新潮日本古典集成

源氏物語

一

石田穣二　清水好子　校注

新潮社版

目次

凡例……三
桐壺……九
帚木……四三
空蟬……一〇三
夕顔……一一九
若紫……一八一
末摘花……二四三

解説……二八五
付録
長恨歌……三二五
系図……三三三
図録……三三五

凡例

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とする。

一、ただし、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、桐壺、帚木の二帖は明融本を底本とし、空蟬、夕顔、若紫、末摘花の四帖は、大島本を底本とする。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図や図面を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文脈の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷

りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、巻末の解説には、この物語と作者に関する校注者の見解を要約して載せた。また、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、「長恨歌」、系図、図録を掲載した。系図はこの第一巻全体に関係のあるものを掲げ、以下、各巻に分載する。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

源氏物語 一

桐(きり)

壺(つぼ)

この巻は、まず時代をいい、主人公の両親を紹介するという長編物語の発端の形式を整えている。時代は巻の半ばで、歴史上の延喜時代（九〇一～九二二）にあたることが明らかになる。

桐壺に御殿を賜る更衣が帝に寵愛され、他の妃に嫉まれ苛められて、幼い皇子を残して死ぬ。この主人公は以後、父帝の膝下に育つので、やがて母の面影に似た父の妃藤壺の女御を慕う機縁が用意される。天性の美貌に学問、音楽の才を発揮する皇子を、父帝は皇太子にと願うものの、後見のないことを考慮して臣籍に降し、源姓を与えた。帝の決断には、高麗の相人が「皇子には帝王の相があるが、そうなれば国が乱れる。しかし、さりとて臣下で終る人ではない」と言ったことが大きく働いている。相人の予言は主人公の運命について、最後まで読者の興味を唆るものであろう。

源氏は十二歳で元服、左大臣の姫君を正妻に得て、政界に進出する。同時に、心の中にはひそかに藤壺への思いが育っている。誕生から元服まで、源氏はすでに大人になり、運命の予言、藤壺への恋、さらに敵対する勢力も示されて、物語は主人公の一生について語り出す用意をすべて整えている。

この巻の前半、主人公の母について語るところでは、彼女を異常なまでに寵愛し、その死後は悲嘆の余り、政治も手につかぬ帝との間柄を、長恨歌の玄宗皇帝と楊貴妃になぞらえて書いている。巻名「桐壺」は主人公の母を暗示するものである。

主人公の母――時めく更衣の紹介

一 何と申す天皇の御代であったか。まず時代を言い、次に人物を紹介する。「昔、男ありけり」（『伊勢物語』）「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり」（『竹取物語』）などと同じ形式で、物語の語り出しのきまった型。

二 「女御」は、天皇の妃で、皇族、大臣以上の家の姫がなり、この中から皇后が選ばれる。「更衣」は、女御の次で、大納言以下の家柄から出る。

三 「さぶらふ」は、仕えるの意。女御、更衣の多いのは天皇の勢力が強く、特別強大な外戚（妃の実家）がいないことを示す。

四 他人の批判を気になさる余裕もなく。「え……ず」は、「……できない」の意。「せたまふ」は、最高敬語。

五 官は参議（大納言、中納言に次ぐ要職）以上、位は三位以上の者。今の閣僚に当る。

六 殿上人。四位、五位で、清涼殿の殿上の間に上ることを許された者と六位の蔵人をいう。

七 横目でにらんでは。「側目」を訓読した語。「京師の長吏是が為に目を側む」（陳鴻『長恨歌伝』）による。

一 いづれの御時にか、二 女御、三 更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、それ程高い身分ではなくて いとやむごとなき際にはあらぬが、誰よりも時めいていられる方があった すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひ上がりたまへる女御たちは 御かたがた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、心おだやかでない ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、病がちに 人の心をのみ動かし、恨みをうけることが積り積ったせいだろうか 恨みを負ふ積りにやありけむ、妃たちの嫉妬をかきたて いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、〔帝は〕いよいよあかずあはれなるものに思ほして、どこまでもいとしいものに 四 人のそしりをもえ憚らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。五 上達部、六 上人なども、世間の語り草にもなりそうなさようである あいなく目を側めつつ、むやみに いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れ、とても見ていられない程のお気に入りようである こういう女性問題がもとで 具合が悪かったのだと しだいに 広く世間でもおもしろくないことだと 人々の苦の種に あしかりけれと、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみ

一 唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛したあまりに政治が乱れ、安禄山が叛乱するに至ったこと。白楽天の「長恨歌」に歌われて名高い。

更衣の家柄

二 太政官（国政を統べる中枢機関）の次官。正三位相当。

三 更衣の母で大納言の夫人。

四 後楯。更衣の身内の有力な政治家。「し」は、強意の助詞。

五 改まったことのある時。儀式、宴会などの宮廷行事をさす。

主人公の誕生

六 「玉の」は、光り輝くほど美しいことをいう。

七 宮中に参上させて。当時の風習でお産は穢れとされ、宮中は神を祭る清浄な所なので、実家に下がってお産をした。

八 第一皇子は右大臣の姫の女御がお生みになった方で。「右大臣」は、太政官の要職で、左大臣に次ぎ、これを輔ける。

九 皇太子のこと。「儲君」の訓読語。

（たまれないことが）（引き合いに出されそうになってゆくので〔更衣は〕いた）（頼りにし）（ご愛情）（〔帝の〕）（て宮中生活をしていられる）

ぐさになって、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御かたがたにもいたう劣らず、なにごとの儀式をももてなしたまひけれど、とりたてて、はかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほより所なく心細げなり。

（古い家柄出身の教養のある人で）（両親が揃って）（現在）（世間の評判がはなばなしいお妃たちにもそうひ）（お支度をも用意なさったが）（けをとらぬように）（しっかりした）（やはり）

さきの世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなるちごの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、

（前世からの）（ご宿縁も深かったのであろうか）（またとなく美しい）（若宮の）（〔帝は〕まだかまだかと待ち遠しくお思いになって）（後見がしっかりしていて）（この皇子の照り映える美しさには）（世間では大切にお扱い申すけれど）（〔帝は〕第一皇子を一通り大切においつくしみなさるだけで）

一〇 思いのままにおかわいがりになる御子として、大切になさることはこの上もない。

更衣の立場

一一 天皇の側にいつもいて、日常身辺の雑用を奉仕すること。女御、更衣は別に御殿（局）を賜り、天皇のお召しの時だけ参るので別格である。

一二 「さるべき」は、しかるべき、それをするにふさわしいの意。「遊び」は、音楽を演奏すること。

一三 「大殿籠る」は、寝るの尊敬語。

一四 引きつづき、お側に置いておかれなどして。女御更衣は夜のご用がすめば自分の御殿に下がることになっている。

一五 格別大切にお心づもりなさったので。「思ほしおきつ」の「おきつ」（掟つ）は、きめるの意。皇子の母として更衣を大切に待遇しようと考えられたのである。

一六 皇太子のこと。春宮坊（皇太子の御所）から転じた言い方。

一七 お立ちなさるかもしれぬと。「なめり」は、「なんめり」と読む。「なるめり」の音便形で、撥音「ん」を表記しない形。「めり」は、推量の助動詞。

一八 どなたよりも先に参られて。勢力のある政治家の姫が最初に入内することが多かった。

一九 あら捜しをなさる方々。「有司毛を吹き疵を求む」——役人が毛を吹いて隠している疵を捜し出す（『漢書』中山靖王勝列伝）による。

一〇 私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

〔更衣は〕はじめよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。世間の評判も大層重く　おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、高貴の人らしい風格があるが　わりなくまつはさせたまふあまりに、重々しい　さるべき御遊びのをりをり、何事にもゆゑある事のふしぶしには、むやみにお側に引きつけておかれる結果　〔更衣を〕お召しになる　まづまうのぼらせたまふ。ある時には大殿籠りすぐして、催しごとがあるたびに　やがてさぶらはせたまひなど、無理やりに　あながちに御前去らず　いつもお側に引き寄せておかれたので　もてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひてのちは、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、悪くすると　ようせずは、この御子の居たまふべきなめりと、一の御子第一皇子の母の女御はおぼし疑へり。人より先に参りたまひて、〔帝が〕大切に思われることは一通りでなく　やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、やはりけむたく　なほわづらはしう、すまないとお思い申していらっしゃった　心苦しう思ひきこえさせたまひける。

〔帝の〕かしこき御蔭をば〔更衣は〕お頼り申しながら　頼みきこえながら、おとしめ疵を求めたまふ人

一 更衣の御殿は桐壺である。桐壺は淑景舎の和風の呼び名で、清涼殿（帝の御殿）から一番遠い東北隅にある。壺（中庭）に桐が植えてある。（図録四参照）

二 建物と建物との間に臨時に掛け渡す板の橋。取り外しができる。（図録八参照）

三 建物から建物に渡る屋根つきの廊下。（図録六参照）

四 着物の裾が汚れて、がまんできないような不都合なこともある。当時の女房の衣服は、袴や着物の裾を長く引きずっていた。ここでは通路に汚物などを撒き散らしたことが考えられる。貴婦人は大小便を箱に取ったので、召使の女たちにはそういうこともたやすくできたであろう。

五 どうしても通らねばならぬ。「さる」は、避ける。

六 「馬道」は、建物の中央をつきぬける廊下（図録五参照）。「さしこむ」は、前後の戸の錠を下ろしてとじ込めること。

七 清涼殿の別殿。壺を隔てて西側にある。（図録五参照）

八 清涼殿に参上する時の控室。

九 「賜ふ」の最高敬語。

若宮三歳、袴着を行う

一〇 男子がはじめて袴を着ける儀式。三歳から五、六

は多く、わが身は、（更衣自身は）か弱くものはかなきありさまにて、（いつまで生きるとも知れぬ状態で）なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。（なまじご寵愛ゆえの気苦労をなさる）御局は桐壺なり。あまたの御かたがたを（お妃たちの御殿を）過ぎさせたまひて、（〔帝が〕素通りなさって）ひまなき御前わたりに、（お妃たちが気をもまれるのも）人の御心をつくしたまふも、（回数）げにことわりと見えたり。（〔更衣が〕参上なさるにつけても）まうのぼりたまふにも、あまりうちしきるをりは、（ひっきりなしの）打橋、渡殿のここかしこの道に、（けしからぬことがかさなる時には）あやしきわざをしつつ、（をしては）御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなきこともあり。またある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた、心をあはせて、（進むもひくもならぬようにして困らせなさる時も多い）はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて、数知らず苦しきことのみまされば、（〔更衣が〕ひどく苦にしているのを）いといたう思ひわびたるを、（〔帝は〕一層いとしく思し召して）いとどあはれと御覧じて、（局を）後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、（ほかに移すようお命じになって）ほかに移させたまひて、上局に賜はす。その恨みましてやらむかたなし。（晴らしようがない）

この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、（盛大に）いみじうせさせたま

歳にかけて行う。
一一 お召しになったのに。「たてまつる」は、「着る」の尊敬語。
一二 中務省に属し、宝物、献上品などのことをつかさどる役所。
一三 宮中の宜陽殿にあり、皇室歴代の宝物を納める。（図録五参照）
一四 皇子、皇女を産んだ女御、更衣の呼称。

更衣の死

一五 退出しようとなさるのを。「まかづ」は、「まかり出づ」を約めた言い方。去る、退くの謙譲語。
一六 退出おさせ申し上げなさる。まず大筋を言い、次に退出の時の様子をくわしく述べる。「させ」は、使役の助動詞。「たてまつり」は、娘であるが帝の妃なので、母君から更衣を敬っていう。「たまふ」は、母君に対する敬語。
一七 病気退出という折にも、（行列などに厭がらせをされ）とんでもない恥を受けるかもしれないと用心して。御子が同行していれば、その体面が傷つけられる。
一八 しきたりがあるので、帝は更衣をそういつまでも宮中に引き止めておおきになれず。宮中では思うような養生ができないのと、万一の時の死の穢れを憚って、病気退出をするのがならわしであった。

ふ。それにつけても、世のそしりのみ多かれど、この御子のおよすけもておはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、え嫉みあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかる人も世にいでおはするものなりけりと、あさましきまで目をおどろかしたまふ。

その年の夏、御息所、はかなきここちにわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらに許させたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほしばしこころみよ」とのみのたまはするに、日々におもりたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたてまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をばとどめたてまつりて、忍びてぞいでたまふ。限りあれば、さのみもえとどめさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさを、いふかたなく思ほさる。いとにほひやかに、うつくしげなる人の、いたう面

成人して
世間にもたぐいなく
ご性質が
ものごとの道理がお分りの方は
お憎みになりきれない
〔お妃たちは〕
あきれる思いで
目を見張っている
ふとした病にかかり
〔帝は〕
いつもご病気がちでいらしたので
とこ数年
〔帝の〕このまましばらく様子を見よ
とおっしゃる
ひどくばかりだったが
〔帝に〕
衰弱されたので〔更衣の〕
〔宮中に〕
〔更衣は〕こっそり退出なさる
お見送りさえままならぬ心もとなさを
つやつやと美しく
かわいい様子の人が

桐壺

一　いったんは輦車を許す宣旨など仰せ出されたものの。「輦車」は、輿に車輪をつけて、人が手で引く車（図録一一参照）。勅許により親王、大臣、女御、僧などが宮城内の中重の門（内裏外郭の建春、宜秋などの諸門）内に用いる（図録三参照）。「宣旨」は、中務省を経ず、うちわの手続きで出される勅命。

二　更衣をさす。この物語で登場人物を「女」と呼ぶ場合は、恋の場面で、歌が詠まれることが多い。

三　定めのある寿命なのだと思ってお別れする死出の道の悲しさにつけても、生きていたいものでございます。「生く」に「行く」を掛け、行きたいのは死出の道ではなく、生きたい命なのです、の意をこめる。

四　こんなふうになると存じていましたならば。「思うたまへ」の「たまふ」（下二段）は謙譲語。

五　帝はこのまま生死のほどを見届けようとお思いになるが。宮中ではもっとも死の穢れを忌むので、病人は退出させなければならないのだが、帝はそれを問題にしないほど切迫した気持でいる。

痩せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言にいでても聞こえ（しみじみと悲しく思っていながら　言葉に出して申し上げる）やらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧ずるに、（意識もうすれがちでいらっしゃるのを　〔帝は〕）来しかた行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはすれど、御いらへもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我かのけしきにて臥したれば、（〔更衣は〕お答えも　まなざし　だるそうで　常よりも一層頼りなく　意識もないような状態で）いかさまにとおぼしめしまどはる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえ許させたまはず。「限りあらむ道にも、（どうしてもお手放しになれない　〔帝〕　死出の道にさえ）おくれ先立たじと契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」とのたまはするを、女もいといみじと見たてまつりて、（共に行こうとお約束なさったのに　いくらなんでも私を残しては　〔里へ〕　悲しいと）

（更衣）三「限りとて別るる道の悲しきに
いかまほしきは命なりけり

いとかく思うたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じ果てむとおぼしめすに、「今日始むべき

四　申し上げたそうなこと　はある様子だったが

五　始める予定の

六 病気を治すための祈禱。

七 しかるべき僧たち。こんな場合のご祈禱をするのに適している僧。世間から霊験があると認められ、また日頃その家に出入りしている僧が選ばれる。

八 お見舞の勅使が行ったり来たりするほどの時間もたっていないのに。「行きかふ」は、行き会うの意。帝が続けて何度か使いを出されたさまがうかがわれる。

若宮、母の喪により里邸に退出

九 延喜七年（九〇七）以後は、七歳以下の子供は親の喪に服するに及ばないということになった。若宮三歳で母の喪により宮中を退出するのが通例だというところから、この物語の時代は延喜七年以前ということになる。

一〇 若宮が頑是なくて、母と死別した意味も分っていないので、一層悲しく、言うべき言葉もない。

一一 しきたりがある（このままにしておくわけにはゆかない）ので。遺骸をいつまでもとどめておきたいのだが、という気持。

更衣の葬送

祈りども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。御胸つとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行きかふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。きこしめす御心まどひ、何ごともおぼしめし分かれず、籠りおはします。

（六 祈りども＝病気を治すための祈禱をするのに。七 さるべき人々＝しかるべき僧たち。こんな場合のご祈禱をするのに適している僧。世間から霊験があると認められ、また日頃その家に出入りしている僧が選ばれる。八 御使の行きかふ＝お見舞の勅使が行ったり来たりするほどの時間もたっていないのに。「行きかふ」は、行き会うの意。帝が続けて何度か使いを出されたさまがうかがわれる。）

御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなむとす。何事かあらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣きまどひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、まして

（親の喪中でも＝帝は　こうした時に宮中にいらっしゃるのは　お仕えする女房たちが　帝も　普通の場合でも　こうした死別の　通例の火葬にしてお墓におおさめするのを　退出をお許しになる　お胸もぐっとふさがって　しきりに気がかりなお気持をおもらしになっていたところ　帝の　更衣の里の人々が　帝は　若宮は　何が起ったのかもお分りにならず　不思議そうにご覧になっておられるのだが　帝を　おせきたて　たまらなく　とろとろともなされず　がっかりして　帝の　こうした時に宮中にいらっしゃるのは　親の喪中でも　帝は　若宮は　何が起ったのかもお分りにならず

一「こがれ」は、「煙」の縁語。

二 後からお乗りになって。当時の葬式は、普通男親、夫、兄弟が送り、女親は行かなかった。

三 愛宕郡愛宕郷。平安時代の葬所。（図録一参照）

四 このあたりの言葉は「燃えはてて灰となりなむ後にこそ人を思ひのやまむ期にせめ」――燃えつきて灰となってしまったあとこそ、あの人を慕う思いをうち切る時としよう（『拾遺集』巻十五恋五、読人しらず）によっている。無意識のうちに、歌の発想や表現が口に上る。母君の教養が知られる。

五 従三位。三位には正、従の等級がある。「位」は、朝廷における席次。

六 詔勅はすべて漢文で書かれるが、特に国文で書かれたものをいう。それで「三位の位」と和風にいった。

七 せめてもう一段上の位をとお贈りあそばすのだった。ここで更衣は生前正四位上であったことが分る。四位以下は、正、従の区別のほか、さらにそれぞれ上下の等級がある。

八 帝づきの女房。大勢のお妃たちに対して、本来中立的な立場にあるうえ、帝のお側に参る女御、更衣をみな見知っているので、比較できる位置にいる。

（野辺送り）にのぼりなむと、泣きこがれたまひて、御送りの女房の車にしたひ乗りたまひて、愛宕（おごそかに葬式を行っているところに）といふ所に、いといかめしうその作法したるに、おはし着きたるここち、いかばかりかはありけむ。「むなしき御骸（母君）（どんなであったことだろう）（目の前に見ながら）を見る見る、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になりたまはむを見たてまつりて、今は亡き人と、ひたぶるに思ひな（まだ生きていらっしゃると思うのが）（きっぱりあきらめよう）りなむ」と、さかしうのたまひつれど、車よりも落ちぬべうまろび（冷静に）（落ちそうに泣きもだえられるので）たまへば、さは思ひつかしと、人々もてわづらひきこゆ。内裏より（思ったとおりだと）（女房たちもお扱いに手を焼いている）（帝から）御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなむ、（女御とも呼ばせずに終ったのが）悲しきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかずくち（〔帝は〕心残りで無念に）をしうおぼさるれば、いま一階の位をだにと、贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。もの思ひ知りたまふ（〔更衣を〕）（人の世の情理がお分りの妃は）（お妃たち）は、様、容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼしいづる。さまあしき御も（美しかったこと）（気立てが素直で）（欠点がなく）（〔帝の〕見苦しいまでのご）（冷たくあしらい）（嫉妬なさったが）（〔更衣の〕）（寵愛ゆえに）てなしゆゑこそ、すげなう嫉みたまひしか、人がらのあはれに情あ（ゆかしく）（たけ）

九「あるときはありのすさびに憎かりきなくてぞ人は恋しかりける」――あの人の生前は生きているというだけで憎かった。亡くなってしまってからいまさら恋しく思われることだ（出所不詳）、の歌をさす。『源氏釈』があげる。

帝の悲しみ

一〇 しめじめとした秋である。「露」は涙を暗示する。「露」「秋」は縁語。

一一 妃に賜る御殿。転じてそこに住む妃をいう。清涼殿のすぐ北にあり、有力な妃が住む（図録四参照）。次に「なほ許しなうのたまひける」とあり、「一の宮……」と続くので、この妃が右大臣の姫、第一皇子の母であることが分る。

一二 腹心の女房や乳母でないと弘徽殿の女御に内通の恐れもある。乳母はもっとも信頼できる人物である。

一三 秋のはじめ、野の草を分けて吹く激しい風。台風。

野分の夕べ、靫負の命婦の弔問

一四「靫負」は、衛門府（宮城の門を守衛し、行幸に供奉することをつかさどる役所）の武官。「命婦」は、中級の女房。父兄や夫が靫負の場合、ほかの命婦と区別してこう呼ばれる。

一五 夕月。「夜」は、調子を整えるため添えた語。昼過ぎから出て、夜半に沈む十日頃までの月。

りし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、
（こういう場合のことをいうのかと思われた）
かかるをりにやと見えたり。
はかなく日ごろ過ぎて、（いつのまにか日数がたって）後のわざなどにもこまかにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、（帝は）せむかたなう悲しうおぼさるるに、（どうしようもなく）御かたがたの御宿直なども絶えてしたまはず、（夜のおとぎも全くお命じにならず）ただ涙にひちて（濡れて）明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の心をむしゃくしゃさせるご寵愛ぶりだこと）人の胸明くまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などにはなほ許しなうのたまひける。（帝は）一の宮を見たてまつらせたまふにも、（帝の）若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、（亡き更衣の）親しき女房、御乳母などをつかはしつつ、（更衣の里に）ありさまをきこしめす。

野分だちて、にはかに膚寒き夕暮のほど、（帝は）常よりもおぼしいづること多くて、靫負の命婦といふをつかはす。（更衣の里に）夕月夜のをかしきほどにいだし立てさせたまひて、（そのまま思いにふけっていられる）やがてながめおはします。（こんなふうに月のよい夜は）かうやうの（管絃の御遊）をりは、（更衣は）御遊びなどせさせたまひしに、（特別すぐれた琴の音を）心ことなるものの音をかき

一 更衣の幻像は闇の中で手探りする現し身にはやはり及ばなかった。夢と同様はかないものだった、の意。「うば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」――暗闇の中の逢瀬ははっきりと見た夢に比べてそれほどまさってはいなかった（『古今集』巻十三恋三、読人しらず）による。

二 「まうで」の「う」を表記しない形。

三 子を失った悲しみで、眼の前がまっくらになった思いで悲嘆にくれていらっしゃるうちに。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」――子を持つ私の心は闇ではありませんが、子を案ずるゆえにどうしてよいか分らないのです（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による。兼輔は紫式部の曾祖父。

四 「とふ人もなき宿なれど来る春は八重葎にもさはらざりけり」――尋ねてくる人もないわが家ではあるが、廻り来る春だけは八重に茂った雑草にもかまわずやってくる（『貫之集』三）によっている。いま季節は秋なので「来る春」を変えて月光がさし入るといった。

五 当時の邸宅は建物の南側を晴の場所とした。

六 今まで生きながらえておりますのが、大層情けのうございますのに。「はべり」は、会話の時に使われる謙譲語。

七 内侍司（天皇に仕え、取次ぎ、女官の監督、後宮の儀式作法をつかさどる役所）の次官、定員四名。従六位相当、のち従四位相当になる。

鳴らし、はかなく聞こえいづる言の葉も、人よりはことなりしけはひ容貌の、おもかげにつと添ひておぼさるるにも、闇のうつつにはなほ劣りけり。

命婦、かしこにまで着きて、門引き入るるより、けはひあはれなり。やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇にくれてふし沈みたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたるここちして、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。南面におろして、母君も、とみにえものもたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いとはづかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。「『参りてはいとど心苦しう、心肝も尽くるやうになむ』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬここちにも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。「『しばし

その場でさりげなく申し上げる　すぐれていた　ありありと浮んでひたと身に添うように思われるにつけても　更衣の邸に　〔車を〕　引き入れると　更衣一人をおもりたてするために　手入れして　見苦しくないようにして暮していらっしゃったのが　月の光だけが　涙にむせんですぐにはお話しできない　（母君）　弔問の勅使が　草深い家の露を分けてお尋ね下さるにつけても　身の置き所もございません　（命婦）お尋ねしてみま　ほんとに身も世もあられず　胸もはりさけそうでございます　私のようなものの情けを知りませぬ者にも　すとひとしおお気の毒で　やっと涙を抑えて　（命婦）　たえがたうございます　います

は夢かとのみたどられしを、やうやう思ひ静まるにしも、さむべきかたなく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなむや。若宮のいとおぼつかなく、露けきなかに過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるるを、疾く参りたまへ』など、はかばかしうものたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつるらむと、おぼしつつまぬにしもあらぬ御けしきの心苦しさに、うけたまはり果てぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて、御文たてまつる。「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなむ」とて、見たまふ。

ほど経ばすこしうちまぎるることもやと、待ち過ぐす月日に添へて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさを、今はなほ昔のかたみになずらへてものしたまへ。

など、こまやかに書かせたまへり。

夢ではないかと茫然たる思いだったが　心が静まるにつれかえって　覚めるはずも　なく悲しくてならないのは　相談できる相手もな　いので　内々宮中においでになりませんか　気がかりなこ　とに　涙がちの所でお暮しなさるのも　〔帝は〕はきはきと終りまでおっしゃれず　〔涙に〕　それでも　お気弱なと拝するであろうと　人目をお憚りな　さらぬでもないご様子がおいたわしくて　しまいまで承らぬような有様で　〔母君〕〔涙に〕　困ったことです　時がたてば少しは紛れることもあろうかと　心待ちに過す月日がたつにつれて　ただいまの恐れ多いお言葉を　共に養育しないのが気がかりでなりませんから　やはり〔私を〕亡き人の形見と思って　幼い人はどうしているかと　情をこめて

一〇　宮中に参られよ。「ものす」は、前後の文脈の上で、具体的な意味を言わなくても明らかな時に、その動詞の代りに用いる。

九　頼りにして拝見いたします。「目も見えはべらぬ」に対して「光」といった。

八　おいたわしくお思いですから。「おぼさるる」は、帝の言葉を伝えているので、語り手の帝に対する敬語がおのずと現れたもの。

一 宮中に吹く秋風の音を聞くにつけても涙をもよおし、子供のことを思いやっているのだ。「宮城野」は、宮城県仙台市の東にある野。萩の名所で歌によく詠まれた。ここでは「宮中」の意味に用いる。「露」は、涙を暗示し、「小萩」に「子」を掛ける。

二 長生きがつらいものだと思い知られますうえに。「寿則辱多し」（『荘子』外篇「天地」）による。

三 「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむこともはづかし」――どうかしていまだに生きていると知らせまい。高砂にある千年の老松がどう思うか恥ずかしくてならないから（『古今六帖』五）による。

四 「宮中」「都」の枕詞から転じて、「宮中」「都」自体をさすようになった。歌語で女の言葉づかいである。

五 それもごもっともと悲しい思いで拝見しています。若宮が父帝のいる宮中を慕うのは当然だと思うが、自分は共に参るわけにゆかぬから、お別れせねばならぬのが悲しい、の意。

六 縁起の悪い身の上でございますので。娘に先立たれるのは逆縁で不吉なことと考えられていた。

七 子ゆえに思い乱れて、どうしてよいか分らぬ親心の胸におさめておけぬせめてその一部だけでも。「くれまどふ」の「昏れ」と「闇」は縁語。前出の「人の親の心は闇にあらねども……」の歌を踏まえている。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に
小萩がもとを思ひこそやれ

とあれど、え見たまひ果てず。「命長さの、いとつらう思うたまへ知らるるに、松の思はむことだに、はづかしう思うたまへはべれば、百敷に行きかひはべらむことは、ましていと憚り多くなむ。かしこき仰せ言をたびたびうけたまはりながら、自らはえなむ思うたまへ立つまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはむことをのみなむおぼし急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべるなど、うちうちに思うたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身には べれば、かくておはしますも、いまいましう、かたじけなくなむ」とのたまふ。

（母君）（命長）（私自身はとても決心できそうにございません）（どこまでお分りなのか）（お出入り申すのは）（お急ぎのご様子ですから）（内心存じておりますよしを）（若宮が）（こんな所にお暮しなのも）（憚り多く）（恐れ多いことで）

宮は大殿籠りにけり。「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらむに、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。「くれまどふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばか

（命婦）（若宮を）（帝が）（夜も更けましょう）（帝に）（奏上いたしたいのですが）（母君）（晴らすほどに申）

八（今夜は勅使として来たが）お役目でなく個人的にも。

九 若宮誕生の祝いや袴着の儀式などの折をさす。

一〇 無情な命でございます。「つれなし」は、何の反応もないこと。はやく死にたいと願っているのに、そしらぬふりをしているわが命だ、の意。

一一 以前から持ちつづけていた志。

一二 人並みに扱われぬ恥をかばいながら。「人げなし」は、身分のある人らしい有様ではないこと。後見がないのをよいことに、苛められたことをさす。

一三 寿命を全うしたのではないような有様で、とうとうこんなことになりましたので。「横様」は、横向き。普通でないこと。前に「恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつしくなりゆき」（一一頁）とあり、そののち、後宮の意地悪がいよいよ募って、更衣が苦しんでいたと書かれてあったことと照応する。

一四 これも理性を失った親心の乱れでございまして。前出の兼輔の歌を踏まえている。帝に対して恨がましい言い方をしたので、すぐ弁解している。

し上げとう存じますので
りに聞こえまほしうはべるを、わたくしにも、心のどかにまかでたまへ。年ごろ、うれしくおもだたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、かへすがへすつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならずとげさせたてまつれ。われ亡くなりぬとて、くちをしう思ひくづほるな』と、かへすがへすいさめおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、いだし立てはべりしを、身に余るまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人の嫉み深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、横様なるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思うたまへられはべる。一四 これもわりなき心の闇になむ」と、言

お出で下さい
数年来
晴れがましい折に
弔問のお使いで
お目にかかるのは
何度も申しますが
〔亡き更衣は〕
望みをかけていた子で
〔大納言〕
父が
臨終の時まで
情けなくもくじけてはならぬ
後楯になる人もない宮仕えは
かえってしない方がましだと
故大納言の
ご奉公に出しましたのを
〔帝の〕お情けが
何かにつけてもったいないのに
宮仕えをなさっていたようですが
心を痛めることがだんだん多くなりましたところへ
ありがたいはずの帝のお情けが逆に恨めしいことに存じられるのでございます

ひもやらずむせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。（命婦）「上もしかなむ。

（帝）『わが御心ながら、強引に あながちに人目おどろくばかりおぼされしも、はたの人が目を見張るほど ご寵愛なさったのも 長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになむ。世にかえってつらいあの人との縁だった ほんの 亡き更衣 いささかも、人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人わずかでも 長く続くはずのない仲だったのだと 一人が原因で のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひし果て果ては、かう 気持の静めようもないので うち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくな 何度も仰せられては になり果つるも、前の世ゆかしうなむ』と、うちかへしつつ、御し いつも お涙がちでいらせられます ほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、「夜 今夜のうちに いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せむ」と急ぎ参る。月 は入りかたの空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むら の虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

（命婦）鈴虫の声の限りを尽くしても
長き夜あかずふる涙かな

（車に）
えも乗りやらず。

一 帝もご同様で。「しか」は、そのようにの意。「なむ」は、強意の助詞。あとは言いさしている。

二 帝の言葉を命婦が伝えるので、敬語がつく。「おぼされし」も同じ。

三 人の心を傷つけるようなことはしていないと思うが。臣下の希望や意志をできるだけ発揮させるのが天皇たるものの心得である。

四 さあるまじき人、そのようなことがあってはならぬ人。つまり、恨まれてはならぬお妃方のこと。お妃たちに情けをかけ、恨みを抱かせないのが天皇の資格の一つである。

五 前にもまして、人目にも恥ずかしい愚か者になってしまったにつけても。更衣の生前は常軌を外れた寵愛をして人目を驚かし、亡きあとは前よりも見苦しいほど悲しみいちずの状態になってゆくこと。

六 どんな前世の因縁なのだろうか。「ゆかし」は、知りたいの意。

七 前に「夕月夜」（一九頁）とあった。「夕月夜」は、昼過ぎから出て夜半に入る。

八 人にも泣けとすすめているようなのも。虫を擬人化する。「鳴く」と「泣く」を掛ける和歌の手法が踏まえられている。

九 鈴虫が声の限り鳴き尽す、それに促されて私も秋の長夜を泣き通しても涙は尽きないのです。「ふる」は、「降る」（こぼれ落ちる）と「振る」の掛詞。「振る」と「鈴」は縁語。

一〇 悲しみに沈んでいる宿に一層涙をお添えになる大宮人ですこと。「虫の音」に泣く「音」を掛ける。「浅茅生」は、雑草の茂った野原。更衣の里邸を卑下していう。「雲の上人」は、宮中に仕える人。命婦をさす。

一一 母君は室内にいて、取次ぎの女房に言わせる。

一二 こういう入用の折もあろうかと残しておかれた女の衣裳一揃い。普通は法要の折など、寺に寄進する。

一三 髪上げの時のお道具といったもの。釵など。「髪上げ」は、儀式の時に、髻をとる結い方。

一四 (更衣の生前は)宮中でのはなやかな生活に馴れていたので。

(母君)一〇「いとどしく虫の音しげき浅茅生に
露おき添ふる雲の上人

あなた様のせいだと申し上げてしまいそうで かことも聞こえつべくなむ」と言はせたまふ。亡き更衣の風情のあるおみやげなどをかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御かたみにとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上の調度めく物添へたまふ。若き人々、悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の帝の御ありさまなど思ひいできこゆれば、とく参りたまはむことをそそのかしきこゆれど、かくいまましき身の添ひたてまつらむも、いと人聞き憂かるべし、また、見たてまつらでしばしもあらむは、いとうしろめたう思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせたてまつりたまはぬなりけり。

女房たちは主人を失った悲しみはいうまでもないが

(若宮が宮中に)

(母君に)おすすめ申すけれども

逆縁の不吉な身

世間の聞えがよくないだろう

(若宮を)

の上の祖母がご一緒に上るのも

気がかりに存じ上げなさって

(母君は)思いきって参内をおさせすることもおできにならないのだった

命婦は、(帝が)まだ大殿籠らせたまはざりけると、あはれに見たてまつる。御前の壺前栽の、いとおもしろきさかりなるを、御覧ずるやうにて、忍びやかに、心にくき限りの女房四五人さぶらはせたまひて、

おいたわしく拝する

ご覧になるふりをして

おくゆかしい女房ばかり

命婦の復命と帝の新たな悲しみ

一五 清涼殿と後涼殿との間にある中庭の植込み。萩などの草花を植える。(図録五参照)

一「長恨歌」に歌われた場面を絵に画いた屏風。
二 宇多天皇(八八七年より八九七年まで在位)の譲位後の呼び名。亭子院(七条坊門北、西洞院西)を御所としたことがあるので、こう呼ばれた(図録一参照)。
三「書かせ」の「せ」は尊敬語。実際は絵師に命じて書かせ、画題の選択構図等に上皇の指示が強く働いたものと見るべきである。
四 宇多天皇の皇后づきの女房で歌人。のち宇多天皇の皇子を産んだ。『伊勢集』がある。それには宇多天皇の命により、「長恨歌」の屏風絵の中の玄宗皇帝と楊貴妃の身になって詠んだ歌が載っている。
五 伊勢とほぼ同時代の代表的な歌人。『古今集』の中心的な撰者。現存『貫之集』に「長恨歌」を題にした歌はない。
六「長恨歌」と同じ内容。愛する人に死に別れた悲しみを歌ったもの。
七 荒い風を防いでいた木が枯れてからは、木蔭の小萩のことが気がかりです。若宮を守っていた更衣が死にましてからは、幼い者の身の上が心配でなりません。
八 取り乱したさまなのを。帝への返歌に「子供を庇護するものがいなくなって心配だ」と父帝を無視した失礼な言い方をしていることをさす。
九 更衣なしでよくもまあ月日は過ぎたことだと不思議に思われなさる。

御物語せさせたまふなりけり。このころ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の書かせたまひて、伊勢、貫之によませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ。いとこまやかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、

[一]ちゃうごんか [二]ていじのゐん [三]せ [四]つらゆき [五]まくらごと [六]うた [七]ものがたり [八]ゆいごん

[和歌]
[帝は]
[更衣の里の]
[命婦は]
[母君の]
もったいないお手紙を頂いてどうしてよいか分りませぬ

いともかしこきは置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱りごこちになむ。

心の中はまっくらで思い乱れておりまして

荒き風ふせぎしかげの枯れしより
小萩がうへぞ静心なき

[七]しづこころ [八]こ はぎ

気持が乱れている時だからと

などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほどと、御覧じ許すべし。いとかうしも見えじと、おぼししづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず、御覧じはじめし年月のことさへかき集め、よろづにおぼしつづけられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日は経にけりと、あさましうおぼしめさる。「故大納言の遺言あや

お見逃しなさること
とだろう
[帝は]取り乱した姿を見せまいと
[更衣を]
とてもご辛抱がおできにならないで
[生前は]片時も見ずにいられなかったのに
[帝]

一〇 宮仕えをしたかいがあったと喜んでくれるようなことをしてやりたいと、つねづね考えていた。
一一 更衣は亡くなったけれども。
一二 若宮の身の上に関し、それ相応のうれしい機会もあろう。
一三「長恨歌」に、玄宗の使者の幻術士が楊貴妃の魂を仙界に尋ね出し、証拠の釵と小箱を持ち帰ったとあるのによる。
一四 更衣の魂を捜しにいってくれる幻術士がほしい。人づてにでも魂のありかがどこか知れるように。
一五 前頁に「このころ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵」とあった屏風の絵を、帝は念頭に浮べている。
一六「長恨歌」に「太液の芙蓉未央の柳」「芙蓉は面の如く柳は眉の如し」とあるのによる。太液池、未央宮は、漢の皇帝の造営したもの。「芙蓉」は、蓮の花。
一七 更衣の姿や声は、花の色にも鳥の声にも喩えようがない。
一八「長恨歌」に、玄宗と楊貴妃が、死後生れ変る時も「天に在らば願はくは比翼の鳥作らむ　地に在らば願はくは連理の枝為らむ」と誓い合ったことを踏まえる。「比翼の鳥」は、雌雄一目一翼で、二羽一体となっている。「連理の枝」は、二本の木の枝が合して一体となったもの。
一九「長恨歌」の最後に「此の恨み綿綿として絶ゆる期無けむ」とあるのによる。

またず、宮仕への本意深く（しっかり貫いてくれたお礼には）ものしたりしよろこびは、一〇かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや（詮ないことだ）」とうちのたまはせて、いとあはれに（母君を）おぼしやる。（帝）一一「かくても、おのづから（いずれ）若宮など生ひ（ご成人）されれば（長生きしてその時をと辛抱せよ）でたまはば、一二さるべきついでもありなむ。命長くとこそ思ひ念ぜめ」などのたまはす。かの（命婦は）贈り物御覧ぜさす。（帝のお目にかける）一三亡き人の住処尋ねいでたりけむ、しるしの釵ならましかば、と思ほすも、いとかひなし。

（帝）一四尋ねゆく幻もがなつてにても
魂のありかをそこと知るべく

一五絵にかける楊貴妃の容貌は、いみじき（上手な）絵師といへども、筆限りありければ、いとにほひ（生気）少なし。一六太液の芙蓉、未央の柳も、げに通ひたりし容貌を、唐めいたる（唐風の装束をした姿は）よそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしをおぼしいづるに、一七花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。朝夕の言種に、一八翼をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、一九つきせずうらめ

（端麗ではあっただろうが）（ほんとにそっくりだった）（更衣の）やさしく愛らしかったのを

一 「弘徽殿の上の御局」といって、清涼殿の夜の御殿（帝の寝室）のすぐ北隣にある（図録五参照）。弘徽殿の女御がずっと帝の寝室に参らぬことをいう。

二 宮中でさえ涙に曇って暗く見える月が、どうして草深い宿で澄んで見えよう。「雲のうへ」は、宮中の意。月の縁語。下の句に、どうして暮しているだろうの意をこめる。「澄む」に「住む」を掛ける。前文に「月も入りぬ」とあり、ここで月光がかげった光景が察せられる。

三 お思いやりになりながら。「浅茅生の宿」を「おぼしめしやりつつ」とすぐつづく文章。

四 「長恨歌」に、玄宗が亡き楊貴妃をしのぶあまり「秋の燈挑げ尽して未だ眠ること能はず」――秋の燈火の燈芯を最後まで引き出したが、まだ眠れないでいる、とあるのによる。

五 左右の近衛府が交替で夜間宮中警備に当り、亥の一刻（午後九時）から子の四刻（午後十二時半より一時の間）まで左近衛府、丑の一刻（午前一時）から寅の四刻（午前四時半より五時の間）まで右近衛府が巡察した。「宿直奏」は、当夜の宿直者が上司に姓名を申告すること。

六 「長恨歌」の「未だ眠ること能はず」による。

七 更衣の生前は、夜の明けるのも気づかずに共寝をしたものを、と思い出されるにつけ。伊勢が宇多天皇の命により「長恨歌」の屏風の絵に、玄宗の身になって詠んだ歌「玉すだれ明くるも知らで寝しものを夢にしき。風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には、久しく上の御局にもまうのぼりたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる。いとすさまじう、ものしときこしめす。このころの御けしきを見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちてもてなしたまふなるべし。月も入りぬ。

（帝）二 雲のうへも涙にくるる秋の月

いかですむらむ浅茅生の宿

三 おぼしめしやりつつ、四 燈火をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の五 宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふとても、明くるも知らで、とおぼしいづるにも、八 なほ朝政はおこたらせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさ

（管絃の遊びをしていられるようである「帝は」）おもしろくない　不快な
（帝のご様子）
（苦々しいことと）
（とお聞きあそばす）
（弘徽殿女御は）気が強くかどのあるお方で
（更衣の死など）
（無視してお振舞いなさるのであろう）
（お食事もおとりにならず）

も見じと思ひかけきや」――御簾を上げることさえせず、夜の明けたのも知らず寝たものであったが、その人は死んでしまい、夢にも逢うことができなくなろうとは思ってもみぬことだった（『伊勢集』）による。伊勢の歌は「長恨歌」の「春の宵苦短くして日高けて起く」「魂魄曾て来つて夢にだも入らず」を詠み込んでいる。

八 更衣亡きあとの今も早朝のご政務は怠っておしまいになるようだ。「長恨歌」の「春の宵苦短くして日高けて起く　此より君王早朝したまはず」による。

九 朝餉の間（図録五参照）で、女房の陪膳で召し上がる簡単な食事。

一〇 清涼殿昼の御座（図録五参照）で召し上がる正式の食事。陪膳は四位五位の廷臣が奉仕する。

若宮参内、祖母北の方の死

一一 異国の朝廷の例まで持ち出して。前にも「楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに」（一二頁）とあった。

一二 悪いことが起らねばいいがと不安に思われた。当時はあまり美しいものは神が愛でて連れてゆく、早死にすると考えられていた。

一三 この年若宮は四歳になった。

ず、朝餉のけしきばかり触れさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遥かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御けしきを見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかなと言ひあはせつつ嘆く。さるべき契りこそはおはしましけめ、そこらの人のそしり、恨みをも憚らせたまはず、この御ことに触れたることをば、道理をも失はせたまひ、今はた、かく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなりと、人の朝廷の例まで引きいで、ささめき嘆きけり。

月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、きよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしうおぼしたり。明くる年の春、坊さだまりたまふにも、いと引き越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなか危くおぼし憚りて、色にもいださせたまはずなりぬるを、さばかりおぼしたれど、限りこそありけれと、世人も聞こえ、女御も御心お

（一〇 だいしょうじ　一一 形だけお箸をおつけになって　一二 〔帝の〕　一三 お給仕を勤める者はみな　一四 帝のお側近く仕える者はみな　一五 〔更衣の生前は〕大勢の人の批難や　一六 更衣の　一七 亡くなった今は今とて　一八 困ったこと　一九 〔若宮は〕人間界のものと見えぬほど　二〇 美しく　二一 〔帝は〕　二二 ご成長なさっているので　二三 〔帝は〕第一皇子を超えさせたいと思われるが　二四 皇太子がお決りになる時も　二五 世間が承知しそうにないことなので　二六 なかなか　二七 あれほどおい　二八 お心のままにならなかったのだと　二九 弘徽殿の女御もご安　三〇 お噂申し　三一 つくしみだったが）

一 娘の更衣の死を気持の晴れることもなく悲しんで。

二 皇子、皇女は母方の実家で養育されるのが当時のしきたりで、若宮は祖母、母に死別したとはいえ、これは父帝の特別の配慮によるものである。

三 天皇、皇太子、皇子がはじめて書物を読む儀式。

四 せめて母君がいないということに免じてでも、かわいがってやって下さい。「だに」は、最小限の理由を示す。「らうたうす」は、かわいいと思うの意。

若宮のすぐれた才能

五 そのままお部屋の中に。

六 恐ろしい武士や仇敵でも。「いみじ」は、程度の甚だしいことをいい、前後の文脈によってその具体的な意味が分る時に用いる。ここでは荒々しい、乱暴な、の意。「武士、仇敵」は、ものの情を解しない者の代表としてあげている。

七 貴族の女性が男性に対面する時は、几帳や屏風で姿を隠したり、扇で顔を隠すが、源氏は幼少なので隠れたりしなかったのである。

八 お美しく気高くていらっしゃるので。「なまめかし」は、柔らかでつやつやした美しさをいい、「はづ

心なさった ちゐたまひぬ。かの御祖母北の方、慰むかたなくおぼし沈みて、おはすらむ所にだに尋ね行かむと願ひたまひししるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しびおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れむつびきこえたまへるを、見たてまつり置く悲しびをなむ、かへすがへすのたまひける。

今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らずさとうかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずら肩をお並べになることもできなかった ひたまふべきだにぞなかりける。御かたがたも隠れたまはず。今よ

〔亡き更衣の〕 更衣の母 〔帝が〕 親しくお馴染み申し上げたのに 今度の祖母の死は 〔祖母北の方は〕 あとにお残しする悲しさを 〔若宮は〕 〔帝が〕 おさせになって 〔帝〕 どなたも若宮をお憎みになれまい 〔若宮を〕 弘徽殿の女御の 〔弘徽殿女御も〕 若宮とは 〔若宮は〕

かし」は、こちらが圧倒されそうな気品のある様子をいう。

九 特に師について学ぶ学問。漢学のこと。

一〇 絃楽器と管楽器の演奏は、貴族の嗜みとして宮廷社交に必要のものとされた。

一一 宮廷の人々を驚かせ。楽の音が大空に響くのと宮中の評判になる意味を掛けていう。

高麗人の予言、若宮臣籍に下り、源氏の姓を賜る

一二 渤海（朝鮮半島北部にあった国）の人。

一三 「寛平の御遺誡」のこと。宇多天皇が譲位の際、新帝醍醐天皇に遺しおかれた諸注意を書いたもの。その中にやむをえない者以外は宮中に入れないのが望ましいとある（桐壺の帝が醍醐天皇であることを思わせる）。

一四 外国使臣来朝の時の宿舎。七条朱雀にあった（図録二参照）。

一五 太政官の三等官。行政手腕があり、漢学にすぐれた者がなる。従四位上相当。

一六 国が乱れ、民が苦しむことがあるかもしれません。「憂ふ」は、嘆き訴えること。

一七 右大弁もすぐれた学才のある人で。「博士」は、大学の職員で諸学を学生に教授する。転じてその道にすぐれ、人に教える能力のある者をいう。

（おもしろいが気づまりなと）お相手と遊び種に、誰も誰も思ひきこえたまへり。（もとより）わざとの御学問はさるものにて、（のこと）琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことことしう、（うそではないかと）いやになってしまいそうなご様子である）うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

そのころ、高麗人の参れるなかに、（来朝した中に）かしこき（上手な）相人（人相見）ありけるをきこしめして、（帝が）宮の内に召さむことは、（相人を）宇多の帝の御（大仰で）誡あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館（お世話申す）につかはしたり。御後見だちてつかうまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、（お連れ申したところ）相人おどろきて、あまたたび傾きあやしぶ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、（そういうお方として占うと）そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。（朝廷の柱石の臣となって）おほやけのかためとなりて、天下を輔くるかたにて（国政を輔佐する方）見れば、（面で判断すれば）またその相違ふべし」と言ふ。弁もいと才かしこき博士にて、（相人と）話し合った内容は言ひかはしたることどもなむ、いと興ありける。（興深いものであった）文など作りかはして、（漢詩などおたがいに作って）今日明日帰り去りなむとするに、（若宮のような世にまれな方に）かくありがたき人に対面した

るよろこび、（別離のためかえって悲しいに違いないという気持を）かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、御子もいとあはれなる句を（心を打つ詩句を）作りたまへるを、（相人は）限りなめでたてまつりて、いみじき（すばらしい）贈り物ども（若宮に）を捧げたてまつる。朝廷（おほやけ）より（相人に）多くの物賜はす。おのづから（それで自然事が知れわたって）ことひろごりて、漏らさせたまはねど、（帝は）春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。（どういうわけなのかと疑わしくお思いになるのだった）帝、かしこき御心に、倭相をおほせて、おぼしよりにける筋なれば、今までこの君を、親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけり、とおぼして、無品の親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、（帝は）いよいよ道々の才をならはさせたまふ。（若宮に）きはことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に、勘へさせたまふにも、（高麗の相人と）同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくお

（相人が）

（若宮に）

（相人に）

（帝は）

（若宮は）

（帝が）

（高麗の相人と）

（相人は）

（おほめ申して）

（いつまでとも分らぬことだから）

（頼もしそうに思われると考えをお決めになって）

（支持のない）

（臣下とするにはまことに惜しいけれども）

（とび抜けて聡明で）

（してさし上げるようにお決めに）

一　帝は恐れ多いことに、ご自身のご判断で、日本流の観相を仰せつけられ、すでにお考えになっていたことなので。

二　若宮を親王にもなさらなかったのを。皇子は親王宣下があってはじめて親王になる。親王になれば皇太子から天皇になる可能性がある。

三　親王の位は一品から四品まであり、位階によって朝廷からの給付と待遇に差がある。この位をもらわない親王を無品の親王という。

四　母方の親戚。親王は実際の政治に関与しないので、外戚の政治家によって権勢が維持される。

五　臣下として天皇の輔佐役をするのが「ただ人」は、皇族以外の人。

六　諸道の学問。政治学、法律、歴史、詩文、故実など政治家に必要な学問。漢学。

七　（あまりすぐれているため）世間から（ひょっとすれば皇太子に立てるつもりではないかと）疑惑を持たれそうでいらっしゃるので。

八　宿曜道の達人。「宿曜」は、二十八宿（二十八の星座）と九曜星の運行により人の運勢を占う術。

九　皇子、皇孫を臣下に降して、「源」の姓を賜ること。

藤壺の女御の入内

一〇 先代の天皇。在位のまま亡くなったのでこう呼ぶ。当時は生前に譲位して上皇になる場合が多いので、必ずしも桐壺の巻の帝のすぐ前の代の帝とは限らない。

一一 母后がまたとなく大切にお世話申していられるのを。「母后」は、四の宮の御母で先帝の皇后。

一二 内侍司の次官。（二〇頁注七参照）

一三 今もちらと拝見して。姫君は成人すれば自分の女房以外姿を見せないものだが、典侍は親しくお出入りするので自然に漏れ見ることがある。

一四 三代の天皇の宮仕えを引きつづきしてきましたが。先帝の御代に任命されて、現在までで三代というのであるから、先帝と桐壺の帝の間に、もう一代あることになる。この三代は歴史上の光孝、宇多、醍醐に相当する。光孝天皇は在位のまま崩御。

一五 世にまれなご器量よしで。

ぼしおきてたり。

年月に添へて、〔帝は〕御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むや（気が紛れる）と、さるべき人々参らせたまへど、なずらひにおぼさるるだにいと（亡き更衣に比肩できる程度の人もめったにいな）かたき世かなと、うとましうのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづききこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、后の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひいでさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になむ」と奏しけるに、〔帝は〕まことにやと御心とまりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。母后、あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしうと、

（しかるべき姫君たちをお召しになるが）（第四皇女で）（評判）（帝つきの女房の）（御代に任命された人で）（母后の御殿）（典侍）（ご幼少だった時から）（似た）（お見かけできませんでしたが）（ご成人なさいました）（お姿に）（一五）（一三）（一四）（礼を尽してお申し込みなさった）（母女御がひどく意地がわるくて）（縁起でもないと）（おおっぴらにないがしろにあしらわれた）

一「ただ、私の皇女たちと同列にお思い申そう」と。宮仕えに必要な実家の後見は心配しなくてよい。それは帝がわが皇女の世話をするのと同様に、全部しようという含みがある。

二 母后の実家の人々。この人々が皇子、皇女を養育し、盛り立てる。

三 兵部省（諸国の兵士、軍事一切をつかさどる役所）の長官。正四位下相当。平安時代は朝廷の軍事力が衰えていたので閑職であった。

四 四の宮が宮中生活をあそばして。この物語で天皇や皇太子につく最高敬語「させたまふ」が四の宮に用いられているのは、ここが四の宮方の人々の心中の詞だからである。

五 藤壺とお呼び申す。「藤壺」は、飛香舎の和風の呼び方。中庭に藤を植えてあるのでこう呼ぶ。清涼殿の北、弘徽殿の西にある。勢力のある妃に賜る（図録四参照）。

六 そう思って見るせいで、どこも申し分がなく、どなたも悪しざまに申すことはおできにならないから。「人」は、女御、更衣をさす。

七（たまにお通いの方はもとより）誰よりもしげしげと帝がお渡りになる御方（藤壺をさす）は、そういつも姿を隠してばかりはいらっしゃれない。

源氏の君藤壺を慕い、二人ながら帝に寵愛される

ご用心なさって
おぼしつつみて、すっきりとご決心もつかぬうちに すがすがしうもおぼし立たざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。〔四の宮が〕心細きさまにておはしますに、〔帝〕「ただわが女御子たちの同じ列に思ひきこえむ」と、いとねむごろに聞こえさせたまふ。〔四の宮に〕女房たち さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、〔四の宮が〕かく心細くておはしまさむよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、〔宮中に〕参らせたてまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。これは、人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりて飽かぬことなし。かれは人の許しきこえざりしに、〔帝の〕御心ざしあやにくなりしぞかし。〔帝は〕おぼしまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなうおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

紛れるように
ご身分もいちだんと高いので
誰に憚ることなく
不思議なほど亡き更衣に似ておいでになる
こちらは
おさびしさも
何一つ不足はない
亡き更衣は周囲が承知申さなかったのに
〔帝の〕ご愛情があいにくと深かったのだ
お悲しみが紛れるというのではないが
自然と藤壺にお気持が移って
格別お気持が慰むらしいのも
人の心のさがを思わせるのだった

源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、われ人に劣らむ

帝のお側を
自分は人に劣っている

八 みな少しお年を召していらっしゃるのに。父帝のお妃なので、亡き母更衣の年齢に前後する人々である。

九 自然、お姿をちらちらと拝する。几帳の綻（綴じないであけたところ）や屏風の端からつい姿が漏れるのを見る機会があることをいう。

一〇 親しくお近づき申して、お姿を拝していたいものだとお思いになる。「なづさふ」は、身近に馴れまといつくこと。

一一 顔だちや目もとなど、若君と更衣はよく似ていたので、あなた（藤壺）が、若君の生母のようにお見えになるのも、不似合いなことではないと思います。

一二 何でもない春の花や秋の紅葉につけても、お慕いしている心のほどをお見せ申し上げる。「はかなし」は、趣味的で実利に関係のないことをいう。季節の花の枝や紅葉などに、普通、歌をつけて贈る。

一三 やはり、若宮のお美しさは比類がなく、かわいくていらっしゃるのを。「にほはしさ」は、生き生きとして照り映える美しさをいう。

と思っていられる方があろうか　それぞれとても美しいが

とおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うちおとなびたまへるに、〔藤壺は〕いと若うううつくしげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、〔藤壺は〕いとよう似たまへりと、典侍の聞こえけるを、〔源氏は〕若き御ここちにいとなつかしいとあはれと思ひきこえたまひて、〔藤壺のお側に〕常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。上も限りなき御思ひどちにて、〔帝〕「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべきここちなむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、をさなごここちにも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。〔源氏が藤壺に〕こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿の女御、〔藤壺〕またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うちそへて、〔帝が〕またとない美人桐壺の更衣生前からの憎さももり返して〔源氏を〕不快だと もとよりの憎さも立ちいでて、ものしとおぼしたり。世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、〔世間でも〕名高うおはする宮の御容貌にも、なほ

なぜか若君の母にお見立て申してよいような気がします　無礼だと　お思いにならず　かわいがって下さい　格別好意をお寄せになるので　これに加えて　よろしくないので　み申し上げなさるので　だとご覧になり

にほはしさはたとへむかたなく、うつくしげなるを、世の人光君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、帝のご寵愛もそれぞれに厚いので御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。

この君の御童姿、いと変へま憂くおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、帝が親しくお世話を焼かれて限りある事に事を添へさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御ひび盛大であった世間の騒ぎにひけをとらせぬようにときにおとさせたまはず、所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など、おほ公式規定どおり調進したのだがやけごとにつかうまつれる、おろそかなることもぞと、とりわき仰特に勅命せ言ありて、きよらを尽くしてつかうまつれり。おはします殿の善美を尽して調進したがあって東の廂、東向きに倚子立てて、冠者の御座、引入の大臣の御座〔源氏の君の〕御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結ひたまへるつらつき、顔のにほひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人つかうまつる。いときよらなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、亡き更衣が見たならばと涙がこぼれそうなのを上は、御息所の見ましかばと、おぼしいづるに、堪へがたきを、心

源氏の君の元服

一（あまりかわいいので）形を変えるのをつらいと帝はお思いになるが。
二 当時の天皇や親王が元服した通例の年齢である。
三 男子の成人式。
四 一世の源氏の元服の儀式として定まっているしきたり。
五 先年の。
六 内裏の正殿。紫宸殿。（図録四参照）
七 廷臣、女房たちに、宜陽殿その他宮中の諸役所で賜る宴会のご馳走。
八 畿内諸国から納める米、銭を収納する朝廷の倉庫。
九 天皇が常にお住まいの清涼殿の東廂。（図録五参照）
一〇 天皇が坐る椅子。中国風の作法で儀式の時だけ用いる。
一一 元服し冠を着ける当人。
一二 加冠役。
一三 儀式は申の時に行われるので。「申の時」は、午後四時頃。
一四 髪を左右に分け、耳のあたりでたばねる髪型。
一五 大蔵省（諸国の調、財宝などの管理出納をつかさどる役所）の長官。正四位下相当。
一六 理髪役を奉仕する。蔵人はつねづね帝の理髪役をもつとめるのでこういう。

一七 ご休息所。殿上の間の南向いの下侍（校書殿の北廂）がこれに当てられる（図録五参照）。
一八 お召し物をお替えになり。子供の着る闕腋（腋あき）の袍を縫腋の袍に着替える。
一九（東庭に）降りて拝舞をなさる様子に。謝意を表する時の礼の仕方で、まず再拝し、笏を置いて、立って袖を左右左と振り、坐って同様にし、笏を取って小拝、立って再拝する。手の舞い足の踏むところを知らずという喜びの様子をあらわしたもの。
二〇 前に「おぼしまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて」（三四頁）とあった。
二一 あげ劣りするのではないかと、気づかっておられたが。「あげ劣り」は、元服して髪を結ったため、見劣りすること。
二二 加冠役の左大臣の夫人である皇女がお産みした方、の意。
二三 元服して一人前になった折に、（妻として）世話する者がいないようだから。
二四 添い寝。貴族の男性の元服の際、定められる妻。
二五 宮廷の席順は親王、公卿の順。源氏はこの時すでに臣下であるから、この席次は父帝の配慮によるものであろう。公卿の最上席には左大臣が坐っているので、隣り合せになる。
二六 掌侍（内侍司の三等官）が帝のお言葉を承り、蔵人に伝える。

源氏、左大臣の姫君と結婚

強く念じかへさせたまふ。（気を取り直してがまんなさる）かうぶりしたまひて、（加冠の儀をおすませになり）御休み所にまかでたまひて、御衣たてまつりかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙おとしたまふ。帝はた、（帝は帝で）ましてえ忍びあへたまはず、おぼしまぎるるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、（こんなに幼い年頃では）あげ劣りやと疑はしくおぼされつるを、（誰よりもご辛抱に耐えず）あさましううつくしげさ（言葉もないほど愛らしさがお増しになった）添ひたまへり。

引入の大臣の皇女腹に、ただひとりかしづきたまふ御女、春宮よりも（ご所望だったのを）御けしきあるを、（〔左大臣が〕思案していらっしゃったのは）おぼしわづらふことありける、この君にたてまつらむの御心なりけり。（源氏の君にさし上げようとのおつもりからだったのだ）内裏にも、（帝にも）御けしき賜はらせたまへりければ、「（帝）さらばこのをりの後見なかめるを、副臥にも」（ご内意をお伺い申し上げなさったところ）ともよほさせたまひければ、（お促しになったので）さおぼしたり。（〔左大臣は〕）さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒など参るほど、（召し上がる時）親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣（〔源氏が〕）けしきばみきこえたまふことあれど、（それとなく匂わして申し上げなさるのだが）ものつつましきほどに（もの恥ずかしい年頃なので）て、ともかくもあへしらひきこえたまはず。（〔源氏は〕何ともご挨拶なさらない）御前より、内侍、宣旨

一 ご褒美の品物。
二 禄のために大きめの寸法にし、着用の時仕立て直すようにした袿。
三 幼い冠者がはじめて結ぶ元結に、あなたの姫との末長い仲を約束する気持を結びこめたか。
四 深い心をこめて結びました元結に、その濃い紫の色さえ変らなければ。源氏の君のお心が変りさえしなければと存じています。
五 清涼殿から紫宸殿に通じる廊下。（図録五参照）
六 宮中の馬、馬具、諸国の牧の馬のことをつかさどる役所。左右馬寮がある。
七 天皇の日常身辺の雑事や取次ぎ、文書などをつかさどる役所。天皇の鷹も管理した。
八 清涼殿正面の東庭に降りる階段。
九 天皇に源氏から献上するご馳走。「折櫃物」は、檜の曲物に肴などを入れたもの（図録一〇参照）。「籠物」は、籠の中に五菓（柑、橘、栗、柿、梨）を入れ、木の枝につける。
一〇 右大弁が帝の仰せを承って、自分の家で調え申させた。右大弁は前に「御後見だちてつかうまつる」（三一頁）とあった人。
一一 強飯を卵形に握り固めたもの。下々の役人に与える弁当。
一二 足のついた櫃。下々の者に与える禄（反物など）が入れてある。（図録一一参照）

うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。（参られるようにとのお召しがあったので）御禄のもの、（帝つきの）うへの命婦（取次いで）とりて賜ふ。白き大袿に御衣一領、例のこと（きまりど）となり。御さかづきのついでに、（帝）

いときなきはつもとゆひに長き世を
契る心は結びこめつや

（お気持をこめてあらためて念をおされる）御心ばへありておどろかさせたまふ。

（左大臣）

結びつる心も深きもとゆひに
濃きむらさきの色しあせずは

と奏して、長橋よりおりて（拝舞なさる）舞踏したまふ。左馬寮の御馬、蔵人所の鷹する（頂戴なさる）て賜はりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部つらねて、（立ち並んで）禄どもしなじなに（それぞれの身分に応じて）賜はりたまふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なむ、うけたまはりてつかうまつらせける。屯食、禄の唐櫃（〔東庭に〕置ききれないほどで）どもなど、ところせきまで、春宮の御元服のをりにも数まされり。（〔公的なきまりもないので〕かえってこの上なく盛大である）なかなか限りもなくいかめしうなむ。その夜、大臣の御里に、源氏（左大臣邸に）

一三 ご退出させなさる。「させ」は、使役の助動詞。この縁組に帝の意志が強く働いていることが分る。

一四 帝とご同腹で皇后を御母としておられるので。

左右の大臣家の勢力について

一五 左大臣は何人かの夫人の腹に子供を大勢もうけていらっしゃる。子供が多いのは一門が繁栄するもとと考えられていた。

一六 蔵人（蔵人所につとめる天皇のお側役。取次ぎなどをする）と近衛府（天皇側近の護衛の武官）の次官を兼ねる。蔵人は五位、六位相当。少将は正五位下相当。両者の兼官は将来有望な役職で、名門の子弟の任ぜられることが多い。

一七 右大臣は放っておきになれず、大事に養育された四番目の姫君に婿として迎えられた。

桐壺

の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆしううつくしと思ひきこえたまへり。女君はすこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなくはづかしとおぼいたり。

（一三）（おもてなしなさった）（婿取りの作法は例がないほど立派にして）（子供っぽいご様子でいらしたのを）（〔左大臣方では〕）（〔源氏は〕）（〔女君は〕不似合いで気がひけると思われた）

この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ、いづかたにつけてもいとはなやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右の大臣の御勢は、ものにもあらず圧されたまへり。御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は、蔵人の少将にて、いと若うをかしきを、右の大臣の、御中はいとよかねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり。劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになむ。

（帝のご信任が厚い上に）（〔女君の〕）（一四）（左大臣夫妻のどちらからいっても）（源氏の君まで婿として加わられたので）（東宮即位の日には天下を支配なさるはずの）（一五）（姫君と同腹の方は）（一六）（左大臣家とあまり仲は）（美しい方なので）（よくないが）（一七）（〔左大臣家の婿扱いに〕）（どちらも理想的な婿舅のお間柄である）

源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえした

（気楽に私邸でお過しにもなれない）

一 左大臣の姫君はいかにもおきれいで姫君らしい方だが。「大殿」は、左大臣の邸、転じて左大臣その人をいうこともある。「かしづかれたる人」は、女房たちに大切に世話されている人。威厳や気品が自然にそなわっていて、姫君らしく見えることをいう。

二 (源氏は)藤壺の琴の音に合わせるように笛を吹いてお聞かせし。

三 あれこれとお世話申し上げていらっしゃる。「いとなむ」は、作り用意する。当時の貴族の家では衣類調度を自家で調達し、妻の実家は婿の衣服そのほか身辺の世話一切をした。

四 源氏の部屋に仕える女房も姫君づきの女房も、普通でないのをよりすぐってお仕えさせなさる。

五 桐壺の公式な呼び方。「曹司」は、部屋。

六 桐壺の更衣に仕えていた女房たちを散り散りにならぬよう引きつづきお仕えさせなさる。帝の指図による。

七 皇居の修理造営をつかさどる役所。

八 宮中の造営、道具類の管理調達、装飾をつかさどる役所。勅命により皇室用のものを、源氏の私邸の用に当てた。

まはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、たぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。大人になりたまひてのちは、ありしやうに御簾のうちにも入れたまはず。御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえかよひ、ほのかなる御声をなぐさめにて、内裏住みのみこのましうおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづききこえたまふ。御かたがたの人々、世の中におしなべたらぬを、選りととのへすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおぼしいたつく。内裏にはもとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御かたの人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨くだりて、

妻にしたいものだ
〔藤壺のことが〕
気にそまぬふうに感じられて
〔帝は〕以前のよ
元服なさってからは
〔源氏を〕
うに
かすかに漏れる藤壺のお声を
〔宮中に〕
とぎれがちにおいでになるが
〔左大臣方では〕
幼いお年頃だから
仕方のないこととお考えになって
精いっぱいおつとめになる
〔源氏の〕お気に入るような催しをして
故更衣の邸

九 ここでは池の風情のこと。「池心」を踏まえた言い方であろう。

一〇 大騒ぎして立派なものに造営している。「ののしる」は、声高く騒ぐこと。ここは大勢の人々が出て、にぎやかに造営しているさまをいう。

一一 言い伝えたとのことで……。源氏の君に関する言い伝えを聞いて語るのだという体裁をとる。

またとなく立派に
二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、作り直して めでたく造りののしる。かかる所に、思ふやうならむ人をすゑて住まばやとのみ、〔源氏は〕思い嘆かしうお
理想の女性を妻に迎えて住みたいとばかり
ぼしわたる。光君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたてま
高麗の相人がおほめ申して　おつけ申し
続けていられる
つりけるとぞ、言ひ伝へたるとなむ。

帚木（ははきぎ）

光源氏がまだ近衛の中将であった頃の物語である。この巻の巻頭の作者の言葉が、夕顔の巻の巻末の作者の言葉と照応していることから、間に空蟬の巻をはさむこの三帖が一まとまりの物語として構想、執筆されたことが分る。年立の上では、三帖とも源氏十七歳の年の物語と考えられている。

五月雨の一夜、物忌で宮中に籠っている源氏の宿直所に、親友の頭の中将、左の馬の頭、藤式部の丞といういずれも当代きっての好色者が集まって女性談義に花を咲かせ、源氏を除く三名のそれぞれの経験談が披露される。後の夕顔の巻で作者自身によって雨夜の品定めと呼ばれているこの部分には、妻たる女性としてはどのような人が理想的かという、作者自身の抱懐する女性観が吐露されていると見られる。

この席上、源氏は、頭の中将や、特に論客ぶりを発揮して一座をリードする左の馬の頭の話によって、中流の女に個性的なおもしろい女性が多いという新しい視野をひらかれる。このことが、この巻の終りから次の空蟬の巻にかけての空蟬との物語、夕顔の巻における夕顔との物語を導く直接のきっかけになる。

雨夜の品定めの翌晩、中川の紀伊の守の邸ではかない逢瀬を持った空蟬という女は、源氏のはじめて知った中流の女であった。

帚木という巻名は、巻末に近い源氏と空蟬との贈答の歌により、二度と源氏の接近を許そうとしない女の態度を象徴している。

一「光」は、あだ名。世人が「光君」と呼んだことは、桐壺の巻（三六頁、四一頁）に見える。
二 人からけなされるよからぬ行い。「言ひ消たれ」の「消つ」は、上の「光源氏」の「光」の縁語。
三 それに輪をかけて。

光源氏の人柄——作者の前口上

四 こんな浮気沙汰を。「かかる」とは、これからお話するような、という気持。
五 かるはずみな人物だという評判を後々までも残すことになろうかと（用心して）。
六 とはいうものの。
七 古物語の主人公の名。奔放な恋愛遍歴を重ねた人物として著名。『枕草子』『落窪物語』にも見えて、当時流行した物語だったらしいが、今は伝わらない。
八 左大臣の邸。北の方、葵の上のもと。
九 ほかにお好きな女でもできたのかと。「春日野の若紫の摺衣しのぶの乱れ限り知られず」——春日野の若い紫草で摺ったしのぶ摺りの乱れ模様のように私の心はあなたを思って限りなく乱れています（『伊勢物語』初段）による。
一〇 強引に無理を通そうとする、気苦労の多い恋を。空蟬や夕顔との身分違いの恋、それにおそらく藤壺とのことなども念頭に置かれているのであろう。

一光源氏、名のみことことしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、（名前だけは立派だけれども／多いようだのに）
二いとど、かるすきごとどもを、末の世にも聞き伝へて、軽びたる（後世の人たちも）
三名をや流さむと、忍びたまひけるかくろへごとをさへ、語り伝へけ（秘密になさった内緒ごとまでをも／語り伝えた人々のおしゃべりの何とた）
四む人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚り、まめだ（ちの悪いことなのでしょう／〔源氏は〕／まじめに）
五ちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将（と心がけておられたから／色めいて風情のあるお話なんかなくて）
六には笑はれたまひけむかし。

〔源氏が〕まだ近衛の中将などでいらした時は
まだ中将などにものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひようし（宮中だけを居心地よいものとお思いになって）
七たまひて、大殿にはたえだえまかでたまふ。しのぶの乱れや、と、（たまにしかお出かけにならない）
〔左大臣方では〕お疑い申すこともあったが
疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたる、うち（そんなふうに移り気でありふれた／行き当りばったりの浮気っぽさなどは）
八つけのすきずきしさなどは、このましからぬ御本性にて、まれには、（性に合わない）
九あながちに引き違へ心尽くしなることを、御心におぼしとどむる癖（お心に思いつめなさる／風変ったと）

内裏の御物忌——源氏と頭の中将の交遊

一 宮中（帝）の御物忌。「物忌」は、陰陽道でいうことで、凶事を避けるために身を慎んで家の内に籠ること。宮中の御物忌の時は侍臣も宮中に籠る。

二 （源氏は）ふだんより一層、宮中に長滞在なさるのを。「長居さぶらふ」で一語の複合動詞。宮中だから「さぶらふ」（帝のお側にひかえる）という。

三 （舅の）左大臣は。以下、左大臣が舅として婿の源氏の冷淡な態度を恨みに思いながらも、その歓心を買うべく、いろいろ配慮することを述べる。

四 宮中に宿直する時の部屋。桐壺に「もとの淑景舎を御曹司にて」（四〇頁）とあった。

五 桐壺に「蔵人の少将」（三九頁）とあった人。昇進して頭の中将（近衛の中将で蔵人の頭を兼ねる）になっている。

六 右大臣が、婿として大事にお世話なさる通い所。すなわち右大臣の四の君の所。（桐壺三九頁）

七 （通うことを）おっくうに思って。源氏と同様、北の方（四の君）が気に入らないのである。

五月雨の一夜——宿直所での源氏と頭の中将

ながあめ晴れまなきころ、内裏の御物忌さし続きて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿には、おぼつかなくうらめしくおぼしたれど、〔源氏の〕よろづの御よそひ、何くれとめづらしきさまに調じいでたまひつつ、御子息の君達、ただこの御宿直所の宮仕へをつとめたまふ。宮腹の中将は、なかに親しく馴れきこえたまひて、遊びたはぶれをも、人よりは心やすく、なれなれしくふるまひたり。右の大臣のいたはりかしづきたまふ住処は、この君もいとものうくして、すきがましきあだ人なり。里にても、わがかたのしつらひまばゆくして、君の出で入りしたまふに、うちつれきこえたまひつつ、夜昼、学問をも遊びをももろともにして、をさをさ立ちおくれず、いづくにてもまつはれきこえたまふほどに、おのづからかしこまりもえおかず、心のうちに思ふことをも隠しあへずなむ、むつれきこえたまひける。

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさ

ころが　あいにくとおありで　かんばしくないご所行もないではなかった
お思いになったが　気がかりに　あれこれと目新しく　お身支度を　新調なさっては　源氏の　中でも特に　お相手役をおつとめになる　中将も　浮気っぽい道楽者である　〔中将は〕実家でも　自分の部屋の設備を立派に整えて　源氏が　いつもお供申し上げなさって　少しもひけをとらず　どこでも親しくご一緒　自然にご遠慮の気持もなくなって　隠しきれず打明けるといったふうに　親しくお付合いしていられたして　所在なく降り続く一日も暮れて

をさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなるここちするに、大殿油近くて、書どもなど見たまふ。近き御厨子なる、いろいろの紙なる文どもを引き出でて、中将わりなくゆかしがれば、「さりぬべき、すこしは見せむ。かたはなるべきもこそ」と、許したまはねば、「そのうちとけて、かたはらいたしとおぼされむこそゆかしけれ。おしなべたるおほかたのは、数ならねど、程々につけて、書きかはしつつも見はべりなむ。おのがじし、うらめしきをりをり、待ち顔ならむ夕暮れなどのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、やむごとなく、切に隠したまふべきなどは、かやうにおほざうなる御厨子などに、うち置き散らしたまふべくもあらず、深くとりおきたまふべかめれば、二の町の心やすきなるべし、片端づつ見るに、「よく、さまざまなるものどもこそはべりけれ」とて、心あてに、それかかれかなど問ふなかに、言ひあつるもあり、もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふも、をかしとおぼせど、言少なにて、とかくまぎらはし

〔源氏の〕 いつもよりはのんびりした感じなので 漢籍などを 人に見られては具合が悪いとお思いのをこそ 困るようなのもあろうから 〔中将〕そういう内緒の 普通のありふれたのは 私ごときつまらぬ者でも 分相応に 相手とやりとりしてでも見ることができます 女たちそれぞれが 男を恨めしく思っている時のとか 男の訪れを心待ちしている 大切な 絶対人に見せられないようなのは 人目につくようにほうって置かれるはずもなく 別にしてお置きになるであろうから 〔これは〕二流の気の置けない物なのであろう 〔中将〕よくもまあ 当て推量に これは誰これは 誰などと とんでもない見当違いなことを想像して 何かとごまかして

二 恨みごとを言うので。下の文には、この句を正確に受ける語句はないが、三行後の「二の町の心やすきなるべし」に、源氏が見せたという気持が含まれている。「やむごとなく」以下「深くとりおきたまふべかめれば」までは挿入句と見る。

一三 一部分ずつ見るのに。源氏が警戒して手紙の全文は読ませないのである。

一 表面だけを飾って。「情」は、風情、趣。直訳すれば、表面だけの風情で。

二 わきまえていてするといった程度のことなら。恋文の歌のやりとりの作法くらいはわきまえているということである。

三 輝かしい将来を約束されて深窓の内に育てられている間は。裕福な家庭の娘をいうのである。「生ひ先こもれる」は、将来性があるということ。「こもれる」(こもっている)は同時に下の「窓のうち」に掛る。「楊家に女有り初めて長成れり　養はれて深窓に在れば人未だ識らず」(「長恨歌」)によったか。「長恨歌」の通行本には「深窓」が「深閨」とあるが、「深窓」とあるのが古い形である。

四 なまかじりの、未熟な才芸。片才。

五 結婚前の、暇をもてあましている年頃なので。「まぎる」は、あれこれと、することが多いこと。

六 人がやるから私もということで。

つつ、とり隠したまひつ。

「そこにこそ多くつどへたまふらめ。すこし見ばや。さてなむ、この厨子もこころよく開くべき」とのたまへば、「御覧じ所あらむこそ、かたくはべらめ」など、聞こえたまふついでに、「女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかなと、やうやうなむ見たまへ知る。ただうはべばかりの情に、手はしり書き、をりふしのいらへ、心得てうちしなどばかりは、随分によろしきも多かりと見たまふれど、そも、まことにそのかたを取りいでむ選びにかならず漏るまじきは、いとかたしや。わが心得たることばかりを、おのがじし心をやりて、人をばおとしめなど、かたはらいたきこと多かり。親など立ち添ひもてあがめて、生ひ先こもれる窓のうちなるほどは、ただかたかどを聞き伝へて、心を動かすこともあめり。容貌をかしくうちおほどき、若やかにてまぎるることなきほど、はかなきすさびをも、人まねに心を入るることもあるに、おのづから一つゆゑ

(源氏)あなたこそたくさんお持ちでしょう
(中将)ご覧になる値打のあるのは
ほとんどないでしょう
(中将)これなら大丈夫と
分ってきました
非の打ちようのない人はめったにいないものだと
その時々にふさわしい返歌を
字を
分相応に人並みな女も多いと思いますが
それも本当にある一つの技能を問題にして選び出すとなると
馬鹿にしたりなど
笑止なことが
得意になって
付きっきりで大切にして
男が
あるでしょう
容貌をかたち
ちょっとした芸らしくおっとりしていて
事も
熱心に稽古することもあるので
一芸を何とか

七 娘本人を直接知っている人。その家に仕えるか出入りする女房などであろう。

八 まあまあといった方面は実際以上にとりつくろって。「さてありぬべきかた」とは、前の「おのづから一つゆゑづけてしいづることもあり」とあった、一応何とか物になった才芸をさす。

九 こちらは実際を知らないのに、どうして、当て推量で馬鹿にできましょうか。

一〇 以上の頭の中将の話の全部が全部というわけではないが。

一一 今の話のような、生かじりの才芸もない女なんて果しているでしょうか。頭の中将の話は聞きようによっては、このように極端にも聞えるので、疑問を呈したのである。

一二 誰が、仲人口にうまうま乗せられて近づきましょうか。いくら私が間抜けだって、まさか、という気持。

上中下三階層の女の論

一三 周囲の人に大切に世話されて。優秀な女房にも多くかしずかれて輔佐されるのである。

一四 それぞれがほかから際立つ点が、いろいろな面で多いと思われます。要するに、中流階層の女に個性的な女が多くておもしろい、という。

一五 三つの階層というが、果してどうなのか。どの家を上、中、下と、はっきり区別できるものなのか。

一人前にこなすこともあります

づけてしいづることもあり。見る人おくれたるかたをば言ひ隠し、〔その娘の〕劣った方面は

八 さてありぬべきかたをばつくろひて、まねびいだすに、〔こちらに〕伝えるのに それはそうではあるまいと

九 らじと、そらにいかがはおしはかり思ひくたさむ。まことかと見もてゆくに、見劣りせぬやうはなくなむあるべき」と、嘆息した様子も うめきたるけがっかりしないことはまずないと思います

しきもはづかしげなれば、一〇いとなべてはあらねど、我もおぼしあはたいしたものに見えるので ご自分も思い当ることがあるのだろうか

することやあらむ、うちほほゑみて、にやりとして〔源氏〕一一「そのかたかどもなき人はあらむや」とのたまへば、〔中将〕そんなひどい女の所には「いとさばかりならむあたりには、一二誰かはすかされ寄りはべらむ。取るかたなくくちをしき際と、優なりとお全く取柄のないつまらない女と すばらしい なあと思われるほどぼゆばかりすぐれたるとは、数ひとしくこそはべらめ。人の品高く どちらもめったにいますまい 女が 身分 高く生まれぬれば、一三人にもてかしづかれて、隠るること多く、自然にそ人目につかぬ点が はたからはすばらしく見えるでしょうのけはひこよなかるべし。中の品になむ、人の心々、おのがじしの それぞれの気質や めいめいの標榜する個性的な面もはっきりしていて

立てたるおもむきも見えて、一四分かるべきことかたがた多かるべき。下のきざみといふ際になれば、ことに耳たたずかし」とて、いとく 下層 身分になると 格別注意もひかれませんね いたってくわしい様子であるのも興味をそそられて

まなげなるけしきなるもゆかしくて、〔源氏〕一五「その品々やいかに。いづれ

一 普通の身分の人。ここは四位、五位の人々。
二 官は参議以上、位は三位以上。
三 左馬寮の長官。従五位上相当。馬寮は左右あり、宮中の馬のことをつかさどる役所。
四 藤原氏で、式部省の三等官。大丞（正六位下）と少丞（従六位上）とある。式部省は宮中の礼式、文官の勤務評定、選叙をつかさどり、大学寮を管轄する役所。
五 耳をふさぎたくなるような話が多い。草子地（作者の評語）で、遠慮のない露骨な議論が多かったというのである。読者に対する配慮である。

左の馬の頭と藤式部の丞登場

馬の頭の議論——没落上流階層と成上り者、および中流階層の論

六 世間を渡る手づるに乏しく。権門との関係やその引き立ての少ないこと。「たつき」は、手段、便宜。
七 時勢のままに落ちぶれて。
八 国の守。地方長官。実際に任地に赴いて政務をとる者をいうので、介（次官）をさす場合もある。国の格によって、守は従五位上〜従六位下相当、介は正六位下〜従六位上相当。富裕な受領層の擡頭は、当時顕著な社会現象の一つであった。

を三つの品に置きてか分くべき。もとの品高く生まれながら、身は沈み、位みじかくて、人げなき、また直人の上達部などまでなりのぼり、我は顔にて家のうちを飾り、人に劣らじと思へる、そのけぢめをばいかが分くべき」と問ひたまふほどに、左の馬の頭、藤式部の丞、御物忌にこもらむとて参れり。世のすきものにて、ものよく言ひ通れるを、中将待ちとりて、この品々をわきまへ定めあらそふ。いと聞きにくきこと多かり。

落ちぶれて　出世して　低くて　貧乏しているのと　得意げに　両者の区別をどうつけたらよいのか　当代きっての粋人で　弁舌の立つ男　欲迎して　階層の判別について議論をたたかわすたちなので

（馬頭）「なりのぼれども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることも、さはいへどなほことなり。また、もとはやむごとなき筋なれど、世に経るたつき少なく、時世にうつろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心としてこと足らず、わろびたることどもいでくるわざなめれば、とりどりにことわりて、中の品にぞ置くべき。受領と言ひて、人の国のことにかかづらひいとなみて、品定まりたるなかにも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、選り出でつべき

もともとふさわしい家柄でない者は　世間の人の心　証も　やはり違う　高貴の　声望も地に落ちてしまうと　気位だけは高くても万事不如意で　いろいろ体裁の悪いことも出て来ることでしょうから　それぞれ判定を下して　地方の政治にあくせくかかわって　〔中流と〕階層のきまった中にも　いくつも段階があって　かなりな者を

九 四位で参議になる資格のある者。大弁、兵衛の督、蔵人の頭など。「参議」は、朝政の議にあずかるという意味で、大臣、納言に次ぐ重職。定員八名。四位以上で所定の経歴のある資格者の中から選ばれる。

一〇 思いもかけなかった幸運を引き当てるといった例も多いですね。天皇のご寵愛を受けて、皇子を生むといったことをさす。

一一 話はみんな、財力があればよいということになってしまいそうだ。階層というものは元来、血筋、家柄によるものであるのに、馬の頭の議論によると、結局財力の有無によって社会的評価も決ってしまうといったことになりかねないと、茶々を入れたのである。「ななり」は、「なるなり」の撥音便「なんなり」の撥音無表記の形。下の「なり」は、推定の助動詞。

――中流の女の論

一二 上流中の上流の女性についてとやかく申すことは、やめにいたします。源氏や頭の中将に対して卑下してみせたのである。

時勢です
ころほひなり。なまなまの上達部よりも、非参議の四位どもの、世間
いいかげんな
からも結構尊敬され
のおぼえくちをしからず、もとの根ざしいやしからぬ、やすらかに
もともとの家格も低くないのが　あくせくしない
でのんびり構えているのは
身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家のうちに足ら
いかにもこざっぱりしたものです
ぬことなどはた、なかめるままに、はぶかず、まばゆきまでもてか
ないのにまかせて　金をかけて　まぶしいほどに
しづける女などの、おとしめがたく生ひいづるもあまたあるべし。
なかなか立派に
入内して
宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬさいはひ、とりいづる例ども多か
りかし」など言へば、「すべて、にぎはしきによるべきなり」
（源氏）　まぜっ返されるのを　あなたらしくもなく
とて、笑ひたまふを、「異人の言はむやうに、心得ずおほせらる」
心外なおっしゃりようだ　憎らしがる
と、中将憎む。
（馬頭）家柄と　現在の声望が一致して　尊敬を受けている家の姫の　実際の
「もとの品、時世のおぼえうちあひ、やむごとなきあたりの、うち
振舞や感じが劣っているのは　こと改めて言うまでもなく　どうして
うちのもてなしけはひ後れたらむは、さらにもいはず、何をしてか
家柄相応に〔姫が〕　がっかりさせられましょう
く生ひいでけむと、いふかひなくおぼゆべし。うちあひてすぐれた
当り前で　当然のことだと思われて
らむもことわり、これこそはさるべきこととおぼえて、めづらかな
私ごときの手の届く範囲ではありませんから
ることと心もおどろくまじ。なにがしが及ぶべきほどならねば、上

が上はうちおきはべりぬ。さて世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおぼえめ。いかではた、かかりけむと、思ふより違へることなむ、あやしく心とまるわざなる。父の年老い、ものむつかしげにふとりすぎ、兄の顔憎げに、思ひやりことなることなき閨のうちに、いといたく思ひあがり、はかなくしいでたることわざも、ゆゑなからず見えたらむ、かたかどにても、いかが思ひのほかにをかしからざらむ。すぐれて疵なきかたの選びにこそ及ばざらめ、さるかたにて捨てがたきものをば」とて、式部を見やれば、わが妹どものよろしき聞こえあるを思ひてのたまふにや、とや心得らむ、ものも言はず。いでや、上の品と思ふにだにかたげなる世を、と君はおぼすべし。白き御衣どものなよかなるに、直衣ばかりを、しどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて、添ひ臥したまへる御火影、いとめでたく、女にて拝見したいようだ女にして拝見したいようだ

一 人の出入りもないので葎（蔓草の雑草）がはいまつわって開かなくなった門に。下の「閉ぢられたらむ」（閉じこめられている）に掛る。人気もないような陋屋に美女を見いだすという設定は、当時の物語に好んで取り上げられている。

二 こんな所にこんなきれいな人が住むようなことになったのであろうかと、意外に思われる点が、不思議にひきつけられるものなのです。

三 （父や兄から）想像して、たいしたこともないと思われる家の奥深くに。「閨」は、家の奥の女の部屋。

四 全く欠点がないという女性を問題にする場合には、とてもだめですが。

五 藤式部の丞の方を見ると。

六 さあどうだろう、上流にだってすぐれた女はめったにいそうもないのに。

七 直衣の下に重ね着た下着。以下、くつろいだ姿の源氏の美しさに筆を転じて、この場の情景を具体的に浮び上がらせる。

八 直衣（貴族の平常着）だけを。指貫（袴）を着けないくつろいだ姿である。

九 直衣の襟を止める入紐などもさないで。

一〇 「添ひ臥す」は、何かに寄り添った楽な姿勢をいう。

一一 いくら政治が大変な仕事だと言っても、一人や二人で天下の政治が執り行われるというものではありませんから。「まつりごちしる」は、政治を行い統治する意。

――妻とすべき女を決めがたいこと

一二 融通がつくので、それで何とかなるものでありましょう。「ゆづろふ」は、「譲る」に継続の意をあらわす接尾語「ふ」の付いた形。「……に譲る」は、「……に事の成行きを任せる」という意。

一三 (それに対して)家庭というものは狭いことは狭いが、その家庭の主婦となるべき人は一人しかいないのだから、その一人の主婦について考えてみると。

一四 不十分なことではいけない大切な仕事が(家庭には)あれこれ多いです。

一五 こうと思えばああだし、あちらがああならこちらはこう、といった具合で。長所があるかと思えば短所があり、の意。「そゑにとてとすればかかりかくすればあなう言ひ知らずあふさきるさに」――そうだからといってこうすればああだし、といって、こうすれば……ええもうわけが分らない、ああと思えばこうだし(『古今集』巻十九、誹諧歌)によった言い方。調子に乗って言葉を弄した感じである。

一六 ひたすら頼れる妻としたいというほどの気持で。次の「選りそめつる」(五四頁二行目)に掛る。

し。この御ためには、上が上を選りいでても、なほ飽くまじく見えたまふ。

このお方には

不十分だろうと

さまざまの人のうへどもを語りあはせつつ、「おほかたの世につけて見るにはとがなきも、わがものとうち頼むべきを選らむに、多かるなかにも、えなむ思ひ定むまじかりける。男の朝廷につかうまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことのうつはものとなるべきを取りいださむには、かたかるべしかし。されど、かしこしとても、一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下に助けられ、下は上になびきて、こと広きにゆづろふらむ。狭き家のうちの主人とすべき人一人を思ひめぐらすに、足らはであしかるべき大事どもなむ、かたがた多かる。とあればかかり、あふさきるさにて、なのめにさてもありぬべき人の少なきを、すきずきしき心のすさびにて、人のありさまをあまた見あはせむのこのみならねど、ひとへに思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくは、わが力

(馬頭)通りいっぺんの恋仲として付き合うには難がなくても

わが妻として頼れる人を選ぶ場合には

なかなか決めることはできないものです

しっかりした天下の柱石となるべき人物の場合も

真にすぐれた政治家となるべき人物を数えあげるということになると

滅多にいないでしょうよ

まあ人並みでどうにかこれで十分といった女が少ないので

浮気っぽい遊び半分の料簡で

どんな女がいるかなるべくたくさん見比べようというつもりではないので

同じことなら

自分が力を

一 選びはじめた（その対象の）女が、なかなか決りにくいということなのでしょう。

二 二人が夫婦になったのも縁があったのだろうと、その縁を否定する気になれない気持だけから、女と別れないでいる男は。

三 及びもつかず偉い、まことに立派だと思われるような例は見当りません。「心に及ばず」は、俗に「とてもかなわない」というほどの意。

四 御大家の若殿方（源氏、頭の中将をさす）の、この上ない女を、というご縁組には、ましてどんな方がお似合いでしょう。

——未婚の若い娘は見ばえがよいだけ

五 墨の濃淡の具合。

六 かすかに（女の）声を聞ける程度の親しい付合いになっても、息づかいの下に消えてしまうようなかすかな声を出し。前の「文を書けど」から「すべなく待たせ」までは、恋文をやりとりする段階。これは訪問して女房の取次ぎでか、あるいは直接物越しに話をする程度の付合いまで進んだ段階である。

七 やさしくて女らしいと思えば、（そういう女は）度外れて風情というものに捉われて。

八 どうかすると、あだっぽいということになります。

——世話女房型も困りもの

入れて いりをし、なほしひきつくろふべき所なく、（矯正しなくてはならないような点がなく）心にかなふやうにもやと、選りそめつる人の、定まりがたきなるべし。（気に入る人と結婚できないもの）かならずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契りばかりを捨てがたく思ひとまる人は、ものまめやかなりと見え、さてたもたるる女のためも、心にあるのだろうとはたからは思われます（篤実な人柄だと見えるし）（そうして捨てられずにいる女にしても）（取柄が）くくおしはからるるなり。されど、何か、世のありさまを見たまへ集むるままに、三 心に及ばず、いとゆかしきこともなしや。四 君達の上なき御選びには、ましていかばかりの人かはたぐひたまはむ。

容貌きたなげなく、（こぎれいで）若やかなるほどの、（苦労のない年頃で）おのがじしは塵もつかじと身をもてなし、文を書けど、（銘々のつもりでは）おほどかに言選りをし、墨つきほのかに、心もとなく思はせつつ、（〔男に〕）（五 薄く）（のんびりと）（もう一度はっきりとも見たいものだと）またさやかにも見てしがなと、すべなく待たせ、六 わづかなる声聞くばかり言ひ寄れど、息の下にひき入れ、言少ななるが、いとよくもて隠すなりけり。（欠点を隠すものなのです）なよびかに女しと見れば、あまり情にひきこめられて、とりなせばあだめく。これをはじめの難とすべし。（主婦の仕事の中でも）事がなかに、なのめなるまじき、人の後見（〔男を〕）（いいかげんにはできない）（夫の）（第一の）

九 何かちょっとしたことをするにも、しゃれたことをし。

一〇 しょっちゅう額髪（肩のあたりまで垂らす前髪）を耳のうしろにはさんでいて。色気もなくかいがいしく立ち働く姿をいう。

一一 なりふり構わぬ世話女房が。「びさう」は、美相の意という。「家刀自」は、家庭の主婦。

一二 笑いがこみ上げたり、涙ぐんだり、あるいはむやみに公憤をおぼえたりといったふうに。次の「心ひとつに思ひあまることなど多かるを」を修飾する。

一三 ついそっぽを向くことになって。「れ」は、自発の助動詞。

——妻には子供らしい人がいいか

世話のかたは、ものの情趣というものを重んじ過ぎあはれ知り過ぐし、はかなきついでの情あり、を性が過度にあるという面はかしきに進めるかた、なくてもよかるべしと見えたるに、また、ま家事一点ばりでめまめしき筋を立てて、耳はさみがちに、びさうなき家刀自の、ひ世帯じみたとへにうちとけたる後見ばかりをして、朝夕の出で入りにつけても、公私にわたる人々の振舞や善悪いずれのことにせよ公私の人のたたずまひ、よきあしきことの、目にも耳にもとまるありさまを、うとき人に、わざとうちまねばむやは、近くて見む親しくもない人に わざわざ話して聞かせたりしようか 生活を共にする妻で話が分り理解してくれるであろう人と人の、聞きわき思ひ知るべからむに、語りもあはせばやと、うちも話し合いもしたいものだと笑まれ、涙もさしぐみ、もしは、あやなきおほやけ腹立たしく、心話しても何になろうかと思うと ひとつに思ひあまることなど多かるを、何にかは聞かせむと思へば、うちそむかれて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、あはれともうち（妻）何ですのごとが出るのに ひとりごたるるに、『何ごとぞ』など、問抜け顔して夫を見上げているといったあはつかにさし仰ぎゐたらのは 全く話にもならぬことです むは、いかがはくちをしからぬ。ただひたぶるに子めきて、やはら型にはまらぬ柔順な女を かならむ人を、とかくひきつくろひては、などか見ざらむ。心もと何かと教え教えして なくとも、なほし所あるここちすべし。げにさし向ひて見むほどは、なるほど女の家で共に過すぶんには

一 夫が必要な用事を言ってやったり。下の文章への続き具合が不完全のようであるが、「用事を頼んだりした場合（の処理の仕方）とか」というほどの気持で下文に続く。

二 自分の分別で判断できないで。

三 頼りないという欠点が、やはり困ったものでしょう。

四 こうなってはもう、家柄のよしあしにもよりますまい、容貌なんか、もちろん問題にもしますまい。

五 それ以上の余分のたしなみや気の利くところが（その女に）あったならば、それを。「ゆゑ」は、奥深い立派さ。「よし」は、風情。「心ばせ」は、心の働き。

馬の頭の結論——理想の妻とは

六 （夫として）安心して家をあけられる、いちずにものを思いつめない点さえ間違いないならば。下文によると、夫が浮気したような場合、不意に家出したりして夫に心配をかけるような点がないならば、ということである。

七 表面的な（女としての）風情。女らしい風情、といったほどの意味。

八 おしとやかにはにかんで。「艶に」は、ここは、しなを作って、というほどの感じ。

——思わせぶりな女の家出騒ぎの例

そのようにかわいらしいという点に免じて暮しを共にできましょうが

さてもらうたきかたに罪ゆるし見るべきを、立ち離れて、さるべきことをも言ひやり、[一]をりふしにしいでむわざの、あだごとにも、まめごとにも、[二]わが心と思ひ得ることなく、深きいたりなからむは、いとくちをしく、[三]たのもしげなき咎や、なほ苦しからむ。常はすこしそばそばしく、心づきなき人の、をりふしにつけていでばえするやうもありかし」など、隈なきもの言ひも、定めかねて、いたくうち嘆く。

（馬頭）[四]「今はただ品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、いとくちをしく、ねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにものまめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける。[五]あまりのゆゑよし心ばせ、うち添へたらむをば、よろこびに思ひ、すこし後れたるかたあらむをも、あながちに求め加へじ。[六]うしろやすくのどけき所だに強くは、[七]うはべの情は、おのづからもてつけつべきわざをや。[八]艶にもの恥ぢして、恨み言ふ

何かの折にしでかすことが　趣味的なことでも　実用的なことでも　しっかりした配慮がないのは　無愛想で　親しみのもてない人が　何か事ある折にその処置が見ばえがするということもあるものです　さすが周到な議論も　結論を出しかねて　大きな溜息をつく

まったく出来が悪くて　性格的にひねくれた点さえなければ　実直で　落着いた性格の妻を　生涯の頼りになる人と考えておくよりほかありません　不十分な点があっても　無理にそれ以上は求めますまい　自然に身にそなわるものですからね　〔夫に対して〕

九　当時流行していた作り物語である。女房が読み上げて聞き手がそれを聞くという形で鑑賞されるのが普通であった。不幸な女の家出といった話を扱って同情の涙をそそるような物語が多かったのであろう。

一〇（結局は夫との縁が切れて）一生悲しい思いをしなくてはならないことになるのは。

一一　いちずに（女を）嫌いだとも思っていない、まだ未練のある夫が。

一二（愚痴っぽい）老朽の女房などが。おそらく親の代から仕えているといった年寄りの女房である。

べきことをも、見知らぬさまに忍びて（我慢して）、うへはつれなくみさをづくり（〔そのくせ〕）、心一つに思ひあまる時は、言はむかたなくすごき言の葉（言いようもなく悲しげな置手紙をしたり）、あはれなる歌を詠みおき（思い出してもらえるような形見の品を残して）、しのばるべきかたみをとどめて、深き山里、世離れたる海づら（ものさびしい海辺などに身を隠したりします）などにはひ隠れぬかし。童にはべりし時、女房などの物語読みしを聞きて、いとあはれに悲しく（すっかり心を打たれて）、心深きことかなと（悩み抜いたあげくのことだと）、涙をさへなむおとしはべりし。今思ふには、いと軽々しく（表面は何気ないふうにしとやかに振舞い）、ことさらびたることなり（しい仕打ちです）。心ざし深からむ男をおきて（愛情の）、見る目の前につらきことありとも（夫を無視して）、人の心を見知らぬやうに（夫の気持も分らぬかのように）、逃げ隠れて人をまどはし（その愛情を見定めようとするうちに）、心を見むとするほどに（夫を心配させ）、長き世のもの思ひになる（一〇）、いとあぢきなきことなり（ことです）。心深しや（よくぞ決心された）、などほめたてられて（〔周囲の人に〕）、あはれ進みぬれば（気持が昂ずると）、やがて尼になりぬかし（そのまま尼になってしまいます）。思ひ立つほどは（決心する時は）、いと心澄めるやうにて（この世に何の未練もない気持です）、世にかへりみすべくも思へらず（まあなさったことです）。『いで、あな悲し（こんなご決心をよく）。かくはたおぼしなりにけるよ』（一一）などやうに（出家のことを聞いて涙を落すと）、あひ知れる人来とぶらひ（見舞に来たり）、ひたすらに憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて涙おとせば（召使や）、使ふ人、古御達（一二）

一　額髪（五五頁注一〇参照）を手でさわってみて。尼は、髪を肩のあたりで切り揃える。額髪も在俗の時のように残すことは残すが、簡素にしたらしい。次に「あへなく」という所以である。

二　この世の濁りに染まっている在俗の時よりも。「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」――蓮の葉の泥の濁りに染まない清い心でどうして葉に置く露を玉と見せかけるのか（『古今集』巻三夏、僧正遍昭）の言葉を用いたのであろう。『釈』『奥入』以下に引く。

三　地獄、餓鬼、畜生の三悪道。

四　夫婦としての切れない前世からの因縁が深くて。

五　そのまま（家出したりせずに）連れ添って。以下、「契り深くあはれならめ」まで、挿入句の気持で読む。

六　自分（女）も相手も（お互いに今後も相手が何をするか）不安で気が許せないではありませんか。文脈としては、上の「尋ね取りたらむも」に続く。

七　夫が、女と結ばれた当初の愛情を思って、女をいとしく思うならば、（冷たい仲は冷たい仲なりに）一応妻は妻として立てもしましょうのに。

――妻たる者の夫の操縦法

など、『君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身を』（旦那様はまだあなたを愛していらしたのに）など言ふ。みづから（自分も）額髪（ひたひがみ）をかきさぐりて、あへなく（手こたえがなく）心細ければ、うちひそみぬかし。忍ぶれど（我慢しても）涙こぼれそめぬれば、をりをりごとにえ（こらえきれず）念じえず、悔（くや）しきこと（いろいろ後悔するでしょうから）多かめるに、仏もなかなか（かえって未練だとご覧になるに違いありません）心ぎたなしと見たまひつべし。濁りにしめるほどよりも、なまうかびにては、かへりてあし（なま悟りでは）き道にもただよひぬべくぞおぼゆる。絶えぬ宿世（すくせ）あさからで、尼にもなさで（尼にする前に夫が身柄を引き取ったにしても）尋ね取りたらむも、やがてあひ添ひて、とあらむをりも、かからむきざみをも、見過ぐしたらむ仲こそ、契り深くあはれならめ、われも人も、うしろめたく心おかれじやは。また、なのめにうつろふかたあらむ人を恨みて、けしきばみそむかむはた、をこがましかりなむ。心はうつろふかたありとも、見そめし心ざしいとほしく思はば、さるかたのよすがに思ひてもありぬべきに、さやうなら（二人の間にどういうことがあろうともその危機の時々を何とかやり過して来た間柄こそ宿縁も深く情も湧くものでしょうかの女に心を移すような夫を露骨に仲違いするようなのはこれまた馬鹿げたことでしょう気持はほかの女に移っても自分に冷淡ではそんなつまずきがもとでむたぢろきに、絶えぬべきわざなり。すべてよろづのことなだらかに、怨ずべきことをば、見知れるさまにほのめかし、恨むべからむ（縁が切れてしまうものです おだやかに知っていますよという程度にちらと言い）

ふしをも、にくからずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。多くは、わが心も、見る人からをさまりもすべし。あまりむげにうちゆるべ見放ちたるも、心やすくらうたきやうなれど、おのづから軽きかたにぞおぼえはべるかし。つながぬ舟の浮きたるためしも、げにあやなし。さははべらぬか」と言へば、中将うなづく。「さしあたりて、をかしともあはれとも、心にいらむ人の、たしなほしてもなどか見ざらむとおぼえたれど、くて見過ぐさば、さしなほしてもなどか見ざらむとおぼえたれど、それさしもあらじ。一〇ともかくも違ふべきふしあらむを、のどやかに見忍ばむよりほかに、ますことあるまじかりけり」と言ひて、一二わが妹の姫君は、この定めにかなひたまへりと思へば、君のうちねぶりてことばまぜたまはぬを、さうざうしく心やましと思ふ。馬の頭、一三もの定めの博士になりて、ひひらきゐたり。中将は、このことわり聞き果てむと、心いれて、あへしらひゐたまへり。

事を荒立てずにそれとなく言えば　夫の愛情も深まりまし　夫の浮気も　妻の出方次第で　むやみに夫に勝手をさせ　放任するのも　気楽でかわいげがあるようですが　軽く見られてしまいます　実際おもしろくありません　そうではありませんか　きれいだともかわいいとも思って　気にいっている女が　不節操の疑いのある場合は　大変だろう　夫の方に不心得なことがなくて大目に見るならば　必ずしもそうもゆくまい　気長に我慢する　良策はあるまい　議論にぴったりだと　もの足りなくおもしろくないと　弁し立てている　理屈を　熱心に　受け答えしておられる

八 岸につないでない舟はどこにただよって行くか分らない、といったふうなのも。「澹なること深き淵の静かなるが若く泛きたること繋がざる舟の若し」（『文選』鵬鳥の賦）によったものであろう。『河海抄』に引く。

九 女の不心得を何とか矯正してでも結婚生活を続けてゆけないことはあるまいと思われるけれども。

一〇 男女いずれに問題があるにせよ、夫婦仲のうまくゆかなくなるようなことが起った場合には（お互いに）。

一一 頭の中将の妹、葵の上。源氏の北の方。

一二 源氏が居眠りをして意見をさしはさまないのを。議論の風向きが形勢不利なので、理寝入りをきめこんでいるのであろう。

一三 弁論博士。博士は、大学寮、陰陽寮の教官で、明経博士、文章博士、明法博士、天文博士などがある。ここは、それらに准じた諧謔の語である。

――技芸の道にたとえて女の美徳を説く

一　指物師。
二　ゆるがせにできないものとされている、本当にれっきとした。「大事として、まことにうるはしき」は、「人の調度の飾りとする、さだまれるやうある物」に掛る。
三　我々の家庭の調度類の中でも特に豪華にと心掛ける。おそらく、たとえば厨子のような、調度類の中でも特に立派にと心掛けるのがならわしになっている物をいうのであろう。
四　絵画のことをつかさどる役所。
五　彩色絵の線描きの役。墨で輪郭、構図を描き、色彩の指示をする師匠級の絵師。
六　人の見たこともない。次の蓬萊の山以下は、唐絵（中国風の絵）の画材である。
七　古代の中国で空想された神仙の住む山。渤海の東の海の中にあるとされた。
八　「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」（『古今集』仮名序）によったのであろう。
九　真実には遠いでしょうが。要するに写実的でないということ。
一〇　以下は、大和絵の画材である。
一一　人の住まい、その起居の様子。「人の」は、「家居」「ありさま」の両方に掛る。
一二　けわしくない（姿やさしい）山々の様子を。前の

（馬頭）
「よろづのことによそへておぼせ。引き比べてお考えあそばせ木の道の工の、よろづの物を心思いにまかせて作りいだすも、臨時のもてあそび物の、その物と、あと作り方も決っていない物はもさだまらぬは、そばつきさればみたるも、げにかうもしつべかり見た目のしゃれているのも思われてけりと、臨機応変に時につけつつ、趣向をかえてさまをかへて、今めかしきに目移りて、をしろく思う物もあるかしきもあり。大事として、まことにうるはしき人の調度の飾りとする、さだまれるやうある物を、様式の難なくしいづることなむ、なほまことのものの名人の上手は、立派に作ることにかけては違ったものだと一目で分りますさまことに見えわかれはべる。また絵所に上上から下へとはっきり差のつく優劣の違いは手多かれど、墨がきに選ばれて、次々にさらに劣りまさるけぢめ、すぐ見ただけでは分りませんふとしも見えわかれず。かかれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の恐ろしげないかれる魚のすがた、唐国のはげしきけだもののかたち、目に見えぬ鬼の顔などの、大げさに筆をふるった絵はおどろおどろしく作りたるものは、心にまかせて、ひときは目おどろかして、実には似ざらめど、それはそれでいいでしょうさてありぬべし。世の常の山のたたずまひ、水の流れ、目に近き人の家居ありさま、げにと見え、なつかしくやはらいだるかたなどを、静かにかきまぜて、

「静かにかきまぜて」までは、画面に配される様々な点景についていい、以下に、画面全体を遠景と近景とに大きく分けてしめくくっていう。

一三 暮しの雰囲気にあふれた垣根の中（庭先の風景）を。これは近景である。

一四 点を長く引いて筆を走らせ。筆を走らせて続け書きするので、自然点が長く引かれて次の字に書き続けられることになる。気取った書きぶりを形容したもの。

一五 やはり実直な書き方のほうがすぐれています。

一六 目先だけの風情は。

一七 ひどく熱心な顔つきで。「信ず」は、信仰する意で、次の「法の師の、世のことわり説き聞かせむ所のここちするも」という文章と照応している。

一八 考え込んだ時のしぐさ。

一九 法師が、世間の道理を説き聞かせる所。説教の場所。『花鳥余情』は、この品定めの構成を『法華経』の三周説法にのっとったものとする。五九頁末までが法説一周（『法華経』の「方便品」、上根の者に直ちに仏の教えを説く）、次のこれまでの部分が喩説一周（「譬喩品」以下「薬草喩品」まで、中根の者にたとえを借りて説く）、以下の体験談が因縁説一周（「化城喩品」、下根の者に過去の因縁を説く）に当る。このあたりの措辞に照らすに、この説はおそらく当っていると思われる。

二〇 男女の間での語らい。

二一 すくよかならぬ山のけしき、木深く、世離れてたたみなし、け近き籬のうち（ものさびしげに幾重にも描き）をば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと（格別に精彩があって）いきほひことに、わろものは（いい加減な絵師は）及ばぬ所多かめる。手を書きたるにも（字を書くにしましても）、深き素養ことはなくて、ここかしこの（あちこち）、点長（一四）にはしり書き、そこはかとなく（どことなく気取って書いてあるのは）けしきばめるは、うち見るに（ちょっと見ると）、かどかどしくけしきだちたれど（才気があっていっぱしの感じはありますが）、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは（やはり本当の書法をていねいに体現した書は）、うはべの筆消えて見ゆれど（表面の筆のうまさは）、今ひとたび取りならべて見れば、なほ実（一五）になむよりける。はかなきことだに（ちょっとした才芸でもこうしたものです）かくこそはべれ。まして人の心の（女の）、時にあたりてけしたような（何かの折に様子ぶってみせ）きばめらむ、見る目の情（一六）をば、え頼むまじく思うたまへ得てはべる。（信頼のおけないものだと考えるようになりました）

当初の私の失敗談を）そのはじめのこと、すきずきしくとも（好色がましいお話ですが）申しはべらむ」とて、近くゐると（膝を進め）寄れば、君も（源氏も）目さましたまふ。中将いみじく信じて、頬杖（一八）をつきてむかひゐたまへり。法の師の、世のことわり説き聞かせむ所のここちするも（一九）、かつは（はたから見ると）をかしけれど、かかるついでは、おのおの睦言（二〇）も隠しきれずにしゃべってしまうのであったえ忍びとどめずなむありける。

馬の頭の体験談　その一——指食いの女の話

一　先程申し上げましたように。前に「耳はさみがちに、びさうなき家刀自の……」（五五頁）とあったあたりを受けているのであろう。

二　女がひどくやきもちをやきましたので。

三　自分のようなつまらぬ男に愛想もつかさずに。前に「まだいと下臈にはべりし時」とあった。

四　こまごまとした生活上の世話をよくしてくれまして。

五　（私の）機嫌を損ねることのないようにと心掛けておりましたので。

六　やさしさが身につき。

（馬頭）昔「はやう、まだいと下臈（下役）にはべりし時、あはれと思ふ人はべりき。聞こえさせつるやうに、容貌（特にすぐれてもおりませんでしたので）などいとまほにもはべらざりしかば、若きほどのすき心（浮気心）には、この人をとまりにとも（終生の妻にとも）思いきめませず思ひとどめはべらず、よるべ（頼りになる人）とは思ひながら、さうざうしくて（もの足りなくて）、とかくまぎれはべりしを、もの怨じ（不愉快で）をいたくしはべりしかば、心づきなく、いとかからで（こんなふうではなくて）、おいらかならましかばと思ひつつ、あまりいと（っとりしていたらと）許しなく（きびしく）疑ひはべりしもうるさくて（わずらわしくて）、かく数ならぬ身を見も放たで、などかくしも思ふらむと、心苦しきをりをりもはべりて（気の毒になることも時々ございまして）、自然に心をさめらるるやうになむはべりし（ございました）。

この女のあるやう（性格は）、もとより思ひいたらざりけることにも（もともと自分にはとてもできないことでも）、いかでこの人のためにはと、なき手をいだし（ない知恵をしぼりして）、後れたる筋の心をも（おく不得意な面も）、なほくちをしくは見えじと思ひはげみつつ（どうぞ夫にだめな女と思われまいと努力しまして）、とにかくにつけて（何かにつけて）、ものまめやかに後見（うしろみ）、つゆにても（少しでも）、心に違ふことはなくもがなと思へりしほどに（五）、進めるかたと思ひしかど（気の勝った性質の女だと思っていましたが）、とかくになびきて（何かと言うままになって）、なよびゆ（六）

七　親しくない人に会ったら。あまり親しくない来客などである。

八（私が）恥ずかしく思いはせぬかと。「おもてぶせ」（面伏せ）は、不面目の意。

九　遠慮して人前に顔を出さないといったふうで。

一〇　いつもたしなみを忘れずにいて。次の「心もけしうはあらずはべりしかど」に掛る。

一一　憎らしい嫉妬（しっと）という一点だけは、彼女としては改めることができないのでした。

一二（この女は）こんなふうにどんなことでも私の言いなりになり、びくびくしている人のようだ。

一三（私が）もう心底からごめんだと思って縁を切ってしまいそうなそぶりを見せたならば。

一四（女が）例によって怒って恨み言を言うのに向って。

一五　ほかに肩を並べる者のない待遇（正妻としての待遇）を与えることになるだろう、といったことなどを。「あるべきやう」の「やう」は、様子、状態の意。間接話法の言い方。

き、みにくき容貌（かたち）をも、この人に見やうとまれむと、（嫌われはすまいかと）わりなく思ひつくろひ、（粧をし）うとき人に見えば、（いじらしくお化）おもてぶせにや思はむと、（八）憚り恥（九）ぢて、（一〇）みさをにもてつけて、（連れ添ううちに）見馴るるままに、（気立ても悪くはない女でしたが）心もけしうはあらずはべりしかど、ただこの憎（一一）きかた一つなむ、心をさめずはべりし。

（当時思いましたことには）そのかみ思ひはべりしやう、かうあながちに（一二）従ひおぢたる人なめり、いかで（何とか）懲（ご）るばかりのわざして、（懲るほどのことをして）おどして、（嫉妬も少し人並みにもなり）このかたもすこしよろしくもなり、さがなさもやめむ、（口やかましさも直してやろう）と思ひて、（一三）まことに憂（う）しなども思ひて絶えぬべきけしきならば、かばかり我に従ふ心ならば思ひ懲（こ）りなむ、（考えつきまして）と思うたまへ得て、ことさらに情（なさけ）なくつれなきさまを見せて、（冷たく）例の腹立ち怨（えん）ずるに、（一四）『かくおぞましくは、（馬頭）こんなに我を張るなら（夫婦の宿縁）いみじき契り深くとも、（もう二度と逢うまい）絶えてまた見じ。（別れるつもりなら）限りと思はば、（むちゃな邪推）かくわりなきもの疑ひはせよ。（連れ添うつもりなら）ゆくさき長く見えむと思はば、（我慢していい）つらきことありとも、念じてな（嫉妬の心さえ）のめに思ひなりて、（加減にあきらめて）かかる心だに失（う）せなば、（これまで以上にいとしく思うだろう）いとあはれとなむ思ふべき。（人並みに出世もし）人なみなみにもなり、（多少貫禄もつくようになったら）すこしおとなびむに添へて、（一五）またなら

一（いつかは）人並みに出世することもあろうかと、待つことにかけては。

二 これからの長の年月、あてにならない期待を持ち続けることは。

三 一緒に暮した今までのことを指折り数えてみると、今度の痴話喧嘩だけがあなたのいやな点であったろうか（あなたの嫉妬にはずっと悩まされつづけてきたのだ）。「これひとつ」は、前に「指ひとつを引き寄せて」「この指をかがめて」とあったのに応じている。かみつかれた指を見せつけるようなしぐさも伴った詠みかけで、コミカルな印象がある。なお、「ふし」（節）は、「手」（指）の縁語。なお、この歌、『伊勢物語』十六段、紀有常が四十年連れ添った老妻に与えた歌「手を折りてあひ見しことを数ふれば十といひつつ四は経にけり」の上の句をそのまま借用しているところにも滑稽感があろう。

ぶ人なくあるべきやう』など、（我ながらうまい訓戒を垂れるものだと得意になって）かしこく教へたつるかなと思うたまへて、われたけく（えらそうにまくし立てますと）言ひそしはべるに、すこしうち笑ひて（冷やかに笑って）、（女）『よろづ（あなたがどう見てもみすぼらしく）にみだてなく、ものげなきほどを見過ぐして、人数（ひとかず）なる世もやと待つかたは、いとのどかに思ひなされて（軽蔑である間を我慢して）、心やましくもあらず。つら（いつまでものんびり構えていられますから）き心を忍びて、思ひなほらむをりを見つけむと（素行の改まる時がいつかあろうかと）、年月（二）を重ねむあいな頼みは、いと苦しくなむあるべければ（つらくてたまらないでしょうから）、かたみに（今がお互いに別れるいい機会ですから）そむきぬべききざみになむある』と、ねたげに言ふに（こしゃくなことを言いますので）、腹立たしくなりて、にくげ（ひどい言葉をいろいろあびせかけますと）なることどもを言ひはげましはべるに（黙っていられない問題なので）、女もえをさめぬ筋にて、指ひとつを引き寄せてくひてはべりしを（かみつきましたのを）、おどろおどろしくかこちて、（馬頭）『かかる疵（きず）さへつきぬれば、いよいよまじらひをすべきにもあらず。（あなたが馬鹿にしている官位もつかさくらるますます絶望で）はづかしめたまふめる官位、いとどしく、何につけてかは人めかむ、（出家が相応の身の上らしいよ）世をそむきぬべき身なり』など、言ひおどして、（馬頭）『さらば今日こそは限りなめれ』と、（これでお別れらしいね）この指をかがめてまかでぬ。（曲げたまま出て来ました）

（馬頭）三『手を折りてあひ見しことを数ふれば

四 つらいあなたの仕打ちをひとり胸の内に堪えてきましたが、この一件があなたとお別れするしおどきなのでしょうか。「憂きふし」「ひとつ」「数ふ」「こ」（これ）「や」「君」「手」と、言々句々、馬の頭の歌を受けているのは、贈答歌の骨法である。

五 賀茂の臨時の祭（陰暦十一月の下の酉の日に行われた）で神前に奏する東遊びの練習。宮中の楽所で行われる。

六 あの女の家以外にはありませんでした。

七 宮中に泊るのは。「旅寝」は、外泊の意。

八 思われましたので。「たまへ」は下二段活用、謙譲。「られ」は自発の助動詞。

九 何となく不体裁で、きまりの悪い思いでしたが。

一〇 いくら何でも、今夜のような雪の晩にわざわざ尋ねて行ったら、あの喧嘩以来の女の恨みも解けるだろう。

一一 燈台を壁の方に向けて薄暗くして。寝室用の間接照明のさまである。

一二 伏籠。着物に香をたきしめるのに使うが、ここは着物を暖めているらしい。（図録九参照）

一三 引き上げておくべき几帳などの垂れ絹は上げてあって。人を迎え入れる気持である。

これひとつやは君が憂きふし
恨んだりはできまい　〔女は〕
えうらみじ』など言ひはべれば、さすがにうち泣きて、
（女）四
『憂きふしを心ひとつに数へきて
こや君が手をわかるべきをり』

など、言ひしろひはべりしかど、まことには変るべきこととも思うたまへずながら、日ごろ経るまで消息もつかはさず、あくがれまかりありくに、臨時の祭の調楽に、夜ふけて、いみじう霙降る夜、これかれまかりあかるる所にて、思ひめぐらせば、なほ家路と思はむかたは、またなかりけり。内裏わたりの旅寝、すさまじかるべく、けしきばめるあたりはそぞろ寒くや、と思うたまへられしかば、いかが思へると、けしきも見がてら、雪をうち払ひつつ、なま人わろく爪くはるれど、さりとも今宵日ごろの恨みはとけなむ、と思うたまへしに、火ほのかに壁にそむけ、なえたる衣どもの厚肥えたる、大いなる籠にうち掛けて、引き上ぐべきものの帷などうち上げて、

言い争いましたが　本心は女と別れるつもりもありませんでしたも
何日も　便りもやりませず　浮かれ歩いておりま
すうち　五　りんじ　ぞうがく　よ　それ
ぞれ宮中を退出して別れるところで　考えてみますと
おもしろくもないし　六　ひと　たなび　すさまじ　どう
気取った女の所はうすら寒いことだろうし　八
様子　思っているかと　九　なま　つま　こよひ　きぬ　あつぶと　かたびら　一〇　柔らかな　一二　一三

今宵ばかりやと、待ちけるさまなり。されば（それ見たことかと）よと、心おごりするに（いい気になったのですが）、正身（さうしん）はなし。さるべき女房どもばかりとまりて（残っていて〔女は〕）、親の家に、この夜（よ）さりなむ渡りぬると、答へはべり。艶（えん）なる歌も詠（よ）まず、けしきばめる消息（せうそく）もせで、いとひたやごもりに情（なさけ）なかりしかば、あへなきここちして、さがなく許しなかりしも、我をうとみねと思ふかたの心やありけむ、と、さしも見たまへざりしことなれど、心やましきままに思ひはべりしに、着るべきもの、常よりも心とどめたる色あひしざま、いとあらまほしくて、さすがにわが見捨ててむ後（のち）をさへなむ、思ひやり後見（うしろみ）たりし。さりとも絶えて思ひ放（はな）つやうはあらじと思うたまへて、とかく言ひはべりしを、そむきもせず、尋ねまどはさむとも隠れ忍びず、かかやかしからずいらへつつ、ただ『ありしながらは、えなむ見過ぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばなむ、あひ見るべき』など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと思うたまへしかば、しばし懲らさむの心にて、しかあらためむとも言はず、い

（今晩あたりはと）
（自分を嫌いになってくれといった気持が女にあったのか）
（そう思ったのですが〔その夜の〕支度の着物は）
（そうも思えなかったことなのですが）
（〔当夜は〕おもしろくないままに）
（念を入れた色合いや仕立てが）
（申し分のない出来ばえで）
（私に恥をかかせない程度に返事はしながらも）
（とても我慢できません）
（心を入れかえて腰を落着けて下さる気になったら）
（〔女〕今までのままでは）
（そうはいっても思い切れまいと）
（そのように）
（ひど）

一　肝腎のご本人は居ません。男を迎える支度をしておきながらわざと留守にしたのである。馬の頭の来訪を見越して意識的にそれを避けて、間接的な意思表示をしたもの。

二　しゃれた歌を詠み置くでもなく、思わせぶりな置手紙をするでもなく。

三　まったく無愛想で風情のない仕打ちだったので。「ひたやごもり」は、直屋籠（そ）りで、家の中に閉じこもったきりというのが原義であろう。そっけない、曲がないといった意味に使われる。

四　あんな喧嘩はしたもののさすがに、自分が手を切った後々までも、私のことを考えて世話をしてくれていたのでした。

五　そうはいっても、私にすっかり愛想をつかすようなことはあるまいと思いまして。

六　（その後も）よりをもどそうといろいろ言ってみたのですが。

七　女は別れるでもなく、探させて困らせようと雲隠れするでもなく。

八（染色の腕前は）龍田姫といっても不似合いでなく。龍田姫は、春の女神佐保姫に対して秋の女神とされ、紅葉を染めるとされた。「見るごとに秋にもなるか龍田姫紅葉染むとや山も霧るらむ」（『後撰集』巻七秋下、読人しらず）。龍田山、龍田川が紅葉の名所であったところから考えられたもの。

九（裁縫にかけては）織女の腕前にもひけをとりそうになく。

一〇そちらの方（染色、裁縫の技倆）も身に備えていて。

一一彦星と織女との長い夫婦の縁にあやかりたいものだったね。「逢ふことはたなばたつめにひとしくて裁ち縫ふかたはあえずぞありける」――あなたは私をたなばた扱いして殆ど通って来ても下さいませんが、裁縫の方はとてもたなばたのようにはまいりません（『後撰集』巻五秋上、閑院。男から仕立物を頼まれた時の歌）。この歌によってその逆を言ったもの。

一二その女の染色の腕前は及ぶものなくすぐれたものだったろうな。紅葉を錦に見立てた歌が多いのによった言い方。

一三花（桜）や紅葉。染色の技術をたとえたもの。

一四何の見ばえもなく。「露」は、上の「花紅葉」の縁語、次の「消ゆ」は、「露」の縁語。

馬の頭の体験談　その二――木枯の女の話

（女は）たく綱引きて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きて、はかなくなりはべりにしかば、たはぶれにくくなむおぼえはべりし。ひとへにうち頼みたらむかたは、さばかりにてありぬべくなむ、思うたまへいでらる。はかなきあだごとをも、まことの大事をも、言ひあはせたるにかひなからず、龍田姫と言はむにもつきなからず、たなばたの手にも劣るまじく、そのかたも具して、うるさくなむはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。中将、「そのたなばたの裁ち縫ふかたをのどめて、長き契りにぞあえまし。げにその龍田姫の錦には、またしくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひつきなく、はかばかしからぬは、露のはえなく消えぬるわざなり。さあるにより、かたき世とは、定めかねたるぞや」と、言ひはやしたまふ。

（馬頭）「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、はしり書き、かい弾

（死んでしまい）（生活をまめったに冗談も言えないという気がしたことです）（あの女程度でまず十分だろうと）（今でも思い出）（ちょっとした風流ごとでも）（生活上の大切な用件でも）（相談してもしがいがあり）（かせされる妻としては）（たいした女でした）（二の次にして）（不似合いで）（下手くそなのは）（そうだからこそ）（妻選びは厄介なものだと）（議論が紛糾しているのだ）（引き立たないものなのだ）（座をとりもたれる）（人品も格段上で）（気の利き方も本当にたしなみがあると思われるほどに）

一　字や琴の手腕といい、歌の詠みぶりといい。
二　この口やかまし屋を。今話した指食いの女のこと。
三　（この新しい女の所に）足しげく通うようになってみますと。
四　少々派手で。「まばゆし」は、まぶしい。正視しがたい感じをいう。
五　頼りにできる女とは思われませんで、とだえがちな態度を見せつけておりましたうちに。
六　殿上人。
七　（まさか女の所に行くわけにもいかないので）大納言の所に今夜は泊ろうと思いましたところ。この大納言はどういう関係の人物か明らかでない。『河海抄』は、馬の頭の父でもあろうかという。
八　男（殿上人自身をいう）の訪れを待っているであろう（女の）家が。この女がたまたま馬の頭の通っていた同じ女だったのである。
九　この女の家がちょうど、（大納言の家に行く）道筋に当っていたので。「よく」は、避ける。
一〇　月でさえ泊る（池の水に影をやどしている）住処を。
一一　私も一緒に車から降りたのでした。

く爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず、見聞きわたりはべりき。見るめもこともなくはべりしかば、このさがなものを、うちとけたるかたにて、時々かくろへ見はべりしほどは、こよなく心とまりはべりき。この人亡せてのち、いかがはせむ、あはれながらも過ぎぬるはかひなくて、しばしばまかり馴るるには、すこしまばゆく、艶にこのましきことは、目につかぬ所あるに、うち頼むべくは見えず、かれがれにのみ見せはべるほどに、忍びて心かはせる人ぞありけらし。神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、内裏よりまかではべるに、ある上人来あひて、この車にあひ乗りてはべれば、大納言の家にまかりとまらむとするに、この人言ふやう、『今宵人待つらむ宿なむ、あやしく心苦しき』とて、この女の家はた、よきぬ道なりければ、荒れたる崩れより、池の水かげ見えて、月だにやどる住処を、過ぎむもさすがにて、おりはべりぬかし。もとよりさる心をかはせるにやありけむ、この男いたくすずろきて、門近き

達者なものだと　ことごとに感心していま　器量もすぐれた女でしたので　気の置けない通い所とする一方　〔この女と〕こっそり逢っていました間は　気に入ったものでした　指食いの女　どうしようもなく　いとしくは思っても死んだものは仕方がありませんので　あだっぽく気取り屋の点は　気に入らぬ所がありましたので　こっそり仲よくなった男ができたらしいのです　神無月　十月の頃　一緒になって　私の　妙に気にかかる　築地塀の崩れ　池の水に月の光が　素通りするのも気が利かないので　ひどく浮き浮きして　最初からそういう約束になっていたのでしょうか

一二 門を入ったすぐの所にある廊（細長い建物）というのであるから、中門廊であろう。（図録七参照）
一三 一面に色変りして。菊の花が霜に当って色変りしたのを愛でるのが当時の風であった。
一四 催馬楽、律「飛鳥井」の一節。「飛鳥井に　宿りはすべし　や　おけ　蔭もよし　みもひも寒し　御秣もよし」――飛鳥井に泊るのがよい、木蔭もたっぷり、水も冷たいし、まぐさも上等。「宿りはすべし」（泊りたいな）の意を籠めている。
一五 六絃の琴。わが国古来の楽器とされている。
一六 律の調子は。「飛鳥井」は律の歌である。律旋音階は、中国伝来の正楽の調子である呂に対して、わが国固有の俗楽的音階。感傷的で、洋楽の短調に近い。
一七 誰も尋ねて来ないようだね。「秋は来ぬ紅葉は宿に降り敷きぬ道踏みわけて訪ふ人はなし」（『古今集』巻五秋下、読人しらず）による。
一八 琴の音色も月もすばらしいお宅ですが、それで冷たい男を引き止めることができたでしょうか（おひとりのようですな）。「ひき」は、「弾き」を掛けて琴の縁語。
一九 不体裁なことのようですな。尋ねて来る男もないとは……と、からかった冗談。

一二 廊の簀子（縁側めいた所）だつものに尻（しり）かけて、とばかり（しばらく）月を見る。菊いとおもしろくうつろひわたり、風にきほへる紅葉（もみぢ）（風に勢いづいた）の乱れ（散り乱れる様など）など、あはれと、げに見えたり。ふところなりける笛取り出（い）でて（横笛）吹きならし、一四かげもよし、（殿上人が）などづづしりうたふほどに、よく鳴る和琴（わごん）（女は）を調べととのへたりける、（調子をととのえてあったのを）ぽつりぽつり歌うちに）みごとに）うるはしく掻（か）きあはせたりしほど、（合奏したところは）けしうはあらずかし。律（りつ）の調べは、女のものやはらかに掻（か）き鳴らして、簾（す）のうちより聞こえたるも、（まんざらでもありませんでした）（ものやさしく）（部屋の内から聞えたのも）楽器がはなやかな感じの和琴ですので）今めきたるものの声なれば、清く澄める月にをりつきなからず。男いたくめでて、簾（す）のもとに歩（あゆ）み来て、（ちょうどぴったりです）（感心して）『庭の紅葉（もみぢ）こそ、踏み分けたるあともなけれ』などねたます。（くやしがらせます）菊を折りて、

（男）『琴（こと）の音も月もえならぬ宿ながら
つれなき人をひきやとめける』

一九 わろかめり』など言ひて、（男）『今ひと声聞きはやすべき人のある時、手な残（のこ）いたまひそ』など、いたくあざれかかれば、女、いたう声つよ行（もう一曲喜んで聞こうというこの私のいる時に）（弾き惜しみなさるな）（色っぽく持ちかけますと）（きの声を出して）くろひて、

一　木枯に吹き合せるあなたの笛の音を私はどう申してお引き止めしてよいやら（私の琴の腕前ではとてもだめです）。「ひき」に「弾き」を掛け、「言」に「琴」を掛ける。「木枯」は葉を散らす風だから、その縁で「言の葉ぞなき」と言った。

二　十三絃の琴。

三　盤渉（洋楽のhに近い）を宮（主音）とする律旋音階。冬の調子といわれる。

四　指食いの女と木枯の女のことを考え合せてみますと。

五　手折ればこぼれそうな萩の露。男の誘いを待っているような色っぽい女をたとえたものである。「折りて見ば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわわに置ける白露」――折ってみたらこぼれてしまいそうだ、秋萩の枝もたわわに置いた白露は（『古今集』巻四秋上、読人しらず）によったものであろう。

六　手に取れば消え失せそうな風情の玉笹の上の霰。これも前と同じたとえ。引歌がありそうだが、不明。「玉笹」は、笹の美称、歌語。

（女）『木枯に吹きあはすめる笛の音を
　　ひきとどむべき言の葉ぞなき』
となまめきかはすに、憎くなるをも知らで、また箏の琴を盤渉調に調べて、今めかしく搔い弾きたる爪音、かどなきにはあらねど、まばゆきここちなむしはべりし。ただ時々うちかたらふ宮仕へ人などの、あくまでさればみすきたるは、さても見る限りはをかしくもありぬべし。時々にても、さる所にて忘れぬよすがと思うたまへむには、たのもしげなくさし過ぐいたりと心おかれて、その夜のことにことづけてこそまかり絶えにしか。

（艶っぽいやりとりをするので〔私が〕）（目を覆いたいような気持がしました）（才気がないではありませんが）（仲よくする）（女房）（とことん気取ってあだっぽいのは）（そうして付き合う限りでは味のあるものでもありましょう）（通い妻の一人として生涯の生活を託す人としては）（あぶなっかしく派手すぎると口実をもうけて通うのをやめてしまいました）（いや気がさして）

四　この二つのことを思うたまへあはするに、若き時の心にだに、なほさやうにもていでたることは、いとあやしく、たのもしげなくおぼえはべりき。今よりのちは、まして、さのみなむ思うたまへらるべき。御心のままに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉笹の上の霰などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそ、

（若い当時の私の考えでも）（木枯の女のように目立ちずぎる振舞は）（感心できず）（一層）（そういうふうにばかり考えられることでしょう）（おぼしめし通りに）

七　七年以上もたったら。馬の頭は、源氏より七歳ほど年長のようである。

八　身の上話。打明け話。

九　皆でお笑いになる。「おはさうず」は、「おはしあふ」（「おはす」の複数形）の連用形にサ変の「す」のついた形。「おはさひす」の音便形。

頭の中将の体験談——常夏の女の話

一〇　阿呆な男の話。馬の頭のように男の方から女を捨てた話でなく、結果として女に逃げられた話なので、自嘲気味にこう言った。

一一　そうした関係を続けてもいいと思われるほどの女だったので。その女が気に入った、ということ。

一二　我ながら思われる折々もありましたが。かなり深い仲になっても、時々しか通って行かなかったので、こう言う。

風情があるとお思いでしょうが　をかしくおぼさるらめ、今、さりとも七年あまりがほどに、おぼし知られることでしょう　知りはべなむ。なにがしがいやしきいさめにて、私ごとき微賤の者のご忠告ですが　すきたわめらむ女お気をつけなさいませ　に心おかせたまへ。あやまちして、〔そういう女は〕見む人のかたくななる名をも立てつべきものなり」といましむ。中将、例のうなづく。君、すこしかた笑みて、さることとはおぼすべかめり。「いづかたにつけても、人の悪いわろく、はしたなかりける身物語かな」とて、うち笑ひおはさうず。

夫が問抜けだという評判を立てかねないもの　例によって　源氏は　色っぽくなよなよした女に　そういうものだろうとはお思いのようだ　（源氏）いずれにしても　外聞

中将、「なにがしは、痴者の物語をせむ」とて、「いと忍びて見そめたりし人の、さても見つべかりしけはひなりしかば、きものとしも思うたまへざりしかど、馴れゆくままに、ぼえしかば、たえだえ忘れぬものに思うたまへしを、さばかりになれば、うち頼めるけしきも見えき。頼むにつけては、うらめしと思ふこともあらむと、心ながらおぼゆるをりをりもはべりしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをも、かうたまさかなる人とも思ひたらず、ただ朝夕にもてつけたらむありさまに見えて、心苦しかりし

私は　通って　長続きのすること　とても思われませんでしたが　いとしく思われましたので　とだえがちながら　それほどの仲になると　私を頼りにする様子も　〔女は〕何気ないふうで　久しく通って行かなくても　たまにしか訪れない男と思っている様子　もなく　朝夕出入りする夫を送り迎えするような態度に見えて　いじらしく思われた

一 末長く頼りにするようにというようなことも言ったものでした。この「頼む」は、下二段活用、頼りにさせる意。単なる愛人でなく、いずれ妻の一人として処遇するといった約束をしたのである。

二 この人（頭の中将）しか頼りにできる人はいないと。

三 （女が）こんなにおっとりしているので、安心して。

四 私の妻の所から。右大臣の四の君（四六頁注六）である。愛人のことを北の方が知って、人を介して女を脅迫したものと見える。

五 思いやりのない、ひどいことを。

六 （私との間の）幼い子供をかかえていたことでもあり、思い惑んだあげく。この女子、後の玉鬘である。

七 山でたつきを立てる賤しい私の家の垣根は荒れても（私のもとに訪れては下さらなくても）時々は（撫子に露が置くように）このいとしい子をかわいがって下さいませ。「山がつ」は、山の中で生計を立てる、荒くれた、人情を解さぬ者のことで、男の愛の薄い貧しい自分を卑下したもの。「あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲ける大和撫子」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）による。

八 虫の音ときそうかのように泣いている様子は。

かば、（ので）頼めわたることなどもありきかし。（〔女は〕）親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと、ことにふれて（何かにつけて）思へるさまもらうたげなりき。（可憐でした）かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、（通って行きませんでした頃）この見たまふるわたりより、情なくうたてあることをなむ、（五）さるたより（手づるが）ありて、かすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。（私はあとになって知ったのでした）さる憂きことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、（六）をさなき者などもありしに、思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。（〔女は〕すっかり悲観して）「さて、その文のことばは」と問ひたまへば、（手紙の文句は）「いさや、ことなることもなかりきや。（別にたいした歌でもありませんでしたよ）

（寄こしました）

（女）『山がつの垣ほ荒るともをりをりに（七）

あはれはかけよ撫子の露』

（源氏）

（中将）いや

この手紙で思い出したので

思ひいでしままにまかりたりしかば、例のうらもなきものから、いつものようにこだわりのない態度ですが いとものの思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきをながめて、虫の音（八）にき

九　昔物語（の一場面）のような感じでした。「昔物語」は、昔あったことを物語る物語の意で、ここでは作品としての物語を意味するが、この物語では、古風で幼稚な、型にはまった物語といった意識で使われているようである。晒屋に悲しみに沈む美女といった趣向が好まれていたことがうかがえる。

一〇　いろいろ咲いている花の色はどれが美しいと区別もつかないけれども、やはり常夏に及ぶ花はないことだ。「常夏」は、なでしこの異名。歌語。「常」に「床」を掛けて、ここは、妻である女をさす。

一一　夫婦の仲を第一に、ということで。「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」――塵一つもかからないようにしようと思います、妻と共寝する床、その名を持つ常夏の花を（『古今集』巻三夏、凡河内躬恒）。この歌は常夏の花を人にやるのを惜しんだ歌であるが、夫婦仲を大切にしたいという意味が技巧的に掛けられている、そちらの意味をきかせたもの。

一二　塵を払う私の袖も露がいっぱいの（涙に濡れている）常夏に、嵐までも吹きつける秋がやって来ました。下の句は「秋」に「飽き」を掛けており、あなたにも嫌われてしまいましたと受け取れるが、女の気持としては「あらし吹きそふ」に、四の君の脅迫のことを暗に言ったのである。

一三　こんなに行方も知れないようなことにさせてしまうこともなかったでしょう。

ほへるけしき、昔物語めきておぼえはべりし。

（中将）一〇『咲きまじる色は何れとわかねども
なほ常夏にしくものぞなき』

大和撫子をばさしおきて（子供のことはさしおいて）、まづ、塵をだに、など親の心をとる。（女）一一『うち払ふ袖も露けき常夏に
あらし吹きそふ秋も来にけり』

と、はかなげに言ひなして（本気にまめまめしく恨みたるさまも見えず（とても私に気兼ねして遠慮深くとりつくろい隠して）、涙をもらしおとしても、いとはづかしくつつましげにまぎらはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは（私のことを心底情けなく思っていると悟られるのは）、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて（気楽に思って）、またとだえ置きはべりしほどに、あ（突然）ともなくこそかき消ちて失せにしか。まだ世にあらば、はかなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほどに、わづらはしげに思ひまとはすけしき見えましかば、かくもあくがらさざらまし。こよなきとだえ置かず、さるものにしなして、長く見るやうもはべりなまし。

（とても つらいことと思っている様子なので）
（女親のご機嫌を取り結びます）
（行方をくらましてしまいました）
（哀れな落ちぶれ方をしていることでしょう）
（私が愛していました頃にあ）
（うるさく付きまとう様子が女にありましたら）
（通い妻の一人として）
（関係を続けたでもありましょう）

かの撫子のらうたくはべりしかば、子供がかわいかったので いかで尋ねむと思ひたまふるを、何とかして捜し出そうと思っていますが 今にえこそ聞きつけはべらね。これこそ、いまだに様子も知れません この女 のたまへるはかなき例なめれ。つれなくて、〔女が〕平気を装いながら つらしと思ひけるも知らで、〔私が〕いとしく思い続けていた あはれ絶えざりしも、益なき片思ひなりけり。今やうやう忘れゆくきはに、こちらが忘れる頃になって かれはたあの女の方 えしも思ひ離れず、をりをり人やりならぬ胸こがるる夕もあらむと 私のことを思い切れず おぼえはべり。これなむ、長続きしそうにない頼りにならない種類の女でした えたもつまじくたのもしげなきかたなりける。さればかのさがなものも、思い出されることのある女として思ひいでであるかたに忘れがたけれど、一緒に暮すには さしあたりて見むには、けむったくて わづらはしく、よくせずはあきたきこと 悪くするといや気のさすこともあるでしょうよ ともありなむや。琴の音すすめけむかどかどしさも、琴を上手に弾いた木枯の女の才気も すきたる罪重かるべし。この心もとなきも、今話した頼りない女も 疑ひ添ふべければ、局分らなくなってしまうのです いづれとつひに 男女の仲は 思ひ定めずなりぬるこそ。世の中や、どういう女がいいか結 ただかくこそ、全くこんなふうに とりどりにくらべぐるしかるべき。このさまざまのよき限りをとり具し、よい点だけを身に具えて 難ずべきくさはひまぜぬ人は、非難すべき点の全然ない女は いづこにかはあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば、妻にと望めば 法気づき、困りものでしょう くすしからむこそ、またわびしかりぬべけ

一（さっきあなたの）言われた、頼りない女の適例でありましょう。馬の頭が「艶にもの恥ぢして……」（五六頁）と言ったのをさしているのであろう。

二（女が）自ら求めたこととはいえ、悩みに胸をこがす夕方もあろうかと思われることです。「人やりならず」は、誰のせいでもない、自分のせいでの意。「夕」は、男の訪れの待たれる時刻だからこういう。

三 口やかまし屋。指食いの女。

四 疑えば疑えるでしょうから。女が姿を隠したのも、その陰に男がいたかも知れないからである。

五 それぞれに厄介なものでしょう。「くらべぐるし」は、折合いがつきにくい、付き合いにくいの意。

六 帝釈天の娘で、衆生に福徳を授けるとされた豊麗な美貌の女神。『日本霊異記』に吉祥天女の像に恋慕した男の話が見える。

七 抹香臭くてかた苦しい点が。「くすし」は、融通が利かない、まじめ一点張りというほどの意。

藤式部の丞の体験談——女学者、蒜食いの女の話

八「頭」は、蔵人の頭。「君」は、敬称。中将が蔵人の頭を兼任していた頭の中将なので、こういう。

九 文章博士（詩文、歴史を教授する大学寮の教官）の下に、文章得業生、文章生、擬文章生があり、学生から順次試験によって昇進する。このコースをとって任官するのは身分の低い者である。先に「下が下」と言った所以である。

一〇 五五頁以下のあたりの馬の頭の議論をさす。

一一 学問（漢学）の程度は、いい加減な博士も顔色なく。

一二「主人良媒を会す　酒を置いて玉壺に満てり　四座且く飲むこと勿れ　我が両つの途歌ふを聴け　富家の女嫁し易し　嫁ぐこと早ければ其の夫を軽づる　貧家の女嫁し難し　嫁ぐこと晩ければ姑に孝あり　聞け君婦を娶らんと欲るものならば　婦を娶ること意如何」（『白氏文集』奏中吟「議婚」）により、家は貧しいが娘はよい嫁になろうという意を諷したのである。前の文に「主人のむすめども多かり」「さかづき持て出でて」とあるのは、原詩の「主人」「置酒」を下敷にしたもの。

れ」とて、皆笑ひぬ。

（中将）「式部が所にぞ、変ったおもしろい話があろう けしきあることはあらむ。すこしづつ語り申せ」と責められる。「下が下のなかには、なでふことか、きこしめし所はべらむ」と言へど、頭の君、まめやかに「遅し」と責めたまへば、何ごとをとり申さむと思ひめぐらすに、「まだ文章の生にはべりし時、かしこき女の例をなむ見たまへし。かの馬の頭の申したまへるやうに、公事をも言ひあはせ、私ざまの世に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむかたもいたり深く、才の際なまなまの博士はづかしく、学問などしはべるとて、まかり通ひしほどに、主人のむすめども多かりと聞きたまへて、はかなきついでに言ひ寄りてはべりしを、親聞きつけて、さかづき持て出でて、『わがふたつの途歌ふを聴け』となむ、聞こえごちはべりしかど、をさをさうちとけてもまからず、かの親の心を憚りて、さすがにかかづらひはべりしほどに、いとあ

（式部）催促される（式部）「しも下の下の私どもには何の お聞きになっておもしろい話がございましょう」

（博士）相談し 私生活の面にかかわる処世上の心がけについて思慮をめぐらす点にかけてもたいしたもので 万事相手の口出し無用といった女でございました

（博士）ふとしたきっかけでねんごろになりましたのを

（博士）盃

（博士）それとなく持ちかけてきたのですが こちらは婿になる気などさらさらなく

（娘は）それでもふんぎり悪く通っておりましたところ とても

一 夜、床の中で目覚めての夫婦のうちとけた話。そういう時に至極かたい話が出るというところに滑稽感がある。

二 学問が身につき、お役所づとめに役立つ、理屈っぽい知識を教え込んでくれて。

三 仮名は女の使う文字。「といふもの」は、男は漢文を書くから、日頃親しくないよそよそしいものに対する言い方をしている。

四 曲りなりにも下手くそな漢詩を作ることなどを教わりましたので。歌の第三句と第四句の間の続きのよくないのを腰折れ歌といい、下手な歌のことをいうが、それをもじった言い方であろう。

五 馴れ親しむ妻として頼るには。「妻子」は、妻の意。漢学者らしい言い方。

六 まして、あなた様方のような若殿方にとって、しっかりしたやり手の奥方様は、何の必要がありましょうか。

七 何となく宿縁といった観念に捉われて、女と離れられないということもあるようですから。

八 障子（襖）などを隔てて。自室に入れるのではない、よそよそしい対面の仕方である。

情深くはれに思ひ後見、寝覚のかたらひにも、身の才つき、朝廷につかうまつるべき、道々しきことを教へて、いときよげに、大層きれいな筆つきで消息文にも仮名といふもの書きまぜず、格にかなった漢文を見事に書きますのでむべむべしく言ひまはしはべるに、おのづからえまかり絶えで、その者を師としてなむ、わづかなる腰折文作ることなど習ひはべりしかば、今にその恩は忘れはべらねど、なつかしき妻子とうち頼まむには、無才の人、学問のない男はいい切れもしませずいざれ何やらみっともなとても太刀打ちできないと思われましたなまわろならむふるまひなど見えむに、はづかしくなむ見えはべりし。まいて君達の御ため、はかばかしく、したたかなる御後見は、何にかせさせたまはむ。はかなし、くちをしと、かつ見つつも、ただわが心につき、宿世の引くかたはべるめれば、男しもなむ、仔細なきものははべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこづきて語りなす。

（式部）「さていと久しくまからざりしに、もののたよりに立ち寄りてはべれば、常のうちとけゐたるかたにははべらで、心やましき物越にて

つまらないしようがないと思いながらも自分の気に入り他愛のないものようです分ってはいながらおだてなさるのを妙な女もいたものだな何かのついでに
ふだんのくつろいでいる居間ではなくて
うどめかせて
心外千万な

九 風が体内に入って臓腑に発した病と考えられていた。脳溢血、高血圧症、神経痛、神経炎など。普通には「風」という。以下「極熱の草薬」「服す」「対面」「雑事等」と、かたい漢語を連発する。「堪へかねて」「により」「対面賜はる」「まのあたりならずとも」、これらも男の言葉遣いで、全体として当時の女言葉としては異様で滑稽である。

一〇 蒜（にんにく）のこと。「極熱」は、酷暑の意で、暑気あたりにも用いるところからの名であろう。

一一 雑用。用事。

一二 いかにも殊勝に。夫の世話はやこうとする妻らしい心遣いは見えるからである。

一三 蜘蛛の動きで私の来ることが分っているはずのこの夕暮れに、昼間は待て（にんにくの匂いのする間はだめ）というのは聞えません。「昼」と「蒜」を掛ける。「わがせこが来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」――わが夫は今晩きっとお見えになる、蜘蛛の動きではっきりそれが分ります（『古今集』巻末の墨滅歌、衣通姫）によった。

なむあひてはべる。ふすぶるにやと、をこがましくも、またよきふしなりとも思ひたまふるに、このさかし人はた、軽々しきもの怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひとりてうらみざりけり。声もはやりかにて言ふやう、『月ごろ風病重きに堪へかねて、極熱の草薬を服して、いと臭きによりなむ、え対面賜はらぬ。まのあたりならずとも、さるべからむ雑事等はうけたまはらむ』と、いとあはれにむべむべしく言ひはべり。答へに何とかは。ただ『うけたまはりぬ』とて、立ち出ではべるに、さうざうしくやおぼえけむ、『この香失せなむ時に立ち寄りたまへ』と、高やかに言ふを、聞き過ぐさむもいとほし、しばしやすらふべきにはた、はべらねば、げにそのにほひさへ、はなやかにたち添へるも術なくて、逃げ目をつかひて、

阿呆らしくもあり　切れるよ　やいているのかと　この賢女ときたら　男女の仲を達観して恨み言も言いませんでした　せかせかした声で　やきもちなどやくはずもなく　拝顔いたさなくとも　しかるべき　理路整然と　何と言えましょう　（式部）承知つかまつった　もの足りなく思ったのでしょうか　（女）　聞き捨てにする　声高に　のもかわいそうだし　といって寸時もぐずぐずしている場合では　ありませんので　ぷんぷん匂ってくるのも　堪らなくて　目つきもうろうろと

『ささがにのふるまひしるき夕ぐれに
　ひるま過ぐせといふがあやなさ』

（式部）一三

何の口実ですか

いかなることづけぞや』と、言ひも果てず走り出ではべりぬるに、

一 夜ごとに逢っている仲でしたら、昼間（にんにくの匂いのする間）でも何で恥ずかしいことがありましょうか。お逢いしてもいいのですが、疎々しいあなたのことですから……。
二 源氏以下の三人。
三 作り話だろうと。
四 いっそおとなしく鬼とでも差し向いでいた方がましだ。
五 人を非難するしぐさ。

背中から追ひて、

（女）『逢ふことの夜をし隔てぬ仲ならば
　　ひる間もなにかまばゆからまし』

さすがに口疾くすばやい返歌ではありましたなどはべりき」と、しづしづと落着き払って申せば、君達あされかえって ましと思ひて、どこの世界にそんな女がいるものか虚言とて笑ひたまふ。「いづこのさる女かあるべき。四おいらかに鬼とこそ向ひゐたらめ。気色の悪い話だむくつけきこと」と、爪弾きを五して、いはむかたなしと、お話にならないと式部をあはめ憎みて、「すこしよろしからむことを申せ」と、責めたまへど、（式部）これ以上のおもしろい話がございましょうさぶらひなむや」とて、をり。すましている

（馬頭）「すべて男も女も、わろものは、生半可な人間は わづかに知れるかたのことを、残りなく見せ尽くさむと思へるこそ、いとほしけれ。困りものです 三史五経、道々本格の学問をしきかたを、七あきらかにさとりあかさむこそ、愛敬なからめ、などして 女だからといって かは、女といはむからに、八世にあることの公私につけて、むげに知らずいたらずしもあらむ。わざわざ勉強しなくても わざと習ひまねばねど、多少とも才知のある すこしもかど

馬の頭によるまとめ——女手紙の漢字

六 「三史」は、『史記』『漢書』『後漢書』。「五経」は、『易経』『詩経』『書経』『春秋』『礼記』。
七 徹底的にきわめ尽すといったことは、いかにもかわいげのないことでしょうが。
八 世上の公私いずれのことに関しても、一切知らない通じていないということがありましょうか。

九　そうあってはならない（漢字を書くなどふさわしくない）女同士でやりとりする手紙に。

一〇　身分の高い上席の女房。このあたり、女房としての作者の素顔が思わずのぞいているようである。

一一　節日（正月元日、正月七日の白馬、九月九日の重陽など）その他公の行事の日に朝廷で群臣に賜る宴会。

一二　五月五日の節会。武徳殿に行幸があって菖蒲の鬘を付けた群臣に薬玉を賜い、競馬が行われた。冷泉天皇の安和元年（九六八）に停止されて以降廃節になったが、家々で菖蒲を葺き、身に付けて飾りとしたりする風は長く残った。

一三　落着いてものを考えるゆとりもないのに。「文目」（模様、分別）に「菖蒲」を掛ける。

一四　菖蒲の根の趣向を凝らした歌を詠みかけ。「えならぬ」は、すばらしい。菖蒲は長い根のついたまま採取して、その根を飾りとしたり人に贈ったりした。「ひきかけ」は、菖蒲の根の縁語。

一五　九月九日、重陽の節会。御前に菊を飾り、群臣に菊酒を賜り詩会があった。これも当時すでに廃節であった。

一六　むつかしい漢詩の趣向に工夫を凝らして。御宴で作る漢詩の腹案を練るのである。

――はた迷惑な女流歌人

そのあげ女ならば聞きおぼえ見おぼえることがあらむ人の、耳にも目にもとまること、自然に多かるべし。さるまくが漢字を達者に書いてまには、真名をはしり書きて、さるまじきどちの女文に、なかば過半分以上も才走って書き込んだのを見ると ぎて書きすすめたる、あなうたて、この人のたをやかならましかばあたらこの人が女らしかったらなあと思われます と見えたり。ここちにはさしも思はざらめど、おのづからこはごは自分ではそうも思わないのでしょうが しき声に読みなされなどしつつ、ことさらびたり。上臈のなかにも、読む方もぎくしゃくした声で 多かることぞかし。歌詠むと思へる人の、やがて歌にまつはれ、を和歌を鼻にかけた人が 不自然な感じです かしき古ことをも、はじめよりとりこみつつ、すさまじきをりを、昂じて歌のことしか考えなくなり 古歌 初句から踏まえて 詠みかけたるこそ、ものしきことなれ。返しせねばなさけなし、えこちらが迷惑するような時に 不愉快なことです 返歌しなければ気が利かず［といって］ せざらむ人は、はしたなからむ。さるべき節会など、五月の節に急できない事情にある人は 困った立場に立ります ぎ参る朝、何のあやめも思ひしづめられぬに、えならぬ根をひきかけ、九日の宴に、まづ難き詩の心を思ひめぐらして、暇なきをりに、菊の露をかこちよせなどやうの、つきなきいとなみにあはせ、さな菊の露にかこつけて嘆きの歌を寄こすといった その場に不似合いなことにお付合いさせ そんな場合でなくても らでも、おのづから、げに後に思へばをかしくもあはれにもあべかしゃれてもおり意味深くも感じられるはず 目にも入らないといった事情を 察しもせのことが りけることの、そのをりにつきなく、目にとまらぬなどを、おしは

――女は万事控え目に

一 かえって気が利かないことです。

二 どうしてそんな事をするのか（控えるべきだ）と思われる場合とか、折節とか、そんな事の見分けがつかない程度の分別では。

三 ただ一人のお人のことを。藤壺のこと。

四 この馬の頭の議論に。

五 比類のないお方だと思うにつけても、ますます胸がいっぱいになる。藤壺に対する源氏の満たされぬ胸の思いを暗示する筆致。

翌日、源氏、左大臣邸の葵の上のもとを訪れる

六 馬の頭たちが高く評価してあげつらった実直な妻としては頼りにできる人であろう。「ただひとへにものまめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける」（五六頁）とあった。

からず詠み出でたる、なかなか心後れて見ゆ。（ずに）（一）（おく）（万事につけて）よろづのことに、などかは、さても、とおぼゆるをりから、時々、思ひわかぬばかりの心にては、よしばみ情立たざらむなむ目やすかるべき。（気取ったり）（なさけだ）（風流ぶったりしない方が無難でしょう）（わき）すべて、心に知れらむことをも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは、過ぐすべくなむあべかりける」と言ふにも、君は人ひとりの御ありさまを、心のうちに思ひつづけたまふ。（そのうちの一つ二つは）（言わないでおくのがよいのです）（源氏）（三）（言いたいこともまえていることも）

四 これに、足らずまたさし過ぎたることなくものしたまひけるかなと、ありがたきにも、いとど胸ふたがる。いづかたにより果つともなく、果て果てはあやしきことどもになりて、あかしたまひつ。（足りないこともなくまた出過ぎた点もなく〔ぴったりで〕いらっしゃることだと）（おしまいは要領を得ない話になって）（五）（どういう結論になるということもなく）（夜をお明かしになった）

からうして、今日は日のけしきもなほれり。かくのみこもりさぶらひたまふも、大殿の御心いとほしければ、まかでたまへり。おほかたのけしき、人のけはひもけざやかにけ高く、乱れたるところまじらず、なほこれこそは、かの、人々の捨てがたく取り出でしまめ人には頼まれぬべけれ、とおぼすものから、あまりうるはしき御あ（天気も持ち直した）（左大臣のご心中が気の毒なので）（さるのも）（退出なさった）（宮中に長滞在な）（左大臣邸の有様は）（葵の上の様子も端麗で気品があり）（何事もきちんとしていら）（この人）（して）（六）（お思いになるものの）（あまりにも すきのないご態度で）

七 葵の上づきの女房。中納言は後の葵の巻に、中務は末摘花の巻に、いずれも源氏の思い人であると見える。

八 若い女房。

九 図録九参照。

一〇 図録九参照。

一一 天一神。陰陽道で説く神。六十日を周期として、十六日間は天上に在るが、以後、五日あるいは六日ずつ八方に遊行する。その方角を方塞りといって忌み、方違えする。この場合は、内裏から左大臣邸への方角が中神のいる方角に当るので、その方角を避けるため他所に移らなければならないのである。

源氏、方違えのため紀伊の守の邸に赴く

一二 源氏の私邸。桐壺の巻末に修理されたことが見える「里の殿」である。（図録一参照）

一三 京極川の二条以北の称（『河海抄』）。平安京の東京極のあたりを流れていた川（図録一参照）。

一四 門の中に牛をつけたまま車を引き入れられる所がよい。気楽に行ける目下の者の家ということである。

一五 内密のお泊り先（恋人の所）ならたくさんあるだろうけれども。

〔源氏には〕なかなかうちとけず気づまりな程にとりすましていらっしゃるのが、とけがたくはづかしげに思ひしづまりたまへるを、さうざうしくて、中納言の君、中務などやうの、おしなべたらぬ若人どもに、たはぶれごとなどのたまひつつ、暑さに乱れたまへる御ありさまを、見るかひありと思ひきこえたり。大臣も渡りたまひて、うちとけたまへれば、御几帳隔ててはしまして、御物語聞こえたまふを、「暑きに」と、にがみたまへば、人々笑ふ。「あなかま」とて、脇息に寄りおはす。いとやすらかなる御ふるまひなりや。

（人並みすぐれてきれいな人といった）（冗談など）（暑いので着物もくつろげておられる）（〔女房たち〕すばらしいと）（〔源氏が〕）（左大臣）（苦い顔をなさるので）（女房たち）（〔源氏〕）（静かに）（と制して）（いかにも貴人らしく大様な）

暗くなるほどに、「今宵、中神、内裏よりはふたがりてはべりけり」と聞こゆ。「さかし、例は忌みたまふかたなりけり」「二条の院も同じ筋にて、いづくにか違へむ、いとなやましきに」とて大殿籠れり。「いとあしきことなり」と、これかれ聞こゆ。「紀伊の守にて親しくつかうまつる人の、中川のわたりなる家なむ、このころ水せき入れて、涼しきかげにはべる」と聞こゆ。「いとよかなり。なやましきに、牛ながら、ひき入れつべからむ所を」とのたまふ。忍び忍

（〔女房〕）（そうでした）（方角）（お避けになる方角でした）（〔源氏〕）（気分も悪いのに）（女房の誰彼が）（〔人々〕）（〔左大臣に〕親しくお仕えする）（水を引き入れて）（木蔭でございます）（〔源氏〕）（それは好都合だ）

一 長いご無沙汰のあとでせっかくおいでになったのに、方角が悪いのにかこつけて、予定を変えてほかの女のもとに行ったと（左大臣が）お思いになるのは、お気の毒だと思われたのであろう。

二 （源氏が）ご用をお申しつけになると。

三 紀伊の守の父。後に伊予の介と見え、実は次官である。「朝臣」は、敬称。

四 凶事を避けなければならないことがございまして。

五 その女たちのすぐ側に寝させてほしい。女はふだん几帳の陰にいるものだから、こう言った。

六 まあ適当なお泊り場所かもしれません。

七 使いの者をあらかじめ紀伊の守邸に走らせる。

八 （家人は）迷惑がるが。

九 （源氏の供人たちは）誰も問題にもしない。源氏の権勢をたのんで有無を言わせぬ態度である。

一〇 寝殿の東側（東の部分）をきれいに明けさせて。（図録七参照）

一一 遣水。普通、寝殿と東の対の間を南流させ庭を通して池に注ぐ。（図録六参照）

一二 雑木の枝を編んだ垣。（図録八参照）

一三 庭先の植込み。

びの御方違へ所は、あまたありぬべけれど、久しくほど経て渡りたまへるに、方塞げて、ひき違へほかざまへとおぼさむは、いとほしきなるべし。紀伊の守に仰せ言賜へば、うけたまはりながら、しりぞきて、「伊予の守の朝臣の家につつしむことはべりて、女房なむまかり移れるころにて、狭き所にはべれば、なめげなることやはべらむ」と、下に嘆くを聞きたまひて、「その人近からむなむ、うれしかるべき。女遠き旅寝は、もの恐ろしきここちすべきを、ただその几帳のうしろに」とのたまへば、「げによろしき御座所にも」とて、人走らせやる。いと忍びて、ことさらにことことしからぬ所を、と、急ぎ出でたまへば、大臣にも聞こえたまはず、御供にもむつましき限りしておはしましぬ。

（紀伊守）三 お受けはしたけれども さがってから 女たちが 失礼にあたることでもあっては大変です （源氏）その人気に近いというのは 陰で心配するのを 心細いだろうに

「にはかに」とわぶれど、人も聞き入れず。寝殿の東面払ひあけさせて、かりそめの御しつらひしたり。水の心ばへなど、さるかたにをかしくしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心とめて

急のお成りで 急ごしらえのお部屋の支度がしてある 寝殿向 たちだけを連れて 親しい者 お知らせせず わざわざ大げさでない所を選んで それなり 気をくばって 工夫がこらしてある

植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、螢しげく飛びまがひて、をかしきほどなり。人々、渡殿より出でたる泉にのぞきゐて、酒飲む。主人もさかな求むと、こゆるぎの急ぎありくほど、君はのどやかにながめたまひて、かの中の品に取り出でて言ひし、このなみならむかしとおぼしいづ。

思ひあがれるけしきに聞きおきたまへるむすめなれば、ゆかしくて、耳とどめたまへるに、この西面にぞ人のけはひする。衣のおと音がさらさらと聞えて なひはらはらとして、若き声どもにくからず。さすがに忍びて、笑ひなどするけはひ、ことさらびたり。格子をあげたりけれど、守、心なしと、むつかりて、おろしつれば、火ともしたる透影、障子の上より漏りたるに、やをら寄りたまひて、見ゆやとおぼせど隙もなければ、しばし聞きたまふに、この近き母屋につどひゐたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞きたまへば、わが御うへなるべし。「いといたうまめだちて、まだきに、やむごとなきよすがに、さ

一四 渡殿の下から湧き出ている泉を見下ろす場所に坐って。渡殿は、寝殿と対の屋（この場合は東の対であろう）を結ぶ建物（図録六参照）。

一五 主人（紀伊の守）もご馳走の支度にいそがしげにあちこちしている間。「玉垂れの　小瓶を中に据ゑて　あるじはも　や　さかな求ぎに　さかな取りに　こゆるぎの　磯の若布　刈り上げに」――酒瓶を中に置いたまま主人はさかなを探しに磯の若布を刈りに行く（風俗歌「玉垂」）の歌詞によった。「こゆるぎ」は、相模の地名、「こゆるぎの」で「磯」の枕詞。風俗歌は、貴族に愛唱された地方民謡。

一六 昨夜、馬の頭が中流の家庭として特に言及したのは。「中の品のけしうはあらぬ、選り出でつべきころほひなり」（五〇頁）とあった。

一七 気位高く構えているふうだとかねて聞いておられた娘なので。空蟬のこと、今は伊予の介の後妻に納まっている。後に紀伊の守の口から事情が説明される。

一八 源氏の今いる寝殿の西側。源氏は東の方にいる。

一九（女たちのいる西面は）格子が上げてあったけれども。（図録七参照）

二〇 隙間からの火影。

二一 襖障子。西側の部屋との隔て。（図録八参照）

二二 建物の中央部。廂の間を周囲にめぐらす。（図録九参照）

二三 ご立派な（身分の高い）奥様がおきまりでいらっしゃるのは。葵の上のこと。

一 しかるべき忍び所には。
二 胸の内にあること（藤壺のこと）ばかり気になっていらっしゃるので。
三 後に葵の巻以降、朝顔の姫君と呼ばれて登場する。「式部卿の宮」は、親王で式部卿（式部省の長官）である人の称。この人は桐壺の帝の弟であることが後に分る。
四 源氏が朝顔を贈った時の歌。このことは物語の上には見えない。
五 軒先に吊した燈籠の数をふやし。（図録一〇参照）
六 燈台の火を明るくしたりして。「かかぐ」は、「掻き上ぐ」で、燈心を引き出すこと。
七 菓子、果実、木の実など。間食である。
八 寝室のほうもどうだな、支度はできているか。女を、という冗談である。「我家は　帷帳も　垂れたる　大君来ませ　婿にせむ　御肴に　何よけむ　鮑栄螺か　石陰子よけむ　鮑栄螺か　石陰子よけむ」（催馬楽、呂「我家」）による。「帷帳」は、室内の間じきりの垂れ絹。「かせ」は、貽貝。形、女陰に似る。
九 何がお気に召しますやら、分りかねますので。同じ「我家」の句で答えた。
一〇 端近な御寝所に。おそらく南の廂であろう。

源氏、紀伊の守と空蟬のことを語る

一一 殿上の間に上がった時に。見習のため少年で特に殿上の間に上がることを許された者を殿上童という。

だまりたまへるこそ、さうざうしかめれ。されど、さるべき隈には、よくこそ隠れありきたまふなれ」など言ふにも、おぼすことのみ心にかかりたまへば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを、聞きつけたらむ時、などおぼえたまふ。ことなることなければ、聞きさしたまひつ。式部卿の宮の姫君に、朝顔奉りたまひし歌などを、すこしほほゆがめて語るも聞こゆ。くつろぎがましく、歌誦じがちにもあるかな、なほ見劣りはしなむかし、とおぼす。守出で来て、燈籠かけそへ、火明くかかげなどして、御くだものばかり参れり。「とばり帳もいかにぞは。さるかたの心もなくては、めざましき饗ならむ」とのたまへば、「何よけむとも、えうけたまはらず」と、かしこまりてさぶらふ。端つかたの御座に、仮なるやうにて大殿籠れば、人々もしづまりぬ。

主人の子ども、をかしげにてあり。童なる、殿上のほどに御覧じ馴れたるもあり。伊予の介の子もあり。あまたあるなかに、いとけ

つまらないわね　こっそりお通いのようよ　どきりとして　こんな時にでも　人があの　別段のこともな　秘密を噂するのを　聞きつけたらどんな気がするだろう　途中までで聞くのをおやめになった　いので　文句を間違えて　有閑婦人気取りで　何かと言えば歌を口にすることよ　やはりがっかりする手合いだろうな　さし上げた（源氏）　そちらの方の心くばりもなくては　興ざめな　紀伊の守の　接待だろう　控えている　かわいらしい様子でいる　供人たち

三 前の十二、三歳ほどの子供。小君という。
一三 空蟬の父。すでに故人。「衛門の督」は、衛門府の長官。従四位下相当。

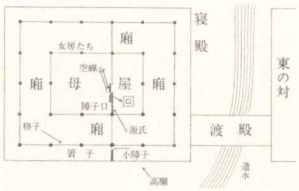
故衛門督 ── 空蟬 ═ 伊予介 ── 紀伊守
└ 小君

一四 すらすらとは出仕できないようでございます。父も亡く、有力なひきがないからであろう。
一五 するとこの子のお姉さんが、君の継母なのか。「まうと」は、真人。軽い第二人称の敬語。
一六 不似合いな（若い）継母を持つことになったものだな。
一七 帝（桐壺の帝）も（入内の希望のことは）お耳にしておられて。
一八（衛門の督が）娘を入内させたいとちらと奏上したことがあったが。前に「思ひあがれるけしきに聞きおきたまへるむすめ」（八三頁）とあった事情がここではっきりする。
一九 男女の縁は分らぬものだな。
二〇 はからずも父に縁づくことになったのでございます。
二一（この世での）運命。

はひあてはかにて十二三ばかりなるもあり。いづれかいづれ、など問ひたまふに、「これは、故衛門の督の末の子にて、いとかなしくしはべりけるを、をさなきほどに後れはべりて、姉なる人のよすがに、かくてはべるなり。才などもつきはべりぬべく、けしうははべらぬを、殿上なども思うたまへかけながら、すがすがしうはえまじらひはべらざめる」と申す。「あはれのことや。この姉君や、まうとの後の親」「さなむはべる」と申すに、「似げなき親をも、まうけたりけるかな。上にもきこしめしおきて、『宮仕へにいだし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ』と、いつぞやのたまはせし。世こそ定めなきものなれ」と、いとおよすけのたまふ。「不意にかくてものしはべるなり。世の中といふもの、さのみこそ今も昔も定まりたることはべらね。中についても女の宿世は浮びたるなむ、あはれにはべる」など聞こえさす。「伊予の介は、かしづくや。君と思ふらむな」「いかがは。私の主とこそは思ひてはべるめるを、す

（源氏が）
（守）
（守）
（源氏）
（源氏）
（帝）
（守）
（源氏）
（源氏）

上品で
姉につながる縁で
父に先立たれて
おりましたのが
とてもかわいがって
見込みはございますが
学問などもできそうな子で
殿上童なども望んではおりますが
ふびんなことだな
さようでございます
どうなったのだろう
ひどく大人びた口をきかれる
男女の仲
こうしたもので
大事にしているか
主君扱
好色
それはもう
いだろうな
なるか分ったものではございませんな
なか
すくせ
さだめないのが
うちうちの主人と思っているようですが
しゅう
わたくし
かしづく
いだろうな



一 召使の住む建物。

二 廂の間の周囲にめぐらしてある濡縁。（図録八参照）

源氏、空蟬の部屋をうかがう

三 むなしい独り寝かとお思いになると。

四 守の話に出た人。空蟬。

五 もしもし。「ものうけたまはる」のつづまった形。おうかがいします、の意。

六 母屋の周囲にめぐらす部屋。ここは、おそらく寝殿の南廂の東半分であろう。（図録九参照）

がましいことだと きずきしきことと、私をはじめ子供たちは皆 なにがしよりはじめて、不承知なのでございます うけひきはべらずなむ」と申す。（源氏）「さりとも、君たちのような似合いの今風の若者に まうとたちのつきづきしく今めきたらむに、下げ渡すものかね おろしたてむやは。伊予の介 かの介は、なかなかたしなみのある伊達者だものな いとよしありてけしきばめるをや」など、物語したまひて、（源氏）「いづかたにぞ、どこにいるのか」（守）「皆下屋におろしはべりぬるを、全部は下がれないでいるかも知れません えやまかりおりあへざらむ」と聞こゆ。酔ひすすみて、供人たち 皆人々簀子に臥しつつ、しづまりぬ。

源氏は落着いてお眠りにもなれず 君はとけても寝られたまはず、三 いたづら臥しとおぼさるるに、御目 冴えて さめて、この北の障子のあなたに 向う側 人のけはひするを、こなたや、四 かくいふ人の隠れたるかたならむ、あはれや、と御心とどめて、どうしているだろう と気をひかれて やを 先程の子供 ら起きて立ち聞きたまへば、ありつる子の声にて、（小君）五「ものけたまはる。いづくにおはしますぞ」と、かすれた愛らしい声音で言うと かれたる声のをかしきにて言へば、（空蟬）「ここにぞ臥したる。客人は寝たまひぬるか。どんなに御座所に近かろう いかに近からむと かと思っていましたが 思ひつるを、でもかなり離れているわね されどけどほかりけり」と言ふ。寝たりける声のしど 調子が けなき、いとよく似かよひたれば、姉だなと いもうとと聞きたまひつ。（小君）六「廂に

七 自称の代名詞。親しい間同士で用いる。
八 障子（襖）の出入口の斜め向うのあたりに。
九 空蟬の侍女の呼び名。
一〇 言うのが聞えると。「なり」は、終止形接続で推定をあらわす。言うらしい、ということで、声がやや遠くに聞える感じになる。次の「答へすなり」の「なり」も同じ。
一一 母屋と廂の間の境、廂の間と簀子の境に横に渡してある木。母屋、廂、簀子と、一段ずつ低くなっている。空蟬は母屋に、女房たちは廂の間に寝ているのである。（図録九参照）
一二 下屋にお湯を使いに下がって。

源氏、空蟬の寝所に忍ぶ

一三 掛金。戸締りの金具。障子（襖）の両面にある。
一四 脚の付いた櫃。衣類などを入れる（図録一一参照）。「だつ物」は、「のような物」の意。
一五 源氏は何となく気が咎めるけれども、空蟬が上に掛けている着物を押しやる、その時まで。
一六 空蟬は、呼んだ中将の君だとばかり思っていた。

ぞ大殿籠りぬる。音に聞きつる御ありさまを見たてまつりつる、げにこそめでたかりけれ」とみそかに言ふ。「昼ならましかば、のぞきて見たてまつりてまし」と、ねぶたげに言ひて、顔ひき入れつる声す。ねたう、心とどめても問ひ聞けかし、とあぢきなくおぼす。「まろは端に寝はべらむ。あなくるし」とて、火かかげなどすべし。女君は、ただこの障子口すぢかひたるほどにぞ臥したるべき。「中将の君はいづくにぞ。人気遠きここちして、もの恐ろし」と言ふなれば、長押の下に、人々臥して答へすなり。「下に湯におりて、『ただ今参らむ』とはべる」と言ふ。

皆しづまりたるけはひなれば、かけがねをこころみに引きあげたまへれば、あなたよりは鎖さざりけり。几帳を障子口には立てて、火はほの暗きに見たまへば、唐櫃だつ物どもを置きたれば、みだりがはしきなかを、分け入りたまへれば、ただひとりいとささやかにて臥したり。なまわづらはしけれど、上なる衣押しやるまで、求め

一　中将をお呼びでしたので。源氏は近衛の中将であるので、空蟬が自分を呼んだかに取りなして言う。

二　申し上げて分って頂きたいと思いまして。

三　私がこうした機会をやっとつかまえましたことからも。近づく機会をねらっていた私の苦心のほどから察しても、という気持。

四　恐ろしい鬼神も（その美しさに感じて）手荒な振舞はできないだろうと思われるほどのご様子なので。

五　しかし、気持は情けなさでいっぱいで、けしからぬ不倫のことと思うと、何ということかと、あきれる思いで。

六　間違えるはずもない私の真実の恋心に導かれてここまでやって来ましたのに。

七　障子の所（前に入って来た障子口）をお出になるところに。

つる人と思へり。（源氏）「中将召しつればなむ、人知れぬ思ひのしるしあ（人知れずお慕いしていたかいがあったとうれしく存じまして）ることこちして」とのたまふを、〔空蟬は〕とっさの分別もつかず（悪夢にうなされるような思いで）そはるることこちして、「や」（ああ）とおびゆれど、（とおびえ声を立てたが）顔に衣のさはりて、音（声にもならない）にも立てず。（源氏）「うちつけに、深からぬ心のほどと見たまふらむ、こと（一時の出来心のたわむれとお思いになるかも知れませんのもともですが）わりなれど、年ごろ思ひわたる心のうちも、聞こえ知らせむとてな（長年お慕いしつづけている私の気持も）む。かかるをりを待ちいでたるも、さらに浅くはあらじと思ひなし（決して気まぐれからではないということを分って下さい）たまへ」と、いとやはらかにのたまひて、鬼神もあらだつまじきけ（もの柔らかに）はひなれば、はしたなく、「ここに、人」（誰か変な人が）とも、えののしらず。（騒ぎ立てられない）ここちはた、わびしく、あるまじきことと思へば、あさましく、「人違へ（空蟬）にこそはべるめれ」と言ふも息の下なり。消えまどへるけしき、い（お人違いでございましょう）と心苦しくらうたげなれば、をかしと見たまひて、「違ふべくもあ（消え入らんばかりに取り乱した様子は）らぬ心のしるべを、思はずにもおぼめいたまふかな。すきがましき（とてもいたいたしく可憐なので）さまには、よに見えたてまつらじ。思ふことすこし聞こゆべきぞ」（いい女だと）とて、いとちひさやかなれば、かき抱きて、障子のもと出でたまふ（おとぼけになるとは心外千万です）（好色めいた振舞は）（決していたしません）（私の胸の内をすこし申し上げるだけです）（小柄な身体つきなので）

一面に匂って。

八（源氏の着物にたきしめた）薫物の香りがあたり

九 その場合でも。

一〇 どんなものだろう、まずい。以上の一文、中将の君の心を書いたもの。

一一（中将は）あとからついて来たが。

一二（源氏は）動ずる色もなく。平然と。

一三 奥のご寝所にお入りになった。前に「端つかたの御座」（八四頁）とあったのはおそらく南の廂であるが、ここは母屋にしつらえられた寝所であろう。

一四 この中将の君がどう思うだろうということも、死ぬほどせつないので。

一五（女も）しみじみ感じ入るほどに。次の「なさけなさけしく」に掛る。

一六 現実のこととも思われません（悪い夢を見ているような気持です）。

一七 おさげすみになった（こんなご無体なことをなさった）お気持のほども。

一八 こうした低い身分の者は、結局低い身分の人間にすぎないと世間でも申すではございませんか。卑賤の人間には卑賤の人間なりの生き方がある、あなたのような高貴のお方とはご縁のない人間なのです、の意。

にぞ、求めつる中将だつ人来あひたる。「やや」とのたまふに、あ（空蟬の呼んだ中将らしい人が来合せた）（源氏）これ（中将が）とお呼びになるので）

やしくて、探り寄りたるにぞ、いみじくにほひみちて、顔にもくゆ（変に思って）（手探りで近づいたところ）（そうと気づいた）

りかかるここちするに、思ひ寄りぬ。あさましう、こはいかなるこ（あきれる思いで）（これはどうしたことか）

とぞと思ひまどはるれど、聞こえむかたなし。なみなみの人ならば（とおろおろするけれども）（申し上げようもない）（相手が普通の身分の男なら）

こそ、あららかにも引きかなぐらめ、それだに人のあまた知らむは、（手荒に引き離しもしよう）（大勢の人に知れるのは）

いかがあらむ。心も騒ぎて、したひ来たれど、動もなくて、奥なる（気もそぞろで）

御座に入りたまひぬ。障子をひきたてて、「暁に御迎へにものせよ」（源氏）（女君の）（参れ）

とのたまへば、女は、この人の思ふらむことさへ、死ぬばかりわり（空蟬）

なきに、流るるまで汗になりて、いとなやましげなる、いとほしけ（気分もひどく悪そうなのが）

れど、例のいづこより取う出たまふ言の葉にかあらむ、あはれ知ら（例によって）

るばかり、なさけなさけしくのたまひつくすべかめれど、なほいと（ものやさしくいろいろ言葉をお尽しになるようだけれども）（女は）それでも）

あさましきに、「うつつともおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、お（あまりのことに）（空蟬）（しがない身分の女ですが）

ぼしくたしける御心ばへのほども、いかが浅くは思うたまへざらむ。（どうして浅いと思わずにおられましょうか）

いとかやうなる際は、際とこそはべなれ」とて、かくおしたちたま（（源氏が）こんな無体なことをな）

一 あなたのおっしゃる、その身分身分の違いといったことをまだ知らない、はじめての経験なのですよ。

二 何が何でもといった無理無体な好色な振舞をしたことは今まで全くなかったのですが。

三 （あなたとのことは、これも）前世からの因縁なのでしょうか。

四 ほんとに、このように（忍び込んだりして）あなたに非難されるのももっともな、狂おしいこの私の気持を。

五 ますます。「わびしければ」に掛る。

六 （空蟬は）元来がおとなしい性質の人であるのに。

七 細くしなやかな竹。

八 （空蟬が）気持の晴らしようもなく情けないと思っている（様子な）ので。

九 どうしてこんなに私をお嫌いになっていいものでしょうか（そう目の敵にしなくてもいいではありませんか）。

（思いやりのない情けないことと悲しんでいる）さったのを（かわいそ）へるを、深く、なさけなくうしと思ひ入りたるさまも、げにいとほ（ひどいと）しく、心はづかしきけはひなれば、（源氏）「その際々を、まだ知らぬ初事（うひごと）（手出しのできないような感じ）うで（それをかえって世間並みの浮気者あつかいなさるのは）ぞや。なかなかおしなべたるつらに思ひなしたまへるなむ、うたて（今まで何かの折にお聞きおよびでもありましょう）思います（ひどいと）ありける。おのづから聞きたまふやうもあらむ、あながちなる好き（す）心はさらにならはぬを、さるべきにや、げにかくあはめられたてまつるもことわりなる心まどひを、（自分でも不思議なほどに思います）みづからもあやしきまでなむ」（まじめになって）など、まめだちて、よろづにのたまへど、（源氏の）いとたぐひなき（たぐいないお美しさを見るにつけ）御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ、（肌身を許すことがつらく思われるので）すくよかに心づきなしとは見えたてまつるとも、（そっけなくいやな女だとお思いになろうとも）さるかたのいふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり。人がらのたをやぎたるに、（無理にも心を強く張りつめているので）強き心をしひて加へたれば、なよ竹のここちして、さすがに（（空蟬は）心底からつらくて）折るべくもあらず。まことに心やましくて、（（源氏の）無理無体なありようを手折れそうにもない）あながちなる御心ばへを、いふかたなしと思ひて、泣くさまなど、いとあはれなり。心苦（ほんとにひどい）しくはあれど、見ざらましかばくちをしからまし、とおぼす。なぐ（毒ではあるが）（ものにしないでいたら悔いを残したろう）（源氏は）

さめがたく憂し、と思へれば、「など、かくうとましきものにしもおぼすべき。（源氏）おぼえなきさまなるしもこそ、契りあるとは思ひたまはめ。むげに世を思ひ知らぬやうに、おぼほれたまふなむ、いとつらき」と恨みられて、「（空蟬）いとかく憂き身のほどのさだまらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼みにて、見なほしたまふ後瀬をも思うたまへ慰めましを、いとかう仮なる浮寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへまどはるるなり。よし、今は見きとなかけそ」とて、思へるさま、げにいとことわりなり。〔源氏は〕並々ならず行末を約束しおろかならず契り慰めたまふこと多かるべし。

思いがけずこんなことになったのをかえって
こうしたお情けにあずかるのでしたら
どうしようもなく悲しくなるのでございます
悲しんでいる様子

（供人）ひどく寝すごしてしまった

鶏も鳴きぬ。人々起きいでて、「いといぎたなかりける夜かな。御車ひき出でよ」など言ふなり。守も出で来て、「女などの御方違へこそ。夜深く急がせたまふべきかは」など言ふもあり。君は、またかやうのついであらむこともいとかたく、さしはへてはいかでか、御文なども通はむことのいとわりなきをおぼすに、いと胸いたし。

言う様子だ
言う者もいる
源氏
暗いうちにお帰りにもおよばないでしょう
一度こうした機会があろうとも思え予
わざわざ訪れることなど不可能だし
やりとりすることはとても無理だろうと

一〇 二人の間に浅からぬ因縁があったからだとお思いにはなれませんか。

一一 全然男女の仲のこともわきまえないかのように（生娘のように）。

一二 情けない境涯のまだ定まらない（しがない受領の妻などにまだおさまらない）。

一三 昔のままの娘の身の上で。「とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」――昔どおりの二人の間柄をとりもどしたいものです、以前どおりの私と思ってもみたいもの（『釈』『奥入』以下に引く。出典不詳の歌）による。

一四 分不相応なうぬぼれでもございましょうが。

一五 いつかはお気が変って愛しても頂けようかと思い慰めることもできましょうが。「後瀬」は、将来の逢瀬の意。歌語。

一六 ほんの一時のかりそめの逢瀬だと思いますと。「浮寝」は、水鳥が水の上に寝ること、歌語で、前の「後瀬」の縁語になっている。

一七 仕方ございません。今となりましては、せめてものことに私のことはきっぱりお忘れ下さいませ。「それをだに思ふこととてわが宿を見きとな言ひそ人の聞かくに」――せめてもの私への思いやりとして、私と逢ったということもおっしゃらないで下さい、人が聞くでしょうから（『古今集』巻十五恋五、読人しらず）による。

一（一旦は、空蟬を）お放しになりはしたものの。
二（これから先）どうしてお便りしたらよいのでしょう。
三 何とも言いようのないあなたのお気持の冷たさといい、なつかしさといい、深く私の心に刻みつけられた二人の間の思い出は。「世」は、男女の仲の意。
四 どちらもめったにない語り草になるようなせつない経験です。
五 あなたの冷たい態度に恨み言も十分に言えないうちにはや夜もしらみ、どうして鶏はせわしなく私を起すのでしょう。「しののめ」は、東の空の明るむ時刻、歌語。「とりあへぬまで」は、取るものも取りあえぬほど、「とり」に「鶏」を掛ける。
六 わが身の境遇、年齢、容貌などを思うと。
七（源氏の）すばらしいお扱い。自分に対する身にあまるほどのご執心ぶりやお言葉。
八 自分のことが夫の夢に現れるのではないかと。ある人について思い悩むと魂が身体を離れてその人の夢に現れる。夫が自分の夢を見れば、何か変ったことがあったのではないかと怪しまれはせぬかと恐れるのである。
九 わが身の情けなさを嘆くにも嘆き足りないうちに明け離れるこの夜は、鶏の声に重ねて私も声を立てて泣かれることです。「あかで」は、飽かで。「とり」に「鶏」を掛ける。

奥の中将も出でて、いと苦しがれば（つらがるので）、ゆるしたまひても、また引きとどめたまひつつ、（源氏）「いかでか聞こゆべき。世に知らぬ御心のつらさも、あはれも、浅からぬ世の思ひ出では、さまざまめづらかなるべき例かな」とて、うち泣きたまふけしき、いとなまめきたり。鶏もしばしば鳴くに、心あわたたしくて、

（源氏）つれなきを恨みも果てぬしののめに
　　とりあへぬまでおどろかすらむ

女、身のありさまを思ふに、いとつきなくまばゆきこちして、めでたき御もてなしも、何ともおぼえず、常はいとすくすくしく心づきなしと思ひあなづる、伊予のかたの思ひやられて、夢にや見ゆらむ、と、そら恐ろしくつつまし。

（空蟬）身の憂さをなげくにあかであくる夜は
　　とり重ねてぞ音もなかれける

ことと明くなれば、障子口まで送りたまふ。うちも外も人騒がし

（不似合いで恥ずかしい）
（ふだんは何ともそっけなくて気にくわないと馬鹿にしている）
（夫のいる伊予の国が気がひける）

一〇（障子が）二人の間を隔てる関のように思われた。「隔つる関」は歌語。「彦星に恋はまさりぬ天の川隔つる関を今はやめてよ」（『伊勢物語』九十五段）「逢坂の名をば頼みて来しかども隔つる関のつらくもあるかな」（『新勅撰集』巻十二恋二、読人しらず）などの例がある。

一一 貴族の平常服。（図録一二参照）

一二 南に面した簀子の欄干の所で。

一三 前に「この西面にぞ人のけはひする」（八三頁）とあった。

一四 丈の低いついたて。源氏のいる東面（東側）と女たちのいる西面（西側）の隔てである。

一五 夜が明けても空に残っている月。陰暦十六日以後の月。

一六 色めかしい感じにも、またもの悲しい感じにも見えるのであった。「艶に」は、前の覗き見する女房たちの気持に、「すごく」は、あとの「人知れぬ」以下の源氏の気持に対応する。

源氏、帰邸　紀伊の守を召して小君をさし出すことを命ずる

一七 女に関して豊富な経験を持っている人。馬の頭のこと。

一八 左大臣邸。

障子を閉めて

ければ、引きたてて別れたまふほど、心細く、隔つる関と見えたり。御直衣など着たまひて、南の高欄にしばしうちながめたまふ。西面の格子そそきあげて、人々のぞくべかめる。簀子の中のほどに立てたる小障子の上より、ほのかに見えたまへる御ありさまを、身にしむばかり思へる、すき心どもあめり。月は有明にて、光をさまれるものから、かほけざやかに見えて、なかなかをかしき曙なり。何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすごくも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸いたく、ことつてやらむよすがだになきを、と、かへりみがちにて出でたまひぬ。

あわただしく上げて　女房たちが覗いているようだ　〔源氏の〕　浮気な女房たちがいるようだ　する思いでうかがう　月のおもてはくっきりと　見る人の気持次第で　かえって趣のある　無心な　〔源氏の〕　とてもつらくて　〔空蟬に〕文通する手だてもないのに　後ろ髪を引かれる思いで

殿に帰りたまひても、とみにもまどろまれたまはず。またあひ見るべきかたなきを、まして、かの人の思ふらむ心のうち、いかならむと、心苦しく思ひやりたまふ。すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありつる中の品かな、隈なく見集めたる人の言ひしことは、げに、とおぼしあはせられけり。このほどは大殿にのみ

お邸に　すぐにも　自分以上に　空蟬　手だてもないが　気の毒な思いで　見苦しい　どんなだろう　くないたしなみを身につけていた　なるほど　とうなずかれるのであった　この頃は

一　やはり。「御心にかかりて」に掛る。

二　先に「故衛門の督の末の子」（八五頁）とあった。中納言兼衛門の督であったらしい。「中納言」は、太政官の次官。大納言に次ぐ地位。従三位相当。

三　帝にも私からさし上げよう。私が世話して童殿上させよう、の意。

四　貴公の弟があるのか。つまり、空蟬と伊予の介との間には子供があるのか、という質問。あれば紀伊の守の異母弟に当るのでこう言う。

五　そういうこともございません。

六　こうしておりますが。結婚して二年ほどになる、という意。

七　（入内させようと思っていた）親の意向とは違った身の上になってしまったと。

八　世間の言い草にも申しますとおり、（こちらも）親しくするということはございません。継子が継母に近づくのは父子の仲違いのもとになるという話が中国にある。それが伝わって来ていたのであろう。

源氏、小君に手紙を託す

おはします。一なほ、いとかき絶えて、思ふらむことのいとほしく御心にかかりて、苦しくおぼしわびて、紀伊の守を召したり。「かのありし中納言の子は得させてむや。らうたげに見えしを、身近く使ふ人にせむ。上にもわれたてまつらむ」とのたまへば、「いとかしこき仰せ言にはべるなり。姉なる人にのたまひむ」と申すも、胸つぶれておぼせど、「その姉君は、朝臣の弟や持たる」「さもはべらず。この二年ばかりぞ、かくてものしはべれど、親のおきてに違へりと思ひ嘆きて、心ゆかぬやうになむ聞きたまふる」「あはれのことや。よろしく聞こえし人ぞかし。まことによしや」とのたまへば、「けしうははべらざるべし。もて離れてうとうとしくはべれば、世のたとひにてむつびはべらず」と申す。

さて五六日ありて、この子率て参れり。こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさまして、あて人と見えたり。召し入れて、いとなつかしくかたらひたまふ。童ごこちに、いとめでたくうれし

（源氏）先日　（守）恐れ多い　（源氏）思い悩んだあげく　（守）五　（源氏）気の毒なことだな　（守）悪くは　（母は）全くよそよそしい態度ですので　（紀伊守が）　（源氏）不満足に思っているように聞いております　（源氏）相当な器量よしだという評判の人だった　（守）七　（源氏）仰せを伝えてみましょう　（源氏）なさったが　（源氏）ずっとあれきりなので　（源氏）女がどんなに思い悩んでいることかと哀れに　（源氏）かわいらしく　（源氏）私にさし出さないか　（源氏）きれいか　（源氏）ございませんでしょう　（源氏）上流の子弟らしく　（源氏）お側近く呼んで　（源氏）やさしくいろいろ話しかけられる　（源氏）非の打ち所なく美しいというわけで　（源氏）それから　（源氏）はないが　（源氏）優雅な物腰で　（源氏）八　（源氏）子供心に　（源氏）すばらしく

九 こちら（源氏）が気恥ずかしくなる程きちんとかしこまっているので。子供の手前ではあるが、源氏は自分のおもわくに気がひけるのである。

一〇（姉と源氏との間に）こんなことがあったのかとぼんやり分ったのも。

一一 それでも。さすがに手紙を突き返すわけにもゆかず。

一二（それで）顔を隠して。「面隠し」は、気恥ずかしさを隠す（照れ隠し）の意の慣用語でもある。

一三 先夜の夢（はかない逢瀬）が現実のものになって再び逢う夜があろうかと悲しんでいるうちに、目までもが合わないで（眠れもしないで）何日もたってしまったことです。「夢があふ」とは夢が現実になる意、その「合ふ」に「逢ふ」を掛け、それに対応して「目さへ合はで」という。

一四「恋しきを何につけてか慰めむ夢だに見えず寝る夜なければ」――恋しい気持を何によって慰めたらよいのでしょうか、眠れぬ夜が続くので夢でもお逢いできません（『拾遺集』巻二恋二、源順）を引き、その上の句の意をきかせる。

一五 こんな受領風情の妻になってしまってから源氏に愛されるようなことになった数奇な自分の身の上を思い続けて。

と思ふ。いもうとの君のこともくはしく問ひたまふ。（姉君）さるべきことは答へきこえなどして、（お答えすべきことは）はづかしげにしづまりたれば、（源氏は）うちいでにくし。されど、（言い出しにくい）いとよく言ひ知らせたまふ。（大層うまく分るようにお話しになる）かかることこそはと、ほの心得るも、（意外なことだったが）思ひのほかなれど、（子供のことと）幼ごこちに深くしもたどらず、（子供のことと深くも考えずに）御文を持て来たれば、（この子もどう思っていることかと気恥ずかしくて）女、（空蟬は）あさましきに（あまりのことに）涙も出で来ぬ。この子の思ふらむこともはしたなくて、（こまごまと書いてあって）さすがに、御文を面隠しにひろげたり。いと多くて、

（源氏）「見し夢をあふ夜ありやと嘆くまに
目さへあはでぞころも経にける

寝る夜なければ」など、（すばらしいお手紙の書きぶりも）目も及ばぬ御書きざまも、（涙で曇って）霧りふたがりて、（翌日）心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひ続けて臥したまへり。またの日、小君召したれば、（お召しになったので）参るとて御返り乞ふ。（空蟬）「かかる御文見るべき人もなしと聞こえよ」（申し上げよ）とのたまへば、（小君）うち笑みて、（問違いようもなくはっきりおっしゃったのに）「違ふべくものたまはざりしものを、いかがさは申さむ」（空蟬は）と言ふに、（おもしろくなくすっかり）心やましく、残りなく

一 お召しがあったのに、どうして参上しないわけにいきましょう。
二 好色な男なので。
三 まだ若い空蟬が年老いた自分の父親の妻であることを。
四（常日頃）何かとご機嫌を取り結ぼうとしているので。
五（どこへでも）連れ歩く。この時も紀伊の守が連れて行ったという含み。
六 どうも私と仲よくはしてくれそうにないのだね。
七 どれ（返事は）。

小君への恨み言

八 君は知らないだろうな。「あこ」（吾子）は、親しみ呼ぶ言い方。
九 先にいい仲だった人なのだよ。
一〇（私を）頼りがいもない、頸の細い若僧だと見くびって。
一一（あんな）不格好な夫をこしらえて。
一二 君は私の子供のつもりでいてほしいね。「を」は、強意の間投助詞。
一三 お邸の衣服調製所。「御匣殿」は、宮中、貞観殿にある衣服調進をつかさどる役所。その名称を転用したもの。

（空蟬）いいえ、この子に話してしまわれたのだと思うと、のたまはせ知らせてけると思ふに、つらきこと限りなし。「いで、ませた口をおききでない（機嫌）およすけたることは言はぬぞよき。（それなら）さは、な参りたまひそ」（参上してはなりません）と、むを損ねられて（小君）つかられて、「召すには、いかでか」とて参りぬ。紀伊の守、すき心に、この継母のありさまを、あたらしきものに思ひて、追従しありけば、この子をもてかしづきて、率てありく。君、召し寄せて、「昨日待ち暮らしを、なほあひ思ふまじきなめり」と怨じたまへば、（小君は）顔うち赤めてゐたり。（源氏）「いづら」とのたまふに、（何ということだ）しかしかと申すに、（源氏）「いふかひなのことや。あさまし」とて、（お手紙を）また も賜へり。（源氏）「あこは知らじな。その伊予の翁よりは、先に見し人ぞ。されど、たのもしげなく、頸細しとて、ふつつかなる後見まうけて、かくあなづりたまふなめり。さりとも、あこはわが子にてをあれよ。このたのもし人は、ゆくさき短かりなむ」とのたまへば、さもやありけむ、（そうだったのかも知れない）（どうせ先も長くないだろう）（深刻なお話だなあ と小君の思っている様子を）（源氏は）おかしいみじかりけることかな、と思へる、をかしとおぼす。この子をまつはしたまひて、内裏にも率て参りなどしたまふ。わが御匣殿にの

（私を）馬鹿になさるらしい（頼りが）（お側）（からお放しにならず）（お命）

一四 以下、空蟬の心。
一五 本人は気をつけているつもりでも、うっかり手紙が人目に触れでもしたら、軽薄な女だという評判まで立てられることになるだろう。
一六 受領の妻というわが身の境涯を（こういう源氏との関係には）まことにふさわしくないことであろうと思うので。
一七 ほんとに（噂にたがわず）並々のものであったろうか（すばらしかった）と。
一八 情を解する女として振舞ってみたところで（源氏のお手紙に対してしかるべきお返事をさし上げたとて）何になろうか。

一九 （そういう）不都合な行動が人に知れることになろうかと。「と」は、下の「人のためもいとほしくと」の「と」とともに、「おぼしわづらふ」に掛る。
二〇 例によって、宮中で何日もお過しの頃。冒頭（四五頁）に「内裏にのみさぶらひようしたまひて」とあったのを受ける。
二一 （紀伊の守邸に行くのに）都合のよい方塞りの日をかねてから心づもりなさる。

源氏、再び紀伊の守の邸を訪れる

たまひて、装束（じになって）などもせさせ（調製させ）、まことに親めきてあつかひたまふ（お世話なさる）。御文はつねにあり。されど、一四この子もいと幼し、心よりほかに散りもせば、軽々しき名さへとりそへむ、身のおぼえをいとつきなかるべく思へば、めでたきこともわが身からこそと思ひて、うちとけたる御答へも聞こえず。ほのかなりし御けはひありさまは、げになべてにやはと、思ひいできこえぬにはあらねど、一八をかしきさまを見えたてまつりても、何にかはなるべき、など思ひかへすなりけり。君（源氏）はお忘れになる時とてなく思へりしけしきなどのいとほしさも、はるけむかたなくおぼしわたる。軽々しくはひまぎれ、立ち寄りたまはむも、人目しげからむ所に、便なきふるまひやあらはれむと、人のためもいとほしくと、おぼしわづらふ。

例の、内裏に日数経たまふころ、二一さるべきかたの忌み待ちいでたまふ。にはかにまかでたまふまねして、道のほどよりおはしました

結構なことも自分の身分次第のことなのだ
気を許した
先夜ほのかに見た〔源氏の〕
〔空蟬のことを〕
頭から払いのけようもなくお思い続けになる
人の出入りに紛れて
人目の多い所だから
女のためにも気の毒だしと
急に〔左大臣邸に〕退出なさるふりをして
途中から
〔紀伊守の邸に〕

一 遺水がお気に入られて名誉この上もないことと恐縮してお礼を言上する。

二 そういう（今夜訪れるという）お便りがあったので。

三 つまらぬことに。意味もなく。下の「……嘆きをまたや加へむ」に掛る。

四 （先夜の）夢のようなことで過ぎてしまった（はかない逢瀬の）悲しみをさらに重ねることになろうかと。

五 やはりこんなふうに源氏のお忍びをお待ちするのは気恥ずかしいので。「さて」は、源氏からの手紙の言いなりになるような状態で、の意。

六 小君が（源氏のお召しで）部屋を出て行った間に。

七 前出（八三頁注一四）。その片側に部屋をしつらえて女房の局にしている例が多い。

八 中将というあの先夜の女房が部屋住みしている、人目につかぬ所に。

九 （源氏は）空蟬のもとに忍ぶつもりで、供人を早く寝かせて、（空蟬に）お便りをつかわすが、使いの小君は姉を尋ね出して会うことができない。

一〇 （小君は、姉の仕打ちを）あんまりな、ひどいと思って。

り。紀伊の守おどろきて、遺水の面目とかしこまりよろこぶ。小君には、昼より、かくなむ思ひよれると、のたまひ契れり。明け暮れまつはし馴らしたまひければ、今宵もまづ召し出でたり。女も、さる御消息ありけるに、おぼしたばかりつらむほどは、浅くしも思ひなされねど、さりとて、うちとけ、人げなきありさまを見えたてまつりても、あぢきなく、夢のやうにて過ぎにし嘆きをまたや加へむ、と思ひ乱れて、なほさて待ちつけきこえさせむことのまばゆければ、小君が出でて去ぬるほどに、「いとけぢかければ、かたはらいたし。なやましければ、忍びてうちたたかせなどせむに、ほど離れてを」とて、渡殿に、中将といひしが局したる隠れにうつろひぬ。さる心して、人疾くしづめて、御消息あれど、小君は尋ねあはず。よろづの所求めありきて、渡殿に分け入りて、からうしてたどり来たり。いとあさましくつらしと思ひて、「いかにかひなしとおぼさむ」と、泣きぬばかり言へば、「かくけしからぬ心ばへは、つかふものか。幼

（空蟬）御座所近くなので
恐れ多い
こっそり肩腰をたたかせたりしたいから
離れた所に
（小君）どんなに役立たずとお思いでしょう
（空蟬）こんな不埒な料簡を
持っていいものですか

き人のかかること言ひ伝ふるは、（取次ぐのは）いみじく忌むなるものを（とてもいけないこととされているのに）」と言ひ（叱りつけて）おどして、「ここちなやましければ、（空蟬）人々避けず、おさへさせてなむ、と聞こえさせよ。（申し上げなさい）あやしと誰も誰も見るらむ」と言ひ放ちて（つっぱねて）、心のうちには、いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし、（しゃれたことでもあろう）しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうにおぼすらむ、と、心ながらも、胸いたくさすがに思ひみだる。とてもかくても、今はいふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくて止みなむ、と思ひ果てたり。君は、いかにたばかりなさむ、と、まだ幼きをうしろめたく待ち臥したまへるに、不用なるよしを聞こゆれば、あさましくめづらかなりける心のほどを「身もいとはづかしくこそなりぬれ」と、いといとほしき御けしきなり。とばかりものものたまはず、いたくうめきて、憂しとおぼしたり。

一 侍女たちを側に置いて、按摩をさせております。
二 （お前がこんな所にうろうろしていては）誰だって変だと思うでしょう。
三 ほんとにこんな（受領の妻として）身分の決ってしまった身の上ではなくて。「身のおぼえ」で一語。わが身が世間からどう評価され見られるかということ。
四 （生前自分の入内を考えてくれていた）亡くなった両親の面影のしのばれるもとの実家にいたままで。
五 無理に（源氏のお気持も）分らぬふうをよそおって無視するのも。
六 どうしようもないわが身の運命（受領の妻であること）なのだから。
七 情のこわい、気にくわない女だと源氏に思われたままで押し通そう。「無心」は、非常識の意。

一 近づけば消えるという帚木のようなつれないあなたの心も知らないで、園原への道に空しく迷ってしまったことです（あなたに逢おうとして無駄骨を折りました。この歌、「園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな」（『新古今集』巻一恋一、坂上是則。「古今六帖」五、四句「ありとてゆけど」）による。「帚木」は、信濃国、伊那郡、園原の伏屋という所にあった帚を逆さにしたような木で、遠くからは見えるが近づくと見えなくなるという。

二 しがない貧しい家（地名の伏屋に掛ける）に生えているということが情けのうございますので、いたたまれずに消えてしまう帚木なのでございます。源氏の歌に答えて同じく是則の歌を踏まえ、しがない身の上ですのでお逢いするのを避けたのです、の意。

三 （源氏と空蟬の歌のやりとりの取次ぎに）うろうろ行ったり来たりするのを。

四 （源氏）おひとり、無駄なことなのに、いつまでもおもしろからぬ思いにとらえられていらっしゃるが。

五 依然としてゆるがずに自分に見せつけられていることだと。「消えず」は、女の歌に「あるにもあらず消ゆる」とあったのを受けて、消えるどころではなく、という気持。「立ちのぼる」は、「消えず」の縁語。

六 「さもあらばあれ」の約。どうともなれ、というほどの気持。

七 ひどくむさくるしい窮屈な部屋の中で。直訳すれば、ひどくむさくるしげにとじこめられて。

（源氏）「帚木の心を知らでそのはらの
　　道にあやなくまどひぬるかな
聞こえむかたこそなけれ」とのたまへり。女も、さすがにまどろまざりければ、

　　数ならぬふせ屋におふる名の憂さに
　　あるにもあらず消ゆる帚木

と聞こえたり。小君、いといとほしさに、ねぶたくもあらでまどひありくを、人あやしと見るらむ、とわびたまふ。例の、人々はいぎたなきに、一所すずろにすさまじくおぼし続けらるれど、人に似ぬ心ざまの、なほ消えず立ちのぼれりけると、ねたく、かかるにつけてこそ心もとまれと、かつはおぼしながら、めざましくつらければ、さばれとおぼせども、さもおぼし果つまじく、「隠れたらむ所に、なほ率て行け」とのたまへど、「いとむつかしげに閉し籠められて、人あまたはべるめれば、かしこげに」と聞こゆ。いとほしと思へり。

申し上げる言葉もありません
侍女たちが変に思うだろうと（空蟬は）つらがる
源氏がお気の毒でたまらないので　眠たさも忘れて
こけているが
女の気強さが
そひかれるのだと
一方では
そうもあきらめきれず
（源氏）その隠れている所に
人とは違った
こういう女だからこ
しゃくで
供人たちは眠り
心外でもあり情けなくもあるので
（小君）
女房
も大勢いるようですから
恐れ多うございます
（小君は）

ハ まあせめて、君だけでも私に冷たくしないでくれ。

（源氏）ハ「よし、あこだに、な捨てそ」とのたまひて、御かたはらに臥せたまへり。若くなつかしき（やさしい）御（〔源氏の〕）ありさまを、うれしくめでたしと（思っている）思ひたれば、つれなき（空蟬様子なので）人よりは、なかなかあはれにおぼさるとぞ。（〔小君は〕）（かえってかわいくお思いになるとか）

空蟬

この巻は、帚木巻末の場面をそのままに、小君をかたわらに臥せた失意の源氏の姿をえがくところからはじまる。

あきらめられぬ思いの源氏は、小君を語らって今度は人目を忍んで中川の邸を訪れる。

夏の夕闇にまぎれて、はからずも源氏は、空蟬と紀伊の守の妹軒端の荻が碁を打つ姿を垣間見る。人々が寝静まってから小君の手引きで源氏は寝室に忍ぶが、それと察した空蟬は身をもってのがれ、源氏は心ならずも軒端の荻と契るはめになった。源氏は、女の脱ぎ捨てていった小袿を手にして二条の院に帰り、むなしくその人香をなつかしむ。

巻名は、源氏と女主人公の歌によっているが、空蟬とは、蟬を意味する歌語である。空しい殻を残して飛び立ってゆく生態からの連想であろう。この言葉は、源氏の歌では、小袿を残してのがれ去った女主人公を意味している。巻末に置かれた女主人公の歌には、木隠れに露に濡れる蟬に託して、源氏の愛に答え得ない女のせつない心情が情感をこめてうったえられている。

作者自身、この人を、帚木巻末の歌によって帚木と呼んだ例もあるが（関屋）、夕顔の巻以下に空蟬と呼ぶ呼び名が固定しており、後の読者も、この人をこの名で呼ぶことになった。

源氏、紀伊の守の邸を去る

一 帚木の巻末を受ける。まだ紀伊の守の邸でのことである。
二 女のことで情けない思いを味わったから。「世」は、男女の仲の意。
三 手ざわりがほっそりしていて、小柄な身体つき。源氏は暗い寝所の中で小君を愛撫しながら、先夜の空蟬のことを思い出す。
四 空蟬の、髪がそう長くはなかった感じ。髪の長いのは、美人の重要な条件であった。
五 しつこく女の居場所を探して近づくのも。
六 いつものようにも小君にいろいろうるさくおっしゃらず。
七 まだ暗いうちにお帰りになるので。
八 あのまま音沙汰なしでおやめになってしまったら、つらい思いをしていることだろう。

空蟬の悩み

寝(一)られたまはぬままには、「われは、(源氏)かく人につれなくされたことも今までなかったのに人に合わせる顔もなく生きていけそうもないような気持になってしまったぬを、今宵なむ、はじめて憂(二)しと世を思ひ知りぬれば、はづかしくて、ながらふまじくこそ、思ひなりぬれ」などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり。〔源氏は〕いとらうたしとおぼす。〔小君は〕かわいい手(三)さぐりの細く小さきほど、様子が似ているのも髪(四)のいと長からざりしけはひの、さまかよひたるも、思ひなしにや、気のせいあはれなり。心をそそられる無理やりにあながちにかかづらひたどり寄らむも、体裁の悪いことだろうし心底からひどい女だと思い続けて一夜を明かしてわろかるべく、まめやかにめざましとおぼし明かしつつ、例(六)のやうにものたまひまつはさず、夜深(七)う出でたまへば、この子は、いとお気の毒でとほしく、つまらないとさうざうしと思ふ。

空蟬 女も、なみなみならずかたはらいたしと思ふに、失礼なことをしたと思っているのに御消息(八)も絶えてなし。おぼし懲りにけると思ふにも、やがてつれなくて止みたまひ

なましかば憂からまし、〔といって〕強引で見苦しい しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむも、うたてあるべし、一よきほどに、かくて閉ぢめてむ、と思ふものから、二ただならず、ながめがちなり。

源氏 君は、心づきなしとおぼしながら、ひどい人だと かくてはえ止むまじう御心にかかり、人わろくおもほしわびて、不面目なことだと思いあまられて 小君に、「いとつらうも、情けなくも思われるので たらもおぼゆるに、しひて思ひかへせど、あきらめようとしても 心にしも従はず苦しきを、思いどおりにもならず さりぬべきをり見て、会えるように手だてしてくれ 対面すべくたばかれ」とのたまひわたれば、おっしゃりつづけるので 〔小君は〕迷惑に思うが わづらはしけれど、こんなことでも かかるかたにても、〔源氏が〕のたまひまつはすは、うれしうおぼえけり。子供心にも をさなきここちに、三いかならむをり、と待ちわたるに、紀伊の守、四国に下りなどして、女たちだけでくつろいでいる 女どちのどやかなる夕闇五の道 たどたどしげなるまぎれに、わが車にて率てたてまつる。お連れ申し上げる この子もをさなきを、うまくゆくか いかならむ、とご心配ではあるが とおぼせど、六さのみもえおぼしのどむまじかりければ、目立たぬ服装で さりげなき姿にて、戸締りなどをしないうちにと 門などささぬさきにと、急ぎおはす。

一 適当なところで、こうしてきりをつけてしまおうと思うものの。

二 心が乱れて、物思いに沈みがちである。

源氏、空蟬と軒端の荻と碁を打つところを覗き見る

三 どんな折がよかろうかと、機会を待つうちに。

四 任国の紀伊の国に。政務処理のためである。

五 夕闇の道もさだかでないのに紛れて。「夕闇は道たどたどし月待ちて帰れわがせこその間にも見む」——夕方の暗がりは道もはっきりしません、わが夫の君よ月の出を待って帰って下さい、その間なりとお姿を見ていたいと思います（『古今六帖』一。原歌は『万葉集』巻四、大宅女）。この歌の上の句によって書いたもの。

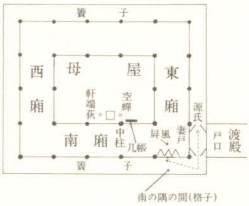
六 そう悠長にばかりも構えていられないお気持だったので。

七 小君は子供なので、夜番の者なども格別気に止めることもなく、ちやほやもしないので、（その点は）安心だ。

八 寝殿の東側の妻戸の所に。「妻戸」は、建物の四隅にある両開きの扉の出入口。（図録六参照）

九 南側の隅の柱の間。

一〇（隅の間の）格子を音高くたたいて（上げさせてそこから）室内に入った。自分に注意をひきつけさせるためである。



一一 年輩の女房が「外から見えますよ」と言うのが聞える。格子を上げたのをとがめるのである。

一二 西の対の姫君。紀伊の守の妹、軒端の荻。

一三 南の隅の間の格子の外側に垂れている簾と簾の間。格子は室内の方に上げる一枚格子であろう。簾はその外側に垂れる。

一四 すきまが見えるので、近寄って（そこから）西の方を見通されると。次に「この際」とあるのは、格子の側である。

一五 真ん中の柱。

一六（下着は）濃い紫の綾の単襲らしい。「単襲」は、夏、表着の下に着る。単二枚を重ねたもの。

一七 何であろうか、その上に着て。これは表着。

人目のない門から〔車を〕〔源氏を〕人見ぬかたより引き入れて、おろしたてまつる。童なれば、宿直人なども、ことに見入れ追従せず、心やすし。東の妻戸に立てたてまつりて、われは南の隅の間より、格子たたきののしりて入りぬ。

せ申しておいて

御達「あらはなり」と言ふなり。「なぜ、かう暑きに、この格子はおろされたる」と問へば、「昼より西の御方のわたらせたまひて、碁打たせたまふ」と言ふ。さて向かひゐたらむを見ばや、と思ひて、やをら歩み出でて、簾のはさまに入りたまひぬ。

（小君）どうして　（御達）　そうやって対坐している空蟬の姿を見たい　〔源氏は〕　そっと

閉めてないので　さっき小君の入った

この入りつる格子はまだささねば、隙見ゆるに、寄りて西ざまに見通したまへば、この際に立てたる屏風も、端のかたおし畳まれたるに、まぎるべき几帳なども、暑ければにや、うち掛けて、いとよく見入れらる。火、近うともしたり。母屋の中柱にそばめる人やわが心かくると、まづ目とどめたまへば、濃き綾の単襲なめり、何にかあらむ上に着て、頭つきほそやかに、ちひさき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔などは、さし向かひたらむ人などにも、わざと見ゆ

見通しを悪くする　かたびらを横木にかけて　横向きの人が忘れられ　二人の近くに　ないあの人かと　小柄な人が　見ばえのしない　向き合っている　特に見えないよ

うに気をつけている
まじうもてなしたり。一手つき痩せ痩せにて、二いたうひき隠したり。今一人は、東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅の単襲、三藍の四小袿だつもの、しどけなくないがしろに着なして、紅の五腰ひき結へる際まで六胸あらはに、ばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげに、つまるまると背の高い人で ぶつぶと肥えて、そぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、目もと口もと まみ口つきいと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、垂れ具合は肩のあたりがすっきりした感じでさがりば、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、おっとりした育ちぶりでをかしげなる人と見えたり。七むべこそ、親の世になくは思ふらめと、興味を持ってをかしく見たまふ。ここちぞ、気立てになほ静やはり落着いた感じを加えたいものだと かなるけをそへばやと、一見して思われる頭の鈍い女ではなさそうでふと見ゆる。かどなきにはあるまじ、陽気に騒ぎ立てると機敏そうな感じで碁打ち果てて、八闕さすわたり、心とげに見えて、きはきはとさうどけば、空蟬 奥の人はいと静かにのどめて、落着いて（空蟬）「待ちたまへや。そこは持にこそあらめ。九このわたりの劫をこそ」など言へど、（軒端荻）「いいえ、このたびは負けにけり。十一隅のところどころ、いでいで」と、指をかがめて、「十、

一　石を置く手の格好もやせ細っていて。
二　袖口をよくひきつくろって隠している様子だ。石を置くには手先があらわになるものであるが、たしなみ深い様子をいう。
三　紅と藍の中間色。
四　小袿めいたもの。表着である。「小袿」は、婦人の略礼装。（図録一二参照）
五　腰は袴の紐。袴は素肌につける。
六　字音語であろうが明らかでない。自堕落、しまりがない、などの意であろう。
七　なるほど、親はこの上なく大切にかわいがっていることだろうと。親は伊予の介。伊予の介の娘自慢を源氏はすでに耳にしていたと受け取れる書きぶりである。

空蟬＝伊予介
先妻＝紀伊守
軒端荻

八　駄目をつめるところなど。「闕」は、双方の地の境界で、どちらの地にもならない所。
九　勝ち負けのない箇所。いわゆるせきであろう。攻め合いでどちらが先に石を置いても置いた方が取られてしまうような形になった所。
一〇　このあたりの劫を片付けましょう。「劫」は、一目を交互に取り返す形になった所。互いにほかの所に打って相手に受けさせてから取る。ここは石の死活には関係のないわゆる半劫であろう。

一 隅のこととここは何目でしょう、どれどれ。隅の地を数えようとするのである。

二 数多い伊予の湯桁もちゃんと数えられそうだ。伊予（愛媛県）の道後温泉は湯槽の数の多いことで知られていた。「湯桁」は、湯槽の周囲にわたした桁。『河海抄』に雑芸（流行歌謡）「伊予湯」として「伊予の湯の　湯桁はいくつ　いさ知らず　や　かずへず　や　かずへずよまず　や　そよや　君ぞ知るらむや」と引く。この娘の父は伊予の介として赴任中であるので、筆を弄したもの。

三 すっかり袖で口もとを隠して。以下、空蟬の様子。「たとしへなし」は、たとえようもない、極端の意。

四 源氏は一心に目をこらしておられるので。「目をし」の「し」は、強意の助詞。「つと」は、ぴったり。

五 とりすまして、横を向いた（まともに顔など見せぬ）よそ行きの姿ばかりはご覧になっているが。

二十、三十、四十」などかぞふるさま、目を数える 三 伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ。すこし品おくれたり。気品に欠ける 一三 たとしへなく口おほひて、さや はっきり かにも見せねど、一四 目をしつとつけたまへれば、おのづからそば目に 横顔が見える 見ゆ。目すこし腫 まぶた れたるここちして、鼻などもあざやかなるところ 鼻筋などもすっきり通っていずひねこびた感じで なうねびれて、色っぽい にほはしきところも見えず、言ひ立つれば、わろき みっとも ない方に近い とりつくろって 軒端の荻 たし によれる容貌 かたち を、いといたうもてつけて、このまされる人よりは心 なみがあろうと 誰しも目をつけそうな様子をしている 〔軒端荻は〕朗らかで あらむと、目とどめつべきさまましたり。にぎはは きれい しう愛敬づきをか な娘なのに 陽気にくつろいで しげなるを、いよいよほこりかにうちとけて、笑ったりしてはしゃぐので 笑ひなどそぼるれば、 これはこれでなかなか魅力的な人柄である にほひ多く見えて、さるかたにいとをかしき人ざまなり。あはつけ 浮ついたこと だとは反省なさるものの お堅くはない しとはおぼしながら、まめならぬ御心は、この女にも無関心ではいられそうにな いのであった 〔源氏が〕ご存じの女君は皆 くつろいでいる時とてなく かりけり。見たまふかぎりの人は、うちとけたる世なく、一五 ひきつく 女の目 常を覗き見したりすることは ろひそばめたるうはべをのみこそ見たまへ、かくうちとけたる人の 〔女たちが〕 ありさまかいま見などは、まだしたまはざりつることなれば、何心 何も気がつかず すっかり見られているのは気の毒だが もなう、さやかなるはいとほしながら、久しう見たまはまほしきに、

小君出で来るここちすれば、やをら出でたまひぬ。

渡殿の戸口に寄りゐたまへり。いとかたじけなしと思ひて、「例ならぬ人はべりて、え近うも寄りはべらず」「さて、今宵もや帰し てむとする。いとあさましう、からうこそあべけれ」とのたまへば、「などてか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなむ」と聞こゆ。さもなびかしつべきけしきにこそはあらめ、童なれど、ものの心ばへ、人のけしき見つべくしづまれるをと、おぼすなりけり。碁打ち果てつるにやあらむ、うちそよめくここちして、人々あかるるけはひなどすなり。「若君はいづくにおはしますならむ。この御格子はさしてむ」とて鳴らすなり。「しづまりぬなり。入りて、さらばたばかれ」とのたまふ。この子も、いもうとの御心は、たわむところなくまめだちたれば、言ひあはせむかたなくて、人少ななむをりに入れたてまつらむ、と思ふなりけり。「紀伊の守の妹もこなたにあるか。われにかいま見せさせよ」とのたまへど、「いか

恐れ多い（小君）（源氏）今夜もこのまま帰そうというのか（小君）ひどいことではないか全くあんまりな（軒端荻が）いいえ決して手だていたしましょう人の気持を読み取れる落着いたところがあるからと期待なさるのであった物事の事情や（女房）小君戸締りしましょう（源氏）寝静まったようだ姉そよそよ衣ずれの音がする感じで話をつけるすべもなくて意志を曲げそうになくまじめぶっているので

一　渡殿の簀子に面する出入口の戸。妻戸とほぼ相対する位置にある。（一〇七頁挿図参照）

二　いつもはいない（珍しい）人が来ていまして。軒端の荻のこと。

三　そのように何とかできそうな（女の）様子なのだろう。以下、源氏の心。

四　女房たちが退散する様子などがうかがえる。「あかる」は、別れる、散るの意。

五　前に小君が上げさせて入った南の隅の間の格子。

六　がたがた音を立てるのが聞える。「なり」は、前の行の「すなり」、次の「しづまりぬなり」の「なり」とともに推定の助動詞。

七　軒端の荻のこと。先に覗き見たことはもちろんしらばくれている。

八 格子には内側に几帳が立ててあります。
九 もう見てしまったことは内緒にしておこう、かわいそうだ。少年の信頼を裏切ったようなことだからである。
一〇（小君は）今度は妻戸をたたいて（開けさせて）入る。前に格子をたたいて入ったのに対していう。

小君、源氏を導き入れるが空蟬は様子を察して逃れる

一一 位置が明らかでないが、南の廂と東の廂の境の障子（襖）の出入口であろうか。
一二 今の薄縁のようなもの。
一三 妻戸を開け（て小君を中に入れ）た女の子。
一四 火の明るい方に屏風をひろげて（光をさえぎって）。
一五 落着いて眠ることもできずに。「君恋ふる涙のこほる冬の夜は心解けたる寝やは寝らるる」（『拾遺集』巻十二恋二、読人しらず）による。
一六 「夜はさめ昼はながめに暮されて春はこのめぞいとなかりける」――夜は目が冴え昼は物思いにあらぬ方を眺めて過して、春は目の休まる時とありません（『一条摂政御集』）きさらぎばかりにいかにぞとのたまうたるに、女）による。「木の芽」に「この目」を掛ける。「いとなし」は、暇なし。
一七 春でもないのにこの目も休まる時とてなく。今は夏なのでこういう。

空蟬

八 格子には内側に几帳が立ててあります。
九 もう見てしまったことは内緒にしておこう、かわいそうだ。少年の信頼を裏切ったようなことだからである。
一〇（小君は）今度は妻戸をたたいて（開けさせて）入る。前に格子をたたいて入ったのに対していう。

小君、源氏を導き入れるが空蟬は様子を察して逃れる

一一 位置が明らかでないが、南の廂と東の廂の境の障子（襖）の出入口であろうか。
一二 今の薄縁のようなもの。
一三 妻戸を開け（て小君を中に入れ）た女の子。
一四 火の明るい方に屏風をひろげて（光をさえぎって）。
一五 落着いて眠ることもできずに。「君恋ふる涙のこほる冬の夜は心解けたる寝やは寝らるる」（『拾遺集』巻十二恋二、読人しらず）による。
一六 「夜はさめ昼はながめに暮されて春はこのめぞいとなかりける」――夜は目が冴え昼は物思いにあらぬ方を眺めて過して、春は目の休まる時とありません（『一条摂政御集』）きさらぎばかりにいかにぞとのたまうたるに、女）による。「木の芽」に「この目」を掛ける。「いとなし」は、暇なし。
一七 春でもないのにこの目も休まる時とてなく。今は夏なのでこういう。

一 今夜はこちらに（泊めて頂きます）と、現代っ娘らしくこだわりなく継母になついて。自室の西の対にはもどらなかったのである。

二 源氏がこうして忍び入って来る様子が。前に「御衣のけはひやはらかなるしも……」とあったのを受ける。

三 とてもかおり高く匂ってくるので。源氏の着物にたきしめた薫物のかおりが匂う。

四 几帳の帷（表と裏二枚）のうち裏一枚を几帳の手（横木）に掛けてあるのであろう。

五 「生絹」は、練絹（灰汁で煮て柔らかくした絹）に対する語。さわさわと張りがある。夏の衣料。「単」は、肌着。

源氏、軒端の荻と契り、空蟬の脱ぎおいた小袿を手にして帰る

六 帳台の浜床。（図録九参照）

七 上に掛けた夜着。

八 まさか別人とは思いよりもなさらないのであった。草子地（作者の口吻のそのまま出た文章）である。

九 人違いをしたとまごまごした態度を女に見せるのも。

一〇 お目当ての人（空蟬）をこれから探して近づくのも。

のめも、いとなく嘆かしきに、（物思いがちなのに）碁打ちつる君、（軒端の荻は）今宵はこなたにと、いまめかしくうちかたらひて、寝にけり。（軒端の荻）若き人は、（無邪気に）何心なくいとようまどろみたるべし。かかるけはひの、いとかうばしくうちにほふに、（空蟬が）顔をもたげたるに、一重うちかけたる几帳の隙間に、暗けれど、（にじり寄って来る）うち身じろき寄るけはひ、いとしるし。あさましくおぼえて、（何ということかと思われて）どうしてよいか分らぬまま）ともかくも思ひ分かれず、（そっと抜け出した）やをら起き出でて、生絹なる単を一つ着て、すべり出でにけり。

（源氏）君は入りたまひて、ただひとり臥したるを心やすくおぼす。（安心に思われる）床の下に（女房が）二人ばかりぞ臥したる。衣をおしやりて（寄り添われると）寄りたまへるに、（先夜の）（空蟬の様子）（大柄な感じだが）しけはひよりは、ものものしくおぼゆれど、おもほしも寄らずかし。（なかなか目をさまさない所などが）いぎたなきさまなどぞ、（空蟬とは）妙に違っているので）あやしくかはりて、（別の人だとお分りに）やうやう見あらはしたまひて、（あまりのこととおもしろくないけれども）あさましく心やましけれど、人違へとたどりて見えむも、（間の抜けたことだし）をこがましく、（女が）あやしと思ふべし、本意の人をたづね寄らむも、（自分を避ける）かばかりのがるる心あめれば、（無駄なことだし）かひなう、（空蟬も）をこにこそ思はめとおぼす。（間抜けな男だと）

一（この女が）あの覗き見の時の美しかった娘ならば。「火影」は、ともし火に照らされた姿。前に「火、近うともしたり」（一〇七頁）とあった。

二 感心しない軽薄さと申すべきでしょう。草子地。

三 思慮ありげな、男に気の毒と思わせるようなたしなみは何もない。

四 ひどく世間体を気にしているのも、さすがに気の毒なので。「名」は、評判。源氏との間に浮き名の立つこと。源氏は、軒端の荻が空蟬とのことに気づくのを恐れたのである。

五 これまで何度も方違えにかこつけておいでになったことを。それは実はあなた（軒端の荻）が目当てだったのだと言いつくろう。

六 よく気のつく女なら察しがつくであろうが。「たどる」は、ここは事情をいろいろ考える意。

七 別に気持のひかれるようなところもない感じで。

八 こんなに強情な女はまたとあるまいとお思いになるにつけても。

二 かのをかしかりつる火影ならば、（この際それもよかろうというお気持になるのも）いかがはせむにおぼしなるも、わろき御心浅さなめりかし。（女は）やうやう目さめて、（思いもよらないあまりのことに）いとおぼえずあさましきに、（動転した）あきれたるけしきにて、何の心深くいとほしき用意もなし。（男をまだ知らないにしては）世の中をまだ思ひしらぬほどよりは、（ませたところのあるほうで）されば（消え入りそうにうろたえるでもない）みたるかたにて、（源氏だとも）あえかにも思ひまどはず。（どうしてこんなことになったのかと）われとも知らせじと思ほせど、（〔女に〕）いかにしてかかることぞと、（〔女が〕）のちに思ひめぐらさむも、（自分としては別に何でもないけれども）わがためにはことにもあらねど、（つれない空蟬が）あのつらき人の、あながちに名をつつむも、さすがにいとほしければ、たびたびの御方違へにことづけたまひしさまを、いと（つくろってお話しになる）よう言ひなしたまふ。（〔軒端荻の〕）たどらむ人は心得つべけれど、（分別では）まだいと若きここちに、（そんなにこましゃくれているようでも）さこそさしすぎたるやうなれど、（真相は見抜けない）えしも思ひ分かず。（〔女が〕）憎しとはなけれど、（可愛くないわけではないが）御心とまるべきゆゑもなきここちして、なほかの（恨めしい空蟬の仕打ちをひどいと）うれたき人の心をいみじくおぼす。（〔空蟬は〕）いづくにはひまぎれて、（どこに隠れひそんで）かたくなしと思ひゐたらむ、（問抜けな男だと）かく執念き人はありがたきものをとおぼすにしも、（困ったことに気持の移りようもなく〔空蟬のことが〕）あやにくにまぎれがたう思ひいでられたまふ。（軒端の荻）この人の、な（別に）

一　情愛深げに将来変らぬお約束をなさっておかれる。
二　こうした人目を忍ぶ仲は。
三　私と同じようにあなたも愛して下さいよ。
四　あなたのご両親も、こうしたことを大目には見て下さるまいと。「さるべき人々」は、しかるべき人たち。女の結婚に発言権を持つ保護者。
五　私からお手紙はようさし上げられません。
六　誰彼なしに人に言っては困るが。
七　小君。童殿上させているのでこういう。
八　薄絹の夏衣裳。後文によると、小袿である。夜着として上に掛けていたものであろう。
九　そこにいるのは誰ですか。不審の者をとがめる言い方なので、次に「おどろおどろしく」という。

源氏、老いた女房に見とがめられる

気に病むふうもなく屈託なげな　いじらしいので　〔源氏は〕
ま心なく若やかなるけはひもあはれなれば、さすがに情々しく契り
（源氏）公認の夫婦仲　情愛も一層深
おかせたまふ。「人知りたることよりも、かやうなるは、あはれも
いものだと　人目を憚る事情
添ふこととなむ、昔人も言ひける。あひ思ひたまへよ。つつむこと
なきにしもあらねば、身ながら心にもえまかすまじくなむありける。
わが身ながら思うにまかせぬ不自由な身の上なのです　〔私を〕
また、さるべき人々も許されじかしと、かねて胸いたくなむ。忘れ
今からつらい思いです
で待ちたまへよ」など、なほなほしくかたらひたまふ。「人の思ひ
月並みな殺し文句をおならべになる　（軒端荻）　人がどう思いましょうか気がひけて
はべらむことのはづかしきになむ、え聞こえさすまじき」と、うら
無邪気に
もなく言ふ。「なべて、人に知らせばこそあらめ、このちひさき上
（源氏）
持たせてお便りしよう　何気なく振舞って下さい
人に伝へて聞こえむ。けしきなくもてなしたまへ」など言ひおきて、
空蟬が脱ぎすべらかして置いたらしい　〔母屋を〕
かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣を取りて出でたまひぬ。

〔源氏のことを〕気にしながら

小君近う臥したるを起こしたまへば、うしろめたう思ひつつ寝け
すぐに目をさました　妻戸
れば、ふとおどろきぬ。戸をやをら押しあくるに、老いたる御達の
仰々しく　厄介に思って
声にて、「あれは誰そ」と、おどろおどろしく問ふ。わづらはしく
（小君）僕だよ　（女房）
て、「まろぞ」といらふ。「夜中に、こはなぞありかせたまふ」とさ
またどうしてお出かけになるのです　世話

一〇 この家に仕える女房の呼び名。「おもと」は、女房の呼び名の下につける敬称。
一一 背が高い人でいつも笑われている人（民部）のことを言うのであった。
一二 今小君をとがめている年老いた女房は、小君がこの民部と連れ立って出歩いているのだと勘違いして。
一三 以下、主語は源氏。渡殿の出入口に身を寄せて。
一四 お前に詰めておいでしたのか。「上」は、主人のお前をいう。ここは空蟬の所。
一五 局に下がっていましたが。
一六 ああ、おなか、おなか。腹痛を訴える。
一七 またあとで申し上げましょう。
一八 やはりこうしたお忍びの出歩きは、ご身分にふさわしくなくひやひやものだと、身にしみてお懲りになったことであろう。草子地。

焼き顔で（小君）違うよ ちょっとここに出るだけだ
かしがりて外ざまへ来。いと憎くて、「あらず。ここもとへ出づるぞ」とて、君（源氏）を押し出でたてまつるに、暁近き月、隈なくさし出でて、ふと人の影見えければ、「（女房）もう一人 またおはするは誰（女房）そ」と問ふ。「民部のおもとなめり。（不意に）けしうはあらぬおもとのたけだちかな（なかなかご立派な）」と言ふ。たけ高き人の常に笑はるるを言ふなりけり。老人（背丈だこと）、これを連ねてありきけると思ひて、「今、ただ今（そのうち すぐに）、立ちならびたまひなむ（同じくらいの背丈におなりでしょう）」と言ふ言ふ、われもこの戸より出でて来。わびしけれど、（「小君は」困ったが）えはた押しかへさで、渡殿（この老女房）の口にかい添ひて、隠れ立ちたまへれば、このおもとさし寄りて、「おもとは、今宵は上にやさぶらひたまひつる。一昨日より腹を病みて、いとわりなければ、下にはべりつるを、人少ななりとて召ししかば、昨夜まうのぼりしかど、なほえ堪ふまじくなむ」と、うれふ。いらへも聞かで、「（女房）あな腹々。今聞こえむ」とて過ぎぬるに、からうして出でたまふ。なほかかるありきはかろがろしくあやふかりけりと、いよいよおぼし懲りぬべし。

源氏、二条の院に帰って、女をしのぶ歌を詠み、小君に託す

一 お車にお供して乗って。
二 源氏の私邸。帚木（八一頁）にも見えた。
三 君はまだ子供でしようがないとおけなしになって。小君の幼稚さゆえに失敗したと苦情を言うのである。
四 人を非難するしぐさ。帚木（七八頁）にも見えた。
五 （君のお姉さんは、私を）嫌っておいでのようだから、この身にも愛想が尽き果てた。
六 伊予の介の足もとにも及ばない私なのだ。
七 前に「薄衣」とあった。「小袿」は、前出（一〇八頁注四）。
八 空蟬を恨めしくは思うものの。
九 寝る時、上に掛ける着物であろう。
一〇 君は。「あこ」（吾子）は、親しみ呼ぶ言い方。
一一 つれないあの人の身寄りだから、おしまいまで仲よくできそうにないよ。
一二 たたんでふところに入れ、持ち歩く紙。普通、恋文は薄様の色紙に書く。
一三 蟬が殻抜けていったあとに残された殻に、憎くはあるがやはりあなたをなつかしむことです。「うつせみ」は、元来、この世に生きている身体の意であるが、『万葉集』に「空蟬」「虚蟬」の宛字が用いられたことから、蟬の意になった。蟬の縁で「木のもと」という

小君、一車の後にて、二条の院におはしましぬ。ありさまのたまひて、三をさなかりけりと、あはめたまひて、かの人の心を、空蟬四爪弾きをしつつらみたまふ。〔小君は〕お気の毒で 何も申し上げられない（源氏）いとほしうて、ものもえ聞こえず。「いと深う憎み五たまふべかめれば、身も憂く思ひ果てぬ。どうして 逢ってはなどか、よそにくれないまでも やさしい返事ぐらいはして下さらないのかても、なつかしきいらへばかりはしたまふまじき。伊予の介六に劣りける身こそ」など、おもしろくない 心づきなしと思ひてのたまふ。さきほどの ありつる小袿七を、さすがに八御衣九の下に引き入れて、大殿籠れり。小君を御前に臥せて、よろづにうらみ、かつはかたらひたまふ。「あこは、らうたけれど、かわいいけれども 一〇つらきゆかりにこそ、え思ひ果つまじけれ」と、〔小君は〕つらい 真顔で まめやかにのたまふを、いとわびしと思ひたり。横になっておられたが しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。御硯一一急ぎ召して、わざわざのお手紙というふうではなく さしはへたる御文にはあらで、畳紙一二に、なぐさみ書きのようにお書き流しになる 手習のやうに書きすさびたまふ。（源氏）一三

うつせみの身をかへてける木のもとに

なほ人がらのなつかしきかな

い、「人殻」（残された小袿）に「人柄」を掛ける。
一四 気の毒だけれども。逢ったあと後朝の文をやるのが普通であるから、それをやらなければ、気にするだろう、という意。
一五 あれこれと考えて思い直されて。空蟬のことを考えると業腹でもあるし、また源氏にはもともとこの娘に深入りする気持もないのである。
一六 軒端の荻への手紙を小君に託すこともなさらない。

空蟬、その心情を源氏からの畳紙の端に古歌に託して書きつける

一七 とんでもないことでしたが。源氏の忍んだことをいう。「いとなむわりなき」に掛る。
一八 小君は、源氏には恨まれ、空蟬には叱られて、立つ瀬のない思いだが。
一九 あの小袿を。「もぬけ」は、蟬や蛇のぬけがら。
二〇 汗じみていなかったろうか。「鈴鹿山伊勢をのあまの捨て衣潮なれたりと人や見るらむ」（『後撰集』巻十一恋三、「女のもとに衣をぬぎおきて取りにつかはすとて」伊尹の朝臣）による。「伊勢を」の「を」は、間投助詞。
二一（一方）軒端の荻も（源氏から何の便りもないので）。前に「西の御方」（一〇七頁）とあった。
二二 不安に胸をしめつけられるばかりだが。
二三 とんでもないことだった（空蟬と人違いされたのだ）と思い当るはずもなくて。

と書きたまへるを、〔小君は〕懐に引き入れて持たり。軒端の荻かの人もいかに思ふらむと、一四いとほしけれど、一五かたがた思ほしかへして、御ことづけもなし。かの薄衣は、小袿のいとなつかしき人香に染めるを、身近くならして、見ゐたまへり。

小君、紀伊の守邸かしこにいきたれば、姉君待ち構えていて待ちつけて、きつく小言をおっしゃる いみじくのたまふ。

（空蟬）一七「あさましかりしに、何とか人目はごまかしても とかうまぎらはしても、人の疑いは避けようもないこと の思ひけむことさとですから りどころなきに、ほんとに困ってしまいます いとなむわりなき。あなたのこんな愚かさかげんを〔源氏は〕 いとかう心をさなきを、かつ頭ごなしにおっしゃる はいかに思ほすらむ」とて、はづかしめたまふ。左右に一八苦しう思へど、かの御手習取り出でたり。〔空蟬は〕さすがに、取りて見たまふ。一九かのもぬけを、いかに、どうだったろう二〇伊勢をの海士のしほなれてや、など思ふもただな気が気でらず、いとよろづに乱れて、思い乱れて二一西の君も、ものはづかしきここちして何となく顔も上げられないような思いで 自分の部屋に帰られた わたりたまひにけり。〔軒端荻は〕また知る人もなきことなれば、人知れずうち物思い に浮かぬ顔でいる ながめてゐたり。源氏との間を行き来するにつけても 小君のわたりありくにつけても、二三胸のみふたがれど、御消息もなし。二三あさましと思ひうるかたもなくて、されたる心ませた所があるだ

けに　もの悲しい思いをしているようだ　空蟬

に、ものあはれなるべし。つれなき人も、一さこそしづむれ、いとあ　通り一遍

とも思えない源氏のご様子に　昔に

さはかにもあらぬ御けしきを、二ありしながらのわが身ならばと、取

返すよしもないことだけれども

りかへすものならねど、忍びがたければ、三この御畳紙の片つ方に、

（空蟬）

うつ四せみの羽に置く露の木隠れて

忍び忍びに濡るる袖かな

一　そんなに冷静に構えてはいるものの。

二　昔のままの（結婚前の）身の上であったならと。「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」（『釈』『奥入』以下に引く古歌）による。帚木にも「ありしながらの身にて」（九一頁）とあった。

三　源氏から歌を書きつけてきた畳紙の端に。

四　蟬の羽根に置く露が木の間隠れに見えぬように、人目に隠れてひっそり涙に濡れる私の袖でございます。『伊勢集』に見える歌で、その古歌に自分の心を託して手習いのように書きつけたのである。手習いは、もとは習字の意であるが、転じて、思い浮ぶ歌（古歌であることも多い）を心にまかせて書きつけること。それとない源氏の詠みかけに、空蟬もそれとなく応じたもの。

夕顔（ゆふがほ）

源氏が、空蟬の手厳しい拒否にあって、雨夜の品定めに論じられた中流の女の魅力を体験しつつあった同じ頃のこと。

源氏には、ひそかに通う六条あたりの高貴の女性があったが、乳母の病気見舞に、五条の家を訪れる途中、隣家の夕顔の花に見とれていると、思いがけずその家の女から、夕顔の花に寄せた歌を贈られた。雨夜の品定めのことが頭を去らぬ源氏は、物語にある陋屋の美女を想像して、女につよくひかれる。巻名はこの夕顔の歌のやりとりから取られている。

乳母子の惟光の調査で、雨夜の品定めに頭の中将が話した常夏の女ではないかと疑ったが、それがまた興味をそそり、やがて惟光の手引きで、女のもとに通い始める。

源氏は覆面までして身分を隠すので、女は、人間ではないものが通うのかと、いぶかしく不安に思うが、素直でやさしい心根に、賤しい住居に似ぬ大らかさ、男を信じ切った様子は、源氏の今までに知らぬものだった。

源氏はいよいよ女に執心し、八月十五夜、女の家に一夜を明かすが、そのまま彼女を廃院に伴う。夜半、女は魔物に襲われて急死し、源氏は惟光の手助けで、やっと彼女を東山に葬った。そのあと、彼も重い病に罹ったが、ようやく九月に癒え、女の侍女を召し出して、その素姓を聞き、やはり頭の中将の常夏の女で、忘れ形見の女の子のあったことも知る。しかし一切は秘密にされ、まもなく、空蟬も夫とともに任地に下る。夕顔は死に、空蟬は去り、雨夜の品定めに始まった中の品の恋の遍歴は終った。巻末の数行は、帚木冒頭の文章と首尾相応じ、この巻が帚木、空蟬の巻と一まとまりのものであることを示している。

一 六条辺のさる女性にお忍びでお通いの頃。「六条わたり」は、左京の六条辺（図録二参照）。
二 途中の休息所。
三 夫が大宰の大弐なので、この呼び名があるのであろう。大弐は大宰府の次官。従四位下相当。長官が赴任せず、大弐が実務をつかさどる場合があり、地方官では最高の職。

源氏、乳母を訪れ、夕顔の宿の女から扇を贈られる

四 尼になったのを。重病の時に、出家すると、その功徳で延命が叶うとされていた。
五 御車を入れる正門は鍵が下ろしてあるので。身分の高い客は車のまま正門から入るのが作法である。
六 惟光をお呼ばせになり。実名で呼び捨てにされているから、源氏の家臣だと分る。
七 檜の細長い薄板を斜めに編んで張った下見板。（図録八参照）
八 小さい蔀。外側に釣鉤でつるし上げる（図録八参照）。「間」は、柱間。柱と柱の間をいう。
九 美しい額ぎわの隙間影がたくさん見えて、こちらを覗いている。「透影」は、ものの隙間から見える姿。
一〇 むやみに背高な感じがする。地面から半蔀までの壁面を檜垣で覆ってあるので、外から見る源氏には床の高さが分らず、ひどく背丈があるように見えたことをいう。
一一 先払いの者にも声を立てさせなさらずに。

夕顔

一 六条わたりの御忍びありきのころ、内裏よりまかでたまふ中宿に、二 大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりにける、見舞おうと とぶらはむとて、五条なる家尋ねておはしたり。

御車入るべき門は鎖したりければ、五 〔源氏が〕 供の者に 人して惟光召させて、六 待たせたまひけるほど、むさくるしい むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、五条の大路の様子を 乳母の家の隣に この家のかたはらに、七 檜垣といふもの新しうして、上は、半蔀四五間ばかりずっと吊り上げて あげわたして、真新しくて涼しそうなところへ 簾などもいと白う涼しげなるに、九 をかしき額つきの透影、あまた見えてのぞく。立って動き廻るらしい たちさまよふらむ下つかた思ひやるに、一〇 〔源氏は〕 変った家だと あながちにたけ高きここちぞする。いかなる者の集へるならむと、やうかはりておぼさる。御車もいたくやつしたまへり、一一 前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、自分が誰だか分るまいと安心なさって すこし

粗末になさっているし

一　同じような形式の門が春日権現験記絵に見える。（図録八参照）

二　しみじみと、「世の中はどこでも仮の宿りだ」とお考えになってみると、立派な御殿とて同じことである。「世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿と定むる」――世の中はどの家をさしてわが家と定めることができよう。たまたま足の行き止る家をわが家とするまでなのだ（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）の歌を思い起したもの。「玉の台」は、歌語。「玉台」の訓読語。

三　きりかけめいたもの。「きりかけ」は、柱に横板をやや斜めにうちつけ、少しずつ重ねてゆく粗末な板塀。

四　あの白い花は何だろうという気持から、次の歌の上の句を口ずさんだ。「うちわたす遠方人にもの申すわれ　そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」――ずっと向うにおられるお方にお尋ね申す、そこに白く咲いているのは何の花でしょうか（『古今集』巻十九、旋頭歌）。

五　勅命によって上皇、摂関以下中将などに賜る近衛府の官人。外出の時警護に当る。源氏は現在中将である。

六　頭注四の旋頭歌を引いて応じたもので、たしなみのある応答といえよう。

七　花の名は夕顔―顔などと申せば、いかにも人並みのようですが。「人めく」の「人」は、身分のある者

顔を覗かせてご覧になると　中を見て

さしのぞきたまへれば、門は蔀のやうなる、押しあげたる、見いれも狭くのほどなく、ものはかなき住ひを、あはれに、何処かさして、と、思ほしなせば、玉の台も同じことなり。きりかけだつ物に、いと青やかなるかづらの、ここちよげにはひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑の眉ひらけたる。「遠方人にもの申す」と、ひとりごちたまふを、御随身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ、咲きはべりける」と、申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、ここもかしこもこのもかのも、あやしくうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに、はひまつはれたるを、「くちをしの花の契りや。一ふさ折りて参れ」とのたまへば、この押しあげたる門に入りて折る。すがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童の、をかしげなる、出で来て、うち招く。白き扇の、いたうこがしたるを、「これに置きて参らせよ。枝もなさけなげなめる花を」とて、

蔓草が　ささやかな　随身の言う通り　みじめに傾いて　頼りなげな軒端などに　むさくるしい界隈の　こんなみすぼらしい　ひざまずいて　遠方人が　源氏が　かわいそうな花のさだめよ　粗末ながら風情のある　裾長に着こなした　香を薫きしめた　随身は　随身を　さし上げなさい　童のを（童）

をいう。
八 遣戸（引違えの板戸）による出入口。（図録八参照）
九 生絹は練らない絹で、夏の衣料。単袴も夏の物。
一〇 ここは女の童。召使の少女。
一一 枝も風情がなさそうな花ですもの。夕顔は蔓草で人にさし出すには扱いにくいことをいう。
一二（乳母の家の）門をあけて、惟光の朝臣が出て来たのを通じて、夕顔の花をさし上げさせる。「朝臣」は、五位以上の廷臣の称。
一三 人の乗った車を路上に止めることを、人に准じて「立つ」という。

源氏、乳母を見舞う

一四 ここで惟光が乳母の子であることが分る。
一五 天台宗、真言宗での僧職。もとは梵語で、修行を積み、弟子の手本となる資格を持つ僧の意。
一六 乳母の娘婿。三河は上国で、国守は従五位下相当。
一七 受戒のご利益で生き返りまして。「忌むこと」は、仏道における戒（禁制）。出家に当って戒を受けて、これを守る。
一八 臨終の時にお迎え下さる阿弥陀さまの御光も。「阿弥陀仏」は、西方の極楽浄土におわす仏で、一切衆生を救済し、極楽往生する人には、臨終に二十五菩薩を連れて迎えに来ると信じられていた。

〔扇を〕取らせたれば、門あけて惟光の朝臣出で来たるして、奉らす。（惟光）「鍵を置きまどはしはべりて、いと不便なるわざなりや。もののあやめ見たまへ分くべき人もはべらぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまして」と、かしこまり申す。引き入れて下りたまふ。

惟光が兄の阿闍梨、婿の参河の守、むすめなど、わたりつどひたるほどに、かくおはしましたるよろこびを、またなきことにかしこまる。尼君も起きあがりて、「惜しげなき身なれど、捨てがたく思うたまへつることは、ただかく御前にさぶらひ御覧ぜらるることの変りはべりなむことを、くちをしく思ひたまへたゆたひしかど、忌むことのしるしによみがへりてなむ、かくわたりおはしますを見たまへはべりぬれば、今なむ阿弥陀仏の御光も、心清く待たれはべるべき」など聞こえて、弱げに泣く。「日頃おこたりがたくものせらるるを、安からず嘆きわたりつるに、かく世を離るるさまにものしたまへば、いとあはれにくちをしうなむ。命長くて、なほ位高くな

〔車を〕
〔源氏が〕
〔乳母〕
〔惟光〕

どこかに置き忘れまして　不都合なことでございます　どなたとお見分け申す眼のある者もおりませぬあたりでございますが　おわびを申し上げる　御礼を　寄り集まっていたところへ　この上ないことに思って恐縮して　尼になりたくないと申し上げる　存じていましたのは　残念に思いましてためらっていましたが　になりますのを　お目通りして変った姿をご覧に入れることの　お見舞いにお越し下さったお姿を拝見しましたので　心残りなくお待ち申せましょう　ご病気が思わしくなくていらっしゃるべき　いつも案じて嘆いていましたが　世を捨てた尼姿でいらっしゃるのでのを　長生きをして　もっと私が出世した

一 その上で、極楽浄土の最上位にでも、何の障害もなく、生れ変られればよいでしょう。「九品の上」は、上品上生のこと。極楽は、上品、中品、下品の三段階に分れ、それぞれ上生、中生、下生に分れて、九段階ある。

二 乳母といった、養い子をかわいがるはずの人物は、おかしいほどその子を完全無欠なものに思い込むものだが。「まほ」は、「かたほ」に対し、完全に整っていること。

三 (他人が出家を惜しんで泣いてくれるのならともかく)自分から泣き顔をして、お目に掛けていなさるよと。「ひそむ」は、泣いて眉のあたりがゆがむ様。

四 私(源氏)をかわいがってくれるはずの人々が亡くなられたあとは。幼時に生母や祖母に死別したことをさす。

五 育ててくれる人はたくさんあるようでしたが。高貴な人には乳母が何人もついた。

六 まならぬ身の上で。官職について、朝廷に出仕し、結婚して妻の家に通わねばならないからである。

七 避けることのできない別れ(死別)などあってほしくないと思います。「世の中にさらぬ別れのなくがな千代もとなげく人の子のため」――どうぞこの世に死別などありませんように。母上のお命が千年もあるようにと願う人の子のために(『古今集』巻十七雑上、在原業平)を引いている。乳母を母と同じと思う源氏の真情がうかがえる。

姿をなりとご覧ください
ども見なしたまへ。一さてこそ、九品の上にも、障なく生まれたまはめ。この世に少しでも執着が残るのはすこしらみ残るは、よくないことだとわろきわざとなむ聞く」など、涙ぐみてのたまふ。

不出来な子でも
かたほなるをだに、二乳母やうの思ふべき人は、あさましうまほに見なすものを、ましていと面だたしう、親しく源氏をお世話申し上げたわが身までなづさひつかうまつりけむが大切で身もいたはしう、もったいなく思われるのも無理からぬことだからかたじけなく思ほゆべかめれば、すずろに涙がちなり。子どもは、〔老母の泣く様を〕いと見苦しと思ひて、そむきぬる世の去りがたきやうに、三みづからひそみ御覧ぜられたまふと、つきじろひ目くはす。

いったん捨てたこの世に未練があるかのようにしきりに涙をこぼして
つっ突き合って目くばせする

源氏君はいとあはれと思ほして、「いはけなかりけるほどに、四思ふべき人々のうち捨ててものしたまひにけるなごり、五はぐくむ人あまたあるやうなりしかど、親しく思ひむつぶる筋は、またなくなむ思ほえし。人となりて後は、六限りあれば、朝夕にしも見たてまつらず、心のままにとぶらひまうづることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は、心細くおぼゆるを、七さらぬ別れはなくもがなとなむ」など、

心から馴れ親しむという点では「あなたが」この上ない人に思われます
幼い頃
成人の後は
たやすくお目にかかれず
やはり

こまやかにかたらひたまひて、おしのごひたまへる袖のにほひも、〔涙を〕香の匂い いと所狭きまでかをり満ちたるに、げによに思へば、おしなべたらぬ人の身宿世ぞかしと、尼君をもどかしと見つる子ども、皆うちしほたれけり。

修法など、またまたはじむべきことなど掟てのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もてなしたる移香、いと染み深うなつかしくて、をかしうすさび書きたり。

（夕顔）二 心あてにそれかとぞ見る白露の

光そへたる夕顔の花

そこはかとなく書きまぎらはしたるも、あてはかにゆゑづきたれば、

三 いと思ひのほかにをかしうおぼえたまふ。惟光に、「この西なる家は何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」とのたまへば、例のうるさき御心とは思へども、さは申さで、「この五六日ここにはべれど、病者のことを思うたまへあつかひはべるほどに、隣のことはえ聞きはべ

ほかにも始めるように　お命じになって〔乳母の家を〕　使い馴らした　持って来させ　さきほどの　非難がましく思った子供たちも　涙にくれた　誰と分らぬように変えてある筆跡も　気品があって奥ゆかしいので　（源氏）　いつもの厄介なお癖が　始まったとは　（惟光）　この家におりますが　心配いたしまして看病にかけていますので　聞く暇もございませ

へ なるほどいかにも考えてみれば、（こんなすばらしい方をお育てした尼君は）並々ならず幸運な方だと。「人の身宿世」で一続きの語。

源氏、夕顔の宿の女に興味を持ち、返歌をやる

九 密教で行う加持祈禱の法。

一〇 手燭。松の木を細長く削って、先に油を塗り、火をともす。手もとを紙でまいてある。（図録一〇参照）

一一 当て推量ながら、源氏の君かと存じます、白露の光にひとしお美しい夕顔の花、光り輝く夕方のお顔は。「夕顔」で人の顔を暗にさし、「光そへたる」の「光」で「光る君」と察していることを匂わせている。この歌は、「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」（『古今集』巻五秋下、凡河内躬恒）の歌の調べ、形を写して詠まれている。

一二 （賤しい小家に住んでいるにしては）意外に気が利いているとお思いになる。

一　ここの家（今、乳母がいる家）の管理人。この家は乳母の一家が日常住んでいるのではなくて、一時借りたものか、控え屋のようなものであろう。

二　名前だけで実務も俸給もない地方官の次官。名誉職である。富裕な者が、上皇、東宮、皇后、親王等に任料を納めてなる。

三　姉妹などが宮中勤めをしておりまして、しょっちゅうやって来ます。

四　召使なのでよく分らないのでございましょう。

五　興ざめしそうな低い身分の者であろうと。

六　男が折り畳んで懐中に入れておく紙。

七　もっと近寄って、誰だかはっきり見たらどうでしょう、夕暮れ時にほのかにご覧になった美しい夕顔を。近寄って確かめてみないか、親しく付き合ってみないか、と誘いかけた歌。

（源氏）憎らしいと思っているのだね　そっけない調子で　ません

らず」など、はしたなやかに聞こゆれば、「憎しとこそ思ひたれな。

この扇は調べてみねばならぬわけがありそうだから　そう怒らずに

されど、この扇の尋ぬべきゆゑありて見ゆるを、なほこのわたりの

事情を知っている者　（惟光は）

心知れらむ者を召して問へ」とのたまへば、入りて、この宿守なる

をのこを呼びて問ひ聞く。

「揚名の介なる人の家になむはべりける。男は田舎にまかりて、妻

家なのでございました　夫は

なむ若くこと好みて、はらからなど宮仕へ人にて来通ふ、と申す。

（宿守が）　泥手好きで

くはしきことは、下人のえ知りはべらぬにやあらむ」と聞こゆ。さ

（贈歌の女は）　詠みかけてきたものよ

らばその宮仕へ人なり、したり顔にものなれて言へるかな、と、

自分を目ざして歌を贈ってきた心根が　いとしく見過しがたく思われるのは　女のことにかけては慎重でないご性分なのだろうよ

めざましかるべき際にやあらむと、おぼせど、さして聞こえかかれ

る心の、憎からず過ぐしがたきぞ、例の、このかたには重からぬ御

心なめるかし。御畳紙に、いたうあらぬさまに書きかへたまひて、

すっかり筆跡を変えてお書きになって

（源氏）寄りてこそそれかとも見めたそかれに

ほのぼの見つる花の夕顔

（まだ見たことのない源氏のお姿だったが）

ありつる御随身してつかはす。まだ見ぬ御さまなりけれど、いとし

八 お返事もなくて時間がたったので、（先方の女は）何やら間の悪い思いをしていると。

九 わざわざご返歌があったので。

一〇 たいまつ。松のやにの多い部分を燃やし、道を照らすのに用いた。（図録一〇参照）

一一 西隣の家の半蔀。前に「半蔀四五間ばかりあげわたして」（一一二頁）女たちが覗いているとあった。

一二 螢の光よりもっとかすかで、ものさびしい。「夕されば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき」（『古今集』巻十二恋二、紀友則）の第二句の言葉だけを使う。

一三 お目当ての所では。六条辺の女君。

一四 「木立」は、邸内の中島などに植えた喬木類。「前栽」は、建物の軒近くにある植込み。草花や、松、桜、梅などを植える。

一五 風情も格別なので。

一六 朝見るお姿。女の所から夜明けに帰ってゆく姿。「わがせこが朝明の姿よく見ずて今日のあひだを恋ひくらすかも」（『万葉集』巻十二、読人しらず）を原歌とする歌が、異本『柿本集』などに載る。歌語である。

一七 昨夜の（夕顔の宿の）蔀の前をお通りになる。

一八 ほんのささいな一件がお心にかかって。扇に歌を書いて寄こしたことをさす。

きりそれと察しのつく るく思ひあてられたまへる御横顔をそば目を見過ぐさで、さしおどろかしたのを けるを、いらへたまはでほどへければ、なまはしたなきに、かくわざとめかしければ、あまえて、いかに聞こえむ、など、言ひしろふ

様子だが 身の程知らずめと べかめれど、めざましと思ひて、随身は参りぬ。御前駆の松明ほのかにて、いと忍びて出でたまふ。半蔀はおろしてけり。隙々より見ゆる火の光、螢よりけにほのかにあはれなり。

御心ざしの所には、木立前栽など、なべての所に似ず、いとのどりと優雅に かに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの、けしき異なるに、ありつる垣根思ほしいでらるべくもあらずかし。翌朝、すこし寝過ぐしたまひて、日さし出づるほどに出でたまふ。朝明の姿は、げに人のめできこえむもことわりなる御さまなりけり。今日もこの蔀の前渡りしたまふ。来しかたも過ぎたまひけむわたりなれど、ただはかなき一ふしに御心とまりて、いかなる人の住処ならむとは、往来に御目とまりたまひけり。

〔乳母の家を〕 〔女君の〕気品のあるご様子などが 調子にのって どうぞ返事申そう 言い合っている ふいに言葉をおかけし 帰って来た 世間の人がおほめ申すのも無理もないご様子であった 今までもお通りになったはずの所だけれども 〔源氏は〕 さきほどの夕顔の家など思い出されるはずもない

惟光に隣の女の正体をさぐらせる

惟光、日頃ありて参れり。「わづらひはべる人、なほ弱げにはべれば、とかく見たまへあつかひてなむ」など聞こえて、近く参り寄りて聞こゆ。「仰せられしのちなむ、隣のこと知りてはべる者呼びて、問はせはべりしかど、はかばかしくも申しはべらず。いと忍びて五月のころほひよりものしたまふ人なむあるべけれど、その人とは、さらに家のうちの人にだに知らせず、となむ申す。時々中垣のかいま見しはべるに、げに若き女どもの透影見えはべり。褶だつもの、かことばかり引きかけて、かしづく人はべるなめり。昨日、夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてゐてはべりし人の、顔こそいとよくはべりしか。もの思へるけはひして、ある人々も忍びてうち泣くさまなどなむ、しるく見えはべる」と聞こゆ。君うちゑみたまひて、知らばやと思ほしたり。おぼえこそ重かるべき御身のほどなれど、御よはひのほど、人のなびきめできこえたるさまなど思ふには、すきたまはざらむも、なさけなくさうざうしかる

（惟光）病人が　何日かたって　まだしっかりいたしませんので　尋ねさせましたが　はっきりしたことも申しません　どく内密に　（惟光）　（西隣の家に）おいでの方があるようですが　どういうお人　申しわけ程度につけて　狭い家いっぱいに　人は　顔がたいそう美しゅうございました　憂いに沈んだふうで　側にいる女房　隣と境界の垣から覗き見しますと　仕える主人がいる様子です　手紙を書こうとして坐っていました　（その女のことを）知りたいものだと　まだお若いことや　女たちがお慕いしちやほや申すことなど考えると　風情がなくもの足りないことだろうよ　あまりお堅いのも

一　なにかと看病いたしておりまして。「見たまへあつかふ」は、「見あつかふ」という複合動詞の間に、謙譲語の「たまふ」（下二段）の入ったもの。

二　全然、家人（揚名の介一家の者）にも知らせません。

三　褶のようなもの。「褶」は、上衣といって腰に着けたというが、実体は分らない。主人の前に出る時の礼装である。

四　社会的には、重いご身分でいらっしゃるが。以下「このましうおぼゆるものを」まで、惟光の心中に思うこと。

五　人が承知しないような身分の者でも、やはり女のこととなれば、心が動くのだもの（貴公子が浮気なさるのは無理からぬこと）。「うけひく」は、承知する意。「さりぬべきあたりのこと」は、男として興味を持つのが当然な女のこと、の意。

六　ここでは恋文。

七　待たさずに返歌を寄こしました。返歌は即座に返すのがよいとされた。

八　あの、最下級だといって、頭の中将が問題にしなかった身分の者が住んでいそうな家だが。雨夜の品定めに、頭の中将が「下のきざみといふ際になれば、ことに耳たたずかし」（帚木四九頁）と言ったことをさす。

九　予想に反して美しい人を発見したならば（どんなにすばらしいか）と。雨夜の品定めに、馬の頭が「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおぼえめ」（帚木五二頁）と言ったことが念頭にある。

伊予の介の上洛と空蟬への未練

一〇　あの、蟬の脱殻のように、小袿だけを残して逃げていった女。

一一　気の毒な、出来心からの過ちとしてすませてしまうはずのところを。空蟬がそののち二度も自分を拒んだので、自尊心が許さず、諦められないのである。

べしかし、人のうけひかぬほどにてだに、なほさりぬべきあたりのことは、このましうおぼゆるものを、と、思ひをり。

（惟光は）

「もし見たまへ得ることもやはべると、はかなきついでつくり出でて、消息などつかはしたりき。書き馴れたる手して、口疾く返りことなどしはべりき。いとくちをしうはあらぬ若人どもなむはべるめる」と聞こゆれば、「なほ言ひ寄れ。尋ね寄らでは、さうざうしかりなむ」とのたまふ。かの下が下と、人の思ひ捨てし住ひなれど、そのなかにも、思ひのほかにくちをしからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり。

（惟光）もしや何か見つけ出せることもあるかと存じまして　ちょっとした機会をつくって　筆跡で　さして悪くはない　若い女房たちがいるようです　（源氏）　正体を突きとめないでは　つまらないだろう

さて、一〇かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人には違ひておぼすに、おいらかならましかば、二心苦しきあやまちにてもやみぬべきを、いとねたく、負けてやみなむを、心にかからぬをりなし。かやうのなみなみまでは思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定めの後、いぶかしく思ほしなるしなじなあるに、いとどくまなく

素直に言うことを聞いていてくれたなら　あきれるばかり冷淡なのを　世間普通の女とは　こしゃくにも　ふられたままで終りそうなのが　気にならぬ時はない　こんな身分の女のことまでは　知りたいとお思いになるいろいろな階層の女があるので　ますます残るくまなく

興味をお持ちになったのであろう
なりぬる御心なめりかし。

一 うらもなく待ちきこえ顔なる片つ方人を、あはれとおぼさぬにしもあらねど、二つれなくて聞きゐたらむことのはづかしければ、まづ空蟬の本心を こなたの心見果ててと、おぼすほどに、三伊予の介上りぬ。四まづ急ぎ海路のせいで 参れり。船路のしわざとて、すこし黒みやつれたる旅姿、いとふつ日に焼けて 年とっていこうで感じが悪い つかに心づきなし。されど人もいやしからぬ筋に、容貌などねびたれも相当な血筋で るが、きよげにて、ただならず、けしきよしづきてなどぞありける。立派で 整っていて 〔源氏に〕国の物語など申すに、五湯桁はいくつと問はまほしくおぼせど、あいなくまばゆくて、六御心のうちにおぼしいづることもさまざまなり。ともに顔が見られなくて 実直な年輩の男を前にしてこんな思いをするのも ものまめやかなる大人をかく思ふも、げにをこがましく、うしろめたきわざなりや、七げにこれぞ、なのめならぬかたはなべかりける、と、八馬の頭のいさめおぼしいでていとほしきに、つれなき心はねたけれど、人のためはあはれとおぼしなさる。だけれども 伊予の介にとっては感心だとお考えになられる 〔伊予介が〕気の毒になって〔空蟬の〕 いことだ 安心のならな かっこうが悪く 妙にま 生れも相当な血筋で ゆかしい風格があるといった人物だった 日に焼けて 海路のせいで

女をばさるべき人にあづけて、北の方をば率て下りぬべしと、聞

軒端の荻を適当な人に縁づけて 空蟬 連れて下るつもりだと

一 （源氏の言葉を）疑いもせず、またの逢瀬をお待ちしているらしいもう一人の人。軒端の荻のこと。

二 空蟬が何食わぬ顔で、軒端の荻とのやりとりを聞いていたのだろうと思うと、気恥ずかしいので。

三 空蟬の夫が上京した。（帚木八五頁系図参照）

四 何はさておき、源氏の邸にご挨拶に上がった。源氏の力で、現在の官職を得たのであろう。

五 源氏は伊予の事情を尋ねたいと思われるが。伊予は昔から道後温泉で名高いので、こういった。空蟬の巻の碁を打つ場面の軒端の荻について、「伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ」（一〇九頁）と思ったことと関連させて書いている。

六 源氏のお胸のうちに浮ぶのは空蟬のこと、軒端の荻のことで、嫉妬や後ろ暗い思いが去来する。

七 全く、こういう人妻との浮気沙汰こそ、尋常ならぬ不届きなことなのだったと。「なべかりける」は、「なんべかりける」の撥音無表記の形。

八 源氏は空蟬の夫を前にして、馬の頭が「なにがしがいやしきいさめにて、すきたわめらむ女に心おかせたまへ。あやまちして、見む人のかたくなる名をも立てつべきものなり」（帚木七一頁）と言ったことを思い出し、女の不実は夫の恥さらしなのだということを悟る。

九 たやすくお微行でいらっしゃりにくいのに。「まぎる」は、ここでは姿をやつして目立たなくすること。

一〇（前に二度まで逃げおおせたのに）いまさら源氏のお越しを待つなど見苦しいと、きっぱり思い切っている。

一一 さし上げた方がよいと思われるような時のお返事。月や花に寄せた恋文をむやみに無視するのは、風情を解しない無神経なものと思われた。

一二 もう一人の女は。軒端の荻のこと。

一三 誰のせいでもない、ご自身から求めたことで（恋が原因で）、物思いに心をつくされることがあれこれあって。空蟬とのこともその一つである。「秋にもなりぬ。……心づくしに……」の文章は、「木の間より漏り来る月の影見れば心づくしの秋は来にけり」（『古今集』巻三秋上、読人しらず）の下の句による。

一四 六条辺の女君に対しても。後の葵の巻に、前坊（皇太子のまま亡くなった方）の妃、六条の御息所として登場する方である。

一五 なかなかご承知なさらぬご様子だったのを、思いどおりになさったのち。「おもむく」（下二段）は、むかせる、従わせること。「きこえ」は、女君に対する敬語。この方の身分の高さが察せられる。

秋、六条の女君を訪れる

きたまふに、ひとかたならず心あわたたしくて、今一度はえあるまじきことにやと、小君をかたらひたまへど、人の心を合せたらむことにてだに、かろらかにえしもまぎれたまふまじきを、まして似げなきことに思ひて、今さらに見苦しかるべし、と思ひ離れたり。さすがに絶えて思ほし忘れなむことも、いといふかひなく、憂かるべきことに思ひて、さるべきをりをりの御いらへなど、なつかしく聞こえつつ、なげの筆づかひにつけたる言の葉、あやしくらうたげに、目とまるべきふし加へなどして、あはれとおぼしぬべき人のけはひなれば、つれなくねたきものの、忘れがたきにおぼす。今一方は、主つよくなるとも、かはらずうちとけぬべく見えしさまなるを頼みて、とかく聞きたまへど、御心も動かずぞありける。

秋にもなりぬ。人やりならず、心づくしにおぼし乱るることどもありて、大殿には絶えま置きつつ、うらめしくのみ思ひきこえたまへり。六条わたりにも、とけがたかりし御けしきをおもむけきこえ

（逢えぬものだ／女が心を合わせている場合でも／〔空蟬は〕／不釣合／とは／いなことだと／〔源氏が〕すっかり自分をお忘れになるとしたら／心の張りもなく／やさしく申し上げ／さりげない文面に詠みこまれた歌も／ては／心にのこる言いまわしがあったりして／恋しくお思いにならずにはいられぬ空蟬の様子なので／冷たくてしゃくだけれど／忘れがたい女と／心を交わしそうに見えた様子だったので安心して／夫がきまってもぬし／婿取りの噂をいろいろ／左大臣方にはとだえがちなので／おほいとの）

たまひてのち、ひきかへしなのめならむはいとほしかし、されどよ（うって変って通りいっぺんのお扱いではおいたわしいことだ）そなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまでおぼしし（何ごとも度を越すほど深く思いつめなさるご性分で）めたる御心ざまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜がれの寝ざめ寝ざめ、おぼししをるること、いとさまざまなり。霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなるけしきに、うち嘆きつつ出でたまふを、中将のおもと、御格子一間あげて、見たてまつり送りたまへ、とおぼしく、御几帳引きやりたれば、御頭もたげて見いだしたまへり。前栽のいろいろ乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。廊のかたへおはするに、中将の君、御供に参る。紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかに引き結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見かへりたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪のさがりば、めざましくも、と見

（溜息をつきながら）（お見送りなさいませ）（外に目をおやりになる）（女君は）（行き過ぎにくそうに）（簀子に）（たたずんでおられるお姿は）（色とりどりに）（中将を）（源氏は）（黒髪のかかり具合）（たしなみのあるかしこまった態度）（さすがなもの）

一　無理をしてでもといったご様子も見えないのは、どうしたことなのかと思われた。草子地。

二　年齢も釣合わないし、世間の人が二人の噂を聞いたらと思うと。後の賢木の巻に、この方は三十歳とあり、源氏より七歳年上である。この時は二十四歳。

三　こうした君の訪れのないさびしい夜々、ふと目を覚まされては、一層思い悩み悲しまれることがあれこれと多い。「夜がれ」は、男が夜、女の家に通わないこと。

四　（源氏は）はやく帰るよう、大層せかされなさって。女のもとから帰る姿が見られぬように暗いうちに出るのが作法であった。

五　女房の呼び名。「おもと」は、女房の敬称。

六　源氏は車に乗るために、廊の方に行こうとしている。「廊」は、中門廊であろう（図録六参照）。

七　中将の君の表着の色目。表が紫か蘇芳、裏が青または萌黄の襲という。秋に着用する。

八　薄絹の裳。「裳」は、主人の前に出るとき腰に着ける礼装（図録一二参照）。

九　御殿の四隅の角に当る所。ここは寝殿の簀子の角。女君からは見えない。

一〇　簀子の外側の欄干。（図録六参照）

たまふ。

（源氏）一二「咲く花にうつるてふ名はつつめども
　折らで過ぎうきけさの朝顔
お前をどうしよう
いかがすべき」とて、〔中将の〕手をとらへたまへれば、いと馴れて疾く、

一三朝霧のはれまも待たぬけしきにて
　花に心をとめぬとぞ見る

と、おほやけごとにぞ聞こえなす。わざと主人のことにしてご返歌申し上げる をかしげなる侍童の、姿このまれた様子ぶったのがしう、ことさらめきたる、指貫の裾露けげに、一四絵にかかまほしげなり。

朝顔折りて参るほどなど、参上するところなど

一五おほかたにうち見たてまつる人だに、心とめたてまつらぬはなし。

一六ものの情知らぬ山がつも、木こりでも花の蔭にはなほやすらはまほしきにや、

源氏の輝くお姿をお見かけ申す人々は この御光を見たてまつるあたりは、ほどほどにつけて、わがかなしと思ふ女をつかうまつらせばやと願ひ、もしはくちをしからずと思ふ妹など持たる人は、いやしきにても、なほこの御あたりにさぶら

一二目の前の花を見ながら、うつるという言葉は使ってはいけないけれども（美しい人に心を移すという評判が立ちはせぬかと憚られるけれども）、わがものとせずにはおれぬ今朝の朝顔―お前の姿だ。「うつる」は、「色あせる」と「心を移す」の意を掛ける。「朝顔」に人の容貌の意味がある。この歌で、前栽の秋草の中に朝顔のあったことが分るが、後にも、「をかしげなる侍童の……朝顔折りて参るほどなど」と出る。冒頭の夕顔の宿の歌と対照をなす。

一三朝霧が晴れて、花がもっとはっきり見えるのを待たずにお出ましなさろうというご様子で、わが宿の花に―ご主人様にお心をおとめなさらぬものとお見受けいたします。

一三身近に置いて召使う少年。

一四絵に描きたいような場面である。当時、物語は男女の恋の場面を絵にして楽しむのが普通であった。ここは作者が絵にする箇所を指定したとも考えられる。

一五特別の関係ではなくて、ちょっとお姿を拝しただけの人でも、源氏をすばらしいとお思い申さぬ者はない。

一六このあたりの文章は、『古今集』仮名序の「大友黒主はそのさまいやし、いはば薪負へる山人の花の蔭に休めるがごとし」の言葉を借りている。

一 まして（中将の君のように）折にふさわしいお歌など頂いて、やさしいお人柄を拝見した人で、少しでももものに感ずる心を持った女は。

二 （お忍びでなく、天下晴れての通い所として）朝に夕にゆっくりして頂けるというふうではないのを、もの足りないことに思っているようである。

三 それはそうと。話題を転じる時に使う当時の常套語。

惟光、夕顔の宿の事情を詳しく報告し、源氏を手引きする

四 南側の半蔀のある建物。冒頭の女たちが覗き見していた所。「長屋」は、横に細長い建物で、ここでは北側に住居としての本屋があると思われる。後文によれば、南と北の建物に板の橋を渡して、通路としている。

五 ちょっとやってくる時があるようでございます。「はひわたる」は、ここは室内を気軽に移動すること。「はべべかめる」は、「はべるべかるめる」の撥音便化した「はべんべかんめる」の撥音無表記の形。

六 先日、先払いをして大路を渡って行く車がございましたが。前駆を追うのは貴人の通行の時。

七 「右近」は、女房の呼び名。「こそ」は、呼び掛けの語。

八 近衛の中将。ここは頭の中将のこと。「こそ」は、係助詞。

九 打橋のようなもの。「打橋」は、取り外しのきく板の橋。（図録八参照）

はせむと、思ひよらぬはなかりけり。一（考えぬ者はなかった）まして、さりぬべきついでの御言の葉も、なつかしき御けしきを見たてまつる人の、すこしものの心思ひ知るは、いかがはおろかに思ひきこえむ、二（どうしてなおざりにお思い申そう）明け暮れうちとけてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかめり。

三 まことや、かの惟光があづかりのかいま見は、いとよく案内見と（事情）りて申す。「その人とはさらにえ思ひえはべらず。（受持ちの覗き見の件は）人にいみじく隠れ忍ぶるけしきになむ見えはべるを、つれづれなるままに、四（大路に）南の半蔀ある長屋にわたり来つつ、（若い女房たちが）車の音すれば、若き者どものぞきなどすべかめるに、この主とおぼしきも、五（主人らしい女も）はひわたる時はべべかめる。容貌なむ、ほのかなれど、いとらうたげにはべる。六（かわいらしゅうございます）一日前駆追ひてわたる車のはべりしを、のぞきて、七（ここをお通りですわ）童女の急ぎて、『右近の君こそ、（はやくご覧なさい）まづもの見たまへ。八（見苦しからぬ女房が）中将殿こそ、これよりわたりたまひぬれ』と言へば、また、よろしき大人出で来て、『あなかま』と、（静かに）手かくものか（右近）（どうして中将様と分ったの）ら、『いかでさは知るぞ、いで、（どれ）見む』とて、（見てみよう）はひわたる。九（手真似で制しながらも）打橋だつ

一〇（右近は）急いで来たところ。「ものは」は、せっかく何々したのに（なんと）……の意。

一一この葛城の神様ったら、危なっかしく橋を掛けてくれたものだ。「葛城の神」は、奈良県葛城山の一言主神。役行者の命令で、金峯山から葛城山まで、岩橋を掛けたが、醜い容貌を恥じて、昼は姿を隠し、夜だけ働いたので、完成しなかったという伝説がある。「さかし」は、危険なこと。打橋の掛け方の下手なのを皮肉って言ったもの。

一二「直衣」は、貴族の日常着。（図録一二参照）

一三近衛の中将や少将が召し連れる少年。

一四もしやあの雨夜の品定めの折に、頭の中将が話していた、行方不明になったままの、可憐で忘れがたい女ではないかと。（帚木七二～七三頁参照）

一五こちらも隣の女房にうまく色恋をしかけておきまして。「私」は「公」に対する語。「私の懸想」は、個人的な自分の恋の意。主人の恋路のご用を勤めている際なので対照的にいう。

一六おなじ女房同士だと私には思わせて、話などする若い婦人がいますのを。上下関係の分る敬語を省いたりして二人でしゃべるのであろう。

一七小さい子供などのおりますのが、うっかり言葉づかいなどを間違いそうになるのもごまかして。つい、主人に対する敬語などを用いることをいう。

ものを道にてなむ通ひはべる。急ぎ来るものは、衣の裾をものに引きかけて、よろぼひ倒れて、橋よりも落ちぬべければ、『いで、この葛城の神こそ、さかしうしおきたれ』と、むつかりて、もののぞきの心もさめぬめりき。君は御直衣姿にて、御随身どももありし。なにがしくれがしと数へしは、頭の中将の随身、その小舎人童をなむ、しるしに言ひはべりし」など聞こゆれば、「たしかにその車をぞ見まし」とのたまひて、もしかのあはれに忘れざりし人にやと、思ほしよるも、いと知らまほしげなる御けしきを見て、「私の懸想もいとよくしおきて、案内も残るところなく見たまへおきながら、ただわれどちと知らせて、ものなど言ふ若きおもとのはべるを、そらおぼれしてなむ、はかられまかりありく。いとよく隠したりと思ひて、ちひさき子どもなどのはべるが、言あやまりしつべきも言ひまぎらはして、また人なきさまを強ひてつくりはべる」など、語りて笑ふ。

「尼君のとぶらひにものせむついでに、かいま見せさせよ」とのた

（打橋から落ちそうになるので）（文句を言って）（覗き見の興味も）（車中の）（童が）（源氏）（見届けたかったのになる）（源氏が）思い（つかれるにつけても）（源氏の）（惟光）（家の中の様子もすっかり分っておりますが）（だまされたふりをしております）（うまく隠しおおせたつもりで）（別に主人はいない様子を）（源氏）（お見舞）

一 雨夜の品定めに、あの頭の中将が、蔑んでいた下の品に入るのであろうが。

二 源氏の心中には、雨夜の品定めに馬の頭が、「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおぼえめ」（帚木五二頁）と言ったことが残っている。一二九頁にも同様の記述があった。

三 惟光自身も、抜けめない好き者のこととて。

四 この辺の（源氏がどんな具合にして通い始めたかという）事情は、くだくだしくなるので、いつものとおり省くことにする。草子地で、物語を進めるための常套的手法。

源氏、身分を隠して女のもとに通い、つよくひかれてゆく

五 （源氏は）相手の女をはっきりどこの誰と素姓をお確かめになれないので、ご自分も名乗りをなさらず。

六 いつもと違って、身を入れてお通いになるのは。「下り立つ」は、うち込む、熱心になる意。

七 あの夕顔の花をお取次ぎした随身だけ。（一二二頁参照）

まひけり。

かりにても、宿れる住ひのほどを思ふに、これこそ、かの人の定めあなづりし下の品ならめ、そのなかに、思ひのほかにをかしきこともあらば、などおぼすなりけり。惟光、いささかのことも御心に違はじと思ふに、おのれも隈なき好き心にて、いみじくたばかりまどひありきつつ、しひておはしまさせそめてけり。このほどのこと、くだくだしければ、例の、もらしつ。

女、さしてその人と尋ね出でたまはねば、われも名のりをしたまはで、いとわりなくやつれたまひつつ、例ならず下り立ちありきたまふは、おろかにおぼされぬなるべしと見れば、わが馬をばたてまつりて、御供に走りありく。「懸想人のいとものげなき足もとを見つけられてはべらむ時、からくもあるべきかな」などわぶれど、人に知らせたまはぬままに、かの夕顔のしるべせし随身ばかり、さては、顔むげに知るまじき童一人ばかりぞ、率ておはしける。もし思

（惟光は）むやみに粗末なみなりをなさって
並々ならぬご執心なのだろうと
（惟光）せっかくの色男が貧相な徒歩姿をあの家の者に見つけられでもしましたら
つらいことでしょうなあ
（源氏は）こぼすが
秘密になさりたいことと
先方が顔を全然知らぬはずの
万一感づ

ヘ　お邸をぜひともつきとめようと探るけれども。
「見す」は、源氏の方で見せるという言い方。
九　（そうまで身もとを隠そうとしながら）そのくせいとしくて、逢わずにいるとやりきれないほど、女のことがお心を去らないので。
一〇　不都合な軽率なことと。下層の女に、微服でお供も十分連れずに通うのは、貴人として、よくない行為とされていた。

一　ついさきほど女と別れて来たばかりの朝とか、間もなく暮れれば逢えるはずの昼間さえ、気が気でないほど、悩ましく思われなさるので。
二　考えてみれば、なんとも馬鹿げた振舞で、それほど熱中するにふさわしい恋愛事件でもないと。

かれる手がかりになっては
ひよるけしきもや、とて、隣に中宿（なかやどり）をだにしたまはず。女も、いと
腑に落ちぬ気がして　〔源氏の〕文使いに尾行をつけ　明け方のお帰り道をつ
あやしく心得ぬここちのみして、御使に人を添へ、暁の道をうかが
〔源氏の方では〕分らぬようにまいて
はせ、御在処（おありか）見せむと尋ぬれど、そこはかとなくまどはしつつ、さ
すがにあはれに、見ではえあるまじく、この人の御心にかかりたれ
〔源氏は〕反省してお悩みになりながら
ば、便なく軽々（かろがろ）しきことと、思ほしかへしわびつつ、いとしばしば
おはします。

色恋のことは　堅い人
かかる筋は、まめ人の乱るるをりもあるを、〔源氏は〕見苦しからず自重なさ
世間から非難をお受けになるような
ってたまひて、人のとがめきこゆべきふるまひはしたまはざりつるを、
おかしいほど
あやしきまで、今朝のほど昼間の隔てもおぼつかなくなど、思ひわ
づらはれたまへば、かつはいとものの狂ほしく、さまで心とどむべき
女の感じは
ことのさまにもあらずと、〔源氏は〕つとめて気持をさまそうとなさるが いみじく思ひさましたまふに、人のけは
思慮深いとかしっかりしている点
ひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深く重きかたはお
何ともいえず素直でおおらかで　全くの世間知らずながら　男女の仲を知らないというのでもない
はなくて　くれて、ひたぶるに若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず、
さして身分の高い姫君ではあるまい　この女のどこにこうまでひかれるのだろうか
いとやむごとなきにはあるまじ、いづこにいとかうしもとまる心ぞ、

一 直衣より略式の平常服。本来は狩猟用で、旅行着にもした。縫付け部分を少なく、活動的にしてある。従者などが日常に用いた。（図録一二参照）

二 異様な風体をして。持ち物など工夫したのか。

三 （覆面して）顔を少しもお見せにならず。

四 昔話によくある変化のものじみて。「ものの変化」で一語。「変化」は、人間以外の、神仏や動植物の精が人の姿になって現れたもの。娘のところに毎夜ひそかに通う男を、親が怪しんで、針に糸をつけて男の着物に刺し、翌朝糸をたぐってゆくと、三輪山の神であることが分ったという三輪山神婚説話は、特によく知られていた。

五 相手のお方のご様子は、さすがに暗がりの手さぐりにでもはっきり分ることだから。暗闇の寝室にいても、着物の手ざわりや、身ごなし、匂いなどで、人柄や身分が察せられる。

六 （あれこれ考えてみるけれど）やっぱり、この浮気者が手引きして始まったことらしいと。

七 五位に叙せられた者の称。惟光のこと。

八 とんでもないといったふうをよそおって、せっせと色恋にはげんでいるので。

九 おかしな具合に、一風変った悩みをするのだった。女の物思いは、普通は男の夜離れによるが、この場合は、男の素姓の分らぬことを嘆いている。

一〇 （女が）こんなふうに、無心に源氏に靡いて、油断をさせておいて、急に隠れてしまったら。ここで、

〔源氏は〕と、かへすがへすおぼす。

〔源氏は〕わざとらしく いとことさらめきて、御装束をも、やつれたる狩の御衣をたてまつり、さまをかへ、顔をもほの見せたまはず、夜深きほどに、人を静まるのを待って しづめて出で入りなどしたまへば、昔ありけむものの変化めきて、〔女は〕ひどく嘆かれもするけれど うたて思ひ嘆かるれど、人の御けはひ、はた、手さぐりもしるきわざなりければ、誰ばかりにかはあらむ、なほこの好き者のしいでつるわざなめり、と、大夫を疑ひながら、〔惟光は〕もっぱらしらを切って せめてつれなく知らず顔にて、かけて思ひよらぬさまに、たゆまずあざれありけば、いかなることにかと心得がたく、女方も、あやしうやう違ひたるもの思ひをなむしける。

源氏 君も、かくらなくたゆめてはひ隠れなば、いづこをはかりとか、〔夕顔の宿は〕われも尋ねむ、かりそめの隠処と、はた見ゆめれば、いづかたにも〔夕顔が〕いづかたにも、うつろひゆかむ日を、いつとも知らじとおぼすに、追ひまどはして、なのめに思ひなしつべくは、ただかばかりのすさ

お召しに 粗末な 人の寝なり どこを目当てにして 予想はできないだろうと いっときの慰みごとで いったいどなた様なのかしら

源氏は、頭の中将のもとから身を隠した女ではないかという疑いを強めている。

一一 女のあとを追って、行方を見失った時。

一二 やはり、誰ということなしに（素姓の分らぬまま）、二条の院に迎え取ろう。「二条の院」は、源氏が母から伝領した自邸で、誰にも気兼ねする必要がない（帚木八一頁注一二参照）。

一三 やはり変ですわ、そんなふうにおっしゃっても、普通じゃないお扱いですもの、なんだか恐ろしゅうございます。「世づかぬ御もてなし」は、源氏が身分を明かさず、覆面までして、人に隠れて出入りすることをさす。女の方で「昔ありけむものの変化めきて、うたて思ひ嘆かるれど……」とあったことにつながる言葉。

一四（二人のうち）どちらが狐なんだろうね。二人ともまだ名乗っていないのでこう言う。「狐」は、人間に化けて人を騙すものと考えられていた。

一五 やはり頭の中将が雨夜の品定めの時に話した、常夏の歌を詠んでやった女ではないかと疑われて。（帚木七三頁参照）

びにても過ぎぬべきことを、（とてもそうした気持ですませそうにはお思いになれない）さらにさて過ぐしてむとおぼされず。人目をおぼして、隔ておきたまふ夜な夜ななどは、いと忍びがたく、苦しきまでおぼえたまへば、一三なほ誰となくて二条の院に迎へてむ、もし聞こえ（世間に知れて）ありて便（具合の悪いことであっても）なかるべきことなりとも、（こうなる廻り合せなのだ）さるべきにこそは、わが心ながら、いとかく人にしむことはなきを、（ここまで女に溺れることはなかったのに）いかなる契り（宿縁）にかはありけむ、など思ほしよる。

「いざ、（源氏）いと心安き所にて、のどかに聞こえむ（お話ししよう）」など、かたらひたまへば、「なほあやしう、（女）一三かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ」と、いと若びて（子供じみて）言へば、げに、（源氏は）全くだほろ（源氏）まれたまひて、「げに、一四いづれか狐なるらむな。ただはかられたまへかし」と、なつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。世になくかたはなることなりとも、ひたぶるに従ふ心は、いとあはれげなる人と見たまふに、一五なほ、かの頭の中将の常夏疑はしく、語りし心ざま、まづ思ひいでられたまへど、

（だまって私に化かされておいでなさいよ）（すっかりその気になってそれでもいいと）（どんなおかしなことにでも）（お誘いになると）（やさしく）（かわいい女だと）（源氏は）

一（夕顔は）すねて、不意に逃げ隠れしそうな気持などはないから。以下、源氏の心中の思い。

二 こちらが夜離れをして、絶え間を置くような時には、（女の方でも）そんな気を起すかもしれないが、（源氏は）わが心ながら、（こんなにいちずに溺れ込むのではなく）少し飽きでもきた方が、（女のひたむきな従順さに）いとしさがまさるであろうとまで思われた。夕顔の人柄をもっと味わい楽しみたい気持。

源氏、仲秋の満月の夜、夕顔の宿に泊る

三 陰暦八月（今の九月）の満月の夜。

四 米の出来にも期待できず、田舎に出かけて行くことも考えられないから。「なりはひ」は、農業あるいは農作のみのりの意。「田舎のかよひ」は、米の買い入れのためであろう。

五 北隣さんよ。「こそ」は、呼び掛ける語。

隠すわけがあるのであろう〔夕顔に〕忍ぶるやうこそは、と、あながちにも問ひいでたまはず。一けしきばみて、ふとそむき隠るべき心ざまなどはなければ、二かれがれにとだえ置かむをりこそは、さやうに思ひ変ることもあらめ、心ながらも、すこしうつろふことあらむこそあはれなるべけれ、とさへおぼしけり。

三八月十五夜、隈なき月影（満月の光が）、隙多かる板屋（板葺きの家には）のこりなく漏り来て〔源氏には〕、見ならひたまはぬ住ひのさまもめづらしきに、暁近くなりにけるなるべし、隣の家々、あやしき賤の男の声々、目さまして、「あはれ、いと寒しや。今年こそ四なりはひにも頼むところすくなく、田舎のかよひも思ひかけねば、いと心細けれ。北殿五こそ、聞きたまふや」など、言ひかはすも聞こゆ。いとあはれなるおのがじしのいとなみに、起き出 でてそそめき騒ぐ（気ぜわしく立ち騒いでいるのも間近なのを）もほどなきを、女いとはづかしく思ひたり。（恥ずかしさに堪えられそうにない）体裁ぶって気取り屋の女なら えんだちけしきばまむ人は、消えも入りぬべき住ひのさまなめりかし。されど、（この女は）のどかに、（恨めしいこともいやなこともきまりの悪いことも）つらきも憂きもかたはらいたきことも、（気に）思

（隣の男）
（ほそぼそとした各自の生計のために）

六 何のことか分らぬ様子なので。女が下情に通じぬことが察せられる。

七 臼を地中に埋め、足で杵の柄を踏んで米などをつく。ここは精米をしているのであろう。

八 何の物音ともお分りにならず。源氏も碓など知らない生活を日頃送っているからである。

九 万事ごたごたしたことばかりが多いのだった。身分の高い読者に対して、下層の話題を提供したことを弁解する草子地。次に、一転して文学的表現になる。

一〇 「白妙の」は、「衣」の枕詞。「白妙」は、「白栲」で、栲の繊維は庶民の衣料に用いられた。

一一 織布を打って柔らかくし、つやを出す道具。

一二 あれこれの物音が一緒になって、堪えがたいほど人恋しい思いをそそる。このあたりの文章は、「北斗の星の前に旅雁を横たへ　南楼の月の下に寒衣を擣つ」（『和漢朗詠集』劉元叔）「月は新霜の色を帯び碪は遠雁の声に和す」（『白氏文集』）などを踏まえ、月、砧の音、雁の声と、物思わしい秋の景物を揃えている。

一三 しゃれた淡竹（が見え）。淡竹は葉が細長く、節が多い。

一四 （源氏の邸は広大で）日頃お邸のどこかで鳴いている蟋蟀もなかなかお耳に入らないのに。「きりぎりす」は、今のこおろぎのこと。「季夏蟋蟀　壁に居る」（『礼記』月令篇）による。

病むふうはなく　本人の態度や様子だけは　品よく

ひ入れたるさまならで、わがもてなしありさまは、いとあてはかにこめかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なさを、いかなることとも聞き知りたるさまならねば、なかなか、恥ぢかかやかむよりは、罪ゆるされてぞ見えける。ごほごほと、鳴る神よりも、おどろおどろしく踏みとどろかす碓の音も、枕上とおぼゆる、あな耳かしかましと、〔源氏は〕これには閉口されるこれにぞおぼさるる。何の響きとも聞き入れたまはず、いとあやしう、めざましき音なひとのみ聞きたまふ。くだくだしきことのみ多かり。

おおらかで　むきだしな隣の家のはしたない会話を　かえって　恥ずかしがって赤くなるよりは　ごろごろと　雷よりも　罪がないように思われる　聞き馴れない　いやな音と　ああやかましい

白妙の衣うつ砧の音も、かすかにこなたかなた聞きわたされ、空飛ぶ雁の声、取り集めて、忍びがたきこと多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引きあけて、もろともに見いだしたまふ。ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露は、なほかかる所も同じごときらめきたり。虫の声々みだりがはしく、壁のなかの蟋蟀だに間遠に聞きならひたまへる御耳に、さしあてたるやうに鳴き乱るるを、なか

〔源氏は〕女と共に外を　手狭な　引戸　人りまじって　つい耳の側でのように

一（女があまり無垢で自然なので）もう少し気取ったところがあってもいいのではないかと。
二 もっとくつろいで気兼ねなく女と過したいと思われるので。
三 奇妙なほど普通とは違って、男女の仲を知っている女ともお思いになれないので。
四 まわりの者の思惑をお考えになるゆとりもなく。
五 女に仕える上席の女房であろう。
六 前出の「夕顔のしるべせし随身」（一三六頁）である。源氏は直接随身に声をかけるのでなく、右近を取次ぎにして呼ばせる。
七 お頼り申し上げている。女房たちが源氏を信頼して、女主人を引きとめなかったことをいう。
八 暁の鶏の声にそそのかされて、女の家を出るというのが、よくある朝の別れの光景であった。
九 修験道で、御嶽（吉野の金峯山。弥勒菩薩出生の時の守護神を祀る）に参籠する前に、千日の精進潔斎をすること。
一〇 額を地につけて礼拝すること。
一一 立ったり坐ったりする様子も苦しそうに。立って仏名を称え、坐して礼拝することを、一日に何千回も繰り返す。
一二 朝置いた露が、夕を待たずに消えてしまうようなはかない人間の世なのに、年寄りが何を欲ばって、わが身の利益を祈っているのかと。「朝の露に名利を

（万事を大て風変りでおもしろいと思われるのも）なかさまかへておぼさるるも、（ほかならぬ女へのご愛情の深さゆえに）御心ざし一つの浅からぬに、よろづ（目にご覧になるのであろうよ）の罪ゆるさるるなめりかし。（夕顔は）白き袷、（薄紫の着馴れた表着を）薄色のなよよかなるを重ねて、はなやかならぬ姿、いとらうたげにあえかなるここちして、そこと（風にも堪えぬ風情で）取り立ててすぐれたることもなけれど、（身体つきは）ほそやかにたをたをとして、ものうち言ひたるけはひ、あな心苦しと、（ただもういとしく思われる）ただいとらうたく見ゆ。（源氏は）心ばみたるかたをすこし添へたらば、と見たまひながら、なほうちとけて見まほしくおぼさるれば、（源氏）「いざ、ただこのわたり近き所に、（夜を）心安くて明かさむ。（こんな所でばかり逢っていたのではたまらない）かくてのみはいと苦しかりけり」とのたまへば、（夕顔）（とてもそんな急ですもの）「いかでか。にはかならむ」と、いとおいらかに（おっとりと）言ひてゐたり。（源氏が）この二人の仲は来世までもなどとお約束なさるのに）の世のみならぬ契りなどまで頼めたまふに、うちとくる（信じきって慕いよる心根など）心ばへなど、あやしくやうかはりて、世馴れたる人ともおぼえねば、人の思はむ所もえ憚りたまはで、右近を召しいでて、随身を召させたまひて、（縁側まで）御車引き入れさせたまふ。（この家の女房たちも）このある人々も、（源氏の）かかる御心ざしのおろかならぬを見知れば、（不安に思いながら）おぼめかしながら、頼みかけきこえたり。

貪り　夕の陽に子孫を憂ふ」（『白氏文集』秦中吟「不致仕」）による。

三「南無」は、仏の名を呼ぶ時、すべてを任せて信じたてまつる意をあらわす語。「当来導師」は、弥勒菩薩のこと。釈迦入滅後、五十六億七千万年の未来に出現して、衆生を救い導くといわれる。

四 優婆塞が修行する仏の道に導かれて、来世でも、二人の深い約束にそむかないで下さい。「優婆塞」は、僧にならずに仏道を修行する男。隣の老人をさす。

五 玄宗皇帝と楊貴妃の、昔の例は縁起が悪いので。「長生殿」は、唐の宮殿。「長恨歌」に歌われる。

六 死んだら比翼の鳥に生れ変ろうという約束とは全く趣を変えて。「長恨歌」の「七月七日長生殿に　夜半に人無くして私語せし時　天に在らば願はくは比翼の鳥作らむ　地に在らば願はくは連理の枝為らむ」とあるのによる。楊貴妃は内乱が起って殺されたので、不吉だとして避けた。

七 弥勒菩薩出現の未来までもと、今からお約束なさる。「かぬ」は、あらかじめ……する意。

八 前世からの宿縁もさこそと思われる今の不運な身の上ですから、未来のことも頼みにできそうもございません。

九 しばらく入るのをためらうように見える月と同じように。十五夜で月の沈むのが遅いのである。

源氏、夕顔を某院に連れ出し、二人きりの時を送る

明けがたも近うなりにけり。鶏の声などは聞こえで、御嶽精進にやあらむ、ただ鈴びたる声にぬかづくぞ聞こゆる。起ち居のけはひ、堪へがたげに行ふ。（勤行する）いとあはれに、朝の露に異ならぬ世を、何を貪る身の祈りにかと、聞きたまふ。（源氏は）「南無当来導師」とぞ拝むなる。（あの老人も）この世だけとは思っていないのだ

（源氏）「かれ聞きたまへ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがりたまひて、

（源氏）優婆塞が行ふ道をしるべにて
　　来む世も深き契り違ふな

長生殿のふるき例はゆゆしくて、翼を交さむとは引きかへて、弥勒の世をかねたまふ。（遠い将来までものお約束）ゆくさきの御頼め、いとこちたし。（大仰なことだ）

（夕顔）前の世の契り知らるる身の憂さに
　　ゆくすゑかねて頼みがたさよ

（こうした返歌の内容も）かやうの筋なども、（実のところ）さるは、（心細い感じである）心もとなかめり。

（ふいに行く先も分らず出かけることを）いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを、女は思ひやすらひ、

一　某院。あらわに名前を言わない言い方。ここは、五条に近い所から「河原の院」をさすのであろう。六条坊門南、万里小路の東にあり、左大臣源融の邸として有名であった。後に宇多天皇に献上され、皇室御領になったが、まもなく荒廃した。（図録二参照）

二　車の前後にある御簾（図録一一参照）。ここは女の姿が月光でよく見えるように、前方の簾を捲き上げていたのであろう。

三　明け方女を連れ出すようなこと。

四　昔の人も、こんなふうにさまよい歩いたのだろうか、私にははじめての明け方の道を。

五　行く先がどこかも知らず、お気持も分らないのに、あなたをお頼りしていて来た私は、途中で消えてしまうのではないでしょうか。「山の端」は、月の入る所。暗に源氏を言い、女自身を月に喩える。「うはの空」は、空の途中の意。「影や絶えなむ」は、前に出ていた月が、「にはかに雲がくれて」という実景を詠み込んだもの。死ぬのではないかという連想を誘う不吉な表現。

〔源氏が〕何かと説得なさるうちに　〔月が〕
とかくのたまふほど、にはかに雲がくれて、明けゆく空いとをかし。
人目に立つほど明るくならぬ先にと　〔源氏は〕
はしたなきほどにならぬ先にと、例の、急ぎ出でたまひて、軽らか
〔女を車に〕　五条の辺に近い
にうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。そのわたり近きなにがし
の院におはしまし着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門のしの
管理人を
ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けき
とても　〔源氏の〕
に、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。「まだか
したことがないのだが　気苦労なことなのだなあ
やうなることをならはざりつるを、心づくしなることにもありける
かな。

（源氏）四
いにしへもかくやは人のまどひけむ
あなたは経験がおありか
わがまだ知らぬしののめの道
ならひたまへりや」とのたまふ。女、はぢらひて、
（夕顔）五
「山の端の心も知らでゆく月は
気味悪そうにしているので　あの立てこんだ住居に
うはの空にて影や絶えなむ
心細く」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさしつどひ

六（牛車の牛を外し）轅を簀子の欄干にもたせかけて、車を停めていらっしゃる。車は普通轅を榻に乗せる（図録一一参照）。ここは臨機に間に合せたやり方。

七 今までのこと（頭の中将との間にあったこと）などを、一人思い出していた。

八 男君のご身分を（源氏だということを）すっかり知ってしまった。皇室御領の院を自由に使い、管理人が懸命にご接待するのを見て、源氏だとはっきり分った。

九（管理人は）親しい下家司として、二条の院にも仕えている者だったので。「下家司」は、下級の家司。「家司」は、親王、摂関以下三位以上の家々の家政をつかさどる職で、四位、五位の中から選ばれた。

一〇 今の御飯。朝食。当時は米を蒸して食べるのが普通で、粥はそれよりも軽いものとされた。

一一 お運びするお給仕も（右近一人で）人数が揃わない。

一二 まだ経験したことのないご外泊なので。前の源氏の歌の「わがまだ知らぬしののめの道」より出た言葉。

一三「二人の仲は息長川の歌のようにいつまでも仲よく」とお約束なさるのに夢中である。「鳰鳥の息長川は絶えぬとも君に語らふこと尽きめやも」（『古今六帖』三、鳰。原歌は『万葉集』巻二十、四句「君に語らむ」）による。「鳰鳥」は、長く水中にもぐる息の長い鳥で、「息長」の枕詞。

馴れているためだろうたる住ひのならひならむと、をかしくおぼす。

〔門内に〕御車入れさせて、西の対に御座などよそふほど、高欄に御車ひきかけて立ちたまへり。右近、えんなるここちして、来しかたのことなども、人知れず思ひいでけり。預りいみじく経営しありくけしき子に、この御ありさま知り果てぬ。ほのぼのともの見ゆるほどに、下りたまひぬめり。かりそめなれど、きよげにしつらひたり。「御供に人もさぶらはざりけり。不便なるわざかな」とて、むつましき下家司にて、殿にもつかうまつる者なりければ、参りよりて、「さるべき人召すべきにや」など、申さすれど、「ことさらに人来まじき隠処求めたるなり。さらに心よりほかに漏らすな」と口がためさせたまふ。御粥など急ぎ参らせたれど、取りつぐ御まかなひうち合はず。まだ知らぬことなる御旅寝に、息長川と契りたまふことよりほかのことなし。

〔源氏は〕日たくるほどに起きたまひて、格子手づから上げたまふ。〔庭は〕いとい

（門内に）（しつらえる間）（はなやいだ気分になって）（管理人が一所懸命）（お世話に走り廻る様）（こざっぱりと室内を整えてある）（預り）（急場のことだが）（ちゃんとした人もおりません）（不都合なことで）（預り）（右近の取次ぎで）（源氏）（絶対にほかの者には言うな）（預りが）（さし上げたが）

一　一面秋の野になってしまって。「里は荒れて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる」（『古今集』巻四秋上、僧正遍昭）の下の句から引く。「ら」は、言い添えた語。

二　ほんとに何とも恐ろしそうな感じになってしまった所だな。格子を上げて、外を見渡している源氏の視線を追って、木立や前栽の様を叙べてきたので、源氏の心中の感想が、そのまま地の文になっているのであろう。あとに、ほとんど同文が源氏の言葉として出る。

三　本邸の敷地に続く一劃。

四　部屋などしつらえて。

五　鬼などでも私を大目に見てくれるだろう。源氏が、帝の御子だからと自負する言葉。「鬼」は、人の目には見えず、荒廃した所に住み、人を食うと信じられていた。

六　夕露に咲きそめる花―紐を解いて顔をお見せするのは、通りすがりの道で逢ったご縁があったからなのですね。「紐とく」に「花が咲く」意と、「紐を解いて覆面をとる」意味を掛ける。「玉鉾」は、ここでは道の意。「たより」は機会。「え」は縁。「夕露に紐とく花」で、夕顔の花を連想させる。

七　露の光はどうかね。女がはじめ、扇に「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」と書いて寄こしたのを踏まえて、どうです、近々と私の顔を見てのご感想は、と冗談を言ったもの。

八　光り輝いていると思った夕顔の花の上の露は、夕

たく荒れて、人目もなく遙々と見わたされて、木立いとうとましくものふりたり。け近き草木などは、ことに見所なく、みな秋の野らにて、池も水草にうづもれたれば、いとけうとげになりにける所かな。別納のかたにぞ、曹司などして、人住むべかめれど、こなたは離れたり。「けうとくもなりにける所かな。さりとも鬼なども、われをば見ゆるしてむ」とのたまふ。顔はなほ隠したまへれど、女のいとつらしと思へれば、げにかばかりにて隔てあらむも、ことのさまにたがひたりと、おぼして、

（人影）（前栽の）（気味悪く）（源氏）（三）（四）（五）（〔源氏は〕まだ覆面していらっしゃるが）（水臭いと）（預りの一家が住んでいる様子だが）（とんな深い仲になってまで隠し立てしているのも）（不自然なことだと）

（源氏）六「夕露に紐とく花は玉鉾の

たよりに見えしえにこそありけれ

七露の光やいかに」とのたまへば、後目に見おこせて、

（夕顔）八光ありと見し夕顔のうは露は

たそかれどきのそら目なりけり

と、ほのかに言ふ。をかしとおぼしなす。げにうちとけたまへるさ

（流し目にこちらを見て）（〔とんな歌をも〕）（〔源氏の〕）

暮れ時の見間違いでございました。大したことはありません、と戯れて言っている。

九　場所が場所なので（荒廃した所には魔物が住みついているものだから）、源氏の美しさは、一層恐いほどに思われた。当時、あまり美しい人は、神隠しにあったり、早死にしたりするという俗信があった。

一〇（人間ではないのかと）とても気味が悪い。前に「いづれか狐なるらむな」と言ったのと一連の言葉。

一一「白浪の寄するなぎさに世を尽す海士の子なれば宿も定めず」（『和漢朗詠集』巻下、雑）を引いて、「賤しい身分で、家も定まらず、名を名乗るほどの者ではございません」という心を述べたもの。

一二　これも自分のせいなのだろう。「海士の刈る藻に住む虫のわれからとねをこそ泣かめ世をば怨みじ」――海士の刈る海藻には「われから」という虫がついている、その虫の名のように、自分のせいでこうなったと声をあげて泣くことにしよう。相手のことは怨むまい（『古今集』巻十五恋五、藤原直子朝臣）によって答えたもの。女が「海士の子」と言ったので、同じ言葉を用いて返事をした。次の地の文の「怨み」も、歌の「世をば怨みじ」から取ったもの。

一三　果実や木の実、または中国風の菓子をいう。間食。

一四　右近が苦情を言うに違いない（やっぱり惟光の手引きだったのだなと責める）ことを考えると、さすがに気の毒なので。

一五　廂と簀子の境の簾。

夕顔

ま、世になく、所から、まいてゆゆしきまで見えたまふ。「尽きせず（源氏）いつまでも隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。一〇いとむくつけし」とのたまへど、（夕顔）「海士の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。「よし、（源氏）一二これもわれからなり」と、怨みかつはかたらひ暮らしたまふ。

惟光尋ねきこえて、一三御くだものなど参らす。一四右近が言はむこと、〔源氏の〕お側に伺候もできないでいるさすがにいとほしければ、近くもえさぶらひ寄らず。かくまでたどりありきたまふ、をかしう、さもありぬべきありさまにこそは、と、おしはかるにも、わがいとよく思ひ寄りぬべかりしことを、〔源氏に〕ゆづりきこえて、心ひろさよ、など、めざましう思ひをる。

たとしへなく静かなる夕の空をながめたまひて、〔源氏は〕奥のかたは暗うものむつかしと、女は思ひたれば、一五端の簾を上げて添ひ臥したまへり。夕ばえを見かはして、女も、かかるありさまを思ひのほかにあやしきここちはしながら、よろづの嘆き忘れて、すこしうちとけ

一　ひるがえって考えてみれば、（偶然に知り合った身分の低い女にここまで心を奪われるとは）我ながらおかしなことだ。

二　すまないと思うことにかけては、まっさきにこの方（六条の女君）のことを念頭にお浮べになる。

三　（六条の女君が）あまり思慮深くて、相手の男も息が詰るような重苦しいところを、少しなくしたい。

その夜、魔性の女が現れ、夕顔は急死する

四　坐りこんで。「ゐる」は、坐ること。

ゆくけしき、いとらうたし。つと（夕顔は）御かたはらに添ひ暮らして、ものをいと恐ろしと思ひたるさま、若う（あどけなくいじらしい）心苦し。格子疾く（と）おろしたまひて、大殿油（おほとなぶら）参らせて、「なごりなくなりにたる御ありさまにて、なほ心のうちの隔て残したまへるなむつらき」と、うらみたまふ。

内裏（うち）にいかに求めさせたまふらむを、いづこに尋ぬらむと、おぼしやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにも、いかに思ひ乱れたまふらむ、うらみられむに、苦しうことわりなりと、いとほしき筋は、まづ思ひきこえたまふ。何心もなきさしむかひを、あはれとおぼすままに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまを、すこし取り捨てばや、と思ひくらべられたまひける。

宵（よひ）過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上（まくらがみ）に、いとをかしげなる女ゐて、「己（おの）がいとめでたしと見たてまつるをば、尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率（ゐ）ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、御かたはらの人をかき起こさむと

帝はどんなにかお探しになっているだろうに（お使いは）
（源氏は）
六条のお方も
（六条の女君に）
つらいことだし無理もないと
おっとりと坐っている目の前の女を
（源氏が）
（源氏は）
私が大層ご立派なお方とお慕い申していますのに
美しい
こんな取柄のない女を
ご寵愛なさるのが
心外で恨めしゅうございます
（源氏の）お側の女を

五（源氏は）ぞっとなさって。魔性のものは、明りのある所を嫌うので、さきに火を消したのかと、源氏はぞっとしたのである。

六 西の対に通じる中門廊か。夜間、身辺警備のため、武具をつけた侍者が、簀子や廊で不寝番をする。

七 源氏が手ずから無理に（夕顔の側に）引き寄せる。

八 西の対の西南隅にある妻戸。

〔夢に〕すと見たまふ。悪夢にうなされるような気がして ものにおそはるるここちして、はっとお目覚めになったところ おどろきたまへれば、火も消えにけり。五 うたておぼさるれば、太刀を引き抜きて、〔魔除けに〕うち置きたまひて、右近を起こしたまふ。右近も これも恐ろしと思ひたるさまにて、参り寄れり。（源氏）「渡殿なる宿直人起こして、紙燭さして参れ と言へ」とのたまへば、（右近）「とても参れません いかでかまからむ。暗うて」と言へば、（源氏）「あな 子供っぽいぞ 若々し」とうち笑ひたまひて、手をたたきたまへば、山彦の答ふる 気味悪い 誰も聞きつけないで参上しない上に 声、いとうとまし。人え聞きつけで参らぬに、この女君、いみじく どうしてよいか分らぬ様子である わななきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、 正気を失ったふうである（右近）何事でもむやみに恐がられるご性分で われかのけしきなり。「ものおぢをなむわりなくせさせたまふ本性 どんなに恐がっておいでか にて、いかにおぼさるるにか」と右近も聞こゆ。いとか弱くて、昼 （源氏） も空をのみ見つるものを、いとほし、とおぼして、「われ、人を起 〔お前は〕 こさむ。手たたけば、山彦の答ふる、いとうるさし。ここに、しば お側に し、近く」とて、右近を引き寄せたまひて、西の妻戸に出でて、戸 を押しあけたまへれば、渡殿の火も消えにけり。

一「男」は、臣下、奉公人をいう語。
二 殿上童。清涼殿の殿上の間に出仕して雑用をする少年。前に「顔むげに知るまじき童一人ばかり」（一三六頁）を供に加えたとある。
三 いつもの随身。「かの夕顔のしるべせし随身」と前にあった。（一三六頁）
四 魔除けのため、矢をつがえず、弓の弦を鳴らすこと。鳴弦ともいう。
五 警戒のため、後文に出てくるように、「火あやふし」などの言葉を、声高に発すること。
六 清涼殿東北方にある滝口（清涼殿の御溝水の流れ落ちる所）に控えて、警備に当る武士。（図録五参照）
七 火の用心。夜の見張りの時に言う言葉。
八 去ってゆく様子である。「なり」は、推定の助動詞。この場合は、音を聞いての推定である。
九 預りの子が滝口で、いかにもそれらしく振舞うので、ふと宮中を思い出す。
一〇 亥の一刻（午後九時）に、宿直の殿上人が上司に名を名乗り、出勤報告をすること。
一一 名対面のあと、すぐに滝口の宿直奏があり、滝口の宿直の武士が同じように名を名乗る。
一二 これはどうしたことだ。なんと馬鹿げた恐がりようだ。

風すこしうち吹きたるに、人はすくなくて（宿直の者は数少ない上に）、さぶらふ限りみな寝たり。この院の預りの子（管理人の子で〔源氏が〕）、むつましく使ひたまふ若き男、また上童一人、例の随身ばかりぞありける。召せば、御答へして起きたれば、「紙燭さして参れ。（源氏）随身も弦打して、絶えずこわづくれ、と仰せよ。人離れたる所に、心とけて寝ぬるものか。（気を許して寝るやつがあるか）惟光の朝臣の来たりつらむは」と、問はせたまへば、「さぶらひつれど、仰せ言もなし、（預りの子）お控えしていましたが）暁に御迎へに参るべきよし申してなむ、まかではべりぬる」と聞こゆ。このかう申すものは、滝口なりければ、弓弦いとつきづきしくうち鳴らして、「火あやふし」と言ふ言ふ、預りが曹司のかたに去ぬなり。内裏をおぼしやりて、名対面は過ぎぬらむ、滝口の宿直奏（夜はまだそう更けていないのであろう）今こそ、と、おしはかりたまふは、まだいたうふけぬにこそは。

（お呼びになると〔預りの子が〕）（さっき来て）（預りの子）（手馴れた様子で）

帰り入りて探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつぶし臥したり。（源氏）「こはなぞ。あなもの狂ほしの物懼や。荒れたる所は、狐などやうのものの、人おびやかさむとて、け恐ろし

（さっきのまま横たわって）（狐などといったものが）（うす気味悪く）

一三 私がいるから、そんなものにおどされはしない。源氏の自分の威光に対する自信が言わせた言葉。

一四 ご主人様こそお苦しくていらっしゃいましょう。「御前」は、右近にとっての主人。夕顔。

一五 預りの子が紙燭を持って参上した。

一六 右近が動けないので、預りの子に燈火を側まで持って来させねばならぬ仕儀になったため、几帳を引き寄せて、夕顔を隠す。

一七 構わぬからずっと持って参れ。

一八（警備の武士といった身分の者が、主人の部屋に入るなどとは）例のないことなので。

一九 廂と簀子の境にある横に長く渡した材木。これで廂の間は一段高くなっている。

二〇 昔物語なんかには、こんな話は聞くけれど。河原の院には、昔、宇多法皇が京極の御息所を連れて一夜を明かされた時、源融の霊が現れて、御息所が気絶したという伝説がある（『江談抄』に伝える）。

二一 わが身の危険をかえりみるおゆとりもなく。燈火が来たので、物の怪の女は、いったん消えたが、まだそのあたりにいるかもしれないから、いっときも早くここを立ち去るべきなのだが。

思わせるのであろう

う思はするならむ。一三 まろあれば、さやうのものにはおどされじ」と

（右近を）

て、引き起こしたまふ。「いとうたて、（右近）もうとても 気分が悪うございますので みだりごちのあしうはべ

うつ伏しているのでございます

れば、うつぶし臥してはべるや。一四 御前にこそわりなくおぼさるらめ」と言へば、「そよ。（源氏）そうだ どうしてこうなのだ などかうは」とて、（夕顔を）かい探りたまふに、息

もせず。引き動かしたまへど、なよなよとして、われにもあらぬさ

（夕顔は）大層子供じみた人だから

まなれば、いといたく若びたる人にて、魔性のものに魅入られたのかもしれぬ ものにけどられぬるなめり、

と、せむかたなきここちしたまふ。

お取次ぎできそうにない様子なので

紙燭持て参れ。一五 右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳

（源氏は）

を引き寄せて、（源氏）一七「なほ持て参れ」とのたまふ。例ならぬことにて、

源氏のお側近く参るのは憚られて

御前近くもえ参らぬつつましさに、一八 長押にもえのぼらず。（源氏）「なほ持

遠慮も所による

て来や、所に従ひてこそ」とて、（紙燭を）召し寄せて見たまへば、ただこの

枕上に、夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。

幻に見えて

（源氏は）世にもあやしく恐ろしく思われるけれど

二〇 昔物語などにこそかかることは聞け、と、いとめづらかにむくつけけれど、まづこの人いかになりぬるぞと思ほす心騒ぎに、二一 身の上も

夕顔

一　僧侶などがいたら、こんな場合（魔性のものに憑かれた人が出た場合）、頼りになる者だとお思いになるところだが。『江談抄』によれば、浄蔵法師の加持によって京極の御息所が蘇生したという。

二　前に、「まろあれば、さやうのものにはおどされじ」と大きな口をきいたことをさす。

三　愛し重んじる者に呼び掛ける言葉。

四　昔、南殿の鬼が、なんとかと申す大臣を脅かした話を思い出されて。太政大臣藤原忠平が若い頃、夜間、帝の命を受けて、南殿の玉座の後ろを通りかかったところ、鬼が忠平の太刀のこじりを摑んだので、勅命でご用に行く者を捉えるとは何ごとかと、太刀を引き抜いたところ、たちまち退散したという逸話が、当時伝えられていたらしく、『大鏡』忠平伝にも載せられている。「南殿」は、紫宸殿。内裏の正殿（図録四参照）。

知られたまはず、添ひ臥して、「やや」と、揺すぶってごらんになるがおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息は疾く絶え果てにけり。言はむかたなし。頼りになるたのもしく、いかにと言ひ触れたまふべき人もなし。一法師などをこそは、かかるかたのたのもしきものにはおぼすべけれど、さこそ強がりたまへど、若き御心にて、いふかひなくなりぬるを見たまふに、やるかたなくて、つと抱きて、「あが君、生きいでたまへ。いとみじき目な見せたまひそ」とのたまへど、冷え入りにたれば、けはひものうとくなりゆく。右近は、ただあなむつかしと思ひけるここち皆さめて、泣きまどふさまいとみじ。南殿の鬼の、なにがしの大臣をおびやかしけるたとひをおぼしいでて、心強く、「さりとも、いたづらになり果てたまはじ。夜の声はおどろおどろし。あなかま」といさめたまひて、いとあわたたしきに、あきれたるここちしたまふ。

この男を召して、「ここに、いとあやしう、ものにおそはれたる人

（源氏は）二
（夕顔が）むなしく死んでしまったのを
（源氏）三
（主人の死に）
（源氏は）
（源氏）
（右近を）
四

五　五条の大弐の乳母の家。

六　惟光の兄の阿闍梨。母の病の祈禱をするため、五条の家にいるはずである。この場合源氏は実名を言ったのだが、それを省略して書いている。

七　前に「たとしへなく静かなる夕の空をながめたまひて」（一四七頁）とあり、次に「風すこしうち吹きたるに」（一五〇頁）と「宵過ぐるほど」のことを言い、今、「夜中も過ぎ」て「風のやや荒々しう吹きたるは」と、しだいに強まる風の不安な気配と時間の経過を示す。ここ以下の文章は、風、松、梟などをあげ、白楽天の「凶宅詩」によって「なにがしの院」の不吉な印象を強めようとしている。「長安に大宅多し　列って街の西東に在り　往往にして朱門の内　房廊相対して空し　梟は松桂の枝に鳴き　狐は蘭菊の叢に蔵る　蒼苔黄葉の地　日暮れて旋風多し　前主は将相為り　罪を得て巴庸に竄る　後主は公卿為り　疾に寝て其の中に没す……」（『白氏文集』諷諭「凶宅詩」）

八　当時、梟は父母を食う悪鳥とされた。

九　廂と母屋の境。

のなやましげなるを、ただ今、惟光の朝臣のやどる所にまかりて、急ぎ参るべきよし言へ、と仰せよ。なにがし阿闍梨、そこにものするほどならば、ここに来べきよし忍びて言へ。かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな。かかるありき許さぬ人なり」など、もののたまふやうなれど、胸塞がりて、この人を空しくしなしてむことのいみじくおぼさるるに添へて、おほかたのむくむくしさたとへむかたなし。夜中も過ぎにけむかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松のひびき木深く聞こえて、けしきある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおぼゆ。うち思ひめぐらすに、こなたかなた、けどほくうとましきに、人声はせず、などて、かくはかなきやどりは取りつるぞと、くやしさもやらむかたなし。右近はものもおぼえず、君につと添ひたてまつりて、わななき死ぬべし。またこれもいかならむと、心そらにてとらへたまへり。われ一人さかしき人にて、おぼしやるかたぞなきや。火はほのかにまたたきて、母屋の

苦しそうにしているのだが　〔随身に〕命じよ　運よくそこに居合せて　来るようこっそり言え　あの尼君なんかが耳にもしよ　こんな忍び歩きをやかましく言う人だ　大げさに言うな　何とか口はきいていられるようだが　死なせてしまったらど　周囲の無気味さは　うしようかとたまらなく思われるのに加えて

松風の響き　奥深い茂みを思わせ　異様な鳥がしわがれ声で鳴くのも　八　九

さびれてうす気味の悪い上に　後悔するものどうにもならぬことである　に泊ったのかと　源氏　〔源氏は〕夢中でつかまえていらっしゃる　こんな馬鹿げたところ　気を失ったよ　わななき震えて今にも死にそうだ　しゃんとしているのはご自分　一人という有様で　途方にくれていらっしゃる　燈火は

際に立てたる屏風の上、ここかしこの隈々しくおぼえたまふに、魔性のものの足音がみしみしとのの足音ひしひしと踏み鳴らしつつ、後ろより寄り来るここちす。惟光疾く参らなむとおぼす。ありか定めぬ者にて、〔随身が〕ここかしこ尋ねけるほどに、夜の明くるほどの久しさは、千夜を過ぐさむここちしたまふ。

四 からうして、鶏の声はるかに聞こゆるに、命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、五 かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり、忍ぶとも、世にあること隠れなくて、内裏にきこしめさむをはじめて、人の思ひ言はむこと、よからぬ童への口ずさびになるべきなめり、ありありて、をこがましき名をとるべきかなと、おぼしめぐらす。

からうして、惟光の朝臣参れり。夜中暁といはず、御心に従へるものの、今宵しもさぶらはで、召しにさへおこたりつるを、憎しと

どんな因縁で
こんな目にあうのだろう
語り草になりそうな事件は起った
実際あったことは
隠していても
世人が面白がって噂するであろう
はしたない
口の端にもてあそばれるだろう
あげくのはて
うつけ者と言い立てられるにちがいないと
御意のままに動く
真夜中早朝の区別なく
〔源氏は〕
お呼びにさえ遅れたのを
者が

一 光が届かず、くろぐろと感じられる所へ。「くまぐまし」は、本来、隠れて見えにくい意。

二 惟光は居場所のきまらぬ者で。通う所が多くて、夜ごと行先が違う。源氏の乳母子らしい好色者ぶり。

三 秋の夜を千夜過すような、待ち遠しい気持がなさる。「秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉のこりて鶏や鳴きなむ」（『伊勢物語』二十二段）による。恋の睦言の場合は、秋の長夜を千夜集めて一夜にしたとて、胸のうちを語り尽せぬうちに、夜明けの鶏が鳴くだろうが、今は逆に、その秋の一夜の明けるまでが、千夜のような気がすると、対比していう。

四 前掲の歌「言葉のこりて鶏や鳴きなむ」とは反対に、こちらは、待ちかねてやっと鶏が鳴く。鶏鳴と共に魔は去ると考えられていた。

五 こういった女性関係のことで、身分をわきまえず、道に外れた恋情を抱く報いとして。「おほけなき」で、相手の女性は身分が上であること、「あるまじき」で、不倫の恋であることが分る。藤壺への恋情をさす（帚木八〇、八四頁参照）。

六 京童べ。平安京の無頼の若者たち。

惟光参上して、夕顔の遺骸を東山に送る

七　惟光が参上したらしい様子を聞くと、惟光が手引きをして、源氏を通わせたはじめからのことが思い出されて泣くので。「大夫」は、前出、一三八頁注七参照。

八　読経なんかを依頼するものだとのことで。「誦経」は、僧に読経（声を上げて読む）を依頼すること。前に「法師などをこそは、かかるかたのもしきものにはおぼすべけれど」（一五二頁）とあったように、物の怪退散には、加持祈禱が効くとされていた。

九　「願を立つ」は、神仏に願いごとをすること。願文を書いてそれを読み上げる。

一〇　山へ登ってしまいました。「山」は、比叡山。延暦寺のこと。天台宗本山で、当時もっとも信仰されていた。天台密教といって、加持祈禱をも行った。

一一（夕顔は）ご気分のすぐれぬことでもございましたか。源氏の愛人なので、「ものせさせたまふ」と敬語を使う。

おぼすものから、召し入れて、（これから話し出されることがあまりあっけないので）のたまひいでむことのあへなきに、（とっさにお言葉も出ないほどである）ふとももの言はれたまはず。右近、大夫のけはひ聞くに、はじめよりのこと、（ご自分）うち思ひ出でられて泣くを、君もえ堪へたまはで、（お一人が気を張って）われ一人さかしがり抱き持ちたまへりけるに、（女を抱きかかえていらしたが）この人に息をのべたまひてぞ、（惟光の顔を見てほっとなさってはじめて）悲しきこともおぼされける。（悲しい気持におなりになった）とばかり、（しばらく）いといたく、（とめども）えもとどめず（なく）泣きたまふ。

（源氏）やっと涙をおさめて）ややためらひて、「ここに、（ほんとに妙なことが起ったのだが）いとあやしきことのあるを、（驚くの何のといって言葉もないほどなのだ）あさましと言ふにもあまりてなむある。（危急のこと）かかるとみのことには、（その手配もさせよう）誦経（八）などをこそはすなれとて、そのことどももせさせむ、願（九）なども立てさせむとて、（阿闍梨に参上せよ）阿闍梨（あざり）ものせよ、（と言ってやったのだが）と言ひやりつるは」とのたまふに、（惟光）「昨日山（一〇）へまかり上りにけり。（それにしても）まづ、いとめづらかなることにもはべるかな。（まことに稀有なことでございますな）かねて、（前から）例ならず御ここちものせさせたまふことやはべりつらむ」（源氏）「さることもなかりつ」（そんなこともなかった）とて泣きたまふさま、いとをかしげにらうたく、見たてまつる人（惟光）もいと悲しくて、おのれもよよと泣き

一 経験を積んだ者なら。「しほじむ」は、潮水や潮風で湿る、海辺の生活に馴れる意味から転じて、世に馴れる意味に用いられる。

二 （源氏も惟光も）どちらも若い者同士のことで。惟光は乳母子だから、源氏とほぼ同年（十七歳）であろう。

三 預り自身は、内輪で信頼できるとしても。前に「むつましき下家司にて、殿にもつかうまつる者なりければ」（一四五頁）とあった。

四 あの五条の夕顔の宿は。「故里」は、もといた場所のこと。

五 山寺なら、何といってもやはり葬送などもとかくありがちで。

六 当時は、東山などに庵を結ぶことが多かった。

七 惟光の父、すなわち「大弐の乳母」の夫で、物語に現れないから、すでに物故しているのであろう。

八 すっかり明るくなる頃の騒がしさに紛れて、御車を西の対につけた。預りの一族に知られぬように気を配って、朝のいっとき、人々がめいめいの一日の仕事に動き出したざわめきに紛れて、事を行うのである。

ぬ。さいへど、年うちねび、世の中のとあることと、しほじみぬる人こそ、ものをりふしはたのもしかりけれ、いづれもいづれも若きどちにて、言はむかたもなけれど、「この院守などに聞かせむことは、いと便なかるべし。三 この人一人こそむつましくもあらめ、おのづからもの言ひ漏らしつべき眷属も立ちまじりたらむ。まづこの院を出でおはしましね」と言ふ。「さて、これより人少ななる所はいかでかあらむ」とのたまふ。「げにさぞはべらむ。四 かの故里は、女房などの、かなしびに堪へず、泣きまどひはべらむに、隣しげく、とがむる里人多くはべらむに、おのづから聞こえはべらむを、五 山寺こそ、なほかやうのことおのづから行きまじり、ものまぎるることはべらめ」と、思ひまはして、「昔見たまへし女ばらの、尼にてはべる東山の辺に移したてまつらむ。惟光が父の朝臣の乳母にはべりし者の、みつはくみて住みはべるなり。あたりは人しげきやうにはべれど、いとかごかにはべり」と聞こえて、明け離るるほどのまぎれ

何といっても　年もとり　〔こんなことは〕世間にままあることだと　非常の折には頼もしいものだが　よい知恵も浮ばなかったが　〔惟光〕　預りなどに相談するのは　聞き耳をたてる町の者も多うございましょうから　〔惟光〕ほんにさようでございます　どうしても評判になりましょうが　〔惟光〕昔知っていました女が　〔女君を〕　思案して　尼になっています　近所が建てこんで　目立たずすませることもできましょう　閑静でございます　すっかり老いこんで

九 源氏には、とても亡骸をお抱きになることができそうにないので。

一〇 綿を入れた薄い敷蒲団のようなもの。普通帳台の畳の上に敷く。源氏と夕顔が、昨夜共寝をしたもの。

一一 惟光が乗って来た馬。すぐ後に「君に馬はたてまつりて」（ご主人に馬はさし上げて）とある。

一二 「くくり」は、指貫の裾を膝下あたりまで上げ、活動に便利なようにしたのである。（図録一二参照）

一三 （惟光はかいがいしく行動しながら）ふと一方では、つくづく不思議な事件で、思いがけない葬送だとは思うが。

一四 わが身のことは考えずに。死の穢れに触れることや、秘密の葬送を行って世の非難を受けるであろうことも顧みずに。

一五 二条の院の女房たち。

一六 御帳台。御寝所。（図録九参照）

一七 騒ぐ胸を抑えて。動悸を静めるために、胸に手を当てて抑えること。

源氏、帰邸後病み、頭の中将の見舞を受ける

一八 源氏は夕顔がもしや蘇生するのではないかと考えもする。いったん死んだと思われた人が蘇生した話は、当時いくつも伝えられている。

に、御車寄す。

九 この人をえ抱きたまふまじければ、一〇うはむしろにおしくくみて、惟光乗せたてまつる。いとささやかにて（小柄で）、うとましげもなく（死人などという感じもせず）、らうたげなり。したたかにしもえせねば（しっかりとも包めないので）、髪はこぼれ出でたるも、目く（源氏は）れまどひて（涙に目も見えず）、あさましう悲しとおぼせば（言いようもなく）、なり果てむさまを見むと（最後まで見届けようと）おぼせど、「はや（惟光）、御馬にて二条の院へおはしまさむ（お帰りなさいますように）。人騒がしくなりはべらぬほどに（人の往来が多くなりませんうちに）」とて、右近を添へて乗すれば（車には）、徒歩より（惟光は）、君に馬はたてまつりて、一二くくり引き上げなどして、一三かつはいとあやしく、おぼえぬ送りなれど、御けしきのいみじきを見たてまつれば（源氏の）（お悲しみの深いのを拝しているので）、一四身を捨てて行くに、君はものもおぼえたまはず（源氏は何を考えるお力もなく）（茫然自失の態で）、われかのさまにて（二条の院に）おはし着きたり。

一五 人々、「いづこよりおはしますにか（どこからお帰りになったのやら）。なやましげに見えさせたまふ」など言へど、御帳のうちに（源氏は）入りたまひて、一七胸をおさへて思ふに、（お具合悪そうなご様子でいらっしゃる）（ひどく悲しいので）いといみじければ、などて乗り添ひて行かざりつらむ、一八生きかへり

たらむ時、〔夕顔は〕いかなるここちせむ、見捨てて（知らぬまに捨てて行ってしまったと）ゆきあかれにけりと、つ（恨み）らくや思はむ、と心まど（気が動転しながらも）ひのなかにも思ほすに、御胸（胸がつき上げられるよ）せきあぐるこ（ご気）こちしたまふ。御頭（熱も出てきたようで）もいたく、身も熱きここちして、いと苦しくま（こんなふうに病みついて）どはれたまへば、かくはかなくて、（死んでしまうのだろう）われもいたづらになりぬるなめ（分が悪いので）りとおぼす。〔源氏は〕

日高くなれど、〔源氏が〕起きあがりたまはねば、（女房たちが）人々あやしがりて、御粥（死ぬのではないかとお思いのところへ）などそそのかしきこゆれど、（おすすめ申すけれども）苦しくて、いと心細くおぼさるるに、内裏より（父帝から）御使あり。昨日え尋ね出でたてまつらざりしより、（〔源氏を〕お探し申し上げられなかったので）おぼつかなながらせたまふ。（〔帝は〕ご心配あそばしているのである）大殿の君達参りたまへど、頭の中将ばかりを、「立ちながら、こなたに入りたまへ」とのたまひて、御簾のうちながらのたまふ。「乳母にてはべる者の、この五月のころほひより、重くわづらひはべりしが、頭剃り忌むこと受けなどして、その験にや、よみがへりたりしを、このころまたおこりて、弱くなむなりにたる、今一度とぶらひ見よ、と申したりしかば、いときなきよりなづさひ

（〔源氏が〕）

（〔源氏〕）

（〔源氏〕）

（再発して）

（衰弱してしまいましたのが）

（幼い時から馴染んだ者が）

（見舞ってくれ）

一　源氏も某の院の物の怪のせいで、身体の具合が悪くなっているのである。

二　左大臣家の若君たち。親友の頭の中将やその弟たちで、源氏の正夫人の兄弟に当る。帝のお使いとして来た。

三　立ったままで、こちらにお入り下さい。「立ちながら」は、着座しないことをいう。『延喜式』（平安初期の制度、儀式、規定の集大成）によれば、死穢に触れた者を訪れた客は、着座すれば同じ穢れになり、客が帰宅するとその家族も穢れ、参内すれば、宮中も穢れになるとある。ここでは、頭の中将が死の穢れに触れぬように、考慮して言った。

四　母屋の御簾を下ろしたままお話なさる。部屋から出ないのである。病中、衣服を改める気力がなかったのであろう。

五　一二三頁注一七参照。

六 家から出る余裕もなく急死しましたが。召使は病気になると、万一の場合の触穢を恐れて、主家を出るが、ここではそれが問に合わずに、乳母の家で死んだという。源氏の苦しい嘘である。

七 私（源氏）に遠慮して、日暮れを待って、こっそり遺骸を運び出しましたのを耳にしましたので。乳母の家人は隠し通そうとしたが、源氏は触穢の事実を知ってしまったので、以下の配慮をするというのである。

八 神事の折から、まことに不都合なことと、恐縮に存じまして。死穢に触れると、三十日間の忌に籠らねばならぬきまりで、忌が明けるのは来月になる。九月は、十七日に伊勢神宮の神嘗祭があり、十一日に宮中から例幣使が立つ。そのため一日から十一日まで、僧尼、服喪中の人は参内できぬきまりであった。

九 咳病でしょうか。「しはぶきやみ」は、咳の出る病気。風邪か。

一〇 どんな穢れにお出会いになったのやら。忍び歩きではないかと暗に諷する気持。「行触」は、穢れのあるところに行き会うこと。

臨終に際して薄情だと思うかもしれない

し者の、今はのきざみにつらしとや思はむ、と思うたまへてまかれ

乳母の家の下働きで　病気だった者が

りしに、その家なりける下人の病しけるが、六にはかに出であへで亡くなりにけるを、懼ぢ憚りて、日を暮らしてなむ取り出ではべりけるを、聞きつけはべりしかば、神事なるころ、いと不便なることと思うたまへかしこまりて、え参らぬなり。この暁より、しはぶきやみにやはべらむ、頭いと痛くて苦しくはべれば、いと無礼にて聞こ

失礼したまま申し上げます

ゆること」などのたまふ。中将、「さらば、さるよしをこそ奏しはべらめ。昨夜も御遊びに、かしこく求めたてまつらせたまひて、御け

音楽の御遊に　〔帝は〕　あなたをお探し申しあそばしまして　その旨を奏上致しましょう　ご機嫌

なめであられました

しきあしくはべりき」と聞こえたまひて、立ちかへり、「一〇いかなる

引き返して来て

行触にかからせたまふぞや。述べやらせたまふことこそ、まことと

事実とは存ぜられませんが

思うたまへられね」と言ふに、胸つぶれたまひて、「かくこまかに

意外な　（源氏）今申したように詳しくではなく　まこと

はあらで、ただおぼえぬ穢らひに触れたるよしを奏したまへ。いと

に不都合な次第でございます

こそたいだいしくはべれ」と、つれなくのたまへど、心のうちには、

〔源氏の〕　さりげなく

取り返すべもない死者のことを思われるにつけ

いふかひなく悲しきことをおぼすに、御ここちもなやましければ、

一 蔵人で太政官の中弁（正五位上）または少弁（同下）を兼ねる者。後の巻々により頭の中将の弟と分る。蔵人は伝奏の役目の者だから、改めて、休暇をとる趣旨を奏上させる。頭の中将に怪しまれたので、先手を打って予防線を張るのである。

源氏、惟光の案内で東山に行き、夕顔の遺骸と対面する

二 こうこういう穢れに触れたとおっしゃるので。「かかる穢らひ」は、源氏が死穢に触れたことをさす。

三 長々とお籠りしていますのも、具合が悪うございますので。

四 日がらも問題ないようでございますから。葬式など儀式を行うには、陰陽道で、障りのない日を占って選ぶ。

五 自分（右近）も一緒に死にたいと取り乱しまして、今朝などは谷に飛び込んだのかとさえ思いました。悲嘆のあまり、身投げしかねない状態であることをいう。「谷」は、東山にある山あいの谷。「世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ」（『古今集』巻十九、誹諧歌）の言葉遣いを連想させる言い方。

誰にも顔をお合せにはならない（その）人に目も見合せたまはず。蔵人の弁を召し寄せて、まめやかにかかる旨を奏せさせたまふ。大殿などにも、かかることありてえ参らぬ御消息など聞こえたまふ。

日暮れて惟光参れり。二かかる穢らひありとのたまひて、参る人々も皆着座せず退出するので（お見舞の人々）お前はひっそりしている（惟光を）どうだったか（源氏）も、惟光の案内で東山に行き、夕顔の遺骸と対面する。「いかにぞ。今はと見果てつや」とのたまふままに、袖を御顔に押しあてて泣きたまふ。惟光も泣く泣く、「今は限りにこそはものしたまふめれ。三長々とこもりはべらむも便なきを、明日なむ四日よろしくはべれば、とかくのこと、いと尊き老僧のあひ知りてはべるに、言ひかたらひつけはべりぬる」と聞こゆ。「添ひたりつる女はいかに」とのたまへば、「それなむ、（惟光）その者が また、五え生くまじくはべるめる。われも後れじとまどひはべりて、今朝は谷に落ち入りぬとなむ見たまへつる。かの故里人に告げやらむ、と申せど、しばし思ひしづめよ、ことのさま思ひめぐらしてとなむ、こしらへおきはべりつる」と、語りき

（もはやご最期とお見受けしました）（生きてゆけそうにはございません）（高徳の老僧で知っております者に）（葬儀万端を）（頼みこんでお）（源氏）付き添っていた女房（落着きなされ）（事情をよく）（「右近か」）（五条の家の者に知らせよう）（なだめておきました）（考えてからにしようと）

六 何ごともそうなのだと（すべて前世からの因縁だと）思ってはみるが。

七 人一人（夕顔をさす）を空しく死なせてしまったと、恨みを言われるに違いないのが。「かこと」は、他人にかこつけて言うこと。転じて、恨み言。

八 女房の呼び名。惟光の姉妹らしい。「命婦」は、五位以上の女官。または五位以上の官人の妻をいう。何人もいるので「少将」とか「靫負」とかを上につけて区別した。

九 そのほかの僧侶たちにも、すっかり違った説明をしてございます。「法師ばら」の「ばら」は、複数を示す接尾語。

一〇 この上ともうまくやってくれ。「事なく」は、問題が起らぬように、無事に、の意。

こゆるままに、（源氏もつくづく悲しく）いといみじとおぼして、（源氏）「われもいとここちなやましく、いかなるべきにかとなむおぼゆる」とのたまふ。（惟光）「何か、さらに思ほしものせさせたまふ。（どうなるのかと思われるらくよくよなさることがありましょう）さるべきにこそよろづのことはべらめ。（何事も前世の因縁でございましょう）誰にも知らすまいと存じますので人にも漏らさじと思うたまふれば、惟光おり立ちて、（惟光めが身を入れまして）よろづはものしはべる」（万事始末いたしております）など申す。（源氏）「さかし、さ皆思ひなせど、浮びたる心のすさびに、（無責任な浮気心にまかせて）人をいたづらになしつるかこと負ひぬべきが、いとからき（何ともつらいのだ）なり。少将の命婦などにも聞かすな。尼君ましてかやうのことなど（忍び歩きなんかをやかましく意見されるから）いさめらるるを、（〔私は〕合わす顔もない気がしよう）心はづかしくなむおぼゆべき」と、口がためたまふ。（惟光）「さらぬ法師ばらなどにも、皆言ひなすさま異にはべり」と聞こゆるにぞ、（頼りにしていられる）かかりたまへる。（〔これを〕）ほの聞く女房など、あやしく、（おかしいこと）何ごとならむ、穢らひのよしのたまひて、（穢れに触れたとおっしゃって）内裏にも参りたまはず、またかくささめき嘆きたまふと、（なひそひそ話をしては悲しんでおられると）ほのぼのあやしがる。（源氏）「さらに事なくしなせ」と、（葬式のやり方を指図なさるが）そのほどの作法のたまへど、（惟光）「何か、（大げさにすべきことでもございません）ことことしくすべきにもはべらず」とて立つが、いと悲しくおぼさ

るれば、（源氏）「便なし（不都合なことと思うだろうが）と思ふべけれど、今一度かの屍骸を見ざらむが、いといぶせかるべきを（心のこりだろうから）、馬にてものせむ（全くおだやか）」とのたまふを、いとたいだいしきことと（ならぬことだとは）思へど、「さおぼされむは（惟光）（そうお思いなさるなら）、いかがせむ（仕方ございません）。はや、おはしまして、夜ふけぬ先に帰らせおはしませ」と申せば、このころの御やつれにまうけたまへる、狩の御装束着かへなどして出でたまふ。御ここちかきくらし（ご気分も悪くて）、いみじく堪へがたければ、かくあやしき道に出で立ちても、あやふかりし物懲に、いかにせむとおぼしわづらへど、なほ悲しさのやるかたなく（やはり悲しみの晴らしようがないので）、ただ今の骸を見では、またいつの世にかありし容貌をも見むと、おぼし念じて（せつなさを我慢なさって）、例の大夫、随身を具して出でたまふ。道遠くおぼゆ。十七日の月さし出でて、河原（賀茂河原の辺は）のほど、御前駆の火もほのかなるに（松明もかすかだし）、鳥部野の方など見やりたるほどなど、ものむつかしきも、何ともおぼえたまはず（〔源氏は〕）、かき乱るここちしたまひて（ひどいご気分のまま）、おはし着きぬ。

あたりさへすごきに（周囲一帯が気味が悪い上に）、板屋のかたはらに堂建てて行へる尼の住ひ（お勤めしている）、

一　馬で行こう。微行しよう、の意。

二　このところのご微行用にお作りになった狩衣にお召し換えになったりして、お出ましになる。前に、夕顔の宿を訪れるためにわざわざ作ったもので、「いとことさらめきて、御装束をも、やつれたる狩の御衣をたてまつり」（一三八頁）とあった。

三　こんな非常識なことで、出てきたものの、昨夜の危なかったことに懲りているので、どうしたものか（引き返そうか）とお迷いになるが、「あやふかりし物懲」は、昨夜、物の怪におそわれて、危うく源氏も命を落すかもしれなかったことをさす。

四　現在の（火葬にする前の）夕顔の亡骸を見ないでは、ふたたびどの世に生前のままの姿を見られようかと。人はそれぞれ来世に、何に転生するか、人間に生れるにしても、どんな姿形に生れ変るか分らないという仏教思想が背後にある。

五　いつもお供する大夫（惟光）と随身。

六　鳥部野の方などを見渡したところなど、気味悪いのも。「鳥部野」は、五条から七条にかけて、東山の麓にある火葬場（図録一参照）。

七　板葺きの家。

八 右近である。夕顔の遺骸に付き添っている。
九（話のあい間に）特に、声に出さぬ念仏を称えている。葬送以前に無音の念仏を称えると、十五功徳があるといわれる。
一〇 夜を、初夜、中夜、後夜の三つに分けて、初夜（午後六時頃から十時頃まで）に行う勤行をいう。
一一 鳥部野の北の方角。清水寺がある。千手観音を本尊とし、参籠者が多かった。（図録一参照）
一二 高徳の僧。転じて僧のことをいう。前に「いと尊き老僧のあひ知りてはべるに」（一六〇頁）とあった僧であろう。

いとあはれなり。御燈明のかげ、ほのかに透きて見ゆ。その屋には、女一人泣く声のみして、外のかたに、法師ばら二三人物語しつつ、わざとの声立てぬ念仏ぞする。寺々の初夜もみな行ひ果てて、いとしめやかなり。清水のかたぞ、光多く見え、人のけはひもしげかりける。この尼君の子なる大徳の、声尊くて経うち誦みたるに、涙の残りなくおぼさる。

（板屋）（時々話をしながら）（光）（障間から）（人も大勢いる様子であった）（尊い声で）（源氏は）涙

（源氏が板屋に）入りたまへれば、火取りそむけて、右近は屏風隔てて臥したり。いかにわびしからむと、見たまふ。恐ろしきけもおぼえず、いとらうたげなるさまして、まだいささか変りたるところなし。手をとらへて、「われに今一度声をだに聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけむ、しばしのほどに、心をつくしてあはれに思ほえしを、うち捨ててまどはしたまふが、いみじきこと」と、声も惜しまず泣きたまふこと限りなし。大徳たちも、誰とは知らぬに、あやしと思ひて、皆涙おとしけり。

（遺骸に）（遺骸は）（源氏は）（遺骸の）（燈火をそむけ）（つらいだろうと）（ほんとう）（恐ろしい感じもせず）（にかわいらしい様子で）（源氏）（どんな前世の定めがあったも）（心の限りいとしいと思われたのに）（私を）（途方にくれさせなさるのは）（あんまりだ）（いぶかしく思い）（ながら）

一　この言葉で、右近が乳母子であるらしいと分る。

二　ご主人様（夕顔）の（火葬の）煙とご一緒になってお跡を追いましょう。

三　（夕顔のように）先に死ぬのも、（私たちのように）後に残るのも。

四　（「われを頼め」とおっしゃっておきながら）頼りない話である。草子地の文である。

五　道ばたの草に露がしとどに置いているのに、さらに深い朝霧が立ちこめて。「露けき」に、涙にくれる意を掛ける。

六　（昨夜）着せ掛け合って寝た、ご自分の紅の御衣が夕顔の遺骸にそのまま掛っていたのなどを思い出されると。女と寝る時は、互いに着物を着せ合う。「紅の御衣」は、直衣や狩衣（ここでは源氏は狩衣を着て通っていた）の下に重ねて着る。

（源氏）さあ二条の院へ行こう　（右近）長年

右近を、「いざ二条へ」とのたまへど、「年頃、一をさなくはべりしより、片時たち離れたてまつらず馴れきこえつる人に、にはかに別れたてまつりて、何処にか帰りはべらむ。いかになりたまひにきと（しばしもお側を離れず親しくお仕え申した方に）（またご主人様はどうおなりなさったと人に申せばよいのでしょう）か人にも言ひはべらむ。悲しきことをばさるものにて、人に言ひ騒がれはべらむが、いみじきこと」と言ひて、泣きまどひて、「煙に（お亡くなりになった悲しさはさておいても）（つらくて）（泣き崩れて）（右近）たぐひて、したひ参りなむ」と言ふ。「道理なれど、さなむ世の中はある。別れといふものの悲しからぬはなし。三とあるもかかるも、（源氏）（世の中はこう無常なものなのだ）同じ命の限りあるものになむある。思ひなぐさめて、われを頼め」（誰もみな命には限りがあるものなのだ）（気を取り直して）とのたまひこしらへても、「かく言ふわが身こそは、生きとまるまじきここちすれ」とのたまふも、四たのもしげなしや。惟光、「夜は明方になりはべりぬらむ。はや帰らせたまひなむ」と聞こゆれば、（右近をお慰めになりながらも）（源氏）（はやくお帰りなさいますよう）

（源氏は）ついふり返りふり返りなさって

かへりみのみせられて、胸もつと塞がりて出でたまふ。

（源氏は）

五道いと露けきに、いとどしき朝霧に、何処ともなくまどふここちしたまふ。ありしながらうち臥したりつるさま、六うちかはしたまへ

（夕顔が）昨夜の姿のまま横たわっていた様子や

りしわが御紅の御衣の着られたりつるなど、いかなりけむ契りにかと道すがらおぼさる。御馬にも、はかばかしく乗りたまふまじき御さまなれば、また惟光添ひ助けておはしまさするに、堤のほどにて馬よりすべりおりて、いみじく御ここちまどひければ、「かかる道の空にて、はふれぬべきにやあらむ。さらにえ行き着くまじきここちなむする」とのたまふに、惟光ここちまどひて、わがはかばかしくは、さのたまふとも、かかる道に率て出でたてまつるべきかは、と思ふに、いと心あわたたしければ、川の水に手を洗ひて、清水の観音を念じたてまつりても、すべなく思ひまどふ。君もしひて御心をおこして、心のうちに仏を念じたまひて、またとかく助けられたまひてなむ、二条の院へ帰りたまひける。あやしう夜深き御ありきを、人々、「見苦しきわざかな、このころ、例よりも静心なき御忍びありきの頻るなかにも、昨日の御けしきのいとなやましうおぼしたりしに、いかでかくたどりありきたまふらむ」と、嘆きあへり。

（賀茂川堤のあたり）（帰りもまた惟光が付き添いながらお連れするのだが）（ひどく）（ご気分も悪いので）（源氏）（こんな）（とても）（道ばたで）（帰り着けそうには思えない）（うろたえて）（自分さえしっかりしていたら）（気が気でないので）（どうしていいか途方にくれる）（源氏も無理に気を取り直して）（ふたたび何かと惟光に介抱されなさって）（わけの分らぬ深夜のお出歩きを）（女房たち）（みっともないことですわね）（ご様子はとてもご気分が悪そうでしたのに）（どうしてこうろうろ出歩きなさるのでしょう）

七　野垂れ死にしてしまうのかもしれない。「はふる」（下二段）は、もとは棲家を離れてさすらう、落ちぶれる、の意。

八　（源氏が）いくら行きたいとおっしゃっても、こんな所にお連れ申すのではなかった、と思うと。洛外の、しかも不吉な葬送場にこっそり行ったことを、非常識な行為として反省するのである。

九　清水寺の本尊千手観音。

一〇　ふだんよりも落着かぬご様子のお忍び歩きばかりなさっている中でも。

源氏、二条の院に帰ってのち、重い病気になる

一 ご病気平癒のためのご祈禱を、あちこちで（方々の寺で）、絶え間なく、大騒ぎをして行う。
二 祭、祓ともに、陰陽道で行う。
三 仏教で行う加持、祈禱。
四 一四七頁注九参照。
五 （右近を）お呼び出しになって、ご用を言いつけられるので。
六 喪服の色の濃いのを着て。女房が主人の喪に服する際は、薄墨色の喪服を着るが、近しい者や、特に悲しみの気持をあらわす場合は、その色を濃くした。
七 （お前は）長年頼りにしていた主人（夕顔のこと）を亡くして、心細いだろうに、それを慰めるためにも。

まことに臥したまひぬるままに、（横になられるとそれっきり）いといたく苦しがりたまひて、二三日になりぬるに、むげに弱るやうにしたまふ。（すっかり弱ってゆかれるようである）内裏にも、（帝も）きこしめし嘆くこと限りなし。御祈り、かたがたに隙なくののしる。祭、祓、修法など、言ひ尽くすべくもあらず。世にたぐひなくゆゆしき御ありさまなれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人の騒ぎなり。

（長生きなさらないのではないかと）

（源氏は）重いご病中ながらも苦しき御ここちにも、かの右近を召し寄せて、局など近くたまひてさぶらはせたまふ。惟光、ここちも騒ぎまどへど、思ひのどめて、（気を静めて）この人のたつきなしと思ひたるを、もてなし助けつつさぶらはす。

（右近が頼む主人もなく心細そうなのを）（気も転倒しているけれども）（ご座所に近く）（ご奉公させている）（世話をし）

源氏君は、いささか隙ありておぼさるる時は、召し出でて使ひなどすれば、ほどなくまじらひつきたり。服いと黒うして、容貌などよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり。「あやしうみじかかりける御契りにひかされて、われも世にえあるまじきなめり。年ごろの頼み失ひて、心細く思ふらむなぐさめにも、もしながらへば、よろづ

（気分がよいとお思いの時は）（ご奉公にも馴染んだ）（どこといって欠点のない無難な）（源氏）不思議なほど短くて終ったあの人との宿縁に引きずられて）（私もこれ以上生きていられないのだろう）（私の命があったら）

にはぐくまむとこそ思ひしか、ほどもなくまたたち添ひぬべきが、
（面倒を見てやろうと考えていたけれど）（まもなくまた私もあの人の跡を追いそうなのが）
くちをしくもあるべきかな」と、忍びやかにのたまひて、弱げに泣
（残念なことだ）
きたまへば、いふかひなきことをばおきて、いみじく惜しと思ひき
こゆ。殿のうちの人、足を空にて思ひまどふ。内裏より、御使、雨
（二条の院の人々は）（足も地につかず）
の脚よりもけにしげし。おぼし嘆きおはしますを聞きたまふに、い
（帝が）（源氏は）
とかたじけなくて、せめて強くおぼしなる。大殿も経営したまひて、
大臣日々にわたりたまひつつ、さまざまのことをせさせたまふしる
（二条院に）
しにや、二十余日いと重くわづらひたまひつれど、ことなる名残の
こらず、おこたるさまに見えたまふ。穢らひ忌みたまひしも、ひと
（ご快方に向われるご様子である）
つに満ちぬる夜なれば、おぼつかながらせたまふ御心わりなくて、
（ご心配あそばす帝のみ心も恐れ多いので）
内裏の御宿直所に参りたまひなどす。大殿、わが御車にて迎へたて
（左大臣家に）
まつりたまひて、御物忌なにやと、むつかしうつつしませたてまつ
（当座）
りたまふ。われにもあらず、あらぬ世によみがへりたるやうに、し
（源氏は）（まだぼんやりとして）（別世界に生き返ったかのように）
ばしはおぼえたまふ。
（はお感じになる）

八（右近は）今さら言ってもかいのないこと（夕顔の亡くなったこと）はさておいて、（源氏にもしものことがあれば）ほんとうに大変だとお思い申している。

九 雨脚よりももっと頻繁である。「雨の脚」は、雨が糸を引くように見える様をいい、物事の度数の多いことの比喩。

一〇 しいて、気を強く持つように心掛けなさる。

一一 左大臣も一心にお世話なさって。「経営す」は、物事の実現のために奔走すること。

一二 いろいろのお手当てをおさせになったのが効いたのかして。「さまざまのこと」は、前に「御祈り、かたがたに隙なくのしる。祭、祓、修法など、言ひ尽くすべくもあらず」とあったように、加持、祈禱、祓などのほか、服薬や医療などをいう。

一三 これといってあともひかず。

一四（病気快癒の日と）触穢を慎んでいられた期限の明けるのがちょうど重なった夜なので。死穢に触れて籠居すべき日数は三十日。夕顔の死は八月十六日夜であるから、この日は九月十五日頃か。

一五 桐壺。（桐壺四〇頁参照）

一六 左大臣。

一七 左大臣は源氏に、物忌や何やと、うるさいほど厳重に、慎みをおさせ申しなさる。

源氏、全快して、右近に夕顔の身の上を聞く

一　陰暦九月二十日。今の十月下旬。

二　御物の怪だろう。「もののけ」は、人に取り憑いて、病気などの祟りをする生霊や死霊をいう。取り憑いた物の怪によって、病状が違い、この場合、「ながめがちにねをのみ」泣く様子から、女の霊でも憑いたのかと考えたのである。

三　夕顔がものにおそわれる前に、源氏に名を聞かれて、「海士の子なれば」と答えたことをさす。（一四七頁参照）

四　一体、あの短い間のいつの折に、大したものでもないお名前をお耳にお入れなさることがおできになったでしょう。

五　最初から、奇妙な、思いもかけないなさりようでしたから。源氏が顔を隠し、尾行をまいてまで、正体を現すまいとしたやり方などをいう。

六　（あなた様が）お名前をお隠しになったことも。

七　多分、源氏の君に違いないとおっしゃりながらも。

八　ほどほどのお戯れで、うやむやにすませようとしていられるのだろうと、情けながっておいでした。名前を隠して、身もとを明かさないのは、女との関係に責任を持たないという意思表示と取られても仕方のないことである。

九月二十日のほどにぞ、（源氏は）ご全快なさって一おこたり果てたまひて、いといたく面痩せたまへれど、なかなかいみじくなまめかしくて、（かえって大層気品があってお美しく）ながめがちにね（ともすれば物思いに沈んでは声に出して泣かれる）をのみ泣きたまふ。見たてまつりとがむる人もありて、（それをお見かけして怪しむ女房もあって）御もののけなめり、など言ふもあり。右近を召しいでて、（源氏は）のどやかなる夕暮に、物語などしたまひて、「（源氏）やはりどう考えても不思議だなほいとなむあやしき。（夕顔は）なぜどこの誰と知られじとは、隠いたまへりしぞ。まことに海士の子なりとも、さば（それほどまで私が思っていたにもかかわらず隠し立てしていらしたから）かりに思ふを知らで隔てたまひしかばなむ、つらかりし」（恨めしかった）とのたまへば、「（右近）などてか、深く隠しきこえたまふことははべらむ。いつのほどにてかは、何ならぬ御名のりを聞こえたまはむ。はじめより、（現実の出来ごとは思えない）あやしうおぼえぬさまなりし御ことなれば、うつつともおぼえずなむある、とのたまひて、（夕顔は）御名がくしも、さばかりにこそは、と聞こえたまひながら、なほざりにこそまぎらはしたまふらめ、となむ、憂きことにおぼしたりし」と聞こゆれば、（源氏）「あいなかりける心くらべどもかな。われは、（そんなふうに隠しておく気はなかったのだ）しか隔つる心もなかりき。ただ、かやうに人に

九 お互いに、つまらぬ意地の張り合いをしていたものだな。源氏と夕顔が、お互いに身分を隠し合っていたことをいう。

一〇 憚ることが多い境遇で。左大臣家の正夫人への遠慮などは、その最たるものである。

一一 ちょっと女に冗談を言っても、すぐ評判になって。

一二 ふとしたことのあった夕方から。この巻冒頭の夕顔の歌のやりとりのあった時をいう。

一三 どうしてあんなに心底からいとしく思われなさったのだろう。「おぼゆ」は、（源氏から）思われる意。「たまふ」は、夕顔に対する敬語。

一四 七日ごとの法会に、仏の絵像を画かせて供養する場合も、名前が分らなくては、一体誰のためと心中祈願すればいいのだ。不動・釈迦・文殊・普賢・地蔵・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀・阿閦・大日・虚空蔵の十三仏のうち、薬師仏までを、七日ごとに画かせたり造らせたりして、来世に生を享けるまでの四十九日、中有に迷う死者のために供養する。

一五 官は近衛の中将で、位は三位のものをいう。中将の相当位は従四位下。三位以上は上達部（公卿）に入るので、夕顔はもと上の品の出身ということになる。

ゆるされぬふるまひをなむ、（忍び歩きなどは）まだならはぬことなる。（経験がないことなのだよ）内裏にいさめ帝がご注意あ
のたまはするをはじめ、一〇つつむこと多かる身にて、一一はかなく人にたはぶれごとを言ふも、所狭う、（周囲の取り沙汰がうるさい身の上なのだが）取りなしうるさき身のありさまになむあるを、一二はかなかりし夕より、（なぜか忘れられず）あやしう心にかかりて、（無理算段をし）あながちて通っていったのも）かかるべき契りこそはものしたまひけめと思に見たてまつりしも、（こうなるはずの定めがおありだったのだろうと思うと）（胸を打たれもし）ふも、あはれになむ、（また反対に恨めしくも思われる）またうち返しつらうおぼゆる。（こんなにはかなく終る仲だったのなら）かう長かるまじきにては、一三など、さしも心に染みて、あはれにおぼえたまひけむ。なほくはしく語れ。今は何ごとを隠すべきぞ。七日七日に仏かかせても、誰が為とか、心のうちにも思はむ」とのたまへば、（右近）「何か、（私が何のお隠し申しましょう）隔てきこえさせはべらむ。（ご自身が秘め続けていらしたことを）みづから忍びすぐしたまひしことを、亡（お亡くなりになったあとで）き御うしろに、（口軽く申しては）口さがなくやは、と思うたまふばかりになむ。親た（夕顔の）ちは、はや亡せたまひにき。一五（御父は）三位の中将となむ聞こえし。いとら（夕顔を）とてもかわいくお思い申していらっしゃったのですがうたきものに思ひきこえたまへりしかど、（ご自分のご出世も思うにまかせないわが身のほどの心もとなのをお嘆きのようでしたのにさをおぼすめりしに、（お命さえままならず亡くなられましたあと）命さへ堪へたまはずなりにしのち、はかなき

一 近衛の少将。中将の下、正五位下相当。桐壺の巻に「宮の御腹は、蔵人の少将にて、いと若うをかしきを」と出ている（三九頁参照）。

二 （姫君の所に）お通い申し上げあそばすようになって。「せたまふ」は、二重敬語。

三 雨夜の品定めの、頭の中将の話の中に、「……あらし吹きそふ秋も来にけり」（帚木七三頁）という歌を残して、夕顔の行方を見失ったとあることと符節が合う。

四 右大臣家。頭の中将の北の方の家。

五 大層恐ろしい噂が立ってまいりましたので。帚木の巻に「この見たまふるわたりより、情なくうたてあることをなむ、さるたよりありて、かすめ言はせたりける」（七二頁）と、頭の中将が語ったのに当る。

六 右京。湿地が多く、荒れていて、人家が少なかった。（図録二参照）

七 方違えにというので、あのあやしげな（五条の）宿においでになりましたところを。

八 それではやはりと、思い合せなさって。やはり頭の中将の話していた常夏の女だと合点する。

縁で
もののたよりにて、頭の中将なむ、まだ少将にものしたまひし時、見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは志あるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿より、いと恐ろしきことの聞こえ参で来しに、物懼をわりなくしたまひし御心に、せむかたなくおぼし懼ぢて、西の京に、御乳母住みはべる所になむ、はひ隠れた
そこもずいぶんむさ苦しいのでお住みになりにくくて
まへりし。それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山里にうつろ
ひなむとおぼしたりしを、今年よりは塞がりけるかたにはべりけれ
ば、違ふとて、あやしき所にものしたまひしを、見あらはされたて
まつりぬることと、おぼし嘆くめりし。世の人に似ずものづつみを
したまひて、人にもの思ふけしきを見えむを、はづかしきものにし
たまひて、つれなくのみもてなして、御覧ぜられたてまつりたまふ
めりしか」と、語りいづるに、されば八よ、とおぼしあはせて、いよ
いよあはれまさりぬ。「をさなき人まどはしたりと、中将のうれへ
しは、さる人や」と問ひたまふ。「しか。一昨年の春ぞ、ものした

お気に召したご様子で
ものをむやみに恐がられるご性分で
こっそり身を隠
移ろうと
方角が悪うございましたので
〔源氏に〕見つけ出され申したと
お嘆きの模様でした
人並み以上にはにかみやでいらして
人に物思わしげな様子を見られるのを
お思
いつもさりげないふうにして
お目通り申していらしたようでございます
〔源氏は〕
〔源氏〕幼い子を行方知れずにしたと
嘆いてい
たのは　そんな子がいたのか
（右近）はい
お生れでした

九 誰にもそう（源氏に渡した）とは知らせずに、（その女の子を）私のところへ連れて来ておくれ。

一〇（そうしたら、何も残さずに急死して）あっけなく、悲しくてならないあの人をしのぶ形見として、どんなにうれしかろう。

一一 言っても返らぬ恨みを言われるだろう。夕顔を死なせたことを非難されるだろう。

一二 だが、いずれにせよ、遺児を私が育てるのに、不都合はあるまいから。「とざまかうざまにつけて」とは、源氏と深いかかわりのあった夕顔の子という点から考えても、妻の兄の頭の中将の子という筋からいっても、の意。

一三（子供と）一緒にいるという乳母。夕顔の乳母。

一四 この巻では、六条の女君の邸の朝景色（一三二頁）と、ここでの源氏の二条の院の夕景色とが、絵のように美しいといわれ、夕顔の宿と対比されている。

一五 鳩の一種で、人の家に飼われ、鳴く声は、人がどもるのに喩えられた。次に夕顔が「なにがしの院」でこの鳥の鳴くのを恐がったとあるのは、物語の上には見えない。

まへりし。女にて、いとらうたげになむ（とてもかわいいお子で）」と語る。（源氏）「さて何処にぞ。人にさとは知らせで、われに得させよ。あと（一〇）はかなく、いみじと思ふ御かたみに、いとうれしかるべくなむ」とのたまふ。（源氏）「かの中将（頭の中将にも知らせるべきだが）にも伝ふべけれど、いふかひなきかこと（一一）負ひなむ。とざまかうざまにつけて、はぐくまむに咎（とが）あるまじきを、そのあらむ乳母（めのと）（一三）などにも、（右近）それ私の所ではないようにうまく言って連れて来てくれことざまに言ひなしてものせよかし」などかたらひたまふ。「さらなら私はほんとうに嬉しゅうございますばいとうれしくなむはべるべき。かの西の京にて生（お）ひいでたまはむは、（姫君が）心苦しくなむ。はかばかしくあつかふ人なしとて、かしこになむ」と聞こゆ。（お気の毒で）（五条ではちゃんとお世話申す人がいないというので）（お育ちになるのはあちらにいらしたので）

夕暮の静かなるに、空のけしきいとあはれに、御前（おまへ）の前栽（せんざい）かれがれに、虫の音（ね）も鳴きかれて、紅葉（もみぢ）のやうやう色づくほど、絵（一四）に画きたるやうにおもしろきを見わたして、心よりほかにをかしきまじらひかなと、かの夕顔の宿（やど）りを思ひいづるもはづかし。竹のなかに家（いへ）（一五）鳩（はと）といふ鳥の、ふつつかに鳴くを聞きたまひて、かのありし院にこ（鳴き弱って）（右近は）（思いがけず結構な宮仕えをすることよと）（源氏は）（太い声で）（あの時の某の院で）

一（夕顔の）亡くなった乳母。西の京の乳母とは別人。ここで右近は夕顔の乳母子であると判明する。

二「いとしも人に」（なぜ、あんなにお馴染み申したのか）と申すように、くやまれます。「いとしも人に」は、「思ふていとしも人にむつれけむしかならひてぞ見ねば恋しき」――あの人を愛するからといって、なぜこんなに深く馴染んだのだろう、それが習慣になって、逢わないと恋しくてたまらない（『源氏釈』にあげる古歌）を引いたもの。

三　私自身がてきぱきせず、しっかりしていないせいか。

四（夕顔は）そうしたご理想には、ちょうどお似合の鳥の鳴きしを、〔夕顔が〕いと恐ろしと思ひたりしさまの、おもかげにらうたく思ほしいでらるれば、（源氏）「齢はいくつにかものしたまひし。あやしく世の人に似ずあえかに見えたまひしも、かく長かるまじくてなりけり」とのたまふ。（右近）「十九にやなりたまひけむ。右近は、亡くなりにける御乳母の捨て置きてはべりければ、三位の君のらうたがりたまひて、かの御あたり去らず、生ほしたてたまひしを思ひたまへいづれば、いかでか世にはべらむとすらむ。いとしも人にと、悔しくなむ。ものはかなげにものしたまひし人の御心を、たのもしき人にて、年ごろならひはべりけること」と聞こゆ。

（源氏）「はかなびたるこそは、らうたけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。みづからはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女はただやはらかに、とりはづして人にあざむかれぬべきが、さすがにものづつみし、見む人の心には従はむなむ、あはれにて、わが心のままにとり直して見むに、なつかしくおぼゆべき」などの

ありありと浮んでかわいく思い出されなさるので　この通り長生きできないからだ　今にも消え入りそうにお見えだったのは　私は　お父君の三位様がおいつくしみ下さって　女君のお側さらずに　なんで亡きあとに生き残っておられましょう　お育て下さったご恩を思い出しますと　見るからに気弱そうなご気性でいらした方を　長の年月過してまいりましたことで　頼るお方として　全く好きにはなれないものだ　頼りなげな人の方が　しっかりして我の強いのは　素直で　うっかりすると男にだまされそうでいて　夫には信頼してついてゆくといった人が　かわいくて　そのくせ慎みぶかく　情が深まるだろう　自分の思い通りに教育して共に暮したら

いだったのに、と思いますと。

五 恋しい人を葬った煙があの雲になったのだと思ってながめると、夕方の空も親しいものに思われる。「見し人」は、契りを結んだ人、夕顔のこと。

六 右近は、今、自分がこうして源氏のお側にいるように、女君が生きておられて、お二人並んでいられるのだったら、と思うにつけても。

七 騒がしく聞えていた砧の音。八月十五夜、夕顔の宿で泊った明け方、「白妙の衣うつ砧の音も、かすかにこなたかなた聞きわたされ」（一四一頁）とあった。

八 「誰が家の思婦か秋帛を擣つ　月苦かに風凄じく砧杵悲しめり　八月九月正に長き夜　千声万声了む時なし　応に天明に到らば頭尽くに白かるべし　一声に添へ得たり一茎の糸」（『白氏文集』律詩「聞夜砧」）を口ずさむ。この白楽天の詩は遠征の夫を思う妻を詠んだもの。

源氏、病後に、空蟬や軒端の荻と文通する

九 伊予の介。空蟬の夫。

一〇 夫と共に伊予に下ること。前に「北の方をば率て下りぬべし」（一三〇頁）とあった。

一一（ご病気と）伺ってお案じ申していますが、口に出しては、とても。「えこそ」は、すぐ次の歌に「えこそ問はぬをも……」と続く。

たまへば、（右近）四「このかたの御好みにはもて離れたまはざりけり、と思ひたまふるにも、残念なことでございます くちをしくはべるわざかな」とて泣く。空のうち曇りて、風冷やかなるに、ひどくしんみりと物思いに沈んでいられて いといたくながめたまひて、

（源氏）五 見し人の煙を雲とながむれば
　　ゆふべの空もむつましきかな

とひとりごちたまへど、（右近は）ご返歌もできない えさしいらへもきこえず。六かやうにておはせましかばと思ふにも、胸塞がりておぼゆ。耳かしかましかりし砧の音を、（源氏は）おぼしいづるさへ恋しくて、「八まさに長き夜」とうち誦じて臥したまへり。

かの伊予の家の九小君、参るをりあれど、（源氏は）とくべつ以前のような ことにありしやうなる言伝もしたまはねば、（空蟬は）もうだめだとあきらめてしまわれたのをおいたわしく 憂しとおぼし果てにけるをいとほしと思ふに、このようにご病気だとうかがって かくわづらひたまふを聞きて、やはり悲しむのだった さすがにうち嘆きけり。一〇遠く下りなむとするを、（空蟬は）さすがに心細ければ、（源氏が）お忘れになったのかと おぼし忘れぬるかと、こころみに、（空蟬）一一「うけたまはりなやむを、言にいでては、えこそ、

一（言葉に出してはとても）お尋ねできませぬのを、なぜかとお問い下さることもなく月日がたちますのを、どんなに思い悩んでおりますことやら。

二「益田」（私こそ生きているかいはございません）と申すのは、本当のことでございました。「ねぬなはの苦しかるらむ人よりも我ぞ益田の生けるかひなき」——苦しいという人よりも、私こそもっと苦しくて、生きているかいもありません（『拾遺集』巻十四恋四、読人しらず）。「ねぬなは」（蓴菜）は「くる」（「苦し」に掛ける）の枕詞。「益田」は「増す」の、「生ける」は「池」の掛詞。「益田の池」は、大和国の歌枕。

三 空蟬のこの世はいやなものだと思い知ったのに、またもお言葉に望みをかけて生きていこうとすることです。「空蟬」は「世」の枕詞。また、「もぬけの殻の着物だけを残して、あなたに逃げられた」という気持を含めている。「葉」は「羽」の掛詞。「羽」は「空蟬」の縁語。

四（あなたのほんの一言に、命を繋ぐとは）頼りないことです。

五 いつもより一層いとしさをそそる書きざまである。

六 近衛の少将で、蔵人を兼任する者。

七 おかしなことだ。（軒端の荻が男を知っていることを）どう思っているだろうか。

八 死ぬほど思っている私の心はご承知でしょうか。「かへる」は、程度の甚だしいことを示す接尾語。

一 問はぬをもなどかと問はでほどふるに
いかばかりかは思ひ乱るる

〔空蟬の手紙は〕この人への気持も

二 益田はまことになむ」と聞こえたり。めづらしきに、これもあはれ
忘れたまはず。（源氏）生きているかいがないとは「生けるかひなきや、誰が言はましことにか。どちらが言いたいせりふでしょう

三 空蟬の世はうきものと知りにしを
また言の葉にかかる命よ

四 はかなしや」と、御手もうちわななかるるに乱れ書きたまへる、五
まだ筆を持つお手も震えるので乱れ書きなさったのは
とどうつくしげなり。なほかのもぬけを忘れたまはぬを、いとほし
いまだにあの脱けがらの小袿を　おいたわしく
も心ときめきにも思うのだった
うもをかしうも思ひけり。〔空蟬は〕かやうに憎からずは聞こえかはせど、け
情のあるお手紙のやりとりはするけれど　逢瀬
のことは考えもしない
近くとは思ひよらず、とはいえ源氏から木石のような女だと思われてしまいたくないと
さすがにいふかひなからずは見えたてまつり
てやみなむと、思ふなりけり。

〔源氏は〕婿取りした
かの片つかたは、蔵人の六の少将をなむ通はす、と聞きたまふ。七あや
もう一方の軒端の荻は
しや、いかに思ふらむと、少将の心のうちもいとほしく、またかの
同情されるし
女の様子も知りたくて
人のけしきもゆかしければ、小君して、（源氏）八「死にかへり思ふ心は、知
小君を使いに

九 一夜の逢瀬にしろ、契りを結んでおかなかったなら、ほんの少しばかりの恨みごとでも、何にかこつけて言えましょう。「軒端の荻」は、軒に近く生える荻。草を結ぶのは、女と契りを交わしたことを暗示する。「結ぶ」「露」「かく」は縁語。

一〇 丈の高い荻につけたのは、娘の背丈の高かったのをからかってのことである。（空蟬一〇八頁参照）

一一 相手は自分（源氏）だったのだなと気づいたら、そうはいっても、大目に見てくれるだろうとお思いになる、その自惚れは、困ったものである。「あいなかりける」は、草子地の文。

一二 （歌の出来はあまりよくないが）早く詠めたことだけを取柄にして。

一三 あのことをほのめかされるお便りにつけても、荻の下葉が霜に当ってしおれているように、（賤しい身にはまれのお尋ねがうれしいながら）なかばは思いしおれているのでございます。「風」と「荻」、「霜」と「結ぼほる」は縁語。霜の置く今の季節を詠み込む。

一四 夏、空蟬と碁を打っていた時の様子。（空蟬一〇八頁参照）

一五 相変らず（空蟬に拒まれたり、夕顔に死なれたりしても）性懲りもなく、またまた浮き名の立ちそうな好色心がお起りになるらしい。草子地。「こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住まへば」（『古今集』巻十三恋三、読人しらず）による。

りたまへりや」と言ひつかはす。

（源氏）ほのかにも軒端の荻をむすばずは
露のかことをなににかけまし

一〇 高やかなる荻に付けて、（源氏）目立たぬように「忍びて」とお命じになるがとのたまへれど、万一しくじって取りあやまちて少将が見つけたりして少将も見つけて、一二 われなりけりと思ひあはせば、（小君が）さりとも罪ゆるしてむと思ふ御心おごりぞ、あいなかりける。少将のなきをりに見すれば、（軒端荻は）恨めしいと思うが心憂しと思へど、思い出して下さったのもさすがにうれしくかくおぼしいでたるもさすがにて、（小君に）渡す御返り、一三 口ときばかりをかことにて取らす。

（軒端荻）一三 ほのめかす風につけても下荻の
なかばは霜にむすぼほれつつ

手は悪しげなるを、字は下手なのにまぎらはしさればみて書いたるさま、品なし。一四 火影に見し顔おぼしいでらる。うちとけでむかひゐたる人は、空蟬 今でも思い捨てることができない様子をしていたなえう（つつましげに対坐していた）とみ果つまじきさまもしたりしかな、（娘の方は）何のたしなみもない様子で何の心ばせありげもなく、さはしゃいで楽しそうにしていたなとうどき誇りたりしよとおぼしいづるに、憎からず。一五 なほこりずまに、

源氏、夕顔の四十九日の法要を営む

またもあだ名立ちぬべき御心のすさびなめり。

夕顔

かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事そがず、装束よりはじめて、さるべきものども、こまかに、誦経などせさせたまふ。

一 四十九日の法要。『湖月抄』は、ナナナヌカと訓む。
二 比叡山延暦寺の法華三昧堂。
三 僧の布施にする衣類。
四 誦経の布施などおさせになる。主語は源氏。
五 経巻や、仏前のお飾り。
六（源氏の）ご学問の師。当時の学問は漢学、特に詩文を作ることを重んじた。
七 大学寮の文章道の教官。従五位下相当。
八 施主が神仏への願いの趣旨を述べたもの。漢文で書く。貴族は専門家に作らせるならわしだった。
九 後世を阿弥陀仏におまかせ申す旨を。死者は四十九日までは中有（この世から次の生に到るまでの間）にさまよっているが、四十九日以後はそれぞれの因縁で、後世がきまって、六道（地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上）に赴くと考えられていたので、念仏誦経して、阿弥陀仏のいる極楽浄土に往生するよう祈願したもの。
一〇（源氏ほどの人を）これほどまで悲しくお思い申させるとは、何という宿縁のすばらしさか。
一一（源氏が）内々にお作らせになった女の衣裳の袴。故人の衣裳や日常使用した調度を、布施として寺に寄進するならわしであるが、夕顔は身一つで某院に行って亡くなっているから、源氏が秘かに新調したのである。

必要な品々　心をこめて　ねんごろに　高徳の僧で　気を配って　立派に準備した

誦経、仏の飾りまでおろかならず、惟光が兄の阿闍梨、いとたふとき人にて、二なうしけり。御書の師にてむつましくおぼす文章博士召して、願文作らせたまふ。

誰と名は明かさず　愛した女が空しくなってしまった

その人となくて、あはれと思ひし人のはかなきさまになりにたるを、阿弥陀仏にゆづりきこゆるよし、あはれげに書きいでたまへれば、「ただかくながら、加ふべきことはべらざめり」と申す。

〔源氏が草稿を〕　〔文章博士〕そっくりこのままで　〔源氏は〕

忍びたまへど、御涙もこぼれて、いみじくおぼしたれば、「何人ならむ。

誰と噂にものぼらないのに

その人と聞こえもなくて、かうおぼし嘆かすばかりなりけむ宿世の高さ」と言ひけり。忍びて調ぜさせたまへりける装束の袴を取り寄せさせたまひて、

持って来させなさって

〔源氏〕泣く泣くも今日はわが結ふ下紐を

いづれの世にかとけて見るべき

一二 涙にくれて今日は私が一人で結ぶ袴の下紐を、いつの世にかまた相逢うて、共に解き、うちとけて相見えることができよう。「とけて」に紐が解ける意と、心がうちとける意を掛ける。わが国古代の民俗に下袴の紐を結び交わし、勝手に解かないのを男女の愛の誓いのしるしとしたことを背景においている。

夕顔をしのぶ五条の宿の人々と源氏

一三 夕顔の遺児の女の子。（帚木七二頁参照）

一四（あの時お供した）右近さえ、消息がないので。

一五 はっきりした証拠はないが、（男君の）感じからして源氏の君ではないかと、（女房同士）ひそひそ話し合っていたこととて。

一六（夕顔が行方不明になったのは）そもそも惟光のせいだと、文句を言ってみるが。前にも「なほこの好き者のしいでつるわざなめり、と、大夫を疑ひながら」（一三八頁）とあった。

一七 ひょっとして、地方の国守の子などで、浮気な男が、（こっそり通っていたのが）頭の中将に知れるのを恐れて、（あの明け方、夕顔を連れ出して）そのまま任国に連れて下向してしまったのだろうかと、想像するのだった。

一八 夕顔の宿の女主人（揚名の介の妻）。

一九 右近は他人だから。前に「右近は、亡くなりにける御乳母の捨て置きてはべりければ」（一七二頁）とあった。

〔夕顔の魂は〕さまよっているというが このほどまではただよふなるを、六道のどの道にいづれの道にさだまりておもむくらむ、〔源氏は〕と思ほしやりつつ、念誦（念仏誦経を心をこめて）をいとあはれにしたまふ。

〔源氏は〕頭の中将を見たまふにも、あいなく（むやみに）胸騒ぎて、一三かの撫子の生ひたつありさま、聞かせまほしけれど、（教えてやりたいのだが）かことに懼ぢてうちいでたまはず。かの夕顔の宿りには、一四〔夕顔は〕どこへ行ってしまわれたのかと心配したが（苦情を）お捜し申せないでいるえ尋ねきこえず、一五右近だにおとづれねば、あやしと思ひ嘆きあへり。たしかならねど、けはひをさばかりにやと、ささめきしかば、一六惟光（問題にもせず）をかこちけれど、いとかけ離れ、（無関係だと）けしきなく言ひなして、なほ同じ（相変らずここの女房にご精励なので）ごと好きありきければ、（前にもまして夢のようで）いとど夢のここちして、一七もし受領の子どもの好き好きしきが、頭の君に懼ぢきこえて、やがて、率て下りにけるにやとぞ、思ひ寄りける。一八この家あるじぞ、西の京の乳母の女なりける。（その乳母の子は三人あって）三人その子はありて、一九右近は異人なりければ、思ひ隔てて（分け隔てして）〔夕顔の〕御ありさまを聞かせぬなりけりと、泣き恋ひけり。右近はた、（右近は右近で）かし（知らせてくれないのだと）（口々に）かましく言ひ騒がれむを思ひて、（非難されるのが面倒なところへ）君も今さらに漏らさじと忍びたま〔源氏〕〔夕顔のことを〕

一 せめて夢にでも（夕顔に）逢いたいと。人を思うと夢にその人が現れるという俗信があった。

二 荒廃した所に住みついた魔性のもの。長い間人が住まぬ所は、魔物が住みつくと考えられていた。

三 十月の初め頃、任地に下る。

四 女連中も下向することだからと。女房は、空蟬とその侍女たちをさす。

五 細工の精緻な美しい櫛や扇。櫛や扇は旅の無事を祈り、再会を願うための祝儀の品。

六 旅行の途中、道祖神（旅人を守る神）に捧げる幣帛。色さまざまの布帛を小さく切って、袋（幣袋）に入れる。

七 また逢うまでの形見にすぎないと思っていましたのに、この小袿の袖も私の涙ですっかり朽ちるまでになってしまいました。「逢ふまでの形見とてこそ留めけめ涙に浮ぶ藻屑なりけり」（『古今集』巻十四恋四、親の守りける人の女に、いとしのびに逢ひて、物らいひけるあひだに、親の呼ぶといひければ、急ぎ帰るとて、裳をなむ脱ぎ置きて入りにける。そののち裳を返すとて詠める　興風）による。この歌は、空蟬の巻の筋立てに影響を与えたと考えられる。

八（お手紙には）ほかにもこまごまと書いてあったが、くだくだしいので書かない。作者のことわり書き。作者は終りを急ぐのである。

空蟬との別れ

幼い姫君のことも聞くに聞けず

へば、若君の上をだにえ聞かず、あさましく行方なくて過ぎゆく。

源氏

君は、夢をだに見ばやと、おぼしわたるに、この法事したまひて

翌晩

またの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも

夢に見えたので

同じやうにて見えければ、荒れたりし所に住みけむものの、われに

しさに目をつけたまきぞえで

見入れけむたよりに、かくなりぬることと、おぼしいづるにもゆゆ

悪いことである

しくなむ。

伊予の介、神無月の朔日ごろに下る。女房の下らむにとて、たむけ心ことにせさせたまふ。また内々にも、わざとしたまひて、こまやかに、をかしきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小袿もつかはす。

（源氏）

逢ふまでの形見ばかりと見しほどに

ひたすら袖の朽ちにけるかな

八

こまかなることどもあれど、うるさければ書かず。御使、帰りにけれど、小君して、小袿の御返りばかりは聞こえさせたり。

すっかり　消息不明のまま過ぎてゆく

この四十九日の法事をなさった

枕上にいた女の姿も同じ様子で

あの時の某の院そのままに

〔夕顔が〕

こんな結果になったのだと

自分の美

気味の

餞別を

格別気を配っておさせになる

〔空蟬に〕特別贈り物をなさって

格別大げさにして

別に小君をお使いにして

九 蟬の羽のような薄い夏衣も裁ち更えて、更衣をすませた今、あの時の薄衣をお返し下さるのを見ますと、（お心も変ったのかと、蟬のように）声を上げて泣いてしまいます。四月一日から夏服に、十月一日から冬服に更衣する。この歌は次の二首をもとに作られている。「鳴く声はまだ聞かねども蟬の羽のうすき衣は裁ちぞ着てける」（『拾遺集』巻二夏、大中臣能宣。）「忘らるる身を空蟬の唐衣かへすはつらき心なりけり」――あなたに忘れられるわが憂き身、その私に蟬の殻のように脱ぎ置いた着物を返して来るとは冷たい仕打ちであることだ（『後撰集』巻十二恋四、源巨城。）。あとの歌は「つらくなりにける男のもとに、今はとて装束などかへしつかはすとて」という詞書で女が送った歌の返歌である。

一〇 今日はちょうど立冬の日だったが、いかにもその日らしく、時雨がさっと通り過ぎて。時雨は晩秋、初冬の景物として歌に詠まれた。

一一 死んでしまった女も、今日旅立って行く女も（死出の道と旅路と）それぞれ道は違うが、どこへ行ってしまったことやら、この秋もどこへ去っていったやら。「すぎにしもいまゆくすゑも二道になべて別れのなき世なりせば」（『斎宮女御集』）による。

一二 以下は帚木冒頭の作者の言葉と首尾照応する。

一三 なんで帝の御子だからといって、源氏を実際知っている人まで、欠点がないかのように、ほめてばかりいるのかと。

（空蟬）九 蟬の羽もたちかへてける夏衣
かへすを見てもねは泣かれけり

（源氏は）思へど、あやしう人に似ぬ心強さにてもふり離れぬるかなと、思ひ続けたまふ。一〇 今日ぞ冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。ながめ暮したまひて、

（源氏）一一 過ぎにしもけふ別るるも二道に
ゆくかた知らぬ秋の暮かな

なほかく人知れぬことは苦しかりけりと、おぼし知りぬらむかし。

一二 かやうのくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくて、みな漏らしとどめたるを、一三 など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならず、ものほめがちなると、作りごとめきてとりなす人もものしたまひければなむ。あまりもの言ひさがなき罪、さりどころなく。

（空蟬）九 蟬の羽もたちかへてける夏衣
かへすを見てもねは泣かれけり

（源氏は）思へど、あやしう人に似ぬ心強さにてもふり離れぬるかなと、思ひ続けたまふ。一〇 今日ぞ冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。ながめ暮したまひて、

（源氏）一一 過ぎにしもけふ別るるも二道に
ゆくかた知らぬ秋の暮かな

なほかく人知れぬことは苦しかりけりと、おぼし知りぬらむかし。

一二 かやうのくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくて、みな漏らしとどめたるを、一三 など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならず、ものほめがちなると、作りごとめきてとりなす人もものしたまひければなむ。あまりもの言ひさがなき罪、さりどころなく。

（源氏が）努めて秘し隠していらしたのもお気の毒なので
みな書かないでおいたのですが
作り話のように受け取る人がおありだったのでお話ししたのです
あまり慎みのないおしゃべりの罪は免れがたいことで

若紫

瘧病をわずらった源氏は、三月の末、北山の年老いた修行者のもとに、加持を受けに赴く。その北山で、源氏は、ある僧都の庵室に祖母と共に身を寄せていた美しい少女を見そめる。少女は、源氏が恋い慕ってやまぬ藤壺の女御に生き写しであった。それも道理、少女は藤壺の姪に当る人だった。

祖母に先立たれた少女は、父の兵部卿の宮（藤壺の兄）に引き取られることになったが、その前夜、源氏は思い切って少女をひそかに二条の院に迎え取る。妻とも娘ともつかぬこのあどけない少女に、源氏は理想の女性藤壺のおもかげを求めて、その成長を楽しみにする。少女はこの時十歳ほど、やがて源氏終生の伴侶となる後の紫の上である。源氏は年立の上では十八歳、その中将時代のことである。

巻名の「若紫」は、『伊勢物語』初段の歌「春日野の若紫の摺衣しのぶの乱れ限り知られず」によっており、この巻のはじめの、源氏が北山で少女を見そめる垣間見のくだりは、『伊勢物語』の初段にその想を借りている。「若紫」とは、春、萌え出た紫草。紫草は、この巻では、藤の花の色の縁で、藤壺その人を意味し、若紫とは、その藤壺の姪でしかも藤壺に生き写しの少女を意味する。

この巻には、並行して、源氏と藤壺とのせつない一夜の逢瀬、その結果の藤壺の懐妊、源氏と北の方葵の上の不和などが語られ、後の須磨、明石の流寓を予想させる記事もあり、この物語の長編的構想の最初の展開の部分として書かれた巻と考えられる。

源氏、おこりをわずらい、北山の聖を訪ねる

一 おこり。マラリア。『和名抄』に「寒熱並びに作り、二日に一たび発する病なり」とある。

二 病気治療の術をほどこすこと。典薬寮の職員に、呪禁博士一人、呪禁師二人、呪禁生六人があり、公に認められていた療法である。

三 真言密教で、印を結び、陀羅尼を唱えて仏を念ずること。「加」は、仏力の加護。「持」は、それを失わぬこと。

四 京都の北の山々を漠然とさす。

五 何々寺。実名で言われたのを省略した書き方。古来、鞍馬寺とする説が有力である。（図録一参照）

六 行者。「行人」の訓読。苦行を積んで法力を得た僧。

七 岩窟。岩屋。転じて僧の庵室をもいうが、ここは前者と見る。

八 明け方暗いうちにお出かけになる。

九 「里はみな散り果てにしをあしひきの山の桜はまださかりなり」（『玉葉集』巻二春下、凡河内躬恒）を踏まえたものか。

瘧病（わらはやみ）にわづらひたまひて、よろづにまじなひ加持（かぢ）など参（おさ）らせたまへど、験（しるし）なくて、あまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山（四）になむ、なにがし寺（五）といふ所に、かしこき行ひ人（六）はべる。去年（こぞ）の夏も世（世間にはやって）におこりて、人々（人々がまじないに手を焼いたのを）まじなひわづらひしを、やがてとどむる（即座になおした例が）たぐひ、あまたはべりき。ししこらかしつる（こじらせてしまいますと大変でございますから）時はうたてはべるを、とくこそこころみさせたまはめ」など聞こゆれば、召しにつかはしたる（僧）に、「老いかがまりて（腰もまがって）室（むろ）の外にもまかでず（出ませぬ）」と申したれば、（源氏）「いかがはせむ、いと忍びてものせむ（出かけよう）」とのたまひて、御供にむつましき（親しくお仕えする）四五人ばかりして、まだ暁（あかつき）におはす。

やや深う（山深く）入る所なりけり。三月の晦日（つごもり）なれば、京の花ざかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りもておはするままに（分け入って行かれるにつれて）、

霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひたまはず、所狭き御身にて、めづらしうおぼされけり。寺のさまもいと（かかった様子も）（こうした遠出のご外出も今までご経験がなく）あはれなり。峰高く、深き巌の中にぞ、聖入りゐたりける。上りたまひて、誰とも知らせたまはず、いといたうやつれたまへれど、しるき御さまなれば、「あなかしこや。一日召しはべりしにやおはしますらむ。今はこの世のことを思ひたまへねば、験方の行ひも捨て忘れてはべるを、いかで、かうおはしましつらむ」と、おどろき騒ぎ、うち笑みつつ見たてまつる。いと尊き大徳なりけり。さるべきもの作りて、すかせたてまつり、加持など参るほど、日高くさしあがりぬ。

（僧）（これは恐れ多い）（素姓をお明かしにならず）（先日お召しのあったお方でいらっしゃいま）（こうわざわざお出でになったのか）（〔源氏は〕）（奉仕するうちに）（〔源氏が〕）

すこし立ち出でつつ見わたしたまへば、高き所にて、ここかしこ、僧坊どもあらはに見おろさるる、ただこのつづらをりの下に、同じ小柴なれど、うるはしうしわたして、きよげなる屋、廊など続けて、木立いとよしあるは、「何人の住むにか」と問ひたまへば、御供なる人、「これなむ、なにがし僧都の、この二年籠りはべるかたには

（きちんと周囲にめぐらして）（こざっぱりした）（風情があるのは〔源氏〕）（所だそうでご）

一　窮屈なお身の上のこととて。
二　山林に隠遁して苦行を積む修行者の称。岩窟に籠って修行するのもその顕著な特色の一つで、境内にそうした岩窟があったものと思われる。
三　ひどく粗末な身なりでいらっしゃるけれども。前の源氏の言葉にも「いと忍びて」とあり、身分を隠しての微行である。
四　高貴のお方とはっきり分るご風采なので。
五　この現世の俗事に関心はございませんので。後世のための修行に専念している、の意。
六　加持祈禱の法力をあらわすといった方面の修行。
七　源氏の美貌に我を忘れてにこにこする表情。
八　いかにもありがたい感じのお坊様なのであった。「大徳」は、高徳の僧。
九　しかるべきもの。ここは護符。
一〇　お呑ませし。「すく」は、無理に呑み込むこと。

源氏、某僧都の庵室を望んで、これに目を止める

一一　僧の住む庵室。
一二　幾重にも折れ曲った山道。『枕草子』の「近うて遠きもの」に「鞍馬のつづらをりといふ道」とあり、鞍馬寺のそれは有名であった。
一三　小柴垣。（図録八参照）
一四　建物や、建物と建物をつなぐ渡殿。

一五 これも実名を省略した書き方。「僧都」は、朝廷から賜る僧官で、僧正に次ぐ地位。都では知名の人で、源氏とも既知の間柄であったことは以下に見える。

一六 小綺麗な召使の少女。

一七 仏に供える水。これに樒や花を浮べる。この水や花を置く閼伽棚は簀子にしつらえられる。（図録一〇参照）

一八 おや、あそこには女の人が住んでいるのだ。童女がいるからには、その仕える女主人がいるはずだからである。

源氏、明石の浦に住む前播磨の守入道とその一人娘の噂を聞く

一九 勤行をなさりながら。

二〇 まるで絵に描いた景色のようだ。「かな」は、普通地の文には使われないが、ここは、見渡している源氏の気持をそのまま地の文としたものであろう。

二一 京に対して、地方の国々をいう。

二二 「嶽」と呼ばれる著名の歌枕で東国にあるのは浅間山である。例の省略した書き方であるが、浅間を思ってのことであろう。

（源氏）気のおける人が住んでいる所なのだね べるなる」「心はづかしき人住むなる所にこそあなれ。何ともみっともなく あやしうも、ひどすぎる身なりをしたものだ あまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」耳に入ったら困るな などのたまふ。きよげな一六 る童女などあまた出で来て、閼伽たてまつり、花折りなどするもあらはに見ゆ。（供人）「かしこに女こそありけれ。僧都は、よもさやうにはまさか女を囲っておかれたりはなさるまいにする、たまはじを、いかなる人ならむ」と、口々言ふ。下りてのぞくもあり。をかしげなる女子ども、若き人、女房童女なむ見ゆる、と言ふ。

（源氏）君は行ひしたまひつつ、日ざかりになるにつれて日たくるままに、病気はどうだろうとご心配になるのを（供人）何かと気をお紛らわしになってるを、「とかうまぎらはさせたまひて、お気になさらぬのがおぼし入れぬなむ、よくはべる」と聞こゆれば、後の山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、どことなく一帯に芽ぶいて煙っているようなのは絵にいとよくも似たるかな。（源氏）「かかる所に住む人、心に思ひ残すこものの情趣を味わいつくすことだろうね とはあらじかし」とのたまへば、（供人）「これはいと浅くはべり。平凡でございます 人の国などにはべる海山のありさまなどを御覧ぜさせてはべらば、いかに御ご覧に入れましたならば 絵いみじうまさらせたまはむ。富士の山、なにがしの嶽」など語りすばらしくご上達なさいますでしょう

一 本来は九州、すなわち西海道をさすが、ここは京より西の国々の意であろうか。

二 どこといって深い趣のあるところもございませんが。

三 その（播磨の）国の前国守で近頃出家した人が、娘を大事に育てている家は。明石の入道とその娘、後の明石の上。「新発意」は、発心して新たに仏門に入った人。

四 従四位下相当の官。播磨の守は、従五位上相当の地位である。

五 官職。

六 髪もおろして（出家して）しまいましたが。

七 多少とも引っ込んだ山中に隠棲することもせず。山住みは出家の常であるのでこういう。

八 そんな（人の多い）海岸で暮していますのは。

九 なるほど考えてみますと。

一〇 出家した人の隠棲にふさわしい場所は方々にありますが。「さも」は、「そういうふうにも」。前の「すこし奥まりたる山住み」を受ける。

一一 それに一つには、自分の気晴らしのための住まいでもあるわけです。

一二 様子を見に立ち寄ってみましたところ。「見たまへ」の「たまへ」は下二段活用、謙譲語。

きこゆるもあり。また西国のおもしろき浦々、磯の上を言ひ続くるもありて、よろづにまぎらはしきこゆ。「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほことにはべれ。何の至り深き隈はなけれど、ただ海の面を見わたしたるほどなむ、あやしく異所に似ず、ゆほびかなる所にはべる。かの国の前の守、新発意の、女かしづきたる家、いといたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、まじらひもせず、近衛の中将を捨てて、申し賜はれりける司なれど、かの国の人にもすこしあなづられて、『何の面目にてか、また都にも帰らむ』と言ひて、頭もおろしはべりにけるを、すこし奥まりたる山住みもせで、さる海づらに出でゐたる、ひがひがしきやうなれど、げに、かの国のうちに、さも人の籠りゐぬべき所々はありながら、深き里は人ばなれ心すごく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは心をやれる住ひになむはべる。先つころ、まかり下りてはべりしついでに、ありさま見たまへに寄りてはべりしかば、

（良清）
やはり格別でございます
何かとおなぐさめ申し上げる
たいしたもので
たいそうな変り
子孫で
出世もできたはずの人なのですが
宮廷づとめを嫌って
者で
馬鹿にされて
申請して頂戴した
心細がるにきまって
人気に遠くてものさびしく
山奥の
問違ったことのよう
ですが
いますから
〔播磨国に〕

一三 国の守の権勢、財力でやっておいたことですので。

一四 後世安楽（極楽往生）のための勤行。

一五 容貌もたしなみも、相当なもののようでございます。「容貌、心ばせなど、けしうはあらずはべるなり」の、倒置された言い方。

一六 播磨の国の守。

一七 以下「海に入りね」まで、入道の遺言。自分がこうして空しく田舎に落ちぶれているだけでもうたくさんなのに、子供はこの娘ひとりだけなのだ、この子の将来については特別に考えるところがある。播磨の国司の息子風情を婿には取れぬという気持である。

一八 万一私に先立たれて、素志がつらぬけず、私の思い決めている運勢がはずれるようなことになったら。

一九 海の龍王。仏経に出てくる異類である。以下、入道の「海に入りね」という遺言を嘲弄して言う。

二〇 六位の蔵人を勤めあげて、今年（正月）従五位下に叙せられた者なのであった。これを巡爵という。「かうぶり」は、爵位の意であるが、ここは特に五位をさす。この人物、須磨の巻で、良清という名であることが分る。

二一 それで入道の家の周囲をうろうろするのであろう。

〔入道は〕京にてこそ所得ぬやうなりけれ、（不遇のようでしたが）そこらはるかにいかめしう占めて（その辺一帯広々と盛大に土地を占有して）造れるさま、さはいへど、（そうはいっても）国の司にてし置きけることなれば、残りの齢ゆたかに経べき心構へも、（過せる用意も）（余生を）（十分にしてあります）一なくしたりけり。後の世の勤めもいとよくして、なかなか法師まさりしたる人になむはべりける」と申せば、（かえって出家して人品の上がった人物でございます）「さて、その女は」（源氏）と問ひたまふ。（良清）「けしうはあらず、容貌、心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる（格別ねんごろな態度で）（求婚の）意思表示をするようですが）（一向に承知しませんが）心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさま異なり。もし我に後れてその志とげず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね、と、常に遺言しおきてはべるなる」（してあるそうでございます）と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。人々（供人たち）、「海龍王の后になるべきいつき女なり。心高さ（秘蔵娘）（源氏）（高望みも）苦しや」とて笑ふ。（この話をしたのは）かく言ふは、播磨の守の子の、蔵人より今年かうぶり得たるなりけり。（供人）「いと好きたる者なれば、かの入道の遺言（好色な男だから）（皆が言う）破りつべき心はあらむかし。さてたたずみ寄るならむ」と言ひあへ（魂胆）

一　いやいや、そうは言っても田舎くさい娘だろうよ。
二　そんな明石のような田舎。
三　きれいな若い女房や童女などを。
四　縁故をたどって探し集めて来て。
五　娘が風情のない人間に育っていったなら、そんなふうに気楽に考えて（高望みをして）、田舎に置いてもおけないだろうからね。
六　入道はどんなつもりで、海の底にとまで深く思いつめているのだろう。「海に入りね」という入道の遺言を受けて言う。「深う」は、「海の底」と「思ひ入る」両方に掛る。
七　はた目もうっとうしい話だね。海の底の「海松布」に「見る目」を掛ける。
八　こんな話にしても。以下、供人たちの心中。
九　おこりの病気だけでなく、の意。「もののけ」は、夕顔一六八頁注二参照。

（供人）り。「いでや、さいふとも田舎びたらむ。をさなくよりさる所に生ひ出でて、古めいたる親にのみ従ひたらむは」「母こそゆゑあるべけれ。よき若人、童女など、都のやむごとなき所々より、類にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ。情なき人になりてゆかば、さて心安くてしも、え置きたらじをや」など言ふもあり。君、「何心ありて海の底まで深う思ひ入るらむ。底のみるめも、ものむつかしう」などのたまひて、ただならずおぼしたり。かやうにても、なべてならず、もてひがみたること好みたまふ御心なれば、御耳とどまらむをやと見たてまつる。「暮れかかりぬれど、おこらせたまはずなりぬるにこそはあめれ。はや帰らせたまひなむ」とあるを、大徳、「御もののけなど加はれるさまにおはしましけるを、今宵はなほ静かに加持など参りて、出でさせたまへ」と申す。さもあることと、皆人申す。君も、かかる旅寝もならひたまはねば、さすがにをかしくて、「さらば暁に」とのたまふ。

（供人）

（源氏）

旧式な両親の言いつけを守っているだけではね　家柄の出らしいよ　高貴な家々から　ぜいたくな育て方をしているそうだ　源氏　風変りなこと　並々ならぬ関心をお寄せになる　ご気性だから　きっと興味をおひかれだろうと　発作はお起りにならないようになった様子でございます　ご帰京なさいませ　言うのを　明日お帰りなさいませ　それがおよろしいと　ご経験のないことなので　おもしろくて

源氏、僧都の坊に美しい少女（後の紫の上）を垣間見る

一〇 先ほどの僧都の僧坊。前に「同じ小柴なれど、うるはしうしわたして……」（一八四頁）とあった。

一一 源氏の乳母子で腹心の家来。（夕顔一二一頁以下参照）

一二 ついそこの西に面した部屋に。

一三 持仏（念持仏。身辺に安置して信仰する仏像）を安置申し上げておつとめをする。

一四 尼なのであった。前に供人たちが「かしこに女こそありけれ。……いかなる人ならむ」（一八五頁）と言ったのを受けた書き方。

一五 坐った時もたれる調度。この場合は机に代用している。（図録九参照）

一六 髪が可憐な感じに切り揃えられたその裾の風情も。いわゆる尼削ぎの髪である。

一七 白い袿や山吹襲（表、薄朽葉、裏、黄）の糊気の落ちた表着を着て。ふだん着の感じである。

一八 成人した時の美しさはさぞかしと思われて。

春の日長のこととて　日もいと長きに、所在ないので つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに〔源氏は〕お出かけになる立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて、花たてまつるめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに誦みゐたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに痩せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうつくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかなと、感心して あはれに見たまふ。きよげなるおとな二人ばかり、さては童女ぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじくおひさき見えて、うつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。「何ごとぞや。童女と腹立ちたまへるか」とて、尼君の見

春の日長のこととて
所在ないので
〔源氏は〕お出かけになる
ほかの供人は
お供えするらしい
大殿そうに
上品に
並の身分の人
頬のあたり
目もとのあたり
全くしゃれた感じのものだな
小綺麗な女房
ほかに
女の子たちとは比べも
のにならず
かわいらしげな
こすって真赤に泣きはら
して
尼
けんかなさったのか

一 召使の童女の名。
二 香炉の上にかぶせる籠。衣服をかけて香をたきしめる（図録九参照）。ここは鳥籠に代用している。
三 その場に坐っている女房。前頁に「きよげなるおとな二人ばかり」とあったその一人。
四 またあのうっかり者が。犬君のことをいう。
五 鳥などが目をつけたら大変ですわ。「もこそ」は、そうなっては困るという危懼の念をあらわす。
六 人が呼んでいるらしいところから見ると。
七 お守役なのであろう。
八 情けないお人だこと。
九 こっちへいらっしゃい。
一〇 髪の生えぎわ。
一一（自分が）限りもなくせつなくお慕い申している人にとてもよく似ているので。藤壺のこと。のちに、この少女は藤壺の姪に当ることが明らかになる。「たてまつる」は、藤壺に対する敬語。

〔源氏は〕似ているところがあるので上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。

（少女）「雀の子を犬君が逃しつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」とて、いとくちをしと思へり。三 このみたる大人、四「例の心なしの、かかるわざをしてさいなまるるこそ、いと心づきなけれ。〔雀の子は〕いづかたへかまかりぬる。いとをかしうやうやうなりつるものを。五 烏などもこそ見つくれ」とて、立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。尼君、「いで、あなをさなや。いふかひなうものしたまふかな。お思いでなく雀を追いのがかく今日明日におぼゆる命をば、何ともおぼしたらで、雀したひたまふほどよ。罪得ることぞと、常に聞こゆるを、心憂く」とて、「此方や」と言へば、ついゐたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまりたまふ。さるは、〔源氏は〕それも実は限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてま

つれるが、〔源氏は〕目が離せないのだまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。尼君、〔少女の〕髪をかき撫でつつ、「櫛を入れることもおいやがりですがけづることをもうるさがりたまへど、きれいなをかしの御髪や。いとはかなうものしたまふこそ、ほんとに子供っぽくていらっしゃるのが心配でたまりませんよあはれにうしろめたけれ。

かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを、[一二]故姫君は、十ばかりにて殿[一三]におくれたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりしぞかし。ただ今おのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とて、いみじく泣くを見たまふも、[一四]すずろに悲し。をさなごころにも、さすがにうちまもりて、伏目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

これくらいのお年になるとこんなでない人もあるものですのに先立たれなさった時はもうちゃんと物事の意味はわきまえておいでだったのですよすぐにも私があなたを残していってしまったらどうやって過していかれるおつもりなのでしょう〔源氏は〕尼君を見つめて〔少女は〕すばらしく

〔尼君〕[一五]
生ひ立たむありかも知らぬ若草を
おくらす露ぞ消えむそらなき

もう一人のその座の女房がほんとにと
またゐたる大人、げにとうち泣きて、

〔女房〕[一六]
初草の生ひゆく末も知らぬまに
いかでか露の消えむとすらむ

一四 こちら（源氏）までわけもなく悲しい気持になる。

一五 これからどこでどう育ってゆくのかも分らないこの子を残しては、私は死ぬに死ねない思いです。「若草」は、春萌え出た草で、この少女を意味し、「露」（はかない命を意味する）はその縁語、「消ゆ」は「露」の縁語。

一六 お姫様のこれから先も分らぬうちに、どうして先立たれることなどお考えなのでしょう。「初草」（若草に同じ）「生ひゆく」「露」「消ゆ」、いずれも尼君の歌を受けて詠む。

と聞こゆるほどに、僧都、あなたより来て、「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将の、瘧病まじなひにものしたまひけるを、ただ今なむ、聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ、知りはべらで、ここにはべりながら、御とぶらひにもまでざりける」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」とて、簾おろしつ。「この世にののしりたまふ光源氏、かかるついでに見たてまつりたまはむや。世を捨てたる法師のここちにも、いみじう世のうれへ忘れ、齢のぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえむ」とて、立つ音すれば、帰りたまひぬ。あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすきものどもは、かかるありきをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよ、と、をかしうおぼす。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れのな

こちらは人目につきましょう　あちら　はし　おいでになっておられるのを　とてもお忍びでいらしたので　(尼君)まあ　お見舞にも　むさ苦しい姿を見られたかもしれません　たいへん　(僧都)世間で大評判の　拝見されたらいかがで　すぐれ　世間の悩みごと　しょう　三　四　五　六　七　藤壺　なにびと　ちご　思いがけない　出かけただけでも　目にあうことだ　これだから　心ひかれる　こんな出歩きばかりして　〔源氏は〕

一　今日に限って（具合の悪いことに）端近な所にいらっしゃったものです。

二　参上しなかったことです。「まで」は、「まうで」の「う」を表記しない形。

三　寿命の延びるような気持のするお美しいお姿です。「人の御ありさま」で一語。

四　どれ、ご挨拶を申し上げましょう。

五　この好色な連中は。家来たちをいう。

六　よく意外な女を見つけたりするのだな。さびれた家に美女を見出すというのは、『伊勢物語』の初段そのほか物語に好んで取り上げられた情景である。

七　どういう素姓の人なのだろう。

八（取次ぎの者を介して）呼び出させる。

源氏、僧都の坊に招かれて泊り、少女の素姓を聞く

九 当地にお立ち寄りになっていらっしゃるということを。以下、使いの弟子の僧の伝える僧都の挨拶。

一〇 旅先のお宿もこちらにお支度申しましょうものを。「草の御むしろ」は、草を敷いた御座所の意。

一一 去る十何日の頃から。今三月の月末と前に見えているから同じ三月のことである。

一二 このような名の聞えた行者が、祈禱の効きめをあらわさなかった時は。

一三 普通の場合より（自分のような身分あるものに対しての場合は）気の毒なことになろうと気を使いまして。

一四 そのうち、そちらにも伺いましょう。僧都の招きに応じたもの。

一五（使いの弟子が帰ると）すぐに。折り返し。

一六 身分にふさわしからぬ手軽なお忍びの姿を。

一七 こうして山中に籠って修行している生活のお話など申し上げなさって。前に「なにがし僧都の、この二年籠りはべるかたにはべるなる」（一八四頁）とあり、僧都の言葉にも「なにがしこの寺に籠りはべりとは……」とあった。何か所願あっての籠山修行と思われる。

ぐさめにも見ばやと思ふ心、深うつきぬ。

〔源氏が〕共に暮したいと

うち臥したまへるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。ほど狭いと なき所なれば、君もやがて聞きたまふ。「過りおはしましけるよし、ただ今なむ人申すに、おどろきながら、さぶらふべきを、なにがしこの寺に籠りはべりとはしろしめしながら忍びさせたまへるを、うれはしく思ひたまへてなむ。草の御むしろも、この坊にこそ設けはべるべけれ。いと本意なきこと」と申したまへり。「いぬる十余日のほどより、瘧病にわづらひはべるを、度かさなりて堪へがたうはべれば、人の教へのままに、にはかに尋ね入りはべりつれど、かやうなる人の験あらはさぬ時、はしたなかるべきも、ただなるよりは、いとほしう思ひたまへつつみてなむ、いたう忍びはべりつる。今、そなたにも」とのたまへり。すなはち僧都参りたまへり。法師なれど、いと心はづかしく、人がらもやむごとなく世に思はれたまへる人なれば、軽々しき御ありさまを、はしたなうおぼす。かく籠れる

ご存じでいらっしゃりながらご内密になさいましたことを お恨みに存じましてさし控えました

源氏もすっかりお聞きになる（僧都）

何はともあれ ご挨拶に上がるべきでございますが 拙僧が

残念でございます

（源氏）

この山奥までやって来ましたが

世間体の悪いことになりましょうが

とても気のおける人で 人柄も重々しい人物だと 世人に

〔源氏は〕きまり悪く

ほどの御物語など聞こえたまひて、（僧都）「同じ柴の庵なれど、すこし涼しき水の流れも御覧ぜさせむ」と、切に聞こえたまへば、かのまだ見ぬ人々に、ことことしう言ひ聞かせつるを、つつましうおぼせど、（源氏は）気はずかしく あの可憐な少女のことも気になるので あはれなりつるありさまもいぶかしくて、おはしぬ。げにいと心こ（僧坊は）格別念入りに 数奇をこらして とによしありて、同じ木草をも植ゑなしたまへり。月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、燈籠などにも参りたり。南面いときよげにしつらひたまへり。そらだきもの、心にくくかをり出で、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風いとことなれば、内の人々も心づかひすべかめり。

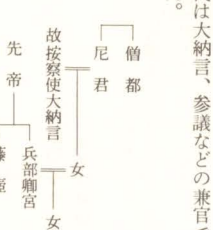
奥ゆかしく　格別なので　気を使っている様子だ

僧都、世の常なき御物語、後の世のことなど聞こえ知らせたまふ。わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生ける限りこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき、おぼし続けて、かうやうなる住ひもせまほしうおぼえたまふものから、昼のおもかげ心にかかりて恋しければ、（源氏）「ここにものしたまふは誰

この世の無常を説くお話や　あの世　話してお聞かせなさる　どうしようもない思慕の情に魂を奪われて　このことに苦しまねばならないのだろう　苦患はいかばかりであろうと　おいでの女の方は

一二 そのお方の素姓を確かめてみたく思うある夢を見たことがあります。

一三 大納言で按察使を兼ねている人。按察使は、地方行政の監察官で、早く陸奥、出羽二国のみに限定されたが、この時代は大納言、参議などの兼官で名目だけのものになった。



一四 こうして私が京にも出ませず山籠りしております関係から。

一五 帝にさし上げよう。入内させよう。

一六 誰が手引きいたしましたものやら。直接あるいは人を使って女房を手なずけ、その手引きで女の所に忍ぶのが普通取られた手段である。

一七 藤壺の兄に当る。（桐壺三四頁参照）

にか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」と聞こえたまへば、うち笑ひて、（僧都）「だしぬけな夢のお話でございますよ うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。尋ねさせたまひても、ご承知になったところで 御心劣りせさせたまひぬべし。ご存じでは 故按察使の大納言は、亡き人になって 世になくて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし、その北の方なむ、拙僧の なにがしが妹にはべる。かの按察使かくれてのち、尼になっておりますのが 世をそむきてはべるが、このころ、身体の具合を悪くいたしましたので わづらふことはべるにより、頼りにして かく京にもまかでねば、頼もし所に籠りてものしはべるなり」と聞こえたまふ。「かの大納言の御女、ものしたまふと聞きしておりましたが 色めいた気持からではなく きたまへしは。すきずきしきかたにはあらで、まじめに申し上げるのですが まめやかに聞こゆるなり」と、当て推量で おしあてにのたまへば、（僧都）「女ただひとりはべりし、亡せてこの十余年にやなりはべりぬらむ。故大納言、内裏にたてまつらむ たいそう大事に育てていましたが など、かしこういつきはべりしを、その本意のごとくものしはべ 希望どおりに事を運びませぬうちに らで、亡くなってしまいましたので 過ぎはべりにしかば、ただこの尼君ひとりもてあつかひはべ 苦労して育ておりました ところ りしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿の宮なむ、忍びて語 ひそかに通っ

て来られるようになりましたが　ご身分の高いお人であったりして
らひつきたまへりけるを、もとの北の方、やむごとなくなどして、
気苦労　もとからの
安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなむ、亡くなりはべり
思い悩んで
にし。もの思ひに病づくものと、目に近く見たまへし」など申した
まのあたりに
まふ。さらばその子なりけりとおぼしあはせつ。親王の御筋にて、
その人の子なのだと　〔源氏は〕
藤壺　似ているのであろうかと
かの人にもかよひきこえたるにやと、いとどあはれに見まほし。人
一層心ひかれ妻にしたいと思う　人柄
も上品でかわいらしく　親しく共に暮して
のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひ
〔源氏は〕
て心のままに教へ生ほし立てて見ばや、とおぼす。
〔源氏〕それは大層お気の毒なことですね　そのお方は　あとに残された忘れ形見も
「いとあはれにものしたまふことかな。それは、とどめたまふかた
ないのですか
みもなきか」と、をさなかりつる行方の、なほたしかに知らまほし
（僧都）　生れました
くて、問ひたまへば、「亡くなりはべりしほどにこそはべりしか。
女の子でした　心配の種だと
それも女にてぞ。それにつけてももの思ひのもよほしになむ、齢の
末に思ひたまへ嘆きはべるめる」と聞こえたまふ。さればよとおぼ
（源氏）妙なことを申し上げますが　やはりそうだと
さる。「あやしきことなれど、をさなき御後見におぼすべく聞こえ
たまひてむや。思ふ心ありて、行きかかづらふかたもはべりながら、

源氏、少女を引き取りたい希望を僧都にもらす

一　（あの少女は）兵部卿の宮のお血筋なので。

二　なくもがなの小ざかしいところもない人だから。

三　あのあどけなかった少女が結局どういう人なのか、その素姓をなお確かに知りたくて。「行方」は、少女についての話の中での行方（結着）の意。

四　女の子であるにつけても。

五　（妹は）先も短い今嘆いておりますようです。

六　その年端もゆかないお方のお守役と私をお思い下さるように（尼君に）お話し頂けないでしょうか。

七　考えるところがありまして。「独住みにてのみなむ」に掛る。

八　通って行くかかわりのある所もありますものの。左大臣家の葵の上のもと。

九　どうにも気持がしっくりしないのでしょうか、ひとり暮しを続けております。

一〇（私は）間の悪い思いをしなくてはならないでしょう。

一一（私から）くわしい意見は申し上げられません。

一二取りつく島もないご様子なので。「ものごはし」（物強し）は、堅い感じ。

一三阿弥陀仏のおいでになるお堂（阿弥陀堂）で。「阿弥陀仏」は、夕顔一二三頁注一八参照。

一四初夜のおつとめ。一昼夜を、晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時に分ける。「初夜」は、午後六時頃から十時頃まで。

源氏、尼君に歌を詠みかけて、意中を訴える

世に心の染まぬにやあらむ、独住みにてのみなむ。まだ似げなきほど（不似合いな年頃だと）と、常の人におぼしなずらへて、はしたなくや」（世間並みの男と同様にお考えになっては）などのたまへば、「いとうれしかるべき仰せ言なるを、まだむげにいはけなきほどに（僧都）（うれしいはずの）（いっこうに頃是ない年頃でございますから）はべるめれば、たはぶれにても御覧じがたくや。（ご冗談にもお世話頂くわけにはまいりますまい）そもそも女は、人（周囲の人の世話を受けて結婚もするものでありますから）にもてなされて大人にもなりたまふものなれば、くはしくはえとり申さず。かの祖母に語らひはべりて聞こえさせむ」（相談いたしましてご返事申し上げましょう）と、すくよかに言ひて、ものごはきさましたまへれば、若き御心にはづかしくて、（気がひけて）えよくも聞こえたまはず。（僧都）「阿弥陀仏ものしたまふ堂に、することはべるころになむ。初夜いまだ勤めはべらず。過ぐしてさぶらはむ」とて、のぼりたまひぬ。（おつとめのございます時刻です）（すませてから）（〔堂に〕）

源氏（気分も）君はここちもいとなやましきに、雨すこしうちそそき、山風ひややかに吹きたるに、滝のよどみもまさりて、音高う聞こゆ。（滝壺の水かさ）すこしねぶたげなる読経の絶え絶えすごく聞こゆるなど、すずろなる人も、（心にしみて）（無関心な人間でも）場所が場所なので殊勝な気持になる所からものあはれなり。ましておぼしめぐらすこと多くて、まどろ（〔源氏は〕いろいろお考えになること）

一　僧都は、初夜のおつとめをすませてからと言ったけれども。

二　奥の部屋でも。前に「内の人々も心づかひすべかめり」（一九四頁）とあった。尼君はじめ女性たちの部屋である。

三　上品な感じだとお聞きになって。尼君とその周囲の女房たちだろうと察したのである。

四　人を呼ぶ合図。

五　奥の人たちは、意外に思うらしいけれども。

六　暗いなかでも、絶対に間違いのないはずでありますのに。「衆生は常に苦悩し　盲冥にして導師無く　苦の尽くる道を識らず　解脱を求むることを知らずして　長夜に悪趣を増し　諸の天衆を減損し　冥き従り冥きに入りて　永く仏の名を聞かざりしなり」（『法華経』化城喩品の偈）による。

七　どういうご案内をいたせばよろしいものやら。

八　うら若くあどけないあの方を見てから、私の旅寝の袖も恋しさの涙にかわくこともありません。「初草」「若葉」「露」の語は、いずれも先の尼君と女房の唱和を受けている。「露ぞ」に、少しも、の意を掛ける。

九　伺って分るような人もいらっしゃらないという事情は。年頃の姫などいない、ということ。

まれたまはず。初夜と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも人の寝ぬけはひしるくて、いと忍びたれど、数珠の脇息に引き鳴らさるる音ほの聞こえ、なつかしううちそよめく音なひ、あてはかなりと聞きたまひて、ほどもなく近ければ、外に立てわたしたる屏風の中をすこし引きあけて、扇を鳴らしたまへば、おぼえなきこちすべかめれど、聞き知らぬやうにやとて、ゐざり出づる人あなり。すこし退きて、「あやし、ひが耳にや」とたどるを聞きたまひて、「仏の御しるべは、暗きに入りても、さらに違ふまじかなるものを」とのたまふ御声の、いと若うあてなるに、うち出でむ声かひも、はづかしけれど、「いかなる方の御しるべにかは。おぼつかなく」と聞こゆ。「げに、うちつけなりとおぼめきたまはむも道理なれど、

初草の若葉のうへを見つるより
　旅寝の袖も露ぞかわかぬ

と聞こえたまひてむや」とのたまふ。「さらにかやうの御消息、う

（源氏は）　狭い家で　ものやさしく　衣ずれの音が　立てめぐらしてある　中ほどを　聞えぬふりもできまいということで　にじり出て来る人がある様子だ　聞き違えかしら　不審がるのを　（女房）お　（源氏）お導きは　気品があるので　（女房）ヒ　気がひけるけれども　分りかねますが　（源氏）　だしぬけのことと不審にお思いになるのも　お取次ぎ下さいませんか　（女房）一向に

一〇 まあ、当世風な。源氏の大胆さに驚く気持。以下、尼君の心中である。

一一 あの「若草」の歌を、どうしてお聞きになったことかと。源氏の歌が自分の歌を踏まえていることを不審がる。

一二 （返歌が遅くなっては）失礼になると思って。「情なし」は、風情がない。

一三 今宵だけの旅寝の枕に結ぶ草の露けさを、奥山の苔（私どもの山籠りの暮し）の露けさに比べないで頂きたいものでございます。源氏の歌の恋の気持をわざと無視して、下の句だけに対して答えたもの。

一四 このようなお取次ぎを介してのご挨拶は、まだ私はいたしたことがなく。

一五 （姫君に関して）間違った噂をお聞きになったのであろう。

一六 （源氏が）間の悪い思いをなさるといけません。ためらう尼君に対面をすすめるのである。

けたまはりわくべき人もものしたまはぬさまは、しろしめしたりげなるを、誰にかは」と聞こゆ。「おのづからさるやうありて聞こゆるならむと思ひなしたまへかし」とのたまへば、入りて聞こゆ。一〇 あな、今めかし、この君や世づいたるほどにおはするとぞ、おぼすらむ、さるにては、かの若草を、いかで聞いたまへることぞと、さまざま あやしきに、心乱れて、久しうなれば、情なしとて、

（ご存じでいらっしゃると思われますのに）（一体どなたになるを）（源氏）（しかるべきわけがあって申し上げるのであろうとお考えになって下さい）（〔尼君に〕）（姫君が男女のことが分る年頃でいらっしゃると）（お思いなのであろうか）（それにしては）（あれこれと不審なので）（時がたつので）

（尼君）一三
「枕ゆふ今宵ばかりの露けさを
深山の苔にくらべざらなむ

（乾きそうにございませんのに）

（源氏）一四
「かうやうの人伝なる御消息は、まださらに聞こえ知らず、ならはぬことになむ。かたじけなくとも、かかるついでにまめまめしう聞こえさすべきことなむ」と聞こえたまへれば、尼君、「ひがこと聞きたまへるならむ。いとはづかしき御けはひに、何ごとをかは答へきこえむ」とのたまへば、「はしたなうもこそおぼせ」と人々聞こゆ。

（乾がたうはべるものを）（はじめて）（恐縮ではありますが）（まじめに申し上げたいのことです）（ことがございます）（ご立派な）（女房たち）

一（応対するのは）年若い女なら困ったことでしょうが（年老いた私ならかまいますまい）。

二（あなたに）思われるに違いないこんな時ですが。「られ」は、受身の助動詞。初対面でこんなことを申し上げては……ですが、の意。

三 み仏はもとより（私の真意を）お見通しでいらっしゃいましょう。

四 こうまで。こんなにお親しく直接に対面して。

五 軽薄なお気持からとどうしてお思い申し上げましょうか。並々ならぬお気持からのことと存ぜられます。

六 おいたわしいお身の上と伺っておりますが。少女のことをいう。

七 親しくはぐくんでくれるはずの人（母や祖母などの肉親）にも先立たれてしまいましたので。（桐壺の巻参照）

八 あのお方も私と同じようなお身の上でいらっしゃるようですから。

九 どうお思いになられても構わないという気持で（思い切って）。

一〇 何か聞き間違えていらっしゃることでもおありではないのかと、憚られることでございます。

（尼君）「げに、若やかなる人こそうたてもあらめ、まめやかにのたまふ、かたじけなし」とて、ゐざり寄りたまへり。（源氏）「うちつけに、あさはかなりと御覧ぜられぬべきついでなれど、心にはさもおぼえはべらねば、仏はおのづから」とて、おとなおとなしう、はづかしげなるにつつまれて、とみにもえうち出でたまはず。（尼君）「げに思ひたまへ寄りがたきついでに、かくまでのたまはせ聞こえさするも、浅くはいかが」とのたまふ。（源氏）「あはれにうけたまはる御ありさまを、かの過ぎたまひにけむ御かはりにおぼしないてむや。いふかひなきほどの齢にて、むつましかるべき人にも立ちおくれはべりにければ、あやしう浮きたるやうにて、年月をこそ重ねはべれ。同じさまにものしたまふなるを、たぐひになさせたまへと、いと聞こえまほしきを、かかるをりはべりがたくてなむ、おぼされむところをも憚らず、うち出ではべりぬる」と聞こえたまへば、（尼君）「いとうれしう思ひたまへぬべき御ことながらも、聞こしめしひがめたることなどやはべらむと、つつ

（尼君）恐れ多いたじけなし
（尼君は）若やかなる人こそうたてもあらめ
（源氏）お心をこめてのおっしゃりよう
（尼君）軽薄な申しようと
（尼君が）落着いていて
（源氏は）すぐにもお言い出しになれないまれて
（尼君）私自身としてはそうも思われませぬから
（源氏）突然で
（尼君）思いもかけませぬこのような
（源氏）気のひける様子であるのに気おくれして
（源氏）お話をうかがいました申し上げますのも
（源氏）あの亡くなられたという母君の代りと私をお思い下さいませんか
（尼君）人と違った頼りない有様で
（尼君）本来なら大変うれしく存ぜられますお申し出でございますが
（尼君）こうした機会はめったにございませんので
（尼君）お仲間にして頂きたいと
（尼君）心から申し上げたいのですが
（尼君）空しく過しています
（尼君）ごく幼少の折に
（尼君）折に
（尼君）
（尼君）
（尼君）

一　かた苦しくおためらいにならないで、こうしたことを考えるようになりましたについては、人とは違う私の思いの深さをお見届け下さい。

三　まじめに取り合おうとなさらない。

一三　法華経を専心に読誦してその真理を観ずる行法。この行法を行う堂を法華三昧堂、法華堂ともいう。

明け方、源氏、僧都と歌を唱和する

一四　法華懺法。法華経を読誦して懺悔し、滅罪を願う行法。

一五　吹きすさぶ深山おろしの風に乗って聞えてくる懺法の声に煩悩の夢もさめて、感涙をさそう滝の音であることよ。

一六　はじめておいでのあなたがつい涙ぐまれて袖を濡らされた山川に、心を澄まして隠れ住む私の心は動かされることもありません。「さしぐみに」は、不意に。

ましうなむ。あやしき身一つを、（老い朽ちたこの私一人を）頼もし人にする人なむはべれど、（頼りに思っている人はおりますが）いとまだいふかひなきほどにて、（聞き分けのない年頃で）御覧じゆるさるるかたもはべりがたげなれば、（大目に見て頂ける点もとてもありそうに思われませんので）えなむうけたまはりとどめられざりける」とのたまふ。（お話を本気でうかがう気持にはなれません）

（源氏）「みなおぼつかなからずうけたまはるものを、（はっきり承知しておりますのに）所狭うおぼし憚らで、思ひたまへ寄るさまことなる心のほどを御覧ぜよ」と聞こえたまへど、（不似合いなことなのを）いと似げなきことを、（そうとも知らないで）さも知らでのたまふとおぼして、（〔尼君は〕）心解けたる御答へもなし。僧都おはしぬれば、（源氏）「よし、（まあ）かう聞こえそめはべりぬれば、（心丈夫です）いと頼もしうなむ」とて、（〔屏風を〕おしめになった）おしたてたまひつ。（お願いの口火を切りましたから）

暁がたになりにければ、法華三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしに（山から吹きおろす風に乗って）つきて聞こえくる、いと尊く、滝の音に響きあひたり。

（源氏）一五
吹きまよふ深山おろしに夢さめて
　涙もよほす滝の音かな

（僧都）一六
「さしぐみに袖ぬらしける山水に
　すめる心は騒ぎやはする

一 例の聖。前に「老いかがまりて室の外にもまかでず」（一八三頁）とあったが、僧都の坊に参上したものと見える。
二 護身法。心身を守護する修法。印を結び陀羅尼を唱える。
三 歯が透いてゆがんで聞えるのも、しみじみと尊く。「功づく」は、修行の年功を積んだ感じ。
四 善法を持して散乱させない意で、仏菩薩の説いた呪語。梵語そのままを漢訳せずに唱える。梵語の音そのものに災厄をはらう呪力があるとされた。
五 京からのお迎えの家来たち。
六 草木のなりもの。果物、木の実のたぐい。間食に用いる。

源氏、僧都、聖と惜別の歌を詠み交わす

七 今年いっぱいの山籠りの誓い。前に「この二年籠りはべるかた……」（一八四頁）とあったから千日の籠山であろう。
八 清らかな山籠り生活に深く心ひかれましたが。
九 大宮人に、帰ってこの山桜の美しさを話しましょう、花を散らす風の吹く前に来て見るように。
一〇 あなた様にお目にかかりましたのは優曇華の花の咲くのにめぐり合せたような気持で、この奥山の桜の美しさに目も移りません。「優曇華」は、三千年に一度咲き、この花が咲くと金輪王が出現して正法をもって世界を統治すると説かれる。

耳馴れはべりにけりや（もう聞き馴れてしまいました）」と聞こえたまふ。明けゆく空は、いといたう霞みて、山の鳥ども、そこはかとなくさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花ども、いろいろに散りまじり（色とりどりに）、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみありくもめづらしく見たまふに、なやましさもまぎれ（気分の悪いのも忘れてしまわれた）果てぬ。聖、動きもえせねど（身動きも不自由だが）、とかうして護身参らせたまふ。かれたる声の、いといたうすきひがめるも、あはれに功づきて、陀羅尼誦みたり。

御迎への人々参りて（よくおなりになったお祝いを言上し）、おこたりたまへるよろこび聞こえ、内裏よりも御とぶらひあり（お見舞）。僧都、世に見えぬさまの御くだもの（世間では見られないような）、何くれと、谷の底まで掘り出で、いとなみきこえたまふ（源氏のために奔走なさる）。「今年ばかりの誓ひ深うはべりて、御送りにもえ参りはべるまじきこと（京までお見送りにも参上できませぬこと）、なかなかにも思ひたまへらるべきかな（が残りそうに思われることでございます）」など聞こえたまひて、大御酒参りたまふ。（源氏）「山水に心とまりはべりぬれど、内裏よりおぼつかながらせたまへるも（帝からご心配とのお言葉がありましたのも）、かしこければなむ（恐れ多いことですので）。今、この花のをり過ぐさず参り来（そのうち桜）

一一 時あって一度咲くというその花は、めったに出会えぬということですのに。「かくの如きの妙法は諸仏如来の　時に乃ち之を説きたまふこと　優曇鉢華の時に一たび現るるが如きのみ」（『法華経』方便品）による。

一二 素焼きのさかずき。

一三 引き籠ったままの奥山の庵の松の扉を珍しく開けて、まだ見たこともない花のようなお顔を拝することです。

一四 密教の仏具。煩悩打破の象徴とされる金剛杵の一種。

一五 『日本書紀』推古天皇三年の条に、聖徳太子が高麗僧恵慈を師としたことが見え、同じ年百済僧慧聡来朝のことが見える。本文の記述については確たる証拠もないが、百済から仏教をはじめとして文物の渡来したことは『書紀』に所見が多い。

一六 菩提樹科の喬木。その果実の核は固く美しい紋があって数珠玉に用いられる。

一七 玉で飾ったのを。

一八 五葉松の枝に付けて。贈り物を木草の枝に付けるのは当時の風習である。

一九 紺碧の瑠璃（玉の一種。あるいはガラス）の壺。衆生の病苦を救うとされた薬師瑠璃光如来の像は、普通左手に薬壺を持っているところから思いついた趣向。

む。

（源氏）九 宮人に行きて語らむ山桜
　　風よりさきに来ても見るべく」

とのたまふ御（お身のこなし）もてなし、声づかひさへ、目もあやなるに、（まぶしいほどご立派なので）

（僧都）一〇 優曇華の花待ち得たるここちして
　　深山桜に目こそ移らね

と聞こえたまへば、ほほゑみて（微笑して）、「時ありて一度ひらくなるは、かたかなるものを」とのたまふ。聖、御土器賜はりて、（源氏）一一

（聖）一二 奥山の松のとぼそをまれにあけて
　　まだ見ぬ花の顔を見るかな

とうち泣きて見たてまつる。聖、御まもりに、独鈷（一四）たてまつる。見たまひて、僧都、聖徳太子（一五）の百済（一六）より得たまへりける金剛子（一七）の数珠の玉の装束（一八）したる、やがてその国より入れたる筥（一九）の唐めいたるを、（百済から入れて来たままの）（唐風なのを）透きたる袋に入れて、五葉の枝に付けて、紺瑠璃の壺どもに、御薬（透かし編みの）

ども入れて、藤、桜などに付けて、所がらにふさわしいにつけたる御贈物ども、ささげたてまつりたまふ。君は、聖よりはじめ、読経しつる法師の布施、そのほか用意の品々をいろいろ〔京へ〕取りに人をやっておかれたのでまうけの物ども、さまざまに取りにつかはしたりければ、そのわたりの山がつまで、木こりにまでさるべき物ども相応の物を賜ひ、御誦経などして出でたまふ。

内に、僧都入りたまひて、かの聞こえたまひしこと、あの源氏のお言葉をまねびきこえたまへど、「ともかくも、〔尼君に〕そのままお伝えするけれども〔尼君〕どうとも今はご返事の申し上げようがありませんただ今は聞こえむかたなし。もし御志あらば、いま四五年を過ぐしてこそは、ともかうも」とのたまへば、三さなむ、と同じさまにのみあるを、前と同じご返事なのを〔源氏は〕がっかりなさる本意なしとおぼす。御消息、僧都のもとなるちひさき童して、童にことづけて

〔源氏〕四

夕まぐれほのかに花の色を見て
けさは霞の立ちぞわづらふ

御返し、

〔尼君〕五

まことにや花のあたりは立ち憂きと
霞むる空のけしきをも見む

一 誦経のための布施などなさって。なおも祈禱をするように依頼するのである。「誦経」は、誦経依頼のための布施の意。

源氏、尼君と歌を詠み交わす

二 いずれなりと（ご返事申し上げましょう）。

三 しかじか。僧都から尼君の言葉を源氏に伝えるのである。

四 （昨日の）夕暮れ時ちらりと美しい花の色（若君）を見ましたので、今朝はここを立ち去りがたい思いです。「霞の」は、「立ち」に掛る序。

五 ほんとうに花のあたりは立ち去りにくいのでしょうか、そんなことをおっしゃるあなた様のお気持を見届けたいことでございます。「霞むる」は、ほのめかす意を掛ける。

六 左大臣家。源氏の舅左大臣が子息たちを源氏の迎えにつかわしたのである。

七 左大臣の子息たち。「君達」は、貴族の子弟をいう語。

八 左大臣の長男。桐壺巻末に蔵人の少将、帚木に頭の中将と見える。

源氏、迎えの君達と宴を張ってのち帰京

九 頭の中将の異腹の弟。夕顔（一六〇頁）に蔵人の弁と見える。左中弁は、太政官の左弁官局（中務、式部、治部、民部の四省に関する事務を取り扱う）の次席。正五位上相当。

一〇 扇で軽く左の掌を打って。拍子を取るさま。

一一 催馬楽、呂「葛城」の歌詞。「葛城の寺の前なるや　豊浦の寺の西なるや　榎の葉井に白玉沈くや　真白玉沈くや　おおしとど　おおしとど　しかしては　国ぞ栄えむや　我家らぞ　富せむや　おおしとど　としとんど　おおしとんど　としとんど」

一二 （左大臣家の子息は）どなたも人並みすぐれた貴公子であるが。

一三 その身の上に不吉なことが起りはしないかと思われるほどの美しいご様子なので。美しい人は神に魅入られて夭折することがあると信じられていた。

一四 中国伝来の竹製の竪笛。

一五 木製の鮑の上に十七本の竹管を立てた管楽器。

一六 七絃の琴。中国でもっとも重んぜられた楽器である。わが国では延喜、天暦の頃までは盛んに演奏されていたが、この物語の制作された当時は一般にほとんど用いられなくなっていた。源氏は琴の名手とされている。（須磨、明石、若菜下などの巻に見える）

風雅な筆跡でまことに品のある文字を　無造作に

と、よしある手のいとあてなるを、うち捨て書いたまへり。

〔源氏が〕お乗りになるところへ　行先もおっしゃらずにお出かけになったことです

御車にたてまつるほど、大殿より、「何方ともなくておはしましにけること」とて、御迎への人々、家来たち君達などあまた参りたまへり。頭の中将、左中弁、源氏のおあとを追って来て　そのほかの君達もしたひきこえて、「かうやうの御供は、つかうまつりはべらむ、と思ひたまふるを、思っておりますのに　つとめさせて頂こう　お見捨てになったとは　あさましくおくらさせたまへること」と、うらみきこえて、「いといみじき花の蔭に、足を止めずに　すばらしいしばしもやすらはず、立ち帰りはべらむは、飽かぬわざかな」とのたまふ。岩隠れの苔の上に並みゐて、酒を召上がる　土器参る。落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとなり。頭の中将、懐なりける笛取り出でて、横笛　趣のある　つまらないことです吹きすましたり。弁の君、扇はかなううち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」と歌ふ。人よりは異なる君達を、源氏の君、いといたう苦しそうに　うちなやみて、岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆゆしき御ありさまにぞ、何ごとにも目移るまじかりける。例の、篳篥吹く随身、笙の笛持たせたるすきものなどあり。僧都、琴をみづから持て参り　ほかの何ごとにも目が移りそうにないのであった　例のごとく　〔従者に〕　風流人

て、「これ、ただ御手一つあそばして、同じうは、山の鳥もおどろかしはべらむ」と、切に聞こえたまへば、「乱りごこちいと堪へがたきものを」と聞こえたまへど、けにくからずかき鳴らして、皆立ちたまひぬ。飽かずくちをしと、いふかひなき法師、わらはべも、涙を落としあへり。まして内には、年老いたる尼君たちなど、まださらにかかる人の御ありさまを見ざりつれば、この世のものともおぼえたまはずと聞こえあへり。僧都も、「あはれ、何の契りにて、かかる御さまながら、いとむつかしき日本の末の世に生まれたまへらむと見るに、いとなむ悲しき」とて、目おしのごひたまふ。この若君、をさなごこちに、めでたき人かなと見たまひて、「宮の御ありさまよりも、まさりたまへるかな」などのたまふ。「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、うちうなづきて、いとようありなむと、おぼしたり。雛遊びにも、絵描いたまふにも、源氏の君と作り出でて、きよらなる衣着せ、かしづきたまふ。

一 （源氏は）この世の人とも思われないと皆でお噂申し上げた。「おぼえたまはず」は、思われなさらないの意。「たまふ」は、源氏に対する敬語。

二 末世。末法時ともいう。正法時（釈迦入滅後五百年、像法時（正法時の後の千年、仏教信仰が形式に流れた時代）に次ぐ一万年の仏法衰退期。当時、永承七年（一〇五二）から末法時に入ると信じられていた。

三 父宮。兵部卿の宮。

四 人形遊び。

源氏、参内して帰京の挨拶をし、左大臣に伴われてその邸におもむく

五 天台宗、真言宗での僧職の名。推薦により宣旨をもって補せられる。もとは梵語で、軌範師（弟子の行いを正してその模範となる高僧）の意。
六 朝廷に今まで知られていなかったことだ。
七 源氏の舅、左大臣。

君はまづ内裏に参りたまひて、日ごろの御物語など聞こえたまふ。いといたう衰へにけり、とて、ゆゆしとおぼしめしたり。聖の尊かりけることなど問はせたまふ。くはしく奏したまへば、「阿闍梨などにもなるべき者にこそあなれ。行ひの労は積りて、公にしろしめされざりけること」と、尊がりのたまはせけり。大殿、参りあひたまひて、「御迎へにもと思ひたまへつれど、忍びたる御ありきに、いかがと思ひ憚りてなむ。のどやかに一二日うち休みたまへ」とて、「やがて御送りつかうまつらむ」と申したまへば、さしもおぼさねど、引かされてまかでたまふ。わが御車に乗せたてまつりたまうて、みづからは引き入りてたてまつれり。もてかしづききこえたまへる御心ばへのあはれなるをぞ、さすがに心苦しくおぼしける。

殿にも、おはしますらむと心づかひしたまひて、久しう見たまはぬうちに、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。女君、例の、はひ隠れて、とみにも出でたまはぬを、大臣、切に聞

源氏
ここ数日来の
〔帝は〕心配に
修行の功績は大きいのに
〔左大臣〕
〔私の邸で〕
〔源氏は〕お気は進まないが
〔源氏を〕
〔帝〕
お出ましなので
〔左大臣〕これからお供申しましょう
左大臣邸
〔源氏が〕いらっしゃるであろうと
〔源氏は〕
ご自分は
る左大臣のお気持のねんごろなのを
こうして源氏を大事にお世話申し上げなさ
〔源氏が〕
おいでになら
引っ込んだままで
すぐにも
強く

八 引きずられる格好で（左大臣邸に）退出なさる。
九 末席にお乗りになる。牛車は後ろの乗り口の方が末席。

源氏、葵の上と不仲

一〇 ますます、玉で飾った高殿よろしく美しく飾り立て。「玉の台」は、「玉台」の訓読語。
一一 葵の上。

一「ものの姫君」で一語。物語絵などの姫君。

二 周囲の女房のお世話で座に坐らせられたまま。

三 心の中の思いをそれとなく口にしたり、今度の北山行きのお話をしたりする場合にも。以下、「あはれならめ」まで、源氏の心中。

四 しゃれたご返事でもなさるようなら情愛も湧こうというものなのに。

五 問わないのはほんとにつらいものでしょうか。源氏の「問はせたまはぬこそ」の言葉を受けて、問われぬ私の気持もお分り下さいましょう、という皮肉である。引歌は明らかでないが、『源氏釈』に「君をいかで思はむ人に忘らせて問はぬはつらきものと知らせむ」――あなたを何とかしてあなたのお好きな人に忘れさせて問わないのはつらいものだと思い知らせて上げたい（出所不明の古歌）をあげる。

六 たまに何かおっしゃるかと思えば、とんでもないことをおっしゃいますね。

七 「問はぬはつらき」などという間柄は（忍ぶ恋仲で言うことで）。

八 いろいろ手を変えてあなたの気持をためそうとしておりますのを、いよいよお嫌いになるのでしょう。

おすすめ申して こえたまひて、やっとのことで出ておいでになったからうしてわたりたまへり。ただ絵に描きたるものの姫君のやうに、身動きもたやすくおできにならずしすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、きちんとお行儀よくていらっしゃるのでうるはしうてものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山道の物語をも聞こえむ、話のしがいもあるようにいふかひありて、をかしううち答へたまはばこそあはれならめ、〔葵上は〕少しもうちとけずよそよそしく気づまりなお相手だとお思いで世には心も解けず、うとくはづかしきものにおぼして、年のかさなるに添へて、御心のへだてもまさるを、いと苦しく思はのので（源氏）ずに、「時々は世の人並みの妻らしの常なる御けしきを見ばや。堪へがたうわづらひましたのをもはべりしをも、いかがとだに問はせたまはぬこそ、めづらしからぬはありませんがことなれど、なほうらめしう」と聞こえたまふ。からうして、「問はぬはつらきものにやあらむ」と、後目に見おこせたまへるまみ、いとはづかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。「まれまれは、あさましの御ことや。問はぬなどいふ際は、異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにはしたなき御もてなしを、もしおぼしなほるをりもやと、とざまかうざまにこころみきこゆる

病気に苦しみ 人並みの妻らしい いかがですかともお尋ね下さらないのは 今にはじまったことで 心外な 流し目にこちらをご覧になった目もと 近づきがたい感じで 私たちとは違いましょう 情けないおっしゃりようです いつまでたっても変らぬ取り付く島もないお仕打ちですが 考え直される折もあろうかと

九 仕方ない、命さえ長らえていれば（私の気持もいつかはお分りいただけよう）。引歌があろうが、明らかでない。

一〇 御帳台。（図録九参照）

一一 あれこれと女のことについて思い悩まれることが多い。「世」は、男女の仲。葵の上のこと、藤壺のこと、そのほか。

源氏、北山の少女を忘れかねて、尼君と文通

一二 心にかかる北山の少女の成長ぶりをやはりこの目で見たいのだが。「若草」は、一九一頁の尼君の歌によってこの少女を呼んだもの。以下、源氏の心中。

一三 少女の父。前出（一九五頁）。

一四 （あの少女は）どうしてご一族のあの方に似ておいでなのだろう、兵部卿の宮も藤壺も同じ后の御子だからなのだろうか（少女もその血を引いているのであろう）。

先帝
| 兵部卿宮―少女（紫上）
后
| 藤壺女御

一五 藤壺との縁故（少女と藤壺と血のつながりがあること）にとても親しみが感じられるので。

一六 これほどまでに（お手紙でも）申し上げることからしても。

ほど、いとどおぼし疎むなめりかし。よしや命だに」とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、〔源氏は〕誘いあぐねなさって ふとも入りたまはず、聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、横になられたが なま心づきなきにやあらむ、何となくおもしろくないのであろうか ねぶたげにもてなして、とかう世をおぼし乱るること多かり。

一二 この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを、似げないほどと思 不似合いな年頃と〔尼君たちが〕 へりしも道理ぞかし、言ひ寄りがたきことにもあるかな、いかにか 交渉しにくいことだなあ 何とか手立てして まへて、ただ心やすく迎へ取りて、明け暮れのなぐさめに見む、兵 気軽に 部卿の宮は、いとあてになまめいたまへれど、つややかなお美しさでもいらっ にほひやかになども 上品でおきれいな方だが しゃらないのに 一四 あらぬを、いかでかの一族におぼえたまふらむ、ひとつ后腹なれば 〔源氏は〕 にや、などおぼす。一五 ゆかりいとむつましきに、いかでかと、深うお 何とかしてと ぼゆ。翌日 またの日、御文〔北山に〕たてまつれたまへり。僧都にもほのめかした それとなくお書きに なったようだ まふべし。尼上には、

（源氏）取り合っても下さらなかったご様子に気がひけまして もて離れたりし御けしきのつつましさに、思ひたまふるさまをも 心に思っておりますことも存分に 申し上げきれずにしまいましたことを残念に存じます えあらはし果てはべらずなりにしをなむ。一六 かばかり聞こゆるにて

一 小さく結び文にして。結び文は、細かく折り畳んで結んだ手紙で、恋文に用いられる形式。少女あての恋文という形にしたものを同封した。

二 山桜の美しい幻は私の身体から離れることもありません、心の総てをそちらに置いて来たのですが。「山桜」を少女にたとえる。

三 「朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」（『拾遺集』巻一春上、元良親王）による。山桜が散らぬか（少女がどこかへ引き取られはせぬか）と危ぶむ気持。

四 （先日）お通りすがりの折のお話は。

五 まだ難波津の歌もちゃんと続け書きできないようなことでございますから。「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」と次の二一一頁の「あさか山」の歌は、当時、幼児の習字の最初の手本とされたもの（『古今集』仮名序）。仮名は、続け書きするので、はかばかしく字も書けないことを「続けはべらざめれば」と言った。

六 （「夜の間」などと仰せられて）激しい山風が吹いていずれは散ってしまう峰の桜の散らない間だけお気持をとめられたとは、ほんの気まぐれではございますまいか。「尾の上の桜」「心とめける」は、源氏の歌の措辞を受け、「嵐吹く」「散らぬ間」は、「夜の間の風も……」を受ける。

（並々ならぬ私の気持の深さをおわかり頂けましたら）も、おしなべたらぬ志のほどを御覧じ知らば、いかにうれしう。などあり。中に小さく引き結びて、

一 おもかげは身をも離れず山桜
心の限りとめて来しかど

（心配でなりません）二 夜の間の風も、うしろめたくなむ。

（筆跡）とあり。御手などはさるものにて、（いうまでもなく）ただはかなうおし包みたまへる（ほんの無造作に）さまも、さだすぎたる御目どもには、（年をとった〔尼君たちの〕）目もあやに、（まぶしいばかり）このましう見ゆ。（すばらしく）（まあ困りました）あなかたはらいたや、（どうお返事申そうと）いかが聞こえむと、（〔尼君は〕）おぼしわづらふ。（尼君）四 ゆくての御ことは、（どうでもよいお話のようにも存ぜられましたが）なほざりにも思ひたまへなされしを、（わざわざの）ふりは（お手紙を頂きましては）へさせたまへるに、（お返事の申し上げようもございません）聞こえさせむかたなくなむ。五 まだ難波津をだにはかばかしう続けはべらざめれば、（お話になりませぬ）かひなくなむ。（それにしても）さても、

六 嵐吹く尾の上の桜散らぬ間を
心とめけるほどのはかなさ

七 いとどうしろめたう。

七（お歌を拝見いたしまして）一層気がかりでございます。「夜の間の風も、うしろめたくなむ」を受ける。

八 前の垣間見の場面に「少納言の乳母とぞ人言ふめるは……」（一九〇頁）とあった。

九 なんともお目の届かぬところのない好色心でいらっしゃることだ。以下、惟光の心。

一〇（自分も）垣間見した時のことを思い出して（源氏の好色ぶりに）感心する。

一一 例によって、中に（結び文にして）。

一二 その一字一字のたどたどしいお手紙がやはり拝見したいのです。尼君の手紙に「まだ難波津をだにはかばかしう続けはべらざめれば」とあったのを受ける。

一三 あなたを浅くも思っていませんのに、どうして相手になって下さらないのでしょう。「あさか山」は、「浅く」を導き出す序、「山の井の」は、「影」に言いかけて「かけ離る」の語を導く。「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」（『万葉集』巻十六。『大和物語』百五十五段。『古今六帖』二には下の句「浅くは人を思ふものかは」）による。尼君の手紙に「まだ難波津をだに……」とあったので、同じ習字の手本として与えられるこの歌を思い寄せたもの。

とあり。僧都の御返りも同じさまなれば、くちをしくて、二三日ありて、惟光をぞたてまつれたまふ。「少納言の乳母といふ人あべし。尋ねて、くはしう語らへ」などのたまひ知らす。さもかからぬ隈なき御心かな、さばかりいはけなげなりしけはひをと、まほならねども、見しほどを思ひやるもをかし。わざとかう御文あるを、僧都も かしこまりきこえたまふ。少納言に消息して会ひたり。くはしく、おぼしのたまふさま、おほかたの御ありさまなど語る。言葉多かる人にて、つきづきしう言ひ続くれど、いとわりなき御ほどを、いかにおぼすにかと、ゆゆしうなむ誰も誰もおぼしける。御文にも、いとねむごろに書いたまひて、例の、中に、「かの御放ち書きなむ、なほ見たまへまほしき」とて、

（源氏）一三

あさか山浅くも人を思はぬに
　　など山の井のかけ離るらむ

御返し、

（源氏）一四

（使者として）
（源氏）
（八）
（乳母）
（お言い含めになる）
（九）
（相談せよ）
（あんなに子供っぽい様子の人だったのにと）
（はっきりとではな）
（一〇）
（恐縮の由を申し上げる）
（申し入れて会った）
（惟光は）
（多弁な人）
（日ごろのご様子）
（〔源氏の〕お気持やお言葉）
（物で）
（もっともらしくいろいろ話すが）
（とても無理なお年なのに）
（〔源氏は〕どういうおつもりなのかと）
（とても心配なことに僧都も尼君も）

一　うっかり汲んでみて後悔したと聞きました山の井の浅いお心のまま、どうして姫をご覧になれましょう。とても姫はさし上げられません。「くやしくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水」――薄情なあなたとかかわり合って私の袖は涙に濡れるのみです（『古今六帖』一一）を踏まえる。

藤壺との逢瀬

二　藤壺の女御。内親王であるので「宮」と呼ぶ。桐壺の巻に「先帝の四の宮」（一三三頁）とあった。

三　どのご婦人の所にもお出かけにならずに。

四　藤壺づきの女房の名。王は親王宣下のない皇子の称であるから、皇族出身で宮仕えに出た人。命婦は中級の女房の称。源氏はこの人につきまとって藤壺との逢瀬をとりはからうようにせがむのである。最初に源氏を手引きした人物とおぼしい。

五　とても現実のこととは思われない（まるで夢の中の逢瀬のような気がする）のは、つらいことである。たまさかの、はかない逢瀬を悲しむ源氏の気持。

六　思いもかけなかった悪夢のような逢瀬を思い出されるだけでも。源氏との最初の逢瀬を暗示する書き方。

（尼君）一
汲みそめてくやしと聞きし山の井の
浅きながらや影を見るべき

（源氏に）（少納言）尼君のご病気が多少とも快方に向われましたら
惟光も同じことを聞こゆ。「このわづらひたまふことよろしくは、
もうしばらくして　お邸にお帰りになってから　何分ともご返事申し上げます
このころ過ぐして、京の殿に渡りたまひてなむ、聞こえさすべき」
（源氏は）
とあるを、心もとなうおぼす。

ご病気になられて　（宮中を）
藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかでたまへり。上の、帝がお気
をもまれご心配申し上げなさるご様子も　（源氏は）おいたわしく
おぼつかなかり嘆ききこえたまふ御けしきも、いといとほしう見たて
せめてこうした折にでもと　気もそぞろになって
まつりながら、かかるをりだにと、心もあくがれまどひて、何処に
所在なく
も何処にも、まうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれ
（命婦が）どう
とながめ暮らして、暮るれば、王命婦を責めありきたまふ。いかが
無理な首尾の末やっとお逢いしたがその間も
手立てしたものか
たばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、うつつとは
おぼえぬぞ、わびしきや。宮も、あさましかりしをおぼしいづるだ
あれ以来一時も忘れられぬお悩みの種なので　せめてあれきりで終りにしようと深く決心され
に、世とともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深うおぼし
ていたのに　情けなくて　とてもつらそうなご様子ではあるものの　やさしく可憐
たるに、いと心憂くて、いみじき御けしきなるものから、なつかし

七　どうしてこのお方には、少しの欠点すらおありでないのかと。欠点でもあれば、自分の思いも少しはさめることもあろうに、という気持。

八　暗いという名のくらぶ山にでも泊りたいところだけれども。くらぶ山ならば、いつまでも夜が明けないだろうから、という気持。「くらぶの山」（「くらぶ山」ともいう）は、歌枕。『能因歌枕』には伊賀とし、他の歌学書には山城とする。

九　お逢いしても再び逢うこともむつかしい、夢のような逢瀬ですので、夢の中にこのまま消えてしまいたい思いです。「逢ふ夜」に「合ふ世」を掛ける。「夢が合ふ」とは、夢に見たことが現実になる意。「見る」「合ふ」「夢」は縁語。

一〇　世間の語り草として人は語り伝えるのではないでしょうか、この上もなく不仕合せなこのわが身をいつまでもさめることのない夢の中のものとしたにしましても。

一一　王命婦。悲しみに茫然として帰ろうともしない源氏に、脱ぎ捨てて置いた直衣などをかき集めて持って来て、帰り支度をうながすのである。

一二　お邸（二条の院）に帰られて。

一三　いつものように藤壺は手にもお取りにならないというご返事ばかりなので。王命婦などが、そう源氏に伝える趣。

源氏と藤壺の懊悩　藤壺、源氏の子をやどす

なぞぶりで　馴れ馴れしくせず　奥ゆかしく気品のあるご態度などが

うらうたげに、さりとてうちとけず、心深うはづかしげなる御もてなしなどの、やはり人とは違っておられるのを　なほ人に似させたまはぬを、などか、なのめなることだにうちまじりたまはざりけむと、つらうさへぞおぼさるる。何ご[源氏は]　積る思いのどれだけを申し上げきれようか　とをかは聞こえ尽くしたまはむ。くらぶの山に宿りも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、なまじ逢わぬがましな悲しい逢瀬である　あさましうなかなかなり。

（源氏）見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちに
　　やがてまぎるるわが身ともがな

（涙に）と、むせかへりたまふさまも、お気の毒なので　さすがにいみじければ、

（藤壺）世語りに人や伝へむたぐひなく
　　憂き身をさめぬ夢になしても

（藤壺の）おぼし乱れたるさまも、恐れ多い　いと道理にかたじけなし。命婦の君ぞ、御（源氏の）直衣などは、かき集め持て来たる。殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ。

御文なども、例の、御覧じ入れぬよしのみあれば、常のことなが

一　またどうしたのかと。前に瘧病をわずらったばかりなのに、また具合でも悪いのかと。

二　（藤壺は）人知れず思い当られることもおありなので。悪阻ではないかと思うのである。

三　懐妊三カ月。源氏とのことは四月頃、今は六月頃である。

四　（藤壺は）言いようもないご宿運（源氏の胤をやどしたこと）がつくづくと情けない。

五　周囲の女房たちは、源氏とのことなど考えも及ばないことなので。

六　藤壺の乳母の子の弁。「乳母子」は、主人と特別に親密な関係にあるので、入浴など最も身近なお世話をする。

七　王命婦。

八　どうしても逃れるわけにはいかなかった（藤壺の）ご宿運を。源氏の胤をやどしたこと。

〔源氏は〕悲しみに正気もなく らも、つらういみじうおぼしほれて、内裏へも参らで、二三日籠り おはすれば、一またいかなるにかと御心動かせたまふべかめるも、恐 〔帝が〕ご心配あそばすらしいのも 〔源氏は〕罪深いことだと ろしうのみおぼえたまふ。宮（藤壺）も、なほいと心憂き身なりけりとおぼ 情けない し嘆くに、なやましさもまさりたまひて、とく参りたまふべき御使 ご気分の悪さも 早く参内なさるようにとの勅使が度々 あるけれども そのお気持にもなれない しきれど、おぼしも立たず。まことに御ここち例のやうにもおはし いつものようでもおありでな いのはどうしたことかと まさぬはいかなるにかと、二人知れずおぼすこともありければ、心憂 どうなることかと く、いかならむとのみおぼし乱る。暑きほどはいとど起きもあがり たまはず。三月（みつき）になりたまへば、いとしるきほどにて、人々見たて はっきり分るくらいで 女房たちがそれと お気づき申すにつけても まつりとがむるに、四あさましき御宿世（すくせ）のほど心憂し。五人は思ひ寄ら ぬことなれば、この月まで奏（そう）せさせたまはざりけることと、おどろ 帝にご報告なさらなかったとはと 意外にお思い申し上げる はっきり源氏の子と思い当られる節もあったのだった ききこゆ。わが御心一つには、しるうおぼしわくこともありけり。 ご自身では 御湯殿（ゆどの）などにも親（した）しうつかうまつりて、何ごとの御けしきをもしる ご奉仕して く見たてまつり知れる、御乳母子（めのとご）の弁（べん）、命婦（みやうぶ）などぞ、あやしと思へ り存じ上げている ど、かたみに言ひあはすべきにあらねば、八なほのがれがたかりける お互いに口にすべきことではないから

九 王命婦。源氏とのことを知るのはこの人だけである。

一〇（藤壺にとりついた）物の怪のせいではっきりせず。前に「なやみたまふことありて、まかでたまへり」とあったのは、物の怪のせいであったらしい。

一一 夢の意味を解く夢解きの者。夢は、将来起ることの予兆と考えられていた。

源氏、不思議な夢を見て、藤壺の懐妊の真相を思い合せる

一二 及びもつかず、思いもよらぬ内容のことを、夢の意味として解いた。源氏が天子の父となるであろうということ。

一三 ご運勢の中に順調にゆかないところがあって。後の須磨退居のこと。この夢合せの言葉は、桐壺の巻の高麗の相人の言葉（三一頁）、後の澪標の巻に見える宿曜の占いとともに源氏の将来を予言するもの。源氏の公的経歴について長期的な構想の骨組みのあったことがうかがえる。

一四 ますますせつなげなお言葉を尽して逢って下さるよう懇願なさるけれども。

一五 困ったことになったという思いもいよいよ強くて。密通の結果、皇子が生れるという事態に、自分の責任も重大だという思いが強まるのである。

御宿世をぞ、命婦はあさましと思ふ。内裏には、御ものののけのまぎれにて、とみにけしきなうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。見る人もさのみ思ひけり。いとどあはれに限りなうおぼされて、御使などのひまなきもそら恐ろしう、ものをおぼすこと、ひまなし。

中将の君も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなうおぼしもかけぬ筋のことを合はせけり。「その中に違ひめありて、つつしませたまふべきこととなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて、「みづからの夢にはあらず、人の御ことを語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな」とのたまひて、心のうちには、いかなることならむとおぼしわたるに、この女宮の御こと聞きたまひて、もしさるやうもやとおぼしあはせたまふに、いとどしくいみじき言の葉尽くしきこえたまへど、命婦も思ふに、いとむくつけう、わづらはしさまさりて、さらにたばかるべきかたなし。はかなき一行の御返りのたまさかな

（源氏）
（夢解き）一三
（源氏は）こと面倒と思って
（源氏）
ほかのお人の夢
藤壺の宮ご懐妊の噂を
一四
一五
（藤壺から）ほんのひとくだり

何たることと驚き恐れる
帝には
すぐにはご懐妊の徴候もそれとお見えでなかったように奏上したらしかった
〔帝は〕一層この上なくいとしく思し召されて
お見
周囲の女房も
舞の勅使が絶えずあるのも〔藤壺は〕
源氏
ただごとでない
異様な夢を
質問おさせになると
お身を慎まねばならぬことがございます
事実となるまで
ほかに誰にも話してはならぬ
考えておられたところ
もしや自分のお子ではないかとお思い合せになるので
まことに恐ろしく
お返事がたまにはあったのも
何とも計らいようがない

七月に藤壺参内

〔藤壺は〕参内なさった　〔帝は〕ご懐妊のこととていとしくて　以前にもますご寵愛ぶりはこの上もない

りしも、絶え果てにたり。七月になりてぞ参りたまひける。めづらしうあはれにて、いとどしき御思ひのほど限りなし。すこしふくらかになりたまひて、うちなやみ、面痩せたまへる、はた、げに似るものなくめでたし。例の、明け暮れこなたにのみおはしまして、御遊びもやうやうをかしき空なれば、源氏の君も暇なく召しまつはし、つつ、御琴、笛など、さまざまにつかうまつらせたまふ。いみじう隠しておられるが　こらえきれない様子が　つつみたまへど、忍びがたきけしきの漏り出づるをりをり、宮も、さすがなる事どもを多くおぼし続けけり。

〔帝は〕ご気分すぐれず　藤壺の御殿にばかりお出ましになって　音楽の乗る秋の季節なので　お側にお引きつけになって　ご下命になる　〔源氏は〕懸命になって　藤壺

かの山寺の人は、よろしうなりて出でたまひにけり。京の御住処尋ねて、時々の御消息などあり。同じさまにのみあるも道理なるうちに、この月ごろは、ありしにまさる物思ひに、異事なくて過ぎゆく。秋の末つかた、いとものの心細くて嘆きたまふ。月のをかしき夜、忍びたる所に、からうして思ひ立ちたまへるを、時雨めいてうちそそく。おはする所は六条京極わたりにて、内裏よりなれば、す

尼君　少しよくなられて　北山から京に帰られた　〔源氏から〕お便り　ここ幾月かは　以前にます　〔藤壺ゆえの〕お悩みに　お忍びの通い所に　〔源氏は〕さびしくてたまらず　おいでになる所は　宮中からなので

一「琴」「笛」、それぞれに絃楽器、管楽器の総称。御遊（帝の御前での演奏会）には廷臣それぞれ得意の楽器を演奏するが、源氏はどの楽器にも堪能だったという趣。

二（源氏につれなくはなさっているものの）さすがにあれこれといろいろお思いになるのであった。源氏に対するせつない複雑な思いを宮も否定しがたいということ。

北山の尼君、帰京　源氏、その邸を訪れて、あどけない少女の声を聞く

三 尼君からのお返事が依然としてはかばかしくないのももっともと思われる上に。

四 ほかの事どころでなく日が過ぎてゆく。姫君のことを思う余裕もなかったのである。

五 六条大路と京極大路の交差するあたり（図録二参照）。その邸の位置から、夕顔の巻の六条あたりの高貴の女性（後の葵の巻の六条の御息所）を思わせる。

六　北山の尼君の亡くなった夫（一九五頁参照）。この家に尼君が帰って来ている。

七　来意を告げよ。

八（惟光が）使いを邸内にやって、案内を乞わせる。

九　お目にかかることもできますまい。

一〇　せめて、お見舞のお礼だけでも言上したいとのことで。尼君の意向を伝えるのである。

一一　ぶしつけに、こうした奥まったうっとうしい御座所にご案内申し上げまして（恐縮でございます）。尼君の病床のある対の屋などに迎えたからこう言ったのであろう。普通は寝殿の南面に招じる。

こしほど遠きここちするに、荒れたる家の、木立いともの古りて木暗う見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ、「故按察使の大納言の家にはべり。一日もののたよりにとぶらひてはべりしかば、かの尼上、いたう弱りたまひにたれば、何ごともおぼえずとなむ申してはべりし」と聞こゆれば、「あはれのことや。とぶらふべかりけるを、などか、さなむとものせざりし。入りて消息せよ」とのたまへば、人入れて案内せさす。わざとかう立ち寄りたまへることと言はせたれば、入りて、「かく御とぶらひになむおはしましたる」と言ふに、おどろきて、「いとかたはらいたきことかな。この日ごろ、むげにいとたのもしげなくならせたまひにたれば、御対面などもあるまじ」と言へども、帰したてまつらむはかしこしとて、南の廂ひきつくろひて、入れたてまつる。「いとむつかしげにはべれど、かしこまりをだにとて。ゆくりなうもの深き御座所になむ」と聞こゆ。げにかかる所は、例に違ひておぼさる。「常に思ひたまへ立ち

〔途中に〕
〔源氏〕それは気の毒な
〔少納言が〕
〔使いに〕
〔源氏が〕
〔使〕
〔女房たちは〕それは困ったことです
〔尼君は〕すっかり回復の見込みもおぼつかなくなっておられるから
〔源氏を〕
〔女房〕
〔源氏〕
先日ついでがありまして立ち寄ってみましたら
心配で何も手につかないと
お見舞すべきであったのに
そうと報告しなかったのか
お見舞に
恐れ多い
取り片付けて
むさ苦しい所でございますが
こうしたお座席は
いつもお伺いしようと存じな

ながら、かひなきさまにのみもてなさせたまふに、つつまれはべりてなむ。なやませたまふこと、重くとも、うけたまはらざりけるぼつかなさ」など聞こえたまふ。「乱りごちは、いつともなくのみはべるが、限りのさまになりはべりて、いとかたじけなく立ち寄らせたまへるに、みづから聞こえさせぬこと。のたまはすることの筋、たまさかにもおぼしめしかはらぬやうはべらば、かくわりなき齢過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ。いみじう心細げに見たまへ置くなむ、願ひはべる道のほだしに思ひたまへられぬべき」など聞こえたまへり。

（ながら）（すげなくおあしらいになるばかりなので）（ご病気が）（重くいらっしゃることも）（伺っておりませんでしたと）（は迂闊なことで）（尼君）（気分のすぐれないのは）（いつものことでございますが）（もう駄目な有様になりまして）（万一にも）（お気持が変らぬようでございましたら）（お目をかけて下さいませ）（極楽往生の障りと思われることでございましょう）

（病床が）いと近ければ、心細げなる御声絶え絶え聞こえて、「いとかたじけなきわざにもはべるかな。この君だに、かしこまりも聞こえたまつべきほどならましかば」とのたまふ。あはれに聞きたまひて、「何か、浅う思ひたまへむことゆゑ、かうすきずきしきさまを見えたてまつらむ。いかなる契りにか、見たてまつりそめしより、あはれに

（尼君の）（せめて姫君が）（いい加減な気持からのことで）（こんな好色めいた振舞をお目にかけるものですか）（遠慮いたされまして）（伺っておりませんでしたと）（仰せになります例のことは）（はじめてお見上げした時から）（いとしく）

一　直接お話し申し上げられぬことは、残念でございます。女房の取次ぎで話を交わしているのである。尼君は死期の近いのを悟って、少女の将来を源氏に託す気持になっている。

二　こうしたどうにもなりませぬ年頃が過ぎましてから。姫君が成長された暁には、の意。

三　（私が先立ちますのに）姫君をひどく頼りない身の上のままにしておきますことが。

四　ほんとに恐れ多いことです。以下は、尼君が取次ぎの女房にもらす言葉。

五　お礼の一言も申し上げられるお年頃ならよいのに。「たまつべき」は、音便形の「たまうつべき」の「う」を表記しない形であろう。

六　何の。どうして。「見えたてまつらむ」に掛る。

七　どうした前世からの因縁なのでしょうか。

八 いえ、もう、何もお分りないご様子で（こんなお話などお分りになりそうになく無邪気に）ぐっすりお寝みで。

九 お祖母さま。「上」は、女主人に対する敬称。「こそ」は、呼びかけ。

一〇 まあ、お声が高い。人声や物音を制する言葉。

一一 あら、だって、（源氏の君を）見たら気分の悪いのもよくなったと（いつかお祖母さまが）おっしゃったからよ。

翌日も尼君に病気見舞の消息、少女への思いがつのる

思ひきこゆるも、あやしきまで、この世のことにはおぼえはべらぬ」などのたまひて、「かひなきこちのみしはべるを、かのいはけなうものしたまふ御一声、いかで」とのたまへば、「いでや、よろづおぼし知らぬさまに、大殿籠り入りて」など聞こゆるをりしも、あなたより来る音して、「上こそ、この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」とのたまふを、人々、いとかたはらいたしと思ひて、「あなかま」と聞こゆ。「いさ、見しかばここちの悪しさなぐさみきとのたまひしかばぞかし」と、かしこきこと聞き得たりとおぼしてのたまふ。いとをかしと聞いたまへど、人々の苦しと思ひたれば、聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを聞こえ置きたまひて帰りたまひぬ。げにいふかひなのけはひや、さりとも、いとよう教へてむとおぼす。

不思議なほど　この世だけのご縁とは思われません　（源氏）いつも無駄骨折りのような気持がいたしますが　あのかわいらしくていらっしゃる　（女房）　ぜひとも　（少女）　北山のお寺にいらした　女房たちは　ひどく具合がわるいと　（少女）　自分はたいしたことを知っているのだとお思いで　〔源氏は〕かわいらしいと　女房たちが困りきっているので　きまじめなお見舞の言葉を申し上げておかれて　なるほどまるで子供っぽいな　教育しようと

またの日も、〔源氏は〕いとまめやかにとぶらひきこえたまふ。例の小さく結んで、

小さく引き

一　あどけない鶴の一声を聞きましてから、葦の間を行き悩む舟は、ただならぬ思いでおります。昨夜、少女の声を聞いたことを詠んだもの。「鶴」「葦間」「舟」は縁語。「えならぬ」は、言うに言われぬの意。「江」に掛け、これも縁語。「湊入りの葦分け小舟障り多みわが思ふ君に逢はぬころかも」（『万葉集』巻十一。『柿本集』には下の句「恋しき人に逢はぬころかな」）を踏まえる。

二　いつまでも慕いつづけるだけなのでしょうか、の意。「堀江漕ぐ棚なし小舟漕ぎ返り同じ人にや恋ひわたりなむ」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）を引いたもの。

三　このまま姫君のお習字のお手本になさいませ。

四　山寺（北山の僧都の房）にこれから移りますところで。死期の近づいた人が山寺に籠って死ぬのは当時の風習である。

五　（この手紙を受け取ったのは、ちょうど）秋の夕方であったから、の意。秋は、人を物思いに誘う季節であり、夕方は、恋しい人のことをせつに思う時刻とされていた。

六　北山での垣間見の時、尼君の詠んだ歌。（一九一頁参照）

七　一緒になったら期待はずれもあろうかと。

八　この手に摘み取って、早くわがものとしたいものだ、あの紫草（藤壺）にゆかりのある野辺の若草（少女）を。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれ」

（源氏）一「いはけなき鶴の一声聞きしより
葦間になづむ舟ぞえならぬ
子供らしく
二同じ人にや」と、ことさらをさなく書きなしたまへるも、いみじうみごとなので
をかしげなれば、「三やがて御手本に」と人々聞こゆ。少納言ぞ聞こ
申し上げた
えたる。
お見舞頂きました尼君は　今日一日ももちそうにない有様でございまして
問はせたまへるは、今日をも過ぐしがたげなるさまにて、四山寺に
あの世
まかりわたるほどにて、わざわざお見舞頂きました御礼は　かからでも改めて申し上げましょう　かう問はせたまへるかしこまりは、この
世ならでも聞こえさせむ。
〔源氏は〕
とあり。いとあはれとおぼす。五秋の夕は、一層まして、心の休まる時もなく
恋いこがれておられる藤壺のことが頭を去らないので　無理にでもそのゆかりの人を
くおぼし乱るる人の御あたりに心をかけて、あながちなるゆかりも
求めたいという気持もおつのりになるのであろう　尼君が詠
尋ねまほしき心もまさりたまふなるべし。六「消えむ空なき」とあり
んだ
〔少女が〕
し夕おぼし出でられて、恋しくも、また、七見ば劣りやせむと、さす
不安でもある
がにあやふし。
（源氏）八手に摘みていつしかも見む紫の

れとぞ見る」――紫草の一本ゆえに武蔵野の草はすべてなつかしく思われる（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）を踏まえる。

尼君死去

九 朱雀院への（桐壺帝の）行幸がある予定である。朱雀院は、上皇御所。三条の南、朱雀大路の西にある（図録二参照）。この行幸のことは紅葉賀の巻に見える。

一〇 舞楽の舞手。

一一 「上達部」は、位は三位以上、官は参議以上の高官。「殿上人」は、四位、五位で、清涼殿の殿上の間に伺候する天皇の侍臣。このあたりの記述、この行幸が規模の大きい盛儀であることを示している。

一二 先月。九月である。

一三 僧侶らしい発想であり、言葉遣いである。次の「悲しび」も男性用語。

一四 亡き母、桐壺の更衣。「御息所」は、天皇の御子を生んだ人の称。源氏は三歳で母に先立たれた（桐壺一四頁参照）。

一五 人が死んでから死の穢れに触れた近親者が家に慎み籠ること。期間は三十日であるから、十月の二十日頃忌みが終ったものと見られる。

源氏、帰京した若君を訪れ、乳母の少納言と歌を詠み交わす

根にかよひける野辺の若草

十月に朱雀院の行幸あるべし。舞人など、やむごとなき家の子ども、上達部、殿上人どもなども、そのかたにつきづきしきは、みな選らせたまへれば、親王達、大臣よりはじめて、とりどりの才ども習ひたまふ、いとまなし。山里人にも、久しくおとづれたまはざりけるを、おぼし出でて、ふりはへつかはしたりければ、僧都の返りことのみあり。「立ちぬる月の二十日のほどになむ、つひに空しく見たまへなして、世間の道理なれど、悲しび思ひたまふる」などあるを見たまふに、世の中のはかなさもあはれに、うしろめたげに思へりし人もいかならむ、をさなきほどに恋ひやすらむ、故御息所に後れたてまつりしなど、はかばかしからねど思ひ出でて、浅からずとぶらひたまへり。少納言、ゆゑなからず御返りなど聞こえたり。

高貴の家の子弟たちをお選びになり　その方面にすぐれている人たちは　選抜なさったので　それぞれの　技芸　多忙である　北山の尼君　お便りなさらなかったのを　習なさるので　〔源氏は〕　わざわざ〔文の使いを〕　お返事　〔僧都〕　命終なるのを見届けまして　しみじみと思われ　〔尼君が〕気掛りに思って　いたあの少女もどうしていることか　聞き分けのない年頃だから　先立たれ申したことなどを　はっきりとではないが　なかなか立派に　ねんごろに　源氏ご自身

忌みなど過ぎて京の殿になど聞きたまへば、ほど経て、みづから、のどかなる夜おはしたり。いとすごげに荒れたる所の人少ななるに、

終って　〔少女が〕　〔帰った〕

一（源氏の）お袖も涙に濡れる。「ただならず」は、普通でないの意。

二 兵部卿の宮（父宮）のお邸に（若君を）お引き取り申し上げようというお話のようでございますが。子供は母方（母亡きあとは母方の祖母）に育てられるが、祖母が亡くなれば、この場合、父宮に引き取られるよりほかない。

三 少女の亡くなった母君。以下、尼君の生前の言葉を伝える趣。

四（宮のお邸の北の方のお仕打ちを）とてもひどい、情けないことにお思い申し上げなさっていたのに。北の方との関係がよくなかったことは僧都の話にも見える（一九六頁参照）。

五 若君は全くの嬰児というでもないお年ながら。

六 大勢いらっしゃるという宮家のお子たちの中の、（母方の身分が低いために）軽くあしらわれるお子としてお暮しになるのではないか、などと。

七 当座の、かりそめの（ことかとも存ぜられます）あなた様のお言葉は。

八 私どもとして大層うれしく思われますはずの場合ではございますが。若君が、保護者である尼君を失った矢先なので、こう言う。

いかにをさなき人恐ろしからむと見ゆ。例の所に入れたてまつりて、（思われる 南の廂）

少納言、御ありさまなど、（尼君臨終のご様子）うち泣きつつ聞こえ続くるに、あいなう（他人事ながら）御袖もただならず。「宮に渡したてまつらむとはべるめるを、故姫君の、いと情なく、憂きものに思ひきこえたまへりしに、いとむげに児ならぬ齢の、まだはかばかしう人のおもむけをも見知りたまはず、中空なる御ほどにて、あまたものしたまふなる中の、あなづらはしき人にてやまじりたまはむ、など、過ぎたまひぬるも、世ととしておられたのも もにおぼし嘆きつるも、しるきこと多くはべるに、かくかたじけなきなげの御言の葉は、後の御心もたどりきこえさせず、いとうれしう思ひたまへられぬべきをりふしにはべりながら、すこしもなずらひなるさまにものしたまはず、御年よりも若びてならひたまへれば、いとかたはらいたくはべり」と聞こゆ。「何か、かうくりかへし聞こえ知らする心のほどを、つつみたまふらむ。そのいふかひなき御ありさまの、あはれにゆかしうおぼえたまふも、契りことにな

（しっかりと人のお仕向けを理解することもおできにならず）（中途半端なお年頃で）（お亡くなりになった尼君も）（始終心配 成程と思われることが沢山ございますので）（後々の思し召しまでも考えてみませず）（若君は）（お似合いのようでもいらっしゃらず）（子供っぽくお育ちでいられますので）（もったいない）（源氏）（どうして）（念を押して申し上げる私の気持を 素直にお取りにならないのでしょう）（たわいないご様子が）（ほとほと痛み入ります）（かわいくいとしく思われなさるのも）（前世からの宿縁が格

九 若君にお目にかかることがむつかしかろうとも、私はこのまま帰ろうか、帰りはせぬ。「あしわかの浦」は、「葦若」と「和歌の浦」を言い掛け、「みるめ」は、海藻の一種、海松布に「見る目」（会うこと）を掛ける。「立ちながら」は、長居しないでの意。「立ち」「かへる」は波の縁語。「あしわかの浦に来寄する白波の知らじな君はわれ思ふとも」（『古今六帖』五、言ひはじむ）による。

一〇 失礼になろう。このまま帰すのはひどかろう。

一一 打ち寄せる波（あなた様）のお心も確かめずに、和歌の浦で玉藻（若君）が（その波に）なびくといたしましたら、行末どうなりますことやら、頼りないことでございます。「玉藻」は、藻の美称。「なびく」「浮く」は、藻の縁語。

一二 どうしても若君と逢いたいものだ。「人知れぬ身はいそげども年を経てなど越えがたき逢坂の関」――人知れず気がせくけれども、何年たってもどうして逢えないのだろう（『後撰集』巻十一恋三、伊尹の朝臣）による。

源氏そのまま若君と一夜を過す

一三 貴族の平常着（図録一二参照）。女だけの家であるから、直衣を着た人は客以外にはない。

別なのだと　我ながら
む、心ながら思ひ知られける。なほ人伝ならで、聞こえ知らせばや。
直接に　私の気持を申し上げたい
あしわかの浦にみるめはかたくとも
こは立ちながらかへる波かは
（少納言）ほんとに　恐れ多いことでございます
一〇めざましからむ」とのたまへば、「げにこそ、いとかしこけれ」とて、

（少納言）
「寄る波の心も知らでわかの浦に
玉藻なびかむほどぞ浮きたる
困ってしまいます　もの馴れているのに　大目に見る気になら
わりなきこと」と聞こゆるさまの馴れたるに、すこし罪ゆるされた
（源氏）れる
まふ。「なぜ越えざらむ」と、うち誦じたまへるを、身にしみて若
ぞくぞくするほどに
女房たちは
き人々思へり。

若君　亡き尼君を
君は、上を恋ひきこえたまひて泣き臥したまへるに、御遊び相手の童
女たちが　父宮がおいでなのでしょう
きどもの、「直衣着たる人のおはする、宮のおはしますなめり」と
（若君）　着ているという人は
聞こゆれば、起き出でたまひて、「少納言よ。直衣着たりつらむは、
近づいていらした　父宮
どこなの
いづら。宮のおはするか」とて、寄りおはしたる御声、いとらうた

一　こちらへいらっしゃい。

二　あのすばらしかったお方（源氏の君）だと。「はづかし」は、こちらがひけめを感ずる、それほどすばらしいの意。前に「この若君、をさなごこちに、めでたき人かなと見たまひて……」（二〇六頁）とあった。

三　御簾の下から手をさし入れて探ってごらんになると。源氏のいる廂の間と、若君のいる母屋の境の御簾である。

四　ほんとにみごとな髪だろうと想像される。「うつくし」は、撫でいつくしみたい感じをいう語。髪の形容に用いられる場合は、愛撫したいほどみごとだ、というほどの意。

五　私があなたをかわいがって上げる人なのです（お祖母さまの代りです）。嫌わないで下さい。「まろ」は、親しい者同士の間で使う自称の代名詞。

六　あんまりでございます。とんでもないことでございます。「ゆゆし」は、いまわしい。

（源氏）私もお近しくして頂いてよい者です し。「宮にはあらねど、またおぼし放つべうもあらず。此方」とのたまふを、（二）はづかしかりし人と、おさな心にも分ってさすがに聞きなして、まずいことを言ってあしう言ひてしまったとてけりとおぼして、乳母にさし寄りて、（若君）さあ行こうよ「いざかし、ねぶたきに」とのたまへば、（源氏）「今さらに、どうして逃げ隠れなさるのかなど忍びたまふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。今すこし寄りたまへ」とのたまへば、乳母の、〔若君を〕「さればこそ、ご覧なさいませこんな頃是ないお年頃でいらっしゃいますかう世づかぬ御ほどにてなむ」とて、押し寄せたてまつりたれば、無心にお坐りになったので何心もなくゐたまへるに、（三）手をさし入れて探りたまへれば、なよよかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたるほど、（四）いとうつくしう思ひやらる。手をとらへたまへれば、柔らかな感じは気味の悪いよその人がうたて例ならぬ人の、かく近づきたまへるは、恐ろしうて、（若君）「寝なむといふものを」とて強ひて引き入りたまふにつきて、〔御簾の中に〕すべり入りて、（源氏）「今は、（五）まろぞ思ふべき人。な疎みたまひそ」とのたまふ。乳母、いやでございますわいくらお言い聞かせになっても「いで、あなうたてや。（六）ゆゆしうもはべるかな。聞こえさせ知らせちっとも何のかいもございませんでしょうにたまふとも、さらに何のしるしもはべらじものを」とて、苦しげにつらがっていた

七 いくらなんでも、こんなお年頃なのを、私がどうするものか。

八 どうして、こんな小人数で、頼りなくお暮しになっているのか。

九 私が宿直の役をつとめよう。

一〇 御帳台（図録九参照）。若君とともに帳台の内に入り、寝所を共にする形になる。

一一 単（肌着）だけで（若君の身体を）包みこんで。

一二 さあ、いらっしゃいよ。二条の院に来ないかと誘うのである。

思ひたれば、「さりとも、かかる御ほどをいかがはあらむ。なほただ世に知らぬ心ざしのほどを見果てたまへ」とのたまふ。霰降り荒れて、すごき夜のさまなり。「いかで、かう人少なに心細うて過ぐしたまふらむ」とうち泣いたまひて、いと見捨てがたきほどなれば、「御格子参りね。もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人にてはべらむ。人々近うさぶらはれよかし」とて、いと馴れ顔に御帳のうちに入りたまへば、あやしう思ひのほかにもと、あきれて、誰も誰もゐたり。乳母は、うしろめたなうわりなしと思へど、荒ましう聞こえ騒ぐべきほどならねば、うち嘆きつつゐたり。若君は、いと恐ろしう、いかならむとわななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げにおぼしたるを、らうたくおぼえて、単ばかりを押しくくみて、わが御ここちも、かつはうたておぼえたまへど、あはれにうち語らひたまひて、「いざ、たまへよ、をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」と、心につくべきことをのたまふけはひの、いとなつか

るので（源氏）
世間に例のない愛情
終りまで見届けてほしい
恐ろしい
（源氏）
とてもこのままにしておけない有様なので（源氏）
今夜の様子だし
下ろしなさい
女房たちお側にお詰めせよ
馴れ馴れしく
奇妙な思いもよらぬことよと
安心のならない困ったことだと
嘆息しながら
控えている
ことを荒立ててやかましく申し上げるのも憚られるので
なることかとおびえ震えて
かわいらしい
ぞくぞく粟立つ思いでおられる様子なのを〔源氏は〕可憐に思われて
考えてみれば並外れた振舞とお思いになるが
やさしくお話しかけになって
われながら
（源氏）
気に入りそうな話をなさる〔源氏の〕ご様子が

しきを、〔若君は〕をさなきここちにも、そうひどくも いといたうも怖ぢず、とはいっても気味が さすがにむつ
かしう、寝も入らずおぼえて、身じろき臥したまへり。
夜一夜、風吹き荒るるに、「げに、かうおはせざらましかば、い
かに心細からまし。同じくはよろしきほどにおはしまさましかば」
とささめきあへり。乳母は、うしろめたさに、〔御帳台に〕心配なので いと近うさぶらふ。
風すこし吹きやみたるに、夜深う出でたまふも、ことあり顔なりや。
「いとあはれに見たてまつる御ありさまを、今はまして片時の間も
おぼつかなかるべし。明け暮れながめはべる所にわたしたてまつら
む。かくてのみは、いかが。もの怖ぢしたまはざりけり」とのたま
へば、「宮も御迎へになど聞こえのたまふめれど、この御四十九日
過ぐしてや、など思ひたまふる」と聞こゆれば、「たのもしき筋な
がらも、よそよそにてならひたまへるは、同じうこそ疎うおぼえた
まはめ。今より見たてまつれど、浅からぬ心ざしはまさりぬべくな
む」とて、〔若君を〕かいなでつつ、かへりみがちにて出でたまひぬ。

悪く
おちおち眠れぬ思いで
もじもじして
（女房たち）
こうして源氏の君がおいでなかったら
どうせなら若君がお似合いのお年頃でいらしたら
（乳母）父宮様もお迎えに来ようなどとおっしゃるようですが
気になってならぬことでしょう
よく恐がりもなさらなかったことだ
尼君の
と思っております
終ってからでも
（源氏）頼りになる実の父君
ではあるが
ずっと別々に暮してこられた方は
〔私の〕
父宮以上であろうよ
後ろ髪を引かれる思いで

一　明け方暗いうちにお帰りになるが、それも、いかにもわけありげに見える（まるで女の所からのお帰りのようだ）。「ことあり顔なりや」は、草子地。
二　こうして一夜を共に過した今となっては一層。
三　いつも（私ひとりで）さびしく暮している所（二条の院）にお移し申しましょう。
四　いつまでもこんな状態では、どうしてお過しになれよう。
五　四十九日の法要。『湖月抄』には「ナヽナヌカ」と傍訓がある。
六　私と同じように（若君は）親しみ薄くお思いになるでしょう。
七　私は今夜はじめてお会いしたのだが。

源氏、帰途に、忍び所の門をたたかせて歌を詠みかける

八 ほんとの（一人前の女に対する）恋にもうってつけであろうに。

九 誰か不明である。前に出た「六条京極わたり」の女性（二一六頁）らしくもあるが、位置関係からいうと逆の位置のように読める。

一〇 朝明けの霧の立ちこめた空模様の乱れにつけても、素通りしがたいあなたの家の前です（ちょっと一休みさせて頂きたいものです）。「妹が門　夫が門　行き過ぎかねてや　我が行かば　肱笠の　肱笠の　雨もや降らなむ　死出田長　雨宿り　笠宿り　宿りてまからむ　死出田長」（催馬楽、呂「妹が門」）を踏まえて、「宿りてまからむ」の意味を利かせる。「肱笠の雨」は、俄か雨、「死出田長」は、時鳥の異名。

一一 下女中。女房より格の低い下働きの女。

一二 霧の立ちこめたこの家の垣根のあたりを素通りできかねるのでしたら、門を閉ざすほど生い茂った草など何の妨げにもなりますまい。「言ふからにつらさぞまさる秋の夜の草の戸ざしにさはるべしやは」（『後撰集』巻十三恋五、読人しらず）による。

一三 日が高く上ってお寝みからお起きになって。「大殿籠り起く」は、「寝起く」の敬語。

一四 手紙の文句も普通とは違うので。男は女のもとから帰ってから手紙（後朝の文）をやるのがならわしであるが、この場合は、普通の後朝の文というわけにもゆかない。

いみじう霧りわたれる空もただならぬに、霜はいと白うおきて、（常に似ぬ風情があるのに）まことの懸想もをかしかりぬべきに、さうざうしう思ひおはす。いと忍びて通ひたまふ所の、（途中であったのを）道なりけるをおぼしいでて、（供人に）門うちたたかせたまへど、聞きつくる人なし。（仕方なくて）かひなくて、（お供の中で声のよい者に）御供に声ある人して歌はせたまふ。

（源氏）朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも
行き過ぎがたき妹が門かな

と、二返りばかり歌ひたるに、（上品な）よしある下仕へを出だして、

（女）立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは
草のとざしにさはりしもせじ

と言ひかけて入りぬ。（詠みかけて）また人も出で来ねば、（ほかに誰も）帰るも情なけれど、（〔このまま〕風情がないが）明けゆく空もはしたなくて（具合が悪くて）殿へおはしぬ。（二条の院）をかしかりつる人のなごり（かわいらしかった若君の忘れられぬ面影が）恋しく、独笑みしつつ臥したまへり。日高う大殿籠り起きて、（若君に）文やりたまふに、書くべき言葉も例ならねば、筆うち置きつつすさびみ（気の向くまま）

兵部卿の宮、若君を訪れ本邸に引き取ろうとする

一 おもしろい絵などを（手紙と一緒に）お届けになる。前に「をかしき絵など多く……」（二二五頁）と若君を誘う言葉があった。

二 ちっとも気兼ねのいるような所ではない。

三 局（部屋）など構えてお仕えすればよい。特別にやや優遇されようという気持。

四 年若い姫たちもいることだから。北の方腹の、若君にとっては異母姉妹たち。

五 （お召し物に）とてもすてきな感じに深くしみついていらっしゃるので。

六 お召し物はすっかりくたびれて。糊気が落ちて柔らかになるのを「萎ゆ」という。着物も新しくないので、経済的に不如意な様を気の毒がるのである。

七 （北の方とも）お馴染みにおなりなさいなどと言ってみたのだが。

八 こんな時に（尼君の亡くなった今となって）本邸に移られるのも、おかわいそうで。

九 いいえ、それにも及びますまい。

たまへり。[にしておられる]をかしき絵などをやりたまふ。

かしこには、[若君のお邸]今日も宮わたりたまへり。[丁度その日 兵部卿の宮]年ごろよりもこよなう荒れまさり、広うもの古りたる所の、[邸が]いとど人少なにさびしければ、見わたしたまひて、「かかる所には、いかでか、しばしもをさなき人の過ぐしたまはむ。[お過しになれよう]なほかしこにわたしたてまつりてむ。何の所狭きほどにもあらず。乳母は、曹司などしてさぶらひなむ。君は、若き人々などあれば、もろともに遊びて、いとようものしたまひなむ」などのたまふ。[宮が若君を]近う呼び寄せたてまつりたまへるに、かの御移り香の、いみじう艶に染みかへりたまへれば、「をかしの御匂ひや。御衣はいと萎えて」と、心苦しげにおぼいたり。「年ごろも、あつしくさだすぎたまへる人に添ひたまへる、かしこにわたりて見ならしたまへなど、ものせしを、あやしう疎みたまひて、人も心置くめりしを、かかるをりにしもものしたまはむも、心苦しう」などのたまへば、「何かは。心細くとも、しばしはかくておはしましなむ。

[ここ数年よりもすっかり]
[宮]
[やはりあちらの邸にお移し申し上げよう]
[とても楽しくやってゆけるだろう]
[若君]
[源氏の]
[宮]
[宮]
[病気が]
[いたいたしくお思いである]
[ちのお年寄りと一緒にお暮しだが]
[あちらの邸に行って]
[北の方も面白からぬよ]
[こちらでは]
[ここにおいであそばしましょう]
[乳母]
[うだったが]

一〇 少しもののわけがお分りになるお年頃になってからお移りあそばす方が、ようございましょう。

一一 もうそんなに思いつめてはいけません。今日、明日にも（邸に）お連れしよう。

一二（若君は）そのあとの悲しみも紛らわしようがなく泣いておられた。

一三 将来の身の上がどうなるだろうかといったことまでもお考えになるのではなく。

一四 ひどくふさぎこんでしまわれるので。

一〇すこしものの心おぼし知りなむにわたらせたまはむこそ、よくははべるべけれ」と聞こゆ。「夜昼恋ひきこえたまふに、はかなきもの（乳母）（尼君を）（ちょっとしたものも）もきこしめさず」とて、げにいといたう面痩せたまへれど、いとあ（召し上がりません）（と申して）（若君は）（上品）てにうつくしく、なかなか見えたまふ。「何か、さしもおぼす。今（でおかわいらしく）（かえって）（宮）（どうして）（そう悲しまれるのか）は世になき人の御ことはかひなし。おのれあれば」など語らひこ（亡くなられた尼君）（仕方がない）（私がいるから）（おなぐさめにな）えたまひて、暮るれば帰らせたまふを、いと心細しとおぼいて泣いって）（宮は）（若君は）たまへば、宮うち泣きたまひて、「いとかう思ひな入りたまひそ。（宮）今日明日わたしたてまつらむ」など、かへすがへすこしらへおきて、（けふ）（あす）（かさねがさねなだめておいて）出でたまひぬ。なごりもなぐさめがたう泣きゐたまへり。行く先の（一三）（ゆく）身のあらむことなどまでもおぼし知らず、ただ年ごろ立ち離るるを（今まで長年いつも離れる時と）りならうまつはしならひて、今はなき人となりたまひにけるとおぼす（てなくお側に置いて頂いたのに）（尼君が）がいみじきに、をさなき御ここちなれど、胸つとふたがりて、例の（とても悲しいので）（胸がいっぱいにふさがって）やうにも遊びたまはず、昼はさてもまぎらはしたまふを、夕暮となれば、一四いみじく屈したまへば、かくてはいかでか過ぐしたまはむと、（何とか）（これではどうしてお過しになれようと）（ゆふぐれ）（く）

源氏、惟光をつかわす

一 自身で参上すべきですが、宮中からお召しがあるので（参れません）。

二 別に宿直の者をおさし向けになった。

三 おめでたいご縁組の最初からこんな冷淡なお仕打ちをなさること。普通の結婚であるならば、三夜は引き続いて通うのが作法であるのに、第二夜に当る今夜、源氏の訪れがないのを不満に思うのである。

四 それを（若君は）何ともお思いでないのは、張合いもないことである。

五 これから将来には（若君が大きくおなりになってから）、源氏の君とご一緒になるご宿縁を逃れられないといったことにおなりかもしれません。

六 軽率なお扱いをしてくれるな。妙な男の手引きなどするな、という意。

七 ご注意のなかった以前よりは。

なぐさめわびて、乳母も泣きあへり。（ご機嫌をとりかねて）（共に泣いた）

君の御もとよりは、（源氏）（その夕方）惟光をたてまつれたまへり。（おさし向けになった）「参り来べきを、内裏より召あればなむ。（おいたわしいご様子を拝見したにつけても）心苦しう見たてまつりしも、（気になりまして）しづ心なく」とて、宿直人たてまつれたまへり。（ご冗談）「あぢきなうもあるかな。たは（乳母）（情けないことでございますわ）ぶれにても、ものの（三）はじめにこの御ことよ。（にもせよ）宮きこしめしつけば、（父宮のお耳にはいったら）（お側の者たちの不行届きとお叱りを受けよう）さぶらふ人々のおろかなるにぞさいなまむ。（決して決して）あなかしこ、もののつ（何かのはず）いでに、いはけなくうち出できこえさせたまふな」など言ふも、（四）（うっかり〔源氏の君のことを〕お口にあそばしますな）（みに）それをば何ともおぼしたらぬぞ、あさましきや。少納言は、惟光にあ（乳母）（悲し）はれなる物語どもして、「あり経て後や、さるべき御宿世のがれき（い話をいろいろして）（少納言）（五）（のち）（すくせ）こえたまはぬやうもあらむ。ただ今は、かけてもいと似げなき御こ（どう考えても若君にはとても不似合いな）と見たてまつるを、あやしうおぼしのたまはするも、いかなる御（お話と思われますのに）（〔源氏の君の〕不思議など執心ぶりとそのお申し出も）心にか、思ひ寄るかたなう乱れはべる。今日も宮わたらせたまひて、（見当もつかず思い悩んでおります）『うしろやすくつかうまつれ、（六）心をさなくもてなしきこゆな』とのたまはせつるも、いとわづらはしう、（私としてもとても気が重く）（七）ただなるよりは、かかる御す（宮）（安心のゆくようにお仕えせよ）（好色め）

八 惟光も、源氏と若君の間にわけがあったかのように思うかもしれないなどと、少納言はそれでは不本意なので、（源氏の訪れのないことを）そう不満そうにも言わない。

九 惟光。大夫は、五位の者の称。

一〇 高い身分にふさわしくない奇矯な振舞だと、世人がこのことを知ったら、思うかもしれないと。

一一 さし障りがいろいろあって、参上できないのを、不熱心ゆえとお思いであろうか。源氏の手紙の文面。

一二 今まで長年住み馴れたこのさびしいお邸を離れてしまうのも。「蓬生」は、よもぎの生い茂った荒れ果てた家。

一三 北の方、葵の上。

源氏、ひそかに若君を迎え取る

いたお振舞も改めて気になることです きごとも思ひ出でられはべりつる」など言ひて、この人もことあり顔にや思はむ、など、あいなければ、いたう嘆かしげにも言ひなさず。大夫も、一体どういうことになっているのかと いかなることにかあらむと、合点のゆかぬ思いである心得がたう思ふ。帰参して、ありさまなど聞こえければ、〔源氏は〕気にかかってならないけれど あはれにおぼしやらるれど、先夜のように さて通ひたまはむも、お通いになるのも さすがにすずろなるここちして、どうかと思われて 軽々しう もてひがめたると、人もや漏り聞かむなど、つつましければ、憚られるので ただ迎へてむと思いきって引き取ろうと おぼす。御文はたびたびたてまつれたまふ。暮るれば、例の大夫を ぞたてまつれたまふ。「さはることどものありて、え参り来ぬを、おろかにや」などあり。（少納言）「宮より、明日にはかに御迎へにとのたまはせたりつれば、気ぜわしくしていまして心あわたたしくてなむ。年ごろの蓬生を離れなむも、おつきの女房たち さすがに心細う、さぶらふ人々も思ひ乱れて」と、言少なに言ひて、ろくに相手にもならず をさをさあへしらはず、着物を縫ったり忙しくしている様子がうかがえるので もの縫ひいとなむけはひなどしるければ、帰参した 参りぬ。

源氏 左大臣邸 君は大殿におはしけるに、一三 女君 すぐにも とみにも 対面したまはず。

一 東琴の略で、和琴のこと。六絃。

二 和琴の一つの奏法。軽い、即興的な奏法。

三 風俗歌（貴族に愛唱された地方民謡）「常陸」の歌詞。「常陸には　田をこそ作れ　誰をかね　山を越え　野をも越え　君が　雨夜来ませるや」――常陸では田作りに忙しいのに、一体誰をおめあてにあなたは山越え野越え雨夜をわざわざいらしたの。女の歌である。わざわざやって来たのに相手になってくれない葵の上へのあてこすりに歌っている。

四 車の支度はそのままにしておいて、護衛の者一両名を（待機しているように）申し付けておけ。

五 どうしたらよいものか。以下、源氏の心。

六 相手の年齢がせめて男女の道を解するほどで、女が（男と）情を通じてのことなのだと、（はたから）想像されるようなことであるのならば、（それは）世間に普通にあることだ。

七 どうしても処理せねばならぬ用事がありますのを、思い出しまして。

〔源氏は〕おもしろくなくお思いで
ものむつかしくおぼえたまひて、一あづまをすががきて、二「常陸には
田をこそ作れ」といふ歌を、声はいとなまめきて、三すさびゐたまへ
〔惟光が〕
り。参りたれば、召し寄せてありさま問ひたまふ。しかしかなど聞
こゆれば、くちをしうおぼして、かの宮にわたりなば、わざと迎へ
兵部卿の宮邸　〔そこから〕わざわざ　非難
出でむも、すきずきしかるべし、をさなき人を盗み出でたりと、も
好色めいたことであろう　年端もゆかぬ少女を
どきおひなむ、そのさきに、しばし人にも口固めて、わたしてむと
宮邸に移る前に　〔二条院に〕連れてこよう
おぼして、「暁かしこにものせむ。四車の装束さながら、随身一人二
（源氏）　あちらに行こう　〔惟光は〕
人仰せおきたれ」とのたまふ。うけたまはりて立ちぬ。

君、五いかにせまし、聞こえありてすきがましきやうなるべきこと、
世間に知れたらいかにも好色らしく思われることであろう
六人のほどだにものを思ひ知り、女の心かはしけることと、おしはか
られぬべくは、世の常なり、父宮の尋ね出でたまへらむも、はした
言いわけも立たないことだと　思い悩まれるが　そんなことでこの機会をのがし
なう、すずろなるべきをと、おぼし乱るれど、さてはづしてむはい
明け方暗いうちに　心進まぬ
とくちをしかべければ、まだ夜深う出でたまふ。女君、例のしぶし
葵の上は　（源氏）二条の院
ぶに、心も解けずものしたまふ。「かしこに、七いと切に見るべきこ
ご機嫌もよろしくない　様子で

とのはべるを、思ひたまへ出でてなむ。立ちかへり参り来なむ」とて、出でたまへば、さぶらふ人々も知らざりけり。わが御かたにて、御直衣などはたてまつる。惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ。門うちたたかせたまへば、心も知らぬ者の開けたるに、御車をやをら引き入れさせて、大夫、妻戸を鳴らしてしはぶけば、少納言聞き知りて、出で来たり。「ここに、おはします」と言へば、「をさなき人は御殿籠りてなむ。などか、いと夜深うは出でさせたまへる」と、もののたよりと思ひて言ふ。「宮へわたらせたまふべかなるを、そのさきに聞こえ置かむとてなむ」とのたまへば、「何ごとにかはべらむ。いかにはかばかしき御答へ聞こえさせたまはむ」とて、うち笑ひてゐたり。君、入りたまへば、いとかたはらいたく、「うちとけて、あやしき古人どものはべるに」と聞こえさす。「まだおどろいたまはじな。いで御目さましきこえむ。かかる朝霧を知らでは寝るものか」とて入りたまへば、「や」ともえ聞こえず。君は何心もなく寝

（すぐ引き返して）（ご自分のお部屋の方で）（お側の女房たちも）（惟光と察して）（事情も知らぬ）（源氏の君が）（少納言）（若君は）（どうして）（こんなに明け方暗いうちにお帰りなのですか）（源氏）（宮のお邸へお移りになるそうですが）（申し上げておこうと思って）（少納言）（源氏）（申し上げる）（困って）（少納言）（お目ざめではないだろうな）（どれ）（若君は何も知らずに）

ハ 惟光。
九 妻戸をたたいて音を立て、咳ばらいすると。妻戸は、寝殿造りの四隅にある出入口の戸。両開きの形式（図録六参照）。咳ばらいは、人がいることを知らせる合図。
一〇 何かのついで（どこか女の所からの帰りにでも立ち寄ったのか）と思って言う。
一一 どんなにか、はきはきしたお返事を申し上げなさることでしょう。源氏の意図を察せず、のんきに冗談を言っている。
一二 気を許して（なりふり構わず）、見苦しい年寄りどもが寝んでおりますのに。「古人」は、年老いた女房。尼君に仕えていた女房であろう。
一三 こんなすばらしい朝霧を知らないで眠っているということがありますか。
一四（少納言は）「あれ」と、お止めする暇もない。「や」は、驚きおびえる声。

たまへるを、抱きおどろかしたまふに、（お起しになるので）おどろきて、（目をさまして）宮の御迎へにおはしたると、寝おびれて（ねぼけて）おぼしたり。御髪搔きつくろひなどしたまひて、「いざ、（源氏）たまへ。（さあ いらっしゃい）宮の御使にて参り来つるぞ」とのたまふに、（宮ではなかったと）あらざりけりと、あきれて、（びっくりして）恐ろしと思ひたれば、「（源氏）あな心憂。まろも同じ人ぞ」とて、かき抱きて出でたまへば、大輔、少納言など、「こはいかに」と聞こゆ。「（源氏）ここには、常にもえ参らぬがおぼつかなければ、心やすき所にと聞こえしを、心憂くわたりたまふべかなれば、まして聞こえがたかべければ。人ひとり参られよかし」とのたまへば、心あわたたしくて、（少納言）「今日はいと便なくなむはべるべき。宮のわたらせたまはむには、いかさまにか聞こえやらむ。おのづからほど経て、さるべきにおはしまさば、ともかうもはべりなむを、いと思ひやりなきほどのことにはべれば、さぶらふ人々苦しうはべるべし」と聞こゆれば、「（源氏）よし、後にも人は参りなむ」とて、御車寄せさせたまへば、あさましう、いかさまにと思ひあへり。若

一 何と情けない（恐がることはないではないか）。私だって父宮と変りないよ。
二 若君づきの女房の名。
三 これはなんとしたこと。源氏の振舞をとがめる言葉。
四 気の置けぬ所（私邸の二条の院）に（お迎えしよう）と申し上げたのに。
五 （そうなっては）一層お話もしにくくなるだろうから（お連れするのだ）。
六 どのように申し上げたらよろしいのでございましょう。
七 そうなりますご縁がおありでしたら、どうとなり思し召し次第でございましょうが（ご一緒にもおなりになれましょうが）。
八 それなら、よし。女房はあとからでも来ればよい。

九　若君のお召し物。

二条の院の西の対で、若君の新しい生活がはじまる

一〇　寝殿の西に渡殿でつながる対の屋。

君も、あやしとおぼして泣いたまふ。少納言、とどめきこえむかたなければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて、みづからもよろしき衣着かへて乗りぬ。

二条の院は近ければ、まだ明うもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をば、いと軽らかにかき抱きておろしたまふ。少納言、「なほ、いと夢のここちしはべるを、いかにしはべるべきことにか」と、やすらへば、「そは心ななり。御みづからわたしたてまつりつれば、帰りなむとあらば、送りせむかし」とのたまふに、わりなくて下りぬ。にはかに、あさましう、胸も静かならず。宮のおぼしのたまはむこと、いかになり果てたまふべき御ありさまにか、とてもかくても、たのもしき人々におくれたまへるがいみじさ、と思ふに、涙のとまらぬを、さすがにゆゆしければ、念じゐたり。こなたは住みたまはぬ対なれば、御帳などもなかりけり。惟光召して、御帳、御屏風など、あたりあたりし立てさせたま

様子が変だと　お止め申し上げるすべもない　〔源氏は〕　どうしても　まるで夢を見ているようでございますが　一体どういたしましたらよろしいものやら　ためらっているので（源氏）　ご本人はもう　お移し申したから　〔あなたが〕帰るということなら　送りましょう　〔少納言は〕急のことで　茫然としたまま　仕方なくて　胸の波立ちも　静まらない　若君は結局どうおなりになるお身の上なのだろうか　とにもかくにも　こらえている　西の対　平生ご使用でない　ここかしこにしつらえてお立てさせになる

一（そのほかは）御几帳の垂れ絹を下ろしたり、お敷物（茵）などをちょっと整えるだけで済むので。「几帳」（図録九参照）は、使わない時は帷を手（横木）に巻き上げてあったものらしい。「御座」は、座席の意であるが、ここは具体的に茵のこと。今の座蒲団に当る。綿を入れ、錦の縁をつける。

二 源氏が平生起居していたものと見える。

三 夜着。

四 身体が震えてたまらないけれども。「ふるはれ」の「れ」は、自発の助動詞。

五 もう、そんなふうにしてお寝みになってはいけませんよ。乳母と一緒に寝たりしてはいけない、の意。

六 庭園のうち、寝殿の前の平坦の地をいう。この部分には白砂を敷きつめる。（図録七参照）

七（今までわびしい暮しに馴れてきたみすぼらしい自分など）場違いだときまり悪い思いでいたが。

八 たまの訪客などの参上した時に使う建物だったので。

九 男の家来たちが部屋の外（簀子）に控えていた。

一〇 並々の思し召しではあるまい。自邸に迎えたのだから、妻としての待遇なのでこういう。

一一 朝の洗面の支度。盥、半插（水注ぎ）、水など。

一二 いわゆる固粥、今の飯。朝食である。

ふ。御几帳の帷引き下ろし、御座などただひきつくろふばかりにてあれば、東の対に、御宿直物召しにつかはして、大殿籠りぬ。若君は、いとむくつけう、いかにすることならむと、ふるはれたまへど、さすがに声立ててもえ泣きたまはず。「少納言がもとに寝む」とのたまふ声いと若し。「今は、さは大殿籠るまじきぞよ」と教へきこえたまへば、いとわびしくて泣き臥したまへり。乳母はうちも臥されず、ものもおぼえず起きゐたり。

明けゆくままに見わたせば、御殿のつくりざま、しつらひざま、さらにもいはず、庭の砂子も玉を重ねたらむやうに見えて、かかやくここちするに、はしたなく思ひゐたれど、こなたには女などもさぶらはざりけり。疎き客人などの参るをりふしのかたなりければ、男どもぞ御簾の外にありける。かく、人迎へたまへりと、ほの聞く人は、「誰ならむ。おぼろけにはあらじ」と、ささめく。御手水、御粥など、こなたに参る。日高う寝起きたまひて、「人なくてあし

（若君）
（源氏）
（少納言が）
（人を）
（源氏）
どうなさるおつもりなのかと
こわくて
幼い
悲しくて
横になる
無我夢中の思いで
気もせず
部屋の設備などは
光り輝く
女房
女房がいなくて
ひそひそ噂する
お選びする
女を
改めて言うまでもなく
ような感じなので

一三 こんなふうに、いつまでも私に情けない思いをさせないで下さい。もういい加減にご機嫌を直しなさい、という意。

一四 濃いねずみ色。ここは喪服である。外祖母の喪に服するのは三カ月。

一五 糊気が落ちて張りのなくなったのを重ね着て。

一六 （若君が）部屋の端近の所まで出て。

一七 庭の一部の林のように趣向した木の植込み。

一八 普通、寝殿の南に、庭を隔てて池がある。ここは西の対からそれを望む。

一九 建物近くの草木の植込み。

二〇 四位は黒色の袍、五位は緋色の袍を着る。

不便だろうから
かめるを、さるべき人々、夕つけてこそは迎へさせたまはめ」との
夕方になってからお呼びになったらよい
たまひて、対に童女召しにつかはす。「小さき限り、ことさらに参
東の対　〔人を〕　〔源氏〕小さい者だけ　特別に
れ」とありければ、いとをかしげにて、四人参りたり。君は御衣に
かわいらしい様子で　若君
すっぽりくるまって
まとはれて臥したまへるを、せめて起こして、「かう、心憂くなおは
無理に　〔源氏〕一三
せそ。すずろなる人は、かうはありなむや。女は心柔かなるなむよ
いい加減な男は　とんなに親切にするものですか　素直なのが
き」など、今より教へきこえたまふ。御容貌は、さし離れて見しよ
もう今から　〔若君の〕
りも、いみじうきよらにて、なつかしううち語らひつつ、をかしき
美しくて　〔源氏は〕やさしくご機嫌を取りながら
絵、遊びものども取りにつかはして見せたてまつり、御心につくこ
おもちゃ　〔東の対に〕　若君のお気に入る
とどもをしたまふ。やうやう起きゐて見たまふに、鈍色のこまやか
〔若君が〕　〔絵などを〕　色濃いのが
なるが、うち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐた
一五　無邪気に
まへるが、いとうつくしきに、われもうち笑まれて見たまふ。東の
とてもかわいらしいので　〔源氏は〕
対にわたりたまへるに、立ち出でて、庭の木立、池の方などのぞき
〔源氏が〕行かれたので　一六　一七　一八
たまへば、霜枯れの前栽、絵に描けるやうにおもしろくて、見も知
趣があって　見たことも
らぬ四位五位こきまぜに、隙なう出で入りつつ、げにをかしき所か
人り乱れて　ない　二〇

一 屏風には、四季折々の風景、行事、歌の名所、物語風の場面など、いろいろな絵が描かれる。

二 何といっても子供のことではある。草子地。

源氏、若君に手習など教え歌を詠み交わす

三 このまま若君のお習字や絵のお手本にというおつもりなのか。

四 心に浮ぶ古歌などを書きつけること。

五 ゆかりの人だと思うと、つい恨み言も出る。「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」――あなたの気持はどうか分らないけれども、武蔵野というと（ゆかりの人だと思うと）つい恨み言も言いたくなる、それも仕方のないことだ、つれないあの紫の君ゆえなのだから（『古今六帖』五）。「紫の一本（ひもと）ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（『古今集』巻十七雑上）を踏まえた歌であるが、源氏のつもりでは、「武蔵野」は若君を、「紫」は藤壺を意味し、若君は私につれなくしないでほしいという意をこめた。

六 まだ共寝はしないけれども、いとしくてならないことだ、逢おうにも逢えぬ武蔵野の紫草（藤壺）のゆかりの人が。「寝（ね）」と「根」（紫草はその根を染料にする）を掛け、「露分けわぶる」は、藤壺に逢うのに苦労する意をこめる。

なと（若君は）おぼす。御屏風どもなど、いとをかしき絵を見つつ、機嫌よくして なぐさめておはするもはかなしや。

源氏君は二三日内裏へも参りたまはで、この人（若君を手なずけようとお相手をなさる）をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本にとおぼすにや、手習（てならひ）、絵などさまざまに書きつつ見せたてまつりたまふ。いみじうをかしげに書き集めたまへり。（とてもお見事にたくさんお書きになった）

「武蔵野（むさしの）といへばかこたれぬ」と紫の紙に書いたまへる、墨つきの（墨のあとの格別すばらしいのを）いとことなるを取りて見ゐたまへり。（〔源氏が〕）（〔脇に〕）すこし小さくて、

（源氏）ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の
露分けわぶる草のゆかりを

とあり。（源氏）「いで、君も書いたまへ」（あなたも）とあれば、（若君）「まだ、ようは書かず」（上手には書けません）とて、見上げたまへるが、何心なくうつくしげなれば、（あまり無邪気でかわいらしいので）うちほほゑみて、「よからねど、（全然書かないのはよくありません）むげに書かぬこそわろけれ。教へきこえむかし」とのたまへば、（〔源氏は〕）うちそばみて（横を向いて隠しながら）書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまのをさなげなるも、（あどけないのも）らうたうのみおぼゆれば、（〔源氏は〕）心ながらあや（いとしくてたまらぬ思いなので）（われながら不思議だと）

七 恨み言をおっしゃるというそのわけを知りませんから、何のことだか分りません、一体私はどんな草のゆかりなのでしょうか。前の歌二首を受けている。

八 将来の上達が思いやられて。

九 この上ない、憂さの気晴らしである。藤壺への恋の憂さを紛らわせるのにこの上ないお相手である、の意。

兵部卿の宮、若君の行方を失って悲しむ

一〇 絶対に口外しないように（少納言から）言い送った。

一一 以下、宮の心。

しとおぼす。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば、

かこつべきゆゑを知らねばおぼつかな
いかなる草のゆかりなるらむ

と、いと若けれど、生ひさき見えて、ふくよかに書いたまへり。故尼君のにぞ似たりける。今めかしき手本習はば、いとよう書いたまひてむと見たまふ。雛など、わざと屋ども作りつづけて、もろともに遊びつつ、こよなきもの思ひのまぎらはしなり。

かのとまりにし人々、宮わたりたまひて尋ねきこえたまひけるに、聞こえやるかたなくてぞ、わびあへりける。しばし人に知らせじと君ものたまひ、少納言も思ふことなれば、切に口がためやりたり。ただ、行方も知らず少納言が率て隠しきこえたる、とのみ聞こえさするに、宮もいふかひなうおぼして、故尼君もかしこにわたりたまはむことを、いとものしとおぼしたりしことなれば、乳母の、いと

出過ぎた気持からいちずに
さし過ぐしたる心ばせのあまり、おいらかに、わたさむを便なしなどは言はで、心にまかせて、率てはふらかしつるなめりと、泣く泣く帰りたまひぬ。「もし聞きいでたてまつらば、告げよ」とのたまふもわづらはしく、僧都の御もとにも尋ねきこえたまへど、あとは
自分の一存で　（宮）　若君のお行方が分ったら　知らせよ　〔宮は〕　北山　探索の手をのばされたが　結局行方が知れなくて
かなくて、あたらしかりし御容貌など恋しく悲しとおぼす。北の方
惜しいほどだった　〔宮の〕
も、母君を憎しと思ひきこえたまひける心も失せて、わが心にまか
〔若君を〕自分の思いどおりにできようと　当てが外れたのは　残念だと
せつべうおぼしけるに違ひぬるは、くちをしうおぼしけり。
〔西の対には〕女房　お遊び相手
やうやう人参り集りぬ。御遊びがたきの童女、児ども、いとめづらかに今めかしき御ありさまどもなれば、思ふことなくて遊びあへり。君は、男君のおはせずなどしてさうざうしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど、宮をばことに思ひ出できこえたまはず。もとより見ならひきこえたまはでならひたまへれば、今はただ、この後の親をいみじう睦びまつはしきこえたまふ。ものよりおはすれば、まづ出でむかひて、あはれにうち
源氏がご不在だったりしてさびしく思われる　何の屈託もなくて皆で遊んでいる　もともと父宮とはご一緒でなく今まで過してこられたので　父宮　馴れ親しみ申し上げなさる　〔源氏が〕よそからお帰りになると　早速お目にかかって　なつかしげにうちと

一　おだやかに、お移しするのは困りますというふうには言わないで。「おいらかに」（おだやかに）は、「言はで」に掛る。

二　連れ出して若君の生涯を台なしにしてしまったのであろうと。

三　女房たちには迷惑で（何も申し上げず）。若君の所在を知ってはいるが、宮に知らせるわけにはゆかないから、迷惑に思うのである。

若君、源氏になつく

四　幼児。「童女」は、若君とほぼ同年輩の、今で言えば少女、「児」は、それより小さい五、六歳前後の子供たち。男の子も含まれているのであろう。

五　世にも珍しい、現代風な（しゃれた）お一組（源氏と若君）なので。実際に夫婦ではないが、夫婦めかした書きぶり。「今めかしき」というのは、年若い二人の、屈託のない同棲生活ぶりを形容したもの。

六　若君。今まで若君と呼んで来たが、ここではじめて「君」と呼ぶ。「女君」（夫人）に准じた書きぶりで、下の「男君」（夫君）と照応する。

七　継親。源氏のこと。

語らひ、御懐に入りゐて、いささか疎くはづかしとも思ひたらず、
（けたお話をし　少しも　遠慮したり気づまりにも思っていず）
さるかたに、いみじくらうたきわざなりけり。さかしら心あり、何
（八）（とてもかわいらしいものであった）（九）（何か）
くれとむつかしき筋になりぬれば、わがここちもすこし違ふふしも
（と面倒な関係になってしまうと）（一〇）
出で来やと、心おかれ、人もうらみがちに、思ひのほかのこと、お
（意外なもめごとが）（自然）
のづから出で来るを、いとをかしきもてあそびなり。女などはた、
（起ってくるものだが）（〔これは〕かわいらしいお遊び相手）（一一）
かばかりになれば、心やすくうちふるまひ、隔てなきさまに臥し起
（このくらいの年になると）（〔父親に〕うちとけて）
きなどは、えしもすまじきを、これは、いとさまかはりたるかしづ
（とてもできないだろうに）（ほんとに風変りな大事の娘と）（〔源氏は〕）
きぐさなりとおぼいためり。
（思っておいでのようだ）

八　そういう関係として。これはこれとして。実際の夫婦ではないが、という含み。
九　妙に分別がつき。ここは、女としての分別、つまり、嫉妬心のあること。
一〇　こちらとしても、気まずいことも起るのではないかと、気持にも隔たりができ。
一一（そうなると）相手の女も、ともすればこちらを恨めしく思うようになり。
一二　自分の娘などでも。

末摘花（すえつむはな）

夕顔の死後、源氏は、彼女のように素直でやさしい女にめぐり逢いたいと、あちこちの女に文をやっている。乳母子の大輔の命婦は、亡き常陸の宮の姫君のことを源氏に話す。荒れた邸にひっそり暮すという姫君の人柄は夕顔を思わせる。源氏はいたく心をそそられ、命婦の案内で、十六夜の朧月夜に、常陸の宮を訪れた。夕顔を失った翌年、源氏十八歳の春のことである。琴の音を聞いて帰り道に、源氏は頭の中将に見つかってしまう。

以後、二人は競争で文をやるが、返事は来ない。心ひかれる相手ではないが、頭の中将への負けじ心から、秋、源氏は命婦を責めて、姫君に逢う。期待に反して、姫君はまともな受け答えもできぬ引っ込み思案の無愛想者で、頑な無言で源氏を手こずらせた。

その年は、北山での紫の上との出逢い、藤壺の宮の懐妊などがあって、源氏の心は暇なく、朱雀院の行幸の準備にも多忙を極めて、常陸の宮へは自然に足が遠のいていた。命婦に責められて、冬、源氏はようやく姫君を訪う。翌朝、雪明りに、その醜い姿、わけても異様な赤い鼻を見て驚くが、宮家の貧しさを思い、色恋抜きに、姫君を援助しようと決心する。巻名は、この時、末摘花（紅花）に託して詠んだ源氏の歌によるもので、後世の読者も、この巻の女主人公の名とした。歳暮、末摘花は、非常識な贈り物をして源氏を辟易させ、二条の院では、紫の上が美しく成長して、源氏は十九歳の春を迎えた。

源氏、夕顔を忘れられず、面影を追う

一 いくら思っても、なお飽きることなくいとしく思われたあの人が、夕顔に置く露の消えるように、はかなく死んでしまったあとの悲しみを。

二 当時の年月の数え方は、あしかけで数えるので、年を越すと、年月という言い方をする。

三 どの女君も、心を開かぬ方ばかりで、気取りやたしなみの深さを競い合われるといった有様なので。「いどましさ」は、競争心の強さ。葵の上や六条の御息所を念頭においている。

四 懲りずに思いつづけていらっしゃるので。「こりずまに」は、懲りずに。夕顔の巻に「なほこりずまに、またもあだ名立ちぬべき御心のすさびなめり」（一七五頁）とあったのを思い起させる言葉。

五 恋文でもやってみようかという気におなりになるほどの様子が感じられる（女の）所には。

六 （といって）なかなか靡かない気の強い女は、何ともいえず情け知らずのもの堅さといった点で、あまりにものの機微が分らぬようでいて。

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしここちを、年月経（二）れど、おぼし忘れず、（三）ここもかしこも、うちとけぬ限りの、けしきばみ心深きかたの御いどましさに、け近くうちとけたりしあはれに似るものなう、〔源氏は〕恋しく思ほえたまふ。

いかで、〔どうかして〕ことことしきおぼえはなく、〔大層な身分ではなく〕いとらうたげならむ人の、つつましきことなからむ、〔気を張る必要のない人を〕見つけてしがなと、（四）こりずまにおぼしわたれば、すこしゆるづきて聞こゆるわたりは、〔ちょっとでもすぐれた点があると噂される人のことは〕御耳とどめたまはぬ隈なきに、（五）さてもやとおぼし寄るばかりのけはひあるあたりにこそは、一行をもほのめかしたまふめるに、〔ほんの一行にしろ文をおやりになるようだが〕なびききこえずもて離れたるは、をさをさあるまじきぞ、〔全く珍しげのない話だ〕いと目馴れたるや。（六）つれなう心強きは、たとしへなう情おくるるまめやかさなど、あまりもののほど知

〔見つけたいものだと〕〔ほんとにかわいらしげな女で〕〔人なつこく自分を信じきっていた夕顔の愛らしさに〕〔隈なくお耳をとどめられるのに〕〔お気持に従わずすげなく振舞う女は〕〔めったになさそうなのは〕

一（そのくせ）そのもの堅さを貫き通すでもなく。

二 伊予の介の娘（軒端の荻）のこと。夕顔の巻に、源氏が「ほのかにも軒端の荻をむすばずは露のかことをなににかけまし」（一七五頁）という歌をやったことからこういう。

三 適当な機会がある時は、お便りをなさることもあるようだ。「たより」は、つて。「おどろかす」は、風が荻の葉に吹いて音を立て、人の注意を促す意味を掛ける。

四 灯に照らされた（軒端の荻の）しどけない姿。空蟬の巻で、空蟬と碁を打っていた時の様子をいう。（一〇八頁参照）

五 左衛門の乳母といって、源氏が大弐の乳母の次に大切に思っておられる者の娘で。大弐の乳母は夕顔の巻で尼になった人（夕顔一一一頁参照）。

六 女房の呼び名。命婦は五位以上、または五位以上の者の妻をいう。命婦は何人かいるので、父や夫の官職名などを上に冠して、区別する。

七 兵部省の次官。正五位下相当。兵部省は諸国の兵士、軍事一切をつかさどる役所。

八（命婦の）母は筑前の守と再婚して、夫と共に任国に下って行ったので。

九 亡くなられた常陸の宮。常陸は上総、上野とともに国司の長官を、大守と呼び、親王を任命した。赴任

源氏、大輔の命婦から末摘花の噂を聞き、興味を持つ

らぬやうに、一さてしも過ぐしはてず、名残なくくづほれて（だらしなく陥落して）、なほな（大したこと）ほしきかたに定まりなどするもあれば、（源氏が）途中でやめてしまわれた女も多かったけり。

かの空蟬を、もののをりをりには、ねたうおぼしいづ（こしゃくな女だと）。荻の葉も、二さりぬべき風のたよりある時は、おどろかしたまふをりもあるべし。

三火影の乱れたりしさまは、（源氏は）またあんなふうな姿をご覧になりたいと思われる（総）またさやうにても見まほしくおぼす。おほかた、名残なきもの忘れをぞ、（昔の女をすっかり忘れはてることがおできにならないのだった）えしたまはざりける。

五左衛門の乳母とて、大弐のさしつぎにおぼいたるが女、大輔の命婦とて、内裏にさぶらふ、（皇族の血筋の）わかむどほりの兵部の大輔なる女なりけり。（命婦は）いといたう色好める若人にてありけるを、（若女房であったのを）君も召し使ひなどし（源氏）たまふ。母は筑前の守の妻にて下りにければ、（実家として）父君のもとを里にて行き通ふ。故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづ（晩年にもうけられて大層かわいがられ大切にお育てになった姫君が）きたまひし御女、心細くて残りゐたるを、（命婦が）もののついでに語りきこ（源氏に）えければ、（気の毒なことだなと）あはれのことやとて、（源氏は）御心とどめて問ひ聞きたまふ。「心（命婦）（末摘

はせず、介が実務をつかさどる。

一〇 人とお付合いしたがられませんので。

一一 しかるべき夜。命婦が伺ったような晩など。

一二 簾、几帳、障子（今の襖）などを隔てて会うこと。

一三 中国渡来の七絃の楽器。中国では君子が常に携えるものの一つとして重んじられたが、わが国では延喜、天暦以後あまり演奏されず、奏法も絶えた。ここは末摘花の古風な教養が窺えるところである。

一四 三友ということになるが、もう一つの方は（女にとっては）感心しないだろうね。「三つの友」は、『白氏文集』の「北窓の三友」に「欣然として三の友を得たり　三友は誰とか為る　琴能んで輒ち酒を挙す　酒罷んで輒ち詩を吟ず　三友遞ひに相引きて　循環して已む時無し」とあるのによって、琴詩酒の三友のうち、酒は婦人向きではないね、と冗談を言ったもの。

一五 お前（命婦）も、その時宮中を下がってこい。

一六 よそに。新しい妻の所に。

一七 「ここ」は、常陸の宮邸。文意から推して常陸の宮邸を本拠としていたのを、新しい妻の家に住みついたととれるので、兵部の大輔は宮家とよほど縁の深い人（末摘花の兄か）と考えられる。

一八 琴の音が冴えて響きそうな夜でもございませんのに。音楽の演奏は秋の澄んだ空気によく合うとされていたが、今夜は春の朧月夜であるため、こういう。

源氏、朧月夜に常陸の宮邸を訪れ、末摘花の琴を聞く

ばへ容貌など、深きかたはえ知りはべらず。かいひそめ、人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越にてぞ、かたらひはべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」と聞こゆれば、「三つの友にて、今一種やうたてあらむ」とて、「われに聞かせよ。父親王の、さやうのかたにいとよしづきてものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじとなむ思ふ」とのたまへば、「さやうにきこしめすばかりにはあらずやはべらむ」と言へど、御心とまるばかり聞こえなすを、「いたうけしきばましや。このころの朧月夜に忍びてものせむ。まかでよ」とのたまへば、わづらはしと思へど、内裏わたりものどやかなる春のつれづれにまかでぬ。父の大輔の君は外にぞ住みける。ここには時々ぞ通ひける。命婦は、継母のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりをむつびて、ここには来るなりけり。

のたまひしもしるく、十六夜の月をかしきほどにおはしたり。

「いと、かたはらいたきわざかな、ものの音澄むべき夜のさまにもは

（源氏）控え目で　一〇　くわしいことは分りません　一一　（源氏）　一二　むつまじい話相手　一三　音楽の方面にかけては大層造詣が深くていらっしゃったから　一四　（命婦）そう大層にお聞きあそばすほどのことではなさそうでございますあるまいと思う　一五　ご執心なさるようにうまく申し上げるを　（源氏）ひどくもったいぶるね　一六　（常陸宮邸へ）そっと行こう　一七　面倒なことになったと思うが　宮中でも行事が少なくてのんびりした春の一日の所在ない折に　一八　おっしゃったとおりに　（命婦）まあ困りましたこと　お親しみ申して

一（命婦は）取り散らした部屋（常陸の宮邸で命婦がふだん使っている部屋）に（源氏を）お通しして、失礼なことがないかと気がかりにもったいなくも思ったが。

二 末摘花のいる所。

三 お琴の音がどんなに聞きばえがするか、と存じられます今夜の風情に。前に「ものの音澄むべき夜のさまにもはべらざめるに」と源氏に言ったのと反対のことを言う。末摘花に琴を弾かせようという仲人口。

四（琴を）分ってくれる人がいるのですね。（でも）宮中にお出入りしている（耳の肥えた）人が聞けるほどにはとても。

五 琴という特別格式の高い楽器の音なので。

六 常陸の親王といった方が、昔ながらのしきたりを崩さず、下へも置かぬようにして、大切に育てたであろうに、そのあとかたもない今の有様に。

七（姫君は）どれほど物思いの限りをつくしていられることだろう。

八 こんな荒れはてた所に、かえって思いがけぬ美人が住んでいて、恋がうまれるという話が、昔物語にもよくあるものだ。

べらざめるに」と聞こゆれど、「なほあなたにわたりて、ただ一声ももよほしきこえよ。むなしくて帰らむが、ねたかるべきを」とのたまへば、うちとけたる住処にする、たてまつりて、うしろめたうかたじけなしと思へど、寝殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかしきを見いだしてものしたまふ。よきをりかな、と思ひて、「御琴の音いかにまさりはべらむ、と思ひたまへらるる夜のけしきに、さそはれはべりてなむ。心あわたたしき出で入りに、えうけたまはらぬこそくちをしけれ」と言へば、「聞き知る人こそあなれ。百敷に行き交ふ人の聞くばかりやは」とて、召し寄するも、あいなう、いかが聞きたまはむと、胸つぶる。ほのかに搔き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。何ばかり深き手ならねど、ものの音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくもおぼされず。いといたう荒れわたりて、さびしき所に、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、かしづきする、たりけむ名残なく、いかに思ほし残すことなからむ、か

（源氏）黙ってご主人のところへ行って　たった一声でもいから琴をおすすめしてこい　何も聞かずに帰るのは　いまいましいじゃないか

（命婦は）眺めていらっしゃった

（三）ひかれまして参上いたしました　いつも気ぜわしくお伺いしてもすぐ失礼して　なかなかお聞かせ頂けないのが残念でございます

（末摘花）（四）

（琴を）

（命婦は）心配で

（末摘花は）

源氏が何と聞かれるだろうと

どれほど上手な腕前というのでもないが

（源氏は）

（六）

（七）

（八）

九 末摘花が、（順序も踏まず）あまりぶしつけなと思われるかもしれないと。

一〇 源氏にそうたくさんお聞かせ申すまい（あらが見えぬ程度にしておこう）。

一一 空も曇り模様のようでございます。曇った日は、楽器の音が冴えないといわれていたから、弾いてもかいがないといって、やめさせようとするのである。

一二 私（命婦）の部屋に客が来るように申していました。（いつまでもこちらにいまして、自分の部屋に下がらないでいると）嫌っているようにとられます。通う男が来るという口実でお前を下がろうとする。「もこそ」には、そうなっては困るの意がある。

一三 源氏が、心にくい（もっと聞きたい）と思われるぐらいのところでとめておこう、と思うので。

一四 さあ、いかがなものでしょう。（末摘花は）不如意なお暮し向きのせいでしおれがちで、お気の毒なご様子とお見うけしますので、（殿方をお引き合せ申すのは）どんなものかと案じられまして。「うしろめたし」は、末摘花の様子が、不意に源氏のような男性と付き合わさせるにはいたいたしくて心配だ、の意。

一五 （それに反して、末摘花は）おいたわしく思われるほどのご身分の高さなので。

やうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどもありけれ、など思ひ続けても、（源氏は）ものや言ひ寄らましとおぼせど、（気持を打ち明けてみようかと思われるが）うちつけにやおぼさむと、心はづかしくて、（源氏は）やすらひたまふ。（気がひけてためらっていらっしゃる）

命婦、（気の利く女で）かどある者にて、一〇いたう耳ならさせたてまつらじ、と思ひければ、「（命婦）一一曇りがちにはべるめり。客人の来むとはべりつる、いとひ顔にもこそ。いま心のどかにを。御格子参りなむ」とて、（そのうちゆっくりと）いたうまり琴をおすすめせずに）もそそのかさで帰りたれば、（源氏）なまじ聞かぬがましな程度で）「なかなかなるほどにても止みぬるかな。もの聞き分くほどにもあらで、（うまいかどうか聞き分けるまもなくて）ねたう」（残念だ）とのたまふけしき、（をお持ちになったご様子だ）かしとおぼしたり。（源氏）「おなじくは、け近きほどの立ち聞きせさせよ」（姫君のお側近くで）とのたまへど、一三心にくくて、と思へば、（命婦）一四「いでや、いとかすかなるありさまに思ひ消えて、心苦しげにものしたまふめるを、うしろめたきさまにや」と言へば、げにさもあること、にはかにわれも人も（なるほどそれもそうだ）うちとけてかたらふべき人の際は、際とこそあれなど、一五あはれにおぼさるる人の御ほどなれば、（源氏）「なほ、（やはり）さやうのけしきをほのめかせ」（すぐにこちらも相手もお互いに親しくなってしまうような人は）（その程度の身分なのだと）（私の気持をそれとなく伝えよ）

言い含められる
とかたらひたまふ。また契りたまへるかたやあらむ、いと忍びて帰
ほかに約束しておられたところがあるのだろう
りたまふ。「上の、まめにおはしますともてなやみきこえさせたま
（命婦）　帝が　あなた様がきまじめでいられるとお気にあそばしていたのが
ふこそ、をかしう思うたまへらるるをりをりはべれ。かやうの御や
おかしく存じられる折がちょいちょいございます　でも今夜のようなお
帝がどうしてお見つけになれましょう
つれ姿を、いかでかは御覧じつけむ」と聞こゆれば、たちかへり、
忍び姿を　（源氏）　（源氏は）
うち笑ひて、「異人の言はむやうに、咎なあらはされそ。これをあ
ことを浮気っぽい行いと責めるのなら　この程度の
だあだしきふるまひといはば、女のありさま苦しからむ」とのたま
（命婦は）
へば、あまり色めいたりとおぼして、をりをりかうのたまふを、は
づかしと思ひて、ものも言はず。

寝殿のかたに、人のけはひ聞くやうもやとおぼして、やをら立ち
姫君の様子でも聞けようかと　（源氏は）
出でたまふ。透垣のただすこし折れ残りたる隠れのかたに、立ち寄
物陰に
りたまふに、もとより立てる男ありけり。誰ならむ、心かけたる好
前から立っている男
き者ありけりとおぼして、陰につきて立ち隠れたまへば、頭の中将
（源氏は）　寄り添って
なりけり。この夕つ方、内裏よりもろともにまかでたまひける、や
源氏と一緒に退出なさったのが
がて大殿にも寄らず、二条の院にもあらで、引き別れたまひけるを、

一　まるでほかの人間が言うように、私の浮気の欠点を言いたててくれるな（お前のような多情な女が他人のことを言えた義理でもあるまい）。

二　女のしていることは弁解できまい。「女のありさま」は、ここでは命婦の浮気沙汰をさす。前に「いといたう色好める若人にてありけるを」（二四六頁）とあった。

三　以下命婦の心中。源氏が自分をあまり浮気っぽいと思し召して、時々こんな皮肉をおっしゃるのを。

源氏、頭の中将に見つけられる

四　竹や木で、間を少し透かして作った垣。建物の間に立てて、目隠しにした。（図録八参照）

五　（末摘花に）興味を持つ洒落者もいるのだなと。

六　源氏はそのまま左大臣家にも寄らず。「大殿」は、源氏の夫人葵の上の所。頭の中将の家。

七　自分（頭の中将）も、約束した女の所はあったのだが、源氏の車のあとをつけて、様子を見張っていたのだった。

八　以下頭の中将の身なり。「あやしき馬」は、馬や馬具などが粗末なもの。「狩衣」は、貴族が旅行や微行の時用いた略服。縫合せが少なく行動的な仕立て方。夕顔の巻で、源氏が夕顔の宿に通うのに用いている（図録一二参照）。

九　さすがに、こんな意外な所（姫君のいる寝殿ではなくて、女房の局のある建物）に入られたので、わけが分らないでいるうちに。「さすがに」は、「心も得ず思ひける」に掛る。

一〇　ご一緒に宮中を退出しましたのに、行く先を晦ましておしまいになるのですね。「大内山」は、宇多法皇御所のあった京都市右京区仁和寺西北の山。転じて内裏の意に用い、源氏を当夜の十六夜の月にたとえている。「山」「入る」「月」は縁語。

一一　人が思いもつかぬことをするじゃないか（驚き入ったことをするね）。

一二　どの里をも、あまねく照らす月の光は仰いでも、大空を渡ってゆく月が入ってゆく山まで誰が尋ねてゆくものがあろう。あちこちの女の所に忍んでゆくのを知っていても、あとをつける者があるものか。「里」は、「大内山」（宮中）に対して用い、女の家のこと。「いるさの山」は、但馬の国（兵庫県）の歌枕。「いるさ」（入る時）を掛ける。

どこへ行かれるのだろうと　見過せずに

いづちならむと、ただならで、われも行くかたあれど、あとにつきてうかがひけり。あやしき馬に、狩衣姿のないがしろにて来ければ、

身軽な風采で

〔源氏は〕気づかれないのに

え知りたまはぬに、さすがに、かう異方に入りたまひぬれば、心も得ず思ひけるほどに、ものの音に聞きついて立てるに、帰りや出で

琴の音に耳をとられて立っていたのだが　〔源氏が〕

出て来られるかと　心待ちしているのだった　源氏

たまふと、した待つなりけり。君は、誰ともえ見分きたまはで、われと知られじと、抜き足に歩みのきたまふに、ふと寄りて、「ふり捨てさせたまへるつらさに、御送りつかうまつりつるは。

誰だかお分りにならず　〔頭中将は〕　お見送りいたしたのですよ

（頭中将）一〇

もろともに大内山は出でつれど

入るかた見せぬいさよひの月」

〔源氏は〕しゃくだが　頭の中将だとお分りになると

とうらむるもねたけれど、この君と見たまふに、すこしをかしうなりぬ。「人の思ひよらぬことよ」と憎む憎む、

（源氏）一一　憎らしがりながら

（源氏）一二

里わかぬかげをば見れどゆく月の

いるさの山を誰かたづぬる

（頭中将）こんな具合におあとをつけ廻したら　どうなさいますか

「かうしたひありかば、いかにせさせたまはむ」と聞こえたまふ。

一 まじめな話、こんなお忍び歩きには、お供の腕次第で事もうまく運ぼうというものです。従者の才覚で女に手引きしてもらえることもあるのだとやりこめている。「随身」は、近衛府の武官。勅命によって上皇以下貴人に賜り、身辺の警護に当る。源氏はこの時近衛の中将で、随身四人を賜っているため、それにかこつけて用いた言葉。「随身から」は、随身によって。

二 身分にふさわしくない事件も起りましょう。

三 あの撫子を（頭の中将が）探し出せないでいるのを、自分の方の大きな得点だと内心思い出していらっしゃる。「かの撫子」は、夕顔の遺児のこと。雨夜の品定めで頭の中将がこう呼んでいる（帚木七四頁参照）。頭の中将はその行方を知らないが、源氏は夕顔の死後、侍女右近からその消息を聞いているので優越感を持つ。（夕顔一七〇頁参照）

源氏、頭の中将と同車して、左大臣邸に行く

四 お二人とも直衣（貴族の平常着）をお取り寄せになって、お着換えになる。「ども」は、複数を示す。

五 雅楽の高麗楽に用いる笛。横笛（唐楽に用いる）よりも細くて短い。

六 葵の上づきの女房。

七 ただこの源氏の君がほんの時たまおかけ下さる情けのお慕わしいのを、お断り申せずにいるので、自然に知れわたって。

（頭中将）一「まことは、かやうの御ありきには、随身からこそはかばかしきこともあるべけれ。後らさせたまはでこそあらめ。（私を放ってゆかれぬのがよいでしょう）やつれたる御ありきは、軽々しき事も出で来なむ」と、おし返しいさめたてまつる。（身をやつしてのお出ましは攻勢に出て忠告申し上げる）

（源氏は）いつもこんなふうに見つけられるのを頼だと思われるがかうのみ見つけらるるを、ねたしとおぼせど、三かの撫子はえたづね知らぬを、重き功に御心のうちにおぼしいづ。

（お二人ともお約束の人の所にも）おのおの契れるかたにも、あまえて、え行き別れたまはず、一つ車に乗りて、月のをかしきほどに雲隠れたる道のほど、笛吹き合せて大殿におはしぬ。前駆などもおはせたまはず、忍び入りて、人見ぬ廊に御直衣ども召して着かへたまふ。つれなら、今来るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、大臣、例の聞き過ぐしたまはで、五高麗笛取り出でたまへり。いと上手におはすれば、いとおもしろう吹きたまふ。御琴召して、うちにも、このかたに心得たる人々に弾かせたまふ。中務の君、わざと琵琶は弾けど、頭の君心かけたるをもて離れて、七ただこのたまさかなる御けしきのなつかしきをば、え

（月が風情ありげに雲隠れる道中を）（いい気なもので）（横笛）（左大臣邸）（人目につ）（前駆の者に声もお立てさせにならず）（かぬ渡殿で）（何食わぬ顔をして）（今来たばかりのふうで）（お二人で笛を吹き興じながらいらっしゃるので）（左大臣は）（簾の内にも）（音楽にかけては堪能な女房たちに）（特に琵琶をよく弾くけれども）（頭の中将が気があるのをふり切って）

八 左大臣の北の方。頭の中将や葵の上の母。桐壺帝の妹。

九 「寄り臥す」は、何かに寄りかかって横になること。

一〇 中務は（左大臣家にいづらいので、お暇をもらうにしても）源氏の姿を全くお見かけ申さぬ所に離れていってしまうのも、やはり心細くて思い悩んでいる。

一一 源氏と頭の中将は、琴の音を聞いて、さきほどの末摘花の琴を思い出すのである。

一二 もし仮に、美しくて可憐な女が、あんな（常陸の宮邸のような）荒れはてた所で、ずっと一人でさびしく暮しているような場合、結ばれてたまらなくいじらしくなったら、世間の評判になるほど、わが心も不様に取り乱すことだろうと。頭の中将もやはり、昔物語にあるような荒れた宿に思いがけぬ美人を見出す場合を空想して、心をときめかしている。「あらましごと」は、仮定のこと。

一三 あまりひどいじゃないか。これより以下「心づきなくわるびたり」まで、源氏と頭の中将の心中。

一四 何でもない草木や、空のたたずまいにつけても、それにかこつけて歌に詠んだりして、その女の気立てが自然にしのばれるような時が何度かあってこそ風情があろうというものだ。

桐壺帝 ― 光源氏
内親王（大宮）
左大臣 ― 頭中将
葵上

源氏、頭の中将と競争して末摘花に文をやる

背ききこえぬに、おのづから隠れなくて、大宮（八）なども、よろしから（こころよからず）ずおぼしなりたれば、もの思はしくはしたなきここちして、すさまじげに寄り臥（九）したり。絶（一〇）えて見たてまつらぬ所にかけ離れなむも、さすがに心細く思ひ乱れたり。

君（きみ）たちは、ありつる琴（こと）の音をおぼしいでて、あはれげなりつる住（すま）ひのさまなども、やうかへてをかしう思ひつづけ、あらましごとに（一二）、いとをかしうらうたき人の、さて年月（としつき）を重ねゐたらむ時、見そめていみじう心苦しくは、人にもて騒がるばかりや、わが心もさまあしからむなどさへ、中将は思ひけり。この君のかけしきばみありきたまふを、まさにさては過ぎしたまひてむやと、なまねたうあやふがりけり。

そののち、こなたかなたより文などやりたまふべし。いづれも返りこと見えず、おぼつかなく心やましきに、あまりうたてもあるかな、さやうなる住ひする人は、もの思ひ知りたるけしき、はかなき（一四）

（思うようになっていられるので）（憂鬱でいづらい思いがして）（さそうに）（風変りでおもしろいと）（みすぼらしい）（源氏）（こんなふうにただならぬ様子で）（とてもあのままではすまされまいと）（小憎らしく油断ならぬ思いがするのだった）（源氏からも頭の中将からも恋文などおやりになるようだ）（気にもなるしおもしろくないので）（おもしろくな）（ああいうわびしい）（ものの情趣を解するところを）

木草、空のけしきにつけても、とりなしなどして、心ばせおしはからるるをりをりあらむこそあはれなるべけれ、重しとても、いとかうあまりうもれたらむは、心づきなくわるびたりと、中将はまいて心いられしけり。例の隔てきこえたまはぬ心にて、「しかしかの返りことは見たまふや。こころみにかすめたりしこそ、はしたなくて止みにしか」と、うれふれば、さればよ、言ひ寄りにけるをやと、ほほゑまれて、「いさ、見むとしも思はねばにや、見るとしもなし」と、いらへたまふを、人わきしけると思ふに、いとねたし。

重々しいといっても　引っ込み思案なのは　おもしろくないしよろしくないと　源氏以上に　苛立っていた　〔頭中将は〕いつものあけっぴろげのお気安さで　〔頭中将〕一　ためしにほんの一筆やってみましたが　二　やっぱり　口説いたのだなと　三　にやにやされて　〔源氏〕さあ　しいて見ようとも思わないからか　見るというわけでもないよ

君は深うしも思はぬことの、かう情なきを、すさまじく思ひなりたまひにしかど、かうこの中将の言ひありきけるを、言多く言ひなれたらむかたにぞ靡かむかし、したり顔にて、もとのことを思ひ放ちたらむけしきこそ、うれはしかるべけれとおぼして、命婦を、まめやかにかたらひたまふ。「おぼつかなうもて離れたる御けしきなむ、いと心憂き。すきずきしきかたに疑ひ寄せたまふにこそあらめ。

しきりに言い寄っているが　六　こと　〔源氏は〕　命婦に対して　真剣に相談なさる　〔源氏〕八　一時の浮気じゃないかと私のことをお疑いなのでしょう

一　あの方からのお返事はご覧になりましたか。「しかしかの返りこと」（こうこうのお返事）は、末摘花からの源氏の恋文に対する返事のことを、作者が省略した形で言ったもの。

二　相手にされないままで終ってしまいましたよ。「はしたなし」は、間が悪いこと。

三　「うれふ」は、泣き言を言う。

四　差別したなと思うと。源氏の返事を聞いて、頭の中将は、末摘花が源氏にだけ返事をやっているとひがむのである。

五　一方源氏は、さほど執着してもいないことが、こう無愛想に扱われるので、だんだん気持が冷めていらしたが。

六　女は言葉数の多い、恋文を書き馴れている方に靡くであろう。

七　（その時）得意然として、はじめの男（源氏）を振ったような様子をされるのは、たまらないだろう。

八　（私の気持をどう思っていられるのか）さっぱり事情が分らず、（私の文にも）見向きもなさらぬご様子が、とても情けない。末摘花から反応のないことをいう。

九 相手の女の人がゆったりしたところがなくて、（私はそんなつもりではないのに）心外なことばかりあるので（源氏が冷たくなったと誤解して離れてゆくので）、結果として自然に私の落度にもなるようです。

一〇 女の人が気長な性分で、はたから入れ知恵したり文句を言ったりする親兄弟もなく、気のおけぬ人は。末摘花と同じ境遇をあげ、彼女にも「心のどかに」「心やすく」してほしいと暗に望んでいる。

一一（末摘花は）仰せのような風情のあるお休み所には、とても無理ではないかと、お似合いでないようにお見受けします。「笠宿り」は、軒下や木蔭などに雨宿りすること。転じて一時立ち寄る意。催馬楽、呂「妹が門」の「妹が門　夫が門　行き過ぎかねてや　我が行かば　肱笠の　肱笠の　雨もや降らなむ　死出田長　雨宿り　笠宿り　宿りてまからむ　死出田長」による。

一二 瘧病におかかりになったり。若紫の巻の冒頭に「瘧病にわづらひたまひて……」とあったのをさす。

一三 ひそかな恋の悩み（藤壺とのこと）に気を取られたり。若紫の巻の密通事件をさす。

源氏、命婦に末摘花の手引きをうながす

一四 夕顔の宿に泊って、砧の音を聞いたことをさす。（夕顔一四一頁参照）

一五 普通の女らしくなく。「世づく」は、男女の情が分ること。

さりとも短き心はえつかはぬものを。（すぐ変る心など持ち合せないのに）人の心ののどやかなることなくて、思はずにのみあるになむ、おのづからわがあやまちにもなりぬべき。心のどかにて、親はらからのもてあつかひ恨むるもなう、心やすからむ人は、なかなかなむらうたかるべきを」とのたまへば、（命婦）「いでや、さやうにをかしきかたの御笠宿りには、えしもやと、つきなげにこそ見えはべれ。ひとへにものづつみし、（末摘花は）ひき入りたるかたはしも、ありがたうものしたまふ人になむ」と、見るありさま語りきこゆ。らららうじうかどめきたる心はなきなめり。いと子めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれと、おぼし忘れずのたまふ。瘧病にわづらひたまひ、人知れぬもの思ひのまぎれも、御心のいとまなきやうにて、春夏過ぎぬ。

（ただもう恥ずかしがって内気な点は世にもめずらしくていらっしゃるお方で知っていることを気が利いて才が働くという点はないのだろうだがほんとに子供のようにおっとりしているほうがかわいく思われるだろうと）（かえってかわいく思われるだろうに）（命婦に）（お手紙をお送りになるが相変らずお返事がないのでのことをお考えになる暇もない様子で）

秋のころほひ、静かにおぼしつづけて、かの砧の音も、耳につきて聞きにくかりしさへ、恋しうおぼしいでらるるままに、常陸の宮にはしばしば聞こえたまへど、なほおぼつかなうのみあれば、世づ

かず、心やましう、負けては止まじの御心さへ添ひて、命婦を責めたまふ。「いかなるやうぞ。いとかかることこそ、まだ知らね」と、いとものしと思ひてのたまへば、いとほしと思ひて、「もて離れて、似げなき御こととも、おもむけはべらず。ただ、おほかたの御ものづつみのわりなきに、手をえさし出でたまはぬとなむ見たまふる」と聞こゆれば、「それこそは世づかぬことなれ。もの思ひ知るまじきほど、独り身をえ心にまかせぬほどこそ、さやうにかかやかしきもことわりなれ。何ごとも思ひしづまりたまへらむと思ふにこそ。そこはかとなく、つれづれに心細うのみおぼゆるを、同じ心に答へたまはむは、願ひかなふここちなむすべき。何やかやと世づける筋ならで、その荒れたる簀子にたたずままほしきなり。いとうたて心得ぬここちするを、かの御ゆるしなうともたばかれかし。心いられし、うたてあるもてなしには、よもあらじ」など、かたらひたまふ。なほ世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞き集め、

一 ほんとに、こんなことって、経験したことがないよ。源氏は女に恋文をやって、これほど無視されたことはないので、腹を立てている。

二 （源氏とのことを）問題にならない、ふさわしからぬご縁だとも、姫君に申し上げたこともございません。「おもむく」は、下二段活用。そのように言うこと。

三 お返事もようなさらないのだとお見受けします。

四 （自分は）何ということなく、ものごとが手につかず、いつも心細い思いでいるから、（末摘花が）同じような気持で返事を下さったら、本望なのだ。現在の境遇にいる末摘花の気持と、自分の気持は似ていて、二人は理解し合えるはずだというのである。

五 あの（常陸の宮の）荒れた簀子（縁側）に、佇んでみたいのだ。前に「世づける筋ならで」と言ったので、部屋に入れてくれとは言わない、簀子でお話がしたいだけだと言う。

六 （末摘花から全然反応がないので）とてもいやなわけの分らぬ思いがするから。裏に直接逢って姫の真意を確かめたいという気持がある。

七 焦れて、けしからぬ振舞は、けっしてしないから。「うたてあるもてなし」は、いやな（姫君に対する）取扱い。姫君が承知しないのに、無理に契りを結ぶこと。

おもしろくなく
（源氏）どういうことだ
不愉快だと
〔命婦は〕お気の毒と思い
万事につけてご遠慮がひど
（源氏）
世間知らずというものだ
わけが分らぬ年頃とか
親がかりで自分のことが自分でままならぬ間は
そのように照れて恥ずかしがって
〔末摘花なら〕何事もしんみりお考えになるだろうと思うのでお便りするのだ
姫君のご承諾がなくてもお話しできるよう計らってくれ
あれやこれやと色めいたことでは
話をおつけになる
〔源氏は〕相変らず世間の女の様子を
気のないようなふりをしていろいろ聞いておき

八 人気の少ない宵の席などで。「さうざうし」は、もの足りず、さびしいこと。

九 （末摘花のことを）こんな方がいられますとだけお耳にお入れしたのに。

一〇 なんとなく気が重く。以下「いとほしきことや見えむ」まで、命婦の心。

一一 しない方がましなような手引きをして、かえって（末摘花に）お気の毒なことになるかもしれない（末摘花の欠点があらわになるかもしれない）。

一二 源氏の君が、こうまで真剣におっしゃるのに、聞き流すのも、頑なというものだろう。

一三 庭の雑草を分けて、訪れる人もないのに。「浅茅」は、丈の低いちがや。来訪者がないので庭も草に埋もれた荒れたさまをいう。

一四 こんな世にも珍しいお方から、すばらしいお手紙が時々来るのを。「にほふ」は、光彩を放つ。はなやかで勢力の盛んなこと。

一五 しがない女房たち。「なま」は、未熟な、大したものではない意味をあらわす接頭語。

一六 また、ご縁があって、万が一、源氏がお通いになるようなことになっても、文句をおっしゃる方（ご両親など）もいらっしゃらない。

耳とどめたまふ癖のつきたまへるを、八さうざうしき宵居などに、はかなきついでに、九さる人こそとばかり聞こえいでたりしに、かくわざとがましうのたまひわたれば、一〇なまわづらはしく、女君の御ありさまも、よづかはしく、よしめきなどもあらぬを、一一なかなかなるみちびきに、いとほしきことや見えむ、など思ひけれど、一二君のかうまめやかにのたまふに、聞き入れざらむも、ひがひがしかるべし。父親王おはしけるをりにだに、旧りにたるあたりとて、おとなひきこゆる人もなかりけるを、まして、今は浅茅分くる人もあと絶えたるに、一四かく世にめづらしき御けはひの漏りにほひくるをば、一五なま女ばらなども笑みまけて、「なほ聞こえたまへ」とそそのかしたてまつれど、あさましうものづつみしたまふ心にて、ひたぶるに見も入れたまはぬなりけり。命婦は、さらばさりぬべからむをりに、物越に聞こえたまはむほど、御心につかずは、一六さても止みねかし、またさるべきにて、仮にもおはし通はむを、とがめたまふべき人なし、

これといった人を心にとめておかれる癖がおありなので　っとした話のついでに　こんなに　末摘花　女らしくも　奥ゆかしくもないのに　本気になっておっしゃりつづけるので　時勢に遅れたお邸だというので　相好を崩して　（女房）やはりお返事をなさいませ　とおすすめ申し上げるけれど　〔末摘花は〕途方もなく内気なご気性で　見向きもなさらないのであった　それなら適当な機会に　〔源氏が〕　お話しなさる折　お気に召さないなら　それきりで終ればよし

など、（浮気っぽい軽はずみな性分で考えて）あだめきたるはやり心はうち思ひて、一父君にも、（こんなことがありますなどとも報告しないのだった）かかることなども言はざりけり。

八月二十余日、（夜が更けるまで待ち遠しく思われる月がなかなか出ないので）宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへの事語りいでて、（〔末摘花は〕）うち泣きなどしたまふ。（〔命婦が〕）いとよきをりかなと思ひて、（〔源氏に〕）御消息（ご案内申し上げたのか〔源氏は〕）や聞こえつらむ、（〔常陸宮邸に〕）例のいと忍びておはしたり。月やうやう出でて、荒れたる籬のほどうとましく、（〔源氏が〕）うちながめたまふに、琴（きん）そそのかされて、（〔命婦にすすめられて〕）ほのかにかき鳴らしたまふほど、（〔末摘花が〕）けしうはあらず。（まんざらでもない）三すこしけ近う今めきたる気をつけばやとぞ、（〔命婦の〕）みだれたる心には、（〔源氏は〕）心もとなく（〔常陸宮邸は〕）思ひゐたる。人目しなき所なれば、（気がねなくお入りになる）心やすく入りたまふ。命婦を呼（お呼ばせになる）ばせたまふ。

四今しもおどろき顔に、（〔命婦〕）「いとかたはらいたきわざかな。（ほんとうに困りましたわ）しかしかことで源氏の君がお越しだそうです）こそおはしましたなれ。五常にかう恨みきこえたまふを、（私の一存ではまいらぬ旨を申しては）心にかなはぬ由をのみ、いなびきこえはべれば、六みづからことわりも聞こえ知（お断り申し上げておりますので）

一 命婦の父、兵部の大輔。この書き方から、兵部の大輔は末摘花の兄かとも考えられる。

源氏、常陸の宮邸を訪れ、末摘花に逢う

二（月に照らし出された）荒れた垣根のあたりが気味悪く。

三 もう少し近づきやすいはなやいだ気分を添えたいものだと。

四 命婦は、今はじめて（源氏の来訪を）知ったような顔をして。

五 いつもこうこうと（末摘花からお返事がないことを）お恨みなさっているのを。

六 源氏の君ご自身で、直接ことを分けてよくお話し申そうと、かねてからおっしゃっているのでございます。

七（今夜の源氏のご来訪は）ご身分がら、そこらの人のような身軽なお出ましではないので、（すげなく扱うのは）もったいなく思われますから。

八（ご両親も亡くなられ）これほどまで頼りなげなお暮し向きですのに、相変らずどこまでも引っ込み思案でいらっしゃるのは、おかしゅうございますよ。

九 格子などしめてならいいでしょう。「格子」は、（廂）と簀子の境の建具で、建物の一番外側にある。「鎖す」は、錠をさすこと。末摘花は源氏を簀子に招じるつもりでいる。

一〇（源氏は）むりやりな、浅はかなお気持など、けっして（起されませんから）。「おしたちて」は、相手の気持を無視した、強引な。「あはあはしき御心」は、衝動的な、思慮のない（女の立場を考えない）お気持。

一一 廂の一部。「間」は、柱と柱のあいだ。「二間」は、柱間二つを通し、部屋にしたもの。命婦は、源氏を簀子でなく、廂に招じることにした。

一二 二間と母屋の境の襖障子。

一三 お座蒲団。源氏の座席。

末摘花

らせむと、のたまひわたるなり。いかが聞こえ返さむ。なみなみのたはやすき御ふるまひならねば心苦しきを、物越にて、聞こえたまはむこと、聞こしめせ」と言へば、いとはづかしと思ひて、「人にもの聞こえむやうも知らぬを」とて、奥さまへぬざり入りたまふさま、いとうひうひしげなり。うち笑ひて、「いと若々しうおはしますこそ心苦しけれ。限りなき人も、親などおはしてあつかひ後見きこえたまふほどこそ、若びたまふもことわりなれ、かばかり心細き御ありさまに、なほ世を尽きせずおぼし憚るは、つきなうこそ」と教へきこゆ。さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、「答へきこえで、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。「簀子などは便ならはべりなむ。おしたちて、あはあはしき御心などは、よも」など、いとよく言ひなして、二間の際なる障子、手づからいと強く鎖して、御茵うち置き、ひきつくろふ。いとつましげにおぼしたれど、かやうの人にもの言ふらむ心ば

何とお断り申しましょう
〔源氏が〕お話し
〔末摘花〕
人にお話しするすべなど知らないのに
申されることを
にじり入られるご様子は
〔命婦は〕
ほんとに子供っぽくていられるのでお案じ申されます
いかにもぎごちない
ご身分ある姫君でも
お世話なさっている間なら
世間知らずでいらっしゃるのも分りますが
〔末摘花は〕
拒まれお気立てなので
ただ聞いていよというなら
〔命婦〕
失礼でございましょう
うまく説明して
命婦自身で
場所を整える
〔末摘花は〕とても恥ずかしく思われたけれど
応対する場合の心構えな

一（末摘花は）命婦がこう言うのを、そういうものなのだろうと思ってまかせておられる。「あるやうこそは」は、「あるやうこそはあらめ」（もっともな理由があるのだろう）を省略した形。

二 乳母といった立場の老女。

三 部屋に入って横になり、宵のうちから眠たがっている頃である。

四 みな気を張っている。「心げさう」は、相手を意識して、言動や容姿に気をつけること。

五 命婦は、何とか見られる程度のお召し物にお着せ換え申し、おつくろい申し上げると。

六 肝心のご本人は（源氏と逢うというのに）どうとも感じないで、何の心用意もしていらっしゃらない。

七 源氏は。男女対座の場面ではしばしばこう呼ぶ。

八 ものの風情が分る人に見せたいのに、一向に見ばえもありそうにないうっとうしいお邸なので、ああ、お気の毒なと、命婦は思うが。

九 命婦は、（源氏から）始終責めたてられる責任逃れにしたことで、お気の毒な姫君のお嘆きが生じはしないかと、気づかわしく思っていた。

一〇（末摘花の人柄は）変にしゃれすぎた当世風の気取りよりは、この上なく奥ゆかしいことだろうと想像していられると。

一一 えび香の匂い。えび香は、薫物（たきもの）の名。

三（末摘花は恋文のお返事さえしないくらいだから）まして身近でのご返事などは、（一層恥ずかしくて）少しもご存じないので（ども）へなども、夢に知りたまはざりければ、一命婦のかう言ふを、あるやうこそはと思ひてもしたまふ。乳母（めのと）だつ老人（おいびと）などは、曹司（ざうし）に入り臥して、夕まどひしたるほどなり。若い女房が二三人いるのは 若き人二三人あるは、世にめでられたまふ御ありさまを、世間で評判の ゆかしきものに思ひきこえて、四心げさうしあへり。五よろしき御衣（ぞ）たてまつりかへ、六つくろひきこゆれば、正身（じみ）は、何の心げさうもなくておはす。七男は、いと尽きせぬ御さまを、〔源氏の〕お姿を 見たいものだとお思い申して 忍ぶ恋路のために心づかいされたご様子は うち忍び用意したまへる御けはひ、まことこの上なく美しいお姿を いみじうなまめきて、八見知らむ人にこそ見せめ、何の栄（はえ）あるまじきわたりを、あないとほしと命婦は思へど、ただ、おほどかにものしたまふをぞ、うしろやすう、さ〔末摘花が〕おっとりしていらっしゃるのを まず安心だ し過ぎたることは見えたてまつりたまはじと思ひける。九わが常に責められたてまつる罪さりごとに、心苦しき人の御もの思ひやいでこむなど、やすからず思ひゐたり。

源氏 姫君のご身分をお考えになると 君は、人の御ほどをおぼせば、一〇されくつがへる今やうのよしばみよりは、こよなう奥ゆかしうとおぼさるるに、〔命婦などに〕しきりにすすめられて いたうそそのかされ

一言もおっしゃらない。

一三 何度といわず何十度、あなたの沈黙に（お便りのないのに）負けたことでしょう、ものを言うな（文を寄こすな）とおっしゃらぬのにせめてもの望みをつないでお手紙をさし上げては。

一四 （黙っていないでいっそ）いやだとおっしゃって下さい。「のたまひ捨つ」は「言ひ捨つ」の尊敬語。

一五 どっちつかずなのは苦しゅう存じます。「玉だすき」の「玉」は、美称。「たすき」は、両方の肩に掛けるので、あちらこちらに引き掛けての意に用いる。「ことならば思はずとやは言ひはてぬなぞ世の中の玉だすきなる」――おなじことならなぜ愛していないと言い切らないのか、どうして二人の仲はこうどっちつかずなのだろう（『古今集』巻十九誹諧歌、読人しらず）による。

一六 女房の呼び名。

一七 鐘をついて論義を終りにするように、あなたにものをおっしゃるなとお止めすることはさすがにできませんが、さりとてお答えしにくいのは、我ながら理屈に合わぬことです。「鐘つきてとぢめむ」は、源氏が「君がしじま」と詠んだのを受けて、法華八講の論義が鐘をついたあと発言せず沈黙する行に移ることにかこつけたのであろう。「とぢめむ」は、終りにする意に、口を閉じて黙らせることを掛ける。上の句は、源氏を思うと言外に打ち明けたもの。「答へまうき」の「まうき」は、「……するのがつらい」の意。

て、ゐざり寄りたまへるけはひ、忍びやかに（もの静かで）、えびの香いとなつかしう薫りいでて、おほどかなるを（〔源氏は〕思ったとおりだと思われる）、さればよとおぼす。年ごろ思ひわたるさまなど（何年も慕っている胸の内など）、いとよくのたまひつづくれど（言葉巧みに次から次へとおっしゃるが）、まして近き御答へは絶えてなし。（源氏）「わりなのわざや（弱りましたね）」と、うち嘆きたまふ。

（源氏）「いくそたび君がしじまにまけぬらむ
　　ものな言ひそと言はぬ頼みに

のたまひも捨ててよかし。玉だすき苦し」とのたまふ。女君の御乳母子、侍従とて（才気走った）、はやりかなる若人、いと心もとなう（見ていられない）、かたはらいたしと思ひて（気持になって）、さし寄りて聞こゆ。

（侍従）鐘つきてとぢめむことはさすがにて
　　答へまうきぞかつはあやなき

と、若びたる声の（若々しい声で）、ことにおもりかならぬを（さほど重々しくはない感じなのを）、人伝にはあらぬやうに聞こえなせば（姫君自身が答えているようにして申し上げると）、ほどよりはあまえてと聞きたまへど（身分の割には馴れ馴れしいと〔源氏は〕）、めづらしきに（はじめてのお返事なので）、

一（今度は）かえって、私の方が口がきけなくなってしまいますね。

二 何もおっしゃらないのは、口に出す以上に深い愛情を持っていて下さるからだとは存じていながら、唖のように、黙ってお心の中にだけ籠めておかれるのはせつないことでした。「おしこめ」の「おし」に「押し」と「唖」を掛ける。「心には下ゆく水のわきかへりいはでおもふぞいふにまされる」（『古今六帖』五、いはでおもふ）などを踏まえている。

三 またもこんな状態なので（相手が黙りこんでしまったので）、普通と様子が変っているし、世間の女とは違った考えの（男のことなど問題にしない）人かと、癖に思って。

四 まあ、ひどい、油断させなさってと。前に、源氏が「心いられし、うたてあるもてなしには、よもあらじ」（二五六頁）と誓っていたことなどをさす。

五 お側に控える若女房たちは女房たちで。「はた」は強めていう副詞。前に「若き人二三人あるは」（二六〇頁）とあった人々をさす。

六 姫君が何のお心用意もなかったことをおいたわしく思っていた。

七 はじめは、こんなのがいじらしいのだ。まだ男女の道を知らぬ、いままで大事に世話されてきた一方の人なのだと。

八（こういう姫君の）どこに源氏がひかれたりなさろうか。物語の語り手の感想。

（源氏）一「なかなか口ふたがるわざかな

言はぬをも言ふにまさると知りながら

おしこめたるは苦しかりけり」

〔源氏は〕何やかやと、はかなきことなれど、をかしきさまにも、まめやかにものたまへど、何のかひなし。いとかかるも、さまかはり、思ふかた異にものしたまふ人にやと、ねたくて、やをら押しあけて入りたまひにけり。

とりとめのないことだが　おたわむれのようにも　まじめなふうにも言ってごらんになるが

命婦、あなうたて、たゆめたまへると、いとほしければ、知らず顔にてわが方へ去にけり。この若人ども、はた、世にたぐひなき御ありさまの音聞きに、罪ゆるしきこえて、おどろおどろしうも嘆かれず、ただ思ひもよらずにはかにて、さる御心もなきをぞ思ひける。正身は、ただ我にもあらず、はづかしくつつましきよりほかのことまたなければ、今はかかるぞあはれなるかし、まだ世馴れぬ人の、うちかしづかれたると、見ゆるしたまふものから、心得ずなまいと

〔源氏は〕そっと障子を押し開けて奥の部屋に入られた　姫君がお気の毒なので　世にまれな美しいご容姿の　お咎めしようとせず　大げさに嘆く気にもなれず　急に起ったことで　身の置き場もなくすくむような思いのほかは何も考えられない様子なので　ご本人は　ただ無我夢中で　〔源氏は〕大目に見られるものの　合点がゆかずどことなく

九「（源氏を）お見送りしなさい」と、女房たちに注意もしない。「声づくる」は、注意を促すため、咳払いしたり、声をあげたりすること。

一〇 やはり、思いどおりの女はめったにいないものだなと。末摘花に夕顔の面影を求めたが失敗だったと。

一一（末摘花の）軽からぬご身分を思うと、好きになれそうにないのを、お気の毒に思われる。

源氏、二条の院に帰り、訪れた頭の中将に怪しまれる

一二 ずいぶん朝寝坊です ね。わけがあろうと思われますね。昨夜はどんなお忍び歩きだったのですかと、ひやかしているのである。

一三 桐壺帝が朱雀院に行幸されること。若紫の巻に「十月に朱雀院の行幸あるべし」（二二一頁）とあったことに相当する。

一四 宮廷行事として舞楽の演奏をするには、前もって朝議で楽人と舞人を指名決定して、一定期間練習させた。若紫の巻に「舞人など、やむごとなき家の子ども、上達部、殿上人どもなども、……みな選らせたまへれば」（二二一頁）とあるのは、この日の決定によるものである。

一五 左大臣。頭の中将の父。朝廷の会議の最高責任者。

一六「粥」は、堅粥（現在の飯）であろう。

一七 お車は、お二人のを続けてゆくが、一台に同車なさって。

く気の毒な感じがする姫のご様子である

ほしとおぼゆる御さまなり。何ごとにつけてかは御心のとまらむ、うちうめかれて、夜深う出でたまひぬ。命婦は、いかならむと、目ず臥せったまま聞き耳を立てていたが　知らぬふりで通そうと　眠れつい太い溜息が出て　まだ暗いうちにお帰りになった　さめて聞き臥せりけれど、知り顔ならじとて、「御送りに」とも声づくらず。君も、やをら忍びて出でたまひにけり。

源氏も　そっと目立たぬように

〔源氏は〕

二条の院におはして、うち臥したまひても、なほ思ふにかなひがたき世にこそと、おぼしつづけて、軽らかならぬ人の御ほどを、心苦しとぞおぼしける。

お帰りになって

〔源氏が〕思ひみだれておはするに、頭の中将おはして、「こよなき御朝寝かな。ゆるあらむかしとこそ、思ひたまへらるれ」と言へば、

〔源氏は〕起きあがりたまひて、「心やすき独り寝の床にてゆるびにけりや。内裏よりか」とのたまへば、「しか。まかではべるままなり。朱雀院の行幸、今日なむ、楽人、舞人定めらるべきよし、昨夜うけたまはりしを、大臣にも伝へ申さむとてなむ、まかではべる。やがて帰り参りぬべうはべり」と、いそがしげなれば、「さらば、もろともに」とて、御粥強飯召して、客人にも参りたまひて、引き

気楽な　油断して　しまいました　（頭中将）ええ　下がってきたばかりです　すぐに宮中に帰参しなければなりません　（源氏）　頭の中将にもおすすめして

一（源氏は）常陸の宮邸に、せめて手紙だけなりとも届けねばならぬと、忘れていたのを気の毒なことをしたと思われて。女とはじめて逢った翌日は早朝に「後朝の文」をやり、三日間は欠かさず訪れるのが当時の作法である。「文をだに」とあるので、源氏は今夜行く気がない様子。文をやるのも「夕つ方」になっている。

源氏、後朝の文を夕方にやる

二 源氏は、（常陸の宮邸に）雨宿りしようという気にもおなりになれなかったのであろう。「笠宿りせむ」は、命婦が前に「さやうにをかしきかたの御笠宿りには、えしもや」（二五五頁）と答えた言葉に応じたもの。

三 今朝来るはずの後朝の文が、日も暮れてから来たのに。

四 夕霧の晴れる気配―あなたが心を開いて、何でもおっしゃって下さるご様子―もまだ見えませんのに、さらに気持を滅入らせる雨が降ってまいりました。「いぶせさ」は、木摘花がつれないので、心が晴れぬこと。「霧」「はる」「雨」、および「はる」「いぶせし」はそれぞれ縁語。

五（雨が上がれば伺おうと）晴れ間を待つ間は。裏に木摘花がうちとけるのを待つ意を含める。

六 とても（こうした後朝の文を）型通りに詠み上げることもおできにならないので。決り文句を連ね何とか格好をつけることもできないので。

続けたれど、一つにたてまつりて、「なほいとねぶたげなり」（頭中将）まだとてもおねむそうですね と、いやみを言いながらとがめいでつつ、「隠いたまふこと多かり」（頭中将）お隠しごとが多いのですね とぞ、恨みきこえたまふ。事ども多く定めらるる日にて、（宮中では）取り決められる日で 内裏にさぶらひ暮らしたまひつ。（一日中宮中においでになった）

一 かしこには文をだにと、いとほしくおぼしいでて、夕つ方ぞありける。雨降り出でて、ところせくもあるに、（お便り）（出かけるのはめんどうな上に）笠宿りせむと、はた、おぼされずやありけむ。（常陸の宮邸では）（後朝の文を）かしこには、待つほど過ぎて、命婦も、いといとほしき御さまかなと、（おいたわしいことになったと）心憂く思ひけり。（つらく思うのだった）正身は、（ご本人は）（昨夜のことを）にはづかしう思ひつづけたまひて、（作法に外れているともお分りにならないのだって）今朝の御文の暮れぬれど、なかなか、とがとも思ひわきたまはざりけり。

（源氏）「夕霧のはるるけしきもまだ見ぬに

いぶせさそふる宵の雨かな

五 雲間待ち出でむほど、（どんなにじれったいでしょう）いかに心もとなう」とあり。（源氏が）おはしますまじき御けしきを、（女房たちは）（しいご様子を）人々胸つぶれて思へど、（女房たち）（やはりお返事をなさいませ）「なほ聞こえさせたまへ」と、（皆でおすすめするけれど）そそのかしあへれど、（「末摘花は」）いとど思ひみだれたまへるほどにて、え

七 雨の晴れぬ夜の月を待つ里―涙に曇り、おいでにならぬあなたを待ちこがれる私―を思ってみて下さいませ、私と同じ思いで物思いにふけっていらっしゃるのではないにしても。「ながめ」に「長雨」を掛ける。

八 「紫の紙」は、薄様（鳥の子紙の薄いもの。さまざまの色に染めて恋文に用いる）を紫色に染めたもの。

九 古くなって紫の色素が抜け、媒染剤に用いた灰の成分で色が白っぽくなったことをいう。

一〇 文字を押しつけるようにしっかりと書いたさまか。

一一 中古の書風で。「中さだ」は、中昔。少し古い時代。「さだ」は、時の意か。

一二 上下を揃えて。散らし書きなどにしていないことをいう。

一三 （今夜行かないことを）末摘花はどう思っているだろうと想像するにつけても、気持が落着かない。

一四 こんなこと（女に無理な算段をして逢ってみたら、つまらなかったというようなこと）を、後悔されることというのだろうか。

源氏、末摘花への訪れを怠る

一五 左大臣家の子息たち。頭の中将や、その弟たち。

一六 いろいろの楽器の音が、いつもよりやかましく。すぐあとに、「例の御遊びならず……」と具体的に述べる。

かたのやうにも続けたまはねば、夜ふけぬとて、侍従ぞ、例の教へきこゆる。（遅くなりますといって）

（末摘花）晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ

同じ心にながめせずとも

（女房たちに）口々に責められて、紫の紙の、年経にければ灰おくれ古めいたるに、（筆跡は）手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。（〔源氏は〕）見るかひなううち置きたまふ。いかに思ふらむと思ひやるも、安からず。かかることを悔しなどは言ふにやあらむ、さりとて（そういっても）いかがはせむ、我はさりとも心長う見果ててむとおぼしなす（〔末摘花の文を〕）（〔末摘花は〕）（〔源氏の〕）（もう仕方がない）（自分は何があっても気長く最後までお世話しようと）知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。（末摘花の方では）

大臣、夜に入りてまかでたまふに、ひかれたてまつりて、大殿におはしましぬ。行幸のことを興ありと思ほして、君たち集りてのたまひ、おのおの舞どもならひたまふを、そのころのことにて過ぎゆく。ものの音ども、常よりも耳かしかましくて、かたがたいどみつ（宮中を退出なさるのに〔源氏は〕伴われなさって）（朱雀院の行幸を〔左大臣が〕）（その話をなさり）（日課にして）（みなが競い合っては）

つ、例の御遊びならず、大篳篥、尺八の笛などの大声を吹き上げつつ、太鼓をさへ、高欄のもとにまろばし寄せて、手づからうち鳴らし、遊びおはさうず。御いとまなきやうにて、切におぼす所ばかりにこそ、ぬすまはれたまへ、かのわたりには、いとおぼつかなくて、秋暮れ果てぬ。

〔いつもの合奏とは違って〕〔ご子息たちが〕〔源氏は〕おひまがない様子で〔末摘花の所へは〕すっかりご無沙汰して

なほ頼み来しかひなくて過ぎゆく。行幸近くなりて、試楽などのしるころぞ、命婦は参れる。「いかにぞ」など、問ひたまひて、いとほしとはおぼしたり。ありさま聞こえて、「いとかうもて離れたる御心ばへは、見たまふる人さへ心苦しく」など、泣きぬばかり思へり。心にくくもてなして止みなむと思へりしことを、くたいてける、心もなくこの人の思ふらむをさへおぼす。正身の、ものは言はでおぼしうづもれたまふらむさま思ひやりたまふも、いとほしければ、「いとまなきほどぞや。わりなし」とうち嘆いたまひて、「もの思ひ知らぬやうなる心ざまを、こらさむと思ふぞかし」と、ほほ

〔宮中に〕〔源氏〕どうしていられるか〔末摘花を〕気の毒だとは〔命婦は〕〔源氏〕忙しい時なのだ〔源氏〕嘆息なさって〔源氏〕〔恋の道が分らぬような気性を〕

一 中国伝来の竹製の管楽器。普通の篳篥（小篳篥という）より大きく、一条天皇の頃には絶えていたらしい。地下の人（宮中の殿上の間に上ることを許されない者）の吹く楽器で、貴人は演奏しなかった。

二 中国伝来の竹製の竪笛。唐尺で一尺八寸ある。一条天皇の頃には絶えていたらしい。

三 打楽器の一つ。ここは大太鼓であろう。屋外の正式の舞楽に用いられ、大きく美しい。台の上に乗って打つ。ここでは、かりに高欄の側に寄せて、高欄の上から打っている。普通は地下の者が受け持つ。

四 合奏していらっしゃる。「おはさうず」は、「みな……していらっしゃる」という意の補助動詞。

五 源氏がせつに恋しく思われる女の方の所だけは、どうしても暇を見つけてお通いになるが。「ぬすまふ」は、隙を見つけてすること。「れ」は自発の助動詞。

六 舞楽の予行演習。

七 （源氏が、末摘花を）奥ゆかしいと思う程度のところですませておこうと（命婦が）心積りしていたことを、台無しにしてしまったが、思いやりがないと命婦は思っているだろうということまでも源氏は気になさる。

やなさるご様子が　若くて愛嬌があるので　命婦も思わず笑みが浮んで

ゑみたまへる、若ううつくしげなれば、我もうち笑まるるここちして、わりなの、人に恨みられたまふ御齢や、思ひやり少なう、御心のままならむもことわりと思ふ。この御いそぎのほど過ぐしてぞ、時々おはしける。

〔源氏は〕朱雀院行幸の準備の時期を　お逢いになった

九 かの紫のゆかり尋ねとりたまひては、そのうつくしみに心入りたまひて、一〇六条わたりにだに、離れまさりたまふめれば、まして荒れたる宿は、あはれにおぼしおこたらずながら、もの憂きぞ、わりなかりける。ところせき御もの恥ぢを見あらはさむの御心もことになくて過ぎゆくを、またうちかへし、一一見まさりするやうもありかし、一二手さぐりのたどたどしきに、あやしう心得ぬこともあるにや、見てしがなと思ほせど、一三けざやかにとりなさむもまばゆし。一四うちとけたる宵居のほど、やをら入りたまひて、格子のはさまより見たまひけり。されど、みづからは見えたまふべくもあらず。几帳など、いたく傷んでいるがくそこなはれたるものから、一五年経にける立処かはらず、おしやりな

そちらをおかわいがりになるのに一心で　ますます遠のかれるようだから　気が進まないのは　仕方のない

常陸の宮邸は　かわいそうにといつもお心にかけながら　ことだった〔末摘花の〕ご大層なはにかみやさんの正体を見届けようという好奇心も

〔月日が〕　思い直して

〔源氏は〕　ご本人の姿はお見えになるはずもない　問から

一 お膳は。
二 食器は秘色らしい舶来のものだが、古びてみっともない上に。「秘色」は、青磁の器。
三 お食事も、これといったものもなく粗末であるのを。
四 女房たちが、姫君のお前から下がってきて、食べている。主人の下し（お下がり）を頂戴している。
五 廂の隅の間。
六 白い着物の、何ともいえず古ぼけて汚れているのに。
七 腰につける礼装用の小さな裳。（夕顔 一二八頁参照）
八 それでも、櫛をずり落ちそうに挿している額ぎわの髪かたちが。「櫛」は、宮中で陪膳に奉仕する女房が髪を上げた際に挿す。以下の文章で、皇族の家などでそうした風習がもはやすたれているのに、常陸の宮家は頑なに形ばかりを守っていることを示す。
九 宮中で舞姫を置いて、女楽、踏歌を練習する所。
一〇 温明殿にあり、神鏡を安置する賢所の北で、内侍が詰めていた。（図録四参照）
一一 おかしくお思いになる。格子の間から、以上の光景を見た源氏の感想。
一二 長生きすると、こんなつらい目にも遭うものなのですね。「寿則辱多し」（『荘子』外篇「天地」）による。

ど乱れねば、心もとなくて、御達四五人（女房たちが）ゐたり。御台、秘色やうの唐土のものなれど、人わろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人々食ふ。隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら（女房らが）、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶引き結ひつけたる腰つき、かたくなしげなり。（いかにも旧弊である）さすがに櫛おし垂れて挿したる額つき、（こんな髪かたちの者がいるよと）教坊、内侍所のほどに、かかる者どものあるはやと、（源氏は）をかし。かけても、（こんな者たちが）人のあたりに近うふるまふ者とも知りたまはざりけり。（女房）「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、かかる世にも逢ふものなりけり」とて、うち泣くもあり。（女房）「故宮（常陸の宮）おはしましし世を、などてからし（つらいと）と思ひけむ。かく頼みなくても過ぐるものなりけり」とて、飛び立ち（飛び立ちそうに身ぶるいしている者もいる）ぬべくふるふもあり。さまざまに人わろきことども（こんな心細い暮しでも死にもせず過せるものなのですね）を愁へあへる（みっともないことを）を聞きたまふも、かたはらいたければ、たちのきて、ただ今おはす（いたたまれないので）るやうにて、うちたたきたまふ。（女房）「そそや」（それそれ）など言ひて、火とりな（明りを向け）ほし、格子放ちて（上げて）入れたてまつる。

侍従は斎院に参り通ふ若人にて、この頃はなかりけり。いよいよあやしうひなびたる限りにて、見ならはぬここちぞする。いとど、愁ふなりつる雪、かきたれいみじう降りけり。空のけしきはげしう、風吹き荒れて、大殿油消えにけるを、ともしつくる人もなし。かの、ものにおそはれしをりおぼしいでられて、荒れたるさまは劣らざめるを、ほどの狭う、人気のすこしあるなどになぐさめたれど、すごう、うたていざときこちする夜のさまなり。をかしうもあはれにも、やうかへて心とまりぬべきありさまを、いと埋れすくよかにて、何の栄なきをぞ、くちをしうおぼす。

からうして明けぬるけしきなれば、格子手づからあげたまひて、前の前栽の雪を見たまふ。踏みあけたるあともなく、はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、「をかしきほどの空も見たまへ。尽きせぬ御心の隔てこそわりなけれ」と、恨みきこえたまふ。まだほの暗けれど、雪の光

〔宮邸に〕いなかった　それでいっそう貧相で野暮ったい女房ばかりで
〔源氏には〕勝手の違う感じがする
空模様はけわしく
女房
〔某院に〕劣らぬよ
人気が少し多かったりするので落着いていられるが
ぞっとするようで　無気味で寝つけそうにもない
〔源氏は〕
人の通った跡もなく
〔源氏は〕
〔源氏〕風情のある
いつまでもうちとけて下さらないのがつらい
〔末摘花に〕
雪明りで

一三 賀茂神社に奉仕する皇女。紫野（京都市北区）に御所があった。この斎院は系図不明。

一四 さきほど女房たちが泣き言に言っていたようであった雪が、一層空をかきくらし、はげしく降っていた。「愁ふなりつる」は、「あはれ、さも寒き年かな……」などと言っていたのを受ける。「なり」は、伝聞推定の助動詞。

一五（源氏は）あの、物の怪におそわれた折をつい思い出されて。夕顔の巻の某の院で夕顔が物の怪に取り殺された夜をさす。あの時も、灯がみな消えて、物の怪が現れた。（一四九頁参照）

一六 おもしろいとも、しみじみと胸を打つものがあるとも、普通とは違って印象深いはずの情景だのに、肝心の相手（末摘花）がただもう殻を閉ざすばかりで、愛嬌がなく、何の張合いもないのを。

一七 やっと夜が明けたようなので。昨夜の無気味さといい、女の様子といい、源氏が夜の明けるのを待ちかねた気持を匂わす。夕顔の巻で、某の院で一夜を明かした時も、「からうして、鶏の声はるかに聞こゆるに」（一五四頁）とあったのを思い出させる書き方。

源氏、翌朝雪明りに末摘花の醜い容姿を見る

一八（夜が明けたからといって）さっさと帰ってゆくのもかわいそうで。「ふり出で」に「降り」を掛ける。「降り」は「雪」の縁語。後朝の別れの背景だけは艶なので、和歌の修辞を用いる。

に、〔源氏が〕いとどきよらに若う見えたまふを、老人ども笑みさかえて見たてまつる。「はや出でさせたまへ。あぢきなし。心うつくしきこそ」など教へきこゆれば、さすがに人の聞こゆることをえいなびたまはぬ御心にて、〔末摘花は〕とかう引きつくろひて、ねざり出でたまへり。見ぬやうにて、外のかたをながめたまへれど、後目はただならず。いかにぞ、うちとけまさりのいささかもあらばうれしからむとおぼすも、あながちなる御心なりや。まづ居丈の高う、を背長に見えたまふに、さればよと、〔源氏は〕胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは、御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先のかたすこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪はづかしく白うて真青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。痩せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上まで見ゆ。〔源氏は〕何に残りなう見

美しく　にこにこして　〔老女房〕はやくお出ましあそばせ　いけませんわ　素直なのが何よりですよ　〔末摘花に〕　〔末摘花は〕何やかや身づくろいして　にじり出られた　〔源氏は〕女君を　見ぬふりで　やっぱりだと　〔源氏は〕　その次に　ああみっともない　まっさきに目につく　〔末摘花の鼻は〕　あきれるばかり高く長くて　赤らんでいるのは　不細工だ　顔色は雪も恥じるほど　とても　お気の毒なほど骨ばっていて　なぜすっかり見届

一　引っ込み思案だが、それでも、お側の者が申し上げることに逆らったりはなされないご性分で。おっとりした姫君らしい性格。前にも「さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて」（二五九頁）とあった。

二　しきりに横目を使ってご覧になる。

三　（源氏は）どんな様子だろう、すっかり近しくなって、それでよいところが少しでも見つかれば、うれしいことだと思われるのも。「うちとけまさり」は、うちとけて見た時（馴れ親しんではっきり見た時）に、美点が分ること。

四　身勝手なお望みというものです。物語の語り手の批評。

五　まず座高が高くて、胴長にお見えになるので。「を」は、接頭語か。以下、次々と、源氏の眼にうつった末摘花の容姿を述べてゆく。

六　「普賢菩薩」は、文殊菩薩とともに釈迦の二脇士の一つで、白象に乗っている。

七　それでもまだ下の方が長く見える顔だちは、たぶん、大層な長顔なのだろう。

八　着物の上からでも、（ごつごつして）痛そうに見える。

九 頭の形や髪の垂れ具合は、女らしくやさしい感じで。「しも」は強意。髪の美しく長いのは、当時、美人の大切な条件。

一〇（源氏が）申し分がないとお思い申す方々にも、めったにひけを取らぬほどで。「思ひきこゆる」と敬語があるので、高貴の婦人をさす。物語に今まで現れた人々では、藤壺、六条の御息所、葵の上がある。

一一 貴婦人の平常着で、下着の上に重ねて着る。

一二 昔物語にも、登場人物のお召し物のことを第一に述べているようだ。

一三 薄紅のひどく古びて色褪せた襲を一揃い着て。「聴し色」は、ここでは薄紅。濃い紅が天皇、皇族や勅許による人以外は着用を禁じられ、禁色といったのに対し、こちらは貴賤を問わず、禁制がないので、こう呼ぶ。

一四 黒貂。シベリア産。毛皮の最高級品だが、貴族の男性用のものであったらしい。一条天皇頃には流行遅れとされていたようである。

一五（末摘花だけではなく）自分まで口がふさがってしまったような気持がなさるけれども。

一六 いつもどおりの末摘花のだんまりを、口を開かせてみようと。「例のしじま」は、はじめて逢った時、源氏が「いくそたび君がしじまにまけぬらむ」と詠んだ歌の言葉をとる。

末摘花

けてしまったのだろうと思うものの〔末摘花が〕異様な顔かたちなので　やっぱりついお目がいってしまう

あらはしつらむと思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ。

頭つき髪のかかりはしも、うつくしげに、めでたしと思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。着たまへるものどもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそまづ言ひためれ。聴し色のわりなう上白みたる一襲、などりなう黒き袿重ねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。されど、げにこの皮なうて、はた、寒からましと見ゆる御顔ざまなるを、心苦しと見たまふ。

〔末摘花が〕お召し物のことまで云々するのも　ひきずっている部分は　色目も見えず汚れた　昔風な由緒のあるあるのを　大層つやつやして香をたきしめて　やはり若い姫君のお召し物としては　似つかわしくなく奇怪な点が　ひどく目立って　なるほどこの皮衣がなくては　さぞ寒いことだろうと思われるお　〔源氏は〕お気の毒とお思いになる　顔色なのを

〔源氏は〕いうべき言葉もなく

何ごとも言はれたまはず、我さへ口閉ぢたるここちしたまへど、例のしじまもこころみむと、とかう聞こえたまふに、いたうはぢら

〔源氏が〕何かと話しかけられると　〔末摘花は〕

一 口もとを袖で隠しておられる格好までが。
二 儀式官が練り歩く時の笏を持った臂つきに似て。「儀式官」は、朝廷の行事や祭事などの儀式（作法やきまり）をつかさどる役人。太政官の弁、少納言、外記などがなる。
三 （源氏は、末摘花が）気の毒にもかわいそうにも思われて、いつもよりも一層早くお帰りになる。「急ぎ出でたまふ」と、まず大筋を言い、以下に、もう一度詳しい様子を述べる。
四 （早く帰るのを）末摘花のせいにして。
五 朝日のさす軒の垂氷は解けましたのに、なぜ、まだ張りつめた氷は解けないのでしょう。二人の仲はここまで深くなりましたのに、なぜ、あなたはいつまでもうちとけず黙っているのですか。「つらら」は、地面や池などに張りつめた氷。「解く」に氷が解ける意と、うちとける、身を許すの意を掛け、「結ぼほる」に「凍る」と「心を閉ざす」の意を掛ける。
六 東西の対から南に延びる廊（中門廊）にある門。ここで車を乗り降りする。（図録七参照）
七 （雨夜の品定めで）左の馬の頭たちが言った、美人の住む荒れた宿とは、こういう所のことだったのだろう（帚木五二頁参照）。これより以下「取るべきかたなし」まで、源氏の心中を述べたもの。

源氏、貧しい門番をあわれむ

ひて、一口おほひしたまへるさへ、ひなびふるめかしう、ことことしく、儀式官の練り出でたる臂もちおぼえて、さすがにうち笑みたまへるけしき、はしたなうすずろびたり。三いとほしくあはれにて、いとど急ぎ出でたまふ。「たのもしき人なき御ありさまを、見そめた

野暮で古風で　大げさで　儀式官　末摘花の　ちくはぐで板についていない　ご縁を結んだ

（源氏）ほかに頼るお方もおられないのですから

私には　心を隔てず親しんで下さってこそ　本望に存じますのに

る人には、うとからず思ひむつびたまはむこそ、本意あるここちすべけれ。ゆるしなき御けしきなれば、つらう」など、四ことづけて、

うちとけぬご様子なので　情けなくて

（源氏）五朝日さす軒の垂氷は解けながら
などかつららの結ぼほるらむ

とのたまへど、ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなるもいと

（末摘花）　容易に返歌が詠めそうにないのも

気の毒なので　（源氏は）

ほしければ、出でたまひぬ。

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて、夜目にこそ

六　よろけていて

それとはっきり分っていても何かと目に立たぬことが多かったが　（今見ると）

しるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ、いとあはれにさ

（綿を着たように）

荒れ果てているのに

びしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖かげに降り積める、山里のこ

七

こちしてものあはれなるを、かの人々の言ひし葎の門は、かうやう

なる所なりけむかし、げに、心苦しくらうたげならむ人をここにすゑて、うしろめたう恋しと思はばや、あるまじきもの思ひは、それにまぎれなむかしと、思ふやうなる住処に合はぬ御ありさまは、取るべきかたなしと思ひながら、我ならぬ人は、まして見忍びてむや、わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへ置きたまひけむ魂のしるべなめりとぞおぼさるる。橘の木のうづもれたる、御随身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるる雪も、名にたつ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがなと見たまふ。

紛れることだろうと　問題　にならないと　〔源氏は〕　こうして通うようになったのは　あとを案じて姫君の身に添えておかれた　導きなのだろうと　〔雪に〕　〔それを〕　ひとりでに　〔源氏は〕　さほど　深い味わいはなくても　おかしくない程度に受け答えできる人がいてほしいものだと

御車出づべき門は、まだあけざりければ、鍵のあづかり尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で来たる。女にや、孫にや、はしたなる大きさの女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へるけしき深うて、あやしきものに、火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり。翁、門をえあけやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくな

大層年取ったのが　鍵の番人　雪に映えてひどく汚れが目立ち　大層寒そうな様子で　もつかぬ年頃の女が　おかしな入れ物に　ほんの少し入れて袖で囲うようにして持っている　開けられないので　〔女が〕　不器用である

八 左の馬の頭たちの話のように、かわいそうな身の上の、かわいらしい女を、ここに住まわせて。

九 (荒れた所に一人で置いて) 心配で恋しくてならぬという恋がしたいものだ。

一〇 けしからぬ悩みごと。藤壺への思慕をさす。

一一 (物語にある荒れた宿のような) 理想的な住居なのに、それに似合わぬ末摘花のご様子は。

一二 自分以外の男なら、なおさらがまんするはずがない。以下「魂のしるべなめり」まで源氏の心中。

一三 以下の文章は、夕顔の巻で、源氏が御随身に夕顔の花を折らせたことや、夕顔の花が「おのれひとり笑の眉ひらけたる」(一一二頁) とあったことを思い出させる書き方。

一四 「わが袖は名に立つ末の松山か空より波の越えぬ日はなし」(『後撰集』巻十恋二、土佐) と詠まれた古歌のように、空から白波が越えるかと思われる眺めであるのを。歌一首の意味と関係なく、松の木が起き上がった拍子に散りかかる雪が、白い波頭のように見えるので、「松」を詠みこんだこの歌を思い起したのである。

一五 車の出入りする門や鍵のことは、夕顔の巻冒頭の、大弐の乳母を見舞った時を思い出させる。(一一一頁参照)

一 老いの身の頭に積る雪、雪のような白髪を見る私も、雪に濡れたお前以上に今朝は涙で袖を濡らすことだ。「ふりにける」は、「旧り」「降り」を掛ける。「頭の雪」は、「白頭」の意を含める。

二 幼い者は身体を包むだけの着物もない、の意。白楽天の諷諭詩「秦中吟」十首のうちの「重賦」（重い税金）の一句を詠じたもの。その一章に「歳暮れて天地閉ぢ　陰風破村に生ず　夜深けて煙火尽きぬ　霰雪白し紛々たり　幼き者は形蔽れず　老いたる者は体温なること無し　悲喘と寒気と　併ら入りて鼻の中にして辛し」（『白氏文集』）。雪に濡れる老人を憐れむ気持から歌を詠み、それが「老いたる者は体温なること無し」を連想させ、さらに、対句の「幼き者は……」が浮んで、眼前の若い女に託して「わかき者は……」と吟じた。

源氏、末摘花の生活を助ける

三 鼻の色が赤くなって、ほんとうに寒そうだった末摘花のお顔が、たちまち思い出されて。源氏は「秦中吟」を口ずさんでいるので、「幼き者は……」以下に続く「悲喘と寒気と　併ら入りて鼻の中にして辛し」から、自然に寒さで一層赤くなっていた末摘花の鼻を思い出してしまうのである。

四 （末摘花が）世間並みの、平凡な容貌ならば。

五 斜線の織目が出た絹織物。

六 主人（末摘花）にも、召使にも気をつけて。

七 （源氏は）一風変った、常識外れの立ち入った（実なり。〔源氏の〕御供の人、寄りてぞあけつる。

（源氏）一「ふりにける頭の雪を見る人も

劣らずぬらす朝の袖かな

二 わかき者はかたちかくれず」とうち誦じたまひて、三 鼻の色に出でて、いと寒しと見えつる御おもかげ、ふと思ひ出でられて、ほほゑまれたまふ。頭の中将にこれを見せたらむ時、赤い鼻をいかなることをよそへ言はむ、常にうかがひ来れば、こちらを探りに来るから今見つけられなむと、術なうおぼす。

四 世の常なるほどの、異なることなさならば、〔末摘花の容姿を〕思ひ捨てても止みぬべきを、さだかに見たまひてのちは、始終気をつけておやりになるなかなかあはれにいみじくて、暮し向きのこともまめやかなるさまに、常におとづれたまふ。五 黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など、老人ども老女房らの着るべきもののたぐひ、六 かの翁のためまで、上下おぼしやりてたてまつりたまふ。〔源氏は〕気が楽で暮し向きのうでないので かやうのまめやかごともはづかしげならぬを、心やすく、さるかたの後見にてはぐくまむと思ほしとりて、七 さまことに、さならぬうちとけわざもしたまひけり。

どんな奇抜なたとえを言うだろう
そのうちに
忘れ去ってしまうところを
かえってひどくかわいそうに思われて
鍵番の老人
こんな暮し向きの贈り物をしても失礼に当りそ
世話役として力になろうと考えら

用的な）贈り物もなさるのだった。「さまことに」は、普通の男女関係では見られぬような。「さならぬ」は、そこまではしないのが普通な、の意。

八 あの空蟬が、くつろいで碁を打っていた宵に見た横顔は、かなり不器量な容貌だったが。以下「負けて止みにしかな」まで、源氏の心中。

九 全く（あの雨夜の品定めに、馬の頭が言っていたように）女のよしあしは、身分の高下にかかわらぬものなのだ。（帚木五六頁参照）

歳の暮、末摘花、源氏に正月の晴着を贈る

一〇 桐壺。（桐壺四〇頁参照）

一一 髪をくしけずり、整えること。

一二 申し上げないのもおかしいと、思案にあまりまして。「聞こえさす」は、「聞こゆ」より重い謙譲語。「ひがひがし」は、穏当でない。「思ひたまへわづらふ」は、「思ひわづらふ」に謙譲の「たまふ」（下二段）の連用形が入った形。

一三 なんで遠慮などいたしましょう。「いかがはつつみはべらむ」の言いさした形。

一四 私自身の訴えごとでございましたら、恐れ多くとも、まっさきに（こちらへ上がります）。

一五 口籠っているので。

一六 「また、様子ぶってる」と憎らしげにおっしゃる。

かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりし容貌ざまなれど、もてなしに隠されてくちをしうはあらざりきかし、劣るべきほどの人なりやは、げに品にもよらぬわざなりけり、心ばせてがやさしく心のある人だったがのなだらかにねたげなりしを、負けて止みにしかなと、もののをりごとにはおぼしいづ。

（八）たしなみ深い振舞に欠点が隠されて悪くはなかったのだ〔末摘花は〕空蟬に劣る身分の人だろうか〔空蟬は〕気立してやられたままで終ってしまったなと

年も暮れぬ。内裏の宿直所におはしますに、大輔の命婦参れり。御梳櫛などには、懸想だつ筋なく、心やすきものの、さすがにのたまひたはぶれなどして、使ひならしたまへれば、召しなき時も、聞こゆべき事あるをりはまうのぼりけり。「あやしきことのはべるを、聞こえさせざらむもひがひがしう、思ひたまへわづらひて」と、意味ほゑみて聞こえやらぬを、「何ざまのことぞ。我にはつつむことあらじとなむ思ふ」とのたまへば、「いかがは。みづからの愁へは、かしこくとも、まづこそは。これは、いと聞こえさせにくくなむ」と、いたう言籠めたれば、「例の、艶なる」と憎みたまふ。「かの宮

（一〇）色恋めいたことはなく気楽だとはいえ〔源氏が〕それでもどこか談などおっしゃって身近に召し使っておられるので〔源氏に〕

（一一）申し上げるべきことがある折には参上するのだった

（一二）〔命婦〕妙なことがございますがありげに笑ってみなは申さないのを〔源氏〕どんなことだまいと思うのだが

（一三）〔命婦〕どうも申し上げにくくて

（一四）遠慮することはある

（一五）〔源氏〕

（一六）〔命婦〕末摘花

よりはべる御文」とて、取り出でたり。（源氏）「ましてこれは、取り隠すべきことかは」とて、取りたまふも胸つぶる。陸奥紙の厚肥えたるに、薫香だけは匂ひばかりは深うしめたまへり。いとよう書きおほせたり。歌も、

唐衣君が心のつらければ
袂はかくぞぞぼちつつのみ

心得ずうちかたぶきたまへるに、包みに、衣筥の重りかに古代なる、うち置きて、おし出でたり。「これを、いかでかは、かたはらいたく思ひたまへざらむ。されど、朔日の御よそひとて、わざとはべるめるを、はしたなうはえ返しはべらず。ひとり引き籠めはべらむも、人の御心違ひはべるべければ、御覧ぜさせてこそは」と聞こゆれば、「引き籠められなむは、からかりなまし。袖まきほさむ人もなき身にいとうれしき心ざしにこそは」とのたまひて、ことにもの言はれたまはず。さてもあさましの口つきや、これこそは手づからの御ことの限りなめれ、侍従こそとりなほすべかめれ、また筆の

一 檀の皮の繊維で作った紙。檀紙。もと陸奥で産したのでこの名がある。白くて厚い紙質。消息文に用いるが、恋文には使わないのが普通である。

二 筆跡は、このたびのは（末摘花としては）、よく書き上げてある。次に「歌も」とあるのに対する。

三 あなたのお心が冷たいので、私の袂はこのようにただもう涙に濡れております。「唐衣」は、「君」の「き」（「着」の意）に掛る枕詞。

四 源氏は、（なぜ「唐衣」や「袂」が詠みこまれ、「かくぞ」―このように―とあるのか）わけが分らず、首を傾けていらっしゃると。

五 衣裳筥の上包み（ふろしき）の上に。

六（末摘花が、源氏の）元旦のお召し物だということで、わざわざお心遣いされたようですのに。男の衣服の世話は本来妻の家でするので、末摘花はそのしきたりを守っているのである。

七 姫君のお心を無にしたことになりましょうから。

八 濡れた私の袖を枕にして、乾かしてくれる女もいない私には。「あは雪は今朝はな降りそ白妙の袖まきほさむ人もあらなくに」（『古今六帖』一、雪。原歌は『万葉集』巻十）の言葉を借りたもの。

九 それにしてもあきれた歌の詠みぶりだ。これこそ、姫君（末摘花）自身で詠まれた精いっぱいのところなのだろう。

一〇 ほかに、手を取って直す先生もいないのだろう。「筆のしりとる」は、子供が字を書く時、筆の柄を持ち添えて教えること。「博士」は、大学の教官。ここでは戯れていう。

一一 流行色（濃い紅梅色）の、我慢できないほど艶のない古めかしい直衣で。「えゆるすまじく」は、色が濃くて、禁色（濃い紅）に近いので、「禁色」に対する「聴し色」にひっかけた洒落。

一二 表と裏が同じほど色の濃いのが。冬の直衣は裏表違う色を用いて、色の重なり具合を重んじた。

一三 親しみを感じる色でもないのに、どうしてこの紅花に手を触れたのだろう。心をひかれる人でもないのに、どうしてこの赤い鼻を相手にしたのやら。「するつむ花」は、紅花のこと。「花」に「鼻」を掛ける。巻名はこの歌によっている。

一四 色美しい花と思ったが。裏に、紅い色の鼻だと見届けたの意がある。「紅を色濃き花と見しかども人を飽くだにうつろひにけり」（『奥入』所引）を引いたものか。

一五 月の光で時々お見かけした末摘花の眉目かたちから思い合せて。命婦も、かねてから月光などで見た末摘花の容貌をおかしいと思っていたが、源氏の言葉で合点する。

一六 紅の一度染めの衣は色薄くても―ご愛情はそのように薄くても、全く姫君の立つ瀬がないような評判さえお立て下さらなければと存じます。

しりとる博士ぞなかべきと、いふかひなくおぼす。（処置なしだと）心を尽くして（〔末摘花が〕精魂こめて歌を詠み上げようとなさった苦労を想像されて）詠みいでたまへらむほどをおぼすに、（源氏）「いともかしこきかたとは、これをもいふべかりけり」と、（まこと恐れ多い作とは）ほほゑみて（苦笑しながら〔文を〕）見たまふを、命婦、面赤みて見たてまつる。今様色の、（な歌のことをいうのだろう）えゆるすまじく艶なる古めきたる直衣の、裏表ひとしうこまやかなる、いとなほなほしう、つまづまぞ見えたる。（〔衣筥の中に〕ひどくありふれた感じで）あさましとおぼすに、この文をひろげながら、端に手習ひすさびたまふを、側目に見れば、（端々を見せて）

（〔源氏は〕お話にならぬと思われている）

（源氏）「なつかしき色ともなしに何にこの
　するつむ花を袖に触れけむ

一四 色濃き花と見しかども」など、（書き散らしていられる）書きなさるのを

一五 なほあるやうあらむと思ひ合はするをりをりの月影などを、いとほしきものから、をかしう思ひなりぬ。（やはり何かわけがあるらしいと）（〔命婦は〕おかしく思った）（紅花をけなされたのを）（〔末摘花が〕お気の毒ではあるが）

（命婦）「一六紅のひと花衣うすくとも
　ひたすら朽す名をし立てずは

一 お気の毒なこと。「世」は、末摘花と源氏の仲をさす。
二 末摘花はご身分の高いお方だからお気の毒で、評判を落すような噂が立つのは、いくらなんでもおいたわしい。
三 こんなことは、常識のある人のすることだろうか。「かかるわざ」は、源氏に生活上の援助を受けているのに、衣服を贈ったりすることをいう。
四 命婦が清涼殿に出仕していると。
五 女房の詰所。清涼殿の西廂にある。（図録五参照）
六 風俗歌「たたらめの花のごと　搔練好むや　滅紫の色好むや」の一句か。「ただうめ」は、「たたらめ」の誤写かといわれている。「たたらめ」は、植物の名で、今の何に当るかは不詳。花の色が赤かったのであろう。「滅紫」は、青黒い感じの紫色。
七 右の風俗歌に、このような詞章があったものか。「三笠の山のをとめ」は、三笠山を神域とする春日神社に奉仕する少女で、春日の祭神は、常陸の鹿島神社の祭神と同じところから、暗に常陸の宮の姫君をそしった歌と思われる。
八 寒い霜の朝に、搔練好きの花の色が（赤いお鼻が）源氏のお目にとまったのでしょう。「搔練」は、練って糊を落し、柔らかくした絹。普通紅色である。前出の風俗歌の歌詞の「搔練好むや」に合わせて言う。
九 「つづしり歌」は、一句ずつ、とぎれとぎれに口ずさむ歌。

一心苦しの世や（いかにももの馴れたふうに口ずさむのを上手な歌というので）」と、いといたう馴れてひとりごつを、よきにはあらはないが［末摘花も］せめてこれくらいに一通りの歌が詠めたらいいのにねど、かうやうのかいなでにだにあらましかば、と、かへすがへす女房くちをし。二人のほどの心苦しきに、名の朽ちなむはさすがなり。人たち人参れば、「取り隠さむや（源氏）隠すとしようよ。三かかるわざは人のするものにやあらむ」と、うちうめきたまふ。何に御覧ぜさせつらむ（［命婦は］なぜお目にかけたのかしら）、我さへ心なきやう（自分まで気が利かないみた）にと、いとはづかしくて、やをらおりぬ。（そっと退出した）

翌日
またの日、上に四さぶらへば、台盤所に五さしのぞきたまひて、「くはや、昨日の返りこと（返事だ）、あやしく心ばみ過ぐさるる（どうもつい気が張ってならないよ）」とて投げたまへり。女房たち、何ごとならむと、ゆかしがる（見たがっている）。「ただ梅の花の色のごと、六三笠の山のをとめをば捨てて」と、七歌ひすさびて出でたまひぬるを、命婦はいとをかしと思ふ。心知らぬ人々は（事情を知らぬ女房たちは）、「なぞ、御ひとりさってるみは（口々に詮索する）」と、とがめあへり。「あらず（命婦）。八寒き霜朝に、搔練好める花の色あひや見えつらむ（みっともないこと）。御つづしり歌（女房たち）のいとほしき（苦しいこじつけですこと）」と言へば、「あながちなる御ことかな（私どもの中では）。このなかには、にほへる鼻もなかめり（赤い鼻の人はいないようですよ）。左一〇近

ひとり笑いな
何ですか
口ずさんで

一〇 いずれも女房の名で、鼻の赤い人らしい。「采女」は、天皇の食事などに奉仕する女官。地方の豪族から容姿のすぐれた者を献じた。

一一 あなたに逢わぬ夜が重なっているのに、二人の間を隔てる袖を、この上にも重ねて見よというおつもりで着物を贈ってこられたのですか。「へだつる」に夜を隔てると、仲を隔てる意味を掛け、「かさねて」に衣手を重ねるのと、逢わぬ夜を重ねる意味を掛ける。「見もし見よとや」は、「見よとや」を強めた言い方。「衣だに中にありしはうとかりき逢はぬ夜をさへへだてつるかな」――着物が二人の間にあるのさえ睦まじくないと思っていた、それなのに今では逢わぬ夜までも隔てるようになってしまった（『拾遺集』巻十三恋三、読人しらず）をもとにしている。

一二 前に末摘花が贈った衣裳箱。

一三 浅紫色の織物。経赤、緯紫で織ったもの。

一四 山吹襲（表薄朽葉、裏黄色の襲）や何か。

一五 月はじめの数日間。

一六 正月十四日に行われる宮廷行事。女踏歌が毎年あるのに対し、年によってない時もあった。歌頭、舞人、楽人等に選ばれた殿上人や地下の人が、南殿の前で踏歌（歌いながら舞う）をし、院、東宮、中宮、諸家を廻る。天元六年（九八三）以後絶え、一条天皇頃には行われていなかった。

一七 （歌頭等に選ばれた貴族の子弟が）方々で。

源氏、正月七日の夜末摘花をおとずれる

の命婦、肥後の采女やまじらひつらむ」など、（居合せているでしょうか）心も得ず言ひしろふ。（合点もゆかず言い合っている）

（命婦が）御返りたてまつりたれば、宮には、女房つどひて見めでけり。

（源氏）逢はぬ夜をへだつるなかの衣手に
かさねていとど見もし見よとや

白き紙に、（さりげなくお書きになっているのが）捨て書いたまへるしもぞ、（かえって趣がある）なかなかをかしげなる。

晦日の日、夕つ方、かの御衣筥に、（源氏のお召料として人が献上した）御料とて人のたてまつれる御衣一具、（様々の色のが入っているのを）葡萄染の織物の御衣、また山吹か何ぞいろいろ見えて、命婦ぞたてまつりたる。（先日さし上げた着物の色合をよくないと思われたのだろうと思い当るが）ありし色あひをわろしとや見たまひけむと思ひ知らるれど、（老女）「かれはた、紅のおもおもしかりしをや。（よもや見劣りはしますまい）さりとも消えじ」と、（老女たちは）ねび人どもはさだむる。（判定する）「御歌も、（こちらからのは）これよりのは、道理聞こえて、（筋が通っていて）したたかにこそあれ。（しっかりしていました）御返りは、（ご返歌は）ただをかしきかたにこそ」など、口々に言ふ。姫君も、（あの歌は）おぼろけならでし出でたまへるわざなれば、（並々ならず苦労してお作りになったことなので）ものに書きつけて、（手控えに）置きたまへりけり。

朔日のほど過ぎて、今年男踏歌あるべければ、（あるはずだから）例の、所々遊びの（音楽の練

一　正月七日の白馬の節会。中国で青は春の色、馬は陽獣として、この日青馬を見ると邪気を払うとされたのに倣い、左右馬寮の青馬を引き出し、天皇御覧のち、酒食を賜る宮廷行事。のちに白馬に変ったが、訓み方はそのまま残ったといわれる。

二　桐壺。（桐壺四〇頁参照）

三　どんな様子だろう、（年が改まったのだから）末摘花も今までの様子を改め、見違えるようになっていたらと。「ひきかふ」は、取り換えること。「む」は、仮定の意。

四　（源氏は、いつもは暗いうちに帰るのだが）今朝は日が上る頃に、わざとぐずぐずして、お帰りになる。

五　寝殿の東のつま（端）の出入口の戸。東の対に通じる渡殿（廊）に面する。（図録六参照）

六　（末摘花は源氏が）御直衣などお召しになるのを見やって、物陰から少しにじり出て。

七　末摘花が、一つ年をとったせいで、よくなったのを見つけたら、どんなにうれしいだろうと。

八　鏡をかける台。（図録一一参照）

九　中国風な作りの櫛匣。「櫛匣」は、櫛そのほかの化粧道具を入れておく箱。（図録一一参照）

一〇　結髪用の道具を入れる箱。唐櫛匣が儀式用なのに対して、日常用かともいわれている。（図録一一参照）

一一　男性用のお道具が、ちらほら見えるのを。たぶん、故父宮の遺品を出してきたのであろう。

一二　しゃれた模様がついていて、目につく表着だけ

（〔末摘花の〕住居）習に大騒ぎなさっているので

のしりたまふに、もの騒がしけれど、さびしき所のあはれにおぼしやらるれば、七日の日の節会果てて、（〔源氏は〕）夜に入りて御前（帝の御前から退出）よりまかでたまひけるを、御宿直所（〔常陸宮邸は〕）にやがてとまりたまひぬるやうにて、（そのままお泊りになっていることにして）夜ふかしておはしたり。（活気づいて世間並みに見える）例のありさまよりは、けはひうちそよめき世づいたり。（姫君も）君も、（もの柔らかな感じを身につけていらっしゃる）すこしたをやぎたまへるけしきもてつけたまへり。（〔源氏は〕）いかにぞ、改めてひきかへたらむ時とぞ、おぼしつづけらるる。

四　日さし出づるほどに、やすらひなして、出でたまふ。東の妻戸おしあけたれば、向ひたる廊の、上もなくあばれたれば、日のあし、（日あしが）ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけざやかに見入れらる。御直衣などたてまつるを見いだして、すこしさし出でて、（部屋の中まで見える）横になっていられる〔末摘花の〕かたはら臥したまへる頭つき、こぼれ出でたるほど、（黒髪の様子）いとめでたし。生ひなほりを見いでたらむ時とおぼされて、格子引きあげたまへり。（近くまでさし込んで）前に気の毒なことをしたのに懲りて〔格子を〕すっかりお上げにならず いとほしかりしものごりに、上げも果てたまはで、脇息をおし寄せて、〔格子を〕うちかけて、御鬢（鬢の毛筋のほつれているのを）くきのしどけなきをつくろひたまふ。わりな

を、おやとお思いになった。

一三（春といえば）待たれる鶯の初音はともかくとして。「あらたまの年たちかへる朝より待たるるものは鶯の声」（『拾遺集』巻一春上、素性法師）による。

一四「百千鳥さへづる春は物ごとに改まれども我ぞふりゆく」（『古今集』巻一春上、読人しらず）によって答える。「私だけが年老いてゆきます」と卑下し、源氏の愛の薄れるのを嘆いたもの。

一五 ほらほら。やっぱり、一つお年をとられたかいがありましたよ。末摘花が何とか古歌を用いて返事ができるようになったのを賞めるのである。

一六「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見むとは」（『古今集』巻十八雑下、在原業平）の言葉を借りたもの。返事があるなんて、夢のようだという気持。

一七 とてもかわいらしい幼な姿で。「片生ひ」は、十分成熟していないこと。

一八 同じ紅でも、こんなに心をひく色もあったのだと思われる袿の上に。末摘花が源氏に贈った直衣の色や、ご本人の鼻の色と、源氏はすっかり紅の色に厭気がさしている。

源氏、二条の院で紫の上と戯れる

一九「無文」は、織出し模様のないもの。無地。祖母の喪中だからであろう。「桜」は、桜襲のこと。表白、裏赤、または蘇芳。「細長」は、小袿の上に着る。袿がなく、身頃の裾先が分れている。

う古めきたる鏡台の、唐櫛匣、掻上の筥など取り出でたり。さすがに、男の御具さへほのぼのあるを、〔源氏は〕しゃれていると興を催されるされてをかしと見たまふ。〔女房が〕女の御装束、今日は世づきたりと見ゆるは、〔末摘花の〕ありし筥の心ばへをさながらなりけり。さもおぼしよらず、世間並みに見えるのは興ある文つきてしるき表着ばかりぞ、あやしとはおぼしける。「今年だに、〔源氏〕せめて今年からでも声すこし聞かせたまへかし。待たるるものはさし置かれて、〔末摘花〕御けしきの改まらむなむゆかしき」とのたまへば、「さへづる春は」と、からうしてわななかしいでたり。〔源氏〕「さりや。年経ぬるしるしよ」と、うち笑ひたまひて、〔源氏〕「夢かとぞ見る」と、うち誦じて出でたまふを、〔末摘花は〕見送りて添ひ臥したまへり。口おほひの側目より、なほかの末摘花、いとにほひやかにさし出でたり。〔源氏は〕見苦しのわざやとおぼさる。

この間の衣箱の中身をそのまま着ていられたからだった〔源氏は〕そうとは気づかれずらなりけり。

あなたのお気持が改まるのが待ち遠しいのです

震え声で言い出された

物に寄りかかっていられる

横顔から

赤い鼻が

あざやかに

二条の院におはしたれば、紫の上の君、いともうつくしき片生ひにて、紅はかうなつかしきもありけりと見ゆるに、無文の桜の細長、なよよかに着なして、何心もなくてものしたまふさま、いみじうらう

しなやかに着こなして

あどけない様子でいらっしゃるのが

一　歯黒めもまだしていらっしゃらなかったのを。「歯黒め」は、鉄を酢でひたして酸化した液に五倍子の粉をつけて歯を黒く染めること。成人した女がする。

二　眉がくっきりとしたのも。眉の毛を抜いて黛を刷いた、成人した女の粧い。

たし。古代の祖母君の御なごりにて、歯黒めもまだしかりけるを、〔源氏が〕ひきつくろはせたまへれば、眉のけざやかになりたるも、うつくしうきよらなり。心から、などか、かう憂き世を見あつかふらむ、かく心苦しきものをも見てゐたらでと、おぼしつつ、例の、もろともに雛遊びしたまふ。〔紫上は〕絵などかきて色どりたまふ。よろづにをかしうすさび散らしたまひけり。〔源氏も〕我もかき添へたまふ。〔源氏は〕髪いと長き女をかきたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、画にかきても見ま憂きさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこのあかばなをかきつけにほはして見たまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひたまふ。「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、「紫上」いやですね「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむと、あやふく思ひたまへり。空のごひをして、「さらにこそ白まね。用なきすさびわざなりや。内裏にいかにのたまはむとすらむ」

昔風な　お鉄けのままに　我から求めて　どうして　こうおもしろくもない女出入りにかかずらうのか　〔源氏は〕　こんなかわいい人と一緒にいることもしないでと　紫の上と共に　〔紫上は〕　お上手におも　〔源氏も〕　しろがって書き散らされるのだった　〔源氏は〕　画中の人物でも見るのもいやな　美しいのを　赤い鼻を　色どって　そんな具合に赤い鼻が真中にあっては醜いのも当り前であった　紫の上　な美貌でも　こんな変な顔になったら　(源氏)わたしが　(紫上)いやですね　そのまま　扮くまねだけして　(源氏)ちっともとれない　つまらぬいたずらをしたものだよ　帝がどんなにお叱りになることだろう

三 平中のように、この上墨をつけて下さるな。「平中」は、平定文。十世紀前半、宇多、醍醐天皇頃の歌人で、好色者として有名。「平中」は、当時の渾名である。女の所で、あなたを思って泣いているといっては、懐中にしのばせた硯の水入れの水で、目を濡らして涙に見せていたが、女が気づいて、水入れに墨を磨って入れておいたので、知らずに使った平中の顔が真黒になったという話がある。(『河海抄』『古本説話集』)

四 (年が明けると)もうさっそくに、一面に霞みわたっている木々の梢が。「いつしか」は、いつかと待ちかねて。「昨日こそ年は暮れしか春霞春日の山にはや立ちにけり」(『拾遺集』巻一春上、山部赤人)「吉野山峰の白雪いつ消えて今朝は霞の立ちかはるらむ」(同上、源重之)などと、新年になればはやばやと霞が立つものという見立てが、『拾遺集』巻一の冒頭の数首を占めているのが参考になろう。

五 殿舎の階(庭に降りる階段)を覆う庇。階の前に二本の柱を立てて支える。(図録七参照)

六 紅の花がわけもなく厭わしい、紅梅の高々とした枝は心ひかれるけれども。「立ち枝」は、高く伸びた枝。「花」に「鼻」が響く。

七 (梅に文句をいっても)どうにもならないことながら、つい溜息まじりにおっしゃる。

八 こういう方々の将来は、どうなられたことでしょう。物語の語り手が読者に期待を持たせようとしていう言葉。

末摘花

と、いとまめやかにまじめくさってのたまふを、〔紫上は〕かわいそうだといとほしとおぼして、寄りて、のごひたまへば、「平中(源氏)がやうに色どり添へたまふな。赤からむは赤いのはまだ辛抱できましょうあへなむ」と戯れたまふさま、いとをかしき似合いの妹背(夫婦)と見えたまへり。

日のいとうららかなるに、四いつしかと霞みわたれる梢どもの、心花の咲くのが待ち遠しいなかにももとなきなかにも、梅はけしきばみほころびかけ(つぼみもふくらみ咲きかかっているのが)特に目につく五見ゆ。階隠のもとの紅梅、いと疾く咲く花にて、色づきにけり。

(源氏)「紅六の花ぞあやなくうとまるる

梅の立ち枝はなつかしけれど

いでや」と、七あいなくうちうめかれたまふ。八かかる人々の末々、いかなりけむ。

解

説

『源氏物語』の成立について

十四世紀後半に出た『源氏物語』の注釈書『河海抄』（四辻善成）には、大斎院選子内親王が、上東門院彰子のもとに、何かおもしろい物語はないだろうか、お借りしたいといって来られたとき、『宇津保物語』や『竹取物語』では珍しくないから、新作の物語を書いて、お目にかけるよう紫式部に命じられた。そこで、石山寺に籠って、よい物語ができますようにと、観音に祈願していると、折から八月十五夜の月が琵琶湖に映じ、心の澄むままに、須磨明石の巻の構想が浮んだので、とりあえず仏前のお経の料紙を借りて須磨の巻より書き始めた、という言い伝えを載せている。中世に流布された伝説であろうが、『源氏物語』の本質をいろいろな面から考察する手がかりを与えてくれる。まず、上東門院彰子とは、十一世紀前半に栄えた左大臣藤原道長の娘、一条天皇の中宮（皇后に同じ）で、紫式部が仕えた主人である。大斎院は、時の賀茂神社の斎院選子内親王で、文学的な教養と洗練された趣味をもって世に聞えた人で、村上天皇の皇女である。五代の帝の御代を通じて長く斎院の地位にあったので、大斎院と呼ばれる。そういう人々の間で、『宇津保物語』や『源氏物語』が読まれたと中世の伝説は伝えるのであるが、たしかに、物語は平安朝の貴婦人たちの間で、消閑の具として読まれたものであった。そして、『源氏物語』のような長大な作品は、有力な貴族の後援がなければ、

書き上げられなかったであろう。紙がたいそう貴重で手に入りにくかったし、何よりも読者の支持がなければ、五十四帖を完成させることは困難であったからである。

中世の伝説は、作者を紫式部とし、今日われわれもそう信じているが、確証があるわけではない。けれども彼女が執筆したとする『紫式部日記』には何度か『源氏物語』の名が現れ、その作者と見做されていたことがわかるので、現在、それを否定する文献上の証拠もないとすれば、まず彼女を『源氏物語』の作者としてよいであろう。そして、「源氏の物語（中宮の）御前にあるを」といった記事などからすれば、『河海抄』が伝えるように、この物語が彰子の命で書かれ、彰子のもとに献じられたということも十分に考えられるのである。

ところで、『源氏物語』の成ったのはいつ頃のことであろうか。この点についても、五十四帖の執筆が何年に始まり、いつ完成したのか不明であるものの、やはり『紫式部日記』中の記事によって、部分的な推察はできる。寛弘五年（一〇〇八）十一月一日の条に、藤原公任が、式部の控えている部屋の御簾の隙から、「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ」と言って覗いており、式部はそれに対して「源氏に似るべき人も見えたまはぬに云々」と思ったとあるので、公任の振舞は『源氏物語』若紫の巻を念頭に置いてのことと考えられる。してみると、寛弘五年には、若紫の巻が後宮にかなり流布していて、廷臣たちの間にまでその評判が伝わっていたといえよう。また、寛弘七年頃に執筆されたとされる日記中のいわゆる〝消息文〟といわれる部分に、一条天皇が侍女に『源氏物語』を読ませてお聞きになり、たいそう感心されて、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」と仰せられた。「この人は日本紀を読んでいるにちがいない。ほんとうに学才があるようだ」と賞められたというのである。『日本紀』とは『六国史』（朝廷編纂の正史）をさす。花宴の巻の記

事が『六国史』の一つである『続日本後紀』の史実に由来することを見抜かれて、こう言われたのだと解されている。これによって、寛弘七年以前に、すでに花宴の巻は発表されていたと考えられるのである。さらに『紫式部日記』によれば、この時の一条天皇の賞讃を嫉んだ同僚の女房（侍女）が、式部にいやがらせをして、「日本紀の御局」と渾名し、彼女がいかにも学才をひけらかしているかのように言いふらしたが、螢の巻の物語論で、光源氏をして「日本紀などはただかたそばぞかし」――日本紀なんかはほんの一面的なものだ――と言わせているのは、後述するような重い意味がある一方、「日本紀の御局」と渾名した女房を意識したとも見られるので、螢の巻の執筆を寛弘七年をあまり隔たらぬ時期と考えることができる。

以上のように、『源氏物語』の執筆は、寛弘三、四年から七、八年にかけて、すなわち寛弘時代に精力的に執筆され、後宮の話題になっていたことが想像されるのである。

作者については、宇治十帖を娘の大弐三位が引き続き書いたとか、父為時や道長の加筆があるという言い伝えがあるが、伝説の域を出ぬもので、今のところ、式部以外の作者が加わったとする文献上の証拠はない。道長などの意見は、執筆の途中において、大いに考慮されたであろうことは、この物語が書かれた背景を考えてみると、十分頷けることである。

内容について

『源氏物語』は現在ではすべて五十四帖ある。鎌倉時代の注釈書の『源氏釈』（藤原伊行）や『源氏

物語奥入』（藤原定家）には、このほかに、「桜人」や「かかやく日の宮」という巻々があったと伝えるが、現在伝わっていないし、それらの書物にも「無くてもありぬべし」とか、巻名だけ伝えて「この巻なし」と書き添えたりしている。『更級日記』の著者が、『源氏物語』をはじめから全部読みたいと念願していたところ、上総の国から帰京して、のち、叔母より「源氏の五十余巻」を櫃に入ったままそっくり貰って、たいそう喜んだのは、治安元年（一〇二一）のことである。この時の「五十余巻」がはたして五十四巻であるかどうかは分らないけれども、紫式部執筆当時の『源氏物語』の巻数もほぼ五十四帖だったのではないかと考えられている。

その五十四帖を現在では三部に分けて考えるようになった。第一部は桐壺の巻から藤裏葉の巻までの三十三帖、第二部は若菜上の巻から幻の巻までの八帖、第三部は匂兵部卿の巻から夢浮橋の巻までの、宇治十帖を含む十三帖である。この分け方は、当時の物語というものに対する考え方や、『源氏物語』の構成、内容からいって、妥当なものと思われる。第一部は、主人公光源氏の誕生から、その栄華が絶頂に達し、四十歳の年祝いが来年行われるというところまでの年代を書き、桐壺の巻で予言された主人公の運命の結末が幸福な形で示されているところに、ハッピーエンドで終るべしとした物語の伝統的な型が見られるからであり、第二部は、あらたに四十歳以後から書き起して、主人公の晩年に起った事件の中に第一部の内容を違った角度から照らし出しながら、彼の死の暗示までを書く。幻の巻は来年は出家するという予告だから、僧になってこの世の一切の関係を捨てるとなれば、それは物語の終焉を意味することになり、同時に、出家に続く死の予感もする。そのせいか、いつの頃よりか雲隠の巻という、巻名のみあって、実際の物語はない一帖が立てられている。雲隠とは月が雲に隠れることで、光源氏の死を暗示したものだが、有名無実の巻なので、現在は五十四帖の中には数え

ない。第三部は、源氏の子や孫が織りなす新しい世代の恋と運命が語られる。場所も都以外の宇治という地に移り、手習、夢浮橋の巻は比叡の麓小野が舞台である。尼になった女主人公が主人公との再会を拒むところで物語は終っているので、ここで、作者は擱筆したと考えるのが穏当であろう。なぜなら平安朝の物語は、本来恋物語であったからである。

桐壺の巻から第二部の終り幻の巻までは、主人公の一生を語るという構成を持つ。これは当時すでに古典として重んじられていた『伊勢物語』が百数十段の小話を集めたものでありながら、初段に元服直後の物語を置き、最終段に臨終の歌を置いて、「昔男」の生涯を語ろうとしたのに一致する。絵合の巻で「物語の出で来はじめの祖」といわれた『竹取物語』では、かくや姫が竹の中から誕生し、終に天上に帰ってゆくのも、基本的にはまったく同じ型といってよいであろう。

桐壺の巻はそのような――ある人物の生涯を語るという――物語の発端の巻としての伝統的な体裁を整えている。「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり」という冒頭は、はじめに物語の時代を言い、ついで主人公の親を紹介する、つまり主人公の素姓を明らかにするという順序を踏んでいるのであって、『竹取物語』に「今は昔、竹取の翁といふものありけり」とあるのや、『宇津保物語』の俊蔭の巻の「昔、式部大輔、左大弁かけて清原王ありけり」、『落窪物語』の「今は昔、中納言なる人の女あまた持たまへる人おはしき」という冒頭と形としてはまったく同じなのである。

そして、主人公が成功して幸福な結末で終る点も古来の物語の約束であった。『宇津保物語』の仲忠や涼、『落窪物語』の継母に苛められていた落窪の君がその好例である。『源氏物語』の場合も藤裏葉の巻で光源氏は準太上天皇という臣下には例のない地位に上り、紫の上という理想の女性を得て、

私生活においても充たされた日々を送っている。桐壺の巻で、外国の人相見が「帝王でもなければ臣下に終りそうもない」と予言したのは、藤裏葉の巻で準太上天皇になることによって、正確な解答を与えられており、みごとに首尾呼応したハッピーエンドなのである。

そのような結末に到るまでの主人公の生涯を、物語は一箇の有機的な世界として構成するのではなく、四十年の時間的経過に従って、主人公に相対する一人の女性の恋物語を以って繋ぎ合せてゆく方法を採っている。したがって、一編一編がかなり完結性の強い独立した様相を呈するのも自然な成行きであろう。帚木、空蟬、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里と、第一部の巻々を辿ってみると、そこにはほぼ、光源氏に配するに、一巻ごとに新しい女性が登場して、各々の巻はそれぞれ主人公とその女性との個別の恋物語なのである。空蟬、夕顔、紫の上、末摘花、源典侍、朧月夜の尚侍、葵の上、六条の御息所、花散里などのヒロインたちは、それぞれの巻において光源氏との出逢いがあるだけで、各女性たち相互の葛藤は見られない。わずかに葵の上と六条の御息所の確執が葵の巻に見える程度であろうか。このような各巻の孤立性は、『竹取物語』の五人の貴公子の求婚譚が、相互に多角的な関係を持たず個別的羅列的であることに類似しているし、一巻ごとに積み上げて主人公の一生を語るという形は、『伊勢物語』の小段の排列を想起させるものがある。

そのなかで、若紫の巻は、桐壺の巻を物語の発端の形式を整える巻とすれば、物語の実質的な第一話としての意味を持つ。その成立は、おそらく帚木、空蟬、夕顔、末摘花よりは早いであろう。巻名の「若紫」とは、藤壺ゆかりの若紫の少女を連想させるが、物語の本文には一度も出て来ない言葉である。北山で僧庵の垣根越しに、思いがけず理想の恋人藤壺に生き写しの少女を発見するくだりが、『伊勢物語』初段の、昔男が春日の里で、さびれた古都には不似合いな美しい姉妹を垣間見して、

「春日野の若紫の摺衣しのぶの乱れかぎり知られず」という歌を贈った話を踏まえているのだということを、巻名によって暗示すると考えられている。主人公にとって、昔男のように元服後間もない青年時代の恋の冒険譚であった。が、同時に、『伊勢物語』初段を踏まえていることをまず巻名に掲げ示したところに、作者の並々ならぬ抱負が窺える。

したがって、巻名は当然作者によって、この物語の成立の時に付されたものと考えるべきである。同じく、物語の本文に現れない「紅葉賀」という巻名の用語が、つぎの花宴の巻の本文に現れたり、夕霧の巻の一条の御息所が、手習の巻で「かの夕霧の御息所」と呼ばれていることなどからも、巻名は作者の執筆当時すでに存在していたと考えられる。

また、さびれた所に思いがけぬ美女を見出して恋をするというのも、当時の恋物語の類型であったことが、『源氏物語』の作中人物の言葉を通して推察できるのであるが、『伊勢物語』の初段はその典型であり、『宇津保物語』の仲忠の母や『落窪物語』の姫君も例外ではない。『源氏物語』においても、作者は何度かこの伝統の型に拠って一編の恋物語をはじめている。『伊勢物語』の初段に倣った若紫の巻はもとより、夕顔、末摘花、第三部の橋姫の巻などが挙げられるが、末摘花の巻は相手の女性が醜女で、意外性が二重になるおかしみをねらったものといえようか。

ところで、作者は「若紫」という巻名を付して、読者に『伊勢物語』との比較を求めたように、従来の物語にない主人公の創造に力を注いだ。そもそも人の一生を語る物語というのであれば、主人公には読者を魅了するに足る内実を与えなければならない。物語の主人公の資格は、高貴の血筋と美貌と、詩歌や音楽の才に恵まれていることに加えて、色好みで、何よりも女性を愛し、女性に愛される人柄であることだ。『伊勢物語』の昔男、業平はその代表的人物である。が、光源氏は業平のように

たんなる色好みではなかった。社会人、政治家としての力量と抑制心を持ちながら、一方、制約の多い恋ほど強く惹かれてゆく不羈の情熱の持主である。そこに、父帝に認められ偉大な政治家として衆望を荷ないながら、父帝の后に恋せずにいられない彼の生涯が拓ける。主人公のこの性格は、現在桐壺の巻に次ぐ第二の巻である帚木の巻の冒頭に、作者によってはっきりと述べられている。

藤壺の宮は父帝の最愛の后で、主人公の若くして逝った生母に似ていた。帝は藤壺と源氏に向って母とも子とも思えと、二人を親しく結びつけたのだから、主人公が義母へ慕情を抱くようになったのは、父帝の配慮がもたらしたものといえる。それだけに、藤壺への思慕は光源氏を愛し庇護する父帝に対する背信を深め、苦悩を増す。倫理的な苦悩と情熱の間を揺れる優れた貴人像こそ、紫式部の新しい創造の賜物である。若紫の巻は、藤壺との密通、冷泉院誕生の予言などが書かれ、構想上も重要な巻である。

そして、このような内面的な問題を孕む主人公が設定されているかぎり、その相手役たるヒロインたちも平面的類型的な造型に終るはずはないのであって、空蟬、夕顔、末摘花、紫の上、葵の上、六条の御息所、朧月夜の尚侍、花散里、明石、いずれも固有の状況と運命をもって、精細な思念と感情に充たされて生きている。『源氏物語』の研究のなかで人物論がつねに取り上げられるのもこういうところに理由があるのであろう。

もろもろの、物語の主人公たるにふさわしい理想的条件を与えられた光源氏の人間像は、藤壺への恋によって生命の火をともされるのであるが、これは同時に、第一部の構成の要をなすものでもある。藤壺を恋するために、正妻葵の上とうち解けられず不仲のまま死別し、藤壺あたりをさまよって、逢瀬を得られぬために朧月夜の尚侍に忍び、これが須磨明石流謫の契機になり、明石の姫君誕生にも連

なる。また、藤壺の姪紫の上を強引に引き取り、生涯を共にするのは、不義の子冷泉院の誕生とともに筋立ての上では大きい意味を持つ。そして、最後に冷泉院の即位が成り、主人公は栄達を保証され、ついに準太上天皇になる。世に許されぬ男女の密かな愛によって、栄達が可能になったのである。ここに、秘密の愛が社会的政治的な場における成功の源になっているという図式が見られる。

この図式の意味するところを、もっとも効果的に訴えるために、作者は物語を歴史と重ね合せる方法を用いた。歴史とは当時において、男子が専らにする学問で、女子はそれに触れることを憚った。紫式部が「日本紀の御局」と渾名されて迷惑したのは、女のくせに歴史を読むかのように受け取られるからである。『日本紀』は当時の政治家の必須の書であった。

桐壺の巻は「いづれの御時にか」――何と申す天皇の御代であったか――と書き出すが、『竹取物語』や『伊勢物語』の「今は昔」「昔」と同様、過去の事件を語ろうとする姿勢は寸分も違わない。けれども、桐壺の巻を少し読み進めば、物語の時代はおのずと明らかになり、けっして漠然とした過去ではないことが分ってくる。史上実在の宇多天皇の名が二度も現れ、その上、主人公が三歳で母の喪に服する事実は延喜七年（九〇七）以前の宮中の慣例に基づくものとして書かれているからである。これによって、桐壺の巻の帝は宇多天皇の次の醍醐天皇に相当し、物語の時代は延喜の御代だということが決定される。『源氏物語』は発端の巻において、物語の時代を暗にではあるが、歴史上特定の時期に定め、何天皇の御代であるかを指し示しているのである。

引き続き、絵合の巻では、物語の朱雀院が醍醐天皇の次の帝であることを明かしているが、これは史上の朱雀院と呼称においても皇位継承の順においてもまったく一致する。さらに、物語の冷泉院は朱雀院の後を承けて即位し、宮中で絵合の行事をするのは、歴史上の村上天皇の天徳内裏歌合の構成

次第をすっかり模したものであり、村上天皇は史上の朱雀院の後を襲って皇位を践んだ帝である。冷泉院もまた即位の順といい、行跡といい、史上実在の村上天皇と符合する。

このように、歴代天皇と即位の順序が実在の歴史と重ね合せられることによって、主人公と藤壺の恋の意味は重くなるし、皇位の継承が不義の子によって枉げられていることの重大さが迫力を持つ。しかも私たちはそのような事の真相を歴史によってではなく、物語によってのみ知ることができるのである。歴史は正確厳密に事実を書き残すのだが、かような秘密の真相を伝えることはできない。薄雲の巻で出生の秘密を知って驚いた冷泉院が、おのれの進退を決めるべく、内外の歴史書を読むところで、ついにわが国史の上で先例を見出すことができず嘆息するところに、この間の事情が明らかにされている。歴史ならば、たとえこのような事実が分っていても、記録に止めることはしないと、冷泉院は悟るのである。螢の巻の物語論で光源氏をして「日本紀などはただかたそばぞかし」と言わせているのは、玉鬘相手の冗談めかしてはいるものの、薄雲の巻の冷泉院の思念を併せ思うとき、作者は架空の物語に天皇の実名を使うことの文学的方法としての意味を十分掌握していたと思われる。

須磨明石以後の巻々は、藤裏葉の巻の栄華に到るまで、主人公がいかにして政治家として成功するかを記すものである。若き日の光源氏にも、政敵右大臣方があり弘徽殿の大后が控えていたが、このたびはかつての盟友頭の中将一家が配される。明石の姫君の成長するまでの年月を、光源氏が外戚政治家たり得たのは、六条の御息所の遺児秋好中宮を養女にしたからであり、その優位は帝の母后藤壺の支持に拠るものであった。澪標、絵合、松風、乙女の巻を通じて、子女の教育と結婚はいかにあるべきかという外戚政治の機微が剰すところなく書かれている。梅枝の巻の明石の姫君の入内によって、光源氏が将来の政権を握ることも確実になる。そのなかで、玉鬘の巻以下十帖は、夕顔の遺児玉

鬘を擁して、六条の院の四季の風物を背景に、年中行事をないまぜて、彼女への恋の推移があるが、そこに制約の多い困難な恋ほど惹かれてゆく往年の光源氏の、情熱が見られる。彼女が髭黒の大将と結ばれるのは、一見意外な結末のようでありながら、髭黒が皇太子の伯父として、次期政権担当者であることを考えると、光源氏の養女でもある玉鬘が、政権とは無関係な螢の宮と結ばれたり、光源氏の政治的安定に波紋を投じることになる秋好中宮のいる冷泉院の後宮への入内などは、ありえないことが分明になろう。昔の恋人たちの娘が、昔の恋が、光源氏の栄華を支えている。その最たる結果が、藤壺没後、光源氏を実父と知った冷泉院が、彼を準太上天皇に進めることである。政治家としての成功と栄華が、主人公の恋愛生活と矛盾せず、むしろ過去の恋愛によって栄華が導かれたところに、いわゆる幸福な結末が、物語として完璧な形を示しているといえるであろう。

第二部は若菜上の巻から始まる。巻名は光源氏が四十歳になったのを祝って、若菜を献じるところから出たものである。その頃は、四十歳からあと十年ごとに四十の賀、五十の賀と、長寿を祝う賀宴を親類縁者が催したので、四十年といえば、人の一生に当ると考えてよいであろう。主人公は老境に入り、第一部でその生涯の事蹟を語り尽したあとに展開する物語である。

第一部によって完成した光源氏の世界はというと、準太上天皇六条院として、子女は天皇、皇太子の後宮に納れ、嫡男を政敵であった致仕大臣の姫と縁組させて大連合勢力の結成に成功し、将来に渉って安定した政権を我が物にした。その私生活でも、彼を取り巻く婦人たちにおのおのその所を得させ、中でも紫の上は誰よりも優る重い扱いを受けて、主人公は晩年の安定期に入ったかと思われた。が、そこへ、突然朱雀院の皇女の降嫁問題が起るという設定である。

若菜上の巻のはじめに延々と続く朱雀院と女三の宮の乳母たちの婿選びの論議は、第一部の帚木の

巻の三分の二を占めた雨夜の品定めを想起させる。頭の中将や左の馬の頭が得意気に披露する体験談やそこから導かれる談議は、光源氏に中流階級の女性への関心を喚び起し、それが空蟬や夕顔との、身分違いの恋愛沙汰を引き起すきっかけになった。雨夜の品定めの長い、あれこれの議論は、光源氏ほどの身分の者には容易に起るはずのない、中流の女たちとの恋を書くために仕組まれた一段なのである。同様に、朱雀院と乳母たちの内親王の配偶者についてのあらゆる角度からの検討、皇女たるものの身の上に関する朱雀院の深い憂慮は、結局、上皇鍾愛の内親王を託するに足る者は光源氏のほかにはないという結論を導き出すための長い手続きであった。そうしなければならぬほど、源氏と紫の上の仲は緊密で安定していた。第一部で作者が終始留意して来たことの一つは、藤壺の身代りとして、いくたびかの愛情の危機にもめげず、光源氏の終生の伴侶、六条の院に君臨する女性として成長する紫の上であった。物語として、理想的なこの関係を崩すにはよほど重い理由がなければならないし、よほどていねいな説明を積み上げねば、読者の納得が得られないであろう。若菜上の巻の冒頭の重さは、第一部の完成された世界を受け止める重さである。したがって、内親王降嫁以後、紫の上の苦悩に多くの筆が費やされる。彼女の置かれた位置と心情について、深い省察と共感なしにはありえない正確な指摘や細やかな叙述が見られ、それによって貴族社会における男女の愛情のあり方について、作者が新たな問題に出会ったことが予想される。

この巻は上下二巻に分れ、それぞれ長大であるが、この物語ではほかに上下に分れている巻はない。上下に分ったのは、一巻ではあまりに厖大になりすぎるからであろうが、別の巻名にせず、上下に分けたところに、二巻でもって一つの纏まりを持ったものとして作者に意識されており、また、そう読まれることを期待していたことが分る。下の巻には朱雀院の五十の賀を祝うことがあって、上の巻の

源氏四十の賀に対し、巻名を揃えるにふさわしい配慮がしてある。そして、上下二巻を通じて、第一部に登場した人物はすべて顔を揃え、事件は回顧され、結論を求められている。入内した明石の姫君の懐妊出産、明石の入道の遺言、住吉詣などは、とくに第一部の若紫の巻から須磨、明石に到る構想の主要な山場に呼応するものである。が、上下の巻を通じて、第一部に対応するのは、藤壺との密通事件に匹敵する柏木、女三の宮の密通である。昔、桐壺院は密通の事実を知らず、冷泉院を我が子として疑わなかったが、光源氏は正室の不義の最初の発見者である。物語の主人公として、この繰返しの意味を確認しなければならなかったからであろう。柏木、横笛、鈴虫と、不義の子の誕生、その両親の出家と死があり、第一部と同様、この事件の結末がそれぞれの身の上に訪れ、夕霧の巻は、光源氏の実子である夕霧がかかわっている。源氏の一生は間もなく終焉を迎え、その物語は終ろうとしている上に、おそらく作者の胸中には、第三部以下の、不義の子薫の物語が構想されつつあったのであろう。柏木の巻以下出家する女三の宮や、死に急ぐ柏木が、若菜両巻とは異なり、肯定的な態度で書かれるのも、理想の主人公光源氏の身の上に起った不祥事が、人事の及ばぬ宿命の致すところであることを印象づけるためでもあるが、一方、新しい物語の主人公薫の両親の物語になるからである。夕霧の巻も、第二部の大きな文脈の一環として、柏木、女三の宮密通事件の波紋の外にあることはできず、夕霧が柏木未亡人と結ばれる過程が捉えられている。紫の上の死のあと、幻の巻で、一年の喪に引き籠る源氏の生活が四季の風物に寄せて描かれ、ここに光源氏の物語は終る。その年末、主人公は来年は出家しようと決意を固めているから、おそらく数年の仏道専一の隠遁生活が続くのであろうが、それはもう物語の題材になるべき世界ではないのである。

こうして、光源氏の一生は終りを告げ、物語は結末を迎えたが、六条の院に新しく登場した女三の

宮に焦点を合わせてみてゆくと、内親王の婿選びから結婚生活にかけて、高貴の女性は、貴族としての名誉を保ちながら、女性として幸福な生涯を送るのはいかに至難であるかという問題が提出されている。それは夕霧の巻の女二の宮（落葉の宮）の運命でもある。女三の宮における父朱雀院上皇、女二の宮の場合の母一条の御息所と、いずれも娘の身の振り方について苦慮し怖れる親が登場するのは、この問題の代弁者、提示者の役割を果している。

第三部の主人公は薫と見做してよいであろう。匂兵部卿、紅梅、竹河の三巻は、薫と行動を共にする匂宮の生い立ちや人柄を紹介するところから始まっているが、同時に、薫の特異な心情や性格にかなりの筆が割かれてもいるのである。源氏の物語である限り、光源氏の血を引く匂宮がまず話題になり、巻名もそれにちなむものでなければ読者は承知しないであろう。紅梅の巻で、源氏の色好みの一面を写し取ったような匂宮の人物と、その宮廷社会における位置づけが書かれ、竹河の巻は玉鬘一家を舞台に薫の人柄と貴族社会における位置づけがある一方、この三巻は夕霧一家、致仕大臣（頭の中将）一家、髭黒一家と、光源氏の物語に活躍した家族の歴史に触れ、物語の時代と舞台が大きく移り変ったことを告げるのである。

匂兵部卿以下竹河までの巻に登場する薫は、おのれの出生への疑問から、政界における成功を望まず、出家遁世を願う人物という設定であるので、第一部のように栄華と恋を二つながら獲得する、幸福な結末を予想することは困難である。しかし、物語は本来恋物語であるから、ここにまったく別途の構想が用意された。

薫の出逢うヒロインは宇治の山里に住む没落した皇族の姫君である。この出逢いの形は、『伊勢物語』以来の、山里に意外の美女を発見する、古来の恋物語の原型といささかも違わないが、薫ははじ

め、ヒロインの父宮に親しみ、父宮を訪れるために、たびたび宇治に通ったのである。世に顧みられない皇族の気品のみに支えられている生活に馴染むこと数年、ここに埋もれ暮す姉妹に理解と共感を覚え、そこから大君に惹かれてゆく。山里に美女を見出す型はまったく同じでも、人物の創造如何によって、色好みの辿る筋道からは及びえぬ男女の出逢いが書かれることになった。大君は薫の愛情を信じながらも、貴族社会ではそれを実らせ得ないことを、長い不遇の体験から見透しているので、薫の求愛を受け入れぬままこの世を去る。薫が大君の同意があるまで、自分の気持を通そうとせず、ついに互いに無二の理解者であるにもかかわらず結ばれなかったのは、愛情の問題について、作者が厳しい道に分け入っていたことを示すものではなかろうか。

薫が大君の面影を求めて、ゆかりの人々に次々と思いを寄せるのは、藤壺ゆかりの紫の上を求める光源氏の姿を彷彿させるが、彼は浮舟と添い遂げることはできない。浮舟には匂宮がからんで、はじめから対照的に描かれて来た二人の人となりが、浮舟の運命を決める時点で、二者択一の形で彼女に迫ってくる。思慮深く社会的秩序と均衡を保つ愛情と、何ものも顧みない情熱。身分社会に生きる女たちにとって後者はこの上なく魅惑的であっただろうが、薫でなく匂宮の情熱に吸い込まれた浮舟には、約束された上流社会の一員たるべき生活は空しくなってしまった。大君、中の君、浮舟と、三姉妹を廻って、薫、匂宮との間に繰返し書かれてきた男女のあり方を見るとき、高貴の女性の生き方の至難さが浮き彫りにされていることに気付くであろう。彼女たちが出身の貴さを傷つけず、愛情に恵まれるにはいかなる道があるのだろうか。作者はその問題に取りつかれて手習、夢浮橋と書き進んだ。橋姫の巻に、あらたに登場するヒロインの背後に、彼女たちの行く末を案じ、出家もしかねている父八の宮がおり、浮舟には娘の良縁を求めて右往左往する母がいる。娘とその身の上を案じる親という

構図が、第二部の女三の宮と朱雀院、女二の宮と一条の御息所以来続いているのである。手習の巻の横川の僧都もいわば、尼になって新しい境涯に入る浮舟の父の役割を果す人物といえよう。光源氏に造型された人間像を薫と匂宮に分ち与え、女の身の上に受け止め、展開してゆくところに、この物語の主題がついに煮詰められたことを知るのである。

文章について

小説の愛読者で、『源氏物語』を読まれた方は、この物語の作中人物につく敬語の夥しさに驚かれるであろう。その種類は多く、使い方は正確厳密で、私たちが高等学校で学ぶ古典文法の敬語法の骨子はすべてここにあるといってよいぐらいである。そして、このことこそ、『源氏物語』の書き方の基本的な輪郭を端的に示すものである。

敬語とは、筆者が純粋に客観的な、第三者的立場に立つときは出て来ないもので、その典型的な例が学術論文であり、多くの小説もまた、作者が作中世界全体を見透すかのような立場に立つことを前提としているために、敬語が現れないのである。とすれば、作中人物に、身分に応じて敬語が使い分けられているのは、作者がそのような立場にいないことを示している。『源氏物語』の作者は、いや、作者という名もふさわしくないので、筆者とでもいうべきか、『源氏物語』の筆者は、過去のある時期に、光源氏の身辺に親しく仕え、その言行をつぶさに見聞したものが語るところを筆記する記録者なのである。だから、『源氏物語』は作者によって創作された架空の物語ではない、事実譚だ、とい

うことになる。そういう体裁をとっている。帚木の巻の「光源氏、名のみことことしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすきごとどもを、末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひけるかくろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさよ」と、光源氏の隠していた内証事まで話し伝えた人を罪深いと批判しているのが、筆記者である。夕顔の巻末で、これを受けて、「かやうのくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくて、みな漏らしとどめたるを、など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならず、ものほめがちなると、作りごとめきてとりなす人ものしたまひければなむ。あまりもの言ひさがなき罪、さりどころなく」と、光源氏を実際知っている者までが賞めてばかりいると、作り話のように取る人があるので、つい思い切ってお話し申したおしゃべりの罪は免れがたいことで……と弁解するのは、語り手の言葉をそのまま写したものである。各巻はこのようなわく組みのなかにあるのであって、帚木、夕顔のように首尾呼応した形でなくても、「かかる人々の末々、いかなりけむ」（末摘花）、「……禄どもなど、二なうおぼしまうけてとぞ」（幻）といったように、時には語り手が、時には聞き手である筆記者の口調がそのまま示されている。そして、こういうあり方が昔からの物語の基本的な型であった。ただ、『源氏物語』は、そのような分り切った物語のあり方を形にして示した、意識に上らせたということはいえる。それが何を意味するかといえば、語り手の、語り口、語り方、つまりは文章に、語る内容とひとしき重さを見出したからにほかならない。

そこで、語り手の敬語の使い方を見てみると、作中人物同士の会話は別として、いわゆる地の文では、敬語のつく人々の身分がほぼ三位以上の公卿階級にきまっている。おそらく、『源氏物語』はごく少数の読者、中宮彰子を中心とする文化圏を目指して、あの形に書かれたと考えてよいのではなか

ろうか。もとより、数々の物語の読み手である同僚の女房の批判は考慮したのであろうが、作者が一番心に置いていたのは彰子で、『源氏物語』は左大臣道長家のものであったといえよう。これは、『紫式部日記』にいうところの大規模な物語筆写のことや、そのほか二、三の傍証によってもいえることなのである。

十二世紀前半の宮廷が制作したといわれる源氏物語絵巻の東屋の第一段には、浮舟が絵を描いた冊子をひろげ、側で女房の右近が詞ばかり書いた物語の本を読みあげる図がある。『源氏物語』のなかにも、女房が姫君のために物語を読むということが帚木の巻や螢の巻に見えるし、一条天皇が女房に『源氏物語』を読ませて聞かれたという。物語は女房に読ませて聞くという鑑賞法が上流社会では行われていたと考えてよい。中宮のために書かれた『源氏物語』も本来の鑑賞法は、女房に読ませることを念頭に書かれたであろう。この物語の文章が、黙読のための文章を対象にして成った文法では割り切れないことや、独特の文の勢いを持つこと、小説とは違った話の進め方をすることなど、みな、このような根から生じたものなのである。『更級日記』の著者が「昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、灯を近くともして」源氏の五十余巻に読み耽ったというのは、もとより、そうした読み方がされる場合もあるのであって、ただそのような場合でも、あの時代のものの読み方として、声に出して読みあげていたであろうことが想像される。『源氏物語』の文章は、物語がそのようなあり方をした時代の文章なのである。

ところが、上流の姫君が物語を鑑賞する場合は絵を伴っていたらしいことが、前記の源氏物語絵巻の東屋第一段や、『源氏物語』のなかの絵合の巻の記事などから想像される。若紫の巻や蜻蛉の巻で、紫の上や明石の中宮腹の一品の宮が絵を見て慰んだというのも、おそらく物語絵が大部分であっただ

ろう。絵と物語との密接な繋がりが想定される当時の状況に対応するように、『源氏物語』の巻々も、視覚的な場面を一巻のうちにいくつか持つことによって、話を進め盛り上げるやり方をしている。作者自身、その場面が絵になるにふさわしいことを指摘する場合も何度かある。夕顔の巻で、源氏が六条わたりのさる貴婦人の邸から、朝霧に濡れ濡れ帰るところで、「絵にかかまほしげなり」というのはその一例である。

物語というものは、作中人物が登場し、対面し、会話を交わすという場面を持つのが、『竹取物語』以来の、これもまた物語の原型の一属性である。『源氏物語』もその伝統のわくの中で呼吸づく以外の何ものでもない。たとえば、桐壺の巻は、誕生から元服までの十二年間、つまり恋物語が展開するにふさわしい成人期に到るまでの主人公を紹介するという、まったく長編物語の発端として位置づけられるべき巻であるにもかかわらず、ここに野分の一段があって、靫負の命婦は「夕月夜のをかしきほど」に、露を分けて亡き桐壺の更衣の里を訪れ、母北の方と対面するのである。物語に対して、さながら舞台の光景をみるかのような場面を求める気持がいかに強いか、それなくしては物語ではない、といった当時の人々の考え方が分るのである。『宇津保物語』が、人々が一堂に集まっては会話を交わす場面で埋まっていたのを想起されるとよい。

だが、その場面なるものは、『宇津保物語』と『源氏物語』ではなんという質的な違いであろうか。会話の内容と、それと不可分のかかわりを持つ話し方、そうした会話を受け止める人物の心情や表情、具体的な動作、すべてが生きいきとして、一人一人が書き分けられている。『源氏物語』において、はじめて描写ということが成し遂げられたといってよい。『枕草子』のなかに、清少納言が仕える定子皇后のもとでは、『宇津保物語』の涼、仲忠の人物論が流行し、皇后は仲忠が幼時木の洞で育った

賤しさを批判すれば、清少納言は涼が帝の御娘を妻にできなかったと攻撃した話が載っている。これは長徳二年（九九六）のことと推定されている。『源氏物語』の執筆は寛弘三、四年（一〇〇六～〇七）頃にはすでに始まっていたと思われるから、その時間的隔たりはわずか十年である。けれども、この間の質的な空隙を埋めるものはない。あるいは、多くの物語が散逸してしまったのかも知れない。『宇津保物語』より写実的な叙述ではずっと進んだ『落窪物語』があるから、面白く作る技術の上達ということはあっただろう。けれども、人間やその内面が書けるためには、質的に違った動機や能力が必要なのだということが痛感される。

その意味において、この物語の文章の特色とされる和歌的技巧、縁語や掛詞、または引歌や出典の技巧も、ただ装飾性を追求したものではないであろう。人の心やあり方が、説明をこまかく順序立てしさえすれば表現できるものではないことを知ったものなら、かならず何らかの象徴的手法を求めるはずである。象徴的手法は、見えざる世界、言語に捉えがたい世界の存在に気付いたものが選ぶ最も有効な方法である。暗示的であること、これが『源氏物語』の表現の特色であろう。作中人物が対坐する場面に、かならずといってよいぐらい点じられる自然の風物、月光や風雨や樹木も、作中人物の個性や境遇の背景としての役割を荷なっている。この物語の場面ほど、気候や天象を含めて人物が自然とともに描かれることは後世の追随的な作品にも模倣し切れなかったところである。

しかし、暗示的象徴的といっても、この物語は人物が対坐する場面を核にして成り立つのであるから、物理的な時空の関係や人間関係、すべて関係ということについて、正確な測量がなされていなければならない。作中人物の視線や聴覚を通して状況を捉える方法は作者が好んで用いたものだが、もろもろの事象の正確な関係を、説明ではなく、描写することによって、存在感や臨場感を出すことは

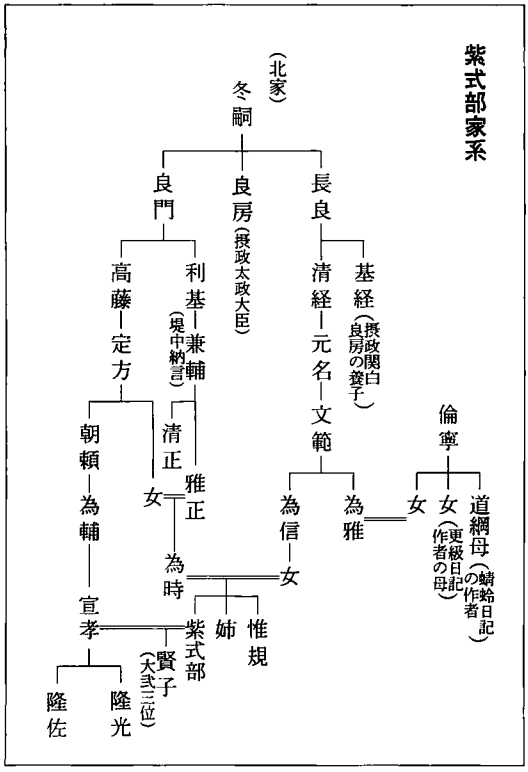
作者の独壇場であった。たくさんな形容詞の適切な使用、「斎宮は……不定なりつる御出で立ちの、かく定まりゆくを」（賢木）とか「詠果てて、袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎはしきに」（紅葉賀）の「定まりゆく」「待ちとる」のような、複合動詞のさかんな使用も、正確な描写や叙述を可能にした作者の発明である。

作者について

物語の作者を物語の手法に倣って紹介すると、父は藤原為時、母は藤原為信の女である。生れた年は、この時代のこの程度の身分の女性の常として不明であるが、天元元年（九七八）、天延元年（九七三）、天禄元年（九七〇）等の説がある。式部が活躍した寛弘年代（一〇〇四～一一）に、中年であったことから考えて、生年は、九七〇年代と考えてよいであろう。

父の家系は、もと、太政大臣藤原良房の弟良門に発する名門ながら、公卿になったのは曾祖父兼輔までで、あとは諸国の受領として四位五位止りの者ばかりである。しかし、歴代、文学の道に名があり、兼輔は堤中納言ともいわれた歌人で、歌壇の庇護者であった。祖父雅正、その弟清正、父為時、伯父為頼、兄惟規みな歌道に聞えた人々である。父為時は歌よりも詩文に優れ、一条天皇時代を代表する文人の一人に数えられた。その詩作は『本朝麗藻』そのほかに数十編収められている。

母方も遡れば、父方とおなじく太政大臣良房の一門で、その兄長良を祖とし、代々歌人を輩出した。曾祖父文範、祖父為信、その兄為雅らで、為雅の妻は藤原倫寧の女、『蜻蛉日記』の著者の姉妹に当



る人である。

式部の幼少の時を知る材料はきわめて乏しい。しかし、千年前の女房出身の女流文学者の生い立ちを語る資料を、とにかく持っているということ自体、同時代の同様の女流歌人群と較べて、はなはだ異色あることなのである。家集『紫式部集』と『紫式部日記』が彼女の生涯を辿る有力な手がかりになる。もっとも早い時期については、『紫式部集』の冒頭の一首、百人一首にも採られた有名な歌が参考になろう。

早うより童友達なりし人に、年ごろ経てゆきあひたるが、ほのかにて、七月十日のほど、月に競ひて帰りにければ

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月かげ

以前、幼友達だった人に再会して、別れを惜しんだ歌である。歌自体は娘時代の作なのだが、詞書にある「早うより童友達なりし人」というのが、彼女の幼な時代に思いを誘う。『源氏物語』の若紫の巻に出る北山の紫の上のように、または二条の院に引き取られてだんだん機嫌を直してゆく紫の上のように、式部も雀の子を飼ったり、友達と雛遊びをしたのかと。あの時代の女の子の日常生活を想像してみようと促すものが、この歌の出来た背景にはある。式部はその頃から利発であったらしい。兄（弟とも）の惟規がまだ子供の頃、儒者の家の跡取りとして、父は息子に漢籍を教授したが、式部は惟規よりも早く理解したので、「お前が男でなかったのが残念だ」と嘆いたことが『紫式部日記』に見える。惟規は官吏としてはさほど有能ではなかったようだが、風雅の道では数々の逸話を残した情操ゆたかな人であった。式部はこのような家風と家族の中で育ち、長じるにしたがって父の蔵書をつぎつぎに読んで向学心を満足させた。当時の女性には異例の、こうした素養が『源氏物語』の構想、文章の骨格の正しさや、漢籍の引用の豊富さなどに、おのずからな影響を与えていると見てよいであろう。

『紫式部集』の前半はほとんど宮仕え以前の歌であって、おそらく式部自身が年代順に編纂したものと考えられるが、それによると、彼女にはさして年の違わぬ姉があった。けれども、この姉は間もなく亡くなったので、式部は年上の友達と次のような約束を交わしている。

姉なりし人亡くなり、又人の妹失ひたるが、かたみにゆきあひて、亡きが代りに思ひ交さむといひけり。文の上に姉君と書き、中の君と書き通はしけるが、おのがじし遠き所にゆき別るるに、よそながら別れ惜しみて

北へゆく雁のつばさにことづてよ雲の上がきかきたえずして

姉を失った自分と妹を失った女が義姉妹の約束をして、手紙の宛名にも姉上と書き、中の君（妹のこと）と書き交わしていたというのだから、式部のだれか年上の女の人に寄りかかってゆきたい淋しさが偲ばれる。家集には母のことに一言も触れていないので、母は早く亡くなったと思われる。母の死を悼む歌も、母を恋う歌も一首もないところから、よほど小さい時に母と死別したのではなかろうか。

式部の父為時は、はじめ大学（国立の官吏養成機関）に入り、文章生となって、播磨権少掾（地方の三等官）を振り出しに、花山天皇の治世には、式部丞、式部大丞を歴任したが、天皇が藤原氏の策謀に乗って出家退位してからは官途を失って十年（九八六～九九六）、不遇の日を送った。ちょうど式部の少女時代から娘時代にかけての年月にあたろうか。

しかし、長徳二年（九九六）、為時は越前守に任ぜられる。はじめの決定は淡路守だったが、淡路は小国なので、為時は名文をものして、さらに恩顧を賜らんことを一条天皇に願い出たところ、天皇はひどく感動されたので、その様子を察して、道長が自分の腹心の部下がすでに越前守に決っていたのと交換したという有名な話が伝わっている。前年、長徳元年、関白道隆が死に、熾烈な後継者争いの結果、道隆の子伊周を抑えて、道長が執権になったばかり、道長としては、ようやく存分に振舞えるようになった頃である。為時は同年夏ごろ越前に赴任し、式部も同行した。前出の歌は、姉と呼んだ人も自分もともに任国に赴くとあるので、この歌は長徳二年の成立と分る。このほか、『紫式部集』には、友人と交わした歌が多い。友情が詠まれているのはほかの女流の家集と比較して『紫式部集』の特色の一つである。

越前に下る前後から式部は後に結婚する藤原宣孝と歌の贈答をしている。彼は越前まで追いかけてたびたび文を寄越す執心ぶりで、越前に来ている宋の人を見がてら、そちらに行くと約束までしている。しかし、彼はこの時為時と同年輩ぐらいで、すでに何人かの妻を持ち、式部と同じほどの息子がある人だった。この時も、式部のほかに恋文をやる女がいた。それを聞いた式部が宣孝の文に手きびしい返歌を送ったことが『紫式部集』に見えている。宣孝の家系は、式部とおなじ良門の流れで、彼の祖父と式部の祖母は兄妹である。父為輔は権中納言、兄説孝は左大弁、長兄惟孝の息子たちはやがて道長の家司になるなど、有能な実務家たちが揃っており、権門に出入りして、羽振りのよい一家であったらしい。『枕草子』には宣孝が世間の常識を破って、きらびやかな服装で金峯山詣をして衆目を驚かしたことが記されている。当時の公卿の日記にも、職務怠慢で勅勘を受けたこと、舞人を命じられたこと等があって、派手好みの不羈な性格だったと思われる。

式部は一冬を越前で過して、翌年秋には任期中の父を置いて単身都に帰還した。往路、琵琶湖を渡る時の不安げな歌、越前の雪に埋もれて心娯しまぬ歌などにくらべ、帰路の詠懐はまことに晴ればれしい気分が調べにまでみちみちている。都に帰れる喜びとともに新しい生活への期待があったのであろう。式部はまもなく宣孝と結婚するが、それは長徳四年（九九八）頃か。式部の年齢は二十歳をいくつか越えていたであろうから、当時としてはかなりの晩婚である。夫は当時右衛門権佐兼山城守であった。翌年か翌々年一女を生む。後に後冷泉天皇の乳母になり、大弐三位と呼ばれた賢子である。けれども、長保三年（一〇〇一）初夏に宣孝は病没し、わずか三年あまりの結婚生活で式部は寡婦になった。家集には、その死を悲しむ歌とともに、いたいけな賢子が病んで一人不安に苦しむ歌がある。また、亡夫の遺した筆跡を見て、継娘と交わした歌をみれば、式部の感情の素直さや親しみぶかさ、

彼女が姉妹ほどの年頃の継娘に慕われていたことが分り、後年、『源氏物語』の中に、紫の上と明石の姫君といった人間関係や、玉鬘を慕う真木柱の姫君を登場させた心的背景を窺わせるに足るものがある。

夫の喪の明ける前後、長保四年頃、家集によれば式部に言い寄る男があったが、彼女はこれを振り切っている。長保六年は改元があり、寛弘元年となる。式部の初宮仕えは寛弘二年（一〇〇五）か三年の十二月二十九日と思われる。月日がはっきり分るのは、『紫式部日記』の寛弘五年十二月二十九日の条に、「はじめて参りしも今宵のことぞかし」とあるからである。その時、もう物語作者として相当有名であったらしく、同僚の女房から「物語好み、よしめき、歌がちに、人を人とも思は」ぬ人柄だという先入主を持たれていた。寡居の間に『源氏物語』の初めの部分などを書き上げており、その文名をもって、道長に見出されたのだと考えられる所以である。けれども、式部はきわめて控え目に、学才を隠し、仲間の女房たちと摩擦を起さぬようにしてきたので、やがて中宮からも同輩からも「人違いかと思うほど、人懐っこく、おっとりしている」といわれた。日記によれば、彼女の交友はとくに最上位の、中宮と血縁関係にある女房たちであり、乗車の順位などと併せ考えて、かなり重い扱いを承けていたと思われる。その呼び名は藤式部で、父がかつて式部丞をしていたところから命名されたものであろう。式部の宮仕えと前後して、兄惟規は蔵人に抜擢され、まもなく兵部丞になっている。越前から任果てて帰京した父為時は官職に恵まれなかったが、道長邸の詩宴にはたびたび陪席しているから、一家をあげて執権に目をかけられていた様子が偲ばれる。

けれども、日記や家集に見る、中宮の皇子誕生を寿ぎ、道長一門の繁栄を礼讃する言葉とともに、あたかも光に添う影のように、彼女自身の心ゆかぬ思いが記されるのはどういうわけだろうか。日記

は主に皇子出産の記録であるが、もし主家の命で書き、提出したとすれば、こういう私的な詠嘆は不用か不適に思われる。家集にも、

はじめて内裏わたりを見るにも、もののあはれなれば

身のうさはこころのうちに慕ひきて今ここのへぞ思ひ乱るる

とあって、宮仕えの最初から、これを気の進まぬこととしていた趣が見える。

しかし、実生活の上では、取次役などに行き届いた働きをしていたし、中宮に近く仕えて、時に『白氏文集』の講義をしたこともある。『源氏物語』の続きも書き進めていたらしく、寛弘五年秋、御産のあと、中宮の内裏還啓にあたって大規模な物語の筆写が行われているのは、『源氏物語』の書写と考えてよいであろう。

寛弘八年（一〇一一）六月、一条天皇が崩御。中宮はまもなく一条院内裏を去って枇杷第に移り、式部もこれに従った。父為時は前年左少弁、この年、越後守になって任国に赴き、惟規もこれを追ったが、途中病を得て、越後に着くとすぐみまかった。式部の没年は不明であるが、文献の上で、生存が確実なのは長和二年（一〇一三）頃までである。父為時が長和三年任半ばで辞任したのは、式部の死に関係があるのではないかといわれている。娘の賢子は母に次いで彰子のもとに仕え、越後の弁と呼ばれていた。父を早く失ったので、祖父為時の官職に因んだ女房名をつけられたのか。彼女はのち高階成章と結婚したが、この人は有名な欲ばりで、渾名を「欲大弐」といわれたほどだから、賢子は裕福に過したであろう。賢子はのち後冷泉天皇の乳母に選ばれたが、母紫式部の薫陶よろしく、天皇を優雅な方にお育てしたという。三位に進み、大弐三位と呼ばれて、母よりもずっと出世したのである。大半は失っているが家集に『大弐三位集』がある。

テキストについて

『源氏物語』が作者の手を離れてから、どのような経路で書写され、流布していったのか、具体的なことは一切明らかでない。おそらく、それは、彰子の後宮から、さまざまな伝を求めて、書写され、世にひろまっていったものであろう。『弘安源氏論義』（弘安三年―一二八〇―成立）の跋文によれば、この物語は「ひろくひろき年のほどより出で来にけり。しかれども、世にもてなすことは、すべらぎのかしこき御代には、やすくやはらげる時よりひろまり、くだれるただ人の中にしては、宮内少輔が釈よりぞあらはれける」という。寛弘年間（一〇〇四～一一）に世に現れ、康和年間（一〇九九～一一〇三）に一般にもてはやされるようになった、というのである。しかし、すでに早く、菅原孝標の女は、父の任地上総の国府で、姉や継母が、ほかのいろいろな物語とともに「光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞」いたと、『更級日記』にしるしている。これは孝標の上総介在任中、寛仁元年～四年（一〇一七～二〇）のことである。また、帰京した作者が、田舎からのぼって来た「をばなる人」から「源氏の五十余巻」を櫃に入ったままもらって帰ったのは、治安元年（一〇二一）のことで、寛弘の末年を隔たることわずかに十年のことである。継母というのは、上総大輔と呼ばれた女房歌人、「をばなる人」とは、受領の妻であったらしいが、道真五世の孫たる孝標の一門、あるいはその身辺には、物語に対するかなり広い知識と関心を持った女性たちがいて、宮家や権門、あるいは知人からいろいろな物語を入手したり借覧したりする伝にも乏しくなく、すでに『源氏物語』の完本を

所持している婦人もいた。要するに、成立以来、さまざまな経路で書写され伝えられて読みつがれてきたものであろうが、成立後百年たって、堀河天皇の康和年間に『源氏物語』が世にひろまったというのは、宮廷で重んぜられるようになったことを意味するのであろう。やや下って、鳥羽天皇の末年の頃（一一二〇前後）には、現在国宝になっている源氏物語絵巻が制作されたと推定されている。

結局、後世の断片的資料によるいくつかの推測は別として、平安時代におけるこの物語の書写、伝来の歴史は不明であるとするほかはなく、現在まで伝えられているこの物語の諸本は、その系譜の明らかに辿られる限りでは、一般に平安時代の古典の校勘作業が盛んに行われた鎌倉初期までしかさかのぼれない。すなわち青表紙本と河内本である。

青表紙本は、藤原定家の書写した本で（一部は自ら写し、大部分は子女をして写さしめたものと思われる）、その原本は、花散里、行幸、柏木、早蕨の四帖が現存していると認定されている。そのほか、桐壺、帚木、花宴、花散里、若菜上、若菜下、柏木、橋姫、浮舟の九帖について、明融（上冷泉為和―天文十八年没―の子）が、原本を、その字くばり、字形まで忠実に写した写本が現存しており、以上、原本、明融本の重複二帖（花散里、柏木）を除いての十一帖が、現在、青表紙本の具体的な姿をうかがうべき基礎資料である。

河内本は、定家と同時代に、河内守源親行の作製した校訂本で、親行は二十一部の写本を披見して校勘の資料としたというが、その中で、二条都督伊房、冷泉黄門朝隆、俊成、定家、各自筆の四本を特に重んじている。伊房は行成の孫にあたる人、朝隆は紫式部の夫宣孝の五世の孫にあたる人である。親行の参照した二十一部の本について、その本文の具体的な詳細については、定家本が、現在伝わる青表紙本を通じてその性格が想像されるほかは、ほとんど不明である。

定家の書写した青表紙本が、どのような本を写し、それにどの程度、定家の校訂の手が加わっているか、明らかでないが、ある一系統の本を、かなり忠実に写したと考うべきもののようである。それに対して、河内本は、文意を通じやすいようにという配慮のもとに異文を取捨した校訂本と考えられ、その本文は、この物語に本来的でない後人の付加や辞句の補訂が集成的に取り入れられる結果になっていると判断される。青表紙本、河内本、両者の本文を比較してみると、青表紙本の本文の方が、総体的に見て、少なくとも、より古態を存するという意味で、純良な本文であると判断される。定家は、書写に際して、もとの本の不審な点はそのままにしておいたようで、意味の通じにくい箇所や、もとの本の誤写をそのまま踏襲したと思われる箇所が多少存するので、そういう箇所は、河内本そのほかを参照して訂正するほかはない。結局、青表紙本を最小限度改訂して読むという方針が、今日もっとも妥当な行き方であると考えられる。

なお、池田亀鑑博士は、青表紙本にも河内本にも帰属せしめ得ない本を一括して別本と呼んで処理したが、これは要するに系統不明の本であって、その研究は今後の課題である。

なお、以上の青表紙本、河内本、別本の主要伝本の本文の違いを一覧し得る校本として、池田亀鑑博士の『源氏物語大成』校異篇三巻があり、本文の校訂にかならず参照すべき文献である。

校訂について

本書では、青表紙本の原本、ならびに原本の忠実な臨写本である明融本の存する、前記の十一帖に

ついては、これらを底本とする。その他の巻については、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とする。大島本の筆者は飛鳥井雅康で、関屋の巻末に、文明十三年（一四八一）の識語がある。大島本は、桐壺、夢浮橋は別筆であり、浮舟の巻を欠く。書写年代は比較的新しいが、全体を通じて、総体的に青表紙本系統の善本であるとの判断のもとに、池田亀鑑博士の『源氏物語大成』校異篇の底本に採用されたテキストである。

本書の底本採用の方針は、すでに池田亀鑑博士の『日本古典全書』本、玉上琢彌博士の『源氏物語評釈』において採られた方針であり、阿部秋生、秋山虔、今井源衛三氏の『日本古典文学全集』本も、ほぼ同様の方針を採っている。

ただ、青表紙原本、明融本、大島本を、どの程度に改訂して本文を立てるかという点になると、校訂者の見解によって、部分的に微細の、場合によってはかなり大幅な差違を生ずる。前にしるしたように、青表紙原本そのものにも改訂を要する箇所があるし、明融本にも誤写がある。また特に、原本、明融本の存しない巻々については、大島本と他の青表紙諸本との本文の厳密な比較検討はゆるがせにできない。

従来、青表紙本系統の本の中で、室町末から江戸時代を通じて、もっとも影響力のあったのは三条西家本であるが、一般に知られている日本大学蔵本（『源氏物語大成』校異篇所収）、書陵部本（新典社の複製があり、『日本古典文学大系』本の底本に採用されている）によってその本文をうかがうに、三条西家本は、肖柏本（三条西家と関係の深かった牡丹花肖柏の自筆本）とともに、現存青表紙諸本中、おそらくもっとも校訂の手の加わった本文である。いわばそれは、青表紙本に関する第一次校訂本とでも称すべきものである。原本、明融本、大島本を基準にして校訂を試みるという現在の大勢は、第二次的に

校訂を模索している段階とでもいえようか。

『大成』校異篇に採用された青表紙諸本の内部には、二乃至三系列の本文の対立が見られる場合が多い。総体的に大島本を善本とする判断に誤りはないにしても、巻によって多少事情に異なるものがあり、各巻ひとしなみに大島本に全幅の信を措くことは危険である。いずれにせよ、どの本を底本とするにしても、校訂作業は必須である。特に大島本は、書写年代が新しいために、語形の訛誤や特有の誤写を含み、また、河内本系統の本文と接触した結果ではないかと考えられる特有の混成本文を稀に持つ。本書で、底本を改訂した箇所の一々について、その旨を指摘し、改訂の理由も述べたいが、ことはかなり専門的な論議にわたるので、紙幅の関係もあり、一般読書人へのこの物語の普及を目的とするという本書の性格をも考慮して、すべて割愛に従うこととする。ただ、各巻について、諸本の異文の対立の状況を観察、吟味した上で、可能な限り厳密な考慮のもとに本文を立てるよう努めたことは、一応おことわりしておきたい。本文を立てること自体が、すでに注釈作業の第一歩だからである。

注釈について

前に引用した『弘安源氏論義』の跋文に見える「宮内少輔が釈」というのは、藤原伊行の著『源氏釈』（単に『釈』とも呼ばれる）のことで、現存の資料からも、これが、この物語の最古の注釈書である。伊行は行成六世の孫にあたる人で、その注釈は、本文に踏まえられた和歌、漢詩文、仏典などの引用を主としたものである。定家の『奥入』は、この『釈』を基礎として、これに取捨、増訂を加

えて成ったものである。『釈』『奥入』のこうした注釈は、和歌や漢詩文の世界を物語の世界に移した『源氏物語』の基本的性格に正確に対応したもので、以後の注釈書にも多く引用、踏襲されて、この物語の注釈の重要な一要素をかたちづくっている。

河内本を作製した、いわゆる河内方の注釈書としては、親行の弟素寂の『紫明抄』十巻（永仁元年―一二九三―頃成立）があり、『釈』『奥入』とともに現存する最も古い注釈書として重要である。前二者における和歌、漢詩文、仏典の引用をさらに充実させ、簡単な語釈を加え、また、この物語の准拠した時代、事件、人物等について考えるいわゆる准拠説にくわしい。この物語は、特定の歴史時代を踏まえて、それらしい背景のもとに物語を展開させているので、後に『河海抄』において徹底的に究明されることになる准拠の問題も、この物語の特異な方法について我々の目を開かせるものである。ほかに河内方の注釈としては、親行の原著にその孫行阿にいたるまで代々考察を加筆した『原中最秘抄』、『紫明抄』を中心に諸家の説を集成した『異本紫明抄』がある。後者は、鎌倉期における諸家の説を知るに便利である。

南北朝時代、四辻善成は『河海抄』二十巻（貞治二年―一三六三―頃成立）を著して、それまでの注釈を集大成した。善成は、学統としては河内方に属するが、元来、河内方の注釈は、煩瑣な考説や付会の説がすくなくないのを、捉われない態度でよく批判的に取捨している。本書は、それまでの諸注の批判的集成たるにとどまらず、和歌や漢詩文の引用も、語の用例にまでその範囲を拡大して、豊富、精密であり、語釈も充実し、准拠説も、本書においてほぼ完成の域に達したといってよい。この物語の注釈の歴史を通じて、最も注目すべき業績である。

一条兼良は室町時代を通じての碩学として聞えた人であるが、その著『花鳥余情』三十巻（文明四

年―一四七二―成立）は、『河海抄』の補正を意図したもので、文意、歌意の把握、説明に一歩を進めている。兼良はまた、この物語の年立（年表）の作製者としての功も没し得ない。牡丹花肖柏の『弄花抄』は、その師宗祇の講義をもととしたもので、三条西家の注釈に大きな影響を与えた。宗祇、肖柏に師事した三条西実隆、その子公条の説を集成した『細流抄』は、語意、文意の解説、文脈の指示などを主としたものであるが、鑑賞にも特に意を用い、文章のこまやかな襞にまで分け入る正確な読解の成果は、後々までもの指針になったかの観がある。三条西家の注釈としては、『細流抄』に増補した『明星抄』（公条の子、実枝の著）があり、その学統を受けたものとして実隆父子に師事した九条稙通の『孟津抄』がある。三条西家は、室町時代後半における学芸の家として著名であったので、その家の本たる三条西家本は、家学とともに、大きな影響力を持った。

江戸時代初期、北村季吟の『湖月抄』（延宝三年―一六七五―刊）の本文は、ほぼ三条西家本の系統であり、その注釈も、『細流抄』『孟津抄』に負うところが大きい。『湖月抄』は、『細流抄』『孟津抄』に主として拠りながら、『河海抄』『花鳥余情』の要をとり、要するにそれまでの注釈、いわゆる旧注の粋を集めて作られたもので、以後のこの物語の流布、ならびに研究に決定的な役割を果した。のみならず、今日なお、この物語の読解の指針たるを失わない好著で、このことは、この物語の注釈にいわゆる旧注の果した役割が、いかに重い意味を持つかということを証するものである。

近世国学、いわゆる新注の業績としては、契沖の『源注拾遺』（元禄九年―一六九六―成立）と、宣長の『玉の小櫛』（寛政八年―一七九六―成立）の二著をあげるべきであろうか。『玉の小櫛』は、最初の総論的部分だけでなく、新しい年立の作製や、『湖月抄』の誤りを正した注釈上の新見にも、注目すべきものがある。宣長の説いた「もののあはれ」とは、要するに色好みの心ということであり、それ

は、平安末から中世を通じてこの物語が読みつがれてきた精神の基盤、具体的には代々の歌詠(うたよ)みの心――平たく言えば、日本の古典文学の伝統――を、明確に言いあらわそうとしたものにほかならない。萩原広道の『源氏物語評釈』(嘉永七年―一八五四―序)は、近代において評判のよい注釈書であり、それなりに敬意を表すべき労作ではあるが、すでに心を失って、頭でこの物語を解こうとしている。ここで失われているものの大きさは、はかり知れないものがある。現代の注釈は、『湖月抄』までひとまずもどり、さらに遡って、中世源氏学の秘められた価値を現代に生かすべく努めねばならぬであろう。

付

録

長恨歌

本文は、平岡武夫、今井清両氏の校定に従い、この作品の古形と考えられる本文を立てた。この本文はまた、平安時代にわが国に流布していた本文である。念のため、通行本との本文の異同を、那波本により、訓み下し文の下に摘記した。訓み下し文は、大東急記念文庫所蔵の金沢文庫旧蔵本（前記校定の根幹的資料の一つ）に付せられた訓点を参考にして作製した。これによって、ある程度まで、平安時代に行われていた古い訓読文の面影を再現し得たかと思う。

漢皇重レ色思二傾国一
御寓多年求不レ得
楊家有レ女初長成
養在二深窓一人未レ識
天生二麗質一難二自棄一
一朝選在二君王側一
廻レ眸一笑百媚生
六宮粉黛無二顔色一
春寒賜二浴華清池一
温泉水滑洗二凝脂一
侍児扶起嬌無レ力
始是新承二恩沢一時

漢皇色を重んじて傾国を思ふ
御寓多年求むれども得ず
楊家に女有り初めて長成れり
養はれて深窓に在れば人未だ識らず
天の麗質を生せれば自らに棄て難し
一朝に選ばれて君王の側に在り
眸を廻らして一たび笑むときに百の媚生る
六宮の粉黛は顔色無し
春寒くして浴を華清の池に賜はる
温泉水滑らかにして凝脂を洗ふ
侍児扶け起せども嬌びて力無し
始めて是新に恩沢を承けし時なり

〔深窓―深閨〕

雲鬢花顔金歩揺
芙蓉帳暖度二春宵一
春宵苦短日高起
従レ此君王不二早朝一
承レ歓侍レ寝無二閑暇一
春従二春遊一夜専レ夜
漢宮佳麗三千人
三千寵愛在二一身一
金屋粧成嬌侍レ夜
玉楼宴罷酔和レ春
姉妹弟兄皆列土
可レ憐光彩生二門戸一
遂令二天下父母心一
不レ重レ生レ男重レ生レ女
驪宮高処入二青雲一
仙楽風飄処処聞
緩歌慢舞凝二糸竹一
尽日君王看不レ足

雲の鬢花の顔金の歩揺
芙蓉の帳暖かにして春の宵を度る
春の宵苦短くして日高けて起く
此より君王早朝したまはず
歓を承け寝に侍して閑かなる暇無し
春は春の遊びに従ひ夜は夜を専らにす
漢宮の佳麗三千人
三千の寵愛一身に在り
金屋に粧ひ成つて嬌びて夜を侍り
玉楼に宴んで酔ひて春に和す
姉妹弟兄皆列土せり
憐むべし光彩の門戸に生ることを
遂に天下の父母の心をして
男を生むことを重んぜず女を生むことを重んぜしむ
驪宮の高き処青雲に入れり
仙楽風に飄つて処処に聞こゆ
緩く歌ひ慢く舞ひて糸竹を凝らす
尽日に君王看れども足らず

〔侍寝―侍宴〕

〔漢宮―後宮〕

漁陽鞞鼓動レ地来
驚破霓裳羽衣曲
九重城闕煙塵生
千乗万騎西南行
翠花揺揺行復止
西出二都門一百余里
六軍不レ発無二奈何一
宛転蛾眉馬前死
花鈿委レ地無二人収一
翠翹金雀玉搔頭
君王掩レ眼救不レ得
廻二看涙血相和流一
黄埃散漫風蕭索
雲棧縈廻登二剣閣一
蛾眉山下少二行人一
旌旗無レ光日色薄
蜀江水碧蜀山青
聖主朝朝暮暮情

漁陽の鞞鼓地を動いで来る
驚破霓裳羽衣の曲
九重の城闕に煙塵生る
千乗万騎西南に行く
翠花揺揺として行きて復た止まる
西のかた都門を出づること百余里
六軍発らず奈何せむといふこと無し
宛転たる蛾眉馬の前に死ぬ
花鈿地に委せて人の収むる無し
翠翹金雀玉の搔頭
君王眼を掩ひて救ふこと得ず
涙と血との相和して流るるを廻らし看る
黄埃散漫として風蕭索たり
雲の棧縈廻して剣閣に登る
蛾眉の山の下に行人少なし
旌旗光無くして日の色薄し
蜀江水碧にして蜀の山青し
聖主朝朝暮暮の情

〔掩眼―掩面〕
〔涙血―血涙〕
〔縈廻―縈紆〕
〔行人―人行〕

行宮見レ月傷レ心色
夜雨聞レ猿腸断声
天旋日転廻三龍馭一
到レ此躊躇不レ能レ去
馬嵬坡下泥土中
不レ見二玉顔一空死処
君臣相顧尽霑レ衣
東望二都門一信レ馬帰
帰来池苑皆依レ旧
太液芙蓉未央柳
対レ此如何不二涙垂一
芙蓉如レ面柳如レ眉
春風桃李花開日
秋雨梧桐葉落時
西宮南内多二秋草一
落葉満レ階紅不レ掃
梨園弟子白髪新
椒房阿監青蛾老

行宮に月を見れば心を傷ましむる色
夜の雨に猿を聞けば腸断ゆる声
天旋り日転つて龍馭を廻らす
此に到りて躊躇して去ること能はず
馬嵬の坡の下泥土の中に
玉顔見えず空しく死にたる処のみあり
君臣相顧みて尽くに衣を霑す
東のかた都門を望みて馬に信せて帰る
帰り来れれば池苑皆旧に依れり
太液の芙蓉未央の柳
此に対ひて如何にしてか涙垂れざらむ
芙蓉は面の如く柳は眉の如し
春の風に桃李の花の開く日
秋の雨に梧桐の葉の落つる時
西宮の南内に秋の草多し
落葉階に満ちて紅掃はず
梨園の弟子白髪新なり
椒房の阿監青蛾老いたり

〔聞猿―聞鈴〕
〔芙蓉如面柳如眉〕
〔対此如何不涙垂〕
〔花開日―花開夜〕
〔南内―南苑〕
〔落葉―宮葉〕

夕殿螢飛思悄然
秋燈挑尽未レ能レ眠
遅遅鐘漏初長夜
耿耿星河欲レ曙天
鴛鴦瓦冷霜花重
旧枕故衾誰与共
悠悠生死別経レ年
魂魄不二曾来入レ夢
臨邛方士鴻都客
能以二精誠一致二魂魄一
為レ感二君王展転思一
遂教二方士殷勤覓一
排レ空馭レ気奔如レ電
昇レ天入レ地求之遍
上窮二碧落一下黄泉
両処茫茫皆不レ見
忽聞海上有二仙山一
山在二虚無縹眇間一

夕殿に螢飛んで思ひ悄然たり
秋の燈挑げ尽して未だ眠ること能はず
遅遅たる鐘漏の初めて長き夜
耿耿たる星河の曙けむとする天
鴛鴦瓦冷やかにして霜花重し
旧き枕故き衾誰と共にかせむ
悠悠たる生死別れて年を経
魂魄曾て来つて夢にだも入らず
臨邛の方士鴻都の客
能く精誠を以つて魂魄を致す
君王の展転の思ひに感ずるがために
遂に方士をして殷勤に覓めしむ
空を排き気に馭つて奔ること電の如し
天に昇り地に入りて求むること遍し
上は碧落を窮め下は黄泉までにす
両の処茫茫として皆見えず
忽ちに聞く海上に仙山有りと
山は虚無の縹眇の間に在り

〔孤燈挑尽未成眠〕
〔鐘漏―鐘鼓〕
〔翡翠衾寒誰与共〕
〔方士―道士〕

〔楼殿―楼閣〕
〔其上―其中〕
〔名玉妃―字玉真〕

楼殿玲瓏五雲起
其上綽約多仙子
中有一人名玉妃
雪膚花貌参差是
金闕西廂叩玉扃
転教小玉報双成
聞道漢家天子使
九花帳裏夢中驚
攬衣推枕起徘徊
珠箔銀屏邐迤開
雲鬢半偏新睡覚
花冠不整下堂来
風吹仙袂飄颻挙
猶似霓裳羽衣舞
玉容寂寞涙瀾干
梨花一枝春帯雨
含情凝睇謝君王
一別音容両眇茫

楼殿玲瓏として五雲起れり
其の上綽約として仙子多し
中に一人の名は玉妃といふ有り
雪の膚、花の貌参差として是なり
金闕の西廂に玉の扃を叩く
転小玉をして双成に報ぜしむ
聞道漢家の天子の使なりと
九花の帳の裏夢の中に驚く
衣を攬り枕を推して起ちて徘徊す
珠箔銀屏邐迤として開きたり
雲鬢半ば偏きて新なる睡覚めたり
花の冠整はずして堂より下りて来る
風仙袂を吹きて飄颻として挙がる
猶霓裳羽衣の舞に似る
玉の容寂寞として涙瀾干たり
梨花一枝春雨を帯ぶ
情を含み睇を凝らし君王に謝せしむらく
一たび別れて音容両ながら眇茫たり

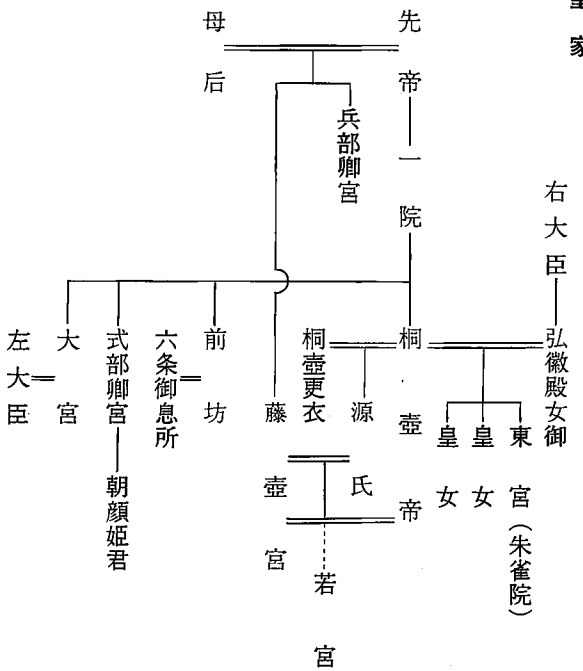
〔雲鬢半偏―雲鬢半垂〕

昭陽殿裏恩愛歇
蓬莱宮中日月長
廻レ頭下二視人寰処一
不レ見二長安一見二塵霧一
空持二旧物一表二深情一
鈿合金釵寄将去
釵留二一鈿一合一扇
釵擘二黄金一合分レ鈿
但教三心似二金鈿堅一
天上人間会相見
臨レ別殷勤重寄レ詞
詞中有レ誓両心知
七月七日長生殿
夜半無レ人私語時
在レ天願作二比翼鳥一
在レ地願為二連理枝一
天長地久有二時尽一
此恨綿綿無二絶期一

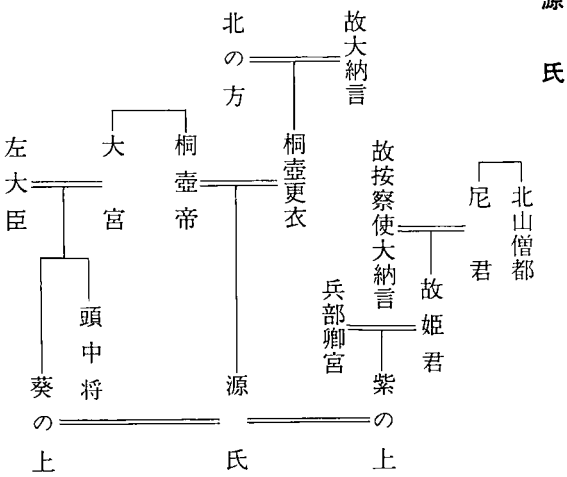
昭陽殿の裏に恩愛歇きぬ
蓬莱宮の中に日月長し
頭を廻らして人寰の処を下し視れば
長安を見ずして塵霧をのみ見る
空しく旧物を持りて深き情を表はす
鈿合金釵寄せ将ちて去ぬ
釵は一鈿を留め合は一扇
釵は黄金を擘き合は鈿を分てり
但心をしては金鈿の堅きに似しめ
天の上人間に会相見る
別れに臨んで殷勤に重ねて詞を寄す
詞の中に誓有り両心のみ知れり
七月七日長生殿に
夜半に人無くして私語せし時
天に在らば願はくは比翼の鳥作らむ
地に在らば願はくは連理の枝為らむ
天長く地久しき時に尽くること有れども
此の恨み綿綿として絶ゆる期無けむ

〔恩愛歇―恩愛絶〕
〔視人寰―望人寰〕
〔空持―唯持〕
〔一鈿―一股〕
〔教心―令心〕
〔絶期―尽期〕

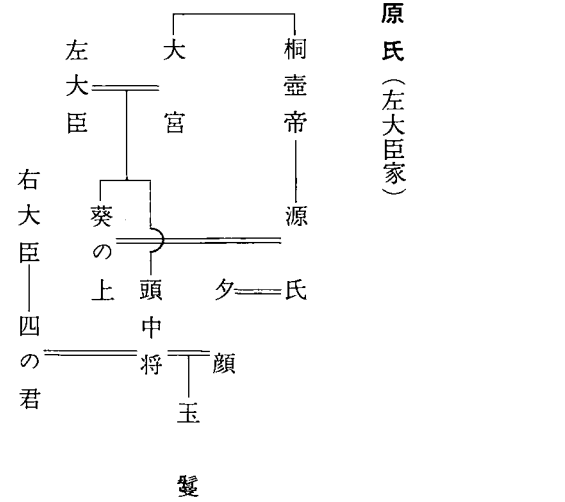
天皇家

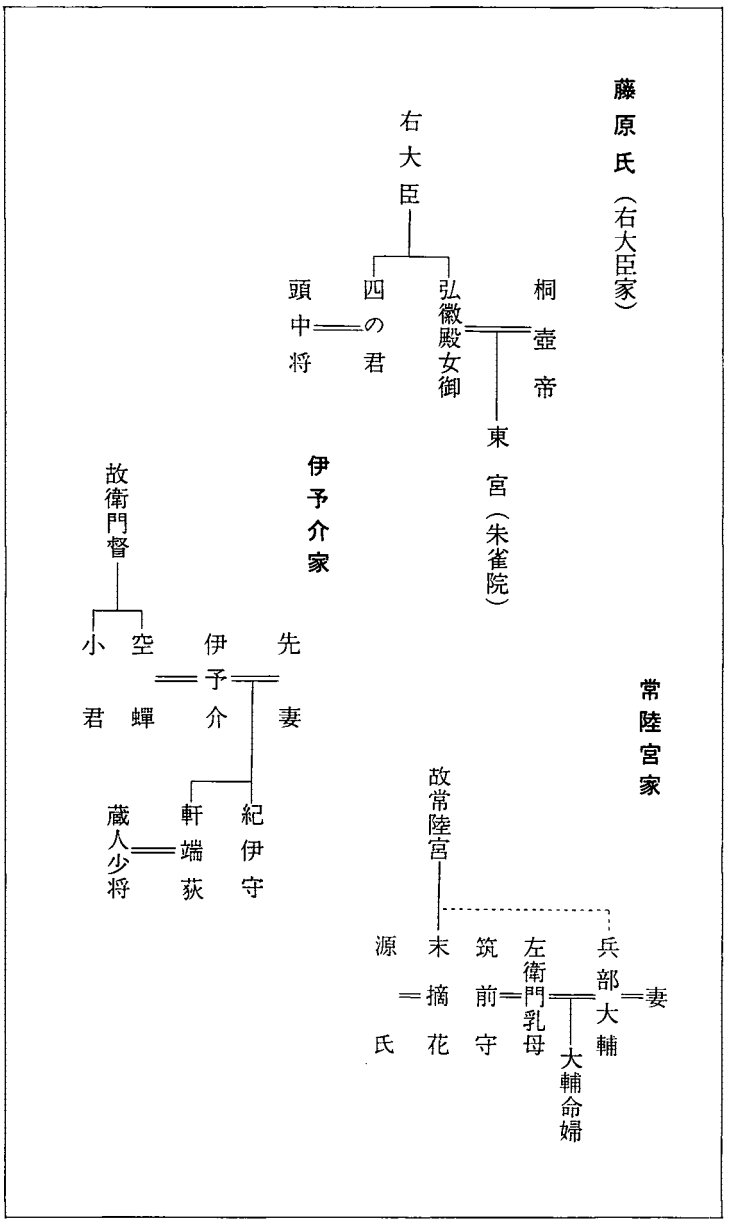

先帝
母后
一院
兵部卿宮
右大臣
弘徽殿女御
東宮（朱雀院）
皇女
皇女
桐壺
桐壺更衣
源氏
帝
若宮
藤壺宮
前坊
六条御息所
式部卿宮
朝顔姫君
大宮
左大臣

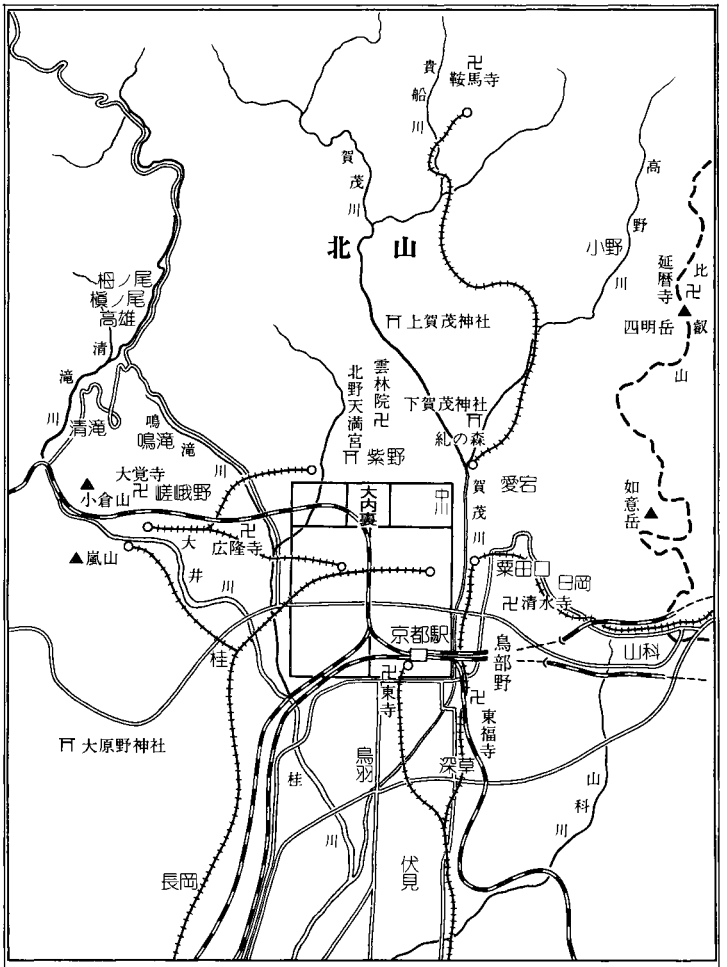
源氏


故大納言
北の方
桐壺更衣
桐壺帝
大宮
左大臣
頭中将
葵の上
源氏
紫の上
兵部卿宮
故按察使大納言
故姫君
北山僧都
尼君

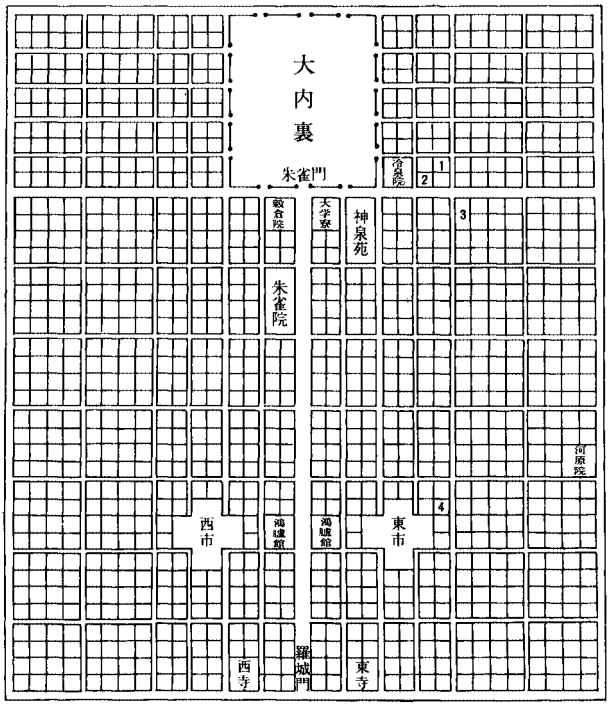
藤原氏（左大臣家）


桐壺帝
大宮
左大臣
源氏
夕顔
葵の上
頭中将
右大臣
四の君
玉鬘


藤原氏（右大臣家）
桐壺帝
弘徽殿女御
東宮（朱雀院）
右大臣
四の君
頭中将
伊予介家
先妻
伊予介
空蟬
小君
故衛門督
紀伊守
軒端荻
蔵人少将
常陸宮家
兵部大輔
妻
大輔命婦
左衛門乳母
筑前守
末摘花
源氏
故常陸宮


貴船川
鞍馬寺
賀茂川
北山
高野川
小野
延暦寺
比叡山
四明岳
上賀茂神社
梶ノ尾
槇ノ尾
高雄
清滝川
清滝
鳴滝
鳴滝川
北野天満宮
雲林院
紫野
下賀茂神社
紀の森
愛宕
如意岳
大覚寺
嵯峨野
小倉山
大井川
広隆寺
嵐山
大内裏
中川
賀茂川
粟田口
日岡
清水寺
京都駅
桂
東寺
東福寺
鳥部野
山科
大原野神社
鳥羽
深草
桂川
伏見
長岡
山科川

京都近郊図

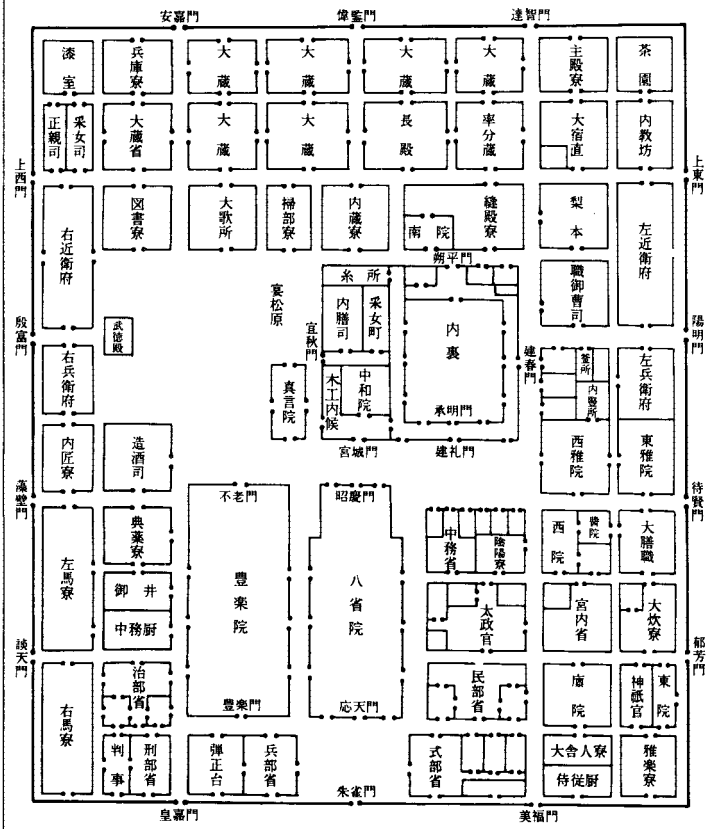


一条大路
正親町小路
土御門大路
櫛司小路
近衛御門大路
勘解由小路
中御門大路
春日小路
大炊御門大路
冷泉小路
二条大路
押小路
三条坊門小路
姉小路
三条大路
六角小路
四条坊門小路
錦小路
四条大路
綾小路
五条坊門小路
高辻小路
五条大路
樋口小路
六条坊門小路
楊梅小路
六条大路
左女牛小路
七条坊門小路
北小路
七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路

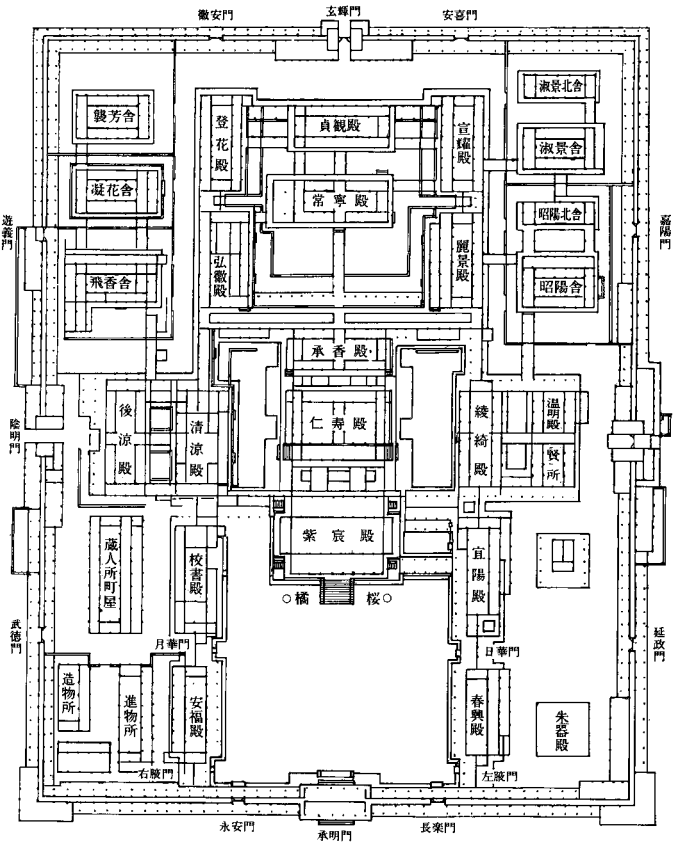
東京極大路
富小路
万里小路
高倉小路
東洞院大路
烏丸小路
室町小路
町尻小路
西洞院大路
油小路
堀川小路
南市門小路
大宮大路
櫛笥小路
壬生大路
坊城小路
朱雀大路
壬生大路
坊城小路
櫛笥小路
大宮大路
堀川小路
猪熊小路
西洞院大路
町尻小路
室町小路
烏丸小路
東洞院大路
高倉小路
万里小路
富小路
西京極大路

1 陽成院　2 二条院　3 東三条院　4 辛子院

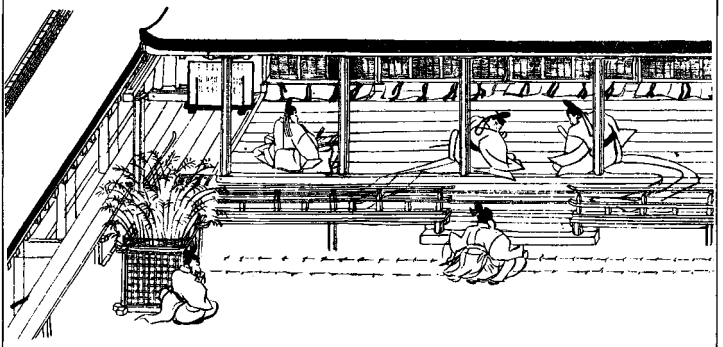
京城図


安嘉門
偉鑒門
達智門
漆室
兵庫寮
大蔵
大蔵
大蔵
大蔵
主殿寮
茶園
正親司
采女司
大蔵省
大蔵
大蔵
長殿
率分蔵
大宿直
内教坊
上西門
上東門
右近衛府
図書寮
大歌所
掃部寮
内蔵寮
南院
縫殿寮
梨本
左近衛府
朔平門
糸所
内膳司
采女町
内裏
職御曹司
宴松原
宜秋門
段富門
陽明門
武徳殿
右兵衛府
真言院
木工寮
中和院
承明門
建春門
釜所
内豎所
左兵衛府
内匠寮
造酒司
宮城門
建礼門
西雅院
東雅院
藻壁門
待賢門
不老門
昭慶門
中務省
陰陽寮
西院
黄院
大膳職
左馬寮
典薬寮
豊楽院
八省院
御井
中務厨
太政官
宮内省
大炊寮
談天門
郁芳門
右馬寮
治部省
豊楽門
応天門
民部省
廂院
神祇官
東院
判事
刑部省
弾正台
兵部省
式部省
大舎人寮
侍従厨
雅楽寮
朱雀門
皇嘉門
美福門

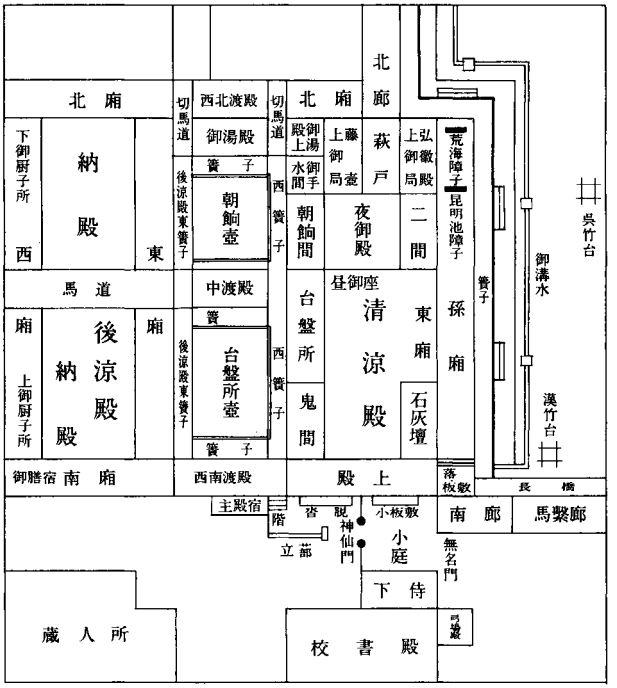
大内裏図


徽安門
玄輝門
安喜門
淑景北舎
淑景舎
昭陽北舎
昭陽舎
宣耀殿
麗景殿
貞観殿
常寧殿
登花殿
弘徽殿
承香殿
仁寿殿
紫宸殿
清涼殿
後涼殿
綾綺殿
温明殿
殿上所
宜陽殿
校書殿
蔵人所町屋
造物所
進物所
安福殿
春興殿
朱雀殿
○橘
桜○
月華門
日華門
右掖門
左掖門
永安門
承明門
長楽門
遊義門
嘉陽門
陰明門
宣陽門
武徳門
延政門

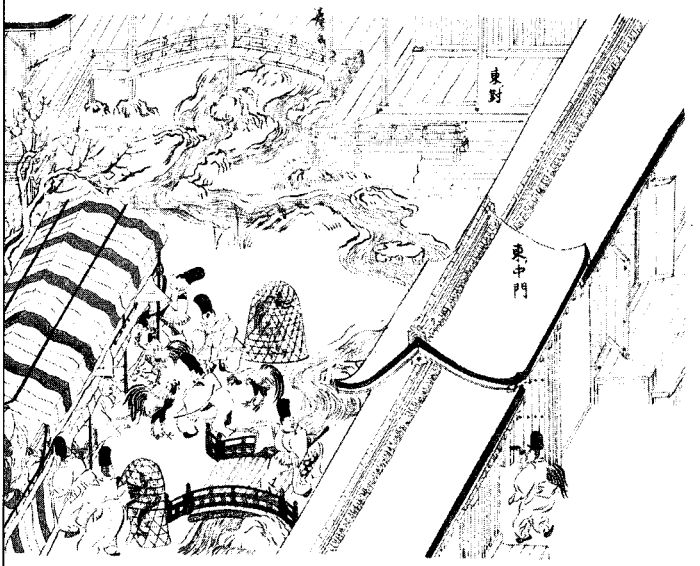
内裏図



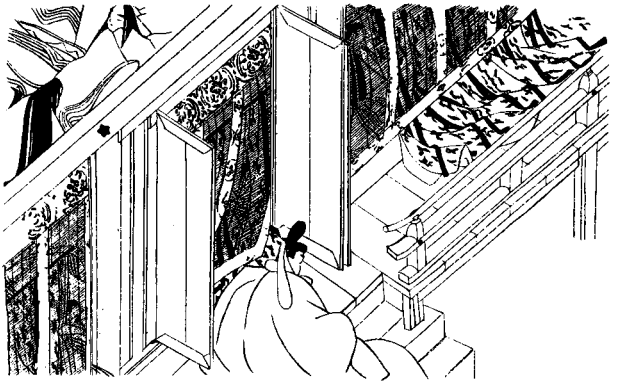
清涼殿南面（信貴山縁起）



清涼殿

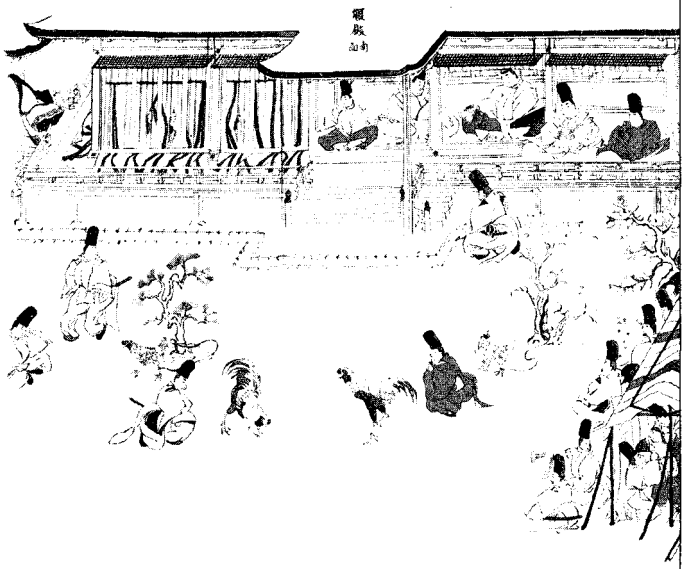


左上の図（341頁）が寝殿、間口五間。中央に階隠がある。格子を上げ渡し、西の二間は簾をおろして女房が見物している。寝殿の東側に妻戸が開き、透渡殿で東の対に連なる。透渡殿の下を遣水が南庭に流れ出ている。図の右、南に延びる建物が東の中門廊と東の中門。

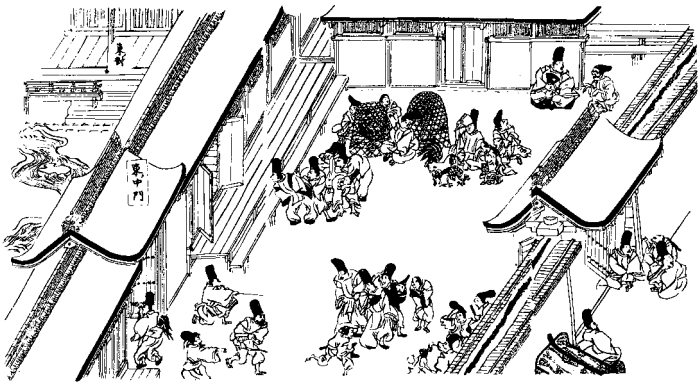


妻　戸　口（源氏物語絵巻　竹河一）

妻戸が開き、簀子から庭に降りる階段がある。簀子には高欄を廻らす。廂の間と簀子との境に簾を垂れ、簾の内側に几帳を立て、その帷を簾の外に押し出してある。

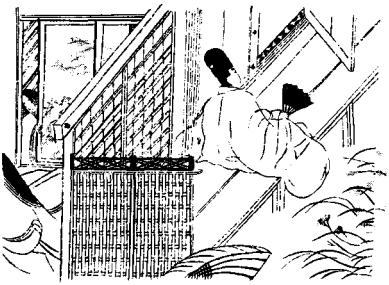


寝殿造り南面（年中行事絵巻十六、堂上鶏合）

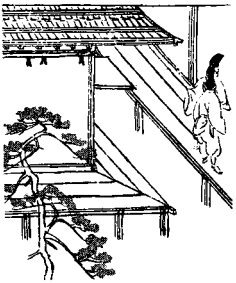


東の門、東の中門（年中行事絵巻）

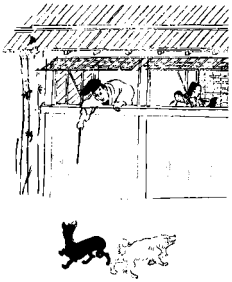
上図右（340頁）に続く部分。東の中門廊に妻戸が開き、簀子がついている。右端は築地塀を廻らし、東の正門が見える。



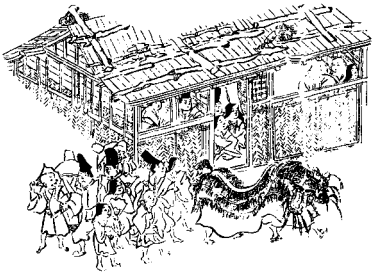
障子・遣戸・透垣
（源氏物語絵巻　東屋二）



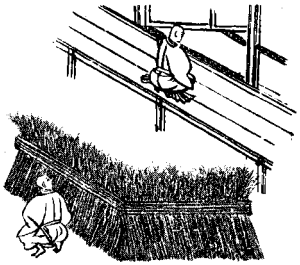
打　橋
（春日権現験記絵）



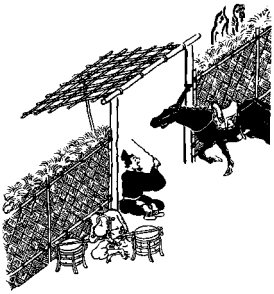
板屋の半蔀
（信貴山縁起）



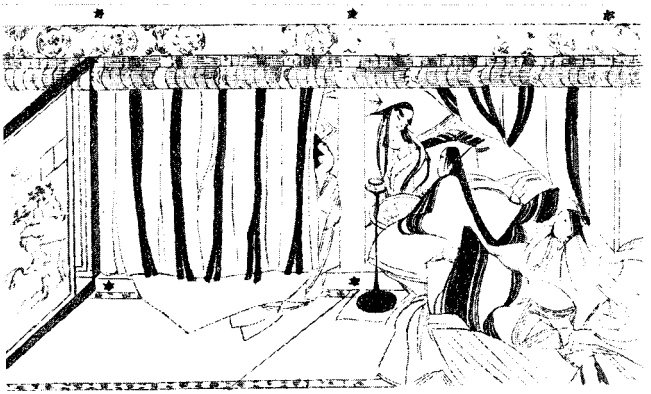
板屋の檜垣
（年中行事絵巻）



柴　垣
（春日権現験記絵）

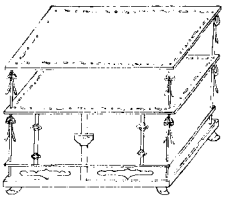


蔀ふうの門
（春日権現験記絵）



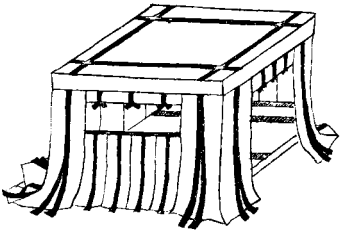
寝殿造り室内(源氏物語絵巻　横笛)

正面が母屋。廂の間より長押で一段高くなっている。廂との境の簾は巻き上げ、壁代を垂れる。中央に燈台。左端に障子。廂の間に高麗縁の畳を敷く。



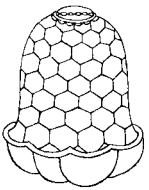
二階厨子

(類聚雑要抄)



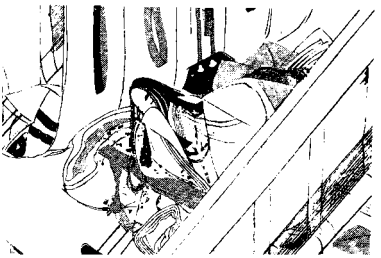
帳　台

(春日権現験記絵)



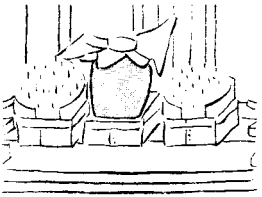
伏　籠

(類聚雑要抄)

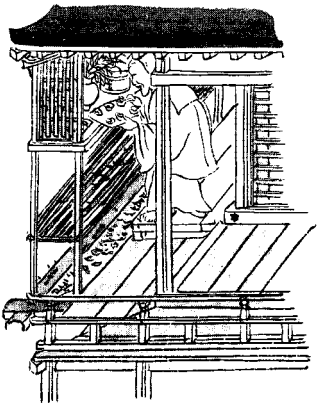


几帳・脇息

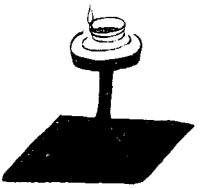
(源氏物語絵巻　御法)



折櫃物（年中行事絵巻）



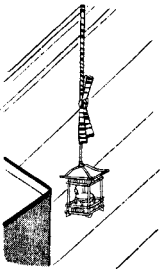
閼伽棚（信貴山縁起）



高坏燈台（病草子）

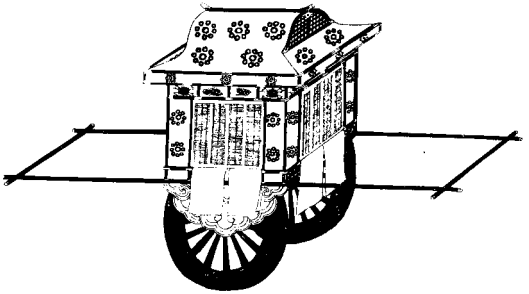
篝　火（紫式部日記絵巻）

松　明（年中行事絵巻）

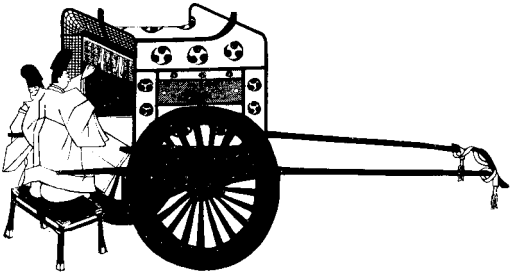


燈　籠（石山寺縁起絵）

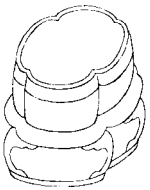
紙燭を持つ僧（法然上人絵伝）

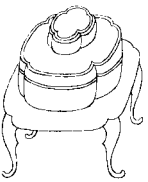


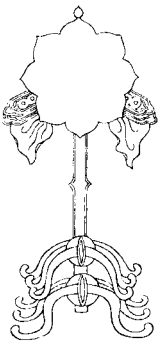
輦　車(輿車図考)



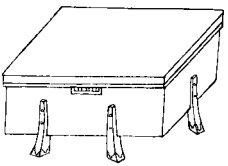
網代車　搨から乗る図(輿車図考)







搔上筥　(類聚雑要抄)　唐櫛匣



香唐櫃(類聚雑要抄)

鏡　台(類聚雑要抄)

小袿姿

直衣姿

狩衣姿

女房の正装(裳、唐衣姿)

新潮日本古典集成（第一回）

源氏物語 一

昭和五十一年六月五日　印刷
昭和五十一年六月十日　発行

校注者　石田穣二　清水好子

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

定価一五〇〇円

組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yoshiko Shimizu, Printed in Japan, 1976.

新潮日本古典集成

源氏物語

二

石田穣二　清水好子　校注

新潮社版

目次

凡例……三
紅葉賀……九
花宴……四七
葵……六三
賢木……一三五
花散里……一九一
須磨……一九九
明石……二五七

付　録

催馬楽ほか……三三
琵琶引……三六
系図……三三
図録……三六

凡　例

一、本巻には、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里、須磨、明石の七巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、花宴は明融本、花散里は青表紙原本（定家自筆、前田家尊経閣蔵）を底本とし、紅葉賀以下の五巻は大島本を底本とする。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文脈の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、頭注に載せ得なかった催馬楽等の詞章、「琵琶引」、系図、図録を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

源氏物語

二

紅葉賀

もみぢの が

朱雀院への行幸は十月の十日過ぎのことであった。その前に試楽が宮中で行われ、源氏と頭の中将は青海波を舞って人々の感嘆の的となったが、行幸当日の出来ばえは、朱雀院の華麗な紅葉の景観に映えて、また一段とすばらしかった。この行幸は、延喜十六年三月七日、宇多法皇五十の賀のための朱雀院行幸を念頭に置いて書かれたものと思われる。宇多上皇の名は、桐壺帝の一代前の帝として桐壺の巻に見えるが、上皇は朱雀院を御所とし、『古今集』では朱雀院と呼ばれている。

二条の院に迎え取った若君は、いよいよ源氏になつき、相変らず雛遊びに熱中している。亡き北山の尼君の喪も年末には明けて、やがて新年を迎える。

葵の上は源氏より四歳ほど年上、左大臣の内親王腹のただ一人の姫君という気位の高さから、源氏の浮気沙汰を不快に思い、夫婦仲はしっくりしない。

二月の十日過ぎに、藤壺は、皇子を出産。帝のお喜びはこの上ないが、源氏に瓜二つの皇子のお顔を拝して、源氏と藤壺の悩みと恐れは深まるばかりである。

夏の頃、宮中に仕える好色な老女源典侍をめぐって、頭の中将と源氏のコミックな鞘当ての一幕があった。中将は葵の上と同腹で、ことごとに源氏に対抗意識をもやしている。

七月に藤壺立后、源氏は参議に昇進。帝は、譲位の暁には藤壺腹の皇子を東宮にとのお心づもりである。

巻名「紅葉賀」は本文には見えないが、次の花宴の巻で作者自らこの朱雀院の行幸を「御紅葉の賀」と呼んでいる。

一　朱雀院は、上皇の御所。三条の南、朱雀大路の西に八町を占める（図録二参照）。この院への桐壺の帝の行幸は、すでに、若紫の巻（一巻二二一頁）、末摘花の巻（一巻二六三頁）に予告されている。大規模な特別の催しであることを強調する筆致から見て、単なる遊覧の行幸でなく、朱雀院におられる上皇（宇多上皇を思わせる）の算賀のため

朱雀院の行幸の試楽に源氏、青海波を舞う

の行幸と見るべきであろう。算賀は、長寿を祝う儀。四十の賀以降、十年ごとに祝うのが普通である。

二　後宮のお妃方。

三　当日行われる舞楽の予行演習。

四　清涼殿の東庭。（一巻図録五参照）

五　舞楽の曲名。唐楽。二人舞。鳥甲をかぶり、袍を着け、波の寄せ返すさまを袖の振りで表す優美ではなやかな舞である。（図録六参照）

六　左大臣の子息、頭の中将。葵の上の兄。

七　桜の花のかたわらの、もてはやす人もない深山の木。目立たぬものの喩え。

八　舞いながら詩句を朗唱すること。この間、奏楽は止む。青海波の詠は、小野篁の作と伝える。「桂殿迎二初歳一、桐楼媚二早年一。剪レ花梅樹下、蝶燕画梁辺」これを四度に分けて字音のまま吟ずる。

九　阿弥陀如来の（迦陵頻伽のような）説法の妙音であろうかと。「迦陵頻伽」は、極楽にいる美声の鳥で、如来の説法の妙音にたとえられる（図録一二参照）。

朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。世の常ならず、おもし（十日過ぎ／並々でなく／すばらしい）ろかるべきたびのことなりければ、御方々、物見たまはぬことをくちをしがりたまふ。上も、帝も（ご見物になれないことを／もの足りなく）と期待されるこのたびのお催しであったので

試楽を御前にてせさせたまふ。源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭の中将、容貌、用意、人にはこぐれているが〔源氏と〕（一方の舞手／気のくばり／人よりはす）となるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入りかたの日かげ、さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや、仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。おもしろくあはれなるに、帝、涙をのごひたまひ、上達部、親王たちも、みな泣きたまひぬ。詠果てて、袖うちなほしたまへるに、待ち（（一）／（二）／（三）／（四）／（五）／（六）／（日の光）／（高まって）／（感興もたけなわの時に）／（足拍子や表情も）／〔源氏のそれは〕／（袖をさっともとに直されると）／〔それを〕待ち）

一「光る」は、美しさの最高の形容。「光君」（一巻桐壺三六頁、四一頁）、「光源氏」（一巻帚木四五頁、若紫一九二頁）という渾名は前に見えている。

二 東宮の母女御。弘徽殿の女御。

三 神などが空から愛でて神隠しにでもしそうな美しさだこと。醍醐天皇の大井川行幸の時、雅明親王が七歳で見事な舞を舞い、万人感涙を催したが、「あまり御容貌の光るやうにしたまひしかば、山の神愛でて取りたてまつりたまひてしぞかし」（『大鏡』昔物語）という話がある。『河海抄』に引く。

四 だいそれた気持がなかったならば。藤壺に対する源氏の思慕の情をさす。

五 そのまま（御殿の藤壺に下がらずに）清涼殿の夜の御殿で帝の御寝に侍した。

六 青海波に万事圧倒されてしまいましたね。

七 良家の子弟は（やはり）格別です。総合的な、貴族らしい教養、品格を重んじて、専門家の技芸を軽く見るのは当時の貴族一般の考え方である。

八 当日の（朱雀院での）紅葉の木蔭での舞はおもしろくなかろうかと思うけれども。

九（源氏たちに）特に念入りにと命じたのです。「用意す」は、意を用いる。「させ」は、使役の助動詞。

構えて再開された奏楽のはなやかさに　一段と映えて
とりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光る
と見えたまふ。春宮の女御、〔源氏が〕こんなにすばらしいにつけても　おもしろから
かくめでたきにつけても、ただならず
お思いで　（女御）
おぼして、「神など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」と
　　おいや　恐いこと
のたまふを、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり。藤壺は、お
　　いやなお言葉と聞きとがめた　一層すばらしく見えるであろうとお思いになると
ほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えましとおぼすに、
夢のここちなむしたまひける。

藤壺
宮は、やがて御宿直なりけり。（帝）「今日の試楽は、青海波に事みな
　　　

翌朝、源氏、藤壺と和歌を贈答

一〇（昨日の舞は）どうご覧になったことでしょうか。以下、藤壺にあてての手紙。

一一 恋の悩みのため立派に舞うこともかなわぬこの私が、思いのたけをこめて袖を振って舞った気持をお分りいただけたでしょうか。「立ち舞ふ」は、世間で立派に振舞う意を掛ける。「袖うち振りし」は、袖を振る青海波の舞の手に、愛情を示す所作として袖を振る意を掛ける。

一二 恐れ多いことですが。手紙の結語。

一三（昨日の）目を奪うほどだった源氏のご様子、美貌に、このままお見過しになれなかったのであろうか。以上、挿入句。

一四 唐の人が袖を振って舞った舞の手振りは遠い昔のことですが、昨日のあなたの舞いぶりにはしみじみと感じ入りました。青海波はもと中国から伝えられたものであるが、仁明天皇の勅命によって、原作の平調を盤渉調に改め、舞を良峯安世が作り、楽は和邇部大田麿等が作ったと伝えられる。

一五（その程度の）一通りには（理解いたしました）。

一六 いかにもお后にふさわしい格調のあるお歌を、もう今からお詠みになる、と、ひとり笑みされて。藤壺が后に立つのは翌年のことである（四四頁）。

一七 常に手離さず読誦する経典。

朱雀院行幸の盛儀

翌朝 つとめて、中将の君、

（源氏）一〇 いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱りごこちながらこそ。

何とも言えないつらい気持のまま舞ったのです

一一 もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の
袖うち振りし心知りきや

一二 あなかしこ。

とあるの（のお返事）

とある御返り、一三 目もあやなりし御さま、容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、

（藤壺）一四 唐人の袖振ることは遠けれど
立居につけてあはれとは見き

一五 おほかたには。

（源氏は）めったにないお返事にうれしく　こうした舞楽の来歴にまでおくわしくいらして

とあるを、限りなうめづらしう、かやうのかたさへたどたどしからず、ひとのみかどまで思ほしやれる御后言葉の、かねても、と、ほほゑまれて、持経のやうにひき広げて見ゐたまへり。

異国のことにまで思いをめぐらされた

一六 一七

行幸には、親王たちなど、世に残る人なくつかうまつりたまへり。

お供なさった

一　楽人の乗る龍頭鷁首の船。唐楽を奏する船の船首に龍、高麗楽の船の船首に鷁（想像上の水鳥、よく風波に堪えて飛ぶという）の像をつける。（図録六参照）

二　唐楽（中国、印度、西域から伝来した舞曲。左の楽ともいう）と高麗楽（朝鮮、中国東北部から伝来した舞曲。右の楽）。

三　打楽器。唐楽には、羯鼓、太鼓、鉦鼓、高麗楽には、三の鼓、太鼓、鉦鼓を用いる。（図録八参照）

四　先日（試楽の日）の。

五　祈禱のために寺に誦経を依頼すること。

六　青海波の時、舞人とともに庭上に出て奏楽する楽人。庭上に輪を作りその中から舞人が舞い出るのでこの名がある。楽器は、琵琶、笙、篳篥、横笛各一人、ほかは反尾で拍子を打ち、楽屋の楽人と交互に演奏する。人数は四十人。ただしこのうち二人（後世は四人）は輪台という序の舞を舞い、二人は青海波（破の舞）を舞う。源氏たちは破の舞を舞ったのである。（図録六参照）

七　殿上の間に上ること　源氏、青海波に秘術を尽すを許されぬ者。

八　参議の中国風の呼び方。太政官で大納言、中納言に次ぐ地位。次の「左衛門の督、右衛門の督」（左右衛門府の長官）は、その兼官。それぞれが左の楽（唐楽）右の楽（高麗楽）の総監督に任じたというのは、異例の大規模な催しであることを物語る。

九　青海波の舞人は鳥甲をかぶるが、それに紅葉の枝

春宮もおはします。例の、楽の船ども〔池を〕漕ぎめぐりて、唐土高麗と尽くしたる舞ども、種多かり。楽の声、鼓の音、世をひびかす。一日の源氏の御夕影、ゆゆしうおぼされて、御誦経など所々にせさせたまふを、聞く人もことわりとあはれがりきこゆるに、〔帝は〕心配にお思いになって　ごもっともなことと　そのお心をお察し申し上げるが　春宮の女御は、あながちなりと憎みきこえたまふ。垣代など、殿上人、地下も、心異なりと世人に思はれたる有職の限りととのへさせたまへり。宰相二人、左衛門の督、右衛門の督、左右の楽のこと行ふ。〔人々は〕舞の師どもなど、世になべてならぬを取りつつ、おのおの籠りゐてなむ習ひける。

大げさななさりようだと　達人ばかりをお揃えになった　種類が多い　管絃　方々の寺に　優秀　世間にすぐれた者たちをそれぞれ迎えて　家に引き籠って

木高き紅葉のかげに、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたるものの音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散り交ふ木の葉のなかより、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のにほひにけおされたるここちすれば、御前なる菊を折りて、左

言いようもなく見事に　響き合った　色とりどりに　何とも恐ろしいほどの美しさだ　吹き乱れ　〔源氏の〕顔の照り映える美しさに圧倒された感じなので

を挿して飾りとした。
一〇 左近衛府の長官。従三位相当。
一一 空模様までもが、今日の盛儀に感涙をもよおしているかのようであるのに。
一二 菊が色とりどりに色変りし。当時は、菊の花が霜で色変りした風情を賞美した。
一三 舞が終って退場する前に、改めて正面を向いて短くおもしろく舞うこと。
一四 承香殿の女御のお生みになった第四皇子。「承香殿」は、後宮の殿舎の一つ（図録五参照）。
一五 唐楽。盤渉調。嵯峨天皇の弘仁年間、南池院に行幸の時、勅によって常世乙魚等が新作したとも、また元来唐から伝来したものを改作したとも伝える。（図録七参照）
一六 正三位になられた。中将は従四位下相当の官であるが、源氏の今までの位は明らかでない。四位には、正従があり、それぞれ上下に分れて四階級ある。以下、この算賀の儀に功労のあった人々の位階が進められる。
一七（従四位上から）正四位下に昇進なさった。
一八 前世でどんな善根を積まれたのか知りたいほどである。
一九 左大臣家からは。
二〇 北山の少女。後の紫の上。（一巻若紫二三二頁以下参照）

源氏と葵の上の不仲　二条の院の若草の少女、源氏を慕う

大将さしかへたまふ。日暮れかかるほどに、（ほんの少しばかり時雨して）けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、（〔源氏が〕そうした美しい姿に）さるいみじき姿に、菊の色色うつろひ、（二つとない秘術を尽した）えならぬをかざして、（すばらしいのを冠に挿して）今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、（ぞくっとするほどで）そぞろ寒く、この世のこととともおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと、（何も分るはずの）岩がくれ、（岩かげ）山の木の葉にうづもれたるさへ、（隠れて見物している連中まで）すこしものの心知るは涙おとしけり。（ものの情趣の分る者は）承香殿の御腹の四の御子、まだ童にて、（築山）秋風楽舞ひたまへるなむ、（これに次いでの）さしつぎの見物なりける。これらにおもしろさの尽きにければ、異事に目も移らず、かへりてはことざましにやありけむ。（って興ざましであったであろう）その夜、源氏の中将、正三位したまふ。（ほかの舞に）頭の中将、正下の加階したまふ。（しかるべき人は）上達部は、皆さるべき限りよろこびしたまふも、（源氏の昇進につれて恩恵を蒙ったのであるから）この君にひかれたまへるなれば、（全部昇進の喜びに浴されたのも）人の目をもおどろかし、（〔昇進で〕）心をもよろこばせたまふ、昔の世ゆかしげなり。

藤壺

宮は、（〔源氏は〕）そのころまかでたまひぬれば、（里邸に退出なさったので）例の、隙もやとうかがひありきたまふをことにて、（お会いする機会がないかと様子を窺いまわるのに夢中で）大殿には騒がれたまふ。（うるさく言われなさる）いとど、かの若草（それだけでなく）

一（葵の上は）こちらの実際の内情はご存じなくて、そんなふうにお思いになるのも無理はないが。以下、この頁九行目の「おぼしなほされなむ」まで、源氏の心。

二（こちらとして）心外なふうにばかりお取りになるのが不愉快なので。「思はずに」は、心外、不本意の意。「とりない」は、「とりなし」のイ音便。

三ついよろしくない浮気沙汰も引き起すといったことになるのだ。

四不十分で、どこが不満だと思われるような欠点も別にない。

五安心のできる、軽率でないご性質の方だから、そのうち自然にと、期待できる点では、やはり格別のお方だった。

六人離れた西の対。（若紫二三五頁参照）

たづね取りたまひてしを、二条の院には人迎へたまふなりと人の聞こえければ、いと心づきなしとおぼいたり。一うちうちのありさまは知りたまはず、さもおぼすむはことわりなれど、心うつくしく、例の人のやうに怨みのたまはば、われもうらなくうち語りてなぐさめきこえてむものを、二思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、三もあるまじきすさびごとも出で来るぞかし、人の御ありさまの、四かたほに、そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし、人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにやむごとなく思ひきこゆる心をも知りたまはぬほどこそあらめ、つひにはおぼしなほされなむ、と、五おだしく軽々しからぬ御心のほども、おのづからと頼まるるかたは異なりけり。

をさなき人は、見ついたまふままに、いとよき心ざま容貌にて、何心もなくむつれまとはしきこえたまふ。しばし殿の内の人にも誰と知らせじとおぼして、六なほ離れたる対に、御しつらひ二なくして、

お引き取りになったのを　女をお迎えになったそうですと　〔葵上は〕とても不愉快だと　素直に　普通　葵の上のご様子は　腹蔵なく事情を話しておなぐさめ申すであの女のように怨みごとをおっしゃるのならば　一番最初に結婚したお方なろうに　いとしく大切にお思い申しているこちらの気持もお分りになのだから　ないうちは仕方がないけれども　しまいには誤解をといて下さるだろう　今も　お部屋の設備を　素姓を明かすまいと〔源氏は〕

少女は　源氏に馴染まれるにつれて　性質　無邪気に源氏になついてお側からお放しにならない

七 源氏ご自身で手本を書いてお習字などさせて。

八 今までよそにいたご自分の娘をお引き取りになったようなお気持であった。当時、子供は母親の手もとで育てられたから、こういうこともよくあった。

九 「政所」は、貴族の家政の事務を取り扱う所。「家司」は、その事務官。二条の院の源氏の家計とは別に、独立した家計を営みうるように経済的な配慮をしたことをいう。一人前の重い扱いである。

一〇 源氏の乳母子で腹心の家来。少女を引き取るについても活躍した。（若紫一三〇頁以下参照）

一一 亡くなった祖母の尼君。（若紫一二一頁参照）

僧都
故尼君――女
兵部卿宮――姫君（紫上）

一二 あちこちの女のもとにお通いになるのにお忙しくて。

一三 左大臣邸。葵の上のもと。

一四 外出も落着いてできない思いでいらっしゃる。

一五 北山の僧都。故尼君の兄上。

われ[ご自分も]も明け暮れ入りおはして、よろづの御ことどもを教へきこえたまふ。手本[七]書きて習はせなどしつつ、ただ外[八]なりける御むすめを迎へたまへらむやうにぞおぼしたる。政所[九]、家司[一〇]などをはじめ、ことに分[別に]ちて、心もとなからずつかうまつらせたまふ。惟光[一〇]よりほかの人は、おぼつかなくのみ思ひきこえたり。かの父宮[兵部卿の宮]も、え知りきこえたまはざりけり。姫君は、なほ時々思ひいできこえたまふ時、尼君を恋ひきこえたまふをり多かり。君[源氏]のおはするほどはまぎらはしたまふを、夜[よる]などは、時々こそとまりたまへ、ここかしこの御いとまなくて、暮るれば出でたまふを、したひきこえたまふをりなどあるを、いとらうたく思ひきこえたまへり。二三日[一三]内裏[うち]にさぶらひ、大殿[おほいとの]にもおはするをりは、いといたく屈[く]しなどしたまへば、心苦し[かわいそ]うて、母なき子持たらむここちして、ありきも静心[しづこころ]なくおぼえたまふ。僧都[そうづ]は、かくなむと聞きたまひて、あやしきものから、うれしとなむ思ほしける。かの御法事などしたまふにも、

[姫君は]
[源氏は]
[源氏は]
[源氏は]
[源氏が]
[様子を]
[源氏は]
[源氏は]
[源氏は]
[故尼君の]

ご自分も
手本
政所
家司
惟光
別に
兵部卿の宮
何もご存じでは
ないのだった
源氏
君を
こちらにお泊りになるが
たまふを
気が紛れていら
っしゃるが
おあとを追ったりなさる折などあるのを
ふさぎこんだりなさるので
姫君は
源氏が
様子を
不思議に思いながらも
これこれと
立派なお供物な
故尼君の

源氏、三条の宮に藤壺を訪う

一 藤壺の里邸。三条あたりにあるのでこう呼ぶ。
二 いずれも藤壺の女房。命婦は、若紫の巻（一巻二一二頁）にも出てきた王命婦。
三 応対に出て来た。源氏と藤壺との間の話を取り次ぐためである。
四 あれやこれやで。藤壺や少女（紫の上）との関係の上からも。宮は藤壺の兄君、少女の父君である。

先帝 ─ 兵部卿宮
后 ─ 藤壺

五 （源氏を）婿にしようなどとはお考えにもならず。自分の姫君が源氏に引き取られていようとはつゆ知らず、という含みがある。
六 宮が、（藤壺のいられる）母屋の中にお入りになるのを。
七 昔は、父帝のお扱いで、すぐお側で、人を介せず直接にお話も申し上げなさったのに。幼少時代の源氏は藤壺の局に出入りしていた。（桐壺三四頁参照）

どお届けなさったらひきこえたまへり。

藤壺のまかでたまへる三条の宮に、御ありさまもゆかしうて、〔源氏が〕どんなご様子かと気になって参りたまへれば、命婦、中納言の君、中務などやうの人々対面したり。他人行儀なお扱いをなさることだとけざやかにもてなしたまふかなと、〔源氏は〕おもしろからず思うが　気持を落着けてやすからず思へど、しづめて、あたりさわりのない世間話をおほかたの御物語聞こえたまふほどに、兵部卿の宮参りたまへり。源氏の君がおいでだとこの君おはすと聞きたまひて、対面したまへり。〔宮は〕たしなみのあるご様いとよしあるさまして、色っぽくなよなよとしていらっしゃるのを〔源氏は〕女にしてお付き合いしたらすてきだ子で色めかしうなよびたまへるを、女にて見むはをかしかりぬべく、〔宮を〕人知れず見たてまつりたまふにも、かたがたむつましくおぼえろうと親しみをお感じになってたまひて、こまやかに御物語など聞こえたまふ。宮も、この御さまねんごろに源氏のご様子がの常よりことになつかしううちとけたまへるを、いとめでたしと見いつもと違って親しみやすくうちとけていらっしゃるのをたてまつりたまひて、婿になどはおぼし寄らで、女にて見ばやと、すばらしい色めきたる御心には思ほす。暮れぬれば、御簾のうちに入りたまふを、〔源氏は〕うらやましく、昔は、上の御もてなしに、いとけ近く、人づてならで、ものをも聞こえたまひしを、〔今は〕すっかり冷たくなさるのもこよなう疎みたまへるも、つ

八（源氏には）恨めしく思われるのは、これもまた仕方のないことではある。「わりなきや」は、草子地（作者の評語）。

九 お申しつけもございましたら、うれしく存じます。

一〇 王命婦。

一一 以前に比べると。懐妊してからは、の意。藤壺懐妊のことは若紫（二一四頁）に見える。

一二 ますます、源氏とのことを情けないこととお思いになっておられて。

一三（手引きをした自分に対して）快からずお思いのご様子も。

一四（源氏がいくら命婦に仲立ちを頼んでも）何の効きめもなくて日がたってゆく。

二条の院の少女、いよいよ源氏に馴れ親しむ・元日の人形遊び

一五 少女（紫の上）の乳母。（若紫一九〇頁、二三〇頁以下など参照）

一六（少女が故尼君の）喪に服すること。

一七 喪は、母方の祖父母の場合、三カ月だからということで。父方は五カ月。

一八 十二月の月末。すぐあとに朝拝のことが見える。尼君の亡くなったのは九月の二十日頃（若紫二二一頁）であった。

一九 ほかに（祖母尼君以外に）母君もなくて。幼い頃母に先立たれて祖母に育てられたので、母の喪に准ずる気持で、喪服を脱いでもすぐ派手にはしない。

らうおぼゆるぞわりなきや。「しばしばもさぶらふべけれど、事ぞとはべらぬほどは、おのづからおこたりはべるを、さるべきことなどは、仰せ言もはべらむこそ、うれしく」など、すくすくしうて出でたまひぬ。命婦も、たばかりきこえむかたなく、宮の御けしきも、ありしよりは、いとど憂きふしにおぼしおきて、心とけぬ御けしきも、はづかしういとほしければ、何のしるしもなくて過ぎゆく。はかなの契りやとおぼしみだるること、かたみに尽きせず。

（源氏）もっと度々お伺いすべきですが　何か特別のことでもありませんと　自然ご無沙汰いたしますが　しかるべきご用事　堅苦しいご挨拶をして　手引きしてさし上げるすべもなく　藤壺　恐れ多くもおいたわしくもあるので　何と　はかない仲かと　それぞれに

一五 少納言は、思いがけず結構な思いをすることだ おぼえずをかしき世を見るかな、これも故尼上の、この姫君のお身の上を心配されて の御ことをおぼして、仏前のお勤めにも 御行ひにも祈りきこえたまひし仏の御しるしご加護であろうかと思われる にやとおぼゆ。大殿いとやむごとなくておはし、葵の上が立派な北の方としておられ ここかしこあまたあちこち大勢の女性に かかづらひたまふをぞ、まことに大人びたまはむほどは、むつかし厄介なことも 起ろうかと きこともやとおぼえける。されど、かくとりわきたまへる御おぼえ〔源氏が〕通っておられるのを〔姫君が〕ほんとに成人された時には こうして〔源氏が〕特別に大切にされるご寵愛ぶりは のほどは、〔少納言として〕心強い限りであることだ いとたのもしげなりかし。御服、母かたは三月こそはとて、晦日には喪服をおぬがせなさるが 脱がせたてまつりたまふを、また親もなくて生ひ出で

たまひしかば、まばゆき色にはあらで、紅、紫、山吹の地の限り織（泥手な）れる御小袿などを着たまへるさま、いみじう今めかしうをかしげなり。（当世風でかわいらしげである）男君は、朝拝に参りたまふとて、さしのぞきたまへり。「今日よりは、大人しくなりたまへりや」とて、うち笑みたまへる、いとめでたう愛敬づきたまへり。（一つ年を取って）大人らしくおなりかな（源氏）いつしか、雛をしゐて、そそきゐたまへる、三尺の御厨子一具に、品々しつらひすゑて、また小さき屋ども作り集めてたまつりたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。「雛やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事とおぼいたり。「げにいと心なき人のしわざにもはべるなるかな。今つくろはせはべらむ。今日は言忌して、な泣いたまひそ」とて、出でたまふけしき、ところせきを、人々端に出でて見たてまつれば、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて、雛のなかの源氏の君つくろひ立てて、内裏に参らせなどしたまふ。「今年だにすこしおとなびさせたまへ。十にあまりぬ

（姫君は）もう早速お道具類を飾り並べて（いそがしげにして）いられるが（たくさん作って）（源氏が）さし上げなさったのを（姫君）（あたりいっぱい広げて遊んでおられる）（こわしてしまいましたので）（大事件だとお思いの様子である）（源氏）ほんとに何ともそっかしい人のやったことらしいね（そのうち）（盛装してご立派なのを）（女房）（御簾ぎわに出て）（着飾らせて）（参内させる真似など）（少納言）（せめて今年なりと）

一三 お髪をお直しする間も、おいやがりあそばして。「参る」は、直す、梳るなどの意の敬語動詞。

一三 姫君の乳母。前出（一九頁）。

一四 この女房たちの夫という連中は、醜い人たちばかりだわ。

一五 いくら幼稚だといってもやはり、新年になってお年が一つ加わった証拠なのでしょう。諧謔めかした草子地。語り手（作者）が直接読者に語りかける趣。

一六 まさかこんな夫婦らしくない添い寝のお相手だろうとは思いもしなかった。「世づかぬ」は、男女の関係のない。「添臥」は、男に添い寝する人。

源氏と葵の上の仲　翌朝藤壺の三条の宮に参賀

一七 葵の上は、（源氏が）わざわざ女を二条の院に迎え取って、大切にしておられるという噂をお耳になさってからは。

紅葉賀

る人は、雛遊びは忌みはべるものを、（いけないと申しますのに）かく御夫（婿君などをお持ちになりましたからには）などまうけたてまつりたまひては、あるべかしうしめやかにてこそ、（奥方らしくおしとやかにお振舞いになって）見えたてまつらせたまはめ。御髪参るほどをだに、（お相手なさねばいけませんもの）もの憂くせさせたまふ」など、少納言聞こゆ。遊びにのみ心入れたまへれば、（〔姫君が〕ご熱心なので）はづかしと思はせたてまつらむとて言へば、心のうちに、（〔姫君は〕これではいけないと思わせてさし上げようと思って）われは、さは、（私は）夫まうけてけり、（それなら夫を持ったのだわ）この人々の夫とてあるは、みにくくこそあれ、（こんなに美しくて）われはかくをかしげに若き人をも持たりけるかなと、（夫）今ぞ思ほし知りける。（やっと今お分りになるのだった）さはいへど、御年の数添ふしるしなめりかし。かくをさなき御けはひの、ことに触れてしるければ、（〔姫君の〕ご様子が）殿のうちの人々も、（何かにつけてはっきり分るので）あやしと思ひけれど、いとかう世づかぬ御添臥ならむとは思はざりけり。

内裏より大殿にまかでたまへれば、（左大臣邸に）（二条の院）例のうるはしうよそほしき御さまにて、（〔葵上は〕例によって端然とものしく着飾っていらして）心うつくしき御けしきもなく、（やさしく素直な）苦しければ、（窮屈なので）「今年よりだに、（夫婦らしく態度を改められるお気持が見えたらでも）すこし世づきて改めたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、（〔源氏〕せめて今年から）わざと人する気てかしづきたまふと聞きたまひ

一（その女を）夫人として大切に扱おうとお考えなのに違いないと。

二（しかし）そんな葵の上のお気持にわざと気づかぬふりをよそおって、冗談などおっしゃる源氏のお振舞に対しては。

三 やはりほかの女とは違って格別すぐれている。

四 葵の上は（源氏より）四歳ほど年長でいらっしゃるので。源氏はこの年十九歳。「このかみ」は、年長者の意。

五 一体、どういう点でこのお方に不足なところがおありだというのだろう。

六 北の方である内親王の御腹にもうけたった一人の姫君として、下へも置かず大切になさっておられる（そのための）気位のお高さが、もうこの上なくて。

七 何もそうあがめ奉る必要はない、といったお仕向けをなさる、そういうお二人ながらそれぞれのよそよそしさなのであろう。「ならはい」は、「馴らはし」の音便。葵の上を馴れさせようとする意。「心のへだて」は、相手に対して隔心をいだくこと。葵の上、源氏それぞれの隔心なので「ども」と複数でいう。

八 翌朝。二日である。

桐壺更衣 ═══ 源氏
桐壺帝 ═══ 内親王（大宮）═══ 葵上
左大臣

しよりは、一やむごとなくおぼしさだめたることにこそはと、心のみ置かれて、いとどうとくはづかしくおぼさるべし。二しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひには、三えしも心強からず、御いらへなど聞こえたまへるは、四なほ人よりはいと異なり。五四年ばかりがこのかみにおはすれば、六うち過ぐし、七はづかしげに、八さかりにととのほりて見えたまふ。九何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ、わが心のあまりけしからぬすさびに、かく怨みられたてまつるぞかしと、〔源氏は〕反省されおぼし知らる。同じ大臣と聞こゆるなかにも、おぼえやむごとなくおはするが、宮腹にひとりいつきかしづきたまふ御心おごり、いとこよなくて、〔源氏が〕少しでも疎略にするのをすこしもおろかなるをば、めざましと思ひきこえたまへるを、源氏の方では男君は、などかいとさしもと、ならはいたまふ、御心のへだてどもなるべし。大臣も、〔源氏の〕こうした実意のないかくたのもしげなき御心を、つらしと思ひきこえたまひながら、〔源氏を〕見たてまつりたまふ時は、恨みも忘れて、かしづきいとなみきこえたまふ。八つとめて出で

こだわりが
増すばかりで
ますます親しめず気づまりに思われなさるのであろう
強情も張り通せず
ご返事など申し上げなさるところは
貫禄があり
お美しく非の打ち所のない感じでいらっしゃる
気おくれするほどで
自分のあまりにも不届きな浮気沙汰ゆえに
このように怨まれ申すのだと
の声望の重々しくていらっしゃる父左大臣が
申し上げる中でも
世間
けしからぬと
お思い申し上げなさるのを
〔源氏の〕こうした実意のない
恨めしいと
〔源氏を〕
大切に何かとお世話し申し上げなさる
〔源氏が〕

九　石帯。束帯（正式の礼装）の時、着用する黒い革の帯。その後ろにあたる所に、四角あるいは円形の玉、石、犀角などを綴じつける。これに彫刻を施したものもある。源氏は三位になったばかりであるが、三位以上は白玉である。立派なものは家々に宝物として伝えられ、特殊な名称の付いたものもあった。上に「名高き」とあるのは、そうした事情を物語る。（図録九参照）

一〇　束帯の時に履く黒革のくつ。（図録九参照）

一一　正月二十一、二、三日のうち、子の日に仁寿殿で催される天皇の私宴。題を賜って詩を作る。平安時代中期には殆ど行われていない。

一二　そのような時に使わせて頂きましょう。

一三　こんな美しい人を（婿君として自分の邸に）出入りさせて眺める以上の幸せはあるまい、とお見えになる。それほどの源氏のご立派さだ、の意。

一四　年賀のご挨拶といっても。

一五　上皇のこと。朱雀院で算賀を受けられた方であろう。

お出かけなさろうとするお部屋に顔を出されて〔源氏が〕たまふところにさしのぞきたまひて、御装束したまふに、名高き御帯、御手づから持たせて、わたりたまひて、御衣のうしろひきつくろひなど、御沓を取らぬばかりにしたまふ、いとあはれなり。「この帯は〔人に〕ご自身で〔源氏〕とてもおいたわしい

れは、内宴などいふこともはべるなるを、さやうのをりにこそ」など聞こえたまへば、「それは、まされるもはべり。これはただ目馴れぬさまなればなむ」とて、しひてさせたてまつりたまふ。げに、よろづにかしづき立てて見たてまつりたまふに、生けるかひあり、たまさかにても、かからむ人を出だし入れて見むにますことあらじと見えたまふ。参座しにとても、あまた所もありきたまはず、内裏、春宮、一院ばかり、さては、藤壺の三条の宮にぞ参りたまへる。

（左大臣）あるそうですから　もっとよいのもあります　目新しい感じのものですから　着用おさせなさる　何くれと大切にお世話申し上げて〔そのお姿を〕　生きがいが感じられ　たまさかのお通いでも　そのほかには　〔源氏は〕そう方々にもお出かけにならず

「今日はまたことにも見えたまふかな。ねびたまふままに、ゆゆしきまでなりまさりたまふ御ありさまかな」と、人々めできこゆるを、宮、几帳の隙より、ほの見たまふにつけても、思ほすことしげかりけり。

（女房）格別お美しく　大人びられるにつれて　恐いほど　ますますお美しくおなりになる　女房たちが　藤壺　多いのだった

二月、藤壺、皇子を産む

一 帝におかれてもお産に際してのいろいろなお心づもりがあったのに。産室の調度類を賜ったり、出産のお祝いの産養などのことであろう。
二 物の怪のせいではないかと。帝寵をほしいままにしているので、人の恨み嫉みを受けることも多い。そうしたところからの噂なのであろう。
三 わが身を滅ぼすようなことになるに違いないとご心配になるので。世間でいろいろ取り沙汰されるにつけても、どんなことから源氏との密通のことが露顕するか分らないことを危惧する気持。
四 いよいよ思い当られることがあって。出産の遅れで、自分のお子であると、いよいよはっきり思い当る。
五 ご安産を祈願するご祈禱。
六 それと事情は明かさずに（藤壺お産のためということは伏せて）方々の寺でおさせになる。
七 今までの心配もすっかり消えて。
八 藤壺は、よくぞ生き永らえたものとお思いになると、情けないけれども。藤壺は、あわよくばこのお産で死にたいとも思っている。
九 弘徽殿の女御。東宮の母女御。
一〇 人のいない時を見はからって。

源氏、三条の宮に参る　藤壺の不安、源氏の苦悩、王命婦の困惑

藤壺のお産が　この御ことの、師走（十二月も過ぎたのが）も過ぎにしが、心もとなきに（気がかりであるにつけ）、この月はさり（この一月にはいくら）ともと宮人も待ちきこえ、内裏にもさる御心まうけどもあるに、つ（何事）れなくて立ちぬ。御ものの（藤壺は）けにやと世人も聞こえ騒ぐを、宮、いと（うるさくお噂するのを）わびしう、このことにより、身のいたづらになりぬべきこととおぼし嘆くに、御ここちもいと苦しくてなやみたまふ。中将の君は、いとど思ひあはせて、御修法など、さとはなくて所々にせさせたまふ。世の中のさだめなきにつけても、かくはかなくてや止みなむと、取り集めて嘆きたまふに、二月十余日のほどに、男御子生まれたまひぬれば、名残なく、内裏にも宮人もよろこびきこえたまふ。命長くもと思ほすは心憂けれど、弘徽殿などの、うけはしげにのたまふと聞きしを、むなしく聞きなしたまはましかば人笑はれにやとおぼしつよりてなむ、やうやうすこしづつさはやいたまひける。上の、いつしかとゆかしげにおぼしめしたること限りなし。

（ご気分も）（源氏）（お具合がよろしくない）（このままはかない仲で終ってしまうのかと）（いろいろと）（人はいつ死ぬか分らぬものだから）（呪うようなことをおっしゃると聞い）（自分が死んだとお聞きになったらもの笑いの種になろうと）（気を強く）（帝）（早く）（快方にお向いになった）（お持ちになって）（皇子をご覧になりたいとお思いになることはこの上もない）

源氏のひそかなお気持としても（皇子のことが）大層気がかりで　かの人知れぬ御心にも、いみじう心もとなくて、人間に参りたま

一一 帝が（若宮を）ご覧になりたがっておられますから。「おぼつかながる」は、不安に思う、会いたく思うの意。

一二（まだ生れたばかりで）見苦しい頃ですから。

一三 源氏のお子であることに紛れもない。

一四 人知れずお心に咎めて、とてもつらく。「心の鬼」は、良心の呵責（かしゃく）というに近い。

一五 不審に思われるに違いない月勘定の狂いを。産み月が予想より遅れたのは、内裏退出後の源氏との密通による懐妊だからである。懐妊当時の帝への奏上の時期についてもすでに問題があった（若紫二一四頁、二一五頁）。

一六 欠点を探し出そうとするこの世間に、（自分の）どんな評判がしまいには漏れ出ることであろうかと。

一七 せつないお言葉を尽して手引きをお頼みになるけれども、何のかいもあろうはずがない。

一八 どうしてそんなにまでご無理をおっしゃるのでしょう。そのうち自然に間違いなくご覧になれることではありませんか。「たてまつる」は、皇子に対する敬語、「せたまふ」は、源氏に対する最高敬語。

一九 命婦とて一通りのことではない。「かたみに」は、それぞれに。皇子（実は源氏の子）出生の責任の一半は手引きをした命婦にもある。

ひて、「上（源氏）のおぼつかながりきこえさせたまふを、まづ見たてまつりて奏しはべらむ（ご報告申し上げましょう）」と聞こえたまへど、（藤壺）「むつかしげなるほどなれば」とて、見せたてまつりたまはぬも、ことわりなり。さるは、いとあさましう、めづらかなるまで（またとないほど源氏に生き写しでいらっしゃる様子は）驚くほど写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。藤壺は宮の、御心の鬼にいと苦しく、人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりを、まさに人の思ひとがめじや、さらぬはかなきことをだに、疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにかとおぼし続くるに、身のみぞいと心憂き。命婦の君に、（源氏が）たまさかに逢ひたまひて、いみじき言ども（どうしてもご覧になりたいと）を尽くしたまへど、何のかひあるべきにもあらず。若宮の御ことを、わりなくおぼつかながりきこえたまへば、（命婦）「など、かうしもあながちにのたまはすらむ。今おのづから見たてまつらせたまひてむ」と聞こえながら、思へるけしき、かたみにただならず。かたはらいたきことなれば、まほにもえのたまはで、「いかならむ世に、人づてならで聞こえさせむ」

（私が）（藤壺）（女房たちが拝見しても）（どうして変だと思い当らずにいようか）（それほどでもない些細なことでも）（王命婦）（このわが身が何とも情けない）（源氏が）（やっとのことで）（若宮のことは）（憚り多いことなので）（源氏が）（直接（藤壺に）お話し申せるのだろう）（正面切って）（申し上げるものの）（悩んでいる様子は）（でもおっしゃれないで）（源氏）（一体いつになったら）（とおっしゃるので）

一　どのような前世からの宿縁で、この世でこんな二人の間の隔てがあるのだろうか。「この世」に「子の世」を掛け、「かかる」（こうした）に「この世にかかわる」の意を掛ける。藤壺にもわが子にも逢えぬつらさを嘆いた歌である。

二　藤壺の悩んでいられる様子などを拝見しているので。子までなした源氏へのせつない愛情を承知しているので。

三　若宮をご覧になっても（宮は）思い悩まれておいでです、ご覧にならないあなたさまはまたどんなにかおつらいことでしょう、これが世の人の迷うという子ゆえの闇というものなのでございましょうか。「こ」（これ）に「子」を掛ける。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）を踏まえる。

四　藤壺は、（こうした源氏のひそかな訪れについて）世間の口の端もうるさいことだからと、迷惑なことにおっしゃりもしお思いにもなって。

五　人目に立たないように（人が不審に思わないように）自然な態度で（命婦に）接しておられるものの。

四月、藤壺と若宮、参内　帝のお喜びと、藤壺、源氏の恐懼

とて、泣いたまふさまぞ、心苦しき。（痛々しい）

（源氏）「いかさまに昔むすべる契りにて
この世にかかるなかの隔てぞ

かかることこそ心得がたけれ」（こんなことはとても納得がゆかない）とのたまふ。命婦も、宮の思ほしたるさまなどを見たてまつるに、（源氏を）そっけなく突き放してもお扱い申せない）えはしたなうもさし放ちきこえず。

（命婦）「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむ
こや世の人のまどふてふ闇

（おいたわしくお悩みの絶えぬお二方ですこと）あはれに心ゆるびなき御ことどもかな」と、忍びて聞こえけり。（そっと申し上げた）かくのみ言ひやるかたなくて、（源氏は）お帰りになるものの帰りたまふものから、人のもの言ひもわづらはしきを、わりなきことにのたまはせおぼして、命婦をも、昔おぼいたりしやうにも、（お目をかけられたようにも）うちとけむつびたまはず。人目立つまじう、なだらかにもてなしたまふものから、（気を許してお側にお近づけにならない）心づきなしとおぼす時も（気に入らぬとお思いになる時もある）あるべきを、いとわびしく思ひのほかなるここちすべし。（〔命婦は〕とてもつらく思ってもみなかった身の不遇を嘆くようだ）

（〔若宮は〕）四月に内裏へ参りたまふ。（日数の割には大きく知恵づいておられて）ほどよりは大きにおよすけたまひて、

六 間違いようのない（源氏にそっくりの）若宮のお顔立ちを。

七 東宮にもお立てすることが出来ないでしまったことを。立太子のいきさつについては、桐壺（二九頁）に同様のことが見えている。

八 こうした身分の高いお方の御腹に、（若宮が）源氏と同じお美しさでお生れになったので。藤壺は、先帝の后腹の第四皇女であるから、その血筋の高さは、押しも押されもしないものがある。「さし出づ」は、「光」の縁語。

九 疵のない玉とお思いになって大切になさるので。源氏の場合は、母が更衣であったことがいわば玉に疵であったのである。

一〇 何につけても。若宮が源氏に似ておられ、帝がその若宮をおいつくしみになるにつけても。

やうやう起きかへりなどしたまふ。あさましきまで（あきれるほど）、まぎれどころ（六）なき御顔つきを、〔帝は〕おぼし寄らぬことにしあれば（お考えも及ばぬことなので）、またならびなきど（ほかに類のない美しい者同士は）ちは、げにかよひたまへるにこそはと思ほしけり（ほんとに似ていらっしゃるものなのだろうと）。いみじう思ほし（〔帝が若宮を〕大層いつくしみ大切になさることは）かしづくこと限りなし。〔帝は〕源氏の君を限りなきものにおぼしめしながら（この上もなく愛しておいでになりながら）、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて（ご賛成申し上げそうにもなかったので）、坊にもえ据ゑたてまつらずなりにしを（どこまでも残念に思われて〔源氏が〕臣下としてもったいない）、飽かずくちをしう（成人してこられたのを）、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておはするを御覧ずるままに、心苦しくおぼしめすを（おいたわしく）、かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、疵なき玉と思ほしかしづくに、宮はいかなるにつけても（藤壺は）、胸のひまなく、やすからずものを思ほす（晴れる時もなく不安な思いでいろいろ心配になる）。

例の、中将の君（例によって源氏）、こなたにて御遊びなどしたまふに、〔帝が〕抱き出でたてまつらせたまひて、〔帝〕「御子たちあまたあれど、そこをのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いとちひさきほどは、皆かくのみあるわ

（藤壺の御殿で管絃の演奏）

（そなたばかりをこのように小さな時からそこをのみなむ、それ故その頃が思い出されるからであろうか）

〔若宮は〕（そなたに）似ている（ただもうこんなふうな）

一「うれしくも、あはれにも（胸を締めつけられるようにも）」は、わが子である若宮に対する気持、前の「恐ろしうも、かたじけなくも」は、父帝に対する気持。

二 涙が落ちそうだ。源氏の主観的な気持をそのまま地の文とした叙法で、作者のよく用いるところである。

三（若宮を拝見して）かえって（とてもつらく）気分も悪いような気がするので。

四 源氏は、ご自分のお部屋に。二条の院の東の対である。

五 左大臣邸（葵の上のもと）へ行こうとお思いになる。

六 なでしこの異名。

七 若宮と思って眺めても心は晴れず、一層露の置き添わる撫子の花です。庭前の撫子の花に若宮を思って、いよいよ涙にくれるばかりです。「撫子」は、いとしい子の意を掛ける。「よそへつつ見れど露だになぐさまずいかにかすべき撫子の花」（『藤原義孝集』、『新古今集』巻十六雑上）を踏まえる。作者は恵子女王（伊尹室）。宮中に在って愛子義孝に詠みおくった歌。

源氏、藤壺と、若宮について歌を贈答

ざにやあらむ」とて、（若宮を）いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。（のであろうか）

源氏中将の君、面の色かはるここちして、恐ろしうも、かたじけなくも、（もったいなくも）

一うれしくも、あはれにも、（さまざまな感情が胸の中を去来する思いで）かたがたうつろふここちして、二涙おちぬべし。物語などして、うち笑みたまへるが、いとゆゆしううつくしきに、（若宮が）声をあげたりして（源氏が）わが身ながら、これに似たらむはいみじういたはしうおぼえたまふぞ、（この若宮に似ているのなら大層大切なものだという気持になりので）あながちなるや。宮は、（身びいきに過ぎることだ）わりなくかたはらいたきに、（藤壺）汗も流れてぞおはしける。中将は、（とてもつらく居たたまれない思いに）三なかなかなるここちの、かき乱るやうなれば、（退出なさった）まかでたまひぬ。

四わが御かたに臥したまひて、（どうにもならぬつらさを静めてから）胸のやるかたなきほど過ぐして、五大殿へとおぼす。（一面に）御前の前栽の、何となくあをみわたれるなかに、六常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、（王命婦）命婦の君のもとに、（こまごまとお書きになるようだ）書きたまふこと多かるべし。

（源氏）七「よそへつつ見るに心はなぐさまで

露けさまさるなでしこの花

八（この撫子の花のように）若宮がお生れになったらと思いましたが、そうなってもどうにもならない二人の仲でございましたので。「わが宿の垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつつ見む」（『後撰集』巻四夏、題知らず、読人しらず）を引く。「私の家の垣根に植えた撫子は花咲いてほしいものだ、あなたと思って眺めよう」という、もとは恋の歌である。

九 ちょうど適当な、人のいない時だったのだろうか。

一〇 ほんの一筆だけでも、お返事を。撫子（常夏）の花に付けた撫子の歌であるから、「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」（『古今集』巻三夏、凡河内躬恒）によって、「塵ばかり」「この花びらに」と言葉を飾ったもの。

一一 あなたのお袖の濡れる露に縁のあるもの（悲しんでおられるあなたのお子）と思うにつけても、やはり大和撫子（このお子）をいとしむ気にはなれません。「やまとなでしこ」は、中国から渡来した「からなでしこ」（石竹）に対して山野に自生するもの。

源氏、西の対の姫君に琴を教え、葵の上のもとに赴かず

一二 いつものことだから無駄だろう（お返事もあるまい）と。

一三 鬢の毛筋。

一四 直衣を着けない姿で。（図録一〇参照）

一五 先程の撫子の花が露に濡れているような風情で。源氏に対してやや怨みを含んだていの艶な姿態の形容である。

八 花に咲かなむと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」とあり。九 さりぬべき隙にやありけむ、〔藤壺に〕御覧ぜさせて、〔命婦〕一〇「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、わが御心にも、とてももの悲しくしみじみと ものいとあはれにお胸に迫る思いのなさる折とて ぼし知らるるほどにて、

〔藤壺〕一一
袖濡るる露のゆかりと思ふにも
なほ疎まれぬやまとなでしこ

墨色薄く途中で筆を止めたかのようなお歌を
〔命婦は〕〔源氏に〕
とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、よろこびながらたてさし上げたが まつれる、一三 例のことなればしるしあらじかしと、くづほれてながめって横になっていらしたが 臥したまへるに、胸うち騒ぎて、いみじくうれしきにも涙おちぬ。

〔源氏は〕思いに沈んで寝ていても 気持のもって行き場もない気がするので
つくづくと臥したるにも、やるかたなきここちすれば、例の、なぐさめには西の対にぞわたりたまふ。しどけなくうちふくだみたまへる鬢ぐき、あざれたる袿姿にて、笛をなつかしう吹きすさびつつ、

〔源氏は〕 そそけ乱れた らしには
横笛をうちとけて気軽に吹き鳴らしながら
のぞきたまへれば、女君、一五 ありつる花の露に濡れたるここちして、添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。愛敬こぼるるや

ものに寄り添っておられる様子は かわいらしく可憐である

一「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らくすくなく恋ふらくの多き」――あの人は、潮が満ちると隠れてしまう磯の藻なのだろうか、見ることは少なくて恋しく思うことが多いことだ（『拾遺集』巻十五恋五、坂上郎女。原歌は、『万葉集』巻七、譬喩歌、寄藻）。下の句を暗示して、源氏の寄りつかないのを怨んだ気持。

二 袖で口もとを隠された様子。恥じらうしぐさ。

三 しょっちゅう逢ってるなんてお行儀の悪いことなのですよ。「伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人を飽くよしもがな」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）による。「海松布」（海藻の一種）に「見る目」（人に逢うこと）を掛ける。

四 十三絃の琴。（図録八参照）

五 外側の第一絃から第五絃までを太緒、第六絃から第十絃までを中緒、次の一番手前の斗、為、巾の三絃を細緒という。その中の最も細い巾の絃をさす。

六 雅楽の六調子の一つ。平調（洋楽のミに近い）を主音とする律旋音階。

七 調子を整えるための短い曲。各調子に一つずつある。

八 高麗壱越調（平調を主音とする呂旋音階）の曲。舞楽「長保楽」の破の部分をいう。

うにて、〔源氏が〕おはしながらとくもわたりたまはぬ、なまらめしかりければ、例ならずそむきたまへるなるべし、〔源氏が〕端のかたについゐて、〔源氏〕「こちや」とのたまへどおどろかず、〔姫君〕「入りぬる磯の」と口ずさみて、二口おほひしたまへるさま、いみじうされてうつくし。「あな憎。かかること口馴れたまひにけりな。三みるめに飽くはまさなきことぞよ」とて、人召して、〔姫君に〕御琴取りよせて弾かせたてまつりたまふ。四〔源氏〕「箏の琴は、中の五細緒の堪へがたきこそところせけれ」とて、平調におしくだして調べたまふ。七かきあはせばかり弾きて、〔琴を〕さしやりたまへれば、え怨じ果てず、いとうつくしう弾きたまふ。ちひさき御ほどに、さしやりてゆしたまふ御手つき、いとうつくしければ、〔源氏は〕しとおぼして、笛吹き鳴らしつつ教へたまふ。いとさとくて、かたき調子どもを、ただひとわたりに習ひとりたまふ。おほかたらうらうじうをかしき御心ばへを、〔姫君の〕思ひしことかなふとおぼす。保曾呂倶世利といふものは、名は憎けれど、おもしろう吹きすさびたまへる

〔源氏が〕お帰りになっていながらすぐにもおいででないのが何となく不服だったので
いつになくすねておいでなのであろう
〔源氏が〕坐って
〔源氏〕こちらへ
〔姫君〕そ知らぬ顔で
〔源氏〕しゃれてかわいらしい
〔姫君に〕
〔源氏〕こんなことをおっしゃるようになりましたね
〔源氏〕
切れやすいのが厄介だ
〔琴を〕押しやりなさると
下げて調子をお整えになる
そうすねてもいられず
かわいらしく
左手をのばして絃をおさえられる
まだ小さいお身丈なので
いとしいと
〔源氏は〕
かしこくて
むつか
一度で
何につけても利発ですしい
希望どおりだと
〔姫君の〕ご気性をぐれた
変だけれども〔源氏が〕
曲
八
世利

九　リズムをはずさず、いかにも達者な弾き方である。

一〇　明りをおつけして。「参る」は、（明りをつけて）さし上げる意。

一一　絵は、当時の女性や子供の娯楽品。おそらく物語の一場面を絵にしたものなどであろう。（若紫二三七頁参照）

一二　供人たちが咳払いして（源氏を）うながし申し上げて。

一三　私が出かけている間はさびしくお思いか。

一四　まず、うるさく怨み言を言うほかの女の機嫌をそこねまいと思って、それが厄介ですから、しばらくはこうして出かけもするのです。

一五　あなたが大人になられてからは、よそへも全然行きませんよ。

一六　女の人の怨みを身に受けまいなどと思うのも。

合奏は

に、かきあはせまだ若けれど、拍子違はず上手めきたり。

幼稚だが

一〇　大殿油参りて、一一絵どもなど御覧ずるに、〔源氏が〕お出かけになるということだったので

（供人）

ればば、一二人々声づくりきこえて、「雨降りはべりぬべし」など言ふに、姫君、例の、心細くて屈したまへり。ふさいでいられる絵も見さして、うつぶしてお

〔源氏は〕

はすれば、いとらうたくて、御髪のいとめでたくこぼれかかりたるを、かき撫でて、（源氏）一三「ほかなるほどは恋しくやある」とのたまへば、うなづきたまふ。（源氏）「われも、一日も見たてまつらぬはいと苦しうこそ。

〔あなたが〕

されど、をさなくおはするほどは、心やすく思ひきこえて、一四まづくねくねしく怨むる人の心破らじと思ひて、むつかしければ、しばしかくもありくぞ。一五おとなしく見なしては、ほかへもさらに行くまじ。一六人の怨み負はじなど思ふも、世に長うありて、思ふさまに見えたてまつらむと思ふぞ」など、こまごまと語らひきこえたまへば、さすがにはづかしうて、ともかくもいらへきこえたまはず。やがて御膝に寄りかかりて、寝入りたまひぬれば、いと心苦しうて、「今宵は

気安くお思い申して

長生きをして

あなたと楽しく一緒に暮したいと思うからです

ご機嫌をお取りになると

〔姫君は〕

そのまま

（源氏）

一　供人たちは皆引き上げて。

二　こんな可憐な人を見捨てては、どうにもならない死出の道にも出かけられまいと。

源氏が二条の院に女を迎えて寵愛するとの噂に、帝、源氏を諫める

三　左大臣家。葵の上。

四　そのように（源氏を）お放し申さず、ふざけたりするというのは。

五　ほんの行きずりに関係なさった女を。宮中の女房風情の女だろうというのである。

六　分別のない幼稚な人だという話ですわ。「は」は、終助詞。

七　気の毒に左大臣が心配しているということだが、それもなるほど無理もない。

出かけぬことにした出でずなりぬ」とのたまへば、皆立ち（一）て、御膳（おもの）などこなたに参らせたり（た）。姫君起こしたてまつりたまひて、「出でずなりぬ」（源氏）と聞こえたまへば、なぐさみて起きたまへり（機嫌を直して）。もろともにものなど参る（食事など召し上がる）。いとかなげにすさびて（のちょっとお箸をつけて）、「さらば寝（おやすみあそばせ）たまひねかし」（姫君）と、あやふげに思ひたまへれば（心配そうにして）、かかる（二）を見捨てては、いみじき道なりとも（いられるので）、おもむきがたくおぼえたまふ。

かうやうに（このように）、とどめられたまふをりをりなども多かるを（〔姫君に〕引き止められなさる時も多いのを）、おのづから漏（も）り聞く人、大殿（おほいとの）（三）に聞こえければ、「誰ならむ。いとめざましきことにもあるかな（失礼なことではありませんか）。今までその人とも聞こえず（誰とも世間に名が知れず）、さやうにまつはしたはぶれなどすらむは、あてやかに（上品な教養のある人ではありますまい）心にくき人にはあらじ（ご大層にお扱いになって）。内裏（うち）わたりなどにて（宮中あたり）、はかなく見たまひけむ人を（五）、ものめかしたまひて（人目に立つかと隠しておいでなのでしょう）、人やとがめむと隠したまふなり（六）。心なげにいはけて聞こゆるは」など、さぶらふ人々も聞こえあへり（〔葵上の〕お側の女房たちも皆でお噂した）。内裏（うち）にも（帝も）、かかる人（女）ありときこしめして、「いとほしく大臣（おとど）の思ひ嘆かるなることも、げに、もの（帝）（七）

（女房たち）（ほんとにこちら様に）（まだ弱）

八 一所懸命これまでに仕立てた左大臣の気持を（それがどんなものか）。
九 どうして薄情な仕打ちをするのだろう。「なる」は、伝聞、推定の助動詞。「人の話によると」という気持。
一〇 だが（源氏は）。以下、別の折に帝が側近にもらされた言葉である。
一一 この辺にいる女房（帝づきの女房）にせよ、またあちらこちらの（後宮の）女房などにせよ。
一二 どのような人目につかぬ所をこっそりうろついて。
一三 こうした方面のこと。女のこと。

源氏、好色の老女房源典侍と歌を詠み交わしてたわむれる

一四 「采女」は、水司（帝の召し上がる水、氷、粥のことをつかさどる役所）、膳司（お食事のことをつかさどる役所）の下級の女官。「女蔵人」は、御装束、裁縫そのほか殿上の雑事を勤める下級の女房。
一五 （源氏は）珍しくもなくなったのであろうか、ほんとに不思議に好色な振舞をなさらないようだと（女房たちは思って）。
一六 （源氏は）気分をこわさぬ程度にあしらって、本当には深入りなさらないのを。

紅葉賀

（それくらいのこ）（色事）（帝）（源氏は）（源氏が）（冠だったそなたを）（帝のお年はかなりでいらっしゃるけれどことが分らぬ年頃でもあるまいに）（才気）（なれず）（目をかけられたので）（気の利いた女房の多いこの頃である）（特にお喜びになりお）（無関心ではおいでに）（冗談を）（「女房の方から」）（心底からもの足りないと）（葵の上が気に入らないのだろうとかわいそうに）（にうつつを抜かして）（浅からぬ仲だといったふうにも見えず噂も聞かないようだが）（〔女が〕御意に従わないことはめったにないので）（〔源氏〕恐れ入った様子で）（きっとでもからかってごらんになれば）

げなかりしほどを、八おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを、九などか情なくはもてなすなる」などのたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御いらへも聞こえたまはねば、心ゆかぬなめりといとほしくおぼしめす。「さるは、すきずきしううち乱れて、一〇この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人々など、なべてならずなども見え聞こえざめるを、一一いかなるもののくまに隠れありきて、かく人にも怨みらるらむ」とのたまはす。

帝の御年ねびさせたまひぬれど、一二かうやうのかた、一三え過ぐさせたまはず、一四采女、女蔵人などをも、容貌、心あるをば、ことにもてはやしおぼしめしたれば、よしある宮仕へ人多かるころなり。はかなきことをも言ひ触れたまふには、もて離るることもありがたきに、一五目馴るるにやあらむ、げにぞあやしう好いたまはざめると、こころみにたはぶれ言を聞こえかかりなどするをりあれど、一六情なからぬほどにうちいらへて、まことには乱れたまはぬを、まめやかにさうざ

一 内侍司（天皇のお側にあって、取次ぎ、女官の監督、後宮の儀式作法のことをつかさどる役所）の次官。従六位相当。後に従四位相当。

二 そちらの方面では軽々しい人がいたのを。

三 人がこのことを漏れ聞いても、あんまり相手がお婆さんなので（外聞を憚って）。

四 典侍は帝のご理髪に奉仕していたが。毎朝、天皇は御湯殿で湯浴し、ついで御手水の間で髪を整えられる。いずれも清涼殿の西廂である（一巻図録五参照）。

五 帝のお召替えに奉仕する人。蔵人の役。

六 典侍、掌侍を略して「内侍」と呼ぶ。

七 姿つき、髪の格好。

八（源氏は）何とも若作りなと、苦々しくご覧になるものの。

九 女房が正装の時、腰につける。うしろに長く裾を引く。（一巻図録一二参照）

一〇 骨に紙を張った今の扇子。「かはぼり」は、蝙蝠のこと。形の似るところから、夏扇の異名。

一一 かざして顔を隠して。目の下までを隠す。

（源氏を）うしと思ひきこゆる人もあり。女房年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく、心ばせあり、才気もあり あてに、上品で おぼえ高くはありながら、いみじうぼい性格で あだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ってもぐるまで、どうしてそんなにふしだらなのかと（源氏は）興味をお感じになったので などさしも乱るらむと、いぶかしくおぼえたまひければ、たはぶれ言言ひ触れてこころみたまふに、言い掛けて（典侍は）不釣合とも思わないのであったあきれたと あさましとおぼしながら、さすがにかかるもをかしうて、こうした女もおもしろくて ものなどたこともあるが のたまひてけれど、人の漏り聞かむもふるめかしきほどなれば、そ知らぬ態度をおとりになるのを れなくもてなしたまへるを、女は、いとつらしと思へり。上の御梳櫛にさぶらひけるを、それが終ったので 果てにければ、上は御袿の人召して、出でさ出ましになられたあと せたまひぬるほどに、また人もなくて、この内侍常よりもきよげに、様体、頭つきなまめきて、色っぽくて 装束、ありさま、着こなし いとはなやかに好ましげに見ゆるを、さも旧りがたうもと、心づきなく見たまふものから、どんな気でいるかと いかが思ふらむと、さすがに過ぐしがたくて、見過しにはできず 裳の裾を引きおどろ引っ張って注意 をおひきになると かしたまへれば、かはぼりのえならず画きたるを、見事に さし隠して見か

三 目のふちがげっそり黒ずみ引っ込んで。「ら」は、接尾語。

一三 「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」――大荒木の森の下草は老いてしまったから、馬も好まず刈る人もいない（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）。大荒木の森は、山城の国の歌枕。愛宕郡の市原野（鞍馬の山口）とも、乙訓郡、淀の与杼神社ともいう。

一四 「ひまもなくしげりにけりな大荒木の森こそ夏のかげはしるけれ」――隙間もなく生い茂っていることだ、大荒木の森こそ夏の涼しい木蔭であることがはっきり分る（『源氏釈』所引、出典不明）。立ち寄ってよさそうな森ではないか、と、扇の絵の批評にかこつけての皮肉。

一五 あなたがおいで下さいましたら、ご愛馬にまぐさとして刈って食べさせましょう、盛りの過ぎた下草でありましょうとも。

一六 私の馬が笹を分けて行ったら人が見咎めるだろう、いつでもほかの馬が馴れ近づいているらしい森の木蔭は。「駒」を、愛人たちに、「森」を典侍に見立てたもの。『蜻蛉日記』下巻に「笹分けば荒れこそまさめ草枯れの駒なつくべき森の下かは」という歌がある。

紅葉賀

（えった目つきは）へりたるまみ、（精いっぱいの流し目だが）いたう見延べたれど、目皮（一二）らいたく黒み落ち入りて、（肉がそげて皺だらけだ）いみじうはつれそそけたり。（年に似合わぬ）似つかはしからぬ（派手な）扇のさまかなと見たまひて、（源氏は）わが持（も）たまへるに、（持ちかえさせて）さしかへて見たまへば、赤き紙の、（顔に映るくらい濃艶なのに）うつるばかり色深きに、木高（たか）き森の画（かた）を（金泥で塗りつぶしてある）塗りかくしたり。（その端に）片つ方に、（筆跡はえらく古めかしいが）手はいとさだすぎたれど、（なかなか上手に）よしなからず、「森の下草老（お）いぬれば」（一三）など（書き流してあるのを）書きすさびたるを、（書くにこと欠いて）ことしもあれ、（いやらしい趣向だなと）うたての心ばへやと笑（え）まれながら、（源氏）（一四）「森こそ夏の、（といったふうだね）と見ゆめる」とて、（何かとおっしゃるのも）何くれとのたまふも、（相手が不似合いで）似げなく、（気になるが）人や見つけむと苦しきを、女はさも思ひたらず、

（典侍）君し来（こ）ば手（た）なれの駒に刈り飼はむ
さかり過ぎたる下葉なりとも

と言ふさま、こよなく色めきたり。

（源氏）「笹分（こま）けば人やとがめむいつとなく
駒なつくめる森の木（こ）がくれ

（厄介だからね）わづらはしさに」とて、（お袖を捉えて）立ちたまふを、（典侍）ひかへて、（こんなつらい）「まだかかるも

一 こうまでなってあなた様に捨てられては、いい恥さらしでございます。

二 愛しているのだが、思うにまかせぬのだよ。

三 そんなことをおっしゃって、このまま切れてしまおうというおつもりですか。「限りなく思ひながらの橋柱思ひながらに仲や絶えなむ」（『拾遺集』巻十四恋四、読人しらず）による。「ながら」に「長柄」を掛ける。長柄の橋は、摂津の国の歌枕。源氏が「思ひながらぞや」と言ったのを受けたもの。

四 襖の隙間から。

五 恋しい人とのことなら、濡衣でも着たがる（あらぬ噂でも立てられたがる）連中もあるらしい、それと同じ気持からだろうか。「憎からぬ人の着すなる濡衣はいとひがたくも思ほゆるかな」（『古今六帖』五）による。「厭ひがたく」と「いと干がたく」を掛ける。「あなればにや」は、「あるなればにや」の撥音便形で、撥音「ん」を表記しない形。

六 女のことにかけては抜け目のない性分で。

七 典侍のいくつになってもやまぬ好色心も見届けてみたくなったので。

源氏と典侍の逢瀬を頭の中将見あらわす

八 人よりは図抜けてすばらしい貴公子なので。

九 あの冷たいお人（源氏）の代りの気晴らしにと。

一〇 とんでもない選り好みだこと。草子地である。お婆さんのくせに贅沢な、という諧謔。

思いをしたことはございません

のをこそ思ひはべらね。今さらなる身の恥になむ」とて泣くさま、

とても大げさだ（源氏）そのうちお話しよう

いといみじ。「いま聞こえむ。思ひながらぞや」とて、

振り切って

引き放ちて出でたまふを、せめておよびて、「橋柱」と怨みかくるを、上は御袿

〔典侍は〕懸命に取りすがって

二人の仲

果てて、御障子よりのぞかせたまひけり。似つかはしからぬあはひかなと、いとをかしうおぼされて、「好き心なしと、常にもてなやむめるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」とて、笑はせたまへば、

（帝）女に目も向けぬと

〔女房たちが〕いつも困っているようだが

それでも

見過しにはしなかったな

照れくさい思いだが

内侍は、なまばゆけれど、憎からぬ人ゆゑは、濡衣をだに着まほしがるたぐひもあなればにや、いたうもあらがひきこえさせず。人人も、思ひのほかなることかなと、あつかふめるを、頭の中将、聞きつけて、至らぬ隈なき心にて、まだ思ひ寄らざりけるよと思ふに、尽きせぬ好み心も見まほしうなりにければ、語らひつきにけり。

意外なことだと

たちも

女房

たいして弁解も申し上げない

取り沙汰するのを

あの女のことはぢえつかなかったと思うと

〔典侍と〕仲よくなってしまった

頭の中将

この君も、人よりはいと異なるを、かのつれなき人の御なぐさめにと思ひつれど、見まほしきは限りありけるをとや。うたての好みや。いたう忍ぶれば、源氏の君は、え知りたまはず。見つけきこえ

〔典侍は〕

逢いたいのはやはり源氏お一人だったとか

とても秘密にしているので

〔二人の仲を〕

〔源氏を〕お見かけしては

一 その気になれぬおっくうさに。
二 綾綺殿の東、宣陽門内にある。中央に馬道があって、北が内侍の詰所、南が神鏡を奉安する賢所である。（図録五参照）
三 帝の御前の音楽の催しなどでも、男の連中の演奏に加わったりして。
四 催馬楽、呂「山城」の歌詞。山城の狛のあたりの瓜作りが私を欲しいという、どうしようか、瓜作りになってしまおうか、瓜が熟すまでに、の意。つれないお方をあきらめて、という気持を含ませたものであろう。歌詞は付録三一三頁参照。
五 白楽天の詩「夜歌ふ者を聞く」（『白氏文集』巻十）に連想をはせたもの。白楽天が、夜、鸚鵡州に泊った時、隣船に十七、八の美女が哀切を極めた歌を歌って泣いていたが、身もとを尋ねてもついに答えなかった、という。原詩は付録三一三頁参照。
六 催馬楽、律。男女の掛合いの歌で、「殿戸ひらかせ」（家の戸をあけて下さい）の部分に主意があり、ここもその意味を利かしている。次の「押し開いて来ませ」も「東屋」の歌詞。歌詞は付録三一四頁参照。
七 この東屋の軒からいやな雨だれが落ちかかります、訪れて来てその雨だれに濡れる人なんかいるはずもありません。同じく「東屋」の歌詞によった歌。
八 自分一人がこんな怨み言に責任を負わねばならぬ筋合でもないが。

喜ばせてやろう

ては、〔典侍が〕まづ怨みきこゆるを、齢のほどいとほしければ、なぐさめむ

かわいそうなので

とおぼせど、かなはぬもの憂さに、いと久しくなりにけるを、夕立

だいぶ日数がたってしまったが

して、名残涼しき宵闇に紛れて宵のまぎれに、温明殿のわたりをたたずみありき

あちこち様子をうかがって

たまへば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きゐたり。御前などに

見事に

ても、男方の御遊びにまじりなどして、〔琵琶にかけては〕ことにまさる人なき上手な

つれないお人に怨みごとも言いたい気分でいた折とて　哀調を帯びて

れば、ものうらめしうおぼえけるをりから、いとあはれに聞こゆ。

声だけはとても美しく

「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうて歌ふぞ、すこ

気にくわない

し心づきなき。鄂州にありけむ昔の人も、かくやをかしかりけむと、

いたという昔の人も　こんな思いをしたであろうかと

耳とまりて聞きたまふ。弾きやみて、〔典侍は〕いといたう思ひ乱れたるけは

小声で

ひなり。君、東屋を忍びやかに歌ひて寄りたまへるに、〔典侍〕押し開い

源氏　どうぞあけてお入りあそばせ　あとを続けて歌ったのも　普通の女とは勝手が違う感じだ

て来ませ」と、うち添へたるも、例に違ひたるここちぞする。

立ち濡るる人しもあらじ東屋に

うたてもかかる雨そそきかな

と、うち嘆くを、われひとりしも聞き負ふまじけれど、うとましや、

いやになるな

何でこうまでしつこいのかと
何ごとをかくまではと、おぼゆ。
（源氏）一
人づまはあなわづらはし東屋の

まやのあまりも馴れじとぞ思ふ

このまま立ち去ってしまいたいが　それもあまりそっけないかと
とて、うち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくやと思ひかへして、二人に従へば、すこしはやりかなるたはぶれ言など言ひかはして、これも、めづらしきここちぞしたまふ。

めずらしい経験だとお思いになる

頭の中将は、三この君のいたうまめだち過ぐして、常にもどきたまふがねたきを、四つれなくて、うちうち忍びたまふかたがた多かめるを、いかで見あらはさむとのみ思ひわたるに、これを見つけたるこちち、いとうれし。かかるをりに、すこしおどしきこえて、御心まどはして、五こりぬやと言はむと思ひて、たゆめきこゆ。風ひややかにうち吹きて、ややふけゆくほどに、〔二人とも〕少しとろとろしたかと すこしまどろむにやと見ゆるけしきなれば、〔中将が〕そっと やをら入り来るに、源氏君は、六とけてしも寝たまはぬ心なれば、ふと聞きつけて、この中将とは思ひ寄らず、七なほ忘れがた

いつも自分を非難なさるのがしゃくなので
何とかして現場を押えてやろうといつも思っていたところ
この場を
恐い思いをさせして　お困らせ申
これに懲りましたかと
すぐに

一（源氏）人妻（ほかに通う男のあるあなた）はもう事面倒です、あまり親しくすまいと思います。「人妻」「東屋のまやのあまり」、いずれも「東屋」の歌詞による。「まや」は、調子の上から「あづまや」の上を略したもの。

二（こうしたやりとりは）相手によることだから、（女に調子を合せて）すこし軽薄な冗談などを典侍と言いかわして。

三 源氏の君がひどくまじめぶった態度をひけらかして。

四（源氏自身は）何食わぬ顔で、こっそり人目を忍んで通われる所がたくさんあるらしいのを。

五（源氏に）油断をおさせ申す。しばらくじっと様子をうかがうのである。

六 気を許してお眠りになるような気分ではないので。典侍のような女が相手では、という含み。

七 いまだに（この典侍を）忘れがたく思っているという噂の。

八 修理職（皇居の修繕、造営をつかさどる役所）の長官。従四位下相当。「かみ」は、長官の意であるが、中宮、大膳、京、修理の四職の長官は正式には「大夫」というので、この字をあてた。

九 （若者が老女に忍ぶといった）こんな突拍子もない行いをして。

一〇 いい人の来ることははっきり分っていたはずなのに。「わがせこが来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」（『古今集』巻末の墨滅歌、衣通姫）による。「ささがにの」は、蜘蛛の枕詞。蜘蛛が現れるのは待つ人の来る前兆とされていた。

一一 年寄りのくせに、えらく気取って、色っぽい女で。

一二 ひどく気は動転していながらも、（闖入者が）このお方（源氏）をどんな目におあわせするつもりかと。

一三 （頭の中将に）しっかりと取りすがっている。

一四 何とも醜態だろうとお思いになって、躊躇なさる。

〔修理大夫のような〕年輩の人に面目ないので

くすなる修理の大夫にこそあらめとおぼすに、おとなおとなしき人に、かく似げなきふるまひをして、見つけられむことは、はづかしければ、（源氏）「やれ、厄介な あな、わづらはし。出でなむよ。もう帰るよ 蜘蛛のふるまひは、しるかりつらむものを、心憂くすかしたまひけるよ」とて、直衣ばかりを取りて、屏風のうしろに入りたまひぬ。中将、をかしきを念じて、〔源氏が〕引きめぐらされて 引き立てたまへる屏風のもとに寄りて、ごほごほとたたみ寄せて、わざと大げさに振舞ってあわてさせると おどろおどろしく騒がすに、内侍は、ねびたれど、いたくよしばみ、なよびたる人の、さきざきもかやうにて心動かすをりをりありけれど、馴れたものでいたから ならひて、いみじく心あわたたしきにも、これまでもこうしたことがあって何度も肝をひやす目にあって この君をいかにしきこえぬるかと、情けなさに わびしさに、震えながら ふるふふるふ、つとひかへたり。〔源氏は〕誰とも知られないで帰りたいと 誰と知られで出でなばやとおぼせど、しどけなき姿にて、冠などうちゆがめて走らむうしろで思ふに、後ろ姿を想像すると いとをこなるべしと、おぼしやすらふ。中将、いかでわれと知られきこえじと思ひて、ものも言はず、ただいみじう怒れるけしきにもてなして、太刀を引き抜けば、自分だと〔源氏に〕知られ申すまいと 様子をよそおって

一 お願い、あなた。人に懇願する時の呼び掛けの言葉。
二 中将の前にまわって拝んで手をすり合せるので。
三（中将が）こんなふうに全く別人のようによそおって。
四（中将は、正体を見破られて）しゃくに思いながらも。
五 まじめな話、一体正気の沙汰かね。うっかりふざけもできないね。
六（中将は、直衣を）しっかりつかんで、一向にお放ししない。
七 直衣の、所々縫い合せてない部分。
八 あなたの隠そうとなさる浮き名は洩れ出てしまうでしょう、引っ張り合ってこんなに断ち切れてしまった二人の仲から。「つつむ」は、衣の縁語。「中の衣」は、元来、男女の仲を意味する歌語で、ここでは二人の間の友情の意と、二人で引っ張り合った着物と、さらに直衣と単の間に着る袙の意の「中の衣」とを掛ける。

女、「あが君、あが君」と、向ひて手をするに、〔中将は〕あやうく吹き出しそうほとほと笑ひぬべし。好ましう若やぎてもてなしたるうはべこそ、さてもありけれ、
になる 凝って若づくりによそおっているうわべだけは
まあ何とか見られるが
五十七八の人の、うちとけてもの思ひ騒げるけはひ、恥も外聞も忘れてあわてふためいている様子も
美貌の えならぬ二十の若人たちの御なかにてものおぢしたる、いとつきなし。かうあらぬさまにもてひがめて、恐ろしげなるけしきを見すれど、なかなか
間にはさまれて恐ろしがっているのは
何とも格好がつかない
〔源氏は〕かえって
目ざとく〔中将だと〕しるく見つけたまひて、われと知りて、ことさらにするなりけりと、
馬鹿らしくなった
中将に違いないとご覧になると
をこになりぬ。その人なめりと見たまふに、いとをかしければ、太刀抜きたるかひなを腕とらへて、いといたうつみたまへれば、ねたきものから、えこらえきれずに堪へで笑ひぬ。「まことはうつし心かとよ。たはぶれにくしや。いどれで、この直衣着む」とのたまへど、つととらへて、さらにゆるしきこえず。「さらば、そちらも付き合いなさいもろともにこそ」とて、中将の帯をひきときて脱がせたまへば、〔中将が〕脱がじとすまふを、さからうのを
何かと強く引っ張るうとかくひきしろちにふほどに、ほころびはほろほろと絶えぬ。中将、
切れた

「つつむめる名やもり出でむ引きかはし

九 歌の「中の衣」（袒）の意味を生かして、「これを上に着たら、浮き名は隠れないことでしょう」の意。「紅の濃染めの衣下に着て上に取り着ばしるからむかも」――紅に濃く染めた衣を今まで下に着ていて（今まで秘かな関係だったのを）、今度それを上に着たならば、人にすっかり知れてしまうことだろう（『古今六帖』五）による。

一〇 あなたと典侍の仲まで世間に知れてしまうと承知の上で、のこのこやって来るとは、思いやりのないことですな（深く愛すればこそ世間には隠すものです）。「夏衣」は「着る」の枕詞、「着たる」に「来たる」を掛ける。中将の歌と、「うへに取り着ば……」の言葉に答えたもの。

源氏、典侍、中将と歌の応酬

一一 お恨みしても何のかいもありません、お二人次々にいらしてさっとお帰りになったそのあとでは。「恨み」に「浦見」、「かひ」に「貝」を掛ける。「浦」「貝」「立ち」「引き」「帰り」「なごり」、いずれも波の縁語。

一二 涙も涸れて悲しゅうございます。「別れてののちぞ悲しき涙川底もあらはになりぬと思へば」（『新勅撰集』巻十四恋四、読人しらず）による。

一三 荒かった波（頭の中将の乱暴）は何とも思わないけれども、その波を寄せさせた磯（中将を近づけたあなた）を、どうして恨まずにいられようか。

かくほころぶる中の衣（ころも）に
うへに取り着ば、しるからむ」と言ふ。君（源氏）、
一〇 かくれなきものと知る知る夏衣（ころも）
きたるを薄き心とぞ見る

と言ひかはして（歌を詠み交わして）、うらやみなきしどけない姿（恨みっこなしのしどけない姿）にお互いにされて引きなされて、みな出（揃ってお帰りになった）でたまひぬ。

君は（源氏）、いとくちをしく見つけられぬることと思ひ臥したまへり。内侍（ないし）は、あさましくおぼえければ（あきれたことと思ったので）、落ちとまれる（あとに残っていた）御指貫（さしぬき）、帯など、つとめてたてまつれり（翌朝）。（源氏に）お届けした

（典侍）一二
「うらみてもいふかひぞなきたちかさね
引きてかへりし波のなごりに
一三 底もあらはに」とあり。面無（おもな）のさまやと見たまふも憎けれど、わりなしと思へりしもさすがにて、（恥知らずなと）

（源氏）一三
あらだちし波に心は騒がねど

（昨夜）途方に暮れていたのもさすがに気の毒なので

寄せけむ磯をいかがうらみぬ

とのみなむありける。帯は、中将のなりけり。一わが御直衣よりは色深しと見たまふに、端袖もなかりけり。あやしのことどもや、おり（見苦しいことだな）立ちて乱るる人はむべをこがましきことも多からむと、いとど御心（女遊び）をさめられたまふ。中将、宿直所より、「これまづ綴ぢつけさせたまへ」とて、〔端袖を〕おし包みておこせたるを、いかで取りつらむと、心やましく。四この帯を得ざらましかばとおぼす。五その色の紙に包みて、（源氏）なか絶えばかことやおふとあやふさに

はなだの帯は取りてだに見ず

とて、やりたまふ。たちかへり、（中将）

「君にかく引き取られぬる帯なれば

かくて絶えぬるなかとかこたむ

えのがれさせたまはじ」とあり。日たけて、おのおの殿上に参りたまへり。〔源氏は〕いと静かに、もの遠きさましておはするに、頭の君もいと

（いよいよ目重しになる人は）（なるほど醜態を演ずることも多かろうと）（立ちて乱るる人はなくてはという気になられる）（〔端袖を〕よこしたのを）（どうやって持って行ったのかと）（おもしろくない）（折り返して）（やはりあなたの責任です）（〔源氏は〕すまして）（昨夜のことなどそ知らぬ顔して）（日が高くなってから）

一　直衣の帯は、直衣と同じきれで作るので、ご自分の直衣より色が濃いところから中将の帯だと分り、比べてみて、ふとご自分の直衣の端袖も切れていることに気づいた。直衣は、身分の低い方が色の濃いのを着用する。薄い方が老成した感じ、あるいは上品な感じになる。

二　袖は二幅であるが、身ごろよりの方の一幅に対して袖口の方の一幅をいう。

三　宮中の宿直所。頭の中将のそれは、規定では、校書殿の西の蔵人所町屋の北廂。（図録五参照）

四　この中将の帯を手に入れていなかったら（大変なところだった）と（源氏は）お思いになる。

五　（帯を）同じ色の紙に包んで。夏の直衣の色は、二藍（紅の上に藍をかけた中間色）あるいは縹（薄い藍色）である。

六　もし帯が中から切れたら文句を言われようかと（典侍との仲が絶えたら私のせいだと恨まれようかと、この縹の帯は手に取っても見ません。「石川の高麗人に　帯を取られて　からき悔する　いかなるいかなる帯ぞ　縹の帯の　中は絶えたる　かやるかやるか　中は絶えたる」（催馬楽、呂「石川」）による。「かこと」（恨み言）は、鉸具（帯についている金具）に掛けて帯の縁語。

七　あなたにこうして引き取られてしまった帯（典侍）ですから、こんな具合に絶えてしまった仲だとお恨みします。同じく「石川」の歌詞による歌。

をかしけれど、公事多く奏しくだす日にて、いとうるはしくすくよかなるを見るも、かたみにほほゑまる。人間にさし寄りて、「もの隠しは懲りぬらむかし」とて、いとねたげなるしり目なり。「などてか、さしもあらむ。立ちながら帰りけむ人こそ、いとほしけれ。まことは、憂しや世の中よ」と言ひあはせて、「とこの山なる」と、かたみに口がたむ。

奏上し宣下する　お互いについにやにやされる　(中将)　(源氏)　いや　そんなことはないよ　意気投合して　互いに口止めしあう

さてそののちは、ともすればことのついでごとに、言ひ迎ふるくさはひなるを、いとどものむつかしき人ゆゑとおぼし知るべし。女は、なほいと艶に怨みかくるを、わびしと思ひありきたまふ。中将は、妹の君にも聞こえ出でず、たださるべきをりのおどしぐさにせむとぞ思ひける。やむごとなき御腹々の親王たちだに、上の御もてなしのこよなきに、わづらはしがりて、いとことにさりきこえたまへるを、この中将は、さらにおし消たれきこえじと、はかなきことにつけても、思ひいどみきこえたまふ。この君ひとりぞ、姫君の御

〔この一件が〕　〔中将が〕話に持ち出す　〔源氏は〕いよいよあの厄介な典侍のせいと思い知りなさったであろう　典侍種なので　〔源氏は〕やれやれと逃げまわっておられる　葵の上　告げ口申さず　脅迫の材料　憚って　特に源氏にはご遠慮申し上げていらっしゃるので　絶対に〔源氏に〕圧倒され申すまいと　対抗意識をもやしておられる

頭の中将、その出自を自負して事ごとに源氏と競う

八　頭の中将がひどく折目正しくまじめくさっているのを見るにつけても。蔵人の頭は、奏上、宣下の取次ぎをする要職である。

九　人のいない時を見はからって、中将が側に寄って。

一〇　秘密主義はもうこりごりでしょう。

一一　えらく得意そうに横目でじろりとにらむ。「ねたげ」は、こちらが「ねたし」（しゃくだ）と思うような様子。こしゃくな感じで、というほどの意。

一二　せっかく忍んで来ながらそのまま帰った人こそ、お気の毒だ。

一三　（しかし）まじめな話。「女はままならぬ」ですね。「憂しや世の中」は引歌であるが、未詳。「世の中」は、男女の仲。

一四　ゆめゆめ他言無用。「犬上の鳥籠の山なるいさや川いさと答へよわが名もらすな」（『古今集』巻末、墨滅歌）。犬上は近江の国の郡名。「いさや川」まで序詞。いいえと答えて私の名をもらすな、の意。

一五　（桐壺帝の後宮の中で）身分の高い方々のお生みになった（ご兄弟の）親王方でさえ。

一六　帝の（源氏に対する）ご寵愛がこの上ないので。

一七　（左大臣のご子息たちのうち）この頭の中将だけが、葵の上とご同腹でいらした。

一（源氏と自分との違いは、相手が）帝の御子というだけのことではないか。

二 内親王腹の子息として、この上なく大切にされているからには。

桐壺帝
└┬─内親王
　└┬─左大臣
　　└┬─葵上
　　└─頭中将

三 けれども、わずらわしいので。省筆をことわる草子地。源典侍の話もその一つ、という含み。

七月、藤壺、弘徽殿を超えて立后　源氏、参議に昇進

四 后がお立ちになったようだ。物語作者として重大な国事に関する記述を遠慮して、ぼかした書き方。

五 参議の中国風の呼び方。太政官の大納言、中納言に次ぐ地位。閣僚に列したというに等しい。

六（東宮になられた場合の）政治的な後楯となるべき人がいらっしゃらない。

七 皇族が国政をおとりになる筋合ではないので。

八 后の地位におつきになるのは間違いないことです。帝の御母として皇太后になることをいう。

后（藤壺）
└┬─若宮
　└┬─東宮
　　└─弘徽殿女御
桐壺帝

ひとつ腹なりける。帝の御子といふばかりにこそあれ、われも、同じ大臣と聞こゆれど、御おぼえことなるが、皇女腹にてまたなくかしづかれたるは、何ばかり劣るべき際とおぼえたまはぬなるべし。人品 申し上げる中でも 帝のご信任の特に厚い父左大臣が 〔源氏に〕どれほどひけを取る 身分ともお思いになれないのであろう 非の打ちどころなく立派で 万事につけて申し分なく 不足な 人がらも、あるべき限りととのひて、何ごともあらまほしく、たら点のないお方だった このお二人の間のいろいろな張り合いは 不思議なほどだったひてぞものしたまひける。この御中どものいどみこそ、あやしかりしか。三されど、うるさくてなむ。

七月にぞ后四ゐたまふめりし。源氏の君、五宰相になりたまひぬ。帝、ご譲位あそばそうとのお心づもりが近くなって 〔ご譲位後は〕 東宮おりゐさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見六したまふべき人おはせず。御母かた、外戚は みな親王たちにて、源氏の公事七しりたまふ筋ならねば、母宮をだに せめて母宮を 〔后という〕押しも押されもせぬ地位におつけして 〔若宮の〕お力にと思し召すのであった 動きなきさまにしおきたてまつりて、つよりにとおぼすになむありける。弘徽殿八、いよいよお心おだやかでないのは いとど御心動きたまふ、ことわりなり。されど、「春宮の御世、ご治世も いと近うなりぬれば、疑ひなき御位なり。思ほしのどめよ」とぞ聞こえさせたまひける。げに、春宮の御母にて二十余年に

九（帝としても）引き超えてほかのお方を后にはなさりにくいことであることよと。

一〇 藤壺が、后として参内なさる。

一一 先帝の后腹の内親王で、（ご身分といいお美しさといい）玉が光を放つように申し分なく。

一二 せつない恋に悩む源氏には。

一三 み輿に召された藤壺のお姿も目に浮んで。后のご乗輿は、帝と同じ鳳輦、葱花輦などである（図録一三参照）。

一四 果てることもない恋の悩みに心も閉ざされる思いだ、遙かの高みにあのお方を仰ぎ見るにつけても。「雲居」は、空と宮中の意を掛ける。

一五 なるほど考えてみれば、どのように作り変えたなら、源氏に劣らぬ美しいお方がこの世にお生れになるというのだろうか。美しいお方であれば、源氏に似るのも当り前だ、の意。

一六 月と日が同じように空に輝いているように。同時に、「そらに通ふ」（暗合、偶然に一致する）意を掛ける。

藤壺腹の皇子の美しさ

なりたまへる女御をおきたてまつりては（さしおいては）、引き越したてまつりたまひがたきことなりかしと、例の（例によって）、やすからず世人（よひと）も聞こえけり。参りたまふ夜の御供に、宰相の君（源氏）もつかうまつりたまふ。同じ后と聞こゆるなかにも、后腹の皇女、玉光りかかやきて、たぐひなき御おぼえにさへものしたまへば、人もいとことに思ひかしづききこえたり。まして、わりなき御心には、御輿のうちも思ひやられて、いと（お噂申し上げた）（その上無類の帝寵をほしいままにしていらっしゃるお方として）（人々も格別丁重にご奉仕申し上げている）（お供申し上げなさる）（よ手も届かない気持がなさるので）（じっとしてはいられないほどである）ど及びなきここちしたまふに、すずろはしきまでなむ。

（源氏）一四
尽きもせぬ心の闇にくるるかな
雲居に人を見るにつけても

（独り言が口をついて出て）（何かひどくせつない思いがする）

とのみ、ひとりごたれつつ、ものいとあはれなり。

皇子（みこ）は、およすけたまふ（成長なさる）月日に従ひて（つれて）、いと見たてまつり分きが（源氏とお見分けしにくいほど似ていられるのを）たげなるを、宮いと苦しとおぼせど、思ひ寄る人なきなめりかし。（藤壺は）（気づく人はいないのであろう）

一五げに、いかさまに作りかへてかは、劣らぬ御ありさまは、世に出でものしたまはまし。一六月日の光の空に通ひたるやうにぞ世人も思へる。

花宴（はなのえん）

二月の二十日過ぎ、南殿の桜の宴が催された。源氏の舞や詩は、際立ってすぐれ、人々の礼讃の的である。これを見た弘徽殿の女御は憎しみを募らせ、藤壺の宮は秘かな思慕に世間を憚る思いを深めている。

その夜、酔い心地に、大胆にも藤壺との逢瀬を求めて禁中をさまよう源氏は、たまたま戸口の開いていた弘徽殿の細殿に忍び入り、折しも、あでやかな声で「朧月夜に似るものぞなき」と歌いながら来る女と契ってしまう。短い春の一夜、女の名前も聞かぬうちに扇だけをしるしに交わして、あわただしく別れねばならなかった。翌日、源氏は、腹心の家来惟光らに、その素姓を探らせ、相手は右大臣の息女、弘徽殿の女御の妹らしいことを突きとめた。が、政界で対立する右大臣家との関係を思うと、容易に積極的な行動に踏み出せない。

一月経って、三月二十日過ぎ、源氏は右大臣邸の藤の花の宴に招かれ、そこで、ようやく目指す女に再会することができた。源氏二十歳の春のことである。

二条の院では紫の上が美しく成長し、正室葵の上との仲は相変らず冷たかった。巻名は、冒頭の南殿の桜の宴に由来し、前巻、紅葉賀の巻と春秋の宴を対にした趣向になっている。両巻とも、晴れの場における源氏の声望はいよいよ高く、一方、東宮を擁する右大臣家の勢力も増すなかで、この巻は、政敵の姫と恋に陥るいきさつをえがき、危険な予感にも充ちている。

一　紫宸殿の前にある左近の桜の宴。
二　中宮（藤壺）と東宮の御座を、玉座の左（東―東宮）右（西―中宮）にしつらえて。藤壺立后のことは紅葉賀（四四頁）に見える。東宮は弘徽殿の女御腹。後の朱雀院。

南殿の花の宴に、源氏、頭の中将、詩を作り、舞を舞う

「御局」は、ここでは御座所の周囲を几帳や屏風で囲って作ったもの。
三　韻字を頂戴して。「探韻」は、韻字（漢詩を作る時、韻を踏むために句の末に置く字）を書いた紙を入れた鉢を庭中に立てた文台の上に置き、一人ずつ手を入れて韻字を探り取り、詩を作ること。帝の御前で行うので「たまはりて」という。
四　源氏。「宰相」は、参議の中国風の呼び方。「宰相の中将」は、参議で近衛の中将を兼ねたもの。源氏が宰相に昇進したことは紅葉賀（四四頁）に見える。
五　左大臣の子息で、葵の上の兄。この時、蔵人の頭で近衛の中将。
六　人が、源氏を見たあと、自分（頭の中将）を見て、どう思うかと、大層気になるところだろうが。
七　清涼殿の殿上の間に上ることを許されない人々。殿上人に対する。この場には、そうした人々の中で、詩文に長じた者を召している。

二月

きさらぎの二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ。后、春宮の御局、左右にして、〔お二方が〕参上なさるまうのぼりたまふ。弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、ようにいられるのを上座にをりふしごとにやすからずおぼせど、おもしろからずお思いになるが物見にはえ過ぐしたまはで参りたまふ。としていらっしゃれずに

〔当日は〕

日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声も、ここちよげなるに、親王たち、上達部よりはじめて、詩文に長じた方はその道のは、皆、探韻たまはりて詩ふみつくりたまふ。宰相の中将、「春といふ文字たまはれり」と、頂いたのたまふ声さへ、例のように、例の、人に異なり。次に頭の中将、人の目移しもただならずおぼゆべかめれど、見苦しからず落着いていとめやすくもてしづめて、声づかひなど、そのあとに続く人々は堂々としてものものしくすぐれたり。さての人々は、皆、臆しがちにおじ気づいてげえない顔色の者が多いはなじろめる多かり。地下の人は、まして、帝、春宮の御才かしこ学才がす

一 作文（中国の詩を作ること）の道にすぐれた人々が大勢いられる頃なので。文運がさかんなことを示す言い方。中国風な考え方から、理想的な政治が行われている現れとされた。

二 ひろびろと晴ればれしいお庭。紫宸殿の南庭のこと。広く、白砂が敷きつめてある。

三 年取った博士らが、身装はみすぼらしく貧相なくせに、（専門の道なので）場馴れているのも帝はいとおしく思し召され。「博士」は、ここは文章博士（大学寮の教官で、歴史、詩文を教授する）。

四 （そうした源氏以下の態度を）いろいろご覧になるのは、（帝にとって）興味深いことであった。

五 春鶯囀（唐楽の名）。はじめ長寿楽、のちに天長宝寿楽と名づけられた。女舞である。（図録七参照）

六 源氏が紅葉の賀に青海波を舞ったこと。（紅葉賀一四頁参照）

七 舞の時、冠の後方に挿す花。ここは桜であろう。

八 葵の上に冷淡なのを恨む気持も忘れて。

九 唐楽。女舞で、桓武天皇の時伝来したが、間もなく絶えたといわれている。（図録七参照）

一〇 （帝から）御衣を頂いて。「御衣」は、ここでは袍の下に着ている袿。身近に着けるものを下賜されることを、もっとも名誉とした。

くすぐれていられるうえに（一）かかる方にやむごとなき人多くものしたまふころなるに、はづかしく（気おくれして）（二）はるばるとくもりなき庭に立ち出づるほど、はしたなくて、やすきことなれど（何でもないことなのに）（三）苦しげなり。年老いたる博士（はかせ）どもの、（四）なりあやしくやつれて、例馴れたるも、あはれに、さまざま御覧ずるなむ、をかしかりける。

楽（がく）ども（舞楽などは）などは、（帝は）さらにもいはずととのへさせたまへり。（帝は）改めていうまでもなく万端ご用意なさっている）やうやう入り日になるほど、春のうぐひす（五）さへづるといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉（六）の賀のをり、おぼしいでられて、春宮（とうぐう）、かざしたまはせて（七）、切に（しきりにご所望になるので）責めたまはするに、（ご下賜になって）のがれがたくて、立ちて、のどかに、袖かへすところをひとをれ（ひとさし）、けしきばかり（まねごとのように）舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左の大臣（おとど）（八）、うらめしさも忘れて、涙落したまふ。「頭の中将（帝）、いづら（どうした）。遅し（早く）」とあれば、柳花苑（りうくわゑん）（九）といふ舞を、これは今すこし過ぐして（念入りに）、かかることもやと（こういうこともあろうかと）心づもりしていたのけむ、いとおもしろければ、御衣（ぞ）（一〇）たまはりて、いとめづらしきこと

に人思へり。上達部皆みだれて舞ひたまへど、夜に入りては、ことにけぢめも見えず。ふみなど講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえよみやらず、句ごとに誦じののしる。博士どもの心にもいみじう思へり。

（順序もなく）（巧拙の区別も）（御作を）（専門の学者たちもお見事だと思っている）

かうやうのをりにも、まづこの君を光にしたまへれば、帝もいかでかおろかにおぼされむ。中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづからおぼしかへされける。

（こんな晴れの催しの際も）（源氏）（〔一座の〕）（おろそかに）（〔源氏の姿に〕）

（藤壺）一六
おほかたに花の姿を見ましかば
つゆも心のおかれましやは

一七 御心のうちなりけむこと、いかで漏りにけむ。夜いたうふけてなむ、事果てける。

（行事は終った）

上達部おのおのあかれ、后、春宮帰らせたまひぬれば、のどやかになりぬるに、月いと明うさしいでてをかしきを、源氏の君、酔ひ

（退出し）（あたりが静まったところへ）

一一 出来上がって提出された詩を読み上げること。
一二 講師も一気に読み終えられず、一句読み上げるごとに、人々も吟じては賞めそやす。「講師」は、詩を読み上げる役の者。
一三 藤壺。「中宮」は、三宮（皇后、皇太后、太皇太后）のいずれをも称したが、のちには皇后のみをいう。
一四 東宮の御母女御（弘徽殿の女御）が、無性に源氏をお憎みになるのも解せないし。弘徽殿の女御が源氏を憎むことは、紅葉賀（一二頁）参照。
一五 自分（藤壺）が、こんなふうに思うのも情けない。「かう思ふ」は、前文に「御目のとまるにつけて」とあるように、ひそかに源氏にひかれていることをさす。
一六 特別ないきさつなしに、この美しい姿を見るのであったなら、何の気兼ねもいらないのに。「花の姿」は、眼前の桜花に源氏をよそえていう。「つゆ」は、ほんのわずかの意と「露」を掛ける。「花」と「露」、「露」と「置く」は縁語。
一七 藤壺がひそかに詠まれたはずの歌が、どうして漏れてしまったのだろう。作者が読者に直接説明する言葉（草子地）。人の話を語り伝える形式をとっている。

宴の後、源氏、弘徽殿の細殿で朧月夜の君に逢う

一八 「きさらぎの二十日あまり」の月である。夜半過ぎに出る。

一 清涼殿の宿直の人々。
二 手引きを頼むことになっている女房の局の戸口。源氏と藤壺の仲を仲介したのは王命婦。
三 このままではすまされないと。
四 弘徽殿の西廂。藤壺（飛香舎）の向い側に当り、女房の局が並んでいる。（図録五参照）
五 細殿の北から第三間にある戸口。細殿は間ごとに遣戸（引き戸）の出入口がある。
六 弘徽殿の女御は、（宴のあと）上の御局にそのまま参上されたので、（おもな女房たちもお供に上って）人少なな様子である。「上の御局」は、ここは「弘徽殿の上の御局」のこと。（一巻図録五参照）
七 細殿から奥（母屋）に通じる境にある枢戸。「枢戸」は、上下に枢（「戸まら」を「戸ぼそ」に差しこんで、回転させるしかけ）をつけて、開閉する戸。
八 「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜に如くものぞなき」（『新古今集』巻一春上、大江千里）の第五句「しくものぞなき」（まさるものはない）が、漢詩文風な表現なので、「似るものぞなき」と、やわらげて言ったものか。この歌を口ずさんだことから、この女性を、後世の読者は「朧月夜の君」と呼んでいる。
九 あなたが、夜更けの情趣をお分りになるというのも、私に逢うという並々ならぬ前世からの約束があるからだと存じます。第一、二句は、女が口ずさんでいた歌からいったもの。「入る月の」は、眼前の光景を言い、「月のおぼろ」は、女の誦した「朧月夜」に応

ごこちに、見過ぐしがたくおぼえたまひければ、（そのままでは立ち去りにくくお思いになったので）上の人々もうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたりを、（ひどく人目を忍んで）わりなう忍びてうかがひありけど、かたらふべき戸口も鎖してければ、（溜息をついて）うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口あきたり。女御は、上の御局にやがてまうのぼりたまひにければ、人少ななるけはひなり。奥の枢戸もあきて、（〔源氏は〕こんな油断から男女の間違いは起るのだ）人音もせず。かやうにて、世の中のあやまちはするぞかし、と思ひて、（〔細殿に〕そっと）やをらのぼりてのぞきたまふ。（女房たちは）人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、（美しい声の並の身分とは思えぬ人が）なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」と、（〔源氏は〕こちらの方に来るではないか）うち誦じて、こなたざまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、「あな、むくつけ。（〔源氏〕こわがることはありません）こは誰そ」とのたまへど、「何かうとましき」とて、

（源氏）九
深き夜のあはれを知るも入る月の
おぼろけならぬ契りとぞ思ふ

じ、「おぼろけならぬ」と転じてゆく。

一〇 私は、何をしても誰も咎めだてしませんから。源氏の自負の言葉。

一一 ふしあわせな私が、このまま（名乗らずに）死んでしまいましたなら、草むす墓を探してでも尋ね当てようとは思って下さらないのですか。「草の原」は、墓のこと。

一二 申しそこねました。「聞こえ」は、朧月夜に対する敬語。「文字」は、言葉の意。

とて、やをら抱きおろして、戸は押し立てつ。あまりの意外さにあさましきにあきれたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく、怖さに震えながら「ここに、人が人」と、のたまへど、（源氏）一〇「まろは、皆人にゆるされたれば、召し人をお寄せたりとも、なんでふことかあらむ。ただ忍びてこそ」とのたまふ声に、この君なりけりと聞き定めて、いささかなぐさめけり。わびしと思へるものから、なさけなくこはごはしうは見えじ、と思へり。酔ひごこちや例ならざりけむ、ゆるさむことはくちをしきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし。らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女はまして、さまざまに思ひ乱れたるけしきなり。（源氏）「なほ名のりしたまへ。いかでか聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりともおぼされじ」とのたまへば、

（朧月夜）一二 うき身世にやがて消えなば尋ねても
草の原をば問はじとや思ふ

と言ふさま、艶になまめきたり。（源氏）「ごもっともだことわりや。聞こえ違へたる文

一〇 枢戸
一一 とてもかわいらしくて風情がある
一二 人をお
一三 呼びになっても
一四 少しも困りませんよ
一五 源氏の君であったのだと分って
一六 恋心の分らぬ情のこわい女だと思われたくない
一七 いとは思っているものの
一八 世間知らずでなよやかで
一九 はねつけることも知らないのであろう「源氏は」
二〇 気が気でない
二一 このまま放してしまうのは心残りなところへ
二二 どうしてお便りができましょう
二三 これきりで終ろうとは
二四 よもやお思いではあるまい
二五 あだめいて優雅である
二六 ごもっともだ
二七 たが
二八 も

字かな」とて、

（源氏）「いづれぞと露のやどりを分かむまに
小笹が原に風もこそ吹け

迷惑にお思いになることでないなら　何の遠慮をしましょう
わづらはしくおぼすことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」とも言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふけしきども、しげくまよへば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取りかへて、出でたまひぬ。

言いも終らぬうちに　女房たちが　（源氏は）仕方なくて　証拠に

桐壺には、人々多くさぶらひて、おどろきたるもあれば、かかる帰りを　何とご熱心なお忍び歩きですこと　女房たちが大勢控えていて　目を覚ました者もいるので　源氏の朝を、「さもたゆみなき御忍びありきかな」とつきじろひつつ、そら寝をぞしあへる。入りたまひて臥したまへれど、寝入られず。をかしかりつる人のさまかな、女御の御おとうとたちにこそはあらめ、まだ世に馴れぬは、五、六の君ならむかし、帥の宮の北の方、頭の中将のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか、なかなかそれならましかば、今すこしをかしからまし、六は春宮にたてまつらむと

突つき合いながら　（源氏は）　弘徽殿　妹君たち　まだうぶなところを見ると　美人だということだが　六の君は東宮にさし上げようと心づもり

一　あなたのお住居はどこなのかと探している間に（あなたは誰なのかと尋ねている間に）、世間に噂が立って二人の仲がだめにならぬかと心配したのです。「露のやどり」は、女の歌に「消えなば」「草の原」とあったのに応じたもの。「風」は「露」を吹き散らすので、二人の仲を割くものに喩える。「露」「小笹が原」「風」は縁語。

二　（名乗って下さらないのは）ひょっとして、私をはぐらかすおつもりではありませんか。

三　（弘徽殿の女御が間もなく下がってくるので）上の御局にお迎えに上がったり、前もって下がってきたりする女房たちの気配がうるさくなってきたので。「まよふ」は、混雑すること。

四　源氏の宮中における宿所。（桐壺四〇頁参照）

五　美しい人だったなあ。以下「……教へずなりぬらむ」まで、源氏が寝られずにあれこれ思う内容。

六　大宰の帥（大宰府の長官）の宮。源氏の弟で、後に螢兵部卿の宮と呼ばれる親王。その「北の方」は、右大臣の女。次の「四の君」の姉であろう。

七　頭の中将があまり大切にしない四の君。「すさむ」は、心にとめて愛すること。帚木（四六頁）に、右大臣の姫君にあまり気がないことが見える。

八　かえって、その方々（帥の宮の北の方や四の君）だったら、もっと味わいがあっただろうに（人妻の方がおもしろかっただろうに）。

九　（相手が右大臣家の姫なので）事めんどうだし、

詮索しても（五、六の君の）どちらかなかなかはっきりしないであろう。

一〇 大きな宴会のあとに行われる小宴。

一一（後宴では）箏の琴の演奏をおつとめになる。「箏の琴」は、十三絃の琴。（図録八参照）

一二 昨日の花の宴よりも優雅で興が深い。昨日は公式行事で、地下の人も参加したが、今日は上流の貴族ばかりで、うちくつろいだ趣向が凝せるためである。

一三 あの有明の女君（朧月夜）が退出してしまうのではないかと、気もそぞろで。「有明」は、陰暦二十日過ぎの月。女に逢った時の情景、女の口ずさんだ歌の印象から、こう呼ぶ。

源氏、惟光らに命じて、朧月夜の身もとを探らせる

「そらにて」の「そら」は有明の縁語。

一四 源氏の家臣たち。「良清」は、播磨の守の息子。若紫の巻（一八六頁）で、明石の入道の噂をした人物であることが、須磨の巻（二四七頁）で明らかになる。「惟光」は、乳母子（一巻夕顔一二三頁参照）。

一五 内裏の北門、朔平門の異名。ここに、兵衛府の陣（詰所）がある。ここから車に乗る。（図録三参照）

一六 いずれも右大臣の子息で、弘徽殿の女御の弟たち。少将の相当位は正五位下。ここでは、名門の出身なので、位の方が高い。「右中弁」は、太政官の弁官局に属し、行政の実務を担う。正五位上相当。

一七 弘徽殿の女御ご一族のお車であろうと存じました。「あかれ」は、分れ、一派の意。

（六の君なら）気の毒なことになるなしていられるのに

こころざしたまへるを、いとほしうもあるべいかな、わづらはしう、尋ねむほどもまぎらはし、さて絶えなむとは思はぬけしきなりつるを、いかなれば、言通はすべきさまを教へずなりぬらむ、などよろづに思ふも、心のとまるなるべし。かうやうなるにつけても、まづかのわたりのありさまの、こよなう奥まりたるはやと、ありがたう思ひくらべられたまふ。

あれきりでうち切ろうとは思っていない様子だったが　文通の手だてを教えないでおいたのだろう　どうして　〔女に〕ひかれているからであろう　こんなことがあるにつけても　どこよりも奥まって慎み深いことよと　世にも珍しいと　藤壺あたりの様子は　つい比較してごらんになる

その日は後宴のことありて、まぎれ暮らしたまひつ。箏の琴つかうまつりたまふ。昨日のことよりも、なまめかしうおもしろし。藤壺は、暁にまうのぼりたまひにけり。かの有明、出でやしぬらむと、心もそらにて、思ひ至らぬ隈なき良清、惟光をつけて、うかがはせたまひければ、御前よりまかでたまひけるほどに、「ただ今、北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。御方々の里人はべりつるなかに、四位の少将、右中弁など急ぎ出でて、送りしはべりつるや、弘徽殿の御あかれならむと見たまへつる。け

〔源氏は〕忙しく一日をお過しになった　〔上の御局に〕　〔源氏は〕　万事に抜かりない　見張りをさせておかれたので　〔源氏が〕お　帝の御前から退出なさった時に　〔良清・惟光〕　退出しました　女御更衣の実家の人々がいました中に　送って行きましたのが　相当

一 どういうふうにして、姉妹のなかの何番目の姫君と確かめようか。以下「いかにせまし」まで、源氏の心中の思い。

二 それに、まだ相手の姫君の事情をよく見届けぬうちは、（六の君ならば、東宮妃に予定されていたりするから）事めんどうであろう。

三 もう何日も逢っていないから、さぞふさぎこんでいるであろうと、いじらしくお思い出しになる。

四 あの、証拠に取り交わした扇。朧月夜と契った証拠でもあり、再会の目印でもある扇。

五 「桜」は、桜色に塗ったものか。「三重がさね」は、檜の薄板八枚一組を三組重ねた檜扇。

六 濃い色に塗った方（片面）に、霞んでいる月を描いて、水に映してある図柄は。

七 （持つ人の）たしなみが、なつかしく偲ばれるほどに使い馴らしてある。

八 こんな思いは今までに味わったことがない、有明の月（女）の行方を途中で見失ってしまって。「有明の月」は、空にかかったまま夜が明けるので、こういう。

九 左大臣邸。正妻の葵の上がいる。

一〇 男の源氏が教育なさるのだから、少々男馴れしたところがあるかもしれないと思われる点が、気がかりである。草子地。姫君の教育は、ふつう、母親、乳母、女房が当る。

な方々らしい様子ははっきりしていまして

しうはあらぬけはひどもしるくて、車三つばかりはべりつ」と聞こゆるにも、胸うちつぶれたまふ。一いかにして、いづれと知らむ、父右大臣大臣など聞きて、ことことしうもてなさむも、いかにぞや、二まだ人

どんなものだろう

のありさまよく見さだめぬほどは、わづらはしかるべし、さりとて知らであらむ、はた、いとくちをしかるべければ、いかにせましと、

相手が分らぬままでいるのも　いかにも不本意なことだろうから　どうしたらよいかと

ご思案にあまって

おぼしわづらひて、つくづくとながめ臥したまへり。

紫の上が　どんなにさびしがっているだろう　ぼんやりもの思いにふけって横になっていられる

姫君、いかにつれづれならむ、三日ごろになれば屈してやあらむと、らうたくおぼしやる。四かのしるしの扇は、五桜の三重がさねにて、六濃きかたにかすめる月を描きて、水にうつしたる心ばへ、目馴れたれど、七ゆゑなつかしうもてならしたり。「草の原をば」と言ひしさまのみ、心にかかりたまへば、

よくあるものだが　〔朧月夜が〕

（源氏）八世に知らぬここちこそすれ有明の

月のゆくへを空にまがへて

〔扇に〕

と書きつけたまひて、置きたまへり。

取ってお置きになる

二（源氏が）この数日来の出来事のお話をなさった　**源氏、二条の院に帰り、紫の上の成長ぶりを見る**り。

三「貫河の瀬々のやはら手枕　やはらかに寝る夜はなくて　親さくる夫」――柔らかい手枕をして、うちとけて寝る夜もなく、親が遠ざける私の夫よ（催馬楽、律「貫河」）の一句。「貫河」の歌の、可憐な女の嘆きに、それとは正反対の葵の上の冷たさを思い、源氏自身のさびしさを漏らしたもの。ただし、左大臣は、「親さくる夫」ではなく、出て来て、娘の代りにもてなすという呼吸で、次の文が書かれている。

三 先日の花の宴が趣深かったことを。

四 この高齢で。「ここら」は、数多くの意。左大臣はこの時、五十四歳（澪標の巻からの逆算）。

五（桐壺帝までの間に）賢明な天子の御代四代を見てまいりましたが。

六 詩文がすぐれていて。「きやうざく」は、「警策」の字音語。儒教思想で、文章や音楽がすぐれているのは聖代のしるしとされた。　**源氏、左大臣邸に行き、左大臣と語る**

七 それぞれ（詩文、音楽、舞等）の専門の道で、すぐれた人が多いこの頃、その人々をあなたが残すところなく詳しく承知し、万全の準備をなさったせいです。才能ある者を埋れさせず、適所に能力を発揮させるのを政治の理想としていた儒教的立場からの礼讃の言葉。

大殿（〔源氏は〕）にも久しうなりにける、とおぼせど、若君（紫の上のことも気がかりなので）も心苦しければ、こしらへむとおぼして（慰めようと）、二条の院へおはしぬ。見るまに（〔紫上は〕見れば見るほど）、いとうつくしげに生ひなりて（成人して）、愛敬づき（利発な気立ては）、らうらうじき（まことに際立っている）心ばへ、いとことなり。飽かぬところなく（不足なところとてなくて）、わが御心のままに教へなさむとおぼすにかなひぬべし。男の御教へなれば、すこし人馴れたることやまじらむと思ふこそ、うしろめたけれ。日ごろの御物語、御琴など教へ暮らして出でたまふを（〔紫上は〕）、例のと、くちをしうおぼせど、今はいとよくしつけられてならはされて、わりなくはしたひまつはさず。

大殿には（葵の上は）、例の、ふとも（すぐにも）対面したまはず。つれづれとよろづおぼしめぐらされて、箏の御琴まさぐりて（手すさびに弾きながら）、「やはらかに寝る夜はなくて」とうたひたまふ。大臣わたりたまひて、一日の興ありしこと聞こえたまふ。「ここらの齢にて（〔左大臣〕）、明王の御代、四代をなむ見はべりぬれど、このたびのやうに、ふみどもきやうざくに、舞、楽、ものの音どもととのほりて、齢延ぶることなむはべらざりつる。道々の

ものの上手ども多かるころほひ、くはしうしろしめしととのへさせたまへるけり。翁もほとほと舞ひ出でぬべきここちなむしはべりし」と聞こえたまへば、〔源氏〕特に指図して用意したということもございませんで公事に、そしうなる物の師どもを、ここかしこに尋ねはべりしなり。よろづのことよりは、柳花苑、まことに後代の例ともなりぬべく見たまへしに、ましてさかゆく春に立ち出でさせたまへらましかば、世の面目にやはべらまし」と聞こえたまふ。弁、中将など参りあひて、高欄に背中おしつつ、とりどりにものの音ども調べ合はせて遊びたまふ、いとおもしろし。

捜したまでのことです　拝見しましたが　合奏していられる　楽器の調子を合せて

かの有明の君は、はかなかりし夢をおぼしいでて、いとものの嘆かしうながめたまふ。春宮には、卯月ばかりとおぼしさだめたれば、〔右大臣が〕四月頃に入内とお決めになっているので　〔朧月夜は〕やるせなくいとわりなうおぼし乱れたるを、男も、尋ねたまはむにあとはかなくはあらねど、いづれとも知らで、ことにゆるしたまはぬあたりにかかづらはむも、人わるく思ひわづらひたまふに、弥生の二十余日、

朧月夜は　夢のようにはかなかった逢瀬を思い出されて　源氏　お捜しになるのに手がかりがないわけではないが　どの姫とも分らないで　とりわけ自分をお認めにならぬご一族にかかわりあうのも　体裁の悪いことだと

一　この年寄りも、もう少しで舞い出しそうな心持がいたしました。尾張連浜主が、仁明天皇の承和十二年正月、百十三歳で、帝の御前で長寿楽を舞い、終って「翁とてわびやはをらむ草も木も栄ゆるときに出でて舞ひてむ」と詠んだ故事（『続日本後紀』）を踏まえている。長寿楽はこの時御感あって、天長宝寿楽と名づけられ、これが今の春鶯囀であるという（『教訓抄』）。

二　お役目として。源氏はこの時、宰相の中将。当時近衛府の官人が音楽や舞に携わるようになっていた時代的背景がある。

三　「そしう」は、古来意味のよく分らない語である。前後の文脈から、「すぐれた」の意か。

四　音楽の師。雅楽寮の歌師、舞師、笛師、唐楽師、高麗楽師、百済楽師、伎楽師、腰鼓師を総じていう。

五　花の宴に、頭の中将が舞った柳花苑の舞。その時、帝が御衣を賜ったことをいう。後世にまで残る典例になることは、儒教的立場から、もっとも名誉とされた。

六　まして、左大臣が感激のあまり舞い出されたら、聖代の面目でございましたでしょう。「さかゆく春」は、前にあげた尾張浜主の歌の句を踏まえている。

源氏、右大臣家の藤の花の宴に招かれ、朧月夜を探し当てる

七　左大臣の子息の左中弁と頭の中将。

八　簀子の高欄に背をもたせて坐りながら。（図録六参照）

九　右大臣家の競射会。「結」は、左右の競技者を一番ずつ組み合わすこと。

一〇　ほかの桜が散ったのちに咲けと教えられたのであろうか。「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし」――誰も見はやす人のない山里に咲いている桜花よ、いっそ、ほかの花が散った後に咲いたならよかったのに（『古今集』巻一春上、伊勢）による。

一一　弘徽殿の女御腹の内親王。女一の宮と女三の宮があり、次の六〇頁に見える。

一二　女子の成人式。はじめて裳を着け、髪上げをする。普通十二、三歳頃に行われた。

一三　前出五五頁（注一六参照）。

一四（まだお越し頂けませんが）わが家の藤の花が並の美しさなら、何で君のおいでを待ちましょうや、君をお迎えするにふさわしい美しさなのです。「花し」の「し」は強意の助詞。「花」は、暗に娘のことをいったもの。

一五　注一一にあげた弘徽殿腹の内親王たち。源氏には、異母姉妹に当るので、「なべてのさまには思ふまじ」という。

九 右の大殿の弓の結に、上達部、親王たち多くつどへたまひて、やがて藤の宴したまふ。花ざかりは過ぎにたるを、「ほかの散りなむ」とや教へられたりけむ、おくれて咲く桜二木ぞいとおもしろき。新しう造りたまへる殿を、宮たちの御裳着の日、みがきしつらはれたり。はなばなとものしたまふ殿のやうにて、何ごとも今めかしうもてなしたまへり。源氏の君にも、一日、内裏にて御対面のついでに、聞こえたまひしかど、おはせねば、くちをしう、ものの栄なしとおぼして、御子の四位の少将をたてまつりたまふ。

（右大臣）一四
わが宿の花しなべての色ならば
何かはさらに君を待たまし

内裏におはするほどにて、上に奏したまふ。「したり顔なりや」と笑はせたまひて、「わざとあめるを、早うものせよかし。女御子たちなども、生ひづるところなれば、なべてのさまには思ふまじきを」などのたまはす。御装ひなどひきつくろひたまひて、いたう

（桜の）一〇
（右大臣は）一一
（源氏は）一二
（帝）一三
（源氏は）一四
一五

お集めになって　続いて　美しく飾りつけられたのである　はなやかに暮してお　家風で　派手好きでいらっしゃる　いでになる　お誘い申し上げなさったが　おいでがないので　残念に　催しばえが　しないと思われて　お迎えにさし上げられた　父帝に　得意然とした歌だね　早く行くがよい　赤の他人とは思っていないだろうよ　育っている邸だから　源氏は宮中にいられる時で

一「桜」は、桜襲（表白、裏蘇芳）、若い人が着る。「唐の綺」は、唐織で、錦に似た薄い絹。これを表にして、裏に蘇芳をつける。「直衣」は、貴族の平常着。二「葡萄染」は、赤紫色。「下襲」は、普通は束帯姿の時、半臂の下に着る衣。（図録九参照）三 下襲の背後の裾を長く引いて。直衣指貫に下襲を付けたやや改まった装い。「直衣布袴」という。（図録九参照）四「うへのきぬ」は、袍。束帯の表着。正装用。（図録九参照）五 皇子らしいお姿。ほかの人々の服装は、布袴姿であろう。右大臣家の私的な催しなので、朝廷の公式行事に着る束帯（袍、表の袴に下襲を着用した第一礼装）を一段略し、表の袴の代りに指貫を着用した、いわゆる布袴の礼装である。源氏は、さらにくつろいだ直衣布袴で、ただの臣下とは異なる身分を示している。（図録九参照）六 前頁に「宮たち」とあった方々。七 寝殿の東南の隅にある妻戸の戸口。源氏は、東の対（藤の花の宴のあった所）から、寝殿の東の簀子に来ている。八 簾（廂と簀子を仕切る）の下から出している女房の袖口。「押し出し」といって、儀式の時などにする。（図録七参照）九 正月、宮中で行われる行事。男踏歌と女踏歌がある。（一巻末摘花二七九頁注一六参照）

暮るるほどに、待たれてぞわたりたまふ。〔右大臣邸に〕

桜の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾いと長く引きて、皆人は

四 うへのきぬなるに、あざれたる五おほきみ姿のなまめきたるにて、いずかれてお入りになるご様子は 優雅な様子で

つかれ入りたまへる御さま、げにいと異なり。花の美しさも圧倒されて

かえって興ざましに見えた 管絃の遊びなど

れて、なかなかことざましになむ。遊びなどいとおもしろうしたまひて、夜すこしふけゆくほどに、源氏の君、いたく酔ひなやめるさ

見せかけなさって それとなく

まにもてなしたまひて、まぎれ立ちたまひぬ。寝殿に、女一の宮、

〔長押に〕

女三の宮のおはします、東の戸口におはして、寄りゐたまへり。藤

寝殿の東側の角に

はこなたのつまにあたりてあれば、御格子ども上げわたして、人々

〔御簾際に〕女房

たちが出ていた 派手に押し出しているのを

出でゐたり。袖口など、踏歌のをりおぼえて、ことさらめきもてい

時のような感じで

不似合いだと

でたるを、ふさはしからずと、まづ藤壺わたりおぼしいでらる。「な

〔源氏〕

気分が悪いところへ ひどくお酒を無理強いされて 弱っています

やましきに、いといたう強ひられて、わびにてはべり。かしこけれ

恐縮ですが

ど、この御前にこそは、陰にも隠させたまはめ」とて、妻戸の御簾

〔女房〕まあ 困りますわ

を引き着たまへば、「あな、わづらはし。よからぬ人こそ、やむど

一〇 この内親王のお前に、おかばい頂きたいものです。「陰に隠す」という言葉遣いの裏に、「咲く花の下に隠るる人多みありしにまさる藤の陰かも」――藤原氏の庇護に頼る人が多いので、前よりも一層栄えて、藤の陰も広くなった（『伊勢物語』）という、藤原氏の興隆を皮肉る歌が考えられる。右大臣家は藤原氏。

一一 源氏が、妻戸口の御簾の中に上半身をさし入れなさると。ここは前出の「東の戸口」のこと。

一二 身分の低い者なら、高貴のご親戚を、何かと口実をつけて頼ってくると申しますが。あなたほどの方がこちらの庇護を求めるのはおかしい、の意。

一三 室内を匂わす香。ほのかに漂うのをよしとした。

一四 そこまでするのは、どうかと思われたが。「さ」は、以下に述べる源氏の色好みの行動をさす。

一五 「石川の　高麗人に　帯を取られて　からき悔する……」（催馬楽、呂「石川」）を、替え歌にして歌ったもの。扇を交換したことを匂わす。「からきめを見る」は、困っているの意。

一六 （帯ではなくて、扇とは）おかしな、一風変った高麗人ですこと。

一七 月の入るいるさの山のほとりでうろうろしています、ほのかに見た月が見えるかと思って。「あづさ弓」は「射る」の枕詞。今日の催しの弓の結にちなむ。「いるさ」の「いる」に「射る」を掛ける。「いるさの山」は、但馬の国（兵庫県）の歌枕。「月のかげ」は、女をたとえていう。

となきゆかりはかこちはべるなれ」と言ふけしきを見たまふに、重重しうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。一三 そらだきもの、いとけぶたうくゆりて、衣の音なひ、いとはなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひはたちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々もの見たまふとて、この戸口はしめたまへるなるべし。一四 しもあるまじきことなれど、さすがにをかしう思ほされて、いづれならむと、胸うちつぶれて、「扇を取られて、からきめを見る」と、うちおほどけたる声に言ひなして、寄りゐたまへり。「あやしくも、さまかへける高麗人かな」と答ふるは、心知らぬにやあらむ。答へはせで、ただ時々、うち嘆くけはひするかたに寄りかかりて、几帳ごしに手をとらへて、

（源氏）一七「あづさ弓いるさの山にまどふかな
ほの見し月のかげや見ゆると

（並々の）（若女房たちではなく）（上品で風情のある様子がはっきり分る）（衣ずれの音も）（ことさら派手な感じに振舞って）（奥ゆかしく深みのある雰囲気は欠けて）（当世風な派手ごのみのお邸で）（尊い内親王方がいて）（〔姫君たちも〕）（座を占めておられるのであろう）（どの姫だろうかと）（胸騒ぎして）（〔長押に〕）（わざとのんびりした声で言って）（〔女房〕）（事情を知らぬ人であろう）（吐息をつくけはいのする方に）

なぜでしょうか
何ゆゑか」と、当て推量でおっしゃると
おしあてにのたまふを、こらえきれないのであろう
え忍ばぬなるべし、

（朧月夜）
心いるかたならませばゆみはりの
月なき空にまよはましやは

と言ふ声、まさにその人である
ただそれなり。いとうれしきものから。

一　深くご執心のところなら、たとえ月が出ていなくても、道に迷ったりなさるでしょうが、月のない暗闇の夜でも、お通いでしょうに。つまりは、薄情なお心だから、そんなことをおっしゃるのです。「心いる」は、心が入る、物事に心をこめ、熱心になること。「いる」は月の縁語で、「射る」に掛ける。「ゆみはりの」は月の枕詞。

二　じつにうれしいのだけれども……。中途で、言いさした形。心にかかっていた女に再会できて、うれしいのだが、右大臣家の姫君ではあり、人目も多い場で、どうにもならないという気持を表す。

葵(あふひ)

この巻は、花宴の巻から二年のちの出来事が語られる。源氏二十二歳。物語に書かれない二年の間に、桐壺帝は譲位し、新帝朱雀院の即位、藤壺腹の皇子の立坊がある。源氏は近衛の大将に昇進している。

退位後、桐壺院は上皇御所で藤壺の中宮とともに閑雅な日々を娯しみ、源氏はいよいよ叶わぬ思いに苦しむ。上皇は源氏を東宮の後見役に定められた。

六条の御息所は、かねて源氏の冷たい態度に思い悩んでいたが、娘が斎宮に選ばれたのを機会に伊勢下向を決意する。賀茂の祭の御禊の日、行列に供奉する源氏の姿を一目見たいと、御息所は姿をやつして出かけてきた。折から、祭見物の葵の上一行と、車の場所を求めて争い、権勢を恃む葵の上方のために、御息所の車は無惨にも後ろに押しやられた。祭の当日、源氏は紫の上と同車して見物し、源典侍と歌のやりとりをする。巻名「葵」は、この時交わした歌の中に見える言葉である。

車争い以来、御息所の恨みは消えず、煩悶のあまり、魂もあくがれる心地に悩むうち、産褥の葵の上は執拗な物の怪に苦しむ。さかんな加持祈禱にようやく名乗り出た物の怪は御息所の生霊であった。葵の上は若君出産後、その物の怪のために亡くなった。源氏はいよいよ御息所をうとましく思った。

四十九日の喪に籠ったあと、源氏は二条の院に帰り、やがて美しく成長した紫の上と契りを結んだ。新年、源氏は左大臣邸を訪れ、あらためて左大臣や大宮の悲しみをそそるのであった。

一　御代替りがあってから後。桐壺帝が朱雀院に譲位したことをいう。紅葉賀の巻の終りに、「帝、おりゐさせたまはむの御心づかひ近うなりて」（四四頁）とあった。

二　（ご昇進により）ご身分の尊さも加わったためか。後文に「大将の君」とあるので、花宴の巻の宰相の中将から、近衛の大将に昇進したことが分る。

三　藤壺は、ご譲位後は前にもまして、いつも、まるで臣下の夫婦のように上皇のお側にいられるのを。

四　新しく后になった方。ここでは、弘徽殿の女御が朱雀院の即位によって皇太后になったので、すでにある后（藤壺の中宮）と区別していう。

五　藤壺腹の皇子。実は源氏の子。紅葉賀に、桐壺帝が「この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに」（四四頁）とあった。今は東宮として宮中におられる。

六　東宮の後見役の政治家のないのを、気がかりにお思い申されて。紅葉賀に「御後見したまふべき人おはせず。御母かた、みな親王たちにて、源氏の公事しりたまふ筋ならねば」（四四頁）とあった。

桐壺帝譲位し、源氏を東宮の後見にする

世の中かはりてのち、〔源氏は〕よろづもの憂くおぼされ（おっくうに思われ）、御身のやむごとなさも添ふにや、軽々しき御忍びありきもつつましうて、ここもかしこも（あちらこちら）、おぼつかなさの嘆きを重ねたまふ報いにや、なほ我につれなき人の（藤壺）御心を、尽きせずのみおぼし嘆く。今はましてひまなう、ただ人のやうにて添ひおはしますを、今后は心やましうおぼすにや、内裏にのみさぶらひたまへば、立ち並ぶ人なう心やすげなり。をりふしに従ひては、御遊びなどを、このましう、世の響くばかりせさせたまひつつ、今の御ありさましもめでたし。ただ春宮をぞ、いと恋しう思ひきこえたまふ。御後見のなきを、うしろめたう思ひきこえて、大将の君（源氏）によろづきこえつけたまふも、かたはらいたきものから、うれしとおぼす。

（なかなかお逢いできない嘆きの女君が）
（相変らず）
（藤壺は）寵を競う人がなくお気楽そうである（桐壺院は）
（不快に）
（管絃の御遊）
（趣向を凝らして）
（世間の評判になるほど盛大にお催しになって）
（ご在位中よりも）
（ご依頼なさるにつけても）
（源氏は）気の咎める思いはするものの

六条の御息所、伊勢下向を考える

一 ああ、そうそう。物語の途中で別の話題に移る時に用いる言葉。

二 六条に邸宅があるのでこう呼ぶ。夕顔の巻に「六条わたりの御忍びありきのころ」（一巻一二一頁）、若紫に「おはする所は六条京極わたりにて」（一巻二一六頁）、末摘花に「六条わたりにだに、離れまさりたまふめれば」（一巻二六七頁）とあった人である。「御息所」は、天皇、皇太子の妃で、皇子、皇女を産んだ人を呼ぶ。

三 前皇太子。皇太子のまま亡くなった方の呼称。後文（九八頁）によれば、桐壺院の兄弟。

四 伊勢の皇太神宮に天皇の名代として仕える未婚の内親王。内親王のいない時は女王（親王の子）が選ばれる。新帝即位のたびに交替することになっている。

五 斎宮がまだ幼くていらっしゃるのが気がかりだということを理由にして。賢木（一三七頁）の記事から逆算して斎宮はこの時十三歳。

六 私（桐壺院）の皇女たちと同列に考えているので。桐壺院の皇女は弘徽殿の女御の腹に女一の宮、女三の宮らがいる（花宴五九頁参照）。

七 どちらからいっても（前坊の遺志を思っても、桐壺院自身の気持を考えても）御息所を疎略にしない方がよかろう。

桐壺院
前坊 ═ 姫宮
六条御息所

一まことや、かの二六条の御息所の御腹の前坊三の姫宮、斎宮四にゐたまひにしかば、大将の御心ばへもいとたのもしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことづけて下りやしなましと、五かねてよりおぼしけり。院にも、かかることなむときこしめして、「故宮のいと層重んじてご寵愛なさったのやむごとなくおぼし時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるが、いとほしきこと。斎宮をも、この御子たちの列になむ思へば、七いづかたにつけても、おろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせて、かくすきわざするは、いと世の非難を受ければならぬぞもどき負ひぬべきことなり」など、御けしきあしければ、わが御こちにも、げにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため、はぢがましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさをきこしめしつけたらむ時と、恐ろしければ、かしこまりてまかでたまひぬ。

なったので
源氏
おきまりに
桐壺院
こういうことになっていると
前坊が大
並々の女と同じように扱っているらしいのが
六
院
伊勢に下ろうかと
御息所は
世間の
浮気をする者は
好き放題に
ご機嫌が悪いので
源氏は
恐れ入った様子で控えていられる
誰をも傷つけぬように扱って
恥になるようなことをせず
院女にとって
藤壺に対する不届きな恋のだいそれた一部始終を桐壺院が
お聞きつけになったならばと
恐縮のていで退出なさった

八 ずっとお年上なのをひけ目に思われて、おうちとけにならぬご様子なので。賢木（一三六頁）に御息所三十歳とあり、その時源氏は二十三歳で、七歳年長になる。

朝顔の姫君の態度

九 式部卿の宮の姫君。前に源氏が朝顔の花に付けて歌を贈ったことからこう呼ぶ。（一巻帚木八四頁参照）

一〇 どうかして、あの方（六条の御息所）の二の舞はすまいと。

一一（今までは）形ばかりあったお返事も（近頃は）めったに来なくなった。

葵の上、懐妊

一二（葵の上は）おいたわしいお身体のご不調にお苦しみになって。悪阻に苦しむこと。

またかく院（桐壺院のお耳にも入りご訓戒があるにつけて）にもきこしめしのたまはするに、人の御名（御息所のご体面上も）も、わがた（ご自分に）とっても めも、すきがましういとほしきに、いとどやむごとなく、心苦しき（いかにも色好みらしくて見苦しいので）（申しわけない）（いよいよ捨ておけず）ことは筋には思ひきこえたまへど、まだあらはれては、わざともてなしき（表立っては）（正妻としてのお扱いをして）こえたまはず。女（御息所）も、似げなき御年のほどをはづかしうおぼして、（お上げにならない）心とけたまはぬけしきなれば、それにつつみたるさまにもてなして、（〔源氏は〕）（遠慮しているような態度をとって）院にきこしめし入れ、世の中の人も知らぬなくなりにたるを、深う（院のお耳に入り）（知らぬ人はなくなってしまったのに）しもあらぬ御心（〔源氏の〕）のほどを、いみじうおぼし嘆きけり。（〔御息所は〕）

かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じと深うおぼせば、はかなきさまなりし御返りなども、をさをさなし。さりとて、人憎く、はしたなくはもてなしたまはぬ御けしきを、君も、なほことなりとおぼしわたる。（すげなく）（気まずい思いをさせるようなおあしらいはなさらぬご様子を）（源氏）（やはり人とは違っているといつもお思いになる）（〔源氏の〕）

大殿（葵の上）には、かくのみ定めなき御心を、心づきなしとおぼせど、あ（おもしろくないと）まりつつまぬ御けしきのいふかひなければにやあらむ、深うも怨じ（大っぴらなご様子が）（お話にもならないからだろうか）きこえたまはず。心苦しきさまの御ここちになやみたまひて、もの

心細げにおぼいたり。〔源氏は〕めづらしくあはれと思ひきこえたまふ。誰も誰もうれしきものから、ゆゆしうおぼして、さまざまの御つつしみせさせたてまつりたまふ。かやうなるほど、〔源氏は〕いとど御心のいとまなくて、〔御息所を〕疎略に思われるわけではないがおぼしおこたるとはなけれど、とだえ多かるべし。

そのころ、斎院も下りゐたまひて、后腹の女三の宮ゐたまひぬ。帝、后、格別大切にいとことに思ひきこえたまへる宮なれば、筋ことになりたまふを、いと苦しうおぼしたれど、異宮たちのふさわしい方がさるべきおはせず、儀式など、規定の常の神事なれど、盛大な世間の騒ぎであるいかめしうのしる。祭のほど、限りある公事に添ふこと多く、見所こよなし。〔斎院の〕ご人徳によると人がらと見えたり。御禊の日、上達部など数定まりてつかうまつりたまふわざなれど、おぼえことに、容貌ある限り、下襲の色、表の袴の紋、馬鞍までみなととのへたり。とりわきたる宣旨にて、大将の君もつかうまつりたまふ。かねてより、物見車心づかひしけり。一条の大路、所なく、むくつけきまで騒ぎたり。所々の御桟敷、心々にし尽くしたるしつ

休まる間も

声望が

格別で

美しい方ばかり

特別の

勅命で

源氏

見物の女車

こわいほどに

めいめい精いっぱい趣向を凝らした

源氏、斎院の御禊に供奉、世の評判となる

一（左大臣家では）どなたも皆うれしいものの、恐ろしく思われて。当時は、お産が無事にすまないことが多かったので、不吉な場合をもすぐに連想した。

二 安産を祈っての物忌（禁忌に触れぬよう、行動を慎むこと）をおさせ申し上げなさる。

三 賀茂神社に奉仕する未婚の内親王または女王。この斎院は系図未詳。

四 弘徽殿の大后腹の女三の宮。花宴の巻で裳着をされたとある方。（五九頁参照）

五 父桐壺院と母弘徽殿の大后。

六 神職という特別の身の上になられるのを。斎院に選ばれると、まず賀茂川で禊をし（初度の禊）、宮中の適当な場所（初斎院）で潔斎し、三年目の四月の祭の前に、再び賀茂川で禊をし（二度の禊）、祭の当日上賀茂、下賀茂両社に参拝して、以後、紫野の斎院にいて神事に奉仕する。

七 賀茂の祭。四月中の酉の日に行われる。

八 ここは二度の禊。

九 供奉の公卿などは、規定通りの人数で奉仕なさることになっているが。『延喜式』によれば、初度の禊には勅使の上達部は参議一人、参議二人の計四人である。

一〇 束帯の時、袍、半臂の下に着る衣服。後ろに裾を長く引く。馬上、歩行の際は帯に挟む。御禊の日は色色に染めたものを用いるという。（図録九参照）

一一 束帯の時、大口袴の上に着用する袴。「紋」は、模様。
一二 ご奉仕なさる。源氏はこの時参議兼大将である。
一三 宮中の初斎院から賀茂川原への道筋に当る。
一四 見物のため仮設した床の高い建物。ここは、貴人が各自に作ったもの。
一五 見物の女房が簾の下から押し出している袖口まで。「押し出し」といって、晴れの場で女房が簾の下から袖口の重なりを押し出すこと。（図録七参照）
一六 お触れをお廻しになって。
一七（一条の大路に物見車が）びっしりと立ち並んでいるところへ。
一八 身分の高い女車がたくさん並んでいて。「女房車」は、女の乗っている車。
一九 身分の低い者のいない場所をそれと決めて。
二〇 網代車。屋形、天井を網代で張った牛車。「網代」は、檜や竹の薄板を斜めあるいは経緯に編んだもの。
二一 牛車の前後の簾の内側に掛け垂らす絹（図録一三参照）。下簾を垂れるのが女車のさまである。

飾りつけ 一五らひ、人の袖口さへ、いみじき見物なり。

大殿には、葵の上は祭見物などのご外出もかやうの御ありきもをさをさしたまはぬに、御ここちことなのでさへなやましければ、そのおつもりもなかったがおぼしかけざりけるを、女房たち若き人々、「いでや、どうもねえ私どもだけでひっそりと見物いたしますのはおのがどちひき忍びて見はべらむこそ、栄なかるべけれ。ご縁のない人おほよそでも人だに、今日の物見には、大将殿をこそは、みすぼらしい田舎者まで拝見あやしき山がつさへしようということだそうです見たてまつらむとすなれ。遠き国々より、地方から妻子を引き具しつつもまうで来なるを、あまりといえばあまりでございます〔葵上が〕御覧ぜぬは、いとあまりもはべるかな」と言ふを、大宮母宮きこしめして、「御ここちもよろしき隙なり。ご気分も少しよい折です さぶらふ人々もさお仕えしている女房たちもうざうしげなめり」とて、にはかにめぐらし仰せたまひて、見たまつまらなそうです ご見物なさるふ。

日が高くなってから日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまにて出でたまへり。お支度も改まったふうにはなさらずに隙もなう立ちわたりたるに、よそほしう引き続きて立ちわづらふ。よき〔葵上一行は〕美々しく何台も続いたまま場所を探しかねている女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めて、〔車を〕皆さし退けさするな使い古したのがかに、網代のすこしなれたるが、下簾のさまなどよしばめるに、い趣味がよくて〔乗り手は〕

たう引き入りて、〔下簾の端から〕少し見えるほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、着物の色目がものの色い
ときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。「これは、（従者）さらに、さやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」と、口ごはくて、手触れさせず。いづかたにも、若き者ども酔ひ過ぎ立ち騒ぎたるほどのことは、えしたためあへず。おとなおとなしき御前の人々は「かくな」など言へど、えとどめあへず。斎宮の御母御息所、ものおぼし乱るるなぐさめにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしつくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人もまじれれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。

美しくて　お忍びであることが　言い張って　押しのけたりしてよいお車ではないのだ　どちらの側でも　とても抑えることができない　年輩のご前駆の者たちは　そんな口をきかせるな　源氏の供人も　〔葵上一行に〕　〔御息所方を〕　仲裁するのも事めんどうなので　〔葵上方の〕　〔御息所は〕

つひに御車ども立て続けつれば、ひとだまひの奥におしやられて、ものも見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し

胸のおさまらぬことはもとより　微行の姿を自分だと　しゃくなことこの上もない

〔葵上方の〕　〔葵上方〕それ　くらいの者には　はっきり分る　〔このお車は〕

一　童女が晴れの時、上に着る衣服。女房の唐衣と裳に当る。（図録一〇参照）

二　そんなにするな。「かくなせそ」を省略した形。

三　（御息所方は）何げないふうをよそおっているが、（葵の上方は）自然に御息所の一行だということが分った。

四　大将殿（源氏）のご威光を笠に着ているのだろう。「豪家」は、権勢家の意。源氏の愛人である御息所に対する当てこすりの言葉。

御息所、屈辱にうちひしがれながら、源氏の晴れ姿を見る

五　副車。お供の女房などの乗る牛車。お供の人々に賜るものという意味で、こういう。

六　牛車の轅を乗せる台。（一巻図録一一参照）

七　とんでもない穀に轅を掛けてあるので。穀を俗に筒といい、車輪の中心にある筒形のもので、その中を軸が貫いている。元来榻に掛ける轅が車の筒に掛けてあるので、「すずろなる」という。

八　「行列がやってきた」の意の成語。

九　源氏の姿を見たいと思うが、ここは「笹の隈」でさえないからか、源氏が馬もとめず見向きもせずに通り過ぎられるにつけても。「笹の隈」は、笹の生い茂った物陰の意。「ささの隈檜の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」――檜の隈川に馬をとめて、しばらく水を飲ませてやって下さい、せめてあなたの後姿なりとも見たいのですから（『古今集』巻二十、神遊びの歌、日霊の歌）による。『古今集』の「ささの隈」は、古歌に「さ檜の隈」とあったのを訛ったもの。「さ檜の隈檜の隈川に馬とどめ馬に水かへわれよそに見む」（『万葉集』巻十二）

一〇　どの車もどの車も競うように、着物の裾や袖口の重なりが（派手に）こぼれ出ている下簾の隙々も。

一一　あの方のお姿をよそながら見るだけの今日の御禊見物だったが、冷たいお仕打ちにわが身の不仕合せがいよいよ思い知られる。「みたらし川」は、神社の近くを流れている川で、参詣者が手を洗い、口を漱ぐ川。「みたらし川」の「み」に「見」を掛ける。御禊にちなんで「みたらし川」を詠み込んだ。前出の『古今集』の「檜の隈川」「影をだに見む」を踏まえた詠み方。

折られて、すずろなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろく、（体裁が悪く）くやしう、何に来つらむと思ふにかひなし。（なんで出て来たのであろうと思うが後の祭だ）ものも見で帰らむとしたまへど、通り出でむ隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがに、つらき人の御前わたりの待たるるも、心弱しや。（薄情な方のお通りが待たれるのも）笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。（後悔されて）（人々）（〔御息所は〕見物もしないで）（かえって物思いの限りを尽される）

げに常よりも好みととのへたる車どもの、われもわれもと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほゑみつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のは、しるければ、まめだちてわたりたまふ。御供の人々うちかしこまり、心ばへありつつわたるを、おし消たれたるありさま、こよなうおぼさる。（趣向を凝らした）（〔源氏は〕何食わぬ顔だが）（すぐそれと分るので）（まじめな顔をして）（にやりとしながら）（〔源氏の〕）（敬意を表しながら）（〔御息所は〕）（たまらなくお思いになる）

（〔御息所〕）

かげをのみみたらし川のつれなきに
身の憂きほどぞいとど知らるる

と、涙のこぼるるを、人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御（〔お供の〕女房の見る目も恥ずかしいけれども）（まばゆいほどの）

さま、容貌の、一いとどしう、出栄を見ざらましかばとおぼさる。

〔供奉の人々は〕身分相応に　身なりを　ほどほどにつけて、装束、人のありさま、いみじくととのへたりと見ゆるなかにも、上達部はいと異なるを、二一所の御光にはおし消たれためり。三大将の御仮の随身に、四殿上の将監などのすることは常のことにもあらず、めづらしき行幸などのをりのわざなるを、今日は五右近の蔵人の将監つかうまつれり。六さらぬ御随身どもも、容貌、姿、まばゆいばかりの者どもを揃えて　まばゆくととのへて、世にもてかしづかれたまへるさま、〔源氏の〕木草もなびかぬはあるまじげなり。七壺装束などいふ姿にて女房の賤しか　世を捨てた者　女たち　らぬや、また尼などの世を背きけるなども、倒れ転びつつ、物見に出でたるも、例は、あながちなりや、あなにく、と見ゆるに、今日　いつもなら　よせばよいのに　ああいやらしい　無理もないと思われ　はことわりに、八口うちすげみて、髪着こめたるあやしの者どもの、九手をつくりて、額にあてつつ見たてまつりあげたるも、をこがましげなる賤の男まで、おのが顔のならむさまをば知らで笑みさかえたり。〔源氏が〕まるでお目をとめそうにもない　一〇何とも見入れたまふまじき、似而非受領の娘などさへ、心の限　どんなおかしな顔になっているのかも気づかず　問の抜けた　精いっぱい

一　一層、晴れの場でお引き立ちになるすばらしさを見なかったら、どんなに心残りなことだろうと（御息所は）お思いになる。

二　源氏お一方のご立派さには圧倒されてしまったようだ。

見物の人々、源氏を礼讃する

三　特別の儀式の折などに、近衛の大将に規定以外に臨時につく随身（護衛の武士）。規定では番長一人に近衛五人の六人。それに将監、将曹、府生を一人ずつ召し連れるのをいう（『花鳥余情』）。

四　六位の蔵人で近衛の将監を兼ねた者。蔵人は殿上を許され、帝の側近に奉仕する。将監は三等官。正六位上相当。

五　六位の蔵人で右近衛府の将監を兼ねた者。

六　そのほかの（源氏の）随身たち。規定による六人。

七　単を頭からかぶり、腰をひもでからげ、市女笠を着ける。婦人の外出姿。（図録一〇参照）

八　（年老いて）口もとがすぼみ、髪を着物の中にたくし込んだ賤しい女たち。壺装束の市女笠をかぶらぬ姿。

九　手を合せて、額に当てては源氏をお拝み申しているのも。

一〇　つまらぬ受領（国司）の娘などまでが。

一　いろいろとおもしろい見物だった。

二　桐壺帝の弟。朝顔の姫君の父。

三　目もまばゆいほど美しくなってゆくお顔立ちだな。以下「目もこそとめたまへ」まで、式部卿の宮が源氏の行列姿を見ての感想。

朝顔の姫君の自戒

四　神などは目をつけられるかもしれないと、気味悪くお思いになった。「もこそ……」は、危惧の気持を表す。あまり美しい者は鬼神などに魅入られるという俗信があった。（紅葉賀一二頁参照）

五　式部卿の宮の姫君。帚木に「式部卿の宮の姫君に、朝顔奉りたまひし……」（一巻八四頁）とあったのは源氏十七歳の時で、五年前のことになる。

六　（男の容姿が）かりに並々であっても、（あの手紙の主と思えば）心がひかれずにはいられないのに。

源氏、車争いのことを聞き、心を痛める

七　賀茂の祭の当日。斎院が賀茂の社に参拝する。

八　やはり惜しいことに、（葵の上は大家の姫君らしく）重々しくていらっしゃる方だのに。「なほ」以下「おぼしうむじにけむ」までの全文が源氏の心中の思い。

九　やさしい心遣いを交わし合うべきものだともお思いでないお考えをそのまま受けて。

飾り立てたり尽くしたる車どもに乗り、様子ぶってさまことさらび、心げさうしたるなむ、気取っているのをかしき様々の見物なりける。

〔源氏が〕

まして、ここかしこにうち忍びて通ひたまふ所々は、女君たちは人知れずのみ、数ならぬ嘆きまさるも、多かり。式部卿の宮、桟敷にてぞ見たまひける。いとまばゆきまでねびゆく人の容貌かな、神などは目もこそとめたまへと、ゆゆしくおぼしたり。姫君は、年ごろ聞こえわ

人数にも加えられぬ嘆きの添う方も

上げられる〔源氏の〕お気持が世の常の男性とは違うので

たりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、ましてかうしもいかでと、御心とまりけり。いとど近くて見えむま

どうしてこんなに美しいのかと

これ以上うちとけてお逢いすること

とまではお考えにならない

女房たち

〔源氏を〕

ではおぼしよらず。若き人々は、聞きにくきまでめできこえあへり。

祭の日は大殿にはもの見たまはず。大将の君、かの御車の所あらそひを、まねびきこゆる人ありければ、いといとほしう憂しとおぼして、なほ、あたら重りかにおはする人の、ものに情おくれ、すくすくしきところつきたまへるあまりに、みづからはさしもおぼさざりけめども、かかるなからひは情かはすべきものともおぼいたらぬ

葵の上

そのままご報告する

見苦しく

情けないと

何事にも

情がなく

そっけない

葵の上自身は

こうした妻妾の間柄は

ないところがおありになる結果

御心掟に従ひて、一次々よからぬ人のせさせたるならむかし、御息所は、心ばせのいとはづかしく、よしありておはするものを、いかにおぼしうむじにけむ、と、いとほしくて、まうでたまへりけれど、斎宮のまだ本の宮におはしませば、榊の憚りにことづけて、心やすくも対面したまはず。ことわりとはおぼしながら、「なぞや、かくかたみにそばそばしからでおはせかし」と、うちつぶやかれたまふ。

祭の当日は

今日は、二四条の院に離れおはして、祭見に出でたまふ。西の対にわたりたまひて、五惟光に車のこと仰せたり。「女房出で立つや」とのたまひて、姫君のいとうつくしげにつくろひたてておはするを、うち笑みて見たてまつりたまふ。「君は、いざたまへ。もろともに見むよ」とて、御髪の常よりもきよらに見ゆるを、かきなでたまひて、「久しうそぎたまはざめるを、今日はよき日ならむかし」とて、八暦の博士召して、九時問はせなどしたまふほどに、「まづ女房出でね」とて、童の姿どものをかしげなるを御覧ず。いとらうたげなる髪ど

奥ゆかしく　風雅でいらっしゃるのに　ご気風が　どんなに　〔御息所邸に〕　いやな思いをされたであろうか　〔御息所は〕　〔源氏〕　どうしたことだ　お二人ともよそよそしくなさらなくてもよいのに　もっともだとは　ついご不満もお口からもれる　紫の上方　紫の上　かわいらしげにおめかししていられるのを　〔源氏〕　一緒に見物しましょう　美しく　お切りにならないようだが　〔源氏〕　出ておいで　かわいらしい

一　段々と下々の者が起させた争いなのであろう。下々の者の中に不心得者がいたのであろうという意。

二　斎宮（御息所の姫君）がまだご実家におられるので。斎宮に卜定（占いで定められること）されると、宮中の初斎院に入り、そこで翌年七月まで潔斎の日を送るが、この時は何か事情があって、初斎院に入るのが遅れているのである。

三　（邸は）斎宮のいる清浄の地だから（男に逢うのは）憚られるという口実で。斎宮が卜定されると、勅使、神祇官が斎宮の邸に赴いて、その旨をつげ、お祓いをし、邸の四方、門などに木綿をつけた榊を立てるのでこういう。

四　源氏は（葵の上方に行かず）二条の院（源氏が母桐壺の更衣から伝領した里邸）にお一人でいられて。

五　源氏の乳兄弟。（夕顔一二三頁参照）

六　女房たちは見物に行くかね。「女房」とは、紫の上づきの童女たちを戯れに大人扱いしたもの。後出の「まづ女房出でね」も同様。

七　今日は吉日のはずだね。当時、陰陽道による風習で、髪を削ぐ（裾を切り揃える）のに吉日を選んだ。

八　暦博士。陰陽寮の職員。暦を作り、暦生（暦を専攻する学生）を教育する。

九　髪を削ぐ時刻の吉凶を調べさせなどなさる間に。

一〇 綾織に、糸を浮かせて模様を織り出したもの。
一一 身につける張袴（紅の平絹）の上に着用する袴。童女の正装。
一二 額から左右の頬にかけて垂れる髪。（図録一一参照）
一三 「髪が千尋まで伸びるように」と祝い言を申し上げなさるのを。「千尋」は、大層深いことや長いことをいう。髪の長いのは美人の徴とされた。
一四 紫の上の乳母。（若紫一九〇頁、一三三頁参照）
一五 際限もない深い海底に生える海松の伸びゆく末は（限りなく長い黒髪の伸びゆく末―紫の上の将来は）私だけが見届けよう。「海松ぶさ」は、房のように垂れた海松（海藻の一種）。黒髪の房々したさまを形容する。
一六 千尋とおっしゃるけれども、どうして分りましょう、今でさえ満ち干る潮のように定めなく落着いていらっしゃいませんあなたですのに。「千尋」の語を受けて、源氏の愛情の深さをたとえた。
一七 左近の馬場（一条、西洞院にある）の殿舎。五月三日、五日の騎射の日に中、少将の着座する所。斎院は紫野の野の宮から一条の大路を通り賀茂の社に参る。

源氏、源典侍に出会う

もの末はなやかにそぎわたして、浮紋の表の袴にかかれるほど、けざやかに見ゆ。（源氏）「君の御髪は、われそがむ」とて、「うたて、所狭くもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」と、そぎわづらひたまふ。（源氏）「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを、むげに後れたる筋のなきや、あまり情なからむ」とて、そぎ果てて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、少納言、あはれにかたじけなしと見たてまつる。

（源氏）はかりなき千尋の底の海松ぶさの
　　生ひゆくすゑはわれのみぞ見む

と聞こえたまへば、

（紫上）千尋ともいかでか知らむさだめなく
　　満ち干る潮ののどけからぬに

と、ものに書きつけておはするさま、らららうじきものから、若うをかしきを、めでたしとおぼす。

今日も、所もなく立ちにけり。馬場の大殿のほどに立てわづらひ

一　どのようにして手に入れられた場所なのだろうとしゃくに思いますので（お譲りいただきましょう）。

二　趣味のよい（絵を描いた）檜扇の端を折って。檜扇は檜の細長い薄板を列ねて作ったもの。その端を折り、次の歌を書いた。

三　つまりませんこと、ほかのお方がお頭におつけになっている葵だというのに（ほかのお方があなたと同車していらっしゃるのに）、男女が逢うのを神様もお許しになる今日という日を待ちもうけていたことでした。賀茂の祭の当日は、冠や車に葵を付けるので、「あふひ」に「葵」と「逢ふ日」を掛け、男女の契りを神も認める日だと言いなしたもの。

四　他人が注連を張っている中には入ってゆけません。「注連」は、一定の場所の占有を示すため、周囲に木を立て、縄を張り廻らして標識としたもの。神域には注連縄を張るので、祭の縁で用いた。

五　源典侍。（紅葉賀三四頁以下参照）

六　葵をかざして、今日の逢瀬を待っていたあなたの心はあてにならないと思われる、大勢の人に誰彼なしに靡く人なのだもの。「八十氏人」は、たくさんの氏族の人々の意。祭の縁でいう。「榊葉の香をかぐはしみ尋め来れば八十氏人ぞ円居せりける」（『拾遺集』巻十、神楽歌）

（源氏）て、「上達部の車ども多くて、もの騒がしげなるわたりかな」（駐車を）と、やすらひたまふに、よろしき女車の、いたう乗りこぼれたるより、扇をさし出でて、人を招き寄せて、「ここにやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」と聞こえたり。いかなるすき者ならむとおぼされて、所もげによきわたりなれば、引き寄せさせたまひて、「いかで得たまへる所ぞと、ねたさになむ」とのたまへば、よしある扇のつまを折りて、

（源典侍）「はかなしや人のかざせるあふひゆゑ
　　神のゆるしのけふを待ちける

注連の内には」とある手をおぼしいづれば、かの典侍なりけり。あさましう、旧りがたくも今めくかなと、憎さに、はしたなう、

（源氏）かざしける心ぞあだにおもほゆる
　　八十氏人になべてあふひを

女は、つらしと思ひきこえけり。

七 悔まれることに、（お逢いできるかと）葵を頼みにかざしていました、葵（逢ふ日）とは名ばかりで、空しい期待を抱かせる草葉に過ぎないものでしたのに。

八 先日（御禊の日）の源氏のご様子がご正装に威儀を正しておられたのに引き換え。

九 源氏と同車するほどの女人だから、きっと美人だろうよ。「けしうはあらじ」は、悪くはあるまいの意。

一〇（源典侍相手では）張合いのない「かざし問答」だなと。「かざし争ひ」は、「かざし」という言葉を詠みこんだ恋歌のやりとり。

一一 源氏の愛情はさめてしまったのだと、すっかりあきらめてはいらっしゃるが。

一二 あんなふうに（車争いの時のように）これ以上の恥はないほど、下々の者までが自分を見下げているらしいことも、心おだやかでなく。

六条の御息所の憂悶

一三「伊勢の海に釣する海士のうけなれや心一つを定めかねつる」――私の心は伊勢の海に釣をする漁師の浮きなのだろうか、あれこれ思い迷ってこの心一つを決めかねている（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）。御息所の伊勢下向にちなんでこの古歌を引き、下の句を効かせたもの。後の「御ここちも浮きたるやうに」も、この歌による。

（源典侍）七 くやしくもかざしけるかな名のみして
人だのめなる草葉ばかりを

と聞こゆ。人（女の人）とあひ乗りて、簾をだに上げたまはぬを、心やましう思ふ人多（女たち）かり。一日（ひとひ）の御ありさまのうるはしかりしに、今日はうちいだご様子でお出かけなさることだ乱れてありきたまふかし、誰ならむ、乗り並ぶ人けしうはあらじは

一〇 や、と、おしはかりきこゆ。いどましからぬかざし争ひかなと、さもの足りなくうざうしくおぼせど、かやうにいと面なからぬ人はた、人あひ乗りたまへるにつつまれて、はかなき御いらへも、心やすく聞こえむも、

一一 まばゆしかし。

御息所は、ものをおぼし乱るること、年ごろよりも多く添ひにけり。つらきかたに思ひ果てたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむは、いと心細かりぬべく、世の人聞きも人わらへにならむことなさるのは とおぼす。さりとて立ちとまるべくおぼしなるには、かくこよなきさまに皆思ひくたすべかめるも、やすからず、「釣する海士のうけ

（源氏を）この数年来よりも 伊勢に下向 女の人と 女たち 一日の御ありさまのうるはしかりしに 乱れてありきたまふかし 誰ならむ 乗り並ぶ人けしうはあらじは 〔女たちは〕 〔源氏は〕 源典侍のように 面なからぬ人はた 人あひ乗りたまへるにつつまれて その場限りのご返歌でも 気が引けて 気楽に 面映ゆいに違いない 世間の噂でも物笑いになるであろうとお気になさる きっとひどく心細いだろうし 京に留まるようなお気持になるためには

なれや」と、起き臥しおぼしわづらふけにや、御ここちも浮きたるやうにおぼされて、なやましうしたまふ。大将殿には、下りたまはむことを、もて離れてあるまじきことなども、さまたげきこえたまはず、「数ならぬ身を、見ま憂くおぼし捨てむもことわりなれど、今はなほ、いふかひなきにても、御覧じ果てむや、浅からぬにはあらむ」と、聞こえかかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もやなぐさむと、立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとど、よろづいと憂くおぼし入れたり。

ご気分も正気が失せたような　お悩みになっていられるせいか　御息所の伊勢下　源氏　感じがなさって　お具合が悪くていらっしゃる　向を　全くとんでもないことだなどとも　（源氏）　反対申し上げたりはなさらず　からんで申し上げなさるので　御禊の日の争いごとに

大殿には、御もののけめきていたうわづらひたまへば、誰も誰もおぼし嘆くに、御ありきなど便なきころなれば、二条の院にも時々ぞわたりたまふ。さはいへど、やむごとなきかたは、異に思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御なやみなれば、心苦しうおぼし嘆きて、御修法や何やなど、わが御方にて、多く行はせたまふ。もののけ、生霊などいふもの多く出で来て、さまざま

葵の上　〔源氏は〕ご外出　具合が悪い折なので　ご懐妊　〔源氏は〕　ご病気　おいたわしいことと　正体を現して

葵の上、物の怪に悩む

一　私のようなつまらぬ者を、相手にするのはいやだとお見限りになるのももっともではございますが、（ひとたび契りを結びましたからには）今はやはり、お話にならぬ者でも、最後まで添い遂げて下さるのが浅からぬ愛情というものでしょう。御息所の高貴の身分を立てた言い方。

二　思い決めかねていらっしゃるお気持も晴れることもあろうかと思って。前出の歌の下の句「心一つを定めかねつる」による。

三　ますます、何もかもとても情けなくつくづくと思いつめていられるのだった。

四　物の怪のためかと思われるご様子でひどくお苦しみになるので。葵の上につくので「御」をつけていう。

五　正室として重んずるという点では。

六　密教の加持祈禱。

七　左大臣邸における源氏のお部屋で。左大臣方とは別に源氏自身の志で行うもの。

八　「もののけ」は、死霊や妖怪。「生霊」は、現在生きている人の怨霊。

の名のりするなかに、人にもさらに移らず、ただみづからの御身に（葵の上ご本人）つと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなけれど、また、片時離るるをりもなきもの一つあり。いみじき験者（げんざ）どもにも従はず、執念（しふね）きけしき、おぼろけのものにあらずと見えたり。大将の君の御かよひ所、ここかしことおぼしあつるに、（女房たち）「この御息所（みやすどころ）、二条の君（紫の上）などばかりこそは、（源氏が）おしなべてのさまにはおぼしたらざめれば、怨みの心も深からめ」とささめきて、（正室に対する）もの（特別に）など問はせたまへど、さして聞こえあつることもなし。もののけとても、わざと深き御敵（かたき）と聞こゆるもなし。過ぎにける御乳母（めのと）（亡くなった〔葵上の〕）だつ人、もしは親の御かたにつけつつ伝はりたるものの、弱目（よわめ）に出で来たるなど、むねむねしからずぞ乱れあらはるる。ただつくづくと、音（ね）をのみ泣きたまひて、をりをりは胸をせきあげつつ、いみじう堪へがたげにまどふわざをしたまへば、いかにおはすべきにかと、ゆしう悲しくおぼしあわてたり。

九 憑坐（よりまし）にも一向に乗り移らず。憑坐は、物の怪や生霊を祈り伏せる時、霊を病人から駆り移すために側に置く人。多く子供や若い女がなる。（図録一五参照）

一〇 大層効験のある僧。「験者」は、加持祈禱をする僧の称。

一一（左大臣家で）見当をつけてごらんになるのに。

一二（左大臣家では）陰陽師（おんようじ）などに占わせてごらんになるが、これといって（誰の怨霊なのかを）申し当てることもない。

一三 重立ってたたる怨霊というのではなく、ばらばらと名乗り出る。これらは憑坐に駆り移されて、その素姓を名乗ったもの。

一四 葵の上は、たださめざめと声を上げてお泣きになるばかりで。以下すべて葵の上に憑いた物の怪のしわざである。

一 一層（亡くなられては大変だと）惜しまれる葵の上のお身の上である。

二 左大臣家の方では、それほどまでともお気づきにならないのだった。

源氏、御息所を見舞う

三 他所にお移りになって。斎宮のいられる御殿では仏法を忌むため、病気治療の加持祈禱を行うのは憚られるからである。

四 いつもと違った仮のお宿なので。ご自邸ではないので。

五 お気持もとけそうなほど（お上手な言い訳を）諄諄と申し上げなさって。

六 ご病人のご容態も、お訴えになる。「うれふ」は、哀訴すること。

桐壺院（お心を配って下さる有様が恐れ多いのにつけても）院よりも、御とぶらひ（お見舞）隙なく、御祈りのことまでおぼし寄らせたまふさまのかたじけなきにつけても、いとど惜しげなる人の御身なり。世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所（みやすどころ）はた（しろくなく）だならずおぼさる。年ごろ（今までは）はいとかくしもあらざりし（これほどでもなかった競争心なのに）御いどみ心を、（あの日のちょっとした車の場所争いに）はかなかりし車の所あらそひに、人の御心（御息所のお心に怨念がきざしたのを）の動きにけるを、二かの殿には、さまでもおぼし寄らざりけり。

（御息所は）かかる御もの（このようなご憂悶のせいで）思ひの乱れに、御ここちなほ（ご気分がどうしてもまだ普通でないように思われなさるので）例ならずのみおぼさるれば、三ほかにわたりたまひて、御修法（みずほふ）などせさせたまふ。大将殿（源氏）聞きたまひて、いかなる御ここち（ご容態かと）にかと、いとほしう（おいたわしく）、おぼし起して（やっと思い立たれて）わたりたまへり。四例ならぬ旅所（たびどころ）なれば、いたう忍びたまふ。心より（心ならず）ほかなるおこたりなど、五罪ゆるされぬべく聞こえ続けたまひて、なもご無沙汰していることなど）やみたまふ人の御ありさまも、うれへきこえたまふ。「みづからは（源氏）（私自身はさほど心配してもおりませんが）さしも思ひ入れはべらねど、親たちのいとことことしう思ひまどはるるが心苦しさに、かかるほどを見過ぐさむとてなむ。よろづをお（まことに一大事と思ってうろたえていられるのがお気の毒なので）（こういう折は他出を控えようと思いまして）（〔源氏は〕〔人目を〕）（何事も大らかに）

七　御息所が心とけたお相手をなさらぬまま明けてしまった早朝に。

八　おろそかにはできぬお方（葵の上）に、いよいよご愛情が増すに違いないことにもなったのだから。懐妊のことをさす。以下「心のみ尽きぬべきこと」までが、御息所の心中の思い。

九　こんなふうに（たまさかの源氏の来訪を）お待ち申しながら日を経るのも。

一〇（源氏のたまさかの訪れのために）かえって日頃の物思いが新たにされたようなお気持がしておられるところへ。

一一（源氏ご本人はお見えにならず）お便りだけが。

一二　見放しかねまして。「引きよく」は、避けて通る意。

一三　袖が濡れる泥田―涙にくれるつらい恋路―とは知りながら、その泥田に深入りするわが身が情けのうございます。「泥（こひぢ）」に「恋路」を掛ける。「田子」は、田を作る農夫。

こまごまとお話　お考え下さるお気持ならば
ぼしのどめたる御心ならば、いとうれしうなむ」など、かたらひき
し申し上げなさる　痛々しげな　〔御息所の〕
こえたまふ。常よりも心苦しげなる御けしきを、ことわりに、あは
無理もないことと　おいた　わしく　〔源氏は〕
れに見たてまつりたまふ。

七　うちとけぬ朝ぼらけに出でたまふ〔源氏の〕御さまのをかしきにも、なほふ
やはり振り切って遠くに行くのはやめようかとお考えになる
り離れなむことはおぼしかへさる。八やむごとなきかたに、いとど心
ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、一つ方におぼししづま
葵の上お一人に落着か　物思いをし尽すだけ
れるであろうに
りたまひなむを、九かやうに待ちきこえつつあらむも、心のみ尽きぬ
であろう
べきこと、一〇なかなかもの思ひのおどろかさるるここちしたまふに、
御文ばかりぞ、暮つかたある。
おさまっていると見えた容態が　〔源氏〕
日ごろ、すこしおこたるさまなりつるここちの、にはかにいとい
たう苦しげにはべるを、一二え引きよかでなむ。
いつもの口実だと　〔御息所は〕
とあるを、例のことづけと見たまふものから、
〔御息所〕　一三
袖濡るるこひぢとかつは知りながら
おりたつ田子のみづからぞ憂き

一「山の井の水」袖がしきりに濡れる」というのも道理でございます（あなたのお心が浅いのですもの）。「くやしくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水」――悔まれることにあの人を愛してしまった、あの人の愛情が浅いので、山の井の水を汲む時のように（涙で）袖が濡れるばかりだ（『古今六帖』一）を引く。

二 どうかと思われるところのある世の中だな。男女の仲はままならぬものだ、の意。

三 袖だけが濡れるとおっしゃるのはどんなものでしょうか。ご愛情の深からぬことと存じます。御息所の歌と、手紙の引歌の一句を取り上げ、次の歌で反論する。

四（「袖濡るる」とか「山の井の水」とかおっしゃるのは）あなたは浅い所に下り立っていられるからでしょうか、私の方は身まで濡れ通るほど深い泥の中（恋路）に入り込んでいますのに。

五 並々のことで、このお返事を直接お伺いして申し上げぬことがありましょうか。

御息所の霊、生霊となってあくがれ出る

よほどの事情があるのです。葵の上の容態が重いことを暗にいう。「や」は反語。

六 六条の御息所の亡き父大臣。賢木（一三六頁）にも、御息所の父が大臣であったことが見える。

七 悩みごとがあると、身体を離れてゆくという魂は。当時の俗信。「もの思へば沢の螢もわが身よりあ

一山の井の水もことわりに。

〔御息所の〕 何といっても大勢の女君のなかで

とぞある。御手は、なほここらの人のなかにすぐれたりかしと見た

〔源氏は〕

まひつつ、二いかにぞやもある世かな、心も容貌も、とりどりに捨つ

それぞれに何の取り柄もない人はなく

〔わが妻と〕 〔源氏の〕

べくもなく、また思ひ定むべきもなきを、苦しうおぼさる。御返り、

いと暗うなりにたれど、

（源氏）三袖のみ濡るるや、いかに。深からぬ御ことになむ。

四浅みにや人はおりたつわが方は

身もそほつまで深きこひぢを

五おぼろけにてや、この御返りを、みづから聞こえさせぬ。

などあり。

大殿には、葵の上

御息所の

この御生霊、六故父大臣の御霊などいふものありと聞きたまふにつけて、おぼし続くれば、身一つの憂き嘆きよりほかに、人をあしかれなど思ふ心もなけれど、七もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあら

〔御息所が〕 葵の上

そうもあろうかと

くがれ出づる魂かとぞ見る」（『後拾遺集』巻二十神祇、和泉式部）

八 これほどの苦しい思いをしたことはなかったが。「砕く」は、思い乱れること。このあたり敬語がなく、御息所の心中の思いをそのまま地の文とした書き方。

九 あの葵の上と思われる人が。以下「うちかなぐる」まで、御息所の夢の内容。

一〇 ほんとに（古歌に詠まれているとおり）、魂が身体から抜け出して行ってしまったのだろうかと。「身を捨ててゆきやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり」――身体を離れてどこかへ行ってしまったのだろうか、思いどおりにならぬものは自分の心なのだった（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）による。

一一 世間というものは、高貴の人のこととなると、よい噂は立てないものだから。「よさま」は、よきさま。

一二 どのようにでも言い立てることのできる格好の材料なのだと。

一三 それでさえ、他人のこととして聞いた場合には、罪障深く恐ろしいことだと思われるのに。

一四 そんな気味の悪い噂を立てられる宿縁の情けないこと。

むとおぼし知らるることもあり。年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれど、かうしも砕けぬを、はかなきことのをりに、人の思ひ消ち、なきものにもてなすさまなりし御禊ののち、ひとふしにおぼし浮かれにし心、しづまりがたうおぼさるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君とおぼしき人の、いときよらにてある所に行きて、とかく引きまさぐり、うつつにも似ず、たけくいかきひたぶる心いできて、うちかなぐるなど見えたまふこと、度かさなりにけり。あな心憂や、げに身を捨ててやいにけむと、うつし心ならずおぼえたまふをりをりもあれば、さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれは、いとよう言ひなしつべきたよりなりとおぼすに、いと名たたしう、ひたすら世に亡くなりてのちに怨み残すは世の常のことなり、それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを、うつつのわが身ながら、さるうとましきことを言ひつけらるる宿世の憂きこと、すべて、つ

（あれやこれやと物思いの限りをし尽してきたけれど）（自分を無視し）（相手がないがしろにあしらったと思われた）（その一件ゆえに）（理性をなくされたお心が）（美しい装いで）（烈しく猛いる所へ）（猛しいいちずな気持が湧いてきて）（あちこちいじり廻し）（荒々しく打ったりすると）（正気が抜けたように）（〔御息所は〕）（怨霊になるのは世間によくあることだ）（生きながらのわが身のまま）（それほどのことでなくても）（いかにも評判になりそうで）（もう死んでしまってから）（もう一切）（冷た）

一（源氏のことを思うまいと）思うのも、やはり物思いをしていることなのだ。ここは引歌。「思はじと思ふものを思ふなり思はじとだに思はじやなぞ」――思うまいと思うこともすでに物を思っていることなのだ、思うまいとも何故思わないのか（『奥入』に引く）。

二 斎宮は去年、宮中（の初斎院）に入られるはずだったのを。新帝即位後ただちに斎宮が卜定されると、まず賀茂川原で御禊（初度の御禊）をして、宮中に設けられた初斎院に入り、翌年秋、二度の御禊をして野の宮に入り、その翌年九月、桂川で御禊ののち伊勢に下向する。ここでは、去年初斎院に入るはずだったのが、いろいろ支障があって今年の秋になったというのである。前にも「斎宮のまだ本の宮におはしませば」（七四頁）とあった。

三 宮城外の浄野（清浄な野）に造る。斎宮が潔斎のため一年間こもる仮宮で、嵯峨野に設けられた。

四 二度の御禊の準備が、同じ今年の秋に重ねてなされねばならないのに。

五 斎宮奉仕の人はまことに重大事だと思って。神事は病気や死を穢れとして忌み避ける。

六 斎宮は仏事を忌むので、神道の祈禱であろう。

七 どうしても憑坐に駆り移されず、葵の上にとり憑いたままなので。

葵の上、出産近く、いよいよ物の怪に苦しむ

〔御息所は〕いと源氏のことなど気にもし申し上げまいと

れなき人にいかで心もかけきこえじと、おぼしかへせど、「思ふものを」なり。

斎宮は、去年内裏に入りたまふべかりしを、さまざまさはることありて、この秋入りたまふ。九月には、やがて野の宮にうつろひたまふべければ、ふたたびの御祓へのいそぎ、とりかさねてあるべきに、ただあやしくほけほけしうて、つくづくと臥しなやみたまふを、宮人いみじき大事にて、御祈りなど、さまざまつかうまつる。おどろおどろしきさまにはあらず、そこはかとなくて、月日を過ぐしたまふ。大将殿も、常にとぶらひきこえたまへど、まさるかたのいたうわづらひたまへば、御心のいとまなげなり。

〔御息所が〕奇妙にぼんやりして正体がなく思いに沈んで

〔御息所は〕どこが悪いということもなくて

ひどく苦しまれるというのではなく

源氏お見舞い申し上げなさるが

まださるべきほどにもあらずと、皆人もたゆみたまへるに、には〔左大臣家では〕出産の時期でもないと油断しておられたところ〔葵上は〕産気づかれて

かに御けしきありて、なやみたまへば、いとどしき御祈りの数を尽くしてせさせたまへれど、例の執念き御もののけ一つ、さらに動かず、やむごとなき験者ども、めづらかなりともてなやむ。さすがに

一段と効験のある

もっと大事な葵の上が

尋常のことではないともてあます

霊験あらたかな

八 物の怪の言葉であるが、とり憑いている葵の上の口を借りて言うので、周囲の人々にはその区別がつかない。それで「のたまふ」と敬語を用いる。

九 加持を止め、声を低めて。前に物の怪が「すこしゆるべたまへや」と哀願したのに応じたもの。

一〇 南無妙法蓮華経。八巻二十八品ある。

一一 お産の時は、産婦の衣服をはじめ、周囲の人々の装束、几帳、屏風等も白い絹を用いる。この句、次の「うち添へたるも」に掛る。女の寝姿は髪を結んで枕上に置く（図録一一参照）。

一二 こんなふうにつくろわないでいてこそ、かわいらしくあでやかな感じが加わって美しいのだと。普段の葵の上はあまりにも端麗でうちとけにくかったことが若紫（一巻二〇八頁）、紅葉賀（二一頁）などに見える。

一三 とてもだるそうに見上げて、じっと源氏をお見つめ申していられるうちに。以下、物の怪のせいで平素とは変った態度になる。

いみじう調ぜられて（調伏されて）、心苦しげに泣きわびて（痛々しげに泣き苦しんで）、「すこしゆるべたまへ（物の怪）や。大将に聞こゆべきことあり」（祈禱を）とのたまふ。「さればよ。ある（女房たち）やうあらむ（何かあるけがあるのでしょう）」とて、近き御几帳のもとに入れたてまつりたり。むげに限りのさまにものしたまふを、聞こえ置かまほしきこともおはするにやとて、大臣も宮（母宮）もすこし退きたまへり。加持の僧ども、声しづめて法華経を誦みたる、いみじう尊し。御几帳の帷引き上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに、見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しうおぼす、ことわりなり。白き御衣に、色あひい（色の対照がとてもあざやかで）とはなやかにて、御髪のいと長うこちたきを、引き結ひてうち添へたるも、かうてこそ、らうたげになまめきたるかた添ひてをかしかりけれと見ゆ。御手をとらへて、「あないみじ。心憂きめを見せた（源氏ほんとにひどいまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしうはづかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げて、うち

一　どうして夫婦の情に動かされぬことがあろう。

御息所の生霊、正体をあらわす

二　こうして自分（源氏）をご覧になるにつけ、もうこれきりかと残念にお思いになるのかとお考えになって。

三　また、たとえどうなっても、私たちの間柄なら、必ずふたたび逢える時があるとのことですから、きっとお目にかかれましょう。当時の俗信で、女は三途の川を渡る時、最初に契った男に背負われて渡ると言われていたから、そこで再会できるはずだという意。

四　（この世で親子の縁を結ぶほど）前世からの深い因縁のある間柄は、未来に転生を重ねても、切れはしないということですから。

五　悲しみにたえかね、（身から抜け出して）宙に迷っている私の魂を結び止めて下さい、下前の褄を結んで。古来、人魂を見た時、「魂は見つ主は誰とも知らねども結びとどめつしたがひのつま」――人魂を見た、その人魂の主は誰か知らないが、迷い出た魂を鎮めるために下前の褄を結びました、という歌を誦えて、男は左、女は右の褄を結んで三日たってから解くという（『袋草子』『拾芥抄』）。

まもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、〔葵上の〕いかがあはれの浅からむ。

〔葵上が〕あまりいたう泣きたまへば、心苦しき親たちの御ことをおぼし、また、一かく見たまふにつけて、〔源氏〕くちをしうおぼえたまふにやとおぼして、「何ごとも、そんなに深く思いつめなさるな いとかうなおぼし入れそ。大したことはありますまい さりともけしうはおはせじ。三いかなりとも、かならず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣、宮なども、四深き契りあるなかは、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむとおぼせ」と、なぐさめたまふに、〔物の怪〕「いえ、違うのです 私の身があらずや。身の上のいと苦しきを、楽にして下さいとお願いしようと思いまして しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。〔葵上方へ〕かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂は、わが身からさまよい出るものだったのですね げにあくがるるものになむありける」と、親しげな様子でなつかしげに言ひて、

五　嘆きわび空に乱るるわが魂を
　　結びとどめよしたがひのつま

とのたまふ声、けはひ、葵の上とは似ても似つかず その人にもあらず、かはりたまへり。いと

六 聞くに堪えないとお思いになって否定なさっていたが。

七 全く御息所その人のご様子なので。物の怪の乗り移った葵の上のしぐさが、源氏だけが知っている御息所独特の様子だったのである。

八 一時お苦しみがおさまったのかと思って。「隙」は、病苦の絶え間。

葵の上、男子出産

九 葵の上は人々に抱き起されなさって。当時のお産は坐位でする。（図録一一参照）

一〇（お産が無事だったのを）くやしがって大騒ぎする様子が。

一一 後産。胎児のあと、残った胞のおりること。

一二 言い尽せないほどの願をたくさん立てさせなさったせいか。「願」は、神仏に財宝の奉納を約束して、願いごとの叶えられるのを祈ること。

一三 延暦寺の天台座主。「山」は、比叡山をさす。「座主」は、一山の寺務を統べる最高の僧職。

一四（そのほか）誰それという尊い僧たち。

あやしとおぼしめぐらすに（源氏が）、ただかの御息所（みやすどころ）なりけり。あさましう（あきれはてて）、人のとかく言ふを（何かと噂するのを）、よからぬ者（下々の者たちが）どもの言ひ出づることと、聞きにくく（六）おぼしてのたまひ消（け）つを、目に見す見す（目の前にまざまざと）、世にはかかることこそ（こんなことが起るものなのだなと）はありけれと、うとましうなりぬ（いやな気持になった）。あな心憂（う）とおぼされて、「かくのたまへど、誰とこそ（誰だか分らぬ）知らね。たしかにのたまへ（はっきり名乗りなさい）」とのたまへば、ただそれなる（七）御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々（女房たち）近う参るも、（源氏は）かたはらいたう（具合悪く）おぼさる。

すこし（葵上の）御声もしづまりたまへれば、隙（ひま）（八）おはするにやとて、宮の御湯持（を）て寄せたまへるに（母宮が薬湯）、かき起こされたまひて（九）、ほどなく生まれたまひぬ。うれしとおぼすこと限りなきに、人に駆（か）り移したまへる御もののけども（憑坐）、ねたがりまどふけはひ（一〇）、いともの騒がしうて、後（のち）（一一）の事、また、いと心もとなし（心配だ）。言ふ限りなき願（くわん）ども立てさせたまふけにや（一二）、たひらかに事なり果てぬれば（後産も終ったので）、山の座主（ざす）（一三）、何くれ（無事に）、やむごとなき僧ども（一四）、したり顔に汗おしのごひつつ、急ぎまかでぬ。多くの

一 残る人なくお贈りになった産養の品々。「産養」は、産後の三日、五日、七日、九日目の夜に行う祝宴。親族や関係者が食物や子供の衣服を贈る。

御息所の妄執深まる

二 どうもおかしくて、正気が抜けたようなご気分をずっと辿ってごらんになると。

三 お召し物などもすっかり芥子の香が染み込んでいるのが不思議で。「芥子の香」は、物の怪退散を祈って護摩（祈禱の時燃す火）に焼いた芥子（邪気を払うとされる）の匂い。御息所が生霊となり葵の上のもとに行って、調伏の護摩をたかれたことの証拠になる。

四 髪をお洗いになり。「ゆする」は、髪を梳いたり洗うのに用いる湯。強飯を蒸したあとの湯という。

五 まして世間の人はどんな噂を立て、どう思うだろうなどと。「おぼし嘆く」に掛る。

六 ますますご錯乱もつのってゆく。

人の心を尽くしつる日ごろの名残、すこしうちやすみて、今はさりともとおぼす。御修法などは、またまた始め添へさせたまへど、まづは、興あり、めづらしき御かしづきに、皆人ゆるべり。院をはじめたてまつりて、親王たち、上達部、残るなき産養どもの、めづらかにいかめしきを、夜ごとに見のしる。男にてさへおはすれば、そのほどの作法、にぎははしくめでたし。

（心を痛めた幾日もの看病のあと／緊張がとけて／もう大丈夫と／楽しみで／もの珍しい赤児のお世話にかまけて／ほっとしていた／桐壺院／盛大なのを／見て大騒ぎする／産養の間の儀式は／豪華で）

かの御息所は、かかる御ありさまを聞きたまひても、ただならず。かねてはいとあやふく聞こえしを、たひらかにもはた、とうちおぼしけり。あやしう、われにもあらぬ御ここちをおぼし続くるに、御衣なども、ただ芥子の香にしみ返りたるあやしさに、御ゆする参り、御衣着かへなどしたまひて、こころみたまへど、なほ同じやうにのみあれば、わが身ながらだにうとましうおぼさるるに、まして、人の言ひ思はむことなど、人にのたまふべきことならねば、心ひとつにおぼし嘆くに、いとど御心がはりもまさりゆく。大将殿は、ここ

（心平らかでない／前には／危ないという噂だったのに／安産だとはまあ／試してごらんになったが／相変らず芥子の匂いがする／ほかならぬわが身ながらもいやなことと思われなさるのに／ばかりなので／〔ご安産に〕）

七（御息所を訪れないで）大層日数が経ってしまったのもお気の毒だし、そうかといって親しくお逢いすれば、どうだろう、きっといやな思いをするだろう、それではあの方にとってお気の毒だと、いろいろお考えになって。

左大臣方の安堵

八 葵の上のご病後が心配で、油断はできないと、どなたも（左大臣も大宮も）心配しておられるので。

九（神隠しにでもあうのではないかと）不安に思うほど美しくお見えになるご様子を。（七三頁注一四参照）

一〇 物ごとが思い通りになった気がして。源氏がお産の間、葵の上に尽してくれた上に長男の誕生に満足している様子を見て、この結婚は万事成功だと思う気持。

一一 あれほど重かったご病気があとを引いているのだろうと。「名残にこそは」は、「名残にこそはあらめ」を言いさした形。

源氏、参内の前に、葵の上とこしばしの別れを惜しむ

気持も少しほっとなさって

ちすこしのどめたまひて、何とも言いようのないあの時の〔生霊の〕あさましかりしほどの問はず語りも、心憂くおぼしいでられつつ、いとほど経にけるも心苦しう、また気近う見たてまつらむには、いかにぞや、うたておぼゆべきを、人の御ためいとほしう、よろづにおぼして、〔御息所のもとに〕御文ばかりぞありける。

いたうわづらひたまひし人の御名残ゆゆしう、心ゆるびなげに、誰もおぼしたれば、〔源氏は〕ごもっともと〔ご外出もなさらない〕ことわりにて、御ありきもなし。なほいとなやましげにのみしたまへば、〔葵上は〕例のさまにてもまだ対面したまはず。〔源氏は〕ふだんのようにも若君のいとゆゆしきまで見えたまふ御ありさまを、〔源氏が〕特別大今から、いとさま切にお世話なさることは

ことにもてかしづききこえたまふさま、一通りではないおろかならず。こと一〇あひたるここちして、大臣もうれしうありがたいといみじと思ひきこえたまへるに、ただこの御ここちおこたり果てたまはぬを、気がかりに心もとなくおぼせど、さ一一ばかりいみじかりし名残にこそはとおぼして、どうしていかでかは、さのみそんなに心配してばかりいらっしゃろうは心をもまどはしたまはむ。

若君の御お眼もとの愛らしさなどがまみのうつくしさなどの、春宮にいみじう似たてまつり

一（源氏が）ご覧申し上げなさっても。「たてまつり」は、若君に対する尊敬語。源氏がわが子を大切に思う気持が現れている。

二 まっさきに、東宮が恋しく思い出されなさるので。「させたまふ」は、東宮に対する最高敬語。

三（これでは）あまりにも（ご様子が分らなくて）気がかりな水くさいお仕打ちです。

四 殿様（源氏）の仰せの通り、ただもう（恋人同士のように）様子ぶっていらっしゃればよいお間柄でもございませんのに。「艶」は、風情のあること。

五 急に様子が変って、こまごまとものをおっしゃったことなどを。御息所の生霊が語り出したことをいう。

たまへるを、見たてまつりたまひても、まづ恋しう思ひ出でられさ[一]せたまふに、忍びがたくて、参りたまはむとて（宮中に）、「内裏（源氏）などにもあ[二]まり久しう参りはべらねば、いぶせさに（気になりますので）、今日なむ初立ち（初めて出かけま）しはべるを、すこし気近き（お側近くでお話し申したいものです）ほどにて聞こえさせばや。[三]あまりおぼつかなき御心の隔てかな」と、恨みきこえたまへれば、「げに（女房）、ただひとへに艶にのみあるべき御仲にもあらぬを、いたう衰へたまへり（ひどくおやつれになったとは申せ）といひながら、物越（几帳越しのご対面などとんでもない）にてなどあべきかは」とて、臥したまへる所に（源氏の）、御座近う参りたれば、入りてものなど聞こえたまふ。（葵上は）御いらへ時々聞こえたまふも、なほいと弱げなり。されど、むげに亡き人と思ひきこえし御ありさまをおぼしいづれば、夢のここちして、ゆゆしかりしほどのことどもなど（葵上に）聞こえたまふついでにも、かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、引きかへし、つぶつぶとのたまひしことども、おぼしいづるに心憂けれ（源氏）ば、「いさや、聞こえまほしきことといと多かれど、まだいとたゆげにおぼしためればこそ」とて、「御湯参れ」

几帳越しのご対面などとんでもない
お作りしたので
お返事を
もうすっかり駄目だとお思い申していた
危篤状態だった時の
時のご様子をお思い出しになると
全く息も絶えたようでいら
したのが
いやどうも
お話し申し上げたいことは
大儀そうなご気分のようですから
お薬を召し上がれ

六 長年、この方（葵の上）のどこに不足があると思っていたのだろうと。この時、源氏は葵の上と結婚して十年になる。

七 このようにして、隔てなく対面申せたなら。

八（男の私がお側に上がっては）ぶしつけかと。

九 いつものお居間にお移りなさい。

一〇 秋の司召があるということになっていたので。「司召」は、大臣以外の中央の官吏や地方官を任命する儀式。この頃は春秋二回あり、秋は京官のことが多かった。

一一 ご子息たちも（左大臣の）お引き立てを願われることがいろいろあって。

などといったことまでお世話申し上げなさるのを　覚えなさったのであろうと　女房たちは感心申し上げる

などさへあつかひきこえたまふを、いつならひたまひけむと、人々あはれがりきこゆ。

大層美しい人が　衰弱しやつれて

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかのけしきにて臥したまへるさま、いとらうたげに心苦しげなり。御髪の乱れたる筋もなく、はらはらとかかれる枕のほど、この世にまたとありがたきまで見ゆれば、年ごろ何ごとを飽かぬことありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ。「院などに参りて、いととうまかでなむ。かやうにて、おぼつかなからず見たてまつらばうれしかるべきを、宮のつとおはするに、ここちなくやと、つつみて過ぐしつるも苦しきを、なほやうやう心強くおぼしなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなしたまへば、かたへは、かくものしたまふぞ」など、聞こえおきたまひて、いときよげにうち装束きて出でたまふを、常よりは目とどめて、見いだして臥したまへり。秋の司召あるべき定めにて、大殿も参りたまへば、君達もいたはり望みた

不思議なほど思わずじっと見つめていられる　（源氏）院の御所にも　早々に退出して来ま

母宮がお側にいられるのに　遠慮して　やはり段々と元気をお出しになって　子供のように甘えていられるから　一つには　いつまでもよくおなりでないのです　美しく

〔葵上は〕　見送って　左大臣

一 左大臣のお側をお離れにならないので。司召の会議の首席は左大臣である。

葵の上、人々の留守中に、にわかに死去する

二 前出の「秋の司召」のこと。除目が正式の名称で、旧官を除き新官を目録に記入するところから、この名称がある。

三 天台座主。（八七頁注一二参照）

四 僧の官位で、僧正に次ぐもの。大僧都、権大僧都、少僧都、権少僧都の四段階があった。四位相当。

五 招くことがおできにならない。「請ず」は、請い招くこと。

六 ものにぶつかる。あわてふためく形容。

七 邸中が大騒ぎで。「ゆする」は、動揺する意。

八 お枕などもそのままにして。枕は魂の安息する所なので、その位置を動かすと、万一蘇生しようとしてもできないと信じられていた。

まふことどもありて、殿の御あたり離れたまはねば、皆ひき続き出でたまひぬ。

殿の内人少なにしめやかなるほどに、〔葵上が〕にはかに例の御胸をせきあげて、いといたうまどひたまふ。内裏に御消息聞こえたまふほどもなく、絶え入りたまひぬ。足を空にて誰も誰もまかでたまひぬれば、除目の夜なりけれど、かくわりなき御さはりなれば、みな事破れたるやうなり。ののしり騒ぐほど、夜中ばかりなれば、山の座主、何くれの僧都たちも、え請じあへたまはず。今はさりともと思ひたゆみたりつるに、あさましければ、殿の内の人、ものにぞあたる。所の御とぶらひの使など、立ちこみたれど、え聞こえつがず、ゆすりみちて、〔お身内の方々の〕大変なお悲しみは御もののけのたびたび取り入れたてまつりしをおぼして、御枕などもさながら、二三日見たてまつりたまへど、やうやうかはりたまふことどものあれば、限りとおぼし果つるほど、誰も誰もいとみじ。

（ひっそりしている頃に）（いつものようにお胸をつまらせて）（お苦しみになる）（足も地につかず）（内裏より）（お知らせ申し上げなさる間もなく）（よんどころないご支障なので）（万事ご破算になった）（誰それという）（大騒ぎになったのは）（ような具合である）（いくら何でももう大丈夫と安心していたのに）（あまりのことなので）（とてもお取次ぎできず）（ご弔問）（〔葵上を〕絶息おさせ申したことを）（死相がはっきりして）（もうこれまでとお諦めになる時は）（来られるので）（ほんとうに悲しい）

葵の上の葬送

九（葵の上の死という）悲しいことに、（御息所の生霊という）厭わしいことが加わって。

一〇 桐壺院におかれても、お嘆きあそばして、ご弔問なさるのが、こんな不幸にもかかわらず名誉なことなので、うれしいこともまじって。上皇からの懇切な弔問によって、葵の上がいかに重んじられていたかが分るので、こういう。

一一（悲しみの涙とうれし涙とで）絶えず泣いていらっしゃる。

一二 鳥部野に、葵の上のご遺骸をお送り申し上げる時は。「鳥部野」は、東山西南麓の火葬場のある所（夕顔一六二頁参照）。

一三 見るにたえない悲しいことが多かった。

一四 尽きせず悲しいというご弔問の言葉を。

一五 足も立たず這いまわっていることだ。「もごよふ」は、うねりながら行く意で、「匍匐逶蛇」（『神代紀』下）、「展転」（『大唐西域記』三）など、訓点語に例がある。

源氏大将殿は、悲しきことにことを添へて、世の中をいと憂きものに（男女の仲を）おぼししみぬれば、ただならぬ御あたりのとぶらひども、心憂しとのみぞ、なべておぼさるる。院におぼし嘆き、とぶらひきこえさせたまふさま、かへりておもだたしげなるを、うれしき瀬もまじりて、大臣は御涙のいとまなし。人の申すに従ひて、いかめしきことどもを、生きやかへりたまふと、さまざまに残ることなく、かつそこなはれたまふことどものあるを見る見るも、尽きせずおぼしまどへど、かひなくて日ごろになれば、いかがはせむとて、鳥部野に率てたてまつるほど、いみじげなること多かり。

（身にしみて思われたのでばかり）（深い仲の方々からの）（ご弔問も）（皆）（一〇）（一方では）（あれもこれも皆ためしてみて）（大がかりな祈禱をいろいろと）（ご遺骸がいたむ様子を目の前に見ながらも）（一一）（〔左大臣たちは〕）（何日にもなったので）（もはや仕方がないと）（一二）

こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もなし。院をばさらにも申さず、后の宮、春宮などの御使、さらぬ所々のも参りちがひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ。大臣はえ立ちあがりたまはず、「かかる齢の末に、若く盛りの子に後れたてまつりて、もごよふこと」と恥ぢ泣きたまふを、

（諸方からのご葬送）（藤壺）（そのほかの諸方のお使いも次々に参って）（一三）（一四）（先立たれ申して）（一五）

大勢の会葬者は
ここらの人悲しう見たてまつる。一夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、二いともはかなき御屍ばかりを御名残にて、暁深く帰夜明け前早くりたまふ。〔人の死は〕常のことなれど、三人一人か、あまたしも見たまはぬことなればにや、類ひなくおぼしこがれたり。八月二十余日の四有明なれば、空のけしきもあはれ少なからぬに、五大臣の闇にくれまどひたまへるさまを〔源氏が〕見たまふも、ことわりにいみじければ、六空のみながめられたまひて、

〔源氏〕七のぼりぬる煙はそれとわかねども
なべて雲居のあはれなるかな

左大臣邸
殿におはし着きて、〔源氏は〕つゆまどろまれたまはず。年ごろの御ありさまをおぼしいでつつ、八などて、つひにはおのづから見なほしたまひてむとのどかに思ひて、〔葵上の〕なほざりのすさびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ、九世を経て、〔自分を〕うとくはづかしきものに思ひて過ぎ果てたまひぬる、など、くやしきこと多くおぼし続けらるれ

一 夜通し、大層な騒ぎの盛大な葬儀であったが。
二 まことにはかないご遺骨しかあとに残らず。遺骨を壺に入れ、家臣が頸にかけて帰る。
三 （人の死に目に遭うのは）一人ぐらいか、その程度で、多くは経験なさらぬことだからであろうか。源氏は今まで、三歳の時に母、六歳の時に祖母に死別しているが、直接死に目に遭ったのは夕顔だけである。
四 有明月の頃なので。有明月は陰暦二十日過ぎの月、夜が明けても空にかかっている。
五 父左大臣が子に先立たれた悲しみに沈んで取り乱していらっしゃる様子を。「闇」は、「心の闇」のこと。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による。葬送には、父、夫、兄弟が行き、母は加わらない風習であった。
六 空ばかりが悲しく眺められなさって。「大空は恋しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ」――大空は恋しい人の形見でもないのに、なぜ物思いをするたびに悲しく眺められるのだろう（『古今集』巻十四恋四、酒井人真）による。
源氏、葵の上をしのぶ
七 （大空に）立ち昇った火葬の煙は、雲と混り合って、どれがその煙か分らないが、空一面がしみじみと眺められることだ。
八 どうして。「おぼえられたてまつりけむ」に掛る。
九 連れ添っている間中。

一〇 鈍色（濃いねずみ色。薄墨色ともいう）のお召し物。喪服。「にばむ」は、鈍色をしていること。

一一 葵の上は、喪服の色をもっと濃くお染めになることだろうとお思いになるにつけても、悲しみが迫って。夫の喪は重服（一年）で、濃い鈍色の喪服を着る。

一二 定りがあるので（妻の喪は軽服で三カ月）喪服は浅い薄墨色であるけれども、涙はたまって袖を淵としてしまった。「ふち」に「淵」と「藤」を掛ける。「藤」は「藤衣」（喪服）のこと。「浅し」は「淵」と縁語。色は浅いが悲しみは深いの意。

一三 仏の加護を念じて、仏名や経文を唱えること。

一四 「法界三昧」は、普賢大士（普賢菩薩）を礼讃する言葉。

一五 この子がなかったなら、何によって故人を偲ぶよすがにしようかと。源氏の心中の思い。「結びおきしかたみのこだになかりせば何にしのぶの草を摘まましし」（『後撰集』巻十六雑二、兼忠朝臣母の乳母）による。「かたみ」に「形見」と「筐」（竹で編んだ籠）、「こ」に「子」と「籠」を掛ける。

一六 一層涙の露にくれるが。「露けし」は、秋の縁でいう。

一七 この子までいなかったなら、どんなにさびしいことかと、気持をお慰めになる。「形見」は、前引の歌による。

ど、かひなし。一〇にばめる御衣たてまつれるも、夢のここちして、われ先立たましかば、一一深くぞ染めたまはましとおぼすさへ、

（源氏）一二限りあれば薄墨衣浅けれど

涙ぞ袖をふちとなしける

とて、一三念誦したまへるさま、いとどなまめかしさまさりて、経忍びやかに誦みたまひつつ、「一四法界三昧普賢大士」とうちのたまへる、行ひ馴れたる法師よりはけなり。若君を見たてまつりたまふにも、「一五何にしのぶの」と、一六いとど露けけれど、一七かかる形見さへなからましかばと、おぼしなぐさむ。

宮はしづみ入りて、そのままに起き上がりたまはず、あやふげに見えたまふを、またおぼし騒ぎて、御祈りなどせさせたまふ。はかなう過ぎゆけば、御わざのいそぎなどせさせたまふも、おぼしかけざりしことなれば、尽きせずいみじうなむ。なのめにかたほなるをだに、人の親はいかが思ふめる、ましてことわりなり。また類ひお

（左大臣家では）
（日数が）
（お命も）
（お唱えになるご様子は）
（源氏が）
（この場合は）
（姫君）
（母宮は悲嘆にくれて）
（七日ごとのご法事の準備など）
（悲しいことである）
（並み一通りのつまらない子でも）
（どんなにせつないだろう）
（ほかに）

がいられないのさえ　もの足りなく思っていらっしゃったのに

はせぬをだに、さうざうしくおぼしつるに、一袖の上の玉の砕けたりけむよりも、あさましげなり。

源氏

大将の君は、二条の院にだに、ほんのしばらくもあからさまにもわたりたまはず、

しみじみと心から

あはれに心深う思ひ嘆きて、行ひをまめにしたまひつつ、明かし暮らしたまふ。

お通い先の方々には

所々には、御文ばかりぞたてまつりたまふ。かの御息所は、斎宮は左衛門の司に入りたまひにければ、いとどいつくしき

厳重な

ご潔斎を理由にして　〔源氏は〕ご文通もなさらない

御きよまはりにことづけて、聞こえも通ひたまはず。憂しと思ひしみにし世も、なべてていとはしうなりたまひて、かかるほだしだに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなましとおぼすには、まづ

念願の出家姿にもなろうものをとお思いになるにつけては

さびしく過していらっしゃるであろう様子が

対の姫君の、さうざうしくてものしたまふらむありさまぞ、ふとおぼしやらるる。夜は、御帳の内にひとり臥したまふに、宿直の人々は近うめぐりてさぶらへど、かたはらさびしくて、「時しもあれ」と寝覚めがちなるに、声すぐれたる限り選りさぶらはせたまふ念仏の暁方など、忍びがたし。

すぐに　〔源氏が〕　女房た

お側が　ちはまわりをとりまいて控えているが

声のよい僧ばかりを　選んで奉仕させておられる

一　大切に袖の上に捧げ持っていた玉が砕けたといった場合よりも、もっと茫然としたご様子である。「袖の上の玉の……」は、当時の諺か。出典未詳。

二　源氏の自邸。（前出七四頁以下参照）

三　仏前のお勤めを几帳面になさって。

四　初斎院となった左衛門府（八四頁注二参照）。御息所も娘の斎宮について初斎院に籠っているのである。

五　源氏は、御息所のことでつくづくいやだと思うようになった世の中も、今は何もかもが厭わしくなられて。

六　このような足手まといになる人（若君）さえ生れなかったならば。

七　紫の上。二条の院の西の対に住む。

八　御帳台。帳を下ろして寝室とする。（一巻図録九参照）

九　「時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを」――時もあろうに、秋に人は死別してよいものだろうか、生きている人に対してさえ恋しくてならないのに（『古今集』巻十六哀傷、壬生忠岑）と古歌に詠まれたとおり、亡き人恋しさに眠りも覚めがちなのに。

秋霧の朝、御息所、源氏に弔問の文を贈る

一〇 縹色（うすい藍色）に青のかかった色。菊の葉の色に揃え、喪中弔問の心を表した。
一一 気の利いたことをすると思って。折にふさわしく、紙の色まで気を配っていることをいう。
一二 お悲しみの折とご遠慮してお便りをさし上げませんでした日頃の私の気持は、お分り下さいますでしょうか。
一三 人の死を聞き、この世を無常と思うにつけ、涙がちでいますものを、まして取り残されなさったあなたの袖は涙でどんなかとお察し申し上げます。「きく」に「聞く」と「菊」を掛ける。「菊」「露」は縁語。

一四 どうして、あんなこと（御息所の生霊が葵の上にとり憑いたこと）を、まざまざとはっきり見たり聞いたりしたのだろうと残念でならないのは。
一五 ご自分でも（ひとたび厭わしいと思った御息所への気持を）やはり思い直すことはおできにならないのであろう。

深き秋のあはれまさりゆく風の音、身にしみけるかなと、〔源氏が〕馴れぬ御独寝に明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊の開きしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、〔誰とも言わず〕さし置きて去にけり。
一二 今めかしうもとて、見たまへば、御息所の御手なり。
（御息所）一二 聞こえぬほどは、おぼし知るらむや。
一三 人の世をあはれときくも露けきに
おくるる袖を思ひこそやれ
空の風情にしのびかねまして
ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ。

とあり。常よりも優に見事にも書いたまへるかなと、〔源氏は〕さすがに〔その手紙を〕置きがたう見たまふものから、知らぬ顔して弔問なさることだとつれなの御とぶらひやと、心憂し。さりとて、ふっつりとお便りをさし上げないのもおいたわしいしかき絶え音なら聞こえざらむもいとほしく、御息所の人の御名の朽ちぬべき傷つくにちがいないことをお案じになる亡くなった葵の上はことをおぼし乱る。過ぎにし人は、とてもかくてもさるべきにこそそうなる運命でいらしたのだろうにはものしたまひけめ、一四何にさることを、さださだとけざやかに見聞きけむとくやしきは、一五わが御心ながらなほえおぼしなほすまじきな

一 わざわざ下さったお手紙のお返事をしないのは、風情に欠けるであろうかと思って。

二 ご遠慮して（お便りしないで）いる私の気持は、それなら（「聞こえぬほどは」との仰せなら）、お分り下さっているであろうかと存じまして。

三 生き残った者も死んだ者も、いずれも同じこと、露のようにはかなく消え失せるこの世の中に、執を残すのはつまらないことではありませんか。私はさほど悲しんではいないのです。「消ゆ」「露」「置く」は縁語。

四 かたがた、あなたもその執着（私の身の上を思いやって下さること）を、おさまし下さいませ。

五 （喪中の身からの手紙は）ご覧にならぬかもしれないと思って、私の方も（これ以上多くは申し上げません）。

六 それとなく匂わしていらっしゃるお気持を。源氏の返事は、表面自分の気持を述べながら「心置く」「おぼし消ちてよ」など、御息所が怨霊になったことを暗に批判している。

七 内心気が咎めることがおありなので、はっきりお悟りになって。「心の鬼」は、心の中にあって自分を責めるもの。

八 やはりこの上もなく情けない身の上だったのだ。以下「流し果つべきこと」まで、御息所の心中。

九 亡き前皇太子。（前出六六頁、系図参照）

めりかし。斎宮の御きよまはりもわづらはしくや、など、久しう思ひわづらひたまへど、わざとある御返りなくは情なくやとて、紫のにばめる紙に、

（源氏）すっかり日数が（たちましたが）こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへおこたらずながら、

つつましきほどは、さらばおぼし知るらむやとてなむ。

とまる身も消えしもおなじ露の世に

心置くらむほどぞはかなき

かつはおぼし消ちてよかし。御覧ぜずもやとて、これにも。

と聞こえたまへり。

（御息所は）六条の自邸においでの時だったので里におはするほどなりければ、忍びて見たまひて、ほのめかしたまへるけしきを、心の鬼にしるく見たまひて、さればよとおぼすも、いといみじ。なほいと限りなき身の憂さなりけり、かやうなる聞こえありて、院にもいかにおぼさむ、故前坊の、同じき御はらからといふなかにもいみじう思ひかはしきこえさせたまひて、この斎宮の

（ご潔斎）（憚り多いことだろうか）（源氏は）（ため）（らっていらしたが）（鈍色がかった）（あなたを）疎略に存じ上げるのではないのですが（たち）（ご）（ご）（ご

一〇（皇太子妃として内裏に住んでいた時と同じように）そのまま宮中で暮しなさいと。自然、桐壺院の寵愛を受けることも含まれている。皇太子は内裏に住み、皇太子の妃もそれぞれ殿舎を賜る。

一一 斎宮が、初斎院から野の宮にお移りになった時も。「野の宮」は、嵯峨野にある。（八四頁注二、三参照）

一二 朝夕、嵯峨野の露を分けて、野の宮を訪れるのを。

一三 七日ごとのご法要は終ったが、（源氏は）四十九日までは、そのまま（左大臣家に）引き籠っていらっしゃる。正日（四十九日）の法事を何かの都合で、繰り上げて先に済ましたのであろう。

時雨する夕暮、三位の中将、源氏を慰める

御ことをも、〔桐壺院に〕ねむごろに聞こえつけさせたまひしかば、その御かはりにも、やがて見たてまつりあつかはむなど、〔桐壺院が〕常にのたまはせて、そのまま引きついでお世話申し上げようなどと

一〇やがて内裏住みしたまへと、〔御息所に〕たびたび聞こえさせたまひしをだに、とんでもないことだと考えてもみなかったのにいとあるまじきことと思ひ離れにしを、かく心よりほかに若々しきもの思ひをして、つひに憂き名をさへ流し果つべきことと、おぼし乱るるに、なほ例のさまにもおはせず。さるは、おほかたの世につけて、心にくくよしある聞こえありて、昔より名高くものしたまへば、一二野の宮の御うつろひのほどにも、をかしう今めきたること多く考え出してしなして、殿上人どものこのましきなどは、風流な連中などは一三朝夕の露分けありくをそのころの役になむする、など聞きたまひても、大将の君は、ことわりぞかし、ゆゑは飽くまでつきたまへるものを、もし世の中に飽き果てて下りたまひなば、〔伊勢に〕さうざうしくもあるべきかなと、さすがにおぼされけり。

とうとう情けない評判まで流してしまうに違いないことと
いまだにお具合も回復なさらない
とはいえ〔御息所は〕この件以外では
体に
ゆかしく風雅なお方だとの評判で
趣深くはなやかな趣向を
仕事
おたしなみはずいぶん深いお方なのに
もの足りなくなることだろうなと

一三御法事など過ぎぬれど、正日まではなほこもりおはす。ならはぬ

一　葵の上の兄。もとの頭の中将。三位昇進はここに初めて見える。中将は四位相当だが、家柄のよい者は特に位階が上のことがある。

二　あの源典侍。紅葉賀の巻で、源氏と二人で張り合った老女。前出（七六頁注五参照）。

三　祖母上のことを、ひどく疎略に申してはなりませぬぞ。戯れていう言葉。「祖母殿」は、源典侍のあだ名のようなものらしい。

四　あの十六夜の月に、はっきりとは見えなかった秋の夜のこと。末摘花の巻の、源氏が初めて末摘花を訪れ、暗い中で頭の中将に見つけられた時のことをいう。「十六夜の月をかしきほどに」「曇りがちにはべるめり」「月のをかしきほどに雲隠れたる道のほど」などとあった。ただし、時節は春であったが、ここではこの時の季節に合せて秋のことにした。（一巻末摘花二四七頁以下参照）

五　薄い鈍色に着替えて。十月一日から冬の衣服に更衣する。兄弟姉妹の服喪は三カ月であるから、三位の中将はなお鈍色を着るが、更衣の機会にやや薄い色に改めたのであろう。

六　劉禹錫（九世紀の唐の詩人）の亡き妻を悼む詩「有所嗟」の一句。宋玉（前三世紀の楚の詩人）の「高唐賦序」（『文選』巻十）の「旦には朝雲となり、暮には行雨となる」によっている。（付録三一四頁参照）

御つれづれを心苦しがりたまひて、三位の中将は常に参りたまひつつ、世の中の御物語など、まめやかなるも、また例のみだりがはしきことをも聞こえいでつつなぐさめきこえたまふに、かの内侍ぞ、うち笑ひたまふくさはひにはなるめる。大将の君は、「あないとほしや、祖母殿の上ないたう軽めたまひそ」といさめたまふものから、常にをかしとおぼしたり。かの十六夜のさやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまざまの好事どもを、かたみに隈なく言ひあらはしたまふ果て果ては、あはれなる世を言ひ言ひてうち泣きなどもしたまひけり。

ご退屈なお暮しを気の毒に思われて　ましめな話も　いつものような浮気相手の　女の話も　話の種にはなるようだ　そのほかも　残らずすっぱぬい　互いに　男らしくすっきりとして　てしまわれるそのあげくは　無常な人の世のことをいろいろ話し合って

時雨うちして、ものあはれなる暮つかた、中将の君、鈍色の直衣、指貫、うすらかに衣がへして、いとををしうあざやかに、心はづかしきさまして参りたまへり。君は、西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙もあらそふここちして、「雨となり雲とやなりにけむ、

もの思わしい　ご立派な様子で　源氏　角の　さっと降り注いだ時　涙も時雨と競うばかりで　（源氏）

七　女だったら、先立って死んでゆく身の魂が、必ず源氏の側に止まるであろうと。前出、劉禹錫の詩の「女郎の魂は暮雲を逐うて帰る」を踏まえたもの（付録参照）。

八　直衣の入れ紐だけをさし直しなさる。襟もとを整えるさま。（図録一一参照）

九　（中将より）もう少し濃い鈍色の夏の御直衣の下に、紅色の擣ち目のつややかな袿をお召しになって。「つややかなる」は、砧で擣って、絹の光沢を出したもの。源氏はまだ更衣せず、服装を改める心境にならないでいる。

一〇（葵の上を荼毘に付した煙は空に昇って雲となったが）時雨の雨となって降る空の浮雲のどれを、それと見分けることができよう。源氏が劉禹錫の詩の「雨となり雲となりにけむ、……」と誦したことから、その気持を歌にしたもの。

一一（宋玉の「高唐賦序」には、神女は朝には雲となり、夕には雨となって、朝々暮々陽台の下におりますと言ったが）葵の上は行方も知れずになってしまったことだ、と独りごとのように言うのに。（付録三一五頁参照）

一二　亡き妻が雲となり雨となってしまった空までもが、時雨の降る冬になり、ますます悲しみにかきくれる今日この頃だ。

一三　三位の中将は、（夫婦の仲というものは）分らぬものだなと思って。

今は知らず」とうちひとりごちて、頬杖つきたまへる御さま、女にては、見捨ててなくならむ魂かならずとまりなむかしと、〔三位中将は〕色めかしきここちに、うちまもられつつ、ついじっと目がとまって近うついゐたまへれば、〔源氏は〕しどけなくうち乱れたまへるさまながら、おくつろぎになったお姿ながら紐ばかりをさしなほしたまふ。源氏は、今すこしこまやかなる夏の御直衣に、紅のつややかなるひきかさねてやつれたまへるしも、地味なお姿であるのがかえって見ても飽かぬここちぞする。中将も、しみじみとした眼ざしでいとあはれなるまみにながめたまへり。

（中将）一〇
「雨となりしぐるる空の浮雲を
いづれのかたとわきてながめむ

（源氏）一一
行方なしや」と、お坐りになると ひとり言のやうなるを、

（源氏）一二
見し人の雨となりにし雲居さへ
いとど時雨にかきくらすころ

〔追慕の情の〕よく分るので とのたまふ御けしきも、浅からぬほどしるく見ゆれば、一三 あやしう、さほどではないご愛情だったのに 桐壺院じっとしていられずご教訓なされ 年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、院など居立ちてのたまはせ、

大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御かたざまに、もて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、えしもふり捨てたまはで、もの憂げなる御けしきながらありへたまふなめりかしと、いとほしう見ゆるをりをりありつるを、まことにやむごとなく重きかたは、ことに思ひきこえたまひけるなめりと見知るに、いよいよくちをしうおぼゆ。よろづにつけて光失せぬるここちして、屈じいたかりけり。

（ねんごろなお世話もお気の毒な上に）（どちらからも関係があるので）（葵上を）（気の進まぬご様子ながら過しておいでになるのであろうと）（おいたわしく思）（大事な正妻としては）（格別）（中将は）（葵上の死が）

枯れたる下草のなかに、龍胆、撫子などの、咲き出でたるを折らせたまひて、中将の立ちたまひぬるのちに、若君の御乳母の宰相の君して、

（前栽の）（立ち去られたあとで）（源氏が召使に）（源氏）「草枯れのまがきに残るなでしこを」（を通して）

別れし秋のかたみとぞ見る

（大宮に）

にほひ劣りてや御覧ぜらるらむ」と聞こえたまへり。げに何心なき御笑顔ぞ、いみじううつくしき。宮は、吹く風につけてだに、木の葉よりけにもろき御涙は、ましてとりあへたまはず。

（若君の）無心な

一　大宮のお血筋からいって、切っても切れないご縁があるなど。葵の上の母大宮は桐壺院の妹で、源氏には叔母に当る。（系図一参照）

二　すっかり元気を失っているのだった。「屈ず」は、元来は「屈す」の促音の表記に「ん」を用いたものであるが、その文字のままに「くんず」と撥音に読みならわされている。「いたし」は、甚だしいこと。

源氏、大宮に若君を思う歌を贈る

三　女房の呼び名。

四　下草の枯れた垣根に咲き残る撫子の花を、過ぎ去った秋の形見（亡き妻の形見）と思って見ています。「なでしこ」の「こ」に「子」を掛け、若君をさす。

五　（しかし、あなたはやはり亡きわが子葵の上よりも）美しさは劣るとご覧なのではないでしょうか。若君を見ても慰められないのではないかと案じる気持。

六　季節の移り変りを知らせる風の訪れにつけても、その風にたやすく散る木の葉よりもっと涙もろくていらっしゃるのに、まして源氏のお手紙を見てはこらえきれずとめどもなくお泣きになる。

七 お手紙を頂きました今も、若君を見て、かえって涙に袖も朽ちるばかりです、垣根も荒れ果ててしまいました撫子なのですから（母を亡くしました不憫な赤児ですから）。「あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）を踏まえている。

源氏、朝顔の姫君に手紙を贈る

八 朝顔の姫君のこと。前出六七頁、七三頁。

九 （女房たちは）格別気にもとめず、お目にかける。

一〇 今の空の色（薄墨色）をした中国渡来の紙に。

一一 とりわけ今日の夕暮は涙もひとしお袖を濡らします、秋はもの思う季節といわれる、そのとおり、もの思う秋は何度も経験してまいりましたけれど。

一二 時雨は毎年のことですが。「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖くたすをりはなかりき」を引くという（『源氏釈』）。『奥入』は、第四句「袖ひつる」とある。

一三 ご服喪のことをお案じ申しながら、とてもこちらからはお便りをさし上げられませんでした。「大内山」は、御室山（京都市右京区）の別称。宇多上皇が出家後籠られたので、源氏の勤行一途の生活を喩えてこういったものか。「えやは」は、「どうして……できようか、とてもできない」の意の連語。「えやは聞こゆべき」を略した言い方。

（大宮）七
今も見てなかなか袖を朽すかな

垣ほ荒れにしやまとなでしこ

なほいみじうつれづれなれば、朝顔の宮に、今日のあはれはさり（この夕暮のもの悲しさはそう）とも見知りたまふらむとおしはからるる御心ばへなれば、暗きほど（〔宮の〕）なれど聞こえたまふ。絶え間遠けれど、さのものとなりにたる御文（それが普通になってしまった）なれば、咎なくて御覧ぜさす。空の色したる唐の紙に、

（源氏）一二
わきてこの暮こそ袖は露けけれ

もの思ふ秋はあまたへぬれど

一三
いつも時雨は。

とあり。御手（ご筆跡）などの心とどめて書きたまへる、常よりも見どころあり（人念にお書きになっているのが）て、過ぐしがたきほどなり、と人々も聞こえ、みづからもおぼさ（ご返歌なしではすまされぬ場合です）（姫君ご自身も）れければ、

（朝顔）一三
大内山を思ひやりきこえながら、えやは。

とて、

一 秋、奥様にお先立たれあそばしたと伺いましてより、はや時雨するこの頃、いかばかりお嘆きも深いことかと存じます。「秋霧に」は、葵の上死去の季節を示すとともに、「立ちおくれぬ」を言い出す言葉。「立ち」に「霧が立つ」意を掛ける。

二 (長く付き合って)見まさりするという女性はめったにないようだのに。

三 冷淡な人こそかえって次第にその魅力が分ってくるものだといわれている、そのとおり。引歌があろうが、不明。

四 (朝顔の姫君は)いつもすげないお扱いながら、しかるべき時々の風情あるご返事はちゃんとして下さるが。

五 こういう間柄こそ、互いにいつまでも優しい心を交わし合うことができるものなのだ。

六 やはり、教養があり風流が過ぎて、人目に立つほどなのは、度が過ぎるという欠点も出てくるものだ。六条の御息所などを念頭に置いたものであろう。

七 二条の院に帰らぬ間気がかりで、(紫の上が)どう思っているだろうか(嫉妬していないか)と、案じられないのは、気楽なことであった。

八 葵の上づきの女房の名。帚木(一巻八一頁)に見えるのと同一人物であろう。

九 葵の上の喪中は。「思ひ」は、「物思ひ」「悲しみ」の意から転じて「喪」をいう。

源氏、葵の上方の女房たちと語る

(朝顔)一 秋霧に立ちおくれぬと聞きしより
しぐるる空もいかがとぞ思ふ

とのみ、ほのかなる墨つきにて(墨色で)、思ひなし心にくし。何ごとにつけても、二見まさりはかたき世なめるを、三つらき人しもこそと、あはれ(姫君の手と思うと奥ゆかしい)なつかしい感じのなさる姫君のお人柄である)におぼえたまふ人の御心ざまなる。四つれなながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、五これこそかたみに情も見果つべきわざなれ、六なほゆゑづきよし過ぎて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり、対の姫君(紫の上)を、さは生ほし立てじとおぼす。つれづれにて恋しと思ふらむかしと、〔源氏は〕忘るるをりなけれど、ただ女親なき子を置きたらむここちして、七見ぬほど、うしろめたく、いかが思ふらむとおぼえぬぞ、心やすきわざなりける。

暮れ果てぬれば、御殿油近く参らせたまひて、さるべき限りの人(しかるべき女房ばかり)人、御前にて物語などせさせたまふ。中納言の君といふは、八年ごろ〔源氏が〕内々ご寵愛だったが忍びおぼししかど、九この御思ひのほどは、なかなかさやうなる筋に(かえってそのような色めいたお相手に)

一〇 こうして、ここ幾日もの間（服喪の間）、前にもまして、どの人ともみな四六時中ずっと一緒に暮したあげく、（この先）このようにいつも会えないなら、恋しく思わぬことがあろうか。「まぎる」は、ほかに気を散らすこと。「みなれ木のみなれそなれて離れなば恋しからむや恋しからじや」――いつも身近に暮していて別れたならば、恋しく思うだろうか、恋しく思わぬことがあろうか（『源氏釈』所引）による。

一一 とても悲しいこと（妻との死別の悲しみ）は言うまでもないこととして、これから先のことをあれこれ考えてみると、たまらないことがたくさんあるものだ。四十九日が過ぎると妻の家を去るので、こう言う。

一二 ふっつりと、お見限りになってしまうことを考えますと（つろうございます）。「あくがる」は、離れ去ること。ここでは左大臣家に来なくなることをいう。

一三 気長に見届けようという人さえあれば、ついには私がどんな人間かお分りだろうに。

一四 （だが）人の命は無常だからね。私もいつ死ぬか分らないから、真意を分ってもらえぬままになるかもしれない、の意。

一五 女の童。

一六 女の童の名。貴君。

葵

もかけたまはず。あはれなる御心かなと見たてまつる。（ただ主従としては）おほかたにはなつかしううちかたらひたまひて、「かう、この日ごろ、ありしよりけに、誰も誰もまぎるるかたなく見なれて、えしも常にかからずは、恋しからじや。いみじきことをばさるものにて、ただうち思ひめぐらすこそ、たへがたきこと多かりけれ」とのたまへば、いとどみな泣きて、「いふかひなき御ことは、ただかきくらすここちしはべるはさるものにて、名残なきさまにあくがれ果てさせたまはむほど、思ひたまふるこそ」と聞こえもやらず。あはれと見わたしたまひて、「名残なくは、いかがは。心浅くも取りなしたまふかな。心長き人だにあらば、見果てたまひなむものを。命こそはかなけれ」とて、燈をうちながめたまへるまみの、うち濡れたまへるほどぞめでたき。とりわきてらうたくしたまひし小さき童の、親どもなく、いと心細げに思へる、ことわりに見たまひて、「あてきは、今はわれをこそは思ふべき人なめれ」とのたまへば、いみじう泣く。

（中納言の君は）やさしいお心よと
（女房たち）言っても詮ないお方のことは
（源氏）見限るなんてことがあるものか
（葵上が）特別かわいがっていらっしゃった
（源氏）

一〇五

一 小さい袿。「袿」は、童女が汗衫の下に着る衣服。
二 ほかの人よりも濃い鈍色に染めて。かわいがられた女主人への哀悼の思いを表したもの。
三 童女が晴れの時、上に着る衣服。（図録一〇参照）
四 萱草色の袴。萱草の花の色（橙色）に染めた袴。喪服に用いる。
五 一層、ここを訪れるよすがもない思いが増すだろうからね。
六 さて、どんなものか。今後は、（葵の上の生前よりも）一層、待ち遠しいご来訪になることだろうと思うと。
七 女房たちに、それぞれの身分に応じて、差をつけながら。
八 ちょっとした趣味的な道具や、また、ほんとうに葵の上のお形見というにふさわしい品々（生前使っていた衣服や調度品など）を。

源氏、左大臣邸を去る

九 悲しい時を心得ているかのような時雨が降りそそいで。
一〇（葵の上の死後、日数もたって）多少は涙の乾くこともあった袖が、皆、（源氏とお別れする悲しみの涙に）あらためて濡れそぼった。
一一 侍所の人々。源氏の雑用を勤めるためについて来ている家来たち。「侍所」は、家来たちの詰め所（図録一四参照）。

一 ほどなき袿、人よりは黒う染めて、黒き汗衫、萱草の袴など着たるも、をかしき姿なり。「昔を忘れざらむ人は、つれづれを忍びても、をさなき人を見捨てず、ものしたまへ。見し世の名残なく、人々さへかれなば、たつきなさもまさりぬべくなむ」など、みな心長かるべきことどもをのたまへど、いでや、いとど待遠にぞなりたまはむと思ふに、いとど心細し。大殿は、人々に、際々、ほど置きつつ、はかなきもてあそびものども、また、まことにかの御形見なるべきものなど、わざとならぬさまに取りなしつつ、皆くばらせたまひけり。

（源氏）故人を忘れぬ人は　若君を　お仕えして下さい　生前のおもかげもなく　あなた方まで出て行ったなら　仕えするようにということを　〔女房たちは〕　改まった形にならぬよう心遣いして

源氏君は、かくてのみもいかでかはつくづくと過ぐしたまはむとて、桐壺院へ参りたまふ。御車さし出でて、御前など参り集るほど、をり知り顔なる時雨うちそそきて、木の葉さそふ風、あわたたしう吹きはらひたるに、御前にさぶらふ人々、ものいと心細くて、すこし隙ありつる袖ども湿ひわたりぬ。夜さりは、やがて二条の院にとまりたまふべしとて、侍ひの人々も、かしこにて待ちきこえむとなるべし、

こうして引き籠ったままぼんやり日を送っているわけにもいかないとお思いになって　桐壺院　前駆の者　女房たちは　夜分は　二条の院　〔源氏を〕　そのまま

一二 よくぞ今日まで生き永らえていたものよと。葵の上を失った悲しみに命ももつまいと思っていましたのに、の意。
一三 ただもう悲しみがこみ上げてきまして。「みだりごこち」は、思い乱れる気持。

左大臣、源氏を見送る

一四 人の世をさまざま思い続けられて。「世」は、葵の上との死別や、残された若君、左大臣夫妻とのこと。

おのおの立ち出づるに、今日限りでご来訪が絶えることはなかろうけれども今日にしもとぢむまじきことなれど、またなくもの悲し。大臣（おとど）も宮（大宮）も、今日のけしきに、また悲しさあらためておぼさる。宮の御前（おまえ）に御消息（おんせうそこ）聞こえたまへり。

（源氏）どうしているかとご心配のお言葉がございましたので院におぼつかながりのたまはするにより、今日なむ参りはべる。ほんのしばらく外出いたしますにつけてもあからさまに立ち出でではべるにつけても、一三今日までながらへはべりにけるよと、みだりごこちのみ動きてなむ、聞こえさせむもなご挨拶申し上げますのもかえってつらいことでございますからかなかにはべるべければ、そなたにも参りはべらぬ。

とあれば、いとどしく（いよいよ）、宮は目も見えたまはずしづみ入りて（涙にくれて）、御返りも聞こえたまはず。大臣（おとど）ぞ、やがてわたりたまへる。（左大臣は）いと堪へがたげにおぼして、御袖も引き放ちたまはず（目から）。見たてまつる人々（女房たち）もいと悲し。

（源氏）大将の君は、一四世をおぼし続くることいとさまざまにて、泣きたまふさま、あはれに心深きものから（しみじみとあわれ深いご様子ながら）、いとさまよくなまめきたまへり。大臣（おとど）、久しうためらひたまひて（長い間かかって涙をお抑えになって）、「齢（よはひ）のつもりには（年をとりますと）、さしもあるま

一 まして、涙の乾く時もなくかきくらされます心を。「思ひたまへまどはれはべる」は、「思ひまどはる」に、下二段活用の「たまふ」と「はべり」の付いた、非常にていねいな言い方。

二 後れたり先立ったりする人の命の定めなさは。「末の露もとの雫や世の中の後れ先立つ例なるらむ」――葉末に置く露と、下にしたたる雫といずれが先に消えるか分らない、これが人の世の老少不定のすがたを示す例なのであろう（『古今六帖』一。『新古今集』巻八哀傷、僧正遍昭）による。

三（身分や、葬の上との親疎に応じて）濃いのや薄いのや、それぞれの身にふさわしい喪服を着て。

じきことにつけてだに、涙もろなるわざにはべるを、（涙もろいものですが）まして、干る世なう思ひたまへまどはれはべる心を、（とても静められませんので）えのどめはべらねば、（他人が見ても）人目も、いとみだりがはしく、心弱きさまにはべるべければ、院などにもえ参りはべらぬなり。ことのついでには、さやうにおもむけ奏せさせたまへ。いくばくもはべるまじき老いの末に、（だらしがなく）（取りなして奏上なさって下さい）（余命が）うち捨てられたるが、つらうもはべるかな」と、（子に）せめて思ひ静めてのたまふけしき、いとわりなし。君も、たびたび鼻うちかみて、「後れ先立つほどの定めなさは、世のさがと見たまへ知りながら、さしあたりておぼえはべる心まどひは、類ひあるまじきわざになむ。院にも、ありさま奏しはべらむに、おしはからせたまひてむ」と聞こえたまふ。「さらば、時雨も隙なくはべるめるを、暮れぬほどに」と、そそのかしきこえたまふ。

（無理に）（気を静めて）（とてもおつらそうだ）（源氏）（人の世の常と承知しておりますものの）（直接わが身のこととして感じられます悲しみは）（ご推量下さいますでしょう）（左大臣）（止む間もなさそうですから）（おせかし申し上げなさる）

（源氏が）うち見まはしたまふに、御几帳の後、障子のあなたなどのあき通りたるなどに、女房三十人ばかりおしこりて、濃き薄き鈍色どもを

（開け放されたあたりなどに）（押し合うようにして）

四（あなたが）お見捨てなさるはずのない若君も、（この家には）残っていらっしゃるのですから。
五 思い詰めてあとさきの考えられない女房などは。
六 この家をあなたが今日限りお見捨てになった過去のものだと悲観して。「屈ず」は、ふさぎこむ意。
七 ただ、折にふれて、親しくお仕え申して来ました幾年かでしたのに、もうそれもできなくなりますことを悲しんでいるようですが、無理もないことです。
八（女房たちに）空しい期待を持たせていましたのに。
九 どうあろうとも（いつか私の気持は分って下さるであろう）と。
一〇 自然とお目通りせぬ折もございましたでしょうが。
一一（葵の上が亡くなった）今は、かえって何を頼りに、気楽に構えて、ご無沙汰いたしましょう。
一二（葵の上も源氏もいない部屋は）蟬の脱け殻を見るような、むなしい感じがなさる。「空蟬の」は、「むなし」に言いかける枕詞的な用法。「うちはへて音を鳴きくらす空蟬のむなしき恋も我はするかな」（『後撰集』巻四夏、読人しらず）など。

着つつ、皆いみじう心細げにて、うちしほたれつつゐ集りたるを、（涙に沈みながら）いとあはれと見たまふ。「おぼし捨つまじき人もとまりたまへれば、（左大臣）四 さりとも、もののついでには立ち寄らせたまはじやなど、なぐさめ（何かと機会があれば お立ち寄りあそばさぬはずはないなどと）はべるを、五 ひとへに思ひやりなき女房などは、六 今日を限りにおぼし捨てつる故里と思ひ屈じて、長く別れぬるかなしびよりも、七 ただ時（故人との永別の悲しみよりも）時馴れつかうまつる年月の名残なかるべきを嘆きはべるめるなむ、ことわりなる。うちとけおはしますことははべらざりつれど、さり（ごゆっくりとわが家にいて下さることはございませんでしたが それで）ともつひにはと、八 あいな頼めしはべりつるを、げにこそ心細き夕に（もいつかはと）はべれ」とても、泣きたまひぬ。「いと浅はかなる人々の嘆きにもはべるなるかな。まことに、九 いかなりともとのどかに思ひたまへつ（仰せのとおり のんきに考えておりました間は）るほどは、一〇 おのづから御目離るるをりもはべりつらむを、一一 なかなか今は何を頼みにてかはおこたりはべらむ。今御覧じてむ」とて出でたまふを、大臣見送りきこえたまひて、入りたまへるに、御しつら（女房たち）ひよりはじめ、ありしに変ることもなけれど、空蟬のむなしきここ（〔源氏の部屋に〕 お部屋の飾りつけをはじめとして 昔に 今にお分り下さいましょう 一二 うつせみ）

源氏が去ったあとの左大臣方の嘆き

一 源氏と葵の上のやすんだ御帳台。
二 若い女房たちは、悲しみにくれながらも、（その様子がおかしいと）つい笑う者がいるようだ。
三 心をうつ古人の詩歌を、漢詩でも和歌でも。
四 「草」は、草仮名のこと。万葉仮名の草体をさらに略した文字。和歌を書くのに用いる。「真名」は、漢字の楷書。
五 婿君としてお世話できなくなるのが残念なのであろう。「よそ人」は、自分とは縁のない人。
六 白楽天の「長恨歌」の一句。「鴛鴦瓦冷霜花重、旧枕故衾誰与共」――むつまじい鴛鴦をかたどった瓦は冷たく凍って、白い花のような霜が深く置く夜、昔の枕や衾を誰と共にすることができよう。（一巻付録「長恨歌」参照）
七 亡き人の魂もさぞ去りがたく思っているであろうと思うと、いよいよ悲しみがまさる、二人が共寝した床をいつも離れがたく思っていたにつけて。
八 前出「長恨歌」の「霜花重」によるすさび書き。
九 あなたが亡くなってから、塵の積ってしまった床に涙を払いながら、幾夜独り寝の時を過したことだろう。「とこなつ」（常夏）は、撫子のこと。「とこ」に「床」を掛ける。「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」（『古今集』巻三夏、凡河内躬恒）による。

ちぞしたまふ。

御帳の前に御硯などうち散らして、手習ひ捨てたまへるを取りて、目をおししぼりつつ見たまふを、若き人々は、悲しきなかにも、ほほゑむあるべし。あはれなる古言ども、唐のも大和のも書きけがしつつ、草にも真名にも、さまざまめづらしきさまに書きまぜたまへり。「かしこの御手や」と、空を仰ぎてながめたまふ。よそ人に見たてまつりなさむが惜しきなるべし。「旧き枕故き衾、誰とともにか」とある所に、

なき魂ぞいとど悲しき寝し床の
あくがれがたき心ならひに

また、「霜の花白し」とある所に、

君なくて塵つもりぬるとこなつの
露うち払ひいく夜寝ぬらむ

一日の花なるべし、枯れてまじれり。宮に御覧ぜさせたまひて、

〔源氏のお手すさびの反古を〔左大臣が〕書き散らしては書体で〕
〔涙を〕
〔（左大臣）みごとなご筆跡だ〕
〔と書いてある側に〕
〔（源氏）〕
〔反古の中に〕
〔左大臣は〕

一〇 先日、歌につけて大宮にさし上げられた時、手折られた花なのであろう。（一〇二頁参照）

一一 なまじこの世で親子の縁を結ぶようになった前世の因縁を、かえってつらいものに思いながら。「思ひやる」は、過去世について思いを馳せるところからいう。

一二 朝夕、光がさしこむように思った源氏のお出入りだったのに、その喜びを失っては。

一三 大宮のお前に控えている年輩の女房などは。

一四 （それにしても）若君はずいぶんお小さくて、張合いのないお形見ですこと。

死別の悲しみは言うまでもないことだが
「いふかひなきことをばさるものにて、悲しい逆縁の例もかかる悲しき類ひ、世間にないことではないと世にくやはと思ひなしつつ、この世の縁は短くて契り長からで、親の心を悲しませようとして生れてかく心をまどはすべくてこそはありけめと、〔悲しみを〕日数が積るにつれて〔亡き娘への〕かへりてはつらく、前の世を思ひやりつつなむ、さましはべるを、ただ日ごろに添へて、赤の他人に恋しさの堪へがたきと、どこまでも悲しく思われの大将の君の、今はとよそになりたまはむなむ、飽かずいみじく思ひたまへらるる。一日二日も見えたまはず、〔源氏が〕お通いが途絶えがちでいらしたのでさえだに、飽かず胸いたく思ひはべりしを、朝夕の光失ひては、いかでかながらふべからむ」と、御声もえ忍びあへたまはず泣いたまふに、御前なるおとなおとなしき人など、いと悲しくて、いっせいに泣き出す様さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕のけしきなり。若き人々は、所々に群れゐつつ、朋輩同士でおのがどち、あはれなることどもうちかたらひて、左大臣「殿のおぼしのたまはするやうに、若君を見たてまつりてこそはなぐさむべかめれと思ふも、いとはかなきほどの御形見にこそ」とて、おのおの、「あらく里に退出しまして また参上しましょうからさまにまかでて、参らむ」と言ふもあれば、互いにかたみに別れ惜し

桐壺院、源氏を迎えいたわる　源氏、藤壺に挨拶

一　精進で何日も過したせいか。「精進」は、一心に仏道修行すること。そのために身をきよめ、肉食も絶つ。葵の上の四十九日に籠って勤行したことをさす。

二　王命婦を通じて。王命婦は、藤壺側近の女房で、源氏との仲を取りもった人。（一巻若紫二一二頁、紅葉賀一八頁参照）

三　この世が厭わしくなることがたくさんあって（出家したいと）思い乱れました気持も。

四　今日までもこの世に永らえてまいりました。

五　こんな時でなくてもいつも物思わしげでいらっしゃるご様子を取り添えて。源氏は、藤壺に対しては、ふだんでも充たされぬ思慕のため物思わしげな様子である。

六　織り出し模様のない袍。喪服のさま。

七　「纓」は、冠の後ろに垂らす。服喪の時には巻き上げる。（図録一一参照）

むほど、おのがじしあはれなることども多かり。（それぞれしみじみと胸に迫ることが多かった）

院（源氏が）へ参りたまへれば、「いといたう面（桐壺院）痩せにけり。精進にて日を経るけにや」と、心苦しげにおぼしめして、御前（院の御前で食事などおすすめになって）にてものなど参らせたまひて、とやかくやとおぼしあつかひきこえさせたまへるさま、あはれにかたじけなし。中宮（藤壺）の御方に参りたまへれば、人々（女房たち）、めづらしがり見たてまつる。命婦（お心遣いをしてさし上げられるご様子は）の君して、「思ひ尽きせぬことどもを、ほど経るにつけてもいかに」（時が経つにつけてもさぞかし）と、御消息聞こえたまへり。「常なき世は、おほかたにも思うたまへ知りにしを、目に近く見はべりつるに、いとはしきこと多く思うたまへ乱れしも、たびたびの御消息になぐさめはべりてなむ、今日までも」とて、さらぬをりだにある御けしき取り添へて、いと心苦しげなり。無紋のうへの御衣に、鈍色の御下襲、纓巻きたまへるやつれ姿、はなやかなる御装ひよりも、なまめかしさまさりたまへり。春宮（中宮に）にも久しう参らぬおぼつかなさなど聞こえたまひて、夜ふけてぞ、まかでたまふ。

（藤壺）何かと悲しみの尽きぬことですが（無常は理屈では一通り存じておりましたが）直接体験いたしまして（藤壺からの）（源氏）この世の（院の御所を）

源氏、二条の院に帰り、紫の上と語る

二条の院には、方々払ひみがきて、男女、待ちきこえたり。上臈[八]ども皆まうのぼりて、われもわれもと装束き、化粧じたるを見るにつけても、かのね[九]並み屈じたりつるけしきどもぞ、〔源氏には〕あはれに思ひいでられたまふ。御装束[一〇]たてまつりかへて、西の対にわたりたまへり。衣[一一]がへの御しつらひ、くもりなくあざやかに見えて、よき若人童女[一二]の、形、姿めやすくととのへて、少納言[一三]がもてなし、心もとなきところなう、心にくしと見たまふ。

紫の上

姫君、いとうつくしうひきつくろひておはす。「久しかりつるほどに、いとこよなうこそ大人びたまひにけれ」とて、小さき御几帳ひきあげて見たてまつりたまへば、うちそばみてはぢらひたまへる〔紫上の〕御さま、飽かぬところなし。火影の御かたはらめ、頭つきなど、だかの心尽くしきこゆる人に違ふところなくもなりゆくかなと見たまふに、いとうれし。近く寄りたまひて、おぼつかなかりつるほどのことどもなど聞こえたまひて、「日ごろの物語、のどかに聞こえ

見苦しからず
奥ゆかしいと〔源氏は〕
栄配ぶりは
行き届かぬところなく
かわいらしく着飾っていらっしゃる
〔源氏〕長い間お目にかからぬうちに
びっくりするほど大人っぽくなられましたね
何一つ不足なところがない
横を向いて
横顔
会えなくて気がかりだった今までのことをあれこれと
〔源氏〕この間からのお話をゆっくりと申し上げた

一 しばらくほかで休息して。「異方」は、源氏の居間になっている二条の院の東の対であろう。（若紫一三六頁参照）

二 （私に飽いてしまって）いやだとまでお思いになるかもしれない。

三 身分の高い、秘密のお通い所がたくさんおありだから。「かかづらふ」は、関係を持つこと。

四 また、やっかいな名門の姫君が、葵の上の代りに現れなさるかもしれないと思うのは。

五 にくらしい気のまわしようだこと。草子地。

六 源氏づきの女房の名。

七 お足など気楽にさすらせなさって。「御足参る」で、足を揉ませること。

八 ちょっとしたご外出。女のもとを訪れること。

源氏、紫の上と契る

九 （夫婦の契りを結んでも）もう似合わしくないことはないと、源氏はご覧になっているので。「はた」は、強めていう語。

まほしけれど、いまいましうおぼえはべれば、（縁起が悪く思われますので）しばし異方（ことかた）にやすらひて、参り来む。（これからは）今は、とだえなく見たてまつるべければ、（お会い申せましょうから）いとはしうさへやおぼされむ」と、（こまやかにお話し申されるのを）かたらひきこえたまふを、少納言はうれしと聞くものから、（やはり不安にお思い申している）なほあやふく思ひきこゆ。やむごとなき忍び所多うかかづらひたまへれば、またわづらはしきや立ちかはりたまはむと思ふぞ、憎き心なるや。

（ご自分のお部屋に）御方にわたりたまひて、中将の君といふに、御足など参りすさびて、大殿籠りぬ。朝には、（左大臣家の）若君の御もとに御文たてまつりたまふ。あはれなる御返りを見たまふにも、（限りなく悲しいことばかりである）尽きせぬことどものみなむ。（源氏は）いとつれづれにながめがちなれど、（物思いにふけることが多いが）何となき御ありきも、もの憂（う）くお（気重く）ぼしなられて、おぼしも立たれず。

（紫の上）姫君の、何ごともあらまほしうととのひ果てて、（理想的にすっかり成長なさって）いとめでたう（すばらしく）のみ見えたまふを、似げなからぬほどにはた、見なしたまへれば、（結婚）けしきばみたることなど、（を匂わすようなことなどを）をりをり聞こえこころみたまへど、（お話しして気を引いてごらんになるが）見も知（まるでお）

一〇 源氏は、所在ないままに。服喪中、出仕しない上に、前に「何となき御ありきも……おぼしも立たれず」とあった。

一一 漢字の旁を隠して、偏だけでその文字を当てる遊戯、また逆に、旁に偏をつけて文字を作る遊戯ともいうが、明らかでない。

一二 (まだ子供だと思って) 念頭に置かれなかった年月こそ、ただそういう少女らしいかわいさばかりを感じていたが、もう我慢できなくなって。

一三 どういうことだったのだろうか。「男君はとく起きたまひて……朝あり」に掛る。

一四 (いつもご一緒にいらっしゃるから) 周囲の者が、いつからご夫婦ともその違いをお見分け申せるお間柄でもないのに。

一五 紫の上がすぐに返歌をしたためられるようにという用意。

一六 側に女房のいない間に。

一七 恋文のさま。新婚の翌朝は必ず男から女に歌を贈り、女も返歌をする。「後朝の文」という。

一八 どうしてあなたと何でもない間柄でいたのでしょう、幾夜も幾夜も、親しく夜の衣を共にしましたのに。「隔て」「重ね」「馴る」は、衣の縁語。

西の対で

りたまはぬけしきなり。一〇つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つきなどしたまひつつ、日を暮らしたまふに、〔紫上の〕気性が利発でらうじく愛敬づき、何でもない遊戯をしていてもはかなきたはぶれごとのなかにも、うつくしきとをしてお見せになるので筋をしいでたまへば、一一おぼし放ちたる年月こそ、たださるかたのらうたさのみはありつれ、しのびがたくなりて、一二心苦しけれど、一三いかがありけむ、一四人のけぢめ見たてまつりわくべき御仲にもあらぬに、分りにならないようである

一向に　女房たち

男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり。人々、

ご気分がおよろしくないのでしょうか

「いかなればかくおはしますならむ。御ここちの例ならずおぼさるこんなふうでいらっしゃるのかしら

源氏〔東の対に〕

るにや」と見たてまつり嘆くに、君はわたりたまふとて、一五御硯の箱を、御帳のうちにさし入れておはしにけり。一六人間にからうして頭もたげたまへるに、一七引き結びたる文、御枕のもとにあり。何心もなく、ひきあけて見たまへば、

〔紫上が〕

(源氏) 一八

あやなくも隔てけるかな夜をかさね
さすがに馴れし夜の衣を

と、書きすさびたまへるやうなり。〔源氏に〕こんなことをなさるお心があろうとは（何げないようなお書きぶりだ）かかる御心おはすらむとは、かけてもおぼし寄らざりしかば、〔紫上は〕などてかう心憂（うい）かりける御心を、うらなくたのもしきものに思ひきこえけむと、あさましう（とてもくやしい思いがなさる）おぼさる。

〔源氏は〕昼つかた、〔西の対に〕わたりたまひて、「なやましげにしたまふらむは、いかなる御ここちぞ。（なご気分ですか）今日は碁も打たで、さうざうしや（退屈なことだ）」とて、のぞきたまへば、〔紫上は〕いよいよ御衣（ぞ）ひきかづきて臥（ふ）したまへり。〔女房たち〕人々はしりぞきつつさぶらへば、〔紫上の側に〕寄りたまひて、〔源氏〕「などかくいぶせき御もてな（何も言って下さらないので）しぞ。（意外に冷たいお方だったのですね）思ひのほかに心憂くこそおはしけれな。（女房たちもどんなに変だと思うでしょう）人もいかにあやしと思ふらむ」とて、御ふすまをひきやりたまへれば、〔紫上は〕（汗びっしょりで）汗におしひたして、〔源氏〕（おやいけない）額髪（ひたひがみ）もいたう濡れたまへり。「あなうたて。（ニ）これはいとゆゆしきわざぞよ」とて、（何やかやとご機嫌をおとりなさるけれども）よろづにこしらへきこえたまへど、〔紫上は〕（心底からひどいと）まことにいとつらしと思ひたまひて、（一言もお返事をなさらない）つゆの御いらへもしたまはず。〔源氏〕「よしよし。（もうけっしてお目にかかりますまい）さらに見えたてまつらじ。いとはづかし」など怨（ゑ）じたまひて、御硯箱あけて見たまへど、（ご返歌も）ものもなければ、若（わか）の御ありさまや、と、

一 御夜着を引きのけてごらんになると。「ふすま」は、寝る時、上に掛ける夜具。（図録一一参照）

二 こんなに汗になっていては大変だ。「ゆゆし」は、不吉で重大だの意。

三 なんと子供っぽいご様子かと、かわいらしいとご覧あそばして。新婚の作法も知らないのだなと、紫の上をかわいらしく思う。

四 陰暦十月の亥の日亥の刻に、無病息災と子孫繁栄を祝って食べる餅。

五 檜の薄板で作った折り箱。中を仕切って食物を入れる。（図録一二参照）

六 様々な色どりにして さし上げるのを。亥の子餅は七種類の粉（大豆、小豆、ささげ、ごま、栗、柿、糖）で作るという。

源氏、三日の夜の餅を祝う

七 明日はちょうど新婚三日目に当る。この夜、男女ともに餅を食べる風習があり、「三日の夜の餅」という。亥の子餅と違い、これは白一色である。

八 今日は縁起でもない日なんだよ。陰陽道で、巳の日と亥の日は重日といい、事をなせば百事重なるといって忌む。それにひっかけて口実としたものであろう。

九 細かいことまでも承らず。源氏があからさまに言いにくがっている気持を察しての心遣い。

一〇 男女が睦み合う意。結婚のことを婉曲に言ったもの。

一一「子の子の餅」はいくつ用意いたさせればよろしゅうございましょうか。亥の日の翌日の子の日に用意する餅であるから、当座の機知で、「亥の子」に対して「子の子」と言った。

一二 三分の一ぐらいでよかろうよ。ただし「か」がやや落着かない（河内本「か」なし）。古来諸説があってなお明らかでないが、三日の夜の餅であることを惟光が納得した何か言葉の綾が隠されているはずである。

らうたく見たてまつりたまひて、日一日入りゐてなぐさめきこえたまへど、解けがたき御〔紫上の〕けしき、いとどらうたげなり。

御帳台の中に入りこんで

その夜さり、亥の子餅参らせたり。かかる御思ひのほどなれば、

源氏が喪に服しておられる折なので

大げさにはせずに

ことことしきさまにはあらで、こなたばかりに、をかしげなる檜破籠などばかりを、色々にて参れるを見たまひて、君、南のかたに出でたまひて、惟光を召して、「この餅、かう数々に所狭きさまにはあらで、明日の暮に参らせよ。今日はいまいましき日なりけり」と、

紫の上の所にだけ　源氏　西の対の南面　こんなにたくさん　大げさにはしないで

照れたように笑って　〔惟光は〕察しの早い男なので　すぐ気がついた

うちほほゑみてのたまふ御けしきを、心ときものにて、ふと思ひ寄りぬ。惟光たしかにもうけたまはらで、「げに愛敬のはじめは、日選りしてきこしめすべきことにこそ。さても、子の子はいくつかつかうまつらすべうはべらむ」と、まめだちて申せば、「三つが一つかにてもあらむかし」とのたまふに、心得果てて、立ちぬ。もの馴れのさまやと君はおぼす。人にも言はで、手づからといふばかり、里にてぞ、作りゐたりける。

〔惟光〕　吉日を選んで召し上がるべきでございます　まじめ顔で　〔源氏〕　すっかり合点して　〔惟光は〕　自身で手を下すばかりにして　自分の家で

一　長年、（紫の上を）かわいいとお思い申してきた気持は、（契りを結んでからの彼女への愛着からすれば）ほんの一部分にも当らぬほどであった。以下「わりなかるべきこと」まで、源氏の心中の思い。

二　人の心は何と妙なものなのだろう。あまりの気持の変化に我ながらあきれている思い。

三　少納言（乳母）は、年輩者だから。年の功で何でも知っているからの意。

四　少納言の娘の弁。「弁」は、女房の呼び名。

五　香壺（香を入れておく壺）を納める箱。内密にするため、餅の容物にも苦心している。（図録一二参照）

六　どうか。ゆめゆめ。強調する言葉。原義は、恐れつつしむ意。

七　疎略に扱って下さるな。「な」は、「な……そ」の形を途中で言いさしたもの。

八　あだ―浮気なんてことはまだ知りませんのに。惟光の用いた同じ言葉を別の意味に生かして、言い返したもの。女房の応答によくある例。

九　そんな（「あだ」などという）言葉は慎んで下さいよ。

一〇　源氏の君が、いつものように、（三日の夜の餅の意味を）教えておあげになっていることであろうよ。草子地。

源氏　機嫌をとりかねなさって　今はじめて盗み出して来た人のような感じがする

君は、こしらへわびたまひて、今はじめ盗みもて来たらむ人のこちするも、いとをかしくて、年ごろあはれと思ひきこえつるは、片端にもあらざりけり、人の心こそうたてあるものはあれ、今は一夜も隔てむことのわりなかるべきこととおぼさる。のたまひし餅、

お命じになった　〔紫上が〕　一夜でも絶え間を置くのはつらいことだろうと　〔惟光が〕

忍びていたう夜ふかして持て参れり。少納言はおとなしくて、はづかしくやおぼさむと、思ひやり深く心しらひて、娘の弁といふを呼び出でて、「これ忍びて参らせたまへ」とて、香壺の筥を一つさし入れたり。「たしかに御枕上に参らすべき祝ひのものにはべる。あなかしこ、あだにな」と言へば、あやしと思へど、「あだなることは、まだならはぬものを」とて取れば、「まことに、今はさる文字忌ませたまへよ。よもまじりはべらじ」と言ふ。若き人にて、けしきもえ深く思ひ寄らねば、持て参りて、御枕上の御几帳よりさし入れたるを、君ぞ、例の聞こえ知らせたまふらむかし。

〔惟光は〕　気を配って　〔惟光〕　そっとさし上げて下さい　〔惟光〕　間違いなく　〔弁は〕　妙なことだと　〔惟光〕　まじめな話　まさか使うことはないでしょうが　〔弁は〕　事情も

女房たち　下げさせなさったので

人はえ知らぬに、翌朝この筥をまかでさせたまへるにぞ、親しき

お側近く

一一 餅を盛るお皿やそのほかの道具類など。
一二 台（または机）の足を花形に彫刻したもの。ここでは、餅の皿を載せる。（図録一二参照）
一三 とてもこうまで（三日の夜の餅の儀式を行うほど）正式な扱いをしては下さるまいとお思い申していたのに。

源氏、いよいよ紫の上にひかれ　朧月夜の君、御息所を顧みず

一四 そわそわと落着かず、いつも目の前に紫の上の面影がちらついて恋しく思われるので。
一五 新婚の紫の上が何と思うかとつらくて、「一夜たりとも間を置いたりできようか」と、お心にかかってならないので。「新手枕」「夜をや隔てむ」は、「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎からなくに」――新妻とはじめて手枕を交わしてのちは、一夜でも逢わずにいられようか、憎くはないものを（『古今六帖』五、一夜へだつ）による。
一六（妻を亡くした直後で）この世がひどく厭わしく思われるので、この時期をやり過してから、どなたにもお目にかかりましょう。

（惟光は）仕える者ばかりは限りの人々、思ひ合はすることどもありける。二御皿どもなど、いつのまにかしいでけむ、花足いときよらにして、餅のさまも、ことさらび、いとをかしうととのへたり。少納言は、一三いとかうしもやとこそ思ひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、おぼしいたらぬことなき御心ばへを、まづうち泣かれぬ。「さても、うちうちにのたまはせよな。（惟光も）かの人も、いかに思ひつらむ」と、ささめきあへり。

（源氏は）一四かくてのちは、内裏にも院にも、あからさまに参りたまへるほどだに、静心なくおもかげに恋しければ、あやしの心やと、われながらおぼさる。通ひたまひし所々よりは、うらめしげにおどろかしきこえたまひなどすれば、いとほしとおぼすもあれど、一五新手枕の心苦しくて、「夜をや隔てむ」と、おぼしわづらはるれば、いとの憂くて、なやましげにのみもてなしたまひて、（源氏）一六「世の中のいと憂くおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき」とのみいらへたまひつつ過ぐしたまふ。

（惟光は）趣向を凝らし（調達したのだろう）（きれいなのを用意して）（お情けが身にしみてありがたく）（女房たち）それにしても（内々私たちにお命じ下さればいいのに）（どう思ったでしょう）（ほんのしばらく参上なさっている間でさえも）（女君たちからは）（お便りをさし上げたりなさるので）（気の毒だとお思いになる方もあるが）（他所へ通うのは）（もっぱら気分がすぐれないということになさって）（といったお返事ばかりで）

一 弘徽殿の大后。
二 朧月夜の君。弘徽殿の大后の妹。「御匣殿」は、「御匣殿の別当（長官）」の略。本来は御匣殿（宮中の貞観殿にあって衣服を調製する役所）に勤める女官を監督する役であるが、天皇、東宮の御寝に侍ることが多い。朧月夜の君は、後文によれば、まだ後宮に入っていないが、そのような含みでまず任命されたのであろう。御匣殿に就任したことは、ここにはじめて見える。
三 （朧月夜の君が）そういうことになっても。源氏の正妻になっても、の意。
四 （御匣殿の別当としての）宮仕えでも、立派にさえお勤めなさるなら、何の不体裁なことがありましょう。
五 浮気をしてみたところで何になろう。葵の上が若くて逝ったように、長くもない人生なのだから。
六 女の怨みを負うのもつまらないことだったと、（御息所の一件があって以来）ますます、あぶないことだと自戒するお気持になっている。
七 ほんとうに頼みとする人（正妻）としてお頼り申すことになったら。
八 今までのような（愛人といった）関係で、大目に見て下さるならば。

源氏、紫の上のことを公にしようと考える

今后は、御匣殿、なほこの大将にのみ心つけたまへるを、「げにはた、かくやむごとなかりつる方も失せたまひぬめるを、さてもあらむに、などかくちをしからむ」など、大臣のたまふに、いと憎しと思ひきこえたまひて、「宮仕へも、をさをさしくだにしなしたまへらば、などかあしからむ」と、参らせたてまつらむことをおぼしはげむ。君も、おしなべてのさまにはおぼえざりしを、くちをしとはおぼせど、ただ今は異様に分くる御心もなくて、何かは、かばかり短かめる世に、かくて思ひ定まりなむ、人の怨みも負ふまじかりけりと、いとどあやふく思ほし懲りにたり。

かの御息所はいといとほしけれど、まことのよるべと頼みきこえむにはかならず心おかれぬべし、年ごろのやうにて見過ぐしたまはば、さるべきをりふしにもの聞こえあはする人にてはあらむなど、さすがに、ことのほかにはおぼしはなたず。

この姫君を、今まで世人もその人とも知りきこえぬ、ものげなき

（右大臣）
一 いまきさき
二 みくしげどの
源氏 ご熱心なのを
あのように重いお扱いのご本妻も亡くなられたようだから
三 何の不足なことがあろう
〔弘徽殿大后は〕
四 おとど
人内おさせ申すことを 熱心に画策なさる
源氏 並々の愛着ではなかったので
残念だとは
五 ことざま 他の女に心を分ける気がなさらず
六 このまま紫の上を妻と決めよう
七 おいたわしくはあるが
六条の御息所
八 しっくりいかないだろう
心に余ることがあるような折にお便りを交わし合う相手としてはふさわしいだろうなどと
まるきり見限ってはしまわれない
紫の上
どこの誰とも存じ上げないのは
いかにも軽く見

九 紫の上の父、兵部卿の宮。（若紫一九五頁参照）

一〇 女子の成人式。はじめて裳を着け、髪上げをする。普通は結婚前、十二、三歳頃に行う。

一一 長年大切にお思い申してきた私の気持も分ってもらえず、うちとけて下さらぬお心がつらくてならない。「馴れはまさらぬ」は、「御猟する雁羽の小野のなら柴の馴れはまさらず恋こそまされ」――あなたに馴れ親しむ機会は増さず、恋い焦がれる思いばかりが増すことだ（『万葉集』巻十二、寄物陳思。『新古今集』巻十一恋一には、四五句「馴れはまさらで恋ぞまされる」柿本人麿）による。

新年、源氏、左大臣家を訪い、悲しみを分つ

一二 例年どおり、上皇御所に拝賀に参上してから、宮中、東宮などにも参られる。妻のための服喪は三カ月なので、源氏は去年十一月半ばに喪が明けている。

一三 一層その悲しみを増すかのように、こうして（故人を思い出させる）源氏ご自身までもがご来訪になったので。

やうなり、九 父宮に知らせきこえてむと、〔源氏は〕思ほしなりて、御裳着（一〇）のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべてならぬさまにおぼしまうくる御用意（ご配慮）など、いとありがたけれど、女君（紫の上）はこよなうとみきこえたまひて、年ごろよろづに頼みきこえて、〔源氏を〕まつはしきこえけるこそ、あさましき心なりけれと、くやしうのみおぼして、さやかにも見合はせたてまつりたまはず、〔源氏が〕ご冗談をおっしゃっても聞こえたはぶれたまふも、苦しうわりなきものにおぼしむすぼほれて、ありしにもあらずなりたまへる御ありさまを、をかしうもいとほしうもおぼされて、「年ごろ思ひきこえし本意なく、馴れはまさらぬ御けしきの心憂きこと」と、怨みきこえたまふほどに、年もかへりぬ。

朔日（ついたち）の日は、（元日）一三 例の、院に参りたまひてぞ、内裏（うち）、春宮（とうぐう）などにも参りたまふ。それより大殿（おほいとの）にまかでたまへり。（左大臣家に退出された）大臣（おとど）、新しき年ともいはず、昔の御ことども聞こえいでたまひて、（亡き人の思い出などお口になさって）さうざうしく（張合いもなく）悲しとおぼすに、一三 いとどかくさへわたりたまへるにつけて、念じかへしたま

（えるようだ）（並々でなく立派にと考えて準備なさる）（世にも珍しいお心遣いだが）（〔源氏を〕お嫌い申さ）（いつもお放し申さなかったとは）（まともに目もお）（合せ申されず）（〔源氏が〕ご冗談をおっしゃっても）（つらく迷惑な）（ふさぎこまれて）（以前とはすっかり変ってしまわれた）（おもしろくもいじらしくも）（ご様子を）（我ながらあきれた考えだったと）（〔源氏〕一一）（年も明けた）（張合いもなく）（じっとこらえなさるが）

へど、堪へがたうおぼしたり。〔源氏は〕一つお年をとられたせいか　堂々たる風格も加御年の加はるけにや、ものものしき前よりもずっと　美しくけさへ添ひたまひて、ありしよりけに、きよらに見えたまふ。一立ち〔涙を〕出でて御方に入りたまへれば、女房たちも人々もめづらしう見たてまつりて忍びあへず。〔源氏が〕若君見たてまつりたまへば、すっかり大きくなってこよなうおよすけて、笑ひがちにおはするもあはれなり。まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば、人もこそ見たてまつりとがむれと見たまふ。二御しつらひなどもかはらず、御衣掛の御装束など、例のやうにし掛けられたるに、女のが並ばぬこそ、栄なくさうざうしけれ。

母大宮　女君のお召し物が　見映えがせずものさびしい

宮の御消息にて、「三今日はいみじく思ひたまへ忍ぶるを、かくわたらせたまへるになむ、なかなか」など聞こえたまひて、「昔なじようなつもりで調えましたお召し物も　〔大宮〕以前と同らひはべりにける御よそひも、四月ごろはいとど涙に霧りふたがりて、色あひなく御覧ぜられはべらむと思ひたまふれど、今日ばかりは、せめて今日だけは　大層心をこめてお作りになったご装束を五なほやつれさせたまへ」とて、いみじくし尽くしたまへるものども、お召しになるようにと六また重ねてたてまつれたまへり。かならず今日たてまつるべきとお

七 束帯の時、袍、半臂の下に着る。後ろに裾を長く引く。（図録九参照）

八 せっかくの志をどうして空しくできようと思われて。

九 「春になったのか」とも（私の年始に参りましたことで）まず知って頂きに参上いたしましたが。「春や来ぬる」は、「新しく明くる今年を百年の春や来ぬると鶯ぞ鳴く」（『源氏釈』所引）によるか。この歌、『貫之集』第三に、四句「春のはじめと」として見える。

一〇 今まで何年も、元日の今日、お心づくしによって着換えておりました美しい晴着を、今日もまた参上して着ますにつけ、涙が降るばかり昔が思われます。「きて」に「来て」と「着て」を掛ける。また「ふる」に「降る」と「古る」（古くなる）を掛け、裏に、以前のことが思われる意をいう。

一一 新しい年だというにもかかわらず、降りそそぐものは、年老いた親の涙でございます。「ふる」に「古る」と「降る」を掛ける。

一二 （どなたのお悲しみも）並々なことであるはずはないのです。草子地。

ぼしける御下襲（七）は、色も織りざまも、世の常ならず、心ことなるを、（すばらしいのを）かひなくやはとて、（源氏は）着かへたまふ。来ざらましかば、（もし来なかったなら）くちをしうお（残念にお思いだったであろうと）ぼさましと、心苦し（おいたわしい）。御返りには、

（源氏）「春や来ぬる」（九）ともまづ御覧ぜられになむ、参りはべりつれど、（思い出されますことが多くて）思ひたまへ出でらるること多くて、（心の内を存分に申し上げられません）え聞こえさせはべらず。

一〇 あまた年今日あらためし色ごろも
　　きては涙ぞふるここちする

（とても気持を静めることはできません）えこそ思ひたまへしづめね。

と聞こえたまへり。御返し、

（大宮）一一 新しき年ともいはずふるものは
　　ふりぬる人の涙なりけり

一二 おろかなるべきことにぞあらぬや。

賢(さか)

木(き)

この巻は、源氏二十三歳の秋（葵の巻末の年）から、二十五歳の夏までの二年間の物語である。

六条の御息所は、源氏との仲を思い切って、伊勢下向を決意した。出発の日も近い九月はじめの一夜、源氏は嵯峨野を分けて、野の宮に御息所を訪れた。巻名「賢木」は、この時交わされた榊の歌によるもので、前巻の「葵」と並んで、神事にちなみ、対をなす命名になっている。斎宮下向の日、源氏は、はるかな旅路を偲んで、思いに沈んだ。

その頃から桐壺院は病がちであったが、冬、帝（朱雀院）に、東宮と源氏を重んずるよう遺言して崩御した。藤壺は三条の里邸に退出した。

諒闇の新年、権勢は右大臣方に移り、朧月夜は尚侍に、朝顔の姫君は斎院になった。朧月夜は今も源氏と文通し、弘徽殿の細殿で危い密会をする。

藤壺は、弘徽殿の大后の圧迫が強まる中で、東宮の将来を懸念し、頼みにする源氏にふたたび迫られたのを機会に出家を決意する。藤壺の強い拒否に世をはかなんだ源氏は、雲林院に籠るが、紫の上を思い、帰京した。年末、桐壺院一周忌の法要のあと、御八講の結願の日、藤壺は落飾した。

年明けて、藤壺や源氏方の人々は、みな昇進を阻まれ、左大臣も辞職した。源氏や三位の中将（頭の中将）は、朝廷に出仕せず、詩作に心をやっている。夏、源氏は、病のため退出した朧月夜に忍び逢ううち、雷鳴の暁、右大臣に現場を見つけられた。激怒した弘徽殿の大后は、これを口実に、源氏の失脚を計ろうとする。

一　斎宮の伊勢ご下向が近づくにつれて。斎宮は野の宮における一年間の潔斎ののち、九月に伊勢に下る。

二　何といっても今度こそはと。「さりとも」は「さありとも」のつづまった形。「さ」は、源氏と御息所の、しっくりいっていなかった関係をさす。それが世間に知れていたことは、葵六六～六七頁参照。

三　（御息所の）御殿の人々も。斎宮の邸なので「宮」という。

四　ふっつりとお通いがなく、あまりにもひどい（源氏の）お扱いをご覧になるにつけ。

五　（源氏が）心からいやだと思われることがあったのであろう。御息所の生霊を見あらわされたことをさす。

六　斎宮に親が付き添ってお下りになる先例も、特にないけれども。歴史上は、円融天皇の貞元二年（九七七）九月十六日、斎宮規子内親王（村上天皇皇女）に、母の女御徽子女王が付き添って下った例がただ一例ある。御息所の伊勢下向は、この徽子女王の例に倣っているが、この物語は、桐壺帝を円融天皇より四代前の醍醐天皇になぞらえているので、「例も、ことになけれど」と言った。

七　（斎宮がまだお年がゆかず）とてもお一人で行かせるにはしのびないご様子なのにかこつけて。この時、斎宮は十四歳。（一三七頁参照）

六条の御息所、伊勢下向を決意する

斎宮の御下り近うなりゆくままに、御息所、もの心細く思ほす。身分の高いけむたいご本妻だと思われていらっしゃったやむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せたまひてのち、さりともと世人も聞こえあつかひ、宮のうちにも期待に胸をときめかせていたのに心ときめきせしを、それ以後かえって そのものちしも、かき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことに憂しとおぼすことこそありけめ、と、知り果てたまひぬれば、一切の未練をお断ち切りになって よろづのあはれをおぼし捨てて、ひたみちにい発なさろうとする で立ちたまふ。親添ひて下りたまふ例も、ことになけれど、いと見放ちがたき御ありさまなるにことづけて、憂き世を行き離れむとおぼすに、大将の君、源氏は〔御息所が〕さすがに今はとかけ離れたまひなむも、遠くへ行っておしまいになるのも くちをしくおぼされて、御消息ばかりは、情のこもった書きぶりで あはれなるさまにて、たびたび通ふ。対面したまはむことをば、今さらにあるまじきことと、御息所女君

もおぼす。人は心づきなしと思ひ置きたまふこともあらむに、われは今すこし思ひ乱るることのまさるべきを、あいなしと心強くおぼすなるべし。

〔御息所は〕自邸には　ほんのしばらく　内密にしていられるので

もとの殿には、あからさまにわたりたまふをりをりあれど、いたう忍びたまへば、源氏は大将殿え知りたまはず。たはやすく御心にまかせて、まうでたまふべき御住処にはたあらねば、桐壺院　気になりながら　おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上、大層重いご病気というわけではないけれども　おどろおどろしき御なやみにはあらで、お具合が悪く　例ならず時々なやませたまへば、お苦しみあそばすので いとど御心の暇なけれど、つらき〔御息所が〕自分を薄情者だと思いこんでおしまいになるのもおいたわしく　ものに思ひ果てたまひなむもいとほしく、人聞き情なくやとおぼし起して、野の宮にまうでたまふ。九月七日ばかりなれば、むげに今日明日とおぼすに、女方も心あわたたしけれど、立ちながら、と、〔源氏から〕たびたび御消息ありければ、〔御息所は〕どうしたものかとお迷いになるものの いでやとはおぼしわづらひながら、いとあまりうもれいたきを、物越ばかりの対面は、と、人知れず待ちきこえたまひけり。

一 あちら（源氏）は、気に食わぬと根に持っていらっしゃることもあろうに、自分の方は（お会いすれば）今より一層悩みが深まるだけのこと、それではつまらぬ目を見るばかりだと、気強くあきらめていられるのであろう。

源氏、御息所を野の宮に訪う

二 野の宮（葵九九頁参照）をさす。

三 （源氏は）ますますお心の休まる間がないけれども。

四 他人が聞いても、冷たい男だと思われはしないかと、無理に思い立って。

五 （伊勢下向の日は）もう今日明日に迫っているとお思いになるにつけ、御息所のほうも何かとせわしない折ではあるが。「むげに」は、ひたすら、全くの意。

六 ほんの少しの間だけでもと。「立ちながら」は、坐らずに立ったままでの意。

七 （お会いしないのも）あまりに控えめすぎて、風情がないので。せっかくの源氏の訪問に殻を閉ざすのもふさわしくないという判断。

八 物越しでお目にかかるぐらいはよかろうと。「物越」は、簾、障子（襖）などを隔てること。

九 はるばると広い野にお入りになるなり。「野辺」は歌語。野の宮は嵯峨野にある。
一〇 丈の低い茅萱の生えた原。
一一 「枯れ枯れ」と「嘆れ嘆れ」を掛ける。
一二 松風が心に沁みるばかり音を添えて、何の琴とも聞き分けられぬくらいかすかに、楽の音が絶えだえ聞えてくるのは、まことに優艶である。「こと」は、琴、箏、和琴、琵琶などの絃楽器の総称。ここは、「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをより調べそめけむ」（『拾遺集』巻八雑上、野の宮に斎宮の庚申しはべりけるに、松風入夜琴といふ題をよみはべりける　斎宮の女御）によって書いている。「峰」に琴の「緒」（絃）を掛ける。斎宮の女御は徽子女王（一一一七頁注六参照）。
一三 朝廷から護衛として賜る近衛府の官人。源氏はこの時参議兼近衛の大将で、随身六人を賜る。
一四 お供の洒落者たちは、場所も嵯峨という風流な所なので、身にしむばかり感じ入っている。
一五 丈の低い柴垣。（一巻図録八参照）
一六 板葺きの建物。野の宮は一代一度限りの造営なので仮建築である。
一七 樹皮を剝かない木で作った鳥居。簡素な仮の鳥居。
一八 咳払いをして。人に注意を促す時などにする。
一九 神饌（神に供える酒食）を供するための小屋であろうと古注にいう。

遙けき野辺を分け入りたまふより、いとものあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのこととも聞き分かれぬほどに、ものの音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。むつましき御前十余人ばかり、御随身ことことしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、ことにひきつくろひたまへる御用意、いとめでたく見えたまへば、御供なる好き者ども、所からさへ身にしみて思へり。御心にも、などて今まで立ちならさざりつらむと、過ぎぬるかたくやしうおぼさる。ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりあたりいとかりそめなり。黒木の鳥居どもは、さすがに神々しう見えわたされて、わづらはしきけしきなるに、神司の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどち、ものうち言ひたるけはひなども、ほかにはさま変りて見ゆ。火焼屋かすかに光りて、人気すくなく、しめじめとして、ここにもの思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどをおぼしやるに、

しおれてゆき　気心の知れた　前駆の者十人余り　ものものしいでたちでなく　特に気を配って装わ　〔源氏の〕　源氏ご自身も　空しく過ぎたこれまでが　たび来なかったのであろうかと　外囲いにして　あちらこちらに　神官たちが　様子であるのに　憚られる　物思いに沈む御息所が　長い月日を過して来られた間のことを　〔源氏が〕

一 寝殿の北にある建物。奥向きに用いる。寝殿に斎宮、北の対に母御息所がいるのであろう。

二（女房たちの）奥ゆかしい立ち居の気配がいろいろ聞えてくる。

三 何やかやと、取次ぎ（の女房）を通じてのご挨拶ばかりで。

四 このような（恋路のための）外出も、今では似合わしからぬ身の上になっていますことをお察し下さいますならば。近衛の大将として、身軽な外出のままならぬことをいう。

五 こんなふうに、隔てを置いたお扱いをなさらずに。「注連」は、神域に不浄なものの侵入するのを禁ずるために張り廻らす縄のこと。場所が野の宮なので、部屋に入れてもらえぬことを「注連のほかにもてなす」（神域の中に入れないようにする）と言った。

六（御息所は）さて、どうしたものか、（こんな押し問答を繰り返しているのは）お側の女房の手前も見苦しく、あの方（源氏）も年がいもないと思われるだろうし、（さりとて）出て行って対面するのも今さら気のひけることと思われるにつけ、ひどく気が進まないけれども。「若々し」は、年相応の思慮のないこと。

七 こちら（北の対）では、簀子に上がるぐらいのお許しはありましょうか。部屋には入れて頂けないまでも……と、他人行儀な応対を皮肉ったもの。

源氏、御息所と歌を詠み交わし、一夜を過す

いといみじうあはれに心苦し。

たまらないほどせつなくおいたわしい

北の対のさるべき所に立ち隠れたまひて、御消息聞こえたまふに、遊びはみなやめて、心にくきけはひあまた聞こゆ。何くれの人づての御消息ばかりにて、みづからは対面したまふべきさまにもあらねば、いとものしとおぼして、「かうやうのありきも、今はつきなきほどになりにてはべるを思ほし知らば、かう注連のほかにはもてなしたまはで、いぶせうはべることをもあきらめはべりにしがな」と、まめやかに聞こえたまへば、人々、「げに、いとかたはらいたう、立ちわづらはせたまふに、いとほしう」など、あつかひきこゆれば、いさや、ここの人目も見苦しう、かのおぼさむことも若々しう、出でゐむが今さらにつつましきこととおぼすに、いとものうけれど、情なうもてなさむにもたけからねば、とかくうち嘆き、やすらひて、ゐざり出でたまへる御けはひ、いと心にくし。「こなたは、簀子ばかりの許されははべりや」とて、上りゐたまへり。はなやかにさし

（源氏が）程よい所に

御息所自身は

（源氏）

晴らしたく存じます

胸にたまっていますことも

女房たち

心をこめて

とても見てはいられませんほど

お取りなし申し上げるので

おいたわしいこと

おもしろくないと

演奏は

来訪の旨を申されると

冷たい態度をとったところで今さらどうにもならないので

溜息をつき

ためらいながら

（御息所の）

奥ゆかしい（源氏）

八　夕月の光に。

九　この榊の葉の色のように、変らぬ私の心に導かれて、禁制の神垣も越えて参ったのです。「榊」は、神事に用いる常緑樹。「しるべ」は、道案内のこと。「ちはやぶる神垣山の榊葉は時雨に色も変らざりけり」（『後撰集』巻八冬、読人しらず）、「ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし今は我が身の惜しけくもなし」（『拾遺集』巻十四恋四、人麿）による。

一〇（それなのに）何とも情けないお仕打ちです。

一一　ここ野の宮には、人を導く目印の杉もありませんのに、どう間違えてお折りになった榊なのでしょう。「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）による。

一二　神に奉仕する少女のいるあたりだと思ったので、榊葉の香がなつかしく、わざわざ捜し求めて折って来たのです。「少女子」は、神前に舞を奏する少女。「少女子があたり」で、斎宮とともにいる御息所をさすことになる。「榊葉の」以下は、「榊葉の香をかぐはしみ尋め来れば八十氏人ぞ円居せりける」（『拾遺集』巻十、神楽歌）による。「少女子」「榊葉」は縁語。

一三　それでも御簾を引きかぶって。上半身だけを室内（廂の間）にさし入れた形。

一四　下長押。簀子と一段高くなった廂とを仕切る横木。

出でたる夕月夜（八）に、立ち居をなさる〔源氏の〕ご様子うちふるまひたまへるさま、その美しさはにほひ似るものなくめでたし。幾月ものご無沙汰を月ごろのつもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、おもはゆいほどになってしまったので まばゆきほどになりにければ、榊をいささか折りて持たまへりけるを、〔御簾の中に〕〔源氏〕、さし入れて、「変らぬ色をしるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。さも心憂く（一〇）」と聞こえたまへば、

〔御息所〕神垣はしるしの杉もなきものを（一一）

いかにまがへて折れる榊ぞ

と聞こえたまへば、

〔源氏〕少女子があたりと思へば榊葉の（一二）

香をなつかしみとめてこそ折れ

あたり一帯の神域らしい様子は憚られるけれども おほかたのけはひわづらはしけれど、御簾（一三）ばかりはひき着て、長押（一四）におしかかりてゐたまへり。

思い通りにお逢い申すことができ心にまかせて見たてまつりつべく、女君も人も慕ひざまにおぼしたりつる年月は、君にご執着であった今までの年月は のんびり構えていられたご慢心のあまりに、のどかなりつる御心おごりに、さほどご執心でもなかったさしもおぼされざりき。

また、〔源氏の〕心のうちに、一いかにぞや、疵ありて思ひきこえたまひにしのちはた、あはれもさめつつ、かく御仲も隔たりぬるを、めづらしき（恋しい気持も冷えてゆき）御対面の昔おぼえたるに、（昔を思い起させるので）あはれとおぼし乱るること限りなし。来（胸にせまって）し方行く先おぼし続けられて、〔源氏は〕心弱く泣きたまひぬ。二女は、さしも見えじとおぼしつつむめれど、（堪えきれぬご様子なのを）え忍びたまはぬ御けしきを、〔源氏は〕いよいよ心苦しう、なほおぼしとまるべきさまにぞ聞こえたまふめる。〔伊勢下向は〕（やはり思いとまられるようにと申し上げなさるようだ）月も入りぬるにや、（物思いをそそる）あはれなる空をながめつつ、〔源氏が〕怨みきこえたまふに、（あれこれと胸のうちに積っていらしたお恨みも）ここら思ひ集めたまへるつらさも消えぬべし。〔御息所は〕やうやう今は（未練を）と思ひ（お絶ちになったのに）離れたまへるに、三さればよと、なかなか心動きておぼし乱る。殿上（四てんじょう）の若君達（きむだち）などうち連れて、五とかく立ちわづらふなる庭のたたずまひも、げに艶（えん）なるかたにうけばりたるありさまなり。（優艶な風情といった点ではどこにも負けぬ様子である）思ほし残すこと（あらゆる物思いをしつくしなさったお二人の間で）なき御なからひに、（お互いに話し合われたさまざまのことは）聞こえかはしたまふことども、六まねびやらむかたなし。

やうやう明けゆく空のけしき、〔この場面のために〕ことさらにつくりいでたらむやう（わざわざ作り出したかのように情

一（御息所について）いかがなものか、欠点があるとお思い申されてからのちは。生霊事件をさす。「いかにぞや」は、感心しないという気持を表す。

二 御息所は、気弱く悩んでいる様子を見られまいと気持を抑えていらっしゃるようだが。

三 やはり思っていた通りだった（源氏に逢えば必ず決心が鈍るに違いないと案じていた通りになった）と、かえってお心が動揺して思い迷われる。

四 殿上を許された貴公子たちなどが連れだって来て。「君達」は、親王、大臣、大将などの子息をいう。葵の巻にも、「殿上人どものこのましきなどは、朝夕の露分けありくをそのころの役になむする、など聞きたまひても」（九九頁）とあった。

五 何やかやと言って佇んでは心を砕くという庭の風情も。野の宮の庭の風情を口実に、女房に懸想する青年貴公子が訪れては、いつまでも立ちつくして、女を口説くのに苦労することをいう。

六（あまりにも普通とは違って、深くこまやかなので）そっくりそのまま語り伝えるすべもない。草子地。「まねぶ」は、真似る意から出て、あったことをそのまま語り伝えること。

野の宮の暁の別れ

七 あなたとの明け方の別れはいつも涙に濡れていましたが、今朝の別れは今まで経験したことがない、涙に曇る秋の空です。「露けし」「秋」は縁語。

八（秋の間、さんざん鳴いて）鳴き声も嗄れがれになった松虫の音も、まるで暁の別れの悲しさを知って泣くかのようであるのを。松虫は、今の鈴虫。

九 まして、（お二人とも）どうしようもないほど思い乱れていらっしゃるので、（松虫の音は、一層悲しみを掻き立てて）かえって、事がはかどらないのであろうか。すぐれた別れの歌があってもよさそうだが、そうでもない、の意。兼ねて読者への弁解にもなる。

一〇（何事もなくて）ただ秋が過ぎ去って行くということだけでも、人は何がなし悲しいものなのに、この上さらに鳴き声をあげておくれでない、野辺の松虫よ。今は九月八日の朝。九月は当時の暦で晩秋である。「別れ」に、人との別れの意を掛ける。

一一（お帰りの）道中は露がしとどに置き、源氏は涙にくれて帰られた。

一二 御息所もとうてい気強いお気持でいられず、源氏のお帰りのあと、しみじみと、物思いに沈んでいらっしゃる。

一三（伊勢下向が）どんなに余儀ない旅路だからとて、こんなすばらしいご様子の方（源氏）をお見限りして、どうしてお別れ申すことができましょうか。

趣がある

なり。

（源氏）暁の別れはいつも露けきを

こは世に知らぬ秋の空かな

風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、をり知り顔なるを、（帰りにくそうに）出でがてに、（女君の）御手をとらへてやすらひたまへる、（思案していられるご様子は）いみじうなつかし。（これといって物思いのない者でも）さして思ふことなきだに、聞き過ぐしがたげなるに、（おやさしい）ましてわりなき御心まどひどもに、なかなか、ことゆかぬにや。

（御息所）一〇

おほかたの秋の別れもかなしきに

鳴く音な添へそ野辺の松虫

（くやまれることも多いが）くやしきこと多かれど、かひなければ、（周囲が明るくなってゆくのも具合悪くて）明けゆく空もはしたなうて（源氏は）出でたまふ。一一 道のほどいと露けし。一二 女もえ心強からず、名残あはれにて、ながめたまふ。ほの見たてまつりたまへる月影の（源氏の）御容貌、なほとまれる（残っている）匂ひなど、（女房たちは身にしむばかり）若き人々は身にしめて、（不謹慎なこともしそうなほど）あやまちもしつべくめできこゆ。「いかばかりの道にてか、かかる御ありさまを見捨て

一（源氏からの）後朝のお手紙。

二（伊勢下向のことは）今さらあらためて思い迷われるべきことではないので。「定めかね」は、葵七八頁注二参照。

三 それほど深くは思われぬことでも、恋路のためには（女の気持をとらえるようなうまいことを）お上手にいくらでもおっしゃるようなお方だから。この一節、前の「御文、常よりもこまやかなるは」を受けて、手紙を書いた源氏の心事を忖度したもの。

四 並々の愛人とはお思い申しておられなかった間柄のお方が。御息所は身分と人柄からいって、正妻級の人である。

五（御息所の）ご旅装はもとより女房たちの衣裳まで、それに何やかやの旅路のお道具類などを。

六 軽はずみで情けない評判ばかり世に流して、言いようもなく嘆かわしいわが身のさまを。下の「起き臥し嘆きたまふ」に掛る。

七（斎宮に親が付き添って下向なさるのは）前例のないことと。（一二七頁注六参照）

八 万事、世間の人からとやかく批判されたりすることのない身分の者は気楽なものだ。以下、草子地。

九 九月十六日。斎宮下向の当日。この日は歴史上の

伊勢下向の日近く、御息所の嘆き深まる

ては、別れきこえむ」と、あいなく涙ぐみあへり。

一 御文、常よりもこまやかなるは、（情がこもっているので）おぼしなびくばかりなれど、（御息所のお気持も傾きそうなほどだが）二 またうち返し定めかねたまふべきことならねば、いとかひなし。（もうどうにもならない）（源氏）男は、三 さしもおぼさぬことをだに、情のためにはよく言ひ続けたまふべかめれば、まして、おしなべての列には思ひきこえたまはざりし御仲の、（こんなふうにして別れて行こうとなさるのを）かくて背きたまひなむとするを、（残念だともおいたわしいとも）くちをしうもいとほしうも、（思い悩まれるのであろう）おぼしなやむべし。四 旅の御装束よりはじめ人々のまで、何くれの御調度など、（贅を尽し目新しいさまに仕立てて）いかめしうめづらしきさまにて、（お餞別にさし上げなさるけれども）とぶらひきこえたまへど、〔御息所は〕何ともおぼされず。五 あはあはしう心憂き名をのみ流して、あさましき身のありさまを、（今さらのように）今はじめたらむやうに、（下向の時が）ほど近くなるままに、起き臥し嘆きたまふ。斎宮は、若き御ここちに、不定なりつる（はっきりしなかったご出発が）御出で立ちの、かく定まりゆくを、うれしとのみおぼしたり。世の人は、七 例なきことと、（非難したりご同情申したりいろいろ取り沙汰申し上げているようだ）もどきもあはれがりもさまざまに聞こゆべし。八 何ごとも、人にもどきあつかはれぬ際はやすげなり。（かえって世間からと）なかなか世に

斎宮規子内親王下向の日と同日である（一二七頁注六参照）。

一〇（斎宮は）桂川　伊勢下向の日、源氏、斎宮と贈答でお祓えをなさる。「桂川」は、京都市の西（右京区桂町）を流れる川。上流嵐山付近を大井川という。（一巻図録一参照）

一一 斎宮一行を伊勢まで送る勅使。中納言または参議、弁、史、六位以下の官人各一人から成る。

一二 そのほかの公卿（参議以上の者）。

一三 申すも恐れ多い斎宮の御前に。以下は斎宮宛ての手紙。「かけまくもかしこき」（掛畏）は祝詞、宣命の用語。

一四 麻、楮の白皮で作った糸。神事の際、幣帛に用い、禊にかけて奉仕する。

一五 雷神でさえ、思う仲を割きはしませんのに。「天の原踏みとどろかし鳴る神も思ふ仲をばさくるものかは」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）による。

一六 大八洲（日本）をお守り下さる国つ神も情けがおありならば、尽きぬ思いで別れる私と御息所二人の仲を考えてみて下さい。「国つ御神」は、地祇（国土の神）で天神に対する言葉。ここでは「天の原」の「鳴る神」に対して言い、斎宮をたとえる。

一七 女別当（斎宮寮の女官）にお書かせになった。

一八 国つ神がお見通しでお二人の仲をお裁きなさるなら、あなたの実のないお言葉をまず糺されるでしょう。

賢　木

び抜けた身分の方のご身辺には

ぬけ出でぬる人の御あたりは、所狭（窮屈なことが多いものだ）きこと多くなむ。

十六日、桂川にて御祓へしたまふ。常の儀式にまさりて、長奉送使など、さらぬ上達部も、やむごとなくおぼえあるを選らせたまへり。（家柄がよく世評の高い人たちを［帝は］）院の御心寄せもあればなるべし。（桐壺院のお心遣いもあったからであろう）出でたまふほどに、大将殿（源氏）より例の尽きせぬことども聞こえたまへり。（例のように書き尽せぬ思いのたけを申し上げなさった）「かけまくもかしこき御前に」とて、木綿（結びつけて）につけて、

（源氏）鳴る神だにこそ、
八洲もる国つ御神も心あらば

飽かぬわかれの仲をことわれ

（考えてみますと）思うたまふるに、飽かぬここちしはべるかな。（心ゆかぬ思いがいたします）

とあり。いとさわがしきほどなれど、御返りあり。宮の御をば、（［斎宮方では］）女別当して書かせたまへり。（お歌を）

（斎宮）国つ神そらにことわる仲ならば
なほざりごとをまづやたださむ

一（御息所に愛想づかしをされて）うち捨てられた格好で見送ったりするのも。

二 お年の割には風情がお分りになるようだと。斎宮はこの時十四歳（次頁参照）。

三 こんなふうに普通とは違った、めんどうな事情のある恋に必ずひかれるお心癖があって。斎宮は神事に奉仕する身で恋は禁制の上、御息所の娘である。

四 この世は無常だから、斎宮にお会いするようなこともあるに違いない。いつか譲位とか崩御で朱雀院の御代が替れば、斎宮も交替し、帰京するからである。

五 今の午後三時から午後五時までの間。

六 肩で担ぐ乗物。斎宮と同輿しているのであろう。

七 今は亡き、御息所の父の大臣がこの上もない后の位にと望みをおかけになって。

八 年たけて再び宮中をご覧になるにつけても。皇太子妃として時めいた昔と比較しての感懐。

御息所、斎宮に付き添い参内

九 この個所の御息所の年齢は、古来不審とされている。桐壺の巻の源氏誕生直後の記述に照らせば、御息所が故宮（前皇太子）に先立たれた二十の時（現在より十年前）は、明らかに源氏誕生以前である。朱雀院の立太子は源氏四歳の時（一巻桐壺二九頁参照）で、仮にこの年故宮が亡くなったとしても、現在、源氏は十四歳のはずで、これまでの物語の記述や、藤裏葉の巻から逆算したこの年の源氏の年齢二十三歳とは合わない。

大将は、御ありさまゆかしうて（斎宮ご出発の様子が見たくて）、内裏にも参らまほしくおぼせど、一うち捨てられて見送らむも、人わろきここちしたまへば、おぼしとまりて、つれづれにながめたまへり。宮の御返りのおとなおとなしきを、ほほゑみて見たまへり。二御年のほどよりはをかしうもおはすべきかなと、ただならず。（お心が動く）三かうやうに例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖にて、いとよう見たてまつりつべかりし（〔斎宮の〕幼い頃のお姿を）いはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ、四世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし、などおぼす。

（〔斎宮は〕奥ゆかしく風雅なお人柄なので）心にくくよしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。五申の時に、内裏に参りたまふ。御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、六父大臣の限りなき筋におぼし心ざして、いつきたてまつりたまひしてて変って）ありさま変りて、七末の世に内裏を見たまふにも、ものみ尽きせずいになる）あはれにおぼさる。八十六にて故宮に参りたまひて、九二十にて後れたてまつりたまふ。十三十にてぞ、今日また九重（内裏）を見たまひける。

（斎宮のご返歌が大人びているのを）

（所在なく物思いに沈んでいられた）

（体裁の悪い感じがなさるので）

（いくらでも拝見できたはずの）

（残念だ）

（何もかも無性に悲しくお思い）

（大切にかしずき育てられたご境遇がうっ）

一〇 その昔のことを今日は口に出すまいとこらえているけれども、心の中は悲しくてたまらない。
一一 (あまりの美しさに、神に奪られぬか、早死になさらぬかと)ほんとうに不吉なほどにお見えになるのを。
一二 別れの櫛を插してお上げなさる時。斎宮下向には、天皇が大極殿で、親しく斎宮の額に黄楊の小櫛を插し、「京の方へ赴き給ふな」と言われる。
一三 大層胸が迫って、涙をお流しになった。自分が譲位しない限り、斎宮の帰京はない。斎宮に恋情を抱いた帝の悲しみ。
一四 八省院。太政官八省の役人が執務する所。その正殿が大極殿。斎宮の輿は昭訓門を出て南行するから、ここは八省院の東側。(図録四参照)
一五 伊勢下向に供奉する女房の車。「出車」は、簾の脇から衣裳の裾や袖口を出している車。(図録一三参照)
一六 個人的な別れ。恋人の女房たちとの別離。
一七 源氏の私邸。(図録二参照)
一八 私を振り捨てて、今日は出立して行かれましても、鈴鹿川を渡る頃、八十瀬の波に袖を濡らされぬことがありましょうか—後悔して泣かれないでしょうか。「ふり」「鈴」は縁語。鈴鹿川は三重県北部を流れ伊勢湾にそそぐ。「八十瀬」は、たくさんある浅瀬。「鈴鹿川八十瀬渡りて誰ゆゑか夜越えに越えむ妻もあらなくに」(『万葉集』巻十二)以下、歌に詠まれる。

御息所、斎宮とともに伊勢に出発

(御息所)一〇
そのかみを今日はかけじと忍ぶれど
心のうちにものぞ悲しき

斎宮は十四にぞなりたまひける。(大層おかわいらしくていらっしゃるご容姿なのを)いとうつくしうおはするさまを、(立派に装い立ててお上げなさったお姿は)うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ、一二いとゆゆしきまで見えたまふを、帝、(お心がひかれて)一三別れの櫛たてまつりたまふほど、一三いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ。

(斎宮が大極殿から)
出でたまふを待ちたてまつるとて、一四八省に立て続けたる出車(一五)どもの袖口色あひも、目馴れぬさまに心にくきけしきなれば、殿上人どもも、(目新しい趣向で奥ゆかしい感じなので)一六私の別れ惜しむ多かり。(暗くなってから)暗う出でたまひて、(二条大路)二条より洞院の大路を折れたまふほど、一七二条の院の前なれば、大将の君いとあはれにおぼされて、榊にさして、

(源氏)一八
ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川
八十瀬の波に袖はぬれじや

と聞こえたまへれど、いと暗うものさわがしきほどなれば、(翌十七日)またの

日、関のあなたよりぞ御返りある。（逢坂の関の向うから）

（御息所）鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず
伊勢まで誰か思ひおこせむ

（ご筆跡は大層あじわいがあって優雅なのに）言葉少なにお書きになっているのが）ことそぎて書きたまへるしも、御手いとよしよししくなまめきたるに、あはれなるけをすこし添へたまへらましかばとおぼす。霧いたう降りて、ただならぬ朝ぼらけに、うちながめてひとりごちおはす。

（源氏）ゆ三
行くかたをながめもやらむこの秋は
逢坂山を霧な隔てそ

西の対にもわたりたまはで、人やり（誰のせいでもなく）ならず、ものさびしげにながめ暮らしたまふ。まして旅の空は、いかに御心尽くしなること多かりけむ。（旅路の御息所はどんなにかお心の乱れることが多かったであろう）

桐壺院のご病気は
院の御なやみ、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜しみきこえぬ人なし。内裏にもおぼし嘆きて行幸あり。弱き御（院の御所に）（院は）ご衰弱のご容態ながらも）ここちにも、春宮の御ことをかへすがへす聞こえさせたまひて、次

（帝に）ご依頼申し上げなさって

一 鈴鹿川の八十瀬の波に袖が濡れるか濡れないか―私が泣いているかどうか、伊勢に行った先まで誰が思いやってくれましょう。

二 独り言を言っていらっしゃる。次の歌を独詠する。

三 あの方の行く先をせつない思いで眺めていよう、だから、今年の秋は逢坂山のあたりを、霧よ、隠さないでおくれ。

四 紫の上の御殿。

五 「神無月」は、陰暦十月。前に「院の上、おどろおどろしき御なやみにはあらで、例ならず時々なやませたまへば」（一二八頁）とあった。

桐壺院病篤く、帝に遺言する

六 藤壺腹の皇子。実は源氏の子。

七 世の中を治める地位についても。「まつりごた」は「まつりごつ―政治をする」（四段活用）の未然形。

八 必ず世の中を治めてゆける相のある人です。以下、桐壺の巻における高麗の相人の予言などから、源氏を臣下にした事情を説明する（桐壺三一～三三頁参照）。

九 そういう私の意向を無になさらないで下さい。

一〇（政治向きのことは）女の口にすべきことではないので、ここにほんの一部お話しするだけでも気のひける思いがします。草子地の文。当時、女は政道にかかわってはならないとされていたので、弁解するのである。

一一 きまりがあるので。行幸は予定のきまった公式の行事であるので、時間の延長などもままならない。

一二（なまじ帝にお目にかかったために）かえって一層悲しみの種も多いのだった。

東宮行啓、源氏供奉する

には大将の御こと、「はべりつる世に変らず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見とおぼせ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、おほやけの御後見をさせむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれなる御遺言ども多かりけれど、

一〇 女のまねぶべきことにしあらねば、この片端だにかたはらいたし。帝も、いと悲しとおぼして、さらに違へきこえさすまじきよしを、かへすがへす聞こえさせたまふ。御容貌も、いときよらに、ねびまさらせたまへるを、うれしくたのもしく見たてまつらせたまふ。限りあれば、急ぎ帰らせたまふにも、一三なかなかなること多くなむ。

春宮も、一度にとおぼしめしけれど、ものさわがしきにより、日をかへてわたらせたまへり。御年のほどよりは、おとなびうつくしき御さまにて、恋しと思ひきこえさせたまひけるつもりに、何心も

（桐壺院）私の在世の時と変らず　隠しごとなく　源氏　少しも　遠慮はいるまいと思っています　そういうことから　さしさわりが多いので　臣下として　朝廷の　輔佐役をさせようと考えたのです　そくそくと胸をうつ　けっして　お言葉にそむき申さぬということを　〔帝は〕　大層お美しく　年ごとにご　立派におなりあそばすのを　〔院は〕　〔帝が〕　大層な騒ぎになるので　別の　大人びてかわいらしい　日に　〔父院を〕恋しくお思い申し上げていらっしゃったあげくなので　ただもう

一 藤壺。院とともに上皇御所にいる。わが子東宮との対面も久々のことである。

二 （東宮のこと、中宮のことと）あれこれお心も乱れる思いでおいでになる。

三 （東宮は）大層頑是ないお年頃なので。この時五歳。

四 先日の行幸に劣るところはない。今のところ、帝すなわち右大臣方と、東宮、源氏方は勢力伯仲している。

五 弘徽殿の大后も、お見舞に院の御所へ参ろうとされるが。大后は内裏にいる。

桐壺院崩御

六 中宮がこんなふうにいつも院のお側にお付き添いになっているのにこだわられて。葵の巻のはじめに、「今はましてひまなう、ただ人のやうにて添ひおはしますを、今后は心やましうおぼすにや、内裏にのみさぶらひたまへば」（六五頁）とあった。

七 足も地につかぬさまで驚き悲しむ人がたくさんいる。院の恩顧をこうむった人々である。

無心に〔父院を〕なくうれしとおぼして、見たてまつりたまふ御けしき、いとあはれなり。一中宮は涙に沈みたまへるを、〔桐壺院が〕見たてまつらせたまふも、二さまざま御心乱れておぼしめさる。〔院は東宮に〕何くれとさざきのことをお教え申し上げなさるが、三いとものはかなき御ほどなれば、〔院は〕うしろめたく悲しと見たてまつらせたまふ。源氏大将にも、朝廷にお仕え申し上げるについてのお心構えや〔東宮〕この宮の御後見したまふべきことを、お世話役をなさるべきことを、繰り返し仰せつけになるかへすがへすのたまはす。〔東宮は〕夜ふけてぞ帰らせたまふ。〔廷臣たちが〕残る人なくつかうまつりてののしるさま、四行幸におとるけぢめなし。〔東宮が〕お供申し上げてざわめいている様〔院は〕大層つらくお思いになる子はほんの短いご会見で〔東宮が〕飽かぬほどにて帰らせたまふを、いみじうおぼしめす。

五 大后も参りたまはむとするを、六中宮のかく添ひおはするに御心置かれて、〔院は〕おぼしやすらふほどに、〔院は〕大してお苦しみになるご様子でもなくおどろおどろしきさまにもおはしまさで、崩御あそばしたかくれさせたまひぬ。七足を空に思ひまどふ人多かり。〔院は〕皇位をお譲りあそばしたというだけのことで天下の政治をとりしきっておられたを去らせたまふといふばかりにこそあれ、世のまつりごとをしづめさせたまへることも、ご在位中と同じことでいらっしゃったのにわが御世の同じことにておはしまいつるを、

八　帝（朱雀院）の外祖父右大臣。弘徽殿の大后の父。

九　その右大臣の思うままになってしまうであろう世の中を。

一〇　七日ごとのご法事などをお勤めになるご様子も。「孝ず」は、死者の供養をすること。

一一　「藤衣」「藤の衣」の敬語。藤衣は、藤蔓の繊維で織った粗末な着物、転じて喪服を意味する歌語。「やつる」は、粗末な身なりをする意。

一二　去年は正妻葵の上、今年は父桐壺院と続いて、このような不幸におあいになるにつけ。

一三　まっさきに思い立たれることはあるが。出家の志をいう。

一四　また一方では、いろいろと出家を妨げるご事情も多い。「ほだし」は、人の身を束縛するもの。ここでは、東宮や紫の上、夕霧などのことであろう。

一五　院の四十九日のご法事。「四十九日」は「しじふくにち」と読むべきであろう。『湖月抄』には「ナヽナヌカ」と振り仮名がある。

一六　御息所は、帝や皇太子の御子を生んだ方の称。

一七　院の四十九日のご法事は、十二月の二十日のことだったので、年の暮の、あたり一体の世の中の終りを告げるかのような暗い空模様につけても。次に「晴るる世なき中宮の御心……」とあり、後文に「雪うち散り風はげしうて」とあるので、雪模様なのであろう。

帝はいと若うおはします、祖父大臣（八）、いと急にさがなくおはして（性急で意地の悪いお方なので）、その御ままになりなむ世を（九）、いかならむと（どうなるだろうと）、上達部、殿上人みな思ひ嘆く。

藤壺
中宮、源氏大将殿などは、ましてすぐれてものもおぼしわかれず（何も考えられぬほどのお嘆きで）、（一〇）のちのちの御わざなど、孝じつかうまつりたまふさまも（人一倍）、そこらの親（大努の）王たちの御中にすぐれたまへるを、ことわりながら（当然のことながら）、いとあはれに（おいたわしい限りと）、世人も見たてまつる。藤の御衣（一一）にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり（美しくいたいたしげである）。去年今年とうち続き、かかることを見たまふに、世もいとあぢきなうおぼさるれど（むなしくつまらなくお思いになるが）、かかるついでにも（機会）、まづおぼし立たるることはあれど（〔桐壺院の〕）、またさまざまの御ほだし多かり（一四）。御四十九日（一五）までは、女御（一六）、御息所たち（上皇御所）、みな院につどひたまへりつるを、過ぎぬれば、散り散りにまかでたまふ。師走の二十日なれば、おほかたの世の中とぢむる空のけしきにつけても、まして晴るる世なき中宮（藤壺）の御心のうちなり。大后の御心も知りたまへれば（〔大后の〕）、心

一（中宮をはじめ、女御、御息所たちが）皆、それぞれ他所へとご退出なさるにあたっては。各人の里邸に退出するのである。

藤壺、三条の宮に退出にあたり、源氏と贈答

二 藤壺の宮の里邸。（紅葉賀一八頁、二三頁参照）

三 藤壺の兄。紫の上の父。（系図一、二参照）

四 お部屋の前の庭の五葉の松。当時、観賞用としてよく植えられた。

五 木蔭がひろいので、頼みにしていた松は枯れてしまったのであろうか、下葉も散ってゆく年の暮であることだ。桐壺院を「松」に、その後宮の女性たちを「下葉」に喩えている。

六 氷の張りつめた池の、鏡のような面はさやかに澄んでいるのに、長年お見かけした池水に映る影―院のお姿を拝することができないのが悲しい。「池はなほ昔ながらの鏡にて影見し君がなきぞかなしき」（『大和物語』七十二段、式部卿敦慶親王亡きのち、宮邸の池を見て、平兼盛の詠んだ歌）による。

ほしいままになさるであろう今後が　立つ瀬もなく
にまかせたまへらむ世の、はしたなく住み憂からむをおぼすよりも、
お身近にお親しみ申し上げなさった長年の院のご様子を　〔藤壺は〕
馴れきこえたまへる年ごろの御ありさまを思ひ出できこえたまはぬ
時の間なきに、このままおいでになるわけにもゆかず　かくてもおはしますまじう、みなほかへと出で
たまふほど、悲しきこと限りなし。

藤壺
宮は、三条の宮にわたりたまふ。御迎へに兵部卿の宮参りたまへ
上皇御所　人影がまばらになってひっそ
り。雪うち散り風はげしうて、院の内やうやう人目かれゆきてしめ
りしている所に　源氏　藤壺の御殿　故院の思い出話を
やかなるに、大将殿、こなたに参りたまひて、古き御物語聞こえた
まふ。御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見たまひて、親
王、

（兵部卿宮）五
蔭ひろみ頼みし松や枯れにけむ
下葉散りゆく年の暮かな

どれほどすぐれた歌でもないのに　その折にふさわしくて心にしみいり　源氏
何ばかりのことにもあらぬに、をりからものあはれにて、大将の御
袖いたう濡れぬ。池の隙なう氷れるに、

（源氏）六
さえわたる池の鏡のさやけきに

七 お心の内をそのまま歌にされただけのことで、あまりにも（技巧がなく）幼い詠みぶりだこと。草子地。作者の弁解。

八 藤壺側近の女房。紅葉賀一八頁、二五頁以下参照。

九 年が暮れて岩井の水も固く凍りつき、今まで見馴れていた人影も消えてゆくことでございます。「岩井」は、岩の間から湧く泉。「あす」は、色がさめ、薄くなること。「浅す」（浅くなる）と掛け、「水」の縁語。

一〇 その折に、いろいろの人の詠んだ歌が大層たくさんあったが、そうみな書き並べても仕方のないことです。省略をことわる草子地。

一一（故院のご在世中はいつもお側にいて）めったにお里下がりもなかった間のことが、いろいろ思い出されなさることであろう。藤壺の心事を忖度したもの。

一二（諒闇のため）世間全体がはなやかな新年の行事もなくひっそりしている。天皇、上皇等の喪は諒闇といって一年間続き、新年の節会、諸家の饗宴の音楽などが取り止められる。

諒闇の新年、ものさびしい源氏邸のさま

一三 正月の官吏任命の儀式。主に地方官を任命する。

一四 源氏邸の門前に。

一五 任官の口添えを依頼に来る人の乗物。

一六 宿直のための夜着を入れる袋。源氏邸に宿直する家臣たちも数少なくなったことをいう。

一七 親王、摂関、三位以上の家の家政をつかさどる者。

見なれしかげを見ぬぞかなしき

と、おぼすままに、あまり若々しうぞあるや。王命婦、

年暮れて岩井の水もこほりとぢ

見し人かげのあせもゆくかな

そのついでにいと多かれど、さのみ書き続くべきことかは。わたら（中宮が里邸に）せたまふ儀式（格式は）かはらねど、思ひなし（気のせいかもの悲しくて）にあはれにて、旧き宮（三条の宮）は、かへりて旅ごこち（人の家のような気がなさるにつけても）したまふにも、御里住み絶えたる年月のほど、おぼしめぐらさるべし。

年かへりぬれど、世の中今めかしきことなく静かなり。まして大将殿は、もの憂くて籠りゐたまへり。除目（自邸に）のころなど、院（桐壺院ご在位中は）の御時をばさらにもいはず、年ごろおとるけぢめなくて（いうまでもなくご退位後も毎年ずっと変ることなく）、御門のわたり、所なく立ちこみたりし馬車うすらぎて（少なくなって）、宿直物の袋をさをさ見えず、親しき家司ども（今後はこんなふうになるのだなと）ばかり、ことにいそぐことなげにてあるを見たまふにも、今よりはかくこそはと思ひやられて、ものすさまじくなむ。（何事もつまらなくお思いになる）

朧月夜の君、尚侍となるが、なお源氏を慕う

一 朧月夜の君のこと。（葵一二〇頁参照）
二 内侍司の長官。定員二人。もと従五位相当。天皇に常侍し、奏請、伝宣、女官の監督、宮廷儀式をつかさどったが、のち、女御、更衣に准ずる地位となった。
三 弘徽殿の大后は里邸（二条の宮）にお住まいがちでいらっしゃって。（一七六頁注五参照）
四 後宮五舎の一。凝花舎のこと。中庭に梅がある。（図録五参照）
五 今まで大后のおられた弘徽殿には、新たに尚侍になられた朧月夜の君がお住みになる。
六 後宮の御殿の一。今まで御匣殿別当としての朧月夜がいた。弘徽殿の北にあって清涼殿から遠いので、「埋れたりつるに」という。（図録五参照）
七 思いもかけなかった源氏とのことをあれこれと。四年前の花の宴の夜以来のことをさす。（花宴五二頁以下参照）
八 いつもの（困難の多い恋ほど執心なさる）お心癖だから。前に斎宮に対しても「かうやうに例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖にて」（一三六頁）とあった。
九（尚侍として帝寵をうけられる）今になってかえって、ご愛情がつのるようだ。

桐壺院の御喪に服してそのまま尼になられた前尚侍の後任なのであった

御匣殿は、二月に尚侍になりたまひぬ。院の御思ひに、やがて尼になりたまへるかはりなりけり。やむごとなくもてなして、人がらもいとよくおはすれば、あまた参り集りたまふなかにも、すぐれて時めきたまふ。后は、里がちにおはしまいて、参りたまふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には尚侍の君住みたまふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れ晴れしうなりて、女房なども数知らずつどひ参りて、今めかしう花やぎたまへど、御心のうちは、思ひのほかなりしことどもを忘れがたく嘆きたまふ。いと忍びて通はしたまふことは、なほ同じさまなるべし。ものの聞こえもあらばいかならむとおぼしながら、例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり。院のおはしましつる世こそ憚りたまひつれ、后の御心いちはやくて、かたがたおぼしつめたることどもの報いせむとおぼすべかめり。ことにふれてはしたなきことのみいでくれば、かかるべきこととはおぼししかど、見知りたまはぬ世の憂さに、立ちまふべくもおぼされ

〔朧月夜は〕家柄の姫君らしい暮しぶりで
〔女御更衣が〕
〔宮中に〕
陰気だったのに対し
〔朧月夜の〕
派手やかで陽気にしていらっしゃるが
相変らず
〔源氏は〕世間の噂にでもなったならばどんなに大変だろうと
桐壺院ご在世中こそ
弘徽殿の大后のご気性がはげしくてあれこれくやしいと思いつめてこられた
具合の悪いことばかり起ってくるので
〔源氏は〕こうなるであろうとは
経験なさったこともない
世間に交わろうともお思いにならない
〔恋文を〕

左大臣の失意

一〇 左大臣。

一一 亡き姫君（葵の上）を、朱雀院（当時の東宮）を避けてこの源氏の大将にご縁づけ申し上げなさった左大臣のお気持を。桐壺の巻に「ただひとりかしづきたまふ御女、春宮よりも御けしきあるを、おぼしわづらふことありける、この君にたてまつらむの御心なりけり」（一巻三七頁）とあった。

一二 左大臣がにがにがしく思っていられるのは、もっともなことである。

源氏、左大臣邸をしばしば訪れる

一三（以前から）お仕えしていた女房たちのことも、（葵の上在世中よりも）かえって、こまごまとお心づかいなされて。

一四 夕霧。現在二歳。葵の巻に誕生。（八七頁参照）

一五 源氏は、桐壺院のこの上ないご寵愛のため、（世間の人気も高く、女たちからちやほやされて）あまりにも、もの騒がしいほどお忙しそうにお見えだったが。

ず。

一〇左の大殿も、すさまじきここちしたまひて、ことに内裏にも参りたまはず。一一故姫君を、引きよきてこの大将の君に聞こえつけたまひし御心を、后はおぼしおきて、よろしうも思ひきこえたまはず。大臣の御仲も、もとよりそばそばしうおはする、故院の御世にはわがままにおはせしを、時移りて、したり顔におはするを、一二あぢきなしとおぼしたる、ことわりなり。

（おもしろくないお心持がなさって　根に持たれて　こころよくもお思い申していられない　右大臣との間も　疎隔がおありのところへ　桐壺院　左大臣の思い通りでいられたのに　時勢が変って〔右大臣が〕得意げでおられるのを）

大将は、ありしにかはらずわたり通ひたまひて、一三さぶらひし人々をも、なかなかにこまかにおぼしおきて、一四若君をかしづき思ひきこえたまへること限りなければ、あはれにありがたき御心と、いとど一五いたつききこえたまふことども同じさまなり。限りなき御おぼえの、あまりものさわがしきまで暇なげに見えたまひしを、通ひたまひし所々も、かたがたに絶えたまふことどもあり、軽々しき御忍びありきも、あいなうおぼしなりて、ことにしたまはねば、いとのどやか

（昔に変らず　〔左大臣邸に〕　大切にしおかわいがりなさることはこの上もないので　しみじみとうれしく奇特なお心だと　〔左大臣が〕　層あれこれと源氏にお尽しなさることは　女君の所も　あちらこちらと　けも　ふさわしからず思われるようになって　お忍びのお出か）

一 こんな（不遇の）時の方がかえって理想的と思われるご様子である。
二 紫の上のこと。二条の院の西の対に住む。（葵一一三頁参照）
三 紫の上の乳母。
四 紫の上の母方の祖母。若紫の巻の北山のくだりに見え、同年秋に亡くなっている。（若紫一二一頁参照）
五 紫の上の父、兵部卿の宮。
六 嫡室（正夫人）の御腹に生れた方で、この上もない玉の輿にと思っていらっしゃる姫君は。兵部卿の宮の姫君。紫の上の異母姉妹に当る。
七 紫の上の継母に当る、兵部卿の宮の正夫人。
八 継子物語にわざと誇張して作ったようなご様子である。草子地。当時流行した継子物語では、たとえば『落窪物語』のように、いじめられた継子の方がのちに出世し、幸福になる筋立てであった。

紫の上の幸福

九 桐壺院の皇女（女三の宮）。母は、弘徽殿の大后。葵の巻（六八頁）に斎院になったことが見える。
一〇 父桐壺院崩御による服喪。
一一 式部卿の宮の姫君。（葵六七頁、七三頁、一〇三～四頁参照）
一二 天皇の孫。朝顔の姫君は親王の子である。
一三 こんなふうに、（斎院といった）神に仕える特別のご身分になりになったので。
一四 朝顔の姫君の女房。ここにはじめて見える。

に、今しもあらまほしき御ありさまなり。

西の対の姫君の御幸ひを、世人も、（感嘆申し上げる）めできこゆ。少納言なども、人知れず、故尼上の御祈りのしるしと見たてまつる。父親王も思ふさまに聞こえかはしたまふ。（お便りのやりとりをなさる）嫡腹の限りなくとおぼすは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、やすからずおぼすべし。物語にことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。

朝顔の姫君、斎院になる

斎院は御服にて、下りゐたまひにしかば、朝顔の姫君は、かはりにゐたまひにき。賀茂のいつきには、孫王のゐたまふ例多くもあらざりけれど、さるべき女御子やおはせざりけむ。大将の君、年月経れど、なほ御心離れたまはざりつるを、かう筋異になりたまひぬれば、くちをしくとおぼす。中将におとづれたまふことも同じことにて、御文などは絶えざるべし。昔にかはる御ありさまなどをば、ことに何ともおぼしたらで、かやうのはかなしごとどもを、まぎるる

（その地位を退かれたので）（ご就任になった）（斎院）（内親王）（適当な）（いまだに〔朝顔の姫君に〕ご執心であったのに）（手紙をおやりなさることも）（〔斎院への〕）（現在のご境遇）（〔源氏は〕）（浮いた恋愛沙汰を）（おいそがしい）（格別気にもされないで）

一五 あちらこちら（朧月夜の君や朝顔の姫君）と思い悩んでいらっしゃる。

一六 桐壺院が、源氏を「おほやけの御後見」とするように遺言したこと。（一三九頁参照）

一七（桐壺院ご在世中と違って）世の中は（源氏に対する風当りが強くなってゆくので）めんどうなことばかり多くなるが。

朱雀院の帝、母后や右大臣に圧される

一八 五大尊（不動明王、降三世明王、大威徳明王、軍荼利夜叉王、金剛夜叉王）を安置する壇（土を高く築いたもの）を設けて行う修法（密教の祈禱）。天皇や国家に重大事のある時に行う。

一九 あの、昔を思い出させる弘徽殿の細殿。二人がはじめて逢った場所。（花宴五二頁参照）

二〇 朧月夜の女房。

二一 御修法奉仕のため、僧や廷臣の出入りが激しく、人目も多い頃なので。

二二 密会の場所がいつもより端近なのが。細殿は弘徽殿の西廂で、簀子がなく、すぐ屋外の通路に面している。

源氏、朧月夜と密会

ご用もないのにまかせて

ことなきままに、一五こなたかなたとおぼしなやめり。

帝は、一六院の御遺言違へず、〔源氏を〕親しく思ってはおられるが殺然としたところがおありになら

あはれにおぼしたれど、若うおはしま

ご性格がおやさしすぎて

すうちにも、御心なよびたるかたに過ぎて、強きところおはしまさ

ないのであろう

ぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことは、それぞれ思いのままになさることは え背かせたまはず、世のまつりごと、御心にかなはぬやうなり。

一七わづらはしさのみまされど、尚侍の君は、朧月夜 ひそかにお気持は通じているので 人知れぬ御心し通へば、

無理をなさりつつも長い途絶えがあるわけではない

わりなくてもおぼつかなくはあらず。一八五壇の御修法のはじめにて、

〔帝が〕

つつしみおはします隙を〔源氏は〕うかがひて、例のように はかないつかの間をお逢いになる 例の、夢のやうに聞こえたまふ。

一九かの昔おぼえたる細殿の局に、二〇中納言の君、〔人目を〕まぎらはして〔源氏を〕入れたてまつる。二一人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおぼゆ。朝夕に〔源氏を〕見たてまつる人だに、見飽きぬほどのお美しさなので 飽かぬ御さまなれば、どうして並々のことに思えよう

時たまにしか叶えられぬ

ましてめづらしきほどにのみある御対面の、いかでかはおろかならむ。女の御さまも、朧月夜 全くすばらしい女盛りでいらっしゃる げにぞめでたき御さかりなる。落着きといった点では 重りかなるかた

どうであろうか

はいかがあらむ、〔しかし〕美しくあでやかで若々しい感じがして をかしうなまめき若びたるここちして、このましいど 見まほし

一 宿直奏の者がここにおります。右近衛府の宿直警備の者が上司（大将か中、少将）に姓名を申告しようとしているところ。宮中の宿直警備は、丑の一刻（午前一時）以後を右近衛府が担当する（桐壺二八頁注五参照）。

二 咳ばらいして言うのが聞える。「声づくる」は、注意をひくために咳ばらいすること。「なり」は推定の助動詞。六行目「申すなり」の「なり」も同じ。

三 自分のほかにこのあたりの局に忍んで来ている近衛府の上司（中、少将）がいるのであろう。

四 たちの悪い同僚が教えてここに来させたのだと。

五 源氏。右近衛大将。本来なら名乗りを受ける身。

六 「寅一つ」は、寅の一刻のこと。今の午前三時。

七 自分から求めた恋ゆえに、あれこれにつけ袖を濡らすことです、夜が明けると教えてくれる声を聞くにつけても。「あく」は「明く」に「飽く」を掛け、別れのつらさと源氏の冷淡さを嘆く意をこめる。

八 嘆きながら一生こんなふうにして過せというのだろうか、胸の思いの晴れる時とてなくて。飽くどころか、心ゆくまで逢えないのがつらい、の意。

九 あわただしい思いでお帰りになった。

一〇 まだ夜明けには間のある、残月のかかる空が。

一一 朱雀院の女御。承香殿に住む。（図録五参照）

一二 近衛の少将は定員二名なので、姓を冠して区別した。藤原氏。

一三 藤壺方の女房のもとにいたのであろう。

様子である き御けはひなり。

ほどなく明けゆくにやとおぼゆるに、ほんのすぐ側で ただここにしも、「宿直奏[一]さぶらふ」と声づくるなり。[二] [三]またこのわたりに隠ろへたる近衛司ぞあるべき、腹[四]ぎたなきかたへの教へおこするぞかしと、[五]大将は聞きたまふ。おもしろくはあるが をかしきものから、厄介な気がする わづらはし。ここかしこ〔上司を〕捜し廻って尋ねありきて、「寅[六]一つ」と申すなり。女君、

（朧月夜）[七] 心からかたがた袖をぬらすかな

あくとをしふる声につけても

とのたまふさま、心細げで はかなだちて、とても美しいとをかし。

（源氏）[八] 嘆きつつわが世はかくて過ぐせとや

胸のあくべき時ぞともなく

[九]静心なくて出でたまひぬ。[一〇]夜深き暁月夜のえもいはず霧りわたれる

〔源氏が〕わざとひどく粗末なお身なりでお忍びらしく振舞われるのが

に、いといたうやつれてふるまひなしたまへるしも、この上もなくすばら 似るものなき

しいご様子で

御ありさまにて、[一一]承香殿の御兄の藤少将、[一二]藤壺より出でて[一四]月の少し

一四 月が少し影になっている立蔀の側に。「立蔀」は、塀の一種。庭先などに立てめぐらして目隠しにする。蔀（格子に類するもので、格子よりも粗末なもの）を立てた形なので、この名がある。

源氏、藤壺に近づく

一五 もの馴れぬことのように窮屈な思いがなさるようになって。宮中は弘徽殿の大后の勢力下にあるので、藤壺は長い間参内しなかったからである。「うひうひし」は、初めてのようなもの馴れぬ感じをいう。

一六（亡き桐壺院が）少しも（源氏との密通の）気配をお気づきにならずじまいだったことを思うのでさえ。

一七 そのような（密通の）噂が立っては。「事の聞こえ」で一語。

一八 東宮のお身の上にとってよくない事件がきっと起ってくるに違いないとお思いになると。東宮の失脚を画策する弘徽殿方の陰謀を恐れるのである。

一九 ご祈禱までおさせになって、自分（藤壺）への恋を諦めて頂こうと。『伊勢物語』六十五段の、男が、自分の恋慕の思いがなくなるようにと、仏神に祈り、祓えまでしたという話を念頭に置いたものであろう。

隈ある立蔀のもとに立てりけるを、〔源氏が〕知らで過ぎたまひけむこそいと（お気の毒なことだ）ほしけれ。もどきこゆるやうもありなむかし。〔藤少将が〕非難申し上げるようなこともあるだろう

かやうのことにつけても、〔自分を〕寄せつけず冷たい藤壺もて離れつれなき人の御心を、（一方では立派だと）かつは〔源氏は〕めでたしと思ひきこえたまふものから、（自分勝手な気持からすれば）わが心の引くかたにては、〔藤壺は〕なほつらう心憂しと（恨めしいと）おぼえたまふをり多かり。内裏に参りたまはむことは、一五うひうひしく所狭くおぼしなりて、春宮を見たてまつりた（気がかりにお思いになる）まはぬをおぼつかなく思ほえたまふ。（ほかに後見として頼りになる方もいらっしゃらないので）またたのもしき人もものしたまはねば、ただこの大将の君（源氏）をぞ、よろづに頼みきこえたまへるに、なほこの憎き御心のやまぬに、〔藤壺は〕（困ったご執心）ややもすれば（はっとなさることが多く）ともすれば御胸をつぶしたまひつつ、一六いささかもけしきを御覧じ知らずなりにしを思ふだに、いと恐ろしきに、今さらにまた、一七さる事の聞こえありて、わが身はさるものにて、（自分はどうなってもかまわないが）春宮（一八）の御ためにかならずよからぬこと出で来なむとおぼすに、いと恐ろしければ、一九御祈りをさへせさせて、このこと思ひやませたてまつらむと、（あらゆる思案をなさってお避けになっていたのに）おぼしいたらぬことなくのがれたまふを、いかなる

をりにかありけむ、思いもかけぬことに あさましうて近づき参りたまへり。心深くたば画なさったに違いないこととて かりたまひけむことを、知る人なかりければ、夢のやうにぞありける。

一 まねぶべきやうなく聞こえ続けたまへど、宮、藤壺は まことにこの上もなく冷たくおおしらいになって 二 離れきこえたまひて、果て果ては御胸をいたうなやみたまへば、近うさぶらひつる命婦、三 弁などぞ、驚きあわてて介抱申し上げる あさましう見たてまつりあつかふ。源氏 男は、憂しつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先、かきくらすここちして、理性 うつし心失せにければ、明け果てにけれど、〔藤壺の部屋から〕出でたまはずなりぬ。〔藤壺の〕ご病気に 御なやみにおどろきて、人々近う参りてしげうまがへば、六 〔源氏は〕人ごこちもなく われにもあらで、七 塗籠に押し入れられておはす。八 御衣ども隠し持たる人のここちども、気が気でない いとむつかし。宮は、ものを何もかもとてもつらいとお思いになったので いとわびしとおぼしけるに、御気あがりて、女房たちが のぼせられて なほなやましうせさせたまふ。九 兵部卿の宮、一〇 大夫など、参りて、「一一 僧召せ」など騒ぐを、まだお苦しそうでいらっしゃる 源氏はとても心細い思いで聞いておられる 大将いとわびしう聞きおはす。やっとのことで からうして、暮れゆくほどにぞおこ〔藤壺は〕

一 〔源氏が〕慎重に計

一（源氏は）ここにうまく伝えられないほどこまごまと言葉巧みにかき口説きなさったが。「まねぶ」は、その通りに人に語り伝えること。

二 しまいには、お胸をつまらせてひどくお苦しみになるので。

三 王命婦。常に源氏の取次ぎをしていた藤壺側近の女房。前出（一四三頁）。

四 藤壺の女房。乳母子。（若紫二一四頁参照）

五 過去も未来も真暗になったような気がして。激しい悲しみに心がとざされた状態の形容。

六 しきりに出入りするので。「まがふ」は、入り乱れる意。

七 周囲を壁で塗り籠め、出入口に妻戸を設けた部屋。母屋や廂にあり、調度類などをしまっておく。

八 源氏のお召し物を隠し持っている女房たちの気持も。王命婦や弁などであろう。

九 藤壺の兄。紫の上の父。

一〇 中宮の大夫。中宮職（中宮方の事務一切をつかさどる役所）の長官。従四位下相当。

一一（加持祈禱の）僧を呼べ。

翌晩、源氏、再び藤壺に迫る

二（藤壺は、今まで休んでいた奥から）昼間の常の御座所ににじり出て来ておいでになる。「ゐざる」は、坐ったまま膝で進むこと。

三 日頃もお身近にお使いあそばす女房は少ないので。「ならす」は、馴れ親しませる意。貴人は人を馴れ馴れしく近づけないと『湖月抄』師説にいう。

四 女房たちは、ここかしこの几帳や屏風のうしろなどに隠れてお控え申している。

五 ひそひそささやき、手を焼いている。事情を知る弁などと語らっているのであろう。「あつかふ」は、めんどうなことに関わりあうこと。

六 塗籠の戸口に近く立てめぐらしてある屏風に沿いながら、屏風と屏風の間に身をおひそめになった。その屏風の隙間から室内の藤壺の姿を近くに見る。

七 藤壺の姿をはっきりと見るのは、元服前以来のことなので、源氏は珍しくうれしく思う。

八「せめてお果物でも召し上がるように」と、お側におすすめして置いてある。

九 硯箱などの蓋。当時、果実などを盛るのによく用いた。

一〇 お身の上をひどく思い悩んでいられる様子で。「世の中」は、源氏との仲をさす。

ご回復なさったたりたまへる。

〔源氏が〕かく籠りゐたまへらむとはおぼしもかけず、〔藤壺は〕思いもよられず 人々も、女房たちも また御心ま 二度とお心を乱 すまいと思ってどはさじとて、〔藤壺に〕かくなむとも申さぬなるべし。昼の御座にゐざり出 こうこうです でておはします。お楽になられたようだというので よろしうおぼさるるなめりとて、兵部卿の宮 宮もまかでたまひなどして、御前人少なになりぬ。例もけ近くならさせたまふ人すくなければ、ここかしこのもののうしろなどにぞざぶらふ。命婦の 王命婦 君などは、「いかにたばかりて出だしたてまつらむ。今宵さへ御気 どう工夫して〔源氏を〕 今夜も 源氏 おのぼせあそばしては あがらせたまはむ、いとほしう」など、うちささめきあつかふ。君 おいたわしくて は、塗籠の戸の細目にあきたるを、やをらおしあけて、御屏風のは 〔藤壺を〕 さまに伝ひ入りたまひぬ。めづらしくうれしきにも、涙は落ちて見 たてまつりたまふ。〔藤壺〕「なほ、いと苦しうこそあれ。世や尽きぬらむ」 まだ とても苦しいこと 死んでしまうのかしら とて、外の方を見出だしたまへるかたはら目、言ひ知らずなまめかしう見ゆ。御くだものをだにとて参り据ゑたり。箱の蓋などにも、 ながめやっていらっしゃる横顔は つい手が出そうなふうに盛ってあるが〔藤壺は〕見向きもなさらない なつかしきさまにてあれど、見入れたまはず。世の中をいたうおぼ

しなやめるけしきにて、（静かに物思いに沈んでいらっしゃるのが）のどかにながめ入りたまへる、いみじうら（とても弱々しい）うたげなり。髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなきに（美し）ほはしさなど、ただかの対の姫君に違ふところなし。年ごろすこし（紫の上）思ひ忘れたまへりつるを、あさましきまでおぼえたまへるかなと見（驚くばかり）たまふままに、すこしもの思ひのはるけどころあるここちしたまふ。（物思いを晴らすあてがあるような気がなさる）（よく似ていらっしゃることだと）〔藤壺の〕気品高くあたりを払うお美しさなども、気高うはづかしげなるさまなども、さらに異人とも思ひ分きがたき（まるで）（ことひと）〔紫上と〕別人とも思えない（やはり）を、なほ、限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや、（〔藤壺を〕深くお慕い申し上げてきた気持がそう思わせるのか）（比べるものもない）さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかなと、たぐひなくお（美しさだと思うと）ぼえたまふに、心まどひして、やをら御帳のうちにかかづらひ入り（心も乱れて）て、御衣の褄を引きならしたまふ。けはひしるく、さと匂ひたるに、（〔藤壺は〕思いもかけぬことと恐ろしく思われて）あさましうむくつけうおぼされて、やがてひれふしたまへり。見だ（そのままうつぶしてしまわれた）（せめて）に向きたまへかしと、心やましうつらうて、引き寄せたまへるに、（こちらを向いて下さいと）（〔源氏は〕うらめしく）（〔藤壺を〕）御衣をすべし置きて、ゐざりのきたまふに、心にもあらず、御髪の（ままならぬことに）〔源氏の手に〕取り添へられたりければ、いと心憂く、宿世のほどおぼし知られて、（とても情けなく）

一 髪の生え際。
二 頭の格好。
三 髪の毛が肩や背にかかっている様子。
四 長年、少し（紫の上が藤壺に似ていることを）忘れていられたのに。藤壺に対面する機会がなかったため、二人がよく似ていることを思い起さなかったのである。
五 （藤壺は）格別にお美しく、大層ご立派になっていらっしゃることだなと。「ねびまさる」は、年とともに貫禄がつき美しくなること。
六 御帳台の中にすべり込んで。「御帳」は、御帳台（一巻図録九参照）。「かかづらふ」は、まといつくこと。ここは屏風の陰から、帳台の隅の帳やまわりの几帳の垂布にまとわりつくようにして身を忍ばせたことをいう。
七 藤壺のお召し物の褄を引き動かしなさる。「褄」は、着物の左右の両端の部分。「引きならす」は、絹は引っぱると衣ずれの音がするので、こういう。
八 源氏だということは疑いようもなく、お召し物の香りがさっと匂うので。動作につれて、着物に薫きしめた香が匂う。「しるく」は、はっきり分ること。
九 （藤壺は）上のお召し物を脱ぎ滑らして。
一〇 逃れられぬ宿縁の深さが思い知られなさって。

一一 ずいぶん宮に対して自制していられたお気持がすっかり乱れて。「ここら」は、数多くの意。「世」は、藤壺との関係をさす。

一二（藤壺も）さすがに身にしみてお聞きになることもまじっているであろう。「いみじ」は、甚だしく胸を打つことをいう。二人の間に生した子（東宮）のことにも触れたのであろう。

一三 せめて、ただこんなふうにでもして、時々せつない嘆きも晴らすことができますならば、何の大それた料簡を起しましょう。「かばかり」は、直接話をするだけという意。

一四 ありふれたことでも、このような（世間を憚る不義の）仲では、胸に迫る悲しみもひとしお増さるものであろうに。

一五 まして、（今宵のお二人のお気持は）比べるものもないご様子である。

賢木

大層つらいと
いみじとおぼしたり。

源氏
男も、一ここら世をもてしづめたまふ御心みな乱れて、うつしざま（まるで気も狂ったように）にもあらず、よろづのことを泣く泣く怨みきこえたまへど、まことに心づきなしとおぼして、いらへも聞こえたまはず。ただ、「ここちのいとなやましきを、かからぬをりもあらば聞こえてむ」とのたまへど、（源氏は）深い思いのたけを尽きせぬ御心のほどを言ひ続けたまふ。二さすがにいみじと聞きたまふ節もまじるらむ。（源氏との仲は）あらざりしことにはあらねど、（今またこうなって）あらためていとくちをしうおぼさるれば、（藤壺は）なつかしきものから、いとようのたまひのがれて、今宵も明けゆく。せめて従ひきこえざらむもかたじけなく、心はづかしき御けはひなれば、三「ただかばかりにても、時々いみじき愁へをだにはるけはべりぬべくは、何のおほけなき心もはべらじ」など、たゆめきこえたまふべし。四なのめなることだに、かやうなるなからひは、あはれなることも添ふなるを、五まして、たぐひなげなり。

（藤壺は）心からいとわしいとお思いになって
（藤壺）気分がとても悪いものですから
こんなに苦しくない時でもあればご返事申しましょう
おやさしくはあるものの
大層うまく言いのがれなさって
しいてお言葉にお従い申さないのも恐れ多く
（源氏）
気高いご様子なので
安心させてお上げになるようだ

明け果つれば、二人（ふたり）していみじきことどもを聞こえ、宮（藤壺）は、なかばは亡きやうなる御けしきの心苦しければ、「世（源氏）の中にありときこしめされむもいとはづかしければ、やがて亡せはべりなむも、（おいたわしいので）また（このまま死んでしまおうと存じますが）この世ならぬ罪となりはべりぬべきこと」など聞こえたまふも、むくつけきまでおぼし入れり。（恐い）（ほど思いつめていられる）

「逢ふことのかたきを今日に限らずは（源氏）

今幾世をか嘆きつつ経む

御ほだしにもこそ」と聞こえたまへば、さすがにうち嘆きたまひて、（嘆息なさって）

ながき世のうらみを人に残しても（藤壺）

かつは心をあだと知らなむ

はかなく言ひなさせたまへるさまの、言ふよしなきこちすれど、（藤壺のご困惑もありまた源氏ご自身にとっても長居は憚られるので）人のおぼさむところもわが御ためも苦しければ、われにもあらで出でたまひぬ。

いづこを面（おもて）にてかはまたも見えたてまつらむ、（何の面目あって〔藤壺に〕お目にかかれよう）いとほしとおぼし（すまないことをしたとお気

一（王命婦と弁と）二人が かりで。

源氏、嘆きながら帰る

二（源氏に）このままでは大変なことになると必死に申し上げ。源氏の無謀をいさめ、帰宅を促す。

三（こんな目にあいながら）まだこの世に生き永らえているのかとお耳に入りますのも、おもしろくなく存じますので。

四 それもまた、この世のほか（来世）の罪障となりますでしょうよ。執着が残って、往生の妨げになるであろうという。

五 お逢いすることのむつかしさが今日でおしまいでないのでしたら―いつまでも、こんなふうにお逢いしにくいのでしたら、私はこの先、生れ変る世々を、幾世嘆きながら過すことでしょう。

六（永劫に執念を残す私がおりましては）あなたの往生のお妨げにもなりましょう。「ほだし」は、前出（一四一頁注一四参照）。「もこそ」は、そうなっては困る気持を表す。

七 未来永劫の恨みを私に残すと言われましても、一方、そんなお心はすぐ変るものだとご承知下さい。

八 よくある浮気沙汰のようにおっしゃるご様子が、言いようもなくすばらしく思えるが。源氏の思いつめた歌意に対し、内心を隠して、わざと「はかなく」（実りがないように）言う様子がすばらしい、の意。

源氏、悲嘆のあまり自邸に籠る

九 どうしたことだ、この世に永らえているからつらさも増すのだと、出家を思い立たれるにつけては。「世に経れば憂さこそまされみ吉野の岩のかけ道踏みならしてむ」――この世に永らえているから、いやなことばかり増すのだ、吉野の険しい山道を踏みしめて、山奥に隠れてしまおう（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）による。

一〇 藤壺の宮も、あの夜のことがあとをひいて、お具合が悪くていらっしゃる。

一一 東宮のことをお考えになると、（源氏以外に後見がないのに、その源氏が）お心を隔てなさるようなことは困るし。

一二 亡き桐壺院が、（東宮の将来のために）お考えおきになり仰せにもなったことは、並大抵のご配慮ではなかったのを思い出されるにつけても。弘徽殿の大后を越えて藤壺を中宮に立てたのは、東宮の後楯にしようとの思し召しであった。（紅葉賀四四頁参照）

藤壺、出家を決意し、宮中に参る

〔源氏は〕知るばかり（づきになるように）、とおぼして、御文も聞こえたまはず。うち絶えて、内裏、春宮にも参りたまはず、〔二条院に〕籠りおはして、起き臥し、いみじかり（ほんとうにひど）ける人の御心かなと、人わろく（みっともないほど）恋しう悲しきに、心魂（こころだましひ）も失せにけ（魂も抜けてしま）るにや、なやましうさへおぼさる。（ったのか）もの心細く、なぞや、世に経れば憂さこそまされとおぼし立つには、（ご気分もお悪いように感じられる）この女君のいとらうたげにて、（かわいらしいご様子で）〔源氏を〕心からお頼り申していらっしゃるのを（紫の上）あはれにうち頼みきこえたまへるを、振り捨てむこといとかたし。（振り捨てて出家することは）

一〇 宮も、その名残、例にもおはしまさず。かうことさらめきて（こうわざとらしく）〔源氏が〕籠りゐ、おとづれたまはぬを、命婦などはいとほしがりきこゆ。（お便りもなさらないのを）（王命婦）（お気の毒にお思い申している）宮も、春宮の御ためをおぼすには、御心置きたまはむことといとほしく、世をあ（この世を）ぢきなきものに思ひなりたまはば、ひたみちにおぼし立つこともや（空しいものと思うようになられたら）（いちずに出家を決心なさるかもしれないと）と、さすがに苦しうおぼさるべし。

かかること絶えずは、いとどしき世に、憂き名さへ漏り出でなむ、（ただでさえつらい）（いやな噂まで立てられることになろう）大后のあるまじきことにのたまふなる位をも去りなむと、やうやう（けしからぬことだとおっしゃっているという中宮の位も）（だんだんとお）心を固められる おぼしなる。院のおぼしのたまはせしさまのなのめならざりしをお

一 戚夫人がされたようなひどい目にはあわぬとしても。戚夫人は漢の高祖の妃。高祖に寵愛され、わが子趙王を太子にしようとしたため、高祖の崩後、呂太后から報復された。呂太后は戚夫人を囚え、手足を断ち、眼をくりぬき、耳を焼き、唖になる薬を飲ませ、厠に入れて、人彘と呼ばせた（『史記』呂后本紀）。

二 尼姿に変ってしまうことは。「面がはり」は、顔かたちが変ること。尼になると、尼削ぎといって、肩のあたりで髪を切り揃え、額髪も簡素にする。

三 （ふだんは）それほどの事でなくても。中宮の宮中行啓といった大事でなくても。

四 （藤壺参内にあたり）一通りのお世話はいつもと同様だが。家臣や従者を差し向けることなどをいう。

五 すっかり気落ちしてしまわれたと。

六 ご決意なさったこと（出家）は、まことに実行なさりにくいけれども。

藤壺、東宮に別れを惜しむ

七 弘徽殿の大后のご気性もまことに気がかりで。以下「宮の御ためにもあやふく、ゆゆしうよろづにつけて思ほし乱れて」まで、『史記』呂后本紀を連想させる書き方である。

八 身の置き所もない思いがして、何かにつけてつらいので。弘徽殿の大后を憚って、内裏の女房や廷臣の態度がよそよそしいからである。

昔とはすっかり変ってゆく　世の中なの
ぼしいづるにも、よろづのこと、ありしにもあらず変りゆく世にこ
であるらしい　世間の
そあめれ、戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず人笑
笑いものになることが起るに違いない身の上なのだろう　世の中がいとわしく
へなることはありぬべき身にこそあめれ、など、世のうとましく過
〔藤壺は〕　尼になることをご決意なさったが
ぐしがたうおぼさるれば、背きなむことをおぼし取るに、春宮見た
〔藤壺は〕悲しく思われなさるので　目立たぬように
てまつらで面がはりせむこと、あはれにおぼさるれば、忍びやかに
〔宮中に〕　源氏
て参りたまへり。大将の君は、さらぬことだに、おぼし寄らぬこと
お加減の悪いのを口実にして　お気のつかぬことはないほどよくご奉仕なさるのに
なくつかうまつりたまふを、御ここちなやましきにことづけて、御
お供にも
送りにも参りたまはず。おほかたの御とぶらひは同じやうなれど、
事情を知る女房たちは
むげにおぼし屈しにけると、心知るどちはいとほしがりきこゆ。
〔母宮の参内を〕　東宮　愛らしく成長なさって
宮はいみじううつくしうおとなびたまひて、めづらしうれしと
〔藤壺は〕いとしいと　まつわり申し上げなさるのを
おぼして、むつれきこえたまふを、かなしと見たてまつりたまふに
宮廷の様子を
も、おぼし立つ筋はいとかたけれど、内裏わたりを見たまふにつけ
〔藤壺が宮中に〕
ても、世のありさまあはれにはかなく、移り変ることのみ多かり。
大后の御心もいとわづらはしくて、かく出で入りたまふにも、はし

九（こういうことでは）東宮のお身の上にとっても不安で、悪いことが起りはしないかと恐ろしく、何かにつけてご心配で。『河海抄』は、『史記』呂后本紀の「孝惠元年十二月、帝晨に出でて射る。趙王少く、蚤く起くること能はず。太后、其の独り居るを聞き、人をして酖を持ちて之に飲ましむ。孝惠還る黎ほひ、趙王已に死せり」をあげる。

一〇私の顔かたちが今とは違ったふうに、いやな感じに変ってしまいましたならば、どうお思いになるでしょう。尼姿になることをそれとなく告げる。

一一式部のようにでしょうか。「式部」は、女房の名。東宮づきの乳母か女房であろう。

一二（あまりのいわけなさに）力が脱け、胸がしめつけられるようで。

一三尼衣。鈍色（薄墨色）の衣を着る。

一四夜居の僧のようになろうというのですから。「夜居の僧」は、夜中、加持祈禱のために詰めている僧。

一五東宮はこの時六歳、元服前なので、垂れ髪である。

一六そのほんのりとしたおかわいらしさといったら、女にして拝したいと思うほど、おきれいである。当時、女子は成人に近くなると、鉄漿で歯を黒く染める風習があったので、その連想がある。（一巻末摘花一八二頁参照）

たなく、事に触れて苦しければ、宮の御ためにもあやふく、ゆゆしうよろづにつけて思ほし乱れて、（藤壺）長い間お目にかからないでいるうちに「御覧ぜで久しからむほどに、容貌の異ざまにてうたてげに変りてはべらば、いかがおぼさるべき」と聞こえたまへば、（藤壺の）じっとご覧になって御顔うちまもりたまひて、（東宮）「式部がやうにや。いかでか、（どうして）さはなりたまはむ（あんなになられることがあろう）」と、笑みてのたまふ。いふかひなくあはれにて、（藤壺）「あの者は それは、老いてはべれば醜きぞ。さはあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、（東宮を）見たてまつらむこともいとど久しかるべきぞ」（今よりずっと問遠になりましょう）とて泣きたまへば、まめだちて、（東宮）「久しうおはせぬは恋しきものを」（真顔になって）とて、涙の落つれば、はづかしとおぼして、さすがに背きたまへる、御髪はゆらゆらときよらにて、まみのなつかしげにほひたまへる（目もとがやさしくこぼれるような風情がおありになる）（横を向かれる）さま、おとなびたまふままに、ただかの御顔を脱ぎすべたまへり。（源氏の そっくりお移ししたようである）（ご様子は ご成人なさるにつれて）御歯のすこし朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへる、かをりうつくしきは、女にて見たてまつらまほしうきよらなり。いとかうしもお（虫歯で）（ほんとにこれほどまで）

一（ほかに何の不足もないが）ただ一つの欠点だと（藤壺が）お思いになるのも。
二 難儀な世情が。弘徽殿の大后ににらまれている事情をいう。
三 言いようもないほどつれない（藤壺の）お心なのだということを。

源氏、雲林院に籠り、紫の上と贈答

四（東宮にお会いしたいのを）我慢しながら。
五 京都市北区紫野にある。もと淳和天皇の離宮。仁明天皇からその皇子常康親王が伝領し、親王出家のの ち、僧正遍昭に付属して寺とした。村上天皇時代、勅願によって堂塔を建てられ、重んじられた。
六 亡き母、桐壺の更衣。
七 僧官の一つ。僧都に次ぎ、僧の戒律を支配する役。五位相当。
八 住み馴れた都のわが家（二条の院）。
九 教義を問答形式で議論して明らかにすること。
一〇 つれない人こそ、なおさら恋しく思われるものだと。「天の戸をおしあけがたの月見れば憂き人しもぞ恋しかりける」（『新古今集』巻十四恋四、読人しらず）による。
一一 眼前の光景であるが、前出の歌の詞葉による。
一二 仏に奉る水。これに花などを浮べる。次の「からからと……」について『玉の小櫛』は、「閼伽奉る時に、花皿をすゝぎて、重ねて、から〳〵とならす作法ありとぞ。たゞおのづからなる音にはあらず」という。

源氏に似ていられるのが（つらいと）ぼえたまへるこそ心憂けれと、玉の瑕におぼさるるも、世のわづらはしさの、空恐ろしうおぼえたまふなりけり。

源氏

大将の君は、東宮をいと恋しう思ひきこえたまへど、あさましき御心のほどを、時々は思ひ知るさまにも見せたてまつらむと、念じつつ過ぐしたまふに、人わろくつれづれにおぼさるれば、秋の野も見たまひがてら、雲林院にまうでたまへり。故母御息所の御兄の律師の籠りたまへる坊にて、法文など読み、行ひせむとおぼして、二三日おはするに、あはれなること多かり。紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて、故里も忘れぬべくおぼさる。法師ばらの才ある限り召し出でて論議させて聞こしめさせたまふ。所からに、いとど世の中の常なさをおぼし明かしても、なほ、憂き人しもぞと、おぼしいでらるるおしあけがたの月影に、法師ばらの閼伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるもはかなけれど、このかたのい

〔藤壺も〕思い知るように見せつけてさし上げようと
体裁が悪いほど所在なく思われなさるので
寺坊
経典
心にしみることが
勤行
みやびやかに美しいのを
学才のある者ばかり
忘れてしまいそうに思われなさる
世の無常を
場所がらのせいで
眠りもやらずお考えになるが
〔藤壺のことが〕
月の光
やはり
些細なことだが
こうした仏に仕える

一三（それに比べて）何とも情けないわが身を持て余していることだ。「あぢきなき身」は、藤壺への叶わぬ恋に苦しむ身をいう。前にも「わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて」とあった（若紫一九四頁参照）。

一四『観無量寿経』の文句。無量寿仏（阿弥陀仏）を観想する衆生を仏はおさめ取って捨てることがない、の意。

一五 なぜ出家できないのか、そんなはずはない、というお考えになられるにつけて。

一六 ほんとに未練がましいお心だ。草子地。

一七 心細さも一層強く感じまして。「心細さまさりてなむはべる」を言いさした形。

一八 まだ教えを聞き残していることがありまして、ぐずぐずしていますが、その間どうお過しでいられるか。

一九 檀の皮の繊維で作った白くて厚い紙。もと陸奥で産したのでこの名がある。ここは場所柄も考えて、普通恋文に用いる鳥の子の薄様（薄い紙質で、色々に染める）を使わなかったのである。

二〇 浅茅生に置く露のようなはかないこの世にあなたを置いたままにして、四方から吹きつける激しい風の音を聞くにつけ、あなたの身の上が案じられて、気が気でなりません。

二一 白い薄様に。源氏の文の陸奥紙の色に揃えたもの。

お勧めは　現世の生活も無聊がみたされ　後世は無論　〔極楽往生が叶うかと〕

となみは、この世もつれづれならず、後の世はた、たのもしげなり。

一三 さもあぢきなき身をもてなやむかな、など、おぼし続けたまふ。律師の、いと尊き声にて、「念仏衆生摂取不捨」と、うちのべて行ひたまへるが、いとうらやましければ、なぞやとおぼしなるに、まづ

一四 一五 一六

さるのが　紫の上

姫君の、心にかかりて思ひいでられたまふぞ、いとわろき心なるや。

いつにない長い隔ても　しきりに気がかりに思われなさるので　〔源氏は〕

例ならぬ日数も、おぼつかなくのみおぼさるれば、御文ばかりぞ、

たびたびさし上げられるようだ

しげう聞こえたまふめる。

俗世が捨てられるだろうかと　ためしに来てみたのですが　所在ない思いも

行き離れぬべしやと、こころみはべる道なれど、つれづれもなぐ

一七 一八

さめがたう、心細さまさりてなむ。聞きさしたることありて、や

すらひはべるほどを、いかに。

一九 気を張らずに書いていられるのまでが

など、陸奥紙にうちとけ書きたまへるさへぞ、めでたき。

二〇

浅茅生の露のやどりに君をおきて

四方の嵐ぞ静心なき

心をこめたお書きぶりに　紫の上

二一

など、こまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返り、白き色

一 風が吹きますと、まっさきに乱れるのです、枯れて色が変ってゆく浅茅に置く露、そんなはかないものにかかっている蜘蛛の糸は。「色かはる」は、源氏の心変りをさし、「かかる」に頼りにする意を掛ける。「ささがに」は、紫の上自身をなぞらえたもの。

二 （紫の上の筆跡は）源氏ご自身のご筆跡に大層よく似て、もっとなよやかで、女らしいところが加わっていらっしゃる。

三 吹き通う風も近いほどの所なので。風は消息を伝えるという歌の発想による。斎院御所は雲林院と同じく、紫野にある。

四 朝顔の斎院。斎院就任のことは、一四六頁に見える。今年冬までは宮中の初斎院にいるはずであるが、何かの事情で早く紫野の院に入ったものか。

五 斎院の女房。一四六頁に既出。

六 口に上すのは、恐れ多いのですが、あの時の秋のことが思い出される木綿襷でございます。「木綿襷」は、木綿（一三五頁注一四参照）で作った襷のこと。神官らが肩にかけて、神事に奉仕する。ここでは、暗に斎院をさし、「かけまくは」の「かく」と縁語。「そのかみの秋」のことは、物語には書かれていないが、

源氏、朝顔の斎院と贈答

紙に、

（紫上）一 風吹けばまづぞ乱るる色かはる
浅茅が露にかかるささがに

（源氏）ご筆跡はほんとにうまくなってくる一方だ とのみあり。「御手はいとをかしうのみなりまさるものかな」と、ひとりごちて、（かわいい人だと）うつくしとほほゑみたまふ。（手紙をやりとりなさるので）常に書きかはしたまへば、二 わが御手にいとよく似て、今すこしなまめかしう、女しきところ書き添へたまへり。何ごとにつけても、（不足なく）けしうはあらず生ほし立てたりかしと（源氏は）思ほす。（ものだと）

三 吹き交ふ風も近きほどにて、四 斎院にも聞こえたまひけり。五 中将の君に、

（源氏）かく旅の空になむもの思ひにあくがれにけるを、（恋の悩みゆえに身も魂もさまよい出たのを）おぼし知るにも（お分りになるはずもな）いでしようよ あらじかし。

など、怨みたまひて、御前には、（斎院）

六 かけまくはかしこけれどもそのかみの

帚木の巻に、「式部卿の宮の姫君に、朝顔奉りたまひし歌などを……」（一巻八四頁）とあった時のことであろう。

七　昔の仲を今に取り戻したいと思いましても、（斎院となられた今では）致し方もなく。「いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」（『伊勢物語』三十二段）による。

八　でも、取り返せるもののように存じまして。「取り返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」（『釈』以下の古注に見える出典不明の歌）による。

九　浅緑色の唐紙（中国製の紙）に書き。榊の緑に色を揃えた。

一〇　恋文は、木の枝などに結びつけて届ける。ここは、斎院にふさわしく、榊を用い、木綿をつける。

一一（ここ、斎院御所では）取り紛れることもなくて。都の外で、神職として暮す斎院だからである。

一二　その昔にどうだったとおっしゃるのですか、あなたが心にかけて偲ぶとおっしゃる事の子細は。

一三　近い世には、なおさら覚えがありません。引歌であろうが、未詳。

一四　万葉仮名の草体。

一五　まして、斎院ご自身も年とともに美しくなっていられることであろうよと。「朝顔」は、斎院をさす。斎院の容姿（顔）を前に見たことがあるのを暗示する言い方。帚木の巻から今まで七年たっている。

秋おもほゆる木綿襷かな

昔を今にと思ひたまふるもかひなく、とり返されむもののやうに。

と、なれなれしげに、唐の浅緑の紙に、榊に木綿つけなど、神々しうしなして参らせたまふ。御返り、中将、

まぎるることなくて、来しかたのことを思ひたまへいづるつれづれのままには、思ひやりきこえさすること多くはべれど、かひなくのみなむ。

と、すこし心とどめて多かり。御前のは、木綿の片端に、

「そのかみやいかがはありし木綿襷

心にかけてしのぶらむゆゑ

近き世に」とぞある。御手こまやかにはあらねど、らうらうじう、草などをかしうなりにけり、まして朝顔もねびまさりたまふらむかしと、思ひやるもただならず、恐ろしや。あはれ、このころぞかし、

一 野の宮での逢瀬のせつなかったことよと思い出されて。六条の御息所を野の宮に訪れた時のことをいう。（一二八頁以下参照）

二 （御息所の場合といい、斎院の場合といい）不思議と、同じように、（神慮を恐れるどころか、憚り多い恋にはかえってひかれて、恋路の妨げとばかり）神を恨めしく思われる源氏のお心癖は、見苦しいことです。「やう（様）のものと」は、同じように意の慣用句。「あやしう」以下、草子地。「かし」は、読者（聴き手）に念を押す気持を表す強意の助詞。

三 （斎院のお振舞としては）いささか困ったことです。これも草子地。

源氏、雲林院より二条の院に帰る

四 天台六十巻の教典。『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』（以上各十巻）とその注釈『法華玄義釈籤』『法華文句疏記』『止観輔行伝弘決』（以上各十巻）をいう。

五 山寺（雲林院）にとっては大層な光明を、修行の力で出現おさせ申したと。「光」は、光彩を放つ美しい人といった気持で、源氏をさす。

六 誦経のためのお布施を盛大にお納めになる。

七 あらゆる功徳になること（現世や来世に幸福をもたらすよい行い）をなさって。

一 野の宮のあはれなりしこととおぼしいでて、（源氏が）ぜひにとお思いならご縁組もできたはずの今までは（今になって）あやしう、やうのものと、神うらめしうおぼさるる御癖の見苦しきぞかし。わりなうおぼさばさもありぬべかりし年ごろは、（源氏が）のどかに（のんびりと）過ぐいたまひて、今はくやしう思ほさるべかめるも、あやしき（妙なご性分だこと）御心なりや。院（斎院）も、かくなべてならぬ（ならぬ）（源氏の）御心ばへを見知りきこえたまへれば、（時たまの源氏のお便り）たまさかなる御返りなどは、（あまりすげなくはお扱いになれないらしい）えしもて離れきこえたまふまじかめり。三 すこしあいなきことなりかし。

四 六十巻といふ書読みたまひ、（不審なところどころを）おぼつかなきところどころ（僧に）解かせなどしておはしますを、五 山寺にはいみじき光行ひいだしたてまつれり（ご本尊）と、仏の御面目ありと、（身分の低い僧たち）あやしの法師ばらまでよろこびあへり。（一人）（都に）（静かに）めやかにて世の中を思ほし続くるに、帰らむこともの憂かりぬべけれど、（ただ紫の上のお身の上を）人ひとりの御ことおぼしやるがほだしなれば、（仏道修行の）（妨げなので）久しうもえおはしまさで、（雲林院）寺にも六 御誦経いかめしうせさせたまふ。あるべき（しかるべき者に）限り、（は皆）上下の僧ども、そのわたりの山賤（木こり）まで物賜び、七 尊きことの限り

八 こなたかなたに。「筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにますかげはなし」（『古今集』巻二十、東歌）の言葉を借りたもの。

九 みすぼらしい柴刈り人。「しはふるひ」は、未詳。「しはふる人」「しはふるひ人」等の異文がある。『河海抄』は「柴振人、木の葉などかきあつむるいやしき賤の男なり。木の葉のちりかゝりたるをうちはらふ心也」と注する。

源氏、帰邸　紫の上と語らい、藤壺に紅葉を贈る

一〇 服喪者の用いる車。源氏は現在、父桐壺院の喪に服している。『西宮記』には、「重服公卿乗二黒莚車一也」とある。

一一 喪服。「藤」は「藤衣」の略。（一四一頁注一一参照）

一二 （源氏との）夫婦仲はどうなるのであろうと案じている様子が。

一三 （藤壺に焦がれる）自分の困った心の、あれこれ思い乱れる様子がはっきり（紫の上に）分るのか。

一四 前出一六〇頁の紫の上の返歌。源氏の心変りを怨んだもの。

一五 特別に深く染めた露の心やりもそのままにはできないし。露が紅葉を染めるという発想は歌に多い。

一六 中宮が宮中にお入りになったのを。参内のことは前出一五六頁以下に見えた。

一七 東宮に関すること（東宮のお世話）も、だいぶど無沙汰してしまいましたので。

を尽くして出でたまふ。（お帰りになる）見たてまつり送るとて、八このもかのもに、あやしきしはふるひどもも集りてゐて、涙を落しつつ（源氏を）見たてまつる。九黒き御車のうちにて、一〇藤の御袂にやつれたまへれば、ことに（お姿は）見えたまはねど、（隙間からかすかに拝するご様子をえにならないが）ほのかなる御ありさまを、（またとないと）世になく思ひきこゆべかめり。

女君（紫の上）は、日ごろ（しばらくの間に）のほどに、ねびまさりたまへるここちして、いといたうしづ（しんみりとなさって）まりたまひて、一二世の中いかがあらむと思へるけしきの、心苦しう（いたいたしくもいとしくも思われなさるので）あはれにおぼえたまへば、一三あいなき心のさまざま乱るるやしるからむ、「一四色かはる」とありしもらうたう（可憐に）おぼえて、常よりことにかたらひきこえたまふ。（こまやかにお話し申し上げなさる）山づとに持たせたまへりし紅葉、御前（庭前のに）のに御覧じくらぶれば、一五ことに染めましける露の心も見過ぐしがたう、おぼつかなさも、（久しいご無沙汰も）人わろきまでおぼえたまへば、ただおほかたにて（藤壺）宮に参らせたまふ。命婦（王命婦）のもとに、

（源氏）一六入らせたまひにけるを、めづらしきこととうけたまはるに、一七宮の間（あひだ）のこと、おぼつかなくなりはべりにければ、静心（しづこころ）なく思ひたま

一 中途でうち切るのも本意ないことかと存じまして。

二 （あまり見事で）一人で賞翫いたしますには、夜の錦の思いがいたしますので。「錦くら（暗）う」は、「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」（『古今集』巻五秋下、紀貫之）による。暗闇に錦の着物を着るのと同じくらい、見映えがしないの意。

三 小さなもの。恋文を小さく畳んで、紅葉の枝に結びつけたのである。

四 廂の間の（簀子との境の）柱。藤壺は母屋にいる。

五 （源氏は）なんと冷静に、どこまでも（自分につれなくなさることか）と。

六 （今さらよそよそしくして）世人もおかしいと怪しみでもしたら大変だとお思いになって。

へながら、行ひもつとめむなど、思ひ立ちはべりし日数を、心ならずやとてなむ、日ごろになりはべりにける。紅葉は、ひとり見はべるに錦くらう思ひたまふればなむ。をりよくて御覧ぜさせたまへ。

（志しました予定の日数を）（仏道修行）（何日にもなってしまいました）（よい折を見て中宮のご覧に入れて下さい）

などあり。げにいみじき枝どもなれば、御目とまるに、例の、いささかなるものありけり。人々見たてまつるに、御顔の色もうつろひて、なほかかる心の絶えたまはぬこそ、いとうとましけれ、あたら思ひやり深うものしたまふ人の、ゆくりなく、かうやうなることをりをりまぜたまふを、人もあやしと見るらむかしと、心づきなくおぼされて、瓶にささせて、廂の柱のもとにおしやらせたまひつ。おほかたのことども、宮の御ことに触れたることなどをば、うち頼めるさまに、すくよかなる御返りばかり聞こえたまへるを、さも心かしこく、尽きせずもと、うらめしうは見たまへど、何ごとも後見きこえならひたまひにたれば、人あやしと見とがめもこそすれとおぼ

（藤壺は）（ほんとにすばらしい）（女房たちが控えているので）（藤壺は）（変って）（相変らず）（ほんとにいやなこと）（惜しいこと）（だしぬけに）（時々）（女房たちも変だと思うであろうと）（なさるのを）（不快に）（一通りのご用件の数々）（東宮）（源氏を）（頼みにしているふうに）（堅苦しい）（藤壺は）（藤壺のお返事を）（つもお世話申し上げてこられたこととて）

して、まかでたまふべき日参りたまへり。〔藤壺が〕宮中を退出なさるという日に

まづ内裏の御方に参りたまへれば、帝の御前に のどやかにおはしますほどにて、昔今の御物語聞こえたまふ。〔帝は〕御容貌も、桐壺院 ご政務もなくのんびりしていらっしゃる折 つりたまひて、今すこしなまめかしき気添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。また一段と おやさしくもの柔らかでいらっしゃる かたみにあはれと見たてまつりたまふ。〔ご兄弟は〕互いになつかしく思ってご覧になる 尚侍の君の御ことも、なほ絶えぬさまに聞こしめし、けしき御覧ずるをりもあれど、何かは、今はじめたることならばこそあらめ、ありそめにけることなれば、さも心かはさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし、とぞおぼしなして、とがめさせたまはざりける。よろづの御物語、書の道のおぼつかなくおぼしめさるることどもなど、問はせたまひて、またすきずきしき歌語なども、かたみに聞こえかはさせたまふついでに、かの斎宮の下りたまひし日のこと、容貌の をかしくおはせしなど、〔帝が〕語らせたまふに、われもうちとけて、野の宮のあはれなりし曙も、みな聞こえいでたまひてけり。

今にはじまったことならばとにかくいることなのだから 前から続いて 大目に見られて 問題になさらないのであった 〔帝は〕 源氏も 〔源氏に〕

源氏、参内し、帝と語る

七 朧月夜。この年二月に尚侍になる。（一四四頁参照）

八 源氏との仲がまだ切れていないようにお聞きになり。前に「いと忍びて通はしたまふことは、なほ同じさまなるべし」（一四四頁）とあった。

九 それらしい様子にお気づきになる折もあるが。

一〇 そんなふうに心を通じ合っても、不似合いとはいえぬ二人の仲なのだ。

一一 学問上のこと。当時の学問は漢学。

一二 色めいた歌のやりとりのお話。恋の体験談。

一三 あの、斎宮の伊勢下向の日のこと。大極殿での別れの儀式の折のことをさす。（一三七頁参照）

一四 野の宮で、六条の御息所と別れを交わした、心に残る明け方のことも。（一三二～三頁参照）

頭の弁、源氏を諷刺する

一 九月二十日の月。午後十時頃出る。陰暦の九月は晩秋に当る。

二 故院（桐壺院）がご遺言なさったことがございますので。前に、「この宮の御後見したまふべきことを、かへすがへすのたまはす」（一四〇頁）と、東宮のことを依頼している。

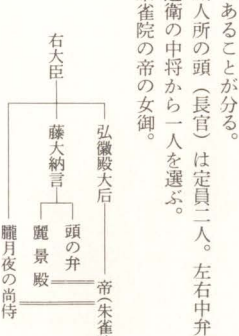
三 （中宮には）私のほかにお世話申し上げる人もいませぬようですので。

四 ことさら、特別に何をしてさし上げることもあるまいと思って。すでにれっきとした東宮の地位におつきでいられるのだから……という気持。弘徽殿に対する配慮もあろう。

五 弘徽殿の大后のご兄弟の藤大納言。弘徽殿方が藤原氏であることが分る。

六 蔵人所の頭（長官）は定員二人。左右中弁から一人、近衛の中将から一人を選ぶ。

七 朱雀院の帝の女御。



風情のある時刻なので

二十日の月やうやうさし出でて、をかしきほどなるに、「遊びなどもせまほしきほどかな」とのたまはす。（帝）管絃の遊びなどでもしてみたい折だね（源氏）「中宮の今宵まかでたまふなるとぶらひにものしはべらむ。院ののたまはせおくことはべりしかば、また後見つかうまつる人もはべらざめるに、春宮の御ゆかりで、いとほしう思ひたまへられはべりて」と奏したまふ。（帝）「春宮を私の皇子になしてなど、のたまはせ置きしかば、とりわきて心ざしものすれど、ことにさしわきたるさまにも何ごとをかはとてこそ。年のほどよりも、御手などのわざとかしこうこそものしたまふべけれ。何ごとにもはかばかしからぬみづからの面起こしになむ」と、のたまはすれば、「おほかた、したまふわざなど、いとさとくおとなびたるさまにものしたまへど、まだいと片なりに」など、その御ありさまも奏したまひて、まかでたまふに、大宮の御兄の藤大納言の子の、頭の弁といふが、世にあひ、はなやかなる若人にて、思ふことなきなるべし、妹の麗景殿の御方に行くに、大将の御前駆を忍

ご退出なさると
東宮のご縁で
気がかりに存ぜられまして
承っているそのお世話に参りましょう
ご筆跡
格段にすぐれていらっしゃるようだ
私の
名誉になることだ
ご聡明でしっか
（源氏）総じて
（東宮は）なさることなどが
りしていらっしゃるようですが
不十分で
（東宮は）
（桐壺院が）
特別に気をつけてはいるのですが
養子にするように
時流に乗って
今を時めく
何の屈
託もないのであろう
源氏
先払い

八『史記』鄒陽列伝、鄒陽の獄中よりの上書の中の一句。戦国時代の人荊軻が燕の太子丹のために、秦の始皇帝を刺そうとして、その誠意が天に通じ、白色の虹が太陽の面を貫く現象が現れたが、丹はやはり事の成らざるを恐れたことをいう。「白虹」は、武器または兵士を意味し、「日」は、君主を示すといわれる。荊軻は結局失敗したので、ここでは、東宮を擁する源氏方が、朱雀院に逆心を抱いても成功しないぞと、皮肉ったもの。

九 大后の甥といった近親の人々まで、態度に出して、とかく言っているらしいこともあるので。「人々」「ことども」とあり、頭の弁の皮肉以外にも、右大臣方からいろいろ非難されているのである。

源氏、藤壺のお前で、歌を詠み交わす

一〇（合奏のお相手をするなど）はなやかなお扱いをして下さったことなど。

一一 宮中には、幾重にも霧がかかって、私を隔てているのでしょうか、宮中に参っていながら、雲の上の月（帝）を、ここからはるかにお偲びしているのです。「霧」は、帝の周辺の悪意ある人々を意味する。桐壺帝在位中に比べて、あまりにも変ってしまった宮廷内の空気に、帝の恩沢の及ばないのを嘆いた歌。

一二 四段活用の「忘る」に自発の助動詞「る」のついた形。

（頭弁）八（をひそやかにするので）びやかに追へば、しばし立ちとまりて、「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」と、いとゆるゆるかにうち（ゆっくりと）誦じたるを、（源氏）大将いとまばゆしと（顔をそむけたい思いで）聞きたまへど、とがむべきことかは。（咎めだてできることだろうか）后の御けしきは、（大后のご意向は）いと恐ろし（大層険悪でめどうなことになりそうな噂ばかり聞えてくる上に）うわづらはしげにのみ聞こゆるを、九かう親しき人々も、けしきだち言ふべかめることどももあるに、（ことめんどうに）わづらはしうおぼされけれど、つ（も止めぬふりをしていらっしゃる）れなうのみもてなしたまへり。（源氏）「御前（帝の御前に）にさぶらひて、今まで（夜を）ふかしはべりにける」と（藤壺に）聞こえたまふ。

月のはなやかなるに（明るく照っているので）、昔かうやうなるをりは、（亡き桐壺院が）管絃の御遊を（催されて）一〇ひて、今めかしうもてなさせたまひしなどおぼしいづるに（藤壺が）、同じ御垣のうちながら（宮中）、かはれること多く悲し。

（藤壺）一一九重に霧や隔つる雲の上の
月をはるかに思ひやるかな

と、（王命婦を取次ぎにして）命婦して聞こえ伝へたまふ。（御座所が）ほどなければ（近いので）、御けはひも、（藤壺のご様子も）ほのかなれど、なつかしう聞こゆるに、（源氏は）つらさも忘られて、一二まづ涙ぞ落

一（仰せのように）月の光は昔ながら照らしていますのに、それを隔てる霧がつろうございます。よそよそしくなさるあなたが恨めしく存じます、の意を下にこめる。

二 霞も仲を隔てる点では人の心と同じように意地悪だ、とが詠まれていますが、昔もあったことなのでしょうか。『奥人』は「山桜見にゆく道を隔ければ霞も人の心なるべし」をあげる。『紫明抄』『河海抄』は第五句「人の心なりけり」。「山桜見にゆく道を隔つれば人の心ぞ霞なりける」（『後拾遺集』巻一春上、人々花見にまかりけるを、かくとも告げはべらざりければ、つかはしける　藤原隆経朝臣）

三 さすがにおあとを追ったりはようなさらないのを。幼いながら東宮という公の立場をわきまえているのである。

四 不穏な情勢をやっかいにお思いになって。弘徽殿一派を恐れ憚る気持。

五 晩秋初冬の景物。

六 木枯の風が吹くたびに、お便りがあるかとお待ちしている間に、待ち遠しく思う時も過ぎてしまいました。もうたまらずにこちらからお便りいたします。「木枯の吹くにつけつつ……」は、風が便りを運ぶという歌の発想を踏まえ、時節のあわれを知って便りがあるはずだという気持を詠む。

つる。

（源氏）「月かげは見し世の秋にかはらぬを
　隔つる霧のつらくもあるかな

（藤壺）霞（かすみ）も人のとか、昔もはべりけることにや」など聞こえたまふ。宮は、春宮（とうぐう）を飽（いつまでも名残惜しく）かず思ひきこえたまひて、（東宮は）（お心にお止めでないのを）よろづのことを聞こえさせたまへど、深うもおぼし入れたらぬを、（大層あとあとのことを気がかりに）いとうしろめたく思ひきこえたまふ。例はいと疾く大殿籠（おほとのごも）るを、（東宮は）（藤壺が）お帰りになるまでは起きていようと出でたまふまでは起きたらむとおぼすなるべし。うらめしげに（母宮のお帰りを）おぼしたれど、（藤壺は）三さすがにえしたひきこえたまはぬを、いとあはれと見たてまつりたまふ。

源氏大将、頭の弁の誦（ず）じつることを思ふに、御心の鬼に、（お気が咎めて）四世の中わづらはしうおぼえたまひて、（朧月夜）尚侍（かむ）の君にもおとづれきこえたまはで、（お便りをさし上げられることなく）久しうなりにけり。五初時雨（しぐれ）、（朧月夜）（早くもその気配を見せて降りそめる頃）いつしかとけしきだつに、いかがおぼしけむ、かれより、

（朧月夜）六木枯（こがらし）の吹くにつけつつ待ちし間に

七 時節にふさわしい便りが心を打つ上に。
八 唐紙（中国渡来の紙）をいろいろ入れさせておかれた御厨子をお開けさせになって。「厨子」は、書画、器物などを収めておく調度。本箱。（一巻図録九参照）
九 いかにも恋する人の風情なので。
一〇 お便りをさし上げても、（なかなかお逢いできず）何の役にも立たないのに懲りまして。
一一 ただもう自分を情けなく思って嘆いている間に（あなたに待たれるほど、長い日数が経ってしまいました。「数ならぬ身のみもの憂く思ほえて待たるるまでになりにけるかな」（『後撰集』巻十八雑四、読人しらず）による。
一二 あなたに逢えないで、恋い忍んで泣いている頃の涙、それが初時雨になって降ったのに、ただのこの季節の時雨とお思いですか。
一三 （たとえ逢えなくても、このようにお便りのやりとりをして、お互いの）心が通うならば。
一四 こうして物思いをそそる時雨が降りましょうとも、どんなにか逢えぬ憂いを忘れることでしょう。物思いの意の「ながめ」に「長雨」を掛け、今の景物の時雨の縁語。
一五 つい情のこもった文面になってしまった。

おぼつかなさのころも経（へ）にけり

と聞こえたまへり。をりもあはれに、（七）（無理をしてこっそり書かれたであろう）あながちに忍び書きたまひつらむ御心ばへも憎からねば、（お手紙の使いを引止めさせて）御使とどめさせて、唐の紙（八）ども入れさせたまへる御厨子（特別上等なのを）あけさせたまひて、（選び出しては）なべてならぬを選り出（え）でつつ、筆なども心ことに（念入りに穂先を整えていらっしゃる様子が）ひきつくろひたまへるけしき艶（えん）なるを、（九）御前（おまへ）なる人々、（女房）誰ばかりならむとつきじろふ。（〔お相手は〕一体どなただろうと突つき合う）

（源氏）一〇 聞こえさせてもかひなきものごりにこそ、（ひどく弱気になってしまいました）むげにくづほれにけれ。

身のみもの憂（う）きほどに、（一一）
あひ見ずてしのぶるころの涙をも（一二）
なべての空の時雨（しぐれ）とや見る

（一三）心の通ふならば、いかにながめの空もの忘れしはべらむ。（一四）（薄情だと思われぬ程度にお返事なさって）

など、こまやかに（一五）（このように折節に事寄せてお便り申し上げる女たちは多いようだが）なりにけり。かうやうにおどろかしきこゆるたぐひ多かめれど、情（なさけ）なからずうちかへりごちたまひて、（〔源氏の〕）御心には深う染（し）まざるべし。

一　法華八講のこと。法華経八巻を、一日を朝座夕座の二座に分ち、一日に二巻、四日間にわたって、問答形式で論議讃仰する法会。

二　桐壺院のご命日。「国忌」は、皇祖、先帝、母后などの命日。

桐壺院の一周忌、源氏と藤壺、追憶の歌を詠み交わす

三　故院にお別れした日は、今日まためぐって来ましたが、亡き院にお目にかかれる世は、いつのことと頼みにすればよいのでしょう。人間は、過去現在未来の三世を、因果の法則によって、六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の各世界）に、何度も生れ変ってゆくという当時の思想による。現世で、たまたま父子の縁を結んでも、次々の来世では、果していつ再会できるだろうかと悲しむ歌。

四　故院亡き後、この世に生き永らえているのはつらく厭わしいのですが、めぐり来た一周忌の今日は、まるで亡き院のご在世の時に会った思いがいたします。

五　（藤壺の字は）書風が独特で当世風というのではないが。

六　（四日の間）日毎に、三宝（仏、法、僧）に供養として奉られるお経。

七　経巻の玉で飾った軸。以下、経巻の装丁。

八　「羅」は、紗、絽など、薄い絹の織物。高度の技術を必要とした。「表紙」は、経

藤壺、御八講の終りの日、出家する

中宮は院の御はてのことにうち続き、御八講のいそぎを、さまざまに心づかひせさせたまひけり。霜月の朔日ごろ、御国忌なるに、雪いたう降りたり。大将殿より宮に聞こえたまふ。

（藤壺）桐壺院の一周忌のご法事　準備　上旬　源氏　藤壺

（源氏）三　別れにしけふは来れども見し人に

ゆきあふほどをいつとたのまむ

どちらでも

いづこにも、今日はもの悲しうおぼさるるほどにて、御返りあり。

（藤壺）四　ながらふるほどは憂けれどゆきめぐり

今日はその世に逢ふここちして

取り立てて気を配られたのでもない

ことにつくろひてもあらぬ御書きざまなれど、あてに気高きは思ひなしなるべし。筋かはり今めかしうはあらねど、人にはことに書かせたまへり。今日はこの御ことも思ひ消ちて、あはれなる雪の雫に濡れ濡れ行ひたまふ。

上品で　〔源氏の〕　人にすぐれて　藤壺への思慕も抑えて　心にしみる　〔涙がちに〕勤行なさる

十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養ぜさせたまふ御経よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙簀の飾り

巻の表紙。

九「帙簀」は、巻物を包む竹製の帙。「飾り」は、その縁や編み糸、紐などに美麗をこらすこと。

一〇 花籠（散華の入れ物）を置く机。

一一 机の上に掛ける敷物。錦などを用いる。

一二 当時の最高の讃辞。

一三 藤壺の父帝。（桐壺三三頁参照）

一四 法華経第五巻（提婆達多品第十二から従地涌出品第十五まで）を講ずる日。第三日目の朝座に当り、法会の中心とされる。

一五 経典の意味を講説する僧。高座に上って行う。

一六「薪こる」ところをはじめとして。「薪こるほど」は、五巻のはじめの提婆達多品に、仏（釈迦）が木の実を採り、水を汲み、薪を拾うなど苦労して、提婆に仕え、法華経の教えを受けたことを述べた個所。当日、この話を詠んだ歌、「法華経をわが得しことは薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」（『拾遺集』巻二十哀傷、大僧正行基）を唱え、薪や水桶を持ち、捧物を捧げて、堂や池の周囲をめぐる（薪の行道という）。

一七 仏に捧げる供物、金銀細工の枝に付けるという。

一八 ご自身のための祈願を最終日の法会の趣旨となさって。

一九（兵部卿の宮がいろいろご意見なさるのに対し）藤壺は、固いご決意のほどを仰せられて。

二〇 天台座主。「山」は、比叡山延暦寺。「座主」は、僧官名で、一山の寺務を統括する者。

〔藤壺は〕またとないほど立派にお作らせになった

も、世になきさまにととのへさせたまへり。さらぬことのきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなり。仏の御飾り、花机のおほひなどまで、まことの極楽思ひやらる。初めの日は先帝の御料、次の日は母后の御ため、またの日は院の御料、五巻の日なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚りたまはで、いとあまた参りたまへり。今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、薪こるほどよりうちはじめ、同じう言ふ言の葉も、いみじう尊し。親王たちも、さまざまの捧物ささげてめぐりたまふに、大将殿の御用意など、なほ似るものなし。常におなじことのやうなれど、見たてまつるたびごとに、めづらしからむをば、いかがはせむ。

普通のお催しでも立派になさる点

〔この法会は〕

第一日

翌第三日

桐壺院の御ため

右大臣方への遠慮も

同じように説く言葉も

行道なさるのに

源氏

果ての日、わが御ことを結願にて、世を背きたまふよし、仏に申させたまふに、皆人々おどろきたまひぬ。兵部卿の宮、大将の御心も動きて、あさましとおぼす。親王は、なかばのほどに立ちて入りたまひぬ。心強うおぼし立つさまをのたまひて、果つるほどに、山

最後の第四日目

藤壺の兄宮

源氏

法要の途中で

〔藤壺の御座所に〕

〔法要が〕

ご出家のよしを

〔僧をして〕

一 僧尼として守るべき戒（仏教上の禁制）。
二 「御をぢ」は、母方のおじであろう。「横川」は、比叡山三塔の一。根本中堂北方約二キロの所にある。慈覚大師円仁の開基。
三 御髪をお切りなさる時には。当時の尼は、下げ髪を肩のあたりで切り揃える。
四 （藤壺ご出家という特別の大事はもとより）一体に法会全体の有様も。
五 藤壺腹ではない、桐壺院の皇子たち。御八講に参会した親王たち。
六 昔、故院がご在世中、藤壺の宮を誰よりもご寵愛なされ、重んぜられたご様子を思い出されると。
七 何をそんなにお悲しみなさるのかと、周囲の人が不審にお思い申すであろうから。

源氏、出家した藤壺と語る

の座主召して、忌むこと受けたまふべきよしのたまはす。御をぢの横川の僧都近う参りたまひて、御髪おろしたまふほどに、宮の内ゆ（大騒ぎで）すりて、ゆゆしう泣きみちたり。何となき老い衰へたる人だに（大した身分でもない老いぼれた人でも）、今（不吉なまでに）はと世を背くほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねて（前々から）（不思議に心を打たれるものなのに）お顔色にもお出しにならなかったことなので）の御けしきにも出だしたまはざりつることなれば、親王もいみじう（兵部卿の宮も）泣きたまふ。〔法会に〕参りたまへる人々も、おほかたのことのさまも、あはれに尊ければ、みな袖濡らしてぞ帰りたまひける。

故院の御子たちは、昔の御ありさまをおぼしいづるに、いとどあはれに悲しうおぼされて、皆とぶらひきこえたまふ。大将は立ち（お残りになって）まりたまひて、聞こえいでたまふべきかたもなく（申し上げるべき言葉もなく）、くれまどひて（どうしていいか分らな）おぼさるれど、などかさしもと人見たてまつるべければ、親王など出（いお気持だが）でたまひぬるのちにぞ、御前に参りたまへる。

やうやう人しづまりて（人の気配が静まって）、女房ども、鼻うちかみつつ、所々に群れ（寄り集まっている）みたり。月は隈なきに、雪の光りあひたる庭のありさまも、昔のこ

八 どのようなご決心から、このように急にご出家あそばしたのですか。
九 今はじめて考えましたことでもありませんのに、先程はもの騒がしい様子でしたので、せっかくの覚悟もゆらぎそうで。「ものさわがしきやう」は、人々が驚き悲しんだことをいう。
一〇 大勢集い控えている女房の衣ずれの音も。
一一 いかにも悲しそうな気配が、堪えかねるように御簾越しに漏れ聞えてくる様子を。
一二 室内に薫きしめた香（空薫物）の匂い。
一三 薫香の一種。冬の季節の香といわれる。
一四 仏に供する香。
一五（先日、参内の折の）東宮のあどけないお話しぶりを。（一五七頁参照）
一六 源氏が、お口添え申し上げなさったのだった。

と思ひやらるるに、〔源氏は〕いと堪へがたうおぼさるれど、いとようおぼしづめて、「いかやうにおぼし立たせたまひて、かうにはかには」と聞こえたまふ。〔源氏〕八〔藤壺〕九「今はじめて思ひたまふることにもあらぬを、ものさわがしきやうなりつれば、心乱れぬべく」など、例のように王命婦を通して、例の、命婦して聞こえたまふ。御簾のうちのけはひ、お部屋の中の様子は一〇そこらつどひさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかにふるまひなして、ひそやかにとことさら気をつけて うち身じろきつつ、一一悲しげさのなぐさめがたげに漏り聞こゆるけしき、ことわりにいみじと無理もないと悲しく思っておぼしづめて聞きになる聞きたまふ。風はげしう吹きふぶきて、吹きすさんで御簾のうちの匂ひ、いとも大層奥ゆかしい一二の深き黒方にしみて、一三名香の煙もほのかなり。ほのかに混っている大将の御匂ひさへかをりあひ、めでたく、極楽思ひやらるる夜のさまなり。春宮の御使〔お召し物の〕も参れり。一五のたまひしさま思ひいできこえさせたまふにぞ、御心強決意もこらえがたくてさも堪へがたくて、御返りも聞こえさせやらせたまはねば、一六大将ぞ、言くはへ聞こえたまひける。お返事も申し上げられずにいらっしゃるので

誰も誰も、そこにいる者はみな心の静まらぬ折なので〔源氏は〕ある限り心をさまらぬほどなれば、おぼすことどもも

お言い出しになれない
えうちいでたまはず。

（源氏）一
「月のすむ雲居をかけてしたふとも
この世の闇になほやまどはむ

ご出家に踏み切られたことの
二と思ひたまへらるるこそ、かひなく。おぼし立たせたまへるうらやましさは、限りなう」とばかり聞こえたまひて、人々近うさぶらへば、さまざま乱るる心のうちをだに、心中の思いも
あからさまに申し上げることができず
え聞こえあらはしたまはず、胸が一杯である
いぶせし。

（藤壺）三
「おほかたの憂きにつけてはいとへども
いつかこの世を背き果つべき

四かつ濁りつつ」など、五かたへは御使の心しらひなるべし。あはれのみ尽きせねば、胸苦しうてまかでたまひぬ。

二条の院　東の対
殿にても、わが御方にひとりうち臥したまひて、御目もあはず、
〔源氏は〕
ご自分も出家したく思われるにつけても　気がかりである
世の中いとはしうおぼさるるにも、春宮の御ことのみぞ心苦しき。
〔桐壺院が〕お考えだったのに
六母宮をだにおほやけがたざまにとおぼしおきてしを、世の憂さに堪

一　今宵の月のように、心澄むご出家の境地をお慕いしようとしても、私はやはりこの世の煩悩に迷うことでしょう。「すむ」は「住む」「澄む」の掛詞。「この世」に「子」を掛け、暗に、東宮の身の上を思って、自分は、出家の志を果せないことをいう。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）を踏まえる。

二　と存じられますので、どうにもならないことでございます。前の歌からすぐ続く言葉。

三　一体に、世の中がはかなく思われて出家はしましたが、いつこの世の執着から脱け切ることができるでしょうか。「この世」に「子」を掛け、東宮のことは、自分とても思い切ることはできないと訴えたもの。

四　出家はしたものの、煩悩を断ち切れませんで。「濁る」は、源氏の歌の「澄む」の縁語。引歌であろうが、未詳。

五　（ご返事の）一部は、取次ぎの女房がよろしくつくろって伝えているのであろう。草子地の文。

六　せめて母宮（藤壺）だけでも、中宮の地位につけて（東宮の後楯にしよう）と。東宮に後見がないので、桐壺院が「母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、つよりにとおぼすになむありける」とあった（紅葉賀四四頁）。これ以下、「捨ててはて」まで、源氏の心中の思い。

藤壺出家後の源氏

七 中宮のご身分のままでいらっしゃることは、とてもおできになるまい。仏門に入った者は、この世の地位身分一切を捨てるからである。

八 こういった方面（仏に仕えるといった生活）に必要なお道具類をさし上げようとお思いになるので。

九 一つ一つ話し続けると大げさなことになるので、（語り手の女房が）省略したようです。源氏がどんな贈り物をしたか、どんなやりとりがあったかを書かないことに対する物語筆記者の女房の言い訳。草子地の文。以下「さうざうしや」までも同様。

一〇 藤壺のお邸に参上なさることも、もう今は世間に対する気がねも薄らいで。藤壺の出家により、男女関係を疑われる恐れはなくなったからである。

一一 心に深く思い込んだこと。藤壺への恋。

一二（桐壺院の諒闇の年が明けて）宮廷はさまざまの新年の行事にはなやいで。

新年、源氏、藤壺の三条の宮に参る

一三 正月下旬、天皇が侍臣に賜る宴。（紅葉賀二三頁注一一参照）

一四 男踏歌（正月十四日。ほぼ隔年に行う）と、内教坊の妓女による女踏歌（毎年、正月十六日）がある。いずれも、御前で舞った後、院、中宮、東宮を廻って歌舞するが、出家した藤壺の所へは来ない。

一五 念誦（経文や仏名を唱える）を行うための堂。

一六（出家に当り）特別に建てられたお堂が西の対の南の方角に、少し離れてあるのに。

へず、かくなりたまひにたれば、（出家してしまわれたので）もとの御位にてもえおはせじ、われさへ（東宮を）見たてまつり捨ててはなど、おぼし明かすこと限りなし。今はかかるかたざまの御調度（王命婦）どもをこそはとおぼせば、年のうちにといそがせたまふ。命婦の君も御供（尼に）になりにければ、それも心深（ねんごろにお）うと見舞なさる）ぶらひたまふ。くはしう言ひ続けむにことことしきさまなれば、漏らしてけるなめり。（実のところ）さるは、かうやうのをりこそ、（人が出家するといった折にこそ）をかしき歌などともあるのに）出で来るやうもあれ、（もの足りないことです）さうざうしや。参りたまふも今はつつましさ薄らぎて、（取次なしに）御みづから（藤壺ご自身でお返事なさる時もあるのだった）聞こえたまふをりもありけり。思ひしめてしことは、さらに（源氏の）御心に離れねど、（尼になられた今では）ましてあるまじきことなりかし。

年もかはりぬれば、（改まったので）内裏わたりはなやかに、内宴、踏歌など聞きたまふも、もののみあはれにて、御行ひしめやかにしたまひつつ、（藤壺は）仏前のお勤めをひっそりとなさっては）後の世のことをのみおぼすに、たのもしく、（来世のことばかりお考えなので）むつかしかりしこと（頃わしかったことも遠い昔のことのように思われなさる）離れて思ほさる。常の御念誦堂をばさるものにて、（そのままにして）ことに建てられたる御堂の、西の対の南にあたりて、すこし離れたるにわたらせたま（藤壺は）

一 中宮職の役人の、藤壺の宮家に縁故のある者だけが。中宮職は、中宮に関する事務をつかさどる役所。
二 ひどく思い沈んだふうである。「屈す」は、気力を失うこと。「いたし」は、甚だしいこと。
三 白馬の節会に牽く馬。白馬の節会は、正月七日の年中行事で、年始に青馬（黒と白の毛の入りまじった馬）を見れば邪気を去るという中国の伝説に由来し、古くは青馬と書いたが、後には白馬と書くようになった。帝の御覧に供したあと、院、三后、東宮にも牽く。帝の服喪中でも白馬を見る儀式だけは行われたから、入道した中宮の場合も差し支えなかったのであろう。下の「ひきかへぬ」の「ひく」は白馬の縁。
四 以前、大勢参集して来られた公卿たちなども。
五 右大臣邸。二条の宮。二条の大路を挟んで三条の宮に対している。
六 （源氏が）千人にも匹敵しそうな立派なご様子で。「一人千に当る」（『涅槃経』）などによる諺であろう。
七 御簾のへりを綴じてある絹。
八 縹（薄い藍色）に青のかかった色。喪服、尼の着物などに用いる。ここは几帳の垂れ絹。
九 薄鼠色や梔子色（山吹色）の袖口。藤壺のお供をして、尼になった女房たちの衣裳。
一〇 源氏は、あれこれ（人事の変遷、変らず巡り来る自然）に、感慨を催されて。
一一 「音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり」――名高い后の御所を今日拝見致しましひて、とりわきたる御行ひせさせたまふ。大将参りたまへり。あらたまるしるしもなく、宮の内のどかに、人目まれにて、宮司どもの親しきばかり、うちうなたれて、見なしにやあらむ、屈しいたげに思へり。白馬ばかりぞ、なほひきかへぬものにて、女房などの見ける。所狭う参りつどひたまひし上達部など、道をよきつつひき過ぎて、むかひの大殿につどひたまふを、かかるべきことなれど、あはれにおぼさるるに、千人にもかへつべき御さまにて、深うたづね参りたまへるを見るに、あいなく涙ぐまる。

客人も、いとものあはれなるけしきに、うち見まはしたまひて、とみにものたまはず。さまかはれる御すまひに、御簾の端、御几帳も青鈍にて、隙々よりほの見えたる薄鈍、梔子の袖口など、なかなかなまめかしう、奥ゆかしう思ひやられたまふ。解けわたる池の薄氷、岸の柳の、けしきばかりは時を忘れぬなど、さまざまながめられたまひて、「むべも心ある」と、忍びやかにうち誦じたまへ

源氏
年の改まった
三条の宮
人影も少なく
そう思って見るせいだろうか
やはり昔に変らぬものとして
〔宮家の前の〕道を避けて通り過ぎては
世の常のこととはいえ
〔藤壺は〕心
志深く
大層しんみりとした様子で
〔あたりを〕
〔今までとは〕一変した尼のご生活で
自然のきさしだけは季節を忘れぬ有様など
って優美で

たが、なるほど、奥ゆかしい尼が住んでいられたのでした（『後撰集』巻十五雑一、西院の后、御髪おろさせたまひて、行はせたまひける時、かの院の中島の松を削りて、書き付けはべりける　素性法師）。「松が浦島」は、陸奥の歌枕。宮城県宮城郡、七浜（塩竈湾の南の半島）の菖蒲田の西南に隣る松浜にある島という。

一二 思いに沈まれる入道の宮のお住居と存じますと、もう何よりも先に涙にくれるのです。「ながめ」に「長布」（海藻）と「眺め」、「あま」に「海士」と「尼」を掛ける。「潮垂る」は「海士」の縁語。

一三 昔の名残もなく衰えてしまった私の所へお立ち寄り下さる方があるとは、めずらしいことでございます。源氏の歌の「松が浦島」の語を受けて、上の句は、龍宮から帰った浦島子が、すっかり変った故郷を見て、あらぬ世に来た思いをする言い伝えによっている。

一四 そうした人（充ち足りている人）にありがちなことで。「ひとつもの」は、同じ物の意。

る、またなうなまめかし。

（源氏）一二
ながめかるあまのすみかと見るからに
　まづしほたるる松が浦島

と聞こえたまへば、奥深うもあらず、〔場所を〕みな仏にゆづりきこえたまへる御座所なれば、すこしけ近きここちして、（身近にいらっしゃる感しで）

（藤壺）一三
ありし世のなごりだになき浦島に
　立ち寄る波のめづらしきかな

〔取次に〕とのたまふも、ほの聞こゆれば、〔源氏は〕忍ぶれど、涙ほろほろとこぼれたまひぬ。世を思ひすましたる尼君たちの〔侍女の〕見るらむも、〔簾中から〕はしたなければ、言少なにて出でたまひぬ。〔源氏は〕「さもたぐひなくねびまさりたまふかな。（尼たち）なんとお年添えてまたなく立派におなりで）心もとなきところなく世に栄え、時にあひたまひし時は、（何の不足もなく）さるひとつものにて、何につけてか世をおぼし知らむと、（何によって人の世の機微がお分りになるだろうと）おしはかられたまひしを、今はいといたうおぼししづめて、（お考え深くなられて）はかなきことにつけても、ものあはれなるけしきさへ添はせたまへるは、（しんみりした感じまでお加わりになったのは）あいなう心（何だかおいたわ）

一　ここは春の除目のこと。正月中旬または下旬に行われる官吏任命の公事。主に地方官が任命された。

藤壺、源氏方の人々、昇進を阻まれる

二　普通の筋道から考えても。年功などで、順番として官位が進められることをさす。

三　中宮の年官。年官とは、春の除目の時、名目だけの地方官（掾、目など）を任命して、俸禄を上皇、東宮、中宮の所得とするもの。

四　藤壺が出家されたといっても、早々と中宮のお位を退き、御封などが停止されるものでもないのに。「御封」は、上皇、中宮以下諸臣に対し、位官、勲功に応じて賜る戸口。その租の半分、庸調の全部が封主の所得になる。中宮は千五百戸（『河海抄』）。

五　東宮のご即位が無事に遂げられたならばということだけをお考えになっては。

六　（藤壺の内心に、東宮のお身の上について）ひそかに危うく不吉なことが起りはしないかと、お案じ申し上げなさることがあるので。東宮が桐壺帝の子ではないことをさす。本来なら、皇位に即くべきではないからである。

七　自分がこの世の栄華を捨て、仏道修行に専念することに免じて。

しくも思えますね　年取った尼たちは
苦しうもあるかな」など、老いしらへる人々、うち泣きつつ、めできこゆ。宮もおぼしいづること多かり。

藤壺
司召のころ、この宮の人は賜はるべき官も得ず、おほかたの道理にても、宮の御たまはりにても、かならずあるべき加階などをだにせずなどして、嘆くたぐひいと多かり。かくても、いつしかと御位を去り、御封などのとまるべきにもあらぬを、ことづけてかはること多かり。皆かねておぼし捨ててし世なれど、宮人どもも、よりどころなげに悲しと思へるけしきどもにつけてぞ、御心動くをりをりがあるがあれど、わが身をなきになしても、春宮の御代をたひらかにおはしまさばとのみおぼしつつ、御行ひたゆみなくつとめさせたまふ。人知れずあやふくゆゆしう思ひきこえさせたまふことしあれば、われにその罪を軽めてゆるしたまへと、仏を念じきこえたまふに、よろづをなぐさめたまふ。大将も、しか見たてまつりたまひて、ことわりにおぼす。この殿の人どもも、また同じさまに、からきことのみ

藤壺に仕える人　位階昇進　出家されたのを口実に　万事前々から執着を断っていられた俗世のことだが　暮しの頼りを失ったように悲しんでいる様子をご覧になると　〔藤壺は〕お気持の納まらぬ時　仏道修行を　〔藤壺の本心を〕そのように推察申されて　つらいことを　一切のつらいことばかり　東宮の罪　源氏　宮家の人々と同様　源氏邸に仕える人たちも　だとお考えになる

左大臣、致仕する

八 臣下が辞職を申し出る時、天皇に上る文書。一定の形式があり、儒者に作らせる。二度、三度と上表し、そのたびに返す慣習であった。

九 （上表しても）何にもならないことだと。

一〇 右大臣一族ばかりが。

一一 重ね重ね栄進なさることは、際限もない。正月の叙位、司召で昇進任官したのに、また、最上席の左大臣の辞職で、次々昇進するのが、右大臣方ばかりである。

一二 左大臣の長子。もとの頭の中将。（葵一〇〇頁参照）

三位の中将、いよいよ源氏に親しむ

一三 右大臣の姫君。三位の中将とはすでに桐壺の巻で結婚している。（桐壺三九頁参照）

一四 相変らず絶え間がちに通うといったことで、（右大臣方にとって）心外なお扱いをなさるので。「れ」は軽い敬語。

あれば、〔源氏は〕世間をおもしろくなく思われて引き籠っていらっしゃる

左の大臣も、公私ともにうって変った世間の有様に公 私ひきかへたる世のありさまに、もの憂くおぼして、致仕の表たてまつりたまふを、帝は、桐壺院故院の、〔左大臣を〕やむごとなく重き御後見とおぼして、長き世のかためと聞こえ置きたまひし御遺言をおぼしめすに、〔左大臣を〕お手放しになりにくくお思い申しておられたので末長く天下の守りとせよと申し上げて置かれた言をおぼしめすに、捨てがたきものに思ひきこえたまへるに、かひなきこと、と、たびたび用ゐさせたまはねど、〔左大臣は〕強いてご辞退申し上げなさってお取り上げにならなかったが たまひて、籠りゐたまひぬ。今はいとど一族のみ、かへすがへす栄えたまふこと限りなし。国家の柱石とされていらっしゃる左大臣が世のおもしとものしたまへる大臣の、かく隠退なさったので世をのがれたまへば、帝もおほやけも心細うおぼされ、世の人も心ある者は皆限りは嘆きけり。

〔左大臣の〕御子どもは、どの方も皆いづれともなく、人がらめやすく世に用ゐられて、好もしくここちよげにものしたまひしを、楽しそうにやっておられたのにこよなうしづまりて、三位の中将すっかり元気をなくして なども、世を思ひ沈めるさま、前途を悲観していることはこよなし。この上もない かの四の君をも、なほかれがれにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、〔右大臣方は〕気を許した心解けたる

御婿のうちにも入れたまはず。思い知れというわけか思ひ知れとにや、一このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。大将殿、かう静かにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、ましてことわりとおぼしなして、常に参り通ひたまひつつ、学問をも遊びをももろともにしたまふ。三いにしへも、もの狂ほしきまで、いどみきこえたまひしをぼしいでて、四かたみに今もはかなきことにつけつつ、さすがにいどみたまへり。春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊きことどもをせさせたまひなどして、またいたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、六文作り七韻塞などやうのすさびわざどもをもしなど、心をやりて、宮仕へをもをさをさしたまはず、八御心にまかせてうち遊びておはするを、世の中には、わづらはしきことどもやうやう言ひいづる人々あるべし。

夏の雨のどかに降りて、つれづれなるころ、中将、さるべき集どもあまた持たせて参りたまへり。殿にも、文殿あけさせたまひて、

大して気にもしていない
世の中は頼みにならぬものだと知られるのに〔自分の不遇は〕〔三位中将は〕
〔源氏のもとに〕儒学
〔三位中将は〕
お互いに今でも些細なことにかこつけては
〔源氏は〕
法会
気ままに振舞って朝廷への出仕もめったにさらないで
気楽な遊び
三位の中将
書庫
詩集
〔供人に〕〔二条院に〕源氏方でも

一 この正月の司召。（一七八頁参照）

二 源氏のようなすぐれた方が、このように世に用いられずにいられるにつけ。以下、三位の中将の心中の思い。

三 若かった昔にも、常軌を逸するほど、競争申しなさったのを。今から五六年前、源氏十八九歳の頃、末摘花や源典侍を張り合ったことがある。（末摘花、紅葉賀参照）

四 季の御読経のこと。春秋二回に、大勢の僧に大般若経を転読（経文の題目、あるいは初めと終りの部分だけを読むこと）させる法事。宮中をはじめ、貴族の家で行われる年中行事。

五 用のない暇のありそうな博士たち。「博士」は、大学寮で学業の教授、学生の試験などを行う官。紀伝（文章）、明経、明法、算、音等があるが、ここは文章博士。

六 作文。漢詩を作ること。

七 古詩などの韻を踏んであるところを隠し、詩の内容から、隠してある韻字を当てる遊び。

八 めんどうなこと（源氏が朝廷に不満を持って、出仕しないのではないかなどということ）を次第に口に出す人々もあるようだ。

九　本箱。（一六九頁注八参照）

一〇　大学寮の博士以下の儒者たち。

一一　左方と右方に入れ違いに組をお分けになった。「こまどり」は、人数を左右に分けて勝負事などをする場合、一、三、五番を左方、二、四、六番を右方とする分け方。左の筆頭に、その場の最上席の者がなる。ここでは右大将の源氏がそれに当る。

一二　韻塞を進めて行くにつれて、むつかしい韻の文字が大層多くて。韻を踏むには細かい法則がある上に、韻字も数が多いので、詩の意味を十分理解しなければ、容易に解けない。ここは、未見の古集の詩であるから、いよいよ困難なのである。

一三　右方の筆頭は三位の中将。

一四　勝負事に負けた方が、勝った方に饗応すること。

一五　檜の薄板で作った折り箱。中に仕切りがあり、食物を入れる。（図録一二参照）

一六　「階」は、殿舎の正面から庭におりる階段。ここは「甕の頭の竹葉は春を経て熟す　階の底の薔薇は夏に入つて開けたり……」（『白氏文集』巻十七、律詩「薔薇正に開いて、春の酒初めて熟す。因つて、劉十九、張大夫、崔二十四を招いて、同じく飲す」。『和漢朗詠集』上、首夏）によって書いている。

一七　童殿上のこと。貴族の子弟が、宮中の作法見習いのため、子供の時から殿上を許されることがあった。

まだ開かぬ御厨子どもの、めづらしき古集（古い詩集で由緒のあるものを）のゆゑなからぬ、すこし選りいでさせたまひて、その道の人々、（作文に堪能な人々を）わざとはあらねどあまた召したり。殿上人も大学の一〇も、いと多うつどひて、左右（一一）にこまどりに方分（かたわか）たせたまへり。賭物ども（かけもの）など、いと二（に）なくていどみあへり。塞（ふた）ぎもて行くままに、かたき韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士（たち）どもなどのまどふ（まごつく）ところどころを時々うちのたまふさま、いとことよなき御才（ざえ）のほどなり。（人々）どうしてこう何事も揃っていらっしゃるのだろう（学才）「いかでかうしもたらひたまひけむ。なほ（やはり）さるべきにて、よろづのこと人にはすぐれたまへるなりけり」と、（前世からの宿縁で）めできこゆ。つひに右負け（一三）にけり。

二日ばかりありて、中将まけ（一四）わざしたまへり。ことことしうはあらで、なまめきたる（風雅な）檜破籠（一五）ども、賭物（かけもの）などさまざまにて、今日も例の人々多く召して文（ふみ）など作らせたまふ。階（はし）のもとの薔薇（さうび）けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ。中将の御子の、今年はじめて殿上（てんじやう）する、八つ九（しっとりと風情のある頃なので）（ろいで合奏なさる）

一 中国渡来の管楽器。木で作った匏に十七本の竹管を立て、匏の側面の口から吹奏する。（図録八参照）

二 催馬楽、律「高砂」。「高砂の　尾上に立てる　白玉　玉椿　玉柳　それもがと　さむ　汝もがと　汝もがと　練緒染緒の　御衣架にせむ　玉柳　何しかも　さ　何しかも　何しかも　心もまたいけむ　百合花の　さ百合花の　今朝咲いた　初花にあはましものを　さゆり花の」。律の音階は、呂の音階が、中国伝来の正階であるのに対し、日本的なくだけた音階で、この場面にふさわしい。

三 お召し物を脱いで、ご褒美にお与えになる。「御衣」は、直衣の下に着ている袿。

四 羅や紗のような、薄い絹織物。

五 袿の下に着る。肌着。

六 前出「高砂」の末句。歌詞は「さゆり花の」であるが、歌う際なので「さゆりばの」となったかという（『湖月抄』師説）。

七 素焼きの盃。

八 それを見たいと願っていた、今朝開いたばかりの初花にも劣らぬ君のお美しさと存じます。上の句、わが子の歌った催馬楽の歌詞を用い、「階のもとの薔薇けしきばかり咲きて」とあった眼前の景を詠む。「我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなるものといふべかりけり」（『古今集』巻十物名、さうび、紀貫之）を踏まえている。「あだ」は、なまめかしいの意。

九 （源氏は、面と向って賞められたので）苦笑して、

〔源氏は〕かわいく思われてお相手になられる

つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の次郎なりけり。世の人の思へる寄せも大変なもので　北の方　次男　〔右大臣の外孫なので〕世人の心

特別大切にお仕えしている　性質も利発で

寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう、容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、高砂を出だしてうたふ、いとうつくし。大将の君、御衣ぬぎてかづけたまふ。例よりはうち乱れたまへる御顔のにほひ、似るものなく見ゆ。うすものの直衣、単を着たまへるに、透きたまへる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見たてまつりて涙落しつつゐたり。「あはましものを、さゆりばの」とうたふとぢめに、中将、御土器参りたまふ。

整っており　ご合奏が少しくだけてゆくうちに　とてもかわいらしい　源氏　上げて歌うのが　うち興じていらっしゃる　色つや　〔次郎が〕　〔源氏に〕　〔父の〕　〔中将〕　声を張り　終り方に

それもがと今朝ひらけたる初花に
　おとらぬ君がにほひをぞ見る

ほほゑみて取りたまふ。

〔源氏〕「時ならで今朝咲く花は夏の雨に

盃をお取りになる。
一〇 時節に合わず今朝咲く花は、夏の雨に萎れてしまったらしい、美しく咲きにおう間もなく。
一一 酔いの紛れの言葉とお取りなしになるのを。
一二 そのほか、まだたくさん一座の人々によって歌は作られたようだが。以下「とどめつ」まで、草子地。
一三 貫之のいましめもあることだし、折角の偉い人の仰せに従って、めんどうなので、省くことにした。「貫之がいさめ」の実際は不明。「倒るる方に」は、慣用句。大勢に順応してというほどの意。歌の羅列を避けた作者の、諧謔をまじえた弁解の辞。
一四 「周公、伯禽を戒めて曰く、我は文王の子武王の弟成王の叔父、我天下に於て亦賤しからず」（『史記』魯周公世家）。なお「周公旦は文王の子武王の弟」という句が貞信公（藤原忠平）の天皇元服後摂政を辞する表（大江朝綱の作）の中に見える（『本朝文粋』巻四、『和漢朗詠集』巻下雑、丞相）。周公は中国の聖人。桐壺院を文王に、朱雀院を武王に、源氏自身を周公に比したもの。
一五 （ご自分を周公になぞらえられるなら）さて成王の何とおっしゃるおつもりなのだろう。東宮は成王に比せられることになるが、実は源氏の子であるから、「成王の叔父」とは言えまいという皮肉。以下「心もとなからむ」まで草子地。
一六 おこり。（一巻若紫一八三頁注一参照）

朧月夜と源氏、密会の場を右大臣に見つけられる

しをれにけらしにほふほどなく（陽気にたわむれて）おとろへにたるものを」と、うちさうどきて、（一）らうがはしく聞こしめしなすを、（中将は）お責めになっては無理にお酒をおすすめになる とがめいでつつしひきこえたまふ。（二）多かめりし言ども も、（このような酒宴の折の整ってもいない歌をいちいち書き止めるのは）かうやうなるをりのまほならぬこと数々に書きつくる、ここち（考えのない）いしわざだとか なきわざとか、貫之（つらゆき）がいさめ、たふるるかたにて、むつかしければ、とどめつ。皆この（源氏の）御ことを（趣旨のことばかり）誉めたる筋にのみ、大和（和歌）のも唐（漢詩）のも作り（自負されて）続けたり。（源氏自身のお気持としても）わが御ここちにもいたうおぼしおごりて、「文王（ぶんわう）の子武（ぶ）王（わう）の弟」と、うち誦（ず）じたまへる（自認のお言葉までもが）御名のりさへぞ、げにめでたき。（一五）成（せい）王（わう）の何とかのたまはむとすらむ。（それだけは自信がおありでないでしょう）そればかりやまた心もとなからむ。（藤壺の兄宮）兵部卿の宮も常にわたりたまひつつ、（音楽のおたしなみなどもすぐれていらっしゃる）御遊びなどもをかしうおはする宮なれば、（中将ともども）今めかしき御あはひどもなり。（はなやかなお相手の方々である）

そのころ尚侍（かむ）の君（一六）まかでたまへり。瘧病（わらはやみ）に久しうなやみたまひて、（呪術）まじなひなども心やすくせむとてなりけり。修法（ずほう）などはじめて、（加持祈禱）お（快方に向われたので）こたりたまひぬれば、誰も誰もうれしうおぼすに、例の、（（右大臣家では））めづらし（めったにない）

き隙なるをと聞こえかはしたまひて、（機会だからとお互いにしめし合わされて）わりなきさまにて（無理な算段をして）夜な夜な対面したまふ。いと盛りに（女盛りで）、にぎははしきけはひしたまへる人の、すこしうちなやみて（病にやつれて）、痩せ痩せになりたまへるほど、いとをかしげなり。（ゆたかではなやかな感じの方がある）后の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば、いと忍びて、たびかさなりゆけば、けしき見る人々もあるべかめれど、わづらはしうて、宮にはさなどは啓せず。大臣はた思ひかけたまはぬに、雨にはかにおどろおどろしう降りて、神いたう鳴りさわぐ暁に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、こなたかなたの人目しげく、女房どもも懼ぢまどひて近うつどひ参るに、いとわりなく、出でたまはむかたなくて、明け果てぬ。御帳のめぐりにも、人々しげく並みゐたれば、いと胸つぶらはしくおぼさる。心知りの人二人ばかり、心をまどはす。

（ほっそりとなさった様子といったら）（様子を悟る女房たちも）（父右大臣）（雷）（まことに心をひく風情で）（恐ろしい勢い）（〔源氏は〕大層困って）（お帰りになるすべもなくて）（女房たちが大勢）（〔源氏は〕胸の波打つ思いがなさる）（おろおろしている）

神鳴りやみ、雨すこしをやみぬるほどに、大臣わたりたまひて、まづ宮の御方（大后）におはしけるを、村雨のまぎれにて、え知りたまはぬ（俄雨の音に紛れて）（お気づきにならなかっ）

一 姉の弘徽殿の大后も同じ右大臣邸（二条の宮）におられる頃なので。宮中から退出しているのである。

二 このような無理な逢瀬ほど、かえってお気持の増す（源氏の）ご性質なので。

三 「啓す」は、申し上げる。三宮（太皇太后、皇太后、皇后）、東宮に申し上げる場合に用いる語。

四 右大臣家の子息たち。弘徽殿の大后や朧月夜の兄弟。

五 皇太后宮職の役人。弘徽殿の大后に関する庶務をつかさどるため、里邸にも付いて来ている。

六 朧月夜の側近くに。

七 御帳台。寝所。この中に、源氏と朧月夜がいる。

八 事情を知っている女房。源氏を手引きした女房。この人々が手紙の取次ぎなどもする。

九 右大臣が（こちらに）やって来られて。風雨、雷鳴などのあと、父や兄弟、夫などが女たちを見舞うのが、当時の風習。

に、軽らかにふとはひ入りたまひて、御簾引き上げたまふままに、「いかにぞ。いとうたてありつる夜のさまに、思ひやりきこえながら、参り来でなむ。中将、宮の亮などさぶらひつや」などのたまふけはひの、舌疾にあはつけきを、大将は、もののまぎれにも、左の大臣の御ありさま、ふとおぼしくらべられて、たとしへなうぞほほゑまれたまふ。げに入りはててものたまへかしな。

〔母屋の〕 と同時に 〔御帳台から〕 そっとにじり出ていらっしゃると 〔右大臣は〕 〔右大臣が〕 〔右大臣〕

尚侍の君、いとわびしうおぼされて、やをらゐざり出でたまふに、面のいたう赤みたるを、なほなやましうおぼさるるにやと見たまひて、「など御けしきの例ならぬ。もののけなどのむつかしきを、修法延べさすべかりけり」とのたまふに、薄二藍なる帯の、御衣にまつはれて引き出でられたるを見つけたまひて、あやしとおぼすに、また畳紙の手習ひなどしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。これはいかなる物どもぞと御心おどろかれて、「かれは誰がぞ。けしき異なるもののさまかな。たまへ。それ取りて誰がぞと見はべらむ」

朧月夜 とてもお困りになって 大変な騒ぎだった 昨夜の天気に お案じはしていたのだが 源氏 早口で落着きのないのを こんなあわただしい折にも ひどい違いだとついおかしく なってしまわれる お側にいましたか まだご気分がお悪いのかと おもてお顔が どうしてお顔色が常と違うのですか 続けさせるのだった 誰のものか調べましょう お渡しなさい 見馴れぬものですね

一三 全く（源氏のお思いになる通り）、お部屋にすっかり入り切ってから、おっしゃればよいのに。草子地。

一四 物の怪（人に憑いて祟りをする死霊や妖怪）などがついていると厄介ですから。

一五 二藍色（山藍の青と呉の藍の紅で染めた色）の薄いもの。

一六 直衣の帯。直衣と同色。二藍の直衣は若年、夏の着用といわれる。

一七 懐紙。檀紙を折り畳んで、懐に入れておき、鼻紙または歌の詠草、備忘録等に用いたもの。男性用。

一八 （感慨を託した）古歌などをすさび書きしたものが。

一九 御帳台の三方の入口に置かれている几帳。

二〇 はっとなさって。「れ」は自発の助動詞。

一 わが子ながらも、相手（朧月夜）が身の置き所もなく思っていらっしゃるだろうと。
二 右大臣ほどの身分の方なら、斟酌なさるべきなのだ。身分の高い人は人格教養が洗練されているはず。
三 とてもせっかちで、ゆったりしたところのおありでない右大臣なので。
四 横になっている男もいる。
五 （見つけられた）今になって。
六 あれこれして身を隠そうとする。衾（夜具）などを引きかぶるのであろう。
七 面と向ってはどうして（源氏だと）あばき立てられよう。
八 寝殿に弘徽殿の大后が滞在している。朧月夜は対の屋にいる。
九 困ったことになったな。以下、源氏の心中。
一〇 胸に納めておくことのおできにならぬ性質である上に。

右大臣の訴えに、弘徽殿の大后立腹し、源氏への報復を計る

とのたまふにぞ、〔朧月夜は〕うち見かへりて、われも見つけたまへる。〔畳紙を〕まぎらはすべきかたもなければ、いかがはいらへきこえたまはむ。（何とお答え申されよう）われにもあらでおはするを、（ろいようもないので）子ながらもはづかしとおぼすらむかしと、（ていらっしゃるのを）さばかりの人はおぼし憚るべきぞかし。されどいと急に、（前後の見さかいもなくなられて）のどめたるところおはせぬ大臣の、〔御帳台の中を〕おぼしもまはさずなりて、（色めかしい様子で）畳紙を取りたまふままに、几帳より見入れたまへるに、（〔右大臣は〕あきれて）いといたうなよびて、（こしゃくで腹立たしいけれど）つつましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞ、（目の前も真暗になった気がするので）やをら顔ひき隠して、とかうまぎらはす。あさましう、（正体もないような気持がして）めざましう心やましけれど、直面にはいかでかはあらはしたまはむ。目もくるるここちすれば、（朧月夜）この畳紙を取りて、寝殿にわたりたまひぬ。尚侍の君は、（源氏）われかのここちして死ぬべくおぼさる。大将殿も、（とうとうつまらぬ振舞が重なって）いとほしう、つひに用なきふるまひのつもりて、（世間の非難を受けることになるのかと）人のもどきを負はむとすることとおぼせど、（朧月夜）女君の心苦しき御けしきを、（いたいたしげなご様子なのを）とかくなぐさめきこえたまふ。

大臣は、（勝手気ままで）思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性に、いとど

一一 何もかも。「ゆくゆくと」は、物事が滞りなく進むさまをいう。
一二 以前のことも、親に許されもせず、出来たことですが。源氏と朧月夜がはじめて逢った、花宴の巻の出来事をさす。
一三 源氏の人物に免じて、何もかも我慢して。
一四 婿として世話しようと言いました折には。葵の上の死後、右大臣にその気持があったことは、葵の巻（一二〇頁）に見える。
一五 （源氏は）意にも介さず、無礼な態度をとられたので。「めざましげ」とは、右大臣方が心外だと思うような態度をいう。当時、源氏には紫の上以外に心を分ける気持はなかったとある（葵一二〇頁）。
一六 まさか、操が穢れているからとて、帝がお見捨てなさるはずはあるまいと望みをつないで。
一七 大手を振って女御などとも名乗らせませんことだけでも。女御と尚侍は、後宮に奉仕する点で、実際は同じだが、尚侍は名目上は一般的な役職で、女御などの特別職と区別される。「うけばる」は、誰にも遠慮せず思うままに振舞うこと。
一八 朝顔の斎院にも、相変らず大それたことに言い寄っては。斎院に対する恋は禁じられているので、「犯す」という。
一九 天下国家にとってだけでなく。斎院は、王城鎮護のため、山城の国の地主神賀茂神社に奉仕するところから、こういう。

賢木

老の御ひがみさへ添ひたまひにたれば、何ごとにかはとどこほりたまはむ。ゆくゆくと宮にもうれへきこえたまふ。「かうかうのことなむはべる。この畳紙は右大将の御手なり。昔も心ゆるされでありそめにけることなれど、人柄によろづの罪をゆるして、さても見むと言ひはべりしをりは、心もとどめず、めざましげにもてなされにしかば、やすからず思ひたまへしかど、さるべきにこそはとて、世にけがれたりともおぼし捨つまじきを頼みにて、かく本意のごとくたてまつりながら、なほその憚りありて、うけばりたる女御なども言はせはべらぬをだに、飽かずくちをしう思ひたまふるに、またかかることさへはべりければ、さらにいと心憂くなむ思ひなりはべりぬる。男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御心なりけり。斎院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあることなど、人の語りはべりしをも、世のためのみにもあらず、わがためもよかるまじきことなれば、よもさる思ひやりなきわざし

（右大臣）これこれしかじかのお訴え申される
（帝に）
もの足りなく残念に思っていますのに
これも前世の宿縁なのだと思い
ためらったりなさろ
偏屈さ
大后
源氏
次第です
おもしろくなく思いましたが
男にありがちなこととはいえ
あらためて
情けない気持になってしまいまし
よもやそんな無分別なことをなさるはずは
ただなら
源氏自身にとっても
ぬ様子だなどと

一 当代の識者として。「有職」は、すぐれた人物。
二 （右大臣よりも）もっとひどく源氏をお憎しみなので。
三 左大臣。致仕したことは、一七九頁に見える。
四 この上なく大事に育てていた一人娘。葵の上のこと。以下の事情、桐壺三七頁参照。
五 弟の、臣籍に下った身分で、年はもゆかぬ者の、元服する時の結婚相手に予定し。「いときなきが」の「が」は、目下の者に対して用いる格助詞。
六 恥さらしな有様だったのを。「をこがまし」は、愚かで物笑いになるさま。入内前に源氏と密通したこと。
七 （右大臣はじめ）皆あちら（源氏）の方に、お味方なさるようでしたが。右大臣が、一時は朧月夜を源氏に添わせようとしたことをいう。
八 源氏を婿にという希望が。
九 どうかして、そちらの方ででも（尚侍としてでも）。
一〇 あんなに憎らしいことをした人（源氏）の手前もあるし。婿にと望んだ時すげなくされた源氏に思い知らせてやりたくもある、の意。
一一 いよいよもって、そんなことでしょう。帝の御妻と通じるくらいだから、という気持。
一二 （源氏の態度が）帝の御ために安心できぬように思えるのは。

出でられじとなむ、時の有職と天の下をなびかしたまへるさま異なめれば、大将の御心を、疑ひはべらざりつる」などのたまふに、宮はいとどしき御心なれば、いとものしき御けしきにて、「帝と聞こゆれど、昔より皆人思ひ貶しきこえて、致仕の大臣も、またなくかしづくひとつ女を、兄の坊にておはするにはたてまつらで、弟の源氏にていときなきが元服の副臥にとり分き、またこの君をも、宮仕へにと心ざしてはべりしに、をこがましかりしありさまなりしを、誰も誰もあやしとやはおぼしたりし。皆かの御方にこそ御心寄せはべるめりしを、その本意違ふさまにてこそは、かくてもさぶらひたまふめれど、いとほしさに、いかでさるかたにても、人に劣らぬさまにもてなしきこえむ、さばかりねたげなりし人の見るところもあり、などこそは思ひはべりつれど、忍びてわが心の入るかたに、なびきたまふにこそはべらめ。斎院の御ことはましてさもあらむ。何ごとにつけても、公の御方にうしろやすからず見ゆるは、春宮の

あるまいと
別らしいので
大后
天下を従えていらっしゃる様子は
格
大層ご不興の面持で
同じ帝と申し
〔朱雀院を〕
おあなどり申して
東宮でいらっしゃる方には
朧月夜
後宮に
さし上げようと
不都合なこととお思いだったでしょうか
外れた具合になって初めて
尚侍として出仕もしていらっしゃるようですが
おかわいそうなので
お世話申そう
〔朧月夜は〕隠れて自分の気に入った人に

一三 東宮（冷泉院）のご治世に、格別好意を寄せている人だから、それも当然のことでしょう。早く東宮の御代をと待ち望んでいる、帝を軽んじ傾けようとしているという含みのある言葉。

一四 こんなふうに、ご自分（弘徽殿の大后）が、同じ邸にいらっしゃって、隙もないのに。以下「軽め弄ぜらるるにこそは」まで、弘徽殿の心中の思い。「おはす」は、心中描写に、語り手の敬意が混入したもの。

一五 あのように、忍び込んで来られるというのは。「入りものせらる」の「らる」は軽い敬語。

一六（源氏を失脚させる）しかるべき事件を企てるには。

御世、心寄せ異なる人なれば、ことわりになむあめる」と、容赦なくすくすくしうのたまひつづくるに、〔右大臣は〕さすがにいとほしう、聞き苦しくなど聞こえつることぞとおぼさるれば、「さはれ、しばしこのこと漏らしはべらじ。（右大臣）まあたりしたのかと内裏にも奏せさせたまふな。〔朧月夜に〕かくのごと罪はべりとも、〔帝が〕おぼし捨つまじきを頼みにて、〔朧月夜は〕いい気になっているのでしょう〔大后から〕内々に意見あそばしあまえてはべるなるべし。うちうちに制しのたてみても まはむに、聞きはべらずは、その責めは その罪に、ただみづからあたりはべらむ」など、聞こえなほしたまへど、おとりなし申されるけれども ことに御けしきもなほらず。格別ご機嫌もよくならない一四かく一所におはして隙もなきに、つつむとこころなく、遠慮もせず一五さて入りものせらるらむは、ことさらに軽め弄ぜらるるにこそは、軽んじ愚弄なさるのだとおぼしなすに、ますますひどく腹が立ってきていとどいみじうめざましく、機会に一六このついでにさるべきことども構へ出でむに、よきたよりなり、とおぼしめぐらすべし。

花散里

はなちるさと

この巻は、賢木の巻末、源氏二十五歳の夏と同じ頃、季節は、橘の花が咲き郭公の鳴く五月のことである。

弘徽殿方の圧迫が強まる政界の重苦しい空気の中で、源氏は出家を思わぬでもないが、やはり心ひかれる女君のことは忘れられなかった。亡き桐壺院の女御、麗景殿の御妹の三の君もその一人である。

五月雨の晴れ間、女御のお邸に伺おうとして、源氏は、中川のあたりで、昔馴染みの女の家に気づく。折から郭公が鳴き渡り、昔を思い出させるので、惟光に案内を乞わせるが、女は長い途絶えを怨んで、源氏を迎え入れなかった。

目指す女御のお邸は人影も無く、昔を偲ばせる橘の花が薫り、さきほどの郭公がここにも訪れて、故院の思い出にふける主客の懐旧の情をそそった。巻名「花散里」は、この時源氏の詠んだ歌の言葉による。

そのあと、源氏は三の君の部屋を訪れるが、この人との対面の場は、その容姿や性格とともに何も描かれていない。しかし、背景や環境から、しめやかにゆかしい人柄が浮び上がってくる。次の須磨の巻で、すでに「花散里」とこの女君を呼んでいるから、巻名は作者によって早くに付けられていたのであろう。賢木の後半から須磨の巻にかけて、政治的事件が続けて話題になるのを避けるべく加えられた、優艶な掌篇である。

一 人知れず、ご自分から求めて物思いに悩むことは。藤壺や朧月夜などへの恋の悩み。

二 このように、世間一体の様子につけても。賢木後半以来の、政界の険悪な状況をいう。「おほかたの」は、恋の悩みが、個人的なものであるのに対していう。「かく」は、「おほかたの」以下「まされば」まで、全文に掛る。

三 麗景殿の女御と申し上げたお方は。桐壺帝の女御。「麗景殿」は、宮中の殿舎の名。后妃に賜る御殿（図録五参照）。

四 源氏が、宮中でほんの時たま短い逢瀬を重ねられた、そのあとが続いていて。「ほのめく」は、ここでは、ちょっと逢うこと。

五 いつものお心癖なので。一度逢った女は忘れないという源氏の性質。（後出一九五頁参照）

六 さりとて、表立ったお通い所としてのお扱いもなさらないので。

七 この頃、ご自分（源氏）も、何事につけても物思いに心を悩ませていらっしゃる、そうした人生の哀しみをそそるものの一つとしては。「くさはひ」は、物事の種。材料。

花散里

源氏、麗景殿の女御を訪う

一人知れぬ御心づからのもの思はしさは、いつと限らぬことのようだが なきことなめれど、

二かくおほかたの世につけてさへ、困ったことになったとお心を遣われることばかり わづらはしうおぼし乱るることの

ふえてゆくので みまされば、もの心細く、世の中なべてすべていとはしうおぼしならるる

そうもいかないことも多いのだった に、さすがなること多かり。

三麗景殿と聞こえしは、皇子や皇女も 宮たちもおはせず、桐壺院 院かくれさせたまひて

おさびしいお暮しなのを のち、いよいよあはれなる御ありさまを、ただこの大将殿源氏の御心お心づかに

いに庇護されて もて隠されて、過ぐしたまふなるべし。御お妹の花散里おとうとの三の君、内裏

わたりにてはかなうほのめきたまひし名残の、例の御心なれば、さ

すがに忘れも果てたまはず、わざともてなしたまはぬに、人の御

〔花散里を〕 思いの限りを尽していらっしゃるらしいのだが 心をのみ尽くし果てたまふべかめるをも、このころ残ることなくお

女君は物 ぼし乱るる世のあはれのくさはひには、思ひ出でたまふには、忍び抑えき

一 京極川の二条以北をいう（『河海抄』）。（一巻帚木八一頁注一三参照）

二 よい音色の琴（和琴）を、東の調べという調子に調絃して。「東の調べ」については明らかでない。和琴は図録八参照。

三 調絃してから、調子を整えるために弾く短い曲。各調子に一つずつある。

四 吹き過ぎる風が伝える匂い。

五 賀茂の祭に、冠などに葵と桂の葉を付けることからの連想。

六 あれからずいぶん時がたったから、覚えているだろうかと。「おぼめかし」は、はっきりしないこと。

七 行き過ぎにくそうにためらっていらっしゃる、ちょうどその時に。「夜や暗き道やまどへる郭公わが宿をしも過ぎがてに鳴く」（『古今集』巻三夏、寛平御時后宮の歌合の歌　紀友則）による。

八（この家を訪れよと）お勧め申すかのようなので。郭公が里に出て鳴くのを、人々の家を訪れると見なして、よく歌に詠まれた。

九 例によって。恋路の案内役は惟光の役目である。夕顔一三六頁など参照。

一〇 昔に立ち戻り、郭公（私）が胸の思いを忍びかねて鳴いています、昔ちょっと訪れた（お逢いした）家の垣根のところで。「をちかへる」は、はじめに返る意。惟光にこの歌を詠み上げさせたのである。

途中で、源氏、中川の女と歌を詠み交わす

がたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間にわたりたまふ。（梅雨の空　雲の絶え間に）

何ばかりの御よそひなく、うちやつして、御前などもなく、忍びて、中川のほどおはし過ぎるに、ささやかなる家の、木立などよしばめるに、よく鳴る琴を、あづまに調べて、掻きあはせ、にぎはは（お身支度もなさらず　目立たぬようにして　先払い　風情ありげなのに　にぎやかにひいているのが聞える）しく弾きなすなり。御耳とまりて、門近なる所なれば、すこしさし出でて見入れたまへば、大きなる桂の木の追ひ風に、祭のころおぼし出でられて、そこはかとなくけはひをかしきを、ただ一目見たまひし宿りなりと見たまふ。ただならず、ほど経にける、おぼめかしくやと、つつましけれど、過ぎがてにやすらひたまふをりしも、郭公鳴きてわたる。もよほしきこえ顔なれば、御車おし返させて、例の、惟光入れたまふ。（〔源氏は〕　〔門内を〕　建物　〔車から〕　女の家だとお気づきになる　お気持が動いて　気がひけるけれども　一度通われた　西の角の部屋に女房たちがいる　以前にも聞いたことのある）

（源氏）一〇 をちかへりえぞ忍ばれぬ郭公

ほのかたらひし宿の垣根に

寝殿とおぼしき屋の、西のつまに人々ゐたり。さきざきも聞きし

一一 惟光は、咳ばらいをして、相手の意を窺ってから、源氏のお言伝をお伝えする。

一二（どなたからかしらと）いぶかしがっているようである。

一三 郭公の訪れて鳴く声は、確かに昔のあの声ですが、五月雨の空が曇っているので、どうもはっきり分りません。源氏の君とはお見受けしますが、今頃どういうつもりでお越しになったのでしょうか。

一四 よろしい、家を間違えたのかもしれない。「植ゑし垣根も」は、垣根も見分けられない、の意。『紫明抄』『河海抄』は、「花散りし庭の木の葉も茂りあひて植ゑし垣根も見どそわかれね」をあげる。

一五 いかにも、このように気を遣わねばならぬことだろう、無理もないと思われるので、源氏も、さすがにそれ以上は押せないのだった。あまり長い途絶えなので、女が別の男を通わせていることも十分考えられるからである。

一六 これくらいの身分の女では。

一七 父兄が筑紫（九州）の地方官で、五節の舞姫に選ばれたことのある娘なので、こう呼ぶ。前に源氏の恋人だった女。ここにはじめて名が見えるが、後の須磨の巻で、大宰の大弐の娘であると分る（二四一頁参照）。

源氏、まず、麗景殿の女御のもとで、昔語りをする

声なのでなれば、声づくりけしきとりて、御消息聞こゆ。若々しい女房たちの気配がしてきどもして、おぼめくなるべし。

（女）郭公ととふ声はそれなれど

あなおぼつかな五月雨の空

わざと分らぬふりをすると見たので（惟光）ことさらたどると見れば、「よしよし、植ゑし垣根も」とて出づるを、［女は］内心では人知れぬ心には、怨めしくも心残りにもねたうもあはれにも思ひけり。さもつつむべきことぞかし、ことわりにもあれば、さすがなり。かやうの際に、筑紫の五節が、かわいい女だったなとらうたげなりしはやと、まづおぼし出づ。いかなるしてもにつけても、御心の暇なく苦しげなり。年月を経ても、なほかやうに、昔の女のことをお忘れにならないので見しあたり、情過ぐしたまはぬにしも、どんな女に対なかなかあまたの人の種になるのであるもの思ひぐさなり。

かの本意の所は、目的の所は想像しておられた通りおぼしやりつるもしるく、人目なく、静かにて麗景殿のお部屋でおはするありさまを見たまふも、胸に迫るものがあるいとあはれなり。まづ女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜ふけにけり。［五月の］二十日の月

桐壺院在世中の

人影もなく

かえって多くの女たちの物思いの

一　さきほど、中川の女の家のあたりで鳴いていた同じ鳥であろうか。「過ぎがてにやらひたまふをりしも、郭公鳴きてわたる」（一九四頁）とあったのを受ける。「垣根」は、惟光が「植ゑし垣根も」（一九五頁）と言ったことによる。

二　自分のあとを追って来たのだなとお思いになるのも、優艶な感じである。前にも、「もよほしきこえ顔なれば」（一九四頁）というように、郭公を擬人化して考えるのは、『万葉集』以来の文学的伝統である。

三　「いにしへのこと語らへば郭公いかに知りてか古声のする」――昔の思い出を話し合っていると、郭公がどうしてそれを知ってやって来たのか、昔ながらの鳴き声がする（『古今六帖』五、物語。『兼輔集』）。

四　昔を思い出させる橘の香を懐かしんで、郭公は、橘の花の散るこのお邸を探してやって来ました。「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』巻三夏、読人しらず）、「橘の花散里の郭公片恋しつつ鳴く日しぞ多き」（『古今六帖』六、時鳥。大伴大納言。『万葉集』巻八）の二首の歌による。昔のことを語り合うことのできるお方と思って、こちらにお伺いしたのです、の意。

五　故院ご在世中のことを、思い出しては話し合える人も少なくなってゆきますので。「かきくづす」は、ぽつりぽつりと話し出すこと。

さし出づるほどに、いとど木高きかげども木暗く見えわたりて、近き橘の薫りなつかしくにほひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、あくまで用意あり、あてにらうたげなり。すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、むつましうなつかしきかたにはおぼしたりしものを、など思ひ出できこえたまふにつけても、昔のことかきつらねおぼされて、うち泣きたまふ。

（奥ゆかしく　気高く愛らしげでいらっしゃる　特に目立つようなご寵愛はなかったけれども　〔桐壺院が〕親しみやすくやさしいお相手だとは　〔源氏は〕）

郭公、一ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。二したひ来にけるよとおぼさるるほども、艶なりかし。三「いかに知りてか」など、忍びやかにうち誦じたまふ。

（源氏）「橘の四香をなつかしみ郭公

花散里をたづねてぞとふ

（お年を召していられるが　やはりこちらにお伺いすべきでございました　〔人は〕時勢に従うものですから　昔のことを忘れられない心を慰めるには　〔すると〕この上なく悲しみの紛れることも　また増すこともあるでございました）

いにしへの忘れがたきなぐさめには、なほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそ、まぎるることも、数添ふこともはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、五昔語もかきくづすべき人すくなうなりゆ

六 まして私以上に、あなたさまは所在なさを紛らすすべもなくお思いでしょう。

七 源氏にはひとしおしみじみと感じられるのだった。

八 訪れる人もなく、荒れてしまった住居では、昔を偲ばせる橘の花が、軒端に咲いて、あなたをお招きするよすがになったのでした。「つま」に、端の意と手がかりの意とを掛ける。

九 やはりほかの女とは違ってすぐれていらっしゃる方だと、つい比較されるのであった。

源氏、花散里と語らう

一〇 寝殿の西面（西側の部屋）。花散里のいる所。

一一 たまのご来訪であるのに加えて。

一二 かりそめにも源氏が関係を持たれた女君はみな、並々の身分ではなく。

一三（仲違いといった）いやなこともなく。

一四 お互いにやさしくし合って。

〔女御に〕と聞こえたまくを、まして、つれづれもまぎれなくおぼさるらむ」と聞こえたまふに、いとさらなる世なれど、ものをいとあはれにおぼし続けたる御けしきの浅からぬも、人の御さまからにや、多くあはれぞ添ひにける。

（麗景殿）人目なく荒れたる宿は橘の
花こそ軒のつまとなりけれ

とばかりのたまへる、さはいへど人にはいと異なりけりと、おぼしくらべらる。

西面には、わざとなく忍びやかにうちふるまひたまひてのぞきたまへるも、めづらしきに添へて、世に目なれぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし。何やかやと、例の、なつかしくかたらひたまふも、おぼさぬことにあらざるべし。かりにも見たまふ限りは、おしなべての際にはあらず、さまざまにつけて、いふかひなしとおぼさるるはなければにや、憎げなく、われも人も情をかはしつつ過ぐしたま

ふなりけり。[一]それをあいなしと思ふ人は、とにかくに変るも、[二]ことわりの世のさがと思ひなしたまふ。ありつる垣根も、[三]さやうにて、
さきほどの中川の女も
心変りしてしまった人なのだった
ありさま変りたるあたりなりけり。

一　そうした仲を気に入らない、つまらないと思う人は、何やかやと心変りしてゆくのも。

二　無理もない、世の中にありがちなことと（源氏は）達観していられる。

三　そんなわけで。大勢の恋人の一人として、嫉妬もせずに過すのは、つまらぬことだと思って、の意。

須す

磨ま

政界の情勢が日増しに不利になってゆくなかで、何よりも東宮に累の及ぶことを恐れる源氏は、決定的な打撃を受ける前に、みずから退き、政敵の鉾先をかわそうと考えた。すでに官位を剝奪され、流罪の決定が迫っていたからである。隠退の地は須磨と定めた。巻名はこれに由来する。

三月二十日過ぎ、源氏は京を去る。その前に、左大臣邸、花散里、藤壺の宮、亡き桐壺院の御陵と、別れを告げに訪れ、朧月夜とは無理をして文を交わす。特に、紫の上の悲しみは深く、彼女と別れを惜しむ場面は繰返し書かれている。このくだりは、人々と交わした、いわゆる離別の歌を中心に構成されている。

須磨の謫居は、在原行平、菅公、白楽天、屈原、周公旦等、無実の罪に沈む政治家の面影を彷彿させるとともに、故郷の女君を恋う主人公を、紫の上、藤壺、朧月夜、六条の御息所たちと交わす歌によって描き出した。秋、冬と、源氏は侘しい生活に耐えて過す。都では、朧月夜が参内を許されたが、源氏への執着を捨て切れず、弘徽殿の大后はなお厳しく源氏を非難した。大弐は上京の途次、源氏を見舞い、娘の五節は改めて思慕の情に思い乱れた。明石の入道は源氏の噂を聞き、娘をさし上げたいと願っている。

年明けて春、宰相の中将が須磨を訪れ、遠来の友とゆかしい交歓があった。三月上巳の日、海辺で禊をしていると、急に暴風雨になり、妖しい夢の告げがあって、源氏はこの地を去りたく思うようになった。

一　世間の情勢が大層やっかいなことになり、（源氏にとって）具合の悪いことばかりが増えてゆくので。後文にあるように官位を剝奪され、流罪の決定が出されようとする形勢をさす（二〇五頁参照）。

源氏、須磨退居を決意する

二　これ以上にひどい目に遭うかもしれないと。流罪に処せられることを恐れる。

三　あの噂に聞く須磨は。「須磨」は、今の神戸市須磨区の海岸。在原行平が須磨に侘住いした時に詠んだ歌「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩垂れつつわぶと答へよ」（『古今集』巻十八雑下）などを念頭に置いた表現（後出二二六頁参照）。

四　昔こそ、身分ある人の別荘などもあったが。行平がここに住んだことなどをさす。

五　世間との交渉のわずらわしい住居は。「ひたたく」は、みだりがわしい、しまりがないなどの意。

六　本心にかなわぬことであろう。

七　都のことが気がかりでならないであろうことを。「故里」は、昔住んでいた所。

八　別れても、めぐりめぐって再び会うことが必ずあるとお思いの場合でも。「下の帯の道はかたがた別るとも行きめぐりても逢はむとぞ思ふ」（『古今集』巻八離別、紀友則）の言葉を用いる。

一　世の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、せめて（無理にそしらぬ顔で過していても）知らず顔にあり経ても、二　これよりまさることもやと（源氏は）おぼしなりぬ。三　かの須磨は、四　昔こそ人の住処などもありけれ、今は、いと里離れ心（ものさびしくて）すごくて、海士の家だにまれに、など聞きたまへど、（源氏は）人しげく、五　ひたたけたらむ住ひは、いと本意なかるべし、六　さりとて都を遠ざからむも、七　故里おぼつかなかるべきを、（人目に具合が悪いほど）人わるくぞおぼし乱るる。

よろづのこと、来し方行く末思ひ続けたまふに、（源氏が）悲しきことといとさまざまなり。憂きものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむことをおぼすには、いと捨てがたきこと多かるなかにも、（紫の上）姫君の、明け暮れ日が経つにつれて一層明け暮れにそへては思ひ嘆きたまへるさまの、心苦しうあはれなるを、八　行きめぐりてもまた逢ひ見むことをかならずとおぼさむにてだ

に、なほ一二日のほど、〔紫上と〕よそよそに明かし暮らすをりをりだに、おぼつかなきものにおぼえ、女君も心細うのみ思ひたまへるを、幾年そのほどと限りある道にもあらず、逢ふを限りに隔たりゆかむも、無常の世だから定めなき世に、やがて別るべき門出にもやと、〔源氏は〕大層悲しく思われなさるので、こっそり一緒に連れて行こうかと思われ紫の上へば、忍びてもろともにもやとおぼし寄るをりあれど、さる心細からむ海づらの、波風よりほかに立ちまじる人もなからむに、訪れる人もなさそうな所に海辺かくらうたき御さまにて引き具したまへらむもいとつきなく、わが心にも、らしいご様子でいられる方をお連れなさるのも不似合いでなかなか、もの思ひのつまなるべきを、などおぼし返すを、女君は、どんなにつらい旅路でも「いみじからむ道にも、ご一緒申し上げるのでさえあれば おくれきこえずだにあらば」とおもむけて、うらめしげにおぼいたり。

かの花散里にも、〔源氏が〕おはし通ふことこそまれなれ、心細くあはれなる御ありさまを、この御蔭に隠れてものしたまへば、源氏過していらっしゃるのでおぼし嘆きたるさまも、いとことわりなり。なほざりにても、おたわぶれ程度でもほんのわずかお逢い申しほのかに見たてまつり通ひたまひし所々、そっと物思いに心を乱される女君たちが多いのだった人知れぬ心をくだきたまふ人ぞ多かりける。

一 何年間どれくらいの間と期限のある旅路というわけでもなく。『獄令』に、流罪の人は六年または三年後復任を許されるとある。源氏は今、自ら進んで退居するのでその期限を切ることができないのである。

二 また逢う時までと、あてもなく旅立って行くのも。「わが恋は行方も知らず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」（『古今集』巻十二恋二、凡河内躬恒）による。

三 このまま永別せねばならぬ旅立ちにでもなりはしないかと。

四 （いたわしいと）思い悩む種になるに違いないなどと思い返されるのを。

五 それとなくほのめかして。「おもむく」（下二段）は、同意を求めてほのめかす意。

六 あの花散里に住む女君にも。花散里の巻で「橘の香をなつかしみ郭公花散里をたづねてぞとふ」と源氏が詠んだ麗景殿の女御の邸に住む、女御の妹三の君をさす（花散里一九六頁参照）。

七 ご自身にとって用心しなくてはとお思いになるものの。

八 昔、このように藤壺もまた自分のことを思って下さり。

九 いかにもあれやこれやと、ただもう物思いの限りを尽さなければならないあの方との宿縁だったのだなと。「人の御契り」で一続きの語。「さまざまに」とは、これまで藤壺との恋で味わった嘆きと、今せっかくやさしくして下さっても、もうどうにもならぬ嘆きとをさす。

一〇 光源氏を書くに当り、作者が念頭に置いた歴史上の人物源高明（醍醐天皇皇子）が大宰権帥に左遷されたのは安和二年三月二十六日である（『花鳥余情』）。

一一 相手の女にせつないほどの思い出が残るようにと、言葉を尽してお書きになったお手紙は。

一二 その当座、気持が動転していたために、はっきりと聞いておかぬままになってしまった。主人公の身辺の事件を実際に見聞きした女房の話を筆録したものという建て前による草子地。

一三 致仕の大臣の邸。前年春辞職した左大臣の邸。辞職のことは賢木一七九頁に見えた。

一四 大臣、納言、大将の略式用の車。（葵六九頁注二〇参照）

一五 女の乗っている車をよそおって。下簾を垂らす。

一六 もとの源氏夫妻の部屋。

源氏、致仕の大臣の邸に暇乞いに行く

藤壺

入道の宮よりも、世間の噂はまたどんなふうに言い立てるであろうかと（セ）ものの聞こえやまたいかがとりなさむと、わが御ためつつましけれど、忍びつつ御とぶらひ（お見舞）常にあり。昔かやうに（八）あひおぼし、あはれをも見せたまはましかばと、うち思ひいでたまふに、（うれしいお気持をもお見せ下さったならばと）さもさまざまに（九）、心をのみ尽くすべかりける人の御契りかなと、つらく思ひきこえたまふ。

三月二十日（一〇）あまりのほどになむ、都離れたまひける。人に今としも知らせたまはず、ただいと近うつかうまつり馴れたる（なじんだ）限り、七八人ばかり御供にて、いとかすかに（ひっそりと）出で立ちたまふ。さるべき所々（女君たち）に、御文ばかり、（そっとさし上げなさったが）うち忍びたまひしにも、あはれと（一一）忍ばるばかり尽くいたまへるは、（きっとすばらしいお書きぶりであっただろうが）見どころもありぬべかりしかど、（一二）そのをりのここちのまぎれに、はかばかしうも聞き置かずなりにけり。

二三日かねて（以前に）、夜に隠れて大殿（一三）にわたりたまへり。網代車（一四）のうち（粗末なのに乗って）やつれたるにて、女車（一五）のやうにて隠ろへ入りたまふも、いとあはれに、夢とのみ見ゆ。御方（一六）、いとさびしげにうち荒れたるここちして、

一 夕霧の御乳母たちや。その一人は宰相の君といって、葵一〇二頁に出、次の二〇七頁にも見える。夕霧はこの時数え年五歳。

二 （自分の部屋から）お前に寄って参って。

三 わが身の病が重いという理由で、朝廷にも出仕せず、官職まで辞退申し上げましたのに。「位」は、ここでは官職の意に用いている。

四 私事には勝手な振舞をしてと。

五 ゆとりのない世の中が。弘徽殿の大后らが、折あらば源氏方の落度を捜し出し、咎め立てようとしていることをさす。「いちはやし」は、きびしく恐ろしい意。

六 長生きはいとわしく存ぜられます末世でございますね。「寿則辱多し」（『荘子』外篇「天地」）による。「世の末」は、道徳風俗が乱れた時代の意。

七 天地を逆さまにしても、こんなことになろうとは、存じもよりませんでした今のご様子を拝見いたしますと。

一若君の御乳母ども、昔さぶらひし人のなかにまかで散らぬ限り、〔葵上に〕仕えていた女房の中でお暇を取らずにいる者は皆〔源氏が〕くわたりたまへるをめづらしがりきこえて、〔源氏を〕まうのぼりつどひて見たてまつるにつけても、ことにもの深からぬ若き人々さへ、大してわきまえがあるわけでもない若い女房たちまで世の常なさ思ひ知られて、涙にくれたり。若君はいとうつくしうて、〔源氏〕ざれ走りおはしたり。「久しきほどに忘れぬこそあはれなれ」〔私を〕とて、〔涙を〕膝にすゑたまへる御けしき、恐びがたげなり。

大臣こなたにわたりたまひて、〔大臣〕ご用もなくお引き籠りなされている折にと存しておりましたが対面したまへり。「つれづれに籠らせたまへらむほど、何とはべらぬ昔物語も、参り来て聞こえさせむと思うたまふれど、身の病重きにより、朝廷にもつかうまつらず、位をも返したてまつりてはべるに、私ざまには腰のべてなむと、もの聞こえひがひがしかるべきを、今は世の中憚るべき身にもはべらねど、いちはやき世のいと恐ろしうはべるなり。かかる御ことを見たまふるにつけて、命長きは心憂く思うたまへらるる世の末にもはべるかな。天の下をさかさまになしても、思うたまへ寄らざりし

なんということもない昔話でも参上してお話し申し上げようと存じましたが

〔退官して〕

世間の評判も悪く取り沙汰されそうですので

このようなあなたのご非運を拝見するにつけても

八 これと言った理由で私のように官位を剝奪されるというのではなく。「さして」は、特定して、の意。

九 朝廷のお咎めにより、謹慎している者が。「かしこまり」は、過失について恐れ慎むこと。

一〇 罪の重いことと異国でもしているということですが。「人の国」は、中国をさす。「なる」は、伝聞の助動詞。

一一 遠流に処すべきだという会議の決定などもあると聞きますのは。「定め」は、公卿会議での決定。律に規定された流罪に、遠流、中流、近流の三等があり、遠流は伊豆、安房、常陸、佐渡、隠岐、土佐に流される。

一二 今以上の大きな辱めを受けぬさきに。実際に流罪の刑を執行されることをいう。

一三 院が、源氏の将来についてお考えになりおっしゃったご意向などを。朱雀院を輔佐し、東宮の後見をするようにとの院の遺言については、賢木一三九頁に見える。

一四 若君（夕霧）が、無心に人々の間をあちこちなさって。「まぎる」は、人々の間に混じること。

一五 あれこれの人にまつわりついておられるのを。「馴れきこえ」とあるのは、その人々の中に大臣や源氏も含まれるからである。

御ありさまを見たまふれば、（万事がまことにおもしろくございません）よろづいとあぢきなくなむ」と聞こえたまひて、（涙にくれていらっしゃる）いたうしほたれたまふ。

（源氏）「とあることもかかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、（詮じつめれば）言ひもてゆけば、（私の至らなさゆえでございます）ただみづからのおこたりになむはべる。さしてかく官爵を取られず、（たいしたことのない咎にかかわった場合でも）あさはかなることにかかづらひてだに、（いつもと変らぬさまで）公のかしこまりなる人の、うつしざまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに人の国にもしはべるなるを、遠く放ちつかはすべき定めなども（容易ならぬ罪科に当ることになっているのでしょう）はべるなるは、さま異なる罪に当るべきにこそはべるなれ。濁りな（良心に恥じないままに）き心にまかせてつれなく過ぐしはべらむもいと憚り多く、（そ知らぬ顔で日を送りますのも）これより大きなる恥にのぞまぬさきに世をのがれなむと思うたまへ立ちぬ（都の生活から身を引こうと思う気持になりました）る」など、こまやかに聞こえたまふ。

（大臣は）昔の御物語、（故桐壺院）院の御こと、おぼしのたまはせし御心ばへなど聞こえ出でたまひて、御直衣の袖もえ引き放ちたまはぬに、（お目から）お離しになれないのに）君も、（源氏）え心（気丈に）強くももてなしたまはず。（涙を見せずにはいらっしゃれない）若君の何心なくまぎれありきて、これか

一 亡くなりました人を。葵の上をさす。

二 こんな、夢かと思うばかりの（信じられないような）ご不運を、見ないですんだことだと。

三 父君であるあなたに、お馴染み申し上げぬ月日がお重なりになるであろうかと存じますのが。「年月」と言わぬところ、配慮がある。

四 昔の人も、必ずしも本当に犯した罪があってこうした罪科に処せられるというわけでもありませんでした。讒言（ざんげん）による無実の罪の人もいたのだ、の意。

五 やはり前世からの宿業で、異国の朝廷でも、このような事件はたくさんございました。当時の政治家は常に中国の例を併（あわ）せ考える。「かかるたぐひ」は、罪なくして罰せられること。

六 けれども、それは、誰かがそれらしい疑いを言い出すということがあって、はじめてそうした事件も起るのでした。謀反の嫌疑などは、誰かの讒言によるものだが、源氏の場合は、そういうこともない無実の罪だという、政道への批判。

七 葵の上の兄。もとの頭の中将。葵一〇〇頁に、三位として初出。

八 ほかの女房より格別に源氏がひそかに情けをかけていられる中納言の君が。中納言の君は、葵の上づきの女房（葵一〇四頁参照）。

れに馴れきこえたまふを、〔源氏は〕いみじとおぼいたり。「過ぎはべりにし人を、世に思うたまへ忘るる世なくのみ、今に悲しびはべるを、この（まことに念頭から去る時とてなく）たびの出来事に（在世中でございましたなら）の御ことになむ、もしはべる世ならましかば、〔葵上が〕いかやうに思ひ嘆きはべらまし、よくぞ短くて（短命で）、かかる夢を見ずなりにけると、思うたまへなぐさめはべる。幼くものしたまふが、（お小さくていられる若君が）かく齢過ぎぬるなかに（こんな年寄りたちの中に残られて）とまりたまひて、なづさひきこえぬ月日や隔たりたまはむと思ひたまふるをなむ、よろづのことよりも悲しうはべる。いにしへの人も、まことに犯しあるにてしも、かかることにあたらざりけり。なほさるべきにて、人の朝廷にもかかるたぐひ多うはべりけり。されど、言ひ出づる節ありてこそ、さることもはべりけれ。とざまかうざまに、（思い当る節とてないことでございます）思ひたまへ寄らむかたなくなむ」など、多くの御物語聞こえたまふ。三位の中将も参りあひたまひて、大御酒など参りたまふに、夜ふけぬれば、〔源氏は〕とまりたまひて、人々（女房を）御前にさぶらはせたまひて、物語などせさせたまふ。人よりはこよなう忍びおぼす中納言の君、

九　とても言葉に尽せず、心中深く悲しんでいる様子を。「言へばえに」は、口に出して言おうとしても言えないでの意。「言へばえに言はねば胸に騒がれて心ひとつに嘆くころかな」（『伊勢物語』三十四段）による。

一〇　陰暦二十日以後の月。源氏の出発は「三月二十日あまり」（一〇三頁）で、その「二三日かねて」致仕の大臣の邸に暇乞いに来ている。

一一　わずかに萌え出た若葉の木蔭が、月光に白く照り映える庭に、うっすらと一面霧にけぶっているのが、どこということなく一様に霞に紛れて。庭は白砂を敷くので、月光に光る。

一二　秋の夜の風情より一段とたちまさって見える。春と秋といずれがすぐれているかとする春秋優劣の論は、『拾遺集』巻九雑下の巻頭の三首などに見えるように、当時の歌の一つの主題であった。

一三　建物の隅の簀子の高欄。妻戸に近い。次に「妻戸おしあけて」とある。

一四　大層暗いうちに、お帰りあそばすご様子なのも、ただもう、以前とは違った感じがいたしまして。源氏が、世間を憚って、人目に立たぬうちに辞去しようとしているのを悲しむ。

言へばえに悲しう思へるさまを、人知れずあはれとおぼす。人皆し（寝静）づまりぬるに、とりわきてかたらひたまふ。（まった頃）これによりとまりたまへるなるべし。（睦言をお交わしになる）

明けぬれば、（暗いうちにお帰りになるのに）夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭の、いと白き庭に薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれにおほくたちまされり。隅の高欄におしかかりて、（この人がお目あてで）〔源氏は〕しばらくとばかりながめたまふ。中納言の君、（お見送り申そうというのであろうか）見たてまつり送らむとにや、妻戸おしあけてゐたり。（控えている）

（源氏）「また対面あらむことこそ、思へばいと難けれ。（こんな別れがある仲だとは）かかりける世を知（気づかず）らで、（何の不安もなく逢えたはずの月日を）心やすくもありぬべかりし月ごろを、（いかにも漫然と送ってきたことだ）さしも急がで隔てしよ」などのたまへば、（〔中納言の君は〕）ものも聞こえず泣く。

若君の御乳母の宰相の君して、（大宮）宮の御前より御消息聞こえたまへり。（夕霧）「（大宮）（自身でご挨拶申し上げたいのですが）みづからも聞こえまほしきを、（あと先も分らず悲しみにくれた気持を静めて）かきくらす乱りごちためらひはべるほどに、（おりますうちに）いと夜深う出でさせたまふなるも、さまかはりた

一 かわいそうな人が、ぐっすり寝入っています時ですのに、しばらくもお待ち下さいませんで。「心苦しき人」は、夕霧のこと。母亡く、今父にも生別しようとするので、こういう。

二 鳥部山で亡き妻を葬った、あの時の煙に似ていはしないかと、海士の塩焼く須磨の浦を見に行くのです（塩焼く煙に妻を偲びに須磨へ行くのです）。大宮の心中を思いやった歌。「浦見」に「恨み」を掛ける。「鳥部山」は、鳥部野近辺の山。鳥部野で葬の上の葬送を行い、源氏は「のぼりぬる煙はそれとわかねどもなべて雲居のあはれなるかな」と詠んだ（葵九四頁参照）。

三 夜明け方の別れとは、ただもうこのように物思いを尽すものだろうか。恋人との別れのつらさに比べて、親子の別離の悲しみはまた格別である、の意。

四 申し上げたいことも、胸の中には篤とございますものの。以下、宰相の君を通じての大宮への返事。

五 （末練が出て）かえって、つらい都を逃れにくく思われそうでございますので。

六 西の山の端に傾きかけた月。有明の月は、明け方近くなっても空にかかっている。

るここちのみしはべるかな。[一]心苦しき人のいぎたなきほどは、しばしもやすらはせたまはで」と聞こえたまへれば、[源氏は]うち泣きたまひて、

鳥部山もえしけぶりもまがふやと
海士の塩焼く浦見にぞ行く

[源氏]三

御返りともなくうち誦じたまひて、「暁の別れは、かうのみや心尽くしなる。思ひ知りたまへる人もあらむかし」とのたまへば、[宰相]「いつとなく、別れといふ文字こそうたてはべるなるなかにも、今朝はなほたぐひあるまじう思うたまへらるるほどかな」と、鼻声にて、げに浅からず思へり。[源氏]四「聞こえさせまほしきことも、かへすがへす思うたまへながら、ただに結ぼほれはべるほどおしはからせたまへ。いぎたなき人は、見たまへむにつけても、[五]なかなか、憂き世のがれがたう思うたまへられぬべければ、心強う思うたまへなして、急ぎまかではべり」と聞こえたまふ。

[大臣邸を]女房たちは出でたまふほどを、人々のぞきて見たてまつる。[六]入りかたの月い

分っていて下さる方もありましょうね
言葉はつらいものといたしますなかにも
やはり比べるものもなく思われることでございます
とても悲しそうな様子だ
ただもう悲しみに心もとざされております気持をお察し下さいませ
もう一度顔を見るにつけましても
気を強く取り直しまして

七「虎狼」は、非情の猛獣の最たるもの。

八 まして、源氏が幼くていらっしゃった頃から、お馴染み申し上げてきた人々なので。源氏が左大臣家に婿入りしてきたのは元服した十二歳の年であった（一巻桐壺三六頁以下参照）。

九 そう言えば。話の筋をもとに戻した時の発語。草子地。

一〇 あなた（源氏）が都を離れて須磨に行かれたならば、亡き娘との別れは、いよいよ遠くになってしまうことでしょう、同じ煙とは申せ、娘が煙となって上っていった都の空ではございませんもの。

一一 この歌にこもる大宮の悲しみもあわせて、ただもう胸に迫ることばかりで。

源氏、二条の院に帰り、その閑散とした様に胸を衝かれる

一二 言葉もないほど、源氏の身の上の変りようを、悲しんでいる様子である。

一三 侍所。おつきの家来たちの詰所。（図録一四参照）

一四 妻や親兄弟と別れを交わしている頃か。「私の」は、私的な、個人的なの意。

一五 面倒なことが多くなるので。右大臣一派を憚らねばならぬ情勢が強まっていることをいう。

と明きに、〔源氏が〕優雅で悲しみに沈んでおられる様子は お美しく ものをおぼいたるさま、虎狼だに泣きぬべし。ましていはけなくおはせしほどより見たてまつりそめてし人々なれば、今までとはうって変ったご境遇を堪えがたく悲しいと たとしへなき御ありさまをいみじと思ふ。まことや、〔大宮の〕御返り、

なき人の別れやいとど隔たらむ
煙となりし雲居ならでは

取り添へてあはれのみ尽きせず、〔源氏が〕出でたまひぬる名残、不吉なまでに ゆゆしきまで泣きあへり。

〔女房たちは〕二条の院殿におはしたれば、東の対 わが御方の人々も、女房たち まどろまぎりけるけしきにて、所々に群れゐて、あさましとのみ世を思へるけしきなり。侍には、親しうつかうまつる限りは、御供に参るべき心まうけして、私の別れ惜しむほどにや、人目もなし。人の姿もない さらぬ人は、そのほかの人 とぶらひ参るも重き咎めあり、〔源氏邸に〕わづらはしきことまされば、所狭くつどひし馬車のかたもなくさびしきに、影かたち 世は憂きものなりけりとおぼし知らる。〔源氏は〕心づもりをして

一 食器（盤）を載せる長方形の台。侍所に置かれる。
二 （板の間に敷いた）畳を、所々上げて、裏返してある。当時の住居は、畳を全部敷き詰めず、坐る場所にだけ置いた。
三 紫の上の御殿。

源氏、紫の上と別れを惜しむ

四 夜、主人の側に侍する時の服装。
五 そんな些細なことにまで（いつもなら気にもならぬことにまで）、お目がとまってならないのであった。
六 昨夜は、これこれの事情で遅くなりましたので（泊りました）。以下、源氏の弁解。
七 いつものように、心外なふうに邪推なさったのではありませんか。ほかの女性と夜を過したとでも思いましたか、の意。紫の上を悲しませぬための言いつくろいである。
八 お側を離れずにいたいと思いますが。「目かる」は、「目離る」で、その人に会わないでいること。
九 そっけなくほっておくわけにもいかないのです。せめて暇乞いにでも行かねばならない、の意。「ひたやごもり」は、「直屋籠り」で、無愛想、そっけないというほどの意に使われる。
一〇 無常の世（いつ死ぬか分らぬ人の世）ですのに、人から冷たい人間だと、疎まれたきりになりましょうかと。
一一 ご無理もないことだ。草子地の文。
一二 紫の上の父、兵部卿の宮。

台盤（半ばは）などもかたへは塵ばみて、畳（自分が）いる間で、所々引き返したり。見るほど（さえこんな有様だ）だにかかり、ましていかに荒れゆかむとおぼす。（源氏は）

西の対にわたりたまへれば、（紫上は）御格子も参らでながめ明かしたまひければ、簀子などに、若き童女、所々に臥して、今ぞ起き騒ぐ。宿直姿どもをかしうてゐるを見たまふにも、（かわいい様子でいるのを）心細う、年月経ば、かかる人々も、（辛抱しきれないで）えしもあり果てでや行き散らむ、など、さしもあるまじきことさへ御目のみとまりけり。（源氏）「昨夜はしかしかして夜ふけにしかばなむ。例の思はずなるさまにやおぼしなしつる。かくてはべる（問だけでも）ほどだに御目かれずと思ふを、かく世を離るる際には、心苦しきことのおのづから多かりけるを、ひたやごもりにてやは。常なき世に、人にも情なきものと心おかれ果てむと、いとほしうてなむ」と聞こえたまへば、（紫上）「かかる世を見るよりほかに、思はずなることは、何ごとにか」とばかりのたまひて、いみじとおぼし入れたるさま、人より異なるを、ことわりぞかし、父親王は、いとおろかにもとより

（おお下ろしせずに）（こうして都にいます）（心にかかることが）（心外なことは）（気の毒に思われまして）（大層悲しいと思いつめていらっしゃるご様子が）（ひどく冷淡にもともと）（紫上のこ）

一三 突然廻り合せた幸運の気ぜわしいこと。源氏に見出され、玉の輿に乗ったと喜んだのも束の間だった、の意。

一四 大事と思ってくれる人が、皆それぞれ別れて行ってしまう人なんだね。生母、養育の祖母、源氏と、庇護してくれる人に次々別れてしまうと、紫の上の薄幸を言い立てる。

一五 継母の北の方の言葉通り、ほんとにお気の毒なご様子だ。

一六 いつまでも、世間に受け入れられることなく年月が経つようなら、たとえ山の中であっても、あなたをお迎えしましょう。「巌のなか」は、「いかならむ巌のなかに住まばかは世の憂きことの聞えこざらむ」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）による。人里離れた山の中の住居の意。

一七 今すぐは、（そんなことをしては）人が聞いてもさぞおだやかならず思うことでしょう。

一八 間違いは犯していないけれども、前世からの因縁で、このような目（冤罪で都を離れねばならぬような目）にも遭うのであろうと思うと。

（この節はまして世間の噂を気にしてとを）思っていられただけに　お便り　おぼしつきにけるに、まして世の聞こえをわづらはしがりて、おとづれきこえたまはず、御（お見舞にさえ）とぶらひにだにわたりたまはぬを、〔紫上は〕人の見るらむこともはづかしく、なかなか知られたてまつらでやみなまし（かえって父君にお知り頂かぬままでいた方がよかったのに）を、継母の北の方などの、「（一三）にはかなりし幸のあわたたしさ。あ（まあ）なゆゆしや、（一四）思ふ人、かたがたにつけて別れたまふ人かな」とのたまひけるを、さる便（たより）ありて漏り聞きたまふにも、いみじう心憂（う）ければ、これよりも絶えておとづれきこえたまはず。〔紫上は〕源氏のほかに頼りとする人もなく（こちらからも）またたのもしき人もなく、（一五）げにぞあはれなる御ありさまなる。（源氏）「（一六）なほ世にゆるされがたうて年月を経（へ）ば、巌（いはほ）のなかにも迎へたてまつらむ。（一七）ただ今は人聞きのいとつきなかるべきなり。朝廷（おほやけ）にかしこまりきこゆる人は、明らかなる月日のかげをだに見ず、安らかに身をふるまふことも、いと罪重かなり。（一八）過（あやま）ちなければ、さるべきにこそかかることもあらめと思ふに、まして思ふ人具するは、例なきことなるを、ひたおもむきにものぐるほしき世にて、立ちまさることもありなむ」など聞こ（お言い）

（光も見ぬように籠居し　気安く思いのままに行動することも　恐懼謹慎申し上げる者は　愛する人を連れてゆくのは　ただ一方的で　道理の通らぬ世の中なので　一層ひどい目にあうこともありましょう）

聞かせになる
え知らせたまふ。日たくるまで大殿籠れり。

帥の宮、三位の中将などおはしたり。〔源氏は〕対面したまはむとて、御直衣などたてまつる。お召しになる「位なき人は」とて、無紋の直衣、なかなかいとなつかしきを着たまひてうちやつれたまへる、いとめでたし。御鬢地味にしていらっしゃるのがなでつけようとなさって四かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面痩せたまへる影の、われながらいとあてにきよらなれば、〔源氏〕すっかり「こよなうこそ、おとろへにけれ。やつれてしまったなこの影のやうにや痩せてはべる。あはれなるわざかな」とのたまへば、女君、涙を一目うけて見おこせたまへる、いと忍びがたし。悲しいことだな

〔源氏〕五 浮べて
身はかくてさすらへぬとも君があたり
去らぬ鏡の影は離れじ

と聞こえたまへば、

〔紫上〕六
別れても影だにとまるものならば
鏡を見てもなぐさめてまし

隠れて坐って
柱隠れにゐ隠れて、涙をまぎらはしたまへるさま、〔紫上の〕なほここら見る やはり大勢知っている

一 大宰府の帥（長官）である親王。源氏の弟で、後の螢の巻によって螢兵部卿の宮と呼ばれる人。帥には多く親王が任命され、赴任はしない。（花宴五四頁参照）

二 「無位無官の者は」と言って。源氏が官位を剝奪されていることは、二〇五頁に既出。

三 模様を織り出さない絹で作った直衣で、かえって近づきやすい感じがするのを。

四 紫の上の鏡台。（一巻図録一一参照）

五 わが身はこうして流浪しましょうとも、いつもあなたのお側にある鏡に映った私の影は離れて行きはしないでしょう。「身を分くることの難さに真澄鏡影ばかりをぞ君に添へつる」（『後撰集』巻十九離別、遠き国にまかりける人に旅の具つかはしける鏡の箱の裏に書き付けける　大窪則春）。ここは、この歌の趣とは逆に、鏡にわが影を残してゆこうといったもの。

六 お別れしても、そこに映る影だけでも止まるものならば、せめて鏡を見ても慰めていましょうものを。

七　帥の宮（螢兵部卿の宮）。

源氏、花散里を訪う

八　麗景殿の女御。女御の妹で源氏の恋人である三の君も共に住む。前出二〇二頁。

九　こまごまと書き続けるのもわずらわしいことだ。草子地。

一〇　まことに、大層心細いご様子で、ただ源氏お一人の庇護のもとで過してこられた年月であったのに、これから先は、いよいよ荒れてゆくであろうお邸の有様が想像されなさって。源氏の目に映り、心に浮ぶ思いを、そのまま次々に文章にしていった趣。

一一　夜更けてから出る春の月。前に「有明の月」の頃とあった（二〇七頁参照）。

一二　遠く都を離れて住む須磨の侘住いが思いやられる。「巌のなか」は、二一一頁注一六参照。

一三　三の君は。彼女は寝殿の西側に住む。（花散里一九七頁参照）

女君たちの中では類のない人だと
なかにたぐひなかりけりと、おぼし知らるる人の御ありさまなり。
心のこもったお話を
親王（七）は、あはれなる御物語聞こえたまひて、暮るるほどに帰りたまひぬ。

八　花散里の心細げにおぼして、常に聞こえたまふもことわりにて、
〔源氏に〕お便りをなさるのも無理からぬことで
三の君　逢わなければ薄情だと思おうかと〔源氏は〕
かの人も今ひとたび見ずはつらしとや思はむとおぼせば、その夜は
〔花散里方へ〕　大層夜の更けるのを待って
また出でたまふものから、いとの憂くて、いたうふかしておはしたれば、女御（九）、「かく数まへたまひて、立ち寄らせたまへること」
人並みにお扱い下さって
おれを申し上げなさるご様子は
と、よろこびきこえたまふさま、書き続けむもうるさし。一〇いといみじう心細き御ありさま、ただこの御蔭に隠れて過ぐいたまへる年月、いとど荒れまさらむほどおぼしやられて、殿の内いとかすかなり。
邸内は大層ひっそりしている
月おぼろにさし出でて、池広く山木深きわたり、心細げに見ゆるにも、住み離れたらむ巌のなかおぼしやらる。
西面には、かうしもわたりたまはずやとうち屈しておぼしけるに、
こうまでしてお出ではなるまいと　悲観していられたのに
ひとしお心にしみる月の光が　立ち居なさる
あはれ添へたる月かげの、なまめかしうしめやかなるに、うちふる

一 ずいぶん夜の短いことだね。源氏の去りがたい気持がこう言わせた。

二 二度とはとてもと思うと。「え」は、下に打ち消しを伴うが、ここでは、言いさして省略されている。

三 平穏無事で過してきた長の年月も、（のんびり構えて、なぜ絶え間を置いたのかと）後悔されて。

四 過去から未来にかけて、めったにない例に引かれそうな身の上だから。無実の罪で、流浪せねばならぬ運命をいう。

五 いつものように、源氏のお帰りが月の入り方に思い合せられて、胸がせまる。

六 ほんとうに「濡るる顔」という風情なので。「あひにあひて物思ふころの我が袖に宿る月さへ濡るる顔なる」――よくも同じように、物思いに沈む頃の私の袖に映る月光（つきかげ）までが、涙に濡れたように見えるものだこと（『古今集』巻十五恋五、伊勢）を引く。

七 月光の映る私の袖は狭くとも、止（とど）めてみとうございます、見飽きることのない光を。数ならぬ私ですがあなたをお引きとめしたく存じます。

八 大空を行きめぐって、ついには澄むはずの月が、しばらく曇るにすぎないのだから、空をながめて物思いをなさるな。時が来れば、晴れて帰京するのだから、そんなにお嘆きなさるな。月は一定の周期で運行するので、「行きめぐり」という。「澄む」に「住む」を掛け、女君と共に暮す意を暗示する。

につけて匂う香の匂いが
まひたまへるにほひ、似るものなくて、いと忍びやかに入りたまへば、〔花散里は〕すこしゐざり出でて、そのまま〔お二人で〕やがて月を見ておはす。またここに御物語のほどに、明けがた近うなりにけり。（源氏）「短（みじか）の夜のほどや。かばかりの対面（たいめん）も、（二）またはえしもやと思ふこそ、（三）ことなしにて過ぐしつる年ごろもくやしう、来（き）し方行く先のためしになるべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」と、過ぎにしかたのことどものたまひて、鶏（とり）もしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。

気持がゆっくりする時なく過してきたのですね
人目を憚って

（五）例の、月の入り果つるほど、よそへられて、あはれなり。〔月光が〕女君の濃き御衣（ぞ）に映（うつ）りて、（六）げに濡るる顔なれば、

紫の　濃い

（花散里）（七）
月かげのやどれる袖はせばくとも
とめても見ばやあかぬ光を

ひどく悲しく思っていられるのが　おいたわしいので　一方では

いみじとおぼいたるが、心苦しければ、かつはなぐさめきこえたまふ。

（源氏）（八）
「ゆきめぐりつひにすむべき月かげの

九（つひにすむべき）とは言っても）考えてみれば、心細いことだね。

一〇ただ、行く末どうなるか分らぬのを悲しむ涙が、心を暗く閉ざしてしまうのですね。「行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり」――将来の再会がおぼつかないことを悲しむ涙は、もう今、目の前にこぼれ落ちるのでした（『後撰集』巻十九離別、源済）。

旅立ちの準備、留守邸の後始末をきめる

一一しかるべき書物（漢籍など）や白氏文集（白楽天の詩賦の集）など。

一二そのほかには琴を一張、ご用意おさせになる。「かの山里の御住処の具は」以下、このあたりまで「堂中、木の榻四、素屏二、漆琴一張、儒道仏書各三両巻を設けたり」（『白氏文集』巻二十六「草堂記」）を踏まえて書く。

一三荘園。

一四牧場。牛馬などを飼う。

一五しかるべき領地の証文（所有権の移動を証明する文書。桐壺帝から譲られたものなどであろう。

一六倉の並んだ一画。二条の院内にある。

一七同じく二条の院にある、金銀、絹綾などを収納する所。

一八紫の上の乳母。一巻若紫一九〇頁に初出。

しばし曇らむ空ななめそ

思へば、はかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ、心をくらすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。

（源氏は）身辺万端の整理をおさせになる

よろづのことどもしたためさせたまふ。親しうつかうまつり、世時勢に靡かぬ家臣たちだけは皆

二条の院の事務をになびかぬ限りの人々、殿のこととり行ふべき上下定め置かせたま上下の役目を決めておかれる須磨にお供申し上げる者は皆ふ。御供にしたひきこゆる限りは、また選り出でたまへり。かの山里の御住処の具は、道具どうしても必要とされる品々をえさらずとり使ひたまふべきものども、ことさら飾りけのない簡素なものにしてよそひもなくことそぎて、またさるべき書ども文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせたまふ。所狭き御調度、はなやかなる御召し物全くお持ちにならずよそひなど、さらに具したまはず、あやしの山賤めきてもてなした賤しい山里の人といったふうになさる（源氏のもとに）仕える女房をはじめまふ。さぶらふ人々よりはじめ、よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。領じたまふ御荘、御牧よりはじめて、さるべき所紫の上ご依頼申し上げなさる（紫上に）の券など、皆たてまつり置きたまふ。それよりほかの御倉町、納殿などいふことまで、少納言をはかばかしきものに見置きたまへれ

一　腹心の家司たちをつけて。「家司」は、貴族の家の家政を行う者。四位または五位である。
二　源氏づきの中務、中将といった女房たちは。いずれも源氏の思い人である。
三　（源氏がいらっしゃらなくなれば）何につけてご奉公の楽しみがあろうかと思うが。いっそ、お暇を頂こうかと思うのである。
四　上﨟の女房も下﨟の女房も皆、紫の上のもとにお仕えさせになる。
五　麗景殿の女御。
六　朧月夜。
七　思いを遂げることのできないあなたを恋して泣いたことが、流浪の身の上になるきっかけだったのでしょうか。「みを」は、「水脈」に「身」を掛ける。「逢ふ瀬なき」とは、すぐあとに「道のほどもあやふければ、こまかには聞こえたまはず」とあるように、手紙が弘徽殿方の手に入る場合を考慮して、他人には、二人の間に何事もなかったのだととれる言い方をしたもの。
八　二人の仲を思い出しますことだけが、言い逃れできない私の罪と存じます。朧月夜に思いを懸けたこと以外は無実であるという気持が下にある。

源氏、朧月夜の尚侍に別れの便りを送る

ば、一親しき家司（けいし）ども具して、〔紫上が〕取りしきられるように〔少納言に〕言っておかれるしろしめすべきさまどものたまひあづく。二わが御方の中務（なかつかさ）、中将などやうの人々、つれなき御もてなしながら、見たてまつるほどこそなぐさめつれ、三何ごとにつけてかと思へども、「（源氏）命ありてこの世にまた帰るやうもあらむを待ちつけむと思はむ人は、こなたにさぶらへ」とのたまひて、四上下（かみしも）、皆まうのぼらせたまふ。若君の御乳母（めのと）たち、五花散里などにも、をかしきさまのはさるものにて、まめまめしき筋におぼし寄らぬことなし。

気のないお扱いとはいえ
お身近にお仕えしていてこそ満足してもいたのに
（私が）
紫の上のもとにお仕えせよ
夕霧
風流な贈り物はもとより
暮し向きのことまで
困難をおかしてお便りをさし上げなさる

尚侍（ないしのかみ）の御もとに、わりなくして聞こえたまふ。

（源氏）お見捨てさらないのも無理はないと存じますものの
この世をあきらめて京を離れる

とはせたまはぬもことわりに思ひたまへながら、今はと世を思ひ果つるほどの憂（う）さもつらさも、たぐひなきことにこそはべりけれ。

逢（あ）ふ瀬なき涙の河に沈みしや
流るるみをのはじめなりけむ

と思ひたまへ出づるのみなむ、罪のがれがたうはべりける。

九 朧月夜の尚侍。敬語を付けないで、「女」と呼び捨てにするのは、感情の高潮した場面に多い。

一〇 涙がお袖で抑えきれないのも、どうしようもないことである。

一一 涙河に浮ぶ水泡（みなわ）―そのようにはかない私は、悲しみにくれたまま死んでしまうでしょう、行く末の逢瀬も待たないで（ご帰京もお待ちせずに）。「流れて」は、河の流れと、時が経つ意を掛ける。

一二 ひどい人々だとお考えになる縁者が大勢いられて。弘徽殿の大后や右大臣をさす。

一三 明日ご出立という日の夕暮には。

一四 京都の北方に連なる山。桐壺院の御陵の位置は不詳。後文に下賀茂神社を見ながら行くとある。

一五 明け方近く月が出る頃なので。いわゆる有明（ありあけ）の月の頃である。

出発の前夜、源氏、藤壺の宮を訪れ、桐壺院の御陵に参拝する

一六（まだ月の出ない闇に隠れて）藤壺の宮に参上なさる。

一七 後の冷泉院。源氏と藤壺の間の子。

一八 お互いにものを深くお感じになる方々のお話は、何事にも、しみじみと胸に迫るものが多かったことであろう。草子地。

須磨

手紙が届くかどうか不安なので　詳しくは　胸が

道のほどもあやふければ、こまかには聞こえたまはず。女（をんな）、いとい（九）みじうおぼえたまひて、忍びたまへど、御（一〇）袖よりあまるも所狭（ところせ）うなむ。

（朧月夜）一一

涙河うかぶ水泡（みなわ）も消えぬべし

流れてのちの瀬をも待たずて

泣く泣く乱れ書きたまへる御手（ご筆跡）、いとをかしげなり。今ひとたび対（たい）面なくてやとおぼすは、なほくちをしけれど、おぼし返して、憂（一二）し

逢えぬまま別れるのかと　考え直されて

とおぼしなすゆかり多うて、おぼろけならず忍びたまへば、いとあ

一方ならず人目を憚っていらっしゃるので　大層な無理をしてまで逢おうともおっしゃらずに終った

ながちにも聞こえたまはずなりぬ。

明日（あす）（一三）とての暮には、院（桐壺院）の御墓拝（をが）みたてまつりたまふとて、（一六）北山（一四）へまうでたまふ。暁（一五）かけて月出づるころなれば、まづ入道の宮にまうでたまふ。近き御簾（みす）の前に御座（おまし）参りて、御みづから聞こえさせたま（一七）ふ。春宮（とうぐう）の御ことをいみじううしろめたきものに思ひきこえたまふ。

お設けして　藤壺がご自身でご応対あそばされる　大層気がかりなことと　〔藤壺は〕

かたみに心深きどちの御物語は、よろづあはれまさりけむかし。な（一八）

一（わが思いを受け入れて下さらず）つらかった今までのおあしらいを、それとなく口に出して、お恨み申し上げたいけれども。

二 思い当るただ一つのことのために、天の咎めも恐ろしゅうございます。藤壺と密通して、東宮が生れたことをさす。

三 東宮の御代さえ、ご安泰でいらっしゃるならば。無事に、ご即位できさえすれば、の意。源氏謀叛ということになれば、源氏が後見する皇太子に累が及び、位を廃されることを恐れている。

四 お連れ添い申した院は亡く、生きておいでのあなたは悲しい身の上になられた世の終りを、出家して煩悩を捨てたはずなのに、そのかいもなく、泣きながら過しているのです。「なくなく」に「無く」と「泣く」を掛ける。「あるはなくなきは数添ふ世の中にあはれいづれの日まで嘆かむ」（『新古今集』巻八哀傷、小野小町）によるか。

五 故院にお別れした時、悲しい思いはし尽したはずでしたのに、さらにこの世のつらさはひどくなるのでした。「この」に「子」を響かせ、暗に東宮を案ずる

つかしうめでたき御（藤壺の）けはひの昔にかはらぬに、つらかりし御心ばへもかすめきこえさせまほしけれど、今さらにうたてとおぼさるべし、わが御心にも（ご自分としても）、なかなか今ひときは乱れまさりぬべければ、念じ返して（じっと思い返して）、ただ、「かく思ひかけぬ罪にあたりはべるも、思うたまへはすることの一節になむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身は（わが身は）命を投げ出しても）きになしても、宮の御世だに、ことなくおはしまさば」とのみ聞こえたまふぞことわりなるや。宮も、皆おぼし知らるることにしあれば、御心のみ動きて聞こえやりたまはず。大将、よろづのことかき集めおぼし続けて泣きたまへるけしき、いと尽きせずなまめきたり。「御山に参りはべるを、御ことつてや」と聞こえたまふに、とみにものも聞こえたまはず。わりなくためらひたまふ御けしきなり。

（源氏）思いもよらぬ罪に問われるにつけましても
（藤壺）口にしたらかえって一段と心が乱れるに違いないので
（藤壺は）厭なこととお思いになろうし
（源氏）お心が波立つばかりでお返事もようなさらない
（藤壺）
（源氏）山陵にお参りしますが
（藤壺は）お伝え申すことは
（藤壺）ひたすらお気持を静めようとなさるご様子である

見し（藤壺）はなくあるは悲しき世の果てを

そむきしかひもなくなくぞ経る

お二人とも大層なお悲しみなので
お胸に積るあれこれのことも
いみじき御心まどひどもに、おぼし集むることどもも、とても一首にお えぞ続けさ

気持をこめる。
六 下仕えも気心の知れた者だけを連れて。「下人」は、馬の口とりなど、下級の召使。
七 普通は牛車を用いるが、世間を憚っての用意。
八 かつてのお出ましの様子とは違っている。源氏は参議兼大将なので、規定の随身だけでも六人付く。
九 あの賀茂の祭の斎院御禊の日、源氏の仮の随身としてお供した、右近の尉の蔵人。（葵七二頁参照）
一〇 得られるはずの五位の位にも叙せられず、その時期が過ぎてしまった上に。六位の蔵人（定員四人）のうち、毎年上席の者が五位に昇進するのを「爵得」という。
一一 名簿を削られ。除籍という。「御簡」は、殿上人の名を書き出した「日給の簡」。六位の蔵人を免ぜられたのである。
一二 官職（右近の尉）も剝奪され。源氏に対する圧迫が、腹心の家来にも及んでいるのである。
一三 賀茂御祖神社。俗に下賀茂神社という。（図録一参照）
一四 君のお供をして、葵を挿頭にお参りしたあの御禊の時を思うと、賀茂の祭神のご加護もなかったのかと、恨めしく思われます。「そのかみ」は、その当時、「かみ」に「神」を掛ける。「みづがき」は、神社の周囲にめぐらした垣。
一五 ほんとに、自分の身の上についてどんなに悲しんでいることであろう。

せたまはぬ。
（源氏）別れしに悲しきことは尽きにしを
　またぞこの世の憂さはまされる
　月待ち出でて出でたまふ。御供にただ五六人ばかり、下人もむつましき限りして、御馬にてぞおはする。さらなることなれど、ありし世の御ありきに異なり。皆いと悲しう思ふなかに、かの御禊の日、仮の御随身にてつかうまつりし右近の尉の蔵人、得べき爵もほど過ぎつるを、つひに御簡けづられ、官も取られて、はしたなければ、御供に参るうちなり。賀茂の下の御社を、かれと見わたすほど、ふと思ひ出でられて、下りて御馬の口を取る。
（右近尉）ひき連れて葵かざししそのかみを
　思へばつらし賀茂のみづがき
と言ふを、げにいかに思ふらむ、人よりけにはなやかなりしものをとおぼすも、心苦し。君も、御馬より下りたまひて、御社のかた拝

（まとめになれない）（有明の月の出を待って）（言うまでもないことだが）（家来たちは）（面目がないので）（それと見渡せる所で）（源氏の）（御禊の日が）（誰よりも特に威勢よく振舞っていたのにと）（くつわを取る）（須磨にお供する人数の中にいる）

一 住みづらい都を今、離れてまいります、あとに残る噂の是非は、糾の森の神におまかせして。「ただす」に、正邪を糺す意と、下賀茂神社所在の地名を掛ける。

二 それに対する故院の是非のご判断を、（幽明境を異にしているので）現実のものとして、お伺いなさることができないから。お墓は何も答えて下さらないから。

三 あれほどお心をこめてお考えおきになり、言い遺しておかれた数々のご遺言は。桐壺院が、帝（朱雀院）に、源氏や東宮に配慮するように遺言したことは、賢木一三九頁に見える。

四 「古き墓何れの世の人ぞ　姓と名とを識らず　化して路の傍の土と作る　年々春の草生る」（『白氏文集』巻二続古詩）。『河海抄』に引く。

みたまふ。神にまかり申したまふ。（お暇乞いを申し上げなさる）

（源氏）憂き世をば今ぞ別るるとどまらむ
　　名をばただすの神にまかせて

とのたまふさま、（右近尉は）感動しやすい若者なのでものめでする若き人にて、身にしみてあはれにめでたしと見たてまつる。

（山陵に）御山にまうでたまひて、（桐壺院ご生前の）おはしましし御ありさま、ただ目の前のやうにおぼし出でらる。限りなきにても、（この上ない帝王の御身でも）世に亡くなりぬる人ぞ、言はむかたなくくちをしきわざなりける。（無念なことなのであった）よろづのことを泣く泣く申したまひても、（お墓に向って）そのことわりをあらはにえうけたまはりたまはねば、さばかりおぼしのたまはせしさまざまの御遺言は、何方か消え失せにけむと、いふかひなし。御墓は、道の草茂くなりて、分け入りたまふほど、（涙に一層）いとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立、木深く（ものさびしい）心すごし。（御陵から）帰り出でむかたもなきここちして、（ご生前のお姿がはっきりとお見えになったのは）拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、（鳥肌立つような感じがする）そぞろ寒きほどなり。

五 亡き父院は、私の沈淪をどうお思いだろうか、父上かと思いよそえて悲しくながめる月も、雲に隠れてしまったことだ。「かげ」は姿の意に「光」を掛ける。「ありし御面影さやかに見えたまへる」を受けて「かげ」と言った。

源氏、東宮に別れの便りを送る

六 東宮は宮中にいる。（賢木一五五頁参照）

七 藤壺の腹心の女房。源氏と藤壺の間を仲立ちし、藤壺に殉じて出家した。（若紫一一二頁、賢木一四三頁、一七五頁参照）

八 いつまた、春の都の花を見ることでしょうか、時節に見捨てられた山賤の身で。「春の都の花」は、春の宮（東宮）の治世の栄えを暗に意味する。「山賤」は、山仕事をする身分の低い者。須磨に退居する身を卑下して言った。

九 三月の末という今の季節にもふさわしく、源氏の今の身の上にもふさわしいものとして選んだのであろう。

一〇 しかじかでございます。文面の趣を伝える言葉。

一一 東宮は現在八歳。

一二 困ったことにご心労なさっていた昔のこと。源氏が藤壺への恋に悩んで、自分に手引きを頼んでいた頃のこと。以下、王命婦の心中。

（源氏）五 亡きかげやいかが見るらむよそへつつ
ながむる月も雲隠れぬる

明け果つるほどに帰りたまひて、春宮にも御消息聞こえたまふ。

王命婦を御かはりとてさぶらはせたまへば、その局にとて、

（源氏）今日なむ都離れはべる。また参りはべらずなりぬるなむ、あまた

のうれへにまさりて思うたまへられはべる。よろづおしはかりて

啓したまへ。

八 いつかまた春の都の花を見む
時うしなへる山賤にして

桜の散り過ぎたる枝につけたまへり。「かくなむ」と御覧ぜさすれば、幼き御ここちにも、まめだちておはします。「御返りいかがもの しはべらむ」と啓すれば、「しばし見ぬだに恋しきものを、遠くはましていかに、と言へかし」とのたまはす。ものはかなの御返りやと、あはれに見たてまつる。あぢきなきことに御心をくだきたま

一 後悔にさいなまれて、まるで、自分の心がけ一つの結果でもあるかのように思われる。源氏と藤壺の間を仲立ちしたことを悔いる気持。二人の仲は、前世からの宿縁であるのに、という気持が作者には働いている。

二 とりとめもない文面であるのは、悲しみに心の乱れたせいなのであろう。

三 桜は、咲いたかと思えばすぐ散るのが悲しゅうございますが、過ぎ行く春は、再びめぐってまいります、都をお立ち去りになっても、またお帰り下さって、東宮の栄える御代をご覧下さいませ。「ゆく春」に、源氏を喩え、今の季節を詠み込む。「桜」は、源氏の文をつけた枝による。

四 時節が廻りくれば（必ずお帰りになるはずでございます）。引歌であろうか。未詳。

五 お返事を認めたあとも、女房同士しみじみと悲しい話をしては、東宮御所をあげて、皆、声を忍んで泣いた。

六 「長女」は、下働きの女。「御厠人」は、便器の掃除をする女。いずれも、源氏の眼に触れることもない身分の低い者たち。

七 世にまれなほどの手厚いご恩顧のもとに今まで過してきたので。

ひし昔のこと、をりをりの御ありさま、思ひ続けらるるにも、もの（何の苦労もなしに源氏ご自身も藤壺の宮もお過しになれたはずのお身の上なのに）思ひなくてわれも人も過ぐいたまひつべかりける世を、心とおぼし（我から求めて）嘆きけるを、一くやしう、わが心ひとつにかからむことのやうにぞおぼゆる。御返りは、

（王命婦）とても言葉に尽して申し上げられません

さらに聞こえさせやりはべらず。御前には（東宮には）啓しはべりぬ。（東宮が）心細げにおぼしめしたる御けしきもいみじくなむ。

と、二そこはかとなく、心の乱れけるなるべし。

（王命婦）三

咲きてとく散るは憂けれどゆく春は

花の都を立ち帰り見よ

四時しあらば。

と聞こえて、五名残もあはれなる物語をしつつ、一宮のうち忍びて泣きあへり。一目も見たてまつれる人は、（源氏を）かくおぼしくづほれぬる御（源氏の）このようにお気弱くなっていられるご様子をありさまを、嘆き惜しみきこえぬ人なし。まして常に参り馴れたり（お邸に）参りつけていた者は（源氏が）ご存じのはずもないしは、知り及びたまふまじき六長女、御厠人まで、七ありがたき御かへ

八 源氏七歳の時は、読書始めの儀があった。（桐壺三〇頁参照）

源氏の不遇に対する世間の動静

九 源氏のお骨折りに預からぬ者はなく。任官や昇進の世話になったことをいう。

一〇 家柄の出の公卿。官は参議以上、位は三位以上の者を公卿といい、政治の中枢に参画することができる。

一一 太政官の判官（三等官）。行政の実務を握る中堅官僚。

一二（源氏に同情したりすれば）すぐに手ひどい仕打ちを受ける今の時勢を憚って。

一三 何になろうかと思うせいか（源氏をおたずねする人もなくて）。

一四 このような（突然没落したような）場合は、我ながらめめしいほど、（冷たい態度の）恨めしく思われる人が多くて。

一五 例によって。旅立ちは夜明け前にする。

一六 貴族の旅行着。狩衣の敬語。縫付けが少なく、行動に便利な仕立て。（一巻図録一二参照）

出発の日、源氏、紫の上と別れを惜しむ

りみの下なりつるを、しばしにても、〔源氏を〕拝さぬ月日を過すのかと見たてまつらぬほどや経むと、思ひ嘆きけり。

世間一般の人々も

大方の世の人も、誰かはよろしく思ひきこえむ。八七つになりたまひしこのかた、帝の御前に夜昼さぶらひたまひて、奏したまふことのならぬはなかりしかば、九この御いたはりにかからぬ人なく、御徳をありがたく思わぬ者がいたろうか聞き届けられぬことはなかったから

をよろこばぬやはありし。一〇やむごとなき上達部、弁官などのなかにも多かり。それより下は数知らぬを、〔源氏のご恩を〕思ひ知らぬにはあらねど、さ現実問題としては しあたりて、一一いちはやき世を思ひ憚りて、〔源氏方に〕参り寄るもなし。世の中は騒世ゆす然として りて惜しみきこえ、下には朝廷をそしり恨みたてまつれど、身を捨てててとぶらひ参らむにも、一三何のかひかはと思ふにや、一四かかるをりは安全を投げうってお見舞に上がっても

人わろく、うらめしき人多く、世の中はあぢきなきものかなとのみ、よろづにつけておぼす。

〔源氏は〕

当日は その日は女君に、紫の上御物語のどかに聞こえ暮らしたまひて、一五例の、一六狩の御衣など、旅の御よそひいたくやつしたま

粗末なふうをな

夜深く出でたまふ。

一 自分がこんなふうに、いつ死ぬか分らない人生なのに、遠く旅立っていったならば、（生別が死別になって）紫の上はどのように転々とした身の上を辿られることだろうと。

二 生別ということがあるとは予想もせず、繰返しお約束しては、命のある限りあなたと共にと申し上げたことです。頼りないお約束でした。

三 （あなたとお別れするのなら）もはや少しも惜しくないこの命に替えて、今のこのお別れを、しばらくでも引き止めとうございます。

さって（源氏）やはり少しは端近に出て見送りなりとして下さい
ひて、「月出でにけりな。なほすこし出でて見だに送りたまへかし。
〔須磨では〕どんなにお話ししたいことがたくさん積ったと思うことでしょう
いかに聞こゆべきこと多くつもりにけりとおぼえむとすらむ。一日
たまに〔夜を〕不思議に晴れぬ思いがしますのに
二日たまさかに隔つるをりだに、あやしういぶせきここちするもの
を」とて、御簾まき上げて、端にいざなひきこえたまへば、女君、
お誘い申し上げなさると
涙をおさめて
泣き沈みたまへる、ためらひて、ゐざり出でたまへる、月かげに、
にじり出て来られたお姿は
いみじうをかしげにてゐたまへり。わが身かくてはかなき世を別れ
なば、いかなるさまにさすらへたまはむと、うしろめたく悲しけれ
〔紫上が〕深いお嘆きなのに　一層悲しませそうなので　気がかりで
ど、おぼし入りたるに、いとどしかるべければ、

（源氏）「生ける世の別れを知らで契りつつ
命を人に限りけるかな

大したことではないかのように申し上げなさると
はかなし」など、あさはかに聞こえなしたまへば、

（紫上）惜しからぬ命にかへて目の前の
別れをしばしとどめてしがな

げに、さぞおぼさるらむと、いと見捨てがたけれど、明け果てなば、

四 紫の上の姿がありありと目に浮んで忘れられず。
五 当時は普通、山崎で乗船し、淀川を下る。（図録一参照）
六 午後四時前後。
七 昔、駅楼を立てて楼の岸と呼んだ所（『紫明抄』『河海抄』）とも、斎宮帰京の折の旅宿（『花鳥余情』）ともいうが、明らかでない。「大江」は、摂津の渡辺にあり、当時は海岸だった。「松ばかりぞ」というのも明らかでない。（図録一参照）
八 唐の国に、後世まで言い伝えられる人よりも、私は一層、行方も知らぬ侘住いをすることであろうか。旧注に屈原のことかという。戦国時代の楚の王族で、国政に尽したが、讒言のため追放され、中国南方を放浪し、ついに汨羅に投身した。
九 「いとどしく過ぎ行く方の恋しきにうらやましくもかへる波かな」（『伊勢物語』七段）
一〇 そうした世間で言いふるされた歌ではあるが。
一一 「十一月中の長至の夜　三千里の外遠行の人　若し独り楊梅館に宿することをせば　冷枕単床一病身」（『白氏文集』巻十三「冬至宿楊梅館」）による。
一二 「わが上に露ぞ置くなる天の川門渡る舟の櫂の雫か」（『古今集』巻十七雑上、読人しらず。『伊勢物語』五十九段）。海路なので、涙を「櫂の雫」という。
一三 住み馴れた都を山々の霞が隔てていて見えないけれども、ここから悲しく眺める空は、都の人も同じように見ている空なのか。

源氏、須磨に着く

世間体が悪いであろうことを思って
はしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ。

胸もいっぱいのまま
道すがら面影につと添ひて、胸もふたがりながら、[四]御船に乗りたまひぬ。日長きころなれば、追風さへ添ひて、まだ申[六]の時ばかりに、

須磨
お近くへのお出ましでも
かの浦に着きたまひぬ。かりそめの道にても、かかる旅をならひたったので
まはぬここちに、心細さもをかしさもめづらかなり。大江殿[七]と言ひ

その跡に残っている
ける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。

（源氏）
唐国[八]に名を残しける人よりも
ゆくへ知られぬ家居をやせむ

寄せては返すのを
渚に寄る波のかつかへるを見たまひて、「うらやましくも」[九]と、うち誦じたまへるさま、[一〇]さる世の古言なれど、珍しう聞きなされ、悲しとのみ御供の人々思へり。うちかへりみたまへるに、来し方の山は霞はるかにて、まことに三千里の外のここちするに、櫂の雫も堪へがたし。

（源氏）
故里を峰の霞は隔つれど

一　在原行平。桓武天皇の孫、阿保親王の子。業平の兄。寛平五年（八九三）薨。七十六歳。『古今集』『後撰集』などに入集。

二　「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩垂れつつわぶと答へよ」――たまさかに私の安否を尋ねてくれる人があったら、須磨の浦で、涙にくれながら侘住いをしていると答えてくれ（『古今集』巻十八雑下、田村の御時に事にあたりて、津の国の須磨といふ所にこもりはべりけるに、宮のうちにはべりける人につかはしける　在原行平朝臣）による。「田村の御時」は、文徳天皇の御代。「藻塩垂れつつ」は、塩を採る海藻から、塩分を濃くするために掛ける海水が垂れること。涙を流す意の「しほたる」を詠み込む。

三　かやぶきの建物とか、葦をふいた廊（建物と建物をつなぐ渡殿）めいた建物など。

四　昔の興にまかせたお忍び歩きをお思い出しになる。夕顔の五条の家とか、末摘花の常陸の宮邸などであろう。

五　須磨近辺の源氏の荘園の管理者。

六　源氏の腹心の家来。播磨の守の子。（若紫一八六～七頁、花宴五五頁参照）

七　側近の家司（事務官）として、源氏のお指図どおり事を運ぶのもけなげである。

八　庭の遣水をもっと深くし。

九　摂津の国の守も、源氏の邸に親しくお出入りする

須磨の住居のさま

ながむる空はおなじ雲居か

何一つ胸に迫らぬものはないのだった

つらからぬものなくなむ。

お住まいになる所は

おはすべき所は、一行平の二中納言の、藻塩垂れつつわびける家居近きわたりなりけり。海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中なり。海岸からは少し入り込んでいて　身に沁みるばかりさびしげな

〔源氏は〕

垣のさまよりはじめてづらかに見たまふ。茅屋ども、葦ふける廊めく屋など、野趣に富んだ飾りつけがしてある　場所柄にふさわしい　をかしうしつらひなしたり。所につけたる御住ひ、風変りで　やうかはりて、かかるをりならずは、をかしうもありなましと、おもしろくも思われるであろうにと　昔の御心のすさびおぼし出づ。五近き所々の御荘の司召して、さるべきことどもなど、良清の六朝臣、親しき家司にて、仰せ行ふもあはれなり。時の間に、いと見所ありてしなさせたまふ。八水深う遣りなし、植木どもなどして、今はと静まりたまふここち、うつつならず。九国の守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せつかうまつる。かかる旅所ともなう、人騒がしけれども、はかばかしうものをものたまひあはすべき人しなければ、知らぬ国のここちして、いと埋れいたく、い

必要なこと

となどをあれこれと

風情があるように手入れをおさせになる

さてと落着きなさるお気持は

夢のようだ

こっそりと好意のこもったお世話をする

人が大勢出入りするが

お旅先に似ず

まともにお話し相手になさることのできる人もいない

ので

気持が晴れず

家来筋の者なので。

一〇 涙に目もくらむ思いでいられる。

一一 松島の海士―尼のあなたはいかがお過しでしょうか、須磨の浦に侘住いする私は涙に濡れておりますが。「海士」に「尼」を掛け、「松島」「須磨」、「海士」「浦人」は縁語。「松島のあま」は、賢木一七七頁の贈答を踏まえた修辞。「苫屋」は、菅、萱などで編んだ菰で覆った海辺の小屋。

長雨の頃、源氏、京の人々に文を送る

一二 いつと限らず、常に嘆いております中にも、この頃は特に、過去や行く末を思って悲しみにくれ、涙がまさるばかりでございます。「汀まさりて」は「君惜しむ涙落ち添ふ」（『古今六帖』四、別れ。『貫之集』七「君を惜しむ涙落ち添ふ」）による。「ながる」は「流る」「泣かる」の掛詞。

一三 中納言の君への私信のようにして、その中に入れたお手紙に。中納言の君は、朧月夜の尚侍の侍女で、源氏との仲を取りもった人（賢木一四七頁参照）。

一四 性懲りもなく、あなたにお会いしたいと思いますが、塩焼く海士はどう思うことでしょう。「こりずま」に「須磨」を掛ける。「みるめ」は「海松布」と「見る目」の掛詞。「白浪は立ち騒ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ」（『古今六帖』三、みるめ）による。「海士やいかが思はむ」は、世間を憚る気持を表す。

過そうかと先々がお案じになられる

かで年月を過ぐさましとおぼしやらる。

梅雨の季節になって

やうやう事静まりゆくに、長雨のころになりて、京のこともおぼしやらるるに、恋しき人多く、紫の上の悲しみに沈んでいらした様子女君のおぼしたりしさま、春宮の御夕霧こと、若君の何心もなくまぎれたまひしなどをはじめ、ここかしこ動き廻っていられたことなど思ひやりきこえたまふ。京へ人出だし立てたまふ。二条の院へたて使者を紫の上のもとへさし上げなさる手紙とまつれたまふと、藤壺入道の宮のとは、書きもやりたまはず、一〇くらされはかばかしくもお書きになれず藤壺たまへり。宮には、

（源氏）一一

松島のあまの苫屋もいかならむ

須磨の浦人しほたるるころ

一二

いつとはべらぬなかにも、来し方行く先かきくらし、汀まさりてなむ。

朧月夜

尚侍の御もとに、例の、一三中納言の君の私事のやうにて、中なるに、

（源氏）所在なく　過ぎ去った昔のことが思い出されますにつけても

つれづれと、過ぎにしかたの思うたまへいでらるるにつけても、

一四

こりずまの浦のみるめのゆかしきを

一 左大臣家にも、宰相の乳母のもとに、の意。宰相の乳母は、夕霧の乳母（前出二〇四頁参照）。

源氏の文を見て、紫の上の嘆き

二 一つには、それが（紫の上が、源氏に死別したかのように嘆くのが）縁起でもないので。

三 紫の上の乳母。源氏から後事を託されている（二一五～六頁参照）。

四 紫の上の亡き祖母の兄。若紫の巻の北山の僧都。

五 （僧都は）二つの祈願のために、御修法をおさせになる。「修法」は、密教における加持祈禱。一つは源氏の無事帰京を祈り、いま一つは次に「かつは」として述べている。

六 旅先での御夜着。

七 固織りの薄い平絹。無紋である。普通は紋様を織り出したものを着るので、次に「さまかはりたるここちするも」という。

八 紫の上に別れを惜しんで源氏が詠んだ歌。（二一二頁参照）

塩焼く海士やいかが思はむ

さまざま書き尽くしたまふ言の葉、思ひやるべし。大殿にも、宰相の乳母にも、つかうまつるべきことなど書きつかはす。

京には、この御文、所々に見たまひつつ、御心乱れたまふ人々のみ多かり。二条の院の君は、そのままに起きもあがりたまはず、尽きぬ悲しみに沈んで（紫の上）きせぬさまにおぼしこがるれば、さぶらふ人々もこしらへわびつつ、心細う思ひあへり。もてならしたまひし御調度ども、弾きならしたまひし御琴、ぬぎ捨てたまへる御衣の匂ひなどにつけても、今はと世になからむ人のやうにのみおぼしたれば、かつはゆゆしうて、少納言は、僧都に御祈りのことなど聞こゆ。二方に御修法などせさせたまふ。かつは、かくおぼし嘆く御心しづめたまひて、思ひなき世にあらせたてまつりたまへと、心苦しきままに祈り申したまふ。旅の御宿直物など、調じてたてまつりたまふ。縑の御直衣、指貫、さまかはりたるここちするもいみじきに、「去らぬ鏡」とのたまひし

若君のお世話についてのご注意などを
お別れした日から
女房たちもお慰め申しかねては
〔源氏が〕日頃お使いになった
もうお亡くなりになった人のようにお嘆きになるので
ご依頼する
まるで今は
物思いのないお
不憫に思われるままに〔仏に〕
身の上にさせて上げて下さいませと
〔紫上が〕
〔紫上は〕
今ま
でとはうって変った気持がするのも悲しいのに

九 あのお歌に「影は離れじ」とあった通り、身に添うように思われるにつけても、やはり源氏ご本人がいらっしゃらないので、何のかいもない。

一〇 杉、檜などの良材で作った柱。歌語。「わぎもこが来ては寄り立つ真木柱そもむつましやゆかりと思へば」（『紫明抄』『河海抄』）

一一 物事をあれこれ違った面から考えることができ、世間の経験を積んだ年輩の人でも、そうなのに。「あり」は、後の述語「恋しう思ひきこえたまへる」を代行させる使い方。

一二 次第に忘れるということもあろうが。「忘れ草」は、萱草のこと。身に付けると物思いを忘れると言われ、「忘れ草生ふ」で、忘れることをいう歌語的表現。

藤壺の嘆き、朧月夜の返歌

一三 藤壺の宮におかれても、東宮のご将来を思って源氏のことをお嘆きになる様子は、今さら言うもおろかなことだ。

一四（子までなした）前世からの因縁の深さをお考えになると、どうして通り一遍のお気持でいられよう。

一五 これほどまでに（源氏を須磨に逐いやるまでに）情けない世間の人の口ではあるが。以下「もて隠しつるぞかし」まで、藤壺の心中の思い。

一六 このこと（藤壺と源氏の仲）については。

目に浮ぶお姿が〔源氏が〕おもかげの、げに身に添ひたまへるもかひなし。出で入りたまひしかた、寄りゐたまひし真木柱などを見たまふにも、胸のみふたがりて、ものをとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齢の人だにあり、まして〔紫上は〕馴れむつびきこえ、〔源氏が〕父母にもなりて生ほし立てならはしたまへれば、恋しう思ひきこえたまへる、ことわりなり。死別といった場合ならひたすら世になくなりなむは、仕方のないことで言はむかたなくて、やうやう忘れ草も生ひやすらむ、〔須磨は〕聞くほどは近けれど、いつまでと限りある期限のあるお別れでもないので御別れにもあらで、思えば思うほどお悲しみは尽きないおぼすに尽きせずなむ。

一三 入道の宮にも、春宮の御ことによりおぼし嘆くさま、いとさらなり。一四 御宿世のほどをおぼすには、いかが浅くはおぼされむ。年ごろはただものの聞こえなどのつつましさに、世間の評判などが憚られてすこし情あるけしき見せば、それにつけて人のとがめ出づることもこそとのみ、ひとへにおぼし忍びつつ、あはれをも多う御覧じ過ぐし、誰かが見とがめはしないかとばかり恐れて源氏のお気持も多くは見て見ぬふりをなさり取りつくしまもない態度でいらしたのをしたまひしを、一五 かばかりに憂き世の人言なれど、かけても、一六 このか

今までは
やさしいそぶりを見せたら

少しも

たには言ひ出づることなくて止みぬるばかりの人の御おもむけも、
いちずな恋慕の情の赴くままにまかせず
あながちなりし心の引くかたにまかせず、かつはめやすくもて隠し
〔藤壺は〕
つるぞかし、あはれに恋しうもいかがおぼし出でざらむ。御返りも
〔それにつけても〕
ていたのだ
心をこめて
すこしこまやかにて、
（藤壺）ニ
このころはいとど、
塩垂るることをやくにて松島に
年ふる海士もなげきをぞつむ
尚侍の君の御返りには、
朧月夜
浦にたく海士だにつつむ恋なれば
くゆるけぶりよ行くかたぞなき
短いお便りで
さらなることどもは、えなむ。
とばかり、いささかにて、中納言の君のなかにあり。おぼし嘆くさまなど、いみじう言ひたり。あはれと思ひきこえたまふ節々もあれば、うち泣かれたまひぬ。
〔朧月夜を〕いとしいとお思い申される

一（世間の者が）問題にすることもなくてすんでしまったほどの、あの方のなさりようも。

二 この頃は一層。次の歌の「塩垂るることをやくにて」にただちに続く。

三 涙に濡れますのを仕事にして、尼の私も嘆きを重ねております。「なげき」は「投げ木」（藻塩を焼く薪）と「嘆き」の掛詞。「やく」に「役」と「焼く」を掛け、「海士」の縁語。

四 須磨の浦に塩を焼く海士さえ人には隠す恋ですから、大勢の人目を憚ってふすぶる私の思いは晴らしようもありません。「海士だに」に「数多に」（大勢の人に）を掛け、「恋」の「ひ」に「火」を掛ける。源氏の「塩焼く海士やいかが思はむ」に応じた歌。

五 今さら言うもおろかなことは（源氏に会えぬ悲しみは）とても筆には尽せません。「えなむ書かぬ」などの言葉を言いさした形。

六 中納言の君の返書の中に同封してある。

七 中納言は私信の中に、朧月夜の尚侍が悲しんでいらっしゃるご様子などを、しきりに書いていた。

八 紫の上。「女君」というよりは可憐な感じがある。

紫の上の返書

九 浦人の潮を汲む袖―あなたの涙に濡れたお袖と比べてみて下さい、波路を隔ててお会いできず泣き濡れている私の夜の衣を。「しほくむ」は、塩を焼くため、藻にかける海水を汲むこと。「夜の衣」は、前に「旅の御宿直物など、調じてたてまつりたまふ」（一二二八頁）とあったのによる。

一〇 お見舞の品々の染め色、仕立て具合など。夜着のほかに「縑の御直衣、指貫」も作られている。

一一 今はよけいなことに気忙しく、ほかに通う女がいるわけでもなく、ゆっくりと過せるはずなのに。

一二 どうして、そんなことができよう。反語。

一三 こんなつらい世の中だから、せめて前世からの罪障でも少なくしようとお考えになるので。源氏は政界からの失脚、藤壺との事件などをすべて宿縁と観じている。

一四 心身を清浄にして、魚肉を絶ち、勤行すること。

一五 頼りになる方々がおいでだから。祖父母の大臣や大宮、伯父の中将をさす。

一六 かえって、この方面、子供のことについては惑われぬものなのだろうか。「この」に「子」を掛ける。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による。夫婦の仲の方が煩悩は深いのだろうか、の意。

姫君の御文は、心ことにこまかなりし御返りなれば、あはれなること多くて、

（紫上）浦人のしほくむ袖にくらべ見よ
波路へだつる夜の衣を

一〇 ものの色、したまへるさまなど、いときよらなり。何ごともらうらうじうものしたまふを、思ふさまにて、一二 今は異事に心あわたたしう、行きかかづらふかたもなく、しめやかにてあるべきものをと、おぼすに、いみじうくちをしう、夜昼おもかげにおぼえて、堪へがたう思ひ出でられたまへば、なほ忍びてや迎へましとおぼす。またうち返し、一三 なぞや、かく憂き世に罪をだに失はむとおぼせば、一四 やがて御精進にて、明け暮れ行ひておはす。大殿の若君の御ことなどあるにも、いと悲しけれど、おのづから逢ひ見てむ、一五 たのもしき人々ものしたまへば、うしろめたうはあらずと、おぼしなさるるは、一六 なかなかこの道のまどはれぬにやあらむ。

一 そう言えば。新しい話題に転ずる時の発語。

二 須磨にお移り以来の、何かと騒がしいことに取り紛れて、言い落していた。草子地。

六条の御息所の使い、伊勢より来る

三 いつまでも明けぬ夜の中で悪い夢でも見続けているのかと思われることでございます。

四 罪障深い私だけは。神事に奉仕するところでは仏道に関することを忌むので、こういう。

五 ふたたびお目にかかることも、遠い先のことでございましょう。斎宮は、御代替りに交替するきまりであるから、御息所の伊勢在住は、当帝在位中続くことになる。

六 つらい日々を送っている伊勢の私を思いやって下さいませ、涙にくれていらっしゃるという須磨の浦で。「うきめ」に「浮き布」と「憂き目」、「藻塩垂る」に「しほたる」（泣く）を掛ける。「伊勢を」の「を」は間投助詞。「藻塩垂るてふ」は前出行平朝臣の歌による（二二六頁注二参照）。

七 遠い伊勢にいて、何のかいもないのが、この私なのです。源氏にはやがて帰京の日もあろうが、の意をこめる。「伊勢島」は、伊勢のこと。「あさる」は、魚貝のたぐいを採ること。「かひ」に「貝」と「かひ」（効果）を掛ける。

一 まことや、騒がしかりしほどのまぎれに漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりも、ふりはへたづね参れり。浅からぬ深いお気持を書いていらっしゃることども書きたまへり。言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしく、いたり深う見えたり。

斎宮　御息所からも　一方な　教養の程が

なほうつつとは思ひたまへられぬ御住ひをうけたまはるも、明けぬ夜の心まどひかとなむ。さりとも年月は隔てたまはじと、思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。

（御息所）とても現実のこととは思われませぬ　わざわざお見舞の使者が参上した　長くはご逗留なさるまいと　ご推察申し上げますにつけても

六 うきめかる伊勢をの海士を思ひやれ
藻塩垂るてふ須磨の浦にて

何事につけても思い乱れますこの頃の世の中の様子も　結局どういうことになるのでしょうか

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになり果つべきにか。

と細かに書いてある

と多かり。

七 （御息所）伊勢島や潮干の潟にあさりても

八（筆を）置いては書き、置いては書きしてお認めになった手紙は。御息所が、物思いに耽りながら、言葉の浮ぶままに書いては案じ、書いては案じしたさまをいう。

九 中国渡来の紙。模様を型押ししてある。

一〇 墨の濃淡が見事である。とぎれとぎれに書いているので、筆を下ろした時の墨色の濃さが、そのまま心の動きを表すのである。

一一 慕わしくお思い申した方なのに、それを、一つだけいやだなとお思い申した自分の心得違いから。葵の巻の生霊事件をさす。以下「別れたまひにし」まで、源氏の心。

一二 斎宮の侍所の者。貴族の側に控え警護に任じる。

一三（どんなに心をこめたものか）想像にかたくないであろう。草子地。以下、歌の前後の文章だけをしるした趣。

一四 こんな憂き目を見ずに、伊勢にお供しておればよかったのにと存じます。「伊勢人はあやしきものぞなどといへば小舟に乗りて波の上漕ぐ」（『河海抄』所引、風俗歌。『細流抄』「なぞといへば」）による。

須磨

いふかひなきはわが身なりけり

（しみじみと悲しく）ものをあはれとおぼしけるままに、うち置きうち置き書きたまへる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻き続けて、墨つきなど見所あり。あはれに思ひきこえし人を、ひとふし憂しと思ひきこえし心あやまりに、かの御息所も思ひうむじて別れたまひにし、とおぼせば、今にいとほしうかたじけなきものに思ひきこえたまふ。をりからの御文、いとあはれなれば、（御息所の）御使さへむつましうて、二三日据ゑ留めおかれて、かしこの物語などせさせて聞こしめす。若やかにけしきある侍の人なりけり。かくあはれなる御住ひなれば、かやうの人もおのづからもの遠からで、（源氏の）容貌を、いみじうめでたしと涙落しをりけり。御返り書きたまふ言の葉、思ひやるべし。

（（御息所の使は）（源氏）都を去らねばならぬ身の上と）かく世を離るべき身と、思ひたまへましかば、おなじくはしたひきこえましものを、などなむ。つれづれと、心細きままに、

（お慕い申せばよかったのに）（などと存じます）

一四 伊勢人の波の上漕ぐ小舟にも

（申しわけのないことをしたと）（情けなく思って別れてゆかれたのだ）（こういう折の）（なつかしく思われて）（たしなみのある）（侍といった身分の者も）（お側近くお仕えして）（伊勢の）（おいたわしい）（おあとを）

一 私とて、悲しみの涙にくれて、いつまで須磨の浦で物思いを続けるのでしょう。御息所の「いふかひなきはわが身なりけり」に答え、いたわったもの。「なげき」に「投げ木」と「嘆き」を掛ける。

二 いろいろお書きになった、そうした女君たちの思い思いの文面を。以下に、これまでの女君たちからの手紙を見る源氏の思いをまとめて書く。

花散里の文

三 (お別れして以来) 荒れまさる軒の忍ぶ草を眺めながら悲しみに沈んでおりますと、涙がしきりに袖を濡らすのでございます。「しのぶ」「露」は縁語。

四 本当に、茂った葎よりほかにはお守するものもないようなことでいられるのであろうと、おしはかりなさって。葎が門を閉ざすという表現が和歌にあり、それが用心堅固だという気持で「後見」という。

五 源氏の京の留守邸、二条の院から報告があるのであろう。

六 京の二条の院の家司(家政をつかさどる事務官)。

うきめは刈らで乗らましものを

海士(あま)がつむなげきのなかに塩垂れて

いつまで須磨の浦にながめむ

聞こえさせむことの、(お目にかかることの)いつとも分ましぬのが)はべれ。

などぞありける。かやうに、(どなたともことこまかに)いづこにもおぼつかなからず聞こえか(お手紙のやり)はしたまふ。

花散里も、悲しとおぼしけるままに書き集めたまへる御心々見たまふは、をかしきも(珍しい感じがして)目なれぬここちして、いづれもうち見つつなぐさめたまへど、かつはもの思ひのもよほしぐさなめり。

(花散里)三

荒れまさる軒のしのぶをながめつつ

しげくも露のかかる袖かな

とあるを、四げに葎(なぐら)よりほかの後見(うしろみ)もなきさまにておはすらむとおぼしやりて、長雨に築地所(ついぢ)々崩れてなど聞きたまへば、五京の家司(けいし)のも

七　都近辺の諸国にある源氏の荘園。

八　世間の物笑いになってひどく萎れていられるのを。源氏とのことが露顕して、参内が停止になったからである。

朧月夜の尚侍、許されて参内する

九　弘徽殿の大后にも帝（朱雀院）にも、お許しのほどを奏上なさったので。皇太后には「啓す」というが、「内裏にも」とあるので、重い敬語に含めていう。

一〇（尚侍という職は）必ず帝の御寝に奉仕すべき職分の女御、御息所というお立場でもなく、（内侍司の長官という）公的な官職だからと、お考え直しになり。「御息所」は、女御、更衣で、帝の御子を生んだ方の称。

一一（参内停止という）厳しい処置も定められたのだが。源氏が自分から身を引いた今となっては、朧月夜に強く当ることもないので、という気持。

一二　格別だったご寵愛が今も失せぬことゆえ。

一三　お側にずっとお置きになって。「うへ」は、天皇の常に起居する清涼殿をいう。

一四　あの人（源氏）のいないのが、じつにさびしいことだね。「その人」は、誰それの意。

一五　故院がお考えになり仰せになったことに背いてしまったことだ。桐壺院の、源氏に関する遺言をさす（賢木一三九頁参照）。

とに仰せつかはして（命令なさって）、近き国々の御荘の者などもよほさせて（徴用させて）、つかうまつるべき由のたまはす。（修理のご用を勧めるように仰せになる）

尚侍の君（朧月夜）は、人笑へにいみじうおぼしくづほるるを、大臣（右大臣）いとかなしうしたまふ君（かわいがっていられる姫君なので）にて、切に、宮にも内裏にも奏したまひければ、限りある女御、御息所にもおはせず、公ざまの宮仕へとおぼし直り、また、かの憎かりしゆゑこそ（源氏が憎らしく思われた故にこそ）、いかめしきことも出で来しか、許さ（朧月夜は）れたまひて、参りたまふべきにつけても（参内なさることになったにつけても）、なほ心に染みにしかたぞ（源氏の事が）、恋しく思われなさるのであった）あはれにおぼえたまひける。七月（朧月夜は）になりて参りたまふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、人（帝は）のそしりもしろしめされず（お気に止められず）、例の（以前のように）、うへにつとさぶらはせたまひて、よろづに怨み、かつはあはれに契らせたまふ。御さま（帝は）、容貌も（優雅でお美しいけれど）、いとなまめかしうきよらなれど、思ひ出づることのみ多かる心のうちぞかたじけなき（恐れ多いことである）。御遊びのついでに（管絃の御遊）、（帝）「その人（朧月夜の）のなきこそ、いとさうざうしけれ。いかにましてさ思ふ人（どんなにか私以上にそう思う人が）多からむ。何ごとも光なきこちするかな（つまらない感じがすることだ）」とのたまはせて、「院

のおぼしのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて、涙ぐませたまふに、え念じたまはず。「世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれと思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむ、さらに思はぬ。さもなりなむに、いかがおぼさるべき。近きほどの別れに思ひおとされむこそ、ねたけれ。生ける世にとは、げに、よからぬ人の言ひ置きけむ」と、いとなつかしき御さまにて、ものをまことにあはれとおぼし入りてのたまはするにつけて、ほろほろとこぼれ出づれば、「さりや。いづれに落つるにか」とのたまはす。「今まで御子たちのなきこそ、さうざうしけれ。春宮を、院ののたまはせしさまに思へど、よからぬことども出で来めれば、心苦しう」など、世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人のあるに、若き御心の、強きところなきほどにて、いとほしとおぼしたることも多かり。

〔朧月夜も〕涙をこらえられない　（帝）この世などは　こうして生きている　長くこの世に生きようとは　につけてもつまらないものだと　少しも思わない　もしそうなったら　あなたはどうお思いだろう　心やさしいご様子で　〔朧月夜は〕　〔涙が〕　（帝）それご覧　誰のために泣くのか　（帝）〔あなたに〕

須磨には、いとど心尽くしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平

一　ほど近い須磨の別れ（源氏との別れ）ほどにも思って下さるまいことが、くやしく思われます。

二　「生きているこの世で、恋しい人とともに暮さなければ何にもならない」というのは、全く、たいしたこともない人が詠んだ歌なのだろう。「恋ひ死なむのちは何せむ生ける日のためこそ人は見まくほしけれ」（『古今六帖』四、恋。『拾遺集』巻十一恋一、大伴百世、第四句「人の」）をさすか。あなたの心は源氏のことでいっぱいだから、「生きているこの世で」と思っても、何にもならぬことなのだ、古歌は私のような場合のあることを知らないのだ、の意。

三　東宮を、故院のご遺言通りに今でも思っているが、不都合なことがいろいろ出てくるようだから、お気の毒。賢木の巻に「春宮をば今の皇子になしてなど、のたまはせ置きしかば、とりわきて心ざしものすれど」（一六六頁）とあった。「よからぬこと」は、弘徽殿方の妨害などをいうのであろう。

四　帝のご意向を無視して政治をとりしきられる人がいるので。弘徽殿の大后や右大臣をさす。

五　いよいよ物思いをそそる秋風が吹き。「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」（『古今集』巻四秋上、読人しらず）による。

六　前にも源氏の住居は「海づらはやや入りて」（一二六頁）とあった。

秋、須磨の侘住いのさま

七「旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風」（『続古今集』巻十羈旅、津の国須磨といふ所にはべりける時、よみはべりける　中納言行平）。その浦風に立つ波の意で「浦波」と続ける。

八 夜毎夜毎にはいかにもとても近く聞えて。「浦波」が「寄る寄る」に、「夜々」を言い掛ける歌語的表現。「住吉の岸の白波よるよるはあまのよそめに見るぞ悲しき」（『後撰集』巻九恋一、読人しらず）などの例があり、夜の独り寝を嘆く気持がある。

九 枕を立てて。床の上で頭をもたげるさま。「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く　香炉峯の雪は簾を撥いて看る」（『白氏文集』巻十六、律詩「香炉峯の下に、新たに山居をトし、草堂初めて成る時に、偶、東壁に題す」）による。

一〇「枕浮く」は、「独り寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり」（『古今六帖』五、枕）などにより、独り寝の悲しみをいう歌語的表現。

一一 前に「さては琴一つぞ持たせたまふ」（二一五頁）とあった。

一二 都恋しさに耐えかねて泣く声かとも聞える浦波の音は、私の思う都の方から風が吹くからであろうか。都に残した女たちを思う自分の気持から、浦波が悲しく聞えるのであろうか、の意。

一三 ほんとうに、（この人たちは）どんなに悲しい思いをしていることだろう。以下「かくまどひあへる」まで、家来たちを思いやる源氏の心中。

の中納言の、関吹き越ゆると言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、（源氏が）ひとり目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくるここちして、涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴をすこしかき鳴らしたまへるが、われながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

（源氏）恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は
　　思ふかたより風や吹くらむ

と歌ひたまへるに、人々おどろきて（目覚めて）、めでたう（すばらしいと）おぼゆるに、忍ばれで、あいなう起きゐつつ、鼻を忍びやかにかみわたす。

一三げに、いかに思ふらむ、わが身ひとつにより（私一人のために）、親、兄弟、片時立ちも離れがたく、ほどにつけつつ思ふらむ家を別れて（それぞれにつけて大事に思っているであろう家を捨てて）、かくまどひあへる（大層不憫で）、とおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細し

と思ふらむとおぼせば、昼は何くれと戯れ言うちのたまひまぎらはし、つれづれなるままに、色々の紙を継ぎつつ、手習ひをしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などに、さまざまの絵どもを書きすさびたまへる屏風の面どもなど、いとめでたく、見所あり。人々の語り聞こえし海山のありさまを、遙かにおぼしやりしを、御目に近くて（人々）は、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なく書き集めたまへり。「このころの上手にすめる千枝、常則などを召して、作り絵つかうまつらせばや」と、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御さまに、世のもの思ひ忘れて、近う馴れつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞ、つとさぶらひける。

退屈しのぎに　様々な色の　目のあたりご覧になって　口々に残念がっている　〔源氏の〕　お側近く親しくお仕えするのを　いつも控えている

前栽の花、色々咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に〔源氏が〕出でたまひて、たたずみたまふ御さまの、ゆゆしうきよらなること、所からは、ましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよよかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しど

場所が場所だけに

一 古歌などのすさび書き。
二 舶来の綾織物。斜めに筋を織り出した絹。
三 屏風の表の絵。当時、屏風には四季の風景、名所絵などを書いた。
四 若紫の巻で、供の家来たちが源氏に諸国の景色について語ったことをさす。（若紫一八五～六頁参照）
五 なるほど、話の通りに筆も及ばぬすばらしい海辺の風景を、この上なくお上手に、たくさんお書きになる。
六 当節の名人だという千枝や常則をお召しになって。千枝、常則は、ともに村上天皇頃の高名の絵師。
七 彩色をご奉仕させたいものだ。「作り絵」は、「墨がき」（師匠格の絵師）が構図、輪郭を決定したあと、その指示に従って彩色することで、職人仕事とされた。貴族の画技は墨がきまでである（一巻帚木六〇頁参照）。
八 庭前の植込み。
九 不吉な思いがするほどお美しいことといったら。あまり美しい人は、神隠しにあったり、早死にするという俗信があった。

夕暮れ、源氏、家来たちと唱和する

一〇 直衣の下に重ねる袿。
一一 一番上に重ね着た袿の色。青みがかった薄い紫色。襲の色目は、表蘇芳、裏萌黄で、秋、冬の着用。
一二 色こまやかな。十月の更衣までは夏の直衣であるから、縹色（薄い藍色）であろう。

一三 経を読み上げる時、まず「釈迦牟尼仏弟子何のなにがし」と名前を名乗る。

一四 櫓の音に似ているのを。「雁櫓」といって、雁の声は空櫓を押すのに似ているという（『花鳥余情』）。空櫓は、櫓を水に浅く入れて漕ぐこと。

一五 初雁は恋しい人の仲間なのだろうか、旅の空を渡ってゆく声がとても悲しく聞える。「初雁」は、秋はじめて渡って来た雁。「つら」（列）は、雁の縁語。

一六 前出。（一二六頁注六参照）

一七 次々と昔のことが思い出されます、雁は昔の友ではございませんが。「つらね」は、雁の縁語。

一八 民部省の次官の上席。正五位下相当。良清に並ぶ者であるから、多分惟光であろう。

一九 自分から進んで故郷の常世を捨てて、旅の空に鳴く（泣く）雁を、私にはかかわりのないよそごとと思っていたのでした。雁は「常世」（海のかなたにある不老不死の仙境）の鳥とされていた。

けなくうち乱れたまへる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子（源氏）」[一三]と名のりて、ゆるるかによみたまへる、また世に知らず聞こゆ。沖より舟どもの歌ひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。（舟が）ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき、黒き御数珠に映えたまへるは、故里の女恋しき人々の心、皆なぐさみにけり。

（源氏）初雁は恋しき人のつらなれや[一五]

旅の空飛ぶ声の悲しき

とのたまへば、良清、[一六]

かきつらね昔のことぞ思ほゆる[一七]

雁はその世の友ならねども

民部の大輔、[一八]

心から常世を捨てて鳴く雁を[一九]

舟歌を大声で歌って　沖の方を　遠目には見えるのも　黒檀の　都の妻を恋う

一 前出。（二一九頁注九参照）

二 常世を出て旅の空を飛ぶ雁も、仲間と共にいるから慰められているのです。「かりがね」は、雁が音。転じて雁をいう。

三 親が常陸の介になって、任国へ下ったのにも同行しないで。この「親」は、後の関屋の巻で、空蟬の夫、伊予の介であることが分る。常陸は守（長官）に親王が任じられるので、介（次官）が赴任して実務をとる。

四 清涼殿の殿上の間における管絃の御遊。八月十五夜には、月の宴が催されるのが例である。

五 あちらこちらの女君が、この月を眺めて物を思うていられることであろう。源氏を偲んでいるであろう、の意。

六 「銀台金闕夕に沈沈たり 独り宿して翰林に在り」（『白氏文集』巻十四、律詩「八月十五日の夜、禁中に独り直して、月に対つて元九を憶ふ」）。「故人」は、旧友の意。

七 賢木の巻に、藤壺が詠んだ「九重に霧や隔つる雲の上の月をはるかに思ひやるかな」をさす。一昨年の九月二十日のことである。（一六七頁参照）

八 月を見る間だけしばらく心が慰められる、都に再び帰れる日は、はるか先ではあるけれども。「めぐりあ

八月十五夜、源氏、故郷を懐う

雲のよそにも思ひけるかな

前の右近の尉、

「常世出でて旅の空なるかりがねも

列に遅れぬほどぞなぐさむ

（どんなに心細いことでしょう）

友まどはしては、いかにはべらまし」と言ふ。三親の、常陸になりて

（友にはぐれたら）

下りしにも誘はれで、参れるなりけり。下には思ひくだくべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。

（内心では思い悩んでいるらしいが）

（何気ない様子で日頃を過している）

（元気よく振舞って）

月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出でて、殿上の御遊び恋しく、四所々ながめたまふらむかしと思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の、涙もとどめられず。五入道の宮の、「霧や隔つる」とのたまはせしほど、言はむかたなく恋しく、をりをりのこと思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜ふけはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

（〔源氏は〕月の面ばかりじっと見詰められなさる）

（〔人々は〕）

（たまらなくて激しくお泣きになる（人々））

藤壺

あふ」は、月が一定の周期で廻る意と再会の意を掛ける。「月の都」は、月世界にある都。京の都を喩える。

九　藤壺が「霧や隔つる」と詠んだその同じ夜。（賢木一六五頁、一六六頁参照）

一〇「去にし年の今夜清涼に侍りき　秋思の詩篇独り腸を断つ　恩賜の御衣は今ここに在り　捧げ持ちて日毎に余香を拝す」（『菅家後集』九月十日）。昌泰三年（九〇〇）九月十日の宴に、右大臣菅原道真が「秋思」の題で詩を献じ、醍醐天皇より御衣を賜ったことを、翌年、大宰府の配所で詠じたもの。

一一　帝から賜った御衣。物語本文には書かれていないが、何かの折、恩賞に賜ったのであろう。

一二　帝に対してただつらいとだけは思われず、懐かしさとつらさに泣く涙に、左右の袖がそれぞれに濡れることである。「ひとへ」は、一途の意と「単」の掛詞。「単」は「左右」の縁語。

大宰の大弐、上京の途次、源氏に消息を奉る

一三　大宰府の次官。従四位下相当。

一四　大変だったので、奥方の一行は船で都に上る。

一五　浦から浦へと、風景を遊覧しながら来るのだが。

一六　我知らずとりつくろった気持になる。

一七　大弐の娘で、源氏の昔の恋人。（花散里一九五頁参照）

一八　このまま通り過ぎるのも残念なのに。「綱手引く」を「引き過ぐ」に言い掛ける。「綱手」は、船を引く綱。（図録一二参照）

（源氏）八　見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはむ

月の都は遥かなれども

（帝がとてもうちとけて）

九　その夜、上のいとなつかしう（昔の思い出話）昔物語などしたまひし御さまの、（桐壺院）院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出できこえたまひて、「一〇恩賜の御衣は今ここにあり」（菅公の詩の）と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに（通り）身放たず、かたはらに置きたまへり。

一二　憂しとのみひとへにものは思ほえで

ひだりみぎにもぬるる袖かな

（大層な勢いで）

そのころ、大弐（一三）はのぼりける。いかめしく（一族が多く）類ひろく、（娘が沢山いて）娘がちにて、一四所狭かりければ、北の方は船にてのぼる。浦づたひに逍遙しつつ来るに、（須磨の浦は）ほかよりもおもしろきわたりなれば、心とまるに、大将かくておはすと聞けば、あいなう、（無駄なことなのに）好いたる（気取りたい年頃の娘たちは）若き娘たちは、（船の中にいても）船の内さへ（気が張って）はづかしう、一六心懸想せらる。まして五節の君は、綱手引き過ぐるもくちをしきに、琴の声、風につきて遙かに聞こゆるに、所のさま、

一 大弐のこと。大弐は長官の帥に代って実務を統べる場合が多いので、しばしば帥と呼ばれた。

二 迎えに出向いて来まして大勢おりますので。「まで」は「まうで」の「う」を表記しない形。

三 人目の多さを何かと気に致さなくてはならぬこともございまして、お側に上がることのかないませぬのはまことに残念でございます。勅勘の身の源氏を訪うことの世間への聞えを憚るのである。

四 大弐の息子の筑前の守。筑前は上国。国守は従五位下相当。筑前は大宰府のある所なので、はじめ府の管轄であったが、平安初期より国守を任命した。

五 源氏が、蔵人に引き立てて目をかけておやりになった者なので、本当に悲しい。蔵人は、ここは六位の蔵人。天皇の側近に奉仕するので、名誉の要職とされた。

六 大弐へのご返書も、その旨が書いてある。

七 あれこれ無理をして。別に使者を出すのである。

源氏のご身分の高さ　情趣を解する者は皆

人の御ほど、ものの音の心細さ取り集め、心ある限りみな泣きにけり。帥、御消息聞こえたり。

上京いたしましたならば　早速にお側に上がって

（大弐）いと遥かなるほどよりまかりのぼりては、まづいつしかさぶらひて、都の御物語もとこそ、思ひたまへはべりつれ、思ひのほかに

承りたいと　存じておりましたが

〔源氏が〕かくておはしましける御宿をまかり過ぎはべる、かたじけなう悲しうもはべるかな。あひ知りてはべる人々、さるべきこれかれ、

素通りいたしますのは　もったいなく

旧知の者で　親しい誰かれが

まで来向ひてあまたはべれば、所狭さを思ひたまへ憚りはべることどもはべりて、えさぶらはぬこと。ことさらに参りはべらむ。

また改めて　参上いたしましょう

など聞こえたり。子の筑前の守ぞ参れる。この殿の、蔵人になしかへりみたまひし人なれば、いとも悲し。いみじと思へども、また見る人々のあれば、聞こえを思ひて、しばしもえ立ちとまらず。「都離れてのち、昔親しかりし人々、あひ見ること難うのみなりにたるに、かくわざと立ち寄りものしたること」とのたまふ。御返りもさ

外聞を憚って　〔筑前守は〕長居もできない　ひどく悲しく思うけれども　ほかに人目も多いので

〔源氏〕　こうしてわざわざ立ち寄ってくれたとは

八 琴の音に引き止められている私の、綱手縄のようにたゆたう心をあなたはご存じでしょうか。「綱手縄」は、船を引く縄。「引き」に「弾き」を掛ける。

九 （こちらからお便りをさし上げる）さし過ぎたまねも「人な咎めそ」でございます。「いでわれを人な咎めそ大船のゆたのたゆたにもの思ふころぞ」――いえ、もう、誰も私をあやしまずにおいて下さい、大船がゆらゆらと漂うように、あの人を思って心定まらぬ頃なのです（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）を引く。

一〇 本当に私を思う気持があって心が揺らぐのなら、このまま通り過ぎて行かれるでしょうか、須磨の浦を。

一一 「思ひきや鄙の別れに衰へて海士の縄たきいさりせむとは」――思いもしないことだった、都に別れて田舎の生活にやつれ、海士の釣縄をたぐって漁をしようとは（『古今集』巻十八雑下、隠岐の国に流されてはべりける時によめる　篁朝臣）を引く。

一二 昔、宿場の長に、詩をお与えになった人もあったが。道真の故事をさす。「また、播磨の国におはしまし着きて、明石の駅といふ所に御宿りせしめたまひて、駅の長のいみじく思へる気色を御覧じて、作らしめたまふ詩、いと悲し。駅長驚くこと莫れ時の変改を一たび栄き一たび落つる是れ春秋」（『大鏡』時平伝）。「句詩」は、一句、二句のみの詩。「口詩」（口頭で吟ずる詩）とする説もある。

源氏を恋う人々と、弘徽殿の大后の怒り

やうになむ。守、泣く泣く帰りて、おはする御ありさま語るに、〔父に〕帥よりはじめ、迎への人々、縁起でもないほどにみなが激しく泣いたまがまがしう泣き満ちたり。五節は、とかくして聞こえたり。

琴の音にひきとめらるる綱手縄
たゆたふ心君知るらめや

すきずきしさも、人なとがめそ。

〔源氏は〕にやりとして気圧されるほどのお美しさだと聞こえたり。ほほゑみて見たまふ、いとはづかしげなり。

（源氏）心ありて引き手の綱のたゆたはば
うち過ぎましや須磨の浦波

いさりせむとは思はざりしはや。思いもしませんでしたよ

とあり。駅の長に句詩取らする人もありけるを、〔五節は〕ここに一人残ってしまいたいように思われたまして落ちとまりぬべくなむおぼえける。

都には、月日過ぐるままに、帝をはじめたてまつりて、〔源氏を〕恋ひきこゆるをりふし多かり。春宮は、まして常におぼし出でつつ、忍びて

泣きたまふを、見たてまつる御乳母、一まして命婦の君は、いみじうあはれに見たてまつる。入道の宮は、春宮の御ことをゆゆしうのみおぼしに、大将もかくさすらへたまひぬるを、いみじうおぼし嘆かる。御兄弟の親王たち、むつましう聞こえたまひし上達部など、はじめつかたは、とぶらひきこえたまふなどありき。あはれなる文を作りかはし、それにつけても、世の中にのみめでられたまへば、后の宮聞こしめして、いみじうのたまひけり。「朝廷の勘事なる人は、心に任せてこの世のあぢはひをだに知ること難うこそあなれ。おもしろき家居して、世の中をそしりもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人のひがめるやうに追従する」など、あしきことども聞こえければ、わづらはしとて、絶えて消息聞こえたまふ人なし。

二条の院の姫君は、ほど経るままに、おぼしなぐさむをりなし。東の対にさぶらひし人々も、皆わたり参りしはじめは、などかさしもあらむと思ひしかど、見たてまつり馴るるままに、なつかしう

藤壺
流浪なさっているのを
源氏
親しくご交際申しておられた
お便りをさし上げられる方などもあった
心を打つ
公卿
漢詩
世の礼讃をお受けになるばかりなので
弘徽殿の大后
きびしくおっしゃった
（弘徽殿）
悪く言い非難して
よくない噂がいろいろ伝わって来たので
かかわり合うと面倒だと〔源氏に〕
紫の上
〔紫上を〕まさか
お側近く仕え馴れるにつれて
さほどではあるまいと
やさしく

一 まして、事情を知る王命婦は。藤壺の代りに東宮について宮中にいる（二二一頁参照）。
二 東宮のお身の上に凶事が起りはせぬかとお案じになってばかりいたところへ。源氏との密通が露顕して、東宮を廃されはしないかと案じるのである。
三 源氏の異母兄弟。帥の宮などが特に親しい（二一二頁参照）。
四 朝廷のお叱りを蒙った人は、気ままに日々の食事を味わうこともむつかしいものとかいうことです。
五（源氏は）趣向を凝らした住居を構えて。
六（世間の者は世間の者で）あの、鹿を馬だと言ったという人が、間違っているのと同じように、源氏の意を迎えている。「趙高乱を為さんと欲す。群臣の聴かざるを恐れ、乃ち先づ験を設け、鹿を持して二世に献ず。曰く、馬也と。二世笑つて曰く、丞相誤れるか、鹿を謂ひて馬と為すと。左右に問ふに、左右或いは黙し、或いは馬と言ひ、以つて趙高に阿り順ふ。或いは鹿と言ふ者あり。高因つて、陰に諸の鹿と言ふ者に中つるに、法を以つてす」（『史記』秦始皇本紀）を引く。
七 源氏にお仕えしていた女房たちも。「東の対」は、二条の院における源氏の居室（若紫二三六頁参照）。
紫の上、女房たちの信頼を得る
八 皆、こちら（紫の上の住む西の対）に移ってまいったはじめの頃は。（二一五頁参照）

九 身分のある女房たちには、（紫の上は）時たま姿をお見せになる。几帳などに隠れて、容易に姿を見せないのを嗜みあることとした。

一〇 自分でさえ（こんな所に住もうとは）思いもかけぬ運命と思われる侘住いに。

一一 どうして、紫の上を伴っては（暮せよう）、いかにもそぐわないことであろうと思い返しなさる。「いかでかは、うち具しては」「つきなからむ」と、

源氏、流謫の生活に耐える

思案の浮ぶままを言葉にした文章。

一二 もの珍しい下々の者の暮しを身近に見聞きされるにつけても。「見たまへ知らぬ」は「見たまひ知らぬ」の誤りか。

一三 自分の身分にそぐわず、もったいないことだと、我ながらお感じになる。源氏が、自らをいとおしむ気持。

一四 以下、そうした源氏の見聞の一端。

一五 「須磨の海士の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）を念頭に置いている。

一六 （自分はこんな見知らぬ世界に暮しているが）しばしばも便りを寄こしてほしいものだ、恋しい京の人よ。「山がつのいほりに焚ける柴（山に住む者たちの小屋で焚いている柴）」は「しばしばも」に言い掛ける序詞。「山がつ」に対して「里人」という。

美しい〔紫上の〕をかしき御ありさま、暮し向きのことに気を配るご配慮もまめやかなる御心ばへも、思ひやり深うあはれなれば、あるのでまかで散るもなし。お暇を取って去る者もない九なべてならぬ際の人々には、ほの見えなどしたまふ。そこらのなかにすぐれたる御心ざしもことわりなりけりと見たてまつる。大勢の女君の中でとりわけ源氏のご愛情が深いのも〔源氏つきの女房は〕

かの須磨の御住ひには、久しくなるままに、え念じ過ぐすまじうおぼえたまへど、とても我慢しきれないようにお思いになるが一〇わが身だにあさましき宿世とおぼゆる住ひに、こうした田舎いかでかは、うち具しては、つきなからむさまを思ひ返したまふ。所につけて、なので〔都とは〕よろづのことさまかはり、見たまへ知らぬ下人のうへをも、見でご覧になったこともなかったので一二たまひならはぬ御ここちに、一三めざましうかたじけなう、みづからおぼさる。一四煙のいと近く時々立ち来るを、一五これや海士の塩焼くならむとおぼしわたるは、お住居のおはします後の山に、柴といふものふすぶるなのだったりけり。めづらかにて、

一六山がつのいほりに焚けるしばしばも

ことととひこなむ恋ふる里人

冬になりて雪降り荒れたるころ、〔源氏は〕空のけしきもことにすごくながめたまひて、琴を弾きすさびたまひて、良清に歌うたはせ、大輔、横笛吹きて、遊びたまふ。心とどめてあはれなる手など弾きたまへるに、こともののの声どもはやめて、〔人々は〕涙をのごひあへり。昔、胡の国につかはしけむ女をおぼしやりて、〔漢帝の胸中は〕ましていかなりけむ、この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむこと、など思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、「霜の後の夢」と誦じたまふ。月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所は、奥まで隈なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入りかたの月かげ、すごく見ゆるに、〔源氏〕「ただこれ西に行くなり」と、ひとりごちたまひて、

いづかたの雲路にわれもまよひなむ

月の見るらむこともはづかし

例の、まどろまれぬ暁の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

〔源氏〕友千鳥諸声に鳴く暁は

一 民部の大輔、惟光。前出（二三九頁）。

二 王昭君のこと。漢の元帝の竟寧元年（紀元前三三年）、匈奴の呼韓邪単于の妃としてつかわされた。「胡」は、匈奴のこと。元帝は後宮が多く、画工に作らせた絵姿によって宮人を召した。画工に賄賂を贈らなかった王昭君は、召されることなく、匈奴が入朝して宮人を妃として求めた時、元帝は絵姿によって王昭君を選んでつかわした。出発に際して王昭君が後宮第一の美人であることを知った帝はいたく後悔し、画工を皆処刑して市にさらしたという（『西京雑記』）。

三 「翠黛紅顔錦繡の粧　泣沙塞を尋ねて家郷を出づ　辺風吹き断つ秋の心緒を　隴水に流れ添ふ夜の涙行　胡角一声霜の後の夢　漢宮万里月の前の腸　昭君若黄金の賂を贈らましかば　定めて是身を終ふるまでに帝王に奉らまし」（『和漢朗詠集』下雑、王昭君　大江朝綱）。「胡角」は、胡人の吹く角笛。

四 「暁に向むとする簾の頭に白露を生せり　終宵床の底に青天を見る」（『和漢朗詠集』下雑、故宮付故宅　三善善宗）による。

五 「蓂発き桂香しくして半円ならむとす　三千世界一周する天　天玄鑑を廻らして雲将に霽れむとす　唯是西に行く左遷ならじ」（『菅家後集』月に代りて答ふ）。月に託してわが身の無実を詠じたもの。

六 これから先、自分も果てしない旅の空のどこにさすらうのであろう、まっすぐ西をさして行く月が、私を見てどう思うか気はずかしい。

七 友千鳥が、声を合せて鳴く明け方は、旅の宿りにただ一人目覚めて泣く私も心強く思われる。「友千鳥」は、群れをなしている千鳥。

八（唱和してくれる人もないので）繰返し、独り口ずさんでお休みになっている。

九 明け方まだ暗いうちに手をお洗いになり。

一〇 心に仏を念じ、口に仏の名号や経文を唱えること。

明石の入道、源氏の噂を聞き、娘を奉ろうと思い立つ

一一 一巻若紫一八七頁参照。

一二 ほんのちょっと、ご面談できないものか。良清を通じて、源氏への接近をはかったのである。

一三 こちらの申し出を承知するはずもないだろうから、なまじかかわり合って、事が成らずにすごすごと帰る後ろ姿も、もの笑いになるだけだろうと。

一四（自信がなく）気が滅入って、（明石に）出かけない。「くんじ」の「ん」は、もと促音「つ」の表記。

一五 入道は、娘についてとんでもない高い望みを持っているので。

一六（良清など相手にせずに）今まで過して来たのだが。

ひとり寝覚の床もたのもし

また起きたる人もなければ、かへすがへすひとりごちて臥したまへり。夜深く御手水参りて、念誦などしたまふも、めづらしきことのやうに、めでたうのみおぼえたまへば、え見たてまつり捨てず、家にあからさまにもえ出でざりけり。

明石の浦は、ただはひわたるほどなれば、良清の朝臣、かの入道の娘を思ひ出でて、文など遣りけれど、返りことも[娘は]せず。父の入道ぞ、「聞こゆべきことなむ。あからさまに対面もがな」と言ひけれど、うけひかざらむものゆゑ、行きかかりて、むなしく帰らむ後手もをこなるべしと、屈じいたうて行かず。

世に知らず心高く思へるに、国の内は、守のゆかりのみこそは、かしこきことにすめれど、ひがめる心はさらにさも思はで年月を経ける[娘の]に、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、「桐壺の更衣の御腹の、源氏の光君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨

ほかに
ただもう結構など様子にお見えになるので〔源氏を〕とてもお見限りできないで
ほんの気軽に行けるほどの近さなので
申し上げたいことがあります
播磨一国では
国守の一族だけを
変り者の入道は
えらいものと思っているようだが
お咎めを受けられて

一 娘のご宿縁で、こんな思いがけぬことがあるのだ。「吾子」は、わが子をいとしんで呼ぶ言葉。
二 何とかして、こういう機会に。源氏が近くに来ている時に。
三 こっそり帝の御妻とも間違いを犯しなさって。朧月夜のこと。
四 何でこんなみすぼらしい田舎者をお心にとどめられましょうぞ。「まさに」は、反語の意に用いる。
五 婿になって源氏が娘にお心をとどめて下さるようならば、ともかく。
六 （入道は）ひどくぶつぶつと文句を言っている。母親の言い分にはっきり反対できないでいる様子。

の浦にものしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君にたてまつらむ」と言ふ。母、「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻ども、いと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへあやまちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山がつを、心とどめたまひてむや」と言ふ。腹立ちて、「え知りたまはじ。思ふ心ことなり。さる心をしたまへ。ついでして、ここにもおはしまさせむ」と、心をやりて言ふも、かたくなしく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり。

（おいでになるとのことだ）（源氏）（娘を）（まあ）（とんでもない）（源氏は）（身分のある）（それだけでなく）（こうまで世間で騒がれなさるというお方が）（人道は）（お分りになる）（格別の考えがあるのだ）（そのつもりでいて下さい）（機会を作って）（調子づいて）（頑愚に）（お出で願おう）（家の中を）（飾り立てて）（娘を）（大切にしている）

母君、「などか、めでたくとも、ものはじめに、罪にあたりて流されておはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても心をとどめたまふべくはこそあらめ、たはぶれにてもあるまじきことなり」と言ふを、いといたくつぶやく。「罪にあたることは、唐土にもわが朝廷にも、かく世にすぐれ、何ごとにも人に異になりぬる人の、かなら

（どうして）（結構なこととは申せ）（結婚の門出に）（婿にと思いましょう）（冗談にも）（そんなことはあるはずがありません）（入道）

七　源氏の亡き母御息所。桐壺の更衣。以下、源氏と明石の入道の血縁関係を説く。

八　大納言で按察使を兼ねる。按察使は、地方行政の監察官で、早く陸奥、出羽の二国に限定され、この時代は名目だけの兼官。桐壺の巻には単に大納言とのみある（一巻一二頁、二三頁）。

九　大層すばらしい方だという評判が高くて。「警策」はもと詩文のすぐれていることをいう。次の「国王」とともに、漢文風な堅い用語で、入道の素養や人柄を示している。

「大臣――明石入道
　　母――君
　按察使大納言――桐壺更衣
　　――桐壺院」

入道の娘の人柄

一〇　なるほど（父の入道が自信を持つだけあって）、高貴の姫君にも劣るまいと思われるほどだった。

一一　（そうかといって）おのれの分際に合った縁組などは、決してするまい。

一二　尼にもなろう、海の底に沈みもしよう。若紫の巻に、明石の入道が同様の旨を遺言していたとある（一八七頁参照）。

一三　住吉神社。大阪市住吉区にある。底筒男命、中筒男命、表筒男命の三柱を祀り、神功皇后も併祀される。海路の平安を守る神として信仰された。（図録一参照）

ずあることなり。いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのが叔父にものしたまひし按察使の大納言の御娘なり。いとかうざくなる名をとりて、宮仕へに出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人の嫉み重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへる、いとめでたしかし。女は心高くつかふべきものなり。おのれ、かかる田舎人なりとて、おぼし捨てじ」など言ひゐたり。

（どういうお方だと心得ているのか）（ことが肩を並べる者もなかったために）（帝がとりわけご寵愛あそばす）（源氏の君が世に残っていられるのは）（本当にすばらしいことだ）（このように女は）（父の私が）（娘をお見捨てには）

この娘、すぐれたる容貌ならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、一〇げに、やむごとなき人におとるまじかりける。身のありさまを、一一くちをしきものに思ひ知りて、高き人はわれを何の数にもおぼさじ、一二ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人々におくれなば、一三尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ、などぞ思ひける。父君、所狭く思ひかしづきて、年に二たび、一三住吉にまうでさせけり。神の御しるしをぞ、人知れず頼み思ひける。

（やさしく気品があって）（たしなみのある様子など）（〔娘は〕わが身の上を）（しがない田舎者とわきまえていて）（高貴の方は自分などを人並みにもお思いにはなるまい）（頼りに思う親たちに先立たれたら）（ご大層にあがめかしずいて）（ご霊験）（〔人道は〕）

須磨には、年かへりて（新年になって）、日長くつれづれなるに（春の日長で）、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて（ちらほらと）、空のけしきうららかなるに、よろづのことおぼし出でられて、うち泣きたまふをり多かり。二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御ありさまなどいと恋しく（おいたわしく思った女君たちの）、南殿の桜は盛りになりぬらむ、一年の花の宴に、院の御（桐壺院）けしき、内裏の上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひしも、思ひ出できこえたまふ。

（源氏）いつとなく大宮人の恋しきに
桜かざしし今日も来にけり

いとつれづれなるに、大殿の三位の中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてものしたまへど、世の中（世の人望）あはれにあぢきなく、もののをりごとに恋しくおぼえたまへば、この立って（噂が）との聞こえありて罪にあたるともいかがはせむとおぼしなして、に（止むを得ないとお心をきめられて）はかにまうでたまふ。うち見るより、めづらしううれしきにも、ひ（須磨に）（一目見るなり）

翌年の春、源氏、都を偲ぶ

一 前に、寓居を整えた時、「植木どもなどして」とあった、その中の一つであろう。（一二六頁参照）

二 紫宸殿前の左近の桜。

三 先年の、桜の宴。花宴の巻頭に、「きさらぎの二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ」とあったのをさす。源氏二十歳の時で、今から七年前になる。

四 今の朱雀院の帝。当時の東宮。

五 花宴の巻に、東宮が源氏の作った詩を誦したことは、特に見えない。

六 いつと限らず都の人が恋しいのに、昔、花の宴に桜を挿して遊んだ日も廻って来たことだ。今日は一層都恋しく思われる、の意。「百敷の大宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮しつ」（『和漢朗詠集』巻上、春興　赤人）による。花宴の巻に、特に東宮より桜の挿頭を賜って舞った、とある（五〇頁）。

宰相の中将、源氏を訪問

七 参議の中国風の呼び方。太政官の中枢の職。中納言に次ぐ。

八（源氏ほどの人の浮沈を見て以来）この世を物思わしくつまらなく思って。

九 うれしさと悲しさ、二つの感情が同じ一つの涙になって流れるのだった。「うれしきも憂きも心はひとつにて分れぬものは涙なりけり」（『後撰集』巻十六雑二、読人しらず）による。

一〇「五架三間新なる草堂　石の階松の柱竹編める墻　南の簷は日を納れて冬の天暖かなり　北の戸は風を迎へて夏の月涼し　砌に灑く飛泉は纔に点ずること有り　窓を払ふ斜竹は行を成さず　来春更めて東廂の屋を葺かむ　紙閣蘆簾孟光を著かしむ」（『白氏文集』巻十六、律詩「香炉峯の下に、新たに山居を卜し、草堂初めて成る時に、偶、東壁に題す」）を踏まえて書く。

一一 薄紅色の黄色がかった袿に。「ゆるし色」は、禁色（深紅の色）に対する語。

一二 青色がかった縹色。服喪中、仏事などのほか、旅装などの着用例がある。

一三 二人で盤を隔てて賽を振り、駒石を動かし早く敵陣に入るのを勝ちとする中国伝来の遊び。

一四 二人で盤上の石を指で弾いて、敵の石に当るのを勝ちとする遊び。

一五 念仏誦経に用いる道具。数珠、花立、香炉、机など。

一六 何やら分らぬことをしゃべっているのも。「さへづる」は、意味が分らず、鳥の囀りのように聞えること。

一七（お二人が）お召し物などを褒美に賜るのを、海士は生きているかいがあったと喜んでいる。「かひ」に「貝」、「かづく」（賜り物を肩に掛ける）に、海に潜って貝などを取る意を掛ける。

須磨

とつ涙ぞこぼれける。住ひたまへるさま、言はむかたなく唐めいたり。所のさま、絵にかきたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかし。山が住人のようにつめきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫、うちやつれて、ことさらに田舎びもてなしたまへるしも、いみじう、見るに笑まれてきよらなり。取り使ひたまへる調度も、かりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁、双六の盤、調度、弾棊の具など、田舎わざにしなして、念誦の具、行ひ勤めたまひけりと見えたり。もの参れるなど、ことさら所につけ、興ありてしなしたり。海士ども漁りして、かひつもの持て参れるを、召し出でて御覧ず。浦に年経るさまなど問はせたまふに、さまざま安げなき身の愁へを申す。そこはかとなくさへづるも、心の行方は同じこと、何か異なると、あはれに見たまふ。御衣どもなどかづけさせたまふを、生けるかひありと思へり。御馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞな

（山里の粗末ではあるが）（質素なりを）（見るからに）（ほほえましく美しい）（親しく）（道具）（当座の物を用意してあるだけで）（すっかり呪きこめる）（付風の道具）（お食事をさし上げるにも）（場所柄らしく）（風趣を盛って調してある）（貝の類）（〔お前に〕）（苦労の多い身の）（辛さ）（〔家来に〕）（かわいそうにお思いになる）（思いは同じことで）（近くに立て並べて）（むこうに見える倉か何かに入って）

一 催馬楽、律「飛鳥井」。「飛鳥井に　宿りはすべし　や　おけ　蔭もよし　みもひも寒し　御秣もよし」という歌詞。「御馬ども近う立てて……稲取り出でて飼ふなど」の実景を見て、歌い出したもの。

二 （お二人のお話は）尽きそうにもないので、なまじその一端もここに伝えることはできない。草子地。

三 なまじ、再会の喜びを味わったために、別離が一層つらく思われる。

四 素焼きの盃でお酒を召し上がって。

五 白楽天が親友の元稹（微之）と五年ぶりに遇い、語り尽せぬ思いを託して贈った詩の一節。「一たび別れて五年方に面を見る　相携へて三宿し未だ船を廻らさず　坐して日暮るるより唯長歎す　語りて天の明くるに到るまでに竟に未だ眠らず　歯髪蹉跎として将に五十になんなんとす　関河迢遰として三千を過ぐ　生涯は共に滄江の上に寄す　郷国は倶に抛つ白日の辺　往事眇茫として都て夢に似たり　旧遊零落して半泉に帰す　酔の悲しび涙を灑く春の盃の裏　吟苦にして支頤つく暁の燭の前」（『白氏文集』巻十七、律詩）

六 なつかしい都をいつの年の春に見ることだろう、羨ましいのは北に帰る雁だ。雁に寄せて、中将が帰るのを羨む。雁は春、北に帰る。都は須磨からは北にあるので、こういう。「我は遷客たり汝は来賓　共に是蕭々として旅に漂ふ身なり　枕を欹てて帰去の日を思量するに　我は何れの歳とか知らむ汝は明春なり」（『菅家後集』旅雁を聞く）を踏まえる。

る稲取り出でて飼ふなど、めづらしう見たまふ。〔中将は〕飛鳥井すこし歌ひて、月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、若君の何とも世をおぼさでものしたまふ悲しさを、〔一別以来の〕大臣の明け暮れにつけておぼし嘆く、〔祖父大臣が〕など語りたまふに、〔源氏は〕堪へがたくおぼしたり。尽きすべくもあらねば、なかなか片端もえまねばず。終夜まどろまず、文作り明かしたまふ。〔漢詩〕さ言ひながらも、〔世間の噂になるのを恐れて〕ものの聞こえをつつみて、急ぎ帰りたまふ。〔中将は〕いとなかなかなり。御土器参りて、「酔ひの悲しび涙そそく春の盃のうち」と、諸声に誦じたまふ。御供の人も涙をながす。〔供人もそれぞれ〕おのがじし、〔迫る別れを〕はつかなる別れ惜しむべかめり。〔明け方の〕朝ぼらけの空に雁連れてわたる。〔中将が〕主人〔源氏の〕君、

故里をいづれの春か行きて見む

うらやましきは帰るかりがね

〔中将は〕宰相、〔少しも出発する気になれず〕さらに立ち出でむここちせで、

あかなくにかりの常世を立ち別れ

七 心残りのままにこの地を去りましては、花の都に帰るにも、心乱れて道も分らぬことでしょう。「かりの」は「雁」と「仮」の掛詞。「常世」は、雁の故郷。「仮の常世」は、源氏のいる間、須磨の地は「常世」（仙境）であると賞める意があろう。

八 中将から源氏への都のみやげの品々。

九 こんなありがたいご訪問のお見送りにと。客が帰る時に贈る「送り物」の馬である。

一〇 黒馬。『河海抄』に「よそにありて雲居に見ゆる妹が家に早く到らむあゆめ黒駒」「わが帰る道の黒駒心あらば君は来ずともおのれいななけ」（『拾遺集』巻十四恋四）の二首をあげるのは適切であろう。

一一（勅勘の身からの贈り物ゆえ）不吉に思われるかもしれないが。

一二「胡馬北風に依り　越鳥南枝に巣ふ」（『文選』第二十九、古詩十九首）による。『釈』『河海抄』は、「胡馬北風に嘶え」としてあげる。胡馬（北方産の馬）は北風に故郷を思う、の意。嘶き勇んで故郷に帰るでしょうと、中将の帰路を祝った言葉。

一三 なまじ短い再会で、別れが悲しい。

一四 雲居近く飛び交う鶴―あなたも、宮中にあってご覧下さい、私はこの春の日のように、一点の疚しいところもない身です。必ず帰京できるでしょう。

一五 昔の賢人でも、はかばかしく再度政界に復帰することはむつかしいものですから。菅公などを念頭に置いて言っている。

中将、帰京する

花の都に道やまどはむ

さるべき都の土産など、由あるさまにてあり。主人の君、かくかたじけなき御送りにとて、黒駒たてまつりたまふ。「ゆゆしうおぼされぬべけれど、風にあたりては、嘶えぬべければなむ」と申したまふ。世にありがたげなる御馬のさまなり。「形見にしのびたまへ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人とがめつべきことは、かたみにえしたまはず。

（源氏）一一 風流に仕立ててある（源氏）一二 二つとないような（源氏）一三 これを形見に思い出して下さい（源氏）一四 世間に聞えたみごとな笛など贈られたぐらいで 人目に立つようなことは どちらからもご遠慮なさる

日やうやうさしあがりて、心あわたたしければ、かへりみのみしつつ出でたまふを、見送りたまふけしき、いとなかなかなり。「いつまた対面たまはらむとすらむ。さりとも、かくてやは」と申したまふに、主人、

（源氏）一四「雲近く飛びかふ鶴もそらに見よ
われは春日のくもりなき身ぞ」

（中将が）（源氏の）一三 後を振り返り振り返りして お目通りが叶うのでしょう いくら何でも このままでは

一五 かつは頼まれながら、かくなりぬる人は、昔のかしこき人だに、は

一方ではそう期待されますが こんな目に遭った人は

かばかしう世にまたまじらふこと難くはべりければ、何か、都のさかひをまた見むとなむ思ひはべらぬ」などのたまふ。宰相、

（何の　都の地を）

「たつかなき雲居にひとりねをぞなく
つばさ並べし友を恋ひつつ

（二度と見ようとは思っていません）

かたじけなく馴れきこえはべりて、いとしもとくやしう思ひたまへらるるをり多くなむ」と、しめやかにもあらで帰りたまひぬる名残、

（もったいなくも親しくさせていただきまして）（しんみりお話しになる間もなく）

〔源氏は〕いと悲しうながめ暮らしたまふ。

弥生の朔日に出で来たる巳の日、「今日なむ、かくおぼすことある方は（悩みごとのおありの）（知ったかぶりの人が）る人は、御禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、〔源氏は〕海辺の景色もご覧になりたくて（簡略に）づらもゆかしうて出でたまふ。いとおろそかに、軟障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓へさせたまふ。

舟にことことしき人形乗せて流すを見たまふにも、よそへられて、（わが身のように思われて）

〔源氏〕知らざりし大海の原に流れ来て
ひとかたにやはものは悲しき

一　あなたがいらっしゃらなくて頼み所のない宮廷で、私は一人声をあげて泣いているのです、ともに帝にお仕えしてきた友を慕っては。「たつかなき」は「たつきなき」と同じ。「たつ」に「鶴」を掛ける。

二　なぜあんなにお親しみ申したのかと。「思ふとていとしも人にむつれけむしかならひてぞ見ねば恋しき」（『源氏釈』所引）（一巻夕顔一七二頁注二参照）。

三　三月の上旬に廻って来た巳の日。「上巳の祓へ」と言って、中国古代では、水辺に死霊を招じて祀り、不祥を払った。わが国でも、平安初期以来、その風習を倣った。

四　海や川の水で、罪、穢れを洗い流すこと。

五　幔幕のようなもの。絹で作り、表側に絵を描く。（図録一二参照）

六　摂津の国に通って来ていた陰陽師。当時は、諸国にも陰陽師が置かれたが、これは京から通っていたのであろう。「陰陽師」は、陰陽寮の職員で占い祓えのことをする。

七　神に贖物を捧げて祈り、罪、穢れ、災厄を除くこと。

八　大きな人形。「人形」は、人の形をしたもの。人形。禊や祓えの時、罪、穢れをこれに移して、川や海に流した。「ことことしき」とあるのは、等身大であろう。

九　（人形のように）見も知らぬ大海原に流浪してき

三月上巳の日、源氏、海浜に出て御禊をし、暴風雨に襲われる

て、さまざまな悲しい思いをすることだ。「ひとかた」は「一方」と「人形」の掛詞。

一〇 八百万の神々も私をあわれと思し召すことであろう、これという犯した罪はないのだから。「八百よろづの神」は、すべての天神地祇のこと。大祓えの祝詞に用いられる言葉。

一一 源氏の歌に、神々が感心してたちまち天変地異が起ったことを暗示する書き方。

一二 肱笠雨とかいう俄か雨が。「肱笠雨」は、笠が間に合わず、肱をかざし、袖を笠にするほど急に降ってくる雨。「肱笠雨とか」とあるのは、催馬楽、呂「妹が門」の歌詞に、「妹が門　夫が門　行き過ぎかねてや　我が行かば　肱笠の　肱笠の　雨もや降らなむ　死出田長　雨宿り　笠宿り　宿りてまからむ　死出田長」とあるのを念頭に置いた表現。「死出田長」は、郭公の異名。

一三 広く一面に光がみなぎって。「衾」は、夜具のこと。上に掛けるので大きく仕立ててある。「張る」は、弛みなく大きく広げること。

須磨

言いようもなくど立派に

とて、ゐたまへる御さま、坐していられるご様子は さる晴れに出でて、言ふよしなく見えたまふ。

海の面うららと凪ぎわたりて、行方も知らぬに、来し方行く先おぼし続けられて、

（源氏）八百よろづ神もあはれと思ふらむ

犯せる罪のそれとなければ

とのたまふに、にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。御祓へもし果てず、立ち騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹き散らし、またなき風なり。波いといかめしう立ち来て、人々の足をそらなり。海の面は、衾を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかかるここちして、からうしてたどり来て、「かかる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、けしきづきてこそあれ。あさましうめづらかなり」と、まどふに、なほ止まず

海辺の晴れ晴れしい所で

人々は足も地に着かぬ有様である

稲妻が光る

〔雷が〕

〔人々〕

〔源氏の住居に〕

〔雷は〕

動転しているが

信じがたい稀有なことだ

って吹くものだ

二五五

一 雨脚。雨の降るのが白く糸を引いたようになる様をいう。

明け方、源氏の仮睡の夢に異形の者が現れる

二 龍族の王。海底の龍宮に住むとされた。

三 美しいものを大層ひどく好むものなので、自分に目をつけたのだとお思いになると。彦火々出見尊が、兄から借りた釣針を海中に落して失い、海底の宮に到り、海神の娘の豊玉姫と結婚して三年を過した海幸山幸の伝承がある。『河海抄』は、海神が尊の容貌をめでて娘の豊玉姫と結婚させたとして（『日本書紀』一書の伝承）この話を引き、『花鳥余情』は、豊玉姫を次の明石の巻の明石の入道の娘に思いよそえて書いたとする。

鳴りみちて、一雨の脚、あたる所徹りぬべく、音を立てて はらめき落つ。かくて このまま 世は尽きぬるにやと、心細く思ひまどふに、源氏 君は、静かに のどやかに経うち誦じておはす。暮れぬれば、雷すこし鳴り止みて、風ぞ、夜も吹く。「多く立てつる願の力なるべし。今しばし、この調子だったら かくあらば、波に 〔海に〕呑まれてしまったろう 〔人々〕 引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、津波 とりあへず人は 命を落すものだとは そこなはるるとは聞けど、いとかかることは、まだ知らず」と言ひあへり。

暁がた、源氏 みなうち休みたり。君もいささか寝入りたまへれば、何者の姿とも判じがたい人が現れて そのさまとも見えぬ人来て、「など、どうして 宮からお呼びであるのに参上なさらぬのか 宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、手探りに捜しまわると思ううちに たどりありくと見るに、はっと目覚めて おどろきて、さては、海のなかの龍王の、二 三いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけりとおぼすに、いとものむつかしう、気味が悪く この住ひ堪へがたくおぼしなりぬ。

明(あか)

石(し)

須磨の巻末に書かれた嵐はなお止まず、数日を経過する。かろうじて二条の院の紫の上のもとから使者が来て、往来も杜絶して政務も行われない都の天候の異変を告げる。高潮と雷鳴の中で源氏は住吉明神に祈念をこらすが、落雷によって邸の一部も炎上、その夜、夢枕に亡き桐壺院が立って、住吉明神のお導きのままにこの浦を去るようにとさとす。三月十三日のことであった。その明け方、明石の入道が舟を仕立てて源氏を迎えに来る。入道にも源氏を迎えるようにとの夢のお告げがかねてあったのだった。

須磨から明石の入道の居館に移った源氏はようやく落着きを得た。四月、初夏の一夜、源氏は琴を弾じて思いをやり、入道も琵琶、箏の琴でお相手する。その夜、入道は、自分の娘に寄せる期待を源氏にかき口説き、次の日から源氏は岡辺の宿に住む娘に文をやるようになる。都では三月十三日の夜、帝は夢に桐壺院の叱責を受けられて以来眼病に悩まれ、外祖父太政大臣は亡くなり、弘徽殿の大后も病がちになった。

八月十三日、折柄の月明の夜、源氏は、岡辺の宿で入道の娘と契った。後の明石の上である。源氏はそのことをそれとなく都の紫の上に知らせるのであった。

年明けて七月二十余日、ついに源氏に帰京するようにとの宣旨が下った。帰京した源氏は権大納言に昇進、帝のご譲位も近いことが予想される。源氏が帝に久しぶりにお目にかかったのは八月十五日の月明の夜で、須磨、明石の流謫の生活は二年数カ月で終った。巻名は、物語の舞台となった地名により、前巻と対をなす命名である。

一　須磨の巻末の三月上巳の日の暴風雨の叙述を直接受けた書き方。この暴風雨を『河海抄』『花鳥余情』は『尚書』金縢篇の故事によるとする。周公旦は、弟の管叔、蔡叔の讒言によって東都に居ること二年、その秋、雷電、大風が起り、成王は周公の金縢の書（武王が病の時、その将来を亀卜によって占うための祈願文を金属で厳封した櫃に納めたもの）を披見して周公が王室に功労のあることを悟ったところ、風雨たちまちにおさまったという。

二　今までの須磨の侘住いに加えて、この風雨によって将来もどうなるか分らぬ悲しいお身の上なので。

三　どうしたらよかろうか、暴風雨に遭ったからといって都に帰ることも。以下、「あと絶えなまし」まで源氏の心中。長徳二年（九九六）藤原伊周が大宰の帥に左遷されて播磨の国に留められたが、ひそかに上京して母に会ったことが露顕し、ついに九州まで流されたという例がある。

四　須磨の巻末の夢のくだりを参照。

五　京の源氏の私邸。紫の上のもと。

なお風雨止まず、京との音信杜絶、わずかに紫の上の使者来訪

一なほ雨風やまず、雷鳴りしづまらで日ごろになりぬ。いとど、（何日にもなった）（心細く思われることは数限りもなく）のわびしきこと数知らず、来し方行く先悲しき御ありさまに、（気を強く持つことも）心強うしも、えおぼしなさず、三いかにせまし、かかりとて都に帰らむことも、まだ世に許されもなくては、（世間に許されぬ身であってみれば）（今より一層もの笑いになるだけのことであろう）人笑はれなることこそまさらめ、（思い切ってここよりもっと深い山に分け入って消息を絶ってしまおうか）なほこれより深き山を求めてやあと絶えなまし、とおぼすにも、（波風の騒ぎに恐れをなして）波風に騒がれて、（などと）など、人の言ひ伝へむこと、後の世まで、いと軽々しき名をや流し果てむ、とおぼし乱る。四御夢にも、（源氏は）ただ同じさまなるもののみ来つつ、（そっくり同じ様子のあやしいものが相変らず現れては）（雲の晴れ間もなくて）まつはしきこゆと見たまふ。（お引き寄せ申すと）雲間もなくて明け暮るる日数に添へて、（日数が重なるにつれて）（都の事情もどうなのかますます気がかりで）京のかたもいとどおぼつかなく、（このまま）かくながら身をはふらかしつるにやと、（流浪の生涯を終ることになるのかと）（源氏は）心細うおぼせど、頭さし出づべくもあらぬ空の乱れに、（雨風に）出で立ち参る人もなし。五二条の院よりぞ、（わざわざ京から参上する人もない）あなが（お話にな

一 びしょ濡れになって参上して来た。
二 人間かそれともほかのものかともお見分けになれそうにない、見るなり追い払ってしまいそうな下人が。
三 （源氏は、そうした自分が）我ながらもったいなく。高貴な自分がこんな下々の者にまで親しみを感ずるとは、という気持。
四 すっかり弱気になってしまった今の自分の心のあり方が思い知られる。源氏の気持をそのまま地の文として書いているので、「思ひ知らる」と敬語がない。
五 （日頃悲しみに沈む私の心のみか）空までも、ますます閉じふさがるような感じで。
六 そちら須磨の浦風はどんなに激しく吹いていることでしょう、遙かにお案じしている私の袖を濡らして涙の絶え間もない今日この頃は。「波間」は、波（こは涙の比喩）の絶え間で、「浦風」の縁語。
七 一層お涙も増しそうで。「君惜しむ涙落ち添ひこの川の汀まさりて流るべらなり」（『古今六帖』四、別れ。『貫之集』七「君を惜しむ涙落ち添ふ」）によるか。紫の上と別れて暮している悲しみが改めてこみ上げてくるという意。
八 国家鎮護、七難即滅のため宮中で「仁王護国般若経」を講讃する勅会。七難とは、日月度を失う、宿星度を失う、火、雨、風、旱、鬼賊の七つの災い。天皇即位の時の一代一講の仁王会と臨時の仁王会とがあり、後者は春秋二季に行われる恒例となった。このほかにも、事があれば随時行われた。

ちにあやしき姿にて、一そほち参れる。道かひにてだに、二人か何ぞと（道ですれ違っても）（らぬひどい格好で）だに御覧じわくべくもあらず、まづ追ひ払ひつべき賤の男の、三むつましうあはれにおぼさるるも、四われながらかたじけなく、屈しにける心のほど思ひ知らる。御文に、

（紫上）恐ろしいほど小止みなく降り続くこの頃の空模様に
あさましくをやみなきころのけしきに、五いとど空さへ閉づるここちして、ながめやるかたなくなむ。
（心の晴らしようもありません）

六浦風やいかに吹くらむ思ひやる
袖うち濡らし波間なきころ

あはれに悲しきことども書き集めたまへり。ひきあくるより、七いと（書き連ねていらっしゃる）（〔手紙を〕）ど汀まさりぬべく、かきくらすここちしたまふ。（使）「京にも、この雨（悲しみに心もとざされる思いがなさる）風、いとあやしきもののさとしなりとて、仁王会など行はるべしと（まことに容易ならぬ神仏のお告げだということで）（行われる予定だという）なむ聞こえはべりし。内裏に参りたまふ上達部なども、すべて道と（どこも道路がふさがって）ぢて、政治も絶えてなむはべる」など、はかばかしうもあらず、かたくなしう語りなせど、京のかたのこととおぼせば、いぶかしうて、（とだえております）（はきはきともせず）（たどたどしい話しぶりだが）（様子が知りたくて）

九 以下は、使いの者がこの須磨の地の天候の異変に驚いて、京ではこれほどのことはなかった、という趣。

一〇 雹。長和二年（一〇一三）三月二十九日「未刻、雷鳴氷降、大如二梅李一」（『日本紀略』『河海抄』に引く）という記録もある。

一一 ひきつっているのを見るにつけても。「からし」は、つらい、苦しいの意。

翌日未明、暴風、高潮あり、住吉神社に願を立てるが、廊に落雷炎上

御前に召し出でて（事情をお訊かせになる（使））問はせたまふ。「ただ、例の雨のをやみなく降りて、風は時々吹き出でつつ、日ごろになりはべるを、（何日もたちましたのを）例ならぬことにおどろきはべるなり。いとかく、地の底徹るばかりの氷降り、雷のしづまらぬことははべらざりき」など、（普通でないことと）いみじきさまにおどろき懼ぢてをる顔のいとからきにも、（源氏は）心細さぞまさりける。（おびえきった表情で）

（このまま世界は滅びてしまうのであろうか）かくしつつ世は尽きぬべきにや、とおぼさるるに、そのまたの日（翌日）の暁より、風いみじう吹き、潮高う満ちて、波の音荒きこと、巌も山も残るまじきけしきなり。雷の鳴りひらめくさま、（稲妻の光る）さらに言はむかたなくて、（頭上に）落ちかかりぬとおぼゆるに、ある限りさかしき人なし。（供人）「われはいかなる罪を犯してかく悲しき目を見るらむ。父母にもあひ見ず、（いとしい）かなしき妻子の顔をも見で（死なねばならぬとは）死ぬべきこと」と嘆く。（源氏）君は（お気持を落着けて）御心をしづめて、何ばかりのあやまちにてか、この渚に命をば極めむと、（気を強くお持ちになるが）強うおぼしなせど、（あまり皆が恐れざわめいているので）いともの騒がしければ、色々の幣帛さげさせたまひて、（源氏）「住吉の神、近き境をしづめ（鎮護しておられる）守りたまふ。まこ

三 人々は皆生きた心地もない。「ある限り」は、その場にいる人全部。「さかし」は、しっかりしている。

一三 どれほどの過失を犯したからといって、この海辺に命を終るというのか。

一四 いろいろな色の捧げ物。「幣帛」は、神への供物の総称であるが、絹布などを串に插したものを称することが多い。

一五 住吉神社（大阪市住吉区）の祭神。底筒男命、中筒男命、表筒男命（後に神功皇后を合祀して四座）。航海の安全を守る海の神として信仰された。須磨からは淀川の河口を隔てて対岸に当る。（図録一参照）

とに迹を垂れたまふ神ならば、助けたまへ」と、多くの大願を立てたまふ。おのおの、みづからの命をばさるものにて、かかる御身の（二の次として）（かくも尊い源氏が）（心をふるい起して）三またなき例に沈みたまひぬべきことのいみじう悲しきに、心を起こして、すこしものおぼゆる限りは、身に代へてこの御身一つを救ひたてまつらむと、とよみて、諸声に仏神を念じたてまつる。「帝王の深き宮に養はれたまひて、いろいろの楽しみにおごりたまひしかど、深き御うつくしみ、大八洲にあまねく、沈める輩をこそ多く浮かべたまひしか。今、何の報いにか、ここら横様なる波風にはおぼほれたまはむ。天地ことわりたまへ。罪なくて罪にあたり、官、位を取られ、家を離れ、境を去りて、明け暮れ安き空なく嘆きたまふに、かく悲しき目をさへ見、命尽きなむとするは、前の世の報いか、この世の犯しかと、神仏明らかにましまさば、この愁へやすめたまへ」と、御社のかたに向きて、さまざまの願を立てたまふ。また海の中の龍王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴

（供人それぞれ）（多少とも気のたしかな者は皆）（大声をあげて）（慈は）（罪かと）（心の安まる時もなく）（都を去って）（前世の業報か）（雷は）（お立てさせになると）

一 本地垂迹説による。兜率天の高貴徳王菩薩が、鎮護国家のため住吉明神となって現れたとする伝説がある。
二 願いの叶った時に盛大な願ほどき（お礼詣り）を約束する願。その旨を願文に書く。
三 またと例のないような非運のうちにお命を落してしまわれそうなのがひどく悲しいので。「沈む」は、海辺の縁で用いた。
四 日本国中にあまねくゆきわたり。「大八洲」は、日本の古称。
五 悲境に沈んでいた者たちをたくさんお救い上げになりました。
六（しかるに）今、何の報いで、かくも恐ろしい非道の波風にお溺れになろうというのですか。
七 天地の神々よ、理非を明らかになさって下さい。
八 源氏が官位を剝奪されて除名の処分を受けたことは、須磨の巻二〇五頁に見える。
九 神仏が明らかに照覧なさいますのならば、この難儀をおしずめ下さい。
一〇 住吉神社の方に向って。次に「立てたまふ」と敬語があるから主語は源氏。前の祈願の言葉、後半は敬語がなく源氏自身の言葉のように読める。源氏もともに和した趣であろうか。
一一 仏経における異類。嵐をその所為かとも見ている。（須磨二五六頁参照）

一二 源氏のおられる寝殿に続いている廊。「廊」は、ここは寝殿と対の屋を結ぶものであろう（一巻図録六参照）。
一三 気も動転して、居合せた者は皆あわてふためく。「魂」は、性根というほどの意。
一四 食事を調進する雑舎とおぼしい建物に。
一五（そこに）身分の上下もなく難を避けて皆はいりこんで。

一六 源氏が今しがた移られた大炊殿があまりにも粗末で、いつもの御座所と違っているのも。
一七 あれほど大勢の人間が（落雷の時）踏み鳴らして右往左往した上に。「とどろかし」は、雷の縁でこう言った。「ごほごほと、鳴る神よりも、おどろおどろしく踏みとどろかす碓の音も」（一巻夕顔一四一頁）
一八（ここで）夜を明かしてから（お移し申そう）と皆で思案しているが。
一九 心に念じて仏名、経文などを口に唱えること。
二〇 前後のことをいろいろお考えになるが、とても気持が落着かない。
二一 雑木を編んで作った垣根の戸。山荘めいた趣。
二二 この近在には。「世界」は、地方、田舎の意。
二三 あれこれと確かにこの天変の意味を解き明かせる人もいない。当時の政治家が求める賢人である。

夜に入ってようやく風雨おさまり、源氏、危うく難をのがれる

りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落ちかかりぬ。炎燃えあがりて廊は焼けぬ。心魂なくて、ある限りまどふ。後のかたなる大炊殿とおぼしき屋に移したてまつりて、上下となく立ち込みて、いとらうがはしく泣きとよむ声、雷にも劣らず。空は墨をすりたるやうにて、日も暮れにけり。

やうやう風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、この御座所のいとめづらかなるも、いとかたじけなくて、寝殿に返し移したてまつらむとするに、焼け残りたるかたも、うとましげに、そこらの人の踏みとどろかしまどへるに、御簾などもみな吹き散らしてけり。夜を明かしてこそはとたどりあへるに、君は御念誦したまひて、おぼしめぐらすに、いと心あわたたし。月さし出でて、潮の近く満ち来けるあともあらはに、名残なほ寄せかへる波荒きを、柴の戸おしあけて、ながめおはします。近き世界に、ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやかくやとはかばかしう悟る人もな

一四 大炊殿 ひどく騒がしく
一五 上下 泣き叫ぶ声は
一六 御座 恐れ多いので
一七 寝殿に返し移した 廊の様子も 気味の悪い感じだし
一八 御簾 風に吹き飛んでしまって
一九 君は御念誦 源氏
二〇 潮の近く満ち来 去未来のことを察して
二一 名残なほ寄せかへる波荒きを 過ぎ
二二 ながめおはします 源氏は
二三 近き世界に ことの意味を見抜き

一 源氏がお聞きになっても分らないいろいろなことを皆でしゃべっているのも。「さへづる」は、都人には意味の分らぬ異様な方言で話すこと。

二 『細流抄』に「あまどものいふなり」とするが、地元の漁師たちの話を聞いて語る供人の言葉であろう。

三 大変心細い思いがするといったどころの話ではない。

四 海に鎮座ましまし神（住吉明神）のご加護をこうむらなかったなら、多くの潮道（潮の流れの道）の集まり会う遙かの沖に行方知れずになっていたことであろう。「ます」「潮の八百会」、いずれも祝詞の用語で、六月、十二月の晦日に行われる大祓えに見える。

桐壺院、源氏の夢枕に立ち須磨を去ることをすすめる

五 激しく荒れ狂った。「いりもむ」は、物を煮ったり揉んだりするように雷の鳴り荒れるさま。

六 気を張ってはおられたが、さすがに。

七 亡くなった父桐壺院。

八 恐れ多い父君のお姿にお別れ申して以来、あれこれと悲しいことばかり多くございますので。桐壺院と死別してからこのかた、弘徽殿の大后一派の政治的圧迫によって須磨に退居せざるを得なくなった事情をさす。

し。あやしき海士（漁師たちなどが）どもなどの、貴き人おはする所とて、集り参りて、聞きも知りたまはぬことどもをさへづりあへるも、いとめづらかなれど、〔供人は〕え追ひも払はず。「この風、今しばし止まざらましかば、潮（高潮が襲ってきて）のぼりて残る所なからまし。神のご加護は並々ならぬものでした）神の助けおろかならざりけり」と言ふを聞きたまふも、いと心細しといへばおろかなり。

〔源氏〕海にます神の助けにかからずは
潮の八百会にさすらへなまし

終日にいりもみつる雷の騒ぎに、さこそいへ、〔源氏は〕いたう困じたまひにければ、心にもあらずうちまどろみたまふ。物に寄りかかっていられると）ご生前そのままのお姿で夢枕にお立ちになって）かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、故院、ただおはしましさまながら立ちたまひて、〔院〕「など、（どうして）このようにむさくるしい所にいるのか）かくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出して、この浦を去りね」とのたまはす。いとうれしくて、〔源氏〕八「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきこと

（お疲れになったので）（つい我知らず）（うとうとなさる）（もったいない仮の）（立ち去れ）（仰せになる）

のみ多くはべれば、今はこの渚に身をや捨てはべりなまし」と聞こえたまへば、「いとあるまじきこと。これは、ただいささかなるものの報いなり。われは、位にありし時、あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るに、堪へがたくて、海に入り、渚にのぼり、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ、急ぎのぼりぬる」とて、立ち去りたまひぬ。

命を終ろうかと存します　院　とんでもないことだ　自分は　帝の位にあった時　別段の失政はなかったけれども　こうした機会に　こらえきれなく

飽かず悲しくて、「御供に参りなむ」と泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢のここちもせず、御けはひとまれるここちして、空の雲あはれにたなびけり。年ごろ夢のうちにも見たてまつらで恋しうおぼつかなき御さまを、ほのかなれど、さだかに見たてまつりつるのみ、おもかげにおぼえたまひて、わがかく悲しびを極め、命尽きなむとしつるを、助けに

名残惜しく　（源氏）ご一緒にお連れ下さい　誰もいず　月の顔のみきらきらとして　夢の中のこととも思えず　まだこのあたりにいられるような気がして　今まで何年も　激しくお泣きになって　夢の中のこととも思えず　お会いしたく思っていたお姿を　はっきりと拝見したことだけが　自分が

ハ　この天変は、ただほんのちょっとした罪の報いなのだ。「ものの報い」で一語。

一〇　知らず知らずのうちに犯した罪があったので、死後、そのつぐないをする間、余裕がなくて。桐壺帝は醍醐天皇を思わせる書き方がされているが（一巻桐壺三一頁、三三頁など参照）、醍醐天皇には、生前犯した五つの罪によって地獄に落ちたという伝説がある（北野縁起）。ここも、そうした伝説を思わせる。

一一　そなたが大変な難儀に苦しんでいるのを見ると。

一二　海を渡り、渚にあがりして、大層疲れてしまったが。桐壺院の霊が冥界からこの須磨の浦までやって来た道中をいう。

一三　帝（朱雀院）に奏上しなくてはならぬことがあるので、これから急いで京に上るのだ。

一四　ここからが、夢からさめた趣。

一五　「月の顔」は、月面。上の「人もなく」に対していう。

一六　はかない夢の中のことではあるが。

一七　ありありと心にお残りになって。「おもかげ」は、心の中の映像、幻。「おもかげに」と、副詞的に使われることが多い。

一 空を飛んで来られたのだと。亡き人の霊は空を飛ぶと考えられた。「天翔る」という例が多い。

二 夢で父院にお目にかかって、かえって悲しみにお気持も乱れて。

三 夢の中にもせよ、なぜもう少しでもお答え申し上げずにしまったのかと、みたされぬ思いで。

四 もう一度、父院が夢にお見えになるかと。

五 この源氏の仮のお住居をめざしてやって来る。

六 前播磨の守、明石の入道。若紫の巻の北山での噂話に「かの国の前の守、新発意」（一八六頁）と呼ばれている。「新発意」は、新たに仏道に入った者の称。

七 良清の正式の呼称。源氏で少納言（太政官の少納言局で詔勅宣下、印璽のことをつかさどる。従五位上相当）。若紫の巻で明石の入道親子の噂話をした人物。

八 私ごとで少々互いに気まずいことがございまして、これといった手紙のやりとりもせずに。その事情は須磨二四七頁に見える。

九 桐壺院が夢で、「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出して、この浦を去りね」と言われたこと。

翌暁、住吉明神の夢告により明石の入道の迎えの舟来る

翔りたまへると、あはれにおぼすに、よくぞかかる騒ぎもありける（ありがたく思われるにつけ）（このような天変もあってくれたも）と、名残たのもしう、うれしうおぼえたまふこと限りなし。胸つと（夢のあとも力づけられて）（胸もいっぱいになって）ふたがりて、なかなかなる御心まどひに、うつつの悲しきこともう（現実のこの悲しい境遇も）ち忘れ、夢にも御答へを今すこし聞こえずなりぬることといぶせさに、またや見えたまふと、ことさらに寝入りたまへど、さらに御目（わざと眠ろうとなさるけれども）も合はで、暁がたになりにけり。

渚に小さやかなる舟寄せて、人二三人ばかり、この旅の御宿りをさして来。何人ならむと問へば、「明石の浦より、前の守新発意の、（お迎えの舟を支度して）（お側にいられるならば）御舟よそひて参れるなり。源少納言さぶらひたまはば、対面して、（事情をご説明申しましょう）ことの心とり申さむ」と言ふ。良清おどろきて、「入道は、かの国（播磨の国）（長年親しく付き合っておりましたが）での知人での得意にて、年ごろあひ語らひはべりつれど、私にいささかあひ恨むることはべりて、ことなる消息をだに通はさで、久しうなりはべりぬるを、波のまぎれに、いかなることかあらむ」と、おぼめく。（波風の騒がしい折に）（どういうことなのでしょう）（不審がる）（お考え合せになることもあって）

源氏は君の、御夢などもおぼし合はすることもありて、「はや会へ」との

一〇 以下、入道の言葉。去る（三月の）一日の日の夢に。源氏は須磨の巻末で、「弥生の朔日に出で来たる巳の日」に海辺で祓えをした。

一一 異形のものが現れて告げ知らせることがございましたので。後に入道が明石に源氏を迎えて「まづ住吉の神を、かつがつ拝みたてまつる」（二七〇頁）ともあり、住吉明神のお告げである。

一二 十三日にあらたかな霊験を示そう。十三日とはすなわちこの日。霊験のことは次に見える。以下、夢告。

一三 須磨の浦に。「を」は強意の助詞。

一四 大変な雨や風、雷が、それと思い当らせてくれましたので。この天変が源氏の身の上にかかわることだと悟った、の意。「おどろかす」は、はっと気づかせる意。

一五 異朝にも、夢を信じて国を救うといった話はたくさんございますので。『河海抄』は『史記』殷本紀を引き、武丁が、説という聖人を得るという夢を見、捜索して傅険（地名）にこれを得て宰相とし、殷国大いに治まったという話をあげる。

一六 不思議な風が一筋吹いて。「細う」は、入道の舟の航路にあたる所だけに順風が吹いたさまをいう。

一七 神のお導きは間違いのないことでございました。

たまへば、舟に行きて会ひたり。〔良清は〕〔入道に〕さばかりはげしかりつる波風に、いつの間にか舟出しつらむと、〔良清は〕心得がたく思へり。〔不思議に思っている〕

「一〇去ぬる朔日の日の夢に、一一さま異なるものの告げ知らすることはべりしかば、信じがたきことと思うたまへしかど、一二十三日にあらたなる験見せむ、舟よそひまうけて、かならず、雨風止まば一三この浦に舟をあらかじめ舟を支度して寄せよ、と、前もってかねて示すことのはべりしかば、こころみに舟のよそひをまうけて待ちはべりしに、一四いかめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば、人の朝廷にも、一五夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、〔源氏が〕お取り上げにならぬまでも用ゐさせたまはぬまでも、夢のおさとしにあったこの十三日をすごさずず、このよし〔源氏に〕を告げ申しはべらむとて、舟出だしはべりつるに、一六ああやしき風細う吹きて、この浦に着きはべりつること、まことに神の一七しるべ違はずなむ。ここにも、こちらでももしやお心当りのことでもおありではなかったかと存じましてもしろしめすことやはべりつらむとてなむ。いと恐縮でございますが憚り多くはべれど、このよし〔源氏に〕申したまへ」と言ふ。良清、忍びやかに伝へ申す。ごく内密に

一　夢といい現実に起った天変といい、いろいろ異常なことばかりで、神仏のおさとしとしか思われぬこのところの出来事を、自分の過去、将来にわたってお考え合せになってみて。

二　世間の人がこのことを聞き伝えて、あとあと大変な非難をするであろうことを気にして。以下、源氏の心中。

三　（この入道の迎えが）本当の神のお助けであるかもしれぬのに。

四　世間のもの笑いの種になるようなひどい目にあうかもしれない。

五　（神のご加護といったことではなく）現世の人の意向でもやはり背きがたいものだ。以下にそのことが細叙され、入道の申し出に傾く気持が次第に固まる。

六　控え目にしていれば間違いはない。『河海抄』に「孝経に曰く、退かざれば咎あり」と引くが、現存本に見えない。出典不明である。

七　今さら後世に残る悪評を避けたところで（入道の迎えに応じなかったところで）たいしたこともあるまい。これ以上の悪評を受けることもあるまい、の意。

八　京にいた時の親しい友と思って悲しくながめていますのに。

九　うれしいお迎えの舟を頂きました。「波にのみ濡れつるものを吹く風のたよりうれしき海士の釣舟」（『後撰集』巻十七雑三、紀貫之）による。

源氏、慎重に考慮の末迎えの舟で明石に赴く

源氏は思案をめぐらされるに

君、おぼしまはすに、夢うつつ、さまざま静かならず、さとしのやうなることどもを、来し方行く末おぼし合はせて、世の人の聞き伝へむ後のそしりもやすからざるべきを憚りて、まことの神の助けにもあらむを、背くものならば、またこれよりまさりて、人笑はれなる目をや見む、うつつの人の心だになほ苦し、はかなきことをもつつみて、われより齢まさり、もしは位高く、時世の寄せ今一際まさる人には、なびき従ひて、その心むけをたどるべきものなりけり、退きて咎なしとこそ、昔のさかしき人も言ひ置きけれ、げにかく命を極め、世にまたなき目の限りを見尽くしつ、さらに後のあとの名をはぶくとても、たけきこともあらじ、夢の中にも父帝の御教へありつれば、また何ごとをか疑はむ、と、おぼして、御返りのたまふ。

（源氏）不案内な土地で　世にもまれな　つらい目の限りにあったが　遙か彼方の空の　便りをくれる人もいません　「源氏は」　ご返事を

「知らぬ世界に、めづらしき愁への限り見つれど、都のかたよりとて、言問ひおこする人もなし。ただ行方なき空の月日の光ばかりを、故里の友とながめはべるに、うれしき釣舟をなむ。かの浦に静やか

今までより以上に　そむいたりしたら　此細なことにも身をつつし　自分より　信望が　その人の意向をよくよく考えてみるべきものなのだ　賢人も言い残しておいたことだ　世間にまたとないつらい目の限りを見尽したことだし　明石の浦

一〇 何はともあれ、夜の明けきらぬさきにお舟にお乗りあそばせ、ということで。人目を忍ぶさま。
一一 いつもの親しくお仕えする者だけ四五人ほどをお供に。須磨に「近う馴れつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞ、つとさぶらひける」（一二三八頁）とあった。
一二 前に「あやしき風細う吹きて」と入道の言った風。
一三 須磨から明石へはほんの一またぎの近さなので、さして時間もかからぬとはいえ。

源氏、都に劣らぬ豪奢な明石の入道の居館に落着く

一四 良清の話のとおり、格別の風情がある。（一巻若紫一八六頁参照）
一五 海岸にも山の陰にも。以下「稲の倉町どもなど」まで、入道の所領内の諸所の建物について調子の張った文章で言及する。
一六 興趣をもよおせるように特にしつらえた海辺の風流な家。「苫屋」は、菅、茅などで屋根を葺いた漁師の家。歌語。前の「海のつらにも」に応ずる。
一七 仏を念じて心を乱さぬ修行。そのための堂を三昧堂という。この部分は「山隠れにも」に応ずる。
一八 「田の実」は「頼み」を掛けて使われる歌語。
一九 余生を豊かに暮せる多くの稲を納める倉を建て並べた一画など。「積む」は、稲にもかかる掛詞。
二〇 岡のあたりの家。「岡辺」「宿」いずれも歌語。

に隠ろふべき隈はべりなむや」とのたまふ。限りなくよろこび、かしこまり申す。[一〇]ともあれかくもあれ、夜の明け果てぬさきに御舟にたてまつれ、とて、[一一]例の親しき限り四五人ばかりして、たてまつりぬ。[一二]例の風出で来て、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。[一三]ただはひわたるほどは片時の間といへど、なほあやしきまで見ゆる風の心なり。

浜のさま、[一四]げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、御願ひにそむきける。[一五]入道の領じ占めたる所々、海のつらにも山隠れにも、[一六]時々につけて興をさかすべき渚の苫屋、行ひをして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、[一八]いかめしき堂を建てて三昧を行ひ、この世のまうけに、秋の田の実を刈りをさめ、[一九]残りの齢積むべき稲の倉町どもなど、[二〇]をりをり所につけたる見どころありてし集めたり。高潮に懼ぢて、このころ、娘などは岡辺の宿に移して住ませければ、この浜の館に心やすくおはします。

舟より御車にたてまつり移るほど、日やうやうさしあがりて、ほ

[人道は]物陰はありましょうかを言上する
[源氏は]舟にお乗りになる
[源氏が]乗り移られる頃に
[人道は]
お礼
人が多いと見えることだけが
風の様子である
源氏の
ご希望にそぐわなかった
四季に応じて
勤行をして
後世のこと
立派な
山川の岸に
を静かに思うにふさわしい
現世の暮しの用意には
四季折々につけて土地柄にふさわしい趣向をこらして数々建てである
気楽にお過しになる

一 何よりも先に住吉の神を、とりあえずお拝み申し上げる。源氏を迎え得たお礼の気持。入道が娘の将来を住吉明神に祈願していることは、須磨二四九頁、後の二七九頁にも見える。

二 この上なくすばらしい源氏を迎え得た喜びの気持。ただし後の若菜上の巻に、明石の上の誕生の前に入道が「山の左右より月日の光（明石の姫君とその所生の若宮）さやかにさし出でて世を照らす」という夢を見たとあるが、それとも照応する。

三 以下、贅を尽した庭園のさま。「立石」は、池や遣水の石組み。「前栽」は、庭前の植込み。「入江」は、恐らく庭園内に小さな湾入を取り入れたものであろう。

四 そうした入道の暮しぶりなどは。

五 なるほど良清の話どおり。（一巻若紫一八七頁参照）

六 二条の院の紫の上のもとから須磨にやって来た使いの者。

七 京にお帰しになる。次の頁に見える紫の上への手紙を託して帰すのである。

八 そのほか関係の深い陰陽師、呪禁師などの類いであろう。改めて祈禱その他を依頼するためである。

九（親しい方々の中では）藤壺だけには。重大な秘密を共にする藤壺への報告は特別のものである。

源氏、京の諸所に文通、紫の上への返書をしたためる

源氏をそれとなく拝見するやたちまちのかに見たてまつるより、老忘れ、齢延ぶるここちして、笑みさかえて、まづ住吉の神を、かつがつ拝みたてまつる。月日の光を手に得たてまつりたるここちして、いとなみつかうまつること、ことわりなり。所のさまをばさらにも言はず、作りなしたる心ばへ、木立、立石、前栽などのありさま、えも言はぬ入江の水など、絵に描かば、心のいたり少なからむ絵師は描き及ぶまじと見ゆ。月ごろの御住ひよりは、こよなくあきらかに、なつかし。御しつらひなど、えならずして、住ひけるさまなど、げに都のやむごとなき所々に異ならず、艶にまばゆきさまは、まさりざまにぞ見ゆる。

（寿命も延びる気がして）（にこにこ）（無理もな）（懸命にお世話申し上げるのも）（入道が邸宅にこらした趣向）（立派にし）（変りなく）（高貴な人々の邸宅と）（源氏のお部屋の設備など）（今までの須磨の）（好ましい）（この上もなく明るい感じで）（修業の浅い絵師ではとても写しきれまいと思われる）（たいへんだ）（趣向をこらしたきらびやかさでは）（一段上かとも思われる）

すこし御心しづまりては、京の御文ども聞こえたまふ。参れりし使は、「今はいみじき道に出で立ちて悲しき目を見る」と泣き沈みて、あの須磨にとまりたるを召して、身にあまれる物ども多くたまひてつかはす。むつましき御祈りの師ども、さるべき所々には、このほどの御ありさま、くはしく言ひつかはすべし。入道の宮ばかり

（お気持が落着かれてから）（京へのお便りをあちこちにお書きになる）（この度はとんでもない使いの旅に出てひどい目にあうことだ）（身分不相応な立派な褒美の品々を）（お出入りの祈禱僧たちや）（報告してやられるようだ）（問からの出来事を）

一〇 紫の上の、あの嵐のさなかに受け取った心打たれるお手紙へのご返事は、すらすらともお書きになれず。あの時のうれしさ、悲しさを思い起すのである。

一一（紫の上のこととなると）源氏の態度はやはり格別である。

一二 もうこれまでと俗世を離れて出家したいという気持だけが強くなっていますが。

一三 あなたが「別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし」（須磨二一二頁）と詠まれた時のお顔がいつまでも目先に浮んで忘れられませんのに。

一四 こうして遠く離れて逢えぬまま出家してしまうのかと思うと（その悲しみに比べれば）。

一五 遙かにあなたのことばかり思っていることです、知りもしなかった須磨の浦からさらに遠いこの明石の浦に移って来て。地の文から歌に言い続ける気持。

一六 まだその夢がさめきらぬような思いですので、どんなにか変なこともたくさん書いたことでしょう。

一七 側から手紙をのぞいて見たいほどの様子であるのを。「側目」は、ここは、側から見ること。

一八 京の留守宅に心細そうな伝言をするようだ。手紙を二条の院に帰る使いの者に託すのである。

には、めづらかにてよみがへるさまなど聞こえたまふ。[一〇]二条の院のあはれなりしほどの御返りは、書きもやりたまはず、うち置きうち置き、（涙を）おしのごひつつ聞こえたまふ（お書きになる）御けしき、[一一]なほ異（ことと）なり。

（源氏）かすがへすいみじき目の限りを見尽くし果てつるありさまなれば、[一二]今はと世を思ひ離るる心のみまさりはべれど、「鏡を見ても」

とのたまひしおもかげの離るる世なきを、[一四]かくおぼつかなながらやと、ここら悲しきさまざまのうれはしさは、[一五]遙かにも思ひやるかな知らざりし

浦よりをちに浦伝ひして

夢のうちなるここちのみして、[一六]さめ果てぬほど、いかにひがことと多からむ。

と、げに、そこはかとなく書き乱りたまへるしもぞ、[一七]いと見まほしき側目なるを、いとこよなき御心ざしのほどと、人々見たてまつる。おのおの、故里に心細げなる言伝すべかめり。をやみなかりし空の

（不思議なめぐり合せで命をとりとめた事情などを）（筆を休め休めして）（このところのとても悲しいいろいろなつらい思いは）（二の次という気がして）（まるで夢を見ているような気持で）（ほんとにはきはきとせず取り乱したお書きぶりであるのがかえって）（全くこの上ないご愛情の深さだと）（めいめいも）（供人たちは）（小降りになることもなかった）

一「あさりする与謝の海士人ほこるらむ浦風ぬるく霞みわたれり」（恵慶法師集）による。

二 人の多い点はお気持に添わなかったが。前に「人しげう見ゆるのみなむ、御願ひにそむきける」（二六九頁）とあった。

三 この居館の主人である入道。客人たる源氏に対していう。

四 時々源氏に打ち明けて愚痴をお聞かせ申し上げる。

五 源氏のお気持としても、よほどの美人だろうと話を聞いてお思いになった人なので。（一巻若紫一八七頁、一八八頁参照）

六（娘との間に）しかるべき前世の因縁があるのだろうかとお思いにはなるものの。

七 都にいる普通の場合より、愛を誓った言葉に嘘があったとお思いになるであろうことも気はずかしく思われなさるので。「ただなるよりは……」は、遠く離れているからこそ操を守りたい、という気持。「言ひしに違ふ」は、引歌。「ほどふるもおぼつかなくはおもほえず言ひしに違ふとばかりはしも」（出典未詳。『釈』『奥入』以下に引く）

八 源氏の御座所には。

九 召使などの居室にあてられる建物。

明石の入道、娘を源氏に と思い、種々苦慮する

晴れわたって　元気いっぱいの様子だ

けしき、名残なく澄みわたりて、漁する海士ども、ほこらしげなり。

岩陰の小屋も少なかったが　何かと

須磨はいと心細く、海士の岩屋もまれなりしを、人しげき厭ひはしたまひしかど、ここはまた、さま異にあはれなること多くて、よろづにおぼしなぐさまる。

明石　須磨とは違った風情に富んでいて

お気持もほぐれるのだった

三 あるじの入道、行ひ勤めたるさま、いみじう思ひすましたるを、ただこの娘ひとりをもてわづらひたるけしき、いとかたはらいたきまで、時々漏らし愁へきこゆ。御ここちにもをかしと聞きおきたまひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにやとおぼしながら、なほかう身を沈めたるほどは、行ひよりほかのことは思はじ、都の人も、ただなるよりは、言ひしに違ふとおぼさむも心はづかしうおぼさるれば、けしきだちたまふことなし。ことに触れて、心ばせ、ありさま、なべてならずもありけるかなと、ゆかしうおぼされぬにしもあらず。ここには、かしこまりて、みづからもをさを参らず、もの隔たりたる下の屋にさぶらふ。さ

勤行ぶりは　すっかり俗念を去った様子だが

明石の上　どうしたものかと悩んでいる心中を　はた目にも見苦しいほど

こうして思いがけずめぐりめぐって明石まで来られたのも　やはりこうして落ちぶれた身の上の間は　勤行

紫の上　気のあるような素振りはお見せにならない

お気持がひかれないわけでもない　〔娘の〕気立てや　暮しぶりは〔噂どおり〕並々でない立派さだなと　何かにつけて

ご遠慮申して　ひかえている　その

入道自身もめったに参上せず　かなり離れた

一〇 朝夕いつも（婿として）源氏をお世話申し上げたく、（このままでは）もの足りなくお思い申して。

一一 人品が気高いせいであろうか。次の「いにしへのものをも見知りて」以下に掛る。入道は大臣の家柄に生れ（若紫一八六頁）、源氏の母桐壺の更衣の父按察使の大納言は、入道の叔父にあたる（須磨二四九頁）。

一二 上品で、趣味のよいところもあるので。

一三 今までそんなにもくわしくお聞きになったことのない、世間のいろいろな古い出来事を、（入道は）ぽつぽつお話しして。

一四 知らないでしまったらもの足りぬ思いがしたであろうと思われるほど。

一五 入道は、あんなことを言いはしたものの。須磨二四八頁に「吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君にたてまつらむ」と言ったことが見える。

一六 娘の母君、すなわち入道の妻。

一七 本人は。娘のこと。

一八 世の中にはこんなすばらしい方もいらしたのだと源氏をお見上げしたにつけても。後の二八七頁にも「まほならねどほのかにも見たてまつり」とあり、源氏の姿をほのかに見た趣に書いてある。

実るは、一〇明け暮れ見たてまつらまほしう、飽かず思ひきこえて、いかで思ふ心をかなへむと、仏神をいよいよ念じたてまつる。

〔入道は〕年は六十ばかりになりたれど、いときよげにあらまほしう、行ひさらぼひて、一一人のほどの、あてはかなればにやあらむ、うちひがみ、ほれぼれしきことはあれど、いにしへのものをも見知りて、一二ものきたなからず、よしづきたることも交れば、昔物語などせさせて聞きたまふに、一三すこしつれづれのまぎれなり。年ごろ、公私、御暇なくて、一三さしも聞き置きたまはぬ世の古事ども、くづし出でて、かかる所をも人をも、一四見ざらましかばさうざうしくや、とまで、興ありとおぼすことも交る。〔入道は〕これほどお近づき申したが かしき御ありさまに、一五さこそ言ひしか、つつましうなりて、わが思ふことは心のままにもえうち出できこえぬを、〔源氏に〕申し上げられないのを 心もとなうくちをしと、一六母君と言ひ合はせて嘆く。正身は、一七おしなべての人だに、めやすきは見えぬ世界に、一八世にはかかる人もおはしけりと見たてまつり

（なんと）（かして希望をかなえようと）（〔入道は〕）（ほとけかみ）（とてもさっぱりした感じで好ましく）（勤行の）（ため痩せ細って）（偏屈者で）（もうろくしているところはあるけれども）（古いこともいろいろ知っていて）（昔話などさせて）（すこしは所在なさも紛れる思いがする）（おほやけわたくし）（いとま）（こと）（した明石の浦や入道を）（おもし）（ろいと）（ご立派な）（気おくれしてきて）（源氏のご様子に）（気が気でなく残念だと）（話し合って）（普通の身分の男でも）（無難な）（のは見つからないこんな田舎で）

一 とても及びもつかぬお方と源氏のことをお思い申すのだった。

二 何事もなかったこれまでよりは、ものを思うことも多い。源氏のことが気にかかる娘心をいう。

三 四月の一日から衣服、調度などを夏向きに改める。

四 御帳台の垂れ絹など。帳台は、一巻図録九参照。

五 （源氏は）困ったものだ、こうまでしなくても、とお思いになるが。入道の献身ぶりをなかば迷惑に思う気持。

六 京の二条の院の池の水かと、我知らずふと思われなさるにつけ。「池水」は歌語。

七 言いようもなく恋しく思われる気持は、どこへということなく、あてどもなくただようような心細い気がなさって。「わが恋は行方も知らず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」（『古今集』巻十二恋二、凡河内躬恒）

八 「淡路にてあはと遙かに見し月の近き今宵は所からかも」（『新古今集』巻十六雑上、躬恒）「あはと」は、あれはと、の意。「阿波門」（鳴門海峡）を掛ける。

九 あれはと目の前に望まれる淡路の島の悲しい情趣までをも（私の故郷を思う気持だけでなく）残るくまなく照らし出す今宵の月であることだ。

初夏の一夜、月明に、源氏、琴を弾じてはるかに京を思う

しにつけて、身のほど知られて（わが身の分際が思い知られて）、いと遙かにぞ思ひきこえける。（両親がこのようにやきもきしているのを聞くにつけても）親たちのかく思ひあつかふを聞くにも、（不似合いな縁談だと思うと）似げなきことかなと思ふに、ただなるよりはものあはれなり。

四月になりぬ。更衣の御装束、御帳の帷など、（〔入道は〕趣向をこらして調進する）よしあるさまにし出づ。（〔入道が〕何かにつけて懸命にお世話申すのを）よろづにつかうまつりいとなむを、いとほしう、すずろなりとおぼせど、（入道の人柄がどこまでも気位を高く持していて気品があるので）人ざまのあくまで思ひあがりたるさまのあてなるに、（次から次へと諸方からのお見舞のお便りが）おぼしゆるして見たまふ。京よりも、（大目に見ておられる）うちしきりたる（ひっきりなしに多い）御とぶらひども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく（明るく）見わたれるも、（見わたされるのも）住み馴れたまひし故里の池水に思ひまがへられたまふに、言はむかたなく恋しきこと、何方となく行方なきここちしたまひて、ただ目の前に見やらるるは、淡路島なりけり。「あはと遙かに」などのたまひて、（口ずさまれて）

（源氏）あはと見る淡路の島のあはれさへ
残るくまなく澄める夜の月

一〇 須磨の巻に、秋の一夜、源氏が琴を弾いたことが見える（二三七頁）。『白氏文集』その他とともに都から須磨にたずさえて来たものである（須磨二一五頁）。

一一 側でお見上げする供人たちも心が動いて。

一二 広陵散。琴の秘曲。晋の嵇康が昔の楽人（堯の時の楽士伶倫という伝説がある）の霊から奏法を伝えたという伝説がある。

一三 入道の娘や妻の住む山の手の家でも。

一四 音楽にたしなみのある若い女房たちは。

一五 未詳。「しはふるひども」の形で、賢木一六三頁に既出。

一六 印を結んで真言を唱え、あまねく供養することを念ずる密教の修法。供養とは、三宝をはじめ父母、亡者等に供物を供えること。

一七 来世で生れたいと願っております極楽の様子も、かくやと想像されます今宵の風情でございます。極楽では天人が常に伎楽を奏して如来をたたえるという。

一八 折々に催された宮中の音楽の催し。

一九（今の境遇とひき比べると）夢のようなお気持がなさるので。

明石

久しう手触れたまはぬ琴を、袋より取り出でたまひて、はかなくかき鳴らしたまへる御さまを、見たてまつる人もやすからず、あはれに悲しう思ひあへり。広陵といふ手を、ある限り弾きすましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音に合ひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。何とも聞きわくまじきこのもかのものしはふる人どもも、すずろはしくて、浜風をひきありく。入道もえ堪へで、供養法たゆみて、急ぎ参れり。「さらに、そむきにし世の中も取り返し思ひ出でぬべくはべり。後の世に願ひはべる所のありさまも、思うたまへやらるる夜のさまかな」と、泣く泣く、めできこゆ。わが御心にも、をりをりの御遊び、その人かの人の琴笛、もしは声の出でしさま、時々につけて、世にめでられたまひしありさま、帝よりはじめたてまつりて、もてかしづきあがめたてまつりたまひしを、人の上もわが御身のありさまも、おぼし出でられて、夢

源氏のお姿を
秘術を尽して
一心不乱にお弾きになると
〔琴の音色が〕
身にしみる思いで聞いているようだ
聞いても何のことやら分りそうもないあちらこちらの
気もそぞろになって
浜をうろうろして風邪を引く
（入道）全く
捨て去った俗世のことも
あらためて思い出しそうな琴の音色でございます
感涙を流して
賞讃申し上げる
源氏ご自身も
いはその歌いぶりや
その時々に
世人の賞讃の的になられたご自身のこと
〔多くの方々がご自分を〕大切にし敬い申されたことなどを
〔当時の〕人々のことも自分の身の上も
〔源氏は〕
琴の音も
深い悲しみの響きが

一 年老いた入道。
二 四絃四柱の弦楽器。（図録八参照）

入道、琵琶、箏の琴を取り寄せて弾き、源氏と音楽談を交わす

三 十三絃の琴。（図録八参照）
四 にわか作りの琵琶法師になって。諸諸の語。当時すでに琵琶を弾くのを業とする法体の者がいて「琵琶の法師」と呼ばれていた。
五 あれもこれも（琴も箏の琴も）何にでも源氏はすばらしくていられると心から感嘆申し上げる。
六 かえって。次の行の「なまめかしきに」に掛る。
七 水鳥の名。初夏の頃盛んに鳴き、その鳴き声が戸をたたくのに似るので、鳴くのを「たたく」という。
八 「まだ宵にうち来てたたく水鶏かな誰が門さして入れぬなるらむ」（『源氏釈』所引）。「さして」は、鎖して（錠をおろして）。
九 音色もこの上なくよい楽器をあれこれと。
一〇 箏の琴。
一一 深い意味もなくおっしゃると。「おほかたに」は、一般の話として、の意。
一二 勘違いして。娘のことで頭がいっぱいなので、喜んで娘のことに話を移す。
一三 醍醐天皇。次に「三代」とあるから、入道は醍醐天皇じきじきのご伝授を伝えた人から箏の琴の奏法を伝えられたことになる。

古人（ふるひと）は涙もとどめあへず、岡辺に、琵琶（びは）、箏（さう）の琴（こと）取りにやりて、入道、琵琶（びは）の法師になりて、いとをかしうめづらしき手（曲）一つ二つ弾き出でたり。箏の御琴（おすすめしたので〔源氏は〕）参りたれば、すこし弾きたまふも、さまざまいみじうのみ思ひきこえたり。いとさしも聞こえぬものの音（ね）だに、（そうたいして上手でもない楽器の音でも）をりからこそはまさるものなるを、はるばるとものの（さえぎるものもない）とどこほりなき海づら（海辺である上に）なるに、なかなか、春秋（はるあき）の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなう茂れる蔭（何ということもなく青々と茂っている木蔭があでやかであるのに）どもなまめかしきに、水鶏（くひな）のうちたたきたるは、「誰（たが）が門（かど）さして」と、（〔源氏は〕感興をもよおす）あはれにおぼゆ。音（ねね）もいと二（に）なう出づる琴（こと）どもを、いとなつかしう弾き鳴らしたるも、（〔源氏は〕感心なさって）御心（いこころ）とまりて、（〔人道が〕興をそそるように）（〔源氏〕）「これは、女の、なつかしきさまにてしどけなう（やさしい様子で）（くつろいで）弾きたるこそ、をかしけれ」と、おほかたにのたまふを、入道はあいなくうち笑（ゑ）みて、（〔入道〕ご演奏ぶり以上に人をひきつけるものが）「あそばすよりなつかしきさまなるは、いづこのかはべらむ。なにがし、延喜（えんぎ）の御手（ご奏法）より弾き伝へたること、三代になむなりはべりぬ（ものだが）（どこの世界にございましょう）（私が）ゆ。

一四 ひどく気の滅入ります時々には。
一五 不思議に、見よう見真似で弾くようになりました者のおりますのが。娘のこと。
一六 故親王。上の「かの」は、その人の名を自明とする言い方であるが、誰か不明。醍醐天皇から直接伝授を受けて入道に伝えた人。「大王」は、親王の称。
一七 山住みの田舎者のこととて聞き誤って、松風を娘の琴の音と思いこんでいるのかもしれませぬ。入道の謙遜の言葉。『花鳥余情』は寿玄法師（『拾遺集』に入集）の「松風に耳なれにける山伏は琴を琴とも思はざりけり」によるとするが、この歌、出典未詳。
一八 私の琴など琴ともお聞きになるはずのない所で、うっかりしたことをしたものです。『花鳥余情』によれば、前注の寿玄の歌詞によって答えたことになる。
一九 嵯峨天皇の第五皇女繁子。嵯峨天皇、繁子ともに『秦箏相承血脉』には見えないが、次の源氏の言葉にその流が絶えたとあるから、血脉に載せられていないのも不審はないと『河海抄』はいう。
二〇 こちらでこうして由緒ある奏法をお伝えになっておられるのは。入道から娘への箏の伝承をいう。
二一 商人の中にいてすら、古曲を賞翫した人はございました。白楽天のこと。白楽天が江州の司馬に左遷されていた時、尋陽江上で夜、船中に琵琶を弾くのを聞き、もと長安の名妓で今は商人の妻になっているその女に数曲を弾ぜしめて「琵琶引」を作った（『白氏文集』巻十二。付録三一六頁参照）。

俗世のことにはとんとご無沙汰いたしておりますが
るを、かうつたなき身にて、この世のことは捨て忘れはべりぬるを、
（箏の琴を）
一四 ものの切にいぶせきをりをりは、かき鳴らしはべりしを、あやしう
一五
まねぶもののはべるこそ、自然にかの先大王の御手に通ひてはべれ。
似通っております
山伏のひが耳に、松風を聞きわたしはべるにやあらむ。いかで、こ
何とぞ　娘の
琴をそっとお耳に入れたいものでございます　申し上げる言葉とともに　身をふるわせて
れ忍びて聞こしめさせてしがな」と聞こゆるままに、うちわななき
落涙する様子である
て涙おとすべかめり。
源氏
君、「琴を琴とも聞きたまふまじかりけるあたりに、ねたきわざ
（琴を）
かな」とて、おしやりたまふに、「あやしう、昔より箏は、女なむ
（源氏）不思議に
巧みに弾くものでした
弾き取るものなりける。嵯峨の御伝へにて、女五の宮、さる世の中
嵯峨天皇のご伝授で　一九　当時名高かった
そのご流儀で
の上手にものしたまひけるを、その御筋にて、取り立てて伝ふる人
これといって弾き伝える人はいません　通りいっぺんの自己満足程度にす
なし。すべて、ただ今世に名を取れる人々、かきなでの心やりばか
現在名人として世間に有名な人々は
きませんが　まことに興味深いこと
りにのみあるを、二〇ここにかう弾きこめたまへりける、いと興ありけ
ぜひにも聞きたいものです　（入道）お聞きになるのに
とです
ることかな。いかでかは聞くべき」とのたまふ。「聞こしめさむに
は何の憚りかはべらむ。御前に召しても。商人のなかにてだにこそ、
差し障り

ふること聞きはやす人ははべりけれ。琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人、（弾ける人は）いにしへも難うはべりしを、（娘は）全く苦もなく弾きこなしをさをさ、とどこほることなう、なつかしき手など、（心にしみる弾き方など）筋異になむ。いかでたどるにかはべらむ。（娘の琵琶の音が）荒き波の声に交るは、悲しくも思うたまへられながら、かき集むるもの嘆かしさ、まぎるるをりをりもはべり」など、すきゐたれば、（風流がっている）（とても老）をかしとおぼして、（源氏は）箏の琴とりかへて賜はせたり。（琵琶と）げにいとぐぐしてかい弾きたり。（入道に）今の世に聞こえぬ筋弾きつけて、（奏法を身につけていて）手づかひいといたう唐めき、ゆの音深う澄ましたり。（手さばき）伊勢の海ならねど、「清き渚に貝や拾はむ」など、声よき人に（供人）歌はせて、（源氏ご自身も）われも時々拍子とりて、声うち添へたまふを、（入道は）琴弾きさしつつ、（途中で弾きやめては）めできこゆ。（賞讃申し上げる）御くだものなど、めづらしきさまにて参らせ、（目新しい趣向をこらしてお前にさし上げ）人々に酒強ひそしなどして、（いつしか日頃の苦労も忘れてしまいそうな）おのづからもの忘れしぬべき夜のさまなり。

いたくふけゆくままに、浜風涼しうて、月も入りがたになるままに澄みまさり、静かなるほどに、（しめやかな雰囲気に）御物語残りなく聞こえて、この浦（西の方に傾くにつれて）

一 白楽天の故事に言及したことから、娘が琵琶にもすぐれていることに話題を転ずる。
二 昔もなかなかいないものでしたが。
三 人と違って格別の趣がございます。
四 どうやって見よう見真似におぼえるのでございましょう。「たどる」は、手探りする意。
五 悲しくも思われますものの。娘がこんな田舎に暮しているのを悲しく思う気持。
六 左手で絃をゆすって出すうねりをつけた音。
七 ここは明石の浦で、伊勢の海ではないけれども。次の催馬楽「伊勢の海」の歌詞にひっかけたもの。
八 催馬楽、律「伊勢の海」。「伊勢の海の　清き渚に　しほかひに　なのりそや摘まむ　貝や拾はむや　玉や拾はむや」。「しほかひ」は、潮の満ちてくるまでの間。「なのりそ」は、海藻ほんだわらのこと。
九 果物、木の実、菓子などの軽い間食。
一〇 源氏の供人たちに酒を無理にすすめたりして。「そす」は、度を越えてすること。

入道、娘の将来についての長年の苦労を源氏に打ち明ける

一一 入道は打明け話を源氏にすっかり申し上げて。

に住みはじめしほどの心づかひ、後の世をつとむるさま、かきくづし聞こえて、この娘のありさま、問はず語りに聞こゆ。をかしきものの、さすがにあはれと聞きたまふ節もあり。「いと取り申しがたきことなれど、わが君、かう、おぼえなき世界に仮にても移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏のあはれびおはしまして、しばしのほど御心をもなやましたてまつるにやとなむ思うたまふる。その故は、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童のいときなうはべりしより、思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとに、かならずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意かなへたまへとなむ念じはべる。前の世の契りつたなくてこそ、かくくちをしき山がつとなりはべりけめ、親、大臣の位をたもちたまへりき。みづからかく田舎の民となりにてはべり。つぎつぎ、さのみ劣りまからば、何の身にか

心づもりや　片端から少し　不憫だと　長年　ご心労をもおかけ申し上げるのではないかと存ぜられます　お頼り申し上げるようになりまして　ごく幼少でございました時から　思う仔細がございまして　極楽往生の願い　私はこうしたつまらぬ下賤の身となりましたのでしょうが　子孫が次々に　そのように落ちぶれる一方では　末はどんな身の

三　来世の極楽往生を願う仏道修行の模様など。
一三　人から聞かれもしないのに自分から話し出すこと。
一四　あなた様が、こうして、思いもかけぬ辺鄙な土地にかりそめにもせよ移っておいでになりましたのは。
一五　入道自身のことをいう卑下の言葉。
一六　今年で十八年になります。住吉明神に願を立てて以来十八年になるというのは、ほぼ明石の上の年齢を察せしめる。仮にこの時十八歳とすれば、若紫の巻（一八六頁以下）の北山での噂話の時は九歳で、代々の国司が求婚しているという話とは合わない。
一七　娘のこと。父親が娘のことをいうやや卑下した言い方。
一八　一昼夜を晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時に分けて、それぞれの定時に行う勤行。
一九　娘について、どうか高い望みをおかなえ下さいとお祈りしております。「高き本意」とは、次の頁に「いかにして都の貴き人にたてまつらむ」と見える。
二〇　前世の因縁に恵まれませんでしたから。

上になりますことやらと

なりはべらむと、悲しく思ひはべるを、一これは、生れし時より頼むところなむはべる。いかにして都の貴き人にたてまつらむと思ふ心深きにより、二ほどほどにつけて、あまたの人の嫉みを負ひ、身のためも、からき目を見るをりをりも多くはべれど、さらに苦しみと思ひはべらず。三命の限りは狭き衣にもはぐくみはべりなむ。かくながら見捨てはべりなば、四波のなかにも交り失せねとなむ、掟てはべる」など、五すべてまねぶべくもあらぬことどもを、うち泣きうち泣き聞こゆ。君も、ものをさまざまおぼし続くるをりからは、うち涙ぐみつつ聞こしめす。

（源氏）六「横さまの罪にあたりて思ひかけぬ世界にただよふも、七何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞き合はすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはと、あはれになむ。などかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。都離れし時より、八世の常なきもあぢきなう、行ひよりほかのこ

縁づけ申そう

どうかして

私としても

つらい目にあう時もたくさんございますが

源氏

いろいろ悲しい思いをしておられる時でもあるので

〔入道は〕

今のままで私めが先立ちましたなら

源氏、入道の話に思い合せられるところがあり、娘への関心を示す

一 この娘は、生れた時から頼りに思うことがございます。後の若菜上の巻に、明石の上の生れる前、子孫から帝と后が出ると解される夢を入道が見たということが語られる（二七〇頁注二参照）。

二 私のようなしがない者でもしがない者なりに。身分身分に応じて、が原義。次の「あまたの人の嫉みを負ひ……」は、求婚をことわって人の恨みを買ったことをいう。

三 私の生きております限りは、及ばずながらも、父親として大事に育ててやりましょう。

四 海に身を投げでもして死んでしまえと、申しつけております。「掟つ」は、将来のことを決める意。同様のこと、若紫一八七頁に見える。

五 それはもうここにそのまま伝えるのも憚られるような奇妙な話を。

六 無実の罪を着せられて。「横さま」は、非道の意。

七 どうした罪の報いかと不審に思っていましたが。

八 この世の浮き沈みの激しさにもいや気がさしまして。

感無量の思いです

どうして

こうは

つきりとお分りになっていたことを

勤行以外のことには目もく

九 こういう人（入道の娘のこと）がいられるとはほのかに耳にしておりながら。

一〇 自信をなくしていましたが、そういうお話でしたら、お手引き下さるということなのですね（自分を婿として迎えて下さるおつもりなのですね）。

一一「ひとり寝」とおっしゃいますが、あなた様もお分りでしょうか、所在なく物思いに夜を明かすこの明石の浦のものさびしさを―娘のわびしい気持を。「あかし」に「明石」、「浦さびし」に「心さびし」を掛ける。

一二 まして長の年月、娘のことを心配してきました私の胸もふさがる思いをご推察下さいませ。

一三 わなわな身体をふるわせているけれども。老人の興奮のてい。

一四 けれども浦住まいに馴れておられる方は（私ほどではありますまい）。

一五 この明石の浦の旅寝の悲しさに夜を明かしかねて、安らかな夢を結ぶこともありません。「旅衣」は「うらがなし」の「うら」（裏―衣の縁語）を導く序詞でもある。「あかし」に「明石」を利かせる。

一六 入道はそのほか数多くのことを源氏にいろいろ申し上げたが、わずらわしいので書かない。以下草子地。

となくて月日を経るに、心も皆くづほれにけり。（すっかり気落ちしてしまいました）かかる人ものしたまふとはほの聞きながら、いたづら人をばゆゆしきものにこそ思ひ捨てたまふらめと、思ひ屈しつるを、（こんな役立たずの人間は縁起でもないと相手にもして下さる）さらば導きたまふべきにこそあなれ。心細きひとり寝のなぐさめにも」などのたまふを、（入道は）限りなくうれしと思へり。

（入道）一一「ひとり寝は君も知りぬやつれづれと
　思ひあかしの浦さびしさを

一二 まして年月思ひたまへわたるいぶせさを、おしはからせたまへ」と聞こゆるけはひ、一三 うちわななきたれど、さすがにゆゑなからず。（品格を失わない）

（源氏）一四「されど浦なれたまへらむ人は」とて、

（源氏）一五 旅衣うらがなしさにあかしかね
　草のまくらは夢もむすばず

と、うち乱れたまへる御さまは、いとぞ愛敬づき、（うちとけて本心をお明かしになるご様子は）言ふよしなき御けはひなる。一六 数知らぬことども聞こえ尽くしたれど、うるさしや。（言いようもないお美しさである）

一 入道の言葉を誇張もまじえて書いたから、一層、馬鹿げて愚かしい入道の性格も、はっきりしたことであろう。「ひがこと」は、間違いの意。入道の話の内容の奇怪さを読者に対して弁解する草子地。

源氏、入道の娘に文をやり、その後文通を続ける

二 岡辺の家に住む娘のもとに。二六九頁に「岡辺の宿」とあった。

三 意外なすばらしい人が隠れ住んでいることも多いものだと。

四 高麗（朝鮮）産の薄い香色（丁子色とも。薄紅に黄色を帯びた色）の紙。『河海抄』によれば、表は薄香色、裏は白という。

五 ここかしこも分らず（どこを目ざしてよいやら分らず）遙かにお噂を聞くのみなのに思いあぐねて、入道がちらりとほのめかされたあなたの家の梢を目ざしてお便りをさし上げます。「をちこち」は、遠近。

六 あなたを恋しく思う気持に堪えかねまして。「思ふには忍ぶることぞ負けにける色には出でじと思ひしものを」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）を引く。

七 手紙の使者をおもはゆいほど盛大にもてなして酔わせる。

八 源氏のご身分としがないわが身の上を思い比べると、比較にもならないという思いなので。

九 こういう場合の代筆は、普通母親の役割で、出家

一 ひがことどもに書きなしたれば、いとど、をこにかたくなしき入道の心ばへも、あらはれぬべかめり。

（入道は）願いが　どうやらかなったという気がして

思ふこと、かつがつかなひぬるここちして、涼しう思ひたるに、

さっぱりした思いでいたところ

（源氏は）二

翌日の

またの日の昼つかた、岡辺に御文つかはす。心はづかしきさまなめ

（相手の娘が）たしなみがあるらしいに

つけても　かえって　こんな人知れぬ所に

るも、なかなか、かかるものの隈にぞ、三思ひのほかなることも籠る

べかめると、気をお遣いになって心づかひしたまひて、四高麗の胡桃色の紙に、えならず

並々でなく念を入れて

ひきつくろひて、

（源氏）五

「をちこちも知らぬ雲居にながめわび

かすめし宿の梢をぞとふ

とだけ書いてあっただろうか

六思ふには」とばかりやありけむ。入道も、人知れず待ちきこゆとて、

（源氏のお手紙を）

岡辺の家に来ていたところ期待どおりだったので

かの家に来ゐたりけるもしるければ、御使いとまばゆきまで酔はす。

とても遅い　（入道が）　せき立てるけれども

御返りいと久し。内に入りてそのかせど、娘はさらに聞かず。い

一向に聞き入れない　何と　もすばらしい

とはづかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも、はづかしう

（源氏の）　お返事を書くのも　気がひけて

臆してしまって　気分が悪いと

つつましう、八人の御ほどわが身のほど思ふにこよなくて、ここちあ

の身の父親が書くのは奇矯である。

一〇 まことに恐れ多いお手紙を頂きましたが、田舎者の娘には、そのうれしさが身に余るのでございましょう。「うれしきを何につつまむ唐衣袂ゆたかに裁てと言はましを」（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）

一一 物思わしく眺めていられるというその同じ空を眺めているのは、娘も同じ思いなのでございましょう。

一二 まことに色めいた申しようで恐縮でございます。

一三 檀の木から製した紙。檀紙。普通恋文には使わない。入道からの返書なので用いたのであろう。

一四 入道は立派な裳（女の装束）など禄として与えた。海辺なので「玉裳」に「玉藻」を掛け、「かづく」（肩に掛け与える）に「潜く」を掛ける。

一五 代筆の手紙などまだもらったことがありません。宣旨は勅旨を文書にしたものなので、代筆のことを「宣旨書き」という。

一六 胸もふさがる思いで悩んでいることです、いかがですかと尋ねてくれる人もいませんので。「やよや」は、呼び掛けの言葉。

一七 まだ見ぬあなたに恋しいとも言いかねまして。『花鳥余情』は、一条院御製「恋しともまだ見ぬ人の言ひがたみ心にもののむつかしきかな」をあげる。

一八 薄い鳥の子紙。恋文に用いる。

一九 この手紙を若い女がすばらしいと思わなかったら、あまりにも風情が分らぬというものであろう。草子地。

明石

しとて寄り臥しぬ。言ひわびて、入道ぞ書く。

一〇 いとかしこきは、田舎びてはべる袂に、つつみあまるにや。さらに見たまへも及びはべらぬかしこさになむ。さるは、

一一 ながむらむ同じ雲居をながむるは
思ひもおなじ思ひなるらむ

となむ見たまふる。

一二 いとすきずきしや。

と聞こえたり。陸奥紙に、いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。げにもすきたるかなと、めざましう見たまふ。御使に、

一四 なべてならぬ玉裳などかづけたり。またの日、

一五 「宣旨書きは、見知らずなむ」とて、

一六 「いぶせくも心にものをなやむかな
やよやいかにと問ふ人もなみ

一七 言ひがたみ」と、このたびは、いといたうなよびたる

一八 薄様に、いと

一九 若き人のめでざらむも、いとあまり埋

一　及びもつかぬわが身のほどを思うと、何もかも無駄だという気がするので。
二　なまじ、こんな娘がいると源氏が自分のことをご存じになったことを思うと、悲しみの涙がこみ上げてきて。
三　前の時と同じように、全然筆をとろうともしないのを。
四　私を思って下さるというあなた様の心の深さのほどは、さて、どの程度なのでしょう、まだ私を見たこともない人が噂だけで悩むということがあるものなのでしょうか。
五　いかにも貴婦人らしい感じだ。
六　都でのこうした恋文のやりとりのことが思い出されて。
七　あるいはもの悲しい明け方などといったふうに、恋文らしくなくよそおって。
八　手紙のやりとりをなさってみると、文通の相手として、不足はなく。「似げなからず」は、似つかわしくないことはない、ふさわしい。
九　良清が娘のことをまるで自分のもののように話していた様子もこしゃくなと思われるし。若紫一八六頁以下の良清の噂話の口調を思い出すのである。
一〇　その目の前で見込み違いをさせるのもかわいそうだと、いろいろ思案されなさって。

れいたからむ。〔娘は〕すばらしいとは思うものめでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどの、いみじうかひなければ、なかなか、世にあるものと尋ね知りたまふにつけて、涙ぐまれて、さらに例の動なきを、無理にせつかれて十分せめて言はれて、浅に香をたきしめたからずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄くまぎらはして、書きまぎらわして

（娘）四　思ふらむ心のほどややよいかに

まだ見ぬ人の聞きかなやまむ

筆跡の具合や歌の出来ばえなど手のさま、書きたるさまなど、都の身分の高い女性にもそうひけは取りそうになくやむごとなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり。京のことおぼえて、興味をお持ちになったけれども続けざまに手をかしと見たまへど、うちしき紙をおやりになるのもりてつかはさむも、人目が憚られるので人目つつましければ、二三日隔てつつ、つれづ思いの夕暮れとかれなる夕暮れ、もしはものあはれなる曙などやうにまぎらはして、その時々相手も同じように情趣を感ずるであろう頃合を見はからってをりをり人も同じ心に見知りぬべきほどおしはかりて、書きかはしたまふに、似げなからず、考え深く気位の高い様子を知るにつけても心深う思ひあがりたるけしきも、見ではぜひ逢ってみたいとお思いになるものやまじとおぼすものから、良清が領じて言ひしけしきもめざましう、長年心をかけていたであろうものを年ごろ心つけてあらむを、一〇目の前に思ひ違へむもいとほしうおぼし

一一 入道の方から進んでこちらに女房として出仕させるのなら、そういうことで仕方なかったのだということにでもして、うやむやのうちに事を運んでしまおうとお思いになるけれども。

一二 こしゃくなと思われるような態度なので。軽々しく源氏に靡くような態度を見せないことをいう。

一三 京に残してきた紫の上のことを。

一四 こうして須磨の関を間に隔てていよいよ遠くなってみると。

一五 冗談ではなく心底恋しくてたまらない。「ありぬやと試みがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき」(『古今集』巻十九誹諧歌、読人しらず)

一六 いくらなんでも、このままここに何年も過すことにはなるまい。都に召還される希望を持つのである。

一七 入道に異変があると予告された日。(二六七頁参照)

一八 清涼殿の東庭に下りる階段。(一巻図録五参照)

一九 桐壺院が帝にいろいろ申し上げなさることが多い。院は源氏に「内裏に奏すべきことあるによりなむ」と言われた(二六五頁参照)。

二〇 源氏のお身の上についてであったのだろう。政治向きのことは憚って省略した書き方。

二一 帝の母后、弘徽殿の大后。

帝、夢に桐壺院を見て、眼病を病む　太政大臣死去　弘徽殿の大后も病む

めぐらされて、人進み参らば、さるかたにてもまぎらはしてむとおぼせど、女は女で女はた、なかなかやむごとなき際の人よりもいたう思ひあがりて、ねたげにもてなしきこえたれば、心くらべにてぞ過ぎける。

京のことを、かく関隔たりては、いよいよおぼつかなく思ひきこえたまひて、いかにせまし、たはぶれにくくもあるかな、忍びてや迎へたてまつりてましと、おぼし弱るをりをりあれど、さりとも、かくてやは年を重ねむ、今さらに人わろきことをばと、おぼししづめたり。

その年、朝廷に、神仏のお告げがしきりにあってもののさとししきりて、不安に思われることが多いもの騒がしきこと多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階のもとに立たせたまひて、御ご機嫌がとてもお悪くけしきいとあしうて、にらみきこえさせたまふを、[帝は]恐縮しておいでになるかしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御ことなりけむかし。いと恐ろしう、[帝は]いとほしとおぼして、[后]后に聞こえさせたまひければ、一雨な

一 何かそうと思いこんでいることは、そのように夢に現れるものです。
二 下々の者のように、気になさるものではありませぬ。帝王らしくものに動じなさるな、の意。
三 ご眼病平癒のための物忌など。
四 大后の宮でも。
五 帝の外祖父。大后の父。
六 亡くなっても不思議はないご高齢であるが。
七 御母后。弘徽殿の大后。
八 目がたつにつれてご衰弱のご様子なのを。
九 帝におかれてはいろいろご心痛の種が尽きない。
一〇 本当に罪もないのにこうして逆境に沈んでいるのならば。
一一 世間の非難も、それでは軽々しい処置だと取り沙汰しましょう。
一二 「獄令」によれば、流罪に処せられた者は六年たたないと出仕を許されないが、流罪に相当しなくて特に配流された者は三年の後には出仕を許される。この規定を考慮しての発言かとされる。（『花鳥余情』）。
一三 帝が遠慮しておられるうちに。

ど降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、おぼしおどろくまじきこと」と聞こえたまふ。〔桐壺院が〕にらみたまひしに見合はせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひて、堪へがたうなやみたまふ。御つつしみ、内裏にも宮にも限りなくせさせたまふ。太政大臣亡せたまひぬ。ことわりの御齢なれど、つぎつぎにおのづから騒がしきことあるに、大宮も、そこはかとなうわづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内裏におぼし嘆くことさまざまなり。「なほ、この源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありなむとなむおぼえはべる。今はなほ、もとの位をも賜ひてむ」と、たびたびおぼしのたまふを、「世のもどき、軽々しきやうなるべし。罪に懼ぢて都を去りし人を、三年をだに過ぐさず許されむことは、世の人もいかが言ひ伝へはべらむ」など、后かたくいさめたまふに、おぼし憚るほどに、月日かさなりて、御なやみども、さまざまに重りまさらせたまふ。

天候の悪い
目と目がお合いになったと夢に見たせいか〔帝は〕お目の病におかりになって
お苦しみになる
数知れずお取り
次々に
行いになる
こうして何となくおだやかでないことが続く上に
どこということなくお加減
がお悪くなって
（帝）やはり
この上はやはり〔源氏に〕
お考えをおっしゃるのを
（后）
お二方のご病気は
それぞれに
次第に重くなっていかれる

一四 例によって、秋は浜辺の風がことさら身にしみるので。源氏は去年の秋を須磨で過した経験があるので「例の」という。

秋、源氏、娘を呼び寄せようとするが、娘も親も思い悩む

一五 当の娘は娘でまた、源氏のもとに出向く気になどなるはずもない。

一六 取るにも足らぬ分際の田舎の女ならば、ほんの一時都から下って来た人の甘い言葉に乗せられて。以下「心をや尽くさむ」まで、娘の心中の思い。

一七 どうせ源氏は自分を人並みにも思っては下さらないであろうから。

一八 今までのように自分が未婚の娘でいる間は、あてにもならぬことをあてにして、将来立派にと望みをいだいてもいようが。

一九 ただ源氏がこの明石の浦にいらっしゃる間、こうしたお手紙だけでもやりとりし申し上げることができるのは、並々ならぬことなのだ。以下次の頁の二行目「身にあまることなれ」まで、再び娘の心中の思い。

二〇 こうして思いもかけずこちら（明石）にお住まいになることになって。

明石には、一四例の、秋は浜風の異なるに、〔源氏は〕ひとり寝もまめやかにもほんとうにつらい思いがするので のわびしうて、入道にもをり語らはせたまふ。話をおもちかけになる「何とか目立たぬようにして〔娘を〕こちらに寄こせないことと思いだが」とお思いだが はして、こち参らせよ」とのたまひて、ご自分がお出向きになることはとんでもわたりたまはむことをばあるまじうおぼしたるを、一五正身はた、さらに思ひ立つべくもあらず。一六いとくちをしき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、軽々しく契りを結ぶこともしようが 人数にもおぼされざらむものゆゑ、自分はひどい物思いの種を加えるだけのことだろう われはいみじきもの思ひをや添へむ、一七かく及びなつかぬ高望みをしている両親も き心を思へる親たちも、一八世籠りて過ぐす年月こそ、あいな頼みに、こんなに及びも 行く末心にくく思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむと思ひて、かえって大変な心配をすることになるだろう 一九ただこの浦におはせむほど、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそ、おろかならね、年ごろ音にのみ聞きて、長年噂に聞くだけで いつかはさる人の御あ一体いつ源氏のようなお方のご様子をちらりとでも拝見することがあろうかなどと りさまをほのかにも見たてまつらむなど、叶わぬことと思い申していたのに 遙かに思ひきこえしを、よそながらも 二〇かく思ひかけざりし御住ひにて、まほならねどほのかにも見たてまつり、世間に並びない上手と噂に聞いていた 世になきものと聞き伝へし御琴の音をも風につけて聞き、風のまにまに

一 こうまで人並みにお心にかけてお声をかけて下さるなどということは、こうした海辺の賤しい者たちの中に落ちぶれてしまった自分にとっては、分に過ぎることなのだ。

二 夢にも契りを結ぶことなどは思わない。「つゆも」は、少しもの意。

三 万一人並みに扱って頂けなかった時には、どんな悲しい思いをすることになるだろうと、先のことを考えると。

四 源氏がどんなにすばらしいお方だと申しても、そんなことになったら、怨めしく悲しくお思い申すことになるであろう。

五 肝腎の源氏のお気持も、娘がどんな運勢のもとに生れたのであろうかということも考えに入れないで。「宿世」は、前世からの因縁、具体的には現世でこれから先どうなるかということ。

六 この秋の頃の波の音に合せて、娘の琴の音を聞きたいものだ。そうでなくて

八月十三夜、源氏、岡辺の宿の娘のもとを訪れる

は、せっかくのこのよい季節のかいもない。

七 暦で適当な吉日を見はからって。

八 家来の法師たちなどにも知らせず。

九 「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや」（『後撰集』巻三春下、源信明）。娘を許す意をほのめかしたもの。

お暮しぶりも身近に見聞きして

け暮れの御ありさまおぼつかなからで、一かくまで世にあるものとおぼし尋ぬるなどこそ、かかる海士のなかに朽ちぬる身にあまることなれ、など思ふに、いよいよはづかしうて、二つゆも気近きことは思ひ寄らず。親たちは、ここらの年ごろの祈りのかなふべきを思ひながら、ゆくりかに見せたてまつりて、三おぼし数まへざらむ時、いかなる嘆きをかせむと思ひやるに、ゆゆしくて、四めでたき人と聞こゆとも、つらういみじうもあるべきかな、目に見えぬ仏神を頼みたてまつりて、五人の御心をも宿世をも知らで、など、うち返し思ひ乱れたり。六君は、「このころの波の音に、かのものの音を聞かばや。さらずは、かひなくこそ」など、常にのたまふ。

気おくれがして

今まで長年の祈願がこれでかなうことになるのだとは思うものの

よく考えもせず娘をお近づけ申して

心配でたまらず

こと改めて思い悩んでいる

源氏

〔人道は〕七忍びてよろしき日見て、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、弟子八どもなどにだに知らせず、心一つに立ちゐ、かかやくばかりしつらひて、十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。源氏君は、好きのさまやとおぼせど、御直衣たて

あれこれ心配するのに耳もかさず

自分の一存で奔走して〔娘の部屋を〕まばゆいほどに

ととのえて

風流ぶったものよ

お召

一〇 大げさになるということで。
一一 源氏の乳母子で腹心の家来。
一二（娘の住む岡辺の家は）海辺からやや遠くはいった所なのであった。
一三 いとしい人と一緒に眺めたい入江に映る月影につけても。「思ふどちいざ見に行かむ玉津島入江の底に沈む月影」（『源氏釈』）。玉津島は、紀伊の国、和歌の浦に臨む歌枕。
一四 私の乗るつきげの馬よ、月という名を負うならば、私が都を思って眺める大空を飛んでおくれ、つかの間でもあの人の姿を見ようものを。「秋の夜の」は、月に言い掛けて「つきげ」の序詞。「つきげ」は、鴇の羽色に似た赤味を帯びた毛色。
一五 庭木が鬱蒼と茂り、なかなかたいした趣向がこらしてあって。「いたし」は大層すぐれていること。
一六 こんな所に住んでいたら、あらん限りの物思いをし尽すことであろうと、娘の人柄がしのばれて。
一七 法華三昧の行法を修するお堂。（二六九頁注一七参照）
一八 岩の上に生えた松の根のごつごつした格好も。
一九 庭前の様々な植込みに。

しになって身なりをととのえて　夜更けを待って　〔人道が〕
まつりひきつくろひて、夜ふかして出でたまふ。御車は二なく作りたれど、一〇所狭しとて、御馬にて出でたまふ。惟光などばかりをさぶ　お供させなさる
らはせたまふ。やや遠く入る所なりけり。一二道のほども、四方の浦々見わたしたまひて、一三思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ恋し　途中も
き人の御ことを思ひ出できこえたまふに、やがて馬引き過ぎておも　紫の上　このまま馬を引いて通り過ぎて京へ
むきぬべくおぼす。　向いたい気になられる

（源氏）一四
秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる
雲居を翔れ時の間も見む

と、うちひとりごたれたまふ。　自然にお歌が口ずさまれる

〔岡辺の家は〕
造れるさま、一五木深く、いたきところまさりて、見どころある住ひ　海辺の家は贅を尽して興趣に富み
なり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさ　ひっそりとした風情の住ま
ま、一六ここにゐて、思ひ残すことはあらじとすらむと、おぼしやらるに、ものあはれなり。一七三昧堂近くて、鐘の声、松風に響きあひて、　しみじみした思いになる　風情のある様子だ
もの悲しう、一八岩に生ひたる松の根ざしも、一九心ばへあるさまなり。前

一 あらゆる虫を放って鳴かせている。
二 月のさし入った妻戸の出入口が、ほんのわずか押し開けてある。「月入れたる」の措辞に、あたかも源氏を閨に誘うかのように、という感じがあらわされている。「真木」の「真」は美称、杉、檜などの良質の建築材をいう歌語。この戸口を木戸口とするのは当らない。「君や来む我や行かむのいさよひに真木の板戸もさざず寝にけり」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）など。
三 なんとまあいっぱしの貴婦人めいた振舞であることか。以下「あなづらはしきにや」まで、源氏の心。
四 そんな態度を取りそうもない（簡単に男になびきそうもない）高い身分の女性でも。
五 思いやりなく無理を通すのも、この場合ふさわしい態度といえない。父入道の許しのある婚姻だからである。以下、源氏の心。
六 といって、意地の張合いに負けるのは体裁の悪いことだし、などと思い乱れて怨みを言われる様子は。
七 ほんとにものの情趣を解する人に見せたいほどだ。前の「あたら夜の」（二一八八頁）という入道の誘いをここに受けて「げに」という。
八 女の身近の几帳の紐（帷とともに垂れている野筋）が触れて箏の琴（十三絃）が音を立てたのも。
九 常に噂に聞いていますこの琴もお聞かせ下さらぬのですか。
一〇 閨の語らいの相手の人がほしいのです、このつら

栽どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覧ず。
一 〔源氏は〕邸内のあちこちの様子などを
娘住ませたるかたは、心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口、けしきばかりおしあけたり。うちやすらひ、何かとのたまふにも、か
二 念入りに磨き立てて
〔源氏が〕ためらいがちに
〔娘は〕
しきばかりおしあけたり。うちやすらひ、何かとのたまふにも、か
これほどまでに近々とはお会いすまいと深く思っているので
気を許そうとしない態度を
うまでは見えたてまつらじと深う思ふに、もの嘆かしうて、うちと
三
けぬ心ざまを、こよなうも人めきたるかな、さしもあるまじき際の
四
これほどまでに近づいてしまえば
気強くことばむこともないのが今までの例だった
人だに、かばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりし
のに
自分がこんなに落ちぶれているので
見くびっているのだろうかと
を、いとかくやつれたるに、あなづらはしきにやと、ねたう、さま
しゃくで
ざまにおぼしなやめり。情なうおし立たむも、ことのさまに違へり、
五
六
心くらべに負けむこそ人わろけれ、など、乱れ怨みたまふさま、げ
七
にもの思ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。
八
近き几帳の紐に、箏の琴のひき鳴らされたるも、けはひしどけな
取り片付けた様子もなく
くつろいだふんのまま琴を手なぐさみにしていたさまが察せられて風情があるので
く、うちとけながらかきまさぐりけるほど見えてをかしければ、
（源氏）
九
「この聞きならしたる琴をさへや」など、よろづにのたまふ。
（源氏）一〇
むつごとを語りあはせむ人もがな

い世間の夢かと思われる数々の辛酸も、それで半ばは慰められようかと思いまして。「むつごと」「夢」は縁語。

一一 明けることのない夜の闇の中にそのままどうしていいか分らないでいる（夢を見続けているような）私には、どちらを夢とはっきり取り分けてお話しすることができましょう。

一二 伊勢に下向した六条の御息所。（賢木一三五頁以下参照）

一三 こうした意外な源氏のお出でに気も動転して。

一四 どう戸締りをしたものか、びくともしないのを。

一五 けれども、いつまでもそんなことをしているわけにもいかない。とうとう部屋にはいったことをいう。

一六（今までの経緯をふりかえってみると）こんな結ばれるはずもない二人が結ばれたという深い縁をお思いになるにつけても。「あながち」は、無理の意。

一七 お逢いになってみてご愛情も深まるのであろう。草子地。

一八 人に知られまい（早く帰らなくてはならぬ）とお思いになるにつけても。

一九 後朝のお手紙が大層人目を忍んで今日は届けられた。今までの文通は大っぴらだったのである。

二〇 つまらぬ良心の呵責というものだ。草子地。源氏としては京への聞えを憚るのである。

憂き世の夢もなかば覚むやと

（娘）一一 明けぬ夜にやがてまどへる心には

いづれを夢とわきて語らむ

ほのかに言う様子は ほのかなるけはひ、一二 伊勢の御息所にいとようおぼえたり。〔娘は〕何も知らずにくつろいでいたのに くうちとけてゐたりけるを、一三 かうものおぼえぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の部屋の中に 入りて、一四 いかで固めけるにか、いと強きを、〔源氏は〕無理に意を通そうともなさらぬご様子である しひてもおし立ちたまはぬさまなり。一五 されど、さのみもいかでかはあらむ。人ざま、いとあてに、気品があり そびえて、すらりとして 心はづかしきけはひぞしたる。一六 かうあながちなりける契りをおぼすにも、浅からずあはれなり。一七 御心ざしの近まさりするなるべし。常はいとはしき夜の長さも、秋の夜の すぐに明けてしまった気がするので とく明けぬるここちすれば、一八 人に知られじとおぼすも、気が気でなくて心あわたたしうて、こまかに語らひ置きて出でたまひぬ。

御文、一九 いと忍びてぞ今日はある。二〇 あいなき御心の鬼なりや。ここ岡辺の家でも にも、源氏のお通いを何とか世間に知られぬようにと憚って かかることといかで漏らさじとつつみて、御使ことことしうも

もてなさぬを、胸いたく思へり。かくて後は、忍びつつ時々おはす。ほどもすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海士の子も（娘は）やはり思った通りだと悲しむのを や立ちまじらむとおぼし憚るほどを、さればよと思ひ嘆きたるを、ほんとにどうなることかと げにいかならむと、入道も、極楽の願ひをば忘れて、極楽往生の願いも ただこの御けしきを待つことにはす。今さらに心を乱るも、いといとほしげなり。

紫の上が　風の便りにでもこのことをお耳にされたりしたら
二条の君の、風のつてにも漏り聞きたまはむことは、たはぶれに　冗談にもせよ
隠しだてをしたのだと不愉快な思いをおさせ申すことになるのは　お気の毒だし合せる顔もないとお思いになるのも
ても心の隔てありけると思ひうとまれたてまつらむは、心苦しうは
づかしうおぼさるるも、あながちなる御心ざしのほどなりかし。かかるかたのことをば、さすがに心とどめて怨みたまへりしをりを、
（紫上が）　真剣に　どうして　つまらない気まぐれの忍び歩きにつけても　そんな思いをおさせ申したのだろうな
などて、あやなきすさびごとにつけても、さ思はれたてまつりけむ
など、とりかへさまほしう、人のありさまを見たまふにつけても、
入道の娘にお逢いになるにつけても　心をこめて　いつもより
恋しさのなぐさむかたなければ、例よりも御文こまやかに書きたまひて、奥に、

（源氏）
まことや、われながら心よりほかなるなほざりごとにて、うとま
そんなつもりもなかったつまらない浮気沙汰で

一 入道は残念に思っている。結婚第一夜の後朝の文の使いは盛大にもてなすしきたりであった。
二 距離も少し遠いので、途中に自然口さがない土地の若者もうろうろしているかもしれないと気をお遣いになって、お通いも控えめなのを。「海士の子」は、歌語。
三 待つことといっては、ただひたすら源氏のお通いだけである。出家の身で今さら入道が娘のことに思い悩むのも、まことに気の毒な有様である。入道の「待つこと」は、本来聖衆の来迎であるはずなのに、という気持。「は」は強意の助詞。　源氏、京の紫の上に自分から明石の上のことをほのめかす
四 あまりといえばあまりなご愛情の深さというものだ。草子地。
五 （今までも）こうした自分の浮気沙汰を。以下、「さ思はれたてまつりけむ」まで、源氏の心。
六 昔を今に取り返したい思いで。あの昔が今なら、そんな思いはさせなかったろう、の意。
七 紫の上への恋しさはつのる一方なので。
八 そういえば。思い出したように付け加える口調。
九 あなたに、いやな人だとおもしろくない思いをおさせ申したあれこれのことを。

一〇 またしても妙にとりとめもない夢を見たことです。娘と逢ったことをそれとなく知らせたもの。

一一 引歌未詳。『奥入』に「忘れじと誓ひしことをあやまたず三笠の山の神もことわれ」の歌をあげる（『紫明抄』以下、三句「あやまたば」）。

一二 次の歌の「しほしほとまづぞ泣かるる」に続く。

一三 しっとり涙に濡れて、まずあなたのことを思って泣けることです、ほかの女（ひと）とのかりそめの逢瀬は私の慰みごとのようなものであるにしても。「見る目」（人に逢うこと）に「海松布（みるめ）」を掛ける。「しほしほ」に掛けられている「しほ」（潮）、同じく「かりそめ」の「かり」（刈）とともに「海士（あま）」の縁語。

一四 とある文への紫の上のご返事は。

一五 隠しきれずに打ち明けて下さった夢のお話につけても、思い当ることが多いのですが。歌に続く。

一六 何の疑いもなく信じていたことです、末の松山を波は越えることはない―心変りはないものとお約束なさったことを。「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（『古今集』巻二十、陸奥歌（みちのくうた））、「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」（『後拾遺集』巻十四恋四、清原元輔）

一七 その後長いこと、忍びのお通いもなさらない。

れたてまつりし節々（ふしぶし）を、思い出すだけでもつらい気持ですのに思ひ出づるさへ胸いたきに、一〇またあやしうものはかなき夢をこそ見はべりしか。かう聞こゆる問はず語りに、隔（へだ）てなき心のほどはおぼし合はせよ。一一包み隠しをしない私の気持はお分りと思います誓ひしことも。

など書きて、

（源氏）一二何ごとにつけても、

一三しほしほとまづぞ泣かるるかりそめの

みるめは海士（あま）のすさびなれども

一四とある御返り、何心なくらうたげに書きて、果てに、

（紫上）一五こだわりのない可憐な書きぶりで忍びかねたる御夢語りにつけても、思ひ合はせらるること多かるを、

一六うらなくも思ひけるかな契りしを

松より波は越えじものぞと

（紫上）おだやかな調子ではあるものの

おいらかなるものから、お怨みをこめてほのめかしていられるのを（源氏は）ただならずかすめたまへるを、いとあはれに、うち置きがたく見たまひて、名残（なごり）久しう、忍びの旅寝もしたま

一 女（明石の上）は、恐れていたとおりの結果になったので。源氏の通いのないことをいう。今まで「娘」と呼ばれていたのが、ここではじめて「女」と呼ばれている。

明石の上の嘆き

二 今こそ本当に海に身も投げてしまいたいような気がする。二八〇頁の入道の言葉を受けていう。

三 いつまで生きているか分らない親だけを頼りにして。以下、明石の上の心。

四 一体何につけて心を悩ますようなことがあっただろう。気楽だった娘時代を振り返って思う。

五 所詮こんな気苦労の多い結婚生活を送る身の上だったのだと。「世」は、男女の仲の意であろう。

六 憎らしげのない態度で源氏にお逢い申す。悲しみなどおもてに表さない、たしなみのある態度をいう。

源氏と紫の上、それぞれ絵日記に無聊を慰める

七 大切にお思いの、都に遠く離れて会うこともかなわず年月を過していらっしゃる方が。紫の上をさす。

八 明石の上の許へはあまり通わずに。

九 それに心の思いを書きつけ、紫の上からの返事を聞けるようにという趣向になさった。歌を主にしたものであろう。

一〇 どうしてお話し合いもないのにお互いのお気持が通じ合うのであろうか。

はず。

一 女、思ひしもしるきに、二 今ぞまことに身も投げつべきここちする。三 行く末短げなる親ばかりを頼もしきものにて、いつの世に人なみな（いつになったら人並みの境遇にもなれよう身の上とも思わなかったけれども）みになるべき身とは思はざりしかど、ただそこはかとなくて過ぐし（何ということもなくぼんやり過してきた今までは）つる年月は、四 何ごとをか心をもなやましけむ、五 かういみじうもの思はしき世にこそありけれと、（前から想像していたよりも）かねておしはかり思ひしよりもよろづ（何かにつけ）に悲しけれど、（何げないように振舞って）なだらかにもてなして、六 憎からぬさまに見えたてまつる。

（いとしいものと）あはれとは月日に添へておぼしませど、（ご愛情は深まるが）七 やむごとなきかたの、おぼつかなくて年月を過ぐしたまふが、（心おだやかでなくこちらのことをお思いで）ただならずうち思ひおこせた（お気の毒なので）まふらむが、（あろうことが）いと心苦しければ、八 独り臥しがちにて過ぐしたまふ。絵をさまざま書き集めて、（数多く書いて）九 思ふことどもを書きつけ、返りこと聞くべきさまにしなしたまへり。（見る人の心にしみ入るに違いないすばらしい出来ばえだ）見む人の心にしみぬべきもののさまなり。一〇 いかでか空に通ふ御心ならむ、二条の君も、（紫の上）ものあはれになぐ（もの悲しくて心の晴れよう）

一一 日記のようにお書き入れになった。日記は、かならずしも毎日でなく、その日の記録の意。
一二 どうなるお二人の身の上であろうか。草子地。どんな二人の身の上が絵日記に書かれてゆくのだろうか、の意。
一三 帝のご病悩のことがあって。眼病のことは二八六頁に見える。
一四 今上のお子様は。以下「ゆづりきこえたまはめ」までは世間の取り沙汰を書く趣。
一五 後に登場する髭黒の大将の父。
一六 御位は今の東宮（藤壺腹）にお譲りになることになろう。
一七 その場合、帝のご後見をして政治をとり行うべき人物を。
一八 ご赦免になられるという評定がなされた。「定め」は、公卿の会議で決めること。
一九 弘徽殿の大后の病気のことも二八六頁に見えたが、それをここでは、物の怪による病であったという。
二〇 以下と同様の表現が前（二八五頁）にも見えた。
二一 源氏を都に召還するという宣旨が下った。「宣旨」は、帝のご意向を文書にしたもの。詔や勅は手続きが煩雑で儀式的な場合に用いられる。普通のことは宣旨による。

右大臣 ─┬─ 髭黒
　　承香殿女御
帝 ═══ 皇子

年改まって七月二十余日、召還の宣旨下る

もなく思われなさる時々は
さむかたなくおぼえたまふをりをり、同じやうに絵を書き集めたまひつつ、やがてわが御ありさま、日記のやうに書きたまへり。いかなるべき御さまどもにかあらむ。

年が改まった
年かはりぬ。内裏に御薬のことありて、世の中さまざまにののしる。当代の御子は、右大臣の女、承香殿の女御の御腹に男御子生まれたまへる、二つになりたまへば、いといはけなし。春宮にこそはゆづりきこえたまはめ。朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人をおぼしめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこと、いとあたらしうあるまじきことなれば、つひに后の御いさめをも背きて、ゆるされたまふべき定め出で来ぬ。去年より、后も御もののけになやみたまひ、さまざまのもののさとししきり、騒がしきを、いみじき御つつしみどもをしたまふしるしにや、よろしうおはしましける御目のなやみさへ、このころ重くならせたまひて、もの心細くおぼされければ、七月二十余日のほどに、また重ねて、京へ帰りたまふべ

取り沙汰
まだとてもご幼少だ
〔帝が〕
不遇でいられることは
惜しく
母后のご諫言
よろしくないことであるので
不穏である上に
多少快方に向われていた
ご病気までが

き宣旨下る。

一 つひのことと思ひしかど、世のさだめなさを思うにつけても 世の常なきにつけても、一体どうなってしま うつべきにかと嘆きたまふを、二 かうにはかなれば、うれしきに添へても、また、明石 この浦を今はと思ひ離れむことをおぼし嘆くに、入道、これを最後と立ち去ることを 当然のことと思うものの さるべきことと思ひながら、うち聞くより胸ふたがりておぼゆれど、胸もふさがる悲しい思いであるが 三 思ひのごと栄えたまはばこそは、わが思ひのかなふにはあらめなど、思ひ直す。そのころは夜離れなく語らひたまふ。六月ばかりより心 四 五 苦しきけしきありてなやみけり。こうしてお別れなさらねばならぬ時なので かく別れたまふべきほどなれば、六 あやにくなるにやありけむ、以前よりもいとしくお思いになって ありしよりもあはれにおぼして、不思議 あやに物思いの絶えることのない身の上であることよと しうもの思ふべき身にもありけるかなとおぼし乱る。女は、改めてさらに うまでもなく悲しみにくれている も言はず思ひ沈みたり。七 いとことわりなりや。八 思ひのほかに悲しき 道に出で立ちたまひしかど、つひには行きめぐり来なむと、かつは 一方では希望をお持ちだった おぼしなぐさめき。九 このたびはうれしきかたの御出で立ちの、また やはかへりみるべきとおぼすに、あはれなり。お供の家来たちも それぞれ さぶらふ人々、ほど

明石の上懐妊、源氏の悩み

一 いつかはこうなると思ってはいたものの。以下、源氏の心。

二 こうして急に都に帰れることになったので。

三 思いどおりに源氏がお栄えになってこそ、はじめて自分の望み（娘の栄達）もかなうことになるのだ。

四 夜のお通いのとだえることなく、（女君と）仲むつまじくしていらっしゃる。

五 女君は痛々しい様子があって気分がすぐれなかった。懐妊の徴候である悪阻があったことをいう。

六 源氏はあいにくと愛情がいや増すのであろうか。

七 ほんとに無理もないことだ。草子地。

八 思いもかけず須磨への悲しい旅路にお出になったのであるが、いつかはきっと都に帰って来ることになろうと。以下、源氏のこと。

九 今度はそれとはうって変ってうれしい都へのご出立であるが、二度と再びこの明石の浦を訪れることがあろうかとお思いになると、感無量である。

一〇 新しい月になった。仲秋の八月である。上の「くれて」は、「月」と響き合う。
一一 どうして、自分から求めて今も昔も埒もない色恋沙汰にわが身を捨てて顧みないのかと。源氏の心。
一二 明石の上との事情を知っている家来たちは。
一三 困ったお方だ、またいつもの天の邪鬼がはじまった。帚木の巻の冒頭に「まれには、あながちに引き違へ心尽くしなることを、御心におぼしとどむる癖なむ、あやにくにて」（一巻四五頁）とあった。
一四 家来たちは、互いに腕をつつき合う。それとなく非難するしぐさ。
一五 良清。二六六頁に源少納言と呼ばれている。
一六 出発は明後日という日の夜。
一七 いつものようにひどく夜が更けてからというのでなく。別れを告げる最後の逢瀬だからである。
一八 しかるべき扱いにして都に迎えようという気になられた。身分が身分なので処遇の問題は微妙である。
一九 源氏。二人がさし向いでいる恋の場面に特有の端的な呼び方。女も単に「女」と呼ぶ。

源氏、琴を弾じて明石の上と別れを惜しみ、歌を詠み交わす

陽気には季節もちょうど
れの身の程なりに帰京を喜んでいる
ほどにつけてはよろこび思ふ。京よりも御迎へに人々参り、ここち
しゃいでいるが
よげなるを、あるじの入道、涙にくれて、一〇月も立ちぬ。ほどさへあ
もの悲しい空のたたずまいに
はれなる空のけしきに、一一なぞや、心づから今も昔もすずろなること
にて身をはふらかすらむと、さまざまおぼし乱れたるを、一二心知れる
人々は、「一三あな憎、例の御癖ぞ」と見たてまつりむつかるめり。月
少しも人に様子をさとらせず　こっそり人目を忍んでお通いといった冷淡
おもしろからずお思い申すようだ
ごろは、つゆ人にけしき見せず、時々はひまぎれなどしたまへるつ
近頃はまたあいにくと　女の嘆きの種だと
さだったのに　なまじっか
れなさを、このころあやにくに、なかなかの、人の心づくしにと、
娘を取り持ちすることになった北山での噂話のことなど人々がひそ
一四つきじろふ。少納言、一五しるべして聞こえ出でしはじめのことなどさ
ひそ噂しているのを　おもしろくなく思っている
めきあへるを、ただならず思へり。

明後日ばかりになりて、一六例のやうにいたくもふかさで、わたりた
はっきりとも　なかなか優雅な風情があり
まへり。さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、いとよしよししう気
〔女君の〕　身分に似合わぬすぐれた女なのだったと　残念に
高きさまして、めざましうもありけるかなと、見捨てがたく、くち
そのように　約束しておなぐさめになる
をしうおぼさる。一八さるべきさまにして迎へむとおぼしなりぬ。さや
言うに及
うにぞ語らひなぐさめたまふ。一九男の御容貌、ありさまはた、さらに

一 何年もの勤行にとても面やつれしていらっしゃるのがかえって。須磨退居は一昨年の春だから、それ以来足掛け三年になる。

二（こういうお方となら）ただこの程度のはかない逢瀬だけでも身に余る幸いと思って、あきらめてもいいではないかとまで思われもしようが、男君のすばらしさにつけても、わが身のほどを思うと悲しみは尽きない。明石の上の心。

三 海水をかけた海藻を日に乾かし、これを焼いて水に溶かし、煮つめて塩を製した。

四 今度は別れ別れになっても、藻塩を焼く煙が同じ方にたなびくように、やがてはあなたを都に迎えよう。「たび」に「度」と「旅」を掛ける。「立ち」は煙の縁語。

五 いろいろと悲しみに胸はいっぱいでございますが、悲しんでも、及ばぬ身の上ではどうしようもないことゆえ、お恨みも申し上げますまい。「かきつめて」は、掻き集めて。「かきつめて海士のたく藻の」は、火に言い掛けて「思ひ」（「ひ」に「火」を掛ける）の語を導き、全体で自分の悲しみを卑下していう。「かひなき」の「かひ」に「貝」、「うらみ」に「浦見」を掛け、いずれも海士の縁語。

六 こういう場合のご返歌などは、心をこめて申し上げる。

ばぬお美しさだ

も言はず。年ごろの御行ひにいたく面痩せたまへるしも、言ふかたなくめでたき御ありさまにて、心苦しげなるけしきにうち涙ぐみつつ、あはれ深く契りたまへるは、ただかばかりを幸ひにても、などか止まざらむとまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、わが身のほどを思ふも尽きせず。波の声、秋の風にはなほ響き異なり。塩焼く煙かすかにたなびきて、とりあつめたる所のさまなり。

痛々しげなご様子で

しみじみと愛情深く将来を約束なさるのは

何もかもがもの悲しいこの地の景色である

（源氏）四

このたびは立ち別るとも藻塩焼く
煙は同じかたになびかむ

とのたまへば、

（明石上）五

かきつめて海士のたく藻の思ひにも
今はかひなきうらみだにせじ

せつなげに

あはれにうち泣きて、言少なるものから、六さるべき節の御答へなど浅からず聞こゆ。この常にゆかしがりたまふものの音など、さらに聞かせたてまつらざりつるを、いみじう恨みたまふ。「さらば、

源氏がいつも聞きたがっていらした琴の音

（源氏は）

ってもお聞かせ申し上げなかったことを

（源氏）それでは

七 あなたの形見として思い出になるように、せめて一弾きだけでも。「一こと」は「一言」に「一琴」を掛ける。

八 京からたずさえて来られた琴の琴を、浜辺の館に取りに使いをおやりになって。琴のこと、二七五頁に既出。

九 感に堪えず。

一〇 ひとしお、涙までもよおされて。「そそのかす」には、すすめるの意があるので、琴の演奏をすすめられるだけでなく「涙さへ」という。

一一 落涙を禁じ得ないので、気持をそそられるのであろう。

一二 とても気品のある演奏ぶりである。

一三 藤壺。以下、明石の上の弾奏を藤壺のそれと思い比べる源氏の心。

一四 (それは) 当世風にはなやかで、ほんとにすばらしいと、聞く人がほれぼれして。

一五 深みがあって、しゃくなと思われるほどの練達した音色にすぐれている。

一六 源氏のように音楽に堪能なお方の耳にも。

一七 もっと聞きたいと心残りを感じさせる程度に途中までで弾き止め弾き止めして、残念にお思いになるにつけても。

一八 心をこめて再会のお約束をなさるばかりだ。

一九 この琴はこの次一緒に弾く時までの形見に (ここに残してゆこう)。

形見にもしのぶばかりの一ことをだに」とのたまひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りにつかはして、心ことなる調べをほのかにかき鳴らしたまへる、深き夜の澄めるは、たとへむかたなし。入道、え堪へで、箏の琴取りてさし入れたり。みづからも、いとど涙さへそそのかされて、とどむべきかたなきに誘はるるなるべし、忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。入道の宮の御琴の音を、ただ今のまたなきものに思ひきこえたるは、今めかしうあなめでたと、聞く人の心ゆきて、容貌さへ思ひやらるることは、げにいと限りなき御琴の音なり、これはあくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる。この御心にだに、はじめてあはれになつかしう、まだ耳なれたまはぬ手など、心やましきほどに弾きさしつつ、飽かずおぼさるるにも、月ごろ、など強ひても聞きならさざりつらむと、くやしうおぼさる。心の限り行く先の契りをのみしたまふ。「琴はまた搔き合はするまでの形見に」とのたまふ。女、

澄んだ音色は
明石の上当人も
〔御簾の内に〕
格別に風情のある曲を
ほんとにこの上
明石の上のはどこまでも音色が冴えて
当代に比類のないものとお思い申し上げていたが
はじめて聞く感じのしみじみと心ひかれる
珍しく思われる曲などを
どうして無理を言ってでもいつも聞かなかったのだろうと
後悔されなさる
〔源氏〕

一 軽いお気持でうれしいことをおっしゃって下さるのでしょうが、私はそのお言葉を、いつまでも悲しみに泣き濡れながら思い出すのでしょうか。「頼め」（下二段）は、頼りにさせる意。「一こと」は「一言」に「一琴」を掛ける。「音」は琴の縁語。琴を残しておこうという源氏の言葉に答えた形の歌。

二 再び会うまでの形見とお約束するこの琴の中の緒の調子―私たち二人の仲の愛情―は、格別変ることなくあってほしいものです。「かたみに」に、互いにの意を掛ける。「中の緒」は、明らかでないが、箏の琴に太緒、中緒、細緒という区別がある。ここは「中」に二人の仲の意を掛ける使い方。

三 （女としては）ただこの別れのつらさに胸をいっぱいにしているのも、ほんとに無理もないことだ。

出立の明け方、源氏明石の上と唱和する

四 人目のない折を見はからって。

五 あなたをこの浦に残して出立する私の心も悲しくてなりませんが、そのあとどんなに嘆かれるかと案じられることです。「立つ」「浦波」「なごり」（余波）は縁語。

六 ご出立のあとは、長年住みなれたこの浦の苫屋も荒れてつらいことでございましょう、あなたのお帰りになる海に身を投げてしまいましょうか。「苫屋」は、海辺の粗末な家。卑下の語。「たぐふ」は、一緒にする。

（明石上）一 なほざりに頼め置くめる一ことを
尽きせぬ音にやかけてしのばむ

思わず口ずさんだこの歌を
言ふともなき口ずさびを恨みたまひて、

（源氏）二 逢ふまでのかたみに契る中の緒の
調べはことに変らざらなむ

この音違はぬさきにかならずあひ見むと頼めたまふめり。されど、狂わないうちに 三 ただ別れむほどのわりなさを思ひ咽せたるも、いとことわりなり。

立ちたまふ暁は、暗いうちに夜深く出でたまひて、〔京からの〕御迎への人々も騒がしければ、心も空なれど、四 人間をはからひて、

（源氏）五 うち捨てて立つも悲しき浦波の
なごりいかにと思ひやるかな

御返り、

（明石上）六 年経つる苫屋も荒れて憂き波の
帰るかたにや身をたぐへまし

七　事情を知らぬ人々は。都の迎えの人々などであろう。
八　やはりこんな田舎のお住まいではあるが。
九　これが最後とお思いの時は、悲しくお思いになるのもごもっともなことだ。
一〇　女君を並々でなくいとしくお思いなのであろうと、いまいましく思う。
一一　（源氏の家来たちは）ほんとに今日を最後にこの海辺ともお別れだ、などと感慨をもよおして。
一二　けれども、書きとめるにも及ばないと思って。家来たちの歌などは省略したとことわる草子地。
一三　ご衣裳を納めた櫃をたくさん担わせてお供させる。御衣櫃は肩に掛けるので「かけ」を数詞として用いる（図録一二参照）。
一四　きちんとした都へのお土産にもできそうな贈り物を、立派に整えて、何から何まで行き届いた配慮ぶりだ。
一五　出立の時お召しになる狩衣に。狩衣は旅装（一巻図録一二参照）。
一六　ご用意申し上げましたこの旅のお着物は、私の悲しみの涙にしとどに濡れているとお厭いでしょうか。「寄る波に」は「立つ」（「裁つ」を掛ける）を言い出す序詞、「しほどけし」（形容詞）はその縁語。

入道、源氏の旅装や贈り物に心をくばる　別れの歌の唱和

と、うち思ひけるままなるを見たまふに、忍びたまへど、ほろほろ（我慢なさるが）（心の内をそのまま歌にしたのを〔源氏は〕）とこぼれぬ。心知らぬ人々は、なほかかる御住ひなれど、年ごろといふばかり馴れたまへるを、今はとおぼすはさもあることぞかし、（何年といって）（いいほど住み馴れなさったのを）など見たてまつる。良清などは、おろかならずおぼすなめりかしと、憎くぞ思ふ。うれしきにも、げに今日を限りにこの渚を別るること、（うれしいにつけても）などあはれがりて、口々しほたれ言ひあへることどもあめり。されど、何かはとてなむ。（それぞれ涙を流して皆で詠んだ歌などもあるようだ）

入道、今日の御まうけ、いといかめしうつかうまつれり。人々、下の品まで、旅の装束めづらしきさまなり。いつの間にかしあへけむと見えたり。御よそひは言ふべくもあらず。御衣櫃あまたかけさぶらはす。まことの都の土産にしつべき御贈り物ども、ゆゑづきて思ひ寄らぬ隈なし。今たてまつるべき狩の御装束に、

（今日の旅立ちのお支度を）（とても盛大におととのえ申し上げた）（家来たち）（源氏のご装束は言いようもなくすばらしい）（準備しおおせたのかと）

（明石上）寄る波に立ちかさねたる旅衣

しほどけしとや人のいとはむ

とあるを御覧じつけて、騒がしけれど、（お目に止めて）（あわただしいけれど）

かたみにぞ換ふべかりける逢ふことの（源氏）

日数隔てむ中の衣を

とて、心ざしあるをとて、たてまつり換ふ。御身になれたるども（今まで身につけておられたものを）をつかはす。げに今一重しのばれたまふべきことを添ふる形見なめり。（〔源氏の〕）えならぬ御衣に匂ひの移りたるを、いかが人の心にもしめざらむ。（すばらしい）（きっぱりと世を捨てた出家の身ではあるが）入道、「今はと世を離れにし身なれども、今日の御送りにつかうまつらぬこと」など申して、かひをつくるもいとほしながら、若き人（若い連中）は笑ひぬべし。（は吹き出すことだろう）

（入道）「世をうみにここらしほじむ身となりて

なほこの岸をえこそ離れね

心の闇はいとどまどひぬべくはべれば、境までだに」と聞こえて、（入道）（色めいた申しようでございますが）「すきずきしきさまなれど、おぼし出でさせたまふをりはべらば」（ご意向をうかがう）（〔源氏は〕）など、御けしき賜はる。いみじうものをあはれとおぼして、所々う

一 形見としてお互いに着物を取り換えることにしよう、また逢うまで多くの日数を隔てる仲なのだから。「形見」に「互み」を掛ける。「中の衣」は、男女共寝する時二人の間を隔てる着物の意で、男女の仲の意を兼ねる歌語。

二 せっかく作ってくれたものだからということで、お着換えになる。

三 ほんとにもう一層女君の悲しい思慕の思いをそそる形見の品になることであろう。「一重」は着物の縁語。「しのばれたまふ」の主語は源氏、「れ」は受身。

四 どうして女君としても心に深くしみじみと思わないことがあろう。「しめ」は「匂ひ」の縁語。

五 今日のお見送りのお供ができませんのはまことに悲しい。

六 べそをかくのも気の毒だが。口をへの字に曲げるのが貝の形に似るからという。海辺の縁語である。

七 世間がいやになって、もう長年この海辺に暮す身の上となりましても、やはりこの世への執着は捨て切れません。「うみ」に「憂み」と「海」を掛け、「しほじむ」（潮染む）「岸」はその縁語。「この岸」は「彼岸」（悟りの境地）に対して言い、「こ」に「子」を響かせる。

八 娘のことを思いますと一層悲しみが増すでございましょうから、国境までもとてもお見送りできません。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、兼輔）による。

九 お思い出し下さいます折がございましたら（娘を都にお迎え下さいませ）。
一〇 私として見捨てにくい筋合のこともあるようですから、そのうち、すぐに私の気持はお分りいただけるでしょう。懐妊のこともあるから、やがては京に迎えよう、の意。
一一（明石の上との再会はあろうが）ただ住み馴れたこの明石を去ることはつらい限りです。
一二 都を出た時のあの春の嘆きに劣ろうか、何年も住み馴れたこの明石の浦と別れてしまう秋の悲しみは。京を出たのは一昨年の「三月二十日あまり」（須磨二〇三頁）であった。
一三 立ち居の動作も悲しみにままならず、あきれるほどよろよろする。入道を滑稽気味に描く筆致。
一四 当の女君の悲しみは、たとえようもないほどで。
一五 元来が不仕合せなわが身の上がすべての原因なのだから、どうしようもないことではあるが。
一六 できることといっては涙に伏し沈むだけである。「たけし」は、なし得る限りだ、精いっぱいだ、というほどの意。
一七 機嫌をとるのに手こずって。
一八 源氏の君がお見捨てになるはずのない懐妊のこともおありなのだから、そうはいっても先のことはお考え下さっているであろう。

入道一家の悲嘆

ち赤みたまへる御まみ（目もと）のわたりなど、言はむかたなく（言いようもなくお美しく）見えたまふ。

「思ひ捨てがたき筋もあめれば、今、いととく見なほしたまひてむ。一〇（源氏）ただこの住処（すみか）こそ見捨てがたけれ。いかがすべき（どうしたらよいのだろう）」とて、

一二（源氏）都出でし春の嘆きに劣らめや
年経（ふ）る浦を別れぬる秋

とて、（涙を）おしのごひたまへるに、（入道は）いとどものおぼえず（一層正体もなく）、しほたれまさる。一三 立ちゐもあさましうよろぼふ。

正身（さうじみ）のここち、たとふべきかたなくて、かうしも人に見えじと思ひしづむれど、身の憂（う）きをもとにて、わりなきことなれど、（源氏が）うち捨てたまへる恨みのやるかたなきに、（やり場がない上に）おもかげ添ひて忘れがたきに、（お姿が目にちらついて忘れようもないので）一六 たけきこととはただ涙に沈めり。母君もなぐさめわびて、（母君）「何にか（どうして）こんな気苦労なことを思いついたのだろう）心尽くしなることを思ひそめけむ。すべて、ひがひがしき人に従（変り者の主人の言いなりになっていた私の失敗でした）ひける心のおこたりぞ」と言ふ。（入道）「あなかまや（お黙りなさい）。一八 おぼし捨つまじきこともものしたまふめれば、さりともおぼすところあらむ。思ひな（気を楽に）

一 お薬などでも召し上がれ。「湯」は、薬湯。
二 部屋の隅に引っ込んで寄りかかっている。口では強がりを言うものの、意気銷沈のてい。
三 一日も早く、なんとかして思い通りのお身の上にしてお世話申そうと、長の年月をそればかり夢見て過し。
四 おかわいそうな有様を、結婚早々から見なくてはならないとは。
五 入道はつらくてたまらないので、ますます頭がぼんやりしてきて。「られ」は自発。
六 数珠もどこへやったか分らなくなったといって、素手を合せてぼんやり空を眺めている。勤行も忘れてしまった有様。
七 それを弟子たちに軽蔑されて、一念発起、月夜に庭に出て行道したまではよかったが、なんと遣水にころげ込んでしまった。「行道」は、経をよみながらめぐり歩くこと。
八 難波は古くから祓えの場所として有名。「祓へ」は、神に祈って災いや罪を取り除くこと。
九 無事に帰京できることになって、いろいろの願を立てたそのお礼に改めて参詣する旨を。
一〇 急にご身辺もこみ合って動きが取れず。京からの出迎えの人数もふえたのであろう。

源氏入京　二条の院に紫の上と再会　権大納言に昇進

ぐさめて、御湯などをだに参れ。（なんと縁起でもない）あなゆゆしや」とて、片隅に寄りゐたり。乳母、母君など、ひがめる心を言ひ合はせつつ、（入道の変り者ぶりを非難し合いながら）「いつしか、いかで思ふさまにて見たてまつらむと、年月を頼み過ぐし、今や思ひかなふとこそ頼みきこえつれ、心苦しきことをも、もののはじめに見るかな」と嘆くを見るにも、いとほしければ、いとどほけられて、昼は日一日寝をのみ寝暮らし、夜はすくよかに起きゐて、数珠の行方も知らずなりにけりとて、手をおしすりて仰ぎゐたり。弟子どもにあばめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩の片そばに腰もつきそこなひて、（風流な）（突き出たかどに腰などもぶつけて怪我をして）病み臥したるほどになむ、すこしものまぎれける。（寝込んでしまう仕儀になってやっと〔痛みに〕少し悲しみも紛れるのだった）

君は、難波のかたにわたりて御祓へしたまひて、住吉にも、たひらかにていろいろの願果たし申すべきよし、御使して申させたまふ。（報告おさせになる）にはかに所狭うて、みづからはこのたびえまうでたまはず、ことなる御逍遙など（ご遊覧もなくて）なくて、急ぎ入りたまひぬ。（格別の）（〔京に〕）

一一 生きていてもかいないものと何の未練も持っておられなかった命を、今まで永らえて再会できたことをうれしくお思いになられることであろう。源氏と別れる時、紫の上は「惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとどめてしがな」（須磨二二四頁）と詠んだ。

一二 扱いにくいほど多かったお髪のすこし落ち細ったのがかえって、とてもすばらしいのを。

一三（源氏には）痛々しくお心に浮ぶ。

一四 やはりいつになっても、こうした恋の道でお心の休まる時とてないお方なのだ。草子地。

一五 紫の上は、おだやかならぬお気持で拝見なさるのであろうか。

一六「忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな」――あなたに忘れられるわが身のことは案じもいたしませんが、神仏に誓って愛を約束したあなたの命が心配でなりません（『拾遺集』巻十四恋四、右近）。

一七 こうして逢っていてもいつまでも見ていたいと思われるご様子を、どうして逢わずに長の年月を過したことかと。

一八 もとの官職（参議、右大将）から昇進して、定員外の、すなわち権大納言になられた。令制では大納言の定員は二名。正三位相当。

二条の院におはしましつきて、都の人も、御供の人も、夢のここちして行き合ひ（再会し）、よろこび泣きもゆゆしきまで立ち騒ぎたり。（うれし泣きも縁起でもないほど大騒ぎしている）女君（紫の上）も、かひなきものにおぼし捨てつる命、うれしうおぼさるらむかし。いとうつくしげに（愛らしげに）、ねびととのほりて（大人びて容姿もととのい）、御もの思ひのほどに、所狭（お留守中のお悲しみに）かりし御髪のすこしへがれたるしも、いみじうめでたきを、今はかくて見るべきぞかしと、御心落ちゐるにつけては（からはこうして一緒に暮せるのだと〔源氏は〕ご安心なさるにつけては）、また、かの飽かず別れし人の思へりしさま（思いで別れた人の悲しんでいた様子が）、心苦しうおぼしやらる。なほ世とともに、かかるかたにて御心の暇ぞなきや（明石の上）。その人のことどもなど聞こえ出でたまへり（お話し申し上げなさる）。おぼし出でたる御けしき浅からず見ゆるを（思い出していられるご様子が並々でなく見えるのを）、ただならずや見たてまつりたまふらむ（〔紫上に〕）、わざとならず（さりげないふうに）、「身をば思はず」など、ほのめかしたまふぞ（ちらりと嫌味を言われるのを〔源氏は〕しゃれてかわいらしいと）、をかしうらうたく思ひきこえたまふ。かつ見るにだに飽かぬ御さまを、いかで隔てつる年月ぞと（信じられ）、あさましきまで思ほすに（ぬような気がなさるにつけ）、とりかへし（今さらながら）、世の中もいとうらめしうなむ（あの時のいきさつも）。ほどもなく、もとの御位あらたまりて、数よりほかの権大納言になり

一　源氏に連座して罷免された家臣たち。

二　帝からお召しがあって。

源氏参内して帝と語る
東宮、藤壺とも対面

三　いよいよご立派になられて、（こんなすばらしいお方が）どうしてあのような辺鄙な田舎に何年もお過しだったのであろうと、人々はお思い申し上げる。

四　帝も（源氏の立派さに）気がひけるほどのお気持がなさって。

五　ご気分がすぐれなくて、もうこのところ何日にもおなりでいらせられたので。

六　昨日今日は少しご気分もおなおりのようにおぼしめされたのであった。源氏とのご対面も実現したその事情を述べたもの。

七　八月十五夜。源氏が須磨で殿上の御遊のことなどを思ったのも、八月十五夜であった（須磨二四〇頁）。

八　気もお弱くなっていらせられるのであろう。ご病気のため譲位のお心づもりがあることを暗示する草子地。

九　昔聞いたあなたの演奏。

たまふ。つぎつぎの人も、（しかるべき者たちは皆）さるべき限りはもとの官返し賜はり世に（世間に復帰を許されるのは）ゆるさるるほど、枯れたりし木の春にあへるここちして、いとめでたげなり。

召しありて、内裏に参りたまふ。御前にさぶらひたまふに、ねびまさりて、いかで、さるものむつかしき住ひに年経たまひつらむと見たてまつる。女房などの、院の御時よりさぶらひて、（桐壺院ご在位中からお仕えして）老いしらへるどもは、（老いぼれてしまった連中は）悲しくて、今さらに泣き騒ぎめできこゆ。上もはづかしうさへおぼしめされて、（今さらのように）御よそひなど、（お召し物なども）ことに引きつくろひて出でおはします。御ここち例ならで、日ごろ経させたまひければ、いたう静かなるに、昔のこと、（帝は）かきくづしおぼし出でられて、（少しずつ次から次へと思い出されなさって）しほたれさせたまふ。もの心細くおぼさるるなるべし。「遊びなどもせず、昔聞きしものの音なども聞かで、久しうなりにけるかな」とのたま

（控えておられるお姿は）
（念入りにおととのえになって）
（出御あそばす）
（大層お弱りになっていらせられたけれども）
（しみじみと）
（涙にくれさせられる）
（帝）管絃の催し

一〇 海辺にうちしおれ心細い思いで、動きの取れない三年の間を過してきたことです。「かぞいろ（父母）はあはれと見ずや蛭の児は三歳になりぬ脚立たずして」（『日本紀竟宴和歌』大江朝綱）による。伊弉諾、伊弉冉の二神が蛭児を生み、「已ニ三歳ニナルマデ脚猶立タズ　故之ヲ天磐櫲樟船ニ載セテ　順風　放チ棄ツ」（『神代紀』上）とあるのを詠んだもの。源氏の流謫は足掛け三年であるので、「蛭の児の脚立たざりし年」（三年）といった。「わたつ海」「しなえうらぶれ」いずれも『万葉集』に見える古語。

一一 こうして互いに再会の時があったのだから、あの別れた春の恨みは忘れてほしいものです。「宮柱」は伊弉諾、伊弉冉の国生み神話に基づき「めぐりあふ」の序詞。磯馭慮嶋を国の中の柱として二神がそれをめぐった二度目の時に「於是二神却テ更ニ相遇ヒヌ」（『神代紀』上）とある。

一二 法華八講のこと。『法華経』を講讃する法会。次の澪標の巻に見える。

一三 東宮はこの年、十歳。

一四 東宮はご学問もこの上なくご上達なさって、御位におつきになって天下をお治めあそばすのに何の心配もないであろうと。

一五 明石から京まで源氏を送って来て帰る人々にことづけて。「返る波」は歌語。

源氏、明石に文通、五節と歌の贈答

はするに、

（源氏）一〇
わたつ海にしなえうらぶれ蛭の児の
脚立たざりし年は経にけり

と聞こえたまへば、〔帝は〕まことにお気の毒なと顔向けできぬお思いで（帝）一一
宮柱めぐりあひける時しあれば
別れし春のうらみ残すな

優雅な〔帝の〕いとなまめかしき御ありさまなり。

桐壺院院の御ために、一二八講行はるべきこと、〔源氏は〕準備なさる〔再会を〕すっかり成人なさっておられてまづいそがせたまふ。一三春宮を見たてまつりたまふに、こよなくおよすけさせたまひて、〔源氏は〕おいとしくめづらしうおぼしよろこびたるを、限りなくあはれと見たてまつりたまふ。一四御才もこよなくまさらせたまひて、世をたもたせたまはむに憚りあるまじく、藤壺ご立涙にかしこく見えさせたまふ。入道の宮にも、お気持がすこし落着御心すこししづめて、いてから御対面のほどにも、しみじみとしたお話がいろいろあるであろうあはれなることどもあらむかし。

そういえば人目につまことや、かの明石には、一五返る波につけて御文つかはす。ひき隠

一 波の打ち寄せる明石の浦での独り寝の夜々をどんなにか。歌の「嘆きつつ」に言い掛ける。「波のよるよる」（「寄る」に「夜」を掛ける）は歌語。「有度浜のうとくてのみや世をば経む波のよるよるあひ見てしがな」（『古今六帖』三）などの例がある。

二 あなたが（毎夜どんなにか）嘆きながら夜を明かす明石の浦に、あなたの嘆きの息が朝霧となって立っていようかと思いやることです。「君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知らませ」（『万葉集』巻十五）など、嘆き（嘆息）が霧となって立つという発想による。「朝霧」は「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」（『古今集』巻九羇旅、左注に人麿作）による。

三 須磨の巻（二四三頁）に源氏との贈答があった大弐の娘。

四 もともとどうにもならぬことだったが、人知れず須磨の源氏に同情して心を寄せた恋心もさめてしまった気がして。帰京して今を時めく源氏に対するやるせない気持をいう。

五 使いにどこからの文とも言わせず、ただ目くばせさせて。「まくなぎ」（蟻）は、蚊、ぶよの類の小虫。これが目の前を飛ぶ時まばたきするのでいう（『源語秘訣』）。

六 須磨の浦で心をお寄せ申した舟人が、その時以来涙で朽ちさせてしまった袖をお見せしたいことです。

七 かえってこちらから苦情を申したいくらいです、かぬようにしてこまごまとお書きになるようだしてこまやかに書きたまふめり。

（源氏）一 波のよるよるいかに、

二 嘆きつつあかしの浦に朝霧の
立つやと人を思ひやるかな

三 かの帥の娘の五節、四 あいなく人知れぬもの思ひさめぬるここちして、五 まくなぎつくらせてさし置かせけり。

（五節）六 須磨の浦に心を寄せし舟人の
やがて朽たせる袖を見せばや

（源氏）七 かへりてはかことやせまし寄せたりし
名残に袖の干がたかりしを

（筆者を）お見抜きになって返事をおやりになる
すっかり上達したものだと

八 飽かずをかしとおぼしし名残なれば、思いがけぬ手紙を受け取りなさって おどろかされたまひて、いとどおぼし出づれど、九 このころはさやうの御ふるまひ、さらにつつみたまふめり。一〇 花散里などにも、ただ御消息などばかりにて、一一 おぼつ

あの時お手紙を頂いたそのあと涙に袖がなかなか乾かなかったのですから。「寄す」は、波が寄せる意。『花鳥余情』は「いたづらに立ちかへりにし白波のなごりに袖のひる時もなし」（『後撰集』巻十二恋四、朝忠朝臣）によるとする。

八 いかにもしゃれた振舞とその時お思いになったその思い出もあることなので。

九 近頃はそのような浮気など所行を、ふっつり慎んでおられるようだ。

一〇 麗景殿の女御の妹君。（花散里一九三頁、須磨二〇二頁など参照）

一一 女君は、源氏のお気持も心もとなく、なまじお手紙を頂くために一層怨めしいお気持のようだ。

かなく、なかなか怨めしげなり。

付

録

山城（催馬楽、呂）

山城の　狛のわたりの　瓜つくり　な　なよや　らいしなや　さいしなや
瓜つくり　瓜つくり　はれ
瓜つくり　われをほしといふ　いかにせむ　な　なよや　らいしなや　さいしなや　いかにせむ　いかにせむ　はれ
いかにせむ　なりやしなまし　瓜たつまでに　や　らいしなや　さいしなや
瓜たつま　瓜たつまでに

夜歌ふ者を聞く　鄂州に宿す　（『白氏文集』巻十）

夜鸚鵡州に泊る　秋江月澄徹せり　隣船に歌ふ者有り　調べを発して愁絶に堪へたり　歌ふこと罷んで継ぐに泣を以てす　泣く声通うて復咽ぶ　声を尋ねて其の人を見る　婦有り顔雪の如し　独り帆檣に倚りて立てり　娉婷たる十七八　夜の涙真珠に似たり　雙々として明月に堕つ　借問誰が家の婦ぞ　歌泣何ぞ凄切なる　一たび問うて一たび襟を霑す　眉を低れて終に説かず

典侍が琵琶を弾くところは、同じ白楽天の「琵琶引」に、今は商人の妻となった長安の老名妓が琵琶を弾く趣に通うところがある。作者は恐らく「琵琶引」を脳裏に浮べながらこの場面を書き、「琵琶引」に似た趣のある「夜聞歌者」に想到したのであろう。

なお『奥入』に引く本文は「秋江月」を「江秋月」に、「霑襟」を「霑巾」に、「終不説」を「竟不説」に作る。

東屋（催馬楽、律）

東屋の　真屋のあまりの　その　雨そそき　われ立ち濡れぬ　殿戸ひらかせ
かすがひも　とざしもあらばこそ　その殿戸　われ鎖さめ　おしひらいて来ませ　われや人妻

嗟く所有り二首（『劉夢得外集』第一）

庾令楼の中に初めて見し時　武昌の春の柳は腰支に似たり　相逢ふも相笑ふも尽く夢の如し　雨となり雲とやなりにけむ今は知らず
鄂渚濛々として烟雨微なり　女郎の魂は暮雲を逐うて帰る　只応に長く漢陽の渡りに在るべし　化して鴛鴦と作り一隻にして飛ばむ

『奥入』に引く本文は「相逢相笑尽如夢」を「相逢相失両如夢」（相逢うしも相失うしも両ながら夢の如し）に作り、「夢得は白楽天同時之人也。おもふ人におくれてつくれる詩也」と注する。

高唐の賦 并序　（『文選』巻十）

昔、楚の襄王、宋玉と雲夢の台に遊びて高唐の観を望む。其の上に独り雲気あり。崒として直ちに上り、忽として容を改む。須臾の間に変化すること窮りなし。王、玉に問ひて曰く「此れ何の気ぞ」と。玉対へて曰く「いはゆる朝雲といふ者なり」と。王曰く「何をか朝雲と謂ふ」と。玉曰く「昔先王嘗て高唐に遊び、怠くして昼寝ねたり。夢みるに一婦人を見る。曰く『妾は巫山の女なり、高唐の客たり。聞く、君高唐に遊ぶと。願はくは枕席を薦めむ』と。王因つて幸す。去る時にして辞して曰く『妾は巫山の陽、高丘の岨にあり。旦には朝雲となり、暮には行雨となる。朝朝暮暮、陽台の下にす』と。旦朝にこれを視るに言の如し。故に為に廟を立て、号けて朝雲と曰ふ」と。（下略）

本文は、金沢文庫旧蔵本（大東急記念文庫蔵）の文集巻第十二による。通行本との本文の異同を、那波本により訓み下し文の下に摘記した。訓み下し文は、底本に付せられた訓点により作製し、定家の『奥入』に引用されている部分については、その訓点をも参考にした。なお、一巻付録三二五頁「長恨歌」の解説をも参照されたい。

琵琶引 并序

元和十五年秋、予左遷九江郡司馬。明年秋、送客至湓浦口。聞舟中夜弾琵琶者。聽其音、錚錚然有京都声。問其人、本是長安倡家女。嘗学琵琶於穆曹二善才。年長色衰、委身為賈人婦。遂命酒、使快弾数曲。曲罷憫默、自叙少小時歓楽事、今漂淪憔悴、転徙於江湖間。予

元和十五年の秋、予、九江郡の司馬に左遷せらる。明年の秋、客を送りて湓浦の口に至る。舟中に夜琵琶を弾ぜる者を聞く。其の音を聴くに、錚錚然として京都の声有り。其の人を問へば、本是長安の倡家の女なり。嘗て琵琶を穆曹二善才に学ぶ。年長じ色衰へて、身を委てて賈人の婦と為りたり。遂に酒を命じて、快く数曲を弾ぜしむ。曲罷んで憫默として、自ら少小の時の歓楽の事を叙ぶ。今漂淪憔悴して江湖の間に転徙す。予、

〔十五年秋—十年〕

〔至—ナシ〕〔舟—舟船〕

〔本是—本〕〔倡家女—倡女〕

〔憫默—憫默〕

出官二年、恬然自安。感斯人言、是夕始覚有遷謫意。因為長句歌以贈之。凡六百一十二言、命曰琵琶引。

官を出でて二年、恬然として自ら安し。斯の人の言に感じて、是の夕始めて遷謫の意有ることを覚えぬ。因て長句の歌を為りて以て贈る。凡て六百一十二言、命けて琵琶引と曰ふ。

〔琵琶引—琵琶行〕

琵琶引

〔琵琶引—ナシ〕

尋陽江頭夜送レ客
楓葉荻花秋索索
主人下レ馬客在レ船
挙レ酒欲レ飲無二管絃一
醉不レ成レ歓慘将レ別
別時茫茫江浸レ月
忽聞二水上琵琶声一
主人忘レ帰客不レ発
尋レ声暗問弾者誰

尋陽江の頭に夜客を送る
楓葉荻花秋索索たり
主人は馬より下りて客は船に在り
酒を挙して飲まむと欲るに管絃無し
醉ひて歓を成さず慘へて将に別れむとす
別るる時に茫茫として江月を浸せり
忽に水上の琵琶の声を聞きて
主人帰ることを忘れて客は発たず
声を尋ねて暗に問はく弾ぜる者誰と

〔尋陽—潯陽〕

〔暗問—闇問〕

琵琶声停欲レ語遅
移レ船相近邀相見
添レ酒廻レ燈重開レ宴
千呼万喚始出来
猶抱二琵琶一半遮レ面
転レ軸撥レ絃三両声
未レ成二曲調一先有レ情
絃絃掩抑声声思
似レ訴二平生不一レ得レ意
低レ眉信レ手続続弾
説尽心中無限事
軽攏慢撚抹復挑
初為二霓裳後緑腰一
大絃嘈嘈如二急雨一
小絃竊竊如二私語一
嘈嘈竊竊雑錯弾
大珠小珠落二玉盤一
間関鶯語花底滑

琵琶声停んで語らむと欲ること遅し
船を移して相近づいて邀つて相見る
酒を添へ燈を廻らして重ねて宴を開く
千たび呼び万たび喚んで始めて出で来れり
猶琵琶を抱いて半ば面を遮せり
軸を転らし絃を撥くこと三両声
未だ曲調を成さざるに先づ情有り
絃絃掩抑して声声思ひ
平生の意を得ざることを訴ふるに似たり
眉を低れ手に信せ続続に弾く
説き尽しつ心中の無限の事を
軽し攏へ慢く撚りて抹いて復挑す
初めには霓裳を為し後には緑腰
大絃は嘈嘈として急雨の如く
小絃は竊竊として私語の如し
嘈嘈竊竊雑錯して弾く
大珠小珠玉盤に落つ
間関たる鶯の語は花の底に滑なり

〔竊竊—切切〕
〔竊竊雑錯—切切錯雑〕

幽咽泉流氷下難　幽咽せる泉の流れは氷の下に難む
氷泉冷渋絃凝絶　氷泉冷渋にして絃凝絶しぬ
凝絶不レ通声暫歇　凝絶して通ぜず声暫く歇む
別有二幽愁暗恨生一　別に幽愁暗恨の生る有り
此時無レ声勝レ有レ声　此の時に声無きは声有るに勝れり
銀瓶閉破水漿迸　銀瓶閉ぢたる破れて水漿迸る
鉄騎突出刀鎗鳴　鉄騎突き出でて刀鎗鳴る
曲終収レ撥当レ心画　曲終つて撥を収めて心に当てて画く
四絃一声如レ裂レ帛　四絃一声帛を裂くが如し
東船西舫悄無レ言　東の船西の舫悄として言無し
唯見江心秋月白　唯見る江の心に秋の月の白きを
沈吟放レ撥插二絃中一　沈吟して撥を放きて絃の中に插す
整二頓衣裳一起斂レ容　衣裳を整頓ひて起ちて容を斂む
自言本是京城女　自ら言はく本是京城の女なり
家近二蝦蟇陵下一住　家蝦蟇の陵下に近くして住みき
十三学二得琵琶一成　十三にして琵琶を学び得て成す
名属二教坊第一部一　名教坊の第一の部に属せり
曲罷曾教二善才伏一　曲罷んで曾善才をして伏せしむ

〔難—灘〕
〔閉破—乍破〕
〔近—在〕

粧成毎被二秋娘妬一
五陵年少争纏頭
一曲紅綃不レ知レ数
鈿頭雲篦擊レ節碎
血色羅裙翻レ酒汚
今年歓笑復明年
秋月春風等閑度
弟走従レ軍阿姨死
暮去朝来顔色故
門前冷落鞍馬稀
老大嫁作二商人婦一
商人重レ利輕二離別一
前月浮梁買レ茶去
去来江口守二空船一
遶レ船月明江水寒
夜深忽夢二少年事一
夢啼粧涙紅闌干
我聞二琵琶一已歎息

粧ひ成つて毎に秋娘に妬まれき
五陵の年少争ひて纏頭す
一曲紅綃数を知らず
鈿頭の雲篦節を撃ちて砕く
血色の羅裙は酒を翻けて汚す
今年の歓笑復明年
秋の月春の風等閑に度る
弟は走つて軍に従ひ阿姨は死したり
暮去り朝来りて顔色故りぬ
門前に冷落して鞍馬稀なり
老大にして嫁いで商人の婦と作りたり
商人は利をのみ重うして離別を軽くしければ
前の月に浮梁に茶を買うて去ぬ
去来江口に空しき船をのみ守る
船を遶つて月明らかに江の水寒し
夜深けて忽に少年の事を夢に見る
夢に啼く粧ひの涙紅にして闌干たり
我琵琶を聞くだにも已に歎息す

〔離別―別離〕

又聞二此語一重唧唧
同是天涯淪落人
相悲何必曾相識
我従二去年辞二帝京一
謫居病臥二尋陽城一
尋陽小処無二音楽一
終レ歳不レ聞二糸竹声一
住近二湓江一地低湿
黄蘆苦竹遶レ宅生
其間旦暮聞二何物一
杜鵑啼哭猿哀鳴
春江花朝秋月夜
往往取レ酒還独傾
豈無二山歌与村笛一
欧啞嘲哳難レ為レ聽
今夜聞二君琵琶語一
如レ聽二仙楽一耳暫明
莫レ辞更坐弾二一曲一

又此の語を聞きて重ねて唧唧す
同じく是天涯に淪落せる人なれば
相悲しぶことは何ぞ必ずしも曾相識れるのみならむ
我去年帝京を辞せしより
謫居に病して尋陽城に臥せり
尋陽の小しきなる処なれば音楽無し
歳を終ふるまでに糸竹の声を聞かず
住むこと湓江に近ければ地低湿せり
黄蘆苦竹宅を遶りて生ひたり
其の間に旦暮に何物をか聞く
杜鵑啼き哭きて猿哀しび鳴く
春の江の花の朝秋の月の夜
往往に酒を取りて還りて独り傾く
豈山歌と村笛と無けむや
欧啞嘲哳として聽きを為し難し
今夜君が琵琶の語を聞きて
仙楽を聽くが如し耳暫く明らかなり
辞すること莫れ更に坐て一曲を弾くことを

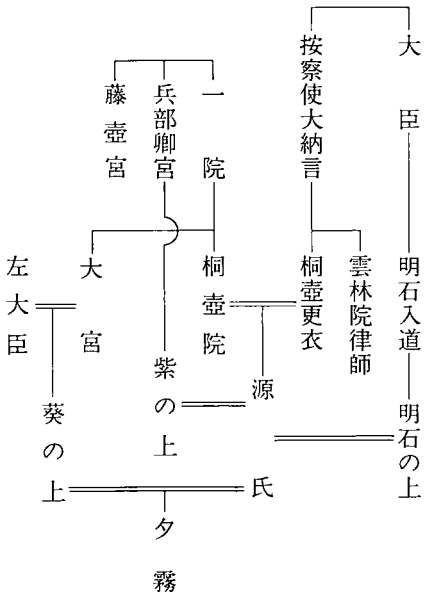
〔相悲—相逢〕
〔病臥尋陽城—臥病潯陽城〕
〔尋陽—潯陽〕
〔啼哭—啼血〕

為レ君翻作二琵琶行一　君が為に翻つて琵琶の行を作らむ
感二我此言一良久立　我が此の言に感じて良久しく立てり
却坐促レ絃絃転急　却り坐て絃を促にして絃転急なり
凄凄不レ似二向前声一　凄凄として向前の声に似ず
満座重聞皆掩レ泣　満座重ねて聞きて皆泣を掩ふ
就中泣下誰最多　就中に泣の下ること誰か最も多き
江州司馬青衫湿　江州の司馬青衫湿へり

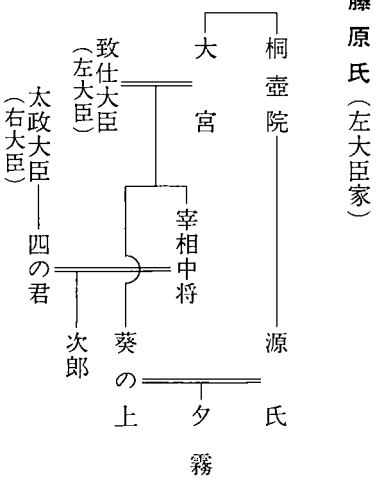
天皇家

- 先帝 ＝ 母后（横川僧都）
  - 一院
    - 桐壺院 ＝ 源氏
      - 東宮
    - 朱雀院の帝 ＝ 朧月夜尚侍
    - 女一の宮
    - 女三の宮
  - 桐壺更衣
  - 藤壺宮 ＝ 藤壺
  - 兵部卿宮
  - 前坊 ＝ 斎宮
    - 六条御息所
  - 式部卿宮 ― 朝顔斎院
  - 大宮 ＝ 左大臣
- 太政大臣（右大臣）
  - 弘徽殿大后
  - 藤大納言 ― 麗景殿女御

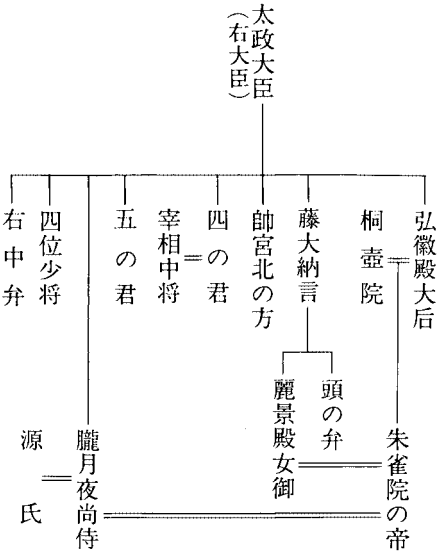
源氏

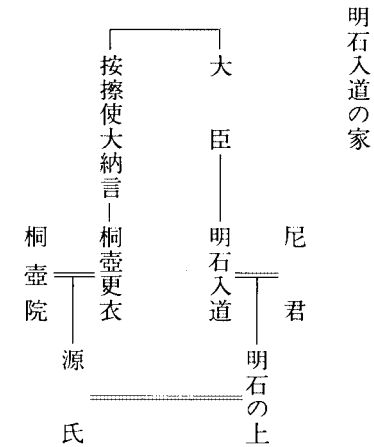

大臣
明石入道
明石の上
氏
夕霧
源
按察使大納言
雲林院律師
桐壺更衣
桐壺院
一院
兵部卿宮
藤壺宮
紫の上
大宮
左大臣
葵の上

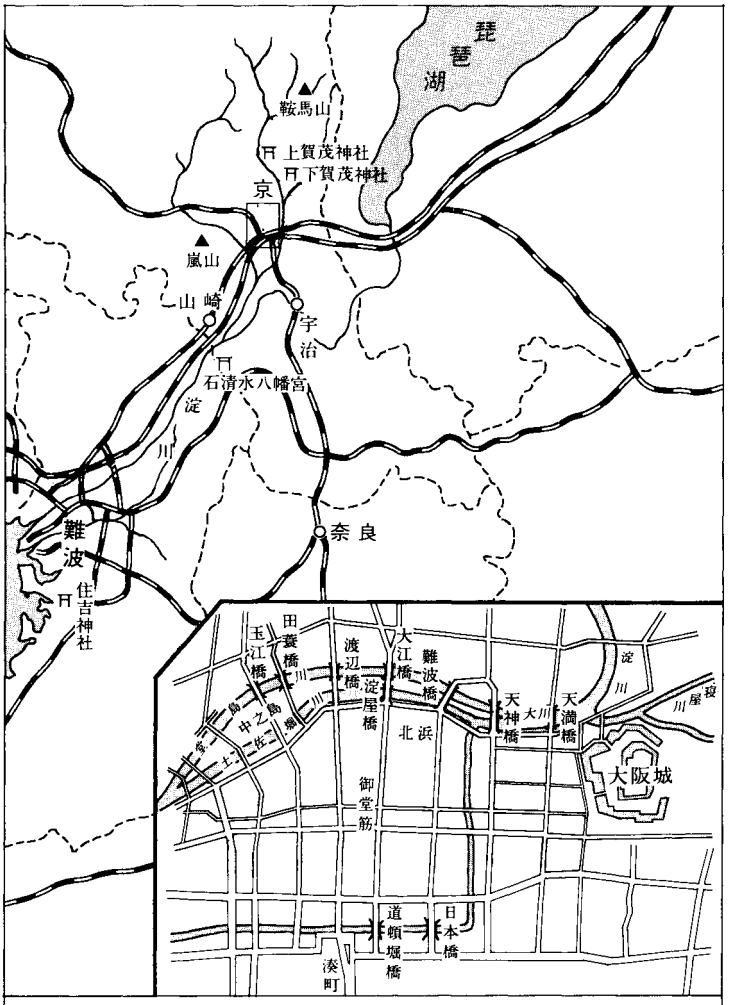
藤原氏（左大臣家）


桐壺院
源氏
夕霧
大宮
致仕大臣（左大臣）
宰相中将
太政大臣（右大臣）
四の君
葵の上
次郎

藤原氏（右大臣家）

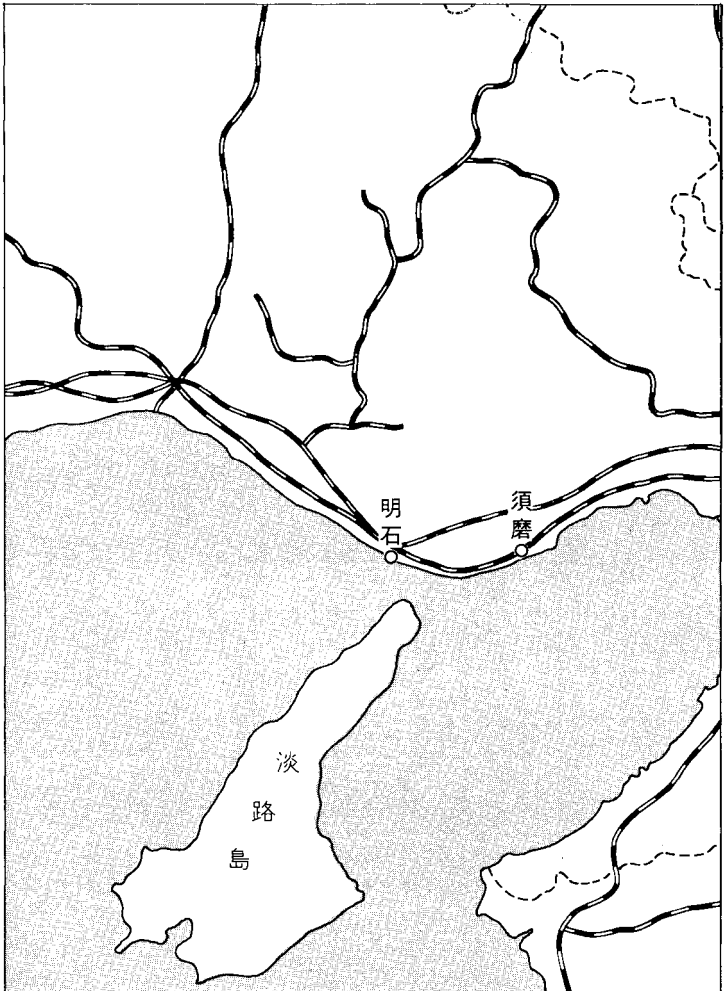

太政大臣
（右大臣）
弘徽殿大后
桐壺院
帥宮北の方
藤大納言
四の君
宰相中将
五の君
四位少将
右中弁
頭の弁
麗景殿女御
朱雀院の帝
朧月夜尚侍
源氏


明石入道の家
大臣
明石入道
尼君
明石の上
按擦使大納言
桐壺更衣
桐壺院
源氏

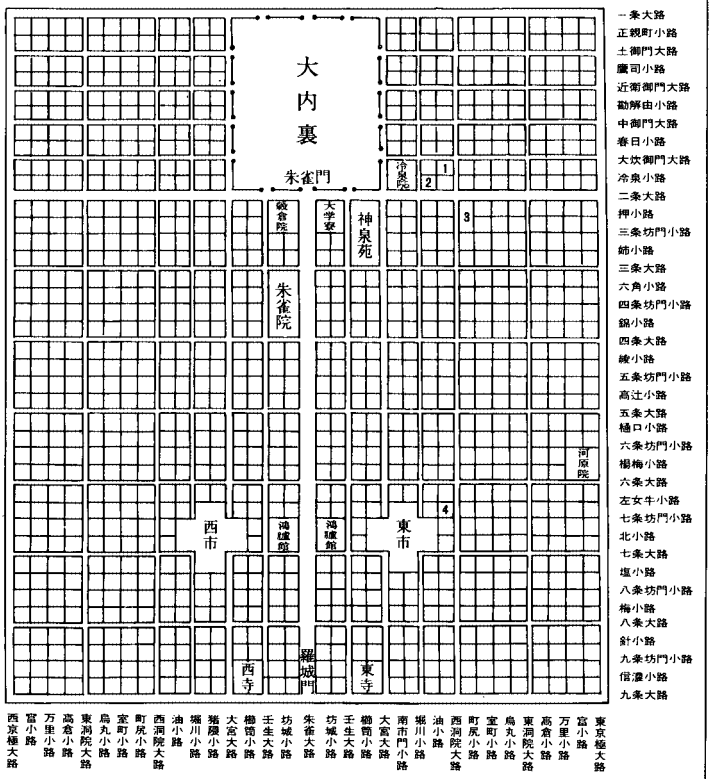


難　波

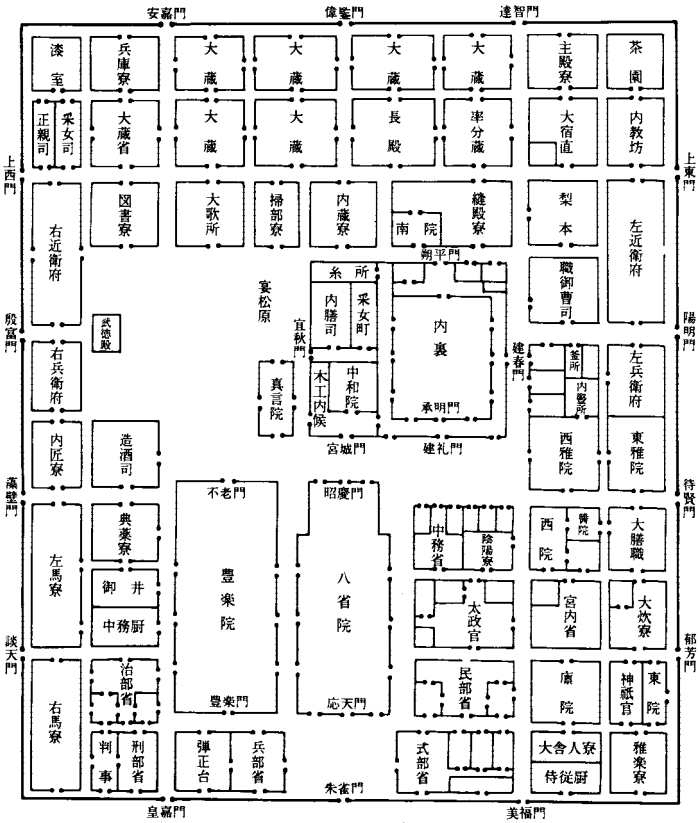
堀江は今の大阪城の西北端に触れる淀川の川筋かとされる。大阪城は大阪の市街地の東に南北に連なる上町台地の北端に位置する。渡辺、大江、田蓑の島など往時の地名は、今、橋の名前にわずかにその名残をとどめている。渡辺は、今の天満橋、天神橋のあたりとされる。当時の地形は、このあたりから北西の一帯にかけて、淀川が複雑な水路をなして多くのデルタを形成しつつ入江に注いでいた。



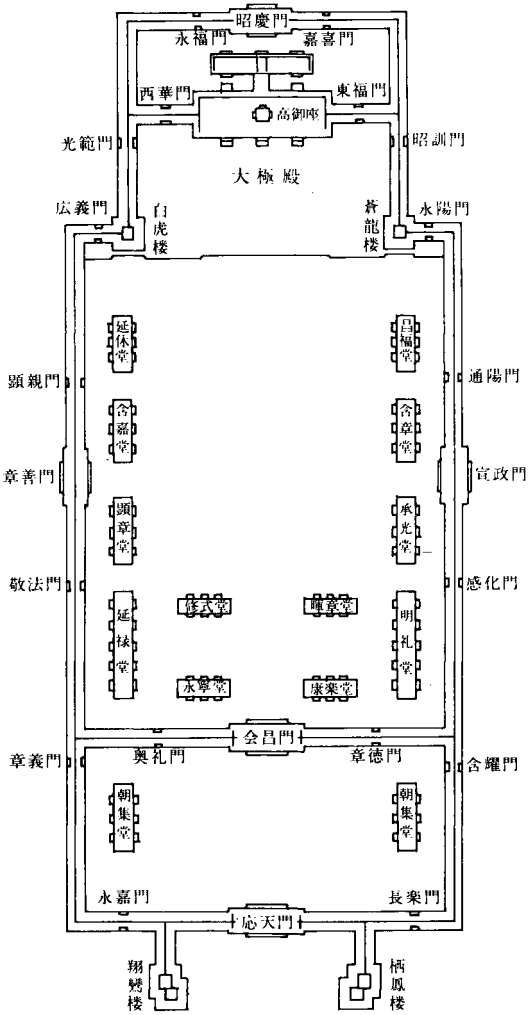
京　難波　須磨　明石


大内裏
朱雀門
冷泉院
1
2
3
4
穀倉院
大学寮
神泉苑
朱雀院
河原院
西市
鴻臚館
鴻臚館
東市
羅城門
西寺
東寺
一条大路
正親町小路
土御門大路
鷹司小路
近衛御門大路
勘解由小路
中御門大路
春日小路
大炊御門大路
冷泉小路
二条大路
押小路
三条坊門小路
姉小路
三条大路
六角小路
四条坊門小路
錦小路
四条大路
綾小路
五条坊門小路
高辻小路
五条大路
樋口小路
六条坊門小路
楊梅小路
六条大路
左女牛小路
七条坊門小路
北小路
七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路
東京極大路
宮小路
万里小路
高倉小路
東洞院大路
烏丸小路
室町小路
町尻小路
西洞院大路
油小路
堀川小路
南市門小路
大宮大路
柳馬場小路
壬生大路
坊城小路
朱雀大路
壬生大路
坊城小路
柳馬場小路
猪隈小路
大宮大路
堀川小路
油小路
西洞院大路
町尻小路
室町小路
烏丸小路
東洞院大路
高倉小路
万里小路
宮小路
東京極大路
1 陽成院
2 二条院
3 東三条院
4 亭子院

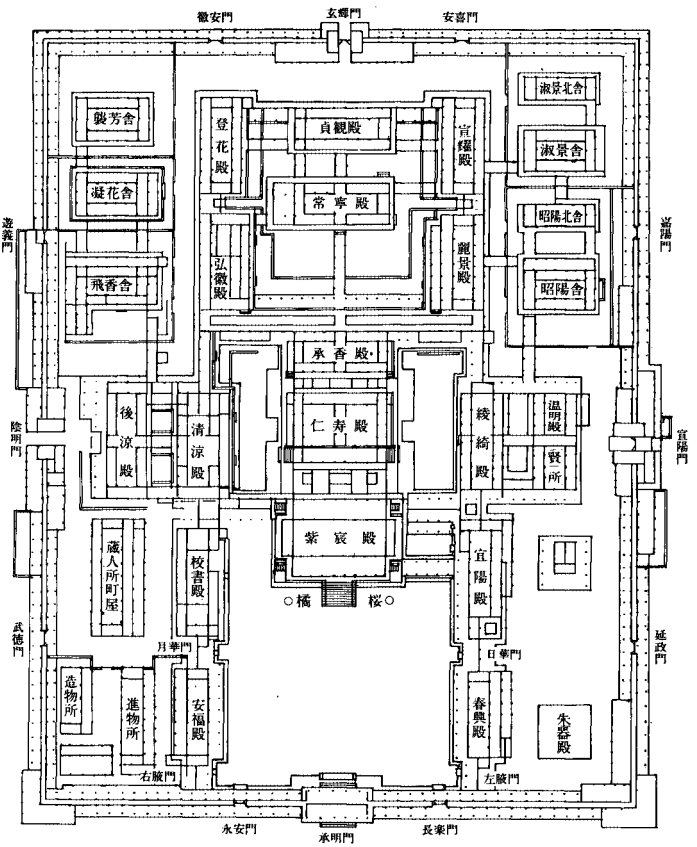
京城図


安嘉門
偉鑒門
達智門
漆室
兵庫寮
大蔵
大蔵
大蔵
大蔵
主殿寮
茶園
正親司
采女司
大蔵省
大蔵
大蔵
長殿
率分蔵
大宿直
内教坊
上西門
上東門
右近衛府
図書寮
大歌所
掃部寮
内蔵寮
南院
縫殿寮
梨本
左近衛府
朔平門
所
職御曹司
宴松原
内膳司
采女町
内裏
宜秋門
武徳殿
般富門
陽明門
右兵衛府
真言院
木工内候
中和院
建春門
釜所
内蔵所
左兵衛府
承明門
内匠寮
造酒司
宮城門
建礼門
西雅院
東雅院
蘭豊門
待賢門
不老門
昭慶門
中務省
陰陽寮
西院
黄院
大膳職
典薬寮
左馬寮
御井
豊楽院
八省院
太政官
宮内省
大炊寮
中務厨
談天門
郁芳門
治部省
民部省
廂院
神祇官
東院
右馬寮
豊楽門
応天門
判事
刑部省
弾正台
兵部省
式部省
大舎人寮
侍従厨
雅楽寮
朱雀門
皇嘉門
美福門

大内裏図


昭慶門
永福門
嘉喜門
西華門
東福門
高御座
光範門
昭訓門
大極殿
広義門
白虎楼
蒼龍楼
永陽門
延休堂
昌福堂
顕親門
通陽門
含嘉堂
含章堂
章善門
宣政門
顕章堂
承光堂
敬法門
感化門
延祿堂
修式堂
暉章堂
明礼堂
永尊堂
康楽堂
会昌門
章義門
奥礼門
章徳門
含耀門
朝集堂
朝集堂
永嘉門
長楽門
応天門
翔鸞楼
栖鳳楼

八省院


徽安門
玄輝門
安喜門
淑景北舍
淑景舍
昭陽北舍
昭陽舍
宣陽門
延政門
日華門
左廂門
長楽門
承明門
永安門
右廂門
月華門
武徳門
陰明門
遊義門
宣陽殿
春興殿
朱雀殿
宣耀殿
麗景殿
貞観殿
常寧殿
登花殿
弘徽殿
綾綺殿
温明殿
賢所
承香殿
仁寿殿
紫宸殿
清涼殿
後涼殿
校書殿
安福殿
進物所
造物所
蔵人所町屋
桜
橘
襲芳舎
凝花舎
飛香舎

内裏図

右、龍頭船。左、鷁首船。簀子には高欄に背中を押した公卿たち。御簾の外に女房の押出だしが見える。中島には楽屋が設けられ、西の釣殿に舞台がしつらえられている。

青　海　波（舞楽図説）

垣　　代（舞楽図説）

高陽院寝殿南面における船楽（駒競行幸絵巻）

秋風楽（舞楽図）

春鶯囀（舞楽図）

柳　花　苑（信西古楽図）

琵琶を弾く図（源氏物語絵巻　宿木三）

横笛

高麗笛

和琴

琴

箏の琴

尺八　篳篥　笙

三の鼓

羯鼓

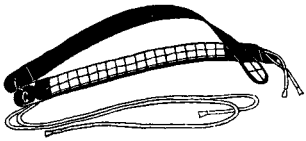
鉦鼓

束　帯（武官）

束　帯（文官）

下襲に半臂を重ねた姿
この上に袍を着ける

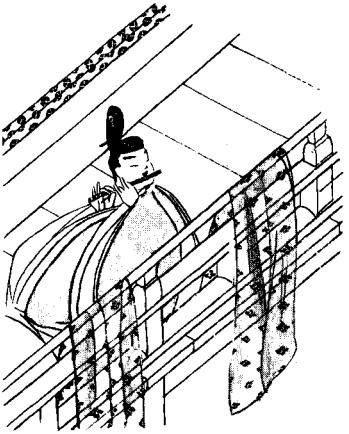
直衣布袴



石　帯

桂　姿

（源氏物語絵巻　宿木二）



直衣布袴・高欄を背に横笛を吹く

（源氏物語絵巻　鈴虫）

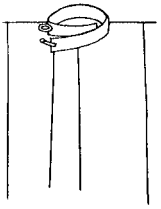
壺装束

（石山寺縁起絵）

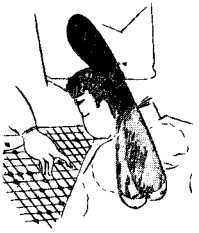
汗　衫

（枕草子絵巻）

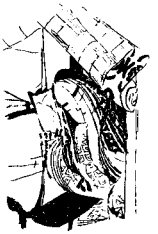
衣架に掛けた着物（葉月物語絵巻）



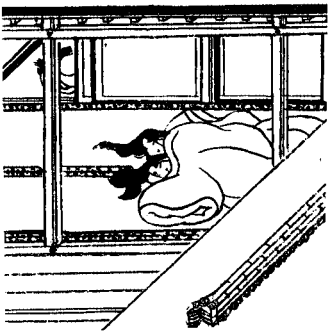
直衣人紐



冠の纓（源氏物語絵巻　宿木一）

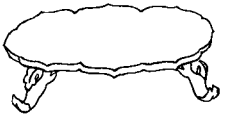


額　髪（同三）

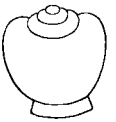


女の寝姿・衾（春日権現験記絵）

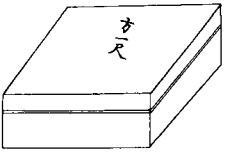
坐位の出産（餓鬼草子）



花　足



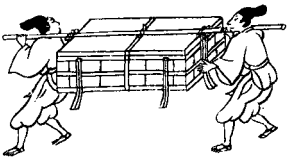
香　壺



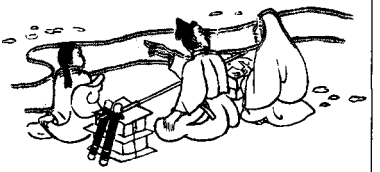
香壺筥

帳　障（年中行事絵巻　内宴）

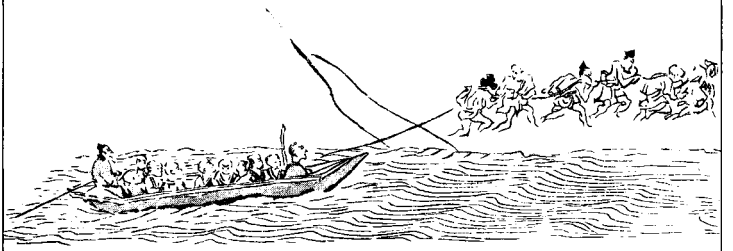
迦陵頻伽（中尊寺蔵華鬘）



御衣櫃（石山寺縁起絵）

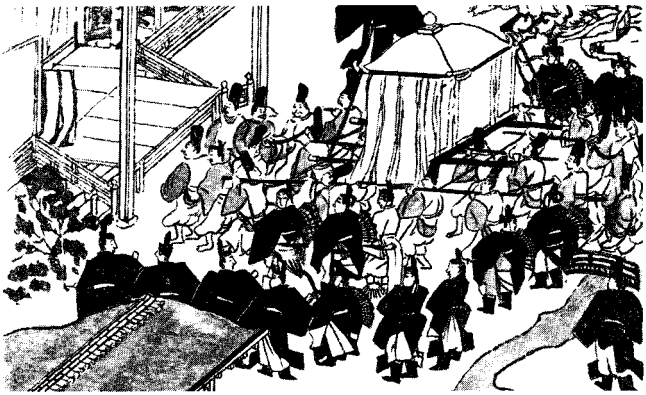


破　籠（石山寺縁起絵）

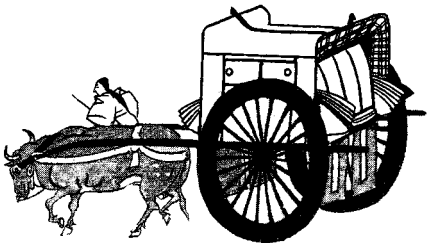


引　船（一遍聖人絵伝）

鳳　輦（年中行事絵巻　朝親行幸）



葱花輦（駒競行幸絵巻）



出車・下簾（輿車図考　付図）

車の接触事故のようなことらしいが、殺気だった雰囲気が活写されている。葵70頁の車の所争いの参考として掲げる。

侍　所（年中行事絵巻　臨時客）

東三条殿の侍所。部屋の中央に台盤、左端に東の中門の屋根が見える。

車　争　い（年中行事絵巻　稲荷祭）

憑　坐（荏柄天神縁起絵巻）

新潮日本古典集成（第一三回）

源氏物語 二

昭和五十二年七月五日　印刷
昭和五十二年七月十日　発行

校注者　石田穣二
　　清水好子

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
　　東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

定価一五〇〇円

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yoshiko Shimizu, Printed in Japan, 1977.

新潮日本古典集成

源氏物語

三

石田穣二　清水好子　校注

新潮社版

目次

凡例……三
澪標……九
蓬生……五三
関屋……八三
絵合……九一
松風……一一七
薄雲……一四七
朝顔……一八七

少女……二一五
玉鬘……二二九

付録

天徳四年内裏歌合……三三三
系図……三四八
図録……三五一

凡例

一、本巻には、澪標、蓬生、関屋、絵合、松風、薄雲、朝顔、少女、玉鬘の九巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻に収めた諸巻の底本は、いずれも大島本である。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の

濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文脈の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、

第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、天徳四年内裏歌合、系図、図録を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

源氏物語 三

澪(みをつ)

標(くし)

この巻は、二十八歳から二十九歳にかけて、帰京後の源氏が、政権の座を固めるために、着実に布石を打ってゆく様が具体的に語られている。その中で、ご願果しの住吉詣では、住吉という歌の名所に、折から来合せた明石の上一行を配し、身分の隔たりに泣く彼女のとらえた光景を一幅の絵のように書いている。巻名「澪標」は、この段の構成に深くかかわる古歌「わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ」に由来する。

さて、帰京後、源氏はまず父桐壺院追善の法要を営み孝養を尽した。翌年二月、冷泉院は無事即位し、源氏は内大臣に、致仕の大臣は摂政太政大臣になり、孫娘を入内させ、外戚となった。藤壺は准太上天皇の待遇をうけ、院司が設けられる。三月、明石で女子誕生。その将来に立后の予言があり、期するところの大きい源氏は、親しく乳母を選んで派遣し、紫の上にも打ち明け、五十日の祝いには立派な贈り物を届ける。秋、ご願果しの住吉詣で。明石の上も姫君ともども来合せるが、再会はかなわなかった。

六条の御息所は、斎宮退下により帰京し、病のために出家する。やがて、源氏に斎宮のことを託して死去した。源氏は斎宮を養女にして、冷泉院の後宮に納れようとするが、朱雀院もご執心である。源氏は、藤壺に諮り、彼女の力によって、朱雀院の希望を斥け、明石の姫君が成長するまでの十数年間、冷泉院の外戚として活躍すべき地位を得ることに成功する。

一　桐壺院がまざまざと夢にお現れになってからは。明石の巻（二巻二六四頁）に、源氏がうちまどろむ夢に「故院、ただおはしましさまながら立ちたまひて」とあった。

二　どうかして、あの時お話しの、院が苦しんでいらっしゃるという罪をお救い申すことをしようと。明石の巻で、桐壺院が、「われは、位にありし時、あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて……」と言われたことをさす（二巻二六五頁注一〇参照）。

源氏、桐壺院追善の法華八講を営み、朱雀院を輔佐する

三　法華八講。追善法要である。（明石三〇七頁参照）

四　弘徽殿の大后は、なおご病気が重くていらっしゃる上に。大后の病のこと、明石二八六頁参照。

五　とうとう源氏を屈服させられずに終るとはと、おもしろからずお思いであったが。

六　桐壺院が、自分の在世中に変らず、源氏を執政の臣として重んずるよう遺言したこと。（二巻賢木一三九頁参照）

七　（院のご遺言に背いた結果になったので）何か報いがあるに違いないと思っていらっしゃったのだが、すっかりきちんとなさって（源氏を都に呼びもどしてもと通りの地位におつけになって）。

さやかに見えたまひし夢の後は、〔源氏は〕院の帝の御ことを心にかけきこえたまひて、いかで、かの沈みたまふらむ罪救ひたてまつることをせむと、おぼし嘆きけるを、かく帰りたまひては、その御いそぎしたまふ。神無月に御八講したまふ。世の人なびきつかうまつること、昔のやうなり。

大后、なほ御なやみ重くおはしますうちにも、つひにこの人をえ消たずなりなむことと心病みおぼしけれど、帝は、院の御遺言を思ひきこえたまふ。ものの報いありぬべくおぼしけるを、なほし立てたまひて、御ここち涼しくなむおぼしける。時々おこりなやませたまひし御目もさはやぎたまひぬれど、おほかた世にえ長くあるまじう、心細きこととのみ、久しからぬことをおぼしつつ、常に召しあ

桐壺院の御ことを　こうしてご帰京なさってからは　ご準備を　誰もが心を寄せてご用を承ることは　朱雀院　お心　ご気分もさっぱりなさったのであった　病気が起ってお苦しみになった　よくおなりになったけれども　大体が長生きできそうになく　ほんとうに心細いことだと　お命の長からぬことをお考えになっては

一 朱雀院は、世の政治なども、一部始終ご相談なさっては、ご満足のご様子なので。桐壺院の「大小のことを隔てず、何ごとも御後見とおぼせ」（賢木一三九頁）という遺言に叶うことになるので、本望なのである。

朱雀院、譲位を決意し朧月夜の尚侍と語る

二 朧月夜。

三 朧月夜の尚侍の父太政大臣（もとの右大臣）。明石二八六頁に、死去のことが見える。

四 頼み少なげに、ご病気が重くなられる一方なのに。「あつい」は、「篤ゆ」（下二段）の連用形「篤え」をもとの形と考えるべきであろう。

五 あなたは、今までとは打って変ったご境遇で、あとにお残りになることでしょう。強力な後見のいない状態をいう。

六 昔から、誰かより軽く見ていらっしゃったけれど。「人」は、源氏を婉曲にさす。

七 ふたたび、あなたのお望み通り、契りを結ばれるにしても。源氏と縒りを戻したにしても。

八 どうして、せめて御子だけでもお産みでなかったのでしょうか。

りて、源氏の君は参りたまふ。〔宮中に〕一世の中のことなども、隔てなくのたまはせなどしつつ、御本意のやうなれば、一般の世間の人も事情おほかたの世の人も、あは知らぬものいなくうれしきことによろこびきこえける。

下りゐなむの御心づかひ近くなりぬるにも、ご退位なさろうとのお心積りが近々のものとなるにつけても尚侍、心細げに世を思ひ嘆きたまへる、いとあはれにおぼされけり。「大臣亡せたまひ、（朱雀院）大后大宮もたのもしげなくのみあついたまへるに、わが世残り少なきこがするにつけてこちするになむ、いといとほしう、名残なきさまにてとまりたまはむとすらむ。昔より人には思ひおとしたまへれど、みづからの心ざしのまたなきならひに、ただ御ことのみなむ、あはれにおぼえける。立ちまさる人、また御本意ありて見たまふとも、おろかならぬ心ざしはしも、なずらはざらむと思ふさへこそ、心苦しけれ」とて、うち泣きたまふ。女君、顔はいとあかくにほひて、こぼるばかりの愛敬にて、涙もこぼれぬるを、〔朱雀院は〕一切の過失を忘れてよろづの罪忘れて、あはれにらうたしと御覧ぜらる。「などか御子をだに持たまへるまじき。くちをしう

を悲しみ案じていられるのを
誠においたわしいことに
私の一生も余命久しからぬ気
あなたのことだけが
いとしく思われたのです
私の方は誰にも劣らぬ深い愛情が身にしみてしまっていて
あの私以上のお人が
並々ならぬ愛情という点で
私ほどではあるまいと思われることも
たまらないのです
染まって
ほんとうに残念な

九 宿縁の深いあの人（源氏）のためには、そのうちお子を儲けなさるに違いないと思うにつけても、たまらないことだ。子供が生れるのは、前世からの約束事だとする当時の考え方による。

一〇 しかし、身分は越えられないから、臣下としてお育ちになるのですね。臣下である源氏の子だから、の意。

一一 なるほど、源氏はすばらしい方だけれども、さほど深く自分を愛して下さってはいなかった様子や、気持などを。

一二 あんな騒動まで引き起して。源氏との密会を父大臣に見つけられて、須磨流謫に到る政争の端緒になったことをいう。賢木巻末に詳しい。「などて」から「人の御ためさへ」までが、朧月夜の心中。

一三 ほんとうに我が身がいとわしくなってしまわれる。朧月夜の思いと草子地が一体になった文章。

翌年春、東宮元服

一四 後の冷泉院。

一五 源氏は、明石の巻（三〇五頁）で権大納言に就任。権大納言も大納言と称した。

ことだ もあるかな。九 契り深き人のためには、今見出でたまひてむと思ふもくちをしや。一〇 限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」など、行く末のことをさへのたまはするに、〔朧月夜は〕いとはづかしうも悲しうもおぼえたまふ。〔朱雀院の〕御容貌など、優雅で なまめかしうきよらにて、お美しくて 〔朧月夜への〕この上ないご愛情が時と共に深まるかのように大切にお扱いなさるので しの年月に添ふやうにもてなさせたまふに、一一 めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりしけしき、心ばへなど、もの思ひ知られたまきた今は ふままに、いたらなくて無知なままに などて、わが心の若くいはけなきにまかせて、一二 さる騒ぎをさへ引き出でて、自分の評判を落したことはもとより わが名をばさらにもいはず、源氏にもご迷惑をかけた 人の御ためさへ、などおぼし出づるに、一三 いと憂き御身なり。

二月

明くる年のきさらぎに、一四 春宮の御元服のことあり。十一になりたまへど、お年のわりには大きく ほどよりおほきに、おとなしうきよらにて、大人びていらしておきれいで ただ源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむやうに見えたまふ。一五 いとまばゆきもう一つに移し替えたかのように まで光りあひたまへるを、互いに輝くお美しさなのを 世人めでたきものに聞こゆれど、すばらしいことと お噂申すけれども 母宮は、〔お二人が〕全くいたたまれぬ思いで いみじうかたはらいたきことに、どうにもならぬことにお心をお痛めになる あいなく御心を尽くしたまふ。内

一（一国の天子ではないので）何の栄えもない身ではあっても。

二 東宮には承香殿の女御のお産みになった皇子がおつきになった。「承香殿の皇子」のことは、「当代の御子は、右大臣の女、承香殿の女御の御腹に男御子生まれたまへる、二つになりたまへば、いといはけなし」（明石二九五頁）とあった。

東宮即位し、源氏一門で政権を握る

三 令外の官で、必要に応じて置かれた。職掌は左右大臣に同じ。一条天皇頃から、実権を握る外戚が任じられ、摂政関白になる例があらわれた。

四 左右大臣の定員（各一人）が決っていて。

五 源氏の舅、左大臣。桐壺院崩御後、致仕の表を奉って、自邸に引き籠っていた。（賢木一七九頁参照）

六 天皇が幼少の時、代ってすべての政治を執る役。

七 官職も辞退申し上げていたのに。「位」は、当時は官位相当なので、官（役職）を辞したことをも、こういったのであろう。左大臣は二位相当。

八 異国でも、事変が起り世の中が乱れている時には、政界を退き深山に籠ってしまった人でさえ、太平の世になれば、白髪の身も恥じず、出て来て天子にお仕えする、そういう人をこそ、真の聖賢とはしたものだ。聖賢は儒教における理想的人物。漢の高祖の時、商山に隠棲し、高祖の召しにも応じなかった四皓（東園公、甪里先生、綺里季、夏黄公の四人の賢人）が皇太子（後の孝恵帝）の輔佐として出仕した故事がある。

帝も〔東宮を〕ご立派だとお思い申し上げなさって　まつりごとをお譲り申そうとなさる
裏にもめでたしと見たてまつりたまひて、世の中ゆづりきこえたま
お考えなどを　おやさしく〔東宮に〕お話ししてお聞かせなさる
ふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。

二月

同じ月の二十余日、御国ゆづりのこと、急にあったので　にはかなれば、大后おぼ狼狽
ご譲位のことが　なさった
しあわてたり。「かひなきさまながらも、心のどかに御覧ぜらるべ
ゆっくりお目通り願えるようにという　ことを考えるのです
きことを思ふなり」とぞ、〔朱雀院〕聞こえなぐさめたまひける。〔大后を〕坊には承香
執政の人々が入れ替り　前代とは一変していろいろはなや
殿の皇子ゐたまひぬ。世の中あらたまりて、引きかへ今めかしきこ
かなことが多かった
とども多かり。源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。数定まりて、
欠員がなかったので　〔員外として〕　ただちに摂政になって
くつろぐ所もなかりければ、加はりたまふなりけり。やがて世のま
繁忙な　〔源氏〕　役職には力が
て天下の政治をおとりになるべきであるが
つりごとをしたまふべきなれど、「さやうのことしげき職には堪へ
足りません
ずなむ」とて、致仕の大臣、摂政したまふべきよし、ゆづりきこえ
〔大臣〕
たまふ。「病によりて、位を返したてまつりてしを、いよいよ老の
老が加わって　ご承知申されない
つもり添ひて、賢政もできますまい さかしきことはべらじ」と、うけひき申したまはず。
人の国にも、こと移り世の中定まらぬをりは深き山に跡を絶えたる
人だにも、をさまれる世には、白髪も恥ぢず出で仕へけるをこそ、

「四皓」とは、四人の鬚眉が皓白であったことからいう。（『史記』留侯世家）

九　少しもさしつかえはないはずと、朝廷の会議の席でも、個人の間のお話でも、ご結着がついた。

一〇　わが国においても、そのような前例があったので。前に「人の国にも……」とあったのを受ける。

一一　太政官の最高の官。一位相当。天皇の師範たる人が任じられ、その人無ければ則ち闕く、ということで「則闕の官」ともいう。

一二（弘徽殿の大后や右大臣が政治を専らにして）世間がおもしろくなかったので、実は、それもあって籠居していらしたのを。

一三　葵の上の兄。もとの頭の中将。須磨の巻（二巻二五〇頁）に宰相になったことが見える。

一四　中納言は、太政官の次官で令外の官。大納言に次ぐ。正と権とあり、従三位相当。

一五　権中納言の北の方。故太政大臣（もと右大臣）の四女。（賢木一七九頁参照）

一六　四の君腹の次男。（賢木一八二頁参照）

一七　宮中と東宮御所の童殿上を許されたことをいう。

一八　葵の上の亡くなられたそのあとあとも。

まことの聖にはしけれ、病に沈みて返し申したまひける位を、世の中かはりてまた改めたまはむに、さらに咎あるまじう、公私定められる。さる例もありければ、すまひ果てたまはで、太政大臣になりたまふ。御年も六十三にぞなりたまふ。世の中すさまじきにより、かつは籠りゐたまひしを、とりかへし花やぎたまへば、御子どもなど、沈むやうにものしたまへるを、皆浮かびたまふ。とりわきて、宰相の中将、権中納言になりたまふ。かの四の君の御腹の姫君、十二になりたまふを、内裏に参らせむとかしづきたまふ。かの高砂歌ひし君も、かうぶりせさせて、いと思ふさまなり。腹々に御子どもいとあまたつぎつぎに生ひ出でつつ、にぎはしげなるを、源氏の大臣はうらやみたまふ。

辞退申された職務ではあるが　政情が変ってもう一度改めてお仕えなさるのに　とうとうお断りなされずに　また昔のように　出世なさる　〔太政大臣の〕　人内を予定して大切に育てていられる　若君も　元服させて　ご夫人方に　思い通りのご繁栄である

大殿腹の若君、人よりことにうつくしうて、内裏、春宮の殿上したまふ。故姫君の亡せたまひにし嘆きを、宮、大臣、またさらにあらためておぼし嘆く。されど、おはせぬ名残も、ただこの大臣の御

夕霧　かわいいご様子で　母大宮　葵の上　〔夕霧の成長を見て〕　源氏

一 頼もしい身の上になれるようご配慮下さるので。「よすが」は、身を寄せるべき所や人をいう。ここでは、見込みのある男との縁組や、夫や親兄弟、子供の官職の世話などをして、生活の安定を計ってやること。

二 現在紫の上づきの女房で、源氏の思い人であった（須磨二一六頁参照）。「やう」は、それに類することを示す接尾語で、「といった」というほどの意。

三 一八頁に東の院と呼ばれる邸宅。

四 花散里などといったお気の毒な境遇の女君たち。源氏のほかには頼る親兄弟もない人々。花散里は麗景殿の女御の妹君（明石三〇八頁参照）。

五 お心積りなさって、お手入れをおさせになる。

六 そういえば。新たな話題に移る時に発する語。

七 あの明石で、痛々しい様子だったのはどうなったかと。明石の上の懐妊のことをさす。「六月ばかりより心苦しきけしきありてなやみけり」（明石二九六頁）とあった。

明石で、姫君誕生　源氏子孫繁栄の予言を信じる

光に、よろづもてなされたまひて、（長年不遇をかこっていられたあとかたもないほどの威光で）（万事結構な扱いをお受けになって）年ごろおぼし沈みつる名残なきまで栄えたまふ。（源氏は）なほ昔に御心ばへかはらず、（太政大臣邸に）をりふしごとにわたりたまひなどしつつ、若君の御乳母（夕霧の）たち、さらぬ人々も、（そのほかの女房たちも）年ごろの（お留守の間の年月を辞めて出てゆかなかった者には）ほどまかで散らさりけるは、（適当な機会があるごとに）皆さるべきことに触れつつ、（仕合せな人々が多くなるようだ）よすがつけむことをおぼしおきつるに、幸ひ人多くなりぬべし。

（源氏の私邸）二条の院にも、（源氏の帰京を）同じごと待ちきこえける人を、（女房）あはれなるものにおぼして、（物思いが晴れるようにと）年ごろの胸あくばかりとおぼせば、中将、中務やうの人人には、（その身分人柄に応じて）ほどほどにつけつつ情を見えたまふに、（情けをおかけになるので）御いとまなくて、（よその女君に通うこともなさらない）ほかありきもしたまはず。二条の院の東なる宮、（桐壺院）院の御処分なりしを、二なく改め作らせたまふ。（ご改築をおさせになる）花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど、おぼしあててつくろはせたまふ。

（源氏は）（殊勝な者たちだと）

六 まことや、七 かの明石に心苦しげなりしことはいかにと、おぼし忘るる時なければ、公私いそがしきまぎれに、（お心のままに尋ねておやりになることもできなかったのだが）えおぼすままにもとぶらひたまはざりけるを、三月ついたちのほど、（出産は）このころやとおぼ

八 安産の上に、珍しく女の子だという報告をお考えになると、源氏のお喜びは一通りではない。源氏には、冷泉院、夕霧と男子が続いている。それに加えて、女子を重んじた当時の貴族の考え方による。「あなる」の「なり」は、伝聞の意。

九 星の二十八宿、九曜によって、運勢や方角、日時の吉凶を占う法。この占いをさせたことは、物語に書かれていない。

一〇 この占いと、桐壺の巻の高麗の相人の予言（一巻三一頁）、若紫の巻の夢占（一巻二一五頁）が、源氏の運命の基本線を示すものである。

一一 一つ一つ適中するようだ。秘密の子の冷泉院が無事皇位に即き、今、女子誕生を見ることは、入内立后の可能性を語るものであるところからこういう。ただし、夕霧の太政大臣就任は物語に書かれないで終る。

一二 総じて、源氏がこの上ない帝の位につき、天下をお治めになるはずだということを。

一三 あれほど優れた多くの人相見たちがこぞって申し上げたのに。その一つに、桐壺の巻の高麗の相人の予言がある。ほかに倭相のことが桐壺三二頁に見える。

一四 かかわりのないことと考えていらっしゃることは。皇位に即くことをさす。

一五 臣下にしようとお決めになった父院のお心を思えば。（桐壺三二頁参照）

一六 皇位とは縁のない運命だったのだ。

しゃるに、人知れずあはれにて、御使ありけり。〔使いは〕とく帰り参りて、「十六日になむ、女にて、たひらかにものしたまふ」と告げきこゆ。めづらしきさまにてさへあなるをおぼすに、おろかならず。などて、京に迎へてかかることをもせさせざりけむと、くちをしうおぼさる。宿曜に、一〇「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中で劣るお子の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と、勘へ申したりしこと、一一さしてかなふなめり。一二おほかた上なき位にのぼり、世をまつりごちたまふべきこと、一三さばかりかしこかりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさに皆おぼし消ちつるを、当帝のかく位にかなひたまひぬることを、思ひのごとうれしとおぼす。一四みづからも、もて離れたまへる筋は、さらにあるまじきこととおぼす。あまたの皇子たちのなかに、すぐれてらうたきものにおぼしたりしかど、一五ただ人におぼしおきてける御心を思ふに、一六宿世遠かりけり、内裏のかくておはしますを、あらはに人の知ることならねど、

ひそかに不憫に思われて　ご報告申し上げる　無事ご出産になりました　どうして　お産もさせなかったのかと　御子は三人で　揃ってご誕生になるでしょう　次男　人臣最高の位を極めましょう　勘へ申し上げたことが　今までは　ずっと周囲の情勢に憚って　お諦めだったが　全く問題にならぬことだと　源氏自身も　今の帝がこうして無事み位におつきになったことを　〔源氏は〕　いとしいものと　〔桐壺院が〕　帝がこうしてみ位におつきなのを　〔真相は〕

一 人相見の予言は誤りではなかったと。
二 今の有様、将来のことをお考えになってみると。「あらましごと」は、将来起るであろうことの意。
三 すべては住吉の神のお導きであった。立后が予言される女児の誕生は、明石移住があったからこそである。（明石二六一頁、二六七頁など参照）
四 将来后になる姫君を産むという並々ならぬ宿縁を持つ人で、だから、偏屈者の父入道も大それた望みを持ったのであろう。明石の入道も娘の宿世を信じて、住吉の神を頼んでいたことは、明石の巻（二七九頁）に見える。

源氏、明石に乳母を送る

五 女房の名。立太子や立后の宣旨（勅旨を伝える公文書）を受け取る上臈の女房に付けることが多い。
六 宣旨の夫。宰相（参議）兼宮内卿に在職中亡くなった人。宮内卿（宮内省の長官）は正四位下相当だが、宰相なので、上達部である。
七 （その者を介して）乳母になるようにご契約なさる。
八 田舎住いがどんなものか、深く考えてみようともせず。

相人の言むなしからず、と、御心のうちにおぼしけり。今、行く末のあらましごとをおぼすに、住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな、このほど過ぐして迎へてむ、と、おぼして、東の院急ぎ造らすべきよし、もよほし仰せたまふ。

（相人の言むなしからず）明石の女も
（住吉の神）ひなびた
（世になべてならぬ宿世）そういうことなら恐れ多い皇后の位にも将来つくはずの人が
（かしこき筋にもなるべき人）いたわしくもったいなくもあることではないか
（あやしき世界）田舎で誕生したということでは
（いとほしうかたじけなくもあるべきかな）しばらくしてから京に迎えよう
（もよほし仰せたまふ）督促の仰せをお出しになる

さる所に、はかばかしき人しもありがたからむをおぼして、故院にさぶらひし宣旨の娘、宮内卿の宰相にて亡くなりにし人の子なりしを、母なども亡せて、かすかなる世に経けるが、はかなきさまにて子産みたりと聞こしめしつけたるを、知るたよりありてことのついでにまねびきこえける人召して、さるべきさまにのたまひ契る。

（さる所に）あんな田舎で
（はかばかしき人しもありがたからむ）まともな乳母といっても
（故院）桐壺院
（宣旨）見つけにくいことだろうと
（母なども亡せて）頼み少ない身の上で
（かすかなる世に経けるが）見込みのない結婚をして
（知るたよりありてことのついでに）先方に親しいってがあって何かの折にと
（まねびきこえける人召して）のことをお話し申し上げた女房をお呼びになって

〔女は〕まだ若く、何心もなき人にて、明け暮れ人知れぬあばらやにながむる心細さなれば、深うも思ひたどらず、この御あたりのことをひと

（何心もなき人）世間の裏を知らぬ人で
（明け暮れ人知れぬあばらやにながむる）訪う人もない
（深うも思ひたどらず）物思いがち
（この御あたりのことをひと）源氏の君にご縁のあることならいちずに過す心細さだったから

源氏、親しく乳母の人柄を観る

九（乳母は）あのように（お勤めすると）申し上げたものの、（やはり明石のような田舎に下ることは）どうしたものかと思案にくれていたのだが。

一〇 支障のない日だったので。当時、外出、旅立ちに際し、陰陽師に吉凶を占わせて日時を定める風習であった。源氏はかねて出入りの陰陽師に乳母出発の日を占い決めさせていたのである。

一一（明石へ行けなどというのは）わけの分らぬ、労りのないことと思うだろうが、私には特別の考えがあってのことでね。

一二 私でさえ、思いがけぬ侘住いに、晴れぬ思いで暮していた、そんな例もあったのだからと思って。「思ひよそふ」は、同じようなものだと思う、の意。

一三 この乳母は、昔、桐壺帝の御前に時々出仕していたことがあったので。母の宣旨に従って、桐壺帝に奉仕していたのであろう。

一四（こんな所で）どうやって暮してきたのだろうと思われる。

一五 昔のようになりたい気がするね。側に置いておきたい、の意。

澪標

結構なこととお思い申して（ご奉公する旨〔仲介の女房に〕）〔源氏は〕大層不憫なと一面ではお思いになりながら〔明石に〕出発させなさる

へにめでたう思ひきこえて、参るべきよし申させたり。いとあはれにかつはおぼして、出だし立てたまふ。

〔その日〕ご他出のついでに〔源氏は〕こっそり隠れて〔乳母の家に〕

ものついでに、いみじう忍びまぎれておはしまいたり。さは聞こえながら、いかにせましと思ひ乱れけるを、〔源氏のご光来の〕いとかたじけなきに、よろづ思ひなぐさめて、「ただのたまはせむままに」と聞こゆ。よろしき日なりければ、急がし立てたまひて、「あやしう思ひやりなきやうなれど、思ふさま異なることにてなむ。みづからもおぼえぬ住ひに結ぼほれたりし例を思ひよそへて、しばし念じたまへ」など、事のいきさつを

ことのありやうくはしうかたらひたまふ。上の宮仕へ時々せしかば、見たまふをりもありしを、いたうおとろへにけり。家のさまも言ひ知らず荒れまどひて、さすがに大きなる所の、木立などうとましげに、いかで過ぐしつらむと見ゆ。人のさま、若やかにをかしければ、御覧じ放たれず。とかくたはぶれたまひて、「取りかへしつべきこちこそすれ。いかに」とのたまふにつけても、げに同じうは御身

（乳母）（源氏）

荒れ果てて　乳母の様子は　屋敷で　気味悪いほど茂って　美しいので　何やかやと色めいた振舞をなさって（源氏）　お見過しになれない　お前はどうか　〔源氏の〕

一 前々から、親しい仲として付き合ってきたわけではないが、別れるのは名残の尽きないものなのだね。

二 別れが惜しいなどとおっしゃいますが、そんなロから出まかせのお言葉を口実に、いっそ、恋しいお方のいらっしゃる方（明石）についておいでになったらいかがですか。

三 場馴れのしたご返歌ぶりを、なかなかやるものだと感心なさる。「いたし」は、意外にすぐれているの意。

乳母、明石へ出で立つ

四 お守り刀や、そのほかの必要な品々など、あれやこれやといっぱいなまで、ご配慮の行き届かぬところもない。

五 乳母にも、例のないほど行き届いたお心遣いの賜り物は一通りではない。「いたはり」は、恩顧というほどの意。

六 明石の入道が、新しく生れた姫君を大切にお扱いし、いとしんでいるであろう様子を想像するにつけても。

近うもつかうまつり馴れば、憂き身もなぐさみなましと、見たてまつる。（源氏）「かねてより隔てぬ仲とならはねど

別れは惜しきものにぞありける

したひやせまし」とのたまへば、うち笑ひて、（乳母）うちつけの別れを惜しむかことにて

思はむかたにしたひやはせぬ

馴れて聞こゆるを、いたしとおぼす。

車にてぞ京のほどは行き離れける。いと親しき人さし添へたまひて、ゆめに漏らすまじく、口がためたまひてつかはす。御佩刀、さるべきものなど、所狭きまでおぼしやらぬ隈なし。乳母にも、ありがたうこまやかなる御いたはりのほど浅からず。入道の思ひかしづき思ふらむありさま、思ひやるも、ほほゑまれたまふこと多く、またあはれに心苦しうも、ただこのことの御心にかかるも、浅からぬ

（不仕合せな身のうれいも慰むだろうと〔乳母は〕）
（追いかけてゆこうか）
（にっこりして）
（決して人には漏らさぬように）
（洛中は）
（腹心の家来をお付けになって）
（思わずお口もとのゆるむことが多く）
（しみじみといたわしく思われもし）
（姫君のことが）
（〔心〕愛情が〕深い）

七　一日も早く、私も袖をかけてみたいものだ、天女が長の年月、羽衣の袖で撫でる岩の行く末を祝って。「をとめ子」は、明石の上を喩え、「岩のおひさき」に、姫君の千年の栄えを祝う意がある。早く明石の上と共に、わが手もとで姫君を養育したい、の意。「君が代は天の羽衣まれに来て撫づとも尽きぬ巌ならなむ」（『拾遺集』巻五賀、読人しらず）による。この歌、磐石劫といって、天女が三年に一度天下り、四十里立方の岩を羽衣で撫で、撫で尽して岩が無くなった時を一劫という仏説を踏まえている。

乳母を迎えた明石の人々のよろこび

八　摂津の国。今の大阪府と兵庫県の一部を含む。淀川を舟で下ったのである。（図録二参照）

九　姫君が、ひとしお大切で、そら恐ろしいほどに思われる。源氏がこの女児を后にもと思っている気持を察しての思い。

一〇　赤児（姫君）が、ほんとに不吉なことが起るのではないかと恐いほどかわいらしくていらっしゃることは、比べるものもない。あまり美しいと神隠しにあったり早死にしたりするという俗信による。

一一　なるほど、源氏が尊い思し召しから、この姫君を大切にお育て申そうとお考えになったのは、もっともなことだったのだと拝見すると。赤児の美しさを見ての乳母の感想。

一二　明石の上。「子持ち」は、赤児の母親をいう語。

からであろう〔女君への〕にこそは。御文にも、おろかにもてなし思ふまじと、かへすがへす注意なさった いましめたまへり。

（源氏）いつしかも袖うちかけむをとめ子が
　世を経て撫づる岩のおひさき

津の国までは舟にて、それよりあなたは馬にて、〔明石に〕急ぎ行き着きぬ。入道待ちもうけて〔源氏の配慮を〕喜び恐縮申し上げることこの上もない待ちとり、よろこびかしこまりきこゆること限りなし。京の方そなたに向きて拝みきこえて、ありがたき御心ばへを思ふに、いよいよいたはしう、恐ろしきまで思ふ。児のいとゆゆしきまでうつくしうおはすること、たぐひなし。げにかしこき御心にかしづききこえむとおぼしたるは、むべなりけりと見たてまつるに、あやしき道に出で立ちて、夢のここちしつる嘆きもさめにけり。〔乳母は〕いとうつくしうらうたうおぼえて、〔姫君を〕お世話申し上げるあつかひきこゆ。

子持ちの君も、月ごろものをのみ思ひ沈みて、〔お産で〕一層身も心も弱っていとど弱れるここちに、生きたらむともおぼえざりつるを、この御おきての、すこし

一 お使いにも、またとないくらいの心遣いの限りを見せる。具体的には、数々の贈り物をしたり饗応すること。「御使」は、乳母について来た使いで、二〇頁に「いと親しき人さし添へたまひて」とあった。

二 私一人で姫君をお育てするのは、いかにも力及びません、あなたの大きなご庇護をお待ちいたしております。「大空に覆ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」（『後撰集』巻二春中、題しらず、読人しらず）の言葉を用い、「撫づる」「袖」は源氏の歌に応じたもの。

源氏、紫の上に、姫君誕生のことを打ち明ける

三 こういうことなのだそうです。「さ」は、明石で姫君が誕生したことをいう。「なれ」は、伝聞の助動詞。

四 そうあって頂きたい（お子が生れてほしい）と思う方にはその気配もなくて。紫の上に子のないことをいう。

五 （明石で子供を儲けるなどとは）意外なことで、残念です。

六 女の子だということですから、全く気に入りません。わざと軽視した言い方をするのである。

七 いやですこと、いつもそんな意味の（嫉妬しないようにという）ご注意を頂く私の心のほどが、われながら厭になります。

もの思ひなぐさめらるるにぞ、頭もたげて、御使にも二なきさまの心ざしを尽くす。〔お使いが〕すぐ帰参したいと帰りを急いで迷惑がるので とく参りなむと急ぎ苦しがれば、思ふことどもすこし聞こえ続けて、

（明石上）二 あれこれお書き申して

ひとりして撫づるは袖のほどなきに
覆ふばかりの蔭をしぞ待つ

と聞こえたり。〔源氏は〕あやしきまで御心にかかり、〔姫君のことが〕ゆかしうおぼさる。早く見たいと

紫の上 女君には、言にあらはしてをさをさ聞こえたまはぬを、聞きあはせたまふこともこそとおぼして、「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。四 さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひのほかにくちをしくなむ。五 女にてあなれば、六 いとこそものしけれ。たづね知らでもありぬべきことなれど、〔親心とは〕そうもほっておくわけにはさはえ思ひ捨つまじきわざなりけり。呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」と聞こえたまへば、面うちあかみて、「あやしう、七 つねにかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、われながらうとましけれ。もの

紫の上 ことを明石のことを口に出してはめったにお話し申されないのだが ほかからお耳になさってもいけないと

三 ものごとは妙にすんなりとゆかぬものですね

四 気をつけてやらなくてもよいことなのですが

五 そうもほっておくわけにはゆかぬものでした〔赤児を〕

六 人に嫉

八（私は身に覚えがないのに）心外にお見受けします よ。次の「人の心よりほかなる……」という紫の上の態度を評したもの。

九 明石の女のことも何もかも一切が、当座の慰みにすぎないのだと（今度の出来事も大したことではないのだと）打ち消すお気持になってくる。源氏の心中である。

一〇 この人（明石の上）のことを、こうまで心にかけて見舞ってやるのは、実は考えるところがあるのですよ。でも、今からそれを申せば、また妙なふうにおとりになりそうですから。赤児の将来について、思うところがあることを言いさしたもの。

一一 しみじみと胸に迫った夕方の塩焼く煙や明石の上の詠んだ返歌など。源氏帰京の二日前、明石の上と別れを惜しんだ時のことをさす（明石二九八頁参照）。

一二 はっきりとではないが、その夜彼女の容貌をわずかに見たことや、琴の音色の優艶であったことなど。これも明石二九七頁以下参照。

一三 以下「心を分けたまひけむよ」まで紫の上の心中の思い。

妬するなんて　いつ覚えることでしょうか　にこにこなさって

憎みは、いつならふべきにか」と怨じたまへば、いとよくうち笑みて、「そよ。誰がならはしにかあらむ。思はずにぞ見えたまふや。

（源氏）それぞれ　誰が教えたことなのでしょうね　私が思ってもいないようなことを邪推して

人の心よりほかなる思ひやりごとして、もの怨じなどしたまふよ。思へば悲し」とて、果て果ては涙ぐみたまふ。年ごろ飽かず恋しと思ひきこえたまひし御心のうちども、をりをりの御文の通ひなどおぼし出づるには、よろづのこと、すさびにこそあれと思ひ消たれたまふ。

お互いのお胸の中や　あの何年もの間

（源氏）一〇「この人を、かうまで思ひやり言とふは、なほ思ふやうのはべるぞ。まだきに聞こえば、またひが心得たまふべければ」とのたまひさして、「人からのをかしかりしも、所からにや、めづらしうおぼえきかし」など語りきこえたまふ。あはれなりし夕の煙、言ひしことなど、まほならねどその夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて御心とまれるさまにのたまひ出づるにも、われはまたなくこそ悲しと嘆きしか、すさびにても心を分けたまひけむよ、

（明石上の）　すぐれていたのも　あんな田舎のせいか

（源氏が）話し出されるにつけても　この上もなく悲しいと嘆いていたのに　たわむれにしろ（ほかの女に）心を分けていらしたのだ

一　あなたはあなた、私は私で、お互いに別々の心なのですね、の意。「君は君我は我と隔てねば心々にあらむものかは」（『和泉式部日記』）がある。

二　愛し合っているお二人が、共に靡くとおっしゃる方角ではなくても、私も煙になって、先に死んでしまいとうございます。前に、源氏が「あはれなりし夕の煙、言ひしことなど」を語り出した時、明石の上の返歌の前に、当然源氏の贈歌を語っているはずであるから、それを受けて詠んだのである。すなわち「このたびは立ち別るとも藻塩焼く煙は同じかたになびかむ」（明石二九八頁）に応じたもの。

三　何とおっしゃる。情けないこと。

四　誰のために、つらい境涯を遠い海辺や山里にさすらって、絶えぬ涙に浮き沈みする私なのでしょう。「うみ」は、「海」と「憂み」の掛詞。「涙」に「波」が響く。「浮き沈み」は「海」の縁語。

五　しかし、それには寿命が思うにまかせぬもののようです。長い将来を見てくれという気持。「命だに心にかなふものならば何か別れの悲しからまし」（『古今集』巻八離別、白女）の言葉による。

六　ただ一つ、あなたのために長生きをしたいからです。

七　調音ののち、音色を調べるために弾く小曲。

八　明石の女が上手だったというのもおもしろくないのか。前頁に、「琴の音のなまめきたりし」ことが源氏の話の中にあった。

と、ただならず思ひ続けたまひて、（それからそれへと恨めしくお思いになって）「われはわれ」（紫上）一と、うちそむき（背を向けて物思わ）ながめて、「あはれなりし世のありさまかな」（しみじみと心の通った昔の二人だったのに）と、独言のやうにうち嘆きて、

（紫上）二
思ふどちなびくかたにはあらずとも
われぞ煙にさきだちなまし

（源氏）三
「何とか。心憂や。

四
誰により世をうみやまに行きめぐり
絶えぬ涙に浮き沈む身ぞ

（何とか私の本心を分って頂くようにしよう）いでや、いかでか見えたてまつらむ。五命こそかなひがたかべいものなめれ。（つまらぬことで他人の恨みを受けぬようにしたいと思うのも）はかなきことにて人に心おかれじと思ふも、六ただ一つゆゑぞや」とて、（軽くお弾きになって）箏の御琴引き寄せて、七掻き合せすさびたまひて、（紫上に）そそのかしきこえたまへど、八かのすぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず。いとおほどかにうつくしう、（素直でいらっしゃるものの）たをやぎたまへるものから、（おっとりとしてかわいらしく）さすがに執念きところつきて、（しつこいところがあって）もの怨じしたまへるが、（嫉妬なさるのが）なかな

源氏、明石の姫君の五十日の祝いに心を配る

九　子供が生れて五十日目。五十日の祝いといって、小児に餅を含ませて祝う。この餅を五十日の餅という。明石の姫君の誕生は三月十六日とあった（一七頁参照）。

一〇（都で誕生したのならば）万事、どんなに思う存分に世話をしてやれてうれしいことだろうに。以下、源氏の心中。

一一（姫君なので、将来は特別のお考えもあることとて）もったいなくもおいたわしくも思われ、ご自身のご運勢も、このお方のご誕生のために、一時欠けることがあったのだとお考えになる。須磨、明石の流浪は、立后を予言されている姫君誕生をもたらすためだったと思う。

一二　いつも、侘しい田舎住いをして、今日が五日のあやめの節句だと、どうして分ろうぞ。（どうして五十日の祝いも取り立ててできようぞ）。「海松」（海藻の海松）を松にとりなし「時ぞともなき蔭」を言い出す。「あやめ」に「文目」（すじめ、けじめ）の意と五月五日の「菖蒲」を掛け、「いかに」に「五十日」を詠み込む。

五月五日にぞ、五十日には当るらむと、人知れず数へたまひて、ゆかしうあはれにおぼしやる。何ごとも、いかにかひあるさまにもてなし、うれしからまし、くちをしのわざや、さる所にしも、心苦しきさまにて、出で来たるよ、とおぼす。男君ならましかば、かうしも御心にかけたまふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世もこの御ことにつけてぞかたほなりけりとおぼさるる。御使出だし立てたまふ。「かならずその日違へずまかり着け」とのたまへば、五日に行き着きぬ。おぼしやることも、ありがたうめでたきさまにて、まめまめしき御とぶらひもあり。

（源氏）海松や時ぞともなき蔭にゐて

何のあやめもいかにわくらむ

愛らしい様子でお腹立ちになるのを〔源氏は〕風情があっておもしろいとご覧あそばす　〔源氏は〕　不憫な　ままならぬことよ　あんな田舎に　男のお子だったら　生れてきたことだ　境遇で　どうしているかといとしく思いを馳せられる　到着せよ　お祝いの使いをおさし向けになる（源氏）　お心遣いの品々も　暮し向きに必要な品々の贈り物まである　様で　普通では考えられぬほど結構な有　（源氏）　気もそぞろなほど思っています　やはりこのままでは我慢できそうにないから　上京を　心配するようなことは　決してないから　決心なさい　大丈夫

と書いたまへり。入道、例の、よろこび泣きしてゐたり。一かかるをりは、生けるかひもつくり出でたる、ことわりなりと見ゆ。

ここにも、よろづ所狭きまで思ひ設けたりけれど、二この御使なくは、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母も、この女君のあはれに思ふやうなるをかたらひ人にて、世のなぐさめにしけり。をさを

（明石の上）（しみじみと）（入道のもとでも〔祝いの品を〕せ）（何やかやといっぱい用意していたけれど）（やさしく欠点とてない人柄なのを相談相手にして）（田舎住いの慰めにしていた）（〔この乳母に〕）（少しも劣らぬ女房も）

さ劣らぬ人も、類に触れて迎へ取りてあらすれど、四こよなくおとろへたる宮仕へ人などの、巌の中たづぬるが落ちとまれるなどこそあれ、これは、こよなうこめき思ひあがれり。聞きどころある世の物語などして、大臣の君の御ありさま、世にかしづかれたまへる御おぼえのほども、女ごこちにまかせて限りなく語り尽くせば、五げに、かくおぼし出づばかりの名残とどめたる身も、いとたけくやうやう思ひなりけり。御文ももろともに見て、心のうちに、あはれ、からこそ思ひのほかにめでたき宿世はありけれ、憂きものはわが身こそありけれ、と、思ひ続けらるれど、「乳母のことはいかに」など、

（縁故を通じて迎え入れて置いているが）（この乳母は）（この上もなくおっとりしていて気位が高い）（〔乳母は〕聞きがいのある都の貴人のお噂などして）（世間からあがめられていらっしゃるご評判の大したことも）（女らしいあこがれから）（〔源氏の〕）（〔乳母は〕）（いもかけぬすばらしい幸運もあるのだ）（情けない身の上というのは私のことだ）（乳母はどうしているか）（〔源氏

一　こんなうれしい折には、生きているかいがあると、泣きべそをかいているのも、無理もないと思われる。「かひ」に、泣き顔の意と、「生きがひ」の「かひ」を掛ける。明石三〇二頁で、別離の悲しみにべそをかいたのと対照して書いている。

二　京よりのお使いがなかったら、それも闇夜の錦の感じで、今日の日が終ってしまうところだった。「闇夜の錦」は、「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」（『古今集』巻五秋下、紀貫之）という歌もあり、何の見栄えもせぬことをいう。「富貴にして故郷に帰らざるは、繡を衣て夜行くが如し」（『史記』項羽本紀）の故事による。

三　明石に下向した姫君の乳母。

四　すっかり落ちぶれた宮廷の女房などで、山の中にでも隠れ住みたいと思っていた者が、たまたまここ（入道の館）に身を寄せているといった人がいるのだが。「巌の中」は、「いかならむ巌の中に住まばかは世の憂きことの聞こえざらむ」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）による。

五　ほんとうに、源氏ほどのお方が、こうまでお心に止めて下さるよすがを残している（姫君を産んだ）自分も、大層えらいものだと、だんだん思うようになるのだった。

六　人数ならぬ私のもとで心細く育つ姫を、五十日の祝いの今日も、どうしているかと尋ねてくれる人はいないのでした。「み（島）」に「身」を掛け、「いか（に）」に「五十日」を掛ける。わが身を卑下し、世間に認められることのない姫君の境遇を嘆いたもの。

七　ほんとうに仰せの通り、姫の身の上が、安心できるようなことになってほしい、と存じます。源氏の文に「なほかくてはえ過ぐすまじきを、思ひ立ちたまひね。さりとも、うしろめたきことは、よも」とあったのを受けた言葉。

八　「み熊野の浦よりをちに漕ぐ船の我をばよそに隔てつるかな」（『古今六帖』三、浦、伊勢。『伊勢集』。下の句「我をばよそに隔てつるかな」（私は除け者なのですね）の意を暗示する。

九　これは、ただ、ほんのこの場かぎりの感慨にすぎないのですよ。明石からの手紙を読んだ当座、ふと過去を回想したまでだとの弁解。次に「所のさまなど……」と、その説明がある。

一〇　あの土地の景色などを思い出す折々。明石の女その人を思っているのではないと言外に示す気持。

一一　手紙を上から包んだ紙。宛名が書いてある。ここは立文（たてふみ）であろう。

澪　標

の文に〕やさしく案じて下さっておられるのも
こまかにとぶらはせたまへるもかたじけなく、何ごともなぐさめけり。御返りには、

（明石上）六
数ならぬみ島がくれに鳴く鶴を
　　けふもいかにととふ人ぞなき

何かにつけて物思いにふさいでおります有様で
よろづに思うたまへむすぼほるるありさまを、このように時たまのお慰め かくたまさかの御
におすがりして生きる私の命もいつまでのことかと　心細く存します
なぐさめにかけはべる命のほども、はかなくなむ。七げに後やすく思うたまへ置くわざもがな。

〔源氏は〕繰り返しご覧になっては
と、心からまめやかに聞こえたり。うち返し見たまひつつ、「ああはれ」と
嘆息なさるのを　紫の上
長やかにひとりごちたまふを、女君、後目に見おこせて、「浦八よりをちに漕ぐ舟の」と、忍びやかにひとりごちながめたまふを、「まことは、かくまでとりなしたまふよ。九こは、ただかばかりのあはれぞや。所のさまなどうち思ひやる時々、来しかたのこと忘れがたき独言を、ようこそ聞き過ぐいたまはね」など、うらみきこえたまひて、上包ばかりを見せたてまつらせたまふ。手などのいとゆゑづき

そこまで邪推なさるのだね　そっとつぶやいて物思わしげにしていらっしゃるのを　（源氏）
なんと
よくまあ逃さず聞きとがめなさることですね　過ぎ去った昔が忘れられずに漏らす
〔明石上の〕筆跡など大層立派で

て、やむごとなき人苦しげなるを、[一]かかればなめりとおぼす。

身分の高い女もたじろぎそうなのを　紫の上のご機嫌をおとりになる間に

かく、この御心とりたまふほどに、花散里を離れ果てたまひぬるこそ、いとほしけれ。[二]公事も繁く、所狭き御身に、おぼし憚るに添へても、めづらしく御目おどろくことのなきほど、思ひしづめたまふなめり。五月雨つれづれなるころ、公私もの静かなるに、おぼしおこしてわたりたまへり。よそながらも、明け暮れにつけて、[三]ろづにおぼしやりとぶらひきこえたまふを頼みにて、過ぐいたまふ所なれば、今めかしう心にくきさまに、そばみうらみたまふべきならねば、心やすげなり。年ごろにいよいよ荒れまさり、すごげにておはす。女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸に夜ふかして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ、尽きもせず見えたまふ。いとどつましけれど、端近うちながめたまひけるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひ、いとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

お気の毒なことだ　〔花散里から〕目新しくお心をひくようなお便りも来ないため　慎重にしていらっしゃるのであろう　梅雨の雨で所在ない頃　〔花散里へ〕　〔源氏の〕おいでではなくても　公私共にお暇なので　思い立たれて

当節の女性のように様子ぶって　すねたり嫉妬したりなさるはずもないので　〔源氏も〕お気楽そうだ　この数年の間に　〔お邸は〕ものさびしい暮しである　〔花散里は〕ますます気がひけるけれど　限りなく美しくお見えになる　夜が更けてから　もの静かに源氏をお迎えになるご様子は　どこといって難がない

九　せめて水鶏でも戸を叩いて知らせてくれなかったら、どうして訪れる人もない荒れた家に月を（あなたさまを）招じ入れたりいたしましょう。ご来訪など思いもよりませんでした、の意。「月」を源氏に喩える。

一〇　とても親しみをそそる調子で、怨めしさを抑えておっしゃるのが（独特の風情があって）。

一一　どの家の戸でも叩く水鶏の音に、見境なしに門を開けていたら、上の空の月（いいかげんな気持の男）も入ってくるかもしれませんよ。

一二　須磨への別れの折、源氏が「ゆきめぐりつひにすむべき月かげのしばし曇らむ空ながめそ」と詠んで、花散里をはげまし慰めたことをさす。（須磨二一四頁参照）

一三　どうして、あの時は、別れのつらさをまたとあるまいと、ひどく嘆き悲しんだのでしょう。

一四　（ご帰京になっても、なかなか訪れて頂けぬ）不仕合せな私ですから、同じ悲しさでございますのに。

一五　例のように、どこから取り出されるお言葉なのだろうか。女の心を捉えるうまい言葉が次々に出てくることに、なかばあきれたという気持の草子地。これも源氏のすぐれた資質の一つである。

（花散里）九
水鶏だにおどろかさずはいかにして
荒れたる宿に月を入れまし

一〇
いとなつかしう言ひ消ちたまへるぞ、とりどりに捨てがたき世かな、かかるこそ、なかなか身も苦しけれ、とおぼす。

どなたもそれぞれによい所があるものだな
〔源氏は〕
こんなだから
かえって私も苦労なのだ

（源氏）一一
「おしなべてたたく水鶏におどろかば
うはの空なる月もこそ入れ

気になりますね
やはり言葉の上では申されるが〔花散里は〕多情な点などで
うしろめたう」とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など、うたがはしき御心ばへにはあらず。年ごろ待ち過ぐしきこえたまへるも、さらにおろかにはおぼされざりけり。「空ながめそ」と、頼めきこえたまひしをりのことも、のたまひ出でて、「などて、たぐひあらじと、いみじうものを思ひ沈みけむ。憂き身からは、同じ嘆かしさにこそ」とのたまへるも、おいらかにらうたげなり。例の、いづこの御言の葉にかあらむ、尽きせずぞかたらひなぐさめきこえたまふ。

疑いが持たれるようなご性質ではない
〔源氏は〕決しておろそかにお思いではなかったのだった
ことも
長年お帰りをお待ちして過して来られた
お力づけ申し上げなさった折のことも
お口になさって
（花散里）一三
おとなしく愛らしい感じがする
何やかやとこまやかにお慰め申し上げなさる

一 こうしたことがあるにつけても、あの五節の君をお忘れにはならない。五節の君は、花散里の巻に「まづおぼし出づ」（一九五頁）とあった人。須磨の巻で、筑紫から上京の途次、源氏と歌を交わしている（二四三頁参照）。

五節の君や朧月夜の尚侍の動静

二 とてもこっそりお逢いになるわけにはゆかない。「まぎる」は、ものに混って隠れること。

三 源氏への叶わぬ思慕のために、ずっと物思いに沈んでいるのを。

四 娘は、（源氏への思いが遂げられないので）もう人並みな結婚生活を送ることは断念している。

五 気楽にくつろげる邸を造って、花散里や五節のような、気の張らない愛人を集めて住まわせたりして。花散里などのために、源氏が二条の院の東にある別邸の改築を始めたことは一六頁に見える。

六 別邸なので、かえって自由な趣向が凝らせて、目をひく所が多く。

七 風雅を解する受領などを選んで。「受領」は、国守で、実際に任国に赴いて実務を行う者。富裕であった。源氏の恩顧をこうむる受領たちに、寝殿や対の屋を分担造営させることをいう。

源氏、新東宮とも間柄良し

八 失敗に懲りもせず昔ながらに。「こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住まへば」（『古今集』巻十三恋三、読人しらず）による。

一 かやうのついでにも、かの五節をおぼし忘れず。また見てしがな（もう一度逢いたいもの）と心にかけたまへれど、いとかたきことにて、二えまぎれたまはず。四女、もの思ひ絶えぬを、（五節は）三親はよろづに思ひ言ふこともあれど、世に経むことを思ひ絶えたり。五心やすき殿（造りしては、かやうの人つどへても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、（思い通りに養育なさるべきお子でもお生れになったならば）さる人の（そんな方の）後見にもとおぼす。（二条の東の院）かの院のつくりざま、六なかなか見どころ多く、（各自に割り当てて工事を）今めいたり。七よしある受領（世話役にもと）などを選りて、あてあてにもよほしたまふ。（当世風である）尚侍の君、（朧月夜を〔源氏は〕）なほえ思ひ放ちきこえたまはず。八こりずまに立ちかへり、（お気持を伝えたりなさるが）御心ばへもあれど、女は憂きに懲りたまひて、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず。（とかくのお返事を申されない）なかなか所狭う、（〔そんなわけで〕窮屈で）さうざうしう、世の中おぼさる。（もの足りなく）

（〔源氏は〕）朱雀院の上皇は気楽なご心境になられて院はのどやかにおぼしなりて、時々につけて、（四季に応じて）をかしき御遊びなど、（趣ある管絃の御遊などをなさり）好ましげにておはします。（風流なお暮しぶりでいらっしゃる）女御、（ご在位中と同じく）更衣、みな例のごとさぶらひたまへど、（承香殿の女御）春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めきたまふことも

九　上皇御所（朱雀院）を出て東宮にお付き添い申していられる。女御は東宮とともに内裏にいるのである。
一〇　源氏の宿直所が淑景舎（桐壺）であったことは、桐壺（一巻四〇頁）、花宴（二巻五四頁）の巻に見える。
一一　淑景舎の南隣りの昭陽舎。（二巻図録五参照）
一二　源氏は東宮のお世話もしてお上げになる。源氏の自信と、遠い将来の次期政権への配慮。
一三　（ご出家の身であるから）中宮のご身分をあらためて、皇太后になられるべきではないので。公式令によれば、天皇の母を皇太后という。
一四　上皇に准じて。「太上天皇」は、天皇退位後の尊称。准太上天皇の歴史上の実例は、正暦二年（九九一）九月、一条天皇の母后詮子が落飾したので、皇太后職を停め、東三条院と号したのがはじめである。
一五　皇族、諸臣に、官位や勲功に応じて賜る戸口。その租の半分、庸調の全部が封主の収入になる。太上天皇は二千戸、中宮は千五百戸。
一六　（中宮職に代って）院の事務を取り扱う役人が任命されて。
一七　現世、来世にわたって利益をもたらす善行。
一八　弘徽殿の大后。
一九　（大后の昔の仕打ちを思うと）かえって見ていられないほどであるのを。
二〇　紫の上の父宮。（須磨二一〇～二一一頁参照）

源氏、兵部卿の宮に冷淡

なく、尚侍の君の御（ご寵愛には圧されていらっしゃったのに）おぼえにおし消たれたまへりしを、かくひきか（って変）へめでたき御幸ひにて、離れ出でて宮に添ひたてまつりたまへる。

一〇この大臣の御宿直所は、昔の淑景舎なり。梨壺に春宮はおはしませば、近隣の（隣同士のよしみで）御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ。

入道后の宮、御位をまたあらためたまふべきならねば、太上天皇（格別立派である）になずらへて、御封たまはらせたまふ。院司どもなりて、さまことにいつくし。（藤壺は）御行ひ、功徳のことを、（日々のお仕事として）常の御いとなみにておはします。年ごろ世に憚りて（宮邸の）出で入りも難く、見たてまつりたまはぬ嘆きをいぶせくおぼしけるに、（お思い通りに）おぼすさまにて（宮中に出入りなさるのも）参りまかでたまふも、いとめでたければ、大后は、憂きものは世なりけりとおぼし嘆く。大臣はことに（源氏）触れて、（大后に）非の打ちどころのないほどによくお仕えし（心遣いをしてさし上げられるのも）まふも、なかなかいとほしげなるを、（世人もあそこまでなさらずともとお噂した）人もやすからず聞こえけり。

兵部卿の親王、年ごろの（須磨流謫の間のお仕打ちが冷たく心外なさりようで）御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の（世間の）

一 兵部卿の宮家に関することには、（紫の上の父上なのに）かえってつらくお当りになることもままあるのを。

二 困った不本意なこととお思い申していらっしゃる。藤壺と兵部卿の宮は同腹の兄妹なので、心を痛めるのである。

三 太政大臣（もとの左大臣。源氏の舅）と、源氏のお二人のお心のままである。

四 もとの頭の中将。（一五頁参照）

五 祖父君（太政大臣）が、直接お世話をやいて。

六 二番目の姫君。入内のことは少女二三〇頁に見える。紫の上の腹違いの姉妹。なお絵合九九頁参照。

七 源氏は、中の君が特にすぐれたお身の上（帝の妃）になられようともお考えにならないのだった。入内のために、いろいろ斡旋することがなかったことをいう。

八 住吉神社。（図録一参照）

九 源氏が須磨謫居の翌年三月上巳の日以来、暴風雨の危険に襲われた際、住吉の明神に多くの誓願を立てた、その願果し。帰京の折、使いを出して予告もしていた。（明石二六一頁、三〇四頁参照）

一〇 毎年恒例のこととして参詣するのだが。明石の入道が娘に例年住吉詣でをさせていたことは、入道自身が源氏に述懐するなかで述べている（明石二七九頁）。

一一 神に奉納する宝物。

秋、源氏の住吉詣で　たまたま、明石の上一行も来合わす

取り沙汰ばかりを気にしておられたことを　恨めしいことと心にとどめられて　聞こえをのみおぼし憚りたまひしことを、大臣は憂きものにおぼしおきて、昔のやうにもむつびきこえたまはず。なべての世には、あまねくめでたき御心なれど、親しいお付合いをなさらない　たいていの人には〔源氏は〕　この御あたりは、なかなか情なき節もうち交ぜたまふを、わけ隔てなく思いやりがありだが　入道の宮は、藤壺　いとほしう本意なきことに見たてまつりたまふ。世の中のこと、政治は　ただ、なかばを分けて　二つに分けて　太政大臣、〔後宮に〕　この大臣の御ままなり。権中納言の御女、その年の八月に参らせたまふ。祖父殿ぬたちて、儀式などいとあらまほし。入内のお支度など本当に申し分がない　兵部卿の宮の中の君も、入内するように　さやうに心ざしてかしづきたまふ名高きを、大臣は、人よりまさりたまへとしもおぼさずなむありける。大切にお育てだという噂が高いのに　一体どうなさろうというおつもりでしょうか　いかがしたまはむとすらむ。

その秋、住吉に詣でたまふ。願ども果たしたまふべければ、いかめしき御ありきにて、世間でも大騒ぎして　世の中ゆすりて、上達部、殿上人、われもわれもとつかうまつりたまふ。をりしも、かの明石の人、年ごとの例のことにて詣づるを、去年今年はさはることありておこたりけるか

お供なさる　明石の上　勢いさ　かんなお出ましで　〔妊娠出産と〕さしさわりがあってお参りしなかったそ

三 社頭で東遊びを奏する舞人十人。馬に乗り、青摺り（山藍の葉で模様を青く摺り出したもの）の装束を着用する。

一三 訳く様子だが。下人が尋ねているのを、明石の上たちが船中で聞く趣。

一四 ほんとうにあきれたこと、今日以外に月日もあろうに（源氏の住吉詣でを知らずにやって来て）。遠く明石の浦に住むゆえの嘆きである。

一五 とはいえ、さすがに切っても切れぬご縁があるものの。源氏との間に姫君を儲けたことをいう。

一六 こんな、生きがいもないような低い身分の者まで。前出の「はかなきほどの下衆」をさす。

一七 晴れがましいことと思っているのに。

一八 住吉の海岸の松原。以下、船中の明石の上の眼に映る光景をそのまま書いてゆく。

一九 花や紅葉をしごいて散らしたかのような、人々の袍の紅紫の濃淡の点々たるさまは数え切れない。位の上下によって、袍の色に浅深があり、一位深紫、二位三位浅紫、四位深緋、五位浅緋、六位深緑、七位浅緑、八位深縹、初位浅縹（「衣服令」）であるが、平安中期には、乱れていた。ここは、四位五位の供奉の者が目につくのであろう。

二〇 六位の蔵人の第一席の者は、天皇から麹塵の御袍（天皇の日常服、青みがかった黄色）を賜って着用する。

源氏一行の美々しい行列とそれを見る明石の上の嘆き

のお詫びもかねて
しこまり取り重ねて、思ひ立ちけり。舟にて詣でたり。岸にさし着くるほど見れば、ののしりて詣でたまふ人のけはひ、渚に満ちて、
大勢で騒がしく　立派な
いつくしき神宝を持て続けたり。楽人十列など、装束をととのへ容貌を選びたり。「誰が詣でたまへるぞ」と問ふめれば、「内大臣殿の
（源氏方）
御願果たしに詣でたまふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなき
（世間には）　取るに足らぬ　気持よさそうに
ほどの下衆だに、ここちよげにうち笑ふ。げにあさましう、月日もこそあれ、なかなかこの御ありさまを遙かに見るも、身のほどくちをしうおぼゆ。さすがにかけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かくくちをしき際の者だに、もの思ひなげにて、つかうまつるを色節に思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけておぼつかなう思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らで立ち出でつらむ、など思ひ続くるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。

なまじ及びもつかぬ源氏のご威勢のほどを遠くから見るにつけ　わが身の上が情けなく思われる　何の屈託もなさそうに　（源氏のお側に）

松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆるうへのきぬの濃き薄き、数知らず。六位のなかにも蔵人は青色しるく見えて、

（明石上は）　涙にくれるのであった　前世にどんな深い罪があって　忘れる時とてなく源氏のお身の上をお案じ申し上げて　いながら　これほどまでに評判のご参詣も

一 あの須磨下向の前に「ひき連れて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂のみづがき」と詠んだ右近の将監（右近衛府の三等官、正六位上相当。常陸の介（もとの伊予の介）の子。（須磨二一九頁参照）

二 靫負の尉の略。左右衛門府の三等官。従六位上相当。衛門府は、靫（箭を入れる物）を負い弓を持つので、靫負の司の名がある。

三 ものものしい随身を引き連れた蔵人である。須磨の巻で蔵人を免じられているが（二一九頁）、復任されたのであろう。「随身」は、近衛府の武官で、弓矢を持ち警護に当る。

四 播磨の守の子で、源氏の家来。須磨明石にお供したことは両巻に詳しい。「同じ佐にて」は、同じく衛門府の佐（次官、従五位上相当）になったことをいう。

五 「赤衣」は、五位の袍。

六 従一位左大臣 源融（八二二～八九五年）。嵯峨天皇皇子。その豪奢風流な邸宅を河原の院と号した。

七 随身として召し連れる童。勅許による。源融が童随身を賜ったことは、史実には見当らない。長徳二年（九九六）、藤原道長が童随身六人を賜っている（『公卿補任』）。

八 童の髪型。髪を左右に分け、耳のあたりで丸く輪にして束ねる。

九 上を薄く、裾を濃く紫にぼかし染めにした元結。「元結」は、束ねた髪を結ぶ組み紐。

一 かの賀茂の瑞籬恨みし右近の尉も靫負になりて、三 ことことしげなる随身具したる蔵人なり。四 良清も同じ佐にて、人よりことにもの思ひ（充ち足りた面）なきけしきにて（持で）、おどろおどろしき（一段と目に立つ）赤衣姿、五 いときよげなり。すべて見し人々、ひきかへはなやかに、何ごと思ふらむと見えてうち散りたるに、若やかなる上達部、殿上人の、われもわれもと思ひいどみ、馬鞍などまで飾りをととのへ磨きたまへるは、いみじき見物に田舎人も思へり。

（すっきりしている）（何の憂いもなさそうな様子であちこちに姿を見せているが）（競い合って）（明石で知った人々が）（明石の一行も）

源氏のお車御車を遙かに見やれば、なかなか心やましくて、恋しき御影（お姿）をも六 え見たてまつらず。河原の大臣の御例（ご先例になって）をまねびて、七 童随身（大層美しく）をたまはりたまひける、八 いとをかしげに装束き、みづら結ひて、九 紫裾濃の元結なまめかしう、丈姿（優雅で）ととのひ、うつくしげにて（かわいい格好をして）十人、さま異に今めかしう見ゆ。大殿腹の若君、限りなくかしづき立てて、馬添童の（夕霧）（揃いの衣裳で）（ほかとは違えて）（様子も）ほど、皆作りあはせて、やうかへて装束きわけたり。雲居遙かにめでたく見ゆるにつけても、若君の数ならぬさまにてものしたまふを（かえってもどかしい思いがして）（やかに見える）（わが腹の姫君が人数にも入らぬ有様でお育ちなのを）

一〇（夕霧の）乗馬に付き添う童。
一一（源氏の一行が）遙か遠くに手の届かぬすばらしい有様に見えるにつけても。「雲居遙かに」は、海上からの距離と身分の懸隔の両方をいう。
一二 摂津の守が源氏のもとにご挨拶に参上して。
一三 といってこのまま帰るのもおさまりがつかない。
一四 今の大阪市東部、上町台地。この水辺で、古代から祓えが行われた。源氏も明石から帰京の際、この地で祓えをしている（明石三〇四頁参照）。

源氏、惟光、主従の感懐

一五 夜通し、さまざまの神事を奉納なさる。神事は深更から夜明けにかけて行う。
一六 神がご嘉納になるようなこと。歌舞や宝物の奉納をいう。
一七 惟光のような、辛苦を共にした家来たちは。
一八 住吉に参って岸の松を見ましても、まず感無量でございます、昔のことを忘れられずに思いますので。「松」に「先づ」を掛ける。住吉の岸の松は、『古今集』以来歌によく詠まれている。「神代」は「住吉」の縁で、須磨明石で苦労した往時の意をこめる。

大層悲しいと いみじと思ふ。いよいよ御社のかたを拝みきこゆ。一二国の守参りて、ご饗応を御まうけ、例の大臣などの参りたまふよりは、格別に例のないほど丁重に奉仕したことであろう ことに世になくつかうまつりけむかし。〔明石方は〕いたたまれぬ思いで いとはしたなければ、立ち交り、数ならぬ身の少しばかりの祭りや奉納をしても いささかのことせむに、神も見入れかずまへたまふべきにもあらず、お喜びになり人並みに思し召されるはずもあるまい 一三帰らむにも中空なり、一四今日は難波に舟さしとめて、祓へをだにせむとて、漕ぎ渡りぬ。

源氏 君は夢にも知りたまはず、一五夜一夜いろいろのことをせさせたまふ。まことに神一六のよろこびたまふべきことをし尽くして、流謫の折に立てた来しかたの御願にもうち添へ、またとないほど奉納の楽や舞をにぎやかに演じて夜を明かされる ありがたきまで遊びののしり明かしたまふ。一七惟光やうの人は、心のうちに住吉の神のご加護を肝に銘じてありがたく思っている 神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。あかひとときほんの〔源氏が車外に〕らさまに立ち出でたまへるにさぶらひて、お側に参って聞こえ出でたり。

〔惟光〕一八 住吉の松こそものは悲しけれ
神代のことをかけて思へば

本当にそうだと げにとおぼし出でて、

一 激しかった波風の騒ぎを思うにつけ、住吉の神の御徳をいささかなりとも忘れたりしようか。

二 霊験はあらたかだな。「な」は、感動の助詞。

三 住吉の神のお導きを思い出されることも一通りではないので。子までなした二人の契りは、源氏と明石の入道のそれぞれに、住吉明神の託宣があったからで、その経緯は明石二六四頁、二六七頁に詳しい。

源氏、惟光より明石の一行のことを聞き、消息を交わす

四 (つい側まで来ていながら、空しく引き返したとあれば)かえってつらい思いをしているであろう。

五 (住吉からの帰途)あちらこちらの景色を存分にお楽しみになる。海辺の遊覧をするのである。

六 仁徳帝の時代に掘ったと伝える。今の天満川という。歌枕。(二巻図録一参照)

七 「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ」――恋しさに耐えられないので、今はもう同じこと、命をかけてもお逢いしたいと思います(『後撰集』巻十三恋五、事出で来て後に京極の御息所につかはしける　元良親王。『古今六帖』三、みをつくし)。「身をつくし」に「澪標」(水脈つ串。水脈に杭を立てて航路の目印にしたもの)を掛ける。

八 携帯用の筆。

九 たたんで懐中に入れておく紙。

一〇 命をかけてあなたを恋い慕う証拠に、こうして今日難波で再会するとは、前世からの深い宿縁によるのか。

(源氏)一「あらかりし波のまよひに住吉の
神をばかけて忘れやはする
験(しるし)ありな」とのたまふも、いとめでたし。

(惟光は)かの明石の舟、この響きにおされて過ぎぬることも聞こゆれば、(源氏は)知らざりけるよと、あはれにおぼす。三神の御しるべをおぼし出づるもおろかならねば、いささかなる消息(せうそこ)をだにして心なぐさめばや、四なかなかに思ふらむかし、とおぼす。御社(みやしろ)立ちたまひて、五所々に逍遙(せうえう)を尽くしたまふ。難波(なには)の御祓(はらへ)など、ことによそほしうつかうまつる。六堀江(ほりえ)のわたりを御覧じて、七「今はた同じ難波なる」と、御心にもあらでうち誦(ず)じたまへるを、御車のもと近き惟光、うけたまはりやしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懐(ふところ)にまうけたる八柄(つか)短き筆など、御車とどむる所にてたてまつれり。九畳紙(たたうがみ)に、

(源氏)一〇みをつくし恋ふるしるしにここまでも

手紙でもやって気持を慰めてやろう
儀式もおごそかにおっとめする
ついつい思
お聞きしたので
そんなご用もあろうかと
いつもの通り
気がきくと

ですね。「えに」(縁)に「江」を掛け、「澪標」と縁語。
一一 歌語。「駒並めていざ見にゆかむ故里は雪とのみこそ花は散りけれ」(『古今集』巻二春下)など。
一二 ほんの歌一首のお手紙だけれど。「露」は、秋の景物。
一三 人数でもない私は、何につけてもかいないこととあきらめていますのに、どうして命をかけてあなたのようなお方をお慕いすることになったのでしょう。「難波」に「何」が利かせてある。「かひ」は「貝」に掛け、「澪標」と共に難波の縁語。
一四 古来からの御禊の場所。地勢変遷して不明であるが、現在堂島に田蓑橋がある。(二巻図録一参照)
一五 源氏が御禊をおつとめする、その時の被えに用いる木綿に、返歌をつけたのである。
一六 「難波潟潮みち来らし雨衣田蓑の島に鶴鳴き渡る」(『古今集』巻十七雑上、題しらず、読人しらず)による叙景。「雨衣」は、蓑を言うための枕詞。
一七 涙にくれて旅の衣を濡らすことは、昔、須磨明石の海辺を流浪した時と同じことだ、田蓑の島というけれども、その名だけでは身は隠れず、泣き濡れている。「雨により田蓑の島を今日ゆけど名には隠れぬものにぞありける」(『古今集』巻十七雑上、難波へまかりける時、田蓑の島にて雨にあひてよみける　紀貫之)による。この歌、「名には」に「難波」を掛ける。
一八 当時、淀川流域の宿駅にいた遊女。船に乗る。
(図録一参照)

めぐり逢ひけるえには深しな

とて、たまへれば、かしこの心知れる下人して(明石方の事情を)(下男を使いに)やりけり。駒並めて(一一)うち過ぎたまふにも心のみ動くに、(明石上は)露ばかりなれど、いとあはれにかたじけなくおぼえて、うち泣きぬ。

(明石上)数ならでなにはのこともかひなきに(一二)

などみをつくし思ひそめけむ

田蓑の島に御禊つかうまつる、(一四)(一五)御祓へのものにつけてたてまつる。日暮れがたになりゆく。夕潮満ち来て、(一六)入江の鶴も声をしまぬほどのあはれなるをりからなればにや、(源氏は)人目もつつまずあひ見まほしくさへおぼさる。

(源氏)露けさの昔に似たる旅衣(一七)

田蓑の島の名には隠れず

(お帰りの道々で)(結構な名所遊覧をなさりにぎやかにお楽しみになるが)道のままに、かひある逍遙遊びののしりたまへど、御心にはなほかりておぼしやる。(明石の一行を)遊女どものつどひ参れる、(公卿といったお方)上達部と聞こゆれ(一八)

一 さて、どうだろう。否定的な気持で発する語。以下「たよりもなきものを」まで、ひたすら明石の上を思って、遊女などに感興を覚えない源氏の心中の思い。

二 翌日が日柄も悪くなかったので、住吉の明神に幣帛（神への捧げ物）を奉納する。当時は、陰陽師などに、参詣の日の吉凶を、かねてから占わせているのである。

明石の上、源氏の上京の勧めに思い悩む

三（源氏方の盛大な願果しを目のあたりにしたために）住吉参詣が、かえって物思いを増すことになって。

四 大層たのもしげに人並みに扱って、おっしゃって下さっているようだが。以下、明石の上の心中の思い。

五 さあ、どうだろうか、京へ出るにしても、親もと遠く明石の浦を離れて、どっちつかずで心細い思いをするのではないかと思い悩む。「島漕ぎ離れ」は、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」（『古今集』巻九羇旅、題しらず、読人しらず。左注に人麿作）を踏まえた措辞。

六 かえって、何のあてもなかった今までよりもいろいろ物思いが多い。

ど、若やかにこと好ましげなるは、皆目とどめたまふべかめり。されど、いでや、をかしきこともののあはれも、人からこそあべけれ、なのめなることをだに、すこしあはきかたに寄りぬるは、心とどむるたよりもなきものを、とおぼすに、おのが心をやりて、よしめきあへるもうとましうおぼしけり。

（でも）（もの好きとおぼしい方々は）（おもしろいやりとりも胸にしみる情趣も）（相手の女の人柄によるもの）（だ）（普通の恋愛沙汰でも）（多少なりともうわついたところがある場合は）（心をとめる拠りどころもないのに）（しなを）（〔遊女らが〕いい気になって）（作って戯れているのもつまらなく）

かの人は過ぐしきこえて、またの日ぞよろしかりければ、御幣たてまつる。ほどにつけたる願どもなど、かつがつ果たしける。またなかなかもの思ひ添はりて、明け暮れくちをしき身を思ひ嘆く。今や京におはし着くらむと思ふ日数も経ず、御使あり。このころのほどに迎へむことをぞのたまへる。いとたのもしげに、数まへのたまふめれど、いさや、また、島漕ぎ離れ、中空に心細きことやあらむと、思ひわづらふ。入道も、さて出だし放たむは、いとうしろめたう、さりとて、かくうづもれ過ぐさむを思はむも、なかなか来しかたの年ごろよりも、心尽くしなり。よろづにつつましう、思ひ立ち

（明石の上〔源氏のお通りを〕）（身分相応の）（何とか）（〔源氏が〕）（〔源氏から〕）（あまりに身分違いの境遇を）（〔母娘を京に〕）（近いうちに）（父入道）（仰せのままに手放してやるのは）（大層気がかりで）（〔母娘が〕こんな田舎に埋もれて過すことを考えてみるのも）（〔上京は〕何かと気がかりで）（決心がつきに）

七 そう言えば。話題転換の時に用いられる語。
八 六条の御息所の姫君。六年前、伊勢に下向（賢木一三七頁）。今年二十歳。斎宮は、新帝即位ごとにあらたに卜定される。

斎宮帰京し、母御息所病のために出家する

九 六条の御息所が娘の斎宮について、伊勢に下ったことも、賢木一三七頁に詳しい。今、斎宮交替により帰京したのである。今年三十六歳。
一〇 伊勢への下向以前でさえ、冷淡なお気持だったのに、（今さら源氏のお手紙に取り合って）また昔ながらのつれなさを見るような、しないがましの嘆きはすまいと、源氏のことは、お胸の中から払い去っておいでなので。
一一 源氏が御息所のお邸へおいでになるようなことは、特にない。御息所の返事が他人行儀だからである。
一二 わが心ながら、さきざきどう変るか分らず。生霊事件（葵八二頁～八九頁参照）でいったんうとましく思ったことがあるので、御息所への気持は、源氏自身にも自信が持てない。
一三 あれこれとかかわりごとの多いお出まし（女の所へのお通い）なども、ご身分柄窮屈に近頃はお思いなので。女との間は、嫉妬などされて、とかく対処しなければならぬことが多い。
一四 御息所の旧邸。六条京極にある。
一五 斎宮では、仏事を忌むのでこういう。

くい旨お便り申し上げるがたきことを聞こゆ。

まことや、かの斎宮もかはりたまひにしかば、御息所上りたま上洛なさってのち〔源氏が〕ひてのち、かはらぬさまに何ごともとぶらひきこえたまふことは、何くれとお見舞い申されることは世にまたとないほどありがたきまで情を尽くしたまへど、昔だにつれなかりし御心ばへの、なかなかならむ名残は見じと、思ひ放ちたまへれば、わたりたまひなどすることはことになし。あながちに動かしきこえたまひても、わが心ながら知りがたく、とかくかづらはむ御ありきなども、所狭うおぼしなりにたれば、強ひたるさまにもおはせず。斎宮をぞ、いかにねびなりたまひぬらむと、ゆかしう思ひきこえたまふ。

気持をお尽しになるが強いて御息所のお心をなびかせなさったとしてもどうしてもというご熱心さではない

なほかの六条の旧宮をいとよく修理しつくろひたりければ、みやびかにて住みたまひけり。よしづきたまへること旧りがたくて、よき女房など多く、好いたる人のつどひ所にて、ものさびしきやうなれど、心やれるさまにて経たまふほどに、にはかに重くわづらひたまひて、もののいと心細くおぼされければ、罪深き所に年経つるも、

どんなに美しくご成長なさったことかと
お姿を見たく
昔通り一四
風雅のおたしなみの深いことは昔に変らず
優雅な
風流な貴公子たちの
権勢からは外れていらっしゃ
心にかなうご生活ぶりで
〔御息所は〕

一 仏道修行から遠ざかっていたので、来世にどんな報いがあるかと、恐ろしく思われて。

源氏、御息所を見舞う

二 やはり、風雅に関することでお話し相手になる方とお思い申していたのに。

三 側に置いて、もたれるための道具。（一巻図録九参照）

四 いつまでも変らぬ自分の好意を、お分り頂けぬままになるのではないかと。御息所の死の近いことを予感しての思い。

五 女君の方でも、何もかもがしみじみと胸に迫る思いがなさって。「女」とあるのは、源氏の心に応じて、御息所も昔ながらの恋人として対する場面だからである。

御息所、斎宮のことを遺言

六 必ず、何かの折には人数に入れてお扱い下さいませ。今までの身分を落さぬ処遇を頼む、との意。

七 ほかにお世話を頼める身寄りもなく、この上もなくお気の毒なお身の上でございます。上流の姫君で、後見役がいなくては、ほとんど生きてゆくのもむつかしいので、こういう。

一 いみじうおぼして、尼になりたまひぬ。

大臣（源氏）聞きたまひて、かけかけしき筋（もはや色恋といった筋ではないが）にはあらねど、なほさるかたのものをも聞こえあはせ人に思ひきこえつるを、二 かくおぼしなりに（出家をご決心なさるにいたったことが）、〔六条のお邸に〕けるがくちをしうおぼえたまへば、おどろきながらわたりたまへり。（尽きせずお心をこめたお見舞を）飽かずあはれなる御とぶらひ聞こえたまふ。近き御枕（まくらがみ）上に御座（おまし）よそ（お席を用意して）ひて、脇息（けふそく）におしかかりて、〔御息所が〕御返りなど聞こえたまふも、いたう弱りたまへるけはひなれば、四 絶えぬ心ざしのほどは、え見えたてまつらでやと、くちをしうて、〔源氏は〕いみじう泣いたまふ。

（こんなにまでお心にかけて下さっていたのを）かくまでもおぼしとどめたりけるを、五 女もよろづにあはれにおぼして、斎宮の御ことをぞ聞こえたまふ。（ご依頼申し上げなさる）〔御息所〕「心細くてとまりたまはむすが、六 かならずことに触れて数（かず）まへきこえたまへ。七 また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。（何の力もない私ですが）かひなき身ながらも、（もうしばらくと命のほどをゆっくりと考えていました間は）〔斎宮が〕何とか人並みに分別がおつきになるまで）し世の中を思ひのどむるほどは、とざまかうざまにものをおぼし知るまで見たてまつらむとこそ思ひたまへつれ」とても、（お世話申し上げようと存じていましたのに）消え入りつ（息も絶えだえに）

八 それはとてもむつかしいことです。本当に頼りにできる父親などで、あとを任せられる人があっても。

九 まして（父親でもないあなたが面倒をみて下さる際に）ご寵愛の人といったお扱いをなさるとしたら。

一〇 おもしろからぬことも起ったりして。源氏の妻妾の間で嫉妬し合うといったことをさす。

一一 悲しいわが身に引き比べて考えてみましても、女というものは、不本意なことで物思いを重ねるものでございますから。自分のせいではなく、相手の男次第で、嫉妬に苦しまねばならぬことをいう。「身を抓む」は、わが身をつねって、人の痛さを知ること。

一二 斎宮は、どうかそういうつらいめには縁のないお身の上でいらして頂きたいと存じています。普通の結婚をして妻妾の一人となることを望まぬ気持。

一三 若い頃の浮気っぽさがまだ残っているかのように仰せられますのも、残念です。

一四 よろしゅうございます、そのうち自然に（私の本心がお分り頂けましょう）。

一五 御殿にともす燈台の灯。（一巻図録九参照）

つ泣いたまふ。「かかる御ことなくてだに、（源氏）かようなお言葉がなくても 斎宮のことなら心におかけ申さぬ思ひ放ちきこえさすべきにもあらぬを、はずもございませんのに まして、〔ご依頼があった上は〕気のつく限りは心の及ばむに従ひては、何ごとも後見きこえむとなむ思うたまふる。〔斎宮については〕決してご心配申されますさらにうしろめたくな思ひきこえたまひそ」など聞こえたまへば、「いとかたきこと。まことにうち頼むべき親などにて見ゆづる人だに、（御息所）母親に先立たれた娘は女親に離れぬるは、いとてもかわいそうなあはれなることにこそはべるめれ。ものでございましょう まして思ほし人めかさむにつけても、あぢきなきかたやうち交り、ほかの方に憎まれたりなさいましょう 人に心も置かれたまはむ。いやな気の廻しようですけれどもうたてある思ひやりごとなれど、どうぞ決してそのような色めいたことはお考え下さいますな かけてさやうの世づいたる筋におぼし寄るな。憂き身を抓みはべるにも、女は思ひのほかにてもの思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさるかたをもて離れて見たてまつらむと思うたまふる」など聞こえたまへば、あいなくものたまふかなとおぼせど、（源氏）ここ数年の間に何事にも思慮深くなりましたのに「年ごろによろづ思うたまへ知りにたるものを、昔の好き心の名残あり顔にのたまひなすも本意なくなむ。よし、おのづから」とて、外は暗うなり、内は大殿油のほのかにものより通りて

見ゆるを、もしやとおぼして、やをら御几帳のほころびより見たまへば、心もとなきほどの火影に、御髪いとをかしげにはなやかにそぎて、寄りゐたまへる、絵にかきたらむさまして、いみじうあはれなり。帳の東面に添ひ臥したまへるぞ、宮ならむかし。御几帳のしどけなく引きやられたるより、御目とどめて見通したまへれば、頬杖つきて、いとものの悲しとおぼいたるさまなり。はつかなれど、いとうつくしげならむと見ゆ。御髪のかかりたるほど、頭つき、けはひ、あてに気高きものから、ひぢぢかに愛敬づきたまへるけはひしるく見えたまへば、心もとなくゆかしきにも、さばかりのたまふものをと、おぼし返す。

「いと苦しさまさりはべる。かたじけなきを、はやわたらせたまひね」とて、人にかき臥せられたまふ。「近く参り来たるしるしに、よろしうおぼさればうれしかるべきを、心苦しきわざかな。いかにおぼさるるぞ」とて、のぞきたまふけしきなれば、「いと恐ろしげ

一 几帳の帷（垂布）の縫い合せてないところ。
二 御息所の容姿である。尼そぎといって、肩のあたりで髪を切り揃えてあるので、扇を拡げたように見える。それを「はなやか」といった。
三 物語によく出てくる、当時の誉め言葉。
四 御帳台の東側。
五 何かに寄りかかって横になる、または肘をついて横になる姿勢という。
六 斎宮のお側の御几帳が無造作に押しやられている、その隙間から。
七 お髪が肩や背に垂れかかっている具合や、頭の形、全体の感じは、上品で気高いものの。髪の美しさは美人の一条件。
八 小柄、または親しみやすい意という。
九 もったいなく存じますので。病床のむさくるしさを詫びる言葉。
一〇 お側近く伺ったかいがあって、いくらかご気分がよくなられたのなら、うれしく存じますのに。
一一（病にやつれて）とてもひどい姿でおります。

そっと　一　きちやう　二　ひむがしおもて　五　視線を凝らして　斎宮　六　愛らしい方のように見える　七　ほの暗い　三　かげ　四　〔脇息に〕　少しか見えないが　八　気になって心が動くけれども　思い直される　御息所が　ああまでおっしゃったのにと　はっきり　九　大層苦しくなってまいりました　女房に　一〇　源氏　早くお引き取り下さいませ　一一　御息所　おいたわしいことです　どんなお具合ですか　一二　〔几帳の中を〕

一二 きっとお心にかけて下さいましょうと、心強うございます。

一三 私を、こんな大切なご遺言を承るべき人々と同列に考えて下さったのも。

一四 院の上（桐壺院）が、斎宮を院の皇女たちと同じようにお考えになっていましたから。桐壺院は在世中「斎宮をも、この御子たちの列になむ思へば……」（葵六六頁）と源氏に語っていた。

一五 私も、そのつもりで（兄妹として）お頼り申し上げましょう。

一六 どうやら一人前といえるような年齢になりながら。この時、源氏二十九歳。幾人かの子女があってよい年齢なのに、の意。

御息所の死　源氏、後事に尽す

一七 もとの斎宮寮（斎宮に関する事務を取り扱う役所）の役人などで。斎宮退下と共に、解任されているので、こういう。

にはべるや。（病気がちょうどこのように最後かと思える折に）乱りごこちのいとかく限りなるをりしもわたらせたまへるは、（おこし下さいました）まことに浅からずなむ。（前世の契りも）思ひはべることをすこしも聞こえさせつれば、（気になっていましたことを少しでもお耳にお入れしましたので）さりともと、たのもしくなむ」と聞こえさせたまふ。

（源氏）一三「かかる御遺言の列におぼしけるも、（故桐壺院）いとどあはれになむ。（ひとしお感無量です）故院の御子たち、あまたものしたまへど、（私を）親しく思って下さる方もほとんどおられませんが）一四なきを、上の同じ御子たちのうちに数まへきこえたまひしかば、さこそは頼みきこえはべらめ。一六すこしおとなしきほどになりぬる齢ながら、（養育する姫君もいませんので）あつかふ人もなければ、（物足りなく思っていますから）さうざうしきを」など聞こえて、帰りたまひぬ。（お見舞を）御とぶらひ、（前よりもっとねんごろに）今すこしたちまさりて、しばしば聞こえたまふ。

（御息所は）七八日ありて亡せたまひにけり。（源氏は）あへなうおぼさるるに、（がっかりなさるにつけ）世もい（世間の無常も思われて）とはかなくて、もの心細くおぼされて、内裏へも参りたまはず、（ご葬送のことなどについて）とはかくの御ことなど（お指図なさる）掟てさせたまふ。（ほかに頼みとすべきご親戚も特にいらっしゃらないのだった）またたのもしき人もことにおはせざりけり。一七古き斎宮の宮司など、（何とか）つかうまつり馴れたるぞ、わづ

一 斎宮寮の女官。賢木一三五頁に斎宮の歌を代筆したことが見える。今はその役を退いているが、昔の呼び名をそのまま用いている。

二 亡き母君にお話し申し上げ、また母君もご遺言なさっていたこともございましたので。

三 今までの冷たいお仕打ちも、これからはまたちゃんとして下さりそうに思われる。

四 仏道修行に専心すること。そのために身を浄め、魚肉を断つ。

五 御簾を垂れこめて（お部屋に籠って）僧に勤行をおさせになる。喪に服する気持である。

六 （直筆のお返事をさし上げるのを）恥ずかしく気詰りにお思いになったが。

七 どんなに六条の宮の有様はものさびしく、斎宮も物思いに沈んでいらっしゃることかと。

源氏、斎宮を弔問

八 （空さえ悲しみにかき昏れているようですが）ただ今の空模様をどのようにご覧になっていらっしゃいますか。

事を取りしきった　源氏ご自身も〔御息所邸に〕

かにことども定めける。御みづからもわたりたまへり。斎宮に御消息

ご挨拶をお伝えになる　斎宮　何の分別もなく取り乱しておりまして

聞こえたまふ。「何ごともおぼえはべらでなむ」と、女別当して聞

（源氏）ニ

こえたまへり。「聞こえさせ、のたまひ置きしこともはべりしを、

気のおけぬ相談相手とお思い下さるなら　うれしく思います

今は隔てなきさまにおぼされば、うれしくなむ」と聞こえたまひて、

女房たちを　ご用をいろいろ仰せつけになる　まことに頼もしい感じで

人々召し出でて、あるべきことども仰せたまふ。いとたのもしげに、

三 年ごろの御心ばへ、取り返しつべう見ゆ。いといかめしう、殿の人

臣を　ご奉仕させなさった　〔源氏は〕しみじみと物思いにふけっては　〔と葬儀は〕大層盛大に　源氏の侍

人、数もなうつかうまつらせたまへり。あはれにうちながめつつ、

四 御精進にて、御簾おろしこめて行はせたまふ。宮には、常にとぶら

斎宮　五　てお見舞い申される　〔斎宮は〕

ひきこえたまふ。やうやう御心しづまりたまひては、みづから御返

六　お便りし

りなど聞こえたまふ。つつましうおぼしたれど、御乳母など、「か

恐れ　おすすめ申すのであった　多いことです

たじけなし」と、そそのかしきこゆるなりけり。

七　雪、霙かき乱れ荒るる日、いかに宮のありさまかすかにながめた

まふらむと思ひやりきこえたまひて、御使たてまつれたまへり。

〔源氏は〕　（源氏）八

ただ今の空を、いかに御覧ずらむ。

九 雪、霙が降り乱れ、やむ間もない空を、亡き母君の魂があなたを案じるあまり、お邸の上の大空を翔っているかと、悲しく思われます。母上は、どんなにかあなたのことをお案じでしょう、の意。仏教で、死者の魂は死後四十九日の間、次の生を得ず、家のあたりをさまようと考えられていた。

一〇 薄い縹色（藍色）の紙の黒ずんだのに書いておありになる。周囲の景色に合せたものでもある。

一一 薄鼠色の紙の、とても香り高く香を薫きしめた優美なのに。鈍色は喪中に用いる。

一二 墨の濃淡など、美しく紛らわしてお書きになって。薄鼠色の紙に筆跡が見え隠れし、次の「消えがてに」の歌意にふさわしいものとなる。

一三 消えそうもなく（死にもせずに）日を送っているのが悲しゅうございます、涙にくれて、わが身がわが身とも分らぬ世の中に。「ふる」は、「経る」「降る」の掛詞、「消え」「降る」「かきくらし」は、「雪」「霙」の縁語。「わが身それとも」に「霙」を詠み込む。

一四 斎宮が伊勢に下向された時分から、ただではおけぬと思っていらっしゃったのに。源氏は、当時から「世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし」（賢木一三六頁）と思っていた。

源氏、斎宮の入内を志す

一五 例によって、また逆に、それもお気の毒に思われる。前にも「おぼし返す」（四二頁）とあった。

降り乱れひまなき空に亡き人の
天翔るらむ宿ぞかなしき

一〇 空色の紙の、くもらはしきに書いたまへり。（丹精こめて美しくお書きになったのは）若き人の（うら若い斎宮のお心を捉えるよう）御目にとどまるばかりと、心してつくろひたまへる、いと目もあやなり。（目もくらむほどである）宮はいと聞こえにくくしたまへど、（お返事をしづらいご様子だったが）これかれ、（二三の女房が）「人づてには、（代筆では）いと便なき（失礼に当ります）こと」と責めきこゆれば、（きつく申し上げるので）一一 鈍色の紙の、いとかうばしう艶なるに、墨つきなどまぎらはして、

一三 消えがてにふるぞ悲しきかきくらし
わが身それとも思ほえぬ世に

つつましげなる書きざま、（遠慮がちな書きぶりは）いとおほどかに、（大層おっとりしていて）御手すぐれてはあらねど、（ご筆跡は）（愛らしく上品な書風と見える）らうたげにあてはかなる筋に見ゆ。

一四 下りたまひしほどより、なほあらずおぼしたりしを、今は心にか（いつも心に置いてどのようにもわが思いをお打ち明け申せるのだとお思いになる一方では）けてともかくも聞こえ寄りぬべきぞかしとおぼすには、一五 例の、引き返し、いとほしくこそ。故御息所の、（とても心配そうに気にしていらっしゃった）いとうしろめたげに心おきた

一 その予想をひっくり返して、下心なしにお世話申そう。

二 帝（冷泉院）が、もう少し世間のことがお分りになるお年になられたなら。帝は現在十一歳。

三 （斎宮を）宮中にお住まわせ申して。「内裏住み」は、ここでは女御として入内すること。

四 （自分にはちょうど年頃の女の子がなくて）手持ち無沙汰だから、大切にお世話申そうと、お心に決められる。「かしづきぐさ」は、大切に養育する対象のこと。

五 亡き母君のお身代りとでもお考え下さって。親同様に考えるように、の意。

六 いずれも、もと斎宮寮の女官。以下、「見てしがな」まで、源氏の心中の思い。

七 皇室の血筋の者。王孫。

八 今、自分（源氏）がひそかに考えている筋の、後宮生活をおさせ申すのに、ほかの方々（后妃）にひけをおとりになるまい。「まじらひ」は、大勢の妃に伍して宮仕えをするので、こういう。その際、もっとも必要なのは、優秀な女房であった。六条の御息所がすぐれた女房を持っていたことは、三九頁にも見える。

のに（御息所と同じような邪推をしそうな）まひしを、（それも無理はないが）ことわりなれど、世の中の人もさやうに思ひ寄りぬべきことだから）ことなるを、引き違へ心清くてあつかひきこえむ、上の今すこしものおぼし知る齢にならせたまひなば、内裏住みせさせたてまつりて、さうざうしきに、かしづきぐさにこそ、とおぼしなる。

〔源氏は〕こまごまと心をこめてお便りなさって

いとまめやかにねむごろに聞こえたまひて、さるべきをりをりは〔ご自身で〕わたりなどしたまふ。「かたじけなくとも、昔の御名残におぼしなずらへて気遠からずもてなさせたまはばなむ、本意なるここちすべき」など聞こえたまへど、わりなくもの恥ぢをしたまふ奥まりたる人ざまにて、ほのかにも御声など聞かせたてまつらむは、いと世になくめづらかなることとおぼしたれば、人々も聞こえわづらひて、かかる御心ざまを愁へきこえあへり。女別当、内侍などいふ人々、あるは離れたてまつらぬわかむどほりなどにて、心ばせある人々多かるべし、この人知れず思ふかたのまじらひをせさせたてまつらむに、人に劣りたまふまじかめり、いかでさやかに御容貌を見てしが

（源氏）もったいないことですが

〔斎宮は〕むやみに恥ずかしがられる内気なお人柄なので

何か事がある折々は よそよそしくなさらずお付き合い下さるなら

満足に存じましょう

〔源氏に〕

女房たちもお取りなしに困ってしまって とんでもないことだと

皆で嘆いていた こうしたご性分を

ある者は同じお血筋の

たしなみのある女房たちが

見たいものだ はっきりと

九　気の許せる御親心ではなかったのでしょうか。草子地。

一〇　斎宮を娘分として入内させるというおつもりも。

一一　お暇を取って、散り散りに去って行きなどして。

一二　（お邸の場所は）下京の京極辺なので、人家も少なく。邸が六条にあることは三九頁に見える。当時、貴紳の邸宅は、左京四条以北に集中していたという（『本朝文粋』巻十二「池亭記」慶滋保胤）。

一三　「入相」は、日没の頃につく入相の鐘。「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」（『拾遺集』巻二十哀傷、読人しらず）

一四　しばらくの間も、母御息所のお側をお離れにならず、それがいつもの習いになっていらっしゃったので。「たてまつり」は、御息所に対する敬語。

一五　史上の実例としては、円融天皇の貞元二年（九七七）、斎宮規子内親王の母徽子女王の例があるが、この物語は、桐壺院を醍醐天皇、冷泉院を村上天皇になぞらえているので、「例なきことなるを」という。（賢木一二七頁注六参照）

一六　あえて、母君をお誘い申し上げなさったほどのお気持なので。賢木の巻では、御息所の意志で伊勢下向が決められたように書かれていたが、ここでは、斎宮の強い希望によるものであったと書く。

一七　たとえ御乳母でも、自分勝手なこと（勝手に男を取り持つこと）を、しでかしてはならぬぞ。

朱雀院、斎宮に求婚する

な、とおぼすも、[九]うちとくべき御親心にはあらずやありけむ。わが[ご自身]御心も定めがたければ、[一〇]かく思ふといふことも、人にも漏らしたまはず。御わざなどの御ことをも取り分きてせさせたまへば、[七日ごとのご法事などのお世話も]ありが[世にまれなご厚意を]たき御心を宮人[宮家の人々も]もよろこびあへり。

はかなく過ぐる月日に添へて、[〔宮家は〕]いとどさびしく、心細きことのみまさるに、さぶらふ人々もやうやうあかれ行きなどして、[一二]下つかた[一三]の京極わたりなれば、人気遠く、[一三]山寺の入相の声々に添へても、音[声を上げて泣く日も多く]泣きがちにてぞ過ぐしたまふ。[同じ親子のお間柄と申すなかでも]同じき御親と聞こえしなかにも、[一四]片時の間も立ち離れたてまつりたまはでならはしたてまつりたまひて、[一五]斎宮にも親添ひて下りたまふことは例なきことなるを、[一六]あながちに誘ひきこえたまひし御心に、[死出の道には]限りある道にては、[お供申し上げることができたぐひきこえたまはずなりにしを、[〔涙の〕]干る世なうおぼし嘆きたり。

[〔宮家に〕]さぶらふ[女房たち]人々、貴きも賤しきもあまたあり。されど大臣の、[一七]「御乳母たちだに、心にまかせたること、引き出だしつかうまつるな」

など、親がり申したまへば、（父親ぶって）いとはづかしき御ありさまに、（気がひけるほど立派な源氏のご様子なので）便なきこと聞こし召しつけられじと言ひ思ひつつ、はかなきことの情もさらにつくらず。院（朱雀院）にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたうおぼし置きければ、「参りたまひて、斎院など、御はらからの宮々おはしますたぐひにて、さぶらひたまへ」と、御息所にも聞こえたまひき。

〔御息所は〕されど、やむごとなき人々さぶらひたまふに、数々なる御後見もなくてやとおぼしつつみ、上はいとあつしうおはしますも恐ろしう、またもの思ひや加へたまはむ、と憚り過ぐしたまひしを、今はまして誰かはつかうまつらむと、人々思ひたるを、ねむごろに院にはおぼしのたまはせけり。

（お申し入れがあった）〔斎宮には〕大勢のお世話役もないのにどんなものかとご心配なさり

（御息所亡き今は）女房たちは諦めていたのに

大臣（源氏）聞きたまひて、院より御けしきあらむを、引き違へ横取りたまはむを、かたじけなきこととおぼすに、人の御ありさまのいとうたげに、見放たむはまたくちをしうて、入道の宮にぞ聞こえたま

（ご意向が伝えられているのに）斎宮

恐れ多いことと

手放すのはこれもまた残念で

藤壺

ご相談なさった

一 不始末なこと（お叱りを受けるようなこと）が、お耳に入るようなことはすまいと。「られ」は、受身。

二 ちょっとした風流なことも、決してしない。季節の風物に託した恋歌の取次ぎなどをいう。

三 あの、昔、斎宮が伊勢に下向なさった日の大極殿の荘重だった盛儀の折に。朱雀院が斎宮に別れの櫛を挿した時のこと。（賢木 一三七頁参照）

四 不吉なことが起るのではないかとこわいほど美しくお見えになった斎宮のお顔立ちを。

五 院の御所においでになって。妃になることをすすめるのである。

六 桐壺院の皇女、女三の宮。母は弘徽殿の大后。朱雀院と同腹。葵の巻で斎院に立ち（六八頁）、賢木の巻で桐壺院崩御により朝顔の斎院と交替した（賢木 一四六頁）。

七 私の姉妹の皇女たちがいらっしゃるのと同じことに考えて、一緒に暮して下さい。桐壺院も生前、斎宮を皇女と同列に考えているといっていた（葵六六頁）。「さぶらふ」は、上皇のお側にいること。

八 れっきとしたお妃たち。朧月夜や承香殿。

九 院は、大層ご病気がちでいらっしゃるのも恐ろしく。院のご病気のもとである物の怪を恐れるのである。

源氏、藤壺の力を藉り、斎宮の入内を遂げようとする

一〇 また、上皇のご逝去といったことで、物思いを重ねられるのではないかと。

一一 そのお心に背いて、斎宮を横取りなさったりしては。冷泉帝に入内させることをいう。

一二 私を、そのような、後事を託するに足る者と、かねて聞き置いて。

一三 何もかも心に残すことなく打ち明けようと、（あんなにお恨みでしたのに）それでもやはり私のことを考えておられたのであろうと、思いますにつけましても。

一四 亡くなった後ではありましても。「蔭」は、もの陰、うしろ。

一五 帝におかせられましても、ずいぶん大人らしくおなりあそばしましたが、まだ頑是ないお年頃でいらせられますので。冷泉帝はこの時、十一歳。

一六 少しは分別のある方がお側にいらっしゃってもいいのではないかと存じますが。年上の后妃を納れてもいいのではないか、ということ。斎宮は二十歳。

一七 お考え（ご決定）に従いましょう。

一八 上皇におかせられてもがっかりなさいますでしょうことは、ほんとうに恐れ多く、お気の毒なことですが。

ひける。（源氏）「かうかうのことをなむ思うたまへわづらふに、母御息所（みやすむどころ）いと重々しく心深きさまにものしはべりしを、（大層落着いて考え深い性格の方でしたのに）あぢきなき（私のよからぬ）好き心にまかせて、（けしからぬ浮き名さえ流し）さるまじき名をも流し、憂き（恨めしい男と思われたままになりました）ものに思ひ置かれはべりにしをなむ、（まことに気の毒に存じております）世にいとほしく思ひたまふる。この世にて、（生前は）その恨みの心とけず過ぎはべりにしを、（亡くなってしまいましたが）今はとなりての際（臨終の際に）に、この斎宮の御ことをなむものせられしかば、（言い置かれましたので）さも聞き置き、心にも残すまじうこそは、さすがに見置きたまひけめ、と思ひたまふるにも、（たまらない気）忍びがたう、おほかたの世につけてだに、（気の毒なことはほうってはおけぬものでございま）心苦しきことは見聞き過ぐされぬわざにはべるを、いかで、（直接かかわりのない人のことでも）なき蔭にても、（生前の恨みを忘れるほどのことを）かの恨み忘るばかり、と思ひたまふるを、内裏にも、さこそおとなびさせたまへど、いときなき御齢におはしますを、すこしものの心知る人はさぶらはれてもよくやと思ひたまふるを、（藤壺）「御定めに」など聞こえたまへば、「いとこそお考え下さったことですが）ようおぼし寄りけるを、（御息所の）院にもおぼさむことは、げにかたじけなう、いとほしかるべけれど、（口実にして）かの御遺言をかこちて知らず顔に（帝に）参らせた（おさし上

一 そのようなこと（妃をお召しになるようなこと）には、特にご執心でなく。

二 あなた（源氏）から院に、このように申し上げなさるのを。母御息所の遺志によると言上すること。

三 そのような（斎宮を冷泉帝の後宮に納れようという）ご内意があって、妃の一人としてお認め下さるならば。母宮のご意向ということであれば、の意。

四 私（源氏）の方は、ただ、わきからお勧めする程度のお口添えをするということにいたしましょう。自分の主導ではない体にしたいのである。

五 どちらに対しても十分に考え尽しましたし。朱雀院にも斎宮にも、十分考慮した、という。

六 後日、藤壺のお言葉通り、知らぬふりをして、斎宮をわが邸（二条の院）にお移し申そうとお考えになる。養女として引き取ろうと考える。

七 ちょうどよい年頃のお仲間でしょう。紫の上は二十一歳。

八 姫君を、早く入内させたいと、そのお世話に大騒ぎをしていらっしゃるのを。前に、中の君の入内を志している、とあった（三二頁参照）。

九 内大臣（源氏）が宮とはしっくりせぬ間柄で。源氏が、兵部卿の宮を快からず思っていることは、三一～三二頁参照。

一〇 前出。（一五頁参照）

一一 摂政太政大臣。弘徽殿の女御の祖父。

藤壺、源氏の冷泉帝輔佐をよろこぶ

てまつりたまへかし。今は（院は）、さやうのこと、わざともおぼしとどめず、御行ひがち（仏道のご修行もっぱらにおなりで）になりたまひて、かう聞こえたまふを、深うしも（さほど深くも）おぼしとがめじと思ひたまふる」「さらば、（源氏）では御けしきありて数まへさせたまはば、もよほしばかりの言を添ふるになしはべらむ。とざまかうざまに思ひたまへ残すことなきに、かくまでさばかりの心構（ここまで打ち割って深いおもんばかりもそっくりお話ししましたが）へもまねびはべるに、世人やいかにとこそ、憚りはべれ」など聞こえたまひて、後には、げに知らぬやうにてここにわたしたてまつりてむとおぼす。女君にも、（紫の上）「しかなむ思ふ。かたらひきこえて過ぐいたまはむに、いとよきほどなるあはひならむ」と、聞こえ知らせたまへば、（紫上は）うれしきことにおぼして、御わたりのことをいそぎたまふ。

（世間は何と言うかと心配です）

（源氏）こういうつもりです お話し相手にして お過ごしなさるのに

（斎宮のお移りのことを準備なさる）

（藤壺の宮は）入道の宮、兵部卿の宮の、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを、大臣の隙あるなかにて、いかがもてなしたまはむと、心苦しくおぼす。権中納言の御女は、弘徽殿の女御と聞こゆ。大殿の御養

（この問題に）どういう態度をとられるかと ご心痛でいらっしゃる

教えてお上げになる

子にて、いとよそほしうもてかしづきたまふ。上もよき御遊びがたきにおぼいたり。「宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びのここちすべきを、おとなしき御後見は、いとうれしかべいこと」とおぼしのたまひて、さる御けしき聞こえたまひつつ、大臣のよろづにおぼし至らぬことなく、公がたの御後見はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こまかなる御心ばへの、いとあはれに見えたまふを、たのもしきものに思ひきこえたまひて、いとあつしくのみおはしませば、参りなどしたまひても、心やすくさぶらひたまふこともかたきを、すこしおとなびて添ひさぶらはむ御後見は、かならずあるべきことなりけり。

女として　美々しく　(藤壺)　同じお年頃でいらっしゃるから　そういうご意向を源氏に申し上げなさっては　お思いになり仰せにもなって　ご政治向きのご補佐はもとより　万事行き届かぬことなく　お心遣い　(帝に対する)　いかにも情愛深く　いつもご病気がちでいらっしゃるので　(藤壺は)　(内裏に)

一二 帝もよいお遊び相手とお思いである。冷泉帝十一歳、弘徽殿の女御十二歳。

一三 おかしな、ままごと遊びのような感じもしましょうから。

一四 お年嵩なお世話役ができるのは、ほんとうにうれしいことです。斎宮の入内を喜ぶ気持。「うれしかべいこと」は「うれしかんべいこと」の撥音便無表記の形。

一五 ゆっくりと帝のお側にいられることもむつかしいので。宮中は病を忌む上に、十分な療養（加持祈禱）ができないからである。

一六 （母宮の代りに）少しご年長で、帝のお側におつきするお世話役はぜひ必要なことなのであった。

蓬(よもぎ)生(ふ)

源氏が須磨明石で侘住いをしていた三年ほどの間に、都では嘆き暮す女君たちが多かったが、なかでも源氏の庇護を唯一の頼みとする末摘花は、たちまち窮乏の生活に戻らねばならなかった。常陸の宮邸は荒れ果て、召使たちも次々に去って、狐、木霊の跳梁する中を、主人の姫君は少しも動ぜず、邸や調度を手放して日々の糧に替えることも承知しない。古物語や古歌を慰みに、塵に埋もれ、ひたすら父母の遺風を守っている。

彼女の母方の叔母は、今は受領の北の方であるが、それを一族に侮られていたことを恨み、昔の仕返しに姫君をわが娘たちの侍女にしようと考えている。折から、夫が大宰の大弐に昇進したので、姫君にも下向を勧めるが、末摘花はもとより応じようとしない。

その頃、源氏は帰京し、昔にまさる権勢のほどが伝えられながら、末摘花を訪れることはないので、叔母は一層勢いづき、ついに姫君の乳母子侍従を連れ去った。手足を捥がれた末摘花は、なお源氏を信じて心細い日々を送る。古風で、処世の術を知らぬ姫君に対する叔母の振舞は、逆に皇族の気品と温良さを際立たせ、末摘花が、のちに長く源氏の心遣いを受けるに足る女性であることを納得させるものがある。翌年四月、花散里を訪う道すがら、常陸の宮邸の前を通り、源氏はようやく姫君を思い出し、再会した。

巻名「蓬生」（蓬の生えた荒れ果てた家を意味する歌語）は、物語本文には見えないが、ヒロインの住む邸の荒廃をいうために、しばしば「蓬」の生い茂るさまに触れるところから出たものである。

一 須磨、明石の浦で、涙に昏れて苦しい日々を送っていらっしゃった頃。「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」（『古今集』巻十八雑下、在原行平朝臣）による。「藻塩たる」に「しほたる」（涙を流す）をこめる。（二巻須磨二三二頁参照）

二 ただ源氏をお慕いする思いだけは、おつらそうであったが。

源氏須磨退居の折の女君たちの生活

三 二条の院の紫の上などものんびりしたお暮しぶりで。紫の上はこの巻からはじめて「上」（奥様）と呼ばれる。

四 官位をお退きになっていらした頃のかりそめのお召し物なども。下の「竹の子のよの憂き節を」と同格で、女の仕事として一番大切な季節ごとの衣服の新調をまず言ったもの。須磨の巻に「位なき人は」と言って無紋の直衣を着たことが見えるが（須磨二一二頁参照）、上の「旅の御住処」に対応して、「狩の御よそひ」（旅装束としての狩衣）の意を掛ける。

五 源氏の須磨でのつらいお暮しを。「竹の子のよ」に「この世」を言い掛ける。「よ」は竹の節と節の間。「節」は竹の縁語。「今さらになに生ひいづらむ竹の子の憂き節しげき世とは知らずや」（『古今集』巻十八雑下、凡河内躬恒）による。

末摘花の窮乏の生活

六 なまじ源氏のお情けを受けたものの、そのお通い所の一人と世間にも知られず。

七 末摘花。（一巻末摘花二四六頁以下参照）

八 源氏が通うようになったことをいう。

藻塩たれつつわびたまひしころほひ、都にも、さまざまおぼし嘆く人多かりしを、女君たち さてもわが御身のより所あるは、一方の思ひこそ苦しげなりしか、二条の上などものどやかにて、それでも〔源氏の〕自分の暮しのより所のあるお方は旅の御住処をもおぼつかなからず聞こえ通ひたまひつつ、位を去りたまへる仮の御よそひをも、竹の子のよの憂き節を、時々につけてあつかひきこえたまふに、その時々につけてお世話申し上げることによって気を紛らわされたであろうが なぐさめたまひむ、なかなかその数と人にも知られず、〔都を〕立ち別れたまひしほどの〔源氏の〕御ありさまをもよそのことに思ひやりたまふ人々の、噂に聞くだけで想像なさるにすぎない方方で 人知れず物思いを尽されるといった方が多い 下の心くだきたまふたぐひ多かり。

常陸の宮の君は、父親王の亡せたまひにし名残に、また思ひあつかふ人もなき御身にていみじう心細げなりしを、思ひかけぬ御ことの出で来て、〔源氏が〕気をつけておあげになることが とぶらひきこえたまふこと絶えざりしを、〔源氏の〕さかんな話をする人もいないお身の上で ほかに心配してお世

一 ご権勢からしてみれば。
二 取るに足らぬ、わずかばかりのご援助にすぎぬと（源氏は）思っていられたが。
三 お待ち受けになる末摘花方のお暮しが何分にも貧しいものなので。「袂」は、物を受けるものなので、恩恵を受ける末摘花についてこの語を使う。
四 手の届かぬ大空の無数の星影を、ほんのすこし身近な盥に映してわが物とした思いで。七夕祭の時、盥に水を入れて庭上に置き、星合いの影を映して見るところから来た喩えであろう（『河海抄』）。
五 特に気をつけてお世話してさし上げることもおできにならない。花散里邸の修理をしたこともあったが（須磨二三四頁参照）、末摘花のことは思い起すこともできなかったのである。
六 源氏のご庇護の名残で、しばらくの間は、泣く泣くも何とかお過しになっていられたが。
七 思いがけず、まるで神か仏が現れなさったような源氏の君のお情けを受けて。
八（源氏の訪れのなくなったのは）ご政治向きのことのためとはいいながら。「おほかたの世のこと」は、ここでは末摘花との個人的な関係に対して、世間一般にかかわる事件の意。須磨退居をさす。
九 そうした貧しい暮しに馴れてしまっていた以前の長の年月は。

御勢にこそ、ことにもあらず、はかなきほどの御情ばかりとおぼしたりしかど、待ち受けたまふ袂の狭きに、大空の星の光を盥の水にうつしたるここちして過ぐしたまひしほどに、かかる世の騒ぎ出で来て、なべての世憂くおぼし乱れしまぎれに、わざと深からぬかたの心ざしはうち忘れたるやうにて、遠くおはしましにしのち、ふりはへてしもえ尋ねきこえたまはず。その名残に、しばしは泣く泣くも過ぐしたまひしを、年月経るままに、あはれにさびしき御ありさまなり。

一 ご権勢
二 ご運だった
三 ご援助
四 あの須磨退居という一大事
五 格別深いというのではないが起って〔源氏は〕この世の事をすべていとわしく思い悩まれたために
六 全くお話にもならぬ
七 〔須磨へ〕仲の方へのお気持は何となく忘れたような具合で
八 〔今は〕おいたわしく不如意なお暮し向きである
昔から仕えている女房などは

古き女ばらなどは、「いでや、はてさて、いとくちをしき御宿世なりけり。おぼえず神仏のあらはれたまへらむやうなりし御心ばへに、かかるよすがも人は出でおはするものなりけりと、ありがたう見たてまつりしを、おほかたの世のことといひながら、また頼むかたなき御ありさまこそ悲しけれ」と、つぶやき嘆く。さるかたにありつきたりしあなたの年ごろは、いふかひなきさびしさに目馴れて過ぐしたま

なご縁にも姫君はお出会いになるものだったのだと
まれなご幸運とお思い申していまして
ほかに頼みとなさる方もない
愚痴をこぼして
嘆いても詮ない貧しさも当り前のことになって〔末摘花は〕

一〇（源氏の援助のお蔭で）なまじ多少は世間並みな生活に馴染んだ年月を送ったために。

一一 多少ともお役に立ちそうな女房たちは、（源氏がお通いと聞いて）招かずともやって来て、居ついてお仕えしていたのだが。

一二 女房の中には、老齢で寿命の尽きる者もあって。

一三 身分の上の者も下の者も数がへってゆく。女房や下働きの男女をさす。

一四 宮邸の荒廃は末摘花の巻にすでに述べられている。（一巻二六九頁、二七二頁）

常陸の宮邸の荒廃のさま

一五 以下の文章は「梟は松桂の枝に鳴き　狐は蘭菊の叢に蔵る」（『白氏文集』諷諭「凶宅詩」）を踏まえる。（一巻夕顔一五三頁注七参照）

一六 人気のない木立。

一七 人の住む気配があったればこそ、そのようなあやしいものも阻まれて姿を隠していたが。「さやうのもの」は、次の「木霊など」をさす。

一八 樹木の精霊。「樹神和名古多万」（『和名抄』）。木が古くなると宿ると信じられていた。

一九 こうした受領どもで。「この」の語は、受領たちがすでに話題になっていたことを示す。当時、受領層の中に富裕な者のいたことは、帚木の巻にも見えている（一巻五〇頁注八参照）。

二〇 ってを求めて、ご意向をお伺い申させていますが。「ほとり」は、宮家に仕えている姫君周辺の女房。

ふを、一〇なかなかすこし世づきてならひにける年月に、〔女房たちは〕いと堪へがたく思ひ嘆くべし。一一すこしもさてありぬべき人々は、おのづから参りつきてありしを、皆次々に（次から次へと）従ひて行き散りぬ。一二女ばらの命堪へぬもありて、月日に従ひて、一三上下の人数少なくなりゆく。

一四もとより荒れたりし宮のうち、一五いとど狐の住処になりて、（気味悪く）うとましう、一六気遠き木立に、梟の声を朝夕に耳ならしつつ、一七人気にこそ、さやうのものもせかれて影隠しけれ、一八木霊など、（奇怪なものどもが）けしからぬものども、所を得て、（わがもの顔に）やうやう形をあらはし、ものわびしきことのみ数知らぬに、（何やら難儀なことばかりが数えきれずあるので）まれまれ残りてさぶらふ人は、（女房）「なほいとわりなし。（もう打つ手がございません）この受領どもの、（風流な家造りに熱心な者が）おもしろき家造りこのむが、この宮の木立を（目につけて）心につけて、（〔お邸を〕手放して下さいませんかと）放ちたまはせてむやと、二〇ほとりにつきて、案内し申さするを、さやうにせさせたまひて、いとかうもの恐ろしからぬ御住ひに、（移ろうとお考え下さいませ）おぼしうつろはなむ。（〔このお邸に〕）立ちとまりさぶらふ人も、（私たちも）いと堪へがたし」（本当に辛抱しきれません）など聞こゆれど、「あないみじや。（末摘花）まあとんでもない（世間の人が聞いたら何と思うことでしょう）人の聞き思はむこともあり。（私の生

一 そんなお父様のお形見を何もかも無くしてしまうようなことは、どうしてしましょう。

二 ご両親のお姿が、とどまっていらっしゃる感じがする古い家だと思うので、さびしさも紛れているのです。部屋のあちこちのたたずまいに、そこにいた親の面影が彷彿とする感じをいう。

三 にわか仕込みの骨董いじりをこころざす者が。「なま」は、本式でなく未熟な状態をいう。「もののゆゑ」は、ものの由緒。

四 そうしたお道具類を欲しがって。

五 それこそ、世間の習いよと言って。「そ」は、落ちぶれて売り食いすることをいう。

六 さし迫った今日明日の暮しの見苦しさを取り繕おうとする時もあるのを。米などに換えることをいうのであろう。

七 父宮は、私どもが使うようにとお思いなさったから、こうして（お道具類を）作らせてお置きになったのでしょう。

八 ご兄弟の禅師の君。「禅師」は、もと、僧の尊称。ここは、内供奉十禅師（宮廷の内道場に奉仕する十人の僧）の一人であろう。のちの初音の巻に「醍醐の阿闍梨の君」と呼ばれている。山科の醍醐寺に属していたことになる。

きている間に一る世に、しか名残なきわざはいかがせむ。かく恐ろしげに荒れ果てぬれど、親の御影とまりたるここちする古き住処と思ふに、なぐさみてこそあれ」と、うち泣きつつ、〔邸の売却など〕おぼしもかけず。御調度ども、古風で使い古したのが昔風の型で立派なのを お道具類もいと古代になれたるが昔やうにてうるはしきを、なまもののゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、〔故宮が〕特別に誰それと名のある者に作らせなさったと聞き出してお伺いを立てるのもまへると尋ね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと見くびって思ひあなづりて言ひ来るを、例の女ばら、先程の女房たちは「いかがはせむ。もはや仕方がないそこそは世の常のこと」とて、取りまぎらはしつつ、目立たぬように品を選びながら目に近き今日明日の見苦しさをつくろはむとする時もあるを、〔末摘花は〕きつくお叱りになって いみじういさめたまひて、「見よと思ひたまひてこそ、しおかせたまひけめ。などてか軽々し下下の者の き人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意違はむがあはれなることと」とのたまひて、そんなことはお許しにならないさるわざはせさせたまはず。ほんのちょっとした用件でもはかなきことにても、お伺いする人は誰一人いない姫君のご身辺であるとぶらひきこゆる人はなき御身なり。ただ〔山科から〕御兄の禅師の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時はさしのぞき顔をお出しにな

九 現世とは縁のない聖のようなお暮しぶりで。「聖」は、世俗を離れて修行する隠遁僧のこと。
一〇 生い茂った草や蓬も、刈り取らねばならぬものともお気づきにならない。
一一「浅茅」は、丈の低い茅萱。「庭」は、寝殿の南の平坦部、白砂を敷く。「しげき蓬は」以下と対句をなす。
一二 葎（蔓草の一種）が這いまつわって、東西の御門を閉ざしてしまったのは、用心がよくて心丈夫だけれども。「今さらにとふべき人も思ほえず八重葎して門鎖せりてへ」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）
一三 泥土を築き固めた築地塀なので、崩れやすい。
一四 お邸の中で牛馬を放ち飼う牧童の料簡も、けしからぬことである。「総角」は、髪を左右に分け、耳の上で輪に巻く少年の髪型、転じて少年のこと。「総角や　とうとう　尋ばかりや　とうとう　離りて寝たれども　転びあひけり　とうとう　か寄りあひけり　とうとう」（催馬楽、呂「総角」）など、歌謡に見える語。
一五 東西の対の屋から南に延びる中門廊であろう。
一六 召使の住居や物置に用いられた雑舎。
一七 押し入っても無駄だと、目もくれず通り過ぎて。
一八 こんなひどい野や藪のようになったお邸ではあるが。「ら」は接尾語。
一九 末摘花が住む。
二〇 雑事に乱されることのないきちんとしたお暮しぶりで。

蓬生

たまへど、（その方も世間にまれな古風な人で）それも世になき古めき人にて、同じき法師といふなかにも、（処世のすべを知らず）たづきなく、この世を離れたる聖にものしたまひて、一〇しげき草蓬をだに、かき払はむものとも思ひ寄りたまはず。かかるままに、浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。一一葎は西東の御門を閉ぢこめたるぞ頼もしけれど、一三崩れがちなるめぐりの垣を馬牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、一四放ち飼ふ総角の心さへぞめざましき。八月、野分荒かりし年、一五廊どもも倒れ伏し、一六下の屋どもの、（粗末な）はかなき板葺なりしなどは、（骨組みだけが）残りて、（こうなっては）立ちとまる下衆だになし。（朝夕の）煙絶えて、（悲しくつらいことが多い）あはれにいみじきこと多かり。盗人などいふひたぶる心ある者も、（情け容赦のない者も）思ひやりのさびしければにや、（こうした事情なので）この宮をば（お邸を）不用のものに踏み過ぎて寄り来ざりければ、一八かくいみじき野ら藪なれども、さすがに寝殿のうちばかりは、（昔ながらのお部屋の設備もそのままで）ありし御しつらひ変らず、つややかに掃き掃きなどする人もなし、塵は積れど、二〇まぎるることなきうるはしき御住ひにて、（末摘花は）明かし暮らした

一 たわいもない昔の歌や物語などといった慰みごとによってこそ、所在なさも紛らわし、こんなさびしい暮しでも何とか過せるものなのであろうが。当時の女子の一般的な消閑のさまである。

二 特に、そういうこと（手紙のやりとり）を進んでするというのではないが。

三 若い姫君は、四季折々の草木につけても、気をお紛らわしになれるものなのだが。

四 時たまにしろ、お手紙をお出しになってもよいご親戚などにも、全然親しくなさらず。

五 扉のついた本箱様のもの。（一巻図録九参照）

六 以下、当時の物語の名。「唐守」は、散逸して伝わらない。「藐姑射の刀自」は、藐姑射の刀自に育てられた照満姫をヒロインとする求婚譚らしく、中世まで伝存した。「かくや姫の物語」は、現存の『竹取物語』。いずれも古風な物語だったと思われる。当時の物語は絵をともない、特に上流階級では絵を見て物語を楽しんだことが後の絵合、東屋の巻に見える。

七 おもしろい趣向で選択編集し、詞書（歌の成立事情）や作者をもはっきりさせて、歌の気持のよく分るのが興をそそるのだが。歌物語風のものであろう。

八 朝廷の紙屋院（紙屋川辺に置かれた）で漉いた紙。上質のもので、色紙（色を染めた紙）もあった。

九 檀紙。檀の皮から作り、白くて厚い。陸奥の産。

末摘花のさびしい暮し

まふ。

はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをもまぎらはし、かかる住ひをも思ひなぐさむるわざなめれ、〔末摘花は〕さやうのことにも心遅くものしたまふ。（関心が鈍くていらっしゃる）わざとこのましからねど、おのづからまた急ぐことなきほどは、（別に急ぐ用事のない時には）同じ心なる文通はしなどうちしてこそ、（気の合う同士の）若き人は木草につけても心をなぐさめたまふべけれど、〔末摘花は〕父宮が大事にお育てなさったそのお考えを守っててかしづきたまひし御心おきてのままに、世の中をつつましきものにおぼして、（用心しなければならぬものだとお思いで）まれにも言通ひたまふべき御あたりをも、さらに馴れたまはず、古りにたる御厨子あけて、唐守、藐姑射の刀自、かくや姫の物語の絵に画きたるをぞ、時々のまさぐりものにしたまふ。古歌とても、（気軽にしてこそもてあそびもの）をかしきやうに選り出で、題をも読人をもあらはし心得たるこそ見どころもありけれ、（堅苦しい）うるはしき紙屋紙、陸奥紙などのふだったのに（ありふれた古歌が書いてあるのなどは）くだめるに、古言どもの目馴れたるなどは、（全く興ざめなていなのを）いとすさまじげなるを、せめてながめたまふをりは、（一人物思いに沈むしかない折々は）ひきひろげたまふ。（当節の人がよくやる）今の世の人の

一〇 読経とかおつとめ（勤行）などいうことは、大層気のひけることとお考えになっていて。『紫式部日記』に「昔は経読むをだに人は制しき」とある。女の読むものではない漢字で書かれているからである。末摘花の受けた古風な教育を示す。

一一 このように、万事きちんとしていらっしゃるのだった。末摘花の生真面目さをからかった口調。

末摘花の叔母、報復を企む

一二 末摘花の巻で、姫君に代って返歌をしたり（二六一頁）、返事を教えて書かせたりした（二六五頁）才走った女房。

一三 お出入りしていた斎院（末摘花二六九頁参照）。宮邸だけでは不安で、斎院にも通っていたのである。

一四 見苦しからぬ若手の女房たちも。末摘花を見限り、叔母の家に顔を出すのである。

一五 昔、親たちもこの方（叔母の北の方）にはお目通りしていたのだからと思って。このあたりから、「若人ども」の中の侍従一人に焦点を絞った叙述になる。「親ども」は侍従の親。母親は末摘花の乳母である。

一六 人見知りするご性格なので、（叔母君と）親しくお付き合いもなさらない。

一七 亡き姉上（末摘花の母）は、私をお見下しになって。

一八 かえって、上流の方の真似をして、とりすまして。

常陸宮 ═ 末摘花
北の方
叔母北の方 ═ 娘ども
受領

すめる、経うち読み、行ひなどいふことは、いとはづかしくしたまひて、見たてまつる人もなけれど、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。

侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろあくがれ果てぬ者にてさぶらひつれど、通ひ参りし斎院亡せたまひなどして、いと堪へがたく心細きに、この姫君の母北の方のはらから、世におちぶれて受領の北の方になりたまへるありけり。娘どもかしづきて、よろしき若人どもも、むげに知らぬ所よりは、親どももまうで通ひしをと思ひて、時々行き通ふ。この姫君は、かく人疎き御癖なれば、むつましくも言ひ通ひたまはず。「おのれをばおとしめたまひて、面伏せにおぼしたりしかば、姫君の御ありさまの心苦しげなるも、えとぶらひきこえず」など、なま憎げなる言葉ども言ひ聞かせつつ、時々聞こえけり。もとよりありつきたるさやうの並々の人は、なかなかよき人の真似に心をつくろひ、思ひ上がるも多かるを、やむごとな

長年お暇をとろうともしない忠義者として
目をお止め申す人もいないのだが
とても暮してゆ
姉妹で
末摘花
奥方におなりになった方があった
〔彼女は〕
大事に育てていて
全くはじめての主家よりは
末摘花
〔侍従は〕
〔叔母〕
お暮しがいたいたしくていられるのも
お見舞い申
〔侍従に〕
小憎らしい文句を
〔末摘花に〕
家の恥にお思いでしたから
もともと生れついての受領のような低い身分の者は
お便りしていた
お高くとまる者も
〔叔母北の方は〕高貴

一　自分が受領の妻といった一段低い身分で、見下されていたのを。以下「後見ならむ」まで、叔母の心中の思い。

二　今のような、宮家の家運の衰退の折に。

三　いかにも安心できる介添役であろう。育ちもいいし、血のつながりもあるから、という気持。

四　（あなたのお弾きになる）お琴の音もお聞きしたがっている者がございます。娘のことをいう。末摘花が琴を唯一の趣味にすることは、末摘花二四七頁ほかに見える。

五　言うとおりにも親しくお付き合いなさらないのを、（叔母は）小面憎いと思っていた。

六　大宰の大弐。大宰府の次官。従四位下相当。長官はたいてい赴任せず、大弐が実務をつかさどることが多い。地方官では最高の職。

七　あなたのさびしいお暮しが。「いとあはれにうしろめたくなむ」に続く。

八　お近くにいて安心でした間はともかくも。

九　そんな草茫々の所に何年も住みついていらっしゃ

叔母、末摘花を大宰府に伴おうとする

き筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心すこしなほなほしき御叔母にぞありける。わがかく劣りのさまにて、あなづらはしく思はれたりしを、いかでか、かかる世の末に、この君をわが娘どもの使人になしてしがな、心ばせなどの古びたるかたこそあれ、いとうしろやすき後見ならむ、と思ひて、「時々ここにわたらせたまひて、御琴の音もうけたまはらまほしがる人なむはべる」と聞こえけり。この侍従も、常に言ひもよほせど、人にいどむ心にはあらで、ただこちたき御ものづつみなれば、さもむつびたまはぬを、ねたしとなむ思ひける。

かかるほどに、かの家あるじ、大弐になりぬ。娘どもあるべきさまに見置きて、下りなむとす。この君をなほも誘はむの心深くて、「はるかにかくまかりなむとするに、心細き御ありさまの、常にもとぶらひきこえねど、近き頼みはべりつるほどこそあれ、いとあはれにうしろめたくなむ」などことよがるを、さらにうけひきたま

（受領の妻にまでの血筋でありながら）
（叔母の夫は）
（末摘花）
（召使にしたいものだ）
（考え方など古風なところはあるが）
（叔母）
（私どもの家においで）
（申し上げた）
（末摘花は）人と張り合うもおすすめするけれども）
（大変な恥ずかしがりやでいらっしゃるので）
（しかるべく縁づけておいて）
（下向することになりましたが）
（末摘花）
（赴任しようとする）
（見舞い申してもおりませんが）
（言葉巧みに言うのを）
（末摘花は）とんとご承知なさらず気がかりでなりません）

る方を。その貧窮のさまをさげすんでいう。

一〇 怨んだり呪ったりした。「うけふ」は、相手に悪いことが起るように言うこと。

一一 果して源氏が世間に復帰なさることになって、都にお帰りになるということで。

一二 今はもうおしまいだ。以下「かひなき世かな」まで、源氏の訪れのないのを嘆く末摘花の心中の思い。

源氏、帰京後も末摘花を訪れず、叔母の勧誘いよいよ急

一三 長の年月、（源氏の）今までとはうって変ったお身の上を悲しくつらいことと思い続けながらも。須磨流浪の不遇を悲しみ案じていたことをいう。

一四 やがて、一陽来復の春にめぐりあって頂きたいと祈ってきたが。「岩そそくたるひの上の早蕨の萌え出づる春になりにけるかな」（『古今六帖』一。原歌は『万葉集』巻八春雑歌、志貴皇子。「岩走る垂水の上の」「なりにけるかも」）

一五 下賤な者。「たびし」は、礫（石ころ）の意という。「かはら」は、瓦。瓦礫のようなつまらぬ者の意。

一六 官位のご昇進などを。源氏は帰京後、権大納言に昇進した。（一巻明石三〇五頁参照）

一七 自分一人にとって起ったことなのだと思われたのだが。悲しみは自分だけが背負っていると思われた、の意。「世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれるか」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）の言葉によって書いたもの。

ないので（叔母）まあ憎らしい　ご大層なこと　ご自分だけでうぬぼれていらしても

はねば、「あなにく。ことことしや。心一つにおぼし上がるとも、さる藪原に年経たまふ人を、源氏大将殿も、大事にお世話しようとはとてもお思い申やむごとなくしも思ひきこえたまはじ」など、怨じうけひけり。

さるほどに、げに世の中にゆるされたまひて、都に帰りたまふと、〔源氏の〕天の下のよろこびにて立ち騒ぐ。知って頂こうとばかりに競い合う われもいかで、人より先に、深き心ざしを御覧ぜられむとのみ思ひきほふ男女につけて、〔身分の〕高きをも下れるをも、天下の人々の喜びとして大騒ぎする人の心ばへを見たまふに、〔源氏は〕しみじみとお悟りになることがいろいろある あはれにおぼし知ることさまざまなり。〔末摘花を〕かやうにあわたたしきほどに、さらに思ひ出でたまふけしき見えで月日経ぬ。

今は限りなりけり、年ごろ、あらぬさまなる御さまを悲しういみじきことを思ひながらも、萌え出づる春に逢ひたまはなむと念じわたりつれど、たびしかはらなどまでよろこび思ふなる御位あらたまりなどするを、無縁のこととして聞かねばならないのだよそにのみ聞くべきなりけり、悲しかりしをりのう須磨退居の折の嘆かしさは れはしさは、ただわが身一つのためになれるとおぼえし、それも詮ないかひなき

一 それ見たことか。以下「御心おごりのいとほしきこと」まで、叔母の心中。

二 どうして、こんな暮しのあてもない、みっともないご様子の方を。「まさに」は、下の「ありなむや」の反語に応ずる。

三 仏や聖（高僧）でさえも、罪業軽く生れついた者を救いやすいとされているとか。現世の財宝や、容貌の美に恵まれているのは、過去世における善因の結果だと考えられていた。末摘花のような人を相手にする男などいるはずがない、という気持。

四 父宮や母北の方がご在世の時と同じように、やりつけていらっしゃる高慢さは困ったものだと。

五 この世がつらい時は、そういうことのない山奥に籠ってしまうというではありませんか。出家遁世することをいう。「世の憂き目見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）、「み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ」（同上）などによる。

六 すっかり元気をなくしている女房たちは。「屈ず」は、「屈す」の促音を撥音表記して、音のままに読んだもの。

七 あの大弐の甥とかいう男がねんごろな仲になって。

八 （侍従を）都に残して置くはずもなかったので、あわただしく旅立つことになって。

乳母子の侍従も叔母に同行せんとし、姫君を勧誘する

源氏との仲なのだと思い乱れて世かなと心くだけてつらく悲しければ、人知れず音をのみ泣きたまふ。大弐の北の方、さればよ、まさにかくたづきなく、人わろき御ありさまを、人並みにお扱いになる殿方があろうかかずまへたまふ人はありなむや、仏聖も、罪軽きをこそ導きよくしたまふなれ、ここまで落ちぶれていながらかかる御ありさまにて、何かにつけて偉そうにたけく世をおぼし、宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる御心おごりのいとほしきことと、いとどをこがましげに思ひて、「なほ思ほし立ちね。世の憂き時は見えぬ山路をこそは尋ぬなれ。田舎などはむつかしきものとおぼしやるらめど、ひたぶるに人わろげには、よもものてなしきこえじ」など、いとことよく言へば、むげに屈じにたる女ばら、「さもなびきたまはなむ。たけきこともあるまじき御身を、いかにおぼして、かく立てたる御心ならむ」と、もどきつぶやく。

侍従も、かの大弐の甥だつ人語らひつきて、とどむべくもあらざりければ、心よりほかに出で立ちて、「見たてまつり置かむがいと心苦しきを」とて、そそのかしきこゆれど、なほかくかけ離れて久

（叔母）やはりご決心なさいませ
ますます姫君を馬鹿げた方だと思って
恐ろしい所なのだと想像なさるかもしれませんが
言葉巧みに
ひどく見苦しいようには
大したこともなさそうなお身の上を
おっしゃる通りになさればいいのに
扱い申さぬつもりです
こんなに我をお立てになるのだろう
非難しぶつぶつ言う
（侍従）姫君をお残ししたまま行きますのがとてもつらいので
（九州下向を）おすすめ申すけれど
（末摘花は）訪れもないまま

九 そうはいっても、ずっとあとになってからでも、思い出して下さる折がないことがあろうか。「あり経」は、生き永らえて時が経つこと。以下、「かならずとぶらひ出でたまひてむ」まで、末摘花の心中の思い。

一〇 私の果報が悪くて、こんなふうに源氏から忘れられてしまったのだ。こうなったのは源氏が冷淡なせいではない、という気持。

一一 総体にお住居も、前よりさらに荒れてひどくなっているが。「おほかたの御家居」は、「はかなき御調度ども」に対して、まず概括していう。

一二 末摘花ご自身のお考えで、役に立たないようなお道具類なども、無くさせたりなさらず。前に、女房が、こっそり勝手に処分して生活費にしようとしたとあった（五八頁）。

一三 ともすれば声をあげてお泣きになっては、いよいよ鬱ぎこんでいらっしゃるお姿といったら。

一四 ただ、樵夫などが、赤い木の実一つを顔に放さずにつけているといったふうでいらっしゃる横顔などは。末摘花の鼻の先の赤いことをいう。（末摘花二七〇頁参照）

一五 こまかには申し上げますまい。以下草子地。

一六 源氏が秋帰京した、その年の冬のことである。

一七 桐壺院追善の法華八講。十月に行われた。（澪標一一頁参照）

冬、兄の禅師の君、源氏の動静を伝える

しうなりたまひぬる人に（源氏）頼みをかけたまふ。御心（〔末摘花の〕）のうちに、さりとも、あり経てもおぼし出づるついであらじやは、あはれに心深き契りをしたまひしに、（約束をして下さったのに）一〇わが身は憂くて、かく忘られたるにこそあれ、風のつてにても（便り）、わがかくいみじきありさまを（私のこんなひどい暮し向きをお耳になさったら）聞きつけたまはば、かならずとぶらひ出でたまひてむと（思い出して訪れて下さるに違いないと）、年ごろおぼしければ、おほかたの御家居も、ありしよりけにあさましけれど、一二わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く（強情に）同じさまにて念じ過ぐしたまふなりけり（耐え忍んで）。音泣きがちに、いとどおぼし沈みたるは、一四ただ山人の赤き木の実一つを顔に放たぬと見えたまふ御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし（薄情な男ならこらえてさし上げることはできもしないであろう）。一五くはしく聞こえじ、いとほしうもの言ひさがなきやうなり（お気の毒だし口さがないと思われるでしょうから）。

一六 冬になりゆくままに、いとどかき付かむかたなく悲しげにながめ過ぐしたまふ。かの殿（源氏）には、一七故院の御料の御八講、世の中ゆすりてしたまふ。ことに僧などはなべてのは召さず、才すぐれ行ひにしみ、

（すがりつくものとてなく〔末摘花は〕思いに沈んで）

（世間でも大騒ぎして盛大にお営みになる）

（並々の者は学才にひいで修行を積み）

高徳の者ばかりを〔八講に〕尊き限りを選らせたまひければ、一この禅師の君参りたまへりけり。帰りざまに立ち寄りたまひて、〔常陸宮邸に〕「しかしか。二権大納言殿の御八講に参列していましたのです参りてはべりつるなり。いとかしこう、三生ける浄土の飾りに劣らず、四いかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。仏菩薩の変化の身にこそものしたまふめれ。五つの濁り深き世になどて生まれたまひけむ」と言ひて、やがて出でたまひぬ。言少なに、世の人に似ぬ御あはひにて、ど兄妹で六かひなき世の物語をだにえ聞こえ合はせたまはず。七さてもかばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐしたまふは、心憂の仏菩薩やとつらうおぼゆるを、八げに限りなめりとやうやう思ひなりたまふに、大弐の北の方にはかに来たり。

例はさしもむつびぬを、誘ひ立てむの心にて、〔末摘花が〕お召しになるたてまつるべき御装束など調じて、よき車に乗りて、面もち、得意げにけしき、ほこりかにもの思ひなげなるさまして、ゆくりもなく走り来て、門開けさするよ

一 兄上の禅師の君が。（五八頁参照）

二 源氏。帰京後八月に権大納言に昇進（明石三〇五頁参照）。

三 この世の極楽浄土の荘厳（飾り付け）さながらで。「生ける」は、この世に現じたの意。

四 盛大で、興趣の深いことばかりいっぱいなさいました。論義や奉納の舞楽のことをいうのであろう。

五 （あんな立派な八講をとり行われる）源氏の君は、仏か菩薩の化身でいらっしゃろう。「菩薩」は、仏に次ぐ修行者。仏になるため、無上の悟りを求め、一切衆生の教化に努める。

六 そんなお方が、どうして五濁悪世のこの世にお生れになったのだろう。「五つの濁り」は、劫濁、見濁、命濁、煩悩濁、衆生濁の五種。悟りを開く妨げになるこの世の濁り。

七 それにしても、こんなに不運なわが身の有様を、悲しいことに訪うても下さらず放っておかれるとは、情けない仏菩薩ではないか。兄禅師の話を聞いた末摘花が源氏をうらめしく思う。

八 いかにもこれきりの縁なのだろうと。「げに」は、大弐の北の方などの言った通りに、という気持。

叔母、最後の勧誘に来訪

九 門を開けさせるやいなや、邸内は（手入れもせず荒れ果てて）不体裁で貧しい有様といったら、この上もない。

一〇 門の左右の扉。
一一 大弐の北の方の供人。
一二 どれだろう、このように荒れてさびしい家にもかならず草を踏み分けた跡があると言われる三つの径は、と、捜し捜し行く。「三つの径」は、漢の蔣詡が庭に三逕（三つの小路）を作り、松、菊、竹を植えた故事に基づき、隠遁者の家の庭をいう。わが国では陶淵明の「三径荒に就けども　松菊猶存せり」（『文選』帰去来の辞）が知られている。『紫明抄』は、三逕は「門（ゆく道、井へゆく道、則へゆく道）」と注する。
一三 （寝殿の）南側の格子を上げた一間へ。「南面」は、表座敷である。「間」は、柱と柱の間。
一四 末摘花は、ますます立つ瀬もなくたまらなくお思いになったが。荒れ果てた寝殿に、さほどの身分でもない叔母が、立派な車で堂々と直接乗りつけたからである。
一五 情けないことに、私をお嫌いなので。「思ひ隔つ」は、隔意をいだくこと。
一六 姫君ご自身が、ほんのちょっとでも、私方におこし下さることはないにしても。
一七 どうしてこうおいたわしい有様でいらっしゃるのでしょう。
一八 （世の常の人なら）ここで思わず泣きもするところだ。叔母を皮肉った草子地。
一九 今までだって何の疎略にお思い申したことでしょう。

り、人わろくさびしきこと限りなし。左右の戸もみなよろぼひ倒れ（一〇）（ひだりみぎ）（傾いて）にければ、男ども助けてとかく開け騒ぐ。いづれか、このさびしき（一一）（をのこ）（門番を）（あ）宿にもかならずわけたる跡あなる三つの径と、たどる。わづかに南（一二）（あと）（みち）（みなみ）面の格子上げたる間に寄せたれば、いとどはしたなしとおぼしたれど、あさましう煤けたる几帳さし出でて、侍従出で来たり。容貌などおとろへにけり。（一四）（おもて）（かうし）（ま）（車を）（すす）（汚れた）（きちやう）（侍従は）（かたち）（やつれているが）（長年のうちに）年ごろいたうつひえたれど、なほものきよげにて奥ゆかしい態度でよしあるさまして、かたじけなくとも、とりかへつべく見ゆ。（恐れ多いことながらも）（末摘花と）（取り換えられそうに見える）

（叔母）旅立とうと「出で立ちなむことを思ひながら、心苦しきありさまの見捨てたてまつりがたきを、侍従の迎へになむ参り来たる。心憂くおぼし隔てて、御みづからこそあからさまにもわたらせたまはね、この人をだにゆるさせたまへとてなむ。（一七）などかうあはれげなるさまには」とて、うちも泣くべきぞかし。されど、行く道に心をやりて、いとここちよげなり。（一八）「故宮おはせし時、おのれをば面伏せなりとおぼし捨てたりしかば、うとうとしきやうになりそめにしかど、年ごろも何か

（姫君の）おいたわしいご様子なのがお見捨て申し（栄転の旅先に満足なので）（上げかねるのですが）（叔母は）（亡き姉上が）（一家の恥だとのけ者にお思いで）（せめてこの人だけはお暇を頂きたいと存じまして）（それ以来疎遠な間柄のようになっていましたが）（したから）

は。[一]やむごとなきさまにおぼしあがり、[二]大将殿などおはしまし通ふ御宿世のほどをかたじけなく思ひたまへられしかばなむ、（もったいなく存じられましたので）むつびきこえさせむも憚ること多くて過ぐしはべるを、[三]世の中のかく定めもなかりければ、[四]数ならぬ身は、なかなか心やすくはべるものなりけり。（前には及びもつかぬと拝しましたあなたさまのお身の上が）及びなく見たてまつりし御ありさまのいと悲しく心苦しきを、[五]近きほどはおこたるをりものどかに頼もしくなむはべりけるを、かくはるかにまかりなむとすれば、うしろめたくあはれになむおぼえたまふ」などかたらへど、心解けてもいらへたまはず。

「いとうれしきことなれど、[六]世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも失せめとなむ思ひはべる」とのみのたまへば、「げにしかなむおぼさるべけれど、生ける身を捨てて、かくむくつけき住ひするたぐひははべらずやあらむ。大将殿の造り磨きたまはむにこそは、引きかへ玉の台にもなりかへらめとは、頼もしうははべれど、ただ今は式部卿の宮の御女よりほかに心わけたまふかたもなかなり。

一（あなたさまが）ご大層なお身の上のようにお高く構えられて。

二 源氏。この時は権大納言に昇進しているが、つい口癖で無造作に言っているのであろう。ここは以前のことを言っているのであるが、後にも「大将殿」と言っている。

三 人の身の上は、こうも定めないものですから。たちまちのうちに、源氏のお通いが絶えてしまったことをいう。

四（私のような）人数にも入らぬ身分の者は、（浮き沈みがなくて）かえって気楽というものでございます。

五 近くにおりますうちは、勝手をしましても、そのうちにと呑気に構え、心丈夫でございましたが。「おこたる」は、ここは、ご無沙汰する意。

六 私はこんな変り者で、何でご一緒できましょう。

七 式部卿の宮の姫君（紫の上）以外には心をお分けになるお人もないようです。紫の上の父宮は、澪標の巻（三一頁、五〇頁）、絵合の巻（九九頁）には兵部卿の宮とあり、式部卿に転ずるのは少女の巻（二三〇頁）である。「なかなり」は「なかるなり」の撥音便の撥音無表記の形。「なり」は伝聞の助動詞。

八 すっかりお忘れになってしまったということです。「たなり」は「たるなり」の撥音便無表記の形。「なり」は伝聞の助動詞。

九 まして、こんな頼りなげな有様で、荒れ果てたお邸に日をしのいでいらっしゃる方を。末摘花のこと。

一〇 貞淑いちずにご自分（源氏）を頼りになさってのことと思って、訪れて下さることは、とても望めないことでしょう。

叔母、侍従を連れ去る

一 では、せめて侍従だけでも（お暇を下さい）。

二 取りあえず今日は、こんなにまでおっしゃるお方のお見送りにだけ行ってまいりましょう（すぐに帰ってまいります）。

三 ますます、声をあげて泣くことばかりを、せめてものことにしていらっしゃる。「たけきこと」は、この際できる精いっぱいのこと。

四 形見として、侍従の身に添えておやりになれそうなお召し物も、汗じみているので。「身馴れ衣」は、常に身につけていたふだん着。贈り物として、最上のものとされた。「しほなる」は、潮気にしめる意（一巻空蟬一一七頁注二〇参照）。

一五 長年勤めてくれたお礼の気持をお表しになれるものもなくて。

浮気など性分で

昔よりすきずきしき御心にて、一時のお慰みに なほざりに通ひたまひける所々、皆[八]おぼし離れにたなり。まして[九]、かうものはかなきさまにて藪原（やぶはら）に過ぐしたまへる人をば、心[一〇]きよくわれを頼みたまへるありさまと尋ねきこえたまふこと、いとかたくなむあるべき」など言ひ知らするを、話して聞かせるのを

その通りだとお思いになるにつけ〔末摘花は〕しみじみと げにとおぼすもいと悲しくて、つくづくと泣きたまふ。

〔末摘花は〕 されど動くべうもあらねば、一日中いろいろ言ってみたものの困りはてて よろづに言ひわづらひ暮らして、

（叔母）「さらば、侍従をだに」と、日の暮るるままに急げば、心あわたたしくて、泣く泣く、（侍従）「さらば、まづ今日は、かう責めたまふ送りばかりにまうではべらむ。叔母さまの申されることも道理でございます かの聞こえたまふもことわりなり。また、

〔姫君が〕お決めかねになるのもよく分りますので おぼしわづらふもさることにはべれば、中に立って伺っていますのもつらく存ぜられます なかに見たまふるも心苦しくなむ」と、内々に忍びて聞こゆ。侍従 この人さへうち捨ててむとするを、見捨てて行こうとするのを 〔末摘花は〕 めしうもあはれにもおぼせど、引き止めるすべもなくて 言ひとどむべきかたもなくて、[一三]いと ど音（ね）をのみたけきことにてものしたまふ。[一四]かたみに添へたまふべき身馴れ衣（ごろも）も、しほなれたれば、[一五]年経ぬるしるし見せたまふべきもの

一 かもじ。添え髪。当時、旅立つ人に鬘を贈る風習があった（注八参照）。

二 『河海抄』に「衣の丈、昔は八尺或いは九尺云々。仍て鬘もその長さにしける歟」という。末摘花の髪が長く美しかったことは末摘花二七一頁に見える。

三 宮家に古くから伝わる薫衣香。「薫衣香」は、薫物の名。

四 あなたとは絶えるはずのない間柄だと頼りにしていましたのに、思いもかけず遠く別れてしまうのですね。「玉かづら」は、鬘の美称。「絶ゆ」「筋」「かけ」は「かづら」の縁語。乳母子だから、切っても切れぬ縁があると思っていたのに、の意。

五 「まま」は、乳母を親しみ呼ぶ語。侍従の母。

六 あなたは、最後まで私を世話してくれるに違いないと思っていましたのに。

七 はるばると遠い九州までうろうろ出かけてまいりますこと。「まかりあくがる」は「行きあくがる」の謙譲語。「あくがる」は、さまよい出る意。

八 姫君とのご縁は決して切れることはございません、行く道々の手向の神にもかけてお誓いいたします。「玉かづら」は、姫君の歌を受けて、「絶え」「かけ」に言い掛ける。「手向の神」は、旅人が物を供え（これを手向けという）旅の安全を祈る神。『伊勢集』に「ものへ行く人に鬘をやるとて」の詞書で、「けづりこし心もしるく玉鬘手向の神となるぞうれしき」（「神」に「髪」を掛ける）という例がある。

なくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて鬘にしたまへるが、九尺余ばかりにて、いときよらなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薫衣香のいとかうばしき、一壺具して賜ふ。

（末摘花）「絶ゆまじき筋を頼みし玉かづら
思ひのほかにかけ離れぬる

遺言しておかれたこともあったので
故ままの、のたまひ置きしこともありしかば、ふがいない私だけれども かひなき身なりとも、
見果ててむとこそ思ひつれ、〔あなたに〕見捨てられるのも仕方ないけれど〔私のことを〕うち捨てらるるもことわりなれど、誰
誰に頼んでゆく気かと 侍
に見ゆづりてかと、恨めしうなむ」とて、いみじう泣いたまふ。〔涙で〕ものもろくに申せない 〔侍従〕今さら申し上げるまでもありま
従
の人も、ものも聞こえやらず。「ままの遺言はさらにも聞こえさせ
せん 今まで耐えがたい暮しのつらさも我慢してまいりましたのに 思いが
ず。年ごろの忍びがたき世の憂さを過ぐしはべりつるに、かくおぼ
けぬ旅路に誘われて
えぬ道にいざなはれて、はるかにまかりあくがること」とて、
（侍従）「玉かづら絶えてもやまじ行く道の
手向の神もかけて誓はむ

（叔母）どうしたの
命こそ知りはべらね」など言ふに、「いづら、暗うなりぬ」と、つ

九 命のほどは分りませんが。

一〇 今まで長年の間、迷惑がりながらもお側を離れなかった人（侍従）が、こうして別れて行ってしまったことを。

一一 めいめい自分たちの縁につながるってなどを思い出して。

一二 末摘花は、体裁の悪いことだと思って聞いておいでになる。

雪に埋れた末摘花の暮し

一三 源氏帰京の年の十一月である。

一四 雪の消えることがないと言われる越の白山が思いやられる雪の中に。「越の白山」は、越前の白山。「越」は、北陸道一帯の古称。「消え果つる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける」（『古今集』巻九羇旅、こしの国へまかりける時、白山をみてよめる　躬恒）

一五 夜ともなれば、塵の積った御帳台の中も、一人寝のお側がさびしく。「塵がましき御帳」は、男の訪れが絶えて久しく、整えることを怠った帳台をいう。

一六 源氏は、久々にやっと再会された方（紫の上）に、ますます大層など熱中といった有様なので。

くさ言われて　〔侍従は〕上の空のまま車を引き出すので　後ろばかり振り返られるのであった

ぶやかれて、心も空にて引き出づれば、かへりみのみせられける。〔末摘花は〕

一〇 年ごろわびつつも行き離れざりつる人のかく別れぬることを、いと心細うおぼすに、世に用ゐらるまじき老人さへ、〔老女房〕「いでや、ことわ

どこも使ってくれそうもない　いやいや　無理もな

い〔侍従が〕りぞ。いかでか立ちとまりたまはむ。われらも、えこそ念じ果つま

とても辛抱しきれないでし

じけれ」と、おのが身々につけたるたよりども思ひ出でて、〔ここに〕残ってとまる

ようよ　いられないと

まじう思へるを、人わろく聞きおはす。

霜月ばかりになれば、雪霰がちにて、ほかには消ゆる間もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬葎の陰に深うつもりて、越の白山思ひやらるる雪のうちに、出で入る下人だになくて、〔末摘花は〕つづれとながめたまふ。

所在なく物思いに沈んでいられる

とりとめもないことを申し上げてお慰めし

はかなきことを聞こえなぐさめ、泣きみ笑ひみまぎらはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳のうちもかたはらさびしく、もの悲しくおぼさる。〔侍従〕〔さびしさを〕

さほど大切に思われない方々には　あの末摘花は

かの殿には、めづらし人に、いとどもの騒がしき御ありさまにて、いとやむごとなくおぼされぬ所々には、わざともえおとづれたまはず。まして、その人はまだ世にやおはすらむとばか

わざわざお出かけになるお気持も起らない

一 帰京の翌年、源氏二十九歳の初夏四月である。

二 「花散里」の「花」は橘。初夏五月の花とされている。その季節も近く、花散里を思い出すのである。

四月、源氏、花散里を訪れる
途中、常陸の宮邸に気づく

三 こっそりと、紫の上にお暇を頂いてお出かけになる。源氏は帰京後、官位も上ったので、「とかくかかづらはむ御ありきなども、所狭うおぼしなりにたれば」（澪標三九頁）とあった。

四 気分をそそる感じの夕方の月に。花散里の巻にも「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間にわたりたまふ」（二巻一九四頁）、「二十日の月さし出づるほどに」（同一九五頁）とあった。

五 橘とはまた違って、風情があるので。花散里を目当てに行くのが、末摘花訪問に変る経緯を暗示する。

六 築地も崩れて邪魔しないから。「築地」は、「築泥」の約まった形。泥を築き固めて作った塀（図録七参照）。

七 それもそのはず、例の常陸の宮だったのだ。「早う」は、「もともと」「すでに」の原義から転じた用法。

八 例のように、惟光は、こんなお忍び歩きには必ずお供を勤めるので、この時も一行の中に控えていた。夕顔の巻の活躍など参照。

りおぼし出づるをりもあれど、尋ねたまふべき御心ざしも急がであり経るに、年かはりぬ。

お見舞になろうというお気持も急に起らぬまま過すうちに

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつる名残の雨すこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。昔の御ありきおぼし出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのことおぼし出でてはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。おほきなる松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風に乗ってにつきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橘にかはりてをかしければ、さし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、乱れ伏したり。見しこころちする木立かなとおぼすは、早うこの宮なりけり。いとあはれにておしとどめさせたまふ。例の、惟光はかかる御忍びありきに後れねば、さぶらひけり。召し寄せて、「ここは、常陸の宮ぞかしな」「しかはべる」と聞こゆ。

風情を添えるように
お若い頃のお忍び歩きが
道すがら
月の光に揺れているのが
風に
〔車からお顔を〕
ひどく胸をつかれて〔車を〕
たしか常陸の宮だね（惟光）さようでございます
（源氏）

九　ここにいた人（末摘花）は、まだ二人で暮しているのだろうか。「ながむ」は、物思いに沈む意。
一〇　わざわざ尋ねてくるのも、大変だ。
一一　こんな機会に、お前が入って行って、来意を伝えてみよ。
一二　直接よく事情を確かめてから、話を切り出せ。人違いをしては馬鹿を見るだろう。「を」は強意の助詞。

惟光、邸内の様子を探る

もうここに住んでいないかもしれぬからである。
一三　ひとしお物思いのまさるこの頃なので。「ながめ」は、前に「日ごろ降りつる」とあった雨に掛ける。
一四　昼間のうたた寝の夢に、亡き父宮がお見えになったので。『細流抄』は、「父宮の見えたまへるに、折ふし源氏のとひたまふは誠に瑞夢なるべし」という。
一五　雨漏りで濡れた廂の間の端の方を拭わせて。「廂」は、母屋の外側にある部屋。
一六　あちこちのお席を整えさせなどしては。「御座」は、畳（人の坐る所にだけ敷く）や敷物をいう。
一七　亡き父宮を慕って袂の乾く間もないのに、荒れた家では、雨まで漏って濡らし添えるのも、おいたわしい折柄なのであった。歌からすぐ続いて「も心苦しきほどになむありける」と、地の文になる。
一八　柱間二間。「間」は、柱と柱の間。

（源氏）九
「ここにありし人は、まだやながむらむ。見舞ってやらねばならぬが
とぶらふべきを、一〇わざと
ものせむも所狭し。かかるついでに入りて消息せよ。一一よく尋ね寄り
てを、うち出でよ。人違へしては、をこならむ」とのたまふ。
常陸の宮邸では　思いに沈んでいらっしゃったが
ここには、一三いとどながめまさるころにて、つくづくとおはしける
に、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めていと名残悲しくお
ぼして、漏り濡れたる廂の端つかたおしのごはせて、一六ここかしこの
御座引きつくろはせなどしつつ、いつになく人並みに歌など詠まれて例ならず世づきたまひて、
（末摘花）一七
亡き人を恋ふる袂のひまなきに
荒れたる軒のしづくさへ添ふ
も心苦しきほどになむありける。
〔邸内を〕あちこち廻って
惟光入りて、めぐるめぐる人の音するかたやと見るに、いささか
やはりそうだ　覗いてみるが　人の住む気配もしない
人気もせず。さればこそ、往来の道に見入るれど、人住みげもなき
のだものと　やっとのことで人の気配を見つけ
ものをと思ひて、帰り参るほどに、月明くさし出でたるに見れば、
格子二間ばかり上げて、簾動くけしきなり。わづかに見つけたるこ

た気持は
こち、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて声づくれば、いとものふ年寄古り
りじみた声で　咳きこみながら
たる声にて、まづしはぶきを先にたてて、「かれは誰ぞ。何人ぞ」
〔惟光は〕
と問ふ。名のりして、「侍従の君と聞こえし人に、対面賜はらむ」
（老女）その人はよそにお勧めです　〔侍従と〕同様にお考え
と言ふ。「それはほかになむものしたまふ。されど、おぼしわくま
下さってよい女がいます
じき女なむはべる」と言ふ声、いたうねび過ぎたれど、聞きし老人
〔御簾の〕　〔惟光と〕　大層年を取っているが
と聞き知りたり。内には、思ひも寄らず、狩衣姿なる男、忍びやか
こんな姿は見馴れなくなってしまっているので
にもてなして、なごやかなれば、見ならはずなりにける目にて、も
〔惟光が〕　しかとしたことをうけた
し狐などの変化にやとおぼゆれど、近う寄りて、「たしかになむう
まわりとう存じます
けたまはらまほしき。変らぬ御ありさまならば、尋ねきこえさせた
まふべき御心ざしも、絶えずなむおはしますめるかし。今宵も行き
何とお返事申しましょう　ご懸念なくあり
過ぎがてにとまらせたまへるを、いかが聞こえさせむ。うしろやす
女房たちはあざ笑って　のままを
くを」と言へば、女どもうち笑ひて、「変らせたまふ御ありさまな
お心変りなさるような姫君のご気性ならば　お移りにならないことがありましょうか
らば、かかる浅茅が原をうつろひたまはではべりなむや。ただお
しはかりて聞こえさせたまへかし。年経たる人の心にも、たぐひあ

一　訪問を知らせるため、咳払いをすること。
二　前出の乳母子の侍従のこと。
三　聞いたことのある老女の声だと分った。
四　狩衣姿の男が、そっと現れて、しなやかな物腰なので。忍び歩きのお供という役目柄、自然にその感じが動作に出るのである。「狩衣」は、外出用の略服。袖に括りがあり、所々縫い放って、動作に便に仕立てである。
五　神仏や動物が仮に人の姿になって現れたもの。前に「もとより荒れたりし宮のうち、いとど狐の住処になりて」（五七頁）とあった。
六　昔に変らぬお暮しならば（末摘花がほかの男の世話になっているのでないならば）、うちの殿様は、お尋ね申し上げようというお気持も、いまだにお持ちでいらっしゃるようです。
七　今夜も、このまま行き過ぎにくいと、お立ち寄りなさっているのですが。今はじめて末摘花を思い出したのではないように言いなす惟光の気転。
八　荒れ果てた家をいう。歌語。
九　（私が何もご説明申さずとも）ただあたりをご覧になって、ご推察のままをお返事申し上げて下さい。
一〇　長年、いろいろのことを見尽してきた私のような年寄りにも、（末摘花のようなお人は）ほんとにまたとあるまいと。

惟光、蓬の露を払いつつ、源氏を邸内に導く

二「少将」は、女房の呼び名。前に「おぼしわくまじき女」と言ったのは、侍従の叔母だったのである。

三今だしぬけに邸内におはいりになることは、やはり憚られるようにお思いになる。長の無沙汰を重ねて、こうした荒廃した邸に今も暮しているという末摘花の気持もまだしかとはつかめていないからである。

三きちんとしたお歌などさし上げたいのは山々だが。久々の訪れなので、心を打つ歌など詠みおくりたいと思うのである。

四ご経験ずみの、ご返歌の遅さの方も相変らずだったならば。（末摘花二六一頁参照）

世にもまれなお身の上を拝しながら過してまいりました

らじとのみ、めづらかなる世をこそは見たてまつり過ごしはべれ」と、ぽつぽつと話し出しては　ややくづし出でて、問はず語りもしそうな様子が　問はず語りもしつべきが、面倒に思われたので　むつかしければ、

（惟光）「よしよし。とりあえず　まづ、これこれだと申し上げよう　かくなむと聞こえさせむ」とて参りぬ。

（源氏）「などかいと久しかりつる。どうしてひどく遅かったのか　いかにぞ。昔のあとも見えぬ蓬のしげさかな」とのたまへば、（惟光）「しかしかなむ、これこれの次第で　たどり寄りてはべりつる。やっと捜し出して会ってまいりました

侍従が叔母の少将といひはべりし老人なむ、変らぬ声にてはべりつる」と、ありさま聞こゆ。〔源氏は〕大層気の毒に思われいみじうあはれに、かかるしげきなかに、草茫々の

何ごころちして過ぐしたまふらむ、今まで訪はざりけるよと、わが御心の情なさもおぼし知らる。（源氏）「いかがすべき。どうしたものだろう　かかる忍びありきも容易にできそうにないから　とても立ち寄れまい　かたかるべきを、かかるついでならではえ立ち寄らじ。昔のままに過しているというのなら　変らぬありさまならば、いかにもさもあろうと　げにさこそはあらめと、おしはからるる人ざまになむ」とはのたまひながら、姫の人柄だ　ふと入りたまはむこと、なほつつましうおぼさる。ゆゑある御消息もいと聞こえまほしけれど、見たまひしほどの口遅さもまだ変らずは、惟光御使の立ちわづらはむもいとほしう、待ちあぐねて迷惑するのも気の毒なので

一 捜し捜ししてでも私は尋ねよう、道もないほどに深く茂った草のもとに、昔の人の変らぬ心を。「蓬のもと」を「もとの心」に言い掛ける。

二 惟光は騎馬でお供していたと見える。惟光が源氏を案内するこの情景は、源氏物語絵巻に描かれている（図録六参照）。

三 雨の雫。催馬楽、律「東屋」の「東屋の　真屋のあまりの　その　雨そそき　われ立ち濡れぬ　殿戸ひらかせ／かすがひも　とざしもあらばこそ　その殿戸　われ鎖さめ　おしひらいて来ませ　われや人妻」による。女を訪うこの場の情景にふさわしい措辞。

四 お傘がございます。全く（あの古歌のとおり）、木の下露は雨よりひどうございます。「みさぶらひみ笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」（『古今集』巻二十、東歌。『古今六帖』一、露）による。「みさぶらひ」は、侍の方よ、と呼びかけた言葉。

五 直衣の下に着ける袴。裾を紐で括っている。

六 末摘花の巻に「御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて」（二七二頁）とあった。

七 （源氏の君ともあろう方が）まことに格好もつかないが。「無徳」は、不体裁。

源氏を迎える末摘花

八 いくら何でも（源氏はきっとお出でになるに違いない）と、じっと待ち暮していらっしゃったご期待通り。

九 六六頁参照。

思いとどまられた　とてもお踏み分けになることはかなわぬほど草むらの露が　いっぱいでございます　おはいりなさいますように

おぼしとどめつ。惟光も、「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ、入らせたまふべき」と聞こゆれば、

（源氏）尋ねてもわれこそとはめ道もなく
深き蓬のもとの心を

構わず　〔惟光は〕お足もとの露を

とひとりごちて、なほ下りたまへば、御さきの露を、馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそけば、「（惟光）御傘さぶらふ。げに木の下露は、雨にまさりて」と聞こゆ。

濡れてしまったようだ　〔源氏が〕　その場にいて　気楽であった

御指貫の裾は、いたうそほちぬめり。昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて、入りたまふにつけても、いと無徳なるを、立ちまじり見る人なきぞ心やすかりける。

とても気のひけるみすぼらしいお身なりで　〔源氏に〕　気づまりに　不愉快に思わ

末摘花

姫君は、さりともと待ち過ぐしたまへる心もしるく、うれしけれど、いとはづかしき御ありさまにて対面せむもいとつつましくおぼしたり。大弐の北の方のたてまつり置きし御衣どもをも、心ゆかず

一〇 衣類を入れて、香を移らせるための唐櫃。「唐櫃」は、一巻桐壺三八頁注一二参照。

一一 前に、大弐の北の方が訪れた時、「あさましう煤けたる几帳さし出でて」（六七頁）とあったもの。

一二（あなたの方では）それほどにもお尋ね下さらなかったことが恨めしくて。「さしも」は、自分が思っているほどには、の意。「おどろかす」は、ここでは便りをすること。

一三 あのしるしの杉ではありませんが、お邸の木立がいかにも人待ち顔にはっきり目につきましたので。「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）を引く。前に「見しこちする木立かな」（七二頁）と言って立ち止ったことをいう。

一四 通り過ぎることができませんで、あなたとの根くらべにとうとう負けてしまいました。

一五 几帳の垂れ絹。

一六 こんな草深いお邸に、長の年月ひっそりと暮してこられたおいたわしさは、一通りには思われませず、加えて、私自身いつまでも心変りせぬ男ですので。

一七 誰に対しても同じことだと大目に見て下さるでしょう。須磨流謫中の無沙汰は、末摘花に限ったことではないのだから、の意。

源氏、末摘花と唱和

（この老女たちが）見向きもなさらなかったのを（れた人のくれた物なので）おぼされしゆかりに、見入れたまはざりけるを、この人々の、香の御唐櫃に入れたりけるが、いとなつかしき香したるをたてまつりければ、いかがはせむに、着かへたまひて、かの煤けたる御几帳引き寄せておはす。（お部屋に）入りたまひて、（源氏）長年ご無沙汰しましたが「年ごろの隔てにも、心ばかりは変らずなむ、思ひやりきこえつるを、（お案じ申し上げていましたのに）さしもおどろかいたまはぬ恨めしさに、今までこころみきこえつるを、（お気持をためしていたのですが）杉ならぬ木立のしるさに、（恥ずかしそうにして）過ぎでなむ、負けきこえにける」とて、（すぐにも）帷をすこしかきやりたまへれば、（末摘花は）例のいとつつましげに、とみにもいらへきこえたまはず。（こうまでしてあばら屋をお尋ね下さったお志が並々でないのに）かくばかり分け入りたまへるが浅からぬに、（心をふるいおこして）思ひおこしてぞ、ほのかに聞こえ出でたまひける。

（源氏）一六「かかる草隠れに過ぐしたまひける年月のあはれもおろかならず、また変らぬ心ならひに、（あなたのお気持もしかとは確かめられぬまま）人の御心のうちもたどり知らずながら、（露に濡れながらわざわざお尋ねした気持などをどうお思いですか）分け入りはべりつる露けさなどをいかがおぼす。（今までのご無沙汰は）年ごろのおこたり、（これは）はた、なべての世におぼしゆるすらむ。（今後お心にかなわぬことがありましたら）今よりのちの御心にかなは

一　お約束に背いたという罪も負いましょう。「いとどこそまさりにまされ忘れじと言ひしにたがふことのつらさは」（『奥入』所引）

二　さほど深くも思っていらっしゃらないことでも、いかにも愛しているふうに、お上手におっしゃることもいろいろあるようだ。源氏のすぐれた能力の一つとして肯定している。

三　（古歌にあるように）自分が植えたというのではないが。「引き植ゑし人はむべこそ老いにけれ松の木高くなりにけるかな」（『後撰集』巻十五雑一、躬恒）。この松は、前出の「おほきなる松に藤の咲きかかりて」（七二頁）とあったもの。

四　松に掛る藤の花を通り過ぎがたく思ったのは、松に見覚えがあったからでした、変らずに待つ、そのことが思われたからでした。「松」に「待つ」を掛ける。下の句は、「杉ならぬ木立のしるさに、え過ぎでなむ、負けきこえにける」（七七頁）と言ったのを踏まえる。

五　そのうちゆっくりと田舎住いに落ちぶれた身の上話もみな申し上げましょう。「思ひきや鄙の別れにおとろへて海士の縄たき漁せむとは」（『古今集』巻十八雑下、隠岐の国に流されてはべりける時によめる　篁朝臣）による。

六　何の疑いもなく思われますのも。自分以外に頼る男がいるなどとは思いもせず、の意。

七　長の年月、ひたすらお待ちするかいもなかった私の家を、ただ藤の花を愛でるついでにお立ち寄り下さざらむなむ、言ひしに違ふ罪も負ふべき」など、さしもおぼされぬことも、情々しう聞こえなしたまふことどももあめり。立ちとどまりたまはむも、所のさまよりはじめ、まばゆき御ありさまなれば、つきづきしうのたまひすべして出でたまひなむとす。引き植ゑしならねど、松の木高くなりにける年月のほどもあはれに、夢のやうなる御身のありさまもおぼし続けらる。

（源氏）「藤波のうち過ぎがたく見えつるは

松こそ宿のしるしなりけれ

数ふればこよなう積りぬらむかし。都に変りにけることの多かりけるも、さまざまあはれになむ。今のどかにぞ鄙の別れにおとろへし世の物語も聞こえ尽くすべき。年経たまへらむ春秋の暮らしがたさなども、誰にかはうれへたまはむと、うらもなくおぼゆるも、かつはあやしうなむ」など聞こえたまへば、

（末摘花）

年を経て待つしるしなきわが宿を

（今夜）ここにお泊りになろうにも
何もかも目もあてられぬご様子なので
お邸の様子
適当に言い逃れをおっしゃって
浮き沈みの激しかったお身の上も
年月がたったようですね
あれもこれも心が痛みます
今まで過してこられた折ふしごとのお暮しのご苦労なども
〔私以外に〕誰にお訴えになろうかと
みればおかしなことです
考えて

ただけなのですね。今夜泊らぬことを怨んだもの。

八「かの煤けたる御几帳」（七七頁）の陰に末摘花はいる。

九 香の唐櫃に入れてあったお召し物。（七七頁参照）

一〇 源氏が出かけて来たのは、夕月のさし出る頃であった。夕方に出る月（上旬の月）の入りは夜半。

一一 寝殿の西南の妻戸（両開きの板戸）。妻戸のほぼ向いに簀子を隔てて、西の対に通ずる渡殿が本来ならあるはずである。

一二 軒しのぶが生い茂って見る影もない外観よりは。「君しのぶ草にやつるる古里は松虫の音ぞ悲しかりける」（『古今集』巻四秋上、読人しらず）による。

一三 未詳。『奥入』に、昔、顔叔子という婦人が、夫の留守中、夫の疑いを避けるために、塔の壁を壊し、夜通し明りをつけていたという、貞淑な女の話をあげる。

一四 その物語の女と同じような有様で。ほかの男に頼ろうとしないで、貧乏暮しを続けたことをいう。

一五 末摘花をそういう人として（恋人としてではなく、庇護すべき人として）忘れずお世話しようと、おいたわしく思っていたのに。

一六 薄情者だと思われていたことだろうと。「れ」は受身の助動詞。

一七 そちらと比べても大した違いはないので、末摘花の欠点も大目に見られたのであった。「目移し」は、あるものを見ていた目を転じて、ほかのものを見ること。

花のたよりに過ぎぬばかりか

と忍びやかにうちみじろきたまへるけはひも、袖の香も、昔よりは落着いて女らしくなられたのではないかと ねびまさりたまへるにやとおぼさる。月入り方になりて、西の妻戸のあきたるより、さはるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りな朽ち果て ければ、いとはなやかにさし入りたれば、あたりあたり見ゆるに、そこかしこが照らし出されて ているので「月光が」 昔に変らぬ御しつらひのさまなど、しのぶ草にやつれたる上の見るめよりは、みやびかに見ゆるを、昔物語に、塔こぼちたる人もありけるをおぼしあはするに、同じさまにて年古りにけるもあはれなり。

いちずに恥じらっている女君の様子が ひたぶるにものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなるも、気品があるのも 〔源氏は〕奥ゆかしく思われて 心にくくおぼされて、さるかたにて忘れじと心苦しく思ひしを、年 何年かは ごろさまざまのもの思ひにほれぼれしくて隔てつるほど、つらしと うっかりして訪れなかった間 思はれつらむといとほしくおぼす。かの花散里も、あざやかに今め 人目について当世風に といったふうには派手になさらぬ所なので かしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎 多う隠れにけり。

源氏、末摘花を庇護し、人人、常陸の宮邸に集まる

一 賀茂の祭。四月中の酉の日に行われる。「御禊」は、祭に先立つ午の日（未の日のことも）、斎院が賀茂川で禊を行うこと。（二巻葵六八頁参照）

二 しかるべき方々（源氏の庇護を受けている女君）には、みな気をつけてお上げになる。献上の品々をそれぞれの方に配るのである。

三 『湖月抄』師説は、やがて二条の東の院に移すつもりなので、築地塀を築かず、板垣で応急の処置をしたのだという。

四 このように、常陸の宮の姫君をわざわざ捜し出されたと、人が噂を耳にするであろうにつけても、（相手が末摘花では）ご自分にとって自慢できる話ではないので。

五 二条の院に大層近い所にお邸をお造らせになっているが。二条の東の院のこと。源氏は帰京以来、この院の造営を急いでいた。（澪標一六頁、三〇頁参照）

六 心にとまる点のある女性を捜し求めなさるものだと、世間の人は承知していたのに。

七 こんなふうに、うって変って。

祭、御禊などのほど、御いそぎどもにことづけて、人のたてまつりたる物いろいろに多かるを、さるべき限り御心加へたまふ。中にもこの宮には、こまやかにおぼし寄りて、むつましき人々に仰せ言賜ひ、下部どもなどつかはして、蓬払はせ、めぐりの見苦しきに、板垣といふもの、うち堅めつくろはせたまふ。かう尋ね出でたまへりと聞き伝へむにつけても、わが御ため面目なければ、わたりたまふことはなし。御文いとこまやかに書きたまひて、一条の院いと近き所を造らせたまふを、「そこになむわたしたてまつるべき。よろしき童女など、求めさぶらはせたまへ」など、人々の上までおぼしやりつつ、とぶらひきこえたまへば、かくあやしき蓬のもとには置き所なきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きてよろこびきこえける。なげの御すさびにても、おしなべたる世の常の人をば目とどめ耳たてたまはず、世にすこしこれはと思ほえ、ここちとまる節あるあたりを尋ね寄りたまふものと人の知りたるに、かく引き

（そのいろいろなお支度にということで）
（こまごましたことまでお気をつけられて）
（腹心の家臣たちに）
（末摘花）
（下男）
（宮邸に）
（塀がくずれて見苦しいので）
（源氏）
（源氏の方から）訪れ
（末摘花に）
（なさることはない）
（お移し申すつもりです）
（見苦しか）
（捜して仕えさせておいて下さい）
（侍女たち）
（こんなみすぼらしいあばら屋には身に余る）
（気をつけてお上げなさるので）
（女房連中も）
（源氏のお邸の方に）
（お礼を申し上）
（ほどの思いで）
（並々の平凡な女性には）
（源氏は）一時のおたわむれでも
（げた）
（世間から少しこれはと注目され）
（ほ）
（ん）
（ち）
（ま）
（か）
（く）

八 一体どんなおつもりだったのであろう。これも前世からのご宿縁であったのであろう。草子地。

九 あちこちに、我先にと散り散りに去っていった奥向きの女房や下働きの者たちで。「上」は、主人の御前を意味する。

一〇（末摘花は）お気立てなどは、それはもう、内気さの度が過ぎるほど人がよくていらっしゃるお人柄なので。

一一 大したこともない、つまらぬ受領などといった家に仕えている者は。「なま」は、未熟、不完全の意。

一二 今まで経験したこともない、居ごこちの悪い思いをする者もあって。受領は、物質的には豊かであるが、田舎廻りの生活で、教養や品位に欠けることが多い。「なま受領」なら、実力、教養ともに一段と劣ったであろう。

一三 羽振りもよくなって。「にほふ」は、繁栄する意。

一四 庭内に引き入れて、池に注ぐ流れ（図録六参照）。「かき払ひ」は、落葉や土砂の堆積を取り払って、流れをよくすること。

一五 大して目をかけて頂けない下家司で。「下家司」は、下級の家司で、四位五位の者を「家司」「上家司」と称するのに対する。

一六（源氏の）ご意向を伺いながら。

違へ、何ごともなのめにだにあらぬ御ありさまをものめかし出でた（人並みでさえないお人柄の方を／ひとかどの方のようにお扱）まふは、いかなりける御心にかありけむ。これも昔の契りなめりかし。

今は限りとあなづり果てて、さまざまにきほひ散りあかれし上下の人々、われもわれも参らむとあらそひ出づる人もあり。心ばへなど、はた、埋れいたきまでよくおはする御ありさまに、心やすくならひて、異なることなきなま受領などやうの家にある人は、ならはずはしたなきここちするもありて、うちつけの心みえに参り帰る。

（馬鹿にしきって／帰参しようと／願い出る者もある／気楽な宮仕えに／馴れて）

源氏君は、いにしへにもまさりたる御勢のほどにて、ものの思ひやりもまして添ひたまひにければ、こまやかにおぼしおきてたるに、ほひ出でて、宮のうちやうやう人目見え、木草の葉もただすぐくあはれに見えなされしを、遣水かき払ひ、前栽のもとだちも涼しうしなどして、ことなるおぼえなき下家司の、ことにつかへまほしきは、かく御心とどめておぼさるることなめりと見取りて、御けし

（帰京後は一段と／こまごまとお指図をなさったので／ご権勢で／てきめんに変る心をあけすけに／人の姿も見え／常陸の宮邸に／荒れ果てても／根もともすっきり下草を刈り／のさばしげに見えていたのに／取ったりして／格別に忠勤を励みたい者は／〔末摘花を〕ご寵愛になるらしいと見て取って／〔源氏が〕）

き賜はりつつ、追従しつかうまつる。

二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、のちはわたしたてまつりたまひける。対面したまふことなどは、いとかたけれど、近きしめのほどにて、おほかたにもわたりたまふに、さしのぞきなどしたまひつつ、いとあなづらはしげにもてなしきこえたまはず。かの大弐の北の方上りておどろき思へるさま、侍従が、うれしきものの、今しばし待ちきこえざりける心浅さをはづかしう思へるほどなどを、今すこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたう、うるさく、もの憂ければなむ。今またもついであらむをりに、思ひ出でてなむ聞こゆべきとぞ。

一（末摘花の）ご機嫌を伺って、お仕え申し上げる。「追従」は、こびへつらうこと。

その後の、末摘花の仕合せな暮し

二 二条の東の院。（前出八〇頁）

三 ご本邸（二条の院）に近いお敷地内のことなので。「しめ」は、一区域を限り、領有を示すしるし。

四（源氏が）普通のご用などで、こちら（東の院）におこしになる折々には、（末摘花のお部屋に）ちょっとご挨拶にお顔を出されたりして。「おほかたに」は、特に末摘花に逢いに行くのではなく、ほかの用事で、ということ。

五 大宰の大弐の任期は五年。

六 もう少し、聞かれずともお話ししたいのですが。「かの大弐の北の方」以下「聞こゆべき」まで、物語の語り手の言葉。実際に、末摘花の身の上を見聞したことのある者が語る体。

七 大層頭が痛く、面倒くさく、気が進みませんので。この巻を終ろうとする作者の技巧。

八 ……ということです。最初の語り手の話を聞き伝えた者が付け加えた体の言葉。

関(せき)屋(や)

この巻は、前の蓬生の巻が、源氏の須磨謫居以来の末摘花の動静を伝え、源氏との再会を果したのに続いて、空蟬との邂逅を書いている。時は、源氏二十九歳の秋の終り、逢坂の関がその舞台である。「逢う」という言葉に掛けて、しばしば歌に詠まれる名所であることが配慮されている。巻名の「関屋」は、物語本文中、源氏の美々しい行列が「関屋より、さとはづれ出でたる」と書かれている本巻中の見せ場に用いられた言葉である。

空蟬は、桐壺院崩御の翌年、源氏二十四歳の年、夫の伊予の介が常陸の介に任じられたのに従って、はるか東国に下向した。やがて、源氏失脚の噂が常陸まで伝わって来たが、いたずらに胸を痛めるばかりで、音信は叶わなかった。四年の常陸在任中に、源氏はめでたく都に帰還し、昔に優る勢いで、あちこちの社寺へお礼参りをする。任明けて翌年の秋、常陸の介一行は上京した。折から、石山詣での源氏の行列と行き会い、昔、文使いの役に親しく召し使われた小君、今は衛門の佐が、また空蟬との間を往復し、空蟬は源氏の変らぬ心に、あらためてわが身のつらい宿世を悲しく思った。

作者は、前の蓬生の巻と同じく、巻末に、この年からずっとあとまでの空蟬の身の上の概略を述べており、彼女の物語も、この巻で終ることが暗示されている。空蟬は夫の死後尼になり、恋物語のヒロインの役を降りるのである。

一 伊予の介といった者は。空蟬の夫。一巻帚木八二～八六頁、同夕顔一三〇頁、一七八頁に見える。
二 桐壺院の崩御は、源氏二十三歳の冬、須磨退居の三年前のことである。（一巻賢木一四〇頁参照）
三 常陸の介に任じられて下向したので。常陸の国守は、大守といって親王が任命されるが赴任せず、介が実務を執り行った。

空蟬、夫の任地常陸に下向する

四 空蟬のこと。帚木巻末の贈答にちなむ呼び名。
五 筑波嶺の山を吹き越す風に託すのでは、頼りない気がして。「甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人にもがもや言つてやらむ」（『古今集』巻二十、東歌）を踏まえ、常陸にある筑波山に換え用いた。常陸からではあまりに遠いので、途中を不安に思って音信を控えたことをいう。
六 常陸の介の任期は四年。源氏二十四歳の年、常陸下向、二十八歳帰洛の年が任期満了となる。
七 常陸の介一行が、逢坂の関に入るちょうどその日。逢坂の関は、近江と山城の境、逢坂山にあり、東国に向う関門である（図録四参照）。

帰洛の途次、逢坂の関で、源氏に再会

八 石山寺。滋賀県大津市にある。（図録四参照）
九 須磨での立願の叶ったお礼参りに。
一〇 常陸の介の先妻の子。（帚木八一頁以下参照）
一一 当時、よく行われた関迎え（国境の関所まで出迎えること）の習慣による。

伊予の介といひしは、故院かくれさせたまひてまたの年、常陸になりて下りしかば、かの帚木もいざなはれにけり。須磨の御旅居も（その翌年）（連れられて行ったのだった〔源氏の〕）はるかに聞きて、人知れず思ひやりきこえぬにしもあらざりしかど、（はるか遠国で）（お案じ申し上げないでもなかったが）〔その思いを〕伝へ聞こゆべきよすがだになくて、筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたるここちして、いささかの伝へだになくて年月かさなりにけり。（お伝え申し上げるつてもなくて）（便りをすることもなくて）限れることもなかりし御旅居なれど、京に帰り住みたまひて、また（何年と年限があったわけでもない）〔源氏が〕の年の秋ぞ、常陸は上りける。

関入る日しも、この殿、石山に御願果しに詣でたまひけり。京より、かの紀伊の守などいひし子ども、迎へに来たる人々、この殿かく詣でたまふべしと告げければ、道のほど騒がしかりなむものぞとて、まだ暁より急ぎけるを、女車多く、所狭うゆるぎ来るに、日

（源氏）（源氏が）（途中混雑することだろうということで）〔一行に〕（まだ夜明け前から）（道一杯に練って来るので）

一　大津市の湖岸。歌にもよく詠まれる。（図録四参照）

二　京都東山連山の一峰（図録四参照）。打出の浜までは一里余あり、源氏の行列の盛んなさまが窺える。

三　道を避け切れないほど大勢入り込んで来たので。「梓弓春の山べを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける」（『古今集』巻二春下、貫之）の言葉を借りる。

四　逢坂の関付近をいう。

五　牛車の牛を外し、轅を下ろす。

六　それでも一族縁類が多いと見える。常陸の介一行も、地方官としては相当の勢力なのである。

七　空蟬主従の乗る車である。

八　伊勢の斎宮のご下向かなんぞといった折の、見物の女房車の有様が思い出されなさる。斎宮が伊勢に下るには逢坂山を越える。

九　晩秋九月下旬の頃なので。

源氏、衛門の佐を介して、空蟬に文をやる

一〇　関所の建物。

一一　色さまざまの狩襖。「襖」は、狩衣に裏のついたもの。位階により染色が異なる。

一二　よく似合った刺繍の模様。

一三　絞り染め。旅行着は派手なものが好まれた。

一四　空蟬の弟。源氏と空蟬の間の文使いをした（帚木八五頁以下参照）。今、常陸の介一行の中にいる。

一五　衛門府の次官。従五位上相当。

一六　今日の関までのお出迎えは、おろそかにはお思い

高くなった
たけぬ。打出の浜来るほどに、源氏殿は粟田山越えたまひぬとて、御前
前駆の人々が
の人々、道もさりあへず来こみぬれば、関山に皆下りゐて、ここか
車から降りて
うやうやしく坐って〔源氏を〕
しこの杉の下に車どもかきおろし、木隠れにゐかしこまりて過ぐし
一部は
〔一部は〕前日に出発させたりしたが
たてまつる。車など、かたへは後らかし、先に立てなどしたれど、
衣裳のかさねの色合
なほ類ひろく見ゆ。車十ばかりぞ、袖口、ものの色あひなども漏り
趣味がよくて
出でて見えたる、田舎びず、よしありて、斎宮の御下りなにぞやう
源氏　世にお栄えあそばしての久々のご外出のこととて
のをりの物見車おぼし出でらる。殿もかく世に栄え出でたまふめづ
〔空蟬たちの車に〕　数も知れぬ
らしさに、数もなき御前ども、皆目とどめたり。
まさって見え
九月晦日なれば、紅葉の色々こきまぜ、霜枯れの草、むらむらを
さっと現れ出た〔源氏一行の〕旅装の者たちの　濃く薄くきれい
に色づいて一面に見えるのに
かしう見えわたるに、関屋より、さとはづれ出でたる旅姿どもの、
こうした旅行着として
色々の襖のつきづきしき縫物、括り染めのさまも、さるかたにをか
〔源氏の〕　風情がある
しう見ゆ。御車は簾おろしたまひて、かの昔の小君、今は衛門の佐
（源氏）
なるを召し寄せて、「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ」な
伝言なさる　ほんとうにしんみりと
どのたまふ御心のうち、いとあはれにおぼし出づること多かれど、

になりますまい。偶然の再会をわざとこう言った。

一七 一通りのご伝言だけなので、何のかいもない。

一八 逢坂の関を越えて往く者と来る者と、行き違って逢うことが出来ず、それを悲しんでとめどもなく流す私の涙を、絶えず流れる関の清水と人は見ることであろうか。「堰き止め」に「関」を掛ける。「清水」は、当時逢坂の関にあった「関の清水」のこと。この歌、空蟬のひそかな独詠である。

一九 こうした歌を詠んでも、ご承知になるはずもないと思うと、ほんとに何のかいもない。

二〇 先日、石山詣でのお供をせずに、そのまま行ってしまったお詫びなどを申し上げる。「まかり過ぐ」は「行き過ぐ」の謙譲語。

二一 昔、童であった頃、ずいぶんお身近にかわいがっていらっしゃったので。帚木、空蟬の巻の頃をさす。

二二 従五位下に叙せられること。叙爵といい、当時の貴族社会で、立身の最初の関門とした。

二三 思いがけぬ大事件。源氏の須磨引退をさす。

二四 河内は大国で、国守は従五位上。紀伊は上国、国守は従五位下。

二五 二巻須磨二一九頁、二四〇頁、澪標三四頁参照。

先妻
- 紀伊守（河内守）
- 右近将監
- 伊予介（常陸介）
- 空蟬
  - 小君（衛門佐）

空蟬、源氏と贈答

一七 おほぞうにてかひなし。女も、人知れず昔のこと忘れねば、とりかへしてものあはれなり。（空蟬）一八 行くと来とせきとめがたき涙をや

絶えぬ清水と人は見るらむ

一九 え知りたまはじかしと思ふに、いとかひなし。

石山より出でたまふ御迎へに衛門の佐参れり。一日まかり過ぎしかしこまりなど申す。昔、童にて、いとむつましうらうたきものにしたまひしかば、爵など得しまで、この御徳に隠れたりしを、おぼえぬ世の騒ぎありしころ、ものの聞こえに憚りて、常陸に下りしをぞ、すこし心置きて年ごろはおぼしけれど、色にも出だしたまはず。昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人のうちには数へたまひけり。紀伊の守といひしも、今は河内の守にぞなりにける。その弟の右近の尉解けて御供に下りしをぞ、とりわきてなし出でたまひければ、それにぞ誰も思ひ知りて、などてすこしも世に従ふ心をつかひ

（石山寺参籠）（源氏の）（小君）（源氏のご思顧を蒙っていたのに）（世間の取り沙汰に）（源氏は）（ご不快に今まではお思いだったけれど）（ご家来の中には）（源氏が）（お引き立てになったので）（思い当って）（どうしてあの時少しでも世間に迎合する気持になった）（あの頃を思い起して何となく胸がいっぱいである）

一　この間は、思いがけぬ再会に、前世からの深い約束があったのだと悟りましたが、あなたもそうだとお分り下さったでしょうか。以下、手紙の文面。

二　逢坂の関での偶然の再会に期待を寄せていましたが、やはり無駄でした。何しろ潮ならぬ海ですから。「潮ならぬ海」は、水海、琵琶湖のこと。海ではないので、海松布（見る目）が生えていない、対面できない、の意を含める。「ゆきあふみち」に「近江路」、「かひ」に「貝」を掛ける。「潮満たぬ海と聞けばや世とともにみるめなくして年の経ぬらむ」（『後撰集』巻九恋一、ある所に近江といひける人のもとにつかはしける　貫之）

三　（あなたを）わが物顔の番人が、いかにも羨ましく、しゃくなと思われたことでした。「関守」は、逢坂の関の縁語で、空蟬の夫常陸の介をさす。

四　心の中では、始終（空蟬のことを）思っていて、（昔のことが）たった今のことのような気持のするのが癖になっているので。

五　色めかしい振舞だと、前にもまして嫌われることであろうか。空蟬の巻に「いと深う憎みたまふべかめれば……」（一巻一一六頁）と小君に語ることがあった。

六　いよいよ真似のできぬことと思われます。「昔には」以下、ここまで、須磨にもお供しなかった自分に対する、源氏の隔てのない態度についていう。

七　こんな一時の慰みごとは、無用だとは思いますけむなど思ひ出でける。佐召し寄せて御消息あり。〔空蟬に〕今はおぼし忘れ（普通ならもうお忘れにのだろうなどと）ぬべきことを、心長くもおはするかなと思ひたり。（なりそうなことを）（いつまでも変らぬお方だなと〔衛門佐は〕）

一日は契り知られしを、さはおぼし知りけむや。

わくらばに行きあふ道を頼みしも

なほかひなしや潮ならぬ海

関守の、さもうらやましく、めざましかりしかな。（源氏）長年のご無沙汰ゆえ〔便りをするのも〕面映ゆい気がするがとあり。「年ごろのとだえも、うひうひしくなりにけれど、心にはいつとなく、ただ今のここちするならひになむ。すきずきしう、いとど憎まれむや」とて賜へれば、かたじけなくて持て行きて、「なほ聞こえたまへ。昔にはすこしおぼしのくことあらむと思ひたまふるに、同じやうなる御心のなつかしさなむ、いとどありがたき。すさびごとぞ用なきことと思へど、えこそすくよかに聞こえかへさね。女にては負けきこえたまへらむに、罪ゆるされぬべし」など言ふ。〔空蟬は〕今はましていとはづかしう、よろづのことうひうひしきここちすれ

（昔に比べて少しはお心の隔てもあろうかと思っていましたが）（相変らぬお気持のおやさしさといったら）（かくお返事なさいませ）（〔便りをするのも〕）（〔衛門佐は〕もったいなく思って）（とても気がひけて）（とてもきっぱりとお断り申し上げられません）（女の身としてはほだされてお返事申し上げなさっても）（大目に見られましょう）（きまりが悪い）

が。

八 逢坂の関は、（逢うという名がついていながら）一体どんな関だというので、こう深い嘆きを味わわねばならないのでしょう。「なげき」に「木」を掛けて、実景を詠み込んでいる。

九 恋しさも恨めしさも、忘れがたい一件だったと、心にとどめていらっしゃる人なので。

一〇 「のたまひ動かす」は「言ひ動かす」の尊敬語。恋文をやって、心をひこうとすること。

常陸の介の死と、その後の空蟬

一一 空蟬の夫の常陸の介。常陸の国は、大守の親王が遙任なので、介を守とも呼んだ。

一二 紀伊の守（今は河内の守）以下、先妻腹の子供たち。空蟬との間に子はない（帚木九四頁参照）。

一三 もともと悲しい宿縁のために常陸の介の後妻になったのだが、その夫にも先立たれて、ついにはどんなみじめな身の上に落ちぶれてさまようことになるのであろうかと。

一四 命数はどうしようもないものだから、もっと生きたいと思ってもままならぬものだ。以下「わが子どもの心も知らぬを」までが、常陸の介の感懐。

一五 死んだあとに魂なりと残しておきたいものだ。

一六 自分ではそのつもりでも、命はとりとめることができないものなので。

（空蟬）「逢坂（八）の関やいかなる関なれど、（久しぶりのお便りに）めづらしきにや、（我慢できなかったのであろうか）え忍ばれざりけむ、

しげきなげきの中を分くらむ

（夢のように思われます）夢のやうになむ」と聞こえたり。あはれ（九）もつらさも忘れぬふしとおぼし置かれたる人なれば、（そののち）をりをりはなほ（一〇）のたまひ動かしけり。

かかるほどに、（一一）この常陸の守、老のつもりにや、（病気がちで）なやましくのみして、もの心細かりければ、子ども（一二）に、ただこの（空蟬）君の御ことをのみ言ひ置きて、（遺言して）よろづのこと、ただこの（空蟬の）御心にのみまかせて、（自分の存命の時と変らずお世話せよということばかり）ありつる世に変らでつかうまつれとのみ、明け暮れ言ひけり。女君（空蟬）、心憂き宿世（すくせ）ありて、この人にさへ後（おく）れて、いかなるさまにはふれまどふべきにかあらむと思ひ嘆きたまふを見るに、（常陸介が）命の限りあるものなれば、惜（を）しみとどむべきかたもなし、いかでか、この（空蟬）人の御ために残（一五）し置く魂（たましひ）もがな、（わが子とはいえ気心も知れないのにと）わが子どもの心も知らぬをと、（心配で）うしろめたう悲しきことに言ひ思へど、心（一六）にえとどめぬものにて、（常陸介は）亡（う）せぬ。（しばらくの間）しばしこ

一 亡き父上が、あんなにおっしゃっていたのだからと、心を配るふりをするが。
二 ひたすらわが身が不幸な運命に生れついたせいなのだと思って。
三 前から色好みな気持があって、少しやさしげに振舞うのだった。帚木の巻に「紀伊の守、すき心に、この継母のありさまを、あたらしきものに思ひて」（九六頁）とあった。
四 ご機嫌を取って近づいて。
五 悲しい因縁のある身のために、こうして夫に先立たれたあげく、（継子に口説かれるなどという）とんでもない目まで見ることだと。
六 空蟬に仕えている女房たち。
七 私をお嫌いになったために。尼になられたのでしょうが、という気持を補って読む。
八 などと言って。下の「はべるめる」に掛る。
九 つまらぬおせっかいだ、などと人は申しているようです。世間の評判を伝える語り手の言葉。草子地。

そ、一さのたまひしものをなど、情つくれど、うはべこそあれ、つらきこと多かり。とあるもかかるも世の道理なれば、二身一つの憂きことにて嘆き明かし暮らす。ただこの河内の守のみぞ、三昔よりすき心ありて、すこし情がりける。「あはれにのたまひ置きし、数ならずとも、おぼしうとまでのたまはせよ」など追従し寄りて、いとあさましき心の見えければ、五憂き宿世ある身にて、かく生きとまりて、果て果てはめづらしきことどもを聞き添ふるかなと、人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、尼になりにけり。六ある人々、いふかひなしと思ひ嘆く。守も、七いとつらう、「おのれを厭ひたまふほどに、残りの御齢は多くものしたまふらむ、いかでか過ぐしたまふべき」などぞ、八九あいなのさかしらやなどぞはべるめる。

（冷たい）（うわべはともかく）（仕打ちが）（それもこれも）（〔空蟬は〕）（河内守）（くれぐれもご遺言なさったのですから）（至らぬ者で）（お嫌いにならず何でもおっしゃって下さい）（すが）（何ともあきれた下心が）（誰にもそうとは知らせず）（悟って）（情け）（事態を）（ないことだと）（河内守）（大層うらめしくて）（先の長いお年でしょうに）（これからどうして無事に過されようか）

絵(え)合(あはせ)

この巻は、澪標の巻を受け、一年の空白を置いて続く源氏三十一歳の年の春のことである。

六条の御息所の忘れ形見前斎宮は、藤壺の支持を得て入内した。朱雀院の上皇は大層残念に思ったが、入内当日には心をこめた品々と歌を贈った。源氏は上皇の心中を思いやって、表立った動きはしない。

後宮には、すでに弘徽殿の女御が上っていて、帝とは年齢も近く、ご寵愛もまさっていたが、斎宮の女御が絵に堪能なため、この道を好む帝はいつしか心を移される。弘徽殿の父権中納言は気が気でなく、数々の新作の物語絵で帝のお心を引きつけようとする。源氏も対抗して、伝来の古画を献上する。

かくて、後宮に絵論議の熱が高まり、藤壺の御前で、左右に分れて物語絵合せが行われた。斎宮の女御方は古画を主とし、弘徽殿方ははなやかな近代の絵で優勢を誇ったが、藤壺は左の伊勢物語に心を寄せ、源氏方を後援するのであった。これを見て、源氏は帝の御前での絵合せを催す。当日は藤壺も臨御し、帥の宮を判者に、数々の名品が出されたが、最後に出た源氏の須磨明石の絵日記に勝敗は決した。この行事は、村上天皇の天徳内裏歌合になぞらえて書かれ、おのずから、桐壺帝を延喜の帝に比した時代設定とも合致し、またかの歌合が、前後にその比を見ない盛儀として、後代の模範となったことをも踏まえ、聖代を輔佐する名臣としての源氏の姿を描き出している。巻名「絵合」は、物語中の両度の行事によって名づけられたもので、本文中には見えない言葉である。

一 六条の御息所の姫君。天皇譲位により、斎宮を辞したので、こう呼ぶ（澪標三九頁参照）。
二 ご入内のことを。母御息所の喪（一年）が明けてのちのことである。
三 中宮がご熱心にうながし申される。藤壺の意向で事が行われる体にする相談が、源氏との間になされたこと、澪標四九～五〇頁参照。なお、藤壺はすでに女院になっているが（澪標三一頁）、この巻では前の呼称のまま中宮と呼んでいる。

前斎宮の入内　朱雀院より贈り物をする

四 こまごましたお世話まで、これといったご後見役もいないことだしと（源氏は）お気にかけられるが。
五 源氏。「大殿」は、大臣の敬称。源氏は現在内大臣。
六 朱雀院がお耳になさったらとご遠慮なさって。院の求婚を無視して事を進めた事情、澪標四九頁参照。
七 前斎宮を二条の院にお引き取り申そうと考えていたことも。澪標五〇頁に見える。
八 櫛、鋏、鑷子、髪掻などの化粧道具を入れる箱。（図録一一参照）
九 乱れ箱。手拭やかもじなどを入れ、結髪の時などに用いるという。（図録一一参照）
一〇 薫香を入れた壺を納める箱。（二巻図録一二参照）
一一 薫香の名。これを口に含めば、日がたつにつれて身体、衣服香ばしく、遠く風に匂うとされた。
一二 百歩を過ぎてもっと遠くまで匂うほどに。薫香の合せ方の一つである「百歩の方」にちなんだ表現。

前斎宮の御参りのこと、中宮の御心に入れてもよほしきこえたまふ。こまかなる御とぶらひまで、とり立てたる御後見もなしとおぼしやれど、大殿は、院に聞こしめさむことを憚りたまひて、二条の院にわたしたてまつらむことをもこのたびはおぼしとまりて、ただ知らず顔にもてなしたまへれど、おほかたのことどもは、とりもちて親めききこえたまふ。

振舞っていらっしゃるが　一通りのいろいろなお支度は　引き受けて　親のようにしてお上げになる

朱雀院

院はいとくちをしくおぼしめせど、人わろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の宮、打乱の筥、香壺の筥ども、世の常ならず、くさぐさの御薫物ども、薫衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことにととのへさせたまへり。大臣見たまひもせむにと、かねてよりやお

体裁が悪いので　えもいえぬ見事なお召し物の数々や　入内の当日になって　幾種類もの

源氏がご覧にもなろうかと　前々からお心づもりな

一 これこれでございますと、女別当がお目にかける。女別当は、前斎宮の女房（澪標四四頁参照）。
二 櫛の箱は一双（二つ一組）という。（『類聚雑要抄』）
三 飾り櫛を入れた箱。櫛の箱は外箱の中に小箱を納め、その一つに挿櫛の箱がある。（図録一一参照）
四 贈り物の箱や饗膳、折敷などに装飾としてつける松、梅などの作り物の枝。（図録一一参照）
五 伊勢にお旅立ちの時、お身に添えた黄楊の小櫛のことを口実に、遠く離れた二人の仲でいよと神がおとめになったのでしょうか。伊勢下向の折、天皇自ら斎宮の額に黄楊の小櫛をさし、「京に帰らぬように」と言ったことを踏まえる（二巻賢木一三七頁注一二参照）。この歌を書いた紙を、作り物の枝に結びつけてあったのである。
六 ご自分のお心癖として、ままならぬ恋にひかれるわが身を顧みては。四行あとの「おぼし続けたまふ」に掛る。
七 あの、斎宮がご下向の折（親しくご対面になって）、院のみ心の内に、さぞ好ましく思われたであろうことや。
八 それを、こう何年もたって、斎宮が帰京なさって。
九 入内という、御意に反することが起ったのをどうお思いであろうか。以下に、その心中を忖度する。
一〇 須磨退居については、恨めしくもお思い申し上げたけれども。

ぼしまうけけむ、いとわざとがましかめり。（いかにも特別誂えといった感じである）源氏〔六条のお邸に〕殿もわたりたまへるほどにて、かくなむと女別当御覧ぜさす。〔源氏は〕ただ御櫛の筥の片つかたを見たまふに、尽きせずこまかになまめきて、（この上もなく精緻な細工で優美で）めづらしきさまなり。
挿櫛の筥の心葉に、

（朱雀院）別れ路に添へし小櫛をかことにて
はるけき仲と神やいさめし

（さったのであろうか）

大臣これを御覧じつけて、（あれこれお考えになるのに）おぼしめぐらすに、いとかたじけなくいとほしくて、（たわしくて）わが御心のならひ、あやにくなる身を抓みて、（大層恐れ多く）かの下りたまひしほど、御心に思ほしけむこと、かう年経て帰りたまひて、（ようやくかつてのご希望をもおとげになれるという時に）その御心ざしをもとげたまふべきほどに、かかる違ひめのあるをいかにおぼすらむ、（ご譲位になり）御位を去り、（ご身辺もひっそりして）もの静かにて、世をうらめしとやおぼすらむ、など、（自分がそんな目にあえば平静ではいられないことだと）われになりて心動くべきふしかなと、おぼし続けたまふに、いとほしく、（お気の毒で）何にかくあながちなることを思ひはじめて、（どうしてこんな無理なことを思い立って）心苦しく思ほしなやますらむ、つらしとも思ひきこえしかど、また（おいたわしくも院のお気持を悩ますのだろう）

一一 ほかに（院からの）お手紙も、何とお書きでしたか。

一二 大層具合が悪いので。手紙の内容も、前出の歌と同じようなことではないかと察せられたからである。

一三 お返事を申されないのも、まことにやさしみがなく、恐れ多いでしょう。

一四（院が）大層優雅でお美しくて、ひどくお泣きになったご様子を。大極殿の儀式の時、「帝、御心動きて、別れの櫛たてまつりたまふほど、いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ」（賢木一三七頁）とあったことをさす。

一五 亡き母六条の御息所。澪標四三頁に死去。

一六 はるか昔、お別れに当り、「帰るな」と仰せられた一言も、こうして帰京しますと、今はかえってもの悲しく存じられます。

（またおやさしく情の深いお気持の方なのに）なつかしうあはれなる御心ばへを、（源氏は）など思ひ乱れたまひて、とばかり（しばらく）（物思いに沈んでいらっしゃる）うちながめたまへり。

（源氏）「この御返りは、（このご返歌は）いかやうにか聞こえさせたまふらむ。（どのように申し上げなさるのでしょうか）二また御消息（せうそこ）もいかが」など聞こえたまへど、三いとかたはらいたければ、（女別当は）御文は（さし出せずにいる）え引き出でず。（前斎宮ご気分もお悪くて）宮はなやましげにおぼして、（大層気の進まぬご様子）御返りいともの憂くしたまへど、（女房）「聞こえたまはざらむも、（だったが）いと情なく、（なさけ）かたじけなかるべし」と、人々（おすすめ申すのに困っている様子を）そそのかしわづらひきこゆるけはひを聞きたまひて、（源氏）「いとあるまじき御ことなり。（形だけでもお返事なさいませ）しるしばかり聞こえさせたまへ」と聞こえたまふも、（前斎宮は）いとはづかしけれど、（伊勢下向の）いにしへおぼし出づるに、一四いとなまめき、きよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを、（何となく悲しく思って拝見していらっしゃった）そこはかとなくあはれと見たてまつりたまひし（ご自分の）御幼心も、（をさな）ただ今のこととおぼゆるに、一五故御息所の（みやすどころ）御ことなど、（次々ともの悲しくお思い出しになって）かきつらねあはれにおぼされて、ただかく、（次のように）

（前斎宮）一六別るとてはるかに言ひし一言も（ひとこと）

一 とだけ、書かれていたであろうか。草子地。
二 お使いの労をねぎらって賜る物。祝儀。多く衣類、絹等である。「品々に」は、使者たちの身分に応じて差をつけて、の意。
三 朱雀院のご様子は、女にして拝見したいぐらいお美しいのに。以下、「ものしとやおぼすらむ」まで、源氏の心中。
四 前斎宮のお年格好もちょうどよいくらいで、大層お似合いの仲と見えるのに。朱雀院はこの年、三十四歳。斎宮は二十二歳。
五 帝はまだ大層子供っぽくていらっしゃるようなのに。この年、十三歳。
六 こうして、無理の多い筋にお運び申し上げるのを。
七 源氏は、いやな邪推までなさって。前斎宮の心情にまで立ち入っていろいろ考えることをいう。
八 ご信頼になっていられる修理の宰相に。「修理の宰相」は、参議兼修理の大夫（修理職の長官）。従四位下相当。修理職は、宮中の造営、道具類の調達管理、装飾のことをつかさどる。
九 母御息所在世中から、「よき女房など多く」（澪標三九頁）、「女別当、内侍などいふ人々、あるは離れたてまつらぬわかむどほりなどにて、心ばせある人々多かるべし」（同四六頁）という有様であった。
一〇 ああ、（御息所が）ご存命ならば、どんなに晴れがましいことと思って、大切にお世話なさることだろ

源氏参内し、六条の御息所を偲ぶ

かへりてものは今ぞ悲しき

とばかりやありけむ。御使の禄、品々に賜はす。大臣は御返りをいとゆかしうおぼせど、え聞こえたまはず。

院の御ありさまは、女にて見たてまつらまほしきを、この御けはひも似げなからず、いとよき御あはひなめるを、内裏はまだいといはけなくおはしますめるに、かく引き違へきこゆるを、人知れず、ものしとやおぼすらむなど、にくきことをさへおぼしやりて、胸つぶれたまへど、今日になりておぼしとどむべきことにしあらねば、事どもあるべきさまにのたまひおきて、むつましうおぼす修理の宰相をくはしくつかうまつるべくのたまひて、内裏に参りたまひぬ。うけばりたる親ざまにはきこしめされじと、院をつつみきこえたまひて、御とぶらひばかりと見せたまへり。よき女房などはもとより多かる宮なれば、里がちなりしも参りつどひて、いと二なく、けはひあらまほし。あはれ、おはせましかば、いかにかひありておぼし

一 拝見したいと
二 お申し出にはなれない
三 〔前斎宮の〕
四 〔前斎宮は〕
五 お胸を
六 〔ご入内を〕
七 〔お付きの者に〕お命じになって
八 こまごまとお世話申し上げるようにおっしゃって
九 ただお祝いのご挨拶程度のことと
一〇 実家に引き籠りがちだった者も参り集まって
一一 〔宮邸の〕
一二 不快だと
一三 痛めなさるが
一四 諸事しかるべく行うよう
一五 表立っての親代りのようにはお考えいただかないようにと
一六 お憚り申し上げなさって
一七 有様は理想的である

うと。源氏の心中の思い。

一一（御息所は）特別な関係を抜きにして考えるならば、惜しむべきすばらしいお人柄だった。「あたらし」は、惜しくもったいないの意。「人の御ありさま」で一纏まりの語。

斎宮の女御入内　帝、弘徽殿の女御に親しむ

一二藤壺が日常過す自邸は三条の宮である。（賢木一四二頁参照）

一三夜の御殿（清涼殿の帝の御寝の間）に参上なさった。（一巻図録五参照）

一四弘徽殿の女御。権中納言（もとの頭の中将）の姫君。（澪標五〇頁参照）

いたづかましと、昔の御心ざまおぼし出づるに、おほかたの世につけては、惜しうあたらしかりし人の御ありさまぞや、さこそえあらぬものなりけれ、よしありしかたはなほすぐれて、もののをりごとに思ひ出できこえたまふ。

中宮も内裏にぞおはしましける。上は、帝も新しいお妃が入内なさると大層かわいらしく緊張なさっていらっしゃると聞こしめしければ、いとうつくしう御心づかひしておはします。お年のわりにはずいぶんおませで大人っぽくていらっしゃるほどよりはいみじうされおとなびたまへり。宮も、「かくはづかし入内なさるのですからき人参りたまふを、御心づかひして、見えたてまつらせたまへ」と聞こえたまひけり。人知れず、大人ははづかしうやあらむとおぼしけるを、いたう夜ふけてまうのぼりたまへり。いとつましげにおほどかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかしとおぼしけり。弘徽殿には御覧じつきたれば、むつましうあはれに、心やすく思ほし、これは、人ざまもいたうしめり、はづかしげに、大臣の御もてなしも、やむごとなくよそほしければ、あなづ

藤壺
前斎宮は
前斎宮
源氏のお扱いも
お会い申し上げなさいませ
年上の方は気詰りであろうかと
親しみ深くなつかしく
お馴染みになっているので
人柄も大層落着いて
大層恥ずしい深く
こうした立派な方が
小柄でかよわい感じでいらっしゃるので
〔帝は〕大層
とりしたお方で
風流でいらした点はやはり抜群だと
あのようにはとても
できぬものだ
気がねなく
気がひけるほど
重々しいので
軽々しくは
どこで

一 后妃が夜の御殿に侍ること。
二 気のおけぬ子供同士のお遊びに。
三 弘徽殿方へおいでになりがちでいらっしゃる。澪標にも「上もよき御遊びがたきにおぼいたり」（五一頁）とあった。弘徽殿の女御は帝より一歳年上。
四 権中納言（弘徽殿の女御の父君）は、将来立后を期待して、（入内を）お申し出になったのに。

源氏、朱雀院と往時を語る

五 朱雀院におかせられては、あの櫛の箱につけたお歌のご返歌をご覧になったにつけても。斎宮からの「別るとて」の歌をさす。
六 前にもお口になさっているので。賢木の巻に「またすきすきしき歌語なども、かたみに聞こえかはさせたまふついでに、かの斎宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど、語らせたまふに」（二巻一六五頁）とある。
七（しかし）恋しく思う気持があった、などとは。「さ思ふ」は、妃にと所望するような気持をいう。
八（院が昔ご覧になって）美しいと深くお心に刻まれた斎宮のお顔立ちは。

できないと〔帝は〕
りにくくおぼされて、御宿直などはひとしくしたまへど、うちとけたる御童遊びに、昼などわたらせたまふことは、あなたがちにおはします。権中納言は、思ふ心ありて聞こえたまひけるに、かく参りたまひて、御女にきしろふさまにてさぶらひたまふを、かたがたにやすからずおぼすべし。

平等になさっているが　お出向きになるのは　〔前斎宮が〕　競い合うかたちで　あれこれと心お　だやかでなくお思いのようである

五 院には、かの櫛の筥の御返り御覧ぜしにつけても、御心離れがたかりけり。そのころ大臣の参りたまへるに、御物語こまやかなり。ことのついでに、斎宮の下りたまひしこと、さきざきものたまひ出づれば、聞こえ出でたまひて、さ思ふ心なむありしなどは、えあらはしたまはず。大臣も、かかる御けしき聞き顔にはあらで、ただいかがおぼしたるとゆかしさに、とかうかの御ことをのたまひ出づるに、あはれなる御けしきあさはかならず見ゆれば、いといとほしくおぼす。めでたしと思ほししみにける御容貌、いかやうなるをかしさにかと、ゆかしう思ひきこえたまへど、さらにえ見たてまつりた

おあきらめになりに　〔院は〕　しんみりとなさる　くいのだった　〔今日も〕　源氏　院の内々のお気持を知っているような顔はせずに　あれこれと前斎宮の御ことを　知りたくて　あらわには　どう　おっしゃれない　おとど　お思いであろうかと　ご傷心のご様子が　並々でないと察せられるので　大層お気の毒にお思い　どのようなお美しさなのかと　になる　見たいと〔源氏は〕　全く拝見できないのを

まはぬを、ねたう思ほす。いと重りかにて、夢にもいはけたる御ふるまひなどのあらばこそ、おのづからほの見えたまふついでもあらめ、心にくき御けはひのみ深さまされば、見たてまつりたまふままに、いとあらまほしと思ひきこえたまへり。かく隙間なくて二所さぶらひたまへば、兵部卿の宮、すがすがともえ思ほし立たず、帝おとなびたまひなば、さりともえ思ほし捨てじとぞ、待ち過ぐしたまふ。二所の御おぼえども、とりどりにいどみたまへり。

残念に　〔前斎宮は〕　重々しくて　かりそめにも子供っぽいお振舞などがあったりすれば　奥ゆかしいご様子が深くなるばかりなので　〔前斎宮のご様子を〕拝察なさるにつけて　〔源氏は〕　本当に理想的だと　帝がご成人あそばしたら　いくらなんでもお見捨てにはなれないだろうと　すらすらともお思い立ちになれず　時機を待っていらっしゃる　お二方のご寵愛は　それぞれに厚くて競い合っていらっしゃる

上は、よろづのことにすぐれて絵を興あるものにおぼしたり。立てて好ませたまへばにや、二なく描かせたまふ。斎宮の女御、いとをかしう描かせたまひければ、これに御心移りて、わたらせたまひつつ、描き通はさせたまふ。殿上の若き人々もこのことまねぶをば、御心とどめてをかしきものに思ほしたれば、ましてをかしげなる人の、心ばへあるさまに、まほならず描きすさび、なまめかしう添ひ臥して、とかく筆うちやすらひたまへる御さま、

何にもまして　特別にご趣味がありだからかお上手に　〔帝は〕こちらにご一緒に描き合っていらっしゃるては　絵を学ぶ者を　〔帝は〕好ましい者とお思いでいらっしゃるので　画趣ゆたかに　優雅な様子でものに寄りかかって　ああかこうかと筆を休めて思案していらっしゃるご様子　その愛らしさにお心が深く

帝、絵を好まれ、後宮もこれに倣い、競う

一 自然、ちらとでもお姿をお見せになる折もあるだろうが。軽々しい所行をしないので、几帳や屏風の隙から、その姿の漏れ見える機会がないのである。

一〇 このように、ほかの人の入る余地のない有様で、有力なお二方（前斎宮と弘徽殿の女御）がお仕えしていらっしゃるので。

一一 紫の上の父、藤壺の兄宮。かねて姫君を入内させたく思っていた（『澪標』三二頁、五〇頁参照）。

一二 前斎宮の後宮における身分が女御であることを、ここで明らかに示す。前頁に、権中納言の御女（弘徽殿の女御）に「きしろふさまにてさぶらひたまふを」とあったのに照応する。

一三 殿上の間に伺候する若い侍臣たち。

一四 まして美しいご様子のお方が。斎宮の女御のこと。

一五 型にはまらず、興の湧くままに筆を運び。「まほ」は、ここでは専門家の正式な描法をいう。

一　大層上手な絵師どもをお召しかかえになって。

二　とりわけ物語絵は、情趣があって見応えのあるものだ。「物語絵」は、物語の中の一場面を絵にあらわしたもの。

三　筋立のおもしろい趣の深い場面ばかりを選んでは、お描かせになる。権中納言が画図の選択についてあれこれと指示するのである。

四　よくある月次の絵。一年十二カ月の風景や行事を順に描いた絵。当時の屏風、障子の絵はほとんどこの画題であったが、ここは紙絵である（一〇六頁、一〇九頁参照）。

五　目新しい趣向で、和歌を次々と書きつらねてお目におかけになる。画中の光景についての感懐を詠んだ歌を書き入れるのである。

六　帝が、こちら（斎宮の女御）の御殿へ持ってお行きになるのを。斎宮の女御にも見せたいお気持からである。

七　私のところに、古くから伝わった御絵がいろいろございますから、さし上げましょう。

しみて、いとしげうわたらせたまひて、〔斎宮女御方に〕ありしよりけに御思ひまされるを、前よりも一層ご寵愛が深くなったのを権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしく今めきたまへる御心にて、才気煥発で自分としたことが人に負けてなるものかと意地を張られて派手など性分のわれ人に劣りなむやとおぼしはげみて、一すぐれたる上手どもを召し取りて、厳重な注意を与えて いみじくいましめて、またないようなすばらしいなきさまなる絵どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。

（権中納言）「物語絵こそ心ばへ見えて見所あるものなれ」とて、三おもしろく心ばへある限りを選りつつ描かせたまふ。四例の月次の絵も、五見馴れぬさまに、言の葉を書き続けて御覧ぜさせたまふ。わざとをかしうしたれば、〔興深く〕特に趣向を凝らして描いてあるので〔帝は〕弘徽殿方たまこなたにてもこれを御覧ずるに、〔権中納言は〕心やすくも取り出でたまはず、いといたく秘めて、六この御方へ持てわたらせたまふを惜しみ領じたまへば、大臣聞きたまひて、「なほ権中納言の御心ばへの若々しさこそ、あらたまりがたかめれ」など笑ひたまふ。「あなかちに隠して、心やすくも御覧ぜさせず、なやましきこゆる、いとめざましや。古代の御絵どものはべる、参らせむ」と奏したまひて、

独占なさるので　源氏　容易にお変りにならないようだ　人げなさといったら　相変らず　性分の大　（源氏）無理　すなおにお目にもかけず　けしからぬことです　〔お心を〕おじらせ申すとは　〔帝に〕

八 ご自邸（二条の院）で、古い絵も新しい絵もいろいろ入っている御厨子を開けさせなさって。「厨子」は、両開きの戸のある本箱ようのもの。

九 九世紀の唐の詩人白楽天の詩。玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋の物語（一巻付録参照）。しばしば絵に描かれたらしく、桐壺の巻にも「長恨歌の御絵」とある（一巻二六頁注一、注四参照）。

一〇 漢代の宮女。匈奴に嫁がされ、その地で死んだ。（二巻須磨二四六頁注二参照）

一一 今回はさし上げまいと、より分けてお残しになる。斎宮の女御の入内早々のことなので、縁起をかつぐのである。

一二 あの、須磨明石での絵日記（二巻明石二九四～五頁参照）を納れた箱。

一三 涙を抑えがたく、しみじみと心を打つお作である。

一四 一人京に残って悲しみに沈んでいるよりは、海士の住む海辺を、この絵のように、私も行って見るのでした。「かた」は「潟」に「画」を掛ける。

殿に古きも新しきも絵ども入りたる御厨子ども開かせたまひて、女君ともろともに、今めかしきはそれそれと選りととのへさせたまふ。長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、ことの忌みあるは此度はたてまつらじと選りとどめたまふ。

（紫の上）殿に古きも新しきも絵ども入りたる御厨子ども開かせたまひて、女君ともろともに、今めかしきはそれそれと選りととのへさせたまふ。長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、ことの忌みあるは此度はたてまつらじと選りとどめたまふ。

（当世向きのはそれとこれとと）（選び出してお揃えになる）（不吉なのは）（この機会に）

かの旅の御日記の箱をも取り出でさせたまひて、このついでにぞ女君にも見せたてまつりたまひける。御心深く知らで今見む人だに、すこしもの思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて忘れがたく、その世の夢をおぼしさますをりなき御心どもには、取りかへし悲しうおぼし出でらる。今まで見せたまはざりける恨みをぞ聞こえたまひける。

（紫の上）（少し物の心の分る人なら）（当時のご事情をよく知らず初めて見る人でも）（あの時の夢かと思う悲しさのうすらぐ時もない）（お二人にとっては）（今さらのように）（この旅日記を）

（紫上は）

一一人ゐて嘆きしよりは海士の住む
かたをかくてぞ見るべかりける

（お身の上を案じる思いは紛れましたでしょうに）（まことにもっとも）

おぼつかなさは、なぐさみなましものを」とのたまふ。いとあはれだとおぼして、

（源氏）一 憂きめ見しそのをりよりも今日はまた
過ぎにしかたにかへる涙か

二 中宮ばかりには、見せたてまつるべきものなり。（他見を憚る必要のなさそうな）かたはなるまじき
三 一帖づつ、さすがに浦々（それぞれの浦の景色がよく描けているのを）のありさまさやかに見えたるを、選りたま
四 ふついでにも、かの明石の家居ぞ、（どうしているかと）まづいかにとおぼしやらぬ時の
間なき。

〔源氏が〕
か う絵ども集めらるると聞きたまひて、権中納言いとど心を尽くして、
五 軸、表紙、紐の飾り、いよいよととのへたまふ。弥生の十日の
六 ほどなれば、空もうららかにて、（人々の気持ものどかに）人の心も延び、（何となく風情のある折から）ものおもしろきを
七 りなるに、内裏わたりも、（宮中でも）節会どものひまなれば、ただかやうのこ
八 とどもにて、御方々暮らしたまふを、
九 同じくは、（こうした絵をもてあそぶことで）御覧じ所もまさり
ぬべくてたてまつらむの御心つきて、（格別気を入れて）いとわざと集め参らせたまへ
一〇 り。こなたかなたとさまざまに多かり。物語絵はこまやかに、（図柄がくわしくて）なつ
一一 かしさまさるめるを、（親しみ深さではまさっているようだが）梅壺の御方は、（昔の物語で）いにしへの物語、名高くゆゑ、（由緒の

一 つらい思いをしたあの時よりもまして、今日は改めて、昔の有様を描いた絵に過去を偲んで涙を流すことです。「憂きめ」に「浮き布」を響かせ、「かた」は「方」「画」の掛詞。「涙」に「波」を言い掛ける。

二 藤壺にはぜひお見せしなくてはならぬものである。源氏の気持をそのまま書いたもの。須磨退居は今上を無事即位させるためであった。その意味は源氏と藤壺のみが知ることである。

三 「帖」は、冊子仕立てのものの数え方。須磨、明石からそれぞれ一帖ずつを選んだのである。

四 あの明石の浦の住居を。明石の上や姫君のこと。

五 絵を巻物仕立てにしたのである。軸や表紙、紐といった装飾を、ますます立派になさる。

六 陰暦三月。今の四月。

七 あれこれの節会もない頃なので。「節会」は、節日（正月元日、七日の白馬、九月九日の重陽など）に、朝廷で儀式があり、群臣に宴を賜うこと。

八 お妃たち。斎宮の女御や弘徽殿の女御をさす。

九 同じことなら、帝が一層感興をお催しになるように仕立てて献上しようというご計画を思いつかれて。主語は源氏。

一〇 こちら（斎宮の女御方）にも、あちら（弘徽殿の女御方）にもと、いろいろな絵がたくさんある。権中納言も、負けじと献上したのである。

一一 斎宮の女御のこと。梅壺（凝花舎）を賜っているのである。（一巻図録四参照）

一二 帝づきの女房なども、絵をたしなむ者は皆、これはどうだあれはなどと、皆で評定するのを、近頃のお役目にしている様子である。斎宮の女御方、弘徽殿の女御方それぞれの絵の批評をするのである。

一三 左と右とに組をお分けになる。

一四 女房の呼び名。「典侍」は、内侍司の次官。以下、「侍従の内侍」「少将の命婦」ともに、斎宮の女御方に選ばれた上の女房。「内侍」は、典侍に次ぐ掌侍。「命婦」は、中級の女房。

中宮のお前の物語絵合せ　竹取物語と宇津保物語の俊蔭

一五 弘徽殿方。したがって斎宮の女御方は左である。身分の高い方が左になる。

一六 現在、大した物知りたちとして。

一七 物語が最初に作られた、元祖である『竹取の翁の物語』に。古代から伝承された竹取説話の域を脱して、いわゆる「作り物語」の形を整えた最初のものだという、日本文学史上重要な認識がここに示されている。斎宮の女御方提出の分である。

一八『宇津保物語』の俊蔭の巻。『竹取物語』に対するに、当代の物語として扱われている。

一九（これは）古くから伝わる物語で。「なよ竹の」は「世々」を言うための枕詞。「世」に竹の「よ」（節と節との間）を掛け、主人公の名「なよ竹のかぐや姫」にちなんで、論争の言葉を飾っている。

二〇 かぐや姫が人間世界の濁りにも染まず。帝や五人の貴公子の求婚を退けて、月の都に帰ったこと。

（興深い絵ばかりを）ある絵ばかりをある限り、弘徽殿は、（当時の新作の物語で）そのころ世にめづらしく、をかしき限りを選り描かせたまへれば、（ちょっと見たところ当世風ではなやかな点では）うち見る目の今めかしきはなやかさは、（弘徽殿方が）いとこよなくまされり。上の女房なども、よしある限り、これはかれはなど定めあへるを、このころのことにすめり。

藤壺〔宮中に〕中宮も参らせたまへるころにて、（絵については）かたがた御覧じ捨てがたく思ほすことなれば、（仏前のお勤めも怠っては絵の方をご覧になるとなので）御行ひもおこたりつつ御覧ず。（帝づきの女房たちがそれぞれに議論するのを）この人々のとりどりに論ずるを聞こしめして、左右と方分かたせたまふ。梅壺の御方には、平典侍、侍従の内侍、少将の命婦、右には大弐の典侍、中将の命婦、兵衛の命婦を、ただ今は心にくき有職どもにて、（その人が）心々にあ（思いに論じ合う言い方をおもしろいと）らそふ口つきどもをかしと聞こしめして、まづ、物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせてあらそふ。（左方）「なよ竹の世々に古りにけること、（特に目を引く点もありませんが）をかしきふしもなけれど、かぐや姫のこの世の濁りにもけがれず、（高く理想を持って天に上った宿世は格別で）はるかに思ひのぼれる契り高く、神代（神代の事のようですから）のことなめれば、（物を知らぬ女は）あさはかなる女、（見ても分らないでしょうね）目及ばぬならむかし」と言ふ。

右は、一かくや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。二この世の契りは竹のなかに結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、百敷のかしこき御光にはならばずなりにけり。四阿倍のおほしが千々の黄金を捨てて、火鼠の思ひ片時に消えたるも、いとあへなし。五車持の親王の、まことの蓬莱の深き心も知りながら、六いつはりて玉の枝に疵をつけたるをあやまちとなす。絵は巨勢の相覧、手は紀の貫之書けり。七紙屋紙に八唐の綺をばいしして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。九俊蔭は、はげしき波風におぼほれ、知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きけるかたの心ざしもかなひて、つひに人の朝廷にもわが国にもありがたき才のほどを広め、名を残しける古き心を言ふに、絵のさまも、唐土と日の本とを取り並べて、おもしろきことどもなほ並びなしと言ふ。〔料紙は〕白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は一〇常則、手は道風なれば、今めかしうをかしげに、目もかかやくまで

昇天したという　なるほど手の届かぬ所なので　身分は賤しい人のことと思われます　裏打ちして　筆跡　溺れ　見知らぬ異国に流されたけれど　それで　目指して渡海した当初の目的も果されて　類い稀な　楽才　中国と日本の風景を取り合せて　名を残した今に伝わる逸話を言い立てる上に　よく見うける表装である　当世風で

一　以下、七行目の「あやまちとなす」まで、右方（弘徽殿方）の反論の大略を述べる。

二　しかし、この世では、竹の中に生れるという身の上に生れついていたから。現存『竹取物語』の冒頭に当る。以下の論も、それぞれ現存物語の内容に同じ。

三　宮中に上って、恐れ多くも帝と並ぶ皇后の位に即く光栄には浴しませんでした。「百敷」は、宮中を意味する歌語。

四　阿倍のおほし（現存本「あべのみむらし」）が、千金を投じて火鼠の皮衣を求めた、それほどの思いも、たちまち空しくなったのも、大層あっけないことです。「思ひ」に「火」を掛け、その縁で「消えたる」と言い、「あへなし」に「阿倍なし」を掛けた原作の洒落を生かしている。

五　車持の親王が、本当の蓬莱山の神秘な事情も知りながら、贋物を持参して、玉の枝に疵をつけたのが、いけないと、（右方は）論難する。「疵」は「玉」の縁語。以上、作中人物の行跡を問題にしている。

六　醍醐天皇頃の絵師。金岡の子といわれる。

七　蓬生六〇頁注八参照。巻物の料紙。

八　中国渡来の綺（錦に似た薄い織物）。

九　以下、右方が俊蔭の巻の主人公のすぐれた点を挙げる。遣唐使に従って渡航中、暴風雨のため、波斯国へ流され、そこで琴の秘法を修得したことをいう。

一〇　飛鳥部常則。村上天皇頃の有名な絵師。

一一　小野道風。延喜、天暦頃の能書家。三蹟の一人。

一二 在原業平の歌と行跡を中心にした物語。左方の物語である。

一三 散逸物語。「正三位」は、ヒロインの呼び名であろう。

伊勢物語と正三位を合わす

一四 前出の平典侍。典侍、掌侍をともに内侍ともいう。左方の女房。

一五『伊勢物語』の深い意味を考えようとせず、いたずらに古風な作だと、けなしてよいものでしょうか。

一六 ありふれた色恋沙汰の、一見おもしろく書いてあるのに気圧されて、業平の名声を無にしてしまってよいでしょうか。

一七 宮中に上った正三位の高い志と比べれば、『伊勢物語』などはずっと下のものです。「千尋の底」は、深い海底の意。「伊勢の海の深き心」に応じる。

一八 兵衛の大君の（宮中に上ろうと志した）気位の高さは、ほんとうに（右方の言うように）誉めてやらねばならないけれど。「兵衛の大君」がヒロインで、宮仕えをし、帝寵を受けてついに正三位を賜ったのであろう。

一九 業平のこと。在原氏の五男。官は近衛の中将。

二〇 ちょっと見たところは古くさいでしょうが、昔から有名な『伊勢物語』の名を堕すことができましょうか。「みるめ（海松布）」「うら（浦）ふり」「沈め」は「海士」の縁語。「伊勢を」の「を」は間投助詞。藤壺が、歌で判定を下し、左方を支持したのである。

〔これに対して〕反論する言葉がない

見ゆ。また左にそのことわりなし。

次に、伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず。これも、右はおもしろくにぎはしく、内裏わたりよりうちはじめ、近き世の中の様子をのありさまを描きたるは、をかしう見所まさる。平内侍、

はなやかな感じで　宮廷の光景をはじめとして　近頃の世

「伊勢の海の深き心をたどらずて
　ふりにし跡と波や消つべき

世の常のあだことのひきつくろひ飾れるに圧されて、業平が名をや朽すべき」と、あらそひかねたり。右のすけ、

論破しかねている　大弐の典侍

　雲の上に思ひのぼれる心には
　　千尋の底もはるかにぞ見る

（藤壺）「兵衛の大君の心高さは、げに捨てがたけれど、在五中将の名をば、え朽さじ」とのたまはせて、宮、

仰せられて　藤壺

　みるめこそうらふりぬらめ年経にし
　　伊勢をの海士の名をや沈めむ

一 このような女同士の議論で。
二 物語絵一巻の判定に、あらん限りの論陣を張って。
三 物語絵などあまり見たこともない若女房たちは。
四 帝づきの女房も宮（藤壺）の女房も、この一部分さえ見ることができず。

源氏、内裏の絵合せを企画　朱雀院、斎宮の女御に絵巻を贈る

五 一〇二頁に「かたはなるまじき一帖づつ、さすがに浦々のありさまさやかに見えたるを、選りたまふ……」とあったもの。献上にあたり、巻物に仕立てたのであろう。
六 勝負を挑むお気持は、源氏に劣らない。
七 屏風や障子の絵（普通絹地に描く）に対して、紙に描かれた小品画をいう。物語絵、歌絵などがあった。
八 ただ、今までに持っていたものだけを（競い合おう）。権中納言所有の絵についても言うので、「けむ」を用いる。
九 秘密の部屋を用意して（絵師に）お描かせになるのを。「わりなき窓」は、普通でないところに、無理に造った窓、の意。
一〇 一年の内の数々の節会の風情があり、興深い有様を、昔の上手な絵師たちがそれぞれ技を競って描いたところへ。いわゆる年中行事の絵巻である。

一 かやうの女言にて、乱りがはしくあらそふに、二 一巻に言の葉を尽くして、（やかましく言い合うのに）（それでも言い尽せない）えも言ひやらず。三 ただあさはかなる若人どもは、（死ぬばかりに見たがるけれども）ゆかしがれど、四 上のも宮のも片端をだにえ見ず、いといたう秘めさせたまふ。

（源氏）大臣参りたまひて、（このように左右それぞれ言い立てる女房たちの論旨を）かくとりどりにあらそひ騒ぐ心ばへども、をかしくおぼして、（源氏）「同じくは、（帝の）御前にてこの勝負（おっしゃる）定めむ」とのたまひなりぬ。かかることもやと、（源氏は）かねておぼしければ、中にもことなる（特別優れたのは）選りとどめたまへるに、五 かの須磨、明石の二巻は、（お考えがあって）おぼすところありて取り交ぜさせたまへりけり。中納言もその御心劣らず。六 この頃の世間では（調製することを）のころの世には、ただかくおもしろき紙絵をととのふることを、天の下いとなみたり。（皆が仕事にしている）「今あらため描かむことは本意なきことなり。七 おもしろくないことだ八 ただありけむ限りをこそ」とのたまへど、中納言は人にも見せで、九 わりなき窓をあけて描かせたまひけるを、（朱雀院）院にも、かかること聞かせたまひて、（斎宮の女御）梅壺に御絵ども（さし上げなさった）たてまつらせたまへり。一〇 年の内の節会

一一 加えて、朱雀院ご自身のご治世のこともお描かせになった巻に。物語の朱雀院が史上の醍醐天皇の次の帝であることを示している。桐壺の帝を醍醐天皇になぞらえるのに符合する（桐壺三一頁注一三、三三頁注一四参照）。
一二 二巻賢木一三七頁参照。
一三 絵師。巨勢金岡の孫、公忠の子（『河海抄』）。
一四 優雅な透し彫りの沈の箱。「沈」は、香木。沈香ともいって、薫香の材料にするとともに、調度類の材にも用いる。
一五 同じように優艶な心葉のさま。「心葉」は、九四頁注四参照。
一六 院の御所の殿上人でもある左近の中将。当時、院、東宮においても、それぞれ殿上人があった。この「左近の中将」は系図不詳。
一七 斎宮の乗られた輿。
一八 わが身こそ今こうして宮廷の外にいますが、その昔、心の内に思ったことは、決して忘れません。「そのかみ」に「神」を掛け、「標」とともに、斎宮下向の神事の絵に合せている。
一九 下向の時の別れの櫛（黄楊の小櫛）の端を少し折って。
二〇 宮中は、あの時とすっかり変ってしまった感じがいたしまして、神に仕えた遠い昔のことも今は恋しく存じられます。

どものおもしろく興あるを、昔の上手どものとりどりに描けるに、延喜の御手づからことの心書かせたまへるに、（醍醐天皇がご真筆で詞書をお書きあそばしたものに）一 またわが御世のことも描かせたまへる巻に、二 かの斎宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみておぼしければ、描くべきやうくはしく仰せられて、（図柄を）公 三 茂がつかうまつれるが、（大層みごとなのを）（お描き申したのが）いといみじきをたてまつらせたまへり。艶 四 に透きたる沈の箱に、同じき心葉のさまなど、いと今めかし。御消息 五 はただ言葉にて、（お便りはただ口上で）院 六 の殿上にもさぶらふ左近の中将を御使 七 にてあり。かの大極殿 八 の御輿 九 寄せたる所の、神々 一〇 しきに、

身こそかくしめの外なれそのかみの
心のうちを忘れしもせず

（とだけ書いてある）とのみあり。聞こえたまはざらむもいとかたじけなければ、（ご返歌をなさらないのも大層恐れ多いので）苦しう（お思いになりながら）おぼしながら、一一 昔の御 一二 釵 一三 の端をいささか折りて、（詠みづらく）

（斎宮女御）二〇
しめのうちは昔にあらぬここちして
神代のことも今ぞ恋しき

一 縹色（薄い藍色）の中国渡来の紙。
二 （だが、これも）昔のご応報であろうか。源氏を須磨に逐いやったこと。「大臣をも」以下、草子地。
三 あちらの女御。弘徽殿の女御のこと。母は、弘徽殿の大后の妹四の君である（桐壺三九頁参照）。
四 朧月夜の尚侍。同じく弘徽殿の大后の妹六の君。
五 何日と決めて。二十日過ぎのこと（一一三頁）。
六 急なことのようだが。中宮お前の絵合せが行われたのは「弥生の十日のほど」（一〇二頁）であった。
七 風流に、大げさにならぬよう配慮して。例えば、場所を「女房の侍」にするのもその一つ。
八 女房の詰所に玉座を設けさせて。「女房の侍」は、台盤所（一巻図録五参照）。以下、施設、調度、装束など、天徳内裏歌合の模様に従っている。（付録三三三頁参照）

帝のお前の絵合せ

九 玉座の北南に、左右がそれぞれ分れて控える。玉座の左（南）が左方である。
一〇 清涼殿の西にある殿舎。
一一 絵を入れた紫檀の箱に、それを載せる蘇芳の木で作った花足（装飾用の反った脚）の机。以下、左方は、調度、童女の装束を紫、赤の系統で揃える。舞楽の左の楽（唐楽）の装束が赤系統であるのにちなむ。
一二 床上に敷き、上に机を置く。「唐」のものを用いるのは、舞楽の左の楽（唐楽）にちなむ。
一三 花足の机の上に敷く。
一四 薄紫色の唐の綺（錦に似た薄い織物）。

とて、縹の唐の紙に包みて参らせたまふ。御使の祝儀禄など、いとなまめかし。院の帝御覧ずるに、限りなくあはれとおぼすにぞ、ありし昔をとりかへさまほしく思ほしける。大臣をもつらしと思ひきこえさせたまひけむむかし。過ぎにしかたの御報いにやありけむ。院の御絵は、后の宮より伝はりて、あの女御の御方にも多く参るべし。尚侍の君も、かやうの御このましさは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ。

（ご在位のなさったことであろう）（源氏をも恨めしいとお思い申し上げ）（弘徽殿の大后から伝来して）（このような物語絵に対するご愛好は）（興味多くお描かせになってはお集めになる）

五 その日と定めて、にはかなるやうなれど、をかしきさまにはかなうしなして、左右の御絵ども参らせたまふ。女房の侍に御座よそはせて、北南かたがた別れてさぶらふ。殿上人は、後涼殿の簀子に、おのおの心寄せつつさぶらふ。左は、紫檀の箱に蘇芳の花足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に桜襲の汗衫、袒は紅に藤襲の織物なり。姿、用意など、なべてならず見ゆ。右は、沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あし

（帝のお前に）（左右に）（態度）

一五 左方の女の童。上述の箱や机、打敷などを運ぶ役。
一六 赤色の表着の上に、桜襲（表白、裏赤または紫）の汗衫を着、袙は、紅と、藤襲（経緯の糸に薄紫、青を用いる）の織物である。「汗衫」は、童女の晴れの儀の衣服で裾が長い。「袙」は、表着の下に着る。
一七 香木の一種。沈の水に沈まぬものを浅香という。いずれも色は暗色。「下机」は、上に箱を置く机。
一八 右方は、打敷をはじめ、以下の童の装束も青色で統一する。舞楽の右の楽は、高麗楽で、装束は青色。
一九 机の足に飾り結びにして垂れる組糸。
二〇 襲の色目。表白、裏青。
二一 表薄朽葉、裏黄。
二二 机を肩にして運び、帝の御前に並べ立てる。
二三 帝づきの女房は、前（左）後（右）と分れて、それぞれ応援する方の色の衣裳を着ている。
二四 源氏の弟宮、後の螢兵部卿の宮。源氏と特に親しい。（須磨二二二頁参照）
二五 春夏秋冬四季の風物を描いた絵。
二六 以下「たとへむかたなし」まで、左方の絵をいう。
二七 ただ筆先の技巧や、趣向の巧みさに飾られて。以下、右方の絵。

ゆひの組、花足の心ばへなど、今めかし。童、青色に柳の汗衫、山吹襲の袙着たり。皆、御前に舁き立つ。上の女房、前後と装束き分けたり。

〔帝より〕召しありて、内の大臣、権中納言、参りたまふ。その日、帥の宮も参りたまへり。いとよしありておはするうちに、絵をこのみたまへば、大臣の、下にすすめたまへるやうやあらむ、ことことしき召しにはあらで、殿上におはするを、仰せ言ありて、御前に参りたまふ。この判つかうまつりたまふ。いみじう、げに描き尽くしたる絵どもあり。さらにえ定めやりたまはず。例の四季の絵も、いにしへの上手どものおもしろきことどもを選びつつ、筆とどこほらず描きながしたるさま、たとへむかたなしと見るに、紙絵は限りありて、山水のゆたかなる心ばへをえ見せ尽くさぬものなれば、ただ筆の飾り、人の心に作り立てられて、今のあさはかなるも、昔のあと恥ならずく、にぎははしく、あなおもしろと見ゆる筋はまさりて、多くのあ

趣向
大層風流な方でいらっしゃる上に
源氏
内々にお勧めになったことでもあるのだろうか
〔たまたま〕
〔帝の〕
この勝負の審判をお勧めなさる
大層上手に
いかにも筆の及ぶ限り描いた絵
〔帥宮も〕
興のある画題を選んでは
自在にのびのびと
画面が狭くて
山や川の悠々とした趣を十分あらわし尽せないものなので
今出来の手軽なものでも
昔の絵に劣
論
ああまいなと思われる点はかえって勝っていて

須磨の絵日記で、左方勝つ

一 朝餉の間。台盤所の北隣りにある。天皇が略式の食事を召し上がる所。（一巻図録五参照）

二 台盤所との間の襖障子。

三 内大臣（源氏）も、（藤壺の臨御を）まことにすばらしいとお思いになって。藤壺を意識して緊張する気持。

四 判者である帥の宮の判定。

五 前に「須磨、明石の二巻」（一〇六頁）とあったうちの須磨の巻。

六 あの当時、（この座の方々が源氏を）おいたわしい悲しいとお思いになった以上に。

七 （この絵を見ると）源氏のお住いのご様子や、お心の内にお感じになったあれこれが、目の前のことのように思われ。絵には、当時の感懐が歌に詠まれ書き込まれているのである。

八 草体に平仮名を所々書きまぜて。「草」は、万葉仮名の草体で装飾的な字体。

九 本式の詳しい日記。当時の政治家が漢文体で記した日録。

一〇 ほかの巻々もぜひ見たいと思われる。一座の人々の思い。

争は らそひども、今日はかたがたに興あることも多かり。左右それぞれに

朝餉の御障子をあけて、中宮もおはしませば、〔藤壺が〕絵のことにご精通で深うしろしめした

あろうと思うにつけらむと思ふに、大臣もいと優におぼえたまひて、所々の判ども心もはっきりしない

となきをりをりに、時々さし答へたまひけるほど、あらまほし。定

めかねて夜に入りぬ。左はなほ数一つある果てに、須磨の巻出で来

たるに、中納言の御心騒ぎにけり。あなたにも心して、果ての巻は

心ことにすぐれたるを選り置きたまへるに、かかるいみじきものの

上手の、心の限り思ひすまして静かに描きたまへるは、たとふべき

かたなし。親王よりはじめたてまつりて、〔どなたも〕涙とどめたまはず。その

世に、心苦し悲しと思ほししほどよりも、おはしけむありさま、御

心におぼししことども、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつか

なき浦々、磯の隠れなく描きあらはしたまへり。草の手に仮名の所

所に書きまぜて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌な

ども まじれる、たぐひゆかし。誰も異事思ほさず、さまざまの御絵

藤壺

帥の宮

様子を隈なく

源氏のようなすばらしい絵の名手

その地の風景を見も知らぬ

心にしみる歌などもまじっているもので

一一 前頁に「定めかねて夜に入りぬ」とあるのに応ずる。

一二 お盃などお傾けになる折に。「土器」は、素焼の盃。「参る」は、飲むの敬語。当時の宮廷では、行事のあと、酒宴を催すならわしであった。

一三 学問というものは。以下「この道な深く習ひそ」まで、亡き桐壺院の教訓の言葉。

一四 大層よくできた人で、長寿と幸福とに併せて恵まれた者は、なかなかいないものだ。学才に秀でた者で、不幸、短命だった例に、歴史上では、醍醐天皇の頃の菅原道真、一条天皇の頃の藤原伊周がある。

一五 無理に学問を深く修めるなと。「な……そ」は、禁止の意を表す。

一六 実際の役に立つ技能。儀式、典礼など、政治家に必要な知識、技能。作詩、書道、舞、楽など諸方面があるので「かたがた」という。

一七 思いがけぬ山里住いをする身になって。須磨謫居のことをさす。「山がつ」は、山に住む賤しい者。

一八 あちこちの海辺の深い情趣を見ましたので。

一九 もはや思い及ばぬ所もないほど、十分に会得されましたが。「くま」は、奥まって、至り及ばぬ所。

源氏と帥の宮、才芸について論じ合う

の興、これに皆移り果てて、あはれにおもしろし。よろづ皆おしゆづりて、左勝つになりぬ。

夜明け方近くなるほどに、ものいとあはれにおぼされて、御土器など参るついでに、昔の御物語ども出で来て、「いはけなきほどより、学問に心を入れてはべりしに、すこしも才などつきぬべくや御覧じけむ、院ののたまはせしやう、才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるは、いとかたきものになむ。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじきほどにて、あながちにこの道な深く習ひそと、いさめさせたまひて、本才のかたがたのもの教へさせたまひしに、つたなきこともなく、またとり立ててこのことと心得ることもはべらざりき。絵描くことのみなむ、あやしくはかなきものから、いかにしてかは心ゆくばかり描きて見るべきと思ふをりをりはべりしを、おぼえぬ山がつになりて、四方の海の深き心を見しに、さらに思ひ寄らぬくま

〔この巻に〕須磨の巻に
左方の勝となった
〔源氏は〕感慨が胸にこみ上げてきて
〔源氏〕幼少の時から
学問など身につきそうにご覧になったのか
父院が仰せられましたには
儒学に精を出しておりましたが
学問などしなくても人に負けるはずがないのだから
高い身分に生れ
出来が悪いということ
上達することもありませんでした
不思議に趣味的なものにすぎないのに
どうしたら思う存分に描いてみることができるだろうかと

なく至られにしかど、筆のゆく限りありて、心よりはことゆかずな（絵筆の及ぶ所には限界があって）（心の思うようにはうまく描けなかったと思われましたのに）む思うたまへられしを、ついでなくて御覧ぜさすべきならねば、（機会もないのに上覧に供するわけにはゆきませんので）かうすきずきしきやうなる、後の聞こえやあらむ」と、親王に申したまへば、（帥宮）「何の才も、（その気がないのに習得できるものではありませんが）心より放ちて習ふべきわざならねど、道々にものの師あり、学び所あらむは、（習得したものの深浅は別としても）ことの深さ浅さは知らねど、おのづから移さむにあとありぬべし。（書画の道）筆取る道と碁打つこととぞ、あやしう魂のほど見ゆるを、深き労なく見ゆるおれ者も、さるべきにて、書き打つたぐひも出で来れど、（名門の子弟）家の子のなかには、（やはり抜群の人がいて）なほ人に抜けぬる人、何ごとをもこのみ得けるとぞ見えたる。（才能のままに会得していると思われます）院の御前にて、親王たち、内親王、いづれかは、さまざまとりどりの才習はさせたまはざりけむ。そのなかにも、（あなたは）とり立てたる御心に入れて、（格別ご熱心に）伝へうけと（伝授を受けご習得になったかいがあって）らせたまへるかひありて、文才をばさるものにて言はず、（当然のことで申しませんが）さらぬことのなかには、琴弾かせたまふことなむ一の才にて、（そのほかのこと）次には横笛、琵琶、箏の琴をなむ、次々に習ひたまへると、上もおぼしのたまは（故院もお認めで仰せでし）

一（そんなものを）この機会に持ち出したりして、いかにも物好きなようなのは、後世から批判されるかもしれません。

二 学問、芸能をいう。

三 諸道それぞれに、師匠というものがあり。「ものの師」で一語。

四 学習すべき具体的な課程のあるものは。

五 自然、師匠の技法を学び取るにもきまった筋道がありましょう。教えられた通りのきまった学習をすればある程度の上達は望める、という意。

六 不思議に天分のほどが現れますが。

七 深い稽古を積んだとも見えぬ愚か者も、天分の然らしめるところで、見事に書いたり打ったりする者も出て来ますが。

八 故桐壺院のお膝もとで、皇子皇女たちの、どなたに、いろいろさまざまの諸道の稽古をおさせにならなかったことがありましょうか。

九 詩文の力量。当時の政治家がもっとも重んじたもの。

一〇 七絃の琴。村上天皇の頃には奏法が絶えた。源氏が琴に親しんだことは、須磨二三七頁など参照。

一一 十三絃の琴。礼楽といって、楽才も君子の徳の一つであった。

一二 昔の墨がきの名人たちも。「墨がき」は、彩色画の線描きをする師匠格の絵師（一巻帚木六〇頁注五参照）。
一三 酔って感動しやすくなり泣くこと。
一四 三月二十日過ぎの月。明け方近くに出る。
一五 清涼殿の西廂。絵合せの行われたのは、台盤所である。
一六 後宮十二司の一。後宮の書籍、文房具、楽器などを管理する。
一七 六絃の琴。わが国固有の楽器とされている。
一八 そうはいっても。何事も源氏が一番すぐれているとはいっても、の気持。
一九 中宮お前の絵合せで、左方の一員として出ていた女房。
二〇 拍子を仰せつけられる。「拍子」は、笏を二つに割った形のもので、左右の手に持ち、打ち合せて拍子をとる。
二一 夜が明け離れて明るくなった頃をいう。
二二 帥の宮は、別に帝から御衣をかさねて頂戴なさる。判者として特に帝着用の御衣を賜る。

せき。世間も世の人、しか思ひきこえさせたるを、そのようにお思い申していましたが絵はなほ筆のついでにやはりご気分の向いた時にすさびさせたまふあだごととこそ思ひたまへしか、いとかう、まさおなぐさみあそばす余技とばかり存していましたのに不都合なまでになきまで、いにしへの墨がきの上手ども、あとをくらうなしつべかなまでに跡をくらまして逃げ出しそうなほどめるは、かへりてけしからぬわざなり」と、うち乱れて聞こえたま上手なのは かえってとんでもないことです酩酊してひて、酔ひ泣きにや、院の御こと聞こえ出でて、皆うちしほたれたまひぬ。故院涙をお流しになった

二十日あまりの月さし出でて、こなたはまださやかならねど、おほかたの空、をかしきほどなるに、書司の御琴召し出でて、和琴、権中納言賜はりたまふ。さはいへど、人にまさりて搔きたてたまへり。親王、箏の御琴、大臣、琴、琵琶は少将の命婦つかうまつる。上人のなかにすぐれたるを召して、拍子賜はす。いみじうおもしろし。明け果つるままに、花の色も人の御容貌どももほのかに見えて、鳥のさへづるほど、ここちゆき、めでたき朝ぼらけなり。禄どもは、中宮の御方より賜はす。親王は、御衣また重ねて賜はりたまふ。

一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 藤壺 明るくないけれども 風情のある刻限に 〔和琴を〕 殿上人の中でこの道に堪能な者を 心も晴れ晴れして 下される

一 その当時の、世を挙げてのこととしては、人々は、この、絵の論評に明け暮れていられる。二度にわたる絵合せの余波をいう気持。

二 ちょっとした遊びごとにつけても、（源氏が斎宮の女御を）こんなふうにお引き立てになるので。

三 やはり娘の弘徽殿の女御の世評が圧されるようになるのではないかと。

四 いくら源氏方の勢力が強くとも、まさかお見捨てなさるまいと、お思いなのだった。

五 れっきとした節会の折々にも、当帝の御代より始まったと、後世の人が言い伝えるような事例を加えようとお思いになって。聖代と仰がれるような立派な前例を遺すのが輔佐の臣の役目である。以下、今上の治世を聖代と印象づける筆致。

源氏、輔佐の臣として聖代の政治に貢献する

六 （絵合せなどといった）女房向きの、たわいもないお遊びをも。「私ざま」は、公的、政治的なことに対して後宮関係のことをさす。

七 源氏の大臣ご自身は、それでも、この世を無常のものと観じられて。

八 以下「かつは齢をも延べむ」まで、源氏の心中の思い。

一 そのころのことには、この絵の定めをしたまふ。（源氏）「かの浦々の須磨明石の巻は、中宮（藤壺）にさぶらはせたまへ（お納めになって下さい）」と聞こえさせたまひければ（申し上げなさったので）、（藤壺は）これが初め、また残りの巻々ゆかしがらせたまへど（ご覧になりたがられたけれども）、「今、次々に（源氏）」と聞こえさせたまふ。上にも（帝もご満足におぼしめしていられるのを）御心ゆかせたまひておぼしめしたるを、（源氏は）うれしく見たてまつりたまふ。二 はかなきことにつけても、かうもてなしきこえたまへば、権中納言は、三 なほおぼえ圧さるべきにやと、心やましうおぼさるべかめり。（しろくなくお思いであるようだ）上の御心ざしは、（帝のお気持は）もとよりおぼししみにければ、（もとから弘徽殿に深く傾いていらしたので）なほこまやかにおぼしめしたるさまを、（変りなくご寵愛あそばす様子を）人知れず見たてまつり知りたまひてぞ、（心丈夫に）たのもしく、四 さりともとおぼされける。

五 さるべき節会（せちえ）どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむとおぼし、私（わたくし）ざまのかかるはかなき御遊びも、めづらしき筋にせさせたまひて、（目新しい趣向を凝らしてお催しになって）いみじき盛りの御世なり。（大層な繁栄のご治世である）大臣（おとど）ぞ、なほ常なきものに世をおぼして、（帝が）今すこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背（そむ）きなむと（出家しようと心中深くお考えのようである）深く思ほすべかめる。八 昔のためしを見

九 若くして高位高官にのぼり、世間に抜きんでた人は、長生きできぬものなのだ。ここの源氏の思惟について『河海抄』は、「後漢書に曰く、位尊ければ身危し、財多ければ命殆し、功成り名遂げて身退くは天の道也」などをあげる。

一〇 中途で一度没落して、苦境に沈んだ嘆きの代りに、今まで生き永らえているのである。須磨流謫のことをいう。

一一 今後も栄華を貪っては、やはり命が心配だ。

一二 極楽往生を願って勤行につとめ。

一三 山里の静かな土地を手に入れて、御堂をお建てになり。次の松風の巻に「造らせたまふ御堂は、大覚寺の南にあたりて、滝殿の心ばへなど、劣らずおもしろき寺なり」（一一三頁）とある。

一四 あとのお子様たちを思い通りに大切に育て上げて、その行く末を見たいとお思いなので。「末」は、子孫の意。夕霧（十歳）、明石の姫君（三歳）がある。

一五 （御堂建立は）どういうおつもりなのか、よく分らない。草子地。

聞くにも、齢足らで官位高くのぼり、世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなりけり、この御世には（当帝の御代では）、身のほどおぼえ過ぎにたり（地位も声望も身に余るほどになってしまった）、一〇中ごろなきになりて沈みたりし愁へにかはりて、今までもながらふるなり、一一今より後の栄えは、なほ命うしろめたし、静かに籠りゐて（出家して）、一二後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べむと思ほして、一三山里のどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ、仏経のいとなみ添へてせ（本尊や経巻の準備も同時に）させたまふめるに、一四末の君達、思ふさまにかしづき出だして見むと（なさるご様子だが）おぼしめすにぞ、疾く捨てたまはむことはかたげなる（むつかしそうである）。一五いかにおぼしおきつるにかと、いと知りがたし。

松風（まつかぜ）

絵合の巻と同じ年の秋のこと。二条の院の東の院の造営が成って、その西の対に花散里が移った。東の対は明石の上にと予定されていたが、彼女は身の程を思って上京をためらう。

明石の入道夫妻は、母尼君の祖父中務の宮の別邸が大井川のほとりにあったのを修理して、そこに娘を住まわせることにした。ちょうどその頃、源氏も、ほど近い大覚寺の南に、嵯峨野の御堂を造営中であった。

明石の上は、父入道を明石に残し、姫君、母尼君とともにひそかに海路を経て上京し、大井に落着く。巻名となった「松風」の語は、地の文と尼君の歌に見え、形見の琴をもてあそびながら源氏の訪れを待つ明石の上の心事を象徴する。

源氏は、造営中の嵯峨野の御堂と、これもこの頃桂に設けた別邸桂の院の用事にかこつけて、大井に明石の上を訪れ、三歳になった姫君ともはじめて父娘の対面をした。大井川に臨んで昔の明石の海辺を思わせる邸に、源氏は二夜を過してこまやかな契りをかわしたが、翌日は迎えの人々にいざなわれて桂の院に赴き、月明のもとに遊宴が催される。都の帝との間に歌の贈答があり、源氏をはじめ人々は歓を尽して帰京した。

予定を過ぎての帰京にご機嫌斜めの紫の上を、源氏はなだめるのに苦労するが、明石の上所生の姫君を養女として引き取らないかという源氏の相談に、紫の上もようやく機嫌を直す。大井への通いは容易でなく、嵯峨野の御堂の念仏にかこつけて、月に二度ほどの逢瀬であるという。

一 二条の院の東の院。澪標に「二条の院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め作らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど、おぼしあててつくろはせたまふ」（一六頁）とあった。

二 麗景殿の女御の妹君。

三 花散里の住む建物。「渡殿」は、西の対と寝殿を結ぶものであろう。

東の院の造営成り
花散里等移り住む

四 「政所」は、貴族の家政をつかさどる所、「家司」は、その事務官。花散里の支配下に置かれ、東の院全体の家政をつかさどるので、花散里に対する夫人の一人としての重い処遇を物語る。

五 明石の上。この人は、「上」より一段低い「御方」という呼び方がされる。身分の低さのゆえである。ただし夫人の一人としての称。ここに初出。

六 かりそめにもお情けをかけて、将来まで末長くと頼もしいお約束をなさった人々が一緒に住めるように。「頼め」（下二段）は、頼りにさせる意。末摘花について「二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、のちはわたしたてまつりたまひける」（蓬生八二頁）とあっ

明石の上の上京を勧める

七 自分とは比較にもならぬ高いご身分の女君たちでも。以下、明石の上の心中。花散里などの噂を聞いてのことと読める。

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、うつろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにし置かせたまふ。東の対は、明石の御方とおぼしおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにても、あはれとおぼして行く末かけて契り頼めたまひし人々つどひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見所ありてこまかなり。寝殿は塞げたまはず、時々わたりたまふ御住み所にして、さるかたなる御しつらひどもし置かせたまへり。

立派に造営して　申し上げた方を　移り住ませなさる　しかるべくきちんと設けさせてお置きになる　ご予定になっていられる　部屋部屋を仕切って整えさせなさったのが　感じがよく　立派で　行き届いている　明けておかれて〔源氏が〕　それにふさわしいお部屋の設備を準備させてお置きになった

明石には御消息絶えず、今はなほ上りぬべきことをばのたまへど、女はなほわが身のほどを思ひ知るに、こよなくやむごとなき際の人だに、なかなかさてかけ離れぬ御ありさまのつれなきを見つつ、

やはり自分の身分の低さを身にしみて思うので　もう決心して　上京するようにとおっしゃるけれども　なまじそのように切れてしまわれるでもない源氏のお扱いの冷たさを見ながら

一 この若君（明石の姫君）の名誉をお汚しするように、自分の人並みでない低い身分が人に知られるだけのことだろう。

二 人の笑いものになるような、みっともないことがどんなに多いことだろうと、思い悩むけれども。

三 （明石の上は、上京をうながす源氏のすすめに）いちずに不満を示したり、ことわったりすることもできない。

四 （ありがたい源氏のすすめにも）かえって気苦労の限りをし尽すのだった。

五 親王で中務省（帝のお側のことや詔勅の宣下などをつかさどる役所）の卿（長官）。四品以上の親王が任じられる。古注は、醍醐天皇の皇子兼明親王（前の中書王）をこの人に擬する。亀山（小倉山の東南の尾根）の麓に隠棲し、小倉の宮と号した（図録五参照）。

六 保津川が嵯峨、松尾あたりを南流する部分を称する。下流は桂川。（図録五参照）

七 管理人のようなことでいた者を、明石に呼び寄せて相談する。

八 年をとってから思いがけぬことが起って。娘の源氏との結婚、姫君の出生したことをいう。

九 いきなりはなやかな人中に出るのも。上京した娘が京の中に住むことをいう。「まばゆし」は、まぶしい。

一〇 昔の所領を探し出して（娘を住まわせよう）と思

明石の入道、大井の邸を修築

気苦労が増しそうだと噂に聞くのに

もの思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりのおぼえなりとてか、

〔自分が〕どれほどの身分の者だとうぬぼれて

都の方々のお仲間入りをしようか

さし出でまじらはむ、この若君の御面伏に、数ならぬ身のほどこそ

〔源氏が〕たまにちょっとお立ち寄りになる折を待つだけなことで

あらはれめ、たまさかにはひわたりたまふついでを待つことにて、

人笑へにはしたなきことといかにあらむと思ひ乱れても、また、さり

人並みの扱いをお受けにならないのも

とてかかる所にて生ひ出で数まへられたまはざらむも、いとあはれ

〔姫君が〕明石

とてもおいたわしいので

なれば、ひたすらにもえ恨み背かず。親たちも、げにことわりと思

入道と母君

ひ嘆くに、なかなか心も尽き果てぬ。

昔、母君の御祖父、中務の宮と聞こえけるが領じたまひける所、

申し上げた方が

大井川のわたりにありけるを、その御後、はかばかしうあひ継ぐ人

近辺

しっかりと相続する人もなくて

もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿

荒れ果てているのを

宮の在世中から引き続いて

守のやうにてある人を呼び取りてかたらふ。「世の中を今はと思ひ

（入道）

これきりとあきらめて

果てて、かかる住ひに沈みそめしかども、末の世に思ひかけぬこと

落ちぶれることになったが

出で来てなむ、さらに都の住処もとむるを、にはかにまばゆき人中

改めて

居心地が悪かろうし

いとはしたなく、田舎びにけるここちも静かなるまじきを、古き所

田舎暮しに慣れた娘の気持も落着くまいから

いついたのだ。
一一 必要な物は、こちらから京へ送ることにしよう。
一二 一通り人が住めるように手入れをしてもらえまいか。「つくろひなされ」の「れ」は軽い敬語。
一三 管理人。前の「宿守のやうにてある人」。
一四 ひどく荒れ果てた所になっておりますので。「藪」は、荒れ果てた邸内をいう。
一五 雑舎に、修理して住んでおりますが。「下屋」は、寝殿、対の屋などに対して、使用人の住む付属の建物。
一六 源氏。源氏の御堂造営のことは絵合の巻末（一一五頁）に見え、後に「嵯峨野の御堂」（一四四頁）と呼ばれている。
一七 閑静なお住まいをというご希望ならば、都合が悪うございましょう。入道の申し入れを警戒して、口実を設けて婉曲にことわろうとする。
一八 実は、その源氏の大臣のご庇護に、一つにはお頼りしようというつもりもあってのことなのだ。「かたかく」は、片方を掛ける意。
一九 「荘」は、貴族などの私有地。この別邸のある土地をいう。
二〇 亡くなった民部の大輔様。民部省（諸国の戸籍その他民政をつかさどる役所）の次官。正五位下相当。古注は、兼明親王の次男、従四位上、東宮学士、民部の大輔伊行を擬する。
二一 しかるべき物をお納めして。耕作料のようなもの。

尋ねてとなむ思ひ寄る。さるべき物は上げわたさむ。修理などして、かたのごと人住みぬべくはつくろひなされなむや」と言ふ。預り、

「この年ごろ領ずる人もものしたまはず、あやしき藪になりてはべれば、下屋にぞつくろひて宿りはべるを、この春のころより内の大殿の造らせたまふ御堂近くて、かのわたりなむいと気騒がしうなりにてはべる。いかめしき御堂ども建てて、多くの人なむ造りいとなみはべるめる。静かなる御本意ならば、それや違ひはべらむ」「何かそれも、かの殿の御蔭に、かたかけてと思ふことありて。おのづからおひおひに内のことどもはしてむ。まづ急ぎておほかたのことどもをものせよ」と言ふ。「みづから領ずる所にはべらねど、また知り伝へたまふ人もなければ、かごかなるならひにて、年ごろ隠ろへはべりつるなり。御荘の田畑などいふことのいたづらに荒れはべりしかば、故民部の大輔の君に申し賜はりて、さるべき物などたてまつりてなむ、領じ作りはべる」など、そのあたりの貯へのことど

今まで長年
持主のお方もおいでになりませんし
あの近辺は
もの騒がしくなって
精を出して造っております
立派な
部屋部屋のしつらいは整えよう
ているようです
いやそのことも
（人道）
大体のところをやって
おいてほしい
ほかに
（預り）私自身が
持主として相続なさる人もありませんので
ひっそりした土地柄をよいことに
お下げ渡し頂いて
耕作しております
田畑からあがる

もをあやふげに思ひて、鬚がちにつなしにくき顔を、鼻などうち赤めつつはちぶき言へば、「さらにその田などやうのことは、ここには知るまじ。ただ年ごろのやうに思ひてものせよ。券などはここになむあれど、すべて世の中を捨てたる身にて、年ごろともかくも尋ね知らぬを、そのことも今くはしくしたためむ」など言ふにも、大殿のけはひをかくれば、わづらはしくて、その後、物など多く受け取りてなむ急ぎ造りける。

一 取り上げられはしないかと不安に思って。
二 語義明らかでないが、不逞なというほどの意味であろう。
三 口をとがらせて言うので。『河海抄』に「はちぶくは撥撫歟。一説、はちをはらふ時うそをふく也。蜂吹」という。
四 領地の証文（所有権の移動を証明する文書）。
五 内大臣（源氏）との縁故を匂わせるので。前にも「かの殿の御蔭に、かたかけて……」と言っている。
六 入道がこうしたことを考えていようとも。大井の邸の修築をいう。
七 姫君がそのように（明石のような田舎に）ものさびしくお暮しなのを。
八 もう一段外聞の悪い、姫君の経歴上の疵になろうかとお思いになっていたところ。母の出自が低い上に田舎育ちということなので「今一際」という。
九 こういうつもりだったのだと、源氏は合点なさる。人目に立たぬ住まいをしようという心づもりを源氏は察する。
一〇 源氏の腹心の家来。（一巻夕顔一三六頁以下、同若紫一八九頁以下など参照）
一一 例によって人目を忍ぶ（源氏の）恋路には。

（入道）私の方で
今までどおりと思って耕作しておればよい
こちらに
は問題にはしない
一切この俗世を捨てた出家の身なので
調べ
いずれきちんと処置しよう
てもいないが
（預りは）事面倒と思って
代償の物

六 かやうに思ひ寄るらむとも知りたまはで、上らむことをもの憂がるも心得ずおぼし、若君のさてつくづくとものしたまふを、後の世に人の言ひ伝へむ、今一際人わろき疵にやと思ほすに、造り出でてぞ、しかしかの所をなむ思ひ出でたると聞こえさせける。人にまじらはむことを苦しげにのみものするは、かく思ふなりけりと心得たまふ。くちをしからぬ心の用意かなとおぼしなりぬ。惟光の朝臣、例の忍ぶる道は、いつとなくいろひつかうまつる人なれば、つかは

〔源氏は〕上京することを
渋
るのも不審にお思いになり
言い伝えるのは
〔大井の邸を〕
これこれの所領のあることを思い出しましたと〔源氏に〕申し上げたのだった
京の夫人たち
の仲間入りするのをいやがってばかりいたのは
なかなか行き届いた明石の上の配慮だと〔源氏は〕感心なさった
いつということなくかかわりあってお役をつとめる者なので〔大井に〕

一二 あの明石の海辺を思わせる場所柄でございました。大井川の流れに臨む場所なので、こう言った。明石の上を住まわせて源氏が通うにふさわしい所だと、源氏の気持をのみ込んだ、いかにも惟光らしい言い分。

一三 人目を忍ぶ明石の上の暮しには、ふさわしくないこともあるまいと源氏はお思いになる。

一四 嵯峨の大覚寺。もと嵯峨上皇の御所嵯峨の院を、上皇の皇女正子内親王（淳和天皇皇后、承和七年淳和上皇崩御により出家）が貞観十八年（八七六）寺とした。「大覚寺の南」とあるのは、栖霞寺（源融の別荘栖霞観を寺としたもの）のことかと古注はいう。栖霞寺はもと清涼寺（釈迦堂）の東にあり、今の阿弥陀堂はその跡であるが、いつ頃からか清涼寺に併せられた。（図録五参照）

一五 泉が流れ落ちるように石組みしたそばにしつらえた建物。大覚寺にも滝殿があって当時の名所であったことは、藤原公任の「滝の糸は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」（『拾遺集』巻八雑上「大覚寺に人々あまたまかりたりけるに古き滝を詠みはべりける」）で知られる。その頃、すでに水も涸れて、詞書にも「古き滝」とある。

一六 こんな苦労の少しもない人がうらやましく思われる。「露の」は、少しもの意で、露が「かかる」を「かからぬ」に言い掛ける和歌的な修辞。

明石の上の上京

〔邸内の〕あちこちの支度などおさせになったのだった

して、しかるべきようにさるべきさまに、ここかしこの用意などせさせたまひけり。

〔惟光〕付近は景色もよくて

「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」

と聞こゆれば、一三さやうの住ひによしながらずはありぬべしとおぼす。

〔源氏が〕造らせたまふ御堂は、一四大覚寺の南にあたりて、一五滝殿の心ばへなど、〔大覚寺に〕風情のある格別の劣らずおもしろき寺なり。これは川面に、大井の邸えもいはぬ松蔭に、何の数奇をこらしたでもなく簡素な作りのさまもいたはりもなく建てたる寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。内のしつらひなどまでおぼし寄る。

風趣に富んだ　山荘　室内の調度のたぐいまで　〔源氏は〕配慮なさる

腹心の家来たちを〔源氏は〕親しき人々、いみじう忍びて下しつかはす。明石に派遣なさる

よいよ上京と思うと　明石に残ることを〔明石上は〕　名残惜しく　父入道が　何かと　明石に風情のあるらしい風情を見せている

はと思ふに、年経つる浦を離れなむことあはれに、入道の心細くて一人とまらむことを思ひ乱れて、よろづに悲し。すべてなどかく心尽くしになりはじめけむ身にかと、一六露のかからぬたぐひらやましくおぼゆ。親たちも、〔源氏からの〕かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝ても覚めても願ひわたりし心ざしのかなふと、いとうれしけれど、あひ会わずに過すこれからのつらさが　希望　互いに　もうどうしようもなくて　ぼんやりして　どうしてこう千千に心を砕くことになってしまった身の上なのかと

見で過ぐさむいぶせさの堪へがたう悲しければ、夜昼思ひほれて、

一 今までも長年、入道とは同じ庵室にも住まず、別別の暮しであったから。入道は浜の館に、母娘は岡辺の家に住んでいた（二巻明石二六九頁）。母も恐らく入道の出家と同時に尼になっていたらしいが、そのことは見えない。次の頁ではじめて「尼君」と呼ぶ。

二 まして娘が上京する今となっては、誰のためにこの明石に留まろうか。娘とともに上京するのである。

三 互いに馴染んだ末別れる時の悲しみは、やはり一通りのことではないであろうに。「みなれ木の見なれそなれて離れなば恋しからむや恋しからじや」（『源氏釈』所引歌）による。

四 いかにも偏屈そうな坊主頭や考え方は頼りにならない夫ではあるが。入道の平素のやり方から、その頭の格好までがいかにも偏屈らしく感じられる尼君の気持をいったもの。

五 いつかは終る命の間だけは（一緒に）と思って。「あり果てぬ命待つ間のほどばかり憂きことしげく思はずもがな」（『古今集』巻十八雑下、平貞文）による。

六 若い女房たちで田舎暮しをおもしろくなく悲観していた者たちは。

七 打ち寄せる波に加えて、涙に袖が濡れがちである。「帰る」に触発されて、浜辺の縁で「寄する波」といった。

明石親子の歌の唱和

八 後夜の勤行の時刻よりも早い深更に起きて。「後夜」は、初夜、中夜、後夜と分ける夜の最後の勤行。

同じことをのみ、「さらば、若君をば見たてまつらではべるべきか」（入道）と言ふよりほかのことなし。

（それなら 姫君とはもうお会いできなくてこれから過すことになるのか）

母君も、いみじうあはれなり。年ごろだに、同じ庵にも住まずかけ離れつれば、まして誰によりてかは、かけとまらむ。ただ、あだにうち見る人のあさはかなるかたらひだに、見なれそなれて別るるほどは、ただならざめるを、まして、もてひがめたる頭つき、心おきてこそたのもしげなけれど、またさるかたに、これこそは世を限るべき住処なれと、あり果てぬ命を限りに思ひて、契り過ぐし来つるを、にはかに行き離れなむも心細し。若き人々のいぶせう思ひ沈みつるは、うれしきものから、見捨てがたき浜のさまを、またはえしも帰らじかしと、寄する波に添へて、袖濡れがちなり。

（ほんの一時の気 まぐれで契りを結ぶ人のかりそめの男女の仲ですら 終る 共に暮してきたのに 景色 二度とは帰って来られないだろうと 出発という 涙に鼻 もの悲しい気分を取り添えたような気持がして 〔上京は〕）

秋のころほひなれば、もののあはれ取り重ねたるここちして、その日とある暁に、秋風涙しくて、虫の音もとりあへぬに、海のかたを見出だしてゐたるに、入道、例の、後夜よりも深う起きて、鼻す

（今日 こらえきれず鳴くのに 〔明石上は〕）

九 お勤めをしておいでだ。「います」は、女流の文章の地の文では特殊な固い感じのある敬語（普通は「おはす」を使う）。入道に敬語を使うのも珍しく、例によって、偏屈な入道を戯画化した筆致。

一〇（めでたい門出なので）不吉な言葉を使わないようにつとめるけれども。

一一 夜光ったという玉のような気持がして、袖の上よりほかにはお離し申したことがなかったのに。大切にしたことの喩え。以下、入道の気持。「夜光の玉」は、『史記』『文選』そのほか、中国の諸書に見える。

一二 とんでもないと思われるほど。以下、出家の身として姫君に馴れむつんだ自分を憚る気持。

一三 姫君の将来をはるかにお祈りする旅の別れに、こらえきれないのはこの年寄りの涙なのでした。「行くさき」は、旅路の安全と姫君の将来を掛ける。

一四 母尼君。ここではじめて「尼君」と呼ぶ。

一五 ど一緒に都は出たのでしたが、今度の旅は、ひとりあてどない野中の道に途方に暮れることでしょうか。「たび」に「度」と「旅」を掛ける。「古道に我やまどはむいにしへの野中の草は茂りあひにけり」（『拾遺集』巻七物名、藤原輔相）を踏まえる。

一六 あてにもならぬことを頼りにして。源氏の愛情だけが頼りであることをいう。

一七 思ってみれば、頼りないことである。尼君の気持を代弁するような草子地。

一八 明石の上。

をすすりながら
すりうちして、[九]行ひいましたり。[一〇]いみじう言忌すれど、誰も誰もいとしのびがたし。若君は、いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉のここちして、袖よりほかには放ちきこえざりつるを、〔姫君が〕自分に見馴れてなしんでお放しにならないかわいい心根など
まつはしたまへる心ざまなど、[一二]ゆゆしきまで、かく人に違へる身を不吉なものと
いまいましく思ひながら、片時見たてまつらでは、いかでか過ぐさどうして過すことがで
むとすらむと、つつみあへず。涙をこらえきれない

「行くさきをはるかに祈る別れ路に[一三]（入道）

堪へぬは老の涙なりけり〔涙を〕

いともゆゆしや」とて、おしのごひ隠す。[一四]尼君、まことに縁起でもない

もろともに都は出できこのたびや[一五]

ひとり野中の道にまどはむ

とて、泣きたまふさま、いとことわりなり。ここら契りかはしてつもりぬる年月のほどを思へば、かう浮きたることを頼みて、捨てし世に帰るも、思へばはかなしや。[一八]御方、今まで長年夫婦として暮してきて京

一 お別れして生きて再びお会いするのはいつのことやら、その時も知れぬ将来をあてにするのでしょうか。「いきて」は「行きて」に「生きて」を掛ける。

二 せめて都までご一緒に。「送り」は、旅立つ人、帰る人を目的地まで送ること。

三 何かにつけて、そうはいかない旨を言いながらも。以下に、入道の長い述懐と決意が述べられている。

四 この世のことをあきらめた当初の頃。入道は、近衛の中将の官を捨てて播磨の守になった（若紫一八六頁参照）。

五 こんな地方（播磨の国）を心ざして下向しましたのも。

六 わが身の不運な分際が思い知られることが多かったので。播磨の守としても志を得なかったことをいう。若紫の巻の良清の話にも「かの国の人にもすこしあなづられて」（一八六頁）とあった。

七 「さらに」（絶対に）は、下に打消しを受けるが、言葉を続けるうちに、脈絡が消えている。

八 もとの国司。

九 入道の父は大臣であった。（明石二七九頁）

一〇 都落ちしたことがそのままこの世を捨ててしまう門出だったのだと、人にも知られることになったのでしたが。都に帰らず出家したことをいう。

一一 せっかくの美しさをお隠し申すのだろうと。「富貴にして故郷に帰らざるは、繡を衣て夜行くが如し」（『史記』項羽本紀）

「いきてまたあひ見むことをいつとてか
　限りも知らぬ世をば頼まむ

送りにだに」と切にのたまへど、かたがたにつけて、えさるまじきよしを言ひつつ、さすがに道のほども、いとうしろめたなきけしきなり。「世の中を捨てはじめしに、かかる人の国に思ひ下りはべりしことも、ただ君の御ためと、思ふやうに明け暮れの御かしづきも心にかなふやうもやと、思ひたまへ立ちしかど、身のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば、さらに都に帰りて、古受領の沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬葎、もとのありさまあらたむることもなきものから、公私にをこがましき名を広めて、親の御なき影をはづかしめむことのいみじさになむ、やがて世を捨てつる門出なりけりと人にも知られにしを、そのかたにつけては、よう思ひ放ちてけりと思ひはべるに、君のやうやうおとなびたまひ、もの思ほし知るべきに添へては、

（入道）
旅の道中も
とても心配でたまらない様子である
明石の上
思いどおりに
お世話も
満足にできようかと
決心したことなのですが
うだつの上がらぬたぐいで
もとの落ちぶれた状態を立て直すことも
笑われ者との評判を
たまらないので
出家したことについては
よくぞさっぱり決心したものだと思いますが
あなたがようやく大人びられて
ものの分別のつく年頃になられるにつれて
どうしてこんなつまらぬ田舎で

こゆらむと、心の闇晴れまなく嘆きわたりはべりしままに、仏神を頼みきこえて、さりとも、かうつたなき身に引かれて、山がつの庵にはまじりたまはじと思ふ心一つを頼みはべりしに、思ひ寄りがたくて、うれしきことどもを見たてまつりそめても、なかなか身のほどをとざまかうざまに悲しう嘆きはべりつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世のたのもしさに、かかる渚に月日を過ぐしたまはむもいとかたじけなう、契り異におぼえたまへば、見たてまつらざらむ心まどひは静めがたけれど、この身は長く世を捨てし心はべり、君達は世を照らしたまふべき光しるければ、しばしかかる山がつの心を乱りたまふばかりの御契りこそはありけめ、天に生まるる人のあやしき三つの途に帰るらむ一時に思ひなずらへて、今日長く別れたてまつりぬ。命尽きぬと聞こしめすとも、後のことおぼしいとなむな。さらぬ別れに御心うごかしたまふな」と言ひ放つものから、「煙ともならむ夕まで、若君の御ことをなむ、六時のつとめに

こんな宿運つたない私の巻き添えになって　思いも寄らぬことが　拝見するようになっても　かえってしがない身分　お生れに　あなたが　恐れ多く　これからお目にかかれない悲しみは静めようもありませんが　私自身は永遠にこの世を捨てたつもりでおりま　田舎者の私の気持をお乱しになるというだけのご因縁はあったのでしょうが　お別れ申し上げます　私が死んだとお聞きになっても　法事など気にかけてなさるな　(人道)　ご将来を

一二七

一二「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔)

一三 二巻明石二七九頁参照。

一四 あなたがこんな田舎で私と共に一生を終ることはあるまいと思う自分の願いだけを頼りにしておりましたが。「山がつの庵」は、田舎者の庵室の意。

一五 明石の上が源氏と結ばれたこと。

一六 ご宿運に力を得まして。姫君の誕生であなたの運勢に確信が持てたので、の意。

一七 格別のご運勢と思われなさいますので。「たまふ」は明石の上に対する敬語。

一八 あなた方は、この世をお照らしになる立派なご運勢がはっきりしているのですから。若菜上の巻に、入道が明石の上誕生の前「みづから須弥の山を右の手に捧げたり。山の左右より月日の光(明石の姫君とその所生の皇子)さやかにさし出でて世を照らす」という瑞夢を見たことが語られる。

一九 天人が果報尽きていまわしい三悪道(地獄、餓鬼、畜生)に堕ちるという一時の苦しみに思いなぞらえて。「天上より退かむとする時、心に大苦悩を生ずること、地獄の衆の苦毒十六の一に及ばず」(『正法念経』)

二〇 避けられない親子の死別。「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと嘆く人の子のため」(『古今集』巻十七雑上、在原業平)

二一 火葬の煙。人生の終りを比喩的に「夕」という。

二二 晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の勤行。

一　お車はたくさん連ねるのも大げさだし。以下上洛の道中の配慮。

二　源氏から遣わされた迎えの家来たちも、できるだけ目立たぬようにとのつもりなので。源氏の意を受けてのことである。

三　午前七時から九時までの間。

明石の上、大井の邸に到着

四　昔の人も感慨深いものと詠んだ明石の浦の朝霧に、船が遠ざかってゆくにつれて。「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」（『古今集』巻九羇旅、読人しらず。左注に「この歌はある人のいはく、柿の本の人麿が歌なり」）により、一行の船を入道が見送る気持をいう。

五　いつまでも道心堅固でいられそうもなく。「澄み」に「住み」を掛け、いつまでも明石に残っていられそうもなく、の意を響かせる。

六　彼岸の浄土に思いを寄せていた尼の私が、捨てた世（京）の方に漕ぎ帰ることです。「かの岸」は、彼岸に明石の浦の意をもこめる。「海士」に「尼」を掛ける。

七　いくたび去ってはまた来る秋をこの明石の浦に過した末、頼りない舟に乗ってなぜ私は帰るのでしょうか。「浮木」は、水に漂う木。あるいは、いかだ。「天の川浮木に乗れる我なれやありしにもあらず世はなりにけり」（『俊頼髄脳』。張騫が漢の武帝の命によって、槎に乗って天の川の源を尋ねて帰ったという故事に基づく）

やはり未練がましく一緒にお祈りすることでしょう　この時には

もなほ心きたなくうちまぜはべりぬべき」とて、これにぞ、うちひそみぬる。

御車はあまた続けむも所狭く、一部分ずつ別々に分けるのも面倒だということでかたへづつ分けむもわづらはしとて、御供の人々も、あながちに隠ろへ忍ぶれば、船にて忍びやかにと定めたり。辰の時に船出したまふ。昔人もあはれと言ひける浦の朝霧隔たりゆくままに、いとものの悲しくて、入道は、心澄み果つまじく、心も空に悲しみに沈んでいる　今まで長年を　あくがれながめぬたり。ここら年を経て今さらに帰るも、なほ思ひ尽きせず、尼君は泣きたまふ。

（尼君）

かの岸に心寄りにし海士船の

そむきしかたに漕ぎ帰るかな

明石の上

御方、

いくかへり行きかふ秋を過ぐしつつ

浮木に乗りてわれ帰るらむ

順風なので　かねて予定の　人目に立たぬよ

思ふかたの風にて、限りける日違へず入りたまひぬ。人に見とが

八 道中も、さして身分高からぬ一行のようによそおった。

九 大井の邸のさま。

一〇 尼君の祖父中務の宮在世中のこと。

一一 前からの建物に新たに造り加えた廊。「廊」は、寝殿と対の屋など、建物と建物をつなぐもの。

一二 庭の遣水の流れも風流な作りにしてある。曲折や流れの緩急、底の石畳、岸の植込みや立石などに気を配る。

一三 源氏は腹心の家司（事務官）にお命じになって。他聞を憚る心づかい。

一四 明石の上は（せっかく上京したのに源氏の訪れもないので）かえっていろいろなことが思われて。

一五 源氏が明石を去る時、形見として残していかれた琴。（明石二九九～三〇〇頁参照）

一六 （誰も聞いていないと思ったのに）松風が気はずかしいほど遠慮もなく琴の響きに合せて鳴る。前に「これは川面に、えもいはぬ松蔭に」（一二三頁）とあった。「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをより調べそめけむ」（『拾遺集』巻八雑上、野の宮に斎宮の庚申しはべりけるに、松風入二夜琴一といふ題をよみはべりける　斎宮の女御）

一七 あらぬ世界のように思われるこの山荘にひとり帰って来て、昔聞いたことのあるような松風が吹いていることです。「身をかへて」は、生を変えての意。「松風」には、明石の上の弾く琴の音を含む。

うにというつもりもあるので
められじの心もあれば、道のほども軽らかにしなしたり。家のさま
風情があって
もおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる
明石の海辺に似ているので　違う所に来たような気もしない
ここちもせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。
立派な外観で
造り添へたる廊など、ゆゑあるさまに、水の流れもをかしうしなし
たり。まだこまやかなるにはあらねども、住みつかばさてもありぬ
手入れは十分に行き届いてはいないが　住みついたらこのままで十分であろう
べし。親しき家司に仰せ賜ひて、御まうけのことせさせたまひけり。
安着の祝宴の用意をさせておありだった
（源氏が）おいでになることは　あれこれ口実をお考えになるうちに
わたりたまはむことは、とかうおぼしたばかるほどに、日ごろ経ぬ。
所在ないので
なかなかもの思ひ続けられて、捨てし家居も恋しう、つれづれな
折も折とてひどく悲しみをこらえかねる
れば、かの御かたみの琴を掻き鳴らす。をりのいみじう忍びがたけ
人気のない自室に　くつろいで
れば、人離れたるかたにうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく
横になっておられたが
響きあひたり。尼君、もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起きあ
がりて、

（尼君）
身をかへてひとり帰れる山里に
聞きしに似たる松風ぞ吹く

一　この昔の山荘で、昔の世の知り人を恋しく思うあまりに弾く田舎びた琴の音を、誰がそれと聞き分けるでしょうか。「故里」は「山里」に応じ、「見し世」は「身をかへて」に応ずる。「見し世の友」は、昔幼時を過した都の知り人の意。「さへづること」は、意味の分らぬ方言、「こと（言）」に「琴」を掛ける。

二　例によって、紫の上がほかからお聞き合せになってはいけないと気を遣われて、あらかじめご挨拶を申し上げなさる。

三　桂に用事があるのですが。次に見える別邸桂の院造営のこと。桂は葛野郡、今の京都市右京区桂。大井から下流一里ほど、桂川の西岸（図録五参照）。

四　訪ねる約束をした人までが。明石の上のことを婉曲にいう。

五　前出一二一頁。

六　（二三日とおっしゃっていますが）斧の柄までおすげかえになるような長のお出かけの間、待ち遠しいことでしょう。「斧の柄は朽ちなばまたもすげかへむ憂き世の中に帰らずもがな」（『古今六帖』二「をのの え」）。晋の王質が木を伐りに石室山に入り、しばらく数人の童子が碁を打つのを見ているうちに斧の柄が朽ちてしまったという故事（『述異記』）による。

七　例によってお相手しかねる女君の拗ねようだ、昔の浮気沙汰もすっかり影をひそめていると、世人も噂しているらしいのに。源氏の心中を以て地の文としたものと思われる。

明石の上御方、

故里に見し世の友を恋ひわびて

さへづることを誰か分くらむ

こうした頼りない有様で かやうにものはかなくて明かし暮らす。大臣、なかなか静心なく落着かぬ気持がなさるので おぼさるれば、人目をもえ憚りあへたまはでわたりたまふを、〔大井に〕女君紫の上には明石の上が上京したともはっきりお知らせすることもなさらなかったのだが は、かくなむとたしかに知らせたてまつりたまはざりけるを、例の聞きもや合はせたまふとて、消息聞こえたまふ。「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり近く来ゐて待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御とぶらひすべければ、二三日はべりなむ」と聞こえたまふ。桂の院といふ所、にはかに造らせたまふと聞くは、そこにするゑたまへるにやとおぼすに、心づきなければ、「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠に」と、心ゆかぬ御けしきなり。例のくらべ苦しき御心、いにしへのありさま名残

かえって　待っているそうなので　まだ飾りつけのない仏像のお世話のことがあるので　気の毒に思いまして　〔明石上を〕お迎えになったのかと　おもしろくないので　ご不満のご様子である

なしと世人も言ふなるものを、何やかやと御心とりたまふほどに、日も高くなった日たけぬ。

忍びやかに、御前疎きはまぜで、御心づかひしてわたりたまひぬ。たそかれ時におはし着きたり。狩の御衣にやつれたまへりしだに世に知らぬここちせしを、ましてさる御心してひきつくろひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆきここちすれば、思ひむせべる心の闇も晴るるやうなり。めづらしうあはれにて、若君を見たまふも、いかが浅くおぼされむ。今まで隔てける年月だに、あさましく悔しきまで思ほす。大殿腹の君をうつくしげなりと世人もて騒ぐは、なほ時世によれば、人の見なすなりけり、かくこそは、すぐれたる人の山口はしるかりけれと、うち笑みたる顔の何心なきが、愛敬づき、にほひたるを、いみじうらうたしとおぼす。乳母の、下りしほどはおとろへたりし容貌ねびまさりて、月ごろの御物語など馴れ聞こゆるを、あはれに、さる塩屋のかたはらに過ぐしつらむこ

人目をお憚りになって
ご機嫌をお取りになるうちに
念入りに身なりをお整えになった
まばゆいほどに思われるので
〔源氏は〕はじめての対面に感無量で
〔源氏は〕
〔姫君の〕
〔源氏は〕
あどけないのが
ちやほや
かわいらしいと
つやつやかなのを
やつれていた
上京以来の
一段と美しくなって
親しく申し上げるのを〔源氏は〕いとしく
するのは
塩焼く小屋の側で

一八 ご前駆の者たちも親しくない者は加えないで。
一九 夕暮れ時。「たそかれ」は、「誰ぞ彼」で、顔の見分けもつかなくなった時刻の意。
二〇 狩衣をお召しになった質素なお姿でさえ、世にまたとなくお美しいと思われたのに。明石の上の心。明石で源氏と逢った当時のことをいう。旅先でのことであったので、「狩の御衣」（旅装）と筆を飾ったもの。

大井での再会

二一 久しぶりの再会と心遣いなさって。
二二 悲しみに閉ざされた母としての心。「心の闇」は、親心の意（一二七頁注一二参照）。
二三 どうして通り一遍にお思いになれようか。
二四 今まで逢わずにいた年月も、我ながらどうしたことかと、後悔されるほどにお思いになる。三年ぶりの再会である。
二五 左大臣（この時摂政太政大臣）の姫君葵の上腹の若君。夕霧。この年十歳。以下、源氏の心。
二六 やはり権勢におもねるから、人がそう見るのだった。
二七 美しい人の徴候は今から分るものだと。「山口」は、山の入口。「山口しるし」で成語。「人よりも思ひのぼれる君なればむべ山口はしるくなりけり」（『河海抄』に六帖として引く）など、歌にも例がある。
二八 源氏が明石に遣わした乳母。（澪標一八頁参照）

とをおぼしのたまふ。（源氏）「ここにも、いと里離れて、わたらむことも（おねぎらいになる）（この大井も）（人里遠くて）（たずねて来ることもむつかしいから）かたきを、なほかの本意ある所にうつろひたまへ」とのたまへど、（明石上）「いとうひうひしきほど過ぐして」と聞こゆるもことわりなり。夜一夜、（源氏は）よろづに契りかたらひ明かしたまふ。

（手入れしなければならない所々の担当を）（新たに任命した）つくろふべき所々のあづかり、今加へたる家司などに仰せらる。（お命じになる）桂の院にわたりたまふべしとありければ、（桂の院に）近き御荘の人々参り集りたりけるも、（大井に）（御荘の人々に）皆尋ね参りたり。前栽どもの折れ伏したるなどつくろはせたまふ。（源氏）「ここかしこの立石どもも皆転び失せたるを、情ありてしなさば、をかしかりぬべき所かな。（こうした仮の住まいを念入りに手入れするのも）かかる所をわざとつくろふも、（つまらないことだ）あいなきわざなり。（去る時は気が重く）さても過ぐし果てねば、立つ時もの憂く、（執着が残るのは）心とまる、（つらいことだった）苦しかりき」など、来しかたのことものたまひ出でて、（泣いたり笑ったりして）泣きみ笑ひみ、（くつろいだお話をなさる様子は）うちとけのたまへる、いとめでたし。尼君、のぞきて見たてまつるに、老も忘れ、もの思ひも晴るるここちしてうち笑みぬ。

一　やはりあのかねて考えてある所にお移りなさい。東の院の東の対である。（一一九頁参照）

二　まだとても都に馴れませんので、もうしばらくしてから。「うひうひし」は、物馴れない意。

源氏、大井にくつろぎ、尼君とも語る

三　付近の（源氏の）荘園に仕える者たちが。

四　庭に植え込んだ草木。

五　池や遣水のほとりに立てた石組み。立石などまで倒れたり失われているのは、中務の宮時代からのこの山荘の荒廃ぶりを思わせる。

六　数奇をこらして作り立てたら、見所のある庭になりそうだ。

七　そうしたとて、いつまでも住めるわけでもないから。

八　昔の明石を去る時のつらかった思いも話題になさって。

九　寝殿と東の対を結ぶ渡殿の下から流れ出る遣水の風情を手入れさせなさるということで。遣水を東の渡殿の下から庭に流して南の池に導くのが、当時の一般の作庭法である（図録六参照）。
一〇　上に直衣をつけぬくつろいだ姿。
一一　源氏の家庭的にくつろいだ姿を、尼君はすばらしくまたうれしく拝見するのである。
一二　花や樒を浮べて仏前に供える水。そのための皿その他の道具。普通は簀子に閼伽棚をしつらえる（一巻図録一〇参照）。
一三　尼君がその陰から覗いていた几帳の所に。
一四　美しくお育て下さった姫君のことを思いますと。「罪軽く」は、前世の罪の軽いこと、果報によってこの世に美しく生れ育つ意。「ゆゑ」は、理由。尼君の勤行のゆえに、前世の罪が軽くなったという。
一五　お気持のほどは並々ならずうれしく存じます。明石の上母子に付き添って来てくれたことを感謝する。
一六　明石のような田舎の海辺にお育ちになって、おいたわしくお思い申し上げておりました幼い姫君も。「荒磯陰」「二葉の松」、いずれも和歌的修辞、互いに縁語。
一七　（こうしてお膝もとに参って）もう今は安心など将来と祝着に存じ上げておりますが。「生ひ先」は「松」の縁。
一八　母の素姓の卑しさゆえ、どうでありましょうかと。「根ざし」は「松」の縁。

東の渡殿の下より出づる水の心ばへ、つくろはせたまふとて、いとなまめかしき桂姿うちとけたまへるを、いとめでたうれしと見たてまつるに、閼伽の具などのあるを見たまふに、おぼし出でて、「尼君はこなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」とて、御直衣召し出でてたてまつる。几帳のもとに寄りたまひて、「罪軽く生ほし立てたまへる人のゆゑは、御行ひのほどあはれにこそ思ひなしきこゆれ。いといたく思ひすましたまへりし御住処を捨てて、憂き世に帰りたまへる心ざし浅からず。またかしこには、いかにとまりて思ひおこせたまふらむと、さまざまになむ」と、いとなつかしうのたまふ。「捨てはべりにし世を今さらにたち帰り、思ひたまへ乱るるをおしはからせたまひければ、命長さのしるしも思ひたまへ知られぬる」と、うち泣きて、「荒磯陰に心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今はたのもしき御生ひ先と祝ひきこえさするを、浅き根ざしゆゑやいかがと、かたがた心尽くされはべる」など聞こ

（源氏）（尼君のことを）（源氏）（尼君）（尼君）

こちらにおいでか　ひどくだらしない格好をしたものです　お召しになる　取り寄せて　長年のお勤めのほどをしみじみとありがたくお思い申し　俗念を離れていらした　つらい世　上げます　間に　明石　（人道が）どんなにかあと　あれこれ思われることです　に残って気づかっておられるかと　やさしく　いろいろ思い悩んでおります　長生きのかいもありましたことと　とうれしく存ぜられます　気持をお察し頂きましたので　長生きさのしるしも　いろいろ心配でならぬことでございます

一 風情がなくはないので。尼君の話しぶり、言葉遣いなど、さすがにたしなみのほどがうかがえるので。
二 尼君の祖父にあたる中務の宮。
三 手入れのすんだ遣水の水音も、昔恋しさを訴えるかのように聞える。底をさらえたり、草を払ったり、石を立て直したりで、流れの音もよくなったという趣。
四 昔ここに住み馴れた私は、かえって昔のことも思い出しかねていますが、湧き出るきれいな水はこの家の主のように音を立てております。「かへりて」は「却りて」と「帰りて」を掛ける。遣水は湧き出る泉を水源とすることが多い。
五 ささやかな泉は昔のことも忘れないであろうが、影に映るもとの主人が尼になって面変りしているからだろうか、知らぬ顔でいることよ。「いさらゐ」は、小さな井（湧き水）の意で、歌語。尼君の歌の「清水」に応ずる。「はやく」は「いさらゐ」の縁語。
六 嵯峨野の御堂。
七 毎月、十四日に普賢講、十五日に阿弥陀の念仏三昧、晦日に釈迦の念仏三昧を修する。
八 普賢菩薩の功徳をたたえる法会。
九 心に仏を念じ、仏名、経などを唱える行法。「三昧」は、心を正しく持して妄念を離れること。
一〇 仏を荘厳する様々な仏具。天蓋、花鬘、燈明、花瓶その他。

嵯峨野の御堂

ゆるけはひ、よしなからねば、昔物語に（昔話に）、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに（話をおさせになるのに）、つくろはれたる水の音なひ、かことがましう聞こゆ。

（尼君）
住み馴れし人はかへりてたどれども
清水ぞ宿のあるじがほなる

（源氏）
「いさらゐははやくのことも忘れじを
もとのあるじや面がはりせる

（源氏は）優雅でたしなみがあると
さりげなく謙遜する様子を
わざとはなくて言ひ消つさま、みやびかによしと聞きたまふ。

感慨を催して（その場を）
ご立涙さを（尼君は）世に類いもないと
あはれ」と、うちながめて立ちたまふ姿にほひを、世に知らずのみ思ひきこゆ。

御寺にわたりたまひて、月ごとの十四五日、晦日の日、行はるべき普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧をばさるものにて、またまた加へ行はせたまふべきこと、定め置かせたまふ。堂の飾り、仏の御具など、めぐらし仰せらる。月の明きに帰りたまふ。

いうまでもなく
ほかにも多く
つけ加えて仏事をいとなませなさることを
人々にお触れをお廻しになる
（大井に）

一一 かつての明石での一夜。別れに臨んで源氏が琴を弾いた夜。（明石二九七～三〇〇頁）

源氏、形見の琴を弾き、明石の上と唱和

一二 前の一二九頁にも見えている。

一三 絃の調子もあの時のままで。源氏は「逢ふまでのかたみに契る中の緒の調べはことに変らざらなむ」と詠み、「この音違はぬさきにかならずあひ見む」と明石の上を力づけた（明石三〇〇頁）。

一四 約束した通りに今も変らぬこの琴の調べで、あなたを思い続けてきた私の心のほどは分ったでしょうか。「絶えぬ」は、琴の緒（絃）の縁語。

一五 心変りはせぬとお約束なさったことを力として、松風の音に音を添えて泣いていたことです。「こと」は「言」と「琴」を掛ける。「松の響き」（松風）は、琴の音に調べ合わすものとして琴に縁がある（一二九頁注一六参照）。

一六 身の程に過ぎた仕合せというものであろう。草子地。

一七 どうしたものだろう、ここでこのまま日陰の身の上のようなことで育つのはかわいそうだし不本意なことだから。以下、源氏の心中。

一八 紫の上の養女にして、という含み。

一九 将来、人に後ろ指をさされるようなこともあるまい。「おぼえ」は、人のおもわく。「罪まぬかる」は、難点がないというほどの意。

一 ありし夜のことおぼし出でらるるをり過ぐさず、二 かの琴の御琴さし出でたり。そこはかとなくものあはれなるに、三 え忍びたまはで搔き鳴らしたまふ。四 まだ調べもかはらず、ひきかへし、そのをり今のここちしたまふ。

（源氏が）思い出されなさるちょうどその折に
（源氏は）何ということもなくしみじみとした思いなので
気持を抑えかねなさって
昔にもどって
あの夜のことが

（源氏）一四
契りしにかはらぬ琴の調べにて
絶えぬ心のほどは知りきや

明石の上
女、

一五
かはらじと契りしことを頼みにて
松の響きに音を添へしかな

歌をやりとり申し上げたのも（源氏に）不釣合いでないのは
すっかり女盛りに美しくなった
（源氏は）見捨てて置かれそうもなく
姫君は姫君で
いつまで見ていても目をお離しになれない
思う存分大切に育てたら

と聞こえかはしたるも似げなからぬこそは、一六 身にあまりたるありさまなめれ。こよなうねびまさりにける容貌けはひ、え思ほし捨つまじう、若君はた、尽きもせずまもられたまふ。一七 いかにせまし、隠ろへたるさまにて生ひ出でむが心苦しうくちをしきを、一八 二条の院にわたして、心のゆく限りもてなさば、後の一九 おぼえも罪まぬかれなむか

一　その場合の明石の上の悲しみが痛々しく思われて。

二　姫君は、幼な心地に（見馴れぬ源氏に）少し恥ずかしがっていたのが。

三　源氏が姫君を抱いていらっしゃる様子は、いかにもご立派で、（こうした父君を持った）姫君の幸運はこの上もないものと思われる。

四　すこしお寝過しになって。昨夜の語らいのこまやかさを暗示する。

五　前にも「桂の院にわたりたまふべしとありければ」（一三二頁）とあった。噂で、源氏の迎えにそちらに行った人々もあったという趣。

六　こうしてわざわざ見つけられるような秘密の通い所でもないのに。色恋沙汰ではないという家庭的な気持から言ったもの。

七　（こうしてあわただしく帰るのが）明石の上に気の毒なので。

八　これからは、姫に会わないではとてもつらいことだろうが、全く現金なものだ。今までほっておいて、という気持。「うちつけ」は、唐突の意。

九　ここはいかにも遠いな。「里遠みいかにせよとかかくのみはしばしも見ねば恋しかるらむ」（『元真集』人の国なる女に）によるか。

言い出すことがおできになえうち出でたまはで、涙ぐみて見たまふ。幼きここちにすこしはぢらひたりしが、やうやううちとけて、もの言ひ笑ひなどしてむつれたまふを見るままに、にほひまさりてうつくし。抱きておはするさま、見るかひありて、宿世こよなしと見えたり。

大井での別れの朝　迎えの人々参集

翌日

またの日は京へ帰らせたまふべければ、すこし大殿籠り過ぐして、やがてこれより出でたまふべきを、桂の院に人々多く参りつどひて、ここにも殿上人あまた参りたり。御装束などしたまひて、「いとはしたなきわざかな。かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」とて、騒がしきに引かれて出でたまふ。心苦しければ、さりげなくまぎらはして立ちとまりたまへる戸口に、乳母、若君抱きてさし出でたり。あはれなる御けしきにかき撫でたまひて、「見ではいと苦しかりぬべきこそ、いとうちつけなれ。いかがすべき。いと里遠しや」とのたまへば、「はるかに思ひたまへ絶えたりつる年ごろよりも、今か

お帰りになるご予定なので　このままここからお帰りになるはずだったのが　大井　〔お迎えに〕　まりの悪いことだな　〔姫君を〕　いとしくてならぬご様子で　（源氏）　（乳母）　明石でお目にかかれぬものとあきらめておりました今までよりも　これか　全くき　何気ないふうをよそおって　人々の騒ぎにせき立てられるようにお帰りになる　顔を出した

一〇 どうしたのだ。母の明石の上を求める言葉。
一一 そうしてくれたら、元気も出ようにこんなつらい思いをしなくてもすむのに、の意。

一二 明石の上は、なまじ久しぶりの逢瀬に、悲しみに心も乱れて横になっているので。
一三 あまりにも上臈ぶった（身分の高い人のような）振舞と源氏はお思いになる。

一四 しなやかな身のこなしは、皇女といっても不足はないであろう。
一五 几帳の垂れ絹を引きあげて。
一六 ご前駆の者たちなど、立ち騒いでそこらにいるので。「やすらふ」は、たたずむ、ぐずぐずする意。
一七 明石の上は、あれほど落着いていたものの、さすがにお見送り申し上げる。

らのお扱いが心細いようなことでございましたら心配なことでございます
らの御もてなしのおぼつかなうはべらむは心尽くしに」など聞こゆ。
若君、手をさし出でて、〔源氏の〕立ちたまへるをしたひたまへば、後をお追いになるので ついゐたまひて、膝をおつきになって「あやしうもの思ひ絶えぬ身にこそありけれ。〔源氏〕不思議にいつまでも物思いとは縁の切れぬ私だな しばしの別れもつらいことだ
も苦しや。いづら。一〇 どうして など、一緒に出て来て別れを惜しまれないのかもろともに出でては惜しみたまはぬ。一一 さらばこそ人ごこちもせめ」とのたまへば、〔乳母は〕うち笑ひて、女君にかく しかじかと
なむと聞こゆ。

一二 なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、すぐにも起き上がれないでいる とみにしも動かれず。一三 あまり上衆めかしとおぼしたり。女房たちも見るに見かねているので 人々もかたはらいたがれば、しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはらめ、なかば姿を隠している横顔は いみじうなまめいてよしあり。一四 風情がある たをやぎたるけはひ、皇女たちといはむにも足りぬべし。一五 帷 引きやりて、やさしくおなぐさめになる こまやかにかたらひたまふ。一六 御前など、立ち騒ぎてやすらへば、〔源氏は〕出でたまふとて、美しくて とばかりかへりみたまへるに、一七 さこそ静めつれ、〔源氏は〕言いようもない 見送りきこゆ。いはむかたなき盛りの御容貌なり。大層すらりとした背格好であられたのが いたうそびやぎたまへりしが、少し釣合うほどにおふとりになられた すこしなりあふほどになりた

一 御指貫（直衣の時の袴）の裾まで、色めかしく魅力がこぼれ落ちると見えるのは、あまりな贔屓目というものであろう。「あながちなる」以下草子地。

二 あの解任された蔵人（二巻須磨二一九頁）。澪標三四頁に見え、関屋八七頁に空蟬の夫常陸の介（もと伊予の介）の先妻腹の子、河内の守（もと紀伊の守）の弟とある。

三 衛門府の三等官。従六位上相当。

靫負の尉と女房

四 六位の蔵人から従五位下に叙せられていた。

五 源氏のお太刀を受け取りに近づいて来た。

六 明石時代に見知った女房の姿を簾越しに見つけて。

七 明石の浦風を思い出しました（ここ大井での）明け方の寝覚めにも。「浦風」「寝覚」いずれも和歌の世界の言葉。女房相手の気取った言い廻し。

八 雲の幾重にも立つこの大井の山里のものさびしさは、本当に明石の海辺にも劣りませんでしたので。「白雲の八重立つ山の峰にだに住めば住まるる世にこそありけれ」（『源氏釈』所引）、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」（『古今集』巻九羇旅）によって言葉を綾なしたもの。

九 誰も知る人もいないと、途方に暮れておりましたが。「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」（『古今集』巻十七雑上、藤原興風）

一〇 （女房の大げさな言葉に）興ざめな思いがするが。

一一 迎えの中の重立った人々。ここだけに見える人物。

まひにける御姿など、（こうあってこそ貫禄がおありというものだと）かくてこそもののしかりけれと、御指貫の裾まで、なまめかしう愛敬のこぼれ落つるぞ、あながちなる見なしなるべき。

かの解けたりし蔵人も、（復職していたのだった）かへりなりにけり。靫負の尉にて、今年かうぶり得てけり。昔にあらため、（昔にひきかえ）ここちよげにて、（得意の面持で）御佩刀取りに寄り来たり。人影を見つけて、「来しかたのもの忘れしはべらねど、（靫負尉）昔のつらかったことを忘れはいたしませんが恐れ多いのでご遠慮しましたかしこければこそ。浦風おぼえはべりつる暁の寝覚にも、おどろかしきこえさすべきよすがだになくて」と、（女房）けしきばむを、「八重立つ山は、さらに島隠れにも劣らざりけるを、松も昔のと、たどられつるに、（昔を忘れぬお方もいらっしゃいましたので）忘れぬ人ももしたまひけるに、（心強く存じます）たのもし」など言ふ。こよなしや、（自分だって当時悩みがないわけではなかったのに）われも思ひなきにしもあらざりしを、（様子ぶるのを）など、あさましうおぼゆれど、（靫負尉）「今、（いずれ）ことさらに（改めて）」と、（きちんと挨拶してお側に参った）うちけざやぎて参りぬ。

（源氏が）いとよそほしくさし歩みたまふほど、（重々しく）（供人は）かしかましく追ひ払ひて、（やかましく先払いをして）御車のしりに、（末席に）頭の中将、兵衛の督乗せたまふ。（源氏）「いと軽々しき隠

一二 何ともお手軽な隠処を見つけられたのは残念だ。
一三 昨夜はよい月でしたのに。以下、同車した頭の中将たちの言葉。
一四 山の紅葉。歌語を借りた表現。「霜の経露の緯こそ弱からし山の錦の織ればかつ散る」（『古今集』巻五秋下、藤原関雄）
一五 野辺の秋草の花。「野辺」は歌語。
一六 実名を言ったのを、ここに写すに際して伏せて言わない書き方。
一七 隼・鷂など小型の鷹を放って鶉などの小鳥をとる秋の鷹狩。小鷹狩とも。冬の大鷹狩に対していう。（図録一〇参照）

桂殿での遊宴

一八 桂の院。帰京の予定の変更である。
一九 ご饗宴の準備に大騒ぎして。
二〇 鵜匠たち。鵜を飼いならして川魚をとる者。
二一 須磨、明石での漁師たちの言葉。（須磨二五一頁、明石二六四頁参照）
二二 先の「なにがしの朝臣」たち。
二三 獲物の小鳥を形ばかり。不猟の趣であろう。小鳥を物の枝に付ける作法について『河海抄』に詳しい。
二四 上席から末席へと盃が廻されて。
二五 四句の漢詩。五言と七言とある。
二六 管絃のお催し。
二七 調子合せのための管楽器だけの短い曲。各調子に一つずつあるが、ここは秋の調子とされる平調の調子であろう。

処見あらはされぬるこそねたう」と、いたうからがりたまふ。「昨夜の月に、くちをしう御供に後れはべりにけると思ひたまへられしかば、今朝は霧を分けて参りはべりつる。山の錦はまだしうはべりけり。野辺の色こそ盛りにはべりけれ。なにがしの朝臣の、小鷹にかかづらひて立ち後れはべりぬる、いかがなりぬらむ」など言ふ。

残念なことに　つらがっていられる　時期がまだ早うございました

「今日はなほ桂殿に」とて、そなたざまにおはしましぬ。にはかなる御饗し騒ぎて、鵜飼ども召したるに、海士のさへづりおぼし出でらる。野に泊りぬる君達、小鳥しるしばかりひき付けさせたる荻の枝など、土産にして参れり。大御酒あまたたび順流れて、川のわたりあやふげなれば、酔ひにまぎれておはしまし暮らしつ。おのおの絶句など作りわたして、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊びはじまりて、いと今めかし。弾きもの、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手の限りして、をりに合ひたる調子吹き立つるほど、川風吹き合はせておもしろきに、月高くさしあがり、よろづのこと澄める夜の

川辺の遊覧は　諸事を忘れて終日桂の院でお過しになった　あぶなそうなので　皆作って　絃楽器は　はなやかだ　季節にふさわしい　上手の者ばかりで

勅使参り、帝、歌を賜る　源氏唱和

一　清涼殿の殿上の間に伺候する帝の侍臣。勅使をまじえて京から参上したのである。

二　中神の物忌であろうかとされる。五日か六日連続するゆえである。（一巻帚木八一頁注一一参照）。「御物忌」とあるのは、帝の物忌である。

三　五位の蔵人で太政官の少弁（正五位下相当）を兼ねる者。名誉の職である。

四　そちらは月の澄む川向うの人里ゆえ、月の光はさぞのどかなことであろう。桂の院での源氏の宴遊のさまを思いやられた歌。「月の澄む川」は、桂川のこと。「澄む」に「住む」を掛ける。「桂の影」とともに、月の中に桂の大樹があるという中国の伝説に基づく。「兼名苑に云く、月の中に河あり、河の水の上に桂樹あり、高さ五百丈」（『河海抄』）

五　桂の院には、（使者への禄や出席者への引出物などのための）用意の品もなかったので。

六　衣裳を納める櫃。肩に掛けて担うので「荷」を数詞として用いる。（二巻図録一二参照）

七　勅使の蔵人の弁は、お役目がら早々に帰参するので、使者の禄として女の装束をお与えになる。頂いて肩に掛けるので、「かづく」（かぶせる）という（図録九参照）。

八　ここ桂は、月の光に近いというのは名ばかりで、朝霧夕霧の晴れ間もない山里でございます。「久かた」は、枕詞「久かたの」から転じて、月の意。

ややふくるほどに、殿上人（てんじやうびと）四五人ばかり連れて（連れ立って）参れり。上（うへ）にさぶらひけるを（お前にはべっていたのだが）、御遊び（管絃の御遊）ありけるついでに、「今日（帝）は六日（二）の御物忌（ものいみ）あく日にて、かならず参りたまふべきを（〔源氏は〕きっと参内なさるはずなのに）、いかなれば（どうしてなのか）」と仰せられければ、ここにかう泊（つかひ）らせたまひにけるよし聞こしめして（〔帝は〕桂の院）、御消息（せうそこ）あるなりけり。御使（つかひ）は、蔵人（三）の弁なりけり。

（帝）四
「月のすむ川のをちなる里なれば
　桂の影はのどけかるらむ

うらやましう」とあり。かしこまりきこえさせたまふ。上（うへ）の御遊（禁中の御遊）びよりも、なほ所からのすごさ添へたるものの音（ね）をめでて、また酔（ゑ）ひ加はりぬ。ここにはまうけの物もさぶらはざりければ、大井に、（やはり場所柄ゆえひとしお心にしみ入る）

「わざとならぬまうけの物（五）や」と、（ことごとしくない用意の品はないか）言ひつかはしたり。（使いをおやりになる）取りあへた（ありあわせた物をそのままにさし上げた）るに従ひて参らせたり。衣櫃二荷（ひつふたかた）にてあるを、御使（七）の弁は疾（と）く帰り参れば、女の装束（さうぞく）かづけたまふ。

（源氏）八
久かたの光に近き名のみして

九 帝のお成りをお待ち申し上げていらっしゃるというお気持の歌なのであろう。作者の自注。草子地。
一〇「久かたのなかに生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる」（『古今集』巻十八雑下、桂にはべりける時に七条の中宮とはせたまへりける御返りことにたてまつれりける　伊勢）。七条の中宮は宇多天皇の女御温子、醍醐天皇即位後、中宮を称する。
一一 明石で、月明のもとに淡路島を望んで歌を詠んだ時のこと。（明石二七四頁参照）
一二「淡路にてあはと遙かに見し月の近き今宵は所からかも」（『新古今集』巻十六雑上）。明石で源氏はこの歌を口ずさんだ。都で眺める月はまた格別という感慨を源氏は躬恒の歌に託して今語るのである。
一三 月も廻り、自分も都に帰って来て、手に取るほどにくっきり見えるのは、淡路の島を望んで遙かに遠く見たのと同じ月なのであろうか（明石二七四頁参照）。
一四 浮雲にしばらく姿を隠した月の光が美しく澄みきった今宵は、いつまでもものどかなことでございましょう。須磨、明石に流寓したが、都に帰って末長く政権の座にあるであろう源氏をたたえた歌。「澄み果つ」に「住み果つ」、「夜」に「世」を掛ける。
一五 太政官の職で、中務、式部、治部、民部の四省を監督する。従四位上相当。ここだけに見える人物。
一六 亡き桐壺院は崩御あそばしてどこにお姿をお隠しになったのであろう。「雲の上のすみか」は、宮中を意味する。

朝夕霧も晴れぬ山里

行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし。（源氏）一〇「なかに生ひたる」とうち誦じたまふついでに、一一かの淡路島をおぼし出でて、躬恒が「一二所から（いぶかしがったとかいう話など）か」とおぼめきけむことなどのたまひ出でたるに、（感に堪えない）ものあはれなる酔ひ泣きどもあるべし。

（源氏）一三めぐり来て手に取るばかりさやけきや
淡路の島のあはと見し月

頭の中将、
一四浮雲にしばしまがひし月影の
すみはつるよぞのどけかるべき

一五左大弁、すこしおとなびて、（年輩の人で）故院（亡き桐壺院の御代にも）の御時にも、むつましうつかうまつりなれし人なりけり。

（左大弁）一六雲の上のすみかを捨てて夜半の月
いづれの谷にかげ隠しけむ

一 思い思いに歌はたくさん詠まれたようだが、わずらわしいので（あとは書き留めない）。草子地。
二 親しい人々だけ相手の内輪のしみじみとしたお話が、少し砕けてきて。
三 いつまでもここで過してしまいそうだが。紫の上が「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠に」（一三〇頁）と言ったのに応ずる筆致。
四 今日までも遊び暮すわけにはいかないということで。
五 禄の物を身分に応じて賜って、霧の絶え間に姿を見せているのも。色とりどりの禄の衣裳をめいめい肩に掛けて庭に立っている姿である。
六 近衛の舎人は、将監、将曹、府生、番長、近衛の総称。随身として奉仕する者であるが、当時は神楽の人長をつとめるなど音楽に堪能な者が多かった。「名高き」とは、その方面に名のあらわれた者のこと。
七 近衛の舎人のうち、東遊びに堪能な者を補して称する。
八 神楽歌の一曲。神の還御を送る歌。「葦駮の　や　森の　森の　下なる　若駒率て来　葦毛駮の　虎毛の駒（本）　その駒ぞ　や　我に　我に草乞ふ　草は取り飼はむ　水は取り　草は取り飼はむや（末）」。神楽歌は本方と末方に分れて歌う。
九 人々が舎人たちに禄として脱いでお与えになる袿の様々な色合いは。

源氏、帰邸、紫の上の機嫌をとる

一心々にあまたあめれど、うるさくてなむ。気近ううち静まりたる御物語、すこしうち乱れて、千年も見聞かまほしき御〔源氏の〕ありさまなれば、斧の柄も朽ちぬべけれど、今日さへはとて、急ぎ帰りたまふ。物ども品々にかづけて、霧の絶え間に立ちまじりたるも、前栽の花に見間違えるような えまがひたる色あひなど、ことにめでたし。近衛府の名高き舎人、物の節どもなどさぶらふに、お供にいるのに さうざうしければ、このままでは物足りないので 其駒など乱れ遊びて、紅葉を風が吹いて着せかけたかと見える ぬぎかけたまふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと見ゆ。ののの騒ぎで しりて帰らせたまふ響きを、人馬の音を 明石の上は 遥か遠くに 大井にはもの隔てて聞きて、名残さびしながめたまふ。物思いに沈まれる お手紙もやらないでと 御消息をだにせでと、大臣も御心にかかれり。〔紫上に〕

二条の院に帰られて

殿におはして、しばらくとばかりうち休みたまふ。山里の御物語など聞こえたまふ。〔源氏〕「暇聞こえしほど過ぎつれば、お暇を頂いたその日数も過ぎたので いと苦しうこそ。このすき連中が探し当てて来て きものどもの尋ね来て、無理に引き止めたのについ負けて いとといたう強ひとどめしにひかされて、今朝はいとなやまし」とて、気分がすぐれません 大殿籠れり。例の、〔紫上は〕ご機嫌がお悪いようだ 心とけず見えたまへど、わざと気づかぬふりをして 〔源氏〕比較にもならぬ相手を ひき比べてお考えになる 見知らぬやうにて、「なずらひならぬほどを、おぼしくらぶる

一〇（紫の上と共に）寝所に入っておられる。

一一 源氏が、宮中にお出かけになる時に。

一二 はたから見ても、細々と情をこめてお書きのようだ。

一三 ひそひそ言い含めて使いの者をお出しになるのを、紫の上づきの重立った女房などは憎らしいとお思い申し上げる。

源氏、姫君を引き取ることを紫の上に相談する

一四 先ほどのお手紙へのご返事を（使いの者が）持って参上した。

一五 この手紙は、あなたが破って始末して下さい。紫の上に読ませようとして渡す科白。

一六 こうした手紙が人目に触れたりするのも。「散る」は、手紙の始末が悪くて人目に触れること。

一七 肘をもたせかけて身体を休める調度。（一巻図録九参照）

一八 明石の上からの手紙は、ひろげられたままそこにあるけれども。

のも みっともないことでしょう 自分は自分だと平気でいらっしゃればよい

も、わろきわざなめり。われはわれと思ひなしたまへ」と、教へきこえたまふ。暮れかかるほどに、内裏へ参りたまふに、脇に隠すように ひきそばめて急ぎ書きたまふは、大井へのお手紙のようだ かしこへなめり。側目こまやかに見ゆ。うちささめきてつかはすを、御達など憎みきこゆ。

その夜は内裏にもさぶらひたまふべけれど、宮中にご宿直のご予定もあったが 解けざりつる御けし直らなかった紫の上のご機嫌を取りに きとりに、夜ふけぬれど、退出なさった まかでたまひぬ。ありつる御返り持て参れり。格別紫の上のお気に障りそうな所もないような 〔紫上に〕え引き隠したまはで御覧ず。ことに憎かるべきふしも見えねば、〔源氏〕「これ、破り隠したまへ。面倒でなりません むつかしや。かかるものの散らむも、不似合いな年輩になってしまいました 今はつきなきほどになりにけり」とて、御脇息に寄りゐたまひて、〔明石上のことが〕御心のうちには、それ以上何もおっしゃらない いとあはれに恋しうおぼしやらるれば、燈をうちり見つめて ながめて、ことにものたまはず。文は広ごりながらあれど、女紫の上は君、見たまはぬやうなるを、〔源氏〕「せめて見隠したまふ御まじりこそ、わざと見て見ぬふりをなさる御まなじりが 気になることです わづらはしけれ」とて、うち笑みたまへる御愛敬、所狭きまでこぼれ 〔紫上に〕そうなほどだ れぬべし。さし寄りたまひて、〔源氏〕「まことは、実は らうたげなるものを見

一　姫君を（私の子として）一人前に扱うのも、いろいろ世間体があるので、困っているところなのです。生母明石の上の出自が低いので、こう言う。

二　私と一緒に考えて下さって、お考え通り決めて下さい。姫君を紫の上の養女にすることに、婉曲に同意を求めようとしている。

三　三歳にもなっているのですが。「かぞいろ（父母）はあはれと見ずや蛭の児は三歳になりぬ脚立たずして」（『日本紀竟宴和歌』大江朝綱）。伊弉諾、伊弉冉二神の生んだ蛭児が三歳になっても脚が立たなかった故事による。

四　本人は非の打ち所なくかわいらしいのも、ほっておけない気がします。

五　幼げな腰のあたりも、とりつくろってやりたいなどと思うのですが。男女、三歳ではじめて袴を着ける袴着の儀のこと。

六　袴の腰紐を結んでやって下さい。袴着の儀でもっとも重い腰結の役をつとめてほしいと言う。

七　（私が嫉妬しているなどと）いつも心外なふうにばかり邪推なさる冷たいお気持を、こちらも無理にも気づかぬふりをして、素直に振舞うこともないと思いまして（すねてもお見せするのです）。

八　前に「月ごとの十四五日、晦日の日、行はるべき普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧」（一三四頁）とあった。

九　一年に一度の七夕の逢瀬よりは、まだましではあ

したので　宿縁が浅いとも思われませんが

しかば、契り浅くも見えぬを、さりとて、一ものめかさむほども憚り多かるに、思ひなむ」わづらひぬる。二同じ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定めたまへ。いかがすべき。ここにてはぐくみたまひてむや。

どうしたものでしょう　あなたが育てて下さらないでしょうか

三蛭の児が齢にもなりにけるを、四罪なきさまなるも思ひ捨てがたうこそ。五いはけなげなる下つかたも、まぎらはさむなど思ふを、めざまし

失礼だと　お思いでないなら

とおぼさずは、六引き結ひたまへかし」と聞こえたまふ。（紫上）七「思はずにのみとりなしたまふ御心の隔てを、せめて見知らず、うらなくやはとてこそ。いはけなからむ御心には、いとようかなひぬべくなむ。

まだお小さい姫君のお心には　〔私は〕きっとお気に召すでしょう

どんなにかわいらしくおなりでしょう

いかにうつくしきほどに」とて、すこしうち笑みたまひぬ。八児をわ

小さい　お子を無性におかわいがりになるご気性なので

りなららうたきものにしたまふ御心なれば、得て、抱きかしづかばやとおぼす。

引き取って

どうしたものか　〔姫君を〕

いかにせまし、迎へやせましとおぼし乱る。わたりたまふことといとかたし。嵯峨野の御堂の念仏など待ち出でて、月に二度ばかりの御契りなめり。九年のわたりには、立ちまさりぬべかめるを、及びな

〔源氏は〕　〔大井へ〕

お二人の逢瀬のようだ　〔明石上は〕これ以

ろうが。「玉かづら絶えぬものからあら玉の年のわたりはただ一夜のみ」（『後撰集』巻五秋上、題しらず、読人しらず）による。年に一度、牽牛が天の川を渡って織女に逢うという故事にもとづく。

上は望めぬことと思うものの
きことと思へども、やはりどうして物思わしくないことがあろうなほいかがもの思はしからぬ。

薄雲

絵合、松風の巻と同じ年の冬にはじまり、翌年の秋に及ぶ巻で、この年、源氏は三十二歳になった。

冬になり、雪に閉ざされた大井の明石の上はいよいよ無聊に苦しむが、姫君の将来を思った源氏は、心を鬼にして、紫の上のもとに姫君を引き取り、悲しい母子の別れがあった。姫君の袴着の儀は二条の院で行われた。

年改まって、新春、源氏は大井に明石の上を訪れる。この年は多事の年で、源氏の舅太政大臣が亡くなり、天文に凶兆を示す様々な異象が続き、三月には、母后藤壺の宮が崩御する。女の重い厄年である三十七歳であった。巻名「薄雲」は、念誦堂に籠った源氏の哀悼の歌による。

帝は、藤壺の宮家に古くから仕える夜居の僧都の奏上によって、源氏が実の父であることを知り、頻りに続く天変は、帝である自分が源氏に父としての礼を尽さぬ故であることを知る。帝は源氏に帝位を譲ろうとまで思い詰められるが、源氏は強く帝を諫め、秋の司召に太政大臣にという勧めも固辞して受けない。

静かな秋雨の一日、二条の院に里下がりした斎宮の女御に、源氏は慕情を抑えかねながらも、往時を語り、将来を託すが、自分の本当の願いは生活の風雅にあるとして、贅を尽した庭造りの夢をもらす。後の少女の巻に実現される六条の院造営の構想である。春秋優劣の論が話題にされ、女御が秋を好むのに対して、紫の上は春を愛するということもここにはじめて見える。

巻は、大井での、源氏と明石の上の唱和で閉じられる。

一 明石の上の大井の邸での暮し。「これは川面に、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり」（松風一二三頁）とあった。

二 あの近い所に移る決心をしなさい。二条の東の院のこと（松風一一九頁）。

源氏、明石の上に姫君を手放すことをすすめる

三 そこにまた移って源氏のつれないお気持を数々めし尽してしまう結果になるのも、身も蓋もない思いがされるであろうから。源氏の気持を大井でためし、東の院でためしして……、ということ。「宿かへて待つにも見えずなりぬればつらき所の多くもあるかな」（『後撰集』巻十一恋三、かりそめなる所にはべりける女に、心変りにける男の、ここにてはかく便なき所なれば、心ざしはありながらなむえ立ち寄らぬと言へりければ、所をかへて待ちけるに見えざりければ　女）

四 歌に「怨みてののちさへ人のつらからばいかに言ひてか音をも泣かまし」（『拾遺集』巻十五恋五、読人しらず）などとあるように（その時は怨み言の言いようもないと）。

五 思う仔細もあるから、このままでは恐れ多い。姫君の人内、立后のことを思っている（澪標一八頁）。

六 松風一四四頁参照。

七 世間の人の洩れ聞くところは。姫君が自分を生母とすること。

冬になりゆくままに、川づらの住ひ、いとど心細さまさりて、〔明石上は〕はの空なるここちのみしつつ明かし暮らすを、源氏君も、「なほかくて（まことに頼りないわが身の上を嘆きながら）はえ過ぐさじ。二かの近き所に思ひ立ちね」と、すすめたまへど、三らき所多くこころみ果てむも残りなきここちすべきを、四いかに言ひてか、などいふやうに思ひ乱れたり。〔明石上は〕「さらばこの若君を。〔源氏〕〔明石の姫君〕かくて（こんな所にいては不都合なことです）のみは便なきことなり。五思ふ心あれば、かたじけなし。対に聞き置きて常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、（紫の上も知っていつも見たがっているから）（しばらくの間紫の上に馴れさせて）六袴着のことなども、（内々のことではなく立派にとり行いたいと思う）人知れぬさまならずしなさむとなむ思ふ」と、まめやかにかたらひ（まじめに相談をおもちかけになる）たまふ。さおぼすらむと思ひわたることなれば、いとど胸つぶれぬ。（そういうご意向であろうと前から思っていたことなので）〔明石上は〕「あらためてやむごとなきかたにもてなされたまふとも、七人の漏り聞かむことは、なかなかにやつくろひがたくおぼされむ」とて、放（今さら姫君が紫の上のお子として大切に扱われなさっても）（かえってとりつくろいにくくお思いになるのではないでしょうか）（手放）

一　生みの親として、気がかりな扱いをされるのではないかなどといった心配はご無用です。継子の扱いを受けるようなことはない、という意。

二　六条の御息所の遺児、斎宮の女御。源氏の養女として、この年の春、冷泉帝の後宮に入り（絵合九七頁）、梅壺に住む（同一〇二頁）。この年、二十二歳。紫の上は二十三歳。

三　おろそかにほっておけそうにない気性の人です。「心ばへになむ（ある）」などを、言いさした形。

明石の上の悩み

四　ほんとに、昔は、どのようなお女に満足なさって落着きなさることやらと、遠い明石でも人伝にほのかにお噂を耳にした浮気なご性分が、紫の上によってすっかり静まってしまわれたのは、並たいていの前世からのご因縁ではなく。以下、最後の行の「ゆづりきこえまし」まで、明石の上の心。

五　それを押して人並みなお扱いを受けたら。源氏の夫人の一人として東の院に迎えられること。

六　自分は、どうなったにしても、もともと身分の低い女として終る身の上。

七　源氏のおっしゃるとおり、こうして物心もつかぬうちにお世話をお願い申した方がよいかもしれない。

八　そうかといって。以下、再び明石の上の心。

（源氏）一　しにくく思っているのも　ちがたく思ひたる、ことわりにはあれど、「うしろやすからぬかたにやなどは、な疑ひたまひそ。かしこには、年経ぬれど、かかる人もなきがさうざうしくおぼゆるままに、前斎宮のおとなびものしたまふをだにこそ、あながちにあつかひきこゆめれば、ましてかく憎みがたげなめるほどを、三おろかには見放つまじき心ばへに」など、女君の御ありさまの思ふやうなることも語りたまふ。

もっともではあるけれども　紫の上は　こうした子供　もないのがもの足りなく思われるのにまかせて　すっかり大人になっていら　つしゃるのをさえ　無理にもお世話申し上げているようだから　いらしい年頃の姫君を　お気立ての申し分のないことも

四　げにいにしへは、いかばかりのことに定まりたまふべきにかと、つてにもほの聞こえし御心の、名残なくしづまりたまへるは、おぼろけの御宿世にもあらず、人の御ありさまも、ここらの御なかにすぐれたまへるにこそはと思ひやられて、数ならぬ人の並びきこゆべきおぼえにもあらぬを、五さすがに立ち出でて、人もめざましとおぼすことやあらむ、六わが身はとてもかくても同じこと、生ひ先遠き人の御うへも、つひにはかの御心にかかるべきにこそあめれ、さりとならば、七げにかう何心なきほどにやゆづりきこえまし、と思ふ。八ま

紫の上のお人柄も　大勢の夫人方の中で際立って　いらっしゃるに違いないと想像されて　自分のようなしがない女が肩を並べられる分際でもないのに　思いになるやもしれない　結局は紫の上のお心によって左右されるさだめであろう　君のお身の上も　紫の上も身の程知らずなとお　行く先の長い姫　そうだと　すれば

九（姫君がいなくなって）この大井での暮しの所在なさを慰めるすべもなくては。

一〇 何によって、源氏のたまさかのお立ち寄りもあるだろう。姫君がいたからこそ、今まで源氏の訪れもあったのだ、という気持。

一一 明石の上の母尼君。

一二 くよくよしてもつまりません。

一三 結局のところ、この姫君にとっておしあわせになるようにと考えなければいけません。

母尼君の意見

一四 母方の家柄次第で、帝の御子もそれぞれご身分に差があるもののようです。『河海抄』は「朱雀院は延喜第十一、村上天皇は第十四皇子にておはしませども、此両皇、御母中宮穏子、昭宣公女たりしによりて、即位ありけるなり」という。昭宣公は関白藤原基経。

一五 桐壺の更衣の父。（一巻桐壺一二頁参照）

一六 女御になれるのは皇族、大臣の家柄で、大納言以下の家柄では更衣にとどまる。『河海抄』は、西宮左大臣源高明や兼明。親王（いずれも醍醐天皇の皇子）が賢才があったにもかかわらず更衣腹だったので臣下になった例をいうか、とする。高明は第一源氏、兼明は第二源氏。

一七 また、たとえ親王や大臣の姫君のお子といっても、身分は低くてもやはり現に北の方である人が生んだお子たちに比べては。

た、手を放ち（手放したら）て、うしろめたからむこと（どんなに気がかりなことだろう）、つれづれもなぐさむかたなくては、いかがは明かし暮らすべからむ（どうして日を過していったらいいのだろう）、何につけてか、たまさかの御立ち寄りもあらむ、など、（明石上は）さまざまに思ひ乱るるに、身の憂きこと限りなし。

尼君、思ひやり深き人にて（思慮深い人なので）、「あぢきなし。見たてまつらざらむことは、いと胸いたかりぬべけれど（とてもつらいことでしょうが）、つひにこの御ためによかるべからむことをこそ思はめ。浅くおぼしてのたまふことにはあらじ。ただうち頼みきこえて（姫君をご信頼して）、わたしたてまつりたまひてよ。母方からこそ、帝の御子も際々におはすめれ。この大臣の君の、世に二つなき御ありさまながら、世に仕へたまふは、故大納言の、今ひときざみなり劣りたまひて、更衣腹と言はれたまひしけぢめにこそはおはすめれ。ましてただ人はなずらふべきことにもあらず。また親王たち大臣の御腹といへど、なほさし向ひたる劣りの所には、人も思ひおとし、親の御もてなしも、え等しからぬものなり。ましてこれは、

姫君にお目にかかれないことは（姫君にあちらにお移し申し上げたがよい）

いい加減なおつもりでおっしゃることではありますまい（ただもう殿様をご信頼して）

母方（一四）

この世に二人とない源氏

立派なお方でありながら

臣下でいらっしゃるのは（臣下の場合は比較にもならないことです）

もう一段ご出世がかなわなかったために

その差によるためでいらっしゃるようです

世間の人も軽く見ますし

父君のおあつかいも

この姫君は

とても同じようにはゆかぬものです

一 あちらの身分の高い夫人方にこうした姫君でもお生れになったら。
二 そのまま将来人にも軽く見られぬことになるわけのものです。
三 こんな人目にもつかぬ大井の田舎では、何の見栄えがありましょう。「深山隠れ」は歌語。「かたちこそ深山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなむ」（『古今集』巻十七雑上、女どもの見て笑ひければ詠める　兼芸法師）
四 思慮深い人たちの将来の見通しも。尼君をはじめとする周囲の人々の意見をいうのであろう。

明石の上、姫君を手放す決意をする

「心の占」は、歌語。「かく恋ひむものとは我も思ひにき心の占ぞまさしかりける」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）
五 陰陽師、宿曜師などに吉凶を占わせてみても。
六 姫君を引き取ろうと心は決めておられるものの。
七 確かに姫君の将来にとってもお気の毒なことと思われますが、そうかといってまた、そちらの皆様とご一緒させて頂いても、どんなにもの笑いになりましょうことやら。卑下しながら承諾をほのめかした文面。母親としての悲しみがにじんでいる。
八 移転の日取りなどを陰陽師に占わせなさって。

一 やむごとなき御方々にかかる人出でものしたまはば、こよなく消たれたまひなむ。ほどほどにつけて、親にもひとふしもてかしづかれぬる人こそ、やがておとしめられぬはじめとはなれ。御袴着のほども、いみじき心を尽くすとも、三 かかる深山隠れにては何の栄かあらむ。ただまかせきこえたまひて、もてなしきこえたまはむありさまをも聞きたまへ」と教ふ。

すっかり無視されておしまいでしょう　ひとかど大切にあつかわれた子供こそ　それぞれの身分相応に　何もかもあちらにおまかせなさって　こちらでいくら一所懸命になっても　姫君をどのようにおあつかいなさるかその様子を見ておいでになるがよい　と言い聞かせる

四 さかしき人の心の占どもにも、五 もの問はせなどするにも、なほわたりたまひてはまさるべし、とのみ言へば、思ひ弱りにたり。殿も、しかおぼしながら、六 思はむところのいとほしさに、しひてもえのたまはで、「御袴着のこと、いかやうにか」とのたまへる御返りに、「よろづのこと、かひなき身にたぐへきこえては、七 げに生ひ先もいとほしかるべくおぼえはべるを、たちまじりても、いかに人笑へにや」と聞こえたるを、いとどあはれにおぼす。八 日など取らせたまひて、忍びやかに、さるべきことなどのたまひおきてさせたまふ。放

移りになった方がよいでしょう　〔明石上も〕気が折れてきた　源氏　明石の上の悲しみのほどがいたわしいので　強くもおっしゃりかね　どのようになさるのか　お手紙があったご返事に　〔源氏〕　〔明石上〕何につけても　ふがいない私の手許に姫君をお置きしていては　〔源氏は〕ますます不憫にお思いになる　移転のためのしかるべき準備など手はずを整えさせなさる　姫君

九 乳母ともこれで別れなくてはならないことだ。この乳母は、姫君の誕生にあたって源氏が京から明石につかわした人（澪標一八頁以下参照）。**明石の上、乳母と歌を唱和する**以下、明石の上の心。

一〇 これからは、（姫君のみか）その乳母までいなくなってますます頼るものもない身の上になって。

一一 これもしかるべき前の世からのご縁でしょうか。

一二 それ以来長年のおやさしいお心遣いが、忘れられず恋しく思われますことでしょうが。「おぼえたまふ」の「たまふ」は、明石の上に対する敬語。直訳すれば、（自分に）思われなさる。

一三 結局いつかはまだご一緒になれますことと心頼みにしておりますものの。いつかはご生母として姫君そして自分とも一緒にお暮しになれよう、の意。

一四 雪や霰のちらつくことが多く、明石の上は、ひとしお心細い思いがつのって。姫君との別れの日も近いのである。

一五 いつもは部屋のずっと端近な所に出ていたりすることもないのに。ふだんの奥ゆかしい暮しぶりをいう。

一六 庭の池の水際に張りつめた氷。

（姫君のおためになることを）（やはりとてもつらく思われるけれども）をお手放し申すことは ちきこえむことは、なほいとあはれにおぼゆれど、君の御ためによかるべきことをこそはと、念ず。

（明石上は）我慢する

乳母をもひき別れなむこと、明け暮れのもの思はしさ、つれづれをもうちかたらひてなぐさめならひつるに、一〇いとどたつきなきことをさへ取り添へ、いみじくおぼゆべきことと、君も泣く。乳母も、

（明石の上）

「さるべきにや、一一おぼえぬさまにて見たてまつりそめて、一二年ごろの御心ばへの、忘れがたう恋しうおぼえたまふべきを、うち絶えきこゆることはよもはべらじ。一三つひにはと頼みながら、しばしにても、よそよそに思ひのほかのまじらひしはべらむが、やすからずもはべるべきかな」と、うち泣きつつ過ぐすほどに、師走にもなりぬ。

（この乳母と）しみじみ語り合っては今まで紛らわしてきたのに

（どんなにか心細いことだろうと）

（思いもかけずお側にお仕え申すことになりまして）

（このままご縁が切れてしまうことはよもやございますまい）

（しばらくの間にせよ）

（お側を離れて思いもかけないご奉公をいたしますことが）

（さぞや気に染まぬことでございますでしょう）

（どうしてこうもいろいろともものを思い悩まねばなるべきかな）

一四雪霰がちに、心細さまさりて、あやしくさまざまにもの思ふべかりける身かなと、うち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつぬたり。雪かきくらし降りつもる朝、来しかた行く末のこと、残らず思ひつづけて、一五例はことに端近なる出で居なども せぬを、一六汀の氷

（嘆息して）

（姫君の身なりをいとしげに取りつくろっらぬ身の上かと）

（空を暗くして）

（ている）

（明石上は）

一 ぼんやり物思いに沈んでいる姿つき、髪かたち、後ろ姿など。
二 この上なく高貴なお方と申しても、こんなふうでいらっしゃるだろう。明石の上の気品のある姿は、どんな高貴な人にも劣るまい、の意。
三 こんな日には、これまでにましてどんなにか気がかりな思いをすることでしょう。姫君が移られてからの心細さをいう。
四 雪の深さに、山深いここまでの道は通れなくなろうとも、どうか文の使いはいつも都から寄こして下さい、とだえることなく。「晴る」は「雪」の縁語。「文通へ」と「踏み通へ」を掛け、「跡」は足跡の意で、「踏み」の縁語。乳母に詠みかけた歌。
五 雪の消えることのない吉野の山に分け入ることになりましても、心の通う文の使いの踏み跡が絶えるようなことがありましょうか。上の句は、どんなに雪の深い山奥でありましょうとも、の意で、吉野山は雪の深い山奥のたとえ。
六 姫君と別れなくてはならぬのは、誰のせいでもない、自分のせいだとくやまれる。
七 おことわり申すのを無理にとはおっしゃるまいに、つまらぬことをしたもの、と思われるが。

姫君、二条の院に迎えられる

など見やりて、白き衣どものなよよかなるあまた着て、（柔らかいのをたくさん重ね着て）ながめゐたる様体、頭つき、うしろでなど、限りなき人と聞こゆとも、かうこそはおはすらめと人々（女房たちも）も見る。落つる涙をかき払ひて、（明石上）「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」と、（明石上に）らうたげにうち泣きて、

（明石上）雪深み深山の道は晴れずとも
　なほふみかよへ跡絶えずして

とのたまへば、乳母、うち泣きて、

雪間なき吉野の山をたづねても
　心のかよふ跡絶えめやは

と、言ひなぐさむ。

この雪すこし解けてわたりたまへり。（〔源氏は〕大井にいらした）例は待ちきこゆるに、（〔明石上は〕いつもは迎えにいらしたのだろうと思われるので）さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならずおぼゆ。（姫君を自分の意向次第のことなのだ）わが心にこそあらめ、いなびきこえむをしひてやは、あぢきな、と

八 今さらおことわりしては無考えな女と思われようと、無理にも思い返す。

九 源氏は、とてもおろそかには思えないこの人との前世からの因縁であることだとお思いになる。「人」は、明石の上。こんなかわいらしい人を産んだ明石の上との並々ならぬ宿縁の深さを思う。

一〇 この春からのばしはじめたお髪。赤児の頃は髪を剃っている。この年、姫君は三歳。

一一 尼の、背のあたりで髪を切りそろえる髪形。

一二 ほんのりとした美しさなど、言い立てるのも今さらといった感じだ。

一三 この子を人手に渡して遠くから案ずるであろう明石の上の親心をお思いやりになると。「心の闇」は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による。

一四 繰り返し安心するようにおっしゃって夜を明かされる。「のたまひ明かす」を、説明すると解するのは誤り。

一五 生い先遠いこの姫君に今別れて、一体いつ、立派に生い育った姿を見ることができるのでしょう。「二葉」は、芽を出したばかりの二枚の葉。「引き」は、正月の子の日に小松を引いて長寿を祝う風習から、「松」の縁語。わが子を祝福するせつない気持をこめる。

おぼゆれど、軽々しきやうなりと、せめて思ひかへす。〔姫君が〕とてもかわいらしくしげにて、前にゐたまへるを見たまふに、おろかには思ひがたかりける人の宿世かなと思ほす。一〇この春より生ほす御髪、尼そぎのほどにて、ゆらゆらとめでたく、つらつき、まみの薫れるほどなど、言へばさらなり。一三よそのものに思ひやらむほどの心の闇おしはかりたまふに、〔源氏は〕いと心苦しければ、一四うち返しのたまひ明かす。〔明石上〕「何か、かくくちをしき身のほどならずだにもてなしたまはば」と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひ、あはれなり。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。〔車を〕寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、「乗りたまへ」と引くも、いみじうおぼえて、

（明石上）一五 末遠き二葉の松に引き別れ
いつか木高きかげを見るべき

一 母子の深い宿縁もあることなのだから、いずれあなたと姫君は末長く暮すことになるでしょう。「武隈の松」は、明石の上をたとえ、「末遠き二葉の松」を受けて「小松の千代」に祝福の意をこめた。「植ゑし時契りやしけむ武隈の松をふたたびあひ見つるかな」（『後撰集』巻十七雑三、陸奥の守にまかり下れりけるに、武隈の松の枯れてはべりけるを見て小松を植ゑつがせはべりて、任果ててのちまた同じ国にまかりなりて、かのさきの任に植ゑし松を見はべりて　藤原元善）。武隈は、宮城県名取郡岩沼町、昔の国府の跡という。

二 乳母とは別の女房。

三 守り刀。乳母が明石につかわされた時、源氏から贈られたことが、澪標二〇頁に見える。

四 練絹で縫い、綿を入れて小児の這う形に作った人形（『貞丈雑記』巻八）。『仙源抄』に「三歳まで之を用ふ。諸事凶事これにおほする也」という。（図録一一参照）

五 見苦しからぬ若い女房。

六 どんなにつらかろう、罪の報いも受けるであろうかと源氏はお思いになる。悪いことをしたという気持。

七 寝殿の西側であろう。西半分の母屋、廂を含む。

八 寝殿から西の対に通ずる渡殿の、北側のそれをおあてがいになった。南北に二本ある北側の渡殿。

九 果物、菓子、木の実。間食である。

しまいまでも言い切れず
えも言ひやらず、いみじう泣けば、無理もないさりや、あな苦しとおぼして、かわいそうに

（源氏）「生ひそめし根も深ければ武隈の
松に小松の千代をならべむ

〔明石上は〕そうなることと気を静めるけれども
安心していなさい
のどかにを」と、なぐさめたまふ。さることとは思ひ静むれど、えてもこらえきれないのだった
なむ堪へざりける。乳母、少将とてあてやかなる上品な女房人ばかり、御佩刀、
天児やうの物取りて乗る。二条の院までお供させる人だまひにお供の車よろしき若人、童女など乗せて、御送りに参らす。

道すがら、あとに残った明石の上を気の毒に思ってとまりつる人の心苦しさを、いかに、罪や得らむとおぼす。暗うおはし着きて、御車寄するより、はなやかにけはひ異なるを、田舎暮しになれた乳母や少将は田舎びたるここちどもは、気のひけるお勧めをすることになろうかと心配したけれども はしたなくてやまじらはむと思ひつれど、姫君用に特に立派に設備させなさって西面をことにしつらはせたまひて、小さき御調度ども、ういらしげに揃えさせておありになるつくしげにととのへさせたまへり。乳母の局には、西の渡殿の、北に当れるをせさせたまへり。若君は、途中で道にて寝たまひにけり。抱きおろされて、泣きなどはしたまはず。西面こなたにて御くだもの参りな

二条の院での姫君、袴着の儀

一〇 大井の山里暮しの所在なさは、姫君がいなくては以前にもましてどんなであろうと。

一一 どんなものかと非難がましく世人の思うような欠点のないお子の生れることは。以下、源氏の心。「いかにぞや」は「思ふ」に掛る。生母の出自の低さを云云されるようなことのないお子の誕生は、という意。

一二 大井で馴れ親しんだ女房たち。

一三 紫の上。

一四 紫の上は、ほかのことはほったらかしで抱いてあやし、おかわいがりなさって。

一五 そうしたことから、自然に、紫の上のお側近く親しくお仕えするようになったのだった。

一六 この乳母のほかに、身分のある人でお乳の出る人を加えてお仕えさせなさる。

一七 お人形遊び。家、調度類、車などもある。部屋の設備など、姫君用に小さくかわいらしく作ってあるのである。

どしたまへど、やうやう見めぐらして、母君の見えぬをもとめて、らうたげにうちひそみたまへば、乳母召し出でて、なぐさめまぎらはしきこえたまふ。

（だんだんとあたりを見まわして　探して　あやして気を紛らわし　いじらしい様子でべそをおかきになるので　てお上げになる）

一〇 山里のつれづれ、ましていかにとおぼしやるはいとほしけれど、明け暮れおぼすさまにかしづきつつ見たまふは、ものあひたるここちしたまふらむ。一一 いかにぞや人の思ふべき瑕なきことは、このわたりに出でおはせでと、くちをしくおぼさる。しばしは人々もとめて泣きなどしたまひしかど、おほかた心やすくをかしき心ざまなれば、上にいとよくつきむつびきこえたまへれば、いみじううつくしきもの得たりとおぼしけり。異事なく抱きあつかひもてあそびきこえたまひて、乳母もおのづから近うつかうまつり馴れにけり。また、やむごとなき人の乳ある、添へて参りたまふ。

（〔源氏は〕ご想像になるといたわしいけれども　至極ご満足な気持がなさる　お思いどおりに大切にお世話して〔姫君を〕　この紫の上に　ことであろう　〔源氏は〕残念に　はおありでなくてと　〔姫君は〕　大体が　素直でかわいらしい性質なので　なついてお慕いになられるので　〔紫上は〕ほんとにかわいいお子をさずかったものとお喜びだった）

御袴着は、何ばかりわざとおぼしいそぐことはなけれど、けしきらしいお支度だことなり。御しつらひ、雛遊びのここちしてをかしう見ゆ。参りた

（どれほども特別念入りに準備なさることはないけれども　お部屋の調度など　やはりすばらしい　列席なさ）

一　常日頃と人の出入りの多さには少しも変りはないので。

二　袴の腰紐を胸もとで交叉させて袖をからげるように結んだものと思われる。「御衣は濃き綾の袿、給の袴、襷がけにて」（『宇津保物語』蔵開の上）、「あからかなる綾、掻練のひとかさね、織物の直衣、襷がけの御袴」（同、国譲の下）などとある。

三　姫君を手放した自分のふがいなさを、今までの嘆きに加えて悲しんでいる。

四　（何不足ないあちらでの姫君のご生活に）一体どんなことをこちらからなまじお世話なさることがあろう。生母として、何もお世話できることはない、の意。

五　明石の上に待ち遠しい思いをさせることも、ますますやはり思ったとおりだ（姫君を手放したからだ）と思うであろうと、かわいそうなので。

六　明け暮れ大切にお世話してきた姫君までもお手放しして。

七　姫君を手許に引き取った今は、（明石の上について）特に源氏に怨み言を申し上げることもなさらず。

歳暮、明石の上、乳母などに衣裳を贈る

二条の院の新春、東の院の花散里の日常

まへる客人ども、（特に目立つこともなかった）ただ明け暮れのけぢめしなければ、あながちに目も立たざりき。ただ、姫君の襷引き結ひたまへる胸つきぞ、うつくしげさ添ひて見えたまへる。

大井には、（明石の上は）尽きせず恋しきにも、身のおこたりを嘆き添へたり。（ああは意見したものの）さこそ言ひしか、尼君もいとど涙もろなれど、（こうして大切にされていらっしゃる噂を）かくもてかしづかれたまふを聞くはうれしかりけり。何ごとをか、なかなかとぶらひきこえたまはむ、ただ（姫君づきの女房たちに）御方の人々に、乳母よりはじめて、世になき色（すばらしい色あいの衣裳をと心掛け支度して）あひを思ひいそぎてぞ、贈りきこえたまひける。待ち遠ならむも、（源氏は）いとどされば よと思はむに、いとほしければ、（大井に）年の内に忍びてわたりたまへり。いとどさびしき住ひに、明け暮れのかしづきぐさをさへ離れきこえて、（どんなに嘆いているかと）思ふらむことの心苦しければ、御文なども絶え間なくつかはす。（紫の上）女君も、今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり。（姫君に免して大目に見てさし上げていられる）

年も返りぬ。（改まった）うららかなる空に、（何一つ不足のない源氏のお暮しぶりは）思ふことなき御ありさまは、い

八（正月に備えて）すっかりきれいに調度など整えられてあるが。

九 七日に、位階昇進のお礼言上など申し上げる人々が、連れ立ってお見えになる。五日あるいは六日に、五位以上に位階を授けられる叙位の議があり、七日に位記が渡される。そのお礼言上である。

一〇 同じく年賀に見える年若い人たちは。「参りつどひたまふめる人の」を「おとなしきほどのは」と「若やかなるは」とに分けて書く。

一一 それより段々と身分の低い人たちも。

一二 東の院の西の対に住む花散里。（松風一一九頁参照）

一三 二条の院に近いという地の利のよさはてきめんで。「しるし」は、効果、ききめ。

一四 自分は、この程度の運命に生れついた身の上なのであろうと諦めをつけて。

一五 時節時節の暮し向きのご配慮なども。源氏からの経済的援助のこと。

一六 紫の上のもとと同じように、人々はご奉公に参上して。

一七 政所（松風一一九頁注四参照）を取りしきる者たちも。「別当」は、長官の意。政所には数人あった。

とどめでたく、磨き改めたる御よそひに、参りつどひたまふめる人の、おとなしきほどのは、七日、御よろこびなどしたまふ、ひきつれたまへり。若やかなるは、つぎつぎの人も、心のうちには思ふこともやあらむ、うはべは、ほこりかに見ゆるころほひなりかし。東の院の対の御方も、ありさまはこのましう、あらまほしきさまに、さぶらふ人々、童女の姿など、うちとけず、心づかひしつつ過ぐしたまふに、近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇の隙などには、ふとはひわたりなどしたまへるが、夜立ちとまりなどやうに、わざとは見えたまはず。ただ、御心ざまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなしたまひて、あなづりきこゆべうはあらねば、同じごと、人参りつかうまつりて、別当どもも事おこたらず、

続々と年賀のご挨拶に参上なさる人
年輩の人々は
何ということもなく屈託なげに
陽気
内々は人知れぬ心配事もあろうかもしれないが
そうに見える時節であることだ
申し分のない様子で
お暮しぶりは
優雅で
お仕えする女房たち
気をくばりながら
きちんとさせて
のんびりした
〔源氏は〕気軽にちょっとお顔を出したりなさ
お泊りになるといったふうに
わざわざお立ち寄りはなさらない
〔花散里の〕
お気立てがおっとりとして素直で
めったにないほどに気のおけないのんびりしたお人柄でいらっしゃる
こちらの紫の上のお暮しぶりにひどく見
劣りするようなけじめをおつけにならぬご待遇ぶりで
〔世人も〕ないがしろにお思い申すわけはな
いので
勤務にはげんで
ので

一 大井での明石の上の所在ない暮しをも。

二 公私ともにいろいろ事の多い正月はじめが過ぎてから。

源氏、大井を訪れようとして、紫の上と唱和

三 桜襲。表白、裏は紅、紫、二藍など諸説がある。

四 すばらしい色合いの袿を下に重ね着て。

五 薫物をたきしめ、身づくろいなさって。

六 紫の上にお暇乞いをなさる様子が。

七 催馬楽、呂「桜人」の歌詞。「桜人　その舟止め　島ヶ田を　十町作れる　見て帰り来むや　そよや　明日帰り来む　そよや／言をこそ　明日とも言はめ　遠方に　妻ざる夫は　明日もさね来じや　そよやさ明日もさね来じや　そよや」。夫と妻の掛け合いの歌。「妻ざる」は「妻ぞある」の意という。

八 紫の上が、中将の君を通じて歌を詠みかけられた。「中将の君」は、女房で源氏の思い人の一人（二巻須磨二一六頁、澪標一六頁参照）。

九 あなたを引き止める遠くのお人（明石の上）がいないのでしたら、明日帰って来る夫とお待ちすることもできるのですが。「桜人」の歌詞によって詠む。

一〇 あちらに泊って明日にもきっと帰って来ましょう、なまじ短い訪れで、あちらの人は気を悪くしようとも。これも「桜人」によって仕立てた歌。

かえって諸事きちんと取りはからわれて　結構な

なかなか乱れたるところなく、めやすき御ありさまなり。

一 山里のつれづれをも絶えずおぼしやれば、公　私もの騒がしきほど過ぐしてわたりたまふとて、常よりことにうちけさうじたまひて、

いつもより念入りにおめかしなさって

二 桜の御直衣に、四 えならぬ御衣ひき重ねて、五 たきしめ装束きたまひて、

三 まかり申したまふさま、隈なき夕日に、いとどしくきよらに見えたまふを、女君ただならず見たてまつり送りたまふ。姫君は、いはけなく御指貫の裾にかかりてしたひきこえたまふほどに、外にも出でたまひぬべければ、立ちとまりて、いとあはれとおぼしたり。こしらへおきて、「明日帰り来む」と、口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。

六 紫の上はおだやかならぬ思いでお見送り申し上げなさる　聞き分け

ふだんよりもひときわ美しく

まつわっておあとをお慕い申されるうちに　部屋の外にも

もなく　出てしまれそうなので　〔源氏は〕　とてもいとしく　なだめすかして　待ち受けていて

（紫上）九 舟とむる遠方人のなくはこそ

（源氏）七 明日帰り来む夫と待ち見め

大層もの馴れた調子で　いかにもはなやかに口もとをほころばして

（源氏）一〇 いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほゑみて、行きて見て明日もさね来むなかなかに

一一 このやりとりの意味が分るはずもなく（自分の母を源氏が訪れようとしてのやりとりであることも知らず）、無邪気にはしゃぎまわっていられる姫君を。

一二 あの大井にいる人がおもしろからず思われることも。「めざまし」は、身の程知らずなと見下す気持。

一三 どんなにか姫君のことを気がかりに思っていることだろう、私だって（こんな子を手放したら）、とても恋しくてたまらないだろうと思われるかわいらしさだものと。明石の上の心中を思いやる紫の上の気持。

一四 たわむれていらっしゃるお姿は。乳の出るはずのない乳房を、いとしげに含ませているのである。

一五 どうして、同じことなら（こちら様のお子として）お生れにならなかったのでしょう）。ままならぬものですね。

一六 一風変っていてもの珍しい感じであるが。（松風 一二三頁参照）

大井に源氏を迎える

明石の上のたしなみ

一七 身分の高い人々（紫の上そのほかの夫人たち）などにひどく見劣りするようなところもなく、容姿や身だしなみも非の打ち所なく女盛りの立派さになってゆく。

一八 ただ普通に受領の娘というだけでほかにすぐれた所もないならば、そうした女が自分のような高貴な人の妻になるといった例も世間にないことではないと軽く思われもしようが。以下、源氏の心。

遠方人は心置くとも

何ごととも聞き分かでされありきたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、遠方人のめざましさも、こよなくおぼしゆるされにたり。いかに思ひおこすらむ、われにて、いみじう恋しかりぬべきさまをと、うちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳を〔姫君に〕含ませ含ませくくめたまひつつ、たはぶれゐたまへる御さま、見どころ多かり。御前なる人々は、「などか、同じくは。いでや」などかたらひあへり。

かしこには、いとのどやかに、心ばせあるけはひに住みなして、家のありさまも、やう離れめづらしきに、みづからのけはひなどは、見るたびごとに、やむごとなき人々などに劣るけぢめこよなからず、容貌、用意あらまほしうねびまさりゆく。ただ世の常のおぼえにかきまぎれたらば、さるたぐひなくやはと思ふべきを、世に似ぬひがものなる親の聞こえなどこそ苦しけれ、人のほどなどはさてもあべ

一「世の中は夢の渡りの浮橋かうちわたりつつものをこそ思へ」（『奥入』に引く古歌）。夢のようにはかない逢瀬に物思いの絶えぬことだ、の意。

二 十三絃の琴。

三 源氏が明石を去るのも明後日という夜、源氏の琴に明石の上が箏の琴を弾いた（二巻明石二九九頁参照）。なお「小夜ふく」は歌語。

四 明石の上は箏の琴だけでなく琵琶もよくした（明石二七七～八頁参照）。

五 どうしてこうまで何もかもよく身につけたのだろうとご感心になる。接頭語「ひき」は、この場合「弾き」を掛ける。

六「くだもの」は、前出（一五六頁注九）。「強飯」は、甑で蒸した飯。

七 嵯峨野の御堂と桂の院。（松風一二三頁、一三〇頁）

八 心底から明石の上に夢中といった態度はお見せにならないが。

九 まことに格別のご寵愛だと思われることだ。以上、姫君の生母としての明石の上に対する源氏の特別な扱いぶりをいう草子地。

一〇 度を越した卑下もせずといったふうで。

一一 並々ならず身分の高い女の人のもとでも。「おぼろけに」は、ここは「おぼろけならず」の意。

（はかない逢瀬で）（いつも心を残して別れるからだろうか）（ゆっくり）（嘆息）（〔源氏は〕）（になどと）きをなどおぼす。はつかに、飽かぬほどにのみあればにや、心のどかならず立ち帰りたまふも苦しくて、「夢のわたりの浮橋か」とのみうち嘆かれて、箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて小夜ふけたりし音も、例のおぼし出でらるれば、琵琶をわりなく責めたまへば、すこし搔き合はせたる、いかでかうのみひき具しけむとおぼさる。若君の御こととなど、こまやかに語りたまひつつおはす。

（もできなくて）（されるばかりで）（〔源氏の琴に〕少し合せて弾いたのを）（ぜひにもとご催促になるので）（こうした田舎であるが）（こまごまとお話しになってお過しになる）（お泊りになる）

ここはかかる所なれど、かやうに立ちとまりたまふをりをりあれば、はかなきくだもの、強飯ばかりはきこしめす時もあり。近き御寺、桂殿などにおはしましまぎらはしつつ、いとまほには乱れたまはねど、また、いとけざやかにはしたなく、おしなべてのさまには

（おいでになるのを口実にといったことで）（といって）（はっきりけじめをつけてそっけなく）（並々のお相手といったおあつかいはなさらないところなどは）

もてなしたまはぬなどこそは、いとおぼえことには見ゆめれ。女もかかる御心のほどを見知りきこえて、過ぎたりとおぼすばかりのことはし出でず、また、いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける。おぼろけにやむごとなき

（出過ぎたこととお思いになるような振舞はこうした源氏のお気持をよくお察し申し上げていて）（源氏のご意向にせず）（よく沿って）（まことに難のない態度なのであった）

一二 お側近くで、ほかの女の方々のお仲間入りをすることになったら。以下、明石の上の心。
一三 人に馬鹿にされるようなこともあるかもしれない。「もぞ」は、危懼の気持を表す。源氏の処遇ぶりが変るかもしれないことを恐れる。
一四 明石の上は思うようだ。語り手の立場から明石の上の気持を忖度する筆致。
一五 明石にとどまった父入道も、あんな強いことは言ったけれども。別れに臨んで「この身は長く世を捨てし心はべり」（松風一二七頁）などと言ったことをさす。
一六 胸のつぶれる思いをすることもあり。明石の姫君を手放したことであろう。

太政大臣薨去

一七 葵の上の父、源氏の舅。太政大臣になったのが六十三歳（澪標一五頁）。この年、六十六歳。
一八 朱雀院の治世に、一時、左大臣を辞して隠居したこと。（二巻賢木一七九頁）
一九 政務万端を太政大臣に無理にお譲り申し上げたからこそ。源氏は内大臣になった時、今上（冷泉帝）の摂政をすべきだったが、太政大臣に譲った（澪標一四頁）。
二〇 冷泉帝。この年、十四歳。

所にてだに、〔源氏は〕これほどにもおくつろぎになることはなく（気品のあるお振舞いぶりを聞き知っているので）しを聞き置きたれば、近きほどにまじらひては、なかなかいとど目（かえって一層珍しげもなく）馴れて、人あなづられなることどももぞあらまし、たまさかにても、（時たまのおいでにでも）かやうにふりはへたまへるこそたけきここちすれ、と思ふべし。明石にも、さこそ言ひしか、この御心おきて、ありさまをゆかしがりて、おぼつかなからず人は通はしつつ、胸つぶるることもあり、また、おもだたしく、うれしと思ふことも多くなむありける。

（こうしてわざわざお越し下さるほうが我ながら大したものと思われる）（源氏のご意向や）（都の事情がよく分るように使いの者をつかわしては）（晴れがましく）（おあつかいぶりを知りたがって）

そのころ、太政大臣亡せたまひぬ。（世の重鎮でいらしたお方なので）世のおもしとおはしつる人なれば、おほやけにもおぼし嘆く。しばし籠りたまへりしほどをだに（帝におかれても）天の下の騒ぎなりしかば、まして悲しと思ふ人多かり。源氏の大臣も、いとくちをしく、よろづのことおし譲りきこえてこそ、暇もありつるを、心細く、事しげくもおぼされて、嘆きおはす。帝は、御年よりはこよなう大人大人しうねびさせたまひて、世の政治も、うしろめたく思ひきこえたまふべきにはあらねども、またとりたてて（とてもがっかりされて）（政務の多忙もわずらわしく思われて）（成人あそばされて）（不安があろうとお思い申し上げなさることはないのであるけれども）（源氏のほかには特別に）

一 誰に帝の輔佐役を譲って、心静かに勤行の暮しもしようというご希望も叶えられるだろうとお思いになると。源氏の出家の希望ということは、賢木の巻の雲林院参籠の頃から見え（二巻一五九頁）、絵合の巻末（一一五頁）にはっきり述べられている。

二 権中納言たち。

三 一体に世間に変事が多くて。疫病の流行や災害の頻発をいう。

この年、しきりに天に異象を見る

四 いつもとは違った月や日や星の光が見え、不思議な雲がたなびくといったことばかりで。「例に違へる」は「雲のたたずまひ」にも掛る。月蝕、日蝕、流星、彗星など、あるいは巨大な雲が空を渡ってたなびくなど、いずれも凶兆とされた。

五 陰陽寮の頭や天文博士など諸道の勘文（先例を考え吉凶を判じて奏上する文書）を多く奏上した中にも。

六 源氏の内大臣だけが、ひそかに困ったことだとお気づきになるところがあった。

藤壺の宮、病あらたまり、冷泉帝、行幸

自分が帝の実の父親でありながら臣下として仕えていることが、凶兆の原因であることを悟る。

七 帝が桐壺院の崩御におおいあそばした頃は。帝の東宮時代で、五歳の時。（賢木一四〇頁参照）

八 今年はきっと逃れられない年と思っておりましたが。死期を悟っていたという意。後に三十七歳とあり、女の重い厄年である。

御後見したまふべき人もなきを、一誰に譲りてかは、静かなる御本意もかなはむとおぼすに、いと飽かずくちをし。後の御わざなどにも、追善のご法事二御子ども孫に過ぎてなむ、こまやかにとぶらひあつかひたまひける。ねんごろにお見舞し何くれとお世話なさったのであった

その年、三おほかた世の中騒がしくて、もの騒がしく朝廷においても神仏のお告げがしきりにあっておほやけざまにもものさとしげく、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、四雲のたたずまひありとのみ、世の人おどろくこと多くて、五道々の勘文どもたてまつれるにも、奇怪な容易ならぬ凶兆である旨を告げたものがいろいろとあるあやしく世になべてならぬことどもまじりたり。六内の大臣のみなむ、御心のうちにわづらはしくおぼし知ることありける。

入道后の宮、春のはじめよりなやみわたらせたまひて、三月には藤壺 正月以来 ずっとご病悩がお続きになって いと重くならせたまひぬれば、行幸などあり。七院に別れたてまつらせたまひしほどは、いといはけなくて、もの深くもおぼされざりし藤壺 さほど深いお悲しみでもなかったけれども を、いみじうおぼし嘆きたる御けしきなれば、宮もいと悲しくおぼしめさる。八「今年はかならずのがるまじき年と思ひたまへつれど、藤壺 [この度は] ひどくご心痛のご様子なので

九 世間の人が、厭味なわざとらしいことと思いましょうかと、気づかいされまして。

一〇 後世の安楽のために善根を積む仏事供養。藤壺は「御行ひ、功徳のことを、常の御いとなみにておはします」（澪標三一頁）と前にもあった。

一一 どうにもなりませず、気の晴れぬ思いで過してしまいましたことです。帝にお目にかかりたかったが、果せなかったという意。

一二 ご用心あそばさなくてはならぬお年まわりですのに。「つつしむ」は、災厄を避けるために、精進潔斎すること。

一三 さまざまなことをなさる。加持祈禱などである。主語は帝。

一四 いつものご病気とばかり思ってうっかりしていたのだが。藤壺は「いとあつしくのみおはしませば、参りなどしたまひても、心やすくさぶらひたまふこともかたきを」（澪標五一頁）とあった。

一五 しきたりがあるので。行幸には予定がきちんと決められているので、いつまでもお側にいらっしゃるわけにはいかない。

（寿命を悟っているようなこと）おどろおどろしきここちにもはべらざりつれば、命の限り知り顔に（そうひどい病気とも思えませんでしたので）はべらむも、人やうたてことことしう思はむと憚りてなむ、功徳のことなども、（特別にふだんとは違ったことともいたさないでしまいました）わざと例よりも取り分きてしもはべらずなりにける。（参内してゆっくりと）参りて心のどかに昔の御物語もなど思ひたまへながら、（気分のはっきりしております時も少のうございまして）うつしざまなるをり少なくはべりて、くちをしくいぶせくて過ぎはべりぬること」と、いと弱げに聞こえたまふ。（藤壺は）三十七にぞおはしましける。（とても若々しくお美しくていらっしゃるご様子を）（帝は）されど、いと若く盛りにおはしますさまを、惜しく悲しと見たてまつらせたまふ。（帝）「つつしませたまふべき御年なるに、晴れ晴れしからぬ（すっきりともなさらぬ）ままここ幾月もお過しでいらっしゃることだけでも（心を痛めておりましたのに）で月ごろ過ぎさせたまふことをだに、嘆きわたりはべりつるに、御（ふだんより特別になさらなかったとは）斎戒などつつしみなどをも、常よりことにせさせたまはざりけること」と、（大層なお嘆きようでいらっしゃる）いみじうおぼしめしたり。（つい最近になってから）ただこのころぞ、（気になって）おどろきて、よろづのことせさせたまふ。（今までは）月ごろは常の御なやみとのみうちたゆみたりつるを、（深くご心痛になっていられる）源氏の大臣も深くおぼし入りたり。限りあれば、ほどなく帰らせたまふも、悲しきこと多かり。（藤壺）宮、いと苦しうて、（はきはきと）はかばかし

一 先帝の四の宮として生れ、国母、女院にまでなった宿縁。

二 （しかしまた）心中ひそかに飽き足らず思うことも。源氏に愛情は抱きながらも拒まねばならなかったことをいう。

三 こうした事情をご存じでいらせられないのを。「事の心」で一語。実の父が源氏であること。

源氏、藤壺の宮を見舞う、藤壺の宮崩御

四 こうして身分の尊いお方ばかりが。最近の太政大臣の薨去を思い合せている。

五 藤壺への人知れぬ哀惜の思いはもちろんのこと、この上もなくて。

六 もう長年おあきらめになっていらした（宮への）せつない思いまでも。

七 ご病床近くに立てめぐらしてある几帳。

八 （仏前の）お勤めをほんの一時もお怠りになることなくあそばされましたそのご無理が積って。

〔帝に〕お話も申し上げなさらない うものも聞こえさせたまはず。御心のうちにおぼし続くるに、一高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、二心のうちに飽かず思ふことも人には越えた身の上だったと思い知られなさる人にまさりける身とおぼし知らる。上の、帝が少しも夢のうちにも、三かかる事の心を知らせたまはぬを、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて、これとだけが気がかりでいつまでも心の晴れぬこととしてこの世に思いが残りそうな気持がなさるのみぞ、うしろめたくむすぼほれたることにおぼし置かるべきこのことであったちしたまひける。

大臣は、源氏今上のご治世の上から申しても おほやけがたさまにても、四かくやむごとなき人の限り、うち続き亡せたまひなむことをおぼし嘆く。五人知れぬあはれ、はた、限りなくて、ご祈禱などあらゆる手だてをお尽しになる御祈りなどおぼし寄らぬことなし。六年ごろおぼし絶えたりつる筋さへ、今一度申し上げずにしまったことがたまらなく思われなさるので聞こえずなりぬるがいみじくおぼさるれば、七近き御几帳のもとに寄りて、ご病気の様子などを御ありさまなど、ご介抱の女房たちにさるべき人々に問ひ聞きたまへば、側近の者たちだけはべっていて親しき限りさぶらひて、くわしくこまかに聞こゆ。（女房たち）「月ごろご気分がすぐれずいらせられましたのになやませたまへる御ここちに、八御行ひを時の間もたゆませたまはずひとしおすっかりお弱りになってしまわれましたのですが近頃にさせたまふ積りの、いとどいたうくづほれさせたまへるに、この

九　お蜜柑のようなものも、手にしようともなさらなくなってしまいましたので。

一〇　桐壺院のご遺言どおりに。遺言のことは、賢木一四〇頁に見える。

一一　今上の帝のご輔佐役をお勤め下さいますお志のほどは。

一二　一体どうした折に、それを並々ならずうれしく思っていますことをちらりとでも申し上げられましょうかと。

一三　苦しい息の下からかすかに仰せになるのも。取次ぎの女房に、源氏への挨拶を伝えているのである。

一四　どうしてこんなにも気弱いことで、と。どうしてこう藤壺のことを嘆くのかと、見咎められはしないかと恐れる気持。

一五　昔からの、瞼に浮ぶ藤壺の慕わしいお姿を。次の「人の御さまを」とともに「かけとどめきこえむかたなく」に掛る。

一六　（特別の感情を抜きにして）一般の世間のこととしても。

一七　帝のご輔佐役をお勤めしなくてはならぬということを。

一八　世の中は無常迅速なものと思われますのに。

なりましては
ころとなりては、柑子などをだに、触れさせたまはずなりにたれば、頼みどころなくならせたまひにたること」と、泣き嘆く人々多かり。「院の御遺言にかなひて、内裏の御後見つかうまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかは、その心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、今なむあはれにくちをしく」と、ほのかにのたまはするも、ほのぼの聞こゆるに、「源氏は」ご返事も申し上げることがお出来にならず御いらへも聞こえやりたまはず、泣きたまふさまいといみじ。などかうしも心弱きさまにと、人目をおぼしかへせど、いにしへよりの御ありさまを、おほかたの世につけても、あたらしく惜しき人の御さまを、心にかなふわざならねば、かけとどめきこえむかたなく、いふかひなくおぼさるること限りなし。

ご回復の望みもなくなっておしまいになりましたことです
（藤壺）
長年身にしみて存ぜられますことも多いのですが
のんきに考えておりましたのですが
今となってはしみじみ残念に思われます
ほのかに
とてもおいたわしい
周囲の人目を思って我慢なさるが
藤壺
人の命はままならぬものゆえ
世にお引き止め申すすべもなく
情けなくお思いになることこの上もない

（源氏）頼りにもならぬ私ではありますが
「はかばかしからぬ身ながらも、昔より、御後見つかうまつるべきことを、心のいたる限り、おろかならず思ひたまふるに、太政大臣のかくれたまひぬるをだに、世の中心あわたたしく思ひたまへらる

心の及びます限り
ひとかたならず心にかけておりますが
おかくれになったことだけでも

一　またあなた様まで、こうしてご不例でいらっしゃいますので。

二　『法華経』安楽行品の偈「無漏の妙法を説き　無量の衆生を度ひ　後に当に涅槃に入ること　煙尽きて燈の滅ゆる如し」によるものであろう（『河海抄』に引く）。藤壺の崩御を仏の涅槃に入るのになぞらえて書く。

藤壺の宮の仁慈

三　権勢を笠に着て。『河海抄』に「豪家」の字を宛て、「又高家」とする。中世には「高家」を宛てるのが一般だったようであるが、「豪」は、漢音「かう」である。

四　家来筋の者が奉仕することでも。

五　善根を積む仏事供養といったことでも。法会を行ったり、納経、造仏、造寺などのこと。

六　昔の賢聖のご治世にもよくあったことなのだが。作者の尚古思想が顔をのぞかせている。

七　毎年、一定の下級の地方官を補任して、その俸禄を天皇以下の所得とすること。

八　毎年、一定の従五位下叙爵者の位田の収入を上皇及び諸院宮の所得とすること。

九　封戸。皇族、諸臣に賜る民戸。地租の半分、庸、調の全部を所得とする。藤壺は太上天皇に准じて二千戸。

るに、一またかくおはしませば、よろづに心乱れはべりて、世にはべらむことも残りなきここちなむしはべる」と聞こえたまふほどに、燈などの消え入るやうにて果てたまひぬれば、いふかひなく悲しきことをおぼし嘆く。

（もうどうしてよいか分りませず　私もこの世にそう長くもないような気持がいたされます　息を引き取られたので　〔源氏は〕）

かしこき御身のほどと聞こゆるなかにも、御心ばへなどの、世の尊いご身分のお方と申し上げる中でも　世の人に対しても広く一様にご慈愛深くいらせられて　〔藤壺は〕お気立て）ためにもあまねくあはれにおはしまして、豪家にことよせて、人の愁へとあることなどもおのづからうちまじるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人のつかうまつることをも、世の苦しみとあるべきことをばとどめたまふ。功徳のかたとても、すすむるによりたまひて、いかめしうめづらしうしたまふ人など、昔のさかしき世に皆ありけるを、これは、さやうなることなく、ただもとよりの宝物、得たまふべき年官、年爵、御封の物のさるべき限りして、まことに心深きことどもの限りをしおかせたまへれば、何とわくまじき山伏などまで惜しみきこゆ。

（人の迷惑になることなども世間にはよくあることなのだが　〔藤壺には〕　道に外れたことはなく　おさし止めになるとは　盛大に人目を驚かすようなことをなさる　世間の難儀になるようなこと　勧進に応じなさって　宮家に伝わる　収入の中から応分の物を割いて　物のわけも分らぬ山の修行者　お心のこもった善根の限りを尽してお置きになったので　〔と崩御を〕）

一〇 ご葬儀につけても。火葬に付し、お骨を墓所におさめる。

源氏の悲傷の歌

一一 殿上の間に伺候することを許された四位、五位の者と六位の蔵人。諒闇なので、帝の侍臣も、母后の喪に服する。

一二 南殿の桜の宴。源氏が春鶯囀を舞い、藤壺がひそかに歌を詠んだ（二巻花宴五〇～五一頁）。十二年前のこと。

一三 「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」（『古今集』巻十六哀傷、堀川の太政大臣みまかりにける時に深草の山にをさめてける後に詠みける　上野岑雄）

一四 念仏誦経するためのお堂。邸宅内に設けられた。

一五 峰の梢がくっきり見えるのに。

一六 濃い鼠色。喪服の色で、橡で染める。

一七 入り日のさす峰にたなびく薄雲は、悲しみの喪に服している私の袖に色を似せているのだろうか。無心の雲も女院の崩御を悲しんでいるのだろうか。巻名、この歌による。

一八 誰も聞いている人のいない念誦堂でのこととて、この源氏の悲しみのお歌を知って唱和する人もなく、かいのないことだ。草子地。

夜居の僧都の密奏

一九 四十九日のご法事。四十九日まで七日ごとに法要が営まれる。

二〇 藤壺の母は先帝の后。（一巻桐壺三三頁参照）

二一 僧正に次ぐ地位の僧。

世間中の騒ぎで

一〇 をさめたてまつるにも、世の中響きて、悲しと思はぬ人なし。殿上人など、皆ひとしなみに喪服の黒一色を身につけて なべてひとつ色に黒みわたりて、ものの栄えなき春の暮なり。二条の院の御前の桜を御覧じても、〔源氏は〕花の宴のをりなどおぼし出づ。「今年ばかりは」と、ひとりごちたまひて、人の見とがめつべければ、御念誦堂に籠りゐたまひて、日一日泣き暮らしたまふ。夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるのが、〔悲しみに〕鈍色なるを、何ごとも御目とまらぬころなれど、いとものあはれにおぼさる。

棚引いている

（源氏）一七 入り日さす峰にたなびく薄雲は
もの思ふ袖に色やまがへる

一八 人聞かぬ所なれば、かひなし。

一九 御わざなども過ぎて、事どもしづまりて、帝、もの心細くおぼしたり。二〇 この入道の宮の御母后の御世より伝はりて、次々の御祈りの師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやむごとなく親しきものに

ご在世中から引き続いて　代々のご祈禱僧として　宮家にお出入りしていた　亡き藤壺もとても尊敬なさって信頼していられたが

一　重大な勅願を数多く立てて。
二　世にも尊い、仏道一途の聖僧であったが。
三　自身の後世のための勤行。
四　藤壺のご法事も終ってからは。
五　僧が寝所の近くで終夜加持すること。帝の場合、清涼殿の二間（夜の御殿の東側の部屋。一巻図録五参照）に伺候する。
六　ご意向も恐れ多いことですから。
七　昔からご奉仕してまいりました志も取り添えまして（お勤めいたしましょう）。
八　拙僧の罪も重くて。帝が、源氏が実の父であることをご存じなく、源氏に対して父としての礼を尽しておられぬために天変も起っている。真相を知る自分が、帝にそのことをお知らせしない罪は重い、という。
九　天の照覧が恐ろしく思われますことを。「天の眼」は天眼。五眼（肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼）の一つで、帝釈、梵天など天部の、物を見通す力。
一〇　一体何ごとであろう、この世に執着が残るような何か不満でもあるのであろうか。地位、待遇などの不満か、の意。以下、帝の心。

おぼしたりしを、朝廷（おほやけ）にも重き御（ご）（ご尊崇が厚くて）おぼえにて、一いかめしき御願（ぐわん）ども多く立てて、二世（よ）にかしこき聖（ひじり）なりける、（山に）年七十ばかりにて、三今は終りの行ひをせむとて籠りたるが、（藤壺ご病悩のご祈禱のため京に出て来たのだが）宮の御ことによりて出でたるを、（やはりもとの）内裏（うち）より召しありて常にさぶらはせたまふ。四このころは、なほもとのごとく参りさぶらはるべきよし大臣（おとど）（源氏）もすすめのたまへば、（僧都）「今は、夜居（よゐ）（五）などいと堪へがたうおぼえはべれど、（とても身体がつらく思われますけれども）仰（おほ）せ言（ごと）（六）のかしこきにより、（ように護持僧としてお側近くお仕えするようにと）古き心ざし（七）を添へて」とて、（帝のお側に）さぶらふに、静かなる暁（あかつき）に、人も近く（伺候せず）さぶらはず、（あるいは退出してしまったりした折に）あるはまかでなどしぬるほどに、（帝に）古代にうちしはぶきつつ、世の中のことども奏したまふついでに、（僧都）「いと（まことに奏上しにくく）かへりては罪にもやまかりあたらむと思ひたまへ憚（はばか）ること多かれど、（古風に咳払いをしながらかえって罪科に当りもいたしましょうかと）しろしめさぬに、八罪重くて、九天の眼（まなこ）恐ろしく思ひたまへらるることを、（心中ひそかに嘆いておりますままご存じでいらせられぬと）心にむせびはべりつつ命終りはべりなば、何の益かははべらむ。仏も心ぎたなしとやおぼしめさむ」とばかり奏しさして、（途中まで奏上して）えうち出（何ごとかを口に出せないでいる）でぬことあり。上（うへ）、一〇何ごとならむ、この世に恨み残るべく思ふこと（未練がましいと）

一一 僧侶というものは、世離れた聖僧といっても、道に外れたけしからぬ嫉妬の念が深くて、気味の悪いものだからとお思いになって。僧侶は修行を積んでいるだけに、悪道に堕ちると強い物の怪になる。

一二 仏がいましめて秘密のこととなさる真言の深い道理でさえ。真言は、大日如来の教説。如来の自内証自境界の説法であるので、その器でなければ理解しがたいゆえ、真言秘密という。「さらに」は「隠しとどむることなく」に掛る。

一三 何か隠し立て申すようなことは、何につけてかございましょう。

一四 おかくれあそばしました桐壺院とご母后（藤壺）。

一五 （このままにしておきますと）かえってお為にならぬこととして世間に取り沙汰される恐れもございましょう。

一六 拙僧ごとき老いぼれには、たとえお咎めがございましょうとも、何の後悔いたすことがございましょう。

一七 仏と天部の諸神（仏法の守護神）。

一八 くわしくは、法師の身でございますゆえ、理解の届かぬことでございます。男女の間のことであるので明言を避けた。

一九 不慮の事態になりまして、源氏の大臣があらぬ罪に問われなさいました時。須磨退居の一件をいう。

やあらむ、法師は、聖といへどもあるまじき横様の嫉み深く、うたてあるものをとおぼして、「いはけなかりし時より、隔て思ふことなきを、そこにはかく忍び残されたることありけるをなむ、つらく思ひぬる」とのたまはすれば、「あなかしこ。さらに仏のいさめ守りたまふ真言の深き道をだに、隠しとどむることなくひろめつかうまつりはべり。まして心に隈あること、何ごとにかはべらむ。これは来しかた行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましにし院、后の宮、ただ今世をまつりごちたまふ大臣の御ため、すべて、かへりてよからぬことにや漏り出ではべらむ。かかる老法師の身には、たとひ愁へはべりとも、何の悔かはべらむ。仏天の告げあるによりて奏しはべるなり。わが君はらまれおはしましたりし時より、故宮深くおぼし嘆くことありて、御祈りつかうまつらせたまふゆゑなむはべりし。くはしくは法師の心にえ悟りはべらず。事の違ひめありて、大臣横様の罪にあたりたまひし時、いよいよ懼ぢおぼしめして、

（帝）幼少であった頃から
心を許してきたのに
そなたにはこうして何か私に隠しておられたことがあったとは
（僧都）滅相もないこと
ご伝授申し上げてお
過去将来にわたる重大事でございますが
源氏
陛下がご胎内にいらせられました当時から
ご祈禱を拙僧にお申しつけあそばす仔細がございました
藤壺
（藤壺は）

重ねて御祈りどもうけたまはりはべりしを、大臣も聞こしめしてなむ、またさらに言加へ仰せられて、御位に即きおはしましまでつかうまつることどもはべりし。そのうけたまはりしさま」とて、くはしく奏するを聞こしめすに、あさましうめづらかにて、恐ろしうも悲しうも、さまざまに御心乱れたり。とばかり御いらへもなければ、僧都、進み奏しつるを便なくおぼしめすにやと、わづらはしく思ひて、やをらかしこまりてまかづるを、召しとどめて、「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍び籠められたりけるをなむ、かへりてうしろめたき心なりと思ひぬる。またこのことを知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ」とのたまはす。「さらに、なにがしと王命婦とよりほかの人、このことのけしき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。天変しきりにさとし、世の中静かならぬは、このけなり。いときなく、ものの心しろしめすまじかりつるほどこそはべりつれ、やうや

多くのご祈禱を仰せつかりましたが
〔陛下が〕
仰せつかりましたご祈禱の趣は
源氏
〔帝は〕
困ったことになった
不届きと
そっと恐懼のていで退出するのを
〔帝〕
後世までもの
非難を受けるべきであった秘密を
心の中に秘めておられたのは
世間にもらすような人はいるのだろうか
(僧都)絶対に
拙僧と
この秘密
啓示を現し
この秘密ゆえです
まだ幼くお
ものの わけがお分りになるはずもなかった間はそれでもようございましたが
わし

一 大臣のご意向も加えてご祈禱をお命じになって。次に「御位に即きおはしましまでつかうまつる」とあるから、須磨退居当時東宮だった今上の無事即位を祈願するものであったと思われる。即位は須磨退居当時より三年後である。

二 思いもかけぬ驚くべきことで。実の父が源氏であることをはじめてご承知になっての気持。

三 かえって安心のならない人だと思われる。自分の信頼にこたえて、早く打ち明けてくれればよかった、の意。

四 藤壺の側近の女房。源氏の手引きをした人。一巻若紫二一二頁に初出。藤壺出家後、冷泉帝に近侍する。(二巻須磨二二一頁)

五 それだからこそ、大層恐ろしく存じられます。誰も知る者のない秘密だからこそ仏天の照覧が恐ろしい、の意。

六 一六四頁に見えている。

七 天は、その罪咎をも明らかに示すのです。
八 陛下が何の罪ともご存じでいらせられぬことが恐ろしく存じられますので。天変そのほかは、治世の不始末から起る。帝の責任なのである。
九（口外すまいと）断念しておりましたことを、思い返して申し上げた次第でございます。

帝、思い悩んで、譲位の希望をもらす

一〇 亡き桐壺院の御ことをお思い申しても気にかかることであるし。果して院はご承知であられたのかどうか、容易ならぬことである、といった気持。以下、「あはれにかたじけなかりけること」まで、帝の心。
一一 源氏の大臣がこうして臣下として仕えていられるのも、おいたわしく恐れ多いことであったと。帝王の父が、子のもとに臣下であるのは、父子の道に外れるという考え。
一二 日の高くなるまで夜の御殿から出御あそばされぬので。
一三 涙の乾く時もないほど悲しんでいられる今日この頃だからなのであろうと。
一四 桐壺院の御弟。朝顔の斎院の父。

う御齢足りおはしまして（十分におなりあそばして）、何ごともわきまへさせたまふべき時に至りて、咎をも示すなり。よろづのこと（一切のことは）、親の御世よりはじまるに（親の御時からはじまるもののようで）こそはべるなれ。何の罪ともしろしめさぬが恐ろしきにより、思ひたまへ消ちてしことを、さらに心より出しはべりぬること」と、泣く泣く聞こゆるほどに明け果てぬれば、まかでぬ。

上は、夢のやうにいみじきことを聞かせたまひて（悲しく恐ろしいことをお聞きあそばされて）、いろいろにぼし乱れさせたまふ。故院の御ためもうしろめたく、大臣（〔僧都は〕）のかくただ人にて世につかへたまふも、あはれにかたじけなかりけること、かたがたおぼしなやみて、日たくるまで出でさせたまはねば、かくなむと聞きたまひて、大臣もおどろきて参りたまへるを御覧ずるにつけても、いとど忍びがたくおぼしめされて（いよいよ堪えがたいお気持になられて）、御涙のこぼれさせたまひぬるを、おほかた故宮（亡き藤壺）の御ことを干る世なくおぼしめしたるころなればなめりと見たてまつりたまふ。その日、式部卿の親王（〔源氏は〕）亡せたまひぬるよし奏するに、いよいよ世の中の騒がしきことを嘆きお（〔帝は〕）

一　こうした異常な事件の続く折柄なので。

二　亡き母宮（藤壺）がご心配あそばすでしょうから、私の身の振り方についても今まで遠慮して口にしなかったのですが。「世間のこと」は、社会的な地位、仕事というほどの意、ここでは帝位のこと。

三　母宮亡き今は、気楽な身分にでもなって暮したいと思います。譲位して、上皇として過したい、の意。

四　必ずしも政治が正しいか間違っているかによるというわけのものでもございません。

五　聖代の帝の治世にも、道理に合わぬ凶事が出来した例は、中国にもございました。『河海抄』は『後漢書』皇后紀上を引いて、「堯湯は洪水大旱の責めを負ひ」「高宗成王は雉雊迅風の変有り」という。堯は洪水九年、湯は大旱七年に及んだ。高宗は殷の武丁のことで、宗廟の祭に鼎の端に雉の鳴く凶兆があった。成王の迅風とは、周公旦東遷の時の大風のこと。「わが国」の例としては「延喜聖代菅家左遷事以下歟」という。

六　亡くなって不思議のない老齢の人々が、その時が来て亡くなったのを。太政大臣や式部卿の宮の薨去をいう。

七　その一端をお話しするのも、とても気のひけることです。政道に関することへの言及を女として憚る草子地。

ぼしたり。かかるころなれば、大臣は里にもえまかでたまはで、つとさぶらひたまふ。

二条の院　帝の　お側につききりでいられる

しめやかなる御物語のついでに、「世は尽きぬるにやあらむ、もの心細く例ならぬここちなむするを、天の下もかくのどかならぬに、よろづあわたたしくなむ。故宮のおぼさむところによりてこそ、世間のことも思ひ憚りつれ、今は心やすきさまにても過ぐさまほしくなむ」とかたらひきこえたまふ。「いとあるまじき御ことなり。世の静かならぬことは、かならず政治の直くゆがめるにもよりはべらず。さかしき世にしもなむ、よからぬことどももはべりける。聖の帝の世に横様の乱れ出で来ること、唐土にもはべりける。わが国にもさなむはべる。まして、ことわりの齢どもの、時至りぬるを、おぼし嘆くべきことにもはべらず」など、すべて多くのことどもを聞こえたまふ。片端まねぶも、いとかたはらいたしや。

しんみりした〔源氏との〕　身体の具合もはかばかしくありませんし　何かにつけ気のせく思いがします　騒ぎが続きますので　ご相談申し上げなさる　〔源氏〕　とんでもないお考えです　すぐれた治世にかえって　不祥事もいろいろ起ったものでございました　さようでございます　〔帝が〕

〔帝が〕　喪服のお身なりに　地味にしていられる　源氏に生写しだ

常よりも黒き御よそひに、やつしたまへる御容貌、違ふところな

八 どうかしてこの僧都の密奏のことをそれとなく申し上げたいとお思いになるが。

九 何といってもやはり源氏がおもはゆくお思いになるに違いないことなので。密通のことをわが子の口から聞かされる源氏の気持を推し量ったもの。

一〇 平生とはまるでご様子が違うのを。源氏の目に映った帝のご様子。

一一 人並みすぐれた源氏のお目には。以下、さすがに洞察力のすぐれた源氏にも、帝が事の真相をお知りになったとまでは見抜けなかった、という。

帝、源氏に譲位を考慮

一二 母宮がそれほど秘密になさったであろうことを、自分が知ってしまったと。

一三 これまでにこうした事例はあったことなのかと。「かかることの例」とは、皇統紊乱の事例。

僧都の密奏をお聞きあし。上も、帝も今までお鏡を見てもそうお思いのことであったが年ごろ御鏡にもおぼしよることなれど、聞こしめししこそばされて以来は格別今までより一層とののちは、しげしげと〔源氏を〕またこまかに見たてまつりたまひつつ、ことにいとど胸を打たれるお思いなのであはれにおぼしめさるれば、いかでこのことをかすめ聞こえばやとおぼせど、さすがにはしたなくもおぼしぬべきことなれば、若き御お年若のことをとて気がひけてここちにつつましくて、急にも申し上げかねていらっしゃるのでふともえうち出できこえたまはぬほどは、親しげに当りさわりのない世間話をただおほかたのことどもを、常よりことになつかしう聞こえさせたまふ。〔帝が〕へりくだった態度をおとりになってうちかしこまりたまへるさまにて、いと御けしきことなるを、かしこき人の御目には、あやしと見たてまつりたまへど、いとかくいぶかしくはっきりとさださだと聞こしめしたらむとはおぼさざりけり。〔帝が〕

上は、王命婦にくはしきことは問はまほしうおぼしめせど、今さらに、しか忍びたまひけむこと知りにけりと、かの人にも思はれじ、ただ大臣源氏にいかでほのめかし問ひきこえて、さきざきかかることの例はありけりやと問ひ聞かむ、とぞおぼせど、全くそうした機会もないのでさらについでもなければ、いよいよ御学問をせさせたまひつつ、さまざまの書どもを御

一「秦始皇は荘襄王の子として位に即くといへども、実は始皇の母太后、嫪毐、呂不韋といふ臣下に密通して所レ生云々」（『河海抄』）。秦の始皇は呂不韋の子であるので呂秦といい、晋の元帝は牛金という者の子であるので牛晋というと、『細流抄』はいう。

二 仮にわが国にそうした例があったにしても。以下、帝のご考慮。

三 皇子で臣籍に降下した人。以下の例につき『河海抄』は、光仁天皇（もと大納言）、桓武天皇（もと大学頭、中務卿）、光孝天皇（もと一品式部卿）、宇多天皇（もと侍従、親王となり即位）を、また親王になった例として、是忠（光孝皇子、もと中納言）、是貞（光孝弟、もと左中将）、兼明（醍醐皇子、もと左大臣）、盛明（醍醐皇子、もと大蔵卿）各親王を挙げる。

源氏、譲位のことを固辞

四 二巻葵九一頁注一〇参照。

五 源氏が太政大臣におなりになるという、内々のご僉議があった機会に。「太政大臣」は、太政官の最高位で、帝の師範たるべき職、「則闕の官」といって、その人を得なければ闕き、特に職掌はなく最も重んじられた。

六 帝位をお譲りあそばすことは、とうとうお考えにもならなかったことなのです。その事情は、桐壺三一～三二頁に見える。

七 及びもつかぬ帝位に即くことをいたしましょうか。

質ずるに、唐土には、（公然のこととしても秘密のことでも）あらはれても忍びても、乱りがはしきことと多かりけり。日本には、（全くそうした例はお見いだしになれない）さらに御覧じ得るところなし。たとひあらむにても、（こうした秘密のことを）かやうに忍びたらむことをば、（どうして後世の人が知り得るわけがあるだろう）いかでか伝へ知るやうのあらむとする、一世の源氏、また納言、大臣になりてのちに、さらに親王にもなり、位にも即きたまへるも、あまたの例ありけり、（源氏がすぐれた人物であることを理由にして）人がらのかしこきにことよせて、（帝の御位をお譲り申し上げようか）さもや譲りきこえましなど、よろづにぞおぼしける。

（帝は）

四 秋の司召に、五 太政大臣になりたまふべきこと、うちうちに定め申したまふついでになむ、帝、（かねての譲位のご意向を）おぼし寄する筋のこと（源氏に）漏らしきこえたまひけるを、大臣、いとまばゆく恐ろしうおぼして、（目も上げられず）さらにあるまじきよしを申し返したまふ。「故院の御心ざし、（亡き桐壺院のお気持は）あまたの皇子たちの御中に（特別に私のことをお思いあそばしながら）取り分きておぼしめしながら、位を譲らせたまはむことをおぼしめし寄らずなりにけり。何か、その御心改めて、（お考えに背いて）及ばぬ際にはのぼりはべらむ。ただもとの御おきてのままに、（桐壺院のご意向のとおりに）朝廷につかうま（臣下としてお）

八 心静かな勤行に明け暮れる隠遁の暮しをいたしたいと思っております。同じ趣旨のことは前にも見える（一六四頁注一参照）。

九 源氏は、もうしばらくこのままでとお考えになるところがあって。

一〇 ただ御位だけ上がって。内大臣は正従二位相当であるから、太政大臣相当の正従一位、恐らく従一位に昇進したのであろう。

一一 牛車の宣旨を賜って。牛車に乗ったまま大内裏の門を通過することを勅許されることで、親王、摂関、宿老の大臣などに賜る。

一二 親王（親王宣下による）におなりになるようにとご勅諚があるが。臣下としての処遇を心苦しく思われるのである。

一三 政治の輔佐役をおつとめになるべき人が今はいないから。以下、源氏の心中。

一四 もとの頭の中将。澪標一五頁に権中納言。この時の除目で大納言に昇進、右大将を兼任。

一五 もう一階昇進したら。大臣になること。

源氏、王命婦に質す

一六 亡き藤壺の宮にとってもお気の毒なことであり。帝が秘密を知られたことを察知しての、源氏の心中。

一七 御匣殿の別当が転出したその跡の場所に移って。この人は誰か不明。御匣殿は貞観殿にある。

仕えしてつりて、今すこしの齢かさなりはべりなば、のどかなる行ひに籠りはべりなむと思ひたまふる」と、常の御言の葉にかはらず奏したまへば、〔帝は〕いとくちをしうなむおぼしける。太政大臣になりたまふべき定めあれど、しばしとおぼすところありて、ただ御位添ひて、牛車ゆるされて参りまかでしたまふを、帝、飽かずかたじけなきものに思ひきこえたまひて、なほ親王になりたまふべきよしをおぼしのたまはすれど、世の中の御後見したまふべき人なし、権中納言、大納言になりて、右大将かけたまへるを、今一際あがりなむに、何ごとも譲りてむ、さてのちに、ともかくも静かなるさまにとぞおぼしける。

平生の　お言葉どおり　御所にお出入りなさるのを　どこまでも恐れ多いことと　政務をす

〔源氏は〕なほおぼしめぐらすに、故宮の御ためにもいとほしう、また上のかくおぼしめしなやめるを見たてまつりたまふもかたじけなきに、誰かかることを漏らし奏しけむと、あやしうおぼさる。命婦は御匣殿のかはりたる所に移りて、曹司たまはりて参りたり。大臣、対面

お見受け申し上げなさるにつけても恐れ多いことなので　こうした秘密を　王命婦　局を賜って参内している

したまひて、〔源氏〕「このことを、〔藤壺が〕何かの機会にもしもののついでに、露ばかりにても漏らし奏したまふことやありし」と案内〔帝に〕したまへど、〔王命婦〕「さらに、かけても聞こしめさむことを、いみじきことにおぼしめして、かつは罪うることにやと、上の御ためをなほおぼしめし嘆きたりし」と聞こゆるにも、ひとかたならず心深くおはせし御ありさまなど、尽きせず恋ひきこえたまふ。

源氏、二条の院に退出した斎宮の女御に対面

斎宮の女御は、おぼししもしるき御後見にて、やむごとなき御おぼえなり。御用意、ありさまなども、思ふさまにあらまほしう見えたまへれば、かたじけなきものにもてかしづききこえたまへり。秋ごろ、二条の院にまかでたまへり。寝殿の御しつらひ、いとど輝くばかりしたまひて、今はむげの親ざまにもてなして、あつかひきこえたまふ。秋の雨いと静かに降りて、御前の前栽のいろいろ乱れたる露のしげさに、いにしへのことどもかき続けおぼし出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御かたにわたりたまへり。こまやかなる鈍

一事情をお尋ねになるが。

二それはもう、帝がちらりとでもこの秘密をご存じになることを、大変なことと（藤壺は）お思いあそばして。

三しかしまた（帝に申し上げなくては）罪を負うことにもなろうかと。帝がご存じなければ、源氏に子としての礼を尽せないことになるからである。

四前斎宮。六条の御息所の姫宮。前年春の入内のいきさつは絵合の巻頭に見える。

五源氏の予想されたとおりの、帝のよいお世話役で。幼少の帝のお世話役として、九歳年上の前斎宮の入内を藤壺に計ったこと、澪標四八頁に見える。

六女御は源氏の養女の格で入内しているから、二条の院は里邸にあたる。入内の時は朱雀院に遠慮して、二条の院にはお移し申さなかった（絵合九三頁）。

七女御の住む御殿。源氏は東の対に、紫の上は西の対に住む。

八今はすっかり親代りのご態度で。女御入内の時、源氏は朱雀院に遠慮して、表立って親代りという態度はとらなかった（絵合九三頁）。

九御息所との昔のことが次から次へと思い出されなさって。野の宮に御息所を訪れたのも秋（二巻賢木一二八頁以下）、御息所の亡くなったのも秋（澪標四三頁）であった。

一〇 濃い鼠色。喪服の色。
一一 世情の不穏なことなど口実になさって、そのままずっとご精進を続けておられるので、手放すことのない数珠を目立たぬように持って。ひそかに藤壺の冥福を祈る気持からである。
一二 女御のおられる部屋（母屋）にお入りになった。親代りという態度。
一三 「百草の花の紐解く秋の野に思ひたはれむ人なとがめそ」（『古今集』巻四秋上、題しらず、読人しらず）が下に思われていよう。「ひもとく」は、花が開く意の歌語。
一四 夕方の薄明りに映えた姿。
一五 あの野の宮で御息所になかなか対面できなかった明け方の別れのことなどを（賢木一三〇～一三一頁）。源氏は、朱雀院にも「野の宮のあはれなりし曙」を語ったことがある（同一六五頁）。
一六 「思い出すと」というわけなのだろうか。「いにしへの昔のことをいとどしくかくれば袖ぞ露けかりける」（『河海抄』『釈』「袖に露かかりけり」、『紫明抄』「袖の」。『紫明抄』『河海抄』には作者を小町姉とする。出典未詳）
一七 胸の騒ぐのは、困ったものですよ。「うたてあるや」は草子地。源氏がこの人に心を動かしているのは昔からのことである（賢木一三六頁、澪標四五頁など）。

源氏、御息所のことなど過去を語り、後事を託す

色の御直衣姿にて、世の中の騒がしきなどことづけたまひて、やがて御精進なれば、数珠ひき隠して、御さまよくもてなしたまへる、尽きせずなまめかしき御ありさまにて、御簾のうちに入りたまひぬ。御几帳ばかりを隔てて、みづから聞こえたまふ。「前栽どもこそ残りなくひもときはべりにけれ。いとものすさまじき年なるを、心や託もなく季節を知り顔なるも、あはれにこそ」とて、柱に寄りゐたまへる夕ばえ、いとめでたし。昔の御ことども、かの野の宮に立ちわづらひし曙などを、聞こえ出でたまふ。いとものあはれとおぼしたり。宮も、「かくれば」とにや、すこし泣きたまふけはひ、いとらうたげにて、うち身じろきたまふほども、あさましくやはらかになまめきておはすべかめる。見たてまつらぬこそくちをしけれと、胸のうちつぶるるぞ、うたてあるや。

「過ぎにしかた、ことに思ひなやむべきこともなくてはべりぬべかりし世の中にも、なほ心から、すきずきしきことにつけて、もの思

（二）優雅に振舞っていられるお姿は
（三）女御子自身でご応対なさる
（源氏）（一三）まことに何の興もない諒闇の年ですのに〔草木は〕届
（一四）悲しいことです
（一五）亡き御息所の思い出話
（一六）お話し申し上げなさる
（一七）とてもの悲しくお思いのご様子である
（源氏）今まで
格別気苦労しなくてはならないこともなくて
過ぎたはずの時代で
やはり自ら求めて
色恋沙汰に関しては

一　いろいろかんばしからぬ色恋沙汰で相手の女に悪かったと思われることが、たくさんありました中で、とうとうおしまいまで私を許して下さらず、深い悩みのままに終ってしまったことが二つございます。

二　生涯いつまでも嘆かねばならぬことと思われたのですが。

三　私に対する怨みの解けぬままになってしまわれたであろうことは。「むすぼほれ燃えし煙をいかがせむ君だにこめよ長き契りを」（『紫明抄』『河海抄』『奥入』「煙も」。『釈』「煙も」「わかき契りを」。出典未詳）

四　もう一つは話されずにしまわれた。藤壺のこと。

五　それから一時、あるかなきかに落ちぶれておりました時に。須磨、明石の流謫の時代。

六　東の院に住んでいる人。花散里。（松風一一九頁参照）

七　ずっと気がかりに思われておりましたのも。花散里は、姉の麗景殿の女御とともに、源氏の庇護のもとにあった（二巻花散里一九三頁、須磨二三四頁など）。

八　帝のご後見をつとめさせて頂く喜びなどは、それほどにも深く思われませんで。次に女御への「後見」のことを言う伏線。

九　あなたに対しては、並々ならず気持を抑えてのお世話役であるとはお分りでいられましょうか。抑えた慕情を訴えたもの。

ひの絶えずもはべりけるかな。さるまじきことどもの心苦しきが、あまたはべりしなかに、つひに心も解けず、むすぼほれて止みぬること二つなむはべる。まづ一つは、この過ぎたまひにし御ことよ。あなたの亡くなられたお母様のことなのです

あさましうのみ思ひつめて止みたまひにしが、長き世の愁はしきふあまりと思われるほど悩みに悩んだ末亡くなってしまわれましたのが

しと思ひたまへられしを、かうまでもつかうまつり御覧ぜらるるを

こうまでも親しくお世話申し上げお付き合い頂いておりますのを

なむ、なぐさめに思うたまへなせど、燃えし煙のむすぼほれたまひ

せめてもの罪ほろぼしと考えてみますが

けむは、なほいぶせうこそ思ひたまへらるれ」とて、今一つはのたまひさしつ。「中ごろ、身のなきに沈みはべりしほど、かたがたに

（源氏）

やはりまことに気がかりに思われることです

〔帰京後〕少しずつ思いどおりになりました

思ひたまへしことは、片端づつかなひにたり。東の院にものする人の、そこはかとなくて、心苦しうおぼえわたりはべりしも、おだし

頼りないお暮しで　〔今は〕安心できるようになりました

う思ひなりにてはべり。心ばへの憎からぬなど、われも人も見たまへあきらめて、いとこそさはやかなれ。かく立ち返り、おほやけの御後見つかうまつるよろこびなどは、さしも心に深く染まず、かやうなるすきがましきかたは、しづめがたうのみはべるを、おぼろけ

あれこれと思っておりましたことは

気立てのやさしいところなど

私も相手もお互いよく理解し合っておりまして

全く何の問題もありません

こうして再び

好色がましい方面はいつまでも気持を抑えられないのですが

一〇 女御はどうしてよいか分らず、とかくのご返事もないので。「むつかし」は、処置に窮する意。

一一 やはりそうなのですね。なんと情けない。自分の意を汲んでくれぬことに対する怨み言。

一二 この世に執着を残さず、後世安楽のための勤行も思いのままにして。

一三 この世の思い出にできそうなことが何もありませんのが。実の娘の入内といった晴れがましい経験がない、ということであろう。

一四 人数にも入らぬ幼い娘がおりますが、大きくなるまで何とも待ち遠しいことです。明石の姫君のこと。この年、四歳。その入内を待ち望む気持。

一五 何といってもこの一門（源氏一族）を繁栄させて下さって。源氏の養女として、女御が冷泉帝の皇子を産むといったことを望む意。

一六 お目をかけてやって下さい。姫君の入内の世話もしてほしいという気持。

一七 頼もしい子孫繁昌といった望みはそれとして。「はかばかし」は、生活上の利益をもたらすというほどの意。

一八 気の晴れる楽しみごともしてみたいものです。次に見える庭造りのこと。少女の巻二七二頁以下に見える六条の院造営の構想の端緒が、ここに見られる。

春秋優劣の論の話題に女御は秋に心を寄せる

に思ひ忍びたる御後見とはおぼし知らせたまふらむや。あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」とのたまふ。一〇むつかしうて、御いらへもなければ、「さりや。あな心憂」一一とて、異事に言ひまぎらはしたまひつ。「今はいかでのどやかに、生ける世の限り、思ふこと残さず後の世のつとめも心にまかせて、籠りゐなむと思ひはべるを、一二この世の思ひ出でにしつべきふしのはべらぬこそ、さすがにくちをしうはべりぬべけれ。数ならぬ幼き人一四のはべる、生ひ先いと待ち遠なりや。かたじけなくとも、一五なほこの門ひろげさせたまひて、はべらずなりなむのちにも、数まへさせたまへ」一六など聞こえたまふ。御いらへは、いとおほどかなるさまに、からうして一言ばかりかすめたまへるけはひ、いとなつかしげなるに聞きつけて、しめじめと暮るるまでおはす。

（源氏）「はかばかしきかたの望みはさるものにて、年のうちゆきかはる時の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともしはべりにし

（源氏）一一 さりや。あな心憂 気の毒にくらい
一〇 むつかし おっしゃって頂かなくては
一二 思ふこと残さず後の世のつとめも心にまかせて 隠居して暮したいと
一三 この世の思ひ出でにしつべきふしのはべらぬこそ、さすがにくちをしうはべりぬべけれ やはり残念に思われることでしょう
一四 数ならぬ幼き人 私の亡きあとも
一五 なほこの門ひろげさせたまひて 恐れ多いことですが
一六 数まへさせたまへ 〔女御の〕
一七 はかばかしきかたの望みはさるものにて 季節
一八 年のうちゆきかはる時の花紅葉、空のけしきにつけても 一年のうちに移り変る 季節の 風情

がな。春の花の林、秋の野の盛りを、それぞれに人がその優劣を論じていますがとりどりに人あらそひはべりける、そのころの、季節げにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらざなれ。唐土には、春の花の錦に如くものなしと言ひはべるめり、大和言の葉には、和歌秋のあはれを取り立てて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。狭き垣根のうちなりとも、手狭な私などの邸でもその季節季節の風情が味わえるようにそのをりをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覧ぜさせむと思ひたまふるを、そこに放って皆様のご覧に入れようと思うのですがいづかたにか御心寄せはべるべからむ」と聞こえたまふに、いと聞こえにくきこととおぼせど、むげに絶えて御いらへ聞こえたまはざらむもうたてあれば、「まして、いかが思ひ分きはべらむ。げに、いつとなきなかに、あやしと聞きし夕こそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ」と、しどけなげにのたまひ消つもいとらうたげなるに、え忍びたまはで、

一　以下、春秋優劣の論。後の野分の巻に「春秋のあらそひ」という語が見える。

二　「晋の石季倫金谷に居り春花林に満ちて五十里の錦障を作る」（『釈』『奥入』に引く。出典未詳）。「春に逢うて遊楽せざる、恐らくは是れ無心の人」（『河海抄』。『白氏文集』巻六十三、春遊「但恐らくは是れ凝人」）。なお適切な典拠を求めるべきであろう。

三　秋の情趣を格別のものと思っていますが。「春はただ花のひとへに咲くばかりもののあはれは秋ぞまされる」（『拾遺集』巻九雑下、読人しらず）。秋をよしとする最も古い歌としては『万葉集』巻一の額田王の長歌がある。

四　そのどちらも、その季節季節につけて見ますと、目移りがして。「春秋に思ひ乱れてわきかねつ時につけつつ移る心は」（『拾遺集』巻九雑下、ある所に春秋いづれかまさると問はせたまひけるに詠みてたてまつりける　紀貫之）などの歌が下に思われていよう。なお「見たまふに」は「見たまふるに」とありたいところ。

五　とても花の色も鳥の声もその優劣を判じかねます。「花鳥の……」は歌語的表現。「花鳥の色をも音をもいたづらにもの憂かる身は過ぐすのみなり」（『後撰集』巻四夏、藤原雅正）

六　「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）。上の「いつとなきなかに」にも響く。

七 あなたも、それなら私と思いを交わして下さい、人知れず秋の夕風が身にしみる思いをしているのです（あなたを恋しく思っているのです）。「さは」は、前の女御の言葉に踏まえられている『古今集』の歌の「秋の夕はあやしかりけり」（秋の夕方は不思議に人恋しい思いがするのだった）を、女御の意中に取りなしていう。

八 どんなご返事があろう。「いづこの……あらむ」は、慣用句。反語。

九 この機会に、源氏は胸の内に納めておくことがおできにならなくて、いろいろお怨み申し上げなさることがあるようだ。草子地。かねて省筆の筆法である。

一〇 女御は、今はうとましくお思いになる。

一一 ほんとうに思慮の深い人は、こんなふうに口には出さないものでしょう。自嘲気味の言葉。

一二 仕方がない、（こうしてお打ち明けした以上）これからは、お嫌いにならないで下さい。（冷たくされては）つらいことでしょう。

一三 お座布団。（図録一一参照）

一四 「梅が香を桜の花に匂はせて柳が枝に咲かせてしがな」（『後拾遺集』巻一春上、中原致時）による。

（源氏）「君もさはあはれをかはせ人知れず
わが身にしむる秋の夕風

堪えがたい思いをする時も多いのです
忍びがたきをりをりもはべりかし」と聞こえたまふに、いづこの御いらへかはあらむ、心得ずとおぼしたる御けしきなり。このついでに、え籠めたまはで、怨みきこえたまふことどもあるべし。今すこしひがこともしたまひつべけれども、いとうたてとおぼいたるもことわりに、わが御心も、若々しうけしからずとおぼし返して、うちなまめかしきも、心づきなうぞおぼしなりぬる。やをらづつひき入りたまひぬるけしきなれば、「あさましうも疎ませたまひぬるかな。まことに心深き人は、かくこそあらざなれ。よし、今よりは、憎ませたまふなよ。つらからむ」とて、わたりたまひぬ。うちしめりたる御匂ひのとまりたるさへ、うとましくおぼさる。人々、御格子など参りて、「この御茵の移り香、言ひ知らぬものかな。いかでかく取り集め、柳が枝に咲かせたる御あ

変だとお思いのご様子である
もう少し
無体な口説きようもなさりそうになるけれども
ご自分としても
まあいやなと〔女御が〕お思いなのももっともだし
年がいもなく不埒なことと反省なさって
奥ゆかしく色めかしい感じなのも
溜息をつかれる
そっと少しずつ〔奥に〕
何と
お嫌いになったものですね
もひどく
雨気にしっとりした〔お着物の〕
女房たち
〔女御は〕いや
あちらにお帰りになった
お下ろしして
何から何まで
らしく
何と
も言いようがありませんね

りさまならむ。ゆゆしう（こわいほど）」と聞こえあへり。（皆でお噂している）

対にわたりたまひて、とみにも（すぐにも〔奥に〕）入りたまはず、いたうながめて、端近う臥したまへり。燈籠遠くかけて、近く人々さぶらはせたまひて、物語などせさせたまふ。かうあながちなることに胸ふたがる癖の、なほありけるよと、わが身ながらおぼし知らる。これはいと似げなきことなり、恐ろしう罪深きかたは多うまさりけめど、いにしへの好きは、思ひやりすくなきほどのあやまちに、仏神もゆるしたまひけむとおぼしさますも、なほこの道は、うしろやすく深きかたのまさりけるかなと、おぼし知られたまふ。

（女房たちをはべらせなさって）（おさせになる）（罪深いという点ではこれよりひどかっただろうが）（若くて思慮が足りなかったための過失として）（恋の道には）（危ない橋を渡らぬ思慮深さが以前よりも身に付いてきたものだと）（自覚されなさる）

女御は、秋のあはれを知り顔にいらへ聞こえてけるも悔しうはづかしと、御心ひとつにものむつかしうて、なやましげにさへしたまふを、いとすくよかにつれなくて、常よりも親がりありきたまふ。女君に、「女御の秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君の春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ。時々につけたる木草の花

（情趣をいかにもわきまえ顔にお答え申したことも）（気のひけることと）（〔源氏は〕とてもさっぱりと何食わぬ顔で）（親ぶったお世話をお焼きになる）（秋が好きだとおっしゃったのもお気持がよく分るし）（季節季節に咲く）

一 西の対。紫の上のもと。

二 ひどく物思わしげに。なお女御のことが心にかかっている。

三 燈籠を遠くの軒先にかけて。雨模様なので軒先に光を求める気持。「燈籠」は、一巻図録一〇参照。

四 こうしたわりない恋に心を労する妙なところがまだ自分にはあったのだと。帚木の巻頭（一巻四五頁）以来、しばしば繰り返される源氏の性癖である。

五 女御とのことは、いかにも不都合なことだ。以下、源氏の反省。

六 昔の好色沙汰は。藤壺との密通のこと。

七 仏や神も大目に見て下さったのであろうと、冷静に反省なさるにつけても。

八 お具合もお悪そうでいらっしゃるのに。わけ知り顔に何気なく答えた言葉が源氏の恋の告白を誘ったので、ショックを受けている。

九 あなたが春の曙に心ひかれておいでなのも、もっともなことです。女御が秋を好むのに対して、紫の上は春を愛するとした。ここに初めて見えることで、以下、少女の巻の六条の院造営（二七三頁以下）と、二人の歌の贈答（二七七頁）につながる記述。

源氏の反省

一〇 公私につけて用事の多い今の身の上が私にはそぐわない感じですが。

一一 ただただあなたが退屈されはしないかと思うのが、私としてはつらいのです。

一二 お出かけもますますままならぬお身の上とて。位階も昇進している（前出一七七頁）。

一三（明石の上は）自分との仲を心ゆかぬ情けないものと悲観しているようだが、何でそんなにまで思うことがあろう。以下、源氏の心中。

一四（人に馬鹿にされるような）いい加減な暮しはすまいと思っているのを。京に移ることを危懼する明石の上の気持は前にも見えている（一四九頁、一六三頁）。

一五 嵯峨野の御堂の、不断の御念仏を口実にして。「不断の念仏」とは、一定の期間、昼夜間断なく余念をまじえず念仏を修すること。松風の巻に「阿弥陀、釈迦の念仏の三昧」（一三四頁）とあった。

一六 ままならぬ源氏との仲ではあるが、さすがに姫君まで生した浅からぬ因縁を思うと、お逢いしてかえって悲しみもつのって。

一七 大井川の鵜飼の篝火であろう。松風の巻に、桂殿で鵜飼を召したことが見える（一三九頁参照）。

源氏、大井に明石の上を訪う

（かこつけても）によせても、（あなたのお気に入るような管絃の催しなどしたいものと）御心とまるばかりの遊びなどしてしがなと、公私（おほやけわたくし）のいとなみしげき身こそふさはしからね、（どうかして思いどおりの暮しがしたい）いかで思ふことしてしが（ご機）なと、ただ御ためさうざうしくやと思ふこそ、心苦しけれ」などか（ものと）たらひきこえたまふ。

（嫌をお取りになる）

（大井の明石の上）山里の人も、（どうしているかと）いかになど絶えずおぼしやれど、所狭（すま）さのみまさる御身にて、（大井へのお出かけは）わたりたまふことといとかたし。世の中をあぢきなく憂しと思ひ知るけしき、などかさしも思ふべき、（気軽に京に引き移って）心やすく立ち出でて、おほぞうの住（すま）ひはせじと思へるを、（身のほどを知らぬ）おほけなしとはおぼすものから、いとほしくて、例の、不断の（ものさびしげな場所柄なので）御念仏にことづけてわたりたまへり。住み馴るるままに、いと心すごげなる所のさまに、（さほど深刻なことでな）いと深からざらむことにてだに、（思いは深まるであろう）あはれ添ひぬべし。まして見たてまつるにつけても、（とうしてお逢い申すにつけても）つらかりける御契りの、さすがに浅からぬを思ふに、なかなかにて、（気持を晴らしようもない様子なので）なぐさめがたきけしきなれば、（〔源氏は〕なだめかねておいでになる）こしらへかねたまふ。いと木繁きなかより、篝火どものかげの、遣水の螢に見えまがふもをかし。

一 こうした暮しの苦労に馴れていなかったなら、（こんな景色も）ずいぶん目馴れぬ思いがすることでしょう。須磨、明石に漁火を望む暮しを経験していなかったら、の意。海辺の縁で「潮染む」という。

二 明石の浦での暮しを思い出させる篝火がここに見えますのは、あの浦での悲しい思いが、ここまで私を追って来たのでしょうか。明石でもここでも悲しい思いをするばかりです。「いさり」は、漁、「かげ」は、漁火のこと。「浮舟」（水の上に漂う舟）は、「憂き」を言い掛けて「いさり」の縁で置かれた歌語。

三 まるであの頃のような思いがいたされます。「思ひ」の「ひ」に「火」が掛けられている。

四 並々ならぬ私の深い愛情をご存じないから、いまだに気持が騒ぐのでしょうか。「思ひ」の「ひ」に「火」が響かせてある。「篝火の影となる身のわびしきは流れて下に燃ゆるなりけり」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）の言葉を踏まえる。「篝火のかげ」は、水面に乱れ映る篝火の影。

五 あなたの方こそ最初に私に悲しい思いをさせたのです。「うたかたも思へば悲し世の中を誰憂きものと知らせそめけむ」（『古今六帖』三「うたかた」。同五「思ひわづらふ」に初句「うたがふも」として重出。『釈』以下には初句「うちかへし」の形で引く）

六 いつもよりは長くご滞在のせいか、明石の上の気持も少しは紛れたでしょう、とか。人の話を伝え聞いて書き留めたという体の草子地。

（源氏）一「かかる住ひにしほじまざらましかば、めづらかにおぼえまし」とのたまふに、

（明石上）二「いさりせしかげ忘られぬ篝火は
身の浮舟やしたひ来にけむ

三思ひこそまがへられはべれ」と聞こゆれば、

（源氏）四「浅からぬしたの思ひを知らねばや
なほ篝火のかげは騒げる

五誰憂きもの」と、おし返し怨みたまへる。（こちらから逆に）おほかたもの静かにおぼさるるころなれば、（時候なので）尊きことどもに（御堂でのお勤めにお気持も向いて）御心とまりて、六例よりは日ごろ経たまふにや、すこし思ひまぎれけむとぞ。（一体に気持もしみじみと落着く秋の）

朝顔
あさがほ

前の薄雲の巻に続く、同じ年の秋の終りから冬にかけてのこと。父式部卿の宮の薨去で喪に服すことになった朝顔の姫君は、斎院を退下、九月になって父式部卿の宮の旧邸桃園の宮に移った。そこには、前斎院の叔母君に当る年老いた女五の宮も住んでおられるので、源氏は、そのお見舞にかこつけて、桃園の宮を訪れ、女房の宣旨の取次ぎで前斎院に長年の思いのたけを訴えるが、前斎院は取り合おうとしない。帰邸後、源氏と前斎院との間に、昔の共通の思い出につながる朝顔の花の歌の贈答があった。巻名はこれによる。

冬十一月になって桃園の宮を訪れた源氏は、思いもかけず、尼になった昔の源典侍に会ったりするが、前斎院の昔からの志操は変ることなく、源氏の求婚に応ずる気配もない。斎院時代仏事に遠ざかっていた罪も軽めるべく、ようやく勤行一途の生活を志す。

しかし世上には源氏と前斎院との結婚が取り沙汰され、源氏の並々ならぬ執心ぶりを見せつけられた紫の上は、ほのめかしてもくれない源氏のよそよそしさを恨み、自分の妻としての座がおびやかされる深刻な不安に悩む。

冬の一夜、源氏は庭に童女をおろして雪まろばしをさせる。降り積った雪と冴えわたる月明を前に、源氏は紫の上に、藤壺、前斎院、朧月夜、明石の上、花散里と、昔今の女性たちの人柄を話題に上せるが、まどろんだ源氏の夢に藤壺が現れて、源氏を恨む。巻は、やるせない藤壺思慕の情を詠んだ源氏の歌によって閉じられる。

一 朝顔の斎院。賀茂の斎院に就任のことは、賢木の巻（二巻一四六頁）に見える。式部卿の宮の姫君で、ずっと前から源氏が思いをかけていた人（初出は一巻帚木八四頁）。

二 父式部卿の宮の服喪のため退下なさった。式部卿の宮の薨去は、薄雲一七三頁に見える。夏の頃である。斎院は、御代替り、服喪のことがあれば交替する。

源氏、桃園の宮に女五の宮を訪う

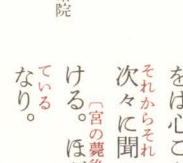
三 源氏。

四 前斎院は、世間に憚る思いをなさったことをお考えになるので。賢木の巻に、源氏が雲林院滞在中、斎院に文通したことが見え（二巻一六〇頁以下）、源氏と斎院の文通のことが右大臣と弘徽殿の大后の間で話題になっている（同一八七～八頁）。そのことは斎院の耳にも入っていたのであろう。

五 亡父、式部卿の宮の旧宅。桃園は、一条の北、大宮の西。

六 式部卿の宮の妹宮であろう。前斎院の叔母。ここにはじめて見える。

七 西に朝顔の前斎院、東に女五の宮。



源氏、女五の宮と語る

八 女五の宮。

一 斎院は、御服にて下りゐたまひにきかし。大臣、例のおぼしそめつること絶えぬ御癖にて、御とぶらひなどいとしげう聞こえたまふ。

（例によって思いをかけられたことは忘れない）（お見舞のお便りなどをとても頻繁にさし上げなさる）

四 宮、わづらはしかりしことをおぼせば、御返りもうちとけて聞こえたまはず。いとくちをしとおぼしわたる。長月になりて、桃園の宮にわたりたまひぬるを聞きて、女五の宮のそこにおはすれば、そなたの御とぶらひにことづけてまうでたまふ。故院の、この御子たちをば心ことにやむごとなく思ひきこえたまへりしかば、今も親しく次々に聞こえかはしたまふめり。同じ寝殿の西東にぞ住みたまひける。ほどもなく荒れにけるここちして、あはれにけはひしめやかなり。

（お返事も心を許して申し上げることはなさらない）〔源氏は〕〔前斎院が〕〔源氏は〕（桃園の宮）（女五の宮）（故桐壺院）（女五の宮たちを格別大切にお思い申し上げておられたので）〔源氏は〕（それからそれへとお付合いしていられるようだ）〔宮の薨後〕（問もないのに）（ものさびしげに気配もしみじみとしている）

八 宮、対面したまひて、御物語聞こえたまふ。いと古めきたる御け

（ご訪問になる）〔源氏に〕（とてもお年を召したご様子で）

はひ、しはぶきがちにおはす。年長(一)におはすれど、故大殿(おほいとの)の宮は、あらまほしく古りがたき御ありさまなるを、もて離れ、声ふつつかに、こちごちしくおぼえたまへるも、(三)さるかたなり。「院(五宮)の上(四)かくれたまひてのち、よろづ心細くおぼえはべりつるに、年のつもるまに、いと涙がちにて過ぐしはべるを、この宮さへかくうち捨てたまへれば、(五)いよいよあるかなきかにとまりはべるを、かく立ち寄り訪はせたまふになむ、もの忘れしぬべくはべる」と聞こえたまふ。

咳き込みがちでいらっしゃる　お美しくて　無骨な感じでいらっしゃるのも　太くて　いつまでもお若くていらっしゃるが　(五宮)　(私を)　年をとるに従いまして　式部卿の宮まで　(あなたが)　この世の憂さも忘れそうでございます　お見舞い下さるので

かしこくも(六)古りたまへるかなと思へど、うちかしこまりて、「院(源氏)かくれたまひてのちは、さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず、(七)おぼえぬ罪にあたりはべりて、知らぬ世にまどひはべりしを、(八)たまたま朝廷に数まへられたてまつりては、またとり乱り暇なくなどして、年ごろも、参りていにしへの御物語をだに聞こえうけたまはらぬを、(五宮)いぶせく思ひたまへわたりつつなむ」など聞こえたまふを、(九)「いともいともあさましく、いづかたにつけても定めなき世を、

丁重に　何かにつけまして　同じ世の中とも思われませず　見も知らぬ土地で苦労をいたしましたが　(源氏)　今まで長いこと　参上して昔のお話も申し上げまたうけたまわったりもいたしませんでしたことを　ずっと気にかけ続けておりました　(五宮)

一 お姉様でいらっしゃるが、亡くなった太政大臣の北の方の宮は。後に「三の宮」と呼ばれている（一九二頁）。源氏の北の方だった故葵の上の母宮である。太政大臣の薨去は、薄雲一六三頁に見える。

二 この女五の宮は、少しも似たところがなく。

三 それなりに宮としての気品がある。

四 桐壺院。崩御は、賢木の巻（一四〇頁）に見える。九年前のことになる。

五 ますます生きているのか死んでいるのか分らないような有様で、この世に生き永らえておりますが。

六 恐ろしくお年を召したものだと、源氏は思うが。

七 思いもかけぬ罪に問われまして。以下、須磨の流謫のことをいう。

八 たまたま召還されまして朝廷にお取り立て頂きましてからは、またあれこれと政務多端のため暇もないといったことでございまして。

九 ほんとにどう申してよいやら考えも及びませぬ、院の御こととといい、あなた様のお身の上といい無常なこの世の有様を。院の崩御と源氏の流謫をいう。

一〇 私自身は、相も変らぬ身の上でじっと見ているだけということでございますのは。

一一 なまじ長命が恨めしく思われることが多うございますが。「寿則辱多し」（『荘子』外篇「天地」）による。

一二 あの以前のご不幸の時代を途中まで拝見したまま私が死んでしまいましたならば。「ありし年ごろ」は、源氏の須磨流謫を頂点とする不遇の時代。

一三 まだ童形でいらしたお姿をはじめて拝見しました時。源氏の元服前のこと。

一四 よくないことでも起るのではないかと、心配に思われましたことです。あまりに美しい人は神隠しにあったり、夭折したりすると信じられていた。

一五 今の帝（冷泉帝）。藤壺の所生。源氏によく似ていることは、今まで所々（二巻紅葉賀二五頁、二七頁、薄雲一七四～五頁など）に見える。

一六 こう面と向ってわざわざほめる人はいないものなのだがと。女五の宮の遠慮のないほめ言葉を、この人らしいもの言いと、源氏はおかしく思う。

一七 田舎に逼塞しまして。須磨の侘住いのこと。「山がつ」は、山で暮しを立てる賤しい者の意。歌語。

一八 ただでさえ長い私の寿命も、ますます延びることでございましょう。

朝顔

一〇 同じさまにて見たまへ過ぐす、一一命長さのうらめしきこと多くはべれど、かくて世に立ち返りたまへる御よろこびになむ、一二ありし年ごろを見たてまつりさしてましかば、くちをしからましとおぼえはべる」と、うちわななきたまひて、一三「いときよらにねびまさりたまひにけるかな。童にものしたまへりしを見たてまつりそめし時、世にかかる光の出でおはしたることとおどろかれはべりしを、時々見たてまつるごとに、一四ゆゆしくおぼえはべりてなむ。内裏の上なむいとよく似たてまつらせたまへると人々聞こゆるを、さりとも、劣りたまへらむとこそおしはかりはべれ」と、ながながと聞こえたまへば、一六ことにかくさし向ひて人のほめぬわざかなと、をかしくおぼす。

「山がつになりて、一七いたう思ひくづほれはべりし年ごろののち、こよなく衰へにてはべるものを。内裏の御容貌は、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ、ありがたく見たてまつりはべれ。あやしき御おしはかりになむ」と聞こえたまふ。一八「時々見たてまつらば、いと

（こうして再び世にお栄えになったことをうれしく存じ上げますにつけても）
（残念に思われたことでしょうと存ぜられます）
（五宮）ほんとにお美しく成人なさいましたことです
（お声をふるわせて）
（この世）
（にこんな美しい方がお生れになったことよと目を見張る思いをいたしましたが）
（お噂申し上げるのを）
（帝の方が）
（あなた様に）
（劣っておいでしょうと私は推察いたします）
（くどくどと）
（源氏は）
（ひどく気落ちしてしまいましたあの数年のあとというものは）
（源氏）
（つかりやつれてしまっておりますのに）
（世にも稀なお美しさと拝見いたします）
（解せぬご推察だと存ぜられます）
（五宮）
（お目にかかれれば）

一 前に「故大殿の宮」とあった、葵の上の母宮。ここで「三の宮」と呼ばれている。

二 あなたとの間にしかるべきご縁もあって（婿と姑というご縁もあって）。「添ひて」は、叔母と甥という関係だけでなく、という気持からいう。

三 亡くなった兄の式部卿の宮も、そのように言って後悔なさることが時々ありました。源氏を、朝顔の姫君の婿に迎えなかったことを後悔したという。

四 婿として親しくお付合い頂いておりましたならば、今もって思いどおりのしあわせな私でありましたろうに。

五 あちらのお庭の方をご覧になると。朝顔の前斎院の住む寝殿の西の方。

源氏、前斎院と歌を詠み交わす

六 静かに悲しみの喪に服しておられるであろう前斎院のご様子や。斎院を退下しての暮しであるので「のどやかに」という。

七 そのまま簀子（濡れ縁）を通ってあちらにお出でになる。源氏は今まで簀子に坐っている。

八 帽額と縁に鈍色（濃い鼠色）の布を付けた御簾。喪中のさま。

九 同じく鈍色の帷の御几帳が御簾の間から洩れ見えているのがものあわれで。

一〇 室内の空薫物の香りを運んで来る風が、艶めいた感じにこちらまで吹いて来て。

どしき命や延びはべらむ。今日は老いも忘れ、憂き世の嘆きみな去りぬるここちなむ」（つらいこの世の悲しみもすっかり消えた思いがいたします）とても、また泣いたまふ。「三の宮（五宮）」

一 さるべき御ゆかり添ひて、親しく見たてまつりたまふをうらやましく思っています（お付合い申し上げておられるのをうらやましく）

二 みはべる。この亡せたまひぬるも、さやうにこそ悔いたまふをりをりありしか」とのたまふにぞ、すこし耳とまりたまふ。「さもさぶらひ馴れなましかば、今に思ふさまにはべらまし。皆さし放たせたまひて」と、うらめしげにけしきばみきこえたまふ。

三 あなたの御前を見やりたまへば、枯れ枯れなる前栽の心ばへもことに見わたされて、

四 のどやかにながめたまふらむ御ありさま、容貌も、いとゆかしくあはれにて、

五 え念じたまはで、「かくさぶらひたるついでを過ぐしはべらむは、心ざしなきやうなるを、あなたの御とぶらひ聞こゆべかりけり」とて、

六 やがて簀子よりわたりたまふ。暗うなりたるほどなれど、

七 鈍色の御簾に、

八 黒き御几帳の透影あはれに、

九 追風なまめかしく吹きとほし、けはひあらまほし。簀子はかた

（源氏は）注意がひかれなさる（源氏）意中をほのめかし申し上げなさる（こうしてお伺いしまして）風情もすばらしく（とても気にかかりしみじみと思われて）お気持を抑えかねて（私の気持も無になりましょうから）あちらへのお見舞も申し上げなくてはなりませんでした（した機会をのがしましては）すっかりお見限りなさる（恐れ多く）風情は申し分なく奥ゆかしい

一一 前斎院づきの女房の名。恐らく斎院任命の時の宣旨を取り伝えた女房であろう。
一二 前斎院のご挨拶はお伝えする。
一三 今さら若者のような感じのするよそよそしいお扱いです。「御簾の前」は、御簾の内（母屋）に入れない扱いをいう。
一四 昔から長の年月、心をお寄せしてきた私の功労も数多く積っているのですから。「神さぶ」は、相手が前斎院であるのにちなむ言葉遣い。「労」は、年功。
一五 仰せの年功などということは、静かに考えさせて頂くほかはございますまい。
一六 ほんとに無常な世の中だと。「定めがたき」は、前斎院の「思ひたまへ定めがたく」の語に触発されたもの。
一七 ひそかに賀茂の神の許しを待っていた間に、こんなにも長いことすげないお扱いに堪えてきたものです。「神のゆるしを……」とは、斎院在任中は憚りがあるので、その退下の時を待っていた、の意。在任は八年に及んだ。
一八 もうこの世にいられないような厄介な事件がありましてからこのかた。須磨流謫にいたる不遇の時代をいう。
一九 どうかその一端だけでもお話し申し上げたいものです。

はらいたければ、南の廂に入れたてまつる。
宣旨、対面して、一二御消息は聞こゆ。（源氏）一三「今さらに若々しきここちする御簾の前かな。一四神さびにける年月の労かぞへられはべるに、今は内外もゆるさせたまひてむとぞ頼みはべりける」とて、飽かずおぼしたり。（朝顔）「ありし世は皆夢に見なして、今なむ、さめてはかなきに一五やと、思ひたまへ定めがたくはべるに、労などは静かにや定めきこえさすべうはべらむ」と、聞こえ出だしたまへり。一六げにこそ定めがたき世なれと、はかなきことにつけてもおぼし続けらる。
（源氏）「人知れず神のゆるしを待ちしまに
今は、何のいさめにかかこたせたまはむとすらむ。一八なべて世にわづらはしきことさへはべりしのち、さまざまに思ひたまへ集めしかな。一九いかで片端をだに」と、あながちに聞こえたまふ御用意なども、昔よりも今すこしなまめかしきけさへ添ひたまひにけり。さるはいと

（源氏を）ひきし
（源氏）
（朝顔）
（源氏）

一一 前斎院づきの女房の名。恐らく斎院任命の時の宣旨を取り伝えた女房であろう。
一二 前斎院のご挨拶はお伝えする。
一三 今さら若者のような感じのするよそよそしいお扱いです。「御簾の前」は、御簾の内（母屋）に入れない扱いをいう。
一四 昔から長の年月、心をお寄せしてきた私の功労も数多く積っているのですから。「神さぶ」は、相手が前斎院であるのにちなむ言葉遣い。「労」は、年功。
一五 仰せの年功などということは、静かに考えさせて頂くほかはございますまい。
一六 ほんとに無常な世の中だと。「定めがたき」は、前斎院の「思ひたまへ定めがたく」の語に触発されたもの。
一七 ひそかに賀茂の神の許しを待っていた間に、こんなにも長いことすげないお扱いに堪えてきたものです。「神のゆるしを……」とは、斎院在任中は憚りがあるので、その退下の時を待っていた、の意。在任は八年に及んだ。
一八 もうこの世にいられないような厄介な事件がありましてからこのかた。須磨流謫にいたる不遇の時代をいう。
一九 どうかその一端だけでもお話し申し上げたいものです。

一 今の御位の高さには似合わないほど若々しくていらっしゃるようだ。源氏は、内大臣、薄雲一七七頁に位が一階上がったことが見えている。

二 一通りこの世の悲しみばかりをお慰めするだけでも、誓いに背くと賀茂の神はおいましめになるでしょう。「何のいさめにか……」の言葉を受けて詠む。

三 何という情けないおっしゃりようか。その昔の罪は、皆科戸の風と一緒に払い捨ててしまいましたよ。「なべて世のあはればかりをとふ」とあったのを受けて、須磨流謫時代のことはもうすんだ過去のこと、今の私の思いをこそ慰めて頂きたいのだ、の意。「科戸の風」は、風の神級長戸辺命による名。風を飾っていう。「天の下四方の国には罪といふ罪はあらじと科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く」（大祓）

四 その罪を払う禊を、神はご嘉納になったのでしょうか。「恋せじと御手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけるかな」（『伊勢物語』六十五段）を利かせる。源氏の「その世の罪は……」という言葉をとがめて切り返しただけの言葉の上の冗談。宣旨の臨機の応答と見られる。以下の文はその事情の説明。

五 ご覧下さいと申し上げられるほどにもおあしらい下さったでしょうか、冷たいお方だ。『源氏釈』以下に「君が門今ぞ過ぎ行く出でて見よ恋する人のなれる姿を」（『住吉物語』に一句「君があたり」を引く。

六 仰々しいまで、例によって女房たちは皆でお噂申し上げる。

いたご態度ではあるものの

いたう過ぐしたまへど、御位のほどには合はざめり。

（朝顔）二

なべて世のあはればかりをとふからに

誓ひしことと神やいさめむ

（源氏）三

とあれば、「あな心憂。その世の罪は、みな科戸の風にたぐへてき」

とのたまふ愛敬もこよなし。「みそぎを神はいかがはべりけむ」など、はかなきことを聞こゆるも、まめやかにはいとかたはらいたし。

（宣旨）四

魅力も格別だ

とりとめもないことを申し上げるのも

まじめな話

とても気のひける思いがする

〔前斎院の〕色恋にはうといど性格は

世づかぬ御ありさまは、年月に添へても、もの深くのみ引き入りたまひて、お返事もなされないのを

〔女房たちは〕お側でやきもきしている

〔とうした場合〕慎み深く控え目になさるばかりで

え聞こえたまはぬを、見たてまつりなやめり。「すきずきしきやうになりぬるを」など、浅はかならずうち嘆きて立ちたまふ。「齢の積りには、面なくこそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを、今ぞとだに聞こえさすべくやはもてなしたまひける」とて、出でたまふ名残、所狭きまで、例の聞こえあへり。おほかたの空も空模様も風情がある頃でをかしきほどに、木の葉の音なひにつけても、過ぎにしもののあはれとり返しつつ、そのをりをり、をかしくもあはれにも、深く見え

（源氏）色めかし

並々ならぬ思い入れで嘆息なさって〔座を〕

いお話になってしまいましたね

（源氏）年をとりますと

臆面もなくなるものでした

ふ。

すっかり恋にやつれた私の姿を

散りかかる音

斎院時代のあわれ深い源氏との

やりとりを思い出しては

ただでさえ秋の終りの

心深げでいら

七 常よりも一層、その夜は目覚めがちにあれこれと思い続けられなさる。

八 翌朝は早く、御格子を上げさせなさって。

九 （すぐすぐと帰りました）私の後ろ姿も一層どんなにみすぼらしいとご覧になったことかと、しゃくに思われます。

一〇 昔拝見した折のことが一向に忘れられません美しい朝顔（あなたのお顔）の盛りは、もう過ぎたことでしょうか。「朝顔」は、女の寝起きの顔の意を掛ける。「見しをりの」は、帚木の巻に「式部卿の宮の姫君に、朝顔奉りたまひし歌などを……」（一巻八四頁）とあった時のことであろう。一体いつお逢いできるのでしょうか、と嘆く意。「つゆ」（少しも）は「露」を掛けて、朝顔の縁語。なお、二巻賢木一六〇～一六一頁参照。

一一 一方では（たのもしくも思っています）。

一二 老成したお手紙の趣なので。長年の付合いであることに感慨を催させるような、しみじみした文面なので、の意。

一三 ものの情趣も分らぬ女と見えようかとお思いになり。

帰邸後、源氏、前斎院と朝顔の歌を贈答

たまひし御心ばへなども、〔女房たちは〕思ひ出できこえさす。

〔源氏の〕お便りの趣

心やましくて立ち出でたまひぬるは、七まして寝覚がちにおぼし続けらる。疾く八御格子参らせたまひて、朝霧をながめたまふ。枯れた

気持のおさまらぬままお帰りになったこととて

る花どものなかに、朝顔のこれかれにはひまつはれて、何やかやにまつわりついて あるかなきかに咲きて、〔人に〕にほひもことにかはれるを、〔前斎院に〕折らせたまひてたてまつれたまふ。

色艶もすっかり衰えたのを

（源氏）昨夜のそっけないおあしらいに けざやかなりし御もてなしに、きまりの悪い思いがいたしまして人わろきここちしはべりて、九うしろでもいとどいかが御覧じけむと、ねたく。されど、

一〇 見しをりのつゆ忘られぬ朝顔の

花の盛りは過ぎやしぬらむ

長の年月の恋の苦労も気の毒だというほどには

年ごろの積りもあはれとばかりは、それでもお分り頂いておりましょうかと さりともおぼし知るらむやとなむ、一二かつは。

一二 おとなびたる御文の心ばへに、お返事をさし上げなおぼつかなかなど聞こえたまへり。

女房たち

いのも

らむも、一三見知らぬやうにやとおぼし、人々も御硯とりまかなひて聞

用意を整えてお返事をお

一 秋も終って霧の立ちこめた垣根にすがりついて、あるかなきかに色あせた朝顔―それが今の私の姿でございます。

二 まことにふさわしいお喩えを伺いますにつけても、涙にくれております。「御よそへ」は、源氏の歌の「朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらむ」をさす。「露けく」は、朝顔の縁語。

三 縹（薄い藍色）に青のかかった色。服喪中なのでこの色の紙を用いる。

四 なよなよとした筆跡の墨の濃淡の具合は、趣深く見えるようだ。「しも」は強意で、歌の内容は取り立てておもしろくもないが、「墨つきは……」という気持。

五 総じて贈答の歌などは、その人のご身分や、書きぶりなどで、欠点が隠されて。以下、草子地。

六 事実を誤り伝えることもあるようですから、（それを書き手としては）勝手にとりつくろって書き書きしますので、ほんとはどうだったか、はっきりしないところも多いのです。このお歌もほんとはもっとお上手だったかもしれません、という気持。

七 源氏の居室。西の対に住む紫の上を憚ってのこと。

八 前に取次ぎの役をつとめた前斎院の女房。

源氏、前斎院に執心　その噂に紫の上悩む

すすめするので
こゆれば、

（朝顔）一
秋果てて霧の籬にむすぼほれ
あるかなきかにうつる朝顔

二
似つかはしき御よそへにつけても、露けく。

取り立てて趣のあるところもないのを
とのみあるは、何のをかしきふしもなきを、いかなるにか、置きがたくご覧になるようだ
たく御覧ずめり。三青鈍の紙の、四なよびかなる墨つきはしも、をかしく見ゆめり。五人の御ほど、書きざまなどにつくろはれつつ、その当時
は難もなく思われたことも〔それを〕もっともらしく言い伝える段には
りは罪なきことも、つきづきしくまねびなすには、六ほほゆがむこともあめればこそ、さかしらに書きまぎらはしつつ、おぼつかなきことも多かりけり。

昔にもどって
立ち返り、今さらに若々しき御文書なども、似げなきこととおぼせど、〔源氏は〕なほかく昔よりもて離れぬ御けしきながら、

〔前斎院が〕やはりこうして昔からそっけなくはなさらぬもの
このままではすまされぬ思いがなさるので　今
思いを遂げぬままに過ぎてしまったことを思っては
さらのように真剣に文をお通わしになる
くちをしくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじくおぼさるれば、さらがへりてまめやかに聞こえたまふ。

七
東の対に離れおはして、八宣旨を迎へつつかたらひたまふ。さぶら

呼び寄せてはご相談になる
〔前斎院に〕

九　たいした身分でもない男のことでも、すぐ言いなりになってしまうような連中は。

一〇　どちらも（前斎院も源氏も）恋に心を労するようなこともないはずのお年であり、地位でもあられて。

一一　ちょっとした木草にかこつけての（源氏からのお手紙への）お返事などを、その折の興趣をはずさずになさることも。

一二　源氏が前斎院に思いをかけているということが、世間に伝わって噂になって。

一三　前斎院は、源氏が熱心に言い寄っておられるので、（叔母君の）女五の宮なども、結婚なさるのもよかろうと考えておいでのようだ。五の宮は前斎院の保護者の立場にあるらしい。源氏はその許しを得ようとしているという噂の趣。

一四　紫の上。

一五　その気になって（源氏のご様子に）気をつけてご覧になると。「うちつけに」は、ここは、自分の疑念に応じてとっさに、というほどの意。

一六　真剣に結婚しようという気におなりになっているらしいのに。

一七　次の頁四行目の「など」とともに、上を受けて、「人知れずおぼし嘆かる」に掛る。

一八　前斎院は、自分と同じ親王のお子ではいらっしゃるが。以下も紫の上の心中。

ふ人々の（女房たち）、さしもあらぬ際（きは）のことをだになびきやすなるなどは、（問違いも引き起しかねないほどおほめ申し上げるが）やまちもしつべくめできこゆれど、宮（前斎院）は、そのかみだにこよなくお（昔でさえ〔源氏との結婚は〕全然お考えにもならなかったのに）ぼし離れたりしを、今はまして、誰も思ひなかるべき御齢（よはひ）、おぼえにて、はかなき木草（きくさ）につけたる御返りなどのをり過ぐさぬも、軽々（かるがる）軽率な振舞と取り沙汰されようかなどと〔前斎院は〕世間の噂を）しくやとりなさるらむなど、人のもの言ひを憚（はばか）りたまひつつ、うち（〔源氏に〕許そうとなさるようなご様子も全くないので）とけたまふべき御けしきもなければ、古（ふ）りがたく同じさまなる御心（相変らず〔前斎院の〕）ばへを、世の人にかはり、めづらしくもねたくも思ひきこえたまふ。（普通の女とは違って）

一二　世の中に漏り聞こえて、「前斎院（ぜんさいゐん）、ねむごろに聞こえたまへばなむ、女五の宮などもよろしくおぼしたなり。似げなからぬ御あはひ（まずはお似合いのご縁組であろう）ならむ」など言ひけるを（噂しているのを）、対（たい）の上（うへ）は伝へ聞きたまひて、しばしは、（最初のうちは）いくら何でも（そのようなお話もあるのなら）さりとも、さやうならむこともあらば、隔ててはおぼしたらじとおぼしけれど、うちつけに目とどめきこえたまふに、御けしきなども、（〔源氏の〕ご様子なども）いつもに似ず上の空であるようなのも情けなく）例ならずあくがれたるも心憂く、まめまめしくおぼしなるらむことを、（何食わぬ顔で冗談のようなおっしゃりようをなさったことよ）つれなくたはぶれに言ひなしたまひけむよ、と、同じ筋にはも

のしたまへど、おぼえことに、世間の声望も格別で 一 昔よりやむごとなく聞こえたまふを、ご愛情が移ったりしたら 御心など移りなば、二 はしたなくもあべいかな、今まで長年の〔源氏の〕ご寵愛 年ごろの御もてなし などは、三 立ち並ぶかたなくさすがにならひて、人に押し消たれむこと、など、人知れずおぼし嘆かる。四 かき絶え、幼少の頃から親の庇護もない私と共に暮してこられた今まで長年の 名残なきさまにはもてなしたまはずとも、五 いとものはかなきさまにて見馴れたまへる年 二人の仲では ごろのむつび、あなづらはしきかたにこそはあらめ、など、さまざまに思ひ乱れたまふに、六 よろしきことこそ、うち怨じなど憎からず 〔このことは〕本心からひどいとお思いなのに 聞こえたまへ、まめやかにつらしとおぼせば、顔色にもお出しにならない 色にも出だしたまはず。〔源氏は〕端近う、物思いにふけりがちで ながめがちに、内裏住みしげくなり、頻繁になり 七 役とは御文を書きたまへば、八 げに人の言はむなしかるまじきなめり、けしきをだに 様子くらいほのめかして下さってもよいのにと 〔源氏を〕いやなお方といちずにお思い申し上げなさる かすめたまへかしと、うとましくのみ思ひきこえたまふ。

冬つ方、九 神事などもとまりてさうざうしきに、もの足りぬ思いなので〔源氏は〕所在なく気持をもて つれづれとおぼし あまして あまりて、五の宮に、例の、一〇 近づき参りたまふ。雪うち散りて艶な 風情ある夕暮時に るたそかれ時に、やさしい感じに着馴れて糊気の落ちた なつかしきほどに馴れたる御衣どもを、いよいよ

一 昔から重々しいお方として世に聞えていらっしゃるお人だから。

二 自分はどんなにかみっともない立場に立つことになろう。「あべいかな」は「あんべいかな」の撥音無表記の形。

三 そうはいっても（いろいろ問題はあったにしても）肩を並べる人もないお扱いに馴れて、（今になって）ほかの人に頭を押えられるようなことになろうとは。

四 すっかりお見限りといったようにはお扱いにならないにしても。以下、再び紫の上の心。

五 つい、軽くご覧になることになるのであろう。前斎院に比べては軽く見られるのであろう、の意。

六 どうでもいいようなことなら、怨み言を言ったりなど、憎らしげなく何かと申し上げなさるのだが。

七 なさることといっては（前斎院に）お手紙をお書きになるばかりなので。

八 なるほど人の噂は根も葉もないことではなさそうだ。前の頁の「前斎院、ねむごろに……」の噂をさす。

源氏、女五の宮を訪う　紫の上の不安

九 藤壺の諒闇のため、宮中の神事も停廃されている。神事の続くのは十一月である。

一〇 いつものように。すでに何度も訪問していることを匂わせる筆致。

一（そのお美しさは）いよいよもって、志操堅固でない女ならどうだろうか（靡かずにはいられまい）と思われる。
二 そうはいうものの。紫の上によそよそしくして打ち明けようとはしないものの、の意。
三 明石の姫君。
四 しかし何も悪いことをしているわけではありませんよ。
五 いつも見馴れすぎて。引歌未詳。「塩焼衣の」は「目馴れ」の「馴れ」（着物が萎える）に言い掛け、「あまり」に「海女」が隠されている。古注は「須磨の海士の塩焼衣なれゆけばうとくのみこそなりまさりけれ」（『河海抄』所引の形による）をあげる。この歌『古今集』清輔本巻十三恋三に「なれぬれば」「見えわたりけれ」、同じく元永本巻十五恋五に「なれぬれば」「思ふべらなり」の形で見える。
六 ご無沙汰していますのを。前に「内裏住みしげくなり」とあった。
七 それをあなたは、またどうおとりになるのやら。
八 「馴れゆく」のはほんとに情けないことが多いものでした。『河海抄』に「馴れゆくは憂き世なればや須磨の海士の塩焼衣間遠なるらむ」（『新古今集』巻十三恋三、女御徽子女王。『斎宮女御集』）を引く。
九 鈍色のお着物だが。諒闇だからである。

〔香を〕たきしめたまひて、念入りにおめかしして一日を過されたのだから心ことにけさうじ暮らしたまへれば、一いとど心弱からむ人はいかがと見えたり。二さすがに、まかり申しはた、お暇乞いだけは〔紫上に〕聞こえたまふ。「〔源氏〕女五の宮のなやましくしたまふなるを、お加減がお悪いそうですから とぶらひきこえになむ」とて、お見舞い申し上げに ついぬたまへれど、ひざまずかれるけれども〔紫上は〕見もやりたまはず、三若君をもあやしてさり気なくしていらっしゃる横顔がただならぬ様子なので てあそびまぎらはしおはするそば目のただならぬを、〔源氏〕妙にご様子が「あやしく御よそよそしくなってしまわれたこの頃ですね けしきのかはれる月ごろかな。罪もなしや。四塩焼衣のあまり目馴れ、見映えもないとお思いかと思いまして見だてなくおぼさるるにやとて、五とだえ置くを、七またいかが」などとだけ聞こえたまへば、〔紫上〕八「馴れゆくこそ、げに憂きこと多かりけれ」とばおっしゃってかりにて、うち背きて臥したまへるは、見捨てて出でたまふ道、も気の進まぬ思いだが五の宮の憂けれど、宮に御消息聞こえたまひてければ、訪問をお知らせしてあったので出でたまひぬ。かなことも起る二人の仲だったのにかりけることもありける世を、九何の疑いもなく過して来たことよと〔紫上は〕うらなくて過ぐしけるよと思ひ続けて臥したまへり。鈍びたる御衣どもなれど、色合いや重なり具合がかえってすばらしい感じで色あひかさなりこのましくなかなか見えて、雪の光にいみじく艶なる御姿を見出だして、〔紫上は〕お見送りして まことに離れまさりたまはばと忍びあへずおぼさる。御前など忍び

一 今はあなたが頼りです、などと女五の宮がそうお思いで口に出しておっしゃるのも。

二 浮気なお気持がいつまでもなおらぬのが、玉に疵と申すものだ。よからぬ事件も起りかねまい。「軽々しきこと」とは、源氏の身分にふさわしくないような事件ということで、葵の巻の車争いなど思い浮べられよう。

桃園の宮の荒廃

三 北側の、人の出入りの多い方のご門は。こちらがふだん使われている門なのであろう。

四 女五の宮にご来訪の旨をお伝えすると。

五 昨日今日と思っておられるうちに、もう三十年も昔のことのようにもなってしまった世の中だな。夕霧の巻にも「昨日今日と思ふほどに、三十年よりあなたのことになる世にこそあれ」とあり、人の死後、月日のたつことの早さを言う当時の諺と思われる。式部卿の宮の薨去は今年の夏頃であるが、すでに門の錠もさびついているのに、源氏は感慨を催すのである。

六 こうした世の移り変りの激しさを目の前にしながら、仮の宿りであるこの世への執着を捨てきれず。

もの静かな連中だけで（源氏）参内以外の出歩きは おっくうな年輩になってしまったやかなる限りして、「内裏よりほかのありきはもの憂きほどになりにけりや。桃園の宮の心細きさまにてものしたまふも、式部卿の宮に年ごろは譲りきこえつるを、今は頼むなどおぼしたまふも、こ（女五の宮）今まではお世話をお委せしていたのだが ともなこととおいたわしいからとわりにいとほしければ」など、人々にものたまひなせど、「いで（供人）困った や。御好き心の古りがたきぞ、あたら御疵なめる。軽々しきことも（供人たちにも弁解なさるが）ものよ出で来なむ」など、つぶやきあへり。皆でぶつぶつ言っている

桃園の宮 宮には、北面の人しげきかたなる御門は、入りたまはむも軽々しければ、西なるがことことしきを、人入れさせたまひて、宮の御方（西側の門が大きな構えなので）（供人を中にお入れさせになって）に御消息あれば、今日しもわたりたまはじとおぼしけるを、おどろ（まさか今日はおいでになるまいと）きてあけさせたまふ。御門守、寒げなるけはひ、うすすき出で来て、（西の門を）（あわてて出て来たが）すぐにもあけられない（下男はいないのであろう）とみにもえあけやらず。これよりほかの男はたなきなるべし。ごほ（御門守）ごほと引きて、「錠のいといたく錆びにければ、あかず」と愁ふるのを しみじみとお聞きになるを、あはれと聞こしめす。昨日今日とおぼすほどに、三十年のあなたにもなりにける世かな、かかるを見つつ、かりそめの宿りをえ思

七　いつのまに蓬の生い茂るむさくるしい所になり、雪の降る古里と荒れ果ててしまった垣根なのだろう。「蓬」は、邸の荒廃を象徴する雑草。「雪降る里」に「古里」（式部卿の宮の亡くなったあとの邸）を掛ける。

八　源氏は、聞いて格別おもしろいお話もなく、ねむたくてたまらないのに。お相手　**源氏、源典侍に会う**

に辟易している体。

九　宵のうちからねむくてたまりませんので、お話もよう申し上げられません。「宵まどひ」は、老人の習性。

一〇（私がこのお邸にご奉公していることは）ご承知でいらせられることと心頼みにお思い申し上げておりますのに、まだこの世に生きている者ともお考え下さいませんので（まかり出ました）。今まで声もかけてもらえなかったので、こちらから名乗り出たというのである。

一一　葵の巻に、源氏が「祖母殿の上ないたう軽めたまひそ」（二巻一〇〇頁）と言うところがある。桐壺院がたわむれに付けられたあだ名なのであろう。

一二　二巻紅葉賀三四頁以下、同葵七六頁参照。

一三　女五の宮のお弟子として勤行にはげんでいると聞いたけれども。これによって見ると、女五の宮も尼になっていると思われる。

ひ捨てず、木草の色にも心を移すよとおぼし知らる。口ずさびに、（源氏）

いつのまに蓬がもととむすぼほれ

雪降る里と荒れし垣根ぞ

やや久しうひこしらひあけて入りたまふ。

宮の御方に、例の、御物語聞こえたまふに、古事どものそこはかとなきうちはじめ、聞こえ尽くしたまへど、御耳もおどろかず、ねぶたきに、宮も欠伸うちしたまひて、「宵まどひをしはべれば、ものもえ聞こえやらず」とのたまふほどもなく、鼾とか、聞き知らぬ音すれば、よろこびながら立ち出でたまはむとするに、またいと古めかしきしはぶきうちして、参りたる人あり。「かしこけれど、聞こしめしたらむと頼みきこえさするを、世にある者とも数まへさせたまはぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」など名のり出づるにぞ、おぼし出づる。源典侍といひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にてなむ行ふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知

（奪われることよと反省なさる）（口に出るままに）（かなり長くかかって門を無理に引きあけて）（源氏は）（五の宮）（源氏が）（ない話をはじめとして）（いろいろお話しなさるけれども）（五宮）（宮は）（古い話題のとりとめも）（聞いたこともない）（源氏は）（これさいわいと）（寄りじみた咳払いをして）（故桐壺院）（源氏は）（お前に出て来た）（源典侍）（恐れ入りますが）（おからかいでした）（生きているとも）（確か）

一 あきれる思いでいらっしゃる。紅葉賀の巻で、源典侍は、五十七、八とあった。あれから十三年たっているから、今、七十歳か七十一歳のはずである。

二 うれしい昔馴染みの方のお声をうかがいました。

三 親もなくて横たわっている旅人と思って、私をお世話下さいませんか。「しなてるや片岡山に飯に飢ゑて臥せる旅人あはれ親なし」（『拾遺集』巻二十哀傷、聖徳太子）による。親子ほどの年齢の差を皮肉る気持がある。

四 さすがにもう呂律もあやしく、それでも色っぽいやりとりをしようという気持だけは残っている。「舌つき」は『和名抄』に「諢涎」の字を「之多都岐」と訓んでいる。舌のまわらないこと。

五 『釈』以下に「身を憂しと言ひこしほどに今はまた人の上とも嘆くべきかな」――わが身を情けないと言ってきた間に、今はそれもあなたのお身の上になったと嘆かねばなりません（出典不明）を引く。お互いに年を取りました、それゆえ、お相手としては五分五分、というほどの下意であろう。

六 今、急に年を取ったわけでもあるまいに。

七 この典侍の女盛りの時代に（桐壺帝の）寵を争われた女御、更衣は。以下、源氏の思い。

八 それに、あの入道の宮（藤壺）などの何とお若くて亡くなられたことか。三十七歳だった（薄雲一六五頁参照）。

にご存じでなかったので（源氏）故院のみ代のことは
りたまはざりつるを、一あさましうなりぬ。「その世のことは、みな
昔語りになりゆくを、はるかに思ひ出づるも心細きに、二うれしき御
声かな。三親なしに臥せる旅人とはぐくみたまへかし」とて、寄りゐ
たまへる御けはひに、いとど昔思ひ出でつつ、古りがたくなまめか
しきさまにもてなして、いたうすげみにたる口つき思ひやらるる声
づかひの、四さすがに舌つきにて、うち戯れむとはなほ思へり。「言
ひこしほどに」など聞こえかかるまばゆさよ。六今しも来たる老のや
うになど、ほほゑまれたまふものから、ひきかへ、これもあはれな
り。七この盛りにいどみたまひし女御更衣、あるはひたすら亡くなり
たまひ、あるはかひなくて、はかなき世にさすらへたまふもあべか
めり。八入道の宮などの御齢よ、あさましとのみおぼさるる世に、年
のほど身の残り少なげさに、心ばへなども、ものはかなく見えし人
の、生きとまりて、のどやかに行ひをもうちして過ぐしけるは、な
ほすべて定めなき世なりとおぼすに、ものあはれなる御けしきを、

物に寄り
〔当時を〕
〔典侍は〕
かかっていられる
いつまでたっても色っぽいし
なをつくって
歯が抜けてひどくすぼんでしまった口元が
言いかけてくるのは閉口千万だ
（典侍）
ついおかしく苦笑をお浮べになるものの
考えてみれば
この歌もしみじみと胸を
打つ
世にあるかいもなく
頼りない境遇に落ちぶれていられる方もあるようだ
あるいは影もなく
あまりといえばあまりな移り変りの激しい世に
年が
心構えなども
あだっぽく浅はかに見えたこの典侍が
生き永らえて
心静かにお勧めなどして今まで過してきたというのは
感慨に堪えないでいられる源氏のご様子を
りすべて無常の世の中なのだと

九 典侍は、胸のときめくことかと誤解して、年がいもない歌を詠む。

一〇 年経てもあなた様とのご縁は忘れられません、親の親（祖母殿）とかおっしゃった一言がございますもの。「この」に「子の」を響かせる。「親の親」は、「親の親と思はましかばとひてましわが子の子にはあらぬなるべし」（『拾遺集』巻九雑下、源重之の母）による。

一一 生をかえてあの世でも見ていてご覧なさい、この世の人間が親を忘れる例があるだろうかと。「この世」に「子」を響かせる。

一二 変ることのないご縁ですよ。親子の契りのようなものだから、の含み。

一三 寝殿の西側。前斎院の居室。

一四 源氏がこちらにおいでになるのをお嫌い申すように見えるのも、どうかということで。

一五 柱と柱の間を一間という。格子一、二枚である。

一六 さきほどの年老いた源典侍がひとり心ときめかせていたのも、興ざめなものをいう世間の喩えになっているとか聞いたがと。前の冬の月の風情に触発されての思い。『河海抄』に「清少納言枕草子、すさまじきもの、おうなのけさう、しはすの月夜と云々」とあるが、現存本には見えない。なお、後の二〇九頁参照。

前斎院の志操堅固

九 心ときめきに思ひて、若やぐ。

（典侍）年経（ふ）れどこの契りこそ忘られね

親の親とか言ひし一言（ひとこと）

と聞こゆれば、（源氏は）うとましくて、（いやになって）

「身（一）をかへてのちも待ち見よこの世にて

親を忘るるためしありやと

たのもしき契りぞや。今（いずれ）のどかにぞ聞こえさすべき（ゆっくりお話しすることにしましょう）」とて、立ちたまひぬ。

一三 西面（にしおもて）には御格子（みかうし）参りたれど、（お下ろししたが）一四いとひきこえ顔ならむもいかがとて、一五一間（ひとま）二間（ふたま）はおろさず。月さし出でて、薄らかにつもれる雪の光りあひて（月光に映えて）、なかなかいとおもしろき夜（よ）のさまなり。一六ありつる老（お）いらくの心げさうも、よからぬものの世のたとひとか聞きしとおぼし出でられて、をかしくなむ。今宵（こよひ）はいとまめやかに聞こえたまひて、「一言（ひとこと）、憎しなども、人伝（ひとづて）ならでのたまはせむを、（直接おっしゃって下さるのを）思ひ絶ゆるふしにも（真剣に）

せ(しましょう)む」と、おり立ちて責めきこえたまへど、昔、(自分も源氏もまだ若々しくて)われも人も若やかに、罪ゆるされたりし世にだに、故宮などの心寄せおぼしたりしを、(それでもとんでもない気のひけることとお思い申してそのままになったのに)なほあるまじくはづかしと思ひきこえてやみにしを、世の末に、(盛りを過ぎ)さだすぎ、(不似合いな年輩になって)つきなきほどにて、一声もいとまばゆからむとおぼして、(全くゆらぐことのないお気持なので)さらに動きなき御心なれば、(〔源氏は〕何というひどいお方かと)あさましうつらしと思ひきこえたまふ。さすがに、はしたなくさし放ちてなどはあらぬ人伝の御返りなどぞ心やましきや。夜もいたうふけゆくに、風のけはひはげしくて、まことにいともの心細くおぼゆれば、(あまり大げさでなく〔涙を〕)さまよきほどにおしのごひたまひて、

(源氏)「つれなさを昔に懲りぬ心こそ
人のつらきに添へてつらけれ

心づからの」とのたまひすさぶるを、(お口に上るままおっしゃるのを)「げに、(ほんとに気が気でありません)かたはらいたし」と、(女房たち)人々、例の、聞こゆ。

(朝顔)「あらためて何かは見えむ人のうへに

一〇 昔と違ったことは今もできません。「ならふ」は、し馴れる意。

一一 ほんとにこのように世間の語り草にもなりそうな私の墨かしい振舞を。

前斎院の心境

一二「いさら川」など申し上げるのも、ぶしつけな話ですね。引歌は、契りを交わした相手への歌なので、こう言う。「犬上や鳥籠の山なるいさら川いさと答へてわが名もらすな」（『古今六帖』五、名を惜しむ。『古今集』巻末墨滅歌にもある）

一三 しきりにひそひそ話しかけていらっしゃるが、一体何ごとなのだろう。取次ぎの女房（恐らく宣旨）に対してである。「何ごとにかあらむ」は、草子地。

一四（姫君は）どうしてやみくもにつれないお仕打ちをなさるのでしょう。

一五 ほんとに（女房たちの言う通り）源氏のお人柄がすばらしいとも、慕わしいともお分りにならぬわけではないが。以下、前斎院の気持を述べる。

一六 普通の世間の女が源氏にあこがれ申しているのと同じように思われるかもしれない。

一七 ものやさしい風情をお見せしても、二人の間柄にはまことに不似合いだ。再び、前斎院の心中。次の行から次頁にかけて「聞こえたまひ」と敬語があるのは、語り手の立場の反映したもの。

かかりと聞きし心がはりを

一〇昔にかはることはならはずなむ」と聞こえたまへり。

取り付く島もなくて

いふかひなくて、いとまめやかに怨じきこえて出でたまふも、いかにも年に似合わぬ気がなさるので

と若々しきここちしたまへば、一一（源氏）「いとかく世の例になりぬべきありさま、漏らしたまふなよ、ゆめゆめ。一二いさら川などもなれなれしや」とて、切にうちささめきかたらひたまへど、何ごとにかあらむ。

女房たち　何とも　恐れ多いことです

人々も、「あな、かたじけな。一四あながちに情おくれても、もてなしきこえたまふらむ。軽らかにおし立ちてなどは見えたまはぬ御けしきを、心苦しう」と言ふ。げに人のほどのをかしきにも、あはれにもおぼし知らぬにはあらねど、もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて、一六おしなべての世の人のめできこゆらむ列にや思ひなされむ、かつは軽々しき心のほども見知りたまひぬべく、はづかしげなめる御ありさまを、とおぼせば、一七なつかしからむ情も、いとあいなし、よその御返りなどは、うち絶えで、おぼつかなかるまじきほどに聞

[人に]　決して決して　軽々しく無体なことをなさるなどとはお見えにならぬご様子です　ものの情けを解する女のようにお付き合い申し上げたのに　おいたわしい　恐み言を申し上げて　軽　怨　一五　一三　一二　一一

こちらの至らぬ心底もお見抜きになるに違いない　気のひけるほど立派なお方ではあるし　ご無沙汰にならぬ程度に　時々して　さし障りのないご返事などは　それに　かつは　とて　一七　一六

こえたまひ、人伝の御いらへ、はしたなからで過ぐしてむ、年ごろ沈みつる罪失ふばかり御行ひを、とはおぼし立てど、にはかにかかる御ことをしも、もて離れ顔にあらむも、なかなか今めかしきやうに見え聞こえて人のとりなさじやは、と、世の人の口さがなさをおぼし知りにしかば、かつさぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつつ、やうやう御行ひをのみしたまふ。御兄弟の君達あまたものしたまへど、ひとつ御腹ならねば、いとうとうとしく、宮のうちいとかすかになりゆくままに、さばかりめでたき人の、ねむごろに御心を尽くしきこえたまへば、皆人、心を寄せきこゆるも、ひとつ心と見ゆ。

急いでこうした源氏のご求愛を　嫌って出家したようであるのも　周囲に気をお遣いになりながら　[前斎院と]ご同腹ではないので　とても疎遠で　ひっそりとなってゆくにつれて　源氏　心をこめてぜひにもとご執心でいらっしゃるので

大臣は、源氏やみくもにお心がいらだつというわけでもないけれども、[前斎院の]つれないお仕打ちも情けないので　このまま引き下がってしまうのも残念だし　けしきのうれたきに、負けてやみなむもくちをしく、げにはた、人の今のお人柄は　世間の声望も格別で　の御ありさま、世のおぼえことに、あらまほしく、申し分なく　物事の道理も深くおわきまえで　ものを深くおぼし知り、世の人の、とあるかかるけぢめも聞き集めたまひて、昔よ人それぞれの生き方の違いも　広く見聞されて

一　女房を介してのお相手など、恥をおかかせするようなことなくお付き合いしてゆこう。

二　今まで長年、仏道から外れていた罪が消え失せるようにお勤めをしよう。斎院は神に仕える身ゆえ、仏事にはたずさわれなかったので、その罪障消滅のため出家しようと思い立つのである。

三　かえって人目を引くきざなことのように見えもし、聞えもするように人が取り沙汰しないことがあろうか。世間の評判によって、自分の出家が何か浅薄な動機によるかのように受け取られるのを恐れる。

四　世人の口さがなさを思い知られたこととて。（一八九頁注四参照）

五　お側近く仕えるお味方のはずの女房たちにさえ気をお許しにならず。

六　段々と勤行一途の生活に入ってゆかれる。本格的に出家する下構えである。

七　前斎院にお仕えする女房たちは皆、源氏に心をお寄せ申しているのも、誰の思いも同じと思われる。源氏の求婚なら誰も不賛成な者はいない、の意。

源氏、紫の上を慰める

八　なるほど、それは確かに。以下、次の頁一行目の「おぼさるれば」までに掛る。

九　昔よりもずっと経験を積まれたように、ご自分でもお思いになられるので。

一〇 二条の院（西の対に住む紫の上のもと）に、夜おわたりにならぬことが続くのを。「内裏住み」（一九八頁）が続くのである。

一一 冗談もならぬほど恋しくてたまらぬお気持である。「ありぬやとこころみがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき」――それでも大丈夫かと試しがてら逢わないでいると、そんな冗談もならぬほどあの人が恋しくてならない（『古今集』巻十九俳諧歌、題しらず、読人しらず）による。

一二 絵に描いてみたいほどお美しいお二人である。「あはひ」は、間柄、ここは夫婦の仲。

一三 藤壺。

一四 源氏の舅、葵の上の父。この年の春、藤壺よりすこし前に亡くなった（薄雲一六三頁）。

一五 帝のご後見をまかせる人がほかにいなくて、いそがしいからなのです。「内裏住み」が続くのは、政務多端のためという弁解。

一六 もういくら何でも安心しておいでなさい。絶え間を置くことはあっても心変りはないから、という気持。

一七 涙にもつれた額髪を。「額髪」は、頬に垂らした前髪。

りもあまた経まさりておぼさるれば、今さらの御あだけも（浮気沙汰）、かつは（一方では）世のもどきをもおぼしながら、（世間の非難をもお考えにはなるものの）むなしからむはいよいよ人笑へなるべし（この話が実を結ばなければますます物笑いの種になるだろう）、いかにせむと、御心動きて（お心が騒いで）、一〇二条の院に夜離れ重ねたまふを、女君（紫の上）は、たはぶれにくくのみおぼす。忍びたまへど（堪えてはいられるが）、いかがうちこぼるるをりもなからむ。「あやしく例ならぬ御けしきこそ、心得がたけれ」（〔源氏〕妙にいつもと違うご様子は）とて、御髪をかきやりつつ、いとほしとおぼしたるさまも、（〔紫上の〕おいたわしいときませんね）絵に描かまほしき御あはひなり。「宮亡せたまひてのち、上のいと（〔源氏〕帝がとてもものさびしそうにしていらっしゃるのも）さうざうしげにのみ世をおぼしたるも、心苦しう見たてまつり、太政大臣（一四）ものしたまはで、見譲る人なきことしげさになむ。このほどの絶え間などを、見ならはぬことにおぼすらむもことわりにあはれなれど、今はさりとも心のどかにおぼせ。（今までにないことと不満にお思いであろうのももっともでおいたわしく思いますが）おとなびたまひためれど、まだいと思ひやりもなく（物事の深い考えもなく）、人の心も見知らぬさまにものしたまふこそ、らうたけれ」（私の気持も分らぬようでいらっしゃるところがかわいらしい）など、一七まろがれたる御額髪ひきつくろひたまへど、いよいよ背きてものも聞こえたまはず。「（〔紫上は〕）いといたく若びた（〔源氏〕どうにも聞き分けがおあ

一 いつ死ぬかも分らぬ無常な世に、このいとしい人にこんなにまで怨まれるのも、つまらぬことよと、前斎院のことを思う一方、浮かぬ思いでいらっしゃる。

二 斎院は、昔から私など全然相手にして下さらぬお気持なのですが。「けどほし」は、うとうとしい。

三 心を静めがたくて、お便りをさし上げてお困らせすると。「ただならで」は、平静でいられなくての意。

四 こういうことですなどと（前斎院とのことがうまくゆかないなどと）あなたに泣き言を申さねばならないことでしょうか。反語。

五 その季節季節に応じて、人があれこれと心を移すという花や紅葉の盛りよりも。「春秋に思ひ乱れて分きかねつ時につけつつ移る心は」（『拾遺集』巻九雑下、貫之）を念頭に置いている。

六 「いざかくてをりあかしてむ冬の月春の花にも劣らざりけり」（『拾遺集』巻十七雑秋、元輔）

七 何の色合いもないが、身にしみて。「し（染）みて」は上の「色」の縁語。

その夜の月明の雪の情趣

りでないのは
まへるは、誰がならはしきこえたるぞ」とて、一常なき世にかくまで
（一体誰のおしつけなのかな）
心おかるるもあぢきなのわざやと、かつはうちながめたまふ。（源氏）「斎
（とりとめもない文をさし上げるのを）
院にはかなしごと聞こゆるや、もしおぼしひがむるかたある。それ
（全く見当違いなことですよ）
は、いともて離れたることぞよ。おのづから見たまひてむ。二昔より
（自然にそのうちお分りでしょう）
こよなうけどほき御心ばへなるを、さうざうしきをりをり、三ただな
（何かものさびしい折々に）
らで聞こえなやますに、かしこもつれづれにものしたまふ所なれば、
（あちらも日頃所在なくお暮しの所ですから）
たまさかのいらへなどしたまへど、まめまめしきさまにもあらぬを、
（お返事）（本気のやりとりでもありませんから）
四かくなむあるとしも愁へきこゆべきことにやは。うしろめたうはあ
（気がかりなことは何もない）
らじとを思ひ直したまへ」など、日一日なぐさめきこえたまふ。
（のだと考え直して下さい）

雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめ
（「雪を着た」）
をかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光まさりて見ゆ。（源氏）五一時々につ
けても、人の心を移すめる花紅葉の盛りよりも、六冬の夜の澄める月
に雪の光りあひたる空こそ、あやしう、七色なきものの身にしみて、
（現世以外のことにまで遥かに思いが馳せられ）
この世のほかのことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残ら
（尽され）

る時節です

ぬをりなれ。すさまじき例に言ひ置きけむ人の心浅さよ」とて、御簾巻きあげさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見えわたされたるに、しをれたる前栽の蔭心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはずすごきに、童女おろして、雪まろばしせさせたまふ。をかしげなる姿、頭つきども、月に映えて、大きやかに馴れたるが、さまざまの袒乱れ着、帯しどけなき宿直姿なまめいたるに、こよなうあまれる髪の末、白きにはましてもてはやしたる、いとけざやかなり。ちひさきは、童げてよろこび走るに、扇なども落して、うちとけ顔をかしげなり。いと多うまろばさむと、ふくつけがれど、えも押し動かさでわぶめり。かたへは、東のつまなどに出でゐて、心もとなげに笑ふ。

（源氏）「一年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。何のをりをりにつけても、〔藤壺の崩御は〕くちをしう飽かずもあるかな。〔藤壺は〕いとけどほ

源氏、紫の上に藤壺のこと、あわせて前斎院のことを語る

一六 雪の山を作ることは、昔からよく行われたことだが。雪山を作ったことは当時の記録類にも散見される（図録八参照）。

一七 興ざめなものの例として言い残した昔の人の、心の浅いことよ。『二中暦』十列の「冷物」（すさまじきもの）に「十二月月夜、十二月扇、十二月蓼水、老女仮借、女酔……」とあり、『宇津保物語』蔵開中に「この師走の月夜のやうなるわざしたんなる者は、女の童のかじけたるをこそ生まめ」とある。『河海抄』には、このほか『篁物語』の例も挙げる。なお二〇三頁参照。

一八 「香炉峯の雪は簾を撥いて看る」（『白氏文集』巻十六）の心があろう。

一九 水が凍って、流れがとどこおる音を立てるさま。

二〇 童女の表着。

二一 主人のお前で夜、宿直する時の服装。丸寝に便利なようにうちとけた服装をする。

二二 はめをはずしているのもかわいらしげだ。（顔を隠すべき）扇なども落して」と上にあるのが「うちとけ顔」の「顔」に利いている。

二三 西の対の東のかどの簀子。庭の見渡せる位置。

二四 中宮は藤壺。『河海抄』は、『枕草子』の雪山の段を引いて、このことを物語に取り込んだものかという。作者の念頭には当然あったことであろう。

二五 相の裾よりずっと長い

二六 色様々な

二七 庭の雪の白さには一層引き立って見えるのなのに

二八 子供っぽく

二九 一部の童女は

三〇 檜扇

三一 欲ばる

三二 困っているようだ

三三 気づかわしげに

三四 やはり目新しい趣向をこらしてこうした遊びごとをもなさったものでした

三五 〔藤壺の崩御は〕

三六 私にはとて

一 くわしいご様子を、日頃親しく拝見することはなかったのですが。源氏として、藤壺とのことは紫の上にも打ち明けられぬことである。

二 表立って、何ごとも巧者にてきばきなさるといったふうにもお見えになりませんでしたが。以下、藤壺の、女性としての理想的な人柄についていう。

三 藤壺のお血筋（姪）だけあって、よく似ておられるようですが。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（『古今集』巻十七雑上、題しらず、読人しらず）、「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」（『古今六帖』五）による。「紫のゆゑ」は血縁をいう（一巻若紫の巻参照）。「こよなからず」は、格段には違わないの意。前に「並びなく……」とあったのに対応する。

四 少々厄介なところがあって。先ほど、紫の上が前斎院のことで嫉妬していたことを揶揄気味にいう。

五 藤壺とはまた違った、すぐれたお方と思われます。

六 こちらも下手なことはできないと、気を遣わざるを得ないお方としては。

七 朧月夜。朱雀院の尚侍であった。（賢木一四四頁参照）

朧月夜の噂

も隔てを置いていらして
くもてなしたまひて、一くはしき御ありさまを見ならしたてまつりし
内裏でのお暮しの間　〔私を〕安心のできるお世話役とはお
ことはなかりしかど、御まじらひのほどに、うしろやすきものには
思い下さったことでした　〔私も〕お頼り申し上げて
おぼしたりきかし。うち頼みきこえて、とあることかかるをりにつ
ご相談申し上げていましたが　二
けて、何ごとも聞こえかよひしに、もて出でてらうらうじきことも
立派に　申し分なく　ほんのちょっとした
見えたまはざりしかど、いふかひあり、思ふさまに、はかなきこと
この世にあれほどのお方がまたとあるでしょうか　ことでも格別のなさりようでした
わざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむ
女らしくしかとしたところもありませんでしたが　いかにも深いたしなみを思わせる点が
や。やはらかにおびれたるものから、深うよじづきたるところの、
あなたは　さすがに　三
並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど、紫のゆゑこよな
からずものしたまふめれど、四すこしわづらはしき気添ひて、かどか
勝っておられるところが困りものと言えましょうか　利発さの　お気立ては
どしさのすすみたまへるや苦しからむ。五前斎院の御心ばへは、また
ぜんさいいん　別段のことでなくてもお便りをかわして　何か所在ない折に
さまことにぞ見ゆる。さうざうしきに、何とはなくとも聞こえあは
せ、六われも心づかひせらるべきあたり、ただこの一所や、世に残り
世に残っておられましょうか
たまへらむ」とのたまふ。
（紫上）七尚侍こそは、ららうじくゆゑゆゑしきかたは人にまさりた
巧者で　奥ゆかしい点では

八 どうしてあのようなことがあったのでしょう。源氏との間に浮き名を流したことをいう。

九 悪いことをしたと後悔されることが多いことです。朧月夜とのことも、その一つという気持。

一〇 ほかの男と比較したら、比べものにならぬほどおとなしいと思っていた私でさえ、こうなのだから。

一一 朧月夜のことを思い出されても。前に藤壺の思い出を語った時にも落涙したことを匂わせる筆致。

一二 あなたが、人並みでもないとさげすんでいられる山里の人は。

明石の上と花散里

明石の上のこと。大井の山荘に住むのでこういう（薄雲一八五頁）。

一三 ほかの人と同列には扱えぬ人ですから。受領の娘であるという出自の低さをいう。

一四 全然取り柄のない女というのはまだ知りません。自分の周囲にはそういう人はいない、の意。

一五 花散里のこと。（松風一一九頁参照）

一六 あれはまた、ああした人としてよく出来た人と思って世話をするようになって以来。「心ばせ人」は、よく気のつく人というほどの意。

まへれ。軽々しい振舞などは浅はかなる筋など、ご縁のないお人柄でしたのにもて離れたまへりける人の御心を、あやしくもありけることどもかな」とのたまへば、（源氏）いかにも色っぽくなまめかしう容貌よき女の例には、なほ引き出でつべき人ぞかし。そう思うとさも思ふに、いとほしく悔しきことの多かるかな。まいて、うちあだけす浮気っぽい好色な男きたる人の、年積りゆくままに、いかに悔しきこと多からむ。人よりはこよなき静けさと思ひしだに」など、のたまひ出でて、尚侍の君の御ことにも、涙すこしは落したまひつ。

（源氏）「この、数にもあらずおとしめたまふ山里の人こそは、身のほどにはややうち過ぎ、ものの心など得つべけれど、人よりことなるべきものなれば、思ひあがれるさまをも見消ちてはべるかな。いふかひなき際の人はまだ見ず。人はすぐれたるはかたき世なりや。東の院にながむる人の心ばへこそ、古りがたくらうたけれ。さはた、さらにえあらぬものを、さるかたにつけての心ばせ人にとりつつ見そめしより、同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬるよ。今はた、

ものの道理などよく分った人のようですが
やや不相応に
気位の高いところなども
無視しているのです
人並みすぐれた女はめったにいないものです
相変らず可憐なものがあります
あのようには
とても
気立ては
もできないものですが
いまだに変らず遠慮がちな態度で過していることです
今となっては

かたみに背くべくもあらず、深うあはれと思ひはべる」など、昔今の御物語に夜ふけゆく。

（お互いに　離れられそうもなく　いとしく思っています）

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、（紫の上）

氷閉ぢ石間の水はゆきなやみ
空澄む月のかげぞながるる

外を見出だして、すこしかたぶきたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえて、めでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

（首をかしげていられる様子は　らしげである　藤壺）

かきつめて昔恋しき雪もよに
あはれを添ふる鴛鴦の浮寝か

（源氏）

藤壺、源氏の夢枕に立って恨む

〔奥に〕入りたまひても、宮の御ことを思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたまへる御けしきにて、

（藤壺）

「漏らさじとのたまひしかど、憂き名の隠れなかりければ、はづか

（藤壺を　源氏を　身の置き）

一 氷が張って石の間を流れる遣水は流れかねていますが、空に澄む月の光はとどこおることなく西に向ってゆきます。「ながるる」は、氷の面に映じながら移る景をいう。庭を眺めての叙景の歌である。

二 髪の生え際、顔立ちが。

三 前斎院にいささか分けていられるお気持も、あらためてさらに紫の上に注がれることになりそうだ。源氏の気持をそのまま地の文として書いたもの。

四 池に放ってあるおしどり。

五 あれもこれも昔のことが恋しく思われる雪の降る中に、哀れをそそる鴛鴦の浮寝であることよ。「かきつめて」は、かき集めて。「昔」は、藤壺のこと。「鴛鴦の浮寝」は、紫の上との間柄を意味しよう。

六 私のことを人には漏らさぬとおっしゃっていましたが、あなたとの情けない噂は隠れないことでしたの

で。紫の上に自分のことを語ったのを恨んでいる。女としての悲しい嫉妬の思いが籠められている。

七 夢のさめたのがいかにも残念で、どうしようもなく気持が騒ぐので。

八 源氏は身動きもしないで横になっておいでになる。主語を紫の上とするのは誤り。

九 安らかに眠れず目覚めてわびしい冬の夜に、結ばれた夢の気がかりなままはかなく終ってしまったことよ。「むすぼほる」は、結ばれる意と気にかかる意とを掛ける。源氏の心中の歌。

藤壺への源氏の思慕の情

一〇 短い夢に、かえって心満たされず悲しいお思いなので。

一一 諸方の寺に誦経のための布施などおさせになる。苦患に沈む藤壺の菩提をとむらうため。

一二 この世の穢れをおすすぎになっておられないのであろう。密通のことが藤壺のこだわりになっているという意。仏教では五濁（劫濁、見濁、煩悩濁、衆生濁、命濁）を数える。

所もなく〔冥界で〕しう、苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。御い答え申し上げているおつもりがらへ聞こゆとおぼすに、おそはるるここちして、女君の「こは、なあそばしましたどかくは」とのたまふに、〔源氏は〕目ざめておきどころなく騒げば、〔胸を〕おさへて、涙も流れ出でにけり。今もいみじく〔袖を〕濡らし添へたまふ。女君、いかなることにかとおぼすに、うちもみじろかで臥したまへり。

〔源氏〕とけて寝ぬ寝覚さびしき冬の夜に

むすぼほれつる夢の短さ

一〇 なかなか飽かず悲しとおぼすに、疾く起きたまひて、さとはなくて、所々に御誦経などせさせたまふ。苦しき目見せたまふと恨みたまへるも、〔藤壺は〕さぞおぼさるらむかし、行ひをしたまひ、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら、このひとつことにてぞ、一二この世の濁りをすすいたまはざらむ、と、ものの心を深くおぼしたどるに、いみじく悲しければ、何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、

一 藤壺の御ために、特別に何かご法要でもお営みになるのは。内容は源氏の心中の思いであるが、地の文のような書き方をしている。

二 帝も、お気がとがめていろいろご心配なさるかもしれない。帝は、源氏に対して父の礼を尽さぬことにひけ目を感じておられるから、藤壺のことでこれ以上何かとご心配をおかけしたくないという気持。

三 西方極楽浄土の教主。

四 極楽の同じ蓮の上に往生しようと。歌の「なき人をしたふ……」に続く。極楽の往生人は、蓮華の上に半座をあけて同行の人を待つとされる。

五 亡き藤壺を慕う心にまかせて冥途に赴いても、その姿も見えぬ三途の川の渡しで途方に暮れることであろうか。女ははじめて逢った男に負われて三途の川を渡るといわれていた。「みつ（三）の瀬」（三途の川）の「みつ」に「水」を掛ける。

六 情けない思いであられたとか。源氏の気持を伝える語り手の言葉。

お慰め申し上げにあがって
とぶらひきこえにまうでて、罪にもかはりきこえばや、など、つく
代ってさし上げたい　しみじ
づくとおぼす。かの御ために、とり立てて何わざをもしたまはむは、
みとお思いになる
世人が変だとお思い申すであろう
人とがめきこえつべし、内裏にも御心の鬼におぼすところやあらむ、
気がねなさるので　心に浮べて一心に祈念申し上げなさる
とおぼしつつむほどに、阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたま
ふ。同じ蓮にとこそは、
（源氏）
なき人をしたふ心にまかせても

かげ見ぬみつの瀬にやまどはむ

とおぼすぞ、憂かりけるとや。

少女（をとめ）

前の朝顔の巻の翌年、源氏三十三歳から三十五歳にかけて、彼の一家が大きく発展してゆく流れを逐った物語である。

源氏は相変らず朝顔の前斎院を思い切れず、叔母女五の宮も、二人の結婚を望んでいるが、前斎院の心は変らず、源氏もそれ以上押そうとはしなかった。

源氏の嫡男夕霧は、この年十二歳になり、元服する。源氏は思うところあって、六位に止め、大学に入学させた。二条の東の院に学問所を設けて、勉学に専念させたので、祖母大宮は不満であった。

同年、斎宮の女御が立后。源氏は太政大臣になり、右大将（もとの頭の中将）は内大臣になった。内大臣は、娘の弘徽殿の女御が、斎宮の女御に超えられたことを深く恨みとした。

夕霧は、同じ祖母大宮の膝下で育った内大臣の娘雲居の雁と相愛の仲であったが、これを知った内大臣は立腹し、大宮を非難したあげく、娘を自邸に連れ戻してしまう。夕霧は、六位の身を嘆くばかりであった。

冬、源氏は五節の舞姫に、惟光の娘を献上する。娘を垣間見た夕霧は、その美しさにひかれ、歌を贈る。源氏も昔を偲び、筑紫の五節の君に歌を贈った。巻名「少女」は、五節の舞姫をいう歌語である。

翌年春、朱雀院の行幸があり、帝の御前の試みに、夕霧は進士に合格。やがて侍従に任じられた。

翌々年秋、かねて造営中の六条の院が完成し、四季の庭を配する町々に、紫の上をはじめ女君たちが移り住む。中宮も里下がりし、紫の上と風雅な応酬があったりして、ここに六条の院の理想的な生活が繰り展げられるのである。

一 藤壺の一周忌。崩御は前年三月（薄雲一六八頁）。
二 四月一日から夏の衣服になることをいう。
三 賀茂の祭。四月中の酉の日に行われる。
四 朝顔の前斎院。前の朝顔の巻を受けて書く。朝顔の巻の冒頭（一八九頁）参照。
五 賀茂の祭には、衣服、冠などに葵と桂の葉を組み合せて付けるので、斎院時代をいろいろ思い出すのである。

御禊の日、源氏、朝顔の前斎院と贈答

六 賀茂の祭に先立つ午または未の日に、斎院が賀茂川に臨んで身を浄める儀式。
七 今日の御禊の日は。次の歌にすぐ続く文面。
八 思いもかけませんでした、あなたが斎院を辞されたあげく、除服の禊ぎをなさろうとは。喪の明けには水辺に出て禊ぎをして喪服を脱ぐ。「川瀬の波」は「たちかへり」を言い出し、「みそぎ」の縁語。「藤」は藤衣（喪服）。「淵」に掛け、「川瀬」「波」の縁語。
九 歌の「藤」にちなんだ色紙。
一〇 立文にきちんとして。「立文」は、手紙を包み紙で縦に包んだ正式の形。
一一 父の喪に服したのはつい昨日のことと思われますのに、もう除服しなければならぬとは、月日の早く移り変る世をはかなく存じます。「世を」「はかなく」と続く。「飛鳥川淵にもあらぬ我が宿も瀬にかはりゆくものにぞありける」（『古今集』巻十八雑下、伊勢）、「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）による。

年が改まって

年かはりて、一宮の御果ても過ぎぬれば、世の中色あらたまりて、人々の喪服が常の衣服に改まって

更衣のほどなども今めかしきを、はなやいだ気分だが、まして祭のころは、三おほかたの空のけしきここちよげなるに、前斎院はつれづれとながめたまふ。御前なる桂の下風なつかしきにつけても、若き人々は女房たち五思ひ出づることどもあるに、大殿より、「御禊の日はいかにのどやかにおぼさるらむ」と、とぶらひきこえさせたまへり。「今年は、どんなにのんびりとしておいでのことでしょう」源氏七「今日は、

ここちよいのにつけても所在なく物思いに沈んでいられる

源氏大殿

お見舞を申してこられた

八かけきやは川瀬の波もたちかへり

君がみそぎの藤のやつれを」

九紫の紙、一〇立文すくよかにて、藤の花につけたまへり。をりのあはれなれば、〔前斎院より〕御返りあり。

「藤衣着しは昨日と思ふまに

今日はみそぎの瀬にかはる世を

はかなく」とばかりあるを、例の、御目とどめたまひて見おはす。御服なほしのほどなどにも、宣旨のもとに、所狭きまでおぼしやれることどもあるを、院は見苦しきことにおぼしのたまへど、をかしやかに、けしきばめる御文などのあらばこそ、とかくも聞こえ返さめ、年ごろも、おほやけざまのをりをりの御とぶらひなどは聞こえならはしたまひて、いとまめやかなれば、いかがは聞こえもまぎらはすべからむと、もてわづらふべし。

女五の宮の御方にも、かやうにをり過ぐさず聞こえたまへば、いとあはれに、「この君の、昨日今日の児と思ひしを、かくおとなびてとぶらひたまふこと。容貌のいともきよらなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたまへれ」と、ほめきこえたまふを、若き人々は笑ひきこゆ。こなたにも対面したまふをりは、「この大臣の、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを、何か、今はじめたる

一 服喪の期間を過ぎて、常の衣服に着換えること。
二 前斎院の女房。（朝顔一九三頁、一九六頁参照）
三 意味ありげに、色めかしいお手紙などがついていれば、何かと申し上げてお返しもしようが。以下「聞こえもまぎらはすべからむ」まで、宣旨の心中の思い。
四 斎院として神事をとり行われる折々のお見舞などは、始終さし上げていらっしゃって。
五 源氏からの贈り物の処置に困っている様子だ。草子地。

女五の宮、源氏との結婚を勧めるが、前斎院は従わず

六 故式部卿の宮の妹宮。前斎院の叔母。桃園の宮に前斎院と同居している（朝顔一八九頁以下参照）。
七 この源氏の君が、昨日今日まで子供だと思っていましたのに、こうして一人前にお見舞下さるとは。

八 故式部卿の宮。

九 （あなたが）斎院という神に仕える特別のご身分になられて、源氏を婿君としてお世話できないことをお悔みになっては。

一〇 私がその気になったのに、強情にお断りになったことよ。朝顔の姫君が源氏の求婚にすげない態度を取っていたことは、二巻葵六七頁そのほかに見えるが、父宮は結婚に賛成だった事情がここに初めて見える。

一一 故太政大臣の姫君。葵の上。

一二 葵の上の母大宮。朝顔一八九頁系図、同一九〇頁注一参照。

一三 私（女五の宮）も、あれこれとお口添え申すこともしなかったのです。

一四 れっきとした正室で、のっぴきならぬ間柄でいらした方も。「えさらぬ」は、葵の上の母大宮が源氏の叔母であるという近い姻戚関係をいう。

一五 式部卿の宮のお考え通りに、という気持。

一六 いかにも古風にお勧めになるので。昔にさかのぼって律義な話題の進め方をするのをいう。

一七 そんなふうに強情者と思われたまま過してまいりましたのに。前の「思ひ立ちしことをあながちにもて離れたまひしこと」という式部卿の宮の言葉を受けたもの。

一八 前斎院にお仕えする人たちも、上下となくみな源氏に好意をお寄せ申しているので。

御心ざしにもあらず、故宮（婚でもありません）も、筋異（すぢこと）になりたまひて、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひては、『思ひ立ちしことをあながちにもて離れたまひしこと』などのたまひ出（よくお口にも出されて）でつつ、悔しげ（残念そうにお思いだった）にこそおぼしたりしをりをありしか。されど、故大殿（こおほいとの）の姫君ものせられし限りは、三の宮の思ひたまはむことのいとほしさに、とかく言添へきこゆることもなかりしなり。今は、そのやむごとなくえさらぬ筋にてものせられし人さへ亡くなられにしかば、げに、などてかは、さやうにておはせましもあしかるまじとうちおぼえはべるにも、さらがへりてかくねむごろに聞こえたまふも、さるべきにもあらむとなむ思ひはべる」など、いと古代に聞こえたまふを、心づきなしとおぼして、「故宮にも、しか心ごはきものに思はれたてまつりて過ぎはべりにしを、今さらにまた世になびきはべらむも、いとつきなきことでございますとになむ」と聞こえたまひて、はづかしげなる御けしきなれば、しひてもえ聞こえおもむけたまはず。宮人も、上下みな心かけきこえ

折々がありました
お気になさるのが
お気の毒で
一四
一五
どうして
あの方
の正室になられても悪いはずがあろうかと思われますにつけても
うにておはせましもあしかるまじとうちおぼえはべるにも、さらが
昔に返っ
て
（源氏が）
お申し込みなさるのも
前世からのご縁でもあろうかと
一六
（前斎院）亡き父宮にも
一七
世の習いに従いますのも
取り付く島もないご様子なので
（女五宮は）
お勧め申すこともできずにいらっしゃる
一八

一（前斎院は、女房たちがいつ源氏を手引きするかもしれないと）毎日ご心配でいらっしゃるが。「世の中」は、男女の仲。源氏との関係をいう。
二 先方の源氏ご本人は。以下、草子地。前斎院側に立って書いているので「かの御みづからは」という。
三 女房を手なずけて、無理に忍び入るというようなことをして。
四 前斎院のお心を傷つけようなどとはお考えでないようだ。
五 太政大臣の姫君の産んだ、の意。夕霧。二巻葵八七頁に誕生。今年十二歳。
六 源氏の自邸。
七 夕霧の祖母。葵の上の母。
八 やはりそのまま故太政大臣邸でおさせ申された。夕霧は母方で養育されているので、「やがて」という。
九 夕霧の母方の伯父。もとの頭の中将。薄雲一七七頁で、大納言兼右大将になる。
一〇 主催者である右大将一族の側でも。
一一 源氏は夕霧を四位にしようとお思いになり。親王の子は従四位下に叙する規定であるが、一世の源氏の子の場合は従五位下が通例である。源氏の場合は親王に准じたものか（『河海抄』『花鳥余情』）。
一二 夕霧はまだごく幼少であるのに。以下「目馴れたることなり」まで、源氏の思惟。
一三 六位が着用する浅緑色の袍。葱の葉の青く白みがかったものの薄い色をいう。

夕霧の元服

たれば、世の中いとうしろめたくのみおぼさるれど、[一]かの御みづからは、わが心を尽くし、あはれを見えきこえて、[二]（ご自分の誠意を尽し）（相手のお気持がやわらぎも）人の御けしきのうちもゆるばむほどをこそ待ちわたりたまへ、[三]（しよう折をいつまでもお待ちになってはいるけれども）さやうにあながちなるさまに、御心破りきこえむなどはおぼさざるべし。[四]

大殿腹[五]の若君の御元服[六]のこと、おぼしいそぐを、（源氏は）二条の院にてとおぼせど、[七]大宮[八]のいとゆかしげにおぼしたるもことわりに心苦しければ、なほやがてかの殿にてせさせたてまつりたまふ。[九]右大将をはじめきこえて、御伯父[一〇]の殿ばら、みな上達部[一一]のやむごとなき御おぼえ異にてのみものしたまへば、主人[一二]がたにも、われもわれもと、さるべきことどもは、とりどりにつかうまつりたまふ。おほかた世ゆすりて、所狭き御いそぎの勢なり。

（元服の儀式を）（大層見たがっていらっしゃるのもごもっともでおいたわしいので）（殿方は）（格別の方ばかりでいらっしゃるので）（皆上達部で帝の大層なご信任も）（伯父君たちが）（必要なことは）（すべて世の中全体が）（大騒ぎで）（ご準備）

四位になしてむとおぼし、世人[一三]も、さぞあらむと思へるを、まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからむも、なかなか目馴れたることなりとおぼしとどめつ。浅葱[一四]に

（きっとそうだろうと思っていたが）（自分の思いのままになる世だからといって）（そんなに急に高い位につけるのも）（かえって月並みなことだと）（思い止まりなさった）

一四 夕霧は童殿上していたので（澪標一五頁）、元服後、六位でふたたび殿上を許されたことをいう。
一五 大宮が源氏にお会いになって。
一六 現在、こうして（急いで元服して）、無理にまだ幼い年頃を大人めかすこともないのですが。「お（老）いつかす」は、大人にする、元服させる意。
一七 大学寮。式部省の所管で、主として五位以上の子弟で、十三歳以上十六歳以下の聡明な者を採り、紀伝、明経、明法、算道を教授する。
一八（大学の学問を身につけて）いずれ朝廷にもお仕えできるようになりましたならば。
一九 ほんの少々、言うほどでもない学問などもいたしました。「書」は、漢籍。「はかなき」は卑下した言い方。
二〇 音色が十分でなく、至らぬところが多うございました。「音た（耐）へず」は「琴笛の調べにも」を直接受け、その上の「文の才をまねぶにも」もこれで兼ねて受けたもの。
二一 つまらぬ親に出来のよい子が勝るという例はめったにないことですから。時代が下るほど世の中が衰えるという尚古思想。
二二 私から遠ざかってゆくうちに、将来どうなるかと、大層気にかかりますので。「うしろめたなし」は「うしろめたし」と同じ。
二三 朝廷の官職。

て殿上にかへりたまふを、大宮は、飽かずあさましきこととおぼしたるぞ、ことわりにいとほしかりける。御対面ありて、このこと聞こえたまふに、「ただ今かうあながちにしも、まだきにおいつかすまじうはべれど、思ふやうはべりて、大学の道にしばしならはさむの本意はべるにより、今二三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にもつかうまつりぬべきほどにならば、今人となりはべりなむ。みづからは九重のうちに生ひ出でではべりて、世の中のありさまも知りはべらず、夜昼御前にさぶらひて、わづかになむはかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりしだに、何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音たへず、及ばぬところの多くなむはべりける。はかなき親にかしこき子のまさる例は、いとかたきことになむはべれば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先いとうしろめたなきによりなむ、思ひたまへおきてはべる。高き家の子として、官

一四 殿上 祖母宮 ご不満でとんでもないことだと
一五 ご無理もなくおいたわしいことであった
一六 源氏 考えるところがございまして 希望がございますので
一七 しばらく親しませたいと 無駄に過したものと思うことにして
一八 そのうち一人前になり
一九 私は 宮中に 父帝のお側に控えて 恐れ多くも帝から直接教えていただいてさえ
二〇 ご不満の旨を
二一 いろいろな経験を積まぬうちは
二二 次々に子孫の代になって
二三 [大学入学を] 思いきめているのです
二四 名門の子弟として

一 位階。宮廷における席次。社会的待遇が添う。

二 官職と位階。当時は、官位相当といって、高官ほど高位である。

三 内心は馬鹿にしながら。「鼻まじろき」は、鼻をうごめかしせせら笑うこと。

四 （親などの）頼りにすべき人に先立たれて。

五 やはり、学問という基礎があってこそ、政治家としての臨機の力量が世間に重んじられることも、一層強みがございましょう。「大和魂」は、「才」が、儒学（政治学）の知識であるのに対して、わが国の実情に応じた政治的判断や行政能力をいう。

六 将来世の柱石の臣となるための心得を習得しましたならば。「世のおもし」は、政道輔佐の重臣。

七 安心できようと存じまして。以下、「大学に入れることにしたのでございます」といった言葉で結ばれるべきところ、言葉を続けるうちに脈絡が消えたものと見られる。

八 貧窮の大学生だといって、嘲笑し馬鹿にする人もまさかございますまいと思います。「大学の衆」は、大学の学生のこと。『宇津保物語』藤原の君の巻に「せまりしれたる大学の衆」とある。

爵（一からぶり）心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば（世の栄華になれていい気になってしまいますと）、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる（全く縁遠いことに思われるようです）。たはぶれ遊びを好みて、心のままなる官爵（二くわんしやく）にのぼりぬれば、時に従ふ世人（三よひと）の、下には鼻まじろきをしつつ、追従（ついしよう）し、けしきとりつつ従ふほどは（機嫌を伺いながら言いなりになるうちは）、おのづから人とおぼえて（一人前に感じられて）、やむごとなきやうなれど（堂々としているようですが）、時移り（四時勢が変り）、さるべき人に立ちおくれて（権勢が衰えてくる果てには）、世おとろふる末には（馬鹿にされても）、人に軽（かる）めあなづらるるに（頼るものとてないことなのでございます）、かかりどころなきことになむはべる。なほ才（ざえ）をもととしてこそ（五）、大和魂（やまとだましひ）の世に用ゐらるるかたも強うはべらめ。さしあたりては（当座は）、心もとなきやうにはべれども（もどかしい地位のようではありますが）、つひの世のおもしとなるべき心おきてを（六）習ひなば、はべらずなりなむのちも（私亡きのちも）、うしろやすかるべきによりなむ（七）、ただ今はかばかしからずながらも（今のところは人並みにえらい顔ができなくても）、かくてはぐくみはべらば（私がこうして面倒をみていますれば）、せまりたる大学の衆（しゅう）とて（八）、笑ひあなづる人もよもはべらじと思うたまふる」など聞こえ知らせたまへば（〔事情を〕ご説明申されると）、〔大宮は〕吐息をおつきになって（なるほど）、うち嘆きたまひて、「げにかくもおぼし寄るべかりけることを（そこまでお考えになるのも当然なことでしたのに）、この大将なども（こちらの右大将なども）、『あまり引き

九 右大将の弟。「御伯父の殿ばら」の一人。左衛門府の長官。従四位下相当。

一〇 皆めいめい位が上がっては、一人前になってゆくのに。夕霧のいとこたちは、それぞれ以前に元服し、名門の子として五位に叙せられていたのが、そののちの昇進の機会に加増して昇進しているのである。

一一 夕霧が自分一人六位の浅葱姿なのを、大層つらいと思っていられるのが。「思はれたる」の「れ」は軽い敬語。

一二 実名以外の呼び名。ここは、大学の紀伝道（歴史、詩文を修める学科）に入学した学生の名簿につける中国風の二字の名。姓の一字を上につけて、三善清行を三躍というたぐい。

一三 二条の東の院。（松風一一九頁注一参照）

一四 めったにないことなので、どんなことかと思って。貴族の子弟が大学に進むことはほとんどなかった当時の情勢が背景にある。

一五 大学の博士。学業を教え、試験をつかさどった。ここは文章博士（紀伝道を担当）で、定員は一人。「ども」とあるのは、そのほか詩文にすぐれた儒者が参加しているからであろう。

一六 借物の衣裳が。大学の博士たちは貧困である。

夕霧の字をつける儀式

違へたる御ことなり』と、（例にはずれたなさり方だ）かたぶきはべるめるを、（首をひねっているようですが）この幼ごころに（本人も子供心に）もいとくちをしく、大将、左衛門の督の子どもなどを、われよりは下臈と思ひおとしたりしだに、（見くびっていました者も）皆おのおの加階しのぼりつつ、およすけあへるに、浅葱をいとからしと思はれたるが、心苦しうはべるなり」と聞こえたまへば、〔源氏は〕うち笑ひたまひて、「いとおよすけても（申しているようですな）恨みはべるななりな。いとはかなしや、（ほんにたあいのない）この人のほどよ」とて、いとうつくしとおぼしたり。「学問などして、すこしものの心得はべらば、（まだそんな年頃なのですね）その恨みはおのづから解けはべりなむ」と聞こえたまふ。

字つくることは、東の院にてしたまふ。東の対をしつらはれたり。上達部、殿上人、めづらしくいぶかしきことにして、われもわれもとつどひ参りたまへり。博士どももなかなか臆しぬべし。「憚るところなく、例あらむにまかせて、なだむることなく、きびしう行へ」と仰せたまへば、〔源氏が〕しひてつれなく思ひなして、家よりほかにもとめたる装束どもの、うちあはずかたくなしき姿などをも恥なく、

（式のために）設備された（ものの道理が分ってきまし）たら（源氏）（博士たちは）無理に平静を装って（厳格に）（慣例があろうからその通り）（手加減せず）（気後れしよう）（身につかず）（不細工な）

面もち、声づかひ、（声の出し方）むべむべしくもてなしつつ、（仔細ありげに振舞っては）座に着き並びたる作法よりはじめ、見も知らぬさまどもなり。（すべて見たこともない有様である）若き君達は、（我慢で）え堪へず（笑い出したりなどしないような）ほほゑまれぬ。（きず失笑してしまう）さるは、（実は）もの笑ひなどすまじく、（年もいって落着いた者ばかりをと）過ぐしつつ静まれる限りをと選り出だして、瓶子（一）なども取らせたまへるに、筋異（二）なりけるまじらひにて、右大将、民部卿（三）などの、（一所懸命になって）おほなおほな土器（四）とりたまへるを、（博士どもが）あさましくとがめ出でつつおろす。（あきれるばかり文句を言っては叱りつける）「おほし垣下（六）ある（五）じ、はなはだ非常（七）にはべりたうぶ。かくばかりのしるしとあるなにがしを知らずしてや、朝廷（八）にはつかうまつりたうぶ。（全く馬鹿げている）はなはだをこなり」など言ふに、人々皆ほころびて笑ひぬれば、また、（思わず吹き出して）「鳴り高（九）し。（博士ども）（静まりなされ）鳴りやまむ。はなはだ非常なり。（席を引き上げて頂きましょう）座を引きて立ちたうびなむ」など、（居丈高に）おどし言ふも、いとをかし。（大学の課程を）見ならひたまはぬ人々は、（ご存じない方々は）めづらしく興（おもしろいと）ありと思ひ、この道より出で立ちたまへる上達部（かむだちめ）などは、（得意げにやにやしたりしながら）したり顔にうちほほゑみなどしつつ、（源氏が）かかるかたざまをおぼし（学問の道を）好みて、（夕霧の修業を）心ざしたまふがめでたきことと、いとど限りなく思ひきこえた（源氏を）尊敬申し上げ

一一（博士たちは）ちょっと私語しても制止する。
一二 無礼だといったりして、とがめる。学生を教授する時と同様に振舞うのである。
一三（昼の光よりも）かえって一段と明るい燈の光で、道化じみて貧相で体裁の悪いことなど。「掲焉」は、はっきり目立つさま。「猿楽」は、即興で滑稽な物真似などする民間芸能。
一四 やかましく言われてまごつくだろう。「けうさう」は、「喧噪」の撥音を「う」で表記したものという。「まどはかす」は「まどはす」と同じ。わざと儒者言葉をまねて奇妙な言い廻しをしたものであろう。
一五 大学の紀伝道の学生。
一六 対に続く中門廊の南端に、池に臨んで建てられた小殿舎。ここは会場の東の対に続く中門廊の南端であろう。（図録九参照）
一七 漢詩文の才能ある人。
一八 五言律詩のこと。八句あり、五言で、偶数番句末合計四つに韻を踏むため、この名がある。
一九 起、承、転、結の四句からなる詩。五言と七言がある。律詩に比べて短く作りやすい。
二〇 趣のある詩題の句を選んで。詩題には多く五言の詩句が選ばれる。
二一 太政官左弁官局（中務、式部、治部、民部の四省を管轄する）の次官。正五位上相当。行政の実務をつかさどるので、漢学の素養を必要とした。
二二 詩を読み上げる役。

作文の会

なさる
まへり。いささかもの言ふをも制す。無礼げなりとても、とがむ。
やかましく大声をあげている　〔博士たちの〕
かしかましうののしりをる顔どもも、夜に入りては、なかなか今すこし掲焉なる火影に、猿楽がましくわびしげに人わろげなるなど、
何から何まで　全く並み一通りのことでなく　風変りな儀式なのであった
さまざまに、げにいとなべてならず、さまことなるわざなりけり。
源氏　とてもだらしなく　気の利かぬたちだから
大臣は、「いとあざれ、かたくななる身にて、けうさうしまどはかされなむ」とのたまひて、御簾のうちに隠れてぞ御覧じける。数定
母屋の御簾の中に
れた数の席　退出する
まれる座に着きあまりて、帰りまかづる大学の衆どもあるを聞こしめして、釣殿のかたに召しとどめて、ことに物など賜はせけり。
〔源氏は〕
事果ててまかづる博士、才人ども召して、またまた文作らせたまふ。上達部、殿上人も、さるべき限りをば、皆とどめさぶらはせたまふ。博士の人々は四韻、ただの人は、大臣をはじめたてまつりて、絶句作りたまふ。興ある題の文字選りて、文章博士たてまつる。短
漢詩　詩文に堪能な人ばかりを　学者の人々は　夏の
きころの夜なれば、明け果ててぞ講ずる。左中弁、講師つかうまつる。容貌いときよげなる人の、声づかひものしく神さびて読み
短か夜のことなので　読み上げる　声の調子が堂々としていて

一 ここは碩学の意。

二 かような高貴の家柄にお生れになって、ひたすらこの世の栄華を楽しまれてよいお身の上でありながら。以下「すぐれたるよし」まで、当夜の人々の、夕霧を称讃した詩の内容を概括したもの。

三 窓の螢を友とし、枝の雪に親しんだ中国の古人のように、苦労して学問に精励されるお志の立派なことを。「窓の螢を……」「枝の雪を……」と対句風にし、漢詩の趣を出している。ともに家貧しくして燈火の油を得られず、螢の光で学んだ晋の車胤（『晋書』）と、雪明りで読書した晋の孫康（『孫氏世録』）の故事による。『蒙求』に「孫康映雪　車胤聚螢」として見える。

四 思いつく限りのことに見立て喩えて。漢詩の基本的な作法である。

五 人々が思い思いに作った詩が寄せられているのが。「作り集めたる」は、この座で多くの人が作ったのでいう。

六 女が分りもせぬことを口にするのは生意気だと（言われそうで）、いやなので、書き止めなかった。当時漢詩文は男子の業とされていたのでこういう。草子地。

七 大学入学の儀式をおさせになって。入学に際して、師に束脩の礼を行う。令制では、布一端に酒食を添える。

八 お部屋。夕霧の学問所。

九 大宮は夕霧を夜となく昼となくかわいがられて、

夕霧、学問に励む

あげたるほど、いとおもしろし。（世の声望の特別な）おぼえ心ことなる博士なりけり。かかる高き家に生まれたまひて、世界の栄花にのみたはぶれたまふべき御身をもちて、窓の螢をむつび、枝の雪を馴らしたまふ心ざしのすぐれたるよしを、よろづのことによそへなずらへて、心々に作り集めたる、句ごとにおもしろく、唐土にも（中国にまで持って行って伝えたいほどの）持てわたり伝へまほしげなる夜の文どもなりとなむ、そのころ世に（世間で賞めたたえたのであった）めでゆすりける。大臣（源氏）の御はさらなり、（お作は勿論のこと）親めき、（親らしい）あはれなることさへすぐれたるを、（情味のこもっている点も）涙おとして（朗唱しもてはやしたが）誦じ騒ぎしかど、（人々は）女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ。

うち続き、入学といふことせさせたまひて、（本当に）やがて、（そのまま）この院のうちに（二条の東の院）御曹司つくりて、まめやかに（造詣深い先生に）才深き師にあづけきこえたまひてぞ、（学問をおさせ申し上げなさった）学問せさせたてまつりたまひける。大宮（〔祖母の〕）の御もとにも、（めったに参上なさらない）をさをさまうでたまはず。夜昼（大宮のお邸では）うつくしみて、なほ児のやうにのみもてなしきこえたまへれば、（勉強はお出来になるまいということで）かしこにては、えもの習ひたまはじとて、静

元服した今でもまだ子供のようにお扱い申されるので。

一〇 令制でも十日に一日の休暇を許す規定である。

一一 どうかして、課せられた書籍類を早く読み終えて。大学の課程を終えて、の意。『史記』『漢書』『後漢書』の三史と『文選』などが紀伝道のテキストであった。

一二 紀元前二世紀、漢の武帝の時、司馬遷の著した中国最初の歴史書。百三十巻。

一三 大学寮の試験。合格すると擬文章生となる。三史のうち一史の五条を読ましめ、三条以上に通じた者を合格とする。

一四 左弁官局（二二五頁注二一参照）の長官。従四位上相当。詩文の才のある人が任じられた。この人物、系図不詳。

一五 式部省の次官。正五位下相当。儒者で、侍読（帝、東宮の漢籍の師）をつとめた者が任じられる。大学寮を管轄し、卒業生の試験を行うのも式部省の業務の一つである。

一六 前出。講師を勤めた。

一七 中務省の役人。正六位上相当、定員二名。詔勅宣命を作り、御所の記録をつかさどる。文筆の才ある者が採用された。

一八 文章の不審な箇所に、爪で印をつけること。

夕霧の寮試の予行

かなる所に籠めたてまつりたまへるなりけり。一〇一月に三度ばかりを〔大宮の〕参りたまへとぞ、ゆるしきこえたまひける。

〔夕霧は〕ずっとお籠りになっていて　〔源氏は〕

つとこもりゐたまひて、いぶせきままに、気が晴れぬものだから　父源氏を　殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位にのぼり、世に用ゐらるる人はなくやはあると思ひきこえたまへど、〔夕霧は〕大体の人柄が　世間に重んぜられる人もいるではないかと　はなくやはあると思ひきこえたまへど、おほかたの人がら、まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば、いとよく念じて、一二いかでさるべき書ども疾く読み果てて、まじらひもし、世にも出でたらむと思ひて、ただ四五月のうちに、史記などいふ書は、読み果てたまひてけり。

今は寮試受けさせむとて、まづわが御前にてこころみさせたまふ。一三例の、大将、一四左大弁、一五式部の大輔、一六左中弁などばかりして、〔夕霧の〕御師の大内記を召して、史記の難き巻々、寮試受けむに、博士のかへさふ　反問しそうな　大事な箇所を　どの箇所もよく通暁して読み解かれる様子は　べきふしぶしを引き出でて、一わたり読ませたてまつりたまふに、一八至らぬ隈なくかたがたにかよはし読みたまへるさま、爪じるし残ら

ず、あさましきまでありがたければ、（驚くばかり）（抜群の出来なので）（天性の資質がおありだったのだと）さるべきにこそおはしけれと、誰も誰も涙おとしたまふ。大将は、（伯父の）まして、「故大臣（ご存命ならば）おはせましかば」と、聞こえ出でて泣きたまふ。（話題におのぼせして）殿（源氏）も、（我慢がおできにならず）え心強うもてなしたまはず、「人のうへにて、（源氏）かたくなりと見聞きはべりしを、（他人のことで）子のおとなぶるに、親の立ちかはり（親馬鹿だと見聞きしていましたが）痴れゆくことは、いくばくならぬ齢ながら、かかる世にこそはべりけれ」などのたまひて、（人の世はそうしたものなのですね）おしのごひたまふを見る御師（大内記）のここち、うれしく面目ありと思へり。大将、盃さしたまへば、いたう酔ひ痴れてをる顔つき、（〔大内記の〕）いと痩せ痩せなり。世の（変り者で）ひがものにて、才のほどよりは用ゐられず、（学才のわりには出世できず）すげなくて身貧しくなむありけるを、御覧じ得るところありて、（顧みられなくて）かくとりわき召し寄せたるなりけり。身にあまるまで御かへりみを賜はりて、この君の御徳蔭で、たちまちに身をかへたると思へば、まして行く先は、ならぶ人なきおぼえにぞあらむかし。（信望を得ることであろう）

（夕霧の師として特別にお召し出しになったのであった）（ご愛顧を頂いて）（夕霧の師となったお）

夕霧寮試に及第

大学に参りたまふ日は、寮門に、上達部の御車ども数知らずつど

一 亡き太政大臣。夕霧の母方の祖父。薄雲一六三頁で薨じている。

二 子が成人してゆく一方で、親が入れ替りに耄碌してゆくことは。

三 私などまださほどの年齢でもありませんが。源氏は今年三十三歳。

四 右大将が師の大内記に盃を賜るので。夕霧の伯父としてねぎらう。

五 貧窮で痩せているさま。

六 源氏がお見込みになるところがあって。

七 急に生れ変ったような境遇になったことだと思うと、まして（夕霧が出世した）将来は。

八 夕霧が大学に行かれる日。寮試の日。

九 大学の正門。大学寮は二条の南、朱雀大路の東、神泉苑の西に四町を占める（二巻図録二参照）。

一〇 試験を参観する上達部である。

一一 装束など美々しく装わされてお入りになる冠者の君のご様子は。「冠者」は、元服をして冠を着けた若君の意。夕霧をさす。

一二 この前（字をつける儀式の時）と同じような粗末な身装の学生たちが出て来て坐っている末座に列するのを（夕霧が）つらいと思われるのも、全く無理もないことだ。大学における席次は長幼の序による。学生は十三歳から十六歳までの者から選んだが、夕霧は今十二歳で、最年少である。

一三 昔が思い出されるような、大学の栄える頃なので。「昔」は、平安初期、朝廷より大学寮に水田百町を給するなど、大学を重んじた時代をいう。

一四 学問の道。ここでは特に夕霧の進んだ文章道をさす。

一五 擬文章生のこと。寮試に合格した者をいう。

一六 源氏のお邸でも、作文（漢詩を作ること）の会がしばしば催され。

一七 詩文に限らず、万事それぞれの道に励む人の才能のほどが発揮される時代であった。源氏の政道輔佐よろしく、万人所を得る聖代の様相。

一八 そろそろ立后の儀があってもよい頃だが。冷泉帝即位以来今年は五年目である。

一九 母は故六条の御息所。源氏の養女分。

二〇 御母藤壺の宮も、ご自分の代りのお世話役として入内申させなさったのだから。

（澪標五一頁参照）

斎宮の女御、立后

ひたり。おほかた世に残りたるあらじと見えたるに、またなくもて（およそ世間にこれを見ぬ人はあるまいと思われる有様であるが）かしづかれて、（大切に扱われて）つくろはれ入りたまへる冠者の君の御さま、げにか（厳しい学生の生活には堪えられそうにない）かるまじらひには堪へず、あてにうつくしげなり。（気高くかわいらしい風情がある）例のあやしき者どもの立ちまじりつつ来ゐたる座の末をからしとおぼすぞ、いとことわりなるや。ここにてもまた、（大声で落度を叱りつける儒者たちがいて）おろしののしる者どもありて、（不愉快だけれども）めざましけれど、（夕霧は）すこしも臆せず（出題された箇所を）読み果てたまひつ。昔おぼえて大学の栄ゆるころなれば、上中下の人、われもわれもとこの道に心ざし集れば、いよいよ、世の中に（学才があり能力のある人が）才ありはかばかしき人多くなむありける。文人擬生などいふなることどもよりうちはじめ、（すらすらとお進みになったので）すがすがしう果てたまへれば、ひとへに心に入れて、師も弟子もいとどはげみましたまふ。殿にも、文作りしげく、博士、才人ども所得たり。すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほどあらはるる世になむありける。

かくて、（源氏）后ゐたまふべきを、「斎宮の女御をこそは、母宮も、御

一 母宮のご遺志を持ち出して主張される。
二（斎宮の女御立后ということになれば、その前の藤壺中宮に続き）皇族出身の方が二代続いて皇后の位に即かれることになるのを、世人は賛成申し上げない。皇后は代々藤原氏から立てるという、奈良時代、聖武天皇以来の政界の風潮が背景にある。
三 弘徽殿の女御、右大将の娘。（絵合九七頁参照）
四 それぞれこちら側あちら側（斎宮の女御方、弘徽殿方）にお味方申す人々が。
五 兵部卿の宮と申し上げた方は、今は式部卿になられて。藤壺の兄。紫の上の父。
六 帝の御伯父として、今まで以上に帝のご信任が厚くていらっしゃる、その方の姫君が。
七 かねての望み通り入内なさった。澪標の巻に「兵部卿の宮の、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを」（五〇頁）とある。
八 斎宮の女御と同様に、王女御としてお仕えなさっているのを。「王女御」は、女王で女御の方。
九 同じことなら、御母方の血筋で陛下にお近いはずの方に、母后亡きあと代りのお世話役になって頂くのがよいとかこつけて。式部卿の宮方の内々の主張。
一〇 斎宮の女御。後宮梅壺を賜る。（絵合一〇二頁参照）
一一 源氏。今までは内大臣。前に太政大臣になるよう言われたが、思うところがあって辞退した（薄雲一七

源氏、太政大臣になる
内大臣とその家族のこと

後見と譲りきこえたまひしかば」と、大臣（源氏）もことづけたまふ。源氏のうちしきり后（誰よりも先に入内なさったのを差し置いていかがかなど）にゐたまはむこと、世の人ゆるしきこえず。弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひにしもいかがなど、うちうちに、こなたかなたに心寄せきこゆる人々、おぼつかながりきこゆ。兵部卿の宮と聞こえし、今は式部卿にて、この御時（当帝の御代では）にはましてやむごとなき御おぼえにておはする御女、本意ありて参りたまへり。同じごと、王女御にてさぶらひたまふを、同じくは、御母方にて親しくおはすべきにこそ、母后のおはしまさぬ御かはりの後見にとことよせて、（ふさわしいであろうと）似つかはしかるべく、とりどりにおぼし争ひたれど（それぞれに競い合われたけれども）、なほ梅壺（結局后になられた）ゐたまひぬ。御幸ひの、かく引きかへすぐれたまへりけるを、世の人おどろききこゆ。

大臣、太政大臣にあがりたまひて、大将（右大将）、内大臣になりたまひぬ。（天下の政治をおとりになるよう）世の中のことどもまつりごちたまふべく（〔源氏は内大臣に〕）譲りきこえたまふ。人がら、（〔内大臣の〕思慮などもしっかりしていらっしゃる）いとすくよかにきらきらしくて、心もちゐなどもかしこくものした

七頁）のは、外戚としての地位の確立するこの機会を待っていたのである。

一二 韻塞には（源氏に）お負けになったけれども。二巻賢木一八一頁に詳しい。「韻塞」は、同一八〇頁注七参照。

一三 弘徽殿の女御。

一四 もうお一人いらっしゃった。雲居の雁のこと。

一五 皇族の方を母として。「わかむどほり」は、皇族の血筋の意。

一六 雲居の雁の母君は、按察使の大納言と再婚して、現在の夫との間の子供が多くなって。「按察使の大納言」は、大納言で按察使（地方行政の監察官）を兼官する。大納言は大臣の次。

一七 雲居の雁を、その子供たちと一緒に、継父に委ねるのは、まことに不都合だとお考えになって。

一八 お部屋は別々で。

一九 なんでもない季節ごとの美しい花や紅葉につけても、お人形遊びのご機嫌とりにも、真心から雲居の雁の世話を焼いて。夕霧のさま。「まつはれありく」は、あれこれとつきまとい離れぬこと。

按察使大納言北の方 ═ 雲居雁
故太政大臣 ─ 内大臣 ═ 大宮 ─ 葵上 ═ 夕霧
源氏

夕霧と雲居の雁の恋

まふ。学問を立ててしたまひければ、韻塞には負けたまひしかど、公事にかしこくなむ。腹々に御子ども十余人、おとなびつつものしたまふも、次々になり出でつつ、劣らず栄えたる御家のうちなり。

とりたてて熱心になさったので
政務にはお詳しい
幾人もの夫人に
それぞれに成人していらっしゃる方々も
立身して
〔源氏方に〕

姫君

女は、女御と今一所となむおはしける。わかむどほり腹にて、あてなる筋は劣るまじけれど、その母君、按察使の大納言の北の方になりて、さしむかへる子どもの数多くなりて、それにまぜて後の親に譲らむ、いとあいなしとて、とり放ちきこえたまひて、大宮にぞあづけきこえたまへりける。女御にはこよなく思ひおとしきこえたまへれど、人がら、容貌など、いとうつくしくぞおはしける。

高貴の血筋という点では負けないはずだが
〔母方から〕お引き取りになって
祖母宮
ご養育をお願い申し上げなさった
〔内大臣は〕弘徽殿の女御に比べてずっと軽くお考えだけれども
〔雲居雁の〕

冠者の君、ひとつにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十にありたまひてのちは、御方異にて、むつましき人なれど、男子にはうちとくまじきものなりと父大臣聞こえたまひて、けどほくなりにたるを、幼ごこちに思ふことなきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、ねむごろにまつはれありきて、心ざ

夕霧
同じお邸で
親しい血筋ではあっても
かわいらしくていらっしゃった
仲良
お教えなさって
離れてお暮しになるように
くするものではないと〔雲居雁に〕
子供心になつかしく思うこともなくはないので
好意を

一 雲居の雁は、今も、きっぱりとは夕霧に対して恥じ隠れるようなことはなさらない。
二 雲居の雁の乳母たち。
三 何の、お小さい方たちのことだもの。以下「はしたなめきこえむ」まで、後見たちの考え。
四 雲居の雁。十四歳（二五一頁）。幼い二人を恋人同士と見立てて、一人前の男女扱いをした呼び方。
五 あんなにお話にもならぬお年頃とお見受けしていたのに、いっぱしに、どんなお二人の仲になったことやら。すでに二人が深い仲になったことを暗示する草子地。夕霧十二歳。
六 逢えぬことを気が気でなく思うようである。これも草子地。
七 まだ未熟ながら、将来の上達が偲ばれるかわいらしい字で。
八 子供心の用意の無さから。
九 どうして、これこれですと、どなたにもご報告申し上げよう。二人を咤って大宮や父の内大臣に告げないのである。

内大臣、雲居の雁を交え大宮と琴を弾きつつ語る

一〇 源氏と内大臣の新任の大饗の宴。大臣の大饗には、正月に行う恒例のものと、任官披露の二種あり、ここは後者。
一一 荻を吹く風も身にしみる夕暮に。「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」（『藤原義孝集』秋の夕暮。『和漢朗詠集』巻上秋、秋興）

しを見えきこえたまへば、〔お互いに〕いみじう思ひかはして、一けざやかには今も恥ぢきこえたまはず。御後見ども、二何かは、三若き御心どちなれば、年ごろ見ならひたまへる御あはひを、にはかにもいかがはもて離れはしたなめきこえむと見るに、四女君こそ何心なく幼くおはすれど、男は、五さこそものげなきほどと見きこゆれ、おほけなく、いかなる御仲らひにかありけむ。よそよそになりては、六これをぞ静心なく思ふべき。七まだ片生なる手の生ひ先うつくしきにて、書きかはしたまへる文どもの、八心幼くて、おのづから落ち散るをりあるを、御方の人々は、ほのぼの知れるもありけれど、九何かは、かくこそと誰にも聞こえむ、見隠しつつあるなるべし。

一〇所々の大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ、時雨うちして、一一荻の上風もただならぬ夕暮に、大宮の御かたに、内の大臣参りたまひて、姫君わたしきこえたまひて、御琴など弾かせたてまつりたまふ。宮は、よろづのものの上手にお

お見せ申されるので
今までずっとご一緒にお暮しだったお間柄なのに
どうして急によそよそしくお扱いして恥をおかかせすることができようと思っていたが
夕霧
お部屋が別々になってからは
数々の恋文が
うすうす様子を知っている者もあったが
ついうっかり人の目に触れる折があるのを〔雲居雁の〕
女房たち
やりとりなさる
見て見ぬふりをしているのであろう
ほかに朝廷の大きな行事もなく
お部屋に
雲居の雁をお呼び申されて
大宮
あらゆる楽器の

一二 琵琶というものは、女が弾いていると、不格好なようですが。楽器の形が張って、弾奏の姿勢が優美でないことをいう。「琵琶なむ、さるは女のせむにうたて憎げなる姿したるものなる」（『宇津保物語』初秋）

一三 何々親王、だれそれの源氏。内大臣が何くれと思い出す体。すべて皇族である。

一四 源氏の大臣が、山里においていらっしゃる方が。大井の里にいる明石の上のこと。

一五 琵琶の名人の血筋ではありますが。父明石の入道が醍醐天皇より奏法を伝えて三代になることは、二巻明石二七六頁に見える。

一六 ほかのこととは違って、音楽の才能は、やはりいろいろな人と合奏し。

一七 明石の上は（そんな機会もなく）一人で弾いていて。合奏できるような貴族社会に育たなかったことをいう。

一八 左手で柱をおさえること。「柱」は、琵琶の頸についた四本の駒。これをおさえて絃の緩急を加減する。

一九（明石の上は）わが身の幸運ばかりでなく、やはり並々ならず立派な人柄なのですね。次にそのわけが具体的に言われる。

二〇 源氏がお年を取られた現在まで、ほかにはお持ちになっていない姫君をお産み申し上げて。

二一 れっきとした方（紫の上）にお預けした心がけは。明石の姫君を紫の上に託したこと、松風一四四頁以下、薄雲の巻参照。

はすれば、いづれも伝へたてまつりたまふ。「琵琶こそ、女のしたるに憎きやうなれど、らららじきものにはべれ。今の世にまことしう伝へたる人、をさをさはべらずなりにたり。何の親王、くれの源氏」など数へたまひて、「女のなかには、太政大臣の、山里に籠め置きたまへる人こそ、いと上手と聞きはべれ。ものの上手ののちにははべれど、末になりて、山がつにて年経たる人の、いかでさしも弾きすぎれけむ。かの大臣、いと心ことにこそ思ひてのたまふをりをりはべれ。異事よりは、遊びのかたの才はなほ広うあはせ、かれこれにかよはしはべるこそ、かしこけれ、ひとりごとにて、上手となりけむこそ、めづらしきことなれ」などのたまひて、宮にそそのかしきこえたまへば、「柱さすことうひうひしくなりにけりや」とのたまへど、おもしろう弾きたまふ。「幸ひにうち添へて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老の世に持たまへらぬ女子をまうけさせたてまつりて、身に添へてもやつしゐたらず、やむごとな

（内大臣）
どれも皆〔雲居雁に〕お教えになる
正確に弾
いかにも達者な感じのするものです
（内大臣）
めったにいなくなってしまいました
田舎住いで
子の代になって
明石の上
どうしてそう上手に弾くのでしょうか
〔明石上の琵琶を〕ことのほか上手だとお思いでよくお誉めになります
上手になるのですが
これの楽器に調べを合せてこそ
（大宮）
久しぶりでまごついてしまいます
母大宮にお勧め申し上げなさると
（大宮）
〔その姫君を〕手許に置いて低い身分に甘んじさせず

一 女は、ただ心がけのいかんによって、世間から重んじられるものだったのですね。明石の上の処世の決断のすぐれていることに感嘆するのである。その理由が以下に述べられる。

二 弘徽殿の女御。

三 意外な人に負かされた不運に。弘徽殿の女御立后の期待が、源氏側の斎宮の女御によって破られたこと。

四 せめてこの姫君なりとも、何とか理想通りにしたいものだ、東宮の御元服も、もうすぐのことだしと。雲居の雁を東宮に入内させ、弘徽殿の女御に果せなかった立后の夢を託そうという気持。

五 今お話しした運の強い人（明石の上）が産んだ后の候補者が、また続いて出てきました。明石の姫君の年頃が、東宮にふさわしいことをいう。

六 今度にまして。明石の姫君は、斎宮の女御のように養女分でなく、源氏の実の子だからである。

七 わが家から、そうなる（后になる）方が出られずに終るはずはあるまいと。歴代の皇后は藤原氏から出るという考え。

八 亡き太政大臣。大宮の夫君。

九 みずから熱心にお支度なさったのに。祖父大臣の娘分として入内したことは、澪標五〇頁に見える。

一〇 こんな間違ったこともなかったでしょう。源氏の立后は筋道の通らぬことなのである。

（申し分などない人だと聞いています）きに譲れる心おきて、こともなかるべき人なりとぞ聞きはべる」など、かつ御物語聞こえたまふ。

（内大臣）「女はただ心ばせよりこそ、世に用ゐらるるものにはべりけれ」など、（琵琶を）弾きさしてお話し申し上げなさる人のうへのたまひ出でて、「女御を、（人の身の上について話し出されて）けしうはあらず、何ごとも人に劣りては生ひ出でずかしと思ひたまへしかど、（他人にひけを取らぬほどに成人したと存じていましたが）思はぬ人におされぬる宿世になむ、（この世は案に相違したものと存じました）世は思ひのほかなるものと思ひはべりぬる。

四 この君をだに、いかで思ふさまに見なしはべらむ、春宮の御元服、ただ今のことになりぬるをと、（ひそかに考えていたのですが）人知れず思うたまへ心ざしたるを、五 かういふ幸ひ人の腹の后がねこそ、またおひすがひぬれ。立ち出でたまへらむに、六 ましてきしろふ人ありがたくや」（競争相手はいそうにありません）とうち嘆きたまへば、「（大宮）何で（そんなことがありましょう）七 などか、さしもあらむ。この家にさる筋の人出でものしたまはで止むやうあらじと、故大臣の（ご存命ならば）思ひたまひて、（弘徽殿）女御の御ことをも、九 ゐたちいそぎたまひしものを、おはせましかば、一〇 かくもてひがむることもなからまし」など、（この度の立后のことでは）この御ことにてぞ、太政大臣（源氏）をもうらめ

一一 髪の生え際。几帳を隔てずに近く対坐していることが分る。
一二 箏の琴（十三絃の琴）の奏法の一。右手で弾く絃の、柱から一寸ほど左を左手で摘み、絃をゆるめるようにして音にゆらぎを与えること。
一三 調子を整えるために弾く小曲。
一四 日本古来の琴。六絃。
一五 律調。西洋音楽の短音階に近い。呂（西洋音楽の長音階に近い）に対する。中国では、呂を正式の音楽、律を俗楽とした。わが国の歌謡は律調。また、律は秋の調べともした。
一六 こうした名人が。絵合一一三頁参照。なお後の常夏の巻に、内大臣が和琴の名手であることを源氏も認めている。
一七 「落葉、微風を俟ちて隕つ。而も風の力、蓋し寡し。孟嘗、雍門に遭うて泣く。而も琴の感、已に未だし」（『文選』豪士の賦の序。陸士衡）。落葉は微風によって散る。しかし思うに風の力はかすかである。孟嘗君は雍門周の琴を聴いて泣いた。しかし琴の感動は、そんなに強いわけではなかった。落葉も涙も、おのずから落ちるものである、という意。眼前の光景によって吟じたもの。
一八 「琴の感」の故事ではないが。「琴の感、已に未だし」を引く。
一九 舞楽（唐楽）の曲名。盤渉調で律である。
二〇 楽器の譜を口で歌うこと。

〔大宮は〕しげに思ひきこえたまへる。姫君の御さまの、いときびはにうつくしうて、箏の御琴弾きたまふを、御髪のさがり、髪ざしなどの、あてになまめかしきをうちまもりたまへば、はぢらひて、すこしそばみたまへるかたはらめ、つらつきうつくしげにて、取由の手つき、いみじうつくりたるもののここちするを、宮も限りなくかなしとおぼしたり。掻きあはせなど弾きすさびたまひて、押しやりたまひつ。

雲居の雁　あどけなくかわいらし　垂れ具合　気品　わきを　〔父大臣が〕じっと見ていらっしゃると　頬のあたりが　お向きになった横顔は　上手に作ったお人形のような感じなのを　大宮も　いとしいと　〔琴を〕

大臣、和琴ひき寄せたまひて、律の調べのなかなか今めきたるを、さる上手の乱れてかい弾きたまへる、いとおもしろし。御前の梢ほろほろと残らぬに、老御達など、ここかしこの御几帳のうしろに、かしらをつどへたり。「風の力けだしすくなし」と、うち誦じたまひて、「琴の感ならねど、あやしくものあはれなる夕かな。なほあそばさむや」とて、秋風楽に掻きあはせて、唱歌したまへる声いとおもしろければ、皆さまざま、大臣をもいとうつくしと思ひきこえたまふに、いとど添へむとにやあらむ、冠者の君参りたまへり。

軽くお弾きになって　かえって今風な好みなのを　うちとけて　調子を整えて　落葉して　老女房　〔内大臣〕　わけもなく涙をもよおす　もっとお　夕霧　〔内大臣の〕　弾きになりませんか　一層感興を添えようとしてか　〔大宮は〕

夕霧来訪、内大臣と語る

一 なぜこう、この節はご学問に打ち込んでいらっしゃるのでしょう。

二 源氏は、かつて帥の宮に、同様の趣旨の父院の遺訓を語ったことがある。（絵合一一一頁参照）

三 笛の音にも古の聖賢の教えは伝わっているものです。儒教では、礼楽といって音楽を重んじたところからこういう。

四 大宮の琵琶、雲居の雁の箏の琴、内大臣の和琴。

五 正式には笏拍子（笏を二つ打ち合せて拍子をとる）であるが、ここはくつろいだ場合なので、扇で左手の掌を打つのであろう。一座の中で、もっとも身分の高い者、またはもっとも音楽に通ずる者がする。

六 催馬楽、律「更衣」。「更衣せむや　さきむだちや　わが衣は　野原篠原　萩の花摺りや　さきむだちや」。「さきむだちや」は囃しことば。『花鳥余情』は、夕霧が早く昇進して浅葱の衣を脱ぎ換えるようにという気持をこめて歌ったものと説く。

七 繁忙など政務をお逃れになったのでした。執政の役を自分（内大臣）に譲ったことをいう。

八 飯（玄米を蒸したもの）に湯を注いだもの。夏の水飯に対して、冬の食事。

九 木の実、果物など間食用の食事。酒のさかなにも供する。

こちらへと〔雲居雁とは〕こなたにとて、御几帳隔てて入れたてまつりたまへり。〔内大臣〕めったにさ対面もえ賜はらぬかな。お目にもかかれぬことです　学才が身分に過ぎて秀でるのもよろしくないことだと　などかく、この御学問のあながちならむ。才のほどよりあまりぬるもあぢきなきわざと、大臣もおぼし知れることなるを、このようにお指図申されるのには　かくおきてきこえたまふ、やうあらむとは思ひたまへながら、わけがあろうとは存じながら　かう籠りおはすることなむ、お気の毒に存じます　心苦しうはべる」と聞こえたまひて、〔内大臣〕変ったこともなさいませ「時々はことわざしたまへ。笛の音にも古事は伝はるものなり」とて、横笛　御笛たてまつりたまふ。〔夕霧は〕いと若うをかしげなる音に吹きたてて、いみじうおもしろければ、御琴どもをばしばしとどめて、大臣、拍子おどろおどろしからずうち鳴らしたまひて、ふと興の乗るままに「萩が花ずり」など歌ひたまふ。〔内大臣〕「大殿も、源氏　かやうの御遊びに心とどめたまひて、音楽にご執心なさって　いそがしき御政治どもをばのがれたまふなりけり。げに、本当に　あぢきなき世に、心のゆくわざをしてこそ、過ぐしはべりなまほしけれ」などのたまひて、〔夕霧に〕お勧めなさるうちに　御土器参りたまふに、暗うなれば、召し上がる　御殿油参り、御湯漬、雲居の雁　自室に　くだものなど、誰も誰もきこしめす。姫君はあなたに

一〇 困ったことが起りそうなお二人の仲だこと。二人の仲がいずれ内大臣に知れるであろうと危懼する。

一一 こっそり、このお邸の女房にお逢いになろうとして座をお立ちになったのだが。大宮方に内大臣の寵を受ける女房がいるのである。

一二 えらそうにしていらっしゃるけれども（姫君を十分監督していられるつもりでも）、やはり親馬鹿ね。

一三 結局、馬鹿げた騒ぎが持ち上がるでしょう。「おる」（痴る）は、おろかな状態であること。

一四 「子を知るは親にしかず」というのは、「古人言ふことあり。臣を知ることは君に若くは莫し。子を知ることは父に若くは莫し」（『日本書紀』雄略天皇二十三年）。「明君は臣を知り、明父は子を知る」（『史記』李斯伝）

一五 なんということだ。以下「世は憂きものにもありけるかな」まで、周章する内大臣の心中。

一六 内大臣の車の前駆。

一七 どこにこっそり忍んでいらしたのかしら。

内大臣、夕霧と雲居の雁の噂を聞く

お引き取らせになった
わたしたてまつりたまひつ。しひて気遠くもてなしたまひ、御琴の
お琴の音すら〔夕霧に〕お聞かせ申すまいと　今ではすっかりお引き離し申されるのを
音ばかりをも聞かせたてまつらじと、今はこよなく隔てきこえたま
ふを、「一〇いとほしきことありぬべき世なるこそ」と、近うつかうま
つる大宮の御かたのねび人ども、ささめきけり。
年輩の女房たちが　ひそひそ話していた
大臣出でたまひぬるやうにて、一一忍びて人にもののたまふとて立ち
内大臣はお帰りになったふりをして
たまへりけるを、やをらかい細りて出でたまふ道に、かかるささめ
そっと小さくなって女の部屋からお帰りになる途中で
き言をするに、あやしうなりたまひて、御耳とどめたまへば、わが
不審にお思いになって　（女房）一二　ご自分
の陰口を言っている
御うへをぞ言ふ。「かしこがりたまへど、人の親よ。一三おのづからお
れたることとこそ出で来べかめれ。子を知るはといふは、虚言なめ
そらごと　嘘たいですね
り」などぞ、つきしろふ。一五あさましくもあるかな、さればよ、思ひ
つつき合っている　やっぱりだ　疑って
みなかったことではないが　小さいからと油断をしていて　世の中は
寄らぬことにはあらねど、いはけなきほどにうちたゆみて、世は憂
つくづくままならぬものだなと　事情を一部始終お悟りになったが
きものにもありけるかなと、けしきをつぶつぶと心得たまへど、音
もせで出でたまひぬ。一六御前駆追ふ声のいかめしきにぞ、「殿は今こ
（女房）　たった　今でもこんな
今お帰りあそばしたのだ
そ出でさせたまひけれ。一七いづれの隈におはしましつらむ。今さへか

一 とてもよい匂いが、そよそよと出て行ったのは。衣服に薫きしめた香の匂いである。「うちそよめき」は、衣摺れの音がすること。

二 陰口をお耳になさったのではないかしら。「しりうごと」（後言）は、陰で非難すること。

三 夕霧との縁組は、全く問題にならぬ不都合なことというのではないが。「ねたくもあるかな」まで、車中の内大臣の思案。

四 源氏が、強引にわが家の女御をお圧えになるのも恨めしいので。藤氏立后の機会を奪ったことをいう。

五 ひょっとして、人をしのぐこともあるかもしれないと思っていたのに。雲居の雁を東宮に入内させれば、やがて立后もあろうかと期待していたのに。

六 こうした競争相手としては、張り合われたこともあったのをお思い出しになって、おもしろくないので。

七 母大宮も。以下「見たまふならむ」まで内大臣の心中。

八 先ほど女房たちが話していた口ぶりを。内大臣を軽んじた話し方を。

九 少々かどのある、物事の黒白をはっきりつけるご性分には、我慢できかねる。

かる御あだけこそ」と言ひあへり。ささめき言の人々は、「いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしましつるとこそ思ひつれ。あな、むくつけや。しりう言やほの聞こしめしつらむ。わづらはしき御心を」と、わびあへり。殿は道すがらおぼすに、いとくちをしくあしきことにはあらねど、めづらしげなきあはひに世人も思ひ言ふべきこと、大臣の、しひて女御をおし沈めたまふもつらきに、わくらばに、人にまさることもやとこそ思ひつれ、ねたくもあるかな、とおぼす。殿の御仲の、おほかたには昔も今もいとよくおはしながら、かやうのかたにては、いどみきこえたまひし名残もおぼし出でて、心憂ければ、寝覚がちにて明かしたまふ。大宮も、さやうのけしきは御覧ずらむものを、世になくかなしうしたまふ御孫にて、まかせて見たまふならむ、と、人々の言ひしけしきを、めざましうねたしとおぼすに、御心動きて、すこし男々しくあざやぎたる御心には、しづめがたし。

（お浮気をなさるとは）（女房たち）（おいでだったのだと思っていました）（うるさいご気性ですのに）（皆で困っている）（内大臣）（ありふれた親戚同士の結婚だと）（取り沙汰するに違いない）（〔源氏との〕）（たいていのことは）（残念なことだ）（そうした二人の様子はお気づきだろうのに）（〔夕霧は〕）（またとなくかわいがっていなさる）（好きなようにさせておいでなのだろう）（ここしゃくでいまいましいと）（お気持が荒立って）

内大臣、大宮を訪れ非難する

一〇 尼削ぎ（肩のあたりで切り揃える髪形）の額髪（頬に垂れる前髪）。

一一 改まった御小袿などを上に重ねられて。「小袿」は、略式の礼装。

一二 うちとけてまともに顔を合わすようなことをせず。横顔を向けながら話すのであろう。

一三 始終お目通りいたし、どうしておいでか分らぬようなご無沙汰はせぬようにと存じていました。「それなのに」と下に続く語気。

一四 出来の悪い者のことで。娘の雲居の雁のこと。

一五 こんなにやきもきいたしますまいと一方では存じますものの。

一六 私も今さらこんな年寄りですのに。

一七 頼もしいご庇護のもとに、幼い者（雲居の雁）をお預け申しておきましたので、父親の私にはかえって小さい時からなついてもおりません。それほど大宮の愛育に頼っているというのである。

〔内大臣は〕二日ばかりありて〔大宮邸に〕参りたまへり。しきりに参りたまふ時は、大宮もいと御心ゆき、うれしきものにおぼいたり。一〇御尼額ひきつくろひ、一一うるはしき御小袿などたてまつり添へて、子ながらはづかしげにおはする御人ざまなれば、一二まほならずぞ見えたてまつりたまふ。大臣〔内大臣〕御けしきあしくて、「ここにさぶらふもはしたなく、人々いかに見はべらむと、心置かれにたり。はかばかしき身にはべらねど、世にそ思ひたまふれ。一三御目離れず御覧ぜられ、おぼつかなき隔てなくとこはべらむ限り、一四よからぬもののうへにて、〔母上を〕うらめしと思ひきこえさせつべきことの出でまうで来たるを、一五かうも思うたまへじとかつは思ひたまふれど、なほしづめがたくおぼえはべりてなむ」と、涙おしのごひたまふに、宮、化粧じたまへる御顔の色違ひて、〔驚きで〕御目も大きになりぬ。「いかやうなることにてか、一六今さらの齢の末に、心置きてはおぼさるらむ」と聞こえたまふも、〔大宮が〕さすがにいとほしけれど、〔内大臣〕一七「たのもしき御蔭に、幼き者をたてまつりおきて、みづからを

〔大宮邸に〕まことにご満足で
〔内大臣は〕気がひけるほどご立派
なお人柄なので
ご対面申し上げなさる
ご機嫌ななめで
〔内大臣〕こちらに伺うのも居心地が悪く
女房たちも何と思い
不快に思っております
これといって働きのない私ではございますが
〔母上を〕恨めしいとお思い申し上げ
ねばならぬことが起ってまいりましたのを
やはり我慢できかねる気持がいたしまして
〔大宮〕一体どのようなことで
しろからずお思いなのでしょう
〔大宮が〕
〔驚きで〕
〔内大臣〕

一 私も、とりあえず手もとにいる娘が。本妻腹の弘徽殿の女御のこと。
二 宮仕えなど思わしくないのを。立后できなかったことをいう。
三 雲居の雁の方は、いくら何でも（養育をお任せしたのだから）一人前に成人させて下さるに違いないと。
四 なるほど天下にまたとない優秀な方ではいらっしゃいましょうが。相手の夕霧のこと。「有職」は、ことは学問のよくできる人。
五 親戚同士でこういうふうなのは。いとこ同士の縁組は。
六 世に時めいていて、今まで縁のなかった一族に、はなやかな婿扱いをされてこそ、晴れがましいものです。政治家として派閥を拡大したことになる。
七 親族同士の縁組は。
八 源氏の大臣もお耳になさって不快に思われることがありましょう。
九 それにしても。出来たことは仕方がないとしても。
一〇 婿として改まった扱いをし、多少とも世間からさすがだと思われるようなことを加えるのがよいと存じます。家柄にふさわしい婚儀も挙げるべきだという意。

ばなかなか幼くより見たまへもつかず、まづ目に近きが、まじらひなどはかばかしからぬを、見たまへ嘆きいとなみつつ、さりとも人となさせたまひてむと頼みわたりはべりつるに、思はずなることのはべりければ、いとくちをしうなむ。まことに天の下並ぶ人なき有職にはものせらるめれど、親しきほどにかかるは、人の聞き思ふところも、あはつけきやうになむ、何ばかりのほどにもあらぬ仲らひにだにしはべるを、かの人の御ためにも、いとかたはなることなり。さし離れ、きらきらしうめづらしげあるあたりに、今めかしうもてなさるるこそ、をかしけれ。ゆかりむつび、ねぢけがましきさまにて、大臣も聞きおぼすところはべりなむ。さるにても、かかることなむと知らせたまひて、ことさらにもてなし、すこしゆかしげあることをまぜてこそはべらめ。幼き人々の心にまかせて御覧じ放ちけるを、心憂く思うたまふる」など聞こえたまふに、夢にも知りたまはぬことなれば、あさましうおぼして、「げにかうのたまふもこと

心配しながら何かと苦労しておりますが
心外なことがありましたので
頼りにしてまいりましたのに
実に残念でなりません
世間の人が耳にして思うところも
お粗末なことのように
大した身分でもない者同士の縁組でも考えますので
夕霧
まことに見苦しいことです
全くの他人で
若い二人のなすままにしてご放任になったことを
情けなく存じます
まともでない感じがして
これこれしかじかですと〔私に〕
〔大宮は〕
あきれておしまいになって
〔大宮〕なるほどおっしゃることもっともな

一一 あなたがお気づきにならぬことでも。「そこ」は、同等以下の者を呼ぶ二人称。

一二 まだ年端もゆかぬうちに、かわいさに目がくらんで、あわてて結婚させようとは考えもしないことです。「心の闇にまどひて」は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による。雲居の雁を親代りに養育しているからである。

一三 身分の低い世間の者たちの噂を取り上げて、容赦なくお考えになりおっしゃるのも、いかがなものかと思われますし。

一四 根も葉もない噂で、姫君の御名に傷がつくのではないでしょうか。

一五 お側に仕える女房たちも、陰では皆私をあざ笑っているようですのに。「める」は、大宮方の女房についていうので、確定的な言い方を避けたもの。

一六 この間の夜、陰口をきいた女房たちは、なおさら肝をつぶして。

一七 仲良し同士のうちとけ話。

わりなれど、かけてもこの二人の下の心なむ知りはべらざりける。ほんとに大層残念なことですがげにいとくちをしきことは、私こそあなた以上に情けない思いがいたしますここにこそまして嘆くべくはべれ。あの二人と同罪になさるのはもろともに罪をおほせたまふは、うらめしきことになむ。〔雲居雁を〕お世話申してからはりしより、格別大事にいたしまして心ことに思ひはべりて、そこにおぼしいたらぬことをも、立派に仕立ててやりましょうとすぐれたるさまにもてなさむとこそ、人知れず思ひはべれ。内々考えておりましたものげなきほどを、心の闇にまどひて、いそぎものせむとは思ひ寄らぬことになむ。さても、誰かはかかることは聞こえけむ。誰がこんなことをお耳に入れたのでしょうよからぬ世の人の言につきて、きはだけくおぼしのたまふも、あぢきなく、むなしきことにて、人の御名や穢れむ」とのたまへば、〔内大臣〕何で根拠のないことでありましょうことにかはべらむ。さぶらふめる人々も、かつは皆もどき笑ふべかめるものを、いとくちをしく、やすからず思うたまへらるるや」と〔座を〕立ちたまひぬ。事情を知っている女房は心知れる人は、いみじういとほしく思ふ。〔二人を〕一夜のしりう言の人々は、ましてここちも違ひて、何にかかる睦物語をしけむと、思ひ嘆きあへり。

一 内大臣が顔をお出しになると。大宮の前を立って、雲居の雁の部屋を訪れたのである。

二 いかに年若いとはいえ、（雲居の雁が）こんなに無分別でいらっしゃったとは知らず。年頃の姫君として男女の仲に無知なことをいう。

三 ほんとにこうまで一心に人並みの出世をと願ったのだが、そんな私こそ姫以上に頼りない人間だった。不明を恥じる言葉。

四 雲居の雁の乳母たち。

五 このような男女の仲の過ちは、やんごとない帝が大切にかしずかれる姫君でも、つい間違いを犯す話が。

六 昔物語にもあるようですが。物語を人生の指針としている当時の女性たちである。

七 （その場合でも）双方の気持や事情を知って媒介する女房が、よろしく隙を窺う（逢瀬を作る）ということで事が起るのでしょう。

八 安心して見過してまいりましたが。「過ぐしきこえつる」は、夕霧たちの間を疑わずに見過し申したという意。

九 いかがなものか、ませた真似をする方もいらっしゃるようですのに。「いかにぞや」は、どうであろうかと、非難する気持を表す。

一〇 仲間同士で嘆いている。前に「聞こえむかたなし」とあったのに応じる。

内大臣、乳母たちを叱る

姫君は、何心もなくておはするに、[一]（雲居の雁 何もご存じなくていらっしゃるところへ）さしのぞきたまへれば、（本当にかわいらしいご様子なのを）いとらうたげなる御さまを、あはれに見たてまつりたまふ。「若き人（内大臣）[二]（しみじみと）いひながら、心幼くものしたまひけるを知らで、[三]いとかく人なみなみにと思ひける、われこそまさりてはかなかりけれ」とて、御乳母[四]（乳母たち）[五]（責めて小言をおっしゃるが）ども（お返事の言葉もない）をさいなみのたまふに、聞こえむかたなし。「かやうのことは、限りなき帝の御いつき女も、おのづからあやまつ例、[六]昔物語にもあめれど、[七]けしきを知り伝ふる人、さるべき隙にてこそあらめ。これ（この場合は〔お二人が〕いつもご一緒に暮されて長の年月過しておいでになったのには）、明け暮れ立ちまじりたまひて年ごろおはしましつるを、何かは、（どうして）いはけなき御ほどを、（お小さい年頃の方を）宮の御もてなしよりさし過ぐしても、（大宮のなさり方以上に私どもが出過ぎてまでも）隔てきこえさせむと、[八]うちとけて過ぐしきこえつるを、一昨年ばかりよりは、（はっきり別々のお扱いになりましたようでしたし）けざやかなる御もてなしになりにてはべるめるに、（お遠ざけ申すことがあろうかと）若き人とても、（年のゆかぬ方でも）うちまぎればみ、[九]いかにぞや世づきたる人もおはすべかめるを、（何かとこっそり隠れて）夢に乱れたるところおはしまさざめれば、（〔夕霧は〕少しも色めいたところがおありでない様子なので）さらに思ひ寄らざりけること」と、[一〇]おのがどち嘆く。（少しも気がつかなかったことです）「よし、（内大臣）しばしかかること漏らさじ。（まあよい）

一一 そのうちあちらにお移し申そう。内大臣は、雲居の雁を自邸に引き取るつもり。

一二 まさか事態がこうなればよいとは思わなかっただろう。「思はれ」の「れ」は、前の「言ひなされよ」と同じく軽い敬語。もっとすばらしい結婚（入内）を望んでいたはずだ、という気持。

一三 まあとんでもない。内大臣の「いとかかれとしも思はれざりけむ」を受けた言葉。

一四 大納言様のお耳に入ってどう思われようかということまで気にしておりますのですから。雲居の雁の生母は按察使の大納言と再婚している（二三二頁参照）。

一五 どんな手だてをして、（雲居の雁の将来が）台なしにおなりでないようにすればよかろうと。

一六 しかるべき人々（乳母たち）とご相談なさっては。

一七 男君（夕霧）へのご愛情はまさっていらっしゃるのか。ここでいわば一人前の恋する男として「男君」という呼称が使われている。

一八 内大臣が、やさしい思いやりもなく、けしからぬことのように思って、やかましく言われるのを。「こよなきこと」は、この上もない（ひどい）ことの意。

一九 内大臣は、もともと雲居の雁をそうかわいがっていらっしゃったわけでもなくて。

二〇 これほどまで（立后を考えるまで）大事にしようともお思いでなかったのに。

大宮の思い

隠れあるまじきことなれど、心をやりて、あらぬこととだに言ひなされよ。今かしこにわたしたてまつりてむ。宮の御心のいとつらきなり。そこたちは、さりとも、いとかかれとしも思はれざりけむ」とのたまへば、いとほしきなかにも、うれしくのたまふと思ひて、「あないみじや。大納言殿に聞きたまはむことをさへ思ひはべれば、めでたきにても、ただ人の筋は何のめづらしさにか思ひたまへかけむ」と聞こゆ。姫君はいと幼げなる御さまにて、よろづに申したまへども、かひあるべきにもあらねば、うち泣きたまひて、いかにしてかいたづらになりたまふまじきわざはすべからむと、忍びてさるべきどちのたまひて、大宮をのみ恨みきこえたまふ。

宮は、いいとほしとおぼすなかにも、男君の御かなしさはすぐれたまふにやあらむ、かかる心のありけるも、うつくしうおぼさるるに、情なく、こよなきことのやうにおぼしのたまへるを、などかさしもあるべき、もとよりいたう思ひつきたまふことなくて、かく

いずれは世間に知れることだが　せめてそんなことは嘘だと言い張っ　大宮のなさり方が本当に恨めしい　お前たちは　いくら何でも　困ったことと思いながらも　ありがたいお言葉と　（乳母たち）　ただの臣下の身分では何を結構なことと思って望んだりいたしましょう　立派なお家柄でも　雲居の雁　見るからに無邪気なご様子で　何もお分りでないようなので　〔内大臣が〕　ご注意申されても　〔内大臣は〕　〔二人を〕　大宮　こうした恋心　をとこぎみ　かわいいと　どうしてこれがそう悪いことだろうさしもあるべき

一　まかり間違って、臣下と結婚する前世からの約束があるのなら。

二　雲居の雁以上の、及びもつかぬような身分の方にでもふさわしいと思うのにと。夕霧は内親王の婿にでもふさわしいと、大宮は思う。

大宮、夕霧をさとす

三　この間の晩も人目が多くて。内大臣が来合せていた夜のこと（二三五頁以下参照）。

四　いつもは見境なくにこにこなさり、待ち受けていてお喜びになるのに。

五　よりによって、身も蓋もないようなことにご執心なさって。「ゆかしげなきこと」は、人に感心されない、いとこ同士の恋愛沙汰をいう。

までかしづかむともおぼしたらざりしを、わがかくもてなしそめたればこそ、春宮の御ことをもおぼしかけためれ、一とりはづして、ただ人の宿世あらば、この君よりほかにまさるべき人やは、容貌、ありさまよりはじめて、ひとしき人のあるべきかは、二これより及びなからむ際にもとこそ思へ、と、わが心ざしのまさればにや、大臣をうらめしう思ひきこえたまふ。御心のうちを見せたてまつりたらば、〔内大臣は〕ましていかに恨みきこえたまはむ。

かく騒がるらむとも知らで、冠者の君参りたまへり。三一夜も人目しげうて、〔雲居雁に〕思ふことをもえ聞こえずなりにしかば、常よりもあはれにおぼえたまひければ、夕方おはしたるなるべし。四宮、例は是非知らずうち笑みて、待ちよろこびきこえたまふを、〔大宮〕など聞こえたまふついでに、「御ことにより、五内の大臣の怨じてもの したまひにしかば、いとなむいとほしき。ゆかしげなきことをしも思ひそめたまひて、人にもの思はせたまひつべきが心苦しきこと。

（たからこそ）東宮入内のことも考えつかれたのであろうが
（肩を並べる人があるものか）
（ご自分の愛情が夕霧に傾くせいか）
（そのような大宮のご本心をお見せ申したら）
（もっと立派な人があろうか）
（お話しできずにしまったので）
（恋しく思われなさったゆえ）
（今日はまじめなお顔で）
（怨み言をおっしゃっておいでだったので）
（とても困っています）
（人に心配をおさせになろうとするのが案じられてなりません）

六 そういう事情もご存じなくてはと思いまして。内大臣が耳にして立腹していること。

七 ほかの話にしておしまいになった。「たまうつ」は「たまひつ」の音便。

夕霧と雲居の雁の嘆き

八 夕飯を召し上がりなどなさるが。「参る」は、食べるの敬語。

九 夕霧と雲居の雁の部屋を隔てる中仕切りの襖障子。母屋を仕切っているのであろう。

一〇 風の音が、竹に待ち迎えられてさやさやと鳴るのに。「風の竹に生る夜　窓の間に臥せり　月の松を照らす時　台の上に行く」（『和漢朗詠集』巻上夏、夏夜。『白氏文集』巻十九、七言十二句「贈駕部呉郎中七兄」）によるか（『紫明抄』以下に引く）。

こうはっきり申し上げまいと
かうも聞こえじと思へど、六さる心も知りたまはでやと思へばなむ」
と聞こえたまへば、心にかかれることの筋なれば、ふと思ひ寄りぬ。
かねて気になっていたことにかかわる話なので　すぐに気がついた
面赤みて、（夕霧）「何ごとにかはべらむ。静かなる所に籠りはべりにしの
何かにつけて人と付き合う折がございませんので　学問所に
ち、ともかくも人にまじるをりなければ、恨みたまふべきことはべ
お恨みなさるようなことはないだろう
らじとなむ思ひたまふる」とて、いとはづかしと思へるけしきを、
うと存じます
いじらしくもいたわしくて
あはれに心苦しうて、（大宮）「よし、今よりだに用意したまへ」とばかり
せめて今後は注意なさい
にて、異事に言ひなしたまうつ。

これまでよりも一層文通などもむつかしいことだろうと　〔夕霧は〕
いとど文なども通はむことのかたきなめりと思ふに、いとなげか
し。もの参りなどしたまへど、八さらに参らで、寝たまひぬるやうな
何も召し上がらず
れど、心も空にて、人静まるほどに、中障子を引けど、例はことに
皆が寝静まった頃　特別に
錠をおろしたりもしないのに　固く
鎖し固めなどもせぬを、つと鎖して、人の音もせず。〔夕霧は〕いと心細くお
ぼえて、障子に寄りかかりてゐたまへるに、女君も目をさまして、
雲居の雁
風の音の、竹に待ちとられてうちそよめくに、雁の鳴きわたる声の
〔雲居雁は〕　何かと物思いをなさっているのか
ほのかに聞こゆるに、幼きここちにも、とかくおぼし乱るるにや、

一 空飛ぶ雁も私のように悲しいのか。『釈』は「霧深く雲居の雁もわがごとや晴れせずものは悲しかるらむ」（『奥入』は「霧深き」「晴れせずものの」とする）をあげる。出典未詳。この人の慣用の呼称はこの箇所による。

二 小侍従とは、雲居の雁の御乳母子なのであった。草子地による注釈。

三 恋の切なさは分らぬでもないのは、小憎らしいことだ。無邪気な雲居の雁にもいっぱしの恋心があることをやや冗談めかしていう草子地。

四 真夜中に、友を呼んで鳴く雁の音がもの悲しいのに、さらに吹き加わる荻の上を吹く風よ。歌から「身にもしみけるかな」という心中の思いにすぐ続く。「友呼びわたるかりがね」に、雲居の雁の独り言を暗にさす。「荻の上風」は二三二頁注一一参照。

五 「吹きくれば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな」（『古今六帖』一、秋の風）による。

六 小侍従にもお逢いになれず。乳母子が二人の仲立ちだったのである。

七 女君は女君で、あれこれ言われなさったことだけが気がひけて。二四二頁に父内大臣から注意されたことをいう。

「雲居の雁もわがごとや」と、ひとりごちたまふけはひ、若うらうたげなり。（独り歌を口ずさまれる様子は）（若々しくかわいらしい）（夕霧は）いみじう心もとなければ、「これあけさせたまへ。小侍従やさぶらふ」とのたまへど、音もせず。（この障子をあけて下さい）（雲居雁は）御乳母子なりけり。ひとりごとを聞きたまひけるもはづかしうて、（夕霧が）あいなく御顔も引き入れたまへど、あはれは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。（我知らず）（夜具に）乳母たちなど近く臥して、うちみじろくも苦しければ、かたみに音もせず。（身動きするのも気になるので）（お二人とも）

（夕霧）さ夜中に友呼びわたるかりがねに
うたて吹き添ふ荻の上風

身にもしみけるかなと思ひ続けて、宮の御前に帰りて嘆きがちなるも、御目さめてや聞かせたまふらむとつつましく、みじろき臥したまへり。（大宮）（憚られて）（もじもじしながら）

あいなくものはづかしうて、わが御かたに疾く出でて、御文書きたまへれど、小侍従にもえ逢ひたまはず、かの御方ざまにもえ行かず、胸つぶれておぼえたまふ。女はた、騒がれたまひしことのみは

（どうにも気のひける思いで）（夕霧は）（お部屋に）（雲居雁の）（雲居雁に）（たまらない思いでいらっしゃる）

八 女房たちが、互いに（自分と夕霧とのことを）話し合っていることなどについても。男と女の間柄のこと。

九 それに、こうまでやかましく言われねばならぬこととも思いにならなかったのに。夕霧に対する愛情はごく自然に育ってきたものだったからである。

一〇 御乳母たちもきつくご注意申し上げるので。「あはむ」は、軽蔑的に非難する意。

一一 もう少し大人びていれば、適当な機会も作り出そうが。こっそり逢う機会を作りもしようが。

一二 内大臣は、あれ以来（大宮に苦言を呈して以来）母宮の邸へはおいでにならず。

一三 本妻。昔の右大臣の四の君。

内大臣、雲居の雁を引き取る

一四 中宮が格別のお支度で宮中に上られましたが。「中宮」は、皇后に同じ。ここは斎宮の女御のこと。立后があると、いったん里邸に下がって、立后の宣命を受け、皇后としての威儀を整えて、あらためて宮中に入る。

一五 弘徽殿の女御が、将来を悲観していらっしゃるのが。立后できなかったからである。

一六 そうはいっても（立后はできなかったとはいえ）、帝のお側につききりに侍らせなさって、四六時中おいでのようだから。冷泉帝が弘徽殿の女御に親しんでいることは、絵合九七頁にも見える。

づかしうて、わが身やいかがあらむ、（自分はどうなるのだろうか）人やいかが思はむとも（世間の人がどう思うだろうかなどとも）深くおぼし入れず、（お考えにならず）をかしうらうたげにて、（美しくかわいらしい風情で）うちかたらふさまなどを、（いや）とましとも思ひ離れたまはざりけり。（な話だとお気持の）またかう騒がるべきこととも（遠のくこともないのだった）おぼさざりけるを、一〇御後見（うしろみ）どももいみじうあはめきこゆれば、（こと）え言（手紙もお出しになれない）も通はしたまはず。一一おとなびたる人や、さるべき隙（ひま）をも作り出づらむ、男君（夕霧）も、（まだ少々頼りないお年頃なので）今すこしものはかなき年のほどにて、（ただとても残念だと思うばかりである）ただいとくちをしとのみ思ふ。

大臣（おとど）は、そのままに参りたまはず、宮をいとつらしと思ひきこえたまふ。北の方には、（こういうことがあったとは）かかることなむと、（おくびにもお出しにならず）けしきも見せたてまつりたまはず、ただおほかたいとむつかしき御けしきにて、（何となくひどくご機嫌の悪いお顔つきで）（内大臣）一四「中宮のよそほひことにて参りたまへるに、女御（にょうご）の世の中思ひしめりてものしたまふを、（大宮をほんとうにひどい方だと）心苦しう胸いたきに、（おいたわしく胸が痛むので）まかでさせたてまつりて、心やすくうち休ませたてまつらむ。（ゆっくり）（ご休養願いましょう）さすがに、一六上につとさぶらはせたまひて夜昼おはしますめれば、（宮中をご退出申させて）ある人々も心ゆるびせず、（お付きの女房たちも気を張りつめで）苦しうのみわ（とてもきついとつら）

一 お暇もなかなか出ないのを、内大臣が無理をおっしゃって。「むつかる」は、機嫌を悪くして文句を言うこと。

二 お里邸では所在なくていらっしゃいましょうから、姫君（雲居の雁）をこちらにお連れして。

三 大層こざかしくませた人が一緒にいまして。夕霧のこと。「さくじる」は、物事を詮索すること。

四 同じ邸うちのこととて、つい親しくするのですが。

五 たった一人いらっしゃった姫がお亡くなりになってからは。葵の上のこと。その死は十一年前。

六 うれしいことにこの姫君（雲居の雁）を預かって。

七 私は、心中に不満に存じられますことは、そう存じられますと正直に申し上げただけでございます。大宮の「思ひのほかに隔てありて……」という言葉に対して、心に隔てがないゆえ、思うところを率直に言ったのだと反論する。

（お里下がりをおさせ申し上げなさる）帝はお気持が進まれなかったのに（強引にお迎えをお出しになる）（内大臣）音楽でもなさいませ（雲居雁を）大宮にお預け申しておくのは安心なのですが（雲居雁が）それも困る年頃になりましたので（女御に）（雲居雁を）大宮は大層がっかりなさって（寿命のある限りお世話する大事な宝物と思って）（老の身の憂さつらさも慰めようと思っていましたのに）案外にも他人行儀な冷たい気持をお持ちなのが恨めしいことです（内大臣は）恐縮のていで（深い隔心を抱きますことなどどうしてございましょう）

（がっているようだし）ぶめるに」とのたまひて、にはかにまかでさせたてまつりたまふ。御暇もゆるされがたきを、うちむつかりたまひて、上はしぶしぶに おぼしめしたるを、しひて御迎へしたまふ。「つれづれにおぼされむを、姫君わたして、もろともに遊びなどしたまへ。宮にあづけたてまつりたる、うしろやすけれど、いとさくじりおよすけたる人立ちまじりて、おのづから気近きも、あいなきほどになりにたればなむ」と聞こえたまひて、にはかにわたしきこえたまふ。宮、いとあへなしとおぼして、「ひとりものせられし女子亡くなりたまひてのち、いとさうざうしく心細かりしに、うれしうこの君を得て、生ける限りのかしづきものと思ひて、明け暮れにつけて、老のむつかしさもなぐさめむとこそ思ひつれ、思ひのほかに隔てありておぼしなすも、つらくなむ」と聞こえたまへば、うちかしこまりて、「心に飽かず思ひたまへらるることは、しかなむ思ひたまへらるるとばかり聞こえさせしになむ。深く隔て思ひたまふることはいかでかはべ

八 宮中にお仕えしております者（弘徽殿の女御）が、帝のお気持をお恨みに存じているようでして。

九 何もすることがなくて鬱いでおりますので。弘徽殿の女御は、宮中では始終帝のお相手をしていたと、二四七頁にある。

一〇 楽器の演奏、碁うち、偏つきなどをいう。

一一 人の心ほどいやなものはない。母、祖母としての自分の真心に応えてくれないのを嘆くのである。

一二 何かと分別もつかぬ二人（夕霧と雲居の雁）の気持にしても、私に隠しだてして（あんなことをしていたとは）いやなことです。

一三 しかしまた、それはそれで（子供だから）仕方がないとしても。

一四 あちらのお邸に行ったとて、私の膝もとにいるより安心ということもありますまい。継母の北の方に育てられることになるからである。

一五 もしやちょっとでも隙がありはせぬかと。

一六 この頃は、しきりに姿をお見せになるのであった。本来は月に三日の来訪を許されていた（二二七頁参照）。

夕霧、大宮邸来訪

らむ。内裏にさぶらふが、世の中うらめしげにて、近頃里下がりをしておりますが このころまかでてはべるに、いとつれづれに思ひて屈しはべれば、心苦しう見たまふるを、もろともに遊びわざをもしてなぐさめよと思ひたまへてなむ、あからさまにものしはべる。ほんの一時引き取るのでございます かくまではぐくみ、人となさせたまへるを、おろかにはよも思ひきこえさせじ」と申したまへば、おろそかにはけっして存じ上げぬつもりです たご恩を ここまで立派にお育て下さり 一人前にして下さっ こう

うおぼし立ちにたれば、たとえ大宮がおとめ申されても きっぱりご決心なさったからには とどめきこえさせたまふとも、思い直されるど おぼし返す

べき御心ならぬに、いと飽かずくちをしうおぼされて、「人の心こそ憂きものはあれ。とかく幼き心どもにも、われに隔ててうとましかりけることよ。また、さもこそあらめ、大臣の、ものの心を深う知りたまひながら、われを怨じて、かく率てわたしたまふこと。かしこにて、これよりうしろやすきこともあらじ」と、うち泣きつつのたまふ。

「大宮は」まことにご不満で残念に思われて 気性ではないから 〔大宮〕 気を紛らせるがよいと存じまして 何事も道理をよくわきまえた方なのに 〔雲居雁を〕 連れて行ってしまわれるとは

をりしも冠者の君参りたまへり。もしいささかの隙もやと、このころはしげうほのめきたまふなりけり。内の大臣の御車のあれば、

夕霧

良心にとがめて具合が悪くて　そっと目立たぬように
心の鬼にはしたなくて、やをら隠れて、わが御かたに入りゐたまへり。内の大殿の君達、左少将、少納言、兵衛の佐、侍従、大夫などいふも、皆ここには参りつどひたれど、御簾のうちはゆるしたまはず。左衛門の督、権中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのままに、今も参りつかうまつりたまふことねむごろなれば、その御子どももさまざま参りたまへど、この君に似るにほひなく見ゆ。

お部屋　ご用をお勤め申されることは丁重なので　〔大宮の所に〕　美しさはないと　夕霧

ご愛情も　〔夕霧を〕　この上なく深くお慈しみだったが

大宮の御心ざしも、なずらひなくおぼしたるを、ただこの姫君をぞ、気近うらうたきものにおぼしかしづきて、御かたはらさけず、うつくしきものにおぼしたりつるを、かくてわたりたまひなむが、いとさうざうしきことをおぼす。殿は、「今のほどに内裏に参りはべりて、夕つ方迎へに参りはべらむ」とて出でたまひぬ。いふかひなきことを、なだらかに言ひなして、さてもやあらましとおぼせど、なほいと心やましければ、人の御ほどのすこしもものしくなりなむに、かたはならず見なして、そのほど、心ざしの深さ浅さのおもむ

身近なかわいいものと思われて大切になさって　いつもお側に置いて　こうして行ってしまわれるのが　内大臣　〔雲居雁を〕　おだやかに取りつくろって　〔内大臣は〕　りいかにもおもしろくないので　〔雲居雁への〕　その際

一　左近衛府の少将。正五位下相当。名門の子弟のなることが多い。以下みな内大臣の子息。前に「腹々に御子ども十余人」（一三二頁）とあった。一族を引き連れて来ているのである。
二　太政官少納言局に属し、詔勅、宣命の清書、儀式、除目、叙位の事務を行う。従五位下相当。
三　兵衛府の次官。従五位上相当。名門の子弟がなる。
四　中務省に属し、天皇の側近に侍し、ご用を勤め、輔佐する。従五位下相当。名門の子弟がなる。
五　五位の者をいう。
六　お部屋の中に入ることはお許しにならない。大宮ひいては雲居の雁を重々しく扱うさま。
七　前出（一二二三頁）。内大臣の異母弟。
八　従三位相当。同じく異母弟。
九　故太政大臣のお躾に従って。故大臣が、生前、継子たちに大宮を重んずるよう仕向けたのである。
一〇　左衛門の督と権中納言の子供。
一一　ただこの雲居の雁一人を。雲居の雁を孫娘としてかわいがった大宮の女らしい気持をいう。
一二　今さら言っても仕方のないことだから。出来てしまった二人の仲は悔んでも始まらないから。
一三　そうもしようかと。結婚させてやろうかとも。
一四　男君の官位が少しは高くなったら、結婚の相手として見苦しくないと認めて。夕霧は今六位の擬文章生にすぎない。

一五 事改めての話のように段取りをつけて婿取りしよう。きちんとけじめをつけたいという気持。
一六 同じ邸（大宮邸）に住んでいては。
一七 大宮も、どうせきつくご意見なさることもあるまい。大宮は二人に甘いからである。

大宮、雲居の雁を呼び、別れを惜しむ

きをも見定めて、ゆるすとも、〔婿として〕認めるにしても一五ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ、制しいさむとも、今意見したところで一一六所にては、子供のことだから幼き心のままに、見苦しいこと見苦しうもしようこそあらめ、一七宮も、よもあながちに制しのたまふことあらじ、とおぼせば、女御の弘徽殿の女御のご退屈を理由に御つれづれにことづけて、ここにもかしこにもおいらかに取りつくろって〔雲居雁を〕わたしたまふなりけり。

大宮からのお手紙で宮の御文にて、「大臣こそ、〔私を〕お恨みもしたまはめ、君は、あなたはこうなっても私の気持のほどもお分りでしょう心ざしのほども知りたまふらむ。こちらへ来てお顔を見せて下さいわたりて見えたまへ」と聞こえたまへれば、〔雲居雁は〕大層美しくお召し換えになっておいでになったいとをかしげにひきつくろひてわたりたまへり。十四になむおはしける。一八かたなりに見えたまへど、いと子めかしう、しめやかに、うつくしきさましたまへり。（大宮）私の側からお放し申さずかたはらさけたてまつらず、一九明け暮れのもてあそびものに思ひきこえつるを、〔お別れしては〕きっとさびしくてたまらないでしょうもあるべきかな。残りすくなき齢のほどにて、あなたのお行く末を見届けられないことでしょうと寿命を嘆いておりましたのにまじきことと、命をこそ思ひつれ、二〇今さらに見捨ててうつろひたまふやいづちならむと思へば、いとこそあはれなれ」とて泣きたまふ。

一八 まだ十分女らしくはなっていらっしゃらないけれども、大層おっとりとして、落着きがあり、可憐な風情がおありになる。「子めかし」は、子供のように大らかなこと。貴族の姫君に対する誉め言葉である。
一九 朝晩私の楽しいお相手とお思いしてきましたのに。「もてあそびもの」は、相手にして心を慰めるもの。
二〇 それを今さら見捨てて行っておしまいになる先が、一体どこかと思うと、不憫でなりません。自分の存命中に引き離されて行く先が、継母のもとであることをあわれむ。

一 夕霧とのことであれこれ言われたことを消え入りたいように思っておいでなので。
二 私は、あなたさま（雲居の雁）を、同じくご主人さまとお頼り申し上げておりましたのに。
三 殿さま（内大臣）は、ほかのご縁組をお考えになることがございましても。
四 人の宿世はそれぞれで、とても先のことは分らないのだから。「宿世」は、前世からの因縁。
五 いえいえ、（内大臣は）わが君（夕霧）を、一人前ではないとお侮り申していらっしゃるのでしょうよ。乳母の身晶屓が言わせる言葉。
六 でも。今は六位だが。

夕霧、大宮のはからいで、雲居の雁と対面

七 物陰に入りこんで、この様子をご覧になっていたが。屏風などのうしろに佇んでいたのであろう。
八 夕暮の、人がばたばたする騒ぎに（紛れて）。
九 二人を対面させなさった。許可したのは大宮。

姫君は、雲居の雁 はづかしきことをおぼせば、顔ももたげたまはで、ただ泣きにのみ泣きたまふ。男君の御乳母、宰相の君出で来て、「同じ君とこそ頼みきこえさせつれ、くちをしくかくわたらせたまふこと。殿はことざまにおぼしなることおはしますとも、さやうにおぼしなびかせたまふな」など、ささめき聞こゆれば、いよいよはづかしとおぼして、ものものたまはず。「いで、むつかしきことな聞こえられそ。人の宿世宿世、いと定めがたく」とのたまふ。「いでや、ものげなしとあなづりきこえさせたまふにはべるめりかし。さりとも、げに、わが君や人に劣りきこえさせたまふと聞こしめしあはせよ」と、なま心やましきままに言ふ。

冠者の君、夕霧 もののうしろに入りゐて見たまふに、人のとがめむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心細くて、涙おしのごひつつはするけしきを、御乳母、宰相の君 いと心苦しう見て、宮にとかく聞こえたばかりて、夕まぐれの人のまよひに、対面せさせたまへり。かたみ

（宰相君）二 夕霧 お恨めしいことにこうしてお移りあそばすとは 宰相の君 大宮 何かと上手にお取りつくろい申して 〔二人は〕互 人が見咎めるのも 何でもない時は気にもしたけれども 〔今は〕 実際に 私どもの若君が他人にひけをおとりになる方かどうか誰にでもお聞き合せ下さいませ 何やら腹立たしいのにまかせて言い立てる

そんなご意向にお従いなさ ひそひそと申し上げるので 〔雲居雁は〕 面倒なことは申し上げなさるな （大宮）いえもう （宰相君）五 六 七 八 九

一〇 内大臣のなさり方が大層ひどいので。雲居の雁を引き取ろうとする処置をいう。
一一（あちらへ行っておしまいになったら）あなたがさぞ恋しく思われて、それがたまらないことでしょう。
一二 どうして、もっと機会のあるはずだった日頃を、お逢いしないで別々にいたのでしょう。こんな騒ぎになる前、学問所に籠る日の多かったことを悔む。
一三 私も。親しい者同士の間で使う一人称。男女ともに使う。
一四 明りをおつけし。燈台に油皿を置き燈心を燃やす。室内の照明である。
一五 内大臣が宮中から退出してこられた様子で。前に宮中に参内したことが見える（二五〇頁参照）。
一六 女房たちが「それお帰りだ」と怖れあわてるので。
一七（一方夕霧の方は）そんなにやかましく言われるのなら、言われても構わないと。「れ」は受身。
一八 雲居の雁の乳母。
一九 按察使の大納言様も、どうお聞きになることでしょう。前にもこの人の思惑を気にしていた（二四三頁参照）。
二〇（ご婚儀は）結構なこととはいえ。
二一 せっかくの結婚の相手が六位風情とのご縁では。「もののはじめ」は、人生の門出というほどの気持で婚儀、結婚をいう語。

にものはづかしく胸つぶれて（胸がどきどきして）、ものも言はで泣きたまふ。「大臣の（夕霧）御心のいとつらければ、さはれ思ひやみなむと思へど（諦めてしまおうと思いますが）、恋しうおはせむこそわりなかるべけれ。などて、すこし隙ありぬべかりつる日ごろ、よそに隔てつらむ」とのたまふさまも、いと若うあはれげなので（とても子供っぽく痛々しげな）ければ、「まろも、さこそはあらめ」とのたまふ。「恋しとはおぼしなむや」とのたまへば、すこしうなづきたまふさまも、幼げなり。（雲居雁の）（雲居雁）（夕霧）（恋しいと思って下さるだろうか）（きっと同じことでしょう）

御殿油参り、殿まかでたまふけはひ、こちたく追ひののしる御前の駆の声に、「そそや」など懼ち騒げば、いと恐ろしとおぼしてわななきたまふ。さも騒がればと、ひたぶる心に、ゆるしきこえたまはず。御乳母参りてもとめたてまつるに、けしきを見て、あな心づきなや、げに、宮知らせたまはぬことにはあらざりけりと思ふに、いとつらく、「いでや、憂かりける世かな。殿のおぼしのたまふことは（物々しく大声で先払いをする）（雲居雁は）（雲居雁を）（お放しなさらない）（この様子を見て）（お捜し申すうちに）（大宮がご存じないことではなかったのだと思うと）（乳母）（情けないことだ）（殿さまがお腹立ちでお叱りになるのは）（今さら申すまでもなく）さらにも聞こえず、大納言殿にもいかに聞かせたまはむ。めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ」と、つぶやくもほの聞こゆ。（ぶつぶつ言うのも）

一（乳母は）二人のいる屏風のすぐうしろまで捜してきて、嘆いているのだった。

二 馬鹿にするのだなとお思いになるにつけ。「はしたなむ」は、いたたまれぬ思いをさせること。

三 あなたを思って流す血の涙に深く染まった袖の色を、六位風情の浅緑にすぎないとけなしていいものでしょうか。「言ひしをる」は、けなして人を傷つけること。

四 さまざまのことで、わが身の不運のほどが知られますのは、どのような定めの二人の仲なのでしょう。「いろいろに」は、夕霧の歌に「くれなゐ」「あさみどり」とあったのに応じたもの。「中の衣」は、男女の仲を意味する歌語。

五（雲居の雁の一行は）お車を三輛ばかり続けて、前駆の声も低く急いで出てゆかれる気配を聞くのも。

雲居の雁と別れた夕霧の嘆き

六 気もそぞろな思いがするので。「静心」は、落着いた気持。

一ただこの屏風のうしろに尋ね来て、嘆くなりけり。（夕霧）男君、われをば位なしとて、二はしたなむるなりけりとおぼすに、世の中らめしければ、あはれもすこしさむるここちして、めざまし。（位が低いといって）「かれ聞きたまへ。（恋心もすこしさめる気持がして）（許しがたく思う）（夕霧）あれをお聞きなさい

三くれなゐの涙に深き袖の色を
　あさみどりとや言ひしをるべき

（顔が上げられない）はづかし」とのたまへば、

（雲居雁）四いろいろに身の憂きほどの知らるるは
　いかに染めける中の衣ぞ

（邸内に）ものたまひ果てぬに、殿入りたまへば、（雲居雁は）仕方なくてあちらに行かれわりなくてわたりたまひぬ。

男君は、（あとに残されたお気持も）立ちとまりたるここちも、（とても体裁が悪く）いと人わろく、（胸がいっぱいで）胸ふたがりて、（お部屋で）わが御かたに臥したまひぬ。五御車三つばかりにて、忍びやかに急ぎ出でたまふけはひを聞くも、六静心なければ、（大宮）宮の御前より、（こちらへ）「参り

七 誰にも気がねのない所にと。二条の東の院にある曹司（学問所）。

八（一人になりたいと自分から求めて出て来たことと）誰のせいでもなく心細い思いをしながら行くと。

九 霜が寒々と凍てついているまだ暗い夜明けの空を、かきくもらして涙の雨が降ることよ。夕霧心中の独詠。「霜氷」は、凍てついた霜をいう歌語。

一〇 五節の舞姫をさし上げなさる。「五節」は、大嘗会、新嘗会にあたり、十一月の中の丑、寅、卯、辰の日に行われる儀式。最後の辰の日が豊明節会で、舞姫が天女の舞を模したという舞を奉ずる。ここはその舞姫のこと。通例、公卿より二人、殿上人、受領より二人（大嘗会には三人）献上する。この時は新嘗会。

一一 舞姫に付き添う童女。卯の日（新嘗会）にこれを清涼殿に召して天皇が御覧になる。童女御覧という。

一二 花散里。（松風一九頁参照）

源氏、五節に惟光の娘を奉る

一三 舞姫参入の日のお付きの女房たちの衣裳を調えさせなさる。源氏が分担させるのである。丑の日、舞姫参入の儀式があり、その夜天皇が常寧殿（舞姫の宿所）に出御して、舞姫の舞うのを見る。これを帳台の試みという。

一四 もとの斎宮の女御。

一五 舞姫に付き添って下ざまの用を勤める女房。

一六 去年は、五節なども停止になったのが。藤壺崩御による諒闇のためである。

いらっしゃい　仰せがあるが

たまへ」とあれど、寝たるやうにて動きもしたまはず。涙のみとまらねば、〔翌早朝〕嘆きあかして、霜のいと白きに急ぎ出でたまふ。〔泣き明かして〕うちはれたるまみも、目もと　人に見えむがはづかしきに、女房に見られては気がひけるし　宮はた、大宮は大宮で　召しまつはすべ　お側からお放しなさら　ぬだろうから　かめれば、心やすき所にとて、急ぎ出でたまふなりけり。道のほど、その途中　人やりならず、心細く思ひ続くるに、空のけしきもいたう曇りて、まだ暗かりけり。

（夕霧）霜氷うたてむすべる明けぐれの

空かきくらし降る涙かな

源氏

大殿には、今年、五節たてまつりたまふ。〔源氏としては〕何ほどのご準備でも　期日も迫ったことなので　何ばかりの御いそぎなないが　らねど、童女の装束など、近うなりぬとて、急ぎせさせたまふ。東の院には、参りの夜の人々の装束せさせたまふ。源氏　全般にわたる　殿には、おほかた準備をなさり　衣裳など　えもいわず立派にして　のことども、中宮よりも、童女、下仕への料など、えならでたてまさし上げなさった　物足りなかったこと　つれたまへり。過ぎにし年、五節などとまれりしが、さうざうしかも加わって　今年はいつもより派手にと思ってい　りしつもりも取り添へ、上人のここちも、殿上人の気持も　常よりもはなやかに思ふ

一 舞姫を出す家々で競争して。
二 公卿の分の五節を出す一人。雲居の雁生母の再婚の相手として既出（二三一頁）。
三 内大臣の弟（二二三頁参照）。同じく公卿の分。この年は、太政大臣である源氏を加えて、特に公卿から三人出したことになる。
四 殿上人からの五節の分は、良清、今は近江の守で、左中弁（正五位上相当）を兼任しているのが奉った。良清は、須磨明石にも同行した源氏の家司。当時少納言（明石二六六頁）、帰京後衛門の佐（澪標三四頁）。
五 舞姫を皆宮中にお残しになって、宮仕えをするようにと、帝から前もって特別の仰せ言がある年なので。
六 源氏がさし出される舞姫は。
七 源氏の乳母子。一巻夕顔の巻以来活躍する。
八 左京職（左京の戸籍、租税、訴訟をつかさどる役所）の長官。従四位下相当。
九 惟光は、つらいことと思ったけれど。娘を人目にさらすのをつらがる。
一〇 按察使の大納言が、妾腹の娘をさし上げられるというのに。
一一 そなたが秘蔵娘をさし出したところで、何のみっともないことがあろう。
一二 実家（惟光の家）で十分に仕込んで。
一三 舞姫に付き添う女房。規定では八名。
一四 当日（丑の日）の夕方に。宮中に参入するのは夜。（図録八参照）

大層立派にできる限りの用意をなさるとの噂で

べかめる年なれば、一所々いどみて、いといみじくよろづを尽くした

ある

まふ聞こえあり。二按察使の大納言、左衛門の督、三上の四五節には、良清、今は近江の守にて左中弁なるなむ、たてまつりける。五皆とどめさせたまひて、宮仕へすべく、仰せ言ことなる年なれば、女をおのおのたてまつりたまふ。六殿の舞姫は、七惟光の朝臣の、摂津の守にて

〔源氏が〕

八左京の大夫かけたる女、容貌などいとをかしげなる聞こえあるを召す。九からいことに思ひたれど、「〔源氏〕一〇大納言の、外腹の女をたてまつらるなるに、一一朝臣のいつき女出だしたてたらむ、何の恥かあるべき」と、

お責めになるので　困って

さいなめば、わびて、同じくは宮仕へやがてせさすべく思ひおきてたり。

いつそのことそのまま宮仕えさせようというつもりになって

舞の稽古などは

いる

舞ならはしなどは、里にていとようしたてて、一三かしづき

身近に付き添う役目の者は

など、したしう身に添ふべきは、いみじう選り整へて、一四その日の夕

〔二条院に〕

つけて参らせたり。源氏殿にも、一五御方々の童女、下仕へのすぐれたるを

選び出される者たちの気持は

と、御覧じくらべ、選り出でらるるこちどもは、それぞれ身の程相応にほどほどにつけて、

とても誇らしげである

〔源氏の〕

いとおもだたしげなり。一六御前に召して御覧ぜむうちならしに、

一五 紫の上や花散里方に仕える童女や下仕えの中の優れている者をと。舞姫の付添いに選び出すのである。

一六 帝の御前に召してご覧になる際の下稽古に。卯の日の童女御覧に備えての練習である。

一七（そうしてご覧になってみると）誰一人落すことができず、皆それぞれ美しい童女たちの姿、容貌なので、ほとほとお困りになって。

一八 もう一人の舞姫用の童女。「料」は、必要なもの。

一九（容姿は優劣がつけがたいので）ただ態度と心遣いのいかんによって選ばれたのである。

夕霧、惟光の娘を見て、恋う

二〇 ひどく鬱ぎこんで。「屈ず」は「屈す」の促音を「ん」で表記したもの。

二一 書物。漢籍。大学の教科書である。

二二（二条の院内を）人々に入りまじってあちこち見てまわりなさる。

二三 紫の上の御殿では、御簾の前にもお近づけになるようなお扱いはなさらず。主語は、源氏。「御簾の前」は、簀子である。

二四（源氏は）ご自分のお心癖から、どのようにお考えになったのだろうか。藤壺とのこともあったので、夕霧を義母に近づけないのか、という含み。

二五 重だった女房たちも、よそよそしいのだが。

二六 舞姫（惟光の娘）を、車から大事に降ろして。

二七 廂の隅の妻戸のある一画に屏風などを立て廻らして。「間」は、柱と柱の間。

御前をわたらせてと定めたまふ。捨つべうもあらず、とりどりなる童女の様体、容貌をおぼしわづらひて、（源氏）「今一所の料を、これより（わが家からさし上げたいくらいだ）たてまつらばや」など笑ひたまふ。ただもてなし用意によりてぞ選びに入りける。

（通らせてみようとおきめになる）

夕霧

大学の君、胸のみふたがりて、（ただもう胸がいっぱいで）ものなども見入れられず、屈じいたくて、書も読までながめ臥したまへるを、（食事なども箸を取る気がせず）（ぼんやり横になっていらしたが）心もやなぐさむと立ち出でて、（東の院を）まぎれありきたまふ。さま、容貌はめでたくをかしげにて、（夕霧は）静やかになまめいたまへれば、若き女房などは、（優雅でいらっしゃるので）いとをかしと見てまつる。上の御方には、御簾の前にだに、もの近うもてなしたまはず、わが御心ならひ、いかにおぼすにかありけむ、うとうとしければ、御達なども気遠きを、今日はものまぎれに入り立ちたまへるなめり。舞姫かしづきおろして、妻戸の間に屏風など立てて、（本当にお美しいと）（五節の騒ぎに紛れてはいり込んでいらっしゃったのであろう）（他人行儀なおあしらいなので）（臨時の座席を設けてあるところに）（夕霧が）そっと寄りてのぞきたまへば、なやましげにて添ひ臥したり。（舞姫は）苦しそうに物に寄りかかっている）ただかの人の御ほどと見えて、今すこしそ（ちょうど雲居の雁ぐらいの年格好と見えて）（もうすこし背が

一　舞姫の衣の裾を引っ張って、衣ずれの音をおさせになる。気づかせるしぐさ。

二　天上におわす豊受姫に仕える宮人も、わがものと思う気持を忘れないで下さい。「とよをかびめ」は、伊勢外宮の豊受大神であろう。五穀をつかさどる。「宮人」は、五節の舞姫をいう。「しめ」（標）は、占有の印し。神事の注連（縄）を響かせ、「とよをかびめ」の縁語。「みてぐらはわがにはあらずあめにますとよをかびめの宮のみてぐら」（『拾遺集』巻十、神楽歌）

三　ずっと前から思っていたのです。「をとめこが袖ふる山の瑞垣の久しき世より思ひそめてき」（『拾遺集』巻十九雑恋、柿本人麿）による。「瑞垣の」までが「久しき」の序。「瑞垣」は、神社の玉垣。「袖ふる山」に「布留山」（大和の国、石上神宮がある）を詠み込む。

四　あまりにも唐突な仰せである。草子地。

五　介添えの女房たち。

六　浅葱の色がおもしろくないので。「浅葱」は、六位の袍の色（一二一〇頁注一三参照）。

五節の日、源氏、昔の五節の君を思い、文をやる

七　五節だからということで、直衣（貴族の平常着）など、特別の色の衣服を勅許されて参内なさる。太政大臣の子息として直衣の参内を特に許されるのである。直衣には位階による色目の差はない。ここは、若年の冬の装束で、桜襲（表白、裏赤）であろう。

高くびやかに、様体（姿つきなど風情があり）などのことさらびび、（美しいところは）をかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければ、こまかには見えねど、（はっきりとはしないけれど）ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、（全体の感じが大層よく似ている様子なので）心移るとはなけれど、ただにもあらで、（気持を抑えかねて）衣の裾を引き鳴らいたまふ。何心もなく、（〔舞姫は〕何か分らず）あやしと（変だと）思ふに、

（〔夕霧〕）「あめにますとよをかびめの宮人も

わが心ざすしめを忘るな

（〔雲居雁に〕）みづがきの」とのたまふぞ、うちつけなりける。（〔舞姫は〕）若うをかしき声なれど、誰ともえ思ひたどられず、（思いつないで）なまむつかしきに、（薄気味悪く思うところへ）化粧じ添ふとて（化粧し直そうと）騒ぎつる後見ども、近う寄りて人騒がしうなれば、（〔夕霧は〕）いとくちをしうて、立ち去りたまひぬ。

浅葱の心やましければ、内裏へ参ることもせず、もの憂がりたまふを、五節にことづけて、直衣など、さまかはれる色ゆるされて参りたまふ。きびはにきよらなるものから、まだきにおよすけて、さ（お年のわりに大人ぶって）（いかにも幼げで美しい方であるが）（浮かれて歩き廻られる）帝よりはじめたてまつりて、（皆が大事になさることは一通）おぼしたるさまなべ

八 中の丑の日の五節参内のお支度は、どの家もまさり劣りなく、それぞれ趣向をこらしてこの上なく立派になさるが。

九 太政大臣（源氏）の（惟光の娘）と按察使の大納言のとが。

一〇 源氏の舞姫は、衣裳がいかにもきれいではなやかに、惟光の娘とも見えぬほど美々しく着飾った姿かたちが、真似のできないほど見事なのを。「そのもの」は、誰それ、何の誰がし、の意。

一一 昔お心をひいた舞姫の姿を思い出される。「少女」は、五節の舞姫。「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ少女の姿しばしとどめむ」（『古今集』巻十七雑上、五節の舞姫を見てよめる　良岑宗貞）。源氏の恋人であった筑紫の五節（大宰の大弐の娘）である（二巻花散里一九五頁、須磨二四一頁、二四三頁、明石三〇八頁参照）。

一二 辰の日（豊明節会がある）の夕方、源氏は手紙を筑紫の五節のもとにおやりになる。

一三 天つ少女だったそなたも年とったことだろう、昔の友の私も年とったのだから。「天つ袖」は「ふる」の枕詞。「ふる」は「振る」と「古る」を掛ける。天女の舞を奏する「少女」の縁語。

一四 あれからの長の年月を数えてふと催された感慨を、抑えかねてお便りなさっただけのことが、胸をときめかせるのも、はかないことである。源氏のお手紙を受け取った筑紫の五節の気持をいう草子地。

てならず、世にめづらしき御おぼえなり。（またとない帝のおおぼえである）

五節の参る儀式は、いづれともなく、心々に二なくしたまへるを、舞姫の容貌、大殿と大納言殿とはすぐれたりと、〔人々が〕ほめそやすめでののしる。げにいとをかしげなれど、ここしううつくしげなることは、なほ大殿のには、え及ぶまじかりけり。（かないそうもなかった）（なる）（おっとりとして可憐な感じでは）（ほど二人とも大層美人だが）ものきよげに今めきて、そのものとも見ゆまじうしたてたる様体などの、ありがたうをかしげなるを、かう誉めらるるなめり。例の舞姫どもよりは、皆すこしおとなびつつ、げに心ことなる年なり。殿参りたまひて御覧ずるに、昔御目とまりたまひし少女の姿をおぼし出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文のうち思ひやるべし。（まことに格別な年である）（源氏は参内なさって）（年長で）（例年の）（ご文面はご想像にまかせます）

（源氏）一三
をとめ子も神さびぬらし天つ袖
ふるき世の友よはひ経ぬれば

一四
年月の積りを数へてうちおぼしけるままのあはれを、え忍びたまはぬばかりの、をかしうおぼゆるも、はかなしや。

一 わざわざお言葉を頂きますと、私にも今日のことのように思われます、君のお情けを頂きましたことも。「ひかげ」は「日光」と「日蔭の蔓」を掛け、「かけ」と縁語。「日蔭の蔓」は、さるおがせ（木の枝から糸状に分岐して垂れる黄緑色の地衣類）、辰の日、舞姫と神事奉仕の小忌の上達部、殿上人が插頭に掛ける。後にはこれにかたどった青い組紐を用いる。

二 青い紙に、蠟で模様を摺り出したものかという（『河海抄』）。辰の日に、舞姫が青摺の唐衣を着、小忌の人々も束帯の上に青摺を着るのに因む。青摺は、山藍で青く模様を摺り出したもので、神事に着用する。

三 草の字を多く交えて乱れ書いてあるのも。「草」は、万葉仮名の草体。漢字の草書程度に崩した仮名。

四 近江の守（良清）の娘は、辛崎の祓えをしに。「辛崎」は近江の琵琶湖畔。祓えの場所。舞姫は五節の前と後に祓えをするが、これは神事を解くためのもの。

五 摂津の守（惟光）の娘は難波でと。「難波」も祓えの場所として名高い（二巻明石三〇四頁、澪標三五頁参照）。それぞれ父の任国で祓えをするのである。

六 按察使の大納言も、娘を改めてさし上げる旨人を介して奏上なさった。これは入内させる積りである。

七 左衛門の督は、資格のない人をさし上げて、お咎めがあったが、それも残るよう仰せられた。帝恩の広大さをいう。実子でない娘をさし出したのであろう。

八 「典侍の欠員のところへ」と人を介して源氏に申し上げたので。典侍は内侍司の次官。定員四人。

（筑紫五節）一 かけて言へば今日のこととぞ思ほゆる

日蔭の霜の袖にとけしも

当座によく問に合せて　誰の手か分らぬように書いた

青摺の紙よくとりあへて、まぎらはし書いたる濃墨、薄墨、草がち

にうちまぜ乱れたるも、人のほどにつけてはをかしと御覧ず。冠者

あの身分の者としては気が利いていると

の君も、人の目とまるにつけても、人知れず思ひありきたまへど、

惟光の娘がお目にとまるにつけても　ひそかに思いをかけて徘徊なさるけれども

夕霧

大層無愛想にするので

〔介添たちは〕

あたり近くだに寄せず、いとけけしうもてなしたれば、ものつつま

もの恥ずかしい

年頃の身では　ため息をつくばかりである　娘の器量は　大層心に残って

しきほどの心には、嘆かしうてやみぬ。容貌はしも、いと心につき

つれない雲居の雁に逢えぬ慰めにも　手に入れたいものと　〔夕霧は〕

て、つらき人のなぐさめにも、見るわざしてむやと思ふ。

そのまま舞姫を皆宮中にお残しあそばして　宮仕えするようにとの帝のご内意が示されたが

やがて皆とどめさせたまひて、宮仕へすべき御けしきありけれど、

今度は一応退出させて

このたびはまかでさせて、近江のは辛崎の祓へ、摂津の守は難波と、

皷って退出した

いどみてまかでぬ。六大納言もことさらに参らすべきよし奏せさせた

まふ。左衛門の督、その人ならぬをたてまつりて、咎めありけれど、

それもとどめさせたまふ。摂津の守は、惟光「典侍あきたるに」と申さ

せたれば、そのように骨を折ってやろうかと　源氏　さもやいたはらましと大殿もおぼいたるを、夕霧　かの人は聞

九 自分の年齢や位などがこんなに貧弱でなかったなら、（彼女を欲しいと）願い出てみようものを。以下「やみなむこと」まで、夕霧の心中。

夕霧、惟光の娘に文をやる

一〇（惟光の娘の）兄弟で童殿上している者が。「童殿上」は、宮中儀礼を見習うため、元服前に特に殿上を許されることをいう。「せうと」は、女のきょうだいから男のきょうだいをいう語。

一一 お前がいつも姉妹に会っているのもうらやましいが。「まし」は、「いまし」の「い」が脱落した形。同等または目下の者に対する二人称。

一二 まして、どうして若君さまにはお目通りさせましょう。

一三 前々から、親がこのような文使いはしてはならないとやかましく言うのにと、難儀に思うが。

一四 夕霧の文を見て、すばらしいと思った。

一五 緑の薄様に書いて、色の取り合せよろしく紙を重ねてあるのに。「薄様」は、薄い鳥の子紙。種々の色に染めて、恋文に用いる。歌の「ひかげ」（日蔭の蔓）にちなんで、緑色の紙を用いた。

きたまひて、いとくちをしと思ふ。わが年のほど、位など、かくものげなからずは、乞ひ見てましものを、思ふ心ありとだに知られでやみなむこと、と、わざとのことにはあらねど、うち添へて涙ぐまるるをりをりあり。

（大変残念に思う）（〔相手に〕思いを寄せているとさえ知られずに終るのかと）（特別強く執心しているのではないが）（〔雲居雁のことに〕）

一〇兄の童殿上する、常にこの君に参りつかうまつるを、例よりも（夕霧）（参上してご用を勤めているのを）（親しげに話をしかけられて）なつかしうかたらひたまひて、「五節はいつか内裏へは参る」と問ひたまふ。「今年とこそは聞きはべれ」と聞こゆ。「顔のいとよかりしかば、すずろにこそ恋しけれ。ましが常に見るらむもうらやましきを、また見せてむや」とのたまへば、「いかでかさははべらむ。心にまかせてもえ見はべらず。男兄弟とて近くも寄せはべらねば、まして、いかでか君達には御覧ぜさせむ」と聞こゆ。「さらば文を紙だけでも だに」とて賜へり。さきざきかやうのことは言ふものをと苦しけれど、せめて賜へば、いとほしうて持て去ぬ。年のほどよりは、されてやありけむ、をかしと見けり。緑の薄様の、このましきかさねな

（夕霧）（〔兄〕今年のうちと聞いております）（何とはなしに恋しく思われる）（〔夕霧〕）（〔兄〕どうしてそんなことができましょう）（会わせてくれないか）（私だって思うようにも会えないのです）（〔夕霧〕）（手）（〔娘は〕）（困ってしまって）（無理に下さるので）（ませて）（いたのであろうか）

一 日の光にもはっきり分ったでしょうか、少女が天の羽衣の袖を振って舞った姿、五節の舞姿に恋した私の心は。「ひかげ」は「日光」と「日蔭の蔓」の掛詞。「かけ」の縁語。

二 惟光のこと。「主」は軽い敬語。

三 どうした手紙だ。

四 お殿さまの冠者の君が、こうこうとおっしゃって下さったのです。

五 惟光は、今までの腹立ちはどこへやら、すっかり顔をほころばせて。

六 お前などは、同じ年頃だが、お話にならぬくらい頼りないようだな。「きむぢ」は、二人称。「まし」よりはやや敬意がある。「はかなかめりかし」は「はかなかるめりかし」の撥音便化したものの撥音無表記の形。

七 この若君（夕霧）が、娘を多少とも人並みにお考え下さるようであるなら。夫人の一人としての待遇を考えて下さるようなら、の意。

八 まことに頼もしい。子の夕霧もおそらく父に似ているであろうという気持。

九 あの明石の入道のようになるかもしれぬ。もと受領であったが、娘を源氏にさし上げて姫君誕生の幸運を見た例を想起する。

一〇 家中、宮仕えの支度に一所懸命になっている。惟光の意見はあまり問題にされない。

惟光、夕霧の文を見て喜ぶ

筆跡はまだ幼いけれども　大層みごとに

るに、手はまだいと若けれど、生ひ先見えて、いとをかしげに、

（夕霧）一

ひかげにもしるかりけめやをとめ子が

天の羽袖にかけし心は

隠す暇もない　度を失って　急に側にやってきた　〔二人は〕

二人見るほどに、父主ふと寄り来たり。恐ろしうあきれて、え引き隠さず。「なぞの文ぞ」とて取るに、面赤みてゐたり。「よからぬ

（惟光）三　〔二人は〕　（惟光）

責めるので　ことをしたな

わざしけり」と憎めば、兄逃げて行くを、呼び寄せて、「誰がぞ」

（兄）四　（惟光）　誰のだ

と問へば、「殿の冠者の君の、しかしかのたまうて賜へる」と言へば、名残なくうち笑みて、「いかにうつくしき君の御され心なり。

五　六

きむぢらは、同じ年なれど、いふかひなくはかなかめりかし」など

惟光の妻

誉めて、母君にも見す。「この君達の、すこし人数におぼしぬべか

（惟光）七

並みの宮仕えをさすよりは　〔夕霧に〕　さし上げたいものだ　源氏

らましかば、おほぞうの宮仕へよりは、たてまつりてまし。殿の御

さり方を見ていると　いったんお相手になさった人を　ご自分からはお忘れにならぬよう

心おきてを見るに、見そめたまひてむ人を、御心とは忘れたまふま

だから

じきにこそ、いとたのもしけれ。明石の入道の例にやならまし」など言へど、皆急ぎ立ちにたり。

八　九　一〇

源氏、夕霧を花散里に預ける

一一 たまらなく恋しい面影の人（雲居の雁）に。「面影」は、心に思い描く顔、姿。

一二 雲居の雁が住んでいらしたお部屋や、長年一緒に遊んだ所ばかり、いよいよ思い出されるので、ご自分のお邸さえいとわしく思われては。「里」は、私邸。夕霧にとっては、生れ育った母方の大宮邸がそれである。

一三 花散里。二条の東の院の西の対に住む。夕霧の学問所（曹司）も東の院にある（一二六頁参照）。

一四 こうした幼いうちから（夕霧を）世話しつけておいて、面倒をみてやって下さい。花散里に、これからの夕霧の母親代りの世話を頼む。

一五 夕霧は、花散里を何かの折に几帳や御簾の間などから、わずかに拝見するにつけても。以下「容貌の……」から「思ひ捨てたまはざりけり」、「わが、あながちに……」から「あひ思はめ」まで、夕霧の次々に抱く感懐。

夕霧の花散里評

一六 自分が、むやみに、つれない人（雲居の雁）のお顔を忘れられずに恋しく思っているのも、（我ながら）つまらないことだ。

夕霧

かの人は、〔惟光の娘に〕文をだにえやりたまはず、立ちまさるかたのことし心にかかりて、ほど経るままに、わりなく恋しき面影にまたあひ見でやと思ふよりほかのことなし。宮の御もとへも、あいなく心憂くて参りたまはず。おはせしかた、年ごろ遊び馴れし所のみ、思ひ出でらるることまされば、里さへ憂くおぼえたまひつつ、また籠りゐたまへり。殿は、この西の対にぞ、聞こえあづけたてまつりたまひける。「大宮の御世の残りすくなげなるを、おはせずなりなむのちも、かく幼きほどより見ならして、後見おぼせ」と聞こえたまへば、だのたまふままの御心にて、なつかしうあはれに思ひあつかひたてまつりたまふ。

ほのかになど見たてまつるにも、容貌のまほならずもおはしけるかな、かかる人をも、人は思ひ捨てたまはざりけり、など、わが、あながちに、つらき人の御容貌を心にかけて恋しと思ふもあぢきなしや、心ばへのかうやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめ、と

夕霧
もっと大事な雲居の雁のことが
〔惟光の娘に〕
二度と会えないのかと
どうにも気が進まないので
大宮
〔学問所に〕
源氏
夕霧のお世話をご依頼申し上げなさった
ご余生も長くはなさそうだから
（源氏）
お亡くなりのあとも
〔花散里は〕
源氏のお言葉通りになさる方なので
やさしくこまごまと気を配ってお世話申し上げなさる
お顔立ちはおきれいでなくいらっしゃるお方だ
父上というお方はお見限りにならなかったのだ
性質がこの花散里のように素直な人がいたら愛し合いたいものだ

一 そうかといって、対坐して見ていられないような不器量なのも、相手の女が気の毒だ。以下「むべなりけり」まで、同じく夕霧の思惟。

二 こうして（花散里を世話して）長年たっていらっしゃるが。

三 浜木綿の歌にあるほどの隔てを置いては。几帳などを隔てに、直接顔を見ないようにするのをいう。「み熊野の浦の浜木綿百重なる心は思へどただにあはぬかも」（『拾遺集』巻十一恋一、柿本人麿。『古今六帖』三、はまゆふ）を引き、第五句を意味の上に利かせる。

四 大人も顔負けの観察ぶりなのだった。草子地。

五 大宮が、出家して世の常のお姿ではないけれど。髪を尼削ぎにして、肩のあたりで切り揃えている。

六 どちらへ行っても、女の人といえば美人だとばかり見つけていらっしゃるの

歳暮、大宮と夕霧の嘆き

に。

七 元日のご礼装。

八 この方（夕霧）お一人のことを。今までは雲居の雁の分も作る楽しみがあったが。

九 幾組も。「くだり」は、装束の一揃いを数える語。

一〇 夕霧は気の進まぬ思いがなさるばかりなので。六位の衣裳だからである。

一一 どうして、そんなことでいいでしょうか。元日の出仕を渋ることをたしなめる気持。

思ふ。また、向ひて見るかひなからむもいとほしげなり、かくて年経たまひにけれど、殿の、さやうなる御容貌、御心と見たまうて、浜木綿ばかりの隔てさし隠しつつ、何くれともてなしまぎらはしたまふめるも、むべなりけり、と思ふ心のうちぞ、はづかしかりける。大宮の、容貌ことにおはしませど、まだいときよらにおはし、ここにもかしこにも、人は容貌よきものとのみ目馴れたまへるを、もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたるここちして、痩せ痩せに御髪少ななるなどが、かくそしらはしきなりけり。

（源氏〔花散里を〕承知なさった上で）（三浜木綿れらしいのも）（ごもっともなことだ）（何やかやとなさって顔を見ないようにしていら）（四はづかしかりける）（五大宮）（大層お美しいらっしゃって）（六〔花散里は〕）（もともとさほどでもなかった）（少し盛りがお過ぎになった感じで）（このように難癖をつけたくなるのであった）

年の暮には、睦月の御装束など、宮はただ、この君一所の御ことを、まじることなういそぎたまふ。あまたくだり、いときよらにしたてたまへるを見るも、もの憂くのみおぼゆれば、「朔日などには かならずしも内裏へ参るまじう思ひたまふるに、何にかくいそがせたまふらむ」と聞こえたまへば、「などてか、さもあらむ。老いくづほれたらむ人のやうにものたまふかな」とのたまへば、「老いね

（七大宮）（八）（九）（一〇）（一一）（余念なく）（ご用意なさる）（夕霧）（元日）（参内もいたすまいと思っておりますのに）（どうしてこんなに支度なさるのでしょう）（大宮）（年寄りの元気のない人のようなおっしゃりようですね）（夕霧）

ど、（何をする元気も失せた感じです）くづほれたるここちぞするや」と、ひとりごちて、うち涙ぐみてゐたまへり。（雲居の雁のこと）かのことを思ふならむと、いと心苦しうて、（大宮）宮も、（つい泣顔になられた）うちひそみたまひぬ。「（大宮）男は、くちをしき際の人だに、心を高うこそつかふなれ。あまりしめやかに、（悲観して）かくなものしたまひそ。何とか、かうながめがちに思ひ入れたまふべき。（縁起でもない）ゆゆしう」とのたまふ。

（夕霧）「何かは。六位など人のあなづりはべるめれば、（これもしばらくのこととは）しばしのこととは思っておりますが）思うたまふれど、（参内するのもおっくうなのです）内裏へ参るものの憂くてなむ。（生きていて下さったなら）故大臣おはしまさましかば、（冗談にも）たはぶれにても、（他人から馬鹿にされることはなかったでしょうに）人にはあなづられはべらざらまし。もの隔てぬ親におはすれど、いとけけしうさし放ちておぼいたれば、（いつもお住まいのところに）おはしますあたりに、（軽々しくお目通りもかないません）たやすくも参り馴れはべらず。（やさしくして下さいますが）東の院にてのみなむ、御前近くはべる。対の御方こそ、あはれにものしたまへ、親今一所おはしまさましかば、（何の悲しいことがございましたでしょう）何ごとを思ひはべらまし」とて、涙の落つるをまぎらはいたまへるけしき、いみじうあはれなるに、宮は、いとどほろほろと泣きたまひて、（大宮）「母に先立たれた者は（それぞれ）母におくるる人は、ほどほ

一三 男は、言うに足らぬ分際の者でも、望みは高く持つということです。「なれ」は、伝聞の助動詞。身分の低い者でも高い家柄との縁組を求めるそうだ、の意。

一三 何をそんなにくよくよと思い詰めなさることがありましょう。夕霧ならもっとよい縁があると励ます気持。

一四 いえ、そうではないのです。雲居の雁のことではない、という。

一五 六位などと、人が馬鹿にしているようですので。前に雲居の雁の乳母も「六位宿世」（二五三頁）と言っている。

一六 亡き摂政太政大臣。夕霧の母方の祖父。

一七（源氏は）何の遠慮もない実の親ではいらっしゃいますが。

一八 大層きっぱりと私を遠ざけるようになさいますので。居を共にする紫の上に近づけないようにしているらしいと、二五七頁にあった。

一九 東の院においでの時だけ、お側近く上がります。花散里の所でのみ、近づくことを許される。

二〇 花散里。東の院の西の対に住む。

二一 お母さまが生きておいでしたら。「親今一所」（親がもうお一人）は、父親である源氏に対して母親の葵の上をいう。

一 人力の及ばぬおのおのの宿世なりに、一人前になってしまえば。「宿世」は、前世からの因縁。

二 長生きするのも恨めしいのに。「寿則辱多し」（『荘子』外篇「天地」）による。

三 年明けて元日。源氏三十四歳。

四 源氏の大臣は、お出かけ（宮中参賀のためなどの外出）もないので。左右大臣以下出仕するが、太政大臣は出仕しなくてもよい。

五 冬嗣の子。太政大臣。貞観八年（八六六）、人臣最初の摂政となり、藤原摂関政治の基を開いた。貞観十三年准三宮（三后に准ずる待遇）。諡忠仁公。

六 正月七日、天皇が豊楽院に出御し、左右馬寮の官人が牽く白馬をご覧になり、群臣に宴を賜る。その白馬を源氏の邸にも牽く。白馬は、院、三后、東宮にも牽く。良房が白馬を見たこと記録には見えないが、准三宮の資格によってであろう、源氏の場合も同様であろうと『河海抄』はいう。なお二巻賢木一七六頁参照。

七 朝廷で節日に群臣に宴を賜ること。正月の節会には、元日の節会、七日の白馬の節会、十四日の男踏歌、十六日の女踏歌がある。

八 昔の忠仁公の先例より以上の事を加えて。

九 上皇御所（二巻紅葉賀一一頁注一参照）。今上の兄君の朱雀院上皇の御所。これによりこの人を朱雀院と呼ぶ。

源氏、年頭の盛儀

朱雀院の行事　放島の試みと管絃の宴

どにつけて、さのみこそあはれなれど、身分に応じて おのづから宿世宿世に、人と成りたちぬれば、おろかに思ふ人もなきわざなるを、思ひ入れぬ つめないでいらっしゃい さまにてをものしたまへ。故大臣の今しばしだにものしたまへかし。この上ない庇護者としては〔源氏も〕同様に頼りにお思い申していますが 限りなきかげには、同じことと頼みきこゆれど、思ふにかなはぬこ との多かるかな。内の大臣の心ばへも、なべての人にはあらずと、 誉めそやすようだけれど〔私には〕 世人もめで言ふなれど、昔にかはることのみまさりゆくに、命長さ もらめしきに、生ひ先遠き人さへ、かくいささかにても、世を思 ひしめりたまへれば、いとなむよろづらめしき世なる」とて、泣 きおはします。

皆そのようにかわいそうなものですが 粗末にする人もいないことですから あまり深く思い せめてもうしばらくご在世ならよかったのに 並みの人には真似ができないと お気持 まだ若いあなたまで このようにたとえ少しでも 身の上を 本当に何もかも恨めしく思われるこの世です 悲観していらっしゃるので

四 朔日にも、大殿は御ありきしなければ、のどやかにておはします。五 良房の大臣と聞こえけるいにしへの例になずらへて、白馬ひき、節会の日々、内裏の儀式をうつして、昔の例よりも事添へて、いつかしき御ありさまなり。

申し上げた方の 准じて

二月

きさらぎの二十日あまり、九 朱雀院に行幸あり。〔桜の〕花ざかりはまだし

まだ早い

一〇 三月は故藤壺の宮の亡くなられた月である。（薄雲一六八頁参照）

一一 供奉の人々（上達部、親王たち）は皆、青色の袍に桜の下襲をお召しになる。「青色」は、麹塵（淡黄に青みを帯びた色）の袍。常は天皇が召される。「桜襲」は、表白裏紅または紫の下襲。晴れの儀には、諸臣麹塵の袍を賜い、天皇は赤色の袍を召される。最上席の公卿も同じ赤色を着用する（『西宮記』『河海抄』）。

一二 たださえよく似ていられるのに、一層そっくりで輝くばかりお美しく見間違うほどでいらっしゃる。

一三 専門の詩人、儒者。

一四 大学寮の学生十人。中に夕霧が含まれている。

一五 式部省で行う試験。擬文章生に詩賦を作らせ、合格すると文章生（進士）になる。省試ともいう。

一六 大殿（源氏）のご長男（夕霧）が、試験をして頂かれるからなのであろう。夕霧は、省試に代り、特に天皇の御前で、勅題による試験を受けるのである。

一七 岸につながぬ頼りない船に乗って、池に一人ずつ漕ぎ出して。「放島の試み」である。カンニングを防ぐため、池の中島で詩賦を作らせる中国の試験法。村上天皇の康保二年（九六五）十月二十三日、朱雀院の柏梁殿に行幸されて擬文章生を池のほとりで試験された例がある。

一八 楽人を乗せた船。龍頭鷁首の船。（二巻図録六参照）

一九 演奏の前に調子を整えるために吹く短い曲。

頃であるが

きほどなれど、弥生は故宮の御忌月なり。疾くひらけたる桜の色も

上皇におかれてもお心配りも特別に御殿のお手入れを立派になさり

いとおもしろければ、院にも御用意ことにつくろひ磨かせたまひ、

お供をなさる

行幸につかうまつりたまふ上達部、親王たちよりはじめ、心づかひ

したまへり。人々みな、青色に、桜襲を着たまふ。帝は、赤色の御

衣たてまつれり。召しありて太政大臣参りたまふ。おなじ赤色を着

源氏

たまへれば、いよいよひとつものとかかやきて見えまがはせたまふ。

立居振舞も　大層お美しく年とともにご立派にな

人々の装束、用意、常にことなり。院も、いときよらにねびまさら

前にもまして優雅におなりあそばされた

らせられて

せたまひて、御さま、用意、なまめきたるかたに進ませたまへり。

今日は、わざとの文人も召さず、ただその才かしこしと聞こえたる

詩文の才にすぐれた聞えの高い

学生十人を召す。式部の司の試みの題をなずらへて、御題賜ふ。

出題に准じて　勅題を賜る

大殿の太郎君の試み賜はりたまふべきゆゑなめり。臆だかき者ども

臆病な学生たちは

は、ものもおぼえず。つながぬ船に乗りて池に放れ出でて、いと術

暮れ方になって

なげなり。日やうやうくだりて、楽の船ども漕ぎまひて、調子ども

漕ぎ廻って　夕霧

奏するほどの、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、冠者の君

は、かう苦しき道ならでもまじらひ遊びぬべきものをと、世の中うらめしうおぼえたまひけり。春鶯囀舞ふほどに、昔の花の宴のほどおぼし出でて、院の帝、「またさばかりのこと見てむや」とのたまはするにつけて、その世のことあはれにおぼし続けらる。舞ひ果つるほどに、大臣、院に御土器参りたまふ。

（こんなつらい修業をしなくても皆と一緒に音楽を楽しんだりできるのにと）
（再びあれほどのことが見られるだろうか）
（〔源氏は〕当時のことが次々と感慨深く思い出されなさる）
（源氏）さし上げなさる

（源氏）三 鶯のさへづる声は昔にて
むつれし花の蔭ぞかはれる

院の上、四 九重を霞隔つるすみかにも
春と告げくる鶯の声

帥五の宮と聞こえし、今は兵部卿にて、今の上帝に御土器参りたまふ。

（兵部卿宮）六 いにしへを吹き伝へたる笛竹に
さへづる鳥の音さへかはらぬ

（めでたく取りなして奏上なさったのは）
（お心配りも格別で立派である〔御土器を〕お受けあそ）
あざやかに奏しなしたまへる、用意ことにめでたし。取らせたまひ

一 舞楽の曲名。唐楽。（二巻花宴五〇頁注五参照）
二 昔の花の宴の時を思い出されて。桐壺帝の御代の花の宴である。院（当時東宮）の指名により、源氏は特に春鶯囀を舞った。（花宴四九～五一頁参照）
三 鶯の囀る声は昔のままですが、あの頃馴れ親しんだ花の蔭―桐壺院の御代とはすっかり変ってしまいました。「鶯のさへづる声」は、春鶯囀のことをいう。
四 宮中からは霞を隔てるこの住居にも、ようやく春が来たと告げる鶯の声がします。「霞隔つるすみか」は、霞の洞、仙人の住む所、上皇御所のこと。今日の行幸により、日頃のさびしさをやっと慰めることができました、の意。
五 帥の宮と申し上げた方は、今は兵部卿で。源氏の弟。絵合に判者を勤めた（絵合一〇九頁参照）。
六 昔の音色そのままの笛の音に、鶯の鳴く声まで変りません。「いにしへを吹き伝へたる」に、桐壺院の聖代をそのままに伝えている意を含め、当帝の御代を寿いでいる。「笛竹」は笛の歌語。

七 鶯が古の聖代（桐壺院の御代）を慕って鳴くのは、木伝う枝の花の色が褪せたからでしょうか、私の治世が昔に及ばないからでしょうか。朱雀院のさびしい気持を汲んで、卑下したもの。

八 このお盃ごとは、お身内だけの、内輪のことだったので。廷臣を含めた公式の御宴ではないこと。

九 次々と大勢の方に、お盃が廻らなかったのであろうか、あるいはまたもっと歌があったのにそれを（陪席の女房が手控えに）書き漏らしたのであろうか。当時の宴席では、盃が廻ってくると、順番に歌を詠む。これ以上作中人物の歌を紹介しないことについての語り手（作者）のことわり。草子地。

一〇 音楽を奏している所が遠くて。楽人は身分が低いので庭上の遠くにいる。

一一 源氏が琴の名手であることは、二巻明石二七五頁、絵合一一二頁参照。

一二 前出。（一三五頁注二〇参照）

一三 催馬楽、呂。祝宴に歌う。「あな尊　今日の尊さ　や　いにしへも　はれ　いにしへも　かくやありけむ　や　今日の尊さ　あはれ　そこよしや　今日の尊さ」

一四 催馬楽、呂。（薄雲一六〇頁注七参照）

一五 庭園の池に設けた築島。

一六 一巻若紫一九四頁注三参照。

一七 弘徽殿の大后。朱雀院に同居しているのである。

帝と源氏、弘徽殿の大后を訪う

ばして
て、

（帝）七 鶯の昔を恋ひてさへづるは
木伝ふ花の色やあせたる

この上もなく奥ゆかしくていらせられる
とのたまはする御ありさま、こよなくゆゑゆゑしくおはします。八これは御私ざまに、うちうちのことなれば、あまたにも流れずやなりにけむ、また書き落してけるにやあらむ。

よく聞えないので
一〇 楽所遠くておぼつかなければ、御前に御琴ども召す。兵部卿の宮、琵琶、内の大臣、和琴、箏の御琴、院の御前に参りて、琴は、例の頂戴なさる
太政大臣賜はりたまふ。このようにすばらしくお上手な方々のそれぞれすぐれたご演奏
さるいみじき上手のすぐれたる御手づかひ
秘術をお尽しになった
ども、尽くしたまへる音はたとへむかたなし。一二唱歌の殿上人あまたさぶらふ。一三安名尊遊びて、次に一四桜人、月おぼろにさし出でてをかしきほどに、一五中島のわたりに、ここかしこ一六篝火どもともして、大御遊びはやみぬ。

夜ふけぬれど、かかるついでに、一七大后の宮おはしますかたを、御殿を避けよ

てご挨拶申し上げなさらないのも、きてとぶらひきこえさせたまはざらむも、情なければ、〔帝は〕帰さにわたらせたまふ。大臣もろともにさぶらひたまふ。后待ちよろこびたまひて、御対面あり。一いといたうさだすぎたまひにける御けはひにも、故宮を思ひ出できこえたまひて、かく長くおはしますたぐひもおはしけるものをと、くちをしう思ほす。「今はかく古りぬる齢に、よろづのこと忘られはべりにけるを、いとかたじけなくわたりおはしまいたるになむ、三さらに昔の御世のこと思ひ出でられはべる」と、うち泣きたまふ。四「さるべき御蔭どもにおくれはべりてのち、五春のけぢめも思うたまへわかれぬを、今日なむなぐさめはべりぬる。またまたも」と聞こえたまふ。大臣もさるべきさまに聞こえて、「ことさらにさぶらひてなむ」と聞こえたまふ。六のどやかならで帰らせたまふ響きにも、后は、七なほ胸うち騒ぎて、いかにおぼし出づらむ。世をたもちたまふべき御宿世は、消たれぬものにこそと、いにしへを悔いおぼす。

お帰りの折
源氏
お供をなさる
このように長生きなさる方もいらっしゃるのに
（弘徽殿大后）
何も
まことに恐れ多くもおいで下さいましたので
かも忘れてしまっておりましたのに
源氏もしかるべきご挨拶をなさって
（源氏）
今日お目にかかって心が晴れました
この次も
改めてお伺いいたしまして
今も心おだやかでなく
結局は天下をお治めになる〔源氏の〕
〔后は〕
どうしようもなかったのだと

三 今さらのように、亡き桐壺院の御代のことが思い出されます。
四 お頼り申すべき御方々（桐壺院や藤壺）に先立たれましたのち。
五 春の訪れも気づきませぬほど悲しみに昏れておりましたが。
六 ごゆっくりなさらずにお帰りあそばされる盛んなご様子につけても。「響き」は、人々がかしずき騒ぐこと。
七（源氏を憎んだ）昔のことをどのようにお思い出しのことだろう。草子地。

一（弘徽殿の大后が）ずいぶんお年を召されたご様子なのにつけても。御簾越しの対面である。
二 帝は、亡き母宮（藤壺）をお思い出し申されて。

八 朧月夜の尚侍。朱雀院に同居している。

九 今もしかるべき折には、何かのつてで（源氏から）こっそりお便りをさし上げなさることも、途絶えていないようだ。

一〇 大后に賜る年官年爵や何かのことにつけて。「年官」は、毎年、一定の下級の地方官を任命して、その俸禄を天皇、上皇、三后、東宮、親王などの所得とすること。「年爵」は、毎年、一定の従五位下を叙して、その位田の収入を上皇及び諸院宮の所得とすること。

一一 長生きをしたために、こんな情けないめにあうことだと。「寿則辱多し」（二六六頁注二参照）

一二 もてあまして。「くらべ苦し」は、折合がつきにくいというほどの意。

一三 朱雀院行幸の日の、勅題による詩文。

一四 式部省の試験（省試）に合格した者。文章生ともいう。

一五 当日は長年大学で修業した学才ある者をお選びになったが。前に「学生十人を召す」とあった。

一六 主として中央官（但し大臣以外）を任命する儀式。

一七 従五位下に叙せられて。

一八 従五位下相当（二五〇頁注四参照）。文章生は式部の少丞（従六位上相当）などに任じられるのが普通である。

一九 父の内大臣が、しっかりと監視していらっしゃるのもひどいと思われるので。

夕霧、進士に及第し、侍従になる

尚侍（ないしのかみ）の君も、のどやかに（静かにふり返ってごらんになるのに）おぼし出づるに、あはれなること（忘れがたいことがたくさんある）多かり。今もさるべきをり、風のつてにもほのめききこえたまふこと絶えざるべし。后は、おほやけに（帝に奏上してお願いなさることがある時ごとに）奏せさせたまふことある時々ぞ、御たうばりの年官年爵、何くれのことに触れつつ、御心（ご自分の思い通りにならぬ時）にかなはぬ時ぞ、命長くてかかる世の末を見ることと、取りかへさまほしう、よろづをおぼしむつかりける。老いもておはするままに、さがなさも（おもしろくなくご機嫌がお悪いのだった）（我儘など気性もつのって）まさりて、院もくらべ苦しく、堪へがたくぞ思ひきこえたまひける。

かくて大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。年積れるかしこき者どもを選らせたまひしかど、及第の人わづかに三人なむありける。秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ。かの人の御こと、忘るる世なけれど、大臣の切にまもりきこえたまふもつらければ、わりなくてなども対面したまはず。御消息ばかり、さりぬべきたよりに聞こえたまひて、かたみに心苦しき御仲なり。

（朱雀院の御代をなつかしんで）（万事）（やりきれないとお思い申されるのだった）（けなげにお作りになって）（雲居の雁）（無理をしてまでも）（適当な機会をみてさし上げなさって）（どちらもおいたわしい）

源氏、六条の院の造営、式部卿の宮の五十の賀の準備をする

一 源氏。
二 梅壺の中宮の旧邸のお近くを。中宮が六条の御息所から伝領した邸宅である。
三 「町」は、京の市街地において、大路、小路によって区画された地。一町は約一万五千平方メートル。四町のうち、一町は中宮の旧邸の地であること、次の頁に見える。
四 紫の上の父宮。（二三〇頁注五参照）
五 長寿のお祝い。当時は、四十歳から始めて、十年ごとに行う。
六 紫の上。紫の上は、二条の院の西の対に住む。
七 御精進落しのこと。賀の祝いには、長寿を祈る法要を行うので、精進落しの宴が催される。
八 賀宴に奏する舞や音楽を演ずる人々。
九 御賀の法要に供養するための経巻（『薬師経』『寿命経』などが多い）や仏像（薬師仏など）。
一〇 法要当日の人々のお召し物。
一一 僧や参会者に労をねぎらって与える物。衣類であることが多い。
一二（源氏は）今まで、世間一般に仁慈のみ心あまねき方ではあるが、わが家に対しては、ご縁戚でありながら思いやりがなく。以下「……ことこそはありけめ」まで式部卿の宮の思い。宮家に対して源氏が冷淡であった事情は、澪標三一～三二頁に見える。

大殿（おほいとの）、静かなる御住（すま）ひを、同じくは広く見どころ（立派にして）ありて、ここかしこにておぼつかなき山里人（落着いたこと離れていて逢えない大井の山里の明石の上などをも）などをも、集（つど）へ住ませむの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御古き宮のほとりを、四町（よまち）を占めて造らせたまふ。式部卿の宮、明けむ年（あくる年は五十におなりなので）ぞ五十になりたまひけるを、御賀のこと、対の上（準備していられるが）おぼしまうくるに、大臣（おとど）も、げに（源氏いかにも見過すわけにはゆかぬことだとお思いになって）過ぐしがたきことどもなりとおぼして、さやうの（そのようなお支度も）御いそぎも、同じくはめづらしからむ御家居（お邸でと〔新邸造営を〕）にてと、いそがせたまふ。

年かへりては（年が改まってからは）、ましてこの御いそぎのこと（御賀のご用意のこと）、御としみのこと、楽人（がくにん）、舞人（まひびと）の定めなど（選定）を、御心に入れていとなみたまふ。経仏（とても熱心にあれこれとなさる）、法事の日の御装束（さうぞく）、禄（ろく）どもなどをなむ、上（うへ）はいそがせたまひける（紫の上はご用意なさるのだった）。東の院（花散里）にも、分けてしたまふことどもあり（分担していろいろ準備なさる）。御なからひ（お二人の仲は）、ましていとみやびかに聞こえかはしてなむ過ぐしたまひける（前にもましてまことに優雅にお便りをやりとりしてお過しになっていた）。世の中響きゆすれる御いそぎなるを（世間が大騒ぎしているご準備なのを）、式部卿の宮にも聞こしめして、年ごろ世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやにくに情（なさけ）なく、事に触

一三 宮家に仕える人々のためにもお心遣いがなく。任官昇進などに好意を示さないのである。
一四 私（式部卿の宮）をひどいとお恨みになることがあったのだろうと。須磨流謫に際し、世間を憚って源氏に冷たくしたことを恨まれているのだ、と思い当る（二巻須磨二一〇～二一一頁参照）。
一五 その余慶が、わが家までは及んでこないにしても、晴れがましく（式部卿の宮は）お思いのところへ。
一六 またこれほど（御賀のことを）世間の大きな評判になるまで盛んにご用意なさるとは。
一七 紫の上の継母。（須磨二一一頁参照）
一八 女御（式部卿の宮の姫君、北の方腹）の宮仕えのことに関しても、源氏の大臣が格別お心遣いなさる様子もないことを。立后争いに圧されたことなど（二三〇頁参照）。
一九 源氏三十五歳の八月。去年秋より造営に掛った。
二〇 六条の院は、源融の造営した河原の院に模したものか、河原の院は六条の院とも呼ばれ、一世の源氏の造営した点も似ていると、『河海抄』はいう。
二一 西南の町は、中宮のご旧邸なので。

六条の院完成　四季の庭の情趣

二二 東南の地は、源氏のお住まいになる町である。紫の上もともである。
二三 池や築山。築山は池の南に築く。

	丑 寅 辰 巳	
花散里	夏 春	源氏 紫上
	冬 秋	
	戌 亥 未 申	
明石上		中宮

れてはしたなめ、（恥をかかせ）宮人（一三）をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、（情けないことばかり多いので）つらしと思ひ置きたまふことこそはありけめ、と、（一四）いとほしくもからくもおぼしけるを、（お気の毒にもまたひどいともお思いであったが）かくあまたかかづらひたまへる人々多かるなかに、（あれほど大勢ご関係のある女君が多いなかに）取りわきたる御思ひすぐれて、（特別のご寵愛があって）世に心にくくめでたきことに、（まことに奥ゆかしく結構な方として）思ひかしづかれたまへる御宿世をぞ、（大切にされていらっしゃる〔紫上の〕）（一五）わが家まではにほひ来ねど、面目におぼすに、（一六）またかくこの世にあまるまで、響かしいとなみたまふは、（思いがけぬ晩年の名誉というべきだと）おぼえぬ齢の末のさかえにもあるべきかなとよろこびたまふを、（一七）北の方は、（不満で）心ゆかず、（不快だとばかり思っていらっしゃる）ものしとのみおぼしたり。（一八）女御の御まじらひのほどなどにも、大臣の御用意なきやうなるを、いよいようらめしと思ひしみたまへるなるべし。

（一九）八月にぞ、（二〇）六条の院造り果ててわたりたまふ。（二一）未申の町は、中宮の御古宮なれば、（続けてお住まいになるはずだ）やがておはしますべし。（二二）辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、（花散里）戌亥の町は、（西北）明石の御方とおぼしおきてさせたまへり。（〔源氏は〕お決めあそばされた）（前からあった）もとありける池山をも、便な

一 遣水の流れや池の形。
二 築山の風情を改めて。「おきて」は、あり方というほどの意。
三 それぞれの町にお住みになる女君のご希望に沿った趣向にお造りになった。中宮は秋を好み、紫の上は春を好んだこと、薄雲一八四頁に見える。
四 南東の町。六条の院四季の庭のうち、紫の上の住居のさま。春の景を写してある。
五 殿舎近くの庭にある植込み。観賞用の草木を植える。
六 五葉の松。以下、前栽の植え物である。
七 岩間などに生える躑躅。和歌によく詠まれる。
八 以下、中宮御所の造園の体。秋の庭に造る。
九 泉の水を清らかに遠くまで流し。庭内の湧き水から水を遠くまで引いて遣水とする。
一〇 遣水のせせらぎの音が高まるような大きな岩を立て加え。
一一 さしもの嵯峨の大井のあたりの野山の景も、顔色なしといった今年の秋である。「無徳」は、かたなしというほどの意。嵯峨野は、当時秋草の名所とされた。
一二 北東の町、花散里の御殿の庭は、涼しそうな泉があって、夏の日、蔭を作ることを主として考えてある。
一三 庭先の前栽には、呉竹が、葉末を吹き通す風も涼しげに植えてあるし。「呉竹」は、淡竹。葉が細い。
一四 うつぎの垣根。初夏白い花が咲く。田舎家の風物として、歌にもよく詠まれた。

都合の悪い場所にあるのを崩し移して
き所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり。

南の東は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をば、むらむらほのかにまぜたり。

観賞用の草木を特に選んで植えて
ひとむらずつ少しばかり植えまぜてある

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水遠くすましやり、水の音まさるべき巌立て加へ、滝おとして、秋の野をはるかに作りたる、そのころにあひて、さかりに咲き乱れたり。嵯峨の大井のわたりの野山、無徳にけおされたる秋なり。

色濃く紅葉するようなたちの
見渡す限りに作ってあるのは　折柄ちょうどその季節で　〔秋草が〕

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯の花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆ

郊外の趣に
わざわざ作りめぐらして

一五 昔がしのばれる花橘。「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』巻三夏、読人しらず）による。なお、この女君の登場した花散里の巻でもこの歌によって、源氏と麗景殿の女御が歌を詠み交わしていた（二巻花散里一九六～七頁参照）。

一六 諸説がある。『河海抄』は岩藤とし、『細流抄』などは牡丹の類かという。

一七 北東の町の東側。

一八 競馬、騎射を見るために馬場に設けられた殿舎。元来は左右近衛府の馬場に設けられたもの（二巻葵七五頁注一七参照）。（図録一〇参照）

一九 馬場の柵を設けて。

二〇 北の西の町。明石の上が住み、冬の趣の造園。

二一 北側を築地塀で仕切って。築地塀は泥を築き上げ固めたもの。

二二 倉の並んだ一画。六条の院全体の倉庫であろう。

二三 初冬、朝霜が置くにふさわしい菊の垣根をしつらえ。霜のために紅紫色に色変りした菊を賞でた。

御方々の六条の院移転

二四 わがもの顔に黄葉する柞の原。「柞」は、楢の別名。「ははそ」に母を響かし、姫君の生母として重んじられる明石の上にちなむ。

二五 秋の彼岸の頃。陰暦八月、秋分の日を中心とする前後の七日間。

二六 源氏、紫の上が移る夜。

る花橘、撫子、薔薇、苦丹などやうの、花のくさぐさを植ゑて、春秋の木草、そのなかにうちまぜたり。東面は、分けて馬場の大殿つくり、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、向ひに御厩して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。

（別に／池の岸に／五月の節供の／向う岸に／作って／駿馬を何頭もそろえてお飼いになっている）

二〇 西の町は、北面築き分けて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばむたよりによせたり。冬のはじめ、朝霜むすぶべき菊の籬、われは顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植ゑたり。

（その隔ての垣に松の木をたくさん植え／枝に積る雪を賞玩するのに都合よくしてある／よく名も分らぬ）

二五 彼岸のころほひわたりたまふ。〔六条院に〕ひとたびにと定めさせたまひしかど、騒がしきやうなりとて、中宮はすこし延べさせたまふ。例のお木深きなどを移し植ゑたり。いらかにけしきばまぬ花散里ぞ、その夜、添ひて移ろひたまふ。春の御しつらひは、このころにあはねどいと心ことなり。御車十五、御前四位五位がちにて、六位の殿上人などは、さるべき限りを選ら

（ご一緒の混雑を避けられて／みな一度に移るようにとお決めになったが／延期なさる／ご一緒に／春向きのお部屋の装飾は／今の季節に合わないがやはり大層みごとである／通りおとなしくて気取らない／前駆は四位五位の者が多く／特別縁故のある者だけを）

一　世間の批判もあろうかと、万事簡略になさったので。

二　もう一人のお方。花散里。

三　侍従の君（夕霧）がお供して、そちら（花散里）の方はお世話なさるので。花散里を夕霧の義母として扱う。

四　女房の部屋部屋のあるそれぞれの一画も。四町の御殿にそれぞれある。

五　それぞれに宛てて細かく分けてあるのが。女房の局の割り当て方が行き届いているという、女房の目から見た批評。

六　中宮ご退出の格式がまた、簡略にということであったが、まことに大層なものである。

七　中宮が、ご幸運に恵まれていらっしゃるのはもとよりだが。后になられたご幸運をいう。

八　めぐらしてある塀や廊（屋根のついた渡り廊下）などを、何かと行き来できるようにして。塀には通路を設け、あるいは隣の町の建物との間を廊でつないである趣。内裏の後宮の殿舎間の結構に似ている。

九　硯箱の蓋であろう。当時、容器に用いた。

中宮と紫の上の応酬

せたまへり。（大層な人数ではない）こちたきほどにはあらず。世のそしりもやと省きたまへれば、何ごともおどろおどろしいかめしきことはなし。今一方の御けしきも、（大仰に威勢を張るということはない）をさをさおとしたまはで、（行列のご様子も〔源氏は〕大して劣らぬようになさって）侍従の君添ひて、そなたはもてかしづきたまへば、げにかうもあるべきことなりけりと見えたり。女房の曹司町ども、あてあてのこまけぞ、（いかにも適切なご処遇であると見受けられた）おほかたのことよりもめでたかりける。（そのほかの全般的なことにもましてすばらしかった）

五六日過ぎて、中宮まかでさせたまふ。（〔宮中より〕退出あそばす）この御儀式はた、さは言へど、いと所狭し。御幸ひのすぐれたまへりけるをばさるものにて、（お人柄が奥ゆかしく重々しくていらっしゃるので）御ありさまの心にくくおもりかにおはしませば、世に重く思はれたまへることすぐれてなむおはしましける。（世間から重んじられていらっしゃることは格別でおいであそばす）この町々の中の隔てには、（四町の間の仕切りには）塀ども廊などを、とかく行き通はして、気近くをかしきあはひにしなしたまへり。（親しく風雅なお付合いができるように配慮なさってある）

長月になれば、（九月）紅葉むらむら色づきて、宮の御前えも言はずおもしろし。風うち吹きたる夕暮に、（中宮）御箱の蓋に、（色とりどりの秋の草花や紅葉）いろいろの花紅葉を

一〇 濃い紫の袒。「袒」は、童女の平常着。
一一 紫苑（経蘇芳、緯青）の織物の表着。
一二 朽葉色（黄色に赤みのある色）の赤みがかった色。
一三 童女が正装の時、上に着る。女房の裳、唐衣に当る。（二巻図録一〇参照）
一四 殿舎の間をつなぐ建物。前に「廊などを、とかく行き通はして」とあった。
一五 右に同じ。ただしここは、「反橋」を持つところから、透渡殿（吹き抜きで高欄を備える）であろう。
一六 中央の反った橋。（図録六参照）
一七 中宮のお使いといえば、折目正しい格式のものだが。しかるべき女房がお使いに立つはずだが、の意。
一八 中宮御所といった高貴な所に、日頃からお仕えしているので。
一九 ご自分から好んで遠い春をお待ちの方は、せめて私の方の紅葉を、吹き寄せる風の便りにでもご覧下さい。春秋優劣の応酬である（薄雲一八二頁参照）。
二〇 小石を岩に見立ててあしらって、それに植えつけた五葉の松の枝に。
二一 風に散る紅葉は、心軽いものでございます、春の美しさを、このどっしりとした岩に根ざす常磐の松の緑に見て頂きたいものです。
二二 歌に「岩根の松」と詠まれた五葉の松も。
二三（紫の上が）このようにとっさの間にお考えつきになった趣向の奥ゆかしさなどを。箱の蓋の作り物のことをいう。

〔中宮より〕紫の上にさし上げなさった大柄な をとりまぜて こきまぜて、こなたにたてまつらせたまへり。大きやかなる童女の、濃き袒、紫苑の織物かさねて、赤朽葉の羅の汗衫、いといたうなれまことに落着いた態度で、廊、渡殿の反橋を渡りて参る。うるはしき儀式なれど、童女の容姿の美しい者を をかしきをなむ、えおぼし捨てざりける。さる所にさぶらひなれたお好みでついお使いになるのだった 立居振舞から 姿つきまで 他家の童女とは違って しゃれていて美しい ればもてなし、ありさま、ほかのには似ず、このましうをかし。

御消息には、

（中宮）心から春まつ園はわがやどの
紅葉を風のつてにだに見よ

若い女房たちが 若き人々、御使もてはやすさまどもをかし。御返りは、この御箱の お使いを歓待する様子が優雅である ご返歌は 蓋に苔敷き、巌などの心ばへして、五葉の枝に、

（紫上）風に散る紅葉はかろし春の色を
岩根の松にかけてこそ見め

何ともいえぬみごとな細工物なのであった よくよく見れば この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬ作りごとどもなりけり。

（中宮は）かくとりあへず思ひ寄りたまへるゆゑゆゑしさなどを、をかしく御

一 龍田姫のご機嫌を損ねてもいけないから。「龍田姫」は、秋をつかさどる女神（一巻帚木六七頁注八参照）。

二 春になって、花の美しさを頼みにしてこそ、勝ち目のある歌もできましょう。後の胡蝶の巻に、この返歌がなされる。

三 大層若々しく、あくまでお美しいお姿で、魅力に溢れていらっしゃる上に。源氏の変らぬ美しさをいう。

四 前にもまさる理想的なお邸で、女君たちがゆかしいお便りのやりとりをなさる。理想的な六条の院の生活ぶり。

五 大井に住むお方。明石の上。

六 人数にも入らぬ身は、いつと分らぬようにこっそり移ろうと卑下なさって。

七 明石の上をお移し申し上げなさる。主語は源氏。

明石の上の移転

覧ず。御前（中宮御前の女房もみな感嘆したともしゃくに思われますね）なる人々もめであへり。大臣（源氏）、「この紅葉の御消息（お返事はさし上げなさい）、いとねたげなめり。春の花ざかりに、この御いらへは聞こえたまへ。（今この季節に紅葉を悪く言っては）このころ紅葉を言ひくたさむは、龍田姫の思はむこともあるを、さ（は一歩退いて）ししぞきて、花の蔭に立ち隠れてこそ、強きことは出で来め」と聞こえたまふも、いと若やかに尽きせぬ御ありさまの見どころ多かるに、いとど思ふやうなる御住ひにて、聞こえ通はしたまふ。

五 大井の御方は、（こうしてほかの方々のご移転が終ってから）かうかたがたの御うつろひ定まりて、六 数ならぬ人は、いつとなくまぎらはさむとおぼして、神無月（十月）になむわたりたまひける。御しつらひ（お部屋の装飾や）、ことのありさま（お引越しの行列も）劣らずして、七 わたしたてまつりたまふ。姫君（明石の姫君）の御ためをおぼせば、おほかたの作法（万事についてのやり方も）、けぢめこけることなく（ひどく差をつ）よなからず、いとものしくもてなさせたまへり。（大層重々しくお扱いになった）

玉（たま）

鬘（かづら）

某の院で夕顔が急死して以来、長の年月がたったが、源氏は彼女のことを忘れる時とてない。あの時その場にいた右近も、今は紫の上に仕える身の上で、もし夕顔が生きていたら、明石の上くらいの待遇はお受けになるはずと尽きせず悲しく思うのだった。

夕顔が頭の中将（今、内大臣）との間になした忘れ形見の姫は事件の当時、西の京の乳母の許にいたが、乳母の夫が大宰の少弐になって任地に下ったのに伴われて、乳母とともに筑紫に赴いた。少弐はかの地に歿し、姫は二十ほどに美しく成人した。姫の噂を伝え聞いた肥後の豪族大夫の監という者が、威勢を頼んで強引に求婚してきたが、乳母は言を左右にして難を逃れ、姫を伴って京に上る。故少弐の遺言に忠実な長男の豊後の介が総てを捨てて姫に従い、乳母の娘の兵部の君も行を共にした。

広い都につてもなく途方に暮れた一行は、その年の秋、姫の開運を祈るため長谷寺に参詣したが、そこではしなくもあの右近に邂逅したのであった。

右近から夕顔の忘れ形見の姫の無事を知った源氏は、自分の娘分として六条の院に引き取ることにし、花散里に世話を託す。姫は花散里の町の西の対に住むことになった。姫に対面してその美しさを喜んだ源氏には、弟宮の兵部卿の宮など、院に出入りする貴公子たちの心を惑わして楽しもうという心づもりがあった。「恋ひわたる身はそれなれど玉かづら」という源氏の歌によって、この姫を読者は玉鬘と呼ぶ。巻名もこの歌による。

年の暮、婦人たちに正月の晴着を贈る場面でこの巻は終る。源氏三十五歳の年の春から暮にかけてのことである。

一 夕顔の巻を受ける。以下、この冒頭の書出しは、同じく夕顔の巻を受ける末摘花の巻の書出し（一巻二四五頁）に酷似している。

二 いとしい思いの尽きなかった夕顔のことを、源氏はいささかもお忘れになることなく。「夕顔」は、夕顔の巻の女主人公という意味でのあだ名。「つゆ」には、「夕顔」の縁で「露」が響く。

三 生きていたらと。「世の中にあらましかばと思ふ人亡きが多くもなりにけるかな」（『拾遺集』巻二十哀傷、昔見はべりし人々多く亡くなりたることを嘆くを見はべりて　藤原為頼）。『釈』以下に引く。

四 夕顔の侍女。某の院に行を共にして夕顔の死に遭い、そのまま源氏に仕えることになった（一巻夕顔一四二頁以下、同一六六頁、一六八頁以下参照）。

五 二巻須磨二一五～六頁参照。

六 明石の上程度のお扱いにはひけをお取りにならないだろう。明石の上は六条の院の戌亥（西北）の町に移った（少女二七三頁）。

七 お見捨てにならず。「あぶす」は、零落させる意。

八（紫の上や花散里など）身分の高い方々と同列というわけにはゆくまいが。

九 六条の院にお移りになった方々のお仲間入りはなさったことであろうと。移転のことは少女二七五頁以下参照。

源氏、夕顔を忘れず、侍女右近の追慕の思い

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず、心々（それぞれに違う女君たちの性格を）なる人のありさまどもを、見たまひかさぬるにつけても、（次々にお知りになるにつけても）あらましかばと、（悲しく残念でたまらない気持で）あはれにくちをしくのみおぼし出づ。右近は、何の人数な（お目を掛けていらっしゃるので）らねど、〔源氏は〕夕顔の（古参の女房の一人として長くお仕えしている）なほその形見と見たまひて、らうたきものにおぼしたれば、古人の数につかうまつり馴れたり。須磨の御うつろひのほどに、対（紫の上）の上の御方に、（源氏お付きの女房を皆お仕え申させなさって以来）皆人々聞こえわたしたまひしほどより、（紫の上のもとに）そなたにさぶらふ。（気立てのよい控え目な女房だと）心よくかいひそめたるものに、女君（紫の上）もおぼしたれど、〔右近の〕心のうちには、故君（亡き夕顔）ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし、〔源氏は〕さしも深き御心ざしなかりけるを（さほど深く愛してもおられなかった人でさえ）だに、おとしあぶさず、（ちゃんとお世話なさるようなお気持の）取りしたためたまふ御心長さなりければ、まいて、（変らぬお方なのだから）やむごとなき列にこそあらざらめ、この御殿うつりの数のうちには

一 あの西の京に残された若君ですら、その後の行方も分らず。以下、事件当時の右近の心事、動静を書く。「若君」は、夕顔と当時の頭の中将との間に生れた女子。玉鬘。（一巻夕顔一七〇頁～一七一頁参照）

夕顔の忘れ形見、乳母に伴われて筑紫に下る

二 私の名を世間にもらすなと。「犬上や鳥籠の山なるいさら川いさと答へてわが名もらすな」（『古今六帖』五、名を惜しむ。『古今集』巻末の墨滅歌にも）

三 事情を確かめにお便りをさし上げることもなかったうちに。夕顔の巻にも「右近だにおとづれねば」（一巻一七七頁）とあった。

四 大宰の少弐。大弐に次ぐ、大宰府の次官。定員二名。正五位上相当。

五 乳母も夫とともに筑紫へ下った。筑紫は筑前、筑後を合せての古称。大宰府は筑前にあった（図録一参照）。

六 三歳の年に母の夕顔は亡くなった。（夕顔一七〇頁）

七 やはり父君（頭の中将）にそれとなくお知らせしよう。

八 頭是ない姫君を（父君が）お手許にお引き取りになるのも、（我々として）心配でならぬことでしょう。

まじらひたまひなましと思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。

かの西の京にとまりし若君をだに、行方も知らず、ひたすら夕顔の死を世を憚って秘密にしひとへにものを思ひつつみ、また今さらにかひなきことによりて、「わが名もらす[源氏が]な」と、口がためたまひしを憚りきこえて、今さら言っても詮ない夕顔の死の一件のために尋ねても音づれきこえざりしほどに、その御乳母の夫、若君の少弐になりて、赴任したので行きければ、下りにけり。かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。

夕顔

母君の御行方を知らむと、[乳母は]よろづの神仏に申して、夜昼泣き恋ひて、心当りの諸方をお捜し申したけれども さるべき所々を尋ねきこえけれど、つひにえ聞き出でず。さらばしかたない せめてこの姫君だけでもばいかがはせむ、若君をだにこそは、[夕顔の]お形見としてお世話申そう 筑紫 都から遠い所のような田舎への旅路にお連れ申してやしき道に添へたてまつりて、はるかなるほどにおはせむことの悲しきこと、なほ父君にほのめかさむ、[乳母は]お知らせする適当なと思ひけれど、さるべきたよりもなきうちに、[乳母たち]母君がどちらへいらしたかも分らずつてもない上に「母君のおはしけむかたも知らず、尋ね問ひたまはば、いかが聞こえむ、[父君に]どうお答え申そう まだよくも見なれたまはぬに、幼き人をとどめたてまつりたまはむも、うしろめたかるべし。[頭中将が]ご存じでいながら知りながら、は

九（若君を）連れて筑紫へ下ってよいとお許しになるはずもない。

一〇 格別立派な設備もない船にお乗せして。屋形船であるが、ろくな室内の設備もないのである。

一一 少弐と乳母との間の娘。二人いて、後に「姉おもと」（二九三頁）、「あてきといひしは、今は兵部の君といふ」（二九二頁）と見える。

一二 船旅に涙は不吉と、（母の乳母は）一方では（娘たちを）制したのだった。

一三 夕顔は、気の若いお方だったのに。以下、娘たちの心。

一四 いやもし、夕顔がおいでならば、私たちは筑紫に下ることもあるまいにと。

一五 「いとどしく過ぎゆくかたの恋しきにうらやましくもかへる波かな」（『後撰集』巻十九羇旅、業平。『伊勢物語』七段）による。

一六 船人も誰を恋しく思うとてか、心悲しげに船唄の声が聞えることです。「大島の浦」を「心悲し」に言い掛ける。姉の歌と見られる。「大島」は、筑前宗像郡大島村、次の頁に見える「金の御崎」の沖の島（図録一参照）。

一七 来た方角も行方も分らない沖に漕ぎ出して、一体私たちは、どちらへ向って夕顔の君を恋い求めることなのでしょう。妹の歌。

た、率て下りねとゆるしたまふべきにもあらず」など、おのがじし（それぞれに相談）かたらひあはせて、いとうつくしう（姫君の）、ただ今から（もう今から）気高くきよらなる（お美しい）御さまを、一〇ことなるしつらひなき船に乗せて漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむおぼえける。幼きここちに（姫君は）（子供心に）、母君（夕顔）を忘れず（もおいたわしく思われるのだった）、をりをりに、「母の御もとへ行くか」と問ひたまふにつけて、涙絶ゆる時なく、娘ども（夕顔を）も思ひこがるるを、船道ゆゆしと（一二）、かつはいさめけり。

おもしろき所々（景色のよい）を見つつ、心若（一三）うおはせしものを、かかる道（こうした道中の景色）をも見せたてまつるものにもがな、おはせましかば（一四）、われらは下らざらましと、京のかたのみ思ひやらるるに、かへる波（一五）もうらやましく、心細きに、船子（水夫たちが）どもの荒々しき声にて、「うらがなしくも遠く来にけるかな」（一六）と、歌（船唄を）ふを聞くままに、二人（娘たち）さし向ひて泣きけり。

船人（一六）もたれを恋ふとか大島の
　　うらがなしげに声の聞こゆる

来（一七）しかたも行方（ゆくへ）も知らぬ沖に出でて

一　都を遠く離れての田舎への船旅に、姉妹それぞれ気慰めにこうした歌を詠むのだった。「思ひきや鄙の別れに衰へて海士の縄たき漁せむとは」（『古今集』巻十八雑下、隠岐の国に流されてはべりける時によめる　篁朝臣）

二　筑前宗像郡玄海町の岬。沖に大島があり、その間の航路は難所であった。（図録一参照）

三　「われは忘れず」（夕顔のことはいつまでも忘れない）などということが、明け暮れの口癖になって。「ちはやぶる金の御崎を過ぎぬとも我は忘れず志賀の皇神」（『万葉集』巻七）による。

四　いつも同じ様子の女などがお側に一緒にいて（夕顔が夢に）お見えになると、その夢のあと、乳母は気分が悪く煩ったりしたので。夢に見えた女が魔性のものだからで、乳母も夕顔の身の上に何か変事が起ったのだろうと思う。某の院で枕上に立った女である（一巻夕顔一四八頁）。その後、源氏の夢にも見えたという（同一七八頁）。

乳母の夫少弐死亡　姫君、美しく成人

五　大宰府の任期は五年。

六　格別裕福でもない人なので。

七　神に奪られて若死になさるのではないかと思われるほどかわいらしげでいられるのを拝見して。

八（こんな田舎で）自分までがお見捨てして先立ったら。

あはれいづくに君を恋ふらむ

鄙の別れに、おのがじし心をやりて言ひける。

金の御崎過ぎて、「われは忘れず」など、世とともの言種になりて、かしこに（大宰府）到り着きては、まいてはるかなるほどを思ひやりて、恋ひ泣きて、この君（姫君）をかしづきものにて（大切にお世話申して〔乳母は〕）明かし暮らす。夢などに、いとたまさかに見えたまふ時などもあり。〔夕顔が〕同じさまなる女など、添ひたまうて見えたまへば、名残ここちあしくなやみなどしければ、なほ世になくなりたまひにけるなめりと思ひなるも、いみじくのみなむ。（やはり夕顔はこの世にもういらっしゃらないのだろうと諦める気持になるのもとても悲しい思いである）

少弐、任果てて上りなむとするに、はるけきほどに、ことなる勢なき人は、たゆたひつつ、すがすがしくも出で立たぬほどに、重き病して、死なむとするここちにも、この君の十ばかりにもなりたまへるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを見たてまつりて、「われさへうち捨てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむ

（一層都とのへだたりの遠いことを）（乳母の）（遠い旅路である上に）（上京しようとしたが）（ぐずぐずしたまま）（思い切って旅立ちもできないでいるうちに）（もう先もない苦しい病床にあっても）（姫君）（どんなみじめな落ちぶれようをなさることであ）（少弐）

九　しかるべきお方にもお知らせ申して。姫君の保護者にあたる人、父親の頭の中将を思っているのであろう。

一〇　姫君のご運勢のままにお世話申し上げるにしても、都は広い所だから（いろいろっても多くて）、何の困難もあるまいと上京の支度をしていたのだが。姫の仕合せ（よいご縁組）を期待していたという意。

一一　少弐の男の子三人。後に、長兄豊後の介（二八八頁）、次郎（二八九頁）の名が見える。

一二　父親である自分の死後の供養のことなど思いわずらうな。「孝」は、親の喪に服したり、その追善供養を営むこと。

一三　役所の同僚にも知らせず。「館」は、地方の国府の官舎をいう語。ここは大宰府の官舎。

一四　少弐の孫で、大事にしなくてはならぬ仔細のある子だと表向きには言ってあったので。

一五　父内大臣のお血筋も加わっているからか。頭の中将は、少女の巻で、大納言から内大臣に昇進している（二三〇頁）。その時点に合せた書き方で、次の頁に「二十ばかりになりたまふままに」とあるのは、ほぼその頃にあたる。

とすらむ。あやしき所に生ひ出でたまふも、（辺鄙な田舎で）かたじけなく思ひきこゆれど、（一刻も早く）いつしかも京に率てたてまつりて、（お連れ申し上げて）さるべき人にも知らせたてまつりて、（この地で）御宿世にまかせて見たてまつらむにも、（恐れ多いことと）都は広き所なれば、いと心やすかるべしと思ひいそぎつるを、ここながら命堪へずなりぬること」と、（心配する）うしろめたがる。男子三人あるに、（少弐）「ただこの姫君、京に率てたてまつるべきことを思へ。（お連れ申し上げることを心掛けよ）わが身の孝をば、な思ひそ」となむ言ひ置きける。（遺言したのだった）

その人の御子とは、（どなたのお子であるとは）館の人にも知らせず、ただ孫のかしづくべきゆゑあるとぞ言ひなしければ、人に見せず、限りなくかしづききこゆるほどに、（少弐が）にはかに亡せぬれば、（乳母は）あはれに心細くて、ただ京の出で立ちをすれど、この少弐の仲あしかりける国の人多くなどして、（仲のよくなかった土地の者が多かったりして）（ひたすら京へ旅立とうとするけれども）とざまかうざまに、懼ぢ憚りて、（気が気でなく年を過すうちに）われにもあらで年を過ぐすに、（夕顔）この君、ねびととのひたまふままに、（成人して立派になられるにつれて）母君よりもまさりてきよらに、（姫君）父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。（気品があっておかわいらしい）心ばせおほ（気立てがおっと）

一 姫君の評判をそれからそれへと聞き伝えて。「聞き継ぎつつ」の音便。
二 いっぱしの恋人気取りで手紙を寄こすやからが引きも切らない。
三 乳母をはじめ子供たちは、問題にもしない。
四 私の生きている限りは面倒を見てやるつもりです。
五 (父大臣は) 姫君のまだ幼くいらした頃を、とてもかわいらしいとお思い申し上げなさっていられたから。雨夜の品定めで、頭の中将は、子供の行方も知れないのを嘆いていた(一巻帚木七四頁)。
六 仏や神に願を立てて姫君の幸福を祈念したのだった。「願」は、願文に願いの筋を書き、お礼参りを約束する。
七 田舎は田舎相応のそれぞれの配偶者も出来て、生活の根をおろしてしまっている。
八 一年のうち正月五月九月の三月のそれぞれ前半十五日間、持戒精進して仏菩薩の名号を称すること。この三月は帝釈天が衆生の善悪を記録するので、精進すれば、一切の罪業消滅し、災難にあわず、死後、浄土に往生すると信じられた。

りしていて申し分なくいらっしゃる
どかにあらまほしうものしたまふ。聞きついつつ、好いたる田舎人ども、心かけ、消息がるいと多かり。ゆゆしくめざましくおぼゆれば、誰も誰も聞き入れず。「容貌などはさてもありぬべけれど、いみじきかたはのあれば、人にも見せで尼になして、わが世の限りは持たらむ」と言ひ散らしたれば、「故少弐の孫は、かたはなむあんなる。あたらものを」と言ふなるを聞くもゆゆしく、「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。いときなきほどを、いとらうたしと思ひきこえたまへりしかば、さりともおろかには思ひ捨てきこえたまはじ」など言ひ嘆くほど、仏神に願を立ててなむ念じける。

思いをかけ
滅相もない身のほど知らずなと思われるのどい不具な所がありますから
(乳母)
まあまあ人並みでもありましょうが
言い触らしたところ
結婚もさせず
(世人)
不具なところがあるそうな
せっかくの美人が
噂するらしいのを
(乳母)
どうかして
縁起でもなく

〔乳母の〕娘どもも男子どもも、所につけたるよすがども出で来て、住みつきにたり。〔乳母は〕心のうちにこそ急ぎ思へど、京のことはいや遠さかるやうに隔たりゆく。ものおぼし知るままに、世をいと憂きものにおぼして、年三などしたまふ。二十ばかりになりたまふままに、生ひと

〔上京を〕
ますます遠ざかるよう
いくら何でも
〔姫君を〕疎略にお扱いするようなことはなさるまい
〔姫君は〕もの心がおつきになるにつれて
こうした田舎に住む身の上を嘆かれて
間

九　こんな辺鄙な土地にはほんとにもったいないほどお美しい。

一〇　大宰府のある筑前の国の西隣。今の佐賀県、長崎県。後の大夫の監の歌に「松浦なる鏡の神」（二九一頁）、また「松浦の宮」（二九三頁）と見えるから、その近辺であろう（図録一参照）。少弐の歿後、移り住んだのであろう。

肥後の大夫の監の求婚

一一　大宰府の大監（大弐、少弐の次。正六位下相当）で、従五位に叙せられた者の称。

一二　肥後の国に一族が繁栄していて。肥後は、今の熊本県。肥前とは筑後を隔ててその南にあたる。

一三　乳母の三人の息子たち。

一四　気脈を通じて互いに力を貸す仲になろう。

一五　息子たちのうち二人（次郎と三郎）は、大夫の監の味方についてしまった。

（乳母一家が）り成人されて

とのほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は、肥前の国とぞいひける。そのわたりにもいささか由ある人は、まづこの少弐の孫のありさまを聞き伝へて、なほ絶えずおとづれ来るも、いといみじう、耳かしかましきまでなむ。

（肥後一円には）大夫の監とて、肥後の国に族広くて、かしこにつけてはおぼえあり、勢いかめしき武士ありけり。（声望もあって）むくつけき心のなかに、いささか好きたる心まじりて、容貌ある女を集めて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、（大夫監）「いみじきかたはありとも、（ひどい不具な所があろうとも）われは見隠して持たらむ」と、（とても熱心に求婚してきたのを）いとねむごろに言ひかかるを、（乳母は）いとむくつけく思ひて、「いかで、かかることを聞かで、尼になりなむとす」と言はせたりければ、（大夫監は）いよいよあやふがりて、おしてこの国に越え来ぬ。

（大夫監）この男子どもを呼びとりてかたらふことは、「思ふさまになりなば、同じ心に勢をかはすべきこと」などかたらふに、二人はおもむきにけり。（二人）「しばしこそ似げなくあはれと思ひきこえけれ、おのお

（乳母一家が）
（気の利いた者は）
（近辺でも）
（多少とも）
（恐ろしい無骨な）
（盛んな）
（好色な）
（器量のよい女を沢山妻にしようと）
（恐ろしく）
（大目に見て）
（妻）
（縁談などには耳をかさずに）
（返事させたとこ）
（尼になろうと言っております）
（強引に）
（肥前の国に）
（気が気でなく）
（話を持ちかけるには）
（大夫監）
（思い通り姫と結婚でき）
（持ちかけると）
（呼び寄せて）
（姫を）
（お気の毒とお思い申したが）
（最初のうちは不釣合な話で）
（我々それ）

一 今となっては姫のおしあわせと申すものです。
二 こうなるご縁があればこそ。しかるべき前世からの因縁があって、の意。
三 何のよいことがありましょう。「たけきこと」は、たいしたこと、というほどの意。
四 とんでもない乱暴も働くに違いありません。「せぬこと」は、人のしないことの意。
五 三人兄弟の中の長兄。太郎。
六 豊後の国（大分県）の次官。従六位上相当。
七 それはやはり大層不都合な、また、もったいないことだ。「たいだいし」は、「たぎたぎし」（道が険しく進みがたいというのが原義）の音便。
八 亡き父少弐の言い遺されたこともある。二八五頁に見える遺言のこと。

大夫の監の懸想文、訪問

九 母君（夕顔）が、お世話しようにもしようがなく、どこぞへ行ってしまわれて。

ぞれが（後ろ楯と頼りにするには〔大夫監は〕）のわが身のよるべと頼まむに、いとたのもしき人なり。これにあしくせられては（この近在で暮しが立ちゆきましょうかては）、この近き世界にはめぐらひなむや。よき人の御筋と（高貴のお方のお血筋と）いふとも、親に数まへられたてまつらず（お子として扱っていただけず）、世に知られでは、何のかひかはあらむ。この人のかくねむごろに思ひきこえたまへるこそ、（大夫の監〔姫を〕）今は御幸ひなれ。さるべきにてこそは、かかる世界にもおはしましけめ。逃げ隠れたまふとも、何のたけきことかはあらむ。負けじ魂に、怒りなば、せぬことどももしてむ」と言ひおどせば、いとひどい話だと）いみじと聞きて、中の兄なる豊後の介なむ、「なほいとたいだいしく、あたらしきことなり。故少弐ののたまひしこともあり。とかく構へて京に上げたてまつりてむ」と言ふ。

（〔姫は〕こんな田舎までもおいでになったのでしょう）（〔大夫監が〕）（この人に憎まれ）

（〔乳母の〕）娘どもも泣きまどひて、母君のかひなくてさすらへたまひて、行方をだに知らぬかはりに、人なみなみにて見たてまつらむとこそ思ふに、さるもののなかにまじりたまひなむこと、と思ひ嘆くをも知らで、われはいとおぼえ高き身と思ひて、文など書きておこす。手

（〔姫を〕人並みにご縁組させてお世話申そうと思っているのに）（〔行方も分らないその理合せに〕）（何とか工夫して〔姫君を〕）（あんな田舎者の妻になってしまわれるとは）（自分はいかにも名望家であるぞとうぬぼれて）（〔大夫監は〕）（恋文）（寄こす）（筆跡）

一〇 中国から渡来の染め紙を、かおり高い香で十分にたきしめて。大宰府に近い土地柄ゆえ舶来品もある。
一一 田舎者と思って見るせいか、いやらしい感じで。
一二 声はひどくしゃがれたがらがら声でわけの分らぬ田舎言葉をしゃべっている。「さへづる」は、わけの分らぬ方言をしゃべること。
一三 恋人というものは夜こっそりやって来るからこそ、「よばひ」とは言ったものだが、これはいっぷう変った春の夕暮だ。「よばひ」は、恋人に呼びかけ誘うところから求婚の意であるが、「夜這ひ」の意に解されていた。「夜は安き寝も寝ず、闇の夜に出でても、穴をくじりかいま見、まどひあへり。さる時よりなむ、よばひとは言ひける」（『竹取物語』）。夜こっそりやって来るはずの求婚者が夕暮にやって来たというのだが、大夫の監をいかにも馬鹿にしきった感じの草子地。
一四 今は秋ではないが、おかしな懸想人のご入来だ。「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）の「あやしかりけり」の意を転じ用いて筆を弄した。
一五 祖母殿。乳母のこと。姫君を孫と一般には言い触らしているからこういう（二八五頁参照）。「おとど」は敬称。やや諧謔の気味がある。
一六 いかにも風雅のたしなみ深く。
一七 一意専心姫のお世話をさせて頂こうと存じて。「いかうに」は「一向に」。

などきたなげなう書きて、唐の色紙、かうばしき香に入れしめつつ、をかしく書きたりと思ひたる、言葉ぞいとだみたりける。みづからも、この家の次郎をかたらひとりて、うちつれて来たり。

〔大夫監は〕三十ばかりなる男の、丈高くものものしくふとりて、きたなげなけれど、思ひなしうとましく、荒らかなるふるまひなど、見るもゆゆしくおぼゆ。色あひここちよげに、声いたう嗄れてさへづりゐたり。懸想人は夜に隠れたるをこそ、よばひとは言ひけれ、さまかへたる春の夕暮なり。秋ならねども、あやしかりけりと見ゆ。心を破らじとて、祖母おとど出で会ふ。「故少弐のいと情び、きらきらしくものしたまひしを、いかでかあひかたらひ申さむと思ひたまへしかども、さる心ざしをも見せ聞こえずはべりしほどに、いと悲しくて、かくれたまひにしを、そのかはりに、いかうにつかうまつるべくなむ、心ざしをはげまして、今日は、いとひたぶるに、強ひてさぶらひつる。このおはしますらむ女君、筋ことにうけたまはれば、

見苦しからず　言葉づかいはひどく訛っているのだった　ご本人自らきれいに書いたと自分では思っているが　乳母の次男　味方に抱き込んで　二人連れ立ってやって来た　見苦しからぬ風采だが　顔の色つやもよく元気そうで　見るだにおぞけ立つ思いがする　機嫌をやぶ損じまいと　対面する　（大夫監）　ご立派な方であられたゆえ　どうぞして親しくお付き合いいただこうと願っておりましたが　そうした拙者の気持をご承知いただく機会もありませなんだうちに　お亡くなりになってしまったが　気持をふるいおこして　まことご無礼ながら　押して　参上つかまつった　こちらにおいでとうかがう　格別のお血筋と聞き及びますれば　をんなぎみ

一 ただもう拙者めの内々の主君とお思い申して。「なにがし」は、男性の自称、「ら」は接尾語。「私」は「公」に対する語。

二 祖母殿も。「おとど」は、婦人に対する敬称。

三 そんな奴らを。「すやつ」は、そいつ。「ばら」は複数。

四 大事の姫を。「君」は主君。

五 滅相もない。「おとどもしぶしぶにおはしげなることは……」と言ったのに対する答え。

六 めぐりあわせの悪い生れなのでありましょうか、遠慮される仔細がございまして。噂に流した姫の不具のことをいう。

七 万が一、目がつぶれ、足が折れておられようと、拙者はなおして進ぜよう。「天下に」は、強調の語。「やむ」は、なおす。

八 この自分の言いなりになっておられるのだ。自分が神仏に祈れば不具をなおすことなどたやすい、の意。

九 何日頃という申し入れに。強引に結婚の日取りの取り決めを迫ったのである。

一〇 今月（三月）は、季節（春）の終りだなどと、田舎らしい迷信をたてに言いのがれる。季の終りの月は結婚を忌む習俗があったらしい。

一一 庭におりての帰りぎわに、大夫の監は歌を詠みたく思ったので。田舎者のくせに、という嘲弄の筆致。

（頭の上に高く捧げてあがめたてまつりましょうぞ）いとかたじけなし。一ただなにがしらが私の君と思ひ申して、いただきになむささげたてまつるべき。二おとどもしぶしぶにおはしげなることは、よからぬ女どもあまたあひ知りてはべるを聞こしめしうとむなり。（お気が進まぬげにうけたまわっておりますのは、「拙者が」つまらぬ女どもをたくさん世話しておりますのをお聞き及びでお嫌いになるのでございましょう）さりとも、（しかしながら）三すやつばらを、（姫と）ひとしなみにはしはべりなむや。四わが君をば、（同じように扱いましょうや）后の位におとしたてまつらじものをや」など、いとよげに言ひ続く。（至極景気のよいご託を並べる）（乳母）五「いかがは。（后の位にも負けぬお扱いをいたす所存ですじゃ）かくのたまふを、いと幸ひありと思ひたまふるを、宿世つたなき人にやはべらむ、思ひ憚ることはべりて、（ありがたいお申し入れを）いかでか人に御覧ぜられむと、（どうして殿御とご縁組などできようかと）（姫は）人知れず嘆きはべるめれば、（悲しんでいるようですので）心苦しう見たまへわづらひぬる」と言ふ。（大夫監）「さらになおぼし憚りそ。（何のご遠慮には及ばぬ）天下に目つぶれ、足折れたまへりとも、なにがしはつかうまつりやめてむ。（肥後一円の）国のうちの仏神は、八おのれになむ靡きたまへる」など、ほこりゐたり。（大言壮語している）九その日ばかりといふに、一〇この月は季の果てなり、など、田舎びたることを言ひのがる。

一一 下りて行くきはに、歌詠まままほしかりければ、（だいぶ長いこと首をひねっ）やや久しう思ひめ

一二 姫君に万一私が心変りしましたなら、（どのような罰も受けようと）松浦にます鏡の神にかけて誓いましょう。「かけて」は「鏡」の縁語。「鏡の神」は、肥前の国松浦郡（今の唐津市）鏡に鎮座する鏡の宮。祭神は神功皇后、また天平年中兵を起して誅殺された大宰少弐藤原広嗣の怨霊も合祀されている（図録一参照）。

一三 「歌」と言わないで「和歌」と言ったのは耳馴れぬ言葉づかいで、無骨な田舎者らしい感じであろう。

一四 恋の道には不馴れで場違いな感じだ。嘲弄気味の草子地。「うひうひし」は、初心だの意。

一五 「わたしはもっと駄目、頭がぼうっとして」と言って、坐り込んだままなので。「まろ」は、親しい者同士の間で使う自称。男女ともに使う。

一六 長年お祈りしています念願が叶えられませんでしたら、鏡の神をひどいとお思い申すでしょう。「見る」は「鏡」の縁語。上の句は、姫が大夫の監のような田舎者と結婚されるようなことになったら、という意。

一七 このご縁談が駄目になったら、ひどいとお思いであろう気持を。「引き違へば」は、歌の「たがひなば」を無理に解釈したもの。「れ」は軽い敬語。

たぐらして、

（大夫監）一二「君にもし心たがはば松浦なる
鏡の神をかけて誓はむ

この和歌は、一三つかうまつりたりとなむ思ひたまふる」と、うち笑みたるも、一四世づかずうひうひしや。あれにもあらねば、返しすべくも思はねど、娘どもに詠まれど、「一五まろは、ましてものもおぼえず」とてゐたれば、いと久しきに思ひわづらひて、うち思ひけるままに、

（乳母）一六年を経て祈る心のたがひなば
鏡の神をつらしとや見む

とわななかし出でたるを、「待てや。こはいかに仰せらるる」と、ゆくりかに寄り来たるけはひに、おびえて、おとど、色もなくなりぬ。娘たち、さはいへど、心強く笑ひて、「この人の、さまことにものしたまふを、一七引き違へば、つらく思はれむを、なほほけほけしき人の、神かけて聞こえひがめたまふなめりや」と解き聞かす。

（我ながら上出来の詠みぶりと存じまする）
（乳母は）気もそぞろなので
（とても返歌どころで）
（あまり時がたつので困ったあげく）
（心に浮んだままに）
（大夫監）はてな
（震え声で詠み返したのを）
（これはいかなおっしゃりよう）
（急に近寄って来た様子に）
（乳母は）顔色
（姫君が）
（普通ではないお）
（気丈に）
（身体でいられますから）
（なんと申しても老碌し）
（鏡の神にかけて申し上げそこねられたのでしょうよ）
（ている母が）

一　おお、なるほどなるほど。「さり」は「さあり」の約。

二　もののわけも分らぬ土民ではござらぬ。これでも教養あるれっきとした官人だと誇る。

三　（二首目は）とても出来ない相談だったのだろうか、そのまま帰って行ったようだ。

長兄の豊後の介、上京を決意

四　姫をどうしてさし上げたものであろう。以下、母にせかされて苦慮する豊後の介の心中。

五　にらまれたのでは。「あたむ」は、「あた」（こちらに害をなすもの。敵）を活用させた語。

六　「妹たち」のうちの一人。乳母の娘二人のうちの妹娘の方だけが上京する。昔、童女としての名を「あてき」（貴君）といった娘が今は兵部の君と名乗っている、とここではじめて説明する。父の少弐が、昔、京で兵部省に勤めていたのに因んだ呼び名であろう（三〇〇頁注三参照）。

（大夫監）一「おい、さりさり」と、うなづきて、「をかしき御口つきかな。（拙者は しゃれた詠みぶりでいらっしゃる）なにがしら、田舎びたりといふ名こそはべれ、（評判こそござろうが）二くちをしき民にははべらず。都の人とても、何ばかりかあらむ。（何ほどのことがあろう）みな知りてはべり。（先刻承知のことでござる）なおぼ（馬鹿になさるは禁物でござるぞ）しあなづりそ」とて、また詠まむと思へれども、三堪へずやありけむ、去ぬめり。

次郎がかたらひ取られたるも、（大夫監に）まるめこまれたのも（乳母は）いと恐ろしく心憂くて、この豊後の介を責むれば、四いかがはつかうまつるべからむ、（せかすので）かたらひあはす（相談して力になってくれる人もいない）べき人もなし、（たった二人しかいない弟たちは）まれまれのはらからは、この監に同じ心ならずとて、仲違ひにたり、この監にあたまれては、五いささかの身じろきせむも、所狭くなむあるべき、なかなかなる目をや見む、と思ひわづらひにたれど、姫君の人知れずおぼいたるさまのいと心苦しくて、生きたらじと思ひ沈みたまへる、ことわりとおぼゆれば、いみじき（生きてはいまいと略をめぐらして）ことを思ひ構へて出で立つ。妹たちも、年ごろ経ぬるよるべを捨てて、（姫の）この御供に出で立つ。六あてきといひしは、今は兵部の君といふ

（（自分が）味方しないといって）（ままならぬことであろう）（ちょっとした身動きをしようにも）（かえってひどい目に遭うのが落ちだろう）（思案に暮れて）（嘆いていられる様子がとても痛々しくて）（もっともなことと思われるので）（思い切った計）（長年連れ添った夫）

七 四月二十日の頃に、結婚の吉日を選んでやって来ようという矢先に。

八 姉者人は。兵部の君の姉。「おもと」は、婦人に対する敬称。

九 長の年月暮したなじみの土地とはいっても、格別立ち去りがたい思いもない。上の「あひ見むことの」以下、兵部の君の心。

一〇 松浦の鏡の宮。

一一 寄るべもないこの土地を漕ぎ離れても、これから行く所はどこが泊り（落着き先）とも分らぬ身の上ですこと。「浮島」は、歌枕としては奥州塩竈の浦の島々をいうが、ここはその意味はない。「浮」に「憂き」が響く。

一二 行く先も見えぬ遠い波路に船出して、風にまかせてさすらう身の上の頼りないこと。「浮きたれ」は兵部の君の歌の「浮島」を受ける。「浮く」は、漂う意。

一三 姫君は、行方知れずになるようなとても心細い思いで。

一四『和名抄』に「舸」の字を「はやふね」と訓む。大きな舟の意。『花鳥余情』に、艫を八梃も十梃もたくさん立てた舟であるという。

〔姫に〕ぞ、添ひて、夜逃げ出でて船に乗りける。大夫の監は、肥後に帰り行きて、四月二十日のほどに、日取りて来むとするほどに、かくて逃ぐるなりけり。

姉おもとは、類広くなりて（家族が多くなって）、え出で立たず。〔姉妹は〕かたみに別れ惜しみて、あひ見むことのかたきを思ふに、年経つる故里とて、ことに見捨てがたきこともなし。ただ松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るるをなむ、（後ろ髪を引かれる思いで）かへりみせられて、悲しかりける。

（兵部君）一二
浮島を漕ぎ離れても行くかたや
いづくとまりと知らずもあるかな

（姫君）一三
行く先も見えぬ波路に船出して
風にまかする身こそ浮きたれ

一三 いとあとはかなきこちして、うつぶし臥したまへり。

かく逃げぬるよし、（自然に人の口の端に上って知れたら）おのづから言ひ出で伝へば、〔大夫監が〕負けじ魂にて追ひ来なむと思ふに、（気もそぞろになって）心もまどひて、早船といひて、（特別の船を用意してあ）さまことになむ

一 望む方に吹く風（順風）まで吹きつのって。
二 播磨灘。航海の難所として有名。「音に聞き目にはまだ見ぬ播磨なる響きの灘と聞くはまことか」（『忠見集』）そのほかの例があり、歌枕。次の「なだらかに」（何事もなく）は、「灘」に同音を重ねた文飾。（図録三参照）
三 純友の乱でも知られるように、瀬戸内海には多くの海賊が出没していた。
四 あの大夫の監が追って来るかもしれないと胸が波立ってばかりいるその響きには、響きの灘の荒い波音も物の数でもないことです。「さはる」（障る）は、さしつかえる意。
五 淀川の河口。当時の内海航路の起点で、京へはここから淀川を溯る。当時は、今の淀川の支流である神崎川（三国川）を溯ったから、「川尻」は今の尼崎市の北東部の辺にあたる。（図録二参照）
六 前に「船子どもの荒々しき声にて」（二八三頁）とあったのを受けていう。
七 播磨の国印南郡的形村の福泊の古称であろうとされる。韓泊から川尻まで三日の行程である。（図録三参照）
八 いとしくてならぬ妻や子も忘れてしまった。「韓泊より、川尻おすほどは」に続く歌詞と思われる。
九 ほんとに（歌の通り）妻子も皆捨て去ってきたことだ。以下、豊後の介の心中。

構へたりければ、思ふかたの風さへ進みて、あやふきまで走り上りぬ。響きの灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の船にやあらむ、小さき船の、飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり。海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来るにやと思ふに、せむかたなし。

（乳母）憂きことに胸のみ騒ぐ響きには
　響きの灘もさはらざりけり

「川尻といふ所、近づきぬ」と言ふにぞ、すこし生き出づるここちする。例の船子ども、「韓泊より、川尻おすほどは」と歌ふ声の情なきも、あはれに聞こゆ。豊後の介、あはれになつかしう歌ひすさびて、「いとかなしき妻子も忘れぬ」とて、思へば、げにぞ皆うち捨ててける、いかがなりぬらむ、はかばかしく身の助けと思ふ郎等どもは、皆率て来にけり、われをあしと思ひて追ひまどはして、いかがしなすらむ、と思ふに、心幼くもかへりみせで出でにけるかなと、すこし心のどまりてぞ、あさましきことを思ひ続くるに、心弱くう

一〇「涼源の郷井をば見ること得ずなりぬ　胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」（『白氏文集』巻三「縛戎人」）。江南の湿地に流される俘虜が身の上を語る長詩の一節。涼源を故郷とする男が捕えられて吐蕃（胡国、チベット）に四十年を過し、妻子ももうけたが、ようやく逃れたところ、漢軍にかえって蕃人として捕えられ、江南の地に流される。

一一ほんとに、おかしなことをしてしまったものだ。以下、兵部の君の心。

一二これから帰って行く京といっても、どこそこと落着くことのできる住み馴れた家があるわけでもないし。再び兵部の君の心。

一三とんでもないことをしたという思いにさいなまれるが、こうなった以上どうしようもないということで。成行きに任せるほかないという気持。

一四九条大路。九条大路から北の九条坊門小路あたりまでをも呼んだらしい。ここは左京であろう。北の七条あたりには東市がある。（二巻図録二参照）

都での一行の窮迫、石清水八幡宮に参詣

一五とりあえずその仮住居を確保しておいて。

一六市で物を売る女。（図録一〇参照）

一七肥前から都まで海路約一月、都に着いたのは五月の中旬頃である。七月から秋になる。

ち泣かれぬ。「胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」と誦ずるを、兵部の君聞きて、げにあやしのわざや、年ごろ従ひ来つる人の心にもにはかに違ひて逃げ出でにしを、いかに思ふらむと、さまざま思ひ続けらるる。帰るかたとても、そこ所と行き着くべき故里もなし、知れる人と言ひ寄るべきたのもしき人もおぼえず、ただ一所の御ためにより、ここらの年月住み馴れつる世界を離れて、浮べる波風にただよひて、思ひめぐらすかたなし、この人をもいかにしたてまつらむとするぞと、あきれておぼゆれど、いかがはせむとて、急ぎ入りぬ。

長年従順に連れ添ってきた夫
〔夫は〕どう思っているかと
知り合いだといって身を寄せられる頼りになる人も頭に浮ばない
今まで長の年月
筑紫
人の御ために
姫君お一
波風に身を任せて
何をどうしてよいかも分らない
この姫君も一体どうしてさし上げようとい
うのだろうと
〔京に〕

一四九条に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひ出でて、その宿りを占め置きて、〔九条は〕都のうちといへど、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女商人のなかにて、いぶせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくままに、来し方行く先悲しきこと多かり。豊後の介といふたのもし人も、ただ水鳥の陸にまどへるここち

生き残っていたのを捜し出して
一五れっきとした人の住んでいる界隈でもな
く
貧しげな
一六
一七
頼りにしている人も
ままならぬものと
うろうろしているよう

な思いで　所在なく馴れぬ都の生活の何のってもないことを思うにつけ

して、つれづれにならはぬありさまのたつきなきを思ふに、帰らむ（今さら国に帰るのも具合悪く）にもはしたなく、（無分別に〔国を〕）心幼く出で立ちにけるを思ふに、従ひ来たりし者どもも類に触れて逃げ去り、本の国（肥前）に帰り散りぬ。

（〔都に〕）住みつくべきやうもなきを、（すべもないのを）母おとど（乳母）、明け暮れ嘆きいとほしがれば、（〔豊後介〕）「いえ何　私自身のことは何の心配もいりません　（姫君お一人の御身のお仕合せとひ）何か、この身はいとやすくはべり。人ひとりの御身にかへたてまつりて、いづちもいづちもまかり失せなむに咎あるまじ。わ（私）れらいみじき勢になりても、若君をさるもののなかにはふらかしたてまつりては、何ごころかせまし」とかたらひなぐさめて、（心配せぬように慰めて〔豊後介〕）「神仏こそは、さるべきかたにもみちびき知らせたてまつりたまはめ。近きほどに、八幡の宮と申すは、かしこにても参り祈り申したまひし松浦、筥崎、同じ社なり。かの国を離れたまふとても、多くの願立て申したまひき。今、都に帰りて、かくなむ御験を得てまかり上りたると、早く申したまへ」とて、八幡にまうでさせたてまつる。そのわたり知れる人に言ひ尋ねて、五師とて、早く親のかたらひし大

（気の毒がると）（姫君が）（姫君を）（肥前）（筑紫）（姫君が）（姫君が）（姫君を）（以前亡き父が懇意にしていた）

（しかるべきご幸運にも〔姫君を〕お手引き申して下さるでしょう）（羽振りになっても）（たちが大した）（きかえに）（どんな気持がしましょう）（近辺で）（ご報告なさいませ）

九　大和の国磯城郡初瀬の長谷寺。霊亀元年（七一五）、僧道明が天武天皇のために建立。本尊十一面観音。朝野の尊崇があつかった。（図録二　豊後の介の一行、長谷寺に参詣　参照）

一〇　遠い唐土にも評判が高いそうです。源為憲の『三宝絵』にも「利益あまねく、霊験もろこしにさへ聞えたり」とある。古注には、大唐の僖宗皇帝の第四夫人馬頭夫人が容貌の醜いのを長谷寺の観音に祈請したところ、夢に貴僧が紫雲に乗って東方より来たり、瓶の水を面にそそぐと見て忽ち容貌端正になり、喜んで十種の宝物を献納したという話を引く（『長谷寺霊験記』上）。

一一　（若君は）同じ日本の国の中に、遠い筑紫の田舎とはいっても、長年お住みになったのだから。

一二　わざわざ徒歩でということにした。難行によって大きな利益を得たいという気持からである。

一三　以下、姫君の心中。

一四　大和の国磯城郡三輪村字金屋（桜井市三輪町金屋）。初瀬に入る入口で、長谷寺まで一里ほどの所。後文に見えるように、長谷寺参詣の用意を整えるために泊る所であった。（図録二参照）

一五　京を出て四日目の午前十時前後に。京から椿市あるいは長谷寺まで、牛車で三日の行程であった。

徳残れるを呼び寄せて呼びとりて、〔八幡に〕まうでさせたてまつる。

（豊後介）「うちつぎては、仏の御なかには、初瀬なむ、日の本のうちには、あらたかなあらたなる験（しるし）ご利益をお示しになると あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあんなり。ましてわが国のうちにこそ、遠き国の境とても、年経たまひつれば、若君をばまして恵みたまひてむ」とて、〔初瀬に〕出だしたてまつる。ことさらに徒歩よりと定めたり。〔姫君は〕馴れぬこととて ならはぬここちに、いとわびしく苦しけれど、人の言ふままに、夢中でものもおぼえで歩みたまふ。いかなる罪深き身にて、こんな流浪の日を送るのだろうかかる世にさすらふらむ、母君がわが親、この世にもういらっしゃらなくて世になくなりたまへりとも、私をかわいそうとお思いならわれをあはれとおぼさば、おいでになるあの世におはすらむ所に誘ひたまへ、もし世におはせば、御顔見せたまへと、仏を念じつつ、母君の面影も知らないありけむさまを、嘆ので だにおぼえねば、ただ、母君がおいでだったらというだけのいちずの悲しさを親おはせましかばとばかりの悲しさを、今ですっと嘆いてこられたのだが きわたりたまへるに、こうして今〔馴れぬ旅路で〕つらくてたまらないままに、また改めて悲しい思いを噛みしめながら かへしいみじくおぼえつつ、やっとのことで からうして、椿市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生けるここちもせで行き着きたまへり。

一 今までの道中、歩くともいえぬありさまで、あれこれと手当てしたけれども。姫君の足弱なさま。
二 この頼りとする豊後の介。一行の大黒柱である。
三 そのほかには下男と走り使いの男の子など三、四人。
四 女たちは総勢で三人。姫君と乳母と兵部の君。
五 婦人の外出姿。（二巻裘七二頁注七参照）
六 便器の掃除をしたりする女と年取った下女二人ほどがお供している。
七 仏前に供える燈明。当時、椿市で調達するのが普通であったらしい。
八 宿を取った家の主人の法師。すでに予約があるのにと文句を言うのである。
九 どなたが入りこんで来られたのか。一行をとがめる口ぶり。
一〇 なるほど、泊り客がやって来た。

椿市で夕顔の侍女右近と邂逅

一一 頭を掻き掻きあちこちしている。部屋割りに苦心惨憺の体。
一二 豊後の介や家来は奥に入り、下男などはよその目立たぬ所に隠したりして。
一三 あとの人たちは部屋の一方に身を寄せた。乳母たち。相客に譲ったのである。
一四 幕。（二巻須磨二五四頁注五参照）

一歩むともなく、とかくつくろひたれど、足のうら動かれず、わびしければ、せむかたなくて休みたまふ。二このたのもし人なる介、弓矢持ちたる人二人、三さては下なる者、童など三四人、四女ばらある限り三人、五壺装束して、六樋洗めく者、古き下衆女二人ばかりとぞある。七いとかすかに忍びたり。八大御燈明のことなど、ここにてし加へなどするほどに日暮れぬ。九家主人の法師、「人やどしたてまつらむとする当家に一〇る所に、何人のものしたまふぞ。一一あやしき女どもの、一二心にまかせて」と、一三むつかるを、一四めざましく聞くほどに、一五げに、人々来ぬ。

これも徒歩より一六なめり。よろしき女二人、下人どもぞ、男女、一七数多かめる。一八馬四つ五つひかせて、一九いみじく忍びやつしたれど、二〇きよげなる男どもなどあり。二一法師は、二二せめてここにやどさまほしくして、二三頭掻きありく。二四いとほしけれど、二五またやどりかへむもさまあしく、二六わづらはしければ、二七人々は奥に入り、二八ほかに隠しなどして、二九かたへは片つかたに寄りぬ。三〇軟障などひき隔てておはします。三一この来る人

（姫君は）
家来
相当な身分の
ひどく人目を忍んで微行のていだが
家の主人
無理にもこの一行をここに泊らせたいと思って
気の毒だが
面倒なので
体裁が悪く
（姫君は）
もう一歩も踏み出せず
ひどい言い分と
文句を言うのを
新たに手に入れたりしているうちに
ほかのお方のお宿をすることになっている当家に
わけの分らぬ女たちが
勝手なことをして

もはづかしげもなし。いたうかいひそめて、かたみに心づかひしたり。さるは、かの世とともに恋ひ泣く右近なりけり。年月に添へて、はしたなきまじらひのつきなくなりゆく身を思ひなやみて、この御寺になむたびたびまうでける。

例ならひにければ、かやすく構へたりけれど、徒歩より歩み堪へがたくて、寄り臥したるに、この豊後の介、隣の軟障のもとに寄り来て、参りものなるべし、折敷手づから取りて、「これは御前に参らせたまへ。御台などうちあはで、いとかたはらいたしや」と言ふを聞くに、わがなみの人にはあらじと思ひて、もののはざまよりのぞけば、この男の顔見しこちす。誰とはえおぼえず。いと若かりしほどを見しに、ふとり黒みてやつれたれば、多くの年隔てたる目には、ふとしも見わかぬなりけり。「三条、ここに召す」と呼び寄する女を見れば、また見し人なり。故御方に、下人なれど、久しくつかうまつりなれて、かの隠れたまへりし御住処までありしものな

気のひける相手でもない　ひどくひっそりして　お互いに気を遣っている　年月がたつにつれて　長谷寺　参詣していたのだった　いつものことなので　身軽な旅支度だったけれども　歩いての旅はひどく　姫君のお食事なのであろう　姫君に　(豊後介)　お膳など整わなくて　大層恐れ多いことです　思い出せない　(豊後介の)　隙間　(今は)　日に焼けて粗末な旅装なので　とっさにも見分けられないのだった　(豊後介)

一五 それが（この相客というのは）実はあの、忘れる時とてなく亡き夕顔を恋い慕って涙にくれている右近なのであった。この巻の冒頭に右近のことを書いた作者の用意がここに至って知られる。

一六 身の置き所のないご奉公がそぐわなくなってゆく身の上を。源氏方があまりに立派だからである。

一七 右近は、物に寄りかかって横になっていたところ。

一八 食器を載せる片木（へぎ）作りの角盆。（図録一一参照）

一九（相客の女主人は）自分たち並みの身分の人ではあるまいと思って。右近は、豊後の介の言葉から、女主人の身分の高さを察する。

二〇 三条、姫君がお召しです。「三条」は、下女の名。前に「古き下（げ）衆女」とあった。

二一 亡き夕顔。

三 夕顔が身を隠しておられた五条の小家。

一 覗き見できるようなしつらいではない。注意深く屏風などを立てめぐらしてあるのである。

二 三条にたずねてみよう。以下、右近の心中。

三 豊後の介の若い頃の通称。恐らく父が兵部省に仕えていて、その太郎（長男）、それに藤原の姓を加えた通称。

四 食物に夢中になっていて、すぐにもやって来ないのが。姫君の食膳のお下がりを食べているのであろう。

五 右近にはとてもにくらしく思われるのも、せっかちなことだ。「うちつけなりや」は草子地。「うちつけ」は、唐突なさま。

六 ご存じでいらっしゃる京のお人だなんて。人違いではありますまいか。

七 薄紅の、練って柔らかくした絹。下の「衣」は不審。『花鳥余情』は、上に薄衣を着たものか、という。青表紙本、別本の中に「ききぬ」とするものがある。「生衣」と解され、生絹の表着。

八 あなた様でいらしたのですね。「あが御許」は、婦人を親しみ呼ぶ言い方。

九 まだうら若い年頃の三条を見馴れていた昔の頃を思い出すと。

りけり、（右近は）見て取って と見なして、いみじく夢のやうなり。主とおぼしき人は、女主人 確かめたくてたまらないが いとゆかしけれど、見ゆべくも構へず。思ひわびて、この女に問はむ、兵藤太といひし人も、これにこそあらめ、姫君のおはするにや、この男 思い及ぶと と思ひ寄るに、気もそぞろになって いと心もとなくて、この中隔てなる三条を呼ばすれど、食物に心入れて、とみにも来ぬ、いと憎しとおぼゆるも、うちつけなりや。

（三条）身に覚えのないことです からうして、「おぼえずこそはべれ。筑紫の国に、二十年ばかり経にける下衆の身を、知らせたまふべき京人よ。人違へにやはべらむ」とて、寄り来たり。田舎びたる搔練に衣など着て、いといたうふとりにけり。わが齢もいとどおぼえてはづかしけれど、「なほさしのぞけ。われをば見知りたりや」とて、顔をさし出でたり。この女の手を打ちて、「あが御許にこそおはしましけれ。あなうれしともうれし。いづくより参りたまひたるぞ。上はおはしますや」と、いとおどろおどろしく泣く。若きものにて見なれし世を思ひ出づる

ますます思い知られて気がひけるけれども 構わず（右近） 三条 私に見覚えがありますか 顔をお出し

（驚いて）手を打ち合せて 参詣なさったのですか 夕顔 大仰に

一〇 何はともあれ、乳母殿はおいでですか。「おとど」は、婦人の敬称。

一一 「あてき」と言っていた人は。兵部の君の童名。（二九二頁注六参照）

一二 夕顔のこと。夕顔のことについて言い出さないのは、彼女を死なせてしまった上、その死後、源氏からの口止めもあって乳母たちに知らせなかったというひけめからである（夕顔一七七頁参照）。

一三 ほんとにひどい、何というお人かと恨めしくお思いするお人に、とうとう会えるだなんて。夕顔のお供をして出たまま、右近から何の消息もなかったからである。

一四 よそよそしく間を隔てていた屏風のようなものを。前頁に「いとゆかしけれど、見ゆべくも構へず」とあった。

一五 年老いた乳母。

一六 死出の旅路の障りになろうかとそのお世話に困じ果てて。

に、隔て来にける年月数へられて、いとあはれなり。「まづ、おとどはおはすや。若君はいかがなりたまひにし。あてきと聞こえしは」とて、君の御ことは、言ひ出でず。「皆おはします。姫君も大人になりておはします。まづ、おとどにかくなむと聞こえむ」とて入りぬ。

今まで過ぎてしまった　胸の迫る思いがする　（右近）　（三条）　立派に成人していられます　これこれと

皆おどろきて、「夢のここちもするかな。いとつらく、言はむかたなく思ひきこゆる人に、対面しぬべきことよ」とて、この隔てに寄り来たり。気遠く隔てつる屏風だつもの、名残なくおしあけて、まづ言ひやるべきかたなく泣きかはす。老人は、ただ、「わが君はいかがなりたまひにし。ここらの年ごろ、夢にてもおはしまさむ所を見むと、大願を立つれど、はるかなる世界にて、風の音にてもえ聞き伝へたてまつらぬを、いみじく悲しと思ふに、老の身の残りとどまりたるもいと心憂けれど、うち捨てたてまつりたまへる若君の、らうたくあはれにておはしますを、冥途のほだしにもてわづらひき

乳母たち　言葉もなく　互いに泣く　軟障の所に　夕顔　今まで長年の間　〔夕顔の〕　遠い筑紫の田舎にいて　風の便りにもお噂を耳にすることができませんのを　生き残って　母君がそのままお残し申しておかれていますのもとても情けないのですが　いじらしくおいたわしくておいでなのを

一 まだ目も瞑れないでいます。「またたく（瞬）」は、目叩く。火がまたたく、という言い方から、年寄りがわずかに余命を保っている意と見る説は当らない。

二 昔、あの時、言っても詮ない夕顔の急死にどうしようもなく困り果てた時よりも。

三 いえもう、申し上げても今さらどうにもなりません。

四 どうしようもなく。「むつかし」は、手を付けかねる、というほどの意。

五 前に「大御燈明のことなど、ここにてし加へなどするほどに日暮れぬ」（二九八頁）とあったのに照応する。前には大まかに言い、その間、この右近との邂逅のことがあったのである。

六 どちらも（乳母方も右近も）お互い格別気を遣うでもなく。昔馴染みであることが分ったから、姿を隠したりしないのである。

七 一際目立ってかわいらしげな後ろ姿が。姫君のさま。

八 四月の更衣の頃着る単めいたものに。これを頭から被くので「着こむ」という。河内本「うへにのしひとへめくもの」。「のしひとへ」は、練絹を板に張ったものかという。

御堂に参籠

こえてなむ、またたきはべる」と言ひ続くれば、昔そのをり、いふかひなかりしことよりも、〔今の方が〕返事のしようもなく言いづらいと思うけれども いらへむかたなくわづらはしと思へども、

〔右近〕三「いでや、聞こえてもかひなし。御方（夕顔）は、はや亡せたまひにき」と言ふままに、二三人ながらむせかへり、〔涙に〕皆いとむつかしく、せきかね涙を抑えかねているたり。

〔豊後介一行が〕日暮れぬと急ぎたちて、御燈明（五）のことどもしたため果てて急がせば、なかなかいと心あわたたしくて立ちわかる。〔右近〕ご一緒しましょうかとても落着かぬ思いで「もろともにや」と言へど、〔乳母は〕かたみに供の人のあやしと思ふべければ、この介にも、右近とめぐり合った事情も話して聞かせられないことのさまだに言ひ知らせあへず。（六）われも人もことにはづかしくもあらで、皆下り立ちぬ。右近は、人知れず目とどめて見るに、（七）なかにうつくしげなるうしろでの、いといたうやつれて、卯月（八）の単めくものに着こめたまへる髪の透影、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦しう悲しと見たてまつる。

すこし足なれたる人は、右近疾く御堂に着きにけり。〔豊後介一行は〕姫君のご介

九 初夜の勤行の頃に。「初夜」は、一日を六時（晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜）に分けたうちの一。

一〇 ご本尊から右の方に、近い間にしつらえてある。外陣を仕切って参籠者の局とする。「間」は、柱と柱の間。

一一 豊後の介の一行が祈禱を依頼した世話役の僧侶は、まだ馴染みが浅いせいか、姫君の局は西の間でご本尊から遠い所だったのを。本堂はほぼ南面しているから、右近の局と方角は同じだが遠いのである。

一二 源氏。太政大臣である。

一三 無体な扱いを受けることはありますまいと心丈夫に思っています。「らうがはし」は「乱がはし」。

一四 こうした人の集まるお寺では、素姓のよくないわけの分らぬ者たちが。以下、姫君を自分の局にお呼びしてもう安心という口ぶり。「生者」は、一人前でない者の意。

一五 源氏の君が姫君のお行方をお知りになりたいお気持が深くておいでのようですから、お知らせ申し上げて。（夕顔一七一頁参照）

一六 どうぞ姫君に幸運をお授け下さいませ。以上、右近の心中の祈念。

抱に難渋しながら づらひきこえつつ、初夜行ふほどにぞ〔御堂に〕上りたまへる。いとさわがしく人まうでこみてののしる。右近が局は、仏の右のかたに近き間にしたり。この御師は、まだ深からねばにや、西の間に遠かりけるを、

お参りに集まって大層な騒ぎだ

〔右近〕ぜひこちらにおいでなさいませ 「なほここにおはしませ」と、尋ねかはし言ひたれば、男どもをばとどめて、介にかうかうと言ひあはせて、こなたに移したてまつる。

場所を捜しあって 家来たちは 相談して 右近の局に〔姫君を〕

〔右近〕こんなしがない身の上ですが 「かくあやしき身なれど、ただ今の大殿になむさぶらひはべれば、かくかすかなる道にても、らうがはしきことははべらじと頼みはべる。田舎びたる人をば、かやうの所には、よからぬ生者どもの、あなづらはしうするも、かたじけなきことなり」とて、物語いとせまほしけれど、おどろおどろしき行ひのまぎれ、騒がしきに、もよほされて、仏をがみたてまつる。右近は心のうちに、「この人をいかで尋ねきこえむと申しわたりつるに、かつがつかくて見たてまつれば、今は思ひのごと、大臣の君の、尋ねたてまつらむの御心ざし深かめるに、知らせたてまつりて、幸ひあらせたてまつりたまへ」な

お仕えしていますから

こうした忍びの旅でも

〔姫君に〕恐れ多いことです

馬鹿にした振舞をしますのも

いろいろ話をしたいのは山々だが

騒々しいのに 引き込ま

大声を挙げての周囲の勤行の騒ぎが

この姫君をどうかしてお捜し申そうと今までずっとお祈り申してきましたが

念願どおり

念じたのだった

ど申しけり。

国々より、田舎人多くまうでたりけり。一この国の守の北の方も、まうでたりけり。いかめしく勢ひたるをうらやみて、この三条が言ふやう、「大悲者には、異事も申さじ。三あが姫君、四大弐の北の方ならずは、五当国の受領の北の方になしたてまつらむ。六三条らも、七随分にさかえてかへり申しはつかうまつらむ」と、八額に手をあてて念じ入りてをり。右近、いとゆゆしくも言ふかなと聞きて、（右近）「いといたくこそ田舎びにけれな。九中将殿は、昔の御おぼえだにいかがおはしましし。まして今は、天の下を御心にかけたまへる大臣にて、一〇いかばかりいつかしき御なかに、一一御方しも、一二受領の妻にて、一三品定まりておはしまさむよ」と言へば、（三条）「一四あなかま、たまへ。大臣たちもしばし待て。一五大弐の御館の上の、一六清水の御寺、一七観世音寺に参りたまひし勢は、一八帝の御幸にやは劣れる。一九あなむくつけ」とて、なほさらに手をひき放たず、拝み入りてをり。

仰々しく　威勢を振うのを

縁起でもないことを言うものだと

昔のご威勢だってどれほどでいらしたことでしょう　お心のままになさっていられる　どんな　四　にかど立派な親子の仲でいらっしゃるのに　まあいやな

〔額から〕

一　大和の国の守。大和は大国で、守は従五位上相当。

二　大慈悲者の意。観音菩薩の慈悲を称えて呼ぶ語。

三　大事の姫様を。「あが」（我が）は、親しみ呼ぶ気持。

四　大宰の大弐。従四位下相当。大宰府の次官。帥（長官）は多く親王が任ぜられ赴任しないので、大弐が実質的には長官に等しい。大宰府は西海道（九州）全体を管轄するから、地方官中の最要職であり、三条が実際に知る限りでの最高の権力者である。

五　この大和の国。

六　分相応に栄えて、お礼参りも十分にいたしましょう。

七　合掌した手を額に当てて一心に祈念している。

八　中将様。姫君の父君である頭の中将を、三条の知っている昔のままの呼び方で呼んだ。今は内大臣。

九　その姫君が、選りに選って受領の妻になって、中流のしがない身分に落着いてしまわれるなんて。

一〇　まあうるさい、お黙りなさい。大臣方とおっしゃるが、それもしばらくお置き下さい。

一一　大弐様の北の方が。

一二「清水の御寺」は、観世音寺の通称。清水山普門院と号する。大宰府跡の東にあり、天智天皇の勅願による建立。東大寺に次いで、天平宝字五年正月、薬師寺とともに戒壇が設けられ、九州一の大寺であった。（図録一参照）

一三 姫君の一行は、三日間参籠のご予定だった。

一四 世話役の僧。

一五 ご燈明を供えるについてその趣旨をしたためた文書。僧が施主に代って仏前で読んで礼拝する。

一六 頭の中将の子であるので藤原氏である。「瑠璃君」は、姫君の幼名かともいうが、恐らく右近の作った仮名であろう。

一七 (姫君をお見つけ申すことができるようにと祈った) その願も、お礼参りをすることにいたします。

一八 乳母たちが側で聞くのも、感無量の思いがある。

一九 大層騒がしく、一晩中、僧たちはお勤めをしているようだ。「なり」は、推定の助動詞。局から、僧たちの仏前の礼拝のさまをうかがう趣。

右近と乳母、宿坊に語る

二〇 姫君一行は (御堂から) 右近の知り合いの僧の宿坊に下りた。

二一 源氏の奥方。紫の上のこと。

二二 紫の上のお手許でお育ちの姫君 (明石の姫君) のご様子も、(源氏の実の姫君だから) まことに当然のことながら、すばらしくていられます。この時七歳。

筑紫人は、三日籠らむと心ざしたまへり。右近は、さしも思はざりけれど、かかるついでに、のどかに聞こえむとて、籠るべきよし、大徳呼びて言ふ。御あかし文など書きたる心ばへなど、さやうの人はくだくだしうわきまへければ、常のことにて、「例の藤原の瑠璃君といふが御ためにたてまつる。よく祈り申したまへ。その人、このころなむ見たてまつり出でたる。その願も果たしたてまつるべし」と言ふを聞くも、あはれなり。法師、「いとかしこきことかな。たゆみなく祈り申しはべる験にこそはべれ」と言ふ。いと騒がしう、夜一夜行ふなり。

明けぬれば、知れる大徳の坊に下りぬ。物語、心やすくとなるべし。姫君のいたくやつれたまへる、はづかしげにおぼしたるさま、いとめでたく見ゆ。「おぼえぬ高きまじらひをして、多くの人をなむ見集むれど、殿の上の御容貌に似る人おはせじとなむ、年ごろ見たてまつるを、また生ひ出でたまふ姫君の御さま、いとことわりに

(一三) それほどの予定では
(一四) 三日参籠の旨を
(一五) ゆっくりお話も申そうと思って
(一六) そうした僧はこま
(一七) せっかくの機会なので
(一八) 書いてある趣旨など
(一九) いつものことで
(二〇) (右近)
(二一) 近頃
(二二) なかったが
(二三) いうお方のためにご燈明をさし上げます
(二四) やっとお見つけ申したのです
(二五) それは結構なことでございます
(二六) 拙僧が怠りなく
(二七) 話を
(二八) 心おきなくというつもりら
(二九) ごく粗末な旅支度でいられるのを〔右近の手前〕気のひける思いでいられる様子が
(三〇) (右近) 思いもかけぬ高貴のお方にお仕えして
(三一) ここ長年

一（源氏が明石の姫君を）大切にお育て申していらっしゃる様子も、またとないほどのようですのに。
二 めったにないお美しさと思われます。
三 源氏の君は、父桐壺の帝の御代この方。
四 今上（冷泉帝）の御母后と申し上げたお方と。藤壺のこと。
五 私が（それらの方々と姫君とを）比べて拝しますのに。
六 成人されたらどんなにかと思われるお方です。
七 紫の上。
八（ご自分の奥方ですから）言葉に出してあからさまに、どうして美人の数の内にお入れなさいましょう。
九 私と夫婦でいらっしゃるなんて、貴女は大それたお方だ。源氏が紫の上に言う冗談。
一〇 姫君は、（その紫の上にも）どこが劣っておいでしょう。
一一（仏様のように）頭上はるかに光をめぐらすといったお方はおられません。いわゆる光背の中の頭光。本来は眉間の白毫から発する光で、図像では頭部の背後をとりまく円光に様式化されている。

めでたくおはします。[一]かしづきたてまつりたまふさまも、並びなかめるに、〔姫君が〕こんな粗末なお身なりながら〔紫上や明石姫君に〕かうやつれたまへるさまの、劣りたまふまじく見えたまふは、[二]ありがたうなむ。大臣[三]の君、父帝の御時より、大勢のそこらの女御、后、それより下は残りなく見たてまつり集めたまへる御目にも、当代の御母后と聞こえしと、明石の姫君この姫君の御容貌とをなむ、美人とはこういよき人とはこれを言ふにやあらむとおぼゆると聞こえたまふ。[五]見たてまつり並ぶるに、かの后の宮藤壺をば知りきこえず、姫君はきよらにおはしませどお小さくて、まだ片なりにて、[六]生ひ先ぞおしはかられたまふ。上の御容貌は、やはりどなたも及びもつかぬであろうとお見えになります源氏〔紫上を〕なほ誰か並びたまはむとなむ見えたまふ。殿も、すぐれたりとおぼしたのようですがめるを、言に出でては、何かは数へのうちには聞こえたまはむ。[八]われに並びたまへるこそ、君はおほけなけれとなむ、たはぶれきこえたまふ。見たてまつるに、命が延びるお二方の美しいご様子をたぐひおはしましなむやとなむ思ひはべるに、[一〇]いづくか劣りたまはむ。ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとて、[一一]頂を離れた

一三 紫の上や姫君（玉鬘）。
一三 今まで姫君を丹精して育てて来た乳母。
一四 こんなお美しい姫を、すんでのことに辺鄙な田舎に一生をお過させ申すことになりかねませんでしたので。
一五 家や竈も捨て。せっかくの生活の根拠をも捨て、の意。
一六 右近に対する呼び掛け。
一七 姫君の実の父君内大臣のお耳に入り、お子様のお一人としてお扱われになるような工夫をお考え下さい。
一八（姫君は）気はずかしくお思いで。自分のこれからのことが話題になっているので、今の自分の寄るべない身の上をひけ目に思う。
一九 お前が姫のお噂を聞き出したら（ぜひ自分に知らせよ）と。
二〇 そうしたれっきとした奥様方がおいでになるとのこと。「なり」は、伝聞の助動詞。姫君が源氏の思い人になることを心配する。

る光やはおはする。ただこれを、すぐれたりとは聞こゆべきなめりかし」と、うち笑みて見たてまつれば、老人もうれしと思ふ。

（乳母）一四「かかる御さまを、ほとほとあやしき所に沈めたてまつりぬべかりしに、（それが）惜しくあたらしく悲しうて、一五家かまどをも捨て、男女の頼むべき子どもにも引き別れてなむ、かへって見も知らぬ世界のような気のするかへりて知らぬ世のここちする京にまうで来し。一六あが御許、（姫君を）早くよいようにはやよきさまにみちびきこえたまへ。高き宮（高貴のお邸にお勤めなさるあなたは）仕へしたまふ人は、（自然）おのづから行きまじりたるたよりものしたまふらむ。一七父大臣に聞こしめされ、数まへられたまふべきたばかり、おぼし構へよ」と言ふ。一八はづかしうおぼいて、うしろ向きたまへり。

（右近）「いでや、身こそ数ならねども、（源氏）殿も御前近く召し使ひたまへば、（いえもう）（しがない私ですが）（あれこれとかかわりのあるってがおありでしょう）ものをりごとに、（姫君は）いかにならせたまひにけむと聞こえ出づるを、（どうおなりあそばしたことかとお話し申し上げますのを）（お心にかけておられて）聞こしめし置きて、（自分もどうかしてお捜し申そうと思っているから）われいかで尋ねきこえむと思ふを、聞き出でたてまつりたらばとなむ、（仰せになります）のたまはする」と言へば、（乳母）「大臣（源氏）の君はめでたくおはしますとも、二〇さるやむごとなき妻どもおはしますなり。

一 内大臣に、ぜひお知らせ申し上げて下さい。「を」は強意の助詞。

二 夕顔に思いもかけず先立たれた当時のことなど。次の右近の言葉に見える源氏の意向は、同様のことが、一巻夕顔一七一頁に見える。

三 何分にも当時、我ながら分別のなかったことと思いますが。以下、自分の消息を乳母に伝えなかった右近の弁解。

四 わざわざお知らせすることもようしないでおりましたうちに。当時、乳母の家は西の京にあり、姫君はそこにいたとある（夕顔一七〇頁、一七一頁）。

五 ご主人様が少弐におなりになったことは、人々がそうお呼びするので承知いたしました。以下、その事情を述べる。

六 お話し申せないでそのままになってしまいました。

七 それでも（筑紫に下られても）姫君は、あの昔の夕顔の五条の家にお残し申していかれたものとばかり思っていました。

八 （姫君が）田舎人でお過しになったかもしれないなんて。

九 心に仏を念じて、仏名、経文など唱えること。

一〇 長谷寺の南を西に流れる。歌枕。（図録二参照）

一一 二本の杉の立っているこの初瀬にお参りしなかったら、この古川（初瀬川）のほとりで姫君にお会いできたでしょうか。「初瀬川古川の辺に二本ある杉年を

まづまことの親とおはする大臣（本当の父君でいらせられる）にを知らせたてまつりたまへ」など言ふに、ありしさまなど語り出でて、「世に忘れがたく悲しきことになむおぼして、（源氏は）かの御かはりに（亡き夕顔の代りに）見たてまつらむ、（姫を）子も少なきがさ（その当時）足りなくもあるから）うざうしきに、（お世話申そう）わが子を尋ね出でたると人には知らせてと、そのかからおっしゃっておいでです）みよりのたまふなり。心の幼かりけることは、（何かにつけ気がねばかりされる年頃でしたので）よろづにものつつましかりしほどにて、え尋ねても聞こえで過ぐししほどに、少弐になりたまへるよしは、御名にて知りにき。（赴任のお暇乞いに）まかり申しに、殿（二条の院）に参りたまへりし日、ほの見たてまつりしかども、（ちらりとお姿を拝見いたしましたが）え聞こえで止みにき。さりとも姫君をば、かのありし夕顔の五条にぞとどめたてまつりたまへらむとぞ思ひし。あないみじや、（まあ滅相もない）田舎人にておはしまさましよ」など、（親身に話し合いながら）うちかたらひつつ、日一日、昔物語、念誦などしつつ、参り集まる（参詣に）つどふ人のありさまども、見下さるるかたなり。（場所）前より行く水をば、初瀬川といふなりけり。右近、（坊の前を流れる川は）

「ふたもとの杉のたちどを尋ねずは

経てまたもあひ見む二本ある杉」（『古今集』巻十九雑体歌、旋頭歌、題しらず、読人しらず）によって詠んだもの。

一二 お祈りしたかいがあって、やっとお目にかかることができました。「祈りつつ頼みぞわたる初瀬川うれしき瀬にも流れ合ふやと」（『古今六帖』三、川、兼輔）による。

一三 以前のことは知りませんが、今日の逢瀬のうれし涙に身体まで流れてしまいます。「初瀬川」は、右近の歌と引歌に答えて、流れが「早い」という気持で「はやく」（以前）に言い掛ける。「逢ふ瀬」は、右近の引歌の「うれしき瀬」に応じたもの。「流れぬ」に「泣かれぬ」を掛ける。

一四 以下、姫君を見ての右近の気持。

一五 気のきかないお方だったら。「こちごちし」は、ごつごつしている、無骨だ、の意。以下、姫君の返歌ぶりに洗練された教養を見て取って、乳母の丹精を喜ぶ気持。

一六 右近は（このような姫君が育たれた）筑紫を奥ゆかしい所と思ってみるのだが。

一七 昔の知り人は皆すっかり田舎っぽくなっているので、合点のゆかぬ思いでいる。三条の言動などのこと。

古川のべに君を見ましや

一二うれしき瀬にも」と聞こゆ。

（姫君）初瀬川一三はやくのことは知らねども

今日の逢ふ瀬に身さへ流れぬ

と、うち泣きておはするさま、いとめやすし。容貌一四はいとかくめでたくきよげながら（おきれいながら）、田舎び、こちごちしう一五おはせましかば、いかに玉の瑕ならまし、いで、あはれ、いかでかく生ひ出（お立派にお育ちだったのだろう）でたまひけむ、と、おとど（乳母）をうれしく思ふ。母君（夕顔）は、ただいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし（若々しくおっとりしていて）、これは気高く（気品があって）、もてなしなどはづかしげに（優雅な風情でいらっしゃる）、よしめきたまへり。筑紫を心にくく思ひなすに、皆見し人は里びにたるに、心得がたくなむ。暮るれば御堂に上りて、翌日もまたの日も行ひ暮らしたまふ。

秋風、谷よりはるかに吹きのぼりて、いと膚寒きに、ものいとあはれなる心どもには、よろづ思ひ続けられて、人なみなみならむこ

（いかにもやさしい風情のある方でいらしたが）（姫君）（立居振舞など）（まこと感無量の）（思いでいる乳母たちには）（何かと）（人並みの暮しをすることもお）

一 側室たちの生んだ。
二 こんな日陰の身の上も望みが持てるという気におなりなのだった。主語は姫君に転じている。「下草」は歌語。
三 ひょっとしてまた行方を尋ねても分らなかったらどうしようと、心配に思うのだった。乳母、右近双方とも、互いに相手の行方が分らなかった過去がある。
四 源氏の邸宅。後の三一九頁に「右近が里の五条」とある。
五 乳母たちの住む九条とはそう離れていないので、相談するにも便宜ができたという気がするのだった。

右近、源氏に玉鬘の消息を伝える

六 六条の院。
七 結構な御殿である。「玉の台」は、「玉台」をそのまま訓んだ歌語。
八 意外な出会いのことを思いながら（局で）休んでいた。
九 身分の高い女房や若女房たちの中で。
一〇 晴れがましく思われる。「面立たし」。
一一 源氏も（右近を）お召しになって。
一二 いつになく、独り者が、うって変って、若返るということもあるものだ。「やまめ人」は「やもめ人」（寡婦）。

ぽつかないことであろうと気落ちしていたのに
ともありがたきことと思ひ沈みつるを、この人の物語のついでに、右近
父大臣（内大臣）の御ありさま、腹々の何ともあるまじき御子ども、皆ものめ
結構一人
たいしたこともなさそうな
かしなしたてたまふを聞けば、かかる下草（したくさ）たのもしくぞおぼしなりぬる。出づとても、
前にお引き立てになっている話を聞くので
帰る時も
かたみに宿る所も問ひかはして、それぞれ京の住所も聞き合って
まどはしたらむ時と、あやふく思ひけり。右近が家は、六条の院近
きわたりなりければ、ほど遠からで、言ひかはすもたつき出で来ぬ
るここちしけり。

右近は、大殿（おほいとの）に参りぬ。このことをかすめ聞こゆるついでもやと
姫君を見出したことをそっと申し上げる機会もあろうかと思って
て、急ぐなりけり。御門（みかど）引き入るるより、けはひことに広々として、
〔車を〕
格別立派な様子で
退出し参上する
まかで参りする車多くまよふ。数ならで立ち出づるも、まばゆきこ
行き来する
数ならぬ身で出仕するのも
きまりの悪いほどの
こちする玉の台（うてな）なり。その夜は御前（おまへ）にも参らで、思ひ臥したり。ま翌日
たの日、昨夜（よべ）里（実家）より参れる上臈（じやうらふ）、若人（わかうど）どものなかに、取り分きて右
特別に
〔紫上が〕
近を召し出づれば、一〇おもだたしくおぼゆ。大臣（おとど）も御覧じて、「など
〔源氏〕
か、里居（さとを）は久しくしつる。一一例ならず、やまめ人の、引き違（たが）へ、こま

一三 例によって、お返事に困るような冗談などおっしゃる。右近の年齢（三十七、八か）にふさわしくない色めいたことを言ってからかうのである。

一四 お暇を頂きまして、七日以上たちましたが。長谷寺での参籠三日と往復に要した日数。

一五 山寺にお参りいたしまして。「山踏」は、山歩きの意。

一六 お部屋の明りなどおつけして。ここは源氏と紫の上同座の場面。右近は前に二人別々にお目通りをすませている。

一七 しばらく間を置いて拝見する右近の目には。

一八 あの姫君（玉鬘）を。以下、右近の心中。

一九 気のせいか、やはり紫の上のお美しさとは比べものにならないので。

がへるやうもありかし。（何かしゃれた話などあったに違いないな）をかしきことなどありつらむかし」など、一三例の、むつかしう、たはぶれごとなどのたまふ。「まかでて、一四（右近）七日に過ぎはべりぬれど、（しゃれた話など私どもにはなかなかございません）をかしきことははべりがたくなむ。山踏しはべりて、一五（やまぶみ）（可憐なお人を見つけたことでございました）あはれなる人をなむ見たまへつけたりし」「何人ぞ」と問（源氏）ひたまふ。ふと聞こえ出でむも、（すぐにここで申し上げるのも）まだ上に聞かせたてまつらで、取（紫の上）（源氏）だけに申し上げたのを）り分き申したらむを、（紫上が）のちに聞きたまうては、（あとでお聞きになったのでは）隔てきこえけりとや（自分に隠しごとをしたとお思いになろうか）おぼさむ、など、思ひ乱れて、「今聞こえさせはべらむ」（右近）（あとで申し上げましょう）とて、人人参れば、聞こえさしつ。

一六 大殿油（おほとなぶら）など参りて、うちとけ（くつろいで）並びおはします御（源氏と紫上の）ありさまども、（目を見張るほどのお美しさだ）いと見るかひ多かり。女君（をんなぎみ）は、二十七八（にじふしちはち）にはなりたまひぬらむかし、（今を盛りと輝くほどに美しくおなりでいらっしゃる）さかりにきよらにねびまさりたまへり。一七 すこしほど経（お暇を頂いていた間につややかな美しさがお増しになったことだと）て見たてまつるは、またこのほどにこそにほひ加はりたまひにけれと見えたまふ。一八 かの人をいとめでたし、（紫上に）劣らじと見たてまつりしかど、一九 思ひなしにや、なほこよなきに、（幸運に恵まれないのと恵まれたのとでは違いのあるはずのも）幸ひのなきとあるとは隔てあるべきわざかな

一 お寝みになるということで（源氏は）右近をお足をもむのにお召しになる。「御脚参り」で一語。
二 やはり年寄り同士は。右近に足をもませる源氏の冗談。
三 やっかいなご冗談をおっしゃっておからかいになりますから、困って皆が嫌うのです。源氏が色めかしい冗談を言うから……の意。
四 奥方も。紫の上。
五 そんなことのなさそうな（嫉妬しそうにない）お心とも見えぬから、あぶないものだ。
六 とても魅惑的で、冗談を言って人を笑わせるような一面も、このところおありでいらっしゃる。以下、近頃の源氏の日常についていう。
七 今は、朝廷に出仕して政務多忙といったお身の上でもないので。職掌の特にない太政大臣だからである。
八 こんな（右近のような）年寄りの女房にまでおたわむれになる。
九 修行を積んだ山伏とでも仲よくなって、連れて来たのか。右近が前に「山踏しはべりて」と言ったのでこういう。
一〇 夕顔のこと。「消ゆ」は「露」の縁語。

と見あはせらる。大殿籠るとて、右近を御脚参りに召す。「若き人は、苦しとてむつかるめり。なほ年経ぬるどちこそ、心かはしてむつびよかりけれ」とのたまへば、人々忍びて笑ふ。「さりや、誰か、その使ひならいたまはむをば、むつからむ。うるさきたはぶれごと言ひかかりたまふを、わづらはしきに」など言ひあへり。「上も、年経ぬるどちうちとけ過ぎば、はた、むつかりたまはむとや。さるまじき心と見ねば、あやふし」など、右近にかたらひて笑ひたまふ。いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひたまへり。今は朝廷に仕へ、いそがしき御ありさまにもあらぬ御身にて、世の中のどやかにおぼさるるままに、ただはかなき御たはぶれごとをのたまひ、をかしく人の心を見たまふあまりに、かかる古人をさへぞたはぶれたまふ。

（源氏）女房
気を合せて仲よくする
誰が
（人々）そうですわ
皆が言う
（源氏）
年寄り同士が仲よくしすぎたら
お腹立ちになるというのかね
ひそひそおっしゃって
毎日がのんびりしていらっしゃるの
楽しんで女房たち
他愛のない
にまかせて

「かの尋ね出でたりけむや、何ざまの人ぞ。尊き修業者かたらひて、率て来たるか」と問ひたまへば、「あな見苦しや。はかなく消えたまひにし夕顔の露の御ゆかりをなむ、見たまへつけたりし」と聞こ

（源氏）さっきの捜し出したというのは
（右近）まあ人聞きの悪い
どういう人なのか
見つけ出したのでございます
ゆかりのお方
ちの気持をためしてご覧になるあまり
のだと見比べられる
つらいといっていやがるようだ
いやがりましょう
お
ひ
ふ
す
ぎょうぎ
ゆ
ぎょうぎ
ぎょう
ぎょう
ぎょう

一 ありのままには申し上げにくくて。筑紫のような田舎に育ったことは玉鬘の経歴上の疵になることなので、ぼかして答える。

二 辺鄙な山里でございます。「山里」は、京都周辺の山の中の人里。

三 もうよい、事情をご存じでない方がいられるから。事情を知らぬ紫の上に妙な嫉妬をされても困るという気持。半ば冗談である。

四 （お子様だからとて）お方様ほどのお美しさでいらっしゃるとは限るまいと思っておりましたが、格段に（お方様より）お美しく成人なすっていらっしゃるとお見受けしました。

五 このお方（紫の上）と比べてどうかね。

六 （姫がそんなに美しいのを）得意に思っているようだな。右近が、紫の上に比べては、それほどでもない、と言ったのを受けて言う。

七 実の親のような言い方をなさる。

八 右近を一人だけそっとお呼びになっては。

源氏、玉鬘を引き取ろうとし、玉鬘と歌の贈答をする

（源氏）それはほんとに思いもかけぬことだったなゆ。「げに、あはれなりけることかな。今まで長い間どこにいたのか年ごろはいづくにか」とのたまへば、一 ありのままには聞こえにくくて、（右近）二「あやしき山里になむ。昔の女房も一部分はそのままお仕えしていましたので昔人もかたへはかはらではべりければ、その世の物語し出ではべりて、堪へがたく思ひたまへりし」など聞こえゐたり。（源氏）三「よし、心知りたまはぬ御あたりに」と、隠しきこえたまへば、上、「あなわづらはし。ねぶたきに、聞き入るべくもあらぬものを」とて、御袖して御耳塞ぎたまひつ。（源氏）四「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」などのたまへば、（右近）五「かならずさしもいかでかものしたまはむと思ひたまへりしを、こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」と聞こゆれば、（源氏）六「をかしのことや。誰ばかりとおぼゆ。この君と」とのたまへば、（右近）七「いかでか、さまでは」と聞こゆれば、（源氏）八「したり顔にこそ思ふべけれ。われに似たらばしも、うしろやすしかし」と、親めきてのたまふ。

（とても悲しい思いをいたしました）申し上げている耳にはいるはずもありませんのに話ですこと

（あの頃の）亡き

（誰くらいと思われるか）それはすばらしいな

（それほどでは）私に似ているのなら安心なのだがね

かく聞きそめてのちは、九 召し放ちつつ、（源氏）十「さらばかの人、このわ

（こうしてお耳になさってのちは）この邸に

たりにわたいたてまつらむ。年ごろ、ものついでごとに、くちをしうまどはしつることを思ひ出でつるに、いとうれしく聞き出でながら、今までおぼつかなきも、かひなきことになむ。父大臣には何か知られむ。いとあまたもて騒がるめるが、数ならで、今はじめ立ちまじりたらむが、なかなかなることこそあらめ。われは、かうさうざうしきに、おぼえぬ所より尋ね出だしたるとも言はむかし。好きものどもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」などかたらひたまへば、かつがついとうれしく思ひつつ、「ただ御心になむ。大臣に知らせたてまつらむとも、誰かは伝へほのめかしたまはむ。いたづらに過ぎものしたまひしかはりには、ともかくも引き助けさせたまはむことこそは、罪軽ませたまはめ」と聞こゆ。

「いたうもかこちなすかな」と、ほほゑみながら、涙ぐみたまへり。

「あはれに、はかなかりける契りとなむ、年ごろ思ひわたる。かくて集へたる方々のなかに、かのをりの心ざしばかり思ひとどむる人

残念なこと　何かことあるごとに　こうして消息を聞　お引き取り申すことにしよう　とに行方知れずにしてしまったことと思い出していたのに　お互い知らずにいるのも　つまらぬことだと思う　きながら　数ならぬ身で　〔姫が〕今さらお子　子供も少な　かえって苦労するのが落ちだろう　たちの仲間入りをしても　意外な所から〔実の子の姫を〕捜し出したのだとでも言っておこう　くてさびしいのだから　相談をお持ちかけになると　ともかくも　むなしくお亡くなりになってしまわれたお方様のお身代りには　どのようにでも　姫君をお引き立て下さいますことが　苦笑しながらも　長年思ってきているのだ　縁の薄かった二人の仲だと　あの夕顔との時の気持ほどに深く心をひかれる人はいなかっ

一　実の父の内大臣には、知られる必要もあるまい。知らせる必要もない、知られたとてどうしようもあるまい、の意。

二　（内大臣は）ずいぶん大勢のお子たちの世話に大騒ぎしていられるようだが。「騒がる」の「る」は軽い敬語。

三　女には目のない若者たちにたっぷり気苦労を味わわせる種として、それは大事に扱うことにしよう。源氏の実の娘という触れ込みで六条の院に引き取れば、出入りする貴公子たちの注目の的になるはずである。

四　ご意向どおりになさって下さいませ。お任せ申し上げます、の意。

五　内大臣にお知らせ申し上げようにも、一体どなたがそれとなく先様のお耳に入れることができましょう。源氏を措いてほかにない、という意。

六　罪滅ぼしをなさることになりますでしょう。

七　こうして身を寄せてもらっている人たちの中に。六条の院そのほかに面倒を見ている夫人たちのこと。

八（夕顔だけは）言ってもかえらぬ、あんなことになってしまって。

九 そんなふうに（姫が）ここでお暮しになることになったら、ほんとに長年の思いが叶う気がするだろう。

一〇 玉鬘にお手紙をさし上げなさる。

一一 故常陸の宮の姫君。（一巻末摘花の巻参照）

一二 そのように落ちぶれた境遇で大きくなったという玉鬘の様子が心配で。

一三 こう申し上げるのを。次の歌に続く。

一四 あなたには心当りはなくても、辿ってみればお分りのはずです、あなたと私の間には切っても切れないご縁があるはずですから。「三島江」は、摂津の国の歌枕。今の高槻市内、淀川の中流右岸にある。「三稜」を言うための語。「三稜」は、沼沢に自生する草で、葉が細長く、背面の中央に突起した筋があるので、「筋」に言い掛ける。

一五 玉鬘のお召し物、女房たちの衣料など、いろいろ贈られる。

一六 六条の院の衣類調進所。宮中の貞観殿にある役所の名でもあるが、上流貴族の邸のもこう呼んだ。

なかりしを、命長くて、（たのだが）わが心長さをも見果つるたぐひ多かめるなかに、（私のいつまでも変らぬ気持を見届けるといった人も多い中に）いふかひなくて、右近ばかりを形見に見るは、くちをしくなむ。思ひ忘るる時なきに、さてものしたまはば、いとこそ本意かなふここちすべけれ」とて、一〇御消息たてまつれたまふ。一一かの末摘花の（お話にもならぬ人であったことを思い出されるので）いふかひなかりしをおぼし出づれば、一二さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて、まづ文のけしきゆかしくおぼさるるなりけり。（どんな返事を書くか知りたくお思いになるのだった）ものまめやかに、（この場合にふさわしく）あるべかしく（きまじめに）書きたまひて、端に、

（源氏）一三「かく聞こゆるを、

一四知らずとも尋ねて知らむ三島江に
生ふる三稜の筋は絶えじを」

（右近が自分で退出して伝え）となむありける。御文、（源氏のお言葉など）みづからまかでて、（〔姫君に〕）のたまふさまなど聞こゆ。一五御装束、人々の料などさまざまあり。上にもかたらひきこえた（紫の上にもご相談なさったので）まへるなるべし、（用意の品々をお取り寄せになって）御匣殿などにも、（格別なのをと）まうけの物召し集めて、色あひ、（仕立て）しざまなど、ことなるをと選らせたまへれば、田舎びたる目どもに（乳母たち）

は、ましてめづらしきまでなむ思ひける。

目を見張るほどに

正身は、ただかことばかりにても、まことの親の御けはひならば

ほんの申し訳程度のことにせよ　本当の父君からのお便りであるのならばう

こそうれしからめ、いかでか知らぬ人の御あたりにはまじらはむと、

どうして知りもせぬお人のお邸に身を寄せることができようと　れしいであろうが

おもむけて、苦しげにおぼしたれど、あるべきさまを、右近聞こえ

申し上げ　乳母たち　自然

知らせ、人々も、「おのづから、さて人だちたまひなば、大臣の君

姫のご消息をお知りになるでしょう

も尋ね知りきこえたまひなむ。親子の御契りは、絶えて止まぬもの

ものの数でもない身で　どうぞして姫のお目に止りますようにと思っておりましたのさえ

なり。右近が、数にもはべらず、いかでか御覧じつけられむと思う

たまへしだに、仏神の御導きはべらざりけりや。まして、誰も誰も

たひらかにだにおはしまさば」と、皆聞こえなぐさむ。まづ御返り

無理に　〔玉鬘は〕　お返事

をと、せめて書かせたてまつる。いとこよなく田舎びたらむものを、

気おくれしておいでになる　香をかおり高くたきしめたのを

とはづかしくおぼいたり。唐の紙のいとかうばしきを取り出でて、

書かせたてまつる。

（玉鬘）一〇　数ならぬ三稜や何の筋なれば

うきにしもかく根をとどめけむ

一　玉鬘ご本人は。

二　お思いで。「おもむけ」は、相手をこちらの方に向けさせる意で、ここは、自分の意向を示す、もらすというほどの意。

三　これからどうしたらよいかを。

四　そのように（源氏に引き取られて）人並みにおなりになったら（身分のある方らしいお暮しをするようになったら）。

五　父君の内大臣。

六　親子のご宿縁は切れたままになってしまうということはありません。

七　仏や神のお導きがなかったことでしょうか。神仏のご加護によって長谷寺でお目にかかれたではありませんか、の意。

八　どちら様も（内大臣も姫君も）ご無事でさえいらっしゃいますなら（きっといつかは）。源氏に迎えられることをすすめる気持。

九　中国から渡来した紙。

一〇　数ならぬこの私は、どうした因縁でつらいこの世に生れたのでしょう。「数ならぬ身」を「三稜」に言い掛け、「うき」（泥）に「憂き」を掛ける。

二 紫の上の町には、あいている対の屋などもない。以下、源氏の考慮。

三 大層なご威勢で、どの建物も使っていらっしゃるから。紫の上、明石の姫君がおり、源氏の居所でもあって、六条の院の中心のような一画である。

玉鬘の居所、丑寅の町の西の対に予定される

一三 人目に立つし、人の出入りも多いであろう。

一四 中宮にお仕えする女房と同じように人に思われる恐れがある、とお思いになって。

一五 少し引っ込んで目立たないが。

一六（花散里の住む）東北の町の西の対が、今文殿として使われているのを。「文殿」は、書籍を収めておく部屋。文庫。

一七 一緒に住むにも。

源氏、紫の上に夕顔のことを打ち明ける

一八 紫の上。

一九 こうしてお心の内に秘めておられることのあったのを。紫の上に長年打ち明けなかったこと。

二〇 もう死んでしまった人のことを、聞かれもしないのにお話しすることがありましょうか。（亡き人のことを）世にある人のことのように……の意。

二一 あなたのことを人より格別にお思い申しているからなのです。

とのみ、ほのかなり。手は、はかなだちて、よろぼはしけれど、あてはかにてくちをしからねば、御心落ちゐにけり。

墨色もかすかだ　筆跡　たよりなげで　たどたどしいけれども　気品　〔源氏は〕安心なさるのだった　がただよっていて見所があるので

〔玉鬘の〕住みたまふべき御かた御覧ずるに、南の町には、いたづらなる対どもなどもなし、勢ことに住み満ちたまへれば、顕証に人しげくもあるべし、中宮のおはします町は、かやうの人も住みぬべく、のどやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなされむ、とおぼして、すこし埋れたれど、丑寅の町の西の対、文殿にてあるを、異方へ移してとおぼす。あひ住みにも、忍びやかにこころよくものしたまふ御方なれば、うちかたらひてもありなむとおぼしおきつ。

一　二　三　四　五　六　七　八　秋好む中宮　西南の町　こうした若い姫も住めそうに　閑静で　はあるけれど　〔花散里は〕控え目な気立てがよくていらっしゃるお方だ　仲むつまじくやってゆけるだろうと考えをお決めになる

上にも、今ぞ、かのありし昔の世の物語聞こえ出でたまうける。かく御心に籠めたまふことありけるを恨みきこえたまふ。「わりなしや。世にある人のうへとてや、問はず語りは聞こえ出でむ。かかるついでに隔てぬこそは、人にはことに思ひきこゆれ」とて、いと感慨深げに〔夕顔のことを〕あはれげにおぼし出でたり。「人のうへにてもあまた見しに、いと

以前の遠い昔の夕顔とのことをお打ち明けになるのだった　〔紫上は〕　〔源氏〕困りまし　〔源氏〕他人のこととしても数多く見たことですが

九　一〇　一一　一二　一三　一四　一五　一六　一七　一八　一九　二〇　二一

一 戌亥（西北）の町に住む人（明石の上）と同じくらいには、どうしても世話した人でしょう。巻の冒頭に、右近も「故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし」（二八一頁）と思っているとあった。明石の上の六条の院移転は十月とあるから（少女二七八頁）、厳密にはまだ移転前である。十二行目に「かくいふは、九月のことなりけり」とある。

二 そうはおっしゃっても、明石の上と同列にはお扱いにならなかったでしょうに。明石の上の扱いは破格であるとの皮肉。

三 明石の上を、分に過ぎた人だと（紫の上は）おもしろからずお思いである。

四 明石の姫君。七歳。

五 しかし（明石の上への重いお扱いも）もっともなことだと思い返す気にもおなりになる。

玉鬘、十月に六条の院に移る

六 玉鬘が六条の院にお移りになることは、そうすらすらと運ぶわけのものでもない。いろいろ支度が大変なのである。

思はぬなかも、女といふものの心深きをあまた見聞きしかば、さらにすきずきしき心はつかはじとなむ思ひしを、おのづからさるまじきをもあまた見しなかに、あはれとひたぶるにらうたきかたは、またぐひなくなむ思ひ出でらるる。世にあらましかば、北の町にもの人のなみには、などか見ざらまし。人のありさま、とりどりになむありける。かどかどしう、をかしき筋などはおくれたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな」などのたまふ。「さりとも、明石のなみには、立ち並べたまはざらまし」とのたまふ。なほ北の御殿をば、めざましと心置きたまへり。姫君の、いとうつくしげにて、何心もなく聞きたまふが、らうたければ、またことわりぞかしとおぼしかへさる。

（て愛していない仲でも）（愛執の深さを）（決して）（ついかかわり合ってはならぬ）（〔夕顔は〕）（好色な気持はおこすまいと思っていたのですが）（心からただもうかわいいという点では）（人とも数多く付き合ったなかで）（ほかに類のない人だと思い出されることです）（もしまだ生きていたら）（女の気立てというものは）（人さまざま）（〔夕顔は〕）（才気があって）（気の利いた点などは劣っていましたが）（なものでした）（ほんとに上品でいとしい人でした）（紫上）（やはり）（かわいらしい）（様子で）（無心にこの話を聞いていられるのが）（いとしく思われるので）

かくいふは、九月のことなりけり。わたりたまはむこと、すがすがしくもいかでかはあらむ。よろしき童女、若人など求めさす。筑紫にては、くちをしからぬ人々も京より散りぼひ来たるなどを、た

（これまでの話は）（〔乳母は〕）（適当な）（捜させる）（一通り気の利いた女房たちも）（流れて来たといった人たちを）（つて）

七 市女といった者たちが、とてもよく捜し出しては連れてくる。九条の家は「あやしき市女商人のなかにて」（二九五頁）と前にもあった。

八 前に「右近が家は、六条の院近きわたりなりければ」（三一〇頁）とあった。

九 源氏は、花散里に玉鬘のお世話をお頼みになる。

一〇 気を落して。源氏との仲を悲観してという趣。

一一（二人の間に）子供がありましたので。花散里へは自分の実子のようにいう。

一二（その子が）年頃になるまでそのままになっていたのですが。「をうな」は「女」で、一人前の女の意。

一三 夕霧のお世話をお願いしたのですが、結果は上々です。同じようにお世話下さい。夕霧を花散里に託したこと、少女二六三頁に見える。なお、夕霧が近衛の中将（従四位下相当）とのこと、ここにはじめて見える。

一四 山家育ちのような娘ですから。「山がつ」は、山で生活する賤しい者。

をたよって よりにつけて呼び集めなどしてさぶらはせしも、にはかにまどひ出でたまひし騒ぎに、皆おくらしてければ、また人もなし。京はおのづから広き所なれば、市女などやうのもの、いとよく求めつつ率て来。その人の御子などは知らせざりけり。右近が里の五条に、まづ忍びてわたしたてまつりて、人々選りととのへ、装束ととのへなどして、十月にぞわたりたまふ。

〔六条院に〕

大臣、東の御方に聞こえつけたてまつりたまふ。「あはれと思ひし人の、一〇もの倦じして、はかなき山里に隠れゐにけるを、幼き人のありしかば、年ごろも人知れず尋ねはべりしかども、一一え聞き出でなむ、一二をうなになるまで過ぎにけるを、おぼえぬかたよりなむ、聞きつけたる時にだにとて、うつろはしはべるなり」とて、「母も亡くなりにけり。一三中将を聞こえつけたるに、あしくやはある。同じごと後見たまへ。一四山がつめきて生ひ出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべく、ことに触れて教へたまへ」と、いとこまやかに聞こ

お仕えさせていたのも　あわてて上京　昔愛していた女　何と言　国に置いて来てしまったので　ほかに　なさった　どなたの姫君といったことは伏せてのことであった　女房を　〔六条院に〕　捜していたのですが　聞き出すことができ　思いもかけぬ方面から　耳に　こちらに移らせることにしたのです　したせめて今からでもと思って　今までずっと　なくて　田舎びたところが　しかるべく　しつけて下さい　ていねいにお頼みになる

る

えたまふ。「げにかかる人のおはしけるを、（花散里）ほんとにこのような方がいらしたのを 存じ上げないでいたことです 知りきこえざりけるよ。姫君の一所ものしたまふがさうざうしきに、おさびしいことですから 結構なことと存します よきことかな」と、お いらかにのたまふ。「かの親なりし人は、（源氏）娘の親だった人は 気立てが 心なむ、ありがたきまで 滅多にないほど素直な よかりし。御心もうしろやすく思ひきこゆれば」などのたまふ。 人でした あなたのお気立ても安心にお思いしていますので

「つきづきしく後見むなども、こと多からで、つれづれにはべるを、（花散里）三 うれしかるべきことになむ」とのたまふ。殿のうちの人は、御女と も知らで、「何人、また尋ね出でたまへるならむ。むつかしきふる ものあつかひかな」と言ひけり。御車三つばかりして、人の姿ども など、右近あれば、田舎びずしたてたり。殿よりぞ、綾、何くれと 噂したのだった 女房たちの身な りなど 右近がいるので お支度にさし上げられた たてまつれたまへる。 源氏から

その夜やがて、大臣の君わたりたまへり。昔、光源氏などいふ名 早速 始終噂にお聞きしていたけれども は聞きわたりたてまつりしかど、年ごろのうひうひしさに、さしも 長年都の暮しには縁がなかったので それほど ともお思い申し上げなかったが 思ひきこえざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳のほころびよ りはつかに見たてまつる、いとど恐ろしくさへぞおぼゆるや。わた わずかに 〔源氏の美しさは〕 〔源氏が〕

一 明石の姫君。

二 おっとりしたおっしゃりようである。玉鬘の世話を頼まれても快く引き受ける花散里らしい挨拶。

三 立派にお世話するなどと申して忙しくするほどのこともございませんで、所在なくしておりますので、（玉鬘のお世話は）うれしいことでございます。「つきづきしく……」は、夕霧の世話に格別のこともしていないという謙遜の言葉。

四 一般の、六条の院内の人々は、（玉鬘が）源氏の御娘分であることも知らないで。

五 どういう人を、（源氏は）また捜し出されたのだろう。面倒な骨董趣味だ。源氏が昔の恋人でも引き取って世話するのだろうと臆測する体。

六 御車三台ほどで。玉鬘の移転のさま。

七 玉鬘の所へ。花散里の丑寅の町の西の対。

源氏、玉鬘と対面

八 以下、乳母や娘の兵部の君の気持を述べる。「光源氏」という呼び名は、一巻帚木四五頁、同若紫一九二頁に見える。

九 几帳の帷と帷の縫い合せてない所。

一〇 懸金を外して開けると。
一一 この戸口から入れる人は、特別な間柄なのだね。恋人を迎え入れるような右近の戸の開け方に、冗談をいう。
一二 この燈火の暗さは、まるで恋人同士の出会いのような気がする。前に「ほのかなる大殿油に」とあった。燈台である（一巻図録九参照）。
一三 横を向いておられる姿格好などが。
一四 これでは、もったいぶりすぎる。
一五 燈台の燈心を掻き立てて少し近づける。
一六 遠慮のない人だね。右近のこと。自分の顔がはっきり見えることを気にしていう。
一七 なるほどと思われるお目もとのご立派さだ。燈火にはっきり照らし出された源氏の容貌。
一八 心に掛けぬ折とてなく心配していたのですが。
一九 玉鬘の年齢。二十一歳。
二〇 こんなに長いこと会わないでいた例はほかにないでしょうに。

おいでになる方の妻戸を
りたまふかたの戸を、右近かい放てば、一〇「この戸口に入るべき人は、
（源氏）一一
心ことにこそ」と笑ひたまひて、廂なる御座についゐたまひて、
お坐りになって
見たいものだと聞いている
「一二燈こそ、いと懸想びたるここちすれ。親の顔はゆかしきものとこ
〔玉鬘は〕
そ聞け。そうもお思いにならぬかさもおぼさぬか」とて、几帳すこし押しやりたまふ。わり
とても気のひける思いなので
なくはづかしければ、一三そばみておはする様体など、どこにも難がなく いとめやすく見
ゆれば、うれしくて、「（源氏）今すこし、明るくしてくれぬか光見せむや。一四あまり心にくし」
とのたまへば、右近、一五かかげてすこし寄す。「（源氏）一六おもなの人や」とす
こし笑ひたまふ。一七げにとおぼゆる御まみのはづかしげさなり。いさ
他人行儀によそよそしいおっしゃ方もなさらず
さかも異人と隔てあるさまにものたまひなさず、すっかり父親気取りで いみじく親めきて、
（源氏）
「年ごろ御行方を知らで、一八心にかけぬ隙なく嘆きはべるを、かうて
過ぎ去った昔のこともいろいろ思
見たてまつるにつけても、夢のここちして、過ぎにしかたのことど
い出されて
も取り添へ、忍びがたきに、こらえきれぬ悲しさにえなむ聞こえられざりける」とて、御
はきはきとお話もできぬことです
〔昔のことが〕
目おしのごひたまふ。まことに悲しうおぼし出でらる。一九御年のほど
（源氏）
数へたまうて、「親子の仲の、二〇かく年経たるたぐひあらじものを、

一 つらい前世からの宿縁でしたね。

二 幼い頃母に先立たれて田舎に暮すようになりましてから。「かぞいろ（父母）はあはれと見ずや蛭の児は三歳になりぬ脚立たずして」（『日本紀竟宴和歌』大江朝綱）（松風一四四頁注三参照）。三歳で夕顔に先立たれ、四歳の時、筑紫に下った（一八二頁参照）。

三 亡くなった夕顔。

四 源氏は思い出し笑いをして。夕顔のことを思い出して思わず頬がゆるむ。

五 かわいそうにとも、今は私のほかに誰が思いましょう（母君もいらっしゃらないのだから）。「かぞいろはあはれと見ずや」の歌詞を踏まえていう。

源氏、玉鬘の様子を紫の上に語る

六 源氏の弟宮。少女二六八頁に見えて、琵琶を弾いている。

七 この邸（六条の院）の風流な趣にひかれてしょっちゅうやって来られる気持を乱してみたいものだ。「籬」は、柴などで編んだ垣、転じて垣の歌語。数奇をこらした邸内の意を籠めて和らげて言ったもの。

八 こうした話の種になるような娘がいないからなのだ。「くさはひ」は、材料、種の意。

契りつらくもありけるかな。今はものうひうひしく、若びたまふべき御ほどにもあらじを、年ごろの御物語なども聞こえまほしきに、などかおぼつかなくは」と恨みたまふに、聞こえむこともなくはづかしければ、「脚立たず沈みそめはべりにけるのち、何ごともあるかなきかになむ」と、ほのかに聞こえたまふ声ぞ、昔人にいとよく似て おぼえて若びたりける。ほほゑみて、「沈みたまへりけるを、あはれとも今はまた誰かは」とて、心ばへいふかひなくはあらぬ御いらへとおぼす。右近に、あるべきことのたまはせて、わたりたまひぬ。

（玉鬘が）めやすくものしたまふを、うれしくおぼして、上にも語りきこえたまふ。「さる山がつのなかに年経たれば、いかにいとほしげならむとあなづりしを、かへりて心はづかしきまでなむ見ゆる。かかるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿の宮などの、この籬のうちこのましうしたまふ心乱りにしがな。好きものどもの、いとうるはしだちてのみこのわたりに見ゆるも、かかるもののくさはひのな

（玉鬘）

（源氏）

（源氏）

（源氏）

（源氏は）

（紫の上）

もの馴れず　恥ずかしがられるよ　うなお年でもあるまいに　どうして何もおっしゃらぬのか　申し上げるべきこともなく　何もかも見る影もな　い有様でございまして　遠くで苦労なさったことを　おっとりしている　たしなみのほどはまんざらでもない　〔玉鬘の〕　いろいろ指図をお与えになって　お帰りになった　こちらが気がひけるほどに　ああした田舎者の中で　どんなに見るに見かねる有様だろ　うと見くびっていたのだが　娘がいると　こうした　色好みの若者たちが　いつも至極ま　じめくさったふうでこの邸に顔を出すのも

九（玉鬘を）存分に大事にしたいものだ。男たちが夢中になるように、の意。

一〇平気には見過せない男たちの様子を見てやろう。「なほあり」は、そのままでいる、ここは平気でいるというほどの意。

一一そんなふうに（娘分として）大事にして、男たちの心をまどわしてみるのでした。

一二全く心ないやり方をしてしまったものです。しゃにむに妻としてわが物にしてしまった、という。

一三（源氏のやや露骨な冗談に）顔を赤らめていられるご様子は。

一四すさび書きに。

一五亡き夕顔を恋しく思い続ける自分は昔のままだが、この娘はどのような目に見えぬ縁に引かれて自分の許に頼って来たのだろう。「玉かづら」は「鬘（かづら）」（かもじ）の美称。「絶えぬ」に掛る枕詞だから、「筋」に、絶えぬ筋の意が籠められる。「筋」（毛筋）は「玉かづら」の縁語。巻名、この歌により、この人の呼称もこの歌による。なおこの歌「いづくとて尋ね来つらむ玉かづら我は昔の我ならなくに」（『後撰集』巻十八雑四、源善朝臣）による。　**夕霧にも紹介**

一六ほんとに深く愛された人の形見なのだろうと。

一七そのつもりで仲よく面倒を見てやってほしい。夕霧にも異腹の姉のように思わせていう。

きほどなり。いたうもてなしてしがな。なほうちあらぬ人のけしき見集めむ」とのたまへば、「あやしの人の親や。まづ人の心はげまさむことを先におぼすよ。けしからず」とのたまふ。「まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ。いと無心にしなしてしわざぞかし」とて、笑ひたまふに、面赤みておはする、いと若くをかしげなり。硯引き寄せたまうて、手習に、

「恋ひわたる身はそれなれど玉かづら
　いかなる筋を尋ね来つらむ

あはれ」と、やがてひとりごちたまへば、げに深くおぼしける人の名残なめりと見たまふ。

中将の君にも、「かかる人を尋ね出でたるを、用意してむつびとぶらへ」とのたまひければ、こなたにまうでたまひて、「人数ならずとも、かかる者さぶらふと、まづ召し寄すべくなむはべりける。御わたりのほどにも、参りつかうまつらざりけること」と、いとま

（紫上）おかしな親御様ですこと
何よりも男の方を夢中にさせることをまずお考えになるなんて
（源氏）
いけないお方
今のような気持だったら
（紫上は）
（源氏）こうした人を手許に引き取ったから
夕霧
玉鬘の所にご挨拶にいらして
（夕霧）お役にも立ちませんが
こうした兄弟がいると
誰よりも先にお呼びつけになってしかるべきでした
こちらにお移りの時にも
駆けつけてお世話申し上げなかったとは残念です
至極まじ

事情を知る女房

めなご挨拶をなさるので　はらはらするほどに

めまめしう聞こえたまへば、かたはらいたきまで、心知れる人は思ふ。心の限り尽くしたりし御住ひなりしかど、あさましう田舎びたりしも、たとしへなくぞ思ひくらべらるるや。御しつらひよりはじめ、今めかしう気高くて、親、はらからとむつびきこえたまふ御さま、容貌よりはじめ、目もあやにおぼゆるに、今ぞ三条も、大弐をあなづらはしく思ひける。まして、監が息ざしけはひ、思ひ出づるもゆゆしきこと限りなし。豊後の介の心ばへを、ありがたきものに君もおぼし知り、右近も思ひ言ふ。おほぞうなるは、ことも怠りぬべしとて、こなたの家司ども定め、あるべきことどもおきてさせたまふ。豊後の介もなりぬ。年ごろ田舎び沈みたりしここちに、にはかに名残なく、いかでか、かりにても立ち出で見るべきよすがなくおぼえし大殿のうちを、朝夕に出で入りならし、人を従へ、こと行ふ身となれるは、いみじき面目と思ひけり。大臣の君の御心おきての、こまかにありがたうおはしますこと、いとかたじけなし。

とんでもなく　お部屋の調度などをはじめとして　はなやかで　ここことは天地の差だと思い比べられることだ　目もくらむほどに思われるので　息づかいや剣幕は　律義な心根を　まれに見るものと　玉鬘　ぞっとすること

玉鬘の新しい生活　豊後の介、家司になる

一（筑紫での玉鬘のお住居は）精いっぱい贅を尽したお住居だったが。以下、乳母や兵部の君の思い。

二 玉鬘が、親、兄弟としてお親しくなさる方々（源氏や夕霧）のご様子、ご容貌をはじめとして。

三 今になってはじめてかの三条も、大弐などたいしたものではないと思うのだった。諸諧の筆致。長谷寺での右近とのやりとりを受ける（三〇四頁参照）。

四 玉鬘に求婚したかの大夫の監。（二八七頁以下参照）

五 いい加減にしておいては、十分に行き届かぬこともあろうということで。

六 玉鬘づきの家司（家政をつかさどる事務官）たちを任じ、必要ないろいろな処置をお命じになる。

七 玉鬘づきの家司に任じられた。

八 どうして、かりそめにも自分などが出仕して拝見するようなご縁があろうかと思われた六条の院の邸内を。「いかでか」の呼応は、「よすがなく」のところで消えている。

九 大変晴れがましいことに思うのだった。

一〇 玉鬘と玉鬘にかかわりある者たちへのご配慮。

人に指図して　栄配を振　急にこれまでとうって変って　源氏　行き届いてまたとないほどでいらっしゃることは　ほんとに恐れ多く思われる　う身の上になったのは

一一 玉鬘のお部屋の新春用の調度の新調、女房たちの晴着など。

一二 ほかの立派な方々（紫の上など）と同列にと考えておいでの物を。「たてまつりたまふ」に掛る。

一三 こちらでそうした配慮はしても、（衣裳の新調など）泥臭いところもあろうかと。

一四 特にこちらで新調した玉鬘用の晴着も。

一五 模様を織り出した絹織物。

一六 貴婦人の表着。袵がなく身頃の裾先が分れている。

一七 婦人の略礼装。表着に重ね着る。（一巻図録一二参照）

一八 三一五頁注一六参照。

一九 艶を出すため絹を砧で擣つ所。

二〇 砧で擣って艶を出した絹。

二一 衣裳を納める櫃。（二巻図録一二参照）

二二 衣裳箱。包み（ふろしき）に包んで持ち歩く。

二三 年輩の上席の女房たちがお前にはべって。

年の暮、源氏、新春の晴着を婦人たちに贈る

年の暮に、御しつらひのこと、人々の装束など、やむごとなき御列におぼしおきてたる、かかりとも田舎びたることなどやと、山が〔山家育ちのことだから〕と見くびってご心配になって つのかたにあなづりおしはかりきこえたまひて調じたるも、〔玉鬘方に〕たてまつりたまふついでに、織物どもの、われもわれもと、手を技巧をこらして尽くして織りつつ持て参れる細長、小袿の、いろいろさまざまなるを御覧ずるに、〔源氏〕「ずいぶんたくさんな数になるものだな いと多かりけるものどもかな。方々に、どなたにも恨みっこなしに分けなければいけないね うらやみなくこそものすべかりけれ」と、上に聞こえたまへば、御匣殿に紫の上 つかうまつ調進したものも れるも、紫の上の許でお作らせになったものも こなたにせさせたまへるも、皆とうでさせたまへり。お取り出させになった〔紫上は〕染色かか裁縫もとりわけ とてもお上手で る筋はた、いとすぐれて、世になき色あひ、にほひを染めつけたま色調 艶のある色へば、〔源氏は〕またとないお方とお思い申し上げなさる ありがたしと思ひきこえたまふ。ここかしこの擣殿より参らせたる擣物ども御覧じくらべて、濃き赤きなど、濃紫やさまざまを選らせたまひつつ、御衣櫃、衣筥どもに入れさせたまうて、おとなびたる上蔦どもさぶらひて、これはかれはと取り具しつつ入る。取り揃えて入れる 上も見たまひて、〔紫上〕「いづれも、劣りまさるけぢめも見えぬものどもなめるを、

着たまはむ人の御容貌に思ひよそへつつたてまつれたまへかし。着たるもののさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」とのたまへば、大臣うち笑ひて、「つれなくて人の御容貌おしはからむの御心なめりな。さていづれをとかおぼす」と聞こえたまへば、「それも鏡にてはいかでか」と、さすがにはぢらひておはす。

似合うように見立ててさし上げなさいませ　容姿に合わないのは　みっともないことですから　（源氏）それとなく　おつもりのよ　うですね　ではどれをご自分にとお思いか　（紫上）　はにかんでおいでになる

紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小袿、今様色のいとすぐれたるとは、かの御料、桜の細長に、つややかなる搔練取り添へては、姫君の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、にほひやかならぬに、いと濃き搔練具して、夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対にたてまつれたまふを、上は見ぬやうにておぼしあはす。内の大臣の、はなやかに、あなきよげとは見えながら、なまめかしう見えたるかたのまじらぬに似たるなめりと、げにおしはからるるを、色には出だしたまはねど、殿見やりたまへるに、ただならず。「いで、この容貌のよそへは、人腹立ち

明石の姫君　優美だけれども　派手や　花散里　赤い袿　かでないのに　玉鬘に　優美に見えるところが欠けているのに　〔紫上は〕顔色にはお出しにならぬが　源氏　〔玉鬘は〕　ほんとにすっきりとは

一　そうおっしゃられても、鏡で見ただけではどうして決められましょう。源氏に選択をまかせるとの意。
二　紅梅の模様がくっきりと織り出された葡萄染（薄紫色）の御小袿。
三　濃い紅梅色。禁色（濃い紅）に対する聴し色と大体同じという。禁色よりやや薄い。これは袿か。
四　紫の上のお召し料。
五　桜襲。表白、裏紫、または蘇芳。「細長」は前頁注一六参照。
六　薄紅の、練って柔らかくした絹。袿か。
七　薄い縹色（藍色）の海賦（大波、海松、貝、松など海辺の風物を様式的な模様にしたもの）を織り出した織物。小袿か。
八　山吹襲。表薄朽葉（赤みのある黄色）、裏黄。
九　玉鬘の実父、内大臣。
一〇　ほんとに（衣裳から）玉鬘の容貌が想像されるのを。
一一　（紫の上は）並々ならぬ関心を寄せていられるらしい。
一二　いや、この容貌の見立ては、人のご機嫌をそこねかねないことです。

一三 経、萌黄、緯、白で織る。柳色。襲の色目は、表白、裏青。
一四 唐草模様。蔓草をかたどったものなので「乱れ織れる」という。
一五 源氏は、人知れずついにやにやなさる。末摘花には似合わぬ色合いのものをわざと選ぶ趣。
一六 梅の折枝に蝶や鳥の飛び交っている模様。小袿に織り出された模様。
一七 衣裳から想像して気品があるのを。
一八 関屋の巻末（九〇頁）に尼になったことが見える。源氏の庇護の下にあること、ここにはじめて見える。二条の院の東の院に居るのである。
一九 青みを加えた鈍色（鼠色）。尼にふさわしい色。
二〇 ご自分のお召し料の中の梔子色（くちなしの実で染めた黄色）の袿。
二一 今様色（濃い紅梅色）に同じ。禁色に対する。
二二 婦人たちが同じ元日にこれらの衣裳を着られるようにとのお手紙をもれなくさし上げなさる。次の初音の巻に、源氏が婦人たちを訪れることが書かれる。
二三 二条の院の東の院。（蓬生八二頁参照）
二四（六条の院の夫人方とは違って）もう少し他人行儀に、しゃれた趣向があるべきなのだが。内輪じみず、恋人ふうであるべきだ、の意。
二五 山吹襲。（前頁注八参照）
二六 檀の樹皮から製した紙。白くて厚い紙質。

末摘花のお礼の歌

ぬべきことなり。よしとても、きれいだとて ものの色は限りあり、衣裳の色など知れたものだ 人の容貌は、美人でなくても おくれたるも、やはり格別の深味のあるものだから またなほそこひあるものを」とて、かの末摘花の御料に、柳の織物の、風情のある よしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほほゑまれたまふ。梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小袿に、濃紫の 濃きがつややかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。こしゃくな人と 空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまうて、とても気の利いたのを〔源氏は〕御料にある梔子の御衣、聴し色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。げに似ついたるども見むの御心なりけり。ほんとに身に合った晴着姿を見ようとのおつもりなのだった

皆、御返りどもただならず、御使の禄、心々なるに、末摘花、おれのご挨拶は一通りでない 東の院におはすれば、今すこしさし離れ、艶なるべきを、うるは作法通りのことは しくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の袿の、袖口いたくすすけたるを、うつほにてうち掛けたまへり。御文には、いとかうばしき陸奥紙の、すこし年経、厚きが黄ばみたるに、

律義なお 人柄の方なので 下に衣も重ねず使者の肩にお掛けになった 香を強くたきしめた よごれたのを きちんとなさって

一 いえもう、晴着を頂戴いたしましたのは、かえって恨めしく存じられます。源氏の日頃の疎遠を恨む趣。

二 着てみますとお恨みに思われてなりませぬ、この立派なお着物もお返し申してしまいましょう、私の涙に袖を濡らして。「唐衣」は唐風の珍しい立派な着物の意の歌語。「恨みられ」に「裏見られ」を掛け、「裏」「返し」は縁語。「着て」「裏」「返し」「袖」いずれも「唐衣」の縁語。がんじがらめの唐衣仕立てである。

三 格段に古風である。「奥よる」は「奥寄る」で、奥まっている、古風の意であろう。

四 前に「山吹の桂の、袖口いたくすすけたるを、うつほにてうち掛けたまへり」とあったもの。

五 使いの者は（ご遠慮して）こっそり退出した。

六 「唐衣、袂濡るる」といった恨み言が決り文句になっているものだ。「袂」は「唐衣」の縁語。

七 私もご同様だが。「まろ」は、親しい者同士で使う一人称。

八 すっかり古風一筋に凝りかたまって。

九 帝のお前などの、れっきとした歌詠み仲間の間では。

一〇 「円居」というのが決り文句の三文字なのです。例歌「思ふどち円居せる夜は唐錦立たまく惜しきものにぞありける」（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）

一一 「あだ人」（浮気な人）という五文字を、上の句と

源氏の批評、歌の論

（末摘花）「いでや、賜へるは、なかなかにこそ。きてみればうらみられけり唐衣

返しやりてむ袖を濡らして」

（書風は）御手の筋、ことに奥よりにたり。（源氏は）いといたくほほゑみたまひて、（もう）すぐにも下にお置きにならないので）みにもうち置きたまはねば、（紫の上）上、何ごとならむと見おこせたまへり。（こちらをご覧になった）

四 御使にかづけたるものを、（源氏は）いとわびしくかたはらいたしとおぼして、（とても情けなく体裁の悪いことと）御けしきあしければ、（ご機嫌がお悪いので）すべりまかでぬ。いみじく、（女房たちは銘々ひそひそ噂して）おのおのはささめき笑ひけり。（末摘花が）かやうにわりなう古めかしう、（古風なようなおまなざしだ）かたはらいたきところがおありになるいらざる振舞にろのつきたまへるさかしらに、（これではかなわぬなとお思いになる）もてわづらひぬべうおぼす。（気のひけるはづかしきまみなり。「古代の歌よみは、唐衣、袂濡るるかことこそ離れね。まろも、その列ぞかし。さらに一筋にまつはれて、（当世風のしゃれた言い廻しに宗旨がえなさらない点は）今めきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ、（ご立派と言えばご立派なものです）ねたきことはあれ。（人々の列坐の中にいることを）人のなかなることを、（何かの折の）をりふし、御前などのわざとある歌よみのなかにては、（恋のしゃれたやりとりでは）円居離れぬ三文字ぞかし。昔の懸想のをかしきいどみには、あだ人

下の句の切れ目（第三句）に置いて。河内本「あだ人の」。例歌「秋といへばよそにぞ聞きしあだ人の我を古せる名にこそありけれ」（『古今集』巻十五恋五、読人しらず）。『後撰集』にも第三句「あだ人の」「あだ人に」の例が三首ある。

一三 様々な書物。「草子」は、紙を本の形に綴じたものの称であるが、ここは物語や歌集であろう。

一三 歌語や歌に詠まれる名所を集め、解説した書。「歌枕」と名付けられるものでは『能因歌枕』が現存する。

一四 その内容に精通し、ことごとくを読破して。

一五 癖になった詠みぶりは、変えようと思っても変らないものでしょう。

一六 末摘花の亡くなった父宮。（一巻末摘花二四六頁参照）

一七 蓬生六〇頁注八参照。

一八 和歌の奥義を説いた書。歌学書。『歌経標式』『喜撰式』『孫姫式』『石見女式』『新撰和歌髄脳』などが現存する。

一九 大層窮屈なもので、歌の病を避けなくてはならぬといったことがたくさん書いてあったので。『歌経標式』に歌病七種、『喜撰式』『石見女式』に四病、『孫姫式』に八病を説く。中国の詩学の詩病を機械的に和歌に適用して修辞上の禁忌を説いたもの。

といふ五文字を、やすめどころにうち置きて、言の葉の続きたより（落着くような気がするのでしょう）あるここちすべかめり」など笑ひたまふ。（源氏）「よろづの草子、歌枕、一四よく案内知り見尽くして、そのうちの言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、強うはかはらざるべけれ。常陸の親王の書き置きた（書き写して置かれた）まへりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか。（末摘花が）和歌の髄脳いと所狭う、病去るべきところ多かりしかば、もとよりおくれ（寄こしたことがあります）（もともと不得意な和歌）たるかたの、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば、（ますますかえって窮屈で身動きもできないように思われたので）むつかしくて返してき。よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」とて、をかしくおぼいたるさまぞ、いとほしきや。上、（面倒に思って返してしまいました）（歌学に精通した人の詠みぶりにしては）（ありふれた歌ですね）（きてみればの歌を）（木摘花に）（お気の毒なことです）（きまじめな顔つきで）（紫上）いとまめやかにて、「などて返したまひけむ。書きとどめて、姫君（明石の姫君にもお見せなさればよろしゅうございましたのに）にも見せたてまつりたまふべかりけるものを。ここにも、ものの（私の手許にも）（しまいこんで）かなりしも、虫みなそこなひてければ。見ぬ人はた、心ことにこそ（紙魚が皆駄目にしてしまいましたので）（読んでない私など）（お話にもならぬほど）ありましたのも）（源氏）（歌のご勉強に）（何も存じませんのに）は遠かりけれ」とのたまふ。「姫君の御学問に、いと用なからむ。（かえって有害でしょう）（見よいものではありすべて女は、立てて好めることまうけてしみぬるは、さまよからぬ（表看板にするものをわざわざ作ってそれに打ち込んだのは）

一「返しやりてむ」と（末摘花の歌には）あるようですのに。先方が、お返ししましょうと言っているのに、こちらが返さないのは、という冗談。

二 やさしいお心根の方なので、返事をおしたためになる。諧謔の筆を弄したもの。

三（相手が相手だから）いたってお気楽そうだ。

四 着物を返そうとおっしゃるにつけても、独り寝のわびしさに夢にでも私と逢いたいというあなたのお気持をお察しすることです。「返しやりてむ」とあったのを、夢に恋しい人に逢うために着物を裏返して寝る意にとりなした。「いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞ着る」（『古今集』巻十二恋二、小野小町）による。「片敷」は、自分だけの着物を敷いて寝る独り寝のこと。

ことなり。何ごとも、いとつきなからむはくちをしからむ。ただ心の筋を、ただよはしからずもてしづめおきて、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける」などのたまひて、返りことはおぼしもかけねば、「返しやりてむとあめるに、これよりおし返したまはざらむ、ひがひがしからむ」と、そそのかしきこえたまふ。情捨てぬ御心にて書きたまふ。いと心やすげなり。

全く不案内というのでは仕方がないでしょう　心構えだけを　ふらふらしないようにしっかり持っておいて　うわべはおっとりしていると　見た目も無難というものでしょう　〔末摘花への〕返歌などする気もないのでおありでない　（紫上）一　こちらから歌をお返しなさらないので　〔返歌を〕おすすめ申し上げなさる　礼儀にはずれましょうは

（源氏）四

「返さむと言ふにつけても片敷の
夜の衣を思ひこそやれ」

ごもっともな言い分であるようだ

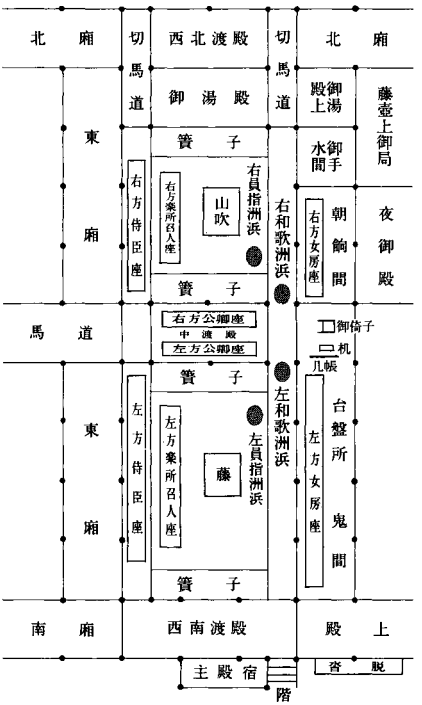
とぞあめる。

付

録

天徳四年内裏歌合

天徳四年の内裏歌合の記録を、十巻本歌合によって掲げる。御記、殿上日記、仮名日記、歌合の本文より成る。御記以下の日記と、絵合の巻一〇八頁以下の叙述を読み合せられたい。なお歌合当日の会場の設営の模様を、御記以下によって簡単に図示する。



清涼殿

後涼殿

内裏歌合　天徳四年

御記

天徳四年三月卅日己巳、此日有女房歌合事。去年秋八月、殿上侍臣闘レ詩。爾レ時典侍命婦等相語曰、男已闘文章、女宜レ合和歌。及今年二月、定左右方人。就中以更衣藤原修子同有序等為左右頭、各令挑読。蓋此為レ惜風騒之道徒以廢絶也。後代之不レ知レ意者恐成レ好浮華、専内寵之謗。仍具記レ之。其儀、暫撤却清涼後涼両殿中渡殿北部、設公卿座於同渡殿之内、舗左右方人座於後涼殿東縁。左在レ南右在レ北　女房又相分候清涼殿西庇簾中。同庇第五間立倚子。便用女方侍倚子此間上簾　申刻就倚子。良久右方人レ自北方、献和歌洲浜。沈押物花足、浅香下机、繡花柳鳥花文綾覆、縹綺地敷、頭更衣之童女四人舁進之御前渡殿立。算刺洲浜置北小庭算刺小舎人円座之前。　暫左方経侍所前自南方、献和歌洲浜。紫檀押物花足、蘇芳下机、繡葦手花文綾覆、紫綺地敷、更衣之童女六人舁出如レ右。算刺洲浜又置南小庭之小舎人円座前、始童女置机下後改置　仰令レ召レ在殿上公卿。即左大臣清慎公　大納言源朝臣高明　右大将藤原朝臣師尹　参議雅信朝臣、朝成朝臣、参来候レ座。次各方人侍臣着レ座。于レ時日已昏。供レ燈、兼立篝火於南北小庭。令レ召可レ読レ歌人。左方、右兵衛督延光朝臣、右方、右近中将博雅朝臣、進就洲浜下、読其和歌。左、作金山吹花枝其葉書レ歌。右、小書色紙　左近少将伊渉、右近少将助信等把脂燭照レ之。殿上小舎人着小庭座刺レ算。仰左大臣清慎公評定。于レ時各方賜酒饌於公

卿及方人。読レ歌之中、左論二詠レ鶯歌一首而右誤読二柳歌一。仰依レ失レ次為レ負。惣廿首読合已了。左勝員九。比二読歌終一、令レ召二楽所人一。相分候二南北小庭一、遞奏二歌曲一。大臣弾レ箏、大納言源朝臣弾二琵琶一。此間盃酒頻巡、絃歌無レ断。大臣起レ座献レ酒。及二遅明一、賜二大臣以下禄一有レ差。大臣夏装束一襲、大納言白合御衣一重、参議白単重御衣、自余疋絹　早旦起レ座入レ内。侍臣退出。此暁霜降。近臣云、累降霜気寒、人恠二時序乖違之一。

四月三日未刻、之二飛香舎一、以二歌合洲浜一給二中宮一、暫還来。酉刻、以二左洲浜台一令レ給二昌子内親王一。

殿上日記

天徳四年三月卅日、女房有二歌合之事一。此事始レ従二今月上旬一。先被レ書二分左右人一。以二更衣一為二左右頭一、相二分典侍掌侍命婦蔵人等一為二方人一矣。同月十九日相二分侍臣一点二定方人一。蔵人頭伊尹朝臣於二御前一書二分之一　当日早朝、蔵人所雑色以下参上、供二奉御装束一。其儀、西廂皆改二懸新御簾一。納二御箱一仁寿殿也　第五間渡殿間也立二御倚子一、大盤所御倚子南方立二御几帳一、立二置物御机一。在二御座間一南四間垂二御簾一為二左方女房座一矣。北二間同垂二御簾一為二右方座一焉。御前渡殿南北各敷二緑端畳三枚一為二公卿座一也。後涼殿東簀子敷従二渡殿一南北相分舗二長畳一為二左右侍臣座一也。南北小庭各敷二畳三枚一為二楽所召人座一。此等舗設仰二所司一進也　申二刻出御、召二左右歌一。於レ是右方侍臣等令レ持二洲浜二机一。一置レ歌一員指　応レ召参二上従二御浴殿西辺一献二御前一。先童女一人執二地敷一。浅縹浮文織物　出進舗二御座乾角高欄下一。還却之後、同童女四人其装束着二青色柳襲一昇二洲浜一立二

地敷。洲浜之為体、沈机入金筋、浅香下机入銀筋、其覆、花紋綾青末濃、加柳折枝之繿文、机四角以金銀作柳枝四茎、便為覆台也、有足結組総、但無帯。洲浜之中奇妙多端、人形鳥獣水樹巌石、皆其所用無不金銀沈香等類。所献歌色紙書小字、詠花樹歌令結其樹題好鳥什又令持其鳥嘴、至于春霞暮春首夏恋望之詞、或在人手或載漁舟、惣二十首随宜分置者也　次小舎人藤原実正執金銀花柳枝下居玉砌傍。員指也　次小舎人二人藤原実明、三善興光、惣三人皆着青色柳襲也　舁員指洲浜置実正前。頃之、左方従殿上侍方参上。童女一人先執地敷紫地綺也　舗御座坤角、如右方。次童女四人舁洲浜立地敷。洲浜之様大体同右。紫檀机、蘇芳下机、同色村濃覆、有葦手并藤花折枝之繿文、有帯無総。其中銀鶴合歌冬一枝、以黄金作八重葩、以青銀作数片葉、每葉各書一首　次又童女執員指洲浜参入。此洲、野水体也。無机。有花紋綾例様之敷物、其内置金銀藤花也　小舎人藤原宣頼、紀延方等皆着赤色桜襲也　於砌下取伝、置員指座前。次殿上公卿依召参上。左大臣、大納言源朝臣、右大将藤原朝臣、雅信朝臣、朝成朝臣等也。南北面也　左右方頭弁、備衝重、各給公卿并男女方人。殿上六位取伝給之。於是召出左方延光朝臣、右方博雅朝臣、令講各方献歌。延光朝臣手執花枝口詠艶藻。博雅朝臣披読之間、誤失次第。方人遺恨尤在斯。言、詩不言乎、白珪之欠尚可磨焉。其今日之謂歟　評定之間、鐘漏頻移。勝負之次、坏酌必勧。今日之事、左方多勝。又御厨子所供御菓子干物等。陪膳重信朝臣依例又召楽所人々於砌下。左右相分侍席。勝方先吹笙笛。初奏調子。先是殊降綸命書分御遊之歌曲左右之召人等也。呂律風俗等也　左則、大臣弾箏、朝成朝臣吹笙、方人侍臣楽所召人。実利朝臣、随大石冨門各奏所能等、陪砌下　右則、大納言源朝臣弾琵琶、雅信朝臣拍子、侍臣并召人。薗平、藤原清適、同公方占部方生等同侍右庭　絃歌如左遞唱、糸管争整曲調。侍臣等密語云、毎有万機之暇景、数命仙欄之御遊。然猶歓楽之至、未如今夜者也。群臣快酔、雑興難禁。左大臣賜夏御衣一襲。青色表御衣、古女御衣、表御袴、大口御袴　大納言已下侍臣召人等給禄有差。大納言白細長一襲、参議単重細長一領、四位五位不論殿上地下、插腰以白絹、六位小舎人皆插赤絹　東方漸明、尊儀入御。大臣以下歌舞退出之。

女房和歌合方人

左

為明朝臣　重信朝臣　重光朝臣　延光朝臣　伊尹朝臣

保光朝臣　忠君　時経　伊陟　為光

済時　珍材　重輔　守仁　保遠

時明　時光　道隆　為義　延方

景舒　宣頼

右

盛明朝臣　博雅朝臣　頼忠朝臣　文範朝臣　元輔

国光　兼家　助信　清遠　高光

安親　泰清　永保　雅材　忠光

元明　実正　朝光　実明　保命

義理　興光　陳政

天徳四年三月十八日

殿上日記雖レ注ス取二分方人一之由一、依レ無二其名一、就二他日記一書入之。

三月二日、左右の方人の書き分けを典侍して方々の頭の曹司にたまへり。これは二月廿九日に、上のみづから書き出ださせたまひたるなり。

歌合方人

左

頭　中将

宰相　典侍　少弐　進　右衛門

兵衛　民部　御匣殿兵衛　介　兵庫

参河　靫負　侍従

右

頭　弁

按察　内侍　少納言　美濃　左衛門

右近　越後　備前　木工　美作

馬　兵部　宮内

天徳四年二月廿九日

三日の日、題をたまふ。これは、典侍の御前にて書き出だせるなり。

霞一　鶯二　柳一　桜三　山吹一　藤一　春の暮れ一　初めの夏一

郭公二　卯の花一　夏草一　恋五

かくて、三十日の日の未の時に、清涼殿の西面の御簾一間上げさせたまひて、後涼殿の

渡殿にあたりて、西向きに倚子の御座よそひておはします。渡殿を分けて、北南の壺に前栽植ゑさせたまへり。南には、左、藤の花、北には、右、山吹の花植ゑさせたまへり。方々の蔵人命婦は、御座の北南に、御簾の内に、左右とさぶらふ。装束は、例の、赤く、青し。かくみなととのひて、まづ右の洲浜たてまつる。ことむなき童女、打敷取り、御前に敷きて入りぬ。また童女四人、洲浜舁きてまゐる。装束は、青色に柳襲、丈のほど、髪の長さ、よくととのひてかたほならず。洲浜の覆ひ、青き裾濃にて繡したり。打敷は浅き縹の綺。洲浜のさまは、上のには沈に金の筋やれり。下のには浅香に銀の筋やれり。歌は、銀、金を作り花にして、歌にしたがひつつ枝に付けたり。恋の歌は、鵜舟して篝火に入れたり。暮れの春は、舟に積みたり。鶯のは、鶯くひたり。さまざまにつけてしたり。日のうちかたぶいて、ものの色見ゆるほどにて、いとめでたし。かかるに、左遅くまゐるとて、主殿頭平の時経を召して、遅しと責めさせたまふ。なほ遅ければ、蔵人平の珍材を召して、責めさせたまふ。ただ今まゐらすと奏す。かかるほどに、日いとたく暮れぬ。また蔵人藤原の重輔を召して、遅きよしを仰せたまふ。もののさまも見えぬほどに、洲浜たてまつる。童女、打敷取りてまゐる。帰りて、また四人、洲浜舁きてまゐる。装束、赤色に桜襲なるべし。されど、見えねば、かひなし。員指の洲浜、また童女持たり。すべて六人の童女あり。大きさととのほらず。珍材、童女のなかにまじりて騒ぐ。童女は大きにて、かたはにもあらじと思ひたるなるべし。右の員指の洲浜は、方の殿上童取りて、壺前栽に立ててさぶらふ。左の洲浜、をさをさしく見えず。暗く

て、御殿油まゐる。左、源少将取れり。打敷は左兵衛の佐取れり。右、蔵人の少将、御殿油取れり。打敷、後少将。渡殿の左右に、方の上達部着きたまへり。左の大臣、右大将、藤宰相朝成。右方、源大納言、源宰相雅信。上人は、後涼殿の簀子に、北南に着き並みたり。方々の男女方に饗したり。かくて、左講師右兵衛の督源延光寄りて、洲浜の覆ひをすこし引き上げて、山吹の花の枝の一尺ばかりある金して作れるを取りて、捧げてゐたり。花びらに歌は書いたるなるべし。ともかくもせで捧げて夜一夜ゐたり。香炉捧げたるに似たり。右講師源中将博雅、洲浜の覆ひは蔵人の少将助信持たり。後少将高光寄りて取る。かくて歌ども合はするに、いかがありけむ、右負けにけり。合はせ果てて、御遊びつかうまつる。召人は、左右の壺前栽にさぶらふ。左、大臣、箏の琴、勘解由長官、笙の笛、図書頭修、琵琶、大膳進なかき、琴、伊予掾もりとき、和琴、左衛門志、富門、笛。修理大夫重信の朝臣、右京大夫実利、主殿の頭時経、橘の世忠などは歌うたひにぞさぶらふ。右は、源大納言、琵琶、右近中将博雅の朝臣、和琴、雅楽頭蕃平、箏の琴、権左中弁頼忠の朝臣、笙の笛。治部卿、大蔵卿盛明の朝臣、右近少将清遠、高光、備前掾公正などは歌うたひにさぶらふ。これがなかに、左の歌出だしは、右京大夫実利、地下の人にてその座にさぶらふ。右の歌出だしは、治部卿、渡殿にさぶらふ。皆、笏拍子取れり。まづ勝方、双調吹きて、安名尊遊ぶ。次に右、同じ調子吹きて、桜人遊ぶ。次々、これよりはじめて、たがひに左右と、ひまなく遊び明かしたまふ。つとめても、上より、かづけものたまふ。左の大臣には御衣ひとくだり、源大納言には白き

袿ひとかさね、宰相たちにひとへがさねをたまふ。異人々には、皆、腰插をたまふ。
二日といふ日、后の宮に洲浜ども御覧ぜさせにたてまつれたまふ。舁きてまゐる人、蔵人為光、雅材二人まゐる。御覧じて、かづけものたまひけり。さて、右の洲浜はとどめさせたまふ。左のは返しまゐらせたまへり。洲浜のありさまは、上のは、銀の筋やれり。下には、蘇芳に白鐵の筋をなむやれりける。覆ひは蘇芳の裾濃、打敷は濃き葡萄染めの綺なりけり。これは若宮にたてまつらせたまひてけり。
かくて合はする日は三月のつごもりの日なれば、洲浜取り入るることは四月一日つとめてになりて、右は夏の汗衫にて出でたり。左は同じ冬ながらにて取り入る。
その左の歌の洲浜の覆ひに葦手を繡にしたる歌。
千代に千代くはへたりとも見ゆるかな松の下なる鶴の齢は
立ち返り鳴けや鶯明日よりはほととぎすてふ声ぞ聞こえむ
君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも尽きぬ巌ならなむ
藤の花色深けれや影見れば池の水さへ濃紫なる
名残をば夏にかへつつ百年の春の水門に咲ける藤波

霞　　左勝　　朝忠

倉橋の山の峡より春霞年をつみてや立ちわたるらむ

右　兼盛

故里は春めきにけりみ吉野の御垣の原を霞こめたり

鶯

左勝　順

氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声

右　兼盛

わが宿に鶯いたく鳴くなるは庭もはだらに花や散るらむ

左　朝忠

わが宿の梅が枝に鳴く鶯は風のたよりに香をや尋めこし

右　兼盛

佐保姫の糸染めかくる青柳を吹きな乱りそ春の山風

鶯を出だすべきに柳をよみて負く。

柳

左　忠見

あらたまの年を経つつも青柳の糸はいづれの春か絶ゆべき

右　兼盛

しろたへの雪降りやまぬ梅が枝に今ぞ鶯春と鳴くなる

これもついでたがひて負く。

桜

左勝　好古

あだなりと常は知りにき桜花惜しむほどだにのどけからなむ

右　元実　此歌在兼盛集

世とともに散らずもあらなむ桜花飽かぬ心もいつか絶ゆると

左勝　能宣

桜花風にし散らぬものならば思ふことなき春にぞあらまし

右　兼盛

桜花色見るほどに世をし経ば年のゆくをも知らでやみなむ

左勝　少弐の命婦

あしひきの山隠れなる桜花散り残れりと風に知らすな

右　中務

年ごとに来つつわが見る桜花今は霞も立ちな隠しそ（巣にやまざくら）（かすみもいまは）

欵冬

左勝　順

春霞井手の川波立ち返り見てこそゆかめ山吹の花

右　兼盛

一重（ひとへ）づつ八重山吹はひらけなむほど経てにほふ花と頼まむ

藤

左　朝忠

紫に見ゆる藤波立ちかへり松にぞ千代の色はかかれる

右勝　兼盛

われゆきて花見るばかり住の江の岸の藤波折りな尽くしそ

暮春

左勝　朝忠

花だにも散らでわかるる春ならば今日をわりなく惜しまましやは

右　兼盛

ゆく春の泊りしるきものならばわれも舟出ておくれざらまし

首夏

左勝　能宣

鳴く声はまだ聞かねども蟬の羽の薄き衣に裁ちぞ着てける

右　中務

夏衣裁ち着る今日は花桜かたみの色も脱ぎや替ふらむ

卯花

左勝　忠見（ミセケチ）　無本集　此歌在兼盛集

道遠み人も通はぬ山里に咲ける卯の花誰と折らまし

右　兼盛

嵐のみ寒き深山の卯の花は消えせぬ雪とあやまたれつつ

郭公

左持　望城

ほのかにぞ鳴きわたるなるほととぎす深山を出づる今朝の初声

右　兼盛

深山出でて夜半にや来つるほととぎす暁かけて声の聞こゆる

左持　忠見

小夜ふて寝覚めざりせばほととぎす人づてにこそ聞くべかりけれ

右　元実

人ならば待ててふべきをほととぎすまた二声と鳴かでゆくかな

夏草

左勝　忠見

夏草のなかを露けみかきわけて刈る人なしに茂る野辺かな

右　兼盛

夏深くなりぞしにけるおはらきの森の下草なべて人刈る

恋

左勝　朝忠

人づてに知らせてしがな隠れ沼の水こもりにのみ恋ひやわたらむ

右　兼盛（ある本なかづかさ両集に共不載）

むばたまの夜の夢だにまさしくはわが思ふことを人に見せなむ

左勝　能宣

恋しきを何につけてかなぐさめむ夢だに見えず寝る夜なければ

右　中務

君恋ふる心は空に天の原かひなくて経る月日なりけり

左　中務

ことならば雲居の月となりななむ恋しき影や空に見ゆると

右勝　兼盛

人知れず逢ふを待つ間に恋ひ死なば何にかへたる命とかいはむ

左勝　朝忠

逢ふことの絶えてしなくはなかなかに人をも身をも怨みざらまし

右　元実

君恋ふとかつは消えつつ経るほどをかくても生ける身とや見るらむ

左　忠見

恋すとてわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

右勝　兼盛

忍ぶれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで

合はせてまたの朝に好古の宰相、衛門督にたてまつりたる

白波の立ち寄るかたの方人は勝つによりてや心ゆくらむ

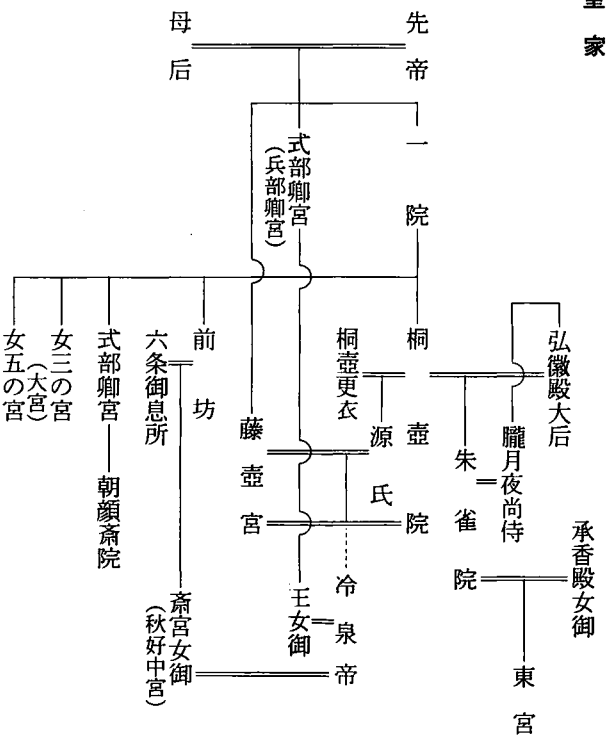
返し、朝忠の宰相

もろともに心も寄する白波のそこのかひあるここちこそすれ

これを見て、典侍

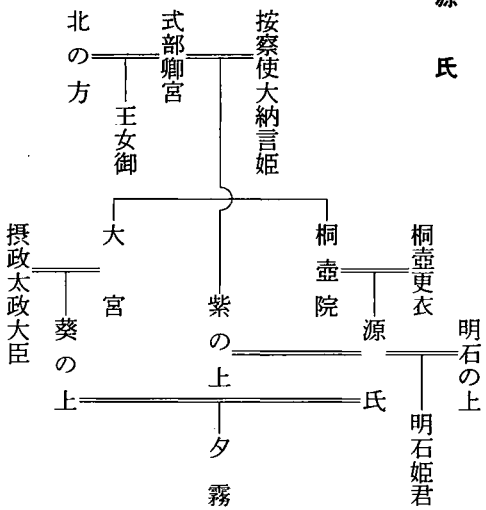
みぎはよりたちまさりにし白波の君がかたよるかひもあるかな

天皇家

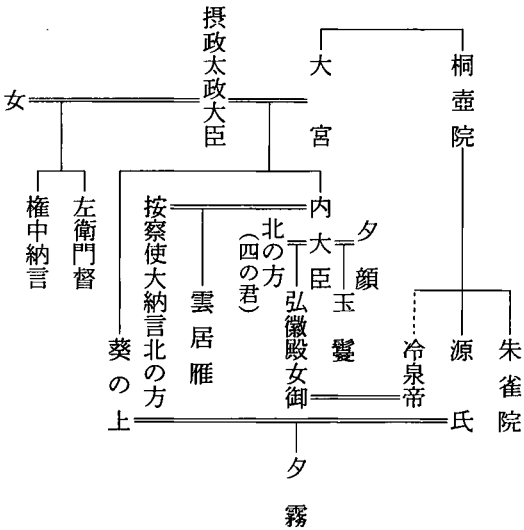

先帝
母后
一院
式部卿宮（兵部卿宮）
桐壺
弘徽殿大后
朧月夜尚侍
朱雀院
承香殿女御
東宮
桐壺更衣
源氏
冷泉帝
藤壺宮
王女御
前坊
六条御息所
斎宮女御（秋好中宮）
式部卿宮
朝顔斎院
女三の宮（大宮）
女五の宮

系図一

源氏



藤原氏（左大臣家）



系図二

藤原氏（右大臣家）

- 摂政太政大臣（右大臣）
  - 弘徽殿大后
    - 桐壺院 ＝ 朱雀院
  - 四の君 ＝ 内大臣
  - 朧月夜尚侍

常陸宮家

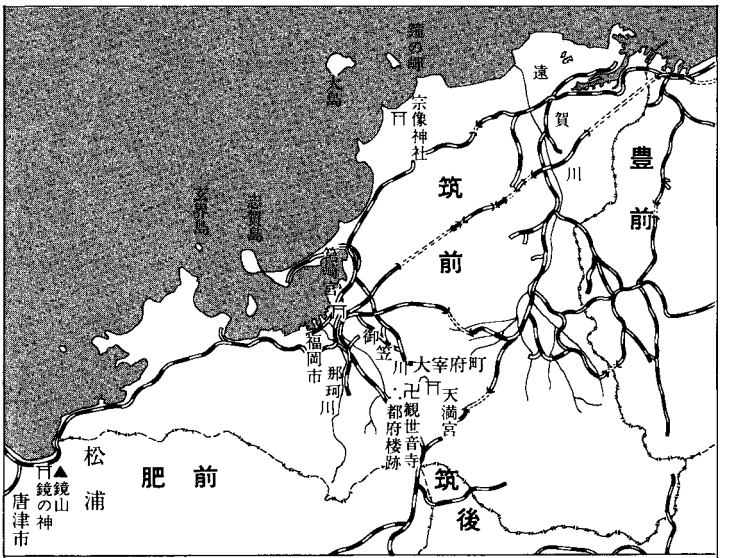
- 故常陸宮
  - 禅師の君
  - 北の方 ＝ 末摘花
    - 源氏
    - 叔母（大弐北の方）

明石入道の家

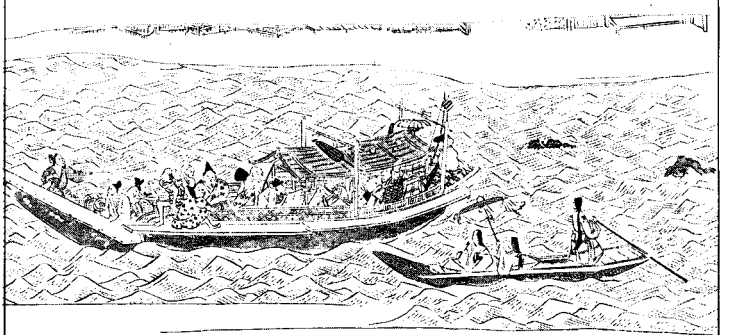
- 中務宮 — 民部大輔 — 尼君
- 大臣 — 明石入道 ＝ 明石の上
- 按察使大納言 — 桐壺更衣 — 源氏 ＝ 明石姫君

伊予介家

- 先妻 ＝ 常陸介（伊予介）
  - 河内守（紀伊守）
  - 右近将監
- 空蟬
- 衛門佐（小君）

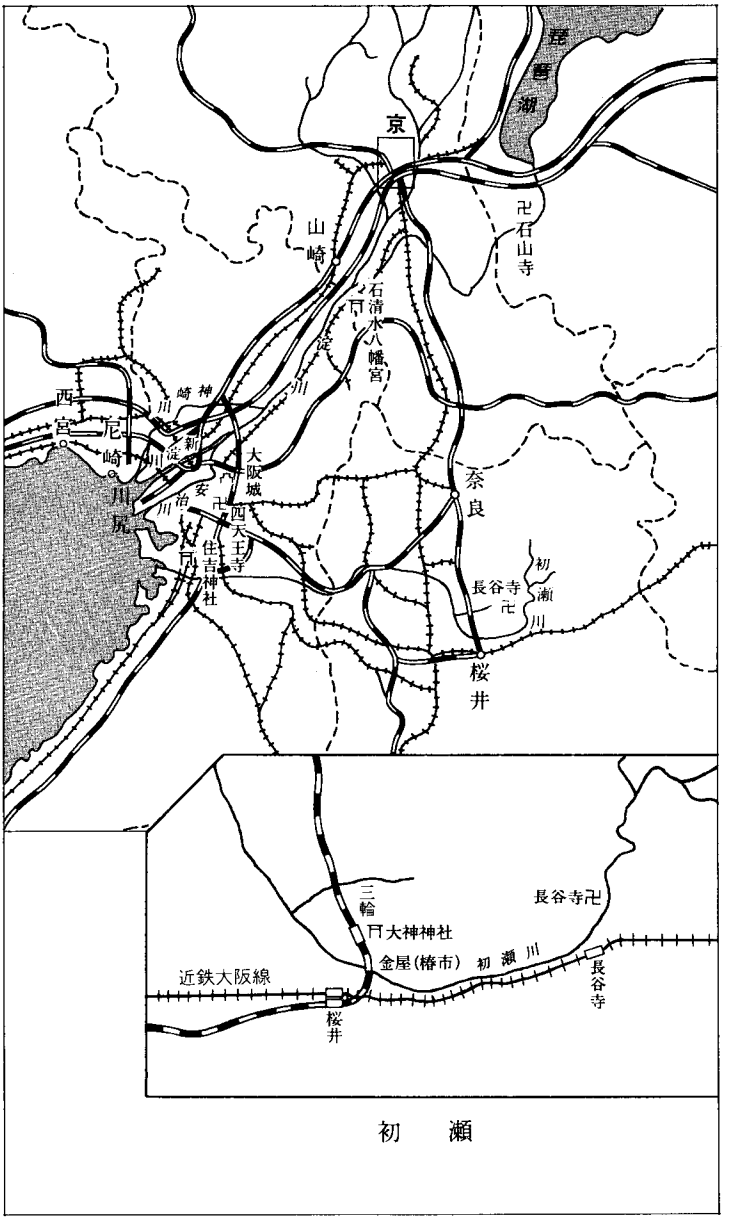


北九州（大宰府　松浦）

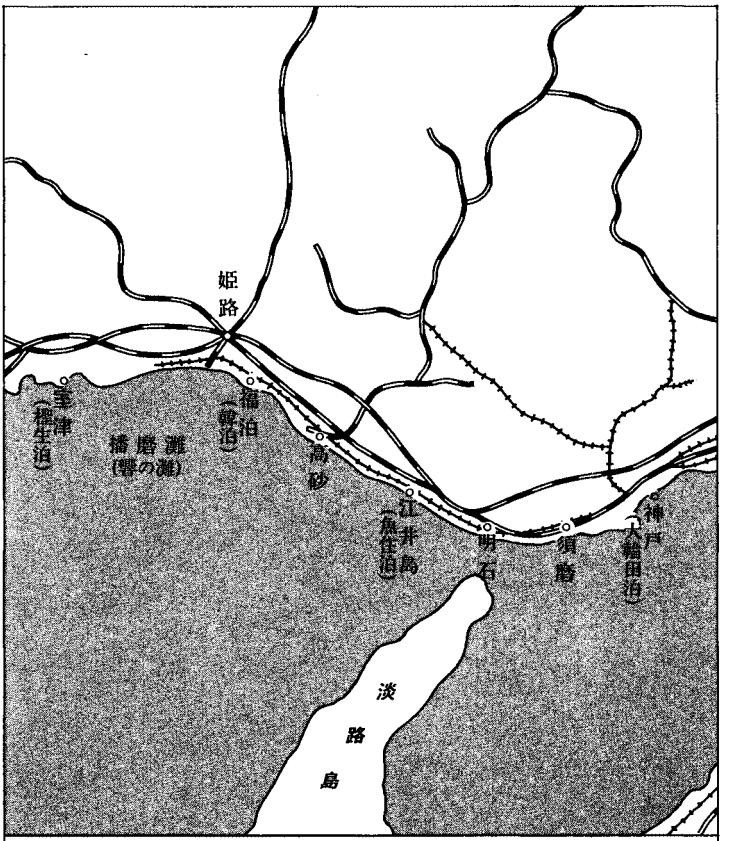


屋形舟と、舟に乗った遊女

（法然上人絵伝）

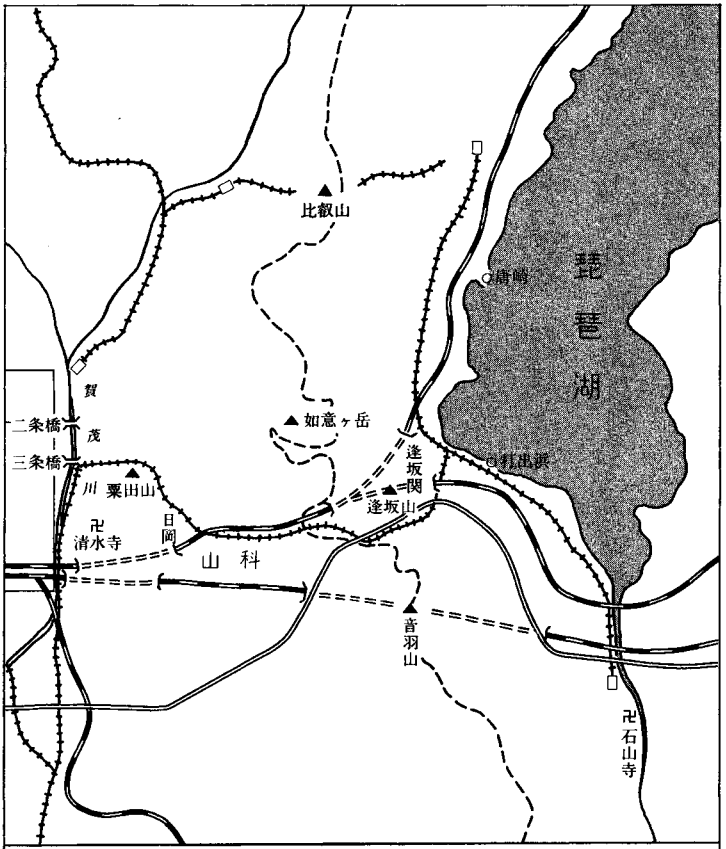

琵琶湖
京
山崎
石清水八幡宮
卍石山寺
淀川
神崎川
西宮
尼崎
新淀川
大阪城
安治川
卍四天王寺
住吉神社
川尻
奈良
初瀬川
長谷寺卍
桜井
三輪
大神神社
長谷寺卍
金屋(椿市)
初瀬川
近鉄大阪線
桜井
長谷寺

初　瀬



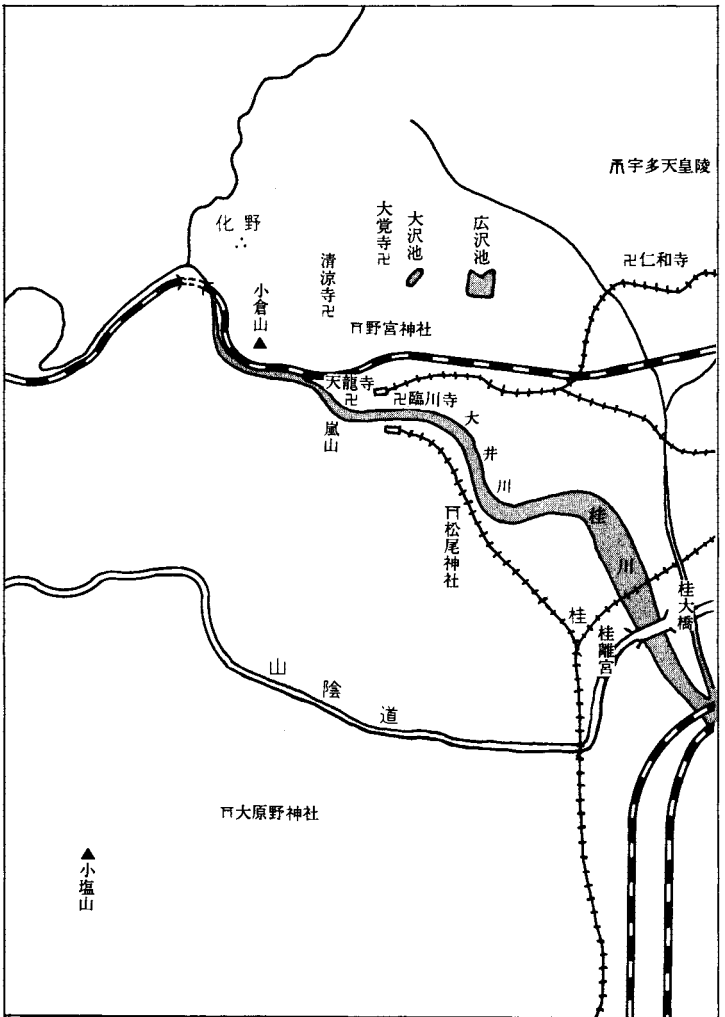
瀬戸内海　難波　京

当時の内海航路の櫂生泊（むろうのとまり）、韓泊（からどまり）、魚住泊（なすみのとまり）、大輪田泊（おおわだのとまり）の四泊を示した。この間各一日行程。櫂生から川尻まで四日の行程である。川尻から今の神崎川を溯行して山崎に至る。



京都東郊

（粟田口　逢坂関　琵琶湖　石山寺）

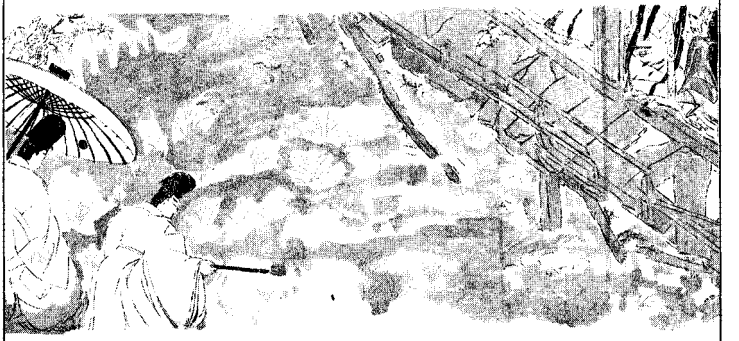


京都西郊

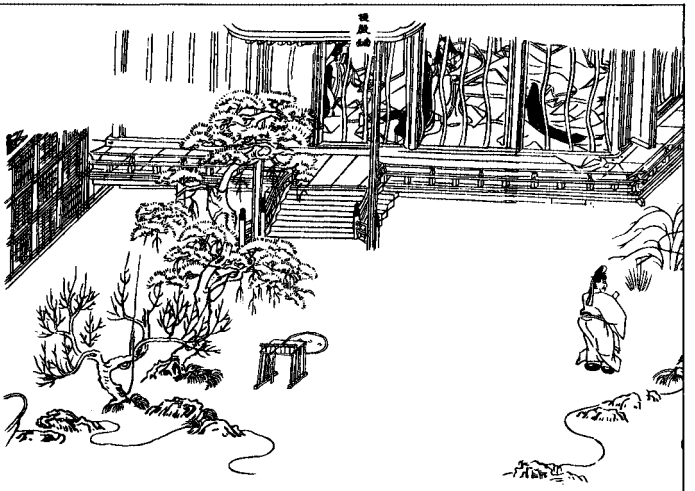
（嵯峨　桂　大原野神社）

図録五

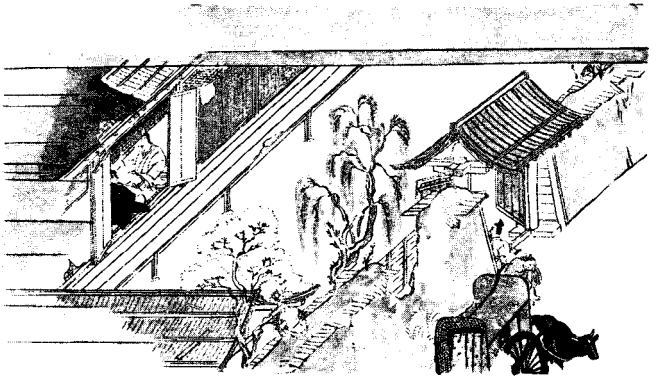
寝殿造り南面の図として、一巻図録六、七にわたる堂上鶏合の図とほぼ同じ趣のものであるが、より家庭的な雰囲気を持つものとして掲げる。寝殿の前庭、池辺に向けて立てられた白木の机の上に大幣（おおぬさ）が置かれ、前の円座は陰陽師の座。遣水に向って立つのは束帯姿の陰陽師、遣水の東側の築山の陰にいるのはその従者。全体に筆致は粗いが、遣水、立石、前栽の趣など、よく見て取れる。



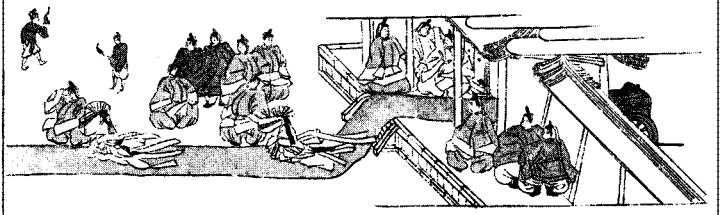
蓬　生（源氏物語絵巻）



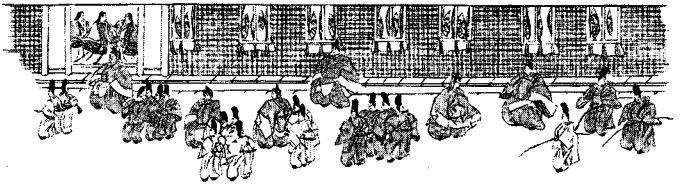
寝殿南面と東の対、遣水（年中行事絵巻十　六月祓）



崩れた築地塀（春日権現験記絵）

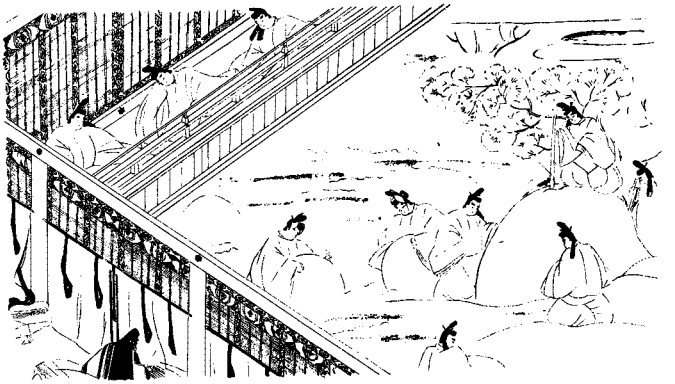


十一月中の丑の日、五節参内の景。左図、玄輝門（内裏内廓の北門）から、右図、朔平門（内裏外廓の北門）にかけて、筵道が敷かれている。玄輝門の柱の陰にいるのが舞姫、次がかしずきの女房、後の二人が童女であろう。それぞれ出迎えの殿上人に介添えされている。

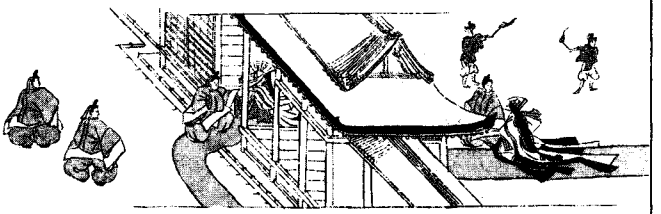


弘徽殿の細殿（承安五節絵）

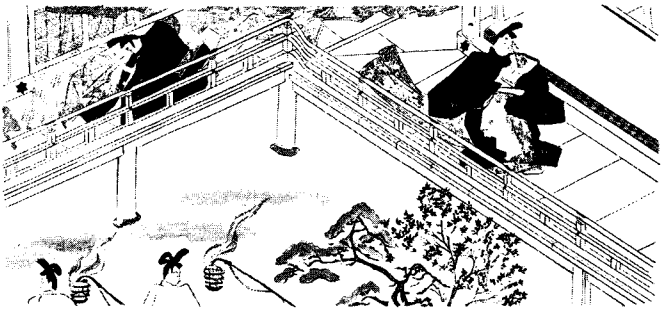
二巻花宴52頁、賢木147頁に見える弘徽殿の細殿の前面の図。寅の日、殿上の淵酔、乱舞の後、殿上人が五節所に向うのを、女房たちが見物している。本巻少女255頁に「上人たちのここちも、常よりもはなやかに思ふべかめる云々」とあるのは、こうした無礼講があるからである。



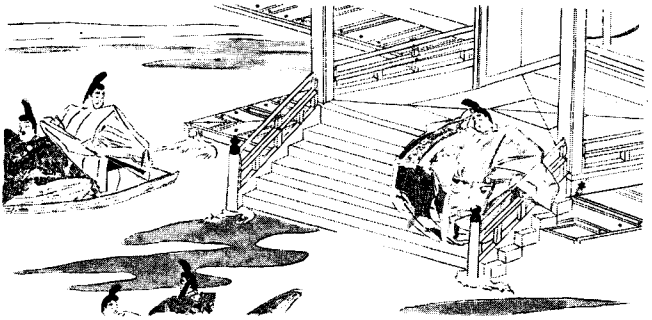
雪山作り（枕草子絵巻）



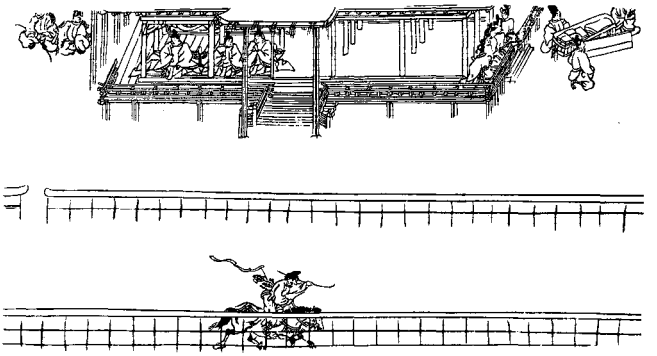
五節の参り（承安五節絵）



禄をかずく（紫式部日記絵巻）



釣　殿（紫式部日記絵巻）



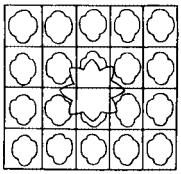
馬場の大殿（年中行事絵巻七）

五月五日、左近の馬場(一条西洞院)の真手結（まてつがい）の日の馬場の大殿の景。前面が馬場で、埒が結われている。

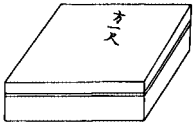
店
（扇面法華経下絵模本）

当時の店（たな）の状況を示す。玉鬘295頁の市女（いちめ）の参考として掲げる。

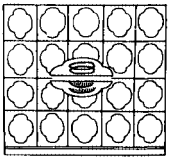
小鷹狩の一行（年中行事絵巻十七）



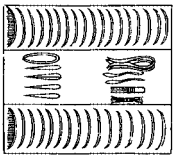
乙 筥 身



櫛 筥



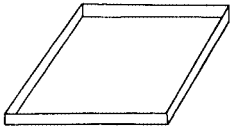
甲 筥 身



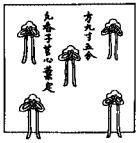
懸 子

櫛 筥（類聚雑要抄）

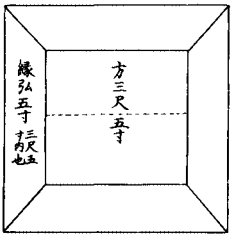
櫛筥甲乙一双。甲の身に小筥二十二、乙の身に小筥二十一を納める。甲の身の中央の小筥二つ、上が鉸子（はさみ）の筥、下が差櫛の筥。甲乙それぞれに懸子があり、右下がその図。



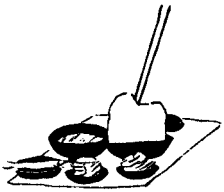
打乱筥（類聚雑要抄）



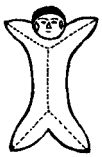
心 葉（類聚雑要抄）



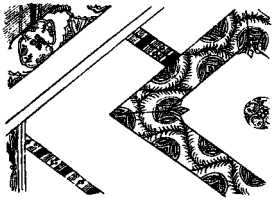
東京錦茵（類聚雑要抄）



折 敷（病草子）



天 児（貞丈雑記八）



茵（枕草子絵巻）

新潮日本古典集成（第一八回）

源氏物語 三

昭和五十三年五月五日　印刷
昭和五十三年五月十日　発行

校注者　石田穣二
　　清水好子

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
　　東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

定価一五〇〇円

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yoshiko Shimizu, Printed in Japan, 1978.

新潮日本古典集成

源氏物語

四

石田穣二　清水好子　校注

新潮社版

目次

凡例……三
初音……九
胡蝶……二九
螢……五七
常夏……八三
篝火……一一三
野分……一三一
行幸……一四五
藤袴……一六一

真木柱……二〇一
梅枝……二五一
藤裏葉……二七七

付録

春秋優劣の論……三一一
薫集類抄……三三〇
海漫々……三四〇
系図……三四二
図録……三四五
官位相当表……三五八

凡　例

一、本巻には、初音、胡蝶、螢、常夏、篝火、野分、行幸、藤袴、真木柱、梅枝、藤裏葉の十一巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、初音、行幸以外の諸巻の底本は、大島本である。

一、初音は、大島本が別本であるため、池田本を底本とする。

一、行幸は、青表紙原本である関戸家本を底本とする。関戸家本は、玉上琢弥博士の『源氏物語評釈』第六巻、行幸の巻にはじめて底本とされたものである。本書では、玉上博士のご好意により博士の調査資料の利用を許されて、底本とすることを得た。記して謝意を表する。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の

「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

　また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文脈の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで

示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、春秋優劣の論、薫集類抄、海漫々、系図、図録、官位相当表を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

源氏物語 四

初(はつ)音(ね)

源氏三十六歳の元日、いずこも同じうららかさに、人の心ものどやかな聖代の春ながら、六条の院はまた格別で、なかでも紫の上の春の御殿は折に合って、さながらこの世の極楽のようであった。

紫の上は、源氏の寵を一人占めにして、ゆったりと落着いて暮している。女房も思うことなげに新年を寿ぐ情景を目にした源氏は、自ら紫の上との水も漏らさぬ仲を祝って唱和した。

夕方、源氏は六条の院の女君たちを歴訪する。年賀のためであるが、一つには、歳末に贈った晴着を着ける婦人たちの姿を見たかったからでもある。

まず、明石の姫君を訪れ、明石の上から贈られた年始の歌に、源氏は生母の情をあわれむ。巻名は、この歌の言葉に由来する。続いて、夏の御殿にひっそりと住む花散里、早くもはなやかに住みつく玉鬘を訪れ、明石の上方では、姫君の返事に思い乱れた手習に源氏も筆を加え、一夜をそこで過した。

明けて二日、臨時客の賑わいの中にも、今年は、玉鬘を思って気もそぞろな貴公子が多かった。源氏は、二条の東の院に住む末摘花や空蟬の尼君を訪れることも忘れない。

十四日、男踏歌が六条の院にも廻ってくる。南の町に女君たちが参集して見物し、踏歌の風情を増した。

この巻は、六条の院の栄華の生活を四季にあてて語るべく、その第一章に、新春の行事を配したものである。

一 年の改まった元日の空の風情の、一点の曇りもなく晴れわたったうららかさには。「あら玉の年立ちかへる朝より待たるるものは鶯の声」（『拾遺集』巻一春、延喜の御時目次の御屏風に　素性法師）による。

二 つまらぬ者の家でさえ、雪の消えた間から草がいきいきと色づきはじめ。「野辺見れば若菜摘みけりむべしこそ垣根の草も春めきにけれ」（『拾遺集』巻一春、恒佐右大臣の家の屏風に　貫之）による。

新春の六条の院

三 （年が明けるなり）はやばやと立ちそめる霞に。「昨日こそ年は暮れしか春霞春日の山にはや立ちにけり」（『拾遺集』巻一春、山部赤人）、「吉野山峰の白雪いつ消えて今朝は霞の立ちかはるらむ」（同上、源重之）など同じ趣の歌である。

四 まして、年の始めは一層玉を敷いたかと見える六条の院のお住居は。「玉を敷く」は、家を飾り立てる形容。

五 寝殿の前の平坦な部分。白砂を敷きつめる。

春の御殿のありさま　源氏、紫の上と唱和

六 ひとしお美しく飾られた女君たちの御殿は。御簾なども新しくしたのであろう。

七 紫の上の御殿のお庭は。紫の上は春を好み、造園に春の趣向を凝らしている（三巻少女二七四頁参照）。

八 まるでこの世の極楽浄土と思われる。最高のほめ言葉である。

九 （奥様づきとして）かえってみやびやかで。

一年立ちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬうららけさには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうちけぶり（萌え出し）、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。（それにつれて自然と人の気持ものんびりするように思われるものだ）まして、いとど玉を敷ける御前は、庭よりはじめ見所多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉たるまじくなむ。（言葉も足りそうにない）

七 春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、八 生ける仏の御国とおぼゆ。さすがにうちとけて、やすらかに住みなしたまへり。（お住まいになっていらっしゃる）さぶらふ人々も、（お仕えする女房たちも）若やかにすぐれたるを、姫君の御かたにと選らせたまひて、（明石の姫君のお付きにと）すこし大人びたる限り、九 なかなかよしよししく、装束ありさまよりはじめて、（〔薫物の〕落着いて〔奥方らしく〕ゆったりと）（〔紫上方には〕年配の者ばかり）めやすくもてつけて、（見苦しからず身だしなみして）

一　正月三カ日、長寿を祝って、大根、瓜の串刺、押鮎、煮塩鮎、猪宍（または雉）、鹿宍（または鴨）を食すること（『江家次第』）。「歯」に「よはひ」（齢）の意があるところから、年歯を固め、延命を願う意。

二　幾千代の栄えもあきらかな一年のはじめの祝い言を言い合って。「万代を松にぞ君を祝ひつる千年の蔭に住まむと思へば」（『古今集』巻七賀、素性法師）による。「蔭」は「影」に掛け、「餅鏡」の「鏡」と縁語。こうした古歌を誦して祝い合っていたのであろう。

三　くつろいでいた懐手のかたちを改めて。

四　私が祝ってあげよう。「ことぶき」は、祝いの言葉。

五　源氏の寵を受ける女房で、須磨下向の時以来紫の上づきとなっている。二巻葵一一四頁、須磨二一六頁、三巻澪標一六頁、薄雲一六〇頁に見える。

六　わが君の千年のお栄えは疑いもないと、お鏡餅に向って話し合っておりました。「近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千年は」（『古今集』巻二十、神遊びの歌、大伴黒主）。歌の「鏡の山」（近江の歌枕）に「鏡」（鏡餅）をこと寄せた挨拶。

七　（六条の院に住む）女君たちの御殿へ、新年の挨拶をしようとなされて。主語は源氏。

八　お化粧なさる（鏡に映った）お姿こそ、ほんとに見るかいのあるお美しさだ。前の中将の君の言葉を受けての草子地。

九　あなた（紫の上）には、私が鏡餅をお見せして祝詞を述べましょう。

ここかしこに群れゐつつ、歯固めの祝ひして、餅鏡（鏡餅まで）をさへ取り寄せて、千年の蔭にしるき年のうちの祝ひごとどもして、そぼれ（戯れ合っているとこ）あへる（まあ困りま）に、大臣（源氏）の君さしのぞきたまへれば、懐手（したわと皆きまり悪がっている）ひきなほしつつ、いとはしたなきわざかなとわびあへり。「いとしたたかなるみづからの祝ひごとどもかな。皆おのおの思ふことの道々あらむかし。すこし聞かせよや。われことぶきせむ」とうち笑ひたまへる御ありさまを、年のはじめの栄えに見たてまつる。われはと思ひあがれる中将の君ぞ、「かねてぞ見ゆるなどこそ、鏡の影にもかたらひはべりつれ。私の祈りは、何ばかりのことをか」など聞こゆ。

（源氏）何と大した仲間同士の祝詞だね
（願いごとの筋がいろいろあるのだろう）
（源氏の立派なご様子を）
（めでたさと拝見する）
（我こそは自信たっぷりな）
（願いごとは）
（何ほどのことを祈りましょうか）

朝のほど（年賀の）は人々参りこみて、もの騒がしかりけるを、夕つかた、御方々の参座したまはむとて、心ことにひきつくろひ、化粧（念入りに衣服を整え）じたまふ御影こそ、げに見るかひあめれ。「今朝（源氏）この人々（こちらの人たちが）のたはぶれかはしつる、いとらやましく見えつるを、上（大層うらやましく思われましたから）にはわれ見せたてまつらむ」とて、乱れたること（色めいた冗談なども）どもすこしうちまぜつつ、祝ひきこえたま

一〇 薄氷も解けた新春の池の、鏡のような面には、類いなく倖せな二人の姿が並んで映っています。「鏡」に「餅鏡」を利かせる。

一一 澄みきった池の鏡に、幾久しくここにお住まいになるはずの君のお姿がはっきり映っています。「住む」に「澄む」を掛け、「鏡」の縁語。

一二 正月の子の日に、小松を根ごと引いて長寿を祈る風習があった。

一三 「千年まで限れる松も今日よりは君にひかれてよろづ代や経む」（『拾遺集』巻一春、入道式部卿の親王の子の日しはべりける所に　大中臣能宣）

一四 明石の上。六条の院の西北の町に住む。

一五 鬚のように端を編み残した籠。若菜などを入れる。

一六 白木の薄板の箱。仕切って食物を入れる。

一七 五葉の松。細工物で、枝に次の歌が付けてある。

一八 長の年月を対面の日を待ちわびて過す私に、今日はせめて年の初めのお便りなりと下さいませ。「まつ」は「待つ」と「松」の掛詞。

明石の上と姫君の贈答

長寿の松に引かれて経ると言って「古人」に言い掛ける。「ひかれ」は小松引きにちなんで「松」の縁語。「初音」に「初子」を掛ける。「松の上に鳴く鶯の声をこそはつねの日とはいふべかりけれ」（『拾遺集』巻一春、大后の宮に宮内といふ人の童なりける時、醍醐の帝の御前にさぶらひけるほどに、御前なる五葉に鶯の鳴きければ、正月初子の日、つかうまつりける）による趣向である。

初音

ふ。

（源氏）一〇 うす氷とけぬる池の鏡には
世にたぐひなきかげぞならべる

（紫上）一一 げにめでたき御あはひどもなり。
くもりなき●池の鏡によろづ代を
すむべきかげぞしるく見えける

何ごとにつけても、〔お二人は〕末遠き御契りを、〔このように〕あらまほしく聞こえかはしたまふ。今日は子の日なりけり。げに千年の春をかけて祝はむに、〔にもふさわしい〕とわりなる日なり。

〔明石の姫君〕姫君の御方に〔源氏が〕わたりたまへれば、童女、下仕へなど、御前の山の小松引き遊ぶ。〔室内の〕若女房たちの気持も〔今日のため特別用意した数多くの〕小松引き遊ぶ。若き人々のここちども、〔じっとしていられない様子だ〕おきどころなく見ゆ。北の御殿より、〔姫君に〕わざとがましくし集めたる鬚籠ども、破籠などたてまつれたまへり。〔移り飛ぶ〕えならぬ五葉の枝にうつる鶯も、〔思う仔細があるのであろう〕思ふ心あらむかし。

（明石上）一八 「年月をまつにひかれて経る人に

一『釈』は、「今日だにも初音聞かせよ鶯の音せぬ里はあるかひもなし」（『奥入』「すむかひ」）をあげる。

二 元日に、縁起でもなく涙もこらえかねるご様子である。「言忌」は、不吉な言行を忌み慎むこと。

三 初のお便りをお控えになるべき人でもないでしょう。「初音……」は、明石の上の歌の言葉によったもの。

四 今まで、生みの母が見ることなく年月が過ぎたのも。薄雲の巻の別離（三巻一五四頁以下）以来四年たっている。

五 お別れしてから年月はたちましたけれども、生みの母君を忘れましょうか。姫君自身を鶯に喩える。

六 子供心に思った通りを詠まれて、ごたごたしている。草子地による歌の批評。理屈が勝って余情に乏しいといったところである。

七 花散里の御殿。東北の町で夏を主とする庭作りである。

八（源氏は花散里に対して）この頃では、しいて親しい男女の仲といったふうなお扱いはなさらないのであった。夫婦として枕を交わすこともなかった、の意。

源氏、花散里を訪う

けふ鶯の初音聞かせよ

音せぬ里の」と聞こえたまへるを、〔源氏は〕げにあはれとおぼし知る。言忌もえしたまはぬけしきなり。「この御返りは、姫君ご自身がみづから聞こえたまへ。初音惜しみたまふべきかたにもあらずかし」とて、御硯取りまかなひ、書かせたてまつらせたまふ。〔姫君は〕大層おかわいらしくいとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに、いつまでも見飽きずお思い申すお姿を飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪つくりでかわいそうだと〔源氏は〕罪得がましく心苦しとおぼす。

〔明石姫君〕ひきわかれ年は経れども鶯の

巣立ちし松の根を忘れめや

をさなき御心にまかせて、くだくだしくぞある。

夏の御住ひを見たまへば、時ならぬけにや、その時節でないせいかいと静かに見えて、ひっそりした感じで取り立てて風流を競うこともなくわざとこのましきこともなく、品よくお暮しになっている様子がここかしこに見受けられるあてやかに住みなしたまへるけはひ見えわたる。年月に添へて、御心の隔てもなく、お互いに信じ合ってしみじみとした夫婦仲であるあはれなる御なからひなり。今は、あながちに近やかなる御ありさまも、もてなしき

九 ただ、大層むつまじい、世にまたとないような夫婦の約束を、お互いに言い交わしていらっしゃる。

一〇 花散里は、それはそれで、されるままにしていらっしゃる。花散里の素直な人柄。

一一 藍色の薄いもの。花散里の着る小袿。去年暮、源氏が新春の衣裳として贈ったもの（三巻玉鬘三二六頁参照）。以下、源氏の眼を通して花散里の容姿を言う。

一二 いかにも、はなやかさには欠ける色合いで。玉鬘の巻にも「浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、にほひやかならぬに」（三巻三二六頁）とあった。

一三 かもじ。髪が薄くなると、添える。

一四 こうしてお世話するのは、自分としてもうれしく、満足なことだ。

一五 花散里が考えの浅い女と同じように、（私の薄情さを怨んで）私から離れていってしまわれていたら、などと。

一六 花散里の御殿の西の対。玉鬘が住む。（玉鬘三一七頁参照）

源氏、玉鬘を訪う

一七 （玉鬘は）まだそう大して住み馴れてもいらっしゃらぬわりには。玉鬘の六条の院移転は、昨年十月のこと（玉鬘三一九頁参照）。

一八 こまごまとした身の廻りのお道具は。

こえたまはざりけり。いとむつましくありがたからむ妹背の契りばかり、聞こえかはしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。〔源氏が〕

御髪などもいたく盛り過ぎにけり、やさしきかたにあらねど、えびかづらしてぞつくろひたまふべき、われならざらむ人は、見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ、心軽き人の列にて、われにそむきたまひなましかば、など、御対面のをりをりには、まづわが御心の長さも、人の御心の重きをも、うれしく、思ふやうなりとおぼしけり。〔源氏は〕こまやかに、ふる年の御物語など、なつかしく聞こえたまひて、西の対へわたりたまふ。〔花散里に〕

まだいたくも住み馴れたまはぬほどよりは、けはひをかしくしなして、をかしげなる童女の姿なまめかしく、人かげあまたして、御しつらひ、あるべき限りなれども、こまやかなる御調度は、いとしもとのへたまはぬを、さるかたにものきよげに住みなしたまへり。

人目を恥じるほどではないけれども　私以外の人だったら　眼気のさしそ　お手入れなさればよいのに　うなご様子を　源氏ご自身の変らぬ愛情も　花散里の重々しいご性格をも　理想的だと　去年以来の　あたりの感じもゆかしくお住　女房の姿もたくさん見え　優雅で　屋の設備も　必要なものだけは皆あるけれども　十分には　そろえていらっしゃらないのだが　それなりにこざっぱりとお住みになっている

一 ご本人（玉鬘）も、ああ美しいと、見るなり思われて。親として、玉鬘に直接対面するのである。
二 山吹襲のお召し物を着て。歳末、源氏が贈った細長である（玉鬘三二六頁参照）。
三 どこからどこまで、輝くほどの美しさは派手やかで。「にほひ」は、輝くように美しいこと。
四 こうして引き取らなかったら、と思われるにつけ。美しい玉鬘をわがものにした幸運を喜ぶ。
五 とてもこのままお見過しになれないのではないか。父親役では納まらないのではないか、という草子地。
六 やはり考えてみると、（そこは実の父ではないので）気のおけることが多く何となく落着かぬ感じなのが、夢を見ているような思いもして。玉鬘の気持。
七 （源氏に対して、玉鬘が）すっかりうちとけた態度をお見せにならないのも、大層風情がある。源氏の心中の思いが、そのまま草子地と重なる。
八 （親代りにお世話しようと思っていた）年来の望みが叶いましたが。
九 琴の手ほどきを受けている幼い人（明石の姫君）もいるようですから。「あめるを」は、婉曲な表現。
一〇 気の許せぬ、軽はずみな考えを持った人は誰もいません。紫の上のこと。新しく来た玉鬘を安心させるための配慮。
一一 しかるべきご返事だ。玉鬘としては素直にお受けするほかないことだ、という意味の草子地。

一 正身も、あなをかしげと、ふと見えて、二 山吹にもてはやしたまへる（一段と美しくお見えになる）御容貌など、いとはなやかに、ここぞ曇れると見ゆるところなく（陰気だと思われるところがなく）、三 隈なくにほひきらきらしく、見まほしきさまぞしたまへる。（筑紫以来）もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、髪の裾すこし細りて、さはら（気苦労のせいか）（いつまでも見ていたいほどでいらっしゃる）（はらりと）かにかかれるしも、いとものきよげに、ここかしこいとけざやかな（〔衣裳の裾に〕）（いかにもこざっぱりとして）（くっきりと目に）るさましたまへるを、四 かくて見ざらましかばと思ほすにつけては、（立つ様子をしていられるのを）（このように何の隔てもなく直接ご対面なさるもの）五 えしも見過ぐしたまふまじくや。かくいと隔てなく見たてまつりたまへど、六 なほ思ふに、隔たり多くあやしきが、うつつのここちもしたまはねば、七 まほならずもてなしたまへるも、いとをかし。「年ご（源氏）（もう何年にもなるような気がして）ろになりぬるここちして、見たてまつるも心やすく、八 本意かなひぬ（お目にかかるのも気が張らず）（お出かけなさい）るを、つつみなくもてなしたまひて、あなたなどにもわたりたまへ（ご遠慮などなさらずに）（紫の上方）かし。九 いはけなき初琴ならふ人もあめるを、もろともに聞きならしたまへ。一〇 うしろめたく、あはつけき心持たる人なき所なり」と聞こ（一緒にお稽古なさい）えたまへば、一一 「のたまはせむままにこそは」と聞こえたまふ。さも（（玉鬘）仰せの通りにいたしましょう）

一二 六条の院西北の町に住む。
一三 明石の上の住む御殿に到る渡殿の戸。
一四 室内の薫物の匂いを吹き送る風。
一五 硯のまわりが散らかっていて。朝方、明石の姫君に手紙を書いたあと、そのままなのであろう。
一六 綴じ本。巻物に対する。ここは、和歌の草子であろう。
一七 中国渡来の、錦に似た薄い織物。
一八 敷物。周囲を錦で縁どる。（三巻図録一一参照）
一九 七絃。中国渡来の楽器で、君子の玩び物とされた。
二〇 火鉢。桐の木などを丸く刳って作る。（図録一〇参照）
二一 薫物の名。秋の物とされる。（付録三三三頁参照）
二二 薫物の名（付録三三八頁参照）。『和名抄』によれば、香木の一種か。
二三 心に浮ぶ思いを古歌に託したり、自ら歌を詠んだりして書きすさぶこと。歌の一句である場合もある。
二四（とはいえ）ご大層に草体をたくさん使ったりして、知ったかぶりをせず。「草」は、万葉仮名の草体。
二五 姫君のご返歌。前出「ひきわかれ」の歌。
二六 何と珍しいこと、はなやかな御殿に住みながら、埋もれたもとの古巣を尋ねてくれるとは。鶯は冬の間、谷に籠っているとされていた。

源氏、明石の上を訪れ、一夜を明かす

あることぞかし。

暮れがたになるほどに、明石の御方にわたりたまふ。近き渡殿の戸押しあくるより、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高くおぼさる。正身は見えず。いづらと見まはしたまふに、硯のあたりにぎはははしく、草子ども取り散らしたるを取りつつ見たまふ。唐の綺のことことしき縁さしたる茵に、をかしげなる琴うち置き、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、裛衣香の香のまがへる、いと艶なり。手習どもの乱れうちとけたるも、筋かはり、ゆゑある書きざまなり。ことことしう草がちなどにも才がらず、めやすく書きすましたり。小松の御返りを、めづらしと見けるままに、あはれなる古言ども書きまぜて、

（明石上）
「めづらしや花のねぐらに木づたひて
谷の古巣をとへる鶯

ほかに比べ格段に
大層立派な
明石の上
〔源氏が〕どうしたのかと
〔源氏は〕
風雅な
縫い付けた
趣向を凝らした風雅な
混じっているのは
たきしめてあるのに
書風が独特で
教養のしのばれる書きぶりである
乱れ書きで思いつくままなのも
無雛にしっとりと書いてある
珍しいことと感じたあまりに
古歌をいろいろ
しみじみとした
書きつけて

一 やっと鶯の声が聞かれたことです。姫君の便りを喜ぶ気持を託す。引歌未詳。手すさびに書く思いが自然に歌の一句になった形とも考えられる。

二 「梅の花咲ける岡べに家しあれば乏しくもあらず鶯の声」（『古今六帖』六、鶯。原歌は『万葉集』巻十春雑歌、詠鳥。ただし、第三句「家居れば」）。姫とは家が近いので、いずれこれからもお便りが頂けよう、という気持を託したもの。

三 そうはいっても明石の上自身の振舞は、（源氏に対して）遜って礼儀に適った態度であるのを。前に、「ものよりことに気高くおぼさる」とあった。

四 白い小袿。年末、源氏より贈られた衣裳。（三巻玉鬘三二七頁参照）

五 新年早々、紫の上にやかましく言われるかもしれないと。

六 やはり、明石の上の寵愛は格別なのだと、（六条の院の）女君たちは、おもしろからずお思いになる。「おぼえ」は、明石の上の思われ方。

七 紫の上方。

八 （源氏を）送り出したあとも心が乱れて、もの悲しく思う。明石の上の心中。

九 源氏の帰りをお迎えになった紫の上は紫の上でまた、（明石の上を）何やら心外なとお思いなさるに違いないお心のうちが遠慮されなさって。「けやけし」は、意外な人が意外なことをする、というほどの意。ここは不快に思うのである。

一 声待ち出でたる」などもあり。「咲ける岡辺に家しあれば」など、思い返して心を慰める意味の文句などを ひき返しなぐさめたる筋など書きまぜつつあるを、〔源氏は〕取りて見たまひつつほほゑみたまへる、気がひけるほどこと立派だ〔源氏が〕はづかしげなり。〔その手習の端に〕筆さしぬらして書きすさみたまふほどに、〔明石上が〕ゐざり出でて、三さすがにみづからのもてなしは、かしこまりおきて、めやすき用意なるを、なほ人よりは並の女よりは〔源氏は〕異なりとおぼす。四白きに、けざやかなる髪のかかりの、くっきりと映える すこしさはらかなるほどに薄らぎにけるも、いとどなまめかしさ添ひて、優美さが加わって なつかしければ、新しき年の御騒がれもやと、五気にかかるけれども つつましけれど、こなたに明石の上方にとまりたまひぬ。六なほおぼえ異なりかしと、方々に心おきておぼす。南の御殿には、〔南の御殿に〕けしからぬと思う女房たちがいる ましてめざましがる人々あり。まだ曙のほどにわたりたまひぬ。そんなにお急ぎになることもないまだ暗いうちなのにと思うと かくしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、名残もただならず、あはれに思ふ。九待ちとりたまへるはた、なまけやけしとおぼすべかめる心のうち憚られたまひて、〔源氏〕いつにない「あやしきうたた寝をして、若々し なく寝込んでしまいましたのを かりけるいぎたなさを、そうだといって起しても下さらないで さしもおどろかしたまはで」と、〔紫上の〕ご機嫌 年がいも

一〇 日が高くなってから、お起きあそばした。「大殿籠り起く」は、「寝起く」（寝て起きる）の敬語。

一一 今日（二日）は、臨時客の接待にいそがしいふりをして、紫の上に顔を合せないようにしていらっしゃる。「臨時客」は、年頭、摂政関白および大臣が来訪の上達部に饗応すること。正月二日を例とする（図録八参照）。

六条の院の臨時客

一二 饗応の際、主人から一座の上客に贈る物。

一三 労をねぎらい、当座の褒美として与える物。

一四 大勢お集まりの来客の方々が。以下、草子地。

一五 その方々も、一人一人別々に見れば。

一六 諸道に精通した人が大勢いらっしゃる頃であるが、源氏のお前に出ると圧倒されておしまいなのは、だらしないことです。草子地。

一七 例年よりも格別の様子である。玉鬘が引き取られているからである。

一八 夕方、薄暗くて、あれは誰と見分けがたい時刻。

一九 催馬楽、呂「この殿は」。「この殿は　むべも　むべも富みけり　さき草の　あはれ　さき草の　はれ　さき草の　三つば四つばの中に　殿づくりせりや　殿づくりせりや」

二〇 前掲歌詞の後半の部分をいうのであろう。「さき草」は何か不明だが、枝先が三つに分れて花をつけるという。「さき草の」で、「三つ」「中」に掛る枕詞。「三つば四つば」は、軒端が幾重にも重なったさまという。

とりたまふもをかしう見ゆ。ことなる御いらへもなければ、わづらはしくて、そら寝をしつつ、日高く大殿籠り起きたり。

（これは面倒をおとりになるのもおもしろく思われる）（〔源氏は〕理寝入りをしては）（格別のご返事もないので）

一一 今日は、臨時客のことにまぎらはしてぞ、おもがくしたまふ。上達部、親王たちなど、例の通り例の、残るなく参りたまへり。御遊びありて、管絃の御遊をなさり

一二 引出物、一三 禄など、二なし。一四 そこらつどひたまへるが、われも劣らじとも立派に振舞っていらっしゃるなかでも〔源氏の君に〕多少とも肩を並べられる方もお見えにならとてなしたまへるなかにも、すこしなずらひなるだに見えたまはぬものかな。一五 とり放ちては、有職多くものしたまふころなれど、御前にてはけおされたまふ、わろしかし。何の数ならぬ下部ども召使たちでもものの数にも入らぬだに、この院に参るには、心づかひ異なりけり。まして若やかなる上達部などは、思ふ心などものしたまひて、すずろに心懸想したまひつつ、一七 常の年よりも異なり。花の香さそふ夕風、のどかにうち吹きたるに、御前の梅やうやうひもときて、一八 あれは誰時なるに、ものの調べどもおもしろく、この殿うち出でたる拍子、いとはなやかなり。大臣も時々声うち添へたまへるさき草の末つかた、いとなつか

（どなたも人に負けまいと立派に振舞っていらっしゃるなかでも〔源氏の君に〕多少とも肩を並べられる方もお見えにならぬことだ）（六条の院に）（ひそかに目指すことなどがおりになって）（むやみに緊張なさって）（次第にほころび出して）（まの楽の音が）（源氏も）（とても心ひかれ）

一 このように年賀の客で雑踏する馬や牛車の音も。

二 遠く離れた御殿でお聞きになる女君たちは。花散里や明石の上である。

三 極楽浄土に咲く蓮花の中に生れながら、その花が十二大劫（劫はきわめて長い時間）の間、開かないでいる気持もこうであろうかと。極楽往生の九階級のうち、最下級の下品下生の者は、開かぬ蓮花の中に劫を経て、三不足（仏を見ず、説法を聞かず、仏を供養せざること）がある、という。

源氏、東の院に末摘花を訪う

四 二条の東の院に、遠く離れてお住まいの方々。末摘花や空蟬。（玉鬘三二七頁参照）

五 憂き世のつらさのない山路に入ったつもりになって。「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」（『古今集』巻十八雑下、物部良名）

六 仏道修行に志す人。空蟬の尼のこと。

七 仮名文字のいろいろの書物の学問にご熱中の方は。末摘花のこと。和歌の髄脳などを重んじていたことが玉鬘三二九頁に見える。それを「学問」と大げさに言うのは、例の、末摘花をからかった筆つき。

八 常陸の宮の姫君。末摘花のこと。

九 その昔、お見事だと思った黒髪も。末摘花が、髪だけはすぐれていたこと、一巻末摘花二七一頁、三巻蓬生七〇頁に見える。

〔源氏が〕お声を添えられるすばらしさに引き立てらてすばらしく聞える しうめでたく聞こゆ。何ごとも、さしいらへしたまふ御光にはやされて、色をも音をもますけぢめ、ことになむ分かれける。

花の色も　楽の音も格段に映える点が　ほかの場合と全く違うのだった

一かくののしる馬車の音をも、二もの隔てて聞きたまふ御方々は、三蓮のなかの世界に、まだひらけざらむここちもかくやと、心やましげご様子だなり。まして四東の院に離れたまへる御方々は、年月に添へて、つれさがつのるばかりだがづれの数のみまされど、五世の憂きめ見えぬ山路に思ひなずらへて、

源氏

つれなき人の御心をば、何とかは見たてまつりとがめむ、そのほかの心もとなくさびしきことはたなければ、六行ひのかたの人は、その外気を散らさずまぎれなく勤め、七仮名のよろづの草子の学問、心に入れたまはむ人は、またその願ひに従ひ、ものまめやかにはかばかしきおきてにも、ただ心の願ひに従ひたる住ひなり。騒がしき日ごろ過ぐしてわたりたまへり。

心穏やかならぬ　所在な　何といってお咎め申し上げたりしよう　源氏の訪れの　ないことのほかには不安で心細いことは何もないので　修行以　その希望通りになさり　生活を支えるしっかりした経済的な処遇の点でも

八常陸の宮の御方は、ご身分がご身分なので〔源氏は〕気の毒に思われて人目には立派に見えるように　大層行き届いたお扱いをなさる　九人のほどあれば、心苦しくおぼして、人目の飾りばかりは、いとよくもてなしきこえたまふ。十いにしへ盛りと見

一〇 今はまして、真白な滝壺の淀みも負けをとるほど白髪になられた御横顔などを。「落ちたぎつ滝の水上年積り老いにけらしな黒き筋なし」（『古今集』巻十七雑上、忠岑）など、滝を白髪に喩える歌がある。

一一 柳の衣裳は、やはり不似合いだったと思われるのも。歳末、源氏が贈った晴着（玉鬘三二七頁参照）。

一二 光沢もない黒っぽい掻練の、さわさわと音を立てるほど強く張った一襲に。「掻練」は、練り絹のこと。紅色。「掻練は薄き紅の張りたる絹なり。張りかず入るれば黒むものなり」と『花鳥余情』にいう。

一三 下に重ねる袿などは、どうしてしまったのであろう。袿は何枚か重ねて着る。末摘花は、掻練の上に袿一枚だけを着ているのである。

一四 お鼻の色だけは、春霞にも隠れそうになく赤く色づいているので。「鼻」に「花」を掛ける。「あさみどり野辺の霞はつつめどもこぼれてにほふ花桜かな」（『拾遺集』巻一春、読人しらず。『古今六帖』五）

一五 かえって女君はそれほど気にもなさらず。

一六 こういった面（生活上のこと）でも。

えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、一〇まして滝の淀みはづかしげなる御かたはらめなどを、いとほしとおぼせば、

柳二はげにこそすさまじかりけれと見ゆるも、着なしたまへる人からなるべし。光もなく黒き掻練の、さゐさゐしく張りたる一襲、さる織物の袿を着たまへる、いと寒げに心苦し。一三かさねの袿などは、いかにしなしたるにかあらむ、一四御鼻の色ばかり、霞にもまぎるまじくはなやかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳引きつくろひ隔てたまふ。一五なかなか女はさしもおぼしたらず、今は、かくあはれに長き御心のほどを、おだしきものにうちとけ頼みきこえたまへる御さま、あはれなり。一六かかるかたにも、おしなべての人ならず、いとほしく悲しき人の御さまとおぼせば、あはれに、われだにこそはと御心とどめたまへるも、ありがたきぞかし。御声なども、いと寒げにうちわななきつつかたらひきこえたまふ。見わづらひたまひて、「御衣ものなど、後見きこゆる人ははべりや。か

年とともに
お気の毒と〔源氏は〕
面と向って対座なさることもない
お召しになっているお方のせいで
例の柳
表着
〔源氏は〕お気の毒とは思いながらもつい嘆息をなさって
このようにやさしく変らぬご愛情を
安心に思って心から源氏にお頼り申して
いられるご様子は
普通の身分の
人とは違って
お気の毒で
〔源氏は〕
おいたわしく悲しいお身の上と
滅多にできないことである
〔末摘花
せめて私だけでもとお世話に気をつけていらっしゃるのも
お見か
ねになって
（源氏）そ
お召し物など
お世話申し上げる人はおりますか
うしろみ

一　ただもう気を張らずに、ふっくらと柔らかい着物がよいのです。綿を入れた糊気のないのがいい、と教える。「さゐさゐしく張りたる」は、その反対。

二　末摘花の兄。蓬生の巻に「御兄の禅師の君」（三巻五八頁）と見える。醍醐は、醍醐寺のこと。京都市伏見区醍醐にある。真言宗小野流の総本山、醍醐天皇の勅願寺となる。「阿闍梨」は、僧官の一。

三　私の着る物も縫えませんで。前の「かさねの袿」の仕立てが、新春の間に合わなかったゆえんである。

四　皮衣まで兄に取られてからは。「皮衣」は、彼女の愛用していた黒貂（くろてん）の毛皮（一巻末摘花二七一頁参照）。

五　ほんとに鼻の赤い（寒がりの）兄上だこと。さすが末摘花に似たご兄妹だ、という気持。

六　皮衣は、それでよいでしょう。本来は男性用の物。

七　山法師の蓑代りの雨衣にお上げになって結構でしょう。「山伏」「蓑代衣」は歌語。醍醐寺は修験道の本山でもある。

八　ところで、先日さし上げた惜しげなく着られる白絹の着物は、遠慮なく七重にも重ねてお召しになったらよろしいでしょう。「白妙の衣」「七重」も歌語。

九　ほかの方々にもそれぞれご用がありますので。

一〇　二条の院。道を隔てて、東の院の向いにある。

（お気楽な）く心やすき御住ひは、ただいとうちとけたるさまに、ふくみなえたるこそよけれ。うはべばかりつくろひたる御よそひは、（外見ばかりを飾ったお召し物は）あいなくなむ」と聞こえたまへば、こちごちしくさすがに笑ひたまひて、「醍（ぎこちなくそれでもやはり笑みを浮べなさって）醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて、（お世話をしなければなりませんので）衣どももえ縫ひはべらでなむ。皮衣をさへ取られにし後、寒くはべる」と聞こえたまふは、いと鼻赤き御兄なりけり。（〔源氏は〕）心うつくしといひながら、（〔これでは〕）あまりうちとけ過ぎたりとおぼせど、ここにては、（末摘花が相手では）いとまめにきすくの人にてはす。「皮衣はいとよし。山伏の蓑代衣にゆづりたまひてあへなむ。（大層生真面目で無骨な人になっていらっしゃる）（〔源氏〕）さてこのいたはりなき白妙の衣は、七重にもなどか重ねたまはざらむ。さるべきをりをりは、うち忘れたらむこともおどろかしたまへかし。もとよりおれおれしく、たゆき心のおこたりに、まして方々のまぎらはしきほひにも、おのづからなむ」とのたまひて、向ひの院の御倉あけさせて、絹、綾などたてまつらせたまふ。荒れたる所もなけれど、（〔源氏が〕）住みたまはぬ所のけはひは静かにて、御前の木立ば

（感心しません）（〔末摘花〕）（私のうっかりしていそうなこともそうとおっしゃって下さい）（ご用のある時には）（生来愚かな上に）（はきはきせぬ性分のせいで）（ついうっかりしまして）（〔東の院は〕）

一 もとの住処の春の梢を尋ねて来て、世にも珍しい花（鼻）を見ることだ。前に「御鼻の色ばかり、霞にもまぎるまじくはなやかなるに」とあった。

三 尼姿の空蟬のもとへも、お顔をお出しになった。「尼衣」とあるのは、空蟬にも、歳末、衣を贈ったからである（玉鬘三二七頁参照）。

三 部屋住みのような体にして。遜ったさま。

四 「閼伽」は、花や樒を浮べて仏前に供える水。そのための皿そのほかの道具。

五 鈍色（薄墨色）に青味のかかった色。尼の住いにふさわしい色である。

六 空蟬はすっかり姿を隠して。

空蟬の尼君を訪う

「ゐ隠る」は、隠れて坐ること。

七 袖口だけ色が違っているのが。空蟬は、源氏から贈られた青鈍の織物を上に着ているが、袖口には、同じく贈り物の梔子色（黄色）、聴し色（濃い紅梅色）の袿がほの見えている（玉鬘三二七頁参照）。

八 尼姿のあなたとは、所詮結ばれぬものと諦めねばならないのですね。「音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり」（『後撰集』巻十五雑一、素性法師）による。「あま」に「海士」と「尼」を掛ける。「松が浦島」は奥州の歌枕（二巻賢木一七六頁注一一参照）。

九 昔から思いの遂げられぬつらいご縁でした。

一〇 そうはいってもやはり、こうして私のもとにいて下さるぐらいのお付合いは、絶えないのでした。

かりぞいとおもしろく、紅梅の咲き出でたるにほひなど、見はやす（賞美する）人もなきを見わたしたまひて、

（源氏）一 ふるさとの春の梢にたづね来て

世の常ならぬ花を見るかな

ひとりごちたまへど、（末摘花は）聞き知りたまはざりけむかし。

一二 空蟬の尼衣にも、さしのぞきたまへり。うけばりたるさまにはあらず、かどやかに局住みにしなして、仏ばかりに所得させたてまつりて、行ひ勤めけるさまあはれに見えて、経、仏の飾り、はかなくしたる閼伽の具なども、をかしげになまめかしく、なほ心ばせありと見ゆる人のけはひなり。青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたくゐ隠れて、袖口ばかりぞ色異なるしもなつかしければ、涙ぐみたまひて、「松が浦島を、はるかに思ひてぞやみぬべかりける。昔より心憂かりける御契りかな。さすがにかばかりの睦びは、絶ゆまじかりけるよ」などのたまふ。尼君も、ものあはれなるけはひにて、

（お分りにならなかったことであろう）
（いい気になるといったふうはなく）
（部屋の大部分をお譲り申し）
（質素な作りの）
（殊勝に思われて）
（風情があり）
（優美で）
（やはり気の利いた人だ）
（趣味のよいのに）
（心ひかれる感じなので）
（源氏は）
（しんみりとした様子で）
（空蟬）

一　こうして（仏に仕える身となって）お頼り申し上げるほうが、かえってご縁も浅からず存じられます。「思ひたまへ知られはべりける」は、「思ひ知られける」の謙譲の意を強めた言い方。

二　薄情な仕打ちを何度もなさって。一巻帚木、空蟬の巻における、源氏を寄せつけなかったことをいう。

三　あのとんでもない昔の事件をお耳に止めていらっしゃるのだろうと。夫の伊予の介没後、継子の紀伊の守が言い寄ったこと。（三巻関屋九〇頁参照）

四　こんなふうに、手の届かぬ尼になってしまったことよとお思いになると、かえってただではすまされぬ思いがなさるけれども。主語は源氏。

五　さしさわりのない思い出話や当座の話などなさって。

六　こんな程度のことでも、（末摘花や空蟬のような具合に）源氏のご庇護を受ける女君が多い。

（空蟬）一「かかるかたに頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」と聞こゆ。（源氏）二「つらきをりをり重ねて、心まどはしたまひし世の報いなどを、仏にかしこまりきこゆるこそ苦しけれ。おぼし知るや。かくいとすなほにしもあらぬものをと、思ひ合はせたまふこともあらじやはとなむ思ふ」とのたまふ。三かのあさましかりし世の古事を聞き置きたまへるなめりと、はづかしく、（空蟬）「かかるありさまを御覧じ果てらるるよりほかの報いは、いづこにかはべらむ」とて、まことにうち泣きぬ。（空蟬は）いにしへよりも、もの深くはづかしげさまざりて、四かくもて離れたることとおぼすしも、見放ちがたくおぼさるれど、はかなきことをのたまひかくべくもあらず、五おほかたの昔今の物語をしたまひて、かばかりの言ふかひだにあれかしと、あなたを見やりたまふ。

六　かやうにても、御蔭に隠れたる人々多かり。皆さしのぞきわたしたまひて、（源氏）「おぼつかなき日数つもるをりをりあれど、心のうちは

（乱しになったあの当時の）（私の心をお）（機悔申し上げるとはお気の毒なことです）（罪の報い）（お分りですか）（男は）（私のように素直にすぐ引っ込むものでもないのだと）（思い合せなさることもなくはあるまいと思います）（どこにございましょ）（んななれの果ての尼姿をお目にさらすよりほかの）（ける落着いた感じは増していて）（色めいたことをおっしゃってみるわけにもゆかず）（せめてこの程度の話し相手が勤まってほし）（いものだと　末摘花の方を）（奥ゆかしく気のひ）（なって　（源氏）お目にかからぬ）（皆にちょっとお顔をお見せに）

七 ただ、いつかは来る死出の別れだけが気がかりです。命のある限り心変りはしないが、の意。「限りある別れのみこそ悲しけれ誰も命を空に知らねば」（『河海抄』所引。出典不明）

八 「ながらへむ命ぞ知らぬ忘れじと思ふ心は身に添はりつつ」（『信明集』敦慶の親王の女―中務―の歌）

九 ただこの程度のお情けに縋って。源氏が時々やさしい言葉をかける位のことで満足しているのである。

一〇 正月十四日、宮中で行われる儀式。清涼殿東庭の帝の御前で、歌を歌い足拍子を踏んで舞を舞う。終ると禄の綿を賜り、宮中を退下、つづいて院、中宮、東宮などを廻って同様に踏歌を行い、暁に宮中に帰る。これに対して正月十六日に行われるものを女踏歌といい、毎年行われたが、男踏歌は隔年、または数年を隔てて行われた。「今年は」と、特にことわるゆえんである。『河海抄』は、円融天皇天元六年（九八三）以後、男踏歌は廃絶したと記している。（図録一参照）

六条の院の男踏歌

一一 朱雀院から六条の院（六条京極）まで、三・五キロほどか。（図録二参照）

一二 女君たち（花散里、玉鬘、明石の上など）も、ご見物にこちら（南の町）へおいでになるようにと。

一三 東西の対の屋や渡り廊下などに、お部屋をしつらえて。お供の女房たちなど、人数は多い。

一四 寝殿の南のお部屋。最も格式の高い部屋。

一五 紫の上もご一緒なので。

おこたらずなむ。ただ限りある道の別れのみこそうしろめたけれ。命ぞ知らぬ」など、なつかしくのたまふ。いづれをも、ほどほどにつけてあはれとおぼしたり。われはとおぼしあがりぬべき御身のほどなれど、さしもことことしくもてなしたまはず、所につけ、人のほどにつけつつ、あまねくなつかしくおはしませば、ただかばかりの御心にかかりてなむ、多くの人々年を経ける。

忘れていないのです　どの女君をも　そのお人柄に応じていとしく　やさしくおっしゃる　〔源氏は〕　〔源氏は〕我こそはと気位高く構えても当然な高貴のご身分であるが　場所柄に応じ　相手の女性の身分に応じて　そのように尊大に振舞うことはなさらず　誰にもみな心を開いてお付合いなさるので

今年は男踏歌あり。内裏より朱雀院に参りて、次にこの院に参る。道のほど遠くて、夜明けがたになりにけり。月の曇りなく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬに、殿上人など、ものの上手多かるころほひにて、笛の音もいとおもしろく吹き立てて、この御前はことに心づかひしたり。御方々物見にわたりたまふべく、かねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに、御局しつつおはす。西の対の姫君は、寝殿の南の御方にわたりたまひて、こなたの姫君、御対面ありけり。上も一所におはしませば、御几帳ばかり隔

六条の院　この道の　源氏　明石の姫君　玉鬘　えもいえず美しい上に　かたがたものみ　ひだりみぎ　たい　わたどの　つぼね　せうそこ　たい　かた　みきちやう　ひとところ　うへ　みたいめん

一 弘徽殿の大后。朱雀院に上皇と同居していること、三巻少女二六九頁に見える。

二 男踏歌の一行を饗応するのに、酒、湯漬などで簡単にもてなすこと。飯駅（大掛りな饗応）に対する。それぞれあらかじめ担当が決められている。

三 青い袍々菱えたのに、白い下襲を着た色合いは、何のはなやかな趣があろう。「なえばめる」は、糊気が落ちて柔らかくなったさま。「吏部王記」、踏歌人装、垂纓冠、麹塵闕腋袍、白下襲（下略）」（『花鳥余情』所引）

四 踏歌の人の冠の額に插す綿の造花。

五 このお邸の左中将の君（夕霧）と内大臣のご子息たち（長子柏木は右中将）。左右の歌頭を勤めているのであろう。歌頭は音頭をとる役。左右各三人。

六 催馬楽、呂「竹河」。「竹河の　橋の詰なるや　橋の詰なるや　花園に　はれ　花園に　我をば放てや少女伴へて」。男踏歌の時、これを歌い終ると、舞人たちは階のもとに二人ずつ舞い進んで、綿を被けられ、舞いながら戻る。

七 袖をひるがえす意とも、単に近寄る意ともいう。

八 見物の女君たち。

九 御簾の下からのぞいている仰々しさ、その色の取合せなども。いわゆる押し出しである。（図録一二参照）

一〇 春の錦が現れ出た霞の中かと見わたされる。「たち」に「裁ち」を掛け、「錦」の縁語。「見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」（『古今集』巻一

てて聞こえたまふ。

朱雀院の后の宮の御方などめぐりけるほどに、夜もやうやう明けゆけば、水駅にてことそがせたまふべきを、例あることよりほかに、さま異にこと加へて、いみじくもてはやさせたまふ。影すさまじき暁月夜に、雪はやうやう降りつむ、松風木高く吹きおろし、ものすさまじくもありぬべきほどに、青色のなえばめるに、白襲の色あひ、何の飾りかは見ゆる。插頭の綿は、にほひもなきものなれど、所からにやおもしろく、心ゆき、命延ぶるほどなり。殿の中将の君、内の大殿の君達、そこらにすぐれてめやすくはなやかなり。ほのぼのと明けゆくに、雪やや散りてそぞろ寒きに、竹河歌ひて、かよれる姿、なつかしき声々の、絵にも描きとどめがたからむこそくちをしけれ。御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたさ、ものの色あひなども、曙の空に、春の錦たち出でにける霞のうちかと見わたさる。あやしく心ゆく見物にぞありける。さ

ご挨拶申し上げなさる
簡略になさるはずのところを
特別趣向を添えて
大層派手に饗応をおさせになる
光も白々とした
次第に
興もさめそうな頃に
色艶もないものだが
心も満ち足り
お邸がお邸だからか風情があって
数多くの一行の中で取り分け立派で目立っている
〔女房たちの〕
感じのいい歌声が
不思議に心の満たされる

春上、花盛りに京を見やりて詠める　素性法師）

一一 冠の巾子（冠の頂上後方に突き出たもの）が、普通より高いもの。男踏歌の六位の舞人二人が冠る。さらに綿で顔を包むので、「世離れたるさま」といった。

一二 男踏歌の時、奉る祝いの言葉。豊年多産を祈って滑稽なことを言ったらしい。

一三 かえって、何ほどの興趣をひく曲節もないものなのだが。

一四 内大臣の次男。美声の持主。賢木の巻で、高砂を歌って、源氏にほめられた（一巻一八二頁参照）。

一五 不思議に、諸道にすぐれた人々が輩出する時勢なのだね。

一六 私自身の風流にかたよった愚かしさに似ないでほしいと思ったけれども。

一七 などとおっしゃって。源氏は、紫の上に向って話しているのである。

一八 男踏歌で、庭前で三度踏歌する時に奏せられる曲。「万春楽万春楽万春楽　我皇延祚億千齢万春楽　元正慶序年光麗万春楽　延暦休期帝化昌万春楽　百辟陪筵華幄内天人感呼　千般作楽紫宸場万春楽　我皇延祚億千齢万春楽　人霑湛露帰依徳万春楽　日暖春天仰載陽万春楽　願以佳辰掌楽事天人感呼　千々億歳奉明王万春楽」（『朝野群載』踏歌章曲）。これを字音で吟ずる。

一九 どうかして皆で合奏をしてみたいものだ。

源氏の夕霧評、踏歌の後宴の計画

いえるは高巾子の世離れたるさま（見馴れぬ様子）、寿詞（ことぶき）のみだりがはしき（みだらな文句や滑稽なことも）、をこめきたることもことことしくとりなしたる（しかつめらしく言い立てたのは）、なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子（ひやうし）も聞こえぬものを、例の綿かづきわたりてまかでぬ（おきまりの緑の綿を皆頂戴して退出した）。

夜明け果てぬれば、御方々（かたがた）帰りわたりたまひぬ。大臣（おとど）の君（源氏）、すこし大殿籠（おほとのごも）りて、日高く起きたまへり。（源氏）「中将（夕霧）の声は、弁（一四）の少将にを（ほと）さをさ劣らざめるは。あやしく有職（いうそく）ども生（お）ひ出づるころほひにこそあれ。いにしへの人は、まことにかしこきかたやすぐれたることも多かりけむ、情（なさけ）だちたる筋（風雅の道では生真面目な）は、このころの人にえしもまさらざりけむかし。中将（夕霧）などをば、すくすくしき（生真面目な）公人（おほやけびと）にしなしてむとなむ思ひおきてし。みづからのあざればみたるかたくなしさを、もて離れよと思ひしかど、なほ下（した）にはほのすきたる筋の心をこそとどむべかめれ。もてしづめ（とりすまして）、すくよかなるうはべばかりは、うるさかめり（生真面目な表向きだけでは）」など、（夕霧を）大層かわいいと、いとうつくしとおぼしたり。万春楽（ばんすらく）、御口ずさみにのたまひて、（源氏）ご婦人方がこちらにお集まりになったのをよい機会に「人々のこなたにつどひたまへるついでに、いかでものの音（ね）こころ

みてしがな。私の後宴すべし」とのたまひて、御琴どもの、うるはしき袋どもして秘めおかせたまへる、皆引き出でて、おしのごひて、ゆるべる緒ととのへさせたまひなどす。御方々、心づかひいたくしつつ、心懸想を尽くしたまふらむかし。

立派な袋
大事にさせておられたのを
にそれぞれ納めて
調律させたりなさる
緊張しておられることであろう

一　わが家の後宴をすることにしよう。「後宴」は、大きな宴会のあとに行われる小宴。ここは、宮中における踏歌の後宴に対していう。二月か三月に弓の競技が催される例がある。

二　「琴」は、琴、箏、琵琶など絃楽器の総称。

胡蝶

前巻に引き続く同じ年の三月二十日過ぎ、六条の院の紫の上の御殿では、春の庭が繚乱の景を繰りひろげていた。源氏は龍頭鷁首の船を新造し、船楽を催した。

折から、中宮は六条の院西南の町に里下がり中であったので、源氏は中宮方の女房を船に乗せ、池伝いに春の庭に招いた。人々は仙境に来た思いで、口々に礼讃の歌を詠む。

翌日、中宮の季の御読経に、昨日六条の院に集まった宮廷の貴紳はそのまま中宮御所に参上する。紫の上も供花を鳥蝶の舞人に献上させた。紫の上の歌は夕霧が使者になって伝える。歌意は、蝶の舞う春の花園を誇るもので、中宮の返歌は、昨日の女房たちの報告に心動かされたのであろう、春の庭に思いを寄せる気持が述べてあった。去年の秋、中宮に挑まれた春秋の論は、かくして春の勝利に終った。巻名「胡蝶」は、この時の贈答の歌の言葉による。

一方、六条の院に迎えられて半年になろうとする玉鬘は次第に洗練されてゆき、この院の行事に集う貴公子の心を惹きつけている。初夏の頃には、彼女の許に集まる恋文も多くなった。源氏はたびたび彼女の部屋に来ては、恋文の扱いや返書について教訓し、兵部卿の宮や右大将髭黒について、婿としての人物評を加えたりするが、次第に玉鬘に対するただならぬ思いを深めてゆく。ある雨上がりの宵、源氏はついに意中を打ち明け、玉鬘の身近に添い臥した。思いがけぬ出来事に、頼る人とてない玉鬘は困惑し、苦悩と不安の日を送るのであった。

一　紫の上の御殿のお庭先。

二　ほかの町の方々（花散里や明石の上）には、南の町だけまだ盛りが過ぎないのかしらと。頃はすでに晩春である。

三　紫の上方の若い女房たちが、遠くからでよく見られないのを物足りなく思っている様子なので。

春の御殿の船楽

四　中国風の船をお造らせになっていたのを。後出の龍頭鷁首の船。船上で奏楽する。

五　急いで装備をおさせになって。艤装を急がせるのである。「屋形の覆ひ、側の幔などなり」（『花鳥余情』）

六　治部省に属し、歌舞、奏楽のことをつかさどる役所。主として儀式の際の奏楽を受け持った。

七　秋好む中宮。六条の院の西南の町を里邸とする。（三巻少女二七三頁参照）

八　去年の秋、中宮が「心から春まつ園はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ」というお歌を贈って挑まれたそのご返歌も、ちょうどこの季節にするのがよいと、紫の上はお考えになり。（少女二七七～八頁参照）

中宮の女房と交歓

九　中宮方の若い女房たちで、ものごとに興じそうな者を船にお乗せになって。後文の「……漕ぎまひて」に続く。中宮にご報告するように、女房たちに見せるのである。

弥生の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやと、めづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる船造らせたまひける、急ぎさうぞかせたまひて、おろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、船の楽せらる。親王たち上達部など、あまた参りたまへり。

三月二十日過ぎの頃

今を盛りと照りはえる

築山

〔池の〕

緑を増す

〔池に〕

中宮、このころ里におはします。かの「春待つ園は」とはげましきこえたまへりし御返りもこのころやとおぼし、大臣の君も、いかでこの花のをり、御覧ぜさせむとおぼしのたまへど、ついでなくて軽らかにはひわたり、花をももてあそびたまふべきならねば、若き

源氏

〔中宮に〕

〔中宮は〕わけもなしに

花をご賞翫なさることもおできにならないご身分だから

気軽においでになり

一 中宮御所（西南の町）の南庭の池は、こちら（南の町）に通じるようにお造らせになったのを、小さな築山を隔ての関といったふうにしてあるけれども、その山の岬を漕ぎ廻って来て。

二 南の町の東の釣殿。「釣殿」は、納涼遊宴のために、池に臨んで建てられた殿舎。ここは東の対の屋に続く廊の南端にあるのであろう。（三巻図録九参照）

三 龍頭の船と鷁首の船。鷁は想像上の水鳥で、風によく耐えるので水難を防ぐとされる。（図録八参照）

四 船を操る、棹をさす童子（少年）は、皆、髪をみずらに結って、中国風な身装をさせて。「みづら」は、髪を中央から左右に分けて、耳のあたりでわがね垂らしたもの（図録八参照）。

五 中国風の船遊びなど見たことのない女房たち。中宮方の女房である。

六 あちらこちらと一面に霞たなびく木々の梢は、錦をはりめぐらしたようであるのに。大和絵の霞の描法を思わせる形容。

七 この巻冒頭に、「ほかの里には、まだ古りぬにやと、めづらしう見え聞こゆ」とあったのに照応する。

八 「高堂虚しくして且迴なり　坐臥して南山を見る　廊を繞れる紫藤の架　砌を夾める紅薬の欄」（『白氏文集』巻二諷諭、秦中吟「傷宅」の一節）による。

九 いわゆる「花銜鳥」の文様にあるような光景。（図録一一参照）

女房たちの、ものめでしぬべきを船に乗せたまうて、南の池の、こなたにとほし通はしなさせたまへるを、小さき山を隔ての関に見せたれど、その山のさきより漕ぎまひて、東の釣殿に、こなたの若き人々集めさせたまふ。龍頭鷁首を、唐のよそひに、ことことしうしつらひて、楫取の棹さす童べ、皆みづら結ひて、唐土だたせて、さる大きなる池のなかにさし出でたれば、まことの知らぬ国に来たらむここちして、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前のかたははるばると見やられて、色をましたる柳、枝を垂れたる、花もえもいはぬにほひを散らしたり。ほかには盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほゑみ、廊をめぐれる藤の色も、こまやかに開けゆきにけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れ

紫の上方
女房たち
中国風に装飾し
派手に仕立てて
全く見知らぬ外国に来たような気がして
〔船を〕
すばらしくおもしろいと
何でもない立て石の具合も
紫の上のお前のお庭が広々と望まれて
緑の色を
枝を垂れており
ました柳が
色濃く
咲きこぼれて
いつも雌雄一つがい

一〇 鴛鴦が、さながら波の作る綾目に、模様を織り出したように浮んでいるのなど。「綾」は、斜めの線条を織り出した絹織物。（図録一一参照）

一一 いわゆる爛柯の故事。遊びにふけって時のたつのを忘れることの喩え。（三巻松風一三〇頁注六参照）

一二 風が吹くと花と散る波も美しく彩られて、これがあの有名な山吹の崎なのでしょうか。「山吹の崎」は、近江、石山寺付近にあった歌枕。水辺の山吹を詠んだ。

一三 春の御殿のお池は井手の川瀬に続いているのでしょうか、岸の山吹が水底にまで美しく咲いています。「井手」は、山城の国の山吹の名所。木津川の右岸。

一四 わざわざ蓬莱山を尋ねても行きますまい、この船のうちに不老の名を止めましょうから。「亀の上の山」は、蓬莱山。巨大な亀の上に載るという（『列子』湯問篇）。秦の始皇帝が童男童女を船に乗せて、蓬莱山に不老不死の仙薬を求めさせ、皆船中に老いたことを踏まえる（『白氏文集』巻三新楽府「海漫々」。付録三四〇頁参照）。

一五 春の日のうららとさす中を棹さしてゆく船は、その棹の雫も花が散るようです。「さす」は、「日がさす」と「棹さす」の意を掛ける。

一六 『河海抄』は、『続斉諧記』の、劉晟、阮肇が天台山に入って道を失い、仙女に会ったという話を引き、『湖月抄』は、陶淵明の『桃花源記』を引く。

一七 若い女房たちが夢中になっても無理もない池の景観だ。「移す」に「映す」を掛け、「水の面」の縁語。

ず遊びつつ、細き枝どもを食ひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に紋をまじへたるなど、ものの絵やうにも（衣裳などの図案として）描き取らまほしき（写し取っておきたいほどで）、まことに斧の柄も朽いつべう思ひつつ、日を暮らす。

（中宮方女房）一二
風吹けば波の花さへ色見えて
　こや名に立てる山吹の崎

（同）一三
春の池や井手の川瀬にかよふらむ
　岸の山吹そこもにほへり

（同）一四
亀の上の山もたづねじ船のうちに
　老いせぬ名をばここに残さむ

（同）一五
春の日のうららにさしてゆく船は
　棹のしづくも花ぞ散りける

などやうの、（当座の歌の数々を）はかなごとどもを、（思い思いに詠み合っては）心々に言ひかはしつつ、行く方も、帰らむ里も忘れぬべう、若き人々の心をうつすに、ことわりなる水の面になむ。

暮れかかるほどに、皇麞といふ楽いとおもしろく聞こゆるに、〔船中の女房は〕心にもあらず、釣殿にさし寄せられておりぬ。ここのしつらひ、いと簡素なたたずまいでことそぎたるさまに、風情があるがなまめかしきに、御方々の若き人どもの、われ劣らじと尽くしたる装束、容貌、花をこきまぜたる錦に劣らず見えわたる。世に目馴れずめづらかなる楽どもつかうまつる。舞人など、〔源氏が〕特別に心ことに選ばせたまひて、人の御心ゆくべき手の限りを尽くさせたまふ。

夜に入りぬれば、いと飽かぬここちして、御前の庭に篝火ともして、御階のもとの苔の上に、楽人召して、上達部、親王たちも、皆おのおの弾きもの、吹きものとりどりにしたまふ。物の師ども、ことにすぐれたる限り、双調吹きて、上に待ちとる御琴どもの調べ、いとはなやかにかき立てて、安名尊遊びたまふほど、生けるかひありと、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり隙なき馬車の立処にまじりて、笑みさかえ聞きけり。空の色、ものの音も、春の調

一 舞楽の曲名。唐楽。平調。舞は、甲をつけ白い杖を持って舞う。船楽のほかに、本格的な楽屋（楽人の座）も設けられていたと思われる。

二 前にあった「東の釣殿」。紫の上方の若い女房たちが待ち受けている。

三 紫の上方、秋好む中宮方の若女房たちが。

四 「見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」（『古今集』巻一春上、花盛りに京を見やりて詠める　素性法師）による。

五 前の「雅楽寮の人」。皇麞その他を舞ったのであろう。

六 庭上を照らす燈火。鉄製の籠を固定し、中に松の割木を盛って燃やす。（図録七参照）

七 御殿から庭上に昇降する階段。（図録一三参照）

八 雅楽寮の人。楽屋から近くに召し寄せた。

九 絃楽器。箏の琴、琵琶など。

一〇 管楽器。横笛、笙、篳篥など。

一一 音楽の師。雅楽寮の笛師らである。

一二 雅楽の六調子の一つ。春の調べといわれる。

一三 御殿の上で、受けて合せる御琴の調べが。上達部、親王たちが奏するものである。

一四 催馬楽、呂「安名尊」。「あな尊　今日の尊さ　やいにしへも　はれ　いにしへも　かくやありけむ　や　今日の尊さ　あはれ　そこよしや　今日の尊さ」

一五 何の分別もない身分の低い男たちも。牛飼童や供人らであろう。

一六 呂（中国の正楽の音階）から、律（俗楽の音階をもとにしたもの）に移ること。
一七 舞楽の曲名。黄鐘調（律）の曲。
一八 源氏の弟宮。（三巻少女二六八頁参照）
一九 催馬楽、律「青柳」。「青柳を　片糸によりて　やおけや　鶯の　おけや　鶯の　縫ふといふ笠は　おけや　梅の花笠や」
二〇 源氏。

人々、玉鬘に心を寄せる

二一 この紫の上の御殿は、いつも春の光に満ちているような明るくはなやかなお邸であるが。
二二 玉鬘のこと。（初音一五～一六頁参照）
二三 源氏の予想なさった通り。玉鬘を大切にかしずいて、貴公子たちの物思いの種にしようという源氏の思惑については、三巻玉鬘三一四頁、三二二頁参照。
二四 我こそは、相手としてふさわしいと自負していらっしゃるご身分の方は。
二五 とても言い出せないで、ひそかな思いに焦がれそうな若者たちもあるらしい。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛け、「燃ゆ」と縁語。「さざれ石の中の思ひはありながらうち出づることのかたくもあるかな」（『奥入』所引。出典不明）
二六 内大臣の長子。後の柏木。玉鬘とは腹違いの姉弟。

（まことに格段にすぐれているその違いを）べ、響きは、いとことにまさりけるけぢめを、人々おぼし分くらむかし。夜もすがら遊び（合奏して）明かしたまふ。返り声に喜春楽（続いて奏されて）立ちそひて、兵部卿の宮、青柳（繰り返し）折りかへしおもしろく歌ひたまふ。主人の大臣も言加（一緒にお歌いになる）へたまふ。

夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥のさへづりを、中宮はもの隔てて、ねたう（やましく）聞こしめしけり。いつも春の光を籠めたまへる大殿なれど、心（心を寄せるあての姫君が一人もいられないのを）をつくるよすがのまたなきを、飽かぬことにおぼす（もの足りないとお思いになる殿方もあったのだが）人々もありけるに、西の対の姫君、ともなき（何一つ欠点のないご器量のことや）御ありさま、大臣（源氏）の君も、わざとおぼしあがめきこえたまふ（て大切にお世話しておられるご様子などが）御けしきなど、皆世に聞こえ出でて、おぼしもしるく、心なびかしたまふ（思いを寄せられる方が多いらしい）人多かるべし。わが身さばかりと思ひあがりたまふ際の人こそ、たよりにつけつつけしきばみ、言出で（つてを求めては）聞こえたまふもありけれ、えしもうち出でぬ中の思ひに燃えぬべき若君達などもあるべし。そのうちに、ことの心を知らで、内の大殿の中将などは、好きぬべかめり。

（特に気をつけすっかり世間に知れわたって意中をほのめかし）

（その中で事の真相を知らないで）

（思いを寄せているようだ）

兵部卿の宮はた、年ごろおはしける北の方も亡せたまひて、この三年ばかり、独住みにてわびたまへば、うけばりて今はけしきばみたまふ。今朝も、いといたうそら乱れして、藤の花をかざして、なよびさうどきたまへる御さま、いとをかし。大臣も、おぼししさまかなふと、下にはおぼせど、せめて知らず顔をつくりたまふ。御土器のついでに、いみじうもてなやみたまうて、「思ふ心はべらずは、まかり逃げはべりなまし。いと堪へがたしや」とすまひたまふ。

（兵部卿宮）四

紫のゆゑに心をしめたれば

淵に身投げむ名やは惜しけき

とて、大臣の君に、同じかざしを参りたまふ。いといたうほほゑみて、

（源氏）六

淵に身を投げつべしやとこの春は

花のあたりを立ち去らで見よ

と切にとどめたまへば、え立ちあかれたまはで、今朝の御遊び、ま

一 長年連れ添っていらっしゃった北の方。故太政大臣（もとの右大臣、弘徽殿大后の父）の姫君。（二巻花宴五四頁参照）

二 （源氏から）お盃を頂く折に。「土器」は、素焼きのさかずき。

三 内心思うところがございませんでしたら、退散いたしておりますでしょう。「まかり逃ぐ」は、「逃ぐ」の謙譲表現。

四 あなたにゆかりある方に深く心を奪われていますので、恋の淵に身を投げようとも不名誉とは思いません。「紫のゆゑ」は、血縁の繋がり。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）による。玉鬘を源氏の実の娘と思うところから、こういう。「淵」に「藤」を掛け、紫の縁語。挿頭の藤の花を詠み込む。

五 同じ藤の花を、盃に添えてさし上げなさる。兄弟として源氏の好意に期待するという気持であろう。『河海抄』は、「わが宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ」（『後撰集』巻十二恋四、伊勢。『古今六帖』四、かざし）を引く。

六 淵に身を投げてもよいかどうか、今年の春は、花の傍らを立ち去らずにご覧なさい。

兵部卿の宮の求婚

七 季の御読経のこと。春秋二季（本来は二月と八月）に紫宸殿に百僧を請じて、四日間『大般若経』を講ずる。東宮、中宮、院、摂関家も行う。

中宮の季の御読経　紫の上、春秋を争い勝つ

八 （六条の院の中で）休息所を拝借して。

九 束帯（袍、表の袴を着し石帯をする）のこと。昼の装束の意で、直衣着用を宿直姿というのに対するという（『源語秘訣』）。

一〇 正午頃。午前十一時から午後一時までの間。

一一 紫の上からの供養のお志として。

一二 それぞれ鳥と蝶との衣装をつけた童子を八人。四人ずつ、鳥の楽（迦陵頻）と胡蝶の舞人。迦陵頻は左の楽、天竺の曲という。胡蝶は右の楽、延喜六年の新作という。いずれも童舞。両者番い舞として、法会の供花に用いられた（図録八参照）。

一三 鳥の童子には。以下、花瓶の色に花の色をそろえる。

一四 南の町の庭前の築山のそばから漕ぎ出して来て、中宮御所の庭前にあらわれる頃。昨日、中宮方の女房が船で通った隔ての築山の陰を船で行くのである。

一五 「平張」は、幔幕を張った仮屋。棟を渡さず、天井が平らである。地下の楽人の座。ここは、昨日の遊宴に用いたもの。

一六 中宮の御座所（寝殿）に通じる廊。中門の廊である。

していとおもしろし。

今日は、中宮の御読経のはじめなりけり。（第一日目）〔人々は〕そのままご退出なさらず やがてまかでたまはで、休み所とりつつ、日の御よそひにかへたまふ人々も多かり。障りあるは、（ご用の）まかでなどもしたまふ。午の時ばかりに、（西南の町）皆あなたに参りたまふ。大臣の君（源氏）をはじめたてまつりて、（皆ずらりとご着席なさる）皆着きわたりたまふ。殿上人なども、残るなく参る。多くは、（大方は）大臣の御勢ひにもてなされたまひて、（ご権勢に後押しされなさったことで）やむごとなく、（押しも押されもせぬ）いつくしき（荘厳なご法会の有様である）御ありさまなり。

春の上の御心ざしに、仏に花たてまつらせたまふ。鳥蝶に装束き分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、（特に美しいのをお選ばせになって）銀の花瓶に桜をさし、蝶は、金の瓶に山吹を、（同じ花でも）同じき花の房いかめしう、（花房）世になきにほひを尽くさせたまへり。南の御前の山際より（またとなく美しいものばかりを用意させなさった）漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこしうち散りまがふ。いとうららかに晴れて、霞の間より立ち出でたるは、いと（〔鳥蝶の童が〕）あはれになまめきて見ゆ。わざと平張なども移されず、御前にわた

一 楽人の用いる椅子。（図録一一参照）
二 鳥、蝶の童子たちは寝殿の南階のもとに寄って。
三 法会の時、僧に香を配ること。また、その役の人をもいう。殿上人が勤める。
四 仏に供える水。
五 紫の上からのお手紙。
六 花園に舞う胡蝶をも、下草に隠れて秋を待つ松虫は、何とも思わないのでしょうか。「まつ」に「待つ」と「松虫」の「松」を掛ける。中宮の「心から春まつ園はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ」（三巻少女二七七頁参照）という歌に応じたもの。
七 ほんとに、春の美しさは、中宮様もとてもおけなしになれそうではございませんでしたと、春の御殿の花には兜を脱いで、口々にお話し申し上げる。
八 舞楽曲を構成する三部（序、破、急）の終りの章。細かく早いリズム。
九 胡蝶の舞はもっと心もとなくひらひらと舞って。
一〇 山吹の植込みの囲いの柵。（図録七参照）
一一 中宮職（中宮に関する事務をとる役所）の次官。従五位下相当。
一二 舞を賞美し、労をねぎらって賜る物。
一三 桜襲（表白、裏赤）の細長。「細長」は、童女、貴婦人の装束。
一四 表薄朽葉、裏黄。これも細長である。
一五 白い袿一襲。
一六 巻絹。腰に差して退出するのでいう。

れる廊を、楽屋のさまにして、仮に胡床ども（お運ばせになった）を召したり。童べども、御階のもとに寄りて、花どもたてまつる。行香の人々（〔供花を〕）取りつぎて、閼伽に加へさせたまふ。御消息、殿の中将の君（夕霧）して聞こえたまへり。

（紫上）花園の胡蝶をさへや下草に

秋まつむしはうとく見るらむ

中宮宮、かの紅葉の御返りなりけりと、ほほゑみて御覧ず。昨日の女房たちも、げに春の色は、えおとさせたまふまじかりけりと、花に折れつつ聞こえあへり。鶯のうららかなる音に、鳥の楽はなやかに聞（聞え）きわたされて、池の水鳥もそこはかとなくさへづりわたるに、急になり果つるほど、飽かず（名残惜しく）おもしろし。蝶は、ましてはかなきさまに飛び立ちて、山吹の籬のもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひ入る。

宮の亮をはじめて、さるべき（然るべき）上人ども、（殿上人が）禄取り続きて、童べに賜ぶ。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしも（まるで前々から用意してあったようである）取りあへたるやうなり。物の師どもは、白き一襲、腰差など、（楽人たちは身分に応じて）つぎつぎに賜

一七 藤襲。表薄紫、裏青。
一八 裳、唐衣、表着、袿など一揃えをいう。これを賜る時は、肩にかけて退出するので、「かづく」という。
一九 昨日は（そちらへお伺いしたくて）声をあげて泣きたいほどでした。「我が園の梅の上つ枝に鶯の音になきぬべき恋もするかな」（『古今集』巻十一恋一、題しらず、読人しらず）による。
二〇 胡蝶の舞人が帰って行くのについて行きたい思いでした、そちらでわざと幾重にもお隔てになりませんでしたら。「胡蝶」に「こてふ」（来いといふ）を掛け、「来い」とおっしゃって下されば、の意を含める。「八重山吹」に「八重山」を響かせる。前に「小さき山を隔ての関に見せたれど」（三三頁）とあった。
二一 お二方とも立派に年功を積まれたお方だが、こうした春秋の争いといった、先例の多いはなやかなお歌のやりとりは荷が勝ちすぎたのでしょうか、思ったほどでもない詠みぶりでいらっしゃるようです。草子地。作中の歌についての作者の弁解。
二二 昨日の、春の御殿の遊宴を見物の女房たちで。
二三 でも、そんなことは、こまごましたことなので、話すと大変です。省略をことわる草子地。
二四 玉鬘。
二五 初音二五～二六頁参照。
二六 人柄から受ける感じが、いかにもしっかりしていて。「労」は、年功のこと。

人々、玉鬘にいよいよ執心

夕霧ふ。中将の君には、一七藤の細長添へて、一八女の装束かづけたまふ。御返り、「（中宮）一九「昨日は音に泣きぬべくこそは、

二〇胡蝶にもさそはれなまし心ありて
八重山吹を隔てざりせば」

とぞありける。二一すぐれたる御労どもに、かやうのことは堪へぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ。まことや、二二かの見物の女房たち、宮のには、皆けしきある贈り物どもせさせたまうけり。二三さやうのこと、くはしければむつかし。明け暮れにつけても、かやうのはかなき御遊びしげく、心をやりて過ぐしたまへば、お仕えする女房たちもさぶらふ人も、自然と何の心配ごともないような気持がしておのづからもの思ひなきここちしてなむ、紙のやりとりをなさるこなたかなたにも聞こえかはしたまふ。

二四西の対の御方は、二五かの踏歌のをりの御対面ののちは、こなたにも聞こえかはしたまふ。深いお心くばりという点では至らぬとかそのほか難もあろうが深き御心もちゐや、浅くもいかにもあらむ、二六けしきいと労あり、親しみやすい性格らしくなつかしき心ばへと見えて、人の心隔つべくも

中宮方のには「紫上から」皆に趣向を凝らした贈り物をいろいろと贈らせなさった
こんな気の張らぬお遊びがたびたびあってどなたもご満足げにお過しなので
お互いにお手紙の上方にも
人が気のおける

一　どちらの女君におかれても。紫の上や花散里である。

二　実の父君の内大臣にもお知らせしようかなどと。実の父に知らせた上で、わがものにも、という気持。

三　すこし側近く、（廂の）御簾のもとなどにも寄って。夕霧は実の姉弟と教えられているので、直接応対したりもする。

四　夕霧は真面目一方で、（玉鬘が他人だなどとは）思いもかけない。

五　内大臣のご子息たち。玉鬘の実の兄弟、柏木たち。

六　何かと意中をほのめかし、切ない思いにうろうろするのを。

七　そんなふうに、ちょっとでも（源氏に）申し上げたりはなさらず。

ようなところもおありでない人柄なので

ものしたまはぬ人ざまなれば、いづかたにも皆心寄せきこえたまへり。聞こえたまふ人、いとあまたものしたまふ。されど、大臣、おぼろけにおぼし定むべくもあらず、わが御心にも、すくよかに親がり果つまじき御心や添ふらむ、父大臣にも知らせやしてましなど、おぼし寄るをりをりもあり。殿の中将は、すこし気近く、御簾のもとなどにも寄りて、御いらへみづからなどするも、女はつつましうおぼせど、さるべきほどと人々も知りきこえたれば、中将はすくすくしくて思ひも寄らず。

〔玉鬘に〕好意をお寄せ申していらっしゃる　言い寄るお方も　大層大勢いらっしゃる　〔玉鬘の夫を〕お決めになれそうにもなく　物堅く父親代りで通せそうにもないお気持もおありなのか　〔夕霧への〕お返事を直接なさったりするのも　女君は恥ずかしくお思いになるけれども　それが当然なお間柄と女房たちも承知しているふうなので

内の大殿の君たちは、この君に引かれて、よろづにけしきばみわびありくを、〔玉鬘は〕色めいた気持からではなくそのかたのあはれにはあらで、下に心苦しう、まことの親にさも知られたてまつりにしがなと、人知れぬ心にかけたまへれど、さやうにも漏らしきこえたまはず、ひとへにうちとけ頼みきこえたまふ心むけなど、らうたげに若やかなり。似るとはなけれど、なほ母君のけはひにいとよくおぼえて、これはかどめいたるところ

夕霧　ついて来て　内心ではつらく　これこれだと知って頂きたいものだと　人知れず思い続けていらっしゃるが　〔源氏に〕心を許してお頼り申し上げなさる心づかいなど　〔顔立ちが〕かわいらしくういういしい　玉鬘　母君になかった才気のはたらき　似ていて　夕顔

源氏、人々の恋文を見る

八 更衣で、はなやかに衣裳も改まった頃。「更衣」は、陰暦四月一日と十月一日に、季節の衣服に改めること。ここは四月、冬服を夏服に替える。

九 （源氏は）ご用もなくていらっしゃるので。太政大臣は、特別のことがなければ出仕しなくてもよい。

一〇 西の対の御方。玉鬘。

一一 しかるべき方の恋文には。すぐあとに見える兵部卿の宮のような人からの恋文。

兵部卿の宮の文

一二 言い寄ってまだ間もないのに、焦れったそうな怨み言を綿々とお書きになったお手紙を、（源氏は）お目にとめられて。

一三 あの兵部卿の宮以外、ほかに歌のやりとりをするにふさわしい人は、あろうとも思われません。「言の葉」は、ここは恋文。歌のやりとりを主とする。

ぞ添ひたる。（くところがある）

更衣の今めかしう改まれるころほひ、空のけしきなどさへ、あやしうそこはかとなくをかしきを、（風情がある上に）のどやかにおはしませば、（あれこれ）よろづの御遊びにて過ぐしたまふに、対の御方に、人々の御文しげくなり（恋文がふえてゆくのを）ゆくを、思ひしこととをかしうおぼいて、（予想通りだと）（源氏は）ともすればわたりたまひつつ御覧じ、（恋文を）さるべきには御返りそそのかしきこえたまひなどするを、（おすすめ申し上げたりなさるのを）うちとけず苦しいことにおぼいたり。

兵部卿の宮の、ほどなくいられがましきわびごとどもを書き集めたまへる御文を御覧じつけて、（玉鬘は）気が張ってつらいことだと）こまやかに笑ひたまふ。（にっこりと）「はやうより隔つることなう、（分け隔てなく）あまたの親王たちの御なかに、（兄弟の）この君をなむ、（兵部卿の宮）かたみに取り分きて思ひしに、ただかやうの筋のことなむ、（恋の道のことにかけては）いみじう隔て思うたまひてやみにしを、（お互いに特別仲よくしてきましたのに）世の末に、（この年になって）かく好きたまへる心ばへを見るが、（色めいたご様子を見るとは）をかしうもあはれにもおぼゆるかな。なほ御返りなど聞こえたまへ。（おもしろくもあり感にたえぬ思いもすることです）すこしもゆゑあらむ女の、（多少とものの分る女なら）かの親王よりほかに、ま

一 髭黒の大将のこと。右近衛大将。従三位相当。承香殿の女御（朱雀院の女御。東宮の母）の兄。承香殿の女御は、三巻澪標一四頁参照。

右大臣
- 髭黒右大将
- 承香殿女御
  - 東宮
  - 朱雀院

二 恋の山には「孔子の倒れ」（孔子ほどの賢人も失敗する）

髭黒の右大将らの文

という諺をそっくり実演しそうな様子で、手紙に怨み言を並べているのも。「孔子の仆れ」という当時の諺については『世俗諺文』、『今昔物語集』巻十第十五話参照。「倒れ」の語に引掛けて「恋の山」と洒落れた。

三 中国渡来の薄藍色の紙。下の「いと細く小さく結びたる」は、恋文の体裁である結び文のさま。

四 こんなに固く結ばれているのか。「結ぼほれたる」には、恋に思い屈しているという含意がある。

五 私がこんなにお慕いしているとも、あなたはご存じないでしょう、湧きかえって岩間に溢れる水には色がありませんから—湧きかえる熱い思いも外からは分りませんから。後の四五頁で内大臣の長子（柏木）の手紙と分る。

六 玉鬘と長谷寺で邂逅し、源氏に引き合せた侍女。夕顔の乳母子。玉鬘の世話役となっている趣。

七 このように（姫君に）恋文をお送りしてくる人については、相手を吟味して、（女房に）お返

源氏、返書について教訓する

た言の葉をかはすべき人こそ世におぼえね。いとけしきある人の御（とてもおもしろいところのあるお）さまぞや」と、若き人はめでたまひぬべく聞こえ知らせたまへど、（若い女性なら夢中になりそうなことを言ってお聞かせになるが）つつましくのみおぼいたり。（人柄ですよ）（実直で）（〔玉鬘は〕ただもう恥ずかしくお思いである）

右大将の、いとまめやかに、（重々しい風采の方が）ことことしきさましたる人の、恋の山には孔子のたふれまねびつべきけしきに愁へたるも、（これはこれでまた）さるかたに興があると）をかしと、（〔源氏が〕）皆見くらべたまふなかに、唐の縹の紙の、（大層感じがよく）いとなつかしう、しみ深う匂へるを、（〔薫香が〕）いと細く小さく結びたるあり。「これは（源氏）いうわけでかなれば、かく結ぼほれたるにか」とて、引きあけたまへり。手（筆跡）とをかしうて、（上手で）

（男）五 思ふとも君は知らじなわきかへり
岩漏る水に色し見えねば（しゃれている）

（現代的で）書きざま今めかしうそぼれたり。「これはいかなるぞ」と問ひきこ（源氏）（これはどういう手紙なのか）えたまへど、（〔玉鬘は〕）はかばかしうも聞こえたまはず。（はきはきともご返事なさらない）

六 右近を召し出でて、「かやうにおとづれきこえむ人をば、人選り（源氏）七

事させなさい。以下、恋文の扱いについて、お付きの女房の心得を説く。

八 不都合なことをしでかしたりするのは、男の方が悪いというわけのものでもない。

九 何と風情を知らぬ、冷たいことだなと、返事をもらえなかったその当座は。「おぼえけれ」に掛る。

一〇 情趣を解さぬ女ではないかとか、あるいは、身の程をわきまえぬような低い身分の女なら、生意気ななどと思ったものだが。「めざまし」は、身の程知らずで無礼なの意。「けやけし」は、異常だの意。

一一 特別執心というのでなくて、花や蝶に浮かれて寄こしたような恋文に対しては。

一二 男をくやしがらせるように返事をしないでおくのは。「心ねたし」は、しゃくに思う意。

一三 また、返事をしないからといって、男の方が忘れてしまうのは、何の構うことがあろう。

一四 早速返事をするものと心得ているのも。

一五 そんなことはせずともよい、あとで世間の非難の的になりかねないことなのです。

一六 兵部卿の宮や右大将は、見境もなくいい加減なことをお口にされるような方でもないし。

一七 あなたとしてはふさわしくないことです。玉鬘の身分、年齢に似つかわしくない、の意。

一八 兵部卿の宮や右大将より下の身分の者には。

一九 忠勤のほども考えてやりなさい。「労」は、年功の意。

して、いらへなどはせさせよ。（浮気っぽく遊び半分な気持の）すきずきしうあざれがましき今やう（近頃の若い女が）の人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。（私の経験を振り返ってみても）われにて思ひしにも、あな情な、うらめしうもと、そのをりにこそ、無心なるにや、もしはめざましかるべき際は、けやけうなどもおぼえけれ、わざと深からで、花蝶につけたる便りごとは、心ねたうもてないたる、なかなか心立つやうにもあり、また、さて忘れぬるは、何の咎かはあらむ。（かえって男が熱を上げてくるものでもあり）（何かの折にふと思いついた程度のいい加減な恋文に）ものの便りばかりのなほざりごとに、口疾う心得たるも、さらでありぬべかりける、後の難とありぬべきわざなり。（何事によらず女が慎みを忘れ）すべて女のものづつみせず、心のままに、（折々の情趣も分ったような顔をして）ものののあはれも知り顔つくり、をかしきことをも見知らむなむ、（ものの風情も十分に解するといったふうなのは）（結局よからぬことに終るが落ちなのです）その積りあぢきなかるべきを、宮、大将は、おほなおほなほざりごとをうち出でたまふべきにもあらず、またあまりもののほど知らぬやうならむも、御ありさまに違へり。（ものの程合いをわきまえないようであるのも）その際より下は、心ざしのおもむきに従ひて、あはれをも分きたまへ、労をも数へたまへ」など聞こえたまへば、君は（相手の熱心さの度合に応じて）（愛情の程度も判断なさい）（玉鬘）

一　撫子襲（表紅梅、裏青）の細長。「細長」は、貴婦人の表着。袵がなく、身頃の裾先が分れている。

二　卯の花襲（表白、裏萌黄）の小袿。「このころの花」は、今の季節、すなわち四月に咲く卯の花。初夏に白い花が群がり咲く。「小袿」は、婦人の略礼装。細長の上に重ねている。

三　（撫子襲と卯の花襲の）色合いが、親しみやすく現代的で。

四　物腰なども、何といっても、田舎くさいところが残っていらした間は、平凡で、ただのんびりとした感じではいらっしゃったが。

五　赤の他人（人の妻）にしてしまうのは、とても残念なことだろうと源氏はお思いになる。「くちをしかべう」は「くちをしかんべう」の撥音無表記の形。

六　親と申し上げるには、（源氏は）不似合いなほど、お若くお見えになるようだ。以下、右近の思い。源氏三十六歳、玉鬘二十二歳。

七　前からご承知で、ご覧にもなりました三つ四つは。兵部卿の宮や髭黒右大将の手紙など。

八　今までと打って変って（お取次ぎしないで）、間の悪い思いをおさせするのもどうかと存じまして、お手紙だけはお受け取りしているようでございますが。

九　ところで、このいかにも初心らしく固く結ばれてちそむきておはする（横顔がまことに美しいらを向いていらっしゃるが）、側目いとをかしげなり。撫子の細長に、このころの花の色なる御小袿、あはひ気近う今めきて、もてなしなども、さはいへど、田舎びたまへりし名残こそ、ただありに、おほどかなるかたにのみは見えたまひけれ、人のありさまを見知りたまふままに、いとさまよう（六条の院の御方々の様子を見てお分りになるにつれて）、なよびかに（大層着こなしもよくたおやかで）、化粧なども（気をつけてなさるので）、心してもてつけたまへれば、いとど飽かぬところなく（不足なところもなく）、はなやかにうつくしげなり（かわいらしげである）。他人と見なさむは、いとくちをしかべうおぼさる。

右近も、うちゑみつつ見たてまつりて（にこにこしながら〔お二人を〕）、親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり（ご夫婦としていらしたほうが）、さし並びたまへらむはしも（お似合いで結構なことだと）、あはひめでたしかしと（右近）、思ひゐたり。「さらに人の御消息などは聞こえ伝ふることはべらず（決して殿方のことはございません）。さきざきも知らしめし御覧じたる三つ四つは、引きかへし、はしたなめきこえむもいかがとて、御文ばかり取り入れなどしはべるめれど（〔玉鬘の〕特別にお殿様がおすすめ申される時だけでございます）、御返りは、さらに聞こえさせたまふをりばかりなむ。それをだに、苦しいことにおぼいたる（〔玉鬘は〕気の進まぬことだとお思いです）」と聞こゆ。

る手紙は誰のか。前出四二頁の手紙のこと。

柏木の文

一〇 あれは、文使いの者が、しつこく置いて帰りましたものです。いくら断っても聞かずに無理に置いていったと弁解する。

一一 内大臣の長子、柏木。前出三五頁。

一二 こちらにご奉公しておりますみるこを。「みるこ」は、玉鬘に仕える女の童の名。

一三 ほかに気をつける人もいなかったのでございましょう。玉鬘の前に出すまでに、適当に処置する女房がいなかった、女房だったらこんなことはしないのに、という含み。

一四 何といじらしいことだね。柏木の振舞をいう。

一五 官位は低くとも、あの人たちをどうしてそんな失礼な目にあわせられよう。手紙を突き返したりはできない、の意。「主」は、軽い敬語。

一六 上達部。三位以上。柏木は近衛の中将であるから従四位下。

一七 柏木がそのうち自然に事情（玉鬘と実の姉弟であること）を知って納得する折もあろう。

源氏の人物評

一八 あなたがまだご経験も浅く、何の後楯もない身の上で。

一九 長年別々でいらっしたごきょうだいの中に入ってゆかれるということは。

二〇 やはり、世間の人が落着くような方向に落着いてこそ。普通に結婚してこそ。

（源氏）九 「さて、この若やかに結ぼほれたるは誰がぞ。いといたう書いたるけしきかな」と、ほほゑみて御覧ずれば、（右近）一〇「かれは、執念うとどめてまかりにけるにこそ。内の大殿の中将の、一二このさぶらふみるこをぞ、前からご存じでいらっしゃったそのつてでことづかったのでございます もとより見知りたまへりける伝へにてはべりける。一三また見入る人もはべらざりしにこそ」と聞こゆれば、（源氏）一四「いとらうたきことかな。下臈なりとも、かの主たちをば、いかがいとさははしたなめむ。一五公卿といへど、この人のおぼえに、柏木 声望に かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。一六 その中でも さるなかにも、〔柏木は〕大層落着いた人物です いとしづまりたる人なり。一七おのづから思ひあはする世もこそあれ。掲焉 今はあからさまでなくうまく言い繕っておくがよい にはあらでこそ言ひまぎらはさめ。見所 〔手に取って〕すぐにも下にお置きにならない ある文書きかな」など、ご注意申すのを とみにもうち置きたまはず。一八

（源氏）「かう何やかやと聞こゆるをも、ご不快にお思いになることもあろうかと 気になりますが おぼすところやあらむと、ややましきを、かの大臣 内大臣に実の子と知って頂かれることにしても に知られたてまつりたまはむことも、一九まだ若々しう何となきほどに、ここら年経たまへる御仲にさし出でたまはむことは、いかがと思ひめぐらしはべる。二〇なほ世の人のあめるかたに

大層綿々と書いてあるようだ

どんなものかと思案しているのです

一 人並みの境遇で（れっきとした家の夫人として）、父大臣に対面するしかるべき機会もおありだろうと考えますが。

二 兵部卿の宮。さて、その結婚の相手としては、と以下に人物評を述べる。

三 （ご家庭には）召人とか、かわいらしげのない名乗り立てをする女房たちが、大勢いるということです。「召人」は、主人の寵を受けて妻室に準ずる特殊な地位を占める女房。

四 しかし、多少とも性格にかどのある女なら、夫にいやがられるようなことが、いずれは生じてくるでしょうから。夫の浮気を容赦できず、嫉妬するような気性なら、うまくゆかないだろう、の意。

五 髭黒右大将。

六 長年連れ添った奥方が。式部卿の宮（紫の上の父）の正室腹の長女。紫の上の腹違いの姉にあたる（藤袴一九八頁参照）。

七 ひどく年をとったのに、厭気がさしたこともあって、あなたに求婚しているということですが。

八 そのこともまわりの者は、面倒なことだと思っているようです。

九 あなた（玉鬘）は、自分の考えが言えないほどのお年頃でもありませんし。

一〇 今では、どうして何事もご自分で分別できぬことがありましょう。

一一 自称の代名詞。男女ともに親しい者同士で使う。

定まりてこそは、人々しう、さるべきついでもものしたまはめと思ふを、宮は、独りものしたまふやうなれど、人柄いといたうあだめいて、通ひたまふ所あまた聞こえ、召人とか、憎げなる名のりする人どもなむ、数あまた聞こゆる。さやうならむことは、憎げなうて見なほいたまはむ人は、いとようなだらかにもて消ちてむ。すこし心に癖ありては、人に飽かれぬべきことなむ、おのづから出で来ぬべきを、その御心づかひなむあべき。大将は、年経たる人の、いたうねび過ぎたるを、厭ひがてらと求むなれど、それも人々わづらはしがるなり。さもあべいことなれば、さまざまになむ人知れず思ひ定めかねはべる。かうざまのことは、親などにも、さはやかに、わが思ふさまとて、語り出でがたきことなれど、さばかりの御齢にもあらず、今は、などか何ごとをも御心に分いたまはざらむ。まろを、昔ざまになずらへて、母君と思ひないたまへ。御心に飽かざらむことは心苦しく」など、いとまめやかにて聞こえたまへば、苦しうて

（一）独身でいられるようですが（二）お通い先が多いという噂だし（三）夫の浮気沙汰については不機嫌な顔をせず大目に見過されるような方なら（四）大層上手に穏便にすますでしょう（五）ご注意が大切です（六）それももっともなことですから〔私も〕（七）こういう結婚の話は（八）自分の希望はこうこうだと（九）あっさりと（一〇）実の母君とも思って下さい（一一）亡くなった方同様に考えて（一二）あなたのお気持に添わぬことがあってはつらい（一三）真面目なおもちで（一四）〔玉鬘は〕困って

一二（かといって、黙りこくって）あまり子供っぽいのも愛敬がないと思われて。

一三 何の分別もない幼少の頃から、親などは知らぬ日を送ってまいりましたので。玉鬘が夕顔に死別したのは三歳（一巻夕顔一七〇頁参照）。

一四 後の養い親を実の親とお思いになって。「後の親を親とせよ」とでもいった諺が、当時世に行われていたのであろう。

一五 庭前の呉竹。「呉竹」は、淡竹のこと。葉が細い。

一六 風に靡く様子が愛らしいのに。なよやかな女の風情を感じるのである。

源氏、玉鬘と唱和

一七 籬のうちにしっかりと植えた筍—邸のうち深く大切に育てた娘が、それぞれよすがを定めて別れてゆくのであろうか。「籬」は、めぐりにしつらえた柵。「世」は、男女の仲、結婚の意。「よ」（節と節の間）を掛ける。「竹の子」は「よ」に言い掛けて用いられる歌語。

御いらへ聞こえむともおぼえたまはず。（お返事を申し上げようというお気持にもならない）一二いと若々しきもうたておぼえて、「（玉鬘）一三何ごとも思ひ知りはべらざりけるほどより、親などは見ぬものにならひはべりて、（どのように思案しましたらよいのやら分りません）ともかくも思うたまへられずなむ」と、聞こえたまふさまのいとおいらかなれば、（おっとりしているので）げにとおぼいて、「（源氏）さらば世のたとひの、（俗に言うように）後の一四の親をそれとおぼいて、（私の並々ならぬ厚意の深さも）おろかならぬ心ざしのほども、（最後までお見届け下さいませんでしょうか）見あらはし果てたまひてむや」など、（こまごまとお話しなさる）うちかたらひたまふ。（わが物にと思うご本心は）おぼすさまのことは、（面はゆくて）まばゆければ、えうち出でたまはず。（意味あり）けしきある言葉は時々まぜたまへど、（玉鬘が）（気づかない様子なので）見知らぬさまなれば、（思わずつい嘆息され）すずろにうち嘆かれてわたりたまふ。（あちらへ）（お帰りになって）

一五御前近き呉竹の、いと若やかに生ひたちて、一六うちなびくさまのなつかしきに、（源氏は）立ちとまりたまうて、

「一七籬のうちに根深くうゑし竹の子の
おのが世々にや生ひわかるべき

（恨めしく思われることですよ）思へばうらめしかべいことぞかし」と、御簾を引き上げて聞こえた（玉鬘に）

一 御簾際までにじり出て。源氏に答えるためである。

二 今さら、どんな場合に、若竹の生いそめたもとの根―生みの親を探したりしましょう。源氏の歌に「おのが世々にや……」とあったのを、実父の方に行く意に受け取ったもの。

三 (実父を尋ね出したりしては)私がかえって困りますでしょう。

四 とはいえ、玉鬘の内心では、そうも思っていないのだ。草子地。

五 昔物語をご覧になるにつけても。継子いじめの物語などであろう。

六 あの亡くなった人(夕顔)は、あまりにもはれやかなところがありませんでした。「はるく」は、物思いを晴らすこと。

まへば、一ゐざり出でて、

(玉鬘)二「今さらにいかならむ世か若竹の
生ひはじめけむ根をばたづねむ

三なかなかにこそはべらめ」と聞こえたまふを、いとあはれとおぼしけり。四さるは、心のうちにはさも思はずかし。いかならむをり聞こえ出でむとすらむと、心もとなくあはれなれど、この大臣の御心ばへのいとありがたきを、親と聞こゆとも、もとより見馴れたまはぬは、えかうしもこまやかならずやと、五昔物語を見たまふにも、やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知りたまへば、いとつつましう、心と知られたてまつらむことはかたかるべうおぼす。

殿(源氏)は、〔玉鬘を〕いとどらうたしと思ひきこえたまふ。上(紫の上)にも語り申したまふ。「あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな。六かのいにしへのは、あまりはるけどころなくぞありし。この君(玉鬘)は、もののありさまも見知りぬべく、気近き心ざま添ひて、うしろめたからずこそ

大層いじらしいと
どんな機会にお耳に入れることになるのかしらと
気がかりで胸がいっぱいになるけれども
実の親と申し上げても
小さい時からお側にいない者には
のお心配りの並々でないのを
とてもこれほど心をかけて下さらないだろうと
源氏の大臣
大層気がねで
自分から進んで実の父に知って頂くことはむつかしかろうと
源氏
不思議に人をひきつける姫君の人柄です
ますますかわいいと
紫の上
世間のこともよく分りそうだし
人なつこいところもあって
心配のない人柄だと思われま

七 物事の表裏はお分りになりそうな方のようですのに。源氏の「もののありさまも見知りぬべく」を受けた言葉。

八 いえ、私のことを振り返ってみましても、本当に耐えがたく、悲しい時が何度かあったあなたのご性分について、思い出されるあれこれがないと申せましょうか。源氏の浮気に苦しめられたことをいう。

九 何と察しの早いこととお思いになって。

一〇（万一、私に好色心でもあれば）玉鬘は、とても見抜かずにおかぬでしょう。

源氏、玉鬘に心中を打ち明ける

一 前に「更衣の今めかしう改まれるころほひ」（四一頁）とあった。四月、新緑の頃である。

二 これは源氏の御殿の庭前である。

見ゆれ」などほめたまふ。（無事にすまされそうにもない〔源氏の〕ご性質を知っていらす）ただにしもおぼすまじき御心ざまを見知りたまへれば、（思い当られてっしゃるので）おぼし寄りて、「（紫上）七ものの心得つべくはものしたまふめるを、（まるで心から気を許し）うらなくしもうちとけ、（あなたを）頼みきこえたまふらむこそ心苦し（毒です）けれ」とのたまへば、（源氏）何で私が頼もしからぬことがあろうか「などたのもしげなくやはあるべき」と聞こえたまへば、（紫上）八「いでや、われにても、また忍びがたう、もの思はしきをりをりありし御心ざまの、思ひ出でらるるふしぶしなくやは」と、ほほゑみて聞こえたまへば、九あな心疾（こころと）とおぼいて、（源氏）「うたてもいやなことおぼし寄るかな。一〇」（事面倒なので）と見知らずしもあらじ」とて、わづらはしければ、のたまひさして、心のうちに、（紫の上が早速こんな推測をなさるにつけても）人のかうおしはかりたまふにも、（どうしたものであろうかと）いかがはあべからむとおぼし乱れ、（一方では）かつは、（道にはずれたよからぬご自分の性）ひがひがしうけしからぬわが心のほども、思ひ知られたまひけり。

（玉鬘のことが）心にかかれるままに、（源氏は）しばしば（西の対に）わたりたまひつつ見たてまつりたまふ。二雨のうち降りたる名残（なごり）の、いとものしめやかなる夕つかた、（しっとりと落着いた）御前の若楓（わかかへで）、柏木（かしはぎ）などの、青やかに茂りあひたるが、何となくここ

ちよげなる空を見いだしたまひて、「和してまた清し」とうち誦じたまうて、まづこの姫君の御さまの、にほひやかげさをおぼし出でられて、例の、忍びやかにわたりたまへり。手習などして、うちとけたまへりけるを、起きあがりたまひて、はぢらひたまへる顔の色あひ、いとをかし。なごやかなるけはひの、ふと昔おぼし出でらるるにも、忍びがたくて、「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりをりこそあれ。あはれなるわざなりけり。中将の、さらに、昔ざまのにほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまうけるよ」とて、涙ぐみたまへり。箱の蓋なる御くだもののなかに、橘のあるをまさぐりて、

「橘のかをりし袖によそふれば
　かはれる身とも思ほえぬかな

一「四月の天気和して且清し　緑槐陰合うて沙堤平かなり」（『白氏文集』巻十九、七言十二句「贈駕部呉郎中七兄」）

二　思いを、古歌などに寄せてすさび書くこと。

三　俯いて書いていた上体を起したのである。

四　全然、亡き人の美しさを伝えていないので、それを当り前のように思って。夕霧が亡き母葵の上に似ていないことを言う。

五　硯箱などの蓋であろう。物を盛るのに用いる。

六　果実、木の実など間食用の軽い食物。

七　柑橘類。酸味強く小さな黄色い実。

八　あなたを、昔懐かしい亡き母上と思ってみれば、とても別人とは思われません。「橘のかをりし袖」は「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』巻三夏、題しらず、読人しらず）を踏まえる。

九 お母様そっくりのあなたとこうしてお会いするのは、ただもう夢ではないかと思ってみるのですが。

一〇 女君は、今までこんなお扱いを受けたことがなかったので。「女」は、娘分だった玉鬘が、ここで、恋の相手となっていることを示す。

一一 亡き母にそっくりだとのことですので、わが身も母と同じようにはかなく終るのではないかと存じます。「み」に「実」と「身」を掛ける。前出「五月待つ」の歌と、「橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜置けどましときはにして」（『河海抄』所引。『古今六帖』六、橘「枝に霜降れどいやときはの木」。『家持集』にも。原歌は『万葉集』巻六、聖武天皇御製。一説に元正太上天皇御製）による。

一二 あなたも、何気ないふりをして目立たぬようにしていらっしゃい。「を」は間投助詞。

一三（もともと亡き人の形見として）一通りにはお思い申さぬ心寄せの上に、あらたな恋の思いがまた加わるのですから、私の気持は、世にも稀なものと思われますのに。

年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほ（やはり）（したが）（九）
（黙ってすませそうにありません）
えこそ忍ぶまじけれ。（私を嫌わないで下さい）おぼしうとむなよ」とて、（玉鬘の）御手をとらへたまへれば、女、（一〇）かやうにもならひたまはざりつるを、（大層いやに思われたが）いとうたておぼゆれど、（何気ないおっとりした様子でおいでになる）おほどかなるさまにてものしたまふ。

（玉鬘）（一一）袖の香をよそふるからに橘の
みさへはかなくなりもこそすれ

（面倒に思ってお顔を伏せていらっしゃる）（玉鬘の）様子は
むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、（愛敬があって）
（身体つきや）（肌合いがきめこまかで愛らしい様子なので）
手つきがふっくらと
手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり、肌つきのこまやかにうつくしげなるに、（源氏は）なまじ打ち明けたために（かえって物思いの増す気持がなさって）なかなかなるもの思ひ添ふここちしたまうて、今日はすこし思ふこと聞こえ知らせたまひける。（ご自分の本心を言ってお聞かせになった）女は、心憂く、いかにせむとおぼえて、（身体が震えてくる様子もよく分るがようと思われて）わななかるるけしきもしるけれど、「何か、かくうとましとはおぼいたる。（私は）うまくうわべをつくろって（誰にも気づかれないようなお嫌いになるのですか）いとよくもて隠して、人に咎めらるべくもあらぬ心のほどぞよ。（一三）さりげなくてをもて隠したまへ。浅くも思ひきこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたぐひあるま

一　こうして手紙をさし上げる人々（兵部卿の宮や右大将など）より、軽くお考えになっていいものでしょうか。

二　（ほかの男にあなたを託すのは）心配でなりません。

三　全くよけいなことまで心配する御親心であることだ。草子地。

四　「風の竹に生る夜　窓の間に臥せり　月の松を照らす　源氏、玉鬘に添い臥す　時　台の上に行く」（前出『白氏文集』巻十九、七言十二句「贈駕部呉郎中七兄」）による。

五　（親子ということで）いつも遠慮なくお会いになる間柄ではあるが。几帳などを隔てず、直接対面することをいう。

六　着馴れて柔らかくなったお召し物の衣摺れの音は、大層上手にごまかして、するりとお脱ぎになって。

七　玉鬘はとても情けなく、女房たちもこれを知ったらどんなに変なことと思うだろうと、大層つらく思われる。

八　隠そうとしても、しきりに涙があふれ出て。「つつむ」は、袖につつむこと。

じきここちなむするを、このおとづれきこゆる人々には、おぼしおとすべくやはある。いとかう深き心ある人は、世にありがたかるべきわざなれば、うしろめたくのみこそ」とのたまふ。いとさかしらなる御親心なりかし。

本当に私のように深い愛情のある者は　世間にめったにいないはずのものですから

雨はやみて、風の竹に鳴るほど、はなやかにさし出でたる月影、をかしき夜のさまもしめやかなるに、人々は、こまやかなる御物語にかしこまりおきて、気近くもさぶらはず。常に見たてまつりたまふ御仲なれど、かくよきをりしもありがたければ、言に出でたまへるついでの御ひたぶる心にや、なつかしいほどなる御衣どものけはひは、いとようまぎらはしすべしたまひて、近やかに臥したまへば、いと心憂く、人の思はむこともめづらかに、いみじうおぼゆ。まことの親の御あたりならましかば、おろかには見放ちたまふとも、かくざまの憂きことはあらましやと悲しきに、つつむとすれどこぼれ出でつつ、いと心苦しき御けしきなれば、「かうおぼすこそつらけ

風情のある　しっとりとした風情に　女房たちは　親子水入らずのお話し合いに　ご遠慮申し上げて　お側近くも控えていない　しまれたはずみのたかぶったお気持からか　お側にいたならば　大事にはせずほってお置きになるにしても　このような情けない目にあうことはあるまいにと　近々と添い臥しなさったので　（源氏）こんなにお嫌いなさるとは情けない　いたわしいご様子なので

九 今までにまして、こうして身近に接した感じは、亡き夕顔とそっくり同じに思われて。

一〇 これが他人なら、こんなにぼんやりしてはいませんよ。手出しをしないことをこういう。

一一 亡き母君が慕わしく思われるその慰めに。

ない。全然見知らぬ男にでも れ。もて離れ知らぬ人だに、男女の仲の道理として世のことわりにて、皆ゆるすわざなめるを、かく年経ぬるむつましさに、〔私が〕この程度お近づき申すのが かばかり見えたてまつるや、何の何のうとましかるべきぞ。これより あながちなる心は、よも見せたてまつらじ。おぼろけに忍ぶるにあまるほどを、なぐさむるぞや」とて、あはれげになつかしう聞こえたまふこと多かり。ましてかやうなるけはひは、ただ昔のここちして、〔源氏は〕胸がいっぱいになる いみじうあはれなり。わが御心ながらも、ゆくりかにあはつけきことおぼし知らるれば、いと よくおぼしかへしつつ、人もあやしと思ふべければ、いたう夜もふかさで出でたまひぬ。「思ひうとみたまはば、いと心憂くこそあるべけれ。一〇よその人は、かうほれぼれしうはあらぬものぞよ。限りなく、そこひ知らぬ心ざしなれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ。ただ昔恋しきなぐさめに、はかなきことをも聞こえむ。同じ心にいらへなどしたまへ」と、いとこまかに聞こえたまへど、われにもあらぬさまして、いといと憂しとおぼいたれば、

自制心のない軽はずみなことだと まこと
女房たちも変だと思うに違いないので あまり遅くならぬう
お嫌いになるのでしたら とてもつらいことでしょう
人が変に思うようなことは決してしません
折節の心をやるお話でもしましょう そのおつもりで
大層気を遣って
お返事などして下さい
〔玉鬘は〕度を失った
これほどつれないお気持

とは思っていませんでしたのに
見たてまつらぬ御心ばへを、いとこよなくも憎みたまふべかめるかな」と、嘆きたまひて、「ゆめけしきなくてを」とて出でたまひぬ。

まことにこれ以上はないほどにお嫌いなさるようですね

（源氏）決して人に気取られぬように

女君も、御年こそ過ぐしたまひにたるほどなれ、世の中を知りたまはねば、これより気近きさまにもおぼし寄らず。思ひのほかにまはぬなかにも、すこしうち世馴れたる人のありさまをだに見知りだけでなく

男女の仲をご存じない

全く思ってもみなかった目にあう身の上だったと

気分もひどくすぐれないので

女房たちはもありける世かなと、嘆かしきに、いとけしきもあしければ、人々、御ここちなやましげに見えたまふと、もてなやみきこゆ。「殿の御

ご気分がお悪そうでいらっしゃると

お扱いに困っている

けしきの、こまやかに、かたじけなくもおはしますかな。まことの御親と聞こゆとも、さらにかばかりおぼし寄らぬことなくは、もて申されないでしょう

ほんとうにこれほど至れり尽せりといったふうには

お世話

なしきこえたまはじ」など、兵部などもの、忍びて聞こゆるにつけて、ますます心外で

〔玉鬘に〕そっと耳打ち申し上げるにつけ

いとど思はずに、心づきなき御心のありさまを、うとましう思ひ果てたまふにも、身ぞ心憂かりける。

いやらしい〔源氏の〕

わが身の上が情けないのだった

ほとほといとわしくお思いになるにつけても

五 またの朝、御文疾くあり。なやましがりて臥したまへれど、人々御硯など参りて、「御返り疾く」と聞こゆれば、しぶしぶに見たま

〔玉鬘は〕気分が悪いといって

（女房）さし上げて

〔玉鬘は〕

玉鬘の悩み

一 女君も、お年こそかなりになっていらっしゃるとはいえ。玉鬘は今年、二十二歳ほど。

二 いくらかでも男女の仲を経験した人の様子というものもご存じないので、（男女の睦びが）これ以上うちとけた関係であろうとはお気づきにもならない。普通なら、世馴れた女房の素振りからそれと気づくはず、という趣。

三 殿様（源氏）のお心遣いの行き届いていてもったいなくおいであそばすこと。

四 玉鬘の乳母子。（三巻玉鬘二九二頁注六参照）

源氏、後朝めいた文を寄こす

五 翌朝、源氏から早速にお手紙がある。後朝の文（男女が共寝をした翌朝早く男から寄こす文）によそえたもの。

六 白く染めた薄様（鳥の子紙を薄く漉いたもの）。普通、恋文ははなやかな色の薄様を用いる。

七 またとない昨夜の無情なお仕打ちは、ひどい方だと思うとかえって忘れられないのです。

八 どんなふうに女房たちもお思い申したでしょう。かえって疑いを持ったのではないか、の意。

九 共寝をしたわけでもありませんのに、どうしてあなたは、いかにも事ありげに思い悩んでいらっしゃるのでしょう。「若草」は、玉鬘によそえたもの。草を結んで枕にして寝るところから、「寝」「若草」「むすぼほる」は縁語。「うちとく」は「むすぼほる」の縁。「寝」に「根」を掛ける。「うらわかみ寝よげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ」（『伊勢物語』四十九段。『古今六帖』六、春の草、業平）による。

一〇 分厚い陸奥紙。「陸奥紙」は、奥州産の檀紙。紙質厚く、白くて、恋文以外の普通の用に使う。

一一 いやらしいお心だこと。草子地。

一二 一度お打ち明けになってからは。「色に出づ」は歌語。

一三 「太田の松の」（もういっそはっきり言ってしまおうか）と、ためらっていると思わせることなく。「思はす」は、推測させる意。「恋ひわびぬ太田の松の大方は色に出でてや逢はむと言はまし」（書陵部蔵『躬恒集』光俊本ほか）による。「太田の松」は所在不明。

玉鬘の困惑

見た目にはおとなしく　見事にお　生真面目な感じのものに

ふ。白き紙の、うはべはおいらかに、すくすくしきに、いとめでた

書きになっている

う書いたまへり。

（源氏）七

たぐひなかりし御けしきこそ、つらきしも忘れがたう。八いかに人見たてまつりけむ。

九

うちとけて寝も見ぬものを若草の

ことあり顔にむすぼほるらむ

世間知らずでいらっしゃることだ

をさなくこそものしたまひけれ。

それでも親気取りで論されるお言葉も　〔玉鬘は〕憎らしいと

と、さすがに親がりたる御言葉も、いと憎しと見たまひて、御返り

皆が不審がるだろうから

聞こえざらむも、人目あやしければ、一〇ふくよかなる陸奥紙に、ただ、

（玉鬘）お便り頂きました　気分が悪うございますので

「うけたまはりぬ。乱りごちのあしうはべれば、聞こえさせぬ」

こういったやり方は　お返事は失礼致します

しっかりしていると〔源氏は〕

とのみあるに、かやうのけしきは、さすがにすくよかなりとほほゑみて、怨みどころあるここちしたまふ、一一うたてある心かな。

口説きがいのある気持がなさるのも

色に出でたまひてのちは、「一三おほたの松の」と思はせたることなく、むつかしう聞こえたまふこと多かれば、いとど所狭きここちし

うるさくいろいろと言い寄られるのでせっぱつまった

〔玉鬘は〕一層とろせ

思いで一て、おきどころなきもの思ひつきて、本当に病気にまでおなりになるいとなやましうさへしたまふ。二かくてことの心知る人は少なうて、うときも親しきも、むげの親ざまに思ひきこえたるを、三かうやうのけしきの漏り出でば、いみじう物笑いになり人笑はれに、憂き名にもあるべきかな、四父大臣などの尋ね知りたまふにても、親身になってかまって下さるお気持でもないであろうがまめまめしき御心ばへにもあらざらむものから、他人が思うまして以上に考えのない女だと五いとあはつけう、待ち聞きおぼさむことと、何もかもが心配で思い乱れていらよろづにやすげなうおぼし乱る。

六宮、大将などは、殿の御けしき、もて離れぬさまに伝へ聞きたまうて、いとねむごろに聞こえたまふ。熱心に言い寄られる七この岩漏る中将も、八大臣の御ゆるしをみてこそかたよりにほの聞きて、本当の事情はまことの筋をば知らず、ただひとへにうれしくて、真剣に恋の怨みをお訴え申してうろうろしているようだおりたち怨みきこえまどひありくめり。

一 どうしてよいか分らぬ悩みに取りつかれて。「置きどころなし」は、上の「所狭し」に触発された措辞。

二 こういう次第で、真相を知る人は少なくて、世間の者もまわりの人も、（源氏を）すっかり実の親とお思い申しているのに。

三 こんな事情がちょっとでも世間に漏れたなら。以下「待ち聞きおぼさむこと」まで、玉鬘の心中の思い。

四 父大臣（内大臣）などが、自分がこうしていることをいずれご承知になっても。

五 （実の娘の消息を）お耳にされて、お思いになることだろうと。

六 兵部卿の宮や右大将などは、殿（源氏）のご意向が、全然問題になさらぬでも仲介の女房から聞くのである。源氏は前に、この二人には丁重に返事するように諭している。（四三頁参照）

兵部卿の宮たちの思惑

七 先ほどの「岩漏る中将」。柏木のこと。「岩漏る水に……」の歌を贈ったので（四二頁）、こう呼ぶ。

八 源氏がお認めになっているということを。次の「みてこそかたよりに」は解しがたい。宣長は「みるこがたよりに」の誤写とする。「みるこ」は仲立ちの女の童である（四五頁）。河内本にこの九字がないのは削ったのであろう。

螢（ほたる）

源氏に言い寄られてからの玉鬘の困惑は一通りでないものがあった。一方で源氏は、玉鬘に兵部卿の宮との交際をすすめ、宮に色よい返事を送って、玉鬘と宮との会見を取りはからったりする。時は五月、宮の訪れは四日の夜のことらしいが、源氏は、玉鬘の世話をやくふりをして、その身近に螢を放ち、ほのかな螢の光に浮ぶ玉鬘の姿を宮に見せる。巻名は、優艶なこの場面にちなむ。

五月五日、花散里の丑寅の町の馬場で、夕霧の引き連れて来た左近衛府の官人たちによる騎射の催しが行われ、花散里、玉鬘方の童女たち、南の町の紫の上づきの童女たちも着飾ってこれを見物した。この夜、晴れがましい女主人の役を勤めた花散里の許に源氏は泊るが、二人はすでに褥を別にする静かな夫婦の仲であった。

折しも五月雨の頃で、六条の院の女君たちは、絵物語のすさびに無聊をまぎらわせている中でも、遠い西国の地に育った玉鬘は、物語に熱中し、住吉の姫君の物語にわが身の数奇な来し方を振り返ってみたりする。その玉鬘を相手に源氏の物語論が展開され、紫の上を相手に、物語を明石の姫君に与えるについての教育的な配慮が語られる。

夕霧は明石の姫君のお相手をしながら、雲居の雁を思い続けているが、内大臣に膝を屈するのをいさぎよしとしない。一方、内大臣は、この頃になって夕顔との間になした女子のことを気にかけて、夢見をうらなわせたりするのであった。

一 今はこうして重々しいご身分ゆえ。源氏はすでに三年前の秋、太政大臣になっている（三巻少女二三〇頁）。

二 何かにつけ、もの静かな落着いたお暮しぶりなので。若い頃のような奔放な女性関係もないという意。

三 （源氏を）お頼り申し上げていられる夫人たちは。六条の院の夫人たちや二条の東の院の女性たち。

四 西の対の姫君。玉鬘。

五 思ってもみなかった心配事が加わって。前の胡蝶の巻の終りで、源氏に言い寄られたこと（五一頁以下参照）。

六 あの大夫の監の、怖気をふるうようだった求婚のありさまとは、比べものにもならぬ感じだが。大夫の監のこと、三巻玉鬘二八七頁以下参照。

七 こうしたことだと、夢にも周囲の者たちがお気づき申すはずもないことなので。実の父が娘に言い寄るはずもないと誰もが思う。

八 とんでもない、いやらしいなさり方とお思い申し上げなさる。

九 何もかも十分にわきまえのあるお年なので。今年、二十二歳ほど。

玉鬘の困惑

源氏、なお言い寄る

今はかく重々しきほどに、よろづのどやかにおぼししづめたる御ありさまなれば、頼みきこえさせたまへる人々、さまざまにつけて、皆思ふさまに定まり、ただよはしからで、あらまほしくて過ぐしたまふ。対の姫君こそ、いとほしく、思ひのほかなる思ひ添ひて、いかにせむとおぼし乱るめれ。かの監が憂かりしさまには、なずらふべきけはひならねど、かかる筋に、かけても人の思ひ寄りきこゆべきことならねば、心ひとつにおぼしつつ、さま異にうとましと思ひきこえたまふ。何ごとをもおぼし知りにたる御齢なれば、とさまかうざまにおぼし集めつつ、母君のおはせずなりにけるくちをしさも、またとりかへし惜しく悲しくおぼゆ。

大臣も、うち出でそめたまひては、なかなか苦しくおぼせど、人

（一）今はかく重々しきほどに（二）よろづのどやかにおぼししづめたる御ありさまなれば（三）頼みきこえさせたまへる人々、さまざまにつけて、皆思ふさまに定まり（思いどおりに落着き）、ただよはしからで（何の不安もなく）、あらまほしくて過ぐしたまふ。対の姫君こそ（四）、いとほしく（お気の毒なことに）、思ひのほかなる思ひ添ひて（五）、いかにせむとおぼし乱るめれ（したものかと悩んでいられるようだ）。かの監が憂かりしさまには（六）、なずらふべきけはひならねど（七）、かかる筋に、かけても人の思ひ寄りきこゆべきことならねば、心ひとつにおぼしつつ（自分の胸ひとつを痛めながら）、さま異にうとましと思ひきこえたまふ（八）。何ごとをもおぼし知りにたる御齢なれば（九）、とさまかうざまにおぼし集めつつ（とわが身の悲しい境涯を思っては）、母君のおはせずなりにけるくちをしさも（母君夕顔が亡くなってしまわれた取り返しのつかぬ悲しみも）、またとりかへし惜しく悲しくおぼゆ（改めて）。

大臣（源氏）も、うち出でそめたまひては（一旦意中を打ち明けなさってからは）、なかなか苦しくおぼせど（かえって安まらぬお気持であるが）、人

一　玉鬘のお前に女房もいなくて。「人遠し」は、たまたま女房たちが側にいないこと。

二　玉鬘は、胸の動悸を抑えかねながらも。

三　きっぱりと取り付く島もない申し上げようはできないことなので。源氏の身分、人柄、また自分に対する好意をも思う。

四　（言い寄る源氏に対して）ひどく真面目ぶって、用心していられるけれども。

五　源氏の弟君、螢兵部卿の宮。胡蝶三六頁に見える。

六　お骨折りのほどはまだどれほどでもないのに。「労」は、元来、官吏の功績をいう語。

兵部卿の宮の求婚

七　五月雨の頃になってしまったと苦情をおっしゃって。五月は婚姻を忌む風習があった。「神代より忌むといふなる五月雨のこなたに人を見るよしもがな」（『信明集』）

八　なんの、宮のようなお方が言い寄られるところはさだめし風情があろう。「なにかは」は、差支えないの意。

九　玉鬘は、ますますいやなことと思われなさるので。源氏が自分に言い寄りながらしかも、宮との交際をすすめるからである。

目を憚りたまひつつ、はかなきことをもえ聞こえたまはず、苦しくもおぼさるるままに、しげくわたりたまひつつ、御前の人遠く、のどやかなるをりは、ただならずけしきばみきこえたまふごとに、胸つぶれつつ、けざやかにはしたなく聞こゆべきにはあらねば、ただ見知らぬさまにもてなしきこえたまふ。人ざまのわららかに、気近く愛敬づきたるけはひのみ見えたまへり。

（ちょっとしたお言葉も〔玉鬘に〕おかけになれず　足しげくお越しになっては　静かな時には　おだやかならぬ言い寄りようをなさるたびごとに　お思いになるのも　何も気づかぬふりをしてお相手申し上げていられる　〔玉鬘は〕人柄が屈託なく　親しみやすい方なので　魅力的な様子ばかりが目立っていらっしゃる）

兵部卿の宮などは、まめやかにせめきこえたまふ。御労のほどはいくばくならぬに、五月雨になりぬる愁へをしたまひて、「すこし気近きほどをだに許したまはば、思ふことをも、片端はるけてしがな」と、聞こえたまへるを、殿御覧じて、「なにかは、この君達の好きたまはむは、見所ありなむかし。もて離れてな聞こえたまひそ。御返り時々聞こえたまへ」とて、教へて書かせたてまつりたまへど、いとどうたておぼえたまへば、乱りごちあしとて聞こえたまはず。

（真剣に交際を迫る文をお届けになる　お側近く上がるだけでもお許し下さるなら　申し上げたいものです　〔宮〕　〔源氏〕　そっけないご返事はなさるな　〔言葉を〕　気分が悪いと言ってお返事をお書きにならない）

一〇 玉鬘づきの女房たちも、格別家柄がよく声望のある家の出といった者も、ほとんどいない。
一一 参議程度であった人の娘で。「宰相」は、参議（正四位下相当。今の閣僚に当る）の中国風の呼び方。
一二 落ちぶれてひとり暮していたのを、捜し出して玉鬘づきの女房となさったのが。
一三「宰相の君」という名前で。父の官職によるこの人の女房名。上臈の格式である。
一四 宮が玉鬘に言い寄られる様子を、見たいとお思いなのであろう。草子地。手紙が宮の訪問を許すような趣の文面であることを暗示して、次の場面の伏線。
一五 玉鬘ご本人は、こうした困った心配事が起ってからは。源氏に言い寄られてからは、の意。
一六（ほかの人はともかく）この兵部卿の宮などは、情のこもったお手紙をさし上げなさる時は。
一七 こうした情けない源氏のお振舞を見ないですますわけはないものかと。

三位中将―夕顔―玉鬘
宰相―宰相の君

兵部卿の宮、玉鬘を訪問

一八 源氏は、大人気なくひとりわくわくなさって。
一九 妻戸を入った所の廂の間。（図録七参照）
二〇 宮のための敷物。（三巻図録一一参照）

人々も、ことにやむごとなく寄せ重きなども、をさをさなし。ただ母君の御をぢなりける、宰相ばかりの人の娘にて、心ばせなどくちをしからぬが、世におとろへ残りたるを、尋ねとりたまへる、宰相の君とて、手などもよろしく書き、おほかたも大人びたる人なれば、さるべきをりをりの御返りなど書かせたまへば、召し出でて、言葉などのたまひて書かせたまふ。ものなどのたまふさまを、ゆかしとおぼすなるべし。正身は、かくうたてあるもの嘆かしさののちは、この宮などは、あはれげに聞こえたまふ時は、すこし見入れたまふ時もありけり。何かと思ふにはあらず、かく心憂き御けしき見ぬわざもがなと、さすがにされたるところつきておぼしけり。

殿は、あいなくおのれ心懸想して、宮を待ちきこえたまふも知りたまはで、よろしき御返りのあるをめづらしがりて、いと忍びやかにおはしましたり。妻戸の間に御茵参らせて、御几帳ばかりを隔てにて、近きほどなり。いといたう心して、そらだきもの心にくき

夕顔
叔父
宰相
たしなみなども相当な
字なども一応人並みには書き
〔源氏が〕
者が
そのほかにも全体がしっかりした人なので
宮に格別心があるのではないが
もあるのだった
お目を止められる時
なかなかのところがあってお思いなのだった
〔宮は〕
まんざらでもないお返事があったのを珍しく思って
〔源氏が〕
さし上げて
気を遣って
部屋にくゆらす香を奥ゆかしい程

螢

一 実の親ではなく、厄介な余計なことをする（玉鬘に言い寄るようなことをする）人ではあるが。

二 気が利かぬと、おつねりになるので、困り果てている。やや諧謔を弄した筆致。「埋る」は、引っ込んでいる、の意。「いとわりなし」は、仕方なく取次ぎの役を勤めねばならぬ宰相の君の気持を直接書くことによって地の文としたもの。

三 夕方の月のない時刻も過ぎて、月もあるかなきかの空模様が曇りがちなのに。後の六六頁に「五日には」とあり、ここは前日の四日らしい。薄く新月がかかっているが、五月（今の六月）のこととて空も曇りがちな風情。

四 いかにも恋にふさわしい風情がある。

五 部屋をかおらせる空薫物を運んで来る風。

六 源氏は、いかにも風情があると（その宮の言葉を）ほのかに聞いておいでになる。

七 母屋の東側に引っ込んでお寝みになっておられたが。そこに帳台が置かれていたのであろう。宮のいる「妻戸の間」は西南の隅であろう。

八 宰相の君が、宮のお言葉を伝えにそちらに膝行して入ったのをよいことに。

源氏、玉鬘の側近く螢を放つ

九 あまりにも暑苦しいご応対ぶりです。夏のことなので、奥に引き籠ったままなのを難ずる言い方。

ほどに（度に）匂はして、つくろひおはするさま（お世話していられるご様子は）、親にはあらで、むつかしきさかしら人の、さすがにあはれに見えたまふ。宰相の君なども、人の御いらへ（宮へのお返事をお取次ぎ申し上げることなど）聞こえむこともおぼえず、はづかしくてゐたるを、埋れたりとひきつみたまへば、いとわりなし。夕闇過ぎて、おぼつかなき空のけしきの曇らはしきに、うちしめりたる宮の御けはひも、いと艶なり。うちよりほのめく追風も、いとどしき御匂ひのたち添ひたれば、いと深くかをり満ちて、かねておぼししよりもをかしき御けはひを、心とどめたまひけり。うち出でて、思ふ心のほどをのたまひ続けたる言の葉、おとなおとなしく、ひたぶるにすきずきしくはあらで、いとけはひことなり。大臣、いとをかしとほの聞きおはす。

親身なお扱いとお見えになる　小さくなって引っ込んでいるのを　物思わしげな　奥からただよって来る　一段とかおり高い源氏のお召し物の香が　部屋中がかおって　〔宮は〕かねがね想像していられたよりもすばらしい玉鬘のご様子を　深く心に止められたのだった　〔宮が〕お口に出して　落着いた感じで　いかにもすばらしいご様子だ

姫君（玉鬘）は、東面（ひむがしおもて）に引き入りて大殿籠りにけるを、宰相の君の御消息伝へに、ゐざり入りたるにつけて、「いとあまりあつかはしき御もてなしなり。よろづのことさまに従ひてこそめやすけれ。ひたぶ

何ごとも場合に応じて振舞うのが無難というものです　どこまで

一〇 せめてもう少しお近くでなりと。玉鬘に座を移すことをすすめる。螢を放つ下心からである。

一一（源氏は）こんなことにかこつけてでも入っておいでになりかねない魂胆をお持ちの方だから。源氏を警戒する玉鬘の気持を書いたもの。

一二 母屋の境に立ててある御几帳の陰に、横におなりになったが。「母屋の際」は、母屋と、宮のいる廂の「妻戸の間」との境。

一三 何やかやと言葉を尽しておっしゃる宮へのお返事を（玉鬘が）申し上げなさることもなく、ためらっていられるのに。

一四 帷は表、裏から成る。夏は、表生絹、裏平絹。その裏を几帳の手（横木）に掛けるのであろう。

一五 手燭。松の木を細長く削って先に油を塗り、火をともすもの。

一六「薄きかた」は、解しがたく、諸説がある。『河海抄』は几帳の帷の裏とする。

一七 何かと玉鬘の身辺のお世話をするふうをよそおって。前に「御几帳の帷を一重うちかけたまふ」とあった。

一八 はっきり目立つさま。

一九 意外な光が見えたなら。以下、源氏の目論見の説明。

二〇 玉鬘をご自分（源氏）の実の娘とお思いになるだけのことで。

よそよそしい

この兵部卿の宮までも

るに若びたまふべきさまにもあらず。この宮たちをさへ、さし放ちたる人伝に聞こえたまふまじきことなりかし。御声こそ惜しみたまふとも、すこし気近くだにこそ」など、いさめきこえたまへど、いとわりなくて、ことづけてもはひ入りたまひぬべき御心ばへなれば、とざまかうざまにわびしければ、すべり出でて、母屋の際なる御几帳のもとに、かたはら臥したまへる、何くれと言長き御いらへ聞こえたまふこともなく、おぼしやすらふに、寄りたまひて、御几帳の帷を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれたり。螢を薄きかたに、この夕つかたいと多くつつみおきて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて、にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目、いとをかしげなり。おどろかしき光見えば、宮ものぞきたまひなむ、わが女とおぼすばかりのおぼえに、かくまでのたまふなめり、人ざま容貌など、いとかく

も子供っぽく振舞われるようなお年頃でもありません

女房の取次ぎでお話し申されてはいけないことです

〔玉鬘は〕おさとし申されるけれども

ほとほと困り果てて

あれを思いこれを思い身の置き所もないので

そっと抜け出して

〔源氏が〕

と同時に

〔玉鬘は〕びっくりする

扇をかざして顔をお隠しになった横顔は

〔玉鬘が〕驚きあきれて

こうまで熱心に言い寄られるのだろう

ほんとにこれ

一（玉鬘の実際の美しさを知ったら）ほんとに夢中になってしまわれるに違いない宮のお心を悩ませうと。

二 ほんとのご自分の姫君を、こんなにまでおせっかいをお焼きになることはあるまい、困ったご性分なのだった。草子地。

三 ほかの戸口から。以上、源氏に即した視点から事の始終を書く。次の「宮は」以下は、同じ場面を宮に即した視点から再現する。螢の光に女の姿を見る趣向は『伊勢物語』三十九段、『宇津保物語』初秋の巻に先蹤がある。

宮、螢の光に玉鬘の姿を見、歌を詠み交わす

四 几帳の薄物の帷の隙間から。宮の側に置かれている几帳。

五 柱と柱との間。

六 風流な恋のやりとりのきっかけにもできそうに見える。やがて次に、宮と玉鬘の贈答がある。

七 なるほど、源氏のご計画は図に当って、深く宮のお心にとまったのだった。「あのごと」、青表紙本は「このこと」とあるが、河内本によるべきである。

八 鳴く声も聞えない虫（螢）の思いでも、人が消そうとしても消えるものでしょうか。まして私の胸の思いは消せるものではありません。「思ひ」の「ひ」に、螢の「火」を掛ける。人々が螢を取り隠したのにちなむ詠みぶり。

しも具したらむとは、（ほど非の打ち所もないとは）えおしはかりたまはじ（想像もおできになるまい）、いとよく好きたまひぬべき心まどはさむと、かまへありきたまふなりけり。まことのわが姫君をば、かくしも、もて騒ぎたまはじ、うたてある御心なりけり。異方（ことかた）より、やをらすべり出（こっそり）でてわたりたまひぬ。（お帰りになった）

宮は、人（玉鬘のおられるあたりは）のおはするほど、さばかりとおしはかりたまふが、すこし気近（けぢか）きはひするに、御心ときめきせられたまひて、（お胸の高鳴る思いがなさって）えならぬ（すばらしい）羅（うすもの）の帷（かたびら）の隙（ひま）より見入れたまへるに、一間（ひとま）ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくを、をかしと（すばらしいと）見たまふ。ほど（奥をおのぞきになると）もなくまぎらはして隠しつ。されどほのかなる光、艶（えん）なることのつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに（すらりと丈高い姿で）臥したまへりつる様体（やうだい）のをかしかりつるを、飽かずおぼして、げに案（あ）のごと御心にしみにけり。

（宮）八

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに
人の消（け）つには消ゆるものかは

（あの辺であろうと見当をおつけになるのが）

（見通しの所に）

（ほのかな螢の光は）

（宮は）心残りに思われて

（女房たちが）分らぬように取り隠した

九 手っ取り早いのだけを取柄に。
一〇 声は立てないでわが身を焦がすばかりの螢の方が、あなたのように口に出しておっしゃるよりも深い思いをいだいていることでしょう。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。「音もせで思ひに燃ゆる螢こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ」（『重之集』）による。
一一 玉鬘ご自身は奥に引っ込んでしまわれたので。宰相の君に取次ぎを託した趣。
一二 軒の雫に濡れ、満たされぬ恋の嘆きもつらいので。「ながめつつわが思ふことはひぐらしに軒の雫の絶ゆる世もなし」（『新古今集』巻十八雑下、秋雨を具平親王）によるか。「軒の雫」は歌語で、悲しみの涙の比喩。五月雨と宮の悲しみの涙を重ねた趣の文飾。
一三 前の「夜深く」の語を受けて「五月雨にもの思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづちゆくらむ」（『古今集』巻三夏、紀友則）を踏まえる。以下、草子地。
一四 うわべは親のようでありながら、ひそかに自分に思いを寄せる源氏のお気持を。
一五 すべては自分の身の上の招いた不幸なのだ。以下、玉鬘の心中。

玉鬘に対する源氏の自制

思ひ知りたまひぬや」（お分りになりましたでしょうか）と聞こえたまふ。（こうした場合のご返歌を）かやうの御返しを、思ひまはさむもねぢけたれば、（思案するのもおかしなものなので）疾きばかりをぞ。（あれこれ）

（玉鬘）一〇 声はせで身をのみこがす螢こそ

言ふよりまさる思ひなるらめ

などはかなく聞こえなして、（軽くあしらったていにお返事して）一一 御みづからは引き入りたまひにければ、いとはるかにもてなしたまふ。（いかにもよそよそしくおあしらいになる）愁はしさを、（つらさを）いみじく怨みきこえたまふ。（〔宮は〕）すきずきしきやうなれば、（好色がましいようなので）ゐたまひも明かさで、（夜明けまでもおいでにならず）一二 軒の雫も苦しさに、濡れ濡れ夜深く出でたまひぬ。（まだ暗いうちにお帰りになった）時鳥などかならずうち鳴きけむかし。（ほととぎす）うるさければえこそ聞きもとどめね。（わずらわしいので確かめることもできませんでした）御けはひなどのなまめかしさは、いとよく大臣の君に似たてまつりたまへりと、（源氏）人々もめできこえけり。（〔宮の〕ご様子などのお美しさは）（女房たちも）昨夜、いと女親だちてつくろひたまひし御けはひを、（おほめ申すのだった）うちうちは知らで、（内情は知らぬままに）あはれにかたじけなしと皆言ふ。（おやさしくもったいないことと）

（玉鬘）姫君は、一四 かくさすがなる御けしきを、（世話をおやきになった〔源氏の〕）わがみづからの憂さぞかし、（実の父内大臣にも娘と認めていただき）親などに知られたてまつり、（人並みに大事にされている身の上で）世の人めきたるさまにて、（このように源氏）かやうなる

一 どうしてひどく不似合いということがあろう。源氏の愛を受け入れて結婚してもおかしくない、の意。

二 普通でない今の自分の境遇は、しまいには世の語り草になるのではないかと。表向きは実子ということでありながら源氏の寵愛を受けるのではと、世間の噂を気にする。

三 ほんとに世間にありふれたつまらぬことにはしてしまうまいと、源氏はお思いなのだった。手許に置いた若い女につい手を出したといったことにはしたくない、という意。

四 やはりそうした困ったところがおありになるので。「かうあながちなることに胸ふたがる癖の、なほありけるよと、わが身ながらおぼし知らる」（三巻薄雲一八四頁）

五 折り目正しく養女としてお思い申し上げておられようか（そうではない）。薄雲一八〇頁以下に、中宮に言い寄る場面があった。

六 お人柄も、近づきやすく屈託ないので。前にも「人ざまのわららかに、気近くものしたまへば」（六〇頁）とあった。「今めく」は、現代風である意。

七 あぶないものの、何事もないお二人の仲だった。

八 丑寅の町の馬場に設けられている騎射を見物するための殿舎。（少女二七五頁参照）

九 厄介なところがおありの人ですよ。宮を危険人物だと言う。

五日、宮と玉鬘の贈答

御心ばへならましかば、（一）などかはいと似げなくもあらまし、（二）人に似ぬありさまこそ、つひに世語りにやならむと、起き臥しおぼしなやむ。さるは、（三）まことにゆかしげなきさまにはもてなし果てじと、大臣はおぼしけり。（四）なほさる御心癖なれば、中宮なども、（五）いとうるはしくやは思ひきこえたまへる、ことに触れつつ、ただならず聞こえ動かしなどしたまへど、やむごとなきかたの、およびなくわづらはしさに、おり立ちあらはし聞こえ寄りたまはぬを、この君は、（六）人の御さまも、気近く今めきたるに、おのづから思ひ忍びがたきに、をりをり、人見たてまつりつけば疑ひ負ひぬべき御もてなしなどは、うち交るわざなれど、ありがたくおぼし返しつつ、（七）さすがなる御仲なりけり。

（に愛していただくのなら）（秋好む中宮）（気を引いてみたりなさるけれども）（中宮という歴としたご身分が）（もあるので）（身を入れてあからさまにお口説き申すことはなさらないが）（玉鬘）（及びもつかぬ高さで事面倒で）（〔源氏は〕つい気持が抑えがたくて）（女房たちがお気づき申せば不審に思うに違いないようなお振舞などは）（真似のできないほどよく自制されて）

翌五月五日

五日には、（八）馬場の大殿に出でたまひけるついでに、〔西の対に〕わたりたまへり。「いかにぞや。宮は夜やふかしたまひし。いたくも馴らしきこえじ。（九）わづらはしき気添ひたまへる人ぞや。人の心やぶり、ものの

（〔源氏〕どうでしたか）（女の人の心を傷つけ）（何かの問）

一〇 手綱をゆるめたりしめたりといった具合に、玉鬘に注意していられるご様子は。前には宮を近づけるようなことを言い（六〇頁）、今は危険な人だと言う。
一一 直衣の下に重ねている袿。
一二 夏の直衣。紗の地に模様を織り出してある。普通、縹（薄い藍色）で三重襷に花菱あるいは角菱の模様。夏の直衣なので「はかなく」という（図録九参照）。
一三 普通の直衣の色（縹）と変らない模様（三重襷）も、五月五日の今日は目の覚めるように見え。模様の意の「文目」に、五日にちなむ「菖蒲」を掛けての文飾。次の「かをり」も、菖蒲のかおりを掛ける。
一四 白を用いたのは、文を結び付けた菖蒲の白い根に合せたもの。「薄様」は、薄い鳥の子紙、恋文に用いる。
一五 実際にその場で見ていた時はすばらしかったけれども、こうしてお伝えする段になると、別に何ということもありません。草子地。その場にいた女房が語り伝える体。次の歌の批評である。
一六 五月五日の今日も引く人もない水の中に隠れて生える菖蒲の根―あなたに相手にされない私は、今日も声をあげて泣くだけなのでしょうか。五月五日、菖蒲の根を贈り物にする風習によって詠む。「音」と「根」、「泣かれ」と「流れ」を掛ける。
一七 語り草にもできそうな大層長い菖蒲の根。「引き」は根の縁語。「水隠れて生ふる五月の菖蒲草長きためしに人は引かなむ」（『続古今集』巻三夏、貫之）
一八 せっかくの五日ですからお返事なさい。

螢

違いをしでかさないような人は　めったにいないものですよ

あやまちすまじき人は、かたくこそありけれ」など、活けみ殺しみいましめおはする御さま、尽きせず若くきよげに見えたまふ。艶も色もこぼるばかりなる御衣に、直衣はかなく重なれるあはひも、何処に加はれるきよらにかあらむ、この世の人の染め出だしたると見えず、常の色もかへぬ文目も、今日はめづらかに、をかしくおぼゆるかをりなども、思ふことなくは、をかしかりぬべき御ありさまかなと姫君おぼす。

宮より御文あり。白き薄様にて、御手はいとよしありて書きなしたまへり。見るほどこそをかしかりけれ、まねび出づれば、ことなることなしや。

（宮）今日さへや引く人もなき水隠れに
生ふるあやめのねのみ泣かれむ

例にも引き出でつべき根に結びつけたまへれば、「今日の御返り」などそそのかしおきて出でたまひぬ。これかれも、「なほ」と聞こ

どこまでも　おきれいに　色合い　とても優美に　ほんとにすばらしく思われるに違いないご様子　余計な心配事がなければ　お召し物の薫香　玉鬘は　女房の誰彼も　〔文を〕　〔源氏〕　〔返歌を〕おすすめしておいて

ゆれば、御心にもいかがおぼしけむ、（ご自身もどう思われたのだろうか）

「あらはれていとど浅くも見ゆるかな（玉鬘）

あやめもわかず泣かれけるねの

若々しく」とばかり、ほのかにぞあめる。（薄墨で書いてあるようだ）手を今すこしゆゑづけた（筆跡がもう少ししっかりしておれば）らばと、宮は好ましき御心に、いささか飽かぬことと見たまひけむ（この風雅にたけたお心に）（もの足りないとご覧になったことであろう）かし。薬玉など、えならぬさまにて、所々より多かり。おぼし沈みつる年ごろの名残なき御ありさまにて、心ゆるびたまふことも多かるに、同じくは、人の疵つくばかりのことなくてもやみにしがなと、いかがおぼさざらむ。（すばらしい趣向をこらして）（いろいろ気持におゆとりもおできになったので）（顔をお出しになって）

殿は、東の御方にもさしのぞきたまひて、（部下たちを連れてやって来るようなことを言っていましたが）「中将の、今日の司の手結のついでに、男ども引きつれてものすべきさまに言ひしを、さる心したまへ。まだ明きほどに来なむものぞ。あやしく、ここには（夕霧が）（不思議に）（目立たぬように内輪にする催しも）わざとならず忍ぶることをも、この親王たちの聞きつけて、とぶらひものしたまへば、おのづからことことしくなむあるを、用意した（見物にお）（いでになるので）（どうしても大げさなことになりますから）（お心づかい下）

八 兵部卿の宮など親王方が。
九 こちら（花散里の御殿）の廊から見渡す距離もたいしたことはない。馬場は敷地の東側（三巻少女二七五頁）であるから、普通の邸宅の東の中門廊に当るような所。
一〇 前の行に「こなたの廊」とある廊。
一一 近衛府の将監（三等官。正六位上相当）、将曹（正七位下相当）、府生（舎人から選任する）の称。
一二 西の対の玉鬘。
一三 帷を上は白く下を濃く染めた几帳。紫または紺。
一四 下々の用を勤める女。
一五 表青、裏濃い紅梅色。裏白とも。
一六 童女の表着。
一七 紅と藍の中間色。
一八 童女が晴れの時、上に着る。女房の唐衣と裳に当る。後身の尻が長く、前身も左右に長く後ろに引く。（二巻図録一〇参照）
一九 楝の花に似た薄紫色。
二〇 薄萌黄色。
二一 童女、下仕えとも、五日にちなんだ衣裳である。
二二 濃い紅の単二枚を重ねた上に。
二三 表紅梅、裏青。
二四 午後二時前後。
二五 なるほど源氏の言われた通り。
二六 中、少将。手結には参加しない人々も顔を見せるのであろう。

馬場での騎射の催し

まへ」など聞こえたまふ。

馬場の大殿は、こなたの廊より見通すほど遠からず。「若き人々、渡殿の戸あけて物見よや。左の司に、いとよしある官人多かるころなり。せうせうの殿上人に劣るまじ」とのたまへば、物見むことをいとをかしと思へり。対の御方よりも、童女など物見にわたり来て、廊の戸口に、御簾青やかに掛けわたして、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童女、下仕へなどさまよふ。菖蒲襲の袙、二藍の羅の汗衫着たる童女ぞ、西の対のなめる。好ましく馴れたる限り四人、下仕へは、楝の裾濃の裳、撫子の若葉の色したる唐衣、今日のよそひどもなり。こなたのは、濃き単襲に、撫子襲の汗衫などおほどかにて、おのおのいどみ顔なるもてなし、見所あり。若やかなる殿上人などは、目をたてつけしきばむ。未の時に、馬場の大殿に出でたまひて、げに親王たちおはしつどひたり。手結の公事にはさま変りて、次将たちかきつれ参りて、さまことに今めかしく遊び

（源氏）　女房たち　〔女房たちは〕　気の利いたくわんにん　ちょっとした　あちこちする　風情のある物馴れた者ばかり　相手と張り合っている様子は　とりした装いで　花散里の童女　目をつけては流し目を送る　〔源氏は〕　連れ立って　風変りに派手な趣向をこらして

暮らしたまふ。一女は、何のあやめも知らぬことなれど、舎人ども（二）さへ艶（三）なる装束を尽くして、身を投げたる手まどはしなどを見るぞ、（我を忘れてうろたえる姿などを見るのは）（紫の上方でも）をかしかりける。南の町も通して、はるばるとあれば、（おもしろいことだった「馬場は」東南の町に通して）（ずっと続いているので）あなたにもかやうの若き人どもは見けり。打毬楽（四）、落蹲（五）など遊びて、（演奏して）勝負の乱声（六）どものののしるも、（大騒ぎするのも）夜（七）に入り果てて、何ごとも見えずなり果てぬ。舎人どもの禄、品々賜（八）はる。いたくふけて、人々皆あかれたまひぬ。（退散なさった）

大臣（源氏）はこなたに大殿籠（九）りぬ。物語など聞こえたまひて、「兵部卿の宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。（ほかの人とは比べものにならずすぐれていられることだ）容貌（十）などはすぐれねど、用意（心配りや風采など）けしきなど、よしあり、愛敬（魅力的なお人だ）づきたる君なり。忍びて見た（花散里）まひつや。よしといへど、なほこそあれ」とのたまふ。「御弟（十一）にこ（あなたより）そものしたまへど、ねびまさりてぞ見えたまひける。年ごろかくを（お年下でいらっしゃいますが）（ずっと大人びた感じでいらっしゃいます）り過ぐさずわたりむつびきこえたまふと聞きはべれど、昔の内裏（十二）わ（何かの催しには必ずいらしてお親しくなさっているとかがっていますが）たりにてほの見たてまつりしのち、おぼつかなしかし。いとよくこそ容貌（十三）など（お見かけしておりません）ねびまさりたまひにけれ。帥（十四）の親王よくものしたまふめ（立派におなりになりました）

一 女は（武張った騎射など）何も分らないことだけれども。五日にちなんで菖蒲を掛けている。

二 近衛府の兵士。単に近衛ともいう。左右各三百人。

三 「近衛四十人、皂縁（くりのおおい）、緋大繧繝（だいもうけん）布衫前後各一人紫大繧繝細甲形（ほそがぶと）、銀画布冑形（かぶと）、白布帯、横刀（たち）、弓箭（ゆみや）、行騰（むかばき）、麻鞋（わらじ）」（『延喜式』左右近衛府）。五日の節の時の装束である。すなわち緋のしぼり染めの布衫（ふさん）（狩衣の一種）に甲冑をかたどった衣裳を着ける。後の、左近、右近それぞれの馬場における手結の装束は、冠に褐衣（かちえ）（闕腋（けつてき））の袍（ほう）を簡素にした物。布製）で格別のことはない。

四 舞楽の曲名。唐楽（左の楽）、大食調（たいしきちょう）。四人舞、打毬（だきゅう）（玉打ち）にかたどった舞がある。競馬、騎射、相撲（すまう）の時などに奏される。五月六日の武徳殿行幸では実際に打毬を演じながらこの曲を奏した。

五 高麗楽（右の楽）、高麗壱越調（こまいちこつちょう）。二人または一人の舞があり、面を付け、桴（ばち）を持って舞う。競馬、競射、相撲の時などに奏される。納蘇利（なそり）とも。

六 この場合、左が勝てば打毬楽、右が勝てば落蹲を乱声で奏したもの。「乱声」は、拍節なしに笛と太鼓で演奏され、乱れた調子に聞える。

七 勝者、敗者に差などをつけて。

八 人はほめますが、たいしたことはありません。「なほあり」は、平凡だの意。言葉の裏に源氏のわれぼめの気持がある。

九 花散里は昔、姉の麗景殿の女御と共に宮中にい

源氏、花散里の許に泊る

た。（二巻花散里一九三頁参照）

一〇 桐壺院の皇子で源氏の異腹の弟。大宰の帥。この日参会した親王の一人。ここだけに見える人物。

一一 諸王くらいの風格でいらっしゃいます。「大君」は、親王宣下のない皇子、皇孫の称。

一二 取り柄のない人については、よいとも悪いとも批評がましいことはお口になさらない。

一三 人のことについて欠点をあげつらい、見下すような批評をする人を。

一四 髭黒の大将。玉鬘の求婚者の一人（胡蝶四二頁、四六頁参照）。

一五（玉鬘の婿として）近い縁者として付き合うのは。

一六 今はただ表向きの夫婦仲というだけで、お寝床なども別々でお寝みになる。

一七 どうしてこんなふうによそよそしい間柄になってしまったのかと。いつか自然に夫婦の契りはなくなっていた趣。

一八 その馬も食べない草と名高い水際の菖蒲（あなたに相手にされない私）を、今日は五日ですのでお引き立て下さったのでしょうか。「香をとめてとふ人ある菖蒲草あやしく人のすさめざりけり」（『後拾遺集』巻三夏、恵慶法師）、「葦駮の　や　森の　森の下なる若駒率て来　葦毛駮の　虎毛の駒（木）　その駒ぞ　や我に　我に草乞ふ　草は取り飼はむ　水は取り　草は取り飼はむや（末）」（神楽歌「其駒」）による。「駒」は騎射にちなんでいう。

源氏と花散里の唱和

れど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」とのたまへば、〔源氏は〕一目で人柄をお見抜きだとお思いになるがふと見知りたまひにけりとおぼせど、苦笑なさってほほゑみて、なほあるを、よしともあしともかけたまはず。人の上を難つけ、おとしめざまのこと言ふ人をば、〔源氏は〕困ったものとお考えなのでいとほしきものにしたまへば、右大将などをだに、立派な人という評判のようだが心にくき人にすめるを、何ばかりかはある、近きよすがにて見むは、どれほどのことがあろうかもの足りないことであろうかと飽かぬことにやあらむと見たまへど、言にあらはしてものたまはず。

一六 今はただおほかたの御むつびにて、御座なども異々にて大殿籠る。

一七 などてかく離れそめしぞと、殿は苦しがりたまふ。気の毒にお思いになる〔花散里は〕大体が何やかやと嫉妬めいたことをおっしゃることもなくおほかた、何やかやともそばみきこえたまはで、年ごろかくをりふしにつけたる御遊びどもを、その時節にふさわしい様々なお催しを人伝に見聞きたまひけるに、珍しくもこのような催しが行われたことだけでこの丑寅の町にとって大変に名誉なことと満足であるとばかりをぞ、この町のおぼえきらきらしとおぼしたる。

（花散里）一八

その駒もすさめぬ草と名に立てる
汀のあやめ今日や引きつる

一 鳰鳥（かいつぶり）のように、いつも二人水に影を映している若駒（若鷹）の私は、いつ菖蒲のあなたと別れることがありましょうか。鳰鳥はいつも雌雄ひとつがいでいるのでいう。「引き別る」の「引き」は「あやめ」の縁語。「若駒」は、「その駒」の語を受けて同じ神楽歌の歌詞で応じたもので、「ま」「も」の音が相通じるので「若鷹」を掛ける。「若駒と今日にあひ来る菖蒲草おひおくるるや負くるなるらむ」（『頼基集』五月五日駒くらべする所）による。この歌も「若駒」と「若鷹」を掛け、「生ひおくる」と競馬にちなんで「追ひおくる」を掛ける。

二 遠慮のない露骨な二人のお歌ですこと。夫婦仲のことを遠慮なく詠んだ、色気のない歌だという揶揄気味の草子地。

三 帳台の浜床。帳台を寝所として源氏に譲るのである。

四 六条の院の婦人たちは。

五 絵物語（挿絵のついた物語）などの慰み事で。物語を写したり挿絵を描かせたり装幀したりといったこと。

六 （明石の姫君などよりも）一層もの珍しくお思いのことなので。田舎育ちなので、都の婦女子の楽しんだ物語に接する機会もほとんどなかったのである。

玉鬘、物語に熱中、源氏、物語を論ずる

とおほどかに聞こえたまふ。（源氏は）特にどうというお歌でもないが胸を打たれる思いがなさるとおぼしたり。

（源氏）一 にほどりに影をならぶる若駒は
いつかあやめに引き別るべき

二 あいだちなき御ことどもなりや。（源氏）いつもご一緒ではありませんが「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たてまつるは心やすくこそあれ」と、たはぶれごとなれど、（相手が）のんびりしていられるお人柄なのでご冗談ではあるがしてお逢いできるのは安心なことです（源氏は）無理にお誘い申し上げることもなさらないのどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。床をばゆづりきこえたまひて、御几帳引き隔てて大殿籠る。気近くなるといったことはまったく不似合いなことと（花散里は）すっかりあきらめていられるのでどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れ果てきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々、絵物語などのすさびにて、明かし暮らしたまふ。明石の御方は、さやうのことをもよしありてしなしたまひて、姫君の御方にたてまつりたまふ。西の対には、ましてめづらしくおぼえたまふこと

ひどい降りようで（空も心も）
優雅な趣味で見事にお仕立てになって
明石の姫君
玉鬘

七（物語の蒐集、書写、挿絵かきなどに）うってつけの若い女房は大勢いる。

八 それぞれとりどりの世にも珍しい、主人公の身の上などを。以下、物語を読んでの玉鬘の感想。

九『住吉物語』の主人公。現存本は鎌倉時代の改作であるが、大筋は原作とあまり違わないと思われる。典型的な継子いじめの物語。昔、中納言で左衛門の督を兼ねていた人の宮腹の美しい姫君が、継母の讒言で入内もかなわず、縁談も壊され、継母の奸計で、年七十ほどで目のただれた主計頭（主計寮の長官、従五位上相当）に盗み出されようとする。そこで姫君は、故母宮の乳母子の住吉の尼君の許に身を寄せて侘住いするうち、長谷寺の観音のお導きで、姫を慕う少将に見出だされ、都に帰ってしあわせになる。以下の「さしあたりけむをりは」云々は、その住吉の姫君の世評。物語は昔実際にあったことの話という建前だから、作中人物はすなわち昔の実在の人物なのである。

一〇 主計頭がすんでのことに姫を手に入れるところだったことなど、あの大夫の監の恐ろしさも同じであったとお思いくらべになる。

一一 暑苦しい五月雨に輪を掛けて髪の乱れるのも気づかずに。「五月雨」の「みだれ」を下の「乱る」に響かせる。「時鳥をち返り鳴けうなゐ子がうち垂れ髪の五月雨の空」（『拾遺集』巻三夏、躬恒）

一二 こうした昔の世の話でなくては。

の筋なれば、明け暮れ〔物語を〕書き読み、いとなみおはす。つきなからぬ若人あまたあり。さまざまにめづらかなる人の上などを、まことにや〔嘘なのか〕いつはりにや、言ひ集めたるなかにも、〔たくさん物語っている中でも〕わがありさまのやうなるは〔私の今までのような波瀾に富んだ身の上〕なかりけりと見たまふ。〔玉鬘は〕住吉の姫君の、〔その当時の世評のすばらしかったことは〕さしあたりけむをりはさる〔当然として〕ものにて、〔今の世間の受けもやはりたいしたもののようだが〕今の世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさをおぼしなずらへたまふ。

源氏殿も、こなたかなたにかかるものどもの散りつつ、〔こうした絵物語が取り散らしてあって〕御目に離れねば、「あなむつかし。〔源氏〕困ったものだね〔女というものは面倒がりもせずに〕女こそものうるさがらず、〔わざわざ人にだまされようと生まれてきたものらしい〕人にあざむかれむと生まれたるものなれ。〔こんな沢山の物語の中に〕ここらのなかに、〔本当のことは〕まことはいと少なからむを、〔一方では承知の上で〕かつ知る知る、かかるすずろごとに心を移し、〔つまらぬ話にうつつを抜かし〕はかられたまひて、〔ていよくだまされなさって〕暑かはしき五月雨の、髪の乱るるも知らで、〔源氏〕書きたまふよ」とて、笑ひたまふものから、また、〔ほんとに〕「かかる世の古言ならでは、げに〔それにしてもこの嘘八〕何をかまぎるることなきつれづれをなぐさめまし。さてもこのいつ〔百を並べ立てた中に〕はりどものなかに、〔なるほどさもあろうと人の心を打ち〕げにさもあらむとあはれを見せ、〔もっともらしく言葉〕つきづきしく

一　多少とも心がひかれるものですよ。以上、主人公が物思いに沈むといった情趣的な場面。物語の一つの要素である。

二　以下、奇抜な人目を驚かすような物語の趣向。伝奇的な要素。これも物語の持つもう一つの要素である。

三　とっさには興味をそそられる効果満点といったものもあるでしょう。

四　なるほど、日頃嘘ばかりつき馴れている人は、いろいろと、そのように邪推もしましょう（が）。暗に源氏を諷した気持があろう。

五　今まで物語を写していたのが、身を入れて反論するしぐさ。

六　物語は、神代の昔からこの世に起ったことを書き留めておいたものなのでしょう。伝承の記録という意味では国史と変らない、むしろ国史よりも委しいと次に言う。

七　『日本書紀』。わが国最初の正史。

八　（物語は）誰それの身の上ということで、ありのままに物語ることはないけれども。以下、物語の細論。物語には誇張はあるが、この世の人間の姿を伝える点では国史と変らないという主旨を展開する。

を連ねたところには　たわいもないことと心得ではおりながら　むやみに感動し

続けたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、

かわいらしげな姫君が悲しみに沈んでいるのを見ると

らうたげなる姫君のもの思へる見るに、一かた心つくかし。二またいと

大げさに誇張して物語っているところが目を見張

あり得ないことだと思いながらも　とても

あるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが

落着いて二度目に聞く時は感心しないけれども

る思いがされて

目おどろきて、静かにまた聞くたびぞ憎けれど、三ふとをかしき節、

明石の姫君

あらはなるなどもあるべし。このころをさなき人の、女房などに時

なんと口先のうまい者がこの世にいることですね

時読まするを立ち聞けば、ものよく言ふものの世にあべきかな。虚

根も葉もない嘘をつきなれた口から言い出すのであろうと思われますが

言をよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれど、さ

でもありませんか

しもあらじや」とのたまへば、「げにいつはり馴れたる人や、さま

（玉鬘）四

〔私には〕ただどうしても本当のこととしか思われません

ざまにさもくみはべらむ。ただいとまことのこととこそ思うたまへ

〔源氏〕ぶしつけに〔物語を〕悪く申し

られれ」とて、五硯をおしやりたまへば、「こちなくも聞こえおと

てしまったことです

してけるかな。六神代より世にあることを、記しおきけるななり。日

本紀などは、ほんの片端にすぎないものです　物語のたぐい　為になる細かいこ

とは書いてありましょう

ただかたそばぞかし。これらにこそ道々しくくはしき

ことはあらめ」とて、笑ひたまふ。

（源氏）八

「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よき

善悪い

九 見ているだけでは満足できず、聞くだけでは自分の胸一つに収めておけないことを。
一〇 読者の好奇心におもねろうとしては。
一一 皆、善悪それぞれの面で誇張しただけのことで。物語の人物が広い意味での善玉、悪玉にはっきり分れていることは周知の通りである。
一二 異朝（中国の朝廷）では、学問（歴史についての考え）も記述の体裁もわが国とは違います。この一句、解しがたく、異文も多く、諸説も多い。
一三 （国史と物語とでは）同じ日本の国のことですから、昔からの国史と今出来の物語とでは違いがあるはずですし。
一四 物語の実情にそぐわない話なのです。
一五 仏が、（間違いのあろうはずのない）立派なお心からこの世に残されたお教え（経文）でも。
一六 相手の時と場合に応じて様々な説き方をなさるということがあって。
一七 経文のあちらこちらでお教えが違うという疑いを抱くに違いないことなのです。
一八 華厳、法華など大乗経典の総称。
一九 悟りと迷いの違いとは、今ここでいう、物語に誇張された善人と悪人の違いと同じ程度の違いなのです。逆に言えば、煩悩即菩提の道理と同じように、善といい悪といっても、この世のほかのことではないという点で、結局は一に帰すると論を結ぶ。

もあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて、言ひおきはじめたるなり。（物語ることになったものなのです）よきさまに言ふとては、（よい人だと言おうとするあまりよいことばかりを）ことの限り選り出でて、人に従はむとては、（悪い行状の世にもあり得ないようなことを次々に言い連ねるのは）またあしきさまのめづらしきことを取り集めたる、（この世間に実際にないことではありません）皆かたがたにつけたる、この世のほかのことならずかし。人の朝廷のざえつくりやう変る、同じ大和の国のことなれば、昔今のに変るべし、（意味深い国史と浅はかな物語という差はありましょうが〔物語を〕一途に）深きこと浅きことのけぢめこそあらめ、ひたぶるに虚言と（言い切ってしまうのも）言ひ果てむも、ことの心違ひてなむありける。仏の、いとうるはしき心にて説きおきたまへる御法も、方便といふことありて、悟りなきものは、ここかしこ違ふ疑ひを置きつべくなむ。方等経（〔方便説は〕）のなかに多かれど、（詮じつめてゆくと同一の主旨に落ちて）言ひもてゆけば、ひとつ旨にありて、菩提と煩悩との隔たりなむ、この、人のよきあしきばかりのことは変りける。よく言へば、すべて何ごとも空しからずなりぬ（無駄ではなくなってしまいます）や」と、物語を、いとわざとのことにのたまひなしつ。（ほんとにたいした物のように論じてしまわれた）

源氏、物語にかこつけて玉鬘に言い寄る

一 それにしても、こうした古い世の物語の中に、私のように馬鹿正直な間抜け者の話はありますか。いくら冷たくされても私はあなたに実意を尽しているのだ、と言う。

二 恐ろしく人情味のない物語の姫君でも。

三 さあ（私たち二人の仲を）世にまたとない物語にして。

四 このような世にも珍しい話は。父が娘に言い寄るといったこと。

五 世にも珍しいとお思いですか。（私も）ほんとにこれほどまでに人を思ったことはありません。玉鬘の言葉をそらして、からんでゆく。

六 思案に余って昔の人のこと（物語）を捜しても親の意向に背く子は例がありませんよ。

七 『心地観経』には、父母恩、衆生恩、国王恩、三宝恩を四恩とする。

八 昔の人のことを捜しても、おっしゃる通り例のないことでした、この世に、こうした（娘に思いをかけるような）親の心は。

（源氏）一「さてかかる古言のなかに、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。二いみじく気遠きものの姫君も、御心のやうにつれなく、そら（あなたのように冷たくて）おぼめきしたるは世にあらじな。三いざたぐひなき物語にして、世に（語り伝えさせよう）伝へさせむ」と、さし寄りて聞こえたまへば、顔を引き入れて、（玉鬘）「さ（禁に）（うでなくても）らずとも、四かくめづらかなることは、世語りにこそはなりはべりぬべかめれ」とのたまへば、（源氏）五「めづらかにやおぼえたまふ。げにこそ（寄り添っていられる様子は）またなきここちすれ」とて寄りゐたまへるさま、いとあざれたり。（いかにも色っぽい）

（源氏）六「思ひあまり昔のあとをたづぬれど
親にそむける子ぞたぐひなき
（きびしくいましめていますのに）
七不孝なるは、仏の道にもいみじくこそ言ひたれ」とのたまへど、（玉鬘は）ももたげたまはねば、（源氏は）御髪をかきやりつつ、いみじく怨みたまへば、（やっとのことで）からうして、

（玉鬘）八ふるき跡をたづぬれどげになかりけり
この世にかかる親の心は

九　こんな具合で末はどうなるお二人の仲なのでしょう。草子地。

一〇　未詳。河内本は「こまの物語」あるいは「こまの物語」。「こまの物語」は『枕草子』の「物語は」の段に見え、また「成信の中将は」の段に「こまの物語は、何ばかりをかしきこともなく、言葉も古めき、見所多からぬも、月に昔を思ひ出でて、虫ばみたる蝙蝠取り出でて、もと見し駒に、と言ひて尋ねたるが、あはれなるなり」とある。今は失われて伝わらない。

明石の姫君と物語

一一　源氏を疑うこともなく無邪気に馴れ親しんでいた昔のわが身の有様をお思い出しになって。幼い姫君が昼寝していたところへ男君が来て契りを結ぶといった場面と思われる。

一二　私などはやはり語り草にもなるほど、おっとりしているところは人と違っていました。幼い紫の上の成長を待っていたことをいう。

源氏の教育上の配慮

一三　おっしゃる通り、世間にそう例のない珍しい恋ばかりなさってこられたのですものね。草子地。「好む」は、自分の嗜好によって選ぶ意。

一四　自分に対する扱いとは雲泥の差だと、玉鬘が聞かれたら、心証を悪くされそうなおっしゃりようだ。

一五　紫の上。

と聞こえたまふも、〔源氏は〕気はずかしいので心はづかしければ、いといたくも乱れたまはず。かくしていかなるべき御ありさまならむ。

紫の上も、姫君の御あつらへにことづけて、物語は捨てがたくお思いである明石の姫君のためのご注文にかこつけてぼしたり。一〇くまのの物語の絵にてあるを、絵に描いてあるのを〔源氏〕「いとよく描きたる絵かな」とて御覧ず。小さき女君の、幼い何心もなくて昼寝したまへるとこ場面の無邪気にろを、昔のありさまおぼし出でて、一一女君は見たまふ。紫の上「かかる童ど〔源氏〕子供同士でもちだに、いかにされたりけり。一二まろこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」と聞こえ出でたまへり。一三げにたぐひ多からぬことどもは好み集めたまへりけりかし。

〔源氏〕「姫君の御前にて、この世馴れたる物語など、な読み聞かせたまひそ。みそか心つきたるものの娘などは、内緒ごとをするようになった物語の達者な色恋沙汰の をかしとにはあらねど、かかること世にはありけりと、〔姫君が〕当り前のように思われたら大変です見馴れたまはむぞゆゆしきや」とのたまふも、一四こよなしと、対の御方聞きたまはば、心置きたまひつべくなむ。上、一五「心浅げなる人まねどもは、物語の人物に浅はかに見習ったのは見ていてもはがゆく思われます見るにもかたはらいたくこ

一『宇津保物語』の藤原君（源正頼の幼名）の娘（九の君）、貴宮。多くの求婚者の絶望、悲嘆をよそに、東宮妃になった。現存の『宇津保物語』には、巻名も「藤原の君」とあるが、幼名としては「の」を入れないのが慣例であるから、本来は底本のように「の」のない表記が正しいであろう。

二 女らしいところがないようなのが、どうにも一本調子にすぎるように思われます。お手本にならない人物だという批評。「ひとやう」は、一様。

三 たしなみもなくはない（立派な）親が。以下は、貴宮のようなしっかりした人物とは逆の、能なしの箱入娘といったタイプへの言及。

四 なるほど、そうは言っても。以下、再び、かたよってはいても、貴宮的なしっかりした娘に話をもどす。

五 育てたかいもあり、親も鼻高々というものです。

六 大体、ろくでもない者に、どうか娘をほめさせたくないものです。下手な人間に下手な評判は立ててもらいたくないという気持。

七 人に後ろ指をさされるようなことがないように、あれやこれやといろいろ考えてはおっしゃる。

八 そういう継母の心底がよく分って、気に入らぬとお思いになるので。紫の上との間柄を考慮した、姫君への教育的な配慮。「心見え」は、心底が見透かされる意。

そ。宇津保の藤原君の女こそ、いと重りかにはかばかしき人にて、（とても思慮深く　しっかりした人で）あやまちなかめれど、すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しきところなかめるぞ、ひとやうなめる」とのたまへば、「うつつの人もそういうものようです　ものを知りません　さぞあるべかめる。人々しく立てたるおもむき異にて、よきほどにかまへぬや。よしなからぬ親の、心とどめて生ほしたてたる人の、子めかしきを生けるしるしにて、後れたること多かるは、何わざしてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやらるるこそいとほしけれ。げにさいへど、その人のけはひよと見えたるは、かひあり、おもだたしかし。言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることのなかに、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。すべて、よからぬ人に、いかで人ほめさせじ」など、ただこの姫君の、点つかれたまふまじくと、よろづにおぼしのたまふ。継母の腹ぎたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしとおぼせば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵など

（源氏）実際の人もえてして　物の加減という　注意して　育て上げた娘が　一人前にそれぞれが自分を譲らず　一つの取柄で　一体どんな育て方をしていたのかと　育て方まで想像されるのはまことに気の毒なものです　おっとりしているのだけがただ　劣ったところが多いのは　間違いはないでしょうが　いかにも味気ない歌を返すそのやり方も　いかにもその人らしいやり方と思えるのは　〔人が〕口をきわめて気はずかしいほどほめていたのに　〔その娘の〕　なるほどと感心されるところがないのは　まことに　がっかりさせられるものです　明石の姫君が　意地悪をする　立派に書き写させ

夕霧と明石の姫君　夕霧、雲居の雁を忘れず

九　こちら（紫の上の所）には近づけないように源氏は扱っていらっしゃるが。若い義母である紫の上と夕霧との間の間違いを警戒する。

一〇　やはり日頃から馴染んで、いろいろ親しみをいだいている人のことは、格別に思われるに違いないとお思いになって。夕霧が将来姫君の後楯となる場合のことを源氏は考える。

一一　南の廂の間へのお出入りは自由にさせていらっしゃる。

一二　台盤所、すなわち女房の詰所へのお出入りは禁じていらっしゃる。奥向きへの出入りを禁ずるのは、女房を籠絡して紫の上に近づく道を封ずるため。

一三　姫君は、まだあどけないお人形遊びなどを好まれるご様子がうかがわれるので。今年八歳。

一四　夕霧は、お人形遊びのお相手をこまごまとなさりながら。人形遊びの御殿や牛車などもあるので、こういう。

一五　しかるべきあたりには。機会もあり気もひかれる女のいる所には。

一六　女が結婚の望みをいだくような仕向けはしない。深入りはしない。

一七　夫人あるいは愛人として世話してもよいなと。

にも描かせたまひける。

中将の君を、[九]こなたには気遠くもてなしきこえたまへれど、姫君の御方には、さしもさし放ちきこえたまはずならはしたまふ。わが世のほどは、とてもかくても同じことなれど、なからむ世を思ひやるに、[一〇]なほ見つき、思ひしみぬることどもこそ、取り分きてはおぼゆべけれとて、南面の御簾のうちは許したまへり。台盤所、[一二]女房のなかは許したまはず。あまたおはせぬ御仲らひにて、いとやむごとなくかしづききこえたまへり。おほかたの心もちゐなども、いとも慮深くのものしく、まめやかにものしたまふ君なれば、うしろやすくおぼしゆづれり。[一三]まだいはけたる御雛遊びなどのけはひの見ゆれば、かの人の、もろともに遊びて過ぐしし年月の、まづ思ひ出でらるれば、[一四]雛の殿の宮仕へ、いとよくしたまひて、をりをりにうちしほたれたまひけり。[一五]さもありぬべきあたりには、はかなしごともたまひ触るるはあまたあれど、[一六]頼みかくべくもしなさず。[一七]さるかたにな

夕霧
自分の
それほど遠ざけることのないように今から習慣づけていらっしゃる
どちらにせよ
生きているうちは
死んだあとのことを考えてみると
何人もいらっしゃらぬお子たちなので
〔源氏は〕お二人をそれは大切にお世話申し上げていらっしゃる
〔夕霧は〕何事につけものの考え方なども
とても思
ましめ一方でいらっしゃるお方なので
〔源氏は〕安心して姫君のお相手を任せていられる
雲居の雁が
時々涙ぐんでいらっしゃるのであ
軽い気持で言い寄ったりなさる女
大勢いるけれども

一 やはり、あの「緑の袖」（六位風情）と馬鹿にされたのを、立派に出世した婿の姿で見返してやりたいと思う気持だけが、ほっておけない重大事として忘れられないのであった（三巻少女二五三頁参照）。

二 （内大臣も）成行きに折れて結婚をお許しも下さろうが。「倒るる方に」は、二巻賢木一八三頁注一三参照。

三 雲居の雁ご本人だけには、並々ならぬ自分の気持を十分に示して。文通は怠らないのである。

四 雲居の雁のご兄弟たちなども、（落着いている夕霧を）ひどく小憎らしいと思ったりすることが多い。相手の屈して来るのを待とうとする夕霧の作戦が図に当った趣。

五 内大臣の長子。柏木。（胡蝶三三五頁参照）

六 恋文の仲立ちを頼む者もいかにも頼りないので。「みると」のこと（胡蝶四五頁参照）。

七 他人のこととなると、（恋にうつつを抜かすなど）感心できないことですね。

八 （張り合うことにかけては）昔の父大臣たち（源氏と内大臣―頭の中将―）のお間柄に似ている。草子地。

九 北の方はじめ夫人たちのそれぞれに。

一〇 子供たちそれぞれ思い通りというに近い声望や権勢の身の上で。

内大臣、夕顔の生んだ子を心にかける　夢解きのこと

どかは見ざらむと、心とまりぬべきをも、強ひてなほざりごとにしなして、なほかの緑の袖を見え直してしがなと思ふ心のみぞ、やむごとなき節にはとまりける。あながちになどかかづらひまどはば、たふるるかたに許したまひもしつべかめれど、つらしと思ひしをり折にをり、いかで人にもことわらせたてまつらむと思ひおきし、忘れがたくて、正身ばかりには、おろかならぬあはれを尽くし見せて、おほかたにはいられ思へらず。兄の君達なども、なまねたしなどのみ思ふこと多かり。対の姫君の御ありさまを、右の中将は、いと深く思ひしみて、言ひ寄るたよりもいとはかなければ、この君をぞかこち寄りけれど、「人の上にては、もどかしきわざなりけり」と、つれなくいらへてぞものしたまひける。昔の父大臣たちの御仲らひに似たり。

（気に入りそうな女も）（とにして）（一）（無理に一時の浮気沙汰といったこ）（是が非にもとしつこくなりふり構わずお願いしたら）（二）（折に）（どうか内大臣にも理非を分けて反省していただこうと心に決めたことが）（三）（表）（向きはあせらずおっとり構えている）（四）（玉鬘）（五）（心にかけて）（夕霧に泣きついたけれ）（夕霧）（六）（七）（けなくあしらっていらっしゃるのだった）（八）

内の大臣は、御子ども腹々いと多かるに、その生ひ出でたるおぼえ、人柄に従ひつつ、心にまかせたるやうなるおぼえ、勢にて、皆

（九）（一〇）（母方の身分による声望）

一一 弘徽殿の女御。
一二 こうして目論んでいらっしゃったことが思い通りになられず。源氏の推す秋好む中宮が立后したこと。（少女二三〇頁参照）
一三 東宮妃を志していたのに、夕霧と恋仲になってそれもかなわぬようなことでいられるので。
一四 夕顔との間に生れた女の子。（一巻帚木七二～七四頁参照）
一五 思慮もない頼りない女だった母親の料簡のせいで。頭の中将（内大臣）は「これこそ、のたまへるはかなき例なめれ」「これなむ、えたもつまじくたのもしげなきかたなりける」と言った（帚木七四頁参照）。
一六 どのような暮しをしているにせよ、その娘の噂が聞えて来たら（引き取ろう）と。
一七 ご子息たち。
一八 この子の母親は、全くそんなありふれた間柄とも思わなかった女なのだが。夫人の一人として扱うことも考えたほどの人だったというほどの気持。
一九 つまらぬことで私を怨んで（姿を隠して）。「ものの倦じ」は、悲観すること。
二〇 こうして結局は数少ない自分の娘の一人を。「もののくさはひ」は、ここは、大事に扱う種になるもの。
二一 一頃などは、それほどでもなく。「中ごろ」は、昔と今の間の時期を漠然とさす。

なし立てたまふ。女はあまたもおはせぬを、女御も、かくおぼししことのとどこほりたまひ、姫君も、かくこと違ふさまにてものしたまへば、いとくちをしとおぼす。かの撫子を忘れたまはず、ものをりにも語り出でたまひしことなれば、いかになりにけむ、ものはかなかりける親の心に引かれて、らうたげなりし人を、行方知らずなりにたること、すべて女子といはむものなむ、いかにもいかにも目放つまじかりける、さかしらにわが子といひて、あやしきさまにてはふれやすらむ、とてもかくても聞こえ出で来ばと、あはれにおぼしわたる。君達にも、「もしさやうなる名のりする人あらば、耳とどめよ。心のすさびにまかせて、さるまじきことも多かりしなかに、これは、いとしかおしなべての際にも思はざりし人の、はかなきものうむじをして、かく少なかりけるもののくさはひ一つを、失ひたることのくちをしきこと」と、常にのたまひ出づ。中ごろなどはさしもあらず、うち忘れたまひけるを、人の、さまざまにつけて、

（お取り立てになっている）（雲居の雁）（あの雨夜）（どうなったことであろう）（の品定めにも）（かわいらしい子だったのに）（女の子というものは）（くれぐれも目を離してはいけないものなのだった）（勝手に自分の子供と名乗って）（私の子供だと名乗る者がいたら）（内大臣）（感心しない女出入りも）（若い頃）（好き心のおもむくままに）（のがすな）（聞き）（お気にかけ続けていらっしゃる）（れていることだろうか）（源氏などが）（あれこれと）

一　女の子を大事にしていられるといった方々が多い中で、ご自分のお思い通りにもならないのが、とても情けなく、残念にお思いなのであった。たとえば東宮妃にでもと思えるような娘のいないのを残念がる。

二　夢合せの上手な者をお召しになって、夢の意味をお解きになったところ。夢は何かの前兆と考えられていたので、夢の意味を解くことを「合はす」という。それを業とする者を夢解きという。

三　もしや長年お気づきでいらっしゃらないお子を、誰かの養女としてお耳になさっていることがございませんか。

四　女の子が人の養子になることはめったにないことだ。男子の養子の例は当時よくあるが、女子の場合は珍しいことだったらしい。

女子（をんなご）かしづきたまへるたぐひどもに、わが思ほすにしもかなはぬが、いと心憂く、本意（ほい）なくおぼすなりけり。

〔内大臣は〕夢見たまひて、二いとよく合はするもの召して、合はせたまひけるに、（夢解き）三「もし年ごろ御心に知られたまはぬ御子を、人のものになして、聞こしめし出づることや」と聞こえたりければ、（内大臣）四「女子（をんなご）の人の子になることは、をさをさなしかし。（一体どうしたことなのであろう）いかなることにかあらむ」（近頃は不審がっておっしゃっていられるようだ）など、このころぞおぼしのたまふべかめる。

常夏（とこなつ）

前巻と同じ夏、炎暑の頃である。源氏が東の釣殿で夕霧を交えて涼んでいると、内大臣家の君達が訪れる。夕霧と雲居の雁の結婚を許さぬ内大臣に対して含むところのある源氏は、早速、近頃内大臣家に迎えられたご落胤近江の君のことを話題にし、痛烈な皮肉を言う。

夕暮れ、源氏は、西の対の玉鬘のもとに君達を伴う。実の姉弟とも知らぬ人人は、庭前の常夏の花にも玉鬘を見る思いで胸をときめかし、玉鬘は、源氏と父の不仲を知って、実の親に対面の日の遠いことを予想する。源氏は、玉鬘に和琴を教えながら、いよいよ彼女にひかれるが、その将来を思ってよく自制する。昔の雨夜の品定め以来の縁を思い、常夏の花に寄せて交わした歌は、巻名の拠るところである。また、この時源氏が和琴について論じた一段は、螢の巻の物語論に並ぶものといえよう。

一方、内大臣は、娘たちの身の振り方に頭を痛めていた。美しい雲居の雁を見ては、心弱く夕霧に許そうかと思うが、先方が一向に折れて来ないのが腹立たしい。

近江の君のはしたなさはあきれるばかりで、とても大臣家の姫君として通らない。処置に窮した内大臣は、これを弘徽殿の女御のもとに、女房として出仕させることにした。大喜びの近江の君は早速に、ご挨拶の文をさし上げ、これがまた物笑いの種になる。この巻は、源氏と内大臣の膝下に育つ娘たちを対照的に書き分けて、源氏の優位を示しつつ、玉鬘への恋の深まりを逐っている。

源氏、釣殿に、夕霧や内大臣の子息たちと納涼を楽しむ

〔源氏は〕一東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ。中将の君もさぶらひたまふ。二親しき殿上人あまたさぶらひて、三西川よりたてまつれる鮎、四近き川のいしぶしやうのもの、五御前にて調じて参らす。例の六大殿の君達、中将の御あたり尋ねて参りたまへり。〔源氏〕退屈で「さうざうしくねぶたかりつる、をりよくものしたまへるかな」とて、大御酒参り、氷水召して、水飯など、とりどりにさうどきつつ食ふ。

風はいとよく吹けども、日のどかに曇りなき空の、西日になるほど、蟬の声などもいと苦しげに聞こゆれば、〔源氏〕九「水の上無徳なる今日の暑かはしさかな。無礼の罪は許されなむや」とて、寄り臥したまへり。〔源氏〕全くこう暑くては「いとかかるころは、遊びなどもすさまじく、さすがに暮らしがたきこそ苦しけれ。宮仕へする若き人々堪へがたからむな。帯一〇

一 六条の院の南の町の東の釣殿。（胡蝶三二頁注二参照）

二 お出入りの殿上人。「殿上人」は、四位五位で、宮中の昇殿を許された者、および六位の蔵人をいう。

三 桂川のこと。東川（賀茂川）、中川（京極川の二条以北をいう）に対する。西川は、右衛門府が管理し、夏、鮎を朝廷に献上する。（三巻図録五参照）

四 中川や賀茂川であろう。

五 「いしぶし」は、川魚の一種。鯊に似た小魚。河床の石の間に潜むところから、命名されたらしい。

六 内大臣家の子息たち。後文に出る弁の少将など。

七 氷を入れた水。氷は、冬、雪を固めて氷室（土中深く掘りこんだ室）に詰めこみ、夏に切り出して用いる。『延喜式』主水司に、氷室計二十一箇所、山城、大和、河内、近江、丹波の五箇国にわたって見える。

八 姫飯（今の炊いた飯）、または干飯に水をかけたもの。冬の湯漬に対する。

九 涼しいかと思った水の上も、何の役にも立たない今日の暑さだね。

一〇 帯、紐も解かぬ堅苦しさではね。「帯」は、束帯の腰を締める石帯。「紐」は、首をとめる入れ紐。（二巻図録九、一一参照）

紐解かぬほどよ。ここにてだにうち乱れ、このころ世にあらむことの、すこしめづらしく、ねぶたささめぬべからむ、語りて聞かせたまへ。何となく翁びたるここちして、世間のこともおぼつかなしや」などのたまへど、めづらしきこととて、うち出で聞こえむ物語もおぼえねば、かしこまりたるやうにて、皆いと涼しき高欄に、背中押しつつさぶらひたまふ。

「いかで聞きしことぞや、大臣のほか腹の女尋ね出でて、かしづきたまふなるとまねぶ人ありしは、まことにや」と、弁の少将に問ひたまへば、「ことことしく、さまで言ひなすべきことにもはべらざりけるを、この春のころほひ、夢語りしたまひけるを、ほの聞き伝へはべりける女の、われなむかこつべきことあると、名のり出ではべりけるを、中将の朝臣なむ聞きつけて、まことにさやうに触ればひぬべきしるしやあると、尋ねとぶらひはべりける。くはしきさまは、え知りはべらず。げにこのころめづらしき世語りになむ、人々

せめて私の所でなりと楽にして　近頃世間に起ったことで　睡気の覚めるようなことを　事情にうとくなりました　人々は　思いつかないので　恐縮したていで　どうして耳に入ったのか　弁少将　大げさに　そんなに言い立てるほどのことでもございませんでした　人伝てに小耳にはさみました女が　私は　全く近頃には珍しい　語り草に　世間の

一 何となく年寄りじみた気がして。源氏三十六歳。太政大臣として、特別のことがない限り、朝廷にも出仕しないからである。

二 どなたも皆、風通しのよい高欄に背をもたせて、控えていらっしゃる。

三 内大臣が妾腹の娘を捜し出して、大切になさっているそうだと話してくれた人がいたが、本当の話だろうか。近江の君のことを言い出す。

源氏、近江の君のことを尋ねる

四 内大臣の次男。賢木の巻に「四の君腹の次郎」（二巻一八二頁）とあった人。初音二七頁に見える。源氏は、内大臣の子息たちのうち、一座の最年長者に尋ねる。長男の柏木は来ていないのである。

五 今年の春頃、（父が）ご覧になった夢のことを話されましたところ。夢語りのことは、螢八二頁参照。

六 私には、お訴え申すべき仔細があると。昔、内大臣の寵を受けて娘を産んだという。

七 柏木のこと。

八 真実、その女が言うように、縁がある（父娘だ）と言ってよい証拠があるかと、事情を調べました。

九 こんな落胤があるなどといったことは、父にとって、自然と家門の恥になることでございました。「家損」は、家の疵の意。

一〇 ずいぶん大勢いらっしゃるお子たちの列から外れている者まで。『河海抄』に「類よりもひとり離れて飛ぶ雁の友に後るるわが身悲しも」（『曾丹集』）を引く。

一一 私の方は、子供が少ないので、そんな娘を見つけ出したいが、名乗り出ても大したことはない家と思うのか、とんと耳にしないね。内大臣に対する皮肉。「もののくさはひ」は、大切に養育する種になるもの。

一二 底まで清く澄まぬ水に映る月は、曇らぬわけがなんであろう。身分の低い女の腹に立派な子が宿るはずはない。源氏は、かなり詳しい情報を握っている様子。

一三 当のご落胤（近江の君）について、詳しく聞き知っていらっしゃるので、とても真面目ぶってはいられない。源氏のあてこすりに、ついにやりとする。友人の柏木からいろいろ聞いているのであろう。

一四 内大臣の子息。弁の少将の弟。

一五 第二人称の敬称。夕霧に対する呼び掛け。

一六 せめてそんな落し胤（だね）でもらったらどうか。

一七（内大臣に求婚を断られて）体裁の悪い評判が後後まで残るよりは、血のつながる姉妹との結婚で満足して、何の悪かろうものか。「かざし」は、冠などに挿す花や枝葉。前の「落葉」の縁でいう。雲居の雁と近江の君は異腹の姉妹であることからいう。

一八 昔から、さすがにしっくりゆかなかったのだが。

もしはべるなる。（九）かやうのことこそ、人のため、おのづから家損（けそん）なるわざにはべりけれ」と聞こゆ。（噂は本当だったのだと）まことなりけりとおぼして、（源氏）「い。（一〇）と多かめる列（つら）に離れたらむ後（おく）るる雁（かり）を、強（し）ひて尋ねたまふが、（欲張りふくつけきぞ。（一一）いとともしきに、さやうならむもののくさはひ、見出でまほしけれど、名のりももの憂（う）き際（きは）とや思ふらむ、さらにこそ聞こえね。（それにしても お門違いではあるまい）さても、もて離れたることにはあらじ。（内大臣も）昔はやたらにあちこちらうがはしくとかくまぎれたまふめりしほどに、（一二）底きよく澄まぬ水にやどる月は、曇りなきやうのいかでかあらむ」と、（夕霧）ほほゑみてのたまふ。中将の君も、（一三）くはしく聞きたまへることなれば、えしもまめだたず。（弁の少将）少将と藤侍（一四）従（じゅう）とは、いとからしと思ひたり。（源氏）（一五）「朝臣（あそむ）や、（一六）さやうの落葉をだに拾へ。（一七）人わろき名の後（のち）の世に残らむよりは、同じかざしにてなぐさめむに、なでふことかあらむ」と、弄（ろう）じたまふやうなり。かやうのことといったてぞ、（一八）うはべはいとよき御仲の、昔よりさすがに隙（ひま）ありける、まいて中将（夕霧）をいたくはしたなめて、わびさせたまふつらさをおぼし

人もしているようです
お忍び歩きをなさっていたようだから
痛い批評だと
弁の少将
源氏と内大臣の
こうした張り合いといった面で
愚弄するようなお口ぶりだ
ひどくつらい立場に立たせて
嘆かせていらっしゃる内大臣の無情さを腹に据

一（自分がこんな憎まれ口をきいているのを）漏れ聞いて、内大臣がくやしいともお思いになるがよいと源氏はお考えなのだった。

二 西の対の姫君（玉鬘）を、内大臣に対面させたら。以下「いときびしくもてなしてむ」まで、源氏の心中の思い。

三 善悪の区別も、大げさに賞め上げたり、またけなしたり軽んじたりすることも、人一倍激しい大臣だから。

四（美しい玉鬘が源氏の手許に擁せられていると知ったら）どんなに腹立たしく思うだろう。

五（養育の恩を）おろそかにはお考えになれまい、ずいぶんありがたく思うような態度に出てやろう。

六 玉鬘のいる御殿。東の町にある。

七 夕暮れ時。薄暗くて、人の顔が「誰そ彼は」と見分けがたいところからいう。

源氏、人々を引き連れて、西の対に行く

八 どなたも同じ色の直衣をお召しなので。「直衣」は、貴族の平常着。夏は、若年は二藍（紅に藍をかけた二度染め）を着用。年長者は、縹（薄い藍色）なので、源氏だけは別である。

九 前出。弁の少将、藤侍従。

一〇（あなたのところへは）宙を飛んでも来たいほどに思っているのに。まだ、玉鬘を実姉と知らないから、この二人も思いを寄せている。

あまりて、一なまねたしとも漏り聞きたまへかしとおぼすなりけり。（源氏は）こんな話をお聞きになるにつけても

かく聞きたまふにつけても、二対の姫君を見せたらむ時、またあなづらはしからぬかたにもてなされなむはや、いとものきらきらしく、（これには軽からぬお扱いをなさることであろうよ）

かひあるところつきたまへる人にて、三よしあしきけぢめも、けざやかにもてはやし、またもて消ち軽むることも、人に異なる大臣なれば、四いかにものしと思ふらむ、おぼえぬさまにて、この君をさし出でたらむに、五え軽くはおぼさじ、いときびしくもてなしてむ、などおぼす。（打てば響くようなところがおありになる方なので）（万事にはっきりしていて）（内大臣が）予想もせぬところへ（玉鬘）

暮れゆくままに吹く風が

夕つけゆく風いと涼しくて、帰り憂く若き人々は思ひたり。（源氏）「心楽にくつろいで涼むとしよう

やすくうちやすみ涼まむや。やうやうかやうのなかに（こうした若い人たちに）厭はれぬべき齢にもなりにけりや」とて、六西の対にわたりたまへば、君達皆御送りに参りたまふ。七たそかれ時のおぼおぼしきに、八同じ直衣どもなれば、何ともわきまへられぬに、大臣、姫君を、「すこし外出でたまへ」とて、忍びて、九「少将、侍従など率てまうで来たり。一〇（薄暗さに）（玉鬘）（源氏）（誰それと区別もつかないが）（連れて参りました）

一一 中将（夕霧）が無類の堅物ときいていて（こちらに）連れて来ないのは、思いやりのないことです。
一二 つまらぬ家の娘でも、未婚の時は。「窓のうちなるほど」は、深窓に養われている間、の意。
一三 （こう人々が玉鬘に関心を持つところからみれば）わが家の評判は、内幕のこまこましいわりには。「くだくだし」は、細かくつまらぬこと。源氏の謙辞。
一四 この六条の院には、女君たちがいらっしゃるが、何といっても、男が恋を語らおうとするには似合わしくない。「めり」は、婉曲に言ったもの。源氏の夫人たちは、年長けて、若い貴公子の相手にはふさわしくないという。
一五 あなた（玉鬘）が、こうしてわが家にいて下さるのは。
一六 玉鬘の御殿の庭。
一七 撫子の色の美しいのばかりを揃えて、唐撫子も大和撫子も、まわりに垣をごく風雅に結んで、咲き乱れている夕明りの風情は、まことに美しい。唐撫子は、観賞用に中国から渡来したもの。石竹。
一八 思いのままに手折らないのを不満に思って佇んでいる。撫子を玉鬘に見立て、思うままにわがものとできないのをくやしく思っていることを暗示する。玉鬘を撫子によそえたのは、すでに父頭の中将の話に見えるのにちなむのであろう（一巻帚木七二頁参照）。
一九 皆識見のある連中だ。玉鬘に話しかける。
二〇 内大臣の長男。柏木。この席には来ていない。

り来まほしげに思へるを、一二中将の、いと実法の人にて率て来ぬ、無心なめりかし。この人々は、皆思ふ心なき（下心がなくはあるまい）ならじ。一三なほなほしき際をだに、窓のうちなるほどは、ほどに（その身分なりに）従ひて、ゆかしく（気をひかれるものらしいから）思ふべかめるわざなれば、一三この家のおぼえ、うちうちのくだくだしきほどよりは、いと世に（全く分に過ぎて）過ぎて、ことことしくなむ（大げさに噂もし考えてもいるようだ）言ひ思ひなすべかめる。一四かたがたものすめれど、さすがに人の好きごと言ひ寄らむにつきなしかし。一五かくてものしたまふは、いかでさやうならむ人のけしきの、深さ浅さをも見むなど、（退屈のあまりに）さうざうしきままに願ひ思ひしを、本意なむかなふここちしける」など、（何とかして恋する若者たちの心のひそひそと）ささめきつつ聞こえたまふ。御前に、一六（雑多な）乱れがはしき前栽なども植ゑさせたまはず、一七撫子の色をととのへたる、唐の大和の、籬いとなつかしく結ひなして、咲き乱れたる夕ばえいみじく見ゆ。皆立ち寄りて、一八心のままにも折り取らぬを飽かず思ひつつやすらふ。「有職（源氏）ども（立派なものだ）なりな。一九心もちゐなども（心構えなども）、とりどりにつけてこそめやすけれ。二〇右の中将は、（それぞれに）（一段ともう少し落着いていて）ましてすこし静まりて、心（人に）

一 そっけなく突き放したりなさるな。「はしたなく」は、柏木が面目を失うような、の意。
二 中将をお嫌いになるとは、内大臣も困った方だ。雲居の雁との結婚を許さぬことを不本意に思う言葉。
三 ご一家が藤原氏ばかりで時めいていらっしゃるところへ、（夕霧は）王孫といった血筋だから、旧式だとでもお思いなのだろうか。内大臣の正室四の君も藤原氏である。「大君」は、親王宣下を受けない皇子、または皇孫。

源氏、玉鬘と内大臣について語る

四 世の中には「来まさば」（おいでになるなら）という人もございましたのに。源氏の「大君だつ……」の言葉を受けて、催馬楽、呂「我家」によって答える。「我家は　帷帳も　垂れたるを　大君来ませ　婿にせむ　御肴に　何よけむ　鮑　栄螺か　石陰子よけむ　鮑　栄螺か　石陰子よけむ」。夕霧の方から事を進めれば、内大臣も喜んで婿として迎えるだろうにと、内大臣をとりなして言う。
五 いや、そんな（「御肴は何にしましょう」といったふうな）派手な婿扱いは望んでいないのです。
六 ただ、年端もゆかぬ者たちがお互い心を交わしていたのに、悲しい思いをさせたまま、長年仲を割いておかれるなさり方がひどいと思うのです。
七 夕霧がまだ若輩だ、世間から軽く見られると（内大臣が）お思いであれば。
八 燈籠に明りをさした。「燈籠」

源氏、和琴を論ず

はづかしき気まさりたり。いかにぞ、おとづれきこゆや。はしたなくも、なさし放ちたまひそ」などのたまふ。

中将の君は、かくよきなかに、すぐれてをかしげになまめきたまへり。「中将を厭ひたまふこそ大臣は本意なけれ。交りものなく、きらきらしかめるなかに、大君だつ筋にて、かたくなりとにや」とのたまへば、「来まさばといふ人もはべりけるを」と聞こえたまふ。「いで、その御肴もてはやされむさまは願はしからず。ただをさなきどちの結びおきけむ心も解けず、年月隔てたまふ心むけのつらきなり。まだ下臈なり、世の聞き耳軽しと思はれば、知らず顔にてここにまかせたまへらむに、うしろめたくはありなましや」など、うめきたまふ。さは、かかる御心の隔てある御仲なりけりと聞きたまふにも、親に知られたてまつらむことのいつとなきは、あはれにいぶせくおぼす。

〔月末のことで〕

月もなきころなれば、燈籠に大殿油参れり。「なほ気近くて暑か

は、軒先に吊す（一巻図録一〇参照）。

九 庭などで、鉄の籠を固定した台に吊し下げ、中に松の割り木を盛って燃やす。（図録七参照）

一〇 六絃の琴。大和琴とも。わが国古来のものといわれる。（二巻図録八参照）

一一 わが国固有の俗楽的音階。中国伝来の正楽の調子「呂」に対していう。感傷的で、洋楽の短調に近い。

一二 こうした音楽などはお好みでないのかと。以下、玉鬘が筑紫の田舎育ちなので見くびっていたと言う。

一三 和琴は、秋の夜の月の光の澄む頃、そう部屋の奥深く引き込まず、庭前の虫の声に合せるような趣で弾くと、親しみやすくはなやかな感じのする音色です。ほかの楽器と合奏するよりも、自然の虫の音に合せる方がよい、という。以下、和琴の特色について述べる。

一四 改まった曲の演奏には、（和琴は）扱いもしかときまらぬものです。簡素な楽器だからであろう。

一五 しかし、この楽器は、そっくり多くの楽器の音色や拍子をきちんと演奏できるのが大したものです。

一六 大和琴などと呼んで、何でもないもののように見せかけながら。中国伝来のものを第一とした当時の考えが背景にある。

一七 広く外国の音楽について知らぬ女のために作られたものと思われます。女性は、中国をはじめ異国の学芸を習わぬ建前であったところから、こういう。

一八 和琴の奏法。明らかでないが、『河海抄』は、右の手の撥で掻くことという。

はしや、篝火こそよけれ」とて、人召して、「篝火の台一つ、こなたに」と召す。をかしげなる和琴のある、引き寄せたまひて、掻き鳴らしたまへば、律にいとよく調べられたり。音もいとよく鳴れば、すこし弾きたまひて、「かやうのことは御心に入らぬ筋にやと、月ごろ思ひおとしきこえけるかな。秋の夜の月影涼しきほど、いと奥深くはあらで、虫の声に掻き鳴らしあはせたるほど、気近く今めかしきものの音なり。こととしき調べ、もてなししけなしや。このものよ、さながら多くの遊びものの音、拍子をととのへとりたるなむいとかしこき。大和琴とはかなく見せて、際もなくしおきたることなり。広く異国のことを知らぬ女のためとなむおぼゆる。同じくは、心とどめてものなどに掻きあはせて習ひたまへ。深き心とて、何ばかりもあらずながら、またまことに弾き得ることはかたきにやあらむ、ただ今は、この内の大臣になずらふ人なしかし。ただはかなき同じすがきの音に、よろづのものの音籠り通ひて、いふかた

（源氏）
（源氏）
苦しいな
風雅な
響くので
今ま
融通無碍に作ってある楽器なのです
同じこと
深遠な奥義といく
ほかの楽器に合せてお稽古なさい
また本当にうまく弾きこなすことはむつかしいのでしょうか
つたものは何ほどもありませんが
現在では
肩を並べる人はないのですよ
ただちょっと
弾く普通の
言葉に尽せぬ
あらゆる楽器の

一 玉鬘は、このところすこし会得して、どうかしてもっと上達したいと思っていらっしゃることなので。

二 (内大臣もお越しになりそうな) 適当な管絃の御遊の折などに、聞くことができましょうか。

三 (和琴のことを)「あづま」などとも呼んで、いかにも田舎びた感じがしますが。「あづま」は、和琴の別名。東国をも「あづま」と言い、都から遠く隔たる僻地である。玉鬘が、「あやしき山がつなどのなかにも……」と言ったことから連想したもの。

四 書司(後宮十二司の一。書籍、楽器などをつかさどる)の女官。特に累代御物の和琴を管掌する。(三巻絵合一一三頁参照)

五 わが国では和琴を一番大切なものとしているからでしょう。天照大神の岩戸隠れの時の神宴に、弓六張を並べて、弦打ちしたのが和琴の起りという伝承もあり(『花鳥余情』)、わが国古来の楽器で、神前の楽には欠かせぬものとして重んぜられた。

六 (それでも) 和琴の演奏に、技を尽すといったふうに、手の内を隠さずお弾き下さることは、滅多にないでしょう。

七 しかしいつかはきっとお聞きになるでしょう。暗に親子の対面はあろう、の意。

八「ことつひ」は、未詳。和琴を弾く姿とも、琴軋(ことさき)(爪)ともいう。

九 こんな和琴のことにつけても、いつになったら、

ほど高々と響きわたるのです
もなくこそ響きのぼれ」と語りたまへば、一ほのぼの心得て、いかで
一層聞きたく思われて
とおぼすことなれば、いとどいぶかしくて、「このわたりにて、二さ
(玉鬘)こちらのお邸で
身分もない山里住いの者
りぬべき御遊びのをりなど、聞きはべりなむや。あやしき山がつな
和琴といえば
どのなかにも、まねぶものあまたはべるなることなれば、おしなべ
習い覚えて弾く者が大勢おりますとのことですので
誰でもたやすく弾けるものと存じていました
て心やすくやとこそ思ひたまへつれ。さは、すぐれたるは、さまこ
では　上手な方の演奏は　格別のこ
とでございましょう
聞きたそうに
とにやはべらむ」と、ゆかしげに、切に心に入れて思ひたまへれば、
(源氏)左様
「さかし。三あづまとぞ名も立ち下りたるやうなれど、御前の御遊び
宮中の御遊
異国のことは知らず
にも、まづ書司を召すは、人の国は知らず、五ここにはこれをものの
親としたるにこそあめれ。そのなかにも、親としつべき御手より弾
第一人者というべき内大臣のご演奏
すばらしいでしょう
この邸などにも
何か事ある折
からじかに学び取られたら
き取りたまへらむは、心異なりなむかし。ここになども、さるべか
にはおいでになるでしょうが
らむをりにはものしたまひなむを、六この琴に、手惜しまずなど、あ
名手と言われる人は　どの
きらかに掻き鳴らしたまはむことやかたからむ。ものの上手は、い
道の人もむやみに重々しく振舞うようです
づれの道も心やすからずのみぞあめる。七さりともつひには聞きたま
楽曲を
ひてむかし」とて、調べすこし弾きたまふ。八ことつひいと二なく、

そんなふうに気を許してお弾きになるのを聞けようかと、思っていらっしゃった。「さてうちとけ」は、源氏が「手惜しまずなど、あきらかに掻き鳴らしたまはむことやかたからむ」と言ったのを受ける。

一〇 催馬楽、律「貫河」の歌詞。曲の具合で下を略している。「貫河の瀬々の　やはら手枕　やはらかに寝る夜はなくて　親離くる夫（下略）」

一一 催馬楽の歌意は、親が娘に言い寄る男を離し遠ざけることだが、源氏は、親の立場にありながら玉鬘に恋をしかけているので、にやにやしながら弾く。

一二 芸事は恥ずかしがっていては上達せぬものです。

一三 しかし想夫恋だけは、内心弾きたく思っていても、隠す人もあったでしょう。「想夫恋」は、唐楽。平調で舞なし。曲名から、夫を慕う曲と解され、女は演奏を恥ずかしがったであろうというのである。

一四 あんな辺鄙な田舎で、何かにかこつけて都人だと自称していた皇族筋の老女がお教えしたこととて。筑紫にいた時のことをいう。「王女」は、内親王宣下のない皇女、または皇孫。

一五（源氏が）もうしばらくでも弾いて下さればいいのに、耳から覚えられるかもしれないと。

一六 どんな風が吹き添って、こんなによく響くのでございましょう。琴に風が共鳴してよく響くという和歌的発想による。「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをより調べそめけむ」（『拾遺集』巻八雑上、斎宮の女御）

今めかしくをかし。〔内大臣なら〕これにもまされる音や出づらむと、親〔実の親に会いたさの思いも加わって〕しさたち添ひて、このことにてさへ、いかならむ世に、さてうちとけ弾きたまはむを聞かむなど、思ひゐたまへり。

一〇「貫河の瀬々のやはらた」と、いとなつかしく〔源氏は〕歌ひたまふ。「一一親避くるつま」は、すこしうち笑ひつつ、〔格別気も張らずに〕わざともなく掻き鳴らしたまひたるすががきのほど、いひ知らずおもしろく聞こゆ。〔源氏〕「いで弾きたまへ。一二才は人になむ恥ぢぬ。一三想夫恋ばかりこそ、心のうちに思ひて、まぎらはす人もありけめ。〔その他の曲なら〕おもなくてかれこれに合はせつるなむよき」と、〔恥ずかしがらずに誰とでも合奏なさるのがよい〕切に聞こえたまへど、一四さる田舎の隈にて、ほのかに京人と名のりける、古王女の教へきこえければ、〔玉鬘は〕ひがことにもやと〔間違いもあろうかと気がひけて〕つつましくて、手触れたまはず。一五しばしも弾きたまはなむ、聞き取ることもやと心もとなきに、〔気が気でないので〕この御ことによりぞ、〔ただ和琴へのご興味から〕近くゐざり寄りて、〔源氏の側に〕「いかなる風の吹き添ひて、かくは響きはべるぞとよ」とて、〔玉鬘〕一六うち傾きたまへるさま、〔玉鬘の〕火影にいとうつくしげなり。〔可憐である〕〔源氏は〕笑ひたまひて、

一 耳の聡い人には、しみじみと身にしみる風も吹き添う（和琴もよく聞える）のです。私の言うことには聞き分けがないという皮肉があろう。「身にしむ風」は、「秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらむ」（『詞花集』巻三 秋、和泉式部）などの詠がある。

源氏、玉鬘と唱和

二 ほんとに不本意に思われる。玉鬘の思いが、そのまま地の文に重なる書き方。

三 撫子を十分観賞もしないで。あなたに心を残しながら、の意。

四 何とかして、内大臣にも、わが家の花園をお見せしたいものだ。「花園」に玉鬘を暗示する。

五 昔も。以下、雨夜の品定めのこと（一巻帚木七一頁以下参照）。

六 撫子のいつ見ても心ひかれる色―美しいあなたにお会いになったら、内大臣はきっと母上の行方をお尋ねになるでしょう。「とこなつかしき」に「常夏」（撫子の別名）を詠みこむ。「山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露」（帚木七二頁）を念頭に置く。

七 私の手許に引き籠められて父君にお会いできないのも、心苦しく思っています。「たらちねの親の飼ふ蚕の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて」（『拾遺集』巻十四恋四、人麿。原歌『万葉集』巻十二）

八 数ならぬ生れの私のこと、誰が母のことまで尋ねて下さいましょう。「あな恋し今も見てしが山がつの

「耳固からぬ人のためには、身にしむ風も吹き添ふかし」（和琴を）とて、押しやりたまふ、いと心やまし。

女房たちが　いつものように色めいた冗談も

人々近くさぶらへば、例のたはぶれごともえ聞こえたまはで、

弁の少将たち

「撫子を飽かでもこの人々の立ち去りぬるかな。いかで、大臣にも、この花園見せたてまつらむ、世もいと常なきをと思ふに、いにしへ

お互いまことに無常の世の中と

（内大臣が）（あなたのことを）

も、もののついでに語り出でたまへりしも、ただ今のこととぞおぼゆる」（その時のことを）とて、すこしのたまひ出でたるにも、いとあはれなり。

大層もの悲しい

（源氏）

「撫子のとこなつかしき色を見ば

もとの垣根を人や尋ねむ

そのことが面倒に思われるので

このことのわづらはしさにこそ、繭ごもりも心苦しう思ひきこゆれ」とのたまふ。君、うち泣きて、

玉鬘

山がつの垣ほに生ひし撫子の

もとの根ざしをたれか尋ねむ

人数に入らぬ者のようにお答え申し上げられる様子は

はかなげに聞こえないたまへるさま、げにいとなつかしく若やかな

垣ほに咲ける大和撫子」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）

九 引歌があろうが未詳。ここへ来なかったなら、玉鬘とこんな問答が交わせただろうか、の感慨を託したものであろう。

源氏、玉鬘の処遇について思い悩む

一〇 どうして、こんなせずともよい恋をして、心の休まる時のない物思いをするのだろう。以下、源氏の、あれこれの場合を想定しての心中の悩みを書く。

一一（かといって）こんな苦しい思いはすまいと、ほしいままに振舞ったら（玉鬘をわがものにしたら）、世間がどんなに軽々しい振舞だと非難することだろう。

一二 紫の上へのご愛情に匹敵するほどの気持は、我ながらとてもありそうにないとご承知になっている。

一三 妻になっても、そういう紫の上には及ばぬ妻の座を与えられたのでは、何ほどのことがあろう。花散里や明石の上と同列では、大した幸福とはいえない。

一四（それぐらいなら）そのへんにざらにいる納言あたりの身分で、玉鬘一人を後生大事にする者にはとても及ばないことだと。「納言」は、大臣の下、参議の上。中堅の公卿である。

（源氏）九り。「来ざらましかば」とうち誦じたまひて、いよいよつのるご執心はいとどしき御心は、苦しいほどに苦しきまで、やはり自制しきれそうにないとお思いになるなほえ忍び果つまじくおぼさる。

［西の対に］わたりたまふことも、あまりうちしきり、度重なって人の見たてまつりとが女房などが不審にお思い申しそうな時はむべきほどは、心の鬼におぼしとどめて、気が咎めるので思い止まられて、何かのご用を考え出してさるべきことをし出でて、御文の通はぬをりなし。ただこの御ことのみ、玉鬘の御ことだけが明け暮れ御心にかかりたり。なぞ、［源氏の］かくあいなきわざをして、やすからぬもの思ひをすらむ、さ思はじとて、心のままにもあらば、世の人のそしり言はむことの軽々しさ、自分の評判はひとまず措くとしてわがためをばさるものにて、女の身の玉鬘にとってはお気の毒なことであろうこの人の御ためいとほしかるべし、またこの上なく愛するといっても限りなき心ざしといふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじくおぼし知りたり。さてその劣りの列にては、何ばかりかはあらむ、自分は太政大臣として格別の身分ながらわが身ひとつこそ人よりは異なれ、その大勢の妻の中であくせくするような者の末席にいては見む人のあまたがなかにかかづらはむ末にては、何のおぼえかはたけからむ、異なることなき納言の際の、二心なくて思はむには、世間体も何の大したことがあろう劣りぬべきことぞと、［玉鬘が］みづからおぼし知るに、いといとほし

一 螢兵部卿の宮や髭黒の大将。

二 結婚してすっかり自分とは無関係に、（宮や大将が）自分の家に連れて行ってしまったなら、執着も絶えようか。

三 こんなにおっしゃりながらも、人目に立つようなことはなさらないで。意中は打ち明けたが、行動は慎んでいる。

四 それならまた、結婚させて、この邸で今まで通り大切に世話をして。以下、玉鬘を手放さず、婿を通わせながら、ひそかに情を通じることを考える。

五 今のように、まだ男を知らぬ娘心を靡かせようとあれこれ気を遣って策を弄するのは、（玉鬘に対して）気の毒だけれど。

六 （結婚して）自然夫のきびしい目があるようになっても。「関守」は、「人知れぬわが通ひ路の関守は宵宵ごとにうちも寝ななむ」（『古今集』巻十三恋三、業平朝臣。『伊勢物語』五段）による。

七 こちら（源氏）も、仮にも娘分をと、ひるむ気持がなくて、すっかりその気になったら、人目がしげくても障りにはなるまい、とお考えになる。「筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」（『重之集』）による措辞。

くて、一宮、大将などにや許してまし、二さてもて離れいざなひ取りては、思ひも絶えなむや、〔玉鬘を〕許そうか いふかひなきにて、仕方のないこととして さもしてむとおぼすをりもあり。〔西の対に〕されどわたりたまひて、〔玉鬘の〕御容貌を見たまひ、結婚させようかと 今は御琴教へたてまつりたまふにさへことづけて、教え申し上げなさることまでも 口実にして 近やかに〔玉鬘に〕馴れ寄りたまふ。

姫君（玉鬘）も、はじめこそ〔源氏が〕むくつけく、〔源氏を〕気味悪く うたてとも思ひたまひしか、三かくてもなだらかに、安心ならぬお考えはお持ちでないのだと うしろめたき御心はあらざりけりと、やうやう目馴れて、そうひどく いとしもうとみきこえたまはず、〔源氏を〕お嫌い申されず さるべき御いらへも、何かの折のご返歌も 馴れ馴れしからぬほどに聞こえかはしなどして、お会いになるたびに 見るままにいと愛敬づき、美しい風情が増してこられるので かをりまさりたまへれば、やはりおめおめ結婚させられないとお気持が逆戻りする なほさてもえ過ぐしやるまじくおぼし返す。四さはまた、さてここながらかしづきすゑて、自分の気持なりとお話しして心を晴らそうか さるべきをりをりに、はかなくうち忍び、ものを聞こえてなぐさみなむや、五かくまだ世馴れぬほどのわづらはしさこそ、心苦しくはありけれ、男女の情が分るようになり おのづから関守強くとも、六ものの心知りそめ、七いとほしき思ひなくて、わが心も思ひ入りなば、しげくともさはらじかしとおぼし寄る、人目のない折々に

八 全くけしからぬお考えである。草子地。

内大臣、弁の少将と玉鬘の噂をして、対抗心を燃やす

九 問題の、新しい姫君。近江の君のこと。

一〇 お邸の人々も、あれでは姫君と認められないと、軽んじた批評をし。

一一「あれは本当か」とお聞きになったことを。この巻冒頭の納涼の場面（八六頁）のこと。源氏も「なまねたしとも漏り聞きたまへかし」（八八頁）と思って語っていた。

一二 それで、面目を施した気がする。源氏がとかく関心を持ってくれるので晴れがましい、と言う。源氏に突っかかるようなとげとげしいもの言い。

一三 全くこれという欠点もない人柄と見受けられる方のようです。

〔結婚させて〕〔玉鬘のことを〕

八 いとけしからぬことなりや。いよいよ心やすからず、思ひわたらむも苦しからむ、なのめに思ひ過ぐさむことの、とざまかくざまにもかたきぞ、世づかずむつかしき御かたらひなりける。

（さりとてほどほどにして諦めることが）（どう考えてもむつかしいとは）

内の大殿は、九この今の御女のことを、殿の人も許さず軽み言ひ、世にもほきたることとそしりきこゆと聞きたまふに、少将の、ことのついでに、太政大臣の、一〇さることやと問ひたまひしこと語りきこゆれば、「さかし。ここにこそは、年ごろ音にも聞こえぬ山がつの子迎へ取りて、ものめかしたつれ。をさをさ人の上もどきたまはぬ大臣の、このわたりのことは、耳とどめてぞおとしめたまふや。これぞおぼえあるここちしける」とのたまふ。少将の、「かの西の対にする、たまへる人は、一三いとこともなきけはひ見ゆるわたりになむはべるなる。兵部卿の宮など、いたう心とどめてのたまひわづらふとか。おぼろけにはあらじとなむ、人々おしはかりはべめる」と申したまへば、「いで、それは、かの大臣の御女と思ふばかりのおぼえ

（あまり例のない厄介なお二人の問柄なのであった）（世間でも馬鹿なことをなさったと批判申しているとお聞きの上に）（弁の少将）（内大臣）（いかにも）（わが家では）（噂にも立たなかった賤しい腹の）（今まで）（娘を）（大事に育てているのだ）（滅多に）（人の悪口を言われない）（わが家のことというと）（聞き耳を立てては悪くおっしゃるのだ）（玉鬘）（大層ご執心でご求婚に苦労なさっているとか）（姫君は）（並々の美しさではあるまいと）（内大臣）（源氏の御娘と思うだけのことで）

一（玉鬘は）必ずしもそう大したことはあるまい。母方はよくないだろう、の意。
二 人並みの身分なら、今までに噂が聞えていよう。
三 惜しいことにあれほど立派な大臣（源氏）が、悪口一つ言われず、この世には過ぎたご声望ご身分でありながら。
四 れっきとした奥方のお腹に生れた姫君を大切に養育して、なるほどあれならさぞ完璧であろうと、はたが見るにも立派なお子がおありでないとは。紫の上などに女子のないことをいう。
五 大体お子が少なくて、行く先不安なのだろうよ。だから玉鬘などを養うのであろう、の意が裏にある。
六 身分の低い母だが、明石の御方が産んだ姫は。明石の姫君のこと。
七 ああした類いまれな幸運に恵まれた人で、（それなりの）しかるべき仔細があろうと思われる。源氏の手許に引き取られて大切にされているのは、よほどの幸運に恵まれているのだ、の意。
八 ところで、誰を婿に決められる様子かな。
九 親王（兵部卿の宮）が、（玉鬘を）うまく靡かせてわが物になさるだろう。「まつはす」は、側に引きつけて離さぬようにすること。
一〇 誰を婿に取るのだろうなどと、気が気でなく好奇心をそそってやりたかったのにと、忌々しいので。
一一 夕霧の官位が、わが家の婿としてふさわしいと思われぬ間は。夕霧は現在左近衛中将。従四位下相当。

人気が高いのだよ　概してそのような世の中らしい
のいといみじきぞ。人の心、皆さこそある世なめれ。一かならずさしもすぐれじ。二人々しきほどならば、年ごろ聞こえなまし。三あたら大臣の、塵もつかず、この世には過ぎたまへる御身のおぼえありさまに、四おもだたしき腹に、女かしづきて、げに疵なからむと、思ひやりめでたきがものしたまはぬは。五おほかた子の少なくて、心もとなきなめりかし。六劣り腹なれど、明石のおもとの産み出でたるはしも、七さる世になき宿世にて、あるやうあらむとおぼゆかし。その今姫君は、ようせずは、実の御子にもあらじかし。さすがにいとけしきあるところつきたまへる人にて、もてないたまふならむ」と、言ひおとしたまふ。八「さていかが定めらるなる。九親王こそまつはし得たまはむ。もとより取り分きて御仲よし、人柄も警策なる御あはひども
ひょっとすると　本当のお子でもあるまいよ　〔しかし〕玉鬘　〔源氏は〕一癖も二癖も　あるお方だから　〔玉鬘を〕大事にお扱いになるのだろう　悪口をお　つしゃる　〔内大臣〕　〔親王は〕　〔源氏と〕　ご立派で婿君にふさわし　いお間柄だろうよ
ならむかし」などのたまひては、なほ姫君の御こと、飽かずくちをし。かやうに心にくくもてなして、一〇いかにしなさむなど、やすからずいぶかしがらせましものをとねたければ、一一位さばかりと見ざらむ
雲居の雁　玉鬘のように奥ゆかしげに世話をして

一二 源氏の大臣なども、丁重に口添えし（今の自分の処置に）反対なさるのなら。「かへさふ」は、押し返すこと。

一三 おもしろからぬことではある。内大臣の気持をそのまま記したもの。

一四 不意にさっさと（雲居の雁の部屋に）おいでになった。「はひわたる」は、近い距離の所へ気軽に行くこと。

内大臣、雲居の雁の部屋に行き、教訓する

一五 羅や紗のような薄い絹織物。上に袿など重ねていないのである。

一六 羅の単から透けて見える肌のきめなど。上半身が透けて見える、その腕に視線を止めた書き方。

一七 投げ出された御髪の具合は。女が寝る時、髪は枕上の方にうちやられる。（二巻図録一一参照）

一八 そう大して長く多いというのではないが、大層見事な裾の様子である。髪の裾は切り揃えるが、量が多いので、ふさやかなのである。

一九 女房たちも、几帳や屏風の陰で、それぞれものに寄りかかって休んでいるので。

二〇 扇をすこし開閉して、合図なさると。

二一 うたたねはいけないと申し上げているのに。「たらちねの親のいさめしうたた寝はもの思ふ時のわざにぞありける」（『拾遺集』巻十四恋四、読人しらず。『古今六帖』四、うたたね。五句「わざにざりける」）。『雲居の雁は、夕霧と仲の隔りて物思ふ人なり」（『眠江入楚』）

限りは、〔結婚を〕許しがたくおぼすなりけり。〔内大臣は〕大臣（おとど）なども、ねむごろに口入れかへさひたまはむにこそは、負くるやうにてもなびかめとおぼすに、男がたは、さらにいられきこえたまはず、心やましくなむ。

〔内大臣は〕あれこれ思案の末いたたまれず

とかくおぼしめぐらすままに、ゆくりもなく軽らかにはひわたりたまへり。少将も御供に参りたまふ。姫君は、昼寝したまへるほどなり。羅の単を着たまひて臥したまへるさま、暑かはしくは見えず、いとらうたげにささやかなり。透きたまへる肌つきなど、いとうつくしげなる手つきして、扇を持たまへりけるながら、かひなを枕にて、うちやられたる御髪のほど、いと長くこちたくはあらねど、いとをかしき末つきなり。人々ものの後に寄り臥しつつうち休みたれば、ふともおどろいたまはず。扇をならしたまへるに、何心もなく見上げたまへるまみ、らうたげにて、つらつき赤めるも、親の御目にはうつくしくのみ見ゆ。〔内大臣〕「うたた寝はいさめきこゆるものを、などか、いとものはかなきさまにては大殿籠りける。人々も近くさぶ

弁の少将

大層かわいらしく小柄な身体つきである

夕霧の方は一向にあせる様子もお見せなさらないので

それに負けた体にしてでも承服しよう

とてもかわいらしい

〔雲居の雁は〕すぐにもお目覚めにならない

〔雲居の雁の〕目もとただただかわいらしく

雲居の雁

扇をお持ちの姿のまま

腕を枕にして

頬のあたりが赤らんでいるのも

そんな不用意な格好をして

女房たちもお側近く控えて

一 女というものは、わが身をいつも注意して守っているのがよいでしょう。以下、姫君としての心得を説きながら、いつしか源氏への競争心から、明石の姫君を話題にする。

二 不動明王の前で呪文を称えて。不動明王は、五大明王の一で、大日如来の化身かつ使者。降魔忿怒の相で火炎を背負う。「陀羅尼」は、漢語に翻訳せず、梵語のまま読み上げる呪。不動明王の陀羅尼としては大呪（火界呪）、中呪（慈救呪）、小呪がよく知られている。

三 印を結んでいたりするのも。「印」は、もと真言宗で、手の指をさまざまに組み合せ仏の悟りや徳をあらわすもの。それぞれの呪に特定の印が応ずる。以上、堅苦しく身を持することを揶揄的に言ったもの。

四 日頃接する人に対してもあまり奥に引っ込んで。前に「不動の陀羅尼」と仏前のことを言ったのに対し、「うつつの人」と言う。

五 末は皇后にとお心づもりの姫君（明石の姫君）に、お仕込みになっているという教訓は。

六 （明石の姫君も）ご成長なさるにつれて、それなりの人柄を発揮されるでしょう。

七 （源氏が）入内させなさる時はどんなであろうか、その様子を、ぜひ見たいものです。

八 理想通りにお世話申そうと思ったことは、むつかしくなったお身の上だが。内大臣が雲居の雁を東宮妃にとも思っていたことは、三巻少女二三四頁に見える。

ていないで　何をしている

らはで、あやしや。一女は、身を常に心づかひして守りたらむなむよかるべき。心やすくうち捨てざまにもてなしたる、品なきことなり。気を許して無造作なふうにしているのは

さりとて、いとさかしく身かためて、二不動の陀羅尼誦みて、三印つくりてゐたらむも憎し。四うつつの人にもあまり気遠く、もの隔てがま

分別臭く身を守って　いつも物越しに応対

しきなど、気高きやうとても、人にくく、心うつくしくはあらぬわ

上品なこととはいっても　小憎らしく　かわいげのないものです

ざなり。太政大臣の、五后がねの姫君ならはしたまふなる教へは、よ

諸芸　源氏　するのなどは　またよ

ろづのことに通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たど

に通して片寄ることなく　しかも特にすぐれたわざも持たせまい

たどしくおぼめくこともあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。

く知らずにまごつくこともないようにと　ゆったりした教育を　人というものは　おきお心がけだそうです

なるほどもっともなことだが

げにさもあることなれど、人として、心にも、するわざにも、立て

特に好　きこのむ方面はどうしてもあるものだから

てなびくかたはかたとあるものなれば、生ひ出でたまふさまあらむ

お六

かし。明石の姫君が成人して　この君の人となり、七宮仕へに出だし立てたまはむ世のけしき

こそ、いとゆかしけれ」などのたまひて、（内大臣）八「思ふやうに見たてまつ

何とかして世間の物笑いに　ならぬようにしてあげたいと　人の身の上のあれこれを

らむと思ひし筋は、難うなりにたる御身なれど、いかで人笑はれな

らずしなしたてまつらむとなむ、人の上のさまざまなるを聞くごと

九 ちょっと気を引くために親切にするような人の言うことに。夕霧のことをいう。「ねぎごと」は、神に願う言葉。「ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそ果てはなげきの森となるらめ」（『古今集』巻十九、誹諧歌、讃岐）

一〇 昔は、（まだ幼くて）何ごとにも深い分別がなくて。以下「見えたてまつりけるよ」まで、三条の宮で、夕霧とのことが父大臣に発覚した当時のことを回想する雲居の雁の思い。（少女二四二頁以下参照）

一一 かえってあの当座の目も当てられなかった事件の時にも。直接秘めごとをあばかれた当時の醜態をいう。

一二 祖母大宮。今は、三条の宮に一人住む。

一三 近江の君のこと。北の対に住ませている。「今君」は、新しい姫君の意。

内大臣、近江の君の処遇に悩み、弘徽殿の女御に託す

一四 以下「いとさ言ふばかりにやはある」まで、近江の君の処置についての内大臣の思案。

一五 他人がこう悪口を言うからといって、今さら送り返すのも、身分に似合わぬ常識のないやり方である。

一六 こうして邸の中に置いているので。実は、人前には出せないからである。

一七 弘徽殿の女御。現在、内大臣邸に里下がりしている。

に、思ひ乱れはべる。こころみごとにねむごろがらむ人のねぎごとに、なしばしなびきたまひそ。思ふさまはべり」など、いとらうたしと思ひつつ聞こえたまふ。昔は、何ごとも深くも思ひ知らで、なかなかさしあたりていとほしかりしことの騒ぎにも、おもなくて見えたてまつりけるよと、今ぞ思ひ出づるに、胸ふたがりて、いみじくはづかしき。大宮よりも、常におぼつかなきことを恨みきこえたまへど、かくのたまふがつつましくて、えわたり見たてまつりたまはず。

（雲居雁を）
（私に考えがあるのです）
（恥ずかしげもなく父上にお目にかかっていたことだと）
（対面できない心もとなさを）
（父内大臣が）
（遠慮されて）

大臣、この北の対の今君を、いかにせむ、さかしらに迎へ率て来て、人かくそしるとて返し送らむもいと軽々しく、もの狂ほしきやうなり、かくて籠めおきたれば、まことにかしづくべき心あるかと、人の言ひなすなるもねたし、女御の御方などに交らはせて、さるを容貌はた、いとさ言ふばかりにやはある、などおぼして、女御の君

（近江君を）
（独り合点で）
（三条の宮に）
（本気で深窓の姫君として養う気があるのかと）
（世間が噂するらしいのもいまいましい）
（宮仕えさせて）
（そうした）
（女房連中がひどく不細工だとけなしているらしい）
（笑い物にしてしまおう）
（そんなにひどく言うほどのことでもない）
（内大臣は）

一 でも、若い女房たちの噂の種になるような嗤い者にはなさらないで下さい。
二 それではあまり軽率だと思われましょう。評判が世間に広がるのを恐れる気持。
三 柏木。近江の君を捜し出して来た（八六頁）。
四 本当にまたとなく立派だと思って吹聴した前触れには及ばぬというだけのことでございましょう。「かね言」は、先を見越していう言葉。
五 まわりの方々が、こんなふうにいろいろとおっしゃるのを、面目なく思われるにつけても。「思はるる」の「る」は、近江の君に対する軽い敬語。
六 一つには面映いのではないでしょうか。それで気後れしてつい失敗が多いのではないか、と取りなす。
七 こちらが気恥ずかしくなるような様子で。父大臣を暗にたしなめるほどの聡明なもの言い。
八 何もかも整って美しいというのではなくて。「こまか」は、精巧緻密なこと。
九 美しい梅の花が開きかけの明るい朝のような感じで、皆まではおっしゃらず笑みを湛えていらっしゃるご様子は。「開けさしたる」の縁で「ほほゑむ」という。「にははねどほほゑむ梅の花をこそ我もをかしと折りてながむれ」（『曾丹集』。『河海抄』所引）
一〇 お気の毒な（近江の君の）ご評判だこと。草子地。
一一 そのまま、女御の御殿からのついでに。女御は、寝殿にいるのであろう。

内大臣、近江の君を訪れ女御への出仕を勧める

（内大臣）近江の君を老いぼれの女房などにでも言いつけてに、「かの人参らせむ。見苦しからむことなどは、老いしらへる女房などして、つつまず言ひ教へさせたまひて御覧ぜよ。若き人々の言種には、な笑はせさせたまひそ。うたてあはつけきやうなり」と、冗談半分に笑ひつつ聞こえたまふ。「などか、いとさことのほかにははべらむ。中将などの、いと二なく思ひはべりけむかね言に足らずといふばかりにこそははべらめ。かくのたまひ騒ぐを、はしたなう思はるるにも、かたへはかかやかしきにや」と、いとはづかしげにて聞こえさせたまふ。この御ありさまは、こまかにをかしげさはなくて、いとあてに澄みたるものの、なつかしきさま添ひて、おもしろき梅の花の開けさしたる朝ぼらけおぼえて、残り多かりげにほほゑみたまへるぞ、人に異なりけると見たてまつりたまふ。「中将の、いとさ言へど、心若きたどり少なさに」など申したまふも、いとほしげなる人の御おぼえかな。

（弘徽殿女御）どうして そんなひどいことがございましょうこの女御のご容姿は ものやさしいところがおありで 気高くすっきりした感じながら 格段にすぐれているとご覧になる（内大臣）柏木 一人前だとは いっても まだ世間知らずでよく考えもせずに

やがてこの御方のたよりに、たたずみおはしてのぞきたまへば、（近江君の部屋の前に）

一三 簾を外に大きく張り出して。身体ごと簾を押し出すのであろう。つつしみのない端居のさま。

一三 女房の呼び名。いつの年かに、五節の舞姫に選ばれたことから、命名されたのであろう。

一四 中国伝来の遊戯。二人で争う。盤の上で、白黒十二の石を賽の目によって交互に進め、早く敵方に入ったものを勝ちとする。（図録一〇参照）

一五 小賽。相手に小さい目が出るように願う言葉。

一六 そのまま、妻戸の細目に開いた所から、ちょうど襖が開いて見通せる中を覗き込みなさる。「妻戸」は、建物の四隅にある両開きの戸。「障子」は、ここは廂を仕切る襖障子で、その開いた所から廂の御簾際の近江の君たちが見える。

一七 双六の賽を入れる竹の筒。これを振って賽の目を出す。二箇あり、各自一つずつ持つ。

一八 心にはいろいろ物思いもあるのだろうが。「さざれ石の中に思ひはありながらうちいづることのかたくもあるかな」（『紫明抄』『河海抄』）。前文の「とみにも打ち出でず」にも響く。

一九 小柄、または親しみやすい意という。

二〇 前世の因縁も悪くない様子だが。過去の善悪の因縁により、現世の容貌の美醜が決ると考えられていた。

二一 こんな娘と親子だとは、全く不本意に思われる。内大臣の思いをそのまま地の文にした書き方。

簾高くおし張りて、五節の君とて、（気の利いた）されたる若人のあると、双六をぞ打ちたまふ。手をいと切におしもみて、「せうさい、せうさい」とこふ声ぞ、いと舌疾きや。（祈り願う）あなうたてとおぼして、（早口だ〔内大臣は〕）御供の人の前駆追ふをも、手かき制したまひて、（手を振ってお止めになって）なほ妻戸の細目なるより、障子のあきあひたるを見入れたまふ。この人も、（五節の君も）はた、（同じく）けしきはや（興奮している面）れる、「御返しや、御返しや」と、（ご返報）（ご返報）（持で）筒をひねりて、とみにも打ち出でず。（すぐにも〔賽を〕）なかに思ひはありやすらむ、いとあさへたるさまどもしたり。（見た目は二人ともいかにも浅はかな態度である）容貌はひぢぢかに、愛敬づきたるさまして、（髪も見事で）髪うるはしく、罪軽げなるを、額のいと近やかなると、（大層狭いのと）（口跡の軽薄さとで台なしになっているのであろう）声のあはつけさとにそこなはれたるなめり。（特に美人だというのではないが）取りたててよしとはなけれど、異人とあらがふべくもあらず、鏡に思ひあはせられたまふに、いと宿世心づきなし。（鏡の中のわが顔に同じだと思われなさるので）（他人だと抗弁しようもなく）

「かくてものしたまふは、つきなくうひうひしくなどやある。ことしげくのみありて、とぶらひまうでずや」とのたまへば、（内大臣）（この家でお暮しになるのは）（落着かず馴染めないなどということはありませんか〔私は〕）（様子を伺いにも来ませんで）（やたら忙しくて）

舌疾にて、「かくてさぶらふは、何のもの思ひかはべらむ。（近江君）（こうしてお側にいますのは）（何の不足がございましょう）（長年）

一　まるでよい手を打たぬ時のような（焦れったい）気がいたします。「手打つ」は、双六で、巧みな手を打つこと。

二　そんな形ででも、始終お世話申そうと、はじめは思っていましたが。内大臣づきの女房役にするつもりだった、と言う。

三　その場合でも、誰それの娘、何がしの子と、名の通った家の生れとなると、親兄弟の面目を潰すような者が多いようだ。娘が至らぬ場合、名家の出身ほど家門の恥になる。家風を云々されるからである。

四　ましてや（内大臣ともあろう自分の娘がこの調子では、どんなに名を堕すことだろう）。

五　何の、それは、大層に考えまして宮仕えしましたならば、大変でしょうが。

六　御用の壺の掃除役にでも何にでも、ご奉公いたしましょう。「大御大壺」は「大壺」（便器）をさらに敬った言い方。いずれにしろ、姫君の口にすべき言葉ではない。

おぼつかなく、ゆかしく思ひきこえさせし御顔、常にえ見たてまつらぬばかりこそ、手打たぬここちしはべれ」と聞こえたまふ。「げに、身に近く使ふ人もをさをさなきに、さやうにても見ならしたてまつらむと、かねては思ひしかど、えさしもあるまじきわざなりけり。なべてのつかうまつり人こそ、とあるもかかるも、おのづから立ち交らひて、人の耳をも目をも、かならずしもとどめぬものなれば、心やすかべかめれ。それだにその人の女、かの人の子と知らるる際になれば、親兄弟の面伏せなる類ひ多かめり。ましてし」と、のたまひさしつる御けしきのはづかしきも見知らず、「何かそは、ことことしく思ひたまへて交らひはべらばこそ所狭からめ、大御大壺取りにも、つかうまつりなむ」と聞こえたまへば、え念じたまはで、うち笑ひたまひて、「似つかはしからぬ役なり。かくたまさかに会へる親の孝せむの心あらば、このもののたまふ声を、すこしのどめて聞かせたまへ。さらば命も延びなむかし」と、をこめいたまへ

（父上の）お会いしたいと　いつも拝見できませぬこと　（内大臣）　身辺の世話をさせる女房もこれといってないので　（二）　（三）　（四）　言葉　（五）　（近江君）　（父大臣の）ご様子の気恥ずかしいほどなのも分らず　を切られた　（六）　どんなお方か　（内大臣）ふさわしからぬお役目のようです　孝行しようと思うのなら　あなたのものをおっしゃる声を　親に　こうしてやっと会えた　我慢なさりきれず　道化たところがあり　ゆっく

七（早口は）舌の生れつきなのでございましょう。
八 子供でした時でも、亡くなった母がいつも苦にして注意していました。年頃の娘になるまでもなく、子供時分から、やかましく言われていたという。
九 近江の国神崎郡高屋郷にあった寺。伊勢との国境に近く、愛知川の上流南岸である。
一〇「別当」は、寺務を統括する僧。「大徳」は、敬称。
一一（私が生れた時）産屋に控えていましたが。安産の祈禱のため招かれていたのである。生地に因んで、近江の君と呼ばれる（行幸一八〇頁）。
一二 その早口にあやかってしまったと母が嘆いておられました。「はべりたうぶ」は、三巻少女二二四頁注七参照。姫君の言葉遣いではない。
一三 内大臣の言葉の真意を解せず、素直に応じる近江の君をややからかった言い方。
一四 お話の、産屋に親しく入り込んでいたという坊さんが、とんだことだったね。
一五 早口は、その僧が前世で犯した罪の報いなのでしょう。
一六「啞と吃り」と、大乗経の悪口を言った罪の中にも数えてあるからね。「大乗」は、ここは『法華経』のこと。「若し人と為ることを得れば、聾盲瘖瘂にして、貧窮諸衰、以て自ら荘厳し、（中略）斯の経を誘るが故に、罪を獲ること是の如し」（『法華経』譬喩品）
一七 大勢の女房たちも、次々に（近江の君に）接しては、芳しからぬ噂を撒き散らすことだろうと。

る大臣にて、（近江君）ほほゑみてのたまふ。「舌の本性にこそははべらめ。をさなくはべりし時だに、故母の常に苦しがり教へはべりし。妙法寺の別当大徳の、産屋にはべりける、あえものとなむ嘆きはべりたうびし。いかでこの舌疾さやめはべらむ」と思ひ騒ぎたるも、いと孝養の心深く、あはれなりと見たまふ。（内大臣）「その気近く入り立ちたりけむ大徳こそは、あぢきなかりけれ。ただその罪の報いななり。啞、言吃とぞ、大乗そしりたる罪にも、数へたるかし」とのたまひて、子ながらはづかしくおはする御さまに、（近江君が）お目通り申すのは 気がひけるほど立派なお人柄の女御に 見えたてまつらむこそはづかしけれ、いかに定めて、どんな調べ方をして かくあやしきけはひも尋ねず迎へ寄せけむとおぼし、人々もあまた見つぎ言ひ散らさむことと、思ひ返した（宮仕えを）

まふものから、（内大臣）「女御里にものしたまふ時々、わたり参りて、人のありさまなども見ならひたまへかし。ことなることなき人も、おのづから人に交らひ、さるかたになれば、さてもありぬかし。さる心して見えたてまつりたまひなむや」とのたまへば、（近江君）「いとうれしき

（にやにやして）（この早口を直しましょう）（大変だと思っているのも）（こうまで見苦しい人柄を見究めもせず引き取ったのだろうと）（女御が）（こちらにお里下がりの折々には）（女房たちの立居振舞なども）（お伺いして）（大したことのない者でも）（何とかやれるものです）（そういう立場になれば）（つもりでお目通り申されませんか）

一　こちらの皆様方に、姉妹としてお認めいただくことを。「御方々」は、弘徽殿の女御や雲居の雁。

二　水を汲んで頭に載せて運びましてでも、お仕え申しましょう。どんな雑役でもいたします、の意。「大御大壺取りにも……」と言ったのと同じ気持。「法華経をわが得しことは薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」（『拾遺集』巻二十哀傷、大僧正行基詠みたまひける）による。

三　まあそんなに身を入れて薪を拾うまでのことはなさらずとも。前注に引く行基の歌は、『法華経』提婆達多品第十二に、王（釈迦）が仙人（提婆達多）から『法華経』を授かろうとして「果を採り水を汲み、薪を拾ひ食を設け、乃至身を以て牀座と作」して仙人に仕えたとあることを詠んだもの。その『法華経』の文句によって答えた。

四　ただ、あのあやかりものにしたという坊さんさえ近づけなければね。早口だけはやめなさいと、暗に教える。「法の師」は、『法華経』を授けた仙人にちなむ。

五　ところで、何日に女御様へ参上するといたしましょう。「むず」（「むとす」の「と」を省いた言い方）の用例はごく稀。『枕草子』「ふと心劣りとかするものは」の段に、この言い方を下品としている。

六　障りのない日になどとかいうところだね。初宮仕えなどは、吉日を選ぶ。

ことにこそはべるなれ。ただいかでもいかでも、御方々に数まへしろしめされむことをなむ、寝ても覚めても、年ごろ何ごとを思ひたまへつるにもあらず、御許しだにはべらば、水を汲みいただきても、つかうまつりなむ」と、いとよげに今すこしさへづれば、いふかひなしとおぼして、「いとしか、おりたちて薪拾ひたまはずとも、参りたまひなむ。ただかのあえものにしけむ法の師だに遠くは」と、をこごとにのたまひなすをも知らず、同じき大臣と聞こゆるなかにも、いときよげにものものしく、はなやかなるさまして、おぼろけの人見えにくき御けしきをも見知らず、「さて、いつか女御殿には参りはべらむずる」と聞こゆれば、「よろしき日などやいふべからむ。よし、ことことしくは何かは。さ思はれば、今日にても」とのたまひ捨ててわたりたまひぬ。

よき四位五位たちの、いつききこえて、うち身じろきたまふにもいといかめしき御勢なるを見送りきこえて、「いで、あなめでた

何としてでも　長の年月そのほかの何ごとを念じていたのでもございません　〔宮仕えの〕　大層調子よく一段と早口で言い立てるので　お手上げだと　参上　なさればよかろう　冗談に紛らわしておしまいになるのも悟らず　〔内大臣は〕　大層お美しく　堂々として　きらびやかなご様子で　並々の人は　お前に出るのも気後れするご人品とも分らず　〔近江君〕　〔内大臣〕　その気であれば　いや何　別に仰々しくすることもない　立派な　恭しくお供申し上げ　ちょっとどこかへお出ましになるにも　〔内大臣の〕　〔近江君〕

七 私ったら、こういう方の子でありながら、みすぼらしい小家で育ったこと。

八 無理な注文だ。草子地。

九 ほらまた、あなたって、私の言うことをぶち壊しなさる。

一〇 きっと何か仔細のある身の上なのでしょう。内大臣に見出だされたからには、特別の運勢に恵まれているのだろう、の意。

一一 親しみがあって愛らしく。

一二 （近江の君は）ただ大層田舎の、みすぼらしい下下の者の間で大きくなられたので。

一三 おもしろくもない恋の歌のやりとりの話をするにも、声の出し方がそれぞれの場合にふさわしくて。

一四 歌の上の句、下の句いずれにしろ、皆まで言わないように、ひそやかに吟じたのは。

一五 歌の背後の深い事情を理解するにいたらない、ちょっと聞く程度の時には、おもしろそうだと、気もひかれるものです。中身よりも言い方次第で、何やら然るべく聞えるものだ、ということ。

一六 ある程度の内容があろうとも思えないふうに。

のわが親や。かかりける種ながら、あやしき小家に生ひ出でけること」とのたまふ。五節、「あまりことことしく、はづかしげにぞおはする。よろしき親の思ひかしづかむにぞ、尋ね出でられたまはましし」と言ふもわりなし。「例の、君の、人の言ふこと破りたまふ、いで、めざまし。今はひとつ口に、言葉なまぜられそ。あるやうあるべき身にこそあめれ」と、腹立ちたまふ顔やう、気近く愛敬づきて、うちそほれたるは、さるかたにをかしく罪許されたり。ただいと鄙び、あやしき下人のなかに生ひ出でたまへれば、もの言ふさまも知らず。ことなるゆゑなき言葉をも、声のどやかに押ししづめて言ひ出だしたるは、うち聞く耳異におぼえ、をかしからぬ歌語りをするも、声づかひつきづきしくて、残り思はせ、本末惜しみたるさまにてうち誦じたるは、深き筋思ひ得ぬほどの打ち聞きには、をかしかなりと耳もとまるかし。いと心深くよしあることを言ひゐたりとも、よろしきここちあらむと聞こゆべくもあらず、あはつけき声

（近江君）
ほどほどの親で大事に育ててくれるような人に
でもあまりご立派すぎて
気後れしそうなお方です
見つけられなさったらよかったの
友だちみたいに
口出ししないで下さい
ほんとに
あきれた
面さしは
それなりに美しく
ふざけているところは
大目に見られる
言葉遣いも知らない
声をゆっくりと
もの静かに
大体そう深い意味のない言葉でも
のである
口にしたのは
ふと聞くにも
格別に思われ
余情たっぷりに
（しかし反対に）大層内容があって風情のあることを言っていても

一　言葉に訛があって。「東にて養はれたる人の子は舌たみてこそものは言ひけれ」（『拾遺集』巻七物名、したたみ、読人しらず）

二　三十一文字の上下続かぬ歌を。字数は何とか合うものの、意味の通らぬ歌。

三　父大臣が私をいかに大事に思って下さっても、ご姉妹方が冷たくなさったら、このお邸に身の置き所があろうか。「天下に」は、強調の語。「言葉こはごはしく」の実例であろう。

近江の君、女御に歌を贈る

三巻玉鬘二九〇頁、大夫の監の言葉にあった。

四　近江の君のお邸内でのご声望のほど、まことに頼りないことだ。からかい気味の草子地。

五　お近くにおりますのに。「人知れぬ思ひやなぞと葦垣のま近けれども逢ふよしのなき」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）。以下、装飾過多の文章。

六　今までお近くにいるかいもございませんのは（お伺いできませんのは）、来るなと関所をお据えあそばしたのかと存じます。「立ち寄らば影踏むばかり近けれど誰か勿来の関を据ゑけむ」（『後撰集』巻十恋二、小八条御息所）。勿来の関は、陸奥の歌枕。

七　お目にもかかっていませんのに、お血続きだと申し上げるのは恐れ多いのですが。「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」（『古今六帖』五）を引く。（一巻若紫二三八頁注五参照）

八　まことに失礼ながら。手紙の結びの言葉。

声の調子でお口になさる言葉といったらごつごつして　したい放題にいざまにのたまひ出づる言葉こはごはしく、言葉たみて、わがままに

い気になっていた　今も馴れきっているふうに　態度がひどく不作法なので　誇りならひたる乳母の懐にならひたるさまに、もてなしいとあやしきに、やつるるなりけり。

悪く見えるのであった　全くお話にならぬというわけではなく　いといふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あはぬ歌、口疾くうち続けなどしたまふ。

即座にものしたりなさる

（近江君）「さて、女御殿に参れとのたまひつるを、しぶしぶなるさまならば、

（父上が）　出仕をしぶるようなふうでは　お気を悪くもなさろう　ものしくもこそおぼせ。夜さりまうでむ。

今夜参上しよう　大臣の君、天下におぼすとも、この御方々の、すげなくしたまはむには、殿のうちには立てりなむはや」とのたまふ。御おぼえのほど、いと軽らかなりや。まづ御文たてまつりたまふ。

（女御に）　葦垣のま近きほどにはさぶらひながら、今まで影踏むばかりのしるしもはべらぬは、勿来の関をやすゑさせたまへらむとなむ。知らねども、武蔵野といへばかしこけれども、あなかしこや、あなかしこや。

（紙の）　と点がちにて、裏には、

九 字画の点が目立つ書き方。無骨な筆勢をいう。
一〇 嫌われますと、一層思いがつのるからでしょうか。「あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき」（『後撰集』巻十恋二、読人しらず。『拾遺集』巻十五恋五。五句「思ひ絶ゆべき」）
一一 いえもう、いえもう、見苦しい字は大目に見ていただきたく。「あしき手をなほよきさまにみなせ川底の水屑の数ならねども」（『河海抄』所引）
一二 一首の意は、「いかであひ見む」（何とかしてお目にかかりとうございます）にある。「いかが崎」は、「いかで」を言い出す序。河内の国の歌枕（あるいは近江とも）。「田子の浦」は、駿河の国の歌枕。第一句「草若み」は、自分を卑下したつもりか。三箇所の関係のない名所を詠み込み、「本末あはぬ歌」の実例。
一三 「み吉野の大川のべの藤なみのなみに思はば我が恋ひめやは」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）の「大川のべの」を言い誤り、下の句の「並み一通りの気持なら、こんなにお慕いするでしょうか」を暗示したつもり。
一四 歌の「草若み」に合せたか。
一五 万葉仮名の草体。
一六 便器の掃除などをする童女。文使いである。
一七 女房の詰所。
一八 近江の君のこと。その住む御殿を以て呼ぶ。
一九 弘徽殿の女御に仕える女房。

女御方、近江の君の文に一同失笑しつつ、返事を書く

まことや、暮にも参り来むと思うたまへ立つは、厭ふにはゆるにや。いでや、いでや、あやしきは水無瀬川にを。

（今宵にでも／参上しようと思い立ちましたのは／一〇）

とて、また端にかくぞ、

草若み常陸の浦のいかが崎
いかであひ見む田子の浦波

（一二）

大川水の。

（一三）

と、青き色紙一重に、いと草がちに、いかれる手の、その筋とも見えずただよひたる、書きざまも下長に、わりなくゆゑばめり。行のほど、端ざまにすぢかひて、倒れぬべく見ゆるを、うちゑみつつ見て、さすがにいと細く小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。樋洗童はしも、いと馴れてきよげなる、今参りなりけり。

（一五）（一六）（一七）

（いかつい筆跡で／誰の書風を引くとも／分らずあいまいで／〔文字の〕／端の方にゆがんで／倒れそうに見えるのを／〔ご本人は〕にっこりしながら見て／それでも女らしく／いやに由緒ありげである／もの馴れて見よいのだが／の方は／新参者なのであった／〔樋洗童〕この文をさし上げて下さい）

女御の御方の台盤所に寄りて、「これ参らせたまへ」と言ふ。下仕へ見知りて、「北の対にさぶらふ童なりけり」とて、御文取り入る。大輔の君といふ、持て参りて、引き解きて御覧ぜさす。女御、

（一八）（一九）

（よく知っていて／〔文を〕／お目にかける）

一 弘徽殿の女御方の女房。上﨟である。

二 大層しゃれたお手紙の様子でございますね。万葉仮名の草体は、女があまり用いないので、こういう。

三 草の文字はよく分らないからかしら、歌の意味が続かないような気がします。草仮名の読みにくさにかこつけて、やんわりと批評したもの。

四 （ご姉妹のことゆえ）おおっぴらにではないが。

五 （樋洗童が）お返事をと願うので。

六 お側にいるかいもなくお目にかかれませんのは、恨めしく存じます。「葦垣のま近きほどに……」に応じたもの。

七 歌意は「お出かけ下さい。お待ちしています」。「立ち出づ」に、波の「立つ」意を掛け、「松」に「待つ」を掛ける。「筥崎の松」は、筑紫筥崎の松原。一首の中に、贈歌にある「常陸」をはじめ、わざと四箇所の関係のない地名を用いて、こちらも本末合わぬ歌で応じる。

苦笑して　ほほゑみてうち〔下に〕置かせたまへるを、一中納言の君といふ、近くさぶらひて、そばそば見けり。（中納言君）二「いと今めかしき御文のけしきにもはべるかな」と、ゆかしげに思ひたれば、（女御）三「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」とて賜へり。（女御）返事は「返りこと、かくゆゑゆゑしく書かずは、わろしとや思ひおとされむ。やがて書きたまへ」とゆづりたまふ。四もて出でてこそあらね、若き人は、ものをかしくて、皆うち笑ひぬ。五御返りこへば、（中納言君）風流な引歌ばかり「をかしきことの筋にのみまつはれてはべめれば、聞こえさせにくくこそ。宣旨書きめきては、いとほしからむ」とて、ただ御文めきて書く。（中納言君）六「近きしるしなきおぼつかなさは、うらめしく、

横からちらっと　見たそうにしているので　若い女房たちは　ご返歌申し上げにくうございます　代筆と分っては　直筆のお手紙のように

七常陸なる駿河の海の須磨の浦に
波立ち出でよ筥崎の松」

と書きて、読みきこゆれば、（女御）「あなうたて、まことにみづからのにもこそ言ひなせ」と、かたはらいたげにおぼしたれど、（中納言君）「それは聞

くすくす笑った　ついているようですので　お気の毒でしょう　本当に私が書いたと吹聴したらどうしましょう　迷惑そうなご様子だけれども

八 返事を上包みの紙に包んで、使いにことづけた。ものの枝などにはつけなかった趣。

近江の君、返歌を喜ぶ

九 近江の君のこと。

一〇 甘ったるい薫香の香を、何度も何度も、着物にたきしめていらっしゃった。女御に対面の用意である。薫香は、蜜を加えて練り固めるが、その分量が多いと甘ったるい香がして、下品とされた。

一一 頬につける赤い顔料。紅花の花弁を絞って作る。

一二 女御とご対面の折は、さぞ出過ぎたこともあるでしょう。草子地。早速今夜参上対面することを予想させる書き方。

かむ人わきまへはべりなむ」（すぐに分りましょう）とて、おしつつみて出だしつ。

御方見て、（近江君）「（しゃれたお歌だこと）をかしの御口つきや、（待つとおっしゃっているわ）まつとのたまへるを」とて、いとあまえたるたきものの香を、かへすがへすたきしめゐたまへり。紅といふもの、いと赤らかにかいつけて、髪けづりつくろひたまへる、（それなりにはでやかで）さるかたにぎはしく、愛敬づきたり。御対面のほど、さし過ぐしたることもあらむかし。

篝火（かがりび）

前巻に続く頃、季節は秋になっている。

宮仕えに出た近江の君は、女御のもとで行儀見習をするよりはやく、世間の噂の種になっている。

源氏は、大げさに迎えておいて、人柄が眼鏡に叶わぬとなると、たちまち実の娘を女房に出してしまう内大臣のやり方に賛成できない。玉鬘を迎えた時の源氏の慎重さ、六条の院に養われて以来、日ごとに美質を増す玉鬘に、初音の巻以来接している読者には、この源氏の批判の言葉の重さが十分納得できるであろう。

玉鬘もまた、近江の君のことから、源氏の人柄、自分に対する処遇の厚さがよく分り、源氏をありがたく思っている。

七月五六日頃の夕月夜に、源氏は玉鬘のもとに赴く。初秋とはいえ、残暑の折柄、源氏は庭前に篝火を焚かせ、ほのかに明るむ室内で、琴を枕に玉鬘に添い臥した。今はこういうことも厭わぬ玉鬘の変りよう、しかし、それ以上無体なことはせぬ源氏、まことに不思議な仲である。源氏はおのが思いを篝火の煙によそえて愬えた。巻名は、この時の贈答の歌による。

立ち去りがたくする源氏の耳に、夕霧のいる東の対から楽の音が聞える。内大臣の長子柏木の笛の音を聞きつけた源氏は、君達を西の対に招き、あらためて琴笛の合奏に興じた。御簾の中の玉鬘は、兄弟の奏でる楽の音に耳をすまし、その姿に目を凝らすが、まだ真相を知らぬ柏木は、玉鬘を意識して、心のままに和琴を弾くこともできないのであった。

一 近頃の世間の人の噂の種に、「内大臣家の今姫君は」と、何かにつけて言い触らすのを。弘徽殿の女御の女房に出した結果、「人々もあまた見つぎ言ひ散らさむこと」（常夏一〇五頁）と案じた通りになったのである。

近江の君の噂を聞く源氏の批判と玉鬘の思い

二 人目につくはずもなく家の中に引っ込んでいたであろう娘を。姫君は深窓に養われるべし、という考え。

三 先方が些細なことにかこつけて、ご落胤だと言ったにしても。本当は実子ではないかもしれないが、という含み。

四 内大臣は、ものごとの黒白をきっぱりとおつけになるご性分にまかせて。常夏の巻でも「よしあしきけぢめも、けざやかにもてはやし、またもて消ち軽むることも、人に異なる大臣なれば」（八八頁）と言っている。

五 本当によくも源氏のもとに引き取られたものだと。玉鬘の思い。以下に、その理由が述べられる。

六 （近江の君のように、お気に入らぬ場合）恥ずかしい目にあっただろうと。

七 玉鬘の女房。夕顔の乳母子。

一このころの世の人の言種に、内の大殿の今姫君と、ことに触れつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞こしめして、「ともあれかくもあれ、二人見るまじくて籠りゐたらむ女子を、三なほざりのかことにても、さばかりにものめかし出でて、かく人に見せ言ひ伝へらるるこそ、心得ぬことなれ。四いと際々しくものしたまふあまりに、深き心をも尋ねずもて出でて、心にもかなはねば、かくはしたなきなるべし。よろづのこと、もてなしからにこそ、なだらかなるものなめれ」と、五いとほしがりたまふ。

娘の人柄がどうであれ
女房に仕立てて人目にさらし噂されたりするのは
なにご大層に迎え取った上で
しなさり方だ
お気に召さないので
こんな心ない扱いになったのだろう
詳しい内情も
調べず連れ出したものの
こちらのやり方次第で
おだやかにすむものなのだ
気の毒がりなさる

かかるにつけても、げによくこそと、親と聞こえながらも、年ごろの御心を知りきこえず馴れたてまつらましに、六はぢがましきことやあらましと、対の姫君おぼし知るを、七右近もいとよく聞こえ知ら

〔内大臣は〕
こんな噂を聞かれるにつけても
離れて
いた間のお考えを存じ上げずに
お側に参ったなら
玉鬘
そのことをよくお教え申し上

一 秋の初風が涼しく吹き出して、ものさびしい気持がなさるので。「わが背子が衣の裾を吹き返しうらめづらしき秋の初風」（『古今集』巻四秋上、読人しらず）。『釈』以下には「初風の涼しくもあるかわが背子が衣のうらのうらもさびしき」（『紫明抄』『河海抄』）「涼しく吹けば」「衣の裾のうらぞ」を引く。

初秋の一夜、源氏、玉鬘を訪れて、篝火の歌を詠み交わす

二 和琴である。（常夏九一頁以下参照）

三 五日、六日頃の月。夕方に出て、すぐ西に入る。

四 風に鳴る荻の葉ずれの音も、次第に物思いをそそる時刻になってきた。「さらでだにあやしきほどの夕暮に荻吹く風の音ぞ聞ゆる」（『後拾遺集』巻四秋上、村上の御時、八月ばかり、上久しうわたらせたまはで、忍びてわたらせたまひけるを知らず顔にて琴ひきはべりける　斎宮女御）

五 こんな（男女の）仲があろうかと。源氏の思い。

六 庭前の篝火。篝（鉄製の籠）に松材を盛って焚き、屋外の照明にする。（図録七参照）

七 右近衛の将監（しょうげん）（三等官、正六位上相当）で、特に五位に叙せられた者。

八 篝火は水のほとりで焚くという。（『弄花抄』）

九 にしきぎ科の落葉灌木あるいは喬木。初夏、緑白色の花を開き、秋、紅葉する。

せけり。僧き御心こそ添ひたれど、さりとて、御心のままに押した（無理押し）ちてなどもてなしたまはず、いとど深き御心のみまさりたまへば、（源氏は）いやなお心はおありだがなどなさったりせず（いよいよ深いご愛情がまさる一方なので）やうやうなつかしううちとけきこえたまふ。（玉鬘も）（すなおに）

秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣もうらさびしきこ（一）（せ）（ころも）ちしたまふに、忍びかねつつ、いとしばしばわたりたまひて、お（源氏は）（西の対に）（一日中）はしまし暮らし、御琴（二）なども習はしきこえたまふ。五六日の夕月夜（三）は疾く入りて、すこし雲隠るるけしき、荻の音（四）もやうやうあはれなるほどになりにけり。御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。（源氏は）（玉鬘と）

五 かかる類ひあらむやと、うち嘆きがちにて夜ふかしたまふも、人の（女房が）（ともすれば溜息をついて）（よ）咎めたてまつらむことをおぼせば、わたりたまひむとて、御前の（変だとお思い申すかもしれないと）（お帰りになろうとして）（六）篝火のすこし消えがたなるを、御供なる右近の大夫を召して、とも（かがりび）（七）（たいふ）（焚きつけさせなさる）しつけさせたまふ。

八 いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広ごり臥したる檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどに置きて、さし退きて（格別風情のある枝ぶりを広く低く張った）（九）（松の割木を大げさにならぬ程度に用意して）（〔篝火を〕）

一〇 まだ残暑きびしい頃の感じをそのままにいう。
一一 大層気味悪く、心もとないから。木立が茂って、暗いからであろう。
一二 あの篝火の煙につれて立ちのぼる恋の煙こそ、いつまでも消えぬ私の燃える思いなのです。篝火は燃え尽きることがあっても、自分の思いは絶えない、の意。「恋」に「火」を詠み込む。
一三 (それなのに) いつまで待てとおっしゃるのですか、(打ち明けられないで) くすぶる火ではないにしても、人目を忍ぶ苦しい思いなのですよ。「夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下燃えをせむ」(『古今集』巻十一恋一、読人しらず) によっていう。
一四 果てしない空に消して下さいませ、篝火につれて一緒に立ちのぼる煙とおっしゃるならば。篝火の煙は空に消えてゆくので、こういう。
一五 玉鬘のいる西の対から、寝殿を隔ててある。
一六 十三絃の琴。(二巻図録八参照)

篝火

ともしたれば、〔玉鬘の〕御前のかたは、いと涼しくをかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。御髪の手あたりなど、いと冷やかにあてはかなるここちして、うちとけぬさまに、ものをつつましとおぼしたるけしき、いとらうたげなり。帰り憂くおぼしやすらふ。「絶えず人さぶらひてともしつけよ。夏の、月なきほどは、庭の光なき、いともものむつかしく、おぼつかなしや」とのたまふ。

(源氏)「篝火にたちそふ恋の煙こそ
世には絶えせぬ炎なりけれ

いつまでとかや、ふすぶるならでも、苦しき下燃えなりけり」と聞こえたまふ。女君、あやしのありさまやとおぼすに、

(玉鬘)「行方なき空に消ちてよ篝火の
たよりにたぐふ煙とならば

人のあやしと思ひはべらむこと」とわびたまへば、「くはや」とて出でたまふに、東の対のかたに、おもしろき笛の音、箏に吹きあは

〔玉鬘の〕お部屋の方は
玉鬘
気品
身を固くして
のある感じで
〔玉鬘の〕
何もかも恥ずかしいと
大層かわいらしい
〔源氏は〕
ぐずぐずしていられる
(源氏)
誰かがいて焚きつけていよ
(源氏)
皆がおかしいと思うことでしょう
奇妙な二人の仲だと
玉鬘
(玉鬘)
いやがられるので
(源氏)それでは

せたり。中将の、例のあたり離れぬどち遊ぶにぞありける。「頭の中将にこそあなれ。いとわざとも吹きなる音かな」とて、立ちとまりたまふ。

（源氏）御消息、「（源氏）こなたになむ、いと影涼しき篝火に、とどめられてもの（火影の）する」とのたまへれば、うち連れて三人参りたまへり。「風の音秋になりにけりと聞こえつる笛の音に、忍ばれでなむ」とて、御琴（和琴を取り出して）ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。源中将は、盤渉調にいとおもしろく吹きたり。頭の中将、心づかひして出だし立てがたうす。「遅し」とあれば、弁の少将、拍子打ち出でて、忍びやかに歌ふ声、鈴虫にまがひたり。二返りばかり歌はせたまひて、御琴は中将にゆづらせたまひつ。げにかの父大臣の御爪音に、をさをさ劣らず、はなやかにおもしろし。「御簾のうちに、ものの音聞き分く人ものしたまふらむかし。今宵は盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔ひ泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」とのたまへば、姫君もげ

（聞きほれるばかりに）（〔笛を〕）（柏木）（夕霧）（盤渉調にいい）（歌いにくそうにしている）（気を張って）（源氏）（部屋の中に）（注意されよ）（おいでのようです）（柏木）（玉鬘）

一 中将（夕霧）が、いつもの側を離れない人たちと合奏しているのだった。内大臣家の子息たちである。常夏の巻にも「例の大殿の君達、中将の御あたり尋ねて参りたまへり」（八五頁）とあった。

二 頭の中将（柏木）であろうな。柏木は右近衛の中将（常夏八九頁）。蔵人の頭を兼ねていたと分る。

三 全く格別に響く笛の音だね。

夕霧と柏木兄弟西の対に参上

「吹きなる」は「吹き鳴る」か。

四 源氏からの案内である。

五 夕霧、柏木、弁の少将（柏木の弟）の三人。

六 風の音が秋になったと聞えてきた笛の音に。秋風楽を吹いていたのである。「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（『古今集』巻四秋上、秋立つ日詠める　藤原敏行朝臣）による。秋風楽は、唐楽、盤渉調。

七 盤渉（洋楽のhに近い）を主音とする律旋音階。

八 打楽器の一種。笏を切り離した形で、左右の手に持ち、一方の平面に、一方の切口を打ち合せる。

九 今の松虫をいう。

一〇 全く、あの父内大臣のお弾きになる音に、ほとんど負けを取らず。内大臣が和琴の名手であることは、三巻少女二三五頁、二六九頁、常夏九一頁参照。

一一 玉鬘のこと。近頃、源氏に和琴を習っている。

一二 年のいった者は。源氏自身をいう。

一三 ついおしゃべりをしすぎるかもしれない。柏木兄弟に玉鬘のことを漏らしてしまうかもしれない。

にあはれと聞きたまふ。絶えせぬ仲の御契り（切っても切れぬ姉弟のちぎり）、おろかなるまじきものなればにや、この君達を人知れず目にも耳にもとどめたまへど、（玉鬘は）かけてさだに思ひ寄らず、この中将（柏木）は、心の限り尽くして、思ふ筋（玉鬘への）思慕にぞ、かかるついでにも、え忍び果つまじきここちすれど、さまよ（胸に納めておけない気持がするけれども）くもてなして、をさをさ心とけても搔きわたさず。（並々ならぬものだからだろう）（よもやそうとも気づかず）（のことで）（くろって）（平静をつ）

一四　めったなことに気を許して弾き続けることもしない。

野の分わき

篝火の巻（秋七月）に続く、仲秋八月。六条の院西南の町、秋好む中宮の御殿の庭園は、例年になく秋草の花の景観が目を奪うほどのすばらしさであった。ちょうど中宮も里下がり中で、妍を競う秋の花々に目を娯しませていられたが、ある日の夕刻から、激しい野分が吹き荒れはじめて、夜通し猛威をふるった。この巻は、その野分を以て巻の名とする。

その夕刻、風の見舞に南の御殿を訪れた夕霧は、はしなくも、絶えて窺うことも許されなかった紫の上の美しい姿を垣間見る。その姿は夕霧に、春の曙の霞の間に咲き誇る樺桜もかくやと望まれた。その夜を祖母大宮の三条の宮に過した夕霧は、風の音にまんじりともせず、紫の上の美しい面影を思い続ける。

翌早朝、南の御殿に立ち帰った夕霧は、野分に荒れ果てた庭に目をやりながら、聞くともなしに寝室の源氏と紫の上の仲むつまじいやりとりをほの聞く。夕霧は源氏の名代として秋好む中宮を見舞い、ついで、中宮、明石の上、玉鬘、花散里と、女君たちを見舞う源氏のお供をする。中でも玉鬘にたわむれかかる源氏の姿を垣間見て驚くが、玉鬘の美しさは夕映えに露を帯びた八重山吹さながらであった。南の御殿の明石の姫君の許に立ち寄った夕霧は、雲居の雁などへの文を書くが、そこで垣間見た姫君の容姿は、夕霧に藤の花の美しさを思わせた。

読者は夕霧に導かれて、六条の院の女君たちのそれぞれの姿態に接するのであるが、各場面に作者の冴えた描写力が見られ、読みごたえのある巻である。

一 六条の院の西南の町、秋好む中宮の御殿のお庭。
二 風情のある黒木や赤木の籬をあちこちに配して。「黒木」は、皮のついたままの木、「赤木」は、皮をはいだ木。「籬」は、植込みの周囲の柵（図録七参照）。
三 朝露、夕露の光も格別に、玉かと輝くばかり広々と庭作りした。「植ゑたてて君が標結ふ花なれば玉と見えてや露も置くらむ」（『後撰集』巻六秋中、伊勢。『古今六帖』一、露。三句以下「野辺なれば玉とも見よと露や置くらむ」）による。なお「朝夕露」は歌語。

中宮の町の秋の景観

四 「野辺」は歌語。少女の巻に「秋の野をはるかに作りたる」（三巻二七四頁）とあった。
五 「野辺」に対していう。暗に紫の上の東南の町をさす。「南の東は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ」（少女二七四頁）とあった。
六 春秋優劣の論。（付録三一一頁参照）
七 名高い春の御殿の美しい花園にひいきした人々も（胡蝶三三頁参照）。「名たたる」は歌語。「数知らず君が齢をのばへつつ名たたる宿の露とならなむ」（『後撰集』巻七秋下、伊勢）
八 また掌を返すように心変りするさまは。「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」（『古今集』巻十五恋五、小町）
九 亡き前皇太子。中宮の父。「忌月」は、亡くなった月。
一〇 秋の野を分けて吹く激しい風。台風。

野分

一 中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見所多く、色種（種類）を尽くして、二 よしある黒木赤木の籬を結ひまぜつつ、同じ花の枝ぶりや同じき花の枝ざし、姿ながら、三 朝夕露の光も世の常ならず、玉かとかかやきて作りわたせる四 野辺の色を見るに、はた、五 春の山も忘られて、涼しうおもしろく、心も浮き立つ思いがする心もあくがるるやうなり。六 春秋のあらそひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、七 名たたる春の御前の花園に心寄せし人々、八 また引きかへしうつろふけしき、時勢におもねる世情と変り世のありさまに似たり。

〔中宮が〕お気に召して これを御覧じつきて里居したまふほど、管絃のお催しなどもありたいと御遊びなどもあらまほしけれど、花の盛りの過ぎるのを気になさりながら八月は故前坊の御忌月なれば、心もとなくおぼしつつ明け暮るるに、お庭の秋草の花の色が美しさを増す有様を この花の色まさるけしきどもを御覧ずるに、一〇 野分、例の

一 草むらの露の玉が風に乱れ散るにつれて。「露の玉」は、前に「朝夕露の光も世の常ならず、玉かとかかやきて」とあったのに応ずる。「玉の緒乱る」は、玉を貫き止めた糸が切れて乱れ散る意に、心が乱れる意を利かせる。「玉の緒」は、命の意の歌語。

二 大空を蔽うほどの袖は、この秋の空にこそほしいような様子だった。「大空におほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」（『後撰集』巻二春中、題しらず、読人しらず。『寛平御時后宮歌合』一句「大空を」）による。

三 御格子などもお下ろししたので。外の庭も見えなくなる。

四 紫の上の御殿。

五 庭前の植込み。「秋の前栽をば、むらむらほのかにまぜたり」（少女二七四頁）とあった。

六 「もとあらの小萩」（下葉が散って根元のまばらな萩）は風を待つものだが、これでは立つ瀬もないほどのひどい風の吹きようだ。「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君待てこそ待て」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず）による。次の「露もとまるまじく」は、萩の縁でいう。

七 東の対から紫の上のいる寝殿に通ずる渡殿。

八 丈の低い衝立。

九 渡殿から簀子を隔てて廂の間に入る妻戸。

夕霧、南の御殿で紫の上を垣間見る

年よりもおどろおどろしく（ひどい勢いで）、空の色変りて吹き出づ。花どものしを（花が風に吹きたわめられるのを）るるを、いとさしも思ひしまぬ人だに（それほど秋の草花の好きでない人でも）、あなわりなと（まあどうしようと心を痛めるものなのに）思ひ騒がるるを、まして、草むらの露の玉の緒乱るるままに、御心まどひもしぬべくおぼしたり。おほふばかりの袖は、秋の空にしもこそ欲しげなりけれ。暮れゆくままに、ものも見えず（物も見えないほどひどく吹き荒れて）吹きまよはして、いとむくつけければ、御格子など参りぬるに、うしろめたくいみじと（とても不気味なので）、花の上をおぼし嘆く。

南の御殿にも、前栽つくろはせたまひけるをりにしも（手入れさせていらしたちょうどその時）、かく吹き出でて、もとあらの小萩、はしたなく待ちえたる風のけしきなり。（枝も）折れ返り、露もとまるまじく吹き散らすを、すこし（紫上は）端近くて見たまふ。大臣（源氏）は、姫君（明石の姫君）の御方におはしますほどに、中将の君（夕霧）参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸のあきたる隙を、何心もなく（何気なく）見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて、音もせで見る。御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに、

一〇 廂の間のご座所にいられる人は。紫の上である。前に「すこし端近くて見たまふ」とあった。

一一 ほかの人と見間違いようもなく。夕霧には、まさしく紫の上その人と見受けられた、の意。

一二 山桜の一種。樹皮に光沢があって皮細工に用いられる。花期は八重桜より遅い。『河海抄』は「花の色、薄くれなゐにてことさら艶色ある花なり」という。古名「ははか」また「かには桜」ともいう。

一三 魅惑的な美しさは、はなやかにあたりに照り映えて。

一四 どうしたのであろうか、（紫の上が）お笑いになった顔が。何か女房たちとやりとりがあったが、その声は夕霧の所まで聞えてこない趣。

一五 父源氏が、自分を紫の上とは疎遠に、近づけぬようにお扱いなのは。螢七九頁にも同様のことが見える。以下、夕霧の思い。

一六 万一こうしたこと（自分が紫の上を垣間見て心を動かすようなこと）もあろうかと懸念なさってのことだったのだ。

一七 明石の姫君のお部屋。寝殿の西側が姫君の居室という趣。

一八 寝殿の東と西の隔ての襖。「内の」とあるのは、母屋の襖であろう。

一九 家来たちがその辺にいるだろうに、（そんな端近にいられては）お姿が見えたら大変だ。

見通しあらはなる廂（ひさし）の御座（おまし）にゐたまへる人、（一〇）ものにまぎるべくもあらず、気高（けだか）く美しくきよらに、さとぱっと照り映えるような感じでにほふここちして、春の曙（あけぼの）の霞（かすみ）の間より、おもしろき風情のある樺桜（かばざくら）の咲き乱れたるを見るここちす。（一二）あぢきなく、どうにもならぬほど見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬（あいきやう）はにほひ散りて、（一三）またなくめづらしき紫の上人の御さまなり。御簾（みす）の吹き上げらるるを、女房たち人々押へて、（一四）いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いといみじく何とも美しく見ゆ。花どもを心苦しがりて、〔吹き乱される〕え見捨てて〔奥に〕入りたまはず。御前（まへ）なる女房たち人々も、さまざまにものきよげなる姿ども小ざっぱりときれいなは見わたさるれど、目移るべくもあらず。大臣（おとど）のいと気遠（けどほ）くはるかにもてなしたまへるは、こんなふうに見る人が無関心ではいられそうにないお美しさなので用心深いご性質からかく見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、（一五）いたり深き御心に何となく恐ろしくて立ちのいたちょうどその時て、（一六）もしかかることもやとおぼすなりけり、と思ふに、けはひ恐ろしうして立ち去るにぞ、（一七）西の御方（かた）より、（一八）内の御障子（うちのみさうじ）引きあけてわたりたまふ。〔源氏が〕

（源氏）何ともひどい気ぜわしい風だね

「いとうたて、あわたたしき風なめり。御格子（みかうし）おろしてよ。（一九）男（をのこ）ども

一 夕霧がまた（小障子の所に）近づいて向うを見ると。
二 紫の上に何か申し上げて、大臣（源氏）も口もとに笑みを浮べてお顔を見ていられる。
三 親とも思われず。以下、夕霧の目に映じたさま。
四 紫の上も女盛りの申し分ない美しさで。男女対座の場面なので、紫の上を端的に「女」と呼ぶ。
五 夕霧の立っている渡殿の格子。南側の格子であろう。
六 咳払いして。自分の存在を人に知らせる合図。
七 渡殿から寝殿の簀子（縁）の方に。
八 前に「妻戸のあきたる隙を」とあった妻戸。
九 今まで長年こうした機会は全くなかったのに。以下、夕霧の思い。
一〇 風は大きな岩も吹き上げるといった諺のようなものがあったか。
一一 あれほどご用心深いお二方（源氏と紫の上）のお心を騒がせて。人に見られぬかと心配したこと。
一二 花散里の東北の町の馬場にある。（少女二七五頁）
一三 所在不明。南の町の東の釣殿か。（常夏八五頁）

あるらむを、あらはにもこそあれ」と聞こえたまふを、また寄りて見れば、もの聞こえて、大臣もほほゑみて見たてまつりたまふ。親ともおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。女もねびととのひ、飽かぬことなき御さまどもなるを、身にしむばかりおぼゆれど、この渡殿の格子も吹き放ちて、立てる所のあらはになれば、恐ろしうて立ち退きぬ。今参れるやうにうち声づくりて、簀子のかたに歩み出でたまへれば、「さればよ。あらはなりつらむ」とて、かの妻戸のあきたりけるよと、今ぞ見とがめたまふ。年ごろかかることのつゆなかりつるを、風こそげに厳も吹き上げつべきものなりけれ、さばかりの御心どもを騒がして、めづらしくうれしき目を見つるかな、とおぼゆ。

（源氏は）すっきりと美しくて
非の打ち所のないお二人のご様子であるのを
（夕霧は）
見通しになったので
（夕霧が）
（源氏）やっぱりだ
見えたかもしれない
今になって疑念をお持ちになる

人々参りて、「いといかめしう吹きぬべき風にはべり。艮のかた より吹きはべれば、この御前はのどけきなり。馬場の大殿、南の釣殿などは、あやふげになむ」とて、とかくこと行ひののしる。「中

家来たち
とてもひどい勢いになりそうな風でございます
東北の
方角から
静かなのです
補強に立ち騒ぐ（源氏）
何かと

一四 夕霧が幼時から育てられた祖母大宮の邸（少女二二〇頁以下参照）。この呼び方は、ここが初出。

一五 三条の宮では。祖母大宮は、の意。

一六 この中将がお側におりますから（大丈夫でしょう）と、お世話はまかせまして（お同いいたしません）。

一七 ご挨拶を申し上げなさる。夕霧に伝言を託したもの。

一八（祖母大宮と父源氏に）お目通りなさらぬ日はない。「凡そ病患有るに非んば日々必ず親に謁すべし」（『九条殿遺誡』）

一九 帝の御物忌。殿上人たちはそれぞれ宮中の宿所に籠る。（一巻帝木四六頁注一参照）

二〇 朝廷の政務上の儀式や、節会（節日に儀式があって群臣に宴を賜る）などの、時間を取られ、いそがしい場合でも。

二一 こうしたひどい天候のために。「大風、疾雨、雷鳴、地震、水火の変、非常の時は、早く親を訪ひ、次に朝に参れ」（『九条殿遺誡』）

夕霧、三条の宮に赴く

将はいづこよりものしつるぞ（どこからやって来たのか）」（夕霧）一四「三条の宮にはべりつるを、風いたく吹きぬべしと、人々の申しつれば、おぼつかなさに（こちらをお案じして参上いたしましたので）参りはべりつる。一五かしこにはまして心細く、風の音をも、今はかへりて、若き子（幼い子供）のやうに懼ぢたまふめれば、心苦しさに（おいたわしいので）、まかではべりなむ（こちらは失礼いたします）」と申したまへば、（源氏）ほんとに（早くお見舞に上がりなさい）「げに、はやまうでたまひね。老いもていきて（年を取っていって）、また（もう一度子供になることは）若うなること、世にあるまじきことなれど（全く考えられないことだが）、げにさのみこそあれ（ほんとに皆そうしたものだ）」などあはれがりきこえたまひて、（源氏）「かく騒がしげにはべめるを（こうした穏やかならぬ風のようですが）、この朝臣さぶらへばと、思ひたまへゆづりてなむ」と御消息聞こえたまふ。

道すがらいりもみする風なれど（激しく吹き荒れる）、うるはしくものしたまふ君にて（〔夕霧は〕几帳面な性格のお方なので）、三条の宮と六条の院とに参りて御覧ぜられたまはぬ日なし。内裏の御物忌などに、えさらず（止むを得ず）籠りたまふべき日よりほかは、いそがしき公事、節会などの、暇いるべく、ことしげきにあはせても、まづ六条の院この院に参り、三条の宮宮よりぞ出でたまひければ、まして今日、かかる空

一 風の先に立って（源氏のもと、大宮の所へと）あちこち顔出しをされるのも、孝心深い方だと思われる。夕霧の居所は、六条の院東北の町、母代りの花散里のもと。「あくがる」は、さまよい出る意。

二 こんなに年を取りましたが。以下、こんな激しい野分ははじめてだ、と言う。

三 御殿の瓦までも。屋根は檜皮葺であるが、棟を押える棟瓦である。

四 「どうしてわざわざおいで下さったこと」と、ふるえながらも、ちゃんとご挨拶なさる。「かつは」は、一方では。

五 あれほど大層なものだったご威勢も今はひっそりとして。大宮の夫、故太政大臣の生前のことをいう。三条の宮は、太政大臣の旧邸である。

六 内大臣（大宮の長子）のご態度は、かえって少々よそよそしいのだった。雲居の雁と夕霧とのことで大宮につらく当ったこともあった（少女二三九頁以下参照）。

夕霧、一夜、紫の上のことを思い続ける

七 先刻の紫の上の、心に浮ぶお姿が。

八 よからぬ思い（紫の上に対する恋慕）に取りつかれたら大変だ。

九 過去、将来にわたってもあれほどの人はいないと思われるお美しさだった。以下、夕霧の思い。

のけしきにより、風のさきにあくがれありきたまふもあはれに見ゆ。大宮宮、いとうれしう、たのもしと待ち受けたまひて、「ここらの齢に、まだかく騒がしき野分にこそあはざりつれ」と、ただわななきにわななきたまふ。大きなる木の枝などの折るる音も、いとうたてあり。御殿の瓦さへ残るまじく吹き散らすに、「かくてものしたまへること」とかつはのたまふ。そこら所狭かりし御勢のしづまりて、この君をたのもし人におぼしたる、常なき世なり。今もおほかたのおぼえの薄らぎたまふことはなけれど、内の大殿の御けはひは、なかなかすこしうとくぞありける。

夕霧

中将、夜もすがら荒き風の音にも、すずろにものあはれなり。心にかけて恋しと思ふ人の御ことはさしおかれて、ありつる御面影の忘られぬを、こはいかにおぼゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へ、いと恐ろしきことと、みづから思ひまぎらはし、異事に思ひ移れど、なほふとおぼえつつ、来し方行く末ありがたくもものしたまひける

〔夕霧を〕 大宮 〔庭の〕 ふるえにふる えていらっしゃる とても恐ろしい 三 四 五 夕霧一人を頼りにしていらっしゃるのは 変転の激しい世の中だ 世間一般 の声望が衰えていらっしゃることはないけれども 六 七 雲居の雁 むやみに物思わしい気持に襲われる これは一体どうした気持なのだろう 八 思わず念頭に浮んで 九

一〇 こんなすばらしい（源氏と紫の上の）ご夫婦仲に、どうして花散里が、源氏の奥方の一人として肩を並べておいでなのだろう。

一一（花散里のような美しくない人でも立派に扱っていらっしゃる）父源氏のお気持を。

一二 不相応なことを考えはしないが。義理の母に当る紫の上を恋い慕うこと。

翌早朝、夕霧、六条の院に赴く

一三 急に激しく降り出す雨。驟雨。

一四 広くて、あんなに高い感じのする六条の院で。高屋を連ねた感じをいう。それだけに風当りも強い。

一五 家来たちも、源氏のいらっしゃる南の町の御殿のあたりには大勢いるが。

一六 東北の町の花散里などは。

一七 一体どうしたことだ、（雲居の雁のことに加えて）もう一つ自分に物思いの種がふえたことだと、（昨夜の紫の上への思いのことを）思い出すと。

一八（紫の上のことは）いかにも不相応なことなのだ、何と馬鹿なと。

かな、かかる御仲らひに、いかで東の御方、さるものの数にて立ち並びたまへらむ、たとしへなかりけりや、あないとほしとおぼゆ。大臣の御心ばへを、ありがたしと思ひ知りたまふ。人柄のいとまめやかなれば、似げなさを思ひ寄らねど、さやうならむ人をこそ、同じくは見て明かし暮らさめ、限りあらむ命のほども、今すこしはかならず延びなむかしと思ひ続けらる。

暁がたに風すこししめりて、村雨のやうに降り出づ。「六条の院には、離れたる屋ども倒れたり」など人々申す。風の吹きまふほど、広くそこら高きここちする院に、人々、おはします御殿のあたりにこそしげけれ、東の町などは、人少なにおぼされつらむとおどろきたまひて、まだほのぼのとするに参りたまふ。道のほど、横さま雨いと冷やかに吹き入る。空のけしきもすごきに、あやしくあくがれたるここちして、何ごとぞや、またわが心に思ひ加はれるよと、思ひ出づれば、いと似げなきことなりけり、あなもの狂ほしと、とざ

（比べものにもならないことだと）（全くお気の毒だと）（真似のできないことだ）（〔夕霧は〕）（真面目なので）（あのように美しい人を）（いつかは死なねばならぬ寿命も）（妻にして）（明け方に）（衰えて）（吹きすさぶ間）（〔夕霧は〕）（人少なで心細い思いをされたろうと）（〔夕霧は〕）（お気づきになって）（〔六条院に〕）（ほの暗いうちに）（横なぐりの雨）（〔車中に〕）（空模様も荒涼たる感じであるのに）（不思議に心も上の空のような気がして）

一 花散里のもとに。

二 （花散里が）おびえて疲れきっていらしたので。「極」は「極」の音便、疲れる意。

三 南の町の御殿（源氏のもと）に参上なさると、まだ御格子もお上げしていない。

四 源氏（と紫の上）のご座所（ご寝所）のちょうど前の、簀子の欄干（手すり）。

五 屋根を葺いた檜皮（檜の皮の小板）や棟瓦。

六 庭先に立てめぐらす目隠しの塀。蔀（格子に似て粗末な作りのもの）を立てた形なのでこの名がある。（図録六参照）

七 竹や木で、間を少し透かして作った垣。建物から突き出す形にしつらえて目隠しにする。（図録六参照）

八 （野分に痛めつけられた）悲しみを訴えるかのような庭の露がきらきらと光って。「露」には涙の連想があるのでこういう。

九 なぜともなく涙の落ちるのを。露や霧は悲しみの象徴であるので、あたりの気配に感傷をそそられる。

一〇 咳払いをなさると。それとなく自分の来たことを知らせる合図。

一一 昔だってあなたにその悲しみはあじわわせることのなかった明け方の別れですよ。源氏が「夜はまだ深からむは」と言ったのに対して、紫の上が何か言った、それへの答え。

これやと思案しながら
まかうざまに思ひつつ、東の御方に、まづまうでたまへれば、懼ぢ極じておはしけるに、とかく聞こえなぐさめて、人召して、所々つくろはすべきよしなど言ひおきて、南の御殿に参りたまへれば、まだ御格子も参らず。おはしますに当れる高欄に押しかかりて見わたせば、山の木どもも吹きなびかして、枝ども多く折れ伏したり。草むらはさらにもいはず、檜皮、瓦、所々の立蔀、透垣などやうのもの乱りがはし。日のわづかにさし出でたるに、愁へ顔なる庭の露きらきらとして、空はいとすごく霧りわたれるに、そこはかとなく涙の落つるを、おしのごひ隠して、うちしはぶきたまへれば、「中将の声づくるにぞあなる。夜はまだ深からむは」とて、起きたまふなり。

何かとお慰め申して
修理させるようにとの旨など
言うまでもなく
散らばっている
[夕霧は]
合図をしているのだろう
外はまだ暗いだろうな
[紫上の]話しかけられる声は聞えず
お起きになる様子だ

何ごとにかあらむ、聞こえたまふ声はせで、大臣うち笑ひたまひて、「いにしへだに知らせたてまつらずなりにし、暁の別れよ。今ならひたまはむに、心苦しからむ」とて、とばかりかたらひきこえたまふけはひども、いとをかし。女の御いらへは聞こえねど、ほのぼの、

源氏
今になって
経験なさるのは
おかわいそうだ
しばらくむつましく話し合っていらっしゃるお二人の様子は
とても優雅だ
紫の上のお返事は聞えないが
かすかながら

一二 あまりお側近くにいるのも気がひけて。夫妻の会話を漏れ聞いたのを憚る気持。

一三 はい。ちょっとしたことにも涙もろくておいでですので、とてもお気の毒でございます。

一四 内大臣は、どうもあまりやさしくはなさらないらしくて、そのことをこぼしておいでだった。前にも「内の大殿の御けはひは、なかなかすこしうとくぞありける」（一二八頁）とあった。

一五 親に孝養を尽すといったことでも。

一六 それはそれとして、（内大臣は）物事に思慮深く、大変しっかりした人で、この末世にはもったいないほど、学問も人並みすぐれ、立派な人だが。「うるさし」は、煩らわしく思うほど隙のない有様をいう。

一七 人間として、このように欠点が全くないということは、ほとんどあり得ないことなのだ。内大臣にしても、やさしみに欠ける欠点がある、の意。

このように冗談を申し上げなさる　言葉の端々から　水も漏らさぬご夫婦

かやうに聞こえたはぶれたまふ言の葉のおもむきに、ゆるびなき御仲なのだなと　〔夕霧は〕仲らひかなと、聞きゐたまへり。

御格子を〔源氏が〕御手づから引き上げたまへば、気近きかたはらいたさに、控えていられる　立ち退きてさぶらひたまふ。〔源氏〕どうであった「いかにぞ、昨夜、大宮宮は待ちよろこびたまひきや」〔夕霧〕一三「しか。はかなきことにつけても、涙もろにものしたまへば、いと不便にこそはべれ」と申したまへば、笑ひたまひて、〔源氏〕もう先もお長くあるまい「今いくばくもおはせじ。ねんごろにお世話してさし上げるがよい まめやかにつかうまつり見えたてまつれ。一四内の大臣は、こまかにしもあるまじうこそ愁へたまひしか。〔内大臣は〕妙人柄あに派手なところがあってやしうはなやかに、男々しきかたによりて、親などの御孝をも、い世間をあっと思わせようというところがあり大げさなことばかり重んじてかめしきさまをばたてて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみじみと情の深いところはない人でいらっしゃるのだにしみて深きところはなき人になむものせられける。さるは、心の隈多く、いとかしこき人の、末の世にあまるまで、才類ひなく、うるさながら、一七人として、かく難なきことはかたかりける」などのたまふ。

夕霧、源氏の名代として秋好む中宮を見舞う

一 しっかりした中宮職の者など詰めていたであろうか。「宮司」は、中宮に関する事務をつかさどる中宮職の役人。

二 お見舞のご挨拶を申し上げなさる。天候の異変などに、父兄や夫が女性を見舞うのが当時の習い。

三 あいにく私も風邪を発しまして。風邪は、風が体内に故障を起したものとされ、「乱り風」ともいうので、上に「吹き乱りはべりしに」とあるのに応じてこういう。以下、直接見舞に赴かない言いわけ。

四 南の町と中宮の西南の町との隔ての廊の戸を通って。「この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行き通はして」（少女二七六頁）とあった。

五 中宮のご座所の方を。寝殿の南面である。

六 ほの明るい朝明けの時刻に。まだ早い時刻なので気を許している。次に「御簾巻き上げて」とある。

七 簀子の欄干（手すり）に寄りかかって。下文の庭上の童女たちを見やっている体。

八 誰も見ていまいと気を許している姿は実際はどうであろうか（多分美しく着飾ってはいないだろうが）。

九 はっきり見えない明け方の暗さの中で。

一〇 表薄紫、裏青。襲の色目。

一一 表紅梅、裏青。

一二 童女の表着。

一三 表、経青、緯黄の織物に、裏青。

一四 正装の時、童女が上に着ける。（螢六九頁注一八）

（源氏）ずいぶんひどかった昨夜の風に

「いとおどろおどろしかりつる風に、中宮に、一はかばかしき宮司などさぶらひつらむや」とて、夕霧を使者に この君して御消息聞こえたまふ。二「夜の風の音は、いかが聞こしめしつらむ。[風が]吹き乱りはべりしに、三おこりあひはべりて、いと堪へがたき、とてもつらいのを手当していると ころでございまして ためらひはべるほどになむ」と聞こえたまふ。

[庭に]

中将おりて、四中の廊の戸より通りて、参りたまふ。[夕霧の]朝ぼらけの容貌、いとめでたくをかしげなり。東の対の南のそばに立ちて、五御前のかたを見やりたまへば、御格子二間ばかり上げて、六ほのかなる朝ぼらけのほどに、御簾巻き上げて人々ゐたり。女房たち 高欄に押しかかりつつ、若やかなる限りあまた見ゆ。八うちとけたるはいかがあらむ、九さやかならぬ明けぐれのほど、いろいろなる姿は、いづれともなくをかし。童女おろさせたまひて、虫の籠どもに露飼はせたまふなりけり。一〇紫苑、撫子、濃き薄き袒どもに、一三女郎花の汗衫などやうの、時秋にふさわしい衣裳で にあひたるさまにて、四五人連れて、ここかしこの草むらに寄りて、

年若な女房たちばかり

色様々な衣裳を着た姿は どれもこれも美しく見える

庭にお下ろしになって

露を与えさせていられるのであった

角の所に

参照）

一五 色とりどりの虫籠。彩色してある趣。

一六 寝殿の方から吹いてくる、かおり高い風は。「追風」は、ここは香のかおりを運んでくる風。

一七 匂わぬ紫苑の花も格別にかおりを放つ空も、香のかおりも、中宮が袖をお触れになったその移り香であろうかと。やや解しがたい。青表紙本中「空も」が「らむ」とある本もある。河内本「吹き来る追風、侍従の香にことに匂ふ香のかをりも」。

一八 中宮が入内なさった時など、（夕霧は）まだ元服前だったので、しょっちゅう簾中にも入っておられたので。中宮入内は五年前（絵合の巻）、夕霧は十歳。

一九 源氏のご挨拶を中宮に（女房を通じて）言上させなさって。「啓す」は、上皇、后、東宮などに申し上げること。

二〇 夕霧の顔見知りの女房。取次ぎとは別の上臈の女房である。

二一（その女房たちと）個人的な話も小声で親しくお交わしになる。源氏の用事で来ているので、それに対して「私事」という。

二二 この御殿はこの御殿で、何といっても気品高く暮している雰囲気や様子を見るにつけても。女房たちと話している夕霧の感想。紫の上や雲居の雁のことを思うのである。

二三 寝殿中央の南庭に下りる階段。（図録一三参照）

夕霧、源氏に復命、なお紫の上を忘れがたく思う

一五 いろいろの籠どもを持てさまよひ、撫子などの、いとあはれげなる枝ども取り持て参る霧のまよひは、いと艶にぞ見えける。吹き来る追風は、紫苑ことごとに匂ふ空も、香のかをりも、触ればひたまへる御けはひにやと、いと思ひやりめでたく、心懸想せられて、立ち出でにくけれど、忍びやかにうちおとなひて歩み出でたまへるに、人々、けざやかにおどろき顔にはあらねど、皆すべり入りぬ。御参りのほどなど、童なりしに、入り立ち馴れたまへる、女房なども、いとけうとくはあらず。一九御消息啓せさせたまひて、二〇宰相の君、内侍など、けはひすれば、二一私事も忍びやかにかたらひたまふ。二二これはた、さいへど気高く住みたるけはひありさまを見るにも、さまざまにもの思ひ出でらる。

持ってあちこちし　風にひどく痛めつけられた　霧に見え隠れする姿は　想像するさえいかにもすばらしく　緊張されて　咳払いをして　〔夕霧が〕　女房たち　それと目立つようにあわてた様子ではないが　〔室内に〕　そうよそよそしくはない　〔御簾の内に〕

南の御殿には、御格子参りわたして、昨夜見捨てがたかりし花どもの、行方も知らぬやうにてしをれ伏したるを見たまひけり。中将、二三御階にゐたまひて、御返り聞こえたまふ。「荒き風をもふせがせた

上げわたして　〔源氏と紫上は〕　見る影もなく　〔中宮の〕　お坐りになって　〔中宮の〕　防いで下さいま

一　お使いを頂きまして、やっと、ほっといたしました。

二　その場からすぐ（西南の町に）参上なさる。

三　廂の間の御簾。今まで袿姿で簀子に出て夕霧の報告を受けていたのである。

四　丈の低い御几帳。身近に引き寄せて身を隠すもの。源氏が引き上げた御簾の隙間から見える体。

五　中将（夕霧）の朝方の姿はまことにきれいだな。「朝明の姿」は、本来、女の許から朝帰って行く男の姿の意の歌語。「わが背子が朝明の姿よく見ずて今日のあひだを恋ひくらすかも」（『万葉集』巻十二、読人しらず）など。

六　親の欲目だろうか。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による。

源氏、中宮を見舞う

まふべくやと、若々しく心細くおぼえはべるを、今なむなぐさみはべりぬる」と聞こえたまへれば、「あやしくあえかにおはする宮なり。女どちは、もの恐ろしくおぼしぬべかりつる夜のさまなれば、げにおろかなりともおぼいてむ」とて、やがて参りたまふ。御直衣などたてまつるとて、御簾引き上げて入りたまふに、短き御几帳引き寄せて、はつかに見ゆる御袖口は、さにこそはあらめと思ふに、胸つぶつぶと鳴るここちするも、うたてあれば、ほかざまに見やりつ。

殿の、御鏡など見たまひて、忍びて、「中将の朝明の姿はきよげなりな。ただ今はきびはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや」とて、わが御顔は、古りがたくよしと見たまふべかめり。いといたう心懸想したまひて、「宮に見えたてまつるは、はづかしうこそあれ。何ばかりあらはなるゆゑゆゑしさも、見えたまはぬ人の、おくゆかしく心づかひせられたまふぞかし。いとおほ

子供のように
女だけでは
（源氏）不思議にか弱げでいらっしゃる
お思いだったに違いない
たしかに不親切だともお思いだったであろう
お召しになるために
紫の上に違いないと
〔夕霧は〕
ちらりと
どきどきと
よその方に視線をそらした
いやなので
小声で
（源氏）五
今はまだ幼稚な感じがするはずの年頃だが
結構見苦しくなく思えるのも
いつまでも年を取らずきれいだとご覧になるようだ
気遣いなさって
（源氏）中宮にお目にかかるのは
これといって人目につく由緒ありげなところも
お見えで
気の張ることです
奥の深い感じで何かと気を遣わせられるお人柄なのだ
ない方だが
とてもおっと

七 夕霧がすっかりぼんやりしてあらぬ方を眺めていて。前に「ほかざまに見やりつ」とあったのに応ずる。

八 察しのよい源氏のお目にはどのようにご覧になったのだろうか。草子地。

九 どうしてそんなことがありましょう。

一〇 昨日、夕霧が立って覗いていた東の渡殿。

一一 源氏が、中宮のお部屋にお入りになったので。夕霧もお供して行ったこと、すぐ下文に見える。

一二 渡殿に女房の局がある、その局の戸口。

一三 心にかかるあれこれのことが悲しくて。紫の上のこと、雲居の雁のこと。

一四 そのまま北の町に抜けて。明石の上の町は、中宮の町の北。

源氏、明石の上を見舞う

一五 しっかりした家司のような者の姿も見えず。「家司」は、貴族の家政をつかさどる者。

一六 下働きの女。下女。

一七 しゃれた袒姿でくつろいで。袒（童女の表着）だけで上に汗衫をつけない姿。

どかに女しきものから、けしきづきてぞおはするや」とて、出でたまふに、中将ながめ入りて、とみにもおどろくまじきけしきにてゐたまへるを、心疾き人の御目にはいかが見たまひけむ、立ちかへり、女君に、「昨日、風のまぎれに、中将は見たてまつりやしてけむ。かの戸のあきたりしによ」とのたまへば、面うち赤みて、「いかでかさはあらむ。渡殿のかたに、人の音もせざりしものを」と聞こえたまふ。「なほあやし」とひとりごちて、わたりたまひぬ。御簾のうちに入りたまひぬれば、中将、渡殿の戸口に人々のけはひするに寄りて、ものなど言ひたはぶるれど、思ふことの筋々なげかしくて、例よりもしめりてゐたまへり。

（りして）（女らしいけれども）（どこか人とは違ったところがおありだ）（すぐにも気づきそうにない様子で坐っていられるのを）（引き返して）（風の吹く騒ぎで）（あなたのお姿を見たのではないだろうか）（あの妻戸が開いていたからね）（源氏）（どうもおかしい）（夕霧）（西南の町に）（女房たち）（何かと色めいた冗談などおっしゃるが）（いつもより沈んでいらっしゃる）

西南の町

こなたより、やがて北に通りて、明石の御方を見やりたまへば、はかばかしき家司だつ人なども見えず、馴れたる下仕へどもぞ、草の中にまじりてありく。童女など、をかしき袒姿うちとけて、心ど丹精して取り分き植ゑたまふ龍胆、朝顔のはひまじれる籬も、みな散り

（もの馴れた）（明石上が）（からみまじっている）

一 十三絃の琴。
二 源氏の先払いをする家来たちの声がしたので。
三 くつろいで、糊気の落ちた不断着を着ている上に、小袿をはおって、きちんとしたところは、いかにもたしなみ深い。「小袿」は、略礼装、源氏に対する敬意を示したもの。「ひきおとし」を『花鳥余情』は「衣架にかけたるを引落して着たるなるべし」という。
四 （明石の上としては）意に満たぬ思いのようだ。
五 ただ普通に秋になれば荻の葉を吹き過ぎる風の音も―どなたにも一通りなさるお見舞も、しがない身の上の私一人には、飽かれたのかとしみじみと悲しく思われます。「いとどしくもの思ふ宿の荻の葉に秋と告げつる風のわびしさ」（『後撰集』巻五秋上、思ふことはべりけるころ　読人しらず）
六 玉鬘。東北の町の西の対。
七 朝の化粧をしていたのである。
八 大げさに先払いの声を立てるな。玉鬘の許に行くのがあまり目立たぬようにとの配慮。

源氏、玉鬘を見舞う

乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなるべし。（明石上は）何となくもの悲しいもののあはれにおぼえけるままに、（あれこれ引っ張り起して調べているのらしい）箏の琴を（弾くともなく手すさびにして）掻きまさぐりつつ、（気分でいたので）端近うゐたまへるに、御前駆追ふ声のしければ、三うちとけなえばめる姿に、小袿ひきおとして、（源氏は）けぢめ見せたる、いといたし。（ちょっと坐られて）端のかたについゐたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、（お見舞いなさって）つれなく立ち帰りたまふ、四心やましげなり。

（明石上）五
おほかたに荻の葉過ぐる風の音も
　憂き身ひとつにしむここちして

（それきりでお帰りになるのが）

とひとりごちけり。

六西の対には、恐ろしと思ひ明かしたまひける名残に、寝過ぐして、今ぞ鏡七なども見たまひける。「（源氏）ことことしく前駆な追ひそ」八とのたまへば、ことに音せで入りたまふ。（風のため）屏風なども皆畳み寄せ、（取り散らかした部屋内の様子なのに）ものしどけなくしなしたるに、日のはなやかにさし出でたるほど、（玉鬘は）目のさめるように）けざけざと、（きれいに身づくろいして坐っていられる）ものきよげなるさましてゐたまへり。（源氏は）近くゐたまひて、例の、

九 風の見舞にかこつけても、今までと同じように、うるさく色めいた冗談をお言いかけになるので。「むつかしう」は、玉鬘が応対に困る気持。

一〇 こんないやなことばかり仰せですから、昨夜の風とともにどこぞへ行ってしまいとうございました。

一一 風と一緒にどこぞへ行ってしまわれるのでは、ご身分柄軽はずみというものでしょう。「風」の縁で「軽軽し」と言ってからかう。どんな男にでもついて行くという暗喩がある。

一二 でも、どこか落着き先はあるに違いない。お目当ての人がいるに違いない、の意。

一三 だんだんこうしたお気持（私を嫌う気持）が出てきたのですね。無理もないことです。

一四 まるでほおずきなどいうもののように、ふっくらとして、黒髪の垂れかかった隙間からちらちらと見えるのが。「御色白くうるはしう、酸漿などを吹きふくらめてするたらむやうにぞ見えさせたまふ」（『栄花物語』初花）、中宮彰子のさま。

一五 夕霧。ずっと源氏のお供をして来ているのである。

夕霧、源氏と玉鬘を垣間見る

一六 建物の角の間（柱と柱の間）の御簾が、几帳は内側に立ててあるがきちんとしていないのを。

風につけても同じ筋に、むつかしう聞こえたはぶれたまへば、堪へずうたてと思ひて、「から心憂ければこそ、今宵の風にもあくがれなまほしくはべりつれ」と、むつかりたまへば、いとよくうち笑ひたまひて、「風につきてあくがれたまはむや、軽々しからむ。さりともとまるかたありなむかし。やうやうかかる御心むけこそ添ひにけれ。ことわりや」とのたまへば、げに、うち思ひのままに聞こえてけるかなとおぼして、みづからもうち笑みたまへる、いとをかしき色あひ、つらつきなり。酸漿などいふめるやうにふくらかにて、髪のかかれる隙々うつくしうおぼゆ。まみのあまりわららかなるぞ、いとしも品高く見えざりける。そのほかは、つゆ難つくべうもあらず。

一五 中将、いとこまやかに聞こえたまふを、いかでこの御容貌見てしがなと思ひわたる心にて、隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをら引き上げて見るに、まぎるるものども取りやり

（玉鬘）一〇 なく迷惑に
一一 おもしろそうに
（源氏）一二 機嫌を悪くされると
一三 かるがる
一四 ほほづき
一五 ひまひま
一六 きれいな
（おかしくて）笑 まったことと
〔玉鬘は〕ほんとに ふと思ったままを申し上げてし
顔色 頬のあたり
かわいらしく感じられる 目もとがほがらかすぎる感じなのが
あまり 上品にも見えないのだった 非の打ち所がない 一点も
しな
そっと 見通しをさえぎる調度類も片付けてあるの
玉鬘の 見たいも
〔源氏が〕親しげにお話し申していられるのを
のだと日頃思っていたこととて
たち
きちやう
すみ
まみ
たえ
つゆ
しも
あまり
あらず
そっと
やをら
まぎるる

たれば、いとよく見ゆ。一かくたはぶれたまふけしきのしるきを、二あやしのわざや、親子と聞こえ申しながら、三かく懐離れず、もの近かべきほどかはと、目とまりぬ。見やつけ〔源氏が〕お見つけになろうかたまはむと恐ろしけれど、あ不思議さにやしきに心もおどろきて、なほ見れば、柱隠れにすこしそばみたま〔玉鬘が〕横を向いていられたのをへりつるを、引き寄せ〔源氏が〕たまへるに、御髪の並み寄りて、はらはらと横になびいてこぼれかかりたるほど、女も、いとむつかしく苦しと思ひたまへる〔顔に〕とても迷惑でつらいと思っていられる様子ではあるものけしきながら、さすがにいとなごやかなるさまして、寄りかかりた少しもあらがうふうはなく〔源氏に〕まへるは、四ことと馴れ馴れしきにこそあめれ、いであなうたて、いかなることにかあらむ、五思ひ寄らぬ隈なくおはしける御心にて、もしたことなのだろう全く何ということだとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなあいやなことだめり、無理もないことなのだむべなりけりや、あなうとまし、六と思ふ心もはづかし。女の玉鬘のお美しさは御さま、七げにはらからといふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかしどうして心得違いもしないことがあろうと思われるなど思はむは、などか心あやまりもせざらむとおぼゆ。昨日見し御紫の上のご様子には感じが劣るけれどけはひには、け劣りたれど、八見るに笑まるるさまは、立ちも並びぬ肩も並べられそうに

一 源氏が、こうして玉鬘に色めいた冗談をおっしゃる様子は、遠目にもはっきりそれと分るので。

二 おかしなことだ。以下、夕霧の思い。

三 こんなに親の懐に抱かれるほどに、馴れ馴れしくしてよい間柄だろうかと。娘でも年頃になれば、父親との間に隔てを置くのが習いである。

四 もうすっかり親しい間柄であるらしい。以下、地の文から夕霧の思いに筆が移る。

五 女にかけては抜け目のないご性分ゆえ、生れた時からお側近くでお育てにならなかった娘だから、こうした色めいたお気持も抱くようになられたのだろう。

六 と思う心も、気恥ずかしいことだ。子ながら、冷静に思慮する夕霧の真面目さをいう草子地。

七 なるほど同じ姉弟といっても、すこし身を離して、腹違いなのだとでも考えたら。

八 見ていると自然笑みが浮んでくるような美しさは。

九 以下、夕霧の目に映じた玉鬘の印象。玉鬘の巻の年末の衣裳配りに、源氏も「曇りなく赤きに、山吹の花の細長」（三巻三二六頁）を玉鬘に贈ったことが見える。「夕ばえ」は、夕方の薄明りにものが美しく見えるさま。

一〇 どちらも季節にふさわしくない喩えだけれど。以下、弁解をかねた草子地。「よそへども」とあるのは、前に紫の上を樺桜に喩えたことを念頭に置いているのでいう。

一一 花の美しさには限度があります。以下も草子地。

一二 激しく吹く風の勢いに、女郎花はもう折れ伏してしまいそうな気がいたします。無体なご恋慕に、私は死ぬほどつらい思いがいたします、の意。女郎花を女に喩えて詠み、「女郎花秋の野風にうちなびき心一つを誰に寄すらむ」（『古今集』巻四秋上、左のおほいまうち君―左大臣時平―）などのように「風になびく」と詠むのが普通である。

一三 人目につかぬ下葉に宿る露になびいたなら、女郎花は荒い風には折れ伏すこともないでしょうに。私になびいたらよいのに、の意。「下露」の「下」に、秘かに思う意を籠める。

一四 なよ竹を見てご覧なさい。「なよ竹」は、細くしなやかな竹。歌語。

一五 聞き間違えたのでしょうか、ひどいおっしゃりようだ。源氏の歌と言葉は、作者が伝え聞いて読者に語るという趣の草子地。夕霧はすでに立ち去っている。

べく見ゆる。八重山吹の咲き乱れたる盛りに、露かかれる夕ばえぞ、ふと思ひ出でらるる。一〇をりにあはぬよそへどもなれど、なほうちおぼゆるやうよ。一一花は限りこそあれ、そそけたるしべなどもまじるかし、人の御容貌のよきは、たとへむかたなきものなりけり。御前に人も出で来ず、いとこまやかにうちささめきかたらひ聞こえたまふに、いかがあらむ、まめだちてぞ立ちたまふ。女君、

（とっさに）（それでも印象のままを言うのです）（乱れた藥なども時として目につくものですが）（たとえようもないものなのでした）（女房）（源氏は）大層親しげにひそひそとお話し申し上げていられるふうだったが（どうしたのか）（真面目な顔つきで）（玉鬘）

一三 吹き乱る風のけしきに女郎花

しをれしぬべきここちこそすれ

（夕霧には）よくも聞えないが（源氏が）口ずさまれるのを（増らしいものの）くはしくも聞こえぬに、うち誦じたまふをほの聞くに、増きものの気をそそられるので をかしければ、なほ見果てまほしけれど、近かりけりと見えたてま（終りまで見ていたいが）（近くにいたのだと）（源氏に）悟られ申すまいと つらじと思ひて、立ち去りぬ。御返り、

（源氏）一三「した露になびかましかば女郎花

荒き風にはしをれざらまし

一四 なよ竹を見たまへかし」など、一五ひが耳にやありけむ、聞きよくもあ

一 花散里のもとに。同じ東北の町である。
二 野分のあと今朝急に肌寒くなったので家事を思い立ったのか。
三 年とった女房たち。
四 細櫃（櫃の細長いもの）のようなものに真綿を引っ掛けていじっている若い女房たちもいる。綿入れを作る準備であろう。
五 朽葉色（赤みがかった黄色）の薄い絹織物。
六 濃い紅梅色の、すばらしい艶を砧で打ち出した絹など。
七 束帯の時、袍、半臂の下に着ける。後ろに長く裾を引く。（二巻図録九参照）
八 宮中の壺前栽の宴も取り止めになりましたろう。夕霧の束帯の支度を見て言う。「壺前栽」は、清涼殿と後涼殿の間の中庭（朝餉の壺と台盤所の壺）の植込み（図録四参照）。
九 源氏のお召し料の直衣。冬の直衣か。
一〇 いわゆる唐花の丸模様を織り出した綾。（図録九参照）
一一 近頃摘み取って来た鴨頭草（露草）の花で。露草から青い染料を取り縹色（薄い藍色）に染める。その染料のことを「花」という。
一二 何となく気が晴れず。玉鬘のことを見せつけられもしている。

源氏、花散里を見舞う

夕霧、明石の姫君のもとで雲居の雁などに文をやる

らずぞ。

東の御方へ、（西の対から）これよりぞわたりたまふ。今朝の朝寒なるうちとけわざにや、もの裁ちなどするねび御達、御前にあまたして、細櫃めくものに、綿引きかけてまさぐる若人どもあり。いときよらなる朽葉の羅、今様色の二なく擣ちたるなど、（花散里は）ひき散らしたまへり。（源氏）「中将の下襲か。御前の壺前栽の宴もとまりぬらむかし。（こんなに吹き荒らしたのでは）かく吹き散らしてむには、（何の催しができよう）何ごとかせられむ。（興ざめな秋になりそうです）すさまじかるべき秋なめり」などのたまひて、何にかあらむ、さまざまなるものの色どもの、いときよらなれば、（染色裁縫といった面は）かやうなるかたは、（花散里は）南の上にも劣らずかしとおぼす。（紫の上）御直衣、花文綾を、（源氏は）このころ摘み出だしたる花して、（申し分のない）はかなく（夕霧）染め出でたまへる、いとあらまほしき色したり。「中将にこそ、かやうにては（若い人の直衣として無難でしょう）着せたまはめ。（なふうにしてお着せなさるがよい）若き人のにてめやすかめり」などやうのことを聞こえたまひて、（花散里に）わたりたまひぬ。（源氏の）

（気疲れのする）むつかしき方々めぐりたまふ御供にありきて、中将は、（夕霧）なま心や

一三 雲居の雁などに書きたい手紙も、もう日が高く遅くなってしまったことを気にしながら。昨夜の風の見舞である。

一四 姫君はまだあちらにおいでになります。紫の上のもと。寝殿の東に紫の上、西に姫君がいる（一二五頁参照）。

一五 お人形の御殿はご無事でしたか。夕霧は、姫君の「雛の殿の宮仕へ、いとよくしたまひて」（螢七九頁）と前にあった。

一六 お部屋の硯と一緒に（拝借したい）。「御局」は、女房たちの局。

一七 姫君の御厨子（両開きの本箱ようのもの。一巻図録九参照）に寄って。夕霧は女房の紙と硯を借りたいと言ったが、姫君用の物を女房は用立てる。

一八 姫君の生母、明石の上の世評を思うと。出自の低さからあまり重く見られていないこと。

一九 薄く漉いた鳥の子紙。恋文などに用いるもの。

二〇 けれども、妙に型にはまって、おもしろくないお歌の詠みぶりでいらっしゃる。次の夕霧の歌を批評する草子地。

ましう、書かまほしき文など、日たけぬるを思ひつつ、姫君（明石の姫君）の御方に参りたまへり。（乳母）「まだあなたになむおはします。風に懼ぢさせたまひて、今朝はえ起き上がりたまはざりつる」と、御乳母ぞ聞こゆる。（夕霧）「もの騒がしげなりしかば、宿直もつかうまつらむと思ひたまへしを、宮の、いかにもこわがっておいでしたので いとも心苦しうおぼいたりしかばなむ。雛の殿はいかがおはすらむ」と問ひたまへば、人々笑ひて、「扇の風をお送りしても 女房たち 扇の風だに参れば、いみじきことにおぼいたるを、ほとほと壊れそうなほど ほとほとしくこそ吹き乱りはべりしか。この御殿あつかひに、手を焼いてしまいました わびにてはべり」など語る。（夕霧）「そう 御殿のお世話に ことしからぬ紙やはべる。御局の硯と」と乞ひたまへば、御厨子に 大げさでない紙がありますか 硯箱 寄りて、紙一巻、御硯の蓋に取りおろしてたてまつれば、（夕霧）「いな、 恐れ多い これはかたはらいたし」とのたまへど、北の御殿のおぼえを思ふに、 そう気を遣うこともないという気がして すこしなのめなるここちして、文書きたまふ。紫の薄様なりけり。 吟味しながら 墨、心とどめておしすり、筆の先うち見つつ、こまやかに書きやす 念を入れて時々筆を止めて思案していられる姿は らひたまへる、いとよし。されど、あやしく定まりて、憎き口つき

こそものしたまへ。

（夕霧）一 風騒ぎむら雲まがふ夕にも

忘るる間なく忘られぬ君

風にそそけた 吹き乱れたる苅萱につけたまへれば、人々、「女房たち 交野の少将は、紙の色にこそととのへはべりけれ」と聞こゆ。「さばかりの色も思ひ分かざりけりや。何処の野辺のほとりの花」など、かやうの人々にも、言少なに見えて、心解くべくもてなさず、いとすくすくしう気高し。またも書いたまうて、馬の助に賜へれば、をかしき童、またいと馴れたる御随身などに、うちささめきて取らするを、若き人々、ただならずゆかしがる。

（手紙を）二 気がつきませんでした 応対して 気を許すふうもなく 取りつく島もなく 三 こうした親しい女房たちにも 四 ものの馴れた 五 （馬助が）六 （二通の手紙を）七 ひそひそ指図して渡すのを 八 女房たち 気をもんで（宛先を）知りたがる

わたらせたまふとて、人々うちそよめき、几帳引きなほしなどす。見つる花の顔どもも、思ひくらべまほしうて、例はものゆかしからぬここちに、あながちに、妻戸の御簾を引き着て、几帳のほころびより見れば、もののそばより、ただはひわたりたまふほどぞ、ふと

（夕霧は）九 ふだんは覗き見などに関心がない人なのに 一〇 無理をして 一一 何か調度類の端から 一二 （姫君が）ほんのわずかお通りになるところが

一 風が吹き荒れ、むら雲の乱れる物騒がしい夕方でも、片時も忘れられぬあなたです。「むら雲」は、濃く薄く空に散らばる雲。雲居の雁への歌であろう。

二 イネ科の多年草。葉は細長く、秋、褐色の花穂を出す。秋の七草の一。

三 散佚古物語の主人公。帚木の冒頭（一巻四五頁）にも見える。『落窪物語』巻一に「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ、人の妻、帝の御妻も持たるぞかし」とあって、恋文の名人だったらしい。

四 文を付ける草や花を、紙の色にそろえたものでございますのに。

五 どこの野辺の隅にひっそり咲く花に付けたらいいのでしょう。引歌があろうが未詳。

六 もう一通お書きになって。惟光の娘の許へか。（三巻少女二五七頁以下参照）

七 馬寮の次官。正六位下相当。夕霧のお供の家来。ここだけに見える人物。

八 朝廷から賜る護衛の近衛の舎人。中将には四名。

九 明石の姫君がこちらにお帰りになるということで、女房たちが衣ずれの音をさせて動き廻り。

夕霧、明石の姫君を垣間見る

一〇 樺桜に思いよそえられた紫の上、八重山吹を思わせた玉鬘。

一一 妻戸口に掛けてある御簾の中に半身を入れて。

一二 几帳の帷の縫い合せてない所。

一三 薄紫色のお召し物に。

一四 一昨年あたりは、何かの折にも時々ちらりと拝見したことがあるが。以下、夕霧の思い。明石の姫君はこの年八歳。時々は姿を見ることもあった六歳の頃と比較するのである。

一五 あの前に見た紫の上と玉鬘を、桜、山吹と言うならば。以下、ふたたび夕霧の思い。

一六 こんな美しい人々を。以下、さらに夕霧の思い。

一七 自分はそうすることもできるはずなのに。紫の上は継母、玉鬘、明石の姫君は異腹の姉妹であるのにと思う。

一八 父源氏が、どなたにも自分を近づけてくれないのがうらめしい。

一九 夕霧の生真面目な心も、何やら落着かない気持がする。

夕霧、大宮の許に参上、内大臣大宮に近江の君のことをこぼす

二〇 祖母の大宮のお邸。三条の宮。

二一 無難な若い女房などは。

二二 顔かたちの美しい尼君たちが。大宮に従って出家した年輩の女房たちである。

（女房が大勢あちこちするので）うち見えたる。人のしげくまがへば、（こまかいところは何も見えないので）何のあやめも見えぬほどに、（〔夕霧は〕気が気でない）いと心もとなし。薄色の御衣に、髪のまだ丈にははづれたる末の、（背丈までは届かない）引き広げたるやうにて、いと細く小さき様体、（可憐で痛々しいほどだ）らうたげに心苦し。（引き広げたようにふっさりとして）一昨年ばかりは、たまさかにもほの見たてまつりしに、またこよなく生ひまさりたまふなめりかし、まして盛りいかならむと思ふ。（どんなに美しかろうと）（お美しくなられたようだ）の見つるさきざきの、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、（姫君）（美しさ）かくぞあるかしと思ひよそへらる。かかる人々を、（思いのままに）心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや、さもありぬべきほどながら、隔て隔てのけざやかなるこそつらけれ、など思ふに、まめ心も、なまあくがるるここちす。

二〇 祖母宮の御もとにも参りたまへれば、（〔夕霧が〕）（三条の宮）（静かなお暮しで仏前のお勤めをしていられる）のどやかにて御行ひしたまふ。よろしき若人など、ここにもさぶらへど、（物腰や様子）もてなしけはひ、（栄華を極めている六条の院には比較にもならない）束どもも、盛りなるあたりには似るべくもあらず。容貌よき尼君た

ちの、墨染にやつれたるぞ、なかなかかかる所につけては、さるかたにてあはれなりける。内の大臣も参りたまへるに、御殿油など参りて、のどやかに御物語など聞こえたまふ。「姫君を久しく見たてまつらぬがあさましきこと」とて、ただ泣きに泣きたまふ。「今このころのほどに参らせむ。心づからもの思はしげにて、くちをしうおとろへにてなむはべめる。女子こそ、よく言はば、持ちはべるまじきものなりけれ。とあるにつけても、心のみなむ尽くされはべりける」など、なほ心解けず思ひおきたるけしきしてのたまへば、心憂くて、切にも聞こえたまはず。そのついでにも、「いと不調なる女まうけはべりて、もてわづらひはべりぬ」と、愁へきこえたまひて笑ひたまふ。「いであやし。女といふ名はして、さがなかるやうやある」とのたまへば、「それなむ見苦しきことになむはべる。いかで御覧ぜさせむ」と、聞こえたまふとや。

一 墨染の衣に身を包んだ質素な姿が。
二 内大臣。母宮の許に野分の見舞に来ているのであろう。
三 お部屋の明りなどおともしして。燈台である。
四 雲居の雁のこと。少女の巻で内大臣邸に引き取られてから（三巻二四七頁以下参照）、もう三年になる。常夏一〇一頁にも、雲居の雁が内大臣に憚って大宮を訪れないと見える。
五 いまだに不快に思ってこだわっている面持でおっしゃるので。内大臣はかつて夕霧とのことで大宮の監督不行届きを難詰したことがある（少女二三九頁以下参照）。
六 大宮は情けなくて、雲居の雁との対面を強くもお願い申し上げなさらない。
七 まことに不出来な娘を手許に引き取りまして。近江の君のこと（常夏一〇一頁以下参照）。
八 あなたの娘と名乗る者が、出来が悪いはずがありましょうか。
九 それが体裁の悪いことなのです。内大臣たる私の娘だから一層世間体が悪いのだ、と言う。
一〇 申し上げなさるとか。語り手の口ぶり。

行（み）

幸（ゆき）

この巻は、源氏三十六歳の冬から翌年二月までのことが書かれている。玉鬘への恋に苦しむ源氏は、彼女の処遇に思い悩むものの、父内大臣の人柄を考えると、表立って妻とする気になれないでいる。

その年の冬十二月、大原野の行幸があり、左右大臣以下揃って供奉する盛儀を、作者は延喜の聖代の例に模して書いている。帝は、源氏の加わらなかったことを惜しみ、勅使を遣わした。玉鬘も人々に混って見物し、念願の父内大臣の姿に目を止め、求婚者の兵部卿の宮、髭黒の大将をも見るが、帝のお美しさはまた格別で、かねて源氏の勧める尚侍就任のことにも心が動くのだった。

源氏は、玉鬘の入内を進めようとし、その前に裳着の儀式を挙げようと、親子の対面もかねて、内大臣に腰結の役を依頼する。しかし内大臣は、大宮の病気を口実に断ってきた。かくて源氏は三条に大宮を見舞い、玉鬘のことを打ち明ける。驚いた大宮は内大臣に消息を送り、ここに両大臣の対面が実現した。

年明けて二月十六日、玉鬘の裳着の儀の当日、秋好む中宮をはじめ六条の院の夫人方や大宮からお祝いが来る。末摘花もまた非常識な贈り物をして、源氏の眉を顰めさせる一幕もある。内大臣は、源氏の厚意に謝しつつ、裳の腰を結った。近江の君は、玉鬘を羨み、一層人々の嘲弄の的になっている。

巻名は、行幸の盛儀に寄せて詠んだ源氏や玉鬘の歌にもとづく。

一　このように、あらゆることをお考えになって、何とかよい方法はないものかと思案なさるけれども。源氏が玉鬘の身の振り方について考慮することをいう。

二　この（源氏の）ひそかな恋慕は、（玉鬘にとって）いやな気の毒なことで。「音無しの滝」は、山城の歌枕。『釈』『奥人』は、「とにかくに人目つつみをせきかねて下に流るる音無しの滝」（出典未詳）をあげる。

玉鬘への恋を反省する

「人目つつみ」は、人目を気にする意。「つつみ」に「堤」を掛け、「流る」に「泣かる」を掛ける。

三　紫の上のご想像通り、ご身分にふさわしくない浮き名の立ちそうなことである。紫の上が源氏の恋心を見抜いていたことは、胡蝶四九頁に見える。

四　玉鬘とのことが知れて、（内大臣が）誰憚らず派手な婿扱いなどなさろうものなら。

五　その年の十二月。源氏三十六歳。

六　「大原野」は、京都市西京区。大原野神社がある。桂川の西にひらける野で、鷹狩が行われた。いわゆる野の行幸で、冷泉帝が催す鷹狩である。（三巻図録五参照）

大原野の行幸

七　午前五時から七時までの間。

八　朱雀大路を南下、五条で右折し、五条大路を西進したのである。『吏部王記』（醍醐天皇第四皇子重明親王の日記）に、「延長六年十二月五日、大原野行幸、卯初、上御輿、自二朱雀門一至二五条路一、西折到二桂河辺一」とあるのによる（『河海抄』）。

かくおぼしいたらぬことなく、いかでよからむことはと、おぼしあつかひたまへど、この音無しの滝こそ、うたていとほしく、南の上の御おしはかりごとにかなひて、軽々しかるべき御名なれ。かの大臣、何ごとにつけても、きはぎはしう、すこしもかたはなるさまのことを、おぼし忍ばずなどものしたまふ御心ざまを、さて思ひぐまなく、けざやかなる御もてなしなどのあらむにつけては、をこがましうもやなど、おぼしかへさふ。

（内大臣）

我慢なさらないといったご性分だから

はっきりけじめをつけ

少しでも手落ちのあることを

その師走に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを、六条の院よりも、御方々引き出でつつ見たまふ。卯の時に出でたまうて、朱雀より五条の大路を、西ざまに折れたまふ。桂川のもとまで、物見車隙なし。行幸といへど、かならずかうしもあらぬを、今日は親

（帝は）

世をあげて大騒ぎして見物するのを

笑いにもなろうなどと

お考え直しになる

ご婦人方がお車を連ねて見物なさる

世間の物

必ずしもこれほど盛大ではないのだが

一 随身や馬副の、顔立ち身長を選び斉え、立派な衣裳をお着せになって。「随身」は、上皇、摂関以下中将などに賜る近衛府の官人。外出の際の護衛。「馬副」は、乗馬に付き添う従者。

二 この人々、系図不詳。「納言」は、大納言、中納言。

三 麴塵（淡黄に青みを帯びた色）の袍。天皇の日常着であるが、晴の儀式には諸臣が着用し、主上は赤色を召す。前引『吏部王記』に「其装束、御、赤色袍、親王公卿及殿上侍臣六位以上、着二麴塵袍一」とある。

四 薄紫色の下襲。

五 親王、公卿たちも、鷹をお扱いになる方々は、珍しい狩の御装束（狩衣）を用意していられる。野に着いてからこれに着換える。後に見える「摺衣」である。「鷹飼親王公卿着二地摺布衣及袴一（或用二紫、木蘭小色綺袴一）、襖子、餌袋」（『吏部王記』）

六 近衛府の鷹飼。今日の立役者である。「鷹飼」は、蔵人所、六衛府に属し、鷹を飼い、狩猟のことに従う。

七 山藍、紫草などの汁で、種々の模様を摺り出した狩衣。「春日野の若紫の摺衣しのぶの乱れ限り知られず」（『伊勢物語』初段）により、思い思いの摺り模様を着用しているのを「乱れ着つつ」という。

八 水上に船を並べて上に板を渡し、橋としたもの。『吏部王記』に「上御輿、群臣乗二馬渡二浮橋一（方舟為二梁上敷二板自二桂路一入二野口一）」とある。桂川に渡したのである。

九 端然として、じっと正面を向かれた御横顔に。

玉鬘、行幸を見物する

王たち、上達部も、皆心ことに（特別に）、御馬鞍をととのへ、随身、馬副の容貌丈だち、装束を飾りたまうつつ、めづらかにをかし。左右大臣、内大臣、納言より下はた、まして残らずつかうまつりたまへり。青色の袍、葡萄染の下襲を、殿上人、五位六位まで着たり。雪ただいささかづつうち散りて、道の空さへ艶なり。親王たち、上達部なども、鷹にかかづらひたまへるは、めづらしき狩の御よそひどもをまうけたまふ。近衛の鷹飼どもは、まして世に目馴れぬ摺衣を乱れ着つつ、けしきことなり（格別の風情である）。めづらしうをかしきことに競ひ出でつつ、その人ともなく、かすかなる足弱き車など、輪を押しひしがれ、あはれげなるもあり（お粗末な車輪の作りの弱い車など）。浮橋のもとなどにも、好ましう立ちさまよふよき車多かり（優美な風情であちこちする立派な車が多い）。

西の対の姫君（玉鬘）も立ち出でたまへり（〔見物に〕）。そこばくいどみ尽くしたまへる人の御容貌ありさまを見たまふに（大勢の我こそはと綺羅を尽していらっしゃる供奉の方々）、帝の、赤色の御衣たてまつりて（お召しになって）、うるはしう動きなき御かたはらめに、なずらひきこゆべき人な（お比べ申せる方はおいでにならない）

「人主之躰は山岳の如し。高峻にして動かず」（『帝範』。『河海抄』所引）

一〇 やはり、最上とはいえないのだった。帝に比肩しうる人はいなかった、の意。

一一 中将、少将。ともに近衛府の次官。多く名門の子弟の容姿端麗な者が選ばれる。今日の行幸に、護衛として帝のお側近くに供奉している。

一二 誰彼と名のある殿上人といった人々は。

一三 してみると、こうした方々はめったにいらっしゃらないのだ。帝に心ひかれた玉鬘の心中と草子地が一体になった書き方。

一四 源氏の大臣や夕霧の中将などのお美しさを日頃見馴れて、お思いになっていたのだが。

一五 晴れの場で見劣りしている者たち（中少将や殿上人たち）がまともでないのだろうか。

一六 問題にもならず、圧倒されていることだ。草子地。

一七 螢兵部卿の宮。

一八 髭黒の右大将。

一九 矢を入れて背に負う武具。『花鳥余情』は、大臣兼任の大将は武装せず、納言以下が弓箭を帯する例なので、髭黒の大将は、大納言であろうという。

し。わが父大臣を、人知れず目をつけたてまつりたまへど、きらきらしうものきよげに、盛りにはものしたまへど、限りありかし。いと人にすぐれたるただ人と見えて、御輿のうちよりほかに、目移るべくもあらず。まして、容貌ありや、をかしやなど、若き御達の消えかへり心うつす中少将、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず消えわたれるは、さらに類ひなうおはしますなりけり。源氏の大臣の御顔ざまは、異ものとも見えたまはぬを、思ひなしの今すこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。さは、かかる類ひはおはしがたかりけり。あてなる人は、皆ものきよげにけはひ異なべいものとのみ、大臣、中将などの御にほひに目馴れたまへるを、出で消えどものかたはなるにやあらむ、同じ目鼻とも見えず、くちをしうぞおされたるや。

兵部卿の宮もおはす。右大将の、さばかり重りかによしめくも、今日のよそひいとなまめきて、胡籙など負ひて、つかうまつりたま

（気をつけて目をおとめになるが）（盛りではいらっしゃるけれども）（美しく）（立派で）（男）（誰よりも立派な臣下といった感じで）（御輿の中の帝よりほかに）（目が移り）（美男だとか すてきだなどといって）（女房）（そうにもない）（〔帝が〕全く）（ず皆目にも入らないのは）（〔帝と〕）（別人とも）（恐れ多く）（ご立派なのである）（と威厳があって）（身分の高い方々は）（感じも）（格別よいも）（のだとばかり）（〔人間の〕）（気のせいで〔帝は〕）（もう一段）（物の数にも入ら）（あれほど重々しく気取っていらっしゃる方も）（行幸供奉の服装は大層あでやかで）（お供申し上げていらっしゃ）

一 お顔が色黒で髭が多い感じで、とても好きになれない。玉鬘の思い。髭黒という呼称はこれによる。
二 どうしてお化粧したほかの人々の顔の色合いに似ていよう。行列中の男たちは普通化粧する。以下「見おとしたまうてけり」まで、草子地。
三 源氏の大臣が熟慮の末お勧めになることを。尚侍として出仕のこと。（一五一頁以下、一五八頁参照）
四 宮仕えは、自分の意志に反して、見苦しいことになるのではないかと尻ごみしていらっしゃるのだが。源氏が後見する秋好む中宮や、父大臣の娘弘徽殿の女御と、帝寵を競うことになるからである。
五 帝のご寵愛を受けるといったこととは関係なく。
六 幔幕でかこった仮屋。棟がなく、天井が平らなもの。ここは、供奉の公卿の休息所。

源氏と帝の贈答

「従猟卒行猟之、御輿墳進二朝膳一、親王公卿着二平張座一」（『吏部王記』）
七 源氏。「六条院被二貢二酒二荷炭二荷火炉一具一」（『吏部王記』）。この「六条院」は宇多法皇。
八 陰陽道で、凶事を避けるため、身を慎んで家の中に籠ることをいう。「延長四年十一月六日有二北野行幸一、其日余因二物忌一不レ参」（『吏部王記』）
九 蔵人（天皇のお側役）で、右衛門の尉（右衛門府の三等官、従六位上相当）の者を勅使として。
一〇 当日の獲物である。『河海抄』は、雉の雌雄一双を枝の左右に上下して付けるのが作法という。また同書は、『九条右大臣集』（師輔の家集）の、朱雀院の野へり。色黒く髭がちに見えて、いと心づきなし。いかでかは、つくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。いとわりなきことを、若き御ここちには見おとしたまうてけり。大臣の君のおぼし寄りてのたまふことを、いかがはあらむ、宮仕へは、心にもあらで、見苦しきありさまにやと思ひつつみたまふを、馴れ馴れしき筋などをばもて離れて、おほかたにつかうまつり御覧ぜられむは、をかしうもありなむかしとぞ、思ひ寄りたまうける。

かうて野におはしまし着きて、御輿とどめ、上達部の平張にもの参り、御装束ども、直衣、狩のよそひなどに改めたまふほどに、六条の院より、御酒、御くだものなどたてまつらせたまへり。今日つかうまつりたまふべく、かねて御けしきありけれど、御物忌のよしを奏せさせたまへりけるなりけり。蔵人の右衛門の尉を御使にて、雉一枝たてまつらせたまふ。仰せ言には何とかや、さやうのをりのことまねぶ、わづらはしくなむ。

（本当に無理なことなのに）（お若い）（姫君のこととて大将をおさげすみになるのだった）（どんなものだろう）（一般の女官職としてお仕えしお目通り願うということならやりがいもあることだろうと）（〔玉鬘は〕お気持が傾かれた）（こうして大原野にお着きあそばして）（束帯のお召し物を）（狩衣）（お着換えになるところに）（〔源氏も〕）（食事を）（ご酒肴の果物木の実など）（前からご沙汰があったけれども）（お供なさるようにと）（奏上なさったのであった）

の行幸に不参して雉一双を賜った例を挙げる。

一一 帝の仰せ言には何とあったか、このような場合のことをお話しするのは、女の身に憚り多いので（やめておきます）。歌以外は省略することわる草子地。

一二 雪深い小塩山に飛び立つ雉の古い跡―昔の大原野の行幸の跡をも、今日は尋ねてみられよ。「小塩山」は、大原野の西にある山。歌枕。先例もあることだからと、源氏の不参を残念がられた歌。

一三（御製に先例があると仰せられるのは）昔、太政大臣が、こうした野の行幸にお供なさった前例などがあったのだろうか。「野の行幸」は鷹狩の行幸のこと。『河海抄』は、光孝天皇仁和二年（八八六）十二月十四日、芹川野の行幸に、太政大臣藤原基経が供奉した例を挙げる。帝の歌を説明した草子地。

一四 小塩山の雪の積っている松原に、昔も行幸はありましたが、今ほどの盛儀はございませんでしょう。

翌日、玉鬘と源氏の贈答

「みゆき」に「み雪」「行幸」を掛ける。「小塩山」と「松原」は縁語。「大原や小塩の山の小松原はや小高かれ千代の影みむ」（『後撰集』巻二十賀、貫之）

一五 聞き違いかもしれません。「そのころほひ」以下、語り手の女房の言葉をそのまま伝えた体の草子地。

一六 霧り渡るように朝曇りして雪が降っていましたのに、はっきりと日の光―帝を拝むことができたでしょうか。「み雪」と「行幸」を掛ける。「昨日は」からすぐ歌に続く文面。

（帝）一二 雪深き小塩の山にたつ雉の
古きあとをも今日は尋ねよ

一三 太政大臣の、かかる野の行幸につかうまつりたまへる例などやありけむ。大臣、御使をかしこまり（恐縮して）、もてなさせたまふ。

（源氏）一四 小塩山みゆきつもれる松原に
今日ばかりなるあとやなからむ

と、（その当時伝え聞いたことが）そのころほひ聞きしことの（ところどころ思い出されるのは）、そばそば思ひ出でらるるは、一五 ひがことにやあらむ。

（その翌日）またの日、大臣、西の対に、（玉鬘（源氏））「昨日、上は見たてまつらせたまひてきや。（あの宮仕えの件はその気におなりでしょうか）かのことはおぼしなびきぬらむや」と聞こえたまへり。（お便りをさし上げなさった）白き色紙に、（大層くだけた書きぶりの）いとうちとけたる文、（こまごまと色めいたこともおっしゃらないのが）こまかにけしきばみてもあらぬが、（かえって風情があるのを）をかしきを見たまうて、（玉鬘）「（いやなことを）あいなのことや」と笑ひたまふものから、（お笑いになるものの）よくもこちらの心中を見抜いていらっしゃることだと）よくもおしはからせたまふものかなとおぼす。御返りに、（玉鬘）「昨日は、

一六 うちきらし朝ぐもりせしみゆきには

一 よく分らぬことばかりでございます。帝のお顔も宮仕えのことも、の意で「ども」と複数にいう。
二 （玉鬘に）しかじかのことを勧めたのですが。尚侍として宮仕えすること。（一五〇頁参照）
三 宮中には中宮がああしていらっしゃるし。秋好む中宮を源氏の養女として後見していることをいう。
四 ここ（六条の院）の娘という扱いのままでは、具合が悪いでしょう。
五 かといって、あちらの大臣（内大臣）に名乗り出ても。内大臣の娘と公表の上、出仕するにしても。
六 弘徽殿の女御。内大臣の娘。
七 （玉鬘が）思い悩んでいたらしいことなのです。
八 若い女性で、帝に親しくお仕えするといった場合、誰かに気兼ねする必要のない者なら。
九 日の光は空に曇りなく照っていましたのに（帝は輝くばかりのお美しさでしたのに）、どうして雪に眼を曇らせたのですか。「あかねさす」は「光」の枕詞。「み雪」に「行幸」を掛ける。
一〇 何よりも先に裳着の儀式を行わねばと。「裳着」は、女子の成人式。はじめて裳を着け、髪上げをする。年齢は一定しないが、これを行ってのち結婚する。
一一 内大臣にも、そのままこの裳着の儀を機会にお知

さやかに空の光やは見し

おぼつかなき御ことどもになむ」とあるを、上も見たまふ。（紫の上）「ささ（源氏）のことをそそのかししかど、中宮かくておはす、ここながらのおぼえには、便なかるべし。かの大臣に知られても、女御かくてまたさぶらひたまへばなど、思ひ乱るめりし筋なり。若人の、さも馴れつかうまつらむに憚る思ひなからむは、上をほの見たてまつりて、え（帝をほんの少しでも拝見して　宮仕えを考えない者はないでしょう）かけ離れて思ふはあらじ」とのたまへば、「あなうたて、めでたし（紫上）まあいやですわ　帝をすばらしいとお思い申すにしても　自分から進んで宮仕えをする気を起すなど　大層出過ぎたことなのでしょう）と見たてまつるとも、心もて宮仕へ思ひ立たむこそ、いとさし過ぎたる心ならめ」とて、笑ひたまふ。「いで、そこにしもぞ、めでき（冗談を）こえたまはむ」などのたまうて、また御返り、（玉鬘に）

（源氏）「あかねさす光は空にくもらぬを

などてみゆきに目をきらしけむ

なほおぼし立て」など、絶えずすすめたまふ。とてもかうても、まづ御裳着のことをこそはとおぼして、その御まうけの御調度の、こ（やはり宮仕えを決心なさい　いずれにしても　源氏は　それにお入り用の）

らせ申そうかと、（源氏は）お考えになるので。内大臣を裳着の式に招くつもりである。

一二 大層ご立派で、置き場所もないほどである。「その御まうけの御調度の、こまかなるきよらども加へさせたまひ」を受ける。

一三 総じて婦人は、評判が高く、お名を隠さなくてはならないといった身分でない人でも（評判の高くない、名を隠す必要のない人でも）、誰かの姫君として深窓に養われていらっしゃる間は。以下、源氏の考慮。

源氏、玉鬘の裳着の腰結役を、内大臣に依頼する

一四 玉鬘も、今までは源氏の娘として、分らずに日を送っていらっしゃったが。

一五 春日大社。藤原氏の氏神。奈良市春日野町にある。玉鬘は藤原氏だから、源氏の娘として出仕しては、氏神のみ心に背くことになろうことも、の意。

一六 おもしろくもない、故意にしたことのように後々まで取り沙汰されても、いやなことであろう。玉鬘を引き取ったのは、偶然のことからである。

一七（養子になって）他氏を名乗ることの容易な者もいようが。

一八 自分から進んで、内大臣にお知らせ申そう。「を」は間投助詞。

一九 裳着の式の時、裳の腰の紐を結ぶ役。身分の高い声望のある人がつとめる。

二〇 内大臣の母大宮。

行幸

いった細工の立派な品々を　大体どんなお支度も　〔源氏の〕

まかなるきよらども加へさせたまひ、何くれの儀式を、御心にはい

大してお考えにならぬことでも　いつのまにか大げさで盛大なことになるのに

とも思ほさぬことをだに、おのづからよだけくいかめしくなるを、

まして、内の大臣も、やがてこのついでにや知らせたてまつりてま

〔源氏は〕

しとおぼし寄れば、いとめでたく所狭きまでなむ。

〔裳着は〕年が明けて

年かへりて二月にとおぼす。女は聞こえ高く、名隠したまふべき

ほどならぬも、人の御女とて籠りおはするほどは、かならずしも、

ご参詣なども　表立ってしなくてもすむからこそ

氏神の御つとめなど、あらはならぬほどなればこそ、年月はまぎれ

今考慮中の尚侍として出仕のことがもし実現でもしたら

過ぐしたまへ、このもしおぼし寄ることもあらむには、春日の神の

結局は真相を伏せておけるものではないであろうが

御心違ひぬべきも、つひには隠れてやむまじきものから、あぢきな

並々の身分の者なら

くわざとがましき後の名までうたたあるべし、なほなほしき人の際

〔源氏は〕

この節では　同じことなら

こそ、今やうとては、氏改むることのたはやすきもあれ、などおぼ

切っても切れぬものだし

しめぐらすに、親子の御契り絶ゆべきやうなし、同じくは、わが心

〔源氏は〕　ご依頼申し上げられたところ

許してを知らせたてまつらむ、などおぼし定めて、この御腰結には、

内大臣をと

かの大臣をなむ、御消息聞こえたまうければ、大宮、去年の冬つか

たよりなやみたまふこと、さらにおこたりたまはねば、かかるに合はせて便なかるべきよし聞こえたまへり。中将の君も、夜昼、三条にぞさぶらひたまうて、心の隙なくものしたまうて、をりあしきを、いかにせましとおぼす。世もいと定めなし、宮も亡せさせたまはば、御服あるべきを、知らず顔にてものしたまはむ、罪深きこと多からむ、おはする世に、このことあらはしてむとおぼし取りて、三条の宮に、御とぶらひがてらわたりたまふ。

ご病気であるのが　一向によくおなりにならないので　こういう折柄なので　具合が悪い旨をお返事申された　夕霧　お詰めになっていて　大宮　どうしたものかと〔源氏は〕　玉鬘のことを公表してしまおうとお心を決められて　大宮ご在世中に　お見舞かたがたお訪ねになる

今はまして、忍びやかにふるまひたまへど、行幸に劣らずよそほしく、いよいよ光をのみ添へたまふ御容貌などの、この世に見えぬ感がしてここちして、めづらしう見たてまつりたまふには、いとど御ここち悪さものなやましさも取り捨てらるるここちして、起きゐたまへり。御息にかかりて、弱げなれど、ものなどいとよく聞こえたまふ。「けしうはおはしまさざりけるを、なにがしの朝臣の、心まどはして、おどろおどろしう嘆ききこえさすめれば、いかやうにものせさせた

目立たぬように〔源氏は〕　ますますお美しさが増す一方の　この世のものとは思えぬ感がして　またひとしおご気分の悪さも　試い去られるような気持がして　起きて坐っていられる　〔源氏〕大　お元気はないが　よりかかって　お話など大層よくなさる　取り乱して　どんなお具合でいらっしゃるのかと　大げさに　お嘆き申す様子でしたので

一　三条の宮。大宮の邸。（野分一二七頁参照）
二　ご看護に余念なくいらっしゃって、時機が悪いのを。
三　しかし、この世もまことに無常だ。以下「このことあらはしてむ」まで、源氏の思慮。
四　当然、玉鬘も大宮の喪に服さねばならないのに、知らぬ顔ですまされるのは、罪深いことが多いであろう。祖母の喪は五カ月（「喪葬令」服紀条）。今のままでは、源氏の娘ということで、大宮の喪に服するわけにはいかないことをいう。

源氏、大宮の病気を見舞う

五　太政大臣である今は、前にもまして。「行幸に劣らずよそほしく」に掛る。
六　行幸に劣らぬほどいかめしく立派で。太政大臣としての威儀を整えた行装である。
七　久々にお目にかかられるにつけて。主語は大宮。
八　側に置いてもたれるための調度。（図録一〇参照）
九　夕霧のこと。実名で言ったのをおぼめかしてこういう。「朝臣」は、五位以上の人に対する敬称。ここでは、大宮に対する敬意から、その愛孫についてやや改まった言い方をする。

一〇 宮中などにも、特別な場合でない限りは参上しませず。太政大臣は、きまった職掌なく、常は政務をみることもないからである。

一一 腰をちゃんと伸ばしていられぬ年まで、背をかがめて出仕するという例が、昔も今もあるようですが。老いても辞職しない者のこと。「金章腰に勝へざるに、偃僂して君門に入る」（『白氏文集』巻二、秦中吟「不致仕」）。「偃僂」は、背をかがめる意。

一二 私の場合は、なぜか愚かな生れつきの上に、ものぐさになったからでしょう。

一三 親しい人々にも先立たれ、年老いて生き残っている例を。「さべき」は「さるべき」の撥音便「さんべき」の撥音無表記の形。夫とか妻、子供といった人をさす。

一四 よその人のことでも、本当にいやなことだと思っていましたから。大宮自身、夫の致仕の大臣や娘の葵の上に先立たれた身の上である。

一五 来世の支度のことが。「出で立ちいそぎ」は、出立の用意の意。後世の安楽を願う仏事をいう。

一六 あれこれと引き止められまして。夕霧のこと、雲居の雁のことを案じているという。

行幸

まふにかとなむ、おぼつかながりきこえさせつる。（お案じ申し上げておりました）内裏などにも、ことなるついでなき限りは参らず、朝廷につかふる人ともなくて籠りはべれば、（朝廷に仕える人らしくもなく）よろづうひうひしう、（何事もとまどいがちで）よだけくなりにてはべり。（大儀になってしまいました）齢など、これより（私より上の人が）まさる人、腰堪へぬまで屈まりありく例、昔も今もはべめれど、あやしくおれおれしき本性に添ふもの憂さになむはべるべき」など聞こえたまふ。「年の（大宮）年のせいの病気と存じながら）積りのなやみと思うたまへつつ、月も重なりましたが）月ごろになりぬるを、今年となりては、（先も長くないように思われますので）頼み少なきやうにおぼえはべれば、今一度かく見たてまつりきこえさすることもなくてやと、（こうしてお目にかかりお話し申し上げることもなしに終るのかと）心細く思ひたまへつるを、今日こそまたすこし延びぬるここちしはべれ。今は惜しみとむべきほどにもはべらず。（寿命が延びた気持がいたしますし）さべき人々にも立ち後れ、世の末に残りとまれる類ひを、人の上にて、いと心づきなしと見はべりしかば、出で立ちいそぎをなむ、思ひもよほされはべるに、この中将の、（夕霧）いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ、（本当に真心こめて不思議なほどよく世話をしてくれますが）心を騒がいたまふ、見はべるになむ、さまざまにかけとどめられて、今ま（心配して）（おいでの様子を見るにつけまして）

一　傍目には、いかにも愚かしい感じがするけれども。

二　（大宮が孫たちの身を案じられるのも）無理のないことなので、まことに胸に迫るものがある。源氏の心中。草子地でもある。

源氏、玉髪のことを大宮に打ち明ける

三　適当な折がなくては、なかなかお目にかかれませんので。太政大臣と内大臣では、たやすく話し合う機会もない。

四　お上のご用が忙しいのか、孝心が深くないせいか。

五　中将（夕霧）が、恨めしく思っておいでのこともございますが。雲居の雁のこと。

六　二人の仲のはじめの経緯は知りませんが。これより「言ひ漏らすなるを」まで、かつて内大臣に向って言った趣。二人のことは大宮の承認があってのことではないと、改めて強調する。（三巻少女二四〇～二四一頁、二四九頁参照）

七　今となっては二人を引き離すようにしたところで。「けにくし」は、無慈悲で厭な感じをいう。

八　かえって世間の人も噂するとか聞きますが。「言ひ漏らす」は、隠していることをひそかにしゃべる。

九　内大臣は、こうと思ったことは、昔から決して譲らない性分で。「人の本性」で一語。

生き永らえております

で長びきはべる」と、ただ泣きに泣きて、御声のわななくも、をこがましけれど、さることどもなれば、いとあはれなり。

昔のことと今のことをあれこれと

御物語ども、昔今のとり集め聞こえたまふついでに、「内の大臣は、日隔てず参りたまふことしげからむを、かかるついでに対面のあらば、いかにうれしからむ。いかで聞こえ知らせむと思ふことのはべるを、さるべきついでなくては、対面もありがたければ、おぼつかなくてなむ」と聞こえたまふ。「公事のしげきにや、私の心ざしの深からぬにや、さしもとぶらひものしはべらず。のたまはすべからむことは、何さまのことにかは。中将のうらめしげに思はれたることもはべるを、はじめのことは知らねど、今はけにくくもてなすにつけて、立ちそめにし名の、取り返さるるものにもあらず、をこがましきやうに、かへりては世人も言ひ漏らすなるを、などものしはべれど、立てたるところ、昔よりいと解けがたき人の本性にて、心得ずなむ見たまふる」と、この中将の御こととおぼしてのたまへ

日をおかず頻繁におお見舞においでですが

何とかしてお耳に入れたいと

こうした機会に

（大宮）

それほど見舞には参りません

どんな趣のことでしょうか

お話しなさりたいというのは

もとにもどせるものでもなし

馬鹿げたことのように

言い聞かせるのですが

夕霧

納得のゆかぬことと存じています

一〇 今さら言っても仕方のないことと、お構いなくお許し下さることもあろうかと聞きまして。「許し捨つ」は、許して放っておく意。内大臣の気持が一時軟化したらしいというのは、少女の巻に「いふかひなきことを、なだらかに言ひなして、さてもやあらましとおぼせど」（二二五〇頁）とあるのに照応する。

一一 私までがそれとなく口添えすることがありましたが。源氏の申し出があったこと、ここにはじめて見える。

一二 内大臣が大層厳しくおとめだてなさる趣を拝見しましてから。雲居の雁を大宮のもとから引き取ったことをいう。

一三 何事にも、汚れには清めということがございますから。以下、内大臣を嘲弄した言い方。

一四 こんなにどうしようもなく濁ってしまったあとでは、それを受けてすっかり洗い流す水は出て来にくいものです。夕霧との仲が評判になってしまっては、それを帳消しにするほどのよい縁組はないだろう、の意。

一五 あちら（内大臣）がお世話なさる筋合の方を。玉鬘のこと。以下、都合の悪いことは変改して語る。

一六 そうした間違いだ（実の親ではない）とも、その娘（玉鬘）が言ってくれませんでしたので。

一七 そうした者（子供）も少ないことですし。

一八（親というのは）先方の言いがかりであっても。

一九 今までやってきましたが。玉鬘、源氏に引き取られて二年目。

〔源氏は〕一笑なさって

ば、うち笑ひたまひて、「一〇いふかひなきに許し捨てたまふこともやと聞きはべりて、一一ここにさへなむかすめ申すやうありしかど、一二いときびしうしいさめたまふよしを見はべりしのち、何にさまで言をもまぜはべりけむと、人わるう悔い思うたまへてなむ。一三よろづのことにつけて、きよめといふことはべれば、いかがはさもとり返しすすいたまはざらむとは思うたまへながら、一四かうくちをしき濁りの末に、待ちとり深う澄むべき水こそ出で来がたかべい世なれ。何ごとにつけても、末になれば、落ちゆくけぢめこそやすくはべめれ。いとほしう聞きたまふる」など申したまうて、「さるは、一五かの知りたまふべき人をなむ、思ひまがふることはべりて、一六不意に尋ね取りてはべるを、そのをりは、さるひがわざとも明かしはべらずありしかば、あながちにことの心を尋ね返さふこともはべらで、たださるものの種の少なきを、一八かことにても、何かはと思うたまへ許して、をさをさむつびも見はべらずして年月はべりつるを、いかでか聞こしめし

したりしたのかと　面目なく　後悔しております　口出しを　なんでそこまで　どうしてきれいに元通り汚れを洗い流して　しまわれぬことがあろうかとは存じながら　かうくちをしき濁りの末に　あとになるほど　一段一段と悪くなってゆきやすいもののようです　〔内大臣には〕大層お気の毒なことと存じます　〔源氏〕実は　思い違いがございまして　思いがけず捜し出して引き取ったのですが　その当座は　強いて事情を押し返して詮索することもいたしませずに　何の構うものかと大目に見まして　そう大して親しく世話もいたしませずに　どうしてお耳に入ったのか

一 尚侍は、職務を勤める者がいなくては。「尚侍」は、内侍所（後宮十二司の一）の長官。定員二名。従五位相当。天皇に常侍し、奏請、宣伝、女官の監督、宮廷儀式をつかさどった（「後宮職員令」）。のち従三位相当、女御などに準ずる地位にもなった。それで「宮仕へする人なくては」という事態も起ってくるのである。現在、一人は朧月夜の尚侍で、あと一人の任命について、以下九行目の「選らせたまはむ」まで、帝の仰せの要旨を伝える。

二 下級の女官。

三 帝づきの女房である年輩で事に詳しい典侍二人。「典侍」は、内侍所の次官。定員四名。職掌は、奏請、宣伝以外、尚侍と同じ。のち従四位相当。

四 尚侍任官をそれぞれ願い出ているけれども。「申さす」は、人を通じて申し出ること。

五 せめて世間一般の人望によって、お選びになろうと、帝が私に内々仰せられましたが。玉鬘をとのご内意があったことをいう。

六 宮仕えというものは、しかるべき地位について（女御、更衣になって）、身分の高い者も低い者も帝寵に望みをかけ、宮中に出仕することこそ理想が高いというものです。

七（女御、更衣ではなく）表向きの役について。

八 頼もしくなく、浮ついているように思われますが。帝寵を受けるのでなければ、何の意味もないということ。

けむ、内裏に仰せらるるやうなむある。尚侍、宮仕へする人なくては、かの所のまつりごとしどけなく、女官なども、公事をつかうまつるに、たづきなく、こと乱るるやうになむありけるを、ただ今、上にさぶらふ故老の典侍二人、またさるべき人々、さまざまに申するを、はかばかしう選ばせたまはむ尋ねに類ふべき人なむなき。なほ家高う、人のおぼえ軽からで、家のいとなみたてたらぬ人なむ、いにしへよりなり来にける。したたかにかしこきかたの選びにては、その人ならでも、年月の労になりのぼる類ひあれど、しか類ふべきもなしとならば、おほかたのおぼえをだに選らせたまはむとなむ、うちうちに仰せられたりしを、似げなきこととしも何かは思ひたまはむ。宮仕へはさるべき筋にて、上も下も思ひ及び、出で立つこそ心高きことなれ。公様にて、さる所のことをつかさどり、まつりごとのおもぶきをしたため知らむことは、はかばかしからず、あはつけきやうにおぼえたれど、などかまたさしもあらむ、ただわが身の

内侍所の政務も　朝廷のご用を　しまりがなく　よりどころがなく　仕事が順調にゆかないようであったが　勤めるのに　現在　そのほか相当な人たちが　しっかりした者をお選びになろうとする帝のお求めに　叶う人物がいません　世間の評判も　家庭の仕事を顧みなくてもよい人が　やはり家柄がよく　〔尚侍に〕　仕事ができてすぐれているということで選ぶのなら　昔から　年功で昇任する　それに当　名門の出でなくても　内大臣も〕ふさわしくないこととどうして思われましょう　内侍所といった役所の事務を扱い　公職に関する　片づけつかさどるといったことは　用向きを　その人の人柄　どうしてまたそうと限りましょう

九（尚侍就任に）気持が傾いてきましたのを機会に。「はべし」は「はべりし」の促音便「はべっし」の促音無表記の形。男性用語である。

一〇 玉鬘の年齢のことなど尋ねましたところ、あちら（内大臣）がお引き取りになるはずの人であることが分りましたので。「あべい」は「あるべき」の撥音便、い音便「あんべい」の撥音無表記の形。

一一 どうした事情だったのかといったことも。「いかなべい」は「いかなるべき」の音便。

一二 何か機会がなくては、お目にかかれそうにもございません。「はべべき」も「はべるべき」の音便。

一三 お便りをさし上げましたのに。玉鬘の裳の腰結を依頼したことをさす。（一五三頁参照）

一四 大宮のご病気とあれば、時期もよくないと、裳着も思い止まっていたのですが。

一五 むこう（内大臣方）では、あれこれとこういう申し出をする（子だと名乗り出る）人を、厭わず誰でもお集めになっているようですのに。近江の君の噂を耳にしていて、批判的に言う言葉。

一六（玉鬘は）どういうつもりで、そのように間違えて申し出られたのでしょう。「かこつ」は、言いがかりをつけること。「らる」は、軽い敬語。

一七（はじめのことは知らず）近年になって、あなたのお噂を伺って、お子になったのでしょうか。

次第で　何事も決るものでありましょうと

ありさまからこそ、よろづのことはべめれと、思ひ弱りはべしついでになむ、齢のほどなど問ひ聞きはべれば、かの御尋ねあべいことになむありけるを、いかなべいことぞとも、事情をお話ししてはっきりさせた申しあきらめまほしうはべる。ついでなくては対面はべべきにもはべらず。やがてかかることなむと、あらはし申すべきやうを思ひめぐらして、消息申しを、御なやみにことづけて、もの憂げにすまひたまへりし、げに、

（内大臣は）大宮のご病気にかこつけて　お打ち明け申せるような手だてをいろいろ考えて　対面の機会にこれこれのことがと　お心が進まぬふうに辞退なさいましたが　ちょうどご気分もおよろしくていられますので　いかにも　く存じます

をりしも便なう思ひとまりはべるに、よろしうものせさせたまひければ、なほかう思ひおこせるついでにとなむ思うたまふる。さやうに伝へものせさせたまへ」と聞こえたまふ。

（内大臣に）お伝え下さいませ　やはりこういうふうにいったん決心しました機会にと存じます

宮、「いかにいかにはべりけることにか。かしこには、さまざまにかかる名のりする人を、厭ふことなく拾ひ集めらるめるに、いかなる心にて、かくひき違へかこちきこえらるらむ。この年ごろうけたまはりてなりぬるにや」と聞こえたまへば、「さるやうはべることとなり。くはしきさまは、かの大臣もおのづから尋ね聞きたまうて

それは一体どうしたことだったのでしょう　（源氏）それにはわけがあるので　事情　そのうちに（玉鬘に）　ございます

一 ごたごたした、身分の低い者の間柄にあるような話ですので。一人の女に二人が通じて、子供のことについて勘違いをしたといったこと。

二 まだ事情（玉鬘が内大臣の子であること）を知らせてはおりません。

三 大宮が、どんなに人少なな有様で、大勢の人々にかしずかれた源氏の大臣をお迎え申されたことだろう。

大宮、内大臣に消息する

四 源氏の前駆の家来たちを歓待し。家臣たちが丁重に出迎え、酒食を供するのである。

五 源氏のお席を用意したりする人。女房である。

六 いつも大宮の側にいる中将（夕霧）は、今日は、源氏のお供で客側に連なっていられるだろう。「られ」は、夕霧に対する軽い敬語。

七 親しくお出入りしている然るべき殿上人を。「まうち君たち」は、摂関家などの家司を勤めている殿上人。

八 果実、木の実、菓子など、酒の肴にするもの。

九 源氏。居所の名を冠して呼ぶ。「太政大臣」が公式の呼称であるのに対して、日常的私的な呼び方。

一〇 はたの見る目もいかがかと不体裁でもあり、（源氏に対して）恐れ多くも思われますので。

事情を明かし

一 くだくだしき直人の仲らひに似たることにはべれば、明かさむ

たりしましても　ふしだらなことだと世間が噂をしましょうから

につけても、らうがはしう人言ひ伝へはべらむを、中将の朝臣にだ

夕霧

に、まだわきまへ知らせはべらず。人にも漏らさせたまふまじ」と、

お口止め申し上げなさる　お漏らし下さいませぬように

御口かためきこえたまふ。

内の大殿にも、かく三条の宮に、太政大臣わたりおはしまいたる

（内大臣）三　源氏

よし聞きたまひて、「いかにさびしげにて、いつくしき御さまを待

気の利いた者はいないであろう

ちうけきこえたまふらむ。御前どももてはやし、御座ひきつくろふ

人も、はかばかしうあらじかし。中将は、御供にこそものせられつ

さし向けなさる

らめ」などおどろきたまうて、御子どもの君達、むつましうさるべ

粗相に

きまうち君たちたてまつれたまふ。「御くだもの、御酒など、さり

（内大臣）八

ならぬようさし上げよ　私も伺わねばならないが　それではかえって大げさなことになる

ぬべく参らせよ。みづからも参るべきを、かへりてもの騒がしきや

うならむ」などのたまふほどに、大宮の御文あり。

お見舞においで下さいましたのに

（大宮）九

六条の大臣のとぶらひにわたりたまへるを、ものさびしげにはべ

大仰に

れば、一〇人目のいとほしうも、かたじけなうもあるを、ことことし

一一 直接お目にかかって（源氏から）お耳に入れたそうなこともあるようです。

一二 一体、何ごとだろう。以下、「対面に聞こえまほしげなることもあなり」という文面を受けた内大臣の心中。

内大臣、さまざまに思案のあげく、大宮邸に赴く

一三 この姫君（雲居の雁）の一件、中将（夕霧）に関する苦情だろうかと。

一四 源氏の大臣も、穏やかに一言口に出して恨み言をおっしゃるならば。

一五 夕霧が（縁組を断られても）平気な顔をして、心に止めていないのを見るのは、胸がおさまらないし。

一六 大宮や源氏のお言葉に折れたふりをして承諾しようと。

一七（しかしまた一方）お二人が心を合せておっしゃろうとするのだなと思い当られると。

一八 本当によくない、あいにくなご性分だ。草子地。

一九 源氏の大臣も会おうとしてお待ちになっているとか。「や」は、疑問の助詞。

う、（私がこうお願いしたからというふうではなしに）かう聞こえたるやうにはあらで、（おいで下さいませんか）わたりたまひなむや。対面に聞こえまほしげなることもあなり。

と聞こえたまへり。

一二 何ごとにかはあらむ、一三 この姫君の御こと、中将の愁へにやとおぼしまはすに、宮もかう（大宮）御世残りなげにて（余命も少ないご様子で）、このことと切に（これだけはと）懇切に仰せられ一四 大臣も憎からぬさまに一言うち出で恨みたまはむに、とかく申しかへさふことえあらじかし、一五 つれなくて思ひ入れぬを見るにはやすからず、さるべきついであらば、一六 人の御言になびき顔にて許してむとおぼす。御心をさしあはせてのたまはむことと思ひ寄りたまふに、一七いとどいなびどころなからむが、また、（いよいよ反対のしようがないであろうことが）なんですぐ承知することがあろうとついなどかさしもあらむとやすらはるる、一八 いとけしからぬ御あやにく心なりかし。されど、宮かくのたまひ、大臣も対面すべく待ちおはするにや、かたがたにかたじけなし、参りてこそは御けしきに従はめなど思ほしなりて、御装束

（躊躇するのは）どちらにしても恐れ多いことだ　とにかく参上してあちらのご意向を同ってのことにしようとお考えになって

特別にお心づかいなさって　前駆の人数も大げさにはせずに

心ことに引きつくろひて、御前なども

一 老成して威厳のあるさま。
二 薄紫色の御指貫。「指貫」は、直衣の下に着用する袴。
三 「桜」は、襲の色目。表白、裏蘇芳。「下襲」は、束帯姿の時、半臀の下に着、背後に裾を長く引く。ここは直衣、指貫に下襲を付けたやや改まった服装。「直衣布袴」という（二巻図録一〇参照）。
四 桜襲の唐織の綺（錦に似た薄い絹）の御直衣に、今様色（濃い紅梅色）の袿を何枚もお召しになって、くつろいだ皇子らしいお姿で。「おほきみ」は、二世以下の皇族、または親王宣下を受けない皇子をいう。
五 源氏の大臣は、輝くような美しさでは勝っていらっしゃるが。
六 いずれも、亡き致仕の大臣の子で、内大臣の異腹の兄弟。「春宮の大夫」は、東宮坊の長官。従四位下相当。少女の巻に「左衛門の督、権中納言」（二五〇頁）とあった人々であろう。
七 世評の高い家柄の殿上人で。次に蔵人の頭以下を列挙する。
八 蔵人所の職員。定員二名。近衛の中将と、中弁から選ばれる。殿上の実務を統べる要職で、名門有能の人物がなる。四位相当。
九 五位の殿上人で、人物家柄により蔵人になった者。
一〇 近衛府の次官。四位、五位で名門の子弟がなる。

子弟を引き連れた内大臣の威儀

わたりたまふ。

君達いとあまた引きつれて入りたまふさま、〔内大臣の〕ものものしうたのもしげなり。丈だちそぞろかにものしたまふに、太さもあひて、いと宿徳に、おももち、あゆまひ、大臣といはむに足らひたまへり。葡萄染の御指貫、桜の下襲、「裾を」いと長う走り引きて、ゆるゆるとことさらびたる御もてなし、あなきらきらしと見えたまへるに、六条殿は、桜の唐の綺の御直衣、今やう色の御衣ひき重ねて、しどけなきおほきみ姿、いよいよたとへむものなし。光こそまさりたまへ、かうしたたかにひきつくろひたまへる御ありさまに、なずらひても見えたまはざりけり。

君達次々に、いとものきよげなる御仲らひにて、つどひたまへり。藤大納言、春宮の大夫など今は聞こゆる御子どもも、皆なり出でつつものしたまふ。おのづから、わざともなきに、おぼえ高くやむごとなき殿上人、蔵人の頭、五位の蔵人、近衛の中少将、弁官など、

ご子息たちを　お背が高くていらっしゃる上に　お顔付といい　歩み方といい　いかにも大臣らしくていらっしゃる　程よくお太りになって　するすると引いて　ゆっくりと大きく構えられ　お振舞は　ああご立派だという感じでいらっしゃるのに　源氏　ご兄弟で　大層お美しい　皆おいでになっている　昇進なさっていらっしゃる　比べものにはおなりにならないのであった　特にお召しでもないのに

一一 太政官の職員。八省を統べ、行政の実務に携わる。
一二 それ以下の並の身分の者。殿上人以下の者。
一三 盃が何度も廻って。「流る」は、上席から末席に順次移ること。

源氏、内大臣と対面

一四 内大臣。
一五 離れていてこそ、些細なことにつけて、張り合うお気持も起ろうが。雲居の雁の結婚を許さないことなどをさす。
一六 お越しを承りながら参りませんでしたら、ご不興が一段と増すことだったでしょう。「うけたまはり過ぐす」は、「聞き過ぐす」の謙譲表現。聞きながらそのままにすること。
一七 お叱りを受けるのはこちらの方です。「勘当」は、罪を勘え、法に当てて罰すること。
一八 お怒りだなと思うことがたくさんあります。
一九 (内大臣は) 雲居の雁のことかとお思いになるので。

盛大で
人柄が派手で立派な方々が
人柄はなやかにあるべかしき、十余人つどひたまへれば、いかめしう、次々のただ人も多くて、一二土器あまたたび流れ、皆酔ひになりて、酩酊して
〔大宮の〕
話題にした
口々に
おのおのかう幸ひ人にすぐれたまへる御ありさまを物語にしけり。
自然に思い出されなさって
久しぶりの
一四大臣も、めづらしき御対面に、昔のことおぼし出でられて、一五よそよそにてこそ、はかなきことにつけて、いどましき御心も添ふべかめれ、さし向ひきこえたまひては、かたみにいとあはれなることの
こうして面とお向いになっては
お互いに忘れがたい若い時のあれこれのことを
昔のように
長年の間のお
数々おぼし出でつつ、例の、隔てなく、昔今のことども、年ごろの
〔源氏に〕
〔内大臣〕参上しなく
話をなさって
御物語に、日暮れゆく。御土器など進め参りたまふ。「さぶらはで
てはいけないところでしたのに
お召しがないのに
はあしかりぬべかりけるを、召しなきに憚りて、一六うけたまはり過ぐしてましかば、御勘事や添はまし」と申したまふに、
〔源氏〕
「勘当はこなたざまになむ。一八勘事と思ふこと多くはべる」など、
意味ありげにおっしゃ
けしきばみたまふに、一九このことにやとおぼせば、わづらはしうて、かしこまりたる
面倒なことと思われて
恐れ入ったていで居ずまいを正していらっしゃる
さまにてものしたまふ。
〔源氏〕
「昔より、公私のことにつけて、心の隔てなく、大小のこと聞こ

一　共に力を合せて、朝政の輔佐もいたすのだと存じていましたが。「羽を並ぶる」は、輔佐の人を「羽翼」というところから、肩を並べて朝政を助けることをいう。漢の高祖の時、商山の四皓（三巻澪標一四頁注八参照）が、皇太子（後の孝恵帝）に出仕したのを見て、高祖が「彼の四人之を輔く。羽翼已に成り、動かし難し」と嘆じ、癈太子を諦めた故事（『史記』留侯世家）を踏まえ、須磨流謫の政変をくぐり抜け、共に当帝を守ったという含みがある。

二　そのころ考えていましたのとは違うようなことが時にはありますが、それは個人的な家同士のことです。夕霧と雲居の雁とのことをいう。

三　ご身分柄、きまりがあって、威儀を張ったお振舞をなさらねばならぬことと存じますが。軽々しく私などにお会い下さらぬのも無理はないが、の意。

四　昔の友人には、そのご権勢も控えめにして、お訪ね下さればよいのにと。

五　昔は、仰せのようにしげしげお会いして。

六　朝廷にお仕えした当初は、お言葉のようなお仲間の一人とも考えませず。源氏の言葉の「羽を並ぶるやうにて」を受けたもの。

七　ただもう（源氏の）ありがたいお引立てを。「思うたまへ知らぬにははべらぬを」に続く。

えうけたまはり、羽を並ぶるやうにて、朝廷の御後見をもつかうまつるとなむ思うたまへしを、末の世となりて、そのかみ思うたまへし本意なきやうなること、うち交りはべれど、うちうちの私事にこそは。おほかたの心ざしは、さらにうつろふことなくなむ。何ともなくて積りはべる年齢に添へて、いにしへのことなむ恋しかりけるを、対面賜はることもいとまれにのみはべれば、こと限りありて、世だけき御ふるまひとは思うたまへながら、親しきほどには、その御勢をも、引きしじめたまひてこそは、とぶらひものしたまはめとなむ、うらめしきをりをりはべる」と聞こえたまへば、「いにしへは、げに面馴れて、あやしくたいだいしきまで馴れさぶらひ、心に隔つることなく御覧ぜられしを、朝廷につかうまつりし際は、羽を並べたる数にも思ひはべらで、うれしき御かへりみをこそ、はかばかしからぬ身にて、かかる位に及びはべりて、朝廷につかうまつりはべることに添へても、思うたまへ知らぬにははべらぬを、齢の

（年月がたちまして）（少しも変るところはありません）（総じてあなたへの気持は）（ことともせずに重ねました）（お目にかかることもほとんどありませんので）（内大臣）（身分のほどもわきまえず失礼なほどいつもご一緒申し）（お付合い頂きましたが）（大した）（こんな地位にまで昇りまして）（才能もない身で）（ありがたいと存じませぬではございませんが）（年）

玉鬘のことを打ち明ける

八 あの当時から、どうなったことやらと気にして捜していましたことは、何のきっかけでございましたか、心配に堪えず、ついちょっとお耳にお入れしたような気がいたします。雨夜の品定めに、夕顔の話をしたことをいう（一巻帚木七一～七四頁参照）。

九 つまらぬ子供たちが、それぞれの縁で、うろうろしていますのを。内大臣は「腹々に御子ども十余人」（三巻少女二三二頁）、「御子ども腹々いと多かるに」（螢八〇頁）とあり、近江の君も迎え取っていることは、常夏の巻以降に詳しい。不出来な者もまじる大勢の子供たちを卑下して言う。

一〇 また、そんな子供なりに、大勢並べてみますと。

一一 あの昔の雨夜の品定めに、あれこれ親しく打ち明けて議論したことを思い出されて。（帚木四六～八〇頁参照）

一二 このようにお互いに参上してお会いすると、改めて、遠くなってしまった昔のことが思い出されまして。

積りには、（仰せのようについ怠慢なことばかりが）げにおのづからうちゆるぶことのみなむ、多くはべりける」などかしこまり申したまふ。（お詫びを申される）

〔源氏は〕そのついでに、〔玉鬘のことを〕ほのめかし出でたまひてけり。大臣（内大臣）、「いとあはれに、（まことに）めづらかなることにもはべるかな」と、（感に堪えぬ）（またとなく珍しいお話でございますね）まづうち泣きたまひて、「（内大臣）八そのかみより、いかになりにけむと尋ね思うたまへしさまは、何のついでにかはべりけむ、愁へに堪へず、漏らし聞こしめさせしここちなむしはべる。今かくすこし人数にもなりはべるにつけて、九はかばかしからぬ者どもの、かたがたにつけてさまよひはべるを、（体裁が悪く）かたくなしく、見苦しと見はべるにつけても、一〇またさるさまにて、数々に連ねては、（皆わが子だといとしく思われますにつけても）（人並みの身分にもなりますにつけて）（みっともないと思いますにつけても）なむ思ひたまへ出でらるる」とのたまふついでに、一二かのいにしへの雨夜の物語に、いろいろなりし御睦言の定めをおぼし出でて、泣き（泣いたり笑ったり）（お二人ともすっかり打解けられた）み笑ひみ、皆うち乱れたまひぬ。夜いたう更けて、おのおのあかれたまふ。（源氏）一二「かく参り来あひては、さらに久しくなりぬる世の古事、

一　涙をお流しになる。「しほたる」は、もと「藻塩垂る」と同じ。塩を採る海藻に、塩分を濃くするために掛ける海水が垂れること。

二　しくしくとお泣きになる、その涙に濡れる尼衣、尼姿の大宮のお嘆きは、まことに格別深いものなのだった。「尼衣」に「海士衣」を響かせ、「しほたる」「しほしほと」と縁語になる。

三　（内大臣のなさり方が）一ふし配慮が足りぬと、根に持っておいでになっていたので。自分（源氏）の子ということで、万事大目に見るべきなのに、という気持。

四　あちらの大臣（内大臣）は大臣で。

五　そうはいうものの、胸の晴れぬ思いがなさったのだった。「したまうけり」は「したまひけり」の音便。

六　突然で、お騒がせしてもいかがかと存じまして（ご遠慮申し上げます）。

七　では、大宮のご病気もお悪くないご様子ですから。以下、「わたりたまふべきよし」まで、源氏の言葉を要約して述べる。

八　きっと、前にご通知申し上げた日をお間違えなく。玉鬘の裳着の日のこと（一五三頁参照）。

源氏、内大臣、三条の宮を辞去する

思うたまへ出でられ、恋しきことの忍びがたきに、立ち出でむここ（ここを出て帰る気にも）ちもしはべらず」（なれません）とて、をさをさ心弱くおはしまさぬ（決して気弱くはいらっしゃらない）六条殿（源氏）も、酔ひ泣きにや、一うちしほたれたまふ。宮はたまいて、姫君の御ことを（大宮は大宮で一層）おぼし出づるに、ありしにまさる御ありさま、（昔に優るご立派な〔源氏の〕）勢を見たてまつりたまふに、飽かず悲しくて、（〔涙を〕）とどめがたく、二しほしほと泣きたまふ尼衣は、げに心ことなりけり。

（こんなよい機会だったのに）かかるついでなれど、（夕霧）中将の御ことをば、（〔源氏は〕）うち出でたまはずなりぬ。三ひとふし用意なしとおぼしおきてければ、口入れむことも人わ（悪いと思っておやめになり）るくおぼしとどめ、四かの大臣はた、人の御けしきなきに、（先方からお言葉もないのに）（出過ぎたことも）しがたくて、五さすがにむすぼほれたるここちしたまうけり。「今宵（内大臣）も御供にさぶらふべきを、六うちつけに騒がしくもやとてなむ。今日（お邸までお送りすべきですが）のかしこまりは、ことさらになむ参るべくはべる」（御礼には）（日を改めて参上いたすつもりでございます）と申したまへば、七さらば、この御なやみもよろしう見えたまふを、八かならず聞こえし日違へさせたまはず、（おいで下さるようにという旨を）わたりたまふべきよし、聞こえ契りたまふ。（お約束なさる）

九　お二方ご機嫌よく、それぞれお帰りになる物音はまことに盛んである。「響き」は、車馬や大勢の供人のざわめき。

一〇　前出一六二頁の、内大臣の弟や子息たち。

一一　今度はまたどんなお譲りがあるのだろうかなどと。前に、源氏は内大臣を譲って太政大臣になり、政権を委ねたこと、三巻少女二三〇頁に見える。

一二　内大臣は、もう早速（玉鬘が）どんな娘か、早く会いたいと思われなさるのだが。

内大臣の臆測

一三　源氏が、玉鬘を捜し出されてお引き取りになった当初の事情を考えてみると。今も消えぬ夕顔への愛着から玉鬘を引き取った事情は、三巻玉鬘の巻冒頭および三一二三～五頁参照。

一四　きっと、何ごともなく（玉鬘を）ほっておくことはなさるまい。

一五　れっきとしたご夫人方（紫の上や花散里）に遠慮して、大ぴらにその方々の一人としては扱わず。

一六　といって、それではやはり面倒なことと、世間の噂になるのを怖れて。実の娘ということでは恋人にしておけないからである。

一七　源氏の思い者であることを、難としなくてはならないことだろうか。

一八　玉鬘が、宮仕えなさることになったならば。

一九　弘徽殿の女御。玉鬘の腹違いの妹。

一〇　君達（お二人）の御供の人々、何ごとありつるならむ（何があったのだろう）、めづらしき（滅多にない）御対面に、いと御けしきよげなりつるは（とも大層ご満足のご様子だったのは）、一一　またいかなる御ゆづりあるべきにかなど、ひが心を得つつ（思い違いをしては）、かかる筋（こういうお話だとは思いもかけないのだった）とは思ひ寄らざりけり。

大臣（おとど）、うちつけにいといぶかしう、心もとなうおぼえたまへど、ふとしか受けとり親がらむも（すぐお言葉に甘えて引き取り親ぶるのも）、便なからむ（不都合だろう）、尋ね得たまへらむはじめを思ふに、一四　定めて心きよう見放ちたまはじ、やむごとなき方々を憚りて、うけばりてその際にはもてなさず、さすがにわづらはしう、ものの聞こえを思ひて、かく明かしたまふなめりとおぼすは（このように打ち明けなさるのであろうとお考えになると残念だけれど）、くちをしけれど、一七　それを疵とすべきことかは、ことさらにもかの御あたりに触ればはせむに（何の体裁の悪いことがあろう〔娘を〕さし上げたとしても）、などかおぼえの劣らむ（何とお思いになるかおもしろからぬことだと）、宮仕へざまにおもむきたまへらば、女御などのおぼさむこともあぢきなしとおぼせど、ともかくも思ひ寄りのたまはむおきてを違ふべきことかはと（〔源氏が〕考えつかれて仰せになるご決定に背けようかと）、よろづにおぼしけり。

一 二月十六日が彼岸の入りの日で。

源氏、玉鬘と夕霧に事情を話す

「彼岸」は、陰暦二月、春分の日を中心とする七日間。

二 陰陽師が占いの結果をお答え申した上に。「かうがへ」は、「勘へ」の音便。陰陽道で事を行う日時の吉凶を占うこと。

三 裳着の儀式の支度を進められて。主語は源氏。

四 例のように玉鬘のお部屋にお出でになっても。六条の院東の町（花散里の御殿）の西の対である。

五 こうして、玉鬘のことを内大臣に打ち明けられてからは。

六 内々に、こうした事情（玉鬘が内大臣の娘だったこと）を、ご説明なさった。

七 何かとおかしな話だ、事情を知ってみればなるほど、思い合わされることもいろいろあるにつけて。たとえば、野分の巻に、源氏と玉鬘を隙見して抱いた不審などは、今氷解する（一三八頁参照）。

八 あの隙見の時の玉鬘の有様が、たまらなく思い出されて。

九 けれども、（たとい実の姉妹でないにしても、雲居の雁がありながら玉鬘に思いを寄せるのは）してはならない、間違ったことなのだと。

玉鬘の裳着、大宮の贈り物

一〇（尼なので）目立たぬように。

一一 櫛、鋏、鑷子、髪掻などの化粧道具を入れておく箱。（三巻図録一一参照）

かくのたまふは二月朔日ころなりけり。（このお話があったのは）十六日、彼岸のはじめに（事を行うのに）ていとよき日なりけり。（この前後にほかに吉日がないと）近うまたよき日なしとかうがへ申しけるうちに、（大宮も少しお具合がよいので）宮よろしうおはしませば、いそぎ立ちたまうて、例のわたりたまうても、大臣に申しあらはししさまなど、（内大臣にお打ち明けした時の様子など）いとこまかにあべき心得ごとを（玉鬘に）ことども教へきこえたまへば、（行き届いたお心遣いは）あはれなる御心は、（大層こまごまと）親と聞こえながらもありがたからむをとおぼすものから、（実の親と申してもこれほどではあるまいと）いとなむうれしかりける。

夕霧

五 かくてのちは、（源氏は）中将の君にも、忍びてかかることの心のたまひ知らせけり。（玉鬘は）あやしのことどもや、むべなりけりと、思ひあはすることどもあるに、（あの自分に冷たい雲居の雁のご様子よりも）かのつれなき人の御ありさまよりも、なほもあらず思ひ出でられて、（少しも気がつかなかったことだと）思ひ寄らざりけることよと、（自分が間抜けに思われる）しれじれしきここちす。されど、あるまじう、ねぢけたるべきほどなりけりと、（考え直す）思ひ返すことどころこそは、（世にもまれな誠実さであろう）ありがたきまめまめしさなめれ。

裳着の当日

かくてその日になりて、（大宮のもと）三条の宮より、忍びやかに御使あり。御櫛の筥など、（急なことだったが）にはかなれど、（いろいろなお品を大層見事に仕上げなさって）ことどもいときよらにしたまうて、御

文には、

（大宮）お祝いを申そうにも縁起でもない尼姿ですので　ご遠慮しておりますが

聞こえむにもいまいましきありさまを、今日は忍びこめはべれど、

一二 さるかたにても、長き例ばかりをおぼし許すべうやとてなむ。一三あ

はれにうけたまはりあきらめたる筋を、かけきこえむも、いかが。

一四御けしきに従ひてなむ。

一五ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛笥

わが身はなれぬ懸子なりけり

年寄りじみて霞えて書いていらっしゃるのを

と、いと古めかしうわななきたまへるを、殿もこなたにおはしまして、一六ことども御覧じ定むるほどなれば、見たまうて、「古代なる御

（源氏）　古風など　源氏　西の対

文書きなれど、いたしや、この御手よ。昔は上手にものしたまうけ

文面だけれど　大したものだ　このご筆跡は　書の名手でいらっしゃったのだが

るを、年に添へてあやしく老いゆくものにこそありけれ。いとから

不思議に筆跡も老いてゆくものなのですね　大層痛々しい

ほどお手が震えている　何度も繰り返し

く御手ふるひにけり」など、うち返し見たまうて、一七「よくも玉櫛笥

（源氏）

にまつはれたるかな。三十一字のなかに、異文字は少なく添へたる

一八ことのかたきなり」と、忍びて笑ひたまふ。

一三 それにいたしましても（尼だとしても）、長生きの例にあやかって頂くということで、お許し下さるだろうかと存じまして（お便りをさし上げます）。

一四 胸を打つお話だと、先日承って知りました事情を、ここで申し上げるのも、どうかと存じます。玉鬘が孫と分ってうれしく思っていることを、相手の気持も知らずに言うのは遠慮される、の意。大宮の謙遜の言葉。

一五 あなたのお気持次第です。祖母と思ってくれるならばうれしい、の意。

一六 どちらから申しましても、あなたは私とは切っても切れぬ縁のある方なのです。内大臣の関係からゆけば孫、源氏の娘分とすれば、婿の子で、やはり孫になる。「玉櫛笥」は、櫛の箱の美称。歌語。「懸子」は、櫛の箱の懸子で、外箱の縁にかけて、中にはまるようにした箱。「子」を響かす。「ふたかた（二方）」は、「蓋」を掛け、「身」「懸子」とともに「玉櫛笥」の縁語。贈り物の櫛の箱にちなむ歌。

一七 あれこれ（裳着の支度のことを）気をつけてお指図なさっている時なので。

一八 よくもこれだけ玉櫛笥という言葉に引っ掛っているな。縁語の多いことをいう。

一八 一首のうちに、玉櫛笥に縁のない言葉を少ししか使わずに詠むというのが大変なのだ。暗にからかった言葉。

一「裳」「唐衣」は、婦人の正装の時着用する。白い裳、唐衣は儀式用。裳着のために特に賜るのである。（図録九参照）

二 裳、唐衣以外の衣服。表着、袿など。

三 髪上げのお道具。釵、鋏など。髪上げは、儀式の時の、髻をとる結い方。（図録九参照）

四 いつもの通り、いろいろの香壺に、中国渡来の薫香の、特別香りのよいのをさし上げなさった。

五 源氏の妻妾のご婦人方。花散里や明石の上。

六（玉鬘の）お召し物。

七 お付きの女房たち用に。

八 源氏の寵を受けるほどのご婦人たちがご趣向を凝らして、競争でなさったものだから。

九 末摘花や空蟬が住む。（初音二〇頁参照）

一〇 末摘花。

一一 殊勝なお心がけではある。諧謔気味に、その出過ぎた態度を皮肉った草子地。

一二 青みがかった薄墨色。多く喪中、または僧尼が着用し、祝儀には適切でない。

一三 貴婦人の表着。袵がなく、身頃の裾先が分れる。

一四 落栗色。「濃き紅なり」（『河海抄』）。普通の紅より、やや黒い色、あるいは下地を薄紫に染めて上を紅で濃く染めた色（『原中最秘抄』）。

一五 霰のような小紋を織り出した小袿。「小袿」は、貴婦人の略礼装。（一巻図録一二参照）

中宮はじめ御方々の贈り物、末摘花との贈答

秋好む中宮

中宮より、白き御裳、唐衣、御装束、御髪上の具など、いと二なくて、例の、壺どもに、唐のたきもの、心ことにかをり深くてたてまつりたまへり。御方々、皆心々に、御装束、人々の料に、櫛、扇まで、とりどりにし出でたまへるありさま、劣りまさらず、さまさまにつけて、かばかりの御心ばせどもに、いとみ尽くしたまへれば、をかしう見ゆるを、東の院の人々も、かかる御いそぎは聞きたまうけれども、とぶらひきこえたまふべき数ならねば、ただ聞き過ぐしたるに、常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべきことのをり過ぐさぬ古代の御心にて、いかでかこの御いそぎを、よそのこととは聞き過ぐさむとおぼして、形のごとなむし出でたまうける。あはれなる御心ざしなりかし。青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のめでたうしけるあはせの袴一具、紫のしらきり見ゆる霰地の御小袿と、よき衣筥に入れて、つつみいとうるはしうてたてまつれたまへり。御文には、

（それぞれにご用意なさった出来ばえは思い思いに）（どの品品についても）（すばらしく思えるのだが）（こういうお支度のことはお聞きになっていたが）（お祝い申し上げるような人数には入らないので）（変に折目正しくて）（すべき場合にはしないでおかぬといった昔気質でいらして）（このお支度を）（どうして）（他人事として知らぬ顔をしていられようとお思いになって）（きまり通りご用意なさった）（よろこんで用いた裕の袴一揃え）（紫色が白っぽくなっている）（立派な）（上包みも大層見事にして）

一六 こんなおめでたい折は、お祝いを申し上げずにはいられません。
一七 お側の人（女房）にでも、お下げ渡し下さい。
一八 本当にあきれておしまいになって、またまた身の程知らずなとお思いになると。
一九 困った昔気質の人なのです。
二〇 あんなふうに内気な人は。末摘花の内気な人柄は、一巻末摘花の巻、三巻蓬生の巻に詳しい。
二一 いつもの通り、同じ趣向の歌があった。唐衣の縁語仕立ての詠みぶりをいう。同趣の歌は、末摘花二七六頁、三巻玉鬘三二八頁に見える。
二二 わが身が恨めしく思われます、いつもあなたのお側にいることができないと思いますと。親しくして頂けないで残念だ、の意。「唐衣」は「袂」を言い出すための語。「身」に身頃の意を掛け、「うらみ」に「裏」を響かせ、「馴る」とともにいずれも「唐衣」の縁語。
二三 ご筆跡は、昔もそうだったが。（末摘花二六五頁参照）
二四 ぐっと彫りつけるように、強く、堅く書いてある。仮名は、なだらかな続け書きの書風をよしとされた。

（末摘花）お見知り頂くような人数でもございませんので知らせたまふべき数にもはべらねば、気がひけますがつつましけれど、かかるを[一六]りは思たまへ忍びがたくなむ。これ、まことにお粗末ですがいとあやしけれど、人にも[一七]賜はせよ。

と、おいらかなり。おっとりと書いてある殿、御覧じつけて、いとあさましう、例のとお[一八]ぼすに、御顔赤みぬ。（源氏）「あやしき古人にこそあれ。かくものづつみ[一九]したる人は、出しゃばらずに奥に引っ込んでいるのがよいのです引き入り沈み入りたるこそよけれ。やはり体裁の悪いものです[二〇]さすがにはぢがましや」とて、（源氏）返事はおやりなさい「返りことはつかはせ。きまり悪く思うでしょうから はしたなく思ひなむ。父親王の、大層かわいがっていらっしゃったのをいとかなしうしたまひける、思ひ出づれば、人より軽く扱ってはどうも人におとさむはい気の毒な人なのです と心苦しき人なり」と聞こえたまふ。（贈物の）御小袿の袂に、例の、同じ筋の歌ありけり。

（末摘花）二三
わが身こそうらみられけれ唐衣
君が袂に馴れずと思へば

御手は、昔だにありしを、大層ひどくちぢかみいとわりなうしじかみ、彫深う、強う、[二四]堅う書きたまへり。大臣、（源氏）憎きものの、をかしさをばえ念じたまは我慢おできにならず

一 この歌を詠んだ時は、どんなに大変だったやら。

二 昔以上に今は頼りにする人がなくて、持て余したことだろう。代作や手直しをしてくれた侍従（末摘花二六一、二六五、二七六頁参照）は、宮家を去り（蓬生六四～七一頁、八二頁参照）、然るべき女房もいないのであろう。

三 どれ、この返歌は、取り込み中だけれども、私がしよう。末摘花の歌が、祝意より閨怨の趣があるので、こう言った。

四 唐衣、また唐衣唐衣と、あなたはいつまでも唐衣の繰り返しなのですね。「かへす」は、衣を返す意に掛け、唐衣の縁語。

五 本当にまじめな話、あちら（末摘花）が特に好む趣向ですから、その通りしたのです。

六 つまらぬお話が大層多いことです。「ようなし」は、用無し。末摘花が登場する滑稽な一段はこれにておしまい、といった気持の草子地。

七 （はじめは）さほど進んでともお思いになれないお気持だったのだが。それで、大宮の病気を口実に断った。（一五三～四頁）

内大臣、玉鬘の裳の腰を結う

（源氏）一で、「この歌詠みつらむほどこそ。（二）まして今は力なくて、所狭かりけむ」と、いとほしがりたまふ。（源氏）三「いで、この返りことは、騒がしうとも、われせむ」とのたまひて、

（源氏）おかしな誰も考えつかないようなお心づかいはあやしう、人の思ひ寄るまじき御心ばへこそ、あらでもありぬべけれ。

僧らしさのあまり

と、僧さに書きたまうて、

四唐衣また唐衣唐衣

かへすがへすも唐衣なる

（源氏）五とて、「いとまめやかに、かの人の立てて好む筋なれば、ものしてはべるなり」とて、見せたてまつりたまへば、君、玉鬘いとにほひやかに笑ひたまひて、「あないとほし。弄じたるやうにもはべるかな」と、苦しがりたまふ。六ようなしごといと多かりや。

内の大臣は、七さしも急がれたまふまじき御心なれど、めづらかに聞きたまうしのちは、いつしかと御心にかかりたれば、疾く参りた

まへり。儀式（お支度）など、あべい（八）限りにまた過ぎて、めづらしきさまにしなさせたまへり。げにわざと御心とどめたまうけることと見たまふも、かたじけなきもの（九）から、やうかはりておぼさる。亥の時（一〇）にて、入れたてまつりたまふ。例（一一）の御まうけをばさるものにて、内（うち）の御座（おまし）いと二（に）なくしつらはせたまうて、御さかな（ご酒肴をさし上げなさる）参らせたまふ。御殿油（とのあぶら）、例のかかる所よりは、すこし光見せて、をかしきほどにもてなしき（気を利かせたおもてなしをしてお上げになった）こえたまへり。いみじうゆかしう思ひきこえたまへど、今宵（こよひ）はいと（大層急なことであろうから）ゆくりかなべければ、引き結びたまふほど（一四）、え忍びたまはぬけしきなり。あるじの大臣（おとど）、源氏（一五）「今宵（こよひ）は、いにしへざまのことはかけはんべらねば、何のあやめも（何の仔細も）分かせたまふまじくなむ。心知らぬ人目を飾（かざ）りて、なほ世の常の作法に」と聞こえたまふ。「げに、さらに聞こえさせやるべきかたはべらずなむ」とて、御土器（かはらけ）参るほどに、「限りなきかしこまりをば、世に例（たぐ）なきことと聞こえさせながら、今までかく忍びこめさせたまひける恨みも、いかが添へはべらざらむ」

（内大臣は）いかにも源氏が格別お心をこめてのことと

（内大臣を）簾中に

（内大臣）全く

（内大臣）言葉に尽せぬお礼は

世にまたとないご厚意と感謝申し上げますが

（内大臣）このようにお隠しになっていたお恨みも

どうして申し添えずにいられましょう

へ しきたり通りのことにまた事を加えて、目新しい趣向をこらしてなさっていられる。「あべい」は「あるべき」の音便形の撥音無表記の形。

九 （そのご厚意が）もったいないとは思うものの、一風変っているとお思いになる。娘でもない、妻でもない女への心入れを不審に思う。

一〇 （裳着の式は）亥の時ということで。陰陽師がかねて事を行う吉時も勘申（かんぢ）しているのである（一六八頁参照）。「亥の時」は、午後九時から十一時までの時刻。

一一 型通りの飾りつけはもとより、簾中のお席もこの上なく立派にお整えさせになって。単に腰結役でなく、実の父との対面だからである。

一二 ご燈火は、いつものこういう裳着の場合よりは、やや明るくして。

一三 （内大臣は）とても玉鬘のお顔を見たいとお思いになるが。こういう場合、姫君は扇で顔を隠している。

一四 （我慢して）裳の腰（腰紐）をお結びになる時に。（図録九参照）

一五 今夜は、昔のことは口にいたしませんので。祝儀でもあり、亡き夕顔にかかわることには触れない用意。

一六 事情を知らぬ人々の手前、今夜のところはまだ、普通に腰結の役として（お願いいたします）。

一七 お盃をお口になさる時に。式のあとの祝宴の時。

一 恨めしいことだ、裳を着る日まで、名乗り出てくれなかった海士（玉鬘）の心は。「沖つ玉藻」に「裳」を響かせる。「かづく」は、水中に潜って藻や貝を採ること。頭からかぶる意の「被く」を掛ける。

二 それでもまだ（源氏の注意にもかかわらず）堪えかねて涙にくれられる。「しほたる」は、「海士」の縁語。

三 大層気後れするほど立派なご風采の方々がお揃いで。源氏と内大臣のこと。

四 寄るべもなく、こんな所（源氏の所）に身を寄せたので、誰にも顧みられぬかわいそうな者だと思っていたのです。実父に見捨てられた娘だと思って自分が面倒を見たのだ、の意。「かかる渚」は、源氏の卑下の言葉。腰結の役をいったん断ったことなどを、源氏は含んでいる。「藻屑」に「裳」を掛ける。

五 それ以下の人々。

六 玉鬘に思いを寄せていられる人々。兵部卿の宮や髭黒右大将等々。

七 内大臣が、御簾の中にお入りになったまま時間が経つのを。裳の腰結役だけなら、もっと早く出てくるはずなのに、と疑問に思う。

八 内大臣家のご子息たちの、中将や弁の君だけは。「中将」は、柏木。「弁の君」は、その弟の弁の少将。

九（血を分けた姉妹と分って）人知れず慕っていたことを、叶えられないのがつらいとも、また（美しい姉妹を得て）うれしいとも思うようになっていられる。

と聞こえたまふ。

（内大臣）一
うらめしや沖つ玉藻をかづくまで
磯がくれける海士の心よ

とて、二なほつつみもあへずしほたれたまふ。姫君は、三いとはづかしき御さまどものさしつどひ、つつましさに、

玉鬘
ご返歌を申し上げられないので
気はずかしさに
源氏

え聞こえたまはねば、殿、

四「よるべなみかかる渚にうち寄せて
海士も尋ねぬ藻屑とぞ見し

全くご無体なだしぬけのお言葉です
それ以上申し上げる言葉もなくて
退出なさった

いとわりなき御うちつけごとになむ」と聞こえたまへば、「いとことにごもっともです
とわりになむ」と、聞こえやるかたなくて、出でたまひぬ。

（内大臣）まこと

親王たち、五次々、人々残るなくつどひたまへり。御懸想人もあまたまじりたまへれば、六この大臣、かく入りおはしてほど経るを、いかなることにかと思ひ疑ひたまへり。八かの殿の君達、中将、弁の君ばかりぞほの知りたまへりける。九人知れず思ひしことを、からうも、

なぜ相談があるのかと
うすうす事情をご存じだった

一〇 あれこれ風変りな源氏の大臣のお好みのようだ。「なめり」は「なるめり」の撥音便無表記の形。わが娘のように仕立てて、いろいろと人の気を引こうとしたことをさす。

一一 秋好む中宮と同じように、入内させようとお思いなのだろうか。

一二 何事にも気楽な身分の者なら、きちんとしないことが、何かとあってもいいでしょうが。「はべべかめれ」は「はべるべかるめれ」の撥音便無表記の形。

一三 私の方にもあなた（内大臣）の方にも、いろいろの人が、縁組を望んでうるさく申し上げるのは。

一四 普通の場合より具合が悪いでしょうから。結婚の申し込み先が二手に別れていてはおもしろくない、の意。

一五 （玉鬘が内大臣の娘であることを）自然に、だんだんと世間が納得するように持っていくのが、よいことでしょう。

一六 前世の因縁が特別だったからでしょう。

一七 客の帰る時に贈る物。お土産。

一八 饗応の時、主人から主賓に贈る物。馬のことが多い。庭に引き出して贈るところから出た名称。

一九 労をねぎらって贈る物。普通衣服や絹布である。

二〇 前に大宮のご病気を理由にお断りになったことも考えて。

うれしうも思ひなりたまふ。弁は、「よくぞうち出でざりける」と（弁の君）（よくまあ言い出さなかったことだ）ささめきて、「さま異なる大臣の御好みどもなめり。中宮の御類ひにしたてたまはむとやおぼすらむ」など、おのおの言ふよしを聞き（兄弟の君達が言っているとかお耳になさっているが（源氏））たまへど、「なほしばしは御心づかひしたまうて、世にそしりなきさまにもてなさせたまへ。何ごとも心やすきほどの人こそ、乱りがはしう、ともかくもはべべかめれ、こなたをもそなたをも、さまざまの人の聞こえなやまさむ、ただならむよりはあぢきなきを、なだらかに、やうやう人目をも馴らすなむ、よきことにはべるべき」と申したまへば、「ただ御もてなしになむ従ひはべるべき。かうまで御覧ぜられ、ありがたき御はぐくみに隠ろへはべりけるも、前の世の契りおろかならじ」と申したまふ。御贈り物などさらにもいはず、すべて引出物、禄ども、品々につけて、例あること限りあれど、またこと加へ、一なくせさせたまへり。大宮の御なやみにことづけたまうし名残もあれば、ことことしき御遊びなどはなし。

（内大臣）（あなたのなさる通りにいたしましょう）（こんなにまでお世話頂きまたとない行き届いたご養育のもとに守られてまいりましたのも）（身分に応じて）（通常の例には限度があるが）（大規模な管絃の御遊などはなさらない）

兵部卿の宮の求婚

一　もう、口実にお使いになれるような差し障りもないのですからと。裳着の儀式も終えたので、結婚に支障はないはず、というのである。

二　帝からご内意のあったこと（尚侍就任のこと）を、ご辞退の旨奏上し、（それについて）改めて何と仰せられるかによって。

三　父内大臣は、裳着の時に、ほのかな燈火のもとで見た玉鬘の容姿を。

四　今になって、あの夢も正夢だったとお分りになった。夢占いに、わが子を人の養女にしているかもしれぬとあったことをさす（螢八二頁参照）。

五　弘徽殿の女御。

玉鬘を羨む近江の君と、人々の嘲弄

六　あの手に負えない姫君。近江の君のこと。

七　弘徽殿の女御。

八　お殿様は、姫君をお迎えあそばすはずとか。「殿」とは、内大臣をいう。

九　お二人（源氏と内大臣）に大事にされなさるのでしょう。

兵部卿の宮、「今はことづけやりたまふべきとどこほりもなきを」と、（熱心にお願い申し上げなさるが）おりたち聞こえたまへど、（源氏）「内裏より御けしきあること、かへさひ奏し、またまた仰せ言に従ひてなむ、異ざまのことは、ともかくも思ひ定むべき」（決めましょう）とぞ聞こえさせたまひける。三父大臣は、ほのかなりしさまを、いかでさやかにまた見む、なまかたほなること見えたまはば、（何とかはっきりもう一度見たいものだ）かうまでことことしうもてなしおぼさじ、（大げさに大事にお世話なさるまい）（〔源氏が〕）など、なかなか心もとなう恋しう思ひきこえたまふ。四今ぞかの御夢も、まことにおぼしあはせける。五女御ばかりには、（かえって焦れったく恋しくお思い申し上げなさる）さだかなることのさまを聞こえたまうけり。

世の人聞きに、しばしこのこと出ださじと、（世間の人の耳には知らせまいと）切に籠めたまへど、（お隠しになるが）口さがなきものは世の人なりけり、自然に言ひ漏らしつつ、（おしゃべりなのは）やうやう聞こえ出で来るを、六かのさがなものの君聞きて、女御の御前に、（評判になってくるのを）中将、少将さぶらひたまふに出で来て、（弁の少将）（柏木）（近江君）八「殿は、御女まうけたまふべかなり。あなめでたや。いかなる人、二方にもてなさるらむ。聞（何と結構ですこと）（どんな方が）（九）

一〇 無遠慮に。「あふなげ」は「奥なげ」。「奥」の字音「あう」を「あふ」と表記したものであろう。

一一 口うるさい女房などが聞きつけたりしたら大変です。「もこそ」は、危懼の念を表す。

一二 尚侍になるのだそうですね。「べかなり」は「べかるなり」の撥音便無表記の形。

一三 そのようなお情けもあろうかと思って。尚侍に推薦でもして頂けようかと期待して。

一四 並の女房たちでもいたしませんようなことまで、進んでいたしてきましたのに。近江の君の献身的な奉仕の決意は、常夏一〇四頁、一〇六頁に見える。

一五 女御さまが薄情でいらっしゃるのです。

一六 尚侍の欠員があれば、私こそ願い出ようと思っているのに、無茶なことをお望みなのですね。「なにがし」は、男の自称。「非道」も、男性用語で、道理に外れたこと、の意。柏木たちが近江の君を愚弄しているのである。

一七 ご自分からお節介にお迎えになっておきながら、軽蔑し、馬鹿にしたことをおっしゃる。柏木が近江の君を捜し出してきたことは、常夏八六頁に見える。

一八 なまなかの人では、とてもやってゆけないお邸のなかですこと。「せうせう」は、「少々」。漢語で、女性の用語としてふさわしくない。

けば、かれも劣り腹なり」と、一〇あふなげにのたまへば、女御、かた聞き苦しくお思いになってはらいたしとおぼして、ものものたまはず。中将、柏木「しかかしづかあちらはそのように一二方から大事にされるわけがおありなのでしょうるべきゆゑこそものしたまふらめ。さても、誰が言ひしことを、かだしぬけに口になさるのですかくゆくりなくうち出でたまふぞ。一二もの言ひただならぬ女房などもこそ、耳とどむれ」とのたまへば、(近江君)「あなかま。お黙りなさい皆聞きてはべり。全部知っているのです一二尚侍になるべかなり。宮仕へにと急ぎ出で立ちはべりしことは、一三さやうの御かへりみもやとてこそ、一四なべての女房たちだにつかうまつらぬことまで、おりたちつかうまつれ、御前のつらくおはしますなり」と、恨み言を言うのでにやにやして一五一六尚侍あかば、なにがしこそ望まむと思ふを、非道にもおぼしかけけるかな」などのたまふに、腹立ちて、(近江君)立派なご家族の中に「めでたき御仲に、人並みでない者はお仲間入りできないことなのでした数ならぬ人はまじるまじかりけり。柏木中将の君ぞつらくおはする。一七さかしらに迎へたまひて、軽めあざけりたまふ。一八せうせうの人は、え立てるまじき殿のうちかな。あなかまあ怖いしこ、あなかしこ」と、怖いことしりへざまにゐざり退きて、見おこせたま後ろの方にこちらをにらんでいら

一　こちらの宮仕えの方も、またとないお勤めぶりですから、（女御も）よもや疎かにはお思いでないでしょう。

二　堅い岩も沫雪のように蹴散らかしておしまいになりそうなお元気ですから。天照大神が、高天原を訪れた素戔嗚尊に怒って、武装して対面した際、「弓弭を振り起て、剣柄を急握り、堅庭を踏んで股に陷き、沫雪の若くして蹴散かし」（『日本書紀』巻一）とあるのによる。姉弟不和の連想によるのであろう。

三　天の岩戸を閉じて引っ込んでいらっしゃるほうが無難でしょう。弁の少将の言葉を受けて、同じく天照大神が天岩屋に籠ったことに寄せて言う。「天照大神……此に由りて、発慍りまして、乃ち天岩屋に入りまして、磐戸を閉して幽り居しぬ」（『日本書紀』巻一）

四　この方々までが。ご兄弟衆までが。

五　下働きの童女などのようしない雑用までも。

六　尻軽に立ち走りしてうろうろしては。

七　尚侍に私をお願いして下さい。「おれ」は、この当時、相手を低く見ていう二人称。転じて、一人称。普通は使わない言葉であろう。

れる　可愛らしい顔付だが　いかにも意地悪そうに目尻を吊り上げている

ふ。憎げもなけれど、いと腹あしげにまじり引き上げたり。

柏木　〔近江君が〕

中将は、かく言ふにつけても、げにしあやまちたることと思へば、全くその通り失敗だったと思うので　まじめなお顔で聞いていらっしゃる

まめやかにてものしたまふ。少将は、「かかるかたにても、類ひなき御ありさまを、おろかにはよもおぼさじ。御心しづめたまうてこそ。堅き巌も沫雪になしたまうつべき御けしきなれば、いとよう思ひかなひたまふ時もありなむ」と、ほほゑみて言ひゐたまへり。中将も、「天の岩門さし籠りたまひなむや、めやすく」とて立ちぬれば、ほろほろと泣きて、「この君達さへ、皆すげなくしたまふに、ただ御前の御心のあはれにおはしませば、さぶらふなり」とて、いとかやすく、いそしく、下臈童女などのつかうまつりたらぬ雑役をも、たちはしりやすくまどひありきつつ、心ざしを尽くして宮仕へしありきて、「尚侍におれを申しなしたまへ」と責めきこゆれば、あさましう、いかに思ひて言ふことならむとおぼすに、ものも言はれたまはず。

弁の少将　お気持を落着けてお待ち下さい　十分立派に思い　にやにやして　のかないなさる時もありましょう

〔近江君〕四　ただ女御様のお気持がおやさしくていらっしゃるので　冷たくあしらわれるのに　身軽に　五　真心をこめてしきりにご用を勧めて　お仕えしているのです　かいがいしく　六　〔女御に〕催促申し上げるので　〔近江君〕七　どんなつもりで言っているのであろうと　〔女御は〕　まともに相手をする　あきれて　るお気持になれない

八 内大臣。
九 近江の君が尚侍になりたがっているということを。
一〇 どうしているか、近江の君、こちらへ来るように。「この」は、強めの気持で発している。
一一 はい。女の応答の言葉。『類聚名義抄』に、「吁」に「ヲオ」の訓があり、「女答詞」とある。
一二（こちらで）大層よく勤めているご様子だが、お役人として、全くどんなに適任だろう。
一三 そのように（尚侍任官について）ご内意を承りたかったのですが。
一四 こちらの女御様などが、いずれ私の気持を察してお伝え申し上げて下さいましょうと。
一五 精一杯お頼りしておりましたのに。「頼みふくる」は、「頼み眼る」。下賤な言葉づかいであろう。
一六 夢で金持になったような気持がいたしまして、胸に手を置いたような感じでございます。夢醒めてはっと気づくさまをいうか。『河海抄』は、「愁への心胸の中にひしとありて」手で胸を抑えられたような気持をいうか、とする。
一七 本当に妙な、はっきりしないご気性ですね。自分に頼まなかったことをからかっていう。
一八 玉鬘のこと。太政大臣（源氏）の娘という建前で押している。
一九 任官、叙位について、希望を申し出る文書。

大臣（八）、この望みを聞きたまひて、いとはなやかにうち笑ひたまひて（陽気に）、女御の御方に参りたまへるついでに、「いづら、この近江の君、こなたに」と召せば、「を」と、いとけざやかに聞こえて、出で来たり。「いとつかへたる御けはひ、公人にて、げにいかにあひたらむ。尚侍のことは、などかおのれに疾くはものせざりし」と、いとまめやかにてのたまへば、いとうれしと思ひて、「さも御けしき賜はらまほしうはべりしかど、この女御殿など、おのづから伝へ聞こえさせたまひてむと、頼みふくれてなむさぶらひつるを、なるべき人ものしたまふやうに聞きたまふれば、夢に富したるここちしはべりてなむ、胸に手を置きたるやうにはべる」と申したまふ。舌ぶりいとものさはやかなり。笑みたまひぬべきを念じて、「いとあやしう、おぼつかなき御癖なりや。さもおぼしのたまはましかば、まづ人のさきに奏してまし。太政大臣の御女、やむごとなくとも、ここに切に申さむことは、聞こしめさぬやうあらざらまし。今にても申

（内大臣）一一
（近江君）一二
（内大臣）一三
（近江君）一四
（内大臣）一五
（内大臣）一六
（内大臣）一七
（近江君）一八
（内大臣）一九

（はっきりとお返事申し上げて）
（どうして私に）
（早く言わなかったのか）
（まじめくさって）
（ほかに決った方がいらっしゃるようにお聞きしましたので）
（その弁舌はまことにはきはきしたものである）
（笑い出しそうになるのを我慢なさって）
（そんな希望もお持ちで言って下さったら）
（私が奏上したのに）
（どんなにご身分が高くとも）
（帝が）お聞き入れなさらぬことはありますまい
（今からでも）
（ぜひにとお願いしたら）

文を取り作りて、びびしう書き出だされよ。長歌などの心ばへあらむを御覧ぜむには、捨てさせたまはじ。上は、そのうちに情捨てずおはしませば」など、いとようすかしたまふ。人の親げなく、かたはなりや。「大和歌は、あしあしも続けはべりなむ。むねむねしきかたのことはた、殿より申させたまはば、つまごゑのやうにて、御徳をもかうぶりはべらむ」とて、手を押しすりて聞こえゐたり。御几帳のうしろなどにて聞く女房、死ぬべくおぼゆ。もの笑ひに堪へぬは、すべり出でてなむなぐさめける。女御も御面赤みて、わりなう見苦しとおぼしたり。殿も、「ものむつかしきをりは、近江の君見るこそ、よろづまぎるれ」とて、ただ笑ひぐさにつくりたまへど、世人は、「恥ぢがてら、はしたなめたまふ」など、さまざま言ひけり。

一 きちんと作って、立派に書き上げなさい。申文は漢文で、希望の趣旨や、自分の家柄、業績功労などを書き並べるので、からかってこう言う。「びびし」は「便々し」で、似つかわしい、ふさわしい、の意。

二 （申文に）長歌など上手に詠んであるのを、帝がご覧になれば、お見捨てになりますまい。「長歌」は、短歌（三十一文字）に対する長歌のこと。五音七音を繰り返し、最後を五七七で結ぶ。

三 主上は、とりわけ風流にはお目のない方ですから。

四 （仮にも娘を愚弄するとは）人の親らしくもなく、見苦しいことです。草子地。

五 表向きの大事なことの方は（漢文体の公文書の方は）、お殿様から願い出て頂けるなら。

六 私も言葉を添えるようなことで。「つまごゑ」、他に用例なく、明らかでない。「本人の申したまふことに言を添へて言はむとなり」（『細流抄』）

七 おかしくて我慢できぬ女房は。

八 ご自分でも恥ずかしくて、（そのため）ひどいめにお会わせになる。

藤（ふぢ）

袴（ばかま）

源氏三十七歳の八、九月のことが書かれている。前の行幸の巻の末尾は二月で、三月以降五ヵ月間のことは見えない。その間に、玉鬘は尚侍に任命されたらしい。それは、彼女の裳着の儀がすんで間もなくのことであろう。物語は、そういう公式行事は書かず、この巻冒頭「尚侍の御宮仕へのことを……」という書き方で示す。

玉鬘の悩みは深い。入内して秋好む中宮や弘徽殿の女御と帝寵を競うようになった場合どうすればよいか。源氏は前にもまして恋慕の情をあらわにし、父内大臣は、源氏を憚るばかりである。彼女の俄かな幸運を妬む人も多く、親身の相談相手になる人はいない。

喪服姿の玉鬘を、同じ姿の夕霧が訪れる。二人は、祖母大宮の喪に服しているのである。行幸の巻で、昨年の冬から病が篤いとされていた大宮は、書かれていない五ヵ月の間に薨じている。夕霧は源氏の使いとして、帝のご意向を伝えに来たのだが、事情が判明した今は、手にした藤袴にこと寄せて、胸中を漏らさずにいられなかった。巻名は、この時の贈答歌の言葉による。復命の時、夕霧は世間の噂にかこつけて、玉鬘に対する源氏の真意を追求する。

玉鬘の出仕は十月と決り、柏木は、父内大臣の使いとして彼女を訪れる。源氏を憚る玉鬘はあくまで慎み深く、他人行儀の応対を柏木は恨んだ。髭黒の大将は直属の部下柏木を通じて熱心に求婚し、内大臣の心も傾いている。九月、求婚者たちの焦燥は増し、恋文が次々と届けられるなかで、なぜか玉鬘は、螢兵部卿の宮の文にのみ返歌をしたためた。

一　玉鬘の尚侍としての出仕のことを。玉鬘が尚侍に任じられたこと、ここではじめて分る。一八九頁に「尚侍の君」と呼ぶ。行幸の巻に「内裏より御けしきあること、かへさひ奏し、またまた仰せ言に従ひてなむ……」（一七六頁）とあったから、帝から改めてご下命があったのであろう。

二　どなたもお勧めなさるにつけても。源氏や内大臣が勧めるのである。

玉鬘、尚侍に就任し、宮廷出仕について思い煩う

三　どんなものだろう、親とお頼み申す方のお気持も、気を許せぬ身の上なのだから。源氏の求愛のことをさす。以下「とかくにつけて、やすからぬことのみありぬべきを」まで、玉鬘の心中を叙し、自然に地の文になって、「ものおぼし知るまじきほどにしあらねば」に続く形。

四　自分の意志に反して不都合なことでも起ったなら。帝のご寵愛を受けることをいう。

五　秋好む中宮も弘徽殿の女御も。

六　事あれかしと取り沙汰し、何とかして物笑いの種にしようと、呪っていらっしゃる方々も多く。尚侍として入内する玉鬘の幸福を妬み、中宮方や弘徽殿方との軋轢で、その挫折を願う人々も多い。

七　かといって、このままの状態も悪くはないけれど。源氏の養女として六条の院にあること。以下、次頁の「人にもて騒がるべき身なめり」まで、再び玉鬘の思案。

尚侍の御宮仕へのことを、誰も誰もそそのかしたまふも、いかならむ、親と思ひきこゆる人の御心だに、うちとくまじき世なりければ、ましてさやうのまじらひにつけて、心よりほかに便なきこともあらば、中宮も女御も、かたがたにつけて心おきたまはば、はしたなからむに、わが身はかくはかなきさまにて、いづかたにも深く思ひとどめられたてまつるほどもなく、浅きおぼえにて、ただならず思ひ言ひ、いかで人笑へなるさまに見聞きなさむと、うけひたまふ人々も多く、とかくにつけて、やすからぬことのみありぬべきを、ものおぼし知るまじきほどにしあらねば、さまざまに思ほし乱れ、人知れずもの嘆かし。さりとて、かかるありさまもあしきことはなけれど、この大臣の御心ばへの、むつかしく心づきなきも、いかな

一 尚侍（ないしのかみ）　二 誰（たれ）　三 宮中に出仕するにつけて　四 便（びん）　五 女御（にょうご）　六 こんな頼りないありさまで　七 源氏

藤袴

一 すっきりと断ち切って、世間が邪推しているらしいことを、潔白で押し通すことができよう。六条の院にいれば、結局源氏の求愛を斥けることができないであろう、との思い。

二 やはりいずれにしても（宮仕えをするにしろ、このままでいるにしろ）見苦しいことになって。

三 一体どんなことを、ああだとかこうだとかはっきり申し上げることができよう。「聞こえ分く」は、こと分けて申し上げる。

四 （廂の間の）端近に居て、外を眺めていらっしゃる玉鬘のご様子は。

五 薄色の喪服を人懐かしい感じに身にまとい。「鈍色」は、薄墨色。喪服に用いる。「やつる」は、質素な服装をすること。玉鬘が祖母大宮の喪に服していることを、ここにはじめて告げる。大宮の病気のことは行幸一五三頁などに見え、その薨去は、藤裏葉の巻に三月二十日とある（二八〇頁参照）。

喪服の玉鬘と夕霧の訪問

機会に るついでにかは、一もて離れて、人のおしはかるべかめる筋を、心きよくもあり果つべき、まことの父大臣も、この殿のおぼさむところを憚りたまひて、うけばりてとり放ち、けざやぎたまふべきことにもあらねば、二なほとてもかくても見苦しう、かけかけしきありさまにて、心をなやまし、人にもて騒がるべき身なめりと、なかなかこの親尋ねきこえたまひてのちは、ことに憚りたまふけしきもなき大臣の君の御もてなしを取り加へつつ、人知れずなむ嘆かしかりける。

堂々と私を引き取り　源氏のご意向　きっぱり自分の娘としてお扱いになれる　色めいたことに巻き込まれて　ことでもないから　人からとやかく言われる身の上のようだと　かえって実の親　に晴れて対面申し上げなさってからのちは　源氏

〔玉鬘には〕思ふことを、まほならずとも、片端にてもうちかすめつべき女親もおはせず、いづかたもいづかたもいとはづかしげに、いとうるはしき御さまどもには、三何ごとをかは、さなむかくなむとも聞こえ分きたまはむ。世の人に似ぬ身のありさまをうちながめつつ、夕暮の空あはれげなるけしきを、四端近くて見出だしたまへるさま、いとをかし。

なさり方も　一段とひどくなって　全部でなくとも　ちらりとでも漏らすことのできる　〔ご相談しようにも〕どちらの親御も大層ご立派で　まことに近づきにくい　ご様子の方々に向って　思い嘆きながら

五 薄き鈍色の御衣、なつかしきほどにやつれて、例に変りたる色あ

しみじみと胸に迫るさまを　端近くて見出だしたまへるさま　いつもとは違った色合いに

六 夕霧のこと。近衛の中将で宰相を兼ねるのでこういう。「宰相」は、参議の中国風の呼び方。夕霧の参議昇進はここにはじめて見える。

七 同じ鈍色で、一段と濃い色の直衣を着用して。夕霧には外祖母の喪であるが、最近まで親しく養育されていたので、普通よりも濃い色を着ている。

八 巻纓といって、冠の纓を巻き上げた服喪の姿。常は垂らしている。（図録九参照）

九 今さら、実の姉弟ではなかったからといって。

一〇 以前の通り御簾越しで、内側に几帳を添えたご対面は、取次ぎの女房なしでなさるのだった。

一一 （今日の夕霧の来訪は）源氏からのお便りの使いで、帝の仰せ言の内容を、そのままこの方（夕霧）が承って伝えにいらっしゃったのだった。おそらく、帝から出仕を促す旨のお言葉があったのであろう。

一二 あの野分の朝、垣間見たお顔は。「朝顔」は歌語。

一三 あの時、いやなことだと思ったが、実情を知ってからは。源氏が玉鬘に戯れるのを見て、夕霧は「いであなうたて……」と思った（野分一三八頁参照）。夕霧が玉鬘のことを打ち明けられたのは、行幸一六八頁参照。

一四 父源氏は、玉鬘が宮仕えをしても、ご自分の気持をよそに、あっさりとおあきらめにはなるまい。以下「かならず出で来なむかし」まで、夕霧の心中の思い。

一五 あれほどすばらしい六条の院の夫人方との間柄ながら。

かえって　引き立てられていらっしゃるのを

ひにしも、容貌はいとはなやかにもてはやされておはするを、御前なる人々は、女房たちはうち笑みて見たてまつるに、宰相の中将、同じ色の今すこしこまやかなる直衣姿にて、纓巻きたまへる姿しも、またいと優雅でおきれいなご様子でお越しになられた〔夕霧は〕〔玉鬘に対して〕生真面目に なまめかしうきよらにておはしたり。はじめより、ものまめやかに好意をお寄せになっていたので〔玉鬘も〕他人行儀に遠ざけたふうには お扱いに 心寄せきこえたまへば、もて離れてうとうとしきさまには、もてな ならなかった習慣から すっかり態度を変える したまはざりしならひに、今、あらざりけりとて、こよなく変らむのもおかしいので もうたてあれば、なほ御簾に几帳添へたる御対面は、人伝ならでありけり。殿の御消息にて、内裏より仰せ言あるさま、やがてこの君のうけたまはりたまへるなりけり。

〔玉鬘の〕　おっとりとしていらっしゃるものの　どこにも難のない申し上げようをなさるご様子が

御返り、おほどかなるものから、いとめやすく聞こえなしたまふけはひの、ららうじくなつかしきにつけても、かの野分の朝の御朝顔は、心にかかりて恋しきを、うたてある筋に思ひし、聞きあきらめてのちには、なほもあらぬここち添ひて、この宮仕へを、おほかたにしもおぼし放たじかし、さばかり見所ある御あはひどもにて、

才気があって女らしい魅力があるにつけても　忘れがたく恋しいのに　〔自分も〕平静ではいられぬ気持が加わって

一 優婉な色恋沙汰ながら面倒なことが、きっと起るに違いないと思うと。紫の上などとの間に、嫉妬や争いが起ることをいう。

二 御几帳の後ろなどに下がって、皆、あらぬかたを向いている。遠慮の体。「そばむ」は、横を向くこと。

三 夕霧は、（とっさに）作りごとのご伝言を、仔細らしく次から次へと、こまごまと申し上げなさる。

四 帝のご執心の一通りでないのを、そのおつもりでご用心なさい、などといったことである。人払いして話した作りごとの内容を説明する。

五 喪服もこの月にはお脱ぎになることになりますが。祖母の服喪は五カ月（「喪葬令」服紀条）。「この月」は、大宮薨去の三月二十日（藤裏葉二八〇頁）から数えると、八月に当る。玉鬘に何とか返事をさせたくて、話しかけるのである。

六 日柄がよくありませんでした。除服も、陰陽道で吉日を占ったうえで行う風習であった。

七 大宮の薨去の三月二十日からすれば、八月二十日頃が除服の日に当るが、十三日が吉日と定められたのである。

八 賀茂河原。除服は河原に出て行い、祓えをする。

九 私も。男性の遜った自称。

一〇 玉鬘が大宮の喪に服している詳しい事情を。大宮の孫、内大臣の実子であること。

一をかしきさまなることのわづらはしき、はた、かならず出で来なむかしと思ふに、ただならず、胸ふたがるここちすれど、つれなくす（気が気でなく　「心配に」胸のふさがる　さり気なく真面目な様子で）くよかにて、「人に聞かすまじとはべりつることを聞こえさせむに、（夕霧）誰にも聞かせるなと〔源氏が〕おっしゃったことを申し上げたいのですが　女房　仔細ありげに言うので）いかがはべるべき」とけしきだてば、近くさぶらふ人も、すこし退きつつ、御几帳のうしろなどにそばみあへり。

三 そら消息をつきづきしうとり続けて、こまやかに聞こえたまふ。

四 上の御けしきのただならぬ筋を、さる御心したまへ、などやうの筋なり。いらへたまはむこともなく、ただうち嘆きたまへるほど、忍び（〔玉鬘は〕お返事のしようもなく　ただそっと溜息をつかれる気配が　ひっそりとして　愛らしく　大層女らしいので）やかにうつくしういとなつかしきに、なほえ忍ぶまじく、「御服（やはりこらえかねて　（夕霧）五）もこの月にはぬがせたまふべきを、六日ついでなむよろしからざりける。十三日に、七河原へ出でさせたまふべきよしのたまはせつる。九なにがしも御供にさぶらふべくなむ思うたまふる」と聞こえたまへば、（お供申そうと存じております　〔源氏が〕）「たぐひたまはむもことことしきやうにやはべらむ。忍びやかにて（〔玉鬘〕ご一緒においで下さるというのも大げさになりませんかしら　目立たぬようにした方がよろしゅうございましょう）こそよくはべらめ」とのたまふ。一〇この御服などのくはしきさまを、

一一 世間の人に広く知らせまいとしむけていらっしゃるところは、大層行き届いている。玉鬘の素姓は、今しばらく秘密にしようというのが、源氏と内大臣の約束でもあった（行幸一七五頁参照）。

一二 脱ぎ捨てますのも。夕霧は外孫なので、本来なら三カ月間の服喪。

一三 それにしても、なぜか私どもとご縁のあるのが、また腑に落ちないことなのです。内大臣の実子でありながら、六条の院に養育されているのはなぜか、と言う。夕霧は、源氏と夕顔との過去を知らない。

一四 この喪服を着ていらっしゃらなかったら、とても（内大臣のお子とは）分らなかったでしょう。「あらはし衣」は、大宮の孫と分る服喪のことをいう。

一五 何の分別もない私などには、一層、どういうことか筋道も辿れませんが。「思ひ分かぬ心」は、夕霧の「思うたまへ分くまじかりけれ」を受けていう。

一六 藤袴のこと。初秋、淡紫色の小花をつけ、秋の七草の一つ。『和名抄』に、「蘭音闌一名蕙音恵、本草布知波加麻」

夕霧、意中を打ち明ける

とある。

一七 この花も、お目をとめられてよいわけがあるのでした。喪服を「藤衣」というところから、「藤袴」とも無縁でないという気持。

一八 同じ祖母の死を悲しんで喪服に身をやつす私たちではありませんか、やさしいお言葉を聞かせて下さい、ほんの申し訳にでも。

二人にあまねく知らせじとおもむけたまへるけしき、いと労あり。中夕霧将も、「漏らさじとつつませたまふらむこそ心憂けれ。忍びがたく思うたまへらるる形見なれば、ぬぎ捨てはべらむことも、いとものの憂くはべるものを。さても、あやしうもて離れぬことの、また心得がたきにこそはべれ。この御あらはし衣の色なくは、えこそ思うたまへ分くまじかりけれ」とのたまへば、「何ごとも思ひ分かぬ心には、ましてともかくも思うたまへたどられはべらねど、かかる色こそ、あやしくものあはれなるわざにはべりけれ」とて、例よりもしめりたる御けしき、いとらうたげにをかし。

かかるついでにとや思ひ寄りけむ、蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、「これも御覧ずべきゆゑはありけり」とて、とみにもゆるさで持たまへれば、うつたへに思ひも寄らで取りたまふ御袖を、引き動かしたり。

（夕霧）一八 同じ野の露にやつるる藤袴

悲しみを耐えが本当につらく思われます祖母の形見の喪服なので

こういう喪服の色は何だか妙にしみじみと悲しい気持にさせられるものでございます

大層可憐で風情がある

こんな折にと思いついたのであろうか

端から

すぐ手放そうともせず

〔玉鬘の〕別に気づきもせずに

〔夕霧の真意に〕

一 さては、夕霧は自分に思いを寄せていたのかと、（玉鬘は）とても不愉快でいやな感じがしたが。「東路の道の果てなる常陸帯のかことばかりも逢ひ見てしがな」（『古今六帖』五、帯。夕霧の歌の末句「かことばかりも」に掛けて、「逢ひ見てしがな」を暗示したもの。

二 お尋ねになってみて、あなたとはご縁の遠い間柄だったならば、この花の薄紫は格好の口実でもありましょうが。「薄紫」に「紫のゆゑ」（血縁）の意を響かせる。こうして源氏の許にいるのだから、実の姉弟にも等しいではないかと、求愛を斥ける意。「武蔵野は紬ひつばかり分けしかど若紫は尋ねわびにき」（『後撰集』巻十六雑二、読人しらず）による。

三 こうして親しくお話し申し上げるより以上に、深い因縁はあるでしょうか。「ゆゑ」は「紫」の縁語。「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」（『古今六帖』五、紫）

四 もはや同じこと、どうしてもと、たまらない思いからお打ち明け申したのです。「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ」（『後撰集』巻十三恋五、事出で来て後に京極の御息所につかはしける　元良親王。『拾遺集』巻十二恋二、題しらず、元良親王）（三巻澪標三六頁注七参照）

五 （柏木の恋慕のさまを見て）人ごとのようにどうして思っていたのでしょう。

六 （実の姉弟と分ってから）あちら（柏木）はかえっ

あはれはかけよかことばかりも

一「道の果てなる」とかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、見知（玉鬘は）気づかぬふりで らぬさまに、やをら引き入りて、（玉鬘）そっと奥に引っ込んで

二「尋ぬるにはるけき野辺の露ならば

薄紫やかことならまし

三かやうにて聞こゆるより、深きゆゑはいかが」とのたまへば、すこしうち笑ひて、「浅きも深きも、（夕霧）浅いか深いか おぼし分くかたははべりなむと思（私たちの間柄について）本当のところをお分りのことは うたまふる。まめやかには、実際は いとかたじけなき筋を思ひ知りながら、まことに恐れ多い宮仕えのお話を承知しながら（抑えかねる私の思いのほどを）えしづめはべらぬ心のうちを、いかでかしろしめさるべき。なかな（どうして分って頂けましょう）（口に出せば）かえってお疎みになろうことがつらくて かおぼしうとまむがわびしさに、いみじく籠めはべるを、四今はた同（心に）じと思うたまへわびてなむ。頭の中将のけしきは御覧じ知りきや。（柏木）執心ぶりはご存じでしたか

五人の上になど思ひはべりけむ。身にてこそいとをこがましく、かつ（今自分の身になってみて大層愚かなことだと）（内心よく分りもしました）は思うたまへ知られけれ。六なかなかかの君は思ひさまして、つひに（何といって）（もご姉弟の縁は切れないことを当てにして）御あたり離るまじき頼みに、思ひなぐさめたるけしきなど見はべる

て落着いて。

七 せめて私をかわいそうな奴とだけでもお心にお止め下さい。

八（そんなことをくだくだしく書くのは）どうかと思われるので書かないのです。省筆の弁解を兼ねた草子地。

九 玉鬘のこと。すでに尚侍に就任していることを示す呼称。

一〇 あの一段と身に沁みて恋しく思われたお姿を。紫の上のこと。野分一二六頁

夕霧の復命

に、夕霧が垣間見て「女もねびととのひ、飽かぬことなき御さまどもなるを、身にしむばかりおぼゆれど」とあった。

一一 この程度の物越でもよいから。ここは、御簾に几帳を添えた対面であった。

一二 この度の出仕を。大宮の喪が明けるとすぐに、尚侍として宮中に出仕することを求められている事情が窺える。

一三 螢兵部卿の宮。

藤袴

も、いとうらやましくねたきに、あはれとだにおぼしおけよ」など、こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。

尚侍の君、やうやう引き入りつつ、〔奥に〕むつかしとおぼしたれば、〔厄介なこととお思いのようなので〕

「心憂き御けしきかな。〔夕霧〕冷たいなさりようですね あやまちすまじき心のほどは、〔間違いなどしそうにもない私の気性は〕おのづから〔今までに何かと〕御覧じ知らるるやうもはべらむものを」とて、〔お分りになることもありましょうに〕かかるついでに、今すこしも漏らさまほしけれど、〔玉鬘〕「あやしくなやましくなむ」とて、〔何だか気分が悪うございますので〕入り果てたまひぬれば、〔夕霧は〕いといたくうち嘆きて立ちたまひぬ。〔嘆息して〕

言わでものことを口にしてしまったものだと

なかなかにもうち出でてけるかなと、〔夕霧は〕くちをしきにつけても、か〔一〇〕の今すこし身にしみておぼえし御けはひを、〔一二〕かばかりの物越にても、せめてお声だけでもどんな折にか聞きたいものと せつなく思いながら〔源氏の〕御声をだにいかならむついでに聞かむと、やすからず思ひつつ、〔源氏の〕御前に参りたまへれば、〔源氏が〕出でたまひて、〔玉鬘の〕御返りなど聞こえたまふ。〔夕霧は〕

〔源氏〕「この宮仕へを、〔一三〕しぶげにこそ思ひたまへれ。宮などの、れんじた 気のりせぬように〔玉鬘は〕 女の扱いには 手馴れた方で まへる人にて、いと心深きあはれを尽くし、言ひなやましたまふに、 まことに深い情けの限りを見せて お口説きになるのに

一 玉鬘は、大原野の行幸の折に、帝をお拝みなさってからは、本当に立派であらせられるとお思いだったのだ。（行幸一四八～九頁参照）

二 それにしても、（玉鬘の）お人柄は、帝と兵部卿の宮のどちらとご結婚なされば、ふさわしくていらっしゃるのでしょう。玉鬘の人柄を源氏から聞き出したい気持。

三 秋好む中宮が、こうして（皇后として）並ぶもののない地位でいらっしゃるし。以下「立ち並びたまふことかたくこそはべらめ」まで、尚侍として出仕し、帝寵を受けた場合の、玉鬘の中途半端な立場を危惧する。

四 弘徽殿の女御。

五 （それに対して）螢兵部卿の宮は。夕霧は、兵部卿の宮の北の方となるのが似合わしいと考えている趣。

六 はじめからちゃんとそうした筋合の御宮仕え（女御としての入内）でもないにしても。後宮に入るのでなく、尚侍として公職に就くというのであるにしても。

七 宮が、ご自分のお気持を無視した取り計らいのように、不快にお思いになるとしたら。

八 むつかしいことだ。私の一存でどうにかなる人のことでもないのに。実父内大臣の意向も考慮しなければならないと言う。

九 髭黒の大将。玉鬘に求婚していることは、胡蝶四二頁、常夏九六頁などに見える。

一〇 万事こうしたことが気の毒で、黙って見ていられ

（お気の毒だ）心やしみたまふらむと思ふになむ、心苦しき。されど、大原野の行幸に、上を見たてまつりたまひては、いとめでたくおはしけりと思ひたまへりき。若き人は、ほのかにも見たてまつりて、えしも宮仕への筋もて離れじ。さ思ひてなむ、このこともかくものせし」などのたまへば、「さても、人ざまは、いづかたにつけてかは、たぐひてものしたまふらむ。中宮、かく並びなき筋にておはしまし、また、弘徽殿、やむごとなく、おぼえことにてものしたまへば、いみじき御思ひありとも、立ち並びたまふことかたくこそはべらめ。宮は、いとねむごろにおぼしたなるを、わざとさる筋の御宮仕へにもあらぬものから、ひき違へたらむさまに御心おきたまはむも、さる御仲らひにては、いとほしくなむ聞きたまふる」と、おとなおとなしく申したまふ。

（すっかり心を奪われなさったのだろうと思うと）（帝を）（とても宮仕えの）（話を思い切れまい）（私は）（そう思ったから）（宮仕えのこともこのように進めたのだ）（夕霧）（押しも押されもせず）（世の声望も格別でいらっしゃいますから）（いかに帝寵が）（玉鬘が）（中宮や弘徽殿に肩をお並べになるのは無理でしょう）（ひどく熱心でいらっしゃるようですのに）（あつくとも）（よいご兄弟の間で）（困ったことだと存じられます）（いかにも大人っぽく）

（源氏）「かたしや。わが心ひとつなる人の上にもあらぬを、大将さへ、われをこそ恨むなれ。すべてかかることの心苦しさを見過ぐさで、あ

（私を）（親でもな）（恨んでいるとかいうことだ）

ないで（玉鬘を引き取った結果）。「かかること」は、玉鬘が父に知られず零落していたことをさす。

一 あの人の母上（夕顔）が、かわいそうな遺言をしたことが忘れられなかったので。あとの方に「つきづきしくのたまひなす」とあるように、以下、玉鬘を引き取った理由を然るべく言い繕う。

二 寂しい山里に住んでいると聞いたのを。筑紫の田舎育ちであったとは、さすがに玉鬘のために言わない。

三 あちらの大臣といえば。内大臣のこと。「はた」は強調の語。

四 話を聞いて下さりそうにもないと泣きついて来たので。実子だと名乗り出ても、取り合ってもらえなかったと言う。これも作りごとである。

五 玉鬘の人柄は、兵部卿の宮の北の方としてまことに最適であろう。

六 それでいてしっかりしていて、困ったことをしそうにないなどとあって、宮との仲もうまくゆくだろう。むやみに嫉妬をして風波を立てたりしないだろうということ。

七 ここでは、尚侍として内侍司（ないしのかさ）をつかさどる職務をいう。供奉常侍、奏請、宣伝、女官の監督等。

八 帝がいつもお望みあそばすお考えに叶（かな）うであろう。尚侍がいなくては、内侍所の運営が整わぬ意味のお言葉があったこと、行幸一五八頁に見える。

九 あちらの大臣（内大臣）も、そんな意味のことをおっしゃって。

やなき人の恨み負ふ、かへりては軽々（かるがる）しきわざなりけり。（軽率なことであったいのに）わけもなく恨まれるのは

の、あはれに言ひおきしことの忘れざりしかば、心細き山里になむと聞きしを、かの大臣（おとど）はた、聞き入れたまふべくもあらずと愁（うれ）へしに、いとほしくて、かくわたしはじめたるなり。（不憫に思って）（こうして引き取ることになったのだ）ここにかくものめかすとて、かの大臣（おとど）も人めかいたまふなめり」と、つきづきしくのたまひなす。（人並みの扱いをなさるのらしいるというので）（まことしやかに）（当世風で）

（源氏）「人柄は、宮の御人にていとよかるべし。今めかしう、いとなまめきたるさまして、さすがにかしこく、あやまちすまじくなどして、あはひはめやすからむ。（優雅なところがあり）（一方また宮仕えに出るにしても）（本当に十分）さてまた宮仕へにも、いとよく足らひたらむかし。（やりとげる力があろう）容貌（かたち）よく、（才気のある人だが）らうらうじきものの、公事（おほやけごと）などにもおぼめかしからず、はかばかしくて、上（うへ）の常に願はせたまふ御心には、違（たが）ふまじ」などのたまふけしきの見まほしければ、「年ごろかくてはぐくみきこえたまひける御心ざしを、ひがざまにこそ人は申すなれ。かの大臣（おとど）も、さやうになむおもむけて、大将の、あなたざまのたよりにけしきばみたりけるにも、いらへたまひける」と聞こ

（よく通暁し）（てきぱき処理して）（源氏の真意が知りたいので）（夕霧）（今までこうしてご養育申し上げなさったと愛情を）（妙なふうに世間ではお噂しているようです）（一九）（髭黒）（あちらの方の）（お返事なさいました）（つてを通じて）（申し込まれた時にも）

えたまへば、うち笑ひて、（源氏）それもこれも全く見当外れのことだな「かたがたいと似げなきことかな。なほ宮仕へをも何ごとをも、（内大臣が）御心許して、かくなむとおぼされむさまにぞ従ふべき。女は三に従ふものにこそあなれど、ついでを違へて、おのが心にまかせむことは、あるまじきことなり」とのたまふ。

（夕霧）三「うちうちにも、四やむごとなきこれかれ、年ごろを経てものしたまへば、五えその筋の人数にはものしたまはで、捨てがてらにかく譲りつけ、六おほぞうの宮仕への筋に領ぜむとおぼしおきつる、いとかし七こくかどあることなりとなむ、よろこび申されけると、たしかに人が私に話してくれましたのです（源氏）の語り申しはべりしなり」と、いとうるはしきさまに語り申したまへば、げにさは思ひたまふらむかしとおぼすに、（源氏は）いとほしくて、（源氏）「いとまがまがしき筋にも思ひ寄りたまひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし。今おのづから、いづかたにつけても、あらはなることありなむ。八思ひ隈なしや」と笑ひたまふ御しきはけざやかなれど、なほ疑ひは置かる。大臣も、源氏さりや、かく人のおしはか

一　女子には三従の道があるというが。「婦人に三従の義あり。専用の道無し。故に未だ嫁せざれば父に従ひ、既に嫁しては夫に従ひ、夫死しては子に従ふ」（『儀礼』喪服伝）

二　その順序を取り違えて、私の思うままにするなどということは、とんでもないことだ。玉鬘は、実父の内大臣の意に従うべきであるという。

三　しかし内大臣は、お邸の方々にも。「よろこび申されける」に続く。夕霧の執拗な反論。

四　六条の院には、立派なご夫人方が長年連れ添っていらっしゃるので。紫の上や花散里。以下「いとかしこくかどあることなり」まで内大臣の言葉。

五　（玉鬘を妻にしたところで）とてもその方々と同列の扱いはお受けになれないで。源氏自身も「限りなき心ざしといふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじくおぼし知りたり」（常夏九五頁）とあった。

六　通り一遍の宮仕えといったことをさせて（后妃としてではなく、尚侍という公職につけておいて）、わが物にしておこうと考えられたのは。

七　内大臣が感謝しておられたと。皮肉な言い方である。

八　ぶしつけな考え方だね。『花鳥余情』は「いづかたに立ち隠れつつ見よとてか思ひぐまなく人のなりゆく」（『後撰集』巻十一恋三、藤原後蔭朝臣）を引く。

九　あちらの大臣（内大臣）にも。

一〇　一八六頁に、除服は十三日とあった。

一一　来月になれば、やはり出仕は慎まねばならないだろう。次に「十月ばかりに」とあるので、九月のことである。

玉鬘の出仕、十月と決定　人々の焦燥

「九月は忌む月なるを云ふなり」（『花鳥余情』）。九月は結婚を忌む習俗があった。季（この場合は秋）の果てだからであろう（三巻玉鬘二九〇頁注一〇参照）。尚侍は一般職であるが、帝寵を受けることがあるので、こういう。

一二　（玉鬘に）言い寄ってこられる人々は。螢兵部卿の宮や髭黒の大将のこと。

一三　それぞれお味方する仲立ちの女房たちに。「よすが」は、頼りとする人。

一四　「手をさへて吉野の滝はせきつとも人の心をいかが頼まむ」（『古今六帖』四、女をはなれてよめる）による。

一五　普通のお世話に励むといった体で、しきりに（玉鬘の）ご機嫌をとっていらっしゃる。「おほかたの」は、深く立ち入らない、の意。

る、案に落つることもあらましかば、いとくちをしくねぢけたらまし、かの大臣に、いかで、かく心きよきさまを知らせたてまつらむとおぼすにぞ、げに宮仕への筋にて、けざやかなるまじくまぎれたるおぼえを、かしこくも思ひ寄りたまひけるかなと、むくつけくおぼさる。

（全く残念なおもしろくないことであろう／その思惑通りの事実があったとしたら／このように潔白であることをお知らせしようとお考えになる／宮仕えということにして〔玉鬘への恋情を〕周囲に気づかれぬようにご／につけても／気味悪いほどに／まかしてあるのを／よくも見抜かれたものだなと）

一〇　かくて御服などぬぎたまひて、一一月立たば、なほ参りたまはむこと忌あるべし、十月ばかりにとおぼしのたまふを、内裏にも心もとなく聞こしめし、一二聞こえたまふ人々は、誰も誰もいとくちをしくて、この御参りのさきにと、一三心寄せのよすがよすがに責めわびたまへど、一四吉野の滝をせかむよりも難きことなれば、いとわりなしと、おのおのいらふ。

（〔源氏が〕／帝におかせられても／待ち遠に思し召し／ご入内の前に何とかしたいと／泣きついていらっしゃるが／打つ手がありませんと／返事をする）

夕霧

中将も、言わでものことを打ち明けて〔玉鬘が〕なかなかなることをうち出でて、いかにおぼすらむと苦しきままに、駆けずり廻って大層こまごまかけりありきて、いとねむごろに、一五おほかたの御後見を思ひあつかひたるさまにて、追従しありきたまふ。たはやすく、〔思いのほどを〕滅多に

体よく恋心を抑えていらっし

軽々しく口に出してはお口説きにならず

軽らかにうち出でては聞こえかかりたまはず、めやすくもてしづめたまへり。まことの御はらからの君達は、〔遠慮して〕え寄り来ず、宮仕へのほどの御後見をと、おのおの心もとなくぞ思ひける。頭の中将、心を尽くしわびしことは、かき絶えにたるを、うちつけなりける御心かなと、人々はをかしがるに、殿の御使にておはしたり。なほもて出でず、忍びやかに御消息なども聞こえかはしたまひければ、月の明き夜、桂の蔭に隠れてものしたまへり。見聞き入るべくもあらざりしを、名残なく南の御簾の前にするゑたてまつる。

出仕してからの

〔出仕を〕待ちかねていた

柏木

音沙汰もなくなったのを

てきめんにお変りになる方だことと

女房たち

内大臣

目立たぬように

〔玉鬘方でも〕今までは一切構いつけなかっ

いまだに表向きにはせず

〔玉鬘は〕取次ぎなしでお話し申し上げるというのは

やはり気がひけるので

たのに

柏木、父内大臣の使いとして、玉鬘を訪問

一 実のご兄弟の若君たち。柏木や弁の少将たち。

二 あんなに恋い焦がれ、泣きついてきたのは。柏木が実の姉弟と知らず、恋文を寄こしていたことは、胡蝶四二～四五頁に見える。

三 月の明るい夜のこととて、庭前の桂の木の蔭に隠れて立っていらっしゃる。人目を憚るさま。月中の桂を思いよそえての文飾であろう（三巻松風一四〇頁注四参照）。

四 すっかり扱いが変って、南面の御簾の前にお通し申し上げる。簀子である。南面は、客を招じる正式の場所。

五 玉鬘の女房。なかでもっとも教養があり気が利くとされている人。（螢六一頁参照）

六 姉弟は切っても切れぬという諺もあるようです。「絶えぬたとひ」は、兄弟についてそうした諺が、当時あったのであろう。

七 （こんなことを申し上げるのは）いかがかと思われる、古風な言い種ながら、頼みに思っていましたのに。

八 お言葉のとおり、姉弟として、今までに積るお懐かしさも加えて、お話し申し上げたいのですが。

〔柏木〕父が私を特に選んでお差し向け申されたのは

じかに申せとの大事のお便りだからでしょう

私自身は人数にも入りませんが

して申し上げられましょう

〔玉鬘〕

みづから聞こえたまはむことはしも、なほつつましければ、宰相の君していらへ聞こえたまふ。「なにがしを選びてたてまつりたまへるは、人伝ならぬ御消息にこそはべらめ。かくもの遠くては、いかが聞こえさすべからむ。みづからこそ数にもはべらねど、絶えぬたとひもはべなるは。いかにぞや、古代のことなれど、たのもしくぞ思ひたまへける」とて、ものしと思ひたまへり。「げに年ごろの

おもしろくないと

〔玉鬘〕

一 実のご兄弟の若君たち。柏木や弁の少将たち。

二 あんなに恋い焦がれ、泣きついてきたのは。柏木が実の姉弟と知らず、恋文を寄こしていたことは、胡蝶四二～四五頁に見える。

三 月の明るい夜のこととて、庭前の桂の木の蔭に隠れて立っていらっしゃる。人目を憚るさま。月中の桂を思いよそえての文飾であろう（三巻松風一四〇頁注四参照）。

四 すっかり扱いが変って、南面の御簾の前にお通し申し上げる。簀子である。南面は、客を招じる正式の場所。

五 玉鬘の女房。なかでもっとも教養があり気が利くとされている人。（螢六一頁参照）

六 姉弟は切っても切れぬという諺もあるようです。「絶えぬたとひ」は、兄弟についてそうした諺が、当時あったのであろう。

七 （こんなことを申し上げるのは）いかがかと思われる、古風な言い種ながら、頼みに思っていましたのに。

八 お言葉のとおり、姉弟として、今までに積るお懐かしさも加えて、お話し申し上げたいのですが。

九 起き上がることもできずにおりますので。直接応対しないことの言い訳。
一〇 ご気分がお悪いとておやすみの御几帳のもとにまで参るのは、お許し下さらないのでしょうか。姉弟なのに、側まで行って見舞うのも許してくれないのかと恨む。
一一 いやいや、よろしい。全く、こんな理屈を申し上げるのも気の利かぬことでした。私を嫌っていらっしゃるのに、と暗に恨む気持。
一二 父内大臣からのあれこれのご伝言を。
一三 参内なさる折のご都合を、詳しいことも聞けずにいますが。日時その他である。これより内大臣の意向を伝える言葉。
一四 何事も人目を気にして、そちらへも参上できず、お話もできないのを。すべて源氏に任せた手前、遠慮しているという趣。
一五 しかし、いずれにしても。姉弟であるにせよ、他人であるにせよ。
一六 何よりも第一に、今夜のこのおあしらいなどはどうでしょう。他人行儀の応対を責める。
一七 奥向きとでもいったお部屋にお呼び入れ下さって。「北面」は、南面に対し、北側の内証向きの部屋。
一八 あなた方（宰相の君に向っていう）は、私を失礼なと、お相手にもなさらぬでしょうが。

積りも取り添へて、聞こえまほしけれど、日ごろあやしくなやましくはべれば、起き上がりなどもえしはべらでなむ。かくまでとがめたまふも、なかなかうとうとしきここちなむしはべりける」と、いとまめだちて聞こえ出だしたまへり。「なやましくおぼさるらむ御几帳のもとをば、許させたまふまじくや。よしよし。げに聞こえさするもここちなかりけり」とて、大臣の御消息ども忍びやかに聞こえたまふ用意など、人には劣りたまはず、いとめやすし。

（このところ何だか気分が悪うございますので　それをこうまでお叱りになるのも　かえって肉親の情をおかけ下さらないのかという思いがいたします　生真面目に　お伝えさせになった　（柏木）一〇　態度　声をひそめて　どこにも落度がない）

（柏木）一三「参りたまはむほどの案内、くはしきさまもえ聞かぬを、うちうちにのたまはむなむよからむ。何ごとも人目に憚りて、え参り来ず、聞こえぬことをなむ、なかなかいぶせくおぼしたる」など、語りきこえたまふついでに、「いでや、をこがましきことも、えぞ聞こえさせぬや。いづかたにつけても、あはれをば御覧じ過ぐすべくやはありけると、いよいようらめしさも添ひはべるかな。まづは今宵などの御もてなしよ。北面だつかたに召し入れて、君達こそめざまし

（ご相談下さるとよろしかろう　（父大臣は）かえって気がかりにお思いです　（柏木）いやもう（今では）馬鹿げたお手紙も　さし上げられないことです　私の真心を見知らぬふりをなさってよかったのかと）

一 せめて下仕えといった人々とでも、親しくお話ししたいものです。内輪の者として気を許した付合いをさせてほしい、と言う。

二 それぞれに。他人と思っていた時、姉弟と分った時、二つながらの応対ぶりをいう。

三 首をかしげながら。不審に思うというしぐさ。

四 恨み言を言い続けるのも、宰相の君には興味深く思われたので。口説き方のうまいのに感心するのである。

五 本当に、（姉弟と分ったからといって、急に親しくしては）簡単に態度を変えると言われはせぬかと、外聞を気にして。

六 今までずっとひどい引っ込み思案でまいりましたのを、（この際）気ままにもいたしませんのは。源氏のもとにいるので、相変らず控えめにしているという弁解。

七 実の姉弟という深い繋がりのあることを知らず、成らぬ恋に思いまどうて、文を送ったことです。「妹背山」は、紀の川を挟んで向い合う山。歌枕。普通夫婦のことをいうが、ここでは姉弟の仲をさす。「緒絶の橋」は、陸奥の歌枕。「絶え」を響かせ、行き来に難渋する意味の「踏みまどふ」を言い出す。「ふみ」に「文」を掛ける。「ふみまどひけるよ」と続く。

八 事情をご存じなかったとは知らず、妙だと思いながらお便りを拝見していました。

九 どういうわけであのようなお便りを頂くのか、お

くもおぼしめさめ、下仕へなどやうの人々とだに、うちかたらはばや。またかかるやうはあらじかし。さまざまにめづらしき世なりかし」と、うち傾きつつ、恨み続けたるもをかしければ、かくなむと聞こゆ。「げに、人聞きをうちつけなるやうにやと憚りはべるほどに、年ごろの埋れいたさをも、あきらめはべらぬは、いとなかなかなること多くなむ」と、ただすくよかに聞こえなしたまふに、まばゆくて、よろづおしこめたり。

（柏木）「妹背山ふかき道をば尋ねずて
緒絶の橋にふみまどひける
よ」と恨むるも、人やりならず。

（玉鬘）まどひける道をば知らで妹背山
たどたどしくぞ誰もふみ見し

（宰相君）「いづかたのゆゑとなむ、えおぼし分かざめりし。何ごとも、わりなきまで、おほかたの世を憚らせたまふめれば、え聞こえさせたま

こんなおあしらいはまたとありますまい
めったにない問柄ですね
その趣をお取り次ぎする
（玉鬘）
ご挨拶として申されるので
〔柏木は〕
まことにかえってつらいことが多うございます
何も言えないでいる
気恥ずかしくて
みな自分から出たことだ
気にされているようなので
お返事もじかにおできにと思われるほど
世間全体を

分りにならなかったようでございます。柏木が「いづかたにつけても……」（一九五頁）と言ったのを受けた措辞。歌を伝えた宰相の君の解説。

一〇 段々お世話の実績が積み重なってはじめて、こまごまとしたお勤めもさせて頂けるのでしょう。「恪勤」は、雑役などの勤務に励むこと。

一一 こちら（柏木）も美しい方といえるのは、どうしてこう揃いも揃って美しいご一族であったのかと。過去のどういう因縁で、こんなに美しい血筋なのだろう、という気持。「御仲らひ」は、柏木と夕霧との間柄。いとこ同士である。

一二 髭黒のこと。右近衛大将である。（行幸一四九頁参照）

一三 同じ右近衛府の次官なので。髭黒は長官。

一四 柏木を通じて、父内大臣にもお願い申させなさるのだった。

髭黒の運動とその権勢

一五 朝廷の輔佐の臣となるに違いないお方なので。次の頁に「春宮の女御の御はらから」とある。次期政権担当者である。「下形」は、下地の意。

一六 あちらの大臣（源氏）が、こうとお決めになったことを。尚侍出仕のこと。

一七 それにはそれだけの理由があるに違いないと、合点なさることもあるので。玉鬘を源氏のものにしておきたいのだろうと、内大臣は邪推している。（一九一～二頁参照）

ならないのです はぬになむ。おのづからかくのみもはべらじ」と聞こゆるも、さる もなことなので ことなれば、「よし、長居しはべらむもすさまじきほどなり。一〇 やう やう労積りてこそは、恪勤をも」とて立ちたまふ。

いずれこんなふうでばかりでもございますまい

月隈なくさし上がりて、空のけしきも艶なるに、いとあてやかに 上に美しい きよげなる容貌して、御直衣の姿、好ましうはなやかにて、いとを かし。宰相の中将のけはひありさまには、え並びたまはねど、一一 これ もをかしかめるは、いかでかかる御仲らひなりけむと、若き人々は、 例の、さるまじきことをもとりたててめであへり。

夕霧　それほどにもないことでも

〔柏木は〕大層気品がある

趣味がよく　派手で

とても及ばれないが

女房たち

一二 大将は、この中将は同じ右の次将なれば、常に呼び取りつつ、ね 柏木　一三 熱 心に話を持ちかけ むごろにかたらひ、大臣にも申させたまひけり。人柄もいとよく、 一四 おほやけの御後見となるべかめる下形なるを、などかはあらむとお 一五 ぼしながら、かの大臣のかくしたまへることを、いかがは聞こえ返 一六 すべからむ、さるやうあることにこそ、心得たまへる筋さへあれ 一七 ば、まかせきこえたまへり。

〔髭黒は〕

〔婿として〕何の難があろうと〔内大臣は〕

どうして反対だと申せよう

〔源氏に〕

一 朱雀院の女御で、東宮の御母。承香殿の女御。（三巻澪標一四頁、三〇頁参照）

二 源氏の太政大臣と内大臣をお除き申すと。

三 紫の上の異母姉。

四 ご長女。

五 北の方のお年が（髭黒より）三つ四つ上というのは、大した欠点でもないのだが。

六 （髭黒は）お婆さんと渾名をつけて。

七 北の方が紫の上の姉といった関係から。

八 あちらの大臣（内大臣）も、全く問題外だともお考えでないようだ。

九 玉鬘自身は、宮仕えを気が進まぬようにお思いらしいと。「女」とあるのは、結婚の相手として述べるところから出た言葉。

一〇 そうした詳しい事情を知る手蔓があるので。柏木のこと。

一一 実の父上のお気持にさえ背かないなら。見込みはある、という気持。

一二 玉鬘づきの女房。髭黒の仲立ちである。「おもと」は、女房に対する敬称。「この」は、かねてから仲立ちであることを自明とした言い方。

一三 寒くなってはじめて置く霜。歌語。

故按察使大納言姫君 ═ 紫の上
式部卿宮 ═ 左兵衛督
北の方 ═ 大君
右大臣 ═ 髭黒右大将
承香殿女御 ═ 東宮
朱雀院

焦る求婚者たちの恋文

髭黒

この大将は、春宮の女御の御はらからにぞおはしける。大臣たちをおきたてまつりて、さしつぎの御おぼえ、いとやむごとなき君なり。年三十二三のほどにものしたまふ。北の方は、紫の上の御姉ぞかし。式部卿の宮の御大君よ。年のほど三つ四つがこのかみは、こなるかたはにもあらぬを、人柄やいかがおはしけむ、嫗とつけて心にも入れず、いかでそむきなむと思へり。その筋により、六条の大臣は、大将の御ことは、似げなくいとほしからむとおぼしたるなめり。色めかしくうち乱れたるところなきさまながら、いみじくぞ心を尽くしありきたまひける。かの大臣も、もて離れてもおぼしたらざなり、女は、宮仕へをもの憂げにおぼいたなりと、うちうちのけしきも、さるくはしきたよりしあれば、漏り聞きて、「ただ大殿の御おもむけの異なるにこそはあなれ。まことの親の御心にだに違はずは」と、この弁のおもとにもせためたまふ。

九月にもなりぬ。初霜むすぼほれ、艶なる朝に、例の、とりどり

ご兄弟
それに次ぐ帝のご信頼は
大層厚いお方である
お人柄がどんな具合でいらしたものか
源氏
何とかして別れたいと
大事にもせず
髭黒とのご縁組は
適当でないし困ったことにもなろうとお考えなのであろう
〔髭黒は〕色恋にうつつを抜かすというところはない方だが
熱心に運動していらっしゃった
内大臣家の内々の事情も
源氏の大臣のご意向が
違うだけなのだろう
きびしくお責めになる
それぞれの

一四 お世話役たち。恋文の取次ぎをする女房たち。
一五 それでもやはり頼みにしてきましたのに、むなしく過ぎてゆく空のたたずまいが、気が気でなく。
一六 人並みだったら厭がりもしましょうに、その九月を頼みに生きている私は何とはかない身の上であることか。九月は結婚を忌み、玉鬘の出仕もないところから、こういう（一九三頁参照）。
一七 月が改まったらご出仕という取り決めを、ちゃんと聞いていらっしゃるのであろう。「さるくはしきたより」があるからである。
一八 言っても仕方のないことは。出仕が決った以上は。皇族らしいおっとりした態度。
一九 たとえ帝のご寵愛を受けられても、はかない私を忘れないで下さい。「朝日さす光」は、帝をさし、「玉笹の葉分の霜」は、笹の葉の茂みを分けて、下葉にわずかに置く霜。「いづこにか　駒を繋がむ　朝日子が　さすや岡べの　玉笹の上に　玉笹の上に」（神楽歌、日霊女歌、末）、「玉笹の葉分に置ける白露の今幾世経む我ならなくに」（『古今六帖』六、笹）による。
二〇 ひどくかじかんだ、笹の折れた下枝に歌を結びつけて、霜も置いたまま持って参ったお使いまで。あくまで風雅な兵部卿の宮らしいやり方。
二一 式部卿の宮の子息。玉鬘の恋人として初出。
二二 紫の上の異母兄弟。
二三 自然、玉鬘出仕の事情もはっきり聞いていて。

なる御後見（一四）どもの、引き隠しながら引きそばみつつ持て参る御文どもを、〔玉鬘自身は〕見たまふこともなくて、〔女房が〕読みきこゆるばかりを聞きたまふ。髭黒大将殿のには、文には

「なほ頼み来（一五）しも、過ぎゆく空のけしきこそ、心尽くしに、

数ならばいとひもせまし長月に（一六）
　命をかくるほどぞはかなき」

月たたば（一七）とある定めを、いとよく聞きたまふなめり。

兵部卿の宮は、「いふかひなき世は、聞こえむかたなきを、何も申しようがありませんが（一八）

朝日さす光を見ても玉笹の（一九）
　葉分の霜を消たずもあらなむ

おぼしだに知らば、分って下さりさえすれば なぐさむかたもありぬべくなむ」とて、心の慰めようもありましょう いとかしけたる下折れの霜もおとさず持て参れる御使さへぞ、折柄にふさわしいと感じだうちあひたるや。

式部卿の宮の左兵衛の督（二一）は、殿の上（二二）の御はらからぞかし。親しく〔六条院に〕参りなどしたまふ君なれば、おのづからいとよくものの案内（二三）も聞き

て、いみじくぞ思ひわびける。いと多く怨み続けて、（大層心を痛めているのだった）（怨み言を書き続けて）

（左兵衛督）一 忘れなむと思ふものの悲しきを
いかさまにしていかさまにせむ

紙の色、墨つき、しめたる匂ひもさまざまなるを、人々も皆、「お（墨の濃淡）（たきしめた香の匂いも人それぞれに素晴らしいのを）（女房たち）

ぼし絶えぬべかめるこそ、さうざうしけれ」など言ふ。

宮の御返りをぞ、いかがおぼすらむ、ただいささかにて、（兵部卿の宮）（〔玉鬘は〕どういうおつもりか）（ほんの少しお書きになって）

（玉鬘）三 心もて光にむかふあふひだに
朝おく霜をおのれやは消つ

とほのかなるを、いとめづらしと見たまふに、みづからはあはれを（ほのかな筆跡を）（〔宮は〕）（玉鬘自身は宮の愛情を受けと）

知りぬべき御けしきにかけたまへれば、四つゆばかりなれど、いとう（めていられるかのような口ぶりに詠んでいられるので）

れしかりけり。かやうに何となけれど、さまざまなる人々の御わび（お恨みの）

ごとも多かり。五女の御心ばへは、この君をなむ本にすべきと、大臣（手紙も）（六）

たち定めきこえたまひけりとや。（判定申し上げなさったとか）

一 あなたのことを忘れてしまおうと思うにつけても、それがまた悲しいのを、一体どうしたらよいのだろう。「忘るれどかく忘るれど忘られずいかさまにしていかさまにせむ」（『養孝集』『実頼集』）

二 （こうしたすばらしい方々が、出仕の暁には）皆すっかり諦めておしまいになるだろうと思うと、さびしくなりますね。

三 自分から望んで光に向う葵でも、朝置く霜を自分で消すでしょうか。まして私は進んで宮仕えに出るのではない身、なんで消したりしましょう。忘れはしません、の意を暗示し、宮の歌の「消たずもあらなむ」とあるのに応えたもの。「あふひ」は、「からあふひ」。今のタチアオイの古名。「からあふひ、日の影にしたがひてかたぶくこそ、草木といふべくもあらぬ心なれ」（『枕草子』草は）

四 ほんの一言のお便りだが。「つゆ」は、歌の「霜」の縁語。

五 女の心の持ち方としては、この方（玉鬘）をお手本にするのがよいと。

六 源氏の大臣と内大臣。

真木柱（まきばしら）

この巻の冒頭で、読者は、玉鬘が、事もあろうにあの無骨な髭黒の手中に帰したという意外な事実を知らされる。源氏もこの既成の事実を承認せざるを得ない。意に染まぬ結婚に玉鬘はうち沈み、改めて、源氏や螢兵部卿の宮の優雅さを慕わしく思うのだった。

十一月、玉鬘は尚侍としての職務を、髭黒を通わせたまま六条の院で執り行う。髭黒の北の方は式部卿の宮の姫君だが、長年の物の怪のために常人の体ではない。髭黒はその北の方のいる自邸に玉鬘を迎えようともくろむが、ある雪の夜、玉鬘の許に出向こうとする髭黒に、北の方は突然物の怪のために乱心して、火取りの灰を浴びせ掛ける。この一件に恐れをなした髭黒は自邸に寄りつかず、激怒した式部卿の宮は北の方を引き取る。髭黒と北の方との間には、十二三歳の姫君と、十歳と八歳ほどの男子があったが、その姫君が自邸を去る悲しみの歌を詠む。巻名はその歌の言葉による。

年明けて正月、男踏歌の機会に、玉鬘は宮中に出仕し、その承香殿の東面の局に、冷泉帝がおいでになって、事、志と違った怨み言を仰せになる。髭黒は、宮中から強引に玉鬘を自邸に退出させて、ようやく心を安んずるのであった。二月、そして三月と、再度にわたって、なお玉鬘を忘れかねる源氏からの文が届くが、二度目は、髭黒が代って返歌をするといったことで、源氏を苦笑させる。十一月に、玉鬘は、はじめての男子を出産する。

巻は、その年の秋、例によって例の如き近江の君が、夕霧に懸想の歌を詠みかけるという珍妙な一幕を終りに置いて閉じられる。

一　このことが帝のお耳に入ることも恐れ多い。源氏が髭黒に注意する言葉。玉鬘は尚侍として十月に出仕が予定されていたのに（藤袴一九三頁参照）、髭黒が通って来るようになったからである。

二　源氏は、髭黒にご注意申し上げなさるが。

三　髭黒が通うようになって日数がたっても。

四　並々ならぬ前世からの縁の深さを、髭黒はしみじみうれしく思う。多くの競争者を退けて玉鬘を得た喜びをかみしめる。

五　石山寺（滋賀県大津市）の本尊。如意輪観音。髭黒が玉鬘を手に入れるべく祈誓した趣。

六　玉鬘づきの女房。髭黒の手紙の取次ぎをしていたが（藤袴一九八頁）、髭黒の手引きをしたとおぼしい。

七　弁のおもとは出仕もできずに、自宅に謹慎しているのだった。

八　ほんとに、今までたくさんの気の毒な例を、いろいろ見てきましたが、弁のおもとのような無考えな人にとって、お寺の効験もあらたかなものなのでした。えてして無考えな女房の手引きが成功し、女君が不本意な目にあうものだ、という意味の草子地。

事態急転し、玉鬘、髭黒の大将の得るところとなる

「内裏に聞こしめさむこともかしこし。しばし人にあまねく漏らさじ」といさめきこえたまへど、〔髭黒は〕そう隠してもお置きになれない さしもえつつみあへたまはず。ほど経れど、〔玉鬘は〕いささかも髭黒にお心を開くご様子もなく いささかうちとけたる御けしきもなく、思はずに憂き宿世なりけりと、思い詰めていられる様子がいつまでも解けないのを 思ひ入りたまへるさまのたゆみなきを、〔髭黒は〕心外な情けない しと思へど、おぼろけならぬ契りのほど、あはれにうれしく思ふ。見れば見るほどすばらしく 見るままにめでたく、〔玉鬘の〕理想的な 思ふさまなる御容貌ありさまを、よそのもの男の物にしてしまうところだった に見果ててやみなましよ、と思うだけでも生きた空なく と思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも、弁のおもとをも、並べて頂かまほしう思へど、女君の、深くものし目障りだと〔弁のおもとを〕お嫌いなので とおぼしうとみにければ、えまじらはで籠りゐにけり。げに、そこら心苦しげなることどもを、とりどりに見しかど、心浅き人のためにぞ、寺の験もあらはれける。大臣も、源氏 不本意で 残念だと心ゆかずくちをしとおぼせ

一 どなたもどなたも、こうして髭黒の通って来ることをご承認なさったことなので。実父の内大臣はもともと髭黒に傾いていたので、この結婚を早く承認したのであろう（藤袴一九八頁参照）。

二 格別丁重に（髭黒を）婿としてお世話なさる。「儀式」は、格式の意。

玉鬘の結婚のこと、世評にのぼり、帝のお耳にも入る

三 体面も考えずに、早速気軽にあちらにお移りになっても。以下、玉鬘がすぐ居を移すことに反対する源氏の口実。

四 玉鬘をこころよく思うはずのない人がいられるそうなのが困った問題だということを口実になさって。髭黒の北の方のこと（藤袴一九八頁参照）。

五 玉鬘の実父、内大臣。

六 かえって（なまじ宮仕えなどするよりも）無難なことだろう。髭黒との結婚を喜ぶ気持。

七 生半可なちょっと色めいた宮仕えに出て。尚侍は一般職であるが、帝寵を受けるのが当時の慣習で、後宮出仕と変らぬ点があるので、こういう。

八（玉鬘は娘ゆえ）大事にする気はあっても。

九 弘徽殿の女御。

一〇 確かに、いくらお相手が帝だと申しても。以下、内大臣の意見に賛成する口ぶりの草子地。

ど、いふかひなきことにて、誰も誰もかく許しそめたまへることなれば、引き返し許さぬけしきを見せむも、人のためいとほしう、あらぬといなしとおぼして、儀式いと二なくもてかしづきたまふ。

（もうどうしようもないことで）（髭黒に対して気の毒であり）（〔源氏は〕）

一日も早くと〔髭黒は〕ご自邸に玉鬘をお移し申すことを心掛けて文度なさるけれども

いつしかと、わが殿にわたいたてまつらむことを思ひいそぎたまへど、軽々しくふとうちとけわたりたまはむに、かしこに待ち取りて、よくしも思ふまじき人のものしたまふなるがいとほしさにことづけたまひて、「なほ心のどかに、なだらかなるさまにて、音なく、いづかたにも、人のそしり恨みなかるべくをもてなしたまへ」とぞ聞こえたまふ。父大臣は、「なかなかにめやすかめり。ことにこまかなる後見なき人の、なまほの好いたる宮仕へに出で立ちて、苦しげにやあらむとぞ、うしろめたかりし。心ざしはありながら、女御かくてもものしたまふをおきて、いかがもてなさまし」など、忍びてのたまひけり。げに、帝と聞こゆとも、人におぼしおとし、はかなきほどに見えたてまつりたまひて、ものものしくもてなしたまは

（あちらで待ち受けていて）（何ごとも穏便に）（人の非難や恨みを受けないように気をつけて振舞われるがよい）（格別に身を入れてくれる）（思いをするのではないかと）（心配だったのだ）（こうしていらっしゃるのをさし置いて）（〔自分として〕どう世話したものか）（内輪で意見を漏らされた）（ほかの人より軽く思し召し）（まさかの帝のお情けにあずかりなさって）（〔帝が〕重々しいお扱いもなさらないとしたら）

一一 三日の夜のお祝いの歌を、玉鬘の親代りの源氏と、髭黒の間でお詠み交わしになった様子を。結婚第三夜、新郎、新婦が「三日の夜の餅」といって餅を食べる習慣があった（二巻葵一一七頁以下参照）。また、この夜、露顕といって披露の宴が行われた。

一二 このようにあまり表沙汰になさらないご縁組であるけれども。「仲らひ」は、間柄の意。この巻冒頭に書かれた源氏の意向に応じていう。

一三 残念なことに、私とは縁のなかった人だが。髭黒を夫としたことをいう。

一四 一旦そうと思ったことでもあるから。「おぼしし」の主語は、帝。語り手の敬意が反映したものであろう。

一五 出仕することは、色めいた筋合なら断念なさるのもよかろうが。尚侍としての本来の職分を果すためだけなら出仕するのも構うまい、の意。

一六 十一月は諸社の祭、新嘗会など神事の多い月である。

一七 温明殿。南に神鏡を奉安する賢所があり、北に内侍の詰所がある。（図録四参照）

一八 内侍司には尚侍の下に典侍、掌侍、東豎子の諸官がある。「女官」は、下級の女官、「内侍」は、普通、掌侍をいう。尚侍玉鬘の決裁を仰ぐべく六条の院にやって来るのである。

一九 藤袴一九九頁参照。姉妹が髭黒の北の方である。

玉鬘、髭黒に心解けず　兵部卿の宮たちの落胆

ずは、軽率な出仕ということになりかねないのだった、あはつけきやうにもあべかりけり。三日の夜の御消息ども、聞こえかはしたまひけるけしきを伝へ聞きたまひてなむ、この大臣〔内大臣は〕の君の御心を、あはれにかたじけなく、ありがたしとは思ひきこえたまひける。

二 かう忍びたまふ御仲らひのことなれど、おのづから、人のをかしる話題として世間は興味のあきことに語り伝へつつ、次々に聞き漏らしつつ、ありがたき世語り世にも珍しい語り草としてひそかに噂したにぞささめきける。内裏にも帝も聞こしめしてけり。「くちをしう、宿世異なりける人なれど、さおぼしし本意もあるを、宮仕へなど、かけかけしき筋ならばこそ思ひ絶えたまはめ」などのたまはせけり。

霜月になりぬ。神事などしげく、内侍所にもこと多かるころにて、女官ども、内侍ども参りつつ、今めかしう人騒がしきに、大将殿、昼もいと隠ろへたるさまにもてなして、籠りおはするを、いと心づきなく、尚侍の君はおぼしたり。宮などは、まいていみじうくちをしとおぼす。兵衛の督は、妹の北の方の御ことをさへ、人笑へに思

稀に見ること好意だと感謝はなさるのだった

十一月

事務のいそがしい時なので

髭黒

人の物笑いだと

一　自分の失恋のことに加えていろいろ思い悩まれたが。

二　すっかりご満悦で、今までとは打って変った色男ぶりで。

三　自分から進んで髭黒とこんなことになったのではないことは、誰の目にもはっきりしていることなのだが。

四　兵部卿の宮のお気持が、たしなみ深く、やさしくていらっしゃったことなどを。兵部卿の宮は、螢六一頁以下の会見以来、玉鬘の印象に刻み込まれている。

五　髭黒との結婚をいかにも不本意なことにお思いなので、何かと髭黒を嫌うご様子が続く。

六　困ったことに人々もお疑い申した件（玉鬘をわがものにしようとするつもりだとの疑惑）について。

七　行き当りばったりのおかしなことは出来ない性分だったと。帚木冒頭の「さしもあだめき目馴れたる、うちつけのすきずきしさなどは、このましからぬ御本性にて」（一巻四五頁）とあったのに応ずるのであろう。

八　こうなった以上今さら、あやにくな恋にひかれる自分の性癖が出ても困るとお思いになりながらも。

嘆き悲しんで　ひ嘆きて、とり重ねもの思ほしけれど、間抜け面して　をこがましう、〔玉鬘に〕恨み言を言ってもも、今は何にもならないとかひなしと思ひ返す。大将は、髭黒　名に立てるまめ人の、世に隠れもない堅物で　年ご長年少しも女の色香に迷うといった所行もなくて過してこられたろいささか乱れたるふるまひなくて過ぐしたまへる名残なく、心ゆきて、あらざりしさまに好ましう、宵暁のうち忍びたまへる出で入りも、艶にしなしたまへるを、をかしと人々見たてまつる。

女房たち　女は、玉鬘　屈託なく　陽気に　お振舞いになるしゃれたお振舞であるのを　わらかにぎはしくもてなしたまふ本性も、押し殺して　塞ぎ込み　て、いといたう思ひ結ぼほれ、心もてあらぬさまはしるきことなれど、大臣源氏がどうお思いだろうかのおぼすらむこと、宮の御心ざまの、心深う、情々しうおはせしなどを思ひ出でたまふに、身もすくむ思いで　はづかしう、くちをしうのみ思ほすに、もの心づきなき御けしき絶えず。

殿源氏も、いとほしう人々も思ひ疑ひける筋を、潔白であったことを明らかに　心きよくあらはしたなさって　まひて、わが心ながら、うちつけにねぢけたることは好まずかしと、若かった昔からのことも　昔よりのことも（源氏）あなたもお疑いでしたね　おぼし出でて、紫の上にも、「おぼし疑ひたりしよ」　など聞こえたまふ。今さらに人の心癖もこそとおぼしながら、もの　気持を

源氏、玉鬘の部屋を訪れ、歌を詠み交わす

九 しゃんとなさる時とてなく、沈み込んでいらしたが。

一〇 改まった面持で、少し他人行儀な態度をおとりになって。髭黒の室としての玉鬘に接する態度。上に玉鬘が「御几帳にはた隠れて」とあった態度に応ずる。

一一 玉鬘は、生真面目な世間普通の人（髭黒）を日頃夫として迎えるようになってからは。

一二 思いも寄らず髭黒のような人を夫に持つことになったわが身が、身の置き所もなく気はずかしく思われるにつけても。

一三 いじらしく思われることがおありになるにつけても。男女の契りを結んだことをいう。

一四 他人（髭黒）の物にしてほっておくのも、あまりといえばあまりな気まぐれというものだと、残念に思われる。

抑えかねてつらかった時の苦しうおぼされし時、わが物にしようかとさてもやと、お思いにもなったことなのでおぼし寄りたまひしことなれば、いまだに忘れかねていらっしゃるなほおぼしも絶えず。

髭黒のおいででない大将のおはせぬ昼つかたわたりたまへり。〔玉鬘の部屋に〕女君、玉鬘あやしうなやまどうしたことかお具合がずっとお悪いようなふうでいらしてしげにのみもてないたまひて、〔源氏が〕すくよかなるをりもなくしをれたまへるを、かくわたりたまへれば、すこし起き上がりたまひて、御几帳にはた隠れておはす。殿も、源氏用意ことに、すこしけけしきさまにもてないたまひて、さりげない世間話などをおほかたのことどもなど聞こえたまふ。すくよかなる世の常の人にならひては、言いようもなくすばらしい源氏のご様子まして言ふかたなき御けはひありお姿が改めてよく分るにつけてもさまを見知りたまふにも、思ひのほかなる身の、置きどころなくはづかしきにも、涙ぞこぼれける。情愛の籠ったやうやうこまやかなる御物語になりて、〔源氏は〕近き御脇息に寄りかかりて、〔几帳の中を〕すこしのぞきつつ聞こえたまふ。美しくいとをかしげに面痩せたまへるさまの、〔玉鬘の〕見飽きずいとをかしげに面痩せたまへるさまの、見まほしう、らうたいことの添ひたまへるにつけても、よそに見放つも、あまりなる心のすさびぞかしとくちをし。

（源氏）一「おりたちて汲みは見ねどもわたり川
人の瀬とはた契らざりしを
思ってもみなかったことです
思ひのほかなりや」とて、鼻うちかみたまふけはひ、やさしく心を打つ風なつかしうあ
情である
はれなり。女は玉鬘を隠して、
（玉鬘）二みつせ川わたらぬさきにいかでなほ
涙のみをの泡と消えなむ
（源氏）三「心をさなの御消えどころや。四さても、かの瀬は避き道なかなるを、
御手の先ばかりは、引き助けきこえてむや」と、思い出し笑いをなさってほほゑみたまひて、
（源氏）五「まめやかには、安心できるところもおぼし知ることもあらむかし。六世になき痴々しさ
世間にまたとないほどであるのを
も、またうしろやすさも、この世にたぐひなきほどを、七さりともと
〔玉鬘は〕とても聞きづらいお言葉とお思いなむ、たのもしき」と聞こえたまふを、いとわりなう聞き苦しとお
お気の毒で
ぼいたれば、いとほしうて、ほかのことに言いまぎらわされて（源氏）八のたまひまぎらはしつつ、「内裏にの
やはりほんのちょっと出仕なさるよう取り計らいましょう
たまはすることなむいとほしきを、なほあからさまに参らせたてま
つらむ。九おのがものと領じ果てては、さやうの御まじらひもかたげ

一〇 最初私があなたについて考えていた心積りは、はずれたようなことになりましたが。尚侍として帝にさし上げようとしたこと。

一一 二条の大臣（玉鬘の実父内大臣）は、この結婚にご満足のようですから。「二条の大臣」という呼び方はここだけに見える。二条に邸があった趣。

一二 源氏はお思い通りにも馴れ馴れしい振舞に及ばれることなく。

一三 ただ身の振舞、お心構えをおさとし申し上げなさる。参内のこともあるので、もう少し晴れやかにするようにさとすのであろう。

髭黒、玉鬘を自邸に迎えようとする

一四 ご自分のお邸うちを手入れし、設備を整えて。玉鬘を迎える用意である。

一五 今まで長年は、荒れるにまかせ、古びて、ほったらかしにしておられた部屋うちの設備、総てにわたっての格式を立派にして準備なさる。後の二一一頁に見えるが、北の方の物の怪による乱心のため、家庭が荒廃している趣。

髭黒北の方のこと物の怪による乱心

なめる世なめり。思ひそめきこえし心は違ふさまなめれど、二条の大臣は、心ゆきたまふなれば、心やすくなむ」などこまかに聞こえたまふ。あはれにもはづかしくも聞きたまふこと多かれど、ただ涙にまつはれておはす。いとかうおぼしたるさまの心苦しければ、おぼすさまにも乱れたまはず、ただあるべきやう、御心づかひを教へきこえたまふ。かしこにわたりたまはむことを、とみにも許しきこえたまふまじき御けしきなり。

内裏へ参りたまはむことを、やすからぬことに大将おぼせど、そのついでに、やがてまかでさせたてまつらむの御心つきたまひて、ただあからさまのほどを許しきこえたまふ。かく忍び隠ろへたまふ御ふるまひも、ならひたまはぬここちに苦しければ、わが殿のうち修理ししつらひて、年ごろは荒らし埋もれ、うち捨てたまへりつる御しつらひ、よろづの儀式を改めいそぎたまふ。

北の方のおぼし嘆くらむ御心も知りたまはず、かなしうしたまひ

私も安心です　こまごまと　しみじみともまた気はずかしくも〔玉鬘が〕　沈んで　〔玉鬘が〕こんなにつらがっていられる様子がいたわしいので　髭黒の邸にお移りになることを　すぐにもお許し申しそうで　はいらっしゃらないご様子だ　宮中に玉鬘の出仕なさることを　心配なことと　髭黒　そのまま自邸に退出させ申そうというお積りになって　ほんのちょっとの参内を　〔髭黒は〕　人目を忍んでお　今まで経験のないことと　通いになることも　〔髭黒は〕意に介されず　かわいがっておられた

一　もともと、やさしく、情の深いところのある人なら。以下「おしはかり思ふところもありけれ」まで、挿入句の気持で読む。

二　北の方のお心が騒ぎそうなお振舞が多い。

三　その（北の方の）お人柄も、あのようなご立派な父式部卿の宮が、大層大切にご養育になったことと、世人の尊敬も並々ならぬものがあり。

四　しつこい物の怪に取り憑かれたご病気がおありになって。「もののけ」は、生霊、死霊、その他魔性のものに取り憑かれた病気。

五　（その髭黒が）新たに手に入れて愛情を移された人（玉鬘）が、並み一通りどころでなく、人並みすぐれたお美しさであること以上に。

六　あの、誰しもが疑いを抱いて臆測していた源氏との仲までも、潔白に過されたことなどを。

七　なかなか出来ないことと、玉鬘に対するいとしい思いがおつのりになるのも、もっともなことだ。

し君達（お子たちも）をも、目にもとめたまはず、一なよびかに、情々（なさけなさけ）しき心うちまじりたる人こそ、とざまかうざまにつけても、人のため恥がましからむことをば、おしはかり思ふところもありけれ、ひたおもむきに（女にとって恥になるようなことは）（相手のことを思って気を遣うところもあるのだが）（北の方）（一徹なところがおありのご性分なので）すくみたまへる御心にて、二人の御心動きぬべきこと多かり。女君、（人にひけをお取りになるようなことはない）人に劣りたまふべきことなし。三人の御本性（ほんじやう）も、さるやむごとなき父親王（みこ）の、いみじうかしづきたてまつりたまへるおぼえ、世に軽（かろ）からず、御容貌（かたち）なども、（大層お美しくていられたが）いとようおはしけるを、（どうしたことか）あやしう、四執念（しふね）き御もののけにわづらひたまひて、（ここ長年常人のようでもいらっしゃらず）この年ごろ人にも似たまはず、（正気を失われる）うつし心なきをりをり多くものしたまひて、（ご夫婦仲もうとくなって）御仲もあくがれてほど経（へ）けれど、（正室として大事な方だとは）やむごとなきものとは、（ほかに並ぶ人もなくお思い申し上げていられたのだが）また並ぶ人なく思ひきこえたまへるを、五めづらしう御心移るかたの、なのめにだにあらず、人にすぐれたまへる御ありさまよりも、六かの疑ひおきて、皆人のおしはかりしことさへ、心きよくて過ぐいたまひけるなどを、七ありがたう、あはれと思ひましきこえたまふも、ことわりになむ。

式部卿の宮、北の方を引き取ろうとする

八 北の方の父宮。

九 もうこうなっては、そのような若い女（玉鬘）を迎えて、ちやほやする邸の片隅に、（北の方が）体裁悪く一緒にいられるのも、外聞の悪いことだろう。

一〇 世間に恥をさらして大人しく（髭黒の）言いなりになられることもあるまい。「人笑へ」は、人に笑われること。

式部卿の宮聞こしめして、「今は、しか今めかしき人をわたして、もてかしづかむ片隅に、人わろくて添ひものしたまはむも、人聞きやさしかるべし。おのがあらむこなたは、いと人笑へなるさまに従ひなびかでもものしたまひなむ」とのたまひて、宮の東の対を払ひしつらひて、わたしたてまつらむとおぼしのたまふを、親の御あたりといひながら、今は限りの身にて、たち返り見えたてまつらむことと、思ひ乱れたまふに、いとど御ここちもあやまりて、うちはへ臥しわづらひたまふ。本性は、いと静かに心よく、子めきたまへる人の、時々心あやまりして、人にうとまれぬべきことなむうちまじりたまひける。

私の生きている限りは
〔北方を〕お移し申そうとお思いになりおっしゃるのを
夫に捨てられた身の上で
一層ご病気の具合も悪くなって
〔北方は〕父宮のお邸に
おめおめ実家に帰って父宮にお目にかかるとは
もの静かで気立てがよく
おっとりしたお方だが
人に嫌われても仕方のないような所行が時におありなのだった

住ひなどの、あやしうしどけなく、もののきよらもなくやつして、いと埋れいたくもてなしたまへるを、玉を磨ける目移しに、心もとまらねど、年ごろの心ざしひきかふるものならねば、心にはいとあはれと思ひきこえたまふ。「昨日今日のいと浅はかなる人の御仲ら

妙にだらしなく
見る影もないお暮しぶりなのを
美しく飾り立てることもなく貧寒として
長年連れ添った愛情は変るものではないから
内心はしみじみいとしいと〔北方を〕
（髭黒）

一 時々気がおかしくなって。物の怪のためである。

二 以下、髭黒の邸うちのさま。北の方の病気のため、家庭も荒廃している趣。

髭黒、北の方を慰める

三 玉を磨き立てたような玉鬘のお部屋のすばらしさを見て来た目には、愛着の湧きようもないが。

一四 昨日今日一緒になったような、ほんの一通りの夫婦仲でも。

ひだに、一よろしき際になれば、皆思ひのどむるかたありてこそ見果つなれ。二いと身も苦しげにもてなしたまへれば、聞こゆべきこともうち出で聞こえにくくなむ。年ごろ契りきこゆることにはあらずや、世の人にも似ぬ御ありさまを、見たてまつり果てむとこそは、ここら思ひしづめつつ過ぐし来るに、三えさしもあり果つまじき御心おきてに、おぼしうとむな。四をさなき人々もはべれば、とざまかうざまにつけて、おろかにはあらじと聞こえわたるを、女の御心の乱りがはしきままに、かく恨みわたりたまふ。五ひとわたり見果てたまはぬほど、さもありぬべきことなれど、まかせてこそ今しばし御覧じ果てめ。六宮の聞こしめしうとみて、さはやかにふとわたしたてまつりてむとおぼしのたまふなむ、かへりていと軽々しき。まことにおぼしおきつることにやあらむ、しばし勘事したまふべきにやあらむ」と、七うち笑ひてのたまへる、いとねたげに心やまし。

御召人だちて、つかうまつり馴れたる木工の君、中将のおもとな

口に出して　長年　お約束申してきたことではありませんか　申し上げたいことも　普通の人のようでもないご病気のあなたを　最後までお見捨てにならずに添いとげようと　今まで　ずいぶん我慢して過してきましたのに　何かにつけて　疎略にはしないとずっと前から申し上げてきているのに　あなたは女心の考えのなさにまかせて　簾観してもうしばらくの間結果を見届けて下さい　思い切りよくさっさとあなたをお引き取りになろうと　本当にそうお考えになって　〔それとも〕おこらしめになるお積りでしょうか　冗談めかして　髪黒の寵を受けている

一　ある程度の身分の人となると、皆お互いに我慢し合って添いとげるもののようです。父宮が自邸に北の方を引き取ろうとするのを知って、北の方の翻意をうながすのである。

二　いかにもお身体の具合も悪いといったふうでいらっしゃるので。病気の北の方の日頃の暮しぶり、昨今のふさぎ込んだ様子をいう。

三　とてもそうはいかないような（結局二人が別れなければならないといった）お考えで、私をお嫌いになることはやめて下さい。

四　まだ頑是ない子供たちもいることですから。後の二二二頁に、姫君一人、その下に男君二人と見える。

五　一通り事が落着するまで見届けないうちは、お恨みになるのももっともなことですが。

六　父宮が噂をお聞きになって私をうとんじて。

七　いかにも自分勝手なふうで、おもしろくない。北の方の心を書いたもの。「ねたげ」は、こちらがしゃくに思うような相手の様子。

八　召人といったふうで。「召人」は、主人の寵を受けて妻室に準ずるような地位の女房。

九　いずれも女房の名。中臈の女房と思われる。「木工」は、木工寮。「君」「おもと」ともに敬称。

一〇（しかし）父宮の御ことまでも一緒にして何やかやと非難なさるのは。
一一情けないこの私ゆえに、父宮に傷がつくやに思われます。
一二あなたの悪口はもう聞き馴れておりますから、私は今さら何とも思いません。

一三父宮の御ことを、何でないがしろに申し上げましょう。滅相もない、人聞きの悪いおっしゃりようをなさるな。

どいふ人々だに、（女房たちでも）ほどにつけつつ、（それぞれの身分なりに）やすからずつらしと思ひきこえたるを、北の方は、（心おだやかでなくひどいと〔髭黒を〕）うつし心ものしたまふほどにて、（正気でいらっしゃる時なので）いとなつかしうちうち泣きてゐたまへり。「みづからを、（北方）私のことを）ほけたり、（馬鹿だ）ひがひがしと（頭がおかしいと）のたまひはぢしむるは、（頭でなしにおっしゃるのは）ことわりなることになむ。（ごもっともなことです）一〇宮の御ことをさへ取りまぜのたまふぞ、漏り聞きたまはむはいとほしう、一一憂き身のゆかり軽々しきやうなる。一二耳馴れにてはべれば、今はじめていかにものを思ひはべらず」とて、（もしお耳に入ったらおいたわしいことですし）うちそむきたまへる、（横を向いていられる姿は）らうたげなり。いとささやかなる人の、（小柄な）常の御なやみに（常日頃のご病気で）痩せおとろへ、（弱々しげで）ひはづにて、（美しくて）髪いとけうらにて長かりけるが、わけたるやうに（半分にしたように）落ち細りて、（櫛を入れることもほとんどなさらず）けづることもをさをさしたまはず、涙に（とてもおかわいそう）まろがれたるは、（もつれているのは）いとあはれなり。（よく整って美しいといったところはないが）こまかにほへるところはなくて、父宮に似たてまつりて、なまめいたまへる容貌したまへるを、（身なりを構わないでいられるので）もてやつしたまへれば、（どこに泥でやかな）いづこのはなやかなるけはひかはあらむ。（手やかな目に立つところなどあろう）

（髭黒）一三「宮の御ことを、軽くはいかが聞こゆる。恐ろしう、人聞きかたは

一 あの通っています所が。以下、六条の院の玉鬘のもとに通うことの面映ゆさをいう。

二 まことまぶしいほどの立派なお邸に、柄にもなく生真面目一方の私が（婿として）出入りするのも。「玉の台」は「玉台」をやわらげた歌語。

三 源氏。以下、玉鬘を迎えて二人仲よくしてほしいという趣旨を述べる。

四 感心しない噂が漏れ聞えては。新しく迎えた玉鬘と北の方との不和といった噂。

五 （父宮のお邸に移られるのは）世間への聞えも物笑いになることですし、私にしてみても体裁の悪いことですから、今まで長年の夫婦の約束を違えず、お互いに力になろうというお積りになって下さい。

六 あなたのひどいお仕打ちは、どうこう申し上げません。玉鬘のことは直接関係のないことだ、の意。

七 世間並みでもない私の情けない身の上を。物の怪のため、夫髭黒にうとんじられていること。

になのたまひなしそ」と、こしらへて、「かの（髭黒）通ひはべる所の、いとまばゆき玉の台に、うひうひしう、きすくなるさまにて出で入るほども、かたがたに人目たつらむと、かたはらいたければ、心やすくうつろはしてむと思ひはべるなり。太政大臣の、さる世にたぐひなき御おぼえをば、さらにも聞こえず、心はづかしう、いたり深うおはすめる御あたりに、憎げなること漏り聞こえば、いとなむいとほしう、かたじけなかるべき。なだらかにて、御仲よくて、かたらひてものしたまへ。宮にわたりたまへりとも、忘るることはべらじ。とてもかうても、今さらに心ざしの隔たることはあるまじけれど、世の聞こえ人笑へに、まろがためにも軽々しうなむはべるべきを、年ごろの契り違へず、かたみに後見むとおぼせ」と、こしらへ聞こえたまへば、「人の御つらさは、ともかくも知りきこえず。世の人にも似ぬ身の憂きをなむ、宮にもおぼし嘆きて、今さらに人笑へなることと、御心を乱りたまふなれば、いとほしう、いかでか見

なだめて　（髭黒）　気楽なよ　気のひけることですから　あれこれ人目に立つであろうと　うにこちらに迎えようと思うのです　三　ああした世に比べるも　太政大臣　いかにもご立派で　たしなみ深くて　今さら申すまでもなく　のもないご声望のほどは　いたり深う　まことに不都合千万　いらっしゃるあちらのお邸に　四　おはすめる御あたりに　かどを立てずに　申しわけないことでしょう　お二人仲よく　ほしう　親しくお　父宮のお邸にお移りになっても　付き合いなさって下さい　ひてものしたまへ　どうなったにしても　私の気持が遠のくことはあるはずのないことですが　五　世の聞こえ人笑へに　軽々しう　なだめ申し上　げなさると　（北方）　六　人の御つらさは　人の物　父宮も　笑いの種だと　ご心配のようでいられますから　お気の毒で　どうして今さら

八 大殿（源氏）の北の方と申し上げる方（紫の上）も、私にとって他人でいらっしゃるでしょうか。北の方にとって紫の上は腹違いの妹に当る。

九 あの人（紫の上）は、私の知らぬ所で成人された人だが、私の晩年に及んで、こんなふうに（髭黒を奪った）玉鬘の親のような顔をなさるのはひどいと。式部卿の宮にはそのように思われ、何か当てつけがましいと恨みに思う気持。

一〇 どうなさろうと、それを私は見ているだけです。どうしようと紫の上の勝手で、私は構わない、の意。

一一 わけの分ったおっしゃりようだが、いつものご乱心で、困ったことも起るでしょう。

一二（紫の上は）秘蔵の姫君のように大事にされていられる方ですから、こんなに軽く見られている人（玉鬘）のことまでお気にかけられるはずもありません。

一三 こうした噂があちらの耳に入ったら。「ことの聞こえ」で一語。式部卿の宮が紫の上を快く思っていないこと。

一四 何とかして（玉鬘のもとに）出かけようと。

外出の支度をする髭黒に、北の方乱心して火取りの灰をかける

一五 こんな空模様にわざわざ出かけるのも。「ふり」は「雪」の縁語。

一六 こちらも対抗上腹を立てることもできるのだが。「迎へ火」は、野火を防ぐため、こちらからつける火。倭建の命の相模野の故事による。

えたてまつらむとなむ。大殿の北の方と聞こゆるも、異人にやはものしたまふ。かれは、知らぬさまにて生ひ出でたまへる人の、末の世に、かく人の親だちもてないたまふつらさをなむ、思ほしのたまふなれど、ここにはともかくも思はずや。もてないたまはむさまを見るばかり」とのたまへば、「いとようのたまふを、例の御心違ひにや、苦しきことも出で来む。大殿の北の方の知りたまふことにもはべらず。いつき女のやうにてものしたまへば、かく思ひおとされたる人の上までは知りたまひなむや。人の御親げなくこそものしたまふべかめれ。かかることの聞こえあらば、いと苦しかるべきこと」など、日一日入りゐてかたらひ申したまふ。

（髭黒）（私は別に何とも思っておりません）（〔玉鬘のことは〕紫の上ご承知のことでありません）（〔紫上は〕人の親といったふうではいらっしゃらない方のようです）（〔北方を〕お慰め申し上げなさる）

暮れぬれば、〔髭黒は〕心も空に浮きたちて、いかで出でなむと思ほすに、雪かきたれて降る。かかる空にふり出でむも、人目いとほしう、この御けしきも、憎げにふすべ恨みなどしたまはば、なかなかことづけて、われもむかへ火つくりてあるべきを、いとおいらかに、つれ

（空を暗くして）（〔北の方のご様子も〕憎らしげに嫉妬して恨みなどなさるのならば）（人目の憚りもあり）（北の）（かえってそれを口実にして）（何も気）

一　もうおしまいだ、引き止めたところで無駄だろうと思案なさっていられる北の方のご様子は、いかにも痛々しい。

二　こんな雪では、どうして出かけられよう。

三　どうかここ当分の間だけは（あなたも大目に見て下さい）。

四　源氏や内大臣も、あれこれとお耳になさってどうお思いになろうかとその手前を憚って、途絶えを置くのは気の毒だと思うのです。

五　どうか私の本心を見届けて下さい。

六　こんなふうに普通のご様子でいらっしゃる時は。北の方が正常な精神状態でいる時の意。

七　ほかの女に心を移す気もなくなって、いとしくお思い申すのです。

八　悲しみも薄らぐことでございましょう。「思ひつつねなくに明くる冬の夜の袖の氷は解けずもあるかな」（『後撰集』巻八冬、読人しらず）による。「ねなく」に、「寝なく」と「音泣く」を掛ける。「袖の氷」は、涙の凍ったもの。

〔髭黒は〕どうしようかと思乱れつつ、格子などもさながら、端近うちながめてゐたまへり。物思わしげにしていらっしゃる

北の方、けしきを見て、「あやにくなめる雪を、いかで分けたまはむとすらむ。夜もふけぬめりや」とそそのかしたまふ。

その様子を　あいにくな今夜の雪を　どう踏み分けておいでになるというのでしょう　〔外出を〕おうながしになる　夜もふけたようです　一　今は限り、〔髭黒〕二　とどむともと思ひめぐらしたまへるけしき、いとあはれなり。「かかるには、いかでか」とのたまふものから、〔髭黒〕三「なほこのころばかり。

にかけていらっしゃらない様子であるのが　私の気持も分らないで　何かと人が噂し　四　心のほどを知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちも、左右に聞きおぼさむことを憚りてなむ、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめて、五なほ見果てたまへ。ここになどわたしては、心やすくはべりなむ。六かく世の常なる御けしき見えたまふ時は、七ほかざまに分くる心も失せてなむ、あはれに思ひきこゆる」などかたらひたまへば、

〔玉鬘を〕こちらにでも迎えたら　気を遣うこともないで　気持を落着け　それがお気に染まないなら　〔北方〕ここにおとどまりになっても　「立ちとまりたまひても、御心のほかならむは、なかなか苦しうこそあるべけれ。よそにても、思ひだにおこせたまはば、八袖の氷も解けなむかし」など、なごやかに言ひゐたまへり。

お慰めなさると　かえってつらいことでございましょう　よそながらも　思い出してさえ下さるならば　おだやかに

九 衣服に香を焚きしめる香炉（図録一〇参照）。「召して」以下の主語は北の方。「焚きしめさせ」は、女房に焚きしめさせるのである。「たてまつり」は、髭黒に対する敬語。

一〇 どうして今まで長の年月、疎遠に過して来たのかと、すっかり玉鬘に夢中になった自分の気持がいかにも移り気なのだと、そうは思うものの。

一一 やはり玉鬘の許へと気持ははやって。「心懸想」は、改まって緊張する気持。

一二 わざと何度も溜息をついてみせて。出かけるのがおっくうだと見せかけるしぐさ。

一三 侍所。家来たちの詰所。（二巻図録一四参照）

一四 雪が少し小止みになった。

一五 さすがに正面切ってではなく。北の方に遠慮する気持があるからである。

一六 髭黒お手つきの女房。（前出二一二頁）

一七 おいたわしいこと。「世」は、男女の仲。北の方に同情する言葉。

一八 北の方ご本人は。

御火取り召して、いよいよ焚きしめさせたてまつりたまふ。みづからは、萎えたる御衣どもに、うちとけたる御姿、いと細う、か弱げなり。しめりておはする、いと心苦し。御目のいたう泣き腫れたるぞ、すこしものしけれど、いとあはれと見る時は、罪なうおぼえて、一〇いかで過ぐしつる年月ぞと、名残なううつろふ心のいと軽きぞやとは思ふ思ふ、一一なほ心懸想は進みて、一二そら嘆きをうちしつつ、なほ装束したまひて、小さき火取り取り寄せて、袖に引き入れてしめたまへり。なつかしきほどに萎えたる御装束に、容貌も、かの並びなき御光にこそおさるれど、いとあざやかに男々しきさまして、ただ人と見えず、心はづかしげなり。

侍に人々声して、「一四雪すこし隙あり。夜はふけぬらむかし」など、さすがにまほにはあらで、一五そそのかしきこえて、声づくりあへり。中将、木工など、一六「あはれの世や」などうち嘆きつつ、一七かたらひて臥したるに、一八正身は、いみじう思ひしづめて、らうたげに寄り臥し

北の方 ご自身は 身なりを構わない 嵌になった 沈んでいらっしゃるのが 別に気にもならなく しみじみいとしく思う今は 源氏の 〔香を〕た 焚きしめていられる やさしいほどの感じに 着馴れた すっきりと 立派なご様子だ お美しさには及ぶべくもないが いかにも貴人らしく 侍に 〔お出かけを〕うながし申して それぞれ咳払いする 二人一緒に 物に寄り添って横 じっと胸の思いに堪えて いじらしく

たまへりと見るほどに、にはかに起き上がりて、大きなる籠の下なりつる火取りを取り寄せて、殿の後ろに寄りて、さと沃かけたまふほど、人のややみあふるほどもなう、あさましきに、あきれてものしたまふ。さるこまかなる灰の、目鼻にも入りて、おぼほれてものもおぼえず。〔灰を〕払ひ捨てたまへど、〔あたりに〕立ち満ちたれば、御衣ども脱ぎたまひつ。うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへりみすべくもあらずあさましけれど、例の御もののけの、人にうとませむとするわざと、御前なる人々も、いとほしう見たてまつる。立ち騒ぎて、御衣どもたてまつりかへなどすれど、そこらの灰の、鬢のわたりにも立ちのぼり、よろづの所に満ちたるここちすれば、きよらを尽くしたまふわたりに、さながらまうでたまふべきにもあらず。違ひとはいひながら、なほめづらしう、見知らぬ人の御ありさまなりやと、爪弾きせられ、うとましうなりて、あはれと思ひつる心も残らねど、このころ荒だてては、いみじきこと出で来なむとおぼし

〔北方は〕になっていられると見るうちに　〔髭黒は〕茫然としていらっしゃるのに　不意のことなので　北の方が正気でこんなことをなさるのだと思うのならば　二度と見向く気にもなれないほどひどいことだけれども　女房たち　お召し替えになったりするけれども　おびただしい　舞い立ち　善美を尽していられる玉鬘のもとに　このままお出かけになるわけにもいかない　〔先刻〕いとしいと思った気持も消えいやけがさして　この時期に事を荒立てたら　失せたが

一 伏籠。この上に着物を掛けて香をたきしめる。前に「御火取り召して、いよいよ焚きしめさせたてまつりたまふ」とある、その時使っていたものであろう。（図録一〇参照）

二 人が驚いて払いのける暇もなく、というほどの意か。「ややみ」「あふる」と複合動詞と見るべきであろうが、語義不詳。「ややむ」は、驚きあるいは呼び掛けの語「やや」を活用させたものか。「あふる」は、煽るか。「やや見敢ふる」と見るのは無理であろう。

三 目も見えず、息も詰って、わけも分らない。「おぼほれ」は、溺れ。

四 北の方に取り憑いているいつもの物の怪が、髭黒に北の方を嫌わせようとしてすることだと。取り憑いた物の怪のしわざと見る。

五 乱心のなせるわざとはいいながら、何ともひどい、今までにない北の方のご所行であることよと。髭黒の気持。

六 愛想も尽き。「爪弾き」は、不満、非難の気持を表すしぐさ。

七 大変なことになるだろうと気持を抑えて。源氏や内大臣、北の方の父式部卿の宮などの思惑を憚るのである。

八 物の怪調伏のための加持をしてさし上げる騒ぎになる。「加持」は、真言密教で、印を結び、陀羅尼を唱えて仏の加護を念ずること。

九 北の方が大声でわめかれる声など。北の方に取り憑いた物の怪のしわざ。

一〇（北の方は）加持の僧に打擲され引き回され泣きわめいて一夜をお明かしになって。取り憑いた物の怪の調伏のため、責められるのである。

北の方の物の怪調伏の加持　髭黒、玉鬘に消息

一一 昨夜、突然、息も絶え入る病人がございましたので。「はべし」は、「はべっし」の促音を表記しない形。

一二 雪も降って思い切って出かけることもできませず。「ふり出で」の「ふり」は雪の縁語。

一三 身体まで凍えてしまいました。独り寝のわびしさを訴えたもの。

一四 心まであれこれ迷って千々に乱れた雪の降る中に、独り寝の冷たい片敷の袖でした。「片敷」は、独り寝で自分の着物だけを敷いて寝ること。「心さへ」は、雪ばかりか私の心も、の意。

一五 薄く漉いた鳥の子紙。艶書に用いる。

一六 語義明らかでない。「づしやか」（重々しい）の誤りとも考えられる。河内本「づしやぎ」。

一七 学問（漢学）に造詣深くていられるといったお方だった。

一八 髭黒がひとりわくわくしてこんな手紙を書かれたのを。

しづめて、夜中になりぬれど、僧など召して、加持参り騒ぐ。[八] 呼ばひののしりたまふ声など、[九] 思ひうとみたまはむにことわりなり。〔髭黒が〕おいといになられるのももっともな有様である

夜一夜、[一〇] 打たれ引かれ泣きまどひ明かしたまひて、すこしうち休（静かにな）られた頃を見はからって

みたまへるほどに、（玉鬘のもと）かしこへ御文たてまつれたまふ。

昨夜にはかに消え入る人のはべしにより、[一一] 雪のけしきもふり出で（愚図愚図していましたので）

がたく、[一二] やすらひはべしに、[一三] 身さへ冷えてなむ。御心をばさるも（あなたのお気持はもと）

のにて、（お側の人もどう取り沙汰したことでしょう）人いかに取りなしはべりけむ。

と、（生真面目に）きすくに書きたまへり。

心さへ空に乱れし雪もよに[一四]
ひとり冴えつる片敷の袖

堪へがたくこそ。（たまらない思いです）

と、白き薄様に、[一五] つつやかに書いたまへれど、[一六] ことにをかしきところもなし。（筆跡）手はいときよげなり。（美しい）才かしこくなどぞものしたまひける。[一七] 尚侍の君、（玉鬘）夜がれを何ともおぼされぬに、（通いがないのを何ともお思いでないのに）かく心ときめきした（格別風情のあるところもない）

一 ご祈禱など、新たにはじめさせなさる。主語は髭黒。「修法」は、密教で、本尊を安置して祈念すること。ここは北の方の物の怪退散のため。

二 北の方が（ご病気のため）体裁よく整えることもなさらず。

髭黒、玉鬘のもとに籠り北の方に寄りつかず

三 （直衣の下に重ねて着る）袿にも、焼けこげた匂いがしみついている。

四 北の方に嫉妬のいさかいを起されたことも（これでは）歴然としていて。「ふすぶ」（嫉妬する）に、いぶすの意もあるので、昨夜の「火取り」の縁でいう。

五 玉鬘も愛想をつかされるだろうから。「うじ」は、「倦んじ」の撥音を表記しない形。

六 湯浴みをなさったり、大層身づくろいなさる。

七 髭黒お手つきの女房。（前出二一七頁）

まへるを、見も入れたまはねば、御返りなし。男、胸つぶれて、思ひ暮らしたまふ。

北の方は、なほいと苦しげにしたまへば、御修法などはじめさせたまふ。心のうちにも、このころばかりだに、ことなくうつし心にあらせたまへ、と念じたまふ。まことの心ばへのあはれなるを見ず知らずは、かうまで思ひ過ぐすべくもなきけうとさかなと、思ひゐたまへり。

暮るれば、例の、急ぎ出でたまふ。御装束のことなども、めやすくもしなしたまはず、世にあやしう、うちあはぬさまにのみむつかりたまふを、あざやかなる御直衣なども、え取りあへたまはで、いと見苦し。昨夜のは焼けとほりて、うとましげに焦れたるにほひなども、ことやうなり。御衣どもに移り香もしみたり。ふすべられけるほどあらはに、人もうじたまひぬべければ、脱ぎかへて、御湯殿など、いたうつくろひたまふ。木工の君、御たきものしつつ、

目にもお止めにならないので
髭黒気が気でなく
もき一日を過される
〔髭黒は〕
ここ当分の間だけでも
何ともなく正気でいさせて
〔仏に〕祈念なさる
〔北方の〕本当の気立てがやさしいのを見知っていなか
下さいませ
とてもこうまで大目に見ることもできない気味悪さだと
〔髭黒は〕
いかにもみっともなく
身にそぐわないと〔髭黒は〕いつもご機嫌が悪いが
〔今夜も〕立派な
問に合せることがおできにならず
焼けこげた匂いなども
焼け穴ができて
異様な感じだ
お召し物に香をたきしめながら

八（お召し物が焼けましたのは）北の方が独りお邸に取り残されて思いこがれていられる胸のうちの苦しさに思い余っての炎とお見受けしたことです。「ひとり」（独り）に「火取り」を掛け、「こがる」の縁語。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。

九 すっかりお見限りのお仕打ちは、私どもお側で拝見する者たちも、平気でいられましょうか。

一〇 袖で口を覆っているが、その目もとは、なかなか気が利いている。「口おほふ」は、度を越えた発言を恐れ憚るしぐさ。

一一 薄情な話だこと。草子地。

一二 昨夜のいやな一件に心が騒ぐと、いろいろと、ますます（北の方と連れ添ったことが）後悔されることだ。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛け、「くゆる煙」と縁語。「くゆる」に、「燻る」（くすぶる）と「悔ゆる」を掛ける。

一三 自分は（玉鬘にも嫌われて）どっちつかずの身の上になってしまうだろう。

一四 北の方のことを思うと気が滅入るので、ずっと玉鬘のもとに居続けをなさる。

一五 修法など懸命にしているけれども、（北の方の）御物の怪がひどい勢いになって大声でわめき立てるという知らせを（髭黒は）お聞きになるので。

「ひとりゐてこがるる胸の苦しきに
思ひあまれる炎とぞ見し

名残なき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにやは」と、一〇おほひてゐたる、まみ、いといたし。されど、いかなる心にて、かやうの人にものを言ひけむ、などのみぞおぼえたまひける。情なきことよ。

（髭黒）一二「憂きことを思ひ騒げばさまざまに
くゆる煙ぞいとど立ちそふ

いとことのほかなることどもの、もし聞こえあらば、中間になりぬべき身なめり」と、うち嘆きて出でたまひぬ。一夜ばかりの隔てだに、まためづらしう、をかしさまさりておぼえたまふありさまに、いとど心を分くべくもあらずおぼえて、一四心憂ければ、久しう籠りゐたまへり。

一五修法などし騒げど、御もののけこちたくおこりてのしるを聞き

一 とんでもない不名誉なことにもなり、恥をかくようなことがきっと起るに違いないと。火取りの一件に懲りて、北の方に近づけば、また何をされるか分らないと恐れる。「疵」は、経歴上の汚点というほどの意。

二 お子たちだけを、別に自分の部屋に呼び寄せてお会いになる。次に、姫君一人、男君二人と見える。

三 （こうした冷たい夫の仕打ちを）もうこれで二人の仲もおしまいだとご覧になるにつけても。

式部卿の宮、北の方を引き取る

四 北の方の父、式部卿の宮。

五 （髭黒が）そのようにはっきりよそよそしい態度を示していられるというのに。

六 はなはだ不面目な、物笑いの種になることです。

七 無理にこの邸にとどまって。以下、北の方の心中の思い。

たまへば、あるまじき疵もつき、はぢがましきことかならずありなむと、恐ろしうて寄りつきたまはず。殿にわたりたまふ時も、異方に離れゐたまひて、君達ばかりをぞ、呼び放ちて見たてまつりたまふ。女一所、十二三ばかりにて、また次々男二人なむおはしける。近き年ごろとなりては、御仲も隔たりがちにてならはしたまへれど、やむごとなう、立ち並ぶかたなくてならひたまへれば、今は限りと見たまふに、さぶらふ人々も、いみじう悲しと思ふ。

四 父宮、聞きたまひて、「今は、五しかかけ離れてもて出でたまふらむに、さて心強くものしたまふ、六いと面なう人笑へなることなり。おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにしも、などか従ひくづをれたまはむ」と聞こえたまひて、にはかに御迎へあり。北の方、御ここちすこし例になりて、世の中をあさましう思ひ嘆きたまふに、かくと聞こえたまへれば、七しひて立ちとまりて、人の絶え果てむさまを見果てて、思ひとぢめむも、今すこし人笑へにこそあらめ、などお

（髭黒は）ご夫婦仲もうとうとしくしていらっしゃるけれども
強情にお邸にとどまっていられるのは
夫との仲を何ということかと
（父宮が）このように申し上げなさったので
夫が離れ去ってしまうのを見届けてから
もう一層の物笑いの種であろう
心を
あきらめをつけるのも
ご気分が
（北方は）れっきとした本妻として肩を並べる人もなく今まで暮していられたから
お仕えする女房たちも
最近の数年間というものは
お邸にお帰りになる時も
どうして相手の言いなりになっていられるこ
そういちずに
私が生きている限りは
（北方に）
少しふだんのようになって

八 藤袴一九九頁に「式部卿の宮の左兵衛の督」と見える。この巻二〇五頁に既出。

九 兵衛の督は従四位下相当であるが、この人、位階は恐らくそれより上で、参議で兵衛の督を兼帯しているのであろう。

一〇 以下、兵衛の督の弟たち。中将は従四位下相当、侍従は中務省に属し、従五位下相当、民部の大輔は民部省の次官、正五位下相当。

一一 今まで長年なさったこともない余所のお暮しに、手狭で気の置けることでは、どうして大勢はお仕えできましょう。今まで長年ずっと髭黒の邸で気ままに過してきたので、父宮の邸での暮しを「旅住み」という。

一二 こうした情けない身の上と、今は見きわめもつきましたから、もうこの世に何の未練もありません。出家遁世を思う、の意。

ぼし立つ。御兄弟の君達、兵衛の督は、上達部におはすれば、ことことしとて、中将、侍従、民部の大輔など、御車三つばかりしてはしたり。さこそはあべかめれと、かねて思ひつることなれど、さしあたりて今日を限りと思へば、さぶらふ人々も、ほろほろと泣きあへり。「年ごろならひたまはぬ旅住みに、狭くはしたなくては、いかでかあまたはさぶらはむ。かたへは、おのおの里にまかでて、しづまらせたまひなむに」など定めて、人々おのがじし、はかなきものどもなど、里に運びやりつつ、乱れ散るべし。御調度どもは、さるべきは皆したため置きなどするままに、上下泣き騒ぎたるは、いとゆゆしく見ゆ。

君達は、何心もなくてありきたまふを、母君、皆呼びすゑたまひて、「みづからは、かく心憂き宿世、今は見果てつれば、この世にあととむべきにもあらず、ともかくもさすらへなむ。生ひ先遠うて、さすがに散りぼひたまはむありさまどもの、悲しうもあべいかな。

姫君は、たとえどうなっても となるともかうなるとも、私と一緒にお暮しなさい おのれに添ひたまへ。なかなか 男君たちは、よんどころなく父君に始終お目通り申すにしたところで えさらずまうで通ひ見えたてまつらむに、人の心とどけになるはずもなく めたまふべくもあらず、どっちつかずの頼りないことになりましょう はしたなうてこそただよはめ。宮のおはせ 間は むほど、宮仕えをするにしても 形のやうにまじらひをすとも、かの大臣たちの御心にかかれる世にて、かく心おくべきわたりぞと、さすがに知られて、人にもなり立たむこと難し。さりとて、山林に引き続きまじらむこと、深い事情は分らないけれど 後の世までいみじきこと」と泣きたまふに、皆、深き心は思ひ分かねど、四 うちひそみて泣きおはさうず。「昔物語（北方）五などを見るにも、世間 並みの愛情こまやかな親でも の常の心ざし深き親だに、時勢におもねり 時にうつろひ、人に従へば、おろかにの 人の顔色を窺うので すっかり冷たくなってしまうものでした みこそはなりけれ。まして形のやうにて、定石通りに 今の今からすっかり冷淡なお気持で 見る前にだに名残なき心は、頼りになるようなお扱いをなさるはずもない かかりどころありてもてないたまはじ」と、御乳母どもさし つどひてのたまひ嘆く。

日も暮れ、雪降りぬべき空のけしきも、心細う見ゆる夕なり。 「いたく荒れはべりなむ。早う」と、御迎への君達そそのかしきこ

一 姫君よりも、かえって、男のお子たちは。髭黒の子として立身していかなくてはならないが、かえって身の処し方がむつかしい、という気持。

二 源氏の大臣や内大臣のお心のままの世の中ですから、こんな気を許せない宮家一族の者だと、やはり目をつけられて、立身もなりがたいことです。

三 あなたたちが、私のあとを追うように出家遁世するのは、来世までもの悲しみの種です。

四 べそをかいて皆泣いていられる。「おはさうず」は、「おはしあふ」（「おはす」の複数形）の約音「おはさふ」にサ変の「す」のついた形の音便形。

五『住吉物語』や『落窪物語』など、継母の言いなりになって先妻の子をうとんずる物語。

六 姫君や男君たちの乳母たちも一緒になって。

姫君、真木柱の別れの歌を詠む　母君、女房たちの歌

七 父君にお目にかからなくてこれからどうして過していかれよう、今出かけますとお別れも申し上げないで、二度とお目にかかれないことになったらどうしよう。姫君の思い。

八 こうして日も暮れようとする頃、髭黒が玉鬘のもとをお離れになるはずもないことだ。草子地。

九 黒みがかった蘇芳色の紙を重ねたのに、ほんの小さく歌を書きつけて。

一〇 髪の乱れを整えるもの。細長く、手元が平たく先の細い棒状の用具。

一一 もうこれきりとこの家を去ってしまっても、日頃寄り添ってきた真木の柱は私を忘れないでおくれ。「真木」は、杉、檜などの良材をいう歌語。この歌によりこの姫君を真木柱と呼ぶ。巻名もこの歌による。

一二 いえ、なに。否定の語気。

一三 馴れ親しんだと真木の柱は思い出してくれるにしても、今さら何で私たちがこの邸にとどまることがありましょう。

真木柱

悲しみにくれていられる　髭黒が今までとて　殿　君達は　見　姫君が　人の物にしてしまうような気がなさるのも悲しくて　隙間　姫君　北方　そんなお積りでいられる　すぐにも父君がおいでになって　姫君は　姫君が　ほんとに情けない　なぜ申し上げなさる　とても出かけられないと　もおかわいがり申しておられたので　ほんとは　ってほしいと　すらすらとお書きにもなれず

えて、御目おしのごひつつながめおはす。姫君は、殿いとかなしうしたてまつりたまふならひに、見たてまつらではいかでかあらむ、今なむとも聞こえで、またあひ見ぬやうもこそあれと思ほすに、うつぶし伏して、えわたるまじと思ほしたるを、「かくおぼしたるなむ、いと心憂き」など、こしらへきこえたまふ。ただ今もわたりたまはなむと、待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなむや。常に寄りゐたまふ東面の柱を、人にゆづるこころしたまふもあはれにて、姫君、檜皮色の紙の重ね、ただいささかに書きて、柱の乾われたるはさまに、笄の先して押し入れたまふ。

（姫君）一二
今はとて宿かれぬとも馴れ来つる
真木の柱はわれを忘るな

一三 馴れきとは思ひ出づとも何により
立ちとまるべき真木の柱ぞ

えも書きやらで泣きたまふ。母君、「いでや」とて、

一　日頃はそれほど気にもとめない庭の木や草のたたずまいまで、恋しく思われることであろうと。
二　木工の君（前出二二〇頁）は、髭黒お付きの女房として、この邸に残るので。
三　前出二一二頁。北の方に従ってこの邸を去る。
四　殿と浅いご縁のあなたはここに残って、このお邸を守るべき北の方がお立ち去りになるということがあってよいものでしょうか。「石間の水」は、遣水の石の間を流れる水、「木工の君」をさす。「澄み」に「住み」を掛け、「かけ離る」の「かけ」に、水に映る「影」を響かせる。
五　何とも申しようもなく悲しみに心も閉ざされて、私もいつまでこのお邸に（殿のお側に）いられますことやら。「ともかくも言はれず」を「岩間」に言い掛ける。「結ぼほれ」に、水の流れのとどこおる意と心の鬱屈の意を掛け、「かけとむ」（かけとどめる、取り止める）に「影止む」（影を映す）を響かせる。
六　いいえ、そんな。中将の言い分を否定する語気。
七　以下の措辞、菅原道真が左遷されて京を去った時の歌「君が住む宿の梢を行く行くと隠るるまでもかへりみしはや」（『大鏡』時平伝。『拾遺集』巻六別、四句「隠るるまでに」）による。
八　前注所引の歌による。ここは夫の髭黒の意。

式部卿の宮の北の方、源氏をあしざまに言う

御前なる人々（女房たち）も、さまざまに悲しく、さしも思はぬ木草のもとさへ恋しからむことと、目とどめて、鼻すすりあへり。

木工の君は、殿の御方の人にてとどまるに、中将のおもと、

「浅けれど石間の水は澄み果てて
　宿もる君やかけ離るべき

思いもかけなかったことです　こうしてお別れ申すことになりますとは

思ひかけざりしことなり。かくて別れたてまつらむことよ」と言へば、木工、

「ともかくも岩間の水の結ぼほれ
　かけとむべくも思ほえぬ世を

見ることがあろうと　二度とどうして　〔中将は〕心細い気持がする

いでや」とてうち泣く。御車引き出でてかへり見るも、またはいかでかは見むと、はかなきここちす。梢をも目とどめて、隠るるまでぞかへりみたまひける。君が住むゆゑにはあらで、ここら年経たまへる御住処の、いかでか偲びどころなくはあらむ。

〔北の方は〕　どうして　思い出の種とならぬことがあろう

式部卿の宮は待ち受けて　とても悲しくお思いになった

宮には待ち取り、いみじうおぼしたり。母北の方、泣き騒ぎたま

九 源氏を、結構なご姻戚とお思い申し上げていらっしゃいますが。夫の式部卿の宮に向って言う。宮にとっては源氏は婿に当るからである。

一〇 源氏は、どんな前世からの仇敵でいらしたのかと思われるほどです。

一一 北の方腹の姫君。源氏はその入内に関心を示さず（三巻澪標三二頁、五〇頁）、立后も叶わず（同少女二三〇頁）、北の方は恨みに思っていた（少女二七三頁）。

一二 あなたに対する恨みが解けなかったのを。須磨流謫の前後、宮が源氏に対して冷淡だったことへの恨み（澪標三一一～三二頁参照）。

一三 やはり、そんなことがあってよいものか、紫の上一人を大事に愛されるからには、その縁につながる私たちまで羽振りがよくなるといった例は世間にも多いのにと、私は得心がゆかなかったのですが。

一四 見当違いな継娘の世話に身を入れて。玉鬘のこと。

一五 自分が手をつけてもう飽きたのがかわいそうなので。

一六 人に非難されることなどおありでない源氏の大臣を。

一七 以前のこともよく覚えておられて、こうした報いを受けさせるがよいとお考えになるところがおありだったのだろう。

一八 引き立てたり、あるいは退けたりして。

真木柱

ひて、「太政大臣（九）を、めでたきよすがと思ひきこえたまへれど、いかばかりの昔の仇敵（一〇）にかおはしけむとこそ思ほゆれ。女御（一一）をも、ことに触れ、はしたなくもてなしたまひしかど、それは、御仲（一二）の恨み解けざりしほど、思い知れというおつもりだったのだろうとあなたも思いおっしゃりもし思ひ知れとにこそはありけめとおぼしのたまひ、世間の人も取り沙汰したのでさえ世の人も言ひなししだに、なほ、（一三）さやはあるべき、人一人（ひとり）を思ひかしづきたまはむゆゑは、ほとりまでもにほふ例こそあれと、心得ざりしを、ましてかく末に、今頃になって（一四）すずろなる継子かしづきをして、おのれ（一五）古したまへるいとほしみに、実法なる人のゆるぎどころあるまじきって律義な男でわき目もふりそうにないのを夫にと思をとて、取り寄せもてかしづきたまふは、いかがつらからぬ」と、いかにもひどい仕打ちです言ひ続けののしりたまへば、宮は、「あな聞きにくや。世に難つけ（一六）大声で言いつのられるので何とはしたないことを悪く言うものではありません られたまはぬ大臣を、口にまかせてなおとしめたまひそ。かしこき偉いお方だから人は、思ひおき、かかる報いもがなと、思ふことこそはものせられけめ。さ思はるるわが身の不幸なるにこそはあらめ。つれなうて、そう思われている私の身の上が不運だということなのだろう表面はさりげなくあの須磨に退かれた当時の皆かの沈みたまひし世の報いは、浮かべ沈め、いとかしこくこそは

一 しかし私だけは、しかるべき縁戚の者と思ったから。紫の上の父として重んじてくれたという。
二 先年も、あのように世間の評判になるほど盛大に、わが家としては分に過ぎたお祝いもしてくれたのだ。宮の五十の賀のこと（少女二七二～三頁）。
三 不吉なことなどを口走りなさる。源氏や紫の上を呪うような言葉を吐くのである。
四 この大北の方（娘の髭黒の北の方に対していう）は、手に負えない性悪者なのだった。草子地。
五 なんと不体裁な、年若い夫婦仲のように。以下、髭黒の思い。

髭黒、宮邸を訪れるが、説得不調に終る

六 北の方ご本人は、そんなにせっかちな思い切ったことをする性分でもないのに、父宮がこんな軽はずみなことをなさるのだ、と思って。
七 お子たちもあることだし。
八（実家に帰ってくれて）かえって気が楽になったとは思ってみますものの。
九（このままでは）世間の手前も私が薄情者のように思われかねませんから、ちょっと顔出しして、もどってまいりましょう。
一〇 立派な袍。以下、表の袴の代りに指貫を着用した布袴姿。
一一 柳襲。表白、裏青、また表裏とも薄青という。
一二 青みがかった鈍色（薄墨色）。「綺」は、錦に似た織物。

けて漏れなくお考えのようだ
思ひわたいたまふめれ。一おのれ一人をば、さるべきゆかりと思ひてこそは、二一年も、さる世の響きに、満足すべきなのだろうか。それをこの生の面目にてやみぬべきなめり」とのたまふに、〔北方は〕いよいよ腹立ちて、三まがまがしきことなどを言ひ散らしたまふ。四この大北の方ぞ、さがな者なりける。

髭黒
大将の君、北の方が父宮の邸にお帰りになったのを かくわたりたまひにけるを聞きて、五いとあやしう、若若しき仲らひのやうに、やきもちを焼いたようなことをなさったものだ ふすべ顔にてものしたまひけるかな、六正身は、しかひききりに際々しき心もなきものを、宮のかく軽々しうはすると思ひて、君達もあり、〔世間の〕人目もいとほしきに思ひ乱れて、具合が悪いので 尚侍の君に、七玉鬘（髭黒）こんな妙なことが起りましたようです「かくあやしきことなむはべるなる。八なかなか心やすくは思ひたまへなせど、あのまま家の片隅にひっそり暮していてもよい人だと気安く思える 人柄を 安心に思っておりましたのに さて片隅に隠ろへてもありぬべき人の心やすさを、急に思い立って父宮がなさったことなのでしょ おだしう思ひたまへつるに、にはかにかの宮のしたまふならむ。九人の聞き見ることも情なきを、うちほのめきて参り来なむ」とて出でたまふ。一〇よき上の御衣、一一柳の下襲、一二青鈍の綺の指貫着たまひ

一三 父宮にお恨みを申し上げようと、宮邸に参上なさるそのついでに、先にご自邸においでになると。
一四 前出二二六頁。
一五 北の方が邸を去った時の様子。
一六 姫君が歌を詠んだ時のご様子。前出二二五頁。

一七 仕方がない、あの北の方ご本人は、いずれにせよ、もう癈人同様のご様子だから、（ここにいても宮邸に移っても）同じことだ。
一八 しかし、まだ年端もいかない子供たちまで、一体どのようになさるおつもりなのだろう。北の方は子供たちを自分の巻き添えにするつもりか、の意。
一九 姫君が歌を残していった真木柱。
二〇 歌に詠まれた姫君の心根がかわいそうで恋しく思われて仕方なく。

て、引きつくろひたまへる、いとものものし。（身なりをお整えになったところは いかにも堂々としている）なぜかは似げなからむと、人々は見たてまつるを、尚侍の君は、（どうして不似合いなことがあろうと 女房たち）かかることども（こうした事情を）聞きたまふにつけても、身の心づきなうおぼし知らるれば、見もやりたまはず。（今の身の上が情けなく思い知られなさるので 目もお向けにならない）

一三 宮に恨み聞こえむとて、まうでたまふままに、まづ殿（一四）におはしたれば、木工の君など出で来て、ありしさま（一五）語りきこゆ。姫君の御（一六）ありさま聞きたまひて、男々しく念じたまへど、ほろほろとこぼるる御けしき、いとあはれなり。（男らしく我慢なさるけれども 〔涙の〕）（髭黒）「さても、世の人に似ず、あやしきこ（それにしても 普通でもない）とどもを見過ぐすここらの年ごろの心ざしを、見知りたまはずありけるかな。（〔北方は〕お分りではなかったの いと思ひのままならむ人は、今までも立ちとまるべくやはある。（ひどくわがままな夫だったら 一緒に暮していられるもの）よし、かの正身は、とてもかくても、いたづら人と見えたまへば、同じことなり。をさなき人々も、いかやうにもてなしたまはむとすらむ」と、うち嘆きつつ、かの真木柱を見たまふに、手もをさなけれど、心ばへのあはれに恋しきままに、（とても今まで 数々を大目に見て来た今までの長の年月の私の気持を 筆跡）道すがら涙おしの

一 北の方は（髭黒に）お会いになるはずもない。父宮が側についているからである。以下、宮の言葉。

二 なんの（お会いになることはない）。ただ時世におもねる気持なのだから、今になってはじめて心変りされたわけのものでもない。源氏におもねって玉鬘の婿になったのだ、と言う。

三 一体いつを、（髭黒が）気持を改める時と待とうか。いつまで待っても気持の改まる時はあるまい、の意。

四 一層ひどい姿を（髭黒に）さらして終るだけのことでしょう。物の怪に取り憑かれた惨めな姿をさらすだけのことに終ろう、の意。

五 全く年がいもないような気持がいたします。若い夫婦の格気沙汰のようだ、と嘆く。前にも「いとあやしう、若々しき仲らひのやうに、ふすべ顔にてものしたまひけるかな」（二二八頁）とあった。

六 私の落度ゆえ仕方のないことだと、世間の人にも得心させた上で、このような処置をお取りになるのがよいでしょう。自分の非が明らかになった上で、宮邸にお移りになるがよかろう、ここのところはしばらく辛抱してほしい、という苦しい説得。

七 童殿上していられる。見習いのため、殿上の間に出仕しているのである。

ごひつつまうでたまへれば、対面したまふべくもあらず。

（宮）「何か。ただ時に移る心の、今はじめて変りたまふにもあらず。年ごろ思ひうかれたまふさま聞きわたりても、久しくなりぬるを、いづくをまた思ひ直るべきをりとか待たむ。いとどひがひがしきさまのみこそ見え果てたまはめ」といさめ申したまふ、ことわりなり。

（髭黒）「いと若々しきここちもしはべるかな。思ほし捨つまじき人々もはべればと、のどかに思ひはべりける心のおこたりを、かへすがへす聞こえてもやるかたなし。今はただ、なだらかに御覧じ許して、罪さりどころなう、世人にもことわらせてこそ、かやうにももてないたまはめ」など、聞こえわづらひておはす。「姫君をだに見たてまつらむ」と聞こえたまへれど、出だしたてまつるべくもあらず。男君たち、十なるは、殿上したまふ。いとうつくし。人にほめられて、容貌などようはあらねど、いとらうらうじう、分別もようやくついてきていものの心やうやう知りたまへり。次の君は、八つばかりにて、いとらうたげに、姫君に

〔宮邸に〕参上なさると
（宮）二
ずっと玉鬘にうつつを抜かしていられる噂を聞くことも
三
もう長いことになるのに
四
ご意見されるのは
もっともなことだ
（髭黒）五
お思い捨てになれるはずのない子供たち
もいますからと
のんびり構えていました私の油断を
何遍お託びしてもお
託びのしようもありません
事を荒立てず大目に見て下さって
六
説得に難渋していらっしゃる
〔髭黒〕姫君だけにでもお会いした
〔髭黒の前に〕姫君をお出し申すはずもない
十歳
すぐれてはいないが
とても利発で
世人の評判もよく
分別もようやくついてきていらっしゃる
可憐な様子で

八 これからは、そなたを、恋しい姫君のお形見とも思ってかわいがるほかないな。「あこ」（吾子）は、親しみ呼ぶ語。「べかめれ」は「べかるめれ」の撥音便「べかんめれ」の撥音無表記の形。

髭黒、男君二人を自邸に連れ帰る　紫の上の困惑

九 幼い男君二人を。

一〇 六条の院（玉鬘のもと）には、とても連れてお行きになれないので。

一一 いろいろな心労も何もかも忘れる思いがなさる。

一二（その後、髭黒は）ぱったりと宮邸にお便りもせず、立つ瀬もないあしらいだったのを口実にしているふうなのを。

一三 紫の上。この呼称、胡蝶三七頁、常夏九五頁に見える。

一四（このような事件が）私までもが恨まれる原因になるのがつらいことです。

真木柱

もおぼえたれば、（頭を）かき撫でつつ、（髭黒）八「あこをこそは、恋しき御形見にも見るべかめれ」など、うち泣きてかたらひたまふ。宮にも御けし（ご意向を）き賜はらせたまへど、（宮）風邪がひどくて「風おこりて、（養生しておりますから）ためらひはべるほどにて」とあれば、（立つ瀬もない思いで）はしたなくて出でたまひぬ。

小君達（九）をば車に乗せて、かたらひおはす。一〇六条殿には、え率てはせねば、（お邸に残して）殿にとどめて、（髭黒）やはりここにいなさい「なほここにあれ。来て見むにも心やすかるべく」とのたまふ。（様子を見に来るにも気楽に来られるように）うちながめて、いと心細げに見送りたるさまども、（悲しみにくれて）いとあはれなるに、（自分を）もの思ひ加はりぬるここちすれど、女君の御さまの、見るかひありめでたきに、（とても美しくすばらしいのに）ひがひがしき御さまを思ひくらぶるにもこよなくて、（物の怪に取り憑かれた北の方のご様子を思い比べるのも天地の違いなので）よろづをなぐさめたまふ。一二うち絶えておとづれもせず、はしたなかりしにことづけ顔なるを、宮にはいみじうめざましがり嘆きたまふ。一三春の上も聞きたまひて、（紫上）一四「ここにさへ恨みらるるゆゑになるが苦しきこと」と嘆きたまふを、大臣の君、（源氏）いとほしとおぼして、（源氏困ったものだと）「難きことなり。（むつかしいものです）おのが心ひとつにもあらぬ

（二人お同いなさったけれども）（心配の種がまた一つふえた思いがするけれども）（玉鬘の様子がとてもかわいそうなので）（髭黒の種不埒な仕打ちだとお嘆きになる）（式部卿の宮は大子を思い比べるのも天地の違いなので）（私の一存ではどうにもならぬ玉鬘につ

一　帝におかれても私のことをおもしろからずお思いのようです。「たなり」は「たるなり」の撥音便「たんなり」の撥音無表記の形。「なり」は推定の助動詞。

二　事情をはっきり聞いて、私への恨みもお解けになったようです。玉鬘と髭黒の結婚が源氏の意向によることではないと知って誤解を解いたようだ、の意。

三　予定されていた、玉鬘の尚侍としての参内のことも、そのままになって、妨げ申したことを。以下、玉鬘が出仕するよう取りはからおうとする髭黒の心中。

玉鬘、男踏歌を機会に参内　承香殿に局する

四　帝におかれても、無礼な、何か意趣のあることのように（自分が出仕に反対していると）お思いであろうし。

五　公職を持つ女を妻にしている人もいないわけではないしと、思い返して。

六　正月十四日に行われる行事（一巻末摘花二七九頁注一六、初音二五頁以下参照）。初音の巻のそれは一昨年のことである。

七　夕霧。（藤袴一八五頁参照）

八　玉鬘の異母兄弟たち。柏木や弁の少将。

九　こうした機会にと、皆こぞって玉鬘のご機嫌を取り結ぶべく近づいて。（藤袴一九四頁参照）

一〇　承香殿（仁寿殿の北にある後宮の殿舎の一つ）の東側に玉鬘のお部屋はしつらえてある。中央に馬道

人のゆかりに、内裏にも心おきたるさまにおぼしたなり。兵部卿の宮なども、怨じたまふと聞きしを、さいへど、思ひやり深うおはする人にて、聞きあきらめ、恨み解けたまひにたなり。おのづから人の仲らひは、忍ぶることと思へど、隠れなきものなれば、しか思ふべき罪もなしとなむ思ひはべる」とのたまふ。

ながる縁で　お怨みだと聞きましたが　思慮深くていらっしゃる方で　やはり自然に男女の　人目を忍んだつもりでいても　いつかは知れるものですから　そんなに苦に　仲というものは　すから　こうしたいろいろの事件で　するほどの責任はないのだと思います

かかることどもの騒ぎに、尚侍の君の御けしき、いよいよ晴れ間なきを、大将は、いとほしと思ひあつかひきこえて、この参りたまはむとありしことも、絶え切れて、さまたげきこえつるを、内裏にも、なめく心あるさまに聞こしめし、人々もおぼすところあらむ、公人を頼みたる人はなくやはあると思ひ返して、年かへりて参らせたてまつりたまふ。男踏歌ありければ、やがてそのほどに、儀式いといかめしう、二なくて参りたまふ。かたがたの大臣たち、この大将の御勢さへさしあひ、宰相の中将、ねむごろに心しらひきこえたまふ。兄弟の君達も、かかるをりにとつどひ、追従し寄りて、

髭黒　お気の毒に思っていろいろ気を配ってさし上げて　でいるのを　源氏や内大臣も不快にお思いであろう　髭黒　年が明けてから玉鬘を　出仕させ申し上げなさる　お支度　お二方の　またとなくして参内なさる　もまことに立派に　こまごまと心を配ってお世話申し上　ど威勢も加わって　げなさる

（廊下）があって東西を隔てる。（図録五参照）

一一 式部卿の宮の姫君。

一二 馬道を隔てとするだけだが、お心のうちは遠くよそよそしいものであったであろう。草子地。

一三 冷泉帝の後宮の方々。

一四 宮中は、奥ゆかしくはなやいだご時世である。それぞれの後宮が風雅を競うのである。

一五 女御に次ぐ身分。大納言以下の出身。

一六 秋好む中宮。源氏の養女分。

一七 内大臣の姫君。

一八 左大臣の姫君の女御。行幸一四八頁に「左右大臣」とあるうちの左大臣であろう。系図不詳。

一九 中納言の姫君と参議の姫君。この二人は更衣。

二〇 それぞれの後宮に実家の人々が参上し。

踏歌の儀、玉鬘の局での饗応

二一 御簾から押し出した女房たちの袖口の重なりを。（図録一二参照）

二二 東宮の御母女御。朱雀院の女御で、承香殿の女御と申した方。髭黒の妹（三巻澪標一四頁参照）。東宮とともに梨壺におられる（澪標三〇～三一頁）。

二三 東宮。十二歳。明石の巻で二歳（二巻二九五頁）。

二四 帝のお前。清涼殿東庭。以下、踏歌の一行が巡る順路。

二五 院（上皇）の御所。朱雀院がおられる。

二六 東宮の御所である梨壺（昭陽舎）には昭陽北舎もある。（図録四参照）

大事になさる様子は

かしづきたまふさま、いとめでたし。承香殿の東面に御局したり。西に宮の女御はおはしければ、馬道ばかりの隔てなるに、御心のうちは、遙かに隔たりけむかし。御方々、いづれとなくいどみかはしたまひて、内裏わたり、心にくくをかしきころほひなり。ことに乱りがはしき更衣たち、あまたもさぶらひたまはず。中宮、弘徽殿の女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひたまふ。さては、中納言、宰相の御女二人ばかりぞさぶらひたまひける。

格別家柄の劣った　たくさんもお仕えしておられない　どなたもどなたも互いに競い合われて

踏歌は、かたがたに里人参り、さまことに、げににぎはしき見物なれば、誰も誰もきよらを尽くし、袖口の重なり、こちたくめでたくととのへたまふ。春宮の女御もいとはなやかにもてなしたまひて、宮はまだ若くおはしませど、すべていと今めかし。御前、中宮の御方、朱雀院とに参りて、夜いたうふけにければ、六条の院には、このたびは所狭しとはぶきたまふ。朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐるほどに、夜明けぬ。ほのぼのとをかしき朝ぼらけに、

綺羅を飾って　一風変った　ほんとににぎやかな　幾重にも見事に整え　いかにも趣向をこらしたお支度ぶりで　ていらっしゃる　一切がとても風流な趣である　秋好む中宮　仰々しいのでと辞退なさる　〔宮中に〕　風情のある朝明け方に

一 男踏歌の時に歌われる催馬楽。（初音二六頁注六参照）
二 玉鬘の異母兄弟たち。
三 まだ元服前の八男のお方は、ご本妻腹で。内大臣の北の方は、昔の右大臣の四の君（桐壺三九頁参照）。
四 髭黒の長男のお方。前に「十なるは、殿上したまふ」（一三〇頁）とあった。
五 （新たに尚侍として出仕した）この玉鬘のお局の御簾から押し出した女房たちの袖口は。
六 どこでも同じように踏歌の人々一同に禄として被けける綿の様子も、はなやいだ香りがすばらしく、趣向を凝らしたなさりようで。帝のお前でと同様、諸所でも禄の綿が被けられる。
七 初音二六頁注二参照。
八 踏歌の一行の人々もひどく緊張して。「しそして」の「そす」は、度を越える意。
九 前の行の「大将殿」を受けた書き方で、主語は髭黒。右大将の宿直所は、陰明門内南廊（『西宮記』）。（図録五参照）
一〇 一日中玉鬘に申し上げなさることは。踏歌の翌日、宿直所から玉鬘の局（承香殿）に手紙で、以下のことを催促する趣。
一一 夜になったら。

髭黒、玉鬘に早々の退出をうながす

いたく酔ひ乱れたるさまして、竹河歌ひけるほどを見れば、内の大殿の君達、四五人ばかり、殿上人のなかに声すぐれ、容貌きよげにてうち続きたまへる、いとめでたし。童なる八郎君は、むかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並びたるを、尚侍の君も、よそ人と見たまはねば、御目とまりけり。

やむごとなくまじらひ馴れたまへる御方々よりも、この御局の袖口、おほかたのけはひ今めかしう、同じものの色あひ重なりれど、ものよりことにはなやかなり。正身も、女房たちも、かやうに御心やりてしばしは過ぐいたまはましと思ひあへり。皆同じごとかづけわたす綿のさまも、匂ひ香ことに、らうらうじうしないたまひて、こなたは水駅なりけれど、けはひにぎはしく、人々心懸想しそして、限りある御饗などのことどもも、したるさま、ことに用意ありてなむ、大将殿せさせたまへりける。

宿直所にゐたまひて、日一日聞こえ暮らしたまふことは、「夜さ

（髭黒）

重々しい身分で宮廷の暮しにも馴れていられるほかの後宮の方々よりも
総じて全体の雰囲気がしゃれていて
衣裳の
格別目立ってはなやいだ感じである
玉鬘
ように晴れやかなお気持でしばらくは〔宮中で〕お過しになれたらと皆が思うのだった
玉鬘のお局
ご馳走などのお支度も
おきまりの
髭黒
準備させなさったのだった
気を配って
格別に

一二 こうした機会にと、お心が変るかもしれない宮中のお勤めは、心配なことです。宮中のはなやかさにひかれてお勤めなさることになっては困る、の意。尚侍は帝の御寝に侍するしきたりがあるので、髭黒はそれを警戒して焦慮する。

一三 玉鬘から、とかくのご返事もない。

一四 源氏が。一行隔てて「聞こえさせたまひしかば」に掛る。

一五 気ぜわしくすぐ退出なさることなく。以下「まかでさせたまへ」まで、源氏の玉鬘への言葉。

兵部卿の宮、玉鬘に歌を寄せる

一六 前に「宿直所」とあった所。「司」は、右近衛府。

一七 そこからということで取次ぎの女房が受け取ってきたので。髭黒からの手紙であるかのようによそおって使いが渡したのである。

一八 髭黒と仲よくしておられるあなたがこの上もなくやしく思われる新春であることです。「深山木」は、真面目一方の髭黒を喩えて言ったもの。

真木柱

り、まかでさせたてまつりてむ。（ご退出なさるよう取りはからいましょう）一二 かかるついでにと、おぼし移るらむ御宮仕へなむ、やすからぬ」とのみ、同じことをせめきこえたまへど、（催促申し上げなさるけれども）一三 御返りなし。さぶらふ人々ぞ、（お付きの女房たちが）「大臣（おとど）の、一四 心あわたたしきほどならで、（たまさかのご出仕なのだから）まれまれの御参りなれば、（帝のご満足がゆくように）御心ゆかせたまふばかり、（ご勅許を頂いた上で退出なさるようにと）許されありてをまかでさせたまへと、（申し上げなさったことですから）聞こえさせたまひしかば、今宵（よひ）はあまりすがすがしうや」（あまりに急なことでございましょう）と聞こえたるを、〔髭黒は〕（全くひどいと）いとつらしと思ひて、

〔髭黒〕（あれほど申し上げたのに）「さばかり聞こえしものを、（何ともままならぬ夫婦仲だ）さも心にかなはぬ世かな」とうち嘆きてゐたまへり。

兵部卿の宮、（帝のお前の管絃の御遊に出席なさっていて）御前の御遊びにさぶらひたまひて、（気もそぞろに）静心（しづこころ）なく、この御局（つぼね）のあたり思ひやられたまへば、（こちらかねてお手紙をさし上げなさった）念じあまりて聞こえたまへり。

髭黒大将は、司（つかさ）の御曹司（ざうし）にぞおはしける、一七 それよりとて取り入れたれば、しぶしぶに見たまふ。（〔玉鬘は〕）

（宮）「深山木（みやまぎ）に羽（はね）うちかはしゐる鳥の一八

またなくねたき春にもあるかな

一 あなたのことが気になってなりません、というほどの意。「百千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞ古りゆく」（『古今集』巻一春上、読人しらず）を踏まえて、歌の「鳥」の縁で言葉を飾ったもの。

二 浅くはなかったが、それにつけても、情けない心配の種になったのだが。源氏が、親代りでありながら、言い寄ったからである。

三 帝は、どうしてそのように（玉鬘に）思われなさることがあろう。玉鬘として、帝をお厭い申し上げる理由はない、の意。

四 玉鬘を尚侍として召すことを望んだこと。

五 位階昇進の喜びなども、よく分っておいでであろうと思うことがありますのに。玉鬘が正月の女叙位で三位に叙せられたらしいことが、次の帝の歌で分る。三位に叙したのは私の志だ、というほどの大意。

六 こうしたご性分だったのですね。私に対してはとにかく冷淡なのだ、というほどの意。

七 どうして、こうも逢いがたい三位の人を、心に深く思うようになったのであろう。「紫」は、三位の服色。「灰合ひ」は、紫に染める時、媒染剤として椿の灰を用いるところから言い、「合ひ」に「逢ひ」を掛ける。「思ひそめ」に「染め」を掛け、「深く」とともに「紫」の縁語。

八 結局、仲よくはなれないのでしょうか。「濃く」は「紫」の縁語。

帝、玉鬘の局に出御、歌の唱和

〔玉鬘は〕困惑して

一 さへづる声も耳とどめられてなむ」とあり。いとほしう、面赤みて、

お返事のしようもないと思っていられるところへ　帝がおいであそばした

聞こえむかたなく思ひゐたまへるに、上わたらせたまふ。

源氏

月の明きに、御容貌はいふよしなくきよらにて、ただかの大臣の

言いようもなくお美しくて

こんな美しい人がもう一人おいでだった

御けはひに違ふところなくおはします。かかる人はまたもおはしけ

源氏のお気持は　〔玉鬘は〕のだと

りと、見たてまつりたまふ。かの御心ばへは、二浅からぬも、うたて

とてもおやさしく

もの思ひ加はりしを、三これは、などかはさしもおぼえさせたまはむ。

いとなつかしげに、四思ひしことの違ひにたる怨みをのたまはするに、

〔扇で〕　顔も合せられない思いでいられる

面おかむかたなくぞおぼえたまふや。顔をもて隠して、御いらへも

〔玉鬘が〕ご返事も　（帝）どういうわけか何もおっしゃらないのですね　できないでいられるので

え聞こえたまはねば、「あやしうおぼつかなきわざかな。五よろこび

何もお聞き入れでない様子で　いらっしゃるのは

なども、思ひ知りたまはむと思ふことあるを、聞き入れたまはぬさ

仰せになって

まにのみあるは、六かかる御癖なりけり」とのたまはせて、

（帝）七

「などてかくはひあひがたき紫を

心に深く思ひそめけむ

八濃くなり果つまじきにや」と仰せらるるさま、いと若くきよらには

お美しくご立派

九 帝と申しても、源氏の大臣とどこといって違っていらっしゃるところがあろうかと、気を取り直して。

一〇 尚侍として出仕の年功もなくて、今年位階がお進みになったそのお礼の気持を詠んだものであろうか。あらかじめ次の歌に説明を加えた草子地。

一一 どのようなお積りとも存じませんでした三位の紫の色は、深い思し召しからのことでございましたのですね。

一二 おっしゃるように今からよく分って下さっても、どうしようもないことなのです。髭黒との結婚を怨んで言う。「なかべい」は「なかるべき」の音便「なかんべい」の撥音無表記の形。

一三 私の悲しみを訴えることのできる人がいるなら、その人の判断を聞いてみたい気持です。

一四 これからはもう風情のあるそぶりも帝にお見せ申すまい、男女の仲というものは厄介なものときまったものなのだ、と思うと。玉鬘の心中。

一五 玉鬘ご自身も、このままでは不相応なことも出来しかねない身の上だったと、情けなく思われるので。帝寵をこうむることになれば、異母姉妹の弘徽殿の女御などの思惑もある。

髭黒、急遽退出を計る　帝と玉鬘、歌の唱和

であられるのを
づかしきを、違ひたまへるところやあると思ひなぐさめて、聞こえ
お返事申し
上げなさる
たまふ。宮仕への労もなくて、今年加階したまへる心にや。

（玉鬘）二
「いかならむ色とも知らぬ紫を
心してこそ人は染めけれ

これからはよく心得てお仕え申し上げます
今よりなむ思ひたまへ知るべき」と聞こえたまへば、うち笑みて、
（帝）一二
「その今より染めたまはむこそ、かひなかべいことなれ。愁ふべき
人あらば、ことわり聞かまほしくなむ」と、いたう怨みさせたまふ
帝のご様子が　〔玉鬘には〕本気に迷惑に思われるので
御けしきの、まめやかにわづらはしければ、いとうたてもあるかな
ほんとに情けない困ったことだと
とおぼえて、をかしきさまをも見えたてまつらじ、むつかしき世の
一四
生真面目な態度で控えていられるので　〔帝は〕お思い通りの色
癖なりけりと思ふに、まめだちてさぶらひたまへば、えおぼすさま
めいた言葉もお口になさることができなくて　そのうち次第に宮仕えにも馴染むだろう
なる乱れごともうち出でさせたまはで、やうやうこそは目馴れめと
おぼしけり。

髭黒
大将は、〔帝が〕かくわたらせたまへるを聞きたまひて、いとど静心なけ
〔玉鬘を〕せき立てなさる
一五
れば、急ぎまどはしたまふ。みづからも、似げなきことも出で来ぬ

一 玉鬘を退出させなさる段取りは。「父大臣など、かしこくたばかりたまひてなむ」に掛る。

二 それなら仕方がない。これに懲りて、二度と出仕させない人があっては困るから。髭黒のこと。

三 人に先を越されて、その髭黒のご機嫌を取り結び、顔色をうかがわねばならぬとは。

四 昔の誰やらの話も引き合いに出したいような気がすることだ。『河海抄』は、時平に女を奪われた平定文のこととする。「大納言国経の朝臣の家にはべりける女に、平定文いと忍びてかたらひはべりて、行末まで契りはべりけるころ、この女にはかに贈太政大臣に迎へられてわたりはべりにければ、文だにも通はすかたなくなりにければ、かの女の子の五ばかりなるが、本院の西の対に遊びありきけるを呼び寄せて、母に見せたてまつれとて腕に書きつけはべりける　平定文、昔せしわがかねごとの悲しきはいかに契りし名残なるらむ　返し、読人しらず、うつつにて誰契りけむ定めなき夢路にまどふ我は我かは」（『後撰集』巻十一恋三）

五 髭黒の妻になった私は、もう昔の私ではない、身の上は決っているのだと思っているのに、の意。前引の女の返歌の言葉によるか。

六 尚侍の参内、退出には輦車を用いる。輦車は、桐壺一六頁注一、一巻図録一一参照。

七 こうひどく厳重な付ききりの守りは、やりきれない。髭黒が近衛の大将であるのに引っ掛けて「近き守り」という。

べき身なりけりと心憂きに、落着いてもいらっしゃれずえのどめたまはず、一まかでさせたまふべきさま、つきづきしきことづけども作り出でて、父大臣など、内大臣かもっともらしい口実をいろいろと作り出してしくたばかりたまひてなむ、御暇許されたまひける。「さらば。まく手立てをお考えになって（帝）二物懲して、また出だし立てぬ人もぞある。いとこそからけれ。人よも深くあなたを望んだ私の思いだがり先に進みにし心ざしの、三人に後れて、けしき取り従ふよ。四昔のなにがしが例も引き出でつべきここちなむする」とて、まことにいと〔帝は〕本心からまことに残念だとくちをしとおぼしめしたり。噂に聞いておられたよりも実際に見ると格段に美しいのを聞こしめししにもこよなき近まさりを、はじめからお召しになろうというお積りがなかったとしてもはじめよりさる御心なからむにてだにも、御覧じ過ぐすまじきを、なおさらとてもやしく残念にまいていとねたう、飽かずおぼさる。されど、ひたぶるに浅きかたに嫌われることのないようにと大層情愛深げにこれからのことを約束なさって親しませようと に思ひうとまれじとて、いみじう心深きさまにのたまひ契りてなつなさるにつけても〔玉鬘は〕恐れ多くてけたまふも、五かたじけなう、われはわれと思ふものをとおぼす。六御輦車寄せて、源氏方内大臣方それぞれのお世話役たちがこなたかなたの御かしづき人ども、心もとながり、大将も、いとものむつかしうたち添ひ騒ぎたまふまで、ひどく目障りなほどあたりをうろうろしてせきたてなさる時まで〔帝は〕側をお離れになれない（帝）七離れず。「かういときびしき近き守りこそむつかしけれ」と憎ませ

八 夫の髭黒に邪魔立てされたら、あなたは、もうこの程度のほんのちょっとの参内も叶わないのでしょうか。「九重」は、宮中の意と、幾重にもの意を掛ける。「かばかり」は、この程度の意と、「梅の花」の縁語としての「香ばかり」を掛ける。

九 格別のこともないお歌だが。以下、草子地。

一〇 いとしいあなたのお側で一夜を過したいところだが。「春の野に菫摘みにと来しわれぞ野をなつかしみ一夜寝にける」（『古今六帖』六、菫。『万葉集』巻八、赤人）

一一 そうさせたくないであろう人（髭黒）も、わが身のつらさから思いやられて気の毒に思われることだ。「抓み」に前引赤人の歌の「摘み」が響く。

一二 ほのかなお便りだけは風にでもおことづけ下さいませ、ほかの後宮の方々の美しさに肩を並べるべくもない私ではございますが。「かばかり」は、帝の歌の言葉をそのまま受けたもの。

一三 髭黒は、このまま今晩、（玉鬘を）ご自分のお邸に引き取るおつもりだったが。この心積りのことは二〇九頁にも見える。

一四 事前に内大臣に申し上げたのでは、承諾が得られそうにないので。

一五 （玉鬘と）別々では。玉鬘を六条の院に帰さぬ口実。

髭黒、玉鬘を私邸に退出させる

りあそばす
たまふ。

（帝）八 九重に霞隔てば梅の花
ただかばかりも匂ひ来じとや

〔帝の〕お姿やご様子を拝しながらうかがう時は
九 異なることなきことなれども、御ありさまけはひを見たてまつるほどは、をかしくもやありけむ。（帝）一〇「野をなつかしみ明いつべき夜を、
趣も深かったことであろうか
一一 惜しむべかめる人も、身を抓みて心苦しうなむ。いかでか聞こゆべ
心を痛めていられるのも　大層恐れ多いと　どうお便りしたらよいのだろう
き」とおぼしなやむも、いとかたじけなしと見たてまつる。
〔玉鬘は〕

（玉鬘）一二 かばかりは風にもつてよ花の枝に
立ち並ぶべきにほひなくとも

冷たくはあしらわない様子を　いとしく〔帝は〕
さすがにかけ離れぬけはひを、あはれとおぼしつつ、
後ろ髪を引かれる思いでお帰りあそばした
かへりみがちにてわたらせたまひぬ。

一三 やがて今宵、かの殿にとおぼしまうけたるを、一四かねては許されあるまじきにより、漏らしきこえたまはで、「にはかにいと乱り風の
お打ち明けもなさらないで　（髭黒）　ひどい風邪で
苦しゅうございますので　気楽な自邸で静養しようと思いますがその間
一五 なやましきを、心やすき所にうち休みはべらむほど、よそよそにて

一 軽々しいようでもあろうかとお思いになったが。「儀式」は、しかるべき格式。

二 よいようになさるがよい。元来が、私の自由にはならぬ人のお身の上だから。源氏に気兼ねする気持から言う。

三 何の不都合なことがあろう。髭黒としては、もう源氏の意向など意に介する必要はない、という意味の草子地。

四 思ってもみなかった、髭黒との一緒の暮しを、何という身の上かとお嘆きになるが。「須磨の海士の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず）による。

五 髭黒は、この女を盗んで来たらこんな気持もしようかとお思いになって、とてもうれしく、安心した。

六 髭黒がひどくお怨み申し上げなさるのも。「きこえさせ」は、帝に対する敬語。玉鬘に向ってくどくど愚痴をこぼす趣。

七 お話にもならぬよそよそしい態度で。

八 式部卿の宮家でも。以下、二三〇～二三一頁参照。

九 源氏。「さても」以下、髭黒の仕打ちに対する思い。

一〇 全くこうまで思い切ったことをしようとは思いもかけないで。

二月、源氏、玉鬘を偲ぶあまり、ひそかに文を贈る

髭黒の安堵

はいとおぼつかなくはべらむを」と、おいらかに申しないたまひて、（とても気がかりでございましょうから）（おだやかな口実をおこしらえになって）やがてわたしたてまつりたまふ。（そのまま〔自邸に〕お移し申し上げなさる）父大臣、（おとど）にはかなるを、（急なことなので）儀式なき（その程度のことにくちばしを入れて邪魔をする）やうにやとおぼせど、（無理に）あながちに、さばかりのことを言ひさまたげむも、（髭黒が気を悪くするだろうとのも）人の心おくべしとおぼせば、（内大臣）「ともかくも。もとより進退（ご返事申し上げなさった）ならぬ人の御ことなれば」とぞ、聞こえたまひける。

（源氏は）六条殿ぞ、（全く突然のことで）いとゆくりなく本意なしとおぼせど、（不本意に）などかはあらむ。（玉鬘）女も、塩やく煙のなびきけるかたを、あさましとおぼせど、盗みもて行きたらましとおぼしなずらへて、いとうれしくここちおちゐぬ。（あの時帝が玉鬘の局においであそばしたことを）かの入りゐさせたまへりしことを、いみじう怨じきこえさせたまふも、（〔玉鬘は〕気に入らず）心づきなく、（いかにもつまらぬ人だと思われて）なほなほしきここちして、世には心解けぬ御もてなし、いよいよけしきあし。（ますますご機嫌斜めの趣だ）かの宮にも、（あれほどきついことをおっしゃったものの）さこそたけうのたまひしか、（〔今は〕ひどく困っておられるが）いみじうおぼしわぶれど、（〔髭黒は〕全く音沙汰もない）絶えておとづれず。思ふことかなひぬる御かしづきに、（〔髭黒は〕玉鬘のお世話に）明け暮れいとなみて過ぐしたまふ。

二月にもなりぬ。大殿は、（おほいとの）さてもつれなきわざなりや、（それにしても無愛想な仕打ちであることよ）いとかう

一一 前世からの縁などというものは、軽く見てはならぬものではあるけれども。玉鬘が髭黒のものになったのは、人の力の及ばぬ、並々ならぬ宿縁のいたすところと承知してはいるが、の意。以下、源氏の心中。

一二 寝てもさめても、玉鬘の姿が幻のように目に浮ぶ思いがなさる。

一三 髭黒は、風流で愛敬があるといったところが少しもない人なのだが、そんな人と一緒に暮している玉鬘に。以下、源氏の心中。

一四 玉鬘の侍女。もと夕顔の侍女。玉鬘に長谷寺で邂逅して、玉鬘の六条の院移転の世話をし（三巻玉鬘二九九頁以下）、玉鬘づきの侍女となった（胡蝶四二頁）。髭黒邸へも玉鬘とともに移っている趣。

一五 しとしとと降ってのどやかなこの春雨に、あなたは、昔馴染みのこの私を、どのように思っていて下さいますか。「ふるさと人」は、玉鬘のもといた六条の院の私、の意。

一六 所在ない思いがするにつけても、それに輪をかけて。以下、手紙の文面。

真木柱

際々しうとしも思はで、たゆめられたるねたさを、人わろく、すべて御心にかからぬをりなく、恋しう思ひ出でられたまふ。宿世など いふもの、おろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかしと、起き臥し面影にぞ見えたまふ。

（油断させられたくやしさが）（体裁も悪く）（どうにもお心から離れる時とてなく）（〔玉鬘が〕）（自分のどうにも思い切れぬ気持から）（こうして自ら求めての物思いに苦しむのだと）

一三 大将の、をかしやかに、わららかなる気もなき人に添ひゐたらむに、はかなきたはぶれごともつつましう、あいなくおぼされて、念じたまふを、雨いたう降りて、いとのどやかなるころ、かやうのつれづれもまぎらはしどころにわたりたまひて、かたらひたまひしさまなどの、いみじう恋しければ、御文たてまつりたまふ。右近がもとに忍びてつかはすも、かつは思はむことをおぼすに、何ごともえ続けたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

（ちょっとした色めいた手紙をやるのも気のひけるはかなきたはぶれごともつつましう、あいなくおぼされて、念じたまふを、雨いたう降りて、いとのどやかなるころ、かやうのつれづれもまぎらはしどころにわたりたまひて、かたらひたまひしさまなどの、いみじう恋しければ、御文たてまつりたまふ。右近がもとに忍びてつかはすも、かつは思はむことをおぼすに、何ごともえ続けたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。）（不似合いなことと思われなさって）（我慢して）（いられるが）（このような所在なさも）（紛らわすに格好の所として）（親しくお話なさった時の玉鬘の様子）（一方では右近がどう思うかと気になさるので）（何もくわしくはお書きになれずただ相手の推察にまかせたお書きぶりなのだった）

（源氏）一五

かきたれてのどけきころの春雨に
ふるさと人をいかに偲ぶや

一六

つれづれに添へても、うらめしう思ひ出でらるること多うはべる

を、いかでかは聞こゆべからむ。（どうしたらお話することができるでしょう）

などあり。

隙（ひま）に忍びて見せたてまつれば、（玉鬘は）うち泣きて、わが心にも、ほど経（ふ）るままに思ひ出でられたまふ御さまを、（時がたつにつれて思い出されなさる）（源氏の）お姿を（正面切って）まほに、「恋しや、いかで見たてまつらむ」などは、えのたまはぬ親にて、（三）げにいかでかは対（たい）面もあらむとあはれなり。時々むつかしかりし御けしきを、（どうしてよいか応対に困ったお振舞を）心づきいとお思い申し上げたことなどはなう思ひきこえしなどは、（右近にもお打ち明けになっていないことなので）この人にも知らせたまはぬことなれば、（お胸の内だけでいろいろお思いだが）心ひとつにおぼし続くれど、右近（四）は、ほのけしき見けり。いかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。御返り、（お返事を）聞こゆるもはづかしけれど、（申し上げるのも気のひけることだが）おぼつかなくやは、（さし上げぬわけにもいかないと思って）とて、書きたまふ。

（玉鬘）（六）ながめする軒のしづくに袖ぬれて
うたかた人を偲（しの）ばざらめや

（七）ほどふるころは、げにことなるつれづれもまさりはべりけり。（八）あなかしこ。

一　髭黒のいない隙に、右近がこっそりこのお手紙をお見せすると。

二　「お慕わしい、何としてでもお目にかかりたい」などとは、おっしゃることのできない親なのだから。実の親ではないから、の意。

玉鬘の返歌

三　ほんとに、どうしてお目にかかることもできようかと、もの悲しい。源氏の手紙に「いかでかは聞こゆべからむ」とあったのを受けて、「げに」という。

四　右近は、実は、うすうすお二人の仲は察していた。

五　（しかし）源氏と玉鬘の間にどうしたことがあったのだろうと、今に腑に落ちぬ思いなのだった。

六　長雨の降る軒の雫に―悲しみの涙に―袖を濡らしつつ、どうしてあなたのことを恋しく思い出さないことがありましょうか。「ながめ」に、「長雨」（源氏の歌の「春雨」に応ずる）と「ながめ」（悲しみにふけること）を掛ける。「うたかた」に、水の泡（「長雨」「軒のしづく」の縁語）の意と、かりそめにも、の意を掛ける。

七　久しくお目にかかりませぬ今日この頃は、仰せのように、格別所在ない思いもつのることでございました。『河海抄』に「君見ずて程のふるやの廂には逢ふことなしの草ぞ生ひける」（『新勅撰集』巻十五恋五、題しらず、読人しらず）を引く。

八　謹んで申し上げます。手紙の結びの言葉。

九　源氏は、涙も溢れんばかり恋しく思われなさるが。「雨止まぬ軒の玉水数知らず恋しきことのまさるころかな」（『後撰集』巻九恋一、兼盛。『河海抄』に引く。前の玉鬘の歌の「軒のしづく」の縁で「玉水」という。

源氏の悲しみ

一〇　あの昔の、朧月夜を、朱雀院の母后（弘徽殿の大后）が無理に逢わせないようになさった時のことなどお思い出しになるが。朧月夜も尚侍であったし（二巻賢木一四四頁、今、玉鬘も尚侍である。

一一　色を好む人は、自分から求めて物思いの絶えないものなのだった。以下、源氏の反省。

一二　もう自分にはふさわしくない恋の気苦労の種なのだと、気持を冷ますようとなさるがそれもできかねて。「つま」は、端緒の意。

一三　次の行に「あづまの調べ」とあり、和琴である。

一四　玉鬘がくつろいでお弾きになった爪音が、思い出されなさる。（常夏九一頁以下参照）

一五　東の調べを軽く弾いて。「東の調べ」は未詳。和琴の調子の一つともいう。「すががく」は、和琴の奏法の一つ。軽い、即興的な奏法。

一六　「鴛鴦　鶏　鴨さへ来居る　原の池の　や　玉藻は真根な刈りそや　生ひも継ぐがに　や　生ひも継ぐがに」（風俗歌「鴛鴦」）

帝の恋情

一七　「立ちて思ひ居てもぞ思ふ紅の赤裳垂れ引き去にし姿を」（『古今六帖』五、裳。原歌『万葉集』巻十一、「赤裳下引」）

と、ゐやゐやしく書きなしたまへり。

〔文を〕引き広げて、玉水のこぼるるやうにおぼさるるを、人も見ば、うたてあるべしと、つれなくもてなしたまへど、胸に満つここちして、

（人が見たら外聞が悪かろうと）（胸がいっぱいになる思いがして）

一〇　かの昔の、尚侍の君を、朱雀院の后の切に取り籠めたまひしをりなどおぼし出づれど、さしあたりたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。好いたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりやと、さましわびたまひて、御琴掻き鳴らして、なつかしう弾きなしたまひし爪音、思ひ出でられたまふ。あづまの調べをすががきて、「玉藻はな刈りそ」と、歌ひすさびたまふも、恋しき人に見せたらば、あはれ過ぎすまじき御さまなり。

（平静をよそおっていらっしゃるが）（今日の前のことだからであろうか）（玉鬘のことは喩えようなくお心にかかるのであった）（気苦労などしようか）（興に任せてお歌いになるのも）（恋しいあの玉鬘に見せたなら）（心を動かされるに違いないご様子である）

内裏にも、ほのかに御覧ぜし御容貌ありさまを、心にかけたまひて、「赤裳垂れ引き去にし姿を」と、憎げなる古言なれど、御言種になりてなむ、なかめさせたまひける。御文は、忍び忍びにありけ

（帝も）（〔玉鬘の〕）（耳馴れない）（古歌だが）（お口癖になって）（物思いにふけっていられた）（〔帝の〕）（人目を忍んで時々あるのだ）

一 玉鬘は、わが身の上を情けないものとしみじみお思いになって。髭黒の自邸に引き取られてしまった今の身の上をいう。

二 晩春である。

三 藤や山吹の、美しい夕明りに映えた風情をご覧になるにつけても。玉鬘の美しさは八重山吹にたとえられていた（野分一三九頁参照）。

四 紫の上の春の御殿のお庭は見限って、こちら（東北の町の西の対。玉鬘のいた御殿）にお越しになって、庭をご覧になる。

五 淡竹を植え込んだ柵に。「前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく」（三巻少女二七四頁）とあった。

六 「梔子の色に衣を染めしより言はで心にものをこそ思へ」（『古今六帖』五、くちなし）。「梔子」の名義は、口無し。山吹の花の黄色から梔子の実で染めた濃い黄色を連想して、この歌を口ずさむ。

七 心外なことにあの女との仲は隔てられてしまったが、心の中で恋しく思っていることだ。「井手の中道」は、山吹の名所井手の里（山城の国、綴喜郡井手町）を通る道。

八 「夕されば野辺に鳴くてふ顔鳥の顔に見えつつ忘られなくに」（『古今六帖五、顔鳥）

九 鴨の卵。

一〇 蜜柑や橘などのように取りつくろって。着色したり、細工したのであろう。

三月、源氏、玉鬘を偲び歌を贈る　髭黒、返歌

こうした軽い気持のお歌のやりとりも不似合いなことと思いなので

一 身を憂きものに思ひしみたまひて、かやうのすさびごとをもあったり。

やはり

うちとけたお返事も申し上げなさらない

いなくおぼしければ、心とけたる御いらへも聞こえたまはず。なほ

あの余人に似ない源氏のお心配りを

何かにつけて深くありがたいとお思いになった

かのありがたかりし御心おきてを、かたがたにつけて思ひしみたまへる御ことぞ、忘られざりける。

忘られないのだった

お気持が

二 三月になりて、六条殿の御前の、三 藤、山吹のおもしろき夕ばえを

六条の院

お庭

見たまふにつけても、まづ見るかひありてゐたまへりし御さまのみ

見るかいのある美しい姿でいらっしゃった〔玉鬘の〕

おぼし出でらるれば、春の御前をうち捨てて、こなたにわたりて御

四

覧ず。呉竹の籬に、わざとなら咲きかかりたるにほひ、いとおもし

五

〔山吹が〕自然に花を咲きかからせている美しさが

ろし。「色に衣を」などのたまひて、

六

（源氏）

「思はずに井手の中道隔つとも

言はでぞ恋ふる山吹の花

おっしゃっても

こんなふうにさすがに玉鬘を

顔に見えつつ」などのたまふも、聞く人なし。かくさすがにもて離

八

諦めた気持を

今となってはお持ちなのだった

れたることは、このたびぞおぼしける。げにあやしき御心のすさび

ほんとにおかしなおたわむれ心であること

とです

なりや。九 かりの子のいと多かるを御覧じて、一〇 柑子、橘などやうにま

一一 目立たぬようにしてさし上げなさる。「かりの子」であることが目立たぬように、の意。

一二 あなたお一人のお考えだけでもないように聞いておりますので。髭黒が許可しないらしい、の意。

一三 せっかく同じ巣で孵った（わが家で育った）かいもなく、お姿が見えぬことです、一体どんな人が手に握っているのでしょう。髭黒が玉鬘を手放さぬことをいう。「かひ」は、卵。「かひ」（効）を掛ける。

一四 どうしてそんなにきびしく守ることがあるのだろう、などと。

一五 まして（実の親でもないのに）、どうしてこの源氏の大臣が、折にふれ、諦められずに恨み言をおっしゃるのだ。

真木柱

ぎらはして、わざとならずたてまつれたまふ。御文は、あまり髭黒が気にしても困るなどとお思いになってあまり人もぞ目立つるなどおぼして、すくよかに、そっけなく

（源氏）お目にかからぬ

おぼつかなき月日も重なりぬるを、思はずなる御心外なおあしらいだとお恨み申し上げていもてなしなりと

ますがそれも

恨みきこゆるも、御心ひとつにのみはあるまじう聞きはべれば、

格別の機会でもないことには

ことなるついでならでは、対面の難からむを、残念に思っております くちをしう思ひたまふる。

親のようなお書きぶりで

など、親めき書きたまひて、

一三 おなじ巣にかへりしかひの見えぬかな いかなる人か手ににぎるらむ

一四 などかさしもなど、心やましうなむ。おもしろからず思われます

髭黒

などあるを、大将も見たまひて、うち笑ひて、「女は、実の親のお邸にまことの親の御あたりにも、おいそれと気軽に出かけてお会い申し上げなさることはたはやすくうちわたり見えたてまつりたまはむこと、ついでなくてあるべきことにあらず。一五 まして、なぞ、この大臣の、をりをり思ひ放たず恨み言はしたまふ」と、つぶやくも、憎し

適当な機会がなくてはなさるべきことではありません

ぶつぶつ言うのも憎らし

一 お返事を、私はとても申し上げられません。

二 「では私がお返事申し上げよう」と、代りを買って出るのも、（玉鬘としては）見るに見かねる思いである。玉鬘の気持を代弁した草子地。「まろ」は、親しい者同士の間で使う自称の代名詞。

三 私の邸に隠れ住んで、お子の数にも入らぬしがない女を、どちらに取り返してよいものでしょうか（お返し申すわけにはまいりません）。「かりの子」に「仮の子」の意を掛け、「取り」に、「かりの子」の縁語としての「鳥」を掛ける。

四 ご機嫌斜めやのおもむきに恐懼いたしまして。「などかさしもなど、心やましうなむ」という文面に応じたもの。

五 もの好きないたしようでございますが……。歌など詠んだことを弁解する気持。

六 内心では、髭黒がこんなふうに玉鬘をわがもの扱いしているのを、とてもつらくお思いになる。

髭黒一家の動静　真木柱の姫君の孤独

七 男のお子たちは、前と変らず大切になさっておられるので。（二三一頁参照）

いと〔玉鬘は〕と聞きたまふ。

「御返り、ここにはえ聞こえじ」（玉鬘）一と、書きにくくおぼいたれば、書きづらいとお思いなので

「まろ聞こえむ」（髭黒）二と代るも、かたはらいたしや。

「巣隠れて数にもあらぬかりの子を」（髭黒）三

いづかたにかは取り返すべき

四よろしからぬ御けしきにおどろきて。五すきずきしや」と聞こえたまへり。「この大将の、（源氏）髭黒かかるはかなしごと言ひたるも、こんな風流ぶった歌など詠んだのも まだこそ聞かざりつれ。めづらしう」とて、笑ひたまふ。六心のうちには、かく領じたるを、いとからしとおぼす。

今まで聞いたこと　珍しいことだ

かのもとの北の方は、月日隔たるままに、あさましともの思ひ沈み、いよいよ呆け痴れてものしたまふ。世話は　正体もない様子でいられる　万事につけてこまごまとご配慮になって　あまりにひどい仕打ちと悲観して

らひ、何ごとをもくはしうおぼしおきて、君達をば変らず思ひかしづきたまへば、えしもかけ離れたまはず、〔北方は〕縁を切っておしまいになれず　暮し向きの面で髭黒を頼りにすること　髭黒の〔北の方への〕ご生活上のお　大将殿のおほかたのとぶ

まめやかなるかたの頼みは、同じことにてなむものしたまひける。とは　以前と同様でいらっしゃるのだった　〔髭黒は〕真木柱姫君をぞ、堪へがたく恋

八 式部卿の宮家のどなたもが、ひどくお恨み申して、ますます（自分と父髭黒の間を）隔てるようにばかりお仕向けなので。

九 男のお子たちは、しょっちゅう髭黒邸に親しく参上しては。前の二三一頁で、髭黒は宮邸から二人を自邸に連れ帰っている。母北の方も、「なかなか男君たちは、えさらずまうで通ひ見えたてまつらむに……」（二三四頁）と言っている。

一〇 不思議に、男にも女にも、人に物思いをさせる尚侍の君でいらっしゃることだ。草子地。男では、源氏、螢兵部卿の宮、冷泉帝など、女では、もとの北の方、大北の方、真木柱の姫君など。

一一 とてもかわいらしい赤子の世話をなさるようにもなられたので。髭黒の第一子を産み、結婚生活も安定してきた趣。

一二 その時のご様子などは。産 **十一月、玉鬘、男子出産 柏木の思い**

一三 養などのことをいう。父内大臣も、こうした成行きを申し分ない（玉鬘の）ご宿運だと満足にお思いになる。

一四 内大臣が特別大切にしていられるお子たち（弘徽殿の女御など）にも、玉鬘はお美しさの点などではひけをお取りにならない。

一五 内大臣の長子、柏木。（藤袴一九四頁以下参照）

ひきこえたまへど、〔北方は〕どうしてもお会わせ申し上げなさらない絶えて見せたてまつりたまはず。若い御心のうちに、この父君（髭黒）を、誰も誰も許しなう恨みきこえて、いよいよ隔てたまふことのみまされば、心細く悲しきに、男君たちは、常に参り馴れつつ、尚侍（玉鬘）の君の御ありさまなどをも、おのづからことにふれ（何かにつけて）〔姫君に〕てうち語りて、「まろらをも（私たちをも）、〔玉鬘は〕かわいがりやさしくして下さいます らうたくなつかしうなむしたまふ。〔姫君は〕明け暮れ（風流なことばかりなさってお暮しでいられます）をかしきことを好みてものしたまふ」など言ふに、うらやましう、かやうにてもやすらかにふるまふ身ならざりけむを嘆きたまふ。一〇あやしう、男女（をとこをんな）につけつつ、人にものを思はする尚侍の君にぞおはしける。

その年の十一月に、一一いとをかしき児（ちご）をさへ抱（いだ）き出でたまへれば、髭黒大将も、（申し分なく結構なことだと）思ふやうにめでたしと、（そのお子を）大事になさることこの上もない もてかしづきたまふこと限りなし。一二そのほどのありさま、言はずとも思ひやりつべきことぞかし。（お話ししなくても十分に想像のつくことです）父大臣（おとど）も、おのづから思ふやうなる御宿世（すくせ）とおぼしたり。一四わざとかしづきたまふ君達（きむだち）にも、御容貌（かたち）などは劣りたまはず。一五頭（とう）の中将も、この

一 それでも諦めきれないような様子を時々は見せながら。玉鬘の懸想人の一人であったからである。

二 尚侍として出仕されたからには、（同じことなら）そのかいあって帝の御子をお産みだったらよかったのに、と。

三 （もし御子をお産み申したのだったら）どんなに名誉なことであったろう、と。

四 尚侍としての内侍所の公務は、（自宅で）しかるべく取りはからったりしているが。

五 それも当然なことと申すべきです。草子地。

六 そういえば。話題を転ずる時の慣用句。

七 尚侍就任を希望したお方も。近江の君のこと。（行幸一七七頁参照）

八 そうした賤しい生れの者の性としてよくあることなので。

九 弘徽殿の女御。

一〇 もうお勤めに出てはいけない。近江の君は弘徽殿の女御の許に出仕している（常夏一〇五頁以下、行幸一七六頁以下参照）。

一一 くつろいだ感じの拍子を打ち添えて。正式には、笏拍子（笏を二つに割ったような形の物を打つ）であるが、扇か何かで軽く拍子を打つのであろう。

近江の君の近況　夕霧に懸想して歌を詠みかける

尚侍の君を、（玉鬘）いとなつかしきはらからにて、（心から親しみをおぼえる姉弟として）むつびきこえたまふものから、（お付き合い申し上げなさってはいるものの）さすがなるけしきうちまぜつつ、宮仕へに、かひありてもの（中将）したまはましものをと、この若君のうつくしきにつけても、「今まで皇子たちのおはせぬ嘆きを見たてまつるに、いかに面目あらまし」と、（帝の）お嘆きを拝しているのに（玉鬘腹の若君がかわいらしいのにつけても）あまりごとをぞ思ひてのたまふ。（虫のよすぎることを思い描いておっしゃる）公事は、あるべきさまに知りなどしつつ、参りたまふことぞ、（ご自身参内なさることは）やがてかくてやみぬべかめる。（このまま実現を見ないで終るようだ）さてもありぬべきことなりかし。

六 まことや、かの内の大殿の御女の、尚侍のぞみし君も、さるものの癖なれば、（色気づいて）色めかしう、（うろうろ男をあさる気持まで出て来て）さまよふ心さへ添ひて、もてわづらひたまふ。（いつかは軽はずみな失敗をになる）女御も、つひにあはあはしきこと、（この近江の君がしでかすだろうと何かにつけて）ともすれば御胸つぶしたまへど、大臣の、「今はなまじらひそ」と、制しのたまふをだに聞き入れず、（お止めになるのにも耳を貸さず）まじらひ出でてものしたまふ。（〔女御の許に〕堂々と出仕していられるした時であったか）かなるをりにかありけむ、殿上人あまた、（評判のすぐれた人たちばかり）おぼえことなる限り、この女御の御方に参りて、ものの音など調べ、（楽器を奏し）なつかしきほどの拍子

一二 秋の夕暮の心をそそる風情に。「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」（『藤原義孝集』。『和漢朗詠集』巻上秋、秋興）によるか。前に、冬十一月に玉鬘の出産のことを書いたのは、玉鬘の消息を前に引き続いてまとめて書いたもの。これは時期的にややさかのぼる秋の話という体。

一三 いつもに似ず、くだけた冗談などを女房たちと交わしていられるのを。真面目な夕霧も、秋の夕の雰囲気に気持をそそられた趣。「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり」（『古今集』巻十一恋一、題しらず、読人しらず）

一四 これはどうしたことです。大変だ、というほどの気持。

一五 ひやひやさせるようなことを口になさるのではないかしら。「あふなき」は、「奥なき」。

一六 あなたと雲居の雁の仲がまだはっきり決っていないのでしたら、私が代りにお近づき申しましょう、の意。「おき（沖）つ舟」は、夕霧をたとえる。「よるべ」は、寄り所、「よるべなみ」（寄り所がないので）に「波路」を言い掛ける。雲居の雁も自分も同じ内大臣の娘だから、というつもりの歌。

一七 いつまでも同じ雲居の雁を恋い慕っていられるおつもりですか。まあ、だらしのない。「堀江漕ぐ棚なし小舟漕ぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず）による。

一八 寄るべもないので風のもてあそぶ舟人のような私打ち加へて遊ぶ。（演奏する）一三 秋の夕のただならぬに、宰相の中将も寄りおはして、（夕霧）（御簾の前に）例ならず乱れてものなどのたまふを、（女房たちが）人々めづらしがりて、「なほ人よりことにも」（やはりすぐれたお方だこと）と、（ほめしていると）めづるに、この近江の君、（女房たち）人々のなかを押し分けて出でゐたまふ。（女房）「あなうたてや。（あら困ったこと）こはなぞ」（奥に）と引き入るれど、（出張っているので）いとさがなげににらみて、（いかにも意地悪げに）張りゐたれば、（事面倒と思って）わづらはしくて、（つつき合っていると）「あふなきことやのたまひ出でむ」（女房）一五 とつきかはすに、（この世にも稀な堅物）この世に目馴れぬまめ人をしも、（近江君）「これぞな、（このお方）これぞな」（このお方）とめでて、（小声で騒ぎ立て）ささめき騒ぐ声が、（はっきり聞えるし）いとしるし。（女房たちは困りきっているのに）人々いと苦しと思ふに、（声はまことにはっきりした調子で）声いとさはやかにて、

（近江君）「おきつ舟よるべ波路にただよはば
　　棹さし寄らむ泊り教へよ

一七 棚なし小舟漕ぎかへり、同じ人をや。あなわるや」と言ふを、いと（審に堪えず）あやしう、この御方には、かう用意なきこと聞こえぬものをと思ひ（はしたない者がいる噂も聞かないのにと思いめぐらしてみると）（あの評判の近江の君だったと）まはすに、この聞く人なりけりと、をかしうて、

（夕霧）一八 よるべなみ風の騒がす舟人も

も、思ってもいない人に心変りはいたしません。「よるべなみ」の「なみ」に「波」を響かす。「磯づたひ」は、磯から磯へと舟をやること。一九ということで、近江の君にとってずいぶんそっけないご返歌のようだ、とか……。その場に居合せた女房の感想を伝える趣で巻を閉じる技巧。

思はぬかたに磯づたひせず
とて、[一九]はしたなかめりとや。

梅枝（むめがえ）

源氏三十九歳の春、明石の姫君の裳着とそれに続く入内の準備に源氏は善美を尽した。正月の末、薫物の調合を思い立ち、六条の院の婦人方や朝顔の前斎院に、伝来の名香を配って調合を依頼する。源氏自身も紫の上と居を離して、おのおの秘法を競った。二月十日、紅梅の花盛りに、兵部卿の宮が訪れ、人々の調合した薫物競べが行われた。家々に伝わる秘法の上に、おのが好みを加えた婦人方の薫香の優劣は、さすがの兵部卿の宮も判じかねるほどであった。当夜、宴遊が行われ、内大臣の子息弁の少将が催馬楽「梅が枝」を歌って、興を添えた。巻名はこれに由来する。翌日、中宮御殿で明石の姫君の裳着の儀式が行われた。中宮の腰結役は前例がなく、その光栄に源氏は姫君の将来の栄達を深く期するのであった。

二月二十余日、東宮ご元服。明石の姫君に憚って、入内を遠慮する他家の姫君たちのために、源氏はわが娘の入内を四月に延期する。

その間、さらに入内の準備が進められ、名筆の草子が集められた。源氏自身も筆を染め、紫の上を相手に仮名を論じたりする。兵部卿の宮は、この時も、源氏とともに集まった草子を披見して、批評し合った。

一方、内大臣は、こうした噂に気が気ではない。源氏も自分の体験をもとに夕霧に結婚についてこまごまと教訓する。真面目な夕霧は、もとより他の女に心を移すつもりはないが、雲居の雁は、夕霧の縁談の噂などを耳にして、その文にも怨みの歌を返すのであった。

一　明石の姫君の裳着の儀（女子の成人式）。明石の姫君はこの時十一歳。
二　朱雀院上皇の皇子。三巻澪標一四頁に立坊。母は承香殿の女御。この時十三歳。
三　ご元服の儀。男子の成人式。垂れ下げていた髪を髻に結い上げて冠を着ける。

源氏、明石の姫君の裳着、入内に備え、薫物を合わす

四　正月の月末なので、公私ともに事もなくのんびりしている頃に。新年の諸行事や、任官叙位の儀も一段落した頃である。
五　源氏は、薫香（種々の香を合せた練香）を調合なさる。入内に際し、持参する用意である。
六　大宰の大弐。大宰府の次官。従四位下相当。系図不詳。長官は赴任せず、大弐が実務を行うことが多い。中国渡来の品物などを入手しやすい地位である。
七　練香の材料。香木（沈、白檀など）や麝香など。
八　錦は、数種の染糸で模様を織り出した厚手の絹。綾は、斜めの織り筋のある絹。いずれも中国が本場。
九　身近なお道具類の覆いや下敷き。
一〇　座布団などの縁。（三巻図録一一参照）
一一　渤海（八世紀から十世紀頃、朝鮮半島の北部にあった国）の人。一巻桐壺三一～三二頁に源氏の相を見、贈り物をした相人であろう。約三十年前のこと。
一二　金を織り付けた緋色の錦。金襴の類。
一三　入念にそれぞれの用向きに似合ったものを見計らわれて（覆いや敷物などに）仕立てさせなさって。

御裳着のことおぼしいそぐ（ご準備なさる〔源氏の〕）御心おきて（お心くばりは）、世の常ならず（並々でない）。春宮も同じ二月に、御かうぶりのことあるべければ（ある予定だから）、やがて御参りもうち続くべきにや。正月の晦日なれば、公私のどやかなるころほひに、たきもの合はせたまふ。大弐のたてまつれる（献上した〔舶来の〕）香ども（〔旧邸の〕）御覧ずるに、なほいにしへのには劣りてやあらむとおぼして（やはり昔の香には劣っているでもあろうかと）、二条の院の御倉あけさせたまひて、唐のものども（中国渡来の品々を〔六条院に〕）取りわたさせたまひて、御覧じくらぶるに、「錦、綾なども、なほ古きものこそなつかしうこまやかにはありけれ」とて、近き御しつらひのものの覆、敷物、茵などの端どもに、故院の御世（亡き桐壺院ご治世の初めの頃）のはじめつかた、高麗人のたてまつれりける綾、緋金錦ども（源氏）など、今の世のものに似ず（何といっても昔の物は親しみがある上に精巧にできているものだ）、なほさまざま御覧じあてつつ（今出来の物とは比べ物にならず）させたまひて、このたびの綾、羅などは（今度大弐が献じた薄絹）、人々に賜はす（女房たち）。香ど

一 二条の院の倉から取り出させたもの、今度大弐が献上したもの、それぞれを取り揃えさせなさって。
二 二種類ずつ調合なさって下さい。薫香には、梅花、荷葉、侍従、黒方等の種類があり、それぞれに名手による特殊の方（調合法）がある（付録三三〇頁参照）。
三 裳着の式に参列してくれた人へのお土産。
四 三位以上の人々への祝儀の品。女の装束が普通。
五 六条の院でも他所でも。外部にも発注している。
六 それぞれのご夫人方の所でも材料を選び準備して、鉄臼の音が喧しく聞える頃である。「鉄臼」は、香木の小片を搗いて粉にする小さい鉄の臼。伝書には、「搗くこと五百杵」「千杵」「三千杵」などとある。
七 六条の院南の町の寝殿。調合の秘密を知られないように、常の住居の東の対から離れて、一人でいる。
八 仁明天皇が、男子には伝えぬようにと仰せられた二種の調合法を。黒方と侍従である。「承和」は、仁明天皇治世の年号。『河海抄』所引『合香秘方』に「此両種方不レ伝レ男耳。承和仰事也」とある。
九 紫の上。
一〇 六条の院南の町の東の対である。「放出」は、境界の簾や障子を撤去して、母屋と廂などを一続きにした部屋。東、西、南の例が多い。「中の放出」は、母屋の南北の仕切りを放ったものか。
一一 仁明天皇の皇子本康親王。仁明天皇直伝の薫香調合の名人。その「御方」とは、黒方と侍従である。紫の上は女だから、源氏より正統の伝えである。

もは、昔今の、取り並べさせたまひて、御方々にくばりたてまつらせたまふ。（源氏）「二種づつ合はせさせたまへ」と、聞こえさせたまへり。贈り物、上達部の禄など、世になきさまに、内にも外にも、ことし

（お願い申し上げなさった）（ご夫人方に）（またとなく見事に）（あれこれと）

げくいとなみたまふに添へて、かたがたに選りととのへて、鉄臼の音耳かしかましきころなり。

（忙しくお支度なさるのに加えて）

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけむ、心にしめて合はせたまふ。上は、東の中の放出に、御しつらひことに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御方を伝へて、かたみにいどみ合はせたまふほど、いみじう秘したまへば、「匂ひの深さ浅さも、勝負の定めあるべし」と、大臣のたまふ。人の御親げなき御あらそひ心なり。いづかたにも、御前にさぶらふ人あまたならず。御調度どもも、そこらのきよらを尽くしたまへるなかにも、香壺の御笥どものやう、壺の姿、火取りの心ばへも、目馴れぬさまに、今めかしう、やう変へさせたま

（源氏）（源氏と紫上が）（互いに競争して調合なさっている間）（深く心に止めて）（お屏風やみ几帳を幾重にもお立てさせになって）（年頃のお子達の親とも見えぬ競争心でいらっしゃる）（お二方とも）（女房）（ご人内の）（多くの善美を尽した）（ものを揃えていらっしゃるなかでも）（作り様）（形）（香炉）（意匠）（ありふれたものでなく）（はなやかで）（趣向を変えてお作らせにな）

一二 練香を入れる壺を納める箱。（二巻図録一二参照）
一三 寝殿の軒端の紅梅。湿気のあるほうが強く匂う。
一四 螢兵部卿の宮。
一五 朝顔の前斎院。
一六 花が大方散ってしまった梅の枝。今は紅梅の盛りであるから、これはそれより早い白梅の枝である。「比叡の山に住みはべりけるころ、人の薫物を乞ひてはべりければ、はべりけるままに、少しを、梅の花のわづかに散り残りてはべる枝につけてつかはしける　春過ぎて散り果てにける梅の花ただかばかりぞ枝に残れる」（『拾遺集』巻十六雑春、如覚法師。『高光集』「春立ちて散り果てにけり」）による趣向。
一七 お聞き及びのこと。前斎院に対する源氏の執心。世間の評判になったことは、三巻朝顔一九七頁参照。
一八 大層無遠慮なことを。薫物合せの依頼のこと。
一九 沈（香木）で作った香壺の箱。以下前斎院から贈られた薫香のさま。
二〇 硝子の坏（物を盛る器）二つ。二種の薫香を盛る。
二一 贈り物の箱などに装飾としてつける松、梅などの作り物の枝。（三巻図録一一参照）
二二 青色の瑠璃の坏には五葉の松の枝をつけ。松は冬も霜雪に耐え、黒方は冬の香とされるから、こちらは黒方であろう。
二三 白い瑠璃の坏には、白梅の心葉を選んで。こちらは梅花であろう。

兵部卿の宮の来訪　前斎院よりの薫物

ったのに　すばらしい出来ばえな　あちこちの方が苦心して調合なさったであろう香の　とりどころ　のを　匂いを比べた上で入れようとお思いなのだった

へるに、所々の心を尽くしたまへらむ匂ひどもの、すぐれたらむどもを、かぎあはせて入れむとおぼすなりけり。

二月

きさらぎの十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿の宮わたりたまへり。御いそぎの今日明日になりにけることと、とぶらひきこえたまふ。昔より取り分きたる御仲なれば、隔てなく、そのことかのことと聞こえあはせたまひて、花をめでつつおはするほどに、前斎院よりとて、散り過ぎたる梅の枝につけたる御文持て参れり。宮、聞こしめすこともあれば、「いかなる御消息のすすみ参れるにか」とて、をかしとおぼしたれば、ほほゑみて、「いと馴れ馴れしきこと聞こえつけたりしを、まめやかに急ぎものしたまへるなめり」とて、御文は引き隠したまひつ。

迫ってお忙しいことと　お見舞い申し上げなさる　〔源氏と宮とは〕　裳着のお支度がけ　ご相談なさって　紅梅　（兵部卿宮）　まずあちらから参ったのですか　（源氏）　にんまりとして　お願い申し上げましたところ　〔前斎院の〕　几帳面に早速お作り下さったのでしょう

沈の筥に、瑠璃の坏二つすゑて、大きにまろがしつつ入れたまへり。心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を選りて、同じくひき

それぞれ大きな粒に丸めて　同じように心葉を

一 花の香は散ってしまった枝には残っていませんが（この薫物は、時過ぎた私には何のかいもないものですが）、薫きしめて下さる姫君のお袖には深く薫ることでしょう。わが身を卑下し、姫君の若さを讃えた歌。二五五頁注一六「春過ぎて」の歌を踏まえる。

二 前斎院のお使者を探し出してお引き止めになり、十分お酒をお振舞いになる。物陰に控え、すぐ退出しようとしていたのを探し出すのである。

三 紅梅襲（経紅、緯白または紫）の唐織物の細長。「細長」は、貴婦人の表着。袿がなく、身頃の裾先が分れている。

四 裳、唐衣、表着、袿など女物一揃えをいう。

五 前斎院へのお返事を認められたお筆のついでに。次の歌を書いて、兵部卿の宮の好奇心に応えたのである。

六 あの方にますます心をひかれます、あなたに気づかれはしないかと怖れながら。「花の枝」は、前斎院の文の付けられた梅の枝、すなわち前斎院をさす。「梅の花立ち寄るばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる」（『古今集』巻一春上、題しらず、読人しらず。書陵部蔵一本『兼輔集』、いと忍びたる移り香の人知るばかりありければ、その女に）による。

七 と書いてあっただろうか。そっと兵部卿の宮に見せた様子を窺わせる書き方。草子地。

八（薫物合せなどを方々に依頼するのは）物好きのようですが。

結び付けてある糸の結び方も　女らしく優雅に工夫していらっしゃる

結びたる糸のさまも、なよびかになまめかしうぞしたまへる。「艶風情のあるなさりようですね なるもののさまかな」とて、御目とどめたまへるに、

（前斎院）花の香は散りにし枝にとまらねど

うつらむ袖に浅くしまめや

淡墨で書いてあるのをお目になさって　大げさに　吟詠なさる

ほのかなるを御覧じつけて、宮はことことしう誦じたまふ。宰相の中将、御使尋ねとどめさせたまひて、いたう酔はしたまふ。紅梅夕霧襲の唐の細長添へたる女の装束かづけたまふ。御返りもその色の紙にて、御前の花を折らせてつけさせたまふ。宮、「うちのこと思ひやらるる御文かな。何ごとの隠ろへあるにか、深く隠したまふ」と恨みて、いとゆかしとおぼしたり。「何ごとかははべらむ。隈々しくおぼしたるこそ苦しけれ」とて、御硯のついでに、

（源氏）花の枝にいとど心をしむるかな

人のとがめむ香をばつつめど

（源氏）実のところ

とやありつらむ。「まめやかには、すきずきしきやうなれど、また

（兵部卿宮）

源氏のご返事も同じ紅梅襲の紙　お返事の内容が気になる　どんな秘密があるのか　ひどく見たいと　しどとがあるようにお思いなのが迷惑です　隠

九 娘は全く器量もよくありませんから、腰結の役を親しくない人にお願いするのはきまりが悪いので。源氏の卑下の言葉。

一〇 秋好む中宮を、六条の院に里下がりおさせ申してと存じています。

一一 あやかりものとしても。ここでは、将来の立后を願って、中宮の幸運にあやかろうとすること。

一二 事の当否をご判定申される。兵部卿の宮は、前に絵合の判者を勤め（三巻絵合一〇九頁）、このあと薫香の優劣を判定している。それにちなんだ書き方であろう。

一三（前に依頼してあった）ご婦人方の調合なさった薫物を、それぞれ使者を出して。

一四 ちょうどこの夕方の雨湿りに、匂いを試してみよう。前に「きさらぎの十日、薫物競べ雨すこし降りて」（二五五頁）とあった。薫香は、湿気のある時によく匂う。

一五「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（『古今集』巻一春上、友則）。あなたのほかに一体、誰に判定してもらえましょう、の意。

一六 私は「知る人」というに値しませんが。

一七 数々の、口には尽せぬ芳しい薫香の中で、調合の材料の一種のどれが強すぎるとか、足りないといったほんのわずかの欠点をかぎ分けて。

一八 あの、寝殿で調合された源氏の二種の薫香。「承和の御いましめの二つの方」（二五四頁）である。

えのない娘のこととて　こうするのが親として当然の務めなのだろうと考えまして

もなかめる人の上にて、これこそはことわりのいとなみなめれと、思ひたまへなしてなむ。いとみにくければ、うとき人はかたはらいたさに、中宮まかでさせたてまつりてと思ひたまふる。親しきほどに馴れ聞こえ通へど、はづかしきところの深うおはする宮なれば、何ごとも世の常にて見せたてまつらむ、かたじけなくてなむ」など、聞こえたまふ。「あえものも、げにかならずおぼし寄るべきことなりけり」と、ことわり申したまふ。

〔中宮とは〕日頃親しくお付き合い願っていますが　こちらとして気の張るところが深くおありになる宮様ですから　何かの支度も並み一通りの有様でお目にかけるのは　恐縮なものですから　なるほど必ずお考えになるべきことでしたね

このついでに、御方々の合はせたまふども、おのおの御使して、「この夕暮のしめりにこころみむ」と聞こえたまへれば、さまざまをかしうしなしてたてまつれたまへり。「これ分かせたまへ。誰にか見せむ」と聞こえたまひて、御火取りども召してこころみさせたまふ。「知る人にもあらずや」と卑下したまへど、言ひ知らぬ匂ひどもの、進みおくれたる香一種などがいささかの咎を分きて、あながちに劣りまさりのけぢめをおきたまふ。かのわが御二種のは、今

（源氏）　この優劣を判定して下さい　趣向を凝らして　（宮）　焚かせてごらんになる　しいところを優劣の区別をおつけになる

一　右近衛府の詰所。紫宸殿の西の校書殿東廂（図録六参照）。「御溝水」は、軒下の溝の流れ。「承和御時、右近陣の御溝の辺の地にうづまる。後代相伝して其所をたがへず云々」（『河海抄』）。薫物は少し湿気のある土中に埋めるのを法とした。

二　寝殿の西の渡殿の下から南庭に流れ出る遣水のほとりに埋めておかれたのを。宮中の例に準じて、寝殿を紫宸殿になぞらえ、その西南の水辺に埋めたもの。

三　源氏の乳母子。宰相（参議）昇進のこと、初出。

四　少女の巻の五節の舞姫の兄弟（三巻二六一～二頁参照）。「兵衛の尉」は、兵衛府の三等官。大尉は従六位下、少尉は従七位下相当。

五　前斎院の合せなさった黒方。ほかに源氏と紫の上が黒方を合せている（二五四頁）。

六　秋の香という。「合香は四季にかたどる方ある也。春は梅花方…夏は荷葉方…秋は菊花方、又侍従、冬は落葉方、又黒方」（『河海抄』）

七　源氏の大臣の合せなさったのが。「御」は、「御薫物」の略。

八　紫の上の御薫物。黒方と侍従に梅花を加えた。

九　梅の香によそえたとされる。紫の上らしい選択。

一〇　今頃の春風にかおらせるには。「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる」（『古今集』巻一春上、紀友則）を踏まえた措辞。

一一　幾種類もの薫物をさし出すまでもなかろうと。「立ち」は薫物の煙の縁。

ぞ取う出させたまふ。右近の陣の御溝水のほとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛の尉、掘りて参れり。宰相の中将、取りて伝へ参らせたまふ。宮、「いと苦しき判者にもあたりてはべるかな。いとけぶたしや」と、なやみたまふ。同じうこそは、いづくにも散りつつ広ごるべかめるを、人々の心々に合はせたまへる深さ浅さをかぎあはせたまへるに、いと興あること多かり。

さらにいづれともなきなかに、斎院の御黒方、さいへども、心にくくしづやかなる匂ひことなり。侍従は、大臣の御、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。対の上の御は、三種あるなかに、梅花、はなやかに今めかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。「このころの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。夏の御方には、人人の、かう心々にいどみたまふなるなかに、数々にも立ち出でずや

（源氏に）
（夕霧）
（調合法は）同じように
（宮）

と、煙[一二]をさへ思ひ消えたまへる御心にて、ただ荷葉[一三]を一種合はせたまへり。趣の変ったしんみりとした さまかはりしめやかなる香して、あはれになつかし。冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに消たれむもあいなしとおぼして、薫衣香[一六]の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠の朝臣の、ことに選びつかうまつれりし百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしさを取り集めたる心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。月さし出でぬれば、大御酒など参りて、昔の御物語などしたまふ。霞める月の影心にくきを、雨の名残の風すこし吹きて、花の香なつかしきに、御殿のあたりいひ知らず匂ひ満ちて、人の御ここちいと艶なり。

胸に沁みいるようにやさしい

季節季節にふさわしい薫物が決っているのに

またとなく優艶の限りを尽した

〔明石上の〕考案が

〔源氏〕八方美人の

召し上がって

紅梅

蔵人所のかたにも、明日の御遊びのうちならしに、御琴どもの装束などして、殿上人などあまた参りて、をかしき笛の音ども聞こゆ。内の大殿の頭の中将、弁の少将なども、見参ばかりにてまかづるを、

管絃の御遊の試演に

柏木

柏木の弟

人々のお気持はうっとりと夢見心地だ

一三 万事に控えめでいらっしゃるお人柄なので。薫物の縁で、「煙」「思ひ消え」という。

一四 明石の上。

一五 ちょうど春の折柄、冬の薫物を合せてひけをとるのもつまらないと。「消たれむ」は薫物の縁語。

一六 薫衣香の合せ方のすぐれているのは、前の朱雀院のご調合法を（朱雀院が）お学びあそばして、公忠の朝臣が特に工夫を凝らして献上した百歩の方であるが、それを思いついて。「薫衣香」は、薫物の名。「前の朱雀院」は、宇多上皇のこと。「公忠の朝臣」は、源公忠。光孝天皇孫、右大弁従四位下。醍醐、朱雀両帝に仕えた合せ香の名人。この物語では、史上の朱雀院と物語の朱雀院が重なるように書かれている（一巻解説二九五頁参照）。「百歩の方」は、薫衣香の調合法の一つ。百歩の遠くまで匂うので名づけられたという（『花鳥余情』）。

一七 殿内でたく薫香の香りが漂っているのである。

一八 六条の院の蔵人所。宮中の蔵人所に擬して、摂関家にも置かれた。事務を扱う者が控え、また楽器を管掌したらしい。

一九 明日行われる裳着の儀式。

二〇 絃楽器類に絃を張り、琴柱を付けたりすること。

二一 伺候した由を示すため、名前を記帳すること。ここは裳着の儀に招待されたことへのお礼言上である。

薫物競べのあとの宴遊

一 柏木が父内大臣に似て和琴の上手であること、篝火一一八頁に見える。
二 季節にかなった調子。春だから、双調であろう。
三 リズムをとるために、笏拍子を打つこと。笏を左右二分した形の木の、一方の平面と他方の割口を打ち合せて音を出す。
四 催馬楽、呂「梅が枝」。「梅が枝に　来居る鶯　や　春かけて　はれ　春かけて　鳴けどもいまだ　や　雪は降りつつ　あはれ　そこよしや　雪は降りつつ」
五 まだ元服前、韻塞の時に高砂を歌った方である。（二巻賢木一八〇～一八二頁参照）
六 お盃を源氏にさし上げられる時に。盃を廻す時に、祝いの歌を詠むのが作法。
七 鶯の声に（美しい歌声に）いよいよ気もそぞろになりそうです、心ひかれる花の御殿では。「しめつる」は、薫物の縁。
八 いつまでもここにいたい気持です。歌の末句からすぐ続く語気。「いつまでか野辺に心のあくがれむ花し散らずは千代も経ぬべし」（『古今集』巻二春下、素性。『古今六帖』一、仲の春、素性）による。
九 花の色も香も身に染みつくほど、今年の春は、花咲くわが家に絶えずおいで頂きたいものです。
一〇 盃をすすめる。源氏の賜盃を受け、次に夕霧に廻す。その時に次の歌を詠む。
一一 鶯が塀にする梅の枝も撓むほど、夜通しその笛の音を吹きすまして下さい。夕霧の横笛を賞めたもの。

とどめさせたまひて、御琴ども召す。兵部卿の宮の御前に琵琶、大臣に箏の御琴参りて、頭の中将、和琴賜はりて、はなやかに掻きたてたるほど、いとおもしろく聞こゆ。宰相の中将、横笛吹きたまふ。一をりにあひたる調子、雲居とほるばかり吹きたてたり。弁の少将、拍子取りて、四梅が枝出だしたるほど、歌い出した様子は天にも響くほど いとをかし。五童にて、韻塞のをり、高砂歌ひし君なり。宮も大臣もさしいらへしたまひて、ことことしではないが風情のある からぬものから、をかしき夜の御遊びなり。御土器参るに、宮、

「六鶯の声にやいとどあくがれむ　わきから声をお添えになって

心しめつる花のあたりに

七千代も経ぬべし」と聞こえたまへば、

（源氏）九色も香もうつるばかりにこの春は

花咲く宿をかれずもあらなむ

頭の中将に賜へば、取りて、宰相の中将にさす。一〇

［盃を］柏木　夕霧

一一鶯のねぐらの枝もなびくまで

なほ吹きとほせ夜半の笛竹

夕霧

宰相の中将、

「心ありて風の避くめる花の木に

とりあへぬまで吹きや寄るべき

情なく」と、皆うち笑ひたまふ。弁の少将、

霞だに月と花とをへだてずは

ねぐらの鳥もほころびなまし

まことに明けがたになりてぞ、宮帰りたまふ。御贈り物に、みづからの御料の御直衣の御よそひ一領、手触れたまはぬたきもの二壺添へて、御車にたてまつらせたまふ。宮、

〔宮への〕

まだお開けになっていない薫香

お車までお届け申させなさる

花の香をえならぬ袖にうつしもて

ことあやまりと妹やとがめむ

（源氏）

とあれば、「いと屈じたりや」と笑ひたまふ。御車かくるほどに、追ひて、

一三 風さえ気をつけて、花を散らさぬようにこの梅の木を避けて吹いているらしいのに（見事な紅梅の花盛りなのに）、私がむやみに吹き寄っていいでしょうか。「とりあへぬまで」は、我慢できずにの意。「とり」に「鳥」を掛け、前の歌の「鶯」に応ずる。「吹き」に風の吹く意を掛ける。

一三（それでは花が散るではありませんか）思いやりのないことだ、とおっしゃると。

一四 せめて霞が月と花の間に立たないでくれたら、巣の中の鶯も月の光を夜明けかと思って、囀りを聞かせてくれるでしょうに。今宵の楽の音に鶯も気持をそそられて歌い出すだろうに、の意。「ほころぶ」は、花の縁語。

一五 実際に夜が明けてから。前の歌の意を受けていう。二月十一日のこと。

一六 ご自分のお召し料の御直衣のご装束一揃い。厚志を示したさま。「直衣」は、貴族の平常着。直衣、袿、指貫などで一揃い。

一七 頂戴した薫物をこの結構な装束に匂わせて帰りましたら、女と過ちをしたのかと、妻が咎めることでしょう。女の移り香と思い違いするかもしれない、と戯れたもの。兵部卿の宮には、この時夫人はいない（胡蝶三六頁参照）。「花の香」とあるので、梅花香であろう。

一八（奥方を怖れて）ひどく弱気ですね。

一九 お車の轅を牛に付ける頃に。

一 珍しいことだと、奥方も待ち受けてご覧になりましょう、美しい錦の装束を着て帰られるあなたを。「故里人」は、家にいる妻の意。「花の錦…」とともに、「富貴にして故郷に帰らざるは、繡を衣て夜行くが如し」（『史記』項羽本紀）による措辞。

二 めったにないこととお思いでしょう。夫人のない兵部卿の宮を、めったに外泊しない恐妻家に見立ててからかう。

三 いずれも女の装束。

四 六条の院の西の町。中宮の御殿。

五 午後七時から九時までをいう。二月十一日のことである。

裳着の儀式

六 寝殿の西の放出。西面を放出にしたのであろう。

七 髪上げの役を奉仕する内侍。髪上げは、儀式の時の髻をとる結い方（図録九参照）。裳着には髪上げも同時にする。「内侍」は、中宮づきの内侍。当時は立后とともに中宮づきの内侍が任命された。

八 紫の上。明石の姫君の義母として付添っている。

九 中宮方の女房と紫の上方の女房が。

一〇 午後十一時から午前一時までをいう。

一一 燈台の火はかすかだが。裳着の時は、燈火を明るくしないのが通例（行幸一七三頁参照）。

一二 失礼な姿を。まだ裳を着けない童女姿のままなのをいう。

一三 後代の例になろうかと。中宮の行啓を仰いで、腰結役をお願いするのは、前例がない名誉という。

（源氏）「めづらしと故里人も待ちぞ見む
花の錦を着てかへる君

（宮は）またなきこととおぼさるらむ」とあれば、いといたうからがりたまふ。（それ以下の）次々の君達にも、（大げさにならぬようにして）ことことしからぬさまに、細長、小袿などか（お与えになる）づけたまふ。

かくて西の御殿に、戌の時にわたりたまふ。（中宮）宮のおはします西の放出をしつらひて、（飾り付けして）御髪上の内侍（明石姫君が）などもやがてこなたに参れり。（中宮に従って西の放出に参上した）上も、（この機会に）このついでに、中宮に御対面あり。御方々の女房、（ひと所に集まっているのが）押しあはせたる、数しらず見えたり。子の時に御裳たてまつる。（お着けになる）大殿油ほのかなれど、（明石姫君の）御けはひいとめでたしと、宮は見たてまつりたまふ。（中宮）大臣、「（娘をお見捨てにはなるまいと信じてけましたのです）おぼし捨つまじきを頼みにて、なめげなる姿を、（進んでお目にかけられはべるなり。（狭い親心で）後の世のためしにやと、心狭く忍び思ひたまふ（どういうこともわきまえずしたことですのにます）る」など聞こえたまふ。宮、「いかなるべきことども思うたまへ分きはべらざりつるを、（後代の例になるなどと大層に言っていただきますと）かうことことしうとりなさせたまふになむ、

一四 何でもないことのようにおっしゃるご様子が。
一五 思い通りの美しい方々が、わが一門にお集まりになっているのを。中宮や明石の姫君、紫の上といった方々。
一六 そういった家族関係をすばらしいとお思いになる。「あはひ」は、人と人の間柄。
一七 明石の姫君の生母、明石の上。
一八 このお席に参列させようかとお考えになるが。
一九 こういう立派なお邸のしきたりは、普通の場合でも、何かと繁雑で面倒なものだが。まして今回は、源氏が格別力を入れた裳着の儀だから大変なので、という気持。以下、「こまかに書かず」まで、物語筆記者が省筆をことわる草子地。
二〇 二月二十余日の頃に執り行われた。
二一 然るべき姫君たちを競って入内させようと、願っていらっしゃるらしいが。「人の女」で一語。主語は、姫君の親たち。大臣、大納言級の人々である。
二二 (明石の姫君に圧倒されて) かえってしない方がよかったような宮仕えになろうかと。
二三 系図不詳。(行幸一四八頁、真木柱二三三頁参照)
二四 宮仕えというものは、大勢のお妃の中で、わずかの優劣を競うのが本当だろう。皆立派な人たちの中で競争してこそ意義がある、という考え。
二五 多くのすぐれた姫君たちが。「きやうざく」は、字音語。「警策」。人柄や容姿のすぐれていること。

東宮の元服

なかなか心おかれぬべく」と、一四のたまひ消つほどの御けはひ、いと若く愛敬づきたるに、大臣も、一五おぼすさまにをかしき御けはひどもの、さしつどひたまへるを、一六あはひめでたくおぼさる。一七母君の、かかるをりだにえ見たてまつらぬを、いみじと思へりしも心苦しうて、一八まう上らせやせましとおぼせど、人のもの言ひをつつみて過ぐしたまひつ。一九かかる所の儀式は、よろしきにだに、いとこと多くうるさきを、片端ばかり、例のしどけなくまねばむもなかなかにやとて、こまかに書かず。

かえって気がひけます
悲しがっていたことも気の毒なので
世間の陰口を憚られてそのままになさった
一端だけを
例の通りまとまりなく写すのもかえってどうかと思うので

二〇春宮の御元服は、二十余日のほどになむありける。いとおとなしくおはしませば、二一人の女ども競ひ参らすべきことを、心ざしおぼすなれど、この殿のおぼしきざすさまのいとことなれば、二二なかなかにてやまじらはむと、二三左の大臣なども、おぼしとどまるなるを聞こしめして、「いとたいだいしきことなり。二四宮仕への筋は、あまたあるなかに、すこしのけぢめをいどまむこそ本意ならめ。二五そこらのきや

大層大人びていらっしゃるので
入内を思い立たれたお気持に並々ならぬものがあるので
源氏
中止なさるという話を
(源氏) まことに不都合なことだ

一 宮仕えに出ず、家に引き籠められてしまったならば、何のおもしろみもあるまい。
二 明石の姫君のご入内は延期になった。ほかの人々に譲る気持。余裕のある態度である。
三 明石の姫君入内のあとで、次々にでもとさし控えていらっしゃったのだが。
四 源氏がこう言っていらっしゃることをあちこちでお聞きになって。
五 左大臣家の三番目の姫君が入内なさった。元服の副臥（東宮、皇子などの元服の夜、選ばれて添い寝する姫）である。権勢のある公卿の娘が選ばれ、皇妃の中では重い地位を占める。
六 御殿に麗景殿を賜ったのである。（図録四参照）
七 明石の姫君。
八 昔、源氏の御宿直所であった淑景舎（桐壺）を改装して。（三巻澪標三一頁、図録四参照）
九 お道具の雛形や図案などをも。
一〇 「草子」は、綴じ本。「草子の筥」は、草子を納める箱。甲乙一双、方一尺と『類聚雑要抄』に見える。蒔絵や螺鈿を施す。
一一 歌集であろう。『類聚雑要抄』に『万葉』『古今』『後撰集』等を納めるとある。
一二 習字の手本にもなさることができそうなのを。

源氏、さらに入内の準備に励む

うざくの姫君たち、引き籠められなば、世に栄あらじ」とのたまひて、御参り延びぬ。次々にもとしづめたまひけるを、かかるよし所所に聞きたまひて、左大臣殿の三の君参りたまひぬ。麗景殿と聞こゆ。

この御方は、昔の御宿直所、淑景舎を改めしつらひて、御参り延びぬるを、宮にも心もとながらせたまへば、四月にと定めさせたまふ。御調度どもも、もとあるよりもととのへて、御みづからも、もの下形、絵様などをも御覧じ入れつつ、すぐれたる道々の上手どもを召し集めて、こまかに磨きととのへさせたまふ。草子の筥に入るべき草子どもの、やがて本にもしたまふべきを選ばせたまふ。いにしへの上なき際の御手どもの、世に名を残したまへるたぐひのも、いと多くさぶらふ。

（源氏）「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなむ、今の世はいと際なくなりたる。古きあとは、定まれ

東宮におかせられても待ち遠しく思し召すので
もとからあった上にさらに立派に調えて
源氏ご自身も
お目通しなさっては
優秀なそれぞれの道の熟練者たちを
精緻に
手間をかけてお作らせになる
そのまま
無双の名筆家たちで
後世に名を残された方々の筆跡も
お手許にある
悪くなってゆく末世ではあるけれど
昔の字は

一三 仮名に関する限り、現代は、全く際限もない発達をとげたものです。

一四 見事で上手な字は、近頃になってから書ける人が何人か出てきましたが。「外よりてとはするゑになりてと云心歟。或人云、年よりてなり云々」（『河海抄』）

一五 私が、女手を熱心に習っていた最中に。恋文を書くためである。「女手」は、一般に「男手」（漢字）に対する語で、女の書く文字、すなわち平仮名のこととされるが、後文（二六七頁）によるに、仮名の一体とすべきもののようである。

一六 六条の御息所。

一七 それがために、とんでもない浮き名をお立てすることになったのです。御息所の筆跡の見事さにひかれて恋をするようになったという。

一八（御息所は）それを深く後悔していらっしゃいましたが、私はそれほど冷淡ではなかったのです。紫の上に対しての自己弁護。

一九 中宮をこんなにお世話申し上げていることを、分別のあるお方でしたから、草葉の陰からも喜んで下さっているでしょう。中宮の後見は、亡き御息所の遺言でもあった（澪標四〇〜四一頁参照）。

二〇 朧月夜の尚侍。「院」は、朱雀院の上皇。さきほど尚侍になった玉鬘と区別する言い方。

二一 朧月夜の尚侍と、朝顔の前斎院と、あなた（紫の上）が、上手だと思います。「書く」は、上手に書くの意。

した書き方のようですが　自由な変化があまりなくて　どれも似通った感じがします

るやうにはあれど、広き心ゆたかならず、一筋に通ひてなむありける。妙にをかしきことは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど、女手を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本多くつどへたりしなかに、中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行ばかり、わざとならぬを得て、際ことにおぼえしはや。さて、ある

難のつけようのない手本をたくさん集めた中に　何気なく　無造作な筆跡を手に入れて　絶妙の筆と感心したものです

まじき御名も立てきこえしぞかし。悔しきことに思ひしみたまへりしかど、さしもあらざりけり。宮にかく後見つかうまつることを、心深うおはせしかば、なき御影にも見なほしたまふらむ。宮の御手は、ていねいで風情があるけれども　才気が　乏しいでしょうか　中宮のご筆跡

は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらむ」と、うちささめきて聞こえたまふ。「故入道の宮の御手は、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞすくなかりし。院の尚侍こそ、今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。さはありとも、かの君と、前斎院と、ここにとこそは書きたまはめ」と、ゆるしきこえたまへば、「この数にはまばゆくや」

〔紫上に〕　〔源氏〕　藤壺　当代の名手でいらっしゃるけれど　深味があり　優雅なところはありましたが　はなやかさに欠けていました　しゃれていて　癖があるようです　とはいえ　お認めになると　（紫上）その方々のお仲間入りは気がひけます

と聞こえたまへば、「いたうな過ぐしたまひそ。にこやかなるかたのなつかしさは、ことなるものを。真名のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそまじるめれ」とて、まだ書かぬ草子ども作り加へて、表紙、紐などいみじうせさせたまふ。「兵部卿の宮、左衛門の督などにものせむ。みづから一具は書くべし。けしきばみいますかりとも、え書き並べじや」と、われぼめをしたまふ。

墨、筆、ならびなく選り出でて、例の、所々にただならぬ御消息あれば、人々、難きことにおぼして、返さひ申したまふもあれば、まめやかに聞こえたまふ。高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、「このもの好みする若き人々こころみむ」とて、宰相の中将、式部卿の宮の兵衛の督、内の大殿の頭の中将などに、「葦手、歌絵を、思ひ思ひに書け」とのたまへば、皆心々にいどむべかめり。

例の、寝殿に離れおはしまして書きたまふ。花ざかり過ぎて、浅

一 漢字に習熟すればするだけ、仮名は整わない字がまじるようですね。女の紫の上が漢字に上達することは考えられないから、ここは男の側からの感想。

二 まだ何も書いていない草子。前の「いにしへの上なき際の御手ども」の草子のほかに、新しく今の名手たちに執筆を依頼するためである。

三 ここだけに出る。系図に見えない人。

四 私自身も二帖は書こう。「一具」は、上下二冊の一揃いをいう。

五 あの方々（兵部卿の宮や左衛門の督）が、自信たっぷりでいらしたところで、私にだってそれぐらいできぬことはあるまい。「いますかり」は、いらっしゃる。

六 また、薫物の時のように、あちこちのご婦人方に特別のご依頼状を出されるので。筆墨を添えての依頼。

七 朝鮮から渡来した紙の薄様風のもので綴じた草子が。「高麗」は、三韓の一つ。七世紀に亡ぶ。ここは、「唐」（中国）に対して、朝鮮をいうとすべきである。「薄様」は、鳥の子紙の薄手のもの。国産の紙。

八 式部卿の宮（紫の上の父）の子息の兵衛の督。藤袴一九九頁の左兵衛の督のこと。

九 水辺の葦の群生する絵の中に水、葦、石、鳥などの形に文字を隠し書くこと。二六九頁の夕霧の書についての記述が、「葦手」を具体的に想像させる唯一の資料。（図録

源氏、人々に草子の執筆を依頼する

源氏、草子を書く

（源氏）そんなに遠慮しなさるな　ものやわらかな親しみを感じさせる点では

格別ですのに

（源氏）書いて頂こう

最上のものを

自讃なさる

ご辞退申される方もあるので

（そういう方には）ねんごろにお願い申される

大層優雅なのを

（源氏）例の風流好みの若い人たちを試してみよう

夕霧

柏木

腕を競う様子で

（桜の）一人でお籠りになって（源氏は）

前と同様

一一 参照）
一〇 一首の歌意を下絵に描き、歌を配したもの。
一一 草仮名（万葉仮名の草体）も、普通の仮名（狭義の平仮名）も、女手も（二六五頁注一五参照）。
一二 由緒のある古い歌集の歌など。
一三 坐った時身体をもたせかける調度。ここは机の代用にしている。（図録一〇参照）
一四 部屋の端近に楽な姿で。明るさを求めて、廂の間の簀子近く、書に熱中して行儀も構わずにいるさま。
一五 白いのや赤いのなど、墨色の目立つ紙は。「掲焉」は、はっきりと目立つさま。「枚」は、紙や木の葉など、薄く平たいものの称。さまざまの色の紙を綴じ合せた草子に歌を書きつけているところ。
一六 御直衣をお召しになり。今までは、袿姿でいたのである（二巻図録一〇参照）。
一七 お座布団。縁に錦をめぐらす。（三巻図録一一参照）
一八 そのままそこでお待ち受けになっていて、お入れ申し上げなさる。仕事中の部屋にそのまま招じ入れる親密な間柄。
一九 寝殿の南階。
二〇 御簾の中でも。母屋の御簾であろう。

兵部卿の宮の来訪

緑なる空うららかなるに、古き言ども（古歌などをあれこれ静かに思い浮べられて）など思ひすましたまひて、御心のゆく限り（足のゆくまで）、草のもただのも、女手も、いみじう（この上なく見事に存分にお書きになる）書き尽くしたまふ。御前に人しげからず、女房二三人ばかり、墨などすらせたまひて、ゆゑある古き集の歌など、いかにぞやなど（これはどうかなどと）選り出でたまふに、くちをしからぬ限りさぶらふ。御簾あげわたして、脇息の上に草子（全部上げて）うち置き、端近くうち乱れて、筆のしりくはへて、思ひめぐらしたまへるさま、飽く世なくめでたし。白き赤きなど、掲焉なる枚は、筆とり直し、用意したまへるさまへ、見知らむ人は、げにめでぬべき御ありさまなり。

（お返事できそうな者だけが控えている）（いつまでも見飽きぬ美しさだ）（注意してお書きになる様子も）（情趣を解する者なら）（全く感心せずにはいられないお姿である）

「兵部卿の宮わたりたまふ」（女房が）と聞こゆれば、おどろきて、御直衣たてまつり、御茵参り添へさせたまひて、やがて待ち取り入れたてまつりたまふ。この宮もいときよげにて、御階さまよく歩みのぼりたまふほど、内にも人々のぞきて見たてまつる。うちかしこまりて、かたみにうるはしだちたまへるも、いときよらなり。「つれづれに

（おいでになりました）（もう一つ持って来させなさって）（大層お美しいお姿で）（女房たち）（体裁よく）（礼儀正しく）（お二人とも改まったご挨拶をなさるのも）（本当にお美しい）（源氏）（所在なく）

籠りはべるも、苦しきまで思ひたまへらるるころののどけさに、を（つらいとまで思われますこの頃ののどかさですが）りよくわたらせたまへる」と、よろこびきこえたまふ。一かの御草子（うどよい折においでになりました）持たせてわたりたまへるなりけり。やがて御覧ずれば、すぐれてし（欲迎申し上げなさる）もあらぬ御手を、ただかたかどに、いといたう筆澄みたるけしきあ（すぐその場で）りて書きなしたまへり。二歌も、ことさらめき、そばみたる古言ども（さほどお上手で）を選りて、三ただ三行ばかりに、文字少なに好ましくぞ書きたまへる。（未熟ながら才気に任せて）大臣御覧じおどろきぬ。「かうまでは思ひたまへずこそありつれ。（垢抜けした感じに）さらに筆投げ捨てつべしや」と、ねたがりたまふ。「かかる御中に（私などはもう筆を取る気もしませんよ）面なくくだす筆のほど、さりともとなむ思うたまふる」など、たはぶれたまふ。（いくら何でもさほどまずくはないと存じます）

（源氏の）書きたまへる草子どもも、隠したまふべきならねば、取う出たまひて、かたみに御覧ず。五唐の紙のいとすくみたるに、六草書きたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、七高麗の紙の、膚こまかに和うなつかしきが、色などははなやかならで、なまめきたるに、おほど（お互いに）（宮は）（きめ細かで柔らかく温かい感じの紙質で）（優雅な紙に）

一　先日源氏がご依頼になった草子をお持たせになって。二六六頁に「兵部卿の宮、左衛門の督などにものせむ」とあった。

二　歌も、技巧を凝らした、風変りな古歌をいろいろ選んで。

三　一首を、ただ三行ほどに、漢字混じりに趣深くお書きになっている。「文字少なに」は、仮名だけで書かず、漢字混じりにしたので、字数が少なくなっているのであろう。

四　あなたからご依頼を受けられるほどの方々に混じって、臆面もなく書こうというのですから。

源氏の草子を見る

五　中国渡来の紙。「すくむ」は、縮かむこと。『細流抄』は、「ことばはしきなり」という。

六　万葉仮名の草体。料紙に合せて、男性風な趣。

七　朝鮮渡来の紙。こちらは女手を書いている。

八（源氏の）筆跡に添って流れる感じがして。「水茎」は、筆跡をいう歌語。「水」と「流れ」は縁語。

九 わが国の紙屋院の色紙。紙屋院は、北野の紙屋川辺に置かれた朝廷の製紙所。（三巻蓬生六〇頁、絵合一〇四頁参照）

一〇 型に捉われず自在で魅力があり、目が吸いつけられるので。「しどろもどろに」は、乱れたさまをいう歌語。「よしとてもよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろに」（『紫明抄』『河海抄』所引）

一一 ほかの草子。さきに依頼した人々から、書き上がった草子が届けられているのである。

一二 大げさでもったいぶった書風

人々の草子を見る

ばかり好き好んで書いているが。

一三 夕霧や柏木に書かせたもの。（二六六頁参照）

一四 思い思いの工夫を凝らしていて、くだけた感じでおもしろい。「はかなう」は、整った正式の書体に対し、下絵に合せて乱れ書いたものについての感じ。

一五 水の流れをゆったりと表現し、乱れた葦の生え具合など。この水の流れや葦の絵の中に文字が隠し書かれている。以下、「石などのたたずまひ、好み書きたまへる」まで、夕霧の葦手の書き方を具体的に記述したもの。

一六 難波の浦の景色に似ていて。「難波の浦」は、今の大阪市の中心部。当時は一面の沼沢で、葦の茂る所として、古くから歌に詠まれた。

かなる女手の、うるはしう心とどめて書きたまへる、たとふべきかたなし。見たまふ人の涙さへ、水茎に流れ添ふここちして、飽く世あるまじきに、また、ここの紙屋の色紙の、色あひはなやかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる、見所限りなし。しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、さらに残りどもに目も見やりたまはず。

（としたが）（なさそうなところへ）（さらに）（奔放な）（形を整えていねいにお書きになっているのは）（兵部卿の宮）（感涙）（見飽きる時）（〔宮は〕）

左衛門の督は、一二ことことしうかしこげなる筋をのみ好みて書きたれど、筆の掟て澄まぬここちして、いたはり加へたるけしきなり。歌なども、ことさらめきて、選り書きたり。女のは、まほにも取り出でたまはず。斎院のなどは、まして取う出たまはざりけり。一三葦手の草子どもぞ、一四心々にはかなうをかしき。宰相の中将のは、一五水の勢ゆたかに書きなし、そそけたる葦の生ひざまなど、一六難波の浦に通ひて、こなたかなたいきまじりて、いたう澄みたるところあり。またいと今めかしうひきかへて、文字やう、石などのたたずまひ、

（筆法が垢抜けしない感じがして）（技巧を凝らした風がある）（ご婦人方のは）（ろくにお見せにならない）（朝顔の前斎院）（夕霧）（大層清澄な水辺の風情がある）（〔流れや葦が〕あちらこちらと入り混じって）（文字の形や〔文字を隠した〕岩などの様子を）（ぐっとはなやかにすっかり趣を変えて）

一 前には、薫香が話題だった。（二五七頁以下）
二 種々の継紙をした手本を何巻か選び出させなさったついでに。「継紙」は、さまざまの色や紙質の紙を継いだ巻物。
三 兵部卿の宮の御子息の侍従。「侍従」は、中務省に属し、天皇に常侍して、諫言し輔佐する役。従五位下相当。

兵部卿の宮、源氏に仮名の手本を贈る

四 兵部卿の宮のお邸。
五 嵯峨天皇が、『古万葉集』から抜粋してお書きになった四巻。嵯峨天皇は、弘法大師、橘逸勢とともに三筆（平安初期の三人の名筆家）の一人。中国風の漢字を書かれた。『古万葉集』は、『新撰万葉集』（菅原道真撰）『続万葉集』（『古今集』のこと）に対して『万葉集』（二十巻）をいう。
六 醍醐天皇。「延喜」は、醍醐天皇治世の年号。
七 中国製の薄い縹色（薄い藍色）の紙。
八 同じ縹色の、濃い地模様のある綺（薄手の錦）の表紙。巻物の表に付ける。
九 やはり同じ縹色の玉で両端を飾った軸。
一〇 だんだら染めに組んだ中国風の平組の紐。巻物の表紙の端につけ、巻き終った巻物を上から巻き結ぶ。
一一 燈台の火を低くなさって。明りを近づけるため、低い台を用いたのである。
一二 まして女の子のないわが家ではせっかくの名品が埋もれてしまいますから。女子の調度品だからである。

（宮）すばらしいな　手間のかかりしゃれてお書きになった
好み書きたまへる枚もあめり。「目も及ばず。これは暇いりぬべきそうなものですね　風流がりなものかな」と、興じめでたまふ。何ごとももの好みし、艶がりおはおほめになる（兵部卿宮は）何事にも疑り性でさる
する親王にて、いといみじうめできこえたまふ。

一 今日はまた、手本　筆跡のことをあれこれと一日中話し合われ手のことどものたまひ暮らし、二 さまざまの継紙の本ども、選り出でさせたまへるついでに、三 御子の侍従して、四 宮にさぶらふ本ども取りにつかはす。五 嵯峨の帝の、六 古万葉集を選び書かせたまへる四巻、延喜の帝の、七 唐の浅縹の紙を継ぎて、八 同じ色の濃き紋の綺の表紙、九 同じき玉の軸、一〇 綾の唐組の紐など、なまめかしうて、巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる、大殿油短く参りて御覧ずるに、「尽きせぬものかな。

（源氏）いつまででも見飽きないな　一巻ずつ筋筆の書風をお変えになってはあらゆる仮名の美しさをお書き尽しになったのを　ほんの部分的な技巧を凝らすに過ぎないのですね　優雅で　今どきの人は
このころの人は、ただかたそばをけしきばむにこそありけれ」など、めでたまふ。やがてこれはとどめたてまつりたまふ。「女子などを持てはべらましにだに、をさをさ見はやすまじきには伝ふまじきを、

そのままこの二つはこちらに置くことにし贈呈なさる　（宮）をんなこ　娘などを　たいして見る目を持たぬ者には伝えたくないものですが　持っていましたにしても

一二 まして朽ちぬべきを」など聞こえてたてまつれたまふ。侍従に、唐

（源氏に）

一三「沈」は、香木の一種。水に沈むのでこう呼ぶ。
一四 見事な高麗笛。高麗楽に用いられる笛。横笛（唐楽に吹く）よりも細くて短い。（二巻図録八参照）。「唐の本」とともに、兵部卿の宮の贈り物に対する返礼である。
一五 世間で能書家と聞えた者は、身分の上下を問わず。
一六 しかし、明石の姫君のご草子の箱には、身分の低い者の筆跡は一冊もお入れにならず。入内の調度だからである。
一七 草子や巻物などすべてお書かせ申し上げなさる。「たてまつり」は、明石の姫君に対する敬語。
一八 この度の姫君のご調度は、何から何まで世にまたとない御宝物の数々、外国にも滅多になさそうなものばかりのなかに。
一九 若い貴公子たち。夕霧や柏木のような人々。
二〇 紙絵であろう（三巻絵合一〇六頁注七参照）。当時の上流女性の消閑の具であった。
二一 源氏が流謫中に書いた須磨明石の絵日記。（二巻明石二九四～五頁、三巻絵合一〇一～二頁、一〇六頁、一一〇頁参照）
二二 明石の姫君の入内のご準備を、他家の話としてお聞きになるにつけても。内大臣家には、入内にふさわしいような姫君はいない。
二三 娘盛りにきれいになって。雲居の雁二十歳。

源氏、明石の姫君の調度の書画を調える

中国の手本などで特に念入りに書いてあるのを
の本などのいとわざとがましき、沈の筥に入れて、いみじき高麗笛
添へてたてまつれたまふ。

〔源氏は〕論評
またこのころは、ただ仮名の定めをしたまひて、世の中に手書く
とおぼえたる上中下の人々にも、各人に適当なものをそれぞれお考えになって
さるべきものどもおぼしはからひて、尋ねて書かせたまふ。この御筥には、立ち下れるをばまぜたま
はず、丹念にその人の家柄や わざと人のほど、品分かせたまひつつ、地位をお見定めになって 草子、巻物、皆書か
せたてまつりたまふ。よろづにめづらかなる御宝物ども、人の朝廷
までありがたげなるなかに、この数々のお手本を この本どもなむ、ゆかしと見たいと 心動きたま
ふ若人、世に多かりける。御絵どもととのへさせたまふなかに、〔明石姫君が〕もっと世間が か
の須磨の日記は、子孫末にも伝へ知らせむとおぼせど、今すこし世をも
お分りになってからと思い直しなさって
おぼし知りなむにとおぼし返して、まだ取り出でたまはず。

内の大臣は、この御いそぎを、人の上にて聞きたまふも、いみじ
が気でなく ひどく気
う心もとなく、つまらないとお思いになる さうざうしとおぼす。雲居の雁 姫君の御ありさま、盛りにと
所在なげにふさぎこんでいらっしゃる様
とのひて、このままでは勿体ないほどかわいらしい あたらしううつくしげなり。つれづれとうちしめりたま

夕霧と雲居の雁の仲

一 あの方（夕霧）のご様子はといえば、相変らず熱のない態度なので。

二 相手が熱心に望んでいた時に、言うことを聞いていたら。少女の巻（三巻）で、夕霧が雲居の雁との仲をさかれて悲しんでいたのは、今から六年前である。

三 （今では）いちずに夕霧ばかりが悪いともお考えになれない。

四 我から求めて、やるせない思いをする折は多いけれど。「ありぬやとこころみがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき」（『古今集』巻十九誹諧歌、題しらず、読人しらず）による。

五 浅緑の袖を、六位宿世と不足に思ってお噂申した女君の御乳母たちに対して。（少女二五三～四頁参照）

六 中納言に昇進した姿を見せてやろうと、深く心に期しておられるらしい。中納言は、従三位相当。袍の色は紫である。

七 あちらの姫君のことを。

八 雲居の雁のこと。

九 系図不詳。（行幸一四八頁参照）

一〇 ここだけに登場する。中務省の長官。

一一 父帝のもったいないご教訓にも従おうとは思わなかったのだから、私も口を出しにくいが。源氏が女のことで桐壺帝からお叱りを受けたことは、二巻紅葉賀三二～三三頁、葵六六頁参照。

一二 父帝のご教訓こそ今に通じるものであった。

源氏、夕霧に教訓する

へるほど、いみじき御嘆きぐさなるに、[一]かの人の御けしきはた、同じやうになだらかなれば、心弱く進み寄らむも人笑はれに、[二]人のねむごろなりしきざみになびきなましかば、など人知れずおぼし嘆きて、一方に罪をもえおほせたまはず。かくすこしたわみたまへる御けしきを、宰相の君は聞きたまへど、しばしつらかりし御心を憂しと思へば、つれなくもてなししづめて、さすがにほかざまの心はつくべくもおぼえず、[四]心づからたはぶれにくきをり多かれど、浅緑聞こえごちし御乳母どもに、納言に上りて見えむの御心深かるべし。

大臣は、[五]あやしう浮きたるさまかなとおぼしなやみて、「[七]かのわたりのこと、思ひ絶えたらば、[八]右の大臣、中務の宮などの、けしきばみ言はせたまふめるを、何処も思ひ定められよ」とのたまへど、ものも聞こえたまはず、かしこまりたるさまにてさぶらひたまふ。

「かやうのことは、[一〇]かしこき御教へにだに従ふべくもおぼえざりしかば、言まぜま憂けれど、今思ひあはするには、[一一]かの御教へこそ長

子は
〔親の御身には〕一方ならぬ嘆きの種であるが
こちらから弱気に折れて出るのも体裁が悪いし
〔内大臣は〕
〔内大臣が〕
参っていらっしゃるご様子
ひところ冷たくなさった内大臣のお心を恨
さりげなく落着いた態度で
気にもなれず
それでもほかの女性に心を移そうという
めしいと思うので
源氏
妙にいつまでも身の固まらないことだとご心配なさって
思い切ってしまったのなら
〔源氏〕
それと
なくご意向をお伝えになっているようだが
どちらなりとお決めなさい
〔夕霧は〕じっと黙ったまま
恐縮した様子で
控えていられる
〔源氏〕女性問題は

一二 何か思惑でもあるのかと、世間の人も臆測するであろうに。高望みをしているとか、女御、后に思いをかけているとかいった臆測であろう。

一三 宿縁のままに、つまらぬことに結局なってしまうというのは。身分の低い女と結婚することをいう。

一四 尻すぼまり。「後干と書けり」（『岷江入楚』）

一五 しかしまた、大層な高望みをしても、思い通りになるものでもなく、出来ないことは出来ない相談ではあるものの、浮気心を起しなさるな。藤壺への恋などを念頭に置くかのような発言。「る」は軽い敬語。

一六 身分にふさわしくないという非難を受けはしないかと気をつけていたのだが、それでも。

一七 やはり好色だとの責めをこうむって、世間から爪弾きされました。朧月夜の尚侍とのことが端緒になって、須磨に退居したこと（二巻賢木一八三～九頁参照）。

一八 浮気心を抑えるようなものがない時は。「くさはひ」は、ものごとの種になるもの。ここでは、妻。

一九 立派な人が、昔でもしくじる例があったのです。「寛平遺誡云、左大将時平先年於二女事一有レ所レ失とあり」（『河海抄』）

二〇 自分も、そのことで相手の女性から恨みを受けるのは。六条の御息所の場合などをいうのであろう。

二一 あるいは（一心に婿扱いをしてくれる）女の親の心に免じ。葵の上の場合を考えている。左大臣の婿扱いは、紅葉賀二二～二三頁に詳しい。

き例にはありけれ。つれづれとものすれば、一二思ふところあるにやと、世人もおしはかるらむを、宿世の引くかたにて、なほなほしきことにありありてなびく、いとしりぞけに人わろきことぞや。一五いみじう思ひのぼれど、心にしもかなはず、限りあるものから、すきずきしき心つかはるな。いはけなくより、宮のうちより生ひ出でて、身を心にまかせず、所狭く、いささかのことのあやまりもあらば、軽々しきそしりをや負はむとつつみしだに、一七なほすきずきしき咎を負ひて、世にはしたなめられき。位浅く何となき身のほど、うちとけ、心のままなるふるまひなどせらるな。心おのづからおごりぬれば、一八思ひしづむべきくさはひなき時、女のことにてなむ、一九かしこき人、昔も乱るる例ありける。さるまじきことに心をつけて、人の名をも立て、二〇みづからも恨みを負ふなむ、つひのほだしとなりける。とりあやまりつつ見む人の、わが心にかなはず、忍ばむこと難き節ありとも、なほ思ひ返さむ心をならひて、二一もしは親の心にゆづり、もしは親な

ぽつんと一人でいると
自由も利
宮中で
成人して
体裁の悪いことです
「私は」幼い時から
少しでもしくじりをすれば
窮屈で
「あなたは」位も低く気楽な身分だからと
油断をして
自分がいつのまにか増長していると
分に過ぎた人に思いを寄せて
相手の浮き名も立て
後世の妨げとなるものです
しまったと思い
我慢しようにも
ながらも共に暮す相手が
やはり思い直してみる気持を身につけて

一 暮しが満足でなくても。親のない不如意な家では、婿の世話はできないが、という含み。
二 相手の女性の人柄がいじらしく思われるような人は。花散里、末摘花のような人。
三 自分にとっても、相手の女性にとっても、結局はよくなるような（末長く添い遂げるような）思慮をしっかり持つことです。
四 しみじみと、誰のせいでもない、自分が悪いのだという気がなさる。**内大臣の焦慮と雲居の雁の嘆き**
「人やりならず」は、人に強いられたのではなく、わが心からの意。
五 顔向けのできぬ思いで、情けない身の上と悲観していらっしゃるが。親不孝を恥じる気持。
六 うわべはさりげなくおっとりとして、実は物思いに日を送っていらっしゃる。「芹根はふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を」（『拾遺集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず。『古今六帖』三、うき）
七 口先だけとは思っても、この人以外誰の言葉を信じたらよいのかと思いながらも。心細い雲居の雁の心情。「いつはりと思ふものから今さらに誰がまことをか我は頼まむ」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず。『古今六帖』四、雑の思ひ）
八 夕霧に縁談を申し込んでおり、源氏もそれに反対でないことは、一七二頁に既出。
九 内大臣は、こと改めてお胸がつぶれることだろう。
一〇 何と冷たいお気持の人であることよ。夕霧のこくて世の中かたほにありとも、人柄心苦しうなどあらむ人をば、それを片かどに寄せても見たまへ。わがため、人のため、つひによかるべき心ぞ深うあるべき」など、のどやかにつれづれなるをりは、かかる心づかひをのみ教へたまふ。

〔源氏の〕かやうなる御いさめにつきて、たはぶれにてもほかざまの心を思ひかかるは、あはれに人やりならずおぼえたまふ。女も、常よりことに大臣の思ひ嘆きたまへる御けしきに、はづかしう、憂き身とおぼし沈めど、上はつれなくおほどかにて、ながめ過ぐしたまふ。〔夕霧の〕文は、思ひあまりたまふをりを、あはれに心深きさまに聞こえたまふ。「誰がまことをか」と思ひながら、世馴れたる人こそ、あながちに人の心をも疑ふなれ、あはれと見たまふ節多かり。「中務の宮なむ、大殿にも御けしき賜はりて、さもやとおぼしかはしたなる」と「女房」と聞こえければ、大臣は、ひき返し御胸ふたがるべし。忍びて、「〔内大臣〕こんな噂を聞きました」「さることをこそ聞きしか。情なき人の御心にもありけるか

一 一つの取柄にも数えて連れ添いなさい
二 女性問題に関する注意をしきりにお教えになる
三 ご用のない折には
四 ご訓戒に従って
五 〔夕霧は〕いよいよ冗談にしろほかの女に心を寄せたりするのは
六 内大臣
七 〔雲居雁は〕胸を打たれてご覧になる
八 恋の道に馴れた人なら
九 男の気持を疑うものだろうが
一〇 雲居の雁
一一 いつもにましてしみじみと深い思いをこめて書いてお寄こしになる
一二 むやみに
一三 源氏にもご内意を伺って
一四 話をまとめようかとどちらもお考えだそうです

と。

一一 源氏の大臣が、お口添えなさったのに、強情にお言葉に従わなかったというので、話をほかに持ってゆかれるのだろう。源氏の仲介があったことは、行幸一五七頁の源氏の話から窺われる。

一二 きまり悪くて横をお向きになる、そのかわいらしさはこの上もない。

一三 雲居の雁は、そのまま部屋の端近くにいて、物思いに沈んでいらっしゃる。

一四 父上は何と思われたことだろう。夕霧に未練があるとでも思われただろうか、と恥じる気持。

一五 夕霧が怨めしいが、それでもやはりお手紙をご覧になる。

一六 あなたの冷たさは、つらいこの世のさだめのようにいつものことになってゆきますが、それでもあなたを忘れぬ私は、普通の人とは違うのでしょうか。「世の常」と「人にことなる」とを対照させた修辞。

一七 (こんなにこまごまと書いてあるのに) 中務の宮との縁談のことをけぶりにも仄めかさない冷淡な方よと。

一八 これ限りと、忘れられないとおっしゃる私を捨てておしまいになるのも、これこそはなやかな世間に靡く人心というものなのでしょう。中務の宮からの縁談に気があるらしいという噂を含んだ歌。夕霧が「人にことなる」と言ったのに対し、「世になびく心」(人並みの心) と言い返した。

な。大臣(一一)の、口入れたまひしに執念かりきとて、引き違へたまふなるべし。心弱くなびきても、人笑へならましこと」(物笑いになることだろうし) (今さら気弱く降参しても) など、涙を浮けてのたまへば、姫君(雲居の雁)、いとはづかしきにも、そこはかとなく涙のこぼるれば、はしたなくて背きたまへる(一二)、らうたげさ限りなし。いかにせまし、なほや進み出でて、けしきをとらまし、などおぼし乱れて立ちたまひぬる名残も、やがて端近うながめたまふ(一三)。あやしく心おくれても進み出でつる涙かな、いかにおぼしつらむ(一四)、などよろづに思ひゐたまへるほどに、御文あり。さすがにぞ見たまふ(一五)。こまやかにて、

(夕霧)一六 つれなさは憂き世の常になりゆくを
忘れぬ人や人にことなる

とあり。(一七)けしきばかりもかすめぬつれなさよと、思ひ続けたまふは憂けれど、

(雲居雁)一八 限りとて忘れがたきを忘るるも

(どうし) (たが) (おとど) (しふね) (そむ) (なごり) (はしちか) (うし) (こまごまと) (つらいけれど) (うし) (たものやら) (やはりこちらから申し出て) (先方の意向を聞いてみようか) (〔内大臣は〕) (思いがけず腑が) (〔雲居雁は〕) (〔夕霧の〕) (書いてあって) (いなくも流れ出た涙だこと)

一　夕霧は、変なことが書いてあると、手紙を下にも置かれず、じっと持ったまま不審そうに見ていらっしゃる。ほかの縁談に心を移すことなど、夢にも考えないので、雲居の雁の歌の意味がすぐに分らないのである。

こや世になびく心なるらむ

とあるを、あやしと、うち置かれず、傾きつつ見ゐたまへり。

藤（ふぢの）裏（うら）葉（ば）

この巻は、源氏三十九歳の三月から十月までの物語である。夕霧は雲居の雁を思いつつなお素知らぬふりを続け、内大臣は夕霧の縁談に焦慮していたが、三月二十日、故大宮の三回忌が極楽寺で催された機会に、二人は和解した。四月はじめ、内大臣は夕霧を自邸の藤の花の宴に招く。長い年月を耐えてようやく結ばれた夕霧と雲居の雁は理想的な夫婦仲である。巻名は、婿取りの宴席で、内大臣が誦した古歌の言葉による。

同じ四月、紫の上は、明石の姫君の入内を控えて、賀茂の社に詣で、その勢いはさすがに光源氏最愛の夫人たることを示すものであった。祭の当日、夕霧は、使いに立つ藤典侍（惟光の娘）に歌をやって慰める。

四月二十日過ぎ、明石の姫君入内に、紫の上は北の方として付き添い参内する。しかし、生母の心を思いやり、後見の役を彼女に委ねるべく、宮中退出の日はじめて明石の上と対面する。二人は互いに相手のすぐれた人柄を感じ、うちとける。

来年四十歳を迎える光源氏のために、世は挙げて御賀の準備に奔走するなかに、帝は源氏を准太上天皇に進められた。「帝王でもなければ、臣下でもない」という発端桐壺の巻の予言は、ここに見事な答えを出している。内大臣や夕霧も昇進し、夕霧夫妻は亡き大宮の三条の邸に移って一家を構えた。

十月二十日過ぎ、六条の院に行幸がある。往年の朱雀院の紅葉の賀を偲ばせるこの盛儀に、光源氏の栄華は極まった。明石の姫君の入内を果し、夕霧の身も固まり、紫の上の声望は高く、物語はめでたずくめの結末を迎えるのである。

一　明石の姫君入内のご準備の間も。入内が四月に延期されたことは、梅枝二六四頁に見える。

二　自分ながら執念深いことだ。少女の巻以来、雲居の雁を思い続けて六年になる。以下、夕霧の心中。

三　内大臣が、目をつぶってしまおうというほどに気が折れていらっしゃるという噂を聞きながら。「関守」は、関所の番人。「人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにうちも寝ななむ」（『古今集』巻十三恋三、業平朝臣。『伊勢物語』五段）による。内大臣が弱気になっていることは、梅枝巻末二七四～五頁に見える。

夕霧と雲居の雁の煩悶

四　同じことなら、体裁の悪くないように、最後まで頑張ろうと。こちらから折れて申し出ることはすまいと。

五　雲居の雁。

六　父内大臣が、ちょっとお口にされた夕霧の縁談のことを、もしそうなったら、自分のことなどすっかり忘れてしまうのであろうと。（梅枝二七四～五頁参照）

七　（このお二人は）妙にお互いに意地を張ったり、怨んだりしながら、それでもやはり慕い合っていらっしゃるのである。

内大臣、心折れる

八　中務の宮家でも、夕霧を婿にと決めてしまわれたなら。以下「なほ負けぬべきなめり」まで、内大臣の思惟。

九　何かとはしたない噂の種にされることもあろう。

御いそぎのほどにも、宰相の中将はながめがちにて、ほれぼれしきここちするを、かつはあやしく、わが心ながら執念きぞかし、あながちにかう思ふことならば、関守の、うちも寝ぬべきけしきに思ひ弱りたまふなるを聞きながら、同じくは人わろからぬさまに見果てむと念ずるも、苦しう思ひ乱れたまふ。女君も、大臣のかすめたまひしことの筋を、もしさもあらば、何の名残かはと、嘆かしうて、あやしく背き背きに、さすがなる御もろ恋なり。

大臣も、さこそ心強がりたまひしかど、たけからぬにおぼしわづらひて、かの宮にも、さやうに思ひ立ち果てたまひなば、またとか改めて婿選びをすることになると く改め思ひかかづらはむほど、人のためも苦しう、わが御方ざまに側も物笑いになって も人笑はれに、おのづから軽々しきことやまじらむ、忍ぶとすれど、

夕霧　物思いに沈みがちで　心もうつろな感じがするのに　なにむやみに恋しいのならば　内大臣　あんなに強気でいらしたけれど　我慢するにつけ　意地の張りがいのないのに思いあぐねられて　誰彼と　相手の方もやりにくかろうし　ご自分の　隠そうとしても

一 内輪の過失も。祖母大宮のもとで、夕霧と雲居の雁がひそかに相愛の仲になっていたこと。

二 表面はさりげなくて、内心では深く恨み合っていられる内大臣と夕霧の間柄なので。

三月、大宮の三回忌法要に、夕霧も参会する

三 改まって申し出るのも、（今まで頑張っておきながら）馬鹿なことと世間が笑おう。以下「……ほのめかすべき」まで、内大臣の思案。

四 内大臣。

五 大宮のご命日なので。大宮薨去のことは、物語に明らかに書かれていないが、行幸一五三頁に「大宮、去年の冬つかたよりなやみたまふ……」とあり、藤袴一八四頁で玉鬘が祖母の喪に服していた。その死が、行幸の巻の後、三月であったことがここで知られる。

六 京都市伏見区深草極楽寺町にあった藤原摂関家の墓所。基経の草創にかかる由来は『大鏡』第五巻に見える。現在宝塔寺がある。

七 お顔立ちなども、ちょうど今が盛りに美しく成人されて。夕霧、この時十八歳。

八 誦経（声をあげて経を読むこと）を依頼するお布施。

九 （幼少の頃育てられた外祖母のこととて）誰にもまして、万端のことを引き受けて。

一 うちうちのことあやまりも、世に漏りにたるべし、とかくまぎらはして、なほ負けぬべきなめり、とおぼしなりぬ。

漏れているだろうし　何とか世間体をつくろって　やはり折れて出なければなるまい　というお気持になった

二 上はつれなくて、恨み解けぬ御仲なれば、ゆくりなく言ひ寄らむもいかがとおぼし憚りて、三 ことことしくもてなさむも、人の思はむところをこなり、いかなるついでしてかはほのめかすべき、などお

きっかけもなしに言い出すのもどんなものかと〔内大臣は〕　一体どんな折にそれとなく切り出せばよいものか

ぼすに、三月二十日、四 大殿、五 大宮の御忌日にて、六 極楽寺にまうでたまへり。君達皆ひき連れ、〔子息の〕勢あらまほしく、〔威勢この上なく〕上達部などもあまた参りつどひたまへるに、宰相の中将、夕霧をさをさけはひ劣らず、よそほしくて、七 容貌など、ただ今のいみじき盛りにねびゆきて、取り集めてたき人の御ありさまなり。この大臣をば、〔内大臣〕つらしと思ひきこえたまひしより、〔夕霧は〕見えたてまつるも心づかひせられて、いといたう用意し、もてしづめてものしたまふを、大臣も、常よりは目とどめたまふ。八 御誦経など、源氏六条の院よりもせさせたまへり。宰相の君は、九 ましてよろづをとりもちて、あはれにいとなみつかうまつりたまふ。

〔法要に〕　一歩もひけをとらず　堂々たる　何もかもすべて　風采で　届けさせなさった　夕霧　ひどい方だと　お目にかかるのもつい気が張って　取り澄ましていらっしゃるのを　誠心誠意お尽し申し上げなさる

一〇 霞が立ちこめてあたりが朧ろななかに、内大臣は昔を思い出しなさって。優艶な春の夕暮れに、大宮生前の若かりし日を思い出す。

一一 さては（雲居の雁のことを思っているのか）と、胸をときめかせてご覧になることがあったのか。

一二 今日の法要の縁故も考えてみて下さるならば。亡き大宮は、内大臣には母、夕霧にとっては祖母ではないかという。

一三 亡くなられた方（大宮）のご意向も、あなた（内大臣）をお頼り申すようにと。婿として世話を受けるようにということ。大宮が二人の結婚に反対でなかったことは、三巻少女二四四頁参照。

一四 ゆっくりもできない雨風に。前に「雨気あり」とあったのを受ける。

一五 （内大臣は）どういうお積りで、いつもに似ず（雲居の雁とのことを）許してもよいような言い方をなさったのであろうなどと。

夕方になって
夕かけて皆帰りたまふほど、〔桜の〕花は皆散り乱れ、霞たどたどしきに、大臣、昔おぼし出でて、なまめかしううそぶきながめたまふ。宰相も、あはれなる夕のけしきに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と人々の騒ぐに、〔夕霧の〕なほながめ入りてゐたまへり。心ときめきに見たまふことやありけむ、袖を引き寄せて、「などか、いとこよなくは勘じたまへる。今日の御法の縁をも尋ねおぼさば、罪許したまひてよや。残り少なくなりゆく末の世に、思ひ捨てたまへるも、恨みきこゆべくなむ」とのたまへば、〔夕霧は〕恐縮のていでうちかしこまりて、「過ぎにし御おもむけも、頼みきこえさすべきさまに、うけたまはりおくことはべりしかど、許しなき御けしきに、憚りつつなむ」と聞こえたまふ。心あわたたしき雨風に、〔参会の人々は〕皆ちりぢりに競ひ帰りたまひぬ。君、いかに思ひて例ならずけしきばみたまひつらむなど、世とともに心をかけたる御あたりなれば、はかなきことなれど耳とまりて、とやかうやと思ひ明かしたまふ。

（桜の）優雅に小声で歌を口ずさんで物思いに沈んでいられる
夕霧
一層しんみりした面持で
（供の）それでも物思いにひたりきっていらっしゃる
（夕霧の）お咎めなさるのか
（内大臣）どうして
そんなにひどく
私の不行届きは許して下さいよ
余命少なくなってゆく老いの身ですのに
私をお見限りなさるのも
お恨み申したい気持です
（夕霧は）恐縮のていで
かねて承っていたことはございましたが
きついお怒りのご様子に
はばか遠慮いたしまして
（参会の人々は）
先を争って
夕霧
絶えず気にかかっている
内大臣家のことなので
ほんの一言ではあったが
ああかこうか
と考えながら一夜をお明かしになる

内大臣、夕霧を藤の花の宴に招く

一　長の年月、雲居の雁を思い続けてきた甲斐があったのか、あちらの大臣（内大臣）もすっかり我を折りなさって。夕霧の側に立った叙述。

二　ちょうど四月の上旬の頃で。二八七頁に「七日の夕月夜」とある。

三　内大臣邸のお庭先の藤の花。晩春初夏の景物。

四　先日の花のもとでの対面は、物足りなく思われたことですが。極楽寺での対面をいう。「花は皆散り乱れ」（前頁）とあった。柏木を通じて言う口上。

五　わが家の藤の花のひとしお色深い夕暮れに、逝く春の名残を求めておいでになりませんか。暗に雲居の雁を許す気持をこめる。「惆悵す春帰つて留むること を得ざることを　紫藤の花の下に漸く黄昏たり」（『白氏文集』巻十三「三月三十日題二慈恩寺一」。『和漢朗詠集』巻上春、三月尽）を踏まえる。

六　いかにも大層見事な藤の花の枝に歌をお付けになっていた。歌に「藤の色濃き」とあったことを受ける。

七　（内大臣から何か言ってきはしないかと）期待していたのがその通りになられたにつけても。夕霧の気持。

八　かえって藤の花を折るのにまごつくのではないでしょうか、夕暮れ時のはっきりしない頃では。内大臣の、今までとは打って変った申し出でに、かえってとまどい、本当にいいのでしょうか、という気持。

一　ここらの年ごろの思ひのしるしにや、かの大臣も、名残なくおぼし弱りて、はかなきついでの、わざとはなく、さすがにつきづきしをお考えになるのにからむをおぼすに、二　四月朔日ごろ、三　御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむこと惜しき盛りなるに、遊びなどしたまひて、暮れゆくほどのいとど色まされるに、頭の中将して、御消息あり。四「一日の花の蔭の対面の、飽かずおぼえはべりしを、御暇あらば、立ち寄りたまひなむや」とあり。御文には、

（内大臣）五
わが宿の藤の色濃きたそかれに
　尋ねやは来ぬ春の名残を

六　げにいとおもしろき枝につけたまへり。七　待ちつけたまへるも、心ときめきせられて、（夕霧）八　かしこまりきこえたまふ。

なかなかに折りやまどはむ藤の花
　たそかれ時のたどたどしくは

（何でもないきっかけで）（そう改まらずに）（やはりふさわしい折というのを）（音楽の演奏など）（柏木）（夕霧に）（内大臣）（このまま散らしてしまうのは）（藤の花が）一層色深く見える折柄）（お立ち寄り下さいませんか）（胸がと）（おれを申し上げなさる）

九 情けないほど気後れしてしまいました。（意を尽せないところは）よろしく取り繕ってお伝え下さい。使いの柏木に向って言う言葉。

一〇 面倒なお供はいりません。「随身」は、上皇、摂関以下、近衛の中少将などの警護に付く近衛府の武官。柏木は、中将なので、戯れてこういう。

一一 源氏のお前に来て、これこれのお便りがございましたとお目におかけになる。

一二 先方からそうはっきり折れて出られたのなら、昔の不快な思いをした恨みも解けるというものだ。かつて源氏がこの一件に口を入れようとした時、内大臣が拒否したことをいう（行幸一五七頁参照）。

一三 内大臣邸の対の屋の前の藤。

一四（招きに応することを）承諾なさる。内大臣家の婿になることを承認したのである。

一五 直衣が（二藍では）あまり濃過ぎて、身分が軽く見えよう。非参議の頃とか、大した官職もない若い者なら、二藍はよいであろうが。「非参議」は、四位で参議になる資格のある者。夕霧はすでに宰相（参議の唐名）の中将である。「二藍」は、藍と紅で染めた、紫に近い色。

一六 ご自分のお召し料の格別見事なのに。縹（薄い藍色）の直衣である。

一七 すばらしい袿を何枚も取り揃えて、部屋に帰る夕霧に、（家来に）持たせて、さし上げなさる。

夕霧、源氏に報告

と聞こえて、（夕霧）「くちをしくこそ臆しにけれ。取りなほしたまへよ」と聞こえたまふ。（柏木）「御供にこそ」とのたまへば、（夕霧）「わづらはしき随身は否」とて、（柏木を）返しつ。

大臣の御前に、かくなむとて御覧ぜさせたまふ。（源氏）「思ふやうありてものしたまへるにやあらむ。さも進みものしたまはばこそは、過ぎにしかたの興なかりし恨みも解けめ」とのたまふ。御心おごり、こよなうねたげなり。（夕霧）「さしもはべらじ。対の前の藤、常よりもおもしろう咲きてはべるなるを、静かなるころほひなれば、遊びせむなどにやはべらむ」と申したまふ。（源氏）「わざわざと使ささせたりけるを、早うものしたまへ」とゆるしたまふ。（夕霧は）いかならむと、下には苦しう、ただならず。（源氏）「直衣こそあまり濃くて軽びためれ。非参議のほど、何となき若人こそ、二藍はよけれ。ひきつくろはむや」とて、わが御料の心ことなるに、えならぬ御衣ども具して、御供に持たせてたてまつれたまふ。

（内大臣に何かお考えがあってお招きになったのであろう）
（その得意なご様子全く憎らしいほどである）
（例年よりも）
（咲いているそうですから）
（公務も暇な時ですから）
（音楽でもやろうというのでございましょう）
（使いを遣わされたのだから早く出かけなさい）
（内心は不安で落着かない）
（夕霧は）どんなだろうと

夕霧、内大臣邸に着く

一 夕暮れ時も過ぎ、先方が待ち兼ねて気をもまれる頃においでになった。昔、源氏が、右大臣家の藤の花の宴に招かれた時を想起させる書き方（二巻花宴五九～六〇頁参照）。

二 主人側の君達。内大臣の子息たちである。

三 内大臣。

四 内大臣が、冠などお着けになって。今までの烏帽子を改めたのである。「冠」は、束帯（礼装）などの改まった時着用し、直衣（日常着）の場合は、普通は烏帽子を着ける（図録九参照）。

五 雲居の雁にとっては継母。

六 年々大層立派になってゆく人だ。「警策」は、もと詩文のすぐれていることをいう。漢詩文から出た男性用語。

七 あちら（源氏）は、ただもう優雅で魅力があって、会うとついほほえみたくなり、憂き世のことを忘れるような感じがおありだ。

八 政治家としては、少し謹厳さを欠いて、儀式ばらないところがあったが、それもあの人柄からすれば無理もないことだ。杓子定規な実務家タイプでないと言う。一世の源氏として、帝の膝下で育ったからである。源氏自身も「みづからのあざればみたるかたくなしさ……」（初音二七頁）と言っている。

九 学才の程もすぐれ。大学に学んで、試験に優秀な成績で及第したことは、少女の巻に詳しい。

〔夕霧は〕大層念入りに わが御方にて、心づかひいみじう化粧じて、たそかれも過ぎ、心やましきほどにまうでたまへり。主人の君達、中将をはじめて、七八人うち連れて迎へ入れたてまつる。〔夕霧を〕〔子息たちは〕いづれとなくをかしき容貌どもなれど、〔夕霧は〕なほ人にすぐれて、すっきりとして美しいだけでなくあざやかにきよらなるものから、なつかしう、よしづき、みやびかで犯しがたい気品がある はづかしげなり。大臣、整え直させたりなさる御座ひきつくろはせなどしたまふ御用意、お心遣いは並々でない おろかならず。御冠などしたまひて、〔設けの席に〕出でたまふとて、北の方、〔内大臣〕若き女房などに、「のぞきて見たまへ。いと警策にねびまさる人なり。振舞など落着いて用意など静かに、堂々たるものだものものしや。あざやかに、人よりはとび抜けて老成していることでは抜け出でおよすけたるかたは、父大臣よりも優っているぐらいだろうあめれ。かれは、ただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るるここちぞしたまふ。公ざまは、すこしたはれて、あざれたるかたなりし、ことわりぞかし。これは、夕霧才の際もまさり、心構えも男らしくもちゐ男々しく、すくよかに足らひたりと、しっかりしていて申し分がない世間で取り沙汰していようだめり」などのたまひてぞ、対面したまふ。ものまめやかに、むべむ

一〇 藤の花の宴にお移りになった。

一一 春の花は、どれも皆咲きそめる色ごとに、もの珍しく思われぬものはないのに。梅や桜である。

一二 この藤の花だけが遅れて、夏まで咲き続いているのが。「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」（『拾遺集』巻三夏、源重之）による。一人残る娘（雲居の雁）を暗に仄めかす言い方。

一三 色も色で、（紫なので）なつかしい由縁のものといえましょう。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（『古今集』巻十七雑上、題しらず、読人しらず）による。暗に結婚を申し出た言い方。

一四 二八七頁に「七日の夕月夜」とある。

一五 あなたは、末世には過ぎるほど、天下の識者でいらっしゃるようですが。

「末の世」は、末法の世（一巻若紫二〇六頁注二参照）。「有職」は、ここでは、政治家として学問、前例に精通している人。

一六 書物にも、父子の礼ということが書かれているではありませんか。『河海抄』は、『史記』高祖本紀の、漢の高祖が皇帝になった後も、父太公に一家における父子の礼を尽したことをあげる。

一七 聖人の教えもよくご承知と存じますのに。「なにがし」は、周知のことをおぼめかしていう語。儒教では、孝を最も重んじるところから、自分（内大臣）を父としてみてくれ、という含意。夕霧が大学で儒学を修めた経歴は、少女の巻に詳しい。

内大臣、結婚を申し出る

（内大臣）一二 らしいご挨拶は べしき御物語は、すこしばかりにて、一〇花の興に移りたまひぬ。「春の花いづれとなく、皆開け出づる色ごとに、目おどろかぬはなきを、気ぜわしく我々に構わず散ってしまうのが 心短くうち捨てて散りぬるが、うらめしうおぼゆるころほひ、一二この花のひとり立ち後れて、夏に咲きかかるほどなむ、あやしう心にく 可憐に思われます くあはれにおぼえはべる。色もはた、なつかしきゆかりにしつべし」とて、含みのある笑を浮べられたのは うちほほゑみたまへる、風格があって けしきありて、輝くように美しい にほひきよげなり。

一四 月はさし出でぬれど、〔まだほの暗くて〕花の色さだかにも見えぬほどなるを、花を賞 もて 翫するのに心を傾けて あそぶに心を寄せて、大御酒参り、御遊びなどしたまふ。大臣、ほ ご合奏などをなさる どなく空酔ひをしたまひて、〔夕霧を〕遠慮もせず 乱りがはしく強ひ酔はしたまふを、さ 〔夕霧は〕 用心して 大層辞退するのに困っている る心して、いたうすまひなやめり。（内大臣）一五「君は、末の世にはあまるまで、天の下の有職にものしたまふめるを、齢古りぬる人思ひ捨てたまふ 私のような年寄りをお見限りなのが 恨めしく思われたことです なむつらかりける。文籍にも、家礼といふことあるべくや。なにがしの教へも、よくおぼし知るらむと思ひたまふるを、いたう心なや ずいぶん私をお苦し

一　どうしてそのような。今は亡き方々（亡き母葵の上や祖母大宮）を思い出しますお身代りとしまして。

二　潮時を見計らって賑やかに囃し立てて。主語は内大臣。夕霧をもてなす体。

三　「春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はば我も頼まむ」（『後撰集』巻三春下、男のもとより頼めおこせてはべりければ　読人しらず）。「藤の裏葉の」まで「うらとけて」を言う序。「藤の裏葉」は、藤の若葉。「うらとけて」は、心を開いて隔てなくうちとける意。下の句は、あなたが熱意を示してくれるなら、私も心を一つに合せよう、の意。

四　紫の色濃く、格別房の長い見事な藤の枝を折って、客（夕霧）のお盃に持ち添えさせる。雲居の雁を許したことをあらわす。

五　紫の藤の花（雲居の雁）のせいにしておきましょう、お申し込みを待ち受けていましたのに、今日に及んだのはつらく存じますが。「まつ」に「松」を掛け、「藤」の縁語。「うれたし」に、藤の縁語としての「末」が響く。

六　ほんの形ばかり拝舞なさるご様子は。拝舞は、謝意をあらわす時の礼の仕方。（一巻桐壺三七頁注一九参照）。内大臣を岳父として敬ったもの。

七　幾たび涙にくれた春を過してきて、花咲く今日―お許しの出た今日に逢うことでしょう。「いくかへり咲き散る花をながめつつ物思ひくらす春にあふらむ」（『新古今集』巻十一恋一、能宣朝臣）

めになると　お恨みを申したいのです

ましたまふと、恨みきこゆべくなむ」などのたまひて、酔ひ泣きに

ほどよく抑えて意中を仄めかしなさる　（夕霧）一

や、をかしきほどにけしきばみたまふ。「いかでか。昔を思うたま

身を捨ててまでもと　深く心に決めて

へ出づる御かはりどもには、身を捨つるさまにもとこそ思うたま

何と思し召してそのようにおっしゃるのでしょうか　これも元来がうかつ　おりますのに

知りはべるを、いかに御覧じなすことにかはべらむ。もとよりおろ

な私の至らなさのためです　お詫びを申し上げなさる

かなる心のおこたりにこそ」と、かしこまりきこえたまふ。二御時よ

〔内大臣の〕お心をお受け

くさうどきて、三「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御けしきを賜

柏木　して

はりて、頭の中将、四花の色濃く、ことに房長きを折りて、客人の御

〔夕霧は〕　処置に困っていると

盃に加ふ。取りてもてなやむに、大臣、

五　紫にかことはかけむ藤の花

まつより過ぎてうれたけれども

夕霧

宰相、盃を持ちながら、六けしきばかり拝したてまつりたまへるさま、

優雅である

いとよしあり。

（夕霧）七　いくかへり露けき春を過ぐし来て

花のひもとくをりにあふらむ

八（夕霧から）柏木に盃をおさしになると。盃を受けて歌を詠むのが作法。

九 なよやかな美女の袖の色にも似た藤の花は、賞美する人によって一層美しさを増すことでしょう。「藤の花」に、雲居の雁をよそえる。

一〇 次々と廻る盃とともに、歌が詠まれるようだが、酔余の興で大したこともなく、これよりすぐれた歌はない。以下の歌を省略する旨の草子地。

一一 いかにも（お歌に詠まれたとおり）。「かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし」に呼応する。

夕霧、柏木に導かれて、雲居の雁に逢う

一二 あの声のよい弁の少将が。

柏木の弟。（梅枝二二八〇頁参照）

一三 催馬楽、呂「葦垣」。「葦垣真垣　真垣かきわけてふ越すと　負ひ越すと　誰　てふ越すと　誰か　誰か　この事を　親に　まうよこし申しし　とどろける　この家　この家の　弟嫁　親に　まうよこしけらしも（下略）」。男が垣を越えて、娘を背負って盗んでゆくと、誰が親に告げ口したのか、権勢を誇るこの家の弟嫁が告げたのだ、の意。「てふ」は、囃し言葉。内大臣が結婚を許したことを口惜しく思う気持から、わが家の姫を盗んでゆくのは誰だとあてこすったもの。

一四 ずいぶん妙な歌を歌うものだ。「けやけし」は、普通とは変っているさまをいう。

一五 前出「葦垣」の「とどろける　この家の」を歌い換えたもの。古い家であるわが家の、と謙遜の意を示す。

一六 頭の中将に賜へば、

（柏木）一九 たをやめの袖にまがへる藤の花
見る人からや色もまさらむ

一〇 次々順流るめれど、酔ひのまぎれにはかばかしからで、これよりまさらず。

七日の夕月夜、かげほのかなるに、池の鏡のどかに霞みわたれり。茂りもやらぬ

一二 げに、まだほのかなる梢どもの、さうざうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。

物足りぬ感じのする季節であるのに　大層風情のある枝ぶりで横に張っている松の　さほど木高くはない枝に　〔藤の〕

一三 例の弁の少将、声いとなつかしくて、葦垣を歌ふ。大臣、「いとけやけうもつかうまつるかな」と

一四 冗談になさって

一五 うち乱れたまひて、「年経にけるこの家の」とうち加へたまへる御声、いとおもしろし。をかしきほどに乱りがはしき御遊びにて、もの思ひ残らずなりぬめり。やうやう夜ふけゆくほどに、いたうそらなやみして、「乱りごこちいと堪へがたうて、まかでむ空もほとほ

興をそそる程度に　くつろいだご遊宴で　ほんとうにうっとりとする美声で　かまりは跡形もなくなったようだ　〔夕霧は〕ひどく酔ったふりをして　気分が悪くて　我慢できませず　おいとまするにも道中が危な

一 あなたのご寝所を貸して下さいませんか。「宿直所」は、宮中の宿泊所。たわむれて言う。

二 私はひどく酔い過して失礼ですから、引っ込みますよ。「翁」は、あとは若い人たちに任せます、という気持から出た言葉。

三 花のもとの一夜の旅寝ですね。どういうものだろう、つらい案内役ですね。浮気の仲立ちは迷惑だ、の意。

四 色変えぬ松に咲きかかる藤は、浮気な花でしょうか。（旅寝などとは）縁起でもない。眼前の光景によそえ、雲居の雁と自分の仲を喩える。

五 しゃくなことだと思う点はあるが。内大臣家の者として、やはり弁の少将と同じ気持。

六 夕霧は、夢かと思われるにつけ、ご自分の値打ちをひとしお痛感なさったことであろう。草子地。内大臣から丁重に婿としてもてなされたからである。雲居の雁と逢う場面なので「男君」という。

七 （恋死にして）世間の話題にもなりそうな私でしたが、父大臣は進んでこうまで丁重に婿としてお許し下さったのでしょう。「恋しきに死ぬるものとは聞かねども世のためしにもなりぬべきかな」（『古今六帖』四、恋、伊勢。『伊勢集』第二、三句「死ぬてふことは聞こえぬを」）

八 （それなのにあなたは）私の気持を分って下さらないとは、並はずれたお仕打ちですね。雲居の雁が恥じらって、うちとけないのを怨むのである。

つかしくなってしまったようです（柏木）としうこそはべりぬべけれ。宿直所（とのゐどころ）ゆづりたまひてむや」と、中将に愁（うれ）へたまふ。大臣（おとど）、「朝臣（あそむ）や、御休み所（おきな）もとめよ。翁（おきな）いたう酔（ゑ）ひ進みて無礼（むらい）なれば、まかり入りぬ」と言ひ捨てて入りたまひぬ。

お休みの場所を用意せよ

中将（柏木）、「花の蔭（三）の旅寝（たびね）よ。いかにぞや、苦しきしるべにぞはべるや」と言へば、「松（夕霧）に契（ちぎ）れるは、あだなる花かは。ゆゆしや」とて責めたまふ。中将（柏木）は、心のうちに、ねたのわざ（五）やと思ふところあれど、人ざまの思ふさまにめでたきに、かうもあり果てなむと、心寄せわたることなれば、うしろやすく導きつ。

お願いなさる

おせかしになる

夕霧の人柄が非の打ちどころなく立派なので

こういう結果になればよいと

久しく望んでいたことであるので

とどこおりなく（寝所へ）案内した

男君（六）は、夢かとおぼえたまふにも、わが身いとどいつかしうぞおぼえたまひけむかし。女は、いとはづかしと思ひしみてものしたまふも、ねびまされる御ありさま、いとど飽かぬところなくめやすし。「世（夕霧）の例（たぐひ）にもなりぬべかりつる身を、心もてこそかうまでもおぼし許さるめれ、あはれを知りたまはぬ（八）も、さま異なるわざかな」と、怨みきこえたまふ。「少将（夕霧）の進み出だしつる葦垣（あしがき）のおもむきは、

雲居の雁とても目も見合せられぬような思いでいらっしゃるけれども

ずっと女らしくなられたご様子は

何不足なくお美しい

歌い出した

歌の心は

九 ひどい人だな。はっきり物を言う人だな、の意。詠嘆の助詞「かな」に、終助詞「な」のついたもの。

一〇「河口の」と言い返してやりたかったね。催馬楽、呂「河口」。「河口の　関の荒垣や　関の荒垣や　守れども　はれ　守れども　出でて我寝ぬや　出でて我寝ぬや　関の荒垣」。親が守っているが、そっと抜け出して男と共寝をしたという女の歌。雲居の雁とはとうの昔、女のほうも心を交わして逢っていたのだという暗示。河口の関は、伊勢の国壱志郡にあった。

一一 あの時、浮き名を立てられたのは、一体どんなふうに私たちのことをお漏らしになったからでしょうか。催馬楽「河口」の歌句を詠み込み、「浅き」「流し」は「河」の縁語。「漏らし」は、「関」（堰）の縁語。

一二 あんな騒ぎになったのはお守り役の父君のせいですのに、私の至らなさからだとばかり言わないで下さい。「もりにける」に「漏り」「守り」を掛ける。「岫田の関」は、「河口の関」の異称。

一三「玉すだれ明くるも知らで寝しものを夢にも見じと思ひかけきや」（『伊勢集』による措辞。（一巻桐壺二八頁注七参照）

一四 寝乱れた夕霧の朝のお顔、ほんとに見がいのあること。草子地。「寝くたれの朝顔の花秋霧に面隠しつつ見えぬ君かな」（『河海抄』所引。出典不明）

一五 後朝のお手紙。新婚の翌朝、女のもとに届ける。

一六 口の悪い女房連が目引き袖引きしていると。

後朝の文と内大臣の満足

耳とどめたまひつや。いたき主かなな。河口の、とこそさしいらへまほしかりつれ」とのたまへば、女、いと聞き苦しとおぼして、

「浅き名を言ひ流しける河口は
　　いかが漏らしし関の荒垣
あさましし」とのたまふさま、いと子めきたり。すこしうち笑ひて、

「もりにける岫田の関を河口の
　　浅きにのみはおほせざらなむ

年月の積りも、いとわりなくてなやましきに、ものおぼえず」と、酔ひにかこちて苦しげにもてなして、明くるも知らず顔なり。人々聞こえわづらふを、大臣、「したり顔なる朝寝かな」ととがめたまふ。されど、明かし果ててぞ出でたまふ。ねくたれの御朝顔、見るかひありかし。

御文は、なほ忍びたりつるさまの心づかひにてあるを、なかなか今日はえ聞こえたまはぬを、もの言ひさがなき御達つきじろふに、

（お分りでしたか）（雲居雁）（夕霧は）（大層おっとりしている）（あんまりです）（夕霧）（もう耳をふさぎたくお思いになって）（何も分らない）（とても切なくて胸苦しいほどですから）（酔いにかこつけていかにも苦しそうな様子で）（女房た）（得意顔した）（文句をおっしゃ）（ちがお起ししかねているのを）（夕霧は）（やはりまだ暗いうちにお帰りになる）（今まで同様目立たぬように心遣いをして届けられたのを）（雲居雁は）（かえって）（今日はお返事をお書きになれないのを）

一 本当に困ってしまう。雲居の雁の気持になっての草子地。
二 たまらないつらさにまたも命が絶えそうに思われるにつけても。前に、恋死にのために「世の例にもなりぬべかりつる身を」と言ったのを踏まえる。
三 咎めないで下さい、隠れてそっと絞る手もだるくなって、今日は人目に立つ袖の涙ですが。今日からは誰にも遠慮しませんよ、の意。
四 ひどく馴れ馴れしい詠みぶりだ。
五 以前夕霧を遠ざけていた頃の気配は跡形もない。
六 (内大臣は)「みっともないぞ」とおっしゃりながら、(雲居の雁が)ご遠慮なさるのも無理からぬことなので、あちらへおいでになる。
七 後朝の文使いへの禄。「禄」は、労をねぎらって与える物。衣服が普通で、新婚の祝儀には特にはなやかにした。
八 お使いを、風情のあるやり方でおもてなしになる。酒肴を勧めるのである。
九 今日は顔付きなどひとかどの者のように振舞っているようだ。
一〇 右近衛府の三等官。正六位上相当。

源氏、夕霧を諭す

大臣わたりて見たまふぞ、いとわりなきや。

(夕霧)うちとけて下さらなかったご様子に いよいよわが身の程が思い知られることです

尽きせざりつる御けしきに、いとど思ひ知らるる身のほどかな。

堪へぬ心にまた消えぬべきも、

とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみ

今日あらはるる袖のしづくを

など、いと馴れ顔なり。うち笑みて、(内大臣)字が大層お上手になられたものだ「手をいみじうも書きなられにけるかな」などのたまふも、昔の名残なし。(雲居雁の)御返り、いと出で来がたげなれば、「見苦しや」とて、さもおぼし憚りぬべきことなれば、わたりたまひぬ。御使の禄、なべてならぬさまにて賜へり。中将、をかしきさまにもてなしたまふ。常にひき隠しつつ隠ろへありきし御使、今日は、面もちなど人々しくふるまふめり。右近の将監なる人の、むつましうおぼし使ひたまふなりけり。

出来そうにないので 並々ならぬ品々を用意して 柏木 (夕霧の文を) そっとやってきていた

六条の大臣源氏も、昨夜の次第をご承知あそばしたかくと聞こしめしてけり。宰相夕霧、常よりも光添ひて参りたまへれば、うちまもりたまひて、(源氏)「今朝はいかに。文など

美しさの増した様子で参上なさると じっとご覧になって お手紙な

一 賢明な人でも、女の事ではしくじる例もあるのだが。『河海抄』は、「寛平遺誡　左大将藤原朝臣者功臣之後、其年雖レ少、已熟二政理一。先年於二女事一有レ所レ失」と注する。

二 内大臣のなさり方が、あまりにもかたくなで、今になってすっかり折れておしまいになったのを。「すくむ」は、柔軟性がなく堅苦しいこと。今までいちずに夕霧を拒んできた態度をいう。

三 だからといって、自分のほうがえらいのだといった顔をして。

四 （夕霧が）とてもお子さまとは見えず、ほんの少少の年長ぐらいにお見えである。夕霧と兄弟のような源氏の若々しさ。源氏三十九歳、夕霧十八歳である。

五 源氏のお前に出ると、お二人はそれぞれ特徴があって、ああすばらしいとお見えになる。

六 薄縹色の御直衣。高位、年輩になるほど、薄縹になる。

七 白い袿の唐織めいたのが、紋様がはっきり浮き出て艶やかに透いて見えるのをお召しになって。

八 夕霧。社会的地位の重さを印象づける呼び方。

九 源氏よりは少し濃い縹の御直衣に。昨日、源氏から贈られたものである（二八三頁参照）。

一〇 丁子染の焦茶に見えるほど濃い袿に、白い綾の柔らかいのをお召しになっているのが。「丁子染」は、丁子を濃く煎じた汁で染めたもの。黄色味を帯びた薄紅色。

一一 見苦しいほどものしつや。さかしき人も、女の筋には乱るる例ありを、人わろく思い詰めたりかかづらひ、心いられせで過ぐされたるなむ、すこし人に抜けたりるお人柄だと思ったことだける御心とおぼえける。大臣の御おきての、あまりすくみて、名残なくくづほれたまひぬるを、世人も言ひ出づることあらむや。さりとても、わが方たけう思ひ顔に、心おごりして、すきずきしき心ばへなど漏らしたまふな。さこそおいらかに、大きなる心おきてと見ゆれど、下の心ばへ男々しからず癖ありて、人見えにくきところつきたまへる人なり」など、例の教へきこえたまふ。ことうちあひ、

じれたりせずに今日まで過されたのは
出されてはいけない〔内大臣は〕いかにも大様で
内心は
浮気な気持などを
いい気になって
度量の広いど性格とは見えるが
付き合いにくいところのある
釣合いもよく
お人だ

一二 似合いのご縁組だとめやすき御あはひとおぼさる。〔源氏は〕御子とも見えず、すこしがこのかみばかりと見えたまふ。ほかほかにては、〔夕霧は〕同じ顔を写し取りたると見ゆるを、御前にては、さまざま、あなめでたと見えたまへり。大臣は、薄き御直衣、白き御衣の唐めきたるが、紋けざやかにつやつやと透きたるをたてまつりて、なほ尽きせずあてになまめかしうおはします。宰相殿は、すこし色深き御直衣に、丁子染のこがるるまで

別々にいる時には
このお年でなおどこまでも気品があり優美でいらっしゃ

一 誕生仏を寺からお移し申し上げて。四月八日、灌仏会(仏生会とも)といって、誕生間もない小さな釈迦像(右手を上げて天を指し、左手を下げて地を指す)に、偈を誦しながら香水を灌ぐ法会。その功徳は広大とされた。『三宝絵』に、承和七年四月八日、はじめて宮中清涼殿で行われて後、世に広まったとある。(図録一一参照)

六条の院の灌仏会

二 法要を主宰する僧。

三 六条の院のご婦人方から、女の童を使者に立てて、僧へのお布施など、朝廷の儀式通り、思い思いになさった。

四 なまじ格式張った帝の御前よりも。

夕霧の理想的な結婚生活始まる

五 気が気でなく。前に、灌仏会は「日暮れて」始まったことが見える。結婚第二夜である。

六 取り立てた扱いではないが、お情けをおかけになった若い女房などは。夕霧づきの女房である。

七 (お二人の仲に)いささかの隙もあろうか。「などてかくあふごかたみになりにけむ水漏らさじと結びしものを」(『伊勢物語』二十八段)による措辞。

八 舅の内大臣は、側近く見ると一層美しい婿君を。

九 何のわだかまりも残りそうになく。「おぼし許す」に掛る。

一〇 長年ほかの女に目もくれずお過しだったことなどを、なかなか出来ないことと、ご満足に思う。

一一 弘徽殿の女御。雲居の雁の異母姉。

しめる、白き綾のなつかしきを着たまへる、ことさらめきて艶に見ゆ。

(改まったおめかしで 優雅 に見える)

灌仏 率てたてまつりて、御導師遅く参りければ、日暮れて、御方々より童女出だし、布施など、公ざまにかはらず、心々にしたまへり。御前の作法をうつして、君達なども参りつどひて、なかなかうるはしき御前よりも、あやしう心づかひせられて臆しがちなり。

(清涼殿の儀式にならって 諸家の若殿たちも 気が張って)

夕霧 宰相は、静心なく、いよいよ化粧じひきつくろひて出でたまふを、わざとならねど、情だちたまふ若人は、うらめしと思ふもありけり。年ごろの積り取り添へて、思ふやうなる御仲らひなめれば、水漏らむやは。主人の大臣、いとどしき近まさりを、うつくしきものにおぼして、いみじうもてかしづききこえたまふ。負けぬるかたのくちをしさはなほおぼせど、罪も残るまじうぞ、まめやかなる御心ざまなどの、年ごろ異心なくて過ぐしたまへるなどを、ありがたくおぼし許す。女御の御ありさまなどよりも、はなやかにめでたくあらま

(おめかしし衣服を整えて 長年嘆かれていた思いも添って 申し分のないご夫婦仲のようだから 大層大切にお世話申し上げなさる 夕霧が真面目なご性格でもあって こちらから折れて出た無念さ はいまだにお胸に残っているが かわいくお思いになって 理想的な)

紫の上、御形詣での帰り、賀茂の祭を見物

ほしければ、北の方、さぶらふ人々などは、心よからず思ひ言ふもあれど、何の苦しきことかはあらむ。按察使の北の方なども、かかるかたにてうれしと思ひきこえたまひけり。

かくて六条の院の御いそぎは、二十余日のほどなりけり。対の上、御形にまうでたまふとて、例の御方々いざなひきこえたまへど、なかなか、さしも引き続きて心やましきをおぼして、誰も誰もとまりたまひて、ことことしきほどにもあらず、御車二十ばかりして、御前なども、くだくだしき人数多くもあらず、ことそぎたるしも、けはひことなり。祭の日の暁にまうでたまひて、かへさには、物御覧ずべき御桟敷におはします。御方々の女房、おのおの車引き続きて、御前、所占めたるほどいかめしう、かれはそれと、遠目よりおどろおどろしき御勢なり。大臣は、中宮の御母御息所の、車押し避けられたまへりしをりのことおぼし出でて、「時による心おごりして、さやうなることなむ情なきことなりける。こよなく思ひ消ちたりし

三 内大臣の北の方。女御の実母。雲居の雁の継母。
三 何の構うことがあろう。夕霧夫妻の立場に立っての草子地。
四 按察使の大納言の北の方。雲居の雁の実母。（三巻少女二三一頁注一六参照）
五 明石の姫君の入内の儀。
「いそぎ」は、支度。
六 四月二十日過ぎ。
七 紫の上。
八 賀茂の祭、四月の中の申の日を国祭、また御阿礼の日という。上賀茂神社の祭神別雷の神の降誕を再現する神事が深夜行われる。もともとは賀茂の祭の本祭であったとおぼしく、山城の国司が検察するので国祭という。「みあれ」とは、神の降誕を意味する語。
九 例によって六条の院のほかの婦人方をお誘いなさったけれども。
一〇 御形の日の翌日、中の酉の日の祭の日。この日は朝廷から勅使が遣わされて奉幣の儀がある。
一一 見物のための仮屋。一条の大路である。
一二 六条の院のほかの婦人方お付きの女房たち。
一三 紫の上の桟敷の前に、よい場所を占めている光景は盛大なもので。
一四 秋好む中宮の御母六条の御息所が。例の車の所争いの一件である（二巻葵六九～七一頁参照）。
一五（御息所を）頭から馬鹿にしていた人も。葵の上のこと。

人も、嘆き負ふやうにて亡くなりにき」と、そのほどはのたまひ消ちて、「残りとまれる人の、中将はかくただ人にて、わづかになりのぼるめり。宮は並びなき筋にておはするも、思へば、いとこそあはれなれ。すべていと定めなき世なればこそ、何ごとも思ふままにて、生ける限りの世を過ぐさまほしけれ、残りたまはむ末の世などの、たとしへなきおとろへなどをさへ、思ひ憚らるれば」などうちかたらひたまひて、上達部なども御桟敷に参りつどひたまへれば、そなたに出でたまひぬ。

（源氏）　夕霧　臣下として　どうにか立身している程度でしょう　中宮はこの上ない后の位におつきでいられるのも　感慨無量なもの　自分の思い通りがあります　何につけ栄枯盛衰常ならぬこの世ですから　あとに残られるあなたなどの晩年のに　生きている限りのこの世を過したいものですが　見る影もない落ちぶれようなどまでがしみじみ述懐なさって　（源氏は）

近衛司の使は、頭の中将なりけり。かの大殿にて、出で立つ所よりぞ人々は参りたまうける。藤典侍も使なりけり。おぼえことにて、内裏、春宮よりはじめたてまつりて、六条の院などよりも、御とぶらひども所狭きまで、御心寄せいとめでたし。宰相の中将、出で立ちの所にさへとぶらひたまへり。うちとけずあはれをかはしたまふ御仲なれば、かくやむごとなきかたに定まりたまひぬるを、た

柏木　格別目をかけられて　源氏　（典侍の）　夕霧　出発の所にまでわざわざお手紙をお届けになった　（典侍は）　（夕霧が）こうして権門の婿君におなりになったことを

一　御息所の嘆きを身に引き受けたような格好で亡くなってしまいました。

二　その辺のこと（葵の上の死の真相）については言葉を濁されて。御息所の生霊の一件である（二巻葵八二頁以下参照）。

三　あとに残った子供は。以下、葵の上の子の夕霧と御息所の子の秋好む中宮の現状を比較する。

四　気になりますので（勝手なことをするのもつつしまれるのです）。

五　賀茂の祭の勅使。近衛の中少将が立つ。

六　柏木の父内大臣のお邸で、（柏木が）出発するところにまず参上して、そこから上達部たちは源氏の桟敷に参上なさったのだった。当日、知人は勅使の出立所に挨拶に行くのが作法。

七　惟光（源氏の乳母子で腹心の家来）の娘。五節の舞姫に出、典侍に任ぜられた。夕霧の愛人。（少女二六〇～二六二頁参照）

八　内侍所からの使い。『江家次第』賀茂の祭の「路頭次第」の中に「内侍車」とある。

九　お祝いの贈り物が数々置き所がないまで届けられて。

一〇　夕霧と藤典侍は、人目を忍んで情を交わすお間柄なので。「うちとけず」は、心安い公然の仲でないこと。

一一何という名だったのか、今日の挿頭は、その「葵」（「逢ふ日」を掛ける）を目の前に見ながら、思い出せないぐらいになってしまった。逢うこともなく日数を経たことをいう。

一二時宜に適ったお便りという点だけを、うれしく思ったのか。長い間逢って下さらないのは恨めしいけれど、という気持が裏にある。

一三頭に挿頭してもなおはっきり思い出せない葵草の名は、桂を折られたあなたこそよくご存じでしょう。逢えないのはなぜか、あなたのご結婚のせいです、の意。「桂を折る」は、進士に及第することをいう。夕霧の進士及第は、少女二七一頁参照。「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」（『拾遺集』巻八雑上、菅原の大臣かうぶりしはべりける夜、母の詠みはべりける）。賀茂の祭には、葵とともに桂も挿頭にする。

一四あなたのような学者でなければ、分りません。「博士」は、原義は大学の教官。

一五北の方が付き添われるのが慣例であるが。従って、紫の上が付き添われるべきなのだが、という意。

姫君入内の後見に明石の上を添える

一六いつもいつも長くはお付き申していらっしゃれないだろうし。以下「……添へまし」まで、源氏の心中。

一七あのお世話役。姫君の生母明石の上のこと。

一八紫の上。以下「つひに……」より「……もあいなし」まで、紫の上の思い。

藤裏葉

心おだやかでなく思っていた
だならずうち思ひけり。

（夕霧）一二
「何とかや今日のかざしよかつ見つつ
おぼめくまでもなりにけるかな

あきれたことだ
あさまし」とあるを、一三をり過ぐしたまはぬばかりを、いかが思ひけ
大層あわただしく
む、いともの騒がしく、車に乗るほどなれど、

（藤典侍）一三
「かざしてもかつたどらるる草の名は
桂を折りし人や知るらむ

一四博士ならでは」と聞こえたり。はかなけれど、ねたきいらへとおぼす。なほこの内侍にぞ思ひ離れず、はひまぎれたまふべき。

たかが女の歌とはいえ　あざやかなお返しだと
こっそりお逢いになっているらしい

姫君の入内には
かくて御参りは、一五北の方添ひたまふべきを、一六常に長々しうはえ添ひさぶらひたまはじ、かかるついでに、一七かの御後見をや添へましと

付き添わせようかと
結局は一緒になられるはずなのに　今のように親子別々に暮していられるの
おぼす。上も、一八つひにあるべきことの、かく隔たりて過ぐしたまふを、かの人も、ものしと思ひ嘆かるらむ、この御心にも、今はやうやうおぼつかなく、あはれにおぼし知るらむ、かたがた心おかれた

明石の上
ひどいと内心嘆いていられるであろう　姫君のお気持としても　ご成人の今
お二人からおもしろくなく思
つらいとお感じになっているであろう
は次第に母恋しく

一 まだとてもか弱い年頃なのも心配ですのに。明石の姫君はこの時十一歳。

二 気を付けるといっても、なかなか行き届きかねるものですから。「心いたる」は、心の行き届く意。

三 こうこうだと。紫の上がこう言ったと。

四 女房の衣裳やそのほか万端のことも。

五 れっきとした方（紫の上）の有様に負けぬほど立派に整える。

六 明石の尼君。姫君の祖母。

七 姫君にもう一度お目にかかる折もあろうかと、（ままならぬ）命まで執念深く長生きをして、念じていたのだが。

八 どうしたらお目にかかれるものやらと思うと悲しい。生母の明石の上には姫君と再会の時が訪れたが、自分にはどんな機会があるのか、という気持。

九 姫君の御輦車にも、（自分が付き添う場合は）一段下がって、歩いてついて行くなどとあっては、世間体が悪いであろうが、自分はそれでもかまわない。明石の上の心事。「輦車」は、輿に車輪を付けて、人が引く車（一巻図録一一参照）。勅許を得た人が宮中の中重の門（建春、宜秋門など）内で用いる（図録三参照）。紫の上の場合は、姫君と同車する。

明石の姫君入内

一〇 こうして立派にお扱い申し上げていられる姫君のそれこそ玉の疵のようなことで、卑しい自分がこうして生き永らえているのを。

われるのもつまらないことだ

てまつらむもあいなし、と思ひなりたまひて、「このをりに添へたてまつりたまへ。まだいとあえかなるほどもうしろめたきに、さぶらふ人とても、若々しきのみこそ多かれ。御乳母たちなども、見及ぶことの心いたる限りあるを、みづからは、えつとしもさぶらはざらむほど、うしろやすかるべく」と聞こえたまへば、いとよくおぼし寄ることかなとおぼして、「さなむ」とあなたにもかたらひのたまひければ、いみじくうれしく、思ふことかなひ果つるここちして、人の装束、何かのことも、やむごとなき御ありさまに劣るまじくいそぎたつ。尼君なむ、なほこの御生ひ先見たてまつらむの心深かりける。今一度見たてまつる世もやと、命をさへ執念くなして念じけるを、いかにしてかはと思ふも悲し。

（紫上）〔明石上を〕お付きの女房といっても年端もゆかぬ者ばかりが多いのです いつもお側に付いていられません 安心できますように〔源氏に〕 私は 〔源氏は〕 明石の上 言ってお聞かせになったと 〔明石上は〕 望みがすっかりかなった気持がして

人内の

その夜は、上添ひて参りたまふに、御輦車にも、立ちくだりうち歩みなど、人わろかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただ、かく磨きたてたてまつりたまふ玉の疵にて、わがかくながらふるを、か

紫の上 一方

一一 どうしても並はずれた立派なことにならざるを得ない。草子地。
一二 本当にこんなことがあったらいいのに。これが生みの娘であったらいいのに、という気持。
一三 源氏。
一四 ただこのことだけを。紫の上の実子でないこと。
一五 新婚三日間に、正式の婚礼の行事（後朝の文、三日の夜の餅など）がある。紫の上がそれを取り仕切っていたのである。
一六 宮中をご退出になられる。「させたまふ」は最高敬語。異例ではあるが、東宮妃の母として重々しく言ったものであろう。
一七 姫君がこんなに大きくなられたご様子に、（私たち二人のご縁の）年月の長さも分りますので、水くさい遠慮は消えてしまうのではないでしょうか。明石の姫君が紫の上に引き取られてから八年になる。「けぢめ」は、はっきり分る違い。
一八 こうしたご対面も、お二人が仲よくなった端緒であるようだ。草子地。
一九（源氏がこの人を重んずるのも）もっともだと、さすがな人だとご覧になる。紫の上の心中。
二〇 こちらもまたすばらしいと思って。続いて明石の上の心中を述べる。
二一 肩を並べる者のない地位をお占めになったのも、本当にもっともなことだと納得するにつけて。

紫の上、明石の上と対面

（入内のお支度は）では大層つらいと思う つはいみじう心苦しう思ふ。御参りの儀式、人の目おどろくばかりのことはせじとおぼしつつめど、（源氏は）お控えになるが おのづから世の常のさまにぞあらぬや。（姫君を）限りもなくかしづきすゑたてまつりたまひて、（大事にお世話しよそおってお上げになって）上は、まことにあはれにうつくしと思ひきこえたまふにつけても、（紫の上）心から（誰にも渡したくなく）人にゆづるまじう、まことにかかることもあらましかばとおぼす。（紫上は）大臣も、宰相夕霧の君も、ただこのことひとつをなむ、（残念なことだと）飽かぬことかなとおぼしける。三日過ぐしてぞ、上はまかでさせたまふ。

たちかはりて（明石上が）参りたまふ夜、御対面あり。（紫上）「かくおとなびたまふけぢめになむ、年月のほども知られはべれば、うとうとしき隔ては、残るまじくや」と、（親しげに）なつかしうのたまひて、（お話などなさる）物語などしたまふ。これもうちとけぬるはじめなめり。ものなどうち言ひたるけはひなど、（明石上の）むべこそはと、めざましう見たまふ。またいと気高う盛りなる（女盛りの）御けしきを、かたみにめでたしと見て、（大勢の女君のなかでも源氏の特別のご寵愛を受けて）そこらの御なかにもすぐれたる御心ざしにて、並びなきさまに定まりたまひけるも、いとことわり

と思ひ知らるるに、一かうまで立ち並びきこゆる契り、おろかなりやはと思ふものから、〔紫上の〕ご退出の行装が出でたまふ儀式の、まことに格別に美々しくいとことによそほしく、御二輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思ひくらぶるに、三さすがなる身のほどなり。

いとうつくしげに雛のやうなる御ありさまを、夢のここちして見たてまつるにも、涙のみとどまらぬは、四ひとつものとぞ見えざりける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざま憂き身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、五まことに住吉の神もおろかならず思ひ知らる。〔姫君を〕思う存分に大切にお世話申して思ふさまにかしづききこえて、心およばぬことはた、少しもない利発な明石の上のことであるからをさをさなき人のらうらうじさなれば、周囲の人々の人気や評判をはおほかたの寄せおぼえよりはじめ、並はずれてお美しい〔姫君の〕なべてならぬ御ありさま容貌なるに、宮も、東宮若き御ここちに、まことに格別大切にお思い申し上げていられるいことにて方の人などは、六いどみたまへる御方方の人などは、この母君の、かくてさぶらひたまふを、疵に言ひなしなどすれど、それに消たるべくもあらず。七いかめしう並びなきこ

一 その紫の上とこうして対等にお話し申し上げる自分の運勢は、並たいていのものであろうかとは思うものの。

二 御輦車に乗って退出するよう勅許があって、女御と同じ待遇を受けていられるのを比べてみると。

三 （紫の上とは）やはり段違いのわが身の上である。明石の上の感懐。

明石の上、姫君と再会

四 （悲しい時にも流す）同じ涙とは思えないのだった。「うれしきも憂きも心はひとつにて分れぬものは涙なりけり」――うれしく思うのもつらく思うのも、同じひとつの心で、どの場合にも同じ涙がこぼれるのだった（『後撰集』巻十六雑二、読人しらず）を踏まえ、このうれし涙は格別だ、の意。

五 本当に住吉の神の霊験もあらたかだと思い知られる。明石の入道が住吉明神に願をかけていたことは、二巻須磨二四九頁、明石二七九頁、三巻澪標三二頁に見える。

六 競争相手のお妃たちのお付きの女房などは、生母の明石の上が、こうしてお側についていらっしゃるのを、姫君の声価を損うことであるかのように言い立てたりするが。生母の身分の低いのを咎めるのである。

七 堂々として比べるもののないことはもとより。源氏の娘だからである。

八 殿上人なども、ほかにはない挑み所にして。「いどみ所」は、風流の才を競う場。

九 それぞれお仕えする女房たちも。はじめに広く言って、次に「心をかけたる女房の用意ありさまさへ」と、細かく言う。

一〇（殿上人たちが）懸想している女房のたしなみや態度まで、大層気を配って取り仕切っていらっしゃる。明石の上の有能さをいう。

源氏思う事なし

一一 いくらうちとけても、（明石の上は）身の程知らずの出過ぎたことはせず、（かといって）蔑まれるような態度は少しもなく、不思議なほど非の打ち所のない、明石の上の人柄、性質である。

一二 立派なお身の上にしてお上げになって。東宮妃として入内を果したことをいう。

一三 自分から求めたこととはいえ、身の固まらぬ有様で休裁の悪かった夕霧も。雲居の雁との結婚が、意地を張って六年間も延びたことをいう。

一四 もう今はかねての念願を遂げたいとお思いになる。源氏の出家の志は、すでに二巻賢木一五五頁に述べられている。

一五 秋好む中宮。源氏の養女。紫の上は養母に当る。

一六 明石の姫君におかれても。

藤裏葉

二九九

とはさらにもいはず、心にくくよしある御けはひを、はかなきこと（奥ゆかしく優雅な姫君のお人柄を）（明石上は）かりそめの風流事につけても　申し分ない具合に引き立ててお上げになるので につけても、あらまほしうもてなしきこえたまへれば、殿上人（てんじやうびと）なども、めづらしきいどみ所にて、（九）とりどりにさぶらふ人々も、（一〇）心をかけたる女房の用意ありさまさへ、いみじくととのへなしたまへり。

上（うへ）も、（紫の上）さるべきをりふしには参りたまふ。（何か事ある時には　参内なさる）御仲らひあらまほしうちとけゆくに、（一一）さりとてさし過ぎもの馴れず、あなづらはしかるべきもてなしはたつゆなく、あやしくあらまほしき人のありさま心ばへなり。大臣（おとど）も、（源氏）長からずのみおぼさるる御世のこなたにとおぼ（しきりに無常の感じられるこの世にご存命のうちにとお思いだった）しつる御参り、（一二）かひあるさまに見たてまつりなしたまひて、（一三）心からなれど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君も、思ひな（何不足なく世間並みな結婚生活に落着きなさったので）くめやすきさまにしづまりたまひぬれば、御心おちゐ果てたまひて、（すっかりご安心なさって）今は本意（ほい）もとげなむとおぼしなる。対の上（たいのうへ）（紫の上のお身の上が気にかかるとい）たきにも、（一五）中宮おはしませば、おろかならぬ御心寄せなり。（並々ならぬお味方というものだ）この御方（かた）にも、（一六）世に知られたる親ざまには、（表向きの親としては）まづ思ひきこえたまふべけれ（第一に大切にお思い申されようから）

一 宰相（夕霧）がおいでだから（安心だ）と。花散里を夕霧の母代りとしたこと、三巻少女二六三頁参照。

二 四十の賀のこと。当時は、四十歳から十年ごとに長寿を祝う。桐壺の巻に源氏十二歳で元服とあってより（一巻三六頁）、はじめて源氏の年齢について触れる。

三 上皇に准じる待遇（三巻澪標三一頁注一四参照）。源氏はすでに少女の巻二三〇頁以来、人臣最高の太政大臣になっているが、ここで、臣下の域を超えた身分になった。桐壺の巻の高麗人の相人の予言（三一頁）と首尾相応ずるものである。

四 封戸。太上天皇二千戸、太政大臣千五百戸という（『拾芥抄』）。（澪標三二一頁注一五参照）

五 一定の地方官、従五位下叙爵者の収入を所得とすること。（少女二七一頁注一〇参照）

六 それでもやはり、滅多にないことであった過去の例にもう一度倣って。藤壺を准太上天皇にしたことをさす（澪標三一頁参照）。

七 院の事務を扱う役人たちなども任命されて。

八 冷泉帝。源氏と藤壺の宮の子。

九 皇位をお譲り申し上げられないことを。冷泉帝が源氏に譲位しようとしたこと、三巻薄雲一七六頁参照。

一〇 夕霧は婿として太政大臣（もと内大臣）邸にいる

源氏、明年の四十の賀に先立ち、准太上天皇となる

内大臣、夕霧それぞれ昇進

ば、さりともとおぼしゆづりけり。夏の御方の、時々に花やぎたまふまじきも、宰相のものしたまへばと、皆とりどりにうしろめたからずおぼしなりゆく。

（何かにつけはなやかなこと／花散里／どなたもそれぞれに心配はないというお／もう何があってもとお任せするお気持だった／のなさそうな人も／気持になってゆく）

明けむ年四十になりたまふ御賀のことを、朝廷よりはじめたてまつりて、大きなる世のいそぎなり。その秋、太上天皇になずらふ御位得たまうて、御封加はり、年官年爵など、皆添ひたまふ。かからでも、世の御心にかなはぬことなけれど、なほめづらしかりける昔の例を改めて、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなり添ひたまへば、内裏に参りたまふべきこと難かるべきをぞ、かつはおぼしける。かくても、なほ飽かず帝はおぼしめして、世の中を憚りて、位をえゆづりきこえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。

（大変な世をあげてのご準備である／帝／〔何事にも〕格別に威儀いかめしくおなりになった／一方では残念に／世間に遠慮をして／それでも／不足に／〔夕霧は〕）

内大臣あがりたまひて、宰相の中将、中納言になりたまひぬ。御よろこびに出でたまふ。光いとどまさりたまへるさま容貌よりはじめて、飽かぬことなきを、主人の大臣も、なかなか人におされまし

（〔太政大臣に〕／お礼廻りに／何の不足もない姿をみて）

ので、こういう。

一一 かえって人に負かされるような宮仕えよりは（このほうがよい）と、お考えを改められる。秋

夕霧、雲居の雁の乳母と唱和

好む中宮に圧されて立后できなかった弘徽殿の女御と雲居の雁を比較しての気持。

一二 結婚相手が六位風情ではと、夕霧を不足に思って文句を言った宵のことを（少女二五三頁参照）。なお「大輔の乳母」という呼び名はここにはじめて見える。

一三 浅緑の六位の袍を着ていた若年の私が、濃い紫の袍を着るようになろうとは、お前は夢にも思わなかっただろう。中納言は三位で、紫の袍を着用する。白菊が変色して紫色になるのによそえた。「露」は「菊」の縁語。この歌に示される夕霧の気持は、梅枝二七二頁参照。

一四 つらかったあの時の一言が忘れられない。「一言葉」に「菊」の「葉」を響かせる。

一五 お小さい時から名門の若君ですもの、浅緑の色など分け隔てする者は誰もいませんでした。

一六（夕霧は中納言になられたことゆえ）ご威勢が増して、舅の太政大臣邸に相住みなさるのも、手狭になったので。

一七 故大宮の御殿。野分一二七頁に「三条の宮」とある。

夕霧、三条殿に移る

宮仕へよりはと、おぼしなほる。

女君の大輔の乳母、「六位宿世」とつぶやきし宵のこと、ものの（雲居の雁）（一二）（何かの折）をりをりにおぼし出でければ、菊のいとおもしろくうつろひたるを（夕霧は）（色変りしたのを）賜はせて、

「浅緑（一三）若葉の菊を露にても
濃き紫の色とかけきや

（一四）からかりしをりの一言葉こそ忘られね」と、いとにほひやかにほほゑみて賜へり。はづかしういとほしきものから、うつくしう見たてまつる。（大輔乳母は）（顔向けならず困惑しながらも）（こぼれるような愛敬で）（夕霧を）（いとしくお思い申し）（上げる）

「二葉（一五）より名たたる園の菊なれば
浅き色わく露もなかりき

いかに心おかせたまへりけるにか」と、いと馴れて苦しがる。（どんなふうに悪くおとりになったのでしょうか）（いかにも心安げにつらがる）

御勢（一六）まさりて、かかる御住ひも所狭ければ、三条殿にわたりたまひぬ。すこし荒れにたるを、いとめでたく修理しなして、宮のお（一七）（大宮が起）

一　昔が思い出されて。大宮在世中、夕霧も雲居の雁も幼時をここで暮したこと、三巻少女の巻に詳しい。

二　庭先の植込み。

三　前栽に植えられた一かたまりの薄。歌語。「君が植ゑし一叢薄虫の音のしげき野べとなりにけるかな」（『古今集』巻十六哀傷、藤原の利基の朝臣の右近の中将にて住みはべりける曹司の、身まかりてのち人も住まずなりにけるに、秋の夜ふけて、ものよりまうで来けるついでに見入れければ、もとありし前栽もいとしげく荒れたりけるを見て、はやくそこにはべりければ、昔を思ひやりて詠みける　御春有助）による。

四　お二人一緒に。夕霧と雲居の雁。

五　昔からの女房たちで、お暇を取らず、局々に住んでいる者などが。大宮在世中の女房が今も三条殿に住んでいるのである。

六　真清水よ、お前こそはこの家を守っている主人だが、亡き人の行方は知っているか。「岩もる」（岩漏る）は、泉が岩の間からあふれ流れ出る意。その「漏る」に「守る」を掛けて、「主人」に続ける。泉が遣水となって遠く流れてゆくので「行方は知るや」という。

七　亡き大宮のお姿も映らないのに、知らぬ顔で気持よさそうに流れている清水だこと。「いさらゐ」は、小さな泉。歌語。

居していらっしゃったお部屋に新しく調度を入れて
はしましししかたを改めしつらひて住みたまふ。昔おぼえて、あはれ
く心にかなった
に思ふさまなる御住ひなり。前栽どもなど、〔あの当時は〕小さき木どもなりしも、
手入れを
いとしげき蔭となり、一叢薄も心にまかせて乱れたりける、つくろ
生え放題に生い茂っていたのを
おさせになる　取り払ってきれいにし　いかにも気持よさそうに流れてい
はせたまふ。遣水の水草も掻きあらためて、いと心ゆきたるけしき
る
なり。をかしき夕暮のほどを、二所ながめたまひて、あさましかり
お話にもならなかっ　まわり
たあの当時の幼い仲の思い出話などを
し世の御をさなさの物語などしたまふに、恋しきことも多く、人の
の人も何と思っていたかと気はずかしく
思ひけむこともはづかしう、女君はおぼし出づ。古人どもの、まか
で散らず、曹司曹司にさぶらひけるなど、〔御前に〕まうのぼり集りて、いと
うれしと思ひあへり。男君、

（夕霧）なれこそは岩もるあるじ見し人の
ゆくへは知るや宿の真清水

女君、

（雲居雁）なき人のかげだに見えずつれなくて
心をやれるいさらゐの水

八 雲居の雁の父、太政大臣。

太政大臣、三条殿を訪れる

九 昔、亡き人々がお住まいであったご様子にも、大して変ることなく。「おはさふ」は、「おはしあふ」の約、「おはす」の複数形。主語は太政大臣の父、故摂政太政大臣と大宮。

一〇 前段、大宮のことを思い出して歌を詠み、泣いたからである。

一一 古女房たちも、お二人のお前に得意気にまかり出て。前出の、大宮に仕えていた女房たち。

一二 さきほどのお二人のお歌が。二人の唱和は、筆のすさびに、紙に書かれていたのである。

一三 私も、あなた方とともに清水に亡き人を偲びたいのは山々ですが、年寄りは悲しいことを口にするのは遠慮しましょう。新婚の二人に対する甚酌。夕霧の歌の「見し人のゆくへは知るや」を受けて、水の心を辿りたい、と言ったもの。

一四 昔の老木はなるほど朽ちてしまったでもありましょう、その当時植えた小松も苔が生えるほどになったのですから。「植ゑし小松も」は、ここに新たに居を構えた若い二人に対する祝意。

一五 三巻少女二五二頁参照。

などのたまふほどに、大臣（おとど）、内裏（うち）よりまかでたまひけるを、紅葉（もみぢ）の色におどろかされてわたりたまへり。

九 昔おはさひし御ありさまにも、をさをさ変ることなく、あたりあ（あたりの様子）たりおとなしくて住まひたまへるさま、（若い二人らしく）はなやかなるを見たまふにつけても、（太政大臣は）感慨無量でいらっしゃる（も落着いた雰囲気に）いとものあはれにおぼさる。中納言（夕霧）も、けしきことに（改まった表情で）、顔すこし赤みて、いとどしづまりてものしたまふ。（いつも以上にしんみりとしていらっしゃる）あらまほしくう（申し分なくお似合いの）つくしげなる御あはひなれど、女は、（初々しいご夫婦ではあるが）またかかる容貌（かたち）のたぐひも、（ほかに）などかなからむと見えたまへり。男は、際（きは）もなくきよらにおはす。（この上もなく美しくていらっしゃる）古人（ふるびと）どもも御前（おまへ）に所えて、神（かみ）さびたることども聞こえ出づ。（大昔の思い出話のあれこれを）ありつる御手習どもの、散りたるを御覧じつけて、（太政大臣は）お見つけになって うちしほたれたまふ。（ほろりとなさる）

（太政大臣）一三「この水の心尋（たづ）ねまほしけれど、翁（おきな）は言忌（ことい）して」とのたまふ。

（太政大臣）一四 そのかみの老木（おいき）はむべも朽ちぬらむ

植ゑし小松も苔生（こけお）ひにけり

男君の御宰相（さいしやう）の乳母（めのと）、（大臣の）冷たかったお仕打ちも つらかりし御心も忘れねば、したり顔に、

一　どちら様をも蔭とお頼みしています、お小さい時から仲よくここでお育ちになったお二人なのですから。

二　年老いた女房たちも、このような意味合いの歌ばかりお詠み申すのを。夕霧と雲居の雁が幼い時から恋仲であったことを、大宮在世時代からの古女房が詠む。

三　朱雀院の上皇にもお誘いがあって。今上（冷泉帝）の兄君（少女二六六頁注九参照）。

四　午前九時から十一時までをいう。

五　六条の院丑寅（東北）の町にある。（少女二七五頁注一八参照）

六　左右の馬寮の御馬をずらりと並べて、左右近衛府の将監以下が馬に添って整列している有様は。

七　五月の節会といささかの違いもなくそっくりである。五月五日、六日、武徳殿に行幸あって、騎射競馬を御覧になる。「あやめ」（見分けられるしるし）に「菖蒲」を響かせ、五月の節の縁語。

八　六条の院の東南の町。

九　三巻少女二七七頁注一五、一六参照。

一〇　五色の糸で紋様を織り出した厚地の絹。

一一　絵を描いた絹地の幔幕。（二巻図録一二参照）

一二　南の町の南庭の池。西の町の池に通じているので（胡蝶二二一頁参照）、こう言ったのであろう。

一三　内膳司に属し、天皇の食事や節会の饗を調じる。後涼殿西廂にある（図録四参照）。職員に膳部があり、その下に鵜飼などが属して、魚類を採る。

六条の院行幸

（宰相乳母）一

いづれをも蔭とぞ頼む二葉より
根ざしかはせる松のすゑずゑ

二老人どもも、かやうの筋に聞こえ集めたるを、中納言（夕霧）は、をかしとおもしろいとおぼす。女君は、あいなく面赤み、苦しと聞きたまふ。わけもなく聞き苦しいとお思いになる

神無月（十月）の二十日あまりのほどに、六条の院に行幸あり。紅葉の盛りにて、興あるべきたびの行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、興趣も深いはずのこの度の行幸なのに上皇も院さへわたりおはしますべければ、世にめづらしくありがたきことにて、世人も心おどろかす。あるじの院がたも、御心を尽くし、目主人側の六条の院方でも滅多にない盛儀で

もあやなる御心まうけをせさせたまふ。まばゆいばかりのご準備をあそばす

三巳の時に行幸ありて、まづ馬場殿に、左右の司の御馬牽き並べて、左右近衛立ち添ひたる作法、五月の節に、あやめわかれず通ひたり。未くだるほどに午後二時過ぎに、南の寝殿に移りおはします。道のほどの反橋、渡殿には錦を敷き、あらはなるべき所には軟障を引き、いつくしうしなさせたまへり。東の池に船ども浮けて、御厨子所の鵜飼の長、院

お通り道の
よそから見通しのよい所には
いかめしくおしつらわせになった

一四 六条の院の鵜飼。
一五 帝がお通りになる途中のお慰みまでなのであった。
一六 六条の院の西の町、秋好む中宮の御殿のお庭。
一七 南の町と西の町の中仕切りの廊（渡殿）。（少女二七六頁注八参照）
一八 廊の中ほどに設けられた門。（一巻図録六、七参照）
一九 帝と朱雀院のお席。
二〇 帝のお言葉。内侍から蔵人に伝える。
二一 左近衛の少将が手に取り。
二二 帝身辺の雑事や取次ぎに奉仕し、文書をつかさどる役所。帝の鷹も管理した。
二三 北嵯峨野で猟をして取ってきた鳥一番を、右近衛の少将が捧げて。ものの枝に付けてある。
二四 寝殿南面（正面）の階段。（図録一三参照）
二五（その魚と鳥を）調理させて、御膳にさし上げる。
二六 宮中桂芳坊（朔平門の東）にある音楽のことをつかさどる役所。（図録三参照）
二七 大規模な舞楽。「人数饒多にして、その音声のいかめしきを云ふと聞ゆ」と『歌舞品目』にいう。
二八 見習いのため、特に殿上の間に上ることを許された貴族の少年。殿上童。
二九（人々は）朱雀院の紅葉の賀、例によっていにしえの先例が思い出されなさる。「朱雀院の紅葉の賀」は、二巻一一頁、一三〜一五頁参照。

の鵜飼を召し並べて、鵜をおろさせたまへり。小さき鮒ども食ひたり。わざとの御覧とはなけれど、過ぎさせたまふ道の興ばかりになむ。山の紅葉、いづかたも劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁をくづし、中門を開きて、霧の隔てなくて御覧ぜさせたまふ。御座二つよそひて、主人の御座は下れるを、宣旨ありてなほさせたまふほど、めでたく見えたれど、帝はなほ、限りあるゐやゐやしさを尽くして見せたてまつりたまはぬことをなむおぼしける。池の魚を、左少将取り、蔵人所の鷹飼の、北野に猟つかうまつれる鳥一番を、右の少将捧げて、寝殿の東より御前に出でて、御階の左右に膝をつきて奏す。太政大臣、仰せ言賜ひて、調じて御膳に参る。親王たち、上達部などの御まうけも、めづらしきさまに、常のことどもを変へてつかうまつらせたまへり。皆御酔ひになりて、暮れかかるほどに、楽所の人召す。わざとの大楽にはあらず、なまめかしきほどに、殿上の童べ、舞つかうまつる。朱雀院の紅葉の賀、例の

〔池に〕
特別ご覧に入れるというのではないが
一五
一六
秋霧もさえぎることなく十分にご覧にお入れに
一七
特別美しいのを
一八
源氏
一九
整えて
二〇
同座に改
すばらしいことと思われたが
めさせなさるのも
父帝として定められた礼儀を尽くしてお見せ申し上げられないことを残念にお思いなのであった
二一
二二
二三
二四
二五
「献上の由を」
お食事も
特別の
二六
楽人
二七
二八
二九
いつもとはいろいろ目先を変えてご用意させなさった
お酔いになって
風雅な趣に演奏して

一 大食調。一人の舞。祝賀に舞う。（図録八参照）
二 太政大臣の令息で、十歳ぐらいのお子が。
三 冷泉帝。上皇を院の帝と呼ぶのに対する。
四 庭上に降りて、拝舞なさる。「舞踏」は、帝に対して感謝と喜悦の気持をあらわす儀礼。
五 青海波を舞われた折のことを。菊を插頭に插し替えて舞ったこと、二巻紅葉賀　源氏、太政大臣と唱和一四～一五頁参照。
六 今日の行幸にひとしお色まさるわが家の菊も、折に触れて、菊を手折って舞った昔の秋を恋しく思っていることでしょう。「袖うちかけし」は、袖をうちかけて菊を手折ったことをいう。
七 あの時は、同じ舞をご一緒にお舞いになったが。青海波は二人舞。（紅葉賀一一～一二頁参照）
八 やはり、准太上天皇という源氏の身分は。
九 時雨も、（感涙をもよおすべき）折を知っているかのように降り過ぎる。（紅葉賀一五頁注一一参照）
一〇 紫雲かと見紛うばかりの菊の花（格段に高い身分になられたあなた）は、濁りなき聖代の星かと思われます。『河海抄』は、慶雲寿星の心か、という。紫雲は堯（中国の聖代の帝）が生れた時の瑞祥。「久方の雲の上にて見る菊は天つ星かとあやまたれける」（『古今集』巻五秋下、敏行朝臣）
一一 いよいよお栄えですね。「秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば」（『古今集』巻五秋下、平貞文）を引く。宇多法皇を寿いだ歌。

古事おぼし出でらる。賀王恩といふものを奏するほどに、太政大臣の御男の十ばかりなる、切におもしろう舞ふ。内裏の帝、御衣ぬぎて賜ふ。太政大臣おりて舞踏したまふ。

主人の院（源氏）、菊を折らせたまひて、青海波のをりをおぼし出づ。

（源氏）色まさる籬の菊もをりをりに
　袖うちかけし秋を恋ふらし

大臣、そのをりは、同じ舞に立ち並びきこえたまひしを、われも人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりけるほどおぼし知らる。時雨、をり知り顔なり。

（太政大臣）「紫の雲にまがへる菊の花
　濁りなき世の星かとぞ見る
時こそありけれ」と聞こえたまふ。

夕風の吹き敷く紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見えまがふ庭の面に、容貌をかしき童べの、やむごとなき家の子ど

もなどにて、青き赤き白橡、蘇芳、葡萄染など、常のごと、例のみづらに、額ばかりのけしきを見せて、短きものどもをほのかに舞ひつつ、紅葉の蔭にかへり入るほど、日の暮るるもいとほしげなり。楽所などおどろおどろしくはせず。上の御遊びはじまりて、書司の御琴ども召す。

ものの興切なるほどに、御前に皆御琴ども参れり。宇多の法師のかはらぬ声も、朱雀院は、いとめづらしくあはれに聞こしめす。

秋をへて時雨ふりぬる里人も
かかる紅葉のをりをこそ見ね

うらめしげにぞおぼしたるや。帝、

世の常の紅葉とや見るいにしへの
ためしにひける庭の錦を

と聞こえ知らせたまふ。御容貌いよいよねびととのほりたまひて、ただひとつものと見えさせたまふを、中納言のさぶらひたまふが、

一三 青白橡の袍に葡萄染（薄紫）の下襲、赤白橡の袍に蘇芳（やや暗い紅色）の下襲。それぞれ右方（高麗楽）と左方（唐楽）の舞楽の童の装束。青白橡、赤白橡というのは、それぞれ青色、赤色というように同じとされるが、「白橡」は、媒染剤を用いない白茶色の染色とされるので、これの加わった染色であろう。

一三 例のごとくみずらに結い、額に天冠を着けただけの飾りで。「みづら」は、童形の髪型（胡蝶三二頁参照）。童舞には天冠を用いる（図録八参照）。

一四 楽所など大げさに設けることはしない。正式の舞楽には楽所（楽人の演奏する場所）を設け、太鼓、鉦鼓などを打つ。

一五 殿上でのご演奏。地下の楽人を交えない趣。

一六 後宮十二司の一。書物、文房具、楽器などをつかさどる。「御琴ども」は、種々の絃楽器をいう。

一七 お三方（冷泉帝、朱雀院、源氏）の御前。

一八 累代の和琴の名器。宇多法皇ご遺愛の品という（『拾芥抄』）。一条天皇の時、内裏焼亡の際焼失した。

一九 幾年の秋を経て、時雨とともに年老いた野人の私も、こんなみごとな紅葉の折を見たことがありません。わが御代にはかかる盛儀はなかった、の意がある。「ふり」は「降り」「古り」の掛詞。「里人」に、宮中政権の座を離れた身を卑下する気持がある。

二〇 世の常の紅葉と思ってご覧になるのでしょうか、昔の例に倣って引き廻らしたこの庭の錦ですのに。桐壺帝在世中の紅葉の賀に倣ったものとの意。

殿上の御遊

例の装束で

短い曲をいろいろほんのすこし舞っては

惜しいほどに思われる

一四 楽所

一五 上

一六 書司

一七 御前

一八 宇多

音色

ずいぶん久しぶりで感深くお聞きになる

一九 朱雀院

二〇 冷泉帝

恨めしそうに思っていらっしゃることだ

おとりなし申し上げなさる〔帝は〕

お年とともに立派におなりになって

〔源氏と〕ただ瓜二つとお見えあそばすところへ

夕霧

お前に控えておいでなのが

一（帝と）別のお顔と思えないのは、分を超えたものといえよう。

二（夕霧は）笛をうけたまわってお吹きになるのが。

三 楽器の譜を口で歌うこと。

四 寝殿正面の階段の所に控えて歌うなかで。

五 柏木の弟。（二八七頁注一二参照）

六 やはり前世からのしかるべき宿縁によって、このようにすぐれた方々がお揃いなのだと思われるご両家のようだ。草子地。

一ことことならぬこそめざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思気品があってすばらしい感じでは（夕霧は）ひなしに劣りまさらむ、あざやかにほはしきところは、添ひてさ気のせいで帝と優劣があろうが すっきりとして美しい点は帝以上とまで へ見ゆ。笛つかうまつりたまふ、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶらふなかに、弁の少将の声すぐれたり。なほさるべきにこそと見えたる御仲らひなめり。

付

録

春秋優劣の論

春秋優劣の論の資料として、『万葉集』巻一の額田王（ぬかたのおおきみ）の長歌、『拾遺集』巻九雑下巻頭の三首、論春秋歌合、宰相中将君達春秋歌合、以上の四資料を示した。宰相中将君達春秋歌合は、萩谷朴氏『平安朝歌合大成』二の翻刻によった。

なおこの春秋優劣の論は、三巻薄雲一八一頁以下の源氏の言葉によって、少女（おとめ）二七三頁以下の六条の院造営の構想に深くかかわっていることが明らかである。また朝顔巻末の、冬の夜の月明の雪景色を背景とするすぐれた場面の造形も、この春秋優劣の論に触発されたものと考えられる（朝顔二〇八頁参照）。少女二七七頁の中宮と紫の上の応酬、それを受けての、本巻胡蝶三一頁以下の南の御殿の船楽、翌日、中宮季の御読経における紫の上と中宮の贈答（三八～三九頁）は、こうした背景の上に、直接に春秋優劣の論をたたかわしたものである。少女の巻における六条の院の造営は、澪標（みおつくし）以降の課題たる源氏の家庭の整備という問題の帰結であるが、またそれは、源氏が栄華の絶頂を極める初音以降藤裏葉までの物語の展開を準備するものでもあった。この間の物語の構想の展開に、春秋優劣の論のモチーフは決定的な役割を果していると考えられる。

額田王の長歌　（『万葉集』巻一、一六）

天皇詔二内大臣藤原朝臣一
競憐二春山万花之艶秋山
千葉之彩一時、額田王以レ
歌判之歌

冬木成　春去来者
不喧有之　鳥毛来鳴奴
不開有之　花毛佐家礼杼
山乎茂　入而毛不取
草深　執手母不見
秋山乃　木葉乎見而者
黄葉乎婆　取而曾思努布
青乎者　置而曾歎久
曾許之恨之　秋山吾者

天皇（すめらみこと）内大臣（うちのおほまへつきみ）藤原の朝臣（あそみ）に詔（みことのり）して
春山の万花の艶（にほひ）と秋山の千葉の彩（いろ）とを
競（きそ）ひ憐（あはれ）びしめたまふ時、額田王（ぬかたのおほきみ）が
歌をもちて判（ことわ）る歌

冬こもり　春さり来（く）れば
鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ
咲かざりし　花も咲けれど
山を茂（し）み　入りても取らず
草深み　取りても見ず
秋山の　木（こ）の葉を見ては
黄葉（もみち）をば　取りてぞ偲（しの）ふ
青きをば　置きてぞ嘆く
そこし恨（うら）めし　秋山ぞ我は

春秋問答の歌　（『拾遺集』巻九、雑下巻頭）

ある所に春秋いづれかまさると問はせたまひけるに、よみてたてまつりける　紀　貫之

春秋に思ひ乱れてわきかねつ時につけつつうつる心は

元良の親王、承香殿のとしこに、春秋いづれかまさると問ひはべりければ、秋もをかしうはべりと言ひければ、おもしろき桜を、これはいかがと言ひてはべりければ

おほかたの秋に心は寄せしかど花見る時はいづれともなし

題しらず　読人しらず

春はただ花のひとへに咲くばかりもののあはれは秋ぞまされる

論春秋歌合は、大友黒主、滋賀豊主の問答歌に、躬恒が歌で判を加えた体裁のもの。黒主、豊主の実在性が証明しがたく、総て躬恒の虚構と見る説もある。

（十巻本『歌合』巻十）

論春秋歌合

昔の歌よみの春秋を合せける

左　黒主

おもしろくめでたきことをくらぶるに春と秋とはいづれまされり

右　豊主　答ふ

春はただ花こそは咲け野辺ごとに錦を張れる秋はまされり

左　黒主

秋はただ野辺の色こそ錦なれ香さへ匂へる春はまされり

右　豊主

さを鹿の声ふりいでて紅に野辺のなりゆく秋はまされり

左　黒主

霞たち野辺を錦に張りこめて花のほころぶ春はまされり

右　豊主

賤機に天の羽衣織りかけて彦星を待つ秋はまされり

左　黒主

青柳に糸よりかけて朝ごとに玉をつらぬく春はまされり

右　豊主

虫の音の草むらごとに夜もすがら鳴きあかしたる秋はまされり

左　黒主

踏みちらす花も色々にほひつつ鶯の鳴く春はまされり

右　豊主

きりぎりす鳴く草むらの白露に月かげ見ゆる秋はまされり

躬恒判す

おもしろきことは春秋わきがたしただをりふしの心なるべし

左　黒主

恋するにわびしきことをくらぶるに夏と冬とはいづれまされり

右　豊主

泣き流す涙も袖にそほちつつ干せど乾かぬ冬はまされり

左　黒主

いとどしく暑かはしきに恋にさへ身のみ焦るる夏はまされり

右　豊主

消えかへりもの思ふ宿にいとどしく雪の降り積む冬はまされり

左　　黒主

恋ひわびてうち泣く空に蟬の声調べあはする夏はまされり

右　　豊主

寒き夜に薄き衣を返しつつ寝れど寝られぬ冬はまされり

左　　黒主

長き日を思ひ暮して虫の音を夜は鳴きあかす夏はまされり

右　　豊主

草も木も思ひもともにかれゆきて時雨に濡るる冬はまされり

左　　黒主

草も木も思ひもしげくなりゆきて露にそほつる夏はまされり

右　　豊主

人は来ず氷に宿は閉ぢられて熾火に燃ゆる冬はまされり

躬恒判す

いつもいつもいかでか恋のやすからむ深き心ぞわびしさは増す

左　　黒主

世の中にわびしきことをくらぶるに思ふと恋といづれまされり

右　　豊主

をりふしに言ひしことのみ忘られであひ見ぬほどの恋はまされり

左　黒主

心にもまかせぬなかに人知れず思ひかよはすことはまされり

右　豊主

つくづくと契りしほども過ぎゆくに待てども見えぬ恋はまされり

左　黒主

つれもなき人に思ひをつけそめて身のみ焦(こが)るることはまされり

右　豊主

燃ゆる火に身は燃やすとも人恋ふる胸の炎(ほのほ)はなほまさりけり

左　黒主

身一つを千々(ちぢ)の剣(つるぎ)に刺すよりもしばしもの思ふことはまされり

右　豊主

限りなき人を別れてまたとだにあひ見ぬほどの恋はまされり

左　黒主

限りなく頼むに人のあだ心つくを思ふはなほまさりけり

右　豊主

忘るれど忘れわびぬる人をなほ恋しと思ふことはまされり

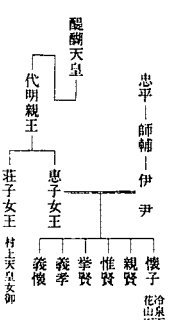
躬恒判す

わびしさは思ひも恋も劣(おと)らぬを深き浅きのほどにやはあらぬ

宰相中将君達春秋歌合　応和三年七月二日

宰相中将君達春秋歌合は、宰相中将藤原伊尹の子女たちが、秋に心を寄せる彼等の生母桃園の宮恵子女王と、春に心を寄せる麗景殿の女御荘子女王（恵子女王の妹）をそれぞれ頭にいただいて、応酬を繰り返したもの。

（二十巻本『類聚歌合』巻十四）



題

歌人

宰相の中将君達、春秋くらべたまうて、春をのみをかしきものにしたまひて、秋をばいふかひもなく心もとなきものに言ひなしたまふなりとて、桃園の宮の御方より、中の十日ばかりのほどに、「おもしろき花どもを折りて、まき捨てたまふなることいと心憂し」と、聞こえたまへるに、作り花のいとおもしろきを、「これいとあはれなれば」とて、たてまつりたまへれば、「花に心をつくる君かな」とて、返したてまつれば、松につけて、春の御方より

かかる秋を君にまかせて我はただのどけき春をまつぞ苦しき

返りこと

咲く花も人の心ものどかなる春と知りせば春を待たまし

かのありし花を、麗景殿の女御御もとに、春の方よりたて
まつりたまへれば
くらぶ山春咲く梅の匂ひにはよるあきの□花もなきかな
女御の春の御心寄せ深かなりとて、秋の御方より、紅葉、
花、虫などをものに入れて
花も咲く紅葉ももみづ虫の音も声々多く秋はまされり
と見れば、桜の作り花に鶯すゑて、春の宮より
野辺ごとに声々乱る虫よりも初鶯の音こそまさらめ
秋の御方、鈴虫を包みて
わづかなる初音ばかりぞ鈴虫はふりゆく声もなほまさりけり
と見れば、春の御方
ただにてもあるべきものを負けぬとや野も狭に虫のかくは鳴くらむ
秋の御方
春まけて世をうぐひすの音も絶えずかずおく山に鳴きわたるかな
春の御方
春ははや秋にぞかずをおく山と鶯の音も高く鳴くらし
秋の御方
小山田も春はまくとか言ふなりしかりくる秋を夜は恋ひつつ

春

かりなきてうち積みわたる稲むらの秋の種こそ春にまくらめ

「あきかちふちはいつか咲くらむ」とあれば、秋の御方より、馬に稲を負ほせて

若草の若く見えこし春駒にかずを負ほする秋の田の稲

「まくるをふかきふちには春なむ咲くなる」とあれば、

春

稲をのみかしこき秋と思（ふ）とも春の駒にぞかちぶちは打つ

秋の御方

春駒の負ふどいふなるかちぶちの深きあはれは秋まさるとかちはやぶる神も秋にやよりぬらむすかさの山に数さしてけり

春

春を知る春日の神のみかさ山秋にぞ数もさすといふなる

負け果てて今はわびしき鹿の音の秋のあはれは誰も知るらむ

秋

春負くといへばしかとぞ答ふなるかつ見る秋に心移りて

春

方にても秋にぞ西はあたりける移るは秋のすまひなるらむ

秋

花もみな移ろひやすき春なれば秋のすまひぞ数はまさらむ

春の御方、呉竹(くれたけ)に付けて

春はなほ移る時なき呉竹のよよにまけくる秋のすまひを

秋の御方

ともかくも何か答(こた)へむきりぎりす言はで思ふをまさるかたにて

春

くちなしの色ににほへる女郎花(をみなへし)言はで思ふは劣るとぞ聞く

秋

山吹のくちなし色にかよひつつ言はねどしるし春は負けぬと

春

色ばかり秋の花にはかよふとも八重(やへ)山吹の数はまされり

秋

山吹の八重の数にも白露はおきまさるらむ秋の夜な夜な

春

たねもなくきりはすらめどものごとにまくと見ゆるは秋の白露

秋

千々(ちち)の秋は多くの数を置き添へて春朝露ぞまくと見えける

春
青柳のいと長かれば秋もみな玉とのみこそ見えわたりけれ

秋
かつ秋におくると見れば青柳のいとどもまくる春かたかな

春
秋風も織りて見すなる青柳のいともかちくる春の心は

秋
かた織りて柳の糸のうちはへて春がよればやまくと見ゆらむ

春
青柳の糸にはあらじ葛かづらまくるは秋の垣根なるらむ

秋
数ふれば春かたなる伊勢の海の海士の栲縄まくるなりけり

春
春の日の海士の栲縄うちはへて長き心はまさりこそすれ

秋
春の海も秋の紅葉の深さにはたちならぶべき波やなからむ

春
いかでかは千尋の海の深さには秋の紅葉の色もならばむ

秋

鹿の鳴く高砂山の木高さを千尋の底に何かたとへむ

春

春風に立つ白波は高砂の松の上より越ゆとこそ聞け

秋

高砂の松を越ゆべき白波は夜も嵐ぞうちしきり吹く

大空も秋の方にぞ筑波嶺の峯の朝霧たちまさるらむ

春

若菜こそ年をもつまめかささぎのかへ（マヽ）来る秋ぞ久しかるべき

天の川年をわたりてかささぎのかへり来る秋ぞ久しかりける

春

天の川わたるとすれどたなばたの逢ふほどもなき秋と知らずや

秋

天の川流るる水の世とともに行く末遠き秋と知られむ

春

子の日する野辺の若菜はよろづよをつみこそまされ絶ゆる世ぞなき

秋

子の日する若菜ならねど秋の夜の穂に出づる稲ぞ年はつむらむ

奥山の巌(いはほ)し分けて住(すま)ふてふ鹿も知るてふ秋のあはれを

春

秋山に妻恋ふ鹿の声よりも峯のわらびはもえぞまされる

秋

春の野にもゆとか聞きしわらびにももえこそまされ秋の螢は

秋萩の花のさかりにさを鹿のうちいづる声のたぐひなきかな

秋の御方

若菜にはつみならべじを秋の田の稲をばかりのものといひつつ

天の川の返し

天の川明日(あす)は浅瀬になればこそたなばたつめも霧(き)りわたるらめ

秋

春を待つ緑にはあらで紅葉する枝より波は越ゆるなりけり

散りてまさり返し

春霞散るはものかは青山の紅葉の錦たちしまされば

春

菅(すが)の根の長き春日(はるひ)の光には紅葉の錦劣りこそせめ

秋

ひぐらしの声うち添ふる秋の日は春にまさるとおもかげの山

春
鳥の音にまさせる春にくらぶれば秋は劣ると思ひくらしを
秋
色々の花咲き乱る秋の野の夕暮れがたぞなほまさりける
春
夕暮れはおぼつかなきを梅の花見えぞまさりし春のさかりは
秋の宮、あかつきがたのすすきに付けて
花すすきほのぼの明くるあかつきの空のけしきも秋はまされり
春
花すすきほのかに見ゆる秋よりも雲居も春の空ぞまされる
秋
天雲のほのかに見えし空よりも近き垣根の秋ぞまされる
春
花とても木高き枝なる春なれば生ひおよぶべき秋ならなくに
秋
鶯の谷から出づる声よりも空飛ぶ雁の音こそ高けれ
春
いかばかり高きものぞは鶯の鳴く音にひびく山彦の声

秋

秋の勝つ数はおほゐの川波もなほわがたかによるとこそ見れ

春

遠へ行くこちかぜ川の水もなほ春こそ淵の色深くなれ

秋

色変へぬ竹の心の露おけば秋の方にもなびくめるかな

春

はるばるに枝さしまさる竹のよに思ひつきぬる君とこそ見れ

なほ春勝つとなむ

くらぶれば紅葉にまさる深緑春山には色もかはらず

秋

春よりは秋こそ神も龍田姫染むる紅葉に何か似るべき

春

龍田姫紅葉にまさる時雨にもたそまさりしは春の藤波

秋

時雨にも雨にもまさる紅葉よりえしもまさらじ春の藤波

虫の音も心すごかる夕暮れにうち吹く風はいかがわびしき

春

悲しさの心すごさずとりすへて秋ぞわびしきものといふなる

秋

あはれをも知らぬ人こそ知らざらめ秋を捨つべきものとやは聞く

同じ

咲くと見るほどに散りぬる花の色の名残なきこそ春はあだなれ

秋

秋の野の花もあはれに見ゆれどもまされる春に着する衣を

同じ

露にうつる紅葉は何ぞふちのみの春名残（マヽ）は秋もかはらず

秋

女郎花にほふ秋こそ武蔵野の常よりことにむつましくなれ

秋来れば天の川原の水もみな春よりことにまさるとか聞く

若菜の返し

あだに散る花のかたみに摘みしかば春の□なにならなくに

わらびの返し、春御方

はかもなき秋の螢を春の野にもゆるわらびにさらにたとへじ

鹿の御返り

名残なく移ろひ果つる秋なれば鹿もわびたる声ぞ聞こゆる

螢御返り、秋

春にほふ花のあだなるにほひこそ野にも山にももゆと見えしか

鹿の御返り

ころを経てよに見まほしき秋なればゆくをば鹿も惜しと鳴くなり

春、天の川の御返り

春深き天の川原の水もみな秋はあさとにわたるなるべし

秋

春深くなるといふなる水底（みなそこ）は渦巻（うづ）くとこそなりまさるなれ

春の御返り

浅きをぞ渦巻く水も騒ぐらむうごき□

秋

水の色を深緑なる春こそはなほ渦巻くと見えわたるらめ

春

春風に落ちて流るるもみぢ葉を渦巻く水も秋とこそ見れ

秋

春はただ負けてのみこそあるま川流るる水に数はかくとも

春の御方、「あいなくも言ひ落いたまふかな」とて

桜咲くみかさの山のかはゆみを春のまとひに射るとこそ見れ

「かはは馴れぬる秋なめり」とあれば、御返りをまゆみに付けて

色深きまゆみは秋の方にこそ誰も心をいるるみゆかな

春

もみぢつつ秋ゆく方のまゆみには心もいると見る人ぞなき

秋

弓張の月も照る日もおしなべて秋の方にぞ心いるらむ

春

月も日も秋の山にしいるなればなほ梓弓春のみぞ勝つ

秋

望月のまとになりゆく影さへはいづれの方にいるとかは見る

春

山にのみいるめる秋の方なれば月の光を隠すなるらむ

秋

春来ては花踏み散らす鶯をねたがりきとか秋に負くとて

秋を憂し天の川さへ春になる春の夢こそまづまさりけれ

春

久方の空のかよひて天の川はるの弓には離れざりけり

薫集類抄

『薫集類抄』は、平安末期、藤原範兼（永万元年―一一六五―没、五十九歳）が勅を奉じて著したものとされる。薫物の諸方を類従したもので、群書類従巻三百五十八に収められている。梅花、荷葉、侍従、菊花、落葉、黒方、薫衣香、袞衣香、承和百歩香の九種について、諸家の方を示すところを上巻より抄出し、下巻の「埋日数付埋所」から数条を抄出した。なお、諸香の量目は、六朱を一分とし、四分が一両、十六両が一斤である。注に「大」「小」とあるのは、「小」は「大」の三分の一、たとえば、小三両は大一両に当る。翻刻は関西大学蔵本により、疑問の箇所については、類従本との異同を括弧でくくって示した。

梅花　擬二梅花之香一也。春尤可レ用レ之。

閑院大臣　冬嗣。贈太政大臣正一位。右大臣内麿三男。

沈八両二分　占唐一分三朱　甲香三両二分
甘松一分　白檀二分三朱　丁子二両二分
麝香二分　薫陸二分

賀陽宮　名賀陽。二品治部卿。桓武天皇第七親王。

沈八両二分　詹唐一両三朱　甲香三両二分
甘松一分　白檀二分三朱　丁子二両二分
麝香一分　薫陸一分

滋宰相　滋野貞主。参議宮内卿正四位下。尼張守家譜子。

沈八両二分（或本二分可用心）　占唐一分三朱　甲香三両一分（或二分）
甘松一分　白檀二分三朱　丁子二両二分
麝香二分（以上小十五両三朱）
沈四両一分　占唐四朱余　甲香一両二分三朱
甘松三朱　白檀一分一朱余　丁子一両一分
麝香一分　薫陸三朱（以上小八両）
沈二両一分二朱　占唐三朱　甲香一両一朱
甘松二朱　白檀五朱　丁子三分二朱
麝香四朱　薫陸二朱（以上小五両一分四朱）

四条大納言 源定。正二位大納言右近大将。嵯峨天皇源氏。

沈八両二分　甲香三両二分(三)　甘松一分五
白檀二分三朱四　丁子二両二分二　麝香二分
薫陸一分六
沈四両一分　甲香一両三分　甘松三朱
白檀一分一朱　丁子一両一分　麝香一分
薫陸三朱合八両一朱

八条宮 本康。一品式部卿。仁明天皇第五親王。母従四位上滋野縄子。貞主女也。

沈八両二分　詹唐一分三朱　甲香三両二分
甘松一分　白檀二分二朱　丁子二両三分
麝香二分　薫陸一分

小野宮 惟高。文徳天皇第一親王。

沈八両二分　占唐一分三朱　甲香三両一分
甘松一分　白檀二分三朱　麝香二分
丁子二両二分　薫陸一分小定

染殿宮 良保。二品式部卿。清和天皇第四親王。

沈八両二分　丁子二両二分　甲香三両二分
占唐一分三朱　白檀二分三朱　甘松一分
薫陸一分　麝香二分或者諸香合レ蜜之後可レ和レ麝也。此説可レ秘云々。

右大弁公忠 従四位下大蔵卿国紀男。仁和源氏也。母典侍滋野直子也。仍伝レ之。

沈八両或八両二分　占唐一分三朱　甲香二両二分或三両一分
甘松一分　白檀二分三朱　丁子二両二分
麝香二分　薫陸一分
沈四両一分　占唐四朱半　甲香一両三分
甘松三朱　白檀一分一朱半　丁子一両一分
麝香一分　薫陸三朱以上小定

占唐代入二麝香一。案レ之、麝香本自在二合種之中一、而其代入レ之者、又可レ加二増麝香分一歟。

大和常生 延喜御時御蔵小舎人也。

沈四両一分　丁子一両一分三朱　占唐四朱半

甲香一両一分　甘松三朱　白檀一分一朱半
麝香一分　薫陸三朱

八条大将　藤原保忠。大納言正三位右近衛大将兼陸奥出羽按察使。左大臣時平一男。母本康親王女従四位上廉子女王。

沈四両二分　麝香二分四朱　甲香三両
丁子三両　薫陸一両　白檀三分大定
沈四両三分　甲香三両　丁子三両
薫陸一両　白檀三両　麝香二分四朱大定

右皆半分造合。足一剤法也。而此数半剤合之、中入青木香、此合物不レ入レ之。

（下　略）

荷葉　擬荷香也。夏月殊施芬芳。

公忠朝臣　天暦六年二月廿一日甲午進レ之。或慶

甘松花一分　沈七両二分　甲香二両二分或一分
白檀二朱或三朱　熟鬱金二分代麝香　藿香四朱
丁子二両二分　安息一分或無

甘松三朱　沈三両二分　甲香一両一分
白檀一朱或本無　熟鬱金一分　藿香二朱
丁子一両一分

山田尼　はちすの花のかとぞいふなる一剤をみつにわかちてあはする。

沈二両四朱　甘松二朱　甲香三分二朱
白檀二朱すこしたらて　丁子二分四朱　麝香四朱いまふたくさ
の香いるなれど、なたしかにしらず。

或説

甘松香花一分　沈七両二分　藿香一分四朱
白檀一分三朱若二分　熟鬱金二分　安息二両一分

不レ知誰人

甘松一分　沈七両一分　甲香二両二分
白檀二朱或三　丁子二両二分　藿香一分四朱
熟鬱金二分　安息一分

侍従　亦名拾遺補闕。秋風蕭颯として心にくきおりによそへたるべし。

閑院大臣

沈四両　丁子二両　甲香一両已上大
甘松一両　熟鬱金一両已上小

賀陽宮　或号院。可尋之。

沈四両　丁子二両　甲香一両
甘松一分　鬱金一分

滋宰相　小一条皇后方同之。又入道一品宮女房陸奥方同之。

沈四両二分　丁子二両二分　甲香一両二分已上大
熟鬱金一両　甘松一両已上小　大九両四朱。小廿七両二分。
或加占唐大一分。又説、停鬱金、加麝香小二分。又或用黄鬱金。
沈六両三分或小六両　丁子三両三分或小三分　甲香二両一分或小一両二分
鬱金二分　甘松二分

若加占唐一分三朱或小三朱、若用麝香一分。縦雖頗減、不可過入之。

八条宮

沈四両　丁子二両　甲香一両
甘松一分二朱
沈四両　丁子二両　甲香一両已上大
甘松一両　熟鬱金一両以上小
一説、入麝香。一説、黄鬱金、或加占唐小一分、合六種。而此本無之。和蜜合搗三千杵許。
此二方者、不伝男。是承和仰事也。延喜六年二月三日、典侍滋野直子朝臣所献也。

沈四両　丁子二両　甲香一両以上大
甘松一両　熟鬱金五両　占唐一分以上小
沈六両　丁子三両　甲香一両二分
甘松二分　鬱金二分　占唐三朱已上小

小野宮

沈四両二分　丁子二両二分　甲香一両二分以上人
熟鬱金一両　甘松一両已上小

染殿宮

沈四両大　丁子二両　甲香一両
甘松一分一朱　麝香三朱　占唐一分
　或諸香合レ蜜之後、可レ和レ麝也。此説可レ秘。

公忠朝臣

沈六両　丁子三両　甲香一両二分
甘松二分　熟鬱金二分　占唐三朱皆小

大和常生

沈四両　丁子二両　甲香二両或本一両
鬱金二分若無レ以麝代レ之　甘松二分一朱已上小
沈四両　丁子二両　甲香二分
甘松二朱　麝香二朱
　右二方、是蔵人所小舎人大和常生之秘方也。件常生、延喜聖代、与二公忠朝臣一同時相並奉二合香之事一（者）也。

八条大将　宇治関白用二此方一。

沈四両一分或二分　丁子二両二分　甲香二両已上大
甘松一両　熟鬱金一両以上小
　大将者、八条式部卿親王之孫也。然則、伝来方、可レ同二承和方一。而有二相誤一、甚可レ疑レ之。

朱雀院　東三条院用レ之。

沈四両　丁子二両　甲香一両
甘松一分三朱　詹陶一分三朱已上小
　右方、自二天暦御時一所二令レ伝給一也。取二煎蜜一徹（微）火以春篩。占唐入レ蜜、且煎且攪撥、合了之後、入二諸搗香一、以レ匙調和。先以二目算一計二搗香程一、調二占唐之蜜一。蜜程多於香、少於香、尤為レ拙。以二能均成一、為（巧）。合了、搗三千（六）百杵、畢取出作レ丸。斤量之後、入二瓷壺一、埋二水辺得一陽

気ニ之地ニ。

藤原致忠 従四位上、右馬頭。大納言元方男。

沈四両二分　丁子二両二分　甲香二両

麝香一分　甘松一両

（下　略）

菊花 菊香（花）にたるにほひにやあらん

不レ知ニ誰人一

沈四両　丁子二両　甲香一両二分

薫陸一分　麝香二分　甘松一分

清慎公云、菊花方者、長生久視之香也。聞レ之薫レ之者、却レ老増レ寿。枇杷左大臣習ニ伝之一。亭子院前栽合、左方用ニ菊花方一、右方用ニ落葉方一云々。我好ニ此方一、常用レ之。但麝香一分可レ令レ加ニ進之一。菊花盛開、其香芬馥時、折レ花置レ傍和ニ合之一。或人云、旧于菊花一両許加レ之云々。水辺菊下埋レ之、経ニ二七日許一、入ニ瓷瓶一、堅封レ口　取出又経ニ二七日許一用レ之。若有ニ急用一者、不レ用ニ此説一而已。

落葉 秋のゆふぐれしぐれするほど、もみぢのちりなどするとき、心すごきにやあらん

不レ知ニ誰人一

沈四両　丁子二両　甲香一両二分

薫陸一分　麝香二分　甘松一分

黒方 又云ニ薫衣香一、此説誤歟。冬冴氷時、深有ニ其匂一、不レ被レ封レ寒。

閑院大臣 長良清経元名等同レ之。

沈四両　丁子二両　白檀一分

甲香一両二分　麝香二分　薫陸一分已上大

賀陽宮

沈四両　丁子二両　白檀一分

甲香一両　麝香二分　薫陸一分

滋宰相

小一条皇后与ニ此方一無二相違一。公任卿同用レ之。小一条院又同レ之。入道一品宮女房陸奥方同レ之。参議師成又同レ之。

沈四両　丁子二両　甲香一両或二分
薫陸一分或二分　白檀一分或二分　麝香二分已上大八両二分
沈六両　丁子三両　甲香二両一分（十）
薫陸一分三朱　白檀一分二朱　麝香三分已上小廿二両三分
沈四両　丁子二両　甲香一両二分
薫陸一分　白檀一分　麝香二分已上小八両二分

四条大納言

源小野宮同レ之。染殿宮又同レ之。

沈四両　丁子二両　甲香一両二分
白檀一分　薫陸一分　麝香一分

八条宮

沈四両　丁子二両　白檀一分
甲香一両二分或大一両　麝香二分或一両　薫陸一分已上大

或云、至要方也。延喜六年二月三日典侍滋野直子朝臣所レ献也。

沈六両　丁子三両　白檀一分二朱
甲香一両一分　麝香三分　薫陸一分三朱已上小
沈八両或本　丁子三両　麝香三両
薫陸二両　白檀二両　甲香三両
蘇合二両已上大　蜜五合

公忠朝臣

沈四両　丁子二両少軽　甲香二分少軽
薫陸一分少軽　白檀一分少軽　麝香二分

上品香等、頗軽可レ用二意之一。若例、香如二両数一。

大和常生

沈三両　丁子一両二分　甲香一両一分
白檀一分　薫陸一分　麝香二分

八条大将

沈四両二分　丁子二両二分　甲香二両二分
麝香一分　白檀二分　薫陸三分已上大

可レ疑之由、委見二侍従一。

朱雀院 東三条院同レ之。

沈四両二分　薫陸一分　白檀一分
丁子二両　甲香一分　麝香一分四朱已上小
（下　略）

坎方 或注二黒方一。承和秘方。

沈四両　丁子二両　麝香二分
甲香一両二分　白檀一分　薫陸一分（已上大）

薫衣香 一名躰身香

八条宮

沈九両　甲香五両　青木香二両
白芷一両　丁子一両　白檀二両
占唐一両　蘇合一両半　麝香半両

公忠朝臣

沈三両　丁子五両　鬱金二両
甘松二両　白檀二両　香附子一両
麝香一両或蜜香一両

能合て絹袋に入て、無二透間一き筥中に置て、其上を又裹て、能暖にして、酒作る甕のうへに置て、にほはせよ。

或方

丁子　麝香　零陵香
青木香　甘松已上各三両　白芷
当帰　桂心　檳榔子已上各一両
麝香二分

右十物、細搗、絹篩為レ粉、以レ蜜和、擣一千杵、然後出レ之。丸如二棗核一。口含咽汁、昼夜三日、利（到）含二十二丸一。（三）当日自覚二口香一。五日自覚二躰香一。十日（亦）衣被忽香。廿日逆レ風行、他人聞レ香。廿五日洗レ

手而水落地香。一月已後抱レ児児忽(亦)香。唯忌二蒜及五辛等。不二只口香体潔、兼亦治二万病一。一方、有香附子一両。

（下　略）

洛陽薫衣香　出二淳和院一。但公忠朝臣所レ献也。

沈五両　甲香二両二分　丁子一両

白檀一分以上大　麝香一分　占唐一分

蘇合一分以上小　丁枝二両（大）

会昌薫衣香　随時朝臣所レ献也。

沈三両大　丁子二両大　甲香一両二分大

白檀一分四朱小　青木香二分四朱小　占唐一分四朱小

蘇合二分小　麝香四朱大

増損薫衣香　八条宮所レ上。

沈三両　甲香一両二分　白檀一分

青木香二分　丁子一両　占唐一分二朱

麝香一朱以上大

（下　略）

裛衣香　或注二薫衣香一。邠王家

零陵七両　沈二両　丁子二両

蘇香(合)二両　占唐二両　藿香三両

鬱金二両　麝香二両

右八種、各別搗為レ散和合。但蘇合占唐以レ手按砕和レ之。

承和百歩香　此方(出)レ自二四条大納言家一。大江千古所レ上耳。

甲香八両　蘇合一斤　占唐一斤

白檀八両　零陵八両　藿香四両

甘松花四両　乳頭香五両　白膠二両二分

麝香四両　鬱金二両二分以上小

甲香一分　蘇合二分　占唐二分

白檀二分　零陵一分　藿香三朱

甘松三朱　乳頭四朱半　白膠二朱（減）

麝香三朱　鬱金二朱半（以上為試一所、四分之一分出也。）

（右十一種、搗篩蜜和レ之。於二瓷器中一盛埋。経二三七日一取焼、百歩之外聞レ香。）

（下　略）

埋日数　付埋所

洛陽薫衣香方

入二瓷器一、埋二水辺陽気地一、深八寸、七箇日之後、出用レ之。

承和百歩香方

盛二瓷器瓶中一、埋経二三七日一取焼、百歩外聞レ香。

同御時

被レ埋二右近陣御溝辺地一、後代相伝不レ変二其処一云々。

或記云、右近陣御溝簷下（壇）埋上云々。

八条式部卿宮

一宿埋二馬矢（クソ）下一、件方伝二得陽成院書一云々。

公忠朝臣

黒方、侍従、春秋五日、夏三日、冬七日、埋二之梅樹下一。

知章朝臣

五葉ノ松下ニ可レ埋。春秋七日、夏五日、冬十日。

本文は、神田喜一郎博士蔵文集巻第三（古典保存会複製）による。通行本との本文の異同を、那波本により訓み下し文の下に摘記した。訓み下し文は、底本に付せられた訓点により作製した。

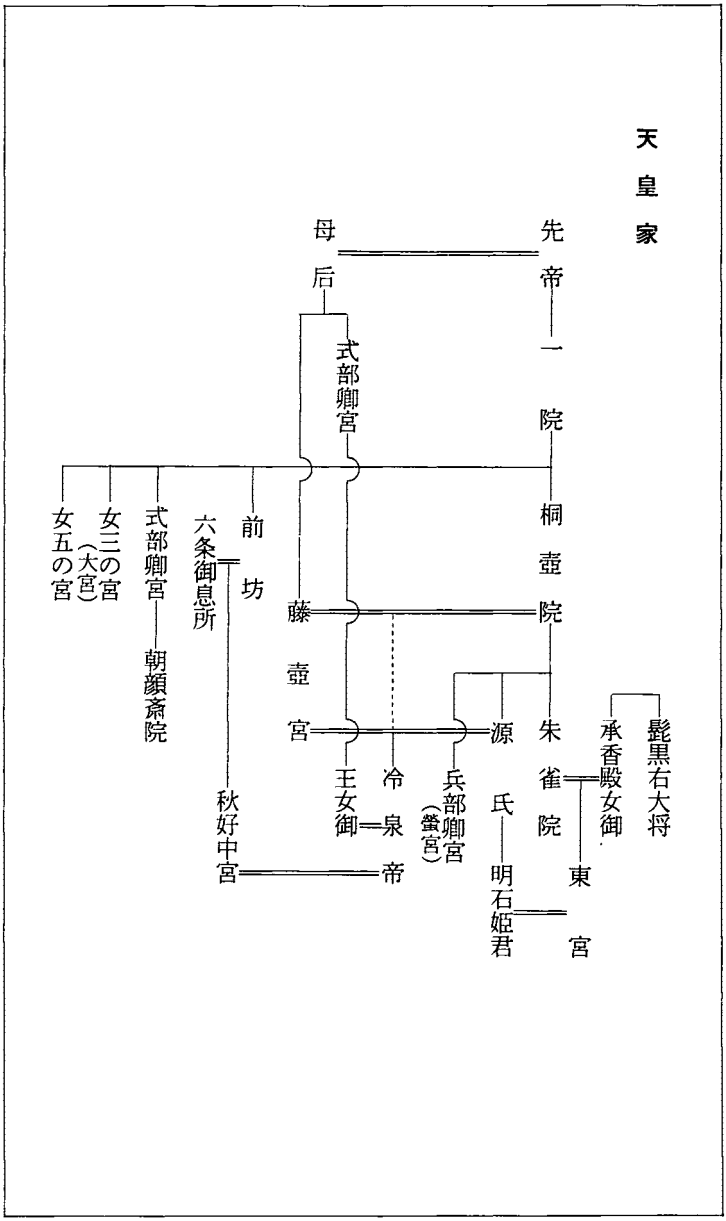
海漫々　戒レ求レ仙也

海漫々
直下無レ底旁無レ辺
雲濤煙浪最深処
人伝中有二三神山一
山上多生二不死薬一
服レ之羽化爲二天仙一
秦皇漢武信二此語一
方士年々採レ薬去
蓬萊今古但聞レ名
天水茫々無二覓処一
海漫々
風浩々

海　漫々たり
直下と見くだせば底も無く旁には辺りも無し
雲の濤煙の浪の最も深き処に
人伝ふらく中に三つの神山有りと
山の上に多く不死の薬生ひたり
之を服すれば羽化して天仙と爲ると
秦皇漢武は此の語を信じ
方士をして年々に薬を採りに去す
蓬萊は今も古も但名を聞くのみ
天水茫々として覓むるに処無し
海　漫々たり
風　浩々たり

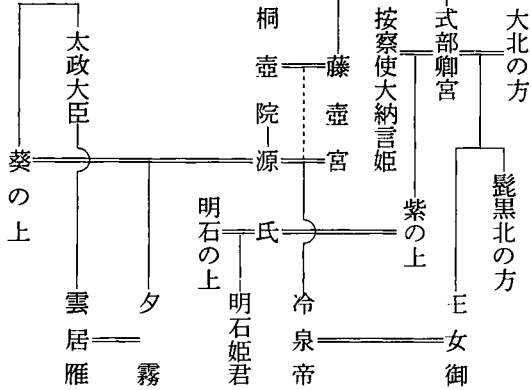
眼穿不レ見二蓬萊嶋一
不レ見二蓬萊一不二敢帰一
童男丱女舟中老
徐福文成多二誑誕一
上元太一虚祠禱
君看驪山塚上杜陵頭
畢竟悲風吹二蔓草一
何況玄元聖祖五千言
不レ言レ薬
不レ言レ仙
亦不レ言二白日昇二青天一

眼は穿げなむとすれども蓬萊の嶋を見ず
蓬萊を見ずは敢や帰らじといひし
童男丱女舟の中に老いたり
徐福文成誑誕多し
上元太一のみ虚く祠り禱る〔祠禱―祈禱〕
君看よ驪山の塚の上杜陵の頭を〔塚上―頂上〕〔杜陵―茂陵〕
畢竟に悲風蔓草を吹く
何に況むや玄元聖祖の五千言にも
薬とも言はず
仙とも言はず
亦白日に青天に昇るとも言はざるをや〔亦―ナシ〕

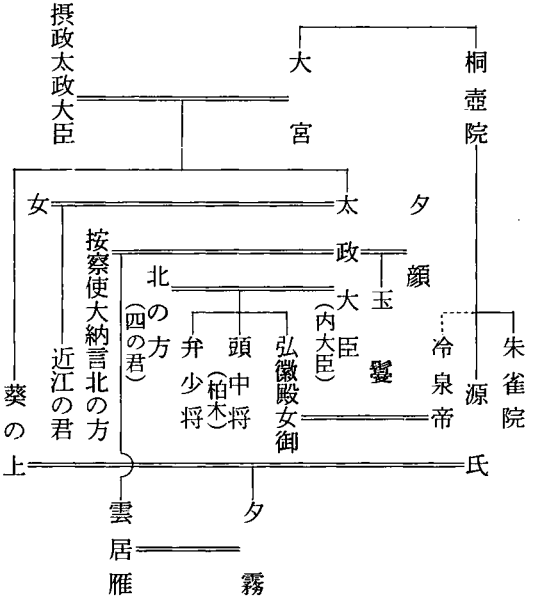

天皇家
先帝
母后
一院
式部卿宮
桐壺院
前坊
六条御息所
式部卿宮
朝顔斎院
女三の宮（大宮）
女五の宮
藤壺宮
源氏
朱雀院
髭黒右大将
承香殿女御
東宮
明石姫君
兵部卿宮（螢宮）
冷泉帝
王女御
秋好中宮

系図一

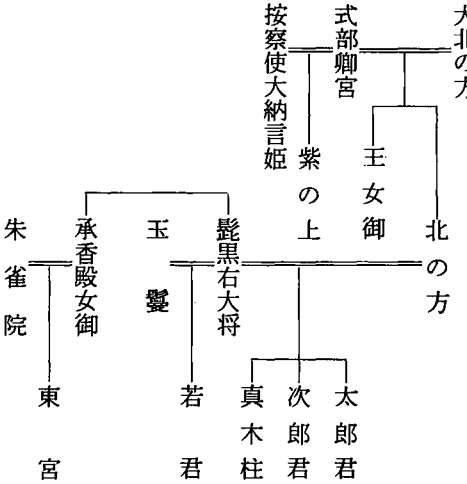
源氏


大北の方
式部卿宮
按察使大納言姫
桐壺院
藤壺宮
源氏
紫の上
髭黒北の方
太政大臣
葵の上
明石の上
明石姫君
冷泉帝
王女御
夕霧
雲居雁

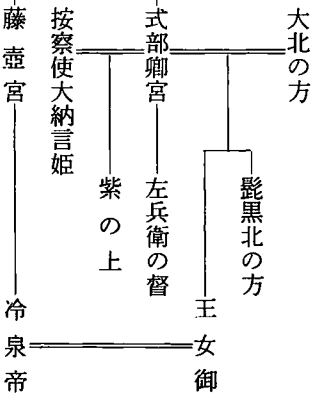
藤原氏（左大臣家）


摂政太政大臣
大宮
桐壺院
女
太政大臣
夕顔
玉鬘
按察使大納言北の方
北の方（四の君）
大（内大臣）
頭中将（柏木）
弁少将
弘徽殿女御
冷泉帝
朱雀院
源氏
葵の上
近江の君
夕霧
雲居雁

藤原氏（髭黒右大将家）



式部卿宮家



歌頭　歌頭　歌頭　歌掌　舞人　後持踏掌　新羅琴楽人　横笛々々　篳篥々々　銅拍子　振桙

歌頭　歌頭　歌頭　歌掌　舞人　和琴踏掌　琵琶楽人　百支々々　笙々々　熨斗　袋持

舞童は舞人の列にあり

琴引以下の十二人をば列人ともいふなり此中九人は楽人なり

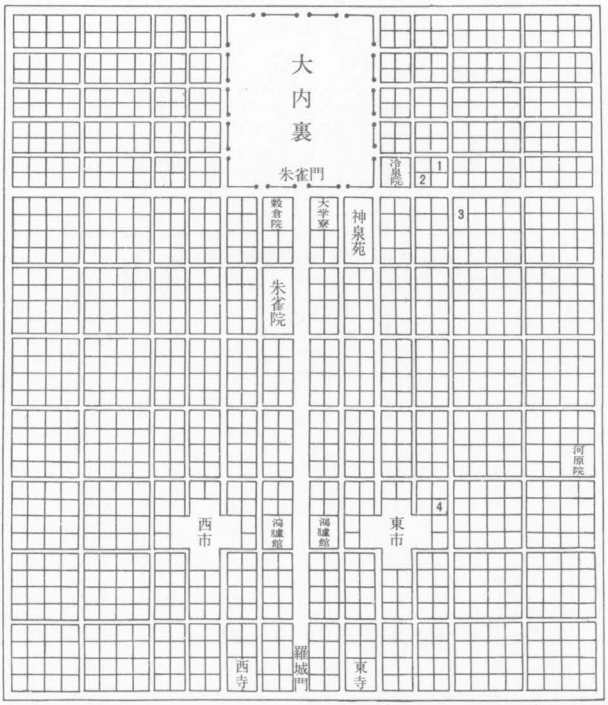
位袍

同

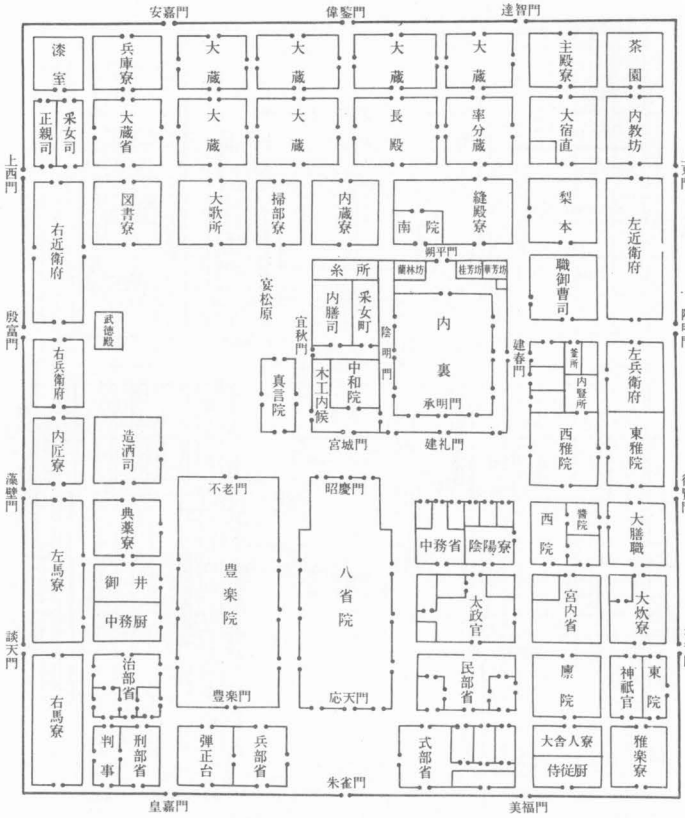
東階

延喜踏歌図（花鳥余情　初音）

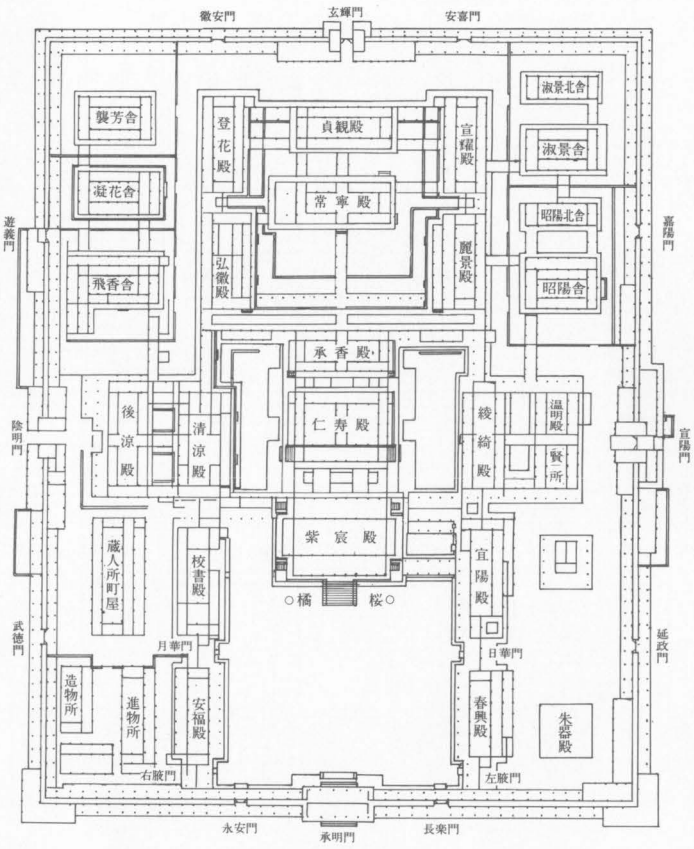
『花鳥余情』初音に所載の〝延喜踏歌図〟は、不明の箇所もあるが、男踏歌の構成を知り得る唯一の資料である。これによれば、楽器の構成は、和琴、琵琶、新羅琴（新羅伝来の十二絃の琴）、百支（田楽に用いるびんざさら）、横笛、笙、篳篥、銅拍子（銅製の円盤二箇を左右の手で打ち鳴らすもの。図録八　鳥の楽参照）の八種である。振桙は魔よけの桙持ち。熨斗は正月の縁起物であるのしあわびを持つ者か。袋持はその従者であろうか。なお、歌掌、舞人は、各列一人ずつではなく、恐らくそれぞれ若干名と考えるべきであろうか。


大内裏
朱雀門
冷泉院
1
2
3
4
穀倉院
大学寮
神泉苑
朱雀院
河原院
西市
洛陽館
鴻臚館
東市
羅城門
西寺
東寺
一条大路
正親町小路
土御門大路
鷹司小路
近衛御門大路
勘解由小路
中御門大路
春日小路
大炊御門大路
冷泉小路
二条大路
押小路
三条坊門小路
姉小路
三条大路
六角小路
四条坊門小路
錦小路
四条大路
綾小路
五条坊門小路
高辻小路
五条大路
樋口小路
六条坊門小路
楊梅小路
六条大路
左女牛小路
七条坊門小路
北小路
七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路
東京極大路
富小路
万里小路
高倉小路
東洞院大路
室町小路
町尻小路
烏丸小路
西洞院大路
油小路
堀川小路
南市門小路
大宮大路
櫛笥小路
壬生大路
坊城小路
朱雀大路
坊城小路
壬生大路
櫛笥小路
大宮大路
猪隈小路
堀川小路
油小路
西洞院大路
町尻小路
室町小路
烏丸小路
東洞院大路
高倉小路
万里小路
富小路
東京極大路
西京極大路
1 陽成院
2 二条院
3 東三条院
4 亭子院

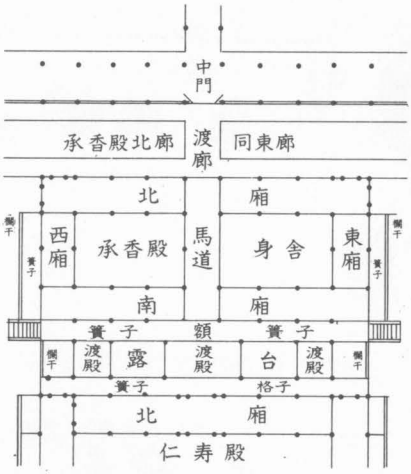
京城図


安嘉門
偉鑒門
達智門
漆室
兵庫寮
大蔵
大蔵
大蔵
大蔵
主殿寮
茶園
正親司
采女司
大蔵省
大蔵
大蔵
長殿
率分蔵
大宿直
内教坊
上西門
上東門
右近衛府
図書寮
大歌所
掃部寮
内蔵寮
南院
縫殿寮
梨本
左近衛府
明平門
糸所
蘭林坊
桂芳坊
華芳坊
職御曹司
宴松原
内膳司
采女町
内裏
陽明門
殿富門
武徳殿
宜秋門
陰明門
建春門
釜所
内豎所
右兵衛府
真言院
木工内候
中和院
承明門
左兵衛府
内匠寮
造酒司
宮城門
建礼門
西雅院
東雅院
藻壁門
不老門
昭慶門
待賢門
典薬寮
中務省
陰陽寮
西院
鷹院
大膳職
左馬寮
御井
豊楽院
八省院
太政官
宮内省
大炊寮
中務厨
談天門
郁芳門
治部省
民部省
廓院
神祇官
東院
右馬寮
豊楽門
応天門
判事
刑部省
弾正台
兵部省
式部省
大舎人寮
侍従厨
雅楽寮
朱雀門
皇嘉門
美福門

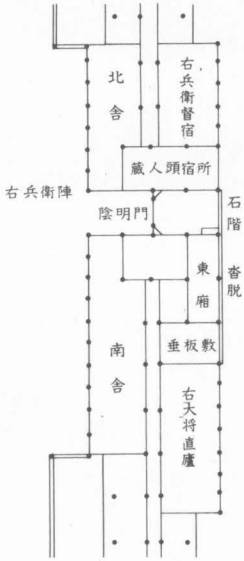
大内裏図


徽安門
玄輝門
安喜門
襲芳舎
凝花舎
飛香舎
登花殿
貞観殿
常寧殿
宣耀殿
麗景殿
弘徽殿
淑景北舎
淑景舎
昭陽北舎
昭陽舎
遊義門
嘉陽門
宣陽門
陰明門
武徳門
延政門
承香殿
仁寿殿
後涼殿
清涼殿
綾綺殿
温明殿
餐所
紫宸殿
宜陽殿
校書殿
蔵人所町屋
橘
桜
月華門
日華門
造物所
進物所
安福殿
春興殿
朱雀殿
右腋門
左腋門
永安門
承明門
長楽門

内裏図

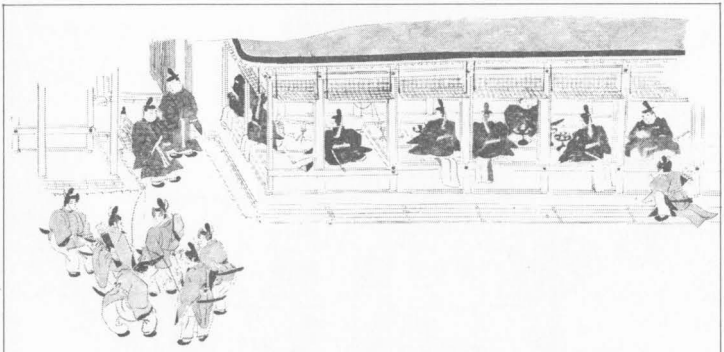


承香殿の図



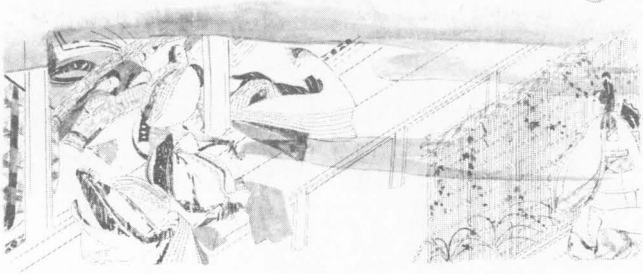
陰明門の図

上図、仁寿殿の北の承香殿の図は、中央の馬道によって、殿舎が東西に分れている様子を示す。左図、陰明門は後涼殿の西に当る内裏内廊の門。門屋の中に右大将その他の宿直所のある様を示す。

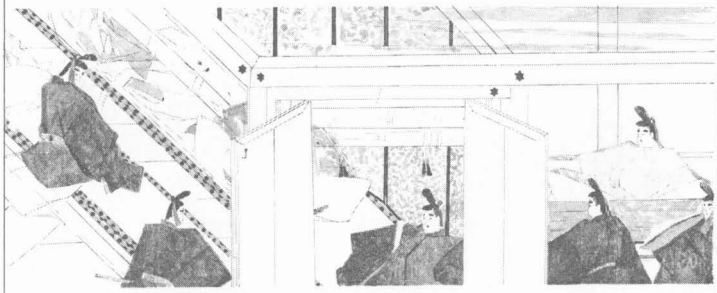


右近陣座　校書殿の東廂（年中行事絵巻九）

立　蔀（石山寺縁起絵）



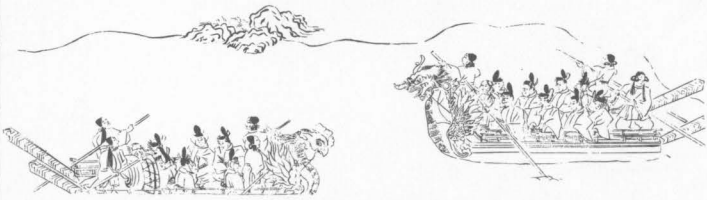
透　垣（源氏物語絵巻　橋姫）



妻戸の間（紫式部日記絵巻）

篝　火（紫式部日記絵巻）

籬　（北野天神縁起）

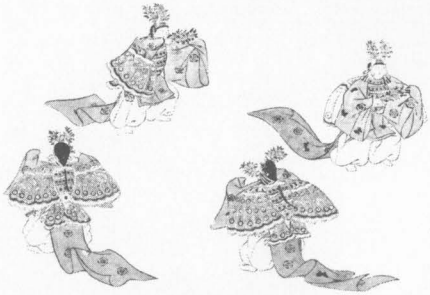


龍頭鷁首の舟（年中行事絵巻十　大饗）

迦陵頻　鳥楽（舞楽図説）

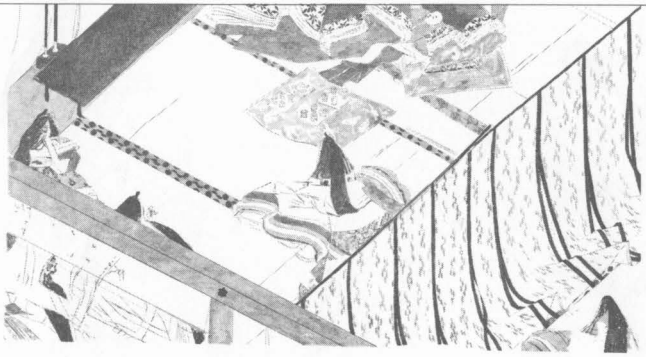
迦陵頻（舞楽図）

賀王恩（舞楽図）



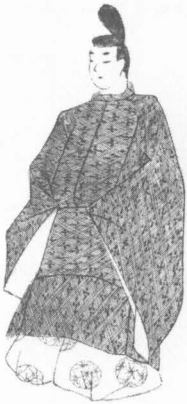
胡　蝶（舞楽図説）

臨　時　客（年中行事絵巻九）

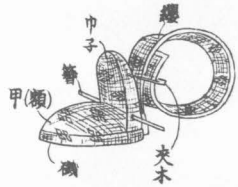


髪上げ姿（紫式部日記絵巻）

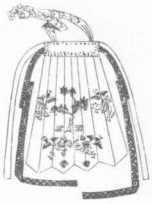
冬の烏帽子直衣姿



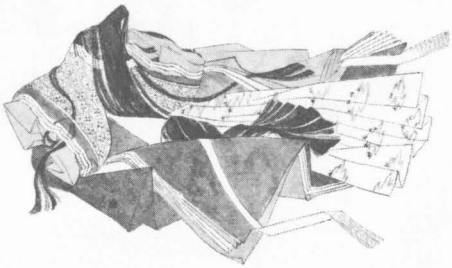
夏の冠直衣姿



巻櫻（装束甲冑図解）

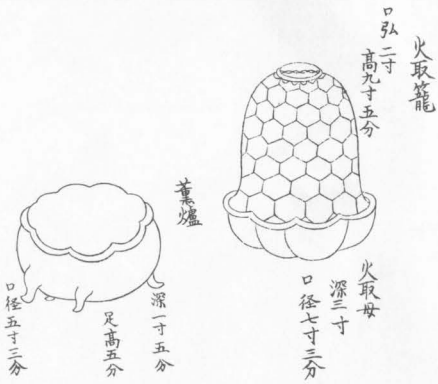


裳の図（貞丈雑記）

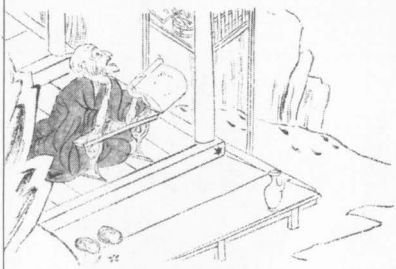


裳唐衣姿（佐竹本三十六歌仙絵　小町）

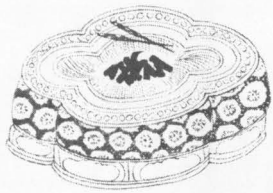
伏籠と火取母（葉月物語絵巻）



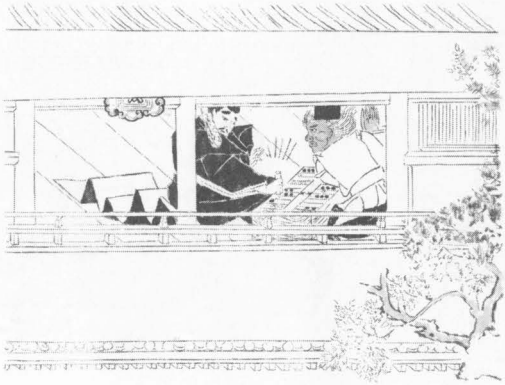
薫　炉（類聚雑要抄）火取母、火取籠



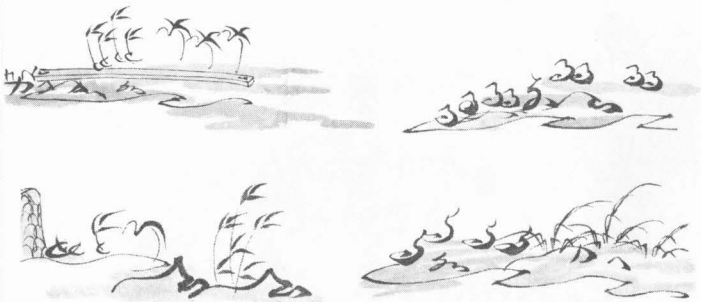
脇　息（平家納経）



火　桶（枕草子絵巻）



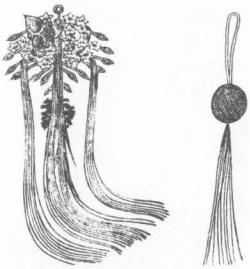
双　六（長谷雄草紙）



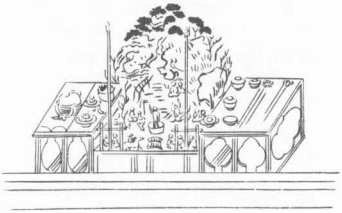
葦　手（前田家本元輔集下絵）

花銜鳥（東大寺刀剣文様）

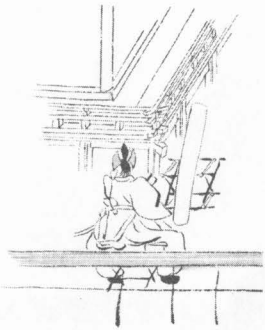
鴛鴦の図（西本願寺本三十六人集料紙文様）



薬　玉（貞丈雑記）

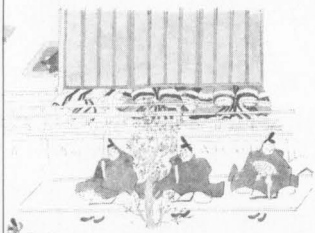


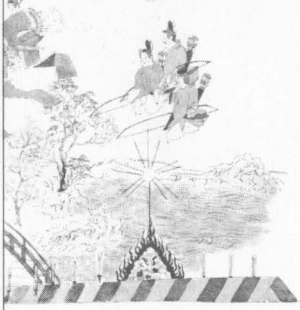
灌　仏（年中行事絵巻別本）
清涼殿東廂に安置された誕生仏の山形。



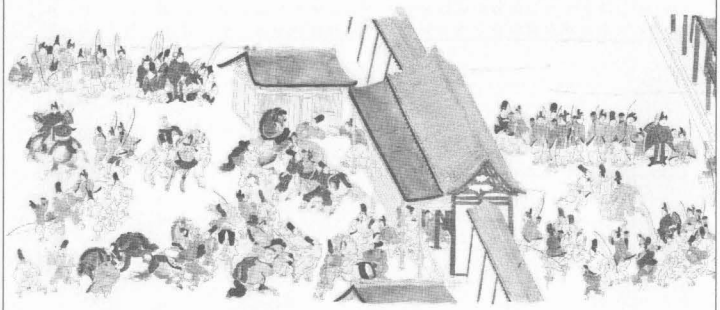
胡　床（年中行事絵巻七）

図は、右端、紫宸殿南階に主上が出御されている所から、その南、承明門から建礼門に至るまでの情景を示す。南階の下には鳳輦が寄せられ、周囲を近衛の次将が警固している。南階東（図の下方）の桜の樹の近くに左大将、西の橘の樹の近くに右大将が立つ。承明門の南には左右兵衛が陣を敷いている。東（図の下方）が左兵衛の督以下、前陣に供奉すべく、列を解いて出発しようとしている。西の右兵衛の督以下は後詰めなので、なお列立している。図の左端、建礼門の南は、左右衛門の陣。東の左衛門の督以下は、左兵衛に先行すべく、出発を開始し、西の右衛門の督以下はなお列立している。

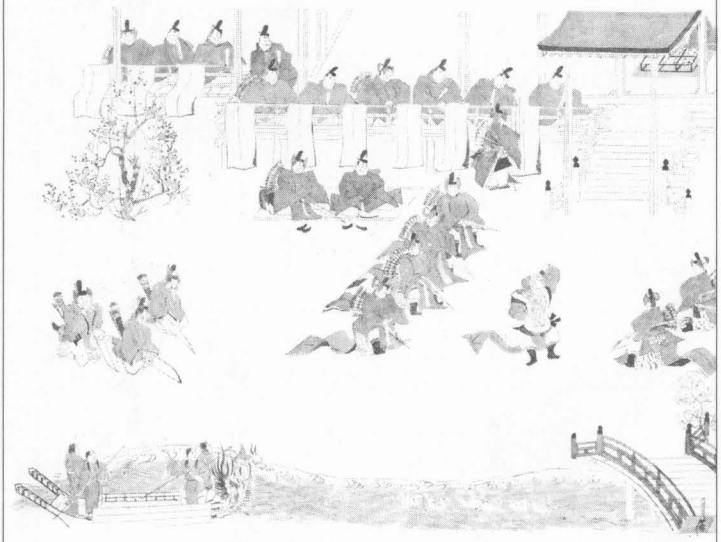




左の図は、上皇御所（法住寺殿）寝殿南庭における舞楽の情景。寝殿中央、階の間が主上の御座所、その東が上皇の座。御簾からは女房の押し出しが見える。舞は抜頭。その東に胡床にかけているのが、左近衛の次将、西が右近衛の次将。庭の南の池には、龍頭の舟を浮べ、中島に渡る橋が見え、中島に設けられた楽屋の幔屋の屋根、大太鼓の頂部が見える。



朝覲行幸（年中行事絵巻一）



朝覲行幸　庭前舞楽（年中行事絵巻一）

官位相当表

官位		神祇官	太政官	中務省	式部省	治部省	民部省	兵部省	刑部省	大蔵省	宮内省	修理職	大膳職	左京職	右京職	中宮職	春宮坊	大舎人寮	図書寮	内蔵寮	縫殿寮	内匠寮	雅楽寮	玄蕃寮	諸陵寮	主計寮	主税寮	木工寮	左馬寮	右馬寮	兵庫寮	大学寮	陰陽寮	典薬寮
正一位			太政大臣																															
従一位			左大臣 右大臣 内大臣																															
正三位			大納言 2																															
従三位			中納言 3																															
正四位	上			卿												傅																		
	下		参議 8						卿																									
従四位	上		左大弁 右大弁																															
	下	伯												大夫																				
正五位	上		左中弁 右中弁	大輔																														
	下		左少弁 右少弁						大判事	大輔																								
従五位	上			少輔																				頭										
	下	大副	少納言 3	大監物	侍従 8				少輔							亮	東宮学士 2														文章博士			
正六位	上	少副	大外記 大史	大丞	大内記																													
	下							大丞	中判事															助						明経博士			待医	助
従六位	上	大佑		少丞											大進																			
	下	少佑				少丞	少判事				大主鑰	少進	大進																					
正七位	上		少外記 少史	少内記 大録				大録						少進																				
	下			少監物 大主鈴			判事大属																	大允						明法博士 直講	助教博士	陰陽博士 天文博士 医博士 女医博士	
従七位	上			監物主典																				少允						音博士 算博士	書博士	陰陽師 暦博士 針博士		
	下			大典鑰					少主鑰																							漏刻博士 医師		
正八位	上			少主鈴 少録				少																										
	下	大史					判事 少属								大属																			
従八位	上	少史		少典鑰											少属									大属										
	下																							少属										
大初位	上																																	
	下																																	
小初位	上																																	
	下																																	

諸国	後宮	大宰府	蔵人所	検非違使	鎮守府	按察使	勘解由使	斎院使	左衛門府	右近衛府	弾正台	主馬署	主殿署	主膳監	采女司	水部司	織部司	隼人司	東市司	西市司	造酒司	内膳司	正親司	囚獄司	斎宮寮	掃部寮	主殿寮	大炊寮
下国 中国 上国 大国									兵衛府	衛門府																		
			別当																									
	尚蔵																											
	尚侍2	帥								大将	伊																	
	尚縫		頭（中弁・中将）																									
	尚膳																											
	典蔵4			別当																								
	典侍	大弐				按察使	長官		督	中将2	大弼																	
			五位蔵人3																									
										少将2	少弼																	
守	掌侍4			佐	将軍				佐																			
守	典縫 命婦 典膳	少弐					次官	長官																			頭	
	尚書		六位蔵人4							将監4	大忠										奉膳	正						
守 介		大監									少忠				正										助			
介	尚殿	少監		大尉				次官		大尉				正													助	
守	尚酒	大判事					判官		大尉				署															
	尚掌典	大工 少判事 大典		少尉					少尉		大疏																	
大掾	尚兵蔵				軍監					将曹															大允			
少掾 掾	尚水典							判官																	少允		允	
	尚薬書						主典		少尉												典膳	佑						
	典掃・典水	少医師 少算師 少工典									少疏						佑											
掾	典薬・典兵・典闈・典殿			大志						大志						佑												
大目	典酒			少志	軍曹				大志	少志															属			
掾 目 少目								主典	少志																		大属	
																				令史		大令史					少属	
目																令史					少令史	令史						
														令史														
目													令史															

新潮日本古典集成（第二三回）

源氏物語四

昭和五十四年二月五日　印刷
昭和五十四年二月十日　発行

校注者　石田穣二　清水好子

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四一八〇八

定価一五〇〇円

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yoshiko Shimizu, Printed in Japan, 1979.

新潮日本古典集成

源氏物語

五

石田穣二 清水好子 校注

新潮社版

目次

凡例……三
若菜上……九
若菜下……一三七
柏木……二六五
横笛……三一七
鈴虫……三四三

付録

系図……三六五
図録……三六八

凡例

一、本巻には、若菜上、若菜下、柏木、横笛、鈴虫の五巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、若菜上、若菜下の二帖は明融本を底本とし、柏木は青表紙原本（前田家尊経閣蔵）を底本とする。横笛、鈴虫は大島本である。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文脈の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、系図、図録を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

源氏物語 五

若菜（わかな）

上

六条の院の御幸ののち、朱雀院は病重く、出家を決意するが、鍾愛の女三の宮の将来を案じ、婿選びに心を砕く。重だった乳母たちと熟慮を重ねるうち、夕霧、柏木、螢兵部卿の宮などの候補者のなかで、適任者は光源氏以外にないと考えるに至った。光源氏も、女三の宮が亡き藤壺の宮の姪であるところから、心動くものがあった。やがて、女三の宮の裳着が済み、朱雀院は出家する。源氏は、朱雀院を見舞い、女三の宮の後見を承諾した。紫の上の嘆きは深く、長い間培って来た源氏との愛のはかなさに絶望する。

年明けて正月、玉鬘が源氏四十の賀を催し、若菜を献じた。巻名は、この時の歌の言葉による。二月十日過ぎ、女三の宮は六条の院に輿入れした。紫の上は、悲しみを抑え、夫の婚儀の支度に務める。女三の宮はただ若々しいだけの姫宮で、源氏は往年の紫の上と比べ、いたく失望する。朱雀院は西山に籠り、源氏は、里下がりした朧月夜と再会する夜々があった。夏頃、明石の女御は懐妊のため、六条の院に退出し、十月、紫の上は、源氏四十の賀を行う。続いて、秋好む中宮、冷泉帝の命をうけた夕霧も盛大に賀の儀式を取り行った。

翌年三月、明石の女御は待望の皇子出産。明石の入道はこれを聞いて、不思議な夢想と宿願を認めた遺書をよこし、みずからは山深く跡を絶った。三月の末、六条の院の蹴鞠に加わった柏木は、たまたま御簾の外れから、今も心を寄せる女三の宮の姿を垣間見て、わが恋の叶えられるしるしかと思い乱れるのであった。

一 朱雀院上皇のこと。朱雀院を御所とするので、この称号がある。（三巻少女二六六頁参照）

二 先だっての六条の院御幸の後。冷泉帝の紅葉御覧の行幸に、上皇も同座されたこと、四巻藤裏葉三〇四頁以下参照。

三 行幸は「神無月の二十日あまり」のことであった。（藤裏葉三〇四頁）

朱雀院病み、出家を志す

四 もともとご病弱でいらっしゃるのだが。眼病のほか病いがちであったこと、二巻明石二九五頁に見える。

五 長年、出家の願いが強いのだが。以下「ここちなむする」まで、朱雀院の言葉と見られるが、途中、敬語をまじえた地の文と重なり混ざった書き方。

六 御母后ご在世の間は、何事にもご遠慮申されて、今まで躊躇なさっていたが。弘徽殿の大后崩御のこと、ここにはじめて見える。（若菜下二四五頁参照）

七 東宮を別にしたてまつると。東宮の母は承香殿の女御。三巻澪標一四頁に立太子のことが見える。

八 藤壺と申し上げたお方は。朱雀院上皇の妃の一人。以下にこの方の経歴を述べる。

朱雀院、女三の宮の将来を憂う

九 先帝の御子の源氏でいらした方だが。「先帝」は、桐壺の巻に見えた帝（一巻三三頁注一〇参照）。「源氏」は、臣籍に下って源の姓を賜った方。

一〇 最高の地位（后）にもおつきになるはずの人だったが。

若菜上

一 朱雀院の帝、ご不例でずっとお
二 ありし御幸ののち、
三 そのころほひより、例ならずな
具合が悪くていらっしゃる
やみわたらせたまふ。
四 もとよりあつしくおはしますうちに、このたびはもの心細くおぼしめされて、
五 年ごろ行ひの本意深きを、
六 后の宮おはしましつるほどは、よろづ憚りきこえさせたまひて、今までおぼしとどこほりつるを、
長くは
やはり出離の道に心せくのであろうか
なほそのかたにもよほすにやあらむ、世に
生きていられないような気がする
世を捨てるに際して
久しかるまじきここちなむする、などのたまはせて、さるべき御心のお心積りをいろいろあそばす
まうけどもせさせたまふ。

御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ四所おはしましける。そのなかに、藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と聞こえさせし時参りたまひて、
一〇 高き位にも定まりたまふべかりし人の、
[朱雀院が]東宮と申し上げた時代に入内なさって
格別の
取り立てたる御後見もおはせず、母方もそ
名の

の筋となくものはかなき更衣腹にてものしたまひければ、御まじら（後宮で）ひのほども心細げにて、大后の、尚侍を参らせたてまつりたまひて、（藤壺は）かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、気おされて、帝も御心のうちにいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、おりさせたまひにしかば、かひなくくちをしくて、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御なかにすぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ。（朱雀院は）

（藤壺を）お気の毒な方とは

ある家柄ではなく微力な

のお暮しぶりも

まわりの方が太刀打ちできないほど重くお扱い申されたりしたので

（御子たちの）

いとしい方と

その頃　お年は十三四ぐらいでいらっしゃる

そのほど御年十三四ばかりおはす。今はと背き捨て、山籠りしなむ後の世にたちとまりて、誰を頼む蔭にてものしたまはむとすらむと、ただこの御ことをうしろめたくおぼし嘆く。

女三の宮のお身の上を心配なさってお嘆きである

四　西山なる御寺造り果てて、うつろはせたまはむほどの御いそぎをせさせたまふに添へて、またこの宮の御裳着のことをおぼしいそがせたまふ。院のうちにやむごとなくおぼす御宝物、御調度どもをばさらにもいはず、はかなき御遊びものまで、すこしゆゑある限りを

女三の宮

院の御所にある大事なものとお思いの

ご準備を

他愛ないお遊びのお道具まで

少しでも由緒のあるものは全部

一　弘徽殿の大后が、朧月夜の尚侍を、源氏とのことがあるにもかかわらず、強引に朱雀院の後宮に入れたことをさす。（二巻葵一二〇頁、同賢木一四四頁参照）

二　ご譲位あそばしたので、（藤壺は）入内のかいもなく、残念なことで、身の上を恨むような有様でお亡くなりになった。立后なども なかったことをいう。

三　今を限りと、俗世の縁を切り、山に籠ってしまったあとに残って。以下「ものしたまはむとすらむ」まで朱雀院の心中の思い。「山籠り」は、仏道修行のため、山寺に籠ること。次に「西山なる御寺」とある。

四　「西山」は、京都の西北にあたる山麓、今の龍安寺、仁和寺一帯の地。『河海抄』『花鳥余情』は、この寺を仁和寺とする。宇多法皇は延喜元年（九〇一）仁和寺に御室を営み、承平元年（九三一）御室に崩じた。また朱雀上皇は、天暦六年（九五二）三月十四日出家、同年四月十五日仁和寺に遷御、八月十五日崩。『花鳥余情』は、両者を取り合せて書いたとする。物語の朱雀院は、史上の朱雀院と重なる書き方がされている（三巻絵合一〇七頁注一一、四巻梅枝二五九頁注一六参照）。

五　女子の成人式。はじめて裳を着け、髪上げをする。貴族の姫は、普通十三歳前後に行う。

承香殿女御
東宮
朱雀院
女二の宮
女四の宮
女三の宮
先帝
更衣
藤壺女御

六「処分」は、財産の分配をすること。

七 朱雀院の皇子。母は承香殿の女御。

八 上皇御所へお成りになった。朱雀院である（一一頁注一参照）。

東宮、母女御とともに朱雀院を見舞う

九 格別のご寵愛というのでもなかったが、東宮がこうしてれっきとした地位にいらっしゃる女御のご運勢が、この上なくすばらしいので。

一〇 以下「おとなびさせたまひて」まで、明融本、大島本なし（明融本は別筆補入）。もと河内本の本文であろう。

一一 輔佐の方々も、母方といい外戚といい、名門同士の立派な方々でいらっしゃるので。母女御の兄は髭黒の右大将。東宮妃明石の姫君の父は光源氏。

一二 今はの別れの折にも、きっと障りになることでしょう。「さらぬ別れ」は、避けられぬ別れ、死別のこと。「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子のため」（『古今集』巻十七雑上、在原業平）による。「ほだし」は、馬の足にからませて、歩けないようにする縄。転じて人の身を束縛するもの。

朱雀院、東宮に、女三の宮のことを依頼

一三 今まで、他人事として見聞きしてきたことからも。過去の内親王方の例を思い出していう。

ば、ただこの御方（女三の宮）に取りわたしたてまつらせたまひて、その次々をなむ、異御子たちには、御処分（六）どもありける。

春宮（七）は、かかる御なやみ（ご病気）に添へて、世を背かせたまふ（ご出家あそばそうとのお心積り）べき御心づかひになむと聞かせたまひて、わたらせたまへり（八）。母女御（承香殿の女御）も添ひきこえさせたまひて参りたまへり。すぐれたる（九）御おぼえにしもあらざりしかど、宮のかくておはします御宿世（すくせ）の、限りなくめでたければ、年ごろの御物語（国をお治めになる時のお心得などを）こまやかに聞こえさせたまひけり。宮（東宮）にも、よろづのこと、世をたもちたまはむ御心づかひなど、聞こえ知らせたまふ。

一〇 御年のほどよりは、いとよくおとなびさせたまひて、一一 御後見（大層立派にご成人あそばして）どももこなたかなた、軽々しからぬ仲らひにものしたまへば、いとうしろやすく思ひきこえさせたまふ。

「この世に恨み残ることもはべらず。女宮たちのあまた残りとどまる行く先を思ひやるなむ、一二 さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける。一三 さきざき人の上に見聞きしにも、女は心よりほかに、あはあはしく、

一 世間から批判されるような、逃れられぬめに遭うのが、ひどく残念で悲しく思われます。女房などの手引きで身分にふさわしくない男と浮き名を流すことなどを念頭においている。

二 天下を思いどおりに治められるようになったら（ご即位なさったら）。

三 四人の内親王のなかで、母方がしっかりしている者は。

四 東宮の御母女御にも、隔意なくして下さるよう、女三の宮のことをご依頼なさる。

五 女三の宮の母藤壺の女御。朱雀院在位中、帝寵の篤かったことは、前に見える。

六 なるほど今では。当の女御も亡くなり、承香殿の女御自身も、東宮の母女御という地位が定まった今は。

七 ほんとうに心にかけて大事に思い、世話をしようとまでは（承香殿の女御は）お思いにならないのではないかと、思いやられるのだ。「されど……」以下、朱雀院の危懼の念を代弁して説明する草子地。

歳末、朱雀院の病、いよいよ重し

八 お部屋（ご病室の母屋）の外にもお出にならない。

一人におとしめらるる宿世あるなむ、いとくちをしく悲しき。いづれ（どなたをも）をも、思ふやうならむ御世には、さまざまにつけて、御心とどめて（何かにつけて）おぼし尋ねよ。（話をなさって下さい）そのなかに、後見などあるは、（お忘れにならずお世）さるかたにも思ひゆ（そちらに任せてもよいと思っています）づりはべり。三の宮なむ、いはけなき齢にて、（まだ幼い上に）ただひとりをたのも（ずっと私一人だけを頼りにしてきて）しきものとならひて、うち捨ててむ後の世に、（私が出家したあと）ただよひさすらへむ（寄るべなく心細い世を送るだろうと）こと、いといとうしろめたく悲しくはべる」と、御目おしのごひつ（［東宮に］ご心中をお聞かせ申される）つ聞こえ知らせさせたまふ。

四 女御にも、心うつくしきさまに聞こえつけさせたまふ。されど、五 女御の、人よりはまさりて時めきたまひしに、皆いどみかはしたま（どなたもお互い競争していらしたので）ひしほど、御仲らひども、（お妃方のお間柄はどうしてもよくはなかったので）えうるはしからざりしかば、その名残にて、六 げに今は（ことさら憎らしいなどということはなくても）わざと憎しなどはなくとも、七 まことに心とどめて思ひ後見むとまではおぼさずもや、とぞおしはからるるかし。

朝夕にこの御ことをおぼし嘆く。（女三の宮の）年暮れゆくままに、御なやみま（［朱雀院は］）ことに重くなりまさらせたまひて、（ご病気が）御簾の外にも出でさせたまはず。

九 御物の怪のせいで、時々ご病気なさることもあったが。朱雀院の病悩は、二巻明石二八六頁、二九五頁、三巻澪標一一頁に見える。

一〇 それでも朱雀院ご在位中からご恩顧をこうむるようになられた人々は。近臣をいう。

一一 夕霧。任中納言は、この年の秋（四巻藤裏葉三〇〇頁参照）。一一一頁の朱雀院の言により、権中納言であることが分る。

一二 亡き桐壺院。

一三 桐壺院が臨終に朱雀院に対して、源氏と冷泉帝のことを依頼したこと、二巻賢木一三八～九頁に詳しい。

一四 源氏。「この」は、夕霧に向って、その父のことを言うので出た言葉。

一五 些細な行き違いから、（源氏に）お恨まれ申すこともあっただろうと思うのに。朧月夜とのことが直接のきっかけになって、源氏の須磨退居にいたった事件をさす。

夕霧、朱雀院を見舞う

御物のけにて、時々なやませたまふこともありつれど、いとかくうちはへをやみなきさまにはおはしまさざりつるを、このたびはなほ限りなりとおぼしめしたり。御位を去らせたまへれど、一〇なほその世に頼みそめたてまつりたまへる人々は、今もなつかしくめでたき御ありさまを、心やりどころに参りつかうまつりたまふ限りは、心を尽くして惜しみきこえたまふ。六条の院よりも、御とぶらひしばしばあり。源氏ご自身もみづからも参りたまふべきよし聞こしめして、院はいといたくよろこびきこえさせたまふ。

一一 中納言の君参りたまへるを、御簾のうちに召し入れて、御物語こまやかなり。「故院（朱雀院）の上の、一三 今はのきざみに、あまたの御遺言ありしなかに、一四 この院の御こと、今の内裏（冷泉帝）の御ことなむ、取り分きてのたまひ置きしを、帝の位につくとおほやけとなりて、何ごとも自由に振舞えないので私個人としての気持はこと限りありければ、うちうちの心寄せは変らずながら、一五 はかなきことのあやまりに、心おかれたてまつることもありけむと思ふを、年ごろことに触れて、今まで長年何かにつけて［源氏は］その恨

一 賢明な政治家でも、自分のこととなれば、話は違って、感情に支配され、必ずその復讐をし、道に外れたことが、昔でもたくさんあったものです。「さかしき人」は、「賢人」を和風に言ったもの。過去の歴史を典例とする儒教的教養による発言。

二 東宮などにも好意をお寄せ申しておられる。東宮への心寄せは、澪標三一頁以来のことである。

三 今は今で、この上なく親しい間柄となり、仲睦まじくしていられるのも。明石の姫君を東宮妃にさし上げたことをいう。「べき」は、当然そうなるはずの意。

四 生来、愚かな性質に加えて、子を思う親心の闇路に迷い、見苦しいことではないかと思って。「子の道の闇」は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による言葉。

五 冷泉帝を、桐壺院の遺言通り無事即位させたことをいう。

六 ご承知のように末世の明君として、故桐壺院以来のご治世の名誉を挽回して下さっています。冷泉帝の治世のすぐれていること、三巻絵合一一四頁に見える。

七 六条の院行幸をさす（四巻藤裏葉三〇四頁参照）。十月に行われたが、紅葉を賞するゆえに、秋という（『花鳥余情』）。

八 （源氏が）懐かしくお会いしたく思われます。「おぼえたまふ」は、思われなさる。主語は、源氏。

み残したまへるけしきをなむ漏らしたまはぬ。一さかしき人といへど、身の上になりぬれば、こと違ひて心動き、かならずその報い見え、ゆがめることなむ、いにしへだに多かりける。いかならむをりにか、（どのような機会に）その御心ばへほころぶべからむと、世人もおもむけ疑ひけるを、（そうしたお恨みの心が漏れ出るのだろうかと）つ（その気で疑っていたが）ひに忍び過ぐしたまひて、二春宮などにも心を寄せきこえたまふ。三今は、またなく親しかるべき仲となり、むつびかはしたまへるも、（無上にうれしく）限りなく心には思ひながら、四本性のおろかなるに添へて、子の道の闇にたちまじり、かたくななるさまにやとて、なかなかよそのことに聞こえ放ちたるさまにてはべる。五内裏の御ことは、かの御遺言違へずつかうまつりおきてしかば、六かく末の世の明らけき君として、来しかたの御面をも起こしたまふ。本意のごと、いとうれしくなむ。

七この秋の行幸ののち、いにしへのことをとり添へて、八ゆかしくおぼつかなくなむおぼえたまふ。対面に聞こゆべきことどもはべり。かならずみづからとぶらひものしたまふべきよし、もよほし申したま

（源氏に）お任せ申した有様でいます
お世話申し上げておきましたから
かえってひとごとのように
望み通りで
まことにうれしく思います
昔からのこともいろいろ思い出されて
お会いして申し上げたいこともいろいろあります
ご自身でお見舞におこし下さるよう
おすすめ申して下さい

へ」など、涙ながらに仰せになる うちしほたれつつのたまはす。

中納言の君、夕霧「過ぎはべりにけむかたは、ともかくも思うたまへ分きがたくはべり。年まかり入りはべりて、朝廷にもつかうまつりすにつけはべるあひだ、世間のことをいろいろ経験しております間には世の中のことを見たまへまかりありくほどには、大小のことにつけても、親子同士のうちとけた話し合いなどの折にも うちうちのさるべき物語などのついでにも、いにしへのうれはしきことありてなむなど、うちかすめ申さるるをりははべらずなむ。かく朝廷の御後見をつかうまつりさして、静かな暮しをしようとなる思ひをかなへむと、すっかり隠退してのちは ひとへに籠りゐしのちは、世事一切を振り捨てたさまで何ごとをも知らぬやうにて、故院の御遺言のごともえつかうまつらず、ご遺言通りにもお仕え申すことができず〔朱雀院が〕御位におはしましし世には、齢のほども、身のうつはものも及ばず、かしこき上の人々多くて、私の思うところを十分に尽してご覧いただくこともなかった その心ざしを遂げて御覧ぜらるることもなかりき。〔朱雀院が〕今かくまつりごとをさりて、参上しておうかがい申したいのだが 静かにおはしますころほひ、心のうちをも隔てなく、参りうけたまはらまほしきを、ついつい万事思うに任せず さすがに何となく所狭き身のよそほひにて、おのづから月日を過ぐすこと、となむ、を

一七

九 過ぎ去りました昔のことは、（幼少の折のこととて私などには）何とも分りかねます。須磨流謫のことには返答しにくいので、こう言う。

一〇 成人いたしましてから。「まかる」は、ここは、他の動詞の上に添えて謙譲表現とする言い方。男性用語である。以下、「あひだ」「大小のこと」も男性用語。

一一 「昔、つらいことがあってな」などと、（父源氏が）一言でも漏らされることはございません。

一二 このように政治の輔佐を途中でご辞退して。直接政治に携わらない太政大臣から、さらに准太上天皇になったことをいう。これより以下、七行後の「おのづから月日を過ぐすこと」まで、源氏の言葉を夕霧が伝えるもの。

一三 桐壺院が源氏に、冷泉帝の後見をするように遺言したこと、二巻賢木一四〇頁に見える。

一四 年も若く、器量も不足で。朱雀院在位中の源氏の年齢は、二十一～二十八歳。参議兼大将であった。

一五 すぐれた目上の方々が多くて。左大臣（葵の上の父）や右大臣（朱雀院の外祖父）がいた。

一六 そうはいっても、何やら大層な身辺の有様で。准太上天皇として、行装の威儀など大層なことをいう。

一　二十歳にもまだわずか足りぬ年齢だが。夕霧、今年十八歳。

二　今お心をお悩ませになっている女三の宮のお世話役（婿）に、これ（夕霧）はどうかなど。「この」は、今問題にしている、といった気持。

三　太政大臣の所に、今は住みつかれたということですね。雲居の雁と結ばれたことをいう。「住む」は、婿として、女の家に通うこと。

四　長年わけの分らぬ話だと、噂を聞いて気の毒に思っていたのだが。太政大臣が雲居の雁との結婚を許さなかったことをさす。三巻少女の巻から四巻藤裏葉の巻まで、六年間のことである。

五　女三の宮のお身の上をこのようにご心配なさって。

六　自然と漏れ聞きなさるつてもあったので。

七　すぐさま呑み込み顔にも、何でお返事申し上げたりしよう。夕霧の心中の思いが自然草子地と重なった書き方。

八　私のような頼りにもならぬ者には、妻になってくれる人もなかなかございません。「さぶらふ」は、「あり」の謙譲語。

りをり嘆き申したまふ」など奏したまふ。

一　二十にもまだわづかなるほどなれど（年齢よりはずっと立派に大人びて）、いとよくととのひ過ぐして、容貌（輝くばかりで）も盛りににほひて（まことに美しいのを）、いみじくきよらなるを、御目（〔朱雀院は〕）にとどめてうちまもらせたまひつつ、二　このもてわづらはせたまふ姫宮の御後見（とお見つめになっていて）にこれをやなど、人知れずおぼし寄りけり。（ご心中お思いつきになった）「太政大臣（〔朱雀院〕）のわたりに、今は住みつかれにたりとな。四　年ごろ心得ぬさまに聞きしがいとほしかりしを、耳やすきものから、さすがにねたく思ふことそあれ」（〔噂を聞いて〕安心したものの しかしやはり残念に思うことがあります）とのたまはする御けしきを（〔朱雀院の〕）、いかにのたまはするにかと（どういう意味でおっしゃるのかと）、あやしく（〔夕霧は〕不審で いろいろ考えてみると）思ひめぐらすに、五　この姫宮をかくおぼしあつかひて（婿として適当な人があれば）、さるべき人あらば（〔姫宮を〕託して 安心して）、あづけて（出家したいものだ）、心やすく世をも思ひ離ればや（〔朱雀院が〕お思いで）、となむおぼしのたまはすると、六　おのづから漏り聞きたまふたよりありければ（お口にもなさると）、さやうの筋にやとは思ひ寄れど（〔夕霧は〕）、七　ふと心得顔にも何かはいらへきこえさせむ。ただ、「はかばかしくもはべらぬ身には、寄るべもさぶらひがたくのみなむ」（〔夕霧〕）とばかり奏して止みぬ。八

朱雀院の源氏父子評

九 几帳や障子の隙間などから、夕霧を覗き見しているのである。

一〇 光るというのは、この人（源氏）のことを言うのだろうと思われる美しさが。「光る」は、当時の最高の賞め言葉。源氏を「光君」と称したことは、一巻桐壺三六頁、四一頁に見える。

一一 威儀を正して、公事に携わっているところを見ると。「はかばかしきかた」は、あとの「たはぶれごと」に対し、しっかりしたこと、政治向きのこと。

一二 一方、くつろいで、冗談などを言い合って楽しむ時には。朱雀院と源氏の、そのような語らいは、二巻賢木一六五頁に見える。

一三 何事につけても、前世の善根が推しはかられて。過去世の因により、現世の果報が定まるという仏教の考え方による。

一四 宮中で成人して、天子がこの上もなく慈しみ、あれほどかわいがられ、わが身以上に大切にお思いだったのに。「帝王」は男性用語。桐壺帝が、光源氏を宮中で撫育したこと、一巻桐壺の巻に詳しい。

女房などは、のぞきて見きこえて、「いとありがたくも見えたまふ容貌、用意かな。あなめでた」など、集りて聞こゆるを、老いしらへるは、「いで、さりとも、かの院のかばかりにおはせし御ありさまには、えなずらひきこえたまはざめり。いと目もあやにこそきよらにものしたまひしか」など、言ひしろふを聞こしめして、「まことに、かれはいとさま異なりし人ぞかし。今はまたその世にもねびまさりて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆるにほひなむ、いとど加はりにたる。うるはしだちて、はかばかしきかたに見れば、いつくしくあざやかに、目も及ばぬここちするを、また、うちとけて、たはぶれごとをも言ひ乱れ遊べば、そのかたにつけては似るものなく愛敬づき、なつかしくうつくしきことの並びなきこそ、世にありがたけれ。何ごとにも前の世おしはかられて、めづらかなる人のありさまなり。宮のうちに生ひ出でて、帝王の限りなくかなしきものにしたまひ、さばかり撫でかしづき、身にかへておぼしたりし

世にまたとないともお見えになる
まあすばらしい
お噂しているのを
年取った
そうは言っても
古女房は
あの六条の院がこれぐらいのお年でいらした時のご様子には
とても肩をお並べ申すことはおできでないでしょう
言い合っているのを
（朱雀院）
きれいでいらっしゃいました
源氏
格別すぐれた人でした
あの時よりもさらに
貫禄が加わって
厳然として
端麗で
目もくらみそうな感じがするが
そうした点では
親しみがわいて愛らしい感じの比べもののないことといったら
本当に
またとないほどです

一 へりくだって、二十歳にならないうちは納言にもならずにいたことだった。「納言」は、ここでは中納言をさす。大納言とともに太政官の次官。大臣に次ぎ、政治の中枢に参画する。

二 二十歳を一つ越して、宰相で大将を兼ねられたのだったと思う。「宰相」は参議（中納言の下）の中国風の呼び方。源氏が宰相に任ぜられたことは、二巻紅葉賀四四頁に見える。十九歳の七月である。大将兼任は、源氏二十二歳の葵六五頁以下の呼称で分るが、ここの朱雀院の言葉により、花宴と葵の巻の間の、物語に書かれていないその前年のこととなる。

三 それに比べて、こちら（夕霧）は、ずっと早く昇進したようだが。「ためる」は、「たんめる」の、撥音無表記の形。「める」は、ぼかした言い方。夕霧が、十八歳で中納言になったことをさす（藤裏葉三〇〇頁参照）。

四 輔弼の臣としての学才。漢学をいう。

五 一二頁注五参照。

六 源氏のこと。

七 紫の上をさす。一巻若紫の巻で、少女の紫の上を引き取って以来養育、妻としていることをいう。

八 冷泉帝の後宮には、秋好む中宮がいられる。

九 大層身分の高い方たちばかりいらっしゃるのに。弘徽殿の女御（太政大臣女）、王女御（式部卿宮女）、左の大殿の女御など（四巻真木柱二三三頁参照）。

朱雀院、女三の宮の婿選びにつき乳母たちと相談

かど、心のままにもおごらず、卑下して、二十がうちには、納言にもならずなりにきかし。一つあまりてや、宰相にて大将かけたまへりけむ。三それに、これはいとこよなく進みにためるは、次々の子の世のおぼえのまさるなめりかし。四まことにかしこきかたの才、心もちゐなどは、これもをさをさ劣るまじく、あやまりてもおよすけまさりたるおぼえ、いと異なめり」など、めでさせたまふ。

姫君のいとうつくしげにて、若く何心なき御ありさまなるを見たてまつりたまふにも、「見はやしたてまつり、かつはまだ片生ひならむことをば、見隠し教へきこえつべからむ人の、うしろやすからむにあづけきこえばや」など聞こえたまふ。おとなしき御乳母ども召し出でて、御裳着のほどのことなどのたまはするついでに、「六条の大殿の、式部卿の親王の女生ほし立てけむやうに、この宮をあづかりてはぐくまむ人もがな。ただ人のなかにはありがたし。内裏には中宮さぶらひたまふ、次々の女御たちとても、いとやむごとな

〔源氏は〕
夕霧も〔源氏に〕
姫君の宮
かわいらしいご様子で
あどけなく無心な
（朱雀院）はなやかにお世話申し
同時に
見知らぬ体でそっと教えてさし上げられるような人で
頼りになる人に
〔女三宮を〕お預けしたいものだ
おもらしになる
年かさの
（朱雀院）六
女三の宮
引き
親から子へと次
心構え
間違っても父親より老成していると
格別なようだ
おほめになる
いう評判は
至らな
いようなところは
取って大事にしてくれる人はいないものか
臣下の中にはいそうにない

一〇 夕霧。「権中納言」は、中納言の定員（三名）外に、名門の子弟などが任じられる。

一一 「警策」の字音語。人物、才能のすぐれていること。

一二 長年、あちらのお方（雲居の雁）にご執心で。夕霧は、結婚まで六年待っている（一八頁注四参照）。

一三 あの六条の院（源氏）の方が、かえって、今もなお、どんな身分の方でも、新しい女君をお求めのお気持は、変らずにお持ちだということでございます。

一四 高いご身分の方を正妻に迎えたいというご希望が深くて。

一五 朝顔の前斎院。近くは、四巻梅枝二五五、二五六、二六九頁に、薫香調合、草子執筆の依頼などにかこつけて、文通が窺える。

一六 いや、その相変らずの浮気っぽさが、大層気にかかるのだ。

一七 いかにも、大勢の妻妾の間に仲間入りして、不愉快な思いをするようなことはあっても。「めざまし」は、女三の宮よりも身分の低い婦人たち（紫の上や明石の上）が、源氏の寵を受けるのを、出過ぎてけしからぬと思う気持。以下「ゆづりおききこえまし」まで、朱雀院の心中。

一八 やはりそのまま親代りということにして。前の頁にも「六条の大殿の、式部卿の親王の女生ほし立てけむやうに、この宮をあづかりてはぐくまむ人もがな」とあった。

き限りものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうのまじらひいとなかなかならむ。一〇この権中納言の朝臣のひとりありつるほどに、うちかすめてこそこころみるべかりけれ。若けれど、いときやうざくに、生ひ先たのもしげなる人にこそあめるを」とのたまはす。

「中納言は、もとよりいとまめ人にて、一一年ごろもかのわたりに心をかけて、ほかざまに思ひうつろふべくもはべらざりけるに、その思ひかなひては、いとどゆるぐかたはべらじ。一三かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしくおぼしたる心は絶えずものせさせたまふなれ。そのなかにも、一四やむごとなき御願ひ深くて、前一五斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」と申す。

「一六いで、その旧りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」とはのたまはすれど、一七げに、あまたのなかにかかづらひて、めざましかるべき思ひはありとも、一八なほやがて親ざまに定めたるにて、さもやゆづりおききこえまし、なども思しめすべし。「まことに、少しも

（乳母）
（将来有望な人と思えるのだが）
（もともと大層生真面目な人で）
（ほかの人に心を向けたりしそうにもございませんでしたのに）
（ますます心を動かすことはございますまい）
（後宮におつとめするの）
（しっかりした）
（それとなくほのめかして打診しておくのだった）
（かえってつらかろう）
（夕霧は）
（まだ独身でいた頃に）
（今も忘れられずお便りをさし上げなさるとか）
（そのようにお）
（預け申すことにしようか）
（多少とも）
（朱雀院）

一 世間並みに過させよう（結婚させよう）と思う娘を持っているなら。

二 あの六条の院でのように、満ち足りた暮しをして過したいものだ。

乳母、兄左中弁の話を、朱雀院に言上

三 女三の宮のお世話役たちの中でも、重だった御乳母の兄で、左中弁の職にあって、六条の院（源氏）の近臣として、長年お出入りしている者があった。「左中弁」は、太政官の職で、中務、式部、治部、民部の四省を管轄する。正五位上相当。

四 お上（朱雀院）が、（源氏について）これこれのご内意をお漏らしになりましたが。「聞こゆ」は、源氏についてお噂するというほどの気持の敬語。

五 内親王は、独身でお過しになるのが普通のことですが。

一世づきてあらせむと思はむ女子持たらば、同じくは、かの人のあたりにこそは触ればはせまほしけれ。（源氏）（縁組をさせたいものだ）いくばくならぬこの世のあひだは、二さばかり心ゆくありさまにてこそ過ぐさまほしけれ。（長くもないこの世に生きているうちは）われ女ならば、同じはらからなりとも、かならずむつび寄りなまし。（そんな気持がしたものだ）若かりし時など、さなむおぼえし。まして、女のあざむかれむは、いとこ（女がだまされたりするのは）（本当に無理もないことだ）とわりぞや」とのたまはせて、（源氏に一なついて近づくだろう）御心のうちに、尚侍の君の御こともおぼし出でらるべし。

三 この御後見どものなかに、重々しき御乳母の兄、左中弁なる、かの院の親しき人にて年ごろつかうまつるありけり。（女三の宮方にも格別忠義を尽してお仕えしているので）この宮にも心寄せことにてさぶらへば、参りたるにあひて、物語するついでに、（左中弁が）（乳母が）（源氏）

四 「上なむ、しかしか御けしきありて聞こえたまひしを、かの院に、をりあらば漏らしきこえさせたまへ。（それとなくお伝え申し上げて下さい）皇女たちは、ひとりおはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心寄せたてまつり、何ごとにつけても御後見したまふ人あるはたのもしげなり。（あれこれにつけて）（お心配りをしてさし上げ）（お力添えをなさる方のある場合は心強く心配のないものです）（お上を別）

六 私らは、いくらお世話申し上げると言っても、（乳母の分際では）何ほどのご奉公ができましょう。「おのら」は、自称の代名詞。我々。

七 私一人の思うままにもならず、自然思いがけないこともおありになり。女房は、ほかにも大勢いるので、その女房たちの手引きで、どんな男が通ってくるやも知れぬ、という。

八 高貴なご身分と申しても、女というものは、本当にお身の上が不安定でいらっしゃいますから。

九 かように大勢姫宮がいらっしゃるなかで。「女宮たちなむ四所おはしましける」と一一頁にあった。

一〇 人に嫉まれるに違いありませんし。「あべかめる」は「あんべかんめる」の撥音無表記の形。

一一 どうかして、些細なきずもおつけ申したくないものです。「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」（『古今集』巻三夏、凡河内躬恒）の言葉による。

一二 それぞれの事情に応じて、お引き取りになっては、大勢お邸にお集め申していらっしゃるが。「尋ね取る」は、捜し出して引き取る意。

一三 紫の上お一人のようですから。

たてまつりて、また真心に思ひきこえたまふべき人もなければ、おのらは、つかうまつるとても、何ばかりの宮仕へにかあらむ。わが心ひとつにしもあらで、おのづから思ひのほかのこともおはしまし、軽々しき聞こえもあらむ時には、いかさまにかはわづらはしからむ。御覧ずる世に、ともかくもこの御こと定まりたらば、つかうまつりよくなむあるべき。かしこき筋と聞こゆれど、女は、いと宿世定めがたくおはしますものなれば、よろづに嘆かしく、かくあまたの御なかに、取り分ききこえさせたまふにつけても、人の嫉みあべかめるを、いかで塵もすゑたてまつらじ」とかたらふに、弁、「いかなるべき御ことにかあらむ。院は、あやしきまで御心長く、仮にても見そめたまへる人は、御心とまりたるをも、またさしも深からざりけるをも、かたがたにつけて尋ね取りたまひつつ、あまたつどへきこえたまへれど、やむごとなくおぼしたるは、限りありて、一方なれば、それにことよりて、かひなげなる住ひしたまふ方々こそは

に申し上げますと　ほかに　〔女三宮を〕　浮いた噂が立つようなことがあれば　〔責任上私は〕どんなに迷惑なことでしょう　お上のご在世中に　いずれにしろ女三の宮のお身の上がきまりましたら　私も定めしお仕えしやすかろうと思います　何かと心配な上に　〔朱雀院が女三宮を〕格別にお扱い申されるにつけても　と相談を持ちかけると　左中弁　どうすれば　よいことなのでしょう　不思議なほどお気持の変らぬ方で　源氏　契りをお結びになった女君は　お気に召した方をも　大切にお思いの方は　何といっても　張合いのない　女君たちが　万事そちらに片寄って　さほど深くご執心でなかった方をも

二三

一 どんなにご寵愛の深い方（紫の上）と申しても、（女三の宮に）張り合って押してこられるようなことは、とてもできないだろうと思われますが。女三の宮の身分が圧倒的に高いからである。

二 それでも、どうかなと案じられることがあるように思います。紫の上の寵愛が並々ならぬことをいう。

三 現世の栄華は末世に余るほどで。准太上天皇という前例のない栄達をしたこと。以下、源氏の述懐を伝える趣。

四 女性関係では、人から非難もされ。六条の御息所や朧月夜の尚侍のことが想起される。

五 また自分としても意に満たぬこともある。源氏の心中としては、藤壺とのことをはじめとして、女性問題で不如意であったことを言うものと見られる。

六 それぞれのご縁で（源氏が）お世話していらっしゃる方は。紫の上や花散里のこと。

七 院（源氏）のご身分に並ぶ声望のある方がおありでしょうか。准太上天皇の身分にふさわしい正夫人のないことをいう。源氏の述懐を、左中弁なりに解釈したのである。世間の常識として当然のことである。

八 どんなにお似合いのご夫婦でしょう。『河海抄』は「窈窕たる淑女は、君子の好逑たり」（『詩経』国風、関雎）を引く。

九 左中弁のこと。実名を言ったのを省略したもの。

一〇 「はべりしかば」の促音便「はべつしかば」の促音無表記の形。

多かめるを、御宿世ありて、もしさやうにおはしますやうもあらば、（ご縁があって［源氏に］ご降嫁あそばすようなことでもあれば）いみじき人と聞こゆとも、立ち並びておしたちたまふことはえあらじとこそはおしはからるれど、なほいかがと憚らるることありてなむおぼゆる。さるは、この世の栄え末の世に過ぎて、身に心もとなきことはなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬこともある、となむ、常にうちうちのすさびごとにもおぼしのたまはすなる。げにおのれらが見たてまつるにも、さなむおはします。かたがたにつけて御蔭に隠したまへる人、皆その人ならず立ち下れる際にはものしたまはねど、限りあるただ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる。それに、同じくは、げにさもおはしまさば、いかにたぐひたる御あはひならむ」とかたらふを、乳母、またことのついでに、「しかしかなむ、なにがしの朝臣にほのめかしはべしかば、かの院にはかならずうけひき申させたまひてむ。年ごろの御本意かなひておぼしぬべきこと

（とは申せはないのだが）（内輪のご閑談の折にも）（いかにも私どもが拝見しても）（おっしゃる通りです）（素性の分らぬような）（私自身について不足）（［女三宮が］ご降嫁なさったら）（低い身分ではいらっしゃらないが）（たかだか臣下の出身ばかりで）（そこへ）（うち割って話すのを）（源氏）（これこれのことを）（ご承諾）（申し上げなさるでしょう）（長年の）（ご宿望が叶うとお思いになるに違いない）

一 普通の身分の者でも、自分のほかにかかわりを持つ女が横にいるのは、誰でも不満なことに思うようでございますのに、まして（女三の宮にとっては）目障りなと思われることもございましょう。一段身分の低い紫の上の寵が厚いのは、一層不愉快であろう、の意。

一二 女三の宮のお世話を望まれる方々。結婚を望む人人。

一三 どなたもはっきり自分のお考えを持ち、立派にお振舞いになって、この世の中をご自分のお考え通りにお過しになれる方もおいでのようですが。以下の女三の宮と比べて、自分の考えをしっかり持った姫君をいう。

一四 ご主人の大筋のご方針にお従い申して、よく気のつく下々の者も、そのお考え通りにご奉公するのが、心丈夫なことでございましょう。

一五 これといったお世話役がいらっしゃらないのは、やはり心細いことでございましょう。姫君にはやはり夫が必要であろう、の意。

ことですが　こちらさまのお許しが本当にあるようでしたら

なるを、こなたの御許しまことにありぬべくは、伝へきこえむとな

〔左中弁が〕

む申しはべりしを、いかなるべきことにかははべらむ。ほどほどに

〔源氏は〕女君の身分に応じて　どんなものでございましょうか

つけて、人の際々おぼしわきまへつつ、ありがたき御心ざまにもの

その違いをよくお考えになって　またとない行き届いたお心遣いでいらっしゃるようですが

したまふなれど、ただ人だに、またかかづらひ思ふ人立ち並びたる

ことは、人の飽かぬことにしはべめるを、めざましきこともやはべ

らむ。一二御後見望みたまふ人々は、あまたものしたまふめり。よくお

よくご考慮の上お決めあそばすのがようございましょう　この上ないお家柄の姫君と申しても　当世の風といたしましては

ぼし定めてこそよくはべらめ。限りなき人と聞こゆれど、今の世の

やうとては、一三皆ほがらかに、あるべかしくて、世の中を御心と過ぐ

したまひつべきもおはしますべかめるを、姫宮は、あさましくおぼ

女三の宮　あきれるほど何もご存じでなく　ただもう頼りなげなご様子でいらっしゃいますので

つかなく、心もとなくのみ見えさせたまふに、さぶらふ人々は、つ

女房たち　お仕えするにしても限度がございましょう

かうまつる限りこそはべらめ。一四おほかたの御心おきてに従ひきこえ

て、さかしき下人もなびきさぶらふこそ、たよりあることにはべら

め。一五取り立てたる御後見ものしたまはざらむは、なほ心細きわざに

なむはべるべき」と聞こゆ。

一 内親王たちが結婚しているのは、見苦しく軽薄な感じもするし。前に乳母も、「皇女たちは、ひとりおはしますこそは例のことなれど」（二二頁）と言っている。

二 またどんなに身分が高くても、女は結婚すると、悔まれることも、腹立たしい思いも、つい味わわねばならぬものだろうと。一夫多妻制のもとで、嫉妬に苦しまねばならぬことをいう。

三 しかるべき人（後見してくれる親など）に先立たれて。

四 自分の意志通り、世の中を生きてゆくといったことも。内親王が独身を通すことをいう。

五 当節では、色めかしく風儀のよくないことも、縁につながる者を通じて聞えてくるようだ。

六 昨日まで名門の親の家で、人々に敬われ大切に養われてきた姫が。「人の女」で一語。

七 詮じつめれば、どちらも皆同じことだ。結婚するにせよ、独身を通すにせよ、心配なことはどちらも同じだ、の意。

八 運、不運などと世間で言っていることは、あらかじめ分らないことなのだから。結婚するにせよ、独身を通すにせよ、結果がどうなるかは分らない、の意。

（朱雀院）私もそのように思案するので

「しか思ひたどるによりなむ、皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、くやしげなることも、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざなめれと、一つにはそれで心を痛めて悩んでいるのだが かつは心苦しく思ひ乱るるを、頼みとする庇護者たちに別れたのち また、さるべき人に立ちおくれて、頼む蔭どもに別れぬるのち、心を立てて世の中に過ぐさむことも、昔は、人の心たひらかにて、世間に認められぬような身分違いの結婚などは 考えてもいけないことと思いこんでいたようだが に許さるまじきほどのことをば、思ひ及ばぬものとならひたりけむ、今の世には、すきずきしく乱りがはしきことも、類に触れて聞こゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人の女の、大したこともない 今日はなほなほしく下れる際のすきものどもに名を立ちあざむかれて、身分の低い浮気男たちに浮き名を立てられだまされて なき親の面を伏せ、死後の名を汚す例が多く耳に入るのも 影をはづかしむるたぐひ多く聞こゆる、言ひもてゆけば皆同じことなり。それぞれの身分に応じて ほどほどにつけて、宿世などいふなることは、知りがたきわざなれば、よろづにうしろめたくなむ。すべてあしくもよくも、さるべき人の心に許しおきたるままにて世の

（男も）世人心が穏やかで

親兄弟といったしかるべき人が指図しておいた通りに

結果が悪くてもよくても

何もかもが気がかりなのだ

九 その結果のよしあしはそれぞれの運不運によることで。

一〇 将来落ちぶれるようなことがあっても、自分の失策ということにはならないし。

一一 何年かのち、この上ない幸福に恵まれ、（世間に対しても）見苦しからぬ結果になる場合には。

一二 これでも悪くはなかったのだと思われるけれども。「かく」は、「心づからの忍びわざし出でたる」ことをさす。

一三 親にも知られず、しかるべき保護者の許しもないのに、自分勝手に密事をしでかしたのは。

一四 大したこともない臣下の者同士のことでも、軽薄で好ましくないことです。まして、内親王は、という気持。

一五 わが意に反して夫にも見え、身の上が決められてしまうのは。心に染まぬ結婚をして、低い身分に定まってしまうことをいう。

一六 誰彼の一存でお取り計らい申し上げるでない。女房が勝手に仲立ちなどしないように、と釘をさす。

一七 そんなこと（親やしかるべき人に認められぬような結婚）が、噂になるのは、まことに情けないことです。

中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世におとろへある時も、みづからの過ちにはならず、あり経てこよなき幸ひあり、めやすきことになるをりは、かくてもあしからざりけりと見ゆれど、なほたちまちにふとうち聞きつけたるほどは、親に知られず、さるべき人も許さぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる。なほなほしきただ人の仲らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心よりほかに人にも見え、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさまおしはからるることなるを、あやしくものはかなき心ざまにやと見ゆめる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなしきこゆな。さやうなることの世に漏り出でむこと、いと憂きことなり」など、見捨てたてまつりたまはむ後の世を、うしろめたげに思ひきこえさせたまへれば、いよいよわづらはしく思ひあへり。

（一〇 後の世 やはりその当座 一二 いきなりちょっと耳にした時には 一三 女の身としてはこの上もない 一四 汚点と思われることです 一五 軽率で 女としての日頃の心構えや態度が推察されるものだが 一六 [女三宮は] 妙に頼りない性質ではないかと思われるご様子だから 一七 ご出家あそばした場合のあとのこと [乳母たちは] 心配そうにお案じ申し上げなさるので 厄介なことだとお互いに思っている）

婿の候補者たちの人物評

一 出家の素懐も遂げずに終りそうな気がするので、つい心がせくのだ。病重く、命の程も分らないので、出家も、女三の宮の結婚も急がれる、という。

二 源氏は、なるほど（紫の上への寵愛が深いなど）問題はあるにしても、万事よく心得ていて、安心して任せられるという点では、最上の人物であろうから。女三の宮を正夫人として、身分にふさわしい待遇をしてくれるであろう、という意。

三 （六条の院の）あちこちに大勢お住まいの婦人たちを考慮する必要もないだろう。内親王の身分は格別である、との認識から出た言葉。

四 いずれにしても、当人の心がけ次第です。一夫多妻制のもとでの女の心構えを説く。

五 そのほかに、まあかなりな人物といえば、誰がいるだろう。源氏のほかは、一段落ちるといった口調。

六 螢兵部卿の宮。朱雀院や源氏の異母弟。

七 藤大納言。系図不詳。後の三〇頁に「院の別当」（院庁の長官）とある。

八 女三の宮方の家司（家の庶務を取り扱う役）を希望しているということだが。家来筋の者なので、こういう言い方をする。

九 そういった面では（女三の宮にかしずく点では）、きっと実直に勤めるであろうが。

一〇 昔も、このような（内親王の）婿選びには、万事につけ人にすぐれた声望のある者に落着したものだ。

（朱雀院）「今すこしものをも思ひ知りたまふほどまで見過ぐさむとこそは、年ごろ念じつるを、深き本意も遂げずなりぬべきここちのするに思ひもよほされてなむ。かの六条の大殿は、げに、さりともものの心得て、うしろやすきかたはこよなかりなむを、かたがたにあまたものせらるべき人々を知るべきにもあらずかし。とてもかくても、人の心からなり。のどかにおちゐて、おほかたの世のためしとも、うしろやすきかたは並びなくものせらるる人なり。さらでよろしかるべき人、誰ばかりかはあらむ。兵部卿の宮、人柄はめやすしかし。同じ筋にて、異人とわきまへおとしむべきにはあらねど、あまりいたくなよびよしめくほどに、重きかたおくれて、すこし軽びたるおぼえや進みにたらむ。なほ、さる人はいとたのもしげなくなむある。また、大納言の朝臣の家司望むなる、さるかたに、ものまめやかなるべきことにはあなれど、さすがにいかにぞや、さやうにおしなべたる際は、なほめざましくなむあるべき。昔も、かうやうなる

（女三宮が）もっと世間のこともお分りになる年頃までそっとしておこうと
今まで
辛抱してきたが
[源氏は]悠揚迫らず
広く世の模範ともいうべき
信頼できる点では比類なくていられる方です
他人扱いをして軽んじたくはないが
同じ兄弟だから
ひどく柔弱で風流がっているために
重々しいところが乏しくて
軽薄な印象が強いといったところだろう
やはり
そんな人はどうも頼りないような気がする
無難というところだね
その程度の並の身分の者は
やはりとんでもない不釣合いなことであろう
そうはいってもどうだろうか

「ことよる」は、物事がその方に靡き寄る意。『河海抄』は、帝王の女が臣下に遇う例として、嵯峨天皇皇女潔姫が太政大臣藤原良房に、醍醐天皇皇女康子内親王が右大臣藤原師輔に配されたことを挙げる。

一一 ただ単純に、自分をただ一人大切にしてくれるという点ばかりを、いいと思って夫を決めるのは、本当にもの足りず残念というべきことです。身分の低い男に、唯一人の妻としてかしずかれるのは、望ましいことではないという。言外に、多くの妻妾を持とうとも、源氏がいいという気持がある。

一二 柏木のこと。右衛門の督（右衛門府の長官。従四位下相当）になったことは、ここにはじめて見える。

一三 内々（女三の宮を所望して）やきもきしているということを。

一四 朧月夜の尚侍。柏木の叔母。

一五 柏木程度なら、位などが今一段人並みの身分になったなら。上達部（三位以上）であることが、婿の条件の一つ。

一六 柏木、この時二十三、四歳。（柏木三〇八頁参照）

一七 結婚には、高い理想を持っていて。高貴の女性を求めていることをいう。

一八 一一頁参照。

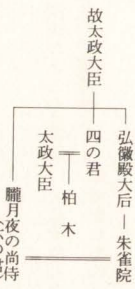
一九 柏木の父。源氏のあとを受けて、太政大臣になった（四巻藤裏葉三〇〇頁参照）。

候補者たちの反応

選びには、何ごとも人に異なるおぼえあるに、ことよりてこそありけれ。ただひとへにまたなく持ちゐむかたばかりを、かしこきことに思ひ定めむは、いと飽かずくちをしかるべきわざになむ。右衛門の督の下に、尚侍のものせられし、その人ばかりなむ、位など今すこしものめかしきほどになりなば、などかはとも思ひ寄りぬべきを、まだ年いと若くて、むげに軽びたるほどなり。高き心ざし深くて、やもめにて過ぐしつつ、いたくしづまり思ひあがれる様子は けしき、人には抜けて、才なども図抜けていて漢学の才なども申し分なくことなども、つひには世のかために違いない人物だからとなるべき人なれば、行く末もたのもしけれど、なほまたこのためにと思ひ果てむには、限りぞあるや」と、よろづにおぼしわづらひたり。かうやうにもおぼし寄らぬ姉宮たちをば、かけても聞こえなる方もいない やましたまふ人もなし。あやしく、うちうちにのたまはする御ささめき言どもの、おのづからひろごりて、心を尽くす人々多かりけり。

太政大臣も、「この衛門の督の、今までひとりのみありて、皇女

ずっと独身のままで
やはり女三の宮の婿にと
志を高く持っている
少しもあせらず
将来は天下の柱石の臣となる
何の不似合いなことがあろうと
話していられたが
まるで
貫禄のない身分だ
決めてしまうには
思い悩んでいらっしゃる
不十分だ
一向に
ご所望申され
[朱雀院が]これほどにもご苦慮なさらぬ
どういうわけか
[朱雀院が]内輪でお話しになるさまざまの内証言が
[女三宮に]
独身を通してきて



一 朧月夜の姉君である（太政大臣の）北の方を通じて。四の君で、柏木の母。

二 髭黒の左大将の北の方をお迎え申しそこねなさって。玉鬘に求婚していたが、髭黒に奪られた経緯は、四巻胡蝶の巻以来、螢、真木柱の巻に見える。髭黒が左大将になったことは、ここに初出。

三 この上もなくやきもきしていらっしゃる。「焦らる」は、あせる意。

四 前に朱雀院の言葉に「大納言の朝臣」（二八頁）とあった人。

五 朱雀院の別当。院庁の長官である。

六 朱雀院がやがて山寺にお籠りになってしまったあと、お頼みする方もなく、心細いことだろうから。朱雀院の入山については、すでに一二頁に触れている。

七 女三の宮のお世話役であるということで、朱雀院のご庇護を頂けるように。

八 夕霧。

九 （朱雀院が）人伝でもなく直接に、あれほど意中をお漏らしになったご様子を拝見したのだから。朱雀院が、夕霧の気持をみずから打診したことは、一八頁

皇女でなければ妻にすまいと思っているが　こうした御婿選びがいろいろされ出したという機会に
たちならずは得じと思へるを、かかる御定めども出で来たなるをり
希望の旨も［朱雀院に］お願い申し上げて　［婿として］親しくお召し頂けたら
に、さやうにもおもむけたてまつりて、召し寄せられたらむ時、い
自分としても
かばかりわがためにも面目ありてうれしからむ」とおぼしのたまひて、尚侍の君には、［求婚の意向を］奏上させて［朱雀院の］ご内意をお伺いになる
よろづ限りなき言の葉を尽くして奏せさせ、御けしき賜はらせたまふ。

兵部卿の宮は、左大将の北の方を聞こえはづしたまひて、［玉鬘が］お耳
になさるであろうことも気になるし　いい加減な相手ではと　選り好みしていられたので　どうしてお心の動かぬことがあろう
まふらむところもあり、かたほならむことはと、選り過ぐしたまふ
に、いかがは御心の動かざらむ、限りなくおぼし焦られたり。藤大納言は、年ごろ院の別当にて、親しくつかうまつりてさぶらひ馴れ
お身近にお仕えしてずっとお出入りしていたのに
にたるを、御山籠りしたまひなむのち、寄り所なく心細かるべきに、この宮の御後見にことよせて、かへりみさせたまふべく、御けしき
懸命に伺っておいでらしい　こうした人々の噂を　ご内意を
切に賜はりたまふなるべし。

権中納言も、かかることどもを聞きたまふに、人伝にもあらず、

に見える。

一〇 自然に何かのってで、（自分の希望を）朱雀院のお耳に入れるようなことでもあれば。

一一 雲居の雁が、もう大丈夫とすっかり頼りにしていらっしゃるのに。以下「苦しくこそはあらめ」まで、再び夕霧の心中。

一二 長年、ひどい仕打ちを口実にすることもできた時でさえ、ほかの女性に心を分けることもなく過してきたのに。雲居の雁が、父太政大臣に制せられて、逢えなかった六年間をいう（一八頁注四参照）。

一三 あいにくなことに、今頃になって昔に戻り、女君に俄かに物思いをおさせしてよいものだろうか。「かねてよりつらさを人のならはさではかにものを思はするかな」（『河海抄』所引、出典不明）

一四 （女三の宮と雲居の雁の）両方に気を遣うのでは。

一五 朱雀院の皇子。女三の宮の異母兄。

一六 （内親王降嫁ということは）さし当り目先のことよりも、後代の先例にもなることですから。内親王は独身でいるのがよいとされた時代の風が背景にある（二二、二六頁参照）。

東宮、源氏を推薦

さばかりおもむけさせたまへりし御けしきを見たてまつりてしかば、一〇おのづからたよりにつけて、漏らし聞こしめさすることもあらば、まさか全然問題にならぬことではあるまいと［期待に］胸もときめきかねない気持だがよももて離れてはあらじかしと、心ときめきもしつべけれど、一一女君の今はとうちとけて頼みたまへるを、年ごろつらきにもことつけつべかりしほどだに、ほかざまの心もなくて過ぐしてしを、一二あやにくに、今さらに立ちかへり、にはかにものをや思はせきこえむ、なのめならずやむごとなきかたにかかづらひなば、何ごとも思ふままならで、一四左右にやすからずは、わが身も苦しくこそはあらめ、など、［夕霧は］浮気な人柄ではないので［内親王といった］並々ならぬ高貴のお方と縁組をしたならば

もとよりすきずきしからぬ心なれば、思ひしづめつつうち出でねど、心を抑え抑えして口に出さないけれど

さすがにほかざまに定まり果てたまはむも、いかにぞやおぼえて、［女三宮が］よその男に決っておしまいになるのも どんなものかと気になって聞き捨てにはできなかった

耳はとまりけり。

一五春宮にも、かかることども聞こしめして、「さしあたりたるただ（東宮）一六

今のことよりも、後の世の例ともなるべきことなるを、よくおぼしめしめぐらすべきことなり。人柄よろしとても、ただ人は限りある 悪くないといっても 臣下は臣下です

一 やはり、姫宮を縁づけようとお考えになるのでしたら。

二 改まってのお便りというわけではないが、内々ご意向を漏らされたのを、（朱雀院は）わが意を得た気持でお聞きになっても。「待ち聞く」は、そうした東宮の意見を期待していた趣をあらわす。

三 あの左中弁を介して。女三の宮の乳母の兄。（二二頁注三参照）

四 とりあえず（朱雀院がしかじかお考えであるとの）事情を、お伝え申させなさった。

左中弁、源氏に説く

五 お気の毒なことだな。「あなるかな」は「あんなるかな」の撥音無表記の形。

六 私（源氏）を親代りにとおっしゃっても。

七 私としてはまた、どれほど長く院のおあとに生き残れると思って、その親代りのお世話のことをお引受け申そうか。源氏は朱雀院の三歳下。若菜下一六四頁の朱雀院の年齢より逆算。

八 大体からいって（朱雀院の皇女であるからには）、どの内親王のことも、他人扱いに放ってお置き申すはずもないが。

九 それも、まことにどうなるか分らぬ世の無常というものだ。老少不定、朱雀院より先に死ぬかもしれない、の意。

親代りにお（源氏）から

を、なほしかおぼし立つことならば、かの六条の院にこそ、親ざまにゆづりきこえさせたまはめ」となむ、わざとの御消息とはあらねど、御けしきありけるを、待ち聞かせたまひても、「げにさることなり。いとよくおぼしのたまはせたり」と、いよいよ御心だたせたまひて、まづかの弁してぞ、かつがつ案内伝へきこえさせたまひける。

世話をお任せ申されるのがよろしいでしょう　（朱雀院）いかにもその通りだ　本当によく考えておっしゃって下さった　その気におなりになって

女三の宮

この宮の御こと、かくおぼしわづらふさまは、さきざきも皆聞きおきたまへれば、「心苦しきことにもあなるかな。さはありとも、院の御世の残りすくなしとて、ここにはまた、いくばく立ちおくれたてまつるべしとてか、その御後見のことをば受けとりきこえむ。げに次第をあやまたぬにて、今しばしのほども残りとまる限りあらば、おほかたにつけては、いづれの皇女たちをも、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど、またかく取り分きて聞きおきたてまつりてむをば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、それだにいと

（源氏）　（源氏も）　朱雀院のご余世が長くはないからといって　年の順を間違えぬとして　（私が）生き残る寿命があったなら　このように特にご心配の旨をお伺いしたような方を　格別に　お世話申そうと思うが

〔朱雀院が〕ご心配なさっていることは

一〇 ましてひたすら頼みにして頂くような者として、常にお親しみ申すことになっては。女三の宮の夫となることをいう。

一一 私自身にとっても、容易ならぬ障りになりましょう。「ほだし」は、ここでは、極楽往生の妨げ。

一二 やがては朝廷のご後見役ともなるはずの見込みがあると思うから。

一三 夕霧を婿にともお考えになるなら、なんのおかしいことがあろう。「こよなし」は、格段に相違あるさまをいう。

一四 意中の人を妻にしてしまったようだから。雲居の雁のこと。

一五 (朱雀院としては) いい加減なご決定ではないのに。源氏でなければならぬ、というお気持なのに、の意。

一六 とてもおかわいがりになっていらっしゃる姫宮らしいから、むやみに、そんなふうに先例を調べ、将来の例になる点も深くお考えになるのだな。前に「昔も、かうやうなる選びには、何ごとも人に異なるおぼえあるに、ことよりてこそありけれ」(二一八～二九頁)、東宮の言葉にも「後の世の例ともなるべきことなるを……」(三一頁)とあった。

一七 身分の高い古参の方々がいらっしゃるということは。秋好む中宮以下の方々(二〇頁注八、九参照)。

不定なる世の定めなさなりや」とのたまひて、(源氏)一〇「ましてひとへに頼まれたてまつるべき筋にむつび馴れきこえむことは、いとなかなかに、うち続き世を去らむきざみ心苦しく、一一みづからのためにも浅からぬほだしになむあるべき。中納言(夕霧)などは、年若く軽々しきやうなれど、行く先遠くて、一二人柄も、つひに朝廷の御後見ともなりぬべき生ひ先なめれば、一三さもおぼし寄らむに、などかこよなからむ。されど、いとといたくまめだちて、一四思ふ人定まりにてぞあめれば、それに憚らせたまふにやあらむ」などのたまひて、みづからはおぼし離れたるさまなるを、弁は、一五おぼろけの御定めにもあらぬを、かくのたまへば、いとほしく、くちをしくも思ひて、うちうちにおぼし立ちにたるさまなどくはしく聞こゆれば、さすがにうち笑みつつ、一六「いとかなしくしたてまつりたまふ皇女なめれば、あながちにかく来し方行く先のたどりも深きなめりかしな。ただ内裏にこそたてまつりたまはめ。一七やむごとなきまづの人々おはすといふことは、よしなき

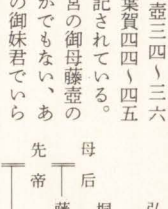
(朱雀院に)引き続いて私が世を去る時がおいたわしくて
前途洋々として
人物も
身分も低いよう
ご遠慮なさるのであろうか
(夕霧は)ひどく生真面目な様子の上に
ご自身はそのお気持はないような
(朱雀院は)
お口ぶりなので
(源氏が)
(朱雀院が)
残念だとも思って
困ったことだ
(源氏は)
にっこりして
迷わずに
帝にさし上げなさるのがよか

一　そうだからといって（古参の方々がいたからといって）、後から入内した人がきまっておろそかにされるというわけでもない。

二　故桐壺院の御代に、弘徽殿の大后が、桐壺帝東宮の折、最初に参られた女御として権勢を振われたが。この事情は、ここに初出。

三　ずっと後に入内された藤壺の宮に、一時は圧倒されなさったことだ。藤壺の帝寵のまさっていたことは、一巻桐壺三四～三六頁、二巻紅葉賀四四～四五頁に特に明記されている。

四　女三の宮の御母藤壺の女御は、ほかでもない、あの藤壺の宮の御妹君でいらっしゃるはずだ。（一一頁　更衣参照）



女三の宮の裳着の儀式

五　どちらにしても、女三の宮は、並々のご器量ではよもやおありであるまいよ。

六　今年も末になった。源氏三十九歳の年末である。

七　女三の宮の裳着。（一二頁参照）

八　柏殿の西座敷を式場にして。「柏殿」は、朱雀院の東北にあった御殿で、柏梁殿という。歴史上の朱雀院の母后穏子のご在所であった。

九　中国の皇后の御殿の飾りつけをご想像なさって。

一〇　裳着の式の時、裳の腰の紐を結ぶ役。高貴で声望

だ
ことなり。それにこだわるべきことでもないそれにさはるべきことにもあらず。一かならずさりとて、末の人おろかなるやうもなし。故院二の御時に、大后おほきさきの、坊ばうのはじめの女御にょうごにていきまきたまひしかど、むげの末に三参りたまへりし入道にふだうの宮に、しばしはおされたまひにきかし。四この皇女みこの御母はは女御にょうごこそは、かの宮の御はらからにものしたまひけめ。容貌かたちも、さしつぎには、いとよしと言はれたまひし人なりしかば、五いづかたにつけても、この姫宮、おしなべての際きはには[姫宮に]関心はお持よもおはせじを」など、いぶかしくち申していらっしゃるらしいは思ひきこえたまふべし。

藤壺の宮について

六　年も暮れぬ。朱雀院すざくいんには、御ここちなほおこたるさまにもおはしまさねば、よろづあわたたしくおぼし立ちて、何かと気ぜわしくお思い立ちになって御裳七もぎ着のことおぼしいそぐさま、来し方行く先ありがたげなるまで、あとにも先にも例がないと思われるほどいつくしくのしる。ものものしく大騒ぎである御しつらひは、柏殿の西面に、御帳、御几帳よりはじめて、この綾錦はまぜさせたまはず、唐土の后の飾りをおぼしやりて、うるはしくことことしく、かかやくばかりととのへさせたまへり。御

お具合が相変らず快方に向う様子でもおありでないので

お部屋の飾りつけは

和製

豪華に

まばゆいばかり立派にご用意あそばした

のある人に依頼する。玉鬘には太政大臣（当時内大臣。四巻行幸一七三頁）、明石の姫君には秋好む中宮（四巻梅枝二六二頁）が勤めている。

一一 あと二人の大臣。左大臣と右大臣。系図不詳。左大臣は、梅枝二六四頁にも見える。

一二 どうにもならぬ故障のある人も、何とか手当てをし、気を張って参上なさる。病苦を押して参るのである。

一三 殿上人は言うにも及ばず、内裏の、東宮のが残らず参集して。

一四 蔵人所や納殿に保管してある中国渡来の品々。「蔵人所」は、天皇の日常身辺の雑事や取次ぎ、文書などをつかさどる役所。調度品などの調製、保管もした。「納殿」は、皇室の御物を保管する所。ここは、蔵人所（校書殿の西廂）に対する宜陽殿の納殿をいうか（四巻図録四参照）。

一五 来客へのお土産の品々。

一六 来会者の労をねぎらって与える物。衣服、絹など。

一七 もと、大臣の大饗（新任および正月に催す宴）の正客のこと。腰結役を勤めた太政大臣をいう。

一八 饗宴の時、主人より正客に贈る物。もと、馬を庭に引き出して贈った。

一九 三巻絵合九三頁注八参照。

二〇 中宮入内の折、朱雀院から賜った調髪の道具（絵合九三～九四頁参照）。「御髪上」は、儀式の時、髻を取る結い方（四巻行幸一七〇頁注三参照）。

秋好む中宮のお祝い

一〇 腰結（ものごとを大層にお考えになる方なので）には、太政大臣（ご依頼申し上げていらっしゃったので）を、かねてより聞こえさせたまへりければ、ことことしくおはする人にて、参りにくくおぼしけれど、院（朱雀院）の御言（仰せ）を昔より背き申したまはねば、参りたまふ。一一 今二所の大臣たち、その残りの上達部（一二）などは、わりなき障（さは）りあるも、あながちにためらひ助けつつ参りたまふ。親王たち八人、殿上人（一三）はたさらにもいはず、内裏、春宮の残らず参りつどひて、（盛大な御儀の評判は大変なものである）いかめしき御いそぎの響きなり。（朱雀院の御行事は今度が最後になろうと）院の御こと、このたびこそとぢめなれと、帝、春宮をはじめたてまつりて、心苦しく聞こしめしつつ、蔵人所、納殿の唐物ども、多くたてまつらせたまへり。（源氏）六条の院よりも、御とぶらひいとこちたし。一五 贈り物ども、人々の禄、尊者の大臣の御引出物（一八）など、（源氏）かの院よりぞたてまつらせたまひける。

中宮よりも、（女三宮の）御装束、櫛の筥、心ことに調ぜさせたまひて、（調進させなさって）かの昔の御髪上の具、（奚儀の祝意をあらわすように手を加えて）ゆゑあるさまに改め加へて、さすがにもとの心ばへも失はず、（もとの感じもそこなわず）それと見せて、（それと分るようにして）その日の夕つかたたてまつれさせたま（当日の夕方献上させなさる）

一 中宮職の権の亮で、朱雀院の殿上人としても奉仕している者を。「亮」は、次官。従五位下相当。

二 こんなお歌が、櫛の箱の中にあった。朱雀院の目にとまることを考えてのことである。

三 さながら昔のままに、今日まで持ち伝えてきましたので、玉の小櫛もすっかり古くなってしまいました。「さしながら」に「挿しながら」を掛け、「櫛」の縁語。「玉の小櫛」は、斎宮下向の折、帝が手ずから斎宮の額に挿された黄楊の小櫛のこと（二巻賢木一三七頁注一二参照）。「玉」は、美称。朱雀院と中宮の贈答には、常にこの黄楊の小櫛が詠みこまれたり、用いられたりする（三巻絵合九四頁、一〇七頁参照）。

四 しみじみと恋しく思い出されることもあるのだった。別れの櫛を挿す時の感慨（賢木一三七頁）や、その後ご執心であったこと（三巻澪標四八頁、絵合九三頁、一〇七頁）など。

五 あやかりものとしても不似合いではなかろうと、（この櫛の箱を）お譲り申し上げなさったのだが、いかにも名誉の櫛なので。中宮は、女御入内、立后と幸運に恵まれている。

六 あなたに続いて、姫宮の幸運を見たいものです。千秋万歳と教える黄楊の小櫛が古くなるまで。「黄楊」に「告げ」を掛け、「万世を告げ」と続く。

七 朱雀院のお妃方。

八 朧月夜の尚侍。

朱雀院の出家

ふ。宮の権の亮、院の殿上にもさぶらふを御使にて、姫宮の御方に（女三の宮）参らすべくのたまはせつれど、かかる言ぞ、なかにありける。

（秋好中宮）三 さしながら昔を今に伝ふれば
玉の小櫛ぞ神さびにける

（朱雀院）六 さしつぎに見るものにもが万世を
黄楊の小櫛の神さぶるまで

院、御覧じつけて、あはれにおぼし出でらるることもありけり。あえものけしうはあらじとゆづりきこえたまへるほど、げにおもだたしき釵なれば、御返りも、昔のあはれをばさしおきて、

〔朱雀院の〕ご自身の懐旧の情はさておいて

〔朱雀院は〕お具合が大層悪いのをこらえながら　元気をお出しになって　裳着の儀式が無事終ったので　並々の身分の者　出家の姿に変るのは悲しく思われることだから　悲しみにくれられる　お側にひ　まして大層おいたわしく

御ここちいと苦しきを念じつつ、おぼし起こして、この御いそぎ果てぬれば、三日過ぐして、つひに御髪おろしたまふ。よろしきほどの人の上にてだに、今はとてさま変るは悲しげなるわざなれば、ましていとあはれげに御方々もおぼしまどふ。尚侍の君は、つとさ

九 子を思う親心には、限度があったのだな。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）

一〇 こんなに深く悲しんでいらっしゃる方との別れは堪えかねることだ。

一一 坐った時もたれる調度。（四巻図録一〇参照）

一二 延暦寺の天台座主。「山」は、比叡山をいう。「座主」は、一山を統べる僧の称。

一三 ご授戒の阿闍梨。「忌むこと」は、仏道における戒（禁制）。ここでは戒を授けることをいう。「阿闍梨」は、もと梵語で、修行を積み、師となる資格を持つ僧。

一四 僧服。略式でなく、正式に着用するもの。

一五 朱雀院の姫宮たちやお妃たち。姫宮は四人あること、一一頁に見える。

一六 大勢の廷臣や女房たち。

一七 身分の高い人々も下々の召使も、皆動揺し、声をあげて泣くので。「ゆすり満つ」は、いっせいに揺れ動く意。大騒ぎをするさまをいう。

一八 こんなふうな出家でなく、静かなお山にすぐに引き籠ってしまうお心積りだったのが、不本意なことになったとお思いになるのだが、それも。

源氏、朱雀院を見舞い、女三の宮との結婚を承引

一九 准太上天皇としての源氏に賜る封戸。「御封」は、皇族、諸臣に賜る戸口。租の半分、庸調の全部が封主の所得になる。太上天皇に准じ、二千戸としたことをいう。

たとお付きなさって　ひどく悲しみに沈んでいられるのを　（院は）慰めかねなさって

ぶらひたまひて、いみじくおぼし入りたるを、こしらへかねたまひて、「子を思ふ道は限りありけり。（朱雀院）九 かく思ひしみたまへる別れの堪へがたくもあるかな」とて、御心乱れぬべけれど、あながちに御脇息にかかりたまひて、（寄りかかりなさって）三 山の座主よりはじめて、御忌むことの阿闍梨三人さぶらひて、法服（一四）などたてまつるほど、この世を別れたまふ御作法、いみじく悲し。今日は、世を思ひすましたる僧たちなどだに、涙もえとどめねば、まして女宮たち、女御、更衣、ここらの男女、上下ゆすり満ちて泣きとよむに、いと心あわたたしう、かからで、静やかなる所にやがて籠るべくおぼしまうけける本意違ひておぼしめさるるも、ただこの幼き宮にひかされて、とおぼしのたまはす。内裏よりはじめたてまつりて、御とぶらひのしげさ、いとさらなり。

抑えられないので　ご決心も鈍りそうだが　無理をして　お召しになる時　現世の執を絶ち切った　俗世にお別れになる儀式は　（朱雀院は）まことにお心も騒ぎ　ひとえに　女三の宮が気がかりなので　お見舞の多いこと　今更言うまでもない

源氏

六条の院も、（朱雀院が）少しご気分がおよろしいと、すこし御ここちよろしくと聞きたてまつらせたまひて、参りたまふ。御たうばりの御封（太上天皇）などこそ、皆同じごと、おりゐの帝とひとしく定まりたまへれど、まことの太上天皇の儀式には

格式にして威儀

一 例のように、大げさにならぬ体（格別である）のお車にお召しになって。『細流抄』は、「常の檳榔毛の車なるべし」という。檳榔（椰子科の常緑喬木）の葉を裂き、さらしたもので、車体を張り覆った牛車（図録四参照）。

二 供奉の公卿（三位以上の人）などは、しかるべき方だけが、車でお供なさる。『岷江入楚』は、上皇御幸の儀式ならば、公卿は馬で供奉すべきところであるという。

三 ご気分の悪いのを無理に元気を出されて、ご対面なさる。

四 改まったことはなさらず、ただ院の常の御座所に（源氏の）お席をもう一つ調えて、お入れ申し上げなさる。病中でもあり、親昵の気持からでもある。

五 このほうの（出家の）念願は、いよいよ深くなっていましたが。

六 とうとう、こうしてご出家あそばしたお姿を拝さねばならないまで、先を越され申した私の優柔不断が、ふがいなく思われることです。

七 自身のこととしましては、（世を捨てることも）大したことでもないように思って決心いたしますことが何度かありましたが。

八（いざとなれば）あらためて、まことに耐えがたいことがたくさんあるものでございました。絆となる人々の見捨てがたいことをいう。女三の宮の身の上を案じる朱雀院の心中を汲んだ発言。

けばりたまはず。世のもてなし思ひきこえたるさまなどは（世間の人々のお扱いやお敬い申し上げている様子などは）、心ことなれど（わざと簡略になさって）、ことさらにそぎたまひて（けれども）、例の、ことことしからぬ御車にたてまつりて、上達部（二）など、さるべき限り、車にてぞつかうまつりたまへる。院には（朱雀院）、いみじく待ちよろこびきこえさせたまひて（大層お待ちかねでお喜び申し上げなさって）、苦しき御ここちをおぼし強（つよ）りて、御対面（おほむたいめん）あり。四 うるはしきさまならず、ただおはしますかたに、御座（おまし）よそひ加へて入れたてまつりたまふ。

（朱雀院の）ご僧形を変りたまへる御ありさま見たてまつりたまふに、（源氏は）来（き）し方行（かたゆ）く先くれて、悲しくとめがたくおぼさるれば、（涙を）とみにもえためらひたまはず。（すぐにも抑えることがおできにならない）

（源氏）故桐壺院にお別れ申した時分から（この世は無常と感じましたので）

「故院におくれたてまつりしころほひより、世の常なく思うたまへられしかば、五 このかたの本意（ほい）深く進みはべりにしを、心弱く思うたまへたゆたふことのみはべりつつ、六 つひにかく見たてまつりなしはべるまで、おくれたてまつりはべりぬる心のぬるさを、はづかしく思うたまへらるるかな。身にとりては、七 ことにもあるまじく思うたまへたちはべるをりをりあるを、八 さらにいと忍びがたきこと多かり

（気が弱くてぐずぐずすることばかりございまして）

九 わが命も今日か明日かと思いながら、それでも月日が経ってしまいましたが、それに油断して、心からの念願の一端でも遂げずに終るのではないかと思って、決心したのです。以下「……やすからずなむ」まで、朱雀院が源氏に語る言葉。「今日か明日か」は、歌語的表現。「わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ高けむ」（『伊勢物語』八十七段）などがある。

一〇（とはいえ）このように出家したところで、余命いくばくもなくては。

一一 とりあえず一時なりとも（出家の功徳で）命を延ばして、せめて念仏でもと思っています。「念仏」は、南無阿弥陀仏という六字の名号を唱えて祈ること。もっとも容易な仏道修行である。

一二（源氏の）お心の中でも、何といっても気にかかる姫宮のことだから。紫の上と同じく、藤壺の宮の姪にあたるからである。

ぬべきわざにこそはべりけれ」と、いかにも残念そうな面持でいらっしゃるなぐさめがたくおぼしたり。

朱雀院 院も、もの心細くおぼさるるに、我慢おできにならずえ心強からず、涙をお流しになってはうちしほたれたまひつつ、昔の思い出話や近頃のお話をいにしへ今の御物語、いと弱げに聞こえさせたまひて、

「今日か明日かとおぼえはべりつつ、さすがにほど経ぬるを、うちたゆみて深き本意の端にてもとげずなりなむこと、と思ひ起こしてなむ。一〇かくても残りの齢なくは、仏道修行の志も果せそうにありませんが行ひの心ざしもかなふまじけれど、何もできない病

一一まづ仮にてものどめおきて、念仏をだにと思ひはべる。はかばかし弱の私ですが

今まで生き永らえているのは からぬ身にても、世にながらふること、ただこの心ざしにひきとどめられたると、思うたまへ知られぬにしもあらぬを、今までつとめ

仏道修行の素志によってこうしていられるのだと 思い知られないわけでもないのですが 仏道に励まなかった怠慢も気にかかることです

お心積りなさっているご修行の計なきおこたりをだにやすからずなむ」とて、おぼしおきてたるさま画など

（朱雀院） 大勢あとに見など、くはしくのたまはするついでに、「女御子たちを、あまたう

捨ててゆくのがたまらない思いです ち捨てはべるなむ心苦しき。中にも、また思ひゆづる人なきをば、

特別に気がかりでどうしたものかと苦にしています 取り分きうしろめたく見わづらひはべる」とて、まほにはあらぬ御

ご様子を お気の毒にお思い申される けしきを、心苦しく見たてまつりたまふ。一二御心のうちにも、さすが

一 仰せの通り、臣下の者よりも、このようなご身分の方（内親王）には、内輪のお世話役（夫）がないのは。

二 まことに末世には過ぎた立派なお世継ぎだと、世の人々はあげてお頼り申すお方と、お崇め申していますが。

三 いかにも物事には限度がありますので。以下に具体的に述べる。

四 姫宮のおんために、どれほど際立ったご好意をお寄せになれるものでもございません。天皇という公的立場では、女である内親王に対し、取り分けた援助のできないことをいう。

五 何かにつけて本当のお世話役といえる者は、やはり夫婦といった契りを交わし、当然の役目として、お世話申すご庇護の者のおりますのが、先々も安心なことでございますが。「えさらぬ」は、避る（よける）ことのできぬの意。「まもりめ」は、守り目。守り役のこと。

六 やはり、どうしてもあとあとまでご心配が残るようでしたら。

にゆかしき御ありさまなれば、（源氏）おぼし過ぐしがたくて、「げにただ人よりも、かかる筋には、私ざまの御後見なきは、くちをしげなるわざになむはべりける。春宮かくておはしませば、いとかしこき末の世の儲けの君と、天の下のたのみどころに仰ぎきこえさするを、ましてこのことと聞こえ置かせたまはむことは、一事としておろそかに軽め申したまふべきにはべらねば、さらに行く先のことおぼしなやむべきにもはべらねど、げにこと限りあれば、おほやけとなりたまひ、世のまつりごと御心にかなふべしとは言ひながら、女の御ためには、何ばかりのけざやかなる御心寄せあるべきにもはべらざりけり。すべて女の御ためには、さまざまことの御後見とすべきものは、なほさるべき筋に契りをかはし、えさらぬことにはぐくみきこゆる御まもりめはべるなむ、うしろやすかるべきことにはべるを、なほしひて後の世の御疑ひ残るべくは、よろしきにおぼし選びて、忍びて、さるべき御あづかりを定めおかせたまふべきになむはべな

お聞き過しにはなれなくて
いかにも残念なことで
軽くお扱い申されるはずはございませんので
決して
将来のことをご心配になる
〔東宮が〕ご即位あそばさ
天下の政治はみ心のままになろうとはいうものの
適当な人物をお決めになって
しかるべきお世話役を決めてお置きになるのがよろしゅうございましょう
内々

七 昔の例を聞きましても。女三の宮の結婚について、過去の先例が考慮されていることは、二八頁注一〇参照。また、源氏の言葉からも知ることができる（三三頁注一六参照）。

八 在位中の全盛時代の帝の皇女にでも、しかるべき人物を選んで、そういったこと（結婚させること）をなさった例は多かったのです。『河海抄』『細流抄』は、嵯峨天皇が忠仁公藤原良房の人物を見込んで、皇女潔姫を嫁せしめた例をあげる。

九 まして私のように、（譲位した上）今を限りと世を捨てるに当って、皇女の結婚について大げさにとやかく思い悩むこともないのですが。

一〇 病気は重くなってゆきますし、二度と取り戻せるはずもない月日がたってゆきますので。

一一 この幼い内親王。女三の宮のこと。

一二 適当な婿も、あなたのお考えどおりにお決め下さって、（その人に）お預け下さいと、お願いしたいところですが。「よすが」は、頼るべき人。はじめから単刀直入に、源氏を婿に、とは言い出さない、幅を持たせた話術。

一三 夕霧。

一四 大臣の和名。太政大臣（雲居の雁の父）のこと。

一五 実際的な面では、しっかりご奉公いたしましょうが。内親王の体面を保つ上で、実生活の面は几帳面にしようが、はなやかな声望を保つ能力はなかろう、という気持。

（朱雀院）私もそのように考えることはあるのですが

る」と、奏したまふ。「さやうに思ひ寄ることはべれど、それも難きことになむありける。いにしへの例を聞きはべるにも、世をたもつ盛りの皇女にだに、人を選びて、さるさまのことをしたまへるたぐひ多かりけり。ましてかく、今はとこの世を離るる際にて、ことことしく思ふべきにもあらねど、またしか捨つるなかにも、捨てがたきことありて、さまざまに思ひわづらひはべるほどに、病は重りゆく、また取り返すべきにもあらぬ月日の過ぎゆけば、心あわたたしくなむ。かたはらいたきゆづりなれど、このいはけなき内親王ひとり、取り分きてはぐくみおぼして、さるべきよすがをも、御心におぼし定めてあづけたまへ、と聞こえまほしきを、権中納言などのひとりものしつるほどに、進み寄るべくこそありけれ。おほいまうち君に先ぜられて、ねたくおぼえはべる」と聞こえたまふ。「中納言の朝臣、まめやかなるかたは、いとよくつかうまつりぬべくはべるを、何ごともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけ

むつかしいことなのです

捨て去りが

一方このように思い捨てるなかにも

たいことがあって

あれこれと考えあぐねていますうちに

気ばかり焦るの

恐縮なお願いなのですが

特にお目をおかけ下さって

独り身でいた時に

こちらから申し出るべきでした

残念に思っています

未熟で

分別も足りぬことでしょう

恐れ多いこと

一（姫宮も）院がご在俗中、お膝もとにいらした時と変ったようには思し召されぬでしょうが。親代りと思っていただけようが、の意。「御蔭」は、ご庇護。

二 主人側の朱雀院の廷臣たちも、お客（源氏）側の上達部も。源氏の供の上達部のこと、三八頁に見える。

三 皆御前でご馳走にあずかるが。「御饗」は、主人となって客をもてなすこと。饗応。

四 野菜、海藻類だけで、肉類を交えぬ食物。

五 「浅香」は、香木の一種。沈の水に沈まぬものをいう。色は暗色。「懸盤」は、食器を載せる足つきの膳（図録七参照）。

六 出家した人の用いる食器。（図録七参照）

七 胸を打つお歌の数々があったが、めんどうなので書き留めておかなかった。語り手の女房の言葉の体。

八 禄の品々を、身分に応じて下賜される。「禄」は、出席者に与える慰労の品。衣服が普通である。

九 朱雀院の別当。藤大納言。（三〇頁参照）

一〇 この日、雪が降っていたことをこういう形で示す。

一一 このようなお話があるなどと。源氏を女三の宮の婿にという朱雀院側の評定を噂に聞いたのであ

朱雀院の饗宴

源氏、紫の上を思って悩む

る。

なくとも、深き心にて後見きこえさせはべらむに、おはします御蔭に変りてはおぼされじを、ただ行く先短くて、つかうまつりさすことがありますまいかと とやはべらむと、疑はしきかたのみなむ、心苦しくはべるべき」と、お引き受け申し上げられた うけひき申したまひつ。

（私が）真心こめてですが　（私とても）　お世話申し上げましたなら　中途でお仕えできなくなるこ　懸念されることだけが　申しわけなく存じられます

夜に入りぬれば、主人の院方も、客人の上達部たちも、皆御前にて御饗のこと、精進物にて、うるはしからず、なまめかしくせさせたまへり。院の御前に、浅香の懸盤に御鉢など、昔にかはりて参るを、人々、涙おしのごひたまふ。あはれなる筋のことどもあれど、うるさければ書かず。夜ふけて帰りたまふ。禄ども、次々に賜ふ。

格式ばらず　朱雀院　優雅に整えさせなさっている　今までと違った物で差し上げるのを

別当大納言も御送りに参りたまふ。主人の院は、今日の雪にいとど御風加はりて、かき乱りなやましくおぼさるれど、この宮の御ことを、人々、涙おしのごひたまふ。あはれなる筋のことどもあれど、うるさければ書かず。夜ふけて帰りたまふ。禄ども、次々に賜ふ。

［源氏の］　朱雀院　［源氏は］　お風邪が悪化し　ご気分がお悪く苦しくお思いだが　女三の宮のお身の上をご依頼してお決めになったので　ご安心あそばされた

聞こえ定めつるを、心やすくおぼしけり。

源氏　何となくつらくて　あれこれと思い悩まれる

六条の院は、なま心苦しう、さまざまおぼし乱る。紫の上も、かかる御定めなど、かねてもほの聞きたまひけれど、さしもあらじ、

そんなことはあるまい

前斎院をもねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしもお
ぼしとげずなりにしを、〔紫上は〕そんなお話があるのですか〔源氏に〕などおぼして、さることやある、とも問ひ
お尋ねなさらず　何の気がかりもない様子でいられるので　おいたわしくて
きこえたまはず、何心もなくておはするに、いとほしく、このこと
自分の気持は少しも変るはずもなく
をいかにおぼさむ、わが心はつゆも変るまじく、さることあらむに
かえってますます愛情は深くなるばかりだろうが　それがまだお分りにならぬ間
つけては、なかなかいとど深さこそまさらめ、見定めたまはざらむ
〔源氏は〕不安にお思いになる
ほど、いかに思ひ疑ひたまはむ、などやすからずおぼさる。今の年
ごろとなりては、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あは
〔源氏は〕一時にもせよ心に隠しごとのあるのは気になってならないが
れなる御仲なれば、しばし心に隔て残したることあらむもいぶせき
を、その夜はうち休みて明かしたまひつ。

翌日
またの日、雪うち降り、空のけしきもものあはれに、過ぎにし方
空模様もしみじみとした風情なので　（源氏）　すっかりお弱りになられたのを
行く先の御物語聞こえかはしたまふ。「院のたのもしげなくなりた
お見舞に参上して　心に深く感じることがいろいろありました
まひにたる御とぶらひに参りて、あはれなることどものありつるか
〔院が〕見捨てて出家しがたく思われて
な。女三の宮の御ことを、いと捨てがたげにおぼして、しかしかな
ご辞退申し上げられなくなってしまった　お気の毒で
むのたまはせつけしかば、心苦しくて、え聞こえいなびずなりにし

源氏、紫の上に打ち明ける

一二 朝顔の前斎院に対しても、熱心に言い寄っていらっしゃるようだったが、ことさら思いを遂げようとはなさらなかったのだから。源氏が朝顔の前斎院に言い寄り、紫の上が真剣に心配した時もあったことは、三巻朝顔一九七～九頁、二〇六～八頁参照。

一三 今度のこと（女三の宮と結婚すること）を（紫の上は）何と思われるだろう。以下「いかに思ひ疑ひたまはむ」まで、源氏の心中の思い。

一四 そんなことがあった場合には。女三の宮を迎えるようなことがあれば、それにつけても。

一五 長の年月を経たこの頃では、いよいよお二人とも隠しだてなさることなく、睦まじいご夫婦仲なので。

一六（源氏と紫の上は）昔の思い出やこれからのことなどお互いにお話しになる。

一七 これこれと私にお頼みになられたので。女三の宮の後見を依頼されたことをいう。

のを

を、ことことしくぞ人は言ひなさむかし。今はさやうのこともうひうひしく、すさまじく思ひなりにたれば、人伝にけしきばませたまひしには、とかくのがれきこえしを、対面のついでに、心深きさまなることどもをのたまひ続けしには、えすくすくしくもかへさひ申さでなむ。深き御山住みにうつろひたまはむほどにこそは、わたしたてまつらめ。あぢきなくやおぼさるべき。いみじきことありとも、御ためあるより変ることはさらにあるまじきを、心なおきたまひそよ。かの御ためこそ心苦しからめ。それもかたはならずもてなしてむ。誰も誰ものどかにて過ぐしたまはば」など聞こえたまふ。はかなき御すさびごとをだに、めざましきものにおぼして、心やすからぬ御心ざまなれば、いかがおぼさむとおぼすに、いとつれなくて、「あはれなる御ゆづりにこそはあなれ。ここには、いかなる心をおきたてまつるべきにか。めざましく、かくてなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべなむを、かの母女御の御方ざまにても、うとから

一 大げさに世間では取り沙汰することでしょう。源氏が正夫人を迎えると、評判にするだろう、の意。

二 今では、そのようなこと（結婚などということ）も気恥ずかしく、関心も持てなくなってきたので。

三 （朱雀院が）人を介して、それとなくおっしゃった時には。先に左中弁を通じて打診されたこと。

四 先日、直接お目にかかった際、あわれ深い親心のお嘆きをあれこれ縷々と申されましたのには。女三の宮の将来を案じ、後見を懇請されたこと。

五 院が、この世の外の山寺にお移りあそばす頃になったら。朱雀院がかねて西山に隠棲の寺を建立のこと一二頁に見える。

六 （この結婚は）女三の宮にとって、お気の毒なことでしょう。源氏の心は、紫の上から分けられることはないから、という含み。

七 どちらの方々も、大らかなお気持で暮して下さったならば。紫の上も女三の宮も嫉妬しないでほしい、という気持。

八 目障りな、ここにいてなどと（姫宮から）お咎めを受けるのでないようでしたら、安心してここにおりましょうが。「はべなむ」は「はべりなむ」の撥音便化したものの撥音無表記の形。

九 あちらの御母女御のご縁からいっても、仲よくして頂けないものでしょうか。女三の宮の母藤壺の女御は、紫の上の叔母にあたる（三四頁参照）。

一〇 あまりこう快くお許し下さるのも、どういうわけかと（私に愛情がないのかと）心配です。

一一 こちらも先方も（あなたも女三の宮も）よく事情を察して、事なきように計らっていって下さるならば、一層ありがたいことです。

一二 自然と、他人の夫婦仲などは、間違って伝えられ、その結果心外なことが持ち上がるものですから。無責任に事ありげに噂され、遂に疑心暗鬼を生じるようなことをいう。

一三 事の成り行きを見定めた上で身を処するのがよいのです。女三の宮を迎えても、紫の上への愛情は変らない、長い目で見てほしいという気持が下にある。

一四 紫の上は心の中で、（女三の宮降嫁の件は）まるで天から降ってきたような不意の出来事で。以下、次頁三行目「思ひ合はせたまはむ」まで、紫の上の心中を叙す。

紫の上の思い

一五 好いた同士の心から生じた恋でもない。朱雀院のたっての依頼だということ。紫の上は、藤壺思慕に発する、源氏の女三の宮への好奇心に気づくはずはないのである。

一六 それを苦にしてうち沈んでいる様子を、世間の人に知られるような馬鹿なことはすまい。

一七 紫の上の継母。

ずおぼし数まへてむや」と、卑下したまふを、（源氏）謙遜なさるのを一〇「あまりかううちとけたまふ御ゆるしも、いかなればと、うしろめたくこそあれ。まことは、さだにおぼしゆるいて、一一われも人も心得て、なだらかにもてなし過ぐしたまはば、いよいよあはれになむ。ひがこと聞こえなどせむ人の言、聞き入れたまふな。すべて世の人の口といふものなむ、誰が言ひ出づることともなく、一二おのづから人の仲らひなど、うちほほゆがみ、思はずなること出で来るものなるを、心ひとつにしづめて、一三ありさまに従ふなむよき。まだきに騒ぎて、あいなきもの怨みしたまふな」と、いとよく教へきこえたまふ。

（しかし）実のところは そのようにも大目に見て下さって　信用なさいますな　な人の話を　世間の噂などというものは　根も葉もない告げ口を申すような　わが胸一つに納めて　早まって騒ぎ立てて　つまらぬ嫉妬などなさいますな

一四心のうちにも、かく空より出で来たるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなさじ、わが心に憚りたまひ、いさむることに従ひたまふべき、一五おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかるべきかたなきものから、一六をこがましく思ひむすぼほるるさま、世人に漏り聞こえじ、一七式部卿の宮の大北の方、常に

（源氏も）ご辞退できなかったのだから　怨みごとめいた申しようはすまい　（今度のことは）ご自身気がお咎めになったり人のお諫めに従いなさるような　止めようにも止められないものなのに

一 私を呪うようなことをいろいろお口にされては。（二巻須磨二一一頁、四巻真木柱二二八頁参照）

二 どうにも仕方のない大将のご結婚のことについても、なぜか私を恨んだり嫉んだりなさるということだが。大北の方は、髭黒大将と玉鬘の結婚を、紫の上の計らいと思い込んでいる（真木柱二一五頁、二三一頁参照）。

三 おっとりした紫の上のご性分とはいえ、どうしてこの程度の邪推をなさらぬことがあろう。草子地。「隈」は、人に見せぬ心の奥底。

四 もう大丈夫、自分以上の寵愛を受ける人はあるまいと慢心し、安心しきって過してきた身の上が、（女三の宮の降嫁によって）世間の物笑いになるだろうことを。

五 求婚していらっしゃった方々。螢兵部卿の宮や柏木、藤大納言ら。

新年、源氏、四十の賀を迎える

六 帝におかせられても、思し召しがあって、（ご入内なさるよう）お申し入れなさっていたのだが。冷泉帝が女三の宮の裳着に贈り物をしたことは、三五頁に見えるが、求婚のことは、ここにはじめて書く。

七 （それはそれとして）実は。前の叙述の内容を受けて、別の事情を提示説明する。

八 源氏の四十の賀のことを帝もお聞き過しにならず、世をあげての行事として、早くから評判であったが。（四巻藤裏葉三〇〇頁参照）

九 玉鬘。三〇頁に「左大将の北の方」とある。

一うけはしげなることどもをのたまひ出でつつ、二あぢきなき大将の御ことにてさへ、あやしく恨み嫉みたまふなるを、かやうに聞きて、（こんなことだと耳にして）いかにいちじるく思ひ合はせたまはむ、など、三おいらかなる人の御心といへど、いかでかはかばかりの隈はなからむ。四今はさりともとのみ、わが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを、（紫上は）下には思ひ続けたまへど、（表面は）いとおいらかにのみもてなしたまへり。（ただおっとりとなさっていらっしゃる）（内心では）

年もかへりぬ。朱雀院（年も改まった）には、姫宮（女三の宮）、六条の院にうつろひたまはむ御いそぎをしたまふ。（ご準備をなさる）五聞こえたまへる人々、（大層残念なこととお嘆きになる）いとくちをしくおぼし嘆く。六内裏（うち）にも御心ばへありて聞こえたまひけるほどに、かかる御定めを（決定を）聞こしめして、おぼしとまりにけり。七さるは（源氏は）、今年ぞ四十になりたまひければ、御賀のこと、朝廷にも聞こしめし過ぐさず、世の中の営みにて、かねてより響くを、（源氏は）ことのわづらひ多くいかめしきことは、（世人に迷惑をかけることの多い儀式ばったことは）昔より好みたまはぬ御心にて、皆かへさひ申したまふ。（すべてご辞退申し上げなさる）

一〇 正月子の日に若菜を摘み、人に贈る風習があった。羹（吸物）にして食べ、不老長生を願う。『河海抄』に、延長二年正月二十五日甲子、宇多法皇が醍醐天皇四十の賀に、若菜を献じられた例を引く。

一一 六条の院南の町の寝殿の西面の放出。「放出」は、仕切りの簾や障子をとって、母屋と廂を続けたもの。

一二 御簾の内側に垂れる絹の帳。（一巻図録九参照）

一三 普通天子が儀式に用いる。中国風の作法になる。

一四 縁どりのあるござ。四十の賀にちなむ数を用いる。

一五 屋久貝、鸚鵡貝などの殻の、真珠光のある部分を薄く剝ぎ、漆器の面に嵌め込んで飾りにしたもの。

一六 「御厨子」は、一巻図録九参照。「二具」は、二対（四基）。

一七 四季のお召し物。夏（四月）冬（十月）に更衣するのでこういう。

一八 香壺の箱と、薬の箱。香壺の箱は、薫物を入れた壺を納める箱（二巻図録一二参照）。薬の箱は、薬壺その他を納める箱（図録八参照）。

一九 泔（洗髪用の水）を入れる器。（図録七参照）

二〇 結髪用の道具を入れる箱。（一巻図録一一参照）

二一 挿頭の花を載せる台。「延長二年正月二十五日御賀御記云、南庇自東第四間立挿頭机一脚、有三銀山銀水金銀花樹等」（『河海抄』所引）

玉鬘、源氏に若菜を献じ、四十の賀を祝う

正月二十三日、子の日なるに、左大将殿の北の方、若菜参りたまふ。かねてけしきも漏らしたまはで、いといたく忍びておぼしまうけたりければ、にはかにて、えいさめ返しきこえたまはず。忍びたれど、さばかりの御勢なれば、わたりたまふ儀式など、いと響き

（玉鬘は）（内密にしてご用意なさった）（源氏は）ご意見して辞退なさることもできない（内々のことので）（はいえ 実家も夫もすぐれた）（六条院に）（格式）（格）

別に盛大である

ことなり。

南の御殿の西の放出に御座よそふ。屏風、壁代よりはじめ、新しく払ひしつらはれたり。うるはしく倚子などは立てず、御地敷四十枚、御茵、脇息など、すべてその御具ども、いときよらにせさせたまへり。螺鈿の御厨子二具に、御衣筥四つ据ゑて、夏冬の御装束、香壺、薬の筥、御硯、泔坏、掻上の筥などやうのもの、うちうちきよらを尽くしたまへり。御挿頭の台には、沈、紫檀を作り、めづらしきあやめを尽くし、同じき金をも、色使ひなしたる、心ばへありて、目馴れぬさまにしなしたまへる、おほかたのことをば、ことさ

取り替えられた　格式ばって　御賀の　お道具類を　大層美しくお作らせになった　整える

目立たぬところ　の材を用い　またとな　色を巧く使ってあるのは　金銀も　しきたりに従ったことは　特に大げ　才気のある方なので　何事にも風雅の趣味が深く　玉鬘は　現代風で　新しい変った趣向でなさっているが

今めかしく、尚侍の君、もののみやび深く、かどめきたまへる人に

一 前出寝殿の西の放出に設けられたお席。その前に、玉鬘に会う。

二 源氏は、玉鬘に思いをかけて、二人の間には複雑ないきさつがあった。四巻胡蝶四九～五五頁、常夏九〇～九七頁など。

三 源氏は大層お若く美しくて、こんなふうに四十の御賀などということは、お年の数え違いではないかと思われるお姿が。

四 こうして久々に、何年ぶりかでお会い申し上げなさるのは。主語は玉鬘。三年目の対面である。

五 昔通り、堅苦しい隔てもない有様で。御簾越しに女房の取次ぎという応対ではないことをいう。

六 玉鬘が髭黒との間にもうけた男の子たち。最初の子の出産は、四巻真木柱二四七頁に見える。

七 続いて二人もお目にかけたくないとおっしゃったのを。三歳と二歳の年子と思われる。のちに、右兵衛の督、右大弁となった人々（六巻竹河参照）。

八 子供の髪型。男女ともに頂きより左右に振り分けて垂れ、肩のあたりで切り揃える。（図録六参照）

九 年をとることも、私自身には格別気にならず。

一〇 こんな孫たちに促されて。玉鬘は源氏の養女なので「末々」（子孫）という。「もよほし」は、催促すること。

一一 中納言（夕霧）が、はやばやと子をなしたということですが。雲居の雁との間の子供のこと。その結婚は、昨年四月（四巻藤裏葉参照）。

さにならぬようにしてある
らにことことしからぬほどなり。
お祝いの方々がご着席なさったりして
人々参りなどしたまひて、御座に出でたまふとて、尚侍の君に御対面あり。御心のうちには、いにしへおぼし出づることどもさまざまなりけむかし。いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおぼゆるさまの、なまめかしく、人の親げなくおはしますを、めづらしくて年月隔てて見たてまつりたまふは、いとづかしけれど、なほけざやかなる隔てもなくて、御物語聞こえかはしたまふ。幼き君も、いとうつくしくてものしたまふ。尚侍の君は、うち続きても御覧ぜられじとのたまひけるを、大将の、かかるついでにだに御覧ぜさせむとて、二人同じやうに、振分髪の何心なき直衣姿どもにておはす。「過ぐる齢も、みづからの心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを、かかる末々のもよほしになむ、なまはしたなきまで思ひ知らるるをりもはべりける。中納言のいつしかとまうけたな

優雅で
子を持つ親のようにはお見えでないのを
〔源氏が〕
かわいらしくていらっしゃる
〔玉鬘は〕とても気がひける思いだが
髭黒が
こんな機会になりとご覧いただこうと言って
無邪気
大人げない有様で過していて
何やらきまりが悪いほど自分の年を痛感させられることもあるものでした
〔源氏〕

一二 ご大層に分け隔てをして、まだ見せないのですよ。物心ついてから、正式に祖父に挨拶させる、というのが格式にかなっているからであろう。
一三 誰よりも先に、私の年を数えて祝って下さった今日の子の日は、やはりつらく思われます。
一四 若葉の萌え出る野辺の小松―幼い子供たちを引き連れまして、育てて下さった親（もとの岩根）の千歳を祈る今日なのでございます。「ひき」に、小松を引く意を掛ける。「岩根を祈る」に、岩の千古不滅に寄せる祝意をこめる。「岩根」は松の縁語。正月子の日に小松を引く行事があったので、先の源氏の言葉に応じたもの。
一五 努めて大人らしく（いかにも母親らしく）お祝い申し上げなさる。「源氏にはぢながら、大人しく言ひなしたまへるなり」（『細流抄』）
一六 「沈」は香木の一種。「折敷」は、食器を載せる片木作りの角盆（図録七参照）。四十の賀にちなんで四つ用意する。
一七 小松原の生い先長い齢にひかれて、野辺の若菜（私）も長生きするのでしょうか。「つむ」は、「積む」に「摘む」を響かす。
一八 寝殿の西面の南の廂である。
一九 紫の上の父。髭黒のもとの北の方の父でもある。玉鬘との結婚に当って、北の方を引き取ったこと、四巻真木柱二二二～八頁に詳しい。
二〇 含むところがあるように思われでも困るので。

るを、ことことしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。[一二]人よりことに数へ取りたまひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老を忘れてもはべるべきを」と聞こえたまふ。尚侍の君も、いとよく（大層立派にお年を重ねられ）ねびまさり、もものしきけさへ添ひて、（貫禄も加わって）見るかひあるさましたまへり。

（玉鬘）[一四]若葉さす野辺の小松をひきつれて
もとの岩根を祈る今日かな

と、せめておとなび聞こえたまふ。[一五]沈の折敷四つして、（若菜の羹を）御若菜、さまばかり参れり。（祝儀ばかりに召し上がる）御土器取りたまひて、（お盃をお取りになって）

（源氏）[一七]小松原末のよはひにひかれてや
野辺の若菜も年をつむべき

（詠み交わしなさっているうちに）など聞こえかはしたまひて、上達部あまた、南の廂に着きたまふ。（玉鬘主催の宴には）式部卿の宮は、[一九]参りにくくおぼしけれど、（ご案内があったので）御消息ありけるに、かく親しき御仲らひにて、[二〇]心あるやうならむも便なくて、（日が高くなって）日たけてぞ

一 源氏の婿というお間柄として、今日の催しを一切取り仕切ってお世話していられるのも。

二 式部卿の宮の孫。髭黒ともとの北の方との間の男の子たち。四巻真木柱に、「女一所……また次々男二人……」（一二二頁）とあり、上は十歳、下は「八つばかり」（一三〇頁）とあった。今はその三年のち。

三 どちらのかかわりからいっても（玉鬘は継母、紫の上は母方の叔母）、身を入れて雑用を勤められる。

四 籠の中に五菓（柑子・橘・栗・柿・梨）を入れ、木の枝につける。以下すべて四十の賀にちなんだ数。当日の献上品である。

五 檜の曲物。肴など入れる。（一巻図録一〇参照）

六 しかるべき方々ばかりが、次々に受け取って献上なさった。庭中に列立し、順次手渡すことをいう。

七 お盃が皆に下され、若菜の羹を召し上がる。これからが正式の賀宴で、前のは玉鬘との内輪の祝い。

八 四二頁注五参照。

九 食器類も好ましく、近頃流行の風になさった。

一〇 雅楽寮、楽所、六衛府の官人などで音楽をよくする者をいう。音楽の専門家である。

一一 管楽器の総称。

一二 すぐれた音色の楽器をすべて。

一三 六絃の琴。わが国古来の楽器とされる。（図録八参照）

一四 太政大臣。

一五 こうした和琴の名人が。太政大臣が和琴にすぐれ

わたりたまへる。大将のしたり顔にて、（髭黒）（得意然として）かかる御仲らひに、うけばりてものしたまふも、（式部卿宮には）（なるほど不愉快に違いないことであろうが）げに心やましげなるわざなめれど、御孫の君たちは、いづかたにつけても、おり立ちて雑役したまふ。籠物四十枝、折櫃物四十、中納言をはじめたてまつりて、（夕霧）さるべき限り取り続きたまへり。御土器くだり、若菜の御羹参る。御前には、沈の懸盤四つ、御坏どもなつかしく、今めきたるほどにせられたり。

朱雀院の御薬のこと、（ご病気が）なほたひらぎ果てたまはぬにより、（まだすっかりよくおなりにならないので）楽人などは召さず。御笛など、太政大臣の、（そちらの方はご用意なさって）そのかたはととのへたまひて、（太政大臣）「世の中に、この御賀より、（ほかに立派で善美を尽すような催しはまたとあるまい）まためづらしくきよら尽くすべきことあらじ」とのたまひて、すぐれたる音の限りを、かねてよりおぼし（お心積り）まうけたりければ、忍びやかに御遊びあり。とりどりにたてまつるなかに、和琴は、かの大臣の第一に秘したまひける御琴なり。（ご秘蔵なさる名器である）さるものの上手の、心をとどめて弾き馴らしたまへる音、いと並びなきを、異人は搔きたてにくくしたまへば、衛門の督のかたくいなぶる

（内輪の方々で〔音楽の〕）（皆それぞれの楽器を演奏なさるなかで）（なさっていたので）（日頃入念に弾き馴らしていらっしゃる音色が）（またとない名器なので）（弾くのを遠慮なさるので）（柏木）（辞退するのを）

ていることは、三巻少女二三五頁、二六九頁、四巻常夏九一頁、九二頁参照。

一六 何の道であれ、名人の子とはいっても、こうまではとても手筋を受け継ぐことはできないものだと。

一七 それぞれの調子に従って楽譜が整っている弾き方や、きまった型のある中国伝来の曲なら、かえって習得する手立てもはっきりしているが。

一八 和琴独得の奏法の一つ。明らかでないが、『河海抄』は、右手の撥で掻くことという。

一九 父の太政大臣は、絃をごくゆるく張って、大層低い調子に整え、余韻をたっぷり響かせて掻き鳴らされる。以下、父子の奏法の特色を述べる。

二〇 こちら（柏木）は、大層明るく高い調子で、くだけた朗らかな感じがするのを。

二一 前出の式部卿の宮のほか、次に螢兵部卿の宮（源氏の弟）が見える。

二二 七絃の琴。中国渡来の楽器。（図録八参照）

二三 宮中紫宸殿の東にある殿舎。累代の楽器や書籍を保管する。（四巻図録四参照）

二四 桐壺院の皇女、女一の宮。母は弘徽殿の大后。（二巻花宴六〇頁参照）

二五 太政大臣が一品の宮に願い出て頂戴なさった、次次の伝来をお考えになると。大臣の北の方は、弘徽殿の大后の妹。その縁で願い出たのであろう。

［源氏が］催促なさると　なるほど大層上手に　［父太政大臣にも］

を責めたまへば、げにいとおもしろく、をさをさ劣るまじく弾く。

一六 何ごとも、上手の嗣といひながら、かくしもえ継がぬわざぞかしと、ゆかしく殊勝なことよと心にくくあはれに人々おぼす。調べ一七に従ひてあとある手ども、定まれる唐土の伝へどもは、なかなか尋ね知るべきかたあらはなるを、興の湧くままに無造作に合奏した心にまかせてただ掻き合はせたるすががきに、一八よろづのものの音と色が一つになって響くのは　ほかの総ての楽器の音　見事で趣があり　とのへられたるは、妙におもしろく、あやしきまで響く。父大臣は、不思議なほど琴の緒もいと緩に張りて、いたう下して調べ、響き多く合はせてぞ掻き鳴らしたまふ。二〇これは、いとわらかにのぼる音の、なつかしく愛敬づきたるを、全くこれほどまで上手だとは思えなかったのにと　いとかうしもは聞こえざりしをと、親王たちも二一おどろきたまふ。琴は、兵部卿の宮弾きたまふ。この御琴は、宜陽二三殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴を、故院の末つかた、一二四品の宮の好みたまふことにて、賜はりたまへりけるを、このをりの音楽にご趣味がおありだったので　頂戴なさったのを　桐壺院　晩年に　このたびの御賀の善美をお尽しになろうとして　二五きよらを尽くしたまはむとするため、大臣の申し賜はりたまへる御伝へ伝へをおぼすに、［源氏は］いとあはれに、昔のことも恋しくおぼし出で

一 螢兵部卿の宮。
二 儀式ばったことではないが、この上もなく興深い今夜の音楽である。「夜の御遊び」で一語。
三 唱歌の殿上人。「唱歌」は、楽器の譜を歌うこと。
四 寝殿南正面の階段の所。
五 音楽の調子が、呂旋法より律旋法に変ること。正式な感じから、くだけた感じになる。
六 それぞれの楽器の音も、くだけたものに変って。
七 催馬楽、律「青柳」。「青柳を　片糸によりて　や　おけや　鶯の　おけや　鶯の　縫ふといふ笠は　おけや　梅の花笠や」
八 まことに塒の鶯も、美しい歌声に目を覚ましそうで。催馬楽「青柳」に、鶯が詠み込まれているのにちなんだ文飾。「夜の御遊び」なので「塒の」という。
九 私的な内輪の祝いということになさって、禄なども、大層見事なものを用意なさったのだった。准太上天皇としては規定があって、自由にならないからである。「禄」は、人々の労をねぎらって与えるもの。「きやうざく」は「饗策」の字音語。物事のすぐれていること。
一〇 年月のたつのも知らずに過してきたようですのに、四十の賀など催して、年の数を知らせて下さったりしますと。
一一 もの悲しくも、また情趣深くも、お思い出し申されることがないでもないので。源氏と玉鬘には、きわどいところまで馴れ親しんだしゃれたいきさつがあっ

らる。親王（みこ）も、酔（ゑ）ひ泣きえとどめたまはず。〔源氏の〕お気持を汲まれて御（み）けしきとりたまひて、琴（きん）は御前（おまへ）にゆづりきこえさせたまふ。〔源氏は〕感興を催されるままにお見過しになれもののあはれにえ過ぐしたまはで、めづらしきもの一つばかり弾きたまふに、ことことしからねど、限りなおもしろき夜（よ）の御遊びなり。唱歌（さうが）の人々御階（みはし）に召して、〔その人々が〕美しい声をあらん限り出してすぐれたる声の限り出だして、返り声になる。夜のふけゆくままに、〔演奏なさる頃には〕ものの調（しら）べどもなつかしく変りて、青柳遊（あをやぎあそ）びたまふほど、げにねぐらの鶯（うぐひす）おどろきぬべく、いみじくおもしろし。私事（わたくしごと）のさまにしなしたまひて、禄（ろく）など、いときやうざくにまうけられたりけり。

〔源氏からの〕おみやげ

暁（あかつき）に、尚侍（かむ）の君帰りたまふ。御贈り物などありけり。「かう世を捨つるやうにて明かし暮らすほどに、年月（としつき）の行方（ゆくへ）も知らず顔なるを、〔源氏〕前より年心細く思われますかう数（かぞ）へ知らせたまへるにつけては、心細くなむ。時々は、老いやとったかどうか見比べにやってきて下さいまさると見たまひくらべよかし。こんな老人で動きにくくてかく古めかしき身の所狭（ところせ）さに、思まことに残念です

ふに従ひて対面（たいめん）なきもいとくちをしくなむ」など聞こえたまひて、あはれにもをかしくも、思ひ出できこえたまふことなきにしもあら

た。四巻胡蝶四九頁以下など。

一二 実の父の太政大臣は、ただの親子のご縁とお思い申されるだけで。

一三 こうしてすっかり髭黒の北の方として、お身の上が落着かれるにつけても。

一四 先に（玉鬘の献じた）若菜を召し上がった寝殿の西の放出。（四七頁注一参照）

女三の宮、六条の院に降嫁

一五 西の放出の母屋の部分に、女三の宮の御帳台を立て、ここを居室とする。御帳台は、一巻図録九参照。

一六 寝殿の西側の対。西の一、二の対である。寝殿に近い方が一の対。

一七 渡殿（寝殿と対の屋を結ぶ廊下）にかけて。渡殿の片側に部屋を作り、ここも女房の局とする。

一八 入内なさる姫君の作法に準じて。源氏はただの臣下でなく准太上天皇だから、女御入内の法式にのっとる。

一九 藤大納言。（一二八頁、三〇頁参照）

二〇 女三の宮の牛車をつけた所。寝殿の南面の階。

二一 通常の入内の例にはないことである。源氏の卑下、謙退のさま。

二二 何といっても、源氏は臣下でいらっしゃるので。

ねば、なかなかほのかにて、（玉鬘が）なまじ顔を見せただけで かく急ぎわたりたまふを、（源氏は）急いでお帰りになるのを いと飽かずくちをしくぞおぼされける。尚侍の君も、まことの親をばさるべき契りばかりに思ひきこえたまひて、ありがたくこまかなりし御心ばへを、年月に添へて、かく世に住み果てたまふにつけても、おろかならず思ひきこえたまひけり。

二月

かくてきさらぎの十余日に、朱雀院の姫宮、六条の院へわたりたまふ。この院にも、御心まうけ世の常ならず。若菜参りし西の放出に御帳立てて、そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、（源氏は）念入りに整えこまかにしつらひ磨かせたまへり。内裏に参りたまふ人の作法をまねびて、かの院よりも御調度など運ばる。（女三宮の）お輿入れの格式は わたりたまふ儀式、言へばさらなり。御送りに、上達部などあまた参りたまふ。かの家司望みたまひし大納言も、やすからず思ひながらさぶらひたまふ。御車寄せたる所に、（女三宮を）院わたりたまひて、おろしたてまつりたまふなども、例には違ひたることどもなり。ただ人におはすれば、よろづのこと

六条の院　ご準備　朱雀院　お道具類　源氏　お供の行列に　おもしろからず思いながらお供をなさる

一　入内の儀とも違うし、かといって普通の婿君というのとも事情が違って。婿が女の家に通う形でないことをいう。「婿の大君」は、催馬楽、呂「我家」の「我家は　帷帳も　垂れたるを　大君来ませ　婿にせむ　御肴に　何よけむ　鮑　栄螺か　石陰子よけむ」による、やや諧謔的な措辞。源氏は大君（親王宣下のない皇子）でもある。

二　新婚三カ日の間は、朱雀院方からも、主人である六条の院の側からも、盛大でまたとないほど優雅な催しを尽される。歌のやりとり、人々への禄、饗宴などはなやかに風雅を尽す。

三　紫の上も、何かにつけて落着いてはいらっしゃれないお身のまわりの事情である。「対の上」は、東の対に住むところから出た呼称。

四　いかにも、こんなことになったからといって、むげにあちらに負けて、影の薄くなるようなこともあるまいけれど。「げに」は、四四頁の源氏の言葉を受けたもの。紫の上の心中。以下自然に地の文になる。

五　あの、藤壺の姪である紫の上をお引き取りになった時のことを。「紫」は、藤壺をさし、「ゆかり」は血縁の意（一巻末摘花二六七頁注九参照）。

六　あちら（紫の上）は、気が利いていて、手ごたえがあったが。一巻若紫の巻末の贈答の場面など。

七　よかろう、これなら憎らしげに（紫の上に対して）高飛車に出ることなどなさそうだ。

限りありて、内裏参りにも似ず、婿の大君といはむにもこと違ひて、あまり例のないご夫婦のお間柄である めづらしき御仲のあはひどもになむ。

三日がほど、かの院よりも、主人の院方よりも、いかめしくめづらしきみやびを尽くしたまふ。対の上も、ことに触れてただにもおぼされぬ世のありさまなり。げにかかるにつけて、こよなく人に劣り消たることもあるまじけれど、また並ぶ人なくならひたまひて、はなやかに生ひ先遠く、あなづりにくきけはひにてうつろひたまへるに、なまはしたなくおぼさるれど、つれなくのみもてなして、御わたりのほども、もろ心にはかなきこともし出でたまひて、いとらうたげなる御ありさまを、いとどありがたしと思ひきこえたまふ。

お年も若く　悔りがたい勢いで　ほかに競争相手もいない今までだったのに　[女三宮が]お輿入れなさった　[紫上は]何やらいたたまれぬ思いがなさるが　ひたすらさりげない態度をよそおって　[源氏と]心を合せてこまごましたこともよくなさって　降嫁の折も　[源氏は]ますます得がたい人だと　の下心もないご様子なのを

姫宮は、げにまだいと小さく、片なりにおはするうちにも、いといけなき感じで　大人になっていらっしゃらないうえ　まるで子供でいらっしゃる　はけなきけしきして、ひたみちに若びたまへり。かの紫のゆかり尋ね取りたまへりしをりおぼし出づるに、かれはされていふかひありしを、これは、いといはけなくのみ見えたまへば、よかめり、憎げ

女三の宮　女三の宮

三日の夜、源氏と紫の上の思い

八 新婚三カ日間は、欠かさず毎夜新婦のもとに通うのが作法。

九 （源氏の）お召し物など、一層念入りに香を薫きしめさせなさりながら。女三の宮のもと（へ）着てゆく装束を女房たちに整えさせる。

一〇 どうして、どんな事情があるにせよ、紫の上のほかに妻をもうけることがあろうか。以下「……おぼしかけずなりぬめりしを」まで、源氏心中の思い。

一一 自分より年若だけれど、夕霧を（朱雀院は）婿にとはお考えにもならなかったようなのにと。実直な夕霧が雲居の雁以外に心を分けぬとご承知のこと、候補者の中に入れておられなかったことは、二一頁、四一頁に見える。

一二 今日が三日目の夜であること、次に「これよりのちのとだえ」とあるので分る。

一三 しかし、そうかといって、（女三の宮をおろそかにしたら）朱雀院には、何とお聞きあそばされよう。

一四 ましてはたの私など、無理かどうかを何できめられましょう。「とまる」は、ここでは決着する意。

におしたちたることなどはあるまじかめりとおぼすものから、いとあまりものの栄なき御さまかなと見たてまつりたまふ。

〔源氏は〕お思いになるものの　張合いのないご様子だなと

八 三日がほどは、夜離れなくわたりたまふを、年ごろさもならひた馴れではない身とて　まはぬここちに、忍ぶれどなほものあはれなり。御衣どもなど、いよいよたきしめさせたまふものから、うちながめてものしたまふけしき、いみじくらうたげにをかし。一〇などて、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにける わがおこたりに、かかることも出で来るぞかし、一一若けれど、中納言をばえおぼしかけずなりぬめりしをと、われながらつらくおぼし続くるに、涙ぐまれて、「今宵ばかりはことわりと許したまひてむな。これよりのちのとだえあらむこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。一三またさりとて、かの院に聞こしめさむことよ」と思ひ乱れたまへる御心のうち苦しげなり。すこしほほゑみて、「みづからの御心ながらだに、え定めたまふまじかなるを、一四ましてことわりも何もいづこ

〔紫上は〕今までこんなことにお　こらえはするがやはりもの悲しい　物思いに沈んでいらっしゃる〔紫上の〕　可憐で　美しい　〔これも〕浮気っぽく情にもろくなってきている　私の失態から　このような事態にも立ち到ったのだ　あれこれと情けなく思わ　無理もないことと　つい涙ぐんで〔源氏〕　れなさって　お許し下さるでしょうね　これからあとこちらに来ない夜があったら〔その時には〕我ながら愛想が尽きることでしょう　〔紫上は〕薄く笑みを浮べて　ご自分のお心でさえ　決めかねていらっしゃるようですのに

一 取り付く島もないように、話をそらされるので。

二 眼のあたり、変れば変る私たちの仲でしたのに、末長くとあてにしていましたこと。

三 古歌などをまぜてお書きになるのを。自分の心を託す古歌を思いつくままに書く、いわゆる手習である。

四 何でもない歌だけれど。

五 はかない人の命こそ絶えることもあろうが、その無常の世に、それとは違う、いつまでも変らぬ二人の仲なのに。

六 ほんとうに困ります。紫の上が源氏を引き止めていると言われはしないかと、迷惑がる気持。

七 しなやかで感じのよいお召し物で。こういう場合適当に糊気の落ちたのが、やさしい感じを与える。

八 えもいえずよい匂いをさせて。さきほど、紫の上が「いよいよたきしめさせ」ていたもの。

九 長い間には、こんなことになりはせぬかと思ったいろいろなことも。自分を上廻る地位の正夫人が迎えられるのではないかと思ったこと。朝顔の前斎院について危ぶんだことは、三巻朝顔一九七～八頁に見える。

一〇 もう今さらと（源氏は）そんな女君との仲も、次第にお断ちになって。

にとまるべきにか」と、[一]いふかひなげにとりなしたまへば、[源氏は]顔むけもならぬ思いがなさってはづかしうさへおぼえたまひて、つらづゑをつきたまひて寄り臥したまへれば、硯を引き寄せたまひて、

（紫上）[二]目に近くうつればかはる世の中を
行く末遠く頼みけるかな

[源氏は]古言など書きまぜたまふを、[三]取りて見たまひて、[四]はかなき言なれど、いかにもともっともだと思われてげにとことわりにて、

（源氏）[五]命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき
世の常ならぬなかの契りを

[源氏が]すぐにもお出かけになれないのを（紫上）とみにもえわたりたまはぬを、[六]「いとかたはらいたきわざかな」と、おすすめ申されるのでそそのかしきこえたまへば、[七]なよよかにをかしきほどに、[八]えならずお見送りなさるにつけても匂ひてわたりたまふを見出だしたまふも、いとただにはあらずかし。とても平気ではいられないことだろう

年ごろさもやあらむと思ひしことどもも、[九]今はとのみもて離れたまひつつ、[一〇]ではこれで大丈夫と気を許すようになった今頃になってさらばかくにこそはとうちとけゆく末に、とどのつまりありありて、

一一 こんな一方ならず外聞の悪いことが起るとは。今まで源氏の寵愛を独占していたのに、圧倒的に身分の高い正室にその座を譲らねばならぬことをいう。

一二 紫の上は、あんなにさり気なくよそおっていらっしゃるが。前に「つれなくのみもてなして……」（五四頁）とあったことなどをうける。

一三 大勢女君がおいでのようですが、どなたも皆、こちら（紫の上）のご威勢には一歩譲り、遠慮なさるようにしてお暮しなればこそ、無事でおだやかに過ぎてきましたのに。六条の院には花散里、明石の上も住むが、紫の上に一目置いたこと、四巻藤裏葉二九三頁に具体例が見える。

一四 （女三の宮方の）誰憚らぬこうしたやり方に。女三の宮の婚儀のさまを、紫の上づきの女房の視点で言う。

一五 しかしまた、そうかといって。紫の上が十分対抗しうるとしても、それならそれで、という気持。

一六 こんなふうに、まわりの女房連中が容易ならぬことのように取り沙汰し、思ったりもしているのを。

一七 どなたも、（源氏の）御心に叶って、はなやいで高い身分ともいえないと。

准太上天皇にふさわしい権勢と家柄の夫人がいないことをいう。

紫の上、女房たちを諭す

一八 いつも同じ方たちばかりで、もの足りないと思っていらしたところへ。

二 かく世の聞き耳もなのめならぬことの出で来ぬるよ。思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今よりのちもうしろめたくぞおぼしなりぬる。一二 さこそつれなくまぎらはしたまへど、さぶらふ人々も、「思はずなる世なりや。一三 あまたものしたまふやうなれど、いづかたも皆、こなたの御けはひにはかたさり憚るさまにて過ぐしたまへばこそ、ことなくなだらかにもあれ、一四 おしたちてかばかりなるありさまに、消たれてもえ過ぐしたまふまじ。一五 またさりとて、はかなきことにつけても、やすからぬことのあらむをりをり、かならずわづらはしきことども出で来なむかし」など、おのがじしうちかたらひ嘆かしげなるを、つゆも見知らぬやうに、いとけはひをかしく物語などしたまひつつ、夜ふくるまでおはす。

安心できるような夫
これから先も何が起るか心配だと思うようにお
紫の上づきの女房た
婦の仲でもなかったのだから
なりになった
ちも
心外なことになりましたわね
負けたままで終るなんておできになれますまい
[女三宮方との間に] おだやかならぬことがいろいろ起ったら
とででも
面倒
些細なこ
なことが持ち上がるでしょう
朋輩同士
話し合って
[紫上は] 少しも気づかぬふうで
嘆く様子なのを
いかにも優雅な風情で
[女房たち
起きていられる
お話をなさっては
と]

一六 かう人のただならず言ひ思ひたるも、聞きにくしとおぼして、「かくこれかれあまたものしたまふめれど、一七 御心にかなひて、今めかしくすぐれたる際にもあらずと、一八 目馴れてさうざうしくおぼした

聞きづらいと
(紫上) 誰彼と大勢女君がお邸にいらっしゃるようですが

一 この姫宮が、こうしておいで下さったのは、本当に結構なことです。准太上天皇にふさわしい身分の北の方であることをいう。

二 いまだに子供心がぬけないからでしょうか、私も親しくお付き合い申し上げたいのですが。女三の宮が大層若い（十四、五歳）ことを配慮していう。

三 （女三の宮の降嫁は）恐れ多く、おいたわしいご事情のあることのようですから。朱雀院が、親代りにと源氏に依頼されたことを含む。

四 紫の上づきの女房。かつて源氏の女房で寵を受けていたが、須磨退居の際、紫の上に託された。（二巻須磨二一六頁参照）

五 六条の院に住む、ほかの女君たち。花散里や明石の上。

六 どんなお気持でしょう。はじめからご寵愛など諦めている私たちは、かえって気が楽だけれども。こういう場合は、見舞うのが当時の妻妾間の礼儀でもあった。

りつるに、一この宮のかくわたりたまへるこそめやすけれ。二なほ童心の失せぬにやあらむ、われもむつびきこえてあらまほしきを、あいなく隔てあるさまに人々やとりなさむとすらむ。ひとしきほど、劣りざまなど思ふ人にこそ、三ただならず耳たつことも、おのづから出で来るわざなれ、三かたじけなく心苦しき御ことなめれば、いかで心おかれたてまつらじとなむ思ふ」などのたまへば、四中務、中将の君などやうの人々、目をくはせつつ、「あまりなる御思ひやりかな」など言ふべし。昔は、ただならぬさまに使ひならしたまひし人どもなれど、年ごろはこの御方にさぶらひて、五異御方々よりも、「六いかにおぼすらむ。もとより思ひ離れたる人々は、なかなか心やすきを」など、おもむけつつ、とぶらひきこえたまふもあるを、かくおしはかる人こそ、なかなか苦しけれ、世の中もいと常なきものを、などてかさのみは思ひなやまむ、などおぼす。

困った
自分と同じ身分とか
たことに間に溝があるように皆が気を廻そうとするのではないかしら
黙って聞き流すわけにゆかぬことも
ついつい起るもむこうが低いなどと思う人に対しては
何とかしのですが
あまりなお心遣いですこと
などといった女房たちは
目まぜをしながら
言うらしい
[源氏が一普通のご用だけではなく親しくお使いになった者たちであるが
あれからずっと
紫の上方にお仕えして[紫上に]お味方しているのであろう
お慰め申される方も
水を向けては
こんな想像をしてくれる人の方が
かえって厄介なこと
あるのを
この
なぜそう執着することがあろう
[紫上は]
世もまことに無常なものなのに

七 あまり遅くまで起きているのも、いつになくことと皆が変に思うだろうと。「宵居」は、夜起きていること。

八 気が咎めて。「心の鬼」は、心中、みずからを責めること。

九 （女房が）夜具をおかけしたが。「衾」は、寝る時、身を覆うもの。

一〇 いかにも独り寝のさびしい幾夜かを過してきたにつけても。三日間の夜離れが続いている。

一一 これ限りと（源氏が）遠くへ行ってしまわれても。「いふかひあらまし世かは」まで、紫の上の心中。

一二 一番鶏の声。「夜深し」は、夜明けにまだ間のある暗いうちをいう。紫の上は、とうとう終夜眠らなかったのである。

一三 源氏の夢に（紫の上が）現れなさったので。当時、恋人が自分のことを思って悩んでいる時は、その魂が身を離れて夢の中に現れるという俗信があった。「かの」は、あちら、すなわち女三の宮方にいる源氏、という意。

一四 心待ちにしていた鶏の鳴くのをお聞きになったので。さきほどの「夜深き鶏の声」を源氏も聞き、鶏の音にかこつけて、まだ暗いのに帰る。

眠れぬ紫の上

あまり久しき宵居も、例ならず人やとがめむと、心の鬼におぼして入りたまひぬれば、御衾参りぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、なほただならぬここちすれど、かの須磨の御別れのをりなどをおぼし出づれば、今はとかけ離れたまひても、ただ同じ世のうちに聞きたてまつらましかばと、わが身までのことはうち置き、あたらしく悲しかりしありさまぞかし、さてそのまぎれに、われも人も命堪へずなりなましかば、いふかひあらまし世かは、と おぼしなほす。風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寝入られたまはぬを、近くさぶらふ人々あやしとや聞かむと、うちも身じろきたまはぬも、なほいと苦しげなり。夜深き鶏の声の聞こえたるも、ものあはれなり。

わざとつらしとにはあらねど、かやうに思ひ乱れたまふけにや、かの御夢に見えたまひければ、うちおどろきたまひて、いかにと心騒がしたまふに、鶏の音待ち出でたまへれば、夜深きも知らず顔に、

（御帳台に）
（源氏）
（源氏の身を）惜しみ悲しく思ったことだった
（紫上は）すぐにも
（女房たち）
（紫上が）思い悩んでいられるせいか
（源氏は）ふとお目覚めになって
（紫上が）どうしているかと胸騒ぎなさるうち

やはり平静ではいられぬ気持がするが
じこの世に無事でいらっしゃるとお聞き申すのであったらと
自分のことはさておいて
あのままあの騒ぎの中で
死んでしまっていたら
お話にもならぬ二人の仲だったろうに
気を取り直される
やはりとてもおつらそうである
にいらっしゃるのも
しみじみと胸に沁みる
身動きもせず
ことさら怨めしいとお思いではないのだが

一 建物の四隅にある両開きの扉。夜など、格子を下ろしたあとの出入りに用いる。
二 夜明けのまだ暗い空。
三 (源氏が) お帰りになったあとまで匂う香に。昨日、紫の上が「いよいよたきしめさせ」たもの。
四 「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」――春の夜の闇は、仕方のないものだ、梅の花の色ばかりは隠して見えないが、香は隠れはしないのだもの(『古今集』巻一春上、春の夜梅の花をよめる 凡河内躬恒)。
五 真っ白な庭で、すぐには雪と見分けがつかないほどなので。寝殿造りの庭は、白砂を敷きつめる。
六 「独り朱檻に凭つて立ちて晨を凌ぐ 山色初めて明らかにして水色新たなり 竹霧は暁に嶺に銜まる 月を籠め 蘋風は煖かにして江を過ぐる春を送る 子城の陰なる処には猶残れる雪あり 衙鼓の声の前には未だ塵有らず 三百年来庾楼の上 曾て多少望郷の人をか経たる」(『白氏文集』巻十六、律詩「庾楼暁望」)。「子城」は、出城。寝殿に対する東の対をなぞらえる気持がある。
七 源氏を懲らしめようというつもり。
八 (こんなに早く帰ってきたのは) あなたをこわがる気持が並々ならぬからでしょう。
九 一番下に着るもの。袖が長く出る。
一〇 この上もない身分の方と申しても、これほどの方はいらっしゃらないものなのにと。

急ぎ出でたまふ。[女三宮は]いといはけなき御ありさまなれば、乳母たち近くさぶらひけり。妻戸おしあけて出でたまふを、[源氏が]見たてまつり送る。[乳母たちが]明けぐれの空に、雪の光見えておぼつかなし。[庭の雪がかすかに光ってたどたどしい]名残までとまれる御匂ひ、「闇はあやなし」とひとりごたる。[乳母]四 [つい独り言が出る]

雪は所々消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけぢめ見えわかれぬほどなるに、「なほ残れる雪」と忍びやかに口ずさびたまひつつ、[源氏]六 御格子うちたたきたまふも、[朝帰りなさるようなことは久しくなかったので]久しくかかることなかりつるならひに、[女房]人々も空寝をしつつ、[しばらくお待たせしてから]やや待たせたてまつりて、[御格子を]引きあげたり。[源氏]ずいぶん長く待たせられて「こよなく久しかりつるに、[こごえてしまった]身も冷えにけるは。懼ぢきこゆる心のおろかならぬにこそあめれ。[でも私に罪もないのですがね]さるは罪もなしや」とて、[御衣を召し物を]御衣ひきやりなどしたまふに、[紫上は]すこし濡れたる御単の袖をひき隠して、[涙で]うらもなくなつかしきものから、[仲直りしようとはなさらぬお心配りなど]うちとけてはたあらぬ御用意など、いとはづかしげにをかし。[気がひけるほどで風情がある]一〇 限りなき人と聞こゆれど、難かめる世を、と[女三宮と]おぼしくらべらる。[つい比較される]

一一 紫の上と同じように、源氏も過去を思い起す。幼い女三の宮を見るにつけて、少女の紫の上、ともに苦難を乗り越えてきた歴史などを思い出すのである。
一二 女三の宮との新婚四日目である。
一三 女三の宮の御殿。（五三頁参照）
一四 今朝の雪に、気分が悪くなりまして。行かない口実に、風邪を引いたという。
一五 朱雀院のお耳に入っても困るし、新婚の間だけは何とか人前を繕おうとお思いになるが。女三の宮と琴瑟相和しているように見せたいと思う。
一六 お察しのないお方だと、迷惑がりなさる。紫の上が引き止めているのではないかと、誤解される立場にあることを察してほしいと思う。
一七 五日目の朝である。
一八（源氏は）今までのように、紫の上方でお目覚めになって。
一九 雪にちなんで、白い薄様（鳥の子紙の薄いもの）に書く。
二〇 私たちの間を邪魔するほどではないのですけれど、降り乱れる今朝の淡雪に思い乱れております。「心乱るる」に「乱りごこち」（病気）の意を暗示し、病気のためあなたに逢えないので思い乱れている、という。「かつ消えて空に乱るる淡雪はもの思ふ人の心なりけり」（『後撰集』巻八冬、雪のすこし降る日、女に遣しける　藤原蔭基。『古今六帖』一、雪）

源氏、女三の宮と贈答

一 よろづいにしへのことをおぼし出でつつ、［紫上が］なかなか言うことをきいて下とけがたき御けしきを怨みきこえたまひてその日は暮らしたまひつれば、［源氏は］お出かけになれさらないのをお怨みになって　二 お手紙をさし上げなさるで、寝殿には御消息を聞こえたまふ。
三 気楽な所
四 大層苦しゅうございますので
今朝の雪にここちあやまりて、いとなやましくはべれば、心やすきかたにためらひはべる。
養生しております
とあり。御乳母、「さ聞こえさせはべりぬ」とばかり、言葉に聞こえたり。異なることなの御返りや、とおぼす。
さよう申し上げました　口上で　そっけないお返事だな　［源氏は］
一五 院に聞こしめさむこともいとほし、このころばかりつくろはむ、とおぼせど、えさもあらぬを、さは思ひしことぞかし、あな苦しと、みづから思ひ続けたまふ。女君も、思ひやりなき御心かなと、苦しがりたまふ。
そうもできないので　やはり思ったとおりだ　ああ困ったことだと　ご自身でも　紫の上　一六
一七 女三の宮
今朝は、一八 例のやうに大殿籠り起きさせたまひて、宮の御方に御文たてまつれたまふ。ことにはづかしげもなき御さまなれど、御筆などひきつくろひて、白き紙に、
［女三宮は］格別気の張るようなお方ではないが　十分選んで
二〇
中道を隔つるほどはなけれども
一九

一 歌の「あは雪」により、白梅につける。
二 寝殿の西の渡り廊下。女三の宮の女房の局があったことは、五三頁注一七参照。
三 （中にお入りにならず）そのまま外を眺めて。女三の宮の返書を待つ体。何となく紫の上に憚る気持。
四 白いお召し物を何枚も重ねられて。直衣を着ないで袿姿のくつろいだ様子。
五 さきほどの白梅の枝の残りであろう。
六 あとから降るのを待ちうける雪。消えそうな残雪をいう歌語。「白雪の色分きがたき梅が枝に友待つ雪ぞ消え残りたる」（『家持集』）
七 「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯の鳴く」――梅の枝を手折ったので、移り香で袖が匂う、それで鶯はここに花があると思うのか、そばまで来て鳴いている（『古今集』巻一春上、読人しらず）。この歌の心により、手まさぐりの花をうしろに隠すのである。
八 廂と簀子の間の御簾。
九 この梅の香を桜に移したなら、もう少しもほかの花を見る気がしないだろうに。「梅が香を桜の花に匂はせて柳が枝に咲かせてしがな」（『後拾遺集』巻一春上、中原致時）。このあたり、何かと紫の上の機嫌をとるためにいう。
一〇 紅に染めた薄様。いかにも恋文らしい派手な色合いの用紙。
一一 女三の宮のご筆跡が大層幼いのを。

心乱るる今朝のあは雪

梅につけたまへり。人召して、（源氏）「西の渡殿よりたてまつらせよ」（文使い）とのたまふ。やがて見出だして、端近くおはします。白き御衣どもを着たまひて、花をまさぐりたまひつつ、友待つ雪のほのかに残れる上にうち散り添ふ空をながめたまへり。鶯の若やかに、近き紅梅の（雪が）末にうち鳴きたるを、（源氏）「袖こそ匂へ」と花をひき隠して、御簾おし（梢に）あけてながめたまへるさま、夢にも、かかる人の親にて、重き位と（重いご身分の）見えたまはず、若うなまめかしき御さまなり。（若々しく美しいご容姿である）

（女三宮の）御返りすこしほど経るここちすれば、（奥に）入りたまひて、女君に花見（暇どる感じなので）せたてまつりたまふ。（源氏）「花といはば、かくこそ匂はまほしけれな。（花という以上）桜にうつしては、また塵ばかりも心わくるかたなくやあらまし」（紫の上）（梅の花）などのたまふ。（源氏）「これも、あまたうつろはぬほど、目とまるにやあら（梅も）（沢山の花に目移りしない時節だから）（注意されるのかもしれない）む。花の盛りに並べて見ばや」などのたまふに、（女三宮から）御返りあり。紅の（梅の花を）（見たいものだ）薄様に、あざやかにおし包まれたるを、胸つぶれて、御手のいと若（いかにもそれらしく包まれているのを）（源氏は）どきりとして

一三 当分の間、紫の上にお見せしないでおきたいものだ。紫の上が、朧月夜の尚侍、朝顔の前斎院に並ぶ書の名手であること、四巻梅枝二六五頁参照。

一四 (女三の宮のお手紙を) 軽々しくすぐ人に見せたりしては。「あはあはし」は、軽々しいこと。

一四 (紫の上は) 横目で見やって、物に寄りかかって横になっていらっしゃる。

一五 おいでがないので、頼るものとてない私は空の途中で消えてしまいそうです、風に漂う春の淡雪のように。乳母たちの代作であろう。

一六 ご筆跡は、なるほど未熟で幼稚な感じがする。「げに」は、前に「御手のいと若きを」とあったのに呼応する紫の上の感想。

一七 (源氏は) ほかの女性の書いたものなら、こんなに下手だなど (紫の上に) こっそり申されようが。

源氏、女三の宮の人柄に改めて、紫の上を思う

一八 新婚五日目。

一九 今はじめて拝見する女三の宮方の女房などは。源氏は、新婚の作法として、三日間は夜ばかり来ていたので、はっきり姿も見ていないのである。

きを、しばし見せたてまつらであらばや、隔つとはなけれど、あはあはしきやうならむは、人のほどかたじけなしとおぼすに、ひき隠したまはむも心おきたまふべければ、かたそばひろげたまへるを、後目に見おこせて添ひ臥したまへり。

隠し立てするわけではないが
女三の宮のご身分柄恐れ多いと〔源氏は〕
お隠しに
なるというのも〔紫上が〕気を悪くなさるだろうから
ほんの片端を

(女三宮)
はかなくてうはの空にぞ消えぬべき
風にただよふ春のあは雪

御手、げにいと若くをさなげなり。さばかりのほどになりぬる人は、本当にこんなに幼稚ではおありでないのにと いとかくはおはせぬものをと、目とまれど、見ぬやうにまぎらはして止みたまひぬ。異人の上ならば、さこそあれなどは、忍びて聞こえたまふべけれど、いとほしくて、ただ、「心やすくを思ひなしたまへ」とのみ聞こえたまふ。

女三の宮くらいの年齢になった人は
つい目がゆくが〔紫上は〕見ないふりをなさって
〔女三宮が〕お気の毒で
〔源氏〕気の張らない方だとお思い下さ

今日は、宮の御方に昼わたりたまふ。心ことにうち化粧じたまへる御ありさま、今見たてまつる女房などは、まして見るかひありと思ひきこゆらむかし。御乳母などやうの老いしらへる人々ぞ、いで

念入りに
身じまいな
すばらしいと
さったお姿を
年とった女房連中は
お思い申すことだろう

や、この御ありさま一所こそめでたけれ、めざましきことはありなむかしと、うちまぜて思ふもありける。女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことことしく、よだけくうるはしきに、みづからは何心もなく、ものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなく、あえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬここちして、心やすくうつくしきさましたまへり。院の帝は、ををしくすくよかなるかたの御才などこそ、心もとなくおはしますと、世人思ひためれ、をかしき筋、なまめきゆゑゆゑしきかたは、人にまさりたまへるを、などてかくおいらかに生ほしたてたまひけむ、さるは、いと御心とどめたまへる皇女と聞きしを、と思ふも、なまくちをしけれど、憎からず見たてまつりたまふ。ただ聞こえたまふままに、なよなよとなびきたまひて、御いらへなどをも、おぼえたまひけることは、いはけなくうちのたまひ出でて、え見放たず見えたまふ。昔の心ならましかば、うたて心劣りせまし

一 このお方（源氏）お一方は、確かに申し分ないが、そのうちしゃくにさわることが起るだろうと。「めざまし」は目に余ること。身分の高い女三の宮が、紫の上などより寵が劣るのではないか、と案じる。

二 女三の宮。「女宮」という呼び方は、夫をもうけた人、という感じを出す。

三 まるでお召し物に埋まって、なかに身体もないかと思われるほどほっそりしていらっしゃる。

四 （源氏に対しても）特にはにかんで顔を隠したりなさらず、ただ幼な子が人見知りしないといったふうで。

五 朱雀院は、男らしく理屈っぽい方面のご学問（儒学）は、しっかりしていらっしゃないと、世間は思っているようだが。「思ひためれ」は「思ひたんめれ」の撥音無表記の形。以下「……皇女と聞きしを」まで、源氏の心中の思い。

六 趣味の方面、優雅で奥ゆかしい面は。和歌や音楽などの面。

七 とても見捨てることができないご様子である。

八 昔の自分だったら、（こんな女三の宮の人柄を知って）いやになってがっかりするだろうに。以下「いとあらまほしきほどなりかし」まで、源氏心中の思い。

九 あれやこれやといろいろな女がいるが、とび抜けて立派なのはいないものだ。

一〇 はたから見れば、（女三の宮も）全く申し分のない方なのだ。身分の点で、外見からすれば正室としてふさわしい、と思い直す。

一一 二人一緒に、いつも離れずお暮しになっていた今までよりも。女三の宮降嫁があるまでの、紫の上と暮した年月をいう。

一二 紫の上のご様子は、何といってもまたとないほど立派で。

一三 我ながら、よくぞここまで教育したものだとお思いになる。前に、朱雀院に対して「などてかくおいらかに生ほしたてたまひけむ」（六四頁）と、その女三の宮教育を批判したことと対応する。

朱雀院より、源氏、紫の上に依頼の手紙

一四 一夜の隔ても、よそで明かした朝の間も。

一五 どうしてこんなに恋しく思われるのかと、不吉な予感がするほどである。死別を怖れる気持。

一六 朱雀院。

一七 西山の御寺。（一二頁参照）

一八 気を遣って、私（朱雀院）が何とか思うのではないかなど、遠慮されることなく。以下「もてなしたまふべく」まで、朱雀院の消息の大意をいう。

を、今は、世の中を皆さまざまに思ひなだらめて、（十人十色と大目に見て）とあるもかかるも、際離るることは難きものなりけり、（それぞれいろいろ特色のある女がいるものなのだ）とりどりにこそ多うはありけれ、一〇よその思ひは、いとあらまほしきほどなりかし、とおぼすに、一一さし並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞなほありがたく、一三われながらも生ほしたてけりとおぼす。一四一夜のほど朝の間も、（紫上が）恋しくおぼつかなく、（気になって）いとどしき御心ざしのまさるを、一五などかくおぼゆらむと、ゆゆしきまでなむ。

院の帝は、一六月のうちに（この二月中に）御寺にうつろひたまひぬ。この院に、（源氏）あはれなる御消息ども聞こえたまふ。姫宮の（女三の宮に対してはもちろんのこと）御ことはさらなり、一八わづらはしくいかに聞くところやなど、憚りたまふことなくて、ともかくも、（源氏の）お心次第にお扱い下さるようにと）ただ御心にかけてもてなしたまふべくぞ、（何度もお便りをさし上げなさるのだった）たびたび聞こえたまひける。されど、（いとらしく後ろ髪引かれる思いで）あはれにうしろめたく、（お案じ申されたる）幼くおはするを思ひきこえたまひけり。

（朱雀院から）お便りが特別にある

紫の上にも、御消息ことにあり。

（朱雀院）女三の宮　何のわきまえもない有様でそちらに参っておるようですが

をさなき人の、ここちなきさまにてうつろひものすらむを、罪なくおぼしゆるして後見たまへ。尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ。

背きにしこの世に残る心こそ
入る山路のほだしなりけれ

闇をはるけで聞こゆるも、をこがましくや。

源氏

とあり。大殿も見たまうて、「あはれなる御消息を、かしこまり聞こえたまへ」とて、御使にも、女房して、土器さし出でさせたまひて、しひさせたまふ。御返りはいかがなど、聞こえにくくおぼしたれど、ことことしくおもしろかるべきをりのことならねば、ただ心をのべて、

つつしんでお受けしなさい　何と お返事したものかと　盃をさし出させなさって　何杯もすすめさせなさる　〔紫上は〕

背く世のうしろめたくはさりがたき
ほだしをしひてかけな離れそ

などやうにぞあめりし。女の装束に、細長添へてかづけたまふ。御

大げさに趣向を凝らすような場合でないので　素直に思って　たままを述べて

一 罪もない者と大目に見て下さって、世話をしてやって下さい。

二 お考え下さってもよい縁故もあろうかと存じます。女三の宮と紫の上は、いとこになる。

先帝 ─ 式部卿宮 ─ 紫の上
先帝 ─ 藤壺宮 ─ 藤壺女御 ─ 女三の宮

三 いったん背いたこの世に残る、子を思う心こそ、山に入ろうとする私の妨げです。「この世」に「子」を掛ける。「世のうきめ見えぬ山路に入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」（『古今集』巻十八雑下、物部良名）による。

四 子ゆえの心の闇を晴らすことができないで、こんなお便りをさし上げますのも、お見苦しいことでしょう。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）

五 朱雀院からの文使い。

六 お捨てになったこの世がご心配でしたら、離れがたいお方を無理にお振り捨てなさいますな。

七 などといったふうにお書きになったようだ。草子地。

八 裳、唐衣、表着、袿など。使者の禄である。

九 童女や貴婦人の装束。禄の物を肩にかけて退出するので、「かづく」（かぶせる）という。

一〇 紫の上のご筆跡。返書の筆跡である。

手などのいとめでたきを、院御覧（朱雀院）じて、何ごともいとはづかしげなめるあたりに、いはけなくて見えたまふらむこと、いと心苦しうお（いになる）ぼしたり。

今はとて、女御、更衣たちなど、おのがじし別れたまふも、あは（しんみ）れなることなむ多かりける。尚侍の君は、故后の宮のおはしまし（女三の宮）（朧月夜）し二条の宮にぞ住みたまふ。姫宮の御ことをおきては、この御ことをなむかへりみがちに、帝もおぼしたりける。尼になりなむとおぼしたれど、かかるきほひには、したふやうに心あわたたしく、といさめたまひて、やうやう仏の御ことなどいそがせたまふ。

源氏

六条の大殿は、あはれに飽かずのみおぼしてやみにし御あたりなれば、年ごろも忘れがたく、いかならむをりに対面あらむ、今一たびあひ見て、その世のことも聞こえまほしくのみおぼしわたるを、かたみに世の聞き耳も憚りたまふべき身のほどに、いとほしげなりし世の騒ぎなどもおぼし出でらるれば、よろづにつつみ過ぐしたま

（朧月夜は）尼になってしまおうと（朱雀院が）お（後ろ髪を引かれるように）（朱雀院）

（朧月夜）

（朱雀院は）大層つらくお思（りと悲しいことが多いのだった）

（一四）（一三）（一五）（一二）（一六）（一七）（一八）

一二 何ごとも大層すぐれていらっしゃる方（紫の上）の側で、（女三の宮が）至らぬ様子でお暮しになっているであろうことを。「見えたまふ」は、見られていらっしゃる。

一三 いよいよこれまでというので、女御、更衣たちが、おのおの上皇御所（朱雀院）を退出されるのも。朱雀院の山住みにつき、それぞれ実家に帰られる。

朧月夜の尚侍、退出

一四 朧月夜の尚侍。

一五 弘徽殿の大后。崩御のことは、この巻冒頭に触れられていた。

一六 もとの右大臣（弘徽殿の大后や朧月夜の父）邸。後の七三頁参照。大后の御所であったので、宮という。

一七 私に負けじとばかりに尼になるのは、あとを追うようで気ぜわしいから。今すぐ出家するのは、一時の感情に動かされてのことで、本当の出家とはいえない、ということ。

源氏、朧月夜と文通

一八 お気の毒だった騒動なども思い出されるので。源氏の須磨流謫のこと。源氏とのことで、一時参内が停っていた（二巻須磨二三五頁参照）。

一（朧月夜が）このようにお暇のある身になられて。朱雀院の出家により、独り身になったことをいう。

二 世の中の移り変りを静かに考えていられるであろうこの頃のご様子が。朧月夜も、朱雀院の出家にともなって、世間の栄枯盛衰に静かに思いをいたしているであろう、と源氏は想像する。

三 通例のお見舞にかこつけて。「おほかたの」は、特別の意味のない儀礼的な、の意。朱雀院の山籠り、自邸退出といった身の上の変化に挨拶すること。

四 この上もないほど何もかも揃い、円熟しきった（朧月夜の）お手紙の様子をご覧になるにつけても。

五 朧月夜の女房。昔、源氏との間を取りもったこと、二巻賢木一四七頁、須磨二三〇頁に見える。

六 中納言の君の兄の和泉前司。「兄」は、女から男の兄弟をいう語。和泉は、下国。国守は、従六位下相当。

七 「いかにしてかく思ふてふことをだに人づてならで君に語らむ」（『後撰集』巻十三恋五、敦忠朝臣。『大和物語』）。「物越」は、障子（襖）や簾を隔てること。

八 この節は、そんな忍び歩きもむつかしい身分ゆえ。准太上天皇という大層な身分。

九 お互い安心だ。相手は「前の守」であるから、お前も安心だという裏には、秘密を守って事を成し遂げたら、次の国守就任は引き受けた、という含みがある。

一〇 どうしたものだろう。以下「……はづかしかるべけれ」まで、朧月夜の心中の思い。

ひけるを、一かうのどやかになりたまひて、二世の中を思ひしづまりたまふらむころほひの御ありさま、いよいよゆかしく心もとなければ、あるまじきこととはおぼしながら、三おほかたの御とぶらひにことづけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ。若々しかるべき御あはひならねば、御返りも時々につけて聞こえかはしたまふ。昔よりも四こよなくうち具し、ととのひ果てにたる御けはひを見たまふにも、なほ忍びがたくて、昔の中納言の君のもとにも、五心深きことどもを常にのたまふ。

（知りたく気になってならないので）
（けしからぬこととはお分りになっているものの）
（心をこめた書きぶりで始終お便りをさし上げなさる）
（若々しく色恋めいて取りなす間柄ではないので）
（時に応じて）
（源氏は）やはり我慢できず
（切ない気持をいろいろと）

六かの人の兄なる和泉の前の守を召し寄せて、若々しく、いにしへに返りてかたらひたまふ。「七人伝ならで、物越に聞こえ知らすべきことなむある。（そなたから）しかるべくお話し申してご承知願った上で　ごくこっそりお伺いしようから　そなたもめったに他人には漏らされはすまいと思うとから　八今はさやうのありきも所狭き身のほどに、おぼろけならず忍ぶれば、そこにもまた人には漏らしたまはじと思ふに、九かたみにうしろやすくなむ」とのたまふ。尚侍の君、一〇いでや、世の中を思ひ知る

（話を持ちかけられる（源氏））
（昔に戻って）
（お耳に入れねばならぬこと）
（一通りではなく秘密のことだ）
（男女のことが分ってくるに）

一一 前から、つれない（源氏の）お心を、ずいぶんと味わってきた今になって。「思ひつむ」は、「思ひ集む」のつづまった語。右大臣が、かつて源氏を婿にしようとした時、すげない態度だったことなどを思い出す（二巻葵一二〇頁、賢木一八七頁参照）。

一二 良心に訊かれたら、答えようがないではないか。「無き名ぞと人には言ひてありぬべし心の問はばいかが答へむ」（『後撰集』巻十一恋三、読人しらず）

一三 昔、無理な逢瀬に苦労した時でさえ。昔、弘徽殿の大后にきびしく見張られていた時。以下「取り返したまふべきにや」まで、源氏の心中。

源氏、朧月夜と再会

一四 いかにもご出家なさった朱雀院に対して、不実なことのようではあるが。

一五 （朧月夜が）いったん立ってしまった浮き名を、あらためて取り消すことがおできになろうかと。「むら鳥の立ちにし我が名今さらに事なしぶともしるしあらめや」（『古今集』巻十三恋三、読人しらず）による。

一六 和泉前司。「和泉なる信田の森の楠の千枝に分れて物をこそ思へ」（『古今六帖』二、森）。「信田の森」は、和泉の歌枕。森は道中目印になるので、こういう。

一七 末摘花。二条の東の院に引き取られたことは、三巻蓬生八二頁参照。

一八 昼間などに人目にたって出かけるのも、よくありませんから。身分柄大げさになるという。

一九 （源氏が）ひどくそわそわなさるのを。

つけても
につけても、一二昔よりつらき御心を、ここら思ひつめつる年ごろの果てに、あはれに悲しき御ことをさし置きて、いかなる昔語りをか聞こえむ、げに人は漏り聞かぬやうありとも、一二心の問はむこそいとはづかしかるべけれ、とうち嘆きたまひつつ、なほさらにあるまじき事ばかりよしをのみ聞こゆ。

心にしみて悲しい朱雀院ご出家のことをさしおいて
なるほど誰も秘密を漏れ聞かぬとしたところで
吐息をおつきになっては
やはり逢うことは叶わぬ旨のお返

一三 いにしへわりなかりし世にだに、心かはしたまはぬことにもあらざりしを、一四げに背きたまひぬる御ためうしろめたきやうにはあれど、あらざりしことにもあらねば、今しもけざやかにきよまはりて、一五立ちにしわが名、今さらに取り返したまふべきにや、とおぼし起こして、一六この信田の森を道のしるべにてまうでたまふ。女君には、「東の院にものする常陸の君の、日ごろわづらひて久しくなりにけるを、もの騒がしきまぎれにとぶらはねば、いとほしくてなむ。一八昼などけざやかにわたらむも便なきを、夜の間に忍びてとなむ思ひはべる。人にもかくとも知らせじ」と聞こえたまひて、一九いといたく心懸想し

〔朧月夜が〕同心なさらぬことでもなかったのに
昔なかったことでもないのだから
今になってきっぱりと潔白にしたところで
〔源氏に〕
〔源氏は〕気を取り直さ
案内役に立てて〔二条宮に〕
紫の上〔源氏〕
このところ久しく患っていましたのに
何かと忙しさにとり紛れて見舞っていないので
気の毒に思いまして
こっそりとと思います
誰にも見舞に行くとも知らせますまい

たまふを、例はさしも見えたまはぬあたりを、あやしと見たまひて、思ひ合はせたまふこともあれど、姫宮の御こととののちは、何ごとも、いと過ぎぬるかたのやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす。

いつもはさほど気になさるとは思えぬ方のことを　おかしいと〔紫上は〕

その日は、寝殿へもわたりたまはで、御文書きかはしたまふ。たきものなどに心を入れて暮らしたまふ。宵過ぐして、むつましき人の限り四五人ばかり、網代車の、昔おぼえてやつれたるにて出でたまふ。和泉の守して御消息聞こえたまふ。かくわたりおはしましたるよし、ささめき聞こゆれば、おどろきたまひて、「あやしく、いかやうに聞こえたるにか」とむつかりたまへど、「をかしやかにて帰したてまつらむに、いと便なうはべらむ」とて、あながちに思ひめぐらして入れたてまつる。御とぶらひなど聞こえたまひて、「ただここもとに、物越にても。さらに昔のあるまじき心などは、残らずなりにけるを」と、わりなく聞こえたまへば、いたく嘆く嘆くゐ

いよいよ当日は　お手紙だけやりとりなさる　昔の忍び歩きが思い出される粗末なのに乗って　ご案内を乞われる　源氏がおいでになった旨を　気心の知れた供人だけ

〔女房〕　〔女房〕　機嫌を悪くされたが　〔女房〕　〔源氏〕　無理な算段をして　お見舞など申し上げなさって　本当に昔のような不埒な考えなど　〔源氏〕　少しも　持っていませんから　切々とお願い申されると　〔朧月夜は〕　溜息をつきながら

一 思い当られることもあるが。朧月夜と度々文をやり取りしていることを、女房などから聞いていたのであろう。
二 何ごとも、そう今までのように嫉妬もなさらず、少しよそよそしい気持ができて、知らぬ顔をしていらっしゃる。
三 女三の宮の所。
四 源氏は、薫物など念入りに薫きしめて一日過される。女三の宮の時とは違って、自分一人でする。
五 夜の更けるのを待って。
六 屋形や側面を網代（檜の薄板を編んだもの）で張った牛車。大臣、納言、大将の略式用の車。
七 取次ぎの女房が、そっとお伝え申し上げると。和泉の守の妹の中納言の君であろう。
八 おかしいこと、（和泉の守が）何とお伝えしたのか。前に「なほさらにあるまじきよしをのみ聞こゆ」とあった。
九 色めいたおあしらいでお帰し申すのは、具合が悪うございましょう。色事の相手のように、対面をことわってお帰し申すわけにはゆくまい、の意。
一〇 源氏をお入れ申す。次の頁に「辰巳のかたの廂」とある。
一一 ほんのここまで（お出まし下さい）、物越しでも結構ですから。源氏のいる廂の間と母屋の境まで、出てきてほしいと頼む。

二二（源氏は）案の定だ、やはりすぐに靡くところは（昔のままだ）と、うれしいながらもお思いになる。前に「いにしへわりなかりし世にだに、心かはしたまはぬことにもあらざりしを……」とあったのを受ける。

二三 お二人とも並々ならぬ思いでのお出ましなので。「物越にての対面なれば、源も朧も身じろきばかりにその気色を知りたまふなり」（『湖月抄』）

二四（ご対面の場所は）東の対なのであった。昔、藤の花の宴の行われた所（二巻花宴六〇頁注七参照）。

二五 東南の廂の間にお坐り頂いて。南廂の東の間。

二六（母屋との間の）襖の端はしっかり掛金がかけてあるので。物越しの対面である。

二七 まるで若い者のような気がしますね。こんなに用心深くするとは、まるで危険な若者扱いだ、の意。

二八「春の池の玉藻に遊ぶ鴛鴦の足のいとなき恋もするかな」（『後撰集』巻二春中、宮道高風）により、鴛鴦を鴛鴦（夫婦仲がよいとされる）に言いかえた。

二九 かくも移り変る世の中であることよ。弘徽殿の大后在世中の盛時と比較する。

三〇 平中の真似ではないが、本当に涙がこぼれる。平中が、女の気を引くため、空泣きしたことをいう（一巻末摘花二八三頁注三参照）。

三一 長い年月を隔ててやっと逢うのに、これでは、堰きとめがたく涙が落ちることです。「堰」に「関」を掛け、「逢坂」の縁語。「逢坂」に「逢う」が響く。

らにじり寄って来られた
ざり出でたまへり。さればよ、なほ気近さはと、かつおぼさる。三三かたみにおぼろけならぬ御みじろきなれば、感慨も浅からぬものがある あはれも少なからず。一四東の対なりけり。一五辰巳のかたの廂にする、たてまつりて、一六御障子の

（源氏）一七しりはかためたれば、「いと若やかなるここちもするかな。年月の（あれ以来）の年月の数も 積りをも、はっきり言えるほどいつも恋い焦がれている私には まぎれなく数へらるる心ならひに、こんな他人行儀なお扱いは かくおぼめかしきは、とてもひどいと思われます いみじうつらくこそ」と怨みきこえたまふ。

夜いたくふけゆく。一八玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々などあはれに聞こえて、人気の少ない しめやかで 二条の宮しめじめと人目少なき宮のうちのありさまも、一九さも移りゆく世かなとおぼし続くるに、二〇平中がまねならねど、まことに涙もろになむ。

[源氏は] 昔に変りて、年輩者らしく落着いてお話しされるものの おとなおとなしくは聞こえたまふものから、この隔てをこのままではと [障子を] くてやと、引き動かしたまふ。

（源氏）二一年月をなかに隔てて逢坂の

さもせきがたく落つる涙か

朧月夜
女、

一 私も涙ばかりは、関の清水のように堰き止めがたく流れ出ますが、お逢いする道はもはや絶え果てました。「清水」は、逢坂の関にある古来有名な泉。「逢ふ道」に「近江路」を詠みこみ、逢坂の関の縁語。

二 昔を思い出されるにつけても、誰のせいであんな大変なこともあった世間の騒ぎだったのか、大体が私のせいだったのだ、と思い出されるにつけても。朧月夜との密会露顕が、須磨流謫の端緒になったことをさす（二巻賢木巻末参照）。以下「え心強くももてなしたまはず」まで、朧月夜が、次第に源氏に靡いてゆく気持を述べる。

三 本当に、今一度だけお目にかかってもいいことなのだと。「げに」は、源氏の懇願の言葉を受けたもの。

四 あれこれと愛情の問題も分り、（源氏との）過去のことが後悔され。（三巻澪標一三頁、三〇頁参照）

五 公私のことにつけて、数限りなく物思われることが重なって。「公」は、政権の推移、尚侍のままで終った宮廷における自分の身分のことなどをいうのであろう。

六 昔に変らず洗練された物腰で、若々しく愛敬があって。やっと逢えた朧月夜の様子。

七 一通りではない世間への遠慮にも、（また源氏への）思慕にも、思い乱れて。

涙のみせきとめがたき清水にて
ゆき逢ふ道ははやく絶えにき

全くお受け付けにならないが
などかけ離れきこえたまへど、いにしへをおぼし出づるも、誰により、多うはさるいみじきこともありし世の騒ぎぞは、と思ひ出でたまふに、げに今一たびの対面はありもすべかりけりと、ご決心が鈍るのおぼし弱るも、もとよりづしやかなるところはおはせざりし人の、年ごろは、あれ以来ずっとも もとも重々しいところはおありでなかった方が

さまざまに世の中を思ひ知り、来し方をくやしく、公私のことに触れつつ、数もなくおぼし集めて、いといたく過ぐしたまひにたれど、昔おぼえたる御対面に、その世のことも遠からぬここちして、

昔が思い出される　大層自重して暮してこられたのだが　若かった当時のこともつい先頃のような気がして

いつまでも気強い態度をおとりになれない
え心強くももてなしたまはず。なほらうらうじく、若うなつかしくて、一方ならぬ世のつつましさをも、あはれをも思ひ乱れて、嘆きがちにてものしたまふけしきなど、今はじめたらむよりもめづらしくあはれにて、明けゆくもいとくちをしくて、出でたまはむ空もなし。

今はじめて逢った場合よりも目新しい感じで心に残り　［夜の］　お帰りになる気もしない

八 いろいろの鳥。歌語。「百千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく」（『古今集』巻一春上、読人しらず）がある。

九 昔、右大臣が藤の宴をなさったのも、ちょうど今頃のことだったなと。右大臣家の藤の宴は「弥生の二十余日」であった（二巻花宴五八～五九頁参照）。この二条の宮が旧右大臣邸であることがこれで分る。

一〇 あれからずいぶん長い年月がたったことも。源氏今年四十歳。花宴の巻では二十歳。

一一 この藤よ、どのようにして染め出した色なのか。やはりえもいえぬ風情のある美しさだな。どうしてこの花の蔭を立ち去ることができよう。濃い紫の色を賞めたもの。「にほひ」は、美しい色艶。藤に、朧月夜をよそえる気持がある。この藤、寝殿の東、すなわち東の対の側にあったこと、花宴六〇頁に見える。

一二 築山のわき。

一三 （朧月夜は）どうして（源氏を）婿君としてご一緒にお過しにもならないのだろう。以下「……響きてやみにしよ」まで、中納言の君の思い。

一四 お宮仕えにも限度があって、格別のご身分になられることもなかったのに。立后などもなかったことをいう。

一五 亡き弘徽殿の大后が、何かとお心を砕かれ、とんでもない騒動で、ご身分柄でもない（源氏との間の）浮いたお噂まで立って終ってしまったのだ。須磨流謫の契機になった密事露顕のこと。

朝ぼらけのただならへ空に（美しい空に）、百千鳥（八）の声もいとうららかなり。花は（桜の花は）皆散り過ぎて、名残（なごり）かすめる梢（こずえ）の浅緑（あさみどり）なる木立（こだち）、昔藤（九）の宴（えん）したまひし、このころのことなりけりかし、とおぼし出づる、一〇月の積りにけるほども、そのをりのこと、（思い出されるが）かき続け（次々としみじみ思い出される）あはれにおぼさる。中納言の君、見たてまつり送るとて、（源氏のお帰りを）妻戸おしあけたるに、立ち返りた（またお戻りになって）まひて、「この（源氏）藤よ、いかに染めけむ色にか。なほえならぬ心添ふ（どうしても帰りにくそうにしてためらっていらっしゃる）にほひにこそ。いかでかこの蔭（かげ）をば立ち離るべき」と、わりなく出でがてにおぼしやすらひたり。一二山際（ぎは）よりさし出づる日のはなやかなる（照りはえて）にさしあひ、目もかかやくここちする（源氏の）御さまの、（この上もなくお年に添えていよいよ立派になられたご様子などを）こよなくねび加はりたまへる（長の年月を経て拝見するの）御けはひなどを、（久しぶりに）めづらしくほど経（へ）ても見たてまつるは、（いよいよ世の常の人とも思われぬ気がするので）まして世の常ならずおぼゆれば、一三さるかたにてもなどか見たてまつり過ぐしたまはざらむ、一四御宮仕へにも限りありて、際（きは）ことに離れたまふこともなかりしを、一五故宮（こみや）のよろづに心を尽くしたまひ、よからぬ世の騒ぎに、軽々（かろがろ）しき御名さへ響きてやみにしよ、など思ひ

一 尽きぬ思いがたくさん残っているに違いないお二人の語らいの締めくくりとしては、本当にもっとあとを続けさせたいものだが。「なめるを」は「なんめるを」の撥音無表記の形。「める」は、婉曲表現。

二 中門廊の妻戸口。「中門廊」は、一巻図録六参照。

三 そっと催促申し上げる。「声づくる」は、注意を促すため、咳払いすること。

四 あなたゆえに、須磨の浦に身を沈めて暮したことも忘れはしないのに、また懲りもせずにこの家の藤（淵）に身も投げてしまいそうです。藤の美しさに（美しいあなたに）命も投げ捨てそうだ、の意。「こりずまに」に「須磨」を詠み込む。「こりずまにまたも無き名は立ちぬべし人憎からぬ世にし住まへば」（『古今集』巻十三恋三、読人しらず）。「藤波」は、藤の花のこと。「淵」を響かせ、「沈む」「身を投ぐ」は縁語。「恋しさに身を投げつべし慰むることに従ふ心ならねば」（『興風集』）

五 美しい花のもとには、やはり身を寄せたくて。「花の蔭」は、源氏を喩えていう。歌語。「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは」（『古今集』巻二春下、躬恒）

六 身を投げようとおっしゃる淵も、本当の淵ではありませんから、そんな偽りの淵の波に、性懲りもなく袖を濡らすまい（かかわりあうまい）と思います。「淵」に「藤」を掛け、「波」は「藤波」の縁語。

出でらる。一名残多く残りぬらむ御物語のとぢめは、げに残りあらせまほしきわざなめるを、〔ご身分柄〕心にまかせたお振舞もかなわぬところへ 大勢の人 御身を心にえまかせたまふまじく、ここら目に触れることも大層恐ろしく用心もされるので の人目もいと恐ろしくつつましければ、〔日が〕やうやうさし上がりゆくに、〔源氏は〕気が気でなくて 心あわたたしくて、廊の戸に御車さし寄せたる人々も、供人たち 忍びて声づくりきこゆ。

供人を呼ばれて
人召して、かの咲きかかりたる花、〔藤の〕一枝折らせたまへり。

〔源氏〕
沈み四しも忘れぬものをこりずまに
身も投げつべき宿の藤波

大層思い悩んでいらっしゃって
いといたくおぼしわづらひて、〔簀子の高欄に〕寄りゐたまへるを、〔中納言の君は〕おいたわしく拝見する こと改めてひどく気の引ける思いで 朧月夜 まつる。女君も、今さらにいとつつましく、さまざまに思ひ乱れたまへるに、五花の蔭はなほなつかしくて、

〔朧月夜〕
身を投げむ六淵もまことの淵ならで
かけじやさらにこりずまの波

若々しいお忍びの逢瀬を 源氏自身も
いと若やかなる御ふるまひを、心ながらもゆるさぬことにおぼしな けしからぬことだとは

七 関守の監視もきびしくないのに気を許してか。朧月夜は今独り住まいである。「関守の……」は、「人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにうちも寝ななむ」（『古今集』巻十三恋三、東の五条わたりに、人を知りおきてまかり通ひけり。忍びなる所なりければ、門よりしもえ入らで、垣のくづれより通ひけるを、度かさなりければ、主人聞きつけて、かの道に夜ごとに人をふせて守らすれば、行きけれど、え逢はでのみ帰りて、よみてやりける業平朝臣）による。『伊勢物語』五段にもあり、相手は二条の后。「主人」は、五条の后（仁明后）。朧月夜は二条の宮に住み、弘徽殿の大后が生前厳しく二人を監視したことなど、よく符合する。

紫の上のもとに帰った源氏

八 あの当時も、誰にもまさって限りなくご執心だったのに。以下「……少なからむ」まで、草子地。

九 源氏は前よりも一層深い愛情を、来世までかけてお約束なさる。「契り」は、約束。変らぬ心をいう。「忘るらむと思ふ心の疑ひにありしよりけにものぞ悲しき」（『伊勢物語』五十六段）による言葉遣い。

一〇 物越しにほんのしばらくお話ししたものだから、もの足りぬ気がする。以下、昨夜のことを一通りの対面のように言いなす。

一一 どちらつかずのよるべない私としては、つろうございます。「中空」は歌語。

〔またの逢瀬を〕約束しておいてお帰りになる

がら、関守の固からぬたゆみにや、いとよくかたらひおきて出でたまふ。そのかみも、人よりこよなく心とどめて思うたまへりし御心ざしながら、はつかにてやみにし御仲らひには、いかでかはあはれも少なからむ。

わずかばかりでとだえてしまったお二人の仲だから　どうして恋の思いのつのらぬことがあろう

大層人目を忍んで戻って来られた

いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ち受けて、女君、

寝乱れたお姿を　紫の上

そんなことだろうと　気づかないふりをしていらっしゃる

さばかりならむと心得たまへれど、おぼめかしくもてなしておはす。なかなかうちふすべなどしたまへらむよりも、心苦しく、などかくしも見放ちたまへらむとおぼさるれば、ありしよりけに深き契りをのみ、長き世をかけて聞こえたまふ。尚侍の君の御ことも、また漏らすべきならねど、いにしへのことも知りたまへれば、まほにはあらねど、「物越にはつかなりつる対面なむ、残りあるここちする。いかで人目咎めあるまじくもて隠して、今一たびも」とかたらひきこえたまふ。うち笑ひて、「今めかしくもなり返る御ありさまかな。昔の恋を今さらむし返しなさるので　軽く笑って　〔紫上〕ずいぶん若返ったお振舞いですこと　お話し申される

かえってやきもちをやいたりなさるよりも　つらくて　かまって下さらないのかとご心配なので　〔紫上は〕昔の事件もご存じなので　誰にも　ありのままでは　ないが〔源氏〕　人に見咎められないようにそっと　もう一度だけでも　うち割って

昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」とて、さ

一 いっそ素直に抓るなりなんなりして、（私のどこが悪いか）教えて下さい。

二 他人行儀に、思うこともおっしゃらないふうには、今までお仕向けしてこなかったのに。

三 お世話役の乳母たちが、（源氏のおわたりがないのを）不平がましくお噂申し上げた。

四 （女三の宮が）面倒な方と思われるようなことであれば。嫉妬などして、正夫人として重んじるよう求める人であったら、の意。

五 そちら（女三の宮の方）も、紫の上以上に気を遣わねばならないのだが。

明石の女御、懐妊のため、退出

六 明石の女御。桐壺を御殿に賜ること、四巻梅枝二六四頁に見える。

七 おめでたのためのご不快（悪阻）なのであった。

八 まだごくかよわいお年頃なので。当年十二歳。

九 大層心配だと、どなたも（東宮も源氏も）お思いになるようだ。

すがに涙ぐみたまへるまみの、（目もと）いとらうたげに見ゆるに、（かわいらしく思われるので）「かう心やすからぬ御けしきこそ苦しけれ。ただおいらかに引き抓みなどして教へたまへ。隔てあるべくもならはしきこえぬを、思はずにこそなりにける御心なれ」とて、（心外なお気持になってしまわれましたね）（何やかやとご機嫌をおとりになっているうちに）（すっかり白状してしまわれたご様子である）よろづに御心とりたまふほどに、何ごともえ残したまはずなりぬめり。（女三の宮）宮の御方にも、（すぐにもお出でになれないで）とみにえわたりたまはず、こしらへきこえつつおはします。姫宮は、（女三の宮）何ともおぼしたらぬを、御後見どもぞやすからず聞こえける。わづらはしうなど見えたまふけしきならば、そなたもまして心苦しかるべきを、（源氏は女三宮を）おいら素直でかわいらしいおもちゃのように）かにうつくしきもて遊びぐさに思ひきこえたまへり。

桐壺の御方は、（入内以来ずっとご退出がかなわず）うちはへえまかでたまはず、御暇のありがたければ、（おひまが出そうにないので）心やすくならひたまへる若き御心に、いと苦しくのみおぼしたり。夏ごろなやましくしたまふを、（今までお気楽に過してこられたお若いお年頃とて）（ご気分が悪くていらっしゃったが）（東宮は）（お里下がりを）（女御は）つらいとみにもゆるしきこえたまはねば、いとわりなしとおぼす。めづらしきさまの御ここちにぞありける。まだいとあえかなる御ほどに、いとゆゆしくぞ、誰も誰もおぼ

紫の上、女三の宮に対面を申し出る

すらむかし。〔女御は〕やっとご退出なさった からうしてまかでたまへり。一〇姫宮のおはします御殿の東面に、御方はしつらひたり。明石の御方、今は御身に添ひて出で入りたまふも、あらまほしき御宿世なりかし。

一一 明石の上。入内以来女御に付き添って世話をしている（四巻藤裏葉二九五～九頁参照）。

一二 紫の上。

一三 中の戸を開けて、ご挨拶申し上げましょう。「中の戸」は、寝殿の東面と西面を隔てる中仕切りの戸。障子（襖）であろう。四巻野分一一二五頁には、「内の御障子」とある。

一四（紫の上は）女三の宮よりも、明石の上が気の張る様子で、女御のお側に控えているであろうとお考えになるので。「はづかしげ」は、こちらが気のひけるような立派な様子。女御入内の折の対面で、その人柄を知っている（藤裏葉二九七頁参照）。「まじる」は、人々のなかにいること。

一五 あちらの対にいます者。紫の上のこと。東の対に住む。寝殿の正室に対して、卑下した言い方。

一六 明石の女御。「淑景舎」は、桐壺の中国風の名。

一七 お近づき申し上げたいと申しているようですが。「きこえさす」は、女三の宮に対する最高敬語。

対の上、こなたにわたりて対面したまふついでに、「姫宮にも、中の戸あけて聞こえむ。かねてよりもさやうに思ひしかど、ついでなきにはつつましきを、かかるをりに聞こえ馴れなば、心やすくなむあるべき」と、大殿に聞こえたまへば、うち笑みて、「思ふやうなるべき御かたらひにこそはあなれ。いとをさなげにものしたまふめるを、うしろやすく教へなしたまへかし」と、ゆるしきこえたまふ。宮よりも、明石の君のはづかしげにてまじらむをおぼせば、御髪すましひきつくろひておはする、たぐひあらじと見えたまへり。

（紫上）女三の宮　明石の女御方　前々からもそう思っていましたけれども　何かの折　こんな機会にお親しくして頂けましたら　〔私も〕安心でございますでないと気がひけますが　〔満足そうに〕　〔源氏〕それこそ　私の望んでいるようなお付合いでありましょう　〔女三宮は〕ひどく子供っぽくていらっしゃるよ　洗い清め身づくろいをしていらっしゃるお姿は　二人あるまいとお見えになる　うですから　心配ないようによく教えてあげて下さい

一三 中の戸。入内以来女御に付き添って世話をしている（四巻藤裏葉二九五～九頁参照）。

一四 紫の上。

大殿は、宮の御方にわたりたまひて、「夕方、かの対にはべる人の、淑景舎に対面せむとて出で立つそのついでに、近づききこえさせまほしげにものすめるを、ゆるしてかたらひたまへ。心などはい

（源氏）女三の宮　一五　一六　一七　お許しになって会って下さい　〔紫上は〕

とよき人なり。まだ若々しくて、御遊び（お遊び相手としても）がたきにもつきなからずなむ（不似合いではないでしょう）」など聞こえたまふ。「はづかしうこそはあらめ。（女三宮）気の張ることでしょうね　何ごとをか聞こえむ（どんなことをお話し申しましょう）」と、おいらかにのたまふ。（源氏）お返事というものは　先方の言うことに応じて考えつかれるとよいのです　おっとりとおっしゃる　ひてこそはおぼし出でめ。隔て置きてなもてなしたまひそ」と、こまかに教へきこえたまふ。御仲うるはしくて過ぐしたまへとおぼす。他人行儀なおあしらいはなさいますな　あまりに何心もなき御ありさまを見あらはされむも、（紫上に）はづかしくあぢきなけれど、（無邪気な〔女三宮の〕）さのたまはむを、心隔てむもあいなしと、（気まり悪くおもしろくないけれども）（〔源氏は〕）おぼすなりけり。

対には、（紫の上は）かく出で（ご対面の用意などなさるものの）立ちなどしたまふものから、われより上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ、など思ひ続けられて（ついいつまでも考え続けて）、うちながめたまふ。手習などするにも、おのづから古言も、もの思はしき筋にのみ書かるるを、さらばわが身には思ふことありけりと、身ながらぞおぼし知らるる。（物思いに沈まれる　物思いを詠んだ歌ばかりおのずと筆にしているので　さては私には思い悩むことがあったのだと　我ながらあらためて悟りになる）院わたりたまひて、（源氏）宮、（女三の宮）女御の君などの御さまどもを、

一（女三の宮と紫の上の）お二人が仲良く、義理をわきまえてお暮しなさるようにと（源氏は）願われる。「うるはし」は、ここでは妻妾の礼に適うこと。

二 せっかく（紫の上が）会いたいとおっしゃるものを、止めだてして、隔てをつくるのも具合が悪いと。

三 私より上の人があろうか。六条の院における源氏の寵愛第一の人としての自負。明石の女御の母儀として薫車を勅許され、社会的にもその地位を認められている（四巻藤裏葉二九八頁参照）。

四 あの当時の境遇の頼りなげな様子を、（源氏に）知られ申していただけのことなのだ。北山で祖母に養われていた幼時をいう。源氏との結婚も、家同士の正式な婿取りではなかった。

五 自詠の歌や古歌などを、心に浮ぶままに書くこと。

六 古歌。

紫の上の物思い

七 それぞれかわいらしくていらっしゃるものだと、ご覧なさったそのお目から見ては。女三の宮、十四、五歳。明石の女御、十二歳。

八 世間にめったにないよほどのお美しさなのだ。草子地。

九 (紫の上は)この上なく理想的に気品高く、気がひけるほど立派に整っていられる上に。以下「目馴れぬさまのしたまへる」まで、源氏の目に映る紫の上の美質。紫の上礼讃である。

一〇 照りはえるような色艶といい優雅さといい、あれこれの美しさも、すべて身にそなわって。

一一 すばらしい女盛りとお見えになる。今、三十二歳。

一二 身近に秋が来たのかしら、見ているうちに、青葉の山も色が変ってしまったことだ。私も飽かれる時が来たのであろうか。「秋」に「飽き」を掛ける。「青葉の山」は、夏山をいう。季節は、前に「夏ごろ……」(七六頁)とあった。「白露はうつしなりけり水鳥の青葉の山の色づく見れば」(『古今六帖』二、山、三原王。原歌『万葉集』巻八)。「紅葉する秋は来にけり水鳥の青葉の山の色づく見れば」(『古今六帖』三、水鳥)

七 うつくしうもおはするかなと、さまざま見たてまつりたまへる御目うつしには、年ごろ目馴れたまへる人のおぼろけならむが、いとかくおどろかるべきにもあらぬを、なほたぐひなくこそはと見たまふ、ありがたきことなりかし。あるべき限り気高うはづかしげにとともひたるに添ひて、はなやかに今めかしく、にほひなまめきたるさまざまのかをりも、取りあつめ、めでたき盛りに見えたまふ。去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく、常に目馴れぬさまのしたまへるを、いかでかくしもありけむとおぼす。

長年見馴れていらっしゃる人が並々の器量の方であったら　これほどにも心を奪われる思いがするはずもないのに　やはり比類ない美しさだなとご覧になるのは　派手で　現代風で　どうしてこうも美しく生れつかれたのかと　思いのままにお書きになった　繰り返しご覧になる　お隠しになっていられたが　[源氏は]　今はじめて見るような感じがなさるのを

うちとけたりつる御手習を、硯の下にさし入れたまへれど、見つけたまひて、引き返し見たまふ。手などの、いとわざとも上手と見えで、ららうじくうつくしげに書きたまへり。

巧者に　筆跡　特別に　かわいい感じに

(紫上)二

身に近く秋や来ぬらむ見るままに
青葉の山もうつろひにけり

とある所に、[源氏は]目とどめたまひて、

〔源氏〕水鳥の青葉は色もかはらぬを
　萩のしたこそけしきことなれ

など書き添へつつすさびたまふ。ことに触れて、心苦しき御けしきの、下にはおのづから漏りつつ見ゆるを、ことなく消ちたまへるも、ありがたくあはれにおぼさる。

手習に興じなさる

また得がたい殊勝な方と〔源氏は〕

今宵は、いづかたにも御暇ありぬべければ、かの忍び所に、いと理なる工面をしてわりなくて出でたまひにけり。いとあるまじきことと、いみじくおぼし返すにもかなはざりけり。

大層無理

何度も反省なさるのだがどうすることもできないのであった

いかにも不届きなことと

春宮の御方は、実の母君よりも、この御方をばむつましきものに頼みきこえたまへり。いとうつくしげにおとなびまさりたまへるを、思ひ隔てず、かなしと見たてまつりたまふ。御物語など、いとなつかしく聞こえかはしたまひて、中の戸あけて、宮にも対面したまへり。

明石の上

紫の上

親しいお方と思って

お頼り申し上げていらっしゃる〔女御が〕大層かわいらしくずっと大人らしくおなりになったのを

四方山のお話など

女三の宮

〔女三宮は〕ただもう無邪気な様子なので

〔紫上は〕気が張らず

年輩の者らしく

いとをさなげにのみ見えたまへば、心やすくて、おとなおとなし

一　青葉の夏山は色変りもしていませんのに―私の心は変らぬものを、萩の下葉の方こそ、はやただならぬ様子です。あなたのご様子こそおかしいではありませんか。「水鳥の」は、羽の青さから「青葉」にかかる枕詞。萩は下葉から黄葉するので「萩のしたこそ」という。「白露は上より置くをいかなれば萩の下葉のまづもみづらむ」（『拾遺集』巻九雑下、躬恒忠岑にとひはべりける　参議伊衡）

二　（紫の上は）何かにつけておいたわしいご様子が、隠していても自然に見えるのを、何でもないふうに慎み深く振舞っていられるのも。「下にはおのづから漏りつつ見ゆる」は、源氏の歌の「萩のしたこそけしきことなれ」に照応する。

三　今夜は、紫の上方にも女三の宮方にも行かなくてよさそうなので。

四　あのお忍びの所。朧月夜のもと。

五　東宮の女御。明石の姫君のこと。

六　（紫の上も）実の子のように、かわいいと思ってご覧になる。

七　七七頁注一三参照。

源氏、朧月夜のもとへ

紫の上、女三の宮に対面

八　親たちのお血筋のつながりなどもお話し申し上げなさる。「尋ぬ」は、辿り求めること。（三四頁、四四頁参照）

九　女三の宮の乳母。「御後見ども」（七六頁）のなかの、重だった一人である。

一〇　同じお血筋のつながりを辿ってゆきますれば。「かざし」は、頭髪や冠に挿す花や枝。「同じかざし」は、もとを同じくする花や枝の意から、兄弟や血縁の者をいう。

一一　あちら（東の対）などにもお出かけ下さって。

一二　頼みとなさる方々に、それぞれにお別れ申しなさって。女三の宮は、母女御には早く死別し、父院は先ほど出家入山したことをいう。

一三　こんなねんごろなお言葉を頂きますと。「御ゆるし」は、紫の上を立てた言い方。「はべめれば」は、「はべるめれば」の撥音便無表記の形。

一四　ご出家あそばされたお上（朱雀院）のご意向も。

一五　（朱雀院は）私どもにも、内々にそのようにおっしゃって、お頼り申し上げていらっしゃいました。

一六　本当にもったいないお便りを頂きましてからは。朱雀院から、紫の上に、特にご依頼の書状が来たことは六五～六六頁に見える。

一七　人数に入らぬわが身が残念に思われます。女三の宮の身分に対して、卑下した言い方。

まるで母親のように
く親めきたるさまに、昔の御筋をも尋ねきこえたまふ。中納言の乳母といふ召し出でて、「同じかざしを尋ねきこゆれば、かたじけなけれど、分かぬさまに聞こえさすれど、ついでなくてはべりつるを、今よりはうとからず、あなたなどにもものしたまひて、おこたらむことはおどろかしなどもものしたまはむなむ、うれしかるべき」などのたまへば、「たのもしき御蔭どもに、さまざまに後れきこえたまひて、心細げにおはしますめるを、かるる御ゆるしのはべめれば、ますことなくなむ思うたまへられける。背きたまひにし上の御心向けも、ただかくなむ御心隔てきこえたまはず、まだいけなき御ありさまをも、はぐくみたてまつらせたまふべくぞはべめりし。うちうちにもさなむ頼みきこえさせたまひし」など聞こゆ。

（紫上）「いとかたじけなかりし御消息ののちは、いかでとのみ思ひはべれど、何ごとにつけても、数ならぬ身なむくちをしかりける」と、やすらかにおとなびたるけはひにて、宮にも、御心につきたまふべく、

一 物語絵などであろう。当時の貴族の婦女子が、絵を好んだことは、三巻絵合に詳しく、一巻若紫二三八頁、末摘花二八二頁にも見える。
二 いつになってもお人形遊びが楽しいといったことを。
三 無邪気なお人柄なので、隔てない気持になられた。人の言葉の裏まで察しようとはなさらぬので、という含み。
四 また事ありげに言う連中もいたが。女三の宮方との仲がうまくゆかないだろうと邪推する。
五 十月。初冬である。
六 源氏が嵯峨野に造営した御堂。三巻絵合一一五頁に初出。続く松風一二一頁、一二三頁、一三四頁参照。
七 薬師瑠璃光如来。衆生の病患を救うという。その像は、通例左手に薬壺を持ち、右手に施無畏の印（衆生の心を安らげるしるし）を結ぶ。源氏の無病長寿を祈願するために供養する。「供養ず」で、一語。『河海抄』は、『吏部王記』を引き、延長四年、京極御息所による宇多法皇の算賀の例、延長五年、同七年、天暦三年の、大臣家などの算賀に薬師如来が供養された例をあげる。
八 薬師仏である。この法要のため、造立した。
九 経典を入れる箱。漆塗りで、蒔絵などを施す。
一〇 巻物の経典を包む竹の簀。（図録六参照）
一一 当時の最高の讃辞。

紫の上、嵯峨野の御堂で、源氏四十の賀の法要を行う

絵などのこと、雛の捨てがたきさま、若やかに聞こえたまへば、げにいと若く心よげなる人かなと、幼き御ここちにはうちとけたまへり。

さてのちは、常に御文かよひなどして、をかしき遊びわざなどにつけても、うとからず聞こえかはしたまふ。世の中の人も、あいなう、かばかりになりぬるあたりのことは、言ひあつかふものなれば、はじめつかたは、「対の上いかにおぼすらむ。御おぼえ、いとこの年ごろのやうにはおはせじ。すこしは劣りなむ」など言ひけるを、今すこし深き御心ざし、かくてしもまさるさまなるを、それにつけても、またやすからず言ふ人々あるに、かく憎げなくさへ聞こえかはしたまへば、こと直りて目やすくなむありける。

神無月に、対の上、院の御賀に、嵯峨野の御堂にて、薬師仏供養じたてまつりたまふ。いかめしきことは、切にいさめ申したまへば、忍びやかにとおぼしおきてたり。仏、経箱、帙簀のととのへ、まこ

二二 金光明最勝王経（鎮護国家を祈願する）、金剛般若波羅蜜多経（仏道修行によって悟りを開くことを説く）、一切如来金剛寿命陀羅尼経（読誦すれば三悪道に堕ちず寿命を増す）など。国家の安泰と、源氏個人の現世の無病息災、来世の至福まで祈願するので、「いとゆたけき御祈り」という。

二三 木々の紅葉の下を分けてゆく、嵯峨野のあたりをはじめとして、ちょうど見頃の景色なので。「野辺」は、歌語。

二四 誦経の僧への布施の物。

二五 六条の院の婦人方。花散里や明石の上。

二六 大勢のご婦人方が、どこにも皆住んでいらっしゃる上に。

二七 紫の上がご自分の御殿と思し召す（気の置けぬ）二条の院で。二条の院が紫の上の所有になっていること、ここに初出。

二八 源氏の当日のお召し物。

二九 東西の対の屋。

三〇 以下、対に招く人々。「諸大夫」は、親王、摂関、大臣家の家司を勤める殿上人。ここは、源氏や紫の上方のそれ。「院司」は、六条の院の事務官。

三一 四七頁注一一参照。

三二 螺鈿細工を施した椅子。源氏の席である（四七頁注一三参照）。「螺鈿」も、同頁注一五参照。

三三 献上のお召し物を載せる机を十二脚立てて。算賀には一年中の衣類を贈るのがならわし。

二条の院での精進落しの賀宴

との極楽思ひやらる。最勝王経、金剛般若、寿命経など、いとゆたけき御祈りなり。上達部いと多く参りたまへり。御堂のさま、おもしろくいはむかたなく、紅葉の蔭わけゆく野辺のほどよりはじめて見物なるに、かたへは、きほひ集りたまふなるべし。霜枯れわたれる野原のままに、馬車の行きちがふ音しげく響きたり。御誦経われもわれもと、御方々いかめしくせさせたまふ。

二一 何一つ不足なく
二二 半ばはそれで
二三 競ってお集まりになるのであろう
二四 一面霜枯れた
二五 野原一帯に
二六 立派におさせになる

二十三日を御としみの日にて、この院は、かく隙間なくつどひたまへるうちに、わが御私の殿とおぼす二条の院にて、その御まうけさせたまふ。御装束をはじめ、おほかたのことどもも、皆こなたにのみしたまふ。御方々も、さるべきことども分けつつ望みつかうまつりたまふ。対どもは、人の局々にしたるを払ひて、殿上人、諸大夫、院司、下人までのまうけ、いかめしくせさせたまへり。寝殿の放出を、例のしつらひにて、螺鈿の倚子立てたり。御殿の西の間に、御衣の机十二立てて、夏冬の御よそひ、御衾など例のごとく、

二七 ご精進落しの日として
二八 六条の院
二九 ご用意をおさせになる
三〇 一通り必要ないろいろのことも
三一 皆紫の上方でお引き受けになる
三二 適当なことをあれこれ
三三 分担しては進んでご奉仕なさる
三四 女房の局々にしたるを払ひて
三五 下役
三六 饗宴の用意を盛大におさせになった
三七 通例のように飾って
三八 寝殿
三九 御夜具など
四〇 お召し物

一 紫の綾絹の覆いが、それぞれの机にきちんとかけられているのがずらりと見渡されて。
二 飾り物を載せる机。
三 中国渡来の絹を、上を淡く下を濃く染めた覆い。
四 四七頁注二一参照。
五 沈香（香木の一種）の材を用い、（台の）足を花形に彫刻してある。（二巻図録一二参照）
六 「嘉祥三年仁明天皇四十御賀、御插頭台造二沈香山一以レ金為レ鶴令レ含二御插頭花一」（『花鳥余情』）
七 源氏のお席の背後に立てる屏風。
八 庭園に設けた泉であろう。
九 泉水の周囲を石などで固めたもの。唐絵であろう。
一〇 寝殿の母屋の北の壁。
一一 楽器を載せる御厨子。
一二 舞楽を舞うための舞台。庭に造る。（図録五参照）
一三 五〇頁注一〇参照。
一四 幔幕を張った、天井の平らな仮屋。楽人の座。
一五 寝殿南庭の東西。中門廊の側になる。
一六 強飯を卵形に握り固めたもの。下人に与える。
一七 舞楽の曲名。唐楽（左の楽）。平調。祝宴に舞う。（図録一〇参照）
一八 舞楽の曲名。唐楽。平調。（図録一〇参照）
一九 高麗楽の前の乱声（笛と太鼓で奏するもの）。
二〇 舞楽の曲名。高麗楽（右の楽）。高麗壱越調。（図録一〇参照）
二一 夕霧と柏木が庭に降りて。

中はどんなに立派かよく見えない

一紫の綾の覆どもうるはしく見えわたりて、うちの心はあらはならず。御前に置物の机二つ、唐の地の裾濃の覆したり。插頭の台は、沈の花足、黄金の鳥、銀の枝にゐたる心ばへなど、淑景舎の御あづかりにて、明石の御方のせさせたまへる、ゆゑ深く心ことなり。うしろの御屏風四帖は、式部卿の宮なむせさせたまひける。いみじく尽くして、例の四季の絵なれど、めづらしき泉水、壇など、目馴れずおもしろし。北の壁に添へて、置物の御厨子二具立てて、御調度も例のことなり。南の廂に、上達部。左右の大臣、式部卿の宮をはじめたてまつりて、次々はまして参りたまはぬ人なし。舞台の左右に、楽人の平張打ちて、西東に屯食八十具、禄の唐櫃四十づつ続けて立てたり。

とまっている趣向
明石の上
作らせなさったのは
重厚で格別すばらしい
桐壺の女御のお受持ちで
大層立派にしてあって
もの珍しく風情がある
仕来り通りである
以下の方々

午後二時頃

未の時ばかりに楽人参る。万歳楽、皇麞など舞ひて、日暮れかかるほどに、高麗の乱声して、落蹲の舞ひ出でたるほど、なほ常の目馴れぬ舞のさまなれば、舞ひ果つるほどに、権中納言、衛門の督お

りて、入綾をほのかに舞ひて、紅葉の蔭に入りぬる名残、飽かず興ありと人々おぼしたり。いにしへの朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕思ひ出でたまふ人々は、権中納言、衛門の督の、また劣らず立ち続きたまひにける世々のおぼえありさま、容貌用意なども、官位はやや進みてさへこそなど、齢のほどをも数へて、なほさるべきにて、昔よりかく立ち続きたる御仲らひなりけりと、めでたく思ふ。主人の院も、あはれに涙ぐましく、おぼし出でらるることども多かり。

ほんの少し舞って

あとを継いでこられた父子二代の世間の評判や様子

やはり然るべき前世の縁で

このように代々並んで栄えてゆかれるお間柄だったのだと

退出する

夜に入りて、楽人どもまかり出づ。北の政所の別当ども、人々ひきゐて、緑の唐櫃に寄りて、一つづつ取りて、次々賜ふ。白きものどもを品々かづけて、山際より池の堤過ぐるほどのよそ目は、千年をかねて遊ぶ鶴の毛衣に思ひまがへらる。御遊びはじまりて、またいとおもしろし。御琴どもは、春宮よりぞととのへさせたまひける。朱雀院よりわたり参れる琵琶、琴、内裏より賜はりたまへる箏の御

下役の者を

しみじみと涙の迫る思いで

源氏

[楽人たちに]

[内輪の]ご演奏が

揃えさせあそばされた

お譲りのあった

頂戴なさった

[父君たちに]

三一 舞が終って退場する前に、改めて正面に向いて短くおもしろく舞うこと。

三二 紅葉賀の朱雀院行幸のこと。（二巻紅葉賀一三～一五頁参照）

三三 源氏の舞われた青海波がすばらしかった夕べのことを思い出される方々は。当時、源氏十八歳。（紅葉賀一四～一五頁参照）。「青海波」は、図録一〇参照。

三四 官位などは、親よりやや優っているほどだなどと、年の数まで数えて。夕霧はこの時十九歳で、すでに権中納言、源氏はその頃宰相の中将、柏木の父は頭の中将であった。

三五 奥方づきの政所の別当。「政所」は、貴族の家政をつかさどる事務所。紫の上のために政所を置いたこと、紅葉賀一七頁参照。「別当」は、長官。数人あった。国守などが兼任する。

三六 単など、白い下着の類いであろう。肩に掛けて退出するので「かづく」という。

三七 二条の院南庭の築山のわき。

三八 千年の齢を持ちながら遊ぶ鶴の白い毛衣に見まがうばかりである。催馬楽、呂「席田の　席田の　伊津貫川に　や　住む鶴の　住む鶴の　や　住む鶴の　千歳をかねてぞ　遊びあへる　千歳をかねてぞ　遊びあへる」による。

三九 絃楽器。次に出る琵琶、琴、箏など。

三一 源氏は東宮の外舅にあたる。

三二 東宮の御父である。

琴など、皆昔おぼえたるものの音どもにてめづらしく（久しぶりに）搔き合はせ（合奏なさると）まへるに、何のをりにも、過ぎにしかたの御（ご自分の）ありさま、内裏わたりなどおぼし出でらる。故入道の宮（源氏は）おはせましかば、かかる御賀など、われこそ進みつかうまつらましか、何ごとにつけてかは心ざしも見えたてまつりけむと、飽かず（一体何によってお尽ししたいと思う気持も分って頂けたことだろうと）くちをしくのみ思ひ出できこえたまふ。

内裏（藤壺）にも、故宮のおはしまさぬことを、何ごとにも栄（張合いがなくもの足りなく）なくさうざうしくおぼさるるに、この院の御ことをだに、例のあとあるさまのかしこまりを尽くしてもえ見せたてまつらぬを、世とともに飽かぬ（何かにつけて常にもの足りぬ思いがなさるにつけても）ここちしたまふも、今年はこの御賀（四十の御賀）にことづけて、行幸（五）などもあるべくおぼしおきてけれど、「世（源氏）の中のわづらひならむこと、さらに（決して）せさせたまふまじくなむ」といなび申（ご辞退申されることが度重なったので）したまふことたびたびになりぬれば、くちをしくおぼしとまりぬ。

師走（十二月二十日過ぎの頃に）の二十日あまりのほどに、中宮（秋好む中宮が六条の院に退出なさって）まかでさせたまひて、今年の（わずかに）残りの御祈りに（残る今年最後のお祈りに）、奈良の京（京都）の七大寺に、御誦経、布四千反、この近

一 皆昔が思い出される音色で。いずれも宮廷伝来の名器なので、宮廷に育った源氏には聞き覚えがある。

二 亡き藤壺の宮がご在世であったなら、このようなお祝いなど、自分が真っ先にご奉仕しようものを。藤壺は三十七歳で亡くなっている（三巻薄雲一六五頁参照）。

三 帝におかせられても。冷泉帝である。

四 せめてこの六条の院の御ことだけでも、人並みにきまった父子の礼を尽してご覧に入れることもできないのを。「あとあるさま」は、昔から父に対する礼儀として決められている規範。

源氏、賀の行幸を拝辞

天子が父に対して朝覲の行幸をする、といったこと。源氏が実の父であることは、あくまで秘密だからである。

五 （六条の院に）行幸などもなさるようにご計画なさったが。ひそかに朝覲の礼に倣おうとする。

六 世間の迷惑になるようなことは。天子の行幸は、大勢の人々の労力や財力を要するので、こういう。儒教的発想。

七 東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・薬師寺・西大寺・法隆寺。

八 お布施に布（麻・苧など植物繊維で織ったもの）四千反。四十の賀にちなむ数字。一反は着物一着分に要する布地。

秋好む中宮の営む御賀の催し

九 一疋は反物二反分。

一〇 どのような折に深い感謝の気持もはっきり見て頂くことができようか（この機会をおいてはない）とお思いになられて。
一一 亡き父宮（故前坊）、母六条の御息所がご存命であったら、その御賀のためにきっとなさるであろう感謝をも加えてと、（中宮は）お思いであったが。
一二 このように、あえて帝にもご辞退なさったので。
一三 余命久しい例は少なかったのですから。『河海抄』は、仁明天皇四十一、村上天皇四十二、東三条院四十にて崩などの例をあげる。
一四 将来、本当に五十、六十になった時お祝い下さい。
一五 中宮のご主催ともなれば、公式のことになって。
一六 秋好む中宮のお邸である六条の院西南の町。
一七 前に玉鬘や紫の上が催したのにそう変らないが。
一八 正月二日、群臣が東宮、中宮に参賀拝礼するのに対し、饗膳を賜ること。玉鬘の時は、賜禄はなく、紫の上の場合は、楽人の禄のみであった。

中宮主催の賀宴のさま

一九 六六頁注八参照。
二〇 四位で参議になる資格のある者。（一巻帚木五一頁注九参照）
二一 摂関家などの家司を勤めている殿上人。
二二 六六頁注九参照。
二三 巻絹。腰に差して退出する。楽人などへの禄。
二四 束帯（正装）の時にする黒い革の帯。（一巻紅葉賀一三三頁注九参照）

近辺の き都の四十寺に、絹四百疋を分かちてせさせたまふ。ありがたき御はぐくみをおぼし知りながら、何ごとにつけてかは深き御心ざしをもあらはし御覧ぜさせたまはむとて、父宮、母御息所のおはせましまたとない源氏のご養育の恩を十分お分りになっているものの御ための心ざしをも取り添へおぼすに、かくあながちに、おほやけにも聞こえかへさせたまへば、ことども多くとどめさせたまひつ。

（源氏）「四十の賀といふことは、さきざきを聞きはべるにも、残りの齢久しき例なむ少なかりけるを、このたびは、なほ世の響きとどめさせたまひて、まことに後に足らむことを数へさせたまへ」とありけれど、公ざまにて、なほいといかめしくなむありける。

過去の例を聞きましても
やはり世間の騒ぎになることはおやめ下さって
やはり大層格式高く堂々たるものであった

宮のおはします町の寝殿に、御しつらひなどして、さきざきにことに変らず、上達部の禄など、大饗になずらへて、親王たちにはことに女の装束、非参議の四位、まうち君達など、ただの殿上人には、白き細長一襲、腰差などまで次々に賜ふ。装束限りなくきよらを尽くして、名高き帯、御佩刀など、故前坊の御方ざまにて伝はり参り

賀宴の設備などして
特別
［身分に応じて］
源氏のお召し料はこの上なく善美を尽して
お形見としてご相続なさって

一 古来第一の重宝と名のあるものばかり、全部集まってくる御賀であるようだ。以下、草子地。
二 昔物語にも、物を与えることを大したこととして、一々数えあげているようだが。『宇津保物語』など、禄の品々を多数列挙する。
三 こちらは（源氏の御賀の場合は）とても大変で、ご立派な方々のご贈答の数々は、数えられるものではありません。地の文に「はべり」が出るのは、ここ一例のみ。語り手の口調をそのまま出したもの。
四 系図不詳。「大将」は、普通大臣、大納言の兼任する顕官。源氏もかつて参議兼右大将であった（二巻葵六五頁）。
五 六条の院東北の町。花散里が住む。夕霧は、花散里を義母とする（三巻少女二六三頁参照）。
六 今日は何といっても（帝のご委託ゆえ）様子も違い、作法の格式も上で。
七 六条の院の、院庁の諸役所への饗応。
八 中務省に属し、宮中の宝物、献上品を管理する。
九 畿内諸国から徴収した米銭を納める朝廷の倉庫。一年中の饗をまかなう。
一〇 八四頁注一六参照。
一一 朝廷の饗宴の場合と同様、頭の中将が勅命によって行った。この頭の中将は、系図不詳の人。蔵人所が受け持って行ったことをいう。
一二 以下、当日出席の人々を上席より列挙する。

帝の仰せにより、夕霧、賀宴を催す

感慨にたえないことである　きたのも

たるも、またあはれになむ。一古き世の一のものと名ある限りは、皆つどひ参る御賀になむあめる。二昔物語にも、もの得させたるをかしときことには数へ続けためれど、三いとうるさくて、こちたき御仲らひのことどもは、えぞ数へあへはべらぬや。

帝は　お思い立ちになった色々のことをむげに止められようかと思われて　夕霧

内裏には、おぼしそめてしことどもをむげにやはとて、中納言にぞつけさせたまひてける。ご委嘱なさった　そのころの右大将、四病して辞したまひけるを、この中納言に、御賀のほどよろこび加へむとおぼしめして、

御賀の折に喜びを添えてやろうと

［右大将に］　にはかになさせたまひつ。院もよろこび聞こえさせたまふものから、

源氏もお礼を申し上げなさるものの

（源氏）　このように急な身に余る昇進は　「いとかくにはかにあまるよろこびをなむ、いちはやきこちしはべる」と卑下し申したまふ。五丑寅の町に、御しつらひまうけたまひて、隠ろへたるやうにしなしたまへれど、六今日はなほかたことに儀式まさりて、七所々の饗なども、八内蔵寮、九穀倉院より、一〇つかうまつらせたまへり。一一屯食など、一二公ざまにて、一三頭の中将宣旨うけたまはりて、一四親王たち五人、左右

ご謙遜申される　ご奉仕をおさせになった　勢いに乗り過ぎる気持がいたしま　目立たぬ所をお選びなさったのだ　けれども

の大臣、大納言二人、中納言三人、宰相五人（参議）、殿上人は、例の、内裏、春宮、院、残る少なし。御座、御調度どもなどは、太政大臣（残る者は少ない）くはしくうけたまはりて、つかうまつらせたまへり。

今日は、仰せ言ありてわたり参りたまへり。院（勅命を）もいとかしこくお（ご用意させなさった）どろき申したまひて、御座に着きたまひぬ。母屋の御座に向へて、大臣の御座あり。いときよらにものものしく太りて、この大臣ぞ、今盛りの宿徳とは見えたまへる。主人の院は、なほいと若き源氏の君に見えたまふ。御屏風四帖に、内裏の御手書かせたまへる、唐の綾の薄絁に、下絵のさまなどおろかならむやは。おもしろき春秋の作り絵などよりも、この御屏風の墨つきのかかやくさまは目も及ばず、思ひなしさへめでたくなむありける。置物の御厨子、弾きもの、吹きものなど、蔵人所より賜はりたまへり。大将の御勢も、いと盛大におなりになったので）いかめしくなりたまひにたれば、うち添へて、今日の作法いとことなり。御馬四十疋、左右の馬寮、六衛府の官人、上より次々に牽き

源氏もまことにもったいない
ことと恐縮なさって
（太政大臣は）美しく堂々と太っていられて
お筆のあとの
ご宸筆と思うせいで一層すばらしいのであった
管楽器など
夕霧
絃楽器
それも加わって
なさり方は格別である

一三 殿上人は、宮中、東宮御所、上皇御所に、それぞれ昇殿を許された者がいる。「院」は、六条の院。
一四 源氏の御座所やお道具類。
一五 今日は、勅命によって太政大臣が六条の院においでになった。太政大臣は別に職掌もなく、特別のこと以外、宮中行事にも出ないのが通例。
一六 母屋にしつらえた源氏の座に向い合って、太政大臣のお席がある。母屋に対座の形。
一七 重々しく威厳のある人。
一八 相変らず若々しい源氏の君といった感じでいらっしゃる。
一九 例の後ろの御屏風である。（八四頁注七参照）
二〇 帝が御手ずからお書きあそばしたのは。本文（典拠になるような漢詩文）を書かれたのであろう。
二一 舶来の綾の薄絁の地に、下絵を描いた具合など、尋常一様であろうはずがない。屏風の表のさまである。「絁」は、『和名抄』に「青にして黄也」とある。
二二 風雅な四季の画題で、彩色したもの。普通、賀には、このような四季の絵の屏風を用いる。
二三 楽器を載せる御厨子。
二四 天皇身辺の雑事や取次ぎ、文書などをつかさどる役所であるが、宮中の楽器、調度も管理する。
二五 御賀の祝いに、帝から賜ったもの。
二六 左右近衛、衛門、兵衛の三等官（近衛将監、衛門兵衛の大尉）以下。
二七 庭上に、上から下へと順番に引き並べる間に。

一 八四頁注一七参照。
二 舞楽の曲名。大食調。一人の舞。祝賀に舞う。（四巻図録八参照）
三 太政大臣がお出でになっているので、久しぶりに一段と興をお添えになった御遊ということで。太政大臣が和琴の上手であること、五〇頁参照。
四 源氏。
五 （源氏は）長年、太政大臣の和琴を何度も聞いてこられたことを思って聞かれるせいか、まことにすばらしく、感慨無量に思われるので、ご自分の琴も、秘術をほとんどお隠しなさらず、そこですばらしい合奏となった。
六 今は今で、こうした親しいお間柄で。太政大臣の娘は、夕霧の北の方である。
七 どちらからいっても、仲よくお付合いなさるべきことなど。夕霧の亡母は、太政大臣の妹。
八 源氏から太政大臣への贈り物。当日の第一の賓客に対する礼。
九 雅楽の高麗楽に用いる笛。横笛（唐楽に用いる）より細くて短い。（二巻図録八参照）
一〇 紫檀の箱一揃いに、一つには幾冊かの中国の手本、今一つにはわが国の草仮名の手本を入れて。
一一 太政大臣がお車にお乗りになったところへ、追いかけてさし上げなさる。贈り物の通例の作法である。
一二 御下賜の御馬を頂いて。
一三 唐楽（左の楽）に対して、右の楽。

ととのふるほど、日暮れ果てぬ。

例の万歳楽、賀王恩などいふ舞、けしきばかり舞ひて、大臣のわたりたまへるに、めづらしくもてはやしたまへる御遊びに、皆人心を入れたまへり。琵琶は、例の兵部卿の宮、何ごとにも世に難きものの上手におはして、いと二なし。御前に琴の御琴、大臣、和琴弾きたまふ。年ごろ添ひたまひにける御耳の聞きなしにや、いと優にあはれにおぼさるれば、琴も御手をさを隠したまはず、いみじき音ども出づ。昔の御物語ども思い出話など出て来て、今はたかかる御仲らひに、いづかたにつけても聞こえかよひたまふべき御むつびなど、心よく聞こえたまひて、御酒あまたたび参りて、もののおもしろさもとどこほりなく、御酔ひ泣きどもえとどめたまはず。

御贈り物に、すぐれたる和琴一つ、好みたまふ高麗笛添へて、紫檀の箱一具に、唐の本ども、ここの草の本など入れて、御車に追ひてたてまつれたまふ。御馬ども迎へ取りて、右馬寮ども、高麗の楽

形ばかりで切り上げて
蛍の宮
稀な
一同心をこめて演奏なさった
名手でいらして
思い出話
ご趣味のある
官人
一座の感興も
お盃を度々傾けなさって
愉快に談笑されて
一お二人とも一
酔いのあまりの感涙を抑えかねていらっしゃる
増す一方で

一四 帝、東宮、朱雀院の上皇、秋好む中宮と、考えてみれば次々と（源氏の）ご縁者の堂々たることは。「一院」は、上皇のこと。

一五 やはりこうした晴れの賀宴の折には、すばらしいことと思われるのだった。草子地。

一六 大将（夕霧）が、ご子息としては、ただ一人しかいらっしゃらないのを、もの足りなく張合いのない感じがしたが。

一七 夕霧の母北の方（葵の上）が、六条の御息所との間に恨み深く、源氏の愛を競い合われた当時のお二方のご運の結果のあらわれたのが、それぞれのお子たちの身の上なのだ。車争いに恨みをのんだ御息所の娘は中宮になり、夕霧はただの臣下である。

一八 こちら（東北の町）の夫人。花散里のこと。

一九 雲居の雁。三条の邸に住むこと、四巻藤裏葉三〇一頁参照。

二〇 折につけて行われる六条の院の御催しや、内々の善美を尽したご用意も。衣裳の仕立てなどをいう。

してののしる。（大音を発する）六衛府の官人の禄ども、大将（夕霧）賜ふ。（源氏の）ご意向で万事簡素になさり御心とそぎたまひて、いかめしきことどもは、このたびとどめたまへれど、一四内裏、春宮、一院、后の宮、次々の御ゆかりいつくしきほど、（筆舌に尽しがたく思われることであるから）いひ知らず見えにたることなれば、一五なほかかるをりにはめでたくなむおぼえける。

一六大将のただ一所おはするを、さうざうしく栄なきここちせしかど、あまたの人にすぐれ、（世間の評判も格別で人物も肩を並べる者がいないほど立派でいらっしゃるにつけても）おぼえことに、人柄もかたはらなきやうにもの一七したまふにも、かの母北の方の、伊勢の御息所との恨み深く、いどみかはしたまひけむほどの御宿世どもの行く末見えたるなむ、さまざまなりける。その日の（源氏の）御装束どもなど、一八こなたの上なむしたまひける。禄ども（禄の品々などおおよそのことを）おほかたのことをぞ、一九三条の北の方はいそぎたまふめりし。二〇をりふしにつけたる御いとなみ、うちうちのもののきよらをも、こなたにはただよそのことにのみ聞きわたりたまふを、何ごとにつけてかは、（花散里方ではご自分には縁のないことばかり思って聞いていられるのでどうしたことによってこのような立派な方々のお仲間入りをもなさるのであろうかと思われることに）かかるものものしき数にもまじらひたまはましと

一 正月上旬。
二 真言密教の祈禱。安産祈願のためである。
三 （かつて葵の上がお産で亡くなるという）不吉なことを経験していらっしゃるので。（二巻葵九二頁参照）
四 こういう時のことは。

新年、明石の女御の出産迫り、西北の町に移る

お産というものは。
五 七六頁注八参照。
六 どなたもご心痛のご様子である。草子地。
七 陰陽師連中も、お住まいを変えてお大事になさるよう申し上げたので。「陰陽師」は、陰陽寮に属し、占いや祓えなどをする。ここは、物の怪の祟りを避けて、居所を移すよう占ったのである。
八 明石の上が住む西北の町の中の対。「中の対」は、二番目の対の屋のこと。南から数えて北の対か。次注参照。
九 こちら（西北の町）は、（寝殿などはなく）ただ大きな対の屋が二つに、いくつかの渡り廊下が周囲をめぐっているが。
一〇 祈禱のため、土を盛り、塗り固めて作った壇。奥に本尊仏を懸け、護摩を焚く。
一一 大層効験のある僧たち。
一二 このご出産で、ご自分の運勢のほどもはっきりすることだから。安産かどうか、また無事出産の結果、男御子であれば、将来東宮になられるであろう。今がその運命の岐れめである。

（夕霧）おぼえたるを、大将の君の御ゆかりに、（ご縁に引かれて）いとよく（十分に）数まへられたまへり。（重んじられていらっしゃる）

（年が改まった）年かへりぬ。（明石の女御）桐壺の御方（〔お産が〕）近づきたまひぬるにより、一正月朔日より、二御修法不断にせさせたまふ。（おさせになる）寺々社々の御祈りはた、数も知らず。

（源氏）大殿の君、三ゆゆしきことを見たまへてしかば、四かかるほどのことは、いと恐しきものにおぼししみたるを、（身にしみていられるので）対の上（紫の上）などのさることしたまはぬは、（お産などなさらないのは）くちをしくさうざうしきものから、（残念で）うれしくおぼさるるに、五まだいとあえかなる御ほどに、（もの足りなくはあるけれども）いかにおはせむと、（どんなことにおなりかと）かねておぼし騒ぐに、（早くからご心配になっていたが）二月ばかりより、（どういうわけかご容態が変ってお苦しみになるので）あやしく御けしき変りてなやみたまふに、六御心ども騒ぐべし。七陰陽師どもも、（心配だということで）所をかへてつつしみたまふべく申しければ、（よそのかけ離れたところでは）ほかのさし離れたらむはおぼつかなしとて、八かの明石の御町の中の対にわたしたてまつりたまふ。九こなたはただおほきなる対二つ、廊どもなむめぐりてありけるに、一〇御修法の壇隙なく塗りて、一一いみじき験者どもつどひてののしる。（大声で祈願する）（明石の上）一二母君、この時にわが

大尼君、女御に昔語りをする

一三 明石の尼君。明石の上の母。ともに上京したこと、三巻松風一二八頁以下参照。

一四 今はすっかり老い呆けた人になってしまっていたことだろう。草子地。

一五 女御のお姿を久しぶりに拝見するのは、夢を見ているような思いで。紫の上に引き取られて以来、ほぼ八年ぶりである（三巻薄雲一五四～七頁参照）。なお四巻藤裏葉二九六頁参照。

一六 一家が明石で暮していた時のことなど。

一七 女御がお生れになった当時のこと。（三巻澪標一六～二二頁参照）

一八 源氏の君が明石の浦にお出でになった様子。（二巻明石二六六～二七〇頁参照）

一九 いよいよお別れと（源氏が）京へお帰りになった時に、一家の者は皆気も転倒して、もうおしまい、これまでのご縁だったのだと、悲しんだのですが（明石三〇〇～三〇四頁参照）。このあたりから、地の文より自然に会話の体に移ってゆく。

二〇 若君（明石の女御）がお生れになって、私どもを助けて下さった前世からのお約束を思いますと、胸がいっぱいでございます。

御宿世も見ゆべきわざなめれば、それは気が気でない思いでいらっしゃる いみじき心を尽くしたまふ。

一三 かの大尼君も、一四 今はこよなきほけ人にてぞありけむかし。この御ありさまを見たてまつるは夢のここちして、早速 いつしかと参り近づき付き添い申している 馴れたてまつる。今まで 年ごろ、明石の上 母君はかう添ひさぶらひたまへど、昔のことなど、まともにもお話し申し上げていらっしゃらなかったのに まほにしも聞こえ知らせたまはざりけるを、この尼君、よろこびにえ堪へで参りては、お側に参っては いと涙がちに、大昔のいろいろなことを 古めかしきことども を、〔女御に〕 〔女御は〕 囁え声を出してお話し申し上げる わななき出でつつ語りきこゆ。はじめつかたは、あやしくむつじっと顔を見つめていらしたが かしき人かなと、うちまもりたまひしかど、かかる人ありとばかりは、ほの聞きおきたまへれば、なつかしくもてなしたまへり。生まれたまひしほどのこと、大殿の君のかの浦におはしましたりしありさま、今はとて京へ上りたまひしに、誰も誰も心をまどはして、今は限り、かばかりの契りにこそはありけれと嘆きしを、若君のかく引き助けたまへる御宿世の、いみじくかなしきこと、と、〔尼君が〕 ほろほろと泣けば、本当に一通りではなかった げにあはれなりける昔のことを、こうして知らせてくれなかったなかく聞かせざらましか

一 紫の上のご養育のお蔭で立派になって。
二（それなのに）自分を、またとない高い身分の者に思って。
三 かたわらの人々（傍輩の女御更衣たち）を、ないがしろに思い、この上もなく慢心していたことだ。
四（女御は）母明石の上については、もともとこのように少し低く見られる家柄とは知りながら。「かく」は、尼君の話してくれたように、の意。
五 ご自分がお生れになった時のことなどを、そんな（明石の浦のような）都離れた田舎でなどともご存じではないのだった。
六（それも）女御が、あまりおっとりしていらっしゃるせいだろう。変に頼りない話ですこと。草子地。
七 仙人の、とてもこの世の暮しではないような有様で、過しているらしいことをお聞きになるにつけても。入道は、ひとり明石の浦にとどまっている（三巻松風一二四～八頁参照）。
八 一日を六時（晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜）に分けて行う加持の一つ。

らば 何も知らずに過ぎてしまうところだったと
ば、おぼつかなくても過ぎぬべかりけりとおぼして、うち泣きたまふ。

［女御は］ ［女御は］
心のうちには、わが身は、げにうけばりていみじかるべき際には
大きな顔をして栄華をきわめるような 身分
ではなかったのに 世間の人の思わくも
あらざりけるを、対の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさま
つまらぬものではないのだった
なども、かたほにはあらぬなりけり、身をばまたなきものに思ひて
宮仕えをしていても
こそ、宮仕へのほどにも、かたへの人々をば思ひ消ち、こよなき心
陰で噂することもあっただろう
おごりをばしつれ、世人は、下に言ひ出づるやうもありつらむかし、
何もかもお分りになった
などおぼし知り果てぬ。母君をば、もとよりかくすこしおぼえ下れ
る筋と知りながら、生まれたまひけむほどなどをば、さる世離れた
る境にてなども知りたまはざりけり。いとあまりおほどきたまへる
明石の入道
けにこそは。あやしくおぼおぼしかりけることなりや。かの入道の、
今は仙人の世にも住まぬやうにてゐたなるを聞きたまふも、心苦し
しいなどと あれこれと
くなど、かたがたに思ひ乱れたまひぬ。
［女御が］大層しんみりと物思いに沈んでいられるところへ
いとものあはれにながめておはするに、御方参りたまひて、日中
明石の上

九（加持僧らが）あちこちの控え室から参集し、大声でご祈禱しているのに。中の対の一室で行う。

一〇 低い御几帳を側に寄せておいでなさいませ。「短き御几帳」は、身辺に置いて身を隠す。周囲の人目を憚る気持から言う。

一一 風などひどくて、つい綻びの隙間から見えたりしましょうに。「ほころび」は、風が抜けるように、几帳の帷（垂れ布）を縫い残した部分。

一二 まるでお医者さんみたいでいらっしゃる。医師は、御簾の中に入り、貴人の身辺に近づくことができる。

一三 ほんに盛りを過ぎていらっしゃる。老耄をやわらかくたしなめて言う。

一四 耄々に。老いぼれて。

一五 古めかしい間違いだらけのお話でもしましたのでしょうか。後述されるように、明石の上は過去のことをまだ当分伏せておきたいと思っている。

の御加持に、こなたかなたより参りつどひ、もの騒がしくののしるに、御前にことに人もさぶらはず、尼君所得て、いと近くさぶらひたまふ。「あな見苦しや。短き御几帳引き寄せてこそさぶらひたまはめ。風など騒がしくて、おのづからほころびの隙もあらむに。医師などやうのさまして。いと盛り過ぎたまへりや」など、なまかたはらいたく思ひたまへり。よしめきそしてふるまふとはおぼゆめれども、もうもうに耳もおぼおぼしかりければ、「ああ」と傾きてゐたり。さるは、いとさ言ふばかりにもあらずかし。六十五六のほどなり。尼姿いとかはらかに、あてなるさまして、目艶やかに泣き腫れたるけしきの、あやしく昔思ひ出でたるさまなれば、胸うちつぶれて、「古代のひが言どもやはべりつらむ。よくこの世のほかなるやうなるひがおぼえどもにとりまぜつつ、あやしき昔のことども も出でまうで来つらむはや。夢のここちこそしはべれ」と、うちほほゑみて見たてまつりたまへば、いとなまめかしくきよらにて、例

女房　いい気になって　明石上　まあみっともない　尼君　一〇　一一　一二　一三　一四　尼君自身は十分気をつけて振舞っているとは思っているらしていらっしゃる　よく聞えないので　尼君　首を傾げている　だが　まだそれほどの年でもない　こざっぱりと　上品な様子で　涙に濡れて　何やら昔を思い出している様子なので　明石上は　一五　この世のことでもない　尼君は　おかしな昔話もあれこれお話し申したことでしょうよ　昔のことは　苦笑を浮べて　女御を　優雅で　お美しくて　いつ

一 自分が産んだ子ともお見えにならぬほどで。気高いさま。「おぼえたまはず」は、思われなさらない、の意。主語は、女御。

二 （尼君が）困ったことをあれこれお話し申されたので、お心を痛めていらっしゃるのではないか。女御の出自の低いことをお耳に入れたのではないか、と案じる。以下「心劣りしたまふらむ」まで、明石の上の心中。

三 もうこれ以上はないと、最高の御位を極められた時に（立后のあかつきに）、委細お話し申し上げようと思っていたのに。

四 （実情をお知りになったからといって）むざむざと自信をおなくしになるほどのことではないが。

五 間食用の果物、木の実の類い。

六 口もとなどは、見苦しくひろがっているが。歯のない口もと。

七 （明石の上が）目まぜで制するが。もう席を立ちなさい、という気持。

八 年寄った私が、生きがいのある身になってうれし泣きしていますのを、誰が咎めることができましょう。「かひ」は「貝」と「効」の掛詞。「立ち」は「波」の縁語。「潮垂る」に、泣く意を掛け、「海士」に「尼」を掛ける。

九 昔も、私のような年寄りは、何をしても大目に見てもらえたものですよ。

もよりもひどく沈みこんで　考えこんでいらっしゃるご様子である

よりもいたくしづまり、ものおぼしたるさまに見えたまふ。一わが子ともおぼえたまはず、かたじけなきに、恐れ多く思われるのに二いとほしきことどもを聞こえたまひて、おぼし乱るるにや、三今はかばかりと御位を極めたまはむ世に、聞こえも知らせむとこそ思へ、四くちをしくおぼし捨つべきにはあらねど、いといとほしく心劣りしたまふらむ、とおぼゆ。

さぞやおかわいそうにがっかりしていられることだろう

御加持果ててまかでぬるに、五御くだものなど近くまかなひなし、

〔僧たちが〕　お側にさし上げ

〔明石上〕せめてこれだけでも　おいたわしく思っておすすめ申し上げなさる

「これば かりをだに」と、いと心苦しげに思ひて聞こえたまふ。尼君は、いとめでたううつくしう見たてまつるままにも、涙はえとどめず。顔は笑みて、六口つきなどは見苦しくひろごりたれど、まみの

〔女御を〕ご立派でおかわいらしいと拝するともうそれだけで　抑えられない　目もとの　あたりが涙に濡れて　泣き顔をしている　ほんとにみっともない

わたりうちしぐれてひそみゐたり。あなかたはらいた、七と目くはすれど、〔尼君は〕聞きも入れず。

「老の八波かひある浦に立ち出でて

しほたるるあまを誰かとがめむ

昔の九世にも、かやうなる古人は、罪ゆるされてなむはべりける」と

一〇（女御の）御硯箱の中の紙。

一一 泣き濡れていらっしゃる尼君を道案内にして、故郷の明石の家を尋ねてみたいものです。「苫屋」は、苫（菅、萱などで編んだむしろのようなもの）で覆った小屋。

一二 俗世を捨てて、明石の浦に住んでいる入道も、子を思うゆえの闇は、晴らせないでいるでしょう。「心の闇」は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による。「明石」に「明かし」を掛け、「闇」と縁語。

一三 入道に別れを告げたという、その暁のことも。三巻松風の巻に「その日とある暁に……」（一二四頁）と書き出されている。

男御子、誕生

一四 三月の十日過ぎに。

一五 こちら（女御が今いられる西北の町）は、裏側に当っていて、ひどく人気近い所なのに。建物が奥深くないことをいう。

一六 盛大な御産養が次々と行われ。「産養」は、産後の三日、五日、七日、九日の夜に、親戚縁者が産婦と子供に食物や衣服を贈って祝うこと。

一七 いかにも「かひある浦」―生きがいのある所と、尼君にとっては見えたが。前の尼君の歌の一句を引く。尼君も、盛大な産養を見ることができたのである。

聞こゆ。一〇御硯なる紙に、

（女御）一一しほたるるあまを波路のしるべにて
尋ねも見ばや浜の苫屋を

御方もえ忍びたまはで、うち泣きたまひぬ。

（明石上）一二世を捨てて明石の浦にすむ人も
心の闇ははるけしもせじ

（明石上も我慢なされず）

など聞こえまぎらはしたまふ。一三別れけむ暁のことも、夢のうちにおぼし出でられぬを、くちをしくもありけるかな、とおぼす。

（それとなく話をおそらし申しなさる）（いかにも残念なことだった）

一四弥生の十余日のほどに、たひらかに生まれたまひぬ。かねてはお（女御は）どろおどろしくおぼし騒ぎしかど、いたくなやみたまふことなくて、男御子にさへおはすれば、限りなくおぼすさまにて、大殿も御心おちゐたまひぬ。

（お産の前には大騒ぎをなさったのだが）（ひどくお苦しみになることもなくて）（何から何までお望みどおりで）（源氏もご安心なさった）

一五こなたは隠れのかたにて、ただ気近きほどなるに、一六いかめしき御産養などのうちしきり、響きよそほしきありさま、一七げに「かひあ

（眺わいもものしい有様は）

一（こんな所では）威儀も整わないようなので。表立たず、手狭だからである。
二（女御は）もとの御殿（南の町の寝殿）に、お帰りになることになった。
三 白いお召し物をおつけになって。産後九夜まで、産婦も奉仕の人々も白い衣服を着用し、産室には白い調度を用いる。
四 いかにも人の親といった様子で。お産をした娘の母親のように。
五（若宮は）まだお扱いにくそうでいらっしゃる時なのに。
六 実のお祖母さまは。明石の上のこと。
七 御湯殿（新生児に産湯をつかわせる儀式）のお世話などをなさる。皇子は、七日間朝夕行う。
八 東宮の宣旨である典侍。「春宮の宣旨」は、立太子の宣旨を取り次いだ女房の呼び名という。上臈の女房。「典侍」は、内侍司の次官。この頃、従四位相当。
九（明石の上が）御迎え湯の役をご自身なさるのも、（典侍は）深く胸を打たれて。「迎湯」は、湯をつかわせる介添役をすること。
一〇（明石の上が）少しでも欠けたところがあれば、（女御にとって）不都合なことであろうに。
一一 この間の重々しい作法など、いちいちお伝えしますのも、今さららしく思われます。
一二 東宮の御父。

七日、帝の産養

る浦」と、尼君のためには見えたれど、儀式なきやうなれば、わたりたまひなむとす。対の上もわたりたまへり。白き御装束したまひて、人の親めきて、若宮をつと抱きてゐたまへるさま、いとをかし。
[産室に] [紫の上自身はお産のご経験もなくみづからかかること知りたまはず、人の上にても見ならひたまはねば、いとめづらかにうつくしと思ひきこえたまへり。むつかしげにおはするほどを、絶えず抱きとりたまへば、まことの祖母君は、ただまかせたてまつりて、御湯殿のあつかひなどをつかうまつりたまふ。春宮の宣旨なる典侍ぞつかうまつる。御迎湯におりたちたまへるもいとあはれに、うちうちのこともほの知りたるに、すこしかたほならば、いとほしからましを、あさましく気高く、げにかかる契りことにものしたまひける人かな、と見きこゆ。このほどの儀式なども、まねびたてむに、いとさらなりや。
[他人のことでも今までご存じないので] [大層もの珍しく] [若宮を] [紫上が] [紫上に] [御湯殿に奉仕する] [典侍は] [内々の事情も少々知っているので] [明石上は] [驚くほど] [特別のご運のおありになった人なのだな] [と思って拝見する]

六日といふに、例の御殿にわたりたまひぬ。七日の夜、内裏より帝も御産養のことあり。朱雀院の、かく世を捨ておはします御かは
[女御は] [あのように出家していらっしゃるかわりであろ]

一三 弁官より選ばれた蔵人の頭。蔵人の頭は定員二名。あと一人は、中将から選ばれる。
一四 帝のなさる公式規定以上に。帝の表向きの禄に、中宮からのも加える。
一五（この産養に奉仕するのが）その頃のもっぱらの仕事で。

源氏の満足

一六 今回のお産に関する、いろいろのお祝いの行事については、いつものように簡略になさらず。将来を慮っての処置である。源氏は、自分のことは簡素に、と努めた（八六頁、八七頁参照）。
一七 お内輪同士の優雅で繊細な風雅の趣の、詳しくお伝えすべき点は、目も引かれずに終ってしまった。贈り物や歌のやりとりである。語り手の言葉をそのまま伝える体の草子地。
一八（若宮は）日に日に、物を引き伸ばすように、どんどんご成長なさる。『竹取物語』のかくや姫も、異常に早く成長している。『岷江入楚』は「昔の物語に多く書けるなり」と注する。
一九 今までお仕えしている女房のなかで、家柄やたしなみのある人ばかりを選んで。

りにや、蔵人所より、頭の弁、宣旨うけたまはりて、例のないほど立派にめづらかなるさまにつかうまつれり。禄の衣など、また中宮の御方よりも、公事にはたちまさり、いかめしくせさせたまふ。次々の親王たち、大臣の家々、そのころのいとなみにて、われもわれもときよらを尽くしてつかうまつりたまふ。

大殿の君も、このほどのことどもは、例のやうにもことそがせたまはで、世になく響きこちたきほどに、うちうちのなまめかしくこまかなるみやびの、まねび伝ふべき節は、目もとまらずなりにけり。

大殿の君も、若宮をほどなく抱きたてまつりたまひて、「大将のあまたまうけたなるを、今まで見せぬがうらめしきに、かくらうたき人をぞ得たてまつりたる」と、うつくしみきこえたまふはことわりなりや。日々に、ものを引きのぶるやうにおよすけたまふ。御乳母など、心知らぬはとみに召さで、さぶらふなかに、品、心すぐれたる限りを選りて、つかうまつらせたまふ。

源氏の満足
世間に例のないほど大変な騒ぎだったので
（源氏）夕霧 大勢子供を作っているようだが
若宮の
気心の分らぬ者は急いで召したりせず
盛大に用意させなさった
別に 秋好む中宮
ご奉仕した
あらん限り立派なものを用意してご奉仕なさる
こんなにかわいらしい人を授かった
おかわいがり申されるのは
もっともなことである
お仕え申させなさる

若宮を囲む紫の上と明石の上

御方の（明石の上のお心がけが）御心おきての、（気が利いていて）らららうじく（大らかでゆったりしていながら）気高く、おほどかなるものの、さるべきかたには卑下して、憎らかにもうけばらぬなどを、（小憎らしく出しゃばったりしないことなどを）ほめぬ人なし。対の上は、まほならねど見えかはしたまひて、さばかりゆるしなくおぼしたりしかど、今は宮の御徳に、いとむつましくやむごとなくおぼしなりにたり。（紫上は）児うつくしみしたまふ（子供好きでいらっしゃる　ご性質で）御心にて、天児など、御手づから作りそそくりおはするも、いと若々し。明け暮れ（忙しそうにしていられるのも）この御かしづきにて過ぐしたまふ。（日を暮される）かの古代の尼君は、（若宮のお世話で）若宮をえ心のどかに見たてまつらぬなむ、（拝見できないことが）飽かずおぼえける。なかなか見たてまつりそめて恋ひきこゆるにぞ、（拝見したためにまたもお目にかかりたくて）命もえ堪ふまじかめる。

（不満に思われるのだった）（なまじ）（若宮を一一度）

明石の入道の入山

かの明石にも、（明石の入道）かかる（若宮ご安産のことを）御こと伝へ聞きて、さる聖ごこちにも、いとうれしくおぼえければ、「（明石入道）今なむこの世の境を心やすく行き離るべき」と弟子どもに言ひて、この家をば寺になし、（住んでいる家）あたりの田などやうのものは、皆その寺のことにしおきて、（寺領）この国の奥の郡に、人も通ひがたく深き山あるを、（通えないような深山があるのを）年ごろも占めおきながら、（以前から）あしこに籠（所有しながら）

一 しかるべき時には、よく遜って。
二 紫の上は、改まった形でというわけではないが、こうして時々機会があって対面なさってからは。女御のお産を機に、明石の上にも会う機会が多い。
三 あれほど許せないと思っていらしたのだが。紫の上が明石の上に嫉妬していたことは、三巻松風一三〇～一頁、一四二～三頁、玉鬘三二七頁の衣配りのくだり参照。
四 今は若宮のお蔭で、（明石の上を）大層親しく大切に思われるようになった。
五 小児の這う形に作った厄除けの人形。三歳まで用いるという。（三巻図録一一参照）
六 あの古めかしい尼君。明石の尼君のこと。
七 せつない思いに、命も堪えられぬ様子である。今にも恋死しそうだと、滑稽化していう。
八 あのような俗念を断ち切った心にも。
九 今こそ、現世から安らかに去ってゆくことができる。
一〇 播磨の国の奥の郡に。『延喜式』に「明石、賀古、印南、餝磨、揖保、赤穂、佐用、宍粟、神埼、多可、賀茂、美嚢」の十二郡をあげる。（図録八参照）
一一 「あそこ」の古形。自分の領地である山奥。

りなむのち、[一二]また人には見え知らるべきにもあらずと思ひて、[一三]ただすこしのおぼつかなきこと残りければ、今までながらへけるを、今はさりともと、仏神を頼み申してなむうつろひける。

（明石に）とどまっていたが　（山奥に）移ったのであった　大丈夫と

この近き年ごろとなりては、京に、異なることならで人も通はしたてまつらざりつ。[一四]これより下したまふ人ばかりにつけてなむ、一行にても、尼君にさるべきをりふしのことも通ひける。思ひ離るる世のとぢめに、文書きて、御方にたてまつれたまへり。

最近の数年間は　特別の用でなければ使いもさし上げら れなかった　（しかし今度は）俗世を捨てる最後の別れに　明石の上に

（明石入道）[一五]この年ごろは、同じ世の中のうちにめぐらひはべりつれど、何かはかくながら身をかへたるやうに思うたまへなしつつ、[一六]させるこ となき限りは、聞こえうけたまはらず。仮名文見たまふるは目の暇いりて、[一七]念仏も懈怠するやうに、益なうてなむ、御消息もたてまつらぬを、つてにうけたまはれば、若君は春宮に参りたまひて、男宮生まれたまへるよしをなむ、深くよろこび申しはべる。そのゆゑは、[一九]みづからかくつたなき山伏の身に、今さらにこの世の

生きながら別世界に生れ変ったように考えることにいたしましては　特別の用のない限りは　お便りのやりとりもいたしません　無駄なことですから　人づてに承りますと　お生れになったとのことを　心からおよろこび申し上げます　その わけは

入道の遺書

一二 ふたたび人に会ったり消息を知られたりすべきでもないと思って。「見え」は受身で「見られ」の意。

一三 ほんの少し、この世に気がかりなことが残っていたので。

一四 こちら（京の方）から遣わされる使者にことづけるぐらいのことで、ほんの一行にせよ、尼君にしかるべき折々の返事も送られたのだった。

一五 ここ何年かは、同じこの世のうちに生き永らえて立ち交っていましたけれども。以下、明石の上への入道の手紙。

一六 仮名文を読みますのは、時間がかかって。「仮名文」は、明石の上たちからの手紙をいう。仮名は一字一音なので、男子の用いる漢文に馴れた目には、意味がすぐ取りにくい。

一七 念仏も滞るようで。「念仏」は、心に仏を念じ、仏名、経などを唱える行法。

一八 明石の女御のこと。三歳の時に別れた時のままの呼び方をしている（三巻松風一二四頁参照）。

一九 私自身は、こんなつまらぬ山伏の身で。「山伏」は、山野に起き臥ししして修行する者。

一 六時の勤行。「六時」は、九四頁注八参照。
二 極楽往生の願いをさしおいて。明石の入道は、かつて源氏にも「昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて……」（二巻明石二七九頁）と語っている。
三 あなたが。明石の上のこと。「おもと」は、婦人を親しみ呼ぶ言葉。
四 某年の二月の某日の夜の夢に見ましたのは。「その年」「その夜」は、実際には何年何日の夜と書いてあるのを、省略した書き方。
五 仏教の世界観で、世界の中心にあり、大海中に聳える高山。日月が常にその周囲を廻り、昼夜を照らす。
六 女は、右をつかさどるとされるところから、ここは明石の上を生むこと。
七 月は皇后、日は帝を喩えるところから、明石の上により皇后、東宮が生れる予兆。
八 入道自身は、出家の身なので、その恩恵に浴さないことをいう。
九 東宮が即位し、四海を治めることを示す。
一〇 般若の船。真理を悟る智恵。それによって彼岸（悟りの境地）に達することから、船に喩える。
一一 「はべりし」の促音便「はべつし」の促音無表記の形。
一二 仏典以外の書。外典。儒学の書物をいう。
一三 仏典。
一四 私のような賤しい者の懐の中ながらも。

栄達を願うのでもございません　過ぎ去った昔の何年かの間　未練がましく

栄えを思ふにもはべらず。過ぎにしかたの年ごろ、心ぎたなく、六時の勤めにも、ただ御ことを心にかけて、蓮の上の露の願ひをばさし置きてなむ念じたてまつりし。わがおもと生まれたまはむとせし、その年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を、右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす。みづからは山の下の蔭に隠れて、その光にあたらず。山をば広き海に浮かべおきて、小さき船に乗りて、西の

あなたのことばかり思って　私は　西方の極楽浄土

かたをさして漕ぎゆく、となむ見はべし。夢さめて朝より、数ならぬ身に頼むところ出で来ながら、何ごとにつけてか、さるいかめしきことをば待ち出でむと、心のうちに思ひはべしを、そのころより孕まれたまひにしこなた、俗のかたの文を見はべしにも、また内教の心を尋ぬるなかにも、夢を信ずべきこと多くはべしかば、賤しき懐のうちにも、かたじけなく思ひいたづきたてまつりしかど、力及ばぬ身に思うたまへかねてなむ、かかる道におもむ

将来への望みが生じたのですが　どんなことによって　そんな大層な　幸運を待ちもうけることができようかと　［あなたが］　母の胎内に孕まれなさって以来

真意　もったいなく思い　大事にお育て申しましたが　沢山書いてありまして　思案に余りまして　こんな田舎に下って来まし　力不足の身で

一五 今度はまた、この播磨の国守に沈淪しまして。「沈み」は、「波」「立ち返る」とともに「浦」の縁語。三巻松風一二六頁に、同様の述懐がある。

一六 心ひそかに多くの願を立てました。（松風一二七頁、二巻明石二七九頁参照）

一七 若君（明石の女御）が、国母におなりになって。国母は、皇后または皇太后のこと。

一八 明石の入道が、住吉の神に大願を立てていることは、明石二七〇頁注一参照。

一九 夢にあった第一の願い。若君が国母になること。以下、その願いも叶ったと断定的にいう。

二〇（第二の）極楽の九品の蓮台の上の往生の望みも間違いないことになりましたから。「是より西の方十万億の仏土を過ぎて、世界有り。名づけて極楽と為す」（『阿弥陀経』）。「九品」は、極楽浄土の九段階。上品、中品、下品のそれぞれを上生、中生、下生に分ける。「十方仏土の中には西方を以て望みとす、九品蓮台の間には下品といふとも足ぬべし」（『和漢朗詠集』下仏事、慶滋保胤）

二一 往生人は、阿弥陀仏、観音、勢至の両脇侍以下に迎えられて蓮華台の上に生れ変る。（『観無量寿経』）

二二 『花鳥余情』は玄賓の歌という「とつ国は水草きよみ事しげき都のうちはすまずまされり」をあげる。

二三 皇子が即位される時も近くなりましたので、今はじめて昔見た夢のお話をするのです。

二四 手紙の日付。これを命日とも思え、という気持。

きはべりにし。（老いの身で二度と都に帰るまいとあきらめをつけて）一五またこの国のことに沈みはべりて、老の波にさらに立ち返らじと思ひとぢめて、（長年おりました間もたさまを頼みの綱にお思い申していましたので）この浦に年ごろはべしほども、わが君を頼むことに思ひきこえはべしかばなむ、一六心ひとつに多くの願を立てはべし。（今やそのお礼参りも無事にできるように）その返り申したひらかに、（望みどおり）思ひのごと時に（時節にお会いです）あひたまふ。（宿願がお叶いなさった時に）若君、一七国の母となりたまひて、（願果しをなさいませ）願ひ満ちたまはむ世に、一八住吉の御社をはじめ、（もはや何ごとをうたがいましょう）果たし申したまへ。（最近かなったわけですから）さらに何ごとをかは疑ひはべらむ。一九このひとつの思ひ、近き世にかなひはべりぬれば、二〇はるかに西のかた、十万億の国隔てたる、九品の上の望み疑ひなくなりはべりぬれば、今はただ迎ふる蓮を待ちはべるほど、その夕まで、（勤行をしようと存じまして）二一水草清き山の末にて（山奥に）籠るのです勤めはべらむとてなむまかり入りぬる。

二三 光いでむ暁ちかくなりにけり
今ぞ見し世の夢語りする

とて、二四月日書きたり。

一 私が、何月何日に死にましょうとも、決してお心におかけ下さるな。以下、入道の追伸の文。

二 昔から、人が染めておいた（着るならわしの）喪服などにも、身をやつされる必要はありません。「藤衣」は、藤や蔦で織った粗末な衣服、転じて喪服のこと。出家の身で、すでに父子恩愛の道を捨てているので、こういう。

三 ただご自身を変化の身とお考えになって。「変化」は、神仏が人の姿をかりて仮にこの世に姿を現したもの。人の子（明石の入道の娘）だと思わずに、の意。

四 私めのためには、功徳をつくって下さい。「老法師」は卑下の言葉。「功徳」は、よい果報を得るための善業。極楽往生を願って読経、布施を行うこと。

五 私が念願しております所（極楽）にさえ生れ変ることができましたら、あなたとは必ずまたお目にかかれましょう。明石の上は仏が仮に姿を現したもので、必ず極楽に帰るであろうから、という考え。

六 「娑婆」は、忍土。諸悪、諸煩悩を忍ぶ世界。人間界。「娑婆のほかの岸」で、彼岸。悟りの世界。

七 住吉神社。

八 熊や狼にも施してやりましょう。「身を捨てて山に入りにし我なれば熊のくらはむこともおぼえず」（『拾遺集』巻七物名、読人しらず）。『河海抄』は、「薩埵王子飢虎に身を施し給し心歟」という。

九 悟りの世界。極楽浄土のこと。

一命終らむ月日も、さらになしろしめしそ。いにしへより人の染めおきける藤衣にも、何かやつれたまふ。ただわが身は変化のものとおぼしなして、老法師のためには功徳をつくりたまへ。この世の楽しみに添へても、後の世を忘れたまふな。願ひはべる所にだに至りはべりなば、かならずまた対面ははべりなむ。娑婆のほかの岸に至りて、疾くあひ見むとをおぼせ。

現世の楽しみを味わうにつけても　後世のことをお忘れなさるな

さてかの社に立て集めたる願文どもを、大きなる沈の文箱に、封じ籠めてたてまつりたまへり。

早く会おうとお思い下さい

別に改めても　しっかり封をしてさし上げられた

尼君にはことごとにも書かず、ただ、

三月

この月の十四日になむ、草の庵まかり離れて、深き山に入りはべりぬる。かひなき身をば、熊狼にも施しはべりなむ。そこには、なほ思ひしやうなる御世を待ち出でたまへ。明らかなる所にて、また対面はありなむ。

庵室を出まして　深い山奥に籠ります

役にも立たぬ老いの身を　続いて望みどおりの「皇子の」御代をお見届け下さい

とのみあり。

一〇 入道の使者の僧。「大徳」は、高徳の僧、転じて僧の敬称。

一一 このお手紙をお書きになってから、三日目にあたる日に。前に「この月の十四日になむ、……深き山に入りはべりぬる」と、入道の手紙にあった。

一二 今は限りとご出家なさった当時を、悲しみの最後と存じましたが、まだ残りがございましたのです。この大徳は、入道在俗中から仕えていたことを窺わせる言葉。後文に、その説明がある。

一三 七絃の琴。

一四 入道が琵琶に巧みであること、二巻明石二七六頁参照。

一五 御堂に喜捨なさいました。「御堂」は、前に「この家をば寺になし」（一〇〇頁）とあった。

一六 財産を親近の者に遺贈すること。

一七 その上でまだ残っている物を。「し」は、強意の助詞。

一八 京の方々（尼君や明石の上）の分として。

一九 少年の頃、京から下った人で。入道の播磨下向についてきたのであろう。

二〇 今は老法師になって、明石の浦に残っているのだが。入道に従って出家したのであろう。

尼君この文を見て、か一〇の使の大徳に問へば、「この御文書きたまひて、三日といふになむ、かの絶えたる峰にうつろひたまひにし。なにがしらも、かの御送りに、麓まではさぶらひしかど、皆返したまひて、僧一人、童二人なむ、御供にさぶらはせたまふ。今はと世を背きたまひしをりを、悲しきとぢめと思うたまへしかど、残りはべりけり。年ごろ行ひの隙々に、寄り臥しながら掻き鳴らしたまひし琴の御琴、琵琶とり寄せたまひて、かい調べたまひつつ、仏にまかり申したまひてなむ、御堂に施入したまひし。さらぬものどもも、多くはたてまつりたまひて、その残りをなむ、御弟子ども六十余人なむ、親しき限りさぶらひける、ほどにつけて皆処分したまひて、なほし残りをなむ、京の御料とて送りたてまつりたまへる。今はとてかき籠り、さるはるけき山の雲霞にまじりたまひにしむなしき御あとにとまりて、悲しび思ふ人々なむ多くはべる」など、この大徳も、童にて京より下りたりける人の、老法師になりてとまれる、い

（大徳）一一
あの人跡未踏の
お移りになりました
拙僧らも
入道のお見送りに
お供いたしましたが
［入道は］
お従えになりました
一二
長年の間
勤行
少しお弾きになっては
ご本尊に
一三
一四
お別れを申されてから
一五
そのほかの財宝も
ほとんど寄進なさいまして
親しい者ばかりがお仕えしていましたが
それぞれ分に応じて
一六
雲や霞の中に入っておしまいになったあと
に空しくとどまって
一七
一八
一九
二〇

一 釈迦の弟子であるすぐれた僧たちも、霊鷲山のことは、確かに信じていながら。「鷲の峰」は、霊鷲山を言い、印度の摩訶陀国王舎城の東北にあって、釈迦がここで常に説法し、入滅後も、その霊が永遠にここで法を説いたという（『法華経』如来寿量品）。

二 やはり、釈迦入滅の夜の悲しみは深かったのだから。『法華経』序品に、

明石の上、入道の文を見る

釈迦入滅を「仏、此の夜滅度したまふこと、薪尽きて火の滅するが如し」と述べ、同じく序品に「世尊の諸子等、仏、涅槃に入りたまはむと聞きて、各々に悲悩を懐く」と記す。

三 明石の上。

四 明石の女御の御殿。

五 「こんなお便りがありました」と、尼君のもとから知らせてきたので。

六 （今は若宮の祖母なので）重々しく振舞って。

七 いつもまず、昔のこと、過ぎ去った日のことを思い出して、恋しいと思い続けていらっしゃる明石の上としては。

八 入道の手紙にあった夢の話を。

九 （悲しみにくれながらも）一方では、正夢かと将来が頼もしく思われ。

一〇 それでは、偏屈なお考えで、私をとんでもない身の上にして、うろうろさせなさると。身分違いの源氏に縁づけるなど、ふさわしからぬことをして、住み馴れた明石を離れさせたことをいう。

とあはれに心細しと思へり。一仏の御弟子のさかしき聖だに、鷲の峰をばたどたどしからず頼みきこえながら、二なほ薪尽きける夜のまどひは深かりけるを、まして尼君の悲しと思ひたまへること限りなし。

御方は、三南の四御殿におはするを、五「かかる御消息なむある」とありければ、忍びてわたりたまへり。六重々しく身をもてなして、おぼろけならでは、通ひあひ見たまふこともかたきを、「あはれなることなむ」と聞きて、おぼつかなければ、七うち忍びてものしたまへるに、いといみじく悲しげなるけしきにてゐたまへり。八火近く取り寄せて、この文を見たまふに、げにせきとめむかたぞなかりける。九その人は、何とも目とどむまじきことの、一〇まづ昔来し方のこと思ひ出で、恋しと思ひわたりたまふ心には、あひ見で過ぎ果てぬるにこそはと見たまふに、いみじくいふかひなし。一一涙をえせきとめず、この夢語りを、一二かつは行く先たのもしく、一三さらば、ひが心にて、わが身をさしもあるまじきさまにあくがらしたまふと、中ごろ思ひただよ

（そっと［尼君のもとへ］）
（［尼君と］行き来しお会いになることもむつかしいのだが）
（悲しいお便りがあったことでなければ）
（気がかりなので）
（人目を忍んでお出でになったところ）
（［尼君は］）
（［明石上が］）
（まことに涙をせきとめるすべもないのだった）
（他人）
（何とも感じないようなことでも）
（ならば）
（［明石上は］）
（本当に気落ちした思いがする）
（ついに父上には会えないまま終ってしまったのだとご覧になると）
（途中で一時気持が迷ったこと）

尼君の述懐

一 あなた（明石の上）のお蔭で、うれしく晴れがましいことも、分に過ぎて、またとないことだと思っております。女御入内や皇子誕生など。

二 数にも入らぬ身分ながらも。夫の明石の入道が、中央で出世しなかったことをいう。

三 まさか生きながら別れ別れになり、離れて住むような夫婦仲とは思いも寄らず。

四 極楽の同じ蓮の上に往生しようと、来世の望みまで持って。極楽の往生人は、蓮華の上に半座をあけて、この世での有縁の人を待つという。

五 急にこんな思いがけぬことが起りまして。明石の上が源氏と結ばれたこと。

六 いったん捨てた都に、また戻ってきましたが。三巻松風一二五頁以下の、大井帰還のこと。

七 宮仕えをしていた時でも、（入道は）一風変った性質でしたから、世をすねているようでしたが。

八 まだ若かった私たちは、いつも頼りにしあっていて。

ともあったがそれは　こんなあてにもならぬ夢に望みを託して　高い理想を持っていらっし

はれしことは、かくはかなき夢に頼みをかけて、心高くものしたま

やったのだと　今になってようやくお分りになる

ふなりけりと、かつがつ思ひ合はせたまふ。

尼君、久しくためらひて、「君の御徳には、うれしくおもだたし

やっと涙をおさめて

きことをも、身にあまりて並びなく思ひはべり。あはれにいぶせき

「けれども」悲しく晴れぬ思い　長年住み馴れた

思ひもすぐれてこそはべりけれ。数ならぬかたにても、ながらへし

をすることも人並み以上の私でした　明石にうらぶれ住んだことだけでも

都をあとにして

都を捨てて、かしこに沈みゐしをだに、世人に違ひたる宿世にもあ

悲しい運命

なのだと

るかなと思ひはべしかど、生ける世にゆき離れ、隔たるべき中の契

りとは思ひかけず、同じ蓮に住むべき後の世の頼みをさへかけて年

月を過ぐし来て、にはかにかくおぼえぬ御こと出で来て、背きにし

そのかいのあったあなたのお身の上を拝見してうれしいながら

世に立ち返りてはべる、かひある御ことを見たてまつりよろこぶも

入道の身を案じて悲しい思いがつきまとって絶えませんでした

のから、片つかたには、おぼつかなく悲しきことのうち添ひて絶え

離れたままで今生の別れになってしまったのが　残念に

のに

ぬを、つひにかくあひ見ず隔てながらこの世を別れぬるなむ、くち

思われます

をしくおぼえはべる。世に経し時だに、人に似ぬ心ばへにより、世

をもてひがむるやうなりしを、若きどち頼みならひて、おのおのは

二人はそれぞれ

一 またとなく深い睦びを交わしていましたから。

二 どうして、こんなすぐ消息も分る所にいながら、このまま別れてしまったのでしょう。「耳に近きほど」は、風聞もすぐ伝わるほど近い所、の意。

三 人よりすぐれた行く先の栄華もうれしくはありません。入道の夢にあるような立后、即位による栄華。

四 人数でもない私には、何事も晴れがましく表立って、生きがいのあるはずもないとはいえ。陰の身で、女御の母、皇子の祖母の扱いはされないことをいう。

五 何もかも、そうした宿縁がおありだった方（父入道）がいらしてはじめて意味のあることと思われます。

六 そんなふうにして（使者が伝えるように）山奥に入っておしまいになったら。

七 以下、明石の上の言葉。

八 私があちら（女御のお側）にいると、ご覧になっていらっしゃったのに。

九 よくないでしょう。身分の低い者の振舞のようだ、の意。

一〇 私だけのことでしたら、何の気がねもありません。

一一 ああして、若宮までお生れになった女御のお身にとって、不都合があってはと思いますので。

明石の上と尼君の悲喜こもごもの涙

一 またなく契りおきてければ、かたみにいと深くこそ頼みはべしか。（お互いに本当に心から頼りにしていましたのに）

二 いかなれば、かく耳に近きほどながら、かくて別れぬらむ」と言ひ続けて、いとあはれにうちひそみたまふ。（とてもつらそうに泣き顔になられる）御方（明石の上）もいみじく泣きて、

三 「人にすぐれむ行く先のこともおぼえずや。四 数ならぬ身には、何ごともけざやかにかひあるべきにもあらぬものから、あはれなるありさまに、（悲しい生き別れの状態で）おぼつかなくてやみなむのみこそくちをしけれ。五 よろづのこと、さるべき人の御ためとこそおぼえはべれ。六 さて絶え籠りたまひなば、世の中も定めなきに、（人の命はかないものですから）やがて消えたまひなば、（そのままお亡くなりになったら）かひなくなむ」とて、（何にもなりません）夜もすがら、あはれなることどもを言ひつつ明かしたまふ。（悲しいことをあれこれ）

七 「昨日も、大殿（源氏）の君の、八 あなたにありと見おきたまひてしを、（こっそり隠れたようなのも）には かにはひ隠れたらむも、九 軽々しきやうなるべし。一〇 身ひとつは、何ばかりも思ひ憚りはべらず。一一 かく添ひたまふ御ためなどのいとほしきになむ、心にまかせて身をももてなしにくかるべき」とて、（思いのままに）（わが身を振舞うわけにもまいりますまい）暁に帰（明石上は）

一三 女御の君も、大層なつかしくあなたを思い出しなさって、お口にあそばすようです。

一三 もし世の中が思いどおりになったら、縁起でもないことを今から言うようだが、尼君もその頃まで長生きして頂きたいものだ、と仰せのようでした。寿命のことを言うので「ゆゆしきかね言」という。

一四 どんなお考えがあってのことでしょうか。源氏は若宮の立坊のことを言っているのだが、それをぼかして曖昧に言う。

一五 いえ、ですから、私はあれもこれも（喜びも悲しみも）例のない運命なのですよ。

一六 願文の入った文箱。

明石の女御の参内迫る

一七 若宮を内々参内おさせ申そうとご用意なさる。皇子は、里邸で養育されるのが当時の風習であった。

一八 明石の女御は、なかなかお暇が出ないのにお懲りになって「御息所」は、皇子、皇女を産んだ女御、更衣の呼称。

一九 年もゆかないお身体で、あんな恐ろしいこと（出産）をなさったので。（七六頁注八、九二頁注五参照）

りわたりたまひぬ。「若宮（尼君）はいかがおはします。いかでか見たてまつるべき」とても泣きぬ。「今見たてまつりたまひてむ。（明石上）そのうちお目もじできましょう　と言ってはまた泣いた　どうしたらお目にかかれましょう　女御の君も、いとあはれになむおぼし出でつつ聞こえさせたまふめる。院（源氏）も、ことのついでに、一三もし世の中思ふやうならば、ゆゆしきかね言なれど、尼君そのほどまでながらへたまはなむ、とのたまふめりき。一四いかにおぼすことにかあらむ」とのたまへば、（泣いていたのに）またうち笑みて、「いでや、さればこそ、さまざま例なき宿世にこそはべれ」とて、よろこぶ。一六この文箱は持たせてまう上りたまひぬ。

宮（東宮）より、「女御に」とく参りたまふべきよしのみあれば、「かくおぼしたる、ことわりなり。めづらしきことさへ添ひて、いかに心もとなくおぼさるらむ」と、紫の上ものたまひて、若宮忍びて参らせたてまつらむ御心づかひしたまふ。御息所（一八）は、御暇の心やすからぬに懲りたまひて、かかるついでに、しばしあらまほしくおぼしたり。一九ほどなき御身に、さる恐ろしきことをしたまへれば、すこし面痩せ細りて、

（女御に）早く参内なさるようとの旨が始終あるので　（東宮が）そうお思いなのも　ごもっともです　おめでたいことまであったのですから　待ち遠しくお思いでしょう　こんな機会に　しばらくお里にいたいと

一 こんなにまだおやつれになったままなのですから。「ためらふ」は、病勢などを静めること。

二 紫の上などが、ご自分の御殿（東の対）にお帰りになった夕方、あたりが人少なでひっそりしている時に。

明石の上、入道の文を女御に見せる

三 明石の上は、女御のもとに参上して、さきほどの文箱のことをお知らせ申し上げる。

四 すっかり、思いどおりのお身の上になられるまでは。若宮の立太子などのあるまでは。

五 この世は無常なものですから、気がかりですので。自分もいつ死ぬか分らない、という。

六 見苦しく見馴れぬ筆跡ですが。明石の入道の手紙である。漢字混りに書かれている。

七 お側の御厨子。「厨子」は、書籍、文書、手紙などを納める本箱ようのもの。両開きの戸があり、上に棚のあるものもある（一巻図録九参照）。

八 将来しかるべきその時。立后の時。

九 この願文に書いてある、願果しの数々。立願の叶った折には、これこれのお礼をすると書かれてあること。

美しいご様子でいらっしゃる

いみじくなまめかしき御さましたまへり。「かくためらひがたくおはするほど、つくろひたまひてこそは」など、御方（明石上）一などは心苦しがりきこえたまふを、大殿（源氏）は、「かやうに面痩せて見えたてまつりたまはむも、なかなかあはれなるべきわざなり」などのたまふ。

もう少し養生なさった上で　明石の上　お目通り申されるのも　くお思い申すが　かえって情愛の湧くことなのです

対の上などのわたりたまひぬる夕つかた、しめやかなるに、御方、御前に参りたまひて、この文箱聞こえ知らせたまふ。「思ふさまにかなひ果てさせたまふまでは、取り隠して置きてはべるべけれど、世の中定めがたければ、うしろめたさになむ。何ごとをも御心とおぼし数まへざらむこなた、ともかくもはかなくなりはべりなば、かならずしも今はのとぢめを御覧ぜらるべき身にもはべらねば、なほうつし心うせずはべる世になむ、はかなきことをも聞こえさせ置くべくはべりける、と思ひはべりて、むつかしくあやしきあとなれど、これも御覧ぜよ。この願文は、近き御厨子などに置かせたまひて、かならずさるべからむをりに御覧じて、このうちのことどもはせさ

（明石上）四　（明石上）五　（女御が）　こんなものは隠しておくべきなのでございますが　ご自分でいろいろご判断のおできになる前に　（私が）何にせよ亡くなることがございましたら　お見取り頂ける身の上でもございませんので　臨終の折を　気が確かでございますうちに　小さなことでもお耳に入れておいた方がよい　やはり　なさっ

一〇 あなたのご将来も、こうとお見届けしましたので。男御子の誕生で、もう安心という気持。
一一 私自身も出家しましょうと思うようになりましたので。「はべなむ」は、「はべりなむ」の撥音便「はべんなむ」の撥音無表記の形。
一二 対の上（紫の上）のご芳情を、おろそかにお思い申されますな。以下、明石の上も遺言めいて語る。
一三 とてもこうまで親身にはして下さるまいと、長年、やはり世間並みに考えて来ました。世間によくある継母並みに考えていた、という。
一四 明石の上は、実の娘のこととて、親しくしてもよい女御のお前でも。
一五 入道の手紙の文句は、いやに堅苦しく、親しめない体のものであるが。
一六 檀の皮の繊維で作った紙。もと陸奥で産したのでこの名がある。白くて厚い紙質。普通の消息文に用いる。

（お漏らしなさいますな）（気心の知れない者には）て下さいませ

せたまへ。うとき人には、な漏らさせたまひそ。一〇かばかりと見たてまつりおきつれば、みづからも世を背きはべなむと思うたまへなりゆけば、（何かにつけゆっくり構える気もいたしません）よろづ心のどかにもおぼえはべらず。一一対の上の御心、おろかに思ひきこえさせたまふな。いとありがたくものしたまふ深き御（まことに世にもまれでいらっしゃる深いご親切のほど）（長生きして頂きたいと存じ）（私などよりはずっとはるかに）を拝見しておりますので）けしきを見はべれば、身にはこよなくまさりて、長き御世にもあら（ています）なむとぞ思ひはべる。もとより御身に添ひきこえさせむにつけても、（もともと）（私は）（お側にお付き添い申し上げるにつけても）（控えたほうがよい身分でございますから）つつましき身のほどにはべれば、（紫上に）（早くからお任せ申し上げたのですが）ゆづりきこえそめはべりにしを、一三いとかうしもものしたまはじとなむ、年ごろは、なほ世の常に思うたまへわたりはべりつる。（けれども）今は来し方行く先、（安心できる気持になりました）うしろやすく思ひなりにてはべり」など、いと多く聞こえたまふ。（女御は）涙ぐみて聞きおはす。（いつも礼儀正しい態度でいらして）一四かくむつましかるべき御前にも、常にうちとけぬさましたまひて、（むやみに控え目にしている様子である）わりなくものづつみしたるさまなり。この文の一五言葉、いとうたてこはく、憎げなるさまを、一六陸奥紙にて、年経にければ、黄ばみ厚肥えたる五六枚、さすがに香にいと深くしみたるに書きたまへり。（大層深く薫きしめられているのに）（女御は）いと

大層感動なさって
あはれとおぼして、御額髪のやうやう濡れゆく御側目、あてになまめかし。

源氏　女三の宮
院は、姫宮の御方におはしけるを、中の御障子より不意にこちらへお出でになったのでふとわたりたまへれば、えしも引き隠さで、御几帳をすこし引き寄せて、明石の上みづか自身はなかば隠れなさったらはした隠れたまへり。「若宮はおどろきたまへりや。時の間も恋お目ざめか少しの間でも恋しいものだなしきわざなりけり」と聞こえたまへば、御息所はいらへも聞こえたお返事も申されないのでまはねば、御方、「対にわたしきこえたまひつ」と聞こえたまふ。

(源氏)それはいかん　あちらで
「いとあやしや。あなたにこの宮を領じたてまつりて、独り占め申されて懐をさらに始終着換えて放たずもてあつかひつつ、人やりならず衣も皆濡らして、脱ぎかへいるとか[紫上が]こちがちなめる。軽々しく、などかくわたしたてまつりたまふ。こなたらに来てお世話申されればよいのだにわたりてこそ見たてまつりたまはめ」とのたまへば、(明石上)まあいやな思いやりのないお言葉ですこと「いとうたて思ひぐまなき御ことかな。女におはしまさむにだに、あなたにて見たてまつりたまはむこそよくはべらめ。まして男は、限りなしと聞こえさすれど、心やすくおぼえたまふを、ご冗談にしろたはぶれにても、かや

一 御額髪が段々涙で濡れてゆく御横顔は、大層気高く美しい。「額髪」は、頬に垂らす前髪。

二 女三の宮の居室である寝殿の西面と、女御のいる東面を仕切る襖障子。前に「中の戸」とあったもの（七七頁注一三参照）。

源氏、入道の文を見る

三 明石の上は、入道の手紙を取り隠すことができないで。

四 若宮の母女御。

五 明石の上。

六 対に（紫の上の御方へ）お渡し申されました。主語は、女御。

七 懐から少しも放さずあやしては、好きこのんで着物もすっかり濡らして。若宮におしっこをかけられていること。

八 簡単に、どうしてそうお渡しになるのです。「軽しく」は、身分の低い者のように、という含み。

九 たとえ若宮が女でいらしても、紫の上がお世話申されるのがよろしゅうございましょう。女は人に見られないよう、簾外に出ることを憚った。しかし紫の上は、女御の養母だからかまわない、という趣旨。

一〇 まして男御子なら、どれほど尊いご身分でも、かまわないと存じ上げますのに。「心やすく」は、気楽にの意。「おぼえたまふ」は、思われなさる。

一一では、若宮のことは、あなた方お二人（紫の上と明石の上）に任せて、お構い申さないのがいいのだね。「ななりな」は、「なるなりな」の撥音便「なんなりな」の撥音無表記の形。

一二隠し立てして、今は皆が私を除け者にして、出しゃばりだなどとおっしゃるのは、考えが足りないよ。「さかしらなどのたまふ」は、明石の上の「なさかしがり聞こえさせたまひそ」を受ける。

一三深いわけがあるのだろう。恋する男が、長歌を詠んで入れて、しっかり封がしてあるといった趣だね。大きい文箱なので、よほど深い思いを長歌に詠み込んで寄こしたのだろう、とからかう。

一四今風に若返りなさったお癖で、私など聞いても分らないようなご冗談が、時々お口から漏れますこと。若い女三の宮を迎えたことを含んで言う。

一五お二人のご様子がはっきり見て取れるので。女御と明石の上。

一六首をかしげること。不審に思うさま。

一七明石の入道のことを、卑下して言う。

一八内々に致しました御祈禱の巻数や、そのほかまだ願果し致しませぬ願などがございましたのを。「巻数」は、願主から依頼された祈禱のために、読誦した経文や陀羅尼の名と度数を書き付けた目録。依頼された寺から願主に送り届ける。

分け隔てするようなことを　知ったふうに申されますな

うに隔てがましきこと、なさかしがり聞こえさせたまひそ」と聞こえたまふ。うち笑ひて、「御仲どもにまかせて、見放ちきこゆべきなりな。隔て[一二]て、今は、誰も誰もさし放ち、さかしらなどのたまふこそをさなけれ。

第一そんなふうにこそこそ隠れて　冷たくこきおろしなさるよ

まづはかやうにはひ隠れて、つれなく言ひおとしたまふめりかし」とて、御几帳を引きやりたまへれば、母屋の柱に寄りかかりて、いときよげに、心はづかしげなるさましてものしたまふ。

うだからな　引きのけられると　[明石上は]

身じまいよく　気がひけるほど立派な様子でいらっしゃる

さきほどの文箱も　あわてて隠すのも見苦しいので

ありつる箱も、まどひ隠さむもさまあしければ、そのままでおいでなのを　さておはするを、

(源氏)何の箱か

「なぞの箱ぞ。深き心あらむ。懸想人の長歌詠みて封じこめたることちこそすれ」とのたまへば、

(明石上)まあいやなこと

「あなうたてや。今めかしくなり返らせたまふめる御心ならひに、聞き知らぬやうなる御すさび言どもこそ、時々出で来れ」とて、

苦笑していられるが　何やら泣いていられたよ

ほほゑみたまへれど、ものあはれなりける御けしきどもしるければ、あやしとうち傾きたまへるさまなれば、わづらはしくて、「かの明石の岩屋より、忍びてはべし御祈り

面倒に思って　(明石上)

の巻数、またまだしき願などのはべりけるを、御心にも知らせたてまつるべきをりあらば、御覧じおくべくやとてはべるを、ただ今は、ついでなくて何かはあけさせたまはむ」と聞こえたまふに、げにあはれなるべきありさまぞかしとおぼして、「いかに行ひまして住みたまひにたらむ。命長くて、ここらの年ごろ勤むる罪もこよなからむかし。世の中によしありさかしきかたがたの人とて見るにも、この世に染みたるほどの濁り深きにやあらむ、かしこきかたこそあれ、いと限りありつつ及ばざりけりや。さもいたり深く、さすがにけしきありし人のありさまかな。聖だち、この世離れ顔にもあらぬものから、下の心は、皆あらぬ世に通ひ住みにたるとこそ見えしか。まして今は、心苦しきほだしもなく、思ひ離れにたらむをや。かやすき身ならば、忍びていと会はまほしくこそ」とのたまふ。「今はかのはべりし所をも捨てて、鳥の音聞こえぬ山にとなむ聞きはべる」と聞こゆれば、「さらばその遺言ななりな。消息は通はしたまふや。

現世の名利に　才智という点ではすぐれているが　迷いが深いせいか　[入道は]いかにも悟り深く　それでいてものの情けも分った人でしたね　聖僧ぶって　俗世を捨て切ったというふうでもない　ただそれだけのことで[入道には]　ものの　気にかかる係累もなく　解脱し切っているだろうな　気軽に動いよ今は　こっそり行ってぜひにも会いたいものだ　けるる身なら　住んでいました家

一 殿様（源氏）にも、お知らせ申し上げるべき機会があれば、お目にかけておいた方がよいのではないかというので、送ってまいったのですが。

二 なるほど、（明石からの手紙なら）泣くのも無理はないと。前の「ものあはれなりける御けしきどもしるければ」を受ける。

三 （入道は）どんなに修行を積まれたお暮しであることだろう。

四 長生きをしたお蔭で、多年勤めてきた修行によって消滅した罪障も数知れぬことだろう。

五 世間でたしなみがあるとか学があるとか、それぞれ名僧高僧といわれる人というので、気をつけて見るにつけても。

六 本心は、この世ならぬ世界（極楽浄土）に、自在に行き来して暮していると思われたものだ。

七 鳥の音も聞えぬ山奥にということでございます。「飛ぶ鳥の声も聞えぬ奥山の深き心を人は知らなむ」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）による言葉。

八 では、（それは）その遺言なのだね。手紙はやりとりなさっているか。

九 なぜか恋しく思い出されてならぬ入道のお人柄ゆえ、深い夫婦の仲とあっては、どんなに感慨も深かろう。

一〇 入道の手紙にあった夢の話も（源氏は）思い当られることがあるかもしれないと思って。

一一 何ともおかしげな、梵字とかいうような筆跡ではございますが。「梵字」は、梵語（古代印度の文章語）を表す文字。明石の入道の筆跡の悪いのをこういった（図録八参照）。「はべめれど」は、「はべんめれど」の撥音無表記の形。

一二 あるいは、お目のとまるようなこともあろうかと存じまして。

一三 ことさら有職といってもよかった人なのだが、ただ処世の術だけがまずかったのだ。「有職」は、学問、芸能などに精通した人。

一四 入道の先祖の大臣。（一巻若紫一八六頁、二巻明石二七九頁参照）

一五 何かの行き違いがあって、その報いで、このように子孫が衰えたのだなどと、世間が言っていたようだが。「ものの違ひめ」は、「報い」と併せ考えるに、人から恨みを受け、祟られることを言うか。『河海抄』は、将門征伐の恩賞のないのを恨んで死んだ忠文民部卿の祟りで、子孫の絶えた清慎公（藤原実頼）の例をあげる。

尼君、いかに思ひたまふらむ。（どんなにおつらいことだろう）親子の仲よりも、（夫婦という仲は）またさるさまの契りはことにこそ添ふべけれ」とて、うち涙ぐみたまへり。

（格別悲しみも深いことだろう）

「年の積りに、（源氏）年を取って世の中のありさまを、とかく思ひ知りゆくままに、あやしく恋しく思ひ出でらるる人の御ありさまなれば、深き契りの仲らひは、いかにあはれならむ」などのたまふついでに、一〇この夢語りもおぼし合はすることもや、と思ひて、（明石上）「いとあやしき梵字とかいふやうなるあとにはべめれど、一一御覧じとどむべき節もやまじりはべるとてなむ。今はとて別れはべりにしかど、（上洛の時）なほこそあはれは残りはべるものなりけれ」とて、（見苦しからぬ体にのでございました）さまよくうち泣きたまふ。取りたまひて、（源氏）「いとかしこく、（大変しっかりしていて）なほほれぼれしからずこそあるべけれ。手（筆跡）なども、すべて何ごとも、一三わざと有職にしつべかりける人の、ただこの世経るかたの心おきてこそ少なかりけれ。一四かの先祖の大臣は、いとかしこくありがたき心ざしを尽くして、（立派で）（世にもまれな忠誠の志を尽して）朝廷につかうまつりたまひけるほどに、一五ものの違ひめありて、その報いにかく末はなきな

（やはりまた思いは残るものなまだ毫髪してはいないようだ）

一 娘の筋によってではあるが、こうして決して子孫が絶えたとはいえないのも。明石の上が、源氏の姫の母としていることをいう。

二 入道の手紙の夢物語の箇所。「夢のわたり」は、歌語。「世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡しつつ物をこそ思へ」（『河海抄』所引。出典未詳）

三 （入道については）妙に変り者で、むやみに大それた望みを持つと人も非難し。以下、六行後の「……心に起こしけむ」まで、入道の手紙を読んでの源氏心中の思い。

四 また自分としても、入道が身分にあるまじき振舞を、かりそめにもすることだと思ったことは。入道が自分を婿にと望んだこと。

五 女御の君がお生れになった時、深い前世からの契りによることだったのだと悟ったのだが。（三巻澪標一八頁参照）

六 してみると（入道は）こんな夢想を頼りにして、無理やり私を婿にと望んだのだ。

七 無実の罪でひどい目にあい、須磨や明石に流浪したのも、入道一人の祈願成就のためだったのだ。

源氏、明石の女御に紫の上の恩を説く

八 この願文は、ほかにも一緒にしてさし上げるべきものがございます。源氏自身の願文のこと。

九 あちら（紫の上）のご厚意を。

りなど人言ふめりしを、女子（一）のかたにつけたれど、かくていと嗣（つぐ）なしといふべきにはあらぬも、そこらの行ひ（おこな）のしるしにこそはあらめ」など、涙おしのごひたまひつつ、この夢（二）のわたりに目とどめたまふ。あやしく（三）ひがひがしく、すずろに高き心ざしありと人も咎（とが）め、また（四）われながらも、さるまじきふるまひを、かりにてもするかな、と思ひしことは、この君の生（む）まれたまひし時に、契（ちぎ）り深く思ひ知りにしかど、目の前に見えぬあなたのことは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ、さらばかかる頼みありて、あながちには望みしなりけり、横さま（ヒ）にいみじき目を見、ただよひしも、この人ひとりのためにこそありけれ、いかなる願（ぐわん）をか心に起こしけむ、とゆかしければ、心のうちに拝みて取りたまひつ。

〔入道の一多年の効験〕

〔遠い過去の因縁は〕

〔どういうものか分らぬとずっと思っていたのだが〕

〔入道は〕

〔願文を〕

〔源氏〕八

「これは、また具（ぐ）してたてまつるべきものはべり。今また聞こえ知らせはべらむ」と、女御（にょうご）には聞こえたまふ。そのついでに、「今は

〔そのうちまたお話し申し上げましょう〕

〔源氏〕

かくいにしへのことをもたどり知りたまひぬれど、あなたの御心ば

〔知りたいので〕

〔さかのぼってお分りになりましたが〕

一〇 もともと親しかるべき夫婦の仲や、切っても切れぬ親子兄弟の親しみよりも、他人がかりそめの情けをかけてくれたり、一言の好意でも寄せてくれるのは、並々のことではありません。「横さまの」は、そういう筋合ではないの意。

一一 実の母の明石の上が、あなたのお側に始終付き添っていられるのを見ながら。

一二 昔からの世間の言いぐさでも、（継母というものは）いかにも表面だけかわいがっているふうをするものだと、継子が知ったふうに気をまわすのも利口なようですが。

一三 たとえ間違っても、自分（継子）に対して内心邪慳な人（継母）のことを、そうは受け取らず素直に接したならば、（継母も）思い返してかわいく思い、どうしてこんなやさしい子に（ひどいことをしたのだろう）と、罰が当りそうな気がするにつけても、（継母が）改心することもありましょう。継子が誠意をもって尽せば、継子いじめもなくなるだろう、という大意。

一四 昔の、並々ならず実のある人は、いろいろ行き違いがあっても、（継母か継子の）どちらか一人に欠点のない時には、自然仲良くなる例はいくらもあるようです。「おぼろけの」は、おぼろけならぬの意。『落窪物語』の女主人公などを念頭に置くか。

へをおろかにおぼしなすな。一〇（おろそかに）もとよりさるべき仲、えさらぬむつびよりも、横さまの人のなげのあはれをもかけ、一言（ひとこと）の心寄せあるは、おぼろけのことにもあらず。まして、一二ここになどさぶらひ馴れたまふを見る見るも、はじめの心ざし変らず、深くねむごろに思ひきこえたるを。一三いにしへの世のたとへにも、さこそはうはべにははぐくみげなれと、ららうじきたどりあらむもかしこきやうなれど、なほあやまりても、わがため下の心ゆがみたらむ人を、さも思ひ寄らずうらなからむためは、引き返しあはれに、いかでかかるにはと、罪得がましきにも、思ひなほることもあるべし。一四おぼろけの昔の世のあだならぬ人は、違ふ節々あれど、ひとりひとり罪なき時には、おのづからもてなす例どもあるべかめり。さしもあるまじきことに、かどかどしく癖をつけ、愛敬なく人をもて離るる心あるは、いとう気の許せないもので　深いおもんばかりのないことと言うべきでしょう　ちとけがたく、思ひぐまなきわざになむあるべき。多くはあらねど、人の心の、とあるさまかかるおもむきを見るに、ゆゑよしといひ、

（紫上は）（女御を）お思い申して　いるのですから　こざかしく　難癖をつけ　可愛げもなく人をうとむ心のあるのは　そうまでしないでもいいことに　なかなか　あれこれとある様子を見るのに　たしなみといい教養といい

一 それぞれに、なかなかしっかりした体の気働きは持っているもののようです。

二 と言ってまた、取り立てて特に自分の妻としてまじめに選ぼうとすれば、なかなか見当らないものです。

三 （しかし）いくら人柄がよいといっても、またあまり締りがなく頼りないのも、残念なものです。

四 （明石の上には）もう一方の人（女三の宮）のことは、おのずと想像されたことだ。紫の上を賞めたきりで、正室の女三の宮には触れず、最後に一言不満らしきものを漏らしているからである。

五 朝夕の口癖に感謝申し上げております。

六 （私を）目障りな者などと思し召して、お許しがなかったら、こうまで私をお見知りおき下さるはずもございませんのに。

七 人数でもない私が、ともかくも世に生き永らえていますのは、世間の評判もいかがとつらく、気がひける思いがいたしますのに。女御の側に、身分の低い実母がいては、世評に響くと案じる気持。

一 さまざまにくちをしからぬ際の心ばせあるべかめり。皆おのおの長所があってたるかたありて、取るところなくもあらねど、取柄がないでもないが二 また取り立てて、わが後見に思ひ、まめまめしく選び思はむには、ありがたきわざになむ。ただまことの心の癖なくよきことは、この対をのみなむ、これ本当に素直で人柄がよいという点では紫の上だけが この人こそ穏やかな心の寛い人というべきだをぞおいらかなる人といふべかりける、となむ思ひはべる。三 よしとて、またあまりひたたけてたのもしげなきも、いとくちをしや」とだけおっしゃるのにばかりのたまふに、四 かたへの人は思ひやられぬかし。

（源氏）あなたは いささか物の道理をわきまえていられるようだから

「そこにこそ、すこしものの心得てものしたまふめるを、いとよし、結構です

［紫上と］仲良くして

むつびかはして、この御後見をも、同じ心にてものしたまへ」など、女御の 心を合せてして下さい

声をひそめて

（明石上）仰せはなくとも ［紫上の］誰も真似のできぬご厚意を拝

忍びやかにのたまふ。「のたまはせねど、いとありがたき御けしき見しておりますので

を見たてまつるままに、五 明け暮れの言種に聞こえはべる。六 めざましきものになどおぼしゆるさざらむに、かうまで御覧じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまで数まへのたまはすれば、かへりては身の置き所もないほど 人並みに扱って下さいますので

面映ゆいくらいでございます

まばゆくさへなむ。七 数ならぬ身のさすがに消えぬは、世の聞き耳も

いと苦しく、つつましく思うたまへらるるを、罪なきさまに、もて隠されたてまつりつつのみこそ」と聞こえたまへば、「その御ためには、何の心ざしかはあらむ。ただこの御ありさまを、うち添ひてもえ見たてまつらぬおぼつかなさに、ゆづりきこえらるるなめり。

一〇 それもまた、とりもちて掲焉になどあらぬ御もてなしどもに、よろづのことなのめに目やすくなれば、いとなむ思ひなくうれしき。はかなきことにても、ものの心得ずひがひがしき人は、立ちまじらふにつけて、人のためさへからきことありかし。一一さ直しどころなく、誰もものしたまふめれば、心やすくなむ」とのたまふにつけても、

一二 さりや、よくこそ卑下しにけれ、など思ひ続けたまふ。一三対へわたりたまひぬ。

一四 「さもいとやむごとなき御心ざしのみまさるめるかな。一五げには、人より異に、かくしも具したまへるありさまの、ことわりと見えたまへるこそめでたけれ。宮の御方、うはべの御かしづきのみめでた

ヘ（紫の上は）あなたに対しては、どれほどの厚意というわけでもなかろう。

九 ただ女御のご日常を、始終付き添ってお世話申し上げられないのが心配で、あなた（明石の上）にお任せ申されるのでしょう。この経緯は、四巻藤裏葉二九五～六頁参照。

一〇 それもまた、あなたが一人で取り仕切って、いかにも親ぶった態度をとられないから、何事も穏やかで体裁よく運ぶので、本当に安心でうれしいことです。「掲焉に」は、はっきりと目立つほどにの意。

一一 どなたも（紫の上も明石の上も）そのように改めねばならぬところがなくていらっしゃるようだから、（私は）安心です。「直しどころ」は、直さなければならぬところ。

一二 やっぱりだ、よくこそ今まで遜ってきたことだ。

一三 源氏は、（紫の上とともに住む）東の対にお帰りになった。

一四 ますます（紫の上を）大事になさるお気持は深まるばかりのようだこと。

一五 （でも紫の上は）なるほどほんとに、人よりは一段とすぐれ、こんなに何もかも揃っていらっしゃるお人柄だから、それも当然だとお見えになるのはすばらしい。

一（源氏が女三の宮のもとに）お出かけになるのも、そう十分とはゆかないらしいのも、恐れ多いことのようです。

二 同じお血筋でいらっしゃるけれど、もう一段とご身分の高い点がお気の毒なことです。女三の宮と紫の上は、いとこ同士であるが、女三の宮は内親王、紫の上は親王の子である。

三 明石の上自身の運勢は、大したものだとお思いになる。次の「やむごとなきだに」以下、「あはれにおぼつかなき」まで、明石の上の心中の思い。

四 まして自分などは、お仲間入りできる分際ではないのだから。

五『異本紫明抄』『河海抄』に、「耶輸陀羅が福地の園に種まきてあはむかならず有為の都に」（出典未詳）をあげる。「耶輸陀羅」は、釈迦が太子の時の妃。「福地の園」は、福徳の生ずる所、極楽の意。入道の手紙に「明らかなる所にて、また対面はありなむ」（一〇四頁）とあったのに照応するもの。

六 女三の宮との結婚を考えぬわけでもなかったから。（三〇～三一頁参照）

七 女三の宮方には何か事ある折ごとにいつも参上し。

八（源氏も）人目につくうわべの格式は立派に、前例になりそうなほど大切にお世話申されているけれども。

夕霧の女三の宮批判

くて、わたりたまふこともえなのめならざめるは、かたじけなきわざなめりかし。同じ筋にはおはすれど、今一際は心苦しく」（陰口を申されるにつけても）としりうごちきこえたまふにつけても、わが宿世は、いとたけくぞおぼえたまひける。やむごとなきだに（ご身分の高い方でも）、おぼすさまにもあらざめる世に、まして立ちまじるべきおぼえにしあらねば、すべて今はうらめしき節もなし。ただかの絶え籠りにたる山住みを思ひやるのみぞ、あは（悲しく）れにおぼつかなき。尼君も、ただ、「福地の園に種まきて」（山奥の暮しを心配でならない）とやうなりし一言をうち頼みて、後の世を思ひやりつつながめゐたまへり。

夕霧

大将の君は、この姫宮の御ことを、思ひ及ばぬにしもあらざりしかば、目に近くおはしますを、いとただにもおぼえず、おほかたの（普通の）御かしづきにつけて、こなたにはさりぬべきをりをりに参り馴れ、（ご用をするのにかこつけて）おのづから御けはひ、ありさまも見聞きたまふに、いと若くおほど（ただいういしくおっとりしていられるばかりで）きたまへる一筋にて、上の儀式はいかめしく、世の例にしつばかりもてかしづきたてまつりたまへれど、をさをさけざやかにもの深く

（女三宮が）身近においでなのを

（来世のことに心をやりながら物思いに沈んでおられる）

（とても平気ではいられず）

（女三宮の）

（実際は）そう大して際立って奥ゆかしい方とも

九 お仕えしている女房なども。以下「童女のありさまなど」まで、女三の宮方の女房の様子。女房は主人の気風を映すものと考えられていた。夕霧も、まず女房によって上のような感想を得たのである。

一〇 （女三の宮方は）何の苦労もないお住まいとはいえ。

一一 一方、本当に楽しそうに万事思い通りにいっているらしい人たちの中にいると、はたの人に引かれて、同じ気分や態度に合せるものなので。女三の宮の女房の中にも、個人的な悩みを持っている女房もいようが、そういう連中も花やかな雰囲気に調子を合せているので、の意。

一二 ただ一日中、子供じみた遊びや戯れに熱中している女の童の有様などを。女三の宮の好むことを童女がする。苦労知らずの思いやりのない姫君育ちが思われる。

一三 一律に世間のことを断じたり、批判したりなさらぬご性質なので。

一四 女三の宮ご本人のお振舞だけは、十分にお教え申し上げなさるので、少し心がけられるようになった。

一五 こんな女三の宮方の様子を。夕霧の目にも触れる女房の様子。

一六 本当に、立派な方（女君）は、なかなかいらっしゃらないものだ。以下、次頁四行目の「……添へたまへること」まで夕霧の感想。

夕霧の紫の上礼讃

思われず
は見えず、女房（にようぼう）なども、おとなおとなしきは少なく、若やかなる
しっかりした年輩の者は少なく　年の若い美人で
容貌人（かたちびと）の、ひたぶるにうちはなやぎ、さればめるはいと多く、数知
ただもうはなやかに振舞って　気取っている連中は大層多くて　数えき
れぬほど我も我もとお側に控えていて
らぬまでつどひさぶらひつつ、一〇もの思ひなげなる御あたりとはいひ
騒がず落着いた人柄の女房は
ながら、何ごとものどやかに心しづめたるは、心のうちのあらはに
心の中がはっきり人には
分らないものだから　たとえその身にひそかな悩みがあったとしても
しも見えぬわざなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも、一一またまこ
とにここちゆきげに、とどこほりなかるべきにしうちまじれば、か
たへの人にひかれつつ、同じけはひもてなしになだらかなるを、一二た
だ明け暮れは、いはけたる遊びたはぶれに心入れたる童女のありさ
源氏　感心しないと
まなど、院は、いと目につかず見たまふことどもあれど、一三ひとつさ
こういうことも勝手にさせて
まに世の中をおぼしのたまはぬ御本性なれば、かかるかたをもまか
そんなこともしたいのだろう　大目にご覧になって　叱って
せて、さこそはあらまほしからめ、と御覧じゆるしつつ、いまし一四め
改めさせたりなさらず
ととのへさせたまはず、正身の御ありさまばかりをば、いとよく教
へきこえたまふに、すこしもてつけたまへり。
夕霧
かやうのことを、大将の君も、一五げにこそありがたき世なりけれ、一六

一 紫の上のお心がけといい、ご様子といい、長年たったけれども、いまだに何かと人の目に触れ耳に触れて噂になったことがなく。

二 それでいてお気持がやさしく、人をないがしろにせず。たとえば、明石の上などに対する態度。

三 昔、野分の夕べに見たお顔も忘れられず、いつもつい思い出されなさる。（四巻野分一二五頁参照）

四 しっかりしていて、人にすぐれた才覚などは、おありにならない方である。紫の上と比較している。

五 （昔は大分気をもんだが）もう安心だ、今は大丈夫と、毎日見馴れているために気が弛んで。

六 やはり、このようにいろいろと集まっていらっしゃる（六条の院の）ご婦人方が、それぞれにご立派なので。

七 別にだいそれた気持を抱いているわけでもないけれど、お顔を拝する機会があるだろうかと。

八 柏木。

柏木の執着

一紫の御用意、けしきの、ここらの年経ぬれど、ともかくも漏り出で見え聞こえたるところなく、しづやかなるをもととして（もの静かな点を第一として）、二さすがに（しかも品位を失わず）心うつくしう、人をも消たず、身をもやむごとなく、（奥ゆかしい態度を）心にくくもてなし添へたまへることと、三見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出で（忘れにならないことだと）られける。（雲居の雁）わが御北の方も、（いとしくお思いになる気持は深いが）あはれとおぼすかたこそ深けれ、四いふかひあり、すぐれたるらうらうじさなど、ものしたまはぬ人なり。五おだしきものに、今はと目馴るるに、心ゆるびて、六なほかくさまざまにつどひたまへるありさまどもの、とりどりにをかしきを、心ひ（内心ひそかに関心を捨て切れずにいるのだが）とつに思ひ離れがたきを、ましてこの宮（女三の宮）は、人の御ほどを思ふにも、（ご身分を考えても）限りなく心ことなる御ほどに、（この上なく格別のご身分なのに）取り分きたる御けしきにしもあらず、（世間の手前を飾っているだけのことだ）人目の飾りばかりにこそ、（ご事情が呑みこめてくると）と見たてまつり知るに、七わざとおほけなき心にしもあらねど、見たてまつるをありなむやと、（関心をお寄せになるのであった）ゆかしく思ひきこえたまひけり。

（朱雀院）八衛門の督の君も、院に常に参り、親しくさぶらひ馴れたまひし人

なれば、この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなど、くはしく見たてまつりおきて、さまざまの御定めありしころほひより聞こえ寄り、院にもめざましとはおぼしのたまはせずと聞きしを、かく異ざまになりたまへるは、いとくちをしく胸いたきここちすれば、なほえ思ひ離れず。そのをりよりかたらひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるをなぐさめに思ふぞ、はかなかりける。「対の上の御けはひには、なほおされたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせたてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらざらめと、常にこの小侍従といふ御乳主をも言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿の君、もとより本意ありておぼしおきてたるかたにおもむきたまはばと、たゆみなく思ひありきけり。

女三の宮　大切にお育て申し上げていらっしゃったご意向などを　よくよく拝見していて　大層残念で胸も痛む思いがするので　話に聞くのを　[女三の宮の]　紫の上のご寵愛には　やはり負けていらっしゃる　はかないことであった　怠りなく機会をうかがっていらっしゃった　責めたてて

弥生ばかりの空うららかなる日、六条の院に、兵部卿の宮、衛門の督など参りたまへり。大殿出でたまひて、御物語などしたまふ。

三月頃　柏木　源氏

六条の院の蹴鞠の遊び

九 誰かれと婿定めがおありだった頃から申し出て、朱雀院におかせられても、出過ぎた者とはお思いにならず仰せにもならなかったと聞いたのに。（二九～三〇頁参照）

一〇 このように違うことになったのは。六条の院にご降嫁になったのは。

一一 その頃（求婚当時）から、馴染みになった女房のつてで。女三の宮との間の取次ぎ役にと、味方に引き入れた女房。

一二 世間でも噂しているのを聞いては。「まねび伝ふる」は、聞いたことをそっくりそのまま伝えること。

一三 恐れ多いことであっても、（自分なら宮に）そんな物思いはおさせ申さないだろう、なるほど、類いまれな高貴の御身にはふさわしくないだろうけれど。

一四 さきほどの小侍従という御乳母子。前出の「そのをりよりかたらひつきにける女房」。女三の宮の乳姉妹である。

一五 世間は無常なものだから、源氏がかねてご本懐のご出家をお遂げあそばしたらと。

一六 螢兵部卿の宮。

一 こういう閑居では、この時節は本当に退屈で、気の紛れることがないね。源氏は准太上天皇で、政治の実務に携わらない。

二 大将（夕霧）が来ていたが、どこへ行ったのか。

三 いつものように、小弓を射させて見物すればよかった。「小弓」は、小弓を射て競う遊戯。坐して左膝を立て、その上に左肘を支えて引くという。

四 六条の院の東北の町。夕霧の養母花散里が住む。

五 大勢の人々に、蹴鞠をさせて見ていらっしゃる。蹴鞠は、数人で鞠を蹴り上げて遊ぶ遊戯。できるだけ鞠が落ちないよう長く続かせる。（図録五参照）

六 （夕霧のもと）お言葉を伝えられたので。

七 若君達といった人々が多かった。「君達」は、上流貴族の子弟をいう。

八 誰それが参っております。実名を挙げたのを、省略した書き方。

九 六条の院南の町の寝殿の東側。明石の女御の御殿。西面は、女三の宮の部屋。

一〇 遣水などの合流する所が広々していて。「遣水」は、三巻図録六、七参照。

一一 風情のある場所を探して、勢揃いする。「かかり」は、蹴鞠をする場所。

一二 太政大臣家の子息たち。「頭の弁」は、蔵人所の頭で弁官を兼ねる者。四位相当。「兵衛の佐」は、兵衛府の次官。従五位上相当。「大夫」は、五位の者の称。柏木の弟たちである。

（源氏）「静かなる住ひは、このころこそいとつれづれにまぎるることなかりけれ。公私とも無事だ公私（おやけわたくし）私にことなしや。何をして今日一日を暮せばよかろう何わざしてかは暮らすべき」などのたまひて、（源氏）「今朝、大将のものしつるはいづかたにぞ。本当に手持ち無沙汰だから いとさうざうしきを、例の、小弓射させて見るべかりけり。〔小弓の〕好きらしい若者好むめる若人ども夕霧も見えつるを、惜しいことに帰ったかなたちもいたのにねたう出でやしぬる」と問はせたまふ。お尋ねさせになる大将の君は、丑寅の町に、人々あまたして、鞠もて遊ばして見たまふ、と聞こしめして、（源氏）無作法な遊戯だが「乱りがはしきことの、それでも派手で気の利いた遊びださすがに目さめてかどかどしきぞかし。いづら、こなたに」とて、〔夕霧たちは〕御消息あれば、参りたまへり。若君達めく人々多かりけり。（源氏）鞠は持たせなさったか「鞠持たせたまへりや。誰々が来たのか誰々かものしつる」とのたまふ。（夕霧）「これかれはべりつ」（源氏）こちらへおいでにならぬか「こなたへまかでむや」とのたまひて、女御寝殿の東面、桐壺は若宮具したてまつりて、〔東宮に〕お連れ申して参りたまひにしころなれば、こなた隠ろへたりけり。こちらは目立たぬ所だった遣水などのゆきあひはれて、よしあるかかりのほどを尋ねて立ち出づ。太政大臣殿の君達、頭の弁、兵衛の佐、大夫の君など、過ぐしたるも、年のいった者もまだ若い者もまだかたなりな

一三 前出の頭の弁。

一四 弁官まで落着いていられないらしいのに、上達部であろうと、若手の衛府の役人たちがどうして飛び出さないのか。「弁官」は、太政官に属し、諸省、諸国の行政の実務をつかさどる。文官。「上達部」は、三位以上または四位の参議をいう。上級貴族。「衛府司」は、武官。夕霧も大将、柏木も衛門の督で、かつ宰相であること、後の一三〇頁に見える。

一五 (私も) これくらいの年の頃には、変に見ているだけですますのは、残念に思われたことだ。

一六 しかし、全く騒々しいな、この鞠の遊びは。「軽軽」は、軽率なこと。

一七 えもいえず美しい桜の花のもとをあちこちなさる夕明りの中のお姿は、本当に美しい。

一八 一面色とりどりに蕾のほころんでいる花の木々や、わずかに浅緑の芽の吹き出た木蔭で。「紐とく」は、花の開くことを、女性に見立てていう歌語。

一九 衛門の督(柏木)が、ほんのお付合いで仲間入りなさった足つきに及ぶ人はなかった。「足もと」は、蹴り方のこと。

二〇 顔立ちが大層きれいで、優雅な物腰の人が。以下柏木のさま。

るも、さまざまに、人よりまさりてのみものしたまふ。やうやう暮れかかるに、風吹かずかしこき日なりと興じて、弁の君もえしづめず立ちまじれば、大殿、「弁官もえをさめあへざめるを、上達部なりとも、若き衛府司たちは、などか乱れたまはざらむ。かばかりの齢にては、あやしく見過ぐす、くちをしくおぼえしわざなり。さるは、いと軽々なりや、このことのさまよ」などのたまふに、大将も督の君も、皆おりたまひて、えならぬ花の蔭にさまよひたまふ夕ばえ、いときよげなり。をさをさまよく静かならぬ乱れごとなめれど、所から人からなりけり。ゆゑある庭の木立のいたく霞みこめたるに、色々紐ときわたる花の木ども、わづかなる萌黄の蔭に、かくはかなきことなれど、よきあしきけぢめあるをいどみつつ、われも劣らじと思ひ顔なるなかに、衛門の督のかりそめに立ちまじりたまへる足もとに並ぶ人なかりけり。容貌いときよげに、なまめきたるさましたる人の、用意いたくして、さすがに乱りがはしき、をかし

それぞれに
ほかの人よりすぐれた方ばかりでいらっしゃる
[蹴鞠に] 絶好の日だと
我慢できずに
仲間にはいったので
源氏
柏木
[庭に]
[蹴鞠は] あまり体裁のよくない騒々しい無作法な遊びのようだが
夕霧
立派な
場所がら人柄によるのだった
何でもない遊戯だけれども
上手下手の違いがあるのを競い合っては
心づかいも十分に
それでいて大いに活躍の様子は
魅力がある

く見ゆ。御階の間にあたれる桜の蔭に寄りて、人々、花の上も忘れて心に入れたるを、大殿も宮も、隅の高欄に出でて御覧ず。

柏木と夕霧、女三の宮を見る

いと労ある心ばへども見えて、数多くなりゆくに、上﨟も乱れて、冠の額すこしくつろぎたり。大将の君も、御位のほど思ふこそ、例ならぬ乱りがはしさかなとおぼゆれ、見る目は、人よりけに若くをかしげにて、桜の直衣のやや萎えたるに、指貫の裾つかた、すこしふくみて、けしきばかり引き上げたまへり。軽々しうも見えず、ものきよげなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかれば、うち見上げて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階の中のしなのほどにゐたまひぬ。督の君続きて、「花、乱りがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」などのたまひつつ、宮の御前のかたを後目に見れば、例の、ことにをさまらぬけはひどもして、色々こぼれ出でたる御簾のつま、透影など、春の手向の幣袋にやとおぼゆ。

御几帳どもしどけなく引きやりつつ、人気近く世づきてぞ見ゆる

一 殿舎の階（簀子から庭に降りる階段）のある柱間。階は、柱間一間の幅で作る。ここは、寝殿南面中央の階段のある一間。

二 源氏も螢兵部卿の宮も、隅の高欄のもとに出て来てご覧になる。「隅の高欄」は、寝殿の東南の隅の簀子の高欄のもとであろう。

三 よく稽古を積んだ技の数々も披露されて、回数が増えてゆくにつれ。

四 身分の高い方々も無礼講となり、冠の額際も少し弛んできた。

五 夕霧は現在、権中納言兼右大将。三位相当。

六 桜の直衣の少し柔らかく糊気が落ちたのに。桜襲（表白、裏紫または蘇芳）の直衣。若い人の着料。

七 階段の中段のあたり。前出の寝殿南面中央の階段。

八 桜は避けて吹けばいいのに。「吹く風よ心しあらばこの春の桜は避きて散らさざらなむ」（『伊行釈』所引。出典未詳）

九 女三の宮の御前の方。御階の間から西の方。

一〇 いつものように、格別慎み深くするでもない女房たちがいる様子で。

一一 色々の袖口がこぼれ出た御簾の端々や、透影など。「透影」は、物の隙間から見える姿。蹴鞠を見物しようと、女房たちが御簾のもとに寄り集まっているさま。

一二 ゆく春に供える幣袋かと思われる。「幣袋」は、旅行の際、道中の道祖神に奉納する幣（色とりどりの絹の切れ）を入れる袋。中が透いて見えるので、色々の袖口のこぼれ出るさまや透影をたとえた。季節は三月（春の末）なので、「春の手向」という。

一三 すぐ端近に女房がおり、世間ずれしているように思われるところに。男にすぐ返事でもしそうに思われる。

一四 舶来の猫。猫は当時、貴族間で愛玩された。

一五 そよそよと身じろぎし、動き廻る女房たちの様子は。

一六 つい側の柱の所に坐っていた女房たち。「この柱」は、猫の引きあげた御簾がかかる柱間のそれ。

一七 几帳の側から少し奥まった所に。几帳は、御簾（ここは簀子と廂を仕切る簾）に添えて立ててある。

一八 表着の代りに袿を着たくつろぎ姿。表着、裳、唐衣を着けた女房姿と区別される。

一九 そこは、中央御階の間から西へ二つめの柱間の東の端なので。猫が引きあげた御簾は、この柱間にかかっていたものである。

二〇 「紅梅」は、襲の色目。表紅、裏紫。以下「細長なるべし」まで、柏木の眼に映じた女三の宮の衣服について述べる。

二一 桜襲（表白、裏紫または蘇芳）で、織り出し模様のある細長。「細長」は、貴婦人の常着。

女三の宮の立姿

に、唐猫（一四）のいと小さくをかしげなるを、すこし大きなる猫追ひ続きて、にはかに御簾（端から）のつまより走り出づるに、人々（女房たち）おびえ騒ぎて、そ（一五）よそよと身じろきさまよふけはひども、衣（衣ずれの音が）の音なひ、耳かしかまし（やかましいほどに思われる）きここちす。猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱（つな）いと長く付きたりけるを、ものに（何かにひっかけてまとわりついていたのを）ひきかけまつはれにけるを、逃げむと（逃げようとして引っ張るうちに）ひこしろふほどに、御簾（横の端が）のそばいと（はっきり中が見えるほど引きあげられたのを）あらはに引きあけられたるを、とみに（すぐに）ひき直す人もなし。（一六）この柱のもとにありつる人々も、心あわたたしげにて、もの懼（誰も手が出ないでいるらしい）ぢしたるけはひども（女房もいない）なり。

几帳の際（一七）すこし入りたるほどに、袿姿（一八）にて立ちたまへる人あり。（隠れようもなく）階（すっかり見通し）より西の二の間（二〇）の東のそばなれば、まぎれどころもなくあらはに見入（せる）られる。紅梅（二〇）にやあらむ、濃き薄き、すぎすぎに、あまたかさなりたるけぢめはなやかに、草子（濃い色から薄い色へ　次々に　幾重にも重なった「袖口や裾の」色の移りもはなやかで　綴じ本の小口のように見えて）のつまのやうに見えて、桜（二一）の織物の細長（ほそなが）なるべし。御髪（くしけ）の末（すそ）までけざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、末（すそ）のふさやかにそがれたる、いとうつくしげ（くっきりと見えるところは　糸を縒りかけたように　髪の裾がふっさりと切り揃えてあるのは　大層かわいい感じがにきにきしく後ろに引かれており）

にて、七八寸ばかりぞあまりたまへる。御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、姿つき、髪のかかりたまへる側目、言ひ知らずあてにらうたげなり。夕影なれば、さやかならず、奥暗きここちするも、いと飽かずくちをし。鞠に身を投ぐる若君達の、花の散るを惜しみもあへぬけしきどもを見るとて、人々、あらはをふともえ見つけぬなるべし。猫のいたく鳴けば、見返りたまへるおもも、もてなしなど、いとおいらかにて、若くうつくしの人やと、ふと見えたり。

（して）（身丈に）（はっきり見えず）（もの足りなく残念だ）（夢中の）（女房たちは）（まる見えなのをすぐにも気づかないのであろう）（女三宮の）（表情や）（身のこなしな）（おおらかで）（かわいらしい）（とっさに感じた）

五　大将、いとかたはらいたけれど、はひ寄らむもなかなかいと軽々しければ、ただ心を得させてうちしはぶきたまへるにぞ、やをらひき入りたまふ。さるは、わがここちにも、いと飽かぬここちしたまへど、猫の綱ゆるしつれば、心にもあらずうち嘆かる。ましてさばかり心をしめたる衛門の督は、胸つとふたがりて、誰ばかりにかはあらむ、ここらのなかにしるき桂姿よりも、人にまぎるべくもあらざりつる御けはひなど、心にかかりておぼゆ。さらぬ顔にもてなし

（女三宮は）（そっと引っ込みなさった）（実のところ）（夕霧自身も）（思わず溜息をおつきになる）（心をひかれている）（いっぱいになって）

一　お召し物の裾が長く余って。小柄だからである。
二　姿かたちや、髪のふりかかっていらっしゃる横顔は、えもいえず気高くいたいけな感じである。柏木の眼に映じた女三の宮の姿。
三　夕方の薄明りなので。
四　花の散るのを、惜しんでもいられないといった奮戦の様子を見ようとして。蹴上げられる鞠に、落花ひとしおなのであろう。普通は、桜の散るのを惜しむのがならい。
五　夕霧は、はらはらするけれども、（御簾を直しに）そっと近づくのも、かえって身分柄はしたなく思われるので。夕霧も、南階の中段にいる。
六　ただ気づかせようと、咳払いなさると。「うちしはぶく」は、注意を促すため咳ばらいすること。
七　（中の女房が）猫の綱を放したので（御簾が下りて）。
八　あれは、女三の宮以外のどなたでもない、大勢の中ではっきりそれと分る桂姿よりも、ほかの女房と間違いようもなかったご様子などが、忘れがたく思われる。
九　（柏木は）何げないふうをよそおっていたが、きっと見ていたにちがいないと。

一〇 さきほどの猫。綱を放されている。
一一 とてもよい匂いがして。女三の宮の移り香。
一二 恋しい方に思いなぞらえられるとは、好色がましいことである。草子地。
一三 源氏はこちらをご覧になって。（一二六頁注二参照）
一四 上達部の席が端近すぎる。夕霧や柏木が、階段に坐っているのをいう。
一五 東の対の南面。廂の間。

東の対の宴と柏木の恋の悩み

一六 螢兵部卿の宮。さきほどから、源氏とともに、簀子で観戦していた。（一二六頁参照）
一七 菅などを円形に編んで作った敷物。（図録七参照）
一八 餅の粉に甘葛をかけて椿の葉で包んだもの。蹴鞠の折、きまって出す（『河海抄』）。以下、いわゆる「くだもの」。
一九 硯箱などの蓋。物を盛るのによく用いられた。
二〇 酒の肴に適当な干物。鳥や魚の肉を干したもの。
二一 わけを知っているので、（柏木が）妙なことから垣間見た、御簾の隙間の女三の宮のお姿を思い浮べているのでもあろうかと、お思いになる。
二二 （女三の宮が）ひどく端近にいらしたことを（心ひかれながらも）、一方ではしたないと思っていることだろう。以下「さはあるまじかめるものを」まで、夕霧の心中。
二三 こちらの対のお方。紫の上。

たれど、まさに目とどめじやと、大将（夕霧）はいとほしくおぼさる。（柏木は）わりなきここちのなぐさめに（困ったことになったと思ったまらない気持の慰めに）、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげにうち鳴くも、なつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや。

大殿（源氏）御覧じおこせて、「上達部の座、いと軽々しや。こなたにこそ」とて、対の南面に入りたまへれば、皆そなたに参りたまひぬ。宮もゐ直（席をお改めになって）りたまひて、御物語したまふ。次々の殿上人は、簀子に円座召して（敷かせて）、わざとなく（軽く）、椿餅、梨、柑子（蜜柑）やうのものども、さまざまに箱の蓋（それ以下の）どもにとりまぜつつあるを、若き人々そぼれ取り食ふ。さるべき干物ばかりして、御土器（沈みこんで）参る。

衛門の督（柏木）は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木（庭前の桜）に目をつけてながめやる。大将（夕霧）は、心知りに、あやしかりつる御簾の透影思ひ出づることやあらむと思ひたまふ。いと端近なりつるありさまを、かつは軽々しと思ふらむかし、いでや、こなたの御ありさ

一　こんなふうだから、（女三の宮は）世の声望の高いわりには、（源氏の）内々のご愛情は薄いようだったのだと。夕霧の心中。「世のおぼえ」は、朱雀院の皇女、源氏の正室という声望。

二　やはり他人に対しても、自分に対しても思慮が足りず、子供っぽいのは、一見かわいいようだが、安心できぬもののようだと、軽んずる気持になる。

三　柏木のこと。宰相兼任のこと、ここに初めて見える。「宰相」は、参議の中国風の呼び方。上達部の一員である。

四　（女三の宮の）いろいろな欠点もなかなか気づかず。夕霧の「……かつは軽々しと思ふらむかし」という思いと照応するところ。

五　思いがけない御簾の隙間から、ほんのわずかにせよ（女三の宮を）あの方だとお見かけしたにつけても。

六　前世からの約束もうれしく思われて、なお思慕の思いに胸もいっぱいである。

七　柏木たちの父。

八　しかとした方面では（政務にかけては）劣っているわが家の家風が、鞠などの方に伝わりましたところで、子孫にとって大したことはございますまい。柏木の謙遜の言葉。「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」（『拾遺集』巻八雑上、菅原の大臣かうぶりしはべりける夜、母のよみはべりける）による修辞。

まの、さはあるまじかめるものを、と思ふに、一かればこそ世のおぼえのほどよりは、うちうちの御心ざしぬるきやうにはありけれ、と思ひ合はせて、二なほ内外の用意多からず、いはけなきは、らうたきやうなれど、うしろめたきやうなりや、と思ひおとさる。

あんなふうでは決しておありでなかろうに

三宰相の君は、四よろづの罪をもをさをさたどられず、五おぼえぬもの隙より、ほのかにもそれと見たてまつりつるにも、わが昔よりの心ざしのしるしあるべきにやと、六契りうれしきここちして、飽かずのみおぼゆ。源氏院は、昔物語し出でたまひて、（源氏）七太政大臣の、よろづのことにたち並びて、勝負の定めしたまひしなかに、鞠なむえ及ばずなりにし。はかなきことは、伝へあるまじけれど、ものの筋はなほこよなかりけり。いと目も及ばず、かしこうこそ見えつれ」とのたまへば、うちほほゑみて、（柏木）八「はかばかしきかたにはぬるくはべる家の風の、さしも吹き伝へはべらむに、後の世のため異なることなくこそはべりぬべけれ」と申したまへば、（源氏）「いかでか。何ごとも人

自分が昔からお慕いしていた気持も叶えられるのであろうかと

私を相手にして

鞠だけはとても敵わなかった

こんな遊びごとには

別に伝授もあるまいが

上手の血筋はやはり

とても底知れぬほど

一段と違うものだね

[今日のあなたは]上手だった

苦笑して

とんでもない

九（柏木の鞠の上手なことなど）家伝などに書き込んでおいたら、おもしろかろう。「家の伝へ」は、その家に伝わる記録。

一〇こんな立派な方（源氏）を見馴れていて、どれほどのことに心を移す人がおられよう。以下「……なびかしきこゆべき」まで、柏木の思い。

柏木、夕霧と同車して女三の宮のことを語る

一一今日のようなひまな時（用事のない時）を見つけて、花の盛りを過さず参れ。

一二相談の結果、約束なさる。

一三院（源氏）におかせられては、やはりこの対にばかりいらっしゃるようですね。紫の上のご寵愛が深いのでしょう。「この対」は、今出てきた東の対。「なめりな」は「なるめりな」の撥音便「なんめりな」の撥音無表記の形。

に異なるけぢめをば、記し伝ふべきなり。家の伝へなどに書きとどめ入れたらむこそ、興はあらめ」などたはぶれたまふ御さまの、に（すぐれている点は）（輝く）ほひやかにきよらなるを見たてまつるにも、一〇かかる人にならひて、（軽口をおっしゃるご様子が）（ようにお美しいのを拝見するにつけても）いかばかりのことにか心を移す人はものしたまはむ、何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき、と思ひめぐらすに、いとどこよなく、御あたりはるかなるべき身のほども思ひ知らるれば、胸のみふたがりてまかでたまひぬ。（どういうことで）（せめてかわいそうにと大目に見て下さるほどにでもお心を動かすことができようか）（いよいよこの上もなく）（女三宮の）（お側には近づきがたい自分の分際も）（胸がいっぱいになるばかりで退出なさった）

大将の君一つ車にて、道のほど物語したまふ。「なほこのころの（同車して）（その途中）（夕霧）（この時節の）（退屈な時には）つれづれには、この院に参りてまぎらはすべきなりけり。今日のやうならむ暇の隙待ちつけて、花のをり過ぐさず参れ、とのたまひつるを、春惜しみがてら、月のうちに、小弓持たせて参りたまへ」と（六条の院）（紛らわすとよいですね）（三月中に）（一二）かたらひ契る。おのおの別るる道のほど物語したまうて、宮の御こ（お互い別れるまでの途中）（女三の宮のお噂がやはりしたかったので）とのなほ言はまほしければ、「院には、なほこの対にのみものせさ（柏木）（一三）（女三の宮はどん）せたまふなめりな。かの御おぼえの異なるなめりかし。この宮いか

一 院の帝（朱雀院）が、並ぶ者のないお扱いを、ずっとしておあげになっていたのに。

二 （六条の院では）それほどでもなくて、（女三の宮は）塞いでいらっしゃるらしいのが、おいたわしいことだ。「屈し」は「屈し」の促音無表記の形。

三 とんでもないこと。「たいだいし」は「たぎたぎし」の音便。道が険しく歩きにくい、というのが原義。転じて、面倒だ、不都合だ、の意に用いる。

四 こちら（紫の上）は、普通とは違った事情で、幼少からお育てになったお親しさが違うというだけのことでしょう。「あべかめれ」は「あんべかんめれ」の撥音無表記の形。紫の上と女三の宮の人柄の違いには、触れぬ配慮。

五 いや、つまらぬことを、やめて下さい。「あなかま」は「あなかしかまし」の意。「たまへ」は、丁寧な命令をあらわす。静かにして下さい、の意。

六 考えられないことですね。源氏の女三の宮に対する扱い方を非難する。

七 どうして、花から花へと訪れる鶯が、桜をとりわけて塒にしないのだろうか。「花」を六条の院の女君たち、「鶯」を源氏、「桜」を女三の宮に喩える。

八 春の鳥ならば、美しい桜だけにとまればよいものを、そうはせぬ移り気な心よ。

九 やっぱり思った通りだ。前に「心知りに、あやしかりつる御簾の透影思ひ出づることやあらむと思ひたまふ」（一一九頁）とあったのに照応する。

なお気持でしょう

におぼすらむ。帝の並びなくならはしたてまつりたまへるに、さしもあらで、屈したまひにたらむこそ心苦しけれ」と、あいなく言へば、「たいだいしきこと。いかでかさはあらむ。こなたは、さま変りて生ほしたてたまへるむつびのけぢめばかりにこそあべかめれ。宮をば、かたがたにつけて、いとやむごとなく思ひきこえたまへるものを」と語りたまへば、「いで、あなかま、たまへ。皆聞きてはべり。いといとほしげなるをりをりあなるをや。さるは、世におしなべたらぬ人の御おぼえを。ありがたきわざなりや」と、いとほしがる。

（夕霧）三

（柏木）五

（柏木）七

「いかなれば花に木づたふ鶯の
　桜をわきてねぐらとはせぬ」と、口ずさびに言へば、いで、あなあぢきなのものあつかひや、さればよ、と思ふ。

（夕霧は）九

よけいなことを

（源氏は）大層大事にお思い申していらっしゃるのに

何かにつけて

知っているの

とてもお気の毒なご様子の時がよくあるそうですね

実際は

一通りではない

（女三宮を）気の毒がる

合点のゆかないことですね

歌まじりに言うので

なんとおもしろくもないおせっかいだ

一〇 奥山の木に巣を作っているはこ鳥も、どうして美しい花の色をいやになったりしよう。「はこ鳥」は、未詳。深山に住む美しい鳥という。「かほ鳥」（未詳）またはカッコウの別名とも。「深山木」を紫の上、「はこ鳥」を源氏、「花」を女三の宮になぞらえる。

一一 太政大臣邸の東の対。

一二 思うところがあって、年来このような独身生活をしているので。「思ふ心ありて」は、結婚について高い理想を持っていて。女三の宮のような高貴の女性を妻にしたいと思っていること。

一三 誰のせいでもなくて、ものさびしく心細い時が折折あるが。婿として後見されるのが、一人前の生活。

一四 あの、女三の宮を垣間見た夕方から、ひどく気持がふさぎ、物思いに沈みがちで。

一五 何をしても人目につかない身分の者なら、かりにも造作なく物忌とか方違えの外出も、身軽にできるから、自然、何かと機会を見つけることもできようが。「物忌」は、陰陽道で、凶事を避けるために身を慎んで、家の中に籠ったり、他所に居を移したりすること。「方違へ」は、外出に当って、陰陽道でいう天一神などのいる方角（『方塞り』という）を避けて、他所に泊ること。

一六 深窓に住む女三の宮に。「深き窓」は、「養はれて深窓に在れば人未だ識らず」（白楽天『長恨歌』。一巻付録参照）の言葉を借りたもの。

柏木、小侍従に文をやる

「深山木にねぐら定むるはこ鳥も
　いかでか花の色に飽くべき
仕方のないことです　そう一方的に言っていいものですか　面倒なので
わりなきこと。ひたおもむきにのみやは」といらへて、わづらはしければ、ことに言はせずなりぬ。異事に言ひまぎらはして、おのおの別れぬ。
それ以上言わせぬようにした　ほかに話をそらして

督の君は、なほ大殿の東の対に、独住みにてぞものしたまひける。
柏木　独身で暮していらっしゃる

思ふ心ありて、年ごろかかる住ひをするに、人やりならずさうざうしく心細きをりをりあれど、わが身かばかりにて、などか思ふことかなはざらむとのみ、心おごりをするに、この夕より屈しいたく、もの思はしくて、いかならむをりに、またさばかりにてもほのかなる御ありさまをだに見む、ともかくもかきまぎれたる際の人こそ、かりそめにもたはやすき物忌、方違へのうつろひも軽々しきに、おのづからとかくものの隙をうかがひつくるやうもあれ、など思ひやるかたなく、深き窓のうちに、何ばかりのことにつけてか、かく深
自分はこれほどの家柄の出身で　どうして望みの叶わぬ　自負していたところ　どんな機会に　もう一度あれぐらいでもよいほのかな垣間見のお姿だけでも見られようか　思いを晴らすべもなく　どのような手段で　こんなに

一 女三の宮の乳母子。（一一三三頁参照）

二 先日、たまたま、お邸うちに参上いたしましたが。「風に誘はれて」は、文学的表現。「御垣の原」は、六条の院の垣の内の意。「故里は春めきにけりみ吉野の御垣の原を霞こめたり」（『天徳四年内裏歌合』霞、兼盛。書陵部本『兼盛集』は、「吉野山御垣の原を」）などによる歌語。（三巻付録「天徳四年内裏歌合」参照）

三 わけもなく、今日一日ぼんやり物思いに耽って暮しました。「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ」（『古今集』巻十一恋一、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車の下簾より、女の顔のほのかに見えければ、よみてつかはしける　在原業平朝臣。『伊勢物語』九十九段）により、「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくは（見ないというのでもなく、見たというのでもない、ただ簾の隙間からほのかに見たあなたが恋しいので）」という上の句の意を暗示する。

四 遠くから見るばかりで、手折れぬ悲しみは深いけれども、夕明りの中で見た花の美しさはいつまでも恋しく思われます。女三の宮を他人のものとしたままで、わがものにできぬ嘆きは深いが、やはり美しい宮は忘れられない、の意。「嘆き」に「木」を響かせ、「しげれども」を言い出す。

五 先日の事情（柏木が簾の隙間から女三の宮を垣間見たこと）を知らぬ小侍従は。

深くお慕いしているということだけでもお知らせできようか

き心ありけりとだに知らせたてまつるべき、と胸痛くいぶせければ、

つらく気が晴れないので

小侍従（一）がり、例の、文やりたまふ。

の許に

一日（二）、風に誘はれて、御垣の原をわけ入りてはべしに、いとどい

［女三宮は］どんなに

かに見おとしたまひけむ。その夕より、乱りごこちかきくらし、

かひとしお私をお見下げになったでしょう

すっかり思い乱れまして

あやなく今日はながめ暮らしはべる。

（三）

など書きて、

（柏木）（四）

よそに見て折らぬ嘆きはしげれども

なごり恋しき花の夕かげ

とあれど、一日（五）の心も知らぬは、ただ世の常のながめにこそはと思ふ。

型通りの恋慣いなのだろうと思う

御前（六）に人しげからぬほどなれば、かの文を持て参りて、「この人の、かくのみ忘れぬものに、言とひものしたまふこそわづらはしくはべれ。心苦しげなるありさまも見たまへあまる心もや添ひはべらむと、みづからの心ながら知りがたくなむ」と、うち笑ひて聞こゆ

女房があまりいない時だったので　柏木の　（小侍従）

こんなに忘れられないといって　手紙を寄こしなさるのが　面倒なことでございます

あまりお気の毒なご様子なのも見るに見かねる気持が起るかもしれませんと

わが心ながら分りかねます

六 女三の宮の御前に。
七 柏木の文中の、「見もせぬ」の歌を引いてあるところをご覧になって。さきの手紙の「あやなく今日はながめ暮らしはべる」とあったところ。
八 思いもかけなかったあの御簾の隙間のことだと、自然思い当られるので。「あさまし」は、あまりのことに驚くばかりだの意。
九 大将（夕霧）に見られたりなさらぬように。「見ゆ」は、受身。源氏は、身近な夕霧に見られることは警戒していたが、柏木は思いもよらなかった。
一〇 ご注意申されるのをお思い出しになると。前に、「正身の御ありさまばかりをば、いとよく教へきこえたまふに」（一一一頁）とあった。
一一 柏木がお姿をお見かけ申したことが、どんなに大きな落度かはお考えにならず。
一二 いつもよりもとかくのご返事がないので。「さしらへ」は、「さしいらへ」のつづまった形。
一三 いつものように、お返事を書く。いつも小侍従が宮の様子を伝えていたのである。
一四 先日は、何食わぬふりをしてお出でになりましたね。女三の宮への恋慕を隠して、体よく寝殿に近づいたとなじる。
一五 （宮様に対して）失礼なこととお許し申しませんでしたのに、「見ずもあらぬ」だなんて、何ごとですか。ほんとにいやらしい。「かけかけし」は、色めかしい。

（女三宮）まあいやなことを言うのね

ればば、「いとうたてあることをも言ふかな」と、何心もなげにのたまひて、文ひろげたるを御覧ず。「見もせへ」と言ひたるところを、あさましかりし御簾のつまをおぼし合はせらるるに、御面赤みて、

[小侍従が]

[あなたは]

[夕霧が]お姿をお見かけ申すこともあるかもしれない

源氏 あれほど事あるごとに

大殿の、さばかりことのついでごとに、「大将に見えたまふな。いはけなき御ありさまなめれば、おのづからとりはづして、見たてまつるやうもありなむ」と、いましめきこえたまふをおぼし出づるに、

ついうっかりしていて

子供っぽいところがおありのようだから

[源氏が]どんなにお叱りになるだろうと

[源氏に]

夕霧

大将の、さることのありしと語りきこえたらむ時、いかにあはめたまはむと、人の見たてまつりけむことをばおぼさで、まづ憚りきこえたまふ心のうちぞ幼かりける。

[源氏を]

こわがり申されるご心中は子供のようなのだった

[小侍従は]当てが外れて

常よりも御さしらへなければ、すさまじく、しひて聞こゆべきことにもあらねば、ひき忍びて、例の、書く。

人目を忍んでべきことでもないので

別に無理にお返事をお願いす

一日はつれなし顔をなむ。めざましうとゆるしきこえざりしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけかけし。

と、はやりかに走り書きて、

一　今さらお顔の色にもお出しなさいますな、手の届きそうもない山桜の枝に心をかけたなどと。「山桜」は、女三の宮を喩える。

（小侍従）―
いまさらに色にな出でそ山桜
　　およばぬ枝に心かけきと
無駄なことですのに
かひなきことを。

とあり。

若菜（わかな）下

巻のはじめは、若菜の上の末尾を受けて、柏木の焦燥の思いを書くが、やがて物語は四年の空白を置き、冷泉帝の御代十八年にして、帝の譲位、東宮即位、明石の女御腹の一の宮立坊のことがある。源氏は、その年十月に住吉神社に盛大な願果しの参詣をした。

明くる年は朱雀院があたかも五十になられるので、源氏は女三の宮主催の御賀に若菜を献じたいと計画する。巻名はこのことによる。御賀にそなえて、源氏は冬の夜な夜な、宮に琴の秘曲を伝授する。

明けて、源氏四十七歳。御賀は二月十余日に予定され、正月二十日頃、六条の院で、あでやかな女楽が催されたが、次の夜の明け方、紫の上はにわかに発病して重態に陥る。御賀は延引、二月も過ぎ、紫の上は二条の院に移され、源氏は付ききりの介抱に明け暮れる。

柏木衛門の督は、中納言に進み、同じ朱雀院の女二の宮を北の方に頂いていたが、今なお女三の宮への執着を絶ち切れないでいた。源氏の不在に乗じて、宮の乳母子小侍従の手引きでついに宮に逢った。宮は不義の子をみごもる。四月十余日のことであった。この頃、紫の上は、六条の御息所の死霊のため一時絶息し、五戒を受け、六月に入ってようやく小康を得る。女三の宮の不例の報に、六条の院に宮を見舞った源氏は、柏木の恋文を発見し、すべてを知った。そのことを宮も柏木も知って、二人は怖れにおののく。

延引を重ねた御賀は十二月になり、その試楽の夜、柏木の若さをたしなめた源氏の皮肉に、柏木は致命的な打撃を受け、重い病に臥す身となる。御賀は、暮れも押し迫った二十五日にようやく行われた。

一　もっともだとは思うけれども。柏木の思い。若菜上の巻末の小侍従の手紙の文面を直接受ける書き方。「思へども」と敬語を使わないのは、四行目の「思ふ」とともに、柏木に密着した書き方。

二　痛い所をついた言い分だ。以下、柏木の心中。

三　なんで、こんな通りいっぺんの返事だけを気休めにしていては、これからどうして過せよう。もう我慢できないという気持。最初に「なぞ」と言った気持がたかぶって、下にさらに「いかが」という。

小侍従の手紙を見ての柏木の焦燥

四　一言でもいいから直接（女三の宮の）お言葉をうかがい、自分の思いも申し上げる折があるだろうか。

五　三月の終りの日。源氏の誘いがあったこと、若菜上一三二頁参照。

六　殿上人による弓の競射の催し。正月十八日に弓場殿に帝が出御して行われる賭弓に対して、同じく弓場殿で臨時に行われる。二月、三月の例が多い。賭弓の名は、布、銭を賭物にするのによる（図録四参照）。

六条の院の競射の催し

七　帝の母后藤壺の亡くなった月（三巻薄雲一六四頁以下参照）。そのために三月には行えないのである。

八　こうした集まりがあると伝え聞いて。「まとゐ」は、円居。歌語。「的射」に掛けたものであろう。

九　左大将は髭黒。右大将は夕霧。

一〇　小弓というお約束だったが。（若菜上一三一頁参照）

一　ことわりとは思へども、二　うれたくも言へるかな、いでや、三　なぞかく異なることなきあへしらひばかりをなぐさめにては、いかが過ぐさむ、かる人伝ならで、四　一言をものたまひ聞こゆる世ありなむや、

いやしかし　こと　ひとつて　ひとこと

[柏木は]と思ふにつけて、おほかたにては、惜しくめでたしと思ひきこゆる

こんなことがなければ　大切なすばらしいお方だとお思い申し上げる源氏に対して

院の御ため、なまゆがむ心や添ひにたらむ。

ややよこしまな気持がきざしたのであろうか

五　晦日の日は、人々あまた参りたまへり。なまもの憂く、すずろはしけれど、そのあたりの花の色をも見てやなぐさむと思ひて参りたまふ。殿上の賭弓、きさらぎとありしを過ぎて、三月はた御忌月なれば、くちをしくと人々思ふに、この院に、六かかるまとゐあるべしと聞き伝へて、例のつどひたまふ。左右の大将、七　さる御仲らひにて参りたまへば、次将たちなどいどみかはして、小弓とのたまひしか

[六条院ヒ]　[柏木は]何やら気が進まず　落着かぬ思いだが　女三の宮のいられるあたりの花の色でも見れば気持も晴れるかと　二月にと予定されていたのが延びて　六条の院　残念なことよ　いつものようにお集まりになる　お身内ということで　中少将以下の連中も左右互いに競って

一 騎射（馬弓）に対する語。正月十七日の射礼、十八日の賭弓など、いずれも歩射である。
二 前と後の組分けを、入れ違いにそれぞれに分けて。競射は二人並んで射るが、左の射手が先に射、右が次に射るので、それぞれを前、後という。「こまどり」は、一、三、五を前、二、四、六を後というふうに組分けすること。
三 今日限りの春霞のたたずまいも。前に「晦日の日」とあった。春の終りである。「とぢむ」（閉む）は「霞」の縁語。
四 「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは」（『古今集』巻二春下、亭子の院の歌合の春の果ての歌 躬恒）による措辞。
五 しゃれた賭物の数々は、あちらこちらとご婦人方の趣味のほども分ろうというものを。賭物は、奥向きから出されるのがしきたり。
六 「楚に養由基といふ者有り。善く射る者也。柳葉を去れること百歩にして射る。百発つて百中つ。左右観る者数千人、皆善く射ると曰ふ」（『史記』周本紀）による。
七 近衛の舎人。左右近衛府の兵士。
八 心ない仕打ちだ。それではおもしろくないという気持。
九 柏木。
一〇 若菜上一二九頁参照。

ど、歩弓のすぐれたる上手どもありければ、召し出でて射させたまふ。

殿上人どもも、つきづきしき限りは、皆前後の心、こまどりに方分きて、暮れゆくままに、今日にとぢむる霞のけしきもあわたたしく乱るる夕風に、花の蔭いとど立つことやすからで、人々いたく酔ひ過ぎたまひて、「艶なる賭物ども、こなたかなた人々の御心見えぬべきを、柳の葉を百度あてつべき舎人どもの、うけばりて射取る、無心なりや。すこしここしき手つきどもをこそ、いどませめ」とて、大将たちよりはじめておりたまふに、衛門の督、人よりけにながめをしつつものしたまへば、かの片端心知れる御目には、見つけつつ、なほいとけしき異なり、わづらはしきこと出で来べき世にやあらむと、われさへ思ひつきぬるここちす。この君たち、御仲いとよし。さる仲らひといふなかにも、心かはしてねむごろなれば、はかなきことにても、もの思はしくうちまぎるることあらむを、いとほしく

[源氏は]
射手としてふさわしい人は総て
気ぜわしく
立ち去りにくくて
（源氏）
[庭に]
少々おっとりした手並みの連中を
競わせるがよい
したり顔に
髭黒と夕霧
[夕霧の]
ほかの人より目立って物思いに沈んでいらっしゃるので
見咎めて
二人の仲なのだろうやはりとても様子が
変だ
やっかいなことがもちあがる
夕霧と柏木は
自分まで悩みにとりつかれたような気がする
かと
そうしたいとこ同士といった間柄の中でも
気心が通じ合った親しい仲なので
でも
[相手に]
思い悩んでそれに屈託するようなことがあるのを
[夕霧は]
わがこと
つまらぬこと

一一 何となく恐ろしく、目を伏せたくなるような思いで。「まばゆし」は、まぶしい。

一二 こんなことを考えてよいものか。以下、女三の宮に対する気持を反省する柏木の心中。

柏木の思い

一三 あのいつかの猫だけでもせめて手に入れたいものだ。女三の宮を垣間見るきっかけになった猫（若菜上一二七頁参照）。以下、柏木の心中。

一四 独り寝のさびしさを紛らわすよすがにも手なずけよう。「かたはらさびし」は、女三の宮を得られぬ満たされぬ思いをいう。

一五 まるで子供のように、どうしたら盗み出せようかと。

一六 それまでもが、むつかしいことなのだった。柏木の思いを地の文としたもの。

一七 弘徽殿の女御。柏木の妹。

柏木、弘徽殿の女御を訪う

一八（柏木にも）じかにお姿をお見せになることもない。用心深く几帳の陰に隠れているのである。

一九（あの垣間見の一件は）軽々しくおかしなことであったとは、さすがに思われるけれども。

二〇（あの件が）女三の宮の不用意から起ったこととは思いおよばない。

二一 女三の宮の異腹の兄君に当る。

二二 当然（女三の宮に）似ていられるところがあるであろうと。

ついで東宮に参上

おぼえたまふ。（のように心配なさる）

みづからも（柏木自身も）、大殿（源氏）を見たてまつるに、気恐ろしく（一二）まばゆく、かかる心はあるべきものか、なのめならむにてだに（どうでもいいようなことでも）、けしからず（不届きな）、人に点つかるべきふるまひはせじと思ふものを（非難されるような振舞はすまいと思っているのに）、ましておほけなきこと（身の程もわきまえぬ望みだと思い悩んだ挙句は）と思ひわびては（一三）、かのありし猫をだに得てしがな、思ふことかたら（悩みを打ち明ける相手にするわけにはいかないが）ふべくはあらねど（一四）、かたはらさびしきなぐさめにもなつけむ、と思ふに、もの狂（一五）ほしく、いかでかは盗み出でむと、それさへぞ難きことなりける（一六）。

女御の御方（一七）に参りて、物語など聞こえまぎらはしこころみる。いと奥深く、心はづかしき御もてなしにて（たしなみ深く気はずかしくなるようなご様子で）、まほに見えたまふこともなし（一八）。かかる御仲らひにだに（こうした兄妹のお間柄でも）、気遠くならひたるを（隔てを置いてきたのに）、ゆくりかにあやしくはありしわざぞかしとは、さすがにうちおぼゆれど（一九）、おぼろけにしめたるわが心から（一方ならず思い詰めた自分の気持ゆえに）、浅（二〇）くも思ひなされず。

春宮（二一）に参りたまひて、論（二二）なう通ひたまへるところあらむかしと、

目とどめて見たてまつるに、〔東宮は〕はでやかといったふうではないにほひやかになどはあらぬ御容貌なれど、東宮という尊いご身分はさすがにさばかりの御ありさまはた、いと異にて、格別で気品があり優雅でいらせられるおはします。

内裏の御猫の、あまた引き連れたりけるはらからどもの、所々にあかれて、この宮にも参れるが、いとをかしげにてありくを見るに、東宮まづ思ひ出でらるれば、「六条の院の姫宮の御方にはべる猫こそ、いと見えぬやうなる顔して、をかしうはべしか。はつかになむ見たまへし」と啓したまへば、わざとらうたくせさせたまふ御心にて、くはしく問はせたまふ。「唐猫の、ここのに違へるさましてなむはべりし。同じやうなるものなれど、心をかしく人馴れたるは、あやしくなつかしきものになむはべる」など、ゆかしくおぼさるばかり聞こえなしたまふ。

〔東宮は〕聞き置かれた上で

聞こしめしおきて、桐壺の御方より伝へて聞こえさせたまひければ、参らせたまへり。げにいとうつくしげなる猫なりけりと、人々

〔柏木〕女三の宮

〔柏木〕四

〔東宮は〕格別に猫をおかわいがりになるご性分なので

ほんのちらりと姿を見ましたに言上なさると

〔猫は皆〕人なつこいのは利発で

〔東宮が〕興味をお持ちになるように大げさにお話し申し上げなさる

〔女三宮から〕献上なさったなるほどほんとにかわいらしげな

一 帝のお飼いあそばしている御猫が、たくさん引き連れていた仔猫たちが、諸所に貰われていって。「あかる」は、散る。宮廷、貴顕の家での猫の愛玩は当時の流行であった。

二 あの垣間見の折の猫がまず思い出されるので。

三 まことに珍しい顔付をしていて、かわいらしゅうございました。「はべし」は「はべりし」の促音便「はべつし」の、促音無表記の形。

四 唐猫（中国から舶載された猫）で、この国（日本）のとは一風変った様子の猫でした。

五 桐壺の女御（東宮妃。明石の姫君）を通じて、その猫をご所望になったので。

柏木、東宮を通じて垣間見の折の猫の入手をはかる

六 あの猫を手に入れたいとお思いだったと、（その時の）東宮のお顔色を見て取った上で。
七 柏木は、まだ元服前から、朱雀院が特別目をかけてお召し使いになったので。
八 朱雀院が出家して西山にお籠りになってからは。院の西山に移られたこと、若菜上六五頁参照。
九 琴、和琴、箏の琴、琵琶など、絃楽器の総称。柏木は音楽の才にすぐれ、父太政大臣の血を享けて和琴の名手である（若菜上五〇～五一頁参照）。
一〇 どうしたかな、私の見た人は。女三の宮の身代りというほどの気持が「人」と言わせている。

興ずるを、衛門の督は、尋ねむとおぼしたりきと、御けしきを見おきて、日ごろ経て参りたまへり。童なりしより、朱雀院の取り分きておぼし使はせたまひしかば、御山住みに後れきこえては、またこの宮にも親しう参り、心寄せきこえたり。御琴など教へきこえたまふとて、「御猫どもあまたつどひはべりにけり。いづら、この見し人は」と尋ねて見つけたまへり。いとらうたくおぼえて、かき撫でてゐたり。宮も、「げにをかしきさましたりけり。心なむ、まだなつきがたきは、見馴れぬ人を知るにやあらむ。ここなる猫ども、ことに劣らずかし」とのたまへば、「これは、さるわきまへ心もをさをさはべらぬものなれど、そのなかにも心かしこきは、おのづから魂はべらむかし」など聞こえて、「まさるどもさぶらふめるを、これはしばし賜はりあづからむ」と申したまふ。心のうちに、あながちにをこがましく、かつはおぼゆ。

（東宮）（柏木）（東宮）（柏木）

お仕え申し上げている　とてもかわいらしく思われて　捜して　確かにきれいな猫だね　内心　まだ用心　私の所の猫たちも　そうした分別もとんとございませ　猫は　もっとよい猫がお側にいるようですから　性根がございましょう　見劣りはしないね　しっかりしたのは　お預かり申しましょう　[柏木は]　あまりに　我ながら思われる　夜が明け離れ　も馬鹿げていると

つひにこれを尋ね取りて、夜もあたり近く臥せたまふ。明け立て

柏木、猫を得て女三の宮を偲ぶ

一 人になつかなかった気性も、すっかりよく馴れて。垣間見の場面でも「猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長く付きたりけるを」（若菜上一二七頁）とあり、東宮も「心なむ、まだなつきがたきは」と言っておられた。

二 いやに積極的だなと、苦笑が浮ぶ。猫の鳴き声の「ねう」を「寝む」（共寝しよう）の意に取りなして、及びもつかぬ女三の宮にひきかえ、宮の身代りとも思うこの猫は進んで寝ようというと、物思いの中にもついおかしみをそそられる。

三 恋い慕ってもどうにもならぬあの方（女三の宮）を偲ぶよすがと思って撫でいつくしんでいると、お前は、どういう積りでそんな鳴き声を立てるのだろう。

四 お前と仲よしになったのも、前世からの縁であろうか。

五 年輩の女房。柏木を幼少の頃から知っている。

六 東宮から返すようにご催促があっても、お返しせず。

七 左大将髭黒の北の方。玉鬘。

八 太政大臣のご子息たち。柏木ほか、玉鬘の異母弟たち。

九 今も昔通り。玉鬘が源氏の娘という触れ込みで、六条の院にいた当時のまま。

玉鬘の近況

ると　世話

ば、猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。人気遠かりし心も、いとよく馴れて、ともすれば衣の裾にまつはれ、寄り臥しむつるるを、まめやかにうつくしと思ふ。いといたくながめて、端近く寄り臥したまへるに、来て、ねうねう、といとらうたげに鳴けば、かき撫でて、うたてもすすむかなと、ほほゑまる。

（柏木）「恋ひわぶる人のかたみと手ならせば
なれよ何とて鳴く音なるらむ」

（猫の）

四 これも昔の契りにや」と、顔を見つつのたまへば、いよいよらうたげに鳴くを、懐に入れてながめたまへり。御達などは、「あやしくにはかなる猫のときめくかな。かやうなるもの見入れたまはぬ御心に」と、とがめけり。宮より召すにも参らせず、取りこめてこれをかたらひたまふ。

左大将殿の北の方は、大殿の君たちよりも、右大将の君をば、なほ昔のままに、うとからず思ひきこえたまへり。心ばへのかどかど

物思いに沈んでいられる　不思議な　動物などお好きでないご性分なのに　独り占めしてこの猫を　不審がるのだった　こと急に猫をおかわいがりになるなんて　おかわいがりになる　親しくお思い申し上げていらっしゃる　夕霧　側に寝そべって甘えるのを　まつわりつき　ひどく物思いに沈んで　心からかわいらしいと　〔柏木が〕　〔柏木は〕　〔猫が〕　〔玉鬘は〕気立てがはきはきし

一〇 夕霧にお会いになる時でも、親身に、他人行儀なところのない態度でお会いになるので。

一一 明石の女御。前に「桐壺の御方」とあった。「淑景舎」は、桐壺の正式の名称。

一二 夕霧は、（玉鬘とは）一風変ったお付合いで。他人なのに、姉弟同様の付合いであるのをいう。

一三 あの最初の北の方ともすっかり縁をお切りになって。別居のいきさつは、四巻真木柱二〇九頁以下参照。

一四 男のお子たちばかりなので。男子二人である（若菜上四八頁参照）。

一五 もとの北の方腹の姫君（真木柱二二五頁参照）。当時十二、三歳とあったから、今十六、七歳。髭黒は当時からこの姫君をかわいがっていた（真木柱二三〇～一頁、二四六～七頁）。

一六 もとの北の方の父宮。式部卿の宮。

一七 せめてこの姫君だけでも、世間の笑いものにならぬよう、立派な婿を迎えてやりたい。

一八 式部卿の宮のご声望は、たいしたもので。帝の伯父君に当り、姫君の一人は女御にあがっている。

大北の方 ─ 髭黒北の方
式部卿宮 ═ 宮の女御
藤壺 ═ 帝（冷泉院）
桐壺帝 ……

一九 東宮の伯父として、国家の柱石ともおなりになるはずの有力者でいられるから。「下形」は、下地の意（四巻藤袴一九七頁参照）。

真木柱の姫君のこと

ていて しく、気近くおはする君にて、対面したまふ時々も、こまやかに隔てたるけしきなくもてなしたまへれば、大将も、淑景舎などの、うとうとしく及びがたげなる御心ざまのあまりなるに、さま異なる御むつびにて、思ひかはしたまへり。

気さくなお方なので　夕霧　よそ　親しくしていらっしゃる

男君、今はまして、かのはじめの北の方をもて離れ果てて、並びなくもてかしづききこえたまふ。この御腹には、男君達の限りなれば、さうざうしとて、かの真木柱の姫君を得て、かしづかまほしくしたまへど、祖父宮など、さらにゆるしたまはず、「この君をだに、人笑へならぬさまにて見む」とおぼしのたまふ。親王の御おぼえいとやむごとなく、内裏にも、この宮の御心寄せ、いとことよなくて、このことと奏したまふことをば、え背きたまはず、心苦しきものに思ひきこえたまへり。おほかたも今めかしくおはする宮にて、この院、大殿にさしつぎたてまつりては、人も参りつかうまつり、世人も重く思ひきこえけり。大将も、さる世のおもしとなりたまふ

夫の髭黒　玉鬘の　並ぶ者なく大切にお扱いになっていられる　もの足りないからとて　はなやかにお世話した　いとお思いだが　どうしてもご承知なさらず　（式部卿宮）　この宮に寄せるご好意には　並々ならぬものがあって　（宮が）これは是非と奏請なさることは　（帝は）お断りになれず　心にかけて大切なお方とお思い申し上げていられる　大体のお人柄も派手なご性質でいらっしゃる宮様で　源氏と　太政大臣のお次には　（宮邸に）　髭黒　大切に

一 婿にと希望を申し出る人々は、何かにつけ大勢いるけれども、式部卿の宮は、これとお決めになることもない。

二 柏木を。以下、太政大臣の長子をという宮の考慮である。

三 そうした気配を見せたら（求婚して来たら）。

四 あのかわいがっている猫よりは姫君をお見下げ申しているのか。以下、前の話題とここの話題とをつないでの諧謔気味の草子地。

五 母君が、どうしたことか、いまだに様子がおかしくて。物の怪のため時々正気を失うのである（真木柱二一〇頁参照）。

六 普通のお暮しぶりでもなく、廃人同様のありさまでいられるのを。

七 玉鬘のことを、いつも心にかけてあこがれて。同様のこと、真木柱二四七頁にも見える。

真木柱、兵部卿の宮と結婚

八 螢兵部卿の宮。

九 いまだにずっとお一人でいらして。（四巻胡蝶三六頁参照）

一〇 熱心にお望みになったご縁談は、皆うまくいかなくて。玉鬘、女三の宮を望んだこと。

一一 世間の笑いものになっているような気がなさるので。「人笑へ」は、人に笑われること。

一二 式部卿の宮。兵部卿の宮に対して、老年の式部卿の宮を呼んだもの。

真木柱のご評判は

どうしていい加減なものがあろう

べき下形なれば、姫君の御おぼえ、などてかは軽くはあらむ。聞こえ出づる人々、ことに触れて多かれど、おぼしも定めず。衛門の督を、さもけしきばまば、とおぼすべかめれど、猫には思ひおとしたてまつるにや、かけても思ひ寄らぬぞくちをしかりける。母君の、あやしくなほひがめる人にて、世の常のありさまにもあらず、もて消ちたまへるを、くちをしきものにおぼして、継母の御あたりをば、心つけてゆかしく思ひて、今めきたる御心ざまにぞものしたまひける。

[柏木が]全然その気もないのは残念なことだった

[宮は]お思いのようだが

[真木柱は]残念なことにお思いになって

当世風に派手好きなご気性でいらっしゃるのだった

兵部卿の宮、なほ一所のみおはして、御心につきておぼしけることどもは、皆違ひて、世の中もすさまじく、人笑へにおぼさるるに、さてのみやはあまえて過ぐすべきとおぼして、このわたりにけしきばみ寄りたまへれば、大宮、「何かは、かしづかむと思はむ女子を、宮仕へにつぎては、親王たちにこそは見せたてまつらめ。ただ人の、すくよかになほなほしきをのみ、今の世の人のかしこくする、

おもしろくなく

式部卿の宮家にご意向をおもらしになったところ

こんなふうにのんびり構えてばかりもいられないと

いや何

大切に世話しようと思う

娘

なら

帝にさし上げるについては

めあわせ申すのがよい

臣下

堅い一方でおもしろくもない連中ばかりを

今の世間の人が大事にするのは

一三 そうたいして（兵部卿の宮を）お焦らし申されることもなく。あっさり承知したことをいう。

一四 兵部卿の宮は、あっさりし過ぎて怨み言を言う余地もないのを、もの足りなくお思いになったが。恋の情趣を楽しむ余地もなく平凡に事が運ばれてしまったという不満。

一五 宮家では、（兵部卿の宮を）婿として下へも置かぬお扱いをなさる。

一六 今までいろいろ心を痛めることも多かったので、女の子の世話はもうたくさんだと思いたいところだが。長女は髭黒のもとの北の方、次女は帝の女御にあがっているが、秋好む中宮に圧されて立后も叶わなかった。

式部卿の宮の心づかい

一七 父親の髭黒といえば、自分の言う通りにしないといって。真木柱を引き取ろうとしたが、式部卿の宮が承知しなかったこと、前の一四五頁に見える。

一八 兵部卿の宮。

一九 お亡くなりになった北の方を。胡蝶の巻に「兵部卿の宮はた、年ごろおはしける北の方も亡せたまひて、この三年ばかり、独住みにてわびたまへば」（四巻三六頁）とあった。朧月夜の姉に当る人。胡蝶の巻当時からすでに五年たっている。

兵部卿の宮、真木柱に不満

品なき（いやしい根性だ）わざなり」とのたまひて、一三いたくもなやましたてまつりたまはず、［結婚を］ご承諾申し上げなさったうけひき申したまひつ。一四親王、あまり怨みどころなきを、さうざうしとおぼせど、大体が馬鹿にできない権勢をお持ちの宮家なのでおほかたのあなづりにくきあたりなれば、言い逃れることもおできにならずえしも言ひすべしたまはで、お通いになるようになったおはしましそめぬ。一五いと二なくかしづききこえたまふ。

式部卿の宮

大宮は、「女子あまたものしたまひて、一六さまざまもの嘆かしきを孫の真木柱りをり多かるに、物懲しぬべけれど、なほこの君のことの思ひ放ちっておけない気持なのでがたくおぼえてなむ。母君は、おかしな正体もない人間にあやしきひがものに、年ごろに添へすますなってゆかれるてなりまさりたまふ。一七大将はた、わがことに従はずとて、薄情に見向きおろかにもなさらないようだから見捨てられためれば、まことに不愍でならぬいとなむ心苦しき」とて、［夫婦の］お部屋の飾りも立ちゐ、御手づから御覧じ入れ、熱心にご自身でお世話なさよろづにかたじけなく御心に入れる何かともったいないほどお気を遣っていらっしゃたまへり。

宮は、一八亡せたまひにける北の方を、それ以来ずっと忘れがたくお思い申されて世とともに恋ひきこえたまひて、亡き北の方の面影に似た人を妻にしたいただ昔の御ありさまに似たてまつりたらむ人を見む、とおぼし

全然感じの違うお方だったとお思いになると

けるに、一あしくはあらねど、さま変りてぞものしたまひけるとおぼすに、残念なお気持だったのだろうか くちをしくやありけむ、通ひたまふさま、いともの憂げなり。

何というひどい仕打ちかと心をお痛めになる

大宮、いと心づきなきわざかなとおぼし嘆きたり。母君も、あれほどさこそひがみたまへれど、うつし心出で来る時は、三くちをしく憂き世と思ひ果てたまふ。

気のおかしなお方だが正気に返る時は

髭黒

大将の君も、四さればよ、いたく色めきたまへる親王をと、

最初からご自分としては賛成ではなかったご縁組だからだろうか

はじめよりわが御心にゆるしたまはざりしことなればにや、ものしと思ひたまへり。

おもしろからぬ思いでいらっしゃる

玉鬘

尚侍の君も、五かくたのもしげなき御さまを近く聞きたまふには、

自分が宮とそんな夫婦仲になったとしたら

さやうなる世の中を見ましかば、

源氏や太政大臣が

こなたかなた、いかにおぼし見たまはまし、など、

何やらおかしくもまたなつかしくもお思い出しになるのだった

なまをかしくもあはれにもおぼし出でけり。六その

宮と結婚しようとは

かみも、気近く見聞こえむとは、

考えもしなかったことだ

思ひ寄らざりきかし、ただ情々しう、心深きさまにのたまひわたりしを、あへなくあはつけきやうにや聞きおとしたまひけむと、

身も縮むように今までも思い続けていらっしゃることなので

いとはづかしく年ごろもおぼしわたることなれば、

こうした近い間柄で何かと宮のお耳に入る自分の噂についても気を遣わねばならず

かかるあたりにて聞きたまはむことも心づかひせらる

玉鬘の感慨

五　こうした頼りがいもない兵部卿の宮のお仕打ちを身近にお聞きになるにつけて。「近く」は、今は継娘に当る真木柱の身の上のこととして、の意。

六　宮に求婚されていた当時も。以下、玉鬘の気持。

七　宮がいかにもやさしく、情愛深げにお手紙を下さっていたのに、（髭黒とこんなことになって）張合い抜けして無考えな女のようにお見下げになったであろうかと。真木柱の巻にも「宮の御心ざまの、心深う、情々しうおはせしなどを思ひ出でたまふに、はづかしう、くちをしうのみ思ほすに」（四巻二〇六頁）とあった。

一　真木柱は、きれいな人ではあるが。以下、兵部卿の宮の不満。

二　真木柱のもとにお通いになる様子は、ひどくおっくうそうである。しばしば通いのとだえるさま。

三　ままならぬ、情けないこの世だと、すっかり悲観しておしまいになる。自分も髭黒との結婚に破れ、娘もまた、という気持。

四　やはりそうだ（言わぬことではない）、ひどく浮気っぽいお方だからと。「ものしと思ひたまへり」にかかる。

八 玉鬘の方からも、真木柱のいろいろなお世話をしてお上げになる。継母としての配慮。

九 真木柱の弟君たちなどをさし向けて。真木柱の巻当時、二人は「十」「八つばかり」（四巻二三〇頁）とあった。四年前の当時から、二人は玉鬘のもとに出入りしている。

大北の方の不満

一〇 例の大北の方という性悪者が。式部卿の宮の北の方。かつて継娘に当る紫の上の不幸を小気味よがったり（二巻須磨二一一頁）、玉鬘と髭黒の結婚について源氏をあしざまにののしったりした（真木柱二二六～八頁）。そこにも「この大北の方ぞ、さがな者なりける」（真木柱二二八頁）とあり、札付きといった扱い。

一一 親王方を婿にするのは、おとなしく浮気もせずに娘を愛して下さるのを、せめて、ぱっともしない暮しの代りにはと思って我慢するところなのに。親王には政治的な権力がなく、婿取りしても世俗的な家の繁栄は望めないので、こうした愚痴にもなる。

一二 聞いたこともない、ひどい言いようだ。以下、兵部卿の宮の反撥。

一三 昔、北の方と仲むつまじく暮した自邸。

一四 冷泉帝。

一五 冷泉帝の即位は十一歳（三巻澪標一三～一四頁）。当時、源氏二十九歳。今、帝、二十八歳、源氏、四十六歳。源氏四十二歳から四十五歳の間、物語は四年の空白を置く。

その後四年を経て冷泉帝、譲位さる

べく、などおぼす。

八これよりも、さるべきことはあつかひきこえたまふ。九せうとの君たちなどして、かかる御けしきも知らず顔に、憎からず聞こえまつはしなどするに、心苦しくて、もて離れたる御心はなきに、一〇大北の方といふさがな者ぞ、常にゆるしなく怨じきこえたまふ。「一一親王たちは、のどかに二心なくて見たまはむをだにこそ、はなやかならぬなぐさめには思ふべけれ」とむつかりたまふを、宮も漏り聞きたまひては、一二いと聞きならはぬことかな、昔いとあはれと思ひし人をおきても、なほはかなき心のすさびは絶えざりしかど、かうきびしきもの怨じは、一三ことになかりしものを、心づきなく、いとど昔を恋ひきこえたまひつつ、故里にうちながめがちにのみおはします。さ言ひつつも、一四二年ばかりになりぬれば、かかるかたに目馴れて、たださるかたの御仲にて過ぐしたまふ。

一五はかなくて年月もかさなりて、内裏の帝、御位に即かせたまひて

（ぬだろう）（宮の冷たいお仕打ちもそ知らぬ顔をして）（親しげに人をそらさぬお扱いをなさったりするので）（「宮も」気の毒がって）（縁を切るようなおつもりはないのに）（始終）（口やかましく）（（大北方））（不平をおっしゃるのを）（とてもいとしく思っていた北の方をさし）（おいても）（やはりちょっとした浮気はいつもしていたけれども）（こんなきつい）（恋しくお思い申されながら）（不愉快で）（ますます亡き北の方を）（特に言われたこともなかったのにと）（怨み言は）（浮かぬ顔でぼんやり時を過してばかりいられる）（こうした問柄も当り前になって）（そうした淡いご夫婦仲で暮していらっしゃる）（これという事もなく）

一 自分には、次の帝におなりになる皇子もいらっしゃらず、ものさびしい上に。冷泉院には、御子がおありでない。

二 気楽に、親しい人々にもお会いし、個人として思い通りに、のんびり暮したいと思う。帝という公の地位を去って、上皇（院）として束縛のない生活に入りたいという譲位の希望。

三 朱雀院の皇子。御母は、髭黒の妹、承香殿の女御。三歳で立坊（三巻澪標一四頁）、十三歳で元服（四巻梅枝二五三頁、二六三頁）、この年二十歳。

「髭黒
承香殿女御
朱雀院 ═══ 東宮（今上）
源氏 ═══ 明石の姫君 ═══ 第一皇子（東宮）」

四 柏木の父。

五 辞職の願い書。「表」は、帝に奉る文書。

六 老齢の私が職を辞することに、何の未練があろう。「挂冠」は、後漢の逢萌が、王莽に仕えることを好まず、冠を東都の城門に挂けて家人とともに遼東にのがれた故事による（『後漢書』逢萌伝）。

七 髭黒。帝の外戚として政務を見るのである。

八 承香殿の女御。亡くなったことは、ここにはじめて見える。

九 規定のご称号を得られたけれども。帝のご生母として皇太后位を追贈されたこと。

太政大臣、致仕　髭黒、右大臣として政権の座に

十八年にならせたまひぬ。「次の君（帝）とならせたまふべき御子おはしまさず、ものの栄なきに、世の中はかなくおぼゆるを、心やすく、思ふ人々にも対面し、私ざまに心をやりて、のどかに過ぐさまほしくなむ」と、年ごろおぼしのたまはせつるを、日ごろいと重くなやませたまふことありて、にはかにおりゐさせたまひぬ。世の人、飽かず盛りの御世を、かくのがれたまふことと惜しみ嘆けど、春宮も（先のことも心もとなく思われるから／ここ近頃とてもひどくお煩いずっとお考えになり仰せにもなっていられたが／急にみ位をお下りあそばされたになることがあって／まだお若い盛りの御代を／こうしておひきあそばすことと）おとなびさせたまひにたれば、うちつぎて、世の中の政治など、ことに変るけぢめもなかりけり。（成人あそばしておいでなので／引き続いて／格別に大きな変化もないのであった）

太政大臣、致仕の表たてまつりて、籠りゐたまひぬ。「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も、位を去りたまひぬるに、年深き身の冠を挂けむ、何か惜しからむ」とおぼしのたまひて、左大将、右大臣になりたまひてぞ、世の中の政治つかうまつりたまひける。女御の君は、かかる御世をも待ちつけたまはで亡せたまひにければ、限りある御位を得たまへれど、ものの後のここちして、かひなかり（政界を退かれた（太政大臣）／世間無常のことわりによって／恐れ多い／こうした今上の御代をもご覧になれないで／輔佐なさることになった／物陰に隠れた感じで／つまらないこと）

一〇 明石の姫君のお生みになった第一皇子。この年、六歳。「六条の女御」の呼称はここだけに見える。六条の院（源氏）の姫君である女御の意。十八歳。

一一 太政官で、大臣に次ぐ重職。正三位相当。右大臣になった髭黒とともに政権を支える立場である。

一二 冷泉院の呼称、ここにはじめて見える。冷泉院は累代の上皇御所。大炊御門南、二条北、堀川西、大宮東、四町。（四巻図録二参照）

一三 東宮が朱雀院側から立ち、冷泉院には継嗣がない。

一四 新東宮も同じ自分の血筋だが。

一五 冷泉院がご憂悶のご生涯ではなくてお過しになれた程度に、出生の秘密という難点はあらわにならず。秘密が保たれて皇位は全うできたということ。

一六 冷泉院のご宿縁を。

明石の姫君腹の第一皇子、立坊

源氏、冷泉院に継嗣のないのをひそかに残念に思う

東宮の女御の声望

一七 東宮の御母である女御。明石の姫君。

一八 皇族出身の方が引き続いて后にお立ちになることを。明石の姫の立后が必然視されている書き方。すでに藤壺、秋好む中宮と、皇族出身の后が続いている（三巻少女二三〇頁注二参照）。

一九 秋好む中宮。以下の事情、少女二二九～二三〇頁参照。

けり。一〇六条の女御の御腹の一の宮、坊（東宮の位につかれた）にゐたまひぬ。（当然のことと前から）さるべきことと（目もさめるようなこと）とかねて思ひしかど、（実現してみるとやはりすばらしく）さしあたりてはなほめでたく、目おどろかる（となのだった）るわざなりけり。右大将（夕霧）の君、一一大納言になりたまひぬ。いよいよあ（ますますご立派）らまほしき御仲（源氏）らひなり。（な髭黒と夕霧のお間柄である）

六条の院は、（みゆかをお下りになった）おりゐたまひぬる冷泉院（れいせいゐん）の、一二御嗣（つぎ）おはしまさぬを、（心ゆかぬことと心中お思いになる）飽（あ）かず御心のうちにおぼす。一四同じ筋なれど、一五思ひなやましき御こと（予想はしていたけれども）ならで過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふ（〔その代り〕後世までは皇統を伝えることが叶わなかった）まじかりける御宿世（すくせ）、一六〔源氏は〕残念でもの足りぬこととと（人と話し合え）くちをしくさうざうしくおぼせど、人にのたまひあはせぬことなれば、いぶせくなむ。（気持は晴れない）

春宮（とうぐう）の女御（にょうご）は、一七御子（みこ）たちあまた数添ひたまひて、いとど御おぼえ（いよいよ帝のご寵愛は）並びなし。一八源氏の、うち続き后（きさき）にゐたまふべきことを、世人（よひと）飽かず（不満に）（並ぶものがない）思へるにつけても、一九冷泉院の后は、ゆゑなくて、（格別の理由もなく）あながちにかくし（強引に自分を后にして下さった）おきたまへる御心をおぼすに、いよいよ六条の院（源氏）の御ことを、年月（〔源氏の〕ご厚意）に添へて、限りなく思ひきこえたまへり。（感謝申し上げていらっしゃる）

冷泉院の日常

一院の帝、おぼしめししやうに、御幸も、所狭からでわたりたまひなどしつつ、かくてしも、げにめでたくあらまほしき御ありさまなり。

紫の上、出家の希望をもらす

姫宮の御ことは、帝、御心とどめて思ひきこえたまふ。おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを、対の上の御勢には、えまさりたまはず。年月経るままに、御仲いとうるはしくむつびきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬものから、「今は、かうおほぞうの住ひならで、のどやかに行ひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと、見果てつるここちする齢にもなりにけり。さりぬべきさまにおぼしゆるしてよ」と、まめやかに聞こえたまふをりをりあるを、「あるまじくつらき御ことなり。みづから深き本意あることなれど、とまりてさうざうしくおぼえたまひ、ある世に変らむ御ありさまの、うしろめたさによりこそながらふれ。つひにそのこととげなむのちに、ともかくもおぼしなれ」

一 冷泉院。

二 帝の行幸とは違って、自由である。普通の人と同じように牛車で、供奉の人々の服装も特に定めはない。

三 新帝は、女三の宮の兄君に当られる。東宮時代、朱雀院から女三の宮についてご依頼もあった（若菜上一三〜一四頁参照）。

四 紫の上。

五 このような成り行きまかせの暮しではなく。「おほぞう」は、通りいっぺん、いい加減の意。

六 この世の中は大方この程度のものと、見極めのついた気のする齢にもなりました。この翌年、「今年は三十七にぞなりたまふ」（一八八頁）とあるのによれば、三十六歳。今年、源氏は四十六歳。若紫の巻では、源氏十八歳の時に紫の上は「十ばかりにやあらむと見えて」（一巻一八九頁）とあった。

七 私こそ前から深く望んでいることなのですが。出家は私の年来の素志であるという。

八 明石の上は陰のお世話役に甘んじて、遜っておいでなのが、かえって将来も安心で立派なことだった。今、分を守ることが、将来、女御の生母として重んじられる下地を作ることになるからである。

明石の上と母尼君

九 明石の上の母尼君。

一〇 涙を拭い払った目までもばっちりと。心の喜びはもとより、の意。諧謔の筆致。「ただす」は、上の「のごふ」とほぼ同義。『名義抄』に、「摂」に「ツクロフ」「タヽス」、「払」に「ノコフ」「タヽス」の訓がある。

源氏、住吉詣でを思い立つ　明石の入道の願文

一一 住吉明神に源氏がかけた願。明石の姫君の将来についての願である。併せて明石の入道の願もある（若菜上一一三～六頁参照）。立后も東宮の即位も将来のことなので「かつがつ」という。

一二 明石の入道の願文を納めた箱。（若菜上一〇四頁）

一三 毎年春秋の神楽を奉納して明石の上の将来を祈願した上に、その度に遠い行く末まで（姫君や東宮のこと）祈って立てた数多くの願は。（二巻明石二七九頁参照）

一四 学才のほども偲ばれる見事なもので。願文は漢文で書くので、こうした源氏の感想がある。

一五 どうして、あのように世俗を離れて行い澄ました身でありながら、このような子孫の栄達を願う心を起したのであろうかと。

などのみ、さまたげきこえたまふ。（反対申し上げなさる）

女御の君（明石の姫君）、ただこなたを、（紫の上）まことの御親にもてなしきこえたまひて、（本当の生みの母君のようにお仕え申し上げなさって）御方は隠処の御後見にて、卑下しものしたまへるしもぞ、なかなか行く先たのもしげにめでたかりける。尼君も、（何かといえば）ややもすれば、堪へぬよろこびの涙、（こらえきれぬうれし涙が）ともすれば落ちつつ、（どうかするとこぼれては）目をさへのごひたどして、命長き（長生きが）、うれしげなる例（しあわせな）になりてものしたまふ。

住吉の御願（すみよし）、かつがつ果たしたまはむとて、（とりあえずお礼参りをなさろうと）春宮の（明石の姫君の将来の祈願のため）女御の御祈りに詣でたまはむとて、かの箱あけて御覧ずれば、さまざまのいかめしきことども多かり。年ごとの春秋の神楽に、かならず長き世の祈りを加へたる願ども、げにかかる御勢ならでは、果たしたまふべきこととも思ひおきてざりけり。ただ走り書きたるおもむきの、才しくはかばかしく、仏神も聞き入れたまふべき言の葉あきらかなり。いかでさる山伏の聖心に、かかることどもを思ひよりけむと、あはれにおぼえなくも御覧ず。さるべきにて、しばしかりそめに身

（いろいろの盛大なお礼参りに）（お礼参りがおできになる）（無造作に筆を走らせた文面は）（ことともに考えていないようだった）（入道が）（お聞き入れになるに違いない）（文章は明晰なものがある）（感に打たれ分に過ぎたことだとも）（入道は）（前世の因縁で）（人の姿に）

一 遠い昔のすぐれた修行僧ででもあったのだろうか。入道の奇矯な高望みがことごとに実現する勢いに、源氏も畏敬の念に打たれる。

二 明石の女御（ならびに東宮）の行く末の祈願という趣旨は表にお立てにならず。

紫の上も同行

三 須磨、明石に流寓した事変の当時、お立てになった数多くの御願は、すっかり全部お礼をすまされているけれども（三巻澪標三二頁参照）。なお「浦伝ひ」の語、二巻明石二七一頁の源氏の歌に見える。歌語。

四 紫の上。足掛け三年のつらい別離をともに耐え忍んだ仲である。

五 官は参議以上、位は三位以上の人々。

六 左大臣と右大臣（髭黒）お二方。

七 東遊（後出一五六頁）の舞人。十人。

八 六衛府（左右の近衛、兵衛、衛門府）の次官。

九 東遊、神楽を奏する楽人。ここは東遊の楽人。石清水、賀茂の臨時の祭の時は、いずれも十二人（四位、五位、六位各四人ずつ）。

一行の盛大な行装

一〇 石清水八幡宮の臨時の祭は三月中あるいは下の午の日、賀茂の臨時の祭は十一月下の酉の日。いずれも東遊を奏する。

一一 それに加わった二人の楽人。加陪従といって、特別に若干名増員された楽人をいう。

をやつしける、昔の世の行ひ人にやありけむ、［源氏は］などおぼしめぐらすに、いとど軽々しくもおぼされざりけり。

このたびは、この心をばあらはしたまはず、ただ院の御物詣にて出で立ちたまふ。浦伝ひのもの騒がしかりしほど、そこらの御願ども、皆果たし尽くしたまへれども、なほ世の中にかくおはしまして、かかるいろいろの栄えを見たまふにつけても、神の御助けは忘れがたくて、対の上も具しきこえさせたまひて詣でさせたまふ響き世の常ならず。いみじくことどもそぎ捨てて、世のわづらひあるまじくとはぶかせたまへど、限りありければ、めづらかによそほしくなむ。上達部も、大臣二所をおきたてまつりては、皆つかうまつりたまふ。舞人は、衛府の次将どもの、容貌きよげに丈だち等しき限りを選らせたまふ。この選びに入らぬをば恥に、愁へ嘆きたるすきものどもありけり。陪従も、石清水、賀茂の臨時の祭などに召す人々の、道々のことにすぐれたる限りをととのへさせたまへり。加はりたる

ますます いい加減にはお思いになれないのだった

源氏

女御や東宮などのお栄えを

その後もこうして世の栄華をお極めになって

お連れ申し上げなさって

大層何ごとにつけても質素にして

世間の騒ぎは

並々でない

簡略におさせになったが

ご身分がご身分なので

またとなくきらびやかなことだった

お除き申しては

お供申し上げなさる

世間の迷惑にならぬようにと

悲しみ嘆いている芸熱心の者

背丈

揃った者ばかり

奉仕させる

それぞれの楽器に特別ひいでた者ばかりを揃えさせなさった

も大勢いたのだった

二二 東遊とともに社頭で奉納するお神楽。
二三 帝、東宮、冷泉院それぞれの殿上人が、それぞれ供奉の分担を決めて。
二四 乗馬に付き添う従者。
二五 護衛の兵。近衛府の将曹以下が務める。上皇、大臣以下、六衛府の次将以上に朝廷から賜る。
二六 貴人が召し連れる少年。
二七 諸家に仕える下々の者。御厩の舎人など。

二八 明石の姫君と紫の上。「女御殿」と重々しい言い方をする。

女御、紫の上、明石の上　明石の尼君も同行

二九 明石の上の母尼君。
三〇 女御誕生の折、源氏が都から明石に遣わした乳母。（三巻澪標一八頁以下参照）
三一 それぞれのお供の女房の車。（二巻葵七〇頁参照）
三二 明石の上ご一族。「あかれ」は、分れ、一派の意。
三三 車の装い（下簾など）や女房の打出し（外にのぞかせた袖口など）の様子。
三四 年老いた顔の皺ものびるように。「老の波」は歌語。「波の皺」は「難波の浦に　立つ波の　波の皺に　や　溺ほれむ」（『古今集』巻十九雑体、忠岑）の例がある。
三五 もし願い通りの世まで生きていましたならば（その時に）。東宮ご即位の暁にでも、の意。
三六 尼君は、これからいつまで生きられるか心配で。

二人なむ、近衛府の名高き限りを召したりける。（世間に名高い者ばかりをお命じになった）御神楽のかたには、いと多くつかうまつれり。内裏、春宮、院の殿上人、かたがたに分かれて、心寄せつかうまつる。（目指すお方にご奉仕申し上げる）数も知らず、いろいろに尽くしたる上達部の御馬鞍、馬副、随身、小舎人童、次々の舎人などまで、（人それぞれに善美を尽した）とのへ飾りたる見物、またなきさまなり。（選んで綺羅を飾った）

女御殿、対の上は、ひとつにたてまつりたり。（同じ車にお乗りになった）次の御車には、明石の御方、尼君忍びて乗りたまへり。女御の御乳母、心知りにて乗りたり。（明石の上）（事情を知る者として）（同車した）方々のひとだまひ、上の御方の五つ、女御殿の五つ、明石の御あかれの三つ、目もあやに飾りたる装束ありさま、言へばさらなり。（紫の上のが五台）（言うも愚かなこと）さるは、「尼君をば、同じくは、老の波の皺のぶばかりに、人めかしくて詣でさせむ」と、院はのたまひけれど、「このたびは、かくおほかたの響きに立ちまじらむもかたはらいたし。もし思ふやうならむ世の中を待ち出でたらば」と、御方はしづめたまひけるを、残りの命うしろめたくて、かつがつものゆかしがりて、したひ参り

（実は）（源氏）（家族の一人として）（こうした世をあげての盛んなお参りに顔出しするのも憚られることです）（源氏）（明石上）（明石の上は同行をおとめになったのだが）（ともあれ盛儀のさまも見たがって）（ついてお出でに）

一 まことにすばらしいものだった宿縁のほどが。
二 陰暦十月の中旬。晩秋、初冬の候である。
三 「ちはやぶる神の斎垣にはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり」（『古今集』巻五秋下、貫之）による。
四 松の下葉の紅葉。「下紅葉」は歌語。
五 「紅葉せぬ常磐の山は吹く風の音にや秋を聞きわたるらむ」（『古今集』巻五秋下、紀淑望。『拾遺集』巻三秋、大中臣能宣）による。**社頭の東遊**
音だけでなく、色にも秋を知り顔である、の意。
六 高麗楽（朝鮮、中国東北部から渡来）と唐楽（中国、印度から渡来）。外来の音楽。
七 もと東国の歌舞が宮廷に入り、神前で奏されたもの。一歌、二歌、駿河舞、求子歌、片降の五曲それぞれに歌詞があり、駿河舞と求子歌に舞がある。楽器は和琴、歌笛、笙、篳篥、拍子。（図録九参照）
八 神楽、東遊の和琴。（図録八参照）
九 笏を二つ切り離したような形のもの。これを打ち合せて調子を取る。（図録八参照）
一〇 高麗楽は太鼓、鉦鼓、三の鼓、唐楽は太鼓、鉦鼓、羯鼓を打楽器として用いるが、東遊は用いない。
一一 舞人は山藍で竹の模様を摺った袍を着ける。
一二 冠に付ける造花。舞人は桜、陪従は山吹。
一三 求子は、舞人が袍の右肩を脱いで舞う。曲の終り頃、上達部も共に舞うのである。
一四 黒い袍。四位以上の服色。
一五 表、蘇芳（やや暗い紅色）、裏、濃蘇芳。

高い宿縁によってなるのであった　もともとこのようにお栄えになるお身の上の方々

たまふなりけり。さるべきにて、もとよりかくにほひたまふ御身どもよりも、いみじかりける契り、あらはに思ひ知らるる人の御ありさまなり。

尼君のお身の上であるはっきりよりも

十月中の十日なれば、神の斎垣にはふ葛も色変りて、松の下紅葉など、音にのみ秋を聞かぬ顔なり。ことことしき高麗唐土の楽よりも、東遊の耳馴れたるは、なつかしくおもしろく、波風の声に響きあひて、さる木高き松風に吹き立てたる笛の音も、ほかにて聞く調べには変りて身にしみ、御琴に打ち合はせたる拍子も、鼓を離れてととのへとりたるかた、おどろおどろしからぬも、なまめかしくすごうおもしろく、所からはまして聞こえけり。山藍にすれる竹の節は、松の緑に見えまがひ、挿頭の花のいろいろは、秋の草に異なるけぢめ分かれで、何ごとにも目のみまがひいろふ。求子果つる末に、若やかなる上達部は、肩ぬぎておりたまふ。にほひもなく黒きうへのきぬに、蘇芳襲、葡萄染の袖を、にはかに引きほころばしたるに、

ものものしい　やさしく　使わずに　大げさなところのないのも　調子をうまく調えた趣が　優雅で　心に　場所が場所だけに一層すばらしく聞えた　しみて　さまざまな色　草花　目先がちらつくばかりである　何の映えもなく　引き出したところに

一六 薄紫。いずれも、下襲の色である。

一七 下に重ね着た袿。

一八 皆見映えのする容姿で。求子の舞に加わった年若い上達部たち。

一九 当座の興に枯れた荻を插頭にしたのである。

源氏と尼君の贈答

二〇 ひところ、都を離れて須磨、明石に苦労を重ねられた時のことも。

二一 致仕の太政大臣。宰相の中将時代、はるばる須磨まで源氏をたずねて行ったことがある（二巻須磨二五〇頁～二五四頁参照）。

二二 二番目の車。前に「次の御車」（一五五頁）とあった。明石の上の車で、尼君が同車している。

二三 私のほかに誰が、昔からのいきさつを知っていて年老いたあなたに話しかけるでしょうか。「住吉の神」から「神代」を言い出し、「代を経たる」と続ける。「松」は尼君をさす。

二四 畳んで懐中にする紙。これに書くのは、とりあえぬさま。

二五 深い山に隠れてしまわれた夫、明石の入道（若菜上一〇四頁参照）。あれから五年の歳月がたっている。

紅深き袙の袂の、うちしぐれたるにけしきばかり濡れたる、松原をば忘れて、紅葉の散るに思ひわたさる。見るかひ多かる姿どもに、いと白く枯れたる荻を、高やかにかざして、ただ一返り舞ひて入りぬるは、いとおもしろく飽かずぞありける。

（さっと時雨が降ったのでほんのわずかに　紅葉の散るのを見る思いがする　高々と冠に飾りつけて　ひと舞）

大殿、昔のことおぼし出でられ、中ごろ沈みたまひし世のありさまも、目の前のやうにおぼさるるに、その世のこと、うち乱れ語りたまふべき人もなければ、致仕の大臣をぞ、恋しく思ひきこえたまひける。入りたまひて、二の車に忍びて、

（源氏　その当時のことを　遠慮なく　車に帰られて）

（源氏）たれかまた心を知りて住吉の
神代を経たる松にこと問ふ

（涙にくれる）

御畳紙に書きたまへり。尼君うちしほたる。かかる世を見るにつけても、かの浦にて今はと別れたまひしほど、女御の君のおはせしありさまなど思ひ出づるも、いとかたじけなかりける身の宿世のほどを思ふ。世を背きたまひし人も恋しく、さまざまにもの悲しきを、

（こうした栄えを目の前にするにつ　姫君が明石でお暮しだっ　明石　[源氏が]　いかにも身の程に過ぎたものだった　[尼君は]）

一 縁起でもないと思い直して、言葉を選んで。「かつは」は、一方では。「言忌」は、不吉な言行を慎むこと。

二 この住吉の浜を、生きていたかいのあった渚と、年老いた尼の私も今日の盛儀で思い知ることでしょう。「かひ」に「貝」を掛け、「あま」は「海士」（漁師）と「尼」を掛ける。

三 手間取っては、失礼に当ろうと思って。

四 昔のことが何よりも忘れられないことです、こうして住吉の神のあらたかな霊験を目のあたりにするにつけても。源氏への挨拶をすませたあと、前に「さまざまにもの悲しきを」とあった真情を詠む。

夜に入って、紫の上女御そのほかの詠歌

五 前に「中の十日」（中旬）と広く言ったが、ここにはっきり「二十日」と言う。

六 紫の上。

一かつはゆゆしと言忌して、
（尼君）二住の江をいけるかひある渚とは
年経るあまも今日や知るらむ
三遅くは便なからむと、ただ心に浮んだままをお返ししたのだったただうち思ひけるままなりけり。
（尼君）四昔こそまづ忘られね住吉の
神のしるしを見るにつけても
とひとりごちけり。ひとり口ずさむのだった

夜一夜遊び明かしたまふ。神楽を奏してお明かしになる二十日の月はるかに澄みて、海の面おもしろく見えわたるに、霜のいとこちたく置きて、松原も色まがひて、よろづのことそぞろ寒く、おもしろさもあはれさも立ち添ひたり。対の上、常の垣根のうちながら、時々につけてこそ、興ある朝夕の遊びに、耳古り目馴れたまひけれ、御門より外の物見、をさをさしたまはず、ましてかく都のほかのありきは、まだならひたまはねば、めづらしくをかしくおぼさる。

空の高みに
大層深く
地上の霜に紛れ
ぞっと身にしみ
ひとしお立ちまさった
ふだんのお邸うちにいらしたまま
四季折々の趣につけて
風雅な
管絃の遊びに
聞き飽き見馴れてもいらしたが
なさることなく
外
お出かけ
経験なさったことがないので

七 住吉の浜の松にまだ夜の闇も深く置く霜は、神様のお掛けになった木綿鬘でもありましょうか。「木綿鬘」は、木綿（楮の皮の繊維で製した白い糸状のもの）の鬘。神拝の時、祭主（神主）が頭に着ける。

八 小野篁（八〇二～八五二）。漢学者で、詩人として令名あり、歌人でもあった。

九 『河海抄』に「ひもろきは神の心にうけつらし比良の山さへゆふかづらせり」を引くが、「文時卿歌也」と注する。清輔の『袋草紙』巻三に文時の歌として、「うけつらむ」「比良の高根に」の形で引く歌である。『花鳥余情』は作者の「名違へか」という。「比良の山」は歌枕。琵琶湖の西岸に秀麗な姿を見せる。

一〇 神にお仕えする人々が手に採り持っている榊葉に木綿を掛け添えるかと見える夜深い霜です。

一一 紫の上づきの女房。（若菜上五八頁参照）

一二 神にお仕えする人々が手にする木綿かと見まがうばかり白く置く霜は、（紫の上の）仰せのように神がお喜びになったはっきりしたあかしでしょうか。

一三 「松の千歳」といった決り文句以外に目新しい趣向の歌もないので、わずらわしくて、書き留めませんでした。「次々」以下、省筆をことわる草子地。一行中の女房の語る言葉をそのまま伝える体。

一四 神楽は本方と末方とに別れて、それぞれの歌詞を歌う。その分担もはっきりしなくなるほどに、の意。

明け方の神楽の情景

（紫上）住の江の松に夜ぶかく置く霜は
　　神のかけたる木綿鬘かも

篁の朝臣の、「比良の山さへ」と言ひける雪の朝をおぼしやれば、祭の心うけたまふしるしにやと、いよいよたのもしくなむ。女御の君、

　　神人の手にとりもたる榊葉に
　　木綿かけ添ふるふかき夜の霜

中務の君、

　　祝子が木綿うちまがひ置く霜は

　　げにいちじるき神のしるしか

次々数知らず多かりけるを、何せむにかは聞きおかむ。かかるをりふしの歌は、例の上手めきたまふ男たちも、なかなか出で消えして、松の千歳より離れて、今めかしきことなければ、うるさくてなむ。

　　ほのぼのと明けゆくに、霜はいよいよ深くて、本末もたどたどし

（紫上）住の江の松に夜ぶかく置く霜は
　　神のかけたる木綿鬘かも

篁の朝臣の、「比良の山さへ」と言ひける雪の朝をおぼしやれば、祭の心うけたまふしるしにやと、いよいよたのもしくなむ。女御の君、

　　神人の手にとりもたる榊葉に
　　木綿かけ添ふるふかき夜の霜

中務の君、

　　祝子が木綿うちまがひ置く霜は

　　げにいちじるき神のしるしか

次々数知らず多かりけるを、何せむにかは聞きおかむ。かかるをりふしの歌は、例の上手めきたまふ男たちも、なかなか出で消えして、松の千歳より離れて、今めかしきことなければ、うるさくてなむ。

　　ほのぼのと明けゆくに、霜はいよいよ深くて、本末もたどたどし

一 神楽を奏する人の顔、の意。『河海抄』は「神楽面とは、さむき顔色歟。或云、顔をさしあはせて並居たるをいふ也」と注する。神楽は最初と途中に勧盃のことがある。

二 神楽を奏する時、庭上に焚く火。

三 神楽の曲のうち「千歳法」の詞。「千歳　千歳　千歳や　千歳や　千年の　千歳や（本）万歳　万歳　万歳や　万歳や　万代の　万歳や（末）なほ千歳（本）なほ万歳（末）千歳　千歳　千歳や　千年の千歳や（本）万歳　万歳　万歳や　万代の万歳や（末）」。前張の諸曲の終った後に歌う曲。

四 「秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉残りて鶏や鳴きなむ」（『伊勢物語』二十二段）による。

五 下簾（車の簾の内側から外に長く垂れる絹）の両脇からこぼれ出ている女の衣裳。（二巻図録一三参照）

六 令制では、一位深紫、二、三位浅紫、四位深緋、五位浅緋、六位深緑、七位浅緑、八位深縹、初位浅縹。一条朝以降は四位以上黒袍。ここは、四位以下の者たちが食膳を供する姿。

七 食器を載せる足つきの膳。（図録七参照）

八 沈香の一種。水に沈まず香気が浅いという。

九 四角の盆。（図録七参照）

一〇 青味を帯びた縹色。尼の服色。

一一 折敷の上に青鈍の絹を折り畳んで置いたのであろう。

翌朝の松原の景

きまで、酔ひ過ぎにたる神楽おもてどもの、おのが顔をば知らで、おもしろきことに心はしみて、庭燎（火勢が衰えているのに）も影しめりたるに、なほ「万歳、万歳」と、榊葉を取り返しつつ祝ひきこゆる御世の末、（取り直し取り直しして）思ひやるぞ（御行く末を）（想像するだにいとよいよめでたい限りだ）いとどしきや。よろづのこと飽かずおもしろきままに、千夜を一夜になさまほしき夜の、何にもあらで明けぬれば、かへる波にきほふ（したいほどの）（なにあっけなく）（「沖に」返る波と先を争うように）もくちをしく、若き人々思ふ。

松原に、はるばると立て続けたる御車どもの、風にうちなびく下簾の隙々も、常磐の蔭（松の緑に）に、花の錦を引き加へたると見ゆるに、うへのきぬの色々けぢめおきて、をかしき懸盤取り続きて、もの参りわたすをぞ、下人などは目につきて（目新しくて）、めでたしとは思へる。尼君の御前にも、浅香の折敷に、青鈍の表をりて、精進物を参るとて、「めざましき女の宿世かな」（運勢よ）と、おのがじしはしりうごちけり。

詣でたまひし道は、ことことしくて、わづらはしき神宝、さまざまに所狭げなりしを、帰さはよろづの逍遥を尽くしたまふ。言ひ続

（男たちはめいめい陰口を言うのだった）（食事を一同にさし上げるのを）（こちらまでの道中は）（ものものしいことで）（疎略に扱えない）（いろいろあって）（窮屈だったが）（帰路は）（物見遊山）

一二 面倒なことなので。以上、省筆をことわる草子地。

一三 あの明石の入道が、聞くことも見ることも叶わぬ深い山の中に入ってしまわれたことだけが、残念なのだった。尼君や明石の上の心中を察して書いたもの。耳馴れない「たうぶ」（「たまふ」の転）の語を使ったのは、入道の奇矯な人柄を表す気持であろう。

一四 むつかしいことではある、入道がこうした中に顔出しするのも、見苦しいことであろうか。草子地。

一五 目を丸くしてそのしあわせをうらやみ。「あさむ」は、驚きあきれる意。

一六 幸運な人の例に言い立てるのだった。

一七 四巻常夏一〇三頁に、近江の君が双六を打つ場面があった。

一八 いい賽の目が出るように祈るのだった。

朱雀院のご日常　女三の宮、二品に叙せらる

一九 帝が上皇と母后の御所に行幸される朝覲の行幸。春と秋に行われる。

二〇 親王、内親王の位。一品から四品まである。

二一 封戸。皇族、諸臣に賜る戸口。租の半分、庸調の全部が封主の所得になる。禄令によれば、親王は、一品、八百戸、二品、六百戸、三品、四百戸、四品、三百戸で、内親王はその半分。二品内親王は三百戸。

紫の上、女一の宮の養育に無聊を慰める

（こうした盛んなご威勢も）わずらわしく、一三むつかしきことどもなれば。かかる御ありさまをも、一三かの入道の、聞かず見ぬ世にかけ離れたうべるのみなむ、飽かざりける。一四難きことなりかし、まじらはましも見苦しくや。世の中の人、これを例にて、（明石一族）心高くなりぬべきころなめり。（高望みが流行になりそうなご時勢のようだ）よろづのことにつけて、一五めであさみ、（世人は）世の言種にて、「明石の尼君」とぞ、幸ひ人に言ひける。かの致仕の大殿の近江の君は、一六双六打つ時の言葉にも、「明石の尼君、明石の尼君」とぞ賽は乞ひける。

（朱雀院）入道の帝は、（勤行一途のご日常で）御行ひをいみじくしたまひて、内裏の御ことをも聞き入れたまはず。（帝のおいさめにも耳をおかしにならない）一七春秋の行幸になむ、（ご出家前のことが思い出されなさることも時々あるのだった）昔思ひ出でられたまふことも（ご心配で）まじりける。（女三の宮）姫宮の御ことをのみぞ、なほえおぼし放たで、（やはり表向きだけの）この院（源氏）をば、なほおほかたの御後見に（お世話役とお思い申されて）思ひきこえたまひて、（内々のご配慮を下さるように）うちうちの御心寄せあるべく（帝にお願いなさる）奏せさせたまふ。二〇二品になりたまひて、御封などまさる。いよいよはなやかに御勢添ふ。（何につけて盛んになられる）

対の上、かく年月に添へて、（［女三宮の］ご声望に）かたがたにまさりたまふ御おぼえに、

一 自分は、ただ源氏お一人が大事にして下さるお蔭で、人にひけを取ることはないけれども。以下、紫の上の思い。「人」は、女三の宮を意識している。

二 そんなみじめなことになってしまわないうちに、自分から世を捨てたいものだと。今のうちに出家をと思う。「世」は、夫婦の仲。

三 女三の宮に格別のご配慮をしてさし上げていらっしゃるので。

四 源氏は、宮を疎略に扱っているような噂が帝のお耳に入るのも、申しわけないことなので。「聞かれ」の「れ」は、受身。

五 紫の上は、義理の祖母としてこの方に特に目をかけてお世話する。

六 紫の上が、大勢の孫の宮様方のお世話をしていられるのを、うらやましがって。

七 夕霧が藤典侍（惟光の娘）との間にもうけた姫君。藤典侍のこと、四巻藤裏葉二九四～五頁参照。花散里は夕霧の母代りなので、これも義理の祖母という関係からである。この子は後の夕霧の巻末によれば、夕霧の三の君。

花散里、夕霧の典侍腹の子を養育

一わが身はただ一所の御もてなしに、人には劣らねど、あまり年積りなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、二さらむ世を見果てぬさきに、心と背きにしがなと、たゆみなくおぼしわたれど、さかしき内裏の帝さへ、三御心寄せことに聞こえたまへば、四おろかに聞かれてまつらむもいとほしくて、わたりたまふこと、やうやうひとしきやうになりゆく。さるべきこと、ことわりとは思ひながら、されば よとのみ、やすからずおぼされけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。春宮の御さしつぎの女一五の宮を、こなたに取り分きてかしづきたてまつりたまふ。その御あつかひになむ、つれづれなる御夜がれのほどもなぐさめたまひける。いづれも分かず、うつくしかなしと思ひきこえたまへり。

花散里

夏の御方は、六かくとりどりなる御孫あつかひをうらやみて、大将の君の典侍腹の君を、七切に迎へてぞかしづきたまふ。いとをかしげ

（年を取り過ぎてしまったら）（ご寵愛）（ずっと思い続けていられるけれども）（こざかしい言い分だと源氏がお思いになろうかと気が引けて）（はっきりとお願いもできないでいられる）（夜お通いになることが）（無理もないとは）（紫上も）（それも当然なことだ）（紫上と）（やはりそうだと身にしみて）（おもしろからぬ思いでいられるが）（素知らぬ顔で出家のことなど口にもせずにいらっしゃる）（すぐ下の妹君）（紫上は）（ご自分の方に引き取って大切にご養育申し上げなさる）（お世話に身を入れることで）（所在ない）（源氏のおいででない夜々も気をお紛らわしになるのだった）（紫上は）（どの宮様もしくいとしいと）（かわいらしく）（懇望の上引き取って大切になさる）

八 源氏の子は、夕霧と明石の姫君、それと表向きではないが冷泉院の三人。

玉鬘の近況　源氏の女三の宮へのいつくしみ

九 髭黒。

一〇 玉鬘もすっかり落着いたお年になられて。今年、三十二歳。

一一 昔と変らず、子供っぽくおっとりしていらっしゃる。六条の院にお輿入れした時も「姫宮は、げにまだいと小さく、片なりにおはするうちにも、いといはけなきけしきして、ひたみちに若びたまへり」（若菜上五四頁）とあった。今年、二十一、二歳。

一二 源氏は、もう帝にすっかりお任せ申し上げなさって。

朱雀院、女三の宮との対面を希望

一三 朱雀院が。次の頁一行目の「聞こえたまひければ」にかかる。

一四 もうすっかり生涯の終りも近いような気がして何やら心細いので。以下、女三の宮に伝えられた院の意向。

にて、（気立ても）心ばへも、ほどよりはされおよすけたれば、大殿の君もらう（源氏）たがりたまふ。（年のわりには利発でしっかりしているので）少なき御嗣とおぼししかど、（女御にくお思いになる）末にひろごりて、こなたかなたいと多くなり（女御にも夕霧にもお孫たちが次々大勢になられたので）添ひたまふを、（かわいがりお世話なさることで）今はただ、これをうつくしみあつかひたまひてぞ、つれづれもなぐさめたまひける。（もてあます時間も紛らわしておいでなのだった）

九 右の大殿の参りつかうまつりたまふこと、いにしへよりもまさりて親しく、今は北の方もおとなび果てて、（源氏も）かの昔のかけかけしき筋思ひ離れたまふにや、（色めかしい気持はさっぱりお捨てになったからか）さるべきをりもわたりまうでたまふ。（何かの折には）対の上にも御対面ありて、（〔六条院に〕ご挨拶にお見えになる）あらまほしく聞こえかはしたまひけり。（申し分のない睦まじいお付合いをなさっていられる）姫宮のみぞ、（女三の宮お一人が）同じさまに若くおほどきておはします。女御の君は、今は公ざまに思ひ放ちきこえたまひて、（女三の宮）この宮をばいと心苦しく、幼からむ御女のやうに、（〔源氏は〕大事にお世話申し上げていられる）思ひはぐくみたてまつりたまふ。

一三 朱雀院の、一四 今はむげに世近くなりぬるここちしてもの心細きを、（決して俗世のことは気にかけまいと出家の身として覚悟しているが）さらにこの世のことかへりみじと思ひ捨つれど、対面なむ今一度あらまほしきを、（万一未練が残ってはいけないから）もし恨み残りもこそすれ、（大げさなことではなく）ことことしきさまならで

一 何のきっかけもなく、取り立てた趣向もなしに、気軽に参上なさるわけにもゆくまい。以下、源氏の思案。

二 今度ちょうど五十になりになる年に。朱雀院は来年ちょうど五十歳になるという設定。

三 若菜など調進してお祝い申し上げようかと。「若菜」は、若菜上四七頁参照。来年の正月に賀の祝いをと思いつくのである。

四 お祝いにお贈りするいろいろな法衣。「法服」は、僧の正装。賀の祝いには四季の衣類を贈るならわし。

五 精進のお料理の調度。

源氏、女三の宮のために朱雀院の五十の賀を計画

御所にお出でになるように［女三宮に］お便りなさったので
わたりたまふべく、聞こえたまひければ、大殿も、「げにさるべき
なことです　　源氏　まことにごもっとも
ことなり。かかる御けしきなからむにてだに、進み参りたまふべき
こうしたお申し入れが仮になくても　こちらから参上なさるべきな　ご訪問
のに
を、ましてかう待ちきこえたまひけるが、心苦しきこと」と、参り
おいたわしいことです
のことを
たまふべきことおぼしまうく。
計画なさる

一 ついでなくすさまじきさまにてやは、はひわたりたまふべき、何
わざをしてか、御覧ぜさせたまふべきと、おぼしめぐらす。このた
お目にかけたらよかろうかと　［源氏は］ご思案になる
いう催しをして
び足りたまはむ年、三 若菜など調じてやと、おぼして、四 さまざまの御
法服のこと、五 斎の御まうけのしつらひ、何くれと、さまことに変れ
ご夫人方のお知恵もいろいろ拝借しては　在俗の方とは違ったお
祝いなので
ることどもなれば、人の御心しらひども入りつつ、おぼしめぐらす。

［朱雀院は］音楽の方面にご関心が深くていらせられたので
いにしへも、遊びのかたに御心とどめさせたまへりしかば、舞人、
入念に選定して　上手な者ばかりをお揃えさせになる
楽人などを、心ことに定め、すぐれたる限りをととのへさせたまふ。
夕霧
右の六 大殿の七 御子ども二人、八 大将の御子、典侍の腹の加へて三人、ま
だ小さき七つより上のは、皆殿上せさせたまふ。九 兵部卿の宮の童孫
親王方の
王、すべてさるべき宮たちの一〇 御子ども、家の子の君達、皆選び出で

御賀の舞楽の準備

六 髭黒のご子息たち二人。以下、童舞を舞わせる予定の子供たちである。

七 雲居の雁腹の二人に藤典侍腹の子を加えて三人。

八 まだ小さい七歳より上の子は、この機会に皆童殿上をさせなさる。場馴れさせるためであろう。

九 螢兵部卿の宮のお子。「童孫王」は、王孫で子供の方。

一〇 名家の子弟たち。

一 若い殿上人たち。

三 音楽や舞のそれぞれの道の師匠。「ものの師」は、元来は雅楽寮の舞師、笛師、唐楽師、高麗楽師などをさす語。

源氏、御賀のために、女三の宮に琴を教授する

三 七絃の琴。聖人の楽器として中国ではもっとも重んぜられたもの。

四 どのくらい上達されたか、気がかりにお思いで。

五 いくら何でも琴くらいは、上手に弾けるようになりであろう。琴の名手である源氏に嫁してもう七年にもなるのだから、といった気持がある。源氏の琴については「琴弾かせたまふことなむ一の才にて」と評されている（三巻絵合一一二頁参照）。

六 ほんとに、やはり何といっても格別のご上達でしょう。これも、源氏の膝下にあるのだからという気持。

たまふ。殿上の君達も、容貌よく、同じき舞の姿も、心ことなるべきを定めて、あまたの舞のまうけをせさせたまふ。いみじかるべきたびのこととて、皆人心を尽くしたまひてなむ。道々のものの師、上手、暇なきころなり。

（一一 目立ちそうな者たち　大変な盛儀になるであろう御賀のこととて）

宮は、もとより琴の御琴をなむ習ひたまひけるを、いと若くて院にもひきわかれたてまつりたまひしかば、おぼつかなくおぼして、「参りたまはむついでに、かの御琴の音なむ聞かまほしき。さりとも琴ばかりは弾き取りたまひつらむ」と、しりうごとに聞こえたまひけるを、内裏にも聞こしめして、「げにさりとも、けはひことならむかし。院の御前にて、手尽くしたまはむついでに、参り来て聞かばや」などのたまはせけるを、大殿の君は伝へ聞きたまひて、「年ごろさりぬべきついでごとには、教へきこゆることもあるを、そのけはひは、げにまさりたまひにたれど、まだ聞こしめしどころあるもの深き手には及ばぬを、何心もなくて参りたまへらむついで

（女三の宮　朱雀院　一三 準備　懸命に練習にはげんでいられる　一四 朱雀院（宮の）おいでになる機会に　一五 陰でこっそりとお噂なさったのを　一六 （帝）秘術を尽される機会に　一七 （宮が）　一八 （私も）うかがって　源氏　（琴を）　院のお耳にご満足がゆくほど　そんなつもりもなく）

（源氏）今まで何か機会のあるごとには　確かに上手にはなっていられるが　宮の腕前のほどは　どの深味のある曲はとても弾けないのに）

宮が何ともお

に、聞こしめさむとゆるしなくゆかしがらせたまはむは、いとはし

〔院が〕お聞きあそばそうとたってご所望あそばしては　近頃になって　お気を

困りになるであろう　お気の毒に

たなかるべきことにも」と、いとほしくおぼして、このころぞ御心

入れて

とどめて教へきこえたまふ。

珍しい旋律の曲

調べことなる手二つ三つ、おもしろき大曲どもの、四季につけて

変るべき響き、空の寒さぬるさをととのへ出でて、やむごとなかる

特別に　〔女三宮は〕

べき手の限りを、取り立てて教へきこえたまふに、心もとなくおは

段々と　とても上手になりになる

するやうなれど、やうやう心得たまふままに、いとよくなりたまふ。

会得なさるにつれて

（源氏）　人の出入りも激しく

「昼はいと人しげく、なほ一度もゆし按ずるいとまも、心あわたた

奏法の勘所もしっかりお教え申し上げよう

しければ、夜々なむ、静かにことの心もしめたてまつるべき」とて、

お暇を頂戴なさって

対にも、そのころは御暇聞こえたまひて、明け暮れ教へきこえた

紫の上

まふ。

女御の君にも、対の上にも、琴は習はしたてまつりたまはざりけ

ふだんはめったに耳にしない曲を　弾かれるであろうのを　聞きた

れば、このをり、をさをさ耳馴れぬ手ども弾きたまふらむを、ゆか

特にお許しの出ない　ほんの暫くと〔帝に〕

しとおぼして、女御も、わざとありがたき御暇を、ただしばしと聞

一　おもしろい大曲で、四季それぞれに応じて変化のあるべき音色。上の「調べことなる手二つ三つ」を、以下に二つに分けて述べる。琴に大曲、中曲、小曲の別があったが、それぞれいかなるものか不明。

女三の宮に秘曲を伝授

二　気候の寒さ暖かさをもその音色によって感化して、霊妙な力を発揮するといった曲ばかりを。「楽書曰、師文之、変二易寒暑一、孫登之感二動風雷一云々。謂二琴事一也。琴書曰、師曠、晋之楽官也、上二於琴一、能易二寒暑一、占二風雨一。為二晋平公一鼓レ之、感二玄鶴一、六下舞」（『花鳥余情』）

三　絃を一ゆすり、一押しするその間も、気が落着かないから。「ゆす」は、弾いた絃を左手でゆすって音にうねりをつけること。「按ず」は、絃を押えること。琴には十三の徽（左手で絃を押える箇所を示す印し）がある（図録八参照）。

女御、六条の院に退出

四 すでに女御の手許を離れている東宮と女一の宮は除いた、二の宮と三の宮であろう。前に「御子たちあまた数添ひたまひて」（一五一頁）とあった。

五 宮中の神事などを口実に、お里下がりなさるのであった。十一月から十二月の初旬にかけて神事が多い。「凡宮女懐妊者、散斎之前、退出。有二月事者、祭日之前、退二下宿廬一、不レ得二上レ殿。其三月九月、潔斎前、預退二出宮外一」（『拾芥抄』触穢部）

六 十二月十一日。この日は、月次の祭があり、夜、神今食（帝が中和院の神嘉殿で、天照大神を祭り、自ら神饌を奉る）の神事がある。

七 源氏は、世人が興趣なしとする冬十二月の月を特にめでた（三巻朝顔二〇八～九頁）。

源氏、冬の夜の月明に琴を伝授　年明ける

八 「琴」は、絃楽器の総称。琴のほかの、箏の琴、和琴、琵琶など、それぞれ得意のものを弾かせる。

九 紫の上などは、新春の支度にいそがしく。紫の上は六条の院全体を取りしきる立場にもある。たとえば玉鬘の巻に新春の衣裳くばりのことが見える（三巻三二五頁以下参照）。

一〇 あちこちのご婦人方の新春のお支度に。六条の院や二条の院の東の院の方々。

一一 帝。朱雀院の御子として、まず第一にお祝いをなさる。

源氏、正月に女楽を計画する

お願い申し上げて［六条院に］退出なさったこえたまひてまかでたまへり。御子二所おはするを、またもけしきばみたまひて、五月ばかりにぞなりたまへれば、神事などにことづけておはしますなりけり。十一日過ぐしては、参りたまふべき御消息うちしきりあれど、かかるついでに、かくおもしろき夜々の御遊びをうらやましく、などてわれに伝へたまはざりけむと、つらく思ひきこえたまふ。

ご懐妊の　きざしがおありで　何度も　［女御は］　琴のご　演奏が　どうして私にはご伝授下さらなかったのだろうと［源氏を］うらめしくお思い申し上げなさる

七 冬の夜の月は、人に違ひてめでたまふ御心なれば、おもしろき夜の雪の光に、をりに合ひたる手ども弾きたまひつつ、さぶらふ人々も、すこしこのかたにほのめきたるに、御琴どもとりどりに弾かせて、遊びなどしたまふ。年の暮れつかたは、対などにはいそがしく、一〇こなたかなたの御いとなみに、おのづから御覧じ入るることどもあれば、「春のうららかならむ夕などに、いかでこの御琴の音聞かむ」とのたまひわたるに、年返りぬ。

この季節にふさわしい曲の数々を　お側にはべる女房たち　音楽の方面にたしなみのある連中に　合奏などなさる　どうしてもご自分でお世話なさることもいろいろあるので　（紫上）新春の　女三の宮のこと　と常日頃おっしゃるうちに　年が改まった

朱雀院の院の御賀、まづ一おほやけよりせさせたまふことどもこちたきに、

盛大なのに

重なっては
さしあひては便なくおぼされて、すこしほど過ごしたまふ。二月十
余日と定めたまひて、楽人、舞人など参りつつ、御遊び絶えず。
「この対に常にゆかしくする御琴の音、いかでかの人々の箏、琵琶
の音も合はせて、女楽こころみさせむ。ただ今のものの上手どもこ
そ、さらにこのわたりの人々の御心しらひどもにまさらね。はかば
かしく伝へ取りたることは、をさをさなけれど、何ごとも、いかで
心に知らぬことあらじとなむ、幼きほどに思ひしかば、世にあるも
のの師といふ限り、また高き家々の、さるべき人の伝へどもをも、
残さずこころみしなかに、いと深くはづかしきかなとおぼゆる際の
人なむなかりし。そのかみよりも、またこのころの若き人々の、さ
れよしめき過ぐすにはた浅くなりにたるべし。琴はた、まして、さ
らにまねぶ人なくなりにたりとか。この御琴の音ばかりだに伝へた
る人、をさをさあらじ」とのたまへば、何心なくうち笑みて、うれ
しく、かくゆるしたまふほどになりにける、とおぼす。二十一二ば

〔源氏は〕お延ばしになる
〔六条院に〕
音楽の名手たちは
六条の院の婦人たち
〔音楽について〕
名人といわれる人々の秘伝も
学んでみましたなかに
まことに造詣が深くてかなわないと思われる
近頃の
風流
程
私の若かった当時よりも
ぶり気取りすぎているために全く浅薄になってしまったようです
〔女三宮は〕無邪気に
ほどにも習い伝えた人は
ほとんどおりますまい
これほど認めて下さるまでになったことだ

六（ほかの楽器に比べて）琴にいたっては、なおさら、全く習う人もいなくなったとかいうことです。以上の論、後に夕霧を相手にしての音楽論（一七八頁以下）の序論の観がある。特に琴については、一八一～三頁に詳論がある。一条朝の頃には、琴の演奏がほとんど杜絶えていたという史実がある。

五　音楽の師。（前出一六五頁注一二参照）

七 まだ、とても幼げで。十分に女らしくなっていないさま。「片なり」は、未成熟の意。

八 大人びられたことだと、朱雀院もご覧になって感心なさるように。

九 ほんとに、こうした源氏のような行き届いたお世話役がいなくては。

一〇 女三の宮づきの女房たち。

一一 後の一七七頁に「臥待の月」とあり、女楽の催されたのは十九日である。

一二 お庭先の梅。梅は、多く建物の近くの庭前に植えられる。

一三 月が改まったら、御賀の支度も近づいて。前に「二月十余日」の予定とあった。以下、源氏の紫の上への言葉。

一四 御賀の試楽のように大げさに人が取り沙汰するでしょうから。「試楽」は、舞や音楽の予行演習。

一五 紫の上を、寝殿にお迎え申し上げなさる。女楽が行われる場所である。寝殿の西に女三の宮、東には里下がり中の女御がいられる。

一六 この方面（音楽）にうとい女房は、選んで残させなさって。

六条の院の女楽

かりになりたまへど、なほいといみじく片なりに、きびはなるここちして、細くあえかにうつくしくのみ見えたまふ。「院にも見えたてまつりたまはで年経ぬるを、ねびまさりたまひにけりと御覧ずばかり、用意加へて見えたてまつりたまへ」と、ことに触れて教へきこえたまふ。げにかかる御後見なくては、ましていはけなくおはします御ありさま、隠れなからましと、人々も見たてまつる。

年端もいかないような　なよなよと　感じで　かわいらしい一方にお見えになる　（源氏）朱雀院　十分に気をつけてお会い申し上げなさい　一層　子供っぽくていらっしゃる　目につくことであろうと

正月二十日ばかりになれば、空もをかしきほどに、風ぬるく吹きて、御前の梅も盛りになりゆく。おほかたの花の木どもも、皆けしきばみ、霞みわたりにけり。「月たたば、御いそぎ近く、もの騒がしからむに、搔き合はせたまはむ御琴の音も、試楽めきて人言ひなさむを、このころ静かなるほどにこころみたまへ」とて、寝殿にわたしたてまつりたまふ。御供に、われもわれもと、ものゆかしがりて、まう上らまほしがれど、こなたに遠きをば、選りとどめさせたまひて、すこしねびたれど、よしある限り選りてさぶらはせたまふ。

空模様もうららかで　（二月）　そのほかの　暖かく　ほころびそめて　（源氏）　落着かないで　しょうし　合奏なさってご覧なさい　参上したがるけれども　年輩ではあるが　たしなみある者ばかりを選んでお供させなさる　［女房たちが］　この催しを見聞きしたがって

紫の上、女御、明石の上、女三の宮それぞれの童女の装い

一 赤色の表着に、桜襲（表白、裏赤）の汗衫。「汗衫」は、童女が正装の時、上に着ける（二巻図録一〇参照）。
二 薄紫色の織物の袒。「袒」は、表着の下に着るもの。
三 綾織りに糸を浮かせて模様を織り出したもの。
四 下袴の上に着ける袴。
五 上の「表の袴」の説明であろう。紅色の、砧で打って艶出ししたもの。
六 蘇芳襲。表蘇芳（赤紫色）、裏濃蘇芳。
七 中国製または中国風の、浮き織りの綾。
八 山吹色。黄金色。
九 錦に似て薄い織物。
一〇 紅梅襲。表紅、裏紫。表着。
一一 桜襲。表白、裏赤。
一二 四人とも青磁色の汗衫で。
一三 表裏とも、濃い青に黄を加えたもの。表着。
一四 柳襲。表白、裏青。
一五 薄紫色。
一六 もともと備わった雰囲気が立派で気品のあるところまで、まことに比べるものもない。女三の宮は皇女だからである。
一七 廂の間の隔ての襖障子。
一八 調子をそろえる役の意であろう。笛を合奏の軸にするのである。

明石の上琵琶、紫の上和琴 女御箏の琴、女三の宮琴

童女は、容貌すぎれたる四人、赤色に桜の汗衫、薄色の織物の袒、浮紋の表の袴、紅の擣ちたる、さまもてなしすぐれたる限りを召したり。女御の御方にも、御しつらひなど、いとどあらたまれるころのくもりなきに、おのおのいどましく尽くしたるよそほひども、あざやかに二なし。童女は、青色に蘇芳の汗衫、唐綾の表の袴、袒は山吹なる唐の綺を、同じさまにととのへたり。明石の御方のは、こことことしからで、紅梅二人、桜二人、あをじの限りにて、袒濃く薄く、擣目などえならで着せたまへり。宮の御方にも、かくつどひたまふべく聞きたまひて、童女の姿ばかりは、ことにつくろはせたまへり。青丹に柳の汗衫、葡萄染の袒など、ことに好ましくめづらしきさまにはあらねど、おほかたのけはひの、いかめしく気高きことさへ、いと並びなし。

廂の中の御障子を放ちて、こなたかなた御几帳ばかりをけぢめにて、中の間は、院のおはしますべき御座よそひたり。今日の拍子合

（童女は大げさでなく）（紅梅二人、桜二人、あをじの限りにて、袒濃く薄く、擣目などえならで着せたまへり。）
（女三の宮）（宮の御方にも、かくつどひたまふべく聞きたまひて、）
（姿も物腰もすぐれた者ばかりをお選びになる）（童女の姿ばかりは、ことにつくろはせたまへり。）
（お部屋の飾りなど）（面目を改めた新春の風情は）（院のおはしますべき御座よそひたり。）
（女房たちめいめいが我劣らじと意匠を凝らした身づくろいは）（明るくはなやかなのに）（おのおのいどましく尽くしたるよそほひども、）
（同じように皆そろえてある）（童女は）（ことことしからで、）
（格別にととのえさせていらっしゃる）（格別に）（趣向を凝らした目新しい身なりではないけれども）（きさまにはあらねど、）
（こうして方々がお集まりになると）（婦人たちそれぞれ）（取りはずして）（隔てとして）（廂の中の御障子を放ちて、）
（源氏）（お座席を用意した）（中の間は、院のおはしますべき御座よそひたり。）

一九 髭黒の三男で、玉鬘腹の兄君。髭黒にはもとの北の方の腹と玉鬘の腹にそれぞれ男子二人ずつがある。
二〇 夕霧のご長男。雲居の雁腹。
二一 敷物。その上に琴を置く。
二二 源氏が秘蔵していらっしゃる御琴。以下の琵琶、和琴、箏の琴など。

源氏、箏の調絃のために夕霧を呼ぶ

はせには童べを召さむとて、右の大殿の三郎、尚侍の君の御腹の兄君、笙の笛、左大将の御太郎、横笛と吹かせて、簀子にさぶらはせたまふ。うちには、御茵ども並べて、御琴ども参りわたす。秘したまふ御琴ども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる取り出でて、明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏の御琴、宮には、かくことことしき琴はまだえ弾きたまはずやと、あやふくて、例の手馴らしたまへるをぞ、調べてたてまつりたまふ。

（源氏）「箏の御琴は、ゆるぶとなければ、なほかくものに合はするをりの調べにつけて、琴柱の立処乱るるものなり。よくその心しらひとければのふべきを、女はえ張りしづめじ。なほ大将をこそ召し寄せつべかめれ。この笛吹ども、まだいと幼げにて、拍子ととのへむ頼み強からず」と笑ひたまひて、「大将こなたに」と召せば、御方々はづかしく、心づかひしておはす。明石の君を放ちては、いづれも皆捨てがたき御弟子どもなれば、御心加へて、大将の聞きたまはむに、難

控えさせていらっしゃる　立派な　方々にさし上げる　女三の宮　調子を整えて　弛むというのではないが　ほかの琴と合奏する時の調子によっては　位置がずれるものだ　その点を考慮して調絃しなければならないが　夕霧　呼び寄せるのがよいだろう　（源氏）夕霧　気づまりに思って　緊張していらっしゃる　（源氏は）気を遣われて　手塩にかけた

三三 女の力では、絃をしっかり張ることはむつかしかろう。
三四 髭黒と夕霧の子息たち。
三五 調子をきちんとするには、いかにも頼りない。「拍子」は、リズムの意。
三六 明石の上を除いては。明石の上は、父入道からの伝えを受けている（二巻明石二七六～七頁参照）。

一 紫の上が弾く和琴。四巻常夏九一～九二頁に源氏の和琴についての論がある。
二 たいして変化のない音色なのだが、奏法にきまったものがなくて。六絃の簡素な楽器だからである。
三 春の琴（絃楽器）の音色は、総じて合奏して聞くものと決っているものだが、の意に解されるが、古来不審とされている。河内本「さるものと琴の音は」。
四 和琴は、ほかの琴と合わないところが出て来ようかと。

夕霧、参上して調絃

五 ひどく緊張した改まった気持で。
六 薫物の香に深く匂った袿を何枚も重ねて。直衣の下に重ね着る。
七 部屋の中に薫き匂わした空薫物のかおり。
八 「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる」（『古今集』巻一春上、寛平御時きさいの宮の歌合の歌　紀友則）による。
九 廂の間と簀子との隔ての御簾。夕霧は簀子に坐っている。
一〇（左大将ともあろう方に）ぶしつけですが。

難点がないようにと　ほかの楽器と　帝
なかるべくとおぼす。女御は、常に上の聞こしめすにも、ものに合
合奏して　安心なのだが　弾きなれていらっしゃるので
はせつつ弾きならしたまへれば、うしろやすきを、和琴こそ、いく
かえって女は弾き方
ばくならぬ調べなれど、あと定まりたることなくて、なかなか女の
にとまどうものだろう　何となく気がかりに　[源氏は]
たどりぬべけれ、春の琴の音は、皆掻き合はするものなるを、乱
るるところもやと、なまいとほしくおぼす。

夕霧　帝の御前での大がかりな　改まった
大将、いといたく心懸想して、御前のことことしく、うるはしき
試楽が催されるような場合よりも　格段に大変だと思われなさる
御こころみあらむよりも、今日の心づかひは、ことにまさりておぼ
ので
えたまへば、あざやかなる御直衣、香にしみたる御衣ども、袖いた
[香を]　身なりを整えて
くたきしめて、引きつくろひて参りたまふほど、暮れ果てにけり。
趣深い　夕暮れ時　梅　残雪かと思われるほどに
ゆゑあるたそかれ時の空に、花は去年の古雪思ひ出でられて、枝も
たわむばかり咲き乱れたり。ゆるるかにうち吹く風に、えならず匂
[梅の香に]　きっかけにもできそ
ひたる御簾のうちのかをりも吹き合はせて、鶯誘ふつまにしつべ
うで　すばらしい
く、いみじき御殿のあたりの匂ひなり。御簾の下より、箏の御琴の
（源氏）　絃を調律して
末すこしさし出でて、「軽々しきやうなれど、これが緒ととのへて、

一一 いかにもたしなみ深く、非の打ち所のない所作で。

一二 「壱越調」は、雅楽の六調子の一つで、壱越（洋楽のdに近い）を宮（主音）とする呂旋音階。「発の緒」は、箏の琴の調絃で、各調子の宮にあたる絃をいい、壱越調では第二絃が宮で、これを壱越の音にする。

一三 調絃してから、調子を見るために弾く短い曲。各調子にそれぞれあり、ここは壱越調の掻き合せ。

一四 興を殺がぬように。お愛想までに、掻き合せくらいは一曲弾いてみなさい、というほどの意。

一五 髭黒の三男と夕霧の長男。玉鬘は源氏の養女分であるから、いずれも源氏の孫にあたる。

一六 宮中に宿直する時は、直衣を着る。子供たちが直衣を着ているのを、夜であるので「宿直姿」と言いなしたもの。

一七 紫の上の和琴。野分の巻の垣間見（四巻一二四頁以下）以来、紫の上は夕霧の心を捉えて離さない人である。源氏もその演奏を気にしていることが前に見える。その含みで「大将も」という。

女君たちのはなやかな演奏

調子を見て下さい
調べこころみたまへ。ここにまたうとき人の入るべきやうもなきを」とのたまへば、あなた以外の他人が立ち入るわけにもいかないから
[夕霧が]礼儀正しく
うちかしこまりて賜はりたまふほど、[琴を]受け取られる態度は
用意多くめやすくて、壱越調の声に発の緒を立てて、
すぐすらすら弾いてもみず控えて
ふとも調べやらでさぶらひたまへば、「なほ掻き合はせばかりは、手一つ、すさまじからでこそ」とのたまへば、「さらに今日の御遊びのさしいらへにまじらふばかりの手づかひなむ、おぼえずはべりける」と、けしきばみたまふ。「さもあることなれど、女楽にえことまぜでなむ逃げにけると、伝はらむ名こそ惜しけれ」とて笑ひたまふ。調べ果てて、をかしきほどに掻き合はせばかり弾きて、参らせたまひつ。この御孫の君達の、いとうつくしき宿直姿どもにて、吹き合はせたるものの音ども、まだ若けれど、生ひ先ありて、いみじくをかしげなり。

御琴どもの調べどもとのひ果てて、掻き合はせたまへるほど、いづれとなきなかに、琵琶はすぐれて上手めき、神さびたる手づかひ、澄み果てておもしろく聞こゆ。和琴に、大将も耳とどめたまへ

（夕霧）とても今日の皆様方のご演奏のお相手としてお仲間入りするほどの腕前は
一曲
（源氏）
私として自信がございません
勿体ぶったご挨拶をなさる
（源氏）もっともな言い分だが
相手もできずに
言いはやされては形なしなことだ
調絃を終って
興をそそる程度に
[琴を]お返し申し上げた
かわいらしい
先の上達が思われて
とても可憐に聞える
調律もすっかり終って
[明石上の]
優劣をつけがたい中で
由緒ある古風な撥さばきが
澄みきった音色で
合奏なさったところは
夕霧

一 和琴は、右手に琴軋（水牛製のへら状の物）を持って弾き、左手の指も使う。「爪音」は、箏の琴、和琴についていう。琴軋、左手の指いずれについてもいえるであろう。「掻き返す」は、琴軋の裏で絃を逆にはねること。

二 和琴をやわらげていう別名。

三 女御が弾かれる箏の琴は、ほかの琴の音色の合間合間に、頼りなく時々かすかに聞えるといった性質の音色のもので。

四 夕霧は、拍子をとって。正式には笏を二つに切り離したような形の物を打ち合せて拍子をとる。笏二本を代用したり、扇を使うこともある。下の「扇うち鳴らして」とあるのは、それ。

五 旋律を譜で歌うこと。

六 月の出の遅い頃なので。後に「臥待の月はつかにさし出でたる」（一七七頁）とある。

源氏、女君たちを覗き見て花によそえる

るに、なつかしく愛敬づきたる御爪音に掻き返したる音の、めづらしく今めきて、さらにこのわざとある上手どもの、おどろおどろしく掻き立てたる調べ調子に劣らず、にぎやかはしく、大和琴にもかかる手ありけりと、聞きおどろかる。深き御労のほどあらはに聞こえておもしろきに、大殿御心おちゐて、いとありがたく思ひきこえたまふ。箏の御琴は、ものの隙々に、心もとなく漏りいづるものの音がらにて、うつくしげになまめかしくのみ聞こゆ。琴は、なほ若きかたなれど、習ひたまふ盛りなれば、たどたどしからず、いとよくものに響きあひて、優になりにける御琴の音かなと、大将聞きたまふ。拍子とりて唱歌したまふ。院も時々扇うち鳴らして、加へたまふ御声、昔よりもいみじくおもしろく、すこしふつつかに、ものもしたものしきけ添ひて聞こゆ。大将も、声いとすぐれたまへる人にて、夜の静かになりゆくままに、言ふ限りなくなつかしき夜の御遊びなり。

六 月心もとなきころなれば、燈籠こなたかなたにかけて、火よきほ

（やさしく）（愛敬づき）（魅力的な）（当節世間に名の通った）（ものものしく）（新鮮で）（曲や調子）（はなやかな感じで）（弾き方）（夕霧は）（感嘆を禁じえない）（源氏も安堵なさって）（ほんとにまたとないお方だと）（おたしなみのほどがはっきり聞き取れて）（可憐で）（優美一筋といった感じに）（まだ未熟といってい技倆だが）（あぶなげなく）（夕霧）（随分上手になられた）（ほかの琴に）（源氏）（一緒に歌われる）（声が太く）（どっしりした感じが加わっていると）（優雅な）（軒先のあちこちに）（頃合いの）

女三の宮　二月の青柳

七　二月のなかばの頃の青柳が。「青柳」は、春の青青とした柳をいう歌語。以下の喩え、『紫式部日記』に同僚の小少将の君を「そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり」と評した類似の文章がある。

八　「白雪の花繁くして空しく地を撲つ　緑糸の条弱くして鶯に勝へず」（『白氏文集』巻六十四、楊柳枝詞八首の第三首）、「鶯の羽風になびく青柳の乱れてものを思ふ頃かな」（『具平親王集』）。いずれも『河海抄』に引く。『具平親王集』は今伝わらない。

九　桜襲（表白、裏赤）の細長。「細長」は、貴婦人の表着。袵がなく身頃の裾先が分れている。

一〇　青柳の縁でいう。これも歌語。

一一　咲き切った花房を豊かに垂れた藤の花が。野分の巻に、明石の姫君を「これは藤の花とやいふべからむ」（四巻一四三頁）とあった。

一二　とてもふっくりしたお姿におなりになって。懐妊のさま。昨年の暮に「五月ばかりにぞなりたまへれば」（一六七頁）とあった。

女御　朝ぼらけの藤の花

明るさに　どにともさせたまへり。女三の宮　宮の御方をのぞきたまへれば、人よりけに一段と小さくうつくしげにて、ただ御衣のみあるここちす。にほひやかな つややかな美しさと るかたは後れて、ただいとあてやかにをかしく、二月の中の十日ば いった点は　気品があって　美しく かりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむここちして、鶯の羽風 青葉を垂れはじめた風情もかくやと思われて にも乱れぬべく、あえかに見えたまふ。桜の細長に、御髪は左右よ か弱げに りこぼれかかりて、柳の糸のさましたり。

これこそは、限りなき人の御ありさまなめれと見ゆるに、女御の この上もなく高貴な方のご様子というものだろうと 君は、同じやうなる御なまめき姿の、今すこしにほひ加はりて、も 優美なお姿だが　物腰 てなしけはひ心にくく、よしあるさましたまひて、よく咲きこぼれ といい感じといい奥ゆかしく　風情のあるご様子で たる藤の花の、夏にかかりて、かたはらに並ぶ花なき朝ぼらけのこ そばに美しさを競う花のない ちぞしたまへる。さるは、いとふくらかなるほどになりたまひて、 とは言え ご気分がすぐれないので なやましくおぼえたまひければ、御琴もおしやりて、脇息におしか 小柄なお身体でなよなよと寄りかかっていられるが かりたまへり。ささやかになよびかかりたまへるに、御脇息は例の 並みの 大きさなので　無理に背伸びしている感じで　〔脇息を〕わざわざ小さく作りたいものと ほどなれば、およびたるここちして、ことさらに小さく作らばやと

一 紅梅襲。表着である。（前出一七〇頁注一〇参照）
二 薄い紫色。紅がかった色合い。
三 次に見える細長の上に重ねたもの。貴婦人の略礼装。丈が短い。（一巻図録一二参照）
四 薄い蘇芳色（赤紫色）。
五 前頁注九参照。
六 花と言うなら、桜にたとえても。以下、他に比べるもののない桜にたとえてもなお不足な感じがする、という。紫の上は、野分の巻で樺桜にたとえられていた（四巻一二五頁参照）。
七 こうした方々のお側では。以上の女三の宮、女御、紫の上に対していう。
八 明石の上は圧倒されても不思議はないのに。
九 心底をのぞいてみたいような様子で。いかにも深いたしなみを思わせる感じ。
一〇 柳襲。（一七〇頁注一四参照）
一一 薄い織物の裳のあるかなきかの感じなのを身につけて。ほかの高貴な女性たちに敬意を表したもの。
一二 その様子といい、女御の生母と思うせいもあって、立派で。
一三 まともに坐らず。茵を遠慮した体。
一四 「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』巻三夏、題しらず、読人しらず）による措辞。

紫の上　桜

明石の上　花橘

見ゆるぞ、いとあはれげにおはしける。紅梅の御衣に、御髪のかかりはらはらときよらにて、火影の御姿、世になくうつくしげなるに、紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小袿、薄蘇芳の細長に、御髪のたまれるほど、こちたくゆるるかに、大きさなどよきほどに、様体あらまほしく、あたりにほひ満ちたるここちして、花といはば桜にたとへても、なほものよりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

かかる御あたりに、明石はけおさるべきを、いとさしもあらず、もてなしなどけしきばみはづかしく、心の底ゆかしきさまして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の織物の細長、萌黄にやあらむ、小袿着て、羅の裳のはかなげなる引きかけて、ことさら卑下したれど、けはひ思ひなしも心にくく、あなづらはしからず。高麗の青地の錦の端縁どりした茵に、まほにもゐで、琵琶をうち置きて、ただけしきばかり弾きかけて、たをやかに使ひなしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、またありがたくなつかしくて、五月待つ花

垂れ具
とても可憐にお見えになるのだった
美しくて
合が
またとなくかわいらしげだが
薄緑色
扱いよう
しなやかに取りさばいた
弾こうとして
ほんの心持ばかり
比類なく立派でやさしい感じがして
見下せない感じだ
縁どりした
風格があり
しゃれていて
身ごなしなど
ということなく気品があってあでやかに見える
格別そうでもなく
格別の風情でいらっしゃる
衆にぬきんでた様子は
裾に
〔髪の〕量も多くゆったりとして〔身体の〕
姿つきも申し分なく

一五 花も実も一緒に折り取った薫りもかくやと思われる。『枕草子』に「四月のつごもり、五月の朔日のころほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたる朝ぼらけの桜に劣らず」（『木の花は』）とある。

一六 夕霧が紫の上を垣間見たこと、四巻野分一二四～五頁参照。

一七 女三の宮を、もう一歩（宮を妻とできるほどの）高い運勢に自分が恵まれていたならば。「宮をば」は、「わがものにても」以下にかかる。以下、夕霧の心。

一八 朱雀院。以下の事情、若菜上一八頁以下参照。

一九 この紫の上のことを、夕霧は、何ごとにつけてもとても手の届かぬ感じで、何のかかわりも持てないまま、今までずっと過ぎてきてしまったので。

二〇（継母に思いをかけるといった）人倫にもとった、とんでもない大それた気持などは、全然お持ちでなく。

二一 陰暦十九日の月。

源氏、夕霧を相手に音楽を論ずる——春秋の論

夕霧の思い

橘、花も実も具しておし折れるかをりおぼゆ。

これもかれも、うちとけぬ御けはひどもを聞き見たまふに、大将も、いと内ゆかしくおぼえたまふ。対の上の、見しをりよりも、ねびまさりたまへらむありさまゆかしきに、静心もなし。宮をば、今すこしの宿世及ばましかば、わがものにても見たてまつりてまし、心のいとぬるきぞくやしきや、院は、たびたびさやうにおもむけて、しりうごとにものたまはせけるをと、ねたく思へど、すこし心やすきかたに見えたまふ御けはひに、あなづりきこゆとはなけれど、いとしも心は動かざりけり。この御方をば、何ごとも思ひ及ぶべきかたなく、気遠くて、年ごろ過ぎぬれば、いかでか、ただおほかたに心寄せあるさまをも見えたてまつらむとばかりの、くちをしく嘆かしきなりけり。あながちに、あるまじくおほけなき心などは、さらにものしたまはず、いとよくもてをさめたまへり。

夜ふけゆくけはひ冷やかなり。臥待の月はつかにさし出でたる、

（夕霧）どなたもどなたも　たしなみ深い婦人たちのご様子を　夕霧　（夕霧は）　自分の妻としてご一緒に暮すこともできたであろうに　（自分に）　残念に　そのように水を向けられて　組みしやすいようにお見えになる女三の宮のご様子に　軽くお思い申すわけではないけれども　家族の一員として　不本意にも情けなくも　大層冷静に身を処していらっしゃる　わずかに姿を見せたのは

一　おぼつかない光だね。前の地の文「はつかにさし出でたる」から、源氏の言葉にそのまま続く書き方。

二　虫の声がないまぜに聞えたのは。

三　笛の音なども、秋は、しゃれた感じに高く澄みきって聞えるということがございません。

四　「女は春をいつくしむ」と、古人も言い残しておりますが。『河海抄』は「女感二陽気一、春、思レ男。男感二陰気一、秋、思レ女毛詩」と注する。『毛詩』国風、豳、「七月」の鄭箋を引いたもの。

五　いや、この春秋優劣の議論だが……（四巻付録三一一頁参照）。夕霧が今夕の催しにかこつけて春をよしとするのに対して、やや留保をつける口調。

六　律の旋法を、呂に次ぐものとしているのは、しかるべきことではある。呂は中国から伝来した雅楽の旋法、律は日本固有の俗楽の旋法に基づくものなので、呂の方を重く見たのである。『河海抄』は「呂は春のしらべ、律は秋のしらべといふ歟」という。中国で律呂というのは、十二律を六律と六呂に分け、前者を陽声、後者を陰声とするが、その律呂のことではない。

（源氏）一「心もとなしや、春の朧月夜よ。秋のあはれはた、かうやうなるものの音に、虫の声縒り合はせたる、ただならず、こよなく響き添ふここちすかし」とのたまへば、大将の君、「秋の夜の隈なき月には、よろづのものとどこほりなきに、琴笛の音も、あきらかに澄めるこちはしはべれど、なほことさらに作りあはせたるやうなる空のけしき、花の露も、いろいろ目うつろひ心散りて、限りこそはべれ。春の空のたどたどしき霞の間より、おぼろなる月影に、静かに吹き合はせたるやうには、いかでか。三笛の音なども、艶に澄みのぼり果てずなむ。四女は春をあはれぶと、古き人の言ひ置きはべりける、げにさなむはべりける。なつかしくもののととのほることは、春の夕暮こそことにはべりけれ」と申したまへば、「いな、この定めよ。五いにしへより人の分きかねたることを、末の世に下れる人の、えあきらめ果つまじくこそ。ものの調べ、曲のものどもはしも、げに律をば次のものにしたるは、さもありかし」などのたまひて、「いか

秋の風情というものは　こうした楽器の音色に　格別の趣で　この上なく音に深みが加わる感じがするものだ　夕霧　明るい　何もかも遠くまで見わたせるようですので　わざわざ　いたしますけれども　目移りがし　ぼんやりとした　どうも限度がございます　朧ろに見える月の光に　趣には　とても及びません　笛を　よく響いて澄みきった感じが　優雅にすべてのものがしっくり調和するという点では　にそうだと存ぜられます　格別のものがございました　（源氏）　判断しかねた問題を　末世の　劣った者が　はつきり結論を出すことはむつかしかろう　調子や　楽曲については　確かに　（源氏）どうで

――当代の名手の評判

七 名手と評判の高い、誰それが。「有職」は、諸道に明るい者の意。

八 その、人よりはすぐれていると自認している名手たちも。「このかみ」は、もと、長子、兄の意。ここは、人に長ずる者の意。

九 飛び抜けてすぐれていようとも思われぬことだ。

一〇 長年こうして引き籠って暮しているので。准太上天皇の地位についたのは、八年前の秋（四巻藤裏葉三〇〇頁）である。以下、批判を和らげる配慮から言う。

一一（この六条の院は）婦人たちの才芸はもとより、さしたることもない取りはからいも、見栄えがしてよそよりすぐれている所なのだ。「とりする」は「取り為る」。催しの支度や禄など、婦人たちの配慮を言うのであろう。

一二 もののわけの分らぬ私ごときが、偉そうな口を利くのもいかがかと存じます。

一三 柏木。父前太政大臣に似て和琴の名手であること、四巻篝火一一八頁、梅枝二六〇頁、若菜上五〇～五一頁に見える。

一四 螢兵部卿の宮。三巻少女二六九頁、四巻梅枝二六〇頁、若菜上九〇頁に、琵琶を弾いている。

一五 確かに、お二人とも、比べるものもない名手ですが。

に、ただ今有職のおぼえ高きその人かの人、御前などにて、たびたびこころみさせたまふに、すぐれたるは、数少なくなりためるを、そのこのかみと思へる上手ども、いくばくえまねび取らぬにやあらむ、このかくほのかなる女たちの御なかに弾きまぜたらむに、際離るべくこそおぼえね。年ごろかく埋れて過ぐすに、耳などもすこしひがひがしくなりにたるにやあらむ、くちをしうなむ。あやしく、人の才、はかなくとりすることども、ものの栄ありてまさる所なる。その御前の御遊びなどに、ひときざみに選ばるる人々、それかれといかにぞ」とのたまへば、大将、「それをなむとり申さむと思ひはべりつれど、あきらかならぬ心のままに、およすけてやはと思ひたまふる。のぼりての世を聞きあはせはべらねばにや、衛門の督の和琴、兵部卿の宮の御琵琶などをこそ、このころめづらかなる例に引き出ではべめれ。げにかたはらなきを、今宵うけたまはるものの音どもの、皆ひとしく耳おどろきはべるは、なほかくわざともあらぬ

帝のお前などで　数少なくなったようだが　弾かせてご覧あそばすのに　どれほども習得し得ていないのであろうか　今夜のこんなに頼りなさそうな　一緒に弾いても　管絃の御遊　第一等の名手として選ばれる人たちの　誰彼に比べて　腑甲斐ないものだ　どういわけか　おかしくなってしまったのかもしれない　ずっと昔のすぐれた時代のことは存じませんからでしょうか　そのことについて意見を申し上げようと思いま　夕霧　どうだろうか　したが　[世人は]近頃めったにない　[婦人方の]やはりこうした特別のことでもない　どれもこれも

一 旋律を譜で歌うこと。（一七四頁参照!）
二 （紫の上の弾いた）和琴は。以下、和琴の一般論。
三 柏木の父、前太政大臣。（若菜上五〇頁参照!）
四 こうして臨機応変に、巧みに操ってその場に合せて引き出した音色など、自由自在に掻き鳴らされたのは。前に「和琴こそ、いくばくならぬ調べなれど、あと定まりたることなくて」（一七二頁）とあった。簡素な楽器だけに、合奏に際して自在な音色を引き出すのがむつかしいのである。
五 （一般には）なかなか飛び抜けて巧みには弾けない楽器のようですのに。
六 それほどたいした技倆でもないのだが、ことさら本格派のようにおほめのことだ。「るる」は、夕霧に対する軽い敬語。
七 確かに、出来の悪くはない弟子たちではあるね。諧謔の語。
八 琵琶だけは。明石の上のこと。明石の上の音楽は父入道の直伝である（二巻明石二七六～八頁参照!）。
九 やはり（私の側にいるお蔭で）どことなく普通とは違うところがあるはずなのだ。自分の感化で上手にもなっていよう、の意。
一〇 どんなことでも、それぞれの専門の道に就いて学習するならば、才芸というものは、どれもこれも際限のないものだと思われて。琴の学習について述べる前にまず一般論から入る。

――源氏の琴の論

御遊びと、（お催しだと）かねて思うたまへたゆみける心の騒ぐにやはべらむ。（かねがね思って油断しておりました気持が不意をつかれたからでしょう）唱歌など、（とてもお付き合いしにくうございます）いとつかうまつりにくくなむ。和琴は、かの大臣ばかりこそ、かくをりにつけて、こしらへなびかしたる音など、心にまかせて掻き立てたまへるは、いとことにものしたまへ、をさをさ際離れぬものにはべめるを、いとかしこくととのひてこそはべりつれ」と、（まことに格別上手でいられますが）（紫上は）全く見事に申し分のないご演奏ぶりでございました）めできこえたまふ。「いとさことことしき際にはあらぬを、わざとうるはしくも取りなさるるかな」とて、したり顔にほほゑみたまふ。（おほめ申し上げなさる）（源氏）（得意げに）（にやにやなさる）

（源氏）「げに、けしうはあらぬ弟子どもなりかし。琵琶はしも、ここに口入るべきことまじらぬを、さいへど、もののけはひ異なるべし。お（差し出口するまでもないのだが）（私が）（明石のような）（意外な所で）（世にも珍しい上手な音色だと感心したものだが）ぼえぬ所にて聞き始めたりしに、めづらしきものの声かなとなむおぼえしかど、そのをりよりは、またこよなくまさりにたるをや」と、（その当時よりは）（格段に上達しているのだからね）せめてわれがしこにかこちなしたまへば、女房などは、すこしつきしろふ。（強引に何もかも自分の手柄のように自慢なさるので）（そっと目引き袖引きする）

（源氏）「よろづのこと、道々につけて習ひまねばば、才といふもの、いづ

一一 自分の気持としてこれで十分だと思う、そうした限度もなく、どこまでも習得するということは、大変むつかしいことだが。

一二 以下、七絃の琴の論。琴は奏法がむつかしく、平安中期にはほとんど弾く人もいなかった。琴にまつわる当時の様々な神秘的伝承が以下に述べられる。

一三 『花鳥余情』は「楽書云、琴動二天地一感二鬼神一」という。『古今集』仮名序に「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」（『詩経』大序「動二天地一感二鬼神一、莫二近二於詩一」による）とあり、以下も四六駢儷文を摸した仮名序を思わせる文体。

一四 ほかのあらゆる楽器の音色の範囲を出ないながらも。琴には特に次のような功徳があるという含み。

一五 この日本の国に琴の奏法を伝えた当初の頃まで。以下の論、『宇津保物語』俊蔭の巻の、俊蔭の波斯国漂流譚が念頭にあろう。

一六 奏法を完全に学び取ることは困難なのだった。

一七 「俊蔭、せた風を賜りていささか掻き鳴らして大曲一つをつかうまつるに、響き高うて御殿の上の瓦砕けて花のごとく散る。今一つつかうまつるに、六月中の十日のほどに雪衾のごとく凝りて降る」（『宇津保物語』俊蔭）、「次に、ほそをを五箇の調べにて一つ弾きたまふに、色々の霰しばしば降り、雲たちまちに出で来、星騒ぎ、空のけしき恐ろしげにはあらで、めづらかなる雲立ちわたる」（同、楼の上の下）

れも際なおぼえつつ、わがここちに飽くべき限りなく習ひ取らむことはいと難けれど、何かは、そのたどり深き人の、今の世にをさをさなければ、片端をなだらかにまねび得たらむ人、さるかたかどに心をやりてもありぬべきを、琴なむなほわづらはしく、手触れにくきものはありける。この琴は、まことに跡のままに尋ねとりたる昔の人は、天地をなびかし、鬼神の心をやはらげ、よろづのものの音のうちに従ひて、悲しび深き者もよろこびに変り、賤しく貧しき者も高き世にあらたまり、宝にあづかり、世にゆるさるるたぐひ多かりけり。この国に弾き伝ふるはじめつかたまで、深くこの琴を心得たる人は、多くの年を知らぬ国に過ぐし、身をなきになして、この琴をまねび取らむとまどひてだに、し得るは難くなむありける。げにはた、明らかに空の月星を動かし、時ならぬ霜雪を降らせ、雲雷を騒がしたる例、上りたる世にはありけり。かく限りなきものにて、そのままに習ひ取る人のありがたく、世の末なればにや、い

一 ほんの一端を無難に学んで身につけた人は
二 そうしたわずかな技
三 奏法通りに
四 技倆を身につけ
五 財宝に恵まれ
六 世間に認められるといった者が
七 現在ではほとんどいない
八 そうした奥義を極めた人が
九 やはり厄介なもので
一〇 芸に自己満足していてもよいわけのものだが
一一 に手を出せないものなのだった
一二 琴なむなほわづらはしく
一三 昔の人は、天地をなびかし
一四 よろづのものの
一五 高貴な身分に成りかわり
一六 学び取ろうとひどい苦労を重ねてすら
一七 なるほど確かに
一八 見知らぬ異国で
一九 身命をなげうって
二〇 会得した
二一 ずっと昔の世にはあったことだ
二二 この上もない楽器なので
二三 [技法を]
二四 [今は]末世の世の中だからか
二五 どこにもなく

一『河海抄』に「礼記曰、夫礼楽通二乎鬼神一。蘼蕪香散楚江頭、湘竹叢辺涙不レ収、莫レ把二悲糸一写二離怨一、夜深簾外鬼神愁聴レ琴　永隙」と注する。『文選』嵇叔夜の琴賦の李善注に「馬融琴賦曰、曠三奏而神物下降、何琴徳之深哉」とある。「曠」は、春秋時代、晋の楽師、師曠。

二　琴はその七絃の各絃が音律（いわゆる呂旋音階）の基準とされた。「琴者、楽之統也。君子所二常御不レ離二於身一」（『風俗通』）、「琴者禁也。禁二止於邪一、以正二人心一也」（『白虎通』）

三　俊蔭の波斯国漂流譚が念頭にあろう。

四（しかし）どうして、それほどまでせずとも、やはり、何とかこの琴の奏法に通暁するに足りる一端だけでも、心得ておかずにいられようか。

五　厄介な楽曲が多いのだが。「曲」は、歌謡に対して、雅楽の曲をいう語。前の「調べ」は、旋律を主としていう語。

六『日本国見在書目録』（寛平年間、藤原佐世撰）の楽家の部に、琴経一巻蔡伯諧撰、琴操三巻晋広陵孔衍撰、琴法一巻越趙耶絫撰、琴録一巻、琴徳譜五巻、琴用手法一巻、雑琴譜百廿巻、弾琴用手法一巻、雅琴録一巻など、琴に関する書名が見える。

づこのそのかみの片端にかはあらむ。（その昔の／一端も伝わっていようか）されど、なほかの鬼神の耳とど（傾聴するものと遠い昔からされてきたものだからか）め、かたぶきそめにけるものなればにや、なまなまにまねびて、（立身が叶わなかったといった者があって以来）思ひかなはぬたぐひありけるのち、これを弾く人よからずとかいふ（琴）難をつけて、うるさきままに、今は、をさをさ伝ふる人なしとか。（難癖をつけて／面倒に思われるままに／ほとんど／一奏法を／なまはんかに／不幸になる）いとくちをしきことにこそあれ。琴の音を離れては、何ごとをかも（まことに残念なことではある／ちんとわきまえる基準にできようか／何ごとも／どの楽器を音律をきすたれることは）のをととのへ知るしるべとはせむ。げに、よろづのことおとろふる（たやすくなってゆくこの世で）さまはやすくなりゆく世の中に、一人出で離れて、心を立てて、唐（志）土高麗と、この世にまどひありき、親子を離れむことは、世の中に（苦労してさすらい／親子とも別れ別れになるのでは／世間の変り者ということになってしまおう）ひがめる者になりぬべし。などか、なのめにて、なほこの道を通はし知るばかりの端をば、知りおかざらむ。調べ一つに手を弾き尽く（曲の一つに／技法／きわめ尽すだけでも）さむことだに、はかりもなきものなり。いはむや、多くの調べ、（めども立たないもののようだ／数多くの曲）わづらはしき曲多かるを、心に入りし盛りには、世にありとあり、（私が熱中していた若い頃は／世間にありとあらゆる）ここに伝はりたる譜といふものの限りをあまねく見合はせて、のち（日本／総てを／広く／見くらべて）のちは、師とすべき人もなくてなむ、好み習ひしかど、なほ上りて（進んで練習したのだが／昔の）

七 夕霧は、全くいかにも腑甲斐なく不肖の子だとお思いになる。源氏の琴の伝授を受けられなかったことを恥じる思い。

八 女御のお産みになった御子たちのなかに、思い通りにご成長になるお方（十分な楽才を示されるお方）がおいでだったら。源氏の外孫にあたる。

九 明融本、河内本に「三の宮」。後の匂宮である。これが原形であろう。青表紙本に「二の宮」とするものが多いが、拠りがたい。なお一六七頁注四参照。

一〇 前にも「さるは、いとふくらかなるほどになりたまひて、なやましくおぼえたまひければ、御琴もおしやりて、脇息におしかかりたまへり」（一七五頁）とあった。

一一 催馬楽、呂「葛城」。「葛城の寺の前なるや　豊浦の寺の　西なる　榎の葉井に　白玉沈くや　真白玉沈くや　おおしとど　おしとど　しかしては　国ぞ栄えむや　我家ら　ぞ　富せむや　おおしとど　としとんど　おおしとんど　としとんど」。「おおしとど」以下は囃しことば。

一二 前に「臥待の月はつかにさし出でたる」（一七七頁）とあった。

一三 梅である。「御前の梅も盛りになりゆく」（一六九頁）とあった。

源氏、和琴を弾く　葛城の演奏

の人には、当るべくもあらじをや。ましてこののちといひては、伝はるべき末もなき、いとあはれになむ」などのたまへば、大将、げにいとくちをしくはづかしとおぼす。「この御子たちの御なかに、思ふやうに生ひ出でたまふものしたまはば、その世になむ、そもさまでながらへとまるやうあらば、いくばくならぬ手の限りも、とどめたてまつるべき。三の宮、今よりけしきありて見えたまふを」などのたまへば、明石の君は、いとおもだたしく、涙ぐみて聞きゐたまへり。

私のあとということになると　伝授に堪える子孫もないのが　何とも心さびしいことだ　(源氏)八　それもそ　伝授申　いかほどでもない私の技のすべても　れほど長生きすることでもあったら　才能がありそうにお見えになるから　明石の上　し上げよう

女御の君は、箏の御琴をば、上にゆづりきこえて、寄り臥したまひぬれば、あづまを大殿の御前に参りて、気近き御遊びになりぬ。葛城遊びたまふ。はなやかにおもしろし。大殿折り返し歌ひたまふ御声、たとへむかたなく愛敬づきめでたし。月やうやうさし上るまに、花の色香ももてはやされて、げにいと心にくきほどなり。

紫の上　源氏　和琴　一段と映えて　くつろいだご演奏になった　源氏　いかにも優雅きわまる趣である　可憐で　やさしく　明石の上

箏の琴は、女御の御爪音は、いとらうたげになつかしく、母君の

一 弾いた絃を左手でゆすってうねりをつけた音。明石の入道の箏の琴についても「今の世に聞こえぬ筋弾きつけて、手づかひいたう唐めき、ゆの音深う澄ましたり」（二巻明石二七八頁）とあった。

二 箏の奏法。静掻（手を細かく静かに弾く）と早掻（手を粗く早く弾く）を一曲の中に混ぜ用いること。輪説、臨説などという。

三 呂旋の曲から律旋の曲に移ること。今までの「葛城」は、呂である。律旋の曲は、わが国固有の俗楽に基づくものという。次に「なつかしく今めきたるに」という。

四 調絃ののち、弾く短い曲。それぞれの調子に一つずつある。それぞれの楽器がこれを弾くのである。

五 琴の五つの調子をいう。「琴五ケ調　掻手　片垂　水宇瓶　蒼海波　雁鳴　調べ」（『河海抄』）

六 青表紙本は「五六のはち」とあるが、河内本の中に「五六のはら」とするものがあり、それが正しいであろう。「はらとは潑剌とかく。七徽の七分あたりにて六の絃を按へて、五六を右手の人中名の三指にて内へ一声に弾ずるを撥と云ふ。外へ弾ずるを剌と云。つめていへば発剌なり」（『玉堂雑記』）

夕霧ら、禄を賜って散会

七 髭黒の三男（笙）と夕霧の長男（横笛）。（一七一頁参照）

御けはひ加はりて、ゆの音深く（奏法の感じ）、いみじく澄みて聞こえつるを、この御手づかひは（上のお手さばきは）、またさまかはりて（趣が変って）、ゆるるかにおもしろく（ゆったりとして）、聞く人ただならず（感に堪えず）、すずろはしきまで愛敬づきて（気もそぞろになるほど）、輪の手など（魅力的で）、すべてさらに（いかにも）、いとかどある（才気あふれた）御琴の音なり。返り声に、皆調べ変りて、律の掻き合はせども（親しみやすくしゃれているが）、なつかしく今めきたるに（奏法）、琴は、五個の調べ、あまたの手のなかに（注意して）、心とどめてかならず弾きたまふべき五六のはらを、いとおもしろく（「女三宮は」）澄まして弾きたまふ。さらにかたほならず（すこしもおかしなところはなく）、いとよく澄みて聞こゆ。春秋よろづのものに（どの季節のものにも）通へる調べにて（調和する調子で）、通は（融通無碍に）しわたしつつ弾きたまふ。心しらひ（「その」心配りは「源氏が」）、教へきこえたまふさま違へず（会得していらっしゃるのを）、いとよくわきまへたまへるを（可憐で）、いとうつくしく（晴れがましく）、おもだたしく思ひきこえたまふ。

七 この君達の（かわいらしく「笛を」）、いとうつくしく吹き立てて、切に（一心不乱なのを）心入れたるを、らうたがりたまひて（いくお思いになって）、「ねぶたくなりにたらむに（源氏）もうねむくなったであろうに）、今宵の遊びは、長くはあらで（ほんのわずかの間だけと）、はつかなるほどにと思ひつるを（やめるには惜しい）、とどめがたきものの

八 源氏が着ておられた袿をお与えになる。肩にかけて頂くので「被く」という。

九 模様を織り出した細長に袴など（添えて）。「細長」は、貴婦人の表着（一七五頁注九参照）。

一〇 お師匠の私をこそ、誰よりも先にお引き立てになって頂きたいものだ。「ものの師」は、元来、雅楽寮の音楽の師をいう語。琴の師匠としての自分をたわむれていう。

一一 横笛より細い。六孔。（二巻図録八参照）

一二 皆源氏のご奏法を直接受け継がれたそれぞれのお手並みが、いずれも衆に抜きんでているので。

音どもの、いづれともなきを、聞き分けるほどに耳がよくないので愚図愚図している甲乙をつけがたいのを聞き分くほどの耳とからぬたどたどしさに、いたくふけにけり。心なきわざなりや」とて、笙の笛吹く君に、土器盃さしたまひて、御衣脱ぎてかづけたまふ。横笛の君には、紫の上こなたより、織物の細長に、袴などことことしからぬさまに、けし形ばかりのことで きばかりにて、大将夕霧の君には、宮女三の宮の御方より、杯さし出でて、宮の御装束一領かづけたてまつりたまふを、大殿源氏、「あやしや。一〇ものの師をこそまづはものめかしたまはめ。愁はしきことなり」とのたまふに、宮のおはします御几帳のそばより、御笛をたてまつる。うち笑ひたまひて取りたまふ。いみじき高麗笛なり。すこし吹き鳴らしたまへば、皆立ち出でたまふほどに、大将立ちとまりたまひて、御子の持ちたまへる笛横笛を取りて、いみじくおもしろく吹き立てたまへるが、いとめでたく聞こゆれば、いづれもいづれも、皆御手を離れぬものの伝へ伝へ、いと二なくのみあるにてぞ、わが御才のほど、世にも稀なものと思い知られなさるのだったありがたくおぼし知られける。

一 箏の琴の、弾き手が（女御から）紫の上に代ってすばらしかった音色も。夕霧の紫の上に対する思慕は、野分の巻の垣間見（四巻一二四頁以下）以来のことである。

二 前太政大臣の亡母。夕霧、雲居の雁の祖母で、二人は幼時、三条の宮でその撫育のもとに育った。琴の教授については、三巻少女二三二～五頁参照。

三 夕霧とのことが父（当時内大臣）に知れて、その手許に引き取られた。（少女二四七頁以下参照）

四 夫の君。夕霧。

五 夕霧は、風情もないことと思っている。世話女房型であるところに、気易さとともにやや不満も抱く。

六 雲居の雁は、おっとりとはしているものの、なかなか一筋縄ではいかないところがあって。以下、嫉妬深いところがあるという。夕霧には、別に夫人として藤典侍（惟光の娘）がいる（一六二頁）。

七 居室のある東の対。

八 はじめの頃、あちらで弾いていらっしゃるのをちらりと耳にいたしました時は。女三の宮の居室は寝殿の西面にある。紫の上と女三の宮が対面し、以後行き来していたことは、若菜上八〇～八二頁に見える。

九 どうしてご上達なさらないことがありましょう、こんなにかかりきりでお教え申し上げなさったのですから。

夕霧と雲居の雁

源氏、紫の上と語る ——女三の宮の琴

〔六条院を〕退出なさる　お子たちを　夕霧

大将殿は、君達を御車に乗せて、月の澄めるにまかでたまふ。道すがら、箏の琴のかはりていみじかりつる音も、耳について離れず　雲居の雁　耳につきて恋しくおぼえたまふ。わが北の方は、故大宮の教へきこえたまひしかど、熱心にお習いもなさらなかったうちに　心にもしめたまはざりしほどに、別れたてまつりたまひにしかば、ゆっくり伝授をお受けになることもなくて　ゆるるかにも弾き取りたまはで、何ごとにつけてもただ素直で　男君の御前にては、おっとりした物腰で　恥ぢてさらに弾きたまはず、何ごともただおいらかに、うちおほどきたるさまして、大勢のお子たちの世話を　子どもあつかひを、暇なく次々したまへば、をかしきところもなくおぼゆ。さすがに腹あしくて、もの妬みうちしたる、愛敬づき　嫉妬なさるところは　増めない人柄でいらっしゃるようだて、うつくしき人ざまにぞものしたまふめる。

源氏　お帰りになった　紫の上

院は、対へわたりたまひぬ。上は、とまりたまひて、宮に御物語　女三の宮　など聞こえたまひて、暁にぞわたりたまへる。日高うなるまで大殿籠れり。「宮の御琴の音は、いとうるさくなりにけりな。いかが聞きたまひし」と聞こえたまへば、「はじめつかた、あなたにてほの聞きしは、いかにぞやありしを、いとこよなくなりにけり。いかで

〔東の対に〕明け方　〔お二人は〕大層上手になったものですね　どうお聞きに　（源氏）　（紫上）　なりましたか　〔今は〕格段のご上達ぶりです　どうかと思われましたが

一〇 手を取らんばかりの教授ぶりで、なかなかしっかりした師匠だというべきでしょう。「ものの師」は、一八五頁注一〇参照。

一一 琴は、面倒で厄介なもので、伝授に時間を取られるものですから。奏法のむつかしいことをいう。

一二 いくら何でも、せめてその程度のことだけでも、こうして特別にお世話役として私に宮をお預けになったたしるしには（してさし上げよう）と。

――理想の妻としての紫の上　紫の上、今年三十七歳

一三 まだ幼かったあなたを大切にお世話した当時は。「世づかぬ」は、まだ結婚前の、というほどの意。

一四 身を入れて聞いてさし上げることもなかった（あなたの）お琴の音色が、すばらしい出来栄えだったのも、私として晴れがましいことで。

一五 今はまた、ご年輩にふさわしく、（明石の女御腹の）宮様方のお世話などを、自分から買って出てなさる様子も。女一の宮などのこと、前の一六二頁に見える。

かは、かく異事なく教へきこえたまはむには」といらへきこえたまふ。「さかし。一〇手を取る取る、おぼつかなからぬものの師なりかし。これかれにも、一一うるさくわづらはしくて、暇いるわざなれば、教へたてまつらぬを、院にも内裏にも、琴はさりともならはしきこゆらむとのたまふと聞くがいとほしく、一二さりともさばかりのことをだに、かく取り分きて御後見にとあづけたまへるしるしにはと、思ひ起こしてなむ」など聞こえたまふついでにも、「昔、一三世づかぬほどをつかひ思ひしさま、その世には暇もありがたくて、心のどかに取り分き教へきこゆることなどもなく、近き世にも、何となく次々まぎれつつ過ぐして、一四聞きあつかはぬ御琴の音の、出で栄したりしも、面目ありて、大将の、いたくかたぶきおどろきたりしけしきも、思ふやうにうれしくこそありしか」など聞こえたまふ。かやうの筋も、一五今はまたおとなおとなしく、宮たちの御あつかひなど、取りもちてしたまふさまも、いたらぬことなく、すべて何ごとにつけても、も

（源氏）そうですね　ほかのどなたにも　朱雀院　帝　おいたわしく　発奮してお教えしたのです　（源氏）　なかなかなくて　特別に落着いて　近頃になっても　用事に取り紛れて日を送って　夕霧　大層不思議がって感心していた様子も　わが　こうした音楽の面も意を得た思いで　行き届かぬことなく　非難

一 このように全く何もかも不足なところのない人は、長生きしない例もあるようだからと、源氏は、紫の上の身の上に何か悪いことが起らねばよいがとまで、いとしくお思い申し上げなさる。

二 三十七歳は、女性の重厄の年である。藤壺も三十七歳で崩じた（三巻薄雲一六五頁参照）。源氏十八歳の若紫の巻で、紫の上は「十ばかりにやあらむと見えて」（一巻一八九頁）とあった。源氏は今四十七歳。多少の齟齬があると見るよりも大体符合するとすべきであろう。厄年にしたのは、作者の意図である。

――紫の上の厄年の不安

三 ご用心なさい。「つつしむ」は、災厄を避けるため精進潔斎すること。

四 亡き北山の僧都。紫の上の祖母尼君の兄（一巻若紫一九五頁参照）。病気の祖母尼君とともに紫の上は、その北山の庵室に身を寄せていた。二巻須磨二二八頁に紫の上と源氏のために修法をさせたことが見えて以来で、ここではすでに故人である趣。

五 幼い時から、人並みすぐれた星の下に、大層な育ち方をして。幼少から父桐壺帝の愛情を一身に集めて宮中に育ったこと。

六 現在の世人の尊敬、栄華の暮しは。准太上天皇として栄華を極めたことをいう。

――源氏、半生を回顧 紫の上への愛を語る

（紫の上を買うような不行届きなところがなく）どかしくたどたどしきことまじらず、（世にも稀な）ありがたき人の御ありさまなれば、（紫の上）いとかく具しぬる人は、世に久しからぬ例もあなるをと、ゆゆしきまで思ひきこえたまふ。（源氏は）さまざまなる人のありさまを見集めていられるので（人さまざまな多くの女性の人柄をご承知になって）たまふままに、（総てにつけ）取り集め足らひたることは、（雛がないことにかけては）まことにたぐひあらじとのみ思ひきこえたまへり。（二人とないお方だと心底から）今年は三十七にぞなりたまふ。

（今までご一緒に暮してこられた）見たてまつりたまひし年月のことなども、（しみじみと）あはれにおぼし出でたるついでに、（源氏）「（ご祈禱）必要なさるべき御祈りなど、（特別になさって）常よりも取り分きて、今年は三つつしみたまへ。（私は）もの騒がしくのみありて、（いつも何かと取り紛れていて）思ひいたらぬこともあらむを、（気のつかないこともあるでしょうから）なほおぼしめぐらして、（あなたの方でいろいろ考えられて）大きなることどももしたまはば、（大がかりな仏事でもお営みになるのでしたら）当然私の方でさせましょう）おのづからせさせてむ。（いらっしゃらなくなってしまったのが）故僧都のものしたまはずなりにたるこそ、（まことに残念です）いとくちをしけれ。（何かにつけ）おほかたにてうち頼まむにも、（仏事のことで）（頼りにするにも）いとかしこかり（いかにもしっかりした）し人を」（人だったが）などのたまひ出づ。（源氏）「（私自身は）みづからは、幼くより、人に異なるさまにて、ことことしく生ひ出でて、今の世のおぼえありさま、来し方にたぐひ少なくなむありける。（過去にその例もないほどのことです）されどまた、（世にまたとないほど）世にすぐれて悲し

七 かわいがって下さった人々に、それぞれ先立たれ。三歳で母桐壺の更衣（一巻桐壺一五頁）、六歳で祖母（桐壺三〇頁）、二十三歳で父桐壺院（二巻賢木一四〇頁）に先立たれた。

八 生き永らえたこの晩年になっても、意に充たず悲しく思うことが多く。具体的に明らかではないが、次の言葉から、藤壺や六条の御息所など、悔恨にみちた青春時代を回想しての感慨と思われる。

九 あの一件の別離をほかにしては、その前も、それからあとも。須磨謫居の折の足掛け三年の別離をさして言う。

一〇 后より地位の低い人々は。女御や更衣をさす。

一一 名誉あるお勧めにつけても。後宮の一員としての宮仕えを言う。

一二 あなたの、親のもとで深窓に過されたような気楽さはほかにあることではありません。娘分のようなことで、苦労も知らず自分のいつくしみのもとにあった、と言う。

一三 その点では、人にすぐれた運勢だったということは、お分りでいらっしゃるでしょうか。

一四 ご自分の身の上のことですから、あるいはお気づきでないかもしれません。

きめを見るかたも、人並み以上だったと言えます人にはまさりけりかし。まづは、思ふ人にさまざま後れ、残りとまれる齢の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、我ながら不本意な感心しないことにかかわったにつけても不思議にあぢきなくさるまじきことにつけても、悩みが絶えずあやしくもの思はしく、心に飽き足りなく思われることが付きまとった身の上で今まで過ぎてきたので心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば、その代りにそれにかへてや、自分で思っていたよりは思ひしほどよりは、今までもながらふるならむとなむ、こんな年までも長生きしているのだろうと思ひ知らるる。君の御身には、あなたについてはかの一節の別れより、あなたこなた、悩みごとといもの思ひとて、心乱りたまふばかりのことあらじとなむ思ふ。后といひ、ましてそれより次々は、お悲しみになるほどのことはなかったであろうと思います一〇 れっきとした身分の方といってもやむごとなき人といへど、皆かならずやすからぬ悩みは付きまとうものです気苦労があり人らぬもの思ひ添ふわざなり。高きまじらひにつけても、心乱れ、人と帝寵をきそう気持が絶えないのも楽なことではありませんが一二にあらそふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親の窓のうちながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし。一三 そのかた、人にすぐれたりける宿世とはおぼし知るや。思いもかけず思ひのほかに、この宮のかくわたりものしたまへるこそは、なま苦しかるべけれど、何やらつらくもありましょうがそれにつけては、いよいよまさる私の愛情の深さをいとど加ふる心ざしのほどを、一四 御みづからの上なれば、おぼし知ら

ずやあらむ。ものの心も深く知りたまふめれば、一さりともとなむ思ふ」と聞こえたまへば、「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、二心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」とて、残り多げなるけはひ、はづかしげなり。

（ものわけもよく分っておられるようですから）（寄るべもない私には分に過ぎて世間からはしあわせと思われてもおりましょうが）（（紫上）おっしゃる通り）（多くを言い残した様子は）（（源氏が）気後れするほどだ）

（紫上）三「まめやかには、いと行く先少なきここちするを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしろめたくこそ。四さきざきも聞こゆることと、いかで御ゆるしあらば」と聞こえたまふ。「それはしも、あるまじきことになむ。さてかけ離れたまひなむ世に残りては、何のかひかあらむ。ただかく何となくて過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ。五なほ思ふさま異なる心のほどを見果てたまへ」とのみ聞こえたまふを、例のことと心やましくて、涙ぐみたまへるけしきを、いとあはれと見たてまつりたまひて、よろづに聞こえまぎらはしたまふ。

（厄年の今年もこうして）（とても不安に思われてなりません）（何気なく過しますのは）（何とかお許しがあれば）（（源氏）それは全く）（そのようにあなたが出家なさったあとに残っては）（何の生きる）（常日頃何の隔てもなく）（別段のこともなく）（何にも代えがたく思われるのです）（くあなたと暮すうれしさだけが）（（紫上の）心からいとしく）（（源氏は）あれこれとお慰め申し上げなさる）

一 それでも、そのことはよくわきまえておいでのことと私は安心しています。私の愛情の深まりは、よくご承知のことと思う、と言う。

二 私の心にはどうしても堪えきれませぬ悲しみの気持がつきまとって離れませんのは、それでは、それが私のためのお祈禱になって今まで生き永らえているのかもしれません。源氏が「それにかへてや、思ひしほどよりは、今までもながらふるならむとなむ、思ひ知らるる」と言ったのにすがった形で、女三の宮降嫁後の苦衷を訴える。

――紫の上、再び出家を願う

三 本当のことを申し上げますと、もうとても先も長くない思いがいたしますので。

四 以前にもお願い申し上げましたこと。出家のことである。一五二頁に見える。

五 やはりあなたを人とは違って深く愛している私の気持を、最後まで見届けて下さい。

六（出家の願いを聞き届けて下さらない）いつもの口実だと、つらく思って。

七 大勢ではありませんが。以下、紫の上を相手に、女性観を述べ、かかわりのあった女性について回顧する。源氏の既往が総括されている観があるが、それを紫の上に語るのは、彼女への愛の証しでもあろう。

——源氏の女性観 それぞれの女性評

——葵の上

八 大将（夕霧）の母君（葵の上）を、幼少の折に妻とすることになって。源氏は、十二歳で元服、その夜、葵の上と結婚した（一巻桐壺三六～三九頁参照）。

九 大事にしなければならない、大切な方だとは思っていましたが。れっきとした北の方として重んじた、の意。

一〇 いつもしっくりいっていた仲ではなく、うちとけぬ気持のまま終ってしまったのは。

——六条の御息所

一一 秋好む中宮の御母（六条の御息所）。皇太子の妃として姫君（中宮）を産んだので「御息所」と呼ぶ。（一巻葵六六頁注二参照）

一二 人並みすぐれて何ごとにもたしなみ深く、優雅な趣味を身につけた女性の例としては。

（源氏）七「多くはあらねど、人のありさまの、（女の人の人柄の）それぞれに見捨てがたく立派な人々をとりどりにくちをしくはあらぬを見知りゆくままに、まことの心ばせおいらかに落ちゐたるこそ、（心の底から気立てがおっとりしていておだやかな人は）いと難きわざなりけれとなむ、（めったにいないものだと思うようになりました）思ひ果てにたる。八大将の母君を、幼かりしほどに見そめて、やむごとなくえ避らぬ筋には思ひしを、一〇常に仲よからず、隔てあるここちして止みにしこそ、今思へば、いと（お気の毒にも残念にも思われます）ほしくくやしくもあれ。またわがあやまちにのみもあらざりけりなど、（自分の胸一つに思い出しています）心ひとつになむ思ひ出づる。うるはしく重りかにて、（きちんとして）そのことの飽かぬかなとおぼゆることもなかりき。（不満だと思われることもありませんでした）ただいとあまり乱れたるところなく、（几帳面で）すくすくしく、すこしさかしとやいふべかりけむと、（どちらかというと頭のよすぎる人だったであろうと）（離れて思うには信頼がおけ）思ふにはたのもしく、（共に暮すにはけむたいところのあった人柄でした）見るにはわづらはしかりし人ざまになむ。一二中宮の御母御息所なむ、さま異に心深くなまめかしき例には、まづ思ひ出でらるれど、（付き合いにくく）人見えにくく、（こちらが気苦労を感ずるような方でした）苦しかりしさまになむありし。（怨むのも当然なことで）怨むべきふしぞ、（まことにもっともだと思われる点を）げにことわりとおぼゆるふしを、（大層つらいことでした）やがて長く思ひつめて、（そのままずっと）深く怨ぜられしこそ、（怨まれたのは）いと苦しかりしか。（一時も油断できず気が置）心ゆるびなくはづ

一　こちらも相手の女も気楽にして、朝夕ともに仲よく暮すには、とても気の引けるところがありましたので。御息所の人柄、教養が立派過ぎた、という。

二　私の方が悪かったという気がしたまま終ってしまった、その罪ほろぼしに。

三　こうして后という高い地位に即かれるはずのご宿縁とはいいながら、（私が）お引き立てして。

四　世間の非難も人の恨みも意に介せずに。藤壺に続いて皇族が二代続けて后に立ち、かつ先に入内した弘徽殿の女御をも越えての立后であったこと、三巻少女二二九～二三〇頁参照。

五　（御息所は）あの世ながらも、私に対する考えを改めていられることでしょう。「れ」は軽い敬語。

六　今までかかわりのあった女性たちについて。

――明石の上

七　今上の女御のお世話役。女御の生母、明石の上。

八　たいした身分の女でもないと、最初から軽く見て。

かしくて、一われも人もうちたゆみ、朝夕のむつびをかはさむには、
（けて）　（気を許しては馬鹿にされるのではないかな）

いとつつましきところのありしかば、うちとけては見おとさるること
（どと）　（必要以上に体裁を飾っていたうちに）　（そのまま疎遠になった仲なのです）　（私と）

とやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。い
（の間にとんでもない浮き名が立って）　（ご身分にふさわしからぬ身の上になられた嘆きを）　（それは）

とあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、いみ
（深く思いつめていらっしゃったのがお気の毒で）　（確かに人柄を考えてみても）

じく思ひしめたまへりしがいとほしく、げに人がらを思ひしも、二わ
れ罪あるここちして止みにしなぐさめに、中宮を、三かくさるべき御
契りとはいひながら、取りたてて、世四のそしり人の恨みをも知らず、
（お世話申し上げているのを）　（うっかりした好き心にまかせて）　（人にも気の毒なことをし悔まれることも多くあります）

心寄せたてまつるを、五かの世ながらも見なほされぬらむ。今も昔も、
なほざりなる心のすさびに、六いとほしくやしきことも多くなむ」
（源氏）七

と、来し方の人の御上、すこしづつのたまひ出でて、「内裏の御方
（気楽な相手だと）

の御後見は、八何ばかりのほどならずとあなづりそめて、心やすきも
（従順で）　（おっとりしていると）

のに思ひしを、なほ心の底見えず、際なく深きところある人になむ。
（人に気を許さぬ）

うはべは人になびき、おいらかに見えながら、うちとけぬけしき下
（どこということなく気の置けるところのある人です）

に籠りて、そこはかとなくはづかしきところこそあれ」とのたまへ

九 ほかの人は、会ったことがありませんので、存じませんが。

一〇 はっきりとではありませんが、何かと様子を目にする機会も時々ありますので。二人は、女御が東宮妃として入内した当時に、宮中ではじめて会って以来（四巻藤裏葉二九七頁参照）、女御のお産の折など、接触の機会があった。

一一 女御は、長い間お育て申したよしみから、大目に見て下さるだろうと、安心に思っております。

一二 あれほど、けしからぬ人と不快に思っておられた人を。「めざまし」は、身分の低いくせに生意気なと、見下す気持。

——紫の上

一三 女御にとってよかれと、心底から思っておられるからのことだと（源氏は）お思いになると、普通にはとても出来ないことと思われるので。紫の上が、明石の上に女御の世話を託していること。

一四 さすがに心の中ではとやかく思わないでもないのですが。嫉妬したりすることもあるが、の意。

一五 大勢の女と付き合ってきましたが。

一六 とても余人に代えがたい感心なお人柄です。「けしきあり」の尊敬表現である。「けしきあり」は、ひとかどの風情があるというほどの意。

一七 にやにやして。冗談めかした風情。

源氏、女三の宮の許に赴き泊る

一八 女三の宮は、自分を快からず思っている人（紫の上）がいようともお気づきでなく。

（紫上）ば、「異人は見ねば知らぬを、これは、一〇まほならねど、おのづからけしき見るをりをりもあるに、いとうちとけにくく、心はづかしき深い様子がよく分りますが ありさましるきを、いとたとしへなきうらなさを、いかに見たまふらむと、つつましけれど、女御は、おのづからおぼしゆるすらむとのみ思ひてなむ」とのたまふ。

明石の上 とても馴れ馴れしくできず 気の置けるたしなみ 〔紫上〕 〔明石上が〕 気の引けることですが

一二 さばかりめざましと心おきたまへりし人を、今はかくゆるして見えかはしなどしたまふも、一三女御の御ための真心なるあまりぞかしとおぼすに、いとありがたければ、「君こそは、一四さすがに隈なきにはあらぬものから、人により、ことに従ひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ。さらに、一五ここら見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。一六いとけしきこそものしたまへ」と、一七ほほゑみて聞こえたまふ。

いになったりなさるのも 〔紫上が〕 大目に見てお会 〔源氏〕 あなたは 相手により 事情次第で 使い分けて心配 全く りなさる方なのでした あなたのように行き届いた人はいな いものでした

「宮に、いとよく弾き取りたまへりしことのよろこび聞こえむ」とて、夕つかたわたりたまひぬ。一八われに心おく人やあらむともおぼし

（源氏） 〔女楽で〕 琴を弾くことがおできになったお礼を申し上げましょう 〔その日の〕 〔寝殿に〕

たらず、いといたく若びて、ひたすら（ひどく無邪気な様子で）ひとへに御琴に心入れておはす。（気を入れていらっしゃる）「今は、暇ゆるしてうち休ませたまへかし。（お暇を下さって休息させて頂きたいものです）ものの師は心ゆかせてこそ。（大層つらかったここしばらくの苦労のかいあって）いと苦しかりつる日ごろのしるしありて、うしろやすくなりたまひ（もう安心できるまでにご上達になったことです）にけり」とて、御琴どもおしやりて、大殿籠りぬ。

対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて聞きたまふ。かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語ども（女房たち）にも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かや（浮気な）（不実な男にかかわりあった女）（こんな）話をたくさん物語っている中でも）うなることを言ひ集めたるにも、つひによるかたありてこそあめれ、（[女は]結局は頼れる一人の男がいるものらしいのに）あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げに、のたまひつるや（確かに）うに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽（人並みすぐれた）（幸運にも恵まれた身の上ながら）かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてや止みなむとすらむ、あぢきなくもあるかな、など思ひ続けて、夜ふけて大殿籠りぬる暁がたより、御胸をなやみたまふ。人々見たてまつりあつかひて、「御消息聞こえさせむ」と聞こゆるを、「いと便ないこと」と制したまひて、（胸の痛みでお苦しみになる）（女房たちがご介抱に手を焼いて）（紫上）

一 師匠というものは、（ご褒美を下さって）喜ばせないといけないものです。「ものの師」は、一八五頁注一〇参照。

二 紫の上は。東の対にいるのでこういう。

三 宵の間、起きていらして。

紫の上、わが身の寄るべなさを嘆く　翌暁、突如発病

四 こうして、世間によくある話としていろいろ物語っているたくさんの昔話でも。物語は、昔の世の事実譚という建て前である。以下、紫の上の感慨。

五 美しい女に目のない男。

六 （自分は）人とは違って、寄るべないありさまで過して来た境涯であることよ。ずっと源氏の正式な北の方としてではなく過してきたこと。それゆえ、今は北の方として、女三の宮がいる。

七 源氏がおっしゃったように。一八九頁参照。

八 世間の女が、堪えがたく、不満なこととする、女の悩みの付きまとって離れない身の上で終るのであろうか。女三の宮のことを思う女の悲しみがにじむ。

九 （源氏に）お知らせ申し上げましょう。

一〇 それはいけません。女三の宮に対して気を遣うのである。

一一 女御のもとから、こちら（紫の上のもと）にお使いがあったので。女御は寝殿の東面にいる。

一二 昨日（紫の上に）申し上げなさった（厄年なので）用心なさらねばならないといったことなど、お思い合せになって。（一八八頁参照）

一三 朝食である。女三の宮のもとから急遽帰った趣。

一四 果物、木の実、菓子などの軽い食事。ここは果物であろう。

一五 ひどくおっくうがりなさって。まるで受けつけないさま。

一六 印を結び、陀羅尼を唱えて仏の加護を念ずる真言密教の作法。

堪へがたきをおさへて明かしたまひつ。御身もぬるみて、御ここちもいとあしけれど、院もとみにわたりたまはぬほど、かくなむとも聞こえず。

女御の御方より御消息あるに、「かくなやましくてなむ」と聞こえたまへるに、おどろきて、そなたより聞こえたまへるに、胸つぶれて、急ぎわたりたまへるに、いと苦しげにておはす。「いかなる御ここちぞ」とて探りたてまつりたまへば、いと熱くおはすれば、昨日聞こえたまひし御つつしみの筋などおぼしあはせたまひて、いと恐ろしくおぼさる。御粥などこなたに参らせたれど、御覧じも入れず、日一日添ひおはして、よろづに見たてまつり嘆きたまふ。はかなき御くだものをだに、いとものの憂くしたまひて、起き上がりたまふこと絶えて日ごろ経ぬ。いかならむとおぼし騒ぎて、御祈りども、数知らずはじめさせたまふ。僧召して、御加持などせさせたまふ。そことところともなく、いみじく苦しくしたまひて、胸は時々お

たまらない苦しさをこらえて　熱でほてって　ご気分もひど　源氏もすぐにもこちらにお帰りにならないその間　これこれともお知らせ申さない　（女房）　お具合が悪くていられます　お返事　女御の方から［源氏に］　どきりと　申し上げたのに　［紫上は］　お帰りになってみると　（源氏）どんなご気分ですか　身体にさわってご覧になると　［源氏は］　こちらでさし上げたけれども　［源氏は］見向きもなさらず　お側にいらして　何かとご介抱に心を痛めていらっしゃる　どうなることかと［源氏は］心配なさって　ご祈禱　苦しがりなさって　おさせになる　どことということもなく　胸の痛みは時々

ひどい発作が起るといったご病状は
こりつつわづらひたまふさま、堪へがたく苦しげなり。さまざまの
数限りもないが　ききめ
御つつしみ限りなければ、しるしも見えず。重しと見れど、おのづ
快方に向うようなきざしがあれば希望が持てるのだが　重態と見えても　たまたま
からおこたるけぢめあるはたのもしきを、いみじく心細く悲しと見
たてまつりたまふに、異事おぼされねば、御賀の響きもしづまりぬ。
丁重に　お見舞を
かの院よりも、かくわづらひたまふよし聞こしめして、御とぶらひ
いとねむごろに、たびたび聞こえたまふ。

二月も過ぎて、二条の院に移る

同じさまにて、二月も過ぎぬ。いふ限りなくおぼし嘆きて、こころ
[源氏は]言いようもなくご心配になって　[紫上を]お移し申し上げなさった
みに所をかへたまはむとて、二条の院にわたしたてまつりたまひ
六条の院　上を下への騒ぎで
つ。院のうちゆすり満ちて、思ひ嘆く人多かり。冷泉院も聞こしめ
紫の上　源氏　懸命になって　ご看護に手を尽していらっし
し嘆く。この人亡せたまはば、院も、かならず世を背く御本意とげ
夕霧　普通に行うものはもとより　ほかに特別に
たまひてむと、大将の君なども、心を尽くして見たてまつりあつか
やる　行わせなさる
ひたまふ。御修法などは、おほかたのをばさるものにて、取り分き
てつかうまつらせたまふ。いささかものおぼし分く隙には、「聞こ
ゆることを、さも心憂く」とのみ恨みきこえたまへど、限りありて

一　禁忌にふれぬよう、生活を慎むこと。

二　ほかのことをお考えになる余裕もないので、朱雀院の御賀の準備の騒ぎも沙汰止みになってしまった。最初は「若菜など調じてや」（一六四頁）とあって正月中の予定だったのが、帝の御賀との兼ね合いで「二月十余日」（一六八頁）に延期されていた。

三　御賀を受けられるはずだった朱雀院。

四　ためしに場所を変えてご覧になろうということで。若菜上で、明石の姫君の初産の折「陰陽師どもも、所をかへてつつしみたまふべく申し」て、明石の町に移ったことが見える（九二頁）。

五　紫の上が「わが御私の殿とおぼす二条の院」（若菜上八三頁）である。

六　きっと出家の素志をおとげになるであろうと。冷泉院のご心配である。続いて「大将の君なども」と、夕霧の心配を重ねる。

七　紫の上は、多少とも意識の確かな折には。「隙」は、病気の隙の意。

八　かねてお願い申し上げていること（出家のこと）を、お許しもなく、情けのう存じます。

九　（寿命で）仕方なくお亡くなりになってしまうことよりも。以下、源氏の心中の思い。

一〇 ご自分から出家してしまわれるお姿を見ては。「やつす」は、地味な尼姿に姿を変える意。

一一 とてもしばらくの間も堪えがたく、惜しく悲しく思われるに違いないので。

一二 確かに、とても望みが持てそうにないほど衰弱して、もうこれきりかとお見えになる時も多いので。先の紫の上の訴えは、出家の功徳によって回復するかもしれないし、生前の罪を軽めることにもなるから、という含みで言われているので、源氏も出家を許そうかと思い迷うのである。

一三 六条の院の女三の宮のもとにも、源氏はほんのちょっとお出かけになることもなく。二条の院の紫の上に付ききりのさま。

一四 ただ女君たちがいらっしゃるだけで、（六条の院のはなやかさも）紫の上お一人がいられたせいであったのだと見える。

一五 普通のお身体でもいらっしゃらないのですから。身重の女御を案ずる言葉。

一六 自分に取り憑いているかもしれない物の怪が女御に移ることを恐れる。

一七 女御に伴われて来ている一番下の皇子。一八三頁に源氏の言う「三の宮」であろう。

明石の女御も看護に尽す

別れ果てたまはむよりも、目の前に、一〇わが心とやつし捨てたまはむ御ありさまを見ては、一一さらに片時堪ふまじくのみ、惜しく悲しかるべければ、（源氏）「昔より、私自身がみづからぞかかる本意深きを、出家の後に残ってあなたがとまりてさうざうしくおぼされむ心苦しさにひかれつつ過ぐすを、張合いなく思われようことが気がかりなあまり思いとどまっているのにさかさまにうてて出家なさろうとお思いなのですかち捨てたまはむとやおぼす」とのみ、それを反対に私を捨惜しみきこえたまふに、一二げにいと頼みがたげに弱りつつ、限りのさまに見えたまふをり多かるを、（源氏は）心を痛められてはいかさまにせむとおぼしまどひつつ、どうしたものかと一三宮の御方にも、あからさまにわたりたまはず、御琴どももすさまじくて、場違いな感じで皆ひきこめられ、取り片付けられ六条の院の院のうちの人々は、皆ある限り二条の院につどひ参りて、すっかり皆この院には、火を消ちたるやうにて、一四ただ女どちおはして、人ひとりの御けはひなりけりと見ゆ。

女御の君もわたりたまひて、（二条院に）（源氏と）一緒に紫の上を看病申し上げなさるもろともに見たてまつりあつかひたまふ。「ただにもおはしまさで、（紫上）一五もののけなどいと恐ろしきを、早く参りたまひね」と、（宮中に）お帰りなさい苦しいなかからも一六苦しき御ここちにも聞こえたまふ。一七若宮の、

一 縁起でもない、そんなことを考えてはいけません。お悪いようでも、めったなことにはおなりになるまい。大丈夫だと、力づける。

二 考え方のひろやかな器量の人には、しあわせもそれに応じて大きく。『河海抄』は『孝経』至徳要道篇の注「小にして焉を取れば小さく福を得。大にして焉を取れば大いに福を得」を引く。

三 気の短い人間は、長くその地位を保つことはなく。「常からず」の形は不審であるが、河内本諸本の多くも同じ。青表紙本は大島本以下ほとんど「常ならず」。

四 紫の上のお気立てが世にも稀なほど立派である旨を、はっきりと申し上げさせなさる。それによって神仏の加護を祈らせるのである。「罪軽し」は、前世の罪障が軽くてこの世に立派な人として生れたこと。

病状なお好転せず

五 御修法を取り行う主僧の称。

六 僧が、加持祈禱のため、終夜寝所の近くに詰めること。

七 御物の怪だなどと名乗って正体を現すものもな

いとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても、いみじく泣きたまひて、「おとなびたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」とのたまへば、女御、せきあへず悲しとおぼしたり。「ゆゆしく、かくなおぼしそ。さりともけしうはものしたまはじ。心によりなむ、人はともかくもある。おきて広きうつはものには、幸ひもそれに従ひ、狭き心ある人は、さるべきにて、高き身となりても、ゆたかにゆるべるかたは後れ、急なる人は、久しく常からず、心ぬるくなだらかなる人は、長き例なむ多かりける」など、仏神にも、この御心ばせのありがたく罪軽きさまを、申しあきらめさせたまふ。

御修法の阿闍梨たち、夜居などにても、近くさぶらふ限りのやむごとなき僧などは、いとかくおぼしまどへる御けはひを聞くに、いといみじく心苦しければ、心を起こして祈りきこゆ。すこしよろしきさまに見えたまふ時、五六日うちまぜつつ、また重りわづらひた

〔紫上は〕 〔紫上〕大きくなられるのを 拝見できないことになるのでしょうね 私のことは忘れておしまいでしょうね 〔源氏〕 気持の持ちようで 人間はどうにもなるものです 立身出世したとしても ゆったりとゆとりのある点で 心がおだやかでおっとりした人間は 劣り 〔寿命も〕 そうなる宿縁で 〔涙を〕とどめがたく 〔源氏の〕取り乱していられる お側近く控えている高僧たちなどは 心を奮い起して祈禱してさし上げる 幾分か快方に向う様子にお見えの時が 五六日時々あったかと思うと

い。よりましに駆り移されて名乗ったりする物の怪もないのである。
八 ほかのことに気を遣うゆとりもおありでないようだ。次に柏木を登場させ、密通事件に筆を運ぶ伏線。
九 そう言えば。話題を転ずる時の常套句。
一〇 柏木。
一一 太政官で大納言に次ぐ要職。左右大臣、大納言とともに政事を議する。従三位相当。
一二 希望の叶えられないせつない思いをどうしようもなくて。女三の宮を忘れかねて、せめてものことにと思って、というほどの意。

柏木の近況　中納言に昇進　女二の宮を北の方とする

一三 身分の低い更衣の腹にお生れになった方なので。女三の宮の母は、藤壺の女御であった（若菜上一一頁）。
一四 柏木は、女二の宮ではどうしても気持が満たされなくて。「わが心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」（『古今集』巻十七雑上、題しらず、読人しらず）による措辞。
一五 女三の宮に対するひそかな恋心を捨てきれず。
一六 若菜上一二三頁参照。
一七 女三の宮の侍従の乳母。「御」は「侍従の乳母」全体にかかる。「侍従」は女房としての名。

柏木、女三の宮を忘れかねて、小侍従を語らう

まふこと、いつとなくて月日を経たまへば、なほいかにおはすべきにか、よかるまじき御ここちにやと、おぼし嘆く。御もののけなど言ひて出で来るもなし。なやみたまふさま、そこはかと見えず、ただ日に添へて弱りたまふさまにのみ見ゆれば、いともいとも悲しくいみじくおぼすに、御心の暇もなげなり。

（いつ果てるともなく　やはりどうおなりになるのだろう　お治りにはならぬご病気なのかと　〔源氏は〕　ご病気の様子は　どこがお悪いとも見えず　日がたつにつれて　〔源氏は〕）

まことや、衛門の督は、中納言になりにきかし。今の御世には、いと親しくおぼされて、いと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても、思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。下臈の更衣腹におはしましければ、心やすきかたまじりて思ひきこえたまへり。人がらも、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはすれど、もとよりしみにしかたこそなほ深かりけれ、なぐさめがたき姨捨にて、人目にとがめらるまじきばかりに、もてなしきこえたまへり。

（今上のご治世では　今を時めく人物である　わが身の声望が高まるにつけても　女三の宮　北の方に頂戴したのだった　〔柏木は〕多少軽くお思いする気持がどうしてもおありだった　〔女二宮の〕　普通の身分の女に比べてみれば　どことなく格段に上品でいらっしゃるが　はじめに女三の宮に執心した気持はやはり深かったので　人目にあやしまれない程度に　〔北の方として〕大切にお扱いしていられる　〔柏木は〕　相談相手は）

なほかの下の心忘られず、小侍従といふかたらひ人は、宮の御侍

一 柏木は、早くから女三の宮の噂を身近にお聞きして。

二 大層おきれいでいらっしゃいます、帝（朱雀院）が大事にお育てしておいでの様子などを。はじめは乳母が柏木に向って語る直接話法のような書き方で、すぐ間接話法に転じている。

三 紫の上の病気のため、源氏もずっと六条の院にいらっしゃらないので、女三の宮のご身辺は人目も少なくひっそりしているであろうと、柏木は見当をつけて。この機会にと思うのである。

四 こんなに命もちぢめるほど真剣に思っていることなのに。

五 一向にそのかいがないので。事態の進展がないことをいう。「しるし」は、ききめの意。

六 （進んで女三の宮を源氏に降嫁させた）朱雀院におかれてさえ。三行先の「すこし悔いおぼしたる御けしきにて」にかかる。

七 源氏が、こんなふうに多くの婦人に情けをかけていらして。以下、ある人の朱雀院への報告。

八 ひとりでさびしくお寝みになる夜の続くことが多く。「夜な夜な」は、元来、男女の共寝すべき毎夜を意味する歌語。

九 臣下の、気楽なお世話役（夫）を決めるというのであれば。

従の乳母の娘なりけり、その乳母の姉ぞ、かの督の君の御乳母なりければ、早くより気近く聞きたてまつりて、まだ宮幼くおはしましし時より、いときよらになむおはします、帝のかしづきたてまつりたまふさまなど、聞きおきたてまつりて、かかる思ひもつきそめたるなりけり。

三 かくて院も離れおはしますほど、人目少なくしめやかならむをおしはかりて、小侍従を迎へ取りつつ、いみじうかたらふ。「昔より、四 かく命も堪ふまじく思ふことを、かかる親しきよすがありて、御あ様子をりさまを聞き伝へ、堪へぬ心のほどをも聞こしめさせて、たのもしきに、五 さらにそのしるしのなければ、いみじくなむつらき。院の上だに、七 かくあまたにかけかけしくて、人におされたまふやうにて、八 一人大殿籠る夜な夜な多く、つれづれにて過ぐしたまふなり、など人の奏しけるついでにも、すこし悔いおぼしたる御けしきにて、同じくは、九 ただ人の心やすき後見を定めむには、まめやかにつかうま

（柏木）
（女三の宮のご幼少の頃から）
（侍従の乳母 ― 小侍従）
（女三宮の乳母）
（姉（柏木の乳母））
（度々邸に呼んでは）
（熱心に手引きするよう口説く）
（宮のご）
（あなたのような親しい手づるがあって）
（抑えがたい私の気持も宮にお聞き頂いて）
（心丈夫に思っているのに）
（女三宮は）紫の上に気圧されるようなふうで
（所在なくお過しのようです）
（後悔なさったご様子で）
（真面目にお世話申し上げるようなことなら）

一〇 柏木を夫にした女二の宮の方が。以下も朱雀院のもらされた言葉の趣。

一一 おいたわしくも残念にも、どんなにつらい思いでいることか。

一二 確かに同じお血筋の方と思って（女二の宮を）頂戴したのだが、それはそれと思われることなのだった。女二の宮は女二の宮で、女三の宮とは違う、自分の思いは満たされない、の意。

一三 女三の宮との結婚を、恐れ多いことながら若輩の私がお望み申し上げた次第は。「及ぶ」は、手を届かせる。柏木としては、背伸びして望んだというほどの気持がある。

一四 もう一押し、朱雀院が私にお慈悲を掛けて下さったならば。「いたはり」は、恩顧。

一五 それはとても望みのなかったことです。

一六 ご宿縁とかいうことがあるようですが、もともと（源氏と女三の宮との間には）それがあって。女三の宮が源氏と結婚したのは、もともとそうなる前世からの因縁があったのだ、と言う。「はべなる」は「はべんなる」の撥音無表記の形。

つるべき人をこそ、定むべかりけれ（選べばよかった）、とのたまはせて（仰せになって）、女二の宮の、なかなかうしろやすく、行く末ながきさまにてものしたまふなること、とのたまはせけるを伝へ聞きしに、いとほしくもくちをしくも、いかが思ひ乱るる。げに同じ御筋とは尋ねきこえしかど、それはそれとこそおぼゆるわざなりけれ」と、うちうめきたまへば、小侍従、「いで、あなおほけな。それをそれとさし置きたてまつりたまひて、またいかやうに限りなき御心ならむ」と言へば、うちほほゑみて、「さこそはありけれ。宮にかたじけなく聞こえさせ及びけるさまは、院にも内裏にも聞こしめしけり。などてかは、さてもさぶらはざらまし、となむ、ことのついでにはのたまはせける。いでや、ただ、今すこしの御いたはりあらましかば」など言へば、「いと難き御こととなりや。御宿世とかいふことはべなるをもとにて、かの院のこと出でてねむごろに聞こえたまふに、立ち並びさまたげきこえさせたまふべき御身のおぼえとやおぼされし。このころこそ、すこしもの

（女二宮を）何と大それたことを（思わず嘆声をあげられると）脇におのけ申し上げておかれて（柏木は）どのように途方もないことをお考えなのでしょう（柏木）そういうものだよ（朱雀院）当時ご承知だったのだ（柏木が夫になっても不足なことがあろう）（院も）何かの折には仰せられたことなのだ（小侍従）（源氏）それに張り合ってお妨げ申し上げることができるほどの貫禄がご自分におありだとお思いでしたか（出して熱心にお望みになったのに）近頃こそ（お口に）偉そう

ものしく、御衣の色も深くなりたまへれ」と言へば、いふかひなく
はやりかなる口ごはさに、え言ひ果てたまはで、「今はよし、過ぎ
にしかたをば聞こえじや。ただかくありがたきものの隙に、気近き
ほどにて、この心のうちに思ふことの端、すこし聞こえさせつべく
たばかりたまへ。おほけなき心は、すべて、よし見たまへ、いと恐
ろしければ、思ひ離れてはべり」とのたまへば、「これよりおほけ
なき心は、いかがはあらむ。いとむくつけきことをもおぼし寄りけ
るかな。何しに参りつらむ」と、はちふく。
「いで、あな聞きにく。あまりこちたくものをこそ言ひなしたまふ
べけれ。世はいと定めなきものを、女御、后も、あるやうありても
のしたまふたぐひなくやは。ましてその御ありさまよ、思へばいと
たぐひなくめでたけれど、うちうちは心やましきことも多かるらむ。
院の、あまたの御なかに、また並びなきやうにならはしきこえたま
ひしに、さしもひとしからぬ際の御方々にたちまじり、めざましげ

とても敵わないほどに
濃くおなりですが
強硬な物言いに
遠慮のない
おしまいまでおっしゃりきれず（柏木）
もうやめよう
過ぎたことはお話しすまいよ
こんなめったにないよい機会に
則近くで
少し申し上げることができるように
とりはからって下さい
料簡が
ほかにあるものですか
何とも恐ろしいことをお考えつきになったものです
（小侍従）
これ以上の大それた
どうして同ったのでしょう
あまりにも大げさなものの言い方をされるというものだ
（柏木）
内情はおもしろくないこともたくさんあるに違いない
も並ぶ者もなくすばらしいけれども
朱雀院
たくさんのお子様方の中で
ほかに肩を並べる方もないように大切にお育て申し上げなさったのに
宮のご様子といったら
いかに
にょうご
きさき
ひさか
きは
かたがた

一 衛門の督は従四位下相当であるが、中納言は従三位相当。令制によれば、四位は深緋の袍、二位三位は浅紫の袍。

二 大それた料簡は、一切、まあ見ていて下さい、とても恐ろしいことだから、持ってはいないのですよ。女三の宮と通ずるような大それたことは考えていないから、と言う。

三 口をとがらせる。『河海抄』に「撥撫はらひすつる也」、『岷江入楚』に「今の世の世俗に、はちはらひするといふ類なり」という。払いのける、拒絶するというほどの意にとるのである。三巻松風一二二頁に既出。

四 まあ、何とも聞き苦しいことを。

五 男女の縁は、どうなるか分ったものではないのだから、女御、后と申しても、わけがあって男と情けをかわされるようなお方がいないわけでもあるまい。『河海抄』『細流抄』など、業平と二条の后のことなどを思ってか、という。

六 とても（宮とは）同列に扱えない身分の方々（六条の院のほかの妻妾たち）とご一緒で、宮に対して失礼に当るようなこともあるに違いないのだ。

なることもありぬべくこそ。いとよく聞きはべりや。世の中はいと常なきものを、ひときはに思ひ定めて、はしたなく、突き切りなることなのたまひそよ」とのたまへば、「人におとされたまへる御ありさまとて、めでたきかたにあらためたまふべきにやははべらむ。

ヒ これは世の常の御ありさまにもはべらざめり。ただ、御後見なくてただよはしくおはしまさむよりは、親ざまに、とゆづりきこえたまひしかば、かたみにさこそ思ひかはしきこえさせたまひためれ。あいなき御おとしめ言になむ」と、果て果ては腹立つを、よろづに言ひこしらへて、「まことは、さばかり世になき御ありさまを見たてまつり馴れたまへる御心に、数にもあらずあやしきなれ姿を、うちとけて御覧ぜられむとは、さらに思ひかけぬことなり。ただ一言、物越にて聞こえ知らすばかりは、何ばかりの御身のやつれにかはあらむ。神仏にも思ふこと申すは、罪あるわざかは」と、いみじき誓言をしつつのたまへば、しばしこそ、いとあるまじきことに言ひ返

何もかもよく知っているのですよ　この世は先のことは　一概に物事を決めてかかって　皆目分らぬものなのに　ぶっきらぼうなこと　取り付く島もなく　ほかの方にひけを取っていらっしゃ（小侍従）を言われるものではないよ　今さら別の結構なご縁組をなさるというわけにもまいりませんでしょう　るからといって　お二人お互いにそのようなお気持でいらっしゃるのでしょう　お頼み申し上げなさ［朱雀院が］ったので　（柏木）　なだめて　［女三宮の］　あれほど世にまたとない源氏の立派なお姿を日頃見馴れて　いらっしゃる　願いの筋を　罪になることだろうか　［小侍従は］初めのうちこそ　全くとんでもないことだとことわっ

七 源氏とのお間柄は、世間の普通のご夫婦仲というわけのものでもございませんでしょう。

八 お世話役がなくて頼りなくお暮しになるよりは、親代りになって頂こう、と。

九 的はずれな悪口をおっしゃるものです。

一〇 本当のところを言うと。

一一 物の数でもない、見すぼらしい、つくろわぬ姿を、近々とお目にかけようとは、一向に思ってもいないことなのだ。女三の宮と近々と逢うことなど思ってもいない、の意。「なれ姿」は、着馴れた普段着姿。源氏に対して卑下の気持でいう。

一二 物を隔てて私の気持を申し上げる程度のことなら、それが、どれほどの宮のご身分の汚れになろう。「やつれ」は、身を落すというほどの意。

一三 大層な誓約を並べ立てておっしゃると。決して間違いは犯さないと誓ってみせるのである。

一　分別の足りない若女房は。小侍従のこと。

二　宮の御帳台のまわりに女房たちが大勢はべって。女房たちが宿直しているのである。帳台は、一巻図録九参照。

三　宮がお寝みになっているお側に、しかるべき人が必ずはべっていられるので。乳母や上臈の女房である。

柏木、小侍従の手引きで、女三の宮に近づく

四　どうなのか、どうなのかと、毎日催促されてうんざりして。「極」は「極」の音便、疲れる意。

五　宮に近づいて、かえって、いよいよ気持が乱れるであろうといったことまでは、考えもせず。宮に会ってかえって惑乱がつのり、過失を犯すことになるとあらかじめ言う。このあたり、柏木の気持を、その心事に即して書いているので、敬語がない。

六　六条の院で女三の宮の姿を垣間見た蹴鞠の夕（若菜上一二七～八頁）。六年前のことである。

七　賀茂の祭（四月中の酉の日）の前の吉日を選んで、斎院が賀茂川原で御禊をする行事。普通は午の日に行われる。

ていたが　柏木が　命に代えてもとひどく思い詰めてお頼み

しけれ、一もの深からぬ若人は、人のかく身にかへていみじく思ひの

になるのを　都合のよい　手立ていたしま

たまふを、え否び果てで、「もしさりぬべき隙あらば、たばかりは

しょう　源氏

べらむ。院のおはしまさぬ夜は、御帳のめぐりに人多くさぶらひて、

どんな折をう

三御座のほとりに、さるべき人かならずさぶらひたまへば、いかなる

かがって　すきを見つけたらよいのでしょう

をりをかは、隙を見つけはべるべからむ」と、わびつつ参りぬ。

当惑しながら帰参した

四いかにいかにと、日々に責められ極じて、さるべきをりうかがひ

適当な機会を　やっと見つけ

出して　知らせてよこした〔柏木は〕　ひどく姿をやつし人目を忍ん

つけて、消息しおこせたり。よろこびながら、いみじくやつれ忍び

で　本当に　自分自身としてもいかにも不届きなことに思われるので

ておはしぬ。まことに、わが心にもいとけしからぬことなれば、気

近く、なかなか思ひ乱るることもまさるべきことまでは、思ひも寄

お側近くで　自分の気持もお話し申し上げたなら

らず、ただ、いとほのかに御衣のつまばかりを見たてまつりし春の

ほんのちらりと　端　〔女三宮の〕お姿を

夕の、飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまを、すこし

忘れがたくいつまでも思い出されなさる

気近くて見たてまつり、思ふことをも聞こえ知らせては、一行の御

返事なども頂けるだろうか　かわいそうにとも思って下さろうか

返りなどもや見せたまふ、あはれとやおぼし知る、とぞ思ひける。

四月十余日ばかりのことなり。御禊明日とて、斎院にたてまつりた

〔お手伝いに〕さし上

八 そう身分が高くはない若い女房や童女など。これらは御禊の行列を見物に行くつもりの者たち。

九 宮のお側近くに控えているはずの按察使の君も。女房の名。

一〇 按察使の君の恋人という趣。系図不詳の人物。

一一 御帳台の東側の宮の御座所の端に。帳台の帳の中にまで導き入れた体。

一二 そんな所にまで引き入れてよいものであろうか。小侍従の軽率さを批判する草子地。

柏木、宮をかき口説く

一三 帳台の浜床の下に。『河海抄』に「床の高さ三尺、鬼気の及ばざる也見養性抄」と注する。『類聚雑要抄』には浜床の高さ、一尺あるいは九寸の例が見える。

まふ女房十二人、ことに上﨟にはあらぬ若き人、童女など、おのがじしもの縫ひ、化粧などしつつ、物見むと思ひまうくるも、とりどりに暇なげにて、御前のかたしめやかにて、人しげからぬをりなりけり。近くさぶらふ按察使の君も、時々通ふ源中将、せめて呼び出ださせければ、下りたるまに、ただこの侍従ばかり、近くはさぶらふなりけり。よきをりと思ひて、やをら御帳の東面の御座の端に坐らせつ。さまでもあるべきことなりやは。

宮は、何心もなく大殿籠りにけるを、近く男のけはひのすれば、院のおはするとおぼしたるに、うちかしこまりたるけしき見せて、床の下に抱きおろしたてまつるに、ものにおそはるるかと、せめて見上げたまへれば、あらぬ人なりけり。あやしく聞きも知らぬことどもをぞ聞こゆるや。あさましくむくつけくなりて、人召せど、近くくもさぶらはねば、聞きつけて参るもなし。わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬけしき、いとあはれ

げなさる
晴着を縫ったり
見物に出かけようと支度しているのも
それぞれ
ひっそりとして
人が多くはいない折なのだった
〔宮の〕
〔局に〕お下がっている間
無理に
〔小侍従は〕
小侍従
〔柏木を〕そっと
坐らせた
源氏がおいでなのだと
〔男は〕いかにも恐れかしこまったそぶりで
〔宮は〕悪い夢を見ているのかと思って
精一杯
違う人なのだった
おかしな聞いたこともないようなことを
何ということかと恐ろしくなって
あれこれ申し上げるではないか
わなわな震えていられる様子は
にも控えていないので
気も動転していらっしゃる面持は
とても痛々しく

一 物の数でもないつまらぬ私ですが、こんなにもひどくあなたにお嫌われ申す身の上とは、思われぬことでございます。これほど嫌われるのは心外だ、の意。

二 昔から、身の程知らずにもあなたをお慕いする気持がございましたが、いちずに秘めたままにしておきましたならば。「はべなましかば」は「はべりなましかば」の撥音便の撥音無表記の形。

三 なまじ、意中をお漏らし申し上げて。女三の宮の降嫁を願い出たことをいう。

四 私が（源氏より）一段劣っていただけのことで、人より深いあなたに対する気持を無駄なものにしてしまいましたことだと。

五 このように大それた振舞をお目にかけましたことも。宮に近づいたこと。

六 考えてみますと、いかにも浅はかなことで申し開きのしようもありませんから、よくない料簡を起すようなことはさらさらないつもりでございます。手を出すようなことはしない、と言う。

可憐なさまだ
にらうたげなり。「（柏木）一数ならねど、いとかうしもおぼしめさるべき身とは、思うたまへられずなむ。二昔よりおほけなき心のはべりしを、ひたぶるに籠めて止みはべなましかば、心のうちにくたして過ぎぬべかりけるを、三なかなか漏らしきこえさせて、朱雀院のお耳にもはいったのもできたでしょうが院にも聞こしめされにしを、全く問題にならないことのようにも卯せになりませんでしたので望みをつなぐ気ですがこよなくもて離れてものたまはせざりけるに、頼みをかけ持になりましてそめはべりて、四身の数ならぬひときはに、人より深き心ざしをむなしくなしはべりぬることと、無念に思うようになりました気持が動かしはべりにし心なむ、何もかももう取り返しのつかぬことと思い返してみましてもよろづ今はどれほど深く私に取りついてしまいましたものかひなきことと思うたまへ返せど、いかばかりしみはべりにけるに残念だとも
か、年月に添へて、くちをしくも、つらくも、ひどいとも気味悪くもむくつけくも、あはれにも、さまざまに深く思いがつのるばかりですので悲しくいろいろに深く思うたまへまさるに、こらえかねてせきかねて、五かくおほけなきさまを御覧ぜられぬるも、六かつはいと思ひやりなくはづかしければ、言い続けるうちに罪重き心もさらにはべるまじ」と言ひもてゆくに、この柏木なのだったと人なりけりとおぼすに、〔宮は〕いとめざましく恐ろしくて、何とも不届きな恐ろしいことに思われてつゆいらへも一言のご返事もなさらないしたまはず。「いとことわりなれど、（柏木）いかにもごもっともですが世に例なきことにもはべらぬ世間にたぐひ例のないことでもありません

七（ご返事も下さらないような）世にまたとないつれないお仕打ちですと、私も、情けなさのあまり、かえっていちずな気持になろうやもしれません。そんなことになっては大変だからと、宮の返事をうながす。

柏木、我を忘れて宮に迫る　猫の夢見る

八 女三の宮は、はたから想像したところは、威厳があって。朱雀院の姫君で二品内親王、源氏の正室とあっては、近づきがたい方だと思われる。

九 なまじ色めいた振舞には及ばないでおこう、と思っていたけれども。

一〇 どこでもいいから、宮をお連れして人目につかぬ所におかくまい申して、自分も、世間の暮しを捨てて行方をくらましてしまいたいものだ。『大和物語』百五十四段、百五十五段に、男が女を盗んで山に籠るという悲恋の物語がある。『伊勢物語』の六段なども想起される。

一一 ほんのしばしうとうとしたともいえない夢の中に。この前後、宮との間に密通のことがあったことを暗示する。

一二 あの手なずけた猫が（一四三〜四頁参照）。『細流抄』に「懐妊の事也」といい、『眠江入楚』に「夢レ獣ヲ（ユメミル）は懐胎の相也」という。

のに を、めづらかに情なき御心ばへならば、いと心憂くて、なかなかひたぶるなる心もこそつきはべれ。あはれとだにのたまはせば、それをうけたまはりてまかでなむ」と、よろづに聞こえたまふ。

八 よその思ひやりはいつくしく、もの馴れて見えたてまつらむもは

馴れ馴れしくお逢い申し上げることなど気のひけることだと思われるようなお方なので

づかしくおしはかられたまふに、ただかばかり思ひつめたる片端聞こえ知らせて、なかなかかけかけしきことはなくて止みなむ、と思ひしかど、いとさばかり気高うはづかしげにはあらで、なつかしく

[柏木は] これほどまでに　別にそれほど気品が高く気のひけるような様子ではなくて　やさしく

可憐な感じで　どこまでももの柔らかな感じにお見えになる　上品でとても美しく

らうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじくおぼゆることぞ、人に似させたまはざりける。さかしく思ひしづむる心も失せて、一〇いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えて止みなばや、とまで思ひ乱れぬ。

思われるところは　誰とも違う感じでいらっしゃるのだった　[柏木は] 冷静に自制する気持　我を忘れた

[柏木の]

一一ただいささかまどろむともなき夢に、一二この手馴らしし猫の、いとらうたげにうち鳴きて来たるを、この宮にたてまつらむとて、わが率て来たるとおぼしきを、何しにたてまつりつらむと思ふほどに、お

女三の宮にお返し申し上げようと思って　自分が　連れて来たと思われるのだが　どうしてお返し申し上げたのだろうと思ううちに　目が

一 思いも寄らぬ事の成行きに呆然たる思いで。

女三の宮の驚きと悲しみ

二 やはりどうしてもこんなふうに、のがれられぬ前世からのご宿縁が浅くはなかったのだと、おあきらめ下さい。

三 あの、宮にしてみれば身に覚えもなかった、御簾の端を猫が綱を引いてかかげた夕方のことも、お話しした。若菜上一二六～八頁の六条の院での蹴鞠の折のこと。

四 なるほど柏木の言う通り、そんなことがあったのであろうと、取り返すすべもなくくやしく。柏木がこれほど自分に執心するには、なるほど確かにそんなきっかけもあったのであろう、という気持。

五 情けない宿縁に取り付かれたお身の上なのだった。女三の宮の気持を、地の文で代弁した筆致。

二人のきぬぎぬの別れ

六 なまじな逢瀬である。せっかく思いは遂げたが、かえってつらい思いでいると、柏木の気持を述べたもの。

どろきて（さめて）、いかに（どうしてこんな夢を見たのだろうと）見えつるならむと思ふ。

宮は、いとあさましく、うつつともおぼえたまはぬに（現実のことと思われなさらないので）、胸ふたがりておぼしおぼほるるを（胸もふさがる思いで悲しみに沈んでいられるのに）、「なほかくのがれぬ御宿世の浅からざりけると思ほしなせ。みづからの心ながらも（私のしでかしたこととはいえ）、うつし心にはあらずなむおぼえはべる」（正気の沙汰ではないという気がいたします）。三 かのおぼえなかりし御簾のつまを、猫の綱ひきたりし夕のことも聞こえ出でたり。四 げに、さはたありけむよと、くちをしく、契り心憂き御身なりけり。五 院（源氏）にも、今はいかでかは見えたてまつらむと、悲しく心細くて、いと幼げに泣きたまふを、いと（まるで子供のように）かたじけなくあはれと見たてまつりて、人の御涙をさへのごふ袖は、いとど露けさのみまさる。

（宮のお涙までをも）

（恐れ多く）

（いとしく）

（夜も）明けゆくけしきなるに、出でむかたなく（帰って行く気にもなれず）、六 なかなかなり。「いかがはしはべるべき。いみじく憎ませたまへば、また聞こえさせむこともありがたきを、ただ一言御声を聞かせたまへ」と、よろづに聞こえなやますも、うるさくわびしくて、もののさらに言はれたまは

（どうしたらよいのでしょう）（ひどく私をお嫌いのようですから）（二度とこうしてお話し申し上げることもないでしょうに）（何もおっしゃれないでいられるので）（げてせがむのも）（あれこれ申し上）（ひとこと）（宮は）わずらわしく情けなくて）（柏木）一体

七 しまいには、薄気味悪くなってしまいます。あなたが何を考えているのか分らない、という気持。

八 それなら、もう駄目なのでしょうね。あなたの好意を得ることはできないのですね、という気持。

九 （それが、こうしてあなたに冷たくされて）今夜きりの命と覚悟を決めますのも、悲しい限りです。

一〇 建物の隅の柱と柱の間。宮の居所は寝殿の西側であるから、寝殿の廂の間の西南の隅。屏風を広げて立てまわすのは、奥の人目を憚る気持。次の「戸」は、寝殿西南隅の妻戸。

一一 妻戸に面して西の対に通ずる渡殿。以下、その渡殿の南に面した戸が、昨夜柏木が忍び入った時のまま開いており、まだ外の暗いことが察しられる、という文面。

一二 妻戸をあけただけでは暗いので、光を求めて廂の間の格子を手ずから上げるのである。

一三 正気もなくなってしまいました。何をするか分りませんよ、というほどの気持であろう。

一四 私たち二人の深い宿縁をしみじみ思わせる夢のお話も申し上げたいのですが。懐妊のしるしである猫の夢を見たこと。

ねば、「果て果ては、むくつけくこそなりはべりぬれ。（柏木）七 またかかるこんなことはほかに例もありますまいやうはあらじ」と、いと憂しと思ひきこえて、（柏木）八「さらば不用なめり。いっそ死んでしまったほうがましです身をいたづらにやはなし果てぬ。何としても命に未練があればこそいと捨てがたきによりてこそ、かくまでもはべれ。してお逢いもしたのです今宵に限りはべりなむもいみじくなむ。少しでもお心つゆにても御心ゆるしたまふさまならば、を開いて下さるお気持がおありでしたらそれにかへつるにても捨てはべりなまし」とて、その代りということで命を捨てても何の惜しいこともありません かき抱きて出づるに、果てはいかにしつるぞと、あもあらぬ思いでいられるきれておぼさる。（宮を）一〇 隅の間の屏風をひき広げて、戸を押しあけたれば、（宮は）我に一体どうしたことかと妻戸を押しあけてみると一一 渡殿の南の戸の、昨夜入りしがまだあきながらあるに、まだ明けぐ夜明けの暗い時刻なのであろうれのほどなるべし、ほのかに見たてまつらむの心あれば、（宮を）格子をやを ら引き上げて、（柏木）「かういとつらき御心に、一三 うつし心も失せはべりぬ。少しでも気持を落着けるようにとお思いなら すこし思ひのどめよとおぼされば、不憫な奴とだけでもおっしゃって下さあはれとだにのたまはせよ」と、（宮を）おどしきこゆるを、何ということを言う人かいとめづらかなりとおぼして、ものも言はむとしたまへど、身体がふるえてわななかれて、いかにも幼げないと若々しき御さまなり。

ただ明けに明けゆくに、とても気が気でなくいと心あわたたしくて、（柏木）一四「あはれなる夢

一（今は四月であるが）秋の空よりもありとあらゆる悲しみをそそる。柏木の心事を述べたもの。「木の間より漏り来る月の影見れば心尽くしの秋は来にけり」（『古今集』巻四秋上、読人しらず）を踏まえる。

二 起き出てあなたとお別れしてどこに帰って行ってよいやら分らぬこの夜明けの暗い頃に、一体どこからの露がかかってしとどに濡れるこの袖なのでしょう。「空も知られぬ」と「いづくの露」が響き合う。「露」は涙を意味し、冒頭の「おきて」には、「露」の縁語「置きて」が響く。

三 柏木が帰ろうとしている様子なのに、少しほっとなさって。歌が後朝の別れの歌だからである。

四 この夜明けの暗い空に悲しいわが身は消えてしまってほしいものです、あのことは夢だったのだと思ってすまされもしますように。「見る」は「夢」の縁語。「なむ」は願望の意の終助詞。

五 弱々しげに。歌の「消えななむ」に響かせていう。

六 「飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなきここちする」（『古今集』巻十八雑下、女友だちと物語して別れてのちにつかはしける　みちのく）。これを別れともない女と別れて来た男の歌に取りなして踏まえる。上の「出でぬる」には、身体を離れて出て行った魂の意も掛けられる。

七 正室の女二の宮のお邸。

八 父の致仕の大臣の邸。

柏木の源氏に対する恐れ

語りも聞こえさすべきを、（こんなに私をお嫌いですから）かく憎ませたまへばこそ。さりとも、今おぼしあはすることもはべりなむ」（それ思い当られることもございましょう）とて、（気もそぞろに）のどかならず立ち出づる明けぐれ、秋の空よりも心尽くしなり。

（柏木）二
おきてゆく空も知られぬ明けぐれに
いづくの露のかかる袖なり

（袖を）
と、ひき出でて（訴え申し上げると）愁へきこゆれば、三 出でなむとするに、すこしなぐさめたまひて、

（女三宮）四
明けぐれの空に憂き身は消えななむ
夢なりけりと見てもやむべく

五 とはかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、（聞きも果てぬありさまで）聞きさすやうに（帰って来た）（歌にあるように）（宮のもとに）て出でぬる魂は、六 まことに身を離れてとまりぬるここちす。

七 女宮の御もとにもまうでたまはで、大殿へぞ忍びておはしぬる。うち臥したれど目も合はず、（あの猫の夢が確かにその通りになることも）見つる夢のさだかに合はむことも難きをさへ思ふに、（夢の中の）かの猫のありしさま、いと恋しく思ひ出でらる。さ

九 胸を張ってこの世に生きてゆくこともできなくなってしまったと。「まばゆし」は、まぶしい、気がひけるの意。上の「さても」以下、柏木の心中。

一〇 相手の女三の宮にとっては言うに及ばず。女三の宮は、自分と通ずることで、正室として夫の源氏を裏切ったことになるので、その罪状は明白、言うに及ばぬことである、の意。

一一（我ながらどうしてあのようなことをしたか）恐ろしいことをしでかしたものだと思われるので。

一二（女御、更衣との密通といった）そうしたはっきりした罪過には該当しないにしても。

一三 この六条の院（源氏）に不快の念をいだかれ申すことは。「目をそばむ」は、にらむ、白眼視する意。漢語「側目」から来た語（一巻桐壺一一頁注七参照）。

一四 この上ない高貴な女性と申し上げても。前に「帝の御妻」とあったが、『花鳥余情』は「二条五条の后などの類也」という。『伊勢物語』を想像しているのである。

一五 うわべはたしなみがありおっとりしているけれども、生地はそうもゆかぬといった気性の人は。

一六 女三の宮は、（それとは違って）深いお考えもおありでないが。心交わしての密通ではないのだが、の意。

女三の宮の恐れ

てもいみじきあやまちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれと、［柏木は］恐ろしくそらはづかしきここちして、何となし身もすくむ思いがして ありきなどもし出歩きもなさらない たまはず。女の御ためはさらにもいはず、一〇わがここちにもいとある我ながらも 不埒千万な所 まじきことといふなかにも、一一むくつけくおぼゆれば、思ひのままに思うように人なかに 行という中でも もえまぎれありかず。帝の御妻をも取りあやまちて、ことの聞こえお妃でも相手に間違いを犯して 事が表沙汰になった あらむに、かばかりおぼえむことゆゑは、身のいたづらにならむ、これほど不埒なと思われることのためなら 命を捨てるようなことになっても 苦しくおぼゆまじ。一二しかいちじるき罪にはあたらずとも、一三この院に目をそばめられたてまつらむことは、いと恐ろしくはづかしくおぼゆ。

一四限りなき女と聞こゆれど、すこし世づきたる心ばへまじり、上は色めいた気性もあって ゆゑあり子めかしきにも従はぬ下の心添ひたるこそ、とあることか あれやこれやの男の かることにうちなびき、心かはしたまふたぐひもありけれ、一六これは 甘言につい身をゆだねて 男と情を交わされるといったお方もあるものだが 深き心もおはせねど、ひたおもむきにもの懼ぢしたまへる御心に、ものにおびえるご性分なので ただもうひたすら 後ろめたく人に顔向けできない思 ただ今しも、［密通のことを］人の見聞きつけたらむやうに、まばゆくはづかしくお 人が気づいたかのように もう今にも

いがなさるので　明るい所ににじり出ることもようなさらず　いかにも情けないわ
ぼさるれば、明かき所にだにえゐざり出でたまはず、いとくちをし
が身の上なのだったと　ご自身つくづく思い知られるようだ
き身なりけりと、みづからおぼし知るべし。

一なやましげになむ、とありければ、大殿聞きたまひて、いみじく
ご心配になっていられる紫の上のご病気に加えて　この宮もどうしたことかとお心を騒
御心を尽くしたまふ御ことにうち添へて、またいかにとおどろかせ
がせなさって［六条院に］　どこが苦しいといった様子もおありではなく
たまひて、わたりたまへり。そこはかと苦しげなることも見えたま
沈みきって　まともに顔をお合せ申すこともなさらない
はず、いといたくはぢらひしめりて、さやかにも見合はせたてまつ
のを
りたまはぬを、二久しくなりぬる絶えまをうらめしくおぼすにやと、
おいたわしくて　紫の上のご病状など
いとほしくて、かの御ここちのさまなど聞こえたまひて、「今はの
が最期なのかもしれません
とぢめにもこそあれ。三今さらにおろかなるさまを見えおかれじとて
なむ。四いはけなかりしほどよりあつかひそめて、見放ちがたければ、
ここ幾月何もかもうち捨てた格好で　この
かう月ごろよろづを知らぬさまに過ぐしはべるぞ。おのづから、こ
時期を過ぎましたら　お分り頂けましょう　［源氏が］　何も
のほど過ぎば、見なほしたまひてむ」など聞こえたまふ。かくけし
お気づきでないのも　おいたわしく　申しわけなく
きも知りたまはぬも、いとほしく心苦しくおぼされて、宮は、人知
れず涙ぐましくおぼさる。

源氏、女三の宮を見舞う

一　お加減がお悪いようですという知らせがあったので。女三の宮が何か沈みきった様子なので、二条の院の源氏のもとに一応の報告があったのである。

二　もうずいぶんこちらへご無沙汰しているのを恨めしくお思いなのかと。女三の宮の態度が、源氏の目には、紫の上の看病にかまけている自分への闇怨と映る。

三　この期に及んで薄情な扱いをしたと恨まれるようなことのないようにと思いまして。向うに付ききりになっていることの言い訳。

四　幼少の頃から面倒を見てきまして、このままほってはおけませんので。紫の上との特別な間柄を改めて説明する。

柏木の日常

五 宮にもまして、なまじ逢瀬を遂げたばかりにつらい悩みが深まる一方で。

六 賀茂の祭の当日。四月中の酉の日。

七 仕える女の童であろう。

八 賀茂の祭は、葵と桂を挿頭にし、簾に挿し飾ったりする。

九 あのお方に無理無体にお逢いするという大それたあやまちを犯して、くやまれることだ、神様が大目に見て下さる—世間に許される—挿頭（葵草）ではないのに。「つみをかす」は「摘み犯す」（無理に摘む）と「罪犯す」を掛け、「葵」に「逢ふ日」を響かせる。

一〇 なまじ宮に逢ったばかりになめなければならぬつらさである。柏木の心事を直叙したもの。

一一 誰のせいにしようもない、我から求めての所在なさに。

一二 気がひけ、心外なと思われるにつけ。夫の柏木に疎んじられて、妻としてまた皇女としての誇りを傷つけられた思い。

督の君（柏木）は、ましてなかなかなるここちのみまさりて、起き臥し明かし暮らし（日を過しかねていられる）わびたまふ。祭の日などは、物見（祭見物に我先にと）にあらそひ行く君達かき連れ来て、言ひそそのかせど、（同行をうながすけれども）なやましげにもてなして、（気分がすぐれないふりをして）ながめ臥したまへり。女宮（女二の宮）をば、かしこまりおきたるさまにもてなしきこえて、（丁重におうやまいするていにおあつかい申し上げて）をさをさうちとけても見えたてまつりたまはず、（親しくお逢い申すこともほとんどなさらず）わがかたに（自分の部屋）離れゐて、いとつれづれに心細くながめゐたまへるに、童べの持たる葵を見たまひて、（何もすることもなく）

（柏木）くやしくぞつみをかしける葵草

神のゆるせるかざしならぬに

と思ふも、いとなかなかなり。世の中静かならぬ車の音などを、よそのことに聞きて、人やりならぬつれづれに、暮らしがたくおぼゆ。（そのように）（一日がとても長く思われる）

女宮（女二の宮）も、かかるけしきのすさまじげさも見知られたまへば、何ごとは知りたまはねど、はづかしくめざましきに、もの思はしくぞおぼされける。女房など、物見に皆出でて、人少なにのどやかなれ

（こうした柏木のそぶりのつまらなそうな様子も見ていてよくお分りなので）（本当のわけはお分りにはならないが）（おもしろくない思いでいられるのだった）（女宮の）

一 十三絃の琴。
二 さすがに皇女でいられるだけあって。
三 どうせ頂くならもう一段上の女三の宮を頂くことのできなかったわが宿縁のつたなさよと、柏木はやはり未練断ちがたい思いでいる。
四 ご姉妹の中で、どうしてつまらぬ落葉のような方を頂いたのだろう、どちらも同じ朱雀院のご息女だけれども、の意。「もろかづら」（諸鬘）は、葵と桂の挿頭。後の読者が女二の宮を落葉の宮と呼ぶのは、この歌による。
五 女二の宮をずいぶん馬鹿にした陰口というものだ。皇女に対して斟酌を加える意味合いもある草子地。

紫の上、絶え入る

六 少しおよろしいようにお見えでしたのに。「隙」は、病気の隙間の意。小康状態。
七 数々のご祈禱の壇をこわして。「御修法」は、病気平癒のための密教の祈禱。本尊仏を掛けて、その前に炉壇を設ける。土を塗り固めるのが本来であるが、木で組み立てるものもある。

ば、うちながめて、（もの思う風情で）箏の琴なつかしく弾きまさぐりておはするけはひも、（弾くともなしに弾いていられる）さすがにあてになまめかしけれど、（気品があり優雅でいらっしゃるが）同じくは今ひと際及ばざりける宿世よと、なほおぼゆ。

（柏木）四
もろかづら落葉を何にひろひけむ
名はむつましきかざしなれども

（書き流しているのは）と書きすさびゐたる、五いとなめげなるしりうごとなりかし。

大殿の君（源氏）は、まれまれわたりたまひて、（六条院に）えふとも立ち帰りたまはず、（すぐにお立ち帰りになるわけにもいかず）静心なく（落着かぬ思いでいられると）おぼさるるに、「絶え入りたまひぬ」（息が絶えてしまわれました）とて、人参りたれば、さらに何ごともおぼしわかれず、（もう何もお考えになれず）御心もくれてわたりたまふ。（真暗になって）道のほどの心もとなきに、（気が気でないのに）げにかの院（二条の院）は、ほとりの大路まで人立ち騒ぎたり。殿のうち泣きののしるけはひ、（人々が一大声で泣き騒ぐ）いとまがまがし。（近くの）われにもあらで入りたまへれば、「日ごろは、いささか隙見えたまへるを、（女房）ここ数日は（我を忘れた面持で）急にこんなことになりましたにはかになむかくおはします」とて、さぶらふ限りは、（控える女房は皆）われも後れ（死出の旅のお供をと泣きうろたえる様子は）たてまつらじとまどふさまども、（大変なものだ）限りなし。御修法どもの壇こぼち、

物の怪出現、紫の上蘇生

僧なども、さるべき限りこそまかでね、ほろほろと騒ぐを見たまふに、さらば限りにこそはとおぼし果つるあさましさに、何ごとかはたぐひあらむ。

「さりとも、もののけのするにこそあらめ。いとかくひたぶるになる騒ぎそ」としづめたまひて、いよいよみじき願どもを立て添へさせたまふ。すぐれたる験者どもの限り召し集めて、「限りある御命にて、この世尽きたまひぬとも、ただ、今しばしのどめたまへ。不動尊の御本の誓ひあり。その日数をだにかけとどめたてまつりたまへ」と、頭よりまことに黒煙を立てて、いみじき心を起こして加持したてまつる。院も、ただ、今一度目を見合はせたまへ、いとあへなく限りなりつらむほどをだに、え見ずなりにけることのくやしく悲しきを、とおぼしまどへるさま、とまりたまふべきにもあらぬを、見たてまつるここちども、ただおしはかるべし。いみじき御心のうちを、仏も見たてまつりたまふにや、月ごろさらにあらはれ出で来

（源氏）
（僧たちを）
（僧）
（源氏は）
（人々の）

一〇 むやみにあてるも
一一 新たにお立てさ
一二 総てを
一三 この世の命が終られたにしても
一四 寿命で
一五 もうしばらく寿命をお延べ下さい
一六 この世にお引き止め申して下さい
一七 必死に心を奮い立てて
一八 全くはかない
一九 見ることができないでしまったことがくやまれ悲
二〇 お命もとてももちそうにもないのを
二一 取り乱していられるご様子は
二二 察してもらうほかない
二三 悲しみの極みの源氏のご心中を
二四 照覧なさったのであろうか

一 物の怪のしわざなのであろう。物の怪が病人を領して絶息させることがあると考えられていた。
二 蘇生のための大層な願を幾つも。病気平癒のために今まで立てた願の上に「いよいよ」大願を立てる。
三 法力にすぐれて加持祈禱に従う僧。
四 不動尊のご本誓もあることです。『河海抄』に「大般若経曰、定業亦能転」、『不動義軌』を引いて「又正報尽者、能延二六月住一」と注する。
五 『不動義軌』にいう六カ月。
六 仏のご加護をお祈りする。「加持」は、真言密教で、印を結び、陀羅尼を唱えて仏の加護を念ずること。
七 ここ幾月もの間全く正体を現さなかった物の怪が。前に「御もののけなど言ひて出で来るもなし」（一九九頁）とあった。

一 憑坐である。病人に取り憑いた物の怪をこれに駆り移す。物の怪はこの憑坐の口を借りて語る。病人は物の怪が離れて回復する。

二 物の怪は、ひどくこらしめられて。物の怪の駆り移された憑坐の女の童を僧たちが祈り責めた結果、物の怪は素姓の告白に及ぶ。

三 情容赦もなく、ひどいお仕打ちなので。

四 どうせ取り憑いたのなら、思い知らせてさし上げようと思いましたが。紫の上を絶息させたこと。

五 今はこうして悪道に堕ちた身の上ではありますが。成仏せずに魔界に生を享けているという。

六 ここまでもお側近く参ったのですから。物の怪となって紫の上に取り憑いたこと。

七 葵の上に取り憑いて源氏に話しかけた六条の御息所の生霊（二巻葵八六～八七頁）。それとそぶりが全く同じと見えたのである。

八 こんなことがこの世にあろうか、恐ろしいことだと心にしみて思った昔の一件とそっくり同じなのも、これからのことが気がかりで。御息所の生霊に取り憑かれて葵の上は亡くなったが、同じ御息所の死霊が紫の上に取り憑いているので、源氏は心配する。

九 本当に間違いないのか。「その人」は、誰それの意、ここは御息所のこと。

六条の御息所の死霊出現

ぬもののけ、小さき童女に移りて、呼ばひののしるほどに、やうやう生き出でたまふに、うれしくもゆゆしくもおぼし騒がる。

（一）（紫上は）（大声で何か訴えるうちに）（源氏は）（どうなることかともお心が騒ぐ）

いみじく調ぜられて、「人は皆去りね。院一所の御耳に聞こえむ。おのれを月ごろ調じわびさせたまふが、情なくつらければ、同じくはおぼし知らせむと思ひつれど、さすがに命も堪ふまじく、身を砕きておぼしまどふを見たてまつれば、今こそかくいみじき身を受けたれ、いにしへの心の残りてこそ、かくまでも参り来たるなれば、ものの心苦しさをえ見過ぐさで、つひにあらはれぬること。さらに知られじと思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、ただ昔見たまひしもののけのさまと見えたり。あさましくむくつけしとおぼししみにしことの変らぬもゆゆしければ、この童女の手をとらへて、引きすゑて、さまあしくもせさせたまはず。「まことにその人か。よからぬ狐などいふなるものの、たふれたるが、亡き人の面伏なること言ひ出づるもあなるを、たしかなる名のりせよ。また

（二）（物怪）（こらしめ苦しめなさるのが）（源氏が）（三）（昔の愛執の思いが残っておればこそ）（四）（お気の毒なご様子を見過すことができずに）（五）（とうとう正体を現してしまいました）（決して悟られまいと）（六）（顔を隠そうと）（憑坐の）（七）（八）（ぶざまな振舞もおさせにならない）（源氏）（九）（狂ったのが）（たちの悪い）（不名誉になることを口走るのもあるようだから）（はっきりと名を名乗るがよい）

一〇 私の身の上は昔と打って変ったあさましい姿になっていますが、昔どおりのお姿のまま空とぼけていらっしゃるあなたは、あなたなのですね。私はともかくとして、昔のままのあなたが空とぼけるとは、と咎める歌。

一一 秋好む中宮。源氏は紫の上に、御息所とのことの罪ほろぼしに、中宮を引き立ててお世話しているのだと語っている（一九二頁）。

一二 成仏せずに魂が宙をさまよっている体。

一三 幽冥、境を異にしてしまいましたので。

一四 人よりも軽んじて。直接には葵の上をさす。

一五 仲のよいお方同士のお話の折に。女楽の後、源氏が紫の上に御息所のことを語ったこと（一九一～二頁参照）。これが紫の上発病のひきがねになったのである。

人は知らないはずのことで
人の知らざらむことの、心にしるく思ひ出でられぬべからむを言へ。
私にはっきり思い出されるに違いないことを言ってみるがよい
さてなむ、いささかにても信ずべき」とのたまへば、ほろほろといたく泣きて、
そうしたら　信じよう

（物怪）一〇
「わが身こそあらぬさまなれそれながら
そらおぼれする君は君なり

ほんとにひどい　ひどい
いとつらし、つらし」と泣き叫ぶものから、さすがにもの恥ぢした
恥じらいを見せている様子は昔そのままで　それがかえってひどくいやらしく　情けないので
るけはひ変らず、なかなかいとうとましく心憂ければ、もの言はせじとおぼす。
[源氏は]

（物怪）一一
「中宮の御ことにても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらむ、なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむ、とまるものなりける。そのなかにも、生きての世に、人よりおとしておぼし捨てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いとうらめしく、今は
心にしみて思われないのでしょうか　ひどいお仕打ちと　この世で　まで残るものなのでした　お見捨てになったことよりも　ひねくれていて扱いにくい女だったと私のことをお口になさったことが

一 こんな恐ろしい身の上に成り果てていますので、こんな大変なことになったのです。魔界に身を堕した悪霊なので、ほんのちょっとした心のゆらぎでも、紫の上の大病の原因となった、と言う。

二 あなた（源氏）は、ご身辺の守りがかたく。源氏の身に備わった徳で、仏神の加護が厚いのである。

三 炎となってまつわりつくばかりで。地獄の責苦にも等しいというほどの気持であろう。

四 後宮のほかの方と寵を争いねたむような気持を起してはなりません。

五 斎宮は仏事を忌むので、斎宮在職当時の罪を軽くする仏事を営むように、と言う。

六 憑坐を一室に閉じ籠めて、紫の上は、また別の部屋にこっそりお移し申し上げなさる。物の怪から遠くに隔離するのである。

紫の上死去の噂が立つ

ただ亡（な）きにおぼしゆるして、異人（ことひと）の言ひおとしめむをだに、はぶき（死んだ者と大目に見て下さって　ほかの人が私の悪口を言う場合でも　打ち消してかば って頂きたいのにとその時ふとそう思っただけで）隠したまへとこそ思へとうち思ひしばかりに、（紫の上）かくいみじき身のけはひなれば、かく所狭（せ）きなり。この人を深く憎しと思ひきこゆることはなければ、守り強く、（とてもお側には寄りつけない感じで）いと御あたり遠きここちして、え近づき参らず、御声（お声だけでもせめてかすかに聞くばかりです）をだにほのかになむ聞きはべる。よし、今はこの罪軽（私の）（軽くするせめてもの法要をお営み下さい）むばかりのわざをせさせたまへ。修法（ずほふ）、読経（どきやう）とのしることも、身（大騒ぎすることも　私に）には苦しくわびしき炎（ほのほ）とのみまつはれて、さらに尊きことも聞こえ（つらい）ねば、いと悲しくなむ。中宮にも、このよしを伝へ聞こえたまへ。（決して）ゆめ御宮仕へのほどに、人ときしろひ嫉む心つかひたまふな。斎宮（ありがたいお経も全く耳に入りませんので）におはしましし ころほひの御罪軽（かる）むべからむ功徳（くどく）のことを、かならずせさせたまへ。いとくやしきことになむありける」など、言ひ続（心からくやまれることでございました）くれど、もののけに向ひて物語したまはむも、かたはらいたければ、（面と向って　具合の悪いことなので）封じこめて、上をば、また異方（ことかた）に、忍びてわたしたてまつりたまふ。

かく亡（う）せたまひにけりといふこと、世の中に満ちて、御とぶらひ（噂が　広まって　ご弔問）

七　賀茂の祭（四月中の酉の日）の翌日、上賀茂の神館に一泊した斎王が、紫野の斎院に帰る行列。

八「待てと言ふに散らでしとまるものならば何を桜に思ひまさまし」（『古今集』巻二春下、題しらず、読人しらず）。桜は盛りが短くて散るからこそ、すぐれて人にめでられるのだ、の意。下の「古言」は、古歌。

九　女三の宮。「二品になりたまひて、御封などまさる」（一六一頁）と前にあった。

一〇　本来のご身分にふさわしいご寵愛をお受けになるであろう。朱雀院の姫宮にふさわしい源氏の扱いをお受けになろう、の意。

一一　柏木は、昨日（祭の当日）一日中身をもてあましたのに懲りて。（二一三頁参照）

一二　太政官の職。中務、式部、治部、民部の四省を監督する。従四位相当。

一三「宰相」は、参議の中国風の呼び方。正四位下相当。藤原氏なのでその姓を冠して呼ぶ。

一四「散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世に何か久しかるべき」（『伊勢物語』八十二段）。『源氏釈』は「なごりなく散るぞめでたき桜花何か憂き世に久しかるべき」という歌を引く。『奥入』初句「のこりなく」。

柏木、弟たちと弔問

に聞こえたまふ（参上なさる）人々あるを、いとゆゆしくおぼす（［源氏は］縁起でもないと）。今日の帰さ見に出でたまひける上達部など、帰りたまふ道に、かく人の申せば、「いといみじきことにもあるかな（それはまことに大変なことになったものだ）。生けるかひありつる幸ひ人の、光失ふ日にて（亡くなる日だから）、雨はそぼ降るなりけり（そぼ降るのであったわ）」と、うちつけごとしたまふ（当座の思い付きを口になさる）人もあり。また、「かく足らひぬる人は（これほど総てに満ち足りた人は）、かならずえ長からぬことなり（きっと長生きはできないものなのです）。何を桜にといふ古言もあるは（はたの人が迷惑するというものだ）。かかる人の、いとど世にながらへて、世の楽しびを尽くさば、かたはらの人苦しからむ。今こそ二品の宮は、もとの御おぼえあらはれたまはめ（おいたわしく［紫上に］圧されていたご寵愛だったから）。いとほしげにおされたりつる御おぼえを」など、うちささめきけり（ひそひそ噂するのだった）。

衛門の督、昨日暮らしがたかりしを思ひて、今日は、御弟ども、左大弁、藤宰相など、奥のかたに乗せて見たまひけり（［車の］後ろの方）。かく言ひあへるを聞くにも、胸うちつぶれて（見物にお出かけだった皆が噂しているのを）、「何か憂き世に久しかるべき」と、うち誦じひとりごちて、かの院（二条の院）へ皆参りたまふ。たしかならぬことなればゆゆしくや（縁起でもないかと案じて）、とて、ただおほかたの御とぶらひに参りた（普通のお見舞のていで）

まへるに、かく人の泣き騒げば、〔噂は〕まことなりけりと、立ち騒ぎたまへり。

式部卿の宮も来邸

一 式部卿の宮もわたりたまひて、〔二条院に〕いといたく悲しみにご放心のご様子でおぼしほれたるさまにてぞ入りたまふ。二 人の御消息も、え申し伝へたまはず。大将の君、夕霧涙をのごひて立ち出でたまへるに、〔柏木〕「一体どうしたことです三いかにいかに。ゆゆしきさまに人の申しつれば、信じがたきことにてなむ。ただ久しき御なやみご病気をうけたまはり嘆きて参りつる」などのたまふ。〔夕霧〕「いと重くなりて月日経たまへるを、この暁より絶え入りたまへりつるを、もののけしわざなのでしたのしたるになむありける。ようやくのことで息を吹き返されたということを聞くことができまして四やうやう生き出でたまふやうに聞きなしはべりて、今なむ皆人心しづむめれど、まだいとたのもしげなしとても安心はできません心苦しきことにこそ」とて、まことにいたく泣きたまへるけしきなり。目もすこし腫れたり。衛門の督、五わがあやしき心ならひにや、夕霧この君の、いとさしも親しからぬ継母の御ことを、いたく心しめたひどく気にかけていられることだまへるかな、と目をとどむ。

一 紫の上の父君。
二 式部卿の宮は、弔問の人々のご挨拶も、奥にお取次ぎなさるゆとりもおありでない。宮はいわば身内だからである。
三 縁起でもないことを人が噂していましたので。死去の噂を婉曲に言う。
四 今やっと、皆、ほっとしているようですが。
五 自分のまともでない恋心からだろうか。源氏を裏切って及ばぬ恋に身をやつす自分の心事からおしはかって、夕霧も継母の紫の上に恋情を抱いているのかと疑う。

六 源氏は、こうして誰彼がお見舞に参上なさったということをお聞きになって。柏木その他の弔問客のことが、恐らく夕霧あたりを通じてようやく源氏の耳に届いた趣。

七 気もそぞろな思いでいますので。直接会って挨拶しないことのことわり。

八 こうしたのっぴきならぬ事情でもなければ、源氏の許に参上することもできそうになく。「らうろう」は、「牢籠」で、閉じ籠める意。相手を閉じ籠めて自由を奪う、またそうされた状態、両方の場合に使う。ここは、後者。

九 その心中は、立派とは言えないものだ。何も知らない源氏に対して、露顕を恐れる柏木の心中を批判した趣の草子地。

源氏、御息所の死霊を恐れる

一〇 大層な修法を数限りもなく。

一一 在世の当時でさえ、生霊になって現れるといった不気味なお人柄だったのが。以下、御息所についての源氏の所懐。

一二 女の身というものは、皆同じ、深い罪障を作る根源なのだと。仏説に説くところで、『河海抄』は『涅槃経』を引いて「所有三千界、男子諸煩悩、合集為一人、女人為業障、女人地獄使、能断仏種子、外面似菩薩、内心如夜叉」と注する。

六 かく、これかれ参りたまへるよし聞こしめして、〔源氏〕「重き病者の、落着きもなく にはかにとぢめつるさまなりつるを、女房などは、心もえをさめず、急に臨終かと思われる様子であったのを 取り乱して 乱りがはしく騒ぎはべりけるに、私自身もあわてふためいて みづからもえのどめず、心あわたしきほどにてなむ。ことさらになむ、後日あらためて かくものしたまへるよろこびは聞こゆべき」とのたまへり。こうしてお出で下さったお礼は申し上げましょう 督の君は胸つぶれて、かかるをりのららうろうならずはえ参るまじく、何がなし恐ろしく気がひけるのも けはひはづかしく思ふも、心のうちぞ腹ぎたなかりける。

かく生き出でたまひてののちしも、恐ろしくおぼして、またまた一〇いみじき法どもを尽くして、後にかえって〔源氏は〕 新たにお祈らせになる 加へ行はせたまふ。一二うつし人にてだに、魔道に堕ちて恐ろしい むくつけかりし人の御けはひの、まして世かはり、あやしきものの姿になっていられるであろうことを想像なさると 秋好む中宮をさまになりたまへらむをおぼしやるに、いと心憂ければ、中宮をあ この際は お世話申し上げることまでも つかひきこえたまふさへぞ、このをりはもの憂く、言ひもてゆけば、とどのつまりは 男と女の仲そのものまでがいやにな 一三女の身は、皆同じ罪深きもとゐぞかしと、なべての世の中いとはしられ あのほかに聞く人もいなかった紫の上との二人きりの睦言に 〔御息所のことを〕 く、かのまた人も聞かざりし御仲のむつ物語に、すこし語り出でた

一 確かにそうだったと、あの時のことをお思い出しになるにつけ、ひどく厄介なことを背負いこんだ気がなさる。死霊を恐れる気持。

二 ご病人が、剃髪出家したいと強くお望みなので。

紫の上、五戒を受ける

三 持戒の功徳によって平癒のこともあろうかと源氏はお思いになって。「忌むこと」は、戒を守ること。

四 殺生、偸盗、邪淫、妄語、飲酒の五つの戒律。在家の信者の守るべき戒律で、源氏は紫の上に正式の出家は許さないのである。

五 信者に戒を授ける師僧。

六 持戒の功徳のすぐれている旨を。「五戒龍王経、一日一夜間、持三帰五戒一人、生三十三天中一、所二守護一。又持二五戒一人、二十五神王被護、又以二清浄心一合掌不レ生二他念一人者、命終時、生二日摩尼天一経意」（『河海抄』）

紫の上、六月に入り小康を得る

七 五月雨（梅雨の長雨）の季節である。

八 紫の上は、すっきりしたご気分にはおなりになれないが。

まへりしことを言ひ出でたりしに、まことととおぼし出づるに、いとわづらはしくおぼさる。

御髪おろしてむと切におぼしたれば、忌むことの力もやとて、御頂しるしばかりはさみて、五戒ばかり受けさせたてまつりたまふ。御戒の師、忌むことのすぐれたるよし、仏に申すにも、あはれに尊きことまじりて、人わるく御かたはらに添ひゐて、涙おしのごひたまひつつ、仏を諸心に念じきこえたまふさま、世にかしこくおはする人も、いとかく御心まどふことにあたりては、えしづめたまはぬわざなりけり。いかなるわざをして、これを救ひかけとどめたてまつらむとのみ、夜昼おぼし嘆くに、ほれぼれしきまで、御顔もすこし面痩せたまひにたり。

五月などは、ましてはればれしからぬ空のけしきに、えさはやぎたまはねど、ありしよりはすこしよろしきさまなり。されど、なほ絶えずなやみわたりたまふ。もののけの罪救ふべきわざ、日ごとに

［物怪が］口にしたので
［頭の］
形ばかり
鋏を入れて
心打たれるありがたい文句も中にあるので［源氏は］見苦しいまでお側に寄り添って
紫の上と一緒に祈念なさる様子は
この世にまたとない偉いお方も
まことにこれほどご心痛になる非常の事態に際しては
冷静ではいらっしゃれない
今までよりは多少ご病状も落着かれた様子だ
どんな手立てをして
紫の上
命を取り止めてさし上げようかとそのことばかり
御息所の死霊
［物怪に］お苦しみ続けになる
救うための供養として
毎日
腑抜けたようにまでなって

九『法華経』二十八品、一部ずつを、御息所の死霊の成仏のために供えさせになる。新たに写経させて仏前に供えさせるのであろう。

一〇一定の期間、昼夜間断なく、交替で、『大般若経』『最勝王経』『法華経』などを読経すること。

一一物の怪は、正体を現すようになってからは、時々憑坐に乗り移って、悲しそうなことをいろいろ言うけれども。未練を断ってもう寄り付くまいといった趣旨のことを言うのであろう。

一二紫の上は、意識もないようなご病状のなかからも。以下、重態の紫の上が、かえって源氏の身の上を案じて病とたたかう様子。

一三この世からいなくなってしまうのも。以下、紫の上の心事。

一四いかにも思いやりのないことであろうと思われるので。「思ひ隈なし」は、考えが至らないの意。

一五あの思いもかけなかった柏木とのことを嘆き沈まれてこのかた。

女三の宮、柏木の胤を宿す

法華経一部づつ供養ぜさせたまふ。日ごとに何くれと尊きわざせさせたまふ。御枕上近くても、不断の御読経、声尊き限りして読ませたまふ。あらはれそめては、をりをり悲しげなることどもを言へど、さらにこのもののけ去り果てず。いとど暑きほどは息も絶えつつ、いよいよのみ弱りたまへば、いはむかたなくおぼし嘆きたり。なきやうなる御ここちにも、かかる御けしきを心苦しく見たてまつりたまひて、世の中になくなりなむも、わが身にはさらにくちをしきこと残るまじけれど、かくおぼしまどふめるに、むなしく見なされたてまつらむが、いと思ひ隈なかるべければ、思ひ起こして、御湯などいささか参るけにや、六月になりてぞ、時々御頭もたげたまひける。めづらしく見たてまつりたまふにも、なほいとゆゆしくて、六条の院には、あからさまにもえわたりたまはず。

姫宮は、あやしかりしことをおぼし嘆きしより、やがて例のさまにもおはせず、なやましくしたまへど、おどろおどろしくはあらず、

御息所の
[紫上は]
[源氏は]言いようもなく
[源氏の]
自分としては何一つ未練に思い残すこと
[源氏が]これほどご心痛のご様子なのに
もないであろうが
はかなくなった自分の
姿をお目にかけるのは
召し上がるせいか
気を張って
薬湯
[源氏は]久しぶりのこととうれしくお思いになるものの
まだとてもご心配で
女三の宮のもと
ほんのかりそめにもお出かけになれないでいられる
女三の宮
そのままお身体のお具合がおよろしくなく
ご気分がお悪くていられるけれど
ひどいご病状ではなくて

一 立ちぬる月より、ものきこしめさで、いたく青みそこなはれたまふ。
柏木 かの人は、わりなく思ひあまる時々は、夢のやうに見たてまつりけ
どうしても思いに堪えかねる折々には 夢のようにはかなく宮にお逢い申したが
れど、宮、尽きせずわりなきことにおぼしたり。院をいみじく懼ぢ
源氏〔常々〕
がっていられる宮にとって
きこえたまへる御心に、ありさまも人のほども、ひとしくだにやは
ある、いたくよしめきなまめきたれば、おほかたの人目にこそ、な
ひどく気取って風采も優美なので 世間一般の人の目から見れば
きたりの男よりはすぐれていて評判もよかろうが
べての人にはまさりてめでらるれ、幼くより、さるたぐひなき御あ
あのような人並みすぐれた源氏のご容姿を見なれていらした宮にとっては
りさまにならひたまへる御心には、めざましくのみ見たまふほどに、
かくなやみわたりたまふは、あはれなる御宿世にぞありける。御乳
懐妊のご様子に気がついて 源氏
母たち見たてまつりとがめて、院のわたらせたまふこともいとたま
不平を申して
しかないのにと
さかなるを、つぶやき恨みたてまつる。
〔宮が〕 〔源氏は〕 〔六条院に〕
かくなやみたまふと聞こしめしてぞわたりたまふ。女君は、暑く
洗って
むつかしとて、御髪すまして、すこしさはやかにもてなしたまへり。
さっぱりした風情でいらっしゃる
横になったまま洗い髪をわきに広げておいでだったので すぐにも いささかも
臥しながらうちやりたまへりしかば、とみにも乾かねど、つゆばか
美しく ゆったりとうねって
癖のある
りうちふくみ、まよふ筋もなくて、いときよらにゆらゆらとして、
乱れた毛筋もなくて

源氏、女三の宮を見舞うため、紫の上に暇を乞う

一 立ちぬる月より、ものきこしめさで、いたく青みそこなはれたまふ。
柏木 かの人は、わりなく思ひあまる時々は、夢のやうに見たてまつりけ
どうしても思いに堪えかねる折々には 夢のようにはかなく宮にお逢い申したが
れど、宮、尽きせずわりなきことにおぼしたり。院をいみじく懼ぢ
源氏〔常々〕
がっていられる宮にとって
きこえたまへる御心に、ありさまも人のほども、ひとしくだにやは
ある、いたくよしめきなまめきたれば、おほかたの人目にこそ、な
ひどく気取って風采も優美なので 世間一般の人の目から見れば
きたりの男よりはすぐれていて評判もよかろうが
べての人にはまさりてめでらるれ、幼くより、さるたぐひなき御あ
あのような人並みすぐれた源氏のご容姿を見なれていらした宮にとっては
りさまにならひたまへる御心には、めざましくのみ見たまふほどに、
かくなやみわたりたまふは、あはれなる御宿世にぞありける。御乳
懐妊のご様子に気がついて 源氏
母たち見たてまつりとがめて、院のわたらせたまふこともいとたま
不平を申して
しかないのにと
さかなるを、つぶやき恨みたてまつる。
〔宮が〕 〔源氏は〕 〔六条院に〕
かくなやみたまふと聞こしめしてぞわたりたまふ。女君は、暑く
洗って
むつかしとて、御髪すまして、すこしさはやかにもてなしたまへり。
さっぱりした風情でいらっしゃる
横になったまま洗い髪をわきに広げておいでだったので すぐにも いささかも
臥しながらうちやりたまへりしかば、とみにも乾かねど、つゆばか
美しく ゆったりとうねって
癖のある
りうちふくみ、まよふ筋もなくて、いときよらにゆらゆらとして、
乱れた毛筋もなくて

一 立ちぬる月より、ものきこしめさで、いたく青みそこなはれたまふ。

二 お食事も進まず、ひどく青ざめてやつれたご様子でいられる。悪阻のさま。

三 宮は、どこまでも無体なこととお思いでいられる。しょうことなしに逢うのだ、という気持。

四 柏木の容姿も人品も、源氏と同列とすらいえようか。とんでもない、格段の違いでと、下に続く文勢。以下、宮の柏木を厭う気持について述べる。

五 源氏に降嫁の前年、宮は「御年十三四ばかりおはす」（若菜上一二頁）とあった。

六 （そうした柏木の振舞を）身の程知らずと不快にお思いになるだけだったところへ。

七 こうしてその柏木の胤を宿してずっとお具合が悪くていらっしゃるのは。

源氏、女三の宮を見舞うため、紫の上に暇を乞う

八 紫の上。以下、二条の院で源氏が紫の上に暇を乞う場面。陰暦六月は酷暑の候であるが、涼味を際立たせようとする筆の運びである。

青みおとろへたまへるしも、色は真青に白くうつくしげに、透きたるやうに見ゆる御肌つきなど、世になくらうたげなり。もぬけたる虫の殻などのやうに、まだいとただよはしげにおはす。年ごろ住みたまはで、すこし荒れたりつる院のうち、たとしへなく狭げにさへ見ゆ。昨日今日かくものおぼえたまふ隙にて、心ことにつくろはれたる遣水、前栽の、うちつけにここちよげなるを見出だしたまひても、あはれに、今まで経にけるを思ほす。池はいと涼しげにて、蓮の花の咲きわたれるに、葉はいと青やかにて、露きらきらと玉のやうに見えわたるを、「かれ見たまへ。おのれひとりも涼しげなるかな」とのたまふに、起き上がりて見出だしたまへるも、いとめづらしければ、「かくて見たてまつるこそ、夢のここちすれ。いみじく、わが身さへ限りとおぼゆるをりをりのありしはや」と、涙を浮けてのたまへば、みづからもあはれにおぼして、

消えとまるほどやは経べきたまさかに

（やつれていられるのがかえって）（可憐な感じで）（この上なく痛々しい美しさに見える）（頼りなげな様子でいらっしゃる）（二条の院）（念入りに手入れされた）（紫上は）（一面に咲いているのに）（源氏）（あれを）（紫上が）（その上に）（ことなので）（源氏）（こうして元気なお姿を拝見するのは）（ついぞ最近ない）（悲しみの余り）（紫上は）（ご自身も胸がいっぱいになられて）（私ももうおしまいかと思われる時が何度もあったことです）（紫上）

一 ひどく手狭なまでに見える。広大な六条の院と思い比べられるからであろう。

一〇 昨日今日、こうして気持のはっきりしていられるご気分のよい時とて。「隙」は、病の隙の意。

一一 南の池に注ぐ庭の中の流れ。（三巻図録六、七参照）

一二 庭前の植込み。（同右参照）

一三 打って変ってたちまち、気持よさそうにさっぱりした風情なのを。「うちつけに」は、唐突に。手入れされた途端に、の意。

一四 しみじみと、今までよくぞ命永らえたものとお思いになる。

一五 自分ひとりだけ（悩みもなげに）涼しそうな面持でいることです。

一六 露が消えないで残っている束の間ほどもこれから生きられるでしょうか、ほんのたまたま蓮の露がこうして消え残っているそれだけのはかない命ですのに。「かかる」（懸かる）は「露」の縁語で、「かかる」（かくある）の意を掛ける掛詞。

蓮の露のかかるばかりを

とのたまふ。

（源氏）一 契りおかむこの世ならでも蓮葉に

玉ゐる露の心へだつな

二 出でたまふかたざまはもの憂けれど、三 内裏にも院にも聞こしめさむところあり、なやみたまふと聞きてもほど経ぬるを、目に近きに（身近な紫の上の病気に心を痛めていた間）心をまどはしつるほど、見たてまつることもをさをさなかりつるに、四 かかる雲間にさへやは絶え籠らむと、おぼし立ちて、（宮にお逢い申すこともほとんどなかったのだから）わたりたまひぬ。（お具合が悪いと聞いてからでも）

源氏、女三の宮を見舞い、懐妊を知る

宮は、五 御心の鬼に、（女三の宮）見えたてまつらむもはづかしう（源氏に）つつましくおぼすに、ものなど聞こえたまふ御いらへも聞こえたまはねば、日ごろの積りを、さすがにさりげなくてつらしとおぼしけると、心苦しければ、とかくこしらへきこえたまふ。六 大人びたる人召して、御こちのさまなど問ひたまふ。（女房）七「例のさまならぬ御ここちになむ」と、（何かとご機嫌をお取り申し上げなさる）（ご容態など）（長らく）（空恐ろしく気のひける思いでいられるので）（表には表さぬもののひどいとお思いだったのだと）（続いたご無沙汰を）

一 お約束しておきましょう、この世だけでなく来世も極楽の同じ蓮の上にと、その蓮の葉に玉と置く露―露の（いささかの）心の隔ても私に対してお持ちにならないで下さい。

二 これからお出かけになる六条の院の女三の宮のもとは、気が進まないけれども。紫の上と離れたくない源氏の気持。

三 帝も朱雀院もどうお聞きになるか、その手前もあり。帝は、女三の宮の兄君。

四 こうした雲の晴れ間にまで、二条の院に閉じ籠っているわけにもゆくまいと。「かかる雲間」は、天候の晴れ間と、紫の上の小康状態の意を掛ける。

五 お気がとがめて。「心の鬼」は、良心の呵責の意。

六 年輩の重立った女房。前々頁に「御乳母たち見たてまつりとがめて」とあった。その一人でもあろう。

七 普通とは違ったお加減でございます。普通のご病気ではない、ご懐妊らしい、と告げる。

ご気分のおすぐれでないご様子を
わづらひたまふ御ありさまを聞こゆ。「あやしくほど経てめづらし
（源氏）
き御ことにも」とばかりのたまひて、御心のうちには、年ごろ経ぬ
長年　連れ
添う方々ですらそういうことはないのに
る人々だにもさることなきを、不定なる御ことにもやとおぼせば、
格別　どうとも　相手になさらないで　ふぢやう　［宮の］
ことにともかくものたまひあへしらひたまはで、ただ、うちなやみ
痛々しげなのを
たまへるさまのいとらうたげなるを、あはれと見たてまつりたまふ。
おいたわしく
やっとのことで思い立たれて　［六条院に］
からうしておぼし立ちてわたりたまひしかば、ふともえ帰りたまは
すぐにも
［体どうしているかと紫の上のことがお気にかかってならな
で、二三日おはするほど、いかにいかにとうしろめたくおぼされる
いので　こまごまとお書きになる　（女房）
ば、御文をのみ書き尽くしたまふ。「いつの間に積る御言の葉にか
あらむ。いでや、やすからぬ世をも見るかな」と、若君の御あやま
女三の宮
ちを知らぬ人は言ふ。侍従ぞ、かかるにつけても胸うち騒ぎける。
柏木　［源氏が］
かの人も、かくわたりたまへりと聞くに、おほけなく心あやまり
いらだつ思いの数々を　［小侍従に］　ほんの
して、いみじきことどもを書き続けて、おこせたまへり。対にあか
ちょっと　［源氏が］
らさまにわたりたまへるほどに、人間なりければ、忍びて見せたて
（女三宮）　厄介なものを
まつる。「むつかしきもの見するこそいと心憂けれ。ここちのいと

〇 いつの間にあれだけたくさんのお言葉がたまるのでしょう。「積る」と「葉」は縁語。
一 なんと、姫様のお身の上が心配なこと。「世」は、男女の仲。源氏の愛情が紫の上に傾いていることを気に病む。
二 柏木の手引きをした小侍従。

柏木の手紙、源氏に発見される

三 身の程をもわきまえず、料簡違いをおこして。源氏に嫉妬を感ずるのである。
四 東の対。源氏と紫の上の居室であった所。
五 ちょうどお側に誰もいなかったので。

どあしきに」とて臥したまへれば、「なほただこの端書きの、いとほしげにはべるぞや」とて広げたれば、人の参るに、いと苦しくて、御几帳ひき寄せて去りぬ。いとど胸つぶるるに、院入りたまへば、えよくも隠したまはで、御茵の下にさしはさみたまひつ。

夜さりつかた、二条の院へわたりたまはむとて、御暇聞こえたまふ。「ここには、けしうはあらず見えたまふを、まだいとただよはしげなりしを、見捨てたるやうに思はるるも、今さらにいとほしくてなむ。ひがひがしく聞こえなす人ありとも、ゆめ心おきたまふな。今見なほしたまひてむ」とかたらひたまふ。例は、なまいはけなきたはぶれごとなども、うちとけ聞こえたまふを、いたくしめりて、さやかにも見合はせたてまつりたまはぬを、ただ世のうらめしき御けしきと心得たまふ。昼の御座にうち臥したまひて、御物語など聞こえたまふほどに暮れにけり。すこし大殿籠り入りにけるに、ひぐらしのはなやかに鳴くにおどろきたまひて、「さらば、道たど

一 それでも、ほんに、この端書きがおかわいそうなほどでございますよ。女三の宮の気をひこうとして言う。「端書き」は、手紙の初めの方にもどって、小さい字で念押しした文言。

二 宮の前に広げられた手紙をとっさに人目から隠す所作。

三 一層どきどきするのに。困惑する女三の宮の気持。

四 四角の今の座ぶとんにあたる物。（三巻図録一一参照）

五 女三の宮にお暇乞いを申し上げなさる。

六 私のことをあしざまにお耳に入れる人がいても。源氏のこちらへの滞在が短いのをけしからぬこととするような悪口。

七 （事情を知らぬ源氏は）ただ、夫にいつも側にいてもらえないのを恨めしく思っていられるのだと、お受け取りになる。「世」は、男女の仲。

八 昼間の御座所。

九 源氏はそのままそこで眠りに落ちた趣。「大殿籠り入る」は、「寝入る」の敬語。

一〇 途中が暗くならないうちに。「夕闇は道たどたど月待ちて帰れわがせこその間にも見む」（『古今六帖』一、夕闇、大宅娘女。原歌『万葉集』巻四）の言葉によったもの。

一一「月待ちて」（月の出を待って）とも歌っているようですのに。前注に引いた歌の言葉によって源氏を引き止める。この何気ない言葉が、翌朝、源氏が手紙を見出だすにいたる端緒になる。

一二 いかにも愛くるしい。無下にことわりもならぬ源氏の気持を、草子地が代弁する。

一三 名残を惜しみたいお気持なのだろうかと。同じ歌の言葉による。

一四 夕露（涙）に袖を濡らして泣けというおつもりで、ひぐらしの鳴くのを聞きながらも、起きて行かれるのでしょうか。夕方は尋ねて来て下さるはずの時ですのに、の余意があろう。「起きて」に「露」の縁語「置きて」が響く。

一五 私の帰りを待っている所でも、どういう思いで聞いていることでしょう、こちら（女三の宮）でもあちら（紫の上）でも人の心を騒がすひぐらしの声であることよ。「来めやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立ち待たれつつ」（『古今集』巻十五恋五、読人しらず）

一六 紫の上のことが気にかかって心落着かず。

一七 果物、木の実、菓子などの軽い摂り物。

一八 夏の、朝涼しい刻限。

たどしからぬほどに」とて、御衣などたてまつりなほす。（女三宮）一二「月待ちて、とも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは、（お召し直しになる）（いかにも初々しいそぶりで）一三憎からずかし。「その間にも」とやおぼすと、心苦しげにおぼして、立ちとまりたまふ。

（女三宮）一四
夕露に袖ぬらせとやひぐらしの
鳴くを聞く聞く起きてゆくらむ

子供のようにあどけないお気持そのままの歌を口ずさまれたのも可憐に思われるので　膝まず片なりなる御心にまかせて言ひ出でたまへるもらうたければ、ついて（源氏）ほんに困りました　ほっと溜息をおつきになるみて、「あな苦しや」と、うち嘆きたまふ。

（源氏）一五
待つ里もいかが聞くらむかたがたに
心さわがすひぐらしの声

どうしようかと思案なさって　すげなくするのもお気の毒なので　物思わしい気分になられて　召し上がりなどして　参りなどして、大殿籠りぬ。（お帰りになろうとして）

まだ朝涼みのほどにわたりたまはむとて、とく起きたまふ。（源氏）一八「昨

一 骨に紙を張った今の扇子。「かはほり」は、蝙蝠のこと。形の似るところから、夏扇の異名。
二 下に「御扇」とある。檜扇であろう。
三 前に「昼の御座」（二二八頁）とあった所。
四 薄緑色の薄様。「薄様」は、薄く漉いた鳥の子紙。薄様の染め紙で、艶書に用いられる。
五 紙にたきしめた薫物のかおりなど、ひどくしゃれていて。
六 紙二枚を重ねて（一重）、上の紙に書く。それが二つ。長文の手紙である。
七 お鏡の蓋をあけて、源氏の前にかかげ持つ女房。朝の身仕舞に奉仕するのである。
八 当然源氏のご覧になるはずの手紙であろう、と。
九 源氏が朝食のお粥など召し上がる方には目も向けずに。ひとり、必死に思いをめぐらす風情。
一〇 いいえ、まさか、昨日の柏木の手紙ではあるまい。以下、小侍従の心。
一一 あの時、宮がお隠しになったに違いない。
一二 なんと幼稚な、このような手紙を人目に触れる所にほっておかれて。「散らす」は、散らかす。手紙が人目に触れることを「散る」という。以下、源氏の心。
一三 やっぱりだ。言わぬことではない、という気持。

夜のかはほりを落して、これは風ぬるくこそありけれ」とて、御扇置きたまひて、昨日うたたねしたまへりし御座のあたりを、立ちとまりて見たまふに、御茵のすこしまよひたるつまより、浅緑の薄様なる文の押し巻きたる端見ゆるを、何心もなく引き出でて御覧ずるに、男の手なり。紙の香などいと艶に、ことさらめきたる書きざまなり。二重にこまごまと書きたるを見たまふに、まぎるべきかたなく、その人の手なりけりと見たまひつ。御鏡などあけて参らする人は、見たまふ文にこそはと、心も知らぬに、小侍従見つけて、昨日の文の色と見るに、いといみじく、胸つぶつぶと鳴るここちす。御粥など参るかたに目も見やらず、いで、さりとも、それにはあらじ、いといみじく、さることはありなむや、隠いたまひてけむ、と思ひなす。宮は、何心もなく、まだ大殿籠れり。あないはけな、かかるものを散らしたまひて、われならぬ人も見つけたらましかば、とおぼすも、心劣りして、さればよ、いとむげに心にくきところなき御

なま暖かいな　乱れている　端から　四　何気なく　気取った　五　筆跡　問違いようもなく　六　柏木　七　事情も知らないが　気がついて　八　大変なことになったと　どきどきと　九　一〇　いくらなんでも　そんなことがあっていいものか　一一　強いて　一二　思う　一三　自分でないほかの人が見つけでもしたら　見下される思いで　もう全く　たしなみ深いところのないお人柄

小侍従と女三の宮の狼狽

ありさまを、うしろめたしとは見るかし、とおぼす。（頼りないと常日頃思っていたのだ）

出でたまひぬれば、人々すこしあかれぬるに、侍従寄りて、「昨日のものはいかがせさせたまひてし。今朝、院の御覧じつる文の色こそ、似てはべりつれ」と聞こゆれば、あさましとおぼして、涙のただ出で来に出で来れば、いとほしきものから、いふかひなの御さまやと見たてまつる。「いづくにかは置かせたまひてし。人々の参りしに、ことあり顔に近くさぶらはじと、一四さばかりの忌をだに、心の鬼に避りはべしを、入らせたまひしほどは、すこしほど経はべりにしを、隠させたまひつらむとなむ思うたまへし」と聞こゆれば、

（女三宮）一五「いさとよ。見しほどに入りたまひしかば、ふともえ置きあへでさしはさみしを、忘れにけり」とのたまふに、いと聞こえむかたなし。寄りて見れば、いづくのかはあらむ。「あないみじ。かの君も、いといたく懼ぢ憚りて、けしきにても漏り聞かせたまふことあらばと、かしこまりきこえたまひしものを、ほどだに経ず、かかることの出

（女房たちが少しお側から散った隙に）（侍従）（源氏が）（あまりのことに仰天なさって）（宮は）（わけありげにお側近くにいるのを見られまいと）（源氏が）（入っていらしたのは）（時が）（たってから）（手紙を）（見ていた時に）（どこにあの手紙があろう）（小侍従）（まあ大変）（源氏を）（気ぶりだけでも）（源氏を）（恐ろしがっていらしたのに）（小侍従は）（なんとも申し上げようもない）（すぐにもしまえずに）（歯に）（柏木）（こんなことが起ります）

一 大体が、子供っぽいお振舞で、あのお方（柏木）にも姿をお見せになったので。最初の蹴鞠の時に姿を見られた不用意をなじる。だから、あれ以来ずっと、柏木が執着していたのだ、と言う。

二 私を恨んで手引きを頼み続けなさったのですが。柏木の執心の深さを言う。

三 （手引きしたからといって）すぐあの方と親しくおなりになるなんて、思ってもみたことでしょうか。

四 気のおけない、子供っぽいお方なので。小侍従は女三の宮の乳母子という親しい間柄でもある。以下、草子地。

五 気安くお思い申し上げているのであろう。

六 源氏の仕打ちを恨めしく思い、不平を言う。

七 この手紙が、それでもなお不審に思われるので。

源氏、柏木の手紙を点検

柏木の筆跡とは見たが、なお事態を信じがたい思いでいる。

八 柏木。衛門の督で、中納言を兼ねる（一九九頁参照）。

九 以下、その手紙の内容の概略。

一〇 それ以来、かえって不安でならないといったことをこまごまと書きしたためた文言は。

でまうで来るよ。すべていはけなき御ありさまにて、人にも見えさせたまひければ、年ごろさばかり忘れがたく、恨み言ひわたりたまひしかど、かくまで思うたまへし御ことかは。誰が御ためにも、いとほしくはべるべきこと」と、憚りもなく聞こゆ。心やすく若くおはすれば、馴れきこえたるなめり。いらへもしたまはで、ただ泣きにのみぞ泣きたまふ。いとなやましげにて、つゆばかりのものもきこしめさねば、「かくなやましくせさせたまふを、見おきたてまつりたまひて、今はおこたり果てたまひにたる御あつかひに、心を入れたまへること」と、つらく思ひ言ふ。

大殿は、この文のなほあやしくおぼさるれば、人見ぬかたにて、うち返しつつ見たまふ。さぶらふ人々のなかに、かの中納言の手に似たる手して書きたるか、とまでおぼし寄れど、言葉づかひきらきらと、まがふべくもあらぬことどもあり。年を経て思ひわたりけることの、たまさかに本意かなひて、心やすからぬ筋を書き尽くした

（宮を）（柏木が）（宮は）（女房たち）（源氏は）（紫上の）（源氏）（宮のお側の女房たちの誰かが）
なんて　すべて　ご覧になるが　ご熱心で　そのままにして　お世話に　お加減がお悪そうで　ほんのわずかのお食事も　お置き申されて　すっかりよくおなりになった　いらっしゃること　繰り返し繰り返し　筆跡　本人に問違いないようなことがいろいろ書いてある　希望が叶って

二 全くこんなにはっきりと書いてよいものか。たとえば、逢っても逢わぬように、おぼめかして書くべきものだ、という気持。以下、源氏の感想。
三 せっかくの柏木ほどの人物が。「あたら」は「あたらし」（惜しむべしの意）の語幹で、下の体言「人」を修飾する用法。
三 人間、用心深くするということは、なかなか出来がたいことだ、と。

源氏、女三の宮の処遇について苦慮する

る言葉、いと見所ありてあはれなれど、心を打つけれども いとかくさやかには書くべしや、あたら人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ、迂闊な手紙の書き方をしたものだ 落ち散ることもこそと思ひしかば、昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、こまごまと書きたい時でも ことそぎつつこそ書きまぎらはしかし、言葉を省いて人には分らぬように書いたものだった 人の深き用意は難きわざなりけりと、[宮とともに] かの人の心をさへ見おとしたまひつ。柏木の心根をも見下げてしまわれた

一四 さても、女三の宮 この人をばいかがもてなしきこゆべき、どうお扱いしたものだろうか 普通でないお身体のお めづらしきさまの御ここちも、かかることのまぎれにてなりけり、いであな心憂や、具合も かく、人伝ならず憂きことを知る知る、じかにこんないやなことを知りながら ありしながら見たてまつらむよ、と、わが御心ながらも、とても許せないという気がするのだが え思ひなほすまじくおぼゆるを、たいして愛してもいない女でも なほざりのすさびと、はじめより心をとどめぬ人だに、また異ざまの ほかの男 心わくらむと思ふは、心づきなく思ひ隔てらるるを、けしからぬ女と 気がありそうに思われるのは 気持もさめるのに ましてこれは、さま異におほけなき人の心にもありけるかな、帝の御妻をもあやまつたぐひ、昔もありけれど、それはまたいふかた異なり、宮仕へといひて、われも人も同じ君に馴れつかうまつるほどに、おのづから、

今までどおり妻としてお世話申し上げる
人目に触れることが
こまごまと書きたい時でも
あってはと案じたから
言葉を省いて人には分らぬように書いたものだった
宮とともに
女三の宮
具合も
とても許せないという気がするのだが
たいして愛してもいない女でも
ほかの男
けしからぬ女と
気がありそうに思われるのは
気持もさめるのに
話が
宮廷勤めとい
別だ
帝
親しくお仕えしているうちに
うことで
男
女

一 女御、更衣といった方でも。前に「帝の御妻」とあったが、それをさらに具体的にいう。女御は、大体三位、更衣は、四、五位である。

二 あれこれ、いろいろ事情もあって。

三 重大な、はっきりした不始末が人目につかない間は、そのまま宮仕えを続けるということもあろうから、それで。「おぼろけの」は、「おぼろけならぬ」（並々でない）の意。

四 こうしたことをひきおこすとは、世間に例もないことであろうと、爪弾きしたいお気持である。「爪弾き」は、人を非難するしぐさ。

五 お相手が帝という立派なお方でも。再び、源氏の心。

六 ただ実直に、帝にお仕えするお勤めというだけの積りで。

七 深く思いを寄せる、男の切なる願いに心動かされ。「私の」は、上の「公ざまの」に対する語、私事としての、の意。「ねぎ言」は、本来、神に願う言葉。「ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそ果てはなげきの森となるらめ」（『古今集』巻十九、誹諧歌、讃岐）

八 同じ密通という不届きな所行でも、まだ許せるところがある。

さるべきかたにつけても、（それ相応のいきさつもあって）心をかはしそめ、（愛し合うようになり）もののまぎれ多かりぬべきわざなり、（みそかごともいろいろあって不思議はないことなのだ）女御、更衣といへど、とある筋かかるかたにつけて、（どうかと思われる人もおり）かたほなる人もあり、（必ずしもたしなみ深いとは言えない人も中にはいて）心ばせかならず重からぬうちまじりて、（心外な事件をひきおこすこともあるが）思はずなることもあれど、おぼろけの定かなるあやまち見えぬほどは、（すぐには表沙汰にならないみそかごともあるであろう）さてもまじらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬまぎれありぬべし、（自分が内心愛着を強く感じている紫の上よりも）かくばかりまたなきさまにもてなしきこえて、（大切な）うちうちの心ざし引くかたよりも、（恐れ多いお方として大事にお世話しているこの）いつくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、（自分をさしおいて）かかることはさらにたぐひあらじ、と、爪弾きせられたまふ。

帝と聞こゆれど、ただ素直に、公ざまの心ばへばかりにて、（後宮の暮しも何となくおもしろくないので）宮仕へのほどもものすさまじきに、心ざし深き私のねぎ言になびき、（そのままにはしにくい折節の男の文への返事もするようになれぞれが思いのたけを尽し）おのがじしあはれを尽くし、見過ぐしがたきをりのいらへをも言ひそめ、（心が通うようになったであろう間柄は）自然に心通ひそむらむ仲らひは、（自分のことながら）同じけしからぬ筋なれど、寄るかたありや、（柏木風情の男に）わが身ながらも、（［宮が］心をお傾けにならねば）さばかりの人に心分けたまふべく

九 しかしまた、顔色にも出してはならないことだ、などと。宮の不行跡を人に知られてはならぬ、という気持。

一〇 亡くなった桐壺院も。以下、藤壺とのことを想起する源氏の心中。

一一 手近なご自身の例をお思いになると、誰しも心を狂わす恋の山路は、非難することもできないだろうというお気持もなさる。「いかばかり恋てふ山の深ければ入りと入りぬる人まどふらむ」（『古今六帖』四、恋。『奥入』以下、一三句「恋の山路のしげければ」）

源氏、紫の上と、女三の宮について語る

一二 自分がやっとのことで命を取り止めた、それが不憫さに、こちらに帰っていらして。以下、源氏の心中を忖度する。

一三 そのせいで、あちら（女三の宮）のことをおいたわしく思って浮かぬ顔をしていられるのか。「人やりならず」は、誰のせいでもない、自分のせいで、の意。こちらに帰っては来たものの、それがくやまれて、というほどの気持になろう。

ならぬとは思われないのに
はおぼえぬものを、と、いと心づきなけれど、
不愉快だけれども
またけしきに出だすべきことにもあらずなど、おぼし乱るるにつけて、故院の上も、かく御心には知ろしめしてや、
内心は何もかもご承知の上で
知らぬふりをなさっていられたのであろうか
知らずあの昔の一件こそは顔をつくらせたまひけむ、思へばその世のことこそは、いと恐ろしくあるまじきとんでもないあやまちなりけれ、と、近き例をおぼすにぞ、恋の山路は、えもどくまじき御心まじりける。

「源氏は」さりげなくしていられるが
つれなしづくりたまへど、
何か思い悩んでいられる様子はありありと見えるので
ものおぼし乱るるさまのしるければ、紫の上は女君、消え残りたるいとほしみにわたりたまひて、人やりならず、心苦しう思ひやりきこえたまふにや、とおぼして、「ここちはよろしくなりにてはべるを、かの宮のなやましげにおはすらむに、とくわたりたまひにしこそ、いとほしけれ」と聞こえたまへば、「さかし。例ならず見えたまひしかど、異なるここちにもおはせねば、おのづから心のどかに思ひてなむ。内裏よりはたびたび御使ありけり。今日も御文ありつとか。院の、いとやむごとなく聞こえつけたまへ

（紫上）私はもう気分も大方よくなりましたが
お具合が悪くていられるようですのに
すぐこちらにお帰りになったのは
お気の毒なことです
（源氏）そうですね
普通でないお身体のようでいられたが
別段のご病気というわけでもないので
それならと安心に思って帰って来たのです
朱雀院
格別大事になさるようにとお頼み申し上げていられる
「お見舞の」帝

れば、上もかくおぼしたるなるべし。帝もこれほどお気づかいなのでしょう すこしおろかになどもあらむは、こなたかなたおぼさむことの、帝も院もどうお思いになるかそれが いとほしきぞや困ったことなのです」とて、うめきたまへば、「内裏の聞こしめさむよりも、（紫上）帝が何と聞こしめすかよりも みづからうらめしと思ひきこえたまはむこそ、心苦しからめ。宮ご自身が ご自分は別に気になさらなくても われはおぼしとがめずとも、よからぬさまに聞こえなす人々、かならずあらむと思へば、いと苦しくなむ」などのたまへば、「げに、（源氏）二 あながちに思ふ人のためには、わづらはしきよすがなけれど、よろづにたどり深きこと、とやかくやと、おほよそ人の思はむ心さへ思ひめぐらさるるを、これはただ、国王の御心やおきたまはむとばかりを憚らむは、浅きここちぞしける」と、苦笑して本心には触れずにおしまいになる ほほゑみてのたまひまぎらはす。（宮のもとに）わたりたまはむことは、（源氏）五「もろともに帰りてを。心のどかにあらむ」とのみ聞こえたまふを、（紫上）六「ここには、しばし心やすくてはべらむ。まづわたりたまひて、人宮のご機嫌も直られた折を見はからって の御心もなぐさみなむほどにを」と、話し合っていらっしゃるうちに 聞こえかはしたまふほどに、日ごろ経ぬ。

一 少しでも宮を疎略にでもお扱いしようものなら。当面、おもての話題は、紫の上と女三の宮に対する源氏の扱い方ということであるが、源氏の念頭からは、これからの宮の処遇という問題が離れない。

二 なるほど、私がひたすらいとしく思うあなたには、別に、文句をつける面倒な縁者は控えていないが。

三 そのかわり、あなたは、何かにつけまことに深く思慮をめぐらすことといったら、あれやこれやと、まわりの人がどう思うかそのおもわくまでもいろいろ考えられるが。この部分は、紫の上の「みづからうらめしと思ひきこえたまはむこそ」以下の内容を受けて、宮自身のことのみか、女房のおもわくにまで思いをめぐらす、と言う。

四 帝がご機嫌を損ねなさらぬかということだけを気にしているのは、我ながら考えの浅いことでした。

五 一緒にあちら（六条の院）に帰ってから。まあこちら（二条の院）でのんびりしましょう。「を」は、間投助詞。

六 私は、こちらでしばらく気楽にしておりましょう。

七 これまでは、源氏のすげないお仕打ちとばかり思っていられたが。
八 世間に顔向けできない思いでいられる。

女三の宮の日常

姫宮は、（女三の宮）かくわたりたまはぬ日ごろの経るも、人の御つらさにのみおぼすを、今は、わが御おこたりうちまぜてかくなりぬるとおぼすに、院（朱雀院）も聞こしめしつけて、いかにおぼしめさむと、世の中つつましくなむ。

かの人（柏木）も、いみじげにのみ言ひわたれども、小侍従（小侍従）もわづらはしく思ひ嘆きて、「かかることなむありし」と告げてければ、いとあさましく、いつのほどにさること出で来けむ、かかることは、あり経れば、おのづからけしきにても漏り出づるやうもや、と思ひしだに、いとつつましく、空に目つきたるやうにおぼえしを、ましてさばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ、はづかしく、かたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身もしむることちして、いはむかたなくおぼゆ。年ごろ、まめごとにもあだことにも、召しまつはし参り馴れつるものを、人よりはこまかにおぼしとどめたる御けしきの、あはれになつかしきを、あさ

九 ひどくせつなそうに小侍従に手引きを頼み続けるけれども。
一〇 こういうことがありました。手紙が源氏の手に落ちた一件。
一一 いつのまに、そんなことが起ったのだろう。以下、柏木の心。
一二 空から何ものかに見すかされているように恐ろしく思われたのに。『河海抄』は「天眼事歟。いかに隠密する事も、四知とて、天地人我の四は知る事也。其中にも天の照覧は第一也」という。
一三 朝涼みも夕涼みもないといった夏の酷暑の頃だが。「朝夕涼み」は「朝涼み」（二二九頁に既出）と「夕涼み」（夏の、夕方涼しい刻限）を簡約して合成した歌語。『源氏釈』以下に「夏の日も朝夕涼みあるものをなどわが恋のひまなかるらむ」（『奥入』初句「夏の日の」。出典未詳）を引く。

柏木、手紙の一件を知り、源氏を畏怖する

（柏木は）呆然たる思いで（大変なことになったと）、（自然に）気配だけでも感づかれることもあろうか（時が）経れば、おのづからけしきにても漏り出づるやうもや、と思ひしだに（ひどく身もすくむ思いで）、いとつつましく、空に目つきたるやうにおぼえしを、ましてさばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ、はづかしく、かたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身もしむることちして、いはむかたなくおぼゆ。年ごろ、まめごとにもあだことにも、召しまつはし参り馴れつるものを、人よりはこまかにおぼしとどめたる御けしきの、あはれになつかしきを、あさ

（恐れ多くも）居たたまれぬ思いなので、申しわけなく、間違いようもないあの手紙の文面をご覧になったであろうことは、冷えこおる、言いようもなく恐ろしく思われる、お側近くお召しになり親しくお伺いしていたのに、何かのご用向きでも遊びにつけてでも、ご自分の不始末のせいもあってこんなことになったのだと、ありがたく身にしみて思われるのに、あきれごとと目をかけて下さった源氏のお気持が

一 源氏も、やはりそうかとお思い合せになることは、たまらなく恐ろしい。

二 気分もひどく苦しくて。恐れと不安で、柏木はいつか健康を損う。

三 やはり思わぬことではなかったと、一方では、自分のおおけない料簡も、我ながらひどくうらめしく思われる。この前後、地の文に柏木への敬語を欠き、その心理に密着した筆致。

柏木、今にして宮の欠点にも気づく

四 考えてみれば。以下、再び柏木の心で、女三の宮のたしなみのなさに思い及ぶ。「いでや」は、否定の語気。

五 蹴鞠の日の垣間見の一件。（若菜上一二七頁）

六 無理にも女三の宮への思いをさまそうという積りで。以下、草子地。手の平をかえしたような宮の欠点のあげつらいを、軽く揶揄するような筆致。

七 宮のお身の上を心配申し上げる気持も、念頭からお離れにならない。

果てた不届き者よと
ましくおほけなきものに心おかれたてまつりては、いかでかは目を
不快の念を抱かれ申しては
も見合はせたてまつらむ、さりとて、かき絶えほのめき参らざらむ
すっかりご無沙汰して顔出しもしないのも
人が変に思うだろうし
も、人目あやしく、一かの御心にもおぼしあはせむことのいみじさ、
不安にさいなまれるうちに
など、やすからず思ふに、二ここちもいとなやましくて、内裏へも参
それほど重い罪に該当するはずもないのだけれども
らず。さして重き罪には当るべきならねど、身のいたづらになりぬ
もうこれでわが身も破滅してしまった気がするので
ることこちすれば、三さればよと、かつはわが心も、いとつらくおぼゆ。
しっとりとしてたしなみ深い様子はお見えでない所だ
四いでや、しづやかに心にくきけはひ見えたまはぬわたりぞや、ま
陳間　あっていいことだろうか
づはかの五御簾のはさまも、さるべきことかは、軽々しと、大将の思
見えたことだった　夕霧
ひたまへるけしき見えきかし、など、六今ぞ思ひあはする。しひてこ
宮を非難がましく
のことを思ひさまさむと思ふかたにて、あながちに難つけたてまつ
高貴のお方の常とはいえ　度外れてただ一筋に
お思い申したいのであろうか
らまほしきにやあらむ。よきやうとても、あまりひたおもむきにお
世間の実情にもうとく　一方のお側に仕える女房に
とりとして上品な人は
ほどかにあてなる人は、世のありさまも知らず、かつさぶらふ人に
おいたわしいご本人自身にとっても　相手にと
用心なさることもなくて
心おきたまふこともなくて、かくいとほしき御身のためも、人のた
大変なことになるものなのだと
ってもめも、いみじきことにもあるかなと、七かの御ことの心苦しさも、え

源氏、女三の宮の幼さを思う

八 源氏は、こうして宮を見限っておしまいになると、それにつけても。

九 情けない思いだけではごまかされきれない、宮恋しさの思いが、せつないまでにこみ上げるので。

一〇 病状の無事を祈るご祈禱。

一一 お二人水入らずでむつまじくお過しになるようなことは、源氏としてはもうすっかりよそよそしいお気持になられて。夫婦としての睦び合いはない、の意。

一二 内心あれこれ思い悩まれるばかりなので、こうした源氏のご心中の方がかえってつらい限りなのだった。女三の宮の処遇についての悩みである。

一三 全くこうしたお人柄でいらっしゃるせいなのだ。そのせいで柏木とのこともおこったのだ、の意。以下、源氏の思い。

一四 あまりにもしっかりせず、気が利かないのは。「後る」は、劣っている意。

一五 明石の女御。

思ひ放たれたまはず。

宮は、いとらうたげにてなやみわたりたまふさまの、なほいと心苦しく、かく思ひ放ちたまふにつけては、あやにくに、憂きにまぎれぬ恋しさの苦しくおぼさるれば、わたりたまひて見たてまつりたまふにつけても、胸いたくいとほしくおぼさる。御祈りなど、さまざまにせさせたまふ。おほかたのことは、ありしに変らず、なかなかいたはしくやむごとなくもてなしきこゆるさまをましたまふ。気近くうちかたらひきこえたまふさまは、いとこよなく御心隔たりて、かたはらいたければ、人目ばかりをめやすくもてなして、おぼしのみ乱るるに、この御心のうちしもぞ苦しかりける。さること見きともあらはしきこえたまはぬに、みづからいとわりなくおぼしたるさまも、心をさなし。いとかくおはするけぞかし、よきやうといひながら、あまり心もとなく後れたる、たのもしげなきわざなり、とおぼすに、世の中なべてうしろめたく、女御の、あまりやはらかにお

（いたいたしげに）（やはりとても）（あいにくなことに）（六条院に）（おいたわしく）（つらく）（宮の日常のお世話については）（以前と変りなく）（かえって）（思いやり深く）（大切にお世話申し上げる有様はこれまで以上でいらっしゃる）（周囲の手前だけを無難にとりつくろって）（体裁が悪いので）（そうした手紙を見たと）（もはっきり申し上げなさらないのに）（宮が）（ご自分からひどく苦しみ悩んでいらっしゃる様子）（愚かしく思われる）（高貴のお方の常とは言いな）（安心のならないものだ）（男女の仲のことがすべて気がかりで）（素直で）

一 内気一方で、強いところのないのを。「はるけどころ」は、心を晴らすはけ口。
二 あってはならぬことながら、何かの折に一目惚れし。
三 右大臣髭黒の正室。玉鬘。
四 格別世話する人もなく。両親の庇護もなかったこと。その生い立ちは、三巻玉鬘の巻の初めの部分にくわしい。

源氏、玉鬘の賢明さを想い起す

五 人柄が利発で思慮も深く。
六 自分も、表向きは親のように面倒を見たけれども、けしからぬ気持を抱かないわけではなかったのに。源氏が玉鬘に懸想したこと。
七 ああした心ない女房と気脈を通じて忍び入ったであろうその時にも。(四巻真木柱二〇三頁参照)
八 わざわざ、源氏や実の父内大臣に許されての結婚というように事を運んで。
九 その初めがどうした事情からであったにせよ、同じようなことであったであろうが。
一〇 玉鬘も心を交わしてああなったのだというふうにでも。
一一 幾分身分柄でもないという気持で見られもしように。

びれたまへるこそ、かやうに心かけきこえむ人は、まして心乱れな（とりしていられるのは）（柏木のように思いをお寄せ申す男がいたら）（一層理性も失ってしまう）むかし、女は、かうはるけどころなくなよびたるを、（男も甘く見るからだ）人もあなづらはしきにや、さるまじきにふと目とまり、（自制心のない過失を犯すことになる）心強からぬあやまちはし出づるなりけり、とおぼす。

三 右の大臣の北の方の、四 取り立てたる後見もなく、幼くより、（頼りない暮しの中に流浪するようなありさまで）ものはかなき世にさすらふるやうにて生ひ出でたまひけれど、五 かどかどしく労ありて、六 われもおほかたには親めきしかど、憎き心の添はぬにしもあらざりしを、（一玉鬘は一かどを立てずさりげない態度で受け流し）なだらかにつれなくもてなして過ぐし、この大臣の、七 さる無心の女房に心合はせて入り来たりけむにも、（髭黒）けざやかにもて離れたるさまを、（自分のせいではなかったということを）（人にもはっきり分らせ）人にも見え知られ、八 ことさらに許されたるありさまにしなして、（自分が悪かったということにはしないですませたことなど）わが心と罪あるにはなさずなりにしなど、今思へば、（いかにも賢い身の処し方であった）いかにかどあることなりけり、契り深き仲なりければ、（宿縁の深い二人だったから）長くかくてたもたむことは、九 とてもかくても同じごとあらましものから、一〇 心もてありしこととも、世人も思ひ出でば、（思い出したら）一一 すこし軽々しき（連れ添うことは）

朧月夜の出家

一三 朧月夜。弘徽殿の皇太后の住んでいた二条の宮（父太政大臣の旧邸）に住む（若菜上六七頁参照）。

一三 こうした、夫を裏切るような女の過失を、情けないことと身に沁みてお思いになって。

一四 あなたが出家なさったことを、他人事とお聞きしましょうか、あの須磨の浦に、海士同様の悲しい侘住いをしましたのも、ほかならぬこの私なのですから。「あま」に、「尼」と「海士」を掛ける。「藻塩垂る」は、塩を焼く海士のような暮しをするのと嘆き悲しむ意とを掛ける。

一五 今までこうして、あなたに出家の先を越されてしまいまして残念に思いますが。

一六 あなたとしてなさらねばならぬ御回向の中には、まず第一に私のことを念じて下さるであろうと、しみじみした思いでおります。「回向」は、自分の出家、修行の功徳を他に及ぼすこと。

思ひ加はりなまし、（ほんとに大層見事に身を処したものだ）いといたくもてなしてしわざなり、とおぼし出づ。

二二 二条の尚侍の君をば、〔源氏は〕なほ絶えず思ひ出できこえたまへど、一三かくうしろめたき筋のこと、憂きものにおぼし知りて、かの御心弱さも、（朧月夜の）少し軽く思ひなされたまひけり。つひに御本意のことしたまひてけ（朧月夜が）（念願の出家をとげられたと）りと聞きたまひては、いとあはれにくちをしく、（悲しく）御心動きて、（残念だと）まづ（お心が騒いで）（すぐに）とぶらひきこえたまふ。（お見舞を申し上げなさる）今なむとだにほはしたまはざりけるつらさを、（今出家するともほのめかして下さらなかった冷たいお仕打ちを）浅からず聞こえたまふ。（心からお恨み申し上げなさる）

（源氏）一四 あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に
藻塩垂れしも誰ならなくに

（あれこれとこの世の無常なさまを心の内にいろいろ思いながら）さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて、一五今まで後れきこえぬるくちをしさを、おぼし捨てつとも、（もう私をお見捨てでも）一六避りがたき御回向のうちには、まづこそはとあはれになむ。（早くに決心なさったことであるけれども）など、多く聞こえたまへり。とくおぼし立ちにしことなれど、（源氏の）この

一 昔から、自分にとっては恨めしいことの多い源氏とのご縁だったが、しかしそれを、源氏も浅い因縁だったとはお考えになれないのだ、などと。源氏が「避りがたき御回向のうちには、まづこそはとあはれになむ」と言ったことへの感慨。

二 つらかったこととといい、また深いかかわりといい、それぞれ昔からのことが思い出されなさる。

三 確かに（おっしゃる通り）。歌に直ちに続く。

四 私の出家に、どうして後れをおとりになったのでしょう、あの明石の浦に海士同様の侘住いをなさったあなた様が――。「あま船」の「あま」に、「尼」と「海士」を掛ける。「いさり」は、漁。明石の浦で「海士船」に乗って漁をしたはずのあなたが、の意。

五 回向にとの仰せでしたが、一切衆生に及ぼす回向の中にもお入りにならぬはずがありましょうか。軽くいなした文面。「あまねきかど」は、「普門」をそのまま和らげたもの。「是の観世音菩薩の自在の業、普門示現の神通力を聞かむ者は、当に知るべし、是の人は功徳少なからじ」（『法華経』観世音菩薩普門品第二十五）

六 鈍色（薄墨色）に青味を加えた色。出家の身にふさわしい色紙。

七 閼伽花（仏前に供える水に散らす花の類い）に用いる。

源氏、紫の上に朧月夜のことを語り、女子の養育に及ぶ

ご反対のために延び延びになっていたので　そうとはっきりおっしゃらないことだが

御さまたげにかかづらひて、人にはしかあらはしたまはぬことなれど、心のうちあはれに、昔よりつらき御契りを、さすがに浅くしもおぼし知られぬなど、かたがたにおぼし出でらる。御返り、今はか

感慨無量で　最後　念入りに

くしも通ふまじき御文のとぢめとおぼせば、あはれにて、心とどめて書きたまふ墨つきなど、いとをかし。

美しい

（朧月夜）無常の世とはわが身一つにしみて思い知っておりましたが　先を越されたとの

常なき世とは身ひとつにのみ知りはべりにしを、後れぬとのたまはせたるになむ、げに、

仰せを思いますと

あま船にいかがは思ひおくれけむ

明石の浦にいさりせし君

回向には、あまねきかどにてもいかがは。

とあり。濃き青鈍の紙にて、樒にさしたまへる、例のことなれど、いたく過ぐしたる筆づかひ、なほ古りがたくをかしげなり。

おきまりの趣向ながら　しゃれた　いつまでも

［源氏は］二条の院におはしますほどにて、女君にも、今はむげに絶えぬる

紫の上　すっかり　関係のない人のこととて［文を］

ことにて、見せたてまつりたまふ。「いといたくこそはづかしめら

（源氏）大層ひどく見びられたものです

れたれ。げに心づきなしや。さまざま心細き世の中のありさまを、よく見過ぐしつるやうなるよ。なべての世のことにても、はかなくものを言ひかはし、時々によせて、あはれをも知り、ゆゑをも過ぐさず、よそながらのむつびかはしつべき人は、斎院とこの君とこそは残りありつるを、かくみな背き果てて、斎院はた、いみじうつとめて、まぎれなく行ひにしみたまひにたなり。なほこちらの人のありさまを聞き見るなかに、深く思ふさまに、さすがになつかしきことの、かの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな。女子を生ほし立てむことよ、いと難かるべきわざなりけり。宿世などいふらむものは、目に見えぬわざにて、親の心にまかせがたし。生ひ立たむほどの心づかひは、なほ力入るべかめり。よくこそ、あまたかたがたに心を乱るまじき契りなりけれ。年深くいらざりしほどは、さうざうしのわざや、さまざまに見ましかばとなむ、嘆かしきをりをりありし。若宮を、心して生ほし立ててまつりたまへ。女御は、も

（普通の世間並みの話題でも）（とりとめもな）（平気で見過して来たものだと思われます）（風情をもわきまえ）（四季折々にかこつけて）（く手紙のやりとりをし）（さっぱりとした親しい付合いをすることのできる人では）（熱心にお勤めをして）（余念なく）（勤行一途のお暮しのようです）（たくさんの女性の）（しかも）（心やさしいという点）（思慮深い人柄で）（二人とてありませんでした）（朝顔の前斎院に比べられる）（では）（まだそれほど年を取らなかった頃は）（もの足）（あれこれと女の子を育てられたらと）（りないことだな）（気をつけて）

八 確かに、我ながら愛想の尽きる思いです。
九 ものの深い意味をも見のがさずに。
一〇 朝顔の前斎院とこの朧月夜の君の二人だけが、今に世に残っていましたが。
一一 こうして皆出家してしまって。朝顔の前斎院の出家のことは、ここにはじめて見える。
一二 女の子を立派に育て上げるということは、全くむつかしいものだと思い知らされます。
一三 前世からの宿縁などというものは、目に見えないものだから、親の思い通りにはならないものです。具体的には、どんな結婚をするか、それは必ずしも親の思い通りにはならない、という気持。
一四（しかし）一人前になるまでの親の配慮は、やはり力を入れねばならぬものと思われます。
一五 考えてみれば、よくぞ、たくさんそれぞれに女の子の身のふり方について心配しなくてもよかった運命でした。源氏は、女の子は明石の女御お一人。
一六 紫の上が養育している女一の宮。（一六二頁参照）
一七 明石の女御。

のの分別を十分おわきまえになる年頃でもなくて
の心を深く知りたまふほどならで、一かく暇なきまじらひをしたまへば、何ごとも心もとなきかたにぞものしたまふらむ。御子たちなむ、三なほ飽く限り人に点つかるまじくて、世をのどかに過ぐしたまはむに、うしろめたかるまじき心ばせ、つけまほしきわざなりける。

頼りないといったふうでいらっしゃるでしょう

四限りありて、とざまかうざまの後見まうくるただ人は、おのづから

あれこれの　夫を持つ普通の身分の女は　自然

夫にも助けられるものですが
それにも助けられぬるを」など聞こえたまへば、五（紫上）「はかばかしきまの御後見ならずとも、世にながらへむ限りは、見たてまつらぬやうあらじと思ふを、六いかならむ」とて、なほものを心細げにて、かく心にまかせて、行ひをもとどこほりなくしたまふ人々を、うらやましく思ひきこえたまへり。

この世に生きております限りは

是非とも面倒を見てさし上げたいと思いますが

何となく心細そうな面持で

思い通りに　何のさしさわりもなく

尼になられたについての　裁縫に馴れないうち

「尚侍の君に、さま変りたまへらむ装束など、まだ裁ち馴れぬほどはとぶらふべきを、袈裟などはいかに縫ふものぞ。それせさせたまへ。一領は、九六条の東の君にものしつけむ。一〇うるはしき法服だちては、うたて見目もけうとかるべし。さすがにその心ばへ見せてを」

お世話すべきだが　お作らせ下さい　頼みましょう　しかし一応法衣らしい意匠ははっきりさせて

源氏、朧月夜に尼の装束その他を贈る

七　以下、源氏の紫の上への相談。

八　僧尼が衣の上に左肩から掛けるもの。（図録六参照）

九　六条の院の東北の町のお方。花散里。

一〇　かた苦しい正式の法衣のようでは、見た目にもなじみにくいでしょう。

一　こうして、里下がりも叶わぬ宮仕えをしていらっしゃるので。帝寵が厚く、帝がお側を離さぬことを言う。前にも「わざとありがたき御暇を、……」（一六六頁）とあった。

二　ここは、女御所生の皇女たちの将来を念頭に置いて、一般的な形で言う。

三　やはりどこまでも人に後ろ指をさされるようなことなく、安穏に生涯をお送りになる上で、心配しなくてすむほどの心の持ち方を、身につけてさし上げたいものです。皇女は独身が建て前なので、男とのことで世間の指弾を受けることのないような気構えを身につけさせたい、と言う。

四　身分上のきまりから。身分柄、というほどの意。

五　ちゃんとしたお世話はできませんまでも。

六　どうなりますことやら。いつまでお世話できるか心もとないと、自分の余命をあやぶむ。

一一 青鈍色の法衣一そろえ。
一二 蔵人所の所管で、宮中の調度類、細工物を作製する役所。内裏の西南隅にある（四巻図録四参照）。長官を別当と称し、職人を細工と呼んだ。ここは、その細工に源氏が私的に製作を命ずる趣。
一三 尼として使用する手道具。黒塗り、白金物、蒔絵など、という（三光院実枝説。『岷江入楚』所引）。
一四 綿を入れた薄い敷布団ようのもの。帳台の畳の上に敷く。

朱雀院の御賀またまた延引、十月、女二の宮主催の御賀行わる

一五 朱雀院。西山の寺に在るのでいう。この呼称は、ここが初出。女三の宮主催の御賀は、当初、二月十余日の予定だったのが（一六八頁参照）、紫の上の発病により延引になった（一九六頁参照）。
一六 夕霧の母、葵の上の亡くなった月。
一七 夕霧が、音楽のことを取りしきられるのには、不都合であろう。「楽所」は、音楽を演奏する楽屋。
一八 朱雀院の母后、弘徽殿の皇太后。
一九 柏木が、正室としてお世話申し上げている女二の宮。
二〇 柏木の父、致仕の太政大臣が奔走して、盛大にまたこまごまと気を配って、お支度の見事さ、格式のありたけを尽してお催しになった。

など聞こえたまふ。青鈍の一領を、ここにはせさせたまふ。作物所の人召して、忍びて、尼の御具どものさるべきはじめのたまはす。御茵、上蓆、屏風、几帳などのことも、いと忍びて、わざとがましくいそがせたまひけり。

紫の上方では　しかるべき物をはじめご下命になる　内々に　特別念を入れて　支度させなさった

かくて、山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、八月は大将の御忌月にて、楽所のこと行ひたまはむに、便なかるべし。九月は、院の大后のかくれたまひにし月なれば、十月にとおぼしまうくるを、姫宮いたくなやみたまへば、また延びぬ。衛門の督の御あづかりの宮なむ、その月には参りたまひける。太政大臣居立ちて、いかめしくこまかに、もののきよら、儀式を尽くしたまへりけり。督の君も、そのついでにぞ、思ひ起こして出でたまひける。なほなやましく、例ならず病づきてのみ過ぐしたまふ。

秋ということだったが　女三の宮　十月　［院の御所に］　気を張って　柏木　やはり気分がすぐれず

宮も、うちはへてものをつつましく、いとほしとのみおぼし嘆くけにやあらむ、月多くかさなりたまふままに、いと苦しげにおはし

女三の宮　あれからずっと世間に顔向けできぬ思いで　大変なことになったとそればかり思い嘆　懐妊の月数が多くなられるにつれて　かれるせいであろうか

一 情けないことをしてくれたとお思い申し上げる気持は、それとして。

二 ご祈禱など、紫の上、そして女三の宮と、今年は何かと取り込みごとが多くてお過しになる。

朱雀院、女三の宮を案じて、宮に消息を送る

三 西山の御寺の朱雀院。

四 源氏がここ幾月も二条の院に離れていらして。

五 俗世のことも今さらながら恨めしくお思いになって。せっかくの女三の宮の結婚がうまくいかないことに対する不満の気持。

六 紫の上のご重態だった頃は。以下、朱雀院の心中。次の行の「聞こしめしてだに」は、語り手の敬意の表れたものと見る。

七 宮ご自身に責任のあることではなくても、心掛けのよくないお世話役の女房たちの料簡で。女房の誰かが男の手引きをして、というほどの意。

八 宮中あたりなどの、風雅なやりとりが日常のことになっている間柄などでも。廷臣と女御、更衣といった間柄。

ませば、院は、心憂しと思ひきこえたまふかたこそあれ、いとらうたげにあえかなるさまして、かくなやみわたりたまふを、いかにおはせむと嘆かしくて、さまざまにおぼし嘆く。御祈りなど、今年はまぎれ多くて過ぐしたまふ。

御山にも聞こしめして、らうたく恋しと思ひきこえたまふ。月ごろかくほかほかにて、わたりたまふこともをさをさなきやうに、人の奏しければ、いかなるにかと御胸つぶれて、世の中も今さらにうらめしくおぼして、対の方のわづらひけるころは、なほそのあつかひにと聞こしめしてだに、なまやすからざりしを、そののちなほりがたくものしたまふらむは、そのころほひ、便なきことや出で来たりけむ、みづから知りたまふことならねど、よからぬ御後見どもの心にて、いかなることかありけむ、内裏わたりなどの、みやびをかはすべき仲らひなどにも、けしからず憂きこと言ひ出づるたぐひも聞こゆかし、とさへおぼし寄るも、こまやかなることおぼし捨てて

九 別に改まった用事もないので、頻繁にお便りもさし上げないうちに。
一〇 お具合がよくないそうですが、その様子は。宮の懐妊のこと。
一一 心に仏を念じ、口に仏の名号や経文を唱えること。
一二 どんなお具合ですか。
一三 源氏は、とてもおいたわしく、お気の毒で。以下、朱雀院に対する気持。

源氏、苦衷を宮に訴える

一四 噂を聞いてご不満にばかりお思いになるであろうことを。
一五 私の方こそ、とてもつらい思いです。「まろ」は親しい間柄に使う自称の代名詞。
一六 疎略なお扱いをして、人が変に思うような態度は取るまいと、私は思っているのです。「思はずに」以下、柏木のことをほのめかして言う。

（朱雀院）親子の愛情は忘れ去りがたくて、心をこめた文面で
の身の上ながら
し世なれど、なほこの道は離れがたくて、宮に御文こまやかにてありけるを、大殿、源氏がお側においでの時とて、おはしますほどにて、見たまふ。
そなたの様子も分らぬ
（源氏）そのこととなくて、しばしばも聞こえぬほどに、おぼつかなくて
気がかりなことです
のみ年月の過ぐるなむ、あはれなりける。なやみたまふなるさまは、くはしく聞きしのち、念誦のついでにも思ひやらるるは、いかが。夫婦の仲が意に満たずおもしろくないことがあっても世の中さびしく思はずなることありとも、忍び過ぐしたまへ。夫を怨むようなそぶりなどうらめしげなるけしきなど、いい加減なことでおぼろけにて、見知り顔にほのめかす、いと品おくれたるわざになむ。
はしたないことです
おさとし申していらっしゃる
など、教へきこえたまへり。
こうした内々の宮のとんでもない不始末は
いといとほしく心苦しく、かかるうちうちのあさましきをば、聞
皆自分の薄情のせいと
耳になさるはずもなくて
こしめすべきにはあらで、わがおこたりに、本意なくのみ聞きおぼすらむことを、とばかりおぼしつづけて、「この御返りをばいかが
（源氏）
あれこれと
上げなさいます
聞こえたまふ。心苦しき御消息に、まろこそいと苦しけれ。思はず
心外なと
お思い申し上げることが仮にあっても
に思ひきこゆることありとも、おろかに、人の見とがむばかりはあ

一 誰が私のことを院に悪しざまに申し上げたのでしょう。

二 いかにも頼りないあなたのご気性を、院はよくご承知の上で。

三 (このお手紙を拝見して) 私には院のお気持が痛いほどよく拝察されますから。

四 今後とも、私としては何かと心配でなりません。

五 院の上が、噂を耳になさって私がご意向に背いているとお思いになろうことが、不本意でもあり気にかかりますので。

六 せめてあなたにだけなりと、申し上げておかなくてはと、思いまして。「やは」は反語。以下、こととこまかに源氏は宮に訴える。

七 今はもうすっかり年をとってしまった私の様子も、(若いあなたは) すっかり見くびってもう飽き飽きしたとご覧になっていられるらしいのも。「いたり少なく」以下、自分の薄情を怨んで、若い柏木と通じたと、暗に怨んで言う。

八 院が私を夫とお決めになったのはそれなりのお考えもあったのでしょうから、そんな年寄りの私でも。

九 昔から深く願っていた仏の道にも、思慮浅いはずの女君たちにも、皆後れをとりまして。前に話題になった朧月夜や朝顔の前斎院のことを思って言う。

らじとこそ思ひはべれ。誰が聞こえたるにかあらむ」とのたまふに、はぢらひて背きたまへる御姿も、いとらうたげなり。いたく面痩せて、もの思ひ屈したまへる、いとどあてにをかし。

(源氏)二「いと幼き御心ばへを見おきたまひて、いたくはうしろめたがりきこえたまふなりけりと、三思ひあはせたてまつれば、四今よりのちもよろづになむ。かうまでもいかで聞こえじと思へど、五上の、御心に背くと聞こしめすらむことの、やすからずいぶせきを、六ここにだに聞こえ知らせでやはとてなむ。いたり少なく、ただ、人の聞こえなすかたにのみ寄るべかめる御心には、七ただおろかに浅きとのみおぼし、また、八今はこよなくさだ過ぎにたるありさまも、あなづらはしく目馴れてのみ見なしたまふらむも、九かたがたにくちをしくもうれたくもおぼゆるを、院のおはしまさむほどは、なほ心をさめて、かのおぼしおきてたるやうありけむさだ過ぎ人をも、同じくなずらへきこえて、いたくな軽めたまひそ。いにしへより本意深き道にも、たど

(いよいよ気品があってお美しい)
(これほどひどくご心配申し上げていらっしゃるのだと)
(こんなことまでは申し上げたくないと思いますが)
(人が悪しざまに申し上げるままにそうお考えになるらしいあなたとしては)
(考えが浅くて)
([私が] 冷淡で愛情が浅いとばかりお考えで)
(父院のご在世中は)
(それもこれも残念にも情けなくも思われますが)
(大人しくなさって)
(父院と同じようにお考え下さって)

一〇 私自身の気持としては、どれほども出家をためらう理由はないのですが。「おぼしまよふ」と敬語になっているのは不審であるが、青表紙本の一部に「おもひまよふ」という改訂本文があるのみである。

一一 院が、いよいよ思い立って出家なさったそのあとのあなたのお世話役として私をお決めになった、そのお気持が、身にしみてうれしく思われましたのに。

一二 院ががっかりなさるであろうということが気になって、出家を思いとどまっているのです。

一三 私が出家したあとのことが心配でした人々も。源氏の夫人たち、子女のこと。

一四 明石の女御。

一五 こうして。「御子たち数添ひたまふめれば」にかかる。帝寵が厚く、ようやく御子も多くなった、と言う。

一六 紫の上、花散里、明石の上など。

一七 この現世については、何の気にかけることもありません。どうということもないのです。現世だけのことなら、問題はない、の意。

り薄かるべき女がたにだに、皆思ひ後れつつ、実にはきはきせぬことが多いいとぬるきこと多かるを、のですが一〇 みづからの心には、何ばかりおぼしまよふべきにはあらねど、一一 今はと捨てたてまひけむ世の後見におきたまへる御心ばへの、あはれにうれしかりしを、私もまた出家してあひき続き争院と競争のような格好でひきこゆるやうにて、同じさまに見なたをあとにお残し申したりしたら捨てたてまつらむことの、一二 あへなくおぼされむにつつみてなむ。一三 心苦しと思ひし人々も、私がこの世に引き止められる足手まといになるほどの人もおりません今はかけとどめらるるほだしばかりなるもはべらず。女御も、一四 かくて、行く末は知りがたけれど、先のことは分りませんが御子たち数添ひたまふめれば、一五 みづからの世だにのどけくはと見おきつべし。私の生きている間だけでもご無事ならばと一応安心はできましょうそのほかは、事情によっては誰も誰も、あらむに従ひて、私と一緒に出家しても悔いのない もろともに身を捨てむも、惜しかるまじき齢どもになりにたるを、ようやく肩の荷を下ろした思いでおりますやうやうすずしく思ひはべる。朱雀院ご余生もそう長くはないでしょう院の御世の残り久しくもおはせじ。とてもご病気がちに近頃はますますおなりになって いとあつしくいとどなりま心外なお噂をさりたまひて、もの心細げにのみおぼしたるに、今さらに思はずなご心配をおかけなさいますな一七 る御名漏お耳に入れて聞こえて、御心乱りたまふな。この世はいとやすし。ことにもあらず。来世のご成仏の妨げになりかねないのも後の世の御道のさまたげならむも、罪いと恐ろしか

一 他人のことでも、話に聞いてよくないことと思っていた年寄りのおせっかいというもの、しかし今は私がするようになってしまいました。

二 何といやらしい爺がと、うっとうしく邪魔なと思うお気持がつのることでしょう。若い柏木に対するねたみの気持が言わせる言葉。

三 あのこまごまと書いてあった柏木の文への返事は、こんなに気後れすることもなく進んでやりとりなさるのであろうと想像なさると。

四 女三の宮が、御賀のため、朱雀院の御所に参上なさることは。

五 女二の宮が、格別のご威勢で参上なさったのに。舅の致仕の太政大臣の肝煎りがあった（二四五頁）。

六 子を身籠られたお身体で、競い合うようなのも。「ふるめかしき」は、若々しくない感じをいう。

七 気のひける思いがするのだった。源氏の気持を敬語抜きで直接書いたもの。

八 十一月は、源氏の父帝桐壺院の忌月（命日のある月）。

御賀さらに延引、十二月に予定さる

らむ」など、まほにそのこととはあかしたまはねど、（まともに柏木の一件とははっきりおっしゃらないが）つくづくと聞こえ続けたまふに、涙のみ落ちつつ、（宮は）われにもあらず思ひしみて（心もここにない様子で悲しみに沈んでいらはすれば、われもうち泣きたまひて、（源氏）「人の上にても、もどかしく聞き思ひし古人のさかしらよ、身にかはることにこそ。（ご自分も）いかにうたての翁やと、むつかしくうるさき御心添ふらむ」と、恥ぢたまひつつ、御硯ひき寄せたまひて、手づからおしすり、（墨を）紙取りまかなひ、（用意してあげて）書かせたてまつりたまへど、（宮は）御手もわかなきて、え書きたまはず。

三 かのこまかなりし返りことは、いとかくしもつつまず通はしたまふらむかしとおぼしやるに、いと憎ければ、（何かとお世話する気持もさめてしまいそうだが）よろづのあはれもさめぬべけれど、言葉など教へて書かせたてまつりたまふ。

四 参りたまはむことは、（十月）この月かくて過ぎぬ。五 二の宮の御勢ことにて参りたまひけるを、六 ふるめかしき御身ざまにて、立ち並び顔ならむも、憚りあるここちしけり。（源氏）「霜月はみづからの忌月なり。八 年の終りはた、いともの騒がし。またいとどこの御姿も見苦しく、待

（ご懐妊の姿も見苦しいとますます）（お待

ちかねの院がご覧になろうかと心配ですが
ち見たまはむをと思ひはべれど、さりとて、そんなに延期してよいことではあさのみ延ぶべきことにりません
やは。くよくよ思い悩まれることはやめてむつかしくものおぼし乱れず、明るくお振舞いになってあきらかにもてなしたまひて、おいたわしいこのいたく面痩せたまへる、お直しなさいつくろひたまへ」など、いとらうたしと、さすがに見たてまつりたまふ。

衛門の督をば、どのような催しにも念入りに趣向をこらさねばならぬ時には何ざまのことにも、ゆゑあるべきをりふしには、特別に親しくお召しになってはご相談になっていらっしゃったのにかならずことさらにまつはしたまひつつのたまはせあはせしを、絶えてさる御消息もなし。人がおかしいと思うだろうと［源氏は］会えばそれにえてさる御消息もなし。人あやしと思ふらむとおぼせど、見むにつけても会えばまた自分の気持も平静いとどほれぼれしきかたはづかしく、見むにはまたわが心もただならずや、とおぼし返されつつ、そのままここ幾月も参上なさらないことではいられまいやがて月ごろ参りたまはぬをもとがめなし。世間の一般の人はにもお咎めがないおほかたの人は、なほ例ならずなやみわたりて、［柏木が］ずっと健康を害して病臥中だし六条の院でも音楽のお催しなど夕霧院にはた、御遊びなどなき年なれば、とのみ思ひわたるを、大将の君ぞ、あるやうあることなるべし、何か仔細のあることなのだろうすきものは、さだめて、わがけしきとりしことには忍ばぬにやありけむ、と思ひ寄れど、いとかく定かに残りなきさまならむとは、思ひ寄りたまはざりけり。

九 柏木。以下、今まで源氏は、こうした御賀の準備などには必ず柏木に親しく相談したという。柏木が音楽の面での相談にあずかっていたこと、後の二五二～六頁に見える。

柏木、六条の院に参らず

一〇 今回は、全然そうしたお声もおかけにならない。

一一 いよいよ自分の間抜けさ加減を相手の目にさらすようで、気がひけるし。女三の宮とのことを知っていながら、源氏としては素知らぬふりをしなくてはならぬからである。

一二 あの多情な柏木は、きっと、自分の気づいた、女三の宮への恋情を抑えかねたのでもあろう。夕霧は、六年前の蹴鞠の日、柏木の執心に気づいていた（若菜上一二九頁以下）。

一三 まさかこんなにはっきり事が源氏に知れるところまでいっていようとは、想像もおつきでないのだった。

十二月に入り、六条の院の試楽

一 朱雀院の御賀は十何日のことと決めて。
二 舞楽の何番もの舞の練習をし。
三 六条の院で催された御賀の試楽。「試楽」は、当日に先立って行われる舞楽の予行演習。恐らく十日前後に行われたのであろう。
四 明石の女御も六条の院にお里下がり中だった。お産のためであること、次の文章で分る。
五 前に見えた「三の宮」に次ぐ方である（一八三頁参照）。
六 六条の院の東北の町。夕霧の母代りの花散里が住む。
七 試楽に先立っての練習。

試楽当日、柏木、参上する

八 いかにも催しが引き立たず、もの足りなく思われるであろう上に。源氏は、音楽に堪能な柏木の助言の必要を感ずる。
九 柏木の父の、致仕の太政大臣。事情を知るよしもなく、出席をすすめる。

十二月になりにけり。十余日と定めて、舞どもならし、殿のうち（六条の院）ゆすりてのののしる。二条の院の上は、まだわたりたまはざりけるを、（紫の上）この試楽によりぞ、えしづめ（落着き払ってもいられず）果てでわたりたまへる。女御の君も里（今度ご誕生の）におはします。このたびの御子は、また男にてなむおはしましける。すぎすぎいとをかしげにておはするを、明け暮れもて遊びたてまつりたまふになむ、過ぐる齢のしるし、うれしくおぼされける。試楽（老いた）に、右大臣殿の北の方もわたりたまへり。大将の君、丑寅の町にて、（玉鬘）（夕霧）まづうちうちに調楽のやうに、明け暮れ遊びならしたまひければ、（音楽の練習をなさったので）かの御方は、御前のものは見たまはず。（試楽の見物はなさらない）（花散里）衛門の督を、かかることのをりもまじらはせざらむは、いと栄なくさうざうしかるべきうちに、人あやしとかたぶきぬべきことなれば、参りたまふべきよしありけるを、重くわづらふよし申して参らず。さるは、そこはかと苦しげなる病にもあらざなるを、思ふ心のあるにやと、心苦しくおぼして、取り分きて御消息つかはす。父大

（上を下への大騒ぎである）（引き続いて）（甲斐と）（源氏は）（こうした御賀の試楽のような時にも参加させないのは）（人がおかしいと不審に思うに違いないことなので）（参上なさるようにとお召しがあったが）（重い病中であるむねを）（病気でもないようなのに）（自分に遠慮し）（どこが悪くて苦しいといった）（特別に）（気の毒に）（てのことかと）

臣も、「などか返さひ申されける。（どうしてご辞退申されたのか）ひがひがしきやうに、（不届きなことのように）院にも聞こしめさむを、おどろおどろしき病にもあらず、（たいしてひどい）助けて参りたまへ」とそそのかしたまふに、（何とかして）かく重ねてのたまへれば、（おすすめになっていたところに）苦しと（つらいと）思ふ参りぬ。

まだ上達部などもつどひたまはぬほどなりけり。例の気近き御簾のうちに入れたまひて、母屋の御簾おろしておはします。げにいといたく痩せ痩せに青みて、例も誇りかにはなやぎたるかたは弟の君たちにはもて消たれて、いと用意あり顔にしづめたるさまぞことなるを、（気圧されて）（ふだんも陽気で派手に振舞うといった点では）（今日は）一層もの静かに控えていられる様子は）いとどしづめてさぶらひたまふさま、などかは皇女たちの御かたはらにさし並べたらむに、さらに咎あるまじきを、ただことのさまの、誰も誰もいと思ひやりなきこそ、いと罪許しがたけれ、など御目とまれど、さりげなく、いとなつかしく、「そのこととなくて、対面もいと久しくなりにけり。月ごろは、いろいろの病者を見あつかひ、心の暇なきほどに、院の御賀のため、ここにものしたま（やさしく）（源氏）（これといった用件もなくて）（看病して）（女三の宮）

一〇 今までどおり、御座所近いお部屋うちにお呼び寄せになって。

源氏と柏木の会見

廂の間である。源氏は母屋の簾中である。

一一 以下、源氏の目に映った柏木の姿。

一二 いかにもたしなみありげに、もの静かに振舞うところが、人にすぐれて目立つのだが。

一三 なんの、皇女といったお方のお側に夫として並べたところで、少しも難はあるまいに。柏木は現に女二の宮を正室としてもいるが、源氏の念頭には女三の宮のことがある。

一四 ただ今度の一件については、どちらも（柏木も女三の宮も）いかにも分別の足りないところが。柏木が自分の恩顧を忘れて正室を犯し、女三の宮も源氏の配慮を考慮しない点を、許しがたく思う。

一五 紫の上と女三の宮のこと。

ふ皇女の、法事[一]つかうまつりたまふべくありしを、次々とどこほることしげくて、かく年もせめつれば、え思ひのごとくしあへで、たのごとくなむ、斎の御鉢参るべきを、御賀などいへば、ことことしきやうなれど、家に生ひ出づる童べの数多くなりにけるを、御覧ぜさせむとて、舞など習はしはじめし、そのことをだに果たさむとて、拍子[四]ととのへむこと、また誰にかはと思ひめぐらしかねてなむ、月ごろとぶらひものしたまはぬ恨みも捨ててける」とのたまふ御けしきの、うらなきやうなるものから、いといとはづかしきに、顔の色違ふらむとおぼえて、御いらへもとみに聞こえず。

（柏木）「月ごろ、[五]かたがたにおぼしなやむ御こと、うけたまはり嘆きはべりながら、春のころほひより、例もわづらひはべる乱り脚病[六]といふもの、所狭く起こりわづらひはべりて、はかばかしく踏み立つることもはべらず、月ごろに添へて沈みはべりてなむ、内裏などにも参らず、世の中あと絶えたるやうにて籠りはべる。院の御齢[七]足りた

さしさわる事情
執り行ってさし上げられることになっていたのが
が重なって
おしつまったので
十分なことはとてもできなくて
んの型どおり
大げさなよう
だが
[院に]ご
覧に入れようと思って
それだけでも予定どおり執り行おうと思
幾月も顔を見せられぬ恨みも捨ててしまってお願いしたのです
変るような気がして
何のこだわりもないように見えるが
[柏木は]顔もよう上げられぬ思いに顔色も
お噂をうかがって心を痛めており
大層ひどくなって苦しみまして
ふだんも病んでおります
月がたつにつれて
弱りきってしまいまして
世間ともすっかり交渉を絶ったありさまで
ましたが
かないませず

一 賀の祝いに、供養の仏事を行うので、こういう。

二 精進のお料理をさし上げるつもりだが。「鉢」は、梵語pātraの音訳、鉢多羅の約。僧が托鉢の際に用いる飯器。院が出家の身であるので、修飾として言う。

三 夕霧の子たちその他。すでに前の一六四頁に準備のことが見えるが、今日の試楽については次の二五七頁以下に見える。

四 調子をきちんとすることは、あなた以外の誰に頼めようと、思案に窮して。「拍子」は、リズム。

五 いろいろご心配のご病人のことは。紫の上と女三の宮のこと。

六 『和名抄』脚気の項の注に「脚気、一云脚病、俗云、阿之乃介」とある。『河海抄』はこれを引いて、「うつほの十五、中納言嵯峨院にまゐり給ひて、みだりかくびやういたはり侍りて、とあり。案ずるに、みだりは病の惣名歟。みだり心地也。世次、東三条殿みだり風などとあり」と注する。

七 朱雀院のお齢がちょうど五十におなりの年だ。以下、父の致仕の太政大臣の言葉を写して言う。

八 人一倍はっきりと数えてお祝い申すべきだという

意向を。「数へ」の縁で「さだかに」と言う。ちゃんとしたお祝いをすべきだ、の意。致仕の太政大臣は、母の大宮との関係で朱雀院のいとこに当り、北の方四の君は朱雀院の母弘徽殿の大后の妹であり、長男の柏木は女二の宮の婿である。

九 官職を辞した身の上で、の意。「冠を挂け」は、一五〇頁注六参照。「車を惜しまず云々」は、いわゆる「懸車」の故事で、『奥入』に「古文孝経曰、七十老致仕、懸二其所レ仕之車一、置二諸廟一、永使二子孫一監而則焉、立レ身之終、其要然也」と注する。

一〇 なるほど、そなた（柏木）はまだ卑官の身だが。

一一 私に賀のお祝いをうながされた事情がございましたので。父の代行を命じられた趣に言う。「申さるる」の「るる」は、二行目の「申されし」の「れ」と同じく、軽い敬語の「る」。相手の源氏に斟酌しての言葉遣い。「はべし」は、促音便「はべつし」の促音無表記の形。

一二 しみじみとした御父娘（院と女二の宮）のご対面をという心からのお望みをお遂げになられますほうが。

一三 女二の宮の夫として自分が取りしきったようには言わぬところも、しっかりしたものとお思いになる。

一四 ただご覧のとおりの支度だけなのです。簡略にしたように、世人は志が浅いと見るだろうが。

一五 お役目のほうは、だんだん一人前になっているようだが。

まふ年なり、人よりさだかに数へたてまつりつかうまつるべきよし、致仕の大臣思ひ及び申されしを、冠を挂け、車を惜しまず捨ててし身にて、進みつかうまつらむに、つくところなし、げに下臈なりとも、同じごと深きところはべらむ、その心御覧ぜられよ、と、もよほし申さるることのはべしかば、重き病をあひ助けてなむ、参りてはべし。今は、いよいよいとかすかなるさまにおぼしすまして、いかめしき御よそひを待ちうけたてまつりたまはむこと、願はしくもおぼすまじく見たてまつりはべしを、ことどもをばそがせたまひて、静かなる御物語の深き御願ひかなはせたまはむなむ、まさりてはべるべき」と申したまへば、いかめしく聞きし御賀のことを、女二の宮の御方ざまには言ひなさぬも、労ありとおぼす。

「ただかくなむ。ことそぎたるさまに世人は浅く見るべきを、さはいへど、心えてものせらるるに、さればよとなむ、いとど思ひなられはべる。大将は、公がたは、やうやう大人ぶめれど、かやうに情

思い立って申されたのですが
冠を挂け
身の置き所もないことだ
つくところなし
げに下臈なりとも
私同様深い気持をお抱き申していよう
その心御覧ぜられよ
無理を押して
重き病をあひ助けてなむ
〔院は〕
まことにひっそりした日常で仏道にご余念もなく
お望みでもない
盛大
盛大だと
上策かと存じられます
諸事簡略になさいまして
拝察いたしましたので
お望みでもないような御賀の儀をお待ち受けなさいますようなことは
衆に先んじてお祝い申し上げても
やはりこれでよかったと
いよいよ安心に思われます
〔源氏〕
はさすがに
よく分ってそう言って下さるので
夕霧

風雅の面には　朱雀院は　お心得
びたるかたは、もとよりしまぬにやあらむ。かの院、何ごとも心及
もともとしっくりしないのでしょうか　特にご
びたまはぬことは、をさをさなきうちにも、楽のかたのことは御心
のないことは　ほとんどない中でも
熱心に　まことにご立派に何もかも心得ていらっしゃるから
とどめて、いとかしこく知りととのへたまへるを、一さこそおぼし捨
お心静かに耳をお傾けになるであろうと　今こそかえって気づか
てたるやうなれ、静かに聞こしめしすまさむこと、今しもなむ心づ
いされることでしょう　心構え
かひせらるべき。かの大将ともろともに見入れて、舞の童べの用意、
夕霧　面倒を見て　自分の専門に
たしなみを　一段と叩き込んで下さい　二
心ばへ、よく加へたまへ。ものの師などいふものは、ただわが立て
ついてはともかくも　全くどうしようもないものです　うちとけて
たることとそあれ、いとくちをしきものなり」など、いとなつかし
お頼みになるのを　[柏木は]　身のちぢむ思いで
くのたまひつくるを、うれしきものから、苦しくつつましくて、言
早々にさがりたいと　親しいお話も
少なにて、この御前をとく立ちなむと思へば、例のやうにこまやか
申し上げず　やっとの思いでお前をさがった
にもあらで、やうやうすべり出でぬ。
夕霧　整えさせていらっしゃる
東の御殿にて、大将のつくろひ出だしたまふ楽人、舞人の装束
[柏木が]　指図をお加えになる　[夕霧が]十分念入りに手立てを尽されている上に
のことなど、またまた行ひ加へたまふ。あるべき限りいみじく尽く
いよいよ事こまかな趣向が加わるのも　[柏木は]音楽の道には　いか
したまへるに、いとどくはしき心しらひ添ふも、げにこの道は、い
にも造詣の深いお方でいられるようだ
と深き人にぞものしたまふめる。

柏木、音楽の指導に当る

一　お話のように、すっかりこの世のことは思い捨てていらっしゃるようではあるが。柏木の「今は、いよいよとかすかなるさまにおぼしすまして」という言葉を受けて言う。

二　音楽の師。もと雅楽寮の教師をいうが、一般に専門の音楽家というほどの気持でここはいう。身分低い地下の連中である。

三　丑寅（東北）の町の花散里の御殿。

四 赤白橡の袍に、葡萄染（薄紫）の下襲。舞の童の装束。赤白橡は赤色というに同じ。なお四巻藤裏葉三〇七頁注一二参照。

五 青白橡の袍に、蘇芳襲（やや暗い紅色の襲）の下襲。これはこの試楽の日の舞の童の装束。

六 白い下襲。

七 池に張り出した納涼の建物。胡蝶、常夏に「東の釣殿」とあったものであろう（四巻三二頁、八五頁）。「廊」は、東の中門廊、ここが、楽人が楽を奏する場所にしつらえられる。

八 池の南の築山。その南のはずれから現れて楽所に向う途中。

九 太食調の曲。舞はない。「斎宮拝行之時、勢田橋上ニテ楽人参向之時奏ニ此曲一」（『教訓抄』）

一〇 「冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける」（『古今集』巻十九、誹諧歌、明日春立たむとしける日、隣の家のかたより風の雪を吹きこしけるを見て、その隣へ詠みてつかはしける　清原深養父）。

一一 紫の上の父宮。

一二 髭黒。この四郎、次頁の三郎、いずれも玉鬘腹。

一三 螢兵部卿の宮。源氏の弟宮。「孫王」は帝の孫。

一四 唐楽、平調の曲、四人の舞。祝賀に用いる。（図録一〇参照）

一五 惟光の娘の腹。前の「三郎君」は雲居の雁腹。

一六 四巻藤袴一九九頁、同梅枝二六六頁参照。

試楽、童舞の清興

今日は、かかるこころみの日なれど、御方々もの見たまはむに、見所なくはあらせじとて、（試楽）（趣向のないようにはすまいと）かの御賀の日は、（当日）赤き白橡に、（予定の）葡萄染の下襲を着るべし、（着るはずだが）今日は、青色に蘇芳襲、楽人三十人、今日は白襲を着たる、辰巳のかたの釣殿に（東南）続きたる廊を楽所にて、山の南のそばより御前に出づるほど、仙遊霞といふもの遊びて、（演奏して）雪のただいささか散るに、春のとなり近く、梅のけしき見るかひありてほほゑみたり。（いかにも美しくほころびかけている）廂の御簾のうちにおはしませば、（「源氏が」）式部卿の宮、右の大臣ばかりさぶらひたまひて、（お側に控えていられて）それより下の上達部は簀子に、わざとならぬ日のことにて、御饗など、気近きほどにつかうまつりなしたり。（手軽な感じにお出ししてある）（髭黒）（ことごとしくない試楽の日のこととして）

右の大殿の四郎君、（夕霧）大将殿の三郎君、兵部卿の宮の孫王の君たち二人は、万歳楽、まだいと小さきほどにて、いとらうたげなり。四人ながら、いづれとなく高き家の子にて、（優劣をつけがたい高貴なお家の子弟で）容貌をかしげにかしづき出でたる、（そう思うせいもあって気品がある）（よそおい立てられている姿は）思ひなしもやむごとなし。また、大将の御子の典侍腹（夕霧）の二郎君、式部卿の宮の兵衛の督といひし、今は源中納言の御子、

一 唐楽、平調の曲。白い杖を持って舞う。（図録一〇参照）

二 唐楽、沙陀調の曲。蘭陵王また羅陵王とも。桴を持って舞う勇壮華麗な一人舞。（図録九参照）

三 高麗楽、高麗壱越調の曲。一人また二人の舞、桴を持つ。前の陵王の番舞である。（図録一〇参照）

四 唐楽、太食調の曲。鎧を帯び、鉾を取り、太刀を抜いて舞う。四人舞。（図録九参照）

五 唐楽、黄鐘調の曲。四人舞。（図録九参照）

六 それぞれの子弟に付いた専門の師たち。前に源氏の言葉にあった「ものの師」である。

七 源中納言（もとの兵衛の督）の子、皇麞を舞った。

八 寄る年波には勝てないもので、酒を飲むと、泣けて仕方のないものです。

源氏、柏木を諷し、柏木そのまま重病の床に臥す

九 「さかさまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齢やともに帰ると」（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）

一〇 廂の源氏の座から、簀子にいる柏木を見る。

一一 ほかの人よりずっとかしこまった体で元気がなく。「屈ず」は、「屈す」の促音を「ん」で表記したもの。

皇麞、右の大殿の三郎君、陵王、大将殿の太郎、落蹲、さては太平楽、喜春楽などいふ舞どもをなむ、同じ御仲らひの君たち、大人たちなど舞ひける。暮れゆけば、御簾あげさせたまひて、ものの興まさるに、いとうつくしき御孫の君たちの容貌、姿にて、舞のさまも世に見えぬ手を尽くして、御師どもも、おのおの手の限りを教へきこえけるに、深きかどかどしさを加へて、めづらかに舞ひたまふを、いづれをもいとらうたしとおぼす。老いたまへる上達部たちは、皆涙おとしたまふ。式部卿の宮も、御孫をおぼして、御鼻の色づくまでしほたれたまふ。

髭黒　夕霧　五　四　同じご一族の　ご子息たち　舞いぶりもまた　技のすべてを　かわいらしい　と見られぬ秘術をつくして　すぐれた利発さをそれに加えて　すばらしく　いとしいと［源氏は］　どのお子をも

源氏

主人の院、「過ぐる齢に添へては、酔ひ泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門の督心とどめてほほゑまるる、いと心はづかしや。さりとも今しばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老はえのがれぬわざなり」とて、うち見やりたまふに、人よりけにまめだち屈じて、まことにここちもいとなやましければ、いみじきことも目もと

うれし涙におくれになる　目をつけてにやにやしていられるが　全く気のひけることです　しかしそれももう暫くのことでしょう　気分もひどく悪いので　すばらしい舞も見ていられないよ

一二 柏木はいよいよどきりと胸にこたえて。源氏の言葉が、柏木の畏怖の思いを決定的にする。
一三 上の席から盃がまわされてくるのも、頭痛の種なので。

一四 いつものとてもひどい悪酔いというわけでもないのに。以下、柏木の思い。
一五 我ながらそんなに怖気づくほどの意気地なしとは思われないのに。
一六 敬語抜きで、柏木の思いに密着した書き方。
一七 柏木の父、致仕の太政大臣、母北の方。柏木は、跡取りの長男である。
一八 別々にいたのでは、とても心配でならないということで。柏木は今、女二の宮の邸にいる。
一九 何事もなく過して来た今までは、のんきに当てにならない先のことを当てにして。いつかは女二の宮と愛情を交わす仲になるだろうと思って、の意。

柏木、療養のため父の邸に移る　女二の宮との別れ

うな気分でいる人をつかまえて
まらぬここちする人をしも、さしわきて、空酔ひをしつつかくのたまふ。たはぶれのやうなれど、いとど胸つぶれて、盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにてまぎらはすを、御覧じとがめて、持たせながらたびたび強ひたまへば、はしたなくて、もてわづらふさま、なべての人に似ずをかし。ここちかき乱りて堪へがたければ、まだことも果てぬにまかでたまひぬるままに、いといたくまどひて、例のいとおどろおどろしき酔ひにもあらぬを、いかなればかかるならむ、つつましとものを思ひつるに、気ののぼりぬるにや、いとさいふばかり臆すべき心弱さとはおぼえぬを、言ふかひなくもありけるかな、とみづから思ひ知らる。しばしの酔ひのまど ひにもあらざりけり。やがていといたくわづらひたまふ。大臣、母北の方おぼし騒ぎて、よそよそにていとおぼつかなしとて、殿にわたしたてまつりたまふを、女宮のおぼしたるさま、またいと心苦し。

わざと名指しで
冗談のように聞えるが
盃
源氏は
飲むそぶりだけで取りつくろうのを
盃を
身の置き所もなくて
困りき
っている様子は
並みの人とは違って優雅である。
宴席も終らぬうちに
それはひどく
どうして
苦しんで
こんなことになったのだろう
何か頭の上がらぬ臆した思いだったので
けのぼせてしまったの
だろうか
心配なさって
斐ない次第だった
一時の
悪酔いの苦し
みというのではなかった
そのまま
北
お邸
にお移し申し上げるのを
女二の宮のお悲しみの様子は
おいたわしい
それほど宮を

一九 ことなくて過ぐす月日は、心のどかにあいな頼みして、いとしも

愛してもおいでなかったが
あらぬ御心ざしなれど、一今はと別れたてまつるべき門出にやと思ふは、あはれに悲しく、後れておぼし嘆かむことのかたじけなきを、自分に先立たれてお悲しみになるのは恐れ多いことと
とてもつらいと思う
いみじと思ふ。母御息所も、いといみじく嘆きたまひて、「世のこ
（御息所）世間の
常のこととして　ご両親はそれはそれとひとまずさし措き申して
ととして、親をばなほさるものにおきたてまつりて、かかる御仲ら
夫婦のお
問柄は　どういうことがありましょうとも
ひは、とあるをりもかかるをりも、離れたまはぬこそ例のことなれ、
お離れにならぬのが普通でありましょうに
すっかりよくおなりになるまで長いことあちらでお過しになるのは
かく引き別れて、たひらかにものしたまふまでも過ぐしたまはむが、
心配でならないことでしょうから　こちらで
心尽くしなるべきことを、しばしここにて、かくてこころみたま
このままご養生なさってみて下さい
へ」と、御かたはらに御几帳ばかりを隔てて見たてまつりたまふ。
一病床の
ご介抱申し上げなさる
（柏木）三
「ことわりや。数ならぬ身にて、及びがたき御仲らひに、なまじひ
いつまでも生きていまして
にゆるされたてまつりてさぶらふしるしには、長く世にはべりて、
つまらぬ今の私の身の上も　多少とも人と肩を並べて立身するところもお目にかけられようか
かひなき身のほども、すこし人とひとしくなるけぢめをもや御覧ぜ
と思っておりましたが　情けないことに
らるる、とこそ思うたまへつれ、いといみじく、四かくさへなりはべ
せめてもの私の深い気持も見届けて頂けないままになってしまいましょうかと思いますと
れば、深き心ざしをだに御覧じ果てられずやなりはべりなむと思う
たまふるになむ、五とまりがたきここちにも、え行きやるまじく思ひ

一　これが、女宮ともう最後のお別れになる出立なのだろうかと思うのは。「かりそめの行きかひ路とぞ思ひ来し今は限りの門出なりけり」（『古今集』巻十六哀傷、在原滋春）

二　女二の宮の母御息所。「御息所」は、皇子皇女を生んだ方の称。

三　ごもっともなことです。取るに足らぬ分際で、及びもつかぬ夫婦というお間柄に、無理にもお許し頂きまして、こうしてお側におりますそのかいには。臣下として朱雀院の皇女を妻に頂戴したからには、それ相応の義務がある、という意。

四　（長生きどころか）こんな重い病にもなりましたので。

五　この世に生き残れまいと思われるほどの苦しい気分のうちにも、とても安心してあの世には行けないという思いがいたします。

六 どうして、誰より先にこの母に顔を見せようとはお思いでないのだろう。

七 そなたに会いたいとも、またそなた一人が頼りだとも思われるのです。「おぼえたまへ」の「たまふ」は、柏木への敬語。「思われなさる」の意。

八 これもまた、もっともなことに思われる。先に柏木が御息所に「ことわりや」と言ったのに対して、柏木の気持を述べたもの。

九 もう最期と、望みもなくなったことをお耳になさいましたら、そっと父の邸にお出でになって、お会い下さいませ。きっともう一度お目にかからせて頂きます。全体が、女二の宮への言葉の趣である。

一〇 どうしたわけか、気がつかない、なおざりな性分の人間で。「たゆし」は、ここは遅鈍というほどの意。

たまへらるる」など、かたみに泣きたまひて、とみにもえわたりたまはねば、また母北の方、うしろめたくおぼして、「などか、まづ見えむとは思ひたまふまじき。われは、ここちもすこし例ならず心細き時は、あまたのなかにまづ取り分きて、ゆかしくもたのもしくもこそおぼえたまへ。かくいとおぼつかなきこと」と恨みきこえたまふも、またいとことわりなり。「人より先なりけるけぢめにや、取り分きて思ひならひたるを、今になほかなしくしたまひて、しばしも見えぬをば苦しきものにしたまへば、ここちのかく限りにおぼゆるをりしも、見えたてまつらざらむ、罪深く、いぶせかるべし。今はと頼みなく聞かせたまはば、いと忍びてわたりたまひて御覧ぜよ。かならずまた対面賜はらむ。一〇あやしくたゆくおろかなる本性にて、ことに触れておろかにおぼさるることありつらむこそ、くやしくはべれ。かかる命のほどを知らで、行く末長くのみ思ひはべりけること」と、泣く泣くわたりたまひぬ。宮はとまりたまひて、言ふ

（すぐにもお移りになれないで）（お互いに）（気がかりに）（北方）六（私は）（気分が少しでも悪く心細く思われる時は）（たくさんの子たちの中で誰よりも特別に）（一体どうしておいでなのやら）（柏木）長男として先に生れたそのせいでしょうか）（いまだに私をいとしくお思いになって）（ちょっとでも顔を見せないのをつらいことにお思いなので）（もう駄目かと思われるこんな重い病の折に）（お目にかかりませんのは）（気にかかることでしょう）（何かにつけて疎略にお扱い申したとお思いのことがありだったでしょうと）（今に後悔されます）（こうした短い命とも悟らないでくはべれ。）（まだまだ先が長いとばかり思っておりましたことです）（父大臣の邸に）（女二の宮）（言いよる）

父大臣の邸で柏木の病重る

かたなくおぼしこがれたり。（うもなく恋い焦がれなさっている）

大殿（おほいとの）に待ち受けきこえたまひて、（柏木をお迎え申し上げなさって）よろづに騒ぎたまふ。（二）さるは（そうはいえ）、たちまちにおどろおどろしき御ここちのさまにもあらず、（急にひどい重態におちいるといったご病状でもなく）月ごろも（ここ数カ月お）のなどをさらに参らざりけるに、（三）いとどはかなき柑子（かうじ）などをだに触（食事など全く召し上がらなかったのに）れたまはず、ただ、（四）やうやうものに引き入るるやうに見えたまふ。（五）さる時の有職（いうそく）の、かくものしたまへば、世の中惜しみあたらしがり（残念がって）て、御とぶらひに参りたまはぬ人なし。内裏（うち）帝（お見舞）より院（朱雀院）よりも、御とぶらひしばしば聞こえつつ、いみじく惜しみおぼしめしたるにも、（全く残念なことにな）いとどしき親たちの御心のみまどふ。（六）六条の院（源氏）にも、いとくちをしったと）きわざなりとおぼしおどろきて、（ご心痛になって）御とぶらひに、たびたびねむごろ（とても仲のよいお間柄なので）に父大臣（ちちおとど）にも聞こえたまふ。（お便りをなさる）大将（夕霧）は、ましていとよき御仲なれば、気近（けぢか）くものしたまひつつ、（親しく病床を見舞っては）いみじく嘆きありきたまふ。（悲しみにくれておろおろしていられる）

御賀（七）は、二十五日になりにけり。かかる時のやむごとなき上達部（かむだちめ）の、重くわづらひたまふに、親、兄弟（はらから）、あまたの人々、さる高き御（当世の下にも置かれぬ）（そうした高貴な）

一 父の致仕の太政大臣の邸。
二 何かと大騒ぎなさる。病気平癒のための加持祈禱などするのである。
三 （父大臣の邸に移られてからは）ますます、軽い蜜柑といったものにも手をお触れにならず。
四 次第に何かに引き入れられるように、弱っていかれる。
五 柏木のような、当世のすぐれた人物が、こうしたことでいらっしゃるので。
六 いよいよ深まるご両親の悲しみは、気も狂わんばかりである。
七 女三の宮主催の朱雀院の御賀。前に「十余日と定めて」（二五二頁）とあったのを受けて、さらに延引した趣にいう。柏木の病気のためである。

朱雀院の御賀、暮れの二十五日に行わる

ご縁戚知友の方々が悲しみに沈んでいらっしゃる折節のこととて　何か興のさめる思いもするけれど仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々にとどこほりつることだにあるを、さて止むまじきことなれば、いかでかはおぼしとどまらむ。女宮の御心のうちをぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦経、またかのお　朱雀院がおいでの西山のお寺でも　はします御寺にも、摩訶毘盧遮那の。

〔源氏は〕どうして断念なさるわけがあろう

ハ　御賀が次々に延引になったことだけでも不都合なことであるのに、このまま沙汰止みにすべきことではないので。この年二月以来の延引である。

九　女三の宮。御賀の延引を、宮に対して心苦しく思うのである。

一〇　しきたりどおり、五十の寺に、息災延命の読経をご依頼になり。五十の賀にちなんでのことである。

一一　「摩訶毘盧遮那」は、大日如来。梵語の音訳。真言密教で至上の絶対的存在とされる。その供養の読経が行われたという文意に読める。朱雀院の西山の寺には仁和寺が擬せられているが、その本尊は大日如来である。なお、こうした中断の形で擱筆したとするのが古来の通説であるが、この帖の終りの一葉が何らかの事情で失われた可能性もあろう。次の柏木の巻の末尾にも同じような情況がある。

柏（かしは）木（ぎ）

柏木の病は回復のきざしもなく、新しい年を迎えた。源氏に事が知れ、その勘気の解けぬ以上、自分は死ぬほかはない、死ぬのが一番よい解決になるとは思うものの、志の遂げられなかった自分の半生があじきなくかえりみられ、女三の宮に対する執着も断ち切れない。小侍従を通じて、死を覚悟した苦しい胸の内を宮に訴えたが、これが最後の便りになった。

女三の宮は、その夕方から産気づいて、翌朝男子（後の薫）を出産するが、衰弱と源氏への怖れからくる心労は、宮に出家を決意させ、夜陰ひそかに宮を見舞った父朱雀院にすがって、出家を遂げる。それは宮に取り憑いていた六条の御息所の死霊のしわざであった。

宮の出家を聞いた柏木は、重態におちいる。見舞に訪れた親友の夕霧に、それとなく事情をほのめかし、落葉の宮に対する配慮を依頼して、実らなかった恋に殉ずるように、その生を終った。

柏木の遺託に答えるべく夕霧は、落葉の宮とその母御息所の住む一条の宮にしばしば弔問の足を運ぶが、想像される宮の地味な性格に心惹かれ、同情の思いはいつしかほのかな恋心を訴えるまでになる。巻名はこの時の贈答の言葉による。

この巻は、源氏四十八歳の年の春から初夏にかけてのこと、柏木の死と女三の宮の出家という破局によって、若菜上冒頭の女三の宮の結婚の問題を収束する。悲恋に身を滅ぼした一青年の死を一幅の絵のように格調高く歌い上げたこの巻は、みずみずしい感傷にあふれて、深く人の心を打つものがある。

一 柏木。以下、若菜下の巻末を受ける。
二 柏木の父の致仕の大臣と母北の方。
三 無理にもこの世を離れ去ってしまおうとするこの自分の命は捨てたところで何のかいもなく、親に先立つ不孝の罪が重いであろうことを思う気持は、それはそれとして。以下、柏木の思い。
四 しかしまた（考えて　死を前にしての柏木の思い　みれば）。
五 人とは違った高い望みがあって、どんなことでも、人よりもう一段立ちまさろうと。
六 並々ならず気位高く身を持したのだけれども。
七 一つ二つのつまずきのたびに、やはり自分は駄目な男だと思うようになってこのかた。朱雀院の女三の宮を妻にと望んで叶えられなかったこともその一つ。
八 全体にこの世間というものがおもしろくなく思われるようになって。「大方のわが身一つの憂きからになべての世をも怨みつるかな」（『拾遺集』巻十五恋五、題しらず、貫之）
九 後世安楽のための仏道修行に気持が深く傾いたのだが。「本意」は、望み。
一〇 野山にもさすらう仏道修行の道の重い障りになるだろうと思われたので。「いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、素性）、「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」（同上、同じ文字なき歌、物部吉名）

柏木

一 衛門の督の君、（同じような容態でずっと具合のお悪いことが）かくのみなやみわたりたまふこと、（依然として好転しな）なほおこたらで年も返りぬ。（いまま年も改まった）大臣、北の方、おぼし嘆くさまを見たてまつるに、
三 しひてかけ離れなむ命かひなく、罪重かるべきことを思ふ心は心として、
四 また、あながちにこの世に離れがたく、（どうしてもこの世に未練があって）惜しみとどめまほし（何とか命を取り留めたい身の）き身かは、（上であろうか）いはけなかりしほどより、（幼少の頃から）思ふ心異にて、何ごとをも、人に今一際まさらむと、公私のことに触れて、なのめならず思ひ上りしかど、その心かなひがたかりけりと、一つ二つの節ごとに、身を思ひおとしてしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに本意深く進みにしを、親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重きほだしなるべくおぼえしかば、とざまかうざまにまぎらはしつつ過ぐしつるを、つひになほ世に立ちまふべ

（その望みは叶いがたいのだったのだと）
（ご両親のお嘆きを考えると）
（とうとうやはりこの世で立派にやっていく分の気持を紛らせて出家せずに来たのだが）
（あれこれと自）

一 あれもこれもとわが身にとりついたのは。女三の宮とのこと、源氏の不興をこうむったこと。

二 誰だって千年の松の齢を保てるわけでないこの世は、結局いつまでも生きていられるわけでもないのだから。「憂くも世に思ふ心にかなはぬか誰も千年の松ならなくに」（『古今六帖』四、うらみ）

三 こうしてあの人（女三の宮）にも多少は思い出してもらえるようなことで。自分が今死んだら、恋ゆえにということで宮にも思い出してもらえよう、の意。

四 ほかならぬ恋の思いに身をこがしたあかしとせめてしよう。「夏虫の身をいたづらになすことも一つ思ひによりてなりけり」（『古今集』巻十一恋一、題しらず、読人しらず）による。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。「一つ思ひ」は、私と同じ恋の思い。

五 自分も相手（女三の宮）も、つらい思いをしなければならない悶着が起ったりするであろう、それよりは（いっそ自分が死んでしまったら）。

六 女三の宮との一件以外には、ほかにどのような失態もないのだから。

七 今まで長年、何か催しごとなどのある度には、いつも親しくお召し下さった、そうしたことからの不愍の思いも掛けて頂けよう。たとえば、若菜下二三七頁参照。

柏木、女三の宮に文を書く

けそうもないような心の悩みが

くもおぼえぬもの思ひの、一方ならず身に添ひにたるは、われより

誰を恨めよう

ほかに誰かはつらき、心づからもてそこなひつるにこそあめれと思

自分の不届きな料簡から何もかも駄目にしてしまったのであろうと思うと

前世

ふに、恨むべき人もなし、神仏をもかこたむかたなきは、これ皆さ

神仏にも不平の訴えようがないのは

からの因縁なのであろう

るべきにこそはあらめ、誰も千年の松ならぬ世は、つひにとまるべ

きにもあらぬを、かく人にもすこしうちしのばれぬべきほどにて、

かりそめにもかわいそうだと思って下さるお方がいるということを

なげのあはれをもかけたまふ人あらむをこそは、一つ思ひに燃えぬ

無理に生き永らえたら

どうしてもけしからぬ浮き名も流して

るしるしにはせめ、せめてながらへば、おのづからあるまじき名を

も立ち、われも人もやすからぬ乱れ出で来るやうもあらむよりは、

不届き者よとご不快にお思いであろう源氏も

いくら何でも大目に見て下さるに違いな

なめしと心置いたまふらむあたりにも、さりともおぼしゆるいてむ

人の死に際しては

一切帳消しになるはずのものだ

かし、よろづのこと、今はのとぢめには、皆消えぬべきわざなり、

また異ざまのあやまちしなければ、年ごろもののをりふしごとには

所在な

まつはしならひたまひにしかたのあはれも出で来なむ、など、つれ

考えてみればいかにも情けない

さにいろいろ思いめぐらすのも

づれに思ひ続くるも、うち返しいとあぢきなし。

どうしてこう明日をも知れぬことにしてしまった身の上かと

やるせない悲しみに心も乱れ

などかくほどもなくしなしつる身ならむと、かきくらし思ひ乱れ

て、枚も浮きぬばかり、誰のせいにしようもなくまた泣いては人やりならず流し添へつつ、いささか隙あ
りとて、ご両親などお側を離れられたすきに人々立ち去りたまへるほどに、女三の宮にかしこに御文たてまつれた
まふ。

（柏木）もう明日をも知れぬ命になりました私のことは
今は限りになりにてはべるありさまは、風の便りにでもお耳になさることも
おのづから聞こしめすや
ございましょうに
その後どうかとも
うもはべらむを、お気に止めて下さいませんのも いかがなりぬるとだに、御耳とどめさせたまは
ごもっともですが
ぬも、ことわりなれど、いと憂くもはべるかな。

お便りするのに ひどく手がふるえるので
など聞こゆるに、いみじうわななけば、書き残して思ふことも皆書きさして、

今はとて燃えむ煙もむすぼほれ
絶えぬ思ひのなほや残らむ

かわいそうにとだけでも仰せ下さい
あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまど
はむ道の光にもしはべらむ。

申し上げなさる
と聞こえたまふ。

侍従にも、こりずまに、悲しい思いのたけの数々を書いてお寄こしになった
あはれなることどもを言ひおこせたまへ
（柏木）直接対面もして 話したいことがある
り。「みづからも、今一度言ふべきことなむ」とのたまへれば、こ

柏木、小侍従へも手紙、面談を求める

一 涙に枕も浮いてしまいそうなほど。「独り寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり」（『古今六帖』五、枕）などにより、独り寝の悲しみをいう歌語的表現。女三の宮を恋しく思う嘆きである。

九 少しは（柏木の）具合がよさそうだということで。「隙」は、病の隙。

一〇 いかにも情けなく存じられます。臨終の自分に、見舞の手紙もないと恨む文面。

一一 もうこれが最後と燃える私の茶毘の煙もくすぶって空に立ち昇らず、いつまでも諦めきれぬあなたへの思いが相変らずこの世に残るでしょう。「むすぼほれ」に思いの晴れぬ意をこめる。「思ひ」の「ひ」に「火」が掛けられ、「燃えむ煙」の縁語。「この世をも後をもいかにいかにせむ燃えむ煙のむすぼほれつつ」（出典未詳、『河海抄』所引）

一二（そのお言葉に）気持を安んじて、誰のせいでもない煩悩の闇の中をさまよう私の行く手を照らす光ともいたしましょう。

一三 柏木の手引きをした小侍従。女三の宮の乳母子。

一四 なお懲りもせずに。歌語。「こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住まへば」（『古今集』巻十三恋三、題しらず、読人しらず）

一 子供の頃から、ご縁があって、お邸にしょっちゅう参上しては、（柏木を）親しく存じ上げている人なので。小侍従の母が女三の宮の乳母で、その姉が柏木の乳母という間柄（若菜下一九九～二〇〇頁参照）。

二 （柏木の、女三の宮に対する）大それた恋心は、うとましい感じがなさるものの。「おぼえたまふ」は、思われなさる。「たまふ」は柏木に対する敬語。

三 おいやではございましょうが、この手紙へのご返事はなさって下さいませ。

四 （あの人とのことは）ほんとに情けないことと、もう懲り懲りしましたので。柏木とのことが源氏に知られてしまったことをいう。

五 ご性質が、しっかりしていて重々しいといったお方ではないのだが。以下、女三の宮の心中を忖度する体の草子地。

六 柏木の父、致仕の大臣。

七 すぐれた行者。修験道の行者である。

八 大和平野の南、河内との国境の山。一言主の神や、修験道の開祖とされる役行者の伝説で名高く、役行者開基という金剛山寺がある。修験道の霊場で、歌枕でもある。

九 真言密教の祈念。柏木の病気平癒のため。

一〇 山野に修行する効験ある僧。「聖」は、官許を得ず山野に修行する私度僧。「験者」は、法力の効験ある僧の意。

致仕の大臣邸　葛城山の聖

侍従の人も、童より、さるたよりに参り通ひつつ、見たてまつり馴れたる人なれば、おほけなき心こそうたておぼえたまへれ、今はと聞くはいと悲しうて、泣く泣く、「なほこの御返り。まことにこれをとぢめにもこそはべれ」と聞こゆれば、「われも、今日か明日かのこちして、もの心細ければ、おほかたのあはればかりは思ひ知らるれど、いと心憂きことと思ひ懲りにしかば、いみじうなむつつましき」とて、さらに書いたまはず。御心本性の、強くづしやかなるにはあらねど、はづかしげなる人の御けしきの、をりをりにまほならぬが、いと恐ろしうわびしきなるべし。されど、御硯などまかなひて責めきこゆれば、しぶしぶに書いたまふ。取りて、忍びて、宵の闇に紛れて まぎれに、かしこに参りぬ。

（小侍従）三　本当にこれが最後のお手紙になるかもしれません　（女三宮）　人の死ぬのは悲しいものとは身にしみて思われますけれども　四　どうしてもお書きにならない　五　宮にとっては気の置けるあの源氏のご機嫌が　つらく思われるのであろう　ご用意して　宵

大臣、致仕の大臣邸　かしこき行ひ人、葛城山より請じ出でたる、待ち受けたまひて、加持参らせむとしたまふ。御修法、読経なども、いとおどろ大変な騒ぎである　おどろしう騒ぎたり。人の申すままに、さまざま聖だつ験者などの、

六　七　八　九　奉仕させようとなさっている　一〇　招き迎えたのを　とても大規模で　お勧めするままに

一 柏木の弟の方々を、（招請のため）各地につかわしては。柏木は、致仕の大臣の長子である。
二 山に籠って修行する僧の意。ここは、修験道の行者。
三 陰陽寮（中務省の被管）に属して、占いや祓えをする。令制によれば、定員六名。ほかに民間にもこれを業とする者がいた。
四 柏木の様子から、女の怨霊が取り憑いていると判断するのである。
五 物の怪の、正体を現してくるのもないのに。陰陽師たちの言う「女の霊」である。憑坐に駆り移されて正体を名乗るものもないのである。若菜下二一五～六頁、六条の御息所の死霊出現のくだり参照。
六 こうした辺鄙な山々にまで、験者をお求めになるのだった。前に「深き山に籠りたるなどをも……」とあったのを受ける。
七 葛城山の「かしこき行ひ人」。
八 梵語を漢訳しないでそのまま読み上げるもの。密教で、災害を除き功徳を得るという。陀羅尼呪。
九 『大鏡』時平伝に、時平の長男、八条の大将保忠が病床で、『薬師経』の「いはゆる宮毘羅大将」という個所を僧が読み上げたところ、自分を縊るのだと聞いて恐れのあまり息絶えたという話がある。『花鳥余情』に、『世継物語』に時平の三男敦忠の話として載せるとするのは誤り。なお巻末三一六頁参照。

柏木、小侍従と語る

をさをさ世にも聞こえず（ほとんど世間にも知られず）、深き山に籠りたるなどをも、弟の君たち（一）をつかはしつつ、尋ね召すに、けにくく心づきなき山伏（一二）どもなども、いと多く参る。わづらひたまふさまの、（柏木のご病状は）そこはかとなくものを心細く思ひて、音をのみ、時々泣きたまふ。陰陽師（一三）なども、多くは女の霊とのみ占ひ申しければ、さることもやとおぼせど、さらにものの（一五）（全く）けのあらはれ出で来るもなきに、思ほしわづらひて、かかる隈々（一六）を（困り果てられたあげく）も尋ねたまふなりけり。この聖（一七）も、丈高やかに、まぶしつべたまして（まなざしも冷酷な光を放って）くて、荒らかにおどろおどろしく陀羅尼（一八）読むを、「いで、あな憎や。（柏木）（一九）罪の深き身にやあらむ、陀羅尼の声高きは、いと気恐ろしくて、いよいよ死ぬべくこそおぼゆれ」とて、やをらすべり出でて、この侍従とかたらひたまふ。

大臣は、さも知りたまはず、うち休みたると、人々して申させたまへば、さおぼして、忍びやかにこの聖と物語したまふ。おとなびたまへれど、なほはなやぎたるところつきて、もの笑ひしたまふ大

（無愛想で）（恐ろしげな）（何というわけでもなくただもの悲しげな）（面持で）（声を挙げて）（時々泣かれるだけである）（そうかもしれぬと）（大臣は）（前世の罪業の深い身なのだろうか）（恐ろしげな声をあげて）（死にそうな気がする）（親しく話をなさる）（そうともお気づきでなく）（眠っていますと）（そっと病床を離れ出て）（柏木が）（女房に報告させなさったので）（そう思い込まれて）（お年は召したが）（相変らず陽気なところがおありで）（よくお笑いになる）

一 何の罪咎のせいとも（父大臣は）お心当りもないのに、陰陽師たちが占ったという女の怨霊とは。

二 本当に、そんな女三の宮のご執心がこの身に取り憑いているのなら。

三 私のような不届きな望みを抱いて。以下の柏木の思いについて、『河海抄』が『伊勢物語』六十五段の一節を引くように、古注は、業平と二条の后とのことをその典型的な例として思い浮べている。

四 ひどい間違いを犯したというわけでもないのに。相手は后妃というわけでもないのに、という思い。（若菜下二一一頁、二三八頁参照）

五 六条の院の試楽の宴席でのこと。（若菜下二五八～九頁）

六 そのままおかしくなって、うろうろするようになった魂が、もとの身体にも返らなくなってしまったのだが。煩悶あるいは病気では魂が身体から遊離すると信じられていた。「身にも返らず」は、重症の状態。

七 （恋しい女三の宮のいる）六条の院の中をあてどなくさまよったら、魂結びをしてもとに戻して下さい。『河海抄』は「思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えば魂結びせよ」（『伊勢物語』百十段）、「恋ひわびて夜々まどふわが魂はなかなか身にも返らざりけり」（出典未詳）の二歌を引く。魂結びは、二巻葵八六頁注五参照。

八 脱殻。魂の脱殻。病による衰弱のさま。

臣の、かかる者どもと向ひゐて、このわづらひそめたまひしありさま、何ともなくうちたゆみつつ、重りたまへること、「まことにこのもののけあらはるべう念じたまへ」など、こまやかにかたらひたまふも、いとあはれなり。「かれ聞きたまへ。何の罪ともおぼし寄らぬに、占ひよりけむ女の霊こそ、まことにさる御執の身に添ひたるならば、いとはしき身をひきかへ、やむごとなくこそなりぬべけれ。さてもおほけなき心ありて、さるまじきあやまちを引き出でて、人の御名をも立て、身をもかへりみぬたぐひ、昔の世にもなくやはありける、と思ひなほすに、なほけはひわづらはしう、かの御心に、かかる咎を知られたてまつりて、世にながらへむこともいとまばゆくおぼゆるは、げに異なる御光なるべし。深きあやまちもなきに、見合はせたてまつりし夕のほどより、やがてかき乱り、まどひそめにし魂の、身にも返らずなりにしを、かの院のうちにあくがれありかば、結びとどめたまへよ」など、いと弱げに、からのやうなるさ

（こうした山伏風情の者とさし向いで）（柏木が病気になられた当初の様子や）（（大臣）本当に女の物）（重くなられたこと）（どういうこともなくぐずぐずしながら）（心から）（ご依頼になるの）（の怪がついているのなら正体を現すよう祈念して下さい）（も）（親なればこそと思われる（柏木）あれをお聞きなさい）（愛想の尽きたこの身もうって変って）（大切なものと思われることだろう）（とんでもない間違いをしでかして）（身の破滅もいとわぬといった例は）（相手のお方の浮き名も立て）（なかったわけ）（ではないのだ）（と気を取り直してみても）（やはり様子が何となく恐ろしく）（源氏の）（失態を知られ申したからには）（この世に生き永らえることも大それた分不相応の）（格別のご威光なのだろう）（ことと思われるのは）

九 面やつれしていられるであろうお姿が、今目のあたりにありありと拝見するような気持で、想像されなさるので。

一〇 ほんとうに、この身をさまよい出ているのでもあろう魂が（恋しい宮のもとに）しばしば行くのでもあろうか、などと。前に「かの院のうちにあくがれありかば……」とあったのを受ける。和泉式部に「もの思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」（『後拾遺集』巻二十、神祇）の歌がある。

一一 もう今となっては、この宮のことも総て終り、一切何も申し上げますまい。

一二 この世ではこんな淡いご縁で終ってしまったが、これから先来世をかけていつまでも成仏の障りになるであろうと思うと、つらいことだ。

一三 私の見た夢を、自分の胸のうち一つだけでそうだったのかと思うだけで、ほかに打ち明ける人もいないのが、何とも心残りでならないことだ。女三の宮が自分の胤を宿していること（若菜下二〇九～二一〇頁参照）を、誰にも知らせることができないのをいう。

一四 手燭。松の木を細長く削って、先に油を塗り、手許に紙を巻く。

女三の宮の返書、それへの柏木の返事

一五 お気の毒なこととお聞きしていますが、どうしてお便りもできましょう。すべてご推察を。

一六 前の、柏木の手紙の「絶えぬ思ひのなほや残らむ」の歌（二六九頁）。

まして、泣きみ笑ひみかたらひたまふ。（泣いたり笑ったりして）

宮もものをのみはづかしうつつましとおぼしたるさまを語る。（女三の宮も何かにつけて空恐ろしく顔向けもできぬ思いでいられる様子を）（小侍従は）その さ てうちしめり、面痩せたまへらむ御さまの、面影に見たてまつることこちして思ひやられたまへば、げにあくがるらむ魂や行き通ふらむなど、いとどしきこころも乱るれば、（柏木）「今さらに、この御ことよ、かけても聞こえじ。この世はかうはかなくて過ぎぬるを、長き世のほだしにもこそと思ふなむ、いとほしき。心苦しき御ことを、たひらかにとだにいかで聞き置いたてまつらむ。見し夢を心ひとつに思ひ合はせて、また語る人もなきが、いみじういぶせくもあるかな」など、取り集め思ひしみたまへるさまの深きを、かつはいとうたて恐ろしう思へど、あはれはた、え忍ばず、この人もいみじう泣く。紙燭召して、（宮の）御返り見たまへば、御手もなほいとはかなげに、をかしきほどに書いたまひて、（女三宮）心苦しう聞きながら、いかでかは。ただおしはかり。「残らむ」

（ようにうち沈んで）（ますます気分もひどく悪くなるので）（気にかかるお産のことを）（無事にすまされたとせめてお聞きしてからあの世に行きたいと思う）（あれもこれもひどく思い詰めていられる執着の深さを）（小侍従は一一方ではおぞけだつほどこわく）（気の毒な思いは）（こらえきれず）（ご筆跡もいまだにとても幼なげだが）（れた風情に）

一 私も一緒に、煙となって空に立ち昇って消えてしまいたい思いです、情けない身の上を嘆く悩みの競いに。柏木の「燃えむ煙もむすぼほれ」に対して、私は煙となって消えたい、という。

二 おくれを取りましょうや。歌の末句から直ちに続いて、煙の競いにおくれは取りませぬ、の意。

三 いや何ということか、この「煙くらべ」のお歌くらいが、私のこの世の思い出なのだろう。「煙」というところから、次の「はかなく」云々の概嘆がもらされる。

四 文章の続きもおぼつかなく、見馴れぬ鳥の足跡のような筆跡で。衰弱して、文字の連綿もおぼつかないさま。「蒼頡観二鳥跡一作二文字一史記」（『河海抄』）

五 行方も知れぬ大空の煙となってしまいましょうとも、いとしいお方のお側を離れることはありますまい。「煙」は、火葬の煙。「立ち」は「煙」の縁語。

六 夕暮はとりわけ思いをこめてお眺め下さい。火葬の煙が雲となってたなびくという発想があった。一巻夕顔に「見し人の煙を雲とながむればゆふべの空もむつましきかな」（一七三頁）という源氏の歌がある。

七 お見咎めなさるであろう人目も。源氏のこと。

八 死んでしまっては詮ないことですが、かわいそうな者よとだけでもいつまでもお心をおかけ下さい。

とあるは、（との仰せは）

一 立ち添ひて消えやしなまし憂きことを
思ひ乱るる煙くらべに

二 後るべうやは。

とばかりあるを、あはれにかたじけなしと思ふ。（柏木は）しみじみもったいないことと

三 「いでや、この煙ばかりこそは、この世の思ひ出でならめ。はかなくもありけるかな」と、いとど泣きまさりたまひて、御返り、臥しながらうち休みつつ書いたまふ。言の葉の続きもなう、あやしき鳥の跡のやうにて、

（柏木）何とも淡いご縁だったことだ　いよいよひどくお泣きになって　お返事を　筆を休め休めして

四 行方なき空の煙となりぬとも
思ふあたりを立ちは離れじ

五 夕はわきてながめさせたまへ。六 とがめきこえさせたまはむ人目をも、今は心やすくおぼしなりて、七 かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ。八

夕暮　今はもうお気になさらずに

九（私が死んだら）こと改めて世間の人は不審なことと思い当りもしようが。女三の宮への恋ゆえに死んだのだと、疑惑を招くかもしれないが、の意。

一〇（柏木は）いつもなら、いつまでも前に坐らせて、（女三の宮のことが聞きたくて）埒もない話までしゃべらせようとなさるのに、口数も少なくていらっしゃることだ。小侍従の思い。

一一 柏木のご容態を、乳母も、小侍従に話して聞かせて。乳母は、小侍従の伯母（二七〇頁注一参照）。

女三の宮、男子―後の薫―を出産

一二 あわてて宮の御殿においでになった。紫の上といる居室の東の対から、寝殿の西面に、である。紫の上は、前年十二月に六条の院に帰っている（若菜下二五二頁参照）。

など、書き乱りて（しどけなく書いて）、ここちの苦しさまさりければ、「よし。いたう（柏木）もうよい ひどく夜のふけないうちに ふけぬさきに、帰り参りたまひて、かく限りのさまになむとも聞こ（こうしてもう最期の様子だということもお知らせして下さい）えたまへ。今さらに人あやしと思ひ合はせむを、わが世ののちさへ（死んだあとのことまで心にかかるとは情けないことだ）思ふこそくちをしけれ。いかなる昔の契りにて、いとかかることし（どうした前世の因縁で）も心にしみけむ」と、泣く泣くゐざり入りたまひぬれば、例は無期（病床に）にむかへすゑて、すずろ言をさへ言はせまほしうしたまふを、言少（悲しくてならぬので）なにても、と思ふがあはれなるに、えも出でやらず。御ありさまを（思いきって帰りもならない）乳母も語りて、いみじく泣きまどふ。大臣などのおぼしたるけしき（ひどく泣きうろたえる）ぞいみじきや。「昨日今日すこしよろしかりつるを、などかいと弱（大臣）げには見えたまふ」と騒ぎたまふ。「何か、なほとまりはべるまじ（父大臣などのお嘆きの様子もただならぬものがある）きなめり」と聞こえたまひて、みづからも泣いたまふ。（多少はよいようだったのに）

宮は、この暮れつかたよりなやましうしたまひけるを、その御け（この日の）しきと見たてまつり知りたる人々騒ぎみちて、大殿にも聞こえたりければ、おどろきてわたりたまへり。御心のうちは、あなくちをし（ご気分がお悪くなられたのを）（産気づかれた）（ご様子とお気づき申した女房たちが一同に色めき立って）（源氏）（柏木）いえもう（やはり生き永らえられないのでご）（ご自身も）（源氏はご内心何と残念なことよ）

一 余計なことを思うこともなくて宮のお産をお世話申すのであったら、めったにないことに心も弾む思いであろうに。柏木の子という疑いがなければ、正室の腹でもあり、子供の少ない源氏にとって晩年の慶事であるはずだ。

二 法力の効験あらたかな僧。

三 ご祈禱は、いつもずっと絶え間なくしていられるので。「不断」は、僧の交替によって昼夜間断なく勤行すること。「不断の御読経」の語がある。

男子出生と聞いての源氏の思い

四 こうした秘密の事情のあるお子が、あいにくなことに、実の父の面影がはっきりそれと人目につくであろう男の子としてお生れになったことは、困ったことであろう。深窓に育てられる女子と違って、男子は人目につく。

五 しかしまた、こんな胸の痛む疑惑のかかったお子であるからには。再び、源氏の思い。

六 自分が今までずっと恐ろしく思っていた罪業（藤壺との密通で冷泉院の生れたこと）の応報なのだろう。

七 この現世で、こうした意外な応報を受けたのだから、来世の罪も少しは軽くなろうか。『河海抄』は、『往生要集』（巻下、大文第十、問答料簡、第五臨終念相）を引く。「有智之人、以二智恵力一能令二地獄極重之業、現世軽受一、愚癡之人、現世軽業、地獄重受」。

産養の儀

や、思ひまずるかたなくて見たてまつらましかば、めづらしくうれしからまし、とおぼせど、人にはけしき漏らさじとおぼせば、験者など召し、御修法はいつとなく不断にせらるれば、僧どものなかに験ある限り皆参りて、加持参り騒ぐ。

様子を悟られまいと

夜一夜なやみ明かさせたまひて、日さし上がるほどに生まれたまひぬ。男君と聞きたまふに、四かく忍びたることの、あやにくにいちじるき顔つきにてさし出でたまへらむこそ苦しかるべけれ、女こそ、何となくまぎれ、あまたの人の見るものならねばやすけれ、とおぼすに、五またかく心苦しき疑ひまじりたるにては、心やすきかたにもの、したまふもいとよしかし、さてもあやしや、六わが世とともに恐ろしと思ひしことの報いなめり、七この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪も、すこし軽みなむや、とおぼす。

お苦しみのままお明かしになって

何かと人目につかず

女ならば

それにしても不思議だ

人はた知らぬことなれば、かく心ことなる御腹にて、末に出でおはしたる御おぼえいみじかりなむと、思ひいとなみつかうまつる。

周囲の人に事情は分らぬことなので

こうした格別のご正室のご所生で

晩年にお生れになった若君のご寵愛は大したものであろうと

心配はないが

世話のやけない男子でいられるのもかえって好都合というものだ

気を入れて何かとご奉仕申し上げる

八 乳付け、臍緒、湯浴その他、新しく生れた若君のお世話の格式。皇子誕生の儀に准じたものであろう。
九 六条の院の婦人たち。紫の上、花散里、明石の上。
一〇 産婦、新生児へのお祝いの品々。出産後、三夜、五夜、七夜、九夜に、産婦に産後の肥立ちのための食物、新生児に襁褓などを贈る。
一一 片木で作った角盆。食器を載せる。（図録七参照）
一二 折敷に台を取り付けた形のもの。今の三方はその一種。食器を載せる。（図録七参照）
一三 高い一本脚の付いた食器を載せるもの。もと土製の坏（碗の類い）の下にわげ物を置いたものであるが、後、作り付けの木製で漆を塗る。（図録七参照）
一四 産婦（女三の宮）の召し上がり物。
一五 身分に応じてけじめをつけた贈り物の数々を。
一六 中宮としての公的な格式で。
一七 産養には粥を贈る風習があった。
一八 強飯を卵形に握り固めた物。下々の者への馳走。

「五十具」は、五十膳。
一九 六条の院内の諸司の役人らへの饗膳は。
二〇 六条の院の下役たち、庁（院の庶務をつかさどる役所）の召次（雑事に任ずる）の詰所、その他下々の者たちまで。
二一 中宮職の役人は、長官（従四位下相当）をはじめ。

女三の宮、源氏に出家を望む

御産屋の儀式、いかめしうおどろおどろし。（人の耳目をそばだたせる盛大で）御方々、さまざまにし出でたまふ御産養、世の常の折敷、衝重、高坏などの心ばへも、（それぞれに工夫をこらされる意匠）ことさらに心々にいどましさ見えつつなむ。五日の夜、中宮の御方より、子持ちの御前のもの、女房のなかにも、品々に思ひ当てたる際々、公事にいかめしうせさせたまへり。（盛大に整えさせなさった）御粥、屯食五十具、所所の饗、院の下部、庁の召次所、何かの隈まで、いかめしうせさせたまへり。宮司、大夫よりはじめて、院の殿上人皆参れり。七夜は、内裏より、それも公ざまなり。致仕の大臣など、心ことにつかうまつりたまふべきに、このころは何ごともおぼされで、（冷泉院格別念を入れてお祝い申し一通りのお祝いのど）おほぞうの御とぶらひのみぞありける。宮たち、上達部など、あまた参りたまふ。（親王方）おほかたのけしきも、世になきまでかしづききこえたまへど、大殿の御心のうちに、心苦しとおぼすことありて、いたうもてはやしきこえたまはず、御遊びなどはなかりけり。

（表向きのお祝いの様子も）（若君を）（柏木の病のため）（近頃はお気持のゆとりもなく）（挨拶があっただけだった）（源氏のご心中ひそかに）（つらくお思いになることがあるので）（そう大して盛大なお祝いをしておあげにならず）（音楽のお催し）

宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならは

（女三の宮いかにもきゃしゃなお身体で）（とても気味の悪い）（はじめて）

一 不仕合せな身の上を、（お産という）こうしたひどい経験をなさったにつけても、つくづく悲しくお思いなので。「身の心憂きこと」は、柏木とのことがあり、源氏にも疎まれているわが身の上。

二 生れたばかりの若君が、まだむさくるしいようでいらっしゃったりするのを、格別目をかけてあやしてさし上げるといったふうでもおありでないので。

三 こんなに、こわいほどお美しくていらっしゃるのに。「ゆゆし」は、不吉なことが起らねばよいが、という気持。美しい人は、神隠しにあったり夭折したりすることがあると信じられていた。

四 これからは、もうずっとこんなふうに、よそよそしいお仕打ちもひどくなるばかりだろうと。

五 私ももう先が短く、いつ死ぬか分らぬという気持で。

六 こうしたお産のすぐあとはもの騒がしい気がしますので、なかなか参れませんが。

のお産におじけづいてしまわれたので
ぬことの恐ろしうおぼされけるに、御湯（薬湯）などもきこしめさず、一身の心憂きことを、かかるにつけてもおぼし入れば、さはれ（いっそのこと）、このついでにも死なばや、とおぼす。大殿（おとど）は、いとよう人目を飾りおぼせど、二まだむつかしげにおはするなどを、取り分きても見たてまつりたまはずなどあれば、老いしらへる人（年取って遠慮のない女房）などは、「いでや（はてさて）、おろそかにも（ずいぶん冷たくていらっしゃること）おはしますかな。めづらしうさし出でたまへる（ずいぶん久しぶりにお生れになったこの若君のご様子が）御ありさまの、三かばかりゆゆしきまでにおはしますを」と、うつくしみきこゆれば、片耳に聞きたまひて、四さのみこそは、おぼし隔つることもまさらめと、（小耳にはさまれて）（源氏が恨めしく）うらめしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。（わが身の咎も責められて尼にでもなってしまいたいというお気持になられた）

（源氏は一女三の宮方）夜なども、こなたには大殿籠らず、昼つかたなどぞさしのぞきたまふ。（源氏）「世の中のはかなきを見るままに、行く末短う、もの心細くて、行ひがちになりにてはべれば、六かかるほどのらうがはしきことちするにより、え参り来ぬを、いかが、御ここちはさはやかにおぼしなりにたりや。（勤行にはげむことが多くなりましたので）（どうですか）（ご気分はさっぱりなさったでしょうか）（病味の）心苦しうこそ」とて、（おいたわしいことです）御几帳のそばよりさしのぞ（脇）

（世の中の常ない有様を見るにつけ）（顔をお出しになる）

七 こういう人は罪も重いと申します。お産で死ぬのは罪が重いと考えられていた。
八 もしやその功徳で命を取り留めますかどうか、ためしてみたく思いますし。
九 いつもの幼稚なご様子にも似ず、ひどく大人ぶって申し上げなさるのを。『湖月抄』は、「是、実は霊のいはせまゐらするなるべし」という。
一〇 本当にご本心から出家を望んでおっしゃるのなら。以下、女三の宮の出家を許そうかとも思う源氏の心中。
一一（このままでは）一方でお世話しながらも、（宮が）事あるごとに、疎ましく思われなさるのがお気の毒だし。「心置かれ」の「れ」は、受身。
一二（かといって）自分としてもどうしても宮への不快の念は改められそうになく、いやな仕打ちも折々はまじるだろうから。
一三 父君の朱雀院などがそうした噂をお耳になさった場合も、総てが自分の不行届きということになってしまおう。朱雀院は真相をお知りのはずもないから、という含み。

きたまへり。御頭もたげたまひて、「なほ、え生きたるまじきここちなむしはべるを、かかる人は罪も重かなり、尼になりて、もしそれにや生きとまるとこころみ、また亡くなるとも、罪を失ふこともやとなむ思ひはべる」と、常の御けはひよりはいとおとなびて聞こえたまふを、「いとうたて、ゆゆしき御ことなり。などてか、さまではおぼす。かかることは、さのみこそ恐ろしかなれど、さてながらへぬわざならばこそあらめ」と聞こえたまふ。御心のうちには、
一〇 まことにさもおぼし寄りてのたまはば、さやうにて見たてまつらむは、あはれなりなむかし、かつ見つつも、ことに触れて心置かれたまはむが心苦しう、われながらもえ思ひなほすまじう、憂きことうちまじりぬべきを、おのづからおろかに人の見とがむることもあらむが、いといとほしう、院などの聞こしめさむことも、わがおこたりにのみこそはならめ、御なやみにことづけて、さもやなしたてまつりてまし、などおぼし寄れど、また、いとあたらしう、あはれに、

枕からお上げになって（女三宮）どうしても　生き永らえられそうにない気がいたしますので　死ぬにしても　罪をなくすことにもなりましょうかと存じます　（源氏）とんでもない　縁起でもないお話です　どうして　そこまでお思いなのです　お産というものは　それは怖いものではありましょうが　それで命がもたないというのなら話はまた別ですけれども　しみじみと心深いことであろう　出家をおさせしてお世話申すのは　自然宮へのお扱いが疎略だと人目に立つこともあろうことが　まことに困ったことで　ご病気を口実にして　お望み通り尼にしてさし上げようか　いかにも残念だし　おいたわしく

柏木

一　こんなにお若くて行く末長い宮のお髪を、尼姿に削ぎ捨てるのも痛々しいので。「生ひ先」は、人生の将来の意と、髪の延びて行く先の意を掛ける。「やつす」は、見すぼらしくする意。

二　そんなことをおっしゃらずに気を強くお持ちなさい。大したことはないと思います。

三　もう駄目かと思われた人も、よくなった例が身近にありますから。大病から回復した紫の上のこと。

四　西山の寺の帝。朱雀院のこと。

五　あれほど身体の弱っておられたお方が。女三の宮のこと。不例は懐妊当初の頃からだった（若菜下二二三～四頁）。

六　今まで長年お目にかからなかった間よりも、父院がとても恋しく思われなさるのに。「たまふ」は、院に対する敬語。宮は源氏に嫁して七年、父院との対面がなかったが、昨年暮れの御賀でお会いして、恋しさがかえってつのるという気持。

七　宮が、父院についてこんなふうにおっしゃっている旨を。「聞こゆ」は、お噂申し上げるというほどの意。

朱雀院、下山して女三の宮を見舞う

一かばかり遠き御髪の生ひ先を、しかやつさむことも心苦しければ、

（源氏）二「なほ強くおぼしなれ。けしうはおはせじ。三限りと見ゆる人も、たひらかなる例近ければ、（やはり望みは持てる世の中です）さすがに頼みある世になむ」など聞こえたまひて、（薬湯）御湯参りたまふ。（宮は）いといたう青み痩せて、（言いようもなく頼りなげなご様子で）あさましうはかなげにてうち臥したまへる御さま、（おっとりして）おほどき、（かわいらしげなので）うつくしげなれば、（気弱く大目に見たくなるようなお方だ）（源氏は）いみじきあやまちありとも、（どんなひどい間違いを犯したにしても）心弱く許しつべき御さまかな、と見たてまつりたまふ。

四山の帝は、（女三の宮のお産がご無事にすんだと）めづらしき御ことたひらかなりと聞こしめして、（いとしく会いたいとお思いなのに）あはれにゆかしう思ほすに、（こうしてお具合が悪いという知らせばかりなので）かくなやみたまふよしのみあれば、（どうおなりになることかと）いかにものしたまふべきにかと、（お勤めも手につかずご心配になった）御行ひも乱れておぼしけり。五さばかり弱りたまへる人の、（お産のあと）ものをきこしめさで日ごろ経たまへば、（何も召し上がらないで）いとたの（すっかり回復の望みもないようになって（女三宮））もしげなくなりたまひて、「年ごろ見たてまつらざりしほどよりも、（もう二度とお目にかかれなくなってしまうのでし）院のいと恋しくおぼえたまふを、六またも見たてまつらずなりぬるにや」と、いたう泣いたまふ。七かく聞こえたまふさま、（しかるべき人をようか）さるべき人

八 院にお取り次ぎさせなさったので。主語は源氏。源氏に暗に院の来訪を乞う意図があったかと思わせる書きぶりである。

九 出家の身として、子への愛に引かれることの反省。

一〇『河海抄』は、『吏部王記』を引いて、延長八年（九三〇）九月二十八日申の時（午後四時前後）に、宇多法皇が、病の上皇（醍醐）を見舞って加持された例に似るという。上皇は、翌日、出家、崩御。

一一 やはり煩悩を拭いきれないものは、子を思う親心の闇でございましたので。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）による。

一二 もしも親子の順が逆になって（宮に）先立たれでもしたら。「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」（『古今六帖』一、雫。『和漢朗詠集』下、無常。遍昭）

一三 そのまま、会うこともなく死別した怨念がお互いあとあとまで残ろうかと、情けなく思われますので。父娘ともども、成道の妨げになろうか、という。

一四 ご僧形にはなられても。

一五 正式の（僧位による）ご僧衣ではなく、墨染の衣をまとわれたお姿が。

一六 源氏にも出家の素志があるからである。それで、次に「例の」という。

［院は］介して八して伝へ奏せさせたまひければ、いと堪へがたう悲しとおぼして、あるまじきこととはおぼしめしながら、夜に隠れて出でさせたまへり。

かねてさる御消息もなくて、にはかにかくわたりおはしまいたれば、主人の院、［朱雀院が］おどろきかしこまりきこえたまふ。「世の中をかへりみすまじう思ひはべりしかど、なほまどひさめがたきものは、この道の闇になむはべりければ、行ひも懈怠して、もし後れ先立つ道の道理のままならで別れなば、やがてこの恨みもやかたみに残らむと、あぢきなさに、この世のそしりをば知らで、かくものしはべる」と聞こえたまふ。御容貌異にても、なまめかしうなつかしきさまにうち忍びやつれたまひて、うるはしき御法服ならず、墨染の御姿、あらまほしうきよらなるも、うらやましく見たてまつりたまふ。例の、まづ涙おとしたまふ。「わづらひたまふ御さま、ことなる御なやみにもはべらず。ただ月ごろ弱りたまへる御ありさまに、はか

（朱雀院）突然のお成りに恐懼のよしを言上なさる　世俗のことを思いわずらうまいと心を決めていましたが　勤行も　怠って　この世での非難には目をつぶって　こうして出かけてまいりました　優雅な　親しみやすいご様子で　お忍びの質素な身なりをなさって　申し分なくご立派でお美しいのも　（源氏）宮のご病状は　格別どうという　ここ幾月も　お身体で　お具合でもございません

とお食事なども召し上がらぬことが続いたせいか

ばかしうものなども参らぬ積りにや、かくものしたまふにこそ」など聞こえたまふ。

（源氏）一「かたはらいたき御座なれども」とて、御帳の前に、御茵参りて入れたてまつりたまふ。宮をも、とかう人々つくろひきこえて、床の下におろしたてまつる。御几帳すこし押しやらせたまひて、「夜居の加持の僧などのここちすれど、まだ験つくばかりの行ひにもあらねば、かたはらいたけれど、ただおぼつかなくおぼえたまふらむさまを、さながら見たまふべきなり」とて、御目おしのごはせたまふ。宮も、いと弱げに泣いたまひて、「生くべうもおぼえはべらぬを、かくおはしまいたるついでに、尼になさせたまひてよ」と聞こえたまふ。「さる御本意あらば、いと尊きことなるを、さすがに限らぬ命のほどにて、行く末遠き人は、かへりてことの乱れあり、世の人にそしらるるやうありぬべき」などのたまはせて、大殿の君に、

（朱雀院）八「かくなむ進みのたまふを、今は限りのさまならば、片時のほどに

こんなにお弱りになったのです

何かと女房たちが身なりをおつくろい申して

押しのけなさって

法力が身につくほどの修行も積んで

会いたいとお思いであろう私の姿を

はた目も憚られることだが

いないから

ありのままとくとご覧になるがよい

（女三宮）とても生きられそうにございませんので

尼になさって下さいませ

先の長い若い人は

いつ死ぬとは分らぬ身の上で

そうは言え人間

（朱雀院）八

源氏

もうこれが最期といった容態なら

女三の宮、父院に出家のことを願う

一 はなはだ恐縮なご座所ですが。病床に近く請じ入れるのを恐縮する挨拶。

二 み帳台。女三の宮の病床。

三 お座布団。（三巻図録一一参照）

四 帳台の浜床。（若菜下二〇五頁注一三参照）

五 夜どおし、貴人のお側にはべって、加持祈禱する僧。病床に近づいた僧形の自分を、こういう。

六 こうしてお出まし頂いたついでに。僧形の父院に、出家の師僧になってほしいと頼む。

七 かえって、あとで間違いが起って、世間の非難を浴びるようなことになりかねないだろう。若い尼には異性問題が起りやすい、という。

八 このようにご自分からおっしゃるのだが。

九 ほんの一時のことにせよ。死ぬまでのわずかの間でも、の意。

ても、その助けあるべきさまにてとなむ、思うたまふる（存します）」とのたまへば、「日ごろもかくなむのたまへど、邪気（一〇）などの、人の心たぶろかして（一一）、かかるかたにて進むるやうもはべなるをとて、聞きも入れはべらぬなり（さないのです）」と聞こえたまふ。「もののけの教へにても、それに負けぬとて、あしかるべきことならばこそ憚らめ（一二）、弱りにたる人の、限りとてものしたまはむことを、聞き過ぐさむは、後の悔心苦しうや」とのたまふ。御心のうち、限りなううしろやすくゆづりおきし御ことをうけとりたまひて、さしも心ざし深からず、わが思ふやうにはあらぬ御けしきを、ことに触れつつ、年ごろ聞こしめしおぼしつめけること、色に出でて恨みきこえたまふべきにもあらねば、世の人の思ひ言ふらむところもくちをしうおぼしわたるに、かかるをりにもて離れなむも、何かは、人笑へに、世を恨みたるけしきならで、さもあらざらむ、おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただあづけおきたてまつりししるしには思ひなして、

（源氏）この日頃もそうおっしゃるのですが
（朱雀院）物の怪の言わせることにせよ
出家の功徳を受けられる身にしてやりたいと
病人の気持をまどわ
取り上げもいた
衰えきった病人が
自分としては満足の
ここ長年噂にお聞きになって積り積
夫婦仲を怨んでのことのようでもな
外聞悪く
それで不都合があろうか
宮の身柄をお預けしたそのかいはあったのだと強いて思い慰めて

一〇 物の怪などが。取り憑いた物の怪が、そんなことを病人に言わせるのかもしれない、という。
一一 こんなありがたそうなことを言って、その気にならせるようなことも世間によくあることと思いまして。
一二 それに負けたからといって、その結果が悪いことだというのなら、さし控えもしましょうが。
一三 あとで後悔して、つらい思いをすることになろうやもしれません。
一四 世間の人が（この結婚を）どう思いどう噂しているであろうかということも、無念に思い続けてこられたので。
一五 こうした機会に、（宮が）出家してしまうのも。以下、朱雀院の心中の決意。
一六 （源氏は）一通りのお世話役としては、今後も十分信頼のおけるお気持の方であることを。「おきて」は、思慮、心構えの意。

一 面あてがましく源氏から背き離れるといったふうではなくとも。なるべく穏便に事を運んで、というほどの気持。

二 お形見分けとして、（女三の宮が朱雀院から）広く趣のあるお邸を拝領しておられるのを。「処分」は、遺産の分与、また、その物。この「宮」は、後の三条の宮。

三 自分の生きておいでのうちに、尼の暮しながらも、よそながら安心できるようにしておき。「おはします」は、筆者の朱雀院に対する敬意が文面に現れたもの。

四 せめて出家の戒（僧尼の守るべき戒律）をお受けになることだけでもして、仏道に縁を結ぶことにしましょう。

五 情けなくお思いのこと（柏木との密通を咎める気持）も忘れて。

六 病床のまわりに立てめぐらしてある几帳の内。

七 表面はさりげなくしていても、（自分の仕打ちを）恨めしいとお思いのこともあったのであろうかと、お察し申されるにつけ、おいたわしく不憫に思われる。宮の思い詰めた様子に、源氏も悔恨に似た思いを抱く。

憎げに背くさまにはあらずとも、御処分に広くおもしろき宮賜はりたまへるを、つくろひて住ませたてまつらむ、わがおはします世に、さるかたにても、うしろめたからず聞きおき、またかの大殿も、さいふとも、いとおろかにはよも思ひ放ちたまはじ、その心ばへをも見果てむ、と思ほし取りて、「さらば、かくものしたるついでに、忌むこと受けたまはむをだに、結縁にせむかし」とのたまはす。

大殿の君、憂しとおぼすかたも忘れて、こはいかなるべきことぞと悲しくくちをしければ、え堪へたまはず、内に入りて、「などか、いくばくもはべるまじき身をふり捨てて、かうはおぼしなりにける。なほしばし心をしづめたまひて、御湯参り、ものなどをもきこしめせ。尊きことなりとも、御身弱うては行ひもしたまひてむや。かつはつくろひたまひてこそ」と聞こえたまへど、頭ふりて、いとつらうのたまふとおぼしたり。つれなくて、うらめしとおぼすこともありけるにやと見たてまつりたまふに、いとほしうあはれなり。

一 憎げに背くさまにはあらずとも（手入れして）、御処分に広くおもしろき宮賜はりたまへるを（宮を）、つくろひて住ませたてまつらむ、わがおはします世に、さるかたにても、うしろめたからず聞きおき、またかの大殿（源氏）も、さいふとも（そうしたお気持も見届けようといっても）、いとおろかにはよも思ひ放ち（ひどく疎略によもや宮をお見放しになることもあるまい）たまはじ、その心ばへをも見果てむ（と気持をお決めになって（朱雀院））、と思ほし取りて、「さらば、かくものしたるついでに（こうして出かけて来た機会に）、忌むこと受けたまはむをだに、結縁にせむかし」とのたまはす。

大殿の君（源氏）、憂しとおぼすかたも忘れて、こはいかなるべきことぞ（これは一体どうなることか）と悲しくくちをしければ、え堪へ（気持をお抑えになれず）たまはず、内に入りて、「などか（（源氏）どうして）、いくばくもはべるまじき身をふり捨てて（これから先長くもないでしょう私を置きざりにして）、かうはおぼしなりにける（こんな気持におなりになったのです）。なほしばし心をしづめたまひて（どうか今しばらく気持をお静めになって）、御湯参り（お薬を召し上がり）、ものなどをもきこしめせ（お食事などもお摂りなさいませ）。尊きことなりとも（功徳になることといっても）、御身弱うては行ひもしたまひてむや（お勤めもおできになりましょうか）。かつはつくろひたまひてこそ」と聞こえたまへど（［女三宮は］）、頭ふりて（いかにも思いやりのない言葉とお思いの様子だ）、いとつらうのたまふとおぼしたり。つれなくて、うらめしとおぼすこともありけるにやと見たてまつりたまふに、いとほしうあはれなり。

女三の宮、出家

とかく聞こえかへさひ、おぼしやすらふほどに、夜明けがたになりぬ。帰り入らむに、道も昼ははしたなかるべしと急がせたまひて、御祈りにさぶらふなかに、やむごとなう尊き限り召し入れて、御髪おろさせたまふ。いと盛りにきよらなる御髪を削ぎ捨てて、忌むことと受けたまふ作法、悲しうくちをしければ、大殿はえ忍びあへたまはず、いみじう泣いたまふ。院はた、もとより取り分きてやむごとなう、人よりもすぐれて見たてまつらむとおぼしをこの世にはかひなきやうにないたてまつるも、飽かず悲しければ、うちしほたれたまふ。「かくても、たひらかにて、同じうは念誦をもつとめたまへ」と聞こえ置きたまひて、明け果てぬるに、急ぎて出でさせたまひぬ。

宮は、なほ弱う消え入るやうにしたまひて、はかばかしうもえ見たてまつらず、ものなども聞こえたまはず。大殿も、「夢のやうに思ひたまへ乱るる心まどひに、かう昔おぼえたる御幸のかしこまり

[源氏が]あれこれ反対申し上げ　ためらっていられるうちに　[西山に]　目立って具合悪かろうと[朱雀院は]　位の高い有徳の僧ばかりを[簾中に]　美しい　[女三宮を]はじめからとりわけ大事になさって　涙にかきくれなさる　[朱雀院]　ご挨拶も申し上げなさらない　はっきり父院のお顔を拝することもできず　夢かと思うばかりの悲しみに取り乱しておりまして

一八五

一 女三の宮の病気平癒のご祈禱に詰めている僧たちの中で。

九 御髪を削がせなさる。尼は、垂れ髪を肩のあたりまで短く切り揃える。

一〇 朱雀院はもちろん。以下、父親として鍾愛のわが子を尼にする悲しみをいう。

一一 誰よりもしあわせな生涯を送らせようとお思いだったのに。そのために、源氏を婿に選んだのである。

一二 この現世では仕方のないようなお姿（尼姿）にしてさし上げるのも。来世の功徳はともかくも、の含み。

一三 こうしたお姿にはなられたが、それでせめて病気もお治りになって、どうせなら、念誦にもおはげみなさい。「念誦」は、心に仏を念じ、口に仏名、経文を誦すること。

一四 このように昔が思い出されますお成りの御礼も、お目にかけられません不行届きの次第は、後日改めて参上のうえ、お詫び申し上げます。

朱雀院、帰山

九年前、帝とともに朱雀院は、六条の院に御幸した（四巻藤裏葉三〇四頁以下）。「かしこまり」は、恐懼の気持。具体的には、饗応、贈り物その他のしかるべきもてなしをいう。

一 私の命も今日か明日かに思われました時に。以下、若菜上冒頭の、女三の宮の婿選びの時のことをふり返って言う。

二 普通とは違った尼姿で、人目の多い所に住むのは不自然なことでしょうが。このまま六条の院に住むのもいかがと思われる、の意。

三 (そうかといって)出家の者が住むような山里などに離れ住んだ暮しも、これまた、そうはいうものの心細いことでしょう。「山里」は、東山、北山、西山など、京周辺の別邸。

四 かえって顔も上げられない思いがいたされます。今後のことをこうまで念を押して頼まれるのは、ご信頼がないゆえか、という含み。

五 六時(晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜)の一つ。夜半から明け方にかけての勤行。

六 女三の宮に取り憑いていた物の怪が憑坐に駆り移されて。

七 うまく取り返したと、先の一人についてはお思いだったのが。紫の上のこと(若菜下二一五～八頁参照)。女三の宮の出家は、六条の御息所の死霊のしわざだった。

六条の御息所の死霊出現

をも、え御覧ぜられぬらうがはしさは、ことさらに参りはべりてなむ」と聞こえたまふ。御送りに(西山までのお供に)人々参らせたまふ。「世の中の今日か明日かにおぼえはべりしほどに、また知る人もなくてただよはむ(宮が)ほかに面倒を見る人もなくて寄るべもなく暮すことがことの、あはれに避りがたうおぼえはべしかば、御本意にはあらざ(このようにお願い申して)りけめど、かく聞こえつけて、年ごろは心やすく思うたまへつるを、(宮が)命を取り留めましたらもしも生きとまりはべらば、さま異に変りて、人しげき住ひはつきなかるべきを、さるべき山里などにかけ離れたらむありさまも、(尼の身の上相応に)たさすがに心細かるべくや。さまに従ひて、なほおぼし放つまじく」など聞こえたまへば、「さらにかくまで仰せらるるなむ、かへりてはづかしう思ひたまへらるる。乱りごこち、とかく乱れはべりて、何ごともえわきまへはべらず」とて、げにいと堪へがたげにおぼしたり。

(今まではずっと安心に思っていたのですが)(ほっておけないように思われましたので)(お気も進まなかったでしょうが)(今後もお見捨てなきように)(何かと取り乱しまして)(何の分別もつかぬ思いでございます)

後夜の御加持に、御もののけ出で来て、「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をばおぼしたりしが、いとねたかりしか

(物怪)(源氏)(悲しみに)(とてもくやしかったので)

八『河海抄』は、小一条院女御（道長女、寛子）が危篤になり、剃髪した時、堀河の大臣（顕光）、その女延子（小一条院女御）の死霊が現れて快哉を叫んだ話をあげる。「御もののけども、いといみじう、し得たり、し得たりと、堀河の大臣、女御、諸声に、今ぞ胸あく、と叫びののしりたまふ」（『栄花物語』峰の月）

九 源氏は、あまりのことに茫然たる思いで。次の「さは」以下、源氏の思い。

一〇 ご祈禱をさらに日延べして。

柏木、重態に陥る

一一 北の方の女二の宮（落葉の宮）がおいたわしく思われなさるので。「おぼえたまへば」の「たまふ」は、落葉の宮に対する敬語。落葉の宮の呼称については、若菜下二一四頁注四参照。

一二 こちら（致仕の太政大臣の邸）にお越し頂くことは。以下、柏木の心中。

一三 母北の方も、父の致仕の太政大臣も。

一四 落葉の宮のお邸。後の三〇三頁に「一条の宮」と見える。

ば、このわたりに、（この宮のお側に）さりげなくてなむ、（そ知らぬ顔で）日ごろさぶらひつる。（この日頃おつきしていたのだ）今は帰りなむ」とて、うち笑ふ。いとあさましう、さは、（では）このもののけのここにも離れざりけるにやあらむ、とおぼすに、いとほしうくや（おいたわしく残念にお思いになる）しうおぼさる。宮、すこし生き出でたまふやうなれど、（物怪が去って）なほ頼みが（生気を取りもどされたようだが）（望みが持てそうになく）たげに見えたまふ。さぶらふ人々も、いといふかひなうおぼゆれど、（お付きの女房たちも）（宮の出家に）すっかり気落ちした思いだが（尼になられても）かうても、たひらかにだにおはしまさば、（無事にお治りになりさえすれば）（悲しみに耐えて）と念じつつ、御修法また延べて、（油断なく）たゆみなく行はせなど、（源氏は）よろづにせさせたまふ。（あらゆる手だてを尽させなさる）

かの衛門の督は、（女三の宮のご出家のことを）かかる御ことを聞きたまふに、いとど消え入るやうにしたまひて、（全く回復の望みもおぼつかなくなってしまわれた）むげに頼むかた少なうなりたまひにたり。女宮のあはれにおぼえたまへば、ここにわたりたまはむことは、今さらに軽々しきやうにもあらむを、上も大臣も、（ご身分柄ふさわしくないようだし）かくつと添ひおはすれば、おのづからとりはづして見たてまつりたまふやうもあらむに、（何かの折についどうかして宮のお姿をお見かけ申されるようなこともあっては）（ぴったり側においでなので）あぢきなしとおぼして、「かの宮に、（柏木）とかくして今一度まうでむ」（何とかして）（参上したい）とのたまふを、（おもしろくないと）さらにゆるしきこえたまはず。（ご両親は）

落葉の宮への配慮

一 落葉の宮の母御息所。
二 柏木の父、致仕の太政大臣。
三 二品の宮（女三の宮）のお身の上に心をお痛めだった折に。源氏との仲が思わしくないらしいことに心を痛められた時、の意。たとえば、若菜下二四六頁参照。
四 どなたに対してもおいたわしいことですが。父院や母御息所のお嘆きも思われるが、というほどの意。
五 添い遂げられぬ夫婦の縁が恨めしく（落葉の宮が）お嘆きになるであろうことが、お気の毒でたまりません。
六 まあ、何という縁起でもないことを。そなたに先立たれては、どれほど生き永らえられる私と思って、こうまで先々のことをおっしゃるのです。
七 柏木の弟の一人。すぐ次の弟かと思われるが、若菜下二一九頁に「御弟ども、左大弁、藤宰相など」とあって、そこでは次弟は左大弁と読める。

誰にも、この宮の御ことを聞こえつけたまふ。はじめより母御息所は、をさをさ心ゆきたまはざりしを、この大臣の居立ちねむごろに聞こえたまひて、心ざし深かりしに負けたまひて、院にも、いかがはせむとおぼしゆるしけるを、二品の宮の御こと思ほし乱れけるついでに、「なかなかこの宮は、行く先うしろやすく、まめやかなる後見まうけたまへり」と、のたまはすと聞きたまひしを、かたじけなう思ひ出づ。「かくて見捨てたてまつりぬるなめりと思ふにつけては、さまざまにいとほしけれど、心よりほかなる命なれば、堪へぬ契りらめしうておぼし嘆かれむが、心苦しきこと。御心ざしありてとぶらひものせさせたまへ」と、母上にも聞こえたまふ。

「いで、あなゆゆし。後れたてまつりては、いくばく世に経べき身とて、かうまで行く先のことをばのたまふ」とて、泣きにのみ泣きたまへば、え聞こえやりたまはず。右大弁の君にぞ、おほかたのことどもはくはしう聞こえたまふ。

（柏木は）お頼みになる
この結婚に）あまり気が進まれなかったのだが
たってのご希望だったのにお折れになって
心にお頼い申し上げなさって
朱雀院も
あるまいと同意なさったのだが
実直な
（朱雀院）かえって
先々も安心な
夫をお持ちになった
恐れ多い
（柏木）こうしてあとにお残し申すことになってしまったようだと
ことと
思うままにならない寿命ですから
どうか気をつけてお世話してさし上げて下さい
（母上）
ただもうお泣きになる
それ以上何もおっしゃれない
ばかりなので
一通りのことは
お頼みなさる

八 員外の大納言。大納言は大臣に次ぐ太政官の要職。正三位相当。柏木はすでに中納言（従三位相当）であった（若菜下一九九頁）。

九 父、致仕の太政大臣。

柏木、権大納言に昇進

心ばへののどかによくおはしつる君なれば、弟の君たちも、まだ末々の若きは、親とのみ頼みきこえたまへるに、かう心細うのたまふを、悲しと思はぬ人なく、殿のうちの人も嘆く。おほやけも、惜しみくちをしがらせたまふ。かく限りと聞こしめして、にはかに権大納言になさせたまへり。よろこびに思ひ起こして、今一度も参りたまふやうもやあると、おぼしのたまはせけれど、さらにえためらひやりたまはで、苦しきなかにも、かしこまり申したまふ。大臣も、かく重き御おぼえを見たまふにつけても、いよいよ悲しうあたらしとおぼしまどふ。

［柏木は］気立てがゆったりしてやさしかったお方なので　まるで親のようにお頼り申していられたのに　［柏木が］　最期と　帝も　お邸に仕える人々も　昇進の喜びに元気を出して　参内な　［帝は］ご意中を仰せだったけれども　［柏木は］一向によくおなりにはなれないので　［病床から］お礼を言上なさる　帝のご寵遇を　折角のことな

夕霧、病床を訪う

夕霧

大将の君、常にいと深う思ひ嘆き、とぶらひきこえたまふ。御よろこびにもまづまうでたまへり。一〇このおはする対のほとり、こなたの御門は、一一馬車たち込み、人騒がしう騒ぎみちたり。今年となりては、［柏木は］起き上がることもをさをさしたまはねば、一二重々しき御さまに、乱れながらはえ対面したまはで、思ひつつ弱りぬることと思ふに、

お見舞い申し上げなさる　昇進の　お祝いにも

一〇 柏木が病床に臥しておられる対の屋の近く。東の対か西の対かであろう。

一一 馬や車がひしめき合って。大納言昇進のお祝い言上の訪客たちのである。（図録四参照）

一二 近衛の大将ともあろう重職の夕霧に、取り乱した病床ではお目にかかりにくくて。

一 どうぞこちらにお通り下さい。「なほ」は、やはり。失礼をかえりみず、無理にも、の気持。『河海抄』は、病中、関白に就任した道兼を、実資が見舞った話をあげて、「病中の任官、臥しながら客人に対面の事以下、あまた相似たり」という。『栄花物語』として文を引くが、『大鏡』道兼伝である。

二 加持、祈禱に詰めている僧。

三 今日は昇進のよろこびごとの日ということで、元気になっていたらどんなによかろうかと思うのに、（こんな具合なので）夕霧はひどくがっかりし張合いのない思いだ。

四 枕上に立ててある几帳の帷の端を。

五 室内でも烏帽子をかぶるのがしきたりである。この場面、『源氏物語絵巻』に図画されている（図録一参照）。

六 袿。下着である。

七 夜具。「御衾は、紅の打ちたるにて、領なし。長さ八尺。また八幅か五幅の物なり。領のかたには、紅の練糸を太らかに縒りて二筋ならべて、横様に三針、差しを縫ふなり。それを領と知るべし。表、小葵の綾、裏、単文なり」（『雅亮装束抄』）（二巻図録一一参照）

くちをしければ、「なほこなたに入らせたまへ。いとらうがはしきさまにはべる罪は、おのづからおぼしゆるされなむ」とて、臥したまへる枕上のかたに、僧などしばし出だしたまひて、入れたてまつりたまふ。

（柏木）ひどくむさくるしくしております失礼の段は事情お察しの上大目に見て頂けましょう

昔から

早うより、いささか隔てたまふことなうむつびかはしたまふ御仲なれば、別れむことの悲しう恋しかるべき嘆き、親兄弟の御思ひにも劣らず。今日はよろこびとて、ここちよげならましをと思ふに、いとくちをしうかひなし。「などかくたのもしげなくはなりたまひにける。今日は、かかる御よろこびに、いささかすくよかにもやとこそ思ひはべりつれ」とて、几帳のつま引き上げたまへれば、「いとくちをしう、その人にもあらずなりにてはべりや」とて、烏帽子ばかりおし入れて、すこし起き上がらむとしたまへど、いと苦しげなり。白き衣どもの、なつかしうなよよかなるをあまた重ねて、衾ひきかけて臥したまへり。御座のあたりものきよげに、けはひかう

（夕霧の）仲よくしていられる

（柏木と）

（夕霧の）お悲しみ

（夕霧）どうしてこんなにお弱りになってしまわれたのです

（柏木）全日頃の私らしくもない姿になってしまいました

（夕霧を）席を外させなさって

こんなおめでたい日ですから

少しでもお元気でいられるかと思っていましたのに

（頭に）

身について

柔らかそうなのを

ご病床の周囲はこざっぱりと

あたりに薫物の

八 枕を立てて身を託して。「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く　香炉峯の雪は簾を撥いて看る」（『白氏文集』巻十六。『和漢朗詠集』下、山家）。詩語とでもいうべき語。

柏木、源氏の不興をほのめかし、落葉の宮のことを託す

九 死ぬ時は一緒にとお約束申していましたのに。「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」（『古今六帖』一、雫。『和漢朗詠集』下、無常。遍昭）

一〇 何が原因で病が重くなられたとも、私ははっきり伺うこともできないでおります。それとなく水を向けたものであろう。後の柏木の告白を誘い出すことになる。

かおり高く　奥ゆかしいお暮しぶりである　くつろいだままながら　たしなみあり

ばしう、心にくくぞ住みなしたまへる。うちとけながら、用意ありげに　むさくるしい

と見ゆ。重くわづらひたる人は、おのづから髪髭も乱れ、ものむつ

感じも出てくるものなのだが

かしきけはひも添ふわざなるを、痩せさらぼひたるしも、いよいよ

気品のある　痩せ衰えた姿がかえって

白うあてなるさまして、枕をそばたてて、ものなど聞こえたまふけ

［夕霧に］

はひ、いと弱げに、息も絶えつつ、あはれげなり。

（夕霧）長らくご病気だった割には　そうひどくやつれてもいらっしゃいませ

「久しうわづらひたまへるほどよりは、ことにいたうもそこなはれ

かえって男ぶりがあがったようにお見えで

たまはざりけり。常の御容貌よりも、なかなかまさりてなむ見えた

おっしゃりはするものの

まふ」とのたまふものから、涙おしのごひて、（夕霧）「後れ先立つ隔てな

くとこそ契りきこえしか。いみじうもあるかな。この御ここちのさ

何と悲しいことでしょう　あなたのご病気について

まを、何ごとにて重りたまふとだに、え聞きわきはべらず。かく親

もどかしく思うことばかりで　（柏木）私自身は　こんな親

しき間柄でありながら

しきほどながら、おぼつかなくのみ」などのたまふに、「心には、

どこが苦しいということもありませんので

いつから重くなったのかもはっきりいたしません

重くなるけぢめもおぼえはべらず。そこどころと苦しきこともなけ

急にこんなことになろうとは思ってもいませんでしたうちに

れば、たちまちにかうも思うたまへざりしほどに、月日も経で弱り

正気

はべりにければ、今はうつし心も失せたるやうになむ。惜しげなき

一 祈禱や、願。「願」は、病気平癒を祈願して神仏に立てる願。

二 そうは言いますものの、この世の別れに臨みますと、心にかかることは、いかにもたくさんあるものです。

三 わが身を修めるという面ではもちろん。「是は世間立身の事なるべし。此三段の書き様おもしろし。孝経云、夫孝、始於事親、中於事君、終於立身。開宗明義章第一 此心おのづから見えたり」（『岷江入楚』）

四 それでも心の中に秘めておけないことを、あなたのほかの誰に訴えることができましょう。「愁ふ」は、愁訴、苦しい胸中を訴える意。

五 とても、それとなく打ち明けるのも憚られることです。「あいなし」は、そぐわない、ふさわしくない意。

六 ちょっとした行き違いがございまして。「ことの違ひめ」で一語。間違い。

七 私としてはそれがまことに不本意で、もうこの世に生きてゆけぬような気になりまして。

八 朱雀院の五十の御賀の試楽の日に。「楽所」は、舞楽の音楽を奏する楽屋。（若菜下二五二頁以下参照）

身を、さまざまにひきとどめらるる祈り、願などの力にや、さすがにかかづらふも、なかなか苦しうはべれば、心もてなむ、急ぎ立つこころちしはべる。さるは、この世の別れ、避りがたきことは、いと多うなむ。親にもつかうまつりさして、今さらに御心どもをなやましし、君につかうまつることもなかばのほどにて、身をかへりみるかたはた、ましてはかばかしからぬ恨みをとどめつるおほかたの嘆きをばさるものにて、また心のうちに思うたまへ乱るることのはべるを、かかる今はのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを、誰にかは愁へはべらむ。これかれあまたものすれど、さまざまなることにて、さらにかすめはべらむも、あいなしかし。六条の院にいささかなることの違ひめありて、月ごろ、心のうちにかしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、召しありて、院の御賀の楽所のこころみの日参りて、御けしきを賜はりしに、な

あれやこれやとこの世に引き止められる　永らえているのも　かえって　自分から進んで　早くあの世に行きたい思いがします　両親への孝養も十分に尽さずに　帝にお仕えすることも中途半端な有様で　なおさら大したこともなかったことが心残りに思われますような世間並みの嘆きはそれはそれとしまして　こうした最期の時に臨んで　思い悩んでいることがあるのですが　何で人に打ち明けてよいものかと思いますけれども　誰彼と兄弟はたくさんいますが　いろいろ事情もあって　源氏　心ひそかに申しわけなくお思い申すことがございましたが　病気になったと思われたのですが　参上して　お呼び出しがあって　ご機嫌をうかがいました折

九 いまだにご不興のお気持があるように、御目差しを拝しまして。源氏が、柏木を見やって、その若さを皮肉るような言葉を掛けたことをさす（若菜下二五八頁）。

一〇 気持がうろうろするようになりまして、このようにもとにも戻らぬことになってしまったのです。魂が身体から離れて落着かぬようになるのを、病気と考えていた。魂の離れ去った状態が、死である。

一一（源氏は）私のことなど、人の数にも入れては下さらなかったでしょうが。

一二 どんな讒言などがあったのかと。事実をぼかす意図から、こう言う。

一三 このお咎めが許されましたら、あなたのお蔭とありがたく存じられましょう。

一四 心中、思い当ることもいろいろあるけれども。夕霧は「あるやうあることなるべし。すきものは、さだめて、わがけしきとりしことには忍ばぬにやありけむ」（若菜下二五一頁）と思ったことがある。

一五 何を気をまわして、そんなことをお考えなのでしょう。「心の鬼」は、気の咎め。

ほ許されぬ御心ばへあるさまに、御目尻を見たてまつりはべりて、ますますこの世に生きてゆくことも何もかもいとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、あぢきなう思うたまへしに、一〇心の騒ぎそめて、かくしづまらずなりぬるになむ。人数にはおぼし入れざりけめど、いはけなうはべし時より、深く頼み申す心のはべりしを、一一いかなる讒言などのありけるにかと、これなむ、この世の愁へにて残りはべるべければ、論なうかの後の世のさまたげにもやと思うたまふるを、ことのついでにはべらば、御耳とどめて、よろしうあきらめ申させたまへ。亡からむうしろにも、一二この勘事許されたらむなむ、御徳にはべるべき」などのたまふままに、いと苦しげにのみ見えまされば、いみじうて、一四心のうちに思ひ合はすることどもあれど、さしてたしかにはえしもおしはからず。

「いかなる御心の鬼にかは。さらにさやうなる御けしきもなく、かく重りたまへるよしをも聞きおどろき嘆きたまふこと、限りなうこそくちをしがり申したまふめりしか。なにかくおぼすことあるにて

（夕霧）一五

二九三

は、今まで残いたまひつらむ。（黙っていらしたのでしょう）こなたかなたあきらめ申すべかりけるものを、今はいふかひなしや」（お二人の間に立って釈明してさし上げられたでしょうに）（もうどうしようもないことです）とて、取り返さまほしう悲しくおぼさる。「げにいささかも隙ありつるをり、聞こえうけたまはるべうこそはべりけれ。（柏木）三 されど、いとかう今日明日としもやはと、みづからながら知らぬ命のほどを、思ひのどめはべりけるもはかなくなむ。（自分のことながら先の分らない寿命というものを）（のんきに考えていましたのも浅はかなことでした）四 このことは、さらに御心より漏らしたまふまじ。（ご配慮いただきたいと思って）さるべきついではべらむをりには、御用意加へたまへとて、（申し上げておくのです）聞こえおくになむ。五 一条にものしたまふ宮、ことに触れてとぶらひきこえたまへ。（何かのことにつけて見舞って上げて下さい）六 心苦しきさまにて、院などにも聞こしめされたまはむを、つくろひたまへ」などのたまふ。（言いたいことはたくさんあるに違いないけれども）言はまほしきことは多かるべけれど、ここちせむかたなくなりにければ、「（柏木）（もうお帰り下さい）出でさせたまひね」と、手かきこえたまふ。（手真似でおうながし）（申される）加持参る僧ども近う参り、上、大臣などおはし集りて、人（女房）人も立ち騒げば、（夕霧は）泣く泣く出でたまひぬ。（改めて申し上げるまでもなく）七 女御をばさらにも聞こえず、八 この大将の御方なども、いみじう嘆

一 昔を今に取り返すことができたらと悲しい思いでいられる。自分が何とかしたものをと、くやむ気持。

二 確かに、少しでも具合のよい時があった折に、お話し申し上げ、ご意見も伺えばよかったと思います。「隙」は、病の隙。

三 まさかこんなに今日明日にもはかなくなるようなことはあるまいと。

四 今申し上げたことは、どうかお心一つにおさめて口外して下さいますな。

五 落葉の宮。一条に邸があったことが分る。後の三〇三頁に「一条の宮」とある。

六 （夫たる自分に先立たれて頼りなく）おいたわしいお身の上で、父院などにもご心配をお掛けなさるでしょうが、そこをよしなにお取り計らい下さい。夕霧に宮の後見役を頼むのである。

七 冷泉院の弘徽殿の女御。柏木の同腹の妹。

八 夕霧の北の方、雲居の雁。柏木の異腹の妹。

柏木、死去

九 柏木は、気立てが、誰にも分け隔てせず、兄貴分然とした面倒見のいいお方だったので。「人のこのかみ心」で、一語。「このかみ」は、年長者。

一〇 髭黒の北の方、玉鬘。これも異腹の姉に当る。

一一（ご祈禱も）柏木の病を治す薬ではないので。恋の病なのだから、の意。「我こそや見ぬ人恋ふる病すれ逢ふ日ならではやむ薬なし」（『拾遺集』巻十一恋一、題しらず、読人しらず）による。

一二「水の泡の消えで憂き身といひながら流れてなほも頼まるるかな」（『古今集』巻十五恋五、題しらず、友則）、「浮きながら消ぬる泡ともなりなむ流れてとだに頼まれぬ身は」（同上、題しらず、友則）。

落葉の宮、母御息所の嘆き

実らぬ恋に死んだ、という含意である。

一三 けじめ正しい態度で終始されたので。柏木の、落葉の宮に対して礼を失わなかったさま。

一四（宮としては）柏木を怨みに思う点も別にない。

一五 ただ、こんなに早死にする運命のお人だったから、妙に何でもこの世の中のことをおもしろくなくお思いだったのだろう。事情を知らぬ宮として、自分に冷淡だったことを善意に解釈する趣。

一六 ひどく不体裁な、情けないことと。独身を建て前とする皇女が、折角結婚したのに、夫に先立たれたことを不面目とするのである。「人笑へ」は、人の笑いものになること。

両親の悲しみ、女三の宮の思い

きたまふ。心おきての、あまねく人のこのかみ心にものしたまひければ、右の大殿の北の方も、この君をのみぞ、（このお方だけを）むつましきものに思（気の置けないご兄弟とお思い）ひきこえたまひければ、よろづに思ひ嘆きたまひて、御祈りなど取（ご祈禱）（ご自分で特別に）り分きてせさせたまひけれど、やむ薬ならねば、かひなきわざにな（役にも立たないことなので）むありける。女宮にも、つひにえ対面しきこえたまはで、泡の消え（落葉の宮）入るやうにて亡せたまひぬ。

（柏木は）年ごろ、下の心こそねむごろに深くもなかりしか、おほかたには、（内心こそ心をこめて宮を深く愛したわけでもなかったが）（表面一通りには）（まことに申し分なくお扱いして大事にお世話申し上げて）いとあらまほしくもてなしかしづききこえて、気なつかしう、心ばへをかしう、うちとけぬさまにて過ぐいたまひければ、つらき節もことになし。ただかく短かりける御身にて、あやしくなべての世すさまじう思ひたまひけるなりけり、と思ひ出でたまふに、いみじう（（落葉宮は））（風雅のそぶりもやさしく）（たしなみもあり）（たまらなくて）て、おぼし入りたるさま、いと心苦し。御息所も、いみじう人笑へ（悲しみに沈んでいられる様子は）にくちをしと、見たてまつり嘆きたまふこと限りなし。（言いようもなく）（宮のお身の上を）

大臣、北の方などは、ましていはむかたなく、われこそ先立ため、（母北の方）（自分の方こそ先に死にたい）

一 世間の道理もあったものではなく、情けないことよと、（亡き子を）恋い焦がれていられるが、どうしようもない。「世のことわり」は、親が先立つこと。

二 尼になった女三の宮。

三 柏木が、生れたお子のことを、自分の胤だと思っていたのも（若菜下二〇九～二一〇頁参照）。以下、女三の宮の思い。

四 ほんとに、こうしたお子が生れる前世からの因縁があって、あのように思いもかけない情けないこと（密通のこと）もあったのであろうか。

五 あれこれ心細くて。若君の父は夭死し、母である自分は尼になってしまったこと。

源氏の、宮への態度

六 生後五十日。五十日の祝いがある。次の頁に見える。

七 いやもう、何とも張合いのないことではあります。尼になったのを嘆く気持。

八（尼になった）今のほうが逆に、大切にこの上もなく丁重にお扱い申し上げなさる。

一世のことわりなうつらいことと、こがれたまへど、何のかひなし。二尼宮は、おほけなき心もうたてのみおぼされて、世に長かれとしも思いではなかったが亡くなったと大それた柏木の恋心も心底からいまわしく思われて生き永らえてほしいともお胸にせまる思いがあることだおぼざざりしを、かくなむと聞きたまふは、さすがにいとあはれなりかし。三若君の御ことを、さぞと思ひたりしも、四げにかかるべき契りにてや、思ひのほかに心憂きこともありけむ、とおぼし寄るに、五さまざまもの心細うて、うち泣かれたまひぬ。

弥生（三月）になれば、空のけしきもものうららかにて、この君（若君）、五十日（六）のほどになりたまひて、いと白ううつくしう（かわいらしく）、ほどよりはおよすけて、物語などしたまふ。大殿（源氏）わたりたまひて、「御（源氏）ここちはさはや（ご気分はもうさっぱりなさいましたか）かになりたまひにたりや。いでや、いとかひなくもはべるかな。例（今）の御ありさまにて、かく見なしたてまつらましかば、いかにうれしうはべらまし。心憂くおぼし捨てけること」と、涙ぐみて怨みきこえたまふ。日々にわたりたまひて、今しも、やむごとなく限りなきさまにもてなしきこえたまふ。

元気におなりのご様子を拝見するのでしたらまでどおりのお姿で
日数にしては知恵がおつきで
何か声をあげたりなさる
情けなくもお見捨てになったことよ

九　小児に餅を含ませる祝いごと。

若君、五十日の祝い

一〇　母君の女三の宮が尼のお姿でいられるのを、女房たちが「どうしたものでしょうか」などと意見を申してためらうけれども。祝いの席に尼のお姿では、とあやぶむ。

一一　寝殿の南正面。表座敷。

一二　若君の召し上がり物の膳。

一三　籠を編んで、薄様を敷き、五菓（柑、橘、栗、柿、梨）を入れて、松の枝などに付けるという（『河海抄』桐壺）。

一四　檜の薄板で作った折り箱。仕切りを作って食物を入れる。（二巻図録一二参照）

一五　母屋にも、廂の間にも。

一六　無心にお祝いしているのを。

一七　お髪の裾がいっぱいに広がっているのを。尼削ぎの姿をいう。すぐ後に「長う削ぎたりければ」とある。

一八　頬に垂らす前髪。これも、尼は短くしたものらしい。

一九　女三の宮が、とても気のひける思いで、顔をそむけていられるお姿は。

二〇　次々と重なって見える鈍色（濃い鼠色）の袿に、黄のかった紅色の表着などお召しになって。「今様色」は、『河海抄』に紅色とし、『花鳥余情』に濃い紅梅色とする。

御五十日に餅参らせたまはむとて、（さし上げなさるということで）容貌異なる御さまを、人々、「いかに」など聞こえやすらへど、（源氏）院わたらせたまひて、（源氏）構うまい「何か。女（子が女でいらっしゃるのなら）にものしたまはばこそ、同じ筋にて、（縁起でもなかろうが）いまいましくもあらめ」とて、南面に、小さき御座などよそひて、（しつらえて）［若君の］参らせたまふ。御乳母、いとはなやかに装束きて、御前のもの、（様々に色どりを揃えた）いろいろを尽くしたる籠物、檜破籠の心ばへどもを、（趣向をこらした品々を）内にも外にも、（本当のことは知らぬことなので）もとの心を知らぬことなれば、取り散らし、何心もなきを、（とても見るに見かねる面映ゆいことよ）いと心苦しうまばゆきわざなりや、と［源氏は］おぼす。

（女三の宮）宮も起きゐたまひて、御髪の末の所狭うひろごりたるを、（るさがられて）いと苦しとおぼして、額など撫でつけておはするに、几帳を引きやりてゐ（お坐りになると）たまへば、いとはづかしうて背きたまへる、いとど小さう細りたまひて、御髪は惜しみきこえて、長う削ぎたりければ、うしろはこと（通の人と変りもおありでない長さだ）にけぢめも見えたまはぬほどなり。すぎすぎ見ゆる鈍色ども、黄がちなる今様色など着たまひて、まだありつかぬ御かたはらめ、かく（尼姿が身につかない御横顔は）

美しいお姿だ　あでやかで

かえってかわいらしい少女のような感じがして

てしもうつくしき子どものここちして、なまめかしうをかしげなり。

（源氏）

「いで、あな心憂。墨染こそ、なほいとうたて目もくるる色なりけれ。

こんな尼姿になられてもお目にかかることはこれからもずっと変るまいと

かやうにても見たてまつることは絶ゆまじきぞかしと、思ひなぐさめはべれど、古りがたうわりなきここちする涙の人わろさを、いとかう思ひ捨てられたてまつる身の咎に思ひなすも、さまざまに

あれこれと

残念に思われることです　つらく

胸いたうくちをしくなむ。取り返すものにもがなや」と、うち嘆きたまひて、

（源氏）

「今はとておぼし離れば、まことに御心といとひ捨てたまひけると、はづかしう心憂くなむおぼゆべき。なほあはれとおぼせ」と聞こえたまへば、

本心から世の中をお捨てになったのだと　顔向けもならず情けなく思われることでしょう

（女三宮）　こうした出家姿の人は　ものの情合いも分らぬものと　やはりいとしい者とお思い下さい

「かかるさまの人は、もののあはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとより知らぬことにて、いかがは聞こゆべからむ」とのたまへば、

（源氏）　張合いのないお言葉ですね

「かひなのことや。おぼし知るかたもあらむものを」とばかりのたまひさして、若君を見たてまつりたまふ。

聞いておりましたが　もともと分らないことですので　どうお返事したらよろしいのでしょう

家柄もよく身ぎれいな人たちばかり　とだけ途中までおっしゃって

御乳母たちは、やむごとなくめやすき限りあまたさぶらふ。召し

一　墨染というものは、やはりどうしても馴染めない悲しい色ですね。「目くる」は、目先が暗くなる意。上の「墨染」と縁語をなしていよう。

二　相変らずどうにも抑えられない涙の未練がましさを、ほんとにこうして見捨てられ申した私の悪い点と思ってみますにつけても。未練がましいところがあるから、あなたから見捨てられたのだろう、の意。「人わろさ」は、不体裁。

三　昔を今に取り返す術はないものでしょうか。「取り返すものにもがなやいにしへをありしながらのわが身と思はむ」（『源氏釈』所引、出典未詳。『奥入』三句「世の中を」）

四　もうこれきりと私をお見限りになるのでしたら。

五　お分りのこともおありでしょうに。柏木とは愛を交わしたではないか、という気持。

六　二人の愛の形見という源氏の思い入れ。

若君を見ての源氏の感慨

七 ああ、残りの命もあまりない私の晩年に、生い育つことになる人なのだね。いつまで面倒を見てあげられるか、という気持。「今さらに何生ひ出づらむ竹の子の憂き節しげき世とは知らずや」（『古今集』巻十八雑下、もの思ひける時、いときなき子を見てよめる　凡河内躬恒）

八 幼児の頃の育ちぶり。

九 明石の女御腹の宮たちは、父帝のお血筋を引いて。

一〇 そう思って見るせいか、やはりとてもよく柏木に似ていることだ。源氏の心をそのまま地の文としたもの。

一一 ああ、何というはかない因縁だったことか、とご覧になると。「人の契り」で一語。この子を残しただけで早世した柏木の薄倖をいたむ気持。

一二 今日は、不吉な言動を忌み憚ること。「言忌」は、不吉な言動を禁物のおめでたい日だから。

一三 「五十八の翁方後有り　静かに思ひて喜ぶに堪へたり　一珠甚だ小さく還りて蚌を慙づ　八子多しと雖も鴉を羨まず　秋月晩く生る丹桂の実　春風新たに長ず紫蘭の芽　盃を持ちて祝ひ願ふこと他の語なし　慎んで頭に愚かなること汝が爺に似ること勿れ」（『白氏文集』巻五十八、自嘲）。「白楽天は子なくして老にのぞむ人也。五十八にてはじめて男子むまれたり。むまるる事おそきによりて生遅と名づく。その子にむかひてつくりける詩也」（『奥入』）

出でて、つかうまつるべき心おきてなどのたまふ。「あはれ、残り少なき世に、生ひ出づべき人にこそ」とて、抱き取りたまへば、いと心やすくうち笑みて、つぶつぶと肥えて白ううつくし。大将などの児生ひ、ほのかにおぼし出づるには似たまはず。女御の宮たちは、父帝の御方ざまに、王気づきて、気高うこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず。この君、いとあてなるに添へて、愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなどを、いとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとようおぼえたりかし。ただ今ながら、眼居ののどかにはづかしきさまも、やう離れて、かをりをかしき顔ざまなり。宮はさしもおぼし分かず、人はた、さらに知らぬことなれば、ただ一所の御心のうちにのみぞ、あはれ、はかなかりける人の契りかな、と見たまふに、おほかたの世の定めなさもおぼし続けられて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今日は言忌すべき日をと、おしのごひ隠したまふ。「静かに思ひて嗟くに堪へたり」と、うち

（源氏）
［若君を］お世話申し上げる心得などおさとしになる
［若君は］
夕霧
少しも人見知りせず
まるまると
皇族らしく
気高くてはおいでだが
特に際立って美しいというわけでもいらっしゃらない
とても気品が高いのに加えて
目もとがほんのりとして
にこやかなところなどを
とてもいとしく
目つきがおっとりして人にすぐれた感じも
尋常でなく
ほのぼのした美しい面立ちである
それほどにもお見分けでなく
人はもちろん
知るはずもないことなので
源氏お一人のお心の中だけで
これのみならず世の中の無常ということもいろいろ思われて

誦じたまふ。一五十八を十取り捨てたる御齢なれど、末になりたるこ（生涯も終りに近づいた気持がなさって）こちしたまひて、（しみじみとした感慨をもよおされる）いとものあはれにおぼさる。二「汝が爺に」とも、いさめまほしうおぼしけむかし。

三このことの心知れる人、女房のなかにもあらむかし、知らぬこそねたけれ、烏滸なりと見るらむと、やすからずおぼせど、四わが御咎あることはあへなむ、五二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ、（女のお立場の方がお気の毒だ）などおぼして、（顔色）色にも出だしたまはず。（若君が）いかにも無心に笑ひたまへるまみ、口つきのうつくしきも、（目もと）（かわいらしいのも）（事情を知らない人はどうか分らな）心知らざらむ人はいかがあらむ、（いけれども）なほいとよく（柏木に）似通ひたりけりと見たまふに、（やはり）親たちの、子だにあれかしと泣いたまふらむにも、え見せず、七人知れずはかなき形見ばかりをとどめ置きて、さばかり思ひあがり、（あれほど高い望みを持ち）（立派になっていた身）およすけたりし身を、（自分から滅ぼしたことよと）心もて失ひつるよと、あはれに惜しければ、（思わず涙されるのだった）めざましと思ふ心もひき返し、（不届きなと思う気持も思い直されて）うち泣かれたまひぬ。

（女房たちがそっと座をはずした間に）人々すべり隠れたるほどに、宮の御もとに寄りたまひて、「（源氏）この

柏木の死をあわれむ源氏の心情

一　前引の詩の「五十八翁」に対していう。源氏、この年、あたかも四十八歳。

二「汝が爺に」（そちの実の父、柏木の轍を踏むでないぞ）とでも、いましめたくお思いになったことであろうよ。前引の詩中の句による草子地。

三　この秘密の事情を知っている者が、女房の中にもいるに違いない、それが自分に分らぬのは無念なことだ、さぞや間抜け者と思っているであろう、と。源氏の心中。「ことの心」で一語。手引きした女房がいるはずだからである。

四　ご自分が物笑いの種になるということなら、それは忍びもしよう。再び、源氏の心。

五　男と女、双方どちらかと言おうなら。

六　両親が、せめて子供でも残していてくれたらと、泣いていられるそうだがその両親にも、お見せできず。「あれかし」は、あってほしい。

七　人知れず、こんな頼りない形見だけをこの世に残して。「はかなき」は、表沙汰にできない、形見とも言えないような、の意。

八 こんな幼い人を見捨てて、出家してしまわれてよかったのでしょうか。まあ、何と情けない。

九 一体、昔、誰が種をまいたのかと人が聞きましたら、岩の上に生い育った松は何と答えるのでしょう。「岩根の松」は、歌語。ここは若君をさす。「岩根」に「言はむ」を響かせる。「梓弓磯辺の小松誰が世にかよろづ代かけて種をまきけむ」（『古今集』巻十七雑上、題しらず、読人しらず）を踏まえる。

一〇 どうして平静でおいでになれようと。柏木の死に悲しい思いでいられるだろう、というほどの意。

夕霧、柏木の死の事情に思いをめぐらす

一一 どうしたいきさつがあったのだろう。以下、夕霧の心。

一二 折も悪く、（事情もはっきり呑み込めず）自分としても気がかりなまま、悲しい思いで別れてしまったことだと。

若君をどうお思いなのです
人をばいかが見たまふや。かかる人を捨てて、背き果てたまひぬべき世にやありける。あな心憂」と、おどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。

（源氏）「誰が世にか種はまきしと人問はば
いかが岩根の松はこたへむ

かわいそうな子です
あはれなり」など忍びて聞こえたまふに、御いらへもなうて、ひれしてしまわれた
ふしたまへり。ことわりとおぼせば、しひても聞こえたまはず。いうお思いだろうか
かにおぼすらむ、もの深うなどはおはせねど、いかでかはただにはと、おしはかりきこえたまふも、いと心苦しうなむ。

夕霧
大将の君は、かの心に余りてほのめかし出でたりしを、いかなることにかありけむ、すこしものおぼえたるさまならましかば、さばかりうち出でそめたりしに、いとようけしきは見てましを、いふかひなきとぢめにて、をりあしういぶせくて、あはれにもありしかなと、面影忘れがたうて、兄弟の君たちよりも、しひて悲しとおぼえ

歌のお返しもせず
宮の注意をおひきしてご覧になると
物事を深く考えたりなさる方ではないが
柏木が思い余ってそれとなく口にしたことを
十分事情は察しられたであろうに
無理もないと
たってそれ以上は申し上げられない
とてもおいたわしい思いだ
もう少し意識がしっかりしている状態だったのなら
一旦言い出したことなのだから
うもない今はのきわのことで
無性に

たまひけり。[一]女宮のかく世を背きたまへるありさま、おどろおどろ（そうひどいご病気と）しき御なやみにもあらで、すがやかにおぼし立ちけるほどよ、また、（よくぞ思いきりよく決心なさったものだ）（いうわけでもなかったのに）さりとも、ゆるしきこえたまふべきことかは、[二]二条の上の、さばか（あれほど）（だからといって［源氏が］お許し申されてよいことだろうか）り限りにて、泣く泣く申したまふと聞きしをば、いみじきことにお（の危篤状態で）ぼして、つひにかくかけとどめたてまつりたまへるものを、など取（とお思いで）（とうとう今までどおりお引き止め申し上げなさったのに）り集めて思ひくだくに、[四]なほ昔より絶えず見ゆる心ばへ、え忍ばぬ（抑えかねる折）をりをりありきかし、いとようもてしづめたるうはべは、人よりけ（折がそう言えばあったことだ）（しごく冷静に構えている表面は）（人にすぐれて）に用意あり、のどかに、何ごとをこの人の心のうちに思ふらむと、（折目正しく）（落着き払って）（一体どんなことをこの人の心の中では考えているのだろうと）見る人も苦しきまでありしかど、[五]すこし弱きところつきて、なよび（はたの人も気詰りなほどであったが）（どんなに切なくても）過ぎたりしけぞかし、いみじうとも、さるまじきことに心を乱りて、（道にはずれた恋に心を苦しめて）かくしも身に代ふべきことにやはありける、人のためにもいとほし（このように命にかえてよいことであろうか）（相手の人にとっても不都合なこと）う、わが身はいたづらにやなすべき、さるべき昔の契りといひなが（だし）（わが身は滅ぼすということでよいものだろうか）（これもそうなる前世からの因縁とはいいな）ら、[六]いと軽々しう、あぢきなきことなりかし、など心ひとつに思へ（がら）（かるがる）（自分一人で）ど、[七]女君にだに聞こえ出でたまはず、さるべきついでなくて、院に（適当な機会もなくて）（源氏に）

一　女三の宮が、こうして出家のお身の上であられることも。以下、女三の宮の出家に不審を抱く夕霧の心中。

二　紫の上。二条の院は紫の上が「わが御私の殿」（若菜上八三頁）と思う邸であり、ここで病気療養中、五戒を受けた（若菜下二二二頁）。

三　あれこれと思案をこらしてみるのに。敬語を使わず、夕霧の心理に密着した地の文。

四　やはり昔からずっとうかがわれた（女三の宮に対する）気持を。夕霧は蹴鞠の時以来、柏木の恋心に気づいていた（若菜上一二九頁）。

五　すこし情に溺れるところがあって、やさし過ぎたためにこんなことになったのだ。

六　いかにも身分柄をわきまえぬ、つまらぬことなのだ。

七　北の方（雲居の雁）にすらお漏らしになることなく。雲居の雁は、柏木の異腹の妹。

八 ご法事の（お布施の）僧服や、お部屋のしつらえ。四十九日まで、七日ごとに法要を営む。

両親の嘆き

上に「日数をも……」とあった所以。

九 弟君たち、姉妹の方々が。弟は、次の「右大弁」以下、姉妹には、玉鬘、弘徽殿の女御、雲居の雁がいる。

一〇 法事に供養するお経や仏像の指図なども。

一一 柏木の弟。（二八八頁注七参照）

一二 七日目ごとに寺々に読経を依頼するお布施のことなどについて。

一三 こんなに身も世もあらず悲しんでいる親の私が世話をしては、かえって往生の妨げにもなろう。「道さまたげ」は、行く手をさえぎること。「思ふことありてこそ行け春霞道さまたげに立ちな隠しそ」（『拾遺集』巻十六雑春、延喜十五年斎院屏風に霞を分けて山寺に入る人あり　紀貫之）

一条の宮の寂寥

一四 柏木がご趣味の深かった鷹や馬。鷹狩り用に飼育に熱心だった趣。『河海抄』は、醍醐天皇の崩御後、左衛門の陣の前で御鷹を解き放った話を引く（『大鏡』昔物語）。

もまだお話しできないでいられるのだった　とは言え　こんなことをほのめかしましたと　源氏に」お話ししてみて　お顔色もうかがってみたいのだった

もまだえ申したまはざりけり。さるは、かかることをなむかすめしと申し出でて、御けしきも見まほしかりけり。

父大臣、母北の方は、涙の涸れる時とてなく悲しみに沈まれて　いつとなく　そのほか何かの準備

ぐる日数をも知りたまはず、御わざの法服、御装束、何くれのいそぎをも、君たち、御方々、とりどりになむせさせたまひける。経仏のおきてなども、右大弁の君せさせたまふ。七日七日の御誦経などを、人の聞こえおどろかすにも、「われにな聞かせそ。かくいみじと思ひまどふに、なかなか道さまたげにもこそ」とて、亡きやうにおぼしほれたり。

おわきまえでなく　思い思いに支度させなさったのだった　人がご指示を仰ぐのに対しても　（大臣）私の耳に入れてくれるな　死んだ人のように

落葉の宮は　なおさらお目にもかからぬままお別れになった心残りまで悲しみに加わって

一条の宮には、ましておぼつかなうて別れたまひにし恨みさへ添ひて、日ごろ経るままに、広き宮のうち、人気少なう心細げにて、親しく使ひならしたまひし人は、なほ参りとぶらひきこゆ。好みたまひし鷹、馬など、そのかたの預りどもも、皆つくところなう思ひ倦じて、かすかに出で入るを見たまふも、ことに触れてあはれは尽

柏木が親しく日頃使っていられた人は　それでもお見舞いにお伺いする　寄る辺なく　[落葉宮が]　気落ちして　ひっそりと　何かにつけて　悲しみは

一 以下、喪中のさま。「かやうの時は絃をはづす事なるべし」（『岷江入楚』）

二 薄墨色の喪服に身をやつして。「やつる」は、粗末な身なりをする意。

三 まあ、なんと、故殿（亡くなった柏木）のおいでかと、ついうっかりしていて、思ったことでした。

四 柏木の弟たち。柏木の遺言で、今までも何度か弔問に訪れている趣。（二八八頁注七参照）

五 寝殿の南廂であろう。「母屋の廂」と言ったのは、すぐ後に、（母屋の）御簾際まで出て応対する母御息所を意識してのことであろう。

六 世のしきたりもあることとて、お見舞の申し上げようもございませんで。何分にも、自分は他人だから、というほどの気持。

夕霧の弔問

きぬものになむありける。もて使ひたまひし御調度ども、常に弾きたまひし琵琶、和琴などの緒も、取り放ちやつされて音を立てぬも、いと埋れいたきわざなりや。御前の木立いたうけぶりて、花は時を忘れぬけしきなるをながめつつ、もの悲しく、さぶらふ人々も、鈍色にやつれつつ、さびしうつれづれなる昼つかた、前駆はなやかに追ふ音して、ここにとまりぬる人あり。「あはれ故殿の御けはひとこそ、うち忘れては思ひつれ」とて、泣くもあり。大将殿のおはしたるなりけり。御消息聞こえ入れたまへり。例の弁の君、宰相などのおはしたるとおぼしつるを、いとはづかしげにきよらなるもてなしにて入りたまへり。

五 母屋の廂に御座よそひて入れたてまつる。おしなべたるやうに、人々のあへしらひきこえむは、かたじけなきさまのしたまへれば、御息所ぞ対面したまへる。「いみじきことを思うたまへ嘆く心は、さるべき人々にも越えてはべれど、限りあれば、聞こえさせやるか

[柏木が] お道具類 見る影もなく取り外されて 気のめいる有様ではある 庭前の 一面に芽ぶいて お付きの女房たちも 先払いの声を派 手にかけて 門の前に (女房)三 夕霧 来訪の旨を申し入れなさった [夕霧は] 一気おくれするほど立派な美しい物腰で 普通のお客と同じように しつらえて 女房たちがお相手申し上げるのでは 恐れ多く思われる立派なご様子なので (夕霧) このたびの悲しい出来事を思い嘆いております気持は お身内の方々以上のものがございますけれども

七 一通りのおろそかな気持でいるわけではございません。落葉の宮のことを話されたことを含んで言う。

八 誰ものんびりとしていられない世の中ですが。私といつ死ぬか分りませんが、の意。

九 (柏木は先立ち)私がしばらくでもあとに残りましたその間だけでも。「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」(二九一頁注九参照)。「けぢめ」は、違い。

一〇 二月は春日の祭、大原野の祭、祈年の祭など、神事が多い。この訪問は三月。前に「弥生になれば」(二九六頁)とあった。

一一 私情にかまけて思いに沈んで引き籠っていますのも。友人の死を悲しむあまり、出仕しないのも、の意。

一二 お庭先で失礼いたしますのでは、これまた。「立ちながら」は、上にあがらないこと。神事に出仕する身として、その時期に訪問しても、死の穢れに触れるのを避けねばならない、という意。

一三 柏木の父、致仕の太政大臣。

一四 親の、子を思う悲しみは、それはそれといたしまして。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔)

一五 死別の悲しみと申しますものは、仰せの、無常な世の中の習いでございましょう。「誰ものどめがたき世なれど」とあったのを受けて言う。

たなうて、世間並みのことになってしまいました[柏木の]最期の折にも世の常になりはべりにけり。今はのほどにも、私に言い遺されたことがございましたので のたまひ置くことはべりしかば、おろかならずなむ。誰ものどめがたき世なれど、後れ先立つほどのけぢめには、私に気のつきます限りは思うたまへ及ばむに従ひて、浅からぬ気持のほどもご覧いただきたいものと存しております深き心のほどをも御覧ぜられにしがなとなむ。神事などのしげきこい時期に引き続いて多ろほひ、私の心ざしにまかせて、つくづくと籠りゐはべらむも、例かと思われることでしたので ならぬことなりければ、立ちながらはた、なかなかに飽かず思うたかえって心残りに存じら れましょうと思いまして まへらるべうてなむ、日ごろを過ぐしはべりにける。大臣などの心悲嘆のご様子を を乱りたまふさま、見聞きはべるにつけても、親子の道の闇をばさるものにて、かかる御仲らひの、深く思ひとどめたまひけむほどを、[涙を]ご推量申し上げますと おしはかりきこえさするに、いと尽きせずなむ」とて、しばしばおしのごひ、鼻うちかみたまふ。あざやかに気高きものから、なつかい優雅な物腰である しうなまめいたり。

御息所も鼻声になりたまひて、「あはれなることは、その常なき世のさがにこそは。いみじとても、またたぐひなきことにやはと、

ずっとご無沙汰にうち過ぎてしまいました
こうしたご夫婦のお間柄で 深く心からご無念だったでありましょうお気持を
何ともご同情に堪えません
すっきりと 気品高いものの
どんなに悲しくても 世間に例のないことではございますまいと

年をとりました私などは　無理にも気強く思い静めようといたしますが　すっかり悲しみにくれられた宮のご様子は

年積りぬる人は、しひて心強うさましはべるを、さらにおぼし入りたるさまの、一いとゆゆしきまで、二しばしも立ち後れたまふまじきやうに見えはべれば、三すべていと心憂かりける身の、今までながらへはべりて、かくかたがたにはかなき世の末のありさまを見たまへ過ぐすべきにやと、いと静心なくなむ。

何かとお親しいお間柄のことゆえ　おのづから近き御仲らひにて、聞き及ばせたまふやうもはべりけむ。

最初から　はじめつかたより、をさをさ

一私としては一なかなかご承知申し上げなかったご縁組なのですが　うけひききこえざりし御ことを、四大臣の御心むけも心苦しう、院に

朱雀院　まあよろしかろうとご賛成あそばす旨のご意向もおもらしでしたので　もよろしきやうにおぼしゆるいたる御けしきなどのはべしかば、さ

思い直しまして　では私の考えが至らなかったのだとらばみづからの心おきての及ばぬなりけりと思うたまへなしてなむ、

こんな夢のような悲しい出来事を目にいたしましたことを思い合せ　五見たてまつりつるを、かく夢のやうなることを見たまふるに思うた

そうした私の存じよりのほどを　どうせなら強く反対して申し上げてみますと　まへ合はすれば、みづからの心のほどなむ、同じうは強うもあらがればよかったのにと思いますと　やはりとても悔まれまして　それはこんなことになろうとは思いも寄らなかったのでございますひきこえましをと思ひはべるに、なほいとくやしう、それはかやうにしも思ひ寄りはべらざりきかし。六皇女たちは、おぼろけのことならで、あしくもよくも、

よくよくのことでなければ　感心できないこと　〔結果が〕悪くもよくも　このように夫をお持ちになることは　かやうに世づきたまふことは、え心にくか

一　ほんとに恐ろしいほどに。不吉な予想を誘うほどに、の意。「見えはべれば」にかかる。

二　しばらくもお立ち遅れになりそうにないように見えますので。すぐにも柏木のあとを追いそうに見える、の意。

三　大体が、いかにも不運な身の上に生れついた私のこととて、今まで生き永らえたあげく、こうしてあちら（柏木）もこちら（落葉の宮）も若死になさるような、世も末の有様を黙って見ていなくてはならないことになりますのかと、気もそぞろの思いでおります。

四　致仕の大臣のご希望も、おいたわしく。むげにことわりもならない、という気持。

五　お世話申し上げたのですが。柏木を夫として迎えた宮をお世話した、の意。

六　若菜上の婿選びのくだりで、乳母の言葉にも「皇女たちは、ひとりおはしますこそは例のことなれど」（二二頁）とあった。

七 どちらともつかず、中途半端な情けないご運勢だったのですから。独身を通すでもなく、といって、結婚生活を続けられるでもない落葉の宮の身の上を嘆く。

八 いっそ、こうした折にでも、おあとを慕って亡くなってしまわれるのは。「煙」は、柏木の火葬の煙。前にも「しばしも立ち後れたまふまじきやうに見えはべれば」とあった。

九 そのようにあっさりと、見切りをつける気持にもなれませず。「思ひしづむ」は、悲観する。

一〇 とても心丈夫なことに、お心のこもったお見舞をもう度々頂きましたようですのを。自身の訪問ははじめてだが、今まで何度も弔問の使者がさし向けられていた趣。

一一 今はの際に、誰彼にあとのことをお頼みになったご遺言が、身にしみますにつけ。

一二 つらい思いの中にもうれしいことはあるものでございました。「うれしきも憂きも心は一つにて分れぬものは涙なりけり」（『後撰集』巻十六雑二、読人しらず）

一三 こうして早死にする運命だったからでしょうか。

一四 度を過ぎて世間の道理（世の無常）を思い知って、考え深くなった人が、悟り澄まし過ぎて、こうして思い沈むといった例は。以下、夕霧が柏木に意見したという、その内容。

らぬことなりと、（とだと）古めき心には思ひはべしを、（私の古い頭では思ったことなのですが）いづかたにもよらず、中空に憂き御宿世なりければ、何かは、かかるついでに煙にもまぎれたまひなむは、（宮のお身の上にとっての世間体などは別に不体裁なこともございませんで）この御身のための人聞きなどはことにくちをしかるまじけれど、（しょうが）さりとても、（そう申しましても）しかすくよかに、え思ひしづむまじう、悲しう見たてまつりはべるに、いとうれしう、浅からぬ御とぶらひのたびたびになりはべめるを、（並々ならぬご厚志とありがたく存じておりますが）ありがたうもと聞こえはべるも、さらばかの御契りありけるにこそはと、（柏木のお約束がございましたゆえと）思ふやうにしも見えざりし御心ばへなれど、（思うようでもございませんでした故人のお気持のほどでしたが）今はとてこれかれにつけおきたまひける御遺言の、あはれなるになむ、憂きにもうれしき瀬はまじりはべりける」とて、いといたう泣いたまふけはひなり。

大将（夕霧）も、（すぐに涙をお収めになれない）とみにえためらひたまはず。「あやしう、（どうしたわけか）いとこよなく老成しておられたお人でしたが）およすけたまへりし人の、かかるべうてや、（この二三年このかた）この二三年のこなたなむ、（ひどく思い沈んで）いたうしめりて、もの心細げに見えたまひしかば、あまり世のことわりを思ひ知り、もの深うなりぬる人の、澄み過ぎて、かかる

一 何ごとにもまして（ほかのどんなことよりも）、人一倍、お話のように、宮のお嘆きでありましょうご心中が。話題を転じて、落葉の宮の悲しみに、同情の言葉を述べる。

二 かなり時を過して、お帰りになる。長座の趣をいう。

三 柏木は、夕霧より五、六歳ほど年上だったが。夕霧は、この年、二十七歳。

夕霧と御息所の唱和

四 「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」（『古今集』巻十六哀傷、堀河の太政大臣身まかりにける時に、深草の山にをさめてけるのちによみける　上野岑雄）。堀河の太政大臣は、昭宣公、藤原基経。寛平三年（八九一）正月十三日薨。

五 不吉な連想を誘う歌なので。「墨染」の語が落葉の宮の出家姿を思わせたのであろう。

六 「春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり」（『古今集』巻二春下、題しらず、読人しらず）

七 時節はめぐってくるので変らぬ美しい色に咲いていることです、片方の枝（柏木）の枯れてしまったこのお邸の桜（落葉の宮）も。

例（たぐ）、心うつくしからず（心の素直でないことで）、かへりては（かえって逆に）、あざやかなるかたのおぼえ薄（はきはきしたところがないように人に思われるようになるものだと）らぐものなりとなむ、常にはかばかしからぬ心にいさめきこえしかば、心浅し（思慮の浅い人間とお思いのようでした）と思うたまへりし。一 よろづよりも、人にまさりて、げにかのおぼし嘆くらむ御心のうちの、かたじけなけれど、いと心苦し（恐れ多いことながら心からおいたわしく存ぜられることです）うもはべるかな」など、なつかしうこまやかに聞こえたまひて、ややほど（やさしげに心からお慰め申し上げなさって）経てぞ出でたまふ。

二 かの君は、五六年のほどのこのかみなりしかど、なほいと若やかに、なまめき（優雅で）、あいだれてものしたまひし。これはいとすくよかに（親しみやすいお人柄でいらっしゃった）重々しく、男々しきけはひして、顔のみぞいと若うきよらなること、人にすぐれたまへる。若き人々（女房たち）は、もの悲しさもすこしまぎれて見出だしたてまつる。御前近き桜のいとおもしろきを（簾中から）お見送り申し上げる）、「四 今年ばかりは」（と思わず心に浮ぶのも）とうちおぼゆるも、五 いまいましき筋なりければ、「六 あひ見むことは」と口ずさびて、

（夕霧）七 時しあれば変らぬ色ににほひけり

八 さりげないふうに吟じて。特に御息所に詠みかけた体でなく、の意。

九 今年の春は、柳の芽に露の玉を貫くように、涙にくれております、咲いて散る桜の行方（落葉の宮のこれからのこと）も分りませんので。「芽」に「目」を響かす。「浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」（『古今集』巻一春上、遍昭）、「よりあはせて泣くなる声を糸にしてわが涙をば玉にぬかなむ」（『伊勢集』）

一〇 女御に次ぐ地位。

夕霧、致仕の太政大臣の邸に立ち寄る

一一 柏木の父、致仕の太政大臣の邸。夕霧が帰途、立ち寄った趣。

一二 主人の、来客との対面所のような所。廂の間である。

一三 かたちを改めて。悲嘆にくれていた涙を収めて、の意。

一四 子が親の喪に服する以上のお悲しみようである。「やつる」は、喪に服して容姿をつくろわぬ意。

片枝枯れにし宿の桜も

わざとならず誦じなして立ちたまふに、いととう、

（御息所）この春は柳の芽にぞ玉はぬく

咲き散る花のゆくへ知らねば

と聞こえたまふ。いと深きよしにはあらねど、今めかしう、かどあるお方との評判はお取りだった　格別深いたしなみをお持ちではないが　当世風で　才気のありとは言はれたまひし更衣なりけり。げにめやすきほどの用意なめりと見たまふ。　なるほどそつがないといえる応対ぶりだと　[夕霧は]

致仕の大殿にやがて参りたまへれば、　そのままお立ち寄りになると　君たちあまたものしたまひけり。「（大臣）こなたに入らせたまへ」とあれば、　弟の方々が大勢おいでになっていた　大臣の御出居のかたに入りたまへり。ためらひて対面したまへり。　[夕霧に]　古りがたうきよげなる御容貌、いたう痩せおとろへて、御髭などもとりつくろひたまはねば、しげりて、親の孝よりもけにやつれたまへり。　お手入れをなさらないので　いつまでもお若く端正な　見たてまつりたまふよりいと忍びがたければ、あまりにをさまらず乱れ落つる涙こそはしたなけれと思へば、せめてぞもて隠したまふ。大臣も、取り　なさるなりとてもこらえきれないので　なりふり構わず　[夕霧は]　そのお姿を拝見　[夕霧が]　見苦しいと　無理をして　[涙を]

一 一条の宮にお見舞にあがった時の様子など、ご報告なさる。「まで」は、「まうで」の「う」を表記しない形。

二 「春雨」「軒の雫」、いずれも歌語。「春雨のふるは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなければ」（『古今集』巻二春下、貫之）、一本大伴黒主）、「かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかに偲ぶや」「ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人を偲ばざらめや」（四巻真木柱二四一、二四二頁、源氏と玉鬘の贈答）、「亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ」（三巻蓬生七三頁、末摘花の歌）。故人を恋い偲ぶ涙というところから選ばれた措辞である。

三 畳んで懐中にする紙。とりあえずこれに歌を書き留めておいた趣。

四 ふだんは意志強くきっぱりした物腰で、ほがらかなご様子なのが、その跡形もなく、体裁も何もない。

五 あなた（夕霧）の御母君。葵の上。亡くなったのは葵の巻、陰暦八月（二巻葵九四頁参照）。

六 女というものは、やはりそうしたもので、実際に見る人も少なく。家庭の内にあるからである。「限り」は、きまり、しきたり。

分きて御仲よくものしたまひしをと見たまふに、ただ降りに降りおちて、えとどめたまはず、尽きせぬ御ことどもを聞こえかはしたまふ。

一条の宮にまでたりつるありさまなど聞こえたまふ。いとどしう、春雨かと見ゆるまで、軒の雫に異ならず、濡らし添へたまふ。畳紙に、かの「柳の芽にぞ」とありつるを書いたまへるをたてまつりたまへば、「目も見えずや」と、おししぼりつつ見たまふ。うちひそみつつぞ見たまふ御さま、例は心強うあざやかに、誇りかなる御けしき名残なく、人わろし。さるは、異なることなかめれど、この「玉はぬく」とある節の、げにとおぼさるるに心乱れて、久しうえためらひたまはず。「君の御母君のかくれたまへりし秋なむ、世に悲しきことの際にはおぼえはべりしを、女は限りありて、見る人少なう、とあることもかかることもあらはならねば、悲しびも隠ろへてなむありける。はかばかしからねど、おほやけも捨てたまはず、

〔涙が〕 語り尽せぬ悲しいお心のうちをお互いに申し上げなさる 一層はげしく 〔袖を〕 さらにお濡らしになる 御息所が詠んだのを書き留めておかれたのをさし上げなさる 〔涙を〕 涙に眉をしかめながら 〔大臣〕 〔大臣〕 極まりと思われたことですが 実のところ 格別のお歌でもないようだが 長いこと涙をお収めになれない いかにもと思われなさるのに 日頃のあれこれのこともおもて立つことはありませんから 悲しみも人目に立たぬように悲しいことの 〔柏木は〕 ふつつか者ですが 帝もお見捨てにならずものなのでした

七 官位も昇るにつれて、頼りに思う人々も、自然と次々に多くなったりして。権門の継嗣ゆえ、その引立てで出世を望む者も多いのである。

八 あちこちにいるようです。「類に触れて」は、縁故を辿って、の意。

九 しかし私の深い悲しみは、そうした世間一般の声望とか、出世のほどとか、そんなことはどうでもよいことなのです。

一〇 空を仰いで嘆息なさる。「大空は恋しき人の形見かはもの思ふごとにながめらるらむ」(『古今集』巻十四恋四、題しらず、酒井人真)。空を仰ぐのは、悲しみの思い入れ。

一一 濃い鼠色。喪服の色であ

人々、悲しみの唱和

る。

一二 今日はじめて、目をお留めになる。今までは悲しみにくれて、庭前の景色も目につかなかった趣。

一三 御息所の歌に並べて書き付けるのである。次は、致仕の大臣の歌。

一四 悲しみの涙に濡れそぼって、逆に、親が子の喪に服して鈍色を身につけている春であることよ。「霞の衣」は、喪服の意。前の「鈍色に霞みて」と響き合う。

一五 亡き人も思ってもみなかったことでしょう、先立ってみまかり、あなたに喪服を着て頂こうとは。

一六 右大弁。前出二八八頁、三〇三頁。

ようやく一人前になり

やうやう人となり、官位につけてあひ頼む人々、おのづから次々に多うなりなどして、[その死を]おどろきくちをしがるも、残念がる者も類に触れてあるべし。かう深き思ひは、そのおほかたの世のおぼえも、官位も思ほえず、ただことなることなかりしみづからのありさまのみこそ、堪へがたく恋しかりけれ。何ばかりのことにてか、思ひさますべからむ」と、空を仰ぎてながめたまふ。

格別人と変ったところもなかった日頃の本人の有様だけが

一体どんなことで

この悲しみが忘れられるのでしょう

夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ。この御畳紙に、

木の下の雫に濡れてさかさまに
霞の衣着たる春かな

夕霧

大将の君、

亡き人も思はざりけむうち捨てて
夕べの霞君着たれとは

弁の君、

一　恨めしいことです、霞の衣（喪服）を誰が着よと思って、春の逝くより先に花は散ってしまったのでしょう。「誰着よ」は、親に喪服を着せたのを難ずる気持。「花」は、柏木をいう。
二　四十九日の法要であろう。
三　夕霧の北の方、雲居の雁。柏木の異腹の妹。
四　寺々に読経を依頼する布施の金品。
五　「空は」は青表紙原本「うのはなは」とある。他の大部分の青表紙本、河内本によって改める。
六　悲しみにくれる家は。歌語的な措辞。「鳴きわたる雁の涙や落ちつらむもの思ふ宿の萩の上露」（『古今集』巻四秋上、題しらず、読人しらず）
七　建物の前の平らな部分をいう。白砂を敷く。
八　庭に敷きつめる白砂。以下、庭の手入れも十分でない趣。「蓬」は、邸の荒廃を象徴する風物。
九　（故人が生前）庭前の植込みの世話に熱心で手入れしておられたのも。
一〇　以下、「君が植ゑし一むらすすき虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな」（『古今集』巻十六哀傷、御春有助）を踏まえた措辞。
一一　とてもの悲しく涙ぐまれて。「露けし」は上の「秋」の縁語。
一二　伊予の国浮穴郡露峰の山中に産する篠簾という（『倭訓栞』）。粗製の簾で、色は白い。服喪中のさま。
一三　これも服喪中のさま。四月から、衣服、調度類を

四月、夕霧、一条の宮訪問

一　うらめしや霞の衣誰着よと
　　春よりさきに花の散りけむ

御わざなど、世の常ならず、いかめしうなむありける。大将殿の北の方をばさるものにて、殿は心ことに、誦経なども、あはれに深き心ばへを加へたまふ。

（並はずれて立派に）（盛大に執り行われた）（言うまでもなく）（夕霧）（格別に）（心のこもった深いお気持からのことを特別になさる）

かの一条の宮にも、常にとぶらひきこえたまふ。卯月ばかりの空は、そこはかとなうここちよげに、ひとつ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、もの思ふ宿は、よろづのことにつけて静かに心細う、暮しかねたまふに、例のわたりたまへり。庭もやうやう青み出づる若草見えわたり、ここかしこの砂子薄きものの隠れのかたに、蓬も所得顔なり。前栽に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、一むらすすきもたのもしげにひろごりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いとものあはれに露けくて、分け入りたまふ。伊予簾かけわたして、鈍色の几帳の衣がへしたる透影、涼しげ

（どことなく陽気な感じで）（緑一色の）（日を暮しかねていられると）（いつものようにお出でになった）（物陰のあたりには）（思いやられるともう）（思いきりのび広がって）（夕霧は）（草を分けて進まれる）

夏向きにする。ここは几帳の帷を夏向きにしたのが、伊予簾の隙から見える趣。

一四 上品な女の童（召使の少女）の、色濃い鈍色がかった汗衫の裾や袖口、髪形などが、ちらちら見えたのは。「汗衫」は、童女が正装の時、上に着けるもの、女房の裳、唐衣にあたる。両袖、裾を長く引く（二巻図録一〇参照）。

一五 最初の訪問では、廂の間に請じ入れられた。

一六 ご身分柄あまりにお粗末なお席だということで、女房たちが、例によって、御息所に応対をおうながし申すけれども。

一七 どうした縁があるのか、枝先が一つになっているのは、将来に望みの持てることです。いわゆる連理の枝（二つの違う木の枝先が一つになって木目の連なったもの。男女の契りの深いことに喩える）に取りなしたもの。「末」に将来の意を含める。

一八 どうせのことなら、この連理の枝のように私と親しくして頂きたいものです、亡きお方のお許しもあったことと

夕霧、御息所と贈答

おぼしめして。「葉守の神」は、柏木に宿るという樹の神。「柏木、いとをかし。葉守の神のいますらむも、かしこし」（『枕草子』花の木ならぬは）。なお、次頁注一参照。

一九 御簾の外によそよそしくお扱いなのが、恨めしく存じられます。

二〇 簀子と廂の間の境、一段高くなっている下長押。

に見えて、よき童女の、こまやかに鈍ばめる汗衫のつま、頭つきなどほの見えたる、（風情はあるが）をかしけれど、（やはり見るなりはっとされる色であることだ）なほ目おどろかるる色なりかし。

一五 今日は簀子にゐたまへば、（お坐りなので）茵さし出でたり。いと軽らかなる御座なりとて、例の、御息所おどろかしきこゆれど、（近頃お具合が悪いということで）このころなやましとて寄り臥したまへり。とかく聞こえまぎらはすほど、（何の悩みもなさそうに生い茂る風情をご覧になるのも）御前の木立ども、思ふことなげなるけしきを見たまふも、いとものあはれなり。

（女房が）何かと座をお取り持ちする間

柏木と楓との、（ほかの庭木より一段と若々しい色合いで）ものよりけに若やかなる色して、枝さしかはしたるを、（夕霧）一七「いかなる契りにか、末あへるたのもしさよ」などのたまひて、（夕霧は一）とてもの悲しい思いだ

（そっと［御簾際に］）忍びやかにさし寄りて、

（夕霧）一八「ことならば馴らしの枝にならさなむ

葉守の神のゆるしありきと

一九 御簾の外の隔てあるほどこそ、（女房）あだなお姿といったら（またなんとおやさしいことなのでしょう）（お寄りかかりになる）たまへり。「なよび姿はた、いといたうたをやぎけるをや」と、（お互いにつつき合う）（今お相手を申し上げている少将の君という女房を通して）れかれつきしろふ。この御あへしらひきこゆる少将の君といふ人し

て、

「柏木に葉守の神はまさずとも
　人ならすべき宿の梢か

口から出まかせのおっしゃりように
うちつけなる御言の葉になむ、浅う思うたまへなりぬる」と聞こゆれば、げにとおぼすに、すこしほほゑみたまひぬ。

御息所ゐざり出でたまふけはひすれば、やをらゐなほりたまひぬ。

「憂き世の中を思うたまへ沈む月日の積るけぢめにや、乱りごちもあやしうほれぼれしうて過ぐしはべるを、かくたびたび重ねさせたまふ御とぶらひの、いとかたじけなきに、思うたまへ起こしてなむ」とて、げになやましげなる御けはひなり。「思ほし嘆くは、世のことわりなれど、またいとさのみはいかが。よろづのこと、さるべきにこそはべめれ。さすがに限りある世になむ」と、なぐさめきこえたまふ。この宮こそ、聞きしよりは心の奥見えたまへ、あはれ、げにいかに人笑はれなることを取り添へておぼすらむ、と思ふもた

御息所と対面

一 主人はおりませぬにしても、みだりに人を近づけてよいお身の上でしょうか。御息所の歌。「枇杷殿より、とし子が家に柏木のありけるを、折りにたまへりけり。折らせて書きつけたてまつりける、わが宿をいつかは君が楢柴の馴らし顔には折りにおこする、御返し、柏木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるな」（『大和物語』六十八段）。「楢柴の」は「馴る」の枕詞。この巻の巻名、この贈答による。

二 御息所が身をずらして御簾際まで出てこられる様子なので。「ゐざる」は、坐ったまま進む。衣摺れの音などでそれと察する。

三 情けないこの世の中を悲しんでおります月日が重なって、そのせいでしょうか。以下、御息所の挨拶。身体の不調を訴える。

四 こうして何度も重ねておはこび下さいますお見舞がいかにも恐れ多く存じられますので、気を取り直しましてお目にかかることにいたしました。

五 また、そのように悲しんでばかりいられるのも、どうかと存じられます。

六 やはり世間とはそうしたものでございます。いくら悲しくても、いつまでも悲しんではいられない、というほどの意。

七 落葉の宮。以下、夕霧の思い。

八 ほんとに、どんなにか世間の笑いものになることを、死別の悲しみに加えて、お悩みのことだろう。皇女としての体面を苦にしておいでだろう、の意。

九（宮の）ご器量は、とても、十分にお美しくてはいらっしゃるまいが。「まほ」は、まとも。以下、夕霧の思い。

一〇どうして、見た目が悪いといって人を嫌いになったり、また、道にはずれた恋に前後を忘れたりしてよいものだろうか。柏木のことを思うのである。「伊勢の海女の朝な夕なにかづくてふ見る目に人を飽くよしもがな」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず）。歌の「見る目」は、相逢う意であるが、この歌の調子を踏まえた措辞と思われる。

一一特に色めいたおっしゃりようというのではないが。

一二どうせなら、このように（落葉の宮のもとに）お通い下さるようにでもなるのだったら。

（落葉の宮のご様子もお尋ね申し上げなさるのだった）

だならねば、（大層念入りに）いたう心とどめて、御ありさまも問ひきこえたまひけり。容貌（も心が波立つので）ぞいとまほにはえものしたまふまじけれど、いと見苦しう（ひどくみっともなくた）かたはらいたきほどにだにあらずは、一〇などて、見る目により人をも（はた目も気になるといったほどでさえなければ）思ひ飽き、また、さるまじきに心をもまどはすべきぞ、（見苦しいことだ）さまあしや、ただ心ばせのみこそ、（気立てだけが）言ひもてゆかむには、（つまるところは）やむごとなかるべけれ、（大切なものだろう）と思ほす。

（夕霧）「今はなほ昔に思ほしなずらへて、（どうぞ故人と同じようにお考え下さって）うとからずもてなさせたまへ」（隔てなくお付き合い頂きたいと存します）など、一二わざと懸想びてはあらねど、（十分に気のあるところをほのめかして）ねむごろにけしきばみて聞こえたまふ。直衣姿いとあざやかにて、（身の丈は堂々と）丈だちもののしう、（見上げるほどそぞろかにお見えなのだった）（女房）（柏木）にぞ見えたまひける。「かの大殿は、（人をひきつける愛らしさが無類のお方でした）（品の良い）よろづのことなつかしうなまめき、あてに愛敬づきたまへることの並びなきなり。（夕霧）これは男々し（優雅で）（やさしく）うはなやかに、（快活で）あなきよらと、（まあおきれいなと）ふと見えたまふにほひぞ、（一目でそう思われる映えたお美しさが）人に似ぬ（並外れていら）や」と、（つしゃる）うちささめきて、「同じうは、（女房）一三かやうにても出で入りたまはましかば」（女房たちは言うようだ）など、人々言ふめり。

諸人、柏木の死を哀惜

「右将軍が墓に草はじめて青し」と、うち口ずさびて、それもいと近き世のことなれば、さまざまに近う遠う、心乱るやうなりし世の中に、高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬはなきも、むべむべしきかたをばさるものにて、あやしう情を立てたる人にぞものしたまひければ、さしもあるまじき公人、女房などの年古めきたるども さへ、恋ひ悲しびきこゆる。まして上には、御遊びなどのをりごとにも、まづおぼし出でてなむ、しのばせたまひける。「あはれ衛門の督」といふ言種、何ごとにつけても言はぬ人なし。六条の院には、ましてあはれとおぼし出づること、月日に添へて多かり。この若君を、御心ひとつには形見と見なしたまへど、人の思ひ寄らぬことなれば、いとかひなし。秋つかたになれば、この君は、ゐざりなど。

[夕霧は] 保忠の死も あれこれと近頃もまた昔も 人の心を騒がすようだった無常の世に [柏木の死を] 惜しみ残念がらぬ人はいないのも 不思議に 情愛の深い人でいらしたから [柏木を] 音楽のお催しなどのある度ごとに 悲しくおなつかしみなのだった 源氏 自分一人のご心中では 何の張合いもない

一「天の善人に与する吾信ぜず、右将軍が墓に草初めて秋なり」。『河海抄』によれば、今伝わらない『本朝秀句』に載せる紀在昌の詩で、藤原時平の長男、八条の右大将保忠の早逝を悼んだもの。保忠は、朱雀天皇の承平六年（九三六）七月十四日歿、四十七歳。原詩の「草初秋」を、季節に合せて「草初青」と変えて吟じた趣である。

二 身分の上下を問わず。

三 人柄の表立った面は言うまでもないとして。「むべむべし」は、「うべうべし」に同じ。もっともらしい、の意。公人としての才幹、学識、技芸といった面をいう。

四 それほどにも及ぶまいと思われる役人や女房などの年老いた者たちまで。宮廷勤めの古手の者たち。

五 帝。柏木は、帝の東宮時代からの御琴の師であった（若菜下一四三頁参照）。

六 言いぐさ。決り文句。

七 女三の宮所生の若君。薫。

八 河内本は「この君、這ひゐざりなどしたまふさまの、言ふよしもなうをかしげなれば、人目のみにもあらず、まことにいとかなしと思ひきこえたまひて、常に抱きもてあそびきこえたまふ」とある。

横笛（よこぶえ）

柏木の一周忌、源氏も夕霧も心をこめて弔う。ことに源氏は、ひそかに薫の分として格別の志を加えたので、何も知らぬ致仕の大臣は大層よろこび、また悲しみを新たにする。

朱雀院は、姫宮たちの相次ぐ不幸に、いよいよ俗念を去り仏道に専念されるが、入道女三の宮へのいたわりは深く、折々の便りを絶やされない。

春頃、西山の御寺近くに生い出る筍や野老を贈られると、幼い薫が這い出してきて、筍に歯を当てたりする。源氏は、その愛らしい姿に、苦い思い出も忘れそうになる。

秋になって、一夜、夕霧は一条の宮を訪れた。母御息所の応対は、柏木の好んだ楽器を挾んでさすがにみやびやかである。静かに更ける夜の風情に、夕霧は想夫恋を弾き、落葉の宮も勧められてつつましく合奏した。帰りがけに御息所は、柏木遺愛の横笛を贈り物にする。巻名は、この時の贈答の歌の言葉による。

ひっそりとした一条の宮に心を残しながら帰ってきた三条の邸では、北の方雲居の雁が不機嫌である。その夜、夢に柏木が現れ、笛の相伝には別の人を考えていたのに、と告げる。

夕霧は柏木の供養を営み、笛のことを相談しがてら、六条の院に赴くと、そこでは、薫が明石の女御の皇子たちと無心に遊んでいた。源氏は、夕霧の話を聞き、笛は訳あって自分が預かろうというが、柏木の遺言については思い当ることはないと、夕霧の口を封じるのであった。源氏、四十九歳の年のことである。

源氏、夕霧、柏木の一周忌を心をこめて弔う

故権大納言のはかなく亡せたまひにし悲しさを、飽かずくちをし（いついつまでも残念な）きものに、恋ひしのびたまふ人多かり。六条の院（源氏）にも、（特別関係のない）おほかたにつけてだに、世にめやすき人の亡くなるをば惜しみたまふ御心に、（者に対しても）ましてこれは、朝夕に親しく参り馴れつつ、人よりも御心とどめおぼしたりしかば、いかにぞやおぼし出づることはありながら、あはれは多く、をりをりにつけてしのびたまふ。御果てにも、誦経など、取り分きせさせたまふ。よろづも知らず顔に、いはけなき御ありさまを見たまふにも、さすがにいみじくあはれなれば、御心のうちに、また心ざしたまうて、黄金百両をなむ別にせさせたまひける。大臣は、心も知らでぞかしこまりよろこびきこえさせたまふ。

大将の君も、ことども多くしたまひ、とりもちてねむごろにいと

（ことに思って）（哀傷の）（誰よりもお目をかけてかわいがっていらっしゃったので）（柏木）（特別におさせになる）（本当に不憫でならないので）（お思い出しになる）（思いは深く）（そのわけもご存しないままただ源氏の厚志に恐縮しお礼を申し上げなさる）（たくさんのお布施をなさり）（ご自身も心をこめて法要のお世話をなさ）（夕霧）

一 柏木。柏木の巻二八九頁に権大納言に昇進のことが、同じく二九五頁に「泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ」と、そのはかない死が述べられている。

二 世間に人望のある人が亡くなるのを惜しまれるご性分なので。為政者として人材を重んじる姿勢。

三 どうにもけしからぬと、お胸にうかぶことはあるものの。女三の宮と密通の一件をいう。

四 一周忌の法要。『花鳥余情』は、柏木の死を去年二月とする。

五 誦経の僧へのお布施。

六 何のいきさつも知らぬげに、無心な若君のご様子をご覧になるにつけても。薫、今年、数えの二歳。

七 内心ひそかに、薫の分として別に追善供養を志されて。

八 砂金であろう。「吏部王記云、天慶十年三月十九日御八講結願、太皇太后御柏殿、設法花八講、参入、于時夕講也。余修讃誦、調布百端、南侍沙金百両、納瑠璃壺等一口、北講畢」（『河海抄』）

九 柏木の父、致仕の太政大臣。

一 柏木の未亡人落葉の宮。臨終に際して、夕霧にこの宮への心寄せを頼んだこと、柏木二九四頁に見え、訪問のこと、同三〇四頁以下に見える。
二 柏木の弟たち。
三 柏木の父致仕の太政大臣と、その北の方。
四 朱雀院。（若菜下二四五頁参照）
五 落葉の宮。以下、朱雀院の心中の思い。
六 こんなふうに世間のもの笑いになるような有様で、嘆き沈んでいらっしゃるし。皇女として結婚しながら、夫に先立たれた身の上をいう（柏木二九五頁参照）。

朱雀院、女三の宮に消息を送る

七 （女三の宮も）自分と同じ仏道修行に励んでいらっしゃることだろうと、思いを馳せられて。
八 西山の御寺。（若菜上二二頁参照）
九 たけのこ。「大宮日記云、延長六年亭子院よりたかうなたてまつれ給へり、御使よしふ、かいねりの大うちき給」（以上『河海抄』所引）。『河海抄』は、このほか、『詞花集』巻九雑上の「冷泉院へたかうなたてまつらせたまふとてよませたまひける　花山院御製」と冷泉院の答歌を引く。
一〇 山の芋。『河海抄』に、『拾遺集』巻十六雑春、賀朝法師と野老を掘る女との贈答を引く。
一一 山里のお住まいにつけては風情のあるものなので。

なみたまふ。[一]かの一条の宮をも、このほどの御心ざし深くとぶらひ（一周忌にあたってのお心遣いも深くお見舞い申し上げなさる）きこえたまふ。兄弟[二]の君たちよりもまさりたる御心のほどを、いと（夕霧の）かくは思ひきこえざりきと、大臣[三]、上も、よろこびきこえたまふ。（おれを申し上げなさる）（これほどまでとはお思い申さなかったと）（ご両人々の信望がどんなに重くていらっしゃったかが分るにつけても）亡きあとにも、世のおぼえ重くものしたまひけるほどの見ゆるに、（親は）いみじうあたらしうのみ、おぼしこがるること尽きせず。（ただもう惜しいことをしたと）（いつまでも恋いこがれていらっしゃる）

山の帝[四]は、二の宮[五]も、かく人笑はれなるやうにてながめたまふなり、（女三の宮）入道の宮も、この世の人めかしきかたは、（現世の普通の人らしいしあわせは）かけ離れたまひぬれば、（一切捨てておしまいになったので）さまざまに飽かずおぼさるれど、（どちらも不本意なこととお思いになるが）すべてこの世をおぼしなやまじと忍びたまふ。（我慢なさる）御行ひのほどにも、（お勤めをなさる時にも）同じ道をこそは勤めたまふらめなどおぼしやりて、（俗世のことに心を煩わすまいと）かかるさまになりたまひてのちは、（[女三宮が]尼になられてからのちは）はかなきことにつけても、絶えず聞こえたまふ。（[お便りを]でなくても）（さしたるご用）

御寺[八]のかたはら近き林に抜き出でたる筍[九]、そのわたりの山に掘れる野老[一〇]などの、山里[一一]につけてはあはれなれば、（[女三宮に]）たてまつれたまふとて、御文こまやかなる端に、

一二 春の野も山も、霞がたちこめて、あたりもはっきり見えないのですが、そなたにさし上げようと心をこめて深い土の中から掘り出させましたのを、ほんの形ばかりお目にかけようと思いまして。

一三 この世を捨ててお入りになった仏道は、私のあとからであるにしても、同じように、極楽浄土を求めて来て下さい。「所」に「野老」を掛ける。

一四 (極楽往生は) 容易なことではないのですよ。

一五 いつになく、女三の宮のお前に、罍子がいくつもあるのを。「罍子」は、『和名抄』器皿部、漆器に「酒器也」とあり、『河海抄』に「たかつきのすがたにて、上はぬりをけのふたをあをのけたるやうなる物也。おきぶちをたかくしたる物也。内は朱漆、外は黒漆也。螺鈿様々也。菓子などを入れらるる也。内蔵寮に被納之」という。

一六 お読みになってみると、胸の迫る思いがする。以下、朱雀院の消息の文面を辿る源氏の気持をそのままに述べる趣。

一七 私の寿命も今日か明日かの気がするが、思うままにそなた (女三の宮) に会えぬのがつらいことです。

一八 朱雀院のお歌に「同じところ」に一緒にとお誘いになっているのを。

一九 格別の風情があるでもない僧侶らしいお歌だが。

二〇 自分まで、十分お世話しないというふうに思われ申して。女三の宮を出家させたことをさす。

二一 青色がかった縹色の綾の袿一襲。尼衣である。

(朱雀院)一二
春の野山、霞もたどたどしけれど、心ざし深く掘り出でさせてはべるしるしばかりになむ。

一三
世を別れ入りなむ道はおくるとも
同じところを君も尋ねよ

一四
いと難きわざになむある。

とお書きになっているのを [女三宮は]
と聞こえたまへるを、涙ぐみて見たまふほどに、大殿の君わたりたまへり。例ならず、御前近き罍子どもを、なぞ、あやし、と御覧ずるに、院の御文なりけり。見たまへば、いとあはれなり。「今日か明日かのここちするを、対面の心にかなはぬこと」など、こまやかに書かせたまへり。この「同じところ」の御ともなひを、ことにをかしき節もなき聖言葉なれど、げにさぞおぼすらむかし、われさへおろかなるさまに見えたてまつりて、いとどうしろめたき御思ひの添ふべかめるを、いといとほしとおぼす。

[女三宮は] 恥ずかしそうに
御返りつつましげに書きたまひて、御使には、青鈍の綾一襲賜

ふ。書き損じなさった反古の紙が〔源氏が〕書きかへたまへりける紙の、御几帳のそばよりほの見ゆるを、取りて見たまへば、御手はいとはかなげにて、

憂き世にはあらぬところのゆかしくて
そむく山路に思ひこそ入れ

〔源氏〕父院がいかにもご心配なご様子ですのに「うしろめたげなる御けしきなるに、このあらぬところもとめたまへる、いとうたて心憂し」と聞こえたまふ。

今は、まほにも見えたてまつりたまはず、いとうつくしうらうたげなる御額髪、つらつきのをかしさ、ただ児のやうに見えたまひて、いみじうらうたきを見たてまつりたまふにつけては、などかうはなりにしことぞと、罪得ぬべくおぼさるれば、御几帳ばかり隔てて、またいとこよなう気遠く、うとうとしうはあらぬほどに、もてなしきこえてぞおはしける。

薫
若君は、乳母のもとに寝たまへりける、起きて這ひ出でたまひて、源氏のお袖を引っぱっておまといつき申される様子が御袖を引きまつはれたてまつりたまふさま、本当にかわいらしいいとうつくし。白き

一 こんなつらい世の中ではないところに住みたくて、私も父上と同じ山寺に入りたく思います。「そむく山路」は、父院が世を背いて入られた山路。贈歌に答え、「ところ」を詠みこむ。

二 このお歌のように、「あらぬところ」―よその住処をお求めになるとは、本当につらく情けないことです。六条の院の生活を厭うとはひどい、と恨む。

三 尼となられた今では、女三の宮は、源氏にまともにお顔をお合せにもならず。

四 額から左右の頬の辺に垂れる髪。

五 頬のあたりの輪郭をいう。

六 どうしてこんなふうになってしまったのか。なぜ尼になどしてしまったのか、と悔む気持。

七 悪いことをしてしまったようなお気持がなさるので。

八 女三の宮との間には御几帳だけを隔てに、さりとてひどく他人行儀によそよそしくはない程度に、お相手申し上げていらっしゃる。

源氏、成長する
薫をいつくしむ

九 白い薄物の下着。「羅」は、薄い絹織物。羅か紗であろう。

一〇 唐織（中国産または中国風の織物）の、小紋模様の紅梅色（濃い桃色）のお召し物。表着である。

一一（しっかり結びこめないので）着物の裾がだらしなく引きずり、（動き廻るにつれて）おなかが丸見えで、背中の方に着物が片寄っていらっしゃる様子は。袴を着けない姿。

一二 柳の木を削って作ったようである。柳は、きめが細かく白くて、彫刻の良材とされた。

一三 頭は露草で特別染めたような感じで。「露草」は、つきくさ、ほたるぐさともいう。夏、青色の花が咲き、花汁から青色の染料を採る。いまも青花といって用いる。『湖月抄』は「緑髪といへば也」と注するが、幼児は頭を剃るので、その痕の青々としたのを言ったものと思われる。

一四 ご自身の鏡に映るお顔に比べて、ふさわしからぬものでもないとお思いになる。わが子と見なしてもよいと思う。

一五 薫、この春で、満一歳あまり。よちよち歩きをする年頃である。

一六 これはいけない。「不便なり」は、不都合だの意。

一七 食いしんぼうだと、口の悪い女房が言い触らすと困るから。薫の無心な振舞に、たわむれて言う。

羅に、唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引きやられて、御身はいとあらはにて、うしろの限りに着なしたまへるさまは、例のことなれど、いとらうたげに白くそびやかに、柳を削りて作りたらむやうなり。頭は露草してことさらに色どりたらむここちして、口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに、はづかしうをりたるなどは、なほいとよく思ひ出でらるれど、かれは、いとかやうに際離れたるきよらはなかりしものを、いかでかからむ、宮にも似たてまつらず、今より気高くものしう、さま異に見えたまへるけしきなどは、わが御鏡の影にも似げなからず見なされたまふ。

わづかに歩みなどしたまふほどなり。この筍の疊子に、何とも知らず立ち寄りて、いとあわたたしう取り散らして、食ひかなぐりなどしたまへば、「あならうがはしや。いと不便なり。かれ取り隠せ。食物に目とどめたまふと、もの言ひさがなき女房もこそ言ひなせ」とて、笑ひたまふ。かき抱きたまひて、「この君のまみのいとけし

（幼児の常ではあるが）（すんなりとして）（口もとが愛らしくつやつやとして）（目もとがのどやかで）（幼児ながら気がひけるほど美しい点などは）（やはりどうしても故人が思い出されるのだが）（柏木）（水際立った美しさはなかったのに）（堂々として）（薫は）（なぜこうも美しいのだろう）（母宮）（常人とは違って）（お見えになる様子などは）（源氏）（なんとお行儀の悪いなさるので）（薫を）（源氏）（目もとのなんと非凡なこと）

一 姫宮がいらっしゃる近くで、こんな美男子が生れてきては、面倒なことが、どちらにとっても起るだろうな。「女宮」は、明石の女御腹の姫宮をいう。紫の上が、女一の宮を養育していること、若菜下一六二頁に見える。冗談ながら、暗に柏木のような恋愛事件を起すのではないか、という含みがある。

二 「春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり」（『古今集』巻二春下、読人しらず）。花の盛り（幼い人々の人生の盛り）にめぐりあえるかどうかは寿命があってのことだ、という気持。

三 涎をたらたらと流して、かじっていらっしゃるので。

四 （筍にご執心とは）ずいぶん変った色好みだな。前に「今よりいとけはひ異なるこそ、わづらはしけれ。女宮ものしたまふめるあたりに……」とあった言葉に続く戯れ。

五 あのいやなことも忘れはしないものの、この子はかわいくて捨てがたく思われることだ。「憂き節」は、女三の宮と柏木の密通のことをさす。「くれ竹のこ」に「竹の子」を詠み込み、「こは」に「これは」の意と「子は」を掛ける。「節」は「くれ竹」の縁語。「今さらに何生ひ出づらむ竹の子の憂き節しげき世とは知らずや」（『古今集』巻十八雑下、もの思ひける時いときなき子を見てよめる　凡河内躬恒）

六 膝に一人抱き取って。「ゐて」は、率て。「放つ」は、女房たちから離す意。

きあるかな。小さきほどの児を、あまた見ねばにやあらむ、かばかりのほどは、ただいはけなきものとのみ見しを、今よりいとけはひ異なるこそ、わづらはしけれ。女宮ものしたまふめるあたりに、かかる人生ひ出でて、心苦しきこと、誰がためにもありなむかし。あはれ、そのおのおのの生ひゆく末までは、見果てむとすらむやは。

二 花の盛りはありなめど」と、うちまもりきこえたまふ。「うたてゆゆしき御ことにも」と、人々は聞こゆ。

御歯の生ひ出づるに食ひあてむとて、筍をつと握り持ちて、雫も

四 よよと食ひ濡らしたまへば、「いとねぢけたる色好みかな」とて、

五 憂き節も忘れずながらくれ竹の

こは捨てがたきものにぞありける

と、ゐて放ちてのたまひかくれど、うち笑ひて、何とも思ひたらず、

六 いとそそかしう、這ひおり騒ぎたまふ。

月日に添へて、この君のうつくしうゆゆしきまで生ひまさりたま

（大勢は知らないからだろうか）（あどけないものとばかり思っていたが）（この子は）（年頃は）（すぐれているのが）（心配なことだ）（見届けることができようか）（しかしその幼い人たちが大人になる先々までは）（薫を）（じっとお見つめ申していらっしゃる）（いやな縁起でもないお言葉でございましょう）（女房たち）（薫は）（噛み当てようとして）（源氏）（お話しかけになるが）（薫は）（にこにこして）（ひどくせかせかと）（動き廻っていられる）

七 この若君（薫）が、愛らしく怖いほどだんだん美しく成長なさるので。あまり美しい者は、早死にしたり、神隠しにあうと信じられていた（二巻紅葉賀一二頁注三参照）。

八 この、お歌にあるいやな一件もすっかりお忘れになりそうだ。草子地。

九 こんな立派な子が生れていらっしゃる因縁があって、あのような慮外な出来事（密通事件）もあったのだろう。

夕霧、柏木の遺言を不審に思うこと絶えず

10 柏木が臨終に言い遺した一言。源氏へのとりなしを頼んだことをいう。（柏木二九二～三頁参照）

11 薄々そうではないかと思い当ることもあるので。（若菜下二五一頁、柏木三〇二頁参照）

ふに、まことに、この「憂き節」皆おぼし忘れぬべし。この人の出でものしたまふべき契りにて、さる思ひのほかのこともあるにこそはありけめ、のがれがたかなるわざぞかしと、すこしはおぼしなほさる。みづからの御宿世も、なほ飽かぬこと多かり。あまたつどへたまへるなかにも、この宮こそは、かたほなる思ひまじらず、人の御ありさまも、思ふに飽かぬところなくてものしたまふべきを、かく思はざりしさまにて見たてまつること、とおぼすにつけてなむ、過ぎにし罪ゆるしがたく、なほくちをしかりける。

（避けられない前世からの宿縁だったのだと／お考え直しになる／一宿縁といえば一源氏自身の／やはりご不満な点が多い／大勢お集めになった／女君のなかでも／女三の宮／[自分として]不足に思うところなく／宮ご自身のお身の上も／何一つもの足りぬところもなくていらっしゃるはずだったのに／過去の二人の罪は／今も残念にお思いなのであった）

夕霧

大将の君は、一〇かの今はのとぢめにとどめし一言を、心ひとつに思ひ出でつつ、いかなりしことぞとは、いと聞こえまほしう、御けしきもゆかしきを、一一ほの心得て思ひ寄らることもあれば、なかなか口に出して申し上げるのも気がひけて）うち出でて聞こえむもかたはらいたくて、いかならむついでに、このことのくはしきありさまもあきらめ、また、かの人の思ひ入りたりしさまをも聞こしめさせむと、思ひわたりたまふ。

（どういう事情だったのかとだけは[源氏に]とてもお尋ねしたく／その際のご反応も知りたいのだが／詳しい事情もはっきりさせ／どのような機会に／亡き柏木が深く思い詰めていた様子をも源氏のお耳に入れようかと／たゆまず思っていらっしゃる）

一 落葉の宮は、くつろいで、ひっそりと、お琴などあれこれ弾いていらっしゃるところだったのだろう。

秋、夕霧、一条の宮を訪れる

夕霧の気持に添った文章。「琴」は、絃楽器の総称。

二 思いがけぬ来訪に、楽器を奥へ片付けもならず、そのまま宮のいらした南の廂にお入れ申し上げた。

三 廂の間の端近にいた女房たちが、今しも奥にいざって入って行った様子もはっきりうかがえて。

四 柏木に応対するのは、いつも母御息所である。(柏木二一三頁参照)

五 ご自身のお住居。三条殿。雲居の雁とともに住む(四巻藤裏葉三〇一頁注一七参照)。以下、夕霧の思い。

六 雲居の雁との間に生れた子供たち。三三二頁以下にも子沢山の趣が見える。

七 植込みの花々が、虫の音の鳴きしきる野原かと思うばかり咲き乱れて、残光に浮んでいるのを。「君が植ゑし一むらすすき虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな」(『古今集』巻十六哀傷、御春有助)。柏木の巻に「一むらすすきもたのもしげにひろごりて、虫の音添へむ秋思ひやらるる」(三一二頁)とあった。

八 前に「深くもえ取りやらで」とあった。「和琴」は、六絃の琴。

九 雅楽の律調。秋の調べという(『河海抄』)。「女の声なり」とも(『龍鳴抄』)。

一〇 以下「さるまじき名をも立つるぞかし」まで、実直な夕霧の思い。

秋の夕のものあはれなるに、一条の宮を思ひやりきこえたまひて、わたりたまへり。[一]うちとけ、しめやかに、御琴どもなど弾きたまふほどなるべし、[二]深くもえ取りやらで、やがてその南の廂に入れたてまつりたまへり。[三]端つかたなりける人の、ゐざり入りつるけはひもしるく、衣の音なひも、おほかたの匂ひかうばしく、心にくきほどなり。[四]例の、御息所、対面したまひて、昔の物語ども聞こえかはしたまふ。[五]わが御殿の、明け暮れ人しげく、もの騒がしく、[六]幼き君たちなど、すだきあわてたまふにならひたまひて、いと静かにものあはれなり。うち荒れたるここちすれど、あてに気高く住みなしたまひて、[七]前栽の花ども、虫の音しげき野辺と乱れたる夕ばえを、見わたしたまふ。

落葉の宮はどうしていられるかとお思い申し上げて
お出かけになった
奥ゆかしい感じ
衣ずれの音も 周囲に漂う香の匂いもかおり高く
人の出入りが多く
亡き柏木の思い出話を
がする
大勢寄って騒々しくしていらっしゃるのにお馴れなので〔こちらは〕ひっそりとものさびしい感じがする
手入れも行き届かぬ感じではあるが
上品で
気位を失わぬお暮しぶりで

和琴を引き寄せたまへれば、[八]律に調べられて、いとよく弾きならしたる、人香にしみて、なつかしうおぼゆ。[一〇]かやうなるあたりに、思ひのままなる好き心ある人は、しづむることなくて、さまあしき

〔夕霧が〕
整えられていて
弾きこんであるのが
移り香がしみて
女らしい感じがする
浮気者は
心を抑えかねて
見苦しいふるま
慎みのない

一一 亡き柏木。夫の遺愛の和琴を落葉の宮が弾き馴らしていたのである。柏木が和琴の名手であったことは、若菜上の源氏四十の賀のくだり（五〇～五一頁）にも見える。

一二 このお琴にも、故人の名残の音はこもっていましょう。

一三 琴の緒が絶えて以来（柏木が亡くなってからは）、（宮は）昔の子供の頃のお遊びに弾かれたことさえ、お思い出しにならないようでございます。「琴の緒絶えにし……」には、伯牙絶絃の故事が踏まえられていよう。中国春秋時代の琴の名手伯牙は、その音色をよく理解してくれた鐘子期が死ぬと、真の知己を失ったことを悲しみ、琴の絃を断ち、終生琴を弾かなかったという（『呂氏春秋』）。友人知己にもまして、夫に死別したのだから、という気持。「亡き人は訪れもせで琴の緒を絶ちし月日ぞかへり来ける」（『蜻蛉日記』上巻康保二年七月）の詠がある。

一四 朱雀院の姫宮たち。

一五（和琴も）悲しい思いをもよおす種とお考えなのだろうと存じます。「浅茅生の小篠が原に置く露ぞ世の憂きつまと思ひ乱るる」（『源氏釈』所引）

一六「恋しさの限りだにある世なりせば年へてものは思はざらまし」（『古今六帖』五、年経て言ふ）

一七 この琴の音に、故人の音色が伝わっているかどうか分るように、お弾き下さい。夕霧と柏木は知友であったので、こう言う。

けはひをもあらはし、さるまじき名をも立つるぞかし、など、思ひ続けつつ搔き鳴らしたまふ。故君の常に弾きたまひし琴なりけり。

（けしからぬ浮き名を立てたりもするものなのだ）

（風情のある曲を一つ二つ）をかしき手一つなど、すこし弾きたまひて、「あはれ、いとめづらかなる音に搔き鳴らしたまひしはや。この御琴にもこもりてはべらむかし。うけたまはりあらはしてしがな」とのたまへば、「琴の緒絶えにしのちより、昔の御童遊びの名残をだに、思ひ出でたまはずなむなりにてはべめる。院の御前にて、女宮たちのとりどりの御琴ども、こころみきこえたまひしにも、かやうのかたはおぼめかしからずものしたまふとなむ、さだめきこえたまふめりしを、あらぬさまにほれぼれしうなりて、ながめ過ぐしたまふめれば、世の憂きつまにといふやうになむ見たまふる」と聞こえたまへば、「いとことわりの御思ひなりや。限りだにある」と、うちながめて、琴はおしやりたまへれば、「かれ、なほさらば、声に伝はることもやと聞きわくばかり鳴らさせたまへ。ものむつかしう思うたまへ沈める耳

（夕霧）（柏木は）滅多とないす（御息所）（朱雀院）（お試し申されました折にも）（それぞれお得意の）（落葉宮は）この方面のお腕前はしっかりしていらっしゃると）（ご判定申されたようでございますのに）（今は別人のようにぼんやりなさって）（物思いに沈んでお暮しのご様子ですので）（夕霧）まことに）（ごもっともなお悲しみです）（御息所）その琴を）（やはりそれなら）（何やら気も晴れず思い沈んでおります私の耳でもせめ）（物思わしげな面持で）

一 仰せのような、亡き人の音の伝わる中の緒、夫婦でいらした宮のお琴の音は、格別でございましょう。「中の緒」は、明らかでないが、『河海抄』に「和琴の第二絃也」という。夫婦の仲を掛けて言う。なお二巻明石三〇〇頁注二参照。

二 「白雲に羽うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月」（『古今集』巻四秋上、読人しらず）を連想させる背景。「雁がね」は、雁。

落葉の宮、夕霧と想夫恋を合奏する

三 宮は、その雁の声をさぞ羨ましくお聞きになっていることであろう。夕霧の心中をそのまま述べる文。

四 （宮が思わずお手もとにあった）箏の琴をごく低くお弾きになったのも。「箏」は、十三絃の琴。

五 唐楽。平調。正しくは「相府蓮」だが、「想夫恋」の字を宛て、夫を慕う曲とされていた。

六 お心のうちをお察ししてのことのようですのは、恐縮ですが。想夫恋の曲を弾いたことの弁解。

七 この曲なら、何かお言葉が頂けるのではないかと思いまして。「こと」に「琴」を掛ける。柏木への追慕から、合奏して頂けるのではないかと、暗にすすめる。

八 （想夫恋は）ただ和琴を所望された以上に気がひけるお相手なので。

九 何も仰せでないのも、言葉に出しておっしゃる以上に深いお気持からなのだとは、ご遠慮深いご様子でよく分ります。「言」に「琴」を掛ける。想夫恋をお弾き下さらぬのも、より深い思慕からだと分ります、

て

をだに、あきらめはべらむ」（夕霧）と聞こえたまふを、「しか伝はる中の緒は、異にこそはべらめ。それをこそうけたまはらむとは聞こえつれ」とて、御簾のもと近くおし寄せたまへど、とみにしもうけひきたまふまじきことなれば、しひても聞こえたまはず。

さっぱりさせましょう

その宮のお琴の音こそ承りたいとお願い申しているので

[和琴を]

[落葉宮が]すぐにご承知になるはずもないことなので

[夕霧も]無理にはお願いなさらない

月さし出でて曇りなき空に、羽うちかはす雁がねも、列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらむかし。風膚寒く、ものあはれなるに誘はれて、箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも、奥深き声なるに、いとど心とまり果てて、なかなかに思ほゆれば、琵琶を取り寄せて、いとなつかしき音に、想夫恋を弾きたまふ。「思ひ及び顔なるは、かたはらいたけれど、これは、こと問はせたまふべくや」とて、切に簾のうちをそそのかしきこえたまへど、ましてつつましきさしいらへなれば、宮はただものをのみあはれとおぼし続けたるに、

離れぬのを

深みのある音色

[夕霧は]一層心を奪われてしまって

かえって物足りぬ思いがするので

とてもやわらかい

簾中に向ってお返事を催促申し上げなさるが

何もかもが悲しくお思いになるばかりなのだが

（夕霧）ことに出でて言はぬも言ふにまさるとは

の意。「心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる」（『古今六帖』五、言はで思ふ）

一〇 あなた様の琵琶をうかがって、秋の夜の趣深い風情はよく分りますが、琴を弾くよりほか、言葉では何を申し上げることができましたでしょうか。

一一 もっと聞きたいと、一層心をそそられる程度に。あとの「止みたまひぬれば」に続く。

一二 もともとおっとりした性質の音色に乗せて。今、落葉の宮の弾いている箏の音色についていう。

一三 昔の人が心をこめて弾き伝えた、同じ調子（律の調べ）のものではあるが、しみじみと胸を打つ曲のほんの幾節かを。

一四 物好きなところを、あれこれとあらわにお目にかけてしまいました。「ひき出でて」に「弾き出でて」を掛け、和琴や琵琶を弾いて、心の動きを表してしまったことを言う。

一五 調子はそのままで。心変りしないで、の意。

一六 とかく、思いもよらぬことのある世の中ですから。「ひき違ふ」に「弾き」を掛ける。ほかの男に心変りなさることもあるかもしれない、と暗に言う。

一七 今夜の風流なお振舞につきましては、誰もがどもっともとお認め申すはずでございます。以下、御息所の言葉。月、雁、秋、風など、「ものあはれなる」夜だったことが想起される。

御息所、柏木遺愛の笛を贈る

人に恥ぢたるけしきをぞ見る

と聞こえたまふに、ただ末つかたをいささか弾きたまふ。

（宮は）想夫恋の終りのところを少しお弾きになる

（落葉宮）

深き夜のあはればかりは聞きわけど

ことよりほかにえやは言ひける

一〇

一一 飽かずをかしきほどに、さるおほどかなるものの音がらに、一三 古き人の心しめて弾き伝へける、同じ調べのものといへど、あはれに心すごきものの片端を掻き鳴らして止みたまひぬれば、うらめしきまでおぼゆれど、「（夕霧）好き好きしさを、一四 さまざまにひき出でても御覧ぜられぬるかな。秋の夜ふかしはべらむも、昔のとがめやと憚りてなむ、まかではべりぬべかめる。またことさらに心してなむさぶらふべきを、この御琴どもの調べ一五 変へず待たせたまはむや。ひき違ふることもはべりぬべき世なれば、うしろめたくこそ」など、まほにはあらねど、一七 うちにほほしおきて出でたまふ。

遅くまでお邪魔しますのも故人の咎めがあろうかと　ご遠慮して　おいとましなければなりますまい　また改めてこうした失礼のないよう気をつけて参上いたしますが　お待ち下さいませんか　心配でなりません　意中をほのめかしておいてお帰りになる　ではないが

「今宵の御好きには、人ゆるしきこえつべくなむありける。そこは

うこともない昔の思い出話に紛らわせておしまいになるばかりで
かとなきいにしへ語りにのみまぎらはさせたまひて、玉の緒にせむ
ここちもしはべらぬ、残り多くなむ」とて、御贈り物に笛を添へて
たてまつりたまふ。「これになむ、まことに古きことも伝はるべく
（御息所）三　いたわしく存じますので
聞きおきはべりしを、かかる蓬生にうづもるるもあはれに見たまふ
四
ここからでもお伺いしたく存じます
るを、御前駆にきほはむ声なむ、よそながらもいぶかしうはべる」
五
と聞こえたまへば、「似つかはしからぬ随身にこそははべるべけれ」
（夕霧）六　この笛もいかにも［柏木が］いつも身につけて愛玩しては
とて、見たまふに、これもげに世とともに身に添へてもてあそびつ
私自身も　とてもこの笛の　音色の総ては　十分に吹きこなせない　大事
つ、「みづからも、さらにこれが音の限りは、え吹きとほさず。思
にしてくれる愛好者に何とかして伝えたいものだ　お口にしていらっしゃったのを
はむ人にいかで伝へてしがな」と、をりをり聞こえごちたまひしを
一段と悲しみが胸に迫って
思ひ出でたまふに、今すこしあはれ多く添ひて、こころみに吹き鳴
半ばほどまでで吹きやめて　（夕霧）八
らす。盤渉調のなからばかり吹きさして、「昔をしのぶひとりごと
下手でも何とか聞いて頂けました　この笛はとても分不相応です
は、さても罪ゆるされはべりけり。これはまばゆくなむ」とて、出
でたまふに、
（御息所）九
露しげきむぐらの宿にいにしへの

一（心ゆくまでお弾き下さいませんでしたから）命が延びる思いもしませんでしたのが、残念でございます。「玉の緒にす」は、命の延びる料にする意。「片糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせむ」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）による言葉。「緒」は、琴の縁語。

二 客の帰る時に贈る物。「笛」は、横笛（次頁注一〇参照）。

三 この笛にこそ、まことに古い由緒もあるように聞いておりましたが。後文三四〇頁に、その由来が、源氏の口から語られている。

四 手入れしない荒れ果てた家。歌語。

五 お先払いの声に負けないほどにお吹き下さる音色を。横笛は懐中にして持ち歩きし、車中ででも吹けるところから、こういう。

六（そのような立派な笛なら）私などにはふさわしからぬ随身でございましょう。「随身」は、近衛府の護衛の武官。夕霧は左大将、随身八人がつく。御息所の言葉に「御前駆」とあったのに対する当座の洒落。

七 雅楽の律の調べ。洋楽のh音を主音とする。冬の調子といわれる。盤渉調の調子（演奏の前に調子を整えるために吹く短い曲）を吹いたのであろう。

八 故人を偲んで独り和琴を弾きましたのは。

九 涙にくれて暮すこの荒れた家に、昔に変らぬ笛の音を聞かせて頂きました。「むぐら」は、蔓でからむ雑草。「虫の声」に笛の音をよそえている。

一〇 横笛の調べは別に昔に変ってはいませんが、亡くなった人を偲んで泣く声は尽きないのです。「横笛」は、もと中国から伝来した笛で、おもに唐楽に用いる。長さ一尺三寸ほどで、太笛（大和笛）、高麗笛より太い。笛の中でもっともよく用いられ、普通、笛といえば、横笛をさす。巻の命名はこの歌による。

一一 雨の間の寶子（縁）に面する格子。

一二 催馬楽、呂「妹と我」。「妹と我と　いるさの山の　山あららぎ　手な取り触れそや　香をまさるがにや　とくまさるがにや」。「ただ今雲居の雁の所へ帰りたれば、いもと我とといふをうたふにや」（『弄花抄』）

帰邸した夕霧と雲居の雁

一三 これはまたどうしてこうすっかり錠を下ろしてあるのだ。前に「格子などおろさせて」とあった状景をいう。

一四 なんとうっとうしい。

一五 格子を上げさせなさって、ご自分で御簾を上げたりなさって、寶子近くに横になった。月を見る体。まだ一条の宮での気分が抜けきらぬ様子。

一六 こんな月の夜なのに、ぐっすり寝入る人があるものか。「かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらに寝て明かすらむ人さへぞ憂き」（『古今集』巻四秋上、凡河内躬恒）を踏まえる。

一七 少しこちらへ出ていらっしゃい。ほんとにしようのない人だ。雲居の雁を誘う。

秋にかはらぬ虫の声かな

と聞こえ出だしたまへり。

（夕霧）一〇 横笛の調べはことにかはらぬを

むなしくなりし音こそ尽きせね

（簾中から）

去りがたげにたたずんでいらっしゃる間に

出でがてにやすらひたまふに、夜もいたくふけにけり。

三条殿

殿に帰りたまへれば、格子などおろさせて、皆寝たまひにけり。

落葉の宮　ご執心申されて

「この宮に心かけきこえたまひて、かくねむごろがり聞こえたまふぞ」など、人の聞こえ知らせたれば、かやうに夜ふかしたまふもなまやら憎らしくて　お帰りになった物音を耳にしながら　眠っているふりをしていらっしゃるのであろう　夜更けまでご外出なのも何

ま憎くて、入りたまふをも聞く聞く、寝たるやうにてものしたまふなるべし。「妹とわれといるさの山の」と、声はいとをかしうて、

（雲居雁に）女房などがお告げしたので（夕霧が）

それであんなに親切にしておあげなさるのです

よいお声で

ひとりごち歌ひて、「こはなどかく鎖し固めたる。あな埋れや。今宵の月を見ぬ里もありけり」と、うめきたまふ。格子上げさせたまひて、御簾巻き上げなどしたまひて、端近く臥したまへり。「かかる夜の月に、心やすく夢見る人はあるものか。すこし出でたまへ。

（夕霧）

見ない所もあったのだな

ぶつぶつおっしゃる

あな心憂」など聞こえたまへど、心やましうち思ひて、聞き忍びたまふ。

［雲居雁は］おもしろくない気がして　知らぬ顔をしていられる

君たちの、いはけなく寝おびれたるけはひなど、ここかしこにうちして、女房もさしこみて臥したる、人気にぎはしきに、ありつる所のありさま思ひ合はするに、多く変りたり。この笛をうち吹きたまひつつ、いかに名残もながめたまふらむ、御琴どもは、調べ変らず遊びたまふらむかし、御息所も、和琴の上手ぞかし、など、思ひやりて臥したまへり。いかなれば、故君、ただおほかたの心ばへは、やむごとなくもてなしきこえながら、いと深きけしきなかりけむと、それにつけても、いといぶかしうおぼゆ。見劣りせむことこそ、いといとほしかるべけれ、おほかたの世につけても、限りなく聞くことは、かならずさぞあるかし、など思ふに、わが御仲の、うちけしきばみたる思ひやりもなくて、むつびそめたる年月のほどを数ふるに、あはれに、いとかうおしたちておごりならひたまへるも、

若君たちが　あどけなく　夢におびえて声をあげる気配など　［簾中の］

混み合って寝ているのは　さきほど

［夕霧は］贈り物の笛を　の［一条の宮の］

調べを変　お琴はどれも　想像　えぞ合奏していらっしゃることだろうしながら

［宮に］逢ってみたい気がしきりにする　大体世間のどんな話でも　すばらしいと

いつもそんなものだ　いう評判のことは

［雲居雁が］わがままに大きな顔をしてずっと過しておいでなのも

一（一条の宮では）私の帰ったあとも、どんなに物思いに沈んでいられることだろう。以下、夕霧の心中の思い。

二 どういうわけで、亡くなった方（柏木）は、表向きの様子は、（落葉の宮を）身分のある北の方として大切にお扱い申していながら、実際はさほど深く愛しているようでもなかったのだろうと。ふたたび、夕霧の心中に、次々うかぶ思いを書く。

三 しかし、実際に逢って、がっかりするような方だったら、お気の毒だな。

四 ご自分たちの夫婦仲が、お互い恋のかけひきなど気にすることもなく仲むつまじくなった、今までの年月を数えてみると、しみじみ感慨深く。幼な馴染みだった結婚当初の二人のいきさつを言う。

五 死んだ衛門の督（柏木）が、そっくりあの時の袿姿で。最後の対面の時、「白き衣どもの、なつかしうなよよかなるをあまた重ねて」とあった病床の姿（柏木二九〇頁参照）。

夢に、柏木現れる

六 この笛に吹き寄る風は、同じことなら、笛の音を末の世まで長く続くものとして伝えてほしい。わが子孫に末長く伝えてほしい、の意。「笛竹」は笛の歌語。竹の縁で風という。「音」に「根」、「世」に「よ」（竹の節と節の間）を掛けて、ともに「竹」の縁語。

七 伝えたいと思う人は違うのでした。

八 お乳を吐いたりなさるので。『和名抄』に「病源論云、哺吐、小児由二哺乳冷熱不一調所一致也」とあり、「哺吐」を「豆太見」と訓む。『箋注』に「哺吐」は「吐哺」の誤りであろうとする。

九 北の方。雲居の雁。

一〇 明り。燈台。源氏物語絵巻にこの場面の絵がある。（図録二参照）

一一 額髪を前に垂れぬよう、耳に挟んで。「まめまめしき筋を立てて、耳はさみがちに、びさうなき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかりをして」（一巻帚木五五頁）とあるように、かいがいしく立ち働くための姿。

一二 夕霧。「背の君」という感じ。

無理もないという気がなさるのだった
ことわりにおぼえたまひけり。

[夕霧が]
すこし寝入りたまへる夢に、五かの衛門の督、ただありしさまの袿姿にて、[夕霧は]側に坐りこんでかたはらにゐて、この笛を取りて見る。夢のうちにも、亡き人の、面倒なことにわづらはしう、この笛の音を頼りにやってきたなと思っていると この声を尋ねて来たると思ふに、

[柏木]六「笛竹に吹き寄る風のことならば
末の世長きねに伝へなむ

七思ふかた異にはべりき」と言ふを、[それは誰かと]問はむと思ふほどに、若君の夢におびえて泣きたまふ御声に、[夕霧は]さめたまひぬ。

若君は
この君いたく泣きたまひて、八つだみなどしたまへば、乳母も起き騒ぎ、上九も御殿油一〇近く取り寄せさせたまひて、持ってこさせなさって耳はさみして、そそげに世話をして
くりつくろひて、抱きてゐたまへり。[雲居雁は]いとよく肥えて、つぶつぶとふっくらとした
をかしげなる胸をあけて、乳などくくめたまふ。含ませなさる児もいとうつくしうおはする君なれば、白くをかしげなるに、御乳はいとかはらかなるを、色白できれいに見えるが すっかりひあがっているのを 気安めに含ませて紛らわしていられる心をやりてなぐさめたまふ。一二男君も寄りおはして、「いかな

一 魔除けの散米。病気、出産や、祓、禊などの時に、悪神よけのため、白米を撒くこと。
二 故人を夢に見た悲しい思いも、どこかへ行ってしまうことだろう。草子地の文。
三 今時の若い人のような格好で、家を外にうろつきなさって。落葉の宮にうつつを抜かして、深夜帰宅したことを皮肉る。
四 おきまりの物の怪が入ってきたのでしょう。若君が具合が悪いのは、格子を上げたため、物の怪が入って来たせいだという。
五 なんと、私が物の怪の手引きをしたとは、妙なことだ。
六 自称の代名詞。親しい者同士で、男女ともに用いる。
七 あちらへ行って下さい。みっともないのですもの。
八 本当に、若君は苦しがって、一晩中泣きむずかって夜をお明かしになった。「柏木の夢に来りしにより、何となくおそはれ給ふ也」(『弄花抄』)
九 この笛は、面倒なことだな。以下、次頁三行目「……執はとどめじと思ふ世なれ」まで、夕霧の思い。
一〇 故人の執着していたものが、納まるべき所へも行かず、女方から自分などに伝わったのでは、何の意味もないことだ。父子の相伝が本来だという考え。

夕霧、笛の処置を思い悩み、柏木の供養をする

るぞ」などのたまふ。[一]騒々しいので うちまきし散らしなどして、乱りがはしきに、[二]夢のあはれもまぎれぬべし。「なやましげにこそ見ゆれ。[三](雲居雁)この子は具合が悪そうですわ 今めかしき御ありさまのほどにあくがれたまうて、夜深き御月めでに、[四]夜更けのお月見とやらで 格子も上げられたれば、例のもののけの入り来たるなめり」など、いと若やかに美しいお顔で 若くをかしき顔してかこちたまへば、文句をおっしゃると うち笑ひて、「あやしのものの[五](夕霧)けのしるべや。[六]まろ格子上げずは、道なくて、げに入り来ざらまし。[七]大勢のお子の親になられるにつれて あまたの人の親になりたまふままに、考え深い立派なことをおっしゃるよ 思ひいたり深くものをこそのたまひなりにたれ」とて、ちらっとご覧になるその目つきが うち見やりたまへるまみの、[八]気おくれするほど美しいので いとはづかしげなれば、さすがにもものたまはで、お返事もなさらずに「出でたまひね。[七](雲居雁)見苦し」とて、明らかなる火影を、さすがに恥ぢたまへるさまも憎からず。[八]まことに、この君、なづみて泣きむつかり明かしたまひつ。

夕霧
大将の君も、夢おぼし出づるに、[九]この笛のわづらはしくもあるかな、人の心とどめて思へりしものの、行くべきかたにもあらず、女の御伝へはかひなきをや、[一〇]「柏木の霊は一何と思ったのだろう 現世では いかが思ひつらむ、この世にて数に思ひ 物の数に

一（人は）あの臨終の際に、ひたすら恨みに思ったり、または一途にいとしく思う気持に執して、無明長夜の闇に苦しむのだろう。「臨終一念生処是定経文」（『河海抄』）

二 この時代の葬所。（一巻桐壺一八頁参照）

三 柏木の帰依していた寺。大宮の法要が極楽寺で行われたから（四巻藤裏葉二八〇頁）、あるいはそこか。

四 以下、ふたたび夕霧の思い。

五 源氏は、明石の女御のお部屋にいらっしゃる時であった。六条の院南の町の寝殿の東面である。源氏は、常は紫の上方（東の対）にいるので、夕霧はまずそこを訪れる。

六 明石の女御腹の御子。後の匂宮。（若菜下一八三頁参照）

夕霧、六条の院に行く　幼い皇子たちの有様

七 紫の上が、また特別に引き取ってお住まわせ申されていた。紫の上は、すでに女一の宮を養育している（若菜下一六二頁）。

八「こそ」は、呼びかけの語。

九 あちら（明石の女御のお部屋）へ連れて行って下さい。

一〇 自分に敬語をつけて。「宮抱きたてまつりて」と言ったことをさす。日頃、女房などが三の宮に対して敬語を使うのを、そのまま使ってよいと思っている。

一一 大層無作法でしょう。

一二 入れぬことも、かの今はのとぢめに、一念のうらめしきも、もしはあはれとも思ふにまつはれてこそは、長き夜の闇にもまどふわざなれ、かかればこそは、何ごとにも執はとどめじと思ふ世なれ、などおぼし続けて、愛宕に誦経せさせたまふ。またかの心寄せの寺にもせさせたまひて、この笛をば、わざと人のさるゆゑ深きものにて、引き出でたまへりしを、たちまちに仏の道におもむけむも、尊きことはいひながら、あへなかるべし、と思ひて、六条の院に参りたまひぬ。

（も思わなかったことも／こんなことになるから「私は」／執着は持つまいと思う世の中なのだ／誦経をおさせになって／わざわざ御息所がそうした由緒の深いものとして／引出物に下さったのに／寺に寄進してしまうのも／故人の供養になるとはいうものの／あまりに簡単すぎよう）

一五 女御の御方におはしますほどなりけり。一六 三の宮、三つばかりにて、特にかわいらしくていらっしゃるので一七 なかにうつくしくおはするを、こなたにぞまた取り分きておはしませたまひける。走り出でたまひて、（三の宮）「大将こそ、一八 宮抱きたてまつりて、一九 あなたへ率ておはせ」と、二〇 みづからかしこまりて、いとしど（お抱き申して／ひどく甘えた様子で）けなげにのたまへば、うち笑ひて、（夕霧）「おはしませ。（おいでなさいませ／どうして／通れましょうか）いかでか御簾の前をばわたりはべらむ。二一 いと軽々ならむ」とて、抱きたてまつりて

一 誰も見ていないよ。寝殿に行くのに、御簾の前を通るのは、紫の上に対して失礼だ、と言ったのに対して、子供らしく反論する。

二 わたしが顔を隠してあげよう。顔を隠せば、人に見えないと思っている。幼い精一杯の知恵。

三 明石の女御方。

四 明石の女御腹の皇子。匂宮の兄君で、後に式部卿の宮という。

五 薫。女三の宮は、女御と同じ寝殿の西面に住む。

六 寝殿の東南の隅の間のあたり。「間」は、柱と柱の間。東南の角の簀子である。

七 帝のお身近く護衛なさる方を、勝手に自分の家来にしようと取り合いなさるのだな。夕霧は近衛の大将なので、「近き衛り」という。「随身」は、近衛府の護衛の武官。上皇、摂関、大臣以下中少将に賜る。

八 (二の宮は) お年のわりには、こわいほどご立派にお見えになる。二の宮、この時、四、五歳か。

九 (源氏は、満足げに) にっこりして。

一〇 公卿には、見苦しく失礼なお席だ。夕霧は、匂宮を下ろしたまま、簀子にいるのであろう。

一一 あちら (東の対) へどうぞ。

お坐りになると (三の宮) 一 みたまへれば、「人も見ず。二 まろ、顔は隠さむ。さあさあ なほなほ」とて、御袖[夕霧の顔を]してさし隠したまへば、たまらなくかわいらしくて いとうつくしうて、率てたてまつりたまふ。三 こなたにも、四 二の宮の、五 若君とひとつに[一緒になって]まじりて遊びたまふを、[源氏は]あやしていらっしゃるところなのであった うつくしみておはしますなりけり。六 隅の間のほどにおろしたてまつりたまふを、二の宮見つけたまひて、「まろと[わたしと一緒に]大将に抱かれむ」とのたまふを、三の宮、「あが[わたしの大将なんだから]大将をや」とて、[夕霧を]お放しにならないひかへたまへり。源氏院も御覧じて、「いと[なんとお行儀の悪い方々ですね]乱りがはしき御ありさまどもかな。七 おほやけの御近きまもりを、私の随身に領ぜむとあらそひたまふよ。三の宮こそ、特に聞き分けなくていらっしゃる いとさがなくおはすれ。常に兄にきほひ申したまふ」と、負けまいとなさる いたしなめ申して仲裁なさる さめきこえあつかひたまふ。夕霧大将も笑ひて、「二の宮は、この上なくこよなく 兄心にところさりきこえたまふ御心深くなむおはしますめる。八 御年のほどよりは、恐ろしきまで見えさせたまふ」など聞こえたまふ。九 うち笑みて、どの宮様をもいづれをもいとうつくしと思ひきこえさせたまへり。(源氏)一〇 「見苦しく軽々しき公卿の御座なり。一一 あなたにこそ」とて、わたり

一二 女三の宮の若君（薫）は、宮たちとご同列に扱うべきではないと、（源氏は）内心ではお思いになるが。臣下の分際だから、公私の別をつけるべきだと、内心は考える。

一三 かえってその心遣いを、母女三の宮が心に咎めて、（柏木のことがあるからかと）気を廻されるであろうと。

一四 こんな斟酌をなさるのも、持って生れた源氏のご性分で、（女三の宮を）お気の毒に思われるので。

夕霧、薫を見てさまざまに思う

一五 二藍の直衣だけを着て。指貫などを着けない幼児の常の姿。「二藍」は、藍を紅で染めた、紫に近い色。貴族の若君の着料の色。

一六 まなざし。目の光。

一七 口もとが、特別はなやかな感じに、にっこり笑ったところなど（柏木にそっくりで）、自分がいきなり見た思い違いなのだろうか。

たまはむとするに、宮たちまつはれて（まつわりついて）、さらに離れたまはず（一向にお離れにならない）。宮の若君は、宮たちの御列（一二）にはあるまじきぞかしと、御心のうちにおぼせど、なかなかその御心ばへを、母宮の、御心の鬼にや思ひ寄せたまふらむと、（一三）これも心の癖（一四）にいとほしうおぼさるれば、（薫を）いとらうたきものに思ひかしづききこえたまふ。（子として大切にしておあげになる）（大事ないとし）

夕霧

大将は、（薫）この君をまだえよくも見ぬかなとおぼして、（ゆっくり見る機会もなかったなと思われて）御簾の隙よりさし出でたまへるに、花の枝の枯れて落ちたるを取りて見せたてまつりて、招きたまへば、（薫が）走りおはしたり。二藍（一五）の直衣の限りを着て、（薫は）いみじう白う光りうつくしきこと、皇子（みこ）たちよりもこまかにを（大層色白でつやつやとしてかわいらしいことは）かしげにて、（整っていて）つぶつぶときよらなり。（まるまると肥えて美しい）なま目とまる心も添ひて見れば（目鼻立ちはよく）にや、眼居（一六）など、（薫）これは今すこし強うかどあるさままさりたれど、（もっとしっかりして才気のありそうな様子は柏木以上だけれど）まじりのとぢめをかしうかをれるけしきなど、（目じりが切れ長ですっきりと美しいところなど）いとよくおぼえたまへり。（何となくそう思って見る気もあるせいか）口つきの、（一七）ことさらにはなやかなるさまして、うち笑みたるなど、（柏木に）（大層よく似ていらっしゃる）わが目のうちつけなるにやあらむ、大殿（源氏）はかならずおぼし寄（気づいていら）

一 二の宮や三の宮たちは、皇子と思って見るから気高くあるものの、世間普通のかわいらしい子供たちというご様子だが。

二 なんとかわいそうな、もし、自分が疑っているようなことが本当ならば。薫は柏木の子ではないか、ということ。以下「罪得がましさ」まで、夕霧の心中を述べる。

三 柏木の父、致仕の太政大臣。

四 柏木の子だと名乗って出てくる人もいないのが悲しい。せめて形見として、世話する者でも残してくれたら。前にも「親たちの、子だにあれかしと泣いたまふらむにも……」（柏木三〇〇頁）と源氏が思うところがあった。致仕の大臣は、玉鬘や近江の君を見出だした経験がある。

五 （実の子がいると）お教えしないのは、罪なことだ。仏教では、親子の縁を重んじるからである。

夕霧、源氏に横笛のことを語る

六 東の対。

七 落葉の宮や御息所がどんなご様子でいらっしゃったかということを。

すらむと、いよいよ御けしきゆかし。宮たちは、思ひなしこそ気高（ますますご心中がうかがいたくなるれるだろうと）けれ、世の常のうつくしき児どもと見えたまふに、この君は、いと（薫）あてなるものから、さま異にをかしげなるを、見くらべたてまつり（際立って美しい顔立ちなのを気品がある一方）つつ、いであはれ、もし疑ふゆゑもまことならば、父大臣のさばか（あんなに）り世にいみじく思ひほれたまひて、「子と名のり出でくる人だにな（ひどくまるでうつけたように悲しんでいらっしゃって）きこと。形見に見るばかりの名残をだにとどめよかし」と、泣きこがれたまふに、聞かせたてまつらざらむ罪得がましさ、など思ふも、（いやいや どうしてそんなことがありえようと）いで、いかでさはあるべきことぞと、なほ心得ず、思ひ寄るかたな（やはり納得がゆかず 推測する手がかりもない［薫は］気立てもやさしくおとなしくて）し。心ばへさへなつかしうあはれにて、むつれ遊びたまへば、いと（［夕霧に］なついてじゃれなさるので）らうたくおぼゆ。

対へわたりたまひぬれば、のどやかに御物語など聞こえておはす（［お二人は］）るほどに、日も暮れかかりぬ。昨夜かの一条の宮にまうでたりしに、（［夕霧が］）おはせしありさまなど聞こえ出でたまへるを、ほほゑみて聞きおはす。あはれなる昔のことかかりたる節々は、あへしらひなどしたま（気の毒な故人のことにかかわりのある話の）（［源氏は］にやにやして）（しかるべき相槌などお打ちになっ）

ふに、「かの想夫恋の心ばへは、げにいにしへの例にも引き出でつべかりけるをりながら、女はなほ、人の心移るばかりのゆゑよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれと、思ひ知らるることどもこそ多かれ。過ぎにしかたの心ざしを忘れず、かく長き用意を人に知られぬとならば、同じうは心きよくて、とかくかかづらひ、ゆかしげなき乱れなからむや、誰がためも心にくく、めやすかるべきことならむとなむ思ふ」とのたまへば、一〇さかし、人の上の御教へばかりは心強げにて、かかる好きはいでや、と見たてまつりたまふ。

（夕霧）一一「何の乱れかはべらむ。なほ常ならぬ世のあはれをかけそめはべりにしあたりに、一二心短くはべらむこそ、なかなか世の常の嫌疑あり顔にはべらめとてこそ。想夫恋は、一三心とさしすぎてこと出でたまはむや、憎きことにはべらまし、もののついでにほのかなりしは、をりからのよしづきて、をかしうなむはべりし。何ごとも、人により、ことに従ふわざにこそはべるべかめれ。一四齢なども、やうやういたう

（源氏）八 女は何といっても男が気持を動かすようなたしなみや風雅のほども 並み大抵のことでは見せてはいけないものだと つくづく考えさせられることがいろいろと多いなと 何かとかかわり合って 世間体も穏やかなこと 世間によくある間違いなどしないほうがとであろうと思う 同じことならきれいな気持で

九 亡き人への情誼を忘れず、こうしていつまでも変らぬ心遣いをするのだということを、先方に分ってもらっている以上は。

一〇 なるほどな、他人のこととなると、ひとかどのご教訓を垂れなさるが、ご自分は、こうした好きごとはどうかな。一人の男性として源氏を見る夕霧の心中。

一一 何の間違いなどありましょう。以下、夕霧の弁解。

一二 当座だけで終っては、かえって世間にありふれた疑いを受けもしようかと思いまして（続けて同っているのです）。未亡人に言い寄ってみたが、はねつけられたので、手を引いたのだと思われはしないか、の意。

一三 あの想夫恋は、（落葉の宮が）ご自分から進んでお弾きになったのなら、出過ぎたことでしょうが。

一四 （落葉の宮は）お年なども、おいおい、ひどく若若しい振舞がお似合いというほどでもいらっしゃいませんし。

やはりはかなく終った人への同情からお世話するようになりました方々ですのに ことのついでにほんの少しお弾きになったのは 折も折とてみやびやかな感じで 結構に存じました 人柄次第 事柄次第ということでございましょう

一 一方、（私の方も）気軽に冗談を言ったり、色めいた態度を見せるといったふうに、馴れ馴れしくもいたしませんので。自分の態度が真面目であることを強調する。

二 あの夢の話。柏木の霊が夢に現れて、笛の相伝について異議を唱えたこと。

三 その笛は、私が預からなければならぬわけのあるものだ。内心、薫に伝えるべきだと判断しての発言。

四 陽成天皇。清和天皇第一皇子。母は藤原高子。元慶元年（八七七）～同八年（八八四）在位。天暦三年（九四九）崩。八十二歳。

五 『河海抄』は、南院式部卿貞保親王をあげ、「此大王絲竹之長者、陽成院御弟也、尤有其寄乎」と言い、この物語の朝顔の斎院の父式部卿の宮を貞保親王に準えたものかという。

六 あの柏木は、年少の頃から大層上手に笛を吹いたのに感心なさって。

七 式部卿の宮のお邸で萩の宴をなさった日。この萩の宴のことは、物語には見えない。

八 将来のこの笛の伝授は、薫のほかの誰にと思い間違えたりしよう。源氏心中の思い。「末の世の伝へ」は、柏木の霊の歌に、「末の世長きねに伝へなむ」とあったのによる。

源氏、笛の由来を語り、みずから預かろうと言う

若びたまふべきほどにもものしたまはず、また、あざれがましう、好き好きしきけしきなどに、もの馴れなどもしはべらぬに、［宮が］気を許されるのでしょうかうちとけたまふにや、おほかたなつかしうめやすき人の御ありさまになむ総じて親しみやすいどこといって難のないお人柄でいらっしゃいますものしたまひける」など聞こえたまふに、いとよきついで作り出でて、すこし近く参り寄りたまひて、かの夢語りを聞こえたまへば、［源氏の］［源氏は］とっさにお返事もなさらずただお聞きになってなどお話し申していられる間にうまく話のきっかけを作り出して心中思い当られることもあるとみにものものたまはで聞こしめして、おぼし合はすることもあり。

（源氏）三「その笛は、ここに見るべきゆゑあるものなり。それは かれは陽成院四の御笛なり。それを故式部卿五の宮の、いみじきものにしたまひけるを、大切な宝ものにしていらっしゃったのをかの六衛門の督は、童よりいと異なる音を吹き出でしに感じて、かの七宮の萩の宴せられける日、贈り物に取らせたまへるなり。お与えになったのです女の心は［御息所が］深くもたどり知らず、簡単にあなたに贈られたのでしょうしかものしたるななり」に深い由緒もよく知らず などのたまひて、末八の世の伝へは、またいづかたにとかは思ひまがへむ、さやうに思ふ［柏木の霊も］そう考えたことであろうなりけむかし、などおぼして、この君もいといたり深き人なれば、とてもよく気のつく人だから夕霧

九（夕霧は）源氏が、あれこれと考え込んでいられるご様子を見ると、ますます遠慮されて。夕霧も、源氏の心の動きを察知する。

一〇この際、是非お耳にお入れしたいという気があるので。夕霧が、かねてこういう機会を待ち望んでいたことは、三二五頁に見える。

一一これこれしかじかと、（源氏に対して）深く申しわけなく思っている旨を、繰り返し申していましたので。「しかしかなむ」は、夕霧の実際に発言した内容を省略した書き方（柏木二九二～三頁参照）。

一二やっぱり知っているのだな、と（源氏は）お思いになるが、いやなに、その時のことをありのままにおっしゃるべきことではないので。源氏の心中の思いと地の文が交錯し、重なる文脈。

一三そんな人に恨まれるような態度は、いつどんな時に見せたものやら、自分でもとても思い出せない。

一四それはそれとして、いずれゆっくり、その夢のことは、考えがついてからお話ししよう。

一五夢の話は、夜しないものだとか、女たちが言い伝えているようだ。「孫真人云、夜夢不レ須レ説」（『紫明抄』）

夕霧、源氏に柏木の遺言を語る

思い当ることもあろうと思ひ寄ることあらむかしとおぼす。〔源氏は〕

九その御けしきを見るに、いとど憚りて、すぐにも言葉を続けてお話し申されとみにもうち出で聞こえないがたまはねど、一〇せめて聞かせたてまつらむの心あれば、今ふとこの機会についでに思ひ出でたるやうに、不審でならないふりをしておぼめかしうもてなして、「（夕霧）今は臨終の折にも見舞に参りましたところせしほどにも、とぶらひにまかりてはべりしに、亡からむのちのことども言ひ置きはべりしなかに、一一しかしかなむ深くかしこまり申すよしを、かへすがへすものしはべりしかば、どんなことだったのでございましいかなることにかはべりけむ、今に至るもそのわけを思いつくことができませんのでいかなる気になるのでございますかなくはべる」と、いかにも腑に落ちぬように申し上げなさるのでいとただどたどしげに聞こえたまふに、一二されば よ、とおぼせど、何かは、そのほどのことあらはしのたまふべきならねば、しばらく考えるふりをして（源氏）一三しばしおぼめかしくて、「しか人の恨みとまるばかりのけしきは、何のついでにかは漏り出でけむと、みづからもえ思ひ出でずなむ。一四さて今静かに、かの夢は思ひ合はせてなむ聞こゆべき。夜語らずとか、女ばらの伝へに言ふなり」とのたまひて、そのあとはろくにお返をさをさ御いら

一（夕霧は）自分がこんなことをわざわざ申し上げたことを、父源氏は何とお思いかと、きまり悪くお思いになったとか。事実を伝え聞いた語り手の口ぶり。

事もないので
へもなければ、一うち出で聞こえてけるをいかにおぼすにかと、つつましくおぼしけりとぞ。

鈴虫（すずむし）

この巻は、横笛の巻の翌年、源氏五十歳の夏から中秋の頃までのことが書かれている。

夏、蓮の花の盛りに、女三の宮の持仏開眼供養が営まれた。やがて新築されるはずの念誦堂のためのもので、こまごまとした仏具一切を源氏は調えた。紫の上も力を合せ、美しい幡や布施の僧服を用意する。持経や仏前に供える経は、源氏が手ずから筆を染めたものである。夜の御帳台をかりそめの仏壇にし、法要の場として美しく荘厳された室内を見て、源氏は、宮が思いもかけず俗世の縁を絶つことになった悲しみを歌い、女三の宮と唱和する。源氏は、尼の生涯を送る女三の宮に対し、せめてその生活はいよいよ豊かに安泰であるようにと、万全の配慮をする。

秋、女三の宮の御殿の庭前を野の風情に造り変え、鈴虫を放った。八月十五夜、源氏は女三の宮方に赴き、虫の音を賞美し、琴を弾き、鈴虫の歌を唱和する。巻名の出所となるくだりである。

折から、螢兵部卿の宮や夕霧が訪れて、たちまち鈴虫の宴となったが、そこへまた冷泉院よりお召しがあり、一同は何をおいてもと参上、詩歌管絃に興を尽した。このような気軽な対面こそ、退位の真意でもあったから、冷泉院はいたく喜ばれた。退出に当り、秋好む中宮のもとに挨拶に参上した源氏は、母御息所の妄執の噂を聞き、その苦患を救いたいと願う中宮から、出家の意向を打ち明けられる。源氏は、それを強く諫め、追善供養を勧めるのであった。

一 六条の院の池の蓮。「極楽国土、有二七宝池一、八功徳水、充二満其中一、池底純以、金沙布レ地、（中略）池中蓮華、大如二車輪一、青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔」（『阿弥陀経』）

二 お念持仏（身辺に安置して、朝夕礼拝する仏像）の数々をお造りになったのを、開眼供養なさる。開眼とは、仏像に眼を入れ、霊を迎え入れること。

女三の宮の持仏開眼供養

三 念誦を行うためのお堂。女三の宮のために、邸内に建てられるもので、この時はまだ竣工していない。

四 仏、菩薩の威徳を示すものとして堂内に掛ける荘厳の具。（図録五、六参照）

五 花籠（散華の入れ物）を置く机。

六 鹿の子絞り。

七 ご寝所である御帳台の帷を。女三の宮の帳台を仮に仏壇とする。「帳台」は、一巻図録九参照。

八 密教における法華法（修法の一種）の本尊として掲げる。法華経説法の会座を描いた図と、法華経の経意を絵画化した法華経変相図の二種がある。「曼陀羅」は、梵語の音訳で、諸仏を安置し、祭った壇の意。

九 仏前でたく香。

一〇 中国風の調合法による百歩の遠くまで匂う衣香（香の一種）。

一一 女三の宮の持仏である。

一二 阿弥陀仏の脇に侍立する観音・勢至の両菩薩。

一三 仏前に供える水を入れる器。供花を浮かせる。

夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫宮の御持仏ども（女三の宮）あらはしたまへる、供養ぜさせたまふ。このたびは、大殿の君（源氏）の御心ざしにて、御念誦堂の具ども（道具類）、こまかにととのへさせたまへるを（こまごまと用意させておありになったのを）、やがてしつらはせたまふ。幡（四）のさまなどなつかしう（女らしく優美で）、心ことなる唐の錦を選び（特に立派な）縫はせたまへり。紫の上ぞ、いそぎさせたまひける（急いでご用意をおさせになった）。花机（五）の覆などのをかしき目染（六）もなつかしう（美しい色合いや）、きよらなるにほひ（美しい感じで）、染めつけられたる心ばへ（趣向は）、目馴れぬさまなり（またとない出来である）。夜（七）の御帳の帷を、四面（四方とも上げて）ながら上げて、後のかたに法華の曼陀羅（八）かけたてまつりて、銀の花瓶に、高く（丈の高い見事な蓮の花を色どりよく揃えてお供えになる）ととのとしき花の色をととのへてたてまつれり。名香（九）には、唐の百歩（一〇）の衣香を焚きたまへり。阿弥陀仏（一一）、脇士（一二）の菩薩、おのおの白檀し（白檀の材でお作り申し上げたのが）て作りたてまつりたる（繊細な出来で愛くるしい感じだ）、こまかにうつくしげなり。閼伽（一三）の具は、例（例の）

一 いずれも造花で、閼伽皿に入れて供える。
二 「荷」は、蓮をいう。夏の薫香の調合法。（四巻梅枝二五八～九頁、付録三三二頁参照）
三 蜂蜜を控えてぼろぼろに調製して、焚き匂わしたのが。薫香は、蜂蜜で和し、練り合せやすくする（四巻付録三三三、三三七、三三九頁等参照）。
四 仏前に供える経。法華経であろう。
五 地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天。衆生は、六道を輪廻する（生れ変る）と考えられていた。
六 女三の宮ご自身の読誦のためにお持ちになる経。法華経であること、三四九頁に見える。
七 （源氏と女三の宮の夫婦の縁は薄かったが）せめてこの経を現世における、悟りへの機縁として。
八 立願の時の願意を記した文。
九 そのほかには阿弥陀経を。これも源氏が書く。
一〇 朝廷の紙屋院の役人。（三巻蓬生六〇頁注八参照）
一一 罫を引いてある金泥の線よりも、源氏の書かれた墨の跡の方が、さらに輝くように立派なことなども。
一二 巻物にした経の軸、表紙、経箱の様子など。
一三 沈（香木）で作った花足の机。「花足」は、机の足を花形に彫刻したもの。（二巻図録一二参照）
一四 本尊（阿弥陀仏）の安置してある同じ御帳台。
一五 法会の行われる場。
一六 法会に経義を講説する僧。仏前の高座に上る。
一七 法会の時、僧に香を配ること。殿上人が勤める。

源氏、女房に訓戒する

通り際立って小さくて　のきはやかに小さくて、青き、白き、紫の蓮をととのへて、荷葉の方を合はせたる名香、蜜を隠しほほろげて、焚き匂はしたる、ひとつかをりに匂ひ合ひて、いとなつかし。経は、六道の衆生のために六部書かせたまひて、みづからの御持経は、院ぞ御手づから書かせたまひける。これをだにこの世の結縁にて、かたみに導きかはしたまふべき心を、願文に作らせたまへり。さては阿弥陀経、唐の紙はもろくて、朝夕の御手ならしにもいかがとて、紙屋の人を召して、ことに仰せ言賜ひて、心ことにきよらに漉かせたまへるに、この春のころほひより、御心とどめていそぎ書かせたまへるかひありて、端を見たまふ人々、目もかかやきまどひたまふ。罫かけたる金の筋よりも、墨つきの上にかかやくさまなども、いとなむづらかなりける。軸、表紙、筥のさまなど、いへばさらなりかし。これはことに沈の花足の机にすゑて、仏の御同じ帳台の上に飾られたまへり。堂飾り果てて、講師まうのぼり、行香の人々参りつどひたまへば、

色どりよく飾って　〔百歩の衣香と〕　源氏がご自身でお書きあそばした　互いに手を引き合って極楽往生で　〔女三宮が〕始終お誦みになるのにはどうかというので　〔源氏が〕　きるようにとの旨を　〔源氏が〕お心をこめて急いでお書きになっただけのことはあって　念入りに美しく　目もくらむほどに驚きなさる　まことに見事な出来ばえなのだった　申すまでもないことである　阿弥陀経は特別にた

一八 あちらの法要の席に。源氏の常の居所は東の対。
一九 寝殿の西面の西の廂。女三の宮の常の居間である母屋は法会の場になっているので、西廂に移っている。
二〇 同じく寝殿西面の北廂。ここも女房や童女がいる趣。
二一 香炉。（四巻図録一〇参照）
二二 空薫物（室内にかおらす薫香）は、どこから匂ってくるのか分らぬほどにするのがよいのだ。以下、法会の際の注意をする。
二三 富士山よりもひどく、煙がたちこめているのはよくないことだ。富士山は、当時噴煙を上げていた。歌枕である。
二四 経義を講じ、説法すること。講師が行う。
二五（法会の妨げになるような）まわりの音を立てないようにして。
二六 無遠慮な衣ずれの音や、人の気配をさせないようにするのがよかろう。
二七 いつもながら、たしなみのない若い女房たちの心遣いをお教えになる。（若菜上一一二一頁参照）
二八 若君（薫）がいては、騒がしかろう、抱いてあちらにお連れ申せ。
二九 母屋と北廂との間の襖障子。
三〇 西廂にいた女房たち。

女三の宮と贈答

源氏 一八院もあなたに出でたまふとて、宮のおはします西の廂にのぞきたまへれば、狭きここちする仮の御しつらひに、所狭く暑げなるまで、窮屈そうに暑苦しいほど 仰々しくことことしく装束きたる女房、五六十人ばかりつどひたり。二〇北の廂、簀子まで童女などはさまよふ。二一 盛装した 動き廻っている 火取りどもあまたして、たくさん使って けぶたきまであふぎ散らせば、さし寄りたまひて、「空に焚くは、二二（源氏）いづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ、富士の峰よりもけに、二三くゆり満ち出でたるは、本意なきわざなり。二四講説のをりは、二五おほかたの鳴りをしづめて、のどかにものの心も聞きわくべきことなれば、二六憚りなき衣の音なひ、人のけはひ、しづめてなむよかるべき」など、二七例のもの深からぬ若人どもの用意教へたまふ。宮は、女三の宮 人気におされたまひて、気圧されなさって いと小さくをかしげにて、かわいい様子で ひれ臥したまへり。二八（源氏）「若君、うつぶしていらっしゃる らうがはしからむ、抱き隠したてまつれ」などのたまふ。

静かにお説教の意味もよく理解しなければならぬことだから

北廂 二九北の御障子も取り放ちて御簾かけたり。そなたに人々は入れたまふ。三〇しづめて、宮にも、ものの心知りたまふべきしたかたを聞こえ

法会の内容がよくお分りになるように予備知識を教えておあげ

[人気を]

一 女三の宮が、いつものご寝所をお譲りなさっている御仏の飾りつけに目をおやりになるにつけても、さまざまの思いが去来して。夜の御帳台が仏壇にされていることに、源氏は感慨を催す。

二 このような仏事の供養を、あなたとご一緒にすることになろうとは思いもかけぬことでした。若い女三の宮は、源氏よりもあと、その死後か出家の後に、世を背くことになろうと思っていたのに、逆に今生で自分が宮から厭い捨てられたことを恨む。

三 まあ、それも仕方ありません。しかし、せめて来世には、あの蓮の中で、ともに暮せるようにと祈って下さい。「かの花のなかのやどり……」は、極楽の池中に咲く同じ蓮の中に生れ変ろう、の意。極楽の往生人は、蓮華の上に半座をあけて同行の人を待つとされた。「一々池中花尽満、花々物是往生人、各留三半座一乗二花葉一、待二我閻浮同行人一」（五会讃）（『河海抄』）

四 来世には極楽の同じ蓮台に乗ろうと約束しておきながら、今は蓮の葉に置く露のように別々に暮すことになるのが悲しい。「露」は「はちす葉」の縁語。

五 丁子を濃く煎じた汁で染めたもの。薄紅で黄色を帯びる。丁子染ともいう。尼の持ち物である。

六 ともに蓮花の宿をとお約束下さっても、あなたのお気持は、私と一緒にとはお思いではございますまい。「住まじ」に「澄まじ」を掛ける。

七 六条の院の婦人方。紫の上や花散里。

八 仏に捧げる供物。金銀細工の枝につけるという。

法要の盛儀

知らせたまふ。（になる）いとあはれに見ゆ。（とてもおやさしく見える）御座（一）をゆづりたまへる仏の御しつらひ見やりたまふも、さまざまに、（源氏）「かかるかたの御いとなみ（二）をも、もろともにいそがむものとは思ひ寄らざりしことなり。（三）よし、後（のち）の世にだに、かの花のなかのやどりに、隔てなくとを思ほせ」とて、うち泣きたまひぬ。

（源氏）はちす葉（四）をおなじ台（うてな）と契りおきて

露のわかるるけふぞ悲しき

と、御硯（すずり）にさし（筆を）濡らして、香染（かうぞめ）（五）なる御扇（あふぎ）に書きつけたまへり。宮、

隔（六）てなくはちすの宿（やど）を契りても

君が心やすまじとすらむ

と書きたまへれば、（源氏）「いふかひなくも思ほしくたすかな」（せっかくの申し出をかいもなくくさされるのですね）と、うち笑ひながら、（やはりしんみりと感にたえぬ面持でいらっしゃる）なほあはれとものを思ほしたる御けしきなり。

例の、（例によってみ）親王たちなども、いとあまた参（こ）りたまへり。御方々（かたがた）（七）より、（競争でご用意なさった）われもわれもといどみ出でたまへる捧物（ほうもつ）（八）のありさま、（格別立派で）心ことに、所

九　講師、読師（講師の講ずる経の題目を読み上げる）、呪願（願文を読み上げる。重要な役で、導師を勤める）、三礼（法要のはじめに三礼の唄を上げる）、唄（梵唄を上げる）、散花（読経しながら、蓮の花片を象った紙を撒き供養する）、堂達（法会中、雑務に従う）の七僧。これの揃うのを大法会とする。

一〇　僧衣。正式に着用するもの。当日のお布施である。

一一（その法服は）綾織物で。以下「……ことどもかな」まで草子地。

一二　目の利く人は。女三の宮方の女房であろう。

一三（女三の宮が）現世では、お若く栄華の盛りのお身の上を厭い捨てて入道なさり、生々世々絶えぬご夫婦の契りを法華経によってお結びになる、ありがたく深いお心を明らかにして。講師の読み上げる表白（法要の趣旨を記したもの）を要約した形で述べる。

一四（この講師は）当代では、学才もすぐれ、ゆたかな文才の持主であるのに、一層心をこめて言い続けるのが、「さきら」は、弁舌、筆勢など、ものに現れた才気。

一五　御念誦堂を営まれる手始めにというお積りだったのだが。

一六（女三の宮のために）経を読み上げるお礼の品々など、（帝、朱雀院のが加わり）置ききれないほどで。

一七　夕方、寺に置き所もなさそうなほど、豪勢な様子で僧たちは帰って行った。「重畳せる煙嵐の断えたる処に晩寺に僧帰る」（『和漢朗詠集』下、僧、閑賦張読）

狭きまで見ゆ。（あたり一杯である）七僧の法服など、すべておほかたのことどもは、皆紫の上せさせたまへり。（用意させなさった）綾のよそひにて、袈裟の縫目まで、見知る人は、世になべてならずとめでけりとや。（なかなかの出来だとほめたたえたとかいうことです）むつかしうこまかなることどもかな。（うるさくこまかい話ですこと）講師のいと尊く、ことの心を申して、（法要の趣旨を申して）この世にすぐれたまへる盛りを厭ひ離れたまひて、長き世々に絶ゆまじき御契りを、法華経に結びたまふ尊く深きさまをあらはして、ただ今の世に才もすぐれ、ゆたけきさきらを、いとど心して言ひ続けたる、いと尊ければ、皆人しほたれたまふ。（涙をお流しになる）

（大体一通りのことは）

（今回の法要はごく内輪で）これはただ忍びて、御念誦堂のはじめとおぼしたることなれど、内裏（帝）にも、山の帝（朱雀院）も聞こしめして、皆御使どもあり。御誦経の布施など、いと所狭きまで、にはかになむこと広ごりける。（俄かに大げさな法要になった）院にまうけさせたまへりけることどもも、そぐとおぼししかど、世の常ならざりけるを、まいて今めかしきことどもの加はりたれば、夕の寺に置き所なげなるまで、所狭き勢になりてなむ、僧どもは帰りける。

（六条の院でご用意させなさったお布施の数々も）（簡素にとお考えではあったが）（それでも並み一通りではなかったのに）（まして一層賑々しいことがいろいろ加わったので）

一（源氏は）女三の宮が出家された今になって、おいたわしく思われる気持が加わり。

二 女三の宮が朱雀院から相続なさった宮。後文に「三条の宮」とある。院がここに女三の宮を移居させようと思っていたことは、柏木二八四頁に見える。

三 日々のお世話をし、こちらから何かと申し上げたり、またご用を承ることができないようでは、私の気持にそぐわぬことになりましょう。朱雀院の委任に応じた本意にもとると言う。

四 いかにも、いつまでも生きていられぬこの世に余命いくばくもないことでしょうが。「あり果てぬ命待つ間のほどばかり憂きことしげく思はずもがな」（『古今集』巻十八雑下、平貞文）の言葉による。

五 上皇、中宮、親王以下諸臣に対し、位官、勲功に応じて賜る戸口。その租の半分、庸調の全部が封主の所得になる。二品内親王は、三百戸。

六 諸国の荘園。

七 私有の牧場。馬を献ずる。

八 朱雀院からご相続分として数知れず賜りなさったものなど。（若菜上一一二～一三頁参照）

九 宮の日常のお世話や、大勢の女房たちの経費といった、宮をはじめとする生活の面倒は、一切源氏の方のご負担で。今までは、宮の収入からなされていたのであろう。

源氏、女三の宮の出家生活に、万全の配慮をする

一今しも心苦しき御心添ひて、はかりもなくかしづききこえたまふ。（この上もなく大切にお世話申される）院の帝は、（朱雀院）この御処分の宮に住み離れたまひなむも、（この際別居なさるというのも）つひのことにて目やすかりぬべく聞こえたまへど、「よそよそにては、（源氏）離れ離れでいては（いずれそうなること）おぼつかなかるべし。（心配でならないでしょう）明け暮れ見たてまつり聞こえうけたまはらむことおこたらむに、本意違ひぬべし。（やはり生きている間なりとお尽ししたい気持は失いたくありません）げにあり果てぬ世いくばくあるまじけれど、なほ生ける限りの心ざしをだに失ひ果てじ」と聞こえたまひつつ、かの宮をもいとこまかにきよらに造らせたまひ、（念入りに立派に改築させなさって）御封のものども、国々の御庄、御牧などよりたてまつるものども、はかばかしきさまのは、（これはと思われるものは）皆かの三条の宮の御倉に納めさせたまふ。（御倉を）またも建て添へさせたまひて、さまざまの御宝物ども、（女三の宮に関係のものは）院の御処分に数もなく賜はりたまへるなど、あなたざまのものは、皆かの宮に運びわたし、（念入りに）こまかにいかめしうし置かせたまふ。（立派にしつらわせなさる）明け暮れの御かしづき、そこらの女房のことども、上下のはぐくみは、（三条の宮の手入れを）おしなべてわが御あつかひにてなむ、いそぎつかうまつらせたまひける。

一〇 女三の宮のお住居の、寝殿の西面と西の対を繋ぐ渡殿。
一一 寝殿と西の対の間にある塀。
一二 閼伽（仏に奉る水）の具を置く棚。縁さきに作る。（図録三参照）
一三 入道の宮のお弟子にと、おあとを慕って尼になった者たちは。
一四 宮がご出家なさった当時の、先を争うような気分の時には。
一五 今でもまだ諦めきれぬ心の内を申し上げて、宮をお困らせになるので。
一六 いつもの、困ったお心癖は、とんでもないことだろうと。女三の宮の思い。
一七 よそ目にこそ以前と変らぬお扱いではあったが、内々は、あのいやなことをご存じのそぶりがはっきりと分って。「憂き」は、柏木との密通事件。以下「御住ひにもがな」まで、女三の宮の心中を叙する。

女三の宮の出家生活

秋ごろ、西の渡殿の前、中の塀の東の際を、おしなべて野に作らせたまへり。閼伽の棚などして、そのかたにしなさせたまへる御しつらひなど、いとなまめきたり。御弟子にしたひきこえたる尼ども、御乳母、古人どもはさるものにて、若き盛りのも、心定まり、さるかたにて世を尽くしつべき限りは、選りてなむなさせたまひける。

一帯に野原の感じにお作らせになった
ご出家の日々にふさわしく作らせなさったご設備
大層優雅である
尼とし
若盛りの女房も
決心が固く
出家をおさせになった
一生を送れそうな者たちは皆
老女たちは当然として

さるきほひには、われもわれもときしろひけれど、大殿の君聞こしめして、「あるまじきことなり。心ならぬ人すこしもまじりぬれば、かたへの人苦しう、あはあはしき聞こえ出で来るわざなり」といさめたまひて、十余人ばかりのほどぞ、容貌異にてはさぶらふ。

出家を競ったけれども
源氏
それはよくないことだ
本心から決意したのではない人が一人でもいると
うわついた評判が
まわりの者が迷惑するし
立ちやすいものだ
尼姿になってお仕えしている

この野に虫ども放たせたまひて、風すこし涼しくなりゆく夕暮に、わたりたまひつつ、虫の音を聞きたまふやうにて、なほ思ひ離れぬさまを聞こえなやましたまへば、例の御心はあるまじきことにこそはあなれと、ひとへにむつかしきことに思ひきこえたまへり。人目にこそ変ることなくもてなしたまひしか、うちには憂きを知りたま

秋の虫をたくさん放させなさって
[源氏は]
[女三宮方に]
[宮は]ただもう厄介なこととお思い申していらっしゃる

一 もうどうしても源氏にお逢いすまいというお気持で、どちらかといえば、ご決心なさったご出家であるので、今では夫婦の繋がりも切れて、気がねせずにいられるのに。

二 人気のない山寺にでも住みたいという気になりになるが。源氏と別居したいと思う。

三 端近にいて、物思いがちにお念誦をなさる。「念誦」は、心に仏を念じ、口に仏名、経文などを唱えること。

四 閼伽（仏に供える水）を入れる器。多く銅製。これに供花を浮べる。からからと音を立てるのを作法とするという（『玉の小櫛』）。二巻賢木一五八頁注一二参照）。（図録三参照）

五 虫の音がひどく鳴き乱れている夕べだな。前に女三の宮方の庭前を野にして、虫を放たせたとある。

六 無量寿如来根本陀羅尼。「陀羅尼」は、梵音を漢字に写し取ったもの。その長いものを大呪という。一度誦すれば、もろもろの罪障消滅し、一万遍になれば、不廃忘の菩提心三摩地を得、命終の時、阿弥陀仏の来迎をうけ、極楽往生すると言われる。

七 いかにも。前の源氏の言葉を受けたもの。

八 今の松虫。鈴虫、松虫は、今の名称と逆であった。「ふり出で」の「振り」は、鈴の縁語。

九 はるばると遠い野を分けて。「野辺」は歌語。

八月十五夜、源氏女三の宮と贈答

ふけしきしるく、（前とはうって変ったお気持なので）こよなう変りにし御心を、一いかで見えたてまつらじの御心にて、多うは思ひなりたまひにし御世の背きなれば、今はもて離れて心やすきに、なほかやうになど聞こえたまふぞ苦しうて、（相変らずこんなことをお耳に入れたりなさるのがつらくて）二人離れたらむ御住ひにもがな、とおぼしなれど、（大人ぶってとてもそうは）およすけてえさも強ひ申したまはず。

十五夜の夕暮に、仏の御前に宮おはして、三端近うながめたまひつつ念誦したまふ。（仏前に）若き尼君たち二三人、四花たてまつるとて鳴らす閼伽坏の音、（水の音などが聞えてくる）水のけはひなど聞こゆる、（そんな今までと違った仕事にお互い忙しそうにしているのが）さま変りたるいとなみにそそ（本当に胸を打つのだが）きあへる、（源氏）五いとあはれなるに、（そこへ）例のわたりたまひて、「虫の音いとしげう乱るる夕かな」とて、（低声で）われも忍びてうち誦じたまふ六阿弥陀の大呪、（虫の）七いと尊くほのぼの聞こゆ。（源氏）八げに声々聞こえたるなかに、鈴虫のふり出でたるほど、（鈴虫）はなやかにをかし。（秋好む中宮）「秋の虫の声いづれとなきなかに、九松虫なむすぐれたるとて、中宮の、（わざわざよい声の松虫を探してきてはお庭に放させなさったが）はるけき野辺を分けて、（はっきり野の声さながらに鳴き続）いとわざと尋ね取りつつ放たせたまへる、しるく鳴き伝ふるこ

一〇 松虫などという名のくせに、寿命のはかない虫なのでしょう。「松」は長寿であるので言う。

一一 存分に、人のいない奥山や、遠い野末の松原では声を惜しまずに鳴くというのも。「松原」は「松虫」にちなむ用語。

一二 秋という季節はつらいものと、よく分ったのですが、鈴虫の声にはまだ心ひかれます。「秋」に「飽き」を掛け、源氏に嫌われたのを怨む気持をこめる。「ふり」は「振り」の掛詞。「鈴」の縁語。

一三 何とおっしゃる。いやはや、思いがけないお言葉ですね。「秋をば憂し」の含意を捉えて言う。

一四 ご自分から、この家をお捨てになったのですが、今も鈴虫の声は変らず美しく聞えます。「ふりせぬ」は、古くならないの意。「鈴」の縁語「振り」を掛ける。女三の宮を鈴虫によそえ、なお思い切れぬ気持を訴える。

一五 宮は、お数珠を手繰る手も止って、楽の音に今も熱心に聞き入っていらっしゃる。女三の宮が源氏から琴（七絃の琴）の伝授を受けたことは、若菜下一六五頁以下に詳しい。

一六 自分とかかわりのあった女人たちが、それぞれの事情で、世を捨てて尼になってしまわれたことも次々とお心に浮んで。女三の宮をはじめ、朧月夜や朝顔の前斎院などのこと。

そ少なかなれ。（けるのは少ないようだ）一〇名には違ひて、命のほどはかなき虫にぞあるべき。心にまかせて、人聞かぬ奥山、はるけき野の松原に、声惜しまぬも、いと隔て心ある虫になむありける。（本当に人に馴染まぬ虫なのだな）鈴虫（松虫）は、心やすく（気軽に）、今めいたる（にぎやかに鳴く）のが愛嬌がある）こそらうたけれ」などのたまへば、宮、

一一おほかたの秋をば憂しと知りにしを
ふり捨てがたき鈴虫の声

と忍びやかにのたまふ。（小声で）いとなまめいて（優雅で）、あてにおほどかなり。（気品があっておっとりした感じだ）

（源氏）一三「いかにとかや。いで、思ひのほかなる御ことにこそ」とて、

（源氏）一四心もて草のやどりをいとへども
なほ鈴虫の声ぞふりせぬ

など聞こえたまひて、琴の御琴召して、（久しぶりに）めづらしく弾きたまふ。一五宮の御数珠引きおこたりたまひて、御琴になほ心入れたまへり。月さし出でて、（十五夜の月）いとはなやかなるほどもあはれなるに、（あかあかと照らす月の光もしみじみと胸に迫るので）空をうちながめて、（［源氏は］）一六世の中さまざまにつけて、はかなく移り変るありさまもおぼし

一 今夜は、例のように十五夜の月を愛でて管絃の御遊があるのではないかとお察しになって。
二 螢兵部卿の宮。
三 （源氏が）入道の宮の御殿にいらっしゃるようだと、お琴の音をたよりに、そのままこちらに参上なさる。まず、東の対（源氏の常の居所）を訪れるが、そのまま寝殿の西面に向う。

兵部卿の宮たちの来訪

四 兵部卿の宮も、こちらにお席をしつらえてお入れ申される。寝殿西面の廂の間の席であろう。
五 宮中で、今夜、十五夜の月の宴があるはずだったのに、中止になって、つまらなく思っていたところ。主語は、これかれの上達部。
六 兵部卿の宮や夕霧たち。
七 いろいろの絃楽器を合奏なさって。
八 月を見る宵は、いつといって感に耐えぬ折はないものだが。「いつとても月見ぬ秋はなきものをわきて今宵のめづらしきかな」（『後撰集』巻六秋中、八月十五夜　藤原雅正）
九 今夜の皎々として上る月を見ると、本当にやはりこの世のほかのことまで、ついあれこれ想像してしまう。「三五夜中の新月の色　二千里の外の故人の心」（『白氏文集』巻十四、律詩「八月十五日の夜、禁中に独り直して、月に対つて元九を憶ふ」）を踏まえての言葉。「故人の心」の詩句から、柏木のことを思い出して次の言葉が続く。なお二巻須磨二四〇頁注六参照。
一〇 柏木。横笛の冒頭にも「故権大納言」とある。

続けられて、例よりもあはれなる音に搔き鳴らしたまふ。
一 今宵は例の御遊びにやあらむと、おしはかりて、兵部卿の宮わたりたまへり。大将の君、殿上人のさるべきなど具して参りたまへれば、二 こなたにおはしますと、御琴の音を尋ねてやがて参りたまふ。
「いとつれづれにて、三 わざと遊びとはなくとも、久しく絶えにたるめづらしきものの音など、聞かまほしかりつるひとりごとを、いとよう尋ねたまひける」とて、四 宮も、こなたに御座よそひて入れたてまつりたまふ。五 内裏の御前に、今宵は月の宴あるべかりつるを、とまりてさうざうしかりつるに、この院に六 人々参りたまふと聞き伝へて、これかれ上達部なども参りたまへり。虫の音の定めをしたまふ。
七 御琴どもの声々搔き合はせて、八 おもしろきほどに、「月見る宵の、いつとてもものあはれならぬをりはなきなかに、九 今宵のあらたなる月の色には、げになほわが世のほかまでこそ、よろづ思ひ流さるれ。
一〇 故権大納言、何のをりをりにも、亡きにつけていとどしのばるるこ

（夕霧）いつもよりしみじみとした
（源氏）いかにも所在ないので
大層な管絃の宴というのではなくても
然るべき者などを連れて
長い間聞くこともなかった
聞きたいと思ってひとりで弾いていた琴の音を
久しぶりの
本当に
よく聞きつけて来て下さった
六条の院
興の乗ってきた頃に
（源氏）
（一同で）
よしあしを品評なさる
亡き人だと思うと一層思い出されることが多

一一 公私につけて、何か事ある時に、ものの栄えがなくなった感じがします。

一二（柏木は）四季の風物のあわれも知り、話が分るという点は、全く大したものだったのに。「花鳥の色をも音をもいたづらにもの憂かる身は過ぐすのみなり」（『後撰集』巻四夏、藤原雅正）の言葉による。なお、雅正は、紫式部の祖父。

一三 御簾の内でも、入道の宮がこの話に聞き耳を立てていられるだろうかと、一方ではお思いになりながらも、こんな管絃の御遊の折などにはまっさきに柏木が恋しく。柏木は音楽に堪能だったからである。

一四（源氏はもとより）帝におかせられてもご追懐になる。やや唐突な一行であるが、柏木のすぐれた人柄を強調するためであろう。

冷泉院よりの御消息

一五 中止になった宮中の月の宴に配慮した発言。また、月は故人を思い起させるものでもあったが、それをさっぱり忘れて、という気持も下にある。

一六 柏木の弟。のちの紅梅の大臣。

一七 ここにのみ登場。系図不詳。

一八 宮中を離れてしまった私の住処にも、忘れずに中秋の名月は照りわたっています。

一九 同じことなら、あなたにその月を見て頂きたいものです。「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや」（『後撰集』巻三春下、源信明）による。

くて
と多く、公私、もののをりふしのにほひ失せたるここちこそすれ。花鳥の色にも音にも思ひわきまへ、いふかひあるかたの、いとうるさかりしものを」などのたまひ出でて、（話し出しなさって）（源氏自身も）みづからも（涙を流された）搔き合はせたまふ御琴の音にも、（合奏なさる）袖濡らしたまひつ。御簾のうちにも、耳とどめてや聞きたまふらむと、片つかたの御心にはおぼしながら、かかる御遊びのほどにはまづ恋しう、内裏などにもおぼし出でける。（源氏）「今宵は鈴虫の宴にて明かしてむ」とおぼしのたまふ。（お考えになり宣言なさる）

御土器ふたわたりばかり参るほどに、（お盃を二巡ほど召し上がった頃に）冷泉院より御消息あり。御前の御遊びにはかにとまりぬるをくちをしがりて、（宮中の月の宴の御遊が急に中止になったのを残念がって）左大弁、式部の大輔、また人々ひきゐて、（別に大勢引き連れて）さるべき限り参りたれば、（夕霧）大将などは、六条の院にさぶらひたまふと聞こしめしてなりけり。（〔冷泉院に〕）（〔冷泉院が〕お聞きになってのことなのだった）

（冷泉院）「雲の上をかけ離れたるすみかにも
もの忘れせぬ秋の夜の月」

（源氏）大して
同じくは」と聞こえたまへれば、「何ばかり所狭き身のほどにもあ（出入りが面倒な身分でもな）

一（冷泉院が）不本意なことに思し召すあまり、お便りを下さったのは、もったいない。冷泉院が退位したのは、「心やすく、思ふ人々にも対面し、私ざまに心をやりて、のどかに過ぐさまほしくなむ」（若菜下一五〇頁）という気持からであった。

二 月は昔に変らぬ光に輝いていますが、私の方がすっかり変ってしまいました。「月かげ」は、冷泉院を喩えていう。下の句は、源氏の卑下の言葉。「こころみにほかの月をも見てしがなわが宿からのあはれなるかと」（『詞花集』巻九雑上、花山院）

三 なにほどのこともないご返歌だが、ご在位の昔に変る冷泉院のご様子に、何かと感慨を催されてのお作であろう。草子地。

四 ご身分の順序に従って、列を直し。

五 螢兵部卿の宮。

六 柏木の弟。「致仕の大臣の子なり。系図になきよしの説もあり」（『細流抄』）

七 柏木の弟か。（若菜下二一九頁参照）

八 直衣（貴族の日常着）で、お手軽なご装束ゆえ、下襲だけをお召しかえになって。下襲は、普通は束帯の時着用する。ここは、「直衣布袴」といって、やや改まった装い。夕霧以下、装いを改めたものと見える。（図録二参照）

九 いかめしく立派な威儀の限りを整えて、お互いにご対面なさるのであるが。「られ」は受身。

源氏、冷泉院に参上

ご退位の後はお気楽にお過しなのに　親しく参上することもめったにないのだが

らずながら、今はのどやかにおはしますに、参り馴るることもをさをさなきを、本意なきことにおぼしあまりておどろかさせたまへる、かたじけなし」とて、にはかなるやうなれど、参りたまはむとす。

急なことのようであるが　［冷泉院に］

（源氏）月かげは同じ雲居に見えながら
わが宿からの秋ぞかはれる

異なることなかめれど、ただ昔今の御ありさまのおぼし続けられけるままなめり。［冷泉院の］御使に盃賜ひて、この上なく立派だ　禄いと二なし。

人々の御車、次第のままにひきなほし、御前の人々立ちこみて、前駆の者どもが大勢集まって　しみじみとしたご合奏もうやむやになって［六条院を］　静かなりつる御遊びまぎれて、出でたまひぬ。院の御車に、親王たて同乗なさり　夕霧　まつり、大将、左衛門の督、藤宰相など、［六条院に］おはしける限り皆参りたまふ。直衣にて軽らかなる御よそひどもなれば、下襲ばかりたてまつり加へて、月ややさし上がり、ふけぬる空おもしろきに、若き人々、笛などわざとなく吹かせたまひなどして、忍びたる御参りのさまなり。うるはしかるべきをりふしは、所狭くよだけき儀式を尽

車中横笛などを興のままにお吹かせになったりして　若い人に　世間の人目に立たぬ参上の　改まった公式の行事の折には　ていである

一〇 時にまた、（源氏は）昔の臣下であられた時代のお気持にかえられて、今夜は身軽ないでたちで、こうして不意に参上なさったので。

一一 お年にふさわしいご立派なお顔立ちは。冷泉院は今年、三十二歳。

一二 当夜の数々の吟詠は、漢詩も和歌も、しみじみと心にしみてすぐれたものばかりでした。以下、草子地。

一三 いつものように、不十分な一端だけでは、ここにお伝えするのも、気がひけますので。省筆をことわる草子地。上皇御前では漢詩を第一とするが、それは女房の口にすべきことではないからである。

一四 詩などを読み上げ披露して。

一五 今は、このようなごゆっくりしたお住まいですから。秋好む中宮も公的な宮廷行事に煩わされることのない上皇御所での日々である。

源氏、秋好む中宮と出家について語る

一六 どっちつかずの身の有様で。ただの臣下でもなく、真の上皇でもない、准太上天皇の身分をいう。源氏の卑下の言葉。

一七（外出なども）やはり気のひける思いで、大層にも存じまして。「うひうひし」は、し馴れない感じをいう。

一八 私より若い人たちに、何やかやと先を越される思いがいたしますのも。柏木との死別、女三の宮、朧月夜、朝顔の前斎院の出家などが念頭にある。

くして、かたみに御覧ぜられたまひ、一〇またいにしへのただ人ざまにおぼしかへりて、今宵は軽々しきやうに、ふとかく参りたまへれば、

[冷泉院は]

いたうおどろき待ちよろこびきこえたまふ。一一ねびととのひたまへる御容貌、いよいよこともものならず。いみじき御盛りの世を、御心と

[源氏と]そっくりである　ご壮年の盛りの御代を　我から進

おぼし捨てて、静かなる御ありさまに、あはれ少なからず。一二その夜の歌ども、唐のも大和のも、心ばへ深うおもしろくのみなむ。一三例の言足らぬ片端は、まねぶもかたはらいたくてなむ。明けがたに一四文など講じて、とく人々まかでたまふ。

[源氏は]　ひっそりとしたお暮しに　んでご譲位なさって

早々とお相伴の方々は退出なさる　夜明け方に

源氏　秋好む中宮

六条の院は、中宮の御方にわたりたまひて、御物語など聞こえたまふ。「今はかう静かなる御住ひに、しばしばも参りぬべく、何ではなけれど、過ぐる齢に添へて、忘れぬ昔の御物語など、うけたまはり聞こえまほしう思ひたまふるに、何にもつかぬ身のありさまにて、一七さすがにうひうひしく、所狭くもはべりてなむ。一八われよりのちの人々に、かたがたにつけて後れゆくここちしはべるも、いと常な

（源氏）一五　たびたび参上もいたしたく　年とともに　承りもしお話し申し上げたくも存じておりますが　まことに無常

なこの世の心細さが　身にしみて思われますので

き世の心細さの、のどめがたうおぼえはべれば、世離れたる住ひにもやと、やうやう思ひ立ちぬるを、残りの人々のものはかなからむ、ただよはしたまふなと、さきざきも聞こえつけし心違へず、おぼし

前々もお願い申し上げましたとおり　お心にとどめて世話をしてやって下さいませ　人々のお身の上についてご依頼申し上げなさる

とどめてものせさせたまへ」など、まめやかなるさまに聞こえさせたまふ。

例の、いと若うおほどかなる御けはひにて、「九重の隔て深うはべりし年ごろよりも、おぼつかなさのまさるやうに思ひたまへらるるありさまを、いと思ひのほかにむつかしうて、皆人の背きゆく世を、いとはしう思ひなることもはべりながら、その心のうちを聞こえさせうけたまはらねば、何ごともまづたのもしき蔭には聞こえさせならひて、いぶせくはべる」と聞こえたまふ。「げに、公ざまにては限りあるをりふしの御里居も、いとよう待ちつけきこえさせしを、今は何ごとにつけてかは、御心にまかせさせたまふ御うつろひもはべらむ。定めなき世と言ひながらも、さしていとはしきことな

（中宮）　かえってお目にかかりにくくなったように存じられます今の有様が　本当に案外でつまらなく思われまして　私も捨てたいと思ったりすることもございますのに　（源氏）　無常なこの世とは申せ　これといって出家の理由のない人が

一 憂き世を離れた山寺にでも移ろうか（出家しようか）と次第に気持が定まってきますが。

二 あとに残る家族たちの、頼る人もいないでしょう者たちを。以下、中宮に後事を託す。中宮は、源氏の養女の格で、源氏が中宮を頼りに思っていた趣は、三巻薄雲一八一頁、四巻藤裏葉二九九頁に見える。

三 寄るべないめにお遭わせ下さいますなと。「ただよふ」は、生活の基盤がなく、零落すること。

四 （秋好む中宮は）いつもながら、若々しくおっとりしたご様子で。今年、四十一歳。

五 宮中の奥深くに住んでいました時よりも。「九重」は歌語。「隔て」はその縁語。

六 誰もが厭い捨てる俗世を。「皆人の背き果てにし世の中にふるの社の身をいかにせむ」（『斎宮女御集』）

七 まだ私の本心を申し上げて、ご意向を承っていませんので、何かといえば、まっさきに（源氏を）お頼り申す今までのならいから、胸がつかえたような気持がいたします。それでこの機会に、出家の本意を打ち明けるというのである。

八 仰せのとおり、宮中においでの時分は、きまりに従った折々のお里下がりも、しばしばお待ち迎え申し上げていましたのに。宮中には、神事などの規則があって、皇妃の宮中退下の行われることがあった。

九 （上皇御所におわします）今では何を理由に、ご自由にあそばすお出かけもございましょう。

一〇 どうしてそんな人真似をして負けじと競われるようなご出家のお志では。前に、「皆人の背きゆく世を、いとはしう思ひなることもはべりながら」とある中宮の言葉に応じたもの。

一一 かえって、おかしなお心がけと、ご想像申す者があっても困ります。「ひがひがし」は、変り者だの意。

一二 (源氏が) ご自分の気持を、深くも汲み取って下さっていないのだなと、(中宮は) 恨めしくお思い申される。

一三 母御息所が、あの世で苦患に遭っていらっしゃるらしい様子、どんな地獄の業火の中をさまよっていらっしゃることか。以下、中宮の気持を直接書く体であるが、「かの院には」あたり以下は、自然に地の文ふうの書き方になる。前に「修法、読経とののしることも、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて」(若菜下二一八頁) とあった。

一四 亡くなったあとまで、この方 (源氏) にいやがられなさる物の怪となって、名乗り出たりなさったことを。(若菜下二一六頁以下、柏木二八六～七頁参照)

一五 憑坐にのり移った物の怪の言葉にもせよ、亡き母君のおっしゃったであろうことの次第を詳しく源氏から聞きたいのだが。母御息所の苦患の様を知って、それを除く供養をしたいからである。

中宮の真意

き人の、さはやかに背き離るるもありがたう、心やすかるべきほどにつけてだに、おのづから思ひかかづらふほだしのみはべるを、などか、その人まねにきほふ御道心は、かへりてひがひがしうおしはかりきこえさする人もこそはべれ。かけてもいとあるまじき御ことになむ」と、聞こえたまふを、深うも汲みはかりたまはぬなめりかしと、つらう思ひきこえたまふ。

一〇 簡単に出家できる身分の者で
一一 出家することもむずかしく
一二 [ご出家など] ゆめにもお考えになってはいけませ

御息所の御身の苦しうなりたまふらむありさま、いかなる煙のなかにまどひたまふらむ、亡き影にても、人にうとまれたてまつりたまふ御名のりなどの出で来けること、かの院にはいみじう隠したまひけるを、おのづから人の口さがなくて、伝へ聞こしめしけるのち、いと悲しういみじくて、なべての世のいとはしくおぼしなりて、仮にても、かののたまひけむありさまのくはしう聞かまほしきを、まほには、えうち出で聞こえたまはで、ただ、「亡き人の御ありさまの、罪軽からぬさまにほの聞くことのはべりしを、さるしるしあらはな

一三 源氏の方ではひた隠しになさっていたのを
一四 [噂を] 人づてにお聞きになってからは
一五 [中宮は] 一体にこの世の中そのものが厭わしくおなりになって
(中宮) 亡き母のあの世でのご様子が
もには申し上げかねなさって
罪障の軽からぬように噂のはしを聞くことがございましたのに そんな証拠がはっきりして

一 何とかして上手に説き聞かせてくれる僧の教えなりと聴きまして、せめて私だけでも、母上の業火のお苦しみをさましたいものと。出家の意志の婉曲な表明。

二 だんだんと年を取るにつれて、おのずと身に沁みて思うこともあったのでございます。出家の志が、長年の間に自然に固まったものだという。

三 その苦患の炎は、誰も逃れることはできないと分っていながら、はかない命のある間は、執着を去ることはできないものなのです。「朝露」は、すぐに消えるところから、命の喩え。

四 釈迦十大弟子の一人。六道に往来する神通力を得、その母の餓鬼道に堕ちて苦しんでいるのを見て嘆き悲しみ、釈迦の教えに従って供養し、次第に天に生れ変らせることができたという（『仏説盂蘭盆経』）。『目蓮救母生天経』（偽経という）では、母は地獄にいたとされる。

五 すぐに母を救ったという先例に対して、（中宮がご出家なさっても）とてもそのあとを継ぐことはおできにならないでしょうのに。目蓮のまねはできないのに、の意。

六 ご落飾なさるのも。「玉の釵」は、玉で飾った中国風の髪飾り。中宮に対してふさわしい言葉遣い。

七 念願の静かな暮しも叶わぬような有様で、朝夕過しておりまして。

先立たれた悲しさばかりをいつまでも忘れませんだけで　娘の私が気づかねばならぬことでございましたが　後世の苦しみにまで思いをめぐらしませんでしたとはほんとにいたらぬことでしたので　いなくても

らでも、おしはかりつべきことにはべりけれど、後れしほどのあはればかりを忘れぬことにて、もののあなた思ひたまへやらざりけるがものはかなさを、いかでよう言ひ聞かせむ人のすすめをも聞きはべりて、みづからだにかの炎をもさましはべりにしがなと、やうやう積るになむ、思ひ知らるることもありける」など、かすめつつぞのたまふ。

いかにもそうお考えになるのももっともだと［中宮を］お気の毒にお思いになって　げにさもおぼしぬべきことと、あはれに見たてまつりたまうて、

（源氏）「その炎なむ、誰ものがるまじきことと知りながら、朝露のかかれるほどは、思ひ捨てはべらぬになむ。目蓮が仏に近き聖の身にて、たちまちに救ひけむ例にも、え継がせたまはざらむものから、玉の釵捨てさせたまはむも、この世には恨み残るやうなるわざなり。やうやうさる御心ざしをしめたまひて、かの御煙はるくべきことをせさせたまへ。しか思ひたまふることはべりながら、もの騒がしきやうに、静かなる本意もなきやうなるありさまに明け暮らしはべり

釈迦尊に近侍する聖僧の身で　現世に悔いを残すようなことでございますなさらずとも］次第にそのお積りにおなりになって　母君のお苦しみが救われるような供養をなさいませ［私も］出家したいと考えますことはございますものの　何やら落着かぬことで

八 自分の後生を願う勤行とともに、（御息所の供養も）そのうちゆっくりと存じますのも、考えてみればあさはかなことでございます。「心をさなし」は、無常の世に、いつまでも命があるかのように油断していることへの自嘲。

九 やはり、ご出家はむつかしいお二人（源氏と中宮）のお身の上である。「やつす」は、粗末な服装をすること。僧形に姿を変えること。

源氏の思いと中宮の道心

一〇 東宮の御母女御（明石の女御）のお身の上が、世に並びなく大切にお育てになっただけのことはある結構なご様子も。以下、源氏の、子供たちに対する心中を叙す。

一一（ご在位中は）ご対面の機会もほとんどなく、気がかりにお思いだったので、それがご動機で。「いそがされ」は、うながされの意。

一二 このような気楽なご境遇にというお気持になられたのだった。草子地。譲位の心境は、三五六頁注一参照。

一三 臣下のご夫婦のように、いつもご一緒にいらっしゃるので。帝は在位中は後宮の后妃にあまねく心を配らねばならないが、譲位後は、お気に召した方と思いのままに暮すことができる。

つつ、みづからの勤めに添へて、今静かにと思ひたまふるも、げにこそ心をさなきことなれ」など、世の中なべてはかなく、いとひ捨てまほしきことを聞こえかはしたまへど、なほやつしにくき御身のありさまどもなり。

昨夜はうち忍びてかやすかりし御ありき、今朝はあらはれたまひて、上達部なども、参りたまへる限りは皆御送りつかうまつりたまふ。春宮の女御の御ありさまの、並びなくいつきたてたまへるかひがひしさも、大将のまたいと人に異なる御さまをも、いづれとなくめやすしとおぼすに、なほこの冷泉院を思ひきこえたまふ御心ざしは、すぐれて深くあはれにぞおぼえたまふ。院も常にいぶかしう思ひきこえたまひしに、御対面のまれにいぶせうのみおぼされけるに、いそがされたまひて、かく心やすきさまにとおぼしなりけるになむ。

中宮ぞ、なかなかまかでたまふこともいと難うなりて、ただ人の仲のやうに並びおはしますに、今めかしう、なかなか昔よりもはな

（ご微行で）（お気軽にお出ましになったのが）（冷泉院に）（源氏のお掃りのお供をお勤めになるて）（夕霧）（すぐれたご様子をも）（どちらも結構なことと満足にお思いになるのだが）（やはり）（お気持）（冷泉院）（源氏のことを）（いつも気）（どのお子にもまして深くいとしいとお思いになられる）（にしておいであそばしたのだが）（秋好む中宮）（かえって六条の院に退出なさることも）（当世風に）（かえってご在位中よりもにぎやか）

やかに、御遊びをもしたまふ。何ごとも御心やれるありさまながら、ただかの御息所の御ことをおぼしやりつつ、行ひの御心進みにたるを、人のゆるしきこえたまふまじきことなれば、功徳のことを立てておぼしいとなみ、いとど心深う、世の中をおぼし取れるさまになりまさりたまふ。

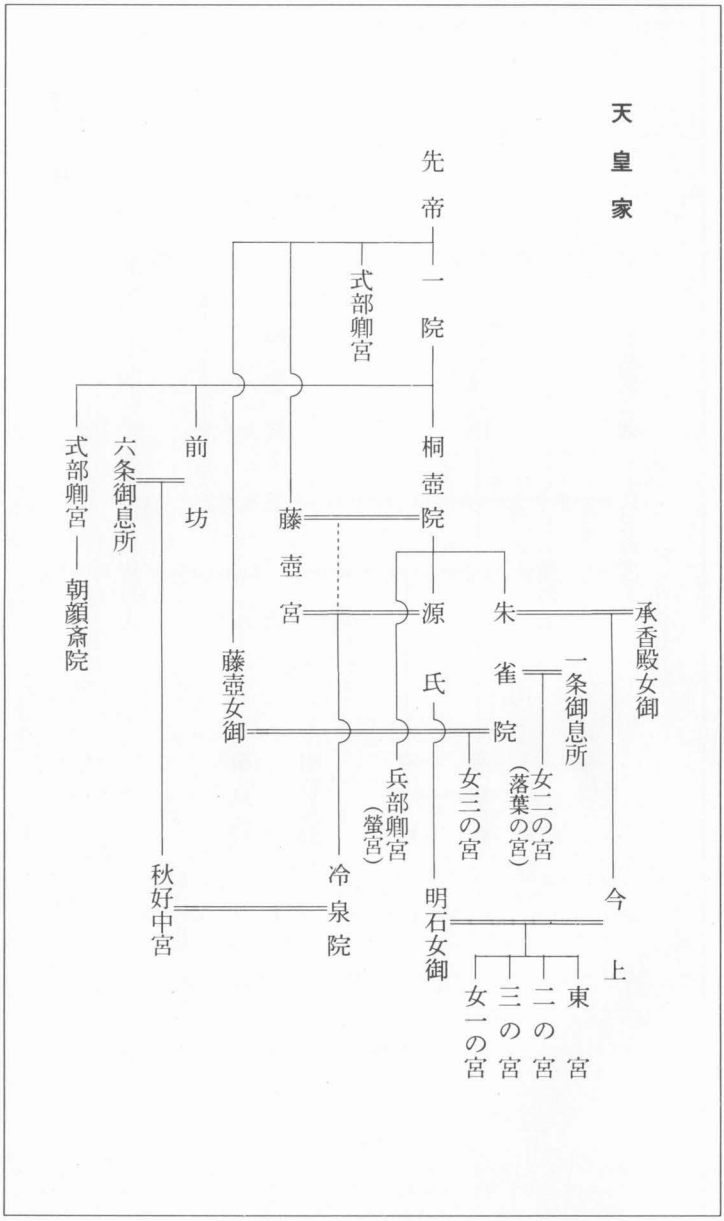
に
管絃の催し
［中宮は］
思いの叶わぬことはないお身の上ながら
お考えになっては
仏道修行のお気持がいよいよ深まる
母君
源氏がお許し申されるはずのないことなので
ひたす
いよいよ思い澄まして
人の世の無常をお悟りになったご日常になっ
ら熱心にお営みになり
てゆかれる

一　善果を得るための善行。読経、布施などの仏事修善をいう。ここでは、母御息所のための追善供養。

付

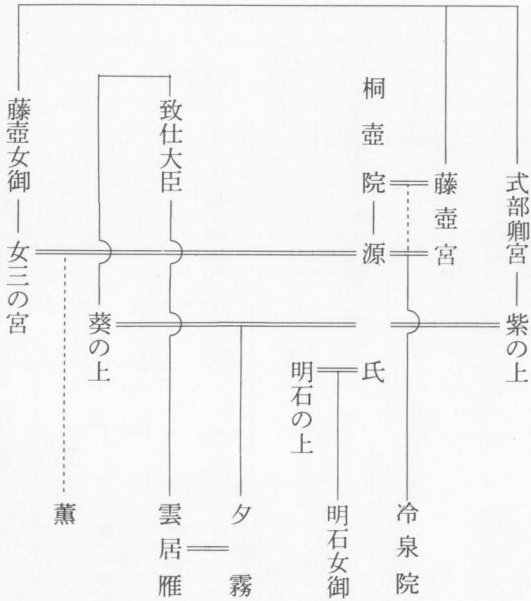
録

天皇家

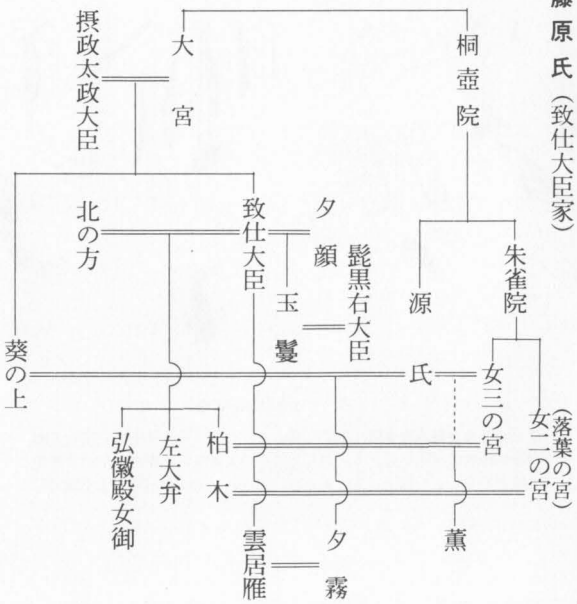

先帝
一院
式部卿宮
桐壺院
藤壺宮
源氏
朱雀院
承香殿女御
一条御息所
女二の宮（落葉の宮）
今上
東宮
二の宮
三の宮
女一の宮
女三の宮
明石女御
兵部卿宮（螢宮）
冷泉院
藤壺女御
前坊
六条御息所
秋好中宮
式部卿宮
朝顔斎院

系図一

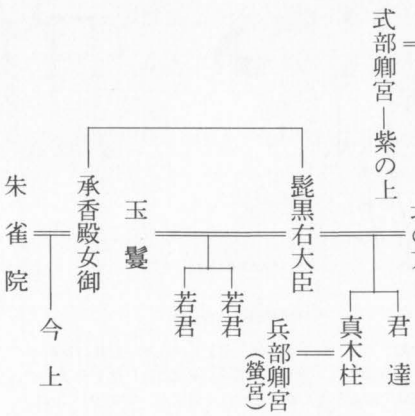
源氏

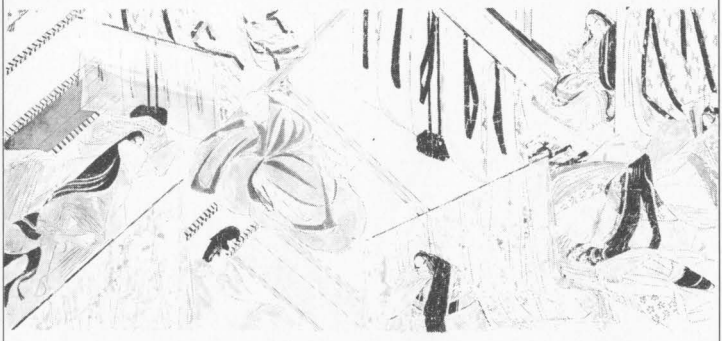


藤原氏（致仕大臣家）



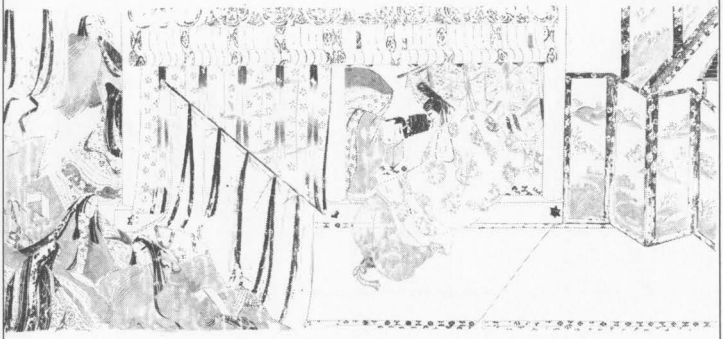
藤原氏（髭黒右大臣家）





柏　　木 一（源氏物語絵巻）

女三の宮を見舞う朱雀院。画面左端、女三の宮。その枕上に三尺の几帳。背後に帳台の浜床が見える。対して僧衣の朱雀院。画面の左手前に源氏。几帳をめぐらした周囲に裳、唐衣姿の四人の女房がはべる。本文282頁。

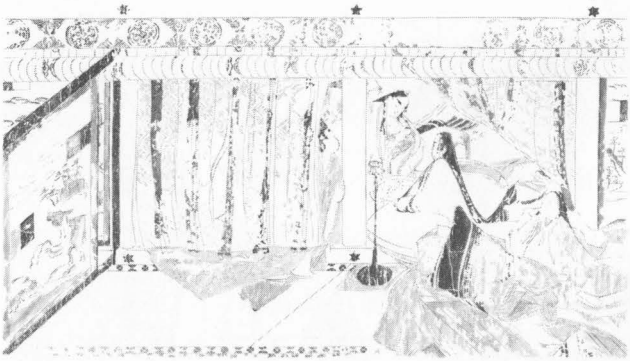


柏　　木 二（源氏物語絵巻）

病床の柏木を見舞う夕霧。二人の対するのは、廂より一段高い母屋。左側の一間には壁代(かべしろ)を垂れる。柏木は烏帽子、無文の袿、枕をそばだてた姿。夕霧は、冠直衣姿。画面左端に裳を着けた女房五人。本文290～１頁。

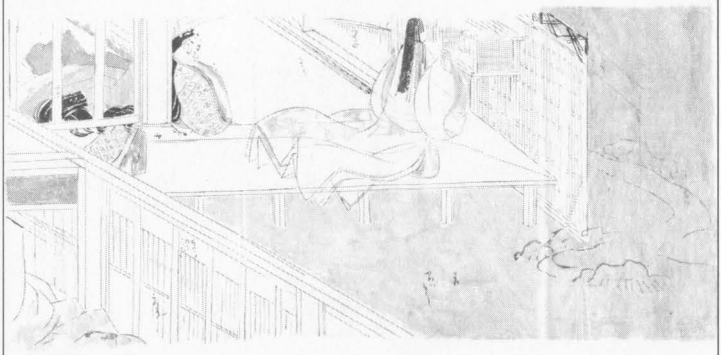
柏　木三（源氏物語絵巻）

五十日（いか）の祝いに、薫を抱く源氏。簀子と廂の間には御簾を垂れ、簀子に几帳の裾を出し、女房の押出だしが見える。画面を右上方から俯瞰する吹抜屋台（ふきぬきやたい）の描法で、源氏の側、御簾の帽額（もこう）と内側に立てた几帳の透き間にかけて、六本の高坏が見える。女房の一人は檜扇をかざす。本文299頁。



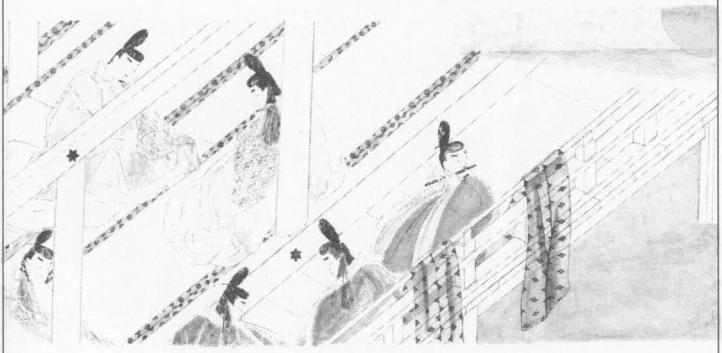
横　笛（源氏物語絵巻）

母屋の中央に、幼児に乳を含ませる雲居の雁。柱に手を掛けてそれを見る桂姿の夕霧。女房の一人が物の怪を払う散米（うちまき）を盛った皿をさし出している。柱の手前に燈台。雲居の雁は額髪を耳のうしろにはさんだ耳はさみ姿。画面左は障子、唐絵風の山水に色紙型。本文333頁。



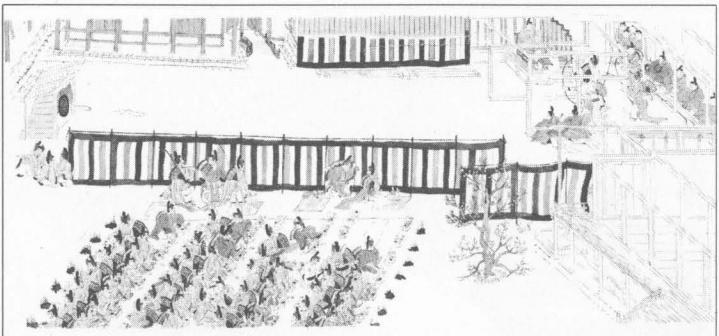
鈴　　虫 一（源氏物語絵巻）

柱の陰に、細長姿の女三の宮。秋の庭を眺める風情。簀子に立つ袈裟を着けた尼そぎの女房が、透垣の内側にしつらえられた閼伽棚に手を掛けている。画面の手前は、吹抜屋台の手法で渡殿の内側を描いたもの。画面右に遣水と立石が見え、簀子の手前の庭に、鈴虫のすだく前栽が描き込まれる予定だったらしい。本文352頁。



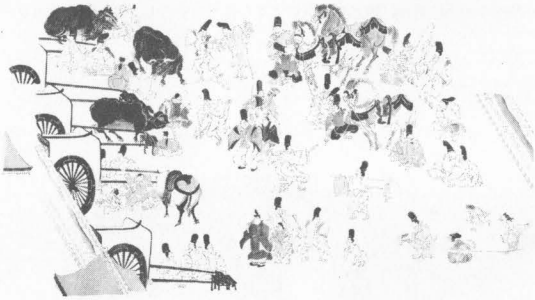
鈴　　虫 二（源氏物語絵巻）

冷泉院に参上した、源氏、螢兵部卿の宮、夕霧たちの一行。画面左上方が冷泉院。柱を背に対座する冠直衣姿の源氏。左下方、螢兵部卿の宮。簀子の三人は夕霧、左衛門の督、藤宰相。夕霧とおぼしき人物が横笛を吹く。直衣に下襲を着けた直衣布袴姿で、下襲の裾を簀子の高欄に打ち掛けている。本文356～7頁。



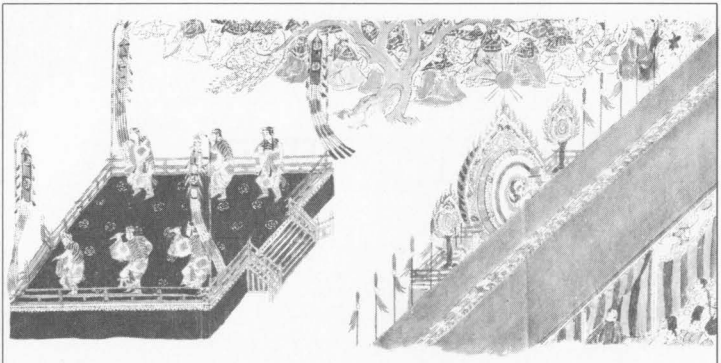
賭　弓（年中行事絵巻三）

画面右手前、紫宸殿と右近の橘。右上方、射場殿に出御された主上。射場は、画面上方、右、校書殿、左、安福殿の前の広場。主上の手前に射手二人、左手に的。幔幕の手前は、饗饌の座に着いている左右近衛、兵衛の射手たち。



馬車立込みの図（年中行事絵巻九　臨時客）

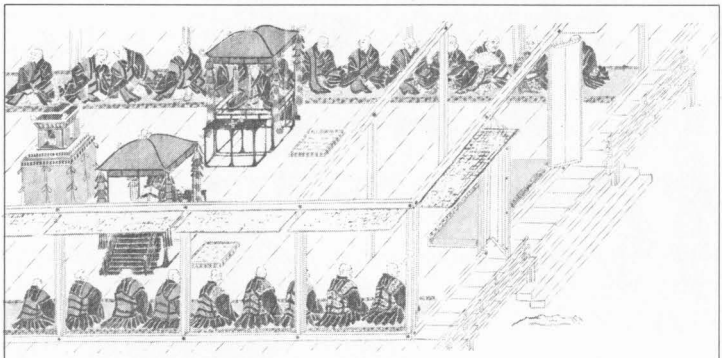
檳榔毛の車（輿車図考　付図）



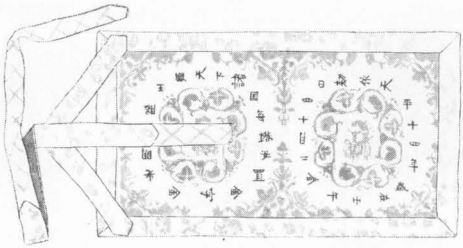
詞書によれば、延喜二十三年、石山寺ではじめて行われた常楽会(涅槃会)の図。左頁、堂内では高座の上で講師が問答を行い、庭上の舞台で童舞が奏されている。高座の四隅に垂れ、舞台の四隅に立てられているのが、幡(はた)である。

蹴　鞠（年中行事絵巻十六）

松、桜、柳、楓を植え込んだ「かかり」での蹴鞠の図。蹴鞠の場の四周の木、また、蹴鞠の場を「かかり」という。



常楽会・常楽会童舞（石山寺縁起絵）

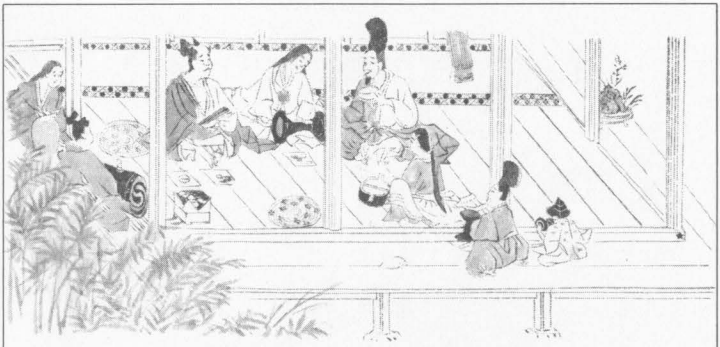


帙　　簀（正倉院蔵）

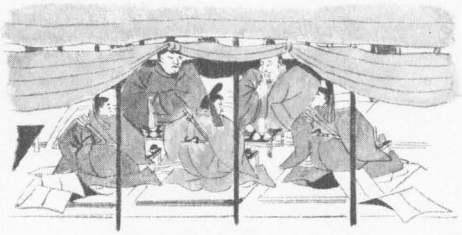
金光明最勝王経の帙簀。細かく並べた竹の芯(簀)を紫と白の絹糸で覆いかくしながら、文様と文字を編み出している。

振分髪（春日権現験記絵）

尼　　姿（平家納経）

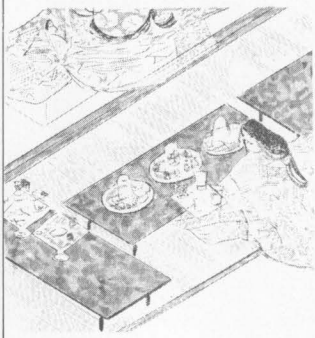


円　座（一遍上人絵伝）



懸　盤（年中行事絵巻三　射遺）

鉢　（慕帰絵）



折敷・高坏（紫式部日記絵巻）

左手の台盤に載るのが高坏。右手の女房の手にするのが折敷。女房の前の台盤の上のは盤(皿)であろう。

泔　坏（伴大納言絵詞）

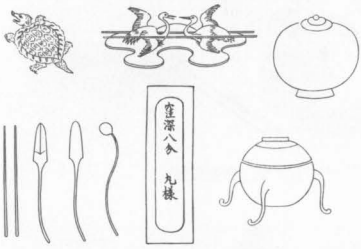
高　坏
（信貴山縁起）

衝　重（年中行事絵巻三　賭弓）

播磨国十二郡（大日本読史地図）

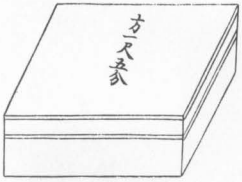
梵　字
（白描伊勢物語下絵梵字経）

上段、右から左へ、以下の各段これに准じて字母が配列されている。全文二十四字の光明真言。



薬筥中身の一部（類聚雑要抄）

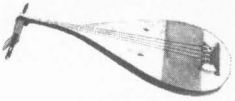
薬壺、鶴の洲浜、亀の置物、薬硯、匙、箸など。いずれも銀製。薬硯は青石に銀の枠。



薬　筥（類聚雑抄）

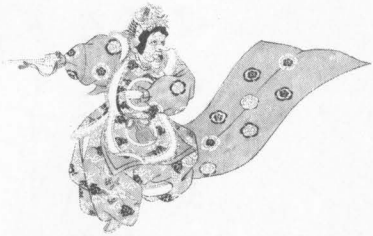
琴

和　琴

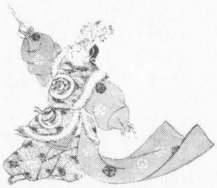


琵　琶

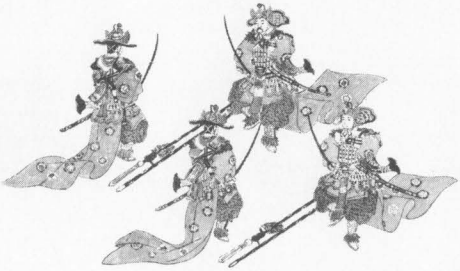
拍　子（年中行事絵巻六）



陵　王（舞楽図説）



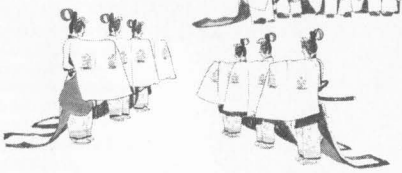
陵王童舞（舞楽図説）



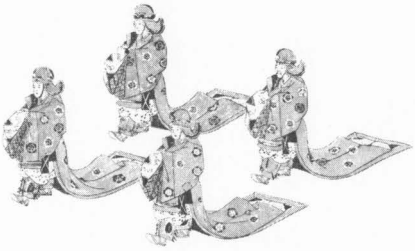
太　平　楽（舞楽図説）

喜　春　楽（舞楽図説）

東　遊（舞楽図説）



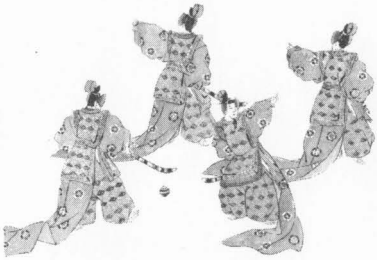
東　遊（舞楽図説）



万歳楽（舞楽図説）

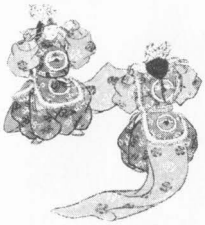
皇　　鑾（信西古楽図）

青海波（舞楽図説）



打毬楽（舞楽図説）

落　蹲（舞楽図説）



落蹲童舞（舞楽図説）

新潮日本古典集成（第四〇回）

源氏物語（げんじものがたり）五

昭和五十五年九月五日　印刷
昭和五十五年九月十日　発行

校注者　石田穣二（いしだじょうじ）
　　清水好子（しみずよしこ）

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
　　東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

定価一八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yoshiko Shimizu, Printed in Japan, 1980.

新潮日本古典集成

源氏物語

六

石田穣二　清水好子　校注

新潮社版

目次

凡例……三
夕霧……九
御法……九九
幻……一三五
雲隱……一五五
匂兵部卿……一五九
紅梅……一七九
竹河……一九七

橋姫……二五三
椎本……三〇三

付録

系図……三五五
図録……三五九

凡例

一、本巻には、夕霧、御法、幻、匂兵部卿、紅梅、竹河、橋姫、椎本の八巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、橋姫は明融本を底本とし、他の夕霧以下七巻は大島本を底本とする。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の

濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文脈の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、

第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、系図、図録を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

源氏物語 六

夕霧

柏木の巻末から横笛の巻へと尾を引いていた、夕霧の落葉の宮への恋の一部始終を物語る巻である。横笛の巻の翌年、源氏五十歳の年の、秋から冬にかけてのことである。

一条の御息所は、物の怪加持のために小野の山荘に移る。八月の半ばの頃、見舞に小野を訪れた夕霧は、夕暮の深い霧にまぎれて落葉の宮の部屋に忍んで、思いを訴えるが、宮の聞き入れるところとならず、二人は何ごともない一夜を共にする。巻名は、苦衷を訴える夕霧の歌による。この人の呼び名もこの巻の主人公であることによって後人の名付けたものである。

二人のことを物の怪加持の律師の話によって知った御息所は、苦慮の末、宮を許す旨の歌を夕霧に詠み送る。ところがこの手紙は雲居の雁に奪われて、夕霧の返事が遅れ、その訪れもないまま、御息所は心痛のあまり絶命する。母の死も夕霧ゆえと思い詰めている落葉の宮はますますかたくなに心を閉ざすが、夕霧は、強引に宮との結婚を策して、宮を一条の宮に連れもどす。宮は塗籠に閉じ籠って夕霧を避けるが、夕霧はついに次の夜、塗籠に入り、翌日も一条の宮に居続けて、表向き二人の結婚が成り立ったかのように見せかける。宮は依然心は解けないものの、成行きに諦めざるを得ないのであった。

雲居の雁は怒って父の邸に帰り、夕霧の説得にも応じない。夕霧には、雲居の雁と藤典侍の腹に都合十二人の子女のあることが紹介されて巻は閉じられる。

夕霧の落葉の宮への思慕

一　堅物との評判を取ってしたり顔でいらっしゃる大将は。夕霧のこと。やや揶揄的な筆致。真木柱の巻に、髭黒が「名に立てるまめ人」（四巻二〇六頁）とされており、同じ巻に、夕霧も「この世に目馴れぬまめ人」（四巻二四九頁）とされていた。

二　落葉の宮。夕霧が宮に惹かれていること、五巻柏木三一三頁以下、同横笛三二六頁以下に見える。

三　亡き柏木の頼みを忘れぬ気持からだと思わせながら。柏木の遺託のこと、柏木二九四頁、三〇五頁参照。

四　落葉の宮の母御息所。

五　はじめから色めいたことを申し上げたりもなさらなかったのに。柏木の巻に「今はなほ昔に思ほしなずらへて、うとからずもてなさせたまへ、など、わざと懸想びてはあらねど、ねむごろにけしきばみて聞こえたまふ」（三一五頁）とあった。

六　急にうって変って気がありそうに色めかしい振舞をするのも、気はずかしい。ここから夕霧の心。

一まめ人の名をとりてさかしがりたまふ大将、二この一条の宮の御ありさまを、（やはり申し分のない方だと心にかけて）なほあらまほしと心にとどめて、（世間の）おほかたの人目には、三昔を忘れぬ用意に見せつつ、（大層心をこめてお見舞い申し上げなさる）いとねむごろにとぶらひきこえたまふ。（内心では）下の心には、（このままではやすまされそうになく）かくては止むまじくなむ、（思いつのりなさるのだった）月日に添へて思ひまさりたまひける。四御息所も、（ご親切な世にも珍しいお心遣いであることよと）あはれにありがたき御心ばへにもあるかなと、（所在ないお暮しを〔夕霧が〕）今はいよいよものさびしき御つれづれを、（お気持の紛れることもいろいろと多い）絶えずおとづれたまふに、なぐさめたまふことども多かり。

五はじめより懸想びても聞こえたまはざりしに、六ひき返し懸想ばみなまめかむもまばゆし、（自分の深い気持をお見せしておけば）ただ深き心ざしを見えたてまつりて、（〔自分に〕）うち（心を開かれる折もないことはあるまい）とけたまふをりもあらじやは、（何かの用事にかこつけても）と思ひつつ、さるべきことにつけても、（落葉の宮のご様子態度に注意を払っていられる）宮の御けはひありさまを見たまふ。（〔宮は〕ご自分でお相手なさるようなことは）みづからなど聞こえたまふ

一 宮のご様子を見よう。宮がどう思われるか、その反応を見よう、の意。

二 人の生霊、死霊、天狗、狐など、魔性のもののしわざによる病気。御息所が健康を害していたことは、柏木三一三頁、三一四頁に見える。

御息所、物の怪をわずらい、小野に移る

三 愛宕郡小野郷。叡山の西麓、高野村を中心に、南は一乗寺、修学院、北は八瀬、大原までを含む一帯の地。ここは恐らく修学院のあたりであろう。（図録一参照）

四 別邸。京都の周辺、東山、西山、北山などに設けられた貴族の別荘をいう語。

五 僧正、僧都に次ぐ僧官。

六 ここは叡山に籠ること。修行のため、自ら期限を決めて籠り、山籠中は叡山の結界の外に出ないしきたり。

七 前駆の者たちなど。移転の車に供奉する者たち。

八 仕事にいそがしいめいめいの暮しにかまけて。『古今集』仮名序の「世の中にある人、ことわざしげきものなれば」が響く。

九 柏木のすぐ次の弟。右大弁。（柏木二八八頁、三〇四頁参照）

一〇 無理におたずねすることもできなくなってしまわれている。「まで」は「まうで」の「う」無表記の形。

一一 密教の加持祈禱。

全くない　何かのよい折があったら　自分の気持もはっきり分るように申

ことはさらになし。いかならむついでに、思ふことをもまほに聞こし上げて　[夕霧は]お思いだったが　え知らせて、人の御けはひを見む、とおぼしわたるに、御息所、もののけにいたうわづらひたまひて、小野といふわたりに、山里持たまへるにわたりたまへり。お苦しみになって　以前からご祈禱の師僧として　早うより御祈りの師にて、もののけなど払ひ捨てける律師、山籠りして、里に出でじと誓ひたるを、麓近くて、請じおろしたまふゆゑなりけり。人里に下りない誓願を立てているのを　ふもと近くに　来て　下山して頂きなさるためなのだった　御車よりはじめて、御前など、夕霧　大将殿よりぞたてまつれたまへるを、なかなかまことの昔の近きゆかりの君たちは、おさし向け申されたが　ことわざしげきおのがじしの世のいとなみにまぎれつつ、えしも思ひ出できこえたまはず。お思い出し申し上げるゆとりもおありでない　弁の君はた、思ふ心なきにしもあらで、けしきばみけるに、ことのほかなる御もてなしなりけるには、ひてえまでとぶらひたまはずなりにたり。この君は、いとかしこう、さりげなくて聞こえ馴れたまひにためり。落葉の宮に下心がないわけでもなくて　そんな素振りを匂わせたが　もってのほかのすげないおあしらいだったので　親しいはずの弟君たちは　夕霧　何食わぬ顔でお付合いして　親しくなられたようだ　大層上手に立ち回って　かえって本来の亡き柏木とのかかわりから　[律師に]　[夕霧は]

修法などせさせたまふと聞きて、僧の布施、浄衣などやうの、ごまかなるものをさへたてまつれたまふ。なやみたまふ人は、え聞こ　ご病人の御息所は　お礼状を　ごとした物までさし上げなさる

一二 律師に従う僧たちのお布施や浄衣。「浄衣」は、修法に従う僧たちの着るもので、修法の本尊によって、青黒、黄、赤、白、鈍、紅染があるという（『拾芥抄』）。

一三 通り一遍の（女房の）代筆の手紙では。宣旨は、勅旨を文書にしたものなので、代筆の手紙を「宣旨書き」という。

一四 北の方の雲居の雁は、様子を察していられるので。雲居の雁は、二人の仲が怪しいと、すでに告げ口されている（五巻横笛三三一頁）。

一五 八月中旬の頃なので。陰暦八月は、仲秋の候である。

一六 何々律師が珍しく下山したそうですが。以下、雲居の雁への他出の暇乞い。「なにがし」は、実名を言ったのを、ぼかした書き方。「たなるに」は「たんなるに」の撥音便無表記の形。「なる」は、伝聞推定の助動詞。

一七 遠出なので、身軽な旅装のてい。

一八 歌枕。修学院の対岸、高野川の右岸に張り出した形の山。所々に岩盤が露出し、松の木が多い。「尾山」の「尾」は、峰の意。（図録一参照）

一九 たいした岩山というのでもないが。

二〇 都にまたとないほどにと数奇をこらした庭造りに比べると。

八月のなかば、夕霧、小野に赴く

（ご機嫌をお悪くなさりそうな）重々しいことご身分柄のお方ですからとしき御さまなりと、人々（女房たち）聞こゆれば、宮ぞ（落葉の宮）御返り聞こえたまふ。

いとをかしげにて、ただ一行など、おほどかな（おっとりとした）書きざま、言葉（文言もや）なつかしきところ書き添へたまへるを、いよいよ（〔夕霧は〕いよいよお会いしたいと目が離されず）見まほしう目とまりて、しげう（しきりにお手紙をさし上げなさる）聞こえ通ひたまふ。なほつひにあるやう（やはり結局は何か事が起るに違いないお二人の仲なのだろうと）あるべき御仲らひなめりと、北の方（一四）けしきとりたまへれば、わづらはしくて、まうでまほしうおぼせど、とみにえ（すぐお出かけになるわけにもいかない）出で立ちたまはず。

（お書きになれない）えたまはず。（一三）なべての宣旨書きは、ものしとおぼしぬべく、

一五 八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしき（風情）もをかしきころなるに、（御息所の山荘の様子がとても気にかかるので）山里のありさまのいとゆかしければ、（〔夕霧〕一六）「なにがし律師のめづらしう（ご病気でいられると）下りたなるに、切にかたらふべきことあり。（ぜひ相談したいことがあります）御息所のわづらひたまふなるもとぶらひがてら、まうでむ」（お伺いしたい）と、おほかたにぞ（さりげない用件のように申し上げて）聞こえごちて（腹心の家来だけ）出でたまふ。御前（前駆も大げさでなく）ことことしからで、親しき限り五六人ばかり、（さほど山深い道中でもないが）狩衣（一七）にてさぶらふ。（お供する）ことに深き道ならねど、松が崎の尾山（一八）の色なども、さる（一九）巌ならねど、秋のけしきつきて（秋めいた風情が加わって）、都に（二〇）一なくと尽くしたる

一　柴を結った小さな垣。山荘らしい風情。（一巻図録八参照）

二　寝殿とおぼしい建物の東の放出。「放出」は、簾や障子の隔てを取りはずして母屋と廂を続けたもの。簡素な山荘で、普通の寝殿造りの配置でないので、「寝殿とおぼしき」という。

三　祈禱のための炉壇をしつらえて。奥に本尊仏を掛け護摩を焚く。正式には土を塗りかためる。（図録六参照）

四　寝殿の西側。

五　御息所に取りついている物の怪が厄介だからというので。下にもあるように、宮に物の怪がのり移るのを恐れる。

六　物の怪が誰彼と人にのり移るのを恐れて、わずかな隔てを置く程度だが。

七　夕霧。

八　落葉の宮のお部屋の簾の前。宮のいる母屋の前の廂の間であろう。

九　上席格の女房たちが、御息所のご挨拶をお取次ぎ申し上げる。

一〇（奥の北廂から）女房を介して（夕霧に）申し上げなさる。

御息所との応対

家居には、なほあはれも興もまさりてぞ見ゆるや。

（やはり情趣もおもしろさも立ちまさって見えることだ）

はかなき小柴垣もゆゑあるさまにしなして、かりそめなれどあてはかに住まひなしたまへり。寝殿とおぼしき東の放出に、修法の壇塗りて、北の廂におはすれば、西面に宮はおはします。御もののけむつかしとて、とどめたてまつりたまひけれど、いかでか離れたてまつらむと、慕ひわたりたまへるを、人に移り散るを懼ぢて、すこしの隔てばかりに、あなたにはわたしたてまつりたまはず。客人のみたまふべき所のなければ、宮の御方の簾の前に入れたてまつりて、上蔀だつ人々、御消息聞こえ伝ふ。「いとかたじけなく、かうまでのたまはせわたらせたまへるをなむ、もしかひなくなり果てはべりなば、このかしこまりをだに聞こえさせでやと、思ひたまふるをなむ、今しばしかけとどめまほしき心つきはべりぬる」と、聞こえ出だしたまへり。「わたらせたまひし御送りにもと思うたまへしを、六条の院にうけたまはりさしたることはべりしほどにてなむ。日ご

（ささやかな）（仮のお住まいだが）（品よく）（由緒ありげに趣向をこらして）（〔御息所は〕）（京に残られるようおすすめ申されたけれども）（落葉の宮）（どうしてお側を離れられまし）（一緒にお移りになったのだが）（北廂には）（〔宮を〕）（お入れ申し上げなさらない）（〔夕霧を〕）（このようにま）（〔御息所〕）（ほんとうに恐れ多く）（もしこのままはかなくなってしまいました）（このお礼ですら申し上げずじまいになりますことかと）（心残りに思われますので）（もうしばらく命を永らえたいという気持になりましてございます）（〔夕霧〕）（こちらにお移りになりました時のお供もいたしたいと存じましたが）（父の六条院からのお申し付けをそのままにしておりましたことがございましたので）（お坐りになる場所がないので）

ろもそこはかとなくまぎるることはべりて、思ひたまふる心のほどよりは、こよなくおろかに御覧ぜらるることの、苦しうはべる」など、聞こえたまふ。

何ということもないいろいろ雑用がございまして　お案じ申し上げております私の気持よりは　ずっと行き届かぬ者のようにご覧頂きますことが　つろうございます

宮は、奥の方にいと忍びておはしませど、ことことしからぬ旅の御しつらひ、浅きやうなる御座のほどにて、人の御けはひおのづからしるし。いとやはらかにうちみじろきなどしたまふ御衣の音なひ、

落葉の宮　奥の方　大げさなものでもない仮住まいの　位置なので　しなやかに　衣ずれの音　気もそぞろになって

お部屋の仕切りや　端近な感じの　宮のご様子は自然に夕霧にはつき　り伝わってくる

さばかりななりと聞きゐたまへり。心も空におぼえて、あなたの御消息通ふほど、すこし遠う隔たる隙に、例の少将の君など、さぶらふ人々に物語などしたまひて、「かう参り来馴れうけたまはることの、年ごろといふばかりになりにけるを、こよなうもてなさせたまへるうらめしさなむ。かかる御簾の前にて、人伝の御消息などの、ほのかに聞こえ伝ふることよ。まだこそならはね。いかに古めかしきさまに、人々ほほゑみたまふらむと、はしたなくなむ。齢積らず軽らかなりしほどに、ほの好きたるかたに面馴れなまし

あれが宮なのだろうと〔夕霧は〕　宮お付き　お話をうかがうことの　夕霧　宮のご様子は自然に夕霧にはつき　り伝わってくる　の女房たちに　一四　一三　一二

さる恨めしさといったらありません　ご挨拶な　いまだに全く他人行儀なお扱いをな　宮お付き

どを　わずかにお取次ぎで申し上げるとは　どんなに　一五　立つ瀬のない思いです　あなた方がおかしがっておいでだろうと　か私を古くさい人間だと　一六

一二　西面の母屋。

一三　御息所への挨拶を取次ぐ女房が何度もあちらに行く間、少し間遠に時間がかかるその隙に。

一三　柏木の巻に「この御あへしらひきこゆる少将の君といふ人して」（五巻三一三頁）とあった。

一四　もうここ何年もというほどになりましたのに。柏木が亡くなってから足掛け三年になる。

一五　まだこんな目にあったことはありません。「ならふ」は、慣れている意。

一六　こんなに年も取らずまだ軽輩だった時分に、多少とも色めいた方面に場数を踏んでいましたら。若い頃から自分は生真面目に過して来た人間だ、と言う。

一　どう考えても、これほど生真面目に、いつまでもうかうかと過す人間は、またといまいと思われます。もういい加減に、親しい扱いをしてほしい、と言う。

落葉の宮、夕霧と挨拶を交わす

二　やはり、ただではすまないことだと。宮の挨拶がなくては事がすむまいという気持。

三　こんなにまでご不満をおもらしですのに、（何もおっしゃらないのでは）ご理解がないように思われかねません。

四　（母が）ご自分で直接お話し申し上げることも叶わぬようでご無礼いたしておりますので。「かたはらいたし」は、見るに見かねる気持。以下、女房を通じて、直接応対できないことわりを言う。

五　何ごとにも行き届いたご理解をお示しになる日頃のお人柄を、さっぱりしたご気分にもなられるまでそのご回復を（あなたが）ご覧になられるまでは。物の怪は、おうおうにして明晰な理解、判断を狂わせる症状を呈するので、「ものをおぼし知る御ありさまなど」と、日頃の御息所の聡明さを特に言う。

六　（私がこうして伺いますのも）ただあちらのお母様のことを心配してとばかりお思いで。

かば、（こんなに不馴れな戸惑いも感じずにすんだでしょう）かううひうひしうもおぼえざらまし。一さらにかばかりすくすくしう、癡れて年経る人は、たぐひあらじかし」とのたまふ。

（確かにいかにも軽くお扱い申せない立派なご様子でいられるので）げにいとあなづりにくげなるさましたまへれば、二さればよと、（女房）なまじ下手なご返事を申し上げるのは）「なかなかなる御いらへ聞こえ出でむは、（気がひけます）はづかしう」などつきし（つつき合って）ろひて、（女房）三「かかる御愁へ聞こしめし知らぬやうなり」と、宮に聞こゆれば、（落葉宮）「みづから聞こえたまはざめるかたはらいたさに、（母に）かはりはべるべきを、（どうなることかと思われるほどひどいご病状でしたのを）いと恐ろしきまでものしたまふめりしを、（介抱しており）見あつかましたうちにひはべりしほどに、（いつにもまして絶え入りそうなつらい気分になりまして）いとどあるかなきかのここちになりてなむ、（お話も叶いません）聞こえぬ」とあれば、「（夕霧）こは宮の御消息（せうそこ）か」とゐなほりて、「心苦し（たわしいご病気を）き御なやみを、（私の命にかえてもとご心配申し上げておりますのも）身にかふばかり嘆ききこえさせはべるも、何のゆゑ（何のためでしょうか）にか。（恐れ多い申し分ですが）かたじけなけれど、五ものをおぼし知る御ありさまなど、はればれしきかたにも見たてまつりなほしたまふまでは、たひらかに過ぐしたまはむこそ、（あなたが何ごともなくお過しなさることが）誰が御ためにもたのもしきことにははべらめと、（お二方どちらにとっても心丈夫なことでございましょうと）おしはかりきこえさするによりなむ。六ただあなたざまにおぼしゆづ（ご推察申し上げるからにほかなりません）

七 上の「山の蔭」の語に応じて、「ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける」（『古今集』巻四秋上、題しらず、読人しらず）を踏まえる。

夕暮の山荘のさま

八 「あな恋し今も見てしが山賤の垣ほに咲ける大和なでしこ」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず）による。

九 一定の期間（一七日、二七日、三七日など）を限って、昼夜間断なく、僧が交替で読経すること。

一〇 一昼夜を、六時（晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜）に分けてする勤行。僧の交替の時が来たのである。

一一 合図の鐘。『紫式部日記』に「後夜の鐘うちおどろかし、五壇の御修法、時はじめつ」とある。

一二 場所が場所だけに。小野というものさびしい土地柄ゆえに。

一三 印を結び、陀羅尼を唱えて、仏力の加護を念ずること。

一四 仏菩薩の説いた呪語。梵語の音をそのままに唱え、災厄をはらう呪力があるとされた。

りて、積りはべりぬる心ざしをも知ろしめされぬは、本意なきこと（今まで長い間の切ない私の気持もお察し下さいませんのは／不本意な気がいたします）ちなむ」と聞こえたまふ。「げに」と人々（女房たち）も聞こゆ。

日入りかたになりゆくに、空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗きここちするに、ひぐらし鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子の、うちなびける色（くびをかしげた花の淡い紅色も可憐に見える）もをかしう見ゆ。前の前栽の花どもは、思い思いに皆咲き乱れているのに心にまかせて乱れあひたるに、水の音いと涼しげにて、山おろし心すごく、松の響き木深く聞こえわたされなどして、不断経一〇読む時（あちこちから聞えてきたりして）かはりて、鐘一一うち鳴らすに、立つ声（座を立つ声も交替の僧の声も）もあかはるも、一つにあひて、いと尊く聞こゆ。所一二から、よろづのこと心細う見なさるるも、あはれにもの思ひ続けらる（しみじみと感慨にふけっていられる／お帰りになる気にもなれない）。出でたまはむここちもなし。律師一三も、加持する音して、陀羅尼一四いと尊く読む（読む様子だ）なり。

〔御息所が〕いと苦しげにし給ふなりとて、人々もそなたにつどひて、おほかた（大勢お供して来ていなかったので／女房たちも北廂の方に集まって）も、かかる旅所（たびどころ）にあまた参らざりけるに、いとど人少なにて、宮はながめたまへり。しめやかにて、思ふこともうち出でつべきをり（物思いに沈んでいられる／もの静かなので／心の内も打ち明けるのにまたとない機会だ）

〔夕霧は〕まざり合って

夕霧、宮と歌を贈答

一　山里のものわびしさをつのらせる夕霧に、ここから帰って行く気にもなれない思いでおります。夕霧の歌。『釈』以下「夕霧に衣は濡れて草枕旅寝するかも逢はぬ君ゆゑ」（『古今六帖』一、霧。五、来れど逢はず）を引く。巻名はこの歌により、この巻の主人公であるので、この人をも夕霧と呼ぶ。

二　この山里の垣根に立ちこめる霧も、帰ろうと気もそぞろなお人は引き止めることをいたしません。宮の返歌。「山賤」は自卑の気持で言う。相手の「立ち出でむそら」の語にすがって、強いて帰りを急ぐ人と取りなした。

三　本当に、帰ることも忘れてしまった。「帰るさ」は、帰り、帰り道の意。『万葉集』以来の歌語。

四　どうしていいか分らない気持です。「中空」（空の中ほど。比喩的に心の落着かぬこと）は、歌の「そら」の語にあわせて言う。

五　落葉の宮の歌によって言う。歌語。上の「家路」も『万葉集』以来の歌語。

かな、と思ひゐたまへるに、霧のただこの軒のもとまで立ちわたれば、「まかでむかたも見えずなりゆくは、いかがすべき」とて、

山里のあはれを添ふる夕霧に
　立ち出でむそらもなきここちして

と聞こえたまへば、

山賤の籬をこめて立つ霧も
　心そらなる人はとどめず

ほのかに聞こゆる御けはひになぐさめつつ、まことに帰るさ忘れ果てぬ。

「中空なるわざかな。家路は見えず、霧の籬は、立ちとまるべうもあらずやらはせたまふ。つきなき人は、かかることこそ」などやすらひて、忍びあまりぬる筋もほのめかし聞こえたまふに、年ごろもむげに見知りたまはぬにはあらねど、知らぬ顔にのみもてなしたまへるを、かく言に出でて怨みきこえたまふを、わづらはしうて、いと

〔夕霧は〕
（夕霧）おいとまして帰る道も見えなくなってゆきますのは　どうしたものでしょう
〔宮に〕
〔宮の〕
立ち止ることも叶わぬよう
〔宮は〕今までも
座を立
こんな目に会うのですね
不馴れな男は
胸の内もそれとなく申し上げなさるのに
いつも気づかぬふりをなさっていられたの
全然お察しでなかったわけではないけれども
もはや抑えがたい
ちかねて
にせき立てなさいます
〔夕霧が〕
面倒に思って
に

六 思いやりのない軽々しい振舞と思われ申しても。以下、夕霧の思案。今夜ここに泊って、直接宮に思いを打ち明けようと決心する。

七 左近の将監（近衛府の三等官なので判官という。従六位上相当）で、五位に叙せられたもの。左近の大夫という。夕霧は左大将なので、ここで「御司」というのは左近衛府。

八 護身などで暇がないようだが、今は休息を取っているだろう。「護身」は、護身法。心身を守護する修法で、印を結び、陀羅尼を唱える。

九 初夜の勤行の終った頃に。午後六時頃から十時頃にかけて行う。

一〇 適当な者を選んでここに控えさせておけ。

一一 朝廷から賜る護衛の兵。近衛の将曹以下が勤める。腹心の家来だけをとどめて、他は遠ざけようとする配慮。

一二 栗栖野の荘園（夕霧の所領地）が近かろうから、（そこで）馬に秣などを与えさせて。「栗栖野」は、愛宕郡栗栖野郷。鷹峰の東、西賀茂の南一帯の野。修学院から真西一里余。遊猟の地で、歌枕でもあった（図録一参照）。

一三 修法をつかさどる主僧を「修法の阿闍梨」というので、その意味で言ったもの。律師のこと。僧官としての阿闍梨は、律師の下である。律師が初夜の勤行を終って退出してくる頃までと安心させる。

いよ（二度とこんな）とど御いらへもなければ、いたう嘆きつつ、心のうちに、（夕霧は）またかよい機会があるだろうかるをりありなむや、と思ひめぐらしたまふ。情なうあはつけきものには思はれたてまつるとも、いかがはせむ、仕方のないことだ思ひわたるさまをだもお打ち明け申そう知らせたてまつらむ、と思ひて、人を召せば、御司の将監よりかうぶり得たる、腹心の家来むつましき人ぞ参れる。忍びやかに召し寄せて、（夕霧）「この律師にかならず言ふべきことのあるを、護身などに暇なげなめる、ただ今はうち休むらむ。今宵このわたりにとまりて、初夜の時果てむほどに、律師の控えている所に行くことにしようかのぬたるかたにものせむ。一〇これかれさぶらはせよ。随身などの男どもは、栗栖野の庄近からむ、秣などとり飼はせて、ここに人あまた声なせそ。人が大勢やかましくするなかやうの旅寝は、身分柄いかがと世人も噂しよなすべし」とのたまふ。何か仔細のあることだろうと呑み込んで［将監は］仰せを受けて立ちぬ。

（夕霧）道も見えぬ霧の深さですので　このお近くで一夜を過すことにしました

さて、「道いとただどしければ、このわたりに宿かりはべる。お部屋の前で過させて頂ければ幸いです同じうは、この御簾のもとにゆるされあらなむ。阿闍梨の下るるほどうせなら

一 夕霧のお言葉を宮にお取次ぎ申し上げに奥にいざって入って行く女房のあとについてお部屋にお入りになった。「ゐざる」は、膝行する。

夕霧、部屋に入って直接宮に訴える

二 母屋から北の廂に通ずる襖障子であろう。

三 (宮の入った) 向う側から懸金のかけようもなかったので。向う側には懸金がなかった趣。

四 事を荒立てて、乱暴に引き離すことのできるようなお方ではないので。相手が身分の高い夕霧だから、の意。

五 思いも寄りませんでした情けないお仕打ちです。「思たまへ」は、音便「思うたまへ」の「う」を表記しない形。

どまで」など、つれなくのたまふ。例は、かやうに長居して、あざればみたるけしきも見えたまはぬを、うたてもあるかな、と宮おぼせど、ことさらめきて、軽らかにあなたにはひわたりたまはむも、さまあしきここちして、ただ音せでおはしますに、とかく聞こえ寄りて、御消息聞こえ伝へにゐざり入る人の蔭につきて入りたまひぬ。

まだ夕暮の、霧にとぢられて内は暗くなりにたるほどなり。あさましうて見返りたるに、宮はいとむくつけうなりたまうて、北の御障子の外にゐざり出でさせたまふを、いとようたどりて、ひきとどめたてまつりつ。御身は入り果てたまへれど、御衣の裾の残りて、障子は、あなたより鎖すべきかたなかりければ、引きたてさして、水のやうにわななきおはす。人々もあきれて、いかにすべきことともえ思ひえず。こなたよりこそ鎖す錠などもあれ、いとわりなくて、荒々しくは、え引きかなぐるべくはたものしたまはねば、「いとあさましう、思たまへ寄らざりける御心のほどになむ」と、泣きぬば

(女房が) 振舞に及んだりなさることもなかったのに 困ったことになった 乱れた 息をひそめておいでなのに (夕霧は) 何かと申し上げ すぐさま母御息所のお部屋にお移りになるのも わざとらしく みっともないと思って て 探り寄って (宮を) (夕霧は) とても気味悪くおなりになって びっくりして 女房たちも度を失って どうしてよいものか思いもつかない 懸金 あるが どうしようもなくて こちらからなら (障子を) しめきれなくて 総身を汗にしてふるえていられる (女房) あまりと 言えばあまりな

六 人数にも入らぬ私ですが、私がどんな人間か親しくお耳になさった年月ももう大分になるはずです。自分の人柄はもうお分りでしょう、の意。

七 不覚だった、こんなにまでこの人を近づけてしまって、悔む気持ばかり先立って、やり場のない思いなので。皇女としての誇りが深く傷つけられた思い。

八 何と情けない、子供じみたご態度なのでしょう。宮の返事のないのを詰る気持。

九 人知れずお慕いしてきた気持を抑えかねてこうした色めいた所行に及びました過ちというほどのことはございましょうが。

一〇 どれほど、胸の内も千々に砕ける悲しみに堪えかねていますことか。「千々にくだく」は、「君恋ふと心は千々にくだくるをなど数ならぬわが身なるらむ」（『曾禰好忠集』）など、歌に詠まれる。

一一 このままでは私の思いが胸の内で朽ち果ててしまうでしょう、その悲しみを。

かりに聞こゆれど、「（夕霧）この程度お側近くに控えることが人並み以上にいとわしかばかりにてさぶらはむが、人よりけにうとましう、めざましうおぼさるべきにやは。無礼な者とお思いになるほどのことでしょうか数ならずとも、御耳馴れぬる年月も重なりぬらむ」とて、いとのどやかにさまよくもてしづめて、思ふことを聞こえ知らせたまふ。

聞き入れたまふべくもあらず、〔宮は〕お耳にとどめられるはずもなくくやしう、かくまでとおぼすことのみ、やるかたなければ、返事のお言葉などはなおさら頭にお浮びにもならないのたまはむことはたましておぼえたまはず。「（夕霧）いと心憂く、若々しき御さまかな。人知れぬ心にあまりぬるすきずきしき罪ばかりこそはべらめ、これより馴れ過ぎたることは、これ以上の馴れ馴れし過ぎる振舞は決してお許しがなくてはさらに御心ゆるされでは御覧ぜられじ。お目にかけませんいかばかり、千々にくだけはべる思ひに堪へぬぞや。そうは言っても何かの折に私の気持にお気づきのこともあろうと存じますのにさりともおのづから御覧じ知るふしもはべらむものを、無理に知らぬふりをなさりしひておぼめかしう、他人行儀におあつかいなさるようですからけうとうもてなさせたまふめれば、聞こえさせむかたなさに、いかがはせむ、ここちなく憎しとおぼさるとも、お話の申し上げようもありませんのでもう仕方がないわきまえもなくけしからぬとお思いになっても二かうながら朽ちぬべき愁へを、はっきり申し上げてお分り頂きたいと思うだけのことなのですさだかに聞こえ知らせはべらむとばかりなり。言いようもないつれないご態度が恨めしく思われますが言ひ知らぬ御けしきのつらきものから、

一 まことに恐れ多いことですから。これ以上のことには及ばぬ、という含意。

二 どこまでもものやさしく、気をつけて振舞っていられる。

三 そうは言っても（そうお美しい方ではないといっても）格段にすぐれている。宮様だけのことはあるという気持。

四 親しみを感じさせる薫きしめられたお召し物の匂いなど。

五 何の趣味もない間抜けな人でも、目が冴えてしまいそうな空の風情なのに。「寝覚」は、夜の風趣に目が冴えて眠れないこと。

一いとかたじけなければ」とて、二あながちに情深う、用意したまへり。障子をおさへたまへるは、〔宮が〕いとものはかなきかためなれど、何の頼りにもならない守りだけれども〔夕霧は〕引きもあけず。（夕霧）この程度の隔てをと無理にお思いでいられるらしいのがおいたわしい「かばかりのけぢめをと、しひておぼさるらむこそあはれなれ」と、うち笑ひて、うたて心のままなるさまにもあらず。人の思いやりのない勝手な振舞をなさることもない宮御ありさまの、やさしく気品があって優雅でいらっしゃることはなつかしうあてになまめいたまへること、三さはいへどことに見ゆ。柏木の死以来ずっと悲しみに沈まれているせいか世とともにものを思ひたまふけにや、痩せ痩せにあしゃな感じでえかなるここちして、ふだんのお召し物のままのうちとけたまへるままの御袖のあたりもなよかでびかに、四気近うしみたる匂ひなど、その総ての感じが可憐で取り集めてらうたげに、やはらとした感じでいらっしゃるかなるここちしたまへり。

風いと心細う、ふけゆく夜のけしき、虫の音も、鹿の鳴く音も、滝の音も、一つに乱れて艶なるほどなれば、五ただありのあはつけ人だに、寝覚しぬべき空のけしきを、格子もさながら、上げたままの山の端近きほど、とどめがたうものあはれなり。〔涙を〕（夕霧）やはりこうして私の気持をお分り頂けないご様子ではし知らぬ御ありさまこそ、六かへりては浅う御心のほど知らるれ。か

六 こんなに世にもまれなほど間の抜けた、ご心配のいらないところなども。「うしろやすさ」は、何も手出しをしないから、私はあなたにとって安心な人間だとの意。

七 私のようなのを間抜け者などと笑いものにして、（女に対して）自分勝手な思いをも押し通すもののようです。女の気持を踏みにじるような振舞にも及ぶものらしい、の意。

八 あまりにも私を見くびりきっていられますので、もうとてもおとなしくはしていられないような気持がいたします。「つれなき心もつかふ」かもしれないとおどす。

九 夫を持ったことがあるから組みしやすいと言わんばかりに、時折夕霧が匂わすのも、不愉快で。落葉の宮の気持。「世」は、前の「世の中」とともに、男女の仲の意。

一〇 情けないわたくしの過ちを思い知るといたしましても。不本意にも柏木と結婚したことをいう。

一一 私だけが、不幸な女の例として、夫に先立たれた悲しみの上に、さらにあなたとのことでつらい思いをして、恥をさらさねばならないのでしょうか。「名をくたす」は、悪い評判を取る意。涙に袖を朽たすと言い掛ける。

一二 口ずさまれるというでもないのを、夕霧は、自分なりに一首に仕立てて。聞えないところは自分なりの理解で補うのである。

う世づかぬまでしれじれしきうしろやすさなども、私のような男はほかにたぐひあらじと
おぼえはべるを、何ごとにもかやすきほどの人こそ、何ごとも手軽にやってのける身分の者はかかるをば痴
者などうち笑ひて、つれなき心もつかふなれ。あまりこよなくおぼ
し貶したるに、えなむしづめ果つまじきここちしはべる。世の中を
むげにおぼし知らぬにしもあらじを」と、男の気持を何もご存じでないわけでもありますまいに よろづに聞こえせめられ
たまひて、いかが言ふべきとわびしうおぼしめぐらす。手をかえ品をかえ言いせまられなさって

世を知りたるかたの心やすきやうに、をりをりほのめかすも、め
ざましう、げにたぐひなき身の憂さなりや、とおぼし続けたまふに、
死ぬべくおぼえたまうて、「憂きみづからの罪を思ひ知るとても、
いとかうあさましきを、いかやうに思ひなすべきにかはあらむ」と、
いとほのかに、あはれげに泣いたまうて、

（落葉宮）一二

われのみや憂き世を知れるためしにて
濡れそふ袖の名をくたすべき

とのたまふともなきを、わが心に続けて、忍びやかにうち誦じたま

死ぬほどつらい思いがなさって（落葉宮）一〇
こんなにもひどいお仕打ちを
どのように考えたらよいのでございましょう
消え入るような声で いたいたしげに
小声で

一 ほんとに、失礼なことを申し上げてしまいましたね。前に「世の中をむげにおぼし知らぬにしもあらじを」と言ったこと。

二 大体、私があらぬ噂を立てられるようなことをしなくても、悲しい思いをなさった汚名（柏木とのこと）は隠れもないことではありませんか。

三 お許しがなければ、決して決して。無体な振舞には及ばないと誓う。

四 深くもない廂の軒は、何の覆いにもならないように思われるので。簡素な山荘の造りのさま。

五 宮の亡き夫柏木。

落葉の宮の心中

へるも、〔宮は〕いたたまれぬ思いで かたはらいたく、どうして歌など詠んだのだろうとくやまれるのに いかに言ひつることぞとおぼさるるに、

（夕霧）一「げにあしう聞こえつかし」など、苦笑いなさっている様子で ほほゑみたまへるけしきにて、

（夕霧）二「おほかたはわれ濡衣を着せずとも
　朽ちにし袖の名やは隠るる

何もかも捨てたお気持におなり下さい ひたぶるにおぼしなりねかし」とて、月明きかたに誘ひきこゆるも、何たることかとお思いになる あさましとおぼす。かたく身構えておいでだけれども 心強うもてなしたまへど、造作もなく はかなう引き寄せてまつりて、

（夕霧）これほどのまたとない私の気持をお分り下さって「かばかりたぐひなき心ざしを御覧じ知りて、気をお楽になさって下さい 心やすうもてなしたまへ。三御ゆるしあらでは、さらにさらに」と、いとけざやかに聞こえたまふほど、明けがた近うなりにけり。

月隈なう澄みわたりて、霧にもまぎれずさし入りたり。妨げられずに 四浅はかなる廂の軒は、ほどもなきここちすれば、月の面に直接向い合ったような感じなの 月の顔に向かひたるやうなる、あやしうはしたなくて、顔をそむけていらっしゃる物腰など まぎらはしたまへるもてなしなど、言いようもなく優雅でいらっしゃる はむかたなくなまめきたまへり。五故君の御こともすこし聞こえ出で〔夕霧は〕て、当り障りのないおだやかな さまようのどやかなる物語をぞ聞こえたまふ。それでもやはり さすがになほ、

六 宮が、あの亡くなった柏木ほどには自分を思って下さらないことを、夕霧は不満足げにお怨み申し上げなさる。

七 柏木は、位などもまだ十分ではない身分だったが。宮との結婚当時、中納言（従三位相当）だった。（五巻若菜下一九九頁参照）

八 どなたも（父朱雀院や母御息所も）ご賛成だったので。結婚のいきさつについては、五巻柏木三〇六頁に、御息所が夕霧に語っているところがある。

九 そうした成行きに身をまかせて（柏木と）夫婦としてなじまれたのだが。「たまふ」と敬語があるのは、地の文の気持が混入したもの。

一〇 それだって、柏木から後々どんなに心外な仕打ちを受けたことか。柏木が宮を疎んじたことをいう。

一一 夕霧は縁もゆかりもない人であるわけでもなく。夕霧は、柏木の異母妹雲居の雁を北の方としている。

一二 柏木の父、致仕の太政大臣。

一三 母御息所がこのことをご存じでないのも、気の咎めることだし。

一四 何ということでしょう。いかにもわけありげに朝露を踏み分けて帰る、その朝露の思わくも恥ずかしいことです。実際は、逢って帰るわけでもないので、言う。

一五 こんな間抜けなところをお目にかけて。手出しをしなかったことを言う。

六 かの過ぎにしかたにおぼし貶すをば、うらめしげに怨みきこえたまふ。〔宮は〕御心のうちにも、七かれは、位などもまだ及ばざりけるほどながら、八誰も誰も御ゆるしありけるに、九おのづからもてなされて見馴れたまひにしを、一〇それだにいとめざましき心のなりにしさま、ましてかうあるまじきことに、一一よそに聞くあたりにだにあらず、大殿などの聞き思ひたまはむことよ、なべての世のそしりをばさらにもいはず、院にもいかに聞こしめし思ほされむ、など、離れぬここかしこの御心をおぼしめぐらすに、いとくちをしう、わが心ひとつに、かう強う思ふとも、人のもの言ひいかならむ、御息所の知りたまはざらむも、罪得がましう、かく聞きたまひて、心幼く、とおぼしのたまはむもわびしければ、「明かさでだに出でたまへ」と、〔夕霧を〕せき立てこえたまふよりほかのことなし。

（夕霧）一四

「あさましや。ことあり顔にわけはべらむ朝露の思はむところよ。なほさらばおぼし知れよ。一五かうをこがましきさまを見えたてまつり

（父朱雀院も噂を耳にされてどのようにお思いになろう）
（一般の世間の非難は今さら言うまでもなく）
（近いかかわりのあるこの方）
（とんでもないことに）
（あの方の思わくを考えてご覧になると）
（いかにも情けなく）
（自分一人が）
（人の口はどう言いふらすだろう）
（迂闊にも）
（お思いになりお）
（これこれとお聞きになって）
（宮）せめて夜の明けぬうちにお帰り下さい
（叱りがあろうこともつらいので）
（どうぞそれならお覚悟下さい）
（て申し上げなさるよりほかの知恵も浮ばない）

一　その時は、とてもおとなしくしていられそうもなく、私にはまだ経験のないことですが、不埒な料簡もいだくようなことになりそうに思われます。「知らぬことこと」の「ことこと」は、事々。「ならふ」は、それが習慣になる、慣れる意。

二　あとあと宮がどんな態度に出るかとても気がかりで、なまじっかな逢い方をしたものと思うけれども。

三　（ここで乱れた振舞に及んだら）何もかも台なしで、自分で自分を見下げ果てた奴と思うことにもなろう。

四　一面の荻の原、その軒端の荻の露にしっとり濡れながら、これから、幾重にも立ちこめる霧の中を帰って行かねばなりません。「露」に涙の意をきかせ、下の句に、帰路の困難を言って、宮の同情を求める。

五　あなたも、あらぬ浮き名はやはりおまぬがれになるわけにいきますまい。「濡衣」は、歌の「露」「霧」に応じて言う。濡衣に同じ。あらぬ嫌疑の意。

六　確かにご自分の浮き名は、なすすべもなく世に漏れ聞えようが。以下、落葉の宮の心。「御名」という敬語は、地の文の気持の出たもの。

七　せめて自分の心に問いただされた場合だけでも、きっぱりと答えよう。「なき名ぞと人には言ひてありぬべし心の問はばいかが答へむ」（『後撰集』巻十一恋三、読人しらず）による。

八　踏み分けて帰って行かれる草葉の露に濡れると難癖をつけて、どうしても私にまであらぬ浮き名を負わ

うまく言いくるめて帰したと今後私を相手にして下さらないなら

て、かしこうすかしやりつとおぼし離れむこそ、一その際は心もえをさめあふまじう、知らぬことこと、けしからぬ心づかひもならひはじむべう思うたまへらるれ」とて、二いとうしろめたくなかなかなれど、ゆくりかにあざれたることの、三まことにならはぬ御ここちなれば、四いとほしう、わが御みづからも心劣りやせむ、などおぼいて、誰が御ためにも、五あらはなるまじきほどの霧に立ち隠れて出でたまふ、ここちそらなり。

いきなり色めいた振舞に及ぶのは

ほんとに今まで経験のないお人柄なので

どちらにとっても

事が人目につきそうにない立ちこめた霧に立ちまぎれてお帰りになるのは

気もそぞろの思いである

「荻原や軒ばの露にそほちつつ
　八重立つ霧をわけぞゆくべき

濡衣はなほえ干させたまはじ。六かうわりなうやらはせたまふ御心づからこそは」と聞こえたまふ。七げにこの御名の、たけからず漏りぬべきを、心の問はむにだに、八口ぎよう答へむ、とおぼせば、いみじうもて離れたまふ。

こんなにやみくもに私を帰そうとなさるあなたのお心から出たことです

そよそしいお返事をなさる

「わけゆかむ草葉の露をかことにて

せようとなさるのですか。

九 今までずっと、普通の人とは違った親切気を出して、あれこれと好意をお寄せしてきたのに、てのひらをかえしたように、油断させた揚句に色めいた振舞に及ぶといったことでは、宮がおかわいそうでもあり、また気はずかしいお人柄でもあるので。「心ばせ人」は、よく気を配る人というほどの意。

一〇 今後相手にされないで馬鹿な目を見るのではないかと。

一一 帰り路の草の露けさも一方ならぬものがある。歩みなずむ気持と悲しみとを同時に言う。

一二 お邸（三条殿）にお帰りだと、北の方（雲居の雁）が、こんな露に濡れそぼった姿をおかしいと不審にお思いになるに違いないので。

夕霧、六条の院に赴く

一三 丑寅（東北）の町の御殿。夕霧の母代りの花散里のもと。

一四 花散里は、いつも、夕霧の装束を、夏冬とり揃えてそれは綺麗に支度しておありなので。母代りとしての花散里の配慮。更衣は、夏と冬にする。

一五 香を入れて、収めた装束に匂いを移らせる唐櫃。「唐櫃」は、六本の足の付いた櫃。（一巻図録一一参照）

一六 今の炊いた飯。朝食である。

一七 源氏のもとにご挨拶にお出向きになる。

なほ濡衣をかけむとや思ふ

何というおっしゃりようでしょう

めづらかなることかな」と、あはめたまへるさま、いとをかしうは

とても風情があり犯しがたい気品がある

づかしげなり。年ごろ、人に違へる心ばせ人になりて、さまざまに

お咎めになる様子は

情を見えたてまつる名残なく、うちたゆめすきずきしきやうなるが、

並々ならず気持を抑え抑えしては

いとほしう、心はづかしげなれば、おろかならず思ひ返しつつ、か

なに無理をして宮のお言葉に従っても

うあながちに従ひきこえても、後をこがましくやと、さまざまに思

ひ乱れつつ出でたまふ。道の露けさもいと所狭し。

こんなお出かけの経験も今までおありでないので　興をそそられもし気のもめること

かやうのありきならひたまはぬここちに、をかしうも心尽くしに

だとも思いながら

もおぼえつつ、殿におはせば、女君の、かかる濡れをあやしととが

参上なさった

めたまひぬべければ、六条の院の東の御殿にまうでたまひぬ。まだ

小野ではどんなだろうと

朝霧もはれず、ましてかしこにはいかにとおぼしやる。「例ならぬ

ついぞないお

忍び歩きだったのですわ　女房たちはささやく

御ありきありけり」と、人々はささめく。しばしうち休みたまひて、

御衣ぬぎかへたまふ。常に夏冬といときよらにしおきたまへれば、

香の御唐櫃より取りでてたてまつりたまふ。御粥など参りて、御前

召し上がって　さし上げなさる

落葉の宮、夕霧の手紙も無視する

一 いきなり思ってもみなかった目にあった昨夜のことを、けしからぬとも気はずかしくもお思いになると。「めざましう」は、夕霧の不届きな態度に対する心外な気持。

二 常とは変った不審な点でもお目にとまり。夕霧の手紙とか行動、あるいは自分の態度など。

三 (昨夜のことを知る) 女房たちが、ありのままにそっとお耳に入れてくれたらよい。夕霧が近づいたけれども何ごともなかったその実情を、いっそ告げてほしいと思う。

四 仲のよい親子と申し上げるなかでも、お二人は、いささかの隠し立てもなくいとしみ合っておいでの仲である。

五 落葉の宮は、とてもそんなお気持にはなれない。

六 いえ、なに、はっきりともせぬことをお耳になさって、いかにも何かあったかのように、あれこれ心配なさるのは、まだ何ごともないのに、おいたわしいことです。夕霧の近づいたことを御息所の耳に入れて、よけいなご心配をかけることはない、の意。

七 (夕霧と落葉の宮の間が) どうなるのだろうと気がかりな女房同士は、この夕霧のお手紙の中身が気になるのだけれども。

に参りたまふ。

小野

かしこに御文たてまつりたまへれど、[宮は]見向きもなさらない御覧じも入れず。一にはかにあさましかりしありさま、めざましうもはづかしうもおぼすに、心不愉快この上なくてづきなくて、御息所の漏り聞きたまはむことも、お耳になさるであろうことも いとはづかしう、とても気の引けることでそれにまた、かかることやとかけて知りたまはざらむに、こんなことがあろうとは夢にもご存じないであろうにただならぬふしにても見つけたまひ、人の噂はすぐにひろまるこの世の中だから人のもの言ひ隠れなき世なれば、[御息所が]おのづから聞きあはせて、隠し立てをしたとお思いになることがとてもつらいので隔てけるとおぼさむがいと苦しければ、三人々ありしままに聞こえ漏らさなむ、憂しとおぼすともいかがはせむとおぼす。

四親子の御仲と聞こゆるなかにも、つゆ隔てずぞ思ひかはしたまへる。他人は秘密を知っているけれども よその人は漏り聞けども、親に隠すたぐひこそは、昔の物語にもあるめれど、五さはたおぼされず。人々は、女房たち「何かは、六ほのかに聞きたまひて、ことしもあり顔に、とかくおぼし乱れむ、まだきに心苦し」など言しあわせてひあはせて、七いかならむと思ふどち、この御消息のゆかしきを、[宮が]あけてみようともなさらないので ひきも開けさせたまはねば、気が気でなくて心もとなくて、(女房)やはりまるでお返事を「なほむげに聞こ

なさらないというのも
えさせたまはざらむも、おぼつかなく、（わけが分らず）若々しきやうにぞはべらむ」など聞こえて、ひろげたれば、（子供じみたことと思われましょう）（宮）みっともなく［手紙を］「あやしう、何心もなきさまにて、人にかばかりにても見ゆるあはつけさの、（うっかりしていて）（男の方にあの程度にせよお逢いした至らなさを）（私自身が悪かったのだと思っ）みづからのあやまちに思ひなせど、（てはみますが）思ひやりなかりしあさましさも、（人を踏みつけにしたあまりのお振舞も）なぐさめがたくなむ。（とても情けなく思われるのです）（八）え見ずとを言へ」と、（もってのほかのご機嫌で）ことのほかにて寄り臥させたまひぬ。

（九）さるは、（やさしげに）憎げもなく、（いかにも心をこめたお書きぶりで）いと心深う書いたまうて、

（夕霧）一〇
たましひをつれなき袖にとどめおきて
わが心からまどはるるかな

（一一）ほかなるものはとか、（昔もこんな例はあったのだと）昔もたぐひありけりと（思ってみましても）思たまへなすにも、

（一二）さらに行くかた知らずのみなむ。

（一三）など、いと多かめれど、（こまごまと書いてあるようだが）人はえまほにも見ず。（女房にはよくも見られない）例のけしきなる今朝の御文にもあらざめれど、なほえ思ひはるけず。人々は、（女房たち）御けしき（宮のお嘆きの様子もおいたわしいのを）もいとほしきを、（心を痛めて拝見しながら）嘆かしう見たてまつりつつ、（一四）いかなる御ことにかはあらむ、何ごとにつけても、（またなくご親切なお心遣いは長く続いているけれど）ありがたうあはれなる御心ざまはほ

一 拝見できませんとお返事しなさい。「を」は、強意の間投助詞。
九 とはいえ。落葉の宮のご不興にもかかわらず、というほどの含み。
一〇 魂をつれないあなたの袖の中に置いて来てしまいましたので、そんな私自身のせいで、心ここにあらぬ思いでいます。「まどふ」は、うろうろする意。魂があなたのもとにあるので、わが身は正体もない思いでいる意。「飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなきここちする」（『古今集』巻十八雑下、陸奥）を踏む。
一一 思い通りにならないものは心であるとか。「身を捨ててゆきやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり」（『古今集』巻十八雑下、躬恒）
一二 気持の晴らしようもない思いです。「わが恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行くかたもなし」（『古今集』巻十一恋一、題しらず、読人しらず）
一三 普通の後朝の文のような今朝のお手紙でもないようだが、女房たちにはどうも十分に納得がいかない。昨夜果して何があったのか、いぶかる気持。
一四 お二人の間柄は一体どうなっているのだろう。以下、女房たちの思い。

一 こういうことで（夫として）お頼り申すことになっては、今までほどではいらっしゃらないかもしれない。夫になったら、夕霧は思ったほどでもないかもしれない、と危ぶむ。柏木の前例もあるからであろう。

二 御息所のこと。以下の症状、物の怪が修法によって退散する時もあると考えられていたからである。

三 六時の勤行の一つ。（一七頁注一〇、一三参照）

四 律師のこと。（一九頁注一三参照）

五 一七頁注一四参照。

六 真言密教での至高の本尊。

七 律師の自称。拙僧というほどの気持。

八 精魂こめて。漢語「至心」の訓読語。仏典に例が多い。

九 成仏できない霊魂。御息所の物の怪の正体。

一〇 衆生が貪欲、嗔恚、愚痴の迷いのために悪業を犯して正道を蔽い隠すこと。

一一 修法に声は嗄れて、いかめしく言い放たれる。

一二 いかにも聖ふうな。修行一筋といった感じをいう。「聖」は官許を得ず山野に修行する私度僧。

一三 柏木。

一四（亡きあとのことを）親しくお頼みになった約束をたがえまいと。

御息所、律師の話から、昨夜の夕霧のことを知る

もへど経ぬれど、かかるかたに頼みきこえては、見劣りやしたまはむ、と思うと心配でもあるし と思ふもあやふく、など、親しくお側にお仕えする者は皆 むつましうさぶらふ限りは、額を寄せ合って おのがどち思ひ乱る。御息所もかけて知りたまはず。夢にもご存じでいられない

ものののけにわづらひたまふ人は、重態と見えても 重しと見れど、ご気分のさっぱりなさる さはやぎたまふ隙もありてなむ、小康の折もあって ものおぼえたまふ。意識を取りもどしていられる 日中の御加持果てて、阿闍梨一人とどまりて、なほ陀羅尼読みたまふ。ご気分のおよろしいのを よろしうおはします、よろこびて、（律師）「大日如来虚言したまはずは、嘘を仰せでないなら どうして などてか、かくなにがしが心をいたしてつかうまつる御修法に、験なきやうはあらむ。悪霊は執念きやうなれど、業障にまつはれたるはかなものなり」と、つきまとわれたつまらぬものなのです 声はかれて怒りたまふ。いと聖だち、一本気な すくすくしき律師にて、ゆくりもなく、（律師）「そよや。おおそれよ 夕霧 この大将は、いつよりここには参り通ひたまふぞ」と問ひ申したまふ。姫宮のもとにお通いであられるのか 御息所、「さることもはべらず。そんなことはございません 故大納言のいとよき仲にて、大層親しくしておられて かたらひつけたまへる心違へじと、この年ごろ、何か事あるごとに さるべきことにつけて、まことに不思議なほど親しくお出入り下さるのですが いとあやしくなむかたらひものしたまふも、

一五 いや、それはお見苦しい。いらざる弁解だというほどの意。

一六 夜中から明け方にかけての勤行。（一七頁注一〇参照）

一七 落葉の宮の居室である西面の出入口の妻戸。（一四頁参照）

一八 このご縁組は、たって望ましいことでもありませぬ。

一九 （夕霧の）人物はまことに立派でいらっしゃる。「有職」は、諸道に通じた人。

二〇 夕霧の祖母。葵の上の死後、夕霧はずっと大宮の膝下に育った。

二一 もっぱら、しかるべきご用は今もお勤め申しております。「一向に」、次の「本妻」「族類」「女人」「長夜の闇」、いずれも僧侶らしい堅い用語。

二二 お二人のご縁組は何のためにもなりませぬ。

二三 雲居の雁。以下、その実家の致仕の太政大臣一族の権勢を言う。

こうしてわざわざ　病気の私を見舞にということで

かくふりはへ、わづらふをとぶらひにとて立ち寄りたまへりければ、

もったいないことと存じておりました

かたじけなく聞きはべりし」と聞こえたまふ。「いで、（律師）一五あなかたは。

お隠しになることでもありますまい　参上した折

なにがしに隠さるべきにもあらず。今朝、後夜にまうのぼりつるに、

立派な　どなたかお見分け申すことも叶わなかったが　弟子の僧どもが

一七かの西の妻戸より、いとうるはしき男の出でたまひつるを、霧深くて、なにがしはえ見わいたてまつらざりつるを、この法師ばらなむ、

お帰りだったのですと

大将殿の出でたまふなりけりと、昨夜も御車も返してとまりたまひにけると、口々申しつる。げに、いとかうばしき香の満ちて、頭痛

が痛くなるほどでしたから　なるほどそうだったのかと

きまでありつれば、げにさなりけりと、思ひあはせはべりぬる。常

にいとかうばしくものしたまふ君なり。一八このこと、いと切にもあらぬことなり。人はいと有職にものしたまふ。なにがしらも、童にも

夕霧　ご一身についてのことは

のしたまうし時より、かの君の御ためのことは、修法をなむ、故大

お申しつけがありましたので

宮ののたまひつけたりしかば、一向にさるべきこと、今にうけたまはるところなれど、二二いと益なし。本妻強くものしたまふ。さる、時

れきとしたお方であられる　ああした　今

世に重きをなしていられる　お子様方は

を時めくにあへる族類にて、いとやむごとなし。若君たちは、七八人になり

一 皇女の君（落葉の宮）とて、押えはききますまい。

二 女人という悪い身の上に生れつき。女は罪深いものという仏教の思想にもとづく。

三 煩悩のため永劫に迷いの世界にさまよって真理の光明を見られないことを喩えていう語。

四 本妻である雲居の雁の嫉妬の怒りを買うようなことになれば、いつまでも成仏の障りとなりましょう。

五 絶対に賛成いたしかねます。「もはら」は「専」の訓読語。男性の用語である。

六（夕霧が）それでは一休みしてからお目にかかろうとおっしゃって、しばらくお待ちでいらっしゃると、こちらの（私の方の）女房たちが申しておりましたが。「御達」は、女房に対する敬称。年輩の重だった女房をいう。

七 そういうこともあったのだろうか。以下、御息所の心中。

たまひぬ。一え皇女の君押したまはじ。また、女人のあしき身をうけ、長夜の闇にまどふは、ただかやうの罪によりなむ、さるいみじき報いをも受くるものなる。四人の御怒り出で来なば、長きほだしとなりなむ。五もはらうけひかず」と、頭ふりて、ただ言ひに言ひ放てば、「いとあやしきことなり。さらにさるけしきにも見えたまはぬ人なり。よろづここちのまどひにしかば、六うち休みて対面せむとてなむ、しばし立ちとまりたまへると、ここなる御達言ひしを、さやうにてとまりたまへるにやあらむ。おほかたいとまめやかに、すくよかにものしたまふ人を」と、おぼめいたまひながら、心のうちに、七さることもやありけむ、ただならぬ御けしきは、をりをり見ゆれど、人の御さまのいとかどかどしう、あながちに人のそしりあらむことはばぶき捨て、うるはしだちたまへるに、たはやすく心ゆるされぬことはあらじと、うちとけたるぞかし、人少なにておはするけしきを見て、はひ入りもやしたまひけむ、とおぼす。

（こうした愛欲の罪によって そのようなひどい応報をも受けるものなのです）
（ずけずけと思い通りを言うので とてもそんなお振舞をなさるともお見受けできないお人柄で）
（御息所）おかしなお話でございます
（私が）すっかり気分が悪うございましたので
（大体がとても実意があって お泊りになったのでしょうか）
（不審そうなおっしゃりようながら まじめでいらっしゃるお方ですのに）
（気のありげなおそぶりは つとめて人から非難されるようなことはなさらないよう柄がいかにもきっぱり筋を通されるお方で）
（まじめに振舞っておられたので めったにこちらの納得せぬようなことはなさるまいと）
（お側に人もいないでいらっしゃる様子を 気を許していたのだ）
（そっとお部屋に忍ばれたのかもしれない）

御息所、小少将の君に問いただす

八 前に「少将の君」（一五頁注一三）とあった人。ここのが正式の呼び名。

九 今朝の夕霧から手紙の来た時の模様。以下、二八頁終りから二九頁にかけてのいきさつを伝える。

一〇 障子（襖）は懸金が掛けてありました。少将は、あわてて、事を取りつくろって御息所を安心させようとする。

律師立ちぬるのちに、小少将の君を召して、「かかることなむ聞きつる。いかなりしことぞ。なぞかおのれには、さなむ、かくなむとは聞かせたまはざりける。さしもあらじと思ひながら」とのたまへば、いとほしけれど、はじめよりありしやうを、くはしう聞こゆ。

今朝の御文のけしき、宮もほのかにのたまはせつるやうなど聞こえ、「年ごろ忍びわたりたまひける心のうちを、聞こえ知らせむとばかりにやはべりけむ。ありがたう用意ありてなむ、明かしも果てで出でたまひぬるを、人はいかに聞こえはべるにか」。律師とは思ひも寄らで、忍びて人の聞こえけると思ふ。ものものたまはで、いと憂くくちをしとおぼすに、涙ほろほろとこぼれたまひぬ。見たてまつるも、いといとほしう、何にありのままに聞こえつらむ、苦しき御ここちを、いとどおぼし乱るらむ、とくやしう思ひゐたり。「障子は鎖してなむ」と、よろづによろしきやうに聞こえなせど、「とてもかくても、さばかりに、何の用意もなく、軽らかに人に見えたま

（御息所）どうしたことなのですか　どうして私には　これこれとは　しかじか　かくなむ　聞かせて下さらなかったのです　よもやそんなことはあるまいと思いますが　困ったとは思うけれど　はじめからのいきさつを　ちらりとおっしゃったことなどを申し上げて　今まで長い間心にこめておいでしたお気持のほども　〔宮に〕お伝え申そうというほどのお積りだったのでしょうか　〔夕霧は〕珍しいほどにお心遣いなさって　夜も明けきらないうちにお帰りになりましたのを　どのように申し上げたのでしょうか　律師が告げたとは　誰か女房が　〔御息所は〕何とも情けなく無念なとお思いになるあまり　〔少将は〕ほぞを噛む思いでいる　苦しいご病中なのに　一層お気持も乱れよう　何かと適当に言いつくろって申し上げるけれども　（御息所）どうであろうと　そんなに近々と　何の用心もなく　簡単に人にお逢いになったと

一 ご自身は実際に潔白でいらしても。
二 律師の言葉の中に「この法師ばらなむ」（三一頁）とあった。
三 たちのよくない京童べ。都の無頼の若者たち。
四 世間の人には、どのように抗弁し、そんなことはなかったと、証を立てることができましょう。それは不可能なことだ、の意。
五 大体、行き届かない人たちばかりが、お側についていて。女房たちを責める。
六（母として）宮に皇女としての誇りを失わぬお暮しをと念じていられたのに。
七 色めかしく、ご身分にふさわしからぬ浮き名がお立ちになるであろうことを。「世づかはし」は、男女のことにかかわり合うというほどの意。
八 こうして少し気分のはっきりしている時に。「隙」は、病の隙。
九 そちらへお伺いすべきですが。娘ながら、皇女としての身分を立てて言う。こちらから行くのを、相手の側を立てて「来」というのは当時の言い方。
一〇 頬のあたりに垂れる前髪。それが、涙に濡れて一つにもつれているのである。
一一 昨夜の夕霧とのことで、重ね着た単の縫い目がほころびたのである。

少将、委細を宮に報告

ひけむこそ、いといみじけれ。何とも残念なことです[一] うちうちの御心ようおはすとも、あれほどまでに言った かくまで言ひつる法師ばら、[二] よからぬ童べなどは、[三] まさに言ひ残してむや。[四] 人には、いかに言ひあらがひ、さもあらぬことと言ふべきにかあらむ。[五] すべて心幼き限りしも、ここにさぶらひて」とも、えいまでおっしゃれない とてもお苦しそうなご容態のところに のたまひやらず。いと苦しげなる御ここちに、思いもかけぬことに胸をお痛めなので ものをおぼしおどろきたれば、いかにもおいたわしい有様だ いといとほしげなり。[六] 気高うもてなしきこえむとおぼいたるに、[七] 世づかはしう、軽々しき名の立ちたまふべきを、一通りでなくご心痛になる おろかならずおぼし嘆かる。[八]（御息所）「かうすこしものおぼゆる隙に、わたらせた 下さるよう宮に申し上げよ こちらにおいで まうべう聞こえよ。[九] そなたへ参り来べけれど、動きすべうもあらで 身動きも叶わない有様ですので なむ。見たてまつらで、久しうなりぬるここちすや」と、涙を浮けてのたまふ。（宮のもとに）（少将）しかじかとおっしゃっておいでです 参りて、「しかなむ聞こえさせたまふ」とばかり聞こゆ。

とだけ申し上げる

言い触らさずにおきま

［宮は］
わたりたまはむとて、御額髪[一〇]の濡れまろがれたる、ひきつくろひ、単[一一]の御衣ほころびたる、着かへなどしたまひても、とみにもえ動い

すぐにも

一二 この少将の君なども、昨夜のことをどう思っているだろう。以下、宮の心中。

一三 脚気。現在の脚気と同じものと考えられている。地中の寒暑風湿などの悪い気がまず脚にあたり、やがて身体の上部にも及ぶとされた。

一四 物事をあれこれひどく気に病んでお思いなので、脚の気が上にあがったのだった。草子地。

一五 御息所に、宮様の御ことを、それとなく申し上げた人がいるようでございます。「はべべけれ」は、「はべんべけれ」の撥音無表記の形。

一六 この夕霧とのことだけに限らず、柏木との不本意な結婚以来。以下、落葉の宮の心中。御息所は、もともと柏木との結婚に賛成でなかったが、その柏木にも宮は先立たれた。

たまはず。[一二]この人々もいかに思ふらむ、[御息所が]まだえ知りたまはで、後に[お思い]いささかも聞きたまふことあらむに、つれなくてありしよ、とおぼ[少しでもお耳に入ることがあったら]しあはせむも、いみじうはづかしければ、また臥したまひぬ。[宮]「こ[気分とても気の引けることなので合せになるのも]がとても悪くてなりません]こちのいみじうなやましきかな。[このまま直らぬことにでもなったら]やがてなほらぬさまにもなりなむ、[何もかも好都合というものです]いとめやすかりぬべくこそ。[一三]脚の気の上りたるここちす」と、[どおさせになる]おしくださせたまふ。[一四]ものをいと苦しう、さまざまにおぼすには、気ぞあがりける。

少将、「[一五]上に、この御ことほのめかし聞こえける人こそはべべけれ。[一体どうしたことなのか]いかなりしことぞ、と問はせたまうつれば、ありのままに聞こえさせて、[懸金のことぐらいを]御障子のかためばかりをなむ、すこしこと添へて、[大げさに]けざやかに聞こえさせつる。[もしそのように何かお尋ねでもございましたら]もしさやうにかすめきこえさせたまはば、[私と同じように]同じさまに聞こえさせたまへ」と申す。[御息所の]ご心痛の様子はお話し申し上げ[ない]嘆いたまへるけしきは聞こ[あああはりと]え出でず。さればよと、[宮は]いとわびしくて、ものものたまはぬ御枕より、[とてもつらくて]雫ぞ落つる。[一六]このことにのみもあらず、身の思はずになりそめ

一 夕霧は、このまま引きさがることもなく。以下、再び、宮の心中。

二 まして、だらしなく、男の甘言に従っていたら、どんなひどい評判を立てられることだろうなどと。

三 （今度の場合、自分は潔白なのだから）多少はお気持の慰められる点はあるけれども。

四 わが身の成行きを情けなく思い沈みなさって。「宿世」は、前世からの因縁。

五 御息所のいる寝殿の東面と宮のいる西面との間の塗籠。「塗籠」は、建物の一郭を四方壁を塗りこめて調度類など納めておく部屋。

母娘、対面しての嘆き

六 （病気にもかかわらず）日頃の礼儀をお崩しにならず。

七 考えてみますと、あさはかな未練というものでございます。永別の時が迫っているのに、という気持。

八 お別れしてあと（死別ののち）、きっとお目にかかれるというわけのものでもございますまい。

九 もう一度この世に生を享けましても、何にもならぬことでございます。お互い顔も見知らぬであろうからである。輪廻転生の考え方からいう。

しより、いみじうものをのみ思はせたてまつることと、生けるかひなく思ひ続けたまうて、この人は、かうても止まで、とかく言ひかづらひ出でむも、わづらはしう、聞き苦しかるべう、よろづにおぼす。まいて、いふかひなく、人の言によりて、いかなる名を朽さましなど、すこしおぼしなぐさむるかたはあれど、かばかりになりぬる高き人の、かくまでもすずろに人に見ゆるやうはあらじかしと、宿世憂くおぼし屈して、夕つかたぞ、「なほわたらせたまへ」とあれば、中の塗籠の戸あけあはせてわたりたまへる。

（御息所は）苦しき御ここちにも、（宮を迎えて）なのめならずかしこまりかしづききこえたまふ。常の御作法あやまたず、起き上がりたまうて、（御息所）「いと乱りがはしげにはべれば、わたらせたまふも心苦しうてなむ。この二日三日ばかり見たてまつらざりけるほどの、年月のここちするも、かつはいとはかなくなむ。後かならずしも、対面のはべるべきにもはべらざめり。まためぐり参るとも、かひやははべるべき。思へば、た

ひどいご心配ばかりおかけしていることだと
生きているかい
始末に悪く
言い寄ってくることも
不愉快なことだろうと
あれとこれとこれから
自分のように皇女とも
こんなに簡単にうっかり男に逢うなどということはあってよいものかと
あろう高貴な女が
妻戸を双方からあけて
（御息所）それでもおいで下さい
（宮を迎えて）並々ならずへりくだって大切におもてなし申し上げ
とてもむさくるしくしておりますので
おいで頂くのも恐縮に存じまして

一〇 思えば、ほんの一時のうちに別れ別れにならねばならない無常迅速のこの世ですのに、それを勝手についつい親子の情にほだされてきましたのも、今となってはくやまれるほどでございます。「ならふ」は、習慣になる意。

一一 宮は、ひどく内気なご性分で、昨夜のことをはきはきと弁明なさるなど思いも及ばぬことゆえ、ただ消え入るような思いでいられるので。

一二 外聞を憚って、少将の君あてと使いの者に言わせたのである。

一三 宮は、またまた（御息所の手前）立つ瀬もない思いをする。宮の思いを直接地の文として書く。

一四 さすがに気になさって。

夕霧から二通目の手紙

前に、宮をいたわって「いかなりしなども問ひきこえたまはず」とあったが、御息所はそういう気づかいも捨てて、という気持。

一五 御息所は、ひそかに、宮を夕霧に許そうと、折れる気持にもなっていられて。事ここに及んでは止むを得ないという気持になっていたのである。

だ時の間に隔たりぬべき世の中を、あながちにならひはべりにけるも、くやしきまでなむ」など泣きたまふ。宮も、もののみ悲しう取り集めおぼさるれば、聞こえたまふこともなくて見たてまつりたまふ。一二 ものづつみをいたうしたまふ本性に、際々しうのたまひさはやぐべきにもあらねば、はづかしとのみおぼすに、いといとほしうて、いかなりしなども問ひきこえたまはず。大殿油など急ぎ参らせて、御台などこなたにて参らせたまふ。もの聞こしめさずと聞きたまひて、とかう手づからまかなひなほしなどしたまへど、触れたまふべくもあらず。ただ御ここちのよろしう見えたまふぞ、胸すこしあけたまふ。

（これと）（お言葉もなくて）（あれ）（〔御息所を〕）（どういういきさつだったのかともお尋ね申されない）（お食膳などこちらでさし上げなさる）（〔宮が〕何も召し上がらないと）（何かとご自分でお食事をととのえ直しなどなさるけれども）（〔宮は〕手もおつけになれない）（御息所のご気分がいくらかよくおなりのご様子に〔宮は〕少しはほっとなさる）

京の夕霧

かしこよりまた御文あり。（事情を知らぬ女房があいにく受け取って）心知らぬ人しも取り入れて、「大将殿より、一三 少将の君にとて御文あり」と言ふぞ、一三 またわびしきや。少将、御文は取りつ。御息所、「いかなる御文にか」と、一四 さすがに問ひたまふ。一五 人知れずおぼし弱る心も添ひて、下に待ちきこえたまうける

（〔女房〕夕霧）（どういうお手紙なのか）（夕霧の訪れを心待ちしていられたの）

一 そうでもないのだろう（今夜たずねては来ないのだろう）とお思いになるのも、気が気でない思いで。もう暗くなった今頃手紙が来るのでは、今夜の訪れはないのだろうと判断する。それでは宮は一夜で見限られたことになる。

二 いけませぬ。返事をしなくてはいけないの意。

三 一度立った悪いお噂を、よいように言い直してくれる人はいないものです。実事のありなしにかかわらず、噂が立った以上は仕方がないと言う。

四 （お返事をしないのは）かえってよくない、いい気な仕打ちでしょう。

五 お話にもなりませぬ冷たいお気持のほどをはっきりお見受けしまして。昨夜、宮の拒否にあったことをいう。

六 これから先の浮き名をどうせ隠しおおせるものでないのなら、私を拒もうとすればするほど、あなたの考えのなさがはっきりするばかりです。「せく」（堰）「浅さ」「つつみ」（「包み」と「堤」の掛詞）は「山川」の「川」の縁語。

七 （昨夜の仕打ちのみならず）このお手紙も。

八 今夜尋ねても来ないのを。「つれなし」は、平然と冷たいさま。

九 亡くなった柏木のお気持が心外に思われた時。柏木が落葉の宮に冷たかったこと。以下、御息所の心中。

（御息所）さあ

に、一さもあらぬなめりと思ほすも、心騒ぎして、「いで、その御文、やはりお返事をなさいませなほ聞こえたまへ。二あいなし。三人の御名をよさまに言ひなほす人は難きものなり。あなた一人が潔白だとお思いでもそこに心きようおぼすとも、そう信じてくれる人はしか用ゐる人は少なくすなおにお手紙のやりとりをなさってこそあらめ。心うつくしきやうに聞こえ通ひたまうて、やはり今まで通りのお付合いをするのがよいでしょうなほありしままならむこそよからめ。四あいなきあまえたるさまなるべし」とて、[手紙を]召し寄す。[少将は]困ったけれどもお渡しした苦しけれどたてまつりつ。

（夕霧）五 あさましき御心のほどを見たてまつりあらはいてこそ、なかなか楽になりまして無茶な気持にもなってしまいそうです心やすく、かえって気がひたぶる心もつきはべりぬべけれ。

六 せくからに浅さぞ見えむ山川の

流れての名をつつみ果てずは

と言葉も多かれど、[御息所は]終りまでご覧にもならない見も果てたまはず。七この御文も、我慢なりかねるいい気な書きぶりけざやかなるを示したものでもなくけしきにもあらで、めざましげにここちよ顔に、今宵つれなきを、何という仕打ちかと八いといみじとおぼす。九故督の君の御心ざまの思はずなりし時、いと情けなく思ったけれども表向きの柏木の仕向けは憂しと思ひしかど、おほかたのもてなしは、また並ぶ人なかりしか きちんと結婚の気持 とても またとなく宮を大事に扱われたの

一〇 こちらの方に強みがある気がして気持を慰めていた、それでさえ、とても満足はできなかったのに。皇女で正室という強みがあった。

一一 致仕の太政大臣。

御息所、夕霧に返書

一二 おかしな鳥の足跡のような筆跡で。（五巻柏木二七四頁注四参照）

一三 女郎花（落葉の宮）の嘆きしおれている野辺（小野の山荘）を、一体どことお思いで、ただ一夜だけお泊りになったのでしょう。「秋の野に狩りぞ暮れぬる女郎花今宵ばかりの宿も貸さなむ」（『古今六帖』二、小鷹狩、貫之。『貫之集』一）による。今宵の訪れのないのを責めた歌であるが、同時に、母親として娘を許すという意思表示にもなっている。

一四 捻り文にして。書状を巻いて上下の端を捻るように折った形。

一五 （今までご気分がよかったのは）御物の怪が油断させて隙をうかがっていたのかと。

一六 律師をはじめ効験のある僧たちすべて、それぞれ大声をあげて修法にはげむ。

ば、一〇こなたに力あることちしてなぐさめしだに、世には心もゆかざりしを、あないみじや、大殿のわたりに思ひのたまはむこと、と思ひしみたまふ。

（何ということだろう）（心を）（一一）（お痛めになる）

なほいかがのたまふと、けしきをだに見むと、ここちのかき乱りくるるやうにしたまふ目おししぼりて、一二あやしき鳥の跡のやうに書きたまふ。

（打診だけでもしてみようと）（気分がひどく悪くて）（涙でかきくもったようにおなりの目を）

（御息所）すっかり弱ってしまいました私を

たのもしげなくなりにてはべる、とぶらひにわたりたまへるをりにて、そそのかしきこゆれど、いとはればれしからぬさまにものしたまふめれば、見たまへわづらひてなむ。

（〔宮は〕見舞にこちらにお出での折ですので）（〔お返事を〕おすすめするのですけれど）（見るに見かねまして）（ひどくふさぎ込んでいられるご様子ですので）

女郎花しをるる野辺をいづことて
一夜ばかりの宿を借りけむ

（一三）（一四）

と、ただ書きさして、おしひねりて出だしたまうて、臥したまひぬるままに、いといたく苦しがりたまふ。御もののけのたゆめけるにやと、人々言ひ騒ぐ。例の、験ある限り、いと騒がしうののしる。

（途中まで書いて）（横におなりになったかと思うと）（一五）（女房たち）（一六）

宮をば、「なほわたらせたまひね」と、人々聞こゆれど、御身の憂きままに、後れきこえじとおぼせば、つと添ひたまへり。

夕霧

大将殿は、この昼つかた、三条殿におはしにける、今宵立ち返りまでたまはむに、ことしもあり顔に、まだきに聞き苦しかるべし、など念じたまひて、いとなかなか年ごろの心もとなさよりも、千重にもの思ひ重ねて嘆きたまふ。北の方は、かかる御ありきのけしき ほの聞きて、心やましと聞きゐたまへるに、知らぬやうにて、君達もて遊びまぎらはしつつ、わが昼の御座に臥したまへり。

宵過ぐるほどにぞ、この御返り持て参れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、とみにも見解きたまはで、御殿油近う取り寄せて見たまふ。女君、もの隔てたるやうなれど、いと疾く見つけたまうて、はひ寄りて、御うしろより取りたまうつ。「あさましう、こは、いかにしたまふぞ。あな、けしからず。六条の東の上の御文なり。今朝、風おこりてなやましげにしたまへるを、院の御前には

女房たち　ぴったりお側についていられる　雲居の雁　まだ何もないのに外聞が悪かろう　気持を抑えなさって　ほんとにかえって今まで長いこと気をもんでいたよりも　こうした小野へのお出かけの様子を　小耳にはさんで　おもしろくないとお思いでいらしたので　見知らぬふりをして　しからぬ乱れた筆跡なので　すぐにも　ご判読なされず　人ごとのような顔をしていらしたが　雲居の雁　そっと近づいて　〔夕霧の〕　〔手紙を〕　〔夕霧〕　とんでもない　これは　どうしたお振舞か　何と　不届きな　風邪がひどくてお苦しそうでいらしたのに　源氏　伺候

一　どうぞあちらへおもどり下さい。物の怪が宮にのり移るのを恐れてのこと。

二　お身の上の情けなさを思うあまり、母君に遅れず自分もご一緒に死んでしまいたいとお思いなので。

三　夕霧の自邸。朝方は六条の院に帰ったことが前の二七頁に見える。

夕霧、雲居の雁に御息所の返書を奪われる

四　今晩も折り返し小野に出向かれるのは。「まで」は「まうで」の「う」無表記の形。

五　いかにも宮との間に何かあったようで。結婚当初なら三夜続けて通うのがしきたりだが、という考慮。

六　あれこれと悩みを重ねてお嘆きになる。「心には千重に思へど人に言はぬわが恋妻を見むよしもがな」（『古今六帖』四、恋。原歌『万葉集』巻十一）。『釈』以下に引く。

七　お子たち。

八　昼間の常の御座所。

九　御息所の返書。

一〇　花散里。朝方、花散里のもとに寄ったことが、とっさの嘘に役立った。

一一 ただ今どんなお加減かと、お見舞をさし上げたのです。

一二 これが恋文のように見えますか。御息所の筆跡であるし、捻り文の体裁は、普通の書状の立文（上下を単に折り返したもの）に似る。恋文は、結び文にする。

一三 （手紙を）大切そうに取り返そうともなさらないので、雲居の雁は、奪ってはみたものの、すぐにも見ないで手に持ったままでいられる。「ひこしろふ」は「ひきしろふ」に同じ。強く引っ張る意。

一四 あなたの方こそ、もうずっとそうなのですわ。「心ならひ」は、心の習慣。「なべかめり」は「なるべかるめり」の音便「なんべかんめり」の撥音無表記の形。

一五 びくびくものの、あの鳥の雄鷹のような暮しをしているのは。「せう」は、『和名抄』に「漢語抄云、大鷹、於保太加、兄鷹、勢宇。今案、俗説、雄鷹謂二之兄鷹一、雌鷹謂二之大鷹一也」とある。鷹は雌が幅を利かして雄が小さくなっているというのである。

べりて出でつるほど、またもまうでずなりぬれば、いとほしさに、（おいたわしくて）（もう一度お伺いもできなかったので）

今の間いかにと聞こえたりつるなり。見たまへよ、懸想びたる文の（ご覧になるがよい）（一二）

さまか。さても、なほなほしの御さまや。年月に添へて、いたうあ（それにしても）（はしたないことをなさるものよ）（としつき）（がたつにつれ）（ひどく私を馬鹿になさるのが情けないことです）

なづりたまふこそうれたけれ。思はむところを、むげに恥ぢたまは（私がどう思おうと）（ちっとも気にもなさらないことだ）

ぬよ」と、うちうめきて、惜しみ顔にもひこしろひたまはねば、さ（嘆息して）（一三）

すがにふとも見で持たまへり。「年月に添ふるあなづらはしさは、（雲居雁）年月がたつにつれ馬鹿になさるのは）（持）

御心ならひなべかめり」とばかり、かくうるはしだちたまへるに憚（一四）（〔夕霧が〕こんなに落着いていられるのに）（はばか）

りて、若やかにをかしきさましてのたまへば、うち笑ひて、「そは、（けおされて）（かわいらしい顔付きで）（〔夕霧〕それは）

ともかくもあらむ。世の常のことなり。またあらじかし、よろしう（どちらでもいいでしょう）（夫婦とはそんなものです）（ほかに例もありますまい）（相当な地位をも築いた）

なりぬる男の、かくまがふかたなく、一つ所を守らへて、もの懼ぢ（こんなにわき目もふらずに）（一人の妻を守り通して）（一五）（そんな）

したる鳥のせうやうのもののやうなるは。いかに人笑ふらむ。さる（阿呆な男に後生大事に守られていられるのは）（あなたとしても名誉にもならぬことだ）（たくさ）

かたくなしき者に守られたまふは、御ためにもたけからずや。あま（んの妻妾の中で）（一段と）（飛び抜けて）（別格に重んじられているといったのこそ）（世間の見）

たがなかに、なほ際まさり、ことなるけぢめ見えたるこそ、よその（ると）（ところも奥ゆかしく）（自身の気持としても）（新鮮な感じで）（夫婦の間のしゃれた風）

おぼえも心にくく、わがここちもなほ古りがたく、をかしきことも

一　年寄りが何やらを大事にしたとかいうように。典拠明らかでないが、『韓非子』五蠹に、宋人の田を耕す者が、兎が木の株に触れて頸を折って死んだのを見て、その株を守ってまた兎を得ようとして国中の笑いを買ったという話がある。

二　無関心をよそおってはいるものの、この手紙を、さりげなくうまく巻き上げようというつもりで。「をこつる」は、だまし誘う意。

三　その見栄えとかいうものをこしらえ上げようとなさるので、私のようなお婆さんは立つ瀬もありません。「いづこの栄かあらむ」を受けて、落葉の宮のことを諷して言う。夕霧二十九歳、雲居の雁三十一歳。

四　前々から慣れさせてもお置きにならないで。「かねてよりつらさをわれにならはさでにはかにものを思はするかな」（『源氏釈』所引。出典未詳）

五　急にこうなったとお思いになるほどに、私のどこが変ったというのでしょう。前注の引歌による答え。

六　やはりあの「緑の袖」（六位風情）が尾を引いて、内心私を馬鹿にしているものだから。大輔の乳母が告げ口するのだろうと言う。かつて「めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ」（三巻少女二五三頁）と苦情を言って夕霧の自尊心を傷つけた。「緑の袖」の語は四巻螢八〇頁に、大輔の乳母の名は同じく藤裏葉三〇一頁に見える。

七　巻き添えにされたお人（落葉の宮）にとっても、ご迷惑なことです。

情も深い情愛も長続きするというものです
あはれなるすぢも絶えざらめ。かく翁のなにがし守りけむやうに、
愚かなていたらくですから　お話にもなりません　何の見栄えが　ありましょう
おれまどひたれば、いとぞくちをしき。いづこの栄かあらむ」と、
気をそらすよ
さすがにこの文の、けしきなくをこつり取らむの心にて、あざむき
うなことを言われると
申したまへば、いとにほひやかにうち笑ひて、「もののはえばえし
はなやかに　（雲居雁）
さ作り出でたまふほど、古りぬる人苦しや。いと今めかしくなり変
いやに若返ってしまわれたご様子　今までそんなあなたを知らずにきた私なのですから
れる御けしきのすさまじさも、見ならはずなりにけることなれば、
には何というお方かと心外でなりませんが
つらくてたまらないのです四
いとなむ苦しき。かねてよりならはしたまはで」とかこちたまふも、
文句をおっしゃるのも
憎からず思われる（夕霧）五
憎くもあらず。「にはかにとおぼすばかりには、何ごとか見ゆらむ。
しようのない疑い深さですね　よくないことをあなたのお耳に入れるお側の人がいる
いとうたてある御心の隈かな。よからずもの聞こえ知らする人ぞあ
昔から私のことをよく思っていないのです　どうしてか
るべき。あやしう、もとよりまろをばゆるさぬぞかし。なほかの緑
あなたをうまくあやつろうという
の袖の名残、あなづらはしきにことづけて、もてなしたてまつらむ
魂胆でもあるのでしょうか　耳ざわりなこともちらほら聞えてくるようです
と思ふやうあるにや、いろいろ聞きにくきことどもほのめくめり。
どうせそうなることなのだとお思いなので　特に弁解もしない
七　あいなき人の御ためにも、いとほしう」などのたまへど、つひにあ
るべきこととおぼせば、ことにあらがはず。

翌日一日中、夕霧、隠された手紙を探す

八 夕霧は、無理に探して取り上げようともせず、さりげない顔付でお寝みになったので。

九 何とかして取り上げたいものだと。以下、夕霧の心中。

一〇 前に雲居の雁が「わが昼の御座に臥したまへり」（四〇頁）とあった所であろう。

一一 雲居の雁。「女君」と呼ばず、敬語抜きなのは、その人に遠慮抜きで親しく密着した書き方。次に夕霧も単に「男」と呼ばれる。

一二 夕霧がこんなふうに探そうとも思っていらっしゃらぬ様子なので、なるほど色恋とは関係のないお手紙だったのだと、気にもかけていないので。

一三 お人形を作り、立て並べて（一緒に）お遊びになる。「ひろひす（据）う」は、あちこちに置く意であろう。

一四 漢籍の素読をしたり、お習字をしたりなど。これは少し大きい子たちのお勉強である。

大輔の乳母、いと苦しと聞きて、ものも聞こえず。とかく言ひしろひて、この御文はひき隠したまうつれば、せめてもあさり取らで、つれなく大殿籠りぬれば、胸はしりて、いかで取りてしがなと、御息所の御文なめり、何ごとありつらむと、目も合はず思ひ臥したまへり。女君の寝たまへるに、昨夜の御座の下など、さりげなくて探りたまへど、なし。隠したまへらむほどもなければ、いと心やましうて、明けぬれど、とみにも起きたまはず。女君は、君達におどろかされて、ゐざり出でたまふにぞ、われも今起きたまふやうにて、よろづにうかがひたまへど、え見つけたまはず。女は、かく求めむとも思ひたまへらぬをぞ、げに懸想なき御文なりけりと、心にも入れねば、君達のあわて遊びあひて、雛作りひろひすゑて遊びたまふ。書読み、手習ひなど、さまざまにいとあわたたし。小さき児這ひかかり引きしろへば、取りし文のことも思ひ出でたまはず。男は、異事もおぼえたまはず、かしこに疾く聞こえむとおぼすに、昨夜の御

（とてもつらく思って）（黙りこくっている）（あれこれ言い合いをして）（雲居雁が）（胸騒ぎして）（一体何があったのだろうと）（眠っていられる間）（何げないふうで）（お隠しになる場所もないはずなので）（はなはだおもしろくなくて）（すぐにも）（お子たちに）（ご自分も）（起されて）（帳台から）（あたりに目をおくばりになるけれども）（騒がしく皆で遊んで）（それぞれにとても騒がしい）（着物を）（引っ張るので）（小野）（お返事したいとお思いになるが）（ほかのことは頭にもなく）

文のさまも、（内容）えたしかに見ずなりにしかば、見ぬさまならむも、（はっきりと読めないでしまったので）散（手紙）らしてけるとおしはかりたまふべしなど、思ひ乱れたまふ。（をなくしたのだとお察しになるだろうなどと）

二 誰も誰も御台参りなどして、のどかになりぬる昼つかた、（やっと静かになった）思ひわ（困ってし）づらひて、「昨夜の御文は何ごとかありし。（どんなご用事でした）あやしう見せたまはで。（どうしてかお見せ下さらなくて）今日もとぶらひに聞こゆべし。（お見舞い申さねばなりません）なやましうて、（気分がすぐれなくて）六条にもえ参るまじ（六条の院）（参上できそうも）ければ、文をこそはたてまつらめ。（手紙をさし上げることにしよう）何ごとかありけむ」（どんなご用事だったのだろう）とのたまふ（ないので）が、いとさりげなければ、（いかにも何げない言い方なので）文は、をこがましう取りてけりと、すさ（手紙のことは口になさらないで）まじうて、そのことをばかけたまはず、「一夜の深山風に、あやま（雲居雁）ちたまへるなやましさなりと、をかしきやうにかこちきこえたま（夕霧）へかし」と聞こえたまふ。「いで、このひがことな常にのたまひそ。（世間並みの浮気男とお思いなのが）何のをかしきやうかある。世人になずらへたまふこそ、なかなかは（思えばおかしなこの私の生真面目ぶりを）づかしけれ。この女房たちも、かつはあやしきまめざまを、かくの（冗談ごとのように言い紛らわして）たまふとほほゑむらむものを」と、たはぶれごとに言ひなして、（かえって気の引）「その文よ。いづら」とのたまへど、とみにもひき出でたまはぬほ（その手紙だが）（どれ）（すぐにも持ち出していらっしゃらない間）

一 見ないで書いたと分るようなことでは。見当違いの返事を出したら、の意。

二 どなたもお食事をすませたりなさって。「台」は、食膳。

三 手紙を取ったりしたのは、ほんとに馬鹿なまねをしたものだと、気持がそがれて。

四 先夜の深山風にあたって、具合がおかしくなられたらしいと、風流者きどりで（花散里に）泣き言を申されたらよいでしょう。小野で風邪でも引いたらしいとでもおっしゃいと、落葉の宮のことを諷して言う。「深山風」の「み」は諸本「御」。改め読む。

五 何と、そんな見当違いなことを、いつもいつもおっしゃるでない。邪推だと、たしなめる。

夕方、ようやく手紙を見つける

六 「ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける」（『古今集』巻四秋上、読人しらず）。なお前の一七頁の小野の情景もこの歌を踏まえていた。

七 小野の山荘では、今頃もうどんなに霧が深く立ちこめていることだろう。以下、夕霧の焦慮する心中。「山の蔭」は前引の歌による措辞。

八 茵（しとね）。座布団。夕霧のであろう。

九 ほっともなさり、どうしてこんな簡単な所に気が付かなかったのかと馬鹿らしくも思われるので。

一〇 昨夜だって、どんな思いで夜をお明かしだったろう、今日も、今までお返事もさし上げないでと。

一一 よほど思い余られた末でなくては、こんなお手紙はお書きにならなかったろう、それなのに、返事もないままで昨夜も明けてしまってどんなお気持だったろうと。娘を許すとまで書いた御息所の苦衷を察する。

一二 雲居の雁の仕打ちが、とても恨めしく、情けなく思われる。

どに、なほ物語など聞こえて、しばし臥したまへるほどに、暮れにけり。

（お話など申し上げて）（横になっていられるうちに）

六 ひぐらしの声におどろきて、七 山の蔭いかに霧りふたがりぬらむ、あさましや、今日この御返りことをだにと、いとほしうて、ただ知らず顔に硯おしすりて、いかになしてしにかとりなさむと、ながめおはする。八 御座の奥のすこし上がりたる所を、こころみにひき上げたまへれば、これにさしはさみたまへるなりけりと、九 うれしうもをこがましうもおぼゆるに、うち笑みて見たまふに、かう心苦しきことなむありける。胸つぶれて、一夜のことを、心ありて聞きたまうけるとおぼすに、いとほしう心苦し。一〇 昨夜だに、いかに思ひ明かしたまうけむ、今日も、今まで文をだにと、いはむかたなくおぼゆ。いと苦しげに、いふかひなく、書きまぎらはしたまへるさまにて、一一 おぼろけに思ひあまりてやは、かく書きたまうつらむ、つれなくて今宵の明けつらむと、いふべきかたのなければ、女君ぞ、いとつら

（はっと気づいて）（今日中にせめてこのご返事だけでもと）（困ってしまって）（何ということか）（何げなく）（手紙をどうしてしまったことにしようかと）（思案にくれていられる）（持ち上がっている）（〔手紙を〕）（こんな痛ましい内容のお手紙なのだった）（どきりとして）（先夜のことを）（何かあったようにお聞きになったのだと）（おいたわしく胸が痛む）（言いようもない気持になられる）（にわかに意味の判じかねるようなお手紙の書きぶりでとてもお苦しそうに）（しまりもなく）（くやんでもくやみきれないので）

一 手紙を、あろうことか、あのように悪ふざけして隠して。夕霧の心中。

二 いやもう。それというのも、もともと自分がいけなかったのだと自認する気持を表わす。

夕霧、とりあえず返書を送る

三 (落葉の宮が) 簡単に逢ってはくれないであろうものの、御息所もこんなふうに(自分を婿として許すと)おっしゃっておいでだし、どんなものだろう。

四 今日はちょうど坎日にも当っていることだし。「坎日」は、陰陽道で、外出その他を忌む凶の日。正月辰、二月丑、三月戌、四月未、五月卯、六月子、七月酉、八月午、九月寅、十月亥、十一月申、十二月巳、各月それぞれの日とされた。

五 このお叱りは何としたことなのでしょう。「一夜ばかりの宿を借りけむ」の歌をさす。

六 そちらにお伺いはいたしましたが、かりそめの契りなど結んだおぼえはありません。「草」の縁で「枕むすぶ」と言い、旅寝の意。「仮寝」は、しばらくの間眠ること。

七 昨夜お伺いしませんでしたことへのお咎めは、ご無体というものでしょうか。「ひたやごもり」は「直屋籠り」(家に閉じ籠る、が原義)で、そっけない、曲がないというほどの意。一方的な決めつけ方だという気持。

自分のしつけが悪かったのだと　あれこれとわが身も責められて　何もかも泣きたいような気持がなさる

う心憂き。一すずろにかくあだへ隠して、二いでや、わがならはしぞやと、さまざまに身もつらくて、すべて泣きぬべきここちしたまふ。

このまま小野にお出かけになろうと思うけれども

やがて出で立ちたまはむとするを、三心やすく対面もあらざらむものから、人もかくのたまふ、いかならむ、四坎日にもありけるを、もし万が一にも婿としてお迎え下さったらしたまさかに思ひゆるしたまはば、あしからむ、なほよからむことをこそと、うるはしき心におぼして、まづこの御返りを聞こえたまふ。

縁起が悪かろう　やはり何ごとも難のないよう　几帳面な性格からお考えになって　とりあえず

(夕霧)

いとめづらしき御文を、五かたがたうれしう見たまふるに、この御咎めをなむ。いかに聞こしめしたることにか。

あれこれにつけ　どのようにお聞きあそばしたのでしょうか

六秋の野の草のしげみは分けしかど
仮寝の枕むすびやはせし

言い訳を申し上げますのも筋の通らぬことですが

あきらめきこえさするもあやなけれど、七昨夜の罪はひたやごもりにや。

落葉の宮　こまごまとお書きになって

とあり。宮には、いと多く聞こえたまひて、御厩に、足疾き御馬に

八 移鞍という。移馬（官吏の公用の乗馬用として左右の馬寮に飼われている馬）に置く一定の型式の鞍。駿足の馬に公用の鞍を用いさせたというのは、使命の重さを印象づける。

九 先夜も同行した「御司の将監よりかうぶり得たる、むつましき人」（一九頁）。

一〇 昨夜の不参と、返事が今まで遅れた言い訳である。

御息所、嘆きのあまり、病勢あらたまる

一一 昨夜も何食わぬ顔で訪れる様子もなかった（夕霧の）ご態度に、我慢なりかねて。

一二 かえって当の落葉の宮ご本人のお心の内は、この件を特に情けないことども、心を動かすほどのこともないので。夕霧の訪れのないのをかえって幸いとするほどの気持であろう。

八 移鞍置きて、一夜の大夫をぞたてまつれたまふ。「昨夜より、六条の院にさぶらひて、ただ今なむまかでつると言へ」とて、言ふべきやうささめき教へたまふ。

（夕霧）一〇 今帰って来たところです

使者としての口上をひそひそと指示なさる

小野

かしこには、昨夜もつれなく見えたまひし御けしきを、忍びあへで、後の聞こえをもつつみあへず恨みきこえたまひしを、その御返りだに見えず、今日の暮れ果てぬるを、いかばかりの御心にかはと、もて離れてあさましう、心もくだけて、よろしかりつる御こころ、またいといたうなやみたまふ。なかなか正身の御心のうちは、このふしをことに憂しともおぼしおどろくべきことしなければ、ただおぼえぬ人に、うちとけたりしありさまを見えしことばかりこそくちをしけれ、いとしもおぼししまぬを、かくいみじうおぼいたるを、あさましうはづかしう、あきらめきこえたまふかたなくて、例よりもものの恥ぢしたまへるけしき見えたまふを、いと心苦しう、ものをのみ思ほし添ふべかりける、と見たてまつるも、胸つとふたがりて

一一 後々の世間の噂も気にしていられずに恨みの手紙をさし上げなさったのに

そのお返事すら

一体どのようなおつもりなのかと

もってのほかのあきれたことと

心も千々に乱れて

少しはおよろしかったご気分が

お苦しみになる

一二 気を許していた何の用意もない姿を見せたことは残念に思われるけれども

それほど気にもしていられないのに〔御息所が〕こんなひどいお悲しみようなので

事を分けて弁解なさるすべもなくて

言いようもなく気はずかしく

思い

〔御息所は〕

いつもよりも恥じらいの色が深くていらっしゃる様子にお見えなのを

次から次へと物思いばかりなさるお身の上なのだ

胸も一杯にふさがる思いで

一　いくらそうしたご運とは言え、思いのほかしっかりしたところがおありでなくて、人の非難をお受けになるでしょうことを。夕霧とのことで、これから世間の非難の的になるだろうと言う。

二　取るにも足らぬ身の上ながら。わが娘ながら落葉の宮に対して卑下して言う。落葉の宮について「下臈の更衣腹におはしましければ」（五巻若菜下一九九頁）とあった。

三　普通の人でも。臣下でも、の意。

四　夫一人にまみえるといったことは。「王歇曰、忠臣不レ事二二君一、貞女不レ更二二夫一」（『史記』田単列伝、『説苑』）。『河海抄』に引く。

五　まして（皇女ともあろう）あなたのようなお方には、そんなにいい加減に、男のお近づき申してよいことでもありませんのに。夕霧のことを言う。

六　思ってもみませんでした心外なお身の上と、今までも心を痛めておりましたが。柏木との結婚も自分としては不本意だったと言う。

七　お父上の致仕の太政大臣に対しても。

悲しければ、（御息所）「今さらにむつかしきことをば聞こえじと思へど、一（いろいろうるさいことは申し上げたくないと思いますが）なほ御宿世とはいひながら、思はずに心幼くて、人のもどき負ひたまふべきことを、取り返すべきことにはあらねど、今よりは、なほさ（今さら取り返しのつくことではありませんが）（今後は）（やはりお）気をつけなさいませる心したまへ。二数ならぬ身ながらも、よろづにはぐくみきこえつる（力の及ぶ限り大切にお世話申してきました）を、今は何ごとをもおぼし知り、世の中のとざまかうざまのありさまをも、おぼしたどりぬべきほどに見たてまつりおきつることと、（何もかもよくお分りになりが）（世間というもののあれこれの事情も）そなたざまはうしろやすくこそ見たてまつりつれ、なほいといはけて、強い御心おきてのなかりけることと、思ひ乱れはべるに、今し（もう十分にお考えになれるまでにお育て申し上げてきたものとばかり）（まだとても頼りなくて）（しっかりしたお心構えもできておいでなかったと）（心配でなりませんので）（もうし）ばらくの短い命も取り止めたい思いでおります）ばしの命もとどめまほしうなむ。三ただ人だに、すこしよろしくなり（多少とも人並みの身分に生い）（育った女が）ぬる女の、四人二人と見る例は、心憂くあはつけきわざなるを、五ましてかかる御身には、さばかりおぼろけにて、人の近づききこゆべきにもあらぬを、六思ひのほかに心にもつかぬ御ありさまと、年ごろも見たてまつりなやみしかど、さるべき御宿世にこそは、院よりはじ（そういうご運だったのでしょう）（朱雀院）（気持がお折れになり）めたてまつりて、おぼしなびき、七この父大臣にもゆるいたまふべき（よかろうというほどのご内）

八 あとあとまでおもしろからぬお身の上を。柏木に先立たれたことをいう。

九 あなたご自身の罪というわけでもありませんから、ただ大空をながめ恨んでは、今までお世話申し上げてきましたのに。「身の憂きを世の憂きとのみながむればいかに大空苦しかるらむ」（出典未詳。『紫明抄』以下に引く）

一〇 そうなったとしても、世間であなたがどう噂されようとそれは知らぬ顔をして。

一一 せめて世間並みの夫婦として（夕霧と）お暮しになるのでしたら、そんなふうに過していかれるうちには。

一二 どんなお生れあわせで、気の休まることもなくひどいご苦労をなさらねばならぬ因縁につきまとわれておいでなのでしょう。

一三 物の怪なども、こうした弱目につけこんで勢いづくものなので。

諾がおありでしたので御けしきありしに、私おのれ一人しも心をたてても、一人が我を張っても いかがはと思しかたのないことと思って承知したことですので寄りはべりしことなれば、末の世までものしき御ありさまを、わが御あやまちならぬに、大空をかこちて見たてまつり過ぐすを、いとかう人のためわがための、先様としてもこちらとしても何かと聞き苦しいことがこれからいろいろ起ってきそうに思よろづに聞きにくかりぬべきことの出で来添われますのがひぬべきが、一〇さてもよその御名をば知らぬ顔にて、世の常の御ありさまにだにあらば、おのづからあり経むにつけても、気持の慰めなぐさむれることもあろうかと思ってみましたのにことともやと思ひなしはべるを、こよなう情なき人の夕霧御心にもはべりけるかな」と、つぶつぶと泣きたまふ。

どうしようもなく独りぎめにしておっしゃるのでいとわりなくおしこめてのたまふを、あらがひはるけむ言の葉もなくて、[宮の]ただうち泣きたまへるさま、おっとりとしていじらしい様子だおほどかにらうたげなり。うと見つめながらちまもりつつ、(御息所)ほんとにどこが人に劣っておいでしょうでしょうあはれ何ごとかは人に劣りたまへる。一二いかなる御宿世にて、やすからずものを深くおぼすべき契り深かりけむ」などのたまふままに、それはひどくお苦しみになるいみじう苦しうしたまふ。一三もののけなども、かかる弱目に所得るものなりければ、にはかに消え入りて、息もとだえて見る見るうちにただ冷えに

一 願など立てて大声で祈念なさる。蘇生を願う願を立てるのである。

二 深い誓いを立てて、今は命終るまでと心を決めた山籠りなのに。以下、願文の趣旨を要約した体。前に「山籠りして、里に出でじと誓ひたるを」（一二頁）とあった。

三 修法の護摩壇。（一四頁注三参照）

四 （今頃手紙が届くようなことでは）今晩もおいでにはならないのだろうと。

五 情けない、（落葉の宮は）世間の語り草として人に後ろ指さされることになろう。皇女なのに一夜で男に捨てられたということになろう。以下、御息所の心中。夕霧からの来信が致命的な打撃になった。

六 どうして私までが、あのような歌を詠み送って、つまらぬ証拠を残したのだろう。「一夜ばかりの宿を借りけむ」の歌のこと。

七 あまりのはかなさに人々の気落ちと悲しみは言葉に言い表わしようもない。

八 一七頁注一三参照。「参る」は、してさし上げる。

九 自分もご一緒に死にたいと悲しみに沈まれて。

一〇 きまった運命の死出の旅路では。

御息所死去　宮の悲嘆

冷えきってしまわれる
冷え入りたまふ。律師も騒ぎたちたまうて、願など立てののしりたまふ。深き誓ひにて、今は命を限りける山籠りを、かくまでおぼろけならず出で立ちて、壇こぼちて帰り入らむことの、面目なく、仏を
こうまで一方ならぬ志によって出てきたのに　壊して　山に　仏
おあわてになって
もお恨みにお思い申そうという旨を
もつらくおぼえたまふべきことを、心を起こして祈り申したまふ。
一心不乱に　仏に
泣きうろたえなさる様子は
宮の泣きまどひたまふこと、いとことわりなりかし。
いかにも無理からぬことと思われる

夕霧
かく騒ぐほどに、大将殿より御文取り入れたる、ほのかに聞きたまひて、今宵もおはすまじきなめりと、うち聞きたまふ。心憂く、世の例にもひかれたまふべきなめり、何にわれさへさる言の葉を残しけむ、とさまざまおぼし出づるに、やがて絶え入りたまひぬ。あへなくいみじと言へばおろかなり。昔より、もののけには時々わづらひたまふ。限りと見ゆるをりをりもあれば、例のごと取り入れたるなめりとて、加持参り騒げど、今はのさま、しるかりけり。
受け取った旨を　御息所は
今までのいきさつをお思い出しになると　そのまま息が絶えてしまわれた
御息所は　最期のご様子は
失わせたのだろうと
もういけないと見える折々も今まであったので
誰の目にも明らかだった
いつものように物の怪が気を

宮は、後れじとおぼし入りて、つと添ひ臥したまへり。人々参りて、「今はいふかひなし。いとかうおぼすとも、限りある道には、
もうしかたはございません　そんなにひどく悲しまれても　ぴったりすがりついていられる　女房たち

一一 本当に縁起でもございません、亡きお方にとっても、成仏のお妨げになります。

一二 しかるべき僧たちだけ。近親者とともに三十日の忌に籠る僧たちであろう。後の五五頁注一六参照。

諸方よりの弔問
朱雀院のお手紙

一三 いつの間に知らせが届いたのかと思われるほどだ。

一四 西山の朱雀院。

一五 つい気を許していて（お見舞もさし上げなかった）。

帰っておいでになるはずもないことです　おあとを追おうとなさっても　どうしてお望

帰りおはすべきことにもあらず。慕ひきこえたまふとも、いかでか

みどおりになりましょう　今さら分りきった道理を申し上げて　（女房）一一

御心にはかなふべき」と、さらなることわりを聞こえて、「いとゆ

もうあちらへお移りなさいませ

ゆしう、亡き御ためにも罪深きわざなり。今は去らせたまへ」と、

〔宮は〕身体もこわばったように　何もお分りにならない

引き動かいたてまつれど、すくみたるやうにて、ものもおぼえたま

〔僧たちも〕ばらばらと帰るので　一部

はず。修法の壇こぼちて、ほろほろと出づるに、一二さるべき限り、か

の者はここに残るけれども　もう総てが終った様子は

たへこそ立ちとまれ、今は限りのさま、いと悲しう心細し。

諸方からのご弔問は　夕霧

所々の御とぶらひ、一三いつの間にかと見ゆ。大将殿も、限りなく聞

真先にお見舞い申し上げなさる　源氏

きおどろきたまうて、まづ聞こえたまへり。六条の院よりも、致仕

もう次から次へと

の大殿よりも、すべていとしげう聞こえたまふ。一四山の帝も聞こしめ

しみじみとしたお手紙をお寄せあそばした

して、いとあはれに御文書いたまへり。宮は、この御消息にぞ、御

頭もたげたまふ。

（朱雀院）このところ重くおわずらいだと聞いてはおりましたが　今までも病気がちだとばか

日ごろ重くなやみたまふと聞きわたりつれど、例もあつしうのみ

り聞いていましたその慣れから　悔んでもかいない人のこと

聞きはべりつるならひに、一五うちたゆみてなむ。かひなきことをば

は言うまでもないが　悲しみにくれていられるであろう様子はいかばかりかと思うと　深く

さるものにて、思ひ嘆いたまふらむありさまおしはかるなむ、あ

胸が痛みます
はれに心苦しき。一なべての世のことわりにおぼしなぐさめたまへ。
[宮は涙に]
とあり、目も見えたまはねど、御返り聞こえたまふ。
ふだんからそうしてほしいと御息所はご希望だったこととて
常にさこそあらめとのたまひけることとて、二今日やがてをさめたてまつるとて、三御甥の大和の守にてありけるぞ、よろづにあつかひきこえける。骸をだにしばし見たてまつらむとて、四宮は惜しみきこえたまひけれど、五さてもかひあるべきことならねば、皆いそぎたちてゆゆしげなるほどにぞ、大将おはしたる。「今日よりのち、日ついであしかりけり」など、人聞きにはのたまひて、いとも悲しうあはれに、宮のおぼし嘆くらむことをおしはかりきこえたまうて、「かくしも急ぎわたりたまふべきことならず」と、人々いさめきこゆれど、しひておはしましぬ。

万端をお世話申し上げるのだった
なきがらでもせめてもうしばらくご一緒にいたいと
そうしたところで仕方もないことなので
夕霧
(夕霧)今夜をはずしては
暦の日
人の聞く手前はおっしゃって
このように直ぐにご自身お出ましになるものではありません
お側の者たちがお諫めする

道のりも
途中はいかにもものさびしい
見るから不吉な感じに
[山懐ろに]
ほどさへ遠くて、入りたまふほどいと心すごし。ゆゆしげに引き隔てめぐらしたる儀式のかたは隠して、六この西面に入れたてまつる。大和の守出で来て、泣く泣くかしこまりきこゆ。七妻戸の簀子におし

隔ての幕を引き廻らしたる物ものしい式場は目につかぬように
ご挨拶に出て
恐縮のよしを申し上げる

一 世間の人誰しもの逃れられぬ（無常の）道理なのだと、お心をお慰めなさい。出家の人らしい言い方。

その夜、御息所の葬儀、夕霧の来訪

二 今日（今夜）直ちにご葬儀を執り行うということで。「をさむ」は、埋葬する意。

三 御息所の甥。大和は大国でその守（長官）は従五位上相当。

四 落葉の宮は、すぐに火葬にするに忍びないとおっしゃるけれども。葬儀の日延べを希望する趣。

五 皆が葬儀の支度に立ち働いて、邸内がいかにも凶事のあった家の様子を呈しているところへ。

六 落葉の宮の居室だった寝殿の西面。

七 （夕霧は）妻戸の前の簀子（廊下）の高欄に背をおもたせになって。

かかりたまうて、女房呼び出でさせたまふに、ある限り、心もをさまらず、ものおぼえぬほどなり。かくわたりたまへるにぞ、いささかなぐさめて、少将の君は参る。ものもえのたまひやらず。涙もろにおはせぬ心強さなれど、所のさま、人のけはひなどをおぼしやるもいみじうて、常なき世のありさまの、人の上ならぬもいと悲しきなりけり。ややためらひて、「よろしうおこたりたまふさまにうけたまはりしかば、思うたまへたゆみたりしほどに、夢もさむるほどはべなるを、いとあさましうなむ」と聞こえたまへり。おぼしたりしさま、これに多くは御心も乱れにしぞかしとおぼすに、さるべきとは言ひながらも、いとつらき人の御契りなれば、いらへをだにしたまはず。「いかに聞こえさせたまふとか聞こえはべるべき。いと軽らかならぬ御さまにて、かくふりはへ急ぎわたらせたまへる御心ばへを、おぼしわかぬやうならむも、あまりにはべりぬべし」と、口々聞こゆれば、「ただおしはかりて。われは言ふべきこともおぼ

呼び出させなさるけれども　女房たちは皆　悲しみに気も　多少は気　何の分別もつかないでいる　[夕霧が]　こうしておいで下さったので　そぞろで　涙もろく　[夕霧は]　何もしかとはおっしゃれない　はいらっしゃらない気丈な方だが　持もほっとして　少し涙を収めて　(夕霧)　少しはおよろしく病勢もおさまられたようにお聞きしていましたので　安心して気を許していましたうちに　[宮に]　ご挨拶申し上げる　亡くなられた　わざわざ早速にお出で下さいましたお気持のほどが　軽々しからぬご身分でありながら　(少将)　どのようにおっしゃっておいでですと申し上げたらよろしいのでしょう　お返事もなさらない　いかにも恨めしい夕霧とのご縁なので　のはそれがさだめとは言え　お分りでないようなのも　あまりなおあしらいでございましょう　私はどんなご挨拶をしたらよいのか分り

一 夢でも、さめる時がございましょうに、これはまた何としたことなのでございましょう。夢かと思われるほどの驚きだが、これは夢ではない、の意。「はべるなるを」は、「はべんなるを」の撥音無表記の形。「なる」は、伝聞推定の助動詞。

二 御息所のご心痛だったご様子、この夕霧とのことで主にはご気分もひどくお悪くなったのだとお思いになると。落葉の宮の心中。

三 そなたたちのはからい次第に。よいように返事せよ、の意。

一 このところは、亡きお方（御息所）と変らないようなご様子でございますので（ご挨拶申し上げられません）。落葉の宮が悲しみに人心地もないと言う。

二（これ以上申し上げては）お恨みを申し上げるようなことになってしまいましょう。夕霧の気持を斟酌して、また後日ゆっくり、と話を端折る。

三 何やら間違ったことを申し上げることもあろうかと存じます。

四 それでは。夕霧が「またしづまりたまひなむに、参り来む」と、辞去する旨を告げたのに応ずる。

五 悲しみもいつかは薄れる、そうしたものだから、の意。

六 帰る潮時を失って愚図々々しているのも、高い身分柄見苦しく、さすがに周囲もざわついているので。葬儀の支度に人の出入りも多いのである。

えず（ません）」とて、臥したまへるもことわりにて（ごもっともなので）、「ただ今は、亡き人と異ならぬ御ありさまにてなむ。わたらせたまへるよしは（お越し下さいました旨は）、聞こえさせはべりぬ」と聞こゆ。この人々もむせかへるさまなれば（応対の女房たちも涙にむせ返っている有様なので）、「聞こえやるべきかたもなきを（私自身も気持が落着き）、今すこしみづからも思ひのどめ（こちら様も）、またしづまりたまひなむに（どうしてこんな急なことになったのかと前後のお心の静まられた頃に）、参り来む。いかにしてかくにはかにと（ご事情が知りたく思われます）、その御ありさまなむゆかしき」とのたまへば、まほにはあらねど（はっきりとではないが）、かの思ほし嘆きしありさまを（御息所のお悲しみだった様子を）、片端づつ聞こえて（一段と何が何やら分らずに私どもも取り乱しておりますので）、「かこちきこえさするさまになむなりはべりぬべき。今日は、いと乱りがはしきここちものまどひに、聞こえさせ違ふることどもはべりなむ。さらば、かくおぼしまどへる御ここちも（こんなに悲しみにくれていらっしゃるお気持も）、限りあることにて、すこししづまらせたまひなむほどに、聞こえさせうけたまはらむ」とて、われにもあらぬさまなれば、のたまひ出づることも口ふたがりて、「げにこそ闇にまどへるここちすれ。なほ聞こえなぐさめたまうて、いささかの御返りもあらばなむ」などのたまひおきて、立ちわづら

（お話も申し上げ承りもいたしましょう）（悲しみに我を失った様子なので）（お話しになろうとすることも何も言えない気持で）（夕霧）ほんとに闇の中をさまようような気持です（何とか宮のお気持をお慰め下さって一言のお返事でも頂ければうれしく思います）

御息所の葬儀　夕霧の助力

七 まさか今夜ではあるまいと思っていた葬儀の様々の支度が、とても簡略でそっけないのを。夕霧の心。「したため」は、準備、処置。

八 前に「栗栖野の庄近からむ」（一九頁）ともあった。

九 手伝いの人数なども大勢で執り行われたのだった。

一〇 めったにない大将殿（夕霧）のご配慮です。

一一 母君の跡形もなくなられて何という悲しいことかと。火葬の煙となってしまったこと。

一二 親と申し上げるお間柄でも、ほんとにこんなに悲しまれるほど日頃から仲むつまじくしてはいけないことなのでした。草子地。落葉の宮の悲嘆を強調する。

一三 宮もまたどうなっておしまいかとご心配申し上げる。

一四 こんな小野のようなさびしい所ではお暮しになれますまい。お悲しみのまぎれる時とてありますまい。京の一条の宮に帰ることをすすめる。

一五 峰に立ち昇った御息所の火葬の煙。

一六 死穢のため、三十日間、近親者が忌に籠る。それとともに籠る僧たち。

一七 召使の者たちの起居する建物。

ひたまふも軽々しう、さすがに人騒がしければ、帰りたまひぬ。

今宵しもあらじと思ひつることどものしたため、いとほどなく際しきを、いとあへなしとおぼいて、近き御庄の人々召し仰せて、さるべきことどもつかうまつるべく、おきて定めて出でたまひぬ。ことのにはかなれば、そぐやうなりつることども、いかめしう、人数なども添ひてなむ。大和の守も、「ありがたき殿の御心おきて」など、よろこびかしこまりきこゆ。名残だになくあさましきことと、宮は臥しまろびたまへどかひなし。親と聞こゆとも、いとかくはならはすまじきものなりけり。見たてまつる人々も、この御ことを、またゆゆしう嘆ききこゆ。大和の守、残りのことどもしたためて、「かく心細くてはえおはしまさじ。いと御心の隙あらじ」など聞こゆれど、なほ峰の煙をだに、気近くて思ひ出できこえむと、この山里に住み果てなむとおぼいたり。御忌にこもれる僧は、東面、そなたの渡殿、下屋などに、はかなき隔てしつつ、かすかにゐたり。

（いかにもあっけないとお思いになって）（必要ないろいろの支度をご奉仕するように）（指図してからお帰りになった）（急のご葬儀なので）（何かと簡素にするようだった諸儀式も）（盛大になり）（お礼を申し上げ恐縮し申し上げる）（身をもんで涙に沈まれるがいたし方もない）（お側の女房たちも）（落葉の宮）（葬儀のあと始末をして）（お近い所でお思い出し申し上げようと）（宮は）（かりそめに間仕切りをして）（ひっそりと控えている）

一 寝殿の西廂。母屋も避け、しつらいも質素にして忌に籠る。

二 夕霧の来訪は「八月中の十日ばかり」（一三頁）とあった。月が変って二月にわたるので「月ごろ」という。

三 木の葉の蔭もなくなって。木々が裸になり、空もあらわに望めるような山荘の寒々としたたたずまいをいう。

落葉の宮の悲嘆
夕霧に心解けず

四 大体がもの悲しい晩秋の空の風情に気持をそそられて。落葉の宮の悲しみをいう。

五 自分の命までもが思い通りにならないと。あとを慕って死ぬことも叶わぬのか、という気持。「命だに心にかなふものならば何か別れの悲しからまし」（『古今集』巻八離別、しろめ）。意味するところは逆だが、この歌を踏んだものか。『河海抄』には「命さへ心にかなふものならば死にはやすくぞあるべかりける」（出典不明）を引く。

六 忌に籠って死者の供養に念仏をとなえる僧。

七 あのとんでもない心外な一件を。夕霧とのこと。以下、落葉の宮の思い。母君の死の原因は夕霧にあると思う。

八 女房たちも、お取りなしのしようもなく困り果てている。お返事をとうながすわけにもいかないのである。

日の明け暮れもお分りでないほどだが

一西の廂をやつして、宮はおはします。明け暮るるもおぼしわかねど、

二月ごろ経ければ、九月になりぬ。

三 山おろしいとはげしう、木の葉の隠ろへなくなりて、よろづのこ

何もかもがいかにもうらぶれた感じの季節なので

四 〔涙の〕といといみじきほどなれば、おほかたの空にもよほされて、干る間

わが身にも愛想の尽きる思いがなさる

五 もなくおぼし嘆き、命さへ心にかなはずと、いとはしういみじうお

お側の女房たちも　何かにつけ　悲しみにくれている　夕霧

ぼす。さぶらふ人々も、よろづにもの悲しう思ひまどへり。大将殿

心細げな　お見舞のお手紙をさし上げなさる

六 は、日々にとぶらひきこえたまふ。さびしげなる念仏の僧などなぐ

一息つ　何かの食物衣料などを送って慰問させなさり　落葉の宮

けるようにと

さむばかり、よろづのものをつかはしとぶらはせたまひ、宮の御前

しみじみと情をこめた言葉を尽してそのつれなさをお怨み申し　また一方で　重ね重

には、あはれに心深き言の葉を尽くして怨みきこえ、かつは、尽き

ねねんごろなお見舞を申し上げなさるけれども　〔宮は〕手に取ってご覧にもならず

もせぬ御とぶらひを聞こえたまへど、取りてだに御覧ぜず、すずろ

病に弱られたお気持で　頭からそうだと思い詰めなさって

にあさましきことを、弱れる御ここちに、疑ひなくおぼししみて、

お亡くなりになってしまったことを　ご成仏の妨げにもなるのでは

消え失せたまひにしことをおぼし出づるに、後の世の御罪にさへや

この夕霧のお噂だけでもちらりとお耳になさる　ないかと

なるらむと、胸に満つここちして、この人の御ことをだにかけて聞

胸も一杯になる気がして　一層恨めしく情けない涙がどっとあふれる思いがなさる　と

七 きたまふは、いとどつらく心憂き涙のもよほしにおぼさる。人々も

夕霧の思い

九 いくら悲しいといっても、時がたてば悲しみも薄らぐものなのに。以下、夕霧の思い。

一〇 全くお門違いに、花よ蝶よと色めいたことを筆にするのならともかくも。「男女などに寄せつつ、花や蝶やと言へれば」（『三宝絵』序）

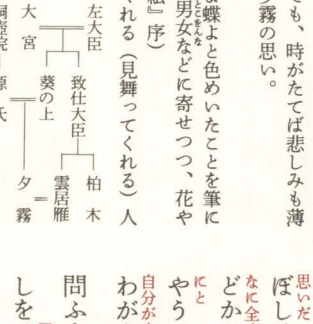
一一 どうですかと尋ねてくれる（見舞ってくれる）人は。

一二 夕霧を育ててくれた祖母の大宮。

一三 致仕の太政大臣。大宮の長子。

一四 死別はこの世のさだめと割り切った風情で、表向きの盛大なご供養を営むだけで子としての勤めを果されたので。源氏も、致仕の大臣の人柄について「人柄あやしうはなやかに、男々しきかたによりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをばたてて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きところはなき人になむものせられける」（四巻野分一三一頁）と夕霧に語ったことがある。

一五 亡き柏木。大宮は父方の祖母に当る。



聞こえわづらひぬ。

一行の御返りだにもなきを、しばしは心まどひしたまへるなどおぼしけるに、あまりにほど経ぬれば、悲しきことも限りあるを、なにとなく全く人の気持もお分りでないようなことでいいものだろうか聞き分けもなくまるで子供のようなどかかくあまり見知りたまはずはあるべき、いふかひなく若々しきにと思いだったがやうにと、うらめしう、異事の筋に、花や蝶やとかけばこそあらめ、自分が心から悲しいと思いわが心にあはれと思ひ、もの嘆かしきかたざまのことを、いかにと哀悼の思いに堪えないでいることについて問ふ人は、親しみを感じ心からうれしく思われるものだむつましうあはれにこそおぼゆれ、大宮の亡せたまへりしを、〔自分は〕いと悲しと思ひしに、致仕の大臣のさしも思ひたまへらず、

一四 ことわりの世の別れに、公々しき作法ばかりのことを孝じたまひしに、恨めしくおもしろくなく思ったのに源氏つらく心づきなかりしに、六条の院の、なかなかねむごろに、後の御ことをもいとなみたまうしが、わがかたざまといふなかにも、うれしう見たてまつりしそのをりに、故衛門の督をば、取り好ましい人と思うようになったのだ〔柏木は〕落着いていて何ごとにも深く分きて思ひつきにしぞかし、人柄のいたうしづまりて、ものをいた心をとどめる性分だったので大宮の死を悲しむ気持も一段と人より深かったのが慕わう思ひとどめたりし心に、あはれもまさりて人より深かりしが、な

最初のうちは宮のお悲しみのあまりのことと夕霧はお

それほどお悲しみの様子もなく

自分の親というひいき目からだけで

なく

しい人柄と思われたのだ
つかしうおぼえし、など、所在なくあれこれとものを思い続けられるばかりでつれづれとものをのみおぼし続けて、明かし暮らしたまふ。

雲居の雁
女君、なほこの御仲のけしきを、一体どういうことだったのだろういかなるにかありけむ、御息所とこそ、文通はしもこまやかにしたまふめりしか、手紙のやりとりもねんごろにしておられたようだがなど思ひ得がた合点のゆかぬ思いで〔夕霧が〕ぼんやり眺めてくて、夕暮の空をながめ入りて臥したまへる所に、若君してたてまつれたまへる。はかなき紙の端に、ありあわせた

（雲居雁）三
「あはれをもいかに知りてかなぐさめむ
あるや恋しき亡きや悲しき

〔夕霧は〕苦笑して　前々もこんなふうに
どちらか分らないのが情けのうございます
おぼつかなきこそ心憂けれ」とあれば、ほほゑみて、さきざきもか疑って文句をおっしゃったがく思ひ寄りてのたまふ、四似げなの亡きがよそへや、何げないふうにとおぼす。いと疾く、ことなしびに、

（夕霧）五
「いづれとかわきてながめむ消えかへる
露も草葉のうへと見ぬ世を

この世の無常こそが悲しいのです
おほかたにこそ悲しけれ」と書いたまへり。やはりこのように本心をお明かしなほかく隔てたまへる

雲居の雁と夕霧の贈答

一　こうした夕霧と落葉の宮お二人の間柄を。
二　二人の間の男の子。
三　あなたのお悲しみも、何が原因と知ってお慰めしたらよいのでしょう、あとに残られたお方（落葉の宮）が恋しいのでしょうか、それとも亡くなられたお方（御息所）のことが悲しいのでしょうか。
四　「亡きや悲しき」と、自分が御息所の死を悲しんでいるのかもしれないといった言い方は、今さらしらじらしい。落葉の宮とのことをはっきり疑っているくせに、という気持。
五　特に誰のことというわけで悲しみに沈んでいるわけでもありません、あっけなく消えてしまう露も、草葉の上のことだけではないこの世ですから―人皆命はかないこの世なのですから。落葉の宮のことははぐらかした返歌。

六 この世の無常を悲しむなどということは、知ったことではなくて。夕霧の歌の言葉によっていう。

七 夕霧は、落葉の宮がどんな気持でいられるのか、気がかりでたまらなくなって。返事もないのにいら立つ思い。

八 三十日の忌籠り。（五五頁注一六参照）

九 もう今となっては、身にふりかかったこのあらぬ噂を、どうして無理にも気に病むことがあろうか。夕霧の気持。「御」は地の文の気持の混入したもの。「なき名」（無実の噂）で熟した歌語に「御」がつく。

一〇 もう男として言い寄って、思いをとげるだけのことだ。「世づく」は、男と女としてつき合う意。

一一 落葉の宮ご本人は気強くお拒みになろうとも。以下、夕霧の心中。

一二 「一夜ばかりの宿を借りけむ」（三九頁）という御息所のお恨みの手紙。

一三 後に「十三日の月のいとはなやかにさし出でぬれば」（六三頁）とある。

一四 「風はやみ峰の葛葉のともすればあやかりやすき人の心か」（『拾遺集』巻十九雑恋、題しらず、読人しらず）の言葉を借りたものであろう。

一五 鳴子。小さな竹筒を取り付けた板を縄につるし、縄を引いて鳴らして鳥を追う仕掛け。（図録六参照）

一六 悲しげである。秋、雄鹿は雌を求めて高い声で鳴く。

夕霧、再び小野を訪れる

〔雲居雁は〕並々ならず心を痛めておいでになることと、露のあはれをばさしおきて、ただならず嘆きつつおはす。

〔小野に〕

七 かくおぼつかなくおぼしわびて、またわたりたまへり。御忌など過ぎてからゆっくり尋ねよう 過ぐしてのどやかに、とおぼししづめけれど、気持を抑えておいでだったが さてもえ忍びたまはず、九 今はこの御なき名の、何かはあながちにもつつまむ、一〇 ただ世づきて、つひの思ひかなふべきにこそは、とおぼし立ちにけり。心をお決めになった 北の雲居の雁のお疑いを 方の御思ひやりを、無理に打ち消そうともなさらない あながちにもあらがひきこえたまはず。一一 正身は強うおぼし離るとも、かの一二 一夜ばかりの御恨み文をとらへどころに 潔白を言い張ることもおできになるまい 責めたら かこちて、一三 えしもすすぎ果てたまはじ、心強い思いなのだった とたのもしかりけり。

一三 九月十余日、野山のけしきは、深く見知らぬ人だにただにやはおぼゆる。ものの情趣の深く分らぬ人も心を動かされずにいられようか 山風に堪へぬ木々の梢も、一四 峰の葛葉も、心あわたたしうあて散るその中から せわしなげに先をあらそっらそひ散るまぎれに、尊き読経の声かすかに、念仏などの声ばかりして、人のけはひいと少なう、木枯の吹き払ひたるに、鹿はただ籬垣根のそばに のもとにたたずみつつ、山田の引板にもおどろかず、色濃き稲ども 常よりも一層物 のなかにまじりてうち鳴くも、一六 愁へ顔なり。滝の声は、いとどもの

思う人の悲しみをそそるかのように
思ふ人をおどろかし顔に、耳かしかましうとどろき響く。草むらの
心細そうに
虫のみぞ、よりどころなげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より、龍
胆の、われひとりのみ心長うはひ出でて、露けく見ゆるなど、皆例
ものこの季節の風情なのだが
のこのころのことなれど、をりから所からにや、いと堪へがたきほ
どのもの悲しさなり。

例の妻戸のもとに立ち寄りたまて、やがてながめ出だして立ち
やや慣れた感じの　　そのまま物思わしげに外を眺めて
まへり。なつかしきほどの直衣に、色こまやかなる御衣の擣目、い
光の弱まった　　遠慮もなく
とけうらに透きて、かげ弱りたる夕日の、さすがに何心もなうさし
まぶしそうに　　さりげなく扇をかざして顔をお隠しになっていられる手つきを
来たるに、まばゆげに、わざとなく扇をさし隠したまへる手つき、
女こそこうはありたいもの　　それもとてもこれほどにはと　　〔女房は〕
女こそかうはあらまほしけれ、それだにえあらぬをと、見たてまつ
る。もの思ひのなぐさめにしつべく、笑ましき顔のにほひにて、少
女房が一緒にいるかもしれないと気になって　　こまごまとしたご相談もおできにならない
将の君を、取り分きて召し寄す。簀子のほどもなけれど、奥に人や
添ひゐたらむとうしろめたくて、えこまやかにもかたらひたまはず。
（夕霧）もっと近くに　　ほっておかないで下さい
「なほ近くてを。な放ちたまひそ。かく山深く分け入る心ざしは、

一　自分ひとりだけいつまでも気長にすっくと花をもたげて。『枕草子』にも「龍胆は、枝ざしなどもむつかしけれど、異花どもの皆霜枯れたるに、いと花やかなる色あひにさし出でたる、いとをかし」（「草の花は」）とある。

二　御息所の亡きあと、また小野というさびしい場所柄のせいか。

三　寝殿の西面の妻戸（五二頁注六、七参照）。下の「たまて」は「たまうて」の「う」を表記しない形。

四　下に重ねた紅の色濃い袿の艶が、とても美しく透いて。「擣目」は、艶を出すために砧で打った痕。「けうら」は「きよら」に同じ。発音に引かれた表記。九月でまだ夏の直衣なので「透きて」という。

五　悲しみを紛らわすこともできそうな、（見ていると）つい笑みのこぼれそうなお顔の美しさで。

六　簀子は何ほどの広さもないけれども。御簾際の少将の君との距離は近いけれども。

七　こんな山深くまでわざわざ尋ねて来る私の気持には、あなたも心を閉ざすわけにはいかないでしょう。もっとうちとけてほしい、と言う。

八 霧も深いから、姿も見えまいと、少将をさそう。
九 特に少将の方に注意するでもないそぶりで。
一〇 構わぬではないかと強くすすめる気持。
一一 薄墨色の帷の几帳。喪中の調度のさま。
一二 几帳の帷の下から押し出している着物の裾が簀子に出たのを横に引き隠して。
一三 前に「御甥の大和の守にて」（御息所 大和守 少将の君）ありけるぞ」（五二頁）とあった。
一四 喪服の色。近親者ほど喪服の色を濃くする。
一五 櫟などのブナ科の実（どんぐり）で染めた黒い色。黒袍や喪服を染めるに用いる。
一六 略礼装として上に重ねる。唐衣、裳に代るもの。
一七 こうしていつ果てるともない御息所の御ことを悲しむ気持はもちろんのことですが。
一八 心も魂もどこかに抜け出てしまって。腑抜けのようになってしまって。
一九 あの御息所の最期の折のお手紙のこと。「一夜ばかりの宿を借りけむ」の歌のこと（三九頁）。
二〇 （お出で頂けぬばかりか）その夜のお手紙のお返事までもないままになってしまいましたことを。
二一 暗くなってしまいました頃の空模様に。いよいよ大将の訪れがないと確信された頃。
二二 そうした弱目につけこんで、いつもの御物の怪がお命をお取りしたのだとお見受けいたしました。
二三 以前のご不幸の折も。柏木の亡くなった時。

隔て残るべくやは。霧もいと深しや」とて、わざとも見入れぬさまに、山のかたをながめて、（夕霧）「なほなほ」と切にのたまへば、鈍色の几帳を、簾のつまよりすこしおし出でて、裾をひきそばめつつゐたり。大和の守の妹なれば、（お近い血のつながりがある上に）離れたてまつらぬうちに、（御息所が）幼くより生ほし立てたまうければ、（てになった人なのでー一三）衣の色いと濃くて、橡の喪衣一襲、小袿着たり。（夕霧）「かく尽きせぬ御ことはさるものにて、（申し上げようもない宮のお心の冷たさをそれに加えて嘆くうちに）聞こえむかたなき御心のつらさを思ひ添ふるに、（会う人ごとに）心魂もあくがれ果てて、見る人ごとに咎められはべれば、（とても気持の抑えようもありません）今はさらに忍ぶべきかたなし」と、いと多く恨み続けたまふ。かの今はの御文のさまものたまひ出でて、いみじう泣きたまふ。（少将）この人も、（それ以上にひどく涙にむせびながら）ましていみじう泣き入りつつ、「その夜の御返りさへ見えはべらずなりにしを、（ご最期の苦しいご容態の折に）今は限りの御心に、（そのままお思い詰めになって）やがてぼし入りて、暗うなりにしほどの空のけしきに、（正気もおなくなりになった）御ここちまどひにけるを、さる弱目に、例の御もののけの引き入れたてまつるとなむ見たまへし。過ぎにし御ことにも、（御息所は）もう少しで正気もなくおなりになりそのを）ほとほと御心まどひぬべかりし

うな時がよくございましたけれども　宮様もまるで同じひどいお悲しみようでしたのを　お慰め申をりをり多くはべりしを、宮の同じさまに沈みたまうしを、こしら
そうと気を張っておいでしたので　どうにか正気をお取りもどしなのでした
へきこえむの御心強さになむ、やうやうものおぼえたまうし。一この
御嘆きをば、御前には、ただわれかの御けしきにて、あきれて暮ら
させたまうし」など、とどめようもなく　とめがたげにうち嘆きつつ、はかばかしうも
はきはきしたもの言い　情けないお気持
もできず　そうです　それもあまりにも頼りない
あらず聞こゆ。「（夕霧）そよや。そもあまりにおぼめかしう、いふかひな
の持ちようです　恐れ多い申しようながら　誰を頼りにお思い申すことがおできにな
き御心なり。二今は、かたじけなくとも、誰をかはよるべに思ひきこ
れよう　世間のことはご断念になった雲の中
えたまはむ。三御山住みも、いと深き峰に、世の中をおぼし絶えたる
のようなお暮しでしょうから　お手紙のやりとりもむつかしい
雲のなかなめれば、聞こえ通ひたまはむこと難し。四いとかく心憂き
何もかも　前世からのさだめなのです
御けしき、聞こえ知らせたまへ。よろづのこと、さるべきにこそ。
五世にあり経じとおぼすとも、従はぬ世なり。まづはかかる御別れの、
御心にかなはば、あるべきことかは」など、よろづに多くのたまへ
［少将は］　お返事の申し上げようもなくて　溜息をつきながら控えている
ど、聞こゆべきこともなくて、うち嘆きつつゐたり。鹿のいといた
く鳴くを、「（夕霧）六われ劣らめや」とて、
（夕霧）七里遠み小野の篠原わけて来て

一　その母君のお亡くなりになったお悲しみには、宮様は、ただもう人ごこちもないようなご様子で、ぼんやりお過しなのでした。

二　母君の亡くなられた今となっては。

三　西山にお籠りの父君朱雀院も。

四　ほんとにこんな情けない私への冷たいお仕打ちを、あなたからよくご意見申し上げて下さい。

五　この世に生きていたくないとお思いでも、そうはいかない世の中です。第一、こうしたお別れ（御息所との死別）も、何もかも思い通りになるものなら、あり得るはずのことでしょうか。

六　私もひけを取ることではない。「秋なれば山とよむまで鳴く鹿にわれ劣らめやひとり寝る夜は」（『古今集』巻十二恋二、読人しらず）

七　人里も遠いので、この小野の篠原を踏み分けて来て、私もあの鹿のように声も惜しまず泣くことです。「しか」（そのように）に「鹿」を響かす。「山城の小

野の山辺の里遠み仮の宿りもとりぞかねつる」（『能宣集』。『河海抄』に「山人」「仮の宿りを」の形で引く）。「小野の篠原」は、もと普通名詞。「浅茅生の小野の篠原しのぶとも人知るらめや言ふ人なしに」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）など。

八 喪服も涙でしめりがちな、露深い秋の山里に住む私たちは、鹿の鳴き声に声を添えて泣き暮しております。少将の君の返歌。「藤衣」は、喪服。もと藤蔓などの繊維で織った粗末な着物。

九 少将を通じて何かと（宮に）申し上げなさるけれども。対面を望むのである。

夕霧、空しく帰る

一〇 今はこうして思いもかけず夢を見ていますようなはかないこの世の成行きを、少しでも思いあきらめる折がございましたなら。「さます」は「夢」の縁語。

一一 前に「九月十余日」（五九頁）とあった。

一二 暗いという名を持つ小倉の山でも迷うはずもなく京に帰ってこられると。「秋の夜の月の光しあかければくらぶの山も越えぬべらなり」（『古今集』巻四秋上、月をよめる、在原元方）。「小倉の山」は、大井川北岸の著名な歌枕、小倉山。

一三 落葉の宮の本邸。

帰途、一条の宮を見る

われもしかこそ声も惜しまね

とのたまへば、

藤衣（八）露けき秋の山人は

鹿のなく音に音をぞ添へつる

[夕霧は]まあまあ折が折として上手ではないがよからねど、をりからに、忍びやかなる声づかひなどを、ひっそりとしたよろしう聞きなしたまへり。あの応対ぶりとお思いになる

御消息（九）とかう聞こえたまへど、「今（宮）一〇はかくあさましき夢の世を、すこしも思ひさますをりあらばなむ、絶えぬ御いつもお見舞い頂きますおれも申し上げましとぶらひも聞こえやるべき」とのみ、すくよかに言はせたまふ。そっけなくお答えさせになる何とも張合いのない冷たい宮のお気持であることよと〔夕霧は〕いみじういふかひなき御心なりけりと、もの悲しげな嘆きつつ帰りたまふ。

道すがらも、あはれなる空をながめて、十三日（一一）の月のいとはなやかにさし出でぬれば、小倉（一二）の山もたどるまじうおはするに、一三条の宮は道なりけり。途中なのだった以前より一層荒れた感じでいとどうちあばれて、未申（ひつじさる）のかたの崩れたるを見西南の隅の築地塀の崩れから邸内を見ると入るれば、はるばるとおろしこめて、ずっと一面に〔格子を〕人影も見えず、月のみ遺水（やりみづ）の

面をあらはに澄みましたるに、大納言、ここにて遊びなどしたまうしをりをりを、思ひ出でたまふ。

（夕霧）見し人のかげすみ果てぬ池水に

ひとり宿守る秋の夜の月

とひとりごちつつ、殿におはしても、月を見つつ、心はそらにあくがれたまへり。「さも見苦しう、あらざりし御癖かな」と、御達も憎みあへり。上は、まめやかに心憂く、あくがれたちぬる御心なめり、もとよりさるかたにならひたまへる六条の院の人々を、ともすれば女の鑑のようにめでたき例にひき出でつつ、心よからずあいだちなきものに思ひたまへる、わりなしや、われも、昔よりしかならひなましかば、人目も馴れて、なかなか過ぐしてまし、世の例にしつべき御心ばへと、親兄弟よりはじめたてまつり、めやすきあえものにしたまへるを、ありありては、末に恥がましきことやあらむ、など、いといたう嘆いたまへり。

一 くっきりと以前よりも冴え冴えと光らせているのに。「澄み」に「住み」を響かせて、月の光が遣水の水面に宿る意味も籠める。

二 亡き柏木。死の直前、権大納言に任じられた（五巻柏木二八九頁）。

三 親しかった柏木の姿ももうここにない池の水に、ひとりこの家の留守を守る秋の夜の月よ。「かげ」に「影」と「光」を掛け、「すみ」に「住み」と「澄み」を掛ける。「光」「澄み」は「月」の縁語。「なき人の影だに見えぬ遣水のそこに涙を流してぞ来し」（『後撰集』巻二十哀傷、なくなりにける人の家にまかりて帰りての朝にかしこなる人につかはしける　伊勢）。『河海抄』に引く。

雲居の雁の思い

四 お邸（三条殿）にお帰りになっても。

五 心はここにない思いでいられる。「そら」は「月」の縁語。

六 重だった女房たち。

七 雲居の雁。「上」は、北の方の称。前の「御達」に対する。

八 すっかりもう何処ぞへ行ってしまったお心なのだろう。以下、雲居の雁の思い。

九 はた目もおかしくなく、かえってうまくいったであろうに。

一〇 世間のお手本にもできる実直な（夕霧の）お心掛けだと。

明け方、夕霧、小野へ手紙を書く

一一 小野への手紙。
一二 この前の時のように取り上げたりもなさらない。御息所の手紙を取り上げた時のことをいう（四〇頁参照）。
一三 声をおひそめだが、（雲居の雁には）それとなくお耳に入る。
一四 いつのことと思ってそちらにお訪ねしたらよろしいのでしょうか、いつまでも明けない夜の夢がさめましたらとか仰せでしたお言葉では。「今はかくあさましき夢の世を、すこしも思ひさますをりあらばなむ」（六三頁）と言った宮の言葉を受けて詠む。
一五 「いかにしていかによからむ小野山の上より落つる音無の滝」（出典未詳。『奥入』『河海抄』などに引く）。どうしたらよいのでしょう、の意。「音無の滝」は、大原、三千院の東側を登った所にある歌枕。相手から返事のない意味を籠める（図録一参照）。
一六 そのあとも「いかでよからむ」（どうかうまくゆけばよいが）などと口ずさんでいらっしゃる。前注に引く歌とは別の引歌があるかとも考えられるが、「いかにしていかによからむ」の調べにならって口ずさんだものか。

夜も明けがた近く、（お二人ともお互いにお話しになることもなくて）かたみにうち出でたまふことなくて、背き背きに嘆き明かして、朝霧の晴れ間も待たず、例の、文をぞ急ぎ書きたまふ。（雲居雁は）とても不愉快にお思いだが いと心づきなしとおぼせど、ありしやうにも奪ひたまはず。念入りに いとこまやかに書きて、（下に置いて書き付けた歌を吟じなさる）うち置きてうそぶきたまふ。忍びたまへど、漏りて聞きつけらる。

（夕霧）「いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の
夢さめてとか言ひしひとこと

上より落つる」（とでもお書きになったのだろうか）とや書いたまへらむ、おし包みて、（手紙を）名残も、「いかでよからむ」など口ずさびたまへり。人召して賜ひつ。（お返事だけでも）御返りことをだに見つけてしがな、（雲居雁は）様子を知りたいと なほいかなることぞと、（やはりどんな事情なのかと）けしき見まほしう（せめてこの目で見たいものだ）おぼす。（お思いになる）

（返事を）日たけてぞ持て参れる。（紫の色こまやかな紙がそっけない感じで）紫のこまやかなる紙すくよかにて、小少将ぞ、例の聞こえたる。（以前と変らず）ただ同じさまに、（宮のお返事は頂けぬ旨を書いて）かひなきよしを書きて、（お気の毒なあまり）「いとほしさに、（あの頂きましたお手紙に）かのありつる御文に、（宮様が）手習ひすさびたまへるを盗（お歌をいたずら書きなさいました）

のをこっそり　見るだけは見て下さったのだとお　返書の中に
みたる」とて、なかにひき破りて入れたり。目には見たまうてけり
思いになるだけでもうれしいのは　何とも体裁の悪いことではある　とりとめもなく書い
とおぼすばかりのうれしさぞ、いと人わろかりける。そこはかとな
ていられるのを　文句を続けてご覧になると
く書きたまへるを、見続けたまへれば、

（落葉宮）
朝夕に泣く音を立つる小野山は

絶えぬ涙や音無の滝

とでも　判読できようか
とや、とりなすべからむ。古言など、もの思はしげに書き乱りたま
へる、ご筆跡御手なども見所あり。人の上などにて、かやうの好き心思ひ
感心できない　正気の沙汰でもないことだと
いらるるは、もどかしう、うつし心ならぬことに見聞きしかど、自分
なるほど　とても心を抑えられそうにないことなのだ　不思議だ
のことにては、げにいと堪へがたかるべきわざなりけり、あやしや、
どうしてこうまでいらいらしなくてはならぬのか　と反省なさるけれども　思うようにも
などかうしも思ふべき心いられぞ、と思ひ返したまへど、えしもか
いかない
なはず。

源氏もこの噂をお耳になさって
六条の院にも聞こしめして、いとおとなしうよろづを思ひしづめ、
人の非難を受けることもなく　そつなく今まで過してこられたのを
人のそしりどころなく、めやすくて過ぐしたまふを、おもだたしう、
自分が昔若い頃に　いささか色恋に身をやつし
わがいにしへ、すこしあざればみ、あだなる名を取りたまうし面起

落葉の宮の手習の歌

一 朝に夕に亡き母を恋い慕って声をあげて泣いているこの小野山では、尽きもしない涙が、音無の滝になるのでしょうか。前頁注一五の「上より落つる」の歌に、触発されたもの。「小野山」は、小野郷の東に連なる比叡の前山一帯を称したものらしい。

二 そのほか、古歌など、もの悲しげにあれこれお書きになっているが。小少将の文面に「手習ひすさびたまへるを」とあったが、思いを自詠や古歌に託してすさび書きするのを「手習」という。

三 他人のことなどで、こんな浮気沙汰にあくせくするのは。以下、夕霧の思い。

源氏の心配

四 夕霧が、いかにも老成したふうで何事にも慎重に構えて。以下、源氏の心中の思い。

五 （親としても）誇らしく思い。

六 浮気だという評判をお取りになった不名誉の回復にもなると。このあたり、「取りたまうし」、次の「おぼしわたるを」と、地の文の気持で書かれている。

七 困ったものだ、どちらにも（当事者双方ともに）気の毒なことがいろいろ起るだろう。

八 赤の他人といった間柄でもないのだから。夕霧と致仕の太政大臣とは、伯父、甥で、かつ舅と婿の間柄。

九 致仕の太政大臣。雲居の雁の父。

一〇 前世からの因縁というものは、逃れようもないことなのだ。夕霧と落葉の宮とのことは、前世からの因縁なのだろうから、人の力ではどうにもなるまい、という気持。

一一 特に女の身にとっては、どちらにも（落葉の宮にも雲居の雁にも）困ったことになったものだと、そんなことにまで気を廻してこの話を心配なさる。

一二 このような話を聞くにつけても、自分の死んだあと、あなた（紫の上）のお身の上が気がかりだといったことをおっしゃるので。誰か思いを寄せる者がいるかもしれない、と心配する。

一三 情けないこと、それほど長く私をあとにお残しになるおつもりなのか。

一四 女ほど、身の処し方も窮屈で、かわいそうなものはない。以下、夕霧との間に浮き名の立っている落葉の宮に同情する紫の上の思い。

一五 この世に生きている晴れがましさも味わい、無常なこの世の所在なさも慰めることができよう。

紫の上の思い

こしに、うれしうおぼしわたるを、（うれしくお思いだったのに）いとほしう、いづかたにも心苦しきことのあるべきこと、さし離れたる仲らひにてだにあらで、大臣なども、いかに思ひたまはむ、（どうお思いになろう）さばかりのことたどらぬにはあらじ、宿世（一〇）といふもの、のがれわびぬることなり、（その程度のことが本人に分らぬはずはあるまい）ともかくも口入るべきことならず、（はさめることではない）とおぼす。（一一）女のためのみこそ、いづかたにもいとほしけれと、あいなく聞こしめし嘆く。

紫の上にも、来し方行く先のことおぼし出でつつ、（一二）かうやうの例を聞くにつけても、亡からむのち、うしろめたう思ひきこゆるさまをのたまへば、〔紫上は〕御顔うち赤めて、（一三）心憂く、（今までのこと先のことをお思いになって）さまで後らかしたまふべきにや、とおぼしたり。（一四）女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、（ものの情趣も）をりをかしきことをも、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば、（何も分らぬかのように引っ込み思案に黙っていたりしては）何につけてか、（一五）世に経るはえばえしさも、常なき世のつれづれをもなぐさむべきぞは、おほかたものの心を知らず、（一体何によって）いふかひなきものにならひたらむも、生ほ（大体が世間の常識もわきまえず）（つまらない女ということになってしまったのでは）（折にふさわしい風雅なことも）（とやこうと自分が口をさし）（お育て）

一 波羅榇国王の太子、慕魄という。容貌端正であったが、無数劫にわたる因果の理を知るゆえに、生れて十三歳になるまで口を閉じて物を言わなかったので、生き埋めにされようとしたが、この時はじめて物を言い、迎えられて王のあとをついで善政をしいたという（『仏説太子慕魄経』）。「慕魄」はまた「墓魄」「沐魄」とも表記される。無言の行の典拠とされる。

二 今上の第一皇女。明石の女御の所生で、紫の上が自分の手許で養育している。（五巻若菜下一六二頁）

三 夕霧がどう思っておられるのか様子も知りたいので。「思たまへらむ」は「思うたまへらむ」の「う」を表記しない形であろう。

源氏、夕霧と語ってその気持を探る

四 三十日の忌籠り。（五五頁注一六、五九頁参照）

五 人の死後、月日のたつことの早さをいう当時の諺と思われる。朝顔の巻に同様の表現がある（三巻朝顔二〇〇頁注五参照）。

六 余命いくばくもないこの世の生にしがみついていることよ。「朝の露に名利を貪り　夕の陽に子孫を憂ふ」（『白氏文集』巻二秦中吟「不致仕」）を転じて言ったもの。

七 四十九日の中陰（死者の来世の生のきまらない期間）の満ちる日、冥福を祈る仏事。

八 御息所の甥（五二頁注三参照）。「なにがし」は、実名を言ったのをぼかした書き方。

上げたであろう親も　ひどく不本意な思いをすることになるのではあるまいか

したてけむ親も、いとくちをしかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとい伝えのように　悪いことと善いこととのけじめが分っていながら　黙っているのも

ひのやうに、あしきことよきことを思ひ知りながら埋もれなむも、つまらないことだ　自分自身としても

いふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかで保つべきぞ、ほどよい身の処し方をするにはどうしたらよいか

いろいろお考えになるのも

とおぼしめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。

夕霧　〔六条院に〕

大将の君、参りたまへるついでありて、思たまへらむけしきもゆかしければ、（源氏）「御息所の忌果てぬらむな。昨日今日と思ふほどに、三十年より昔のことになるこの世の中なのだ　悲しく情けないことだな

三十年よりあなたのことになる世にこそあれ。あはれにあぢきなし

や。夕の露かかるほどのむさぼりよ。いかでかこの髪剃りて、よろ　眠い捨てたいと思うのに　なんといつまでも命があるかのように日を送っていることだ

づ背き捨てむと思ふを、さものどやかなるやうにても過ぐすかな。　（夕霧）もうどうでもよかろうと思われる人でも

いかにもみっともないことだな

いとわろきわざなりや」とのたまふ。「まことに惜しげなき人だに、

めいめいの気持としては捨てがたく思う世の中なのでございましょう

おのがじしは離れがたく思ふ世にこそはべめれ」など聞こえて、

（夕霧）「御息所の四十九日のわざなど、大和の守なにがしの朝臣一人あつ　世話を焼いていますが　思えばさびしいことでございます　しっかりした身寄りのない人は

かひはべる、いとあはれなるわざなりや。はかばかしきよすがなき

九 朱雀院からも、何かとお見舞はなされよう。夕霧の言葉を受けて、院からのお世話もあろうから御息所の御法事に疎漏はあるまい、と言う。

一〇 落葉の宮。源氏としては、誘いの水を向けたつもり。

一一 亡き御息所のこと。若菜下に、落葉の宮について「下臈の更衣腹におはしましければ」（五巻一九九頁）とあった。

一二 お人柄はどんなお方か存じません。落葉の宮については、話をそらすのである。

一三 落葉の宮のことについては頑として口を割らず、そしらぬていでいる。源氏の目に映じた夕霧の態度。

一四 これほど生一本な性格の男が、心にこうと思うようになったことは、意見をしても無駄だろう。以下、源氏の心。

人は、生ける世の限りにて、（生きている間だけはともかく）かかる世の果てこそ悲しうはべりけれ」と、聞こえたまふ。「院（源氏）よりもとぶらはせたまふらむ。（こうして死んでしまったあとは悲しいものでございます）一〇 かの御子、いかに思ひ嘆きたまふらむ。はやう聞きしよりは（以前耳にしていたよりは）、この近き年ごろ、ことに触れて聞き見るに、（何かにつけて）この更衣こそ、（なかなかしっかりした難のない人物の中に数えられる人だった）くちをしからずめやすき人のうちなりけれ。（世間一般のこととしても）おほかたの世につけて、惜しきわざなりや。（残念なことをしたものだ）さてもありぬべき人の、（もっと生きていてほしい人が）かう亡せゆくよ。（朱雀院）院も、いみじうおどろきおぼしたりけり。（あまり急なことにひどくお悲しみであられた）かの御子（落葉の宮）こそは、ここにものしたまふ入道の宮よりさしつぎには、（女三の宮についでは）らうたうしたまひけれ。（おかわいがりになっておられた）人ざまもよくおはすべし」とのたまふ。「（夕霧）一二 御心はいかがものしたまふらむ。（人柄もよくておいでなのだろう）御息所は、ともなかりし人のけはひ、（申し分のないお人柄）心ばせになむ。（気立ての方でした）親しううちとけたまはざりしかど、（心を割ってお付合い下さったわけではありませんが）はかなきことのついでに、（何かのちょっとしたことにつけても）おのづから人の用意はあらはなるものになむはべる」（自然に人の心くばりというものはよく分るものでございます）と聞こえたまひて、一三 宮の御こともかけず、いとつれなし。一四 かばかりのすくよけ心に思ひそめてむこと、いさめむにかなはじ、（聞き入れもしないだろうことに）用ゐざらむものから、（分別ぶって）われさかしに言出でむもあい（口を出すのもつま）

一 前の夕霧の言葉に見えた御息所の四十九日の法要。

二 そうした噂は。夕霧が法要について取りしきっているということ。

三 致仕の太政大臣。

四 落葉の宮が軽率だからだというようにお考えになるのは、困ったものだ。「わりなきや」は、宮にとっては濡衣だというほどの気持の草子地。

五 致仕の太政大臣の子息たち（柏木の弟たち）も法要の席に参会なさる。「まで」は「まうで」の「う」無表記の形。

六 僧に読経を依頼するお布施。

七 落葉の宮は、このまま小野に引き籠ってしまおうと決心なさるところがあったけれども。夕霧を避けて出家したいという意向をもらしたのである。

八 確かに、何人も、あれやこれやとかかわりをお持ちになるのは感心しないことではあるが。柏木との結婚、そして夕霧とのことを婉曲に言ったもの。

九 この世でも来世でも結局どっちつかずで（現世のしあわせもなく来世の往生もかなわなくて）悪く言われるのが落ちというものです。「咎」は、瑕、難点。

御息所四十九日の法要

朱雀院、落葉の宮の出家の意向を諫める

なし、とおぼして止みぬ。

かくて御法事に、〔夕霧は〕万端を取りしきって営ませなさるよろづとりもちてせさせたまふ。ことの聞こえ、どうしても広く知れることなので おのづから隠れなければ、大殿などにも聞きたまひて、おだやかならぬさやはあることだ 亡き柏木とのご縁があるので べき、など、女方の心浅きやうにおぼしなすぞ、わりなきや。かの昔の御心あれば、君達も、までとぶらひたまふ。誦経など、殿より致仕の太政大臣からも盛大におさせになる ご子息たちも もいかめしうせさせたまふ。これかれも、それぞれ負けずにお布施をなさった さまざま劣らずしたまへれば、時の人のかやうのわざに劣らずなむありける。

宮は、かくて住み果てなむとおぼし立つことありけれど、朱雀院院に、今を時めく人のとうした法要にひけを取らぬ立派さであったので 人の漏らし奏しければ、「いとあるまじきことなり。げにあまた、そっとお告げしたので（朱雀院）それはとんでもないことだ とざまかうざまに身をもてなしたまふべきことにもあらねど、後見親のない人は なき人なむ、なかなかさるさまにて、あるまじき名を立ち、罪得が なまじ尼姿になってから 罪を作り かねない時には けしからぬ浮き名が立って ましき時、この世後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる。ここ 女三の宮 同じように尼姿に身をやつしていられるのを うして出家している上に にかく世を捨てたるに、三の宮の同じごと身をやつしたまへる、末 世を捨てた出家の身としては気に病むべきことでもない 子孫がないように人が思い噂するのも なきやうに人の思ひ言ふも、捨てたる身には思ひなやむべきにはあ 私がこ

一〇 この世のつらさに負けて世を厭い捨てるのは、かえって見苦しいことです。

一一 出家するなりどうなりと（お決めになるがよい）。

一二 そうしたことが思うようにいかないのでこの世に見切りをおつけになったのだ。夕霧との間に実事があり、その後、夕霧の態度が煮えきらないので出家したと世間に取り沙汰されることを朱雀院は心配する。

一三 （夕霧とのことを持ち出せば）宮が消え入る思いをなさろうのもおいたわしいことだし。

夕霧、落葉の宮を一条に迎える準備をする

一四 あれこれと宮に言ってはみたけれども、それも今となっては無駄なことだ。以下、夕霧の心中。

一五 今さらしく（年がいもなく）色恋めいて。

けれども　何もそのように　似たもの同士のように競って出家なさるというのも　外聞が
らねど、かならずさしも、やうのこととあらそひたまはむも、うた
悪かろう
てあるべし。世の憂きにつけて厭ふは、なかなか人わろきわざなり。
自分でしっかり考えを決めて　もう少し心を落着けて　冷静になった上で
心と思ひ取るかたありて、今すこし思ひしづめ、心すましてこそ、
ご意見あそばされた　夕霧との浮いたお噂が院のお耳に
ともかうも」とたびたび聞こえたまうけり。この浮きたる御名をぞ
も入っているのであろう
聞こしめしたるべき。さやうのことの思はずなるにつけて倦じたま
〔宮が〕とやかく言われなさることをご心配なのだった　公
へる、と言はれたまはむことをおぼすなりけり。さりとてまた、あ
然と夕霧と一緒になられるのも軽々しいことであり　感心しないことだとお思いではある
らはれてものしたまはむもあはあはしう、心づきなきこととおぼし
が　何でこの自分までが噂を聞い
ながら、はづかしとおぼさむもいとほしきを、何かはわれさへ聞き
て口出ししよう　夕霧とのことは　一言も宮に申し上げなさらないのだ
あつかはむ、とおぼしてなむ、この筋は、かけても聞こえたまはざ
った
りける。

夕霧
大将も、とかく言ひなしつるも、今はあいなし、かの御心にゆる
さることは　難かしかろう　御息所のご承知の上のことなのだと　人前は
したまはむことは、難げなめり、御息所の心知りなりけりと、人に
とりつくろおう　仕方のないことだ　死んだ人に少し軽率だったという罪を着せて
は知らせむ、いかがはせむ、亡き人にすこし浅き咎はおほせて、い
からそうなったのか分らないようにぼかしてしまおう
つありそめしことぞともなくまぎらはしてむ、さらがへりて懸想だ

一 何日と決めて。帰宅、しかも結婚と夕霧は決め込んでいるので、暦によって吉日を選ぶ。
二 婚儀にふさわしい諸式を整えるようお申しつけになり。
三 母屋と廂の境に垂れる仕切りのとばり。（五巻図録一参照）
四 茵。（三巻図録一一参照）

帰京の当日、大和の守の説得

五 夕霧は、ご自身、一条の宮においでになっていて。
六 前駆の者たち。
七 とてもご承知申すわけにはまいりませぬ。有無を言わせぬ口調で帰京をすすめる。
八 私はこれから大和に下向しなくてはなりませぬ。
九 それではまことに不行届きなことで、いかがなものと存ぜられますが。
一〇 たしかに、ご結婚ということで考えてみますと。「思たまふる」は「思うたまふる」の「う」無表記の形。

泣きの涙でしつこく口説いたりするのも　いかにも身につかぬことだろう　心をお
ち、涙を尽くしかかづらはむも、いとうひうひしかるべし、と思ひ
決めになって　一条の宮にお帰りになる日を
得たまうて、一条にわたりたまふべき日、その日ばかりと定めて、
綺麗に部屋内を整え
大和の守召して、あるべき作法のたまひ、宮のうち払ひしつらひ、
気をつけるといっても　女所帯では　庭の草も茂るにまかせてお住まいだったのを
さこそいへども、女どちは、草しげう住みなしたまへりしを、磨き
そのお気づかいぶりは　しかるべき立派な品々を整え
たるやうにしつらひなして、御心づかひなど、あるべき作法めでた
気をおくばりになって
う、壁代、御屏風、御几帳、御座などまでおぼし寄りつつ、大和の
お命じになって　大和の守の家で急いで調進させなさる
守にのたまうて、かの家にぞ急ぎつかうまつらせたまふ。

その日、われおはしゐて、御車、御前などたてまつれたまふ。宮
小野におつかわしになる
どうしても帰りたくないとお思いでそうおっしゃるのを　女房たちがきつくご意見申し
は、さらにわたらじとおぼしのたまふを、人々いみじう聞こえ、大
お一人になられたおいたわしいご様子を拝し
和の守も、「さらにうけたまはらじ。心細く悲しき御ありさまを見
これまでのお世話は　私にできる限りのことはさせて頂き
て心を痛めまして
たてまつり嘆き、このほどの宮仕へは、堪ふるに従ひてつかうまつ
任国の仕事もございますし　一条の宮のとりしきりも　今後のことを任せられる人もございません
りぬ。今は、国のこともはべり、まかり下りぬべし。宮のうちのこ
とも、見たまへゆづるべき人もはべらず、いとたいだいしう、いか
[夕霧が]　こうして万端お世話下さいますのを
にと見たまふるを、かくよろづにおぼしいとなむを、げにこのかた

一一 どうしてもそうなさらなくてはならないお身の上でもありませんが。皇女の身分を考えれば、夕霧との再婚は必ずしも望ましいことではない、の意。
一二 そんなふうに、昔もお思いどおりにはならなかった例はたくさんございます。皇女の再婚の例は昔も多い、と言う。
一三 あなたお一人だけが、世間の非難を受けなくてはならぬわけのものでもありませぬ。

一四 あなた方が（宮様に）よくお言い聞かせ申し上げないからこんなことになるのです。一転して、女房たちに苦情を言う。
一五 「左近」は、ここだけに見える女房。「少将」は、大和の守の妹の小少将。

落葉の宮、泣く泣く帰京

一六 色あざやかなお召し物を。婚儀にそなえて喪服を着がえさせるのである。

一七 少し毛が落ち細っているけれども。物思いのゆえである。
一八 何というやつれようか。以下、落葉の宮の心。

にとりて思たまふるには、かならずしもおはしますまじき御ありさまなれど、さこそは、いにしへも御心にかなはぬ例多くはべれ。一所やは世のもどきをも負はせたまふべき。いと幼くおはしますことなり。たけうおぼすとも、女の御心ひとつに、わが御身をとりしたため、かへりみたまふべきやうかあらむ。なほ人のあがめかしづきたまへらむに助けられてこそ、深き御心のかしこき御おきても、それにかかるべきものなり。君たちの聞こえ知らせたてまつりたまはぬなり。かつは、さるまじきことをも、御心どもにつかうまつりそめたまうて」と、言ひ続けて、左近、少将を責む。

集りて聞こえしらふるに、いとわりなく、あざやかなる御衣どもも、人々のたてまつりかへさするも、われにもあらず、なほいとひたぶるに削ぎ捨てまほしうおぼさるる御髪を、かき出でて見たまへば、六尺ばかりにて、すこし細りたれど、人はかたはにも見たてまつらず、みづからの御心には、いみじのおとろへや、人に見ゆべき

（一二 ご自分の身の振り方をきちんとなさり　一三 いかにもお聞き分けのないことです　一四 深いご思慮による立派な暮し向きのご方針もそれによって立てられるものです　一五 ご自分たち勝手にお取りはからい申すことにしたりして　一六 女房たちがお召しかえさせるのも　一七 ご自分のお気持としてはないのに　一八 女房たちはおかしいともお思い申さないのに）

（一一 女一人のご分別で　一二 お気をつけなさることがどうしてできましょうるのに支えられてはじめて　一三 そのくせ　一四 けしからぬ手紙の取次ぎなど　一五 言いつのって　一六 女房たちが皆してなだめすかし申すので　一七 どうにもしかたなく　一八 〔宮は〕夢ごこちで　一九 削ぎ捨ててしまいたいとお思いのもいちずに　二〇 脇に掻き出して）

一　どうしてこういろいろと情けない思いをしなければならない身の上なのだろう。

二　予定の時刻が過ぎてしまいます。出発の時刻も吉時を選ぶ。

三　母君を葬った時の峰の煙と一緒になって、思いもかけぬ方になびかないでいたいものです。夕霧の意のままになるよりは、ここで死んでしまいたい、の意。「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず）を踏む。

四　宮が自分で髪をおろすのを警戒するのである。

五　たとえまわりがこんなに騒がなくても、何のこの世に未練のある身の上で、愚かしく、子供っぽくこっそり髪をおろしたりしようか。むしろ死にたいと思っているのだから、そんな子供っぽい真似をする気はない、の意。

六　人が聞いてもいやな恐ろしいことと思うだろうことだのに。師の僧による剃髪が出家の正式の作法である。

七　櫛の筥（三巻図録一一参照）と手筥の意であろう。「手筥」は、身の回りの品々を入れる箱。丈が高く、懸子があり、角に丸味をつけ、蓋も丸味をつけて盛り上がっている（『貞丈雑記』）。（図録七参照）

八　六本の脚の付いた蓋のある箱。（一巻図録一一参照）

九　誰もいないお側が見つめられるばかりで。御息所ありさまにもあらず、（まみえるといった姿ではない）一さまざまに心憂き身を、とおぼし続けて、また臥したまひぬ。（女房）二「時違ひぬ。夜もふけぬべし」と、皆騒ぐ。時雨（ひどくせき立てるように風に乗って吹きつけ）いと心あわたたしう吹きまがひ、よろづにもの悲しければ、

（落葉宮）三のぼりにし峰の煙にたちまじり
　　思はぬかたになびかずもがな

（ご自身だけは固く決心していられるが）心ひとつには強くおぼせど、そのころは、御鋏四やうのものは、皆とり隠して、（女房たちが目をお離し申さないので）人々のまもりきこえければ、五かくもて騒がざらむにだに、何の惜しげある身にてか、をこがましう、若々しきやうにはひき忍ばむ、六人聞きもうたておぼましかべきわざを、とおぼせば、その本意のごともしたまはず。

（女房たち）人々は、（支度に立ち働いて）皆いそぎ立ちて、おのおの、櫛七、手筥、唐櫃八、よろづのものを、（しかとも荷造りしない袋に詰めるようなことでだが）はかばかしからぬ袋やうのものなれど、皆さきだてて運び（京に）たれば、（一人だけお残りになるわけにもいかず）一人とまりたまふべうもあらで、泣く泣く御車に乗りたまふも、九かたはらのみまもられたまて、（こちらにお出でになった時）こちわたりたまうし時、（母君が）ご

がお側にいないさびしさである。「たまて」は「たまうて」の「う」無表記の形。

一〇 お守り刀。女性もいつも身近に置く。

一一 経典を納める箱。持経が納めてある。法華経であろう。御息所の形見の品。（図録七参照）

一二 亡き母君への恋しさを慰めようもない形見の品として、涙に曇る玉の箱であることよ。「かたみ」は「形見」と「筐」（竹で編んだ籠。「筥」の縁語）を掛け、「くもる」は「玉」の縁語。

一三 喪中の黒漆塗りの経箱もまだお調えになれず。

一四 漆に屋久貝、鸚鵡貝などの光沢のある箔片をいろいろの模様に埋め込み、磨き出して飾りとしたもの。

一五 僧へのお布施にするようにご遺言があったのを。

一六 あらぬ世界に帰る浦島の子のような気がなさる。歌の「玉の筥」がここに響く。浦島の子の伝説は『丹後風土記』逸文『浦島子伝』『続浦島子伝記』に見え、海中の仙境から持ち帰った「玉匣」（玉の箱）を開けたところ紫雲が飛び去ってたちまち老いたという。

一七 ご自身のお部屋に、急ごしらえに整えて。

一八 雲居の雁のいる夕霧の本邸では。

一条に帰邸

気分の苦しい中にも

こちの苦しきにも、〔宮の〕御髪かき撫でつくろひ、〔車から〕おろしたてまつりたまうしをおぼし出づるに、目も霧りていみじ。涙に曇って悲しい 御佩刀に添へて経筥を添へたるが、御かたはらも離れねば、

今もお側にあるので

（落葉宮）恋しさのなぐさめがたきかたみにて

涙にくもる玉の筥かな

黒きもまだしあへさせたまはず、母君が日頃親しくお使いだった かの手ならしたまへりし螺鈿の筥なり。誦経にせさせたまうしを、母君の形見にお手許にとどめられたのだった 形見にとどめたまへるなりけり。浦島の子がここちなむ。

〔一条宮に〕おはしまし着きたれば、殿のうち悲しげもなく、人気多くて、あまるで様子が変っている らぬさまなり。〔寝殿に〕御車寄せて下りたまふを、お邸の内は悲しい気配もなく お下りになるのに さらに故里とおぼえず、とても もとの邸と思えず 身にそぐわない不愉快な感じがなさるので うとましううたておぼさるれば、すぐにも とみにも下りたまはず。いとあや何とおかしな しう、若々しき御さまかなと、子供っぽいお振舞かと 女房たちもお側ではらはらしている 人々も見たてまつりわづらふ。殿は、夕霧 東の対の南面を、わが御方、仮にしつらひて、もう主人気取りでいらっし 住みつき顔におはす。三条殿には、女房たち 寝耳に水のあきれたなさりようですこと 人々、「にはかにあさましうもなりたまひぬるか

一　もうずいぶん前からのことを、（夕霧は）こっそり何食わぬ顔で隠してこられたのだ、と頭から決めてかかって。

落葉の宮、塗籠に夕霧を避ける

二　お祝膳など、喪中のことゆえ常と変っていて、せっかくの新婚に縁起でもないようだけれども、（ともかく）お食事をさし上げたりしたあと、皆寝静まった頃に。

三　私どもがお取りなし申し上げるのをも。「こしらふ」は、夕霧との結婚を宮に得心させようとすること。

四　何ごとも、わが身かわいさが第一でございます。挿入句。女房の分際として、主人の不興を買うわけにはいかない、の意。

な。（いつからそんなことになっていたのでしょう）いつのほどにありしことぞ」と、おどろきけり。（あきれるのだった）なよらかにを（色めいたつやっぽい）かしばめることを、（苦手となさる夕霧のようなお方は）このましからずおぼす人は、（こうした突拍子もない振舞いきさつを）かくゆくりかなることぞうちまじりたまうける。されど、年経にけることを、音もなくけしきも漏らさで過ぐしたまうけるなり、とのみ思ひなして、かく、女の御心ゆるいたまはぬと、（女の方で承知なさっていないことだと）思ひ寄る人もなし。（気づく者は一人もいない）とてもかうても、宮の御ためにぞいとほしげなる。（いずれにせよ）（落葉の宮にとってはお気の毒千万なことだ）

御まうけなどさま変りて、もののはじめゆゆしげなれど、もの参らせなど、皆しづまりぬるに、わたりたまて、少将の君をいみじう責めたまふ。「御心ざしまことに長うおぼされば、今日明日を過ぐして聞こえさせたまへ。（少将）ご厚志を本当に末長くまでとおぼしめしなら（申し上げて下さいませ）なかなか立ちかへりてものおぼし沈みて、亡き人のやうにてなむ臥させたまひぬる。こしらへきこゆるをも、つらしとのみおぼされたれば、何ごとも身のためこそはべれ、いとわづらはしう、聞こえさせにくくなむ」と言ふ。「いとあやしう、（ご不興がいかにも恐ろしく）（申し上げにくうございます）（夕霧）何とおかしな（かえってこと改めてすっかり悲しみにくれてしまわれて）（ひどいことばかりお思いですので）おしはかりきこえさせしには違ひて、いはけなく心えがたき御心に（ご推察申し上げていたのとは裏腹に）（お聞き分けのない合点のいかぬお考えの方）

五 自分の考えていることを。落葉の宮の処遇についてのこと。雲居の雁と並ぶ正室としてお扱いするといったことであろう。
六 宮様もまた（御息所に引き続いて）お亡くなりになってしまうのではないかと。
七 どうかお願いでございます。多く、相手に懇願する時に呼び掛ける言葉。
八 手をおしすって拝む。懇願するしぐさ。
九 全く、今まで（女から）こんなあしらいを受けたことはない。「世」は、男女の仲。
一〇 不愉快な身の程知らずの男と、人より格段にお見下げになっていられるらしいわが身が情けない限りです。「人よりけに」の「人」は、暗に柏木をさす。
一一（どちらに道理があるのか）ぜひ人にも理非をたださせたいものだ。
一二「まだ知らぬ」（こんなあしらいを受けたことはない）との仰せは、確かに女に対するお扱いもご存じでないなさりかたのせいだと。「いとまだ知らぬ世かな」を「世づかぬ」で受けて、夕霧の強引なやり方を軽くたしなめる。
一三 少将の君がこんなに強く言い張るけれども。
一四 建物の一部を四方壁を塗りこめて調度類など納めておく部屋。
一五 お茵。下の「たまて」は「たまうて」の「う」無表記の形。

なのですね　宮にとっても　自分にとっても
こそありけれ」とて、五思ひ寄れるさま、人の御ためも、わがために
世間の非難などあるはずもない旨を言い続けなさるので　（少将）いいえ　気が気ではなく取り乱して
も、世のもどきあるまじうのたまひ続くれば、「いでや、ただ今は、
六またいたづら人に見なしたてまつるべきにやと、あわたたしき乱り
何も　分別がつきません　何かとご無体をなさって
おりますので
ごこちに、よろづ思たまへわかれず。七あが君、とかくおしたちて、
是が非にもお心を通そうとなさることはおやめ下さいまし　（夕霧）
ひたぶるなる御心なつかはせたまうそ」と手をする。八「いとまだ知
らぬ世かな。一〇憎くめざましと、人よりけにおぼしおとすらむ身こそ
お話にもならぬことだとお思いになって　（少将）
いみじけれ。一一いかで人にもことわらせむ」と、一二いはむかたもなしと
さすがにお気の毒でもあるので
おぼしてのたまへば、さすがにいとほしうもあり、「まだ知らぬは、
道理と申せば確かに　一体どちら
げに世づかぬ御心がまへのけにこそはと、ことわりはげに、いづか
に軍配をあげる人がいると申すのでございましょう
たにかは寄る人はべらむとすらむ」と、すこしうち笑ひぬ。
もうおめおめと邪魔立てされるお積りはないので　そのまま少将の
一三かく心ごはけれど、今はせかれたまふべきならねば、やがてこの
見当をつけて　［内に］　情けなく
君をせかし立てて
人をひきたてて、おしはかりに入りたまふ。宮は、いと心憂く、情
思いやりのない無考えなお付きの者たちの心根よと　無念でうらめしいので　子供っぽい振舞
なくあはつけき人の心なりけりと、ねたくつらければ、若々しきや
と騒ぎ立てようとままよ
うには言ひ騒ぐとも、とおぼして、一四塗籠に一五御座ひとつ敷かせたまて、

一 こんな所に隠れても、いつまで身を守れるというのだろう。以下、落葉の宮の心。
二 夕霧。夫の君といった感じの呼び方。
三 「足引きの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」（『拾遺集』巻十三恋三、人麻呂）の歌の解として、山鳥は、雌雄、山の尾（峰）を隔てて別々に寝るとされていた（『俊頼髄脳』『奥義抄』『袖中抄』などの歌学書に見える）。「昼は来て夜は別るる山鳥の影見る時ぞ音は泣かれける」（『新古今集』巻十五恋五、題しらず、読人しらず）
四 こんなことでは、下手をすると、露骨なにらみ合いということになりかねないので。「ことといへば」は、取り立てて言うと、の意の慣用句。
五 怨んでも怨みきれず胸の晴れようもない長い冬の夜に、その上戸鎖しもいよいよ堅い二人の間のきびしい隔てであることです。「あきがたし」に対して「また鎖しまさる」という。「関の岩門」は、前に「うちより鎖して」とあった塗籠の戸の固め。

夕霧、六条の院に帰る　花散里との対話

六 六条の院の丑寅（東北）の町。
七 花散里。夕霧の母代り。
八 致仕の太政大臣方。

うちより鎖して大殿籠りにけり。これもいつまでにかは、かばかりに乱れ立ちにたる人の心どもは、いと悲しうくちをしうおぼす。男君は、めざましうつらしと思ひきこえたまへど、かばかりにては、何のもて離るることかはと、のどかにおぼして、よろづに思ひ明かしたまふ。山鳥のここちぞしたまうける。からうして明けがたになりぬ。かくてのみ、こととといへば、直面なべければ、出でたまふとて、「ただいささかの隙をだに」と、いみじう聞こえたまへど、いとつれなし。

（夕霧）五「怨みわび胸あきがたき冬の夜に
また鎖しまさる関の岩門

六 六条の院にぞおはして、やすらひたまふ。東の上、「一条の宮わたしたてまつりたまへることと、八 かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御ことにかは」と、いとおほどかにのたまふ。御几帳添へ

（これほどまで に浮き足立ってしまったお付きの者たちの気持は　何と悲しく情けないものかとお思いになる　心外なひどいお仕打ちと　相手ものがれようのないことだと　のんびりお構えになって　あれこれと物思いに夜をお明かしになる　お帰りになろうとして（夕霧）ほんの少しの　隙間だけでも　言葉を尽してお頼みになるけれども　何の　お返事もない　申し上げようもない冷たいお気持なのですね　おくつろぎになる　お移し申し上げなさったことだと　落葉の宮　京に　お噂していますが　どういうご事情なのでしょう　いかにもおっとりと　〔側に〕　立て添

九 横からちらちらとはそれでも（夕霧に）姿をお見せになっていらっしゃる。養母としての花散里の飾らない人柄が示されている。

一〇 自分の死んだあとの宮のお世話役になってほしいというようなご遺言がありましたので。前に、御息所から暗に結婚を許す旨の「女郎花しをるる野辺を」の歌が夕霧に送られた事実がある（三九頁）。夕霧としては、それを楯に取って、やや強い表現にしたというほどのつもりであろう。

一一 こうして引き受ける気になりましたのですが。自分としても結婚に踏み切ったのだ、と言う。

一二 そんなに騒ぎ立てるまでもないことでも、妙に人というものは口さがないものではあります。

一三 ご本人の宮は、どうしても普通の暮しはしたくないと深く決心して。

一四 いえ、なに。正しくは反語で受けられるべきであるが、「またかの遺言は違へじ」で受けられる。

一五 そのように疑惑を招かぬ事情になっても（宮が仮に尼になっても）、それでも御息所の遺言は反故にすまい（宮のお世話はしよう）と思いまして。

（夕霧）そのようにたれど、そばよりほのかにはなほ見えたてまつりたまふ。「さやうにも、なほ人の言ひなしつべきことにはべり。故御息所は、いと心強う、あるまじきさまに言ひ放ちたまうしかど、限りのさまに御こちの弱りけるに、また見ゆづるべき人のなきや悲しかりけむ、亡からむのちの後見にとやうなることのはべりしかば、もとよりの心ざしもはべりしことにて、かく思たまへなりぬるを、さまざまに、いかに人あつかひはべらむかし。さしもあるまじきをも、あやしう人こそもの言ひさがなきものにあれ」と、うち笑ひつつ、（夕霧）「かの正身なむ、なほ世に経じと深う思ひ立ちて、尼になりなむと思ひ結ぼほれたまふめれば、何かは、こなたかなたに聞きにくくもはべべきを、さやうに嫌疑離れても、またかの遺言は違へじと思うたまへて、ただかく言ひあつかひはべるなり。院のわたらせたまへらむにも、ことのついではべらば、かうやうにまねびきこえさせたまへ。ありてありて、心づきなき心つかふと、おぼしのたまはむを憚りはべりつ

大層気強 / やはりどうしても世間では噂するに違いないことです / とんでもないことのようにきっぱり反対なさいましたが / もうご最期も近くお気持の弱くなられた折に / ほかにお世話を頼める人もいないのが悲しかったのでしょうか / もともとそうした積りもありましたことですので / あれこれと / どのように人は取り沙汰していることでしょう / 思い詰めていらっしゃるようですので / 〔結婚は〕あちこちに外聞の悪いことでもありましょうから / 源氏 / こちらにお出での折にも / 今申し上げましたようにお伝え下さい / 何かのついでがございましたら / この年 / 気がねしていになって / おもしろからぬ料簡を起したと / お小言を頂戴することを

一 なるほど、こうしたことについては。女の問題では、の意。

二 「姫君」などとかわいらしげにお呼びになるものですね。「姫君」は、元来、良家の処女を呼ぶ語。花散里は、年下の雲居の雁をいとおしむ気持で呼んだ。

三 まるで鬼のように手ごわい性悪者ですのに。「鬼し」は、「鬼」を形容詞に活用させたもの。「女し」の類例がある（一巻帚木五四頁、本巻九〇頁）。

四 こちらの方々（花散里を含めた六条の院の夫人たち）のお暮しぶりからも、ご推量いただけることです。

五 （妻が）意地を張って事を荒立てるのも。嫉妬したりするのをいう。

六 事がもつれてきますと、それからは、こちらも相手もお互い、憎らしくいや気のさすものです。

七 紫の上。

八 花散里。

（人の意見にもまったが）れど、げにかやうの筋にてこそ、人のいさめをも、（自分の心にもおとなしく従えないものだということが分りました）みづからの心にも従はぬやうにはべりけれ」と、忍びやかに聞こえたまふ。

（花散里）世間のあらぬ噂かと思っておりましたが「人のいつはりにやと思ひはべりつるを、（ほんとにそういうことでいらっしゃったのですね）まことにさるやうある御けしきにこそは。（世間によくあることですが）皆世の常のことなれど、（雲居の雁）三条の姫君のおぼさむこと（どんなにお嘆きかおいたわしいことです）とこそいとほしけれ。（今まで安心しきっていらっしゃったのに）のどやかにならひたまうて」と聞こえたまへば、「（夕霧）二らうたげにものたまはせなす姫君かな。三いと鬼しうはべるさがなものを」とて、「（夕霧）どうして（そちらもいい加減に扱いましょうか）などてか、それをもおろかにはもてなしはべらむ。（恐れ多いことですが）かしこけれど、四御ありさまどもにても、おしはからせたまへ。（何ごともおだやかに対処するのが）なだらかならむのみこそ、（女として結局は取るべき道だと思われます）人はつひのことにははべめれ。五さがなくことがましきも、（最初のうちは何やら面倒で）しばしはなまむつかしう、（厄介なことに思われて）わづらはしきやうに憚らるることあれど、（そういつまでも遠慮しているわけにもいきませんから）それにしも従ひ果つまじきわざなれば、六ことの乱れ出で来ぬるのち、（気がねもされることですが）われも人も、憎げにあきたしや。なほ南の御殿の御心もちゐこそ、（お心遣いこそ）さまざまにありがたう、（いろいろと真似のできぬことで）さてはこの御方の御心などこそは、（次いでは八）めでたきものには見たてまつり果てはべりぬれ」な（ご立派なものだと近頃つくづくお思い申すようになりました）

九 そうした引合いに出したりなさいますので、私の体裁の悪い評判がはっきりしてしまいそうです。

一〇 それにしても、おかしく思われますことは。以下、源氏のことに話題を転ずる。

一一 ご自分のご性癖（好色癖）を人が知らないかのように（棚に上げて）。

一二 利口ぶった人が、自分のこととなると何も分らないと申しますが、まるでそのように思われます。

源氏の思い

一三 源氏のお前に、夕霧がご挨拶に伺いなさると。

一四 とてもご立派でお美しく。以下、源氏の目に映じた夕霧のさま。

一五 荒々しい神様も大目に見るに違いないほど。

ど、ほめきこえたまへば、笑ひたまひて、「（花散里）九ものの例に引きいでたまふほどに、身の人わろきおぼえこそあらはれぬべう。一〇さて、をかしきことは、源氏院の、一一みづからの御癖をば人知らぬやうに、少しでも浮気いささかめいたお振舞があなたに見えるとあだあだしき御心づかひをば、大事とおぼいて、ご忠告なさったりいましめ申したまふ、後言にも聞こえたまふめるこそ、一二さかしだつ人の、おのが上知らぬやうにおぼえはべれ」とのたまへば、（夕霧）その通りいつも男女の道について特にきびしく仰せになります「さなむ、常にこの道をしもいましめ仰せらるる。しかしさるは、恐れ多いお教えを頂かなくても十分に私としては気をつけておりますのにかしこき御教へならでも、いとよくをさめてはべる心を」とて、げにをかしと思ひたまへり。

一三 御前に参りたまへれば、一条の宮のことかのことは聞こしめしたれど、何で聞いたそ何かは聞ぶりも見せようとお思いで黙ってじっとお顔をご覧になると き顔にもとおぼいて、ただうちまもりたまへるに、一四いとめでたくきちょうど今頃がお年につれてお美しくなられた絶頂に当られるのだろうそのようなよらに、このころこそねびまさりたまへる御盛りなめれ、さるさまの好きごとをしたまふとも、人が悪く言うようなご様子もしていらっしゃらず浮気沙汰を引き起されても人のもどくべきさまもしたまはず、一五鬼神も罪ゆるしつべく、水際立ってすっきりとして若々しく今を盛りとあたりあざやかにものきよげに、若う盛りににほひも照り映えるお美しさだ何も分別のない若者というお年格好でもなくを散らしたまへり。もの思ひ知らぬ若人のほどにはたおはせず、か

一 無理もないことだ、女だったらどうしてすばらしいと思わずにいられよう、自分で鏡を見てもどうしていい気にならずにいられよう。この部分は、はっきり源氏の心中になる。

三条殿　夕霧、雲居の雁をなだめる

二 日が高くなってから、三条殿にはお出でになった。

三 帳台。（一巻図録九参照）

四 雲居の雁の引きかぶっているお召し物をお引きのけになると。

五 ここをどこと思って、お出でになったのですか。お門違いでしょう、という皮肉。

六 親しい間柄で使う自称の代名詞。男女ともに使う。

七 鬼は死人の魂とされていた。

八 すてきなお洒落をなすって色っぽく振舞われるようなお方のお側に、いつまでもご一緒できる身でもございませんから。

九 どうぞもうお見限りあそばせ。今日のようにたまに思い出して尋ねてくるようなこともしてほしくない、の意。

たほなるところなうねびととのほりたまへる、（一）ことわりぞかし、女にてなどかめでざらむ、鏡を見てもなどかおごらざらむ、と、わが御子ながらもおぼす。

（二）日たけて、殿にはわたりたまへり。入りたまふより、若君たち、すぎすぎうつくしげにて、まつはれ遊びたまふ。女君は、帳のうちに臥したまへり。入りたまへれど、目も見合はせたまはず。つらきにこそはあめれ、と見たまふもことわりなれど、憚り顔にももてなしたまはず、御衣をひきやりたまへれば、「いづことておはしつるぞ。まろは早う死にき。常に鬼とのたまへば、同じくはなり果てなむとて」とのたまふ。「御心こそ、鬼よりけにもおはすれ、さまは憎げもなければ、えうとみ果つまじ」と、何心もなう言ひなしたまふも、心やましうて、「めでたきさまになまめいたまへらむあたりに、あり経べき身にもあらねば、いづちもいづちも失せなむとす。なほかくだになおぼし出でそ。あいなく年ごろを経けるだに、くや

（一）といって欠点もなく立派にととのわれた壮年のお姿を見ると
（二）次々とかわいらしげな姿で
（三）雲居の雁
（四）まつわりついて甘えられる
（五）〔帳台に〕
（六）〔雲居雁は〕
（七）どこ覧になるにも無理もないと思われるが
（八）〔雲居雁〕
（九）思っているのだろう
（十）気がねしたそぶりもお見せにならず
（十一）〔雲居雁〕
（十二）いっそ鬼になってしまおうと思いまして
（十三）（夕霧）お気持は
（十四）鬼よりもっと恐ろしいお方だが
（十五）姿は憎らしげもないから
（十六）嫌いにはなれそうもないな
（十七）何食わぬ顔でいなしてしまわれるのも
（十八）〔雲居雁〕
（十九）腹が立って
（二十）もうどこへなりと
（二十一）消え失せたいのです
（二十二）おめおめと
（二十三）長の年月
（二十四）連れ添ったのも

一〇 馴れっこになって、この鬼は、もうこわくも何ともなくなってしまったことだ。鬼なら鬼らしく、もう少しおどろかであってもよろしいね。

一一 側近くに（私を）ご覧にならないにしても、よそながら噂をお聞きにならないわけにはいきますまい。「見れば憎し。聞けば愛敬なし」に応じたもの。

一二 そうして夫婦の縁の深い二人の仲を私に分らせようというおつもりなのでしょうね。「おいらかに死にたまひね。まろも死なむ」（一緒に死のう）に応じたもの。

一三 あわただしく続くことになる冥途への支度は。一方が死んだら一方もすぐあとを追うということ。

しきものを」とて、起き上がりたまへるさまは、いみじう愛敬づきて、にほひやかにうち赤みたまへる顔、いとをかしげなり。「かく心幼げに腹立ちなしたまへればにや、目馴れて、この鬼こそ、今は恐ろしくもあらずなりにたれ。神々しき気を添へばや」と、たはぶれに言ひなしたまへど、「何ごと言ふぞ。おいらかに死にたまひね。まろも死なむ。見れば憎し。聞けば愛敬なし。見捨てて死なむはうしろめたし」とのたまふに、いとをかしきさまのみまされば、こまやかに笑ひて、「近くてこそ見たまはざらめ、よそにはなどか聞きたまはざらむ。さても契り深かなる世を知らせむの御心ななり。にはかにうち続くべかなる冥途のいそぎは、さこそは契りきこえしか」と、いとつれなく言ひて、何くれとこしらへきこえなぐさめたまへば、いと若やかに心うつくしう、らうたき心はたおはする人なれば、なほざりごととは見たまひながら、おのづからなごみつつものしたまふを、いとあはれとおぼすものから、心は空にて、かれも、

まれますのに　つやつやと　（夕霧）　子供っぽい怒り方をなさるからだろうか　（雲居雁）つべこべ言わずと　あっさり死んでおしまいになるがいい　冗談に紛らわしなさるが　めな　けが　あいぎょう　あなたを残して死ぬのは気になることだし　いかにも愛くるしい様子が増すばかりなので　げるように　（夕霧）　こみあ　（雲居雁は）大変無邪気で素直な　心にもない言葉だとはお思いになりながらも　自然に機嫌を直しておいでなのを　いとしい人だとお思いにはなるものの　うわの空で　落葉の宮

一 万一、どうしても自分と一緒になるのは気に染まないことで。

二 雲居の雁の父、致仕の太政大臣。幼い二人の恋仲を裂いたいきさつは、三巻少女の巻にくわしい。

三 女だってあれほど操を立て通せるものではあるまい（男のくせして何だ）と、人も悪口を言ったものでした。

四 とても面倒を見きれぬほど大勢になっているようですから。巻末九七頁に、雲居の雁腹の子は、男四人、女三人と見える。

五 命はいつ死ぬか分らぬこの世ですが（私の気持は変りません）。

自分の気持を立て通して　強硬にどうしても譲らないといった人柄にはお見えにならないけれ
いとわが心をたてて、強うものものしき人のけはひには見えたまはねど、もしなほ本意ならぬことにて、尼になども思ひなりたまひなば、をこがましうもあべいかな、と思ふに、しばしはとだえ置くまじう、あわたたしきここちして、暮れゆくままに、今日も御返りだになきよ、とおぼして、心にかかりて、いみじうながめをしたまふ。

尼になろうなどという気になりになった　ここ当分はとだえなく通わねばな　馬鹿な目を見ることになるな　落着いていられない気がして　お返事すらな　いことだ　ひどく物思わしげな風情でいられる

昨日今日つゆも参らざりけるもの、いささか参りなどしておはす。

少しも召し上がらなかったお食事を［雲居雁は］

（夕霧）あなたに対する私の気持の並々ならぬものだったことは

「昔より、御ために心ざしのおろかならざりしさま、大臣のつらく

世間のうつけ者よと評判を取りましたが　仕打ちをなさったので

もてなしたまうしに、世の中のしれがましき名を取りしかど、堪へがたきを念じて、ここかしこ、すすみけしきばみしあたりを、あま

我慢して　あちこちから　熱心に縁組を望んできた人々を　大勢聞き流しにした私の態度は

た聞き過ぐししありさまは、女だにさしもあらじとなむ、人ももどきし。今思ふにも、いかでかはさありけむと、わが心ながら、いにしへだに重かりけりと思ひ知らるるを、今は、かく憎みたまふとも、おぼし捨つまじき人々、いと所狭きまで数添ふめれば、御心ひとつにもて離れたまふべくもあらず。また、よし見たまへや。命こそ定

どうしてあんなことが出来たのかと　自分のことではいえ　若かった昔もうわついた所はなかったのだと思い知られますが　お見捨てにはなれない子供たちが　ご自分の勝手でここを出て行かれるわけにもいきますまい　まあ見ていて下さい

六 下に重ねる肌着なので、次の歌の「馴るる」（身に馴れる）に響いてゆく。
七 長年連れ添って古びてしまったわが身を恐むよりは、いっそ（この単を）尼の衣に裁ちかえてしまいましょうか。単をわが身になぞらえ、いっそ出家してしまいたいと歌う。「松島」は、宮城県松島湾、歌枕。「あま」（海士）に「尼」を掛ける。「うらむる」の「うら」に、「あま」（海士）の縁語「浦」を響かせる。「馴る」と「衣」は縁語。
八 やはりこのまま俗世の人間としては、暮していけそうにもありません。
九 夕霧に詠みかけるつもりもなくおっしゃるのを。
一〇 いくら長年連れ添って私に飽きがきたからといって、私を見限ったという評判を立ててよいものでしょうか。「濡衣」は潮水に濡れたいわゆる「潮馴れ衣」。
一一 お出かけ間際で、気のないお歌だこと。草子地の批評。「なほなほし」は、平凡の意。
一二 落葉の宮がいまだに塗籠に閉じ籠っておいでなのを。

一条の宮の夕霧

めなき世なれ」とて、うち泣きたまふこともあり。女も、昔のことを思ひ出でたまふに、あはれにもありがたかりし御仲の、さすがに契り深かりけるかな、と思ひ出でたまふ。なよびたる御衣ども脱いたまうて、心ことなるをとり重ねて焚きしめたまひ、めでたうつくろひ化粧じて出でたまふを、火影に見出だして、忍びがたく涙の出で来れば、脱ぎとめたまへる単の袖をひき寄せて、

（お泣きになったりもする）（世にまたとないほどの睦びを交わしたお二人の仲は）（そうはいって）（も深い因縁に結ばれていたのだ）（〔夕霧が〕嫌になった）（新調の見事な衣裳を取りかさねて）（香をたきしめなさり）（美しく身づくろいし）（〔雲居雁は〕）（火影の下に見送って）（こらえかねて）（脱ぎ置いていかれた）

「馴るる身をうらむるよりは松島の
あまの衣に裁ちやかへまし」

（雲居雁）七

なほうつし人にては、え過ぐすまじかりけり」と、独言にのたまふを、立ち止まりて、「さも心憂き御心かな。

（夕霧）何と情けないことをお考えだ

一〇 松島のあまの濡衣なれぬとて
ぬぎかへつてふ名を立ためやは」

八 なほうつし人にては、え過ぐすまじかりけり」と、独言にのたまふを、立ち止まりて、「さも心憂き御心かな。

一一 うち急ぎて、いとなほなほしや。

一二 かしこには、なほさし籠りたまへるを、人々、「かくてのみやは。

（一条の宮）（女房たち）（このままではいけません）

一　これから先の外聞の悪さも、ご自分の今までのお悲しみも、皆あの気に入らないひどい夕霧のせいなのだと身に沁みて思って。夕霧と結婚することに対する外部の悪評、夕霧のせいで母御息所の亡くなったことを落葉の宮は思う。「ゆかり」は、つながり。

二　夕霧は、一夜程度の我慢ならともかく、世にも珍しいお仕打ちだと。「ありぬやとこころみがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき」（『古今集』巻十九雑体、誹諧歌、読人しらず）を踏まえる。夕霧の抗議の内容を要約した趣。

三　少将の君も、お気の毒なとお思い申し上げる。「人」は、昨夜も応接に当った少将の君。

四　少しでも人心地のつく折がありましたら。以下、落葉の宮の言葉と意向を伝える。

五　御息所の喪に服されている間は。一年間ということになる。

六　（夕霧とのことを）知らない人もなくなってしまったでしょうことを。夕霧が強引に結婚の体勢に持ち込んでしまったことをいう。

七　私のつもりは、それとは違って何の心配もいらないことですのに、心外な目に会うものです。無理をするつもりはないのに、の意。「世」は、男女の仲。

八　障子（襖）越しなりでも。

九　長の年月でもおとなしく待つつもりでおります。前に「この御服のほどは」とあったのを受けて言う。

大人げない非常識なお振舞と世間でも取り沙汰いたしましょうに　常のお部屋にお帰りになって
若々しうけしからぬ聞こえもはべりぬべきを、例の御ありさまにて、
お考えのほどを申し上げるようになさいませ
あるべきことをこそ聞こえたまはめ」など、よろづに聞こえければ、
もっともなこととは
さもあることとはおぼしながら、今よりのちのよその聞こえをも、
わが御心の過ぎにしかたをも、心づきなく、うらめしかりける人の
ゆかりとおぼし知りて、その夜も対面したまはず。たはぶれにくく
怨みのたけを申し上げなさる
めづらかなりと、聞こえ尽くしたまふ。人もいとほしと見たてまつ
（少将）四　　三　　二
る。「いささかも人ごこちするをりあらむに、忘れたまはずは、と
［私を］お忘れでなければ　とか
くのお返事もいたしましょう　五　せめて心を乱すことなく菩提を
もかうも聞こえむ。この御服のほどは、一筋に思ひ乱ることなく
おとむらいしていたい　深く決心なさり仰せでもありますが
てだに過ぐさむ、となむ深くおぼしのたまはするを、かくいとあや
こうしてまことに都合悪く　やはりとてもひどいなさりようとおっしゃって
にくに、知らぬ人なくなりぬめるを、なほいみじうつらきものに聞
おいでです
こえたまふ」と聞こゆ。「思ふ心は、また異ざまにうしろやすきも
（夕霧）七　　六
のを、思はずなりける世かな」とうち嘆きて、「例のやうにておは
（夕霧）ふだんのお部屋において　私の思いのほどだけを申し上げて　お気持に逆らう
ならば
しまさば、物越などにても、思ふことばかり聞こえて、御心破るべ
ことはいたしません
きにもあらず、あまたの年月をも過ぐしつべくなむ」など、尽きも
九

一〇 それでも、こうして喪中の悲しみに取り乱しておりますところへ、ご無体なことをお考えなのが、いかにも恨めしゅうございます。少将の君を介しての宮の言葉。

一一 世間の人のこのことを聞いての思わくも、どう見ましてもいい加減なことですまされないこの身の情けなさは、さて措くといたしましても。

一二 だからといって、いつまでもこんなことをしてはいられない、（このままでは）人が聞いて次々と噂をもらしても仕方のないことだと。世の物笑いの種になるだろうという気持。

一三 宮の内々のお気づかいの点は、宮の仰せになる通りにもして、当分の間は宮のお気持に逆らわぬようにしよう。「この御服のほどは」とあったのに対して、しばらくは表向きだけの夫婦でいよう、の意。「情ばむ」は、やさしくする意。

一四 宮のご評判がどんなにかおいたわしいことになることだろう。自分に捨てられたということになって、宮の名誉に傷がつこう、と言う。

一五 宮は、ああ何ということだろう、何とひどいことを、と。

夕霧、小少将の導きで塗籠に入る

せず聞こえたまへど、「（宮）一〇なほかかる乱れに添へて、わりなき御心なむいみじうつらき。人の聞き思はむことも、よろづになのめならざりける身の憂さをばさるものにて、返す返すも情けないあなた様のお心積りでございますことさらに心憂き御心がまへなれ」と、また言ひ返し恨みたまひつつ、全く寄せつけようともなさらないはるかにのみもてなしたまへり。

さりとてかくのみやは、人の聞き漏らさむこともことわりと、（立つ）は瀬もなくしたなう、ここの人目もおぼえたまへば、「（夕霧）一三うちうちの御心づかひは、このの女房たちの手前も気におなりなのでこのたまふさまにかなひても、しばしは情ばまむ、世づかぬ私を男として近づけないのはいかにも情けないことだし しかしだからと言ってありさまのいとうたてあり、またかかりとて、これきりお伺いしなかったらひき絶え参らずは、一四人の御名いかがはいとほしかるべき。一方的にど自分のことばかりお考えで大ひとへにものをおぼして、幼人げないのが困りものです少将の君げなるこそいとほしけれ」など、この人を責めたまへば、〔少将は〕げにともとも思い拝見するのも今はお気の毒で思ひ、見たてまつるも今は心苦しう、女房の出入りをお許しかたじけなうおぼゆるさまなもったいなく思われる夕霧の有様なので〔夕霧を〕戸口れば、人通はしたまふ塗籠の北の口より、入れたてまつりてけり。

一五いみじうあさましうつらしと、お側の女房のこともさぶらふ人をも、なるほどこうした世間の人げにかかる世の人

一　夕霧。男女対座の場面なので、「男」と端的に呼ぶ。

二　あなたが好きになるような不届きな料簡を、いつの間にかいだくようになりましたことも、迂闊なことだったと後悔されますが。

三　もうどうにもならない上に、（こうなってしまった以上）今さら汚名を晴らそうとなさったところで何のかいがありましょう。「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」（出典未詳の古歌）

四　「世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ」（『古今集』巻十九雑体、誹諧歌、読人しらず）

五　「身を捨てて深き淵にも入りぬべし底の心の知らまほしさに」（『後拾遺集』巻十一恋一、女の淵に身を投げよと言ひはべりければ　源道済）

六　単のお召し物（肌着）を髪ごとひき包みかぶって。

七　ああ情けない。以下、夕霧の心。

八　岩木にもまして強くあらがおうとするのは。「人、木石に非ざれば皆情あり」（『白氏文集』巻四、新楽府「李夫人」）

の心根なのだから　これよりもっとひどい目にも私を合せるに違いないことだと　頼りにできるお方もすっかりいなくなってしまわれたお身の上を　〔宮は〕

き人もなくなり果てたまひぬる御身を、かへすがへす悲しうおぼす。

男は、よろづにおぼし知るべきことわりを聞こえ知らせ、言の葉多う、あはれにもをかしうも聞こえ尽くしたまへど、つらく心づきなしとのみおぼいたり。「いとかう言はむかたなきものに思ほされける身のほどは、たぐひなうはづかしければ、あるまじき心のつきそめけむも、ここちなくくやしうおぼえはべれど、とり返すものならぬうちに、何のたけき御名にかはあらむ。いふかひなくおぼし弱れ。思ふにかなはぬ時、身を投ぐる例もはべなるを、ただかかる心ざしを深き淵になずらへたまて、捨てつる身とおぼしなせ」と聞こえたまふ。単の御衣を御髪籠めひきくくみて、たけきことは音を泣きたまふさまの、心深くいとほしければ、いとうたて、いかなればいとかうおぼすらむ、いみじう思ふ人も、かばかりになりぬれば、おのづからゆるぶけしきもあるを、岩木よりけになびきがたきは、

しみじみとも気を引くようにも懸命にお話し申しなさるけれども　〔宮は〕恨めしくいやなお方だとばかりお思いである　（夕霧）全くこのようにお話にもならぬいやな男だと思われ申したわが身のつたなさは　この上もなく気のひけることですから　何かと宮が納得なさるように条理を尽してお説き申し

自分の思い通りにならない時　もう仕方のないこととお諦め下さい　あるようですが　こうした私の気持を　とお考え下さって　〔淵に〕捨ててしまった身とお思い下さい　できることと言っては　たしなみ深くおいたわしいので　どうしてこんなにまでおきらいになるのだろう　どんなに決心の堅い人でも　こうまでなってしまえば　自然に気持のゆるむ様子も見えるものなのに

九 前世からの因縁が薄いために、男を嫌ったりすることがあるようだが、宮もそんなお気持なのだろうか、と思い当ると。「と思ひ寄るに」以下、地の文だが、「思ひ出づるも」「思ひ続けらるれば」と、敬語を欠き、夕霧の思いに密着した書き方。

一〇 自分のせいで、こんなつまらぬことになったのだと、あれこれ思い続けられるので。落葉の宮にうとまれ、雲居の雁からは怨まれる結果になったのも、皆自分の招いたことだと、苦い思いを反芻する。

翌日、夕霧、一条の宮にとどまる

一一 いつもこんなことでおめおめ間抜け者然と出入りするのも不体裁なことなので。すでに二晩、宮に拒まれて出入りすることになる。

一二 二七頁注一五参照。

一三 両開きの扉のある調度。上に棚のあるものもある。（一巻図録九参照）

一四 人の住めそうに室内をととのえておいでなのだった。「気近し」は、親しみの持てる感じをいう。

九 契り遠うて、憎しなど思ふやうあなるを、さやおぼすらむ、と思ひ寄るに、あまりなれば心憂く、三条の君の思ひたまふらむこと、いにしへも何心もなう、あひ思ひかはしたりし世のこと、年ごろ、今はとうらなきさまにうち頼み、解けたまへるさまを思ひ出づるも、

（前世からの因縁が薄いために、男を嫌ったりすることがあるようだが、宮もそんなお気持なのだろうか、と思い当ると。）

（あまりのことに情けなく）（雲居の雁）（お悲しみであろうこと）（昔）（何の疑いもなく）（お互いにいとしみ合っていた頃のこと）（今までずっと）（も）（大丈夫と無邪気に自分を信じ）（安心していられた様子を思い出すにつけても）

一〇 わが心もて、いとあぢきなう思ひ続けらるれば、あながちにもこしらへきこえたまはず、嘆き明かしたまうつ。

（無理に宮をおなだめ申そうともなさらず）

二 かうのみしれがましうて出で入らむもあやしければ、今日はとまりて、心のどかにおはす。かくさへひたぶるなるを、あさましと宮はおぼいて、いよいようとき御けしきのまさるを、をこがましき御心かなと、かつはつらきものの、あはれなり。塗籠も、ことにこまかなるもの多うもあらで、香の御唐櫃、御厨子などばかりあるは、こなたかなたにかき寄せて、気近うしつらひてぞおはしける。うちは暗きここちすれど、朝日さし出でたるけはひ漏り来たるに、うづもれたる御衣ひきやり、いとうたて乱れたる御髪かきやりなどして、

（居続けて）（ゆっくりとなさる）（こうまで向う見ずなさりようを）（何ということかと）（うとんずるご様子がひどくなるのを）（みっともないほどの意）（地の張りようと）（一面で恨めしくはあるものの）（おいたわしくもあるぬりこめ）（別に細々とした物が沢山置いてあるわけでもなくて）（片付けて）（何枚も）（ひきかぶった）（ひきのけ）（見苦しいほどに）（脇におしのけなどして）

一 亡くなった柏木が、特にすぐれた美男子というわけでもなかったのに、それでさえ、すっかりお高くとまっていて。以下、落葉の宮の思い。

二 ただ、どうしても宮の立場としては具合の悪いことで。以下、宮の心の内を説明する。

三 あちらでもこちらでも（朱雀院や致仕の太政大臣、このことをお聞きになったら、どうしても自分が悪いのだとお思いになるであろう上に。

四 宮の朝の洗面その他のお支度、朝食のお粥など。「粥」は、普通、今の炊いたご飯をいう。

五 喪中の黒っぽいお部屋の調度類も。

六 寝殿の東側は、服喪中の調度類をそのままに屏風を立てめぐらして隠した趣であろう。

七 母屋と廂の境の御簾際。

八 丁子を濃く煎じた汁で染めたもの。薄紅に黄を帯びる。

九 沈（香木）で作った二階棚。二階棚は、図録七参照。

一〇 山吹襲。表薄朽葉、裏黄。

落葉の宮、常の居間にもどる

（宮は）気品高く優雅な感じのお方でいらっしゃるほの見たてまつりたまふ。いとあてに女しう、なまめいたるけはひしたまへり。（夕霧）男の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、（きちんと身なりを整えていられる時よりも）うちとけてものしたまふは、（こ）限りもなうきよげなり。故君の異なることなかりしだに、心の限り思ひあがり、（宮の）御容貌まほにおはせずと、（お美しくないと）（何かの折に思っていたらしい様子を）とのをりに思へりしけしきをおぼし出づれば、ましてかういみじう（宮は）やつれてしまった自分の姿をおとろへにたるありさまを、（夕霧が）しばらくでも我慢できるだろうかしばしにても見忍びなむや、と思ふも、（ご自分の気持ととても気のひける思いだいみじうはづかし。（あれこれと思案をめぐらしながら）とざまかうざまに思ひめぐらしつつ、わが御心を納得させようとなさるをこしらへたまふ。ただかたはらいたう、ここもかしこも、人の聞きおぼさむことの罪さらむかたなきに、（喪中でさえあるのがとても情けないので）をりさへいと心憂ければ、（気持の慰めようもないのだったなぐさめがたきなりけり。

（常の）御手水、御粥など、例の御座のかたに参れり。（さし上げる）色異なる御しつらひも、（新婚には縁起でもないようなので）いまいましきやうなれば、東面は屏風を立てて、母屋の際に香染の御几帳など、（あまり大げさに喪中らしく見えないものを用い）ことことしきやうに見えぬもの、沈の二階などやうのを立てて、（然るべく気を配って部屋を整えてあるどといった物を）心ばへありてしつらひたり。大和の守のしわざ

一一 表、裏ともに紅色の襲。
一二 濃い紫色の衣裳。
一三 鈍色（薄墨色）に青花を加えた色。青味がかった縹色（薄藍色）。
一四 青味がかった朽葉色（赤味がかった黄色）。これも裳か。
一五 お食膳はさし上げる。以上、お給仕の女房の服色。
一六 女所帯なので、諸事しまりもなく今までやってこられた邸内に。
一七 数少ない下男たちにも声を掛けてきちんとさせ。
一八 こんな思いがけぬ身分の高いお方（夕霧）がお通いになるようになったと聞いて。
一九 貴族の家庭の庶務をつかさどる者。事務官。
二〇 貴族の家庭の庶務をつかさどる事務所。

雲居の雁、致仕の大臣の邸に帰る

二一 夕霧がこうして無理にも落葉の宮と馴染んだ様子をお取りつくろいになるので。河内本、別本「かくせめて住み馴れ顔つくりたまふほど」。
二二 もうこれでおしまいだろう、と。
二三 真面目な男が浮気をしたら振り向きもしないものだと聞いていたのは本当だったのだ、と。
二四 父の致仕の太政大臣の邸。
二五 悪い方角を避けるという口実を設けて。
二六 弘徽殿の女御。冷泉院の女御。北の方の腹で、雲居の雁の腹違いの姉。

なりけり。人々も、（女房たち）あざやかならぬ（目立たない色合いの）色の、山吹、（一〇）掻練、（一一）濃き衣、（一二）青鈍（一三）などを着かへさせ、薄色（薄紫色）の裳、（一四）青朽葉（一四）などを、（何かと目立たぬように工夫して）とかくまぎらはして、御台（一五）は参る。女所（一六）にて、しどけなくよろづのことならひたる宮のうちに、（体面にいろいろ気を配って）ありさま心とどめて、（一七）わづかなる下人（しもびと）をも言ひととのへ、（大和の守ただ一人面倒を見とりしきっている）この人一人のみあつかひ（一八）行ふ。（以前は怠けていた）かくおぼえぬやむごとなき客人（まらうと）のおはすると聞きて、（手の平を返したように参上して）もと勤めざりける家司（一九）など、うちつけに参りて、（詰めて）政所（二〇）などいふかたにさぶらひていとなみけり。（仕事にはげむのだった）

雲居の雁、限りなめり

かくせめても見馴れ顔につくりたまふほど、（雲居の雁）三条殿、（二二）限りなめりと、（まさかそんなことはと一面では信じていたが）さしもやはとこそかつは頼みつれ、（二三）まめ人の心変るは名残なくなむと聞きしはまことなりけりと、（夫婦の仲を見届けてしまったような気がして）世をこころみつることこちして、（何とかしてこんな不面目な仕打ちを見るまい）いかさまにしてこのなめげさを見じ、とおぼしければ、（二四）大殿（おほいとの）へ、（二五）方（かた）違へむとてわたりたまひにけるを、（お帰りになってみたところ）女御（二六）の里（お里帰りなさっていたりしたので）におはするほどなどに、（お会いになって）対面（たいめん）したまうて、（少しはおもしろくない気分も晴れるような気がなさるので）すこしもの思ひはるけどころにおぼされて、（いつものように急いでお帰りにもならない）やうにも急ぎわたりたまはず。（夕霧）大将殿も聞きたまひて、（案の定だ）さればよ、

一 とても気短かな性質のお人だ。雲居の雁のこと。
二 舅の致仕の太政大臣もそれに輪をかけて。
三 （自分のことを）けしからん、顔も見たくない、話も聞かぬなどと、おかしな態度に出かねなさらない、と。相手が相手だから、離縁話に発展しかねないと、あやぶむ。
四 女のお子たち、そのほかはごく小さいお子を連れて帰られたのだったが。插入句の気持で読む。
五 （残ったお子たちが）夕霧の姿を見かけてうれしがってまつわりつき、あるいは、母上を恋しがって、めそめそなさるのを。

夕霧、雲居の雁を迎えに出向く

六 こんな人の物笑いになるようなことをして、お粗末な夫婦仲であることよと。夫の浮気を怒っての妻の家出、世間によくある当時お決りの成行きである。
七 弘徽殿の女御の里下がり中の居室があるのである。
八 年かさの重立った女房たち。雲居の雁について来た女房たち。
九 今さら若い娘のようなご交際をなさることだ。弘徽殿の女御との接触は、雲居の雁に最新の流行の情報などももたらすはずである。以下、女房の取次ぎを以てする雲居の雁への苦情。

一いと急にものしたまふ本性なり、二この大臣もはた、おとなおとなし（年輩者らしくゆったり）うのどめたるところさすがになく、いとひききりにはなやいたまへる人々にて、三めざまし、見じ、聞かじなど、ひがひがしきことども（すぐ思いきったことをする派手なご性分の父娘だから）し出でたまうつべき、と、おどろかれたまうて、三条殿にわたりたまへれば、君たち（心がお騒ぎになって）も、かたへはとまりたまへれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける、見つけてよろこびむつれ、あるは上を恋ひたてまつりて、愁へ泣きたまふを、心苦しとおぼす。（帰ってご覧になると）（お子たちも）（半ばはあとに残っておいでなので）（人をお差し向けになるけれども）（かわいそうに）

〔雲居雁に〕
消息たびたび聞こえて、迎へにたてまつりたまへど、御返りだになし。六かくかたくなしう軽々しの世やと、ものしうおぼえたまへど、（お返事すらない）（腹立たしくお思いになるけれども）大臣の見聞きたまはむところもあれば、暮らして、みづから参りたまへり。七寝殿になむおはするとて、例のわたりたまふかたは、八御達のみさぶらふ。若君たちぞ、乳母に添ひておはしける。（舅の大臣の手前もあるので）（日が暮れてから）（ご自身で）（いつもお里帰りに使われる部屋には）

〔夕霧〕
九「今さらに若々しの御まじらひや。かかる人を、ここかしこに落しおきたまうて、など寝殿の御まじらひは。ふさはしからぬ御心の筋とは、年ご（幼い子供たちを）（あちらこちらにほったらかしになさったま）（寝殿でお遊びとは何たることです）（私とは合わないご気性だとは）（もう今）

一〇 そうした前世からの因縁なのでしょうか。

一一 取るに足らぬ今度のことで（落葉の宮とのこと）、こんな態度をお取りになってよいものでしょうか。

一二 何もおとなしくしているにも及ぶまいと思いまして。夕霧の非難に答えて、勝手にこうしていますと、居直った言いぶり。

一三 見苦しい子供たちは。自分の産んだ子ということで、卑下して言う。

一四 ずい分と素直なおっしゃりようだ。皮肉である。

一五 詮じつめていけば、一体、どちらの名折れになるというのでしょう。あなたが悪く言われるのが落ちだの意。「言ひたてば誰が名か惜しき信濃なる木曾路の橋のふみし絶えなば」（出典未詳。『奥入』以下に引く）

一六 その夜はそのまま太政大臣邸に泊って独り寝なさる。

夕霧、空しく帰る

一七 どうしてこうも行き場のない目に会う今日この頃なのかと思いながら。落葉の宮には拒まれ、雲居の雁の心は解けない今の自分のていたらくを嘆く。

忘れられないお人だとお思い申して
ろ見知りたれど、一〇さるべきにや、昔より心に離れがたう思ひきこえて、今はかく、手のかかる子供たちも大勢かわいくなっていますのを
くだくだしき人の数々あはれなるを、お互いに見限ることかたみに見捨
信じていましたのに
つべきにやはと、頼みきこえける。一一はかなき一節に、ひとふし かうはもてな
きつく不心得をなじって
したまふべくや」と、いみじうあはめ恨み申したまへば、（雲居雁）何もか
もうすっかり嫌気がさしておしまいになった私ですから
も、今はと見飽きたまひにける身なれば、今はたなほるべきにもあ
ませんし
らぬを、一二何かはとて。一三あやしき人々は、おぼし捨てずはうれしうこ
お見捨てにならなければうれしゅう存じます
そはあらめ」と聞こえたまへり。（夕霧）一四「なだらかの御いらへや。一五言ひも
ていけば、誰が名か惜しき」とて、無理にお帰りをすすめるでもなくて しひてわたりたまへともなくて、
一六その夜はひとり臥したまへり。

一七あやしう中空なるころかなと思ひつつ、君たちを前に臥せたまうて、一条の宮ではまた宮がどんなにか思い悩んでおいでの様子を ご想像して かしこにまたいかにおぼし乱るらむさま、思ひやりきこえ、やすからぬ心尽くしなれば、どんな男が いかなる人、こんな色恋沙汰をおもしろく思うのだろう かうやうなることをかしう
落ちとしていられぬ気苦労なので
もう懲り懲りした気がなさる
おぼゆらむ、など、物懲しぬべうおぼえたまふ。明けぬれば、（夕霧）「人
の手前も大人げないことですから
もうおしまいとおっしゃるのなら それでやってみましょう
の見聞かむも若々しきを、限りとのたまひ果てば、さてこころみむ。

一 わざわざ選んで残して行かれたのは、それだけのお考えがあるのだろうとは思いますが。出来の悪いのだけを残して行ったのだろうという嫌味。

二 おおどし申し上げなさるので。縁切りをちらつかせるのである。

三 まっすぐなど性分だから。以下、雲居の雁の心中。子供を全部取られはしないかと恐れる。

四 ここに連れて来たお子たちまで。今、夕霧と一緒に居る。

五 ほんとに情けなく、ものごとの分別のつかない気性があるのは、とてもいけないことなのです。そんなお母さんの言うことを聞いてはいけない、と言う。

六 致仕の大臣。

七 しばらくはそのまま様子を見ていることもなさらないで。雲居の雁の短慮をいましめる。

致仕の大臣、落葉の宮に歌を詠みおくる

あちらに残った子供たちも　かわいそうにあなたを恋しがっていたようですが

かしこなる人々も、らうたげに恋ひきこゆめりしを、選り残したまへるやうあらむとは見ながら、思ひ捨てがたきを、ほってはおけませんから　どうなりとも私が育てともかくももてなしはべりなむ」と、おどしきこえたまへば、すがすがしき御心にて、この君達をさへや、知らぬ所に率てわたしたまはむと、あやふし。姫君を、「いざたまへかし。見たてまつりに、かく参り来ることも具合の悪いことだから　ることにしましょう　一条の宮へでもお連れてお行きにならないかと　不安になる　（夕霧）さあいらっしゃい　あなたにお会いしに　こうしてこちらに伺うこと

ともはしたなければ、常にも参り来じ。かしこにも人々のらうたきら　あちらにも子供たちが私を待っているか　とても幼く　せめて同じ所で面倒を見てさし上げたい

を、同じ所にてだに見たてまつらむ」と聞こえたまふ。まだいといはけなく、をかしげにておはす。いとあはれと見たてまつりたまひて、「母君の御教へになかなひたまうそ。いと心憂く、思ひとるかたなき心あるは、いとあしきわざなり」と、言ひ知らせたてまつりたまふ。

かわいらしげでいらっしゃる　しみじみいとしいと　（夕霧）母上のお言いつけ通りになさってはいけません　お言い聞かせ申し上げなさる

大臣、かかることを聞きたまうて、人笑はれなるやうにおぼし嘆く。「しばしはさても見たまはで。おのづから思ふところものせらるらむものを。女のかくひききりなるも、かへりては軽くおぼゆる

こうしたいきさつを　世間の物笑いになることとお嘆きになる　（大臣）いくらなんでもしかるべきお考えがあるであろうに　女がこんなに思い切りがよいのも　かえって軽はずみだと思われるもの

八 まあ仕方がない、こうして言い出したからには、何で、間抜け顔してすぐにお帰りになることがあろう。

九 近衛の少将（正五位下相当）で、蔵人（帝の側近に詰めて御用を勤める）を兼ねる人。致仕の大臣の子息の一人。

一〇 ご縁があったからでしょうか、あなたのことが気になってならなくて、おいたわしくも思い、お恨みにも存ずる次第です。柏木の未亡人として、また今は雲居の雁から夫を奪った人として、の意。

一一 もの馴れた様子でずんずん入って行かれる。一条の宮には以前から出入りし馴れた様子。

一二 菅などを円く編んだ敷物。（五巻図録七参照）

一三 もうお出入りにも馴れた気がいたしまして、場違いな感じもいたしませんが、そのように馴染みの者ともお認め頂けないのかもしれません。

一四 致仕の大臣への返歌は、いかにも申し上げにくくて。

一五 せっかくのお歌ですのに、よそよそしくなさっては、大人気ないように思われましょう。

一六 代筆のお返事などさし上げるわけにはゆきませぬ。「宣旨書き」は、一三頁注一三参照。

わざなり。よし、かく言ひそめつとならば、何かは癡れてふとしも帰りたまふ。おのづから人のけしき心ばへは見えなむ」とのたまはせて、この宮に、蔵人の少将の君を御使にてたてまつりたまふ。

（です）（八）（いずれそのうちに相手の出方や気持ははっきり分るだろう）（一条の宮）（九）（お差し向けになる）

「契りあれや君を心にとどめおきて
あはれと思ふらめしと聞く

（一〇）（やはりお見捨てにはなれますまい）

なほえおぼし放たじ」とある御文を、少将持ておはして、ただ入りに入りたまふ。

（一一）

南面の簀子に円座さし出でて、人々、もの聞こえにくし。宮は、ましてわびしとおぼす。この君は、なかにいと容貌よく、めやすきさまにて、のどやかに見まはして、いにしへを思ひ出でたるけしきなり。「参り馴れにたるここちして、うひうひしからぬに、さも御覧じゆるさずやあらむ」などばかりぞかすめたまふ。御返りいと聞こえにくくて、「われはさらにえ書くまじ」とのたまへば、「御心ざしも隔て若々しきやうに。宣旨書きはた聞こえさすべきにやは」と、

（一二）（女房たち）（ご挨拶の申し上げようもない）（ご兄弟の中で）（美男で）（見た目も風采）（蔵人の少将）（もの静かに〔あたりを〕）（兄柏木在世中のことを）（一三）（少将）（といった程度にそれとなく嫌味を言われる）（一四）（宮）（私にはとても書けません）（一五）（女房）（一六）

一 亡くなった御息所がおいでだったら。「上」は、北の方、つまり一家を取りしきる婦人の称。

二 涙が、筆の穂先が字をなすより先に流れ落ちる気がして。穂先が墨をもらして字になる、それより先に涙がもれ落ちる意。「水茎」は、筆跡を意味する歌語。涙が「水茎に流れ添ふ」という慣用的表現がある（四巻梅枝二六九頁、幻一五一頁参照）。青表紙本「涙のみつらきに先だつ」。河内本、別本により訂す。

三 どうしたわけなのでございましょう、この世に人数でもないつまらぬ私の一身を、情けないともお思いになり、いとしいともお聞きになるとは。「数ならぬ」を「身ひとつ」に言い掛ける修辞。

四 簀子に座を設けられたあしらいをいう。

五 これからは、ご縁があるように存じられますので、始終お伺いすることになりましょう。姉（雲居の雁）の婿である夕霧がいるから、という軽い嫌味。

六 奥向きへのお出入りもこれからは大目に見て頂けそうで、長年の忠勤の結果がやっと報われるような気がいたします。

七 （致仕の大臣のお手紙があったりして）ますますご機嫌斜めな落葉の宮のご様子に、夕霧は気もそぞろにうろうろしておいでなので。

藤典侍と雲居の雁の贈答

八 藤典侍。惟光の娘で、夕霧の夫人。（三巻少女二六一頁以下、四巻藤裏葉二九四頁、五巻若菜下一六二頁参照）

皆して申し上げるので
集りて聞こえさすれば、〔宮は〕まづうち泣きて、故上おはせましかば、いかに仕方のない人だとお思いになりながらも
かに心づきなしとおぼしながらも、罪を隠いたまはまし、と思ひ出
でたまふに、涙の水茎に先だつここちして、書きやりたまはず。
はきはきともお書きになれない

（落葉宮）
何ゆゑか世に数ならぬ身ひとつを

憂しとも思ひかなしとも聞く

お心に浮んだままに　終りまできちんとお書きにもならぬていで　上包み
とのみ、おぼしけるままに、書きもとぢめたまはぬやうにて、おし
に包んで
つつみて出だしたまうつ。少将は、人々に物語して、「時々さぶら
女房たち　時々お伺いいたし
ますのに
ふに、かかる御簾の前は、たづきなきここちしはべるを、今よりは
身の置き所もないような気がいたしますが
よすがあるここちして、常に参るべし。内外などもゆるされぬべき
意味あり
年ごろのしるしあらはれはべるここちなむしはべる」など、けしき
げな挨拶を残して
ばみおきて出でたまひぬ。

いとどしく心よからぬ御けしき、あくがれまどひたまふほど、大
お嘆きの一方ならぬものがある
殿の君は、日ごろ経るままに、おぼし嘆くことしげし。典侍、かか
雲居の雁
〔雲居雁は〕自分をいつまでも不届きな女とおっしゃっておいでだそうだが
ることを聞くに、われを世とともにゆるさぬものにのたまふなるに、

九 こんな馬鹿にできない相手が現れたのに（雲居の雁はどうお思いだろう）。藤典侍は家来筋の娘だから、雲居の雁と対等の地位ではないが、落葉の宮は、北の方の一人として処遇されるべき人である。いわば雲居の雁と共同戦線を張って、その立場に同情する気持。

一〇 私が人数にも入る女でしたら、わが身のこととして思い知られるでありましょう夫婦仲のつらさでしょうが、今はあなた様のために涙に袖を濡らしております。

一一 何となく出過ぎたことという気はなさるけれども。同情を寄せてくるなど生意気な、という気持。（四巻初音一八頁注九参照）

一二 あちら（典侍）もさぞかし心おだやかではいられまい、とお思いになる気にも幾分おなりになるのだった。

一三 人の夫婦仲の不幸を気の毒に思ったことはありますが、わが身のこととまでは思いませんでしたのに。よく同情して下さいました、の意。

一四 夕霧と雲居の雁お二人の仲が、昔、一時とだえていた間は。致仕の大臣に仲を裂かれていた時期、少女の巻から藤裏葉の巻の二人の結婚まで、六年間。

一五 典侍を、単に内侍とも称する。

一六 河内本は、雲居の雁腹に「太郎、三郎、四郎、六郎、大君、中の君、四、五の君」とし、典侍腹に「三の君、六の君、次郎君、五郎君」とする。

雲居の雁腹、典侍腹の子女たち

〔前から〕

九 かくあなづりにくきことも出で来にけるを、と思ひて、文などは時時たてまつれば、聞こえたり。

（藤典侍）一〇 数ならば身に知られまし世の憂さを
人のためにも濡らす袖かな

一一 なまけやけしとは見たまへど、物思いがちな今日この頃の所在なさに もののあはれなるほどのつれづれに、

一二 かれもいとただにはおぼえじ、とおぼす片心ぞつきにける。

（雲居雁）一三 人の世の憂きをあはれと見しかども
身にかへむとは思はざりしを

〔典侍は〕ご同情する

お気持のままのお歌と

とのみあるを、おぼしけるままと、あはれに見る。

一四 この、昔御中絶えのほどには、この内侍のみこそ、人知れぬものに思ひとめたまへりしか、ことあらためてのちは、いとたまさかに、つれなくなりまさりたまうつつ、さすがに君達はあまたになりにけり。この御腹には、一六 太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は、大君、三の君、六の君、次郎君、

人目を忍ぶ恋仲とし

お二人の仲がもとに戻ってからは

お通いもごくまれに

て目をかけておいでだったが

冷淡におなりになる一方で

それでも

お子たちは大勢になっていた

雲居の雁

長女

次女

出来の悪いお子はなく
四郎君とぞおはしける。すべて十二人がなかに、かたほなるなく、
とてもおかわいらしく
いとをかしげに、とりどりに生ひ出でたまひける。内侍腹の君達し
もなむ、容貌をかしう、心ばせかどありて、皆すぐれたりける。一三
気立てがはきはきしていて
の君、次郎君は、東の御殿にぞ、取り分きてかしづきたてまつりた
お手許に引き取って大切にお育て申していらっし
とてもかわいがっておいでになる
源氏も日頃ご覧になって
まふ。院も見馴れたまうて、いとらうたくしたまふ。三この御仲らひ
やる
のこと、言ひやるかたなくとぞ。

一　五巻若菜下一六二頁に、花散里が「大将の君の典侍腹の君」を手許に引き取っているとあるのが、この「三の君」に当ることになる。

二　花散里。

三　このご一統のお話は、とても語り尽せたものではないとのことです。語り手の口ぶりをそのまま伝える草子地の筆法。「この御仲らひ」は、夕霧の一家の家族関係、具体的には雲居の雁腹、典侍腹それぞれの子女たちのことと見るべきであろう。夕霧と落葉の宮の物語を、夕霧の家庭に生じた一波瀾という印象で収束しようとする作者の意図がうかがえる。

御(み)法(のり)

紫の上は、数年前の大病のあと、ずっと病いがちの日を送っており、年月とともに弱ってゆくので、源氏の嘆きはこの上もない。今は後世のため、かねて念願の出家を望むのだが、源氏は、生きている間は離れて暮しがたく、どうしても許さないのであった。

三月、紫の上発願の法華経千部の供養が二条の院で行われた。五巻の日、紫の上は、薪(たきぎ)こる讃嘆(さんだん)の声にも、こうして人々と会うのもこれが最後かと心細く、挑(いど)み交わした明石の上や花散里も今は懐かしくて、それとなく別れを告げる歌を贈る。巻名の「御法」は、この時の贈答の歌の言葉による。

夏、暑熱に彼女の病勢は進み、明石の中宮はお見舞のため、二条の院に退出する。紫の上は、中宮と三の宮（匂宮(におうみや)）にそれぞれさりげなく遺言する。

秋、やがて中宮も宮中に帰参さるべく、紫の上の病床を訪うた。折から風が激しく吹き出した夕べのこと、庭前の萩の露にはかない自分の命を見る思いで、紫の上は歌を詠む。源氏と明石の中宮が唱和する。その直後、紫の上は、中宮に手を取られてこときれた。源氏は悲しみのあまり、夕霧が近づいて、紫の上の死顔を覗(のぞ)き込むのを制止することさえ忘れていた。八月十五日、紫の上の葬送は終った。

致仕(ちじ)の大臣(おとど)は、昔、葵の上を葬った時を思い合せ、ねんごろな弔問をよこす。秋好む中宮の弔いの文には、かつての春秋の争いが想い起され、源氏はあらたに涙にくれるのであった。

紫の上、病久しく出家を願うも、源氏許さず

一 紫の上は、ひどくお患いになったご病気ののち。四年前の正月、女楽のあと発病し（五巻若菜下一九四頁）、四月、危篤に陥ったこともある（同二一四～八頁）。

二 （源氏は）たとえわずかの間でも、紫の上よりあとにお残りになるのを、とてもつらいこととお思いだし。

三 心配で、死出の旅路の妨げになるような子供もいないお身の上なので。紫の上の実子のないことをいう。

四 長年連れ添った夫婦の縁をふっつりと絶って。死別によって、今生の契りを絶つこと。

五 どうかして、やはり、かねての望み通りの出家を遂げて。紫の上の出家の希望は、若菜下一五二頁、一九〇頁に述べられていた。

紫の上、いたうわづらひたまひし御ここちののち、いとあつしくなりたまひて、そこはかとなくなやみわたりたまふこと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月重なれば、たのもしげなく、いとどあえかになりまさりたまへるを、院の思ほし嘆くこと限りなし。しばしにても後れきこえたまはむことをば、いみじかるべくおぼし、みづからの御ここちには、この世に飽かぬことなく、うしろめたきほだしだにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとどめまほしき御命ともおぼされぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心のうちにも、ものあはれにおぼされける。後の世のためにと、尊きことどもを多くせさせたまひつつ、いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかかづ

ずいぶんお弱りになって　どこがお悪いというのでなくいつもご気分のすぐれぬことがずっと続いている　取り立ててひどいご病状というのではないが　回復のきざしもなく　いよいよ弱々しげになってゆかれるのを　源氏　紫の上ご自身のお気持としては　何の不足なこともなくどうでもこの世に生き永らえたいお命ともお思いではないのだが　[源氏を]　[紫上は]　つくづく　尊い仏事をあれこれと多くおさせになってはと悲しくお思いになるのだった　しばらくの間でも生きなって

一　そうはいうものの、源氏ご自身のご心中でも、出家しようとご決心なさっている事柄なので。源氏の道心はすでに一巻若紫一九四頁から見え、三巻絵合一一四頁、四巻藤裏葉二九九頁に、決意のほどが窺える。

二　いったん出家をなさったからには、仮にも俗世のことを顧みようとはお考えでなく。以下、五行後の「おぼしまうけたるに」まで、源氏の出家についての覚悟。

三　あの世では、極楽に生れて同じ連華の上の座を分け合おうと、お約束を交わされて。（五巻鈴虫三四八頁注三参照）

四　たとえ同じ山に籠るにしても、別々の峰に住み、お目にかかることのない住居に遠く離れて過すことばかりをお心積りなさっていたのだが。紫の上とは別々の生活をすべきだという考え。

五　お苦しみになり、重くなってゆかれるので。「篤ゆ」は、病が重くなってゆくこと。（三巻澪標一二頁注四参照）

六　（そんな執着を持ったまま出家しては）かえって、心を清まそうとした山中の暮しも濁りそうで。「山水」は、山川の意。「水」と「濁る」は縁語。

七　ほんの浅い料簡で、思いのままに道心を起す人々には。「浅ふ」は、この物語では「浅へたる」の形で出る。浅い意。

八　見苦しく、かねての気持に反するようなので。

九　出家を許されぬこと。

らはむ命のほどは、行ひをまぎれなくと、たゆみなくおぼしのたまへど、さらにゆるしきこえたまはず。一 さるは、わが御心にも、しかおぼしそめたる筋なれば、かくねむごろに思ひたまへるついでにも、二 よほされて、同じ道にも入りなむとおぼせど、一度家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみむとはおぼしおきてず、三 後の世には、同じ蓮の座をも分けむと、契りかはしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲なれど、ここながら勤めたまはむほどは、四 同じ山なりとも、峰を隔てて、あひ見たてまつらぬ住処にかけ離れなむことをのみおぼしまうけたるに、かくいとたのもしげなきさまになやみあついたまへば、五 いと心苦しき御ありさまを、今はと行き離れむきざみには捨てがたく、六 なかなか山水の住処濁りぬべく、おぼしとどこほるほどに、七 ただうちあさへたる、思ひのままの道心起こす人々には、こよなう後れたまひぬべかめり。御ゆるしなくて、心ひとつにおぼし立たむも、八 さまあしく本意なきやうなれば、九 このことによりてぞ、

[源氏は]
[紫上が]
[源氏の]
[紫上の]
[出家を]

勤行いちずに暮したいと　いつもお思いでお願いなさるが
こんなに熱心にお願いになるのをしおにご自分も一念発起して
同じ仏道修行の道にも入ろうとお思いになるが
この世において修行にお勤めになるあいだは
それを頼みにしているお二人だが
ご回復もおぼつかないご容態で
とてもおいたわしいご様子を
この世を逃れる段になると見捨てにくく
いよいよ
ぐずぐずしていらっしゃるうちに
ている命の限りは

一〇 紫の上。
一一 また、ご自分を、過去の罪障が深いためにこのように出家が妨げられるのかと、気がかりにお思いになった。
一二 紫の上お一人のひそかなご願としてお書かせ申しなさった法華経千部を、急いで供養なさる。

紫の上、法華経千部の供養を行う

「たてまつり」は「経」に対する敬語。
一三 紫の上が二条の院を伝領していることは、五巻若菜上八三頁参照。
一四 法会に携わる役僧。講師、読師、呪願、三礼、唄、散花、堂達の称。（五巻鈴虫三四九頁注九参照）
一五 僧の身分に応じて授けられる。
一六 女の身でのお指図としては、行き届いていて、仏道にもよく通じていらっしゃるおたしなみの深さなどを。大規模な法要の経営を独自で成し遂げたことに、源氏は感心する。
一七 法要の際、仏前で舞楽を献ずるのである。
一八 「后の宮たち」と複数なので、一人は秋好む中宮、一人は明石の中宮である。明石の女御の立后のことがここではじめて知られる書き方。
一九 花散里や明石の上など。
二〇 誦経の布施の品々。
二一 供物。金銀の作り枝に付ける。

一〇 女君は、〔源氏を〕うらめしく思ひきこえたまひける。一一 わが御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたくおぼされけり。

ここ数年 年ごろ、一二 私の御願にて書かせたてまつりたまひける法華経千部、いそぎて供養じたまふ。一三 わが御殿とおぼす二条の院にてぞしたまひける。一四 七僧の法服など、一五 品々賜はす。〔法服の〕染色や仕立て方 ものの色、縫ひ目よりはじめて、きよらなること限りなし。総じて おほかた何ごとも、いといかめしき大層立派な法会の形を いろいろ整えられた わざどもをせられたり。〔紫上は〕大層なことをするようにも申し上げられなかったので ことことしきさまにも聞こえたまはざりければ、〔源氏は〕こまかいところまで何もご存じでなかったのに くはしきことどもも知らせたまはざりけるに、一六 女の御おきてにてはいたり深く、仏の道にさへ通ひたまひける御心のほどなどを、源氏、本当に申し分ない方だと感心なさって 院はいと限りなしと見たてまつりたまひて、ただおほかたの御しつ一通りのお部屋の設備や らひ、何かのことばかりをなむ、お世話なさった いとなませたまひける。一七 楽人舞人 夕霧 などのことは、大将の君、特別にお世話をしてさし上げなさる 取り分きてつかうまつりたまふ。帝 内裏、春宮、一八 后の宮たちをはじめたてまつりて、一九 御方々、それぞれに ここかしこに御二〇 誦経、捧物などばかりのことをうちしたまふだに 大げさなのに 所狭きに、まして

一 いつのまに、このようにあれこれご用意なさったのであろうか。以下「……とぞ見えたる」まで草子地。

二 いかにも、遠い昔からのご立願なのであろうと察せられる。「石上」は、今、奈良県天理市の東部。その中にある布留の地名に続けて、歌に詠まれたことから「古る」の枕詞。転じて、ここは古い昔の意。

三 紫の上は、南と東の妻戸を開けていらっしゃる。（そこは）寝殿の西面（西側）の塗籠なのだった。紫の上の聴聞の席についていう。「塗籠」は、夕霧三六頁注五参照。ここは、母屋の塗籠であろう。仏壇は、東面の母屋に設けられた趣。

四 花散里や明石の上のお席。

五 仏のおわすという極楽浄土の有様は、こうもあろうかと思いやられて。『観無量寿経』に「爾時、世尊、告韋提希、汝今知不。阿弥陀仏、去此不遠」とある。

六 法華八講で、五巻を講ずる日に参集の僧俗が、「法華経をわが得しことは薪とり菜つみ水汲み仕へてぞ得し」（『拾遺集』巻二十哀傷、大僧正行基）を唱えて行道すること。（二巻賢木一七一頁注一六参照）

七 死期の近きを悟るこの頃、という含み。

八 匂宮をお使いに。紫の上の許で育てられている。

九 惜しくもないわが身ですが、これを最後として、命の尽きましょうことが悲しゅう存じます。「この身」に「菓」を掛け、法華経五巻提婆達多品に「採レ菓汲レ水、拾レ薪設レ食（中略）于レ時奉レ事、経三於千歳一、

明石の上と唱和

大層物々しいことがいろいろとある

そのころ、この御法会のご用をつとめない所はないので

この御いそぎをつかうまつらぬ所なければ、いとこちたきことどもあり。一 いつのほどに、いとかくいろいろおぼしまうけけむ。二 げに、いそのかみの世々経たる御願にや、とぞ見えたる。花散里と申し上げたお方聞こえし御方、明石の上〔二条院に〕などもわたりたまへり。三 南東の戸をあけておはします。寝殿の西の塗籠なりけり。北の廂に、四 方々の御局どもは、障子ばかりを隔てつつしたり。〔桜の〕

映障子だけを仕切りにしてしつらえてある

弥生の十日なれば、五 花盛りにて、空のけしきなども、うららかに

何となく風情があり

ものおもしろく、仏のおはすなる所のありさま、遠からず思ひやられて、ことなる深き心もなき人さへ、罪を失ひつべし。六 薪とる讃嘆の声も、そこらつどひたる響き、おどろおどろしきを、うち休みてしづまりたるほどだにあはれにおぼさるるを、七 ましてこのころとなりては、何ごとにつけても、心細くのみおぼし知る。明石の御方に、八 三の宮して聞こえたまへる、

大して深い信心のない者でも〔信心を起して〕罪障を消せそうだ

大勢参集した人々の声の響きが

やがてそれがとだえて静まり返った時でさえしみじみさびしく〔紫上は〕

あたりをゆるがすのに

残り少ない思いがしみじみとなさる

（紫上）九 惜しからぬこの身ながらもかぎりとて

為ニ於法一故、精勤給侍、令レ無レ所レ乏」とあることを踏まえ、「薪こり……」の讃嘆の歌にちなむ。「薪尽きなむ」は、法華経序品に、仏の入滅を「如ニ薪尽火滅一」とあるのによる。

一〇 明石の上のご返歌は、（紫の上の）心細い歌意にそのまま応じては、あとあと縁起でもない詠みぶりだとの非難を怖れてか、あたりさわりのないもののようだ。次の明石の上の歌に対する語り手の解説。

一一 法華経讃仰の思いは今日をはじめとしまして、このちこの世で成就を願う仏法のために、はるかに千年も長くお仕えなさいましょう。提婆達多品の「于レ時奉事、経ニ於千歳一」により、紫の上の長寿を願う。

一二 打楽器。読経の声に合せて、羯鼓を打つといわれる（二巻紅葉賀一四頁注三参照）。『岷江入楚』に、「此鼓は、撃鼓宣令提婆品文の心にて、糸竹をとりはなしていへる歟。此つづみは仏の法華経をとき給ふ時聴衆をあつむるとての事なり」の説を引く。

一三 「山桜霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ」（『古今集』巻十一恋一、貫之）による修辞。

一四 やはり春に心がひかれそうに、一面に美しく咲いて。紫の上が春を好んだことを想起させる文章。

一五 「百千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく」（『古今集』巻一春上、読人しらず）

一六 五巻若菜下二五八頁注二参照。

一七 陵王の場合は、終曲にテンポの早くなることか。一般には序破急の急であるが、陵王には急がない。

薪尽きなむことの悲しさ

一〇 御返り、心細き筋は、後の聞こえも心後れたるわざにや、そこはかとなくぞあめる。

（明石上）一一 薪こる思ひはけふをはじめにて
この世に願ふ法ぞはるけき

一晩中 夜もすがら、尊きことにうち合はせたる鼓の声絶えずおもしろし。ほのぼのと明けゆく朝ぼらけ、霞の間より見えたる花のいろいろ、一四なほ春に心とまりぬべくにほひわたりて、百千鳥のさへづりも、笛の音に劣らぬここちして、しみじみと胸に迫る悲しみも楽しみもここに極まると思ったもののあはれもおもしろさも残らぬほど時に、一六陵王の舞ひて急になるほどの末つかたの楽、はなやかににぎはしく聞こゆるに、［見物の］皆人の脱ぎかけたるもののいろいろなども、もののをりからにをかしうのみ見ゆ。親王たち、上達部のなかにも、ものの上手ども、秘術を尽して演奏なさる手残さず遊びたまふ。上下ここちよげに、興じて興ある様子であるのをご覧になるにつけても余命いくばくもないとわが身を観じていられる紫けしきどもなるを見たまふにも、残り少なしと身をおぼしたる御心

の上のお心には
のうちには、よろづのことあはれにおぼえたまふ。

昨日、例ならず起きてお坐りになっていたなごり起きゐたまへりし名残にや、〔紫上は〕いと苦しうして臥したまへり。年ごろ、今まで長年かかるものの音楽を演奏なをりごとに、このような催し事のあるたびに参りつどひ遊びたまふ人々の御容貌ありさまの、おのがじし才ども、それぞれの才能や琴笛の音をも、今日や見聞きなさるおりの最後になるであろうか見聞きたまふべきとぢめなるらむ、とのみおぼさるれば、さしいつも
ならさほど目もとまらぬ下々の者の顔まで
も目とまるまじき人の顔どもも、あはれに見えわたされたまふ。悲しくなつかしく見渡されなさる

一 まして、夏とか冬とか、四季折々につけての音楽の会や遊びにも。紫の上が春の上と呼ばれたことをもとに、夏の御方（花散里）冬の御方（明石の上）を念頭に置いた措辞。普通は「春秋の時につけたる……」というところ。六条の院の女楽のこと（五巻若菜下一六九～一八五頁）などが思い出されていよう。

二 それでもお互いに心のこもったお付合いをしていられる方々は。六条の院の御方々。

三 まず、自分一人が行方も知れぬあの世に旅立ってゆくことをお思い続けになると、とても悲しい気がする。紫の上の思い。

四 もうこれで、私がこの世で催す法会は最後と存じますが、この法会の結縁によって生々世々結ばれたあなたとのご縁が頼もしく思われます。「御法」に「身」を響かせ、長からぬわが身の意をこめる。

翌日、紫の上、病床に臥す

花散里と唱和

して夏冬の時につけたる遊びたはぶれにも、なまいどましき下の心
は、おのづから立ちまじりもすらめど、さすがに情をかはしたまふ
方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづわれひと
り行方知らずなりなむをおぼし続くる、いみじうあはれなり。

法会が終って　御方々がそれぞれ
こと果てて、おのがじし帰りたまひなむとするも、遠き別れめき
名残が惜しまれる　永遠の別れのようで
て惜しまる。花散里の御方に、

（紫上）四
絶えぬべき御法ながらぞ頼まるる

世々にとむすぶ中の契りを

五 結構な法会で結ばれました私たちのご縁は、後の世まで絶えることはございますまい、たいていの者には、残り少ない命とて、多くは催せない御法でありましょうとも。「おほかたの」は、普通一般的には、の意。そのなかに自分をこめ、しかし紫の上は特別で、末長いお命を保たれ、法会も営まれましょう、という祝意がある。

六 昼夜間断なく読経すること。普通、一七日、二七日、三七日と日を限って行う。一昼夜の十二時を十二人の僧が輪番で当る。

七 罪障を懺悔し、滅罪を願う行法。ここは法華経を読誦する法華懺法であろう。

八 密教で行う加持祈禱の法。

夏、紫の上、一層弱る

九 見るからに病人めいて、大層にお苦しみになることもない。「むつかしげ」は、むさくるしいさま。

一〇（中宮は）東の対にご滞在になるので。紫の上の病室は西の対であろう。

明石の中宮、紫の上を見舞う

御返り、

（花散里）五 結びおく契りは絶えじおほかたの

残りすくなき御法なりとも

（引き続いてこの法会を機会に）やがてこのついでに、不断の読経、懺法など、たゆみなく、尊きこ（尊い仏事を）とどもをせさせたまふ。御修法は、ことなるしるしも見えでほど経ぬれば、例のことになりて、うちはへさるべき所々、寺々にてぞせさせたまひける。

（源氏は）おさせになる　（これという効験も現れずに）　（日常のことになっていて）　（引き続き然るべきあちらこちら）

夏になりては、例の暑さにさへ、いよいよ意識を失ってしまわれそうな時がしばいとど消え入りたまひぬべきをりをり多かり。そのことと、おどろおどろしからぬ御ここちなれど、ただいと弱きさまになりたまへば、むつかしげに所狭くなやみたまふこともなし。さぶらふ人々も、いかにおはしまさむとするにか、と思ひよるにも、まづかきくらし、あたらしう悲しき御ありさまと見たてまつる。

（どこが悪いと）　（ご看護の女房たちも）　（一体どうおなりになるのであろうか）　（もうはや涙にくれて）　（と考え出すにつけても）　（明石の中宮）　（二条の院にご退出あそばす）　（ずっとこんなご容態なので）　（もったいなく悲しいご様子と）

かくのみおはすれば、中宮、この院にまかでさせたまふ。東の対

一 中宮行啓の到着の作法など。

二 この世のこうした作法もこれが見納めであろうなどとしきりにお思いなので。

三 行啓供奉の公卿などが、入御ののち名を名乗ること。『河海抄』に、「后宮行啓儀」として『北山抄』を引き、「六府次将以下一員近衛等供奉（中略）、入御之後王卿名対面、宮司問レ之（下略）」と注する。

四 公卿（参議、三位以上の者）などが、大層大勢供奉していた。名対面を聞いて分るのである。中宮の声望の盛んなさま。

五 今夜は、巣を無くしたような気がして、体裁の悪いことだ。紫の上は中宮と語り合っていて、側へ寄れないことを戯れて言ったもの。

六 別々の所にお宿り頂きますので、あちら（西の対）にお出で頂くのも恐れ多く存じます。かといって、私がこちらにあがりますことはとても叶わぬようになりましたので。

七 紫の上は、お心のうちで何かとお考えになることが多いが。没後のことについていろいろ思いを廻らすのである。

におはしますべければ、〔紫上は〕その東の対でこなたにはた待ちきこえたまふ。儀式など、例に変らねど、いつもの通りだが二この世のありさまを見果てずなりぬるなどのみおぼせば、よろづにつけてものあはれなり。名対面を聞きたまふにも、あれは誰これは誰などと三その人かの人など、耳とどめて聞かれたまふ。つい耳をとどめてお聞きになる上達部など、いと多くつかうまつりたまへり。〔紫上は〕久しき御対面のとだえを、めづらしくおぼして、御物語こまやかに聞こえたまふ。源氏が入ってこられて院入りたまひて、「今宵は巣離れたるここちして、無徳なりや。ここは失礼して休みましょうまかりてやすみはべらむ」〔ご自分の部屋へ〕とて、わたりたまひぬ。〔紫上が〕起きゐたまへるを、いとうれしとおぼしたるも、〔源氏が〕いとはかなきほどの御なぐさめなり。何ともはかないささやかなお気休めである〔紫上〕四「かたがたにおはしましては、あなたにわたらせたまはむもかたじけなし、参らむことはたわりなくなりにてはべれば」とて、〔紫上は〕東の対しばしはこなたにおはすれば、明石の御方もわたりたまひて、奥ゆかしいしんみりとしたお話をあれこれとお話し合いになる心深げにしづまりたる御物語ども聞こえかはしたまふ。

上は、御心のうちにおぼしめぐらすこと多かれど、利口そうにさかしげに、

八「私の死んだあとは」などとお口にされることもない。

九 明石の中宮腹の御子たち。

一〇 長年側近くお仕えした女房たちで、これという身寄りもなく、気の毒な身の上の。地の文からすぐ紫の上の言葉に続く語り口。

一一 誰と誰とを、私がいなくなりましたあとに、お心をとどめて、お目をかけてやって下さいませ。紫の上のいたわり深い人柄を示す遺言である。

一二 季の御読経。春秋二季、紫宸殿に百僧を請じ、四日間『大般若経』を講ずる。東宮、中宮、院、摂関家でも行い、中宮里邸退出の折は、里邸で行う。胡蝶の巻に、秋好む中宮の六条の院における御読経がある（四巻三七頁参照）。

紫の上、匂宮に遺言

亡からむのちなどのたまひ出づることもなし。ただなべての世の常なきありさまを、おほどかに言少ななるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらむよりもあはれに、もの心細き御けしきはしるう見えける。宮たちを見たてまつりたまうても、「おのおのの御行く末を、ゆかしく思ひきこえけるこそ、かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりけるにや」とて、涙ぐみたまへる御顔のにほひ、いみじうをかしげなり。などかうのみおぼしたらむ、とおぼすに、中宮うち泣きたまひぬ。ゆゆしげにどは聞こえなしたまはず、もののついでなどにぞ、年ごろつかうまつり馴れたる人々の、ことなるよるべなういとほしげなる、「この人かの人、はべらずなりなむのちに、御心とどめて、尋ね思ほせ」などばかり聞こえたまひける。御読経などによりてぞ、例のわが御方にわたりたまふ。

世間一般の無常な様子を　おっとりと　おざなりなおっしゃりかた　ことずく　言葉少なではあるが　ご自分のことをおっしゃるよりも悲しみようではなくお話しになる様子などは　頼りなげな様子ははっきりうかがわれるのだった　（紫上）　見届けたいものとお思い申し上げていたのは　こんなふうに短くて終る命を惜しむ心がどこかにあったからでしょうか　色合いは　お美しい　どうしてこう心細いことばかりお思いなのか　遺言めいた不吉な言い方などはなさらず　何かのお話のついでなどに

匂宮

三の宮は、あまたの御なかに、いとをかしげにてありきたまふを、

大勢の御子たちのなかで　大層かわいい様子であちこちしていられるのを

一 ご気分のよい時には、前にお坐らせ申し上げなさって。匂宮、前々年の横笛の巻に「三の宮、三つばかりにて」（五巻三三五頁）とあった。

二 私がいなくなりましたら、お思い出しなさるでしょうか。「まろ」は、自称の代名詞。男女ともに、親しい者同士で用いる。

三 おばあさまを、もっと大切にお思い申していますから、いらっしゃらなくなれば、きっとむずかりますよ。「はは」は、古くから澄んで読むが、祖母の意であろう。

四 西の対の前にある紅梅と桜。春を好む紫の上らしい遺言。

五 何かの折には、仏にもお供え下さい。暗に自分の供養のためという気持で言う。

六 ほかの宮たちとはちがって、特に手塩にかけてお育て申し上げなさったので。匂宮と女一の宮を紫の上のもとで育てていること、五巻横笛三三五頁注一七参照。

七 それでも、どうかすると、またお悪くなる。「かことがまし」は、何かにかこつけて恨みたくなる、の意。何かにつけて、すぐぶり返す状態をいう。

八 といっても、身に沁むほど冷たくお感じになるような秋風ではないのだが。「秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらむ」（『詞花集』巻三秋、和泉式部。『和泉式部集』。古注は多く第五句

秋、中宮、紫の上の病床を訪う

御ここちの隙には、前にする、たてまつりたまひて、人の聞かぬ間に、（紫上）「まろがはべらざらむに、おぼし出でなむや」と聞こえたまへば、（匂宮）「いと恋しかりなむ。まろは、内裏の上よりも宮よりも、はは（母中宮）をこそまさりて思ひきこゆれば、おはせずは、ここちむつかしかりなむ」とて、目おしすりてまぎらはしたまへるさま、をかしければ、ほほゑみながら涙はおちぬ。「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに、心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にもたてまつりたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて、涙のおつべかめれば、立ちておはしぬ。取り分きておほしたてたてまつりたまへれば、この宮と姫宮とをぞ、見さしきこえたまはむこと、くちをしくあはれにおぼされける。

（涙を）思わず笑いながらも涙はこぼれる　（紫上）　二条の院　かわいらしいので　父帝　女房たちの　（紫上）　（匂宮は）　見まもって　こぼれそうなので　立って行ってしまわれた　匂宮　女一の宮　お世話しさしたままになってしまうことを残念にもまた悲しくもお思いになった

秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては、御ここちもいささかさはやぐやうなれど、なほともすればかことがまし。さるは、身

ようやく秋になって　ご気分も　よくなるようではあるが

「人の恋しき」）の言葉を引く。

九（紫の上は）涙にお袖も湿りがちでお過しになっている。「露けし」は秋の縁語。

一〇（紫の上は）もうしばらくはご滞在になって下さいともお願い申し上げたくお思いになるが。死期の近いことを予感しての気持。

一一 帰参を促す帝のお使い。中宮の寵の厚いことがおのずから窺われる。

一二 そうも（「今しばしは御覧ぜよ」とも）申し上げずにいらっしゃるが。

一三 西の対の紫の上の病室。

一四（紫の上は）この上もなく痩せ細っていらっしゃるが。以下、紫の上に対面した中宮の目を通して書く。

一五 今まであまりに色香にみち、はなやかでいらした女盛りの頃は、かえって、この世の花の美しさにも喩えられていらっしゃったが。野分の巻で樺桜に（四巻一二五頁）、若菜下の女楽では桜に（五巻一七六頁）喩えられている。

一六 風が身に沁むばかり吹き出した夕暮に。以下、この段における光景が、源氏物語絵巻に描かれている。（図録三参照）

紫の上、源氏、中宮と唱和ののち、死す

一七 今日は、本当によい具合に起きていらっしゃるようですね。

にしむばかりおぼさるべき秋風ならねど、露けきをりがちにて過ぐしたまふ。中宮は、〔宮中に〕帰参なさろうとするのを参りたまひなむとするを、一〇今しばしは御覧ぜよとも、聞こえまほしうおぼせども、出過ぎたようでもあり さかしきやうにもあり、内裏の御使の隙なきもわづらはしければ、気になるので 一一さも聞こえたまはぬに、あなたにもえわたりたまはねば、宮ぞわたりたまひける。〔紫上は〕東の中宮〔西の対に〕 かたはらいたけれど、げに見たてまつらぬもかひなしとて、一二こなたに御しつらひを対にもお出向きになれないので いかにもお顔を拝まないのも張合いのないことと ご座所を特別に整えさせなさる ことにせさせたまふ。一四こよなう痩せ細りたまへれど、かくてこそ、恐れ多いことではある かえってこのほうが 気高く優雅なことのこの上もない感じが あてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれと、一段とまさってすばらしいと 一五来し方あまりにほひ多く、あざあざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花のかをりにもよそへられたまひしを、限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたまへるけしき、似るものなく心苦しく、すずろにもの悲し。

今は何にもたとえようなく愛らしく美しいご様子で もういくばくもないものとこの世を思っていらっしゃる 様子は わけもなく無性にもの悲しい

一六風すごく吹き出でたる夕暮に、前栽見たまふとて、脇息によりゐたまへるを、源氏院わたりて見たてまつりたまひて、一七「今日は、いとよ

一　この程度の気分のよさでも。「隙」は、病苦の絶え間。

二　おいたわしく、いよいよ自分が死ぬとなった時には、（源氏が）どんなにお心を乱されるだろうと思うと、しみじみ悲しいので。

三　起きていると見えましてもはかない命、ややもすれば吹く風に乱れる萩の上露と同じことでございます。「おく」は「起く」に「置く」を掛け、「露」の縁語。前に「前栽見たまふとて」とあった、その庭前の光景に託して詠む。

四　まことに庭前の萩は、今しも吹く風に折れかえり、置く露はこぼれ落ちそうな様子、折も折、紫の上の歌によそえて詠まれた時であるのもたまらないので。源氏の見る光景、心中の思いである。

五　どうかすると先を争って消えてゆく露、その露にもひとしいはかない人の世に、せめて後れ先立つ間をおかず、一緒に消えたいものです。「末の露本の雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ」（『古今六帖』一、雫。『遍昭集』。『和漢朗詠集』下、無常、良僧正）による。

六　秋風にしばらくの間もとまらず散ってしまう露の命を、誰が草葉の上のこととだけ思いましょう。わが身も同じことでございます。紫の上お一人ではないと慰める心。

七　紫の上と中宮のお顔立ち。

この上なくご気分も晴れ晴れなさる

く起きゐたまふめるは。中宮この御前にては、こよなく御心もはればれしげなめりかし（ようですね）」と聞こえたまふ。かばかりの隙あるをも、いとうれしと思ひきこえたまへる（源氏の）御けしきを見たまふも、心苦しく、つひにいかにおぼし騒がむ、と思ふに、あはれなれば、

（紫上）三　おくと見るほどぞはかなきともすれば
　　風に乱るる萩のうは露

四　げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、（前栽を）見出だしたまひても、

（源氏）五　ややもせば消えをあらそふ露の世に
　　後れ先だつほど経ずもがな

とて、御涙を払ひあへたまはず。宮、

（中宮）六　秋風にしばしとまらぬ露の世を
　　たれか草葉のうへとのみ見む

と聞こえかはしたまふ御容貌（申し分なく）ども、あらまほしく、見るかひあるに（さすがはと心を打たれ）

八 このままで千年も過す術があればよいのに。「桜花今宵かざしにさしながらかくて千年の春をこそ経め」（『拾遺集』巻五賀、天徳三年内裏に花の宴せさせたまひけるに　九条右大臣）がある。

九 本当に、消えてゆく露そのままのご様子で、ご臨終とお見えになるので。さきほどの露に寄せた最後の唱和が想起されている。

一〇 御誦経を頼みに行く使者。

一一 以前にも、このようにいったん呼吸が絶えて、またよみがえられたことがある、そのご経験から、御物の怪のせいかとお疑いになって。（五巻若菜下二一四～六頁参照）

源氏、夕霧に、紫の上の落飾を命ず

一二 深い因縁だったと、感慨無量でいらっしゃる。

一三 人の世に死別は当然のことで、誰にもあることだともお思いになれず。

るにつけても　〔源氏は〕つけても、かくて千年を過ぐすわざもがな、とおぼさるれど、心にかなはぬことなれば、〔人の命を〕かけとめむかたなきぞ悲しかりける。（紫上）「今は方法あちらへお帰り下さいませ　気分がひどく悪くなりましたわたらせたまひね。乱りごちいと苦しくなりはべりぬ。いふかひお話にもならぬほど弱ってしまいましたこととは申せなくなりにけるほどといひながら、〔これでは〕本当に失礼でございますいとなめげにはべりや」とて、望み少なげにお見えになるので御几帳引き寄せて臥したまへるさまの、常よりもいとたのもしげなく見えたまへば、どんなご気分なのかいかにおぼさるるにか、とて、中宮は、御手をとらへたてまつりて、泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露のここちして、限りに見えたまへば、御誦経の使ども、数も知らず立ち騒ぎたり。さきざきも、かくて生き出でたまふをりにならひたまひて、御もののけと疑ひたまひて、夜一夜さまざまのことを加持祈禱などいろいろの手立てをあらん限りなさったがし尽くさせたまへど、かひもなく、明け果つるほどに消え果てたまひぬ。

中宮　〔内裏に〕宮も、帰りたまはで、こうして臨終にお立ち会い申されたことをかくて見たてまつりたまへるを、限りなくおぼす。誰も誰も、ことわりの別れにてたぐひあることともおぼさ

一 夜明け方の暗がりに見た夢ではないかと、茫然としていらっしゃるありさまは、改めて申すまでもないことである。「明けぐれ」は、夜の明け方のまだほの暗い頃。

二 紫の上の病床を隔てる几帳。源氏は、この時はじめて夕霧を室内（母屋）に招じ入れたのである。

三 長年、深く志し願っていたことを。紫の上の出家の望みをいう。

四 御加持に奉仕する僧たち。「加持」は、真言密教で、印を結び、陀羅尼（呪文）を唱えて仏を念じ、加護を願うこと。「大徳」は、僧に対する敬称。

五 仏のご利益を、今はせめてあの冥途の道案内としてでも、お縋り申さねばならないから。「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」（『拾遺集』巻二十哀傷、性空上人のもとによみてつかはしける 雅致女式部）がある。「従レ冥入二於冥一、永不レ聞二仏名一」（『法華経』化城喩品）による和泉式部の詠作。「とぶらひ」は、面倒を見るというほどの意。

れず、めづらかにいみじく、明けぐれの夢にまどひたまふほど、さらなりや。（二つとないことのように悲しく）さかしき人おはせざりけり。（取り乱さない方はおられないのだった）さぶらふ女房なども、ある限り、（一人も気の確かな者はいない）さらにものおぼえたるなし。（源氏）院は、ましておぼししづめむかたなければ、（お気持を静めるすべもないので）大将（夕霧）の君近く参りたまへるを、御几帳のもとに呼び寄せたてまつりたまひて、「（源氏）かく今は限りのさまなめるを、（このようにもう最期のさまと見えるが）年ごろの本意ありて思ひつること、（こういう時に臨んで）かかるきざみに、（その望みを）その思ひ違へてやみなむがいといとほしきを、御加持にさぶらふ大徳たち、（果させずに終ってしまうのがまことにつらいので）読経の僧なども、（読誦もやめて帰った様子だが）皆声やめて出でぬなるを、（残っているはずの者もあろう）さりとも、立ちとまりてもものすべきもあらむ。（もう現世のためには何にもならないと思うが）この世にはむなしきここちするを、仏の御しるし、今はかの暗き道のとぶらひにだに頼み申すべきを、頭おろすべきよしも（髪を下ろすよう伝えて下さい）のしたまへ。（頼めそうな僧では）さるべき僧、誰かとまりたる」（誰が残っているか）などのたまふ御けしき、（いつもとは変り）心強くおぼしなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまに、いみじく（気丈に振舞おうとしていらっしゃるようだが）堪へかね、御涙のとまらぬを、ことわりに悲しく見たてまつりたまふ。（〔夕霧も〕ご無理もないと）

六 御物の怪などが、これも人のお心を悩まそうとして、よくこんなことになるもののようですから、あるいはそんなことでいらっしゃるのかもしれません。紫の上は、前にも物の怪のために仮死状態に陥ったことがある（若菜下二一四～六頁参照）。

七 それなら、いずれにせよご念願のご出家のことは、結構なことに存じます。

八 たとえ一日一夜でも戒をお守りになりましたら、その効験はかならずあると聞いております。「中品中生者、若有衆生、若一日一夜、受持八戒斎、若一日一夜、持沙弥戒、若一日一夜、持具足戒、威儀無欠、以此功徳、廻向願求生極楽国。戒香薫修、如此行者、命欲終時、見阿弥陀仏、与諸菩薩、放金色光、持七宝蓮華至行者前。」（『観無量寿経』）

九 死穢のため、三十日間、死者の近親が引き籠ること。僧もその間の仏事に従う。

一〇 今まで、どうこうという（紫の上に恋するといった）分不相応な考えはなかったけれども。以下、夕霧の心中の思い。

夕霧、源氏とともに紫の上の死顔を見る

一一 いつの世にか、あの時ほどにもお姿を拝したいものだ。野分の夕べ、紫の上を垣間見たことをいう（四巻野分一二四～五頁参照）。

一二 ほのかにお声さえも聞かぬことよ。紫の上のたしなみ深いさま。

（夕霧）六「御もののけなどの、これも、人の御心乱らむとて、かくのみものははべめるを、さもやおはしますらむ。七さらば、とてもかくても御本意のことは、よろしきことにはべなり。一日一夜忌むことのしるしこそは、むなしからずはははべなれ。まことにいふかひなくなり果てさせたまひて、後の御髪ばかりをやつさせたまひても、異なるかの世の御光ともならせたまはざらむものから、目の前の悲しびのみまさるやうにて、いかがはべるべからむ」と申したまひて、御忌に籠りさぶらふべき心ざしありてまかでぬ僧、その人かの人など召して、さるべきことども、この君ぞ行ひたまふ。

一〇年ごろ、何やかやと、おほけなき心はなかりしかど、一一いかならむ世に、ありしばかりも見たてまつらむ、一二ほのかにも御声をだに聞かぬこと、など、心にも離れず思ひわたりつるものを、声はつひに聞かせたまはずなりぬるにこそはあめれ、むなしき御骸にても、今一度見たてまつらむの心ざしかなふべきをりは、ただ今よりほかにい

（夕霧）安楽のご功徳になることもおありではないでしょうにばかりが増すようで
（しかし）本当にときれておしまいになりまして特に後世してから
（そのお姿に）ただ目前の悲しみ
あとでお髪だけをお下ろしになっても
いかがなものでございましょう
この僧あの僧などをお呼び寄せになって
なすべきことどもを
お命じになる
お声はとうとうお聞かせ下さらないで終ったようだがお姿を拝したいという望みの叶えられる機会は

かでかあらむ、と思ふに、つつみもあへず泣かれて（こらえきれずつい涙があふれて）、女房の、ある限り騒ぎまどふを（取り乱して騒ぐのを）、「あなかま（静かに）、しばし（しばらく）」と、しづめ顔にて（制するふりをして）、御几帳の帷を（何かおっしゃるのにかこつけて）、もののたまふまぎれに、引き上げて見たまへば、ほのぼのと明けゆく光もおぼつかなければ、大殿油を近くかかげて見たてまつりたまふに、飽かずうつくしげに（あまりにもかわいらしく）、めでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしさに（残り惜しさに）、この君のかくのぞきたまふを見る見るも（目にしながらも）、あながちに隠さむの御心もおぼされぬなめり。「かく何ごともまだ変らぬけしきながら（最期の様子ははっきりしているのですよまの感じだが）、限りのさまはしるかりけるこそ」とて、御袖を顔におしあてたまへるほど、大将の君（夕霧）も、涙にくれて、目も見えたまはぬを、しひてしぼりあけて（目を）見たてまつるに、なかなか飽かず悲しきことたぐひなきに、まことに心まどひもしぬべし。御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、露ばかり（ほんの一筋も）乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。火のいと明きに、御色（お顔色は）はいと白く光るやうにて、とかくうちまぎらはすこと

一　前出一一四頁の御几帳。

二　ほのぼのと明けそめる光もまだ薄暗いので。前にも「明けぐれの夢にまどひたまふ……」（一一四頁）と書かれている。

三　（源氏は）燈火を近くかかげて（紫の上の死顔を）見守っていらっしゃるのだが。夕霧の目に入る源氏の姿。「かかぐ」は、燈心を掻き立てて明るくする意。

四　しいて隠そうというお気持も起らぬようである。源氏、茫然自失の体。

五　なまじ拝見したために、かえってつらく悲しいことはこの上もなく、本当に取り乱しそうである。夕霧の心中を叙べる。

六　お髪が、無造作に枕もとにうちやられておありなのが、たっぷりとあって美しく。以下次頁二行目の「……臥したまへる御ありさま」まで、夕霧の目に映る紫の上のさま。

七　何かと、気を配って取りつくろわれることのあった生前のご様子よりも。

八 もう全く正体もない有様で。亡くなって意識のない状態。

九 悲しみに正気を失って、消え入りそうなわが魂が、このまま紫の上のご遺骸に留まってほしいと思われるのも。紫の上の亡骸にでも取り憑きたい夕霧の気持。次の「わりなきことなりや」は草子地。

紫の上の葬送

一〇 昔も、悲しいとお思いになること も数多くご経験なさったお身の上ではあるが。源氏は、母桐壺の更衣に先立たれたのは幼少の頃だったが、その後、祖母、夕顔、葵の上、父桐壺院、藤壺の宮と、大勢の人に先立たれている。

一一 そのまま、亡くなった当日に、あれこれしてご葬送申し上げる。後文に「十四日に亡せたまひて」（一一八頁）とあり、八月十四日のことである。

一二 いつまでも遺骸を見ながら過すというわけにもゆかないのが、情けない人の世ではある。「空蟬は殻を見つつもなくさめつ深草の山煙だに立て」（『古今集』巻十六哀傷、堀川の太政大臣みまかりにける時に深草の山にをさめてける後に詠みける　僧都勝延）による。

一三 葬儀の場所。火葬を行う。

ありしうつつの御もてなしよりも、いふかひなきさまにて、何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなしと言はむもさらなりや。なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入る魂の、やがてこの御骸にとまらなむ、と思ほゆるも、わりなきことなりや。

無心に横たわっていらっしゃるお姿のほうがいたことだ　一点の非の打ちどころもないと申すのもことさらめ　並み一通りの美しさどころか　比べるものもないお姿を　無理な願いというものである

つかうまつり馴れたる女房などの、ものおぼゆるもなければ、院何ごともおぼしわかれずおぼさるる御ここちを、あながちにしづめたまひて、限りの御ことどもしたまふ。一〇いにしへも、悲しとおぼすこともあまた見たまひし御身なれど、いとかうおり立ちてはまだ知りたまはざりけることを、すべて来し方行く先、たぐひなきこととこちしたまふ。

長年お側近くお仕えしてきた女房などで　気の確かな者もいないので　何ごともお分りにならないように思われなさるお気持を　ご葬送のことをあれこれお命じになるて　無理にも落着けられお世話なさったことはまだなかったので　本当にこうまでご自身が立ち入ってお思いになる　またとない悲しいこと

一一やがてその日、とかくをさめたてまつる。一二骸を見つつもえ過ぐしたまふまじかりけるぞ、心憂き世の中なりける。一三はるばると広き野の、所もなく立ち込みて、限りなくいか

何ともきまりのあることなので　余地もなく人が立ち込んで　盛大な

一 ほんのはかない煙になって、あっけなく立ちのぼっておしまいになったのも。紫の上の遺骸を荼毘に付したさま。

二 昔、大将の君（夕霧）の御母君（葵の上）が亡くなられた時の、ご葬送の明け方のことを思い出すにつけても。源氏の思いをそのまま写す筆致。（二巻葵九三～九四頁参照）

三 月の面がはっきりと記憶に残っていたが。葵の巻に「八月二十余日の有明なれば、空のけしきもあはれ少なからぬに」（二巻九四頁）とあった。『弄花抄』は、「葵の上の時は歌などもよみたまひしなり」と注する。

四 これは、十五日の夜明け方のことなのだった。十四日の夜から十五日の暁にかけて、火葬が行われたのである。

五 野辺の露も隠れるところなく照らし出されて。「露」は涙を暗示し、「も」に源氏の涙も、の意をこめる。「隈」は、ものの入りこんだ所。葬送の野からの帰路のさま。

六 いよいよとわしくてならないので。野辺の露が日に照らされてはかなく消えるのを眼前にした思い。

七 紫の上よりあとに生き残ったとて、どれほど生きられようか。このあたり、「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」（『古今六帖』一、雫。『和漢朗詠集』下、無常。『遍昭集』）にもとづく行文。

八 女々しいという後人の批判をお考えになるので。

めしき作法儀式なれど、一いとはかなき煙にて、はかなくのぼりたまひぬるも、例のことなれどあへなくいみじ。空を歩むここちして、人に寄りかかってお出ましになったのを かかりてぞおはしましけるを、見たてまつる人も、さばかりいつか方なのにと しき御身をと、ものの心知らぬ下衆さへ、泣かぬなかりけり。御送に加わった りの女房は、まして夢路にまどふここちして、車よりもまろび落ちるのに ぬべきをぞ、もてあつかひける。二昔、大将の君の御母君亡せたまへりし時の暁を思ひ出づるにも、かれはなほもののおぼえけるにや、三月の顔の明らかにおぼえしを、今宵はただくれまどひたまへり。十四日に亡せたまひて、四これは十五日の暁なりけり。日はいとはなやかにさし上がりて、五野辺の露も隠れたる隈なくて、世の中おぼし続くるに、六いとどいとはしくいみじければ、後るとても幾世かは経べき、かかる悲しさのまぎれに、昔よりの御本意も遂げまほしく思ほせど、七心弱き後のそしりをおぼせば、八このほどを過ぐさむとしたまふに、胸のせきあぐるぞ堪へがたかりける。

（源氏は）足も地につかぬ思いで あれほどのご立派なお ご葬送 わけも分らぬ 下人も

（供人は）手を焼くのだった 牛車からも転び落ちそうにな

あの時はまだ少しは正気づいていたのか 悲しみにくれて何も分らぬお気持である

（源氏は）出家のご念願も遂げたいと せめてこの当座を我慢しようとなさるにつけて 胸のこみあげてくるのがたまらないお気持だった

九　一一五頁注九参照。
一〇　ほんのわずかの間も、自邸にお帰りにならず。自邸は、三条殿（四巻藤裏葉三〇一頁参照）。
一一　風が野分めいて吹く夕暮に。「野分」は、秋の野を分けて吹く激しい風。台風。
一二　野分の巻の垣間見のこと。（四巻一二四～五頁）
一三　また、終焉の時のお顔を見て、現とも思われぬ気持だったことなどを。（一一六頁参照）
一四　よそ目には、そんなに深く悲しんでいる様子を見られまいと憚って。ひそかな思慕を憚る気持。
一五　「阿弥陀仏、阿弥陀仏」と爪繰られる数珠の数をとるのに紛らわして。念仏を一度唱えるごとに、数珠の玉を繰って数をとる勤行。極楽往生を祈願する。
一六　涙を隠していらっしゃった。数珠の玉に対して、「涙の玉」という。
一七　昔、ほのかにお姿を拝した秋の夕べが恋しいにつけ、ご臨終の、明けぐれの光にお顔を見た夢のようなできごとよ。「明けぐれの夢ぞ名残さへ憂かりける―その思い出さえつらいことだった」と、歌の末尾が地の文に続く。夕霧の独詠、心中の思いである。
一八　忌の間行う六時の念仏。一日を、晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時に分けて行う。
一九　『法華経』提婆達多品は、女人成仏を説き、安楽行品は、懺悔滅罪のため誦せられる。

夕霧、紫の上を追想

夕霧大将の君も、御忌に籠りたまひて、一〇あからさまにもまかでたまはず、明け暮れ近くさぶらひて、〔源氏の身に〕心苦しくいみじき御けしきを、おいたわしくも大層お悲しみのご様子をことわりに悲しく見たてまつりたまひて、よろづになぐさめきこえたまふ。風野分だちて吹く夕暮に、一一〔夕霧は〕昔のことおぼし出でて、〔紫上のお姿を〕ほのかに見たてまつりしものをと、恋しくおぼえたまふに、一三面影が恋しく思われなさるのにまた限りのほどの夢のここちせしなど、人知れず思ひ続けたまふに、堪へがたく悲しわが心一つにければ、一四人目にはさしも見えじ、とつつみて、一五（夕霧）「阿弥陀仏、阿弥陀仏」と引きたまふ数珠の数にまぎらはしてぞ、一六涙の玉をばもて消ちたまひける。

（夕霧）一七いにしへの秋の夕のこひしきに
いまはと見えし明けぐれの夢

〔源氏は〕尊い僧たちを幾人も奉仕させなさって
ぞ名残さへ憂かりける。やむごとなき僧どもさぶらはせたまひて、一八定まりたる念仏をばさるものにて、一九もとよりのこととして法華経など誦ぜさせたまふ。かこれまことに心にしみて悲しいたがたいとあはれなり。

源氏、阿弥陀仏を念ず

一（源氏は）寝ても覚めても、涙の乾く時とてなく。
二 鏡に映る顔立ちをはじめとして、才能といい身分といい、人にはすぐれたわが身ながら。以下、源氏の出家の願いを述べる。
三 幼い時から、この世は悲しくはかないのだと悟るように、仏などが促して下さっている身であったのに。幼少時から、母、祖母に死別し、若くして父院の崩などに会ったことをいう。
四 強情に押し切って、そのせいか、あげくのはてには、過去にもこれから先も例はあるまいと思われる悲しい目に会ったことだ。紫の上に先立たれたこと。
五 本当にこんなに静めようもない惑乱の状態では、念願の仏道にも入れないのではないかと。紫の上への愛執の思いの絶ちがたいことを嘆く。

帝をはじめ、人々の弔問続く

六 人に呆け者のようには見られまい、今さらこの年齢になって、愚かしく女々しい乱心から、出家したのだと。紫の上の死を悲しむあまりの出家ととられることをいう。「かたくなし」は、一途に思い込んで愚かしいこと。

臥しても起きても涙の干る世なく、霧りふたがりて明かし暮らしたまふ。いにしへより御身のありさまおぼし続くるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに来し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな、今はこの世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行ひにおもむきなむに、障り所あるまじきを、いとかくをさめむかたなき心まどひにては、願はむ道にも入りがたくやと、ややましきを、この思ひすこしなのめに忘れさせたまへと、阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ。

（目も）
何の心残りなこともなくなってしまった
一筋に
仏道修行をするにしても
さしさわりはないはずだが
気がかりなので
悲しみを人並みにゆるめて

所々の御とぶらひ、内裏をはじめたてまつりて、例の作法ばかりにはあらず、いとしげく聞こえたまふ。おぼしめしたる心のほどには、さらに何ごとも目にも耳にもとどまらず、心にかかりたまふことあるまじけれど、人にほけほけしきさまに見えじ、今さらにわが

あちこちの方々のご弔問は
儀礼には終らずに
ねんごろに度々お見舞い申される
型通りの
悲しみに沈まれている源氏のお気持とは
気にかかられることは何もあるはずはないのだが

七 思いのままにも振舞えぬというお嘆きまで加わるのだった。悲しみにばかり浸っていられず、弔問にも答えねばならぬという嘆き。「いなせとも言ひはなたれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり」（『後撰集』巻十三恋五、伊勢）

八 あのように、この世にはたぐいもなくすばらしくていらっしゃった紫の上のようなお方が、はかなくお亡くなりになってしまったことを。紫の上のような、前世の果報を享けた人でも、無常の例に漏れぬことを悲しむ気持。

致仕の大臣の弔問

九 夕霧の母葵の上。致仕の大臣の妹。

一〇 ちょうど同じ頃のことだった。葵の上の死は三十年前の八月、葬送は「八月二十余日の有明なれば」（二巻葵九四頁）とある。

一一 葵の上を哀惜なさった方々。父左大臣や母大宮など。

一二 後れ先だつといっても、何ほどの違いもない人の世であることだ。「末の露本の雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ」（一一八頁注七参照）による。

一三 柏木や左大弁の弟。（夕霧九五頁注九参照）

一四 遠い昔の秋の悲しみも、あらためて思い出されまして、（紫の上の死の）悲しみの上に、また涙を添えております。「露」は、涙を暗示し、「秋」の縁語。

世の末に、かたくなしく心弱きまどひにて、世の中をなむ背きにけると、流れとどまらむ名をおぼしつつむになむ、身を心にまかせぬ嘆きをさへうち添へたまひける。

（後世まで伝えられるであろう評判を気になさるので）

致仕の大臣、あはれをもをり過ぐしたまはぬ御心にて、かく世にたぐひなくものしたまふ人の、はかなく亡せたまひぬることを、（時宜を得たお見舞にはよく気のつくお人柄なので）（残念）くちをしくあはれにおぼして、いとしばしば問ひきこえたまふ。（お見舞を申し上げなさる）昔、大将の御母上亡せたまへりしも、このころのことぞかし、（致仕大臣は）とおぼし出づるに、いとものの悲しく、そのをり、かの御身を惜しみきこえたまひし人の、多くも亡せたまひにけるかな、後れ先だつほどなき世なりけりや、など、しめやかなる夕暮にながめたまふ。空のけしきもただならねば、御子の蔵人の少将してたてまつりたまふ。あはれなることなどこまやかに聞こえたまひて、端に、

（にも悲しくもお思いになって）

（しんみりとした夕暮に物思いに沈まれる）

（哀れを催し顔なので）

（をお使いにお文をさし上げなさる）（心のこも）

（ったご弔問のお言葉をねんごろに申し上げなさって）

（致仕大臣）

いにしへの秋さへ今のここちして
濡れにし袖に露ぞおきそふ

一 悲しみは、昔も今も変りがあるように思われません、大体、秋の夜というのがたまらない思いがするのです。

二 何ごとにつけても、悲しい思いをなさっている今のお気持そのままのご返歌では。

三 昔、「薄墨衣浅けれど」と、お詠みになった時よりは、もっと濃い色の喪服をお召しになっている。「薄墨」は、濃いねずみ色。妻の喪は、軽服といって三カ月服喪し、薄墨色の喪服を着る。葵の上の喪中、「限りあれば薄墨衣浅けれど涙ぞ袖をふちとなしける」（二巻葵九五頁）と詠んだことをさし、あの時よりもこまやかな志を表わす。

四 この世で幸運に恵まれた結構な方でも、困ったことに一般の世間から嫉まれ。以下「人のため苦しき人もあるを」まで、一般論を述べ、しかし、紫の上はそうではないと、「あやしきまで」からあと、紫の上への讃辞を書く。このあたりの文章は、薄雲の巻の、藤壺崩御に当って、その仁慈を讃える文を連想させる。（三巻一六八頁参照）

紫の上礼讃

五 （それで）さほどご縁もなさそうな世間普通の人までが、その頃は、風の音、虫の声につけても、涙を落さぬ者はない。「風の音、虫の声」は、哀れを催す秋の景物としてよく歌に詠まれるもの。以下、紫の上を惜しむ人々を三段階に分けて書く。

御返し、

（源氏）一 露けさはむかし今ともおもほえず
おほかた秋の夜こそつらけれ

二 もののみ悲しき御心のままならば、待ちとりたまひては、心弱くも（返事を待ち受けていられて）（何と女々しいと）、目とどめたまひつべき大臣の御心ざまなれば、めやすきほどに（お見咎めになるにちがいない）（ご性格なので）（見苦しくないようにと）と、「たびたびのなほざりならぬ御とぶらひの重なりぬること」と、（源氏）（お心のこもったご弔問を重ねて頂戴いたしまして）（お礼を申し上げなさる）よろこびきこえたまふ。

三 「薄墨」とのたまひしよりは、今すこしこまやかにてたてまつれり。

四 世の中に幸ひありめでたき人も、あいなうおほかたの世に嫉まれ、（身分が高いにつけても）よきにつけても、心の限りおごりて、人のため苦しき人もあるを、（この上なくおごりたかぶって）（まわりの人を困らせる方もあるのに）［紫上は］あやしきまで、すずろなる人にもうけられ、（不思議なほど）（何でもない人にまで評判がよくて）はかなくし出でたまふことも、何ごとにつけても、世にほめられ、心にくく、をりふしにつけつつ、らうらうじく、ありがたかりし人の御心ばへなりかし。（ほんのちょっとなさることも）（奥ゆかしく）（その折々につけて）（行き届いていて）（世にまたとないすぐれたお人柄であった）

五 さしもあるまじきおほよその人さへ、そのころは、風の音虫の声に

六 長年、親しくお側に仕えてきた女房たちは、たとえしばしの間にしろ、自分たちのような者が生き残っていることをうらめしく思っては。紫の上のような、すぐれた方の寿命の短かさを残念に思うのである。

七 枯れ果てた野辺の風情をお嫌いになって、亡きお方は、秋に心をお寄せにならなかったのでしょうか。昔、春秋の争いに、紫の上は春を好んだことによって詠む（三巻少女二七七～八頁、四巻胡蝶三七～三九頁参照）。「野辺」は歌語。

秋好む中宮の弔問

八 今になってようやくそのわけが分りました。紫の上の亡き秋、はじめてさびしい野辺の風情がいとわしいものと思われる、という気持。

九 お話のしがいがあり、風情のある歌などやりとりして心を慰める人としては、この宮だけがいらしたのだと。

一〇 少しは、悲しみも紛れるように何やかやと思い続けなさるにつけても。春秋の争いのことなど、何やかや思い続けるにつけても、紫の上を思い出して涙するのであろう。

一一 茶毘の煙となって立ち昇ってしまった空の上からも（亡き人は）ふり返って見てほしい、私はすっかりこの無常の世に飽きてしまったことです。「飽き」に「秋」を掛ける。春を好んだ紫の上をしのぶ気持。

つけつつ、涙おとさぬはなし。ましてほのかにも見たてまつりし人の、思ひなぐさむべき世なし。年ごろむつましくつかうまつり馴れつる人々、しばしも残れる命、うらめしきことを嘆きつつ、尼になり、この世のほかの山住みなどに思ひ立つもありけり。

〔紫上を〕〔哀惜のあまり〕心の晴れそうな時もない　この世を捨てた山寺の暮しなどを志す者もあるのだった

冷泉院の后の宮よりも、あはれなる御消息絶えず、尽きせぬことども聞こえたまひて、

秋好む中宮　お心のこもった　尽きぬ悲しみをあれ

「枯れはつる野辺を憂しとや亡き人の
　秋に心をとどめざりけむ」

（秋好中宮）

今なむことわり知られはべりぬる」とありけるを、ものおぼえぬ御心にも、うち返し、置きがたく見たまふ。いふかひあり、をかしからむかたのなぐさめには、この宮ばかりこそおはしけれと、いささかのものまぎるるやうにおぼし続くるにも、涙のこぼるるを、袖の暇なく、え書きやりたまはず。

お気持ながら　くり返し　下にも置きかねてご覧になる　〔源氏は〕悲しみに何も分らぬ　〔お返事も〕なかなかお書きになれない　〔拭う〕

（源氏）

のぼりにし雲居ながらもかへり見よ

一　お手紙を上包みの紙にお包みになっても、しばらくはぼんやりと物思いに沈んでいらっしゃる。すぐ、使いに手渡すこともせず、茫然とした様子。

源氏、悲しみにくれつつ、勤行に専念する

二　女房たちのいる所。奥向き。男性の出入りする表向きの場所での緊張に耐えないさま。

三　（紫の上と）千年ももろともにと願っていらっしゃったのに、（それも叶わず）仕方のないこととして、死に別れねばならぬとは、まことに無念なことなのだった。源氏の気持を地の文の形で書く。

四　今は極楽往生の願いも、ほかのことで紛れるはずもなく、後世のことをと。

五　けれども、まだ世間の噂が気になりになるのが、つまらなく思われるのだった。紫の上の死を悲しむあまり出家したと取り沙汰されるのを憚っていること。

六　（悲しみのあまり）もう今日が最後かと、源氏ご自身も死のお覚悟のされなさる時が多いのだが、いつのまにか月日が経ってしまったのも、まるで夢のように思われる。「わびつつも昨日ばかりは過してき今日やわが身の限りなるらむ」（『拾遺集』巻十一恋一、読人しらず）による。

われあきはてぬ常ならぬ世に

一おし包みたまひても、とばかりうちながめておはす。

すくよかにもおぼされず、われながら、ことのほかにほれぼれし（しっかりとしたお心もなくなり）くおぼし知らるること多かるまぎらはしに、二女方にぞおはします。（正体もないさまだとご自身でもお分りになることが多いのを隠すために）仏の御前に三人しげからずもてなして、（あまり大勢控えさせぬようになさって）のどやかに行ひたまふ。千年をももろともにとおぼししかど、限りある別れぞいとくちをしきわざなりける。四今は蓮の露も異事にまぎるまじく、後の世をと、ひたみちにおぼし立つことたゆみなし。五されど、人聞きを憚りたまふなむ、あぢきなかりける。（心静かにお勤めをなさる）御わざのことども、（七日ごとのご法要のことも）はかばかしくのたまひおきつることなかりければ、大将の君なむ、（[源氏は]はっきりと取り決めておき命じになることもなかったので）とりもちてつかうまつりたまひける。六今日やとのみ、わが身も心づかひせられたまふをり（夕霧）多かるを、はかなくて積りにけるも、夢のここちのみす。中宮（万事引き受けてお世話申し上げなさった）なども、おぼし忘るる時の間なく、恋ひきこえたまふ。（明石の中宮）（[紫上を]）

幻（まぼろし）

この巻は、紫の上の死の翌年の正月から十二月まで一年間の源氏の哀傷の生活が、月次の風物に寄せた歌をもとにして描かれている。源氏五十二歳。

新年、春の光にも、新たな悲しみに、源氏は簾中に籠ったまま、拝賀の人々に会おうともせず、わずかに螢の宮に対面したほかは、紫の上に親しく仕えた女房たちと故人の思い出話に耽り、女君たちを訪れることもない。独り寝の源氏の傍らには、夕霧が宿直をしている。二月、遺愛の紅梅と匂宮の姿に涙し、三月、花の盛りに、春を愛した人への追慕は抑えがたく、女三の宮、明石の上を訪れてみると、それぞれの人柄に、また故人への愛惜を深めるのであった。

夏四月、花散里の更衣の訪いにも悲傷の歌を返す。五月雨の頃は、花橘と郭公に昔思う心を乱し、六月、飛び交う螢に浮ぶのは、長恨歌の詩句。蓮の露の玉にも涙を催す日が続く。

秋、七夕の逢瀬も今は無縁のことで、八月は一周忌である。紫の上が生前調えておいた曼陀羅を供養した。九月、長寿を祈る菊の露に一人残る身をあわれむ。

冬十月、時雨の雨も涙を誘い、空飛ぶ雁に、大空を通う幻（道士）が求められる。巻名は、この時の源氏の歌の言葉にもとづく。十一月五節の頃、出家の思いは動きなく、歳末近く、紫の上の文を焼く。十二月末、仏名会に、源氏はは じめて人々の前に姿を現し、導師をもねぎらった。晦の日、年の終るとともに、わが一生も終ったことを源氏は悟るのであった。そして、読者も、来年は必ず出家するであろう源氏を思い、光源氏の物語の終ったことを知る。

一 年改まり、新春の光をご覧になるにつけても、一層涙に閉ざされ、心も乱れるようで、源氏お一人のお胸のうちは、悲しみの消えそうにもないのに。紫の上が春を愛した人だったからである。胡蝶の巻に、紫の上の御殿を「いつも春の光を籠めたまへる大殿なれど」（四巻三五頁）とある。「百千鳥さへづる春は物ごとに改まれども我ぞふりゆく」（『古今集』巻一春上、読人しらず）が踏まえられている。

正月、傷心の源氏
螢の宮と対面

二 後に出る「御簾のうち」に対するものであるが、人々と応接する表向きの部屋をいうのであろう。源氏は悲嘆にくれる身を恥じて「女方」に居たこと、前巻御法一二四頁に見える。

三 例年のように、お年賀に人々が参上なさったりするが。妻の服喪は三カ月で、旧年中に源氏の喪は明けている。

四 ほんの内々のお部屋で対面なさろうとして、ご案内を申し上げなさる。「御簾のうち」で対面しようというのである。

五 私の家にはもう花を喜ぶ人もいませんのに、何のために春がわざわざ訪ねて来たのでしょう。螢の宮を春によそえている。

六 梅の香を求めてお訪ねしたかいもなく、ただ一通りの花見のついでとおっしゃるお積りですか。上の句、わざわざ源氏を慰めようとして来たのに、の意がある。

一 春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは、悲しさのあらたまるべくもあらぬに、外には、二例の三やうに人々参りたまひなどすれど、〔源氏は〕ご気分がすぐれないようによそおわれて御こちなやましきさまにもてなしたまひて、御簾のうちにのみおはします。螢兵部卿の宮兵部卿の宮わたりたまへるにぞ、四ただうちとけたるかたにて対面したまはむとて、御消息聞こえたまふ。

（源氏）五
わが宿は花もてはやす人もなし
なににか春のたづね来つらむ

（兵部卿宮）六
宮、うち涙ぐみたまひて、
香をとめて来つるかひなくおほかたの
花のたよりと言ひやなすべき

一 六条の院南の町の前栽であろう。（三巻少女二七四頁、五巻若菜上六二頁参照）

二 （紫の上亡き今は）この螢の宮よりほかに、花の美しさを楽しむことのできる人はいないのではないかと、お見えになる。歌に「花もてはやす人もなし」とあった。源氏の目に映る螢の宮の姿。

三 女房なども、古参の者たちは、喪服の色の濃いのを着て。新春の装いに改めないのである。

源氏、女房たちと紫の上のことを語る

四 （源氏が）このところ、全くほかのご夫人たち（花散里や明石の上）のもとへもお出でにならず。

五 いつも目の前に拝することを心の慰めにして、お側去らずお仕え申している。「まぎれなく」は、ひたすら、いちずに、の意。

六 今まで、本気でお心にかけてというのではなかったが、時々は見捨てがたい者とお思いであった人にも。源氏の寵を受けていた女房たち。後出の中納言の君、中将の君など。

七 夜、警固のために、何人かが当番で主人の側に控えること。

八 源氏は引き籠って人にも会わないので、何もすることもないのである。

九 かつての好き心の名残もないご道心が。

一〇 大したことになるはずもなかったあれこれの恋愛事件につけて。朝顔の斎院とのことなど。

紅梅の下に歩み出でたまへる〔螢宮の〕御さまの、とても優しくお似合いなのでいとなつかしきにぞ、これよりほかに見はやすべき人なくや、と見えたまへる。花はほのかに開けさしつつ、いかにも風情のある美しさだをかしきほどのにほひなり。御遊びもなく、例に変りたること多かり。

女房なども、年ごろ経にけるは、墨染の色こまやかにて着つつ、悲しさもあらためがたく、思ひさますべき世なく〔亡き紫上を〕恋ひきこゆるに、絶えて御方々にもわたりたまはず、まぎれなく見たてまつるをなぐさめにて、馴れつかうまつる。年ごろ、まめやかに御心とどめてなどはあらざりしかど、時々は見放たぬやうにおぼしたりつる人々も、なかなか、紫の上に先立たれたさびしいお独り寝になってからはかかるさびしき御ひとり寝になりては、ごくあっさりとお扱いいとおほぞうにもてなしたまひて、夜の御宿直などにも、誰かれと大勢の女房たちをこれかれとあまたを、御座のあたり引きさけつつ、御帳台のあたりから遠ざけて控えさせておいでになるさぶらはせたまふ。

つれづれなるままに、いにしへの物語などしたまふをりをりもあり。過ぎ去った昔の思い出話名残なき御聖心の深くなりゆくにつけても、さしもあり果つ

まじかりけることにつけつつ、中ごろものうらめしうおぼしたるけしきの、時々見えたまひしなどをおぼし出づるに、[一二]などて、たはぶれにても、またまめやかに心苦しきことにつけても、さやうなる心を見えたてまつりけむ、[紫上は]何ごとにもらうらうじくおはせし御心ばへなりしかば、[一三]人の深き心もいとよう見知りたまひながら、怨じ果てたまふことはなかりしかど、[夫婦の仲が]一わたりづつは、[それぞれ一通りは]いかならむとすらむとご心配なさったために[紫上が]お心を悩まされたであろうことがとおぼしたりしに、すこしにても心を乱りたまひけむことの、いと毒で悪かったと悔まれなさるお気持はほしくくやしうおぼえたまふさま、胸一つにおさめきれないような思いがなさる事のいきさつそのをりのことの心をも知り、今も近うつかうまつる人々は、ほのぼつりと口に出して申し上げる者もいるぼの聞こえ出づるもあり。

一四 入道の宮のわたり始めたまへりしほど、そのをりはしも、色には

さらに出だしたまはざりしかど、ことにふれつつ、[一五]あぢきなのわざ情けないことよと

やと、思ひたまへりしけしきのあはれなりしなかにも、[紫上の]おいたわしかったそのなかでも[一六]雪降りたりし暁に立ちやすらひて、[一七]わが身も冷え入るやうにおぼえて、空のけ空模様も

一一（紫の上が）ひと頃、何やら怨めしくお思いであった様子が、折々お見えであったことなど思い出されると。（三巻朝顔一九九頁、二〇七～八頁参照）

一二 どうして、一時の浮気沙汰にもせよ、また真実おいたわしかったことにもせよ、ほかの女性にひかれるような心をお見せしたのだろう。「まめやかに心苦しきこと」とは、女三の宮を迎えたことをさしていよう。以下、六行後の「……ここちしたまふ」まで、源氏の悔恨の思いを述べる。

一三 自分（源氏）の本当の気持も、大層よく分ってはいらっしゃるものの。

一四 女三の宮が六条の院にお輿入れして来られた時のこと。女房が少しずつ語り出した口調を写した文章から、次第に、源氏自身の回想に移る。

一五 その当座は、（紫の上は）お顔には少しもお出しにならなかったが。源氏と心を合せて、宮を迎えたこと、五巻若菜上五四頁に見える。

一六（女三の宮方からの朝帰りに）雪の降った明け方、部屋の外に佇んで。女三の宮降嫁の三日の夜の明け方のこと（若菜上五九～六〇頁参照）。

一七 女房たちがしばらく格子を上げなかったので、源氏自身「こよなく久しかりつるに、身も冷えにけるは」と言うところがあった。（若菜上六〇頁）

一（紫の上が）とても愛らしく、おっとりとしていながらも、お袖のひどく泣き濡らしていらしたのを隠して。このこと、若菜上六〇頁参照。

二 暁（夜明けのまだ暗い頃）に対し、ほの明るくなって物の形が見分けられる頃をいう。

三 局に下がる女房であろう。夜の御宿直を終って退出するのである。

四 全くあの日の朝と同じ感じがするのに、（ただ一つ違うことといえば）横に紫の上がいらっしゃらないさびしさにつけても、言いようもなく悲しい。

五 つらいこの世からは姿を消してしまいたいと思いながら、思いもかけずまだ月日を過していることだ。「行き消え」に「雪消え」を掛け、「経る」に「降る」を掛ける。「消え」「降る」は「雪」の縁語。「憂き世にはゆき隠れなでかき曇りふるは思ひのほかにもあるかな」（『拾遺集』巻八雑上、加階しはべるべかりける年、えしはべらで雪の降りけるを見て　元輔。『河海抄』は、「ゆき隠れなむ」として引く）による。

六 いつものように、さびしさを紛らわすためには、朝の洗面をなさって、勤行をなさる。「手水」は、朝の洗面の支度。盥、半挿（水注ぎ）、水など。

七 灰の中に活けた炭火。「火桶」は、手焙り用の丸火鉢（四巻図録一〇参照）。

八 いずれも源氏の寵を受けたことのある女房。「中将の君」は、五巻若菜上五八頁注四参照。

九 独り寝が、いつもよりさびしい昨夜ではあった。

〔雪の気配で〕しきはげしかりしに、一いとなつかしうおいらかなるものから、袖のいたく泣き濡らしたまへりけるをひき隠して、無理にも気づかせまいとなさせめてまぎらはしたまへりしほどの用意などを、夜もすがら、夢にても、夢の中でもまたはいかなる世にか、とおぼし続けらる。曙にしも、もう一度いつになったら会えようか曹司におるる女房なるべし、「いみじうも積りにける雪かな」（女房）ずいぶん積った雪だことと言うのをお耳になさるのは二と言ふを聞きつけたまへる、四ただそのをりのここちするに、御かたはらのさびしきも、いふかたなく悲し。

五憂き世にはゆき消えなむと思ひつつ
思ひのほかになほぞほどふる

六例の、まぎらはしには、御手水召して行ひたまふ。七埋みたる火起こし出でて、御火桶参らす。八中納言の君、中将の君などは、御前近くて御物語聞こゆ。「ひとり寝常よりもさびしかりつる夜のさまかな。（源氏）九このように独り住みでも殊勝に行いすまして過せる人生だったのにかくてもいとよく思ひすましつべかりける世を、はかなくもたあいもなく俗世にかかずらってきたものだかづらひけるかな」と、うちながめたまふ。しんみりとなさる〔しかし〕自分までが出家してしまったらわれさへうち捨てては、

三日の夜の暁の回想があったからである。

一〇 並々に思う場合でも、（源氏のお声のすばらしさに）涙がとまらないだろうに、まして（紫の上追慕の折とて）「袖のしがらみ」も塞きとめられないほど悲しく。「しがらみ」は、水を塞きとめるための柵。「涙川落つる水上早ければせきぞかねつる袖のしがらみ」（『拾遺集』巻十四恋四、題しらず、貫之。『古今六帖』三、しがらみ）

源氏の述懐

一一 この世は無常でつらいものだということを悟らせようとして、仏などがお考えおきになった身なのであろう。以下の述懐と同様のことが、御法一二〇頁にも述べられている。

一二 こうして死も近い晩年に、悲しみの極みを味わったことで、自分の運勢のつたなさも、私自身の器量のほども、すっかり見届けて気も楽になったので、もう（出家をするにも）何の障りもなくなったのだが。

一三 ここにいる誰かれと、こんなふうに。眼前の中納言の君たちに向って言う。

この人々の、女房たちがいよいよ嘆き悲しむであろうことがいとど嘆きわびむことの、あはれにいとほしかるべき、いじらしくかわいそうに思われるだろうなど見わたしたまふ。忍びやかにうち行ひつつ、経など読みたまへる御声を、一〇 よろしく思はむことにてだに涙とまるまじきを、まして〔源氏の〕袖のしがらみせきあへぬまであはれに、明け暮れ見たてまつる人々〔源氏を〕女房たちのここち、限りなく悲しくお思い申し上げる尽きせず思ひきこゆ。

〔源氏〕現世の果報については「この世につけては、飽かず思ふべきことをさあるまじく、高貴の身分には生れながら高の身分には生れながら不足に思うようなことはまずないと思うほどき身には生まれながら、また人よりことに、世間の人よりは格別に不本意な運命に生れついたなくちをしき契りにもありけるかな、と思ふこと絶えず。一二 世のはかなく憂きを知らすべく、仏などのおきてたまへる身なるべし。それをしひて知らぬ顔になが〔出家もせずに〕らふれば、一三 かく今はの夕近き末に、いみじきことのとぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も、残りなく見果てて心やすきに、今なむ露のほだしなくなりにたるを、一三 これかれ、かくて、あ前よりもまして親しくなった人々がりしよりけに目馴らす人々の、〔私の出家で〕今はとて行き別れむほどこそ、今一別れ別れになる時には際の心乱れぬべけれ。いとはかなしかし。一段と心が乱れることだろう本当にしようのないものだわろかりける心のほどか思い切りの悪い料簡であることよ

な」とて、御目おしのごひ隠したまふに、まぎれずやがてこぼるる御涙を、見たてまつる人々、ましてせきとめむかたなし。さて、うち捨てられたてまつりなむがうれはしさを、おのおのうち出でまほしけれど、さもえ聞こえず、むせかへりてやみぬ。

かくのみ嘆き明かしたまへる曙、ながめ暮らしたまへる夕暮などの、しめやかなるをりをりは、かのおしなべてにはおぼしたらざりし人々を、御前近くて、かやうの御物語などをしたまふ。中将の君とてさぶらふは、まだ小さくより見たまひ馴れにしを、いと忍びつつ見たまひ過ぐさずやありけむ、いとかたはらいたきことに思ひて、馴れもきこえざりけるを、かく亡せたまひてのちは、そのかたにはあらず、人よりことにらうたきものに心とどめおぼしたりしものをと、おぼし出づるにつけて、かの御形見の筋をぞあはれとおぼしたる。心ばせ容貌などもめやすくて、うなゐ松におぼえたるけはひ、ただならましよりは、らららうじと思ほす。

一 そんなふうになって（源氏が出家なさって）、見捨てられ申すであろうつらさを、めいめい口に出したいけれども、そうも申し上げかねて。女房の分際で、差出がましいことと控える気持。

二 あの、並々にはお思いでなかった女房たちを。前出の中納言の君や中将の君など。

三 中将の君と呼ばれてお仕えしている女房は。

四 どく内密に何度かお見過しになれなかったのであろうか、（中将の君は）それを大層心苦しいことに思って、（源氏に）お親しみ申し上げなかったのに。紫の上に申し訳ないからである。

五 源氏は、色めいた筋ではなく、（紫の上が中将の君を）誰よりも特にかわいい者と目をかけていらっしゃったのにと、思い出されるにつけて。

六 紫の上のお形見という意味で、いとおしくお思いになっていられる。

七 「うなゐ松」と思われる感じが。『河海抄』は「文選曰、馬鬣ノウハツ松青蔟アヲヤブナリ」と引いて、「うなゐ松」を、墓の上に植えた松とし、亡き紫の上を偲ばせる形見の意とする。言葉として、「うなゐ松」は、これから生長する小松の意（「うなゐ」は、項まで垂らした子供の髪形）。なお『河海抄』に引く文は、『文選』本文には見えない。

八 何でもなかったであろう場合よりは、気が利いているとおぼしめす。かつて情けをかけた女房だけに、ひとしお紫の上の形見と思われる、という意か。

九 近しくない人には、（源氏は）全然対面なさらない。「外人には見えじ　見えば笑ひもこそ忘れ」（『白氏文集』巻三諷諭三、新楽府「上陽白髪人」）

一〇 上達部なども、親しい方とか、そのほかご兄弟の宮たちなど、始終お見舞に参上なさるが。「上達部」は、官は参議以上、位は三位以上の者。公卿。「御兄弟の宮たち」は、冒頭に登場した螢兵部卿の宮など。

一一 人と対坐する時だけは、気丈に心を静め、落着いていようとしても。以下「こよなく際まさりてをこなり」まで、源氏の心中。人に会わない理由を言う。

一二 こんなふうに、人が変ってしまわれたようだと、世間が噂しそうな時期だけでもあせらずにいようと、じっとこらえて日を送りなさっては。紫の上を喪った悲しみのために、理性を失って、出家したのだと言われまいとする用意。

一三 六条の院の婦人方。花散里や明石の上。

一四 真先に、とめどない涙がこぼれるので。「墨染の君が袂は雲なれやたえず涙の雨とのみ降る」（『古今集』巻十六哀傷、喪ひにはべりける人を弔問にまかりてよめる　忠岑）による。

疎き人にはさらに見えたまはず。上達部なども、むつましき、また御兄弟の宮たちなど、常に参りたまへれど、対面したまふことをさをさなし。人に向はむほどばかりは、さかしく思ひしづめ、心をさめむと思ふとも、月ごろにほけにたらむ身のありさま、かたくなしきひがことまじりて、末の世の人にもてなやまれむ、後の名さへうたてあるべし、思ひほれてなむ人にも見えざなる、と言はれむも、同じことなれど、なほ音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも、見苦しきことの目に見るは、こよなく際まさりてをこなり、とおぼせば、大将の君などにだに、御簾隔ててぞ対面したまひける。かく心変りしたまへるやうに、人の言ひ伝ふべきころほひをだに思ひのどめてこそはと、念じ過ぐしたまひつつ、憂き世をもえ背きやりたまはず。御方々にまれにもうちほのめきたまふにつけては、まづいとせきがたき涙の雨のみ降りまされば、いとわりなくて、いづかたにもおぼつかなきさまにて過ぐしたまふ。

疎き人（一〇）
上達部（一〇）
対面（一〇）
人に向はむほどばかりは（一一）
月ごろにほけにたらむ身のありさま（一一）
かたくなしきひがことまじりて（一一）
末の世の人にもてなやまれむ（一一）
後の名さへうたてあるべし（一一）
思ひほれてなむ人にも見えざなる（一一）
なほ音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも（一一）
見苦しきことの目に見るは（一一）
こよなく際まさりてをこなり（一一）
御簾隔ててぞ対面したまひける（一一）
かく心変りしたまへるやうに（一一）
御方々にまれにもうちほのめきたまふにつけては（一一）
まづいとせきがたき涙の雨のみ降りまされば（一一）
いとわりなくて（一一）
いづかたにもおぼつかなきさまにて過ぐしたまふ（一一）

幻

一 明石の中宮。

二 匂宮を、つれづれのお慰めとして、お手許にお置きになっていられる。次の匂宮の言葉からすれば、二条の院のことと見なくてはならないが、あえて六条の院のこととしたのであろう。

三 おばあさまがおっしゃったから。紫の上の遺言をさす（御法一一〇頁参照）。

四 御法によれば、二条の院の西の対の前の紅梅。

五 この木を植えて楽しんだ主人もいない家に、それも知らぬげにやって来て鳴いている鶯だ。季節は変らず廻りくるのに対し、人事の変りやすさを嘆く気持。

六 「これより六条院のことなり」（『細流抄』）。「次第にうつりて三月ばかりのことなるべし」（『湖月抄』師説）

七 お庭先の様子は昔に変らないのを。あとの文章から六条の院の春の庭ととれる。

八 桜の花をご賞玩なさってのことではないが、心は落着かず、何を見ても胸が締めつけられるように悲しく思われなさるので。紫の上が春を愛したからである。「ひさかたの光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ」（『古今集』巻二春下、桜の花の散るを詠める　紀友則）

九 鳥の音も聞えぬような山奥に行ってしまいたい一途な遁世のお気持にいよいよ強くおなりになる。「飛ぶ鳥の声も聞えぬ奥山の深き心を人は知らなむ」（『古

二月、匂宮と紅梅と

三月、匂宮と桜を惜しむ

后の宮は、内裏に参らせたまひて、三の宮をぞ、さうざうしき御なぐさめには、おはしまさせたまひける。「ははののたまひしかば」とて、対の御前の紅梅、取り分きて後見ありきたまふを、いとあはれと見たてまつりたまふ。きさらぎになれば、花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしく霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に、鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覧ず。

植ゑ見し花のあるじもなき宿に

知らずがほにて来ゐる鶯

と、うそぶきありかせたまふ。

春深くなりゆくままに、御前のありさまいにしへに変らぬを、めでたまふかたにはあらねど、静心なく、何ごとにつけても胸いたうおぼさるれば、おほかたこの世のほかのやうに、鳥の音も聞こえざらむ山の末ゆかしくのみ、いとどなりまさりたまふ。山吹などの、ここちよげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされたま

帰参なさって
（匂宮）三
世話して回られるのを［源氏は］
梅の木々の
二月
まだつぼみなのも
［源氏は］
（源氏）五
口ずさみながらあたりを徘徊なさる
およそこの憂き世とは別世界のように
気のせいかふと涙の露に濡れているかとばかりご覧に

今集』巻十一恋一、読人しらず）

一〇（六条の院南の町の）よそでは、一重の桜は散って、八重桜は盛りを過ぎ、樺桜は咲き、藤はそのあとから色濃くなどなったりするようだが。「花桜」は歌語。「樺桜」は、四巻野分一二五頁注一二参照。

一一（紫の上は）その遅く咲き早く咲くそれぞれの花の性質をよくわきまえて、色さまざまの花をある限り植えてお置きになったので。六条の院の春の庭のさま。（三巻少女二七四頁、四巻胡蝶三二頁参照）

一二 私の桜が咲きましたよ。「まろ」は、自称の代名詞。男女ともに親しい者の間で用いる。

一三 木のまわりに帳台を立てて、帷を上げなかったなら、風も吹き寄って来られまい。子供らしい思いつき。『花鳥余情』は、「唐穆宗毎宮中花開以重頂帳蒙被欄檻置惜花御史掌之号曰括香」（『雲仙雑記』）と注する。『雲仙雑記』『玉塵集』とも「惜春御史」に作る。

一四 大空に「覆うほどの袖」を欲しがった人よりは、ずっといいことを考えつかれましたね。「大空におほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」（『後撰集』巻二春中、読人しらず）

一五 命のほうは、もうしばらくこの世に留まるにしても、会うことはありますまい。やがて出家しようと考えているので、こう言う。

一六 おばあさまのおっしゃったのと同じことを、縁起でもなくおっしゃる。（御法一一〇頁参照）

ふ。ほかの花は一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その遅く疾き花の心をよく分きて、いろいろを尽くし植ゑおきたまひしかば、時を忘れずにほひ満ちたるに、若宮、「まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳を立てて、帷を上げずは、風もえ吹き寄らじ」と、かしこく思ひ得たり、と思ひてのたまふ顔のいとうつくしきにも、うち笑まれたまひぬ。「おほふばかりの袖求めけむ人よりは、いとかしこうおぼし寄りたまへりかし」など、この宮ばかりをぞもてあそびに見たてまつりたまふ。「君に馴れきこえむことも残り少なしや。命といふもの、今しばしかかづらふべくとも、対面はえあらじかし」とて、例の、涙ぐみたまへれば、いとものしとおぼして、「ははのたまひしことを、まがまがしうのたまふ」とて、伏目になりて、御衣の袖を引きまさぐりなどしつつ、まぎらはしおはす。

なる
一〇
ひと
や
かばざくら
一一
おく
おそ
と
時期を違えず次々と咲き
時を忘れずにほ
何とかしていつまでも散らき
匂宮
ひ満ちたるに
一二
すまい
一三
うまく考えついた
大層かわいらしいの
匂宮
匂宮
一四
（源氏）
（源氏）
（源氏）
一五
一六
（匂宮）
（涙を）隠そうとなさっている

一 源氏のさま。六条の院南の町の東の対（源氏と紫の上の居所）の隅の簀子にいる体。西南の隅であろう。

二 女房なども、服喪中の色を変えず、鈍色のままの者もあり、除服をして、常の色合いの者も、綾織りなどの派手なものは着ていない。御簾の内の有様。

三 色は普通のものであるが。桜襲（表白、裏紅、紫、二藍など）。冬の直衣である。

四 平絹。織り出し模様のない絹。

五 いよいよ出家するとなれば、荒れ果てさせてしまうのだろうか、亡き人が心をこめて作った春の庭を。

六 出家はご自分が深く決意なさったことながら、いずれ何もかも変ってしまうであろうと悲しくお思いになる。

女三の宮を訪う

七 女三の宮の御殿。六条の院南の町の寝殿。

八 お二人とも（匂宮も薫も）花の散るのを惜しむお気持などたいしてなく、本当に無邪気でいらっしゃる。前に匂宮が「木のめぐりに帳を立てて……」と言ったことを受ける。

九 何ほども深くお悟りになったご道心でもなかったのだが。以下、女三の宮を見ての源氏の感懐。

隅の間の高欄におしかかり（もたれて）て、御前の庭をも、御簾のうちをも、見わたしてながめたまふ。女房（二）なども、かの御形見の色変へぬもあり、例の色あひなるも、綾などはなやかにはあらず。みづからの（源氏ご自身の）御直衣（なほし）も、色（三）は世の常なれど、ことさらにやつして（特別地味になさって）、無紋（四）をたてまつ（お召しになっ）れり。御しつらひ（お部屋の飾りつけなども）なども、いとおろそかにことそぎて（大層質素に数少なくしているので）、さびしくもの心細げにしめやかなれば、

（源氏）五 今はとてあらしや果てむなき人の
心とどめし春の垣根を

六 人やりならず悲しうおぼさる。

いとつれづれなれば、七 入道の宮の御方にわたりたまふに、八 若宮（匂宮）も女房人に抱かれておはしまして、こなたの若君（薫）と走り遊び、花惜しみたまふ心ばへども深からず、いといはけなし。宮（女三の宮）は、仏の御前にて、経をぞ読みたまひける。九 何ばかり深うおぼしとれる御道心にもあらざりしかど、この世（この現世に恨みに思ってお気持の乱れるようなこともおありでなく）にうらめしく御心乱るることもおはせず、のど（もの静

一〇「閼伽」は、仏前に供える水。これに花を浮べる。

一一 紫の上の住んでいた東の対の庭前の山吹。

一二「植ゑて見し主なき宿の桜花色ばかりこそ昔なりけれ」（『紫明抄』『河海抄』所引。出典未詳）。「色も香も昔の濃さに匂へども植ゑけむ人の影ぞ恋しき」（『古今集』巻十六哀傷、あるじ身まかりにける人の家の梅の花を見てよめる　紀貫之）

一三「光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散るものの思ひもなし」（『古今集』巻十八雑下、時なりける人の、俄かに時なくなりて嘆くを見て、みづからの嘆きもなくよろこびもなきことを思ひてよめる　清原深養父）を引く。世を捨てた尼の身にとっては、人の世の悲しみも喜びも無縁であるという気持で言ったもの。女三の宮としては、卑下のつもりであろう。

一四 ほかに言いようもあろうに、いやなことを、とお思いになるにつけては。折から、庭前の花を見るにつけても、紫の上を偲び、悲嘆にくれる源氏にとって、「もの思ひもなし」という結句に続く返事は、いかにも思いやりなく響くのである。

一五（紫の上は）まずこんな何でもない受け答えにしても、これこれのことについて、そんなふうにはしないでほしいなと、こちらの思いに反したことはついぞなかったことだと。「おぼし出づるに」に続く。

一六（紫の上の）幼かった時からのご様子を、一体何の不足なことがあっただろうかと、お思い出しになるのに。

かなお暮しなので　気を散らさず勤行をなさって　すっかり俗念を離れてい

やかなるままに、まぎれなく行ひたまひて、一方に思ひ離れたまへ

こちらのように深い思慮からでもない女らしいご道心にさえられるのも

るも、いとうらやましく、かくあさへたまへる女の御心ざしにだに

夕方の薄明にはえて

後れぬること、とくちをしうおぼさる。閼伽の花の、夕ばえしてい

紫の上　何の

とおもしろく見ゆれば、「春に心寄せたりし人なくて、花の色もす

（源氏）

興もそそらぬものに思えるのですが　仏様へのお供えとして見るとよいものですね

さまじくのみ見なさるるを、仏の御飾りにてこそ見るべかりけれ」

やはりほかには見られぬ花の咲きぶりです

とのたまひて、「対の前の山吹こそ、なほ世に見えぬ花のさまなれ。

（源氏）

気高い風情でなどとは考えていない花なのでしょうか　派手

房の大きさなどよ。品高うなどはおきてざりける花にやあらむ、は

でにぎやかな感じは　まことにみごとな趣のあるものです

なやかにぎはしきかたは、いとおもしろきものになむありける。

植ゑし人なき春とも知らず顔にて、常よりもにほひかさねたるこそ

いつもの年より一段と美しく咲いているのがいじらしく思えます　深い

あはれにはべれ」とのたまふ。御いらへに、「谷には春も」と、何

（女三宮）

考えもなく申し上げなさるのを

心もなく聞こえたまふを、ことしもこそあれ、心憂くも、とおぼさ

るるにつけては、まづかやうのはかなきことにつけても、そのこと

のさらでもありなむかしと、思ふに違ふふしなくてもやみにしかな

と、いはけなかりしほどよりの御ありさまを、いで何ごとぞやあり

し、とおぼし出づるに、〔紫上生前の〕あの時この時の まづそのをりかのをり、才気があり行き届いていてかどかどしららうじう、奥ゆかしく情味ゆたかな人柄にほひ多かりし心ざま、もてなし、なさりよう言の葉のみ思ひ続けられたまふに、思い出されなさるとおっしゃった言葉ばかりが次々いつもの涙もろさのことととて例の、涙のもろさは、すぐにふとこぼれ出でぬるもいと苦し。

夕暮の霞たどたどしう、ほの暗くたちこめてをかしきほどなれば、一やがて明石の御方にわたりたまへり。長い間どんなふうなお顔出しもなさらない上に久しうさしものぞきたまはぬに、思いがけない時だったのでおぼえなきをりなれば、〔明石上は〕はっとするけれどもうちおどろかるれど、あわてずいかにも優雅にかたちを整えて応対するのでさまようけはひ心にくくもてつけて、二なほこそ人にはまさりたれ、と見たまふにつけては、三またかうざまにはあらでこそ、ゆゑよしをももてなしたまへりしかと、おぼしくらべらるるに、四面影に恋しう、悲しさのみまされば、いかにしてなぐさむべき心ぞと、五いとくらべ苦し。

明石の上のもとでは

こなたにては、〔源氏〕六のどやかに昔物語などしたまふ。「人をあはれと心とどめむは、いとわろかるべきことと、いにしへより思ひ得て、すべていかなるかたにも、どんな関係の女性についてもこの世に執心が残ることはないようにと気をつとまるべきことなくと、心づ

明石の上を訪う

一 そのまま、明石の上の御殿にお出でになった。六条の院の北の町である。

二 （源氏は）やはりほかの人より立派だ、とご覧なさるにつけては。

三 （紫の上は）また、こういった感じではなく、たしなみのほども趣味の深さをもお見せになったものだと、ふと心中お思い比べになると。

四 亡き紫の上のお顔が目先に浮んで恋しく。「面影に」は、面影に立って（幻のように浮んで）、の意。

五 本当に我ながら扱いにくい。「くらべ苦し」は、折合いがつきにくい、付き合いにくいの意。

六 女人に愛着して執心するようなことは、いかにも不体裁なことだと、ずっと前から考えていまして。以下、明石の上に向って、源氏の述懐。

七 おおよそ世間一般のこととして。前にあげた、女性に執着することに限らず、世間一般の人事として、の意。

八 自分が空しく零落してしまいそうだった頃など。須磨流浪の頃をさす。

九 それとさして、紫の上のこと一つが悲しいようにばかりはおっしゃらないが。

一〇 はたから見れば、出家してもどうということもなさそうに見える人でも、当人の心中には、絶ちがたい執着がどうしても多いもののようでございますから。

一一 そのような（たやすく出家するような）浅はかなことは、かえって軽はずみなと非難されることなども起ってきて、なまじせぬがよしということなどあるようでございますから。道心を貫けない事態が起りやすいことをいう。

一二 昔の人の例など聞きますにつけても、何か事に出会ってつい動揺したり、思いのままにならぬことがあったりして、憂き世を厭うきっかけになるとか。それは、やはり見苦しいことと聞いております。『花鳥余情』は、花山法皇が、最愛の妃弘徽殿の女御（藤原為光女）に先立たれた悲しみのあまり、俄かに位を去り出家したが、やがて俗世に泥む生涯を送られたことを例に引く。

かけていましたが
かひをせしに、おほかたの世につけて、身のいたづらにはふれぬべ
かりしころほひなど、あれやこれやと思案をめぐらした揚句に命を捨てとざまかうざまに思ひめぐらししに、命をも
ることにも何の未練もなく野山の果てにわが身をさすらえさせても格別のさしさわりもあみづから捨てつべく、野山の末にはふらかさむに、ことなる障りあ
るまいと思うようになったのですが もう死期も近い身になってかえってるまじうなむ思ひなりしを、末の世に、今は限りのほど近き身にて
よわいも末に
しも、持たぬでもよい係累に大勢かかわりあってあるまじきほだし多くかかづらひて、今まで過ぐしてけるが、
煮えきらず 苦々しいことです
心弱う、もどかしきこと」など、さして一つ筋の悲しさにのみはの
お胸の内はさぞかしとお気の毒でならないのを おいたわしくお
たまはねど、おぼしたるさまのことわりに心苦しきを、いとほしう
思い申して
見たてまつりて、（明石上）「おほかたの人目に何ばかり惜しげなき人だに、
心のうちのほだし、おのづから多うはべるなるを、ましていかでか
たやすく世をお捨てになれましょう
は心やすくもおぼし捨てむ。さやうにあさへたることは、かへりて
軽々しきもどかしさなども立ち出でて、なかなかなることなどはべ
ご決心がつきかねるようでいらっしゃるほうが 結局は澄みきったご
るなるを、おぼしたつほどにぶきやうにはべらむや、つひに澄み果
境地に到られることが深うございましょうと 存ぜられることでございます
てさせたまふかた深うはべらむと、思ひやられはべりてこそ。いに
しへの例などを聞きはべるにつけても、心におどろかれ、思ふより

違ふふしありて、世を厭ふついでになるとか。それはなほわろきこととこそ。なほしばしおぼしのどめさせたまひて、宮たちなどもお人あそばして となびさせたまひ、まことに動きなかるべき御ありさまに、見たてまつりなさせたまはむまでは、乱れなくはべらむこそ、心やすくもうれしくもはべるべけれ」など、いとおとなびて聞こえたるけしき、本当に申し分がない いとめやすし。

やはりもうしばらくご出家のことはごゆるりとあそばして

変ったことがございませんのが〔私などには〕安心でもありうれしくもございましょう

思慮深く申し上げた様子は

（源氏）三「さまで思ひのどめむ心深さこそ、浅きに劣りぬべけれ」などのたまひて、昔よりものを思ふことなど語り出でたまふなかに、「故后の宮のかくれたまへりし春なむ、花の色を見ても、まことに心あらばとおぼえし。それは、おほかたの世につけて、をかしかりし御ありさまを、幼くより見たてまつりしみて、さるとぢめの悲しさも、人よりことにおぼえしなり。みづから取り分く心ざしにも、もののあはれはよらぬわざなり。年経ぬる人に後れて、心をさめむかたなく忘れがたきも、ただかかる仲の悲しさのみにはあらず。幼きほど

昔から悲しい思いをしたことなどを

（源氏）四こきさい

そんなお方の亡くなられる悲しさも

誰よりも深く感じたのです

あきらめようもなく忘れられないのも

夫婦の仲ゆえの悲しさだけではありません

〔紫上を〕

一 明石の中宮所生の宮たち。

二 本当にゆるぎないご身分と、お見極め申し上げなさるまでは。東宮（第一皇子）の即位のことなどをさす。

三 そこまでゆっくり構える思慮深さこそ、浅はかな出家に劣ることになりましょう。結局いつまでたっても出家を遂げられぬことを怖れる。

四 藤壺の宮。崩御は、二十年前の三月。（三巻薄雲一六四〜八頁参照）

五 花の色を見ても、本当に「心あらば」と感じたものです。「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」（『古今集』巻十六哀傷、堀川の太政大臣みまかりにける時に深草の山にをさめてける後に詠みける　上野岑雄）。（薄雲一六九頁参照）

六 そのわけは、誰が見ても、優雅でいらした藤壺の宮のご様子を。特別の関係があって言うのではないと、無意識にことわる気持がある。

七 幼少の時から拝見し、深く心に刻んでいたので。（一巻桐壺三四〜三五頁参照）

八 自分が特別深い愛情を持っているから、特に無常の悲しみが深いとも限らぬようです。藤壺の死をこれほどまで悲しむことについての弁解。

九 長年連れ添った人（紫の上）に先立たれて。

より生ほしたてしありさま、もろともに老いぬる末の世にうち捨てられて、わが身も人の身も思ひ続けらるる悲しさの堪へがたきになむ。すべてもののあはれも、ゆゑあることも、をかしき筋も、広う思ひめぐらすかたがた添ふことの、浅からずなるになむありける」など、夜ふくるまで、昔今の御物語に、かくても明かしつべき夜を、とおぼしながら、帰りたまふを、女もものあはれにおぼゆべし。わが御心にも、あやしくもなりにける心のほどかなと、おぼし知らる。

育て上げたあいだのことや　晩年に先立たれて　自分の過去も紫の上のことも次々にいろいろ思われる悲しさがたまらないのです　胸を打つ感動も　意味深いことも　風流な方面にしても　あれこれ思いを馳せることのいろいろ多いのが　悲しみを深めるものなのでした　源氏　ご自身でも　おかしなことになってしまった心底だなと　思い知られなさる

一一 さてもまた、例の御行ひに、夜中になりてぞ、昼の御座に、いとかりそめに寄り臥したまふ。つとめて御文たてまつりたまふに、

（源氏）一四 なくなくも帰りにしかな仮の世は
いづこもつひの常世ならぬに

翌朝　一三

一五 昨夜の御ありさまはうらめしげなりしかど、いとかく、あらぬさまにおぼしほれたる御けしきの心苦しさに、身の上はさしおかれて、涙ぐまれたまふ。

本当にこんなに　人が変ったよう　に悲しみにくれていらっしゃるご様子がおいたわしいので　〔明石上は〕自分のことは忘れて　思わず涙ぐみなさる

一〇（源氏は）このままここで明かしてもよい夜だが、とお思いになりながらも。

一一 明石の上。男女の仲が意識されている場面なので、「女」と呼ぶ。紫の上を思慕のあまり、深更、女のもとを去る源氏に、明石の上も深い感慨を催す。

一二 お帰りになってもまた、いつものように仏前のお勤めをなさり、夜半になってから、昼の御座で、ほんのすこし物に寄りかかっておやすみになる。「昼の御座に」は、寝所（御帳台）に入らず、日中を過す席で仮眠すること。

一三 明石の上に贈る、後朝の文によそえたもの。

一四 泣きながら帰ってきたことです、仮のこの世は、どこも永遠の住処ではないのに。「常世」に「床」が響かせてある。「泣く」に「鳴く」、「仮」に「雁」を掛け、「常世」の縁語。雁は、北の常世の国（不老不死の仙境）から渡ってくると考えられていた。三月、帰雁の季節に寄せて詠む。

一五 昨夜の源氏のなさり方は、（明石の上には）怨めしく思われるものだったが。

明石の上と贈答

一 明石の上の返歌。雁がおりてきていた苗代水が絶えてのちは、水に映っていた美しい花の姿さえ見ないのでございます。上の句は、紫の上の亡くなったことを喩えていう。「雁がねし」は、源氏の歌の詞に応じたもの。水に映る影に、影を映す当の人物を意味する例は、当時の歌に多い。紫の上が亡くなってからのちは、源氏のたまの訪れもなくなったことを嘆く歌。

二 いつ見ても相変らず味わいのある書きぶりを見るにつけても。次の「なまめざましきものに」以下、明石の上の返書を見て、また紫の上を思い出す源氏の心中。

三 昔のように、夜を共にされるようなことには、すっかり無縁になられたようである。

四 花散里。

五 四月一日、衣服、調度を夏の装いに改めること。冬の更衣は、十月一日。

六 夏衣を新しく仕立て下ろした今日ぐらいは、すっかり昔のこととなりました私のこともお思い出しにならぬことがありましょうか。

七 薄い夏衣に替る今日からは、空しいこの世がいよいよ悲しく思われることでしょう。「羽衣」は、羽で作った薄く軽い着物。天人が飛翔の時、着るという。夏のひとえ衣の喩え。ことは「空蟬」（蟬の抜殻）の「蟬」の縁語。「空蟬の」は「世」にかかる枕詞。

八 賀茂祭。四月中の酉の日に行われる。

四月、花散里と贈答

雁がねし苗代水の絶えしより

うつりし花のかげをだに見ず

〔紫上は〕この人を目障りな者とお思いであったが

古りがたうよしある書きざまにも、なまめざましきものにおぼしたりしを、末の世には、かたみに心ばせを見知るどちにて、うしろや

互いに気心の分った者同士で　安心できる相手としては頼りにできる人だと

すきかたにはうち頼むべく、思ひかはしたまひながら、またさりとてひたぶるにはたうちとけず、ゆゑありてもてなしたまへりし心お

心をお交わしになりながらも　すっかり気を許してしまうわけではなく　たしなみ深くお付合いをなさっていた心遣いを

きてを、人はさしも見知らざりきかし、などおぼし出づ。せめてさうざうしき時は、かやうにただおほかたにうちほのめきたまふをり

明石の上はそうとも気づかなかっただろう　このようにただ何ということなしに〔明石上のもとに〕顔をお見せになる　たまらなくさびしい思いのする時は　折も時々ある

をりもあり。昔の御ありさまには、名残なくなりにたるべし。

夏の御方より、御更衣の御装束たてまつりたまふとて、

夏衣裁ちかへてける今日ばかり

ふるき思ひもすすみやはせぬ

御返り、

羽衣のうすきにかはる今日よりは

九 女房など、どんなにつまらなく思っていることだろう。源氏に殉じて引き籠っているからである。

一〇 そっと里下がりして見てくるがよい。六条の院から祭見物に出かけるのは、具合が悪かろうとの配慮。

賀茂祭の日、中将の君と贈答

一一 源氏の寵を受けた女房。（一三二頁参照）

一二 源氏の居所である東の対の東廂であろう。

一三 紅の黄がかった色（橙色）の袴。服喪用の袴である。中将の君は、なお一周忌まで喪に服する趣。

一四 萱草（忘れ草）の花の色。くすんだ橙色。喪服に用いる。

一五 大層濃い鈍色（鼠色）の袿に、黒い表着など。「黒き」は、鈍色を黒く見えるほど濃く染めたもの。

一六 賀茂祭の日の景物。人々の冠や車に葵を付ける。

一七 何というのだったかな。この草の名を忘れてしまった。「葵」に「逢ふ日」を掛け、お前に逢うことも忘れてしまった、の意をこめる。

一八 いかにも、神前のよる瓮の水も古くなって水草が一面に生えてもいましょうが、今日の插頭ですのに、葵の名さえお忘れになりますとは。「よる瓮の水」は、社の前に置いた瓶の水。これに神霊が憑るといわれる。「よる瓮」に「寄る辺」が掛けられ、上の句は、私のことなど見向きもなさらぬのは、仕方ございませんが、の意。「さもこそはよるべの水に影絶えめかけし葵を忘るべしやは」（『袖中抄』古歌）

空蟬の世ぞいとど悲しき

祭の日、いとつれづれにて、「今日は物見るとて、人々ここちよげならむかし」とて、御社のありさまなどおぼしやる。「女房など、いかにさうざうしからむ。里に忍びて出でて見よかし」などのたまふ。中将の君の、東面にうたた寝したるを、歩みおはして見たまへば、いとささやかにをかしきさまして、起き上がりたり。つらつきはなやかに、にほひたる顔をもて隠して、すこしふくだみたる髪のかかりなど、をかしげなり。紅の黄ばみたる気添ひたる袴、萱草色の単、いと濃き鈍色に黒きなど、うるはしからず重なりて、裳、唐衣も脱ぎすべしたりけるを、とかく引きかけなどするに、葵をかたはらに置きたりけるを取りたまひて、「いかにとかや。この名こそ忘れにけれ」とのたまへば、

さもこそはよるべの水に水草ゐめ

けふのかざしよ名さへ忘るる

（源氏）
祭見物にと
誰もが楽しそうにし
大層所在がなくて
社頭の様子
ていることだろうな
（源氏）
頬のあた
大層小柄でかわいい様子をして
寝起きの上気した顔をそっと隠して
そそけた髪の毛のかか
りがあでやかで
風情がある
くつろいださまらしい重なりようで
りと具合など
（源氏の来訪に）
（中将君）
（源氏）

一　大方のことは、執着を捨ててしまったこの世ではあるが、今日のこの葵だけは、やはり摘んでしまいそうだ。「葵」に中将の君をなぞらえ、「摘み犯す」（無理に摘む）に「罪犯す」を掛ける。「葵」「罪」は神事にかかわる縁語。

二　五月雨（梅雨）の頃は。

三　「ながめ」は、物思いに沈む意に「長雨」を響かせる。

四　橘の花。歌語。五月の景物とされた。

五　追風が人恋しい気分をそそるので。「追風」は、香りを運んで来る風。「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』巻三夏、読人しらず）

六　「千代をならせる声」（毎年やってくる変らぬ声）を聞かせてほしいものだと。「色変へぬ花橘に郭公千代をならせる声聞こゆなり」（『後撰集』巻四夏、読人しらず）。郭公は、冥途と現世を往復すると考えられていた。「死出の山越えて来つらむ郭公恋しき人の上語らなむ」（『拾遺集』巻二十哀傷、伊勢）

七　軒先に吊す。（一巻図録一〇参照）

八　「耿々たる残んの燈の壁に背けたる影　蕭々たる暗き雨の窓を打つ声」（『白氏文集』巻三諷諭三、新楽府「上陽白髪人」。『和漢朗詠集』巻上、秋夜）

九　紫の上に聞かせたいようなお声だ。傍らの夕霧の心中。「ひとりして聞くは悲しき郭公妹が垣根におとなはせばや」（出典未詳。『紫明抄』『河海抄』所引）

五月雨の夜、夕霧と語る

と、はぢらひて聞こゆ。げにといとほしくて、

（源氏）おほかたは思ひ捨ててし世なれども
葵はなほやつみをかすべき

（中将の君）人だけはお思い捨てにならぬ様子である

など、一人ばかりはおぼし放たぬけしきなり。

五月雨は、いとどながめくらしたまふよりほかのことなく、さうざうしきに、十余日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに、大将の君御前にさぶらひたまふ。花橘の、月影にいときはやかに見ゆる薫りも、追風なつかしければ、千代をならせる声もせなむ、と待たるるほどに、にはかに立ち出づる村雲のけしき、いとあやにくにて、おどろおどろしく降り来る雨に添ひて、さと吹く風に燈籠も吹きまどはして、空暗きここちするに、「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言を、うち誦じたまへるも、

（物さびしいところへ）（夕霧）（雲の晴れ間の珍しさに）（月の光に）（本当にあいにくなことで）（ざあざあと降り出してきた雨に加えて）（火をゆらめかせて）

（源氏）折にふさわしいからか

をりからにや、妹が垣根におとなはせまほしき御声なり。

（別に以前と変ったことはないが）

「独住みは、ことに変ることなけれど、あやしうさうざうしくこそありけれ。深き山住みせむにも、

（妙にもの足りなく思われるものだな）（出家して山寺に住むにしても）

一〇 こちら（夕霧）に果物などさし上げよ。「果物」は、木の実、果実、中国風の菓子などの間食。

一一（ものはおっしゃりながらも）心の中は、ただもう亡きお方のことでいっぱいのご様子が、とてもおいたわしいので。源氏の様子を見ての夕霧の思い。「大空は恋しき人のかたみかはもの思ふごとにながめらるらむ」（『古今集』巻十四恋四、酒井人真）による。

一二 いつもこのように、お悲しみの紛れることがないのでは、お勤めにも専心なさることはむつかしいのではないか。源氏の「心澄みぬべきわざ……」の語を受けての思い。

一三 ちらと見たお姿でさえ忘れられないのだ。野分の巻の垣間見のこと（四巻一二四～五頁参照）。

一四 紫の上が志して作っておかれた極楽の曼陀羅などを、この機会に供養するがよかろう。「極楽の曼陀羅」は、『観無量寿経』によって、極楽浄土のさまを図絵にした浄土変相図。『河海抄』は、女人のために、極楽の曼陀羅が作られた和漢の先例として、『白氏文集』巻六十一の「繡三西方幀讃并序」（女弟子弘農君が楊夫人のために阿弥陀仏等を刺繡した絹絵の讃と序文）、「当麻寺極楽曼陀羅縁起」をあげる。

一五 紫の上の発願で書写した経。御法の巻一〇三頁に「年ごろ、私の御願にて書かせたてまつりたまひける法華経千部」とあった、それ以外のものであろう。

一六 紫の上が帰依していた僧らしいが、どういう人か不明。実名を省いた書き方。

かくて身をならはしたらむは、（このようにして我が身を慣らしておいたら）こよなく心澄みぬべきわざなりけり」などのたまひて、「女房、（源氏）ここに、くだものなど参らせよ。男ども召さむもことことしきほどなり」（家臣どもを呼びつけるのも大げさすぎることだ）などのたまふ。心には、ただ空をながめたまふ御けしきの、尽きせず心苦しければ、かくのみおぼしまぎれずは、御行ひにも心澄ましたまはむこと難くや、と見たてまつりたまふ。ほのかに見し御面影だに忘れがたし、ましてこと（この上もなく悟りきった心境に到ることだろう）（源氏は）無理もないことだ）わりぞかし、と思ひゐたまへり。「昨日今日と思ひたまふるほどに、（夕霧）ご一周忌もだんだん近づいてまいりました）御果てもやうやう近うなりはべりにけり。いかやうにかおきておぼしめすらむ」と、申したまへば、「何ばかり、世の常ならぬことを（どのようにあそばすお積りでいらっしゃいましょう）（源氏）（何ほども）（存じていましたうちに）（世間並み以上のことをしようとは思わない）かはものせむ。かの心ざしおかれたる極楽の曼陀羅など、このたびなむ供養ずべき。経などもあまたありけるを、なにがし僧都、皆その心くはしう聞きおきたなれば、また加へてすべきことどもも、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべき」などのたまふ。「かやうのこと、もとよりとりたててはおぼしおきてけるは、うしろやすきわ（そのほかに）（の趣旨をくわしく聞いておいたそうだから）（言う通りにするのがよいだろう）（ご生前から特に心がけてしておきになりましたのは）（夕霧）（このような功徳を）（来世のためには頼もし）

一 今生では、縁薄くて短いご生涯でいらっしゃったと思いますにつけては。鈴木朖の『玉小櫛補遺』に言うように「見たまふるには」とありたいところ。

二 それは、縁浅からず長命の人たちにも、そういうことが大体少なかった、私自身の宿世の拙さなのだ。紫の上に限らず、ほかの女君にも子供が少ないことをいう。

三 さきほどから心待ちにされていた郭公が、遠くで鳴いたのも。前出の「千代をならせる声もせなむ」を受ける措辞。（一四四頁注六参照）

四 「いにしへのこと語らへば郭公いかに知りてか古声のする」（『古今六帖』五、物語）を踏まえ、「いたうものたまひ出でぬに」「いかに知りてか」と続く文脈。

五 亡き人を恋い偲ぶ今夜の雨に濡れて、死出の山から来たのか、郭公よ。「村雨」は、急に激しく降り出す雨。前に「おどろおどろしく降り来る雨」（一四四頁）とあったが、源氏の涙をも暗示する。

六 前頁注一一参照。

七 郭公よ、あのお方（紫の上）にお伝えしてくれ、昔のお住まいの花橘は今が盛りだと。花橘が昔を思い出させるものであること、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』巻三夏、読人しらず）がある。

いことですが

ざなれど、一この世にはかりそめの御契りなりけりと見たまふには、

形見といえるようにお残し申しなさったお子様もいらっしゃらないのが

形見といふばかりとどめきこえたまへる人だにものしたまはぬこそ、

残念に思われることでございます

くちをしくはべりけれ」と申したまへば、「それは、かりそめならず命ながき人々も、さやうなることのおほかた少なかりける、みづからのくちをしさにこそ。そこにこそは、門はひろげたまはめ」などのたまふ。

（源氏）二

家門をば広げて頂きたい

あなたこそ

〔源氏は〕

紫の上を思ってこらえきれぬお心の弱さが恥ずかしくて

過ぎ去った昔のことをあまりお口にも出されないのに

何ごとにつけても、忍びがたき御心弱さのつつましくて、過ぎにしことといたうものたまひ出でぬに、三待たれつる郭公のほのかにうち鳴きたるも、四いかに知りてかと、聞く人ただならず。

聞く人の胸は落着かない

（源氏）五

なき人をしのぶる宵の村雨に

濡れてや来つる山ほととぎす

夕霧

とて、六いとど空をながめたまふ。大将、

七ほととぎす君につてなむふるさとの

花橘は今ぞさかりと

八 お側に控える女房なども、たくさん唱和したけれども、お話しするのはやめておく。省筆をことわる草子地。

九 紫の上ご在世中は、大層近づきにくかった御寝所のあたりが、今はさほど離れてもいないことなどにつけて、思い出されることが多い。源氏が、夕霧を紫の上に近づけないようにしていたからである。（四巻螢七九頁、野分一一二五頁参照）

一〇 盛夏。旧暦六月である。

一一 六条の院南の町の池の蓮のこと、鈴虫の巻冒頭にも見える。（五巻三四五頁参照）

六月の哀傷

一二 「悲しさぞまさりにまさる人の身にいかに多かる涙なるらむ」（『古今六帖』四、かなしび、伊勢。『伊勢集』）。蓮の露に涙を連想したのであろう。

一三 蜩（ひぐらし）蟬の声が、高く響きわたる折に、お庭先の撫子が、夕明りに浮び上がるのを、ただ一人でご覧になるのは、いかにも張合いのないことだった。「我のみやあはれと思はむきりぎりす鳴く夕かげのやまと撫子」（『古今集』巻四秋上、素性法師）を踏まえた叙述。

一四 なすこともなく、涙にくれて暮す夏の日を、それなら自分も泣くというように鳴く蜩の声だ。

一五 「夕殿に螢飛んで思ひ悄然（せうぜん）たり　秋の燈（ともしび）挑（かか）げ尽して未だ眠（ねむ）ること能はず」。「長恨歌」の、玄宗皇帝が亡き楊貴妃を偲ぶくだり（一巻付録三二九頁参照）。

一六 例によって、古い詩も、このような亡き妻を恋う内容のものばかりお口に上される。

女房（八）など、多く言ひ集めたれど、とどめつ。大将（夕霧）の君は、やがて（そのまま）御宿直（とのゐ）にさぶらひたまふ。（お側に控えておやすみになる）さびしき御ひとり寝の心苦しければ、時（夕霧は）時かやうにさぶらひたまふに、おはせし世（九）は、いと気遠（けとを）かりし御座（おまし）のあたりの、いたうも立ち離れぬなどにつけて、思ひ出でらるることども多かり。

一〇 いと暑きころ、涼しきかたにてながめたまふに、池の蓮（はちす）の盛りなる（涼しいお部屋で物思いに沈んでいらっしゃる折）を見たまふに、いかに多かる（一二）、などまづおぼし出でらるるに、ほれぼれしくて、つくづくとおはするほどに、日も暮れにけり。ひぐらしの声はなやかなるに、御前（おまへ）の撫子（なでしこ）の夕ばえを、一人（ひとり）のみ見たまふは、げにぞかひなかりける。（一三）

（古歌が）つくねんとしていらっしゃるうちに　気が抜けたようになって

（源氏）一四 つれづれとわが泣き暮らす夏の日を
かことがましき虫の声かな

（源氏）螢（ほたる）のいと多う飛びかふも、「夕殿（せきでん）に螢飛んで」（一五）と、例（一六）の、古言（ふること）もかかる筋（すぢ）にのみ口馴れたまへり。

一 夜になったことを知って光を放つ螢を見ても悲しいのは、夜昼ともなく燃える、亡き人を恋う思いである。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。「蒹葭水暗うして螢夜を知る　楊柳風高うして雁秋を送る」（『和漢朗詠集』上夏、螢、許渾）による。

七夕の夜の源氏

二 例年と変ったことが多く。七夕の夜は、詩や歌を詠み交わしたり、女たちは、庭前の机に香華、供物を供えて手巧を祈る。

三 牽牛（彦星）と織女の二星が逢うこと。

四 まだ明け方暗いのに、（源氏は）ただ一人お起きになって。八日の未明のこと。

五 妻戸に面して、東の対から寝殿に通じる渡殿か。

六 彦星と織女星の逢う喜びは、雲の上の別世界のことと思って、今、二星が別れてゆく夜明けの庭に置く露に、私の悲しみの涙を添えることだ。

七 風の音もただならず、物思いをそそるようになってゆく折しも。「秋はなほ夕まぐれこそただならねぬ荻の上風萩の下露」（『藤原義孝集』秋の夕暮。『和漢朗詠集』巻上秋、秋興）による。

八 今までよくも生きてきた月日よ。「身を憂しと思ふに消えぬものなればかくても経ぬる世にこそありけれ」（『古今集』巻十五恋五、読人しらず）

九 精進して。仏事の際、魚肉を避けた食事をする。

一〇 前出。（一四五頁参照）

一一 亡き君（紫の上）をお慕いする涙は、いつまでも

夜を知る螢を見てもかなしきは
　時ぞともなき思ひなりけり

八月、紫の上の一周忌

七月七日も、例に変りたること多く、御遊びなどもしたまはで、音楽の演奏つれづれにながめ暮らしたまひて、星合見る人もなし。女房まだ夜深う、一所起きたまひて、妻戸押しあけたまへるに、前栽の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見わたさるれば、出でたまひて、

（源氏）たなばたの逢ふ瀬は雲のよそに見て
　別れのにはに露ぞおきそふ

風の音さへただならずなりゆくころしも、御法事のいとなみにて、一周忌のご法事のご準備で月はじめの頃は悲しみも取り紛れるようであるついたちころはまぎらはしげなり。夢見る思いで今まで経ける月日よ、とおぼすにも、あきれて明かし暮らしたまふ。御正日には、ご命日上下の人々皆例時の初夜のお勤め斎して、かの曼陀羅など、今日ぞ供養ぜさせたまふ。例の宵の御行の折にひに、御手水参らす中将の君の扇に、

（中将君）君恋ふる涙は際もなきものを

とめどなく流れますのに、今日を何の果てというのでしょう。一周忌を「果て」というのによる修辞。

一二 亡き人を慕う私も、次第に残り少ない齢になってゆくが、涙はまだまだ残り多いのだった。

一三 九月九日、重陽の日に、真綿を菊の花の上に被せ、花の露を綿に移して、それで身を拭うと、老いを去ると信じられていた。長寿を祈る年中行事。

一四 かつて、紫の上と共に起きてめでた、菊に置いた朝露も、今年の秋は私一人の袂にかかることだ。「おき」は「起き」と「置き」の掛詞。「露」は涙を暗示する。「もろともにおきゐし秋の露ばかりかからむものと思ひかけきや」(『後撰集』巻二十哀傷、玄上朝臣女)による。

九月、菊の悲しみ

一五 十月は、たださえ時雨がちな頃。「龍田川錦織りかく神無月時雨の雨をたてぬきにして」(『古今集』巻六冬、読人しらず)をはじめ、時雨は冬十月の景物として歌に詠まれた。

十月、雁に思う

一六 「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖ひたす折はなかりき」(『伊行釈』所引。『奥入』以下「袖ひつる」。出典未詳)

一七 雁は常世の使いとされた。

一八 大空を自在に飛び交う幻術士よ、夢にさえ現れない亡き人の魂の行方を捜し求めてくれ。「幻」は、神仙の術を使う人。方士。「長恨歌」に、玄宗皇帝が、臨邛の方士をして楊貴妃の魂魄を覓めさせたことを踏まえる。巻名出所の歌。(一巻付録三二九頁参照)

今日をば何の果てといふらむ

と、書きつけたるを取りて見たまひて、

(源氏)一二
人恋ふるわが身も末になりゆけど
残り多かる涙なりけり

[中将君の扇に]
と、書き添へたまふ。

九月になりて、一三九日、綿おほひたる菊を御覧じて、

(源氏)一四
もろともにおきゐし菊の朝露も
ひとり袂にかかる秋かな

一五
神無月は、おほかたも時雨がちなるころ、[源氏は]一層涙がちに思い沈まれて いとどながめたまひて、夕暮の空のけしきにも、えもいはぬ心細さに、(源氏)一六「降りしかど」とひ独り口ずさんでおいでになる とりごちおはす。雲居をわたる雁の翼も、うらやましくまもられた見守られなさるまふ。

(源氏)一八
大空をかよふ幻夢にだに
見えこぬ魂の行方たづねよ

一 大嘗会、新嘗会にあたり、十一月の中の丑、寅、卯、辰の日に行われる儀式。公卿、殿上人、受領より舞姫を献上し、辰の日は、豊明節会といって、舞姫の舞を天覧に供する。ここは、新嘗会。

十一月、五節の頃の感懐

二 夕霧の子供たち。雲居の雁腹である。

三 宮中の儀礼作法を見習うため、元服前に特に殿上を許されること。

四 祖父の源氏に挨拶のため、六条の院に来たのである。（付録系図二参照）

五 雲居の雁の弟たち。致仕の大臣の子息。

六 大嘗会、新嘗会の時、特に厳重に斎戒して、神事に奉仕する役。小忌衣を着ける。

七 小忌衣の模様をいう。山藍で、草、鳥などの模様を青く摺りつけたもの。（三巻少女二六〇頁注二参照）

八 昔、心ときめくことのあった五節の折が。物語には書かれていないが、筑紫の五節に逢ったことをいう（三巻少女二五九頁注一一参照）。「日蔭」は、日蔭の蔓のこと。辰の日、舞姫が插頭に掛ける（少女二六〇頁注一参照）

歳末、出家の準備

九 大宮人は、豊明節会にいそいそと参内する今日一日を、私は日の光の移ろいも知らず、昔の恋のやりとりも忘れて過したことだ。「日かげ」に「日光」と「日蔭の蔓」を掛ける。

一〇 それぞれの身分に応じて、形見の品をお与えになるなど。

何ごとにつけても、〔悲しみは〕まぎれずのみ、月日に添へておぼさる。

五節などいひて、世の中そこはかとなく今めかしげなるころ、大将殿の君たち、童殿上したまひて参りたまへり。同じほどにて二人、いとうつくしきさまなり。御叔父の頭の中将、蔵人の少将など、小忌にて、青摺の姿ども、きよげにめやすくて、皆うち続き、もてかしづきつつ、もろともに参りたまふ。思ふことなげなるさまどもを見たまふに、いにしへあやしかりし日蔭のをり、さすがにおぼし出でらるべし。

世間が何となくはなやかに浮き立っている頃
同じくらいのお年頃で
とてもかわいらしいご様子である
すっきりと感じがよくて
若君たち
何の屈託もなさそうな若い人たちの様子を
をお世話しながら
お目になさると

宮人は豊明にいそぐ今日
日かげもしらで暮らしつるかな

今年一年をこうして出家を我慢して過したので
もういよいよ俗世をお捨てになる時期が近づいたとお心積りなさるにつけ
しみじみとお胸に迫ることが尽きない
だんだんと出家に際して必要なことどもを
お仕えする人々にも

今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去りたまふべきほど近くおぼしまうくるに、あはれなること尽きせず。やうやうさるべきことども、御心のうちにおぼし続けて、さぶらふ人々にも、ほどほどにつけてもの賜ひなど、おどろおどろしく、今なむ限りとし

大げさに
これが最後だといった

一一 あとに残っては見苦しいようなお手紙なども、破り捨てては惜しいとお思いになってか。「人の御文」で一語。女君たちからの恋文。「破れば惜し破らねば人に見えぬべし泣く泣くもなほ返すまされり」（『後撰集』巻十六雑二、たまさかに通へりける文を乞ひ返しければ、その文に具して遣はしける　元良親王。『古今六帖』五、文。『元良親王集』）

紫の上の文を焼く

一二（女房に）破り捨てさせなどなさるのに。

一三 あの、須磨流浪の頃、あちらこちらの女君からさし上げなさったお手紙もある中に。（二巻須磨一三〇～一三四頁参照）

一四 全く千年の形見にもできそうなのを。「かひなしと思ひな消ちそ水茎の跡ぞ千年の形見ともなる」（『古今六帖』五、文）による。

一五（出家すれば）こういうものを見ることもなくなるであろうよ、とお思いになると、残しておくかいもなくて。

一六 ましていよいよ目の前も昏くなり、文字もそれと見分けられぬほど降り落ちる御涙が、ご筆跡の上に流れ添うのを。「黄壤に記ぞ我を知らむ　白頭にして徒に君を憶ふ　唯老年の涙を将て　一たび故人の文に灑ぐ」（『白氏文集』巻五十一「題二故元少尹集後一二首」の第一首。『和漢朗詠集』巻下雑、懐旧。「詎」を「誰」に、「徒」を「独」あるいは「猶」に作る）

ふうにはなさらないがなしたまはねど、近うさぶらふ人々は、女房たちは御本意とげたまふべきけしきと見たてまつるままに、出家のお望みをお遂げなさるらしいご様子と拝するにつれて年の暮れゆくも心細う、悲しきこと限りなし。

落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、破れば惜し、とおぼされけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、もののついでに御覧じつけて、破らせたまひなどするに、かの須磨のころほひ、所所よりたてまつりたまひけるもあるなかに、紫の上のご筆跡の分は別にしかの御手なるは、ことに結ひ合はせてぞありける。一つに結わえてあったみづからしおきたまひけることなれど、源氏ご自身がそうしておきになったことではあるが久しうなりにける世のこととおぼすに、はるか昔のことになってしまったとお思いになるにつけただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを、たった今書いたような墨の色などぼせば、かひなくて、疎からぬ人々二三人ばかり、気心の知れた女房二三人ほどに御前にて破らせたまふ。本当にこれほどでない人のことでもいとかからぬほどのことにてだに、過ぎにし人の亡くなった人の跡と見るはあはれなるを、筆跡と思うと胸が痛むものなのにましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の、水茎に流れ添ふを、女房たちもあまりにも意気地がない人もあまり心弱しと見た

と拝するであろうことが　気恥ずかしく

てまつるべきが、かたはらいたう、はしたなければ、押しやりて、

〔お手紙を〕　みっともないので

死出の山越えにし人を慕ふとて

跡を見つつもなほまどふかな

まともにひろげることはできないが　紫の上のご筆跡とうすうす分

さぶらふ人々も、まほにはえ引きひろげねど、それとほのぼの見ゆるので　かき乱れる悲しみも一通りではない

るに、心まどひどもおろかならず。この世ながら遠からぬ御別れの

全くその当時

ほどを、いみじとおぼしけるままに書いたまへる言の葉、げにその

慰めるすべもない　何と嘆かわしい　今一段

にまさるこらえきれない悲しさを

をりよりもせきあへぬ悲しさ、やらむかたなし。いとうたて、今ひ

とまさるお心の乱れも　女々しくは目にも見苦しいことになりそうなので〔お手紙を〕

ときはの御心まどひも、めめしく人わろくなりぬべければ、よくも

〔紫上が〕こまごまとお書きになっている横に

見たまはで、こまやかに書きたまへるかたはらに、

（源氏）三

かきつめて見るもかひなし藻塩草

おなじ雲居の煙とをなれ

と書きつけて、皆焼かせたまひつ。

四

御仏名も、今年ばかりにこそは、とおぼせばにや、常よりもこと

もう今年限りだ

しみじみと感慨を催される　源氏の長寿を

五

に、錫杖の声々などあはれにおぼさる。行く末ながきことを請ひ願

〔導師が〕

一　死出の山を越えていってしまった人のあとを追おうとして、その人の残した跡を見ながらも、まだ私はまごまごしていることだ。残された筆の跡を見ながら、相変らず悲しみにくれまどっていることだ。「跡」に、足跡と筆の跡を掛ける。

二　生きての世の、さほど遠からぬ須磨へのお別れのことを、大層悲しくお思いになったお心をそのままにお書きになった（紫の上の）お手紙の文面は（二巻須磨二三一頁参照）。「この世ながら遠からぬ……」は、死別と比較して、近い所の生別さえも、という気持。二十六年前のことである。

三　掻き集めて見てみたところで、あの人がいなければ空しいばかりのこの手紙は、亡き人と同じ空の煙となるがよい。「かきつめ」は「掻き集め」の約まった形。「藻塩草」は、塩を取るための海藻。「掻き集め」の縁語で、手紙に喩えている。「かひなし」に「貝」を響かせ、「煙」とともに「藻塩草」の縁語。

四　清涼殿で、毎年十二月十九日から二十一日まで三日間行われる仏名会のこと。過去、現在、未来の三世の諸仏の名号を唱えて、罪障を懺悔する法会。院宮、諸寺でも行われた。

五　悪虫などを追い払う意味で僧が持ち歩く杖。頭部を塔婆にかたどり、数箇の環を掛け、振って音を出す。ここは、錫杖の威徳を讃える頌文を唄いながら、錫杖を振ること。（図録六参照）

御仏名に、導師と贈答

六 仏も何とお聞きになろうかと耳が痛い。出家を志す身が長寿を祈願する矛盾をいう。
七 衆生を仏道に導く者の意で、法要を主宰する僧。
八 特に源氏のお前にお呼びになって、お盃を賜ることなど、決められた作法よりも格別になさって。「さし分く」の「さし」に、盃をさす意を掛ける。宮中では、法要の終った後、参会の王卿侍臣に酒肴を賜る。
九 労をねぎらって与える祝儀の品。宮中では恒例として、第三夜に奉仕の僧たちに綿を被けられる。『花鳥余情』は、延喜十九年、導師雲晴律師に、天暦四年、同じく浄蔵に簾中より御衣を賜った例をあげる。
一〇 「香火一炉燈一盞　白頭にしては夜仏名経を礼す」（『白氏文集』巻六十八「戯礼経老僧」。『和漢朗詠集』巻上冬、仏名）
一一 螢兵部卿の宮たちであろう。
一二 （紫の上の一周忌も過ぎたこととて）管絃の御遊などもあってよいのだが。
一三 折にあったもの。『細流抄』に「朗詠などなるべし」という。
一四 そう言えば。話題をもとに戻すための発語。
一五 春までの命もあるかどうか分らないから、旧年の雪のうちに咲きそめた梅を今日は挿頭にしよう。
一六 君をば、千代の春に会うべき花とご長寿の祈願をいたしまして、私めは、降る雪とともに年古りました。「ふり」は「古り」と「降り」の掛詞。「雪」に白頭を暗示する。

ふも、仏の聞きたまはむことかたはらいたし。雪いたう降りて、まめやかに積りにけり。導師のまかづるを、御前に召して、盃など、常の作法よりもさし分かせたまひて、ことに禄など賜はす。年ごろ久しく参り、朝廷にもつかうまつりて、御覧じ馴れたる御導師の、頭はやうやう色変りてさぶらふも、あはれにおぼさる。例の、宮たち上達部など、あまた参りたまへり。梅の花の、わづかにけしきばみはじめてをかしきを、御遊びなどもありぬべけれど、なほ今年までは、ものの音もむせびぬべきここちしたまへば、時によりたるもの、うち誦じなどばかりぞせさせたまふ。まことや、導師の盃のついでに、

（源氏）春までの命も知らず雪のうちに
　色づく梅を今日かざしてむ

御返し、
千世の春見るべき花と祈りおきて

（六条院に）
（かり積ってしまった）
（退出するのを）
（ご奉仕して）
（見馴れていらっしゃる御導師が）
（しみじみ殊勝にお思いになる）
（法会に参会なさった）
（やはり今年中は）
（楽の音もむせび泣きしそうな感じがなさるので）
（詠み上げさせるといったことだけあそばす）
（導師のご返歌）

一（このほか）宴席に列した人々もたくさん歌を詠んでいるが、省きます。草子地。
二（源氏は）その日、はじめて表向きの部屋にお出ましになった。この巻の冒頭に「……御簾のうちにのみおはします」とあった。
三この老僧は。御導師のこと。源氏への返歌に、「わが身ぞ雪とともにふりぬる」と詠んだ。
四今年も暮れてしまったとお思いになるにつけても心細いのに。いよいよ大晦日になったこと。

十二月晦の日の感慨

五匂宮。
六鬼やらいをしようと思うが。追儺のこと。大晦日の夜、宮中で悪鬼を追い払う儀式（二巻紅葉賀二〇頁注九参照）。（図録五参照）
七大きな音をたてるには。宮中の儀式では、群臣声をあげ、宮城門外で鼓をうった。
八物思いをして月日の過ぎるのも知らぬ間に、この一年もわが生涯も、今日で終ってしまうのか。年が明けたら出家の本意を遂げようという気持がある。「もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに今年は今日に果てぬとか聞く」（『後撰集』巻八冬、藤原敦忠朝臣）による。
九六条の院に参賀の親王たち、大臣への贈り物。
一〇それより下の人々への身分に応じた禄。

わが身ぞ雪とともにふりぬる

一人々多く詠みおきたれど、もらしつ。二その日ぞ出でゐたまへる。御容貌、昔の御光にもまた多く添ひて、ありがたくめでたく見えたまふを、三この古りぬる齢の僧は、あいなう涙もとどめざりけり。

昔の輝くお美しさの上にもまた一段と加わって　この世のものと思えぬお美しさとお見えになるので　わけもなく涙も抑えられないのであった

四年暮れぬとおぼすも心細きに、五若宮の、「六儺やらはむに、七音高かるべきこと、何わざをせむ」と、走りありきたまふも、をかしき御姿

どんなことをしようか　このかわいいお姿をもう見ることもなくなるのだと

ありさまを見ざらむことと、よろづに忍びがたし。

何かにつけ耐えがたいお気持である

（源氏）八もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに

年もわが世もけふや尽きぬる

正月年頭の行事のことを　例年よりも格別にしようと

ついたちのほどのこと、常よりことなるべくと、九おきてさせたまふ。

お指図をあそばす

親王たち大臣の御引出物、一〇品々の禄どもなど、一一なうおぼしまうけてとぞ。

またとないほどにご用意なさってとか

雲隱（くもがくれ）

幻の巻と次の匂兵部卿の巻の間に、古くから、名のみあって本文のない「雲隠」という巻が置かれている。文献的に最も古いのは、正治元、二年（一一九九、一二〇〇）の頃に書かれたとされる高野山正智院蔵『白造紙』の源氏目録に見えるところのようであるが、それよりやや早く十二世紀中葉には成立したかと思われる伊行の『源氏釈』も、これを巻として数えていた形跡がある。「雲隠る」の語は『万葉集』に死を比喩的に言い、平安時代は、月について詠まれた歌の例があり、また死を意味する歌の例もある。光源氏の死を暗示する巻名であることは明らかである。幻の巻の翌年に源氏は出家したはずであるが、出家者の生活は物語の対象になり得ないから、出家以降死に至るまでのことを記す巻はなかったであろう。すなわち本文はもともとなかったと考えるよりほかない。巻名が作者自身によって置かれたものか、作者の周囲の読者によるものか、後の読者によるものか、分らないが、ただ、物語は主人公の生涯、その生誕から死までを書くのが本来の形であるから、桐壺の巻に見合う、光源氏の終焉の巻が仮設されたことは、うなずける処置ではある。

幻の巻は、翌年の出家を控えた源氏の一年間の動静を描く。この年、薫は五歳である。次の匂兵部卿の巻に、薫が十四歳で元服したことが見えるから、この間八年の空白が置かれていることになる。

なお後の宿木の巻に、源氏の晩年について「二三年ばかりの末に世を背きたまひし嵯峨の院」とあり、源氏は、出家後二三年で亡くなったことになっている。

匂兵部卿

光源氏の亡きあと、そのかつての声望を継ぐほどの人物は一族の中にも見出だしがたかった。ただわずかに、今上の三の宮（兵部卿の宮）と、女三の宮腹の若君とが、美貌のほまれが高かった。

三の宮は紫の上から伝領した二条の院に、女一の宮は六条の院南の町の東の対に住み、二の宮はその寝殿を時々の休み所にしている。二の宮は右大臣夕霧の次女をめとり、次の東宮にと予定されている。夕霧の長女は東宮（一の宮）の妃になっている。夕霧の子女のうち、典侍腹の六の君が美人の聞えが高い。花散里は東の院に、女三の宮は三条の宮に移ったのち、夕霧は、落葉の宮を六条の院丑寅の町に迎え、三条殿の雲居の雁のもとと、月に十五日ずつ律義に通う。

女三の宮腹の若君は、源氏の配慮によって冷泉院の猶子となり、十四歳で元服、その年の秋、右近の中将になるが、うすうす自分の出生の秘密に気づき、悩み多い青年に育っている。彼には生れつき身体に芳香があり、それと張り合って三の宮は薫物に凝り、世人は二人を匂う兵部卿、薫る中将ともてはやすのだった。巻名はこれに由来する。薫は、十九歳で三位の宰相兼右中将に累進する。匂宮は、冷泉院の女一の宮（弘徽殿腹）に思いを寄せているが、薫は、高嶺の花と諦めている。夕霧は、六の君を丑寅の町の落葉の宮の養女に迎え、いずれ匂宮か薫に縁組させたいと思っている。

巻は、正月十八日、夕霧が六条の院で主催する賭弓の還饗の記事で終る。

一 光源氏がお亡くなりになったあと、あのすばらしいお姿に劣らぬ世評を引き継いでお取りになるような方は。「光」は、源氏の綽名「光」（一巻帚木巻頭参照）に掛けていう。「影」は、日の光と容姿を掛ける。

二 あれほどたくさんのご子孫の中にも、そうはいらっしゃらないのだった。

光源氏没後、三の宮と薫の世評

三 譲位された冷泉院上皇。表向きではないが、源氏と藤壺との間の御子。

四 今上の第三皇子。匂宮。明石の中宮腹。源氏の孫にあたる。五巻若菜下一八三頁に初出。

五 匂宮が育ったのと同じ六条の院の南の町の御殿。匂宮は、女一の宮とともに紫の上の手許に引き取られて、育てられた。（五巻横笛三三五頁参照）

六 女三の宮腹の若君。薫。表向き、源氏の子。実父は柏木。

七 紫の上は、二条の院で亡くなる前、匂宮に、成人したら、この院に住んで、西の対の前の紅梅と桜とを愛するようにと言い遺した。（御法一一〇頁参照）

八 今上の第一皇子。明石の中宮腹。立太子のこと、五巻若菜下一五一頁に見える。

九 皇太子という重い地位のお方として大切にお思い申されることは、それはそれとして。「たまて」は音便形「たまうて」の「う」無表記の形。

匂兵部卿

光かくれたまひにしのち、かの御影に立ちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。おりゐの帝をかけたてまつらむはかたじけなし。当帝の三の宮、その同じ御殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二所なむ、とりどりにきよらなる御名取りたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。ただ世の常の人ざまに、めでたくあてにな

（一 光 二 恐れ多いことだ 三 どうこう申し上げるのは 四 それぞれにお美しいという評判をお取りになって 五 なるほどまことに人並みすぐれたお二人のご容姿ではあるが 六 見るからにまぶしいほどのお美しさではないようだ 世間一般の人と同様に）

まめかしくおはするをもととして、さる御仲らひに、人の思ひきこえたるもてなしありさまも、いにしへの御響きけはひよりも、ややたちまさりたまへるおぼえからなむ、かたへは、こよなういつくしかりける。紫の上の、御心寄せことにはぐくみきこえたまひしゆゑ、三の宮は、二条の院におはします。春宮をば、さるやむごとなきも

（すばらしく気品があって優美でいらっしゃることに加えて 源氏のご子孫ということで 世人のご尊敬申し上げているお取り扱いぶりも 若かりし日の光源氏のご評判やご様子よりも 一つには この上なくご立派に思われ上を行っていらっしゃる高い世評のゆえに ご愛情も格別に大切にお育て申し上げなさった関係からるのだった 匂宮）

一 今上と明石の中宮が。以下、匂宮に対する両親の寵愛ぶりをいう。
二 宮中にお住ませ申し上げていられるが。膝下に置いておきたいという気持。
三 匂宮は、やはり気楽な昔からの住まい（二条の院）の方が居ごこちがよいとお思いなのだった。女主人ともいうべき紫の上亡き後なので「故里」という。
四 兵部省（諸国の兵士、軍事のことをつかさどる）の長官。正四位下相当。公卿の兼官、また親王の任じられることが多い。名誉職である。
五 明石の中宮腹。紫の上の手許に引き取られて愛育された。下の「東の対」は、紫の上の居所。
六 東宮の弟君。同じく明石の中宮腹。
七 後宮の御殿の一つ。凝花舎。（四巻図録四参照）
八 右大臣（夕霧）の二番目の姫君。雲居の雁腹。
九（二の宮は）次の東宮候補で。兄君の東宮が即位の暁には、東宮にと予定されている。
一〇 右大臣夕霧。
一一 ご長女。夕霧巻末、青表紙本では典侍腹、河内本では、中の君とともに雲居の雁腹とされる（九七頁参照）。後の宿木の巻には「二条殿腹の大君」とあって、雲居の雁腹とされる。
一二 次々の妹君たちも、やはり皆順序通り、三の宮以下の宮様方に縁づかれるのであろうと。

女一の宮と二の宮

のにおきたてまつりたまて、帝、后、いみじくかなしうしたてまつり、かしづききこえさせたまふ宮なれば、内裏住みをせさせたてまつりたまへど、なほ心やすき故里に、住みよくしたまふなりけり。御元服したまひては、兵部卿と聞こゆ。

大切にお扱い申していられる　大層おかわいがり申し上げて　ご元服ののちは

女一の宮は、六条の院南の町の東の対を、その世の御しつらひあらためずおはしまして、朝夕に恋ひしのびきこえたまふ。二の宮も、同じ御殿の寝殿を、時々の御休み所にしたまひて、梅壺を御曹司にしたまうて、右の大殿の中姫君を得たてまつりたまへり。次の坊がねにて、いとおぼえことに重々しう、人柄もすくよかになむものしたまひける。

紫の上ご在世中のお部屋の模様もそのままにお住まいになって　〔紫上を〕　ご休息所　お住まいになさって　北の方になさっていらっしゃる　まことに声望も格別で　しっかりしたお方でいらっしゃった

夕霧の子女　大姫君と六の君

大殿の御女は、いとあまたものしたまふ。大姫君は、春宮に参りたまひて、またきしろふ人なきさまにてさぶらひたまふ。その次々、なほ皆ついでのままにこそはと、世の人も思ひきこえ、后の宮ものたまはすれど、この兵部卿の宮は、さしもおぼしたらず、わが御心

東宮妃に　お上りになって　ほかに寵をきそう人もないような勢いでお仕えしていられる　明石の中宮　匂宮　そのようなおつもりもなく　ご自分のお気

一三 姫君たちの父、右大臣夕霧。
一四 なんの、皆同じように、（親王方と）そんな格式ばった縁組ばかりしなくても、と落着きはらってはいらっしゃるが。「やう（様）のものと」は、同じように意の慣用句。
一五 六番目の姫君。典侍腹（夕霧九七頁参照）。以下、この人が美人の聞え高く、貴公子たちの求婚の的になっていた、という。後の宿木の巻で、匂宮と結婚することになる。
一六 それぞれに、（源氏の妻妾として）六条の院に住んでいられた婦人たちは。
一七 花散里と申し上げた方は。六条の院の丑寅（東北）の町に住み、夕霧の母代りをつとめた。
一八 二条の院の東の院。初出は三巻澪標一六頁。松風の巻頭に、その造営成って、花散里がその女主人として迎えられたことが見える（三巻一一九頁）。
一九 源氏から遺産として贈られて、お移りになった。
二〇 女三の宮が父朱雀院から伝領した邸（五巻柏木二八四頁、同鈴虫三五〇頁参照）。女三の宮は南の町の寝殿の西に住んでいた。
二一 新しく后になられた方。明石の中宮のこと。冷泉院の秋好む中宮に対していう。御法の巻にすでに「中宮」と見える（一〇七、一一一頁）。南の町の寝殿の東を、里下がり先としていた。

六条の院のその後
丑寅の町の落葉の宮

持から望まれたのではないご縁組などは
より起こらざらむことなどは、すさまじくおぼしぬべき御けしきなめり。大臣も、何かは、やうのものと、さのみうるはしうは、としづめたまへど、またさる御けしきあらむをば、もて離れてもあるまじうおもむけて、いといたうかしづききこえたまふ。六の君なむ、そのころの、すこしわれはと思ひのぼりたまへる親王たち上達部の、御心尽くすくさはひにものしたまひける。

おもしろくなくお思いになるようなお人柄のようだ
しかしまたそうした帝のご意向があったら
乗り気にならないでもないと
[姫君たちを] それは大切にお世話申し上げなさる
いったそぶりで
多少とも我こそはと気位高くていらっしゃる
お心をさまざまに悩ます種でいらっしゃるのだった

さまざまつどひたまへりし御方々、泣く泣くつひにおはすべき住処どもに、皆おのおのうつろひたまひしに、花散里と聞こえしは、東の院をぞ、御処分所にてわたりたまひにける。入道の宮は、三条の宮におはします。今后は、内裏にのみさぶらひたまへば、院のうちさびしく、人少なになりにけるを、右の大臣、「人の上にて、いにしへの例を見聞くにも、生ける限りの世に、心をとどめて造り占めたる人の家居の、名残なくうち捨てられて、世のならひも常なく見ゆるは、いとあはれにはかなさ知らるるを、わが世にあらむ限

[源氏の没後] 終生の落着き先である
女三の宮
六条の院
夕霧
その人の生きている間は
世の常のことながら無常な
ものと見えるのは
とても悲しく人の世の空しさが思い知られるのだが
私がこの世に生きている間

一　あたりの大路などに、人影がすっかり寄りつかなくなるようなことにはしたくない。
二　母代りの花散里が住んでいたので、夕霧の部屋もあってよく出入りしていた。（前頁注一七参照）
三　一条の宮に在った落葉の宮。柏木の未亡人。夕霧とのいきさつは夕霧の巻に書かれている。
四　雲居の雁。三条殿は、夕霧が雲居の雁と新婚の家庭を営んだ邸（四巻藤裏葉三〇一頁以下参照）。以来、夕霧の本邸であった。

夕霧そのほか諸人、源氏と紫の上を哀惜

五　一月を毎晩十五日ずつ等分に通ったという、「まめ人」夕霧らしいやや諧謔的な筆致。「左の大臣は、宮、大殿、いとうるはしくこそ十五夜づつおはしつつ」（『宇津保物語』楼の上の下。『花鳥余情』所引）
六　漢語「玉台」を訓んだ歌語。立派な邸宅。
七　ただこの方（明石の上）一人の子孫のためなのだった、と思われて。二条の院に三の宮（匂宮）、六条の院に女一の宮、二の宮が住むからである。
八　夕霧。
九　分け隔てなく親切に面倒を見てさし上げられるにつけても。「親心」は、親のような気持。
一〇　紫の上。以下、夕霧の追慕の気持。

だけでも　六条の院
りだに、この院荒さず、ほとりの大路など、人影離れ果つまじう」と、おぼしのたまはせて、丑寅の町に、かの一条の宮をわたしたてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける。

二条の院とて造り磨き、六条の院の春の御殿とて、世にののしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけり、と見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり。大殿は、いづかたの御ことをも、昔の御心おきてのままに、あらため変ることなく、あまねき親心につかうまつりたまふにも、対の上の、かやうにてとまりたまへらましかば、いかばかり心を尽くしてつかうまつり見えたてまつらまし、つひに、いささかも取り分きて、わが心寄せと見知りたまふべきふしもなくて過ぎたまひにしことを、くちをしう、飽かず悲しう思ひ出できこえたまふ。

世間で大騒ぎした　明石の上　お世話申し上げていられる　どの夫人たちのお身の上も　つて変るようなことなく　亡き源氏のご意向そのままに　生前と違　この夫人たちのように長生きしていらっしゃるのなら　どれほど　精魂をこめて　お世話してご覧に入れることであろうか　多少なりとも　特別に　自分の寄せる好意だとお分りになるようなこともなくて　亡くなられてしまわれたことを　不本意なことと　何かにつけても

天の下の人、源氏院を恋ひきこえぬなく、とにかくにつけても、世は

一一 お邸に仕える人々。「殿」は、六条の院、二条の院、それに東の院も含めていうか。
一二 もとの夫人たち。明石の上や花散里であろう。
一三 女一の宮、二の宮、三の宮など。
一四 春の桜の花の盛りは、なるほど束の間であるからこそ、かえって愛着も深まるものだと言われています。草子地。紫の上は春の花を愛し、また、自身、桜に喩えられている（五巻若菜下一七六頁参照）。
一五 女三の宮腹の若君。薫。女三の宮が二品に叙せられたこと、若菜下一六一頁に見える。
一六 源氏がそのお世話をお願い申された通り。薫の将来をおもんぱかって冷泉院の猶子としたのだが、このこと、前には見えない。
一七 秋好む中宮。源氏の養女。
一八 願ってもないご後見役と、心から（薫を）頼りになさっていられる。
一九 冷泉院。大炊御門南、二条北、堀川西、大宮東、四町。

十四歳の二月、侍従秋、右近の中将

（四巻図録二参照）
二〇 中務省に属し、帝の側近に侍してご用を勤める。従五位下相当。名門の子弟の任じられる例が多い。
二一 従四位下相当。
二二 上皇としての年爵（一定の叙位者の枠）による位階の昇進などまで。四位昇進をいう（『花鳥余情』）。

桐壺帝―源氏（女三宮）……冷泉院
藤壺―秋好中宮

薫、冷泉院の愛護のもとに昇進

ただ火を消ちたるやうに、何ごとも栄なき嘆きをせぬをりなかりけり。まして殿のうちの人々、御方々、宮たちなどは、さらにも聞こえず、限りなき御ことをばさるものにて、またかの紫の御ありさまを心にしめつつ、よろづのことにつけて、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし。春の花の盛りは、げに長からぬにしも、おぼえまさるものとなむ。

改めて申し上げるまでもなく　嘆いても嘆ききれぬ源氏のことはそれはそれとして　紫の上　忘れがたく思っては

二品の宮の若君は、院の聞こえつけたまへりしままに、冷泉院の帝、取り分きておぼしかしづき、后の宮も、皇子たちなどおはせず、心細うおぼさるるままに、うれしき御後見に、まめやかに頼みきこえたまへり。御元服なども、院にてせさせたまふ。十四にて、二月に侍従になりたまふ。秋、右近の中将になりて、御たうばりの加階などをさへ、いづこの心もとなきにか、急ぎ加へておとなびさせたまふ。おはします御殿近き対を、曹司にしつらひなど、みづから御覧じ入れて、若き人も、童、下仕へまで、すぐれたるを選りととの

大切にお世話なさり　何がご心配だというのか　立派に一人前にお仕立てになる〔院の〕　お部屋として整えたり　冷泉院御自ら一指図なさって　若い女房　〔容姿の〕

一 女のお子様（女宮）をお世話する場合よりもきらびやかにすべてを立派にさせていらっしゃる。女宮なら、女房や女の童や下仕え（下働きの女）にまで気を配るのは当然のことである。「儀式」は、格式の意。

二 薫が、この冷泉院の住まいが気に入って、住みよく居ごこちよく思うようにとひたすら気を遣われて。

三 亡くなった致仕の太政大臣（昔の頭の中将）の姫君で、冷泉院の女御。弘徽殿の女御。父の権中納言時代に入内（三巻澪標五〇頁、同絵合九七頁以下など）。致仕の大臣死去のこと、ここにはじめて見える。

四 この女宮のこと、ここに初出。後の一七二頁に「冷泉院の一の宮」と見える。

五 （冷泉院の薫へのお心入れは）それほどまでになさらなくてもと思われるほどだった。「后の宮の」以下、冷泉院は、中宮の将来を思って薫を大切になさるのだろう、の意であろう。

女三の宮と薫の日常

六 薫の母、女三の宮。三条の宮にいる（一六三頁）。

七 毎月の、僧を請じての念仏の法会。当時は、天台の行法として、引声（声を長く引き曲節をつけて唱える）の阿弥陀経を読誦することが多い。

八 年二回の法華八講。法華経八巻を、普通四日に分け（一日を朝座、夕座に分ける）、論議讃嘆する法会。

九 できれば身体を二つにしたいものと。「身を分く」は、和歌に使われる常套句。

へ、女の御儀式よりもまばゆくととのへさせたまへり。上（院）にも宮（中宮）にも、さぶらふ女房のなかにも、容貌（かたち）よく、（気品があって見苦しからぬ者は）あてやかにめやすきは、皆移しわたさせたまひつつ、院のうちを心につけて、住みよくありよく思ふべくとのみ、（特別に手をかけてお世話しなくてはならぬ方とお思いでいらっしゃる）わざとがましき御あつかひぐさにおぼされたまへり。故致仕の大殿の女御と聞こえし御腹に、女宮ただ一所おはしけるをなむ、限りなくかしづきたまふ御ありさまに劣らず。后の宮の御おぼえの、年月にまさりたまふけはひにこそは、などかさしも、と見るまでなむ。

［薫の曹司に］

（中宮）（年月に添えて深くおなりだからなのであろう）

（院のご寵愛が宮への）

六 母宮は、今はただ御行ひを静かにしたまひて、月ごとの御念仏、年に二度の御八講、をりをりの尊き御いとなみばかりをしたまひて、つれづれにおはしませば、この君の出で入りたまふを、かへりて親のやうに、たのもしき蔭におぼしたれば、いとあはれにて、院にも内裏にも召しまとはし、春宮も、次々の宮たちも、なつかしき御遊びをしたまへば、暇なく苦しく、いかで身を分けて

（仏前のお勤め）（功徳になるご仏事を営まれるばかりで）

七 八 九 四 五

（薫）（［三条宮に］）（所在ないお暮しなので）

（心丈夫な）（［薫は］とてもおいたわしくて）（冷泉院）（二の宮三の宮たち）（お側を離さず）（気のおけないお遊び相手としてお引き連れになるので）（［薫は］）

（帝）

一〇 子供心に何やらお耳になさったことが。実の父が柏木であることを、何かの折に耳にしたとでもいった趣。

薫、出生の秘密に悩む

一一 母宮には、秘密をおぼろげにでも子供の自分が知ったとお思いになることは、具合の悪い筋合いのことなので。母宮には問いただすすべもないという気持。

一二 善巧太子がわれとわが身に問うて得た悟りでもわがものとしたいものだ。青表紙本の「せんけうたいし」は明らかでないが、悉多太子（釈尊）の前身「善行太子」にヒントを得た創作であろうとする説がある。河内本「くいたいし」（瞿夷太子）。瞿夷は、釈尊の妃耶輸陀羅の異名とされる。耶輸陀羅の子羅睺羅は母の胎内に六年在って生れたので釈尊の実子であるか否かを疑われた。河内本によって、この羅睺羅のこととするのが旧注の大勢であるが、瞿夷が生んだから瞿夷太子とするのは、命名にも不審があり、仏典に所見もない。

一三 気にかかることだ、誰に聞いたらよいのだろう、どうして、始めもまた行く末も分らぬわが身の上なのだろう。

一四 女三の宮は、二十二、三歳で出家。以下、薫の心。

一五 きっと、世の中がいやになられる（出家を思い立たれる）ことがあったのだろう。

しがな、とおぼえたまひける。

幼ごころにほの聞きたまひしことの、（一〇）をりをりいぶかしう、（折に触れて気にかかって）おぼつかなう思ひわたれど、（たことかとずっと気にしているが）問ふべき人もなし。（一一）宮には、ことのけしきにても、知りけりとおぼされむ、かたはらいたき筋なれば、（それ以来）世とと（心から離れることなく）もの心にかけて、「（薫）一体どうしたことだったのだろう）いかなりけることにかは。何の（因縁）契りにて、かう（つらい悩みごとを持った身の上によりによって生れついたのだろう）やすからぬ思ひ添ひたる身にしもなり出でけむ。善巧太子の、わが身に問ひけむ悟りをも得てしがな」とぞ、（ついひとりつぶやかれなさるのだった）ひとりごたれたまひける。

（薫）一三

おぼつかな誰に問はましいかにして
はじめも果ても知らぬわが身ぞ

（答えてくれる人もいない）いらふべき人もなし。ことに触れて、（わが身にどこか悪い所でもあるような気がするのも）わが身につつがあることちするも、（気持が落着かず）ただならずもの嘆かしくのみ思ひめぐらしつつ、（一四）宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて、（髪をお下ろしになって）何ばかりの（どれほどの）御道心にてか、（仏の道に入られたのだろう）にはかにおもむきたまひけむ、（こんな不本意な問違いがもとで）かく思はずなりけることの乱れに、（一五）かならず

一 世間の人も、どうしてこの秘密をひそかに耳にして知らないはずがあろうか。

二 やはり世間に広く知れては困ることだから。「つつむ」は、憚る。「ことの聞こえ」は、世間の評判。

三 きっぱり煩悩を断って極楽に往生なさることもむつかしい。往生の人は極楽の蓮華の上に生れ変るので、明らかに悟りを開くことを、蓮に置く露の玉の清らかさに喩えて言った。

四 「五障」を、「五つの何とやら」と和らげている。「又女人の身には猶五障有り。一には梵天王と作ることを得ず。二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり」（『法華経』提婆達多品）

五 どうせなら、せめて来世の安穏をとりはからってさし上げよう。極楽に往生させてさし上げよう、の意。

六 あの亡くなったという柏木も、つらい思いに迷いを晴らすことなくていられようか。成仏が叶わぬのではないか、の意。柏木の女三の宮への最後の歌を受けたような文章（五巻柏木二六九頁）。

七 女三の宮とのご関係からのお心寄せが深くて。当帝は、女三の宮の異腹の兄に当られ、朱雀院からのご依頼もあった（五巻若菜上一四頁、若菜下一六一頁参照）。

八 明石の中宮はもちろんのこと。表向き、薫の異腹の姉。

九 同じ六条の院の南の御殿。下の「宮たち」は、二の宮、三の宮（五巻横笛三三七～八頁参照）。

帝、中宮、夕霧の薫への心寄せ

憂しとおぼしなるふしありけむ、人もまさに漏り出で知らじやは、なほつつむべきことの聞こえにより、われにはけしきを知らする人のなきなめり、と思ふ。明け暮れ勤めたまふやうなめれど、はかもなくおほどきたまへる女の御悟りのほどに、蓮の露も明らかに、玉と磨きたまはむことも難し、五つのなにがしも、なほうしろめたきを、われ、この御道をたすけて、同じうは後の世をだに、と思ふ。かの過ぎたまひにけむも、やすからぬ思ひに結ぼほれてや、などおしはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて、元服はもの憂がりたまひけれど、すまひ果てず、おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまではなやかなる御身の飾りも、心につかずのみ、思ひしづまりたまへり。

内裏にも、母宮の御方ざまの御心寄せ深くて、いとあはれなるものにおぼされ、后の宮はた、もとよりひとつ御殿にて、宮たちももろともに生ひ出で遊びたまひし御もてなし、

自分には事情を知らせてくれる人がいない
〔母宮は〕
もなくおっとりしていられるたかが女のお悟りなのだから
生れ変ってでも
お会いしたい気持になって
母宮の仏道修行に助力して
自分が
辞退しきれず
そのまま自然に世間から大事にされて
目もくらむほどきらびやかなご身辺の栄華も
一向に気に染まずに
静かな態度でいらっしゃる
〔薫が〕幼少から
〔薫を〕心からいとしいものに
おぼしめされ
お扱いを
少しもお変えになることなく

一〇 夕霧。表向き異腹の兄に当る。年齢は二十六歳上である。

一一 夕霧の子息は、雲居の雁腹と典侍腹を合せて六人いる（夕霧九七～九八頁）。

一二 あれこれと下へも置かず大事にお世話してさし上げなさる。「やうごとなし」は「やむごとなし」に同じ。この表記、底本にはこの巻だけに後の一七二頁の例と二例見える。

一三 この呼び方、一巻桐壺三六頁、四一頁に、また二巻須磨二四七頁の明石の入道の言葉には、「源氏の光君」と見える。

光源氏をしのぐ薫の栄達

一四 お憎みになる人もいて。弘徽殿の女御など。

一五 母の桐壺の更衣の縁戚に有力な後楯になる人もいないといったことだったが。（一巻桐壺一二頁参照）

一六 下手をすればあした大変な世間の騒ぎにもなりかねなかったことも。弘徽殿の女御の画策によって、東宮（冷泉院）を擁して謀反のたくらみがあると無実の罪を着せられそうになったこと。

一七 無事におしのぎになって。須磨に退居することによって、野心のないことを示し、女御の陰謀をかわした。

一八 仏菩薩が仮に人間の姿を借りたのではないかとも思われるところがおありだった。

（源氏）私の晩年にお生れになって かわいそうに 成人するのを見届けることもできぬはず、「末に生まれたまひて、心苦しう、おとなしうもえ見おかぬこと」と、源氏院のおぼしのたまひしを、思ひ出できこえたまひつつ、〔中宮は〕一方ならず大切におろかならず思ひきこえたまへり。右の大臣も、わが御子どもの君たちよりも、この君をば、こまやかにやうごとなくもてなしかしづきたてまつりたまふ。

昔、光君と聞こえしは、あれほど比類ない父帝のご寵愛でありながら さるまたなき御おぼえながら、そねみたまふ人うち添ひ、母方の御後見なくなどありしに、ご気性も思慮深く御心ざまもものの深く、世間のことをおだやかにお考えになったので世の中をおぼしなだらめしほどに、並びなき御光を、ご威光 目立たぬまばゆからずもてしづめたまひ、つひにさるいみじき世の乱れも出で来ぬべかりしことをも、ことなく過ぐしたまひて、後世安楽の仏道修行もおぐ後の世の御勤めも後時期をおはずしにならず 万事何げなく振舞われてらかしたまはず、よろづさりげなくて、久しくのどけき御心おきて遠く先を見るといった考え方の持主でいらっしゃったのだがにこそありしか、薫この君は、まだしきに世のおぼえいと過ぎて、思まだ若いのに世間から大切にされ過ぎて気位の高いことはこの上もないといった風でいらっしゃるひあがりたること、こよなくなどぞものしたまふ。げに、さるべくいかにも 前世の因縁により 全くこの人間世界の人として生れ出たのではないて、いとこの世の人とはつくり出でざりける、仮に宿れるかとも見

一 薫の生れつき身にそなわった芳香。わが国では、聖徳太子、義淵僧正など、誕生の時、芳香を放ったと伝える。『明星抄』は、仏の八十随形好の「四十二者毛孔出香気」、四十三者口出無上香」（『大品経』二十四巻）とあるのを引くが、体の芳香は、すぐれた仏者の身にそなわる異相とされたのである。

二 遠く隔たったあたりまでそのかおりを運んで来る風も。

三 百歩の遠くまでもいいかおりがしそうな気がするのだった。梅枝の巻に、薫衣香について公忠の「百歩の方」というのが見え（四巻二五九頁）、鈴虫の巻に名香について「唐の百歩の衣香」と見える（五巻三四五頁）。種々の薫香について、遠くまで匂うものを「百歩の方」「百歩香」といったらしい。なお三巻絵合九三頁参照。

薫、生れつき身に芳香がそなわる

四 人目を忍んで立ち寄る物陰も。女に忍ぶ体。

五 香を納める「香の唐櫃」（三巻蓬生七七頁参照）。

六 「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」（『古今集』巻一春上、読人しらず）による。

七 「匂ふ香の君思ほゆる花なれば折れる雫に今朝ぞ濡れぬる」（『古今六帖』一、雫、伊勢）による。「春雨」は歌語。

八 「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱ぎかけし藤袴ぞも」（『古今集』巻四秋上、素性）による。「藤袴」は、秋の七草の一つ。葉に芳香がある。

ゆること添ひたまへり。顔容貌も、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよら、と見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしうはづかしげに、心の奥多かりげなるけはひの、人に似ぬなりけり。

（どこがすばらしい　はっきりと　ほんとに美しい　と見えるところもないお顔立ちが　優美で　気品高く　心の奥底が知れないといった様子が　並みはずれているのだった）

一 香のかうばしさぞ、この世の匂ひならずあやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩のほかも薫りぬべきここちしける。誰も、ばかりになりぬる御ありさまの、いとやつればみ、ただありなるやはあるべき、さまざまに、われ人にまさらむと、つくろひ用意すべかめるを、かくかたはなるまで、うち忍び立ち寄らむものの隈も、しるきほのめきの隠れあるまじきに、うるさがりて、をさをさ取りもつけたまはねど、あまたの御唐櫃にうづもれたる香の香どもも、この君のは、いふよしもなき匂ひを加へ、御前の花の木も、はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く、秋の野に主なき藤袴も、も

（この世の匂いとも思われぬほど不思議なまでに　身動きなさるあたりは　薫ほどの高い身分に生れついた方の風采が　身づくろいし気をつけるであろうが　我こそ人よりすぐれようと　目立たないということがあろうか　ひどくみすぼらしく　それぞれに　困ってしまうほど　ほとんど香を身にたきしめもなさらないけれども　ようもないので　厄介に思って　言いようもなくすばらしい　染ませる）

九 心をそそられる追風（薫の体香を運ぶ風）がすばらしく、薫が折り取ったために、一段と香も引き立つのだった。

一〇 人が不審に思う香に深く染みていられるのを。「梅の花立ち寄るばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる」（『古今集』巻一春上、読人しらず）

匂宮、薫に張り合って薫物を好む

一一 衣服にたきしめる薫物。香を移すのでこういう。

一二 「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな」（『古今集』巻四秋上、僧正遍昭）

一三 「わが岳にさを牡鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさを牡鹿」（『万葉集』巻八、大伴旅人）、「さを鹿の立ち鳴く小野の秋萩に置ける白露われも消ぬべし」（『古今六帖』一、露、貫之）など。

一四 重陽の節句に、菊の被綿の露で老を拭う。「皆人の老を忘るといふ菊は百年をやる花にぞありける」（『古今六帖』一、九日）

一五 「前頭には更に蕭条たる物あり　老菊衰蘭三両叢」（『和漢朗詠集』上、秋、蘭。『白氏文集』巻六十七「炒秋独夜」）。「蘭」は、藤袴。

一六 地楡。吾木香、吾亦香と書く。秋、暗紅色の穂状の花を開く。香りはないが、その名から香りがあるとされたものか。『花鳥余情』に『狭衣物語』巻三の「武蔵野の霜枯れに見しわれもかう秋しも劣る匂ひなりけり」を引く。

匂兵部卿

との薫りは隠れて、なつかしき追風ことに、折りなしからなむまさりける。

かく、[薫が]あやしきまで人のとがむる香にしみたまへるを、兵部卿の宮なむ、異事よりもいどましくおぼして、それは、わざとよろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ、御前の前栽にも、春は、梅の花園をながめたまひ、秋は、世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にも、をさをさ御心移したまはず、老を忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜枯れのころほひまでおぼし捨てずなどぬ、わざとめきて、香にめづる思ひをなむ、立てて好ましうおはしける。かかるほどに、すこしなよびやはらぎて、好いたるかたにひかれたまへりと、世の人は思ひきこえたり。昔の源氏は、すべて、かく立ててそのことと、やうかはり、しみたまへるかたぞなかりしかし。

[匂宮は]

匂宮 / 念入りに / 対抗意識をもやされて / ほかのことよりも / 仕事として / 調合に精を出し / 少しも / 見ばえのしない / 特に気をくばって / 香りに夢中になる気持を / 表看板にして風流がっていらっしゃった / 趣味的な面に溺れていらっしゃると / 亡き光源氏 / 一風変って / 執着なさるといった面はなかったのだった / 何かあることを表看板にして / そういうことなので / めめしくやさしくて

一七一

一 薫。右近の中将である。
二 楽器の音色。下に「吹き立て」とあるので、ここは笛。
三 なるほどよい競争相手とも、若い方同士互いに好意をお持ちになれそうな薫のお人柄だった。
四 それぞれに薫香を好み、身に芳香のそなわるところからの綽名。また視覚的には、「匂ふ」は照り映えるような美しさ、「薫る」はほんのりした奥深い美しさをいう言葉でもある。

匂う兵部卿　薫る中将

匂宮のお邸

源中将、この宮には常に参りつつ、音楽のお催し御遊びなどにも、互いに張り合うものの音を吹き立て、げにいどましくも、若きどち思ひかはしたまうつべき人ざまになむ。例の、世人は、匂ふ兵部卿、薫る中将と、聞きにくく言ひ続けて、そのころよき女おはする、身分の高いやうごとなき所所は、胸ときめかして心ときめきに、聞こえごちなどしたまふもあれば、宮は、さまざまに、をかしうもありぬべきわたりをばのたまひ寄りて、人の御けはひありさまをもけしきとりたまふ。わざと御心につけておぼすかたは、ことになかりけり。冷泉院の一の宮をぞ、さやうにても見たてまつらばや、かひありなむかし、とおぼしたるは、母女御もいと重く、心にくくものしたまふあたりにて、姫宮の御けはひ、げにいとありがたくすぐれて、よそのの聞こえもおはしますに、ましてすこし近くもさぶらひ馴れたる女房などの、くはしき御ありさまの、ことに触れて聞こえ伝ふるなどもあるに、いとど忍びがたくおぼすべかめり。

聞きづらいほど二人を並べ立てて
しゃれたやりとりの一つもできそうな相手にはお言い寄りになって
[匂宮が]特にお心にかけてお思いの方
のお人柄やご器量などもそれとなく探ってご覧になる
別になかったのだった
[宮が]お思いなのは
お家柄もよく
たしなみ深くていらっしゃるお方なので
お側近くにもふだんお仕えしている
姫宮のくわしいご様子について
お伝え申し上げることなどもあるので
いよいよ気持を抑えがたくお思いの
ようだ

匂宮、冷泉院の一の宮に心をかける

五 冷泉院の姫宮。（一六六頁注四参照）
六 故致仕の太政大臣の姫君。昔の弘徽殿の女御。

七（妻の扱いについて）面倒な思いをしなくてはならないような高貴な家と縁組をするのは、気が進まない。婿入り先の思わくを気にしなくてはならないのはごめんだ、という気持。

八 今のところ、深く心にかかるような人がいないので、利口ぶったことを考えていたのだろうか。草子地。

十九歳、三位の中将

九「宰相」は、参議（太政官で国政を参議する）の中国風の呼び方。正四位下相当であるが、特に三位に叙せられたのである。次にあるように中将ももとのまま兼任しているので、いわゆる宰相の中将である。この呼び方、後の一七六頁に見える。

一〇 今上と明石の中宮（一六八～九頁参照）。旧注は冷泉院と秋好む中宮とする。

一一 わが身の上について思い知るところがあって。出生の秘密のこと。

薫、厭世の思い深し

薫

中将は、世の中を、深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむ、など思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはむは、つつましく、など思ひ捨てたまふ。さしあたりて、心にしむべきことのなきほど、さかしだつにやありけむ。人のゆるしなからむことなどは、まして思ひ寄るべくもあらず。十九になりたまふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず。帝、后の御もてなしに、ただ人にては、憚りなきめでたき人のおぼえにてものしたまへど、心のうちには、身を思ひ知るかたありて、ものあはれになどもありければ、心にまかせて、はやりかなる好きごと、をさをさ好まず、よろづのこともてしづめつつ、おのづからおよすけたる心ざまを、人にも知られたまへり。

（この世間を）（心の底からつまらないものだと悟り澄ました気持でいるので）（なまじ）（〔女に〕執着したら）（出家するにも後ろ髪引かれる思いが残ろうか）（結婚は断念していられる）（娘の親の承諾のないような結婚などは）（なおさら考えるはずもない）（右近の中将）（一〇）（きさき）（お引き立てで）（臣下としては）（一一）（誰に遠慮もいらぬすばらしいご人望ではいらっしゃるけれども）（もの悲しい思いをすることもあったので）（勝手気ままな）（浮いた色事には）（一向に気が進まず）（万事控えめに振舞われるので）（自然に）（老成した気性の方だと）（周囲の人にも知られていられる）

薫と冷泉院の姫宮

匂兵部卿

匂宮が三の宮の、年に添へて心をくだきたまふめる、冷泉院の姫宮の御あたりを見るにも、〔薫が〕一つ院のうちに、同じ冷泉院の内に明け暮れ立ち馴れたまへば、お暮しなので（年とともに気をもんでいられるらしい）

一 一生涯、心楽しく暮してゆけることになるだろう。「つま」は、糸口、手がかりの意。
二 冷泉院は、ほかの大抵のことにかけては、（薫を）分け隔てすることなくお扱いだが。
三 姫宮のご身辺についてのけじめは、この上なく他人行儀に日頃（薫を）おしつけになっていられるのも。薫を姫宮に近づけないようにする冷泉院の配慮。
四 万一、わが意に反して、姫宮を恋しく思う気持でも萌したら。

薫の情人たち

五 何気なくさほど深くもない愛の言葉をあちこちおかけになる相手の女も。女房風情の女である。「ちらす」は「言葉」の「葉」の縁語。
六 どこがということもないが、情合いがなくはない扱いぶりが、（女にとっては）かえってやきもきする思いなので。

姫宮

に触れても、人のありさまを聞き見たてまつるに、げにいとなべてならず、心にくくゆゑゆゑしき御もてなし限りなきを、同じくは、げにかやうなる人を見むにこそ、生ける限りの心ゆくべきつまなれ、と思ひながら、おほかたこそ隔つることなくおぼしたれ、姫宮の御方ざまの隔ては、こよなく気遠くならはさせたまふも、ことわりにわづらはしければ、あながちにもまじらひ寄らず、四もし心よりほかの心もつかば、われも人もいとあしかるべきこと、と思ひ知りて、もの馴れ寄ることもなかりけり。

なるほどいかにも人並みすぐれて　奥ゆかしくたしなみ深いお暮しぶりはこの上もないので　どうせなら　確かにこのような人と結婚したら　〔薫は〕ごもっともなことと面倒に思われるので　無理にお近づきを求めようともせず　自分も姫宮も大変困ったことになるだろう　よくわきまえて　馴れ馴れしく近づくこともないのだった

ご自身がこのように女にちやほやされるように生れついていられる美しい方なので　全然相手にしないといった気持はなくすぐ意のままになるので　大して気にも染まぬ　特別に扱ったりすることはせず　上手に人目に立たぬように　〔薫に〕情を寄せる女は気がひかれて　〔女房として〕

わがかく人にめでられむとなりたまへるありさまなれば、五はかなくなげの言葉をちらしたまふあたりも、こよなくもて離るる心なく、なびきやすなるほどに、おのづからなほざりの通ひ所もあまたになるを、人のために、ことことしくなどもてなさず、いとよくまぎらはし、そこはかとなく情なからぬほどの、なかなか心やましきを、思ひ寄れる人は、誘はれつつ、三条の宮に参り集まるはあまたあり。六

〔薫は〕相手に対して　〔薫に〕情を寄せる女は気がひかれて

七 宮仕えなどに出るような家柄でない女たちで、（薫との）頼りない縁に望みをつないでいる者が多い。

八 情を交わす女は皆、自分の気持にだまされるような具合で、（そういう冷淡な薫を）つい大目に見てしまう。「る」は、自発の意。

九 朝夕に、お側離れずお目通りし、お仕え申し上げることを、せめてもの孝養に。結婚して独立することはしたくない、との意向。

六の君、落葉の宮の養女となる

一〇 夕霧の巻末（九七～九八頁）によれば、夕霧の娘は、雲居の雁腹と典侍腹と合せて六人いる。

一一 考えてみればあまりに近い縁者でおもしろみもないから（何も薫にこだわることもない）、とは考えてご覧になるものの。

一二 薫とか匂宮とかいう人たちをさしおいては。前に三の君を匂宮にという夕霧の意向が見えていた（一六二頁）。

一三 れっきとした正室（雲居の雁）腹の姫君よりも。

一四 前出。（一六三頁注一五参照）

一五 世間からどうしても低く見られがちなのに、こんなにもったいないほど美しいのを。典侍は、雲居の雁や落葉の宮から見れば、一段身分が下だからである。

一六 落葉の宮。六条の院、丑寅の町に住む（一六四頁）。

冷淡な薫の態度を見るのも　つらいことだろうと思われるのだが　切れてしまうよりは

つれなきを見るも、苦しげなるわざなめれど、絶えなむよりは、心細きに思ひわびて、さもあるまじき際の人々の、はかなき契りに頼みをかけたる多かり。

そうはいってもとても人をひきつける　美しい薫のご容姿

さすがにいとなつかしう、見所ある人の御ありさまなれば、見る人皆、心にはからるるやうにて見過ぐさる。

（薫）母宮がこの世に生きていられる間は

「宮のおはしまさむ世の限りは、朝夕に御目離れず御覧ぜられ、見えたてまつらむをだに」と思ひのたまへば、右の大臣も、あまたものしたまふ御女たちを、一人一人は、と心ざしたまひながら、え言出でたまはず。

誰か一人は薫に　ご希望ではいられるものの　口にお出しになれない

さすがにゆかしげなき仲らひなるを、とは思ひなせど、この君たちをおきて、ほかには、なずらひなるべき人をもとめ出づべき世かは、とおぼしわづらふ。やむごとなきよりも、典侍腹の六の君とか、いとすぐれてをかしげに、心ばへなどもたらひて生ひ出でたまふを、世のおぼえのおとしめざまなるべきしも、かくあたらしきを、心苦しうおぼして、一条の宮の、さるあつかひぐさ持たまへらでさうざうしきに、迎へとりてたてまつりたまへり。わ

肩を並べるほどの婿君を探し出せる世の中　頭を痛めていらっしゃる　であろうか

人並みすぐれてご器量がよく　気立てなども申し分なく

成人なさったのを　[夕霧は]不憫にお思いになって　[六条院に]お預け申し上げなさった

お世話なさるべきお子も　おありでなく手持ち無沙汰なので

一 女のよさも、（薫や匂宮のような）目の利く人は、人と違ってよく分るに違いない。薫や匂宮の目利きに期待する趣。

二 賭弓は、正月十八日、帝が弓場殿に臨御されて、左右の近衛、兵衛の舎人の競射を御覧になる儀（五巻図録四参照）。近衛府所管の行事で、左右の大将が射手の奏を受ける。還饗は、勝方の大将の邸で催される饗宴であるが、この物語の作られた平安中期には行われないようになっていた。

三 特別念入りになさって。主語は、夕霧。右大臣であるが、左大将を兼ねていたと見える。

四 明石の中宮腹。

五 常陸は、上総、上野とともに親王の任国。赴任はせず、介が実務をつかさどる。

六 いつものように。左方の勝つのが恒例であったと見える。歌合などでも、左方の勝つのが恒例である。

七 薫は右近衛の中将（前出一六五頁）で、負けた右方である。

六条の院の賭弓の還饗

夕霧、薫を誘う

ざとはなくて、この人々に見せそめては、かならず心とどめたまひて、〔六君を〕薫や匂宮に一度見せたら〔六君に〕てむ、人のありさまをも、知る人はことにこそあるべけれ、などおぼして、いといつくしくはもてなしたまはず、今めかしくをかしきやうに、特に大切にお扱いになるようではなく はなやかで人目をひくように もの好みせさせて、人の心つけむたより多くつくりなしたまふ。

賭弓の還饗のまうけ、六条の院にて、いと心ことにしたまひて、親王をもおはしまさせむの心づかひしたまへり。その日、親王たち、大人におはするは、皆さぶらひたまふ。后腹のは、いづれともなく、気高くきよげにおはしますなかにも、この兵部卿の宮は、げにいとすぐれてこよなう見えたまふ。四の御子、常陸の宮と聞こゆる、更衣腹のは、思ひなしにや、けはひこよなう劣りたまへり。

例の、左、あながちに勝ちぬ。例よりは、とくこと果てて、大将退出なさる まかでたまふ。兵部卿の宮、常陸の宮、后腹の五の宮と、ひとつ車に招き乗せたてまつりて、〔夕霧は〕まかでたまふ。宰相の中将は、負方にて、

（六君を）薫や匂宮に一度見せたら（六君に）
特に大切にお扱いになるようではなく
はなやかで人目をひくように
若い公達が好ましく思うようにいろいろ工夫をこらされる
支度を
親王方にもご列席いただこうと心積りしていらっしゃる
賭弓の当日
出席なさる
おきれいでいらっしゃる中でも
匂宮
並ぶ人もなく
そう思って見るせいか
人品が格段に劣っていらっしゃる
一方的に
例年よりは
早々と終了になって
夕霧
自分と同じ車
退出なさる
匂宮
呼んでお乗せ申して
〔夕霧は〕

八 親王方がお越しになるお供にはお出でにならぬおつもりですか。ぜひにと出席をすすめる言い方。

九 衛門府の長官。従四位下相当。中納言（従三位相当）兼官なのであろう。

一〇 太政官で、大臣とともに国政を議する。大納言の下。権官は、中納言の定員三名のほかに、名門の子弟が多く任じられる。従三位相当。

一一 太政官の職。兵部、刑部、大蔵、宮内の四省を支配する。従四位上相当。

一二 南の町の寝殿であろう。

一三 左近衛府の中少将。

一四 饗宴の時の相伴役。中少将の労をねぎらう意味で中少将を南面の奥の座に着け、それに向き合って、相伴役の親王、公卿の座を端に設ける。

一五 お酒などはじまって。「土器」は、素焼きの盃。

一六 東遊の中の一曲。将監以下が舞う習い。

一七 「かよる」は、袖のひるがえる意とも、近寄る意ともいう。（四巻初音一二六頁注七参照）

一八 袖のあおりを鶯の羽風に見立てたもの。

一九 今夜の春の夜の闇は、わけもないのに梅の花を隠して、気のもめる暗さですが。「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」（『古今集』巻一春上、春の夜梅の花をよめる　躬恒）

二〇 梅の香に比べられるものは、ほんとにないのでした。「降る雪に色はまがひぬ梅の花香にこそ似たるものなかりけれ」（『拾遺集』巻一春、躬恒）

音なくまかでたまひにけるを、（夕霧）「親王たちおはします御送りには参りたまふまじや」と、（車を）おしとどめさせて、（夕霧の）御子の衛門の督、権中納言、右大弁など、（その他の）さらぬ上達部あまた、（あれこれの車に同乗して）これかれに乗りまじり、誘ひ立てて、（皆誘い合せて）六条の院へおはす。（六条院への）道のややほど経るに、雪いささか散りて、（趣のある夕暮れ時）艶なるたそかれ時なり。（笛の音）ものの音をかしきほどに吹き立て遊びて入りたまふを、（六条院に）げにここをおきて、（六条の院のほかに）いかならむ（どのような極楽浄土に）仏の国にかは、（こうした催し事の折の楽しみを尽す場所を求められようか）かやうのをりふしの心やり所をもとめむ、と見えたり。

寝殿の南の廂に、（恒例によって）常のごと南向きに、（向き合って）中少将着きわたり、（すらりと着座し）北向きにむかへて、垣下の親王たち上達部の御座あり。（一座の興趣の高まる頃に）御土器などはじまりて、ものおもしろくなりゆくに、求子舞ひて、かよる袖どもの、（あおる）うち返す羽風に、御前近き梅の、（十分に咲ききってみちあふれた花の匂いが）いといたくほころびこぼれたる匂ひの、（薫）さとうち散りわたるに、（一層すばらしく）例の、中将の御薫りの、いとどしく（言いようもなく優美な感じだ）もてはやされて、いひ知らずなまめかし。（そっと几帳の陰からのぞく）はつかにのぞく女房なども、（引き立てられて）「闇はあやなく心もとなきほどなれど、香にこそげに似たるも

のなかりけれ」と、めであへり。大臣も、いとめでたしと見たまふ。（皆ほめそやした）（夕霧）（いかにもすばらしいと）

容貌用意も常よりまさりて、乱れぬさまにをさめたるを見て、「右のすけも声加へたまへや。いたう客人だたしや」とのたまへば、憎からぬほどに、「神のます」など。（容貌態度）（行儀を崩さずとり澄ましているのを）（無愛想にならぬ程度に）（薫）

一　右の中将も、一緒に歌われぬか。えらくお客様然としておられる。「すけ」は、次官。

二『奥入』に貼付された別紙に「八乙女は　わが八乙女ぞ　立つや八乙女　立つや八乙女　神のますこの御社に　立つや八乙女　立つや八乙女」という風俗歌を記す（多久行説）。鍋島家本「東遊歌」の裏書に「春日歌」として類似の歌を挙げ「東遊之後多唱二件歌一故以附出」とあるから、東遊のあとで歌われたものらしい。古注にこれを前頁の「求子」の歌詞とするが、誤りであろう。求子の歌は、神社によってその時時に歌人に新作させたようで、数首を採集し得るが、代表的なものは、『古今集』巻二十大歌所御歌「ちはやぶる賀茂の社の姫小松万代経とも色は変らじ」（冬の賀茂の祭の歌、藤原敏行朝臣）である。

紅(こう)梅(ばい)

柏木亡きあとの、故致仕の太政大臣家をつぐ、次男の按察使の大納言一家の物語である。大納言と亡くなった北の方との間には、大君、中の君の姉妹があったが、大君は東宮妃として宮中に上がり、麗景殿に住む。中の君を、大納言は、匂宮にと心ざしている。大納言は、北の方亡きあと、螢兵部卿の宮の未亡人真木柱に通い、今、真木柱は晴れて大納言の北の方になっている。大納言と真木柱との間には、童殿上している若君が一人いるが、真木柱には、故螢兵部卿の宮の遺児で、琵琶に巧みな宮の御方という連れ子がいる。この人は、控えめな性格の女性で、父宮がいないという境遇のせいか、結婚などということは念頭にない。

大納言は、宮の御方の住む寝殿の東の軒先に美しく咲く紅梅の花につけて、匂宮に歌をおくり、宮の気をひこうとするが、宮は気乗りがしない。巻名は、この場面による。匂宮が惹かれているのは、螢兵部卿の宮の遺児、宮の御方であった。大納言の文の使い、匂宮の宮の御方へのひそかな文の仲立ちをしたのは、真木柱腹の若君だった。

この巻で、薫は、按察使の大納言の言葉の中で、源中納言と呼ばれている。薫の中納言昇進のことは椎本の秋に見え、この巻の季節は春であるから、年立の上では、この巻はほぼ椎本の二度目の春に重なり、巻末で「八の宮の姫君」に言及しているところを見ると、椎本の二度目の春に続く、総角の、同じ年の秋、冬の頃に重なるであろう。

一　漠然と時を指定する書き方。物語の冒頭の形式「今は昔」「昔」などに准ずるもので、後の橋姫、宿木、手習に同じ書き出しが見られる。

二　按察使を兼ねる大納言。大納言は正三位相当。按察使は、地方官を監督する役で、この時代、陸奥と出羽に置かれた。

三　昔の頭の中将。（匂兵部卿一六六頁注三参照）

四　柏木。「故致仕の大臣」の長子。

五　子供の頃から利発で、人目に立つ気の利いたところがおありだった方で。音楽に堪能で、美声の持主だった（二巻賢木一八二頁、四巻初音二七頁、篝火一一八頁、梅枝二六〇頁、藤裏葉二八七頁参照）。初音以下には弁の少将と見え、柏木には右大弁と見える（五巻二八八頁、三〇三頁、三一一頁参照）。

六　髭黒。「故致仕の大臣」に対していう。太政大臣に任じたことは物語に見えない。

七　髭黒のもとの北の方の姫君、真木柱。真木柱の巻で「今はとて宿かれぬとも馴れ来つる真木の柱はわれを忘るな」と詠んだ（四巻二二五頁参照）。

八　真木柱の祖父。

九　螢兵部卿の宮。結婚のいきさつは五巻若菜下一四五～八頁に見える。

一〇　世間にそんなに気兼ねしていられるわけにもゆかないのだろう。正式に北の方としたことをいう。

按察使の大納言と北の方真木柱

大納言の三人の姫君

紅梅

一　そのころ、按察使の大納言と聞こゆるは、故致仕の大臣の二郎なり。亡せたまひにし右衛門の督のさしつぎよ。童よりらうらうじう、はなやかなる心ばへものしたまひし人にて、なりのぼりたまふ年月に添へて、まいていと世にあるかひあり、あらまほしうもてなし、御おぼえいとやむごとなかりける。北の方二人ものしたまひしを、もとよりのは亡くなりたまひて、今ものしたまふは、後の太政大臣の御女、真木柱離れがたくしたまひし君を、式部卿の宮にて、故兵部卿の親王にあはせたてまつりたまへりしを、親王亡せたまひてのち、忍びつつ通ひたまひしかど、年月経れば、えさしも憚りたまはぬなめり。御子は、故北の方の御腹に、二人のみぞおはしければ、さうざうしとて、神仏に祈りて、今の御腹にぞ、男君一人まうけた

（一）昇進なさる　（二）弟君に当られる　（三）以前にましていかにも羽振りがよく　（四）申し分のないお暮しぶりで　（五）帝のご信任もきわめて厚いものがあった　（六）前からの方は　（七）別れがたくお思いだった　（八）ご縁づけ申されたのだが　（九）〔大納言が〕人目を忍んでお通いだったが　（一〇）〔大納言の〕姫君お二人だけでいらしたので　（一一）もの足りなくお思いで　（一二）今の北の方

一 亡き螢兵部卿の宮のお子として。真木柱の連れ子である。

二 それぞれの姫君たちに仕える女房などは。

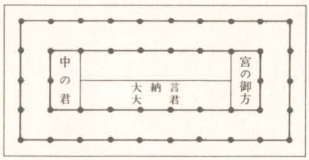
三 ご自分の側が迷惑に思うようなことでも、おだやかに受け取って。二人の姫君は大納言の実子なので、仕える女房たちがかさにかかって、真木柱腹の継子の姫君をあしざまに言ったりすることがあるのである。

四 大納言の三人の姫君。次に、大君（姉君）、中の君（妹君）、宮の御方、と見える。

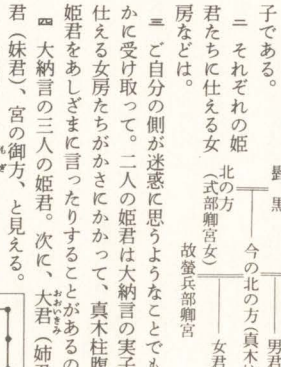
五 （大納言は）裳着の儀などお挙げさせになる。裳を着けるのは女子の成人式。

六 間口七間。母屋七間の周囲に廂（一間）をめぐらしたものであろう。普通は母屋三間程度の規模であったらしいから（一巻図録六、七参照）、「広く大きに造りて」というのであろう。一間は、柱と柱の間。以下の部屋割り、図示のようなことか。

七 父螢兵部卿の宮や母方の祖父式部卿の宮から伝わった



大君、東宮妃となる
中の君を匂宮にと忘



まへる。故宮の御方に、女君一所おはす。〔大納言は〕分け隔てせず どの姫君をも 隔てわかず、いづれをも同じごと、親子としての情愛を交わしていられるが 思ひきこえかはしたまへるを、おのおの御方の人などは、きれい事では割り切れぬ思いを抱いたりすることもあって 何やら面倒なもめごとの起る時もよくあるはしうもあらぬ心ばへうちまじり、なまくねくねしきことも出るけれども で来る時々あれど、北の方、真木柱は いと晴れ晴れしく今めきたる人にて、いかにも屈託のない現代風な気性の方で 何どとも大目に見て 罪なく取りなし、わが御方ざまに苦しかるべきことをも、なだらかに聞きなし、悪意はお持ちにならないので 思ひなほしたまへば、世間の取り沙汰もなく無事に過ぎたのだった 聞きにくからでめやすかりけり。

四 君たち、同じほどに、似たお年格好で すぎすぎおとなびたまひぬれば、次々にお年頃になられたので 御裳など着せたてまつりたまふ。七間の寝殿、広く大きに造りて、南面に、大納言殿、大君、西に中の君、東に宮の御方と住ませたてまつりたまへり。〔宮の御方に〕はたから想像するところでは おほかたにうち思ふほどは、父宮のおはせぬ、お気の毒なお身の上のようだが 心苦しきやうなれど、こなたかなたの御宝物多くなどして、うちうちの儀式ありさまなど、内輪のお暮しの格式や様子は 奥ゆかしく 気品のあるご日常で 心にくく気高くなどもてなして、はた目にも申し分なくていらっしゃる けはひあらまほしくおはす。

例によって 大切にお世話しておられる評判が広まって 例の、かくかしづきたまふ聞こえありて、次から次へと縁組をお申し込みに 次々に従ひつつ聞こえ

ご宝物が沢山あったりして。

八 帝と東宮から、ご希望があるけれども。

九 帝には、明石の中宮がおいでになる。以下、大納言の思案。

一〇 そうかといって、初めから敵わぬものと諦めて、へりくだった気持でいるのも、ご奉公のしがいもないというものだ。

一一 夕霧の長女。「大姫君は、春宮に参りたまひて、またきしろふ人なきさまにてさぶらひたまふ」（匂兵部卿一六二頁）とあった。

一二 そうばかりも言っておられようか、人よりすぐれた生涯をと思う女の子でありながら、宮仕えに出すことを諦めたのでは、何の育てたかいがあろう。

一三 大君を東宮に参上させなさることにした。参上のことは次の頁に見える。

一四 相手が並の臣下ではもったいなく、結婚させるのは気が進まぬほどのご器量だから。

一五 真木柱腹の男君（一八一頁）。次に「内裏にてなど」とあるから、童殿上しているのであろう。

一六 なかなか利発で、いかにも利口そうな目つき、額つきの子だ。

一七 弟のお前と付き合うだけでは終りたくないものだと、父の大納言にお伝えしてくれ。「せうと」は、男の兄弟。

なる人が大勢あって
たまふ人多く、内裏、春宮より御けしきあれど、内裏には中宮おはします、いかばかりの人かは、かの御けはひに並びきこえむ、さりとて思ひ劣り、卑下せむもかひなかるべし、春宮には、右大臣殿の女御、並ぶ人なげにてさぶらひたまふは、きしろひにくけれど、さのみ言ひてやは、人にまさらむと思ふ女子を、宮仕へに思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、とおぼしたちて、参らせたてまつりたまふ。十七八のほどにて、うつくしう、にほひ多かる容貌したまへり。

一体どれほどの人が　中宮のご威勢に肩をお並べできよう　肩を並べる人もいない様子で控えていられるのは　競争もむつかしいけれども　心をお決めになって　派手やかに美しい　かわいらしく　[大君は]

中の君も、うちすがひて、あてになまめかしう、澄みたるさまは

姉君に引き続いて　気品があり優美で　すっきりしたところは

姉君以上で　お美しい方のようなので

まさりて、をかしうおはすめれば、ただ人にてはあたらしく見せまうき御さまを、兵部卿の宮の、さもおぼしたらば、などおぼしたる。この若君を、内裏にてなど見つけたまふ時は、召しまとはし、戯れ敵にしたまふ。心ばへありて、奥おしはからるるまみ額つきなり。

お望みでもあるならば　[大納言は]　匂宮が　[匂宮が]　お見かけになる時は　お側を離さず　遊び相手

「せうとを見てのみはえやまじと、大納言に申せよ」などのたまひかくるを、さなむ、と聞こゆれば、うち笑みて、いとかひありとお

[匂宮]　[大納言に]　[大納言は]　願ってもないこととお思い

一 人にひけを取るような宮中勤めをするよりは。「宮仕へ」は、ここは、帝、東宮に参ること。

二 （藤原氏から后を立てるようにとの）春日明神のご託宣でも、万が一、自分の代に下って。「ことわり」は、判断、裁断の意。春日明神は、藤原氏の氏神。大納言は、長兄柏木が亡くなったので、故致仕の太政大臣のあとを継ぐ立場にある。皇族出身の后の立つことに世評の抵抗のあったこと、三巻少女二三〇頁、五巻若菜下一五一頁に見える。「春日大明神の御うたへの事は、後朱雀院の御宇長暦三年四月春日明神被レ訴二申太神宮一云、度々官幣不レ請レ之、依非二藤氏皇后一也、依レ是内大臣教通公一女可二入内一之由被二宣下一之、其年十二月内大臣女真子入内為二女御一。今案、長暦の訴は物語以後の事也。しかるに物がたりにのせたる事おぼつかなし。もし度々に及で御うたへの事ありしやらん」（『花鳥余情』）

三 大納言の父、故致仕の太政大臣。

四 冷泉院に参った弘徽殿の女御が、秋好む中宮に圧されて、立后の叶わなかったこと。以下のこと、三巻少女二三四頁に見える。

五 大君の継母、真木柱。

六 大納言。大君も北の方も宮中にいて、不在。

七 寝殿の西に住む中の君。

八 寝殿の東に住む宮の御方。

宮の御方の人柄

（大納言）「人に劣らむ宮仕へよりは、この宮にこそは、よろしかぼしたり。（匂宮）（人並みな）らむ女子は見せたてまつらまほしけれ。（婿君として）心ゆくにまかせて、かしづきて見たてまつらむに、命延びぬべき宮の御さまなり」とのたまひながら、まづ春宮の御ことをいそぎたまうて、春日の神の御ことわりも、わが世にやもし出で来て、故大臣の、院の女御の御ことを、胸いたくおぼしてやみにしなぐさめのこともあらなむと、心のうちに祈りて、参らせたてまつりたまひつ。いと時めきたまふよし、人聞こゆ。かかる御まじらひの馴れたまはぬほどに、はかばかしき御後見なくてはいかがとて、北の方添ひてさぶらひたまへば、まことに限りもなく思ひかしづき、後見きこえたまふ。

殿は、つれづれなるここちして、西の御方は、ひとつにならひたまひて、いとさうざうしくながめたまふ。東の姫君も、うとうとしくかたみにもてなしたまはで、夜々は一所に御殿籠り、よろづの御こと習ひ、はかなき御遊びわざをも、こなたを師のやうに思ひきこ

（匂宮）（人々）（大層ご寵愛の深い旨を）（お馴れでない間）（こうした宮中のお勤めに）（ご報告する）（東宮に）（姉君の東宮に参ることを）（ものの）（大事にお世話申し上げたら）（匂宮のお美しさだ）（おっしゃるも）（思い通りに精一杯）（お逢わせ申したいものだ）（の様子だ）

（しっかりした）（姉君といつも一緒にいられ）（付き添って宮中においでなので）（この上もなく気をくばり大事にして）（お世話申し上げなさる）（所在ない気がして）（とてもものさびしくぼんやりしていられる）（他人行儀にお互いにお振舞いにはならず）（いろいろなお稽古ごとをなさり）（ちょっとしたお遊びごとも）（宮の御方）（先生）

九 心遣いやそぶりには少しも陰気なところがなく、人を惹きつける魅力がおありなところは、人並みすぐれていらっしゃる。

一〇 こうして大君の東宮入内やら何やらと、自分の実の娘についてばかり熱心に奔走しているようなのも、（宮の御方や母北の方に）気の毒だなどと大納言はお思いになって。

一一 ご宿縁にまかせて。結婚することになるか、ならないか、それはともかく、というほどの気持。

一二 出家して尼になるなりして、それなりに、人の物笑いになるような、軽はずみな失態を犯すことなくお過しになってほしいものです。つまらぬ男と浮き名の立つようなことはあってほしくない、と言う。父の兵部卿の宮がいないというひけ目が、母にも適当な縁組を断念させているのであろう。

一三 大納言は、どの姫君も分け隔てせず父親らしく振舞っておられるが。

大納言、宮の御方の容貌に関心を抱く

えてぞ、誰も習ひ遊びたまひける。（大君も中の君も）もの恥ぢを世の常ならずしたまひて、母北の方にだに、（真木柱にさえ）さやかには、（はっきりとは）をさをささし向ひたてまつりたまはず、かたはなるまでもてなしたまふものから、（おかしいほどに控えめにお振舞いになるものの）心ばへけはひの埋れたるさまならず、愛敬づきたまへること、はた、人よりすぐれたまへり。一〇 かく内裏参りや何やと、わが方ざまをのみ思ひいそぐやうなるも、心苦しなどおぼして、（大納言）「さるべからむさまにおぼし定めてのたまへ。同じこととこそはつかうまつらめ」と、（実の娘と同様と思ってお世話申し上げましょう）（真木柱）母君にも聞こえたまひけれど、（母北方）「さらにさやうの世づきたるさま、（全然そのような夫を持つといったことは）思ひ立つべきにもあらぬけしきなれば、なかなかならむことは、心苦しかるべし。一一 御宿世にまかせて、世にあらむ限りは見たてまつらむ。後ぞあはれにうしろめたけれど、一二 世を背くかたにても、おのづから人笑へに、あはつけきことなくて過ぐしたまはなむ」など、うち泣きて、御心ばせの思ふやうなることをぞ聞こえたまふ。

一三 いづれも分かず親がりたまへど、（宮の御方の）御容貌を見ばやとゆかしうおぼ

（宮の御方は）人一倍恥ずかしがりやのお方で
（真木柱にさえ）お顔をお見せすることもなさらず
（おかしいほどに控えめにお振舞いになるものの）
（適当なこれと思う縁組相手をお決めになってお申しつけ下さい）
（なまじっかな縁組はもなさそうな様子ですから）
（私の生きています間はお世話申し上げましょう）
（だあとが不憫で心配なことですが）
（大納言に）お気立ての申し分のないことを
（宮の御方の）見たいものとお心を動かされて

して、「隠れたまふこそ心憂けれ」（大納言）姿をお隠しになるのが情けない と恨みて、人知れず、見えたまひぬべしやとのぞきありきたまへど、絶えてかたそばをだに、え見たてまつりたまはず。「上おはせぬほどは、立ちかはりて参り来べきを、うとうとしくおぼし分くる御けしきなれば、心憂くこそ」などど聞こえて、御簾の前にゐたまへば、御いらへなど、ほのかに聞こえたまふ。御声はひなど、あてにをかしう、さま容貌思ひやられて、あはれにおぼゆる人の御ありさまなり。わが御姫君たちを、人に劣らじと思ひおごれど、この君に、えしもまさらずやあらむ、かかればこそ、世の中の広きうちはわづらはしけれ、たぐひあらじと思ふに、まさるかたも、おのづからありぬべかめり、など、いとどいぶかしう思ひきこえたまふ。

「月ごろ何となくもの騒がしきほどに、御琴の音をだにうけたまはらで久しうなりはべりにけり。西の方にはべる人は、琵琶を心に入れてはべる、さもまねび取りつべくやおぼえはべらむ。なまかたほ

姿をお見せに　ならないものかとあちこち覗いて回られるけれども　全く　お姿をちらりとでも　お見か　け申すことができない　（大納言）上　他人行儀に分け隔てなさるお気持のようですので　情けなく思われます　[宮の御方は]　お坐りなので　物腰の感じ　気品があり優雅で　姿　深く心をひかれる宮の御方のご様子である　宮の御方には　とてもかなわないのではなかろうか　いうことだから　絶世の美人と思ってい　ても　それよりすぐれた人も　どうしても世間にはいるもののようだ　（大納言）六　中の君　熱心に学んでいますが　八　九

大納言の音楽懐旧談義

一　母上がご不在の間は、その代りとしてこちらにお伺いするつもりでおりますのに。「上」は、北の方の意。大君とともに宮中にいる。

二　宮の御方の部屋の前。簀子であろう。

三　ご自分の実の姫君たち（大君と中の君）を、人にひけを取ることはあるまいと自慢に思っているが。以下、大納言の心中。

四　この広い世間の内は、気を許せないものなのだ。どんな強敵がいるか分らない、の意。

五　ますます宮の御方のお姿を見たいものとお思い申し上げなさる。

六　ここ幾月、何ということなくごたごたしていましたので。大君の東宮入内のことがあった。

七　あなたのお琴の音もお聞きしないでずいぶんたってしまいました。以下の言葉によるに、宮の御方は琵琶を得意とする。「琴」は琵琶も含む絃楽器の総称。

八　そうやって十分に学び取れると思っているのでしょうか。後の言葉によると、宮の御方に琵琶を習っている趣。前にも「こなたを師のやうに思ひきこえてぞ」（一八四～五頁）とあった。

九　下手に修行したのでは、（琵琶は）聞きづらい音色の楽器です。

にしたるに、聞きにくきものの音がらなり。同じくは、御心とどめて教へさせたまへ。翁は、とりたてて習ふものはべらざりしかど、そのかみ、盛りなりし世に遊びはべりし力にや、聞き知るばかりのわきまへは、何ごとにもいとつきなうはべらざりしを、うちとけても遊ばさねど、時々うけたまはる御琵琶の音なむ、昔おぼえはべる。故六条の院の御伝へにて、右の大臣なむ、このころ世に残りたまへる。源中納言、兵部卿の宮、何ごとにも、昔の人に劣るまじう、いと契りことにものしたまふ人々にて、遊びのかたは、取り分きて心とどめたまへるを、手づかひすこしなよびたる撥音などなむ、大臣には及びたまはずと思うたまふるを、この御琴の音こそ、いとよくおぼえたまへれ。琵琶は、押手しづやかなるをよきにするものなるに、柱さすほど、撥音のさまかはりて、なまめかしう聞こえたるなむ、女の御ことにて、なかなかをかしかりける。いで遊ばさむや。御琴参れ」とのたまふ。女房などは、隠れたてまつるもをさをさな

一〇 自分を年寄りとへりくだっていう。以下の懐旧談、声楽にすぐれていたこの人らしい話しぶり（一八一頁注五参照）。

一一 （あなたは）気を許して思う存分お弾きにもなりませんが。

一二 昔の世の音色そのままと思われます。昔の名手にも劣らないと、ほめる。尚古思想である。宮の御方の父、螢兵部卿の宮は、琵琶の名手とされていた（五巻若菜下一七九頁注一四参照）。その血を引いたという趣なのであろう。

一三 琵琶のご伝授を受けた方として。夕霧が源氏から琵琶の伝授を受けたことは物語には見えない。

一四 薫。匂兵部卿の巻には「宰相の中将」（一七六頁）とあった。後の椎本の巻に「宰相の中将、その秋中納言になりたまひぬ」（三一二三頁）とある。ただし竹河の巻（二四五頁）では、薫の中納言昇進と同時に、夕霧は左大臣に、藤大納言は右大臣に昇進したことになっている。

一五 柱の上を左手でおさえて弾く手法。柱は琵琶の頸の所にある四枚の駒。これをおさえることを「柱さす」という。

一　ひどく若い上﨟風の女房で、大納言に姿をお見せしたくないと思う者は、勝手に奥に引っ込んだままでいるので。「上﨟」は、家柄のよい上席の女房。

二　真木柱腹の若君。

三　今晩宮中に宿直する姿で。殿上童は、ふだんは束帯で、みずら（耳の上で髪をわがねて結う髪型）を結うが、宿直姿は直衣で、髪をただ解き掛けるという（『花鳥余情』）。

若君の笛に、宮の御方琵琶を爪弾く

四　後宮の殿舎の一つ（四巻図録四参照）。東宮妃として大君がこの御殿を賜っている趣。

五　そちら（母北の方）にすべておまかせして。以下「なやましく」まで、若君に託す伝言の内容。

六　横笛。

七　息子自慢の表情がつい洩れる風情。

八　双調（洋楽のgに近い）を宮（主音）とする呂旋音階。春の調子とされる。双調の調子（調子を整えるための短い曲。各調子に一つずつある）であろう。

九　この（宮の御方の）お部屋あたりで。

一〇　琵琶は元来、撥で弾くが、ここは、軽く、遠慮がちに弾く体。

一一　嘯（うそ）すなわち口笛で、『竹取物語』に「うそを吹く」とあるのと同じものであろう。大納言が合せて吹くのである。

一二　宮の御方の部屋は、寝殿の東。

（念入りにきちんと結ない）し。いと若き上﨟だつが、見えたてまつらじと思ふはしも、心にまかせてゐたれば、（大納言）「さぶらふ人さへかくもてなすが、（おもしろくない）やすからぬ」と腹立ちたまふ。

若君、内裏へ参らむと、宿直姿にて参りたまへる、（かわいらしく）わざとうるはしきみづらよりも、いとをかしく見えて、（大納言は）いみじくうつくしとおぼしたり。麗景殿に、（母北方への）ご伝言をお託しになる（大納言）ことづけ聞こえたまふ。「ゆづりきこえて、今宵もえ参るまじく、（参内は叶いそうになく）気分がすぐれない なやましくなど聞こえよ」（申し上げなさい）とのたまひて、「笛すこしつかうまつれ。（吹いてみよ）ともすれば、（何かというと）御前の御遊びに召し出でらるる、かたはらいたしや。（はらはらさせられるとことだが）まだいと若き笛を」（まだとても未熟な笛なのに）とうち笑みて、双調吹かせたまふ。いとをかしう吹いたまへば、（大納言）「けしうはあらずなりゆくは、このわたりにて、おのづからものに合はするけなり。なほ掻き合はせさせたまへ」と責めきこえたまへば、苦しとおぼしたるけしきながら、爪弾きにいとよく合はせて、ただすこし掻き鳴らいたまふ。皮笛、ふつつかに馴れたる声して、この東のつまに、軒近

（帝のお前での演奏にお召しにあずかるの）（常日頃お琴に合せて吹いているせいだろう）（合奏をお願いしたい）（ご催促なさるので）（宮の御方は）迷惑にお思いの様子ながら（笛に）（とても巧みに）（何とか上手になってゆくの）（野太い吹き馴れた音色で）（端）

き紅梅の、いとおもしろくにほひたるを見たまひて、「御前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿の宮、内裏におはすなり。一枝折りて参れ。知る人ぞ知る」とて、「あはれ、光源氏と、いはゆる御盛りの大将などにおはせしころ、童にて、かやうにてまじらひ馴れきこえしこそ、世とともに恋しうはべれ。この宮たちを、世人も、いとことに思ひきこえ、げに人にめでられむとなりたまへる御ありさまなれど、端が端にもおぼえたまはぬは、なほたぐひあらじと思ひきこえし心のなしにやありけむ。おほかたにて思ひ出でたてまつるに、胸あく世なく悲しきを、気近き人の後れたてまつりて生きめぐらふは、おぼろけの命長さならじかし、とこそおぼえはべれ」など、聞こえ出でたまひて、ものあはれにすごく思ひめぐらしをれたまふ。

（大納言）色濃く咲いたのを　匂宮　（大納言）一四　一五　時とともに恋しく思い出されます　一六　なるほど人にほめそやされるように生れついておられるお美しさだのお方とお思い申し上げ　一七　やはり光源氏を比類のないお方とお思い申し上げた気持がそう思わせるのだろうか　世のひとしなみの者として思い出し申し上げても　一八　心の晴れる時とてなく悲しいのに　もの悲しく感に堪えて世の無常に思いをめぐらして涙にくれられる　源氏のお噂話を口になさって　一九

大納言、光源氏を追懐

一三「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（『古今集』巻一春上、梅の花を折りて人におくりける　友則）。中の君を匂宮にという大納言の気持は前に見えている（一八三頁）。

一四 ああ、光源氏よと謳われた、世に言う血気お盛んな近衛の大将などでいらした頃。名門の子弟は、多く若年にして大将に任ずる。源氏の大将時代は二十一歳から二十五歳まで。

一五 私がまだ元服前で、このように（この子が匂宮にお仕えしているように）親しくお近づき申したことが。大納言は、父の頭の中将の韻塞の負けわざの日、童殿上したばかりの八、九歳で、高砂を歌った（二巻賢木一八一～二頁）。

一六（その源氏の孫に当る）匂宮たち。

一七（源氏の）端の端とも思われなさらぬのは。源氏の足許にも及ばぬと思われる、の意。

一八 近しかった人が（光源氏に）先立たれ申して今までこの世に生き永らえているのは、並たいていの寿命ではありますまい。さぞかし長生きをつらく思うことだろう、の意。

大納言、紅梅に付けて匂宮に歌をおくる

一九 そんなことを言っても仕方のないことだ。亡き光源氏を恋しく思うそのお形見としては、匂宮くらいしかいらっしゃらないのだ。

折が折とて気持を抑えかねてか　紅梅　急いでさし上げさせなさる（大納言）

ついでの忍びがたきにや、花折らせて、急ぎ参らせたまふ。「いかがはせむ。昔の恋しき御形見には、この宮ばかりこそは。仏の釈迦

一 釈迦の十大弟子の一人、また十六羅漢の一人。多聞第一といわれ、仏滅後、迦葉を上座とする千人の羅漢による釈迦の遺教の結集に際して、中心人物となった。阿難が遺教を説いた時、大衆は釈迦如来の再来かと疑った。光を放ったことは『増一阿含経』巻一序品第一に「阿難仁和具二四等一、意転入レ微獅子吼、顧眄四部一瞻二虚空一、悲泣揮レ涙不二自勝一、便奮二光明一和二頻色一、普照二衆生一如二日初一」とある。

二 羅漢たち。

三 (自分もそれにあやかって) 源氏亡きあとの深い悲しみを払うすがとして、あえて匂宮に声をおかけしてみよう。

四 そのつもりがあって風が匂いを吹き送る園の梅に、すぐにも鶯がおとずれて来なくてよいものでしょうか。この手紙に色よいお返事を、というほどの気持。「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」(『古今集』巻一春上、紀友則) を踏まえる。

五 紅梅の色に合せたもの。

六 たたんで懐中に持ち歩く紙。

七 明石の中宮。

八 清涼殿の北廂。后妃の控えの間。弘徽殿の上の御局と藤壺の上の御局とがある (一巻図録五参照)。

九 匂宮の宮中における宿泊所。どこか不明。

一〇 気がねのいらぬ邸の方へも、時々は遊びにおいで。私邸の二条の院である (匂兵部卿一六一頁)。

仏が入滅なさったという　その後は　聡明な　いたのだが

くれたまひけむ御名残には、阿難が光放ちけむを、[仏が]二度出でたまへるかと疑ふさかしき聖のありけるを、闇にまどふはるけ所に、聞こえをかさむかし」とて、

(大納言)四 心ありて風のにほはす園の梅に

まづうぐひすの訪はずやあるべき

花やかな書きぶりで　子供心に　宮にかわいがって頂きたいという気があるので　お送り出しになるのを

と、紅の紙に若やぎ書きて、この君の懐紙に取りまぜ、押したたみて出だしたてたまふを、幼き心に、いと馴れきこえまほしと思へば、急ぎ参りたまひぬ。

中宮の上の御局より、御宿直所に出でたまふほどなり。殿上人あまた御送りに参るうちに、見つけたまひて、「昨日は、などいと疾くはまかでにし。いつ参りつるぞ」などのたまふ。「疾くまかでではべりにしくやしさに、まだ内裏におはしますと人の申しつれば、急ぎ参りつるや」と、幼げなるものから、馴れきこゆ。「内裏ならで、心やすき所にも、時々は遊べかし。若き人どもの、そこはかとなく

[若君を]　[匂宮は]　[宮が]　子供してはいるものの　お甘えする　若者たちが　誰誘うともなく　退出したのか

一一 御送りの殿上人たち。
一二 東宮からは、多少お暇が頂けたようだな。以下、匂宮が若君をからかう。東宮にかなり親しく出入りしていた趣。
一三 姉若にご寵愛を奪われてお前もかたなしのようだな。東宮妃として上がった姉の大君、麗景殿のこと。
「時」は、羽振りのよいこと、権勢、寵などの意。
一四 宮様のお側でしたら。あからさまな追従になるのを憚って皆まで言わない趣。
一五 (大君は) 私を、うだつのあがらぬ者とすっかりお見限りだそうな。東宮に参って寵をもっぱらにし、私など振り向きもしない、と言う。
ただの親王であることをひがんでみせた冗談。
一六 世間にもてはやされぬ同じ宮家で、「東」とか申し上げる方は。宮の御方のこと。
一七 怨み言を言ってやってからこの歌をもらったのでは、おもしろみもなかったろう。いちはやく先方からの申し込みに、まんざらでもない面持。「怨みてのちさへ人のつらからばいかに言ひてか音をも泣かまし」(『拾遺集』巻十五恋五、題しらず、読人しらず)
一八 「紅に色をばかへて梅の花香ぞことことに匂はざりける」(『後撰集』巻一春上、紅梅の花を見て　躬恒)
一九 「御前の前栽にも、春は、梅の花園をながめたまひ」(匂兵部卿一七一頁) とあった。

匂宮、宮の御方に関心を寄せる

若君を一人だけお側に呼んで親しくお話しなので
集まる所ぞ」とのたまふ。この君召し放ちてかたらひたまへば、人
それぞれ退出したりして
人は、近くも参らず、まかで散りなどして、しめやかになりぬれば、
あたりも静かになったので
いつもお目をかけられてお側離さずのようだったのに
「春宮には、暇すこしゆるされにためりな。いとしげう思ほしまと
(若君) お側から
はすめりしを、時取られて人わろかめり」とのたまへば、「まつは
あとは言葉を控えて
お離し下さらなくて困ってしまいました
させたまひしこそ苦しかりしか。御前にはしも」と聞こえさしてゐ
(匂宮)
たれば、「われをば、人げなしと思ひ離れたるとな。ことわりなり。
もっともなことよ
けれどおもしろくはないな
されどやすからずこそ。古めかしき同じ筋にて、東と聞こゆなるは、
そっとお誘いしてみてくれ
私と仲よくして下さらぬかと
あひ思ひたまひてむやと、忍びてかたらひきこえよ」などのたまふ
(若君が) 紅梅　(匂宮は)
ついでに、この花をたてまつれば、うち笑みて、「怨みてのちなら
下にも置かずじっと
ましかば」とて、うちも置かず御覧ず。枝のさま、花房、色も香も
尋常でない
(匂宮)
世の常ならず。「園ににほへる紅の、色に取られて、香なむ、白き
負けて
世間では言うが　何とも見事に　色も香も兼ねそなえて咲いたもの
梅には劣れるといふめるを、いとかしこく、とり並べても咲きける
よ
かな」とて、御心とどめたまふ花なれば、かひありてもてはやした
さし上げたかいのあるご様子でご賞
翫になる
まふ。

一 今夜はどうせ宿直なのだろう。若君のいでたちを見て、匂宮が引き止める。
二 閉じこめて外にお出しにならないので。
三 東宮に参上することも叶わず。姉の麗景殿のもとへの大納言の伝言も伝えられない。
四 (若君を) お側近くにお休ませになったのを。
五 大納言は、中の君を (私でなく) どうして東宮にさし上げる気におなりでなかったのだろう。「花」は紅梅 (中の君)、その「主人」は、大納言と見るべきであろう。「うつろふ」(気を移す) は「花」の縁語。
六 存じません。ものの分るお方に (さし上げたい) とか、聞きました。「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや」(『後撰集』巻三春下、源信明)。前に、大納言は「知る人ぞ知る」(一八九頁) とも言っている。
七 (宮の御方でなく) 実の娘である中の君を自分にと考えているらしい。
八 関心は別の方 (宮の御方) に深く向けられているので。
九 花の香にさそわれてもよい身の上でしたら、願ってもない風のお誘いを見過すことでしょうか。一応卑下してみせた体。贈歌と同じ『古今集』の歌による。
一〇 何とか今のところは、年寄りたち (大納言たち) によけいなお節介をさせないで、そっと (宮の御方に渡りをつけてほしい)。
一一 かえって腹違いの姫君たち (大君、中の君) は。

匂宮の返歌

「今宵は宿直なめり。やがてこなたにを」と召し籠めつれば、春宮にもえ参らず、花もはづかしく思ひぬべくかうばしくて、気近く臥せたまへるを、若きここちには、たぐひなくうれしくなつかしう思ひきこゆ。「この花の主人は、など春宮にはうつろひたまはざりし」「知らず。心知らむ人になどこそ、聞きはべりしか」など語りきこゆ。大納言の御心ばへは、わが方ざまに思ふべかめれ、と聞き合はせたまへど、思ふ心は異にしみぬれば、この返りこと、けざやかにものたまひやらず。翌朝、この君のまかづるに、なほざりなるやうにて、

(一 今宵 宿直なめり 召し籠めつれば 二 籠めつれば 三 春宮 四 気近く 五 主人 六 知らず 七 心知らむ人 八 思ふ心 九 花の香 一〇 なほ 一一 なかなか)

(このままこちらに休め 〔匂宮が〕奉った紅梅の花も気がひけるほどに薫物の香が匂って 年若い子供としては 慕わしく 〔匂宮は〕思い合 ご意向は せなさるが この手紙の返事は はっきりしたお 気持もお示しにならない 気のないような詠みぶりで 宮の御方 大切な近しいお方といよい 若君 くりかえし仰せになるので 〔若君に〕姿をお見せになったりして よ好意を寄せるようになった)

花の香にさそはれぬべき身なりせば
風のたよりを過ぐさましやは

さて、「なほ今は、翁どもにさかしらせさせで、忍びやかに」と、かへすがへすのたまひて、この君も、東のをば、やむごとなくむつましう思ひましたり。なかなか異方の姫君は、見えたまひなどして、

一二 普通のきょうだいのような間柄だが。
一三 宮の御方が、いかにも奥ゆかしく、申し分のない気立ての方なので。
一四 姉の大君。麗景殿。
一五 同じ姉君のご出世だから、うれしく思うものの、（宮の御方がこのままでいられるのが）いかにも不本意に残念に思われるので。
一六 願ってもないことに、紅梅の使者をつとめることになったと、若君は思う。
一七 匂宮のお歌は、昨日の歌へのお返事なので、父大納言にお見せする。心進まぬながら、の気持。
一八 右大臣（夕霧）や我々の目の届く所では、しごく生真面目に、おとなしくしていらっしゃるのが、おかしいことだ。気のないような返歌に対する批評。
一九 陰口をたたいて。匂宮の返歌を不満として、もう一押しと、また歌を詠みおくる。
二〇 もともと薫りの高いあなたのお袖が触れたなら、梅の花（私の娘）も、いかにもすばらしい匂いだと世間に評判が立ちましょう。

再び、大納言と匂宮の贈答

二一 例の兄弟のさまなれど、童ごこちに、いと重りかにあらまほしうおはする心ばへを、（子供心に）かひあるさまにて見たてまつらばや、（立派な婿君を持たせてさし上げたいものだ）と思ひありくに、（日頃思っているのに）春宮の御方の、いとはなやかにもてなしたまふにつけて、（今を時めく花やかなお暮しぶりであるのにつけても）同じこととは思ひながら、いと飽かずくちをしければ、この宮をだに、（せめて匂宮を）気近くて見たてまつらばや、（宮の御方の婿君にお迎えしたい）と思ひありくに、うれしき花のついでなり。

二二 これは、昨日の御返りなれば見せたてまつる。（大納言）にくらしいおっしゃりようだな ねたげにものたまへるかな。（匂宮は）あまり風流好みの度が過ぎていらっしゃるのを あまり好きたるかたにすすみたまへるを、（我々が）感心申し上げないとお聞きになって ゆるしきこえずと聞きたまひて、右の大臣、われらが見たてまつるには、いとものまめやかに、御心をさめたまふこそをかしけれ。（ご資格十分なお方なのに）あだ人とせむに足らひたまへる御さまを、（無理に堅物ぶって振舞われるのも）しひてまめだちたまはむも、見所少なくやならまし」（粋人と申しても興がそがれることになろう）など、（若君を）参内させなさるのに）しりうごちて、今日も参らせたまふに、また、

「本つ香のにほへる君が袖触れば
花もえならぬ名をや散らさむ

一 恐縮に存じます。手紙の結びの言葉。

二 大納言に、本当にこの話をまとめようというつもりがあるのかと。「言ひなす」は、「言ひ」（交渉して）「なす」（事を成就させる）の意。

三 梅の花の薫りを匂わせる家を尋ねて行きましたら、色（女色）に目がないと人が咎め立てするのではないでしょうか。

四 この前の夜、宿直して。匂宮のもとで一夜を明かした時のこと。以下、匂宮の移り香のことを言う。退出前、麗景殿に立ち寄った趣。

五 ほかの人は、何とも思わなかったのですが。「なほ」は、平凡の意。

六 以下、匂宮に親しんだことを東宮がからかう。

七 道理で、私を嫌ったはずだ。「うべ」は、なるほど、もっともだ、の意。「すさむ」は、嫌い避ける。

八 こちら（あなた）から、匂宮にお手紙をさし上げたのですか。

九 前に「この東のつまに、軒近き紅梅」（一八八頁）とあった。

一〇 表立っての宮中勤めをなさる女などは、あのようには香をたきしめられないものです。十分には意の解しかねる言葉である。

北の方退出、匂宮の噂

色めいた申しようです 一 とすきずきしや。あなかしこ」と、本気にお申し込みなさるような書きぶりだ 二 まめやかに聞こえたまへり。まことに言ひなさむと思ふところあるにやと、〔匂宮は〕胸をときめかされてさすがに御心ときめきしたまひて、

（匂宮）三
花の香をにほはす宿にとめゆかば
色にめづとや人の咎めむ

胸の内を明かさないお返事ぶりなのを〔大納言は〕不満に思っていられるなど、なほ心とけずいらへたまへるを、心やましと思ひゐたまへり。

真木柱

北の方まかでたまひて、宮中でのことを〔大納言に〕報告なさるついでに、内裏わたりのことのたまふついでに、

（北方）
「若君の、四一夜宿直して、退出して来た時の まかり出でたりし匂ひの、いとをかしかったのを 五 りしを、人はなほと思ひしを、東宮が いち早くお気づきになって 六 宮の、いと思ほし寄りて、様子を察して 七 宮に近づききこえにけり、うべわれをばすさめたりと、けしきとり、怨み言をおっしゃったのがおかしいことでした 八 怨じたまへりしこそをかしかりしか。ここに、御消息やありし。さなふうにも見えませんでしたが 九 も見えざりしを」とのたまへば、〔大納言〕そうです「さかし。梅の花めでたまふ君ほっておけなくて なれば、あなたのつまの紅梅、いとさかりに見えしを、ただならで、〔宮の〕ほんとにすばらしいものです 一〇 折りてたてまつれたりしなり。移り香は、げにこそ心ことなれ。晴

二　薫。

一二 ほかと同じ、花の名前ですが、（芳香のある）梅は、生い出たもとの根ざしがゆかしく思われることです。薫の前世の因縁ということから、梅はどうしてあれほどの芳香があるのだろうか、と言う。

一三 何ごとにつけても、よしあしが分らず、気がつかないといったことではおありでないが。殿方の立派さも分らぬではないが、の意。

匂宮、宮の御方に執心

一四 現に父君のいらっしゃる姫君たちには、身も世もあらず叶わぬ縁組を望み。「さし向ふ」は、現在夫婦が揃っている意。真木柱は継母ではあるが、大君、中の君には両親が揃っていることになる。それに対して、父宮のいない連れ子の宮の御方の立場は弱い。

一五 ご自分にぴったりの方のように（宮の御方の人柄を）お聞き伝えになって。「ふさひ」は「ふさふ」（似合う）の名詞形。

一六 夫の大納言は。以下、匂宮の文通のことを知っての北の方（真木柱）の思い。それで「大納言の君」という。

れまじらひしたまはむ女などは、さはえしめぬかな。源中納言（げんちゅうなごん）は、かうざまに好（この）ましうはたき匂はさで、人柄こそ世になけれ。あやしう、前の世（さき）の契りいかなりける報いにかと、ゆかしきことにこそあれ。同じ花の名なれど、梅（うめ）は生（お）ひ出でけむ根こそあはれなれ。この宮などのめでたまふ、さることぞかし」など、花によそへても、まづかけきこえたまふ。

（風流がってたき匂わすことはなく身に添う香が比類がありません　人に似ず　前世の因縁がどれほどすぐれていた果報なのかと　知りたく思われることです　匂宮　このように　賞美なさるのは　当然のことですね　かこつけても　匂宮のお噂をなさる）

宮の御方（かた）は、ものおぼし知るほどにねびまさりたまへれば、何ごとも見知り、聞きとどめたまはぬにはあらねど、人に見え、世づき結婚生活をすることは　たらむありさまは、さらに、とおぼし離れたり。世の人も、時に寄る心ありてにや、さし向ひたる御方々には、心を尽くし聞こえわび、花やかな話題にこと欠かないが　今めかしきこと多かれど、こなたは、よろづにつけ、ものしめやかに引き入りたまへるを、宮は、御ふさひのかたに聞き伝へたまひて、深う、いかで、と思ほしなりにけり。若君を、常にまつはし寄せたまひつつ、忍びやかに御文（ふみ）あれど、大納言の君、深く心かけきこえ

（ご自分で分別のつくほどにもう十分大人びたお年でいられるので　夫を迎えて　人並みの　決してすまい　と関心を捨てていられる　権勢におもねる気持があってか　宮の御方　匂宮　控えめなお暮しぶりなのを　何とかして結婚したいという気になられた　心から　いつもお側にお引きつけになってては　［若君を仲立ちに］　ぜひ婿君にと匂宮に望みを）

一 こともあろうに、よりによってこんなその気になりそうもない方（宮の御方）に、かりそめにもせよ熱心なお手紙を下さるのは、埒のあきそうにないことです。「ひき違へて」は、予定あるいは予想に反しての意。「なげの言の葉」は、心のこもらないなげやりな言葉。

匂宮と八の宮の姫君

二 何、さしつかえはあるまい。以下、母北の方の思い。匂宮に宮の御方を許してもよいという気持。

三 宇治の八の宮の姫君。中の君。八の宮は、橋姫の巻の冒頭に紹介される。椎本の巻に、匂宮と中の君の文通のことが見え、二人の結婚は、総角の巻の秋で、冬十月初旬の宇治の紅葉狩りのあと、匂宮は、帝、中宮から禁足を申しわたされることが見える。総角と読み合せると、ほぼこの頃のことにあたる。

四 ますます気が進まないので。本人の意向や大納言のおもわくもあって、もともと宮の御方の結婚にはさしさわりが多い。

五 （相手が宮様なので）恐れ多いという気持だけから。

かけられて［宮が］その気になられて申し込まれることがあるならばと
たまひて、さも思ひたちてのたまふことあらばと、けしきとり、心探りを入れ期待
してられるのを見ると
まうけしたまふを見るに、いとほしう、「ひき違へて、かう思ひ寄お気の毒で（北方）
るべうもあらぬかたにしも、なげの言の葉を尽くしたまふ、かひな
げなること」と、北の方もおぼしのたまふ。真木柱

ほんの形ばかりのお返事などもないので［匂宮は］
はかなき御返りなどもなければ、負けじの御心添ひて、思ほしやおあきらめに
なりそうにもない匂宮のお人柄は何不足があろう婿君としてお世
むべくもあらず。一何かは、人の御ありさま、などかは、さても見た
話申し上げたいような方だし先々の望みも十分おありのように拝されるのに
てまつらまほしう、生ひ先遠くなどは見えさせたまふを、など、北
お考えになる時もよくあるが［匂宮は］それは大層な発展家でいらして
の方思ほし寄る時々あれど、いといたう色めきたまうて、通ひたま
ご執心並々でなく足しげくお出か
ふ忍び所多く、三八の宮の姫君にも、御心ざし浅からで、いとしげう
頼りがいのない匂宮のご気性の浮気っぽいところなども
けになるといった
まうでありきたまふ、たのもしげなき御心のあだあだしさなども、
［母北方は］本心では断念していられるが
四いとどつつましければ、まめやかには思ほし絶えたるを、五かたじけ
真木柱時たま自分の一存でお返事申し上げなさる
なきばかりに、忍びて、母君ぞ、たまさかにさかしらがり聞こえた
まふ。

竹（たけ）

河（がは）

この巻は、巻頭に、これは光源氏一族の物語とは別の、亡き髭黒太政大臣一家に仕えていた古女房の問わず語りであるとする作者の言葉が置かれている点、異色をなしている。

この家では、未亡人玉鬘が、大君、中の君の身の振り方に頭を悩ましている。髭黒は生前、大君の入内を志していたので、帝のご所望もあり、また冷泉院もいまだに玉鬘のことを忘れかねていられて、大君をお望みである。右大臣夕霧の子、蔵人の少将もいたく大君に執心で、母雲居の雁の口添えもあったりするが、何分にもまだ若輩である。四位の侍従時代の若き日の薫も、玉鬘の三男藤侍従と友人で、蔵人の少将とともに玉鬘邸に出入りしている。

正月二十日過ぎ、これらの若者たちは、玉鬘邸で琴を弾じ、催馬楽「竹河」を詠じた。三月、大君と中の君が、庭の桜を賭物に碁を打つのを、蔵人の少将が垣間見て、一層思いを募らせるが、結局、玉鬘は、その年四月九日、大君を冷泉院にさし上げた。

翌年、正月十五日の男踏歌に、薫も傷心の蔵人の少将も参加したが、翌日、薫は、冷泉院で、今は院の御息所である大君の女房と、去年正月の集いをなつかしむ歌を詠みかわす。巻名は、踏歌に因む催馬楽「竹河」によるこの応酬にもとづく。四月、大君は姫宮を出産。一方、中の君は、母玉鬘から尚侍の職を譲られて入内する。

年移って、薫はすでに宰相の中将であるが、この巻の巻末では中納言に昇進する。匂兵部卿、椎本の両巻に照らすに、この巻では、薫十四歳から二十三歳にわたるほぼ十年の歳月が流れている。

一　この巻のお話は。以下「いづれかはまことならむ」まで、物語筆記者による前書き。いわゆる草子地。

二　光源氏のご一族にも遠くていらした後の大殿のご一家。髭黒一族のこと。髭黒は、今上の即位とともに右大臣になり、政権の座についていた（五巻若菜下一五〇頁）。その北の方は、源氏の養女分、玉鬘。髭黒が、冷泉朝の太政大臣（故致仕の大臣）と区別するために「後の太政大臣」と呼ばれたこと、紅梅一八一頁参照。

三　おしゃべりな女房たちで、生き永らえ残っていた者が、問わず語りに話しておいたものだが。この巻の内容は、髭黒方の女房の実際に見聞きした話によるものだというのである。物語のリアリティを増す技巧。

四　紫の上方のお話とは違っているようだけれど。これまでの、光源氏一族の物語は、紫の上方の女房から出たものであるという。

五　前出の「わる御達」。

六　光源氏のご子孫について、問違ったことが、いろいろまじって伝わっているのは。

七　玉鬘。尚侍在任は、四巻藤袴冒頭以来のこと。

八　故髭黒太政大臣。その薨去は、ここに初出。

九　上の男子二人の幼時が、五巻若菜上四八頁に見える。

髭黒家の女房の物語

髭黒亡きのちの家族

一　これは、二源氏の御族にも離れたまへりし、後の大殿わたりにありけるわる御達の、三おちとまり残れるが、問はず語りしおきたるは、四紫のゆかりにも似ざめれど、五かの女どもの言ひけるは、「六源氏の御末々に、ひがことどものまじりて聞こゆるは、われよりも年の数積り、ほけたりける人のひがことにや」などあやしがりける。いづれかはまことならむ。

尚侍の御腹に、七故殿の御子は、男八三人、女九二人なむおはしけるを、さまざまにかしづきたてむことをおぼしおきてて、年月の過ぐるも心もとながりたまひしほどに、あへなく亡せたまひにしかば、夢のやうにて、いつしかといそぎおぼし御宮仕へもおこたりぬ。人の心、時にのみよるわざなりければ、さばかり勢いかめしくおはす

仕えて
ほけてしまった人のでたらめかしら
一体どちらが本当なのでしょう
尚侍
故殿
男
女
待ち遠しくお思いになっているうちに
あっけなく
一日も早くと急いでいらっしゃった姫君のご入内も沙汰止みになってしまった
[髭黒が]それぞれ立派に育て上げようとお心積りなさって
ただもう権勢におもねるものなので
勢力を振っていられ

一　髭黒太政大臣の亡くなられたあとは。

二　玉鬘のご近親は。実父故致仕の大臣の子供たち。彼女の異母兄弟である。紅梅の巻の按察使の大納言たち。

三　亡くなられたお殿様（髭黒）が、少し情味に欠け、むら気な面がお強かったご性格だったので。

四　死後の財産分けを指示した書類。源氏は玉鬘を養女として遇したのである。

五　実子の明石の中宮のお次に、お書き入れ申されていたので。

六　夕霧。

七　それぞれ一人立ちなさったので。官途に就き、しかるべき家の婿になったこと。

八　（官位昇進のことなどで）気を揉み、悲しい思いをすることもあるが、（名門のことゆえ）追い追い一人前になられるようだ。

九　ぜひとも宮仕え申したい願いの深い旨を、髭黒がせし大臣の御名残、うちうちの御宝物、領じたまふ所々など、その家の内にある　ご所領の方々の荘園など　そういかたのおとろへはなけれど、おほかたのありさま引きかへたるやう　ご一家の全体の様子は手のひらを返したようで　大勢の方が　世に栄えていらっしゃるが　うち面での衰えはないけれども　に、殿のうちしめやかになりゆく。尚侍の君の御近きゆかり、そこ　お邸の中はひっそりとしてゆく　らこそは世にひろごりたまへど、なかなかやむごとなき御仲らひの、　なまじ身分の高い方々のお付合いで　もとからも親しくなかった上に　もとよりも親しからざりしに、故殿、情すこしおくれ、むらむらし　けむたがられなさることもあったせいか　さ過ぎたまへりける御本性にて、心おかれたまふこともありけるゆ　［玉鬘は］ご兄弟のどなたとも親しくお付き合いになれないでいる　源氏　かりにや、誰にもえなつかしく聞こえ通ひたまはず。六条の院には、　［玉鬘を］家族の一員とお考えになって　すべてなほ昔に変らずかずまへきこえたまひて、亡せたまひなむの　お亡くなりになったあ　とあとのことをいろいろお書き置きになった　ちのことども書きおきたまへる御処分の文どもにも、中宮の御次に　かえって実の兄弟より配慮さ　加へたてまつりたまへれば、右の大殿などは、なかなかその心あり　ご機嫌をおうかがいになる　て、さるべきをりをりおとづれきこえたまふ。

男君たちは、御元服などして、おのおのおとなびたまひにしかば、　髭黒　殿おはせでのち、心もとなくあはれなることもあれど、おのづから　どんなふうにご縁づけ申したらよかろう　なり出でたまひぬべかめり。姫君たちをいかにもてなしたてまつら

生前奏上しておかれたので。

一〇 姫君が成人なさったであろうそれ以来の年月をお考えあそばして。髭黒奏上以来のほぼの年数を数えられて。

一一 入内のご下命。

一二 どなたも形なしといった有様でいらっしゃる末席に列なって、はるかかなたから（中宮に）睨まれ申すというのも厄介だし。「未だに君王に面を見ること得ること容されざるに　已に楊妃に遙かに目を側められたり」（『白氏文集』巻三、新楽府「上陽白髪人」）による。

一三 玉鬘が、昔、院のお志に背いたままで終ってしまわれたひどい仕打ちまでも、また改めてお恨み申しなさって。冷泉院在位の昔、玉鬘に尚侍として出仕するよう仰せがあったのに、髭黒の北の方になったことをさす。（四巻真木柱冒頭、同二三六頁以下参照）

一四 何の栄えもない身の上だとお見限りになるにしても。すでに退位した身であることをいう。

一五 わが身のいかにも不本意なめぐり合せのために、心ならずも、いやな女だと（冷泉帝が）お思いあそばされたことが。玉鬘が、髭黒との結婚を望んでいなかったことは、真木柱の巻の随所に見える。

一六 年取ってからながら、（娘を代りに納れて）ご機嫌を直して頂けようかしら。「この世」の「こ」に「子」を響かせる。

冷泉院、姫君をご所望

むと、〔玉鬘は〕おぼし乱る。内裏にも、かならず宮仕への本意深きよしを、大臣の奏しおきたまひければ、一〇おとなびたまひぬらむ年月をおしはからせたまひて、仰せ言絶えずあれど、中宮の、いよいよ並びなくのみなりまさりたまふ御けはひにおされて、皆人無徳にものしたまふめる末に参りて、はるかに目をそばめられたてまつらむもわづらはしく、また人に劣り、数ならぬさまにて見む、はた、心尽くしなるべきを思ほしたゆたふ。

冷泉院より、いとねむごろにおぼしのたまはせて、尚侍の君の、昔本意なくて過ぐしたまうしつらさをさへ、とり返し恨みきこえたまうて、「今はまいてさだすぎ、すさまじきありさまに思ひ捨てたまふとも、うしろやすき親になずらへて、ゆづりたまへ」と、いとまめやかに聞こえたまひければ、いかがはあるべきことならむ、みづからのいとくちをしき宿世にて、思ひのほかに心づきなしとおぼされにしが、はづかしうかたじけなきを、一六この世の末にや御覧じな

明石中宮　肩を並べる方　もなくなってゆかれるばかりのご威勢に気圧されて　他の妃より劣り　数にも入らぬ有様なのを世話するのでは　気苦労の種であろうと　〔玉鬘は〕思案していられるべきを　大層ご丁寧にお申し込みのお言葉があって　（冷泉院）　あの頃より一層年もとり　安心のできる親のようなつもりで　〔姫君を〕お預け下さい　とても熱心に懇望申し上げなさったので　どうするのがよいのだろうか　顔向けもならず恐れ多く思われるのに

蔵人の少将の求婚

一　お顔立ちが大層よくていらっしゃるという評判が高くて。玉鬘の姫君の様子。

二　右大臣（夕霧）のご子息の蔵人の少将とかいった方は。「蔵人の少将」は、正五位下相当（一巻桐壺三九頁注一六参照）。

三　ご両親のどちらの側からいっても、親しいお間柄なので。玉鬘は、夕霧からすれば義理の姉弟、雲居の雁からは異腹の姉妹になる。

四　（夕霧の子息たちは）玉鬘方の女房にも親しく近づいてきては、意中を訴えるにもよいってがあるというわけで。

五　まことに軽輩の身でございましょうが、お認め下さる点もございましょうか。親しい間柄に免じて許してくれまいか、という。

六　（玉鬘は）上の姫君を、臣下に縁づけようとは、さらさら思っていらっしゃらないで。「姫君」は、長女をいう。二女は「中の君」。

ほされまし、など定めかねたまふ。［玉鬘は］

容貌（かたち）いとようおはする聞こえありて、思いを寄せお申し込みなさる方が多い心かけ申したまふ人多かり。

右の大殿（おほいとの）の蔵人（くらうど）の少将とかいひしは、三条殿の御腹にて、雲居の雁兄君（あにぎみ）たちよりも引き越し、大層大切にお世話なさって風情のおありであをも越えていみじうかしづきたまひ、人柄もいとをかしかりった方が大層熱心にご縁組を求められるし君、いとねむごろに申したまふ。いづかたにつけても、もて離れたまはぬ御仲らひなれば、夕霧の子息たちが睦まじく思って参上なさったりする時にはこの君たちのむつび参りたまひなどするは、他人行儀なお扱いはなさらない気遠くもてなしたまはず。女房にも気近く馴れ寄りつつ、思ふことをかたらふにも便（たより）ありて、夜昼（よるひる）あたりさらぬ耳かしかましさを、煩わしいながらも気の毒なことと玉鬘お側を去らずお耳に入れる騒がしさをうるさきものの、心苦しきに、尚侍（かむ）の殿もおぼしたり。母北の方の雲居の雁御文（ふみ）も、しばしばたてまつりたまひて、［玉鬘に］「いと軽（かろ）びたるほどにはべるめれど、おぼしゆるすかたもや」となむ、大臣（おとど）も聞こえたまひける。姫君をば、さらにただのさまにもおぼしおきてたまはず、中の［蔵人少将が］もっと世間体が軽々しくないほどに釣合いがとれたならば君をなむ、今すこし世の聞こえ軽々（かろがろ）しからぬほどになずらひならば、縁組しても盗み出しもしかねないほど［一方少将は］こわさもや、とおぼしける。ゆるしたまはずは、盗みも取りつべく、む

七　女の方でご承諾のないうちに間違いがあるのは。「ことのまぎれ」で一語。女の方が承知しないのに、女房などを手なずけて、密かに通じること。

八　ゆめゆめ、間違いを仕出かしてはならぬ。「あなかしこ」は、原義は、畏れ慎むべしの意。

玉鬘、薫を婿にと思う

九　冷泉院におかせられて、御子のように大切にお世話なさる四位の侍従。薫のこと。侍従は、従五位下相当官。源氏が薫の後見を冷泉院に託したことは、匂兵部卿の巻一六五頁参照。

一〇　薫の侍従任官は、十四歳の年の二月。その秋、右近の中将に昇進した（匂兵部卿一六五頁）。

一一　こちら（玉鬘）のお邸は、薫の邸の三条の宮と大層近いので。「三条の宮」は、母女三の宮の御殿。朱雀院から伝領したこと、五巻鈴虫三五〇頁参照。

一二　玉鬘の子息たち。

いくらい思い詰めている くつけきまで思へり。こよなきこととはおぼさねど、女方の心ゆるしたまはぬことのまぎれあるは、音聞きもあはつけきわざなれば、聞こえつぐ人をも、「あなかしこ、あやまち引き出づな」などのたまふに朽されてなむ、わづらはしがりける。

〔玉鬘は〕まるで不相応な縁とはお考えでないが　世間の聞えも軽々しいことなので　お取次ぎの女房にも　〔玉鬘〕八　気をそがれて　〔取次を〕面倒がるのであった

源氏

六条の院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生まれたまへりし君、冷泉院に、御子のやうにおぼしかしづく四位の侍従、一〇そのころ十四五ばかりにて、いときびはに幼かるべきほどよりは、心おきておとなおとなしく、めやすく、人にまさりたる生ひ先しるくものしたまふを、尚侍の君は、婿にても見まほしくおぼしたり。一一この殿は、かの三条の宮といと近きほどなれば、さるべきをりをりの遊び所には、君達にひかれて見えたまふ時々あり。心にくき女のおはする所なれば、若き男の心づかひせぬなう、見えしらがひさまよふなかに、容貌のよさは、この立ち去らぬ蔵人の少将、なつかしく心はづかしげに、なまめいたるかたは、この四位の侍従の御ありさまに、似る人

ご晩年に　女三の宮　幼いはずの年齢にしては　いたいけな　心構えもしっかりして　好ましく　玉鬘　婿としてお世話もしたいものとお思いである　将来が今からはっきりお見えになるので　誘われて　何かといった折々の　世評も高い姫君がいらっしゃるお邸なので　若い男で気を遣わぬ者はなく　これ見よがしに気取ってよく出入りする中に　美男という点では　例のここを離れぬ　優しい感じながら気のひけるほど立派で　優雅な点では　薫

ぞなかりける。一六条の院の御けはひ近うと思ひなすが、心ことなるにやあらむ、世の中におのづからもてかしづかれたまへる人なり。

世間の人から自然と大切にされていらっしゃる方である

二若き人々、心ことにめであへり。尚侍の殿も、「げにこそめやすけれ」などのたまひて、なつかしうもの聞こえたまひなどす。「院の御心ばへを思ひ出できこえて、なぐさむ世なう、いみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも、誰をかは見たてまつらむ。右の大臣は、ことことしき御ほどにて、ついでなき対面もかたきを」などのたまひて、兄弟のつらに思ひきこえたまへれば、かの君も、さるべき所に思ひて参りたまふ。世の常のすきずきしさも見えず、いといたうしづまりたるをぞ、ここかしこの若き人ども、くちをしうさざうしきことに思ひて、言ひやましける。

熱心に皆ほめそやしている

〔玉鬘には〕うちとけてお話し申し上げなさったりする

〔玉鬘〕三

本当に感じのよい人だこと

〔薫を〕実の兄弟並みに

〔薫は〕貴公子によくある色好みなところもなく

ひどく落着きは

姉君同様の方のお邸と

あちこちのお邸の若女房たちは

期待はずれでもの足りないこと

六睦月の朔日ころ、尚侍の君の御兄弟の大納言、高砂歌ひしよ、藤中納言、故大殿の太郎、真木柱のひとつ腹など参りたまへり。右の大臣も、御子ども六人ながらひき連れておはしたり。御容貌よりは

〔年賀に〕

〔夕霧は〕

夕霧

一源氏のお血筋を引く方だと思うせいで、特別視するのであろうか。薫出生の秘密は、世間に知られていない。

二玉鬘方の若女房たち。

三源氏のお心遣い。生前養育の恩、死後の遺産分配まで、源氏の慈愛は深い。

四右大臣（夕霧）は、大層なご身分で、何か機会でもなければ、お目にかかることもむつかしいし。玉鬘が日頃女房などに漏らす言葉。

五何やかやものを言いかけて困らせた。薫に返事をさせようと、簾中から言葉をかけたり、歌を詠みかけたりすること。

六正月上旬頃。三カ日は、朝廷、大臣家などで、新年の行事がある。

七玉鬘のご兄弟の大納言―あの高砂を歌った方ですよ。按察使の大納言のこと。高砂を歌ったのは、八、九歳の時のこと。（二巻賢木一八一～一二頁参照）

八藤中納言、すなわち亡き大殿（髭黒）の長男で、真木柱の姫君と同腹の方。母は、式部卿の宮の姫君。

正月、按察使大納言、夕霧たち、年賀に訪問

九男のお子たち六人を全部。北の方（雲居の雁）腹の長男、三、五、六男と、藤典侍腹の二、四男（夕霧九七～九八頁参照）。蔵人の少将は、五男であろう。

玉鬘、夕霧と、姫君の縁談について話す

一〇 夕霧と玉鬘は、実の姉弟並みに取次ぎなしの応対であった。（四巻藤袴一八五頁参照）

一一 昔の思い出話。「御」があるので、光源氏の思い出話。

一二 若い者たちは。夕霧の子息たちのこと。

一三 今ではこのように、世間の人数に入らぬようになってゆく有様ですのに。髭黒亡く、権勢と無縁のさまをいう。

一四 亡くなられた方（源氏）の御ことも、いよいよ忘れがたく存じられます。夕霧のねんごろな訪問も、源氏の遺徳という。

じめて、飽かぬことなく見ゆる人の御ありさまおぼえなり。君たち（何一つ非の打ち所なく見えるお人柄であり声望である）（ご子息たち）も、さまざまいときよげにて、年のほどよりは、官位過ぎつつ、（皆それぞれ大層お美しいご様子で）（どなたも高くて）何ごとを思ふらむと見えたるべし。世とともに、蔵人の君は、かし（何の悩みがあろうとはたからは見えたことだろう）（ところが）いつも（蔵人の少将）（大切に）づかれたるさま異なれど、うちしめりて思ふことあり顔なり。（されている様子は）（格別なのに）（ふさぎこんで悩みごとのある様子である）

一〇 大臣は、御几帳隔てて、昔に変らず御物語聞こえたまふ。「その（夕霧）（これ）ことととなくて、しばしばもえうけたまはらず。年の数添ふままに、（という用事もなくて）（たびたびお話を伺うこともできずにおります）内裏に参るよりほかのありきなど、うひうひしうなりにてはべれば、（出歩き）（身につかず億劫になってしまいましたので）いにしへの御物語も、聞こえまほしきをりをり多く過ぐしはべるを（お話し申し上げたい折々をいつもそのままにしてしまいますのが残念です）なむ。一二 若き男どもは、さるべきことには召しつかはせたまへ。かな（何かのご用の時には呼びつけてお使い下さい）らずその心ざし御覧ぜられよと、いましめはべり」など聞こえたま（各自の誠意を見て頂けよと）（申しつけております）ふ。（玉鬘）一三「今はかく、世に経る数にもあらぬやうになりゆくありさまを、（人並みに思ってお扱い下さるので）おぼしかずまふるになむ、一四 過ぎにし御ことも、いとど忘れがたく思うたまへられける」と申したまひけるついでに、（冷泉院）（ご求婚のことを）院よりのたまはす（玉鬘）（しっかりとした）ること、（それとなくご相談申し上げなさる）ほのめかし聞こえたまふ。「はかばかしう後見なき人のま（宮仕）

一 世にまたとない立派なご様子は、いつまでもお年を召されないふうでいらせられますようですから。前に、冷泉院の言葉に、「今はまいてさだすぎ、すさまじきありさまに……」（二〇一頁）とあったのが想起される。冷泉院は、四十三歳。

二 人並みに育った娘がございましたらと、存じよりながら。しかるべき年頃の娘があれば、上皇の後宮に納れたいぐらいだ、という。夕霧は、大姫君を東宮、中の君を二の宮に納れている（匂兵部卿一六二頁参照）。

三 ご立派なお妃たちの中に、お仲間入りできる者がおりませんので。冷泉院の妃には、秋好む中宮、次に見える女一の宮の女御などがある。

四 昔の弘徽殿の女御。冷泉院のただ一人のお子の母。玉鬘の異母姉である。（匂兵部卿一六六頁参照）

五 これまでも、院に娘をさし上げようとした人は、そのような（女一の宮の女御への）遠慮から、話の進まなかったこともありますね。

六 院と一緒に（玉鬘の大君を）お世話することで、気晴らしにしたいものですなどと。

七 あの方この方が。夕霧をはじめ、前出の按察使の大納言や藤中納言。

八 朱雀院に、昔からのご縁故のおありの方々。

人々、三条の宮に参賀

じらひは、なかなか見苦しきをと、（かえって見苦しいものですからと）かたがた思ひたまへなむわづらふ」と申したまへば、（あれやこれや思案にくれております）「内裏（夕霧）に仰せらるることあるやうにうけたまはりしを、（帝におかせられてもご下命があるように承りましたが）いづかたに思ほし定むべきことにか。（どちらにお決めになったらよいことなのでしょう）院（冷泉院）はげに、御位（御位を）を去らせたまへるにこそ、盛り過ぎたるここちすれど、世にありがたき御ありさまは、古りがたくのみおはしますめるを、よろしう生ひ出づる女子はべらましかばと、思ひたまへよりながら、はづかしげなる御中に、まじらふべきもののはべらでなむ、（残念に存じられます）くちをしう思ひたまへらるる。そもそも、女一の宮の女御は、ゆるしきこえたまふや。さきざきの人、さやうの憚りにより、とどこほることもはべりかし」と申したまへば、「女御（玉鬘）なむ、（その女御様が）つれづれにのどかになりにたるありさまも、同じ心に後見て、なぐさめまほしきを、など、かのすすめたまふにつけて、いかがなどだに思ひたまへよるになむ」と聞こえたまふ。

（このご縁組を）お認め申されるでしょうか。（ご退位のあと）することもなくのんきになった日頃の暮しも

（どうしたものかなどとも考えてみているわけなのです）

（からお勧めなさいますので）

これかれ、ここに集まりたまひて、三条の宮に参りたまふ。朱雀

（玉鬘邸）

（女三の宮邸）

九 六条の院側の人々も、それぞれの関係で。女三の宮は、朱雀院の皇女で、源氏の正夫人。

一〇 玉鬘の邸。「左近の中将」以下、冒頭に「男三人」とあった、玉鬘の子息たち。「左近の中将」は、従四位下相当。「右中弁」は、太政官の実務に携わり、正五位上相当。「侍従」は、従五位下相当。

夕方、薫、年賀に来る

一一 大勢いらした、立派にご成人の貴公子たちも。先ほど来登場の、夕霧の子息や玉鬘の子息たち。

一二 例によって、熱中しやすい若い女房たちは。玉鬘邸の女房。

一三 なるほど女房たちが騒ぐ通り、薫はいかにも若々しく美しい姿をして、身動きなさる時の匂い立つ香などは、世間普通のものではない。薫の身に芳香あること、匂兵部卿一七〇頁に述べられている。

一四 念誦（経文や仏名を唱えること）を行うお堂。髭黒追善の勤行のため、最近設けられたか。次に「御前近き（庭前の）若木の梅」とある。

薫、玉鬘の侍女と贈答

院の古き心ものしたまふ人々、六条の院の方ざまのも、かたがたにつけて、なほかの入道の宮をば、素通りできず参上なさるのであろう えよきず参りたまふなめり。女三の宮 一〇この殿の左近の中将、右中弁、侍従の君なども、やがて大臣の御供に出でたまひぬ。[人々を] ひき連れたまへる[夕霧の] 勢ことなり。

夕つけて、四位の侍従参りたまへり。一一 薫 そこらおとなしき若君達も、皆それぞれのお人柄で あまたさまざまに、いづれかはわろびたりつる。どなたが見劣りしたりしただろう 皆めやすかりつる 好ましい方ばかりだった 中に なかに、立ち後れてこの君の立ち出でたまへる、薫 姿をお見せになったのは いとこよなく目と 本当に際立って まるここちして、例の、ものめでする若き人たちは、「なほことな やはりほかの人と は違うわね りけり」など言ふ。[若女房] 「この殿の姫君の御かたはらには、大君 薫 [婿君 これをこそ 調子に乗って言う 「並べて見たいわ さし並べて見め」と、聞きにくく言ふ。一三 げにいと若うなまめかしき 深窓の姫 さまして、うちふるまひたまへる匂香など、世の常ならず。姫君と ご納得 君と申しても 物ごとをお分りの方は 聞こゆれど、心おはせむ人は、なるほど薫は人より優れているようだと げに人よりはまさるなめりと、見知 なさるに違いない と思われることだ りたまふらむかし、とぞおぼゆる。

尚侍の殿、玉鬘 一四御念誦堂におはして、（玉鬘） 「こなたに」とのたまへれば、

一 薫は、念誦堂の東の階段から上って。南階を避けたのであろう。堂は、邸内の西にある趣。

二 東の妻戸口の御簾の前。以下の場面、図録四参照。

三 薫は、色めかしい一言も言わせたいような様子をしていられるので。若木の梅の蕾に、鳴き馴れぬ鶯といった背景にふさわしいうぶうぶしい姿なので、からかってみたくなる気持。「好かせたてまほしき」は、河内本「好かせたてまつらまほしき」。「好かせたつ」は、ここ一例。

四 宰相の君と申す上席の女房。「聞こゆる」は、下の「たまふ」とともに、語り手の女房より宰相の君に対する敬語。

五 手折ってみたならば、一層匂いもまさりはせぬかと思うほどに、少しは愛想よくして下さいまし、梅の初花のようなお方。

六 付き合ってもみないで、私を枯木のようだと決めているようですね、心の中は、色香に匂う梅の初花なのに。「もぎ木」は、枝のない木。『河海抄』に「槁木（枯木）也」という。

七 そう言うなら、手を触れてご覧なさい。「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」（『古今集』巻一春上、読人しらず）の言葉を用いる。

八 本当は、色よりも香りの方がすばらしいのですわ。前出の『古今集』の歌を踏まえ、薫の身の芳香を賞める。

九 困った人たちだこと。「御達」は、女房の敬称。

玉鬘の挨拶

東の階よりのぼりて、戸口の御簾の前にゐたまへり。御前近き若木の梅、心もとなくつぼみて、うぐひすの初声もいとおほどかなるに、いと好かせたてまほしきさまのしたまへれば、人々はかなきことを言ふに、言少なに心にくきほどなるを、ねたがりて、宰相の君と聞こゆる上﨟の詠みかけたまふ。

（宰相君）折りて見ばいとどにほひもまさるやと

すこし色めけ梅の初花

（薫）「よそにてはもぎ木なりとや定むらむ

したににほへる梅の初花

さらば袖触れて見たまへ」など言ひすさぶに、（女房）「まことは色よりも」と、口々、引きも動かしつべくさまよふ。

尚侍の君、奥のかたよりゐざり出でたまひて、（玉鬘）「うたての御達や。はづかしげなるまめ人をさへ、よくこそ面無けれ」と忍びてのたま

一 東の階 二 戸口の御簾 三 好かせたてまほしきさまのしたまへれば 四 宰相の君 五 折りて見ばいとどにほひもまさるやと 六 よそにてはもぎ木なりとや定むらむ 七 さらば袖触れて見たまへ 八 まことは色よりも 九 うたての御達や

ようやくのことでつぼみをつけて／まだ大層たどたどしいのに／女房たちがたわむれごと／返事もすげなく落着いた態度なので／くやしがって／を言うのに［薫は］／と感心して／す速いな／［薫の袖を簾中から］引っ張らんばかりざわつく／冗談を言うと／にじり出ていらっしゃって／気がひけるほどお堅い方までをも／よくまあ／厚かましく／小声でおっしゃるの

一〇「まめ人」などと、あだ名を付けられてしまった、全く情けない名だな。玉鬘の言葉をほのかに聞いた薫の思い。「屈ず」は「屈す」の促音を「ん」で表記したもの。読み癖としてそのまま読む。

一一 この家の侍従。玉鬘腹の三男。

一二 四位、五位の者で、清涼殿の殿上の間に昇殿を許されること。侍従は、従五位下相当。

一三 あちこちの年賀廻りもせず、ちょうどその場に居合せていられた。前に、夕霧のお供で出て行ったが、早々に帰邸しているのである。

一四「浅香」は、沈（香木）の水に沈まぬもの。「折敷」は、片木で作った角盆。食器を載せる。（五巻図録七参照）

一五 果物、木の実、菓子などの軽食。

一六（源氏は）きっとこんなふうでいらっしゃったのだろう。源氏の青年時代を知らず、薫を源氏の子と信じている玉鬘の感想。

一七 風流っ気もないように見られたことだ、ひとつ西落者の真似をしてみようか。

正月下旬、薫、蔵人の少将、玉鬘邸を訪う

一八 玉鬘の三男の侍従。薫と区別するため、こう呼ぶ。

一九（薫が）中門を入ろうとなさるあたりに、同じ直衣姿の人が立っているのだった。「中門」は、一巻図録六参照。ただし、ここは、西の中門であろう。「直衣」は、貴族の平常着（一巻図録一二参照）。

二〇 寝殿の西側の部屋。

ふなり。一〇（が聞える）まめ人とこそつけられたりけれ、いと屈じたる名かな、と思ひゐたまへり。主人の侍従、殿上などもまだせねば、所々もありかで、おはしあひたり。浅香の折敷二つばかりして、くだもの、盃ばかりさし出でたまへり。「大臣（玉鬘）は、ねびまさりたまふままに、故院（源氏）にいとようこそおぼえたてまつりたまへれ。この君は、（薫）（源氏に）（そっくりのお顔立ちをしていらっしゃる）へるところも見えたまはぬを、（お人柄が大層もの静かな感じで）けはひのいとしめやかに、（優雅な身のこなしなんかは）なまめいたるもてなしぞ、（源氏のお若い盛りが思われてならない）かの御若盛り思ひやらるる。（涙をこぼされる）かうざまにぞおはしけむかし」など、（亡き源氏を）思ひ出できこえたまひて、うちしほたれたまふ。（お帰りになったあとまで匂う薫の芳香を）（女房たちはほめちぎっている）名残さへとまりたるかうばしさを、人々はめでくつがへる。

侍従の君、（薫）まめ人とあだ名されたのを情けないと思ったので）まめ人の名をうれたしと思ひければ、二十余日のころ、梅の花盛りなるに、にほひ少なげに取りなされし、好き者ならはむかし、とおぼして、藤侍従の御もとにおはしたり。中門入りたまふほどに、同じ直衣姿なる人立てりけり。（相手は）隠れようとする様子なのを（薫が）隠れなむと思ひけるを、ひきとどめたれば、この常に立ちわづらふ少将なりけり。（例のいつもの邸を徘徊している少将なのであった）寝殿の西面

一 十三絃の琴。（一巻図録八参照）
二 罪深いことだな。執着を残すからである。
三 自称の代名詞。親しい間で用いる。
四 寝殿と西の対を繋ぐ渡殿。寝殿の西側になる。
五 催馬楽、呂「梅が枝」。「梅が枝に　来居る鶯　や　春かけて　はれ　春かけて　鳴けどもいまだ　や　雪は降りつつ　あはれ　そこよしや　雪は降りつつ」
六 寝殿の西面（西南の隅）の妻戸。
七 和琴。「あづまごと」の略。
八 女の弾く琴で、呂の調子の歌は、こうまでうまく合せられないものなのに。「琴」は、絃楽器の総称。「呂」は、雅楽の旋律で、西洋音楽の長音階に近く、中国伝来の正式の調子で、春の調べとされた。「律」は、わが国固有の俗楽的音階で、秋の調べ。
九 子息の藤侍従を取次ぎにして。あとに「のたまひ出だし」とある。
一〇 玉鬘の実父。柏木の父、薫の実の祖父でもある。和琴の名手であったこと、五巻若菜上五〇頁注一五参照。薫の和琴の音が、故致仕の大臣のに似ていると、かねての世評なのである。

玉鬘、薫の和琴を所望

一一 いっそ鶯に誘われたおつもりで、弾いて下さい。『河海抄』は、「鶯の声に誘引せられて花の下に来る。草の色に拘留せられて水の辺に坐り」（『和漢朗詠集』巻上、春、鶯。『白氏文集』巻十八「春江」）を引く。
一二 手の爪を噛む。気後れするさま。

〔蔵人少将は〕心をときめかして立っていたらしい　つらそ

に、琵琶、箏の琴の声するに、心をまどはして立てるなめり。苦しげや、人のゆるさぬこと思ひはじめむは、罪深かるべきわざかな、と思ふ。琴の声もやみぬれば、〔薫は〕「いざ、しるべしたまへ。まろはい

うだな　まわりが承知しない恋に心を染めるというのは　〔薫〕さあ　案内して下さい　全く

勝手が分らない　〔少将を〕ともなって

とたどたどし」とて、ひき連れて、西の渡殿の前なる紅梅の木のもとに、梅が枝をうそぶきて立ち寄るけはひの、花よりもしるく、さとうち匂へれば、妻戸おしあけて、人々、あづまをいとよく掻き合はせたり。女の琴にて、呂の歌はかうしも合はせぬを、いたし、と思ひて、今一返り、をり返し歌ふを、琵琶も二なく今めかし。ゆゑ、ありてもてないたまへるあたりぞかしと、〔薫は〕心がひかれたので、心とまりぬれば、今宵はすこしうちとけて、〔女房に〕はかなしごとなども言ふ。

口ずさみながら近づいてゆく気配が　梅の香よりもはっきり　ばっと　女房　上手に　歌に合せて弾く　大したものだ　この上なくはなやかだ　高貴なご趣味で暮していらっしゃるお邸なのだなと　気を許して　軽い戯れごとなども

内より和琴さし出でたり。かたみにゆづりて手触れぬに、侍従の君して、尚侍の殿、〔薫も少将も〕「故致仕の大臣の御爪音になむ通ひたまへる、と聞きわたるを、まめやかにゆかしくなむ。今宵は、なほうぐひすにも誘はれたまへ」と、のたまひ出だしたれば、あまえて爪くふべ

互いに　玉鬘　よく似ていらっしゃる　とお噂に聞いていますが　心からお聴きしとうございます　はにかんで

一三 絶えずお側にいて甘えたわけではない親だが、もうこの世にいらっしゃらなくなってしまったのだと思うと。以下、薫の和琴を聞いて、亡き父を偲ぶ玉鬘の心中。

一四 大体この君（薫）は、不思議に亡き大納言のご様子にとてもよく似ていて、琴の音などもただもうそっくりに思えることでした。「故大納言」は、柏木のこと。彼も和琴の上手であったこと、若菜上五〇～五一頁玉鬘主催の源氏四十の賀の段参照。四巻篝火一一八～九頁にも、玉鬘が柏木の和琴を聞くところがある。

一五 お年を取られたための涙もろさなのでしょうか。草子地。

一六 催馬楽、呂「この殿は」の文句。「この殿は　むべも　むべも富みけり　さき草の　あはれ　さき草の　は　れ　さき草の　三つば四つばの中に　殿づくりせりや　殿づくりせりや」。祝儀の歌らしい。男踏歌に歌う。

一七 亡き髭黒の大臣にお似になっていらっしゃるせいか、こちらの方は下手で。髭黒の実直であったこと、四巻胡蝶四二頁、藤袴一九八頁に見える。

一八 祝い言でも称えてはどうか。男踏歌にちなむ冗談（四巻初音二七頁注一二参照）。

一九 催馬楽、呂「竹河」。「竹河の　橋の詰なるや　橋の詰なるや　花園に　はれ　花園に　我をば放てや　少女伴へて」。正月十四日の男踏歌に歌う。その直後なので歌ったのであろう。（初音二六頁参照）

薫、蔵人の少将ら酒宴

きことにもあらぬを、と思ひて、（別に張り切ったふうでもなく）をさをさ心にも入らず（一通り搔き鳴らされた風情は）搔きわたしたまへるけしき、いと響き多く聞こゆ。一三 常に見たてまつりむつびざりし親なれど、世におはせずなりにきと思ふに、いと心細きに、（大層情感のこもった音に聞える）はかなきことのついでにも思ひ出でたてまつるに、（とても悲しく思われるした折のはかない楽の音につけてもお思い出し申し上げると）いとなむあはれなる。「おほかたこの君（玉鬘）は、一四 あやしう故大納言の御ありさまに、いとようおぼえ、琴の音など、ただそれとこそおぼえつれ」とて泣きたまふも、一五 古めいたまふしるしの涙もろさにや。

（蔵人の少将）少将も、（大層よい声で）声いとおもしろうて、一六 さき草歌ふ。（分別くさい料簡を持った）さかしら心つきて、（年配の人もここには同席していないので）うち過ぐしたる人もまじらねば、（いつしかお互いに気分もはずんで）おのづからかたみにもよほされて（演奏なさるのに）遊びたまふに、（藤侍従）主人の侍従は、一七 故大臣に似たてまつりたまへるにや、かやうのかたは後れて、（お酒ばかり飲んでいるので）盃をのみすすむれば、「寿詞（ことぶき）をだにせむや」と、（玉鬘方）はづかしめられて、（少将たちに）なじられて竹河（たけがは）を同じ声に出だして、（皆が歌うのに合せて）まだ若けれど、（未熟だが）をかしう歌ふ。簾のうちより土器（かはらけ）さし出づ。「酔（ゑひ）のすすみては、忍ぶることもつつまれず、ひがことするわざとこそ聞きはべれ。いか（隠しているこの内も包みきれず）（つまらぬことを口にするものだと聞いております）（私めを）

どうなさるおつもりですか
にもてないたまふぞ」と、すぐには盃に手を出さない とみにうけひかず。小袿重なりたる細長の、人香なつかしう染みたるを、取りあへたるままにかづけたまふ。

（薫）二
「何ぞもぞ」などさうどきて、（薫）侍従は、主人の君にうちかづけて去ぬ。引きとどめてかづくれど、（薫）三「水駅にて夜ふけにけり」とて逃げにけり。

蔵人の少将　薫
少将は、この源侍従の君のかうほのめき寄るめれば、四皆人これにこそ心寄せたまふらめ、わが身は、いとど屈じいたく思ひ弱りて、あぢきなうぞ恨むる。

（蔵人少将）五
人はみな花に心を移すらむ
　ひとりぞまどふ春の夜の闇

溜息をついて　簾中の女房の返歌
うち嘆きて立てば、内の人の返し、

六
をりからやあはれも知らむ梅の花
　ただ香ばかりに移りしもせじ

（薫）
朝に、四位の侍従のもとより、主人の侍従のもとに、「昨夜は、

一　小袿の重なった細長の、人の移り香がいかにも慕わしく染みこんだのを、有り合せたままに、ご褒美にお与えになる。「小袿」は、婦人の略礼装（一巻図録一二参照）。「細長」は、貴婦人の着る表着。袿がなく身頃の裾先が分れている。男踏歌には、綿をかずけるのがしきたり。「かづく」は、肩に掛けて与えること。

二　これはどういうおつもりでしょう。『奥入』に引く多久行の説に「すべてたうかには、わがいへ、このとの、ばんすらく、なにぞもぞ、このさいばら四をうたひ候」とある。このあたり、男踏歌仕立ての洒落。ただし「なにぞもぞ」については不明。

三　水駅で夜が更けてしまいました。「水駅」は、男踏歌で廻ってくる一行を、酒、湯漬などで簡単にもてなすこと（初音二六頁注二参照）。ちょっと立ち寄ったつもりが、つい夜更かししました、の意。

四　こちらのお邸の方々は、みなこの人（薫）に好意を寄せていられよう。

五　人は皆、花に心をひかれているのだろう、私一人が春の夜の闇に迷っていることだ、心は悲しみに昏れている。「花」は、梅の花。薫を喩える。「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」（『古今集』巻一春上、躬恒）による措辞。

六　時と場合によって心を寄せもするのです、梅の花の香だけにこうも心をひかれるわけではありません。「香ばかり」は「かばかり」を掛ける。

玉鬘、薫を賞める

七（玉鬘や姫君たちも）ご覧下さいというつもりか、仮名を多くまぜて書いて、その手紙の端に。男同士の文は、普通は漢文である。

八 竹河を歌いましたあの文句の一端に、私の深い心の内はお分り下さいましたでしょうか。姫君を慕う気持を汲んでほしい、の意。「竹河のはし」に「端」と「橋」を掛ける。「竹河の橋の詰なるや……」による。「ひと節」の「節」は「竹河」の「竹」の縁語。「深き」「底」は「竹河」の「河」の縁語。

九（藤侍従は）薫の文を寝殿に持参して。

一〇 どういう人が、この年齢でこうまで何もかも立派なのでしょう。いかなる前世の因縁か、という気持。

一一 昨夜は、水駅などと言って、早くお帰りになったのを、こちらではいかがなものかと存じ上げていたようです。以下、藤侍従の返書。ずいぶんともてなしていたつもりなのに、水駅（簡単な饗応）だなどと言われて心外、と冗談にいう。

一二 竹河の水駅―私方で夜を更かすまいと急いでお帰りになりましたにつけても、一体どんなことを心に止めおけばよろしいのでしょうか。「夜」は、竹の節と節の間を意味する「よ」を掛ける。

一三 まことに、この竹河の「節」を詠み交わした贈答をきっかけにして。「節」に一件の意を掛ける。

一四 お部屋。対の屋に設けられているのであろう。

一五 蔵人の少将の危惧したとおり。前頁に「皆人これにこそ心寄せたまふらめ」とあったことを受ける。

大層酔い乱れて失礼いたしましたが　皆様何とご覧あそばしたでしょうか
いとみだりがはしかりしを、人々いかに見たまひけむ」と、見たまへとおぼしう、仮名がちに書きて、端に、

（薫）竹河のはしうちいでしひと節に
深き心の底は知りきや

と書きたり。寝殿に持て参りて、これかれ見たまふ。（玉鬘）筆跡　玉鬘や姫君が

大層感じがいいこと
いとをかしうもあるかな。一〇いかなる人、今よりかくととのひたらむ。

源氏　先立たれ申し
幼くて院にも後れたてまつり、母宮のしどけなうおほし立てたまへれど、なほ人にはまさるべきにこそはあめれ」とて、尚侍の君は、

やはり人よりまさるさだめをお持ちの方なのでしょう　玉鬘
ご自分の子息たちの　字など下手なことを　女二の宮　さほどしまりもなくお育て申されたけれど
この君たちの、手などあしきことをはづかしめたまふ。返りこと、

なるほど下手な字で　ご返事は
げにいと若く、「昨夜は、水駅をなむ、とがめきこゆめりし。

竹河に夜をふかさじといそぎしも

いかなる節を思ひおかまし」

（薫は）藤侍従　一四　（意中を）ほのめかして
げにこの節をはじめにて、この君の御曹司におはして、けしきばみ

は近づく　一五　（薫に）　藤侍従
寄る。少将のおしはかりしもしるく、皆人心寄せたり。侍従の君も、

一 咲く桜があるかと思えば、空も曇るばかり散り乱れ、あたり一帯花盛りの頃。『釈』は、「桜咲く桜の山の桜花咲く桜あれば散る桜あり」（出典未詳）をあげる。「散りかひくもり」は、「桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふがに」（『古今集』巻七賀、在原業平朝臣）の言葉を用いている。

三月、姫君たち、碁を打つ

二（訪れる人とてなく）静かにお暮しのお邸は。未亡人の家庭には、気の張る来訪者もないのである。

三 姫君たちが端近に出ていても、不注意だと咎められることもなさそうだ。人目につく心配はないからである。

四 その当時は、十八、九のお年頃でいらしただろうか。玉鬘の二人の姫たちのこと。

五 なるほど普通の臣下のご身分のままでお世話申すには、ふさわしくないとお見えである。父髭黒が生前宮仕えを志し（一九九頁）、玉鬘にもその気持があること（二〇二頁）を踏まえて、「げに」という。

六 大君の服装。桜襲（表白、裏赤、または蘇芳）の細長に、山吹襲（表薄朽葉、裏黄）の袿などの。

七 もうお一方。中の君のこと。

八 薄い色目の紅梅襲（表紅、裏紫）。細長か。

九 以下の光景、図録四参照。

一〇 髪の生えぎわ。

若者らしい気持から　近い縁者として　親しくしたいと思うのであった

若きここちに、近きゆかりにて、〔薫と〕明け暮れむつびまほしう思ひけり。

三月

弥生になりて、一咲く桜あれば散りかひくもり、おほかたの盛りなるころ、二のどやかにおはする所は、さしたる用事もなく、三端近なる罪もあるまじかめり。四そのころ、十八九のほどやおはしけむ、御容貌

大君　大層際やかな目鼻立ちで品がお顔立ちも人柄も　それぞれによくていらっしゃる

も心ばへも、とりどりにぞをかしき。姫君は、五いとあざやかに気高う、今めかしきさましたまひて、

明るく堂々とした感じでいらっしゃって　季節に似合った色どりが

げにただ人にて見たてまつらば、似げなうぞ見えたまふ。六桜の細長、山吹などの、をりにあひたる色あひの、なつかしきほどに重なりたる裾まで、七愛敬のこぼれおちたるやうに見ゆる、八御もてなしなども、らららうじく、心はづかしき気さへ添ひたまへり。九今一所は、薄紅梅に、御髪、色にて、柳の糸のやうにたをたをと見ゆ。一〇いとそびやかになまめかしう、澄みたるさまして、重りかに心深きけはひはまさりたまへれど、にほひやかなるけはひは、こよなしとぞ人思へる。一一碁打ちたまふとて、さし向ひたまへる髪ざし、御髪のかかりたるさまども、いと見所あり。

優しくやわらかな感じに重なり合った　お身のこなしなども　利発らしくて　愛らしさがこぼれ落ちるように思えるのに　気圧されるような　感じさえおありになる　艶々として　枝垂柳の緑の枝のようにたおやかに見える　〔中君は〕ぐっと上背があって優雅で　しっとりとした物腰で　落着いて考え深げな感じはすぐれていらっしゃるけれど　はなばなとした美しさでは〔姫君に〕遠く及ばないと女房たちは思っている　〔お二人が〕

一 藤侍従。姫君たちの弟とおぼしい。
二 碁、双六などの勝負を見届けること。立会い。
三 藤侍従の兄。左近の中将と右中弁（二〇七頁参照）。
一四 「愁ふ」は、愚痴をこぼすこと。
一五 弁官の私はそれ以上に、家でのご奉公はおろそかになってしまうのにまかせて、そうまでお見捨てになっていいものでしょうか。「弁官」は、太政官の実務を取り仕切り、毎日出仕する。ここは、いずれも、侍従や姫君に冗談を言う体。
一六 恥ずかしそうにしていらっしゃるご様子は。「おはさうず」は、「おはしあふ」（「おはす」の複数形）の約音「おはさふ」にサ変の「す」のついた形の音便形。主語が複数の時使う。
一七 何とかして、昔父君がお心積りしていらした通りにしたいものだと。宮仕えに上がらせたいものだと。

兄弟たちとの睦み

侍従の君、見証したまふとて、近うさぶらひたまふに、兄君たちさしのぞきたまひて、「侍従のおぼえこよなうなりにけり。御碁の見証ゆるされにけるをや」とて、おとなおとなしきさましてついゐたまへば、御前なる人々、とかうゐなほる。中将、「宮仕へのいそがしうなりはべるほどに、人に劣りにたるは、いと本意なきわざかな」と愁へたまへば、「弁官はまいて、私の宮仕へおこたりぬべきままに、さのみやはおぼし捨てむ」など申したまふ。碁打ちさしてはぢらひておはさうずる、いとをかしげなり。「内裏わたりなどまかりありきても、故殿おはしまさましかば、と思ひたまへらるることと多くこそ」など、涙ぐみて見たてまつりたまふ。二十七八のほどにものしたまへば、いとよくととのひて、この御ありさまどもを、いかでいにしへおぼしおきてしに違へずもがな、と思ひゐたまへり。御前の花の木どものなかにも、にほひまさりてをかしき桜を折らせて、「ほかのには似ずこそ」などもてあそびたまふを、幼くおはし

（一二）見証（けんぞ）：立会いを許されたとはね
（一三）兄君（あにぎみ）：信望は大したものになったね
（一四）中将（ちうしやう）：お側近くに控えていらっしゃる所へ
（一五）右中弁（うちうべん）：いっぱしの殿方といったふうに臆まずいていらっしゃるので
（一六）女房たち：めいめい居ずまいを正す
（一七）姫君たちは：朝廷のお勤めが忙しくなりましたために
（一八）姫君たちを：侍従に出し抜かれたとは残念なことです
（一九）御所の内などあちこちいたしましても：亡き父上がご存生であったら
（二〇）中将は：と存ぜられますことがたくさんありまして
（二一）この姫君たちお二人を：大層恰幅もよくて
（二二）童などに：色合いのすぐれて美しい
（二三）ご賞翫になるのを：姫君たち
（二四）ほかのとは違っていますこと：お庭先のたくさんの花の木の中でも
（二五）中将：お二人がお小

一 中の君。

二 （私は）そうひどくだだをこねたりいたしませんが、内心おもしろくなく思われたことです。父母が姫君たちにかまけて自分を顧みてくれない、と思った幼時の回想。

三 大勢の人に先立たれてしまいました、この身の嘆きを申せば、きりがございません。話の内容よりして、母玉鬘に語る趣。

四 （中将は）他家の婿になって、今ではゆっくりともこちらにお出かけにならないが。婿入婚の習いで、妻の家に住む。

玉鬘母子の語らい

五 昔のことが恋しく思い出されなさるので。在位中、尚侍（ないしのかみ）として出仕した折のこと（四巻真木柱二三六～七頁参照）。

（さかった時）ましし時、この花はわがぞわがぞとあらそひたまひしを、故殿（こどの）は、（私のよ私のよと言って取り合いをなさったのを）姫君（大君）の御花ぞと定めたまふ、上（うへ）は、（玉鬘）若君（一）の御木と定めたまひしを、いとさは泣きののしらねど、（二）やすからず思ひたまへられしはや」と（中将）て、「この桜の老木（おいき）になりけるにつけても、過ぎにける齢（よはひ）を思ひたまへ出づれば、（年の数を思い出しますと）あまたの人に後（おく）れはべりにける、身の愁（うれ）へも止（と）めがたうこそ」など、（三）泣きみ笑ひみ聞こえたまひて、（泣いたり笑ったりしながらお話し申されて）例よりはのどやかにおはす。（四）人の婿（むこ）になりて、心静かにも今は見えたまはぬを、（いつもよりはのんびりとしていらっしゃる）花に心とどめてもものしたまふ。（ゆっくりしていらっしゃる）

尚侍（かむ）の君（玉鬘）、かくおとなしき人の親になりたまふ御年のほど思ふよりは、いと若うきよげに、（こんな一人前の方々の親でいらっしゃるお年の程と思うわりには）なほ盛りの御容貌（かたち）と見えたまへり。（お美しくて）冷泉（れいぜい）院の帝（みかど）は、（いまだに女盛りの）多くは、（主に）この御ありさまのなほゆかしう、（玉鬘）昔恋しうおぼし出でられければ、（五）何につけてかはとおぼしめぐらして、（今もお心にかかって）姫君の御ことを、（何を口実にしてもう一度会えようかと思案あそばして）あながちに聞こえたまふにぞありける。（ただもういちずに申し入れなさっているのであった）院へ参りたまはむことは、（大君院参のことを）この君たちぞ、「なほものの栄（はえ）なきことこそすべけれ。（冷泉院に参られることは中将や右中弁）（何とも張合いのない感じがしましょう）

六 何ごとも、時の勢いに従ったやり方を、世間の人もよしとしましょう。ここでは、帝、東宮などへの入内をいう。上皇では、皇子誕生があっても、立坊の可能性はないからである。

七 琴や笛の調子にしても、四季の景物にしても、時期にかなってこそ、人の耳にもとまるものです。楽器の調子は、壱越調、双調など呂旋が春の調べ、黄鐘調が夏、平調は秋、盤渉調は冬（以上いずれも律旋）とされた。「花鳥の……」は、「花鳥の色をも音をもいたづらにもの憂かる身は過ぐすのみなり」（『後撰集』巻四夏、藤原雅正）の言葉による。雅正は紫式部の祖父。

八 東宮にさし上げてはどうでしょうか。

九 さあそれが、最初から大層なお方が、傍らに並ぶ人がないような勢いでいらっしゃるようなのでね。夕霧の大姫君のこと（匂兵部卿一六二頁、紅梅一八三頁参照）。

一〇 殿（髭黒）がご存生であったなら、（姫君たちの）将来のそれぞれのご運は分らないにしても。

蔵人の少将の垣間見

一一 三番勝負で、一つ勝ち越しなさった方に、桜をさし上げましょう。

一二 端近い所で。廂の間の簀子寄りの座。前にも「……端近なる罪もあるまじかめり」（二一四頁）とあった。

六 よろづのこと、時につけたるをこそ、世人もゆるすめれ。〔冷泉院は〕げにいと見たてまつらまほしき御ありさまは、この世にたぐひなくおはしますめれど、盛りならぬここちぞするや。琴笛の調べ、花鳥の色をも音をも、時に従ひてこそ、人の耳もとまるものなれ。春宮はいかが」など申したまへば、（玉鬘）「いさや、はじめよりやむごとなき人の、かたはらもなきやうにてのみものしたまふめればこそ。なかなかに（なまなかな分際で宮仕えのお仲間入りは気苦労が多く人の物笑いになることもあろうかと）てまじらはむは、胸いたく人笑へなることもやあらむと、つつましければ。一〇殿おはせましかば、行く末の御宿世は知らず、ただ今（今現在は宮仕えのしがいがあるようにお世話して下さるでしょうに）は、かひあるさまにもてなしたまひてましを」などのたまひ出でて、（気が重くて胸の内を漏らされてどなたもしんみりなさる）皆ものあはれなり。

中将など立ちたまひてのち、君たち（姫君たち）は、打ちさしたまへる碁打ちたまふ。昔よりあらそひたまふ桜を賭物にて、「三番に数一つ勝ち（幼い時から取り合いをしていらした）たまはむかたに、花を寄せてむ」とたはぶれかはし聞こえたまふ。（お二人で冗談を言い合っていらっしゃる）暗うなれば、一二端近うて打ち果てたまふ。御簾巻き上げて、人々皆い（終りまでお打ちになる）（〔お二人の〕女房競い）

一 お部屋。西の対にあるのであろう。
二 侍従は、兄君（中将や右中弁）とご一緒にお出かけになったので。前に「中将など立ちたまひてのち」とあった。
三 大体がひっそりしているのに。女房たちの姿も見えないのである。
四 前に「西の渡殿」（二一〇頁）とあったものか。姫君たちは、寝殿の西面にいる。「戸」は、源氏絵巻によれば、中庭に面している（図録四参照）。
五 桜色の着物の色目も、あのお方とはっきり分った。大君の衣裳は桜の細長（二一四頁参照）。
六 本当に花の散り果てたあとの形見にも見たいと思うほど、はなやかに美しくお見えなのを。「桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむのちの形見に」（『古今集』巻一春上、紀有朋）
七 よその人のものになりになっては、いよいよつらい思いが増す気がする。「いとど」は「思ひまさらる」にかかる。姿を見たために、一層募る思い。
八 右方。中の君。勝負事は、目上の者が左方。
九 舞の始まる前や、競馬、相撲の勝ち負けを告げる時に奏する。笛、太鼓を用いる。高麗楽は、右の楽。唐楽（左の楽）に対する（四巻螢七〇頁注六参照）。ここは、たわむれて、大げさに言ったもの。
一〇 右方（中の君）にお味方して、西のお部屋に寄っております木を。西は、南面した場合、右になる。
一一 長年のお取り合いが、そんなわけですから、あっ

合い勝ちをお祈りする

どみ念じきこゆ。をりしも例の少将、侍従の君の御曹司に来たりけるを、うち連れて出でたまひにければ、おほかた人少ななるに、廊の戸のあきたるに、やをら寄りてのぞきけり。かううれしきをりを見つけたるは、仏などのあらはれたまへらむに参りあひたらむここちするも、はかなき心になむ。夕暮の霞のまぎれは、さやかならねど、つくづくと見れば、桜色のあやめもそれと見分きつ。げに散りなむのちの形見にも見まほしく、にほひ多く見えたまふを、いとど異ざまになりたまひなむこと、わびしく思ひまさらる。若き人々のうちとけたる姿ども、夕ばえをかしう見ゆ。右勝たせたまひぬ。「高麗の乱声おそしや」など、はやりかに言ふもあり。「右に心を寄せたてまつりて、西の御前に寄りてはべる木を、左になして、年ごろの御あらそひの、かかれば、ありつるぞかし」と、右方はここちよげにはげましきこゆ。何ごとと知らねど、をかしと聞きて、さしいらへもせまほしけれど、うちとけたまへるをり、ここちなくやは、

蔵人の少将　藤侍従
機会
そっと立ち寄って覗き見をした
仏などが姿を現しなさったような所へ参り合せたほどありがたい思いがする
あわれな恋心というものだ
霞に紛れて
はっきりしないが
よくよく見ると
女房たち
夕べの薄明りに美しく見える
くつろいだ姿が
はしゃいで言う女房もいる
（右方の女房）
左の物にしたりして
得意そう
口出し
心ない振舞はよそう時に
くつろいでいられる時に
［誰もいないと思って］
［少将は］
に応援申し上げる
もしたいところだが

たのでございますよ。「かかれば」は挿入句。「左になして」を受ける。

一二（少将は）もう一度こんなよい折はないものかと。「まぎれ」は、人目に立たぬこと。

姫君たち、花を惜しんで、歌を詠み交わす

と思ひて、出でて去ぬ。[一二]またかかるまぎれもやと、陰に添ひてぞう（物陰に添ってこっそり）かがひありきける。（様子を窺いまわるのだった）

君達（きむだち）は、花のあらそひをしつつ明かし暮らしたまふに、風荒らかに吹きたる夕つかた、乱れ落つるがいとくちをしうあたらしければ、（〔その後も〕）（日を送っていらっしゃるうちに）（〔桜の花の〕）（残念で惜しくてならないので）

左方（ひだり）の負け方（がた）の姫君（大君）、

桜ゆゑ風に心のさわぐかな
　思ひぐまなき花と見る見る

御方（かた）の宰相（さいしやう）の君、[一四]

咲くと見てかつは散りぬる花なれば
　負くるを深き恨みともせず[一五]

と聞こえ助くれば、右の姫君（中の君）、（と加勢申し上げると）

風に散ることは世の常枝ながら
　うつろふ花をただにしも見じ[一六]

この御方の大輔（たいふ）の君、[一七]

一三 この桜のせいで、風が吹くたびに気がもめます、思いやりのない花だとは知りながらも。「思ひぐまなき」は、惜しむ気持も知らずに散る花を恨む気持。右方に加担したことも暗に含む。

一四 大君方の女房。前に「折りて見ば……」と、薫に詠みかけた人か。（二〇八頁注四参照）

一五 咲くと思うまもなく散ってしまう花ですから、負けて、あちらの物になりましたのを、さほど恨みにも思いません。

一六 風に花が散るのは、これは世の常のことですが、枝ごと私のものになってしまった桜をば、平気でご覧になれないでしょう。「うつろふ」に、心変りする意と花の散る意を掛ける。

一七 中の君づきの女房。

一　こちらにお味方して、池の汀に落ちる花よ、水の泡となってもこちら側に流れ寄っておくれ。「汀」に「右」を詠み込む。「枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ」（『古今集』巻二春下、東宮の雅院にて、桜の花の御溝水に散りて流れけるを見てよめる　菅野高世）を踏まえる。

二　「わが方に寄れ」と歌に詠んだのを受けて、実際に花びらを寄せ集めて来る。

三　あたり一面、空吹く風に散ったのですが、私たちの物だと思って、花びらを掻き集めて賞翫します。

四　左方（負け方）すなわち大君づきの童女。馴君。

五　美しい桜の花をあちこちに散らすまいとなさっても、空を覆うばかりの風を防ぐ袖がありましょうか。人の力では、どうしようもありませんわね。「大空に覆ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」（『後撰集』巻二春中、題しらず、読人しらず。『寛平御時后宮歌合』）

六　お心が狭いようですね。「おほふばかりの袖」と照応する措辞。

大君、冷泉院に参ること決定

七　ご催促のお手紙が、毎日のようにある。

八　冷泉院の女御。（二〇六頁注四参照）

九　お上（冷泉院）は、私の方で何かいらぬことを申し上げて、邪魔をしているらしいと。「聞こゆ」は、玉鬘への敬語。

心ありて池のみぎはに落つる花
　あわとなりてもわが方に寄れ

右方
勝ち方の童女おりて、花の下にありきて、散りたるをいと多く拾ひて、持て参れり。

（童女）
大空の風に散れども桜花
　おのがものとぞかきつめて見る

左のなれき、

「桜花にほひあまたに散らさじと
　おほふばかりの袖はありやは

心せばげにこそ見ゆめれ」など言ひおとす。

かくいふに、月日はかなく過ぐすも、行く末のうしろめたきを、尚侍の殿はよろづにおぼす。院よりは、御消息日々にあり。女御、

「うとうとしうおぼし隔つるにや。上は、ここに聞こえうとむるなめりと、いと憎げにおぼしのたまへば、たはぶれにも苦しうなむ。

こうしているうちに　月日をいたずらに送るのも　姫君たちの将来が気がかりなことを　冷泉院　よそよそしく他人行儀にお考えなのでしょうか　あちこちして　庭におりて　憎らしそうにお思いで仰せになるので　ご冗談としてもつろうございます

一〇 そうなる前世からの定めがおありだったのだろう。（女御が）本当にこうまで、あいにくなことに、熱心にお勧め下さるのももったいない。「あやにくに」は、本来反対する立場にある女御が、逆に熱心に勧めて下さるのを恐れ多く思う気持。ここで大君を冷泉院の後宮に納れる決心をする。

一一 お輿入れのお道具類。

蔵人の少将の焦燥　雲居の雁、玉鬘の文通

一二 まことにお恥ずかしいことで、少々お願い申し上げますのも、本当に愚かな親心の迷いでございます。以下、雲居の雁の文面。「闇のまどひ」は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、兼輔朝臣）による。

一三 ご同情下さる点もございましたら。人の子を思う親心は誰も同じ、という。

一四 やはり安心させてやって下さいませ。「なほ」は、少将では婿として不足だろうが、やはり、の意。

一五 どうしたらよいことなのか（私の力では）決心のつけようもございませんのに。以下、玉鬘の返事。

（本当に心から）（ご決心下さい）（近いうちに）（同じことなら）
同じくは、このころのほどにおぼし立ちね」など、いとまめやかに聞こえたまふ。一〇さるべきにこそはおはすらめ、いとかうあやにくにのたまふもかたじけなし、などおぼしたり。一一（玉鬘は）御調度（ごちょうど）などは、そこら（前からた）し置かせたまへれば、人々の装束（さうぞく）、何くれのはかなきことをぞいそぎたまふ。（女房）（こまごましたことをご用意なさる）（くさん作らせておかれたので）

これを聞くに、蔵人（くらうど）の少将は、（雲居の雁）（問え死ぬほど思いつめて）死ぬばかり思ひて、母北の方をせめたてまつれば、（泣き言にほとほとお困りになって）聞きわづらひたまひて、（き申すので）

一二 いとかたはらいたきことにつけて、ほのめかし聞こゆるも、世にかたくなしき闇（やみ）のまどひになむ。一三おぼし知るかたもあらば、おし（ご賢察）はかりて、一四なほなぐさめさせたまへ。（の上）

（玉鬘）困ったことよ（不憫でならぬふうに申し上げなさるのを）（溜息）など、いとほしげに聞こえたまふを、「苦しうもあるかな」と、うち嘆きたまひて、（をおつきになって）

一五 いかなることと思うたまへ定むべきやうもなきを、院（冷泉院）よりわりな（むやみに）くのたまはするに、思うたまへ乱れてなむ。まめやかなる御心な（ご催促がございますので）（思案にくれております）（本心から娘をとお考え下さる）

のでしたら　ここしばらくをご辛抱下さいまして　お心のゆくようお計らい申す有様をご覧下

らば、このほどをおぼししづめて、なぐさめきこえむさまをも見

さってこそ

たまひてなむ、世間の評判もおだやかでございましょう世の聞こえもなだらかならむ。

大君の院参をすませてから

など申したまふも、この御参り過ぐして、中の君をとおぼすなるべ

〔少将に〕

し。一さし合はせては、うたてしたり顔ならむ、まだ位などもあさへ

一向にそうは気持を移せそうにもなく

たるほどを、などおぼすに、二男は、さらにしか思ひ移るべくもあら

またどのような機会

ず、三ほのかに見たてまつりてのちは、四面影に恋しう、いかならむを

にとそのことばかり思われるのに

りにとのみおぼゆるに、五かう頼みかからずなりぬるを、思ひ嘆きた

まふこと限りなし。

〔少将は〕かいのない繰り言も言おうと

かひなきことも言はむとて、例の、侍従の曹司に来たれば、六源侍

藤侍従

従の文をぞ見ゐたまへりける。ひき隠すを、さなめりと見て、奪ひ

〔文を〕〔少将は〕さてはと思って

〔藤侍従は〕意味ありげにとられるのもと思って

取りつ。ことあり顔にや、と思ひて、いたうも隠さず。七そこはかと

なくて、ただ世をうらめしげにかすめたり。

八つれなくて過ぐる月日をかぞへつつ

ものうらめしき暮の春かな

一　大君の院参と中の君の結婚が同時になっては、あまり得意顔で世間の聞えもよくなかろう。（蔵人の少将は）まだ位なども低いのだから（もっと昇進してから結婚を許そう）。「あさへ」は、浅い意。「あさへたる」の形で用いられる。少将は、正五位下相当。

二　結婚の相手として意識した呼称。蔵人の少将。

三　わずかにお姿を拝見してのちは。碁打ちの折の垣間見のこと（二一七～八頁）。

四　面影が目先にちらついて恋しく。

五　こんなふうに頼みの綱が切れてしまったのを。大君の冷泉院御参りが決ったことをいう。

薫の文と少将の落胆

六　薫の手紙。内心は、大君に宛てたもの。前にも「見たまへとおぼしう」（二一三頁）と書かれていた。

七　（薫の文は）これということはなくて、ただ大君のことを恨めしそうにほのめかしてある。

八　私の気持も知らずに過ぎてゆく月日を数えながら、何やら恨めしい春の果てになりました。表は春を惜しむ気持。暗に、大君の院参を恨む心を託す。次のくだりに「またの日は、卯月になりにければ」（二一五頁）とあるので、三月晦の日の詠。

九 あの人（薫）は、こんなふうに悠然として、体裁よく小憎らしいばかりに振舞うようだ。「ねたげ」は、相手を焦らせるような態度。以下、少将の反省。

一〇 いつも懇意にしている中将のおもと。大君の女房。文の取次ぎなどしている趣。「おもと」は、女房の呼び名の下につける敬称。

一一 母玉鬘のもと。薫への返事について相談に行く。

一二 見苦しいほど恨み言をいって嘆くので。中将のおもとの曹司での少将の様子。

一三 このお取次ぎも。中将のおもとのこと。「前申し」は、主人のお前で言葉を取次ぐ意。

一四 姫君たちの御碁のお立会いをした夕方のことも言い出して。「見証」は、一一一五頁注一二参照。ここは、夕暮れの垣間見を、わざと大げさに言ったもの。

一五 （今となれば）「つらきもあはれ」―つれない仕打ちもなつかしい―というのは本当だったね。「つらきもあはれ」は、引歌であろうが未詳。『細流抄』は、「うれしくは忘るることもありなましつらきぞ長き形見なりける」（『古今六帖』四、雑の思、深養父）の意かとする。

一六 気の毒だと思っても、（院参はもう決ったことゆえ）どうしようもないことだ。「あはれとて」は、少将の言葉の「つらきもあはれ」に呼応。以下、中将のおもとの心中。

一七 あのお慰めになろうという玉鬘のご意向を。（一二一～二頁参照）

九 人はかうこそのどやかに、さまよくねたげなめれ、わがいと人笑は〔それに比べて〕自分のいかにれなる心いられを、かたへは目馴れて、あなづりそめられにたる、もみっともない焦り方が一つには馴れっこになって軽く思われることになってしまったのだと思ふも、胸痛ければ、ことにものも言はれで、一〇例かたらふ中将のつらいので〔藤侍従には〕別に何も言う気になれずおもとの曹司のかたに行くも、例のかひあらじかしと、嘆きがちな例のように無駄だろうなと溜息をつきがちである藤侍従り。侍従の君は、「この返りことせむ」とて、上に参りたまふを見この文の返事をしようるに、いと腹立たしうやすからず、若きここちには、ひとへにもの〔少将は〕胸がむかむかして若いだけにいつめるのだったぞおぼえける。

一二 あさましきまで恨み嘆けば、この前申しも、あまりたはぶれにく気の毒だと返答もなかなかはっきりしないく、いとほしと思ひて、いらへもをさをさせず。一四かの御碁の見証せし夕暮のことも言ひ出でて、「さばかりの夢をだにまた見てしがな。（少将）あのような夢かと思う垣間見でもまたしたいものだあはれ、何を頼みにて生きたらむ。かう聞こゆることも、残り少なうおぼゆれば、一五つらきもあはれ、といふことこそまことなりけれ」と、いとまめだちて言ふ。一六あはれとて、言ひやるべきかたなきことなり、一七かのなぐさめたまはむ御さま、つゆばかりうれしと思ふべき

めったに冗談にもできずに
何を頼みにこれから生きていこう
こんなふうにお願いすることも
そう長くはないと思えるから
とても真剣な面持で
ほんの少しでもうれしいと思っているよう

一 なるほどあの夕暮れの姫君たちのお姿が、少将にあらわにお見えになったらしいのに。「顕証」は、人目に立つこと。少将の「見証……」の言葉に掛けて言う。

二 それ（夕暮れの垣間見のこと）を、姫君のお耳に入れましたら、いよいよ何と怪しからぬお方なのかと、お疎み申されましょう。

三 逆にこちらから文句を言うと。「むかへ火」ともいう（四巻真木柱二一五頁注一六参照）。

四 いや、それならそれでもいいよ。「さはれ」は、「さはあれ」の約。

五 あっさり、私をあそこへ呼び入れて下さったらよかったのに。

六 お側で目くばせ申し上げていたら。目くばせで、碁の助言をしていたら、の意。

七 いやもう何ということだ、人数でもない身にとって持ってもどうしようもないものは、人に負けまいとする心なのだった。「数」「負く」は、会話から続いて、碁の縁語。

八 困りましたこと、強い方が勝つに決っています勝負事を、あなたのお心一つでどうなりましょう。「強き」「勝ち負け」も碁の縁語。「強き」に、冷泉院を暗示する。

（いよいよこんなどうな様子も見えないので）けしきもなければ、一げにかの夕暮の顕証なりけむに、いとどかうあ（にもならぬ思いが）やにくなる心は添ひたるならむと、（無理もないと）ことわりに思ひて、「（中将）二聞こしめさせたらば、いとどいかにけしからぬ御心なりけりと、うとみきこえたまはむ。（私も）心苦しと思ひきこえつる心もうせぬ。いとうしろめた（お気の毒だとお思い申していた気持もなくなりました）（ほんとに油断のならぬお方だったのですね）き御心なりけり」と、三向ひ火つくれば、「（少将）四いでや、さはれや。今は（何もこわいものはなくなってしまった）（もう今はやがて死ぬ身だから）限りの身なれば、もの恐ろしくもあらずなりにたり。さても負けた（負けになったのが）まひしこそ、いといとほしかりしか。五おいらかに召し入れてやは。（とてもおいたわしかった）（それにしても碁にお）六目くはせたてまつらましかば、こよなからましものを」など言ひて、（絶対よかったのに）

七いでやなぞ数ならぬ身にかなはぬは
人に負けじの心なりけり

中将、うち笑ひて、

八わりなしや強きによらむ勝ち負けを
心ひとつにいかがまかする

（とそんな返しを詠むのも薄情に思えるのだった）
といらふるさへぞつらかりける。

九 かわいそうだと思って、姫君を私に許して下さい、生きるか死ぬかはあなた次第の私だとお分り下さるならば。「手をゆるす」は、碁で、相手に何目か置き石を許すこと。「生き死に」は碁の縁語。

一〇 翌日は四月になったので。四月一日である。

一一 夕霧の子息たち。蔵人の少将の兄弟。（二〇四頁注九参照）

一二 宮廷に参内すると

四月一日、少将、歌を贈る

て、あわただしくしていらっしゃるのに。四月一日、朝廷で孟夏の旬（夏の初めに行われる朝儀。宴を賜る）などが行われる。

一三 冷泉院がお聞きあそばす手前もあろうし。少将の執心を不快におぼしめすであろう、の意。

一四 今になって後悔するのだが、（玉鬘に）直接会う機会があった時も、口に出してお願いせずじまいだった。正月、年賀の折のこと（二〇四～六頁）。

一五 そんなことがあって、いつものように。

一六 美しい花に見とれてこの春は過しました、その春も逝ってしまった今日からは、深い嘆きに心をまどわすことでしょう。「花を見て」に、姫君を垣間見したことを暗にいう。「嘆き」に「木」を響かせ、「しげき」（繁）と縁語。夏の景物である。月が変れば、いよいよ姫君の御参りが近づくからである。

一七 姫君のお前。母玉鬘が同席している。

一八 姫君へのご求婚者。少将たちのこと。

一九 少将が「あはれとて……」の歌を詠んだこと。

（少将）九 あはれとて手をゆるせかし生き死にを
君にまかするわが身とならば

泣いたり笑ったりして一晩中語らい明かす
泣きみ笑ひみかたらひ明かす。

一〇 またの日は、卯月になりにければ、兄弟の君たちの、一一内裏に参りさまよふに、いたう屈じ入りてながめゐたまへれば、母北の方は、

〔少将は〕しょげて物思いに沈んでいらっしゃるので 雲居の雁

涙ぐみておはす。大臣も、「院の聞こしめすところもあるべし、何

夕霧 一三 何も

真剣に取り上げることもあるまい
にかはおほなおほな聞き入れむ、と思ひて、一四くやしう、対面のついでにもうち出で聞こえずなりにし。

私がどうしても言ってお願い申していたら
みづからあながちに申さましかば、

〔玉鬘も〕いくら何でもたがお断りなされなかったであろう
さりともえ違へたまはざらまし」などのたまふ。一五さて、例の、

（少将）一六 花を見て春は暮らしつ今日よりや
しげき嘆きのしたにまどはむ

お手紙をさし上げなさった
と聞こえたまへり。

一七 御前にて、これかれ上臈だつ人々、この御懸想人の、

上席の女房たち 一八

あれやこれやと
さまざまに

おいたわしい様子をお知らせ申すなかで
いとほしげなるを聞こえ知らするなかに、中将のおもと、「一九生き死

にをと言ひしさまの、言にのみはあらず、心苦しげなりし」など聞こゆれば、尚侍の君も、いとほしと聞きたまふ。大臣、北の方のおぼすところにより、せめて人の御恨み深くはと、取りかへありておぼすこの御参りを、さまたげやうに思ふらむはしも、めざましきこと、限りなきにても、ただ人には、かけてあるまじきものに、故殿のおぼしおきてたりしものを、院に参りたまはむだに、行く末のはえばえしからぬをおぼしたるをりしも、この御文取り入れてあはれがる。御返し、

今日ぞ知る空をながむるけしきにて
花に心をうつしけりとも

「あないとほし。たはぶれにのみも取りなすかな」など言へど、うるさがりて書きかへず。

九日にぞ参りたまふ。右の大殿、御車、御前の人々あまたたてまつりたまへり。北の方も、うらめしと思ひきこえたまへど、年ごろ

口先だけとは見えず　お気の毒な様子でした　玉鬘　臣下の人には　いくら立派な方でも　決して縁づけてはならないと　少将の　〔女房たちは〕　面倒　御前駆の人々を大勢さし上げなさった　雲居の雁

一 右大臣（夕霧）や母北の方（雲居の雁）のお心を思って。以下「行く末のはえばえしからぬ」まで、玉鬘の考え。

二 どうしてもこの方（少将）のお嘆きが深いのならと、代りの方をお考えになっている姫君の御参りを、まるで邪魔をしたいかのように思っているらしいのは、怪しからぬこと。「取りかへありて……」は、中の君を代りにと思っていること（二二二頁参照）。

三 故殿（髭黒）がお決めになっていらしたのに。（一九九頁参照）

四 冷泉院に参られるのでさえ、将来何の栄えもないのにと思っていらっしゃる折も折。皇子誕生があっても、譲位後では張合いのないことである。

五 ご返事。中将のおもとがしたのであろう。

六 今日初めて分りました、空を眺める風情で物思わしげにしていらしたのは、（姫君ではなく）花に心を移していらしたのだということも。

七 まあかわいそうに。すっかり冗談にしてしまうのね。同輩の女房の批評の言葉である。

八 四月九日。『河海抄』は、太上天皇が妃を納れた例として、京極御息所（藤原時平女褒子）が、宇多法皇に参った例をあげる。

九 夕霧。

一〇 今までさほど親しい姉妹付合いもしていなかったのに、少将のご縁談の

四月九日、大君冷泉院に参る

ことで、しきりに親しくお手紙をさし上げなさっていたのを。（二〇二、二二一頁参照）

一 禄（労をねぎらって与える褒美の品）。肩に被けるのでこういう。女の装束が普通。「よき女の装束ども」は、「かづけものども」を説明したもの。

二 どうしましたのか魂の抜けたような人（少将）の具合に心を痛めておりますもので。以下、雲居の雁の消息の文面。禄の品々に添えられたもの。

三 ご用をお言いつけ下さいませんのも、他人行儀なさりようでございます。「おどろかす」は、知らせるの意。

四 物忌がございまして。物忌は、陰陽道などで、凶事を避けるため身を慎んで籠居すること。

五 息子たちを、雑用にでもと伺わせます。

六 ともに夕霧の子息。源少将は、四男（藤典侍腹）であろう。兵衛の佐は、従五位上相当。名門の子弟がなる。六男。

七 按察使の大納言。玉鬘の異母兄弟。実家の当主である。（紅梅一八一頁参照）

八 亡き髭黒大臣の長女。玉鬘の継娘。

さもあらざりしに、この御ことゆゑ、しげう聞こえ通ひたまへるを、改めてふっつり疎遠になるのもおかしいので またかき絶えむもうたてあれば、一かづけものども、よき女の立派な装束ども、あまたたてまつれたまへり。

（雲居雁）二

あやしううつし心もなきやうなる人のありさまを、見たまへあつかふほどに、うけたまはりとどむることもなかりけるを、三おどろかさせたまはぬも、うとうとしくなむ。

とぞありける。穏やかな文面ながらそれとなく恨み言をおっしゃっているのを［玉鬘は］困おいらかなるやうにてほのめかしたまへるを、いとほしと見たまふ。大臣も御文あり。

（夕霧）私自身も参上せねばと存じていましたのに

みづからも参るべきに思うたまへつるに、四つつしむことのはべりてなむ。男ども、五雑役にとて参らす。うとからず召し使はせたまへ。

とて、源少将、一六兵衛の佐などたてまつれたまへり。（玉鬘）「情はおはすかし」と、お礼を申し上げなさるよろこびきこえたまふ。七大納言殿よりも、人々の御車たてまつれたまふ。［大納言の］八北の方は、故大臣の御女、真木柱の姫君なれば、い

一 故髭黒の長男。母は式部卿の宮の女。真木柱の兄。（二〇四頁注八参照）
二 左近の中将と右中弁。玉鬘腹の子息。
三 いつもの取次ぎ役。中将のおもとのこと。

蔵人の少将と大君の贈答

四 いよいよ最後と覚悟をしていた命ですが、それでもやはり悲しいので。以下、少将の手紙の文面。
五 かわいそうに思うと、一言だけでも（姫君が）おっしゃって下さったならば。
六 姫君のいらっしゃる寝殿に、持って上がって、見ると。
七 大君と中の君のお二方。
八 中の戸で隔てられた西と東のお部屋に分れて過すのさえ、とても気ふさぎなこととお思いになって。「中の戸」は、中仕切りの戸。障子（襖）であろう（五巻若菜上七七頁注一三参照）。
九 殿がお心積りなさり、お口にもなさっていたことなどを。髭黒が、姫君の入内を志していたこと。
一〇（蔵人の少将は）父大臣や母北の方が、あのよう

（それがさほ親しくご交際なさるはずのところなのだが）づかたにつけても、むつましう聞こえ通ひたまふべけれど、さしも（どでもない）あらず。藤中納言はしも、（ご自分で出かけてこられて）みづからおはして、中将、弁の君たち、（ご一緒に行事を取りしきられる）もろともにこと行ひたまふ。殿（髭黒）のおはせましかばと、（ご在世であったらと）よろづにつけてあはれなり。（じみともの悲しい）

（少将）蔵人の君、三 例の人にいみじき言葉を尽くして、（大げさな言葉の限りを書き並べて）

四 今は限りと思ひ果つる命の、さすがに悲しきを、五 あはれと思ふ、とばかりだに、一言のたまはせば、それにかけとどめられて、しばしもながらへやせむ。（そのお言葉に引き止められて）（らくは生きているかもしれません）

などあるを、六 持て参りて見れば、七 姫君二所うちかたらひて、いといたう屈じたまへり。夜昼もろともにならひたまひて、八 中の戸ばかり隔てたる西東をだに、いといぶせきものにしたまひて、かたみにわたり通ひおはするを、よそよそにならむことをおぼすなりけり。心ことにしたてひきつくろひたてまつりたまへる御さま、いとをかし。殿のおぼしのたまひしさまなどをおぼし出でて、ものあはれなるを

（ふさいでいられる）（ご一緒のお暮しにすっかりお馴染みで）（お互いに行き来）（今日限り離れ離れになることを悲しんでいらっしゃるのだった）（特なさっているのに）（別念入りに装い立て身づくろいしてさし上げなさった）（本当にお美しい）（〔大君の〕ご様子は）（〔姫君は〕）（何やらもの悲しい気持の時）

に立派にお揃いで、頼りになるご両親なのに。以下、少将の文を読む姫君の心中。

一一「今は限り……」と書いてあるのを。

一二 あわれという、無常のこの世で使われる一言も、一体どういう人に言いかけたらよろしいのやら。少将の文に「あはれと思ふ、とばかりだに、一言のたまはせば」とあるのに促されたもの。

一三 無常の世のこととしてなら、少しは分ります。

一四 こう言っておやり。書き換えて返事せよ、の意。

一五 院に御参りの当日、最後の折であることをお心に止めて返事を下さったのも（胸に迫って）。

一六「恋ひ死なば誰が名は立たじ世の中の常なきものと言ひはなすとも」（『古今集』巻十二恋二、題しらず、深養父）。大君の歌の「常ならぬ世の……」を受けて、私が恋死にしたら、あなたのせいだと人は言いますよ、の意

一七 今日を限りとは思いましても、この世にあれば死も思うにまかせませんから、では、あなたのあわれという一言を聞かずに終ってしまうのでしょうか。

一八 墓の上にでも、あわれとのお言葉をかけて下さるようなお心の内と存じられましたら。「塚の上にも」は、季札の剣の故事。呉の季札は、徐君が彼の剣を欲しているのを知りつつ、君命を帯びて中央へ使する途中なので献じなかった。帰途、徐に至ると、徐君すでに亡く、季札はその墓に剣を掛けて去った（『史記』呉世家。『和漢朗詠集』下、風）。

だったせいか　〔少将の文を〕
りからにや、取りて見たまふ。大臣（一〇）、北の方の、さばかり立ち並びて、たのもしげなる御なかに、どうしてこうわけの分らぬことを　などかうすずろごとを思ひ言ふらむ、不思議なのにつけても　とあやしきにも、限り（一二）とあるを、本当かしらとお思いになって　まことにやとおぼして、そのまま少将　やがてこのお手紙の　の御文の端（はし）に、

（大君）一二「あはれてふ常ならぬ世のひと言も
いかなる人にかくるものぞは

一三 ゆゆしきかたにてなむ、ほのかに思ひ知りたる」と書きたまひて、

（大君）一四「かう言ひやれかし」とのたまふを、〔中将は〕そのままさし上げたのを　やがてたてまつれたるを、〔少将には〕限りなうめづらしきにも、をりをおぼしとむるさへ、いとど涙もとどまらず。

〔少将は〕折り返し　立ちかへり、「誰（た）が名はたたじ」（一六）など、恨みがましく書いて　かことがましくて、

（少将）一七 生ける世の死には心にまかせねば
聞かでややまむ君がひと言

一八 塚の上にもかけたまふべき御心のほどと思ひたまへましかば、ひ

すら死出の道にも急がれましょうものを
たみちにもいそがれはべらましを。
〔大君は〕うかつにも返事をしてしまったこと　書き直さずそのままやったら
などあるに、うたてもいらへをしてけるかな、書きかへでやりつら
しい　と困っておしまいになって　もう何もおっしゃらなくなった
むよ、と苦しげにおぼして、ものものたまはずなりぬ。

大君、冷泉院に参り、時めく

大人、童　雛のない者ばかりをお揃えになった
一　大君のお付きの女房や女の童。
二　院に参られるについての、大体のお支度などは。「儀式」は、格式の意。
三　女一の宮の女御。玉鬘の異母姉妹。もっとも気を遣うところ。玉鬘は姫君に付添って院に参っているのである。
四　（大君は）上皇の御殿に参上なさった。
五　秋好む中宮や女一の宮の女御など。
六　今が年頃の、見ばえのする様子をご覧なさっては。大君は、十八、九歳。
七　冷泉院が、ただの身分の者のように、お気楽にお暮しになっている様子がかえって、本当に申し分なく結構なのであった。入内できなかった不本意も解消した思い。
八　もう全く、昔の光源氏がご成人なさった時に劣らぬご寵愛ぶりである。「人の御おぼえ」で一語。光源氏が、父桐壺帝に寵愛さ

どは、内裏に参りたまはましに変ることなし。まづ女御の御方にわ
入内なさったであろう場合に
たりたまひて、尚侍の君は、御物語など聞こえたまふ。夜ふけてな
玉鬘
む、上にまう上りたまひける。后、女御など、みな年ごろ経てねび
長年お側においでで年た
けていられるのに〔大君は〕大層愛らしいご様子で
たまへるに、いとうつくしげにて、盛りに見所あるさまを見たてま
どうして並々のご寵愛ですもうか
つりたまふは、などてかはおろかならむ。はなやかに時めきたまふ。
ただ人だちて、心やすくもてなしたまへるさまましもぞ、げにあらま
〔院は〕玉鬘　しばらく院の御所においでになるようにと
ほしうめでたかりける。尚侍の君を、しばしさぶらひたまひなむと、
お心にかけてお思いであったのに〔玉鬘は〕　そっと退出しておしまいになったので
御心とめておぼしけるに、いと疾く、やをら出でたまひにければ、
〔院は〕残念で　つらいとお思いになった
くちをしう心憂しとおぼしたり。
〔冷泉院は〕　呼び寄せてお離しにならず
源侍従の君をば、明け暮れ御前に召しまつはしつつ、げに、ただ

冷泉院での薫

れて育ったことは、一巻桐壺三〇～三六頁に見える。

九 冷泉院御所のうちでは、後宮のどなたのところにも隔てなく、あちこち親しくお出入りしていらっしゃる。

一〇 あの女御（大君）のお部屋が近くに眺められる所に立つ五葉の松に。「五葉」は、観賞用の庭木。葉が五本ずつ束生する。

一一 それとあからさまにではないが、恋の思いの叶いがたい嘆きを、言葉のはしばしに匂わせながら語り合う。敬語がないのは、薫に密着した書き方。

一二 手に取ることができるものなら、藤の花の、松よりも濃い紫の色をむなしく眺めていましょうか。私の力の及ぶものなら、姫君を人のものにはしないのに、の含意。

一三 自分としては本意ではない成り行きだと、それとなく言う。冷泉院への憚りから、あからさまには言わないのである。

一四 姉上とは、血の通った姉弟ながら、思うに任せませんでした。「紫の色」は、血縁の意。「かかる」とともに「藤の花」の縁語。

昔の光源氏の生ひ出でたまひしに劣らぬ人の御おぼえなり。院のうちには、いづれの御方にもうとからず、馴れまじらひありきたまふ。

大君
この御方にも、〔薫は〕心寄せあり顔にもてなして、下には、いかに見たま

思いだろうと意識する気持もおありだった
ふらむの心さへ添ひたまへり。夕暮のしめやかなるに、藤侍従と連

立って徘徊するのに
れてありくに、一〇かの御方の御前近く見やらるる五葉に、藤のいとおもしろく咲きかかりたるを、水のほとりの石に、苔を席にてながめ

に眺めていられる
ゐたまへり。一一まほにはあらねど、世の中うらめしげにかすめつつかたらふ。

（薫）一二
手にかくるものにしあらば藤の花
松よりまさる色を見ましや

とて、花を見上げたるけしきなど、〔藤侍従には〕えもいえず切なく気の毒に思われるあやしくあはれに心苦しく思ほゆれば、一三わが心にあらぬ世のありさまにほのめかす。

（藤侍従）一四
紫の色はかよへど藤の花
心にえこそかからざりけれ

一（藤侍従は）純情な方とて、（薫を）気の毒に思っている。

蔵人の少将のその後

二 蔵人の少将を、母北の方（雲居の雁）のお恨みのお言葉があったので、中の君の婿にしてはと玉鬘はお思いになって、それとなくお便り申し上げなさったが。雲居の雁の口添えに、玉鬘が中の君をとほのめかしたことは前にも見えた（二二一～二頁参照）。

三 たまに殿上の間に顔を見せても。少将たちも、冷泉院の殿上を許されているのである。

四 主上では、故大臣の生前のご意向には格別のものがあったのに、こうした遺志に反した院参を、どうしたことかと、不快に思われて。髭黒が、入内を望み、奏上もしていたことは、一九九頁、二〇一頁に見える。

五 大君の兄の左近の中将。

六 主上のご機嫌芳しくありません。以下、中将が帰邸して母玉鬘に訴える言葉。

七 前々からご意見申し上げていましたのに。（二一六～七頁参照）

帝のご不興

一 まめなる君にて、いとほしと思へり。（薫は）さほど理性を失うというほどにはやきもきはしなかったが いと心まどふばかりは思ひられざりしかど、残念だとは思うのだったくちをしうはおぼえけり。

一方あの蔵人の少将はといえば 本気で かの少将の君はしも、まめやかに、いかにせましと、どうしたらよかろうかと 無分別なことも しかねないほど しつべく、しづめがたくなむおぼえける。気持を抑えきれず苦しく思うのであった 求婚していられた人々の中には 聞こえたまひし人々、中の君をと、うつろふもあり。心を移す方もある 二 少将の君をば、母北の方の御恨みにより、さもやと思ほして、ほのめかし聞こえたまひしを、（少将は）絶えておとづれずなりにたり。冷泉院 夕霧の子息たち 院には、かの君たちも、親しくもとよりさぶらひたまへど、以前からお仕えしているが 大君が参上なさってからは この参りたまひてのち、（少将は）めったに参らず をさをさ参らず、三 まれまれ殿上の方にさしのぞきても、情けない思いで あぢきなう、逃げ出すように退出するのだった 逃げてなむまかでける。

四 内裏には、故大臣の心ざしおきたまへるさまことなりしを、かく引き違へたる御宮仕へを、いかなるにか、とおぼして、五 中将を召してなむのたまはせける。苦情を仰せられた（中将）六「御けしきよろしからず。さればこそ、世人の心のうちも、世間の人も内心で 傾きぬべきことなりと、七 かねて申ししことを、お ぼしとるかた異にて、かうおぼし立ちにしかば、ともかくも聞こえ

だからやはり 母上のお考えの筋は また別で もはやあれこれ申し上げに かようにご決心なさったのですから

八 このようなご不快のお言葉がございましたので。
九 さあそれがね、（院参は）今が今、こう急に進めようとも思ってはいなかったのですが。
一〇 冷泉院より、たってのことに、おいたわしいほど熱心に仰せられたので。（二二〇～二二一頁参照）
一一（その点、院は）今では気楽なお立場のようですので、そちらにお預け申して、という気になったのです。
一二 今頃むし返して、右の大臣（夕霧）まで、間違っていたように、何やらおっしゃっているとのことですので、つらくてなりません。夕霧の批判は、物語の中には見えない。
一三 お言葉ながら、その前世の因縁とやらは、しかと目には見えぬものですから。以下、中将の筋道立てた反論。
一四 これは、ご縁がございませんのでなどと、なんで弁解がましく奏上できましょう。
一五 明石の中宮にご遠慮申されるといって。真相は、この人を憚って、入内を避けたと察せられる発言。
一六 冷泉院の女一の宮の女御。
一七 後見とか何とか、前以ってはお互い親しくお思いでも。女御が「同じ心に後見で……」（二〇六頁）と言ってきたこと。
一八 よく考えますと。以下、将来政界に生きてゆかねばならぬ青年として、みすみす好機を逸したと残念がる気持からいう。

私どもの身にとりましても
くうございますが
がたくてはべるに、八かる仰せ言のはべれば、なにがしらが身のためも、あぢきなくなむはべる」と、いとものしと思ひて、尚侍の君を申したまふ。「いさや、ただ今からにはかにしも思ひ立たざりしを、一〇あながちに、いとほしうのたまはせしかば、後見なきまじらひの、内裏わたりは、はしたなげなめるを、今は心やすき御ありさまなめるに、まかせきこえて、と思ひ寄りしなり。誰も誰も、便なからむことは、ありのままにもいさめたまはで、一二今ひき返し、右の大臣も、ひがひがしきやうに、おもむけてのたまふなれば、苦しうなむ。これもさるべきにこそは」と、なだらかにのたまひて、心も騒がいたまはず。「その昔の御宿世は、目に見えぬものなれば、かうおぼしのたまはするを、一四これは契り異なるとも、いかがは奏しなほすべきことならむ。一五中宮を憚りきこえたまふとて、院の女御をば、いかがしたてまつりたまはむとする。一七後見や何やと、かねておぼしかはすとも、さしもえはべらじ。よし、見聞きはべらむ。一八よう思へ

後ろ楯のない宮仕え
お責めになる
（玉鬘）
大層不服に思って
玉鬘
心細いことのようですが
宮中などでは
具合
忠告して下さらないで
の悪そうなことは
おだやかにおっしゃって
気にもな
でもこれも前世からの因縁でしょうよ
（中将）
さらない
［帝が］こ
んなにご執心で仰せになるのを
どのようにお扱い申されるおつもりですか
そうはうまくゆきますまい
よろしい
拝見しておりましょう

一　ほかのお方は宮仕えなさらないでしょうか。帝の場合、多くの妃がいるのが本来の姿だ、という。

二　帝にお仕え申すことは、その点が気兼ねのいらないところを、昔から張合いのあることにしていたものです。后妃が互いに反目せずに帝寵を競うことにこそ、宮仕えの張合いもある、という。

三　女一の宮の女御は、何かちょっとした行き違いでもあって、ご不快にお思い申されることがあったら、（伯母、姪の間柄で）よろしくないことのように、世間の人にも聞えましょう。女御の扱いの方が難儀だという。

四　兄弟二人。中将と右中弁。

大君、懐妊

五　とはいえ、（大君に対しては）院のこの上もないご寵愛が、ただもう月日のたつにつれてまさる。

六　本当にあの蔵人の少将たちが、いろいろと恋文をさし上げてうるさく申し上げたのも、無理もないことだ。以下、草子地。

七　簾中で大君の弾く琴の音。「琴」は、絃楽器の総称。

八　あの「梅が枝」を歌った時、和琴を合せて弾いた中将のおもと。大君づきの女房。里邸から付いて来ているのである。「梅が枝」との合奏は、二一〇頁に見える。

九　正月十四日、宮中で行われる儀式。女踏歌が毎年

ば、内裏は、中宮おはしますとて、異人はまじらひたまはずや。君（明石の中宮）につかうまつることは、それが心やすきこそ、昔より興あることにはしけれ。女御は、いささかなることの違ひ目ありて、よろしからず思ひきこえたまはむに、ひがみたるやうになむ、世の聞き耳もはべらむ」など、二所して申したまへば、尚侍の君、いと苦しとおぼしたり。

五　さるは、限りなき御思ひのみ、月日に添へてまさる。七月よりは（大君は）ご懐妊なさったらみたまひにけり。（つわりで）うちなやみたまへるさま、げに人のさまざまに聞こえわづらはすも、ことわりぞかし、いかでかはかからむ人を、（どうしてこんな美しいお方をいい加減に見聞きしたままで終るはずがあろうか）なのめに見聞き過ぐしてはやまむ、とぞおぼゆる。（冷泉院は）明け暮れ御遊び（音楽の催しをあそばしては）をせさせたまひつつ、（薫）侍従も気近う（お側近く）召し入るれば、御琴の音などは聞きたまふ。かの梅が枝に合はせたりし中将のおもとの和琴も、常に召し出でて弾かせたまへば、聞き合はするにも、（それと聞き合わすにつけても）ただにはおぼえざりけり。（平静ではいられなかっ）

行われるのに対し、隔年、または数年を隔てて行われる。歌頭（六人）、歌掌、舞人、楽人などに選ばれた殿上人や地下の者が、清涼殿東庭の帝の御前で、歌を歌い足拍子を踏んで舞う。終ると禄に綿を賜り、宮中を退下、続いて院、中宮、東宮を廻って同じく踏歌を行い、暁に宮中に帰る。（四巻初音二五頁注一〇参照）

男踏歌

一〇 薫のこと。

一一 踏歌のメンバーは、左右二列を成し、その右側の歌頭（音頭をとる役）。（四巻図録一参照）

一二 四巻図録一参照。

一三 大君。この物語では、御子を産んだ妃をこう呼ぶ。大君も、去年七月懐妊とあったからであろう。

一四 上皇の御殿。

一五 夕霧と致仕の太政大臣（玉鬘の実父、昔の頭の中将）のご一族のほかには。

一六 御息所（大君）が簾中から、見ていらっしゃるだろうと、そちらに思いを馳せて、落着かない。

一七 ただ白いだけの、見映えのしない挿頭の綿花。踏歌の人の冠に挿す綿の造花。

一八 催馬楽、呂「竹河」（二一一頁注一九参照）。これを歌い終ると、舞人たちは正面階段のもとに二人ずつ舞い進んで、綿を被けられ、舞いながら戻る。

一九 去年の正月二十日過ぎのこと。（二一一～二頁参照）

二〇 秋好む中宮の御殿。

その年かへりて、男踏歌せられけり。殿上の若人どものなかに、歌舞音曲にすぐれた者ものの上手多かるころほひなり。〔朝廷では〕そのなかにも、すぐれたるを選らせたまひて、一〇この四位の侍従、一一右の歌頭なり。かの蔵人の少将、楽人の数のうちにありけり。十四日の月のはなやかに曇りなきに、〔帝の〕御前より出でて、冷泉院に参る。女御も、一三この御息所も、一四上に御局して見たまふ。上達部親王たちひき連れて〔踏歌の見物に〕参りたまふ。一五右の大殿、致仕の大殿の族を離れて、きらびやかに美しい貴公子はいないご時世だきらきらしうきよげなる人はなき世なり、と見ゆ。内裏の御前よりも、この院をばいとはづかしう、ことに思ひきこえて、誰もが一層態度装いに気をつけるなかでも皆人用意を加ふるなかにも、蔵人の少将は、一六見たまふらむかし、と思ひやりて、静心なし。一七にほひもなく見苦しき綿花も、かざす人がらに見わかれて、さまも声も、姿も歌声もいとをかしくぞありける。

一八竹河歌ひて、御階のもとに踏みよるほど、一九過ぎにし夜のはかなかりし遊びも思ひ出でられければ、ひがことも〔少将は〕楽の調べも間違いそうになって涙ぐむのだったしつべくて涙ぐみけり。二〇后の宮の御方に参れば、上も冷泉院そなたにわたらせたまひて御覧ず。月

改まって
冷泉院
とても心遣いのいる
格別の所とお思い申して
誰もが一層態度装いに気をつけるなかでも
姿も歌声も
挿す人の人柄によって違って見え
冷泉院

一 盃も、名指しで蔵人の少将一人が、飲みっぷりが悪いと咎められるのは、面目ないことである。「盃」は、踏歌の一行に出される「水駅」などの酒のこと（初音二六頁注二参照）。物思いで、酒盃も進まぬ様子。少将の気持に即して書く。

翌日、薫、冷泉院に召される

二 冷泉院の言葉。

三 男踏歌の折、庭前で三度踏歌する時奏する曲。詩句が一段終るごとに「万春楽」と唱える。（初音二七頁注一八参照）

四 踏歌の見物に参上した、後宮の実家の人々が大勢いて。

五 渡殿にしつらえられた（御息所の）女房の局の戸口。

六 薫の声を聞き知っている女房。玉鬘邸にいた時から取次ぎをしていたのであろう。

七 あれは、月の光に恥じるのではなかったのでしょう。禁中あたりでは、そうも見えませんでした。「桂の影」は、月のこと。月の中に桂の樹があるという中国の伝説による（三巻松風一四〇頁注四参照）。「雲の上」は、宮中のこと、「月」の縁語。簾中の御息所を気にして緊張していたのだと告げる。

は、夜深うなるままに、昼よりもはしたなう澄み上りて、いかに見たまふらむとのみおぼゆれば、踏む空もなうただよひありきて、盃も、さして一人をのみとがめらるるは、面目なくなむ。

昼よりも明るく面映ゆいほどになっていようかとそればかり気になるので

[御息所が]どうご覧

宵を踏む心地でふらふらとあちこち廻って

夜一夜、所々かきありきて、いとなやましう苦しくて臥したるに、源侍従を、院より召したれば、「あな苦し、しばし休むべきに」とむつかりながら参りたまへり。御前のことどもなど問はせたまふ。

歩き廻って

ひどく疲れて

しばらく休みたいのに

冷泉院

薫

[院は]宮中での様子をいろいろご下問になる

ぐずぐず言いながら参上なさった

「歌頭は、うち過ぐしたる人のさきざきするわざを、選ばれたるほど、心にくかりけり」とて、うつくしとおぼしためり。万春楽を御口ずさみにしたまひつつ、御息所の御方にわたらせたまへば、御供に参りたまふ。物見に参りたる里人多くて、例よりははなやかに、けはひ今めかし。渡殿の戸口にしばしゐて、声聞き知りたる人に、ものなどのたまふ。「一夜の月影は、はしたなかりしわざかな。蔵人の少将の、月の光にかかやきたりしけしきも、桂の影にはづるにはあらずやありけむ。雲の上近くては、さしも見えざりき」など語

年のいった者がこれまでは勤めた役目なのに

それに選ばれたとは

大したものだった

かわいくてならぬというご様子である

大君

[薫は]

昨夜の月は

あまり明るくて困ったものでした

常日頃よりは

御所の内が賑やかである

面映ゆく思っていた様子ですが

八「闇はあやなし」と申しますが、月の光に輝くお姿は、あちら（少将）よりもずっとお美しいと、評定申し上げました。「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」（『古今集』巻一春上、躬恒）を引く。薫の身から発する芳香を賞めていう。

九 竹河をお歌いになったあの晩のことを覚えていらっしゃいますか、思い出すほどの出来事はございませんが。「その夜のこと」は、去年正月二十日過ぎ、竹河を歌って遊んだこと。二三五頁に、蔵人の少将も回想している。「夜」に「よ」（竹の節の間）を掛け、「節」とともに「竹河」の「竹」の縁語。

一〇 行く先の希望も空しくなったあのことで、なべて世は憂きものとつくづく分りました。「流れて」は「竹河」の「河」の縁語。「よ」は「世」と「よ」（竹の節の間）の掛詞。

一一 おしゃべりが過ぎるといけません。気を付けなくては。御息所への思慕を吐露してしまいそうだからと、暗にほのめかす。

一二 こちらに。冷泉院が来ておられる御息所の部屋。

一三 初音の巻に見える男踏歌の時のこと（四巻二五〜二六頁参照）。「女方にて……」は、物語には書かれていないが、源氏が六条の院の婦人方を集めて、この機会に管絃の宴を催そうとしていることは、同二七〜八頁に見える。

りたまへば、人々あはれと聞くもあり。（女房の中には気の毒にと聞く者もいる）「闇はあやなきを、月ばえ今すこし心異なり、と定めきこえし」などすかして、（お世辞を言って）内より、（簾中から）

（女房）九 竹河のその夜のことは思ひ出づや

しのぶばかりの節はなけれど

と言ふ。（ふと思いついたままの歌だが）はかなきことなれど、涙ぐまるるも、（なるほど御息所への思いはそう浅いものではなかったのだと）げにいと浅くはおぼえぬことなりけりと、（薫は）身にしみて悟られる）みづから思ひ知らる。

（薫）一〇 流れてのたのめむなしき竹河に

よは憂きものと思ひ知りにき

（何やらうち沈んだ風情を）ものあはれなるけしきを、（女房たちは感心する）人々をかしがる。（とはいえ）さるは、（薫は）おり立ちて（むきになって誰かさんのように泣き言はおっしゃらなかったが）人々（お人柄だけにやはり女房たちの同情をひくので）のやうにもわびたまはざりしかど、（ある）人ざまのさすがに心苦しう見ゆるなり。（薫）一一「うち出で過ぐすこともこそはべれ。あなかしこ」とて立つほどに、（冷泉院）一二「こなたに」と召し出づれば、（きまりの悪い思いがするが）はしたなきここちすれど、参りたまふ。

（冷泉院）一三「故六条の院の踏歌の朝に、女方にて遊びせられける、いとおもし（管絃の催しをされたのが）

一　大層その道にすぐれた女までたくさん集まって。紫の上以下、六条の院の婦人たちをさす。
二　十三絃の琴。
三　六絃の琴。わが国古来の楽器とされる。
四　二一一頁注一六参照。
五　まだ未熟なところがあったのに、（院は）ずいぶんよくお仕込みになっておられる。
六　歌謡の伴奏曲や、楽曲など。「うた　つけ物なり」「曲のもの　曲は楽の曲なり」（『細流抄』）。「歌のもの」「曲のもの」の意であろう。
七　お顔立ちはもちろん、とても美しいであろうと、今なお心がひかれる。琴の音に、見ぬ人を思い描く。
八　このように、御息所に近づく機会は多いが、自然に遠慮がなくなって我を忘れるといったところはおありでなく。以下、薫の態度について述べる。
九　（御息所は）何とおぼしめしたことか、そこまでは存じません。草子地。語り手の言葉をそのまま記す体。
一〇　四月。去年七月より懐妊のこと、二三四頁に見えた。
一一（姫宮のこととて）格別目立って晴れがましくもないことのようだが。
一二　産後の三日、五日、七日、

御息所、女宮を産む

ろかりきと、右の大臣の語られし。何ごとも、かのわたりのさしつぎなるべき人、難くなりにける世なりや。いとものの上手なる女さへ多く集まりて、いかにはかなきことをかしかりけむ」などおぼしやりて、御琴ども調べさせたまひて、箏は御息所、琵琶は侍従に賜ふ。和琴を弾かせたまひて、この殿など遊びたまふ。御息所の御琴の音、まだ片なりなるところありしを、いとよう教へないたてまつりたまひてけり。今めかしう爪音よくて、歌、曲のものなど、上手にいとよく弾きたまふ。何ごとも、心もとなく、後れたることはものしたまはぬ人なめり。容貌はた、いとをかしかべしと、なほ心とまる。かやうなるをり多かれど、おのづから気遠からず、乱れたまふかたなく、なれなれしうなどは怨みかけねど、をりをりにつけて、思ふ心の違へる嘆かしさをかすむるも、いかがおぼしけむ、知らずかし。

卯月に、女宮生まれたまひぬ。ことにけざやかなるものの栄もな

（夕霧）
（あのお方のあとつぎになれるような風雅な人は）
（いなくなってしまった時代だなあ）
（どんなにささやかな催しでもおもしろかったことだろう）
（〔昔を〕）
（調子を整えさせなさって）
（〔院は〕）
（薫）
（合奏なさる）
（はなやかに）
（美しく）
（頼りなく）
（人に劣るようなところはおありにならぬお方のようだ）
（叶わなかった残念さをほのめかすのも）
（望みが）
（馴れ馴れしいふうに怨み言を言ったりはしないが）

九日目の夜、親族や関係者などが赤子の衣類や産婦の食物などを贈り、祝宴を行うこと。
一三 早く院に帰参なさるようにとしきりに仰せがあるので。お産は実家でするからである。
一四 五十日の祝いの頃に。生後五十日目に、五十日の祝いといって、赤児に餅を含ませて祝う。
一五 女御の所生。
一六 女一の宮の女御方の女房たち。
一七 ほんとに、こんなことはあってほしくない世の中だこと。女御がいらっしゃるのに、姪の御息所が参上したのは、やはりよくなかった、という。
一八 ご本人たち（女御と御息所）のお気持は、格別、身分のない者たちのように仲違いなさるのではないが。
一九 左近の中将。御息所の兄。前に、女一の宮の女御方の扱いについて忠告していた（二三三～四頁参照）。
二〇 ただもうこんなことをあれこれ言い言いして、あげくの果てはどうなるのだろう。「世の中をかく言ひ言ひの果て果てはいかにやいかにならむとすらむ」（『拾遺集』巻八雑上、読人しらず。同巻二十哀傷、読人しらず）による。
二一 世間の笑い者になって、体裁の悪い扱いをされるのではないか。
二二 長年仕えていらっしゃる方々が。秋好む中宮や女一の宮の女御。

玉鬘、尚侍を中の君に譲る

冷泉院のご意向もあることなので　夕霧

きやうなれど、院の御けしきに従ひて、右の大殿よりはじめて、御産養したまふ所々多かり。尚侍の君、つと抱きもちてうつくしみたまふに、疾う参りたまふべきよしのみあれば、五十日のほどに参りたまひぬ。女一の宮一所おはしますに、いとめづらしくうつくしうておはすれば、いといみじうおぼしたり。いとどただごとなたにのみおはします。女御方の人々、いとかからでありぬべき世かなと、ただならず言ひ思へり。

抱きかかえてあやしていらっしゃるが　ひたといだき　尚侍の君

[この姫君が] 本当に久しぶりな上にかわいくていらっしゃるので [院は] とても大切にお思いである　前にもましていつも御息所の御方にばかりいらっしゃる　不満そうに

正身の御心どもは、ことに軽々しく背きたまふにはあらねど、さぶらふ人々のなかに、くせぐせしきことも出で来などしつつ、かの中将の君の、さいへど人のこのかみにて、のたまひしことかなひて、尚侍の君も、むげにかく言ひ言ひの果ていかならむ、人笑へに、はしたなうもやもてなされむ、上の御心ばへは浅からねど、年経てさぶらひたまふ御方々、よろしからず思ひ放ちたまはば、苦しくもあるべきかな、と思ほすに、内裏には、まことにものしとおぼしつつ、

意地悪なやりとりも　起ったりしては　お仕えする女房たちの間に　何といっても兄弟中では兄君だけあって　おっしゃったことが的中して　玉鬘　院のご寵愛は浅くはないが　不快にお思いになってお見捨てあそばしたら　困ったことになるだろうな　帝　全くけしからぬ所存だとずっとお思いで

たびたびお腹立ちを漏らされると
たびたび御けしきありと、一人の告げ聞こゆれば、わづらはしくて、
二中姫君を、公ざまにてまじらはせたてまつらむことをおぼして、
尚侍をゆづりたまふ。三朝廷いと難うしたまふことなりければ、〔玉鬘は〕
長年やめようとお心積りしていらしたけれど
ごろかうおぼしおきてしかど、四え辞したまはざりしを、故大臣の御
尚侍お譲りの
心をおぼして、五久しうなりにける昔の例など引き出でて、そのこと
ことはお許しを得られた
かなひたまひぬ。六この君の御宿世にて、〔玉鬘が〕長年願い出ていられた辞職の件は
叶わなかったのだ と思われた
なりけり、と見えたり。

かくて、七心やすく内裏住みもしたまへかし、とおぼすにも、いと
毒に　蔵人の少将　雲居の雁　わざわざ懇願のお便りもあったのに　お気の
ほしう、少将のことを、母北の方のわざとのたまひしものを、八頼め
〔こんな結果になって〕何とお思いであろう　他意のない旨を披瀝して
きこえしやうにほのめかし聞こえしも、いかに思ひたまふらむ、と
右中弁　あれこれお気になさる
おぼしあつかふ。弁の君して、心うつくしきやうに、大臣に聞こえ　夕霧
たまふ。

内裏より、九かかる仰せ言のあれば、院やら宮中やら　さまざまに、一〇あながちなるま
世間の手前もいかが聞えましょうかと案じまして
じらひの好みと、世の聞き耳もいかがと思うたまへてなむ、わづ　もてあ

玉鬘、夕霧に弁明

一 人がお知らせ申すので、（玉鬘は）面倒なことになったと思って。
二 中の君を、一般の女官として宮仕えをおさせ申そうと考えて、ご自分の尚侍の役をお譲りになる。玉鬘の尚侍就任については、四巻行幸一五八頁、同藤袴一八三頁参照。
三 （尚侍は重職なので）朝廷ではそう簡単に（交替を）お許しにならないことだったので。
四 帝は、亡き大臣のご遺志をお汲みあそばして。髭黒は、当帝の外戚（伯父）でもあり、生前、娘を入内させたいと思っていたこと、本巻冒頭に見える。
五 ずいぶん昔の前例などを引合いに出して。なかなか前例もないのを、やっと捜し出して許可したのである。尚侍を母娘譲任の史上の例は現存文献の上に見出せない。
六 中の君に、この際尚侍になられるという前世からの宿縁がおありだったので。
七 （尚侍は公職で、後宮勤めではないので）気楽に宮仕えなさるがよいと、お思いになるにつけても。主語は玉鬘。
八 お心に添うように（中の君のことを）それとなく申し上げたことも。（二二二頁参照）
九 以下、玉鬘の手紙の文面の要約。
一〇 しかじかの仰せ言がありましたので。帝がご不興を漏らされたこと。
一一 むやみに、高望みの宮仕えをしたがると。

一二 帝のご不興のことは、ご不快に思われ、お咎めがあるのも、ごもっともと存じます。以下、夕霧の返事。
一三 表向きのお役でも。尚侍就任のことを含んで言う。
一四 また今回は、明石の中宮のご機嫌を伺ってから参内なさる。前に、大君院参の時は、女一の宮の女御に気を遣った。
一五 どなたも中の君をないがしろにはなさらないだろうに、など、悲しい思いをいろいろなさる。

玉鬘、出家を思い止まって、姫君たちを後見る

一六 あちらこちらとお世話なさっている折から。大君の院参、中の君の入内と引き続いている。

と聞こえたまへば、

内裏の御けしきは、おぼしとがむるも、ことわりになむうけたまはる。公事につけても、宮仕へしたまはぬは、さるまじきわざになむ。はやおぼし立つべきになむ。

と申したまへり。また一四このたびは、中宮の御けしき取りてぞ参りたまふ。大臣おはせましかば、おし消ちたまはざらまし、など、あはれなることどもをなむ。姉君は、容貌など名高う、をかしげなりと、聞こしめしおきたりけるを、引きかへたまへるを、なま心ゆかぬやうなれど、これもいとらうらうじく、心にくくもてなしてさぶらひたまふ。

前の尚侍の君、容貌をかへてむとおぼし立つを、「かたがたにあつかひきこえたまふほどに、行ひも心あわたたしうこそおぼされめ。今すこし、いづかたも心のどかに見たてまつりなしたまひて、もど

ましております
よろしくないことに思われます
いそぎご決心なさるべきことです
一四 一五 髭黒 大君 美人の誉れ高く きれいな方だと いささかご不満のよう 代りの方をお出しになったのを 〔帝は〕お耳になさっていたのに 中の君 大層才気のあるお方で ではあるが 奥ゆかしいお暮しぶりで宮仕えをしていら つしゃる 尼になろうとご決心なさるけれど 〔中将たち〕一六 仏前のお勧めも気ぜわしい思いがなさいましょう 誰にも どちらのお方のお身の上も落着かれるのをお見届け申されてから もっと

難をつけられることなく　ひたすら勤行にお励み下さい　中将や弁の君

かしきところなく、ひたみちに勤めたまへ」と、君たちの申したま

〔出家のことは〕思いとどまられて　〔尚侍のもとに〕時々こっそりお上りになる

へば、おぼしとどこほりて、内裏には、時々忍びて参りたまふをり

時もある　冷泉院　ご用のある時

もあり。院には、わづらはしき御心ばへのなほ絶えねば、さるべき

でも　とんと参上なさらない

をりも、さらに参りたまはず。いにしへを思ひ出でしが、さすがに

世間が皆けしからぬことと思っていたのを

かたじけなうおぼえしかしこまりに、人の皆ゆるさぬことに思へり

も　気づかぬふうで娘の大君に院参をおさせ申して　揚句に自分までが　たと

しをも、知らず顔に思ひて参らせたてまつりて、みづからさへ、た

え冗談にしろ　年がいもない浮き名が世間に漏れたりしたらそれこそ　本当に顔向けも

はぶれにても、若々しきことの世に聞こえたらむこそ、いとまばゆ

ならぬ見苦しいことだろう

く見苦しかるべけれ、とおぼせど、さる忌によりと、はた、御息所

にもあかしきこえたまはねば、われを、昔より、故大臣は取り分き

ておぼしかしづき、尚侍の君は、若君を、桜のあらそひ、はかなき

をりにも、心寄せたまひし名残に、おぼしおとしけるよと、うらめ

しう思ひきこえたまひけり。院の上はた、ましていみじうつらしと

〔冷泉院〕　軽くお

ぞおぼしのたまはせける。「古めかしきあたりにさし放ちて、思ひ

思いなさるのも　無理もないことだ　〔御息所に〕しんみりお話しなさって　いとしく

おとさるるも、ことわりなり」と、うちかたらひたまひて、あはれ

一　あの厄介なお気持が相変らずおありなので。冷泉院が今も玉鬘に懸想していること。

二　昔のことを思い起してみると、さすがに院のお心がもったいなく思われたそのお詫びに。冷泉院ご在位の折、そのご意向に反して、髭黒の北の方となってしまったことをさす（四巻真木柱二〇三頁参照）。以下「見苦しかるべけれ」まで、玉鬘の思い。

三　そうした憚りがあるからとは、これは、御息所にもお話し申されないので。

四　わたしを、昔から、亡きお父上は格別大事にして下さり。以下「おぼしおとしけるよ」まで、玉鬘の心の内を知らず、恨めしく思う御息所の心中。

五　母上の尚侍の君は、若君（中の君）を、あの桜の取り合いや、何でもない小さなことでも、贔屓をなさった続きで、私をあんまり思って下さらないのだと。「桜のあらそひ」は、一一六頁参照。

六　冷泉院は一層御息所以上に、（玉鬘を）冷たい人だとお恨みで、仰せにもなった。

七　年寄りの私のところに、あなたを一人放っておいて。はなやかな宮中には時々参内して、と裏に皮肉をこめる。

数年後、御息所、男御子を産む

八 並々ではない御息所のご運勢よなどと、世間の人人は意外に思う。子供が生れるのは、前世からの深い宿縁によると考えられていた。

九 院の帝（冷泉院）は、ましてこの上なく珍しく愛しいと、この若宮をおいつくしみになる。冷泉院には、はじめての皇子である。

一〇 今は、万事晴れがましいことのないのを、まことに残念だ、とお思いになった。退位後では、若宮に立太子の機会もないからである。

一一 女御の所生。今までは、冷泉院の唯一のお子だった。

一二 あまりこういう有様では不快なことだろうと、お心も穏やかでない。女一の宮の影が薄くなるのは、さすがに母として忍びがたい気持。

一三 女一の宮の女御と御息所の仲。

一四 世間の例として、身分の低い者たちの間でも、もとからの妻だという言い分のある者の方に、事情を知らぬ第三者も、味方をするものらしいから。

思われるお気持はいよいよ深まるにのみおぼしまさる。

何年かたって年ごろありて、また男御子産みたまひつ。そこらさぶらひたまふ[御息所は]をとこみこ

たくさんお側に仕えていらっしゃるお妃方に御方々に、かかることなくて年ごろになりにけるを、おろかならざりける御宿世など、世人おどろく。帝は、まして限りなくめづらしと、この今宮をば思ひきこえたまへり。おりゐたまはぬ世ならましかば、いかにかひあらまし。

どんなに張合いがあったことか

今は何ごとも栄なき世を、いとくちをし、となむおぼしける。女一の宮を、限りなきものに思ひきこえたまひしを、かくさまざまにうつくしくて、数添ひたまへれば、めづらかなるかたにて、いとことにおぼいたるをなむ、女御も、あまりかうてはものしからむと、御心動きける。ことにふれて、やすからずくねくねしきこと出で来などして、おのづから御仲も隔たるべかめり。世のこととして、数ならぬ人の仲らひにも、もとよりことわりえたるかたにこそ、あいなきおほよその人も、心を寄するわざなめれば、院のうちの上下の人々、いとやむごとなくて、久しくなり

このようなご慶事もなくて長の年月が過ぎてきたのに

もしご退位なさらぬ時であったならば

無上のものと

このように皇子皇女とそれぞれかわいらしくて

次々お生れになったので

珍しく

格別ご寵愛が深まるのを

うれしく思われて

意趣を含んだ

何か事あるごとに

意地の悪いことが持ち上がったりなどして

疎隔してゆくよ

冷泉院に仕える

女御という歴としたご身分で

宮仕えの年月も

一　左近の中将や右中弁。

二　こんなふうに宮仕えをせず、気苦労も揉めごともなくて、のんびりと体裁よく、奥様として過す人も多いでしょうにね。

三　この上もなく幸運に恵まれた人でなくては、宮仕えのようなことは、考えてはいけないことでした。

四　玉鬘のこと。御息所も尚侍も、すでに結婚したので、その母として重く呼ぶ。

五　かつて御息所に懸想申していた人々が、それぞれ立派に昇進して。薫や蔵人の少将たちである。

六　源侍従といって、とても年若で、ひ弱に見えたのは、今、宰相の中将で。薫のこと。

薫のその後

匂兵部卿一六五頁に十四歳で侍従、一七三頁に十九歳の時、三位の宰相で中将を兼ねていたとあり、竹河の巻のこの時点と重なる。

七　匂兵部卿一七二頁に「例の、世人は、匂ふ兵部卿、薫る中将と、聞きにくく言ひ続けて」とあった。

八　（女房と）話し合っていらっしゃる。「おはさうず」は、「おはしあふ」の約音「おはさふ」にサ変の「す」のついた形。二一五頁に既出。

九　少将だった人も。蔵人の少将のこと。

こちらの御息所の側

久しいお方の方にばかり道理があるように言って　些細なことでも

たまへる御方にのみことわりて、はかないことにも、この御方ざまをよくないように噂したりするのを　をよからず取りなしなどするを、御兄の君たち、「されば間違よ。あそれご覧なさい　しうやは聞こえおきける」と、いとど申したまふ。心やすからず、心配で気持も乱れったことは申し上げなかったでしょう　聞くのもつらくて　聞き苦しきままに、「かからで、のどやかにめやすくて世を過ぐす人も多かめりかし。限りなき幸ひなくて、宮仕への筋は、思ひ寄るまじきわざなりけり」と、大上は嘆きたまふ。

一層母上をお責めになる　（玉鬘）二　三　四

聞こえし人々の、めやすくなり上りつつ、さてもおはせましに、婿君になっていらしたとしても　この家に不相応とはいえぬ方が大勢いる　かたはならぬぞあまたあるや。そのなかに、源侍従とて、いと若う、ひはづなりと見しは、宰相の中将にて、「匂や薫や」と、聞きにくくめで騒がるなる、げにいと人柄重りかに心にくきを、やむごとなき親王たち、大臣の、御女を、心ざしありてのたまふなるなども、結婚させたいと思って申し込まれるというのなども　聞きづらいほどもてはやされているようだが　確かにまことに人柄も重厚で奥ゆかしいので　〔薫が〕受けつけないなどと聞くにつけて　（玉鬘）あの当時は　聞き入れずなどあるにつけて、「そのかみは、若う心もとなきやうなりしかど、めやすくねびまさりぬべかめり」など、言ひおはさうず。年もゆかず頼りないようだったけれど　立派に一人前になったようですね

一〇 中将の相当位は従四位下。

蔵人の少将のその後

一一 今の面倒な院中のお暮しよりは。臣下でも蔵人の少将の方がよかった、という。

一二 わが身を情けなくも思い、御息所を薄情なお方だとも怨みながらも。

一三 系図不詳。

一四 「東路の道の果てなる常陸帯のかことばかりも逢ひ見てしがな」（『古今六帖』五、帯）。歌意は、いつかほんのちょっとでも逢いたいものだ。

一五 すさび書きにも口癖にもするのは、どんな思惑があってのことだったのだろうか。草子地。

一六 玉鬘。「尚侍の君」と呼ぶのは、次に、現在の尚侍である中の君を「内裏の君」と呼ぶからであろう。

一七 院に奉仕の大君と対照する気持がある。

御息所、退出がち

一八 前出。

一九 夕霧右大臣が左大臣に。ただし、後の宇治十帖を通じて、夕霧は右大臣のままである。

二〇 按察使の大納言。玉鬘の弟（紅梅一八一頁参照）。左大将兼任の右大臣になった趣。ただしこの人、後の宿木、東屋の巻には、按察使の大納言のままである。

薫、昇進の挨拶に、玉鬘を訪問

二一 紅梅一八七頁に「源中納言」とあり、椎本三一三頁に中納言昇進のことが見える。

二二 参議の唐名。閣議に列することができる。

二三 夕霧と致仕の太政大臣ゆかりのご一族以外には。

少将なりしも、一〇三位の中将とかいひて、（評判がよい）おぼえあり。「容貌さへ、（顔立ち）あらまほしかりきや」など、なま心わろきつかうまつり人は、うち（ひそひ）忍びつつ、（女房）一一「うるさげなる御ありさまよりは」など言ふもありて、（そ話しては）いとほしうぞ見えし。（本当に困ったことと思われた）この中将は、（三位の中将）なほ思ひそめし心絶えず、（今も御息所への思慕を捨てず）憂くもつらくも思ひつつ、左大臣の御女を得たれど、（まるで大切に思わず）をさをさ心もとめず、「一四道の果てなる常陸帯の」と、一五手習にも言種にもするは、いかに思ふやうのあるにかありけむ。

御息所、（気苦労の多い宮仕えの煩わしさに）やすげなき世のむつかしさに、（実家にご退出がちになられるのだった）里がちになりたまひにけり。一六尚侍の君、（期待通りにはゆかぬ大君のお身の上を）思ひしやうにはあらぬ御ありさまを、（残念なことと）くちをしとおぼす。一七内裏の君は、（かえってはなはだと賑やかにお気楽そうにお暮しになって）なかなか今めかしう心やすげにもてなして、（奥ゆかしい方という評判を得てお仕えになっている）世にもたしなみ深くにもゆゑあり、心にくきおぼえにてさぶらひたまふ。

左大臣亡せたまひて、一八右は左に、一九藤大納言、左大将かけたまへる右大臣になりたまふ。（それより以下の人々も順番に昇進して）次々の人々なり上がりて、二〇この薫中将は、中納言に、（三位の中将）三位の君は、二一宰相になりて、（ご昇進をなさった方々は）よろこびしたまへる人々、二二こ

一（玉鬘の）お前の庭中で拝舞なさる。拝舞は、謝意を表わす時の礼の仕方。（一巻桐壺三七頁注一九参照）

二 かように、人も訪わぬ草深いあばら屋を。「葎の門」は、葎（蔓草の雑草）がはいまつわって開かなくなった門。見捨てられた家をいう歌語的表現。

三 光源氏のこと。

四 簾中からの声。前に「対面」とあり、取次ぎなしに直接話している。

五 少しもお年を召されないのだなあ、こんなふうだから、冷泉院は、ご執心が絶えないのだ。以下、薫の心中。

玉鬘、御息所の苦境を、薫に訴える

六 昇進の喜びなどは、私にはさほどうれしくも存じられませんが、一番にお目にかけて安心して頂こうと思って参りました。

七 直接お会いしてでないと、いくら何でもこんなお話はごたごたしたことですから。人伝には話しにくいことだという。

八 冷泉院に仕えていられる方が。大君のこと。

人もいないといった時勢であった　中納言拝任の挨拶に

の御族よりほかに人なきころほひになむありける。中納言の御よろこびに、前の尚侍の君に参りたまへり。御前の庭にて拝したてまつりたまふ。尚侍の君対面したまひて、「かくいと草深くなりゆく葎の門を、よきたまはぬ御心ばへにも、まづ昔の御こと思ひ出でられてなむ」など聞こえたまふ御声、あてに愛敬づき、聞かまほしう今めきたり。古りがたくもおはするかな、かかれば、院の上は、怨みたまふ御心絶えぬぞかし、今つひに、ことひき出でたまひてむ、と思ふ。

（玉鬘）二　（薫）三　（薫）四　（薫）五

［薫は］　玉鬘　避けずにおたずね下さるご芳情にも　気品があって愛らしく　ほれぼれするほどはなやかである　今にきっと　［院は］　色恋沙汰を起しなさるだろう

（薫）六「よろこびなどは、心にはいとしも思うたまへねども、まづ御覧ぜられにこそ参りはべれ。よきぬなどのたまはするは、おろかなる罪にうちかへさせたまふにや」と申したまふ。

避けずになどおっしゃるのは　日頃のご無沙汰の罪をわざと反対に仰せなのでしょうか　申し上げるべき折でもないとしまいました私の愚痴など

（玉鬘）「今日は、さだすぎにたる身の愁へなど、聞こゆべきついでにもあらずと、つつみはべれど、わざと立ち寄りたまはむことは難きを、対面なくてはた、さすがにくだくだしきことになむ。院にさぶらはるるが、いといたう世

すっかり年取って　気がひけますけれども　わざわざお立ち寄り下さることは滅多にないのでも　とてもひどく宮仕えに

のことを思い悩み
の中を思ひ乱れ、中空なるやうにただよふを、女御を頼みきこえ、
また后の宮の御方にも、さりともおぼしゆるされなむと、思ひたま
へ過ぐすに、いづかたにも、なめげにゆるさぬものにおぼされたな
れば、いとかたはらいたくて、宮たちは、さてさぶらひたまふ、こ
のいとまじらひにくげなるみづからは、かくて心やすくだにながめ
過ぐいたまへとて、まかでさせたるを、それにつけても、聞きにく
くなむ、上にもよろしからずおぼしのたまはすなる。ついであらば、
ほのめかし奏したまへ。とざまかうざまに、たのもしく思ひたまへ
て、出だし立てはべりしほどは、いづかたをも心やすく、うちとけ
頼みきこえしかど、今は、かかることあやまりに、幼うおほけなか
りけるみづからの心を、もどかしくなむ」と、うち泣いたまふけし
きなり。

（薫）決してそこまで深刻にお考えになるには及ばぬことです
「さらにかうまでおぼすまじきことになむ。かかる御まじらひのや
すからぬことは、昔より、さることとなりはべりにけるを、位を去

九 宙に浮いたような格好でうろうろしていますが。院中にいづらくて、里がちな状態をいう。
一〇 秋好む中宮におかせられても、最後はお許し頂けるであろうと、存じてまいりましたが。ともに光源氏に繋がる縁で大目に見てもらえるだろうと思っていたが。秋好む中宮の不興は、ここではじめて見える。
一一 御息所腹の若宮たち。女二の宮と男宮。
一二 この、大層宮仕えをつらそうにしております本人は。御息所のこと。
一三 よい折がございましたら、それとなくよしなに奏上して下さい。院の猶子である薫は、うってつけの人物。
一四 今では、こうした手違いに、考えもなく身の程知らずだった私の料簡を、いけなかったと思っております。こうした事態も起りうることを予測できなかった不明を恥じて、「幼う」という。

りて、静かにおはしまし、一何ごともけざやかならぬ御ありさまとなりにたるに、誰もうちとけたまへるやうなれど、おのおのうちうちは、いかがいどましくもおぼすこともなからむ。二人は何の咎と見ぬことも、わが御身にとりてはうらめしくなむ、あいなきことに心を動かいたまふこと、女御、后の常の御癖なるべし。三さばかりのまぎれもあらじものとてやは、おぼし立ちけむ。ただなだらかにもてなして、御覧じ過ぐすべきことにはべるなり。四男のかたにて、奏すべきことにもはべらぬことになむ」と、いとすくすくしう申したまへば、「五対面のついでに愁へきこえむと、待ちつけたてまつりたるかひなく、あはの御ことわりや」と、うち笑ひておはする、人の親にて、はかばかしがりたまへるほどよりは、六いと若やかにおほどいたるここちす。御息所も、かやうにぞおはすべかめる、七宇治の姫君の心とまりておぼゆるも、かうざまなるけはひのをかしきぞかし、と思ひゐたまへり。

ひっそりとお過しで
どなたも気楽にお暮しのようですが
それぞれのお胸の内では
どうして人に勝とうとお思いなさらぬことがございましょう
何ごともなくお見過しなさるのがよいのです
ただなだらかにもてなして
全く取りつくしまもなく申されるので
苦笑していられる玉鬘の様子は
子を持つ母として
てきぱきと事を処理していらっしゃるわりには
大君
こんなふうでいらっしゃるのだろう
[薫は]

一（内裏、東宮とは違って）何ごとも、はなやかに目立つことのないご日常になってしまったので。

二 第三者から見れば、何の過ちと思わぬことも、ご自身にとってはくやしいと、些細なことにもお腹立ちになるのが、女御やお后のよくあるお癖でしょう。

三 その程度の小さないざこざも起らぬものと思って、（お覚悟もなく）宮仕えのことをご決心なさったのでしょうか。

四 わざわざ、男の私が表向きに、奏上すべき問題でもございませんことです。

五 お目にかかった機会に、愚痴を聞いて頂こうと、お待ち受け申していたかいもなく、気のないご意見ですこと。「あは」は「淡し」の語幹。「ことわる」は、理非を判断するの意。

六 大層若々しくおっとりとした感じがする。薫の印象。

七 あの宇治の姫君が忘れがたく思われるのも、こんなふうな感じがすばらしいからなのだ。「宇治の姫君」は、橋姫の巻以下と読み合せると、八の宮の大君のこと。紅梅巻末の「八の宮の姫君」と同様の唐突な書き方である。

八 玉鬘の中の君。
九 お二方（御息所と尚侍）が、あちらのお部屋こちらのお部屋とお住まいになっているお邸の雰囲気は、はなやかで。寝殿であろう。（一二八頁参照）
一〇 これが、婿として世話するのだったらと。
一一 右大臣家。玉鬘の弟。さきに右大臣に昇進した（二四五頁注二〇参照）。
一二 大臣の任官披露の祝宴。（三巻少女二三二頁注一〇参照）
一三 宴会の相伴役。
一四 匂兵部卿の宮。
一五 夕霧。さきの昇進で、左大臣である。

隣りの右大臣家

一六 匂兵部卿の巻の終りにあった「賭弓の還饗」のことをさす。「還立」は「還饗」に同じ。（一七六頁注二参照）
一七 相撲の節会（七月、天皇が相撲をご覧になって群臣に宴を賜う節会）のあと、左右の近衛の大将が部下や相撲人を私邸で饗応すること。八月に行う。ただし、この「相撲の饗応」の記事は物語に見えない。
一八 今日の宴に、光を添えて頂きたいと。
一九 実は、格別のお心積りがあって。以下、右大臣が、実子の中の君を妃にと願っているが、匂宮がもう一つ乗ってこないこと、紅梅一八三頁以下に詳しい。
二〇 真木柱。右大臣と結ばれたことは、紅梅の巻冒頭に見える。

尚侍（ないしのかみ）も、このころまかでたまへり。（お里に下がっておられた）こなたかなた住みたまへるけはひをかしう、おほかたのどやかに、（すべてのんびりとして）まぎるることなき御ありさまどもの、簾（す）のうち心はづかしうおぼゆれば、（雑事に煩わされることのないお二方のご様子で）心づかひせられて、いとどもてしづめやすきを、（おのずと緊張して）大上は、（玉鬘）近うも見ましかばと、（一段ともの静かに振舞って端正な感じなのを）うちおぼしけり。（思いになるのだった）

大臣殿（おほいとの）は、（玉鬘邸）ただこの殿の東（ひがし）なりけり。大饗（だいきやう）の垣下（あるが）の君達（きむだち）など、あまたつどひたまふ。兵部卿の宮、左の大殿（おほいとの）の賭弓（のりゆみ）の還立（かへりたち）、相撲（すまひ）の饗（ある）応（じ）などには、おはしましし（ご臨席なさったのを思い出して）を思ひて、今日の光（ひかり）と請（さう）じたてまつりたれど（〔匂宮は〕）まひけれど、おはしまさず。（奥ゆかしく大切にお育てになっている）心にくくもてかしづきたまふ姫君たちを、さるは、（お招き申しなさったけ）心ざしことに、いかで（ぜひに）、と思ひきこえたまふべかめれど、宮（匂宮）ぞ、いかなるにかあらむ（どういうわけなのか）、御心もとどめたまはざりける。源（薫）中納言の、いとどあらまほしうねびととのひ（年とともにますます好もしく立派な風采になり）、何ごとも後（おく）れたるかたなくものしたまふを（人に劣ると）、大臣（おとど）も北の方も、目とどめたまひけり。（〔婿にと〕）

右大臣邸（こう）人騒がしく隣りのかくののしりて行き違（ちが）ふ車の音（おと）、先駆（さき）おふ声々も、昔のこ（前駆の人々の声も）（髭黒生前）

一　螢兵部卿の宮。螢の宮の薨後、程なく真木柱と右大臣が結ばれたことは、紅梅の巻頭に既述。

二　（右大臣の）気持も変らず、北の方として落着いていらっしゃるのも。「思ひ」の「ひ」（火）と「消え」は縁語。

三　女の境涯というのは、分らないものだこと。どちらをよいとしたものでしょう。継子の真木柱の再婚生活の幸福、実子の御息所の苦労など、つい比較しての感慨。

人さまざまの官位昇進

四　左大臣夕霧の子息。もとの蔵人の少将のこと。薫と同時に昇進している。

五　右大臣の大饗。

六　私事の願いが叶わぬ嘆きだけが、年月がたつにつれて、晴らしようもございません。御息所への思いが叶わなかったことの嘆き。

七　困ったあのお坊ちゃんが、世の中が思いのままになるとつけ上がって、官位のことなど何とも思わずに暮していらっしゃること。「いますからふ」は「いますかり」に同じ。いらっしゃるの意。

八　ご子息たち（左近の中将や右中弁）は、それぞれ右兵衛の督や右大弁になられて。「右兵衛の督」は、右兵衛府の長官。従四位下相当。「右大弁」は、従四位上相当。

（玉鬘）一 しんみりと物思いに沈んでいられる
と思ひ出でられて、この殿には、ものあはれにながめたまふ。「故
右大臣 とても
宮亡せたまひてほどもなく、この大臣の通ひたまひしことを、いと
軽々しいことのように 悪く言ったようですが
あはつけいやうに、世人はもどくなりしかど、二思ひも消えずかくて
何と言われてもそれなりに立派なものですね
ものしたまふも、さすがさるかたにめやすかりけり。三定めなの世や。
いづれにか寄るべき」などのたまふ。

四 左の大殿の宰相の中将、大饗のまたの日、夕つけてここに参りた
里下がりしていられると思うと 次の日 夕方になって 玉鬘
まへり。御息所里におはすと思ふに、いとど心げさう添ひて、「朝
帝が人数に入れて下さった昇進の喜びなどは ますます気遣いされて （中将）
廷のかずまへたまふよろこびなどは、何ともおぼえはべらず。私の
思ふことかなはぬ嘆きのみ、年月に添へて、思うたまへはるけむか
たなきこと」と、涙おしのごふも、ことさらめいたり。二十七八の
本当に若盛りで艶々として 人目に立つ派手な いかにもわざとらしい
ほどの、いと盛りににほひ、はなやかなる容貌したまへり。「見苦
お顔立ちである （玉鬘）
しの君たちの、世の中を心のままにおごりて、官位をば何とも思は
髭黒 わが家の息子たちも
ず、過ぐしいますからふや。故殿おはせましかば、ここなる人々も、
心を悩ませていましょう
こんなのんきなお遊びに
かかるすさびごとにぞ、心は乱らまし」とうち泣きたまふ。八右兵衛

の督、右大弁にて、皆非参議なるを、うれはしと思へり。侍従と聞こゆめりしぞ、このころ頭の中将と聞こゆめる。年齢のほどはかたはならねど、人に後ると嘆きたまへり。宰相は、とかくつきづきしく。

情けないことと思っている　年齢からいえば　〔昇進が〕人より遅いとお嘆きである　不満はないが

九 四位で、参議になる資格のある者。左右大弁、左右中将、左右衛門の督、左右兵衛の督、蔵人の頭、左中弁の年功ある者、式部大輔で帝の侍読を勤めた者などに、その資格がある。参議は、朝政を審議する要職で、「宰相」（唐名）ともいう。

一〇 侍従とかお呼びしていた方。玉鬘の三男。藤侍従のこと。

一一 蔵人の頭（蔵人所の首席、定員二名）の一人は、近衛の中少将、一人は中少弁から選ばれる。中将は、従四位下相当。帝の側近に奉仕し、頭の中将は、頭の弁に比し、実務に携わるよりは名誉職的。名門の子弟のポスト。

一二 宰相の中将は、何やかやとうまいことを言ってきて……。前に「道の果てなる常陸帯の」と口癖にしているのは、「いかに思ふやうのあるにかありけむ」（二四五頁）とあったことなどと合せて、玉鬘の姫君にかかわる貴公子として、薫よりはこの人を終始表面に立てた書き方。

橋(はし)姫(ひめ)

橋姫―物語中の歌にもとづくこの巻名は、新しいヒロインの登場を暗示している。

物語は、ヒロインの両親から語り出す。八の宮と申す皇族が、零落して今は宇治に住まわれる。落魄の理由は、昔、光源氏須磨流謫の際、弘徽殿の大后が、東宮を廃し、代りに八の宮立坊を画策したためとあれば、読者も容易に納得しよう。優しい北の方との間に美しい姉妹の姫君を儲けられたが、北の方は産褥で亡くなった。宮は、仏門に深く帰依しながらも、姫君たちを思って出家も叶わず、みずから養育の任に当っている。

宇治山の阿闍梨は八の宮の師であるが、冷泉院にも召される高僧で、宮の噂は、阿闍梨から院に伝わり、常にお側に侍る薫はそれを聞いて、八の宮の人柄と生活に惹かれ、やがてしばしば宇治に通うようになった。

そうして三年目の秋、たまたま八の宮が阿闍梨の寺に籠る留守中を訪れた薫は、月光のもと、琴を合奏する姉妹を垣間見る。『伊勢物語』初段の垣間見の場面と一致する構成が注目される。薫は特に、姉の大君の、落着いた気品と素直な優しさに惹かれた。

ここには、もう一人、薫には逃れられぬ因縁の老女、柏木の乳母子弁がいた。彼女は柏木の形見の品を薫に手渡すことを目的に、後半生を生きてきた。

一方、薫は、都会の貴公子らしく、匂宮に、思いがけぬ美女の発見を誇り、その好奇心をそそっている。二人の貴公子と姉妹の姫君。ドラマティックな展開が期待される宇治十帖開幕の巻である。薫二十歳から二十二歳秋までの物語である。

一 漠然と物語の時を指定する言い方。以下、時代をいい、両親の紹介があり、やがて主人公の紹介に及ぶという、物語の冒頭形式の手続きが踏まれている。紅梅の巻冒頭（一八一頁）参照。

二 世間からは忘れ去られた老年の宮様がいらっしゃった。

三 格別のご身分に上られる噂などおありだったのに。立太子の可能性があったことをいう。以下の事情は、あらためて二六二～三頁に明らかにされている。

四 かえってかつての声望もすっかり衰え、御後見の方々なども、志を果せぬ思いで、それぞれの理由で政界を去ってゆかれたので。出家などしたのである。

五 八の宮の北の方も、昔の大臣家のご出身だが。

六 今のお身の上はしみじみと悲しく心細く、ご両親が期待していられたことなどお思い出しになると。八の宮立坊、即位の暁には、后の位も夢ではなかった。

姫君二人を残し、北の方、亡くなる

一そのころ、二世にかずまへられたまはぬ古宮おはしけり。母方など立派な家柄のお方でいらっしゃって

も、三やむごとなくものしたまひて、筋異なるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて、世の中にはしたなめられたまひけるまぎれに、時勢が変って　世間に交わってゆけないような目にお会いになった騒ぎに

四なかなかいと名残なく、御後見などものうらめしき心々にて、かたがたにつけて、世を背き去りつつ、公私により所なく、さし放たれたまへるやうなり。五北の方も、昔の大臣の御女なりける、六あはれに心細く、親たちのおぼしおきてたりしさまなど思ひ出でたまふに、たとしへなきこと多かれど、深き御契りの二つなきばかりを、憂き世のなぐさめにて、かたみにまたなく頼みかはしたまへり。

頼る人とてなく　見放されなさったような有様である　うって変った悲しいことが多いけれども　長年のご夫婦仲のまたとない睦まじさだけを　お互いにこの上もなく頼りにし合っていらっしゃる　過しがたいこの世の慰めとして

年ごろ経るに、御子ものしたまはで心もとなかりければ、さうざうしくつれづれなるなぐさめに、いかでをかしからむ児もがなと、

お子さまがお出来にならずどうしたことかと案じられたので　張合いのない何をすることもなく過す無聊の慰めに　どうかしてかわいらしい子がほしいと

一　女のお子様。次の「このたびは男にても……」の「男」に対する「女」を意識した呼称。

二　年月を過すにつけても、とても暮しにくく、堪えがたいことが多い世の中ではあるが。以下「人わろかるべきこと」まで、八の宮の心中の思い。

三　頑是ない姫君たちも、父親の自分が一人で育て上げるのは、皇族の身で、まことに愚かしく見えようし、外聞の悪いことだろう。「限りある身」は、皇族としての格式にしばられた身の上。こまごまと娘の世話を焼くのは、身分柄軽々しいことなのである。

八の宮の方が時折お気持をお漏らしだったが
宮ぞ時々おぼしのたまひけるに、めづらしく、女君のいとうつくし
ようやく　一　大層かわいらしいお
この姫君を
方が
げなる、生まれたまへり。これを限りなくあはれと思ひかしづきき
いとしく思って大切にお育て申され
ご懐妊のご様子があって
ているうちに
こえたまふに、さし続きけしきばみたまひて、このたびは男にても、
〔八宮は〕
やはり同じ女君で　ご無事にお生れにはなったものの
などおぼしたるに、同じさまにて、たひらかにはしたまひながら、
産後をひどくおわずらいになって亡くなられた　あまりのことに途方におくれになる
いといたくわづらひて亡せたまひぬ。宮、あさましうおぼしまどふ。

二　あり経るにつけても、いとはしたなく、堪へがたきこと多かる世
見捨てて出家するに忍びないいとしい北の方のご様子やお人柄ゆえに　それをこの世に引きとめられる絆としてともかくも生きてきたのに
なれど、見捨てがたくあはれなる人の御ありさま心ざまに、かけと
どめらるるほだしにてこそ過ぐし来つれ、一人とまりて、いとどす
張合いもないことになろう　いよいよ何の
さまじくもあるべきかな、三はけなき人々をも、一人はぐくみ立て
大層お案じなさりおためらいになりながら
もなくてあとに残してゆくのを
むほど、限りある身にて、いとをこがましう、人わろかるべきこと、
という気持になられて　〔姫君たちを〕託す人
とおぼし立ちて、本意もとげほほしうしたまひけれど、見ゆづるか
出家の本意も遂げたいとお思いになったが
たなくて残しとどめむを、いみじうおぼしたゆたひつつ、年月も経
お二人がそれぞれすくすくと成人なさる姿顔立ちが　かわいく申し分のない
れば、おのおのおよすけまさりたまふさま容貌の、うつくしうあら
美しさなのを　ついついそのまま日をお過しになる
まほしきを、明け暮れの御なぐさめにて、おのづから見過ぐしたま

四 中の君（妹君）のこと。
五 困ったこと、こんな折も折、情けないことだわ。北の方の逝去された折も折と、愚痴をこぼすのである。
六 宮としては、添い遂げられなかった夫婦の縁に、前世の契りも恨めしい折ではあるが。
七 中の君のお顔立ちは、本当に大層愛らしく、空恐ろしい感じがするほどでいらっしゃった。当時、あまり美しくかわいい子は、神隠しにあったり、早死にするという俗信があった（二巻紅葉賀一二頁注三参照）。
八 大君（姉君）。
九 目をかけて大切になさらないではいられぬ点では、大君の方がまさって、どちらの方をも、それぞれ大事と思って、（八の宮は）ご養育申されるが。
一〇 お邸の中もさびしくなる一方である。人の出入りも減り、物質的不如意も目立ってくる。

ふ。

四のちに生まれたまひし君をば、さぶらふ人々も、「いでや、をりふし心憂く」など、うちつぶやきて、心に入れてもあつかひきこえざりけれど、限りのさまにて、何ごともおぼしわかざりしほどながら、これをいと心苦しと思ひて、「ただこの君を形見に見たまひて、あはれとおぼせ」とばかり、ただ一言なむ、宮に聞こえ置きたまひければ、前の世の契りもつらきをりふしなれど、さるべきにこそはありけめと、今はと見えしまでいとあはれと思ひて、うしろめたげにのたまひしをと、おぼし出でつつ、この君をしも、いとかなしうしたてまつりたまふ。容貌なむまことにいとうつくしう、ゆゆしきまでものしたまひける。姫君は、心ばせ静かによしあるかたにて、見るめもてなしも、気高く心にくきさまぞしたまへる。いたはしくやむごとなき筋はまさりて、いづれをも、さまざまに思ひかしづききこえたまへど、かなはぬこと多く、年月に添へて、宮のうちもさ

五 お仕えする女房たちも
ぶつぶつ文句を言って
中君を 気を入れてもお世話申し上げなかったが
北方が 臨終の床で
もはや意識もさだかでないようなご容態だったのに
中の君 大層気がかりに思って
北方
私の
かわいがってやって下さい
ご遺言申し上げなさったの
六 こうなるべき運命だったので
北方が 臨終の間際まで 中君を
だろうと
あとあとを気遣わし
この中の君を特に
大層かわいがってさげにお言いだったのだからと
し上げなさる
七 気立てがしっとりとして優雅な人柄で
見た感じや物腰も
八 気品があって奥ゆかしい風情でいらっしゃる
思うに任せぬことも多く
九
一〇

一 中の君の御乳母も、あの北の方死去の騒ぎと重なったために、しっかりした人物もお選びになることができなかったので。しかるべき家柄の者を捜す余裕がなく、あるにまかせたのである。

八の宮の荒廃した邸

二 親王、摂関、三位以上の家の家政を取り扱う事務官。四位五位の者から選ばれた。

三 軒の忍ぶ草。羊歯の一種。荒れた家の景物。

四 念持仏（身辺に安置して信仰する仏像）のお飾り付けばかりを、念入りにおさせになって。「御飾り」は、供花献香その他の飾り付け。荘厳という。

五 このような、出家入道の障りになる人々。姫君たちのこと。以下、八の宮の道心の深まりを述べる。

八の宮、仏道精進

びしくのみなりまさる。さぶらひし人も、たつきなきここちするに、え忍びあへず、次々に従ひてまかで散りつつ、若君の御乳母も、さる騒ぎに、はかばかしき人をしも、選りあへたまはざりければ、ほどにつけたる心浅さにて、幼きほどを見捨てたてまつりにければ、ただ宮ぞはぐくみたまふ。

（お仕えしていた人々も）（将来の見込みもない思いがするので）（辛抱しきれずに）（次々と順を追ってお暇を頂いて去って行き）（身分）（幼い中の君を）（相応の思慮の浅さから）（八の宮お一人がお育てになる）

さすがに広くおもしろき宮の、池山などのけしきばかり昔に変らで、いといたう荒れまさるを、つれづれとながめたまふ。家司なども、むねむねしき人もなきままに、草青やかに繁り、軒のしのぶぞ所え顔に青みわたれる。をりをりにつけたる花紅葉の色をも香をも、同じ心に見はやしたまひしにこそ、なぐさむことも多かりけれ、いとどしくさびしく、よりつかむかたなきままに、持仏の御飾りばかりを、わざとせさせたまひて、明け暮れ行ひたまふ。

（そうは言っても広々として風雅なお邸の）（池や築山のたたずまいだけは昔に変らぬもの）（〔八宮は〕所在なく）（しっかりとした責任者もいないままに）（我が物顔に一面に青々としている）（四季折々につけての）（気の晴れることも多かったのだが）（〔今は〕ひとしおさびしく）（頼みとするものもないままに）

五 かかるほだしどもにかかづらふだに、思ひのほかにくちをしう、わが心ながらもかなはざりける契りとおぼゆるを、まいて何にか世

（かかずらっているのも）（不本意で残念でならない気がして）（わが心ながらも思い通りに出家もできぬ前世の宿縁だったと思われるのに）（まして何で世間の人並

六（形はいまだ俗ながら）心ばかりはすっかり聖僧におなりになって。「聖」は、山林に隠遁して、修行に専念する私度僧。

七 世の常の人のような気持など、かりそめにも心にお浮べにならないのだった。女を近づけようなどと少しも思われないこと。

八 なにもそこまでお考えにならなくても。死別の当座の悲しみは、またと世にたぐいないように思われるかもしれませんが、時がたてば、そうばかりでもないでしょう。

九 やはり世間の人がするようなお心積りをなさって。再婚を勧める。

一〇 心に仏を念じ、口に経文を誦すること。

一一「琴」は、絃楽器の総称。箏、琴、和琴、琵琶。「琴ならはし」は、名詞。楽器の練習。三巻少女二五六頁に「舞ならはし」の語がある。

一二 囲碁。中国伝来の遊戯。

一三 漢字の旁を隠して、偏だけでその文字を当てる遊戯。または逆に、旁に偏をつけて文字を作るともいう。

大君と中の君の人柄

みに再婚など今さらしようか

の人めいて今さらに、とのみ、年月に添へて、世の中をおぼし離れつつ、心ばかりは聖になり果てたまひて、故君の亡せたまひにしこて以後はなたは、例の人のさまなる心ばへなど、たはぶれにてもおぼし出でたまはざりけり。「などかさしも。別るるほどの悲しびは、また世にたぐひなきやうにのみこそはおぼゆべかめれど、あり経ればさのみやは。なほ世人になずらふ御心づかひをしたまひて、いとかく見に見苦しく取り仕切る方もいないお邸の中も苦しくたつきなき宮のうちも、おのづからもてなさるるわざもや」と、人はもどききこえて、何くれとつきづきしく聞こえごつことも、類にふれて多かれど、聞こしめし入れざりけり。

俗世のことを断念なさっては

故北の方がお亡くなりになって

本当にこのように

自然とうまく立ちゆくことにでもなればよろしいのに

〔八宮を〕非難申し上げて

何やかやともっともらしいご縁組の話をお耳に入れることも

〔八宮は〕お聞き入れにならなかった

縁故を通じて多かったが

御念誦のひまひまには、この君たちをもてあそび、やうやうおよすけたまへば、琴ならはし、碁打ち、偏つきなど、はかなき御遊びわざにつけても、心ばへどもを見たてまつりたまふに、姫君は、らうらうじく、深く重りかに見えたまふ。若君は、おほどかにらうたげなるさまして、ものづつみしたるけはひに、いとうつくしう、さ

姫君たちをお相手にお興じになり

〔お二方が〕だんだんご成人なさるので

ほんのすきびごとのお遊戯につけても

〔父宮が〕お二人のご性格をご覧申されるのに

思慮深く落着いていらっしゃるえが行き届いていて

中の君

おっとりとしていじらしい様子で

初々しくはにかんだ感じがあって

大層かわいらしく

春の日、八の宮、姫君たちと、歌を詠み交わす

ぞれすぐれていらっしゃる
まざまにおはす。

春のうららかなる日影に、〔お庭の〕池の水鳥どもの、寄り添って羽を交わしながら羽うちかはしつつ、いつもは何でもない自然の風景とご覧になっていたのおのがししさへづる声などを、常ははかなきことに見たまひしかどだが〔今は〕雌雄つがいを離れないのを羨ましくしんみりお目に止められて姫君も、つがひ離れぬをうらやましくながめたまひて、君たちに、御琴〔お二人とも〕大層お美しくて まだお小さいなりにども教へきこえたまふ。いとをかしげに、小さき御ほどに、とりどり掻き鳴らしたまふものの音ども、いじらしくもおもしろく思われるので〔八宮は〕お浮べになって涙を浮けたまひて、

（八宮）「うち捨ててつがひさりにし水鳥の
かりのこの世にたちおくれけむ

気苦労の種の尽きぬことだ
心尽くしなりや」と、目おしのごひたまふ。容貌いときよげにおは大層お美しくていらっしやる宮様である
します宮なり。長年の年ごろの御行ひにやせ細りたまひにたれど、さてし勤行に痩せてほっそりとしてしまわれたが そういうお姿がかえって気高く優雅で
もあてになまめきて、姫君たちを何くれとお世話あそばすお心遣いから君たちをかしづきたまふ御心ばへに、直衣の
おくつろぎのご様子は
大層気品があって立派である
萎えばめるを着たまひて、しどけなき御さま、いとはづかしげなり。

大君
姫君、御硯をやをらひき寄せて、そっとお手許に引き寄せて手習のやうに書きまぜたまふを、

四 硯には書きつけないものだと聞いています。「硯は文殊の御眼なり。このゆゑに眼石といふ。此の声を仮りて硯石とは書也云々。仍此の面に物を書かざるなり。菅家の御日記にも硯面不書とあり」（『河海抄』）

五 母もない身で、どうしてここまで大きくなったのかと思うにつけても、悲しいわが身の宿世を思い知るのです。「憂き水鳥」に「憂き身」を詠み込む。

六 さほど上手というのではないが、その場にあっては、大層心を打つのだった。草子地。

七 筆跡は、将来の上達が思いやられる書きぶりだが、まだ十分続け書きはおできにならぬお年頃である。仮名の連綿体がまだこなせていないのである。

八 悲しみに泣きながらも温かく育んで下さるお父様がいらっしゃらなかったら、私はとても大きくなれなかったでしょう。「巣守」は、孵化しないで巣に残っている卵。

九 姫君たちのお召し物など、着古して糊気も落ち、お前には父宮のほかには別に女房とていず。

一〇（八の宮は）お経を片手にお持ちになって、時には読み上げ、時には唱歌をなさる。「唱歌」は、楽器の譜を口で歌うこと。ここは、姫君たちに琴を教えるため。

一一 十三絃の琴。

（八宮）「これに書きたまへ。四硯には書きつけざなり」とて、紙たてまつりたまへば、［大君は］はぢらひて書きたまふ。

（大君）五いかでかく巣立ちけるぞと思ふにも
憂き水鳥の契りをぞ知る

六よからねど、そのをりはいとあはれなりけり。七手は、生ひ先見えて、まだよくも続けたまはぬほどなり。（八宮）「若君も書きたまへ」［仰せなので］とあれば、［ずっと子供っぽい字で］今すこし幼げに、［長い間かかってお書き上げになった］久しく書き出でたまへり。

（中君）八泣く泣くも羽うち着する君なくは
われぞ巣守になりは果てまし

御衣ども九など萎えばみて、御前にまた人もなく、いとさびしくつれづれげなるに、［姫君たちがそれぞれとてもかわいらしいご様子でいらっしゃるのを］［所在なげな有様だが］さまざまいとらうたげにてものしたまふを、あはれに心苦しう、いかがおぼさざらむ。一〇経を片手に持たまひて、かつ読みつつ唱歌をしたまふ。姫君に琵琶、若君に箏の御琴、まだ幼けれど、常に合はせつつ習ひたまへば、聞きにくくもあらで、いとを［本当にひっそりとして］［不憫でいたわしいと］［父宮が］何で思われぬことがあろう［合奏しながらお稽古なさるので］

もしろく聞える
かしく聞こゆ。

八の宮の半生

父帝にも女御にも、疾く後れきこえたまひて、はかばかしき御後見の、取り立てたるおはせざりければ、才など深くもえ習ひたまはず、まいて世の中に住みつく御心おきては、いかでかは知りたまはむ。高き人と聞こゆるなかにも、あさましうあてにおほどかなる女のやうにおはすれば、古き世の御宝物、祖父大臣の御処分、何やかやと尽きすまじかりけれど、行方もなくはかなく失せ果てて、御調度などばかりなむ、わざとうるはしくて多かりける。参りとぶらひきこえ、心寄せたてまつる人もなし。つれづれなるままに、雅楽寮の物の師どもなどやうの、すぐれたるを召し寄せつつ、はかなき遊びに心を入れて生ひ出でたまへれば、そのかたは、いとをかしうすぐれたまへり。

しっかりとした
お修めになれず
これといったお方もいらっしゃらなかったので
この世間に立ち交わってゆく処世のお心構えは
どうしてご承知のことがあろう
高貴のお方と申し上げるなかでも
無尽蔵と思われたのだけれども
どこへともなくいつのまにか皆無くなって
参上してご機嫌
ご用をお勤め申そうという人もいない
[八宮は]所在ないままに
役にも立たな
音楽にかけては
大層お上手で
いい風流事に熱中して
ご成人あそばしたので

[八宮は]

八の宮の系譜と没落の理由

源氏の大殿の御弟におはせしを、冷泉院の春宮におはしましし時、朱雀院の大后の、横様におぼし構へて、この宮を、世の中に立ち継

一 八の宮は、父帝にも母女御にも、早く先立たれなさって。巻頭に「母方なども、やむごとなくものしたまひて」とあった。父帝は桐壺帝であること、次の段に「源氏の大殿の御弟におはせしを」とあるので分る。

二 当時の貴族の必須課目である漢学。法制、経済、歴史、詩文である。

三 あきれるほど上品で大様な女のようなお方でいらっしゃるので。深窓に籠りきりの貴族の女性は世事に疎い。

四 ご先祖伝来のご宝物。

五 八の宮の祖父、すなわち母女御の父大臣のご遺産。

六 お手許に置くお道具類などばかりが、目立つほど立派でいろいろ多いのだった。

七 治部省に属し、すべての歌舞音楽とその練習をつかさどったが、楽所、内教坊が出来て、宮中御遊の音楽を扱うようになってからは、儀式の演奏だけを行った。

八 雅楽寮の音楽の師。歌師、舞師、笛師、唐楽師、高麗楽師、百済楽師、伎楽師、腰鼓師がある。

九 弘徽殿の大后。

一〇 あるまじき企みをご計画になって、八の宮を、帝位をお継ぎになるようにと、ご自分が勢威をお振いの時、後押し申しなさった騒動のために。この巻の

冒頭に「筋異なるべきおぼえなどおはしけるを」とあったのと照応する叙述。弘徽殿の大后が、時の皇太子冷泉院を廃して、八の宮の立坊を画策したことは、以前の物語には書かれていないが、源氏の須磨退居前後のことと考えられる。

一一（源氏が復権し、大后の勢力が失墜するや）心ならずも、あちら側（源氏方）のお付合いからは、遠ざけられてしまいなさったので。「あいなく」は、もともと関係はないのに、担ぎ上げられたばかりに、という気持。

八の宮邸焼け、宇治に移り住む

一二 今の京都府宇治市。琵琶湖から出る宇治川が、山間部から平野に出る所。大和への交通の要路に当り、平安時代には、宇治川を挟んで貴族の別荘が営まれた。（図録二参照）

一三 網代を仕掛けてある様子が近くにして。「網代」は、網代木のこと。流れの早い川に、上流を広く下流を狭く、三角形の二辺の形に隙間なく棒杭（網代木）を打ち立て、簀子を水面の高さに置いて、そこに打ち上げられる氷魚（鮎の稚魚）を獲る。秋から冬にかけてが漁期。（図録六参照）

一四 このように、世間と隔絶して籠り住む野山の果てでも。「野山」は歌語。野や山の意。

ぎたまふべく、わが御時もてかしづきたてまつりける騒ぎに、あいなく、あなたざまの御仲らひには、さし放たれたまひにければ、いよいよかの御つぎつぎになり果てぬる世にて、（源氏のご子孫ばかりが次々世に立たれるご時勢なので）（人交わりはおできになれない）えまじらひたまはず。またこの年ごろ、かかる聖になり果てて、（その上ここ何年かは）今は限りと、（もうこれまでと）（一切の望みを捨ておいでになる）よろづをおぼし捨てたり。

かかるほどに、住みたまふ宮焼けにけり。（次々とつらさの増す境遇に）いとどしき世に、（お話）あさましうあへなくて、（京の中には）（にもならずがっかりして）うつろひ住みたまふべき所の、（邸）よろしきもなかりければ、（適当なのも）宇治といふ所に、（風情のある山荘を）よしある山里持たまへりけるにわたりたまふ。（お持ちになっていたそこへお移りになる）思ひ捨てたまへる世なれども、今はと住み離れなむをあはれにおぼさる。（山荘は）網代のけはひ近く、（急流の音が耳につく川のほとりで）耳かしかましき川のわたりにて、（静かに行い暮したいという願いにそぐわぬところもあるが）静かなる思ひにかなはぬかたもあれど、（致し方もないことだ）いかがはせむ。花紅葉、水の流れにも、（心を慰める）心をやる便によせて、（よすがにつけ）いとどしくながめたまふよりほかのことなし。（前にもまして物思いに沈まれるよりほかはない日々である）かく絶え籠りぬる野山の末にも、（今は亡き北の方がご存命であったならと）昔の人ものしたまはましかばと、（恋しくお思い申されぬ時はないのであった）思ひきこえたまはぬをりなかりけり。

一　共に暮した北の方も邸も煙となってしまったのに、なぜわが身だけ命が消えもせず、生き残っているのだろう。上の句、北の方の火葬の煙と、邸の焼けたことをいう。「消え」は「煙」の縁語。

二　生きている張合いもないと、恋い焦がれていらっしゃる。「おぼしこがる」の「焦がる」は、歌の「煙」の縁語。

三　いよいよ都との間に山また山を隔てた宇治のお住まいに。「月よみの光に来ませ足引の山かさなりて遠からなくに」（『古今六帖』五、人をよぶ）

四　「雁の来る峰の朝霧晴れずのみ思ひ尽きせぬ世の中の憂さ」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）による。宇治における八の宮の憂悶の生活をいう。宇治は、地形上、朝夕、霧が深く立ちこめる所である。

五　このあたり、喜撰法師を連想させる書き方。「わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、喜撰法師）。今、喜撰山といい、山中、喜撰の住んだという洞穴がある。（図録二参照）

六　聖めいた阿闍梨。「聖」は、山林に隠遁して苦行を積む修行者。「阿闍梨」は、天台宗、真言宗での僧職の名。朝廷より任命される。

七　（身は俗体ながら）心だけは極楽往生を願い、濁りない蓮の池にも住めるつもりでいますが。「住み」に「澄み」を掛け、「濁りなき」の縁語。「極楽国土、

八の宮、宇治山の阿闍梨に師事する

（八宮）一
見し人も宿も煙になりにしを
　なにとてわが身消え残りけむ

二生けるかひなくぞおぼしこがるるや。

三いとど山重なれる御住処に、尋ね参る人なし。（わざわざ伺う人はいない）あやしき下衆（身分の低い）など、田舎びたる山がつどものみ、（山住みの者たちばかりが）まれに（時たま）馴れ（親しく参上してご用を勤める）参りつかうまつる。四峰の朝霧晴るるをりなくて明かし暮らしたまふに、五この宇治山に、聖（六）だちたる阿闍梨（経典の知識も大層深く）住みけり。才いとかしこくて、世のおぼえも（世人の尊崇も）軽からねど、をさをさ公事（朝廷の法要）にも出でつかへず籠りゐたるに、この宮の（八の宮）、かく近き（こんな近いあたりにお住まいになって）ほどに住みたまひて、さびしき御さまに、尊きわざをせさせたまひつつ、法文（経典の勉強をなさるので）を読みならひたまへば、尊がりきこえて（〔阿闍梨は〕お敬い申して）、常に参る。（〔八宮が〕今までに学んでご承知のいろいろのことの）ごろ学び知りたまへることどもの、深き心を解き聞かせたてまつり、いよいよこの世のいとかりそめに（仮の世で）、あぢきなきことを申し知らすれば、（八宮）「心ばかりは蓮の上に思ひのぼり、濁りなき池にも住みぬべきを、いとかく幼き人々を見捨てむうしろめたさばかりになむ、えひ

有七宝池、八功徳水、充満其中、……池中蓮華、大如車輪」（『阿弥陀経』）。（五巻鈴虫三四五頁注一参照）

阿闍梨、冷泉院や薫に八の宮のことを伝える

ヘ いつものように、しかるべき経典などをご覧になって、ご下問などもある機会に。

ト ここで初めて八の宮の呼称が出、紅梅一九六頁の八の宮と重なる。桐壺院の第八皇子である。

一〇 仏教徒が、自ら仏教をさしていう語。これに対して、儒教や道教を外教という。

一一 前出。注六参照。

一二 俗体のまま仏法の戒律を持し修行する者、の意。冷泉院に伺候する貴公子たちが、八の宮に付けた綽名。

一三 薫のこと。十九歳の時、三位の宰相を兼任（七）兵部卿一七三頁参照）。

一四 以下、八の宮の話を聞いての薫の思い。

いちずにたみちに容貌をもかへぬ」など、心底を割ってお話しなさる隔てなく物語したまふ。出家もできないのだ

この阿闍梨は、冷泉院にも親しくさぶらひて、御経など教へきこゆる人なりけり。京に出でたるついでに参りて、例の、さるべき文など御覧じて、問はせたまふこともあるついでに、「八の宮の、いとかしこく、内教の御才悟り深くものしたまひけるかな。さるべきにて生まれたたまへる人にやものしたまふらむ。心深く思ひすましたまへるほど、まことの聖のおきてになむ見えたまふ」と聞こゆ。

伺候して

〔冷泉院に〕

〔阿闍梨〕

とに優れたお方で　ご研鑽やお悟りが深くていられることです　こうなるような前世からの因縁で生れなさった方でおいでなのでしょうか　深く悟り澄ましたご心境でいられる点は　お心構えでいられると拝察されます

〔冷泉院〕「いまだ容貌はかへたまはずや。俗聖とか、この若き人々の付けたなる、あはれなることなり」などのたまはす。宰相の中将も、御前にさぶらひたまひて、われこそ、世の中をばいとすさまじう思ひ知りながら、行ひなど、人に目とどめらるばかりは勤めず、くちをしくて過ぐし来れ、と人知れず思ひつつ、俗ながら聖になりたまふ心のおきてやいかに、と耳とどめて聞きたまふ。「出家の心ざしは、もとよりものしたまへるを、はかなきことに思ひとどこほり、今と

ここの若者たちが綽名しているよ　この世を本当に何の意味もないものとよく分って　人から注目されるほどには勤めず　残念な有様で　出家はせずに　心は聖になり切って　〔阿闍梨〕出家の本願は　耳をそばだてて　些細などうでもいいことのために心がにぶり　はじめからおありだったのですが　いられるお心構えはどんなか　日を送って来た

控えていらっしゃって　殊勝なことだな　うだが　勤行　俗聖

一 かわいそうなお娘御たちのことを。姉妹の姫君のこと。

二 お嘆きでいられます。「はべりたうぶ」は「はべりたまふ」と同じ。（三巻少女二二四頁注七参照）

冷泉院、姫君たちに興味を持つ

三 世俗を離れた僧とはいえ、さすがに音楽をたしなむ阿闍梨で。

四 極楽もかくやと思いやられることでございます。「極楽の歌舞の菩薩のことをいへるなり」（『花鳥余情』）

五 古風な賞め方をするので。「極楽思ひやられはべる」という言い方をさす。

六 そんな聖のような宮のお側で大きくなっては。

七 もし、しばらくでも（私が）あとに生き残るようなら、（姫君たちを）お譲り下さらぬだろうか。

八 冷泉院の帝は、（桐壺院の）第十皇子でいらっしゃるのだった。八の宮の弟になる。今、四十九歳。

九 朱雀院が、（弟の）故六条の院（源氏）にお世話をお預け申された、入道の宮（女三の宮）の前例をお思い出しになって。若菜上の、女三の宮降嫁のこと。

薫は八の宮にひかれる

一〇 中将の君（薫）の方が、かえって。冷泉院が姫君たちに関心を寄せたのに対して、という気持。

なりては、心苦しき女子どもの御上を、（とても見捨てて出家できないと）え思ひ捨てぬとなむ、嘆きはべりたうぶ」と奏す。

さすがにものの音めづる阿闍梨にて、「げにはた、（本当にもう）この八の宮の姫君たちの、琴弾き合はせて（演奏をなさるのが）遊びたまへる、川波にきほひて（川音にきそうように聞えてきますのは）いとおもしろく、極楽思ひやられはべるや」と、古代にめづれば、帝ほほゑみたまひて、（冷泉院）「さる聖のあたりに生ひ出でて、この世のかたざまは、（俗世のことに関しては）たどたどしからむとおしはからるるを、（おぼつかないことだろうと推察されるところなのに）〔八宮が〕心配でうしろめたく、（見捨てて出家できないと苦にしていらっしゃるらしいが）思ひ捨てがたくもてわづらひたまふらむを、もししばしも後れむほどは、ゆづりやはしたまはぬ」などぞのたまはする。

この院の帝は、十の御子にぞおはしましける。朱雀院の、故六条の院にあづけきこえたまひし、入道の宮の御例を思ほし出でて、かの（その姫君たちを得たいものだ）君たちをがな、つれづれなる遊びがたきに、（なすこともない日々の遊び相手に）などうちおぼしけり。

一〇 中将の君、なかなか、親王の（八の宮が仏道専一でいらっしゃるらしいお心構えを）思ひすましたまへらむ御心ばへを、（ふとお思いになった）対面して見たてまつらばや、（お目にかかって拝見したいものだ）と思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿闍梨

一一 冷泉院のご伝言として。阿闍梨に口伝えにしたもの。

一二 感に堪えぬお暮しぶりを、人伝に聞くばかりとは。阿闍梨によってその消息を知ったことを伝える。

冷泉院、阿闍梨を使者に、八の宮と贈答

一三 世を厭う気持は、山住みもしたいほどなのですが、（こうしてお伺いできないのは）八重に重なる雲であなたが間を隔てていらっしゃるからでしょうか。

一四 冷泉院のお文のお使い。

一五 並々の身分の、当然お訪ねしてよい人の便りも、めったに来ない山住みのお住まいとて。「山陰」に、日の当らぬ、世間に忘れられたという意がある。

一六 山里らしい酒肴など用意して。

一七 ふっつりと俗世を捨てて、悟りすましているというわけではありませんが、世を憂きものと思い、宇治山にしばらく住んでいるのでございます。「澄む」に「住む」を掛け、「宿」の縁語。「わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」（『古今集』巻十八雑下、喜撰法師）による。「喜撰が歌よりもなほ嘆く心のあるなり」（『細流抄』）

一八 仏道修行の方は、謙遜してご返歌申し上げなさったので。八の宮の返歌の上の句に「心すむとはなけれども」とあるのをいう。

[山に]の帰り入るにも、（薫）「かならず参りてもの習ひきこゆべく、[八宮邸に]何かとお教え頂くようにまづうちうちにも、けしき賜はりたまへ」ご意向を伺って下さいなどかたらひたまふ。お頼みになる

帝の御言伝にて、「あはれなる御住ひを、人伝に聞くこと」など聞こえたまうて、

（冷泉院）一三
世をいとふ心は山にかよへども
八重たつ雲を君や隔つる

一四 阿闍梨、この御使を先に立てて、かの宮に参りぬ。八の宮邸 一五 なのめなる際の、さるべき人の使だにまれなる山陰に、いとめづらしく、[八宮は]待ちよろこびたまうて、一六 所につけたる肴などして、それなりに趣向を凝らしたもてなしをなさるかたにもてはやしたまふ。御返し、

（八宮）一七
あと絶えて心すむとはなけれども
世をうぢ山に宿をこそかれ

一八 聖のかたをば卑下して聞こえなしたまへれば、今も世間に恨みが残っているなほ世に恨み残りけると、いとほしく御覧ず。のだと[院は]気の毒にお思いになる

一 仏道帰依の心。
二 法文などの真意も会得したい願いは、幼い頃から強く持っていながら、余儀なく世間に交わっているうちに。「法文」は、経、論、釈などの、仏法を説いた文章をいう。以下「頼みきこえさする」まで、薫の伝言。前頁に「……まづうちうちにも、けしき賜はりたまへ」と依頼されていた趣を詳しく伝えるのである。
三 大体が大したこともない身なので、世の中を厭い顔に過しても、（世間に迷惑をかけるわけでもなし）気兼ねすることもないのですが。
四 （八の宮の）なかなか真似のできないお暮しぶりを、人伝に承りましてから。阿闍梨から伝え聞いたことをいう。
五 わが身に不幸がある時、何につけこの世は思い通りにならないのだと思い知るきっかけがあってはじめて、道心も起るものだろうに。
六 まことにそのように、後世のことまで、あれこれと考えていらっしゃるらしいとは、めずらしいことだ。
七 私は、こうなる因縁だったのか、ただこの世を厭離せよと、わざわざ仏などが勧め仕向けて下さるような有様で。立坊争いに敗れて以来、次々とつらい悲しい目にあったことをいう。

阿闍梨、薫のことを伝える

阿闍梨、中将の、道心深げにものしたまふなど、語りきこえて、「法文などの心得まほしき心ざしなむ、いはけなかりし齢より深く思ひながら、えさらず世にあり経るほど、公私に暇なく明け暮らし、わざととぢ籠りて習ひ読み、おほかたはかばかしくもあらぬ身にしも、世の中を背き顔ならむも、憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみ、まぎらはしくてなむ過ぐし来るを、いとありがたき御ありさまをうけたまはり伝へしより、かく心にかけてなむ頼みきこえさする、など、ねむごろに申したまひし」など語りきこゆ。

（道心深いようにお見受けすることなど〔八宮に〕）（ことさら引き籠って〔経文を〕）（何となく）（〔仏道修行も〕怠り〔俗事に〕取りまぎれて日を送ってきたのに）（かく申すように心からお頼り申し上げて）（〔八宮に〕）

宮、「世の中をかりそめのことと思ひ取り、いとはしき心のつきそむることも、わが身に愁へある時、なべての世もうらめしう思ひ知るはじめありてなむ、道心も起こるわざなめるを、年若く世の中思ふにかなひ、何ごとも飽かぬことはあらじとおぼゆる身のほどに、さはた後の世をさへ、たどり知りたまふらむがありがたさ。ここには、さべきにや、ただ厭ひ離れよと、ことさらに仏などのすすめお

（八の宮）（この世を仮の姿のものと悟って）（厭世の思いがきざしはじめる）（〔薫は〕）（不足に思うことはあるまいと思われる境遇で）

八 今までもこれから先も、私には何一つ会得したところがないと痛感されるのに、（薫は）かえって気がひけるような仏法の友でいらっしゃるようだ。

九 なるほど、話に聞いたよりもわびしいお暮しぶりで。以下、八の宮邸を訪れた薫の眼を通し、心中の思いに寄せて書く。

薫、宇治を訪う

一〇 全くかりそめの草の庵である上に、八の宮のお人柄を思うせいか、万事が簡素に思われる。「草の庵」は歌語。「草庵」をやわらげて言ったもの。

一一 同じ山里といっても。「山里」は、山荘。当時貴族が、東山、北山、西山など京周辺に設けることが多かった。

一二 （八の宮のお邸では）どうどうたる流れの音や波の響きに、世の憂さを忘れて、夜など、のんびりと夢を結ぶこともできそうにないほど、川風がはげしく吹きまくっている。「宇治川の波の枕に夢さめて夜の橋姫いや寝ざるらむ」（『源氏釈』所引。出典未詳）

一三 仏間との間には、襖障子だけを隔てにして、（姫君たちは）お住まいらしい。

もむけたまふやうなるありさまにて、おのづからこそ、静かな道世の願いやおうなく静かなる思ひかなひゆけど、残り少なきここちするに、もはや余命も少ない気がする昨今はかばかしくもあらでろくに悟りも開かずに終ってしまいそうに思われるので過ぎぬべかめるを、来し方行く末、さらに得たるところなく思ひ知らるるを、かへりては心はづかしげなる法の友にこそはものしたまふなれ」などのたまひて、かたみに御消息通ひ、みづからもまうでたまふ。

九 げに聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまよりはじめて、

一〇 いと仮なる草の庵に、思ひなし、ことそぎたり。

一一 同じき山里といへど、さるかたにて心とまりぬべく、のどやかなるもあるを、

一二 いと荒ましき水の音波の響きに、もの忘れうちし、夜など、心解けて夢をだに見るべきほどもなげに、すごく吹き払ひたり。聖だちたる御ためにかかるしもこそ、心とまらぬもよほしならめ、女君たち、何

お住まいになっているご様子をはじめとして

そんな山荘なりに好ましく思われるように

のんびりとした所もあるのに

聖めいたお方にとって

こんな厳しい環境こそ

俗世の執着を絶つ促しになろうが

薫自身も［宇治に］

互いに

な気持で毎日を送っていられることだろう

女らしく優しいところは少ないので

お住まいの有様である

はないか

くや、とおしはからるる御ありさまなり。

一三 仏の御隔てに、障子ばか

一 色めいた気のある男なら、そんなそぶりを見せて近づき、どんなお方かお付合いしてみたいと、やはり気がかりで心惹かれもするご様子である。「さすがに」は、前に「世の常の女しくなよびたるかたは遠くや、とおしはからるる」とあったのを受ける。

二 事のいきさつにそぐわないであろう。

三 俗の身ながら、山里で修行に励まれる深い悟りの心境や経典などを。「優婆塞」は、僧にならず仏道を修行する男。「山の深き」と「深き心」を掛ける。「優婆塞が行ふ山の椎が本あなそばそばし床にしあらねば」（『宇津保物語』嵯峨院）

四 聖といった人。山林に隠遁して苦行を積む、修行本位の僧をいう。

五 仏典の学問にすぐれた僧。学僧である。

六 あまりに堅苦しく、親しみにくい高徳の僧都、僧正といった身分の僧は。「僧都」「僧正」は、ともに朝廷から賜る僧官。

七 世間的に多忙で、生真面目だし。朝廷をはじめ、名門貴紳の法要に招請され、多忙である。

八 かといって、しかるべき身分でもない、仏の忠実なお弟子といった者で。以下、貴族らしく、身分の低い僧を嫌悪する気持。

薫、八の宮に傾倒する

りを隔ててぞおはすべかめる。好き心あらむ人は、けしきばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかがと、ゆかしうもある御けはひなり。されど、さるかたを思ひ離るる願ひに、山深く尋ねきこえたる本意なく、すきずきしきなほざりごとをうち出でざればまむも、ことに違ひてや、など思ひ返して、宮の御ありさまのいとあはれなるを、ねむごろにとぶらひきこえたまひ、たびたび参りたまひつつ、思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など、わざとさかしげにはあらで、いとよくのたまひ知らす。聖だつ人、才ある法師などは、世に多かれど、あまりこはごはしう、気遠げなる宿徳の僧都、僧正の際は、世に暇なくきすくにて、ものの心を問ひあらはさむも、こととしおぼえたまふ。またその人ならぬ仏の御弟子の、忌むことを保つばかりの尊さはあれど、けはひいやしく言葉たみて、こちなげにもの馴れたる、いとものしくて、昼は公事に暇なくなどしつつ、しめやかなる宵のほど、気近

そんな俗世のことを断ち切ろうという願いで
あだっぽいその場かぎりの調子のよいことを言って戯れた
八の宮
反省して
りするのも
〔八宮を〕
心をこめてお見舞い申し上げなさり
おいたわしいのを
〔薫が〕望んでいた通り
〔八宮は〕大層よく分るように教えて下さる
特に知ったかぶりをせずに
経文の意味を尋ねて明らかにするのも
大げさな感じがなさる
戒律を保っているというだけの有難味はあるけれども
人柄が下品で言葉づかいに訛があって
無作法で馴れ馴れしい連中は
大層不愉快で
政務多忙などだったりで
もの静かな

九（公務多忙で）暇がなかったりして、（宇治を訪れずに）日が経つ時は。

一〇 薫、二十歳から二十二歳までの年月。

一一 八の宮が、四季に割り当ててなさるお念仏。「念仏」は、僧に阿弥陀経を読誦させ、念仏させること。ここは、秋の念仏。すぐ後に「七日のほど行ひたまふ」とある。

一二 この宇治川のほとりのお邸では。

一三 網代の波音も、この頃は、とりわけやかましくて静かでないからということで。「山城国近江国氷魚網代各一処。其氷魚始二九月一迄二十二月卅日一貢之」（『延喜式』三十九、内膳司）。（二六三頁注一三参照）

冷泉院も親交、三年の時が経つ

三年目の晩秋、薫、宇治を訪う

き御枕上などに召し入れかたらひたまふにも、いとさすがにものむつかしうなどのみあるを、いとあてに心苦しきさまして、のたまひ出づる言の葉も、同じ仏の御教へをも、耳近きたとひにひきまぜ、いとこよなく深き御悟りにはあらねど、よき人は、ものの心を得たまふかたの、いとことにものしたまひければ、やうやう見馴れたてまつりたまふたびごとに、常に見たてまつらまほしうて、暇なくなどしてほど経る時は、恋しくおぼえたまふ。

（くつろいだご寝所などに呼び寄せてお話しなさるにも どうにもやはりむさくるしくてならぬといった感じがするのに〔八宮は〕大層上品でいたいたしい感じで お口になさる 言葉一つにしても 身近な喩えをまぜて説かれ 高貴のお方は 物事の道理を会得なさるといった面で まことに格別すぐれていらっしゃるものなので だんだん何度も親しくお会い 申されるたびごとに いつもお会い申し上げたくなって）

薫

この君の、〔八宮を〕かく尊がりきこえたまへれば、冷泉院よりも、常に御消息などありて、長年年ごろ音にもをさをさ聞こえたまはず、さびしげなりし御住処、やうやう人目見る時々あり。

（長年 人の噂にもめったにおのぼりにならず だんだん来訪の人影を見る折々がある）

薫

をりふしにとぶらひきこえたまふことといかめしう、この君も、まづさるべきことにつけつつ、をかしきやうにも、まめやかなるさまにも、心寄せつかうまつりたまふこと、三年ばかりになりぬ。

（〔八宮を〕 〔八宮を〕 何かの事につけて〔院が〕お見舞い申されることも大したものので しかるべき機会にかこつけては 風雅なお楽しみのためにも 日々のお暮しに役立つようにも 心を配りど用をお勧めなさることが）

秋の末つかた、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は、網

（一一 一二 一三）

代の波も、このころはいとど耳かしかましく静かならぬを、とて、

一 かの阿闍梨の住む寺の堂にうつろひたまひて、七日のほど行ひたまふ。姫君たちは、いと心細く、つれづれまさりてながめたまひけるころ、中将の君、久しく参らぬかなと、思ひ出できこえたまひけるままに、有明の月の、まだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなくて、やつれておはしけり。川のこなたなれば、船などもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもてゆくままに、霧りふたがりて、道も見えぬ繁き野中を分けたまふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるも、いと冷やかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。かかるありきなども、をさをさならひたまはぬここちに、心細くをかしくおぼされけり。

（八宮は）お移りになって　お勧めをなさる　所在なさもひとしおで物思いに沈んでいらっしゃる頃　人数なども少なくて　目立たぬようにして行かれた　夜明けに程遠くさし出る頃にご出発なさって　誰にも知らさず　荒々しい風が吹きつのるので　我から求めて来た道に　このようなお忍びの外出なども　めったに日頃なさらぬお気持には　心細くものの珍しくもお思いになるのだった

（薫）六 山おろしにたへぬ木の葉の露よりも
あやなくもろきわが涙かな

一 宇治山の阿闍梨。

二 陰暦二十日過ぎの月。夜が明けても空に残っている。ここは九月下旬の月である。

三 （八の宮のお邸は）宇治川のこちら岸にあるので、船など乗物の面倒もなくて。

四 牛車では目立つので、馬で行くのである。

五 （山間に）入ってゆくにつれて、一面に霧が立ちこめて、道も見えぬ草深い野中を分けて行かれると。「野中」は歌語。明融本の表記は「しけ木のなか」とあり、「茂木の中」と読んだものと思われる。

六 山から吹きおろす風に耐えきれず落ちる木の葉の露よりも、なぜかむやみにこぼれる私の涙であることよ。

七 随身に先払いの声も立てさせなさらない。「随身」は、朝廷から護衛として賜る近衛府の官人。薫は、中将だから、四人賜る。

八 「柴」は、山野に自生する雑木。「籬」は、家の垣根。山家の家々の垣根の間を行くさま。

九 どことも知れず、小さな水の流れが幾筋も流れているのを、踏みつけてゆく馬の足音も。「駒」は歌語。

一〇 紛れもない御身の匂いが。薫の芳香のこと、匂兵部卿の巻一七〇頁に見える。

琴の音に気付く

一一 一体どなたのお通りかと、不審に思う寝覚めの家々があるのだった。「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも」（『古今集』巻四秋上、素性）による。「寝覚め」は、夜半物思いに目をさましていること。

一二 何の楽器の音とも。「こと」は、絃楽器の総称。

一三 七絃の琴。中国渡来の楽器。聖人の楽器として重んじられた。源氏はその名手であったこと、五巻若菜下一六五頁注一五参照。

一四 雅楽の六調子の一。黄鐘（西洋音階のaに近い）を主音とする律旋音階。

一五 調子を整えるための短い曲。各調子に一つずつある。

一六 撥の裏で絃を逆にはねること。すくい撥。

一七 十三絃の琴。

宿直人、薫を案内する

一八 宿直の者といったふうの男の。

山家の者が目をさましたりしては面倒だとて山がつのおどろくもうるさしとて、随身の音もせさせたまはず。柴の籬を分けつつ、そこはかとなき水の流れどもを踏みしだく駒の足音も、やはり静かにと気を付けていらっしゃるのになほ忍びてと用意したまへるに、隠れなき御匂ひぞ、風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける。

〔八宮邸に〕近くなるほどに、そのこととも聞き分かれぬものの音ども、いとしみじみさびしくすごげに聞こゆ。〔八宮が〕常にかく遊びたまふと聞くを、合奏していられるとついでなくて、その機会がなくて、宮の御琴の音の名高きも、聞けないでいることだえ聞かぬぞかし、よきをりなるべし、〔薫は〕よい折であろうと思ひつつ入りたまへば、琵琶の声の響きなりけり。黄鐘調に調べて、世の常の掻き合はせなれど、所からにや、場所柄のせいか耳馴れぬここちして、掻き返す撥の音も、すっきりとした感じで風情があるものきよげにおもしろし。箏の琴、あはれになまめいたる声して、たえだえ聞こゆ。優雅な音色で

〔邸内に〕

〔薫は〕しばらく聞いていたいので しばし聞かまほしきに、忍びたまへど、隠れていらしたが 初めて聞くような気がして 胸にしみ入るような とぎれとぎれに聞える ご来訪の気配をはっきりと聞きつけて、宿直人めく男、融通のきかなそうなのがなまかたくなしき、出で来たり。〔宿直人〕「しかしかなむ籠りおはします。御消息をこそ聞こえさせめ」と申す。〔薫〕何のお出での旨をお伝え申しましょうとれとれの事情

一 そのように日を限ってご修行していられる時に。前に「七日のほど行ひたまふ」（二七二頁）とあった。

二 こんなに霧に濡れながらわざわざ参上したのに、むなしく帰る嘆きを。

三 不細工な顔を綻ばせて。

四 今まで（お上手だとのお噂を）人伝に聞くばかりで、実際にお聞きしたいと思っていたお二方の合奏を、よい折だ、しばらく、ちょっと隠れて聞けるような物陰はないものだろうか。

五 どちらも弾くのをおやめになってしまっては。「ことやむ」は「事止む」。

六 宿直人のようなつまらぬ者にも。身分の低い者には、ものの値打ちは分らぬと考えられていた。

七 たとえ下部でも、京の方から参って、こちらのお邸に逗留している者がございます時には。

一しか限りある御行ひのほどを、（お邪魔申し上げるのはよろしくない）まぎらはしきこえさせむにあいなし。二かく濡れ濡れ参りて、いたづらに帰らむ愁へを、姫君の御方に聞こえて、（気の毒なとおっしゃって頂ければ気もすみましょう）あはれとのたまはせばなむなぐさむべき」とのたまへば、三みにくき顔うち笑みて、「（宿直人）申させはべらむ（さよう申しましょう）」とて立つを、（薫）「しばしや」と召し寄せて、「（薫）四年ごろ人伝にのみ聞きて、ゆかしく思ふ御琴の音どもを、うれしきをりかな、しばし、すこしたち隠れて聞くべきものの隈ありや。（折も考えず出過ぎてお側近く参上したりする間に）つきなくさし過ぎて参り寄らむほど、五皆ことやめたまひては、いと本意なからむ（残念だろう）」とのたまふ。（その薫の）御けはひ、顔容貌の、六さるなほなほしきここちにも、（大層すばらしく恐れ多く思われるので）いとめでたくかたじけなくおぼゆれば、（宿直人）「人聞かぬ時は、明け暮れかくなむ遊ばせど、（かように合奏なさいますが）下人にても、都のかたより参り、立ちまじる人はべる時は、音もせさせたまはず。（お立てになりません）大体がおほかた、（八宮は）かくて女たちおはしますことをば隠させたまひ、（姫君たちがいらっしゃるということをお隠しになり）なべての人に知らせたてまつらじと、（世間の人にはお知らせ申すまいとお思いでおっしゃりもなさるのです）おぼしのたまはするなり」と申せば、うち笑ひて、（薫）「（それはつまらないお隠し立てだ）あぢきなき御もの隠しなり。（そんなふうにお隠しのようだが）しか忍びたまふなれど、

八 世間では、世にも珍しい例として、お噂を聞き出して知っているらしいのに。山里に父宮とともに美しい姫君が住んでいられるということ。

九 (姫君たちが) こうしてお暮しのご様子が、不思議で、全く普通のこととはお見受けできないのだ。「おぼえたまふ」は、思われなさる。主語は、姫君たち。

一〇 これは困りました。とんでもないことをしたと、あとでお叱りがあるかもしれません。

一一 姫君たちのお部屋。薫など、来客を招じ入れる所とは反対の方角(東)にある趣。

一二 竹で作った透垣(間を少し透かした目隠しの垣)。

一三 西側の廊(建物と建物を繋ぐ渡殿)。姫君たちの居間から遠い場所である。

薫、姫君たちを垣間見る

一四 以下、薫の眼に映る光景。(図録五参照)

一五 ほっそりと糊気の落ちた衣裳の童女。十分に着重ねていないので、細く痩せて見える。

一六 (部屋の) 中にいる人の一人は。中の君。

一七 廂の間と簀子の間の柱。

一八 扇でなくったって、この撥ででも、月は呼び返せるのでした。撥の形が扇に似ているところから、戯れていう。扇で月を招く故事は明らかでないが、『紫明抄』以下に「月重山に隠る、扇を撃げて之に喩ふ」(『和漢朗詠集』巻下、仏事。出典を『摩訶止観』とする) を引く。

八 皆人ありがたき世の例に、聞き出づべかめるを」とのたまひて、「なほしるべせよ。われは、(薫)構わず案内せよ すきずきしき心などなき人ぞ。色めかしい心など持ち合せない人間だ かくておはしますらむ御ありさまの、あやしく、げになべてにおぼえたまはぬなり」とこまやかにのたまへば、「あなかしこ。心なきやうに、のちの聞こえやはべらむ」とて、(宿直人)一〇あなたの御前は、竹の透垣しこめて、皆隔てことなるを、教へ寄せたてまつれり。御供の人は、西の廊に呼びすゑて、この宿直人あひしらふ。

ねんごろに仰せになるので　すっかり別の囲いなのを　教えてお連れ申し上げた　立て廻らして　(薫の)　呼び入れて　接待する

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押しあけて見たまへば、(薫が中を)

一四 月をかしきほどに霧りわたれるをながめて、簾を短く巻き上げて、女房たち 人々ゐたり。簀子に、いと寒げに、一五身細く萎えばめる童女一人、同じさまなる大人などゐたり。内なる人一人、一六柱に少しゐ隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつつゐたるに、雲隠れたりつる月の、にはかにいと明くさし出でたれば、「扇ならで、(中君)一八これしても、月は招きつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくら

高く　女房　隠れて坐って　とても愛らしく

一 顔の色艶も美しい人らしい。月光で見る趣。
二 畳などに肘をついて、やや身体を横たえる姿勢か。大君である。
三 夕日を呼び返す撥のことは聞いていますが、（月とは）変った思いつきをなさるのね。「入る日を返す撥」の話は、『釈』に「還城楽、陵王を危ぶめんとするに、日の暮るれば、撥して日を手掻きたまふに、引き返されたる事也」と注する。舞楽「陵王」は、一名「没日還午楽」ともいい、入り日を午の刻に還す意で、最初の乱序一帖に、「日掻返手」という、桴を上げて空を仰ぐ動作がある。
四 違っていたかもしれませんけれど、これ（撥）も月に縁のないものではございません。琵琶の撥を納める所を隠月というからである。（図録七参照）
五 まるでよそながら想像していたのとは違って。前に「世の常の女しくなよびたるかたは遠くや、とおしはからるる御ありさまなり」（二六九頁）とあった。
六 きっとこれと同じようなことを言っているのは。山里に思いがけない美女を発見すること。『伊勢物語』初段、『宇津保物語』俊陰の巻などの例が残っている。
七 なるほど、人の心を打つような隠れたことがあればあるものなのだなと、どうやら姫君たちにひかれてゆきそうだ。「心移りぬべし」は、薫の心中の思いをそのまま地の文にしたもの。
八 また（さっきのように）月が出てほしいと。
九 前頁に「簾を短く巻き上げて」とあった。

うたげにに（一）ほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上に傾きかかりて、「入る日を返す撥こそありけれ、さま異にも思ひ及びたまふ御心かな」（大君）（三）とて、うち笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。「及ばずとも、（中君）（四）これも月に離るるものかは」など、はかなきことを、うち解けのたまひかはしたるけはひども、（五）さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、（六）かならずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむと、憎くおしはからるるを、（七）にあはれなるものの隈ありぬべき世なりけりと、心移りぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。（八）また月さし出でなむとおぼすほどに、奥のかたより、「人おはす」（女房）と告げきこゆる人やあらむ、簾（九）おろして皆入りぬ。おどろき顔にはあらず、なごやかにもてなして、やをら隠れぬるけはひども、衣（一〇）の音もせず、いとなよよかに心苦しくて、いみじうあてにみやびかなるを、あはれと思ひたま

て
にっこりした感じは
また一段と落着きがあり優雅な風情で
とりとめもない
ある
くつろいで言い合っていらっしゃるお二人の様子は
い冗談を
とてもいじらしやさしみがありしゃれている
読み上げるのを
まさかそんなことはなかったろうと
嘘に違いないと想像されるのに
[姫君たちのお姿が]はっきり見えそうにもない
お知らせ申す者があるのか
あわてたふうではなく
ゆったりとおだやかな
とてもやわらかでお
物腰で
そっと身を隠した二人の様子は
[しかも]大層気高くて優雅でいられるのを
いたわしい感じで
[薫は]いじらしいと

一〇 衣擦れの音もせず。着古して糊気が落ちた衣裳。
一一 そっと（透垣の戸口から）出て。主語は薫。
一二 京の邸に、帰りのお車（牛車）を引いて来るよう、使者を走らせた。往路は微行で、馬を用いた（二七二頁）。
一三 さきほどの侍。宿直人のこと。「侍」は、貴人の側近に控えてご用を待ち、警護に任ずる者。
一四 かえってうれしいことに（姫君のお琴も聞けて）、長年の願いもいささか叶えられた気がする。

薫、姫君に挨拶

一五 不思議に、いい匂いのする風が吹いてきたのを。薫の立居につけて匂う追風。前にも「隠れなき御匂ひぞ、風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける」（二七三頁）とあった。
一六 心も乱れて（どなたも）恥ずかしがっていらっしゃる。「おはさうず」は、竹河二一五頁注一六参照。
一七 薫のご挨拶などを取次ぐ人も、こんなことにはいかにも不馴れな女房らしいので。
一八 さきほどの御簾の前。さきに短く巻き上げてあった簾の前の簀子縁に、遠慮なく進み出る。意のあるところを直接話そうというつもり。
一九 田舎びた若女房たち。
二〇 お座布団。（三巻図録一一参照）
二一 この御簾の前では、落着かない思いがいたします。御簾の中（廂の間）に入れて頂きたいという含み。

ふ。

一二 やをら出でて、一三 京に、御車率て参るべく、人走らせつ。一三 ありつる侍に、「（薫）運悪くお留守に参りましたが をりあしく参りはべりにけれど、一四 なかなかうれしく、思ふことすこしなぐさめてなむ。かくさぶらふよし聞こえよ。いたう濡れにたるかことも聞こえさせむかし」とのたまへば、参りて聞こゆ。かく見えやしぬらむとはおぼしも寄らで、うちとけたりつることどもを、聞きやしたまひつらむと、いといみじくはづかし。一五 あやしく、かうばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひかけぬほどなれば、おどろかざりける心おそさよと、一六 心もまどひて恥ぢおはさうず。一七 御消息など伝ふる人も、いとうひうひしき人なめるを、一八 をりからにこそよろづのことも、とおぼいて、まだ霧のまぎれなれば、一八 ありつる御簾の前に歩み出でて、一九 ついゐたまふ。山里びたる若人どもは、さいらへむ言の葉もおぼえで、二〇 御茵さし出づるさまもただただしげなり。（薫）二一 「この御簾の前には、はしたなくはべりけり。うちつけに浅き

（姫君たちは）姿かたちまで見られただろうかとはお考えも及ばず　気を許して弾いていた二人の琴の音を　お聞きになったのではないかと　こうして参上している旨お伝えせよ　ひどく霧に濡れたお恨みもお聞きいただこう　とてもひどく気がひける　予想もしない折なので　気づかなかったとはうかつなことよと　時と場合に応じて何ごとも臨機応変に　まだ霧のためよく見えないので　（薫は）　お相手しようにも言葉も思いつかず　膝まずかれる　おぼつかない手つきであり　その場限りのいい加減な

一 このようにわざわざ参上することもむつかしい険しい山路と存じますものを、これは変ったおあしらいです。「かけ路」は、もと桟道の意。歌語。

二 こうして、露に濡れ濡れ何度も参りましたなら。「度」に「旅」を響かす。

大君、応対する

三 「若き人々」に対する年輩の女房。奥の部屋で、もう寝ているのである。

四 何ごともわきまえのない私どもでございまして、知ったふうにもどうしてお答え申し上げられましょう。田舎住まいを卑下して、薫の「さりとも、御覧じ知るらむ……」という言葉に答えたもの。

五 身を引くようにしながら、かすかにおっしゃる。

六 実はよく知っていながら、人の嘆きを知らぬ顔をするのも、世間の習いとよく存じていますが。大君が「何ごとも思ひ知らぬありさまにて……」と言ったのに応じる言葉。

七 ほかならぬあなたが。

八 珍しく、何もかも悟りきっていらっしゃる父宮のお暮しなどに。「など」は、やわらげていう気持。

九 やはりこうして、心の中に秘めおくことができませぬ私の気持の深さ浅さのほどもお分り下さってこそ、こうして参上したかいもあると申せましょう。

心ばかりにては、気持だけでは一かくも尋ね参るまじき山のかけ路に思うたまふるを、さま異にこそ。二かく露けき度を重ねては、さりとも、いくら何でも御覧じ知るらむとなむ、心丈夫に存じます たのもしうはべる」と、いとまめやかにのたまふ。

若い女房たちで 若き人々の、すらすらと応対申し上げられそうな者もなく なだらかにもの聞こゆべきもなく、ぼうとして正体もない 消え返りかかやかしげなるもかたはらいたければ、三女ばらの奥深きを起こし出づるほど恥ずかしがっているのも見ていられないので、久しくなりて、改まった感じになるのもどうかと思って(大君)四わざとめいたるも苦しうて、「何ごとも思ひ知らぬありさまにて、知り顔にもいかがは聞こゆべく」と、いとよしあり、気品のある声で あてなる声して、五ひき入りながらほのかにのたまふ。「かつ知りながら、憂きを知らず顔なるも、世のさがと思うたまへ知るを、一所しも、あまりおぼめかせたまふらむこそ、残念に思われてなりま くちをしかるべけれ。八ありがたう、よろづを思ひすましたる御住ひなどに、お従い申 たぐひきこえさせたまふ御心のうちは、世間によくある色めいたことだとは 何ごとも涼しくおしはかられはべれば、九なほかく忍びあまりはべる深さ浅さのほども、分かせたまはむこそかひははべらめ。世の常のすきずきしき筋には、おぼしめし

一〇 そのようなこと（色恋沙汰）は、ことさら勧める人がありましても、言う通りにはならぬつもりの決心でございます。

一一 話し相手もないままに、一人さびしく日を送っております私の世間話なりと。暗に独身であるとほのめかす。

一二 聞いて頂けるお方と、頼りにさせて頂き。話の分る方として尊敬するという。最高の讃辞。

一三 そちらからお声をかけて頂くほど親しくさせて頂けましたら、どんなに満足なことでございましょう。

一四 先ほど起した老女房。後に、弁の君と呼ばれる老女。

一五 とんでもないお席の設けようですこと。「かたはらいたし」は、見るにたえない気持をいう。

一六 御簾の内（お部屋の中）にお入れすべきです。

一七 若い人々は、ものの程合いを知らないようでございますのが、困ります。薫を、軽く扱ったことを非難する。

一八 この世にお暮しなさる方々の数にも入らぬご様子で。八の宮の宇治での生活をいう。

老女、現れる

放つべくや。（ないと存じます）一〇 さやうのかたは、わざとすすむる人はべりとも、なびくべうもあらぬ心強さになむ。（何かのことでお聞き及びになっておられることもございましょう）おのづから聞こしめしあはするやうもはべりなむ。一一 つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も、聞こえさせ所に頼みきこえさせ、（一方こうして世間を離れて物思いをなさっていられることでしょうお気持の慰めには）またかく世離れてながめさせたまふらむ御心のまぎらはしには、一三 さしもおどろかさせたまふばかり聞こえ馴れはべらば、いかに思ふさまにはべらむ」など、（大君は）多くのたまへば、（次々と）つ（気詰りで）つましく、いらへにくくて、一四 起こしつる老人の出で来たるにぞゆづりたまふ。

（老女は）たとしへなくさし過ぐして、「あなかたじけなや。（まあもったいないこと）かたはらいたき御座のさまにもはべるかな。御簾のうちにこそ。一六 若き人々は、もののほど知らぬやうにはべるこそ」など、（遠慮会釈もなく言う声が年寄りじみているのも）したたかに言ふ声のさだすぎたるも、（気まりが悪いことと）かたはらいたく君たち（姫君たち）はおぼす。「いともあやしく、（老女）本当にどうしたことか世の中に住まひたまふ人の数にもあらぬ御ありさまにて、（お尋ね下さってもよい方々でも）さもありぬべき人々だに、（人並みにお心にかけてお見舞い下さる方も）とぶらひかずまへきこえたまふも、（お見かけ申さなくな）見え聞こえず

一 少しも遠慮せず物馴れた口をきくのも、何やら可愛げのない感じがするが。老女の、人の応対に馴れた態度を、いやだと思う。

二 感じはひどくひとかどの人らしく。御簾の中の気配は、いかにも上流階級の暮しぶりを身につけた感じ。

三 物に寄りかかって坐っていらっしゃるのを。廂と簀子を仕切る下長押に寄りかかっているのであろう。

四 簾に沿って立ててある几帳の端から見ると。

五 いかにもお忍びのお姿と見える狩衣姿が。「狩衣」は、貴族の鷹狩、旅行用の衣服。簡略で動きやすい仕立て（一巻図録一二参照）。

六 何と、この人間界以外の匂いかと不思議なほど、あたり一面に匂っている。極楽浄土の芳香はかくやと思う気持。

老女の昔語り

七 長の年月ずっと、念仏誦経の折にも、合せてお願いしてまいりましたお蔭でしょうか。念誦の折ごとに、薫に巡りあえるよう祈念してきた、という。

誰にも真似のできないご親切のほどは　物の数

のみなりまさりはべるめるに、ありがたき御心ざしのほどは、数に

何と申してよいか分らぬほどに存じますものを　〔姫君たちの〕

もはべらぬ心にも、あさましきまで思ひたまへはべるを、若き御こ

それをお口に出して申し上げにくいのでございましょう

ちにもおぼし知りながら、聞こえさせたまひにくきにやはべら

る一方のようでございますのに　にも入らぬ私ごときにも

む」と、いとつつみなくもの馴れたるも、なま憎きものから、けは

優雅な

ひいたう人めきて、よしある声なれば、「いとたづきも知らぬこと

（薫）まことに寄るべもない心細い思いでいましたのに

うれしいお方のお出ましですね　よくお分り下さっていた頼もしさは

ちしつるに、うれしき御けはひにこそ。何ごとも、げに思ひ知りた

この上もないことです

まひける頼み、こよなかりけり」とて、よりゐたまへるを、几帳の

明け方　次第に物の色目が見えてくる中に

そばより見れば、曙、やうやうものの色分かるるに、げにやつした

〔霧に〕

まへると見ゆる狩衣姿の、いと濡れしめりたるほど、うたてこの世

のほかの匂ひにやと、あやしきまで薫り満ちたり。

（老女）出過ぎ者とのお咎めもあろうかと存じまして控えております

この老人はうち泣きぬ。「さし過ぎたる罪もやと思うたまへ忍ぶ

悲しい昔のお話につきまして　どのような機会を捉えてお耳にお入れ申しますが

れど、あはれなる昔の御物語の、いかならむついでにうち出で聞こ

その一端なりともそれとなくお知り頂こうかと

えさせ、片端をもほのめかし知らしめさせむと、年ごろ念誦のつい

でにも、うちまぜ思うたまへわたるしるしにや、うれしきをりには

八 もう何度にもなりましたが。前にも「かく露けき度を重ねては」（二七八頁）と、姫君への挨拶に言っている。

九 あなたのように、人の世の哀れをご承知の方もなかったので。八の宮とは、経文を通じての学問的な問答がおもである。

一〇 露深い道中を、一人濡れ濡れ往き来していました。「露けき」に涙にくれる意をこめる。

一一 明日をも知れぬ命のこと、頼みにすべきでもございませんから。「人命不レ停過ぎ於山水一。今日雖レ存明亦難レ保。何縦レ心令レ住二悪法一」（『涅槃経』）

一二 こんな年寄りがこの世にいたとだけは、お知り置き下さいませ。以下、老女の自己紹介が始まる。

一三 薫の母女三の宮の御殿。（匂兵部卿一六三頁参照）

一四 女三の宮の乳母子（五巻若菜下一九九～二〇〇頁参照）。柏木と女三の宮の仲立ちをした。

一五 遙かに遠い田舎から、縁故を辿り辿り都に参りまして。のちの身の上話で、九州にいたことが分る（二九七頁）。

べるを、まだお話しもせぬうちからあふれる涙に目もくれまして とても申し上げられそうにご まだきにおぼほれはべる涙にくれて、えこそ聞こえさせず ざいません はべりけれ」と、身を震わせている様子は うちわななくけしき、真実ひどく何事か悲しく思っている様子 まことにいみじくもの悲しである と思へり。大体が おほかた、さだすぎたる人は、年とった人は 涙もろなるものとは見聞きたまへど、こんなに深く悲しんでいるのも いとかうしも思へるも、おかしいとお思いになって あやしうなりたまひて、（薫）こちらに「こちらに ここに、かく参ることは、たび重なりぬるを、かくあはれ知りたまへる人もなくてこそ、露けき道のほどに、独りのみそほちつれ。うれうれしい折と思いますので しきついでなめるを、何ごとも残さずお話し下さい 言な残いたまひそかし」とのたまへば、「かんな機会もめったにございませんでしょう かるついでしもはべらじかし。たとえございましても またはべりとも、夜の間のほど知らぬ命の、頼むべきにもはべらぬを、さらばただ、かかる古者世にはべりけりとばかり、知ろしめされはべらなむ。三条の宮にはべりし小侍従、亡くなってしまいましたということを ちらと耳にいたしましたが その昔 はかなくなりはべりにけると、ほの聞きはべりし、そのかみ、親しい友だちと存じておりました同じ年頃の人々も むつましう思うたまへし同じほどの人、多く亡せはべりにける 老いの世に 世の末に、はるかなる世界より伝はりまうで来て、この五年六年の このお邸にこうしてお仕えしております ご存じではございますまい ほどなむ、これにかくさぶらひはべる。知ろしめさじかし、このこ

一 藤大納言とかおっしゃるお方のお兄上で。「藤大納言」は、柏木の弟。紅梅の巻冒頭参照。「なる」は伝聞の意を示す。

二 柏木のこと。臨終近く権大納言に昇進したが（五巻柏木二八九頁）、死後も衛門の督と呼ばれている（同三一六頁）。

三 そのお方（柏木）のことと、お噂をお聞き伝えになることもございましょう。

四 （あなた様が）このようにご立派にご成人あそばしましたお年のほどを考えましても、まるで夢のようでございます。薫、今二十二歳。柏木の死は、薫誕生とほぼ同時であった。

五 柏木のこと。

六 老女は、自分の呼び名を名乗る。後文にも「弁の君」とある（二九四頁）。弁は、柏木の乳母子である。小侍従とは従姉妹（若菜下二〇〇頁参照）。

七 誰にも話さず、さりとてまたお胸の内に納めきれなかったことを。女三の宮思慕のこと。

八 （私を枕もとに）お呼び寄せになって、少しばかりご遺言なさることがございましたので。

九 ぜひお耳に入れねばならぬ訳のあることが一つございますが。

一〇 （私のおしゃべりを）聞いていられない、出過ぎたしわざだと。

柏木の乳母 ―― 弁
女三宮の乳母（侍従） ―― 小侍従

ろ藤大納言と申すなる御兄の、右衛門の督にてかくれたまひにしは、ものの（何かの折などに）ついでなどにや、かの御上とて聞こしめし伝ふることもはべらむ。過ぎたまひて（お亡くなりになって）、いくばくも隔たらぬここちのみしはべる、そのをりの悲しさも、まだ袖のかわくをりはべらず思うたまへらるるを、かくおとなしくならせたまひにける御齢のほども、夢のやうになむ。かの権大納言の御乳母にはべりしは、弁が母になむはべりし。朝夕につかうまつり馴れはべりしに、人数にもはべらぬ身なれど、人に知らせず、御心よりはた余りけることを、をりをりうちかすめのたまひしを、今は限りになりたまひにし御病の末つかたに、召し寄せて、いささかのたまひ置くことなむはべりしを、聞こしめすべきゆゑなむ一事はべれど、かばかり聞こえ出ではべるに、残りをとおぼしめす御心はべらば、のどかになむ聞こしめし果てはべるべき。若き人々も、かたはらいたく、さし過ぎたりと、つきじろひはべるもことわりになむ」とて、さすがにうち出でずなりぬ。

（柏木に）（私に）（お亡くなりあそばした方は）（涙に袖の乾くひまもございませぬように存じられますのに）（本当にいくらもたっていないような気持がいたしますが）（いよいよ最期とおなりあそばしました）（ご病気の末頃に）（ここまではっきり申し上げましたので）（いずれゆっくり何もかもお聞き頂くことにいたしまして）（お漏らしになったのですが）（お気持がございましたら）（終りまで聞きたいとお思いの）（女房たち）（口をつぐんでしまった）（目引き袖引きしましょう）（そのあとは）（ていますのももっともに存じられます）

一一 いぶかしくて、夢のお告げの話か、巫女のような者が神憑りになって勝手にしゃべり出したのかとばかり、世にも珍しくお思いになるが。

一二 切なく本当のことが知りたいといつも思っていらっしゃったことについて申し上げるので。（匂兵部卿一六七～八頁参照）

一三 いかにも今は人目も多いことだし。以下、薫の心中。弁の「若き人々も、かたはらいたく……」と言ったことを受ける。

一四 不作法なとお咎めを受けそうな有様ですので。微行の姿を姫君に対して失礼だという。

一五 この私の心の内からいたしますれば、残念に存じます。心にまかせるなら、もっといたいのだが、という挨拶。

一六 あの、八の宮がお籠りになっている寺の鐘の声。晨朝（六時の勤行の一つ）の梵鐘であろう。

一七 峰は幾重もの雲に隠され、宮を思いやるにも隔て多い気がして悲しいのに。「思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらむ峰の白雲」（『後撰集』巻十九、離別、橘直幹。『古今六帖』一、雲）

薫、大君と贈答

一八 夜もほのぼのと明けてゆきますが、帰る家路も見えず、わざわざやって参りました槇の尾山も、霧が立ちこめています。八の宮にも逢えず、都に帰る気もしない気持。「槇の尾山」は、宇治川右岸にある山。歌枕（図録二参照）。

一二 あやしく、夢語り、巫女やうのものの、問はず語りすらむやうに、めづらかにおぼさるれど、あはれにおぼつかなくおぼしわたることの筋を聞こゆれば、（もっと聞きたいとお思いになるが）いとおくゆかしけれど、一三 げに人目もしげし、さ（今出しぬけに昔話にかかわりあって）しぐみに古物語にかかづらひて、夜を明かし果てむも、こちごちし（ぶしつけなことと思われるので）かるべければ、（薫）「そこはかと思ひ分くことはなきものから、いにし（これといってはっきり思い当ることはないのですが）へのことと聞きはべるも、ものあはれになむ。さらば、かならずこ（過ぎ去った昔のことと聞きますにつけても）の残り聞かせたまへ。霧晴れゆかばはしたなかるべきやつれを、面（何だかしんみりとします）なく御覧じとがめられぬべきさまなれば、一五 思うたまふる心のほどよりは、くちをしうなむ」とて立ちたまふに、一六 かのおはします寺の鐘の声、かすかに聞こえて、霧いと深くたちわたれり。

一七 峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに、なほこの姫君たちの（気まりの悪いようなみすぼらしい姿を）御心のうちども心苦しう、何ごとをおぼし残すらむ、かくいと奥ま（さぞ物思いの限りを尽していられようそれにつけても姫君たちはどうして人の応対にも引っ込みがちでいらっしゃるのも無理はない）りたまへるもことわりぞかし、などおぼゆ。

一八 （薫）「あさぼらけ家路も見えず尋ね来し

槇の尾山は霧こめてけり

一 心細くもはべるかな」と、立ち返りやすらひたまへるさまを、都の人の目馴れたるだに、なほいとことに思ひきこえたるを、まいていかがはめづらしう見きこえざらむ。御返り聞こえ伝へにくげに思ひたれば、例の、いとつつましげにて、

（大君）四 雲のゐる峰のかけ路を秋霧の

いとど隔つるころにもあるかな

すこしうち嘆いたまへるけしき、浅からずあはれなり。

五 何ばかりをかしきふしは見えぬあたりなれど、六 げに心苦しきこと多かるにも、明うなりゆけば、七 さすがにひた面なるここちして、

（薫）八「なかなかなるほどにうけたまはりさしつること多かる残りは、今すこし面馴れてこそは、怨みきこえさすべかめれ。九 さるは、かく世の人めいてもてなしたまふべくは、思はずに、ものおぼし分かざりけりと、うらめしうなむ」とて、宿直人がしつらひたる西面におは

一 一人どうしようもなく霧に立ちこめられた心細さを訴え、姫君に応答を求める。

二 ましてこの山里の女房たちが、どうしてまたとない美しさとお思い申さぬことがあろう。それで気後れして、返歌の取次ぎもできないのである。

三 また前のように、（姫君が）ひどく遠慮がちに。

四 いつも雲のかかっている峰の嶮路を秋霧がたちこめて、父君との間をいよいよ隔てるのでございます。「峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに」とあった薫の思いと、期せずして同じ心を詠む。

五 何ほどの風情も見られぬお邸ではあるが。山里の情趣にふさわしい優雅な応対をする女房もいないからである。

六 いかにも姫君たちがおいたわしく思われることが多いにつけても（もっといたいと思うが）。前に「なほこの姫君たちの御心のうちども心苦しう」とあったのを受ける。

七 いくら何でもあらわな感じがして恥ずかしく。「ひた面」は、面と向うこと。

八 なまじお言葉を頂いたために、かえって思いはつのり、途中までしか伺えなかったことの多い残りは。

九 ですけれど、（私を）こんなふうに世間の男並みにお扱いになるおつもりでしたら。世の常の色好みが言い寄っているのだとお考えでしたら、の意。

一〇 宿直人が準備した西側のお部屋。前にも「御供の人は、西の廊に呼びすゑて、この宿直人あひしらふ」

（二七五頁）とあった。

一一 網代は、人が出て騒いでいるようです。氷魚を獲っているのである。

一二 様子をよく知っていて言う。

一三 小さな船に何艘か、柴を刈って積み。以下、薫の眼前の景、その思い。

一四 氷魚を獲る漁師といい、柴舟の船人といい、おのおのが。

一五 自分は水に浮くような心細い身の上ではなく、しっかりと玉の台に安泰な境遇と思ってよいこの世であろうか。「玉の台」は、「玉台」を和らげた語。立派な家。

一六 姫君たちのおさびしいお心の内はいかばかりかとお察しして、浅瀬を漕ぐ棹の雫（涙）に袖を濡らしております。「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）。「宇治の橋姫」は、宇治橋の守護神。ここでは、姫君によそえている。巻名の出所となった歌。

一七 紙にたきしめた香など、並々のものでは気がひけるお相手ではあるが。

一八 こんな場合のご返歌は、早いのがよいとお思いになって。

一九 棹さして何度も行き来する宇治川の渡し守は、朝夕雫に袖を濡らして、すっかり朽ちさせていることでしょう。ここにいつも住む私の袖も涙で朽ち果てることでしょう。「川をさ」は、渡し守。

して、物思いに沈まれる（供人）ながめたまふ。「網代は人騒がしげなり。されど氷魚も寄らぬにやあらむ、威勢のあがらぬ様子です すさまじげなるけしきなり」と、御供の人々見知りて言ふ。あやしき船どもに柴刈り積み、おのおの何となき世のいとこの世のなりわいのためになみどもに行きかふさまどもの、危なっかしい急流に身を浮べているのは はかなき水の上に浮かびたる、誰も皆考えてみれば同じようなこの世の無常の姿である も思へば同じことなる世の常なさなり、われは浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かは、と思ひ続けらる。

硯召して、姫君の御方に あなたに聞こえたまふ。

（薫）「橋姫の心をくみて高瀬さす
棹のしづくに袖ぞ濡れぬる

さぞ物思いに沈んでいられましょう ながめたまふらむかし」とて、宿直人に持たせたまへり。〔宿直人は〕いと寒げに、鳥肌立った顔をして いらぎたる顔して持て参る。御返り、紙の香など、おぼろけならむははづかしげなるを、疾きをこそかかるをりには、とて、

（大君）「さしかへる宇治の川をさ朝夕の
しづくや袖を朽し果つらむ

一 涙で身も浮くばかりでございます。「浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流るると聞かば頼まむ」（『古今集』巻十三恋三、業平朝臣。『伊勢物語』百七段）によるか。『釈』以下、古注は「さす棹の雫に濡るる袖ゆゑに身さへ浮きても思ほゆるかな」（出典未詳）をあげる。

二 お車を持ってまいりました。さきに「御車率て参るべく、人走らせつ」（二七七頁）とあった、その車。

三 八の宮が（お寺から）お帰りになる頃に。七日間の日を決めての山籠りである。

四 霧に濡れたお召し物は、皆この宿直人に脱ぎ与えなさって。前に「狩衣姿」（二八〇頁）とあった。身につけている衣服を脱ぎ与えるのが、最高の褒美とされた。垣間見の手引きを多としてであろう。

五 やはりなかなか厭い捨てにくいこの世なのだと、気弱く思い知られる。薫の気持に即した書き方。

六 恋文は、種々の色に染めた薄様（鳥の子紙の薄いもの）に書く。

七 はじめてお目通りしましたのに失礼かと、むやみにさし控えまして。以下、薫の文面。

八 その折、ちょっと申し上げておきましたように、今後は、お前に参上することも気軽にお許し下さいますように。去り際に「かく世の人めいてもてなしたまふべくは……うらめしうなむ」（二八四頁）と言ったのを受ける。

薫、大君に文、人々に物を贈る

一身さへ浮きて」と、いとをかしげに書きたまへり。まほにめやすく（申し分なく感じのいい）（趣深く）ものしたまひけりと、心とまりぬれど、「御車率て参りぬ」と、（大君に）（供人）人々騒がしきこゆれば、宿直人ばかりを召し寄せて、「帰りわたらせたまはむほどに、かならず参るべし」などのたまふ。濡れたる御衣どもは、皆この人に脱ぎかけたまひて、取りにつかはしつる御直衣にたてまつりかへつ。（（薫）（お帰りを）やかましく申すので）（京に）（お召し換えになった）

老人の物語、心にかかりておぼし出でらる。思ひしよりはこよなくまさりて、をかしかりつる御けはひども、面影に添ひて、なほ思ひ離れがたき世なりけりと、心弱く思ひ知らる。御文たてまつりたまふ。懸想だちてもあらず、白き色紙の厚肥えたるに、筆ひきつくろひ選りて、墨つき見所ありて書きたまふ。（（弁の話が）（想像していたよりはずっとすばらしくて）（風情のあったお二人の姫君のご様子が）（目先にちらついて）（姫君に）（恋文めいても書かず）（見事にお書きになる）

うちつけなるさまにやと、あいなくとどめはべりて、残り多かるも苦しきわざになむ。片端聞こえおきつるやうに、今よりは、御簾の前も心やすくおぼしゆるすべくなむ。御山籠り果てはべらむ（（ことの多いのもつろう存じます）（お話しし残した）（宮の）（お済みになります）

九 霧に閉ざされたあの時の、晴れぬ心の憂さも晴らしましょう。八の宮ご帰邸の頃、また伺いましょう、の意。
一〇 左近衛府の将監（三等官）。正六位上相当。薫は、宰相の中将。ただし右中将である。
一一 あの老女（弁）を尋ねて、手紙も渡すように。弁をしかるべき取次ぎと見ての指示。
一二 檜の薄板で作った折箱。中に仕切りがあり、料理を詰める。（二巻図録一二参照）
一三 八の宮の参籠している宇治山の阿闍梨の寺。
一四 今「秋の末つかた」である。（二七一頁参照）
一五 ああして籠っていらっしゃる間のお礼に布施をお与えにならねばなるまい。「布施」は、僧に施し与える物。
一六 その日は、ちょうど八の宮がお勤めを終って、山寺をお出になる朝であったので。薫の訪れたのは、五日目だったことになる。
一七 修行者。「山籠りの僧ども」である。
一八 僧尼が衣の上に、左肩から右腋へ掛けるもの。（図録六参照）
一九（薫が）脱ぎ与えられた、優に美しい狩衣のお召し物、えもいえぬ白綾のお下着の、なよやかで言いようもなくよい匂いなのを、そのまま身につけて。
二〇 以下「梅の花立ち寄るばかりありしより人のとがむる香にぞしみける」（『古今集』巻一春上、読人しらず）による措辞。

日数もうけたまはりおきて、いぶせかりし霧のまよひもはるけはべらむ。

などぞ、いとすくよかに書きたまへる。左近の将監なる人御使にて、（薫）「かの老人尋ねて、文も取らせよ」とのたまふ。宿直人が寒げにてさまよひしなど、あはれにおぼしやりて、大きなる檜破籠やうのもの、あまたせさせたまふ。

（とても生真面目に書いていらっしゃる）（うろついていたことなど）（かわいそうにお思いになって）（たくさん用意させなさる）

その翌日

またの日、かの御寺にもたてまつりたまふ。山籠りの僧ども、このころの嵐には、いと心細く苦しからむを、さておはしますほどの布施賜ふべからむ、とおぼしやりて、絹、綿など多かりけり。御行ひ果てて出でたまふ朝なりければ、行ひ人どもに、綿、絹、袈裟、衣など、すべて一領のほどづつ、ある限りの大徳たちに賜ふ。

（お見舞を）（お察しなさって）（つらいことだろうに）（一揃いほどずつ）（僧たち）

宿直人が、御脱ぎ捨ての、艶にいみじき狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣の、なよなよといひ知らず匂へるをうつし着て、身をはた、えかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人ごとに

（身は）（変えることのできぬものだから）（当人の）（会う人ごとに）

一 怪しまれたりほめられたりするのが、かえって身の置き所もない思いなのだった。動き廻るたびに衣服が匂うからである。

二 もう気味が悪いくらいまわりの者が気にする匂いを。

三 大層な薫の御移り香なので、洗い捨てることもできないとは、あんまりですこと。諧謔を弄した草子地。

薫、宇治の姫君のことを匂宮に語る

四 大君のお返事。帰京してからの薫の手紙への返事。

五 いや、なに。色恋めいたお扱いをなさるのも、かえってよくないだろう。薫との交際を父として認める意向。以下にその理由をいう。

六 世間の若者とは違うご性分のようだから、私の亡くなったあともよろしくなどと。死後の後見を依頼したことがあると言う。

七 いろいろのお見舞品が、山寺には過分であったお礼などをおっしゃったので。前出の絹、綿などの布施その他のこと。「岩屋」は、修行僧の籠る岩窟の意。

八 こんなふうに奥まった人知れぬ山里に住む女が、実は意外にいい女だったりしたらおもしろいだろうなどと。当時の貴公子の好んだアバンチュールである（一巻夕顔一二九頁注九参照）。

一 とがめられめでらるるなむ、なかなか所狭かりける。〔宿直人は〕心にまかせて、身をやすくもふるまはれず、二いとむくつけきまで人のおどろく匂ひを、失ひてばやと思へど、三所狭き人の御移り香にて、えもすすぎ捨てぬぞあまりなるや。

（わが身を気軽に振舞うこともならず）（無くしてしまいたいと）

薫 君は、四姫君の御返りこと、いとめやすく子めかしきを、をかしく見たまふ。宮にも、かく御消息ありきなど、人々聞こえさせ御覧ぜさすれば、「何かは。懸想だちてもてないたまはむも、なかなかうたてあらむ。例の若人に似ぬ御心ばへなめるを、亡からむのちもなど、一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」などのたまひけり。御みづからも、七さまざまの御とぶらひの、山の岩屋にあまりしことなどのたまへるに、まうでむとおぼして、三の宮の、八かやうに奥まりたらむあたりの、見まさりせむこそをかしかるべけれと、あらましごとにだにのたまふものを、聞こえはげまして、御心騒がしたてまつらむ、とおぼして、のどやかなる夕暮に参りた

（よく整っていて）（大らかなのを）（風情があると）（八の宮）（〔薫から〕）（女房たちがご報告申し上げお目にかけたところ（宮））（八の宮ご自身からも）（〔薫は〕宇治に伺おうと思われて）（匂宮）（そういうつもりで気にかけているのだろう）（せめて空想するだけのことにでもおっしゃるものを）（お話し申して羨ましがらせ）（お手隙ののんびりした夕方に）（気をもませてさし上げよう）

九　この間の明け方の垣間見の様子など。
一〇　思ったとおりだと、（薫は）お顔色を見てとって。
一一　それで、その来たという返事は、どうして持って来て下さらなかったのか。薫の話は、「姫君の御返りこと、いとめやすく子めかしき」くだりに及んだ趣。
一二　私だったら（見せるのに）。「まろ」は、親しい間柄で用いる一人称。
一三　（宮様こそ）ずいぶん大勢の女からの文をいろいろご覧になっていらっしゃるらしいのに、その一部分でも見せて下さらないではありませんか。このあたり、帚木の巻の雨夜の品定めの源氏と頭の中将の応酬を思わせる（一巻四七頁）。
一四　あの方々（宇治の姫君たち）は、私のようないかにも栄えない男が、独り占めにしていてよい人とも思えませんので。匂宮の気を引く言い方。
一五　人の知らぬ所で、いろいろとそういうことが多いようです。
一六　山里といった、人目につかぬ場所などに、何かとよくいるものようです。「山里」は、山荘（二六九頁注一一参照）。「はべべかめり」は「はべるべかるめり」の撥音便無表記の形。
一七　全く世間離れのした坊さんふうで、さぞみやびには欠けるであろうと。「こちごちし」は、無骨なさま。

まへり。

例の、さまざまなる御物語（世間話）、聞こえかはしたまふついでに、宇治の宮の御こと語り出でて、見し暁（九）のありさまなど、くはしく聞こえたまふに、宮、いと切（せち）にをかしとおぼいたり。（一〇）さればよと、御けしきを見て、いとど御心動きぬべく言ひ続けたまふ。「さてそのありけむ返りことは、などか見せたまはざりし。（一一）まろならましかば」と恨みたまふ。「さかし。（一二）いとさまざま御覧ずべかめる端（はし）をだに、見せさせたまはぬ。（一四）かのわたりは、かくいとも埋（むも）れたる身に、ひき籠めてやむべきけはひにもはべらねば、かならず御覧ぜさせばやと思ひたまふれど、いかでか尋ね寄らせたまふべき。かやすきほどこそ、好かまほしくは、いとよく好きぬべき世にはべりけれ。（一五）うち隠ろへつつ多かめるかな。さるかたに見所（みどころ）ありぬべき女の、もの思はしき、うち忍びたる住処（すみか）ども、（一六）山里めいたる隈（くま）などに、おのづからはべかめり。この聞こえさするわたりは、（一七）いと世づかぬ聖（ひじり）ざまにて、こ

（薫）さよう
いちずに興味をお持ちになる
ますますお気持が傾くように次から次へとお話しになる
（匂宮）
お目にかけたいと存じますが
どんなふうにして宇治までお行きになれましょう
気軽な身分の者こそ
いくらでも相手のいる世の中でございますよ
浮気がしたければ
それ相応に
魅力のありそうな女で
物思わしげなのが
人目を忍ぶ
今お話し申し上げている姫君たちは

一 ほのかな月の光で見た顔かたちが、その通りの器量なら。垣間見した時の姫君たちの器量のこと。

二 並々の女には心を動かしそうにない人が。薫のこと。

三 これは並み大抵の心入れではあるまいと、宇治の姫君たちへの興味は、際限もなく募ってゆかれた。

四 何かと制約のある高貴のご身分の窮屈さを、厭わしいまでに、苛立たしくお思いの様子なので。すぐ宇治へ行けない親王の身分を厭わしいまでにじれる気持。

五 いやいや、それはつまらぬことですよ。女のことにかかずらわるのは無意味だと、今度は、匂宮の気持に水をさす。

六 しばらくもこの世に執着を残すまいと存じております仔細のある身ですから。折あらば遁世したいと思う心境は、匂兵部卿一七三頁にも述べられていた。

七 我が心ながらも抑えかねる思いが起りましたなら、大いに本意に違うようなことも起りましょう。女に心をとめて、遁世も叶わぬことになれば大変と逃げる。

八 例によって物々しい修行僧ぶった口ぶり、果してどうなることやら、末を見届けたいものです。

九 あの老女。弁のこと。

ちごちしうぞあらむと、年ごろ思ひあなづりはべりて、耳をだにこ（その噂を耳にも）（今までずっと馬鹿にしていまして）そとどめはべらざりけれ。一ほのかなりし月影の見劣りせずは、まほ（満点と）（申し分のない）ならむはや。けはひありさまはた、さばかりならむをぞ、あらまほ（言えましょうよ）（人柄の感じや態度といったら）（あの方々のようなのを）しきほどとはおぼえはべるべき」など聞こえたまふ。（部に入れてよいと思われるのです）

果て果ては、〔匂宮は〕まめだちていとねたく、二おぼろけの人に心移るまじき人の、かく深く思へるを、三おろかならじと、ゆかしうおぼすこと（こうまで心ひかれているのを）（〔匂宮〕本気にとてもいまいましく）（〔匂宮〕今後とも重ねてよく様子を探って下さい）限りなくなりたまひぬ。「なほまたまたよくけしき見たまへ」と、人をすすめたまひて、四限りある御身のほどのよだけさを、いとはし（相手を激励なさって）きまで、心もとなしとおぼしたれば、をかしくて、「五いでや、よしなくぞはべる。六しばし世の中に心とどめじと思うたまふるやうある身にて、なほざりごともつつましうはべるを、七心ながらかなはぬ心（ほんの遊びの色恋沙汰も気がすすみませんのに）つきそめなば、おほきに思ひに違ふべきことなむはべるべき」と聞（〔薫は〕）こえたまへば、「いで、あなことことし。八例のおどろおどろしき聖言葉、見果ててしがな」とて笑ひたまふ。九心のうちには、かの古人（〔匂宮〕何と）（まあ大げさな）

一〇 ほのめかした話などが。柏木の遺言のこと。
一一（かねて心の奥にわだかまっていたことなので）いよいよ衝撃を受けて、しみじみと悲しいので。
一二 初冬である。
一三 網代を、この節ならご覧になるのがよろしゅうございましょう。氷魚の漁獲は、冬が最盛期で、見物の都人士も多かった。

十月、薫、再び宇治に行く

一四 何の、その蜉蝣とはかない命を競わんばかりに、網代などに寄り付こうぞ。「蜉蝣」は『和名抄』に「蜉」を訓み、「朝生暮死虫也」とある。カゲロウ科の昆虫で、成虫後の寿命短く、はかないものの喩え。「氷魚」を響かせ、「寄る」は、氷魚が網代に寄る意を下に含む。
一五（網代見物の方は）お省きになって。
一六 屋形、側面を網代（檜や竹の薄板を斜めまたは経緯に編んだもの）で張った牛車。
一七 固織りで、無紋の薄い平絹。普通は織模様がある。微行の服装。
一八 前々から読みさしになっていられたいろいろの経典の、意味深い箇所などを。
一九 宇治山の阿闍梨も、寺から下りて来てもらって。
二〇 この間の明け方のことが、自然と思い出されて。八の宮の留守に、姫君たちの合奏を聞いたこと。

薫、八の宮と合奏

一〇 ほのめかしし筋などの、心をときめかすことも
一一 いとどうちおどろかれてもののあはれなるに、美しいと聞く人のことも
をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり。

一二 十月になりて、五六日のほどに、〔薫は〕宇治へまうでたまふ。「（供人）網代をこそ、このころは御覧ぜめ」と、聞こゆる人々あれど、「（薫）何かその蜉蝣にあらそふ心にて、網代にも寄らむ」と、一五 そぎ捨てたまひて、例の、人目につかぬようにしてお出かけになる いと忍びやかにて出で立ちたまふ。軽らかに網代車にて、一六 身軽に 一七 縑の直衣指貫縫はせて、仕立てさせて ことさら微行らしいお姿である ことさらび着たまへり。宮、八の宮 待ちよろこびたまひて、山里にふさわしい 所につけたる御饗応など、趣向を凝らしたご用意をなさる をかしうしなしたまふ。暮れぬれば、大殿油近くて、一八 さきざき見さしたまへる文どもの深きなど、解釈などおさせになる 阿闍梨も請じおろして、義など言はせたまふ。うちもまどろまず、うとうとともなさらず 川風のいと荒ましきに、木の葉の散りかふ音、水の響きなど、あはれも通り越して あはれも過ぎて、もの恐ろしく心細き所のさまなり。この宇治の風情だ

二〇 明けがた近くなりぬらむと思ふほどに、ありししののめ思ひ出で

られて、琴の音のあはれなることのついでつくり出でて、「さきの（薫）この前伺つた時のたびの霧にまどはされはべりし曙に、いとめづらしきものの音、一声うけたまはりし残りなむ、なかなかにいといぶかしう、飽かず思うたまへらるる」など聞こえたまふ。「色をも香をも思ひ捨ててしのち、昔聞きしことも皆忘れてなむ」（八宮）三とのたまへど、人召して（女房）琴取り寄せて、「いとつきなくなりにたりや。四しるべするものの音につけてなむ、思ひ出でらるべかりける」とて、琵琶召して、客人にそ（薫）お勧めになるそのかしたまふ。取りて調べたまふ。「さらにほのかに聞きはべりし、同じものとも思うたまへられざりけり。御琴の響きからにやとこそ思うたまへしか」とて、心解けても搔きたてたまはず。「いで、あなさがなや。七しか御耳とまるばかりの手などは、何処よりかここまでは伝はり来む。あるまじき御ことなり」とて、琴搔きならしたまへる、いとあはれに心すごし。八かたへは、峰の松風のもてはやすなるべし。いとたどたどしげにおぼめきたまひて、心ばへある手ひ

一 琴の音が心にしみるといった話のきっかけをつくり出して。「琴」は、七絃の琴。八の宮は琴の名手である（二七三頁参照）。

二 まことにすばらしい楽の音を、ほんのちょっと承りましたが、そのためかえって一層もう少しうかがいたく、心残りでなりません。姫君たちの合奏を聞いたことを話題にして、間接に宮の琴を所望する。

三 この世のはなやかな色も香も、万事執着を絶ちましてからは。

四 先に立って弾いて下さるなら、そのあとについて、どうやら思い出すことができましょう。

五 とてもこの間ほんのわずかお聞きしましたのと、同じ楽器とも思われません。先晩の琵琶の音をほめ、自らを卑下する言葉。

六 あれは、楽器の響きがよいせいかと思っていましたが。うちとけて、やや冗談めかして言う。

七 そんなにお耳にとまるほどの弾き方など、どこからこの山里に伝わって来ましょう。楽器の奏法は、高貴の人々からの伝承をよしとした。八の宮の卑下の言葉。

八 一つには、峰の松風が興を添えているのであろう。場所柄にもよるのであろう、の意。「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをより調べそめけむ」（『拾遺集』巻八雑上、野の宮に斎宮の庚申しはべりけるに、松風入二夜琴一といふ題をよみはべりける　斎宮女御）による。

九 私のところで、どうしたわけか、時々かすかに鳴らす箏の音は、会得しているのかな、と思う時がありますが。箏を習うのは、中の君である（二六一頁参照）。なお明融本の表記「生のこと」。

一〇 川波ばかりが拍子を合せているのでしょう。「打ち合はす」は、打楽器で拍子を取ること。拍子を整える者もいないことをいう。

一一（そんなことですから）もとより、ちゃんと役に立つような拍子なども、とれまいと思います。「とまる」は、身に付く意。

一二 思いも寄らなかった、人に聞かせるつもりもない琴の音を、（薫が）お耳になさったというだけでも恥ずかしいのに、さぞ聞き苦しいことだろう。「だにあるものを」の「だにあり」は、きまった語法で、「あり」は、下の「かたはなり」を代行する。

一三 こんなことがあるにつけても。

一四 かように風変りな、山家育ちでさぞ気がきかぬ者のように人から思われて過す娘たちの境遇が、不本意なことよと、気のひける思いでいられる。姫君としてふさわしい社交性も身につけさせられなかった隠遁生活を悲しむ。

一五（娘がいることなど）世間の人にも知らすまいとして、隠して育ててきましたが。まして夫を持たせることなど考えもしなかった、という含意。

八の宮、薫に、死後のことを依頼する

どお弾きになっただけでおやめになった

とつばかりにてやめたまひつ。

（八宮）九

「このわたりに、おぼえなくて、をりをりほのめく箏の琴の音こそ、心得たるにや、と聞くをりはべれど、気をつけて聞いてやりもしないで心とどめてなどもあらで、久しくなってしまいました久しうなりにけりや。心にまかせて、〔自分たちの〕おのおの搔きならすべかめるは、それぞれ搔き鳴らしているらしい様子なのは一〇川波ばかりや打ち合はすらむ。論なう、ものの用にすばかりの拍子なども、とまらじとなむおぼえはべる」とて、

（八宮）

「搔き鳴らしたまへ」と、姫君たちの方にお勧め申されるがあなたに聞こえたまへど、一二思ひ寄らざりしひとりごとを聞きたまひけむだにあるものを、いとかたはならむ、尻込みなさっては とひき入りつつ、何やかやと逃げ口上を申し上げて終ってしまわれたようなので皆聞きたまはず。たびたびそのかしたまへど、〔薫は〕とても残念でならないとかく聞こえすさびてやみたまひぬめれば、一四いとくちをしうおぼゆ。

一三 そのついでにも、かくあやしう、世づかぬ思ひやりにて過ぐすありさまどもの、思ひのほかなることなど、はづかしうおぼいたり。

（八宮）一五

「人にだにいかで知らせじと、はぐくみ過ぐせど、今日明日とも知らぬ身の残り少なさに、さすがに行く末遠き人は、生い先の長い二人は落ちあふれて流浪するのさすがに行く末遠き人は、落ちあふれてさ

一 特別のお世話役めいた、しかとした形ではございませんでも。夫として面倒をみるのではなくても、の意。

二 一言でも、こうしてお約束申し上げたことは、違えぬ所存でございます。「聞こえさす」は八の宮に対する二重敬語。

薫、弁の物語を聞く

三 そんなことがあって、その明け方の、宮が勤行をなさる間に。後夜のお勤めであろう。一昼夜を六時（晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜）に分け、後夜は、午前二時頃から六時頃まで。

四 前に、自分からも名乗っていた。（二八二頁参照）

五 柏木のこと。以下、弁の語る内容を伝える体。

六 なるほど、他人の身の上話と思って聞いても、胸を打たれずにいられぬ昔話を。「古事」は、昔の出来事。柏木と女三の宮の、許されない恋愛事件。

すらへむこと、これのみこそ、げに世を離れむ際のほだしなりけれ」と、うちかたらひたまへば、心苦しう見たてまつりたまふ。

（薫）一「わざとの御後見だち、はかばかしき筋にははべらずとも、うとうとしからずおぼしめされむとなむ思うたまふる。しばしもながらへはべらむ命のほどは、一言も、かくうち出で聞こえさせてむさまを、違へはべるまじくなむ」など申したまへば、「いとうれしきこと」とおぼしのたまふ。

三 さて暁がたの、宮の御行ひしたまふほどに、かの老人召し出でて会ひたまへり。姫君の御後見にてさぶらはせたまふ、弁の君とぞいひける。年も六十にすこし足らぬほどなれど、みやびかにゆゑある

四 けはひして、ものなど聞こゆ。五 故権大納言の君の、世とともにもの

を思ひつつ、病づき、はかなくなりたまひにしありさまを聞こえ出

六 げによその人の上と聞かむだに、あはれなるべき古事どもを、まして年ごろおぼつかなくゆかしう、いかな

（八宮が）お世話役としてお仕えさせていらっしゃる
老女
心残りなのでした
（薫は）おいたわしいこととお思い申し上げなさる
胸の内をお話しになるので
他人行儀
たとえしばらくでも生き永らえて命のあります間は
（八宮）本当にうれしく思います
お気持をおっしゃる
お話など申し上げる
若くしてお亡くなりになってしまったいきさつをお話しし出して
深い様子で
都びとの風を失わずたしなみ
悩みくらして
長の年月気がかりで真相を知りたく思い
一体事の

七 容易ならぬこととも気恥ずかしいとも思われるこうしたことについて、やはりこのように知り伝える人は、ほかにいるでしょうか。柏木、女三の宮の仲を取り持ったりして、事情を知る女房のことをいう。自分や母宮のために、秘密の漏れるのを怖れる気持がある。

八 女三の宮の乳母子。弁とは従姉妹（二八二頁注六参照）。この二人が双方の取次ぎ役だった。

九 話しておりません。「まねぶ」は、自分の見聞きしたことを、ありのまま語ること。

一〇 夜となく昼となく、あのお方（柏木）のお側にお付き申していましたので。弁も、乳母子として四六時中側近に奉仕していたという。

一一 ただ私（弁）と小侍従を間の取次ぎとして、時たまのお文のやりとりもございました。あえて核心に迫らず、綺麗ごとにとどめた言い方。

柏木の遺言

（薫）「さても、かくその世の心知りたる人も残りたまへりけるを、めづらかにもはづかしうもおぼゆることの筋に、なほかく言ひ伝ふるたぐひやまたもあらむ。年ごろかけても聞き及ばざりける」とのたまへば、（弁）「小侍従と弁と放ちて、また知る人はべらじ。一言にても、また異人にうちまねびはべらず。かくものはかなく、数ならぬ身のほどにはべれど、夜昼かの御影につきたてまつりてはべりしかば、おのづからもののけしきをも見たてまつりそめしに、御心よりありておぼしける時々、ただ二人のなかになむ、たまさかの御消息の通ひもはべりし。かたはらいたければ、くはしく聞こえさせず。今はのとぢめになりたまひて、いささかのたまひ置くことのはべりし

起りはどうだったのかと　はっきりとお教え下さいと　今まで長の年月少しも私の耳に入らなかったことだ　思い　もかけぬ機会に耳にしたのであろうか　こうしてその当時の事情を知っている人もまだいらしたのだから　以外には　ほかに　〔私は〕こんな頼りない　つまらぬ分際の者で　はございますが　いつのまにか事のいきさつも存じ上げるようになりましたが　〔柏木が〕　失礼かと存じますので　詳しくは申し上げません　〔柏木が〕　ご遺言なさることがございましたのですが　もう最期という時におなりになって

を、かかる身には、置き所なく、いぶせく思うたまへわたりつつ、（気にしながら晴れぬ思いで過してまいりまして）いかにしてかは聞こしめし伝ふべきと、はかばかしからぬ念誦のついでにも思うたまへつるを、仏は世におはしましけりとなむ、思う（どのようにしてあなた様にお伝え申し上げればよいかと）（よくよく分りました）たまへ知りぬる。御覧ぜさすべきものもはべり。今は何かは、焼き捨ても捨てはべりなむ、かく朝夕の消えを知らぬ身の、うち捨てはべりなば、落ち散るやうもこそと、いとうしろめたく思うたまふれど、（もう仕方がない）（焼き捨ててしまいましょう）（こちらのお邸などにも）この宮わたりにも、時々ほのめかせたまふを待ち出でたてまつりてしは、すこしたのもしく、かかるをりもやと念じはべりつる力出でまうで来てなむ。さらにこれは、この世のことにもはべらじ」と、泣く泣くこまかに、生まれたまひけるほどのことも、よくおぼえつつ聞こゆ。（お姿をお見せになるのをようやくお見かけ申すようになりましたので）（少しは希望が湧きまして）（お目にかかれる折もあろうかと念願していました張合いも出てまいりましたのです）

（弁）「むなしうなりたまひし騒ぎに、母にはべりし人は、やがて病づきて、ほども経ずかくれはべりにしかば、いとど思うたまへしづみ、藤衣たち重ね、悲しきことを思うたまへしほどに、年ごろよからぬ（世を去ってしまいましたので）（〔私は〕いよいよがっかりいたしまして）（亡き人のことばかりしのんでおりましたうちに）（長年身分もよろしから）（思い出しては）（〔薫の〕）

一 私ごとき分際では、どうしてよいか分りませず。女房の身に余る遺言の重さ。薫出生の秘密である。

二 私などの、験しもおぼつかない念誦の折にも、祈っておりましたが。「念誦」は、念仏誦経のこと。

三 やはり仏様はこの世にいらっしゃるのだったと。願いを聞き届けて下さったと。

四 お目にかけるべきものもございます。後の文によれば、女三の宮から柏木への文と、柏木の遺文。

五 こんないつ死ぬか分らない身で、これ（文反故）を置いて死にましたなら、どこかで人目に触れてもいけないと、大層心配でございましたが。それで、一時は焼き捨てようともしたのである。

六 本当にこれは、この世だけのことでもございますまい。薫に会えたのも、前世の因縁によるものだろうという。

七 （柏木が）お亡くなりになりました事件で。

八 母でございました者。弁の母、すなわち柏木の乳母。

九 主人の喪に、母の喪を重ねる有様で。「藤衣」は、葛布で仕立てた粗末な衣服。転じて、喪服のこと。歌語。「裁ち重ね」も、歌語的表現。

弁の君の過去

一〇 私をだまして。「はかりこち」は「はかりこと」を活用させた語。

一一 「西の海」は、西海道（九州）のこと。「果て」とあるので、薩摩の国（鹿児島県）であろう。国守は、正六位下相当。中国である。

一二 京の様子もすっかり分らなくなり。

一三 まるで別世界に来るような気持で、再び都に上って参りましたのですが。

一四 父方の縁で、幼い時からお出入りする仔細がございましたので。女の童として時々お勤めに上がっていたのである。（椎本三三四頁参照）

一五 弘徽殿の女御。柏木の姉。柏木の乳母子としては、当然真先に庇護者として考えるべきところ。

一六 奥山に隠れた朽木のような身になっているのでございます。「形こそ深山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなむ」（『古今集』巻十七雑上、女どもの見て笑ひければ詠める　兼芸法師）による措辞。

一七 小侍従は、いつ亡くなりましたのでしょうか。前にも「三条の宮にはべりし小侍従、はかなくなりはべりにけると、ほの聞きはべりし」（一八一頁）とあった。

一八 侍従といった人は。小侍従のこと。以下、弁の問いに答えたもの。「侍従」とだけ呼んだ例は、五巻若菜下二〇五頁、一二一七頁、柏木二六九頁などに見える。

薫、形見の文反故を受け取る

人の心をつけたりけるが、一〇人をはかりこちて、一一西の海の果てまで取連れて行きましたのでりもてまかりにしかば、京のことさへ跡絶えて、その人もかしこにその夫もて亡せはべりにしのち、十年あまりにてなむ、十年余りたってから一三あらぬ世のここちして、まかり上りたりしを、この宮は、八の宮一四父方につけて、童より参り通ふゆゑはべりしかば、今はかう世にまじらふべきさまにもはべらぬを、一五冷泉院の女御殿の御方などこそは、昔よくお噂を承っておりましたところで昔聞き馴れたてまつりしわたりにて、参り寄るべくはべりしかど、はしたなくおぼえはべりて、顔出しもできませんでおすがりして参上すればよかったのですがきまり悪く存じられまして
えさし出ではべらで、一六深山隠れの朽木になりにてはべるなり。一七小侍従は、いつか亡せはべりにけむ。そのかみの若盛りと見はべりし人は、数少なくなりはべりにける末の世に、多くの人に後るる命を、老の世に悲しいものと存じながら悲しく思ひたまへてこそ、さすがにめぐらひはべれ」など聞こゆるあの当時の
ほどに、例の、明け果てぬ。今夜もまた

（薫）「よし、さらば、この昔物語は尽きすべくなむあらぬ。終りそうにもないことです また人聞かない安心できる所でまた話し合いましょう一八ぬ心やすき所にて聞こえむ。侍従といひし人は、ほのかにおぼゆる

ぬ男が心を寄せておりましたのが

ほかに誰も聞かかすかに覚えているところ

一 私が五つ六つぐらいだった時だろうか、俄かに胸を病んで亡くなったと聞いています。薫、今二十二歳。「胸を病む」は、胸部の痛むこと。

二 こうしてあなたにお目にかかることがなかったら、罪重い身で終ってしまうところでした。仏教では、父母の恩を特に重んじ、実の父母を知らず、孝養を尽さないのを重い罪とした。

三 ものを書いて不用になった紙。文反故。

四 あなた様（薫）がご処分して下さい。

五 私はもう生きられそうにもなくなった、と仰せになって。柏木が弁に語った言葉をそのまま伝える体。

六 私事でございますが、いつまでも悲しく存じられます。小侍従の死を知った悲しみを最後に述べる。

七 このような老人は、ふと問わず語りなどにも、世にも不思議な話の実例として、しゃべり出すことがあるかもしれない。老女の昔語りは世の習い。薫は、それを懼れる。

八 （弁が）返す返す他言しない旨誓ったのを、信じてもよいかと。薫は、弁に誓言させたのであろう。

九 「粥」は、「堅粥」（今の御飯）であろう。「強飯」は、甑で蒸した飯。

一〇 官職にある者の休日。

一一 帝の御物忌。一般の臣下は、お前に伺候しない。

一二 冷泉院の女一の宮。弘徽殿の女御腹。（匂兵部卿 **薫、ようやく宇治を辞去** 一七二頁参照）

では（ば）は、五つ六つばかりなりしほどにや、にはかに胸を病みて亡せにきとなむ聞く。かかる対面なくは、罪重き身にて過ぎぬべかりけること」などのたまふ。ささやかに（小さく）おし巻き合はせたる（固く巻き合せた）反故どもの、徽くさきを袋に縫ひ入れたる（袋に縫い込んであるのを）、取り出でてたてまつる。「御前（弁）にて失はせたまへ。われなほ生くべくもあらずなりにたり、とのたまはせて、この御文（お手紙）を取り集めて賜はせたりしかば（お下げ渡しになりましたので）、小侍従にまたあひ見はべらむついでに（この次出会いまするような機会に）、さだかに伝へ参らせむ（間違いなくお届け申してもらおう）、と思うたまへしを（と存じていましたのに）、やがて別れはべりにしも（それきりで別れてしまいましたのも）、私事には（わたくしごとには）、飽かず悲しうなむ思うたまふる」と聞こゆ。つれなくて（［薫は］さりげなく）、これは隠いたまひつ（文反故）。かやうの古人は、問はず語りにや、あやしきことの例に言ひ出づらむ、と苦しくおぼせど（不安にお思いになるが）、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもやと、また思ひ乱れたまふ（改めてあれこれお悩みになる）。

御粥、強飯など参りたまふ（お召し上がりになる）。昨日は暇日なりしを、今日は内裏の御物忌もあきぬらむ（終ったことでしょう）、院の女一の宮、なやみたまふ御とぶらひに（ご病気でいらっしゃるお見舞に）、

一三 このようにたびたびお立ち寄り下さるお蔭で、山蔭の家も、少し晴れやかになった気がいたします。「山の蔭」は、日の当らない所。

一四 唐織りの、模様を浮き織りにした綾。臥蝶の丸紋という。（図録七参照）

一五 「上」は、奉るの意。小侍従を介して、女三の宮にさし上げるつもりだったので、こう書いてある。

一六 かの人（柏木）の御名の封がついている。結び目に、草名（実名を崩し書きにした花押のようなもの）を書き、封印とする。草名は、図録七参照。

薫、文反故を読む

一七 （あけてみると）さまざまの色の紙で。鳥の子の薄様を、色々に染めたもので、恋文に用いる。

一八 自分の病気は重く、もはや最期となってしまったので。以下「悲しきこと」まで、柏木の絶筆となった文面を要約したもの。

一九 お姿もお変りになっていられるであろうのが。柏木は、死の直前に、女三の宮出家のことを聞き知っていたこと、五巻柏木二八七頁に見える。

二〇 檀の皮で製した奥州特産の紙。白くて厚い紙質。

二一 鳥の足跡のように書いて。連綿体にならぬさま。

二二 目の前にこの世を背かれるあなたよりも、お目にかかれずにこの世を去る私の方が悲しいのです。「声をだに聞かで別るる魂よりもなき床に寝む君ぞ悲しき」（『古今集』巻十六哀傷、読人しらず）を踏まえる。

改めてこの時期を過し

かならず参るべければ、かたがた暇なくはべるを、あれこれと またこのころ過ぐして、山の紅葉散らぬさきに参るべきよし、[八宮に]聞こえたまふ。[宮]「かくしばしば立ち寄らせたまふ光に、山の蔭も、すこしものあきらむるここちしてなむ」など、おれを申し上げなさる よろこび聞こえたまふ。

[京に]帰りたまひて、まづこの袋を見たまへば、唐の浮線綾を縫ひて、上といふ文字を上に書きたり。細き組して口のかたを結ひたるに、組紐で口のところを かの御名の封つきたり。[薫は]あくるも恐ろしうおぼえたまふ。いろいろの紙にて、たまさかに通ひける御文の返りこと、[女三宮からの]五つ六つぞある。

そのほかには柏木のご筆跡で さては、かの御手にて、病は重く限りになりにたるに、またほのかにも聞こえむこと難くなりぬるを、再び短いお便りをさし上げることもむつかしくなったが お会いしたいという思いは募るばかりだし ゆかしう思ふことは添ひにたり、御容貌も変りておはしますらむが、あれもこれも悲しいということを さまざま悲しきことを、陸奥紙五六枚に、つぶつぶと、奇妙な あやしき鳥の跡のやうに書きて、

（柏木）目のまへにこの世をそむく君よりも
よそにわかるる魂ぞ悲しき

一　おめでたく承ります幼い人のことも、私などが心配することは何もございませんが。「二葉」は、草や木の芽出しの二枚の葉。薫を喩える。源氏の子として育つのだから安心、という。

二　命さえあれば、ひそかに我が子とも見ましょうものを、誰にも知られずに岩根に残した松の生い先を。薫を岩根の松によそえた歌は、源氏も詠んでいる（五巻柏木三〇一頁参照）。

三　そこまでで、書きさしたように終っていて。力尽きたさま。

四　（手紙を巻いた）表に書き付けてある。これも柏木の筆跡。小侍従にあてた体の上書き。

五　和紙や衣類の害虫。シミ科の昆虫で、魚形をし、全身に銀白色の鱗粉がある。衣魚とも書く。

六　筆跡は歴々として、たった今書いたといってもおかしくはない文言が。古注は、「書きつくる跡は千歳もありぬべし忘れずしのぶ人やなからむ」（出典未詳）をあげる。

七　なるほど、人目に触れでもしたら大変なことだったと。前の弁の言葉（二九六頁）を受ける。

八　（柏木、女三の宮）どちらにとっても安心のならぬ、お気の毒なお手紙だと思われる。

九　参内しようとお思いだったが、出かける気におなりになれない。

一〇　当時、経文などを読むのは女らしくないこととさ

また端に、

一　めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思うたまふるかたはなけれど、

二　命あらばそれとも見まし人知れず
　　岩根にとめし松の生ひ末

三　書きさしたるやうに、大層筆跡も乱れていて いと乱りがはしうて、「小侍従の君に」と上四には書きつけたり。紙五魚といふ虫の住処になりて、古めきたる黴くささながら、六跡は消えず、ただ今書きたらむにも違はぬ言の葉どもの、こまごまとはっきりしているのをご覧になるにつけこまごまとさだかなるを見たまふに、七げに落ち散りたらましよと、八うしろめたう、いとほしきことどもなり。

　かかること世にまたあらむやと、このようなことが世にまたとあろうかと心ひとつにいとどもの思はしさ添ひて、九内裏へ参らむとおぼしつるも、出で立たれず。宮の御前に参りたまへれば、いかにも無心にいと何心もなく、一〇若やかなるさましたまひて、経読みたまふを、はぢらひもて隠したまへり。二何かは知りにけりとも

れていたので、尼ながら恥じられるのであろう。
二 何で秘密を知ったとも、お気づかせ申そう、など。無心な女三の宮の様子を見ての薫の気持。

知られたてまつらむ、など、[一切を]心に籠めて、あれやこれやと考え込んでいらっしゃるよろづに思ひゐたまへり。

椎(しひが)本(もと)

橋姫に続く、薫二十三歳から二十四歳の夏までの物語。春、二月二十日過ぎ、匂宮は、初瀬詣での帰途、宇治にある夕霧の別邸に立ち寄って、音楽に興ずる。かねて薫から聞いている八の宮の姫君たちへの関心からである。薫も、京から出迎え、対岸の八の宮の山荘に赴く。匂宮の詠み送った歌に対して、中の君が返歌をしたためた。それからは、屢々ある匂宮からの便りには、父宮のすすめで中の君が返事をするのだった。

秋、薫は中納言になる。七月、宇治を訪れた薫は、八の宮から姫君たちの後事を託される。この年は、八の宮にとって重厄の年であったが、秋の念仏に宇治山の阿闍梨の寺に籠ったまま、宮は、姫君たちの悲しみをよそに、山寺で亡くなった。八月二十日の頃であった。薫からも匂宮からも、ねんごろな弔問の手紙が度々寄せられた。

九月になって忌も果ててから、薫は宇治を訪れ、大君と親しく対面し、老女の弁とも亡き八の宮を偲ぶ。

冬に入って、あとに残された姫君たちの日頃は寂寥をきわめる。年の暮に再び宇治を訪れた薫は、大君に、中の君と匂宮の結婚をすすめ、大君に対する自らの思いも告白するが、大君は取り合わない。薫は、亡き八の宮の仏間に故人を偲ぶ。巻名は、この時の薫の歌による。

年かわって、春。匂宮の思いはいよいよ募る。この年、薫の邸三条の宮焼亡。夏、宇治を訪れた薫が、姫君たちの姿を垣間見る場面でこの巻は終る。

橋姫、椎本の二巻で、いわば布石をおえた物語は、いよいよ総角の巻に入る。

一 匂宮。
二 大和の国磯城郡初瀬の長谷寺。霊亀元年（七一五）、僧道明が天武天皇のために建立した。本尊十一面観音。（三巻図録二参照）
三 昔お立てになった願のおれ参りのためだったけれども。

匂宮、初瀬詣での帰途、宇治に中宿り

四 宇治のあたりに途中お泊りになりたいというお気持から。宇治の八の宮の姫君たちへの関心からである。当時、初瀬詣での途次、宇治に泊ることが多かった。
五 恨めしいと言う人もあったこの里（宇治）の名前が。「宇治」は「憂し」を掛けて歌に詠まれた。「わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、喜撰法師）
六 右大臣（夕霧）のお持ち物である別邸は。『花鳥余情』は、道長から頼通に伝えられた今の平等院をこれに比定する。
七 川向うに。京都側からいって、対岸になる。
八 急の御物忌で、厳重に身をお慎みになるように、（陰陽師が）進言したということなので。重い物忌で、外出できないことになったのである。「たなれば」は「たんなれば」の撥音無表記の形。「なり」は伝聞、推定。
九 薫。

二月

きさらぎの二十日のほどに、兵部卿の宮、初瀬に詣でたまふ。三 古き御願なりけれど、おぼしも立たで年ごろになりにけるを、四 宇治のわたりの御中宿のゆかしさに、多くはもよほされたまへるなるべし。五 うらめしと言ふ人もありける里の名の、なべてむつましうおぼさるるゆゑもはかなしや。上達部いとあまたつかうまつりたまふ。殿上人などはさらにもいはず、世に残る人少なうつかうまつれり。

（お思い立ちにもならず何年にもなってしまったのだが）（主としてはお出かけになる気になられたのであろう）（総じて親しみ深く感じられなさるわけも）（とりとめもないものではある）（お供申し上げなさる）（改めて言うまでもなく）（あとに残る人はほとんどないほど大勢お供申し上げる）

源氏から伝領して

六条の院より伝はりて、六 右の大殿知りたまふ所は、七 川より遠に、広々として風情を凝らしてあるがそこにいと広くおもしろくてあるに、御まうけせさせたまへり。大臣も、夕霧 宮のお帰りのお出迎えに参上なさるおつもりだったが 帰さの御迎へに参りたまふべくおぼしたるを、八 にはかなる御物忌の、お出迎えの叶わぬ旨のお詫びを言上なさった 重くつつしみたまふべく申したなれば、え参らぬよしのかしこまりつった 申したまへり。宮、匂宮 いささか興をそがれた思いでいられたが なますさまじとおぼしたるに、宰相の中将、今

日の御迎へに参りあひたまへるに、なかなか心やすくて、かのわたりのけしきも伝へ寄らむと、御心ゆきぬ。大臣をば、うちとけて見えにくく、ことことしきものに思ひきこえたまへり。御子の君たち、右大弁、侍従の宰相、権中将、頭の少将、蔵人の兵衛の佐など、皆さぶらひたまふ。帝后も心ことに思ひきこえたまへる宮なれば、おほかたの御おぼえもいと限りなく、まいて六条の院の御方ざまは、次々の人も、皆私の君に、心寄せつかうまつりたまふ。

所につけて、御しつらひなどをかしうしなして、碁、双六、弾棊の盤どもなど取り出でて、心々にすさび暮らしたまひつ。宮は、ならひたまはぬ御ありきに、なやましくおぼされて、ここにやすらはむの御心も深ければ、うち休みたまひて、夕つかたぞ、御琴など召して遊びたまふ。

例の、かう世離れたる所は、水の音もてはやして、ものの音澄みまさるここちして、かの聖の宮にも、たださしわたるほどなれば、

ちょうどお出でになったので
[夕霧の]
世間
親身にお仕え申し上げていらっしゃる
一般のご声望もまことにこの上なくお供していられる
山荘にふさわしくお部屋の模様など風情のあるしつらいにして
それぞれ気ままにその日をお暮しになった
お疲れを覚えられて
宇治でゆっくりしようんあまりなさらぬご旅行なので
取り
と前々からお考えでもあるので
寄せてお弾きになる
閑静な
楽の音色も格段に冴える感じで
ほんの棹さして渡れる向う岸なので

一 匂宮は、かえって気がねなく、八の宮の姫君たちへの橋渡しも薫にしてもらえるだろうと、ご満足になった。

二 匂宮は、夕霧を、気楽にお目にかかりにくく、肩の張るお相手だとお思い申し上げていられる。

三 以下、夕霧の子息たち。二男以下であろう。右大弁は、太政官に属し、兵部、刑部、大蔵、宮内の四省を支配する。従四位上相当。

四 参議（正四位下相当）で侍従（帝に近侍する役、中務省に属する）を兼ねる。

五 近衛の中将の権官（定員外の任命）。従四位下相当。

六 近衛の少将（正五位下相当）で蔵人の頭兼任。

七 兵衛府の次官（従五位上相当）で蔵人。

八 父帝も母の明石の中宮も、格別にお思い申し上げていらっしゃる宮様なので。将来、匂宮を東宮に立てようとのお心積りがある。

九 まして源氏のご一門の方々は、夕霧をはじめ、ご子息たちも、皆、匂宮を内輪のご主君とあがめて。

一〇 四巻常夏一〇三頁注一四参照。

一一 二人で盤上の石を指で弾いて、相手の石に当るのを勝ちとする遊戯。

一二 川（宇治川）の水音も引き立て役になって。

一三 あの行い澄ましていられる八の宮のお邸にも。橋姫の巻に「心ばかりは聖になり果てたまひて」（二五九頁）などとあった。

一四 風に乗って聞えてくる楽の音をお聞きになると。主語は、八の宮。「追風」は、香、音などを運んでくる風。

一五 昔、宮中に出入りしていた頃のことが思い出されなさって。

一六 致仕の太政大臣。柏木の父。対岸での横笛の主は薫なのであろう。柏木の血を引くその音色を、八の宮が事情は知らぬながら聞き分けている趣。

一七 大君と中の君のお美しさが、もったいなく思われ。

一八 こんな山に囲まれた田舎に一生暮させるようなことにはしたくない。都のしかるべき貴公子に縁づかせたいという気持。

一九 薫。以下、八の宮の思い。

二〇 薫はそんなふうに考えてみようともしないようだ。仏道に専心する薫の人柄を思ってのこと。

二一 愉快にお過しの旅寝の宿では。匂宮一行のこと。

追風に吹き来る響きを聞きたまふに、昔のことおぼし出でられて、
（八宮）横笛をいかにも見事に吹き立てているようだ
「笛をいとをかしうも吹きとほしたなるかな。誰ならむ。昔の六条源氏の院の御笛の音聞きしは、風情たっぷりで いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか。これは澄みのぼりて、冴えきった音色で ことことしき気の添ひたるは、風格のある 心をそそる 感じがするのは
致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など、ひとりごちおはす。似ているようだ
（八宮）ああ何とも遠い昔のことになってしまった
「あはれに久しうなりにけりや。かやうの遊びなどもせで、あるにもあらで過ぐし来にける年月の、さすがに多く数へらるるこそあるともいえぬさまで 管絃の催し 世に ふがいないことだ かひなけれ」などのたまふついでにも、姫君たちの御ありさまあたらしく、かかる山懐にひき籠めてはやまずもがな、とおぼし続けらる。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひ寄るまじかめり、まいて今やうの心浅からむ人をば、いかでかは、などおぼし乱れ、つれづれとながめたまふ所は、春の夜もい明けが待ち遠しいほどなのに と明かしがたきを、心やりたまへる旅寝の宿りは、酔のまぎれにいと疾う明けぬることちして、飽かず帰らむことを、宮はおぼす。

どうせなら親しく姫君たちの婿にしたいようなお人柄だが 話にもな まして当世風の軽薄な男などでは 所在なく物思いがちな宮のお邸では 春の短か夜も夜 〔八宮は〕思い悩まれ らない 酒の酔いにまぎれ あっけなく京に帰ることを 匂宮は残念に思われる

一「桜咲く桜の山の桜花散る桜あれば咲く桜あり」（『源氏釈』に引く。出典未詳）

二「稲南川添ひ柳水ゆけば起き伏しすれどその根絶えせず」（『古今六帖』六、柳。原歌、『日本書紀』巻十五顕宗天皇。下の句「なびき起き立ちその根は失せず」）

三　こうした景色を見馴れておいででない方は。匂宮のこと。

四　一人で舟を漕ぎ出して川をお渡りになるのも、身分柄軽々しい振舞であろうか。「船わたり」は、船で川を渡ること。

五　山風に乗って霞を吹き分ける笛の音は聞えてきますが、私たちの間を隔てていると見えるかなたの白波です。前日聞えた笛の音の主を薫と推察しての歌。「をち」は宇治に存した地名（今、宇治橋東詰め近くに彼方神社がある）で、「をち」（遠方、彼方）の意に掛ける。薫の来訪をうながす心の歌。

六　草仮名。万葉仮名の草体。

七　そちらとこちらの岸に川波は間を隔てていましょうとも、それでも宇治の川風は川を吹き渡って便りを届けてほしいものです。

薫、人々と川を渡って山荘を訪れる　翌日、八の宮よりお歌　匂宮、返歌　管絃の興

はるばると霞みわたれる空に、散る桜あれば今開けそむるなど、色とりどりにいろいろ見わたさるるに、川そひ柳の起きふしなびく水影など、おかたならず風情があるのをろかならずをかしきを、見ならひたまはぬ人は、いとめづらしく見立ち去りがたい思いでいられる捨てがたしとおぼさる。宰相は、薫かかるたよりを過ぐさず、かの宮八の宮の山荘にお伺いしたいとにまうでばやとおぼせど、あまたの人目をよきて、避けて一人漕ぎ出でたまはむ船わたりのほども軽らかにや、と思ひやすらひたまふほどに、ためらっていらっしゃるところへあちらからかれより御文あり。

（八宮）五
山風に霞吹きとく声はあれど
へだてて見ゆるをちの白波

匂宮
草にいとをかしう書きたまへり。宮、お目当ての所からのお便りおぼすあたりの、と見たまへば、いとをかしうおぼいて、（匂宮）「このお返事は私がしようこの御返りはわれせむ」とて、

（匂宮）七
をちこちの汀に波はへだつとも
なほ吹きかよへ宇治の川風

薫　［山荘に］
中将はまうでたまふ。管絃に興の乗った貴公子たちを遊びに心入れたる君たち誘ひて、舟に棹さしてさしやり

八 高麗壱越調の曲。保延の頃（一一三五～四〇）まで舞があったが、その後絶えたという（『教訓抄』）。「村上御記、応和元年閏三月十一日、藤宴、舟楽、奏二酣酔楽、舞人四人云々」（『花鳥余情』）

九 川に臨んだ廊（細長い建物）におりられるように上から造りつけてある階（階段）の趣向など。

一〇 この八の宮の山荘は、夕霧のそれとはまた一風変った趣があって。

一一 網代を表に張った屏風。「網代」は、檜や竹の薄板を斜めまた縦横に編んだもの。「昔は山庄などの古めかしき調度には定事也。漆骨に、片面を張りて、細組にて閉合せたる躰也」（『河海抄』）

一二 薫一行を迎える心積りで、きれいに掃除し。

一三 琴（絃楽器）の数々を。

一四 薫と同行の人々が次から次へとお弾きになって。

一五 壱越（洋楽のdに近い）を宮（主音）とする呂旋音階。次の「桜人」は高麗双調の曲であるのを壱越調に移調して演奏した。

一六 催馬楽。呂。歌詞は三巻薄雲一六〇頁注七参照。

一七 七絃の琴。

一八 十三絃。

一九 かすかに皇族のお血につながるといった素姓いやしからぬ人が大勢。「孫王」は、帝の孫以下五世までの人。

二〇 王（二世以下の親王宣下のない皇胤）で四位の人。

二一 お酌する人。「瓶子」は、酒を注ぐ細長い瓶。

たまふほど、酣酔楽遊びて、水にのぞきたる廊に造りおろしたる階の心ばへなど、さるかたにいとをかしう、ゆゑある宮なれば、人々心して船よりおりたまふ。ここはまたさま異に、山里びたる網代屏風などの、ことさらにことそぎて、見所ある御しつらひを、さる心してかき払ひ、いといたうしなしたまへり。いにしへの、音などいと二なき弾きものどもを、わざとまうけたるやうにはあらで、次々弾き出でたまひて、壱越調の心に、桜人遊びたまふ。主人の宮の御琴を、かかるついでにと、人々思ひたまへれど、箏の琴をぞ、心にも入れず、をりをり掻き合はせたまふ。耳馴れぬけにやあらむ、いともの深くおもしろしと、若き人々思ひしみたり。所につけたる饗応、いとをかしうしたまひて、よそに思ひやりしほどよりは、なま孫王めくいやしからぬ人あまた、王四位の古めきたるなど、かく人目見るべきをりと、かねていとほしがりきこえけるにや、さるべき限り参りあひて、瓶子取る人もきたなげならず、さるかたに古め

お渡りになる間
山荘なりにいかにも風情があり
奥ゆかしい宮のお邸なので
心遣いして
山荘らしい
簡素にして
風雅なお部屋のしつらいを
大層気遣いして整えておりになる
昔から伝わった
わざわざ用意したふうでもなく揃えてあって
調子で
こうした機会にぜひにと
合奏なさる
時々
聞き馴れていないせいであろうか
若い同行の人々は感じ入っている
土地柄にふさわしい
はたから想像していたのとは違って
とても風流に支度しておありで
年老いた方など
宮家ゆか
こうした宮家らしく古
こさっぱりとして

一 八の宮の姫君たち。大君と中の君。

二 あちらに残っていられる匂宮は、まして、気軽に旅に出るわけにもいかぬお身の上を、ふだんから窮屈に思っていられるので。

三 殿上童。行儀見習いのため殿上の間勤めを許されている少年。

四 山桜の咲きにおうこの宇治にやって来まして、あなた方と同じ插頭（頭に插す飾り）を手折ったことです。「同じかざし」は、血のつながりを意味するから（四巻常夏八七頁注一七、五巻若菜上八一頁注一〇）、同じ皇族としての親しみの気持が籠められている。

五 「野をむつましみ」とでもあったのだろうか。文面を推測する形でぼかした草子地。「春の野に菫摘みにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける」（『古今六帖』六、菫。原歌『万葉集』巻八、山部赤人）の「なつかしみ」を「むつましみ」と言いかえて、同じ血につながる親しみの気持から、この宇治に一泊しました、の意。

六 年老いた女房たち。過去の宮仕えの経験を語る形で言った。

七 插頭の花を折るおついでに、山住みの貧しい家の垣根を通り過ぎられただけなのです、行きずりの春の旅人であるあなたは。

匂宮と中の君の贈答

風に　いかにも雅趣のあるおもてなしをなさる

きて、よしよししうもてなしたまへり。客人たちは、御女たちの住まひたまふらむ御ありさま思ひやりつつ、心つく人もあるべし。

一 かの宮は、まいてかやすきほどならぬ御身をさへ、所狭くおぼさるるを、かかるをりにだにと、忍びかねたまひて、おもしろき花の枝を折らせたまひて、御供にさぶらふ上童のをかしきしてたてまつり上げなさるりたまふ。

せめてこうした折にでもと　気持を抑えかねなさって　見事に咲いた桜の花

（匂宮）四「山桜にほふあたりに尋ね来て

同じかざしを折りてけるかな

五 野をむつましみ」とやありけむ。御返りは、いかでかは、など、聞

とてもできません　〔姫君たちは〕お返事しにくくお困りになる

こえにくくおぼしわづらふ。〔女房〕こうした折のお返事は「かかるをりのこと、わざとがましく

凝ったお歌をと大げさに考えて　時が　たつのも　かえって気のきかぬこととしたものでございます

もてなし、ほどの経るも、なかなか憎きことになむしはべりし」な

ど、六古人ども聞こゆれば、〔八宮が〕中の君にぞ書かせたてまつりたまふ。

（中君）七「かざし折る花のたよりに山がつの

垣根を過ぎぬ春の旅人

八 わざわざ私どもを目ざしておいでだったのではございますまい。『奥入』以下に「わきてしも何にほふらむ秋の野にいづれともなくなびく尾花に」（出典未詳）を引くが、秋の歌でもあり、ふさわしくない。匂宮の文の「野をむつましみ」に応じたもの。

九 なるほど、川風もあちらとこちらを分け隔てせぬかのように吹き通い、その風に乗った楽の音色も。前の匂宮の歌の「なほ吹きかよへ宇治の川風」によって成した文。

一〇 柏木の次の弟。紅梅巻頭（一八一頁）に「按察使の大納言」と見えた人。

一一 漢詩も和歌も、ご一行の作品は数多くあるけれども、面倒なので、わざわざ聞きおくこともしないのです。省筆をことわる草子地。

一二 薫の手引きなしでも、お手紙はいつもあるのだった。「近江路をしるべなくても見てしがな関のこなたはわびしかりけり」（『後撰集』巻十一恋三、女のもとにつかはしける　源中正）

一三 取り立てて色めいたお手紙といったお扱いはしないようにしよう。なまなか気を揉む種にもなろうから。かえって、さりげなくあしらって、返事も出した方がよい、という気持。

匂宮、中の君と折々、文通

野をわきてしも」と、いとをかしげに、らうらうじく書きたまへり。

げに川風も心わかぬさまに吹き通ふものの音ども、おもしろく遊びたまふ。御迎へに藤大納言、仰せ言にて参りたまへり。人々あまた参りつどひ、ものさわがしくてきほひ帰りたまふ。若き人々、飽かずかへりみのみせられける。宮は、またさるべきついでして、とおぼす。花盛りにて、四方の霞もながめやるほどの見所あるに、唐のも大和のも、歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。

もの騒がしくて、思ふままにもえ言ひやらずなりにしを、飽かず

宮はおぼして、しるべなくても御文は常にありけり。宮も、「なほ聞こえたまへ。わざと懸想だちてももてなさじ。なかなか心ときめきにもなりぬべし。いと好きたまへる親王なれば、かかる人なむ、と聞きたまふが、なほもあらぬすさびなめり」と、そそのかしたまふ時々、中の君ぞ聞こえたまふ。姫君は、かやうのこと、たはぶれにももてはなれたまへる御心深さなり。

八の宮の思い　大君二十五、中の君二十三

一　姫君たちが、そうお美しくもいらっしゃらないのなら、このままこの山里に朽ちさせるのがもったいない、いとおしい、といった思いは薄くもあろうか。

二　八の宮は、今年は、重く身をお慎みにならねばならぬ年なのだった。厄年だったという。この年の秋に亡くなる伏線である。六十一の厄年に当ると見るのが、ほぼ八の宮の年齢に見合う。

匂宮の執心

三　仏前のお勤め。

四　後世安楽の支度のことばかりお考えなので。「出で立ちいそぎ」は、四巻行幸一五五頁注一五に既出。

五　とりあえず人並みで、婿としても外聞が悪くはない程度の、世間からもあれならと大目に見てもらえそうな身分の男で、誠心誠意、（夫として）姫君のお世話をいたしましょう、などという気持になってくれる者がいたら。田舎に零落している宮家の姫君という悪条件を頭に置いての、八の宮の悲しい苦慮である。

いつということなくわびしいお暮しぶりにも　春の日長の所在なさは　ひとしお身をもてあ
いつとなく心細き御ありさまに、春のつれづれは、いとど暮らし
まして物思いにふけられる　［姫君たちの］大きくおなりの　ますますすぐ
がたくながめたまふ。ねびまさりたまふ御さま容貌ども、いよいよ
れて　申し分なくお美しいのも　［八宮には］かえっておいたわしく
まさり、あらまほしくをかしきも、なかなか心苦しう、かたほにも
おはせましかば、あたらしう惜しきかたの思ひは薄くやあらまし、
など、明け暮れおぼし乱る。姉君二十五、中の君二十三にぞなりた
まひける。

宮は、重くつつしみたまふべき年なりけり。もの心細くおぼして、
怠りなく　この世に何の執着もお持ちでないので　極楽へ往生なさることも間違いないはずなのだが
御行ひ常よりもたゆみなくしたまふ。世に心とどめたまはねば、出
で立ちいそぎをのみおぼせば、涼しき道にもおもむきたまひぬべき
ただ姫君たちのことをお案じの余り　本当にお気の毒なことに　この上なく道心堅固なお方で
を、ただこの御ことどもに、いといとほしく、限りなき御心強さな
きっと今はと姫君たちを残して行かれるご臨終の正念は乱れるであろうと　お側にお仕え
はあるが
れど、かならず今はと見捨てたまはむ御心は乱れなむと、見たてま
宮のご理想通りとはいかなくても　する人もご推察申し上げるのだが
つる人もおしはかりきこゆるを、おぼすさまにはあらずとも、なの
めに、さても人聞きくちをしかるまじう、見ゆるされぬべき際の人
の、真心に後見きこえむ、など、思ひ寄りきこゆるあらば、知らず
見て見ぬ

六 姫君たちのうちどちらかお一人が、この世に暮していかれるより所があるならば（どちらか一人が夫を迎えたら）、その夫にあとの一人の世話も託すことにして、一応安心はできるのだが。

七 寺社参詣の途中の宿泊とか、旅の往来の途中とかの気まぐれに、気のありげな文をよこして。宇治は、京から奈良への大和街道の要衝に当り、旅人の往来も多いのである。

八 そんなふうに言い寄っておきながら、こうして落ちぶれた宮家としてのわびしいお暮しぶりなど想像して。

九 前世からの因縁がおありだったのだろうか。物語の成行きを予告する気持の草子地。

一〇 従三位相当。職掌は大納言に同じ。令外の官で、太政官の中堅。（竹河二四五頁参照）

一一 どういう事情だったのかと。自分の出生の秘密のこと。

一二 おいたわしい有様でお亡くなりになったという遠い昔のことが思われるにつけ。実父の柏木のこと。

一三 その父君の罪障が軽くおなりになるように、お勤めもしたい気持になる。

一四 薫に出生の秘密を明かした弁の君。（橋姫二九四頁以下参照）

薫、その年の秋、中納言に昇進

ふりをして婿に迎えようかと顔にてゆるしてむ、一所一所世に住みつきたまふよすがあらば、それを見ゆづるかたになぐさめおくべきを、さまで深き心に尋ねきこゆる人もなし。それほど深い気持で姫君たちに関心をお寄せする人もいないまれまれははかなきたよりに、どくたまにはかばかしからぬつてを通じて色めいた歌などお寄せ申したり好きごと聞こえなどする人は、まだ年若い男の無責任な気持にまかせて物詣の中宿、行き来のほどのなほざりごとにけしきばみかけて、馬鹿にしてかかるような態度をとるのはさすがに、かくながめたまふありさまなどおしはかり、あなづらはしげにもてなすは、無礼千万と思われてなおざりなお返事も〔姫君たちに〕おさせにならない匂宮ましうて、なげのいらへをだにせさせたまはず。三の宮ぞ、なほ見姫君をわが物にというお気持が深いのだったではやまじとおぼす御心深かりける。さるべきにやおはしけむ。

薫

宰相の中将、その秋中納言になりたまひぬ。いとどにほひまさりになる たまふ。世のいとなみに添へても、おぼすこと多かり。お役目ご多忙になられるにつけても お悩みになることが多いいかなることと、いぶせく思ひわたりし年ごろよりも、ずっと気になってならなかった長の年月よりも心苦しうて過ぎたまひにけむいにしへざまの思ひやらるに、罪軽くなりたまふばかり、行ひもせまほしくなむ。かの老人をばあはれなるものに思ひおきて、しみじみいとしい者とお心にかけて いちじるきさまならず、何かと人目をつくろいながら とかくまぎらはしつつ、親切に面倒を見ておやりに心寄せとぶらひた

一 巻頭の部分、春二月の二十日の頃に、匂宮の迎えに宇治を訪れて以来、訪問していない趣。

二 都の内まではまだそれと分るほど入って来ていない秋のけはいを。「なほ尋ね来たるに」にかかる。

三 京都の東山区山科。山城と近江の国境にある。歌枕。宇治への順路からは遙か東にそれるが、それを「音羽の山近く」とぼかし、同音の「風の音」を導く措辞。「松虫の初声さそふ秋風は音羽山より吹きそめけり」（『後撰集』巻五秋上、読人しらず）。（図録二参照）

四 橋姫の巻二八四頁に見える「槇の尾山」と同じであろう。（図録二参照）

五 八の宮、なおさらのこと。薫以上に久々の再会を喜ぶ風情。

六 前に「もの心細くおぼして」（三一二頁）とあった。近々の死を予感している趣。

七 お言なりとも、先にもご意向をうけたまわっておりますから。橋姫の巻に「亡からむのちもなど、一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」（二八八頁）と八の宮の言うところがあり、また、薫が姫君たちの行く末の面倒を見ることを宮に確約するところもある（二九四頁）。

七月、薫、宇治を訪れる

宇治にまうでで久しうなりにけるを、〔薫は〕思ひ出でて参りたまへり。七月ばかりになりにけり。都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槇の山辺もわづかに色づきて、なおも求めて来てみると なほ尋ね来たるに、風情に富んでもの珍しく思われるのだが をかしうめづらしうおぼゆるを、宮はまいて、いつもより薫の訪れを喜んでお待ちうけ申されていて 例よりも待ちよろこびきこえたまひて、このたびは、心細げなる物語、いと多く申したまふ。「亡からむのち、（八宮）私の死んだあと この君たちを、姫君たち さるべきもののたよりにもとぶらひ、思ひ捨てぬものに数まへたまへ」など、意中をそれとなく申し上げなさるので おもむけつつ聞こえたまへば、（薫）「一言にてもうけたまはりおきてしかば、決してあだおろそかに思うことはございません さらに思うたまへおこたるまじくなむ。世の中に心をとどめじと、切り捨てております身の上で はぶきはべる身にて、何ごともたのもしげなき生ひ先の細い私ではございますが 少なさになむはべれど、そうした有様でもこの世に生きております限りは さるかたにてもめぐらひはべらむ限りは、変ることのない私の気持をお見届け頂きましょうと思っております 変らぬ心ざしを御覧じ知らせむとなむ思うたまふる」など聞こえたまへば、〔八宮は〕うれしとおぼいたり。

なる

まふ。

何かのついでにでも様子を見て下さって

お見捨てにならぬ者としてお心におとめ下さい

何につけても頼りない

この世のことに執着は

前途の心

八の宮の述懐

八 まだ夜明けには間のある刻限の月。

九 （月が）山の端に沈むのも間近な思いがするので。八の宮が、月によそえて死期の近いわが身を観ずる趣。「山の端」は、山の頂。

一〇 心に仏を念じて真言をとなえ、成仏を願う。

一一 見馴れない言葉であるが、仏者としての八の宮の特殊な用語なのであろう。「宮」は呉音。

一二 ここは、調子、リズムの意であろう。

一三 女御や更衣のそれぞれの御殿で。「局」は、後宮に賜っているそれぞれの御殿。

一四 表面は仲よく付き合っているようなのですが。

一五 悩み深い風情にかき鳴らして。閨怨を訴える趣。

一六 聞きごたえがあるといったことが多かったものです。

一七 何ごとにつけても、女というものは、なぐさみものの、きっかけになるもので。「もてあそび」は、愛玩の対象。後宮の女性についての思い出話から、一般論に転ずる。

一八 子を思う親の心配ということを考えてみましても。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、兼輔朝臣）

一九 そうしたもので。女には女の運命があって、の意。

二〇 いかにもそうおぼしめすに違いないことだ。地の文の形であるが、以下、聞いている薫の心中。

八 夜深き月のあきらかにさし出でて、明るく雲間から顔を出して 山の端近きここちするに、念誦いとあはれにしたまひて、昔の思い出話 昔物語したまふ。（八宮）近頃の世の中ではどうな「このころの世はいかがなりにたらむ。宮中などにて、かやうなる秋の月に、御前の御帝の御前の管絃のお催しに誰彼と伺候していました中で遊びのをりにさぶらひあひたるなかに、音楽の上手と自他ともに許す人ばかりが ものの上手とおぼしき限り、それぞれ得意の楽器を合奏したとりどりにうち合はせたる拍子など、ものものしい演奏よりも ことことしきよりも、よしあがあると高い りとおぼえある女御更衣の御局々の、めいめい内心では人と寵をきそいながら おのがじしはいどましく思ひ、うはべの情をかはすべかめるに、夜明けには程遠い頃の 夜深きほどの人の気しめりぬ人の寝静まった時分に るに、心やましくかい調べ、かすかに洩れ出て聞えてくる琴の調べなど ほのかにほころび出でたるものの音など、聞き所あるが多かりしかな。何ごとにも、女はもてあそびのつまにしつべく、何やら頼りないものですが ものはかなきものから、人の心を動かすくさはひに人に気をもませる種になるもののように思われます なむあるべき。されば罪の深きにやあらむ、ですから女は罪障が深いのでしょうか子の道の闇を思ひやるにも、男は、いとしも親の心を乱さずやあらむ。男の子は さほど親に心配はかけないものなのでしょう女は、限りありて、どうにも仕方のないものと諦めねばならないにしても やはりとても気にかかるもののようです いふかひなきかたに思ひ捨つべきにも、なほいと心苦しかるべき」など、一般の世間話にかこつけておっしゃるのは おほかたのことにつけてのたまへる、いかがさおぼさざらむ、

一　先程申し上げました通り、この世のことは何もかも断念しておりますせいでございましょうか。前に「世の中に心をとどめじと、はぶきはべる身にて」（三一四頁）と言ったのを受けて言う。

薫、姫君たちの琴を所望する

二　どのようなこととも深くは分りませぬが。女が人の心を動かすくさわいになるという、八の宮の話題についていう。

三　分別くさく修行に専念する迦葉も。「迦葉」は、摩訶迦葉。釈迦の十大弟子の一人で、頭陀第一（乞食修行の第一人者）と称せられた。以下の故事、『河海抄』に「香山大樹緊那羅於二仏前一弾二瑠璃琴一奏二八万四千音楽一、迦葉尊者忘二威儀一而起舞　出二大樹緊那羅経一法花文句第二巻」と注する。緊那羅は帝釈天に仕えて伎楽をつかさどる。

四　心残りにもほんの一声だけ聞いた姫君たちのお琴の音を。去年の秋、八の宮の留守に訪れた時のこと（橋姫二七二頁以下参照）。

五　薫と姫君たちがこれから親しく付き合うことになるきっかけにもしようというおつもりなのか。自分の亡きあとのことを考えた八の宮の配慮。

六　姫君たちのどちらかが、やむなくわずかに弾いて、たっての宮のすすめにこたえた趣。

七　とにかくこうして一応のお近づきにしてあげたそのあとのことは。「馴らす」に、琴を「鳴らす」を掛けた言い方。

心苦しく思ひやらるる御心のうちなり。（おいたわしく推察される宮のご心中である）

「すべてまことに、一（薫）しか思うたまへ捨てたるけにやはべらむ、（私自身）みづからのことにては、二いかにもいかにも深う思ひ知るかたのはべらぬを、げにはかなきことなれど、声にめづる心こそ、背きがたきことにはべりけれ。三さかしう聖だつ迦葉も、さればや、起ちて舞ひはべりけむ」など聞こえて、四飽かず一声聞きし御琴の音を、切にゆかし望みになるので）がりたまへば、五うとうとしからぬはじめにもとやおぼすらむ、御みづからあなたに入りたまひて、（姫君たちのお部屋に）切にそそのかしきこえたまふ。箏の琴をぞ、いとほのかに搔きならしてやみたまひぬる。いとど人のけはひも絶えて、あはれなる空のけしき、所のさまに、わざとなき御遊びの心に入りてをかしうおぼゆれど、うちとけてもいかでかは弾き合はせたまはむ。「おのづからかばかりならしそめつる残りは、世籠れるどちにゆづりきこえてむ」とて、宮は仏の御前に入りたまひぬ。

（薫）総じて心から
のこととしましては
なるほどつまらないことですが
音楽に耳を傾ける気持は
捨てがたいことで
ですから
立って舞ったのでご
ございました
ざいましょう
[八宮は]
たっておすすめ申し上げなさる
日頃にまして人気も
なくひっそりとして
もの悲しい空のたたずまいや
場所柄から
[薫は]請われるままに
[姫君たちは]気を許してどうして合奏した
弾かれる琴の音が心にしみておもしろく思われるが
りなさるはずがあろう
（八宮）
先の長い若者同士にお任せするとしましょう
仏間

八 私がいなくなって、この草の庵は荒れ果ててしまいましょうとも、この琴の一声を手始めに末長くお付き合い頂いて、私のお願いは聞き届けて頂けるものと存じます。「ひとこと」は「一琴」（姫君の弾いた琴の一声）に「一言」（三一四頁）を掛け、「離れ」に「枯れ」を掛け、草の縁語。

九 こうしてお目にかかりますことも。

一〇 どのような世になりましょうともご無沙汰いたすことはございません、末長くとお約束いたしましたこの草の庵には。「むすべる」は「草の庵」の縁語。

一一 相撲の節。七月の下旬に行われる。十六、十七日、召仰（相撲人召集の下命）。二十六日、内取（予行）、帝、仁寿殿に出御。二十八日、召合、帝、南殿に出御。二十九日、抜出（選抜試合）。近衛府の所管である。

八の宮と薫の贈答

薫、弁の君、姫君たちと語る

一二 弁の君（橋姫二九四頁参照）。「古人」は、老女。

一三 御簾の隙間から洩れ見える姿も優美な感じだが。弁の君の透影。

一四 薫は、世間にありふれた色めいた様子もなく、考え深くお話を静かに申し上げながらおいでになるので。弁の君を介してである。

（八宮）「われなくて草の庵は荒れぬとも
　　このひとことはかれじとぞ思ふ
かかる対面もこのたびや限りならむと、もの心細きに忍びかねて、かたくなしきひが言多くもなりぬるかな」とて、うち泣きたまふ。

客人、

（薫）「いかならむ世にかかれせむ長き世の
　　契りむすべる草の庵は
相撲など、公事どもまぎれはべるころ過ぎて、さぶらはむ」など聞こえたまふ。

こなたにて、かの問はず語りの古人召し出でて、残り多かる物語などせさせたまふ。入りかたの月、隈なくさし入りて、透影なまめかしきに、君たちも奥まりておはす。世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞こえつつものしたまへば、さるべき御いらへなど聞こえたまふ。三の宮いとゆかしうおぼいたるものをと、心

（心細い気がいたしますのに耐えかねて）
（このたびが最後でありましょうかと）
（愚かな言わでものことを）
（つい申し上げてしまいました）
（あれこれ忙しい時期が過ぎましてから）
（お伺いいたします）
（こちらで）
（話などおさせになる）
（明るく）
（姫君たち）
（奥の方に）
（まだいろいろ聞きたい）
（姫君たちも）
（しかるべき）
（お返事など申し上げなさる）
（匂宮がこの姫君たちにとてもご執心でいられるのにと）
（内心）

一 我ながら、やはりほかの男とは違っていることだ。以下、匂宮に比べて、気持のせくことのない自分をかえりみる薫の心。

二 ここまで宮がご自分から進んでお許しになることが。姫君たちとの結婚のこと。将来の世話を頼むとは、暗黙のうちに結婚を前提とした依頼と考えてよいのである。

三 時節時節の花や紅葉に託して、気持を訴え合ったり、風情あるやりとりをするには、この姫君たちはなかなか気の利いたお相手だから。

四 自分との縁がなくて、姫君たちがほかの男と結婚なさったりすることは。

五 もう自分のものという気がするのだった。ここの文末は、地の文の形で薫の気持を直接に書く。

薫、帰京　匂宮　中の君と文通

六 お相手の女君は。中の君のこと。前に「中の君ぞ聞こえたまふ」（三一一頁）とあった。

では
のうちには思ひ出でつつ、一わが心ながら、なほ人には異なりかし、
別段せく気にもなれないことだ　しかし
二さばかり御心もてゆるいたまふことの、さしもいそがれぬよ、もて
思われず　こんなふうにしてお
離れてはたあるまじきこととは、さすがにおぼえず、かやうにても
結婚が全然問題にならないことだとは　話も互いに申し上げ
のをも聞こえかはし、三をりふしの花紅葉につけて、あはれをも情を
も通はすに、憎からずものしたまふあたりなれば、四宿世異にて、ほ
かざまにもなりたまはむは、五さすがにくちをしかるべう、領じたる
やはり残念に思われるに違いなく
ここちしけり。
〔薫は〕明け方暗いうちに　〔八宮の〕心細く先も長くないようにお思いだった
まだ夜深きほどに帰りたまひぬ。心細く残りなげにおぼいたりし
ご様子を　何かと忙しい時期を過ごしてから伺おう
御けしきを思ひ出できこえたまひつつ、騒がしきほど過ぐしてまう
匂宮　〔宇治に〕
でむ、とおぼす。兵部卿の宮も、この秋のほどに紅葉見におはしま
〔宇治に〕
さむと、さるべきついでをおぼしめぐらす。御文は絶えずたてまつ
何かよいきっかけをといろいろご思案になる
りたまふ。六女は、まめやかにおぼすらむとも思ひたまはねば、わづ
匂宮が本気でお考えなのだろうともお思いでないので　迷惑な　お手紙
らはしくもあらで、はかなきさまにもてなしつつ、をりをりに聞こ
軽く応じるといったあしらいぶりで　時々
こととも思わず
えかはしたまふ。
のやりとりをなさる

八の宮、山荘に生涯を送るよう姫君たちに遺言

七 例年のように、もの静かな阿闍梨の山寺で（橋姫二七一～二頁参照）。阿闍梨は、宇治山に住む八の宮の師の僧（橋姫二六四頁参照）。

八 何か気持の安まるようなことでもあるのでしたら、（死別の）悲しみも薄らぐというものでしょう。後顧の憂いがないなら、自分もいささか心を安んじて死ねるのだが、の意。

九 いつまでも成仏できないというのも、つまらぬことですから。「長き夜の闇」は、「長夜の闇」（夕霧三二頁注三参照）を和らげた言い方。煩悩によって真の悟りを得ず、六道に輪廻することを喩える。

一〇 一方でこうしてあなた方のお世話をして来た今までですら、この世に執着を持たぬようにして来たのですから。

一一 私（八の宮）一人のためだけではありません、お亡くなりになった母君のお顔に泥を塗るように。

一二 ただこのように、人とは違った特別の運命の身の上とお考えになって。結婚というようなことは考えるな、の意。

一三 いちずにその気になってしまえば。今までこの山荘に隠れ住んで来た自分の経験を引合いに出して言う。

椎本

秋深くなりゆくままに、宮は、（八の宮）いみじうもの心細くおぼえたまひければ、例の、静かなる所にて、念仏をもまぎれなうせむ、とおぼして、（余念なく勤めよう）君たち（姫君たち）にもさるべきこと聞こえたまふ。「世のこととして、（この世の習いとして）つひの別れをのがれぬわざなめれど、（死別ということは避けられぬことではありましょうが）思ひなぐさまむかたありてこそ、悲しさをもさますものなめれ。（これからの心得をお話し申し上げなさる）また見ゆづる人もなく、心細げなる御ありさまどもを、（ほかにお世話を頼める人もなく）うち捨ててむがいみじきこと。（見捨ててしまうとは何というつらさでしょう）されども、（頼りなげな境涯のあなた方お二人を）さばかりのことにさまたげられて、長き夜の闇にさへまどはむが益なさを、かつ見たてまつるほどだに思ひ捨つる世を、去りなむうしろのこと知るべきことにはあらねど、わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし御面伏せに、軽々しき心どもつかひたまふな。おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただかう人に違ひたる契り異なる身とおぼしなして、ここに世を尽くしてむと思ひとりたまへ。ひたぶるに思ひしなせば、ことに過ぎてしまう もあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女は、さるかたに絶え籠り

（それくらいの心配ごとがさし障りになって）（死んでしまったその）（あとのことをとやかく思うべきことではありませんが）（軽はずみな料簡を起してはなりません）（甘い言葉に誘われて）（この山荘をうかうかと出てはなりません）（りになる人でなくては）（ここで生涯を終えようと心をお決めなさい）（何でもなく過ぎてしまう）（なのですよ）（女らしくひっそり閉じこもっ）

て、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを負はざらむなむよかるべき」などのたまふ。一ともかくも身のならむやうまでは、おぼしも流されず、ただいかにしてか、後れたてまつりては、世に片時も生き永らえられようながらふべき、とおぼすに、二かく心細きさまの御あらましごとに、言ふかたなき御心まどひどもになむ。三心のうちにこそ思ひ捨てたまひつらめど、明け暮れ御かたはらにならはいたまうて、にはかに別れたまはむは、四つらき心ならねど、げにうらめしかるべき御ありさまになむありける。

評判になるような不体裁な世間の非難を浴びないようにするのがかしこい生き方でしょうて　一体どのようにして　お思いなのに　お二人とも言いようのないほどのお嘆きようである　父宮に先立たれ申しては　「姫君たちを」お側にずっとお置きになって　急に今お別れになるというのでは　怨めしくお思いになっても無理もない姫君たちのお身の上なのだった

明日入りたまはむとての日は、例ならずこなたかなたたたずみありきたまひて見たまふ。いとものはかなく、かりそめの宿りにて過ぐいたまひける御住ひのありさまを、亡からむのち、いかにしてかは若き人の絶え籠りては過ぐいたまはむ、と涙ぐみつつ念誦したまふさま、いときよげなり。おとなびたる人々召し出でて、「うしろやすくつかうまつれ。何ごとも、五もとよりかやすく、世に聞こえあ

山寺にお籠りになろうとする前の日は　ふだんに似ず山荘のあちらこちらを立ちどまりながらお回りになってご覧になる　いかにも質素に　ほんの一時の　雨露のしのぎとして過してこられた　閉じこもってお過しになれよう　若い姫君たちが　すっきりしたお姿だ　年輩の女房たちをお前にお呼び出しになって　〔宮〕心配のないようにお仕えしてほしい　どのようにして

八の宮、女房たちをいましめる

一（父宮のおっしゃるような）どうなるにせよこれから先のわが身の成行きなどまでは、お考えも及ばず。以下、姫君たちの心中。

二 父宮が、こんな心細い先のことをおっしゃるので。自分の死後のことについて諭したりなさるので、の意。

三 八の宮は、今まで内心ひそかには、姫君たちのことも執着をお絶ちになっていらっしゃったであろうが。以下、姫君たちの悲しみをもっともとする草子地。

四 冷たいお心からそうするというわけではないのだけれども。

五 もともと気軽に暮してゆける、世間に取り沙汰されるはずもない分際の人は。宮家のような身分のない家柄の人は、の意。

六（しかし）このような家柄ともなると。宮家ともなれば、の意。

七 せっかくの尊い血筋に生れたことに対して、あいすまない仕儀で。「契り」は、宿縁。

八 贅沢に人並みな暮しをしたいと思っても。以下、女房たちに、物質に目がくらんで、姫君たちに身分の低い夫を迎えるようなことをしてはならぬと、いましめる。

八の宮、姫君たちを残して参籠

九 明け方まだ暗い時刻。

一〇 あとに残された大君と中の君。

るまじき際の人は、末のおとろへも常のことにて、まぎれぬべかめり。かかる際になりぬれば、人は何と思はざらめど、くちをしうてさすらへむ、契りかたじけなく、いとほしきことなむ多かるべき。ものさびしく心細き世を経るは、例のことなり。生まれたる家のほど、おきてのままにもてなしたらむなむ、聞き耳にも、わがここちにも、あやまちなくはおぼゆべき。にぎははしく人数めかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめゆめ軽々しく、よからぬかたにもてなしきこゆな」などのたまふ。

まだ暁に出でたまふとても、こなたにわたりたまひて、「なから むほど、心細くなおぼしわびそ。心ばかりはやりて遊びなどはしたまへ。何ごとも思ふにえかなふまじき世を、なおぼし入れそ」など、かへりみがちにて出でたまひぬ。二所、いとど心細くもの思ひ続けられて、起き臥しうちかたらひつつ、「一人一人なからましかば、いかで明かし暮らさまし。今行く末も定めなき世にて、もし別るる

子孫の落ちぶれるのもよくあることで　目立ちもしないものだ　人は別に何とも思わぬだろうが　みじめな有様でうろうろするのは　見るに見かねることがいろいろ多いだろう　貧しく頼み少ない暮しをするのは　ありふれたことだ　格式どおりに身を処するというのが　生れた家の身分や　人の聞くところも　自分自身の気持としても　間違いのないことだと思われよう　その思うところも叶いそうにない時勢だというのなら　決して　身分を汚すようなお取り持ちをしてはならぬ　お出かけになる時にも　姫君たちのお部屋においでになって　（宮）私の留守の間　心細がってくよくよなさるな　気持だけは明るくして琴などはもてあそびなさい　何ごとも思い通りにはゆきそうにないこの世のことを　気になさってはいけません　後ろ髪を引かれる思いで　仲むつまじく語り合って　私たちのどちらか一人がいなかったら　どうして日を過していけましょう　今も先もどうなるとも知れぬ世ですから　もし別れ別れに

八の宮、山寺に病む

一 念仏の三昧。心に仏を念じ、仏名、経などを唱える行法。（三巻松風一三四頁注九に既出）
二 今朝から具合が悪くて、お側に帰れません。以下、使いに託しての八の宮の手紙の趣。
三 それにしても、いつもよりあなた方のお顔が見たくてならぬ思いですが。
四 近いうちに、無理をしてでも（帰りましょう）。「念ず」は、我慢する。
五 使者の口上で。筆を執る力もないのであろう。
六 姫君たちのお行く末は、何もご心配になることはないのです。八の宮の妄執をさまそうとする仏者としての配慮。
七 この世のご運勢というものは、それぞれ別にさだまっているのですから。

なることでもあったら　泣いたり笑ったりして　遊ぶ時も手仕事をしながらも
やうもあらば」など、泣きみ笑ひみ、たはぶれごともまめごとも、
気を合せてお互いにいたわりながら
同じ心になぐさめかはして過ぐしたまふ。
宮のお勤めになる　終るはずだからと　心待ちに
かの行ひたまふ三昧、今日果てぬらむと、いつしかと待ちきこえ
たまふ夕暮に、人参りて、「今朝よりなやましくてなむ、え参らぬ。
使い　（八宮）二　あれこれ手当てをしているところです
風邪
風かとて、とかくつくろふとものするほどになむ。三さるは、例より
（姫君たちは）どきりとして　どんなご容態な
も対面心もとなきを」と聞こえたまへり。胸つぶれて、いかなるに
のかとお心を痛め　厚く入れて急いで仕立てさせなさって　お届け申し上
かとおぼし嘆き、御衣ども綿厚くて急ぎせさせたまひて、たてまつ
げたりなさる　（山を）　一体どんなご様子かと使いを
れなどしたまふ。二三日は下りたまはず。いかにいかにと人たてま
（八宮）特にそうひどいというわけではありません　どこがということな
つりたまへど、「ことにおどろおどろしくはあらず、そこはかとな
く大儀なのです　少しでも楽になりましたら
く苦しくなむ。すこしもよろしうならば、四今念じて」など、言葉に
て聞こえたまふ。阿闍梨つとさぶらひてつかうまつりけり。「はか
もないご病気のように見えますが　これがもうご最期であられるのかもしれませぬ
なき御なやみと見ゆれど、限りのたびにもおはしますらむ。六君たち
の御こと、何かおぼし嘆くべき。人は皆、御宿世といふもの異々な
お考え通りになられるものでもありません　一段とこの世の執着をお捨
れば、御心にかかるべきにもおはしまさず」と、いよいよおぼし離

八 もうこの期に及んでは山をお下りになりませぬように。心静かに臨終を迎えさせたいという配慮。

九 朝に夕に心の晴れる折とてなく。姫君たちの気持を、霧の深い宇治の土地の風物に託していう。「朝夕霧」は、朝霧と夕霧。歌語。（三巻松風一四一頁に既出）

一〇 明け方まで空に残る月。陰暦二十日以降の月にいう。

一一 宇治川。

一二 板に縦横に桟を打ち付けた、格子ようのもの。格子より粗末なもので、民家や山荘などに多かったらしい。（図録六参照）

一三 夜明けを告げる山寺の鐘の音。

一四 涙もどこへ行ってしまったのだろうか。驚きと悲しみに涙も出ない有様。

一五 どんなご最期だったか分らないという心残りもあることゆえ。

一六 ぜひにもおあとを追いたいと。

八月二十日夜半、八の宮死去の知らせ

てにならねばならぬことをおさとし申しては（阿闍梨）八るべきことを聞こえ知らせつつ、「今さらにな出でたまひそ」と、ご意見申し上げるのだったいさめ申すなりけり。

八月二十日のほど（頃）なりけり。おほかたの空のけしきもいとどしき（ただでさえ秋の空のたたずまいもひときわもの悲しい）時節に（姫君たち）ころ、君たちは、朝夕霧の晴るる間もなく、（お心を痛めながらもの思わしげで）おぼし嘆きつつながめ（いられる）たまふ。有明の月のいとはなやかにさし出でて、水の面もさやかに（明るく）澄みたるを、（川の方の）そなたの蔀上げさせて、（外を眺めていらっしゃると）見出だしたまへるに、鐘の声（夜も明けたのだろうと）かすかに響きて、明けぬなりと聞こゆるほどに、人々来て、（使）「この夜中ばかりになむ亡せたまひぬる」と泣く泣く申す。（どうしていられるかとは始終お案じ申していられたものの）心にかけて、（忘れる時とてなく）いかにとは絶えず思ひきこえたまへれど、（いざ知らせをお聞きになっては）うち聞きたまふには、（あまりのことに何の分別も消え失せたような気がして）あさましくものおぼえぬここちして、（ましてこうしたあまりの悲しさには）いとどかかることには、涙もいづちか去にけむ、ただうつぶし臥したまへり。（悲しい死別といっても）いみじきことも、見（見ている目の前でたしかに最期をみとるというのが）る目の前にておぼつかなからぬこそ、（普通のことなのに）常のことなれ、おぼつかなさ（姫君たちの）添ひて、（お悲しみもごもっともなことである）おぼし嘆くこととわりなり。しばしにても、後れたてま（おく父宮に先立たれ申しては生き永らえられるものとも今までお思いになることもなかったお二人のことと）つりて世にあるべきものとおぼしならはぬ御ここちどもにて、いか

でかは後れじと、泣き沈みたまへど、限りある道なりければ、何のかひなし。

阿闍梨、年ごろ契りおきたまひけるままに、後の御こともよろづにつかうまつる。「亡き人になりたまへらむ御さま容貌をだに、今一度見たてまつらむ」とおぼしのたまへど、「今さらに、なでふさることかはべるべき。日ごろも、またあひ見たまふまじきことを聞こえ知らせつれば、今はまして、かたみに御心とどめたまふまじき御心づかひを、ならひたまふべきなり」とのみ聞こゆ。おはしましける御ありさまを聞きたまふにも、阿闍梨のあまりさかしき聖心を、憎くつらしとなむおぼしける。入道の御本意は、昔より深くおはせしかど、かう見ゆづる人なき御ことどもの見捨てがたきを、生ける限りは明け暮れえ避らず見たてまつるを、よに心細き世のなぐさめにも、おぼし離れがたくて過ぐいたまへるを、限りある道には、先だちたまふもしたひたまふ御心も、かなはぬわざなりけり。

長年宮がお約束なさっていたとおりに
取りしきってお仕えする
（姫君たち）御なきがらになってしまわれたという
（阿闍梨）
何でご対面なお願いになるけれども
どなさることがありましょう
二度と姫君たちとお会いにはならぬようにとおさとし申し上げましたので
互いに親子のご愛執をお持ちにはならぬようにとのお心構えを
お持ちにならねばなりませぬ
このようにあとを任せられる人もいないお二人の不憫なお身の上を
生きている間は
お手許でお世話申し上げるのを
わびしい限りのお暮しの慰めともし
出家にも踏みきれずに今までお過しだったが
仕方のない死出の道には
先立ちになるご心配もおあとを追いたいお気持も
思うにまかせぬことなのだった
僧らしくひどいとお思いになるのだった
道理をふりかざした

悲しい親娘の別れ

一　寿命には運命のある死出の道なので、願いの叶えられるはずもない。

二　ご葬送のことや、四十九日までの七日ごとの追善のご法要も。

三　この日頃も。今度の山寺にお籠りの間も、の意。

四　お亡くなりあそばした今はまして。

五　山寺にお籠りだった間の父宮のお過しぶりを姫君たちはお聞きになるにつけても。前にもあった、山を出ることを強くとめたことなど、委しい事情の説明も阿闍梨からあったのであろう。

六　世事をかえりみない仏道一筋の気持。

七　出家なさろうというお気持は。八の宮のこと。

薫の悲しみと弔問

〔宮逝去のことを〕中納言殿には、聞きたまひて、いとあへなくくちをしく、今一度、心のどかにて聞こゆべかりけること多う残りたることこちして、おほかた世のありさま思ひ続けられて、いみじう泣いたまふ。「またあひ見ること難くや」などのたまひしを、なほ常の御心にも、朝夕の隔て知らぬ世のはかなさを、人よりけに思ひたまへりしかば、耳馴れて、昨日今日と思はざりけるを、かへすがへす飽かず悲しくおぼさる。阿闍梨のもとにも、君たちの御とぶらひも、こまやかに聞こえたまふ。かかる御とぶらひなど、またおとづれきこゆる人だにな き御ありさまなるは、ものおぼえぬ御ここちどもにも、年ごろの御心ばへのあはれなめりしなどをも、思ひ知りたまふ。世の常のほどの別れだに、さしあたりては、またたぐひなきやうにのみ、皆人の思ひまどふものなめるを、なぐさむかたなげなる御身どもにて、いかやうなるここちどもしたまふらむ、とおぼしやりつつ、後の御わざなど、あるべきことども、おしはかりて、阿闍梨にもとぶらひた

〔宮逝去のことを〕ひどく力を落し残念に思って
宮のこと
ゆっくりとお話し申し上げたかったことがまだまだたくさんあったような気がして
とだけでなくこの世の無常があれこれ思われて
（八宮）
人一倍お思いになっていたお方なので
気にも
姫君たちへのおくやみも
残念に
せずに
君たちの御とぶらひも
このようなご弔問など
薫のほかにわざわざ申し上げる人もいないさび
何の分別もつかないお悲しみのうちにも
今まで長年の薫
改めてよくお分りになる
のお心遣いのご親切だったらしいことなども
その時に当っては
またとないことのように思い詰めて
誰でも悲
気持の慰めようもないお身の上のお二人なのだから
しみにくれるものらしいのに
のようなお気持でいられることだろう
〔薫は〕推察なさっては

薫

椎本

三二五

へ もう一度お目にかかることはむつかしいかもしれません。前に「かかる対面もこのたびや限りならむと、もの心細きに忍びかねて」（三一七頁）とあった。

九 何といっても、八の宮は常日頃のお気持としても。以下、薫の心中。

一〇 朝と夕の短い間もどうなるか分らないこの世のはかなさを。「朝に紅顔有って世路に誇れども、暮には白骨と為つて郊原に朽ちぬ」（『和漢朗詠集』下、無常、義孝少将）といった趣。

一一 こんなさしせまったこととも思っていなかったのに。「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」（『古今集』巻十六哀傷、病して弱くなりにける時よめる　業平朝臣）

一二 世間普通の親子の死別でも。姫君たちの場合は、母君がすでにない。以下、薫の心中。

一三 四十九日までの七日ごとの追善のご法要など。

一四 営まなくてはならないあれこれのことを、見積って、阿闍梨のもとにも、必要な品々をお届けになる。

一 年老いた女房たちに贈るという休裁にして、誦経のお布施のための品々（衣料）のことまで、お心遣い申し上げなさる。

二 いつまでも明けない夜の中をさまようような悲しみのうちに。歌の表現を借りたものであろう。「明けぬ夜の心ながらにやみにしをあくぞといひし声は聞ききや」（『河海抄』所引。『後拾遺集』巻十八雑四、読人しらず、「ここちながらに」「朝倉といひし」。『実方朝臣集』にも）

忌籠り　姫君たちの悲嘆

三 晩秋の季節。

四 姫君たちの涙をそそりがちで。折しも時雨（晩秋、初冬の景物）の候なので修飾的にいう。

五 激しく流れ落ちる涙。「わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ高けむ」（『伊勢物語』八十七段）

六 八の宮の忌に籠って念仏を奉仕する僧。人の死後三十日、死の穢れのため近親者が忌に籠り、僧たちも奉仕する（夕霧五五頁、御法一一五頁）。

七 前に「兵部卿の宮も、この秋のほどに紅葉見におはしまさむと、さるべきついでをおぼしめぐらす」（三一八頁）とあった計画であろう。

八 人々に漢詩など作らせなさろうとお思いで。

まふ。ここにも、老人どもにことよせて、御誦経などのことも思ひやりきこえたまふ。

山荘の方にも

明けぬ夜のここちながら、九月にもなりぬ。野山のけしき、まして袖の時雨をもよほしがちに、ともすればあらそひ落つる木の葉の音も、水の響きも、涙の滝も、ひとつもののやうにくれまどひて、

野や山の風情は　何かというと先を争って散り落ちる　川瀬の音も　[姫君たちは]区別できないかのように悲しみに正体もなく

こんなことではどうして　かうてはいかでか、限りあらむ御命も、しばしめぐらひたまはむと、

定めのあるご寿命も　しばらくの間もおたもちになれようかと　[姫君たちを]必死にお慰め申し上げながらも途方に暮れている

お側に仕える女房たち　さぶらふ人々は心細く、いみじくなぐさめきこえつつ思ひまどふ。

山荘にも　ここにも念仏の僧さぶらひて、おはしましかたは、仏を形見に見たてまつりつつ、時々参りつかうまつりし人々の、御忌に籠りたる限りは、あはれに行ひて過ぐす。

八の宮の生前のお居間には　宮のご持仏を形見と思って拝しながら　伺候して宮のご用を勤めていた人々で　籠っている者は皆　悲しげに勤行して

匂宮　兵部卿の宮よりも、たびたびとぶらひきこえたまふ。さやうの御返りなど、聞こえむここちもしたまはず。おぼつかなければ、中納言にはかうもあらざなるを、われをばなほ思ひ放ちたまへるなめりと、うらめしくおぼす。紅葉の盛りに、文など作らせたまはむとて、

匂宮

ご弔問申し上げなさる　そうしたお手紙　へのお返事など　申し上げる気にもおなりにならない　何のお返事もないので　薫　こんなに冷淡でもあるまいに　自分のことはやはり心にも止めていられないのだろうと　[宮は]

九 八の宮がお亡くなりになって、宇治のあたりでのご遊覧は、不都合な折からなので。

一〇 八の宮の亡くなったのは八月二十日だから、忌の三十日を過ぎて九月の二十日過ぎの頃。

一一 ものには限度のあることだから（どんな悲しみでも日が経てば薄らぐと決ったものなのだから）、姫君たちの涙も乾く折もあろうかと、匂宮は推察なさって。

忌の果て　匂宮との文通

一二 牡鹿が妻を呼んで悲しげに鳴く秋の山里は、どんなにおさびしいことでしょう、小萩の露のこぼれかかるこうした夕暮には。「小萩」は姫君、「露」は涙を暗示し、「かかる」は、こうした、の意を掛ける。

一三 この今の空のたたずまいの哀れさをお分りでないふりをなさるのでしたら、あまりにもひどいお仕打ちと申すべきでしょう。返事をうながす文言。

一四 歌語である。「鹿の棲む尾の上の萩の下葉より枯れゆく野べもあはれとぞ見る」（『新千載集』巻五秋下、題しらず、中務卿具平親王）

一五 中の君。親王の姫君を「宮」と呼ぶ例が当時あった。朝顔の前斎院も「朝顔の宮」（二巻葵一〇三頁）「宮」（三巻朝顔一八九頁）と呼ばれている。この呼称はここが初出で、これ以後、この人は「中の宮」と呼ばれる。

一六 今日まで生き永らえて。以下、中の君の心中。

お出かけのおつもりだったが

出で立ちたまひしを、かくこのわたりの御逍遥、便なきころなれば、

[宮は] 思いとどまられて残念にお思いだった

おぼしとまりてくちをしくなむ。

一〇 御忌も果てぬ。一一 限りあれば、涙も隙もやとおぼしやりて、いと多く書き続けたまへり。時雨がちなる夕つかた、

[匂宮] 一二 牡鹿鳴く秋の山里いかならむ

小萩が露のかかる夕暮

一三 ただ今の空のけしきをおぼし知らぬ顔ならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。一四 枯れゆく野辺も、分きてながめらるるころになむ。

[大君] ほんに　もう風情も何も分らないかのように何度も失礼申し上げてしまいまし

とりわけもの悲しく眺められる季節です

などあり。「げに、いとあまり思ひ知らぬやうにてたびたびになりぬるを、なほ聞こえたまへ」など、一五 中の宮を、例の、そそのかして、書かせたてまつりたまふ。一六 今日までながらへて、硯など近くひき寄せて見るべきものとやは思ひし、心憂くも過ぎにける日数かな、と

おすすめして　やはりお返事をさし上げなさい　たから　硯など近く引き寄せて見ることもあろうと思ってもみただろうか　情けなくも

[中君は] おぼすに、また涙に目も曇って、もの見えぬここちしたまへば、押しや

何も見分けられないような気がなさるので [硯を]

一（日数がたつにつれて）ようやくこうして起きていられたりしますのが。悲しみの薄れたさま。

二 匂宮のつかわした使者。

三 中の君がお返事できそうにもないのを見るに見かねなさって。

四 もうすっかり涙にくれております霧深いこの山里では、垣根のそばで鹿が私どもと声を合せて泣いております。

五 服喪中なので鈍色（薄墨色）の紙を用いる。

六 しかも夜のこととて、墨のつき具合（濃淡）もはっきり分らないので。

七 上包みに手紙を包んで使いにお渡しになった。

八 木幡山。伏見城山の北の山越え。（図録二参照）

九 雨の降る中を。歌語であろう。

一〇 そんなことは物ともしない屈強の者をお選びになったのだろうか。

一一 気味の悪い笹の生い茂った山道も、馬を休ませることもなく早駆けさせて。「笹の隈檜の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」（『古今集』巻二十、神遊びの歌、日霊の歌）の言葉によって綾なした文。お前の「木幡の山」には、「山科の強田の山を馬はあれど徒歩ゆわが来し汝を思ひかねて」（『万葉集』巻十一）が響いている。

（中君）やはりとても書けそうにありません

りて、「なほえこそ書きはべるまじけれ。やうやうかう起きゐられなどしはべるが、（なるほど悲しみもそうしたものなのかと思われるにつけ）げに限りありけるにこそとおぼゆるも、（自分がいやで）うとましう心憂くて」と、（可憐な様子で泣き沈んでいらっしゃるのも）らうたげなるさまに泣きしをれておはするも、（と）（情けなく思われて）（とても痛々しい）と心苦し。

（京から）夕暮のほどより来ける御使、宵すこし過ぎてぞ来たる。（宇治に）「いかで（大君）どうして（これから帰れましょう）か帰り参らむ。今宵は旅寝して」（ここに泊って）と言はせたまへど、（使）「立ち帰りこそ参りなめ」（帰参いたします）と急げば、（大君は）いとほしうて、（気の毒に思って）（自分だけ冷静に落着いていらっしゃると）（いうわけではないけれども）まふにはあらねど、見わづらひたまひて、

（大君）涙のみ霧りふたがれる山里は
　　籬に鹿ぞ諸声に鳴く

黒き紙に、夜の墨つきもたどたどしければ、（気を遣って書くこともなく）ひきつくろふところもなく、筆にまかせて、おし包みて出だしたまひつ。

御使は、木幡の山のほども、（あたりも）雨もよにいと恐ろしげなれど、さやうのもの懼ぢすまじきをや選り出でたまひけむ、むつかしげなる笹

一二 労をねぎらう褒美の品。
一三 今までご覧になっていたのとは違う筆跡の。今までは、中の君が返事を書いていた（三一一頁、三一八頁）。

一四 （匂宮に付き合って起きていて）ねむたいからなのだろう。草子地。
一五 深い朝霧の中に連れにはぐれた悲しい鹿の鳴き声を―父宮に先立たれたあなた方のお嘆きの声を、ただの秋の風情として―ただ世間並みにご同情申し上げるだけでしょうか。「声立ててなきぞしぬべき秋霧に友まどはせる鹿にはあらねど」（『後撰集』巻七秋下、題しらず、紀友則）
一六 「諸声」とおっしゃるのは、私とておくれをとりましょうか。大君の歌の「諸声に鳴く」を受けて言う。
一七 あまり風情を知り顔に振舞うのも面倒だ。以下、大君の心。
一八 父八の宮お一人。
一九 不本意な間違いが。男との間の間違い。「ことのまぎれ」で一語。

の隈を、駒ひきとどむるほどもなくうち早めて、片時に参り着きぬ。たちまち帰参した御前にても、〔使が〕いたく濡れて参りたれば、禄賜ふ。一三 さきざき御覧ぜしにはあらぬ手の、今すこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまなどを、どちらがどちらの筆跡なのだろうと下にも置かずもつとずっと老成した感じで いかにも風情のある筆の運びまなどを、いづれかいづれならむと、うちも置かず御覧じつつ、とみにも大殿籠らねば、（女房）待つといっては起きていらっしゃりぐにも 待つて起きおはしまし、また御覧ずるほどの久しきは、どれほどご執心のことなのでしょうどの久しきは、いかばかり御心にしむことならむ」と、御前なる人人さざめき聞こえて、憎みきこゆ。一四 ねぶたければなめり。

間取られるのは ご覧になるのに手 女房たちはひそひそお噂して

まだ朝霧深き朝に、〔匂宮は〕いそぎ起きてたてまつりたまふ。〔返事を〕

（匂宮）一五「朝霧に友まどはせる鹿の音を

おほかたにやはあはれとも聞く

諸声は劣るまじくこそ」とあれど、あまり情だたむもうるさし、一八 所の御蔭に隠ろへたるを頼み所にてこそ、何ごとも心やすくて過ぐしつれ、心よりほかにながらへて、思はずなることのまぎれ、つゆにてもあらば、うしろめたげにのみおぼしおくめりしなき御魂にさ

ご庇護の下にあるので今までは安心して 何につけても気楽に過して来たのだけれども 心ならずもこれから先生き永らえて 少しでもあるならば 気がかりでならないようにお思いだったらしい亡き父宮の 魂に

まで へ、疵やつけたてまつらむと、なべていとつましう恐ろしうて、
傷をお付け申すことになろうかと　一体に男というものにひどく気後れし恐ろしくて
聞こえたまはず。この宮などをば、軽らかにおしなべてのさまにも
お返事は申されない　匂宮　その辺の並み並みの人のようにも
思ひきこえたまはず。なげの走り書いたまへる御筆づかひ言の葉も、
[大君は]　[匂宮が]何気なく走り書きなさったお筆の運びや
をかしきさまになまめきたまへる御けはひを、あまたは見知りたま
風情に富んで優雅でいらっしゃるお手紙の趣を　[男の文を]多くはご存じではない
はねど、これこそはめでたきなめれと見たまひながら、そのゆゑゆ
こんなのこそすばらしいお手紙なのだろうと
ゑしく情あるかたに言をまぜきこえむも、つきなき身のありさまど
もなれば、何か、ただかかる山伏だちて過ぐしてむ、とおぼす。

薫　中納言殿の御返りばかりは、かれよりもまめやかなるさまに聞こ
薫の方からも生真面目な態度でお手紙申し上げなさるので　こちらからも　ひどくそっけないふうではなく
えたまへば、これよりも、いとけうとげにはあらず聞こえ通ひたま
薫ご自身
ふ。御忌果てても、みづからまうでたまへり。東の廂の下りたるか
質素な喪服姿でいられるのに[薫は]
たにやつれておはするに、近う立ち寄りたまひて、古人召し出でた
悲しみにくれていられる姫君たちのお近くに[薫が]とてもまぶしいほどに立派な風采で
り。闇にまどひたまへる御あたりに、いとまばゆくにほひ満ちて入
[姫君たちは]きまり悪くて　お返事などとてもおできになれないので
りおはしたれば、かたはらいたうて、御いらへなどをだにえしたま
(薫)こんなによそよそしくはなさらないで　亡き父宮のお仕向けのように親しくお
はねば、「かやうにはもてないたまはで、昔の御心むけに従ひきこ

一　そうした匂宮の奥ゆかしく趣深いお手紙にお返事をさし上げてお付合い申し上げるのも、不似合いなわれわれ姉妹の身の上なのだから、何の、ひたすらこうした（ものの情けも知らぬ）山住みの者として過してゆこう、とお思いになる。大君の思い。「山伏」は、山野に起臥して修行する僧。

薫の訪問

二　三二七頁注一〇参照。

三　寝殿の東の廂。姫君たちの居所。「下りたるかた」は、低くなった所。服喪中は、一段低い所で過す。

四　老女の弁。

五 お取次ぎを介してお話し申し上げるのでは。この前後、取次ぎの女房を介してのもったいぶった対話は苦手だ、と言う。

六 諦めようもない夢のような出来事に、どうしてよいか分らない気持でおりますので。「思ひさまさむ」の「さます」は、「夢」の縁語。「たどる」は、手探りする、うろうろする意。

七 月日の光とおっしゃいますが、それは、ご自分から進んで晴れやかにお振舞いになるのでしたら、悪いことでもございましょうが、（こんなことでは）どうしようもなく、気持の晴れない思いです。「月日の影」は、「空の光見はべらむも」に応じて言う。礼儀として、客の自分と応対するのに何の仔細がありましょう、の意。

八 いかにもまことにほかに例のないほどの（姫君たちの）ご愁傷を、お慰め申し上げなさる（薫の）お気持の並々ならぬことなどを、女房たちは（大君に）おさとし申し上げる。直接の応対をすすめるのである。

大君、薫と対面

九 亡き父宮への好誼からであるにしても。

こうしてお話し合いをするかいもあるというものです
付合い下さいますのこそ
えたまはむさまならむこそ、聞こえうけたまはるかひあるべけれ。
色めかしい仔細ありげな振舞には不慣れな私ですから
なよびけしきばみたるふるまひをならひはべらねば、人伝に聞こえ
はべるは、言の葉も続きはべらず」とあれば、（大君）思いのほかに「あさましう、今まで
生き永らえているようではございますが
でながらへはべるやうなれど、思ひさまさむかたなき夢にたどられ
心ならず空の光を見ますのもいけないことのように思われまして
はべりてなむ、心よりほかに空の光見はべらむもつつましうて、端
端近く参ってお相手することも叶いませぬ
近うもえみじろきはべらぬ」と聞こえたまへれば、（薫）あまりといへば
この上もないお考え深さというものです
限りなき御心の深さになむ。月日の影は、御心もて晴れ晴れしくも
て出でさせたまはばこそ、罪もはべらめ、行く方もなく、いぶせう
お悲しみでおいでしょう　一端なりとも　お慰め申し上げたいと存じます
おぼえはべり。またおぼさるらむはしばしをも、あきらめきこえま
ほしくなむ」と申したまへば、げにこそいとたぐひなげなめる御あ
りさまを、なぐさめきこえたまふ御心ばへの浅からぬほどなど、人
人聞こえ知らす。

大君ご自身としても　そうはいっても　ようやく気持も落着いてきて　何もかもよくお分りにもなるので　都から遠い
御ここちにも、さこそいへ、やうやう心しづまりて、よろづ思ひ
知られたまへば、昔ざまにても、かうまではるけき野辺を分け入り

一　姫君たちがどんなにお悲しみであろうかということ、また、八の宮がお約束なさったことなどを。姫君たちのことを薫に託す、との約束（三一四頁参照）。

二　こんなことでいいのかと思いながらも（薫を）頼りにするような具合でもあったこの日頃のことを思い続けるにつけても。父宮亡きあと、薫の手紙には返事を出していたことをさすのであろう（三三〇頁参照）。

三　簾の隙間から見える黒い帷の几帳など。服喪のさま。鈍色（薄黒い色）の几帳である。

四　まして姫君たちご本人の喪服に身をやつしていられるであろうお姿（が思われ）。

五　ほのかに覗き見た明け方暗い頃の姫君たちの姿などが思い出されて。橋姫二七五～六頁の垣間見の折のこと。

六　秋も闌けて色変りしている庭の浅茅を見るにつけても、墨染に身をやつしていられる姫君たちの袖が思いやられることです。姫君たちの袖にもさぞ涙の露が置いているであろう、の含意。

七　特に詠みかけて返歌を期待するふうでもない独吟の体。

八　墨染の袖は、涙の露がしとどに置いておりますが、私の身は、この世に置き所もございません。「置き所」の「置き」は、「露」の縁語。

〔薫の〕好意　よくお分りになるのであろう　〔大君は〕端近ににじり寄って来られた　たまへる心ざしなども、思ひ知りたまふべし、すこしゐざり寄りたまへり。おぼすらむさま、またのたまひ契りしことなど、いとこまやかになつかしう言ひて、うたてをしきけはひなどは見えたまはぬ人なれば、〔大君は〕気味悪くじっとしていられない気持などはしないが　親しくもない男に　とてもねんごろに　やさしく　〔薫は〕　こわそうな荒々しい様子などはお見えにならない人柄なので　けうとくすずろはしくなどはあらねど、知らぬ人にかく声を聞かせたてまつり、すずろに頼み顔なることなどもありつる日ごろを思ひ続くるも、さすがに苦しうて、つつましけれど、ほのかに一言などいらへきこえたまふさまの、げによろづ思ひほれたまへるけはひなれば、いとあはれと聞きたてまつりたまふ。黒き几帳の透影の、いと心苦しげなるに、ましておはすらむさま、ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、　つらくて　気がひけるけれども　〔大君の〕　なるほど何かにつけ悲しみに気の抜けたようなご様子なので　〔薫は〕　お気の毒だと　いかにも痛ましい感じなのに

（薫）色かはる浅茅を見ても墨染に

やつるる袖を思ひこそやれ

と、独言のやうにのたまへば、

（大君）「色かはる袖をば露の宿りにて

九 「藤衣はつるる糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける」（『古今集』巻十六哀傷、父が思ひにてよめる忠岑）。「藤衣」は、喪服の意の歌語（橋姫二九六頁注九参照）。「はつる」は、ほつれる。ほどける。

一〇 大君を引きとどめなどしていい場合でもないので。父宮を亡くして間もなく、相手が悲嘆に沈んでいる時だからである。

一一 弁。前に「古人召し出でたり」（三三三〇頁）とあった弁が、ようやく出て来たのである。

一二 昔のこと今のことを取り集めて。柏木のことや八の宮のこと。

一三 世にも珍しい驚くようなこともあれこれ見て来ている人なので。柏木の懊悩やその死など。

一四 亡き六条の院。光源氏。

一五 ただこうした心のどかなお住まいをなさったりして、それがお気持に叶っておられたのに。八の宮のこと。

一六 無常迅速のこの世がとくと思い知られる気持もいよいよ強められましたが。出家を思わぬでもないが、の含意。

椎本

薫、弁と語る

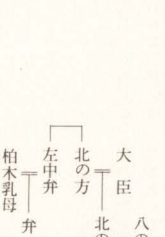
わが身ぞさらに置き所なき

はつる糸は」と末は言ひ消ちて、〔大君は〕もうとても悲しみに堪えきれないかのように奥に引き込まれた様子だにて入りたまひぬなり。

ひきとどめなどすべきほどにもあらねば、〔薫は〕心残りにいたわしく思われる飽かずあはれにおぼゆ。老人ぞ、大君のとんでもない代役として出て来てこよなき御かはりに出で来て、昔今をかき集め、悲しき御物語ども聞こゆる。ありがたくあさましきことどもをも見たる人なりければ、こんな見るかげもなく落ちぶれた人だと馬鹿にする気にもおなりになれずかうあやしくおとろへたる人ともおぼし捨てられず、〔薫は〕とてもやさしくお相手をなさるいとなつかしうかたらひたまふ。（薫）まだ幼かった頃に「いはけなかりしほどに、先立たれ申して故院に後れたてまつりて、いみじう悲しきものは世なりけりと、思ひ知りにしかば、成人してゆく人となりゆく齢に添へて、官位、世の中のにほひも、栄華も何と心も持てないでいますもおぼえずなむ。ただかう静やかなる御住ひなどの、心にかなひたまへりしを、こうしてあっけなくお亡くなりになってしまわれたのかくはかなく見なしたてまつりなしつるに、いよいよとても悲しくいみじく、かりそめの世の思ひ知らるる心ももよほされにたれど、おいたわしいご様子であとに残られた姫君たちのことを出家の妨げなどと申し上げるのは心苦しうてとまりたまへる御ことどもの、ほだしなど聞こえむは、

一 八の宮のご遺言をたがえず。

二 それにしても、思いもかけぬあなたの昔話を聞いてからは。亡き柏木のこと。以下、出家して柏木の菩提をも弔いたいという気持。



弁の素姓

三 太政官に属する左弁官局（中務、式部、治部、民部の四省を管轄する）の次官。正五位上相当。

四 長年、遠い地方の国にさすらえ。（橋姫二八一頁、二九七頁参照）

五 姫君たちの母北の方。

六 柏木の父、致仕の太政大臣家。

七 姫君たちの御乳母代りとしてお引き立てになったのだった。橋姫二九四頁にも「姫君の御後見にてさぶらはせたまふ」とある。

八 他人行儀な秘密などもなく親しくお思い申し上げている姫君たちにも。

口実めいて聞えるかもしれませんが

とにかく生き永らえて

かけかけしきやうなれど、ながらへても、[一]かの御言あやまたず、聞き合い申し上げたいという気持でおります

こえうけたまはらまほしさになむ。[二]さるは、おぼえなき御古物語聞きしより、いよいよこの世に

いとど世の中に跡とめむともおぼえずなりにたりや」と、

弁

お返事も

うち泣きつつのたまへば、この人はましていみじく泣きて、えも聞申し上げられない

薫のご様子などが

こえやらず。御けはひなどの、ただそれかとおぼえたまふに、年ご長年すっかり忘れていた昔の柏木の御ことまで

もう柏木そっくりに思われなさるにつけて

今まで

ろうち忘れたりつるいにしへの御ことをさへとり重ねて、聞こえや話し申すことも叶わず

涙にくれている

らむかたもなく、おぼほれゐたり。

弁

この人は、かの大納言の御乳母子にて、父は、この姫君たちの母北の方の、母方の叔父、[三]左中弁にて亡せにけるが子なりけり。[四]年ごろ遠き国にあくがれ、[五]母君も亡せたまひてのち、[六]かの殿にはうとくなり、この宮には尋ね取りてあらせたまふなりけり。[七]人もいとやむごとなからず、宮仕へ馴れにたれど、[八]ここちなからぬものに宮もおぼして、姫君たちの御後見だつ人になしたまへるなりけり。昔の御ことは、年ごろかく朝夕に見たてまつり馴れ、心隔つる隈なく思ひ

柏木

大君と中の君

疎遠になり

八の宮のお邸で引き取ってお側にお置きになったのであった

人柄もさしてたしなみ深いでもなく

奉公ずれがしているけれども

気の利かぬ者ではないと

八の宮

亡き柏木

のことは

お側近くお仕えして

九 年寄りが人に聞かれもしないのに昔話をするのは、誰にでもあることなのだから。以下、姫君たちは自分の出生の秘密を知っているであろうとする、薫の臆測。

一〇 それが一つには、姫君たちをわがものにせずには置くまいという気持になるきっかけにもなりそうだ。自分の出生の秘密を守るためという動機も、薫の姫君たちへの思わくの中にあることを説明する草子地。

一一 八の宮亡き今となっては、ここに泊るのもおだやかでない気がして。

一二 前に会った時、八の宮が「かかる対面もこのたびや限りならむと」（三一七頁）と言ったこと。「逢ふことはこれや限りのたびならむ草の枕も霜枯れにけり」（『新古今集』巻十三恋三、馬内侍）

一三 この前お目にかかったのも今も、変らぬ同じ秋ではないか。この前後、山荘を去るに当っての薫の感慨をそのまま地の文として書く。

一四 八の宮は冥途のどこにおいでになってしまったのか。

一五 忌籠りの僧たちが、あとの始末にまだ残っているのである。「大徳」は、僧に対する敬称。

一六 八の宮の念仏誦経のお道具類。

薫、心を残して帰京

きこゆる君たちにも、一言うち出で聞こゆるついでなく、忍びこめたりけれど、中納言の君は、古人の問はず語り、皆例のことなれば、おしなべてあはあはしうなどは言ひひろげずとも、いとはづかしげなめる御心どもには、聞きおきたまへらむかし、とおしはからるるが、ねたくもいとほしくもおぼゆるにぞ、一〇またもて離れてはやまじと、思ひ寄らるるつまにもなりぬべき。

今は旅寝もすずろなるここちして、帰りたまふにも、「これや限りの」などのたまひしを、一二 などか、さしもやはとうち頼みて、また見たてまつらずなりにけむ、一三 秋やはかはれる、あまたの日数も隔てぬほどに、一四 おはしにけむ方も知らず、あへなきわざなりや。ことに例の人めいたる御しつらひなく、いとことそぎたまふめりしかど、いとものきよげにかき払ひ、あたりをかしくもてないたまへりし御住ひも、一五 大徳たち出で入り、こなたかなたひき隔てつつ、一六 御念誦の具どもなどぞ、変らぬさまなれど、仏は皆かの寺に移したてまつり

胸の中に納め
［弁は］一言もお洩らし申し上げることもなく
いかにも気の置けるふうでいられる姫君たちは
誰かれなしに軽々しく言いふらしたりはしないにしても
とうにご存じでいられるだろう
自分の弱味とも困ったこととも思われるので
どうして
そんなこともあるまいと高をくくって
二度とお目にかからぬままになったのだろう
まことにあっけないことだ
格別世間
どく質素になさっていたようではあるが
並みの人のようなお部屋の飾りもなく
お邸の内外を風情あるようにしてお暮しでいらした
それぞれ部屋の隔てを設けて
ご仏像は皆阿闍梨の寺にお移し申し上げること
八の宮生前のままだが
いかにもこざっぱりと取り片付けて

一　もう暗くなりましたと、主人の帰りをうながす趣。

二　秋霧の立ちこめている空―ただでさえ悲しみの晴れやらぬ空に、どうして、雁は、その悲しみをそそるかのように、かりかりと、この世を仮の世と言い知らせるのであろうか。「かり」は、雁の鳴き声に「仮」の意を掛ける。「雁の来る峰の朝霧晴れずのみ思ひ尽きせぬ世の中の憂さ」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、読人しらず）を踏まえる。

三　八の宮の亡くなった今は、そうは言っても与しやすいとお思いになって。けむたい存在がいなくなったという気持。　**匂宮の執心**

四　姫君たち。

五　匂宮は、世間に、それはもう大層な色好みのお方だというご評判が隠れもないお方で、こうした文のやりとりも、風流なしゃれたことのようにお思いであろうにつけても。以下、姫君たちの思い。

六　こんな世間から忘れ去られた草深い田舎家からさし出すようなお手紙も。「さし出づ」の縁で「手つき」という。

七　それにしても、思いも寄らず明け暮らされるものは、月日というものだった。以下、姫君たちの思い。　**姫君たちの心細さ**

（申しているのを〔薫が〕）こうした僧たちの姿などまですっかりになっている見えなくなってしまう時ここに残って悲しみにくれられる姫君たちのお気持をお察しになるに

てむとす、と聞こゆるを聞きたまふにも、かかるさまの人影などさへ絶え果てむほど、とまりて思ひたまはむここちどもをくみきこえたまふも、いと胸いたうおぼし続けらる。「いたく暮れはべりぬ」と申せば、ながめさして立ちたまふに、雁鳴きてわたる。

（とてもつらくお悲しみは尽きないつけても）（供人）

（物思いを打ち切って）

（薫）

秋霧のはれぬ雲居にいとどしく
この世をかりと言ひ知らすらむ

（匂宮）（〔薫は〕）（宇治の姫君たち）

兵部卿の宮に対面したまふ時は、まづこの君たちの御ことをあつかひぐさにしたまふ。三今はさりとも心やすきを、とおぼして、宮は、ねむごろに聞こえたまひけり。はかなき御返りも、聞こえにくくつまましきかたに、四女方はおぼいたり。五世にといたう好きたまへる御名のひろごりて、好ましく艶におぼさるべかめるも、六かういとづもれたる葎の下よりさし出でたらむ手つきも、いかにうひうひしく、古めきたらむ、など思ひ屈したまへり。

（話の種）（匂宮）（心をこめてお手紙をさし上げなさるのだった）（何でもないお返事でも）（お出ししにくく気のひけるお相手だと）（どんなに場違いな感じで）（気の利かぬものだろう）（くふさいでいられる）

（こんなにもは）

七　さても、あさましうて明け暮らさるるは月日なりけり、かく頼み

八 昨日今日のこととも思わないで。「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」（『古今集』巻十六哀傷、病して弱くなりにける時よめる　業平朝臣。『伊勢物語』百二十五段）

九 父宮も自分たちも、死ぬにしても後先の隔たりがあろうか、などと迂闊にも思っていたことだ。父宮に先立たれて自分たちが生き永らえようなどとは思ってもみなかった、の意。「末の露本の雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ」（『古今六帖』一、雫。『和漢朗詠集』下、無常、僧正遍昭）

一〇 父宮ご在世中の今までのことを考えてみても。

一一 ふだんは見ることもない人の姿も、連れ立って案内を乞うと、何よりも先にどきりとして。応対に当られるはずの父宮がいないということに、改めて気づく思い。

一二 姫君お二人でさびしい胸の内をしみじみ語り合いながら。

一三 新しい望みの持てる春に早くなってほしいものだ。「百千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく」（『古今集』巻一春上、題しらず、読人しらず）

一四 そんな望みが持てようか、と姫君たちはお聞きになる。

一五 橋姫に「四季にあててしたまふ御念仏」（二七一頁）とあった。

年の暮、山荘の寂寥

（ただ一体に世間というものの無常かないものだった父宮のお命をがたかりける御世を、昨日今日とは思はで、ただおほかた定めなき（なはかなさばかりを）はかなさばかりを、明け暮れのことに聞き見しかど、われも人も後れ先だつほどしもやは経む、などうち思ひけるよ、来し方を思ひ続くるも、何のたのもしげなる世にもあらざりけれど、ただいつとなくのんびりと物思いに日を過し（これといって望みの持てるような暮しでもなかったけれど）くのどかにながめ過ぐし、もの恐ろしくつつましきこともなくて経（何かにおびえたり気がねすることもなくて）つるものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人影も、うち連れ声づくれば、まづ胸つぶれて、もの恐ろしくわびしうおぼゆることさへ添ひにたるが、いみじう堪へがたきことと、二所うちかたらひつつ、干す世もなくて過ぐしたまふに、年も暮れにけり。（暮してきたのに）（常日頃のこととして見聞きしていたけれども）（何か恐ろしい情けない思いまでしなければならなくなったことが）（たまらないことだと）（どこでもこうしたものと思っている）（降りしきるこの季節は）（涙を乾かす時とてなく）

雪霰降りしくころは、いづくもかくこそはある風の音なれど、今はじめて思ひ入りたらむ山住みのここちしたまふ。女ばらなど、「あはれ、年はかはりなむとす。心細く悲しきことを、あらたまるべき春待ち出でてしがな」と、心を消たず言ふもあり。難きことかな、と聞きたまふ。向ひの山にも、時々の御念仏に籠りたまひしゆ（今はじめて決心して奥深く分け入った）（山里住まいのような気がなさる）（女房たちの中には）（新しい年がやがてやって来ます）（心細く悲しいことばかりなのに）（気を落さず言う者もいる）（阿闍梨の山寺からも）（［宮が］参籠なさった縁故が）

一 姫君たちがどうしておられるかと、通り一遍にたまさかのお見舞のお便りをさし上げるけれども。

二 今までは気にもとめなかった山住みの者たちも。「山がつ」は、山に住む賤しい者たちの意。下文に見えるように、山荘に物資を納めに来る者たちである。

三 『法華経』提婆達多品の「即ち仙人に随ひて、所須を供給し、果を採り水を汲み、薪を拾ひ食を設け」の文が念頭にあろう。

四 山で暮しを立てる者。木こり。

五 僧の住む庵室。もとは僧の修行する岩窟の意。

阿闍梨の見舞

六 次の挨拶の言葉から、冬支度の炭などを阿闍梨から贈るのが例年のことになっていたとみえる。

七 綿入れの衣服。

八 山寺に帰って行く使いの法師たち、お供の童子たち。

九 (父宮が)御髪などお下ろしになったそんなお姿でいらっしゃるのなら。出家して阿闍梨の山寺にお籠りになっていらっしゃるのなら、の意。

あればこそ　人も度々参上したけれど

ゐこそ、人も参り通ひしか、阿闍梨も、いかがと、おほかたにまれにおとづれきこゆれど、今は何しにかはほのめき参らむ。いとど人目の絶え果つるも、さるべきことと思ひながら、いと悲しくなむ。

今は何の用でほんの顔出しにでもお伺い申そう　いよいよ訪れる人もばったりないのも　これが当り前だと　とても悲しいことだ

何とも見ざりし山がつも、おはしまさでのち、たまさかにさしのぞき参るは、めづらしく思ほえたまふ。このころのこととて、薪、木の実拾ひて参る山人どもあり。

〔八の宮が〕亡くなられてから　ごくまれにお出入りするのは　この季節の常のこととして

阿闍梨の室より、炭などやうのものたてまつるとて、「年ごろならひはべりにける宮仕への、今とて絶えはべらむが心細さにな

〔阿闍梨〕今まで長年慣いになっておりましたこうしたご奉仕が　今年からとだえてしまいますのがさびしゅうございますので

今まで例年

む」と聞こえたり。かならず冬籠る山風ふせぎつべき綿衣などつかはしを、おぼし出でてやりたまふ。法師ばら、童べなどの上り行くも、見えみ見えずみ、いと雪深きを、泣く泣く立ち出でて見送りたまふ。「御髪などおろいたまうてけるさるかたにておはしまさましかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましやは」

〔姫君たちが〕　〔姫君たちは〕　〔宮が〕　見え隠れして　端近に出て

〔山寺から〕　何かととだえることもないでしょうに　どんなに　〔父宮に〕お会い申し上げることが全くないということもありますまいに　さびしく心細くても

一〇 父宮がお亡くなりになって、山寺との間の険しい道の行き来もなくなってしまってから、松に降り積む雪も、あなたは何とご覧になりますか。それをもせめて父宮の形見と見たいという含意であろう。「松の雪」は、すぐ消えるはかないもの。「かけ道」は、もと桟道の意。

一一 中の君。（三二七頁注一五参照）

一二 奥山の松葉に積る雪とでも、せめて亡き父宮を思うことができたら、どんなにうれしいことでしょう。雪は、消えてもまた降り積むものだからである。父宮を再び見ることのないのを悲しんだ歌。「消え」は「雪」の縁語。

年末、薫来訪　大君、対面

一三 正月は、すぐにも宇治にお伺いすることはできないだろう。元日以降、重要な朝儀が多くて暇がないからである。

一四 お茵（しとね）（二巻図録一一参照）

一五 黒塗りでない御火桶（おひけ）を。客人である薫に供するもの。姫君たちは服喪中なので黒塗りのを用いている。「火桶」は、桐の木などをくり抜いた丸い手焙（あぶ）り。（四巻図録一〇参照）

など、かたらひたまふ。（しみじみ語り合われる）

（大君）一〇君なくて岩のかけ道絶えしより
松の雪をもなにとかは見る

一一中の宮、

一二奥山の松葉に積る雪とだに
消えにし人を思はましかば

（雪は）うらやましくぞまたも降り添ふや。

（薫）中納言の君、一三新しき年は、ふとしもえとぶらひきこえざらむ、とおぼしておはしたり。雪もいと所狭（せ）きに（深いので）、よろしき人だに見えずなりにたるを、（薫が）なのめならぬけはひして（並々ならぬ立派な風采で）、軽らかにものしたまへる（気軽にたずねて来られたお気持がったのに）心ばへの、浅うはあらず思ひ知られたまへば（浅いものではないと思い知られなさるので）、例よりは見入れて（いつもよりは気をつけて）、御座（ま）などひきつくろはせたまふ。墨染（すみぞめ）ならぬ御火桶（おひけ）、ものの奥なる取り出でて（粗相のないように整えさせなさる）、塵（ちり）かき払ひなどするにつけても（故宮が薫の訪れを心待ちにしてお）、宮の待ち喜びたまひし御けしきなどを（喜びったご様子などを）、人々も聞こえ出づ。（女房たちもお噂する）対面（たいめん）したまふことをば（直接お話しなさることを）、つつ（大君は）

一（お会いしないのは）人の好意を察しないように薫が思っていられる様子なので。前の対面の時にも薫は不満を述べていた（三三一頁）。

二 我ながらあっさり変節してしまうものだ、やはり人を好きになるのは仕方のないことなのだった。大君への募る気持を、一面反省する薫の心中。妻帯など今まで思ってもみなかったからである。

三（それは）あのおいたわしい（故宮の）ご遺言を一言うけたまわった時のことなどを、あるいは何かの折に私から（宮に）お洩らし申したことがあったのかもしれません。薫が姫君たちの後事を八の宮から託されたこと。

四 あるいは、いかにも抜け目のない宮のご性格から、ご推察になっていられるのかもしれませんが。あとを託された自分と姫君たちの関係を推察しておられるのか、の意。

五 私から、何分にもよしなに姫君たちにお取りなしをしてほしいと頼りにしているのに。以下、匂宮の言い分を間接に伝える体。

六 この宇治の里への案内役を、そうきっぱりとも、とてもおことわり申せないのですが。「海士の住む里のしるべにあらなくにうらみむとのみ人の言ふらむ」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、小野小町）による。この歌、「浦見む」に「怨みむ」を掛ける。

薫、匂宮の執心を語る

ましくのみおぼいたれど、[一]思ひ隈なきやうに人の思ひたまへれば、（ただもう気のひけることとお思いだが）いかがはせむとて、聞こえたまふ。うちとくとはなけれど、（仕方もないことと思って）さきざきよりはすこし言の葉続けて、（前々より）ものなどのたまへるさま、いとめやすく、心はづかしげなり。かやうにてのみは、え過ぐし果つまじ、と思ひなりたまふも、[二]いとうちつけなる心かな、なほ移りぬべき世なりけり、と思ひゐたまへり。

（言葉多くは）（親しげにというのではないが）（お話し申しなさる）（いかにもそつがなく）（奥ゆかしい感じがする）（こうした対面だけでは）（とてもすまされないだろう）（という気持になられるのも）

（薫）「宮の、いとあやしく恨みたまふことのはべるかな。[三]あはれなりし御一言をうけたまはりおきしさまなど、ことのついでにもや漏らし聞こえたりけむ、[四]またいと隈なき御心のさがにて、おしはかりたまふにやはべらむ、[五]ここになむ、ともかくも聞こえさせなすべきと頼むを、つれなき御けしきなるは、もてそこなひきこゆるぞと、たびたび怨じたまへば、心よりほかなることと思うたまふれど、[六]里のしるべ、いとこよなうもえあらがひきこえぬを、何かは、いとさしもてなしきこえたまふらむ。好いたまへるやうに人は聞こえなすべ

（匂宮がまことにどうしたわけか私をお恨みになることがございます）（姫君たちのお返事も頂けないのは）（私がうまくお取りなし申さないからだと）（お怨みになるので）（とんでもない言い掛りだと思いますけれども）（どうして）（そのようにひどく宮をおあしらい申されるのでしょう）（好色なお方のように世間では取り沙汰申し上げている）

七　どんなことでも、成行きにまかせて、自分を主張することもなく、大ような女こそ。以下、素直なおとなしい女が結婚生活を全うするものだという一般論にかこつけて、宮との結婚をすすめる。「おどけ」は「おほどけ」（下二段）に同じ。

八　多少気に染まぬことがあっても。このあたり、夫の浮気沙汰についていう。

九　かえって（浮気沙汰などあっても）相手の夫がその女を妻として末長く添い遂げるといった例になることもあります。

一〇　一旦夫婦仲がまずくなると、その女の名誉も台なしになり。「神奈備の三室の岸やくづるらむ龍田の川の水の濁れる」（『拾遺集』巻七物名、むろの木、高向草春）の言葉による。

一一　宮は、決して、軽率に始めと終りとでは話が違うといった態度を人にお見せになることはあるまいと、私には思われます。気に入られた人なら、気持の変るようなことはないお人柄だ、と言う。

一二（そうなれば）京とこの宇治との間を奔走して、定めし脚の痛い思いをすることになりましょう。「乱り脚」は、「乱りごこち」「乱り風」などと同じ言い方。

ようですが　かめれど、心の底あやしく深うおはする宮なり。なほざりごとなど
不思議なほど　軽いお気持からお声を掛けられる女たちで　のたまふわたりの、心軽うてなびきやすなるなどを、めづらしから
軽はずみにすぐなびくような手合いを　ありふれたものとして軽蔑しておられるのであろうか　ぬものに思ひおとしたまふにや、となむ聞くこともはべる。何ごと
素直　にもあるに従ひて、心を立つるかたもなく、おどけたる人こそ、た
に世間のならわしに従って　だ世のもてなしに従ひて、とあるもかかるもなのめに見なし、すこ
どのようなことがあっても軽く見過し　し心に違ふふしあるにも、いかがはせむ、さるべきぞ、なども思ひ
仕方のないことだ　これも定めだ　なども考える　なすべかめれば、なかなか心長き例になるやうもあり。くづれそめ
ものようですから　ては、龍田の川の濁る名をもけがし、いふかひなく名残なきやうな
お話にもならず　縁の切れてしまうような例なども　ることなども、皆うちまじるめれ。心の深うしみたまふべかめる御
世間にはよくあるようです　物事に深い愛着を抱かれるとお見受けする宮の　お気に召して　心ざまにかなひ、ことに背くこと多くなどものしたまはざらむをば、
格別　ご意向に背くことが多いといったことのないお人に対しては　さらに、軽々しく、はじめをはり違ふやうなることなど、見せたま
宮について人が存じ上げていないことを　私はよくよく　ふまじきけしきになむ。人の見たてまつり知らぬことを、いとよう
承知しておりますから　もし似合いの話とお思いで　そうしたお気持でもおありなら　そのお　見きこえたるを、もし似つかはしく、さもやとおぼし寄らば、その
取り持ちなどは　及ぶ限りの力を尽くしてお為になるようお計らい申す所存です　もてなしなどは、心の限り尽くしてつかうまつりなむかし。御中道

一 人の親のようなつもりで返事をしよう。匂宮が心をかけているのは中の君だと思い、自分は姉として親代りの立場で応対しよう、と思う。
二 どういうお話なのでしょう。私どもにかかわりのあることのようにいろいろ仰せになりますので、かえってどうお返事申し上げてよいやら分りませぬ。
三 今の宮のお話は、必ずしもあなたご自身にかかわることだとお聞き下さらねばならぬこととも思いません。宮の望む相手は違うだろう、の意。
四 あなたご自身に関しては、私がこうしてわざわざ雪を踏み分けてこの話を持ってお伺いした好意のほどを、喜んで下さる（中の君の）姉君としてのお気持でお聞き下さって今は十分です。姉としてこの話を喜んでくれれば、それだけで今の自分は満足だ、と言う。
五 宮がお心をお寄せしているのは、どうも違うように思われます。中の君らしい、と言う。
六 お手紙のお相手について、宮がちらりとお洩らしだったこともあったと思いますが。中の君が相手だと自分も宮から伺ったことがあるように思うが、の意。
七 冗談にも自分がお返事申し上げなくてよかった。以下、ほっと胸なでおろす大君の心中。
八 もしそうだとしても、別段のこともないけれども、薫がこうおっしゃるにつけても、どんなに気はずかしく胸突かれる思いをしたことだろう、と思うと、どちらともはっきりお答えになれない。

のほど、乱り脚こそ痛からめ」と、いとまめやかにて言ひ続けたまへば、わが御みづからのこととはおぼしもかけず、人の親めきていらへむかし、とおぼしめぐらしたまへど、なほ言ふべき言の葉もなきここちして、「いかにとかは。かけかけしげにのたまひ続くるに、なかなか聞こえむこともおぼえはべらで」と、うち笑ひたまへるも、おいらかなるものから、けはひをかしう聞こゆ。

とても真面目な面持で
（大君は）ご自分自身のこととは夢にもお思いにならず
思案をめぐらしなさるけれども
やはりどう返事してよいか分らない
気がして
（大君）二
おっとりした物言いながら
好もしい感じに聞える
笑いに紛らわされるのも

（薫）三
「かならず御みづから聞こしめし負ふべきこととも思うたまへず。四それは、雪を踏み分けて参り来たる心ざしばかりを、御覧じ分かむ御このかみ心にても過ぐさせたまひてよかし。五かの御心寄せは、また異にぞはべべかめる。六ほのかにのたまふさまもはべめりしを、いさや、それも人の分ききこえがたきことなり。御返りなどは、いづかたにかは聞こえたまふ」と問ひ申したまふに、七ようぞたはぶれにも聞こえざりける、何となけれど、かうのたまふにも、八いかにはづかしう胸つぶれまし、と思ふに、え答へやりたまはず。

それもはたからはどちらのお方とも分りかねることです
宮へのお返事などは
お二人
のうちどちらがお出しなさるのですか

九 雪深い山の懸橋には、あなた以外にほかに踏み通う足跡を見ないことです。「踏み通ふ」に「文通ふ」を掛け、私は、あなた以外の方と文通したことはございません、の意。薫の問いに間接に答えた形。「かけはし」は、崖などに渡して通れるようにした橋。

一〇 前に「え答へやりたまはず」とあったのに応ずる。

一一 氷が張りつめて馬がそれを踏みしだく山川を、宮の道案内をしながら、私が先に渡ることにしましょうか。上の句は、大君の歌の「雪ふかき山のかけはし」に応じて宇治への道の容易ならぬことをいい、下の句は、私の方が先にあなたと契りを結びたい、の意。

一二 それでこそ、こうしてわざわざ私がここに顔出しするかいも、十分にあろうというものです。「浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは」（『古今六帖』二、山の井。原歌『万葉集』巻十六「浅き心をわが思はなくに」）による。

一三 （大君は）取り付く島もなく、ひどくよそよそしくとり澄ました感じにはお見えにならないが。以下、このやりとりから受けた薫の印象。

一四 亡き八の宮についての思い出話。

（大君）
雪ふかき山のかけはし君ならで
　またふみかよふ跡を見ぬかな

（簾の外に）
と書きて、さし出でたまへれば、（薫）「御ものあらがひこそ、なかなか心おかれはべりぬべけれ」とて、

（薫）
「つららとぢ駒ふみしだく山川を
　しるべしがてらまづやわたらむ

さらばしも、影さへ見ゆるしるしも、浅うははべらじ」と聞こえたまへば、（大君は）思はずに、ものしうなりて、ことにいらへたまはず。けざやかに、いともの遠くすみたるさまには見えたまはねど、今やうの若人たちのやうに、艶げにももてなさで、いとめやすく、のどやかなる心ばへならむとぞ、おしはかられたまふ人の御けはひなる。かうこそはあらまほしけれと、思ふに違はぬこちしたまふ。ことに触れてけしきばみ寄るも、知らず顔なるさまにのみもてなしたまへば、心はづかしうて、昔物語などをぞ、ものまめやかに聞こえたま

かえって疑いの気持もきざすというものです
こんな言い訳をなさるので
別にお返事もなさらない
当世風の
わかうど若い女たちのように
思わせぶりなところもなく
いかにも難のない
おだやかな気性なのだろうと
大君の
女はこのようでありたいものだと
予想に
たがわぬ方だとお思いになる
何かにつけて言い寄ってみるけれども
〔大君は〕そ知らぬふりをして受け流してしまわれるばかりなので
〔薫は〕気がひけて
生真面目な面持で

一 咳払いをするので。主人に帰京をうながす合図。
二 ほんとに山荘のようにとても静かな所で、人の出入りもない邸がございますが、（姫君たちが）そんなお気持にでもおなりでしたら、どんなにうれしいことでしょう。大君に向って言う言葉。京の薫の本邸、三条の宮のことをいうのであろう。何なら、そこにお迎えしてもよい、と言う。（三四八頁注四参照）
三 中の君は、奥に女房たちとともにいるのである。
四 果物、木の実、菓子などの軽い間食。
五 素焼のさかずき。
六 あの、薫から拝領の狩衣の移り香で皆からうらやましがられた宿直の者。（橋姫二八七～八頁参照）
七 鬘を掛けたように濃い鬚。
八 これが姫君たちの頼りにされるご家来衆とは、情けないな。「宿直人」は、夜、武装して警備に当る役なので、「たのもし人」という。
九 八の宮ただお一方のご恩顧をこうむりまして。

山荘の接待　宿直人

ふ。

「暮れ果てなば、雪いとど空も閉ぢぬべうはべり」と、御供の人々声づくれば、帰りたまひなむとて、「心苦しう見めぐらさるる御住ひのさまなりや。ただ山里のやうにいと静かなる所の、人も行きまじらぬ、はべるを、さもおぼしかけば、いかにうれしくはべらむ」などのたまふも、いとめでたかるべきことかなと、片耳に聞きて、うち笑む女ばらのあるを、中の宮は、いと見苦しう、いかにさやうにはあるべきぞ、と見聞きゐたまへり。

御くだものよしあるさまにて参り、御供の人々にも、肴などめやすきほどにて、土器さし出でさせたまひけり。かの御移り香もて騒がれし宿直人ぞ、鬘鬚とかいふつらつき、心づきなくてある、はかなの御たのもし人や、と見たまひて、召し出でたり。「いかにぞ。おはしまさでのち、心細からむな」など問ひたまふ。うちひそみつつ、心弱げに泣く。「世の中に頼むよるべもはべらぬ身にて、一所

（薫の）
（薫）どちらを見ても痛々しく感じられる
女房たちがいるのを
そうなれば何とすばらしいことでしょうと
小耳にはさんで
何とはしたない
どうしてそんなことをしてよかろう
しゃれた盛りつけでお出しし
体裁よく取り合せて
頬のあたり
不愛想なご面相でいるのを
（宿直人）
（薫）どうしているか
宮が亡くなられてから
さぞ心細かろうな
［宿直人は］べそをかきながら
気弱げに
頼りにする親族もございませぬ身の上で

一〇 どのような木蔭を身を寄せる頼りとしたらよいのでございましょうか。「わび人のわきて立ち寄る木のもとは頼む蔭なく紅葉散りけり」（『古今集』巻五秋下、雲林院の木のかげにたたずみてよみける　僧正遍昭）

一一 八の宮のお居間だった部屋。後文によるに寝殿の西廂。次に見える仏間はそれに隣る西側の母屋（三四九頁注一一、一三参照）。

仏間に八の宮を偲ぶ薫の詠

一二 仏前に一段高くしつらえられた席。

一三 自分（薫）が出家の素志を果した暁には。

一四 出家の暁にはわが師とお頼りしようと思っていた優婆塞の宮はお亡くなりになって、そのご修行のお席も空しく跡をとどめているだけだ。「優婆塞が行ふ山の椎が本あなそばそばし床にしあらねば」（『宇津保物語』嵯峨院）による。「優婆塞」は、在俗のまま仏道修行する男。巻名、この歌による。

一五 （薫の）荘園のご用など勤めている者たちに、秣を運んで来るように（供人たちが）申し付けておいたのが。今晩あるいは泊ることになるかもしれないと供人が気を利かした処置であろう。

薫、帰京

一六 困った、具合の悪いことだなとお思いになるが、老女の弁の所へ来たかのように取りつくろわれた。薫は泊るつもりもなかったのに奉仕の者たちが大勢やって来たので、バツの悪い思いをする。

の御蔭に隠れて、三十余年を過ぐしはべりにければ、今はまして、野山にまじりはべらむも、いかなる木のもとをかは頼むべくはべらむ」と申して、いとど人わろげなり。

（野や山にさすらえましょうにも）（いよいよ体裁の悪いことである）

一〇

おはしましし方あけさせたまへれば、塵いたう積りて、仏のみぞ花の飾りおとろへず、行ひたまひけりと見ゆる御床など取りやりて、かき払ひたり。本意をもとげば、と契りきこえしことおぼし出でて、

（供花）（以前のままで）（宮がお勤めをなさっていたとおぼしい）（運び去って）（取り片付けてある）（お約束申し上げたことを）

一二　一三　一四

（薫）

立ち寄らむ蔭とたのみし椎が本

むなしき床になりにけるかな

とて、柱に寄りゐたまへるをも、若き人々は、のぞきてめでたてまつる。

（女房たち）（おぼし申し上げる）

日暮れぬれば、近き所々に、御荘などつかうまつる人々に、御秣取りにやりける、君も知りたまはぬに、田舎びたる人々、おどろおどろしくひき連れ参りたるを、あやしうはしたなきわざかな、と御覧ずれど、老人にまぎらはしたまひつ。おほかたかやうにつかうま

一五　一六

（薫もご存じでなかったのに）（荘園の者たちが）（連れ立って）（大勢がやがや）（いつもこのようにご用をつとめるように）

年改まる　阿闍梨からの贈り物

一 不思議なことのように、姫君たちは相変らず悲しみに沈んでいられる。
二 宇治山の阿闍梨の僧坊。
三 お精進のお食膳として姫君たちにさし上げるのを。
四 これがもし父宮の折り取って下さった峰の蕨であるのなら、春がやって来たのだなと、うれしく思われるでしょうに。女房たちの「行きかふ月日のしるし」の言葉によったもの。
五 雪深い汀の小芹も、誰のために摘み取ってもてはやしましょう、親もない身の上で。さし上げて喜んで頂く親もないのに、の意。「小芹」の「小」に「子」を響かし「親」の縁語。
六 くだくだしく別に何でもないことが多いようですから、例によって、書き落したのでしょう。薫や匂宮が折々によこした歌などについて筆を省いたことをことわる草子地。

つるべく、仰せおきて出でたまひぬ。〔荘園の者たちに〕命じておかれて帰京なさった

年かはりぬれば、空のけしきうららかなるに、汀の氷とけたるを、新しい年になったので

一ありがたくもと、ながめたまふ。聖の坊より、「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、蕨などたてまつりたり。お贈り申し上げた 三斎の御台に参れる、「所につけては、こうした山里は山里でかかる草木のけしきに従ひて、行きかふ月日移り変る季節季節の違いのはっきり分るのがおもしろいことですのしるしも見ゆるこそをかしけれ」など、人々の女房たち何のおもしろいことがあろうしきならむ、と聞きたまふ。〔姫君たちは〕

（大君）四
君が折る峰の蕨と見ましかば
知られやせまし春のしるしも

（中君）五
雪深き汀の小芹誰がために
摘みかはやさむ親なしにして

など、はかなきことどもをうちかたらひつつ、明け暮らしたまふ。ふと心に浮ぶお歌を詠み交わしたりしながら

薫 中納言殿よりも匂宮よりも、その折々をはずさずにお見舞を申し上げなさる 六をり過ぐさずとぶらひきこえたまふ。うるさく何となきこと多かるやうなれば、例の、書きもらしたるなめ

り。

桜の花盛り
花盛りのころ、宮、かざしをおぼし出でて、そのをり見聞きたま
匂宮　七　お供でご一緒な
さった貴公子たち　奥ゆかしかった　八　二度と見ることも
ひし君たちなども、「いとゆゑありし親王の御住ひを、またも見ず
なくなってしまいました　なべてこの世のはかなさを　〔宮に〕　〔宮は〕訪れた
なりにしこと」など、おほかたのあはれを口々聞こゆるに、いとゆ
い気持で一杯になられるのだった
かしうおぼされけり。

（匂宮）九
つてに見し宿の桜をこの春は
霞へだてず折りてかざさむ

と、一〇心をやりてのたまへりけり。とんでもないおっしゃりようだ〔中君は〕あるまじきことかな、と見たまひながら、いとつれづれなるほどに、見所ある御文の、うはべばかりをもて消たじとて、

（中君）一一
いづくとか尋ねて折らむ墨染に
霞みこめたる宿の桜を

いつまでもこんなふうに突き放した冷たいお気持ばかり見えるので　〔宮は〕しんそこ　恨め
なほかくさし放ちつれなき御けしきのみ見ゆれば、まことに心憂し
しいとお思い続けになる
とおぼしわたる。

匂宮、昨年春の宇治の遊びをなつかしむ

七「山桜にほふあたりに尋ね来て同じかざしを折りてけるかな」の歌を詠み送ったこと（三一〇頁）。昨年今頃の宇治川逍遙の折のことである。

八 八の宮。

九 昨年は行きずりに眺めたお邸の桜を、今年の春は、霞も隔てず手ずから折って挿頭にしたいものです。姫君をわがものにしたい、の意。

一〇「折りてかざさむ」など、思いのままのお歌をおくられるのだった。

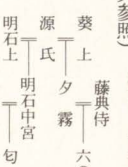
一一 見事なお書きぶりのお手紙の、うわべの風情くらいは無にすまいと思って。情趣をこわさないように、当りさわりのない返歌くらいはしよう、の意。

一二 一体どこと尋ね当てて折り取ろうとなさるのでしょう、墨染の喪の霞の立ちこめた家の桜ですのに。

一 いかにも姫君たちの後見人だといった大きな顔をして（匂宮を）おあしらい申して。

二 右大臣夕霧の六の君。藤典侍（惟光の娘）腹。落葉の宮の養女。（匂兵部卿一六三頁、一七五頁参照）

三 （六の君とは）珍しげもない近い間柄であるだけでなく。匂宮と六の君とは、いとこ同士の間柄。



匂宮、夕霧の六の君に心進まず

四 薫の本邸。母、女三の宮が朱雀院から伝領した邸（五巻鈴虫三五〇頁、匂兵部卿一六三頁参照）。

五 女三の宮。薫とともに六条の院に移るのである。

六 生真面目な薫のお気持は、ほかの人とは全然違うものだったので。

三条の宮、火災

御心にあまりたまひては、ただ中納言を、とざまかうざまに責め恨みきこえたまへば、をかしと思ひながら、いとうけばりたる後見顔にうちいらへきこえて、あだめいたる御心ざまをも見あらはす時時は、「いかでか、かからむには」など、申したまへば、宮も御心づかひしたまふべし。「心にかなふあたりを、まだ見つけぬほどぞや」とのたまふ。

大殿の六の君をおぼし入れぬこと、なまうらめしげに、大臣もおぼしたりけり。されど、「ゆかしげなき仲らひなるうちにも、大臣のことことしくわづらはしくて、何ごとのまぎれをも見とがめられむがむつかしき」と、下にはのたまひて、すまひたまふ。

その年、三条の宮焼けて、入道の宮も、六条の院にうつろひたまひ、何くれともの騒がしきにまぎれて、宇治わたりを久しうおとづれきこえたまはず。まめやかなる人の御心は、またいと異なりければ、いとのどかに、おのがものとはうち頼みながら、女の心ゆるび

〔匂宮は〕思案にあまられては　〔薫は〕いて恨み言を言われるので　あれこれと　〔匂宮の〕浮気っぽいお心根がばれたりする時はその度に　こんなことでは　ご意見申されるので　お気に　はなさるらしい　〔匂宮〕気に入った女の人を　まだ見つけない間のことです　弁解なさる　よ

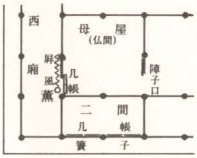
〔匂宮が〕お心にもかけられないのを　いささか不満げに　夕霧　おほいとの　〔匂宮〕三　父大臣がやかましくけむたいお人柄だから　どんなちょっとした浮気でも一々うるさく言われるだろうことがかなわない　陰では　抵抗していられる　した

あれこれと身辺多忙だったのに取り紛れて　〔薫は〕宇治の姫君たちを　至極のんびり構えて　きっと自分の妻になる人だとは信じていながら　大君が許す気持におと

七 好き心にまかせて無体な振舞に及ぶような態度は見せまい。
八 亡き八の宮とのお約束を自分がいつまでも忘れていないということを（大君に）十分に分って頂きたい。
九 宇治川のほとりなら涼しい。

夏、薫、宇治を訪れ　姉妹の姿を垣間見る

に違いなかろう。
一〇 夏の、朝まだ涼しい刻限。
一一 八の宮がお居間にしていられた（寝殿の）西の廂。
一二 例の宿直の男。（三四四頁参照）
一三 西側の母屋の仏間。
一四 ご自分たちのお部屋。寝殿の東側。
一五 母屋から西廂に通ずる襖障子。
一六 掛金。障子の戸締りの金具。
一七 障子の外側。すなわち薫の今いる西廂。
一八 ちょうどその穴に当る所に、（障子の内側に）几帳を添えて立ててあるので。
一九 （こちらから覗いているのも知らず）間抜けな話だと思いながらも。



なりにならない限りは たまはざらむ限りは、あざればみ情なきさまに見えじ、と思ひつつ、昔の御心忘れぬかたを、深く見知りたまへ、とおぼす。

その年、例年よりも常よりも暑さを人わぶるに、もて余すのに川面涼しからむはや、と思ひ出でて、〔薫は〕にはかにまうでたまへり。〔宇治に〕お伺いなさった 朝涼みのほどに〔京を〕出でたまひければ、〔宇治では〕意地悪くさし込んでくる日ざしもまぶしくてあやにくにさし来る日影もまばゆくて、宮のおはせし西の廂に、宿直人召し出でておはす。そなたの母屋の仏の御前に、君たち姫君たちがおいでだったのだものしたまひけるを、近くてはまずいと思って気近からじとて、わが御方にわたりたまふ御お移りになるけはひ、忍びたれど、そっとなさるがおのづから、どうしてもうちみじろきたまふほど姫君たちの身じろぎなさるけはいが近々と近う聞こえければ、なほあらじに、じっとしていられずこなたに通ふ障子の端のかたに、かけがねしたる所に、穴のすこしあきたるを見おきたまへりければ、前からご存じだったので外に立てたる屏風をひきやりて見たまふ。お覗きになる ここもとに几帳を添へ立てたる、ああ何たること あなくちをし、と思ひて、ひき帰るをりしも、風の簾をいたく吹き上げるらしいかして 高く吹き上げるらしいかして 身を引こうとする折も折 (女房)外から見えては大変です 押し出して目隠しにでてこそ」と言ふ人あなり。をこがましきものの、うれしうて見た

一 高いのも低いのも。几帳は、高さ四尺、三尺、二尺などのものがある。
二 廂の間を柱間二間に仕切った部屋。普通、仏間などに使う。
三 中の君である。
四 二間の簾に寄せて立ててある几帳。
五 喪服のさま。
六 萱草色。紅の黄ばんだ色。喪服に用いる。
七 掛け帯。仏前での婦人の身支度。表着の上に、前から両肩に掛けて、背中で結んで垂らす形だったらしい。（図録六参照）
八 単の上に重ねた表着。
九 今上の第一皇女、明石の中宮腹。幼くから紫の上の手許で育てられ、六条の院南の町の東の対に住む。（匂兵部卿一六二頁参照）
一〇 以前ちらりと拝見したお姿も思い比べられて。前に女一の宮の姿を見たことがある趣。後の蜻蛉の巻に「まだいと小さくおはしましほどに、我もものの心も知らで見たてまつりし時、めでたの児の御さまやと見たてまつりし」とある。
一一 もう一人、にじり出て。大君。
一二 今、薫の覗いている障子。

この覗いている障子の向いにあいている障子口をあちらに通ろうとするところだった

まへば、高きも短きも、几帳を二間の簾におし寄せて、この障子に向ひて、あきたる障子より、あなたに通らむとなりけり。

三 まづ一人立ち出でて、四几帳よりさしのぞきて、この御供の人々の、何かとあちこちして皆で涼んでいるのを とかう行きちがひ、涼みあへるを見たまふなりけり。五濃き鈍色の単に、六萱草の袴の引き立つ色合いなのがはもてはやしたる、なかなかさまかはりてはなやかなえるのは 着こなしていられる人柄によるのだろうりと見ゆるは、着なしたまへる人からなめり。七帯はかなげにしなしらしてずず〔袖口に〕すらりとした背丈で て、数珠ひき隠して持たまへり。八いとそびやかに、様体をかしげなる人の、髪、桂にすこし足らぬほどならむと見えて、末まで塵の乱れもなくたくさんあって可憐な風情である よひなく、つやつやとこちたううつくしげなり。横顔など かたはらめなど、いかにも可愛らしげに あならうたげと見えて、ほんのりと赤くにほひやかに、やはらかにおほどきたるけはひ、女一の宮も、かうざまにぞおはすべきと、一〇ほの見たてまつりしも思ひくらべられて、うち嘆かる。

ついつい嘆息される

一一 またゐざり出でて、「かの障子は、あらはにもこそあれ」と、見らをご覧になったたしなみは 外から覗かれそうで心配です

（大君）

このようなお美しさなのだろうと

もの柔らかでおっとりとした感じは

姿の美しい人で

一筋の

風情のある方のように思わ いかにも用心深そうな様子で おこせたまへる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらむとおぼ

一三 頭の格好、額の生え際の具合は。

一四 これも喪服のさま。

一五 すっきりした程度に抜け落ちているのであろう。やつれたさま。

一六「色なり」とかいうようだが。「色なり」は、髪のつやつやした美しさをいう成語であるらしい。竹河二一四頁にも「御髪、色にて」と見える。

一七 かわせみの青羽のような色合いでとても美しく。「翡翠」は、鳥の名。かわせみ。

一八 向うの部屋に通ずる、あいている障子の所。

れる〔中君より〕一段と高貴で優雅な感じに見える
ゆ。頭つき、髪ざしのほど、今すこしあてになまめかしきさまなり。
向う側に　すぐに呪いたりはなさらないでしょう
「あなたに屏風も添へて立てはべりつ。急ぎてしものぞきたまはじ」
女房たち　疑いもせず言う者がいる　(大君)そんなことになったら大変ですよ
と、若き人々、何心なく言ふあり。「いみじうもあるべきわざかな」
気がかりそうに　〔あちらに〕
とて、うしろめたげにゐざり入りたまふほど、気高う心にくきけは
じもひとしおである　中の君と同じような色合いのものを　気品があって奥ゆかしい感
ひ添ひて見ゆ。黒き袷一襲、同じやうなる色あひを着たまへれど、
こちらはやさしく優雅な感じで　痛々しく　胸をしめつけられるようだ
これはなつかしうなまめきて、あはれげに、心苦しうおぼゆ。髪、
より糸を垂らしたように見える
さはらかなるほどに落ちたるなるべし、末すこし細りて、色なりと
かいふめる、翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうな
中の君　〔簾際に〕
り。紫の紙に書きたる経を、片手に持ちたまへる手つき、かれより
痩せぎすなのだろう　中の君　こちらを向いて
も細さまさりて、痩せ痩せなるべし。立ちたりつる君も、障子口に
坐って　何がおかしいのか
ゐて、何ごとにかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬
かわいらしい
づきたり。

付

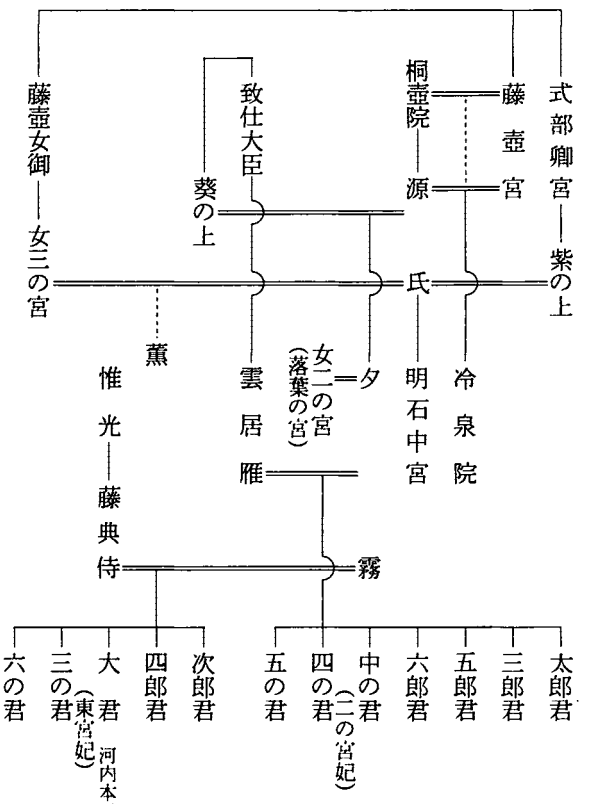
録

系図一

天皇家

先帝
一院
式部卿宮
桐壺院
前坊
六条御息所
藤壺女御
藤壺宮
八の宮
兵部卿宮（螢宮）
源氏
朱雀院
承香殿女御
一条御息所
女二の宮（落葉の宮）
女三の宮
今上
明石中宮
東宮
二の宮
三の宮（匂宮）
五の宮
女一の宮
秋好中宮
冷泉院
弘徽殿女御
女一の宮
玉鬘
大君
今宮
女宮

源氏



本巻に関係のある巻々で、夕霧の子息として現れる人物の官名は次の如くである。 数字は推定される出生順を示す。

匂兵部卿（177頁）衛門督1・権中納言3・右大弁2
竹河（202、227頁）蔵人少将5・源少将4・兵衛佐6
椎本　（306頁）右大弁2・侍従宰相3・権中将5
頭少将4・蔵人兵衛佐6

なお、夕霧97～98頁参照。

藤原氏（致仕大臣家）

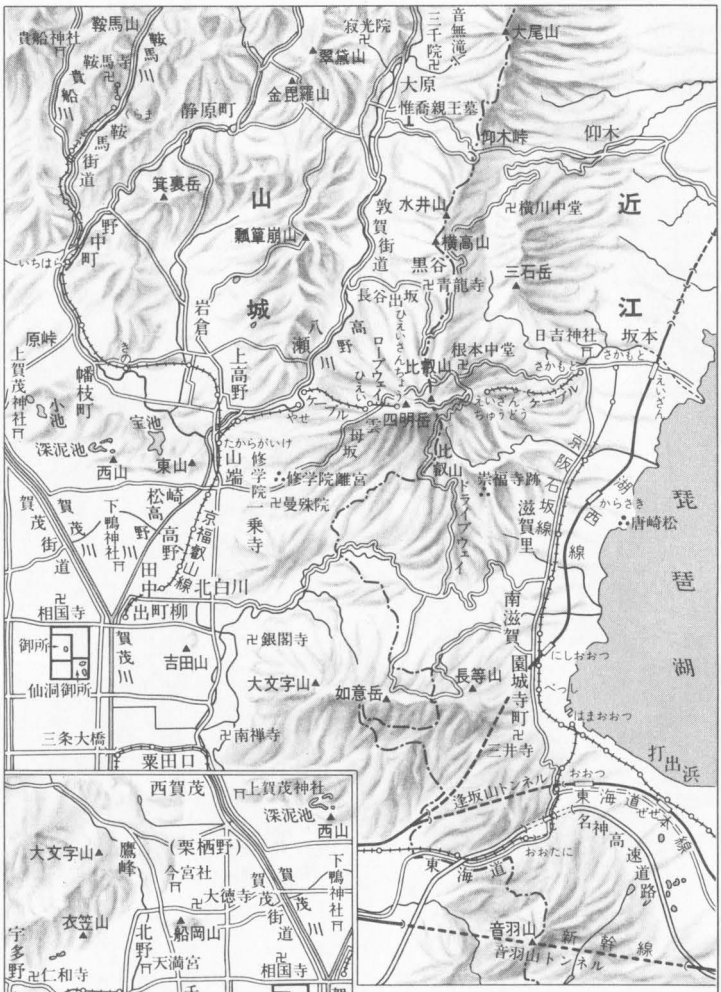
- 桐壺院
  - 大宮
  - 朱雀院
    - 女三の宮
    - 女二の宮（落葉の宮）
- 摂政太政大臣
  - 大宮
  - 致仕大臣
    - 玉鬘
    - 頭中将
    - 蔵人少将
    - 源氏
    - 夕霧
    - 雲居雁
    - 柏木
    - 北の方
    - 葵の上
    - 弘徽殿女御（女一の宮女御）
    - 按察使大納言（紅梅大納言）
      - 北の方
      - 真木柱
        - 兵部卿宮（螢宮）
        - 宮の御方
        - 若君
        - 中の君
        - 大君（匂宮）
        - 東宮

藤原氏（髭黒大臣家）

- 式部卿宮
  - 紫の上
  - 北の方
- 髭黒太政大臣
  - 承香殿女御
    - 今上
  - 玉鬘
    - 致仕大臣
      - 弘徽殿女御（女一の宮女御）
  - 中の君（尚侍）
  - 冷泉院
    - 今宮
    - 女宮
  - 大君
  - 頭中将
  - 右大弁
  - 右兵衛督
  - 真木柱
  - 藤中納言

八の宮家

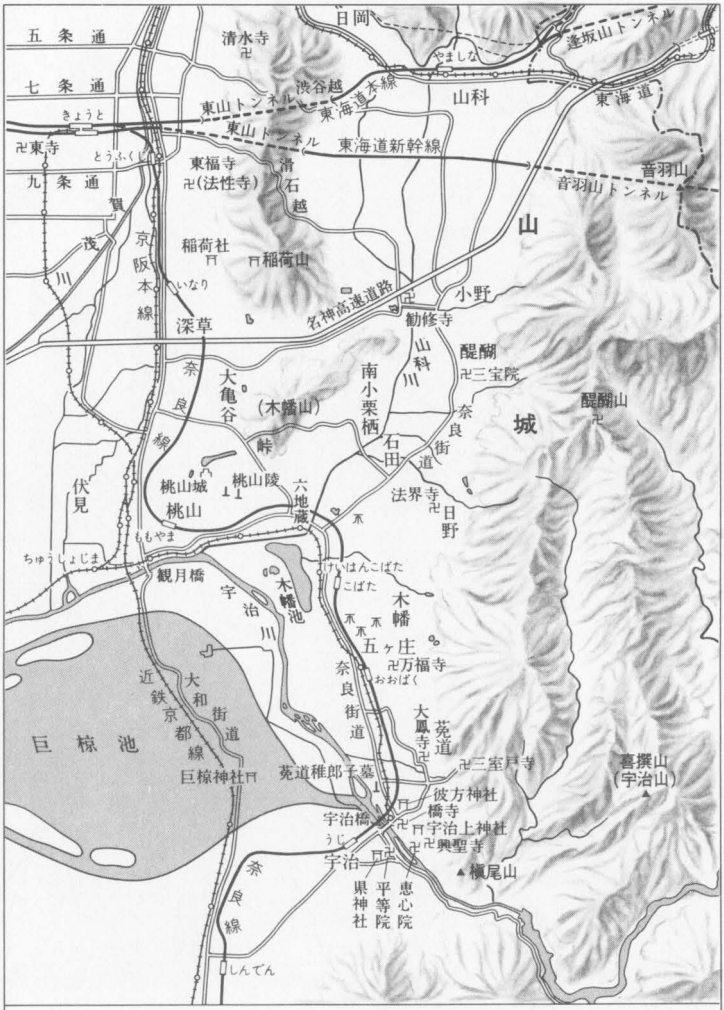
- 桐壺院
  - 朱雀院
  - 源氏
  - 兵部卿宮（螢宮）
  - 冷泉院
  - 八の宮
    - 大君
    - 中の君
    - 大臣
      - 北の方
      - 北の方
      - 左中弁
      - 弁の君
      - 柏木乳母



京都北部
(栗　栖　野)

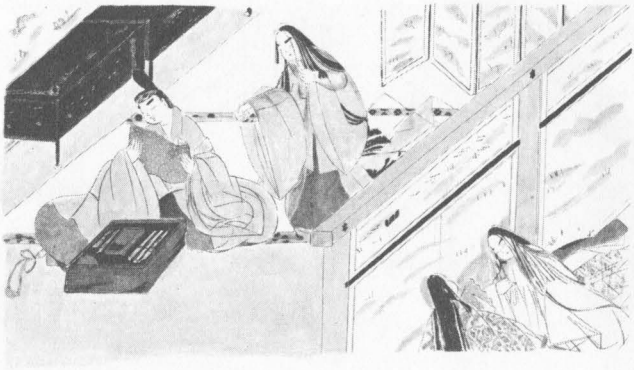
京都東北部
(小　　野)

小野は、ほぼ今の一乗寺、修学院、高野の一帯から北、大原あたりまでを含む叡山西麓の地。夕霧の巻の一条の御息所の山荘は、修学院のあたりかと推定される。



京都より宇治へ

京都より宇治への経路は、九条、賀茂川の東、法性寺（今の東福寺の寺域にほぼ重なる）の前から大和大路を南下、大亀谷から峠を越えて六地蔵に出（木幡山越え）、山沿いを南下して宇治に至った。巨椋池は、昭和16年に干拓されて田圃となった。宇治川の流路は、古くは巨椋池に流れこんでいた。

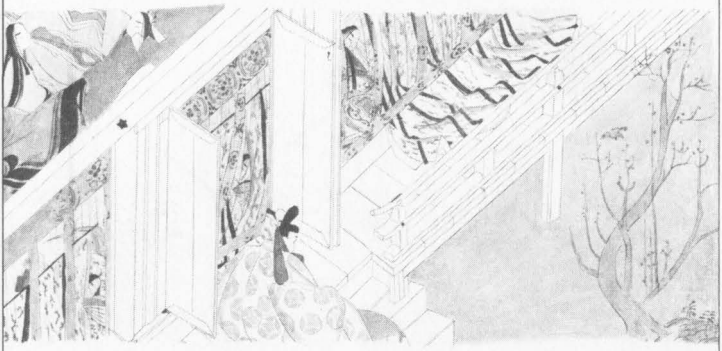


夕　霧（源氏物語絵巻）

雲居の雁が、夕霧の見ている一条の御息所の手紙を後ろから近付いて奪い取ろうとするところ。夕霧は、白い袿に直衣の肩をすべらかしたくつろいだ姿。前に硯筥が置かれている。雲居の雁は、紅の袴に白の単をまとい、肌が透けて見える。障子（襖）のこちら側に二人の女房。本文40頁。

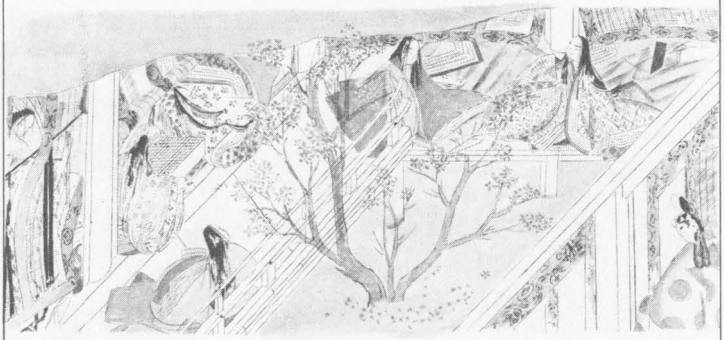
御　法（源氏物語絵巻）

二条の院、紫の上の亡くなる前の夕暮の情景。画面右奥、脇息に寄って袖で顔を蔽うのが紫の上。それに向き合って後ろ姿を見せるのが明石の中宮。いずれも袿姿。源氏もややうつむいて袖を目に当てている。庭前には萩、薄、桔梗が風に靡いている。本文111頁。



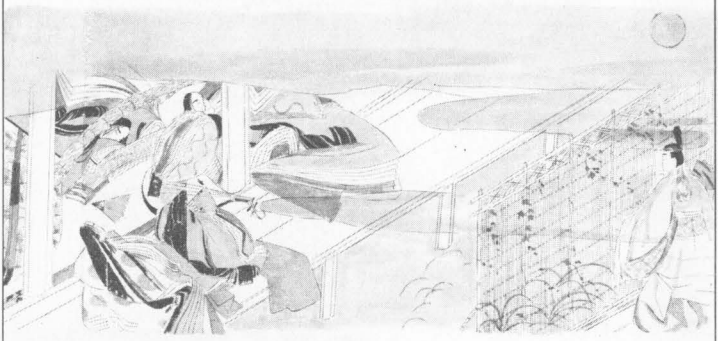
竹　河 一（源氏物語絵巻）

正月の玉鬘邸。念誦堂の東の階上、押し開かれた妻戸の前にいる薫。冠直衣姿。掛けわたした御簾の内側に几帳を立てわたし、裾が簀子に押し出されている。室内に女房、御簾越しに薫をうかがう女房もいる。庭前に梅の若木、鶯を配している。本文208頁。



竹　河 二（源氏物語絵巻）

三月の玉鬘邸。玉鬘の大君と中の君が、庭前の桜を賭け物にして碁を打っているところを、蔵人の少将が垣間見している情景。画面左、碁盤をさしはさんで、上手が大君、後ろ姿を見せているのが中の君。簀子に出ているのは女房。画面左上方に霞をたなびかせて夕暮の雰囲気を表現している。本文214頁。



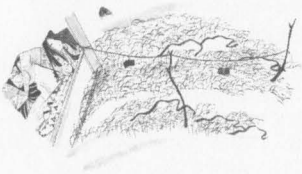
橋　姫（源氏物語絵巻）

宇治の八の宮の山荘。薫が大君と中の君を垣間見する情景。画面右、透垣の所にたたずむのが薫。画面上方に深く霞を入れ、夜の霧を表現し、薫の頭上に月を描く。柱の際に、撥を手にして顔を上げ、琵琶を前にしているのが中の君。箏の琴を前に身をかたむけているのが大君。簀子、中の君に向って後ろ姿を見せているのは童女、その後ろに横顔を見せているのが女房である。本文275頁。

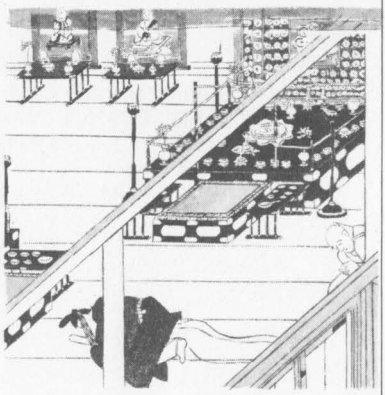
追　儺（政事要略）

方相氏と侲子（わらわ）が疫鬼を追う図。侲子は延喜式、江家次第に、図に見るごとく八人とある。

宇治橋と宇治川の網代（石山寺縁起絵）



引　板（扇面古写経）



修法の壇（春日権現験記絵）

袈　裟・蔀

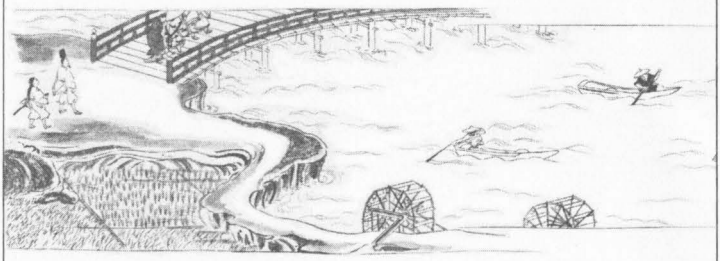
（春日権現験記絵）

錫　杖

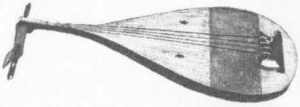
（櫟野寺蔵）

掛け帯

（春日権現験記絵）

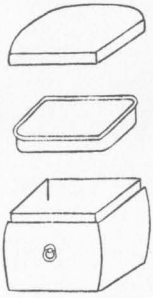


宝相華蒔絵経筥（延暦寺蔵）

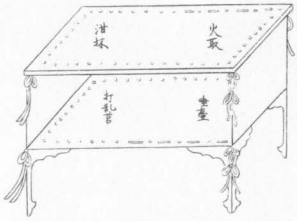


琵琶・隠月（舞楽図説）

隠月は、絃のもとを張る覆手の下にうがたれた穴、音穴（いんけつ）。図は、そこに撥の元を挿したところ。

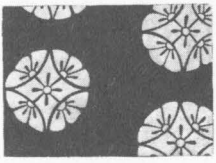


手　筥（貞丈雑記）



二　階　棚（類聚雑要抄）

草　名（藤原佐理）



浮　線　綾

新潮日本古典集成（第五〇回）

源氏物語 六

昭和五十七年五月五日 印刷
昭和五十七年五月十日 発行

校注者 石田穣二 清水好子

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03(二六六)五一一一(業務)
東京03(二六六)五四一一(編集)
振替 東京 四一八〇八

定価一八〇〇円

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yoshiko Shimizu, Printed in Japan, 1982.

新潮日本古典集成

源氏物語

七

石田穣二　清水好子　校注

新潮社版

目次

凡例……三
総角……九
早蕨……一三三
宿木……一四九
東屋……二六七

付　録

飛香舎藤花の宴……三四九
三日夜の儀……三五一
李夫人……三五三
系図……三五六
図録……三六〇

凡例

一、本巻には、総角、早蕨、宿木、東屋の四巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、早蕨は青表紙原本（定家自筆、保坂潤治氏蔵）を底本とし、他の総角以下三巻は大島本を底本とする。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の音は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文脈の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、飛香舎藤花の宴（『西宮記』）、三日夜の儀（『花鳥余情』所引『吏部王記』）、「李夫人」、系図、図録を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

源氏物語 七

総角（あげまき）

秋八月、亡き八の宮の一周忌近き頃、薫は宇治を訪れる。姫君たちは法要の支度に、経の飾りの糸を編んでいた。総角結びのその糸に寄せて、薫は大君への思いを歌に詠む。巻名は、冒頭の段のこの歌による。その夜、薫は大君の側近く近づくものの、喪服にやつれた姫君のいたわしさに身を退いた。心細い宮家の生活に動揺する女房たちは、みな薫を頼みとし、結婚を望まぬ大君の意志は貫けそうにない。大君は、中の君を代りに薫に娶せようと考える。

九月、薫は、ついに大君の部屋に忍び入った。大君は妹を一人残して逃れ去る。薫は、大君以外の人に心を分ける気はなく、中の君とは何ごともなく朝を迎えた。

大君の企みを無にすべく、薫は、かねて中の君に執心の匂宮を彼女のもとに導く。宮は、帝・后の警告ものかは、三日の夜も宇治に通った。薫の物心両面の後見は剰すところがない。しかし、匂宮は将来、皇太子たるべき人、歴とした夫人を儲けねばならない。匂宮の宇治通いは早くも途絶えるのであった。

十月、匂宮、宇治の紅葉狩。もとよりお目当ては中の君ながら、大勢の廷臣に囲まれ、宮は心ならずも帰京した。目の前で都の貴紳たちから無視された大君の落胆と無念。加えて、夕霧右大臣の六の君と匂宮の婚儀整うとの噂は、大君をすっかり打ちのめした。大君病むと聞き、薫は万事を放擲して駆けつける。

十一月、大君は、枕頭の薫に看取られて他界した。二人はついに結ばれることはなかったのである。

十二月、忌明けて、ようやく薫帰京。匂宮は、母后の内意により、中の君を京に引き取ることを告げてきた。薫二十四歳、秋から冬にかけての物語である。

一 八の宮の一周忌の法要。その死は、去年八月二十日頃である（六巻椎本三二三頁参照）。
二 宇治山の阿闍梨。
三 正式の場合に着用する僧衣。当日の布施である。
四 経机の覆いなど。（『花鳥余情』）
五 こうした（薫や阿闍梨の他所からのお世話がなかったら事も進まなかったであろうと。

八の宮の一周忌近づき、薫、宇治を訪う

六 名香（仏前で焚く香）を供えた机の四隅に結び垂らす糸という（『河海抄』）。また、名香を紙に包んで、その上を結ぶ五色の糸とも（『花鳥余情』）。
七 「身を憂しと思ふに消えぬものなればかくても経ぬる世にこそありけれ」（『古今集』巻十五恋五、題しらず、読人しらず）。「経ぬる」に、縦糸を引き延ばして機にかける意の「綜ぬる」が掛詞になるのをこの場の興とする。
八 「たたり」は、糸繰り台。二箇の台にそれぞれ二本、一本の柱を立て、これに糸を巻きつけて縒る道具。「絡垜　多々理」（『和名抄』）（図録六参照）
九 几帳の帷の縫い合せてないところ。
一〇 名香の糸を作っていらっしゃったのだなと。
一一 「縒り合はせて泣くなる声を糸にしてわが涙をば玉に貫かなむ」（『伊勢集』。『古今六帖』四、かなしび、伊勢）。『伊勢集』によれば、中宮温子の崩後、法要のための組糸を縒っていた朋輩の女房たちに言いやった歌。私も同じ悲しみの涙にくれるお仲間です、の意。

あまた年耳馴れたまひにし川風も、この秋はいとはしたなくもの悲しくて、御果てのことといそがせたまふ。（父宮亡き今年の秋は身の置き所もなく／準備をおさせになる）おほかたのあるべかしきことども（決りどおりの法事に必要なさまざまのことは）は、中納言殿（薫）、阿闍梨（二）などぞつかうまつりたまひける。（姫君たちは）こには法服（三）のこと、経（四）の飾り、こまかなる御あつかひを、人の聞こえ（教え申す通りにお支度をなさるのも）ゆるに従ひていとなみたまふも、いとものはかなくあはれに、かかるよその御後見（うしろみ）なからましかば、と見えたり。（こまごまとしたことのご用意を／ご奉仕申されるのであった／姫君／ひどく頼りなげでおいたわしく／女房たちがお）みづからもまうでたまひて、今は（今日を限りと喪服をお脱ぎ捨てになるお悲しみのお見舞を）と脱ぎ捨てたまふほどの御とぶらひ、浅からず聞こえたまふ。（姫君たちは）阿闍梨（ざり）もここに参れり。（六）名香の糸ひき乱りて、（引き乱して／さる）「かくても経ぬる」など、（しみじみと話し合っていらっしゃる時だった／（宇治に）／薫自身も／ねんごろに申し上げな）うちかたらひたまふほどなりけり。（糸を）結びあげたるたたりの、簾（すだれ）のつまより、几帳（きちやう）のほころびに透きて見えければ、（端から）そのことと心得て、（一一）「わが涙をば玉にぬかなむ」とうち誦じたまへる、（口ずさみなさるのは）

一 宇多天皇の中宮温子に仕えた女房。「御」は、女房に対する敬称。（一巻桐壺二六頁注四参照）

二 貫之の歌は「糸に縒るものならなくに別れ路の心細くも思ほゆるかな」（『古今集』巻九羇旅、東へまかりける時、道にてよめる）となっている。「細く」は「糸」の縁語。

三 心細さを細い糸に寄せて詠んだということなのに、などと。「筋」「ひきかけ」は「糸」の縁語。

四 一周忌法要の願意を述べたもの。漢文で書く。ここは、薫がその草稿を認めている趣。（一巻夕顔一七六頁注八参照）

五 総角結びの中に末長い契りを結びこめて、一つ所に結び合わされる、そのように一緒になりたいものです。「総角」は、紐の結び方。上と左右に輪を出し、中央で結び合わす。もと、少年の髪の結い方の名で、それに似るところから出た名称。「縒り」に「寄り」を掛け、下の句は、催馬楽、呂「総角」「総角や　とうとう　尋ばかりや　とうとう　離りて寝たれども　転びあひけり　とうとう　か寄りあひけり　とうとう」による。巻名の出所になった歌。

六 貫きとめることもできない砕けやすい涙の玉の緒―悲しみにたえず、いつ死ぬかも分らない私の命ですのに、末長い契りなどどうして結べましょう。

七 「片糸をこなたかなたに縒りかけてあはずは何を玉の緒にせむ」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）。逢わなくては生きているかいもありません、の意。

薫、大君に訴える

伊勢の御もかくこそはありけめと、をかしく聞こゆるも、内の人は、聞き知り顔にさしいらへたまはむもつつましくて、「ものとはなしに」とか、貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけむを、など、げに古言ぞ、人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出でたまふ。

（きっとこんなふうだったのだろうと　趣深く思われるにつけても　姫君たち　いかにも心得たふうに早速にお相手なさるのも気がひけて　生きていての旅路の別れさえ　本当に　古歌は　人の心の思いを晴らすよすがだったことを）

御願文つくり、経仏供養ぜらるべき心ばへなど書き出でたまへる硯のついでに、客人、

（経典や仏像を供養なさろうとする趣旨などをお書きあらわしになる　筆のついでに　薫）

あげまきに長き契りをむすびこめ
おなじ所によりもあはなむ

（簾中の姫君に）

と書きて見せたてまつりたまへれば、例の、と、うるさけれど、

（大君）

ぬきもあへずもろき涙の玉の緒に
長き契りをいかがむすばむ

（またあのことをと煩わしく思われるが）

とあれば、「あはずは何を」と、うらめしげにながめたまふ。

（薫は）

（ご自身のことは　大君が　このように何とはなしに　話をそらせて相手になさら）

みづからの御上は、かくそこはかとなくもて消ちてはづかしげな

八 匂宮が中の君に執心のこと、椎本三四二頁参照。
九 何分ご婦人のことに関しては、ちと積極的なご性分なので。挿入句の気持で読む。
一〇 いったんお申し出になったからには、あとには引けぬという意地ずくのお気持からかと。匂宮は、去年春の宇治の中宿り以来、文を送っており、中の君が返事をしていた（椎本三一〇頁、三四七頁）。
一一 どうしてこうむやみなまでに取り合おうとなさらないのでしょう。
一二 世間の人情など、お分りにならぬ方々とはお見受けしませんのに。「世のありさま」は、男女の仲の意。
一三 これほどまで心からお信じ申し上げていますのにそのかいもないことと、恨めしく存じられます。
一四 お気持に背くまいという気持なればこそ。薫の「心に違ひて、うらめしくなむ」という言葉に応じる。
一五 これほどまで、おかしな世間の噂になるような有様で、親しくお相手申し上げているのです。取次ぎなしに、直接応対していることをいう。
一六 それをお分り下さらなかったのは、お志の浅い点もあったのだと存じられます。
一七 仰せのように、こんなさびしい山里の住まいなどをしていますと、物の分る方なら物思いの限りを尽すことでしょうが。「世のありさまなど、おぼしわくまじくは見たてまつらぬを」という薫の言葉を受ける。

ないので［薫は］そう簡単に意中をお打ち明けもならず
るに、すがすがともえのたまひよらで、宮の御ことをぞまめやかに
真面目な面持で
聞こえたまふ。「さしも御心に入るまじきことを、かやうのかたに
（薫）それほどお心がひかれるはずもないことなのに
すこしすすみたまへる御本性に、聞こえそめたまひむ負けじ魂に
私の
やと、とざまかうざまに、いとよくなむ御けしき見たてまつる。ま
あれこれにつけて　十分に宮のお気持のほどはお探り申してあります
ことにうしろめたくはあるまじげなるを、などかくあながちにしも
見るところ全然ご心配な点はなさそうに思われますのに
もて離れたまふらむ。世のありさまなど、おぼしわくまじくは見た
いやにただもう意に介さぬもののようにおあしらいなさいますので
てまつらぬを、うたてとほどほしくのみもてなさせたまへば、かば
どのようにお
かりうらなく頼みきこゆる心に違ひて、うらめしくなむ。ともかく
考えになっているのかお考えの向きなどを　はっきりと承りたいものでございます
もおぼしわくらむさまなどを、さはやかにうけたまはりにしがな」
大層真剣な様子をして
と、いとまめだちて聞こえたまへば、「違へきこえじの心にてこそ
（大君）
は、かうまであやしき世の例なるありさまにて、隔てなくもてなし
はべれ。それをおぼしわかざりけるこそは、浅きこともまじりたる
ここちすれ。げにかかる住ひなどに、心あらむ人は、思ひ残すこと
［私は］　気が利かず育ちました上に　ただ今仰せのような
はあるまじきを、何ごとにも後れそめにけるうちに、こののたまふ

一 亡き父宮も、一向に何一つ、もしこうだったならば（こうせよ）ああだったならばなどと、将来のことを予想してあれこれおっしゃった折にも、言い置かれたことはありませんでしたので。八の宮の遺言に、結婚を前提にした指示はなかったという（椎本三一九～二〇頁参照）。このあたり、大君自身のことについて語る口ぶり。

二 とは申せ、私より少し年も若く、こんな山奥で過させるのはお気の毒とお見えになる人のお身の上を、何とかこのまま朽木にはしてしまいたくないものと。妹の中の君のこと。「かたちこそ深山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなむ」（『古今集』巻十七雑上、女どもの見て笑ひければ詠める　兼芸法師）による措辞。

三 はきはきと一人前の大人ぶって、どうして偉そうに事をお決めになれようと、もっともに思われて。薫の思い。うら若い女性の身で、妹の中の君について保護者ぶった口も利けないだろう、の意。

四 老女。弁のこと。

五 （八の宮が）何やら心弱げにおぼしめすようになったご晩年の頃、お二人の姫君のことを、私の考え通りにお世話申し上げるようお約束のお言葉があったのだが。八の宮の依託は、橋姫二八八頁、二九三～四頁、椎本三一四頁、三一七頁に見える。「心にまかせてもてなしきこゆべく……」は、この際自分の側に引きつけた言い方。

薫、弁と語る

お話はめる筋は、一いにしへも、さらにかけて、とあらばかからばなど、行く末のあらましごとにとりまぜてのたまひ置くこともなかりしかば、今まで通りこうした暮しで　世間並みに夫を持つことをあきらめるようにとのお積りだったのだなほかかるさまにて、世づきたるかたを思ひ絶ゆべくおぼしおきてける、となむ思ひ合はせはべれば、ともかくも聞こえむかたなくて、何とお返事してよいやら申し上げようもなくて二さるは、すこし世籠りたるほどにて、深山隠れには心苦しく見えたまふ人の御上を、いとかく朽木にはなし果てずもがなと、人知れず心の中では何とかしなくてはと存じていますが　どのような縁に決りますことやらあつかはしくおぼえはべれど、いかなるべき世にかあらむ」と、うと溜息をついて思い悩んでいらっしゃるらしい大君の様子は　ひどく痛ましい感じがするち嘆きてもの思ひ乱れたまひけるほどのけはひ、いとあはれげなり。三けざやかにおとなびても、いかでかはさかしがりたまはむと、ことわりにて、意中をお話しになる　（薫）これまでは　後世を願う気持からあえてこちらにお伺いしだしたのですが例の、四古人召し出でてぞかたらひたまふ。「年ごろは、ただ後の世ざまの心ばへにて進み参りそめしを、五もの心細げにおぼしなるめりし御末のころほひ、この御ことどもを、心にまかせてもてなしきこゆべくなむのたまひ契りてしを、おぼしおきてたてまつ［八宮が］お心積り申し上げておかれたお身の振り方とは違ってりたまひし御ありさまどもには違ひて、御心ばへどもの、いといと　お二人のなされようが　まことにもっ

六 一体どうしたことか、宮のお心積りの筋はまた別だったのかと、疑わしくもなってまいります。八の宮には別に意中の人物でもいたのか、という。

七 （私は）本当に人とは変った性分で、この世に執着することはなかったのですが。今まで女に惹かれることはなかったことをいう。

八 これも前世からの因縁で、こうまで親しくお付き合い申し上げることにもなったのでしょうか。

九 世間でも、ぼつぼつと二人の仲をとやかく噂をしているようでもありますし。世間の噂にかこつけて、のっぴきならぬように責める。

一〇 私も姫君も、世間の男女のように、うちとけてお付き合い申し上げたい、という気になるのは。

一一 たとえ不似合いなことにしても、そうした例はないわけではありますまい。

一二 匂宮と中の君の縁談のこと。

一三 内々にやはり別にお考えの相手がいるに違いない。

一四 （姫君たちは）もともと、ご覧のように、世間の人とは違ったご性質でいられますせいか。以下、八の宮家の人々や生活を深く理解する弁の言葉。

弁、大君の真意を語る

て困ったことに強情でいられるのは

あやにくにもの強げなるは、六いかに、おぼしおきつるかたの異なるにやと、疑はしきことさへなむ。おのづから聞き伝へたまふやうも自然お聞きおよびのこともありましょうが

あらむ、七いとあやしき本性にて、世の中に心をしむるかたなかりつるを、八さるべきにてや、かうまでも聞こえ馴れにけむ。世人もやうやう言ひなすやうあべかめるに、同じくは昔の御ことも違へきこえず、一〇われも人も世の常に心とけて聞こえ通はばや、と思ひよるは、亡き宮のご遺志にもお背き申さず

つきなかるべきことにても、さやうなる例なくやはある」などのたまひ続けて、一一「宮の御ことをも、かく聞こゆるに、うしろめたくは〔私が〕こう申すのだから　案ずることはあるまい

あらじと、うちとけたまふさまならぬは、一三うちうちに、さりとも思ほし向けたることのさまあらむ。なほ、いかにいかに」とうちながめつつのたまへば、例の、わろびたる女ばらなどは、かかることには、憎きさかしらも言ひまぜて、言よがりなどもすめるを、いとさはあらず、心のうちには、あらまほしかるべき御ことどもを、と思へど、「弁一四もとより、かく人に違ひたまへる御癖どもにはべればにや、

気をお許しになる様子でもないのは　出すぎたおせっかいも口にして　一体どうなのか　物思わしげな　心がけのよくない女房などは　男君の求婚には　風情で仰せになるので　お追従したりするようだが　〔弁は〕全くそうではなく　お二人にとってそれぞれ願ってもないご縁談なのに

一 宮様ご在世中の今まででも、何の頼りがいのある身の寄せ所もございませんでした。「わび人のわきて立ち寄る木の下は頼む蔭なくもみぢ散りけり」（『古今集』巻五秋下、雲林院の木のかげにたたずみてよみける 僧正遍昭）による。

二 昔からの古いご縁故の人々も。宮家に代々奉公してきたゆかりのある者たち。

三 まして八の宮亡き今は。

四 八の宮のご在世中こそ、皇族としての格式もあるし、不釣合いなご縁組は困ったことだなどと、昔気質の律儀さからおためらいにもなりましたが。以下七行後の「道々別れては行ひなすなれ」まで、「よからぬことを聞こえ知らせ」る女房の意見。八の宮が生前、何とか身分にふさわしい婿をと考えていたことは、椎本三〇七頁、三一二～三頁に見える。

五 松の葉を食べて修行する山伏でさえ、生身の身体の捨てがたさゆえに、仏のお教えも、それぞれの流儀を立てて都合のよいように修行すると申すではありませんか。「すく」は、呑み込むこと（一巻若紫一八四頁注一〇参照）。「芰荷為レ衣、松葉為レ食、沙門隠士行也」（『河海抄』）。「芰荷」は、菱や蓮の香草。「樹下集 柴の庵苔の衣に身をやつし松の葉ならぬ時はなしとか。金峯山縁起」役行者着二藤皮衣一、松葉為レ食吸二花汁一、助二身命一世余年云々」（『花鳥余情』）

どのようにもあれ　世間並みにどうこうなどと　〔結婚について〕お考えなさっている　こうしてお仕えしている女房たちも　ご様子ではございません

いかにもいかにも、世の常に何やかやなど、思ひよりたまへる御けしきになむはべらぬ。かくてさぶらふこれかれも、一年ごろだに、何のたのもしげある木の本の隠ろへもはべらざりき。身を捨てがたく思ふ限りは、ほどほどにつけてまかで散り、二昔の古き筋なる人も、多く見たてまつり捨てたるあたりに、三まして今は、しばしも立ちとまりがたげにわびはべりつつ、四おはしましし世にこそ、限りありて、かたほならむ御ありさまはいとほしくも、など、五古代なる御うるはしさにおぼしもとどこほりつれ、今はかう、また頼みなき御身ども境遇で　どのようなご縁組にせよ成行き次第に身の振り方をつけられても　むやみに悪く申し上げて、いかにもいかにも世になびきたまへらむを、あながちにそしるような人は　人の世の苦労もわきまえないで　お話にもならぬことだと存じます　りきこえむ人は、かへりてものの心をも知らず、言ふかひなきことにてこそはあらめ、いかなる人か、いとかくて世をば過ぐし果てたまふべき、六松の葉をすきて勤むる山伏だに、生ける身の捨てがたさによりてこそ、仏の御教へをも、道々別れては行ひなすなれ、などやうのよからぬことを聞こえ知らせ、若き御心ども乱れたまひぬべ

ほかに頼る人とてないお二人のご　どのような人が　本当にこんな有様で一生をお過しになることができましょう　〔姫君たちに〕　お年若なお二人のお気持がお迷いになりそう

六（大君は）中の君を、どうかして人並みにお世話もしてさし上げたいものだ。身分にふさわしい結婚もさせたい、ということ。一四頁の、薫に語った大君の言葉と符合する。「中の宮」の呼称は、椎本に既出（六巻三二七頁注一五参照）。

七（大君は）心を許せるものとお思い申されて、今では何やかやと、立ち入ったことまでご相談なさるようですが。薫の「……かうまでも聞こえ馴れにけむ」「……心とけて聞こえ通はばや」（一五頁）に応じた言葉。

八 中の君のこと。大君は、中の君を薫に娶せたいと思っているという。前に「すこし世籠りたるほどにて、深山隠れには心苦しく見えたまふ人の御上を、いとかく朽木にはなし果てずもがな」（一四頁）と大君の語るところがあった。

九 おいたわしいご遺言を一言耳に止め、はかないながらもこの世に生きている限りは、お付き合い願おうとの所存ゆえ。

一〇（大君が）それほどまでも、（私のことを）お考えになって下さるとは、大層うれしいことなのですが。中の君の婿にふさわしいと認めて下さったのは感謝するが。

一一（大君への思いは）世間によくある色恋めいたことでもないのです。以下、その心情を詳しく語ってゆく。

なことが多いようでございますが　お志を曲げようともなさいませず　とお思い申されている様子です　こうして山路深くわざわざお尋ね下さいますあなた様のご親切の　今まで長の年月お見馴れ申し上げていられる深さのほども

きこと多くはべめれど、たわむべくもものしたまはず、中の宮をなむ、いかで人めかしくもあつかひなしたてまつらむ、と思ひきこえたまふべかめる。かく山深く尋ねきこえさせたまふめる御心ざしの、年経て見たてまつり馴れたまへるけはひも、うとからず思ひきこえさせたまひ、今はとざまかうざまに、こまかなる筋聞こえ通ひたまふめるに、かの御方を、さやうにおもむけて聞こえたまはば、となむおぼすべかめる。宮の御文などはべめるは、さらにまめまめしき御ことならじ、とはべめる」と聞こゆれば、「あはれなる御一言を聞きおき、露の世にかかづらはむ限りは聞こえ通はむの心あれば、いづかたにも見えたてまつらむ、同じことなるべきを、一〇さまではた、おぼしよるなる、いとうれしきことなれど、心の引くかたなむ、かばかり思ひ捨つる世に、なほとまりぬべきものなりければ、あらためてさはえ思ひなほすまじくなむ。一一世の常のなよびかなる筋にもあらずや。ただかやうにもの隔てて、こと残いたるさまならず、さし

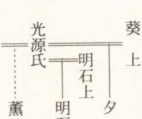
　　　

一（大君の方でも）他人行儀に打ち明けて下さらぬお胸の内を残さずにお相手下さったなら。後の「うとかるまじく頼みきこゆる」に続く気持。

二 兄弟などで、そういった気のおけぬ話のできる間柄の者もなくて。ただ一人の異母兄夕霧は、この時五十歳。薫二十四歳。

三（大君には）親しくして頂きたいものと期待申し上げております。

四 明石の中宮。表向き薫の異母姉。姉とはいえ、身分柄、気軽に話し合えないという。明石の中宮が薫をいとしむことは、六巻匂兵部卿一六八～九頁参照。



五 薫の母女三の宮。前年、三条の宮が焼失して以来、六条の院に住むが、本来の呼称で呼ぶ（椎本三四八頁注四参照）。

六 親子の分がありますので、（きょうだいのように）気軽にお親しみ申せないのです。「きこえさす」は、女三の宮への二重敬語。

七 そのほかの（母や姉以外の）女性は、みんなとても馴染めず気がひけてこわい感じがして、みずから求めて妻もなく心細い身の上なのです。「よるべ」は、婿として世話してくれる家。薫は、今まで結婚しない心情を吐露する。

八 まして真剣に思いつめている筋のことは。大君への思いは。

何やかやとはかないこの世の中の出来事を気がねなくお話し申し上げて一向ひて、とにかくに定めなき世の物語を、隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむなむ、兄弟などのさやうにむつましきほどなるもなくて、いとさうざうしくなむ、世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさまを、心に籠めてのみ過ぐる身なれば、さすがにたつきなくおぼゆるに、うとかるまじく頼みきこゆる。后の宮はた、なれなれしく、さやうにそこはかとなき思ひのままなるくだくだしさを、聞こえ触るべきにもあらず。三条の宮は、親と思ひきこゆべきにもあらぬ御若々しさなれど、限りあれば、たやすく馴れきこえさせずかし。そのほかの女は、すべていとうとくつつましく恐ろしくおぼえて、心からよるべなく心細きなり。なほざりのすさびにても、懸想だちたることは、いとまばゆく、ありつかず、はしたなきこちごちしさにて、まいて心にしめたるかたのことは、うち出づることも難くて、怨めしくもいぶせくも思ひきこゆるけしきをだに見えたてま

大層物足りない思いでおりまして世間にあって
しみじみと悲しくも おもしろくも 嘆かわしくも その折々につけて思うあれこれを
いつも胸に納めて語り合うこともない身ですから やはりどうしてよいか分らぬ気持がしますので
とりとめもなく勝手気ままなくだくだしいことを
とても気恥ずかしくて 板につかず 身の置き所もないといった不色恋めいたことは
〔私は〕その場限りのざれごとでも 口に出して言うことも 器用さで
怨めしいともじれったいともお思い申している気配だけでも〔大君に〕見て頂けない

九　匂宮と中の君の縁談のこと。

一〇　老女の弁。

一一　（八の宮亡く）これほどまで心細い身の上なのに、（大君には）理想的な薫のお人柄なので。薫の真情を聞いた弁の気持。

一二　この色恋の筋をのけたら、ほかはすべて世にも稀な実のある薫のお人柄なので。「人の御心」で一語。

一三　（女房の取次ぎなしに）大君自身が応対なさる。次にあるように、簾に屏風を隔ててである。

薫、その夜、宇治に泊り、大君、応対に出る

一四　お仏間との隔ての戸を開けて。「中の戸」は、襖障子であろう。仏間と廂の間との隔て。大君は仏間にいる。仏間は、母屋の西面であること、椎本三四九頁注一二三、同頁平面図参照。

一五　仏前のお燈明の火をあかあかと掻き立てさせて。大君の用心である。

一六　簾は、母屋と廂の間との境の簾。屏風は、背後から御燈明の火に照らし出されるのを避ける配慮。

一七　母屋から見て外側。西の廂の間であろう。薫がいる。

一八　疲れて失礼な行儀をしているのに、まる見えではないか。「無礼」は男性用語。

つらぬこそ、われながら限りなくかたくなしきわざなれ。宮の御ことをも、さりともあしざまには聞こえじと、まかせてやは見たまはぬ」など言ひゐたまへり。老人はた、かばかり心細きに、あらまほしげなる御ありさまを、いと切に、さもあらせたてまつらばやと思へど、いづかたもはづかしげなる御ありさまどもなれば、思ひのまにはえ聞こえず。

今宵はとまりたまひて、物語などのどやかに聞こえまほしくて、やすらひ暮らしたまひつ。あざやかならず、もの怨みがちなる御けしき、やうやうわりなくなりゆけば、わづらはしくて、うちとけて聞こえたまはむことも、いよいよ苦しけれど、おほかたにてはありがたくあはれなる人の御心なれば、こよなくもてなしがたくて、対面したまふ。仏のおはする中の戸を開けて、御燈明の火けざやかにかかげさせて、簾に屏風を添へてぞおはする。外にも大殿油参らすれど、「なやましうて無礼なるを、あらはに」などいさめて、か

どこまでも融通のきかぬ愚かなことです　悪いようにお計らいするはずはないと　私にまかせてみては下さいません　ぐずぐずしながら夕方まで過された　それと口には出さず　何やら怨みがましそうな　だんだん昂じて扱いにくくなってゆくので　親しくみずから　お話し申し上げなさることも　そっけないあしらいもしにくくて　率直に自分の考えを申し上げかねている　お二人をご夫婦におさせ申したいと思うが　どちらもそれぞれ気づまりなほどご立派な方々なので　心から　姫君と　とこに　薫は　大君は　制止なさって　しするが　（薫）

一 木の実、果実などの簡単な軽食。酒肴とする。
二 上品なつまみ物などを添えて。
三 場所は寝殿の東の方か。前には供人を「西の廊」で接待している（六巻橋姫二七五頁参照）。「廊」は、建物と建物を繋ぐ渡殿。
四 薫のお前。大君と対面するあたり。
五 胸が切なくなるのも、たあいのないことだ。草子地。

薫、大君に近づく

六 こんな何でもない仕切り程度を妨げと思って。一押しすれば入れる簾や屏風の隔て。以下「をこがましくもあるかな」まで、薫の自嘲の思い。
七 さし障りのない世間話をあれこれと。色恋めいた話に触れないで、自制するところ。
八 御簾の内では、姫君が、女房たちに側近く控えているようになどお命じになっておいたのだが。
九 そんなによそよそしい態度をおとりにならぬように、と思っているらしいので。女房たちが、かねてから姫君たちの結婚を望んでいることは、前の弁の言葉にも見える（一六頁参照）。
一〇 前に「御燈明の火けざやかにかかげさせて」とあった。

たはら臥したまへり。御くだものなど、わざとはなくしなして参らせたまへり。御供の人々にも、ゆゑゆゑしき肴などして出ださせたまへり。廊めいたる方に集まりて、この御前は人げ遠くもてなして、しめじめと物語聞こえたまふ。うちとくべくもあらぬものから、なつかしげに愛敬づきてもののたまへるさまの、なのめならず心に入りて、思ひ焦らるるもはかなし。

かくほどもなきものの隔てばかりを障り所にて、おぼつかなく思ひつつ過ぐす心おそさの、あまりをこがましくもあるかな、と思ひ続けらるれど、つれなくて、おほかたの世の中のことども、あはれにもをかしくも、さまざま聞き所多くかたらひきこえたまふ。内には、人々近くなどのたまひおきつれど、さしもて離れたまはざらなむ、と思ふべかめれば、いとしもまもりきこえず、さし退きつつ、みな寄り臥して、仏の御燈火もかかぐる人もなし。ものむつかしくて、忍びて人召せど、おどろかず。「ここちのかき乱りなやましく

横におなりになった　有り合せの物を取り合せたふうにしてさし上げなさった　薫の　酒を　親しみやすく　かわいい感じでものをおっしゃる様子が　薫には　一方ならず気に入って　家来たちも遠ざけて　大君は　お気を許されそうにもない気配ながら　思いも遂げず気が気で　何と人並みはずれて愚かしいことよ　なくあせるだけの不器用さの　平静を装って　あれこれと話上手にしみじみとお話し申し上げなさる　そう気を入れてお見張りもせず　隅の方に　そっと女房を呼ばれるが　起きて来ない　大君　気分が悪くて苦しゅうございますので　大君は　何やら気づまりで　明るくかき立てる

はべるを、ためらひて、暁がたにもまた聞こえむ」とて、入りたまひなむとするけしきなり。「山路わけはべりつる人は、ましていと苦しけれど、かく聞こえうけたまはるになぐさめてこそはべれ。うち捨てて入らせたまひなば、いと心細からむ」とて、屏風をやをらおしあけて入りたまひぬ。いとむくつけくて、なからばかり入りたまへるに、引きとどめられて、いみじくねたく心憂ければ、「隔てなきとは、かかるをや言ふらむ。めづらかなるわざかな」と、あはめたまへるさまのいよいよをかしければ、「隔てぬ心をさらにおぼしわかねば、聞こえ知らせむとぞかし。めづらかなりとも、いかなるかたに、おぼしよるにかはあらむ。仏の御前にて誓言も立てはべらむ。うたて、な懼ぢたまひそ。御心破らじと思ひそめてはべれば、人はかくしもおしはかり思ふまじかめれど、世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや」とて、心にくきほどなる火影に、御髪のこぼれかかりたるをかきやりつつ見たまへば、人の御けはひ、思ふやうにか

少し休みまして　明け方にでもまたお話し申しましょう　〔奥に〕　なおさら　置き　こうしてお話し申し上げお伺いもすることで慰められております　〔薫〕　〔大君は〕大層気味が悪くて　半身ほど　〔御簾の中に〕　去りにして　〔大君〕　思いもかけぬなさりようですこと　おけな　しになる大君の様子が一段と風情があるので　〔薫〕　いやですね　お怖がらないで下さい　大君のご様子は　申し分なく気品のあ

一一 山路を踏み分けて参りました者は。薫自身のこと。歌語的表現。前に弁も「かく山深く尋ねきこえさせたまふめる……」（一七頁）と言っている。
一二 前出の隔ての屏風。
一三 ひどくうらめしく、情けないので。
一四 あなたが「隔てなく（気がねなしに）」とおっしゃるのは、こういうことを言うのでしょうか。薫は、前に弁に向って「……とにかくに定めなき世の物語を、隔てなく聞こえて」（一八頁）と語っている。
一五 隔てない私の真心を少しも分って下さらないので、お教え申そうと思って、お近づき申したのです。大君の言葉の「隔てなきとは、かかるをや言ふらむ」に対する応酬。
一六 思いもかけぬとおっしゃるのも、どういうふうに気を廻されてのことでしょう。これも大君の「めづらかなるわざかな」に応じたもの。
一七 あなたのお気持を損ねまいと、初めから心に決めておりますので、他人はまさかこんなこととも想像いたしますまいが、人並みはずれの馬鹿者で通している私なのです。大君の意に反して手出しすることはしない、と言う。
一八 ほの暗くて奥ゆかしい火影に。前に「仏の御燈火もかかぐる人もなし」とあった。
一九 大君の御髪。

薫、大君に掻き口説く

一　こんな心細いお話にもならぬようなお住居で、色好みの男には、邪魔物は一つもなさそうだのに。以下、美しい大君を見ての薫の心騒ぎ。

二　今までの自分の優柔不断さまで、不安に思われなさるが。今後といわず、今までだって危なかったのだと気づく。今宵、この機会にも思いを遂げたいという気持が下に動く。

三　大君がこんなにいやがられるのではなくて、いつかそのうちお気持の折れる時もあろう、と思い続ける。

四　（薫は）無理強いしているようなのもおいたわしくて、おだやかに取り繕ってお慰め申される。

五　縁起でもない喪服にやつれた姿を、すっかり見ておしまいになった思いやりのないなさり方に、私の至らなさも思い知られますので。薫の無体な振舞に、自分の不用意さも悔む。

六　人に見られようとは思いもしないで、何の用意もなく質素な喪服に身をお包みになった火影の姿を。

七　お袖の色を口実になさるのは、まことにごもっともですが。大君の「ゆゆしき袖の色など……」というのを受けて、服喪中を口実に、私を寄せつけようとなさらないのも、分りますが、の意。

（美しさである）をりをかしげなり。

一　かく心細くあさましき御住処に、好いたらむ人は障り所あるまじげなるを、われならで尋ね来る人もあらましかば、（もし自分以外に姫君を尋ねて来る男でもあったら）さてや止みなま（そのままにしておくだろう）し、いかにくちをしきわざならましと、（そうしたらどんなに残念なことだろうと）来しかたの心のやすらひさへ、あやふくおぼえたまへど、言ふかひなく（言いようもなく）憂しと思ひて（情けないと思って）泣きたまふ（大君の）御けしきの、いといとほしければ、（本当においたわしいので）かくはあらで、おのづから心ゆるびしたまふをりもありなむ、と思ひわたる。わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへきこえたまふ。（大君）「かかる御心のほどを思ひよらで、（こんなお考えをお持ちだとは気づきませんで）あやしきまで聞こえ馴れにたるを、（自分でも不思議なほどお親しくしてまいりましたのに）ゆゆしき袖の色など、見あらはしたまふ心浅さに、みづからの言ふかひなさも思ひ知らるるに、（それもこれも心の慰めようもございません）さまざまなぐさむかたなく」と恨みて、何心もなくやつれたまへる墨染の火影を、（大君は）いとはしたなくわびしと思ひまどひたまへり。（薫）「いとかくしもおぼさるるやうこそはと、（全くこうまで私をお嫌いになるのも訳のあることかと）はづかしきに、（気がひけまして）聞こえむかたなし。（何とも言葉もございません）お袖の色をひきかけさせたまふはしも、ことわり

八 それくらいのことを憚らねばならないような、この頃始まったことと同じにお考えになっていいものでしょうか。喪中を口実にするのは、昨日今日の恋ならともかく、自分の場合は長年のことだからと、次に、二年前の垣間見のことから話し出す。

九 あの琴の音を耳にした有明月の垣間見のことから始まって。（六巻橋姫二七五～六頁参照）

一〇 そんなことまで見られていたのかと、いやな思いがして。大君の心中。

一一 お側の丈の低い几帳。三尺の几帳であろう。身分の高い婦人が、室内で身を隠すため側に置く。それを仏前の隔てにするのである。

一二 仏前に焚く香。

一三 モクレン科の常緑樹。仏前に供える水（閼伽）に散らす。

一四 喪中の今、折もあろうに、まるで焦れて怺え性がないようなことで、軽々しく、自分の本意にも反することだろうから。無理強いはすまいと反省する気持。

一五 このような憚りがなくなる頃には。父宮の一周忌が明ける頃には。

なれど、ここら御覧じなれぬる心ざしのしるしには、さばかりの忌おくべく、今はじめたることめきてやはおぼさるべき。なかなかなる御わきまへ心になむ」とて、かのものの音聞きし有明の月影よりはじめて、をりをりの思ふ心の忍びがたくなりゆくさまを、いと多く聞こえたまふに、はづかしくもありけるかなと、うとましく、かかる心ばへながらつれなくまめだちたまひけるかな、と聞きたまふこと多かり。

今まで長年よくご承知になっている私の気持をお思い下さるならなさらずもがなのご分別というものです

事あるごとに慕わしく思う気持が抑えがたくなってゆく有様をとお訴え申されるので

こんな下心を持ちながら何食わぬ顔をして真面目ぶっていらっしゃったのだ

一二 御かたはらなる短き几帳を仏の御方にさし隔てて、[薫は]形ばかり[姫君に]かりそめに添ひ臥したまへり。名香のいと香ばしく匂ひて、榁のいとはなやかに薫れるけはひも、[薫は]人よりは格別に仏様をもご信仰申し上げていられるお人柄ゆえ人よりはけに仏をも思ひきこえたまへる御心にて、わづらはしく、墨染の今さらに、をりふし心焦られしたるやうに、あはあはしく、思ひそめしに違ふべければ、かかる忌なからむほどに、この御心にも、さりともすこしたわみたまひなむ、など、せめて気長に考えようとなさるてのどかに思ひなしたまふ。秋の夜のけはひは、かからぬ所だに、

気がとがめて

大君のお心もいくら何でも少しはおゆるみになるだろう

こうした喪の家でなくても

おのづからあはれ多かるを、一まして峰の嵐も籬の虫も、心細げにのみ聞きわたさる。二常なき世の御物語に、時々さしいらへたまへるさま、いと見所多くめやすし。三いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと、四けしきとりてみな入りぬ。宮ののたまひしさまなどおぼし出づるに、五げにながらへば、心のほかにかくあるまじきことも見るべきわざにこそはと、もののみ悲しくて、六水の音に流れ添ふここちしたまふ。

はかなく明けがたになりにけり。七御供の人々起きて声づくり、八馬どものいばゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、おぼしやられて、九をかしくおぼさる。一〇光見えつるかたの障子をおしあけたまひて、一一空のあはれなるをもろともに見たまふ。一二女もすこしゐざり出でたまへるに、一三ほどもなき軒の近さなれば、しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。一四かたみにいと艶なるさま容貌どもを、「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世

一 ましてここでは、峰の嵐も垣根の虫の声も、ただもうすべてが心細く聞えてくる。「籬」は、柴などで編んだ垣。「峰の嵐」「籬」ともに歌語。

二 無常の世についてお話しなさるのに、時々お相手なさる姫君の様子は、とても風情があって、どことい う難もない。前に薫が「……さし向ひて、とにかくに定めなき世の物語を、隔てなく聞こえて……」（一七〜一八頁）と、弁に語ったのに違わぬ、理想的な相手。

三 目をさまそうともしなかった女房たちは。大君が呼んでも、わざと起きてこなかった人々（二〇頁）。

四 父宮が言い残しておかれたことなどお思い出しになるのに。（椎本三一九〜三二〇頁、三二一頁参照）

五 わが意に反して、こんなとんでもない目にも会うものなのだと。女房たちも自分に従わないのを見ての嘆き。

六 宇治川の水音に、涙の流れ添う思いがなさる。「辺風は吹き断つ秋の心緒　瀧水は流れ添ふ夜の涙行」（『和漢朗詠集』下雑、王昭君　大江朝綱）

七 咳払いをすること。出立を促す合図である。

八 「いばゆ」は、嘶く。「晨の鶏再び鳴いて残月没りぬ　征馬連に嘶えて行人出づ」（『白氏文集』巻十二「生別離」）

九 明け方の光がさしこむ方の襖障子を押し開けなさって。母屋から廂の間に出た趣。

一〇 見た目には、恋する男女の体なのでこう言う。

一一 お二人ともとてもなまめかしい姿やお顔なのに。

奇妙な暁の別れ

あたかも一夜を共にしたような風情なのに、の意。

一二 こんなふうに（面と向って）きまり悪い思いをするのでなしに。

一三 群鳥が飛び立つ羽風の音が近くに聞える。「むら鳥」は歌語。「むら鳥の立ちにしわが名今さらにことなしぶともしるしあらめや」（『古今集』巻十三恋三、読人しらず）

一四 まだ暗い中を夜明けを告げる鐘の音が。晨朝の鐘である。宇治山の阿闍梨の寺のであろう。（椎本三二三頁注一三参照）

一五 せめて今のうちに。帰りを急かす言葉。周囲に憚る気持。

一六 まるでわけあり顔にあわてて朝露を分けても帰れますまい。「朝露云々」は歌語的表現。

一七 そんなことをしたら、まわりの人は何とお思い申すことでしょう。かえって二人の仲は疑われよう、の意。

一八 いつものように何気なくお振舞いになって、ただ世間普通とは違ったお付合いで、今後もこのように親しくお逢い下さるようになさって下さい。

一九 今後は、お気持はよく分っていますので、仰せの通りにいたしましょう。

出来事をお互いにお話し申し上げて暮したいものです

のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつか態度で

しきさましてかたらひきこえたまへば、やうやう恐ろしさもなぐさみて、「かういとはしたなからで、物越しなどで申し上げるのでしたら もの隔ててなど聞こえば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」といらへたまふ。

明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。夜深き朝の鐘の音かすかに響く。「今だに。本当にたまら いと見苦しきを」と、いとわりなく身の置き所もない思いでいられる なくはづかしげにおぼしたり。「ことあり顔に朝露もえ分けはべるまじ。また、人はいかがおしはかりきこゆべき。例のやうになだらかにもてなさせたまひて、ただ世に違ひたることにて、今よりのち も、ただかやうにしなさせたまひてよ。決してご心配なさるような料簡は持たぬ よにうしろめたき心はあらじとおぼせ。かばかりあながちなる心のほども、あはれとおぼし知らぬこそかひなけれ」とて、出でたまはむのけしきもなし。あさましく、かたはならむとて、「今よりのちは、さればこそ、もてなしたまはむままにあらむ。今朝は、また聞こゆるに従ひたまへかし」

一 ああ、どうすればいいのか。暁の別れなど、まだ知りませんので、本当にまごついてしまいそうです。「まだ知らぬ暁起きの別れには道さへまどふものにぞありける」（『花鳥余情』所引。出典不明）

二 山里の風情が身にしみるさまざまのものの音に、あれこれの思いも一つになって迫る明け方です。「とりあつめたる」に「鳥」を響かせる。群鳥の羽音、鐘の音、鶏の声など。

三 大君。暁の別れの歌に応じる女君の体。

四 ここは、鳥の音も聞えぬ山奥と思っていましたのに、人の世のつらさだけは、あとを追って来るのでした。「飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）。「いかならむ巌のなかに住まばかは世の憂きことの聞こえ来ざらむ」（同巻十八雑下、読人しらず）

五 奥の部屋に通じる障子口。後文によれば、ここに中の君がいる様子。寝殿の東面であろう。

六 西廂と母屋の境の戸口。

七 「夜もすがらなづさはりぬる妹が袖名残恋しく思ほゆるかな」（『古今六帖』五、あした）

八 大君。（椎本三二七頁注一五参照）

大君、中の君と薫を結婚させようと思う

とて、いとすべなしとおぼしたれば、（ほとほと困惑の体でいらっしゃるので）「（薫）あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」と（つい嘆息をもらされる）嘆きがちなり。鶏も、いづかたにかあらむ、（遠くで鳴く声がするのに）ほのかにおとなふに、京思ひ出でらる。

（薫）山里のあはれ知らるる声々に
　とりあつめたるあさぼらけかな

女君、

鳥の音も聞こえぬ山と思ひしを
　世の憂きことはたづね来にけり

障子口まで送りたてまつりたまひて、（大君を）昨夜入りし戸口より出でて、臥したまへれどまどろまれず。（まんじりともできない）名残恋しくて、（これほどまでせつなく思うのだったら）いとかく思はましかば、（長い間今までのんびり構えてもいられなかっただろう）月ごろも今まで心のどかならましや、など、（京に）帰らむこともの憂くおぼえたまふ。

姫宮は、（女房たちが何と思おうかと恥ずかしくてならないので）人の思ふらむことのつつましきに、（すぐにも）とみにもうち臥されたまはで、（頼みにする父母もなしに生きるわが身もつらいのに）たのもしき人なくて世を過ぐす身の心憂きを、（お側の女房たち）ある人ど

九 けしからぬことをあれこれと、次々に言い出す様子だから。女房たちが、自分たちの結婚を望むこと。
一〇 望みもせぬ男と結婚せねばならぬことにもなりかねないようだ。「世」は、男女の仲の意。
一一 この薫のお人柄や風采は。以下、再び大君の思案。
一二 亡き父宮も、もし薫にそういった（姫君と結婚したいという）お気持があるならば（許してもよい）と。八の宮のこうした希望は、椎本三〇七頁に見える。
一三 妹の身の上のこととしてなら（中の君と薫を結婚させたなら）、心の及ぶ限り大切に世話をしよう。姉として、気のつく限りの婿扱いをしよう、の意。
一四 けれども、自分の身の世話は、ほかに誰が見てくれよう。父母のない娘の悲しみ。
一五 あまり立派で近づきがたい薫の様子なのも。「見えにくし」は、親しく夫婦の語らいもしにくい気持。
一六 自分はこのまま独身を通そう。前にも「みづからはなほかくて過ぐしてむ」とあった。何度も決意を固める体。「いざここにわが世は経なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず。『古今六帖』二、里）の言葉を用いる。
一七 いつになく女房たちがひそひそ話し合っていたのもおかしいと。薫と大君の仲をひそひそ噂していたのである。

いぶかしむ中の君

もも（ちまで）、よからぬ（九）こと何やかやと、次々に従ひつつ言ひ出づめるに、心（一〇）よりほかのことありぬべき世なめり、とおぼしめぐらすには、この（一一）人の御けはひありさまの、うとましく（いやらしいところはなさそうだし）はあるまじく、故宮（一二）も、さやうなる心ばへあらばと、をりをり（時々仰せにもなりお考えのようでもあったが）のたまひおぼすめりしかど、みづから（私）はなほかくて過ぐしてむ（自身はやはりこのまま独り身で過すことにしよう）、われよりはさま容貌（かたち）も盛りにあたらしげなる中の宮を、人なみなみに見なしたらむこそうれしからめ、（人並みに結婚させることができたらどんなにうれしいことだろうままでは惜しいような中の君を）人の上（うへ）になしては、心のいたらむ限り思ひ後見（うしろみ）てむ（一三）、みづからの上（一四）（薫）のもてなしは、また誰かは見あつかはむ、この人の御さまの、なのめにうちまぎれたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、（こうして親しんできた長の年月のせいで）うちゆるぶ心もありぬべきを、はづかしげに見えにくきけしきも、（うべなう気持にもなるだろうけれど）なかなかいみじくつつましきに、わが世はかくて過ぐし果ててむ、（かえって大層気がひけてならないので）と思ひ続けて、音泣きがち（ねともすれば声を立てて泣き泣き夜を明かされたが）にて明かしたまへるに、名残いとなやま（そのためひどく気分が悪いので）しければ、中の宮の臥したまへる奥のかたに添ひ臥したまふ。（寄り添ってお寝みになる）

例（一七）ならず人のささめきしけしきもあやしと、この宮（中の君）はおぼしつつ

寝たまへるに、かくておはしたればうれしくて、御衣ひき着せたてまつりたまふに、所狭き御移り香のまぎるべくもあらず、くゆりかかるここちすれば、宿直人がもてあつかひけむ思ひあはせられて、まことなるべしと、いとほしくて、寝ぬるやうにてものたまはず。

客人は、弁のおもと呼び出でたまひて、こまかにかたらひおき、御消息すくすくしく聞こえおきて出でたまひぬ。総角をたはぶれにとりなししも、心もて「尋ばかり」の隔てにても対面しつるとや、この君もおぼすらむと、いみじくはづかしければ、ここちあしとてなやみ暮らしたまひつ。人々、「日は残りなくなりはべりぬ。はかばかしく、はかなきことをだに、またつかうまつる人もなきに、をりあしき御なやみかな」と聞こゆ。中の宮、組などし果てたまひて、「心葉など、えこそ思ひよりはべらね」と、せめて聞こえたまへば、暗くなりぬるまぎれに起きたまひて、もろともに結びなどしたまふ。

〔大君が〕

〔薫〕

〔こまごまと後のことを頼んでおき〕

〔しかつめらしい口上を申し上げておいてお帰りになった〕

〔眠っているふりをして〕

〔大君は〕気分が悪いといって

〔女房たち〕

〔ご法事まであと幾日もございません〕

〔ほかにご用のつとまる者もありませんのに〕

〔にくのご病気ですこと〕

〔どうしてよいか思いつきません〕

〔たっておせがみなさるので〕

〔暗くなって顔も見えなくなった頃に〕

〔糸を〕

一 御夜着をかけてさし上げたところ。

二 強い御移り香が、ほかの誰と紛れようもなく、顔にけぶりかかるような気がするので。

三 前に、宿直の者が始末に困っていたことが思い合せられて。宿直人が薫の狩衣を賜り、移り香に困惑していたこと、橋姫二八七～八頁に見える。

四 (女房たちがお二人の仲をひそひそ話していたのは)本当なのだろうと、姉君がおいたわしくて。

五 大君へのご挨拶は。

六 昨日の薫の「総角」の歌(一二頁参照)を、かりそめの戯れ言に取りなして受け答えしておいたけれど、私にその気があって、「尋ばかり」の隔てはあったにしても、薫にお目にかかったのだと中の君もお考えだろうかと。大君の思い。「尋ばかり」は、催馬楽「総角」の歌詞(一二頁注五参照)。「尋」は、両手を広げた長さ。

七 名香の組糸。総角に結び上げたのである。

八 普通は金銀の作り物の枝で、飾りに用いる。ここは、組糸で作る趣。(三巻絵合九四頁注四参照)

九 女房の代筆でお返事なさる。
一〇 そんな、ほんとにみっともない、子供っぽくていらっしゃる。薫からの文を、後朝の文ととる女房たちは、大君のはにかみと見て文句を言う。
一一 御服喪も終って。一周忌法要は省略した書き方。
一二 ほんのしばらくの間も、父宮亡き後に生き永らえようとは思わなかったのに。姫君たちの心中。

八の宮の一周忌終る

一三 このところ幾月か、ずっと黒い喪服ばかりお召しだったお姿が、薄鈍色になって。普通、除服ののちは平服に替るが、なお志深く薄鈍を着用する体。
一四 前に大君が「われよりはさま容貌も盛りに」（二七頁）と中の君を思うところがあった。
一五 中の君の御髪など洗い整えさせてご覧になると。主語は大君。女房たちにさせるのである。
一六（大君は）心中ひそかに、薫は中の君を期待外れだとは思わないであろうと、心強くうれしくて。「近劣り」は、逢って見ると、予想より劣っていること。
一七 そのためにさし控え申しなさった喪服もすっかりお改めになっているであろう九月も、待ちきれなくて。先夜「墨染の今さらに、をりふし心いられしたるやうに……」（二三頁）と、喪服中を憚って手出しをしなかったことを受ける。「藤の衣」は歌語。八の宮の命日は、八月二十日頃（椎本三二三頁参照）。「男女初会合忌正五九月云々」（『河海抄』）

八月末、薫、宇治に行く

薫（大君）中納言殿より御文あれど、「今朝（大層気分が悪うございまして）よりいとなやましくなむ」とて、人伝（女房）にぞ聞こえたまふ。「さも見苦しく、若々しくおはす」と、人（陰口をおききする）つぶやききこゆ。

御服など果てて、（喪服を）脱ぎ捨てたまへるにつけても、かた時も後れたてまつらむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日のほどを（いつのまにか一年たってしまったこの月日をお考えになると）おぼすに、いみじく思ひのほかなる身の憂さと、泣き沈みたまへる（まことに思いのままにはならぬ身のつらさよと）御さまども、いと心苦しげなり。月ごろ黒くならはしたまへる御姿、（お二人のご様子はとてもおいたわしい）薄鈍にて、いとなまめかしくて、中の宮はげにいと盛りにて、うつ（ひどく女らしくて）くしげなるにほひまさりたまへり。御髪などすましつくろはせて見（美しさという点では姉君よりすぐれていらっしゃる）たてまつりたまふに、世のものおもひ忘るるここちしてめでたければ、人知れず、近劣りしては思はずやあらむと、たのもしくうれしくて、今はまた見ゆづる人もなくて、親心にかしづきたてて見きこえたまふ。（この世の憂いも忘れ去るような気がしてすばらしいので）（今はほかにお世話を頼む人もないので）（大君は）まるで親のように中の君を大切にお世話申し上げなさる

薫 かの人は、つつみきこえたまひし藤の衣も改めたまへらむ長月も、

静心なくて、一またおはしたり。例のやうに聞こえむと、また御消息あるに、心あやまりして、わづらはしくおぼゆれば、とかく聞こえすまひて対面したまはず。「思ひのほかに心憂き御心かな。二人もいかに思ひはべらむ」と、御文にて聞こえたまへり。三「今はとて脱ぎ捨てはべりしほどの心まどひに、なかなか沈みはべりてなむえ聞こえぬ」とあり。

この前のようにしてお会いしようと
「大君は」かたくなな気持になって
応対も迷惑なことと思われるので
何やかやと申し逃れをして
(薫)
冷たいお気持なのですね
(大君)今日限りと喪服を脱ぎ捨てました折の悲しみに
かえって前よりふさいでいましてお話も申し上げられません
とご返事がある

四怨みわびて、例の人召してよろづにのたまふ。世に知らぬ心細さのなぐさめには、薫この君をのみ頼みきこえたる人々なれば、五思ひにかなひたまひて、世の常の住処にうつろひなどしたまはむを、いとめでたかるべきことに言ひあはせて、六ただ入れたてまつらむと、皆かたらひあはせけり。

世にもまれな心細いここの暮しの慰めとしては
女房たち
女房
一同しめし合せた

姫宮、そのけしきをば深く見知りたまはねど、七かく取り分きて人めかしなつけたまふめるに、うちとけて、うしろめたき心もやあらむ、八昔物語にも、心もてやはとあることもかかることもあめる、う

大君
女房たちのそんな様子を深くはお察しではないけれど
気を許して
油断のならぬ料簡もいだくかもしれない
気を

一　また宇治にお出でになった。時に八月下旬。

二　まわりの人も何と思いましょうか。女房たちは、すでに二人は結ばれていると思っている様子だからである。

三　女房に伝言させるのを避けて、筆を取った。

女房たち、薫に同心

四（薫は）怨みあぐねて、例の弁の君をお呼び出しになって、あれこれとお話しになる。

五（姫君が）自分たちの願い通りに薫と結婚して下さって、世間並みに京のお邸にお移りなどなさることを、大層結構なことだと話し合って。

六（姫君のご意向などかまわず）さっさと薫を（姫君のお部屋に）お入れしてしまおうと。

大君の計画　中の君に薫との結婚を勧める

七（薫が）こんなふうに弁の君を格別人がましく扱い、手なずけていられる様子だから。弁の君にねんごろに語るさまなどから思う。

八　昔物語でも、姫君の一存で、とかくのことが起ろうか。みな女房の仲立ちによるものだ、の意。

九（薫が）どうしても諦めずに、深く怨むようなら、代りに中の君を勧めよう。以下「……つつみたまふならむ」まで、大君の思惟。

一〇たとえ見劣りする相手でも、そうしていったん契りを結んだならば、薄情なあしらいはしそうにない人柄のようだから。

一一あからさまに口に出しては、どうしてすぐにそんなこと（中の君との結婚）を承諾する人があろう。

一二かねての希望とは違うと、承知する様子のないらしいのは。薫は、かつて弁の君から、中の君を薫にという大君の意向を聞かされ、「あらためてさはえ思ひなほすまじくなむ」（一七頁）と答えている。

一三（中の君と薫の縁組を）ご計画なさるが。

一四わが身につまされておいたわしいので。先夜の経験から考える。

一五亡き父宮のご意向も、たとえ一生こうして心細いままに終ろうとも、なまじ世の物笑いになるような、浅はかな料簡を起すでない、などとご遺言なさったのですが。（椎本三一九頁参照）

一六ご在世中はお足手まといになって、勤行専一のお心を乱した罪も大変なことだったでしょうに。橋姫二六六頁、二九三～四頁参照。

一七最後に当って、あれほどまでに仰せになったご遺言だけでも背くまいと考えていますので。自分は独り身で通す積りだ、という。

許してはならぬ女房の心というものらしい
ちとくまじき人の心にこそあめれ、と思ひよりたまひて、せめて怨み深くは、この君をおし出でむ、劣りざまならむにてだに、さても見そめては、あさはかにはもてなすまじき心なめるを、ましてほのかにも見そめては、なぐさみなむ、言に出でては、いかでかはふとさることを待ち取る人のあらむ、本意になむあらぬと、うけひくけしきのなかなるは、かたへは人の思はむことを、あいなう浅きかたにやなど、つつみたまふならむ、とおぼし構ふるを、けしきだに知らせたまはずは罪もや得むと、身をつみていとほしければ、よろづにうちかたらひて、「昔の御おもむけも、世の中をかく心細くて過ぐし果つとも、なかなか人笑へに、かろがろしき心つかふな、などのたまひおきしを、おはせし世の御ほだしにて、行ひの御心を乱りし罪だにいみじかりけむを、今はとて、さばかりのたまひし一言をだに違へじ、と思ひはべれば、心細くなどもことに思はぬを、この人々の、あやしく心ごはきものに憎むめるこそ、いとわりなけれ。

お気づきになって
〔中君を〕
満足することだろう
一つにはこちらの思うところを
勝手に軽薄だと取られはしないかなどと
遠慮しておいでなのだろう
〔そんな計画を〕
〔中君に〕
何やかや
〔大君〕
と話しかけなさって
心細いなどとも格別思ってもいませんが
周囲の女房たちが
そんな私を普通でない強情者と憎らしがっているらしいのは
本当に困ったことです

一 でも、あの人たちの言う通り、あなたまでが私と同じに独り身で過されるのも。「やうのものと」は、同じようにの意。

二 こんな私のような者も面目を施し、今までの思いも晴れるばかりお世話したいと思います。立派な婿を迎え、中の君の世話をして面目を施したいと、暗に薫を念頭において言う。

三 しっかりしていない私へのご心配は、お姉様よりもよけいにあるように父宮はお思いのようでした。

四 さびしい日々のお心やりには、こうして朝に夕にご一緒に暮すよりほかに、どんなすべがございましょう。「心細き御なぐさめ……」は、大君の「なぐさむばかり見たてまつりなさばや」に応じたもの。

五 薫の口上。あれこれと多い趣。

薫、帰らず、大君の苦悩の心中

一げにさのみやうのものと過ぐしたまはむも、明け暮るる月日に添へ（一日一日月日がたつにつけても）ても、御ことをのみこそ、あたらしく心苦しくかなしきものに思ひ（あなたのお身の上ばかりを　このままではもったいなくお気の毒でおいたわしいとお思いしていますゆえ）きこゆるを、君だに世の常にもてなしたまひて、二かかる身のありさ（せめてあなただけでも人並みに身を固めなさって）まもおもだたしく、なぐさむばかり見たてまつりなさばや」と聞こ（中君は）（何をお考えなのかと）えたまへば、いかにおぼすにかと、心憂くて、「一所をのみやは、（情けなくて）（中君）（ひとところ）（お姉様だけを）（そのまま独り身で一生終りなさいと父宮は申されたでしょうか）さて世に果てたまへとは聞こえたまひけむ。三はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさは、数添ひたるやうにこそおぼされためりしか。四心細き御なぐさめには、かく朝夕に見たてまつるより、いかなるか（何となく恨めしくお思いの様子なので）（もっともなことといじらしくて）たにか」と、なまうらめしく思ひたまへれば、げにといとほしくて、（大君）（でも誰かれが）（私のことを）（おかしな変り者のように噂したり思ったりしているらしいので）「なほこれかれ、うたてひがひがしきものに言ひ思ふべかめるにつ（何かと心を痛めているのです）けて、思ひ乱れはべるぞや」と、言ひさしたまひつ。（話半ばでおやめになった）

暮れゆくに、客人（まらうと）は帰りたまはず。姫宮（大君）、いとむつかしとおぼす。（薫が）（本当に困ったこととお思いになる）（お怨みなさるのも無理はないということを）弁参りて、五御消息（せうそこ）ども聞こえ伝へて、怨みたまふをことわりなるよしを、つぶつぶと聞こゆれば、（言葉を尽してとを）（大君は）いらへもしたまはず、うち嘆きて、（ほっと溜息をついて）

六 どのように振舞えばよい私なのだろう。以下、大君の心中。

七 ご両親のどちらかお一方でもいらして下さったら、どうなるにせよ、それが筋道のお方にお世話して頂いて。「さるべき人」は、娘の結婚の世話をするのが当然の人。親のこと。

八 自分の思い通りにはならぬこの世なのだから。「いなせともいひ放たれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり」（『後撰集』巻十三恋五、親のまもりける女をいなともせとも言ひ放てと申しければ　伊勢）

九 どうなっても、世間によくあることとして、物笑いになるような間違いも目立たぬものだが。親の言うままの結婚で失敗しても、世間から批判されずにすむが、の意。

一〇 まわりの女房は皆年寄りで。弁などのこと。

一一 こんなお話（結婚のこと）については。

一二 黙って奥の方に向いていらっしゃるので。万策尽きた体。

一三 常の色のお召し物にお着替えあそばせ。前に「薄鈍にて」（二九頁）とあった。薫に逢わせる積り。

一四 （大君は）どうしようもなく、本当に男が近づくのに何の妨げがあろう、狭くて、こんなお暮しの悲しさ、身を隠す所もないのだった。大君の心中から自然に地の文に移る書き方。「世の中を憂しといひてもいづこにか身をば隠さむ山梨の花」（『古今六帖』六、山なし）による。「山梨」に「山無し」を掛ける。

六 いかにもてなすべき身にかは、一所おはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれたてまつりて、宿世といふなるかたにつけて、身を心ともせぬ世なれば、皆例のことにてこそは、人笑へなる咎を（前世からの定めとかいうこともあって）（物の道理を知ったふうにめいめい自分では）も隠すなれ、ある限りの人は年積り、さかしげにおのがじしは思ひ（思って）（いい気になって）（似合いのご縁だとばかり薫とのことをお勧め申すけれど）つつ、心をやりて、似つかはしげなることを聞こえ知らすれど、こ（が何の頼もしい話であることか）ははかばかしきことかは、人めかしからぬ心どもにて、ただ一方に（人並みの身分でもない女房連の考えで）言ふにこそは、と見たまへば、引き動かしつばかり聞こえあへるも、（〔女房が〕お手を引っぱらんばかりに皆してお勧め申すのも）（方的に言い張るのだ）いと心憂くうとましくて、動ぜられたまはず。同じ心に何ごともかたらひきこえたまふ中の宮は、かかる筋には、今すこし心も得ずおほどかにて、何とも聞き入れたまはねば、あやしくもありける身かなと、ただ奥ざまに向きておはすれば、「例の色の御衣どもたてまつりかへよ」など、そそのかしきこえつつ、皆さる心すべかめるけしきを、あさましく、げに何の障り所かはあらむ、ほどもなくて、かかる御住ひのかひなき、山なしの花ぞのがれむかたなかりける。

（〔大君は〕とても情けなくいやで）（これとご相談申される中の君は）（大君よりもっとご存じなくおっとりしていらして）（どういう意味かともお分りでないので〔大君は〕一人ぼっちの変な身の上の私だことと）（〔女房〕）（同婚儀の段取りを進めるらしい様子なのを）（しきりにお勧め申して）

一　こうあからさまに、誰かれにも口を出させず。女房たちが「例の色の御衣どもたてまつりかへよ」など、世話を焼くことをさす。
二　姫君がご承知でないならば、いつまでもこのままでいよう。前夜のように、対面して話をするだけでよいと言う。
三　弁の君。
四　何といっても、心根が浅はかなので、年取ってわけも分らなくなっているのか、姫君がお気の毒に思われる。草子地。弁などは、年輩の思慮深い女房であるはずなのに、という気持が下にある（一五頁参照）。

大君、弁に、あらためて意中を説く

五　姫君の説得に来たのであろう。
六　非常識なほどお親しくしていますのに。取次ぎなしに応対したりすること。
七　考えていたのとは違うようなお気持もあって。ただのご好意と思っていたのに結婚を望んでいられて。
八　けれども、私は、昔から結婚のことはすっかり思い捨てていますので、（そう責められても）大層困るのですが。
九　本当に、こんな山里の暮しも、ただ中の君のお身にとって、存分なお世話ができず不自由だと思われますのに。然るべき婿君を通わすのに都合が悪い、ということ。

客人（薫）は、一かく顕証（目立たぬように）に、これかれにも口入れさせず、忍びやかに、いつありけむこととともなくもてなしてこそ、（二人の仲を）いつからあったこととも知れないようにしたいと思ひそめたまひける（初めから考えていらっしゃったことなので）ことなれば、（薫）二「御心ゆるしたまはずは、いつもいつもかくて過ぐさむ」とおぼしのたまふを、三この老人（それぞれめいめいに相談して）の、おのがじしかたらひて、顕証（大っぴらに私語し）にささめき、四さは言へど、深からぬけに、老いひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる。

姫宮（大君）おぼしわづらひて、五弁が参れるにのたまふ。「年ごろも、人に似ぬ御心寄せとのみのたまひわたりしを聞きおき、（大君）今までも（世の人には似ぬご好意だとしきりに父宮が常々仰せでしたのを耳に留め）今となりては、（父宮亡きこの頃は）よろづに残りなく頼みきこえて、六あやしきまでうちとけにたるを、思ひしに違ふさまなる御心ばへのまじりて、七（お恨みなさるらしいのは困ったことです）恨みたまふめるこそわりなけれ。（「私とて」人並みに夫をもうけて過したいと思う身ならば。このようなお申し出も何でお断りしようなどと思いましょう）世に人めきてあらまほしき身ならば、かかる御ことをも、何かはもて離れても思はまし。八されど、昔より思ひ離れそめたる心にて、いと苦しきを、（中の君が美しい盛りをむなしくお過しなのも残念です）この君の盛り過ぎたまはむもくちをし。九げにかかる住ひも、ただこの御ゆかりに所狭くのみおぼゆるを、まこと

一〇（そうなれば）私ども姉妹、身こそ二つに分れていても、心の内は皆中の君に預けて、私も一緒にお連れ添い申しているような気持がいたしましょう。中の君を身代りと思ってくれるように、の意。

一一 ただもうそのように、前々からご意向をお察し申し上げていましたので、（薫に）よくお話し申し上げたのですが。このこと一五～一七頁参照。その時の薫の返事も、同所に続けて見える。

弁の君、ことを分けて説得

一二 とてもそうは思い直せない。以下「後見きこえむ」まで、薫の言葉をそのまま伝える体。一七頁に、薫が「あらためてさはえ思ひなほすまじくなむ」と語るところがある。

一三（中の君のことは）匂宮のお恨みがいよいよ深くなるようですから、これは別に、そちらの方で存分にお世話申し上げましょう。中の君は、匂宮と結婚して頂こう、と言う。

一四 とても、こんなふうにめったとない結構なご縁談が二つも、続けて参りますことはございますまい。

一五（男君の）先々のお気持までは分りかねますが。将来に心変りすることがないとは言えないにしても。

一六（お二方とも）よくぞお仕合せな結構なご運勢でいらっしゃったことと。

亡き父宮をお慕い申して下さるお気持なのでしたら
に昔を思ひきこえたまふ心ざしならば、同じことに思ひなしたまへ
です
かし。一〇身をわけたる心のうちは皆ゆづりて、見たてまつらむここち
なむすべき。なほかやうによろしげに聞こえなされよ」と、はぢら
ぜひにもこうした旨をよろしく取り繕って申し上げて下さい
かしそうにしながらも
ひたるものから、あるべきさまをのたまひ続くれば、いとあはれと
ご希望の趣をこまごまとお話しになるので
いことと拝察する
見たてまつる。

（弁）一一「さのみこそは、さきざきも御けしきを見たまふれば、いとよく聞
こえさすれど、一二さはえ思ひ改むまじき、一三兵部卿の宮の御恨み、深さ
まさるめれば、またそなたざまに、いとよく後見きこえむ、となむ
仰せでございます
聞こえたまふ。それも思ふやうなる御ことどもなり。二所ながらお
それも願ってもないともども結構なことでございます
二人ともご在世で
はしまして、ことさらに、いみじき御心尽くしてかしづききこえた
まはむに、一四えしも、かく世にありがたき御ことども、さしつどひた
まはざらまし。かしこけれど、かくいとたつきなげなる御ありさま
恐れ多い申し分ですが　このようにまことに頼みどころもないお暮しぶりを
拝見しておりますと　末はいかがおなりあそばすことやらと
を見たてまつるに、いかになり果てさせたまはむと、うしろめたく
だもう悲しくお思い申していますのに　心配でなりませずた
悲しくのみ見たてまつるを、一五後の御心は知りがたけれど、一六うつくし

大層ご熱心に奔走あそばしてご結婚のお計らいをあそばされ
ましょうとも

くめでたき御宿世どもにこそおはしましけれとなむ、何はともあれお思い申しています かつがつ思ひきこゆる。故宮の御遺言違へじとおぼしめすかたはことわりなれど、

二 それは、さるべき人のおはせず、品ほどならぬことやおはしまさむとおぼして、いましめきこえさせたまふめりしにこそ。この殿の、

四 さやうなる心ばへものしたまはましかば、一所をうしろやすく見おきたてまつりて、いかにうれしからましと、をりをりのたまはせしものを。ほどほどにつけて、思ふ人に後れたまひぬる人は、高きも下れるも、心のほかにあるまじきさまにさすらふたぐひだにこそ多くはべめれ。それ皆例のことなめれば、もどき言ふ人もはべらず。ましてかくばかり、ことさらにも作り出でまほしげなる人の御ありさまに、心ざし深くありがたげに聞こえたまふを、あながちにもて離れさせたまうて、おぼしおきつるやうに、行ひの本意をとげたまふとも、さりとて雲霞をやは」など、すべてこと多く申し続くれば、いと憎く心づきなしとおぼして、ひれ臥したまへり。

（八宮も）

ご注意を申し上げあそばしたにすぎないのではございませんか

真心こめてまたとないほどご熱心におっしゃって下さるのを

それとて皆憂き世の習いのようですから とかく非難する人もございません

わざわざあつらえて作り出してもみたいような立派なお人柄の上に

ましてこのご縁談のように

取り付くしまもなくお断り申しなさって

かねてのお考え通り

ご出家の望みを果されても

何やかやと言葉数多く長々と申し上げるので

「大君は」大層憎らしく不快に思われて

うつぶしてしまわれた

一 亡き父宮様のご遺言に背くまいとお考えあそばすのはどもっともですが。八の宮の遺言に、「おぼろけのよすがならで、……この山里をあくがれたまふな。ただかう人に違ひたる契り異なる身とおぼしなして……」とあった（椎本三一九頁）。

二 それは、お家柄にふさわしい殿方がいらっしゃらず、身分の釣合わぬ縁組でもなさりはせぬかと（父宮が）ご心配あそばして。

三 このお殿様が。薫のこと。もはや、主人といった呼び方。

四 そのような（大君と結婚したいという）気持をお持ちならば、ご姉妹のうちせめてお一方なりと、安心してお残し申せて、どんなにうれしいことだろうと。八の宮のこうした希望は、椎本三〇七頁に見え、姫君たちを薫に託す言葉は、橋姫二九三～四頁、椎本三一四～七頁に見える。

五 それぞれの身分につけて、大事と思ってくれるお方に先立たれなさった人は、身分の高い姫君も低い人も、わが意に反してとんでもない身の上に落ちぶれてしまう人も多いようでございます。親のない娘が、身分の低い男と不本意な結婚をする例は多い、と言う。

六 さりとて雲霞を隔てた憂き世の外にお住まいになるわけにもゆきますまい。仙人のような暮しもなるまい、の意。「背くとて雲には乗らぬものなれど世の憂きことぞよそになるてふ」（『古今六帖』一二、尼。『伊勢物語』百二段）

七 ご一緒にいつものようにお寝みになった。姉妹の部屋は、母屋の東面。

大君、不安ながら、中の君とともに臥す

八 （大君は）気がかりで、弁などが何をするだろうと、不安にお思いになるが。薫を導き入れるかもしれないと不安を覚える。

九 （中の君に）しなやかな美しいお召し物を、上にかけてさし上げなさって。薫が忍び入ってきたら、中の君に譲って逃れる積り。

一〇 まだ少し暑く思われる頃なので。旧暦八月下旬である。

一一 少し離れて横におなりになった。「まろびのく」は、前出催馬楽「総角」の言葉を用いる（一一二頁注五参照）。

一二 どういうわけで、こうまで結婚を思い切っていらっしゃるのだろう。以下薫の心中。

一三 聖のようなお暮しをしていらした父宮のお側にいらしたために、この世を無常なものとお悟りなさっているからか。「聖」は、山野に隠遁して苦行を積む修行僧。

一四 では、（大君は）物越しなどでも、もう対面はもっての外という気になっておられるのであろう。「物越」は、簾や几帳越しに応対すること。

一五 気をつけて、ほかの女房たちを早く寝静まらせたりして。

弁、薫を導き入れる

薫、弁より大君の真意を聞き、心を決める

中の君

中の宮も、あまりにもおいたわしいご様子だことと あいなくいとほしき御けしきかなと、見たてまつりたまひて、七もろともに例のやうに大殿籠りぬ。八うしろめたく、いかにもてなさむ、とおぼえたまへど、ことさらめきて、わざとらしくさし籠りかくろになれるような へたまふべきものの隈だになき御住ひなれば、物陰もない手狭なお暮しなので九なよよかにをかしき御衣、上にひき着せたてまつりたまひて、一〇まだけはひ暑きほどなれば、すこしまろび退きて臥したまへり。

弁は、〔大君が〕仰せになった旨を のたまひつるさまを客人に聞こゆ。一二薫いかなれば、いとかくしも世を思ひ離れたまふらむ、聖だちたまへりしあたりにて、常なきものに思ひ知りたまへるにや、とおぼすに、いとどわが心通ひて見識ぶっていやな人という気もしないように思われるので おぼゆれば、さかしだち憎くもおぼえず。（薫）一四「さらば、物越などにも、今はあるまじきことにおぼしなるにこそはあなれ。今宵ばかり、大君の殿籠るらむあたりにも、忍びてたばかれ」とのたまへば、一五心して人疾くしづめなど、心知れるどちは思ひ構ふ。

事情を知る者同士は

宵すこし過ぐるほどに、風の音荒らかにうち吹くに、はかなきさ

ますます自分の心と似ているよ

こっそり計らってくれ

引き籠って身をお隠し

ざっとした作り

一 板に縦横に桟を打ち付けた、格子ようのもの。格子より粗末な作りで、民家や山荘に多かったらしい。（六巻図録六参照）

二 大君が、中の君と同じ場所にお寝みになっているのを、気がかりには思うけれど。以下「……見たてまつり知りたまへらむ」まで、弁の心中。

三 薫は、大君のご様子も、今までに間違いなく十分存じ上げていらっしゃるであろう。姉妹を取り違えることはなかろうと思う。

四 すばやく身をお隠しになった。このあたり、空蟬が身を避けたのに似る（一巻空蟬一一二頁参照）。

五 とてもかわいそうで。以下、大君の心中の思いと動作を交互に書く。

六 （薫は）桂姿で、いかにも馴れ馴れしく、几帳の帷（垂れ絹）を引き上げて（中の君の傍らに）入ってきたので。「桂姿」は、直衣や指貫を脱いで、袿だけになった格好。寝る時の姿。

七 粗壁に身を寄せて、屏風を立てた背後の、むさ苦しい所に坐っていらっしゃった。壁と屏風の間に身を潜める大君。

八 将来の心積りとして話しただけでも、ひどいと思っていらっしゃったのに。前に、大君が中の君に薫との結婚を勧めた時のことをさす（三二頁参照）。

九 まして、今夜のようなことになれば、どんなにあきれた仕打ちと、私（大君）をお疎みになろうかと。

大君、逃げる

（薫がこっそり入ってこられる動きの）まなる蔀などは、（きしきしと鳴る紛らわしい音に）ひしひしとまぎるる音に、人の忍びたまへるふるまひは、（大君は）（お聞きつけにはなれまい）（弁は）（薫を）（そっと）やをら導き入る。同じ所に大殿籠れるを、（今夜は別）うしろめたしと思へど、常のことなれば、ほかほかにともいかが聞こえむ、御けはひをも、（別にお寝み下さいとも何で申せよう）たどたどしからず見たてまつり知りたまへらむ、と思ひけるに、（大君は）（まんじりともせずにいらしたので）うちもまどろみたまはねば、ふと聞きつけたまひて、（すぐに）やをら起き出でたまひぬ。いと疾くはひ隠れたまひぬ。何心もなく寝入りたまへるを、いといとほしく、いかにするわざぞと、（たらよいのだろうと）胸つぶれて、（どきどきして）もろともに隠れなばやと思へど、さ（中の君と一緒に隠れたいと思いはするが）（返すわけにもゆかず）もえ立ち返らで、わななくわななく見たまへば、火のほのかなるに、（灯し火のまたたく中に）袿姿にて、いと馴れ顔に、几帳の帷をひき上げて入りぬるを、（中君が）いみじくいとほしく、いかにおぼえたまはむ、と思ひながら、あやしき壁の面に、屏風を立てたるうしろの、むつかしげなるにゐたまひぬ。あらましごとにてだに、つらしと思ひたまへりつるを、まいていかにめづらかにおぼしうとまむと、いと心苦しきにも、すべては（たまらなくかわいそうで）（どんな気持がなさることだろう）（引き）（大層つらく思うにつけても）（何ごともしっ）

一〇 今日を限りと、山寺にお入りになった亡き父宮の、夕べのお姿などが。八の宮が宇治山の阿闍梨の寺に籠るべく邸を出た前夜のこと（椎本三二〇頁参照）。

一一 女君が一人で寝ていらっしゃるのを、さてはその積りで気を配ったのかとうれしくて。薫を迎える積りで、大君を一人にさせたのかと思う。

一二 だんだんと違っていたと分る。以下、敬語抜きで薫の心中の思いに密着した書き方。

薫、中の君と気づき静かに夜を明かす

一三 また思い返しては、どこかに隠れていらっしゃるに違いない大君のお心の冷たさが、心底情けなくくやしいので。

一四 やはり、もとからの気持が遂げられないのは、残念で。

一五 すぐに変るような軽い気持だったのだと、思って頂きたくない。代りの人を見てすぐ心を移すような気持だとは思われたくない、の意。

一六 今夜の一件は（中の君とのことは）、やはり何ごともなくやり過して。

一七 結局、そういう前世からの定めがあるなら、この方（中の君）と結ばれようとも、同じご姉妹だもの、何で他人のように思おう。大君と同じことに思いもしよう、の意。

かばかしき後見なくて落ちとまる身どもの悲しきを思ひ続けたまふに、一〇今はとて山に登りたまひし夕の御さまなど、ただ今のここちして、いみじく恋しく悲しくおぼえたまふ。

（親もなくてこの世に生き残った二人の身の上の悲しさをつくづくお考えになると）（今目の前に見るような気がして）

薫

中納言は、一一独り臥したまへるを、心しけるにやとうれしくて、心踊る思いをなさったが（胸の）ときめきしたまふに、一二やうやうあらざりけりと見る。今すこしうつと愛らしく可憐な風情はまさっているのではないか くしくらうたげなるけしきはまさりてや、とおぼゆ。あさましげにと途方にくれていられるのに あきれまどひたまへるを、げに心も知らざりける、と見ゆれば、いといとほしくもあり、一三またおし返して、隠れたまへらむつらさの、まめやかに心憂くねたければ、これをもよそのものとはえ思ひ放つまじけれど、一四なほ本意の違はむ、くちをしくて、一五うちつけに浅かりけりともおぼえたてまつらじ、この一ふしはなほ過ぐして、一七つひに宿世のがれずは、こなたざまにならむも、何かは異人のやうにやは、と思ひさまして、例の、をかしくなつかしきさまにかたらひて明かしたまひつ。

（中君は）大君より一段（中君が）あまりのことと思われる なるほど事情も知らなかったのだと察せられるので とても気の毒でもあり この人も他人のものにしてしまう気になれそうにはないけれども いつもの風情のあるものやわらかな態度で何やかやとお話をなさって夜を明かされた 気持を静めて

一 老女たち。弁の君など。
二 手抜かりはないと思って。「しそです」は、十分過ぎるほどにする意。
三 中の君は、どこにいらっしゃるのでしょう。おかしなこと。大君のもとに無事薫を導き入れたと思い込んでいるので、中の君はどうしたのかと不審がる。
四 でも、どうにかしていられましょう。中の君も事情を察して、どこかに身を隠していよう。
五 総じていつも、拝するだけで老の皺ものびる気がして、ご立派でしみじみと見とれていたくなるようなすばらしいお顔立ちやお姿なのに。老女たちの、薫の容姿をほめる気持。
六 何の、これは世間の人が言っているような恐ろしい神が、(大君に)お憑き申しているのでしょう。「世俗の諺に、嫁すべき時過ぎぬれば神のつくとなり」(『細流抄』)。「玉葛実ならぬ木にはちはやぶる神ぞつくといふならぬ木ごとに」(『万葉集』巻二、大伴宿禰、巨勢郎女を娉ふ時の歌一首)がある。「実ならぬ木」は、つれない女を喩えたもの。
七 しかるべくとりなしてさし上げなさるお方もいらっしゃいませんので。母君などおられぬこと。
八 逢う人次第というのでもない秋の夜長だけれど。逢いたい人と過した秋の夜長でもないのだが、の意。「長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」(『古今集』巻十三恋三、凡河内躬恒)

弁たち老女一同喜びながら就寝

老人どもは、しそしつと思ひて、「中の宮、いづこにかおはしますらむ。あやしきわざかな」と、たどりあへり。「さりとも、あるやうあらむ」など言ふ。おほかた例の、見たてまつるに皺のぶるこちして、めでたくあはれに見まほしき御容貌ありさまを、「などていともて離れては聞こえたまふらむ。何か、これは世の人の言ふめる、恐ろしき神ぞ憑きたてまつりたらむ」と、歯はうちすきて、愛敬なげに言ひなす女あり。また、「あなまがまがし。なぞのものか憑かせたまはむ。ただ、人に遠くて生ひ出でさせたまふめれば、かかることにも、つきづきしげにもてなしきこえたまふ人もなくおはしますに、はしたなくおぼさるるにこそ。今おのづから見たてまつり馴れたまひなば、思ひきこえたまひてむ」などかたらひて、「とくうちとけて、思ふやうにておはしまさなむ」と言ふ言ふ寝入りて、いびきなどかたはらいたくするもあり。

(老女一)ど
皆でいぶかしがる
(老女)四
うしてひどく素っ気なくお相手申されるのでしょう
五
(老女二)まあ縁起でもない
憎らしげな言い方をする女がいる
何で魔物などが
歯の抜けた口もとで
六
世間のお付合いもあまりなさらずにお育ちのようですから
お憑きするものですか
ご夫婦の道についても
七
そのうち自然に男君にお馴染み申
きまり悪くお思いになるのですよ
お慕い申されることでしょう
話し合って
されたならば

翌朝の薫の思い

逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、ほどもなく明けぬるここち

何不自由ないお暮しをして頂きたいもの
(老女)早く仲よくなさって
聞くに耐えないほど不作法にする者もいる
いつの間にか
八

九 誰のせいでもない、自分の料簡から手出しをしなかったのに、満たされぬ思いがして。

一〇 あなたも私を好いて下さいよ。

一一 後の逢瀬。「若狭なる後瀬の山の後も逢はむわが思ふ人に今日ならずとも」（『古今六帖』二、国）

一二 今宵の仕儀は、我ながら不思議で夢のように思われるが。逢いながら逢わぬ中の君との出会いのこと。

一三 入れ替りに、弁が姫君たちのお部屋に参上する。

一四（中の君は）とても気がひけて、予想もしなかった出来事に茫然となさって。

一五 大君が昨日、中の君にそれとなく薫との結婚を勧めたこと。（三二頁参照）

大君、中の君の思い

一六 大君のこと。「蟋蟀」は、こおろぎ。昨夜大君は、「あやしき壁の面に、屏風を立てたるうしろの、むつかしげなるにゐたまひぬ」（三八頁）とあった。「季夏蟋蟀壁に居る」（『礼記』月令）。「叢辺に怨み遠くして風聞暗し　壁の底に吟幽かにして月の色寒し」（『和漢朗詠集』巻上秋、虫「蛬声入レ夜催」源順）。「壁を遶ぐる暗蛩限り無き思ひ　巣を恋ふる寒鷲未だ帰ること能はず」（『白氏文集』巻六十八、律詩「感レ秋詠レ意」）

一七（妹の姿まですっかり見られてしまって）奥ゆかしげもなく、情けないことよ。以下、大君の嘆き。

一八 これから先も、気を許してはならない境遇なのだ。女房たちへの不信と警戒心。

して、いづれとわくべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やならず飽かぬここちして、「あひおぼせよ。いと心憂くつらき人の御さま、見習ひたまふなよ」など、後瀬を契りて出でたまふ。われながらあやしく夢のやうにおぼゆれど、なほつれなき人の御けしき、今一たび見果てむの心に思ひのどめつつ、例の、出でて臥したまへり。

（姉君といずれがいずれとも区別もつけかねるほど優雅な中の君のご様子なので）（薫）（本当に情けないほどひどい姉上の）（なさり方を）（もう一度見届けようという決心から胸をさすりながら）（やはり冷たいあの方のお気持のほどを）（今夜もまた）

一三 弁参りて、「いとあやしく、中の宮はいづくにかおはしますらむ」と言ふを、一四いとはづかしく思ひかけぬ御ここちに、いかなりけむことにか、と思ひ臥したまへり。昨日一五のたまひしことをおぼし出でて、姫宮（大君）をつらし（ひどいお方と）と思ひきこえたまふ。明けにける光（明るくなってきた光を頼りに）につきてぞ、一六壁のなかの蟋蟀はひ出でたまへる。おぼすらむことのいといとほしければ、かたみにものも言はれたまはず。一七ゆかしげなく、心憂くもあるかな、一八今よりのちも、心ゆるびすべくもあらぬ世にこそ、と思ひ乱れたまへり。

（ほんとにおかしいこと）（どちらにおいでなのでしょう）（どういう事情だったのだろうか）（［中君が］何とお思いだろうと大層おいたわしいので）（大君もまた）

一 薫のいる部屋。西廂であろう。

二 （大君の）今までのつれなさは、まだ望みの持てる気がして、何かと心を慰めていたのですが。

三 死んでしまいたい気がします。「頼めくる君しらくは四方の海に身も投げつべきここちこそすれ」（『馬内侍集』ある君達いまいまとてすかせば）

四 （とはいえ）亡き父宮が、見捨てがたい思いで、出家もなさらぬまま、ご姉妹の姫君たちをこの世にお残し申してゆかれたお気持のおいたわしさをおしのび申してみると、またいちずに、わが身を捨てることもできません。自分は八の宮の委託を受けた身であることをお忘れあるな、と暗に言う。

五 色恋めいた気持は、お二方どちらにもお持ちしますまい。中の君は本意にあらず、大君は冷たいので、という含み。

六 悲しさも恨めしさも、どちらにつけても、（大君は）忘れられなさるとは思われません。「忘られ」の「れ」は受身。「たまふ」は大君に対する敬語。

七 同じことなら望みを高くと、お目当ての筋が別におありなのでしょう。同じ結婚をするなら、身分の高い匂宮の方を望んでいるのであろうと厭味を言う。

八 どちらにとってもお気の毒なこと。薫も気の毒なら、こんなふうに厭味たらたら恨まれる大君もお気の毒。

薫、弁に怨みを訴える

弁はあなたに参りて、あきれるほかない大君のお気の強さをすっかり聞いてあさましかりける御心強さを聞きあらはして、いとあまり深く、人憎かりけることと、気の毒がってぼんやり坐りこんでいとほしく思ひほれゐたり。「来し方のつらさは、なほ残りあるここちして、よろづに思ひなぐさめつるを、今宵なむ、まことにはづかしく、身も投げつべきここちする。捨てがたく落としおきたてまつりたまへりけむ心苦しさを思ひきこゆるかたこそ、またひたぶるに、身をもえ思ひ捨つまじけれ。かけかけしき筋は、いづかたにも思ひきこえじ。憂きもつらきも、かたがたに忘られたまふまじくなむ。宮などの、はづかしげなく聞こえたまふめるを、同じくは心高くと、思ふかたぞ異にものしたまふらむ、と心得果てつれば、いとことわりにはづかしくて、また参りて、人々に見えたてまつらむこともねたくなむ。よし、かくをこがましき身の上、また人にだにもらしたまふな」と怨じおきて、例よりも急ぎ出でたまひぬ。「誰が御ためもいとほしく」と、ささめきあへり。

（薫）
（宮邸を）
（弁たち）

あまりにも思慮が過ぎて　かわいげのないことと
今夜のことは　心底顔も上げられぬ思いで
気のおけぬふうにお文をさし上げられるようですが
よくよく分りましたので　いかにもごもっともと思うと気がひけて
お側のあなた方にお目通り申すのもいまいましい思いです
こんな馬鹿げた私のことは　ほかの誰にも言って下さるな
皆でひそひそ話している

九 一体どうしたことだろう。万一（薫が）中の君を疎略にあしらわれるお積りだったらどうしよう。

薫の文あり　大君、返歌す

一 夜限りで捨てられる形になることを懼れる。

一〇 いわゆる後朝の文。女に逢った翌日は、早朝、歌を届けるのが誠意を示す作法。

一一 考えてみれば、おかしなこと。草子地。本来は薫の懸想を迷惑がっている大君なのに、という気持。

一二 秋の季節も知らぬげに青葉の枝で、一方の枝だけがとても濃く色づいているのを。薫の文が付けてある枝のさま。今は、八月末、仲秋の末である。

一三 同じ枝を、片方だけ特別に紅く染めた山姫に、どちらが深い色か尋ねたいものです。わざわざ染めた紅の方が深いと答えるに決っていましょう。私の心も、思い染めたお方にと決っているのです。「同じ枝」は、姉妹の喩え。「山姫」は、山を守る女神。山の木の葉を染め、紅葉させると考えられていた。「おなじ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ」（『古今集』巻五秋下、藤原勝臣）

一四 包み文にしてあるのを。恋文なら結び文にする。

一五 （まるで後朝のやりとりめいて）いやな感じがするので。代って大君が自身で返歌しようと思う。

一六 山姫が片方の枝だけ染めた気持は分りませんが、紅葉した方に深い心を寄せているのでしょう。心移りした方（中の君）に深いお志がおありなのでしょう。「うつろふ」は紅葉する意と心変りする意を掛ける。

姫宮（大君）も、いかにしつることぞ、もしおろかなる心ものしたまはば、と胸つぶれて心苦しければ、すべてうちあはぬ人々のさかしら、憎しとおぼす。さまざま思ひたまふに、御文あり。例よりはうれしとおぼえたまふも、かつはあやし。秋のけしきも知らず顔に青き枝の、片枝いと濃く紅葉ぢたるを、

（薫）おなじ枝をわきて染めける山姫に

いづれか深き色と問はばや

さばかり怨みつるけしきも、言少なにことそぎておし包みたまへるを、そこはかとなくもてなしてやみなむとなめり、と見たまふも、心騒ぎて見る。かしかましく、「御返り」と言へば、聞こえたまへ、とゆづらむもうたておぼえて、さすがに書きにくく思ひ乱れたまふ。

（大君）山姫の染むる心はわかねども

うつろふかたや深きなるらむ

ことなしびに書きたまへるが、をかしく見えければ、なほえ怨じ果

（大君は）胸が締めつけられるようにつらいので　やることなすことちぐはぐな女房たちのお節介を　控えめにして　あんなにひどく怨んでいた様子だったのに　言少なに　とご覧になるにつけても　（昨夜の一件は）うやむやにしてすませようという積りらしい　お側でやかましく（女房たち）　（中君に）お返事なさい　それでもやはり何と書いたものかと思い悩まれる　（大君は）軽く受け流して書いていらっしゃるのが　（薫には）お見事だと思われたので　やはり怨み

一 身を二つに分けても心は一つと、中の君にお譲りなさる様子は何度も見えたけれど。「身をわけたる心のうちは皆ゆづりて、見たてまつらむここちなむすべき」と大君は弁に語っている（三五頁）。以下「……棚なし小舟めきたるべし」まで、薫の心中の思い。

二 私（薫）が承知しないので、困って、昨夜のようなことを企てなさったのだろう。

三 それを無にして、中の君にこう気のない態度をとるのも大君が気の毒だし、優しさのない男と思われては、ますます望みも叶いにくいのではないか。昨夜の一件で、さらに大君の心証いかにと案じる。

四 何かと仲立ちなどしているらしい老女（弁）の手前も軽々しい振舞だし。身分にふさわしからぬ執着ぶりと、女房の思惑まで気にする。

五 まして世間にざらにいる色男のように、同じ女にいつまでも付きまとっているのは、全く物笑いな「棚無し小舟」といったところだろう。「堀江こぐ棚なし小舟漕ぎかへりおなじ人にや恋ひわたりなむ」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）。「棚なし小舟」は、船棚（舷側を高くする板）のない小舟。

六 匂宮のお住居。六条の院にも宮の曹司（部屋）がある趣。

七 三条の宮焼亡、薫、女三の宮と六条の院へ移居のこと、椎本三四八頁参照。

八 雑事に乱されることのない理想的なお暮しで。

薫、懊悩の揚句匂宮を訪れる

通せまいと思われる
つまじくおぼゆ。

一 身をわけてなど、ゆづりたまふけしきはたびたび見えしかど、二 けひかぬにわびて構へたまへるなめり、三 そのかひなく、かくつれなからむもいとほしく、情なきものに思ひおかれて、いよいよはじめの思ひかなひがたくやあらむ、四 とかく言ひ伝へなどすめる老人の思はむところもかろがろしく、詰るところ大君に心を寄せたことまで悔まれて とにかくに心を染めけむだにくやしく、こんなかりそめの憂き世を思い切ろうと決心していたのに 我ながらも叶わなかったことよと かばかりの世の中を思ひ捨てむの心に、みづからもかなはざりけりと、人の手前も恥ずかしく思い知られるのに 五 人わろく思ひ知らるるを、ましておしなべたる好き者のまねに、同じあたりかへすがへす漕ぎめぐらむ、いと人笑へなる棚なし小舟めきたるべし、一晩中思いあぐねながら夜を明かしなさって など夜もすがら思ひ明かしたまひて、まだ有明の空 まだ有明月の残る空の風情もおもしろい時刻に もをかしきほどに、六 兵部卿の宮の御方に参りたまふ。

薫は
七 三条の宮焼けにしのちは、六条の院にぞうつろひたまへれば、近いので 匂宮方に くては常に参りたまふ。匂宮もお望み通りとご満足にお思いでいらっしゃった 宮もおぼすやうなる御ここちしたまひけり。

八 まぎるることなくあらまほしき御住ひに、御前の前栽、ほかのには

九 遣水に映る月の姿も、絵に描いたような風情であるのに。絵のような庭をバックに、以下に美しい貴公子二人の姿が描かれる。

一〇 薫の思った通り、風流人の宮様は、月を見るとて起きていらっしゃった。前に「まだ有明の空もをかしきほどに」とあった。

一一 はっきり薫と分るように匂ってくるので。薫はその身に芳香を放つこと、六巻匂兵部卿一七〇頁参照。

一二 御直衣をお召しになり。表着を着けるのである。

一三 折から薫は、お部屋の前の階段を上りきらず、そのまま跪いていらっしゃると。「階」は、簀子から庭に降りる階段。

一四 「どうぞ上に」などともおっしゃらず、ご自身も簀子の高欄に寄りかかってお坐りになって。二人とも月を賞でる体。

一五 何やかやと（薫の仲介の誠意が足りないと）お恨みになるのも、困ったことだ。以下、地の文から自然に薫の心中の思いに移る書き方。

一六 そうなって下ればよい、と考えるようになった仔細があるので。薫は、中の君を匂宮に結びつけて、大君の意図をそらそうという気になっている。

匂宮、薫に、宇治への仲立ちを懇望

一七 宇治の山荘のものさびしい様子をお思い出しになるのか。霧の立ちこめるしめやかな明け方の風景に、匂宮は宇治の侘住いを思いやる。

似ず、同じき花の姿も木草のなびきざまも、（枝ぶりも）ことに見なされて、遣水に澄める月の影さへ、絵に描きたるやうなるに、（格別おもしろく思われて）思ひつるもしるく起きおはしましけり。風につきて吹き来る匂ひの、いとしるくうち薫るに、（匂宮は）ふとそれとおどろかれて、御直衣たてまつり、乱れぬさまに引きつくろひて出でたまふ。階をのぼりも果てずついゐたまへれば、（匂宮）「なほ上に」などものたまはで、高欄によりゐたまひて、世間話をあれこれとお二人でなさるの中の御物語聞こえかはしたまふ。かのわたりのことをも、ものついでにはおぼし出でて、（あの宇治の姫君たちのことも）よろづに恨みたまふも、わりなしや、みづからの心にだにかなひがたきを、（自分の胸の内さえなかなか叶えられないのに）と思ふ思ふ、さもおはせなむ、と思ひなるやうのあれば、例よりはまめやかに、あるべきさまなど申したまふ。

明け方のほの暗い時分で　折あしく　霧が立ちこめて　空一面冷え冷えとした気配なのに　艶な風情である　近々のうちに　上げなさる

明けぐれのほど、あやにくに霧りわたりて、空のけはひ冷やかなるに、月は霧に隔てられて、木の下も暗くなまめきたり。山里のあはれなるありさま思ひ出でたまふにや、「このころのほどに、かな

一 女郎花の咲いている広い野に、どうして人を入れまいと、心狭く囲いを張り廻らされるのか。独り占めにしようなどとは欲張りすぎですよ。姫君たちを野辺に咲く女郎花に喩える。「しめ」は、占有のしるし。

二 霧の立ちこめるあしたの原の女郎花は、深く思いを寄せる人だけが見られるのです。「人の見ることや苦しき女郎花秋霧にのみ立ち隠るらむ」（『古今集』巻四秋上、壬生忠岑）。「霧深き朝」と続いて、眼前の景にちなみ、宇治の風景を連想させる。「あしたの原」は、大和の歌枕。

三 めったなことでは（姫君にお逢わせできません）。

四 やれうるさい。「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひと時」（『古今集』巻十九雑体、誹諧歌、遍昭）による。「花もひと時」（盛りも過ぎてしまいますよ）の意を言外にきかす。

五 匂宮が、もう何年も宇治の姫君たちにご執心のよしを仰せになるが。二年前、薫が初めて、姉妹のことを語って以来である（橋姫二八九～二九〇頁参照）。

薫、中の君を匂宮に娶せる決意

六 お顔立ちなども、宮がご覧になってがっかりなさることもなさそうに思われるし。橋姫二七五～六頁、椎本三五〇頁と、すでに二度にわたって、薫は中の君の容貌を見届けている。

七 何一つ不足なところはおありでなさそうだと思うので。先夜対面して「いづれとわくべくもあらずなまめかしき御けはひ」を確かめている（四一頁）。

らず後らかしたまふな」（一緒に連れていって下さい）とかたらひたまふを、（薫は）相変らず迷惑そうにする（お頼みになるのを）なほわづらはしがれば、

女郎花咲けるおほ野をふせぎつつ
心せばくやしめを結ふらむ

（匂宮は）冗談を言われるとたはぶれたまふ。

（薫）二「霧ふかきあしたの原の女郎花
心を寄せて見る人ぞ見る

三 なべてやは」など、ねたましきこゆれば、（匂宮）四「あなかしかまし」と、しまいには本気で怒ってしまわれた果て果ては腹立ちたまひぬ。

五 年ごろかくのたまへど、人の御ありさまをうしろめたく思ひしに、（中の君がどんなお方か心配に思っていたところ）六 容貌なども見おとしたまふまじくおしはからるる、（人柄が実際は思ったほど）心ばせの近劣りするやうもや、（などと危なっかしく思っていたがどでないかもしれない）などぞあやふく思ひわたりしを、何ごともくちをしくはものしたまふまじかめりと思へば、（先夜のおいたわしくも）かのいとほしく、（「大君が」）うちうちに思ひたばかりたまふありさまも（一人の胸の内でお計らいになったことも）違ふやうならむも、（叶わぬ形になるのも）情なきやうな（ひどいことの）

八 大君の思惑通り、中の君に思い替えることは、できそうにないと思われるので。

九 中の君を匂宮にお譲り申して、匂宮と大君、どちらのお恨みも受けまい。

一〇 狭い料簡だとおとりになるのもおもしろいが。匂宮が「心せばくやしめを結ふらむ」と詠んだこと。

一一 いつものお癖の浮気なお気持で、（中の君に）つらい思いをさせるのではお気の毒です。

一二 あちらの人たち（宇治の姫君たち）の気持としては、そうもしようか（匂宮を婿君にも）と、心を動かしそうな様子は見えないのでございますよ。

一三 この月（八月）の二十六日は、彼岸の果ての日で、吉日だったので。春秋の彼岸の入りの日と果ての日は、事を行うのによいとされていた。彼岸は、毎年二月と八月の春分、秋分の日を中心とする七日間（四巻行幸一六八頁注一参照）。底本「二十八日の」とあって、河内本に同じ。

一四 明石の中宮（匂宮の母后）がお耳になさったりしたら。「いとわづらはしきを」にかかる。

一五 目立たないようにと苦労するのも、並み大抵ではない。薫の気持と地の文を重ねた書き方。

一六 船でお渡りなどというのも大げさなので。前に、薫や殿上人など、夕霧の別邸から船で八の宮邸を訪れている（椎本三〇八～九頁参照）。

一七 大げさなお宿。夕霧の別邸などであろう。

薫、匂宮を宇治に伴う

るを、さりとて、さはたえ思ひ改むまじくおぼゆれば、ゆづりきこえて、いづかたの恨みをも負はじ、など下に思ひ構ふる心をも知りたまはで、心せばくとりなしたまふもをかしけれど、「例の軽らかなる御心ざまに、もの思はせむこそ心苦しかるべけれ」など、親が たになりて聞こえたまふ。「よし、見たまへ。かばかり心にとまることなむまだなかりつる」など、いとまめやかにのたまへば、「かの心どもには、さもやとうちなびきぬべきけしきは見えずなむはべる。つかうまつりにくき宮仕へにぞはべるや」とて、おはしますべきやうなど、こまかに聞こえ知らせたまふ。

二十六日、彼岸の果てにて、よき日なりければ、人知れず心づかひして、いみじく忍びて率てたてまつる。后の宮など聞こしめし出でては、かかる御ありきいみじく制しきこえたまへば、いとわづらはしきを、切におぼしたることなれば、さりげなくともてあつかふも、わりなくなむ。船渡りなども所狭ければ、こととしき御宿り

（ようだが）（匂宮は）（親代り）（薫）（匂宮）（見ていてご覧）（こんなに心をひかれることは）（ひどく真面目になっておっしゃるので）（薫）（今までになかったのですよ）（ですからこれは）（気骨の折れるご奉公でございますよ）（宇治に）（お出でになる）（時の注意などを）（こまごまとお教え申し上げなさる）（薫は）（匂宮を）（お連れ申し上げる）（こういうお忍び歩きをきつく）（お止め申されるので）（宮のたってのお望みなので）（まことに厄介なのだが）

一 薫の荘園（所領地）の管理人の家。宇治川の手前、東岸にある趣。

二（匂宮を同行しても）お見咎め申すような人もいないけれど。警護も手薄のさま。

三 夜の警護の者は形ばかり出てきて見廻りをする、それにも様子を悟られまいとの配慮からであろう。草子地。

四 いつものように、「中納言殿のご入来」とばかり、皆、丁重にお迎えする。「宿直人」の中には、薫から御衣を賜った者（橋姫二七三～五頁、二八六頁、椎本三四四頁参照）もいる。

五 中の君に心移ったはずと、それとなく言っておいたから。前に、薫との贈答で「うつろふかたや深きなるらむ」（四三頁）と返歌したことをさす。

六 お目当ての人は、どうやら自分ではないようだったから、いくら何でも安心だと思いながらも。

七 あのいやなことがあってからのちは。薫が忍び入ったこと。大君も知ってのことと恨めしく思う。

八 何やかやと、取次ぎを通したご挨拶ばかりが往来して。大君は、直接対面しない様子。

薫、まず弁の君を欺く

九 こちらに（大君に）ただ一言申し上げておかねばならぬことがありますが。

一〇 何のご挨拶もなくてはすまされぬ思いですので。「ひたや籠り」は、一巻帚木六六頁注三参照。

一一 先夜のように、中の君のもとへはご案内下さらぬなども借りたまはず、そのわたりいと近き御庄の人の家に、いと忍びて、宮をばおろしたてまつりたまひておはしぬ。見とがめたてまつるべき人もなけれど、宿直人はわづかに出でてありくにも、けしき知らせじとなるべし。例の、中納言殿おはします、とて経営しあへり。君たちなまわづらはしく聞きたまへど、うつろふかた異にほはしおきてしかば、と姫宮おぼす。中の宮は、思ふかた異なめりしかば、さりともと思ひながら、心憂かりしのちは、ありしやうに姉宮をも思ひきこえたまはず、心おかれてものしたまふ。何やかやと御消息のみ聞こえ通ひて、いかなるべきことにかと、人々も心苦しがる。

宇治の宮邸に　［車から］　［まず薫だけが］　姫君たちはその様子を何となく面倒なとお聞きになるが　大君　中の君　以前のように　心からお頼りにはなれず　用心する気持になっていらっしゃる　一体どうなることかと　女房たちもつら

匂宮

宮をば、御馬にて、暗きまぎれにおはしまさせたまうて、弁召し出でて、「ここもとにただ一言聞こえさすべきことなむはべるを、おぼし放つさま見たてまつりてしに、いとはづかしけれど、ひたや籠りにてはえやむまじきを、今しばしふかしてを、ありしさまには

（薫）　弁の君　［先夜］お嫌いなさるご様子を拝見したので　とても顔向けもならないが　もう少し夜が更けてから

闇にまぎれて［宮邸に］お出まし頂きなさって

か。その前にまず大君に話がある、と言う。

一二 ご姉妹のどちらとご縁組なさっても、宮家にとっては同じこと。弁の気持。

一三 思った通り、気が変ったのだと、うれしく思い安心して。大君の気持。

一四 あちらの（中の君方の）お入り口とは違う廂の障子を、しっかり鍵をかけて。「廂の障子」は、母屋と廂の間仕切りの襖障子。中の君の方の戸口は戸締りをせず、難なく入れる趣。

一五 一言申し上げねばならぬことですが、誰か人に聞えるほど大きな声を立てるのも具合の悪いことですから。

一六 いよいよ妹の方に心変りするのを、挨拶なしですますまいと思って、何か一言言う積りかしら。以下「……夜もふかさじ」まで、大君の思い。

一七 無愛想に返事もしないで、夜を更かすようなことはすまい。こころよく応対して、早く中の君のもとへ行かせようという算段。

一八 襖のはざま。引き違えになっている隙間。

一九 何といやなことをすること、何で対面など承知したのだろうと。大君の気持。

二〇（中の君を）自分同様にお思い下さるようにと、それとなくお願いなさる（大君の）お心遣いなど、とてもいじらしい。薫の気持と地の文を重ねた書き方。

総角

大君、安心して、薫と対面

何ごとも腹蔵なくお頼みになるので
うらもなくかたらひたまへば、一二いづかたにも同じことにこそは、と思ひて参りぬ。
[大君のお前に]

さなむ、[弁が]と聞こゆれば、一三さればよ、思ひ移りにけりと、うれしくて心落ちゐて、一四かの入りたまふべき道にはあらぬ廂の障子を、いとよくさして、対面したまへり。「一言聞こえさすべきが、また人聞くばかりののしらむはあやなきを、いささかあけさせたまへ。いと
[この襖を]　とても
気詰りです　申し上げなさるけれど（大君）このままでもよく聞えましょう
いぶせし」と聞こえたまへど、「いとよく聞こえぬべし」とて、あけたまはず。一六今はとうつろひなむを、ただならじとて言ふべきにや、
何の　今初めての対面というわけでもなし
何かは、例ならぬ対面にもあらず、一七人憎くいらへで夜もふかさじ、
[大君は襖のもとまで出ていらしたのに]　[薫は大君の]
など思ひて、かばかりも出でたまへるに、一八障子のなかより御袖をとらへて引き寄せて、いみじう怨むれば、一九いとうたてもあるわざかな、
何に聞き入れつらむと、
悔まれもし厄介でならないけれど　何とか言いなだめて向
くやしうむつかしけれど、こしらへて出だしてむとおぼして、二〇異人と思ひわきたまふまじきさまに、かすめつつかたらひたまへる心ばへなど、いとあはれなり。
うへ行かせようと思われて

匂宮は中の君のもとに、薫、大君に真相を明かす

宮は、教へきこえつるままに、一夜の戸口に寄りて、扇を鳴らしたまへば、弁参りて導ききこゆ。さきざきも馴れにける道のしるべ、をかしとおぼしつつ入りたまひぬるをも、姫宮は知りたまはで、こしらへ入れてむ、とおぼしたり。をかしうもいとほしうもおぼえて、うちうちに心も知らざりける恨みおかれむも、罪さりどころなきここちすべければ、「宮の慕ひたまひつれば、え聞こえいなびで、ここにおはしつる。音もせでこそまぎれたまひぬれ。このさかしだつめる人や、かたらはれたてまつりぬらむ。中空に人笑へにもなりはべりぬべきかな」とのたまふに、今すこし思ひよらぬことの、目もあやに心づきなくなりて、「かくよろづにめづらかなりける御心のほども知らで、言ふかひなき心幼さも見えたてまつりにけるおこたりに、おぼしあなづるにこそは」と、言はむかたなく思ひたまへり。

「今は言ふかひなし。ことわりは、かへすがへす聞こえさせてもあ

匂宮 ［薫が］お教え申し上げた通りに 近づいて 大君 弁解のしようのない気持が 薫 匂宮があとを追って来られたので 頼みこまれてお味方申したのでしょう ここにお出でになりました こちらのお利口ぶった弁が 内も知らずに 大君 こんなにいろいろと世にも稀な企みをなさるお心の 言いようもなくつらいとお思いである 薫 もうどうにもなりません お詫びは 何度でも繰り返し申し上げますがそれでも足り

一 先夜、薫が忍び入った戸口。
二 人を呼ぶ合図。（一巻若紫一九八頁注四参照）
三 弁は、匂宮を薫と信じて手引きする。前にも、弁は薫を「やをら導き入る」（三八頁）とあった。
四 今まで何度もし馴れた仲立ちよと。物馴れた弁の様子に、匂宮は、度々薫を大君のもとに案内したことと想像する。
五 薫をうまく言いなだめて、中の君の部屋に送り込もうとお思いになっている。
六 薫は、そうした大君の様子が、おもしろくもお気の毒にも思えて。
七（後日、大君から）内々そんな事情も知らなかったと恨みを持たれるのも。
八 こっそり人知れず（中の君方に）入りこまれました。
九 どうやら私は、中途半端で世の物笑いにもなりそうな身の上です。大君には嫌われ、中の君は匂宮に取られ、と嘆く。
一〇 また一段と意外な話に、目も眩むばかり不快な気持になって。大君の驚き。
一一 お話にならぬ浅はかさもお見せ申してしまった私の不覚から、馬鹿にしていらっしゃるのですね。今まで信頼して、直接応対するほど親しんだことをいう。

大君、薫を恨み、うちとけず

一二 抓りあげでもして下さい。どうともお気のすむように、の意。
一三 (あなたは)ご身分の高いお方のほうに、お心をお寄せのようですが。前にも「同じくは心高くと、思ふかたぞ異にものしたまふらむ……」(四二頁)と、大君について厭味を言うところがある。
一四 匂宮のお目当ては別のお方でいられましたのを。匂宮は、もともと中の君に執心だったのだと言う。
一五 (それにつけても)思いの叶わぬわが身は、どう始末すればよいのやら、つろう存じます。
一六 この襖の錠くらいいくら強くても、本当に二人の仲が潔白だとご推察申す人もございますまい。
一七 私を案内役とお誘いなさった人。匂宮のこと。
一八 襖も引き破りそうな様子なので。がたがたさせてこわしてしまいそうな気配。
一九 あなたのおっしゃる宿世とかいったことは、目にも見えないことで、何ともかとも、私には見当のつけようもありません。
二〇 ただ「知らぬ涙」が目の前をふさぐ気持がいたします。「行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり」(『後撰集』巻十九、離別羇旅、源済)による。これから先どうなることやら、の意。
二一 あとあと、(こんな目に会った私たちのことを)世間で話の種に持ち出す人があれば、昔物語などに、わざと馬鹿げた笑われ者として描いている、その見本になりそうに思われます。

総角

まりあらば、抓みも捻らせたまへ。やむごとなきかたにおぼしよるめるを、宿世などいふめるもの、さらに心にかなはぬものにはべめれば、かの御心ざしは異にはべりけるを、いとほしく思ひたまふるに、かなはぬ身こそ置き所なく心憂くはべりけれ。なほいかがはせむにおぼし弱りね。障子のかためばかりいと強きも、まことにもの清くおしはかりきこゆる人もはべらじ。しるべと誘ひたまへる人の御心にも、まさにかく胸ふたがりて明かすらむとはおぼしなむや」とて、障子をも引き破りつべきけしきなれば、言はむかたなく心づきなけれど、こしらへむと思ひしづめて、「このたまふ宿世といふらむかたは、目にも見えぬことにて、いかにもいかにも思ひたどられず。知らぬ涙のみ霧りふたがるここちしてなむ。こはいかにもてなしたまふぞと、夢のやうにあさましきに、後の世の例に言ひ出づる人もあらば、昔物語などに、ことさらにをこめきて作り出でたるもののたとひにこそはなりぬべかめれ。かくおぼし構ふる心のほ

なければ
縁などというようなものは
さっぱり思うにまかせぬものらしゅうございますから
お気の毒なことと存じますが
らぬことおあきらめ下さい
まさかこう晴れぬ思いに胸を詰らせて夜明かしていようとはお思いでしょうか
[大君は]言いようもないほど不愉快だけれども
とにかくなだめすかそうと気を静めて
(大君)
夢のようでとても信じられませんのに
これは一体私たちをどうなさるお積りかと
こうまで
お企みになった

一 どういうお積りと、匂宮はご推察なさるでしょう。あなたらしくないと、感心されないでしょう。

二 どうぞ、ほんとにこんな恐ろしいほどのつらい思いをさせて、あれもこれもと（妹のことと言い、私のことと言い）困らせないで下さいませ。

三 心ならずも生き永らえていましたら。今宵の出来事のあまりの悲しさに死にそうですが、の含意。

四 それでもやはり物の道理をことわけておっしゃる大君の態度が、気恥ずかしくいじらしく思えて。「心はづかし」は、相手の立派さに気後れすること。

五 お聞き下さい、あなたのお気持に従うことは、またとない私なればこそ、こうまで馬鹿者で甘んじているのです。大君に拒まれるままでいることをいう。

六 いよいよこの世に生きてゆく気はなくなりました。大君の「心よりほかにながらへば……」に応じる。

七 （大君は）そっと奥に入って、さすがにすっかり入りきりもなさらないのを。「はひ入る」の「はひ」は接頭語。近い距離を移動する意。

八 決して、これ以上無体なことはいたしませぬ。

九 一層はげしい瀬音に目も冴えて。深夜の宇治川の音。

一〇 「夜半の嵐」は歌語。

一一 山鳥は、雌雄別々に寝るとされていたので、こう言う（六巻夕霧七八頁注三参照）。「あふことは遠山鳥の目もあはずあはずてこよひあかしつるかな」（『花鳥余情』所引。出典未詳）

どをも、（お気持も）いかなりけるとかはおしはかりたまはむ。なほいとかくおどろおどろしう心憂く、な取り集めまどはしたまひそ。心よりほかにながらへば、すこし思ひのどまりて聞こえむ。（少し気も静まりましてからお相手申しましょう）ここちもさらにかきくらすやうにて、（大層苦しゅうございますので）いとなやましきを、（ここで少し休みましょう）ここにうち休まむ、ゆるしたまへ」と、（お手をお放し下さい）いみじくわびたまへば、（ひどくつらそうになさるので）さすがにことわりをいとよくのたまふが、心はづかしくらうたくおぼえて、「あが君、御心に従ふことのたぐひなければこそ、かくまでかたくなしくなりはべれ。言ひ知らず憎くうとましきものにおぼしなすめれば、（「そんな私を」言い尽せぬほど憎らしくいやな者とお思いのようですから）聞こえむかたなし。（もはや言葉もございません）いとど世に跡とどむべくなむおぼえぬ」とて、「さらば、隔てながらも聞こえさせむ。（この）ひたぶるになうち捨てさせたまひそ」と（いちずに私をお見限りにならないで下さい）て、ゆるしたてまつりたまへれば、はひ入りて、さすがに入りも果てたまはぬを、いとあはれと思ひて、（とてもいじらしく思って）「かばかりの御けはひをなぐさめにて明かしはべらむ。（せめてこのくらいのかすかなお気配を慰めにして夜を明かしましょう）ゆめゆめ」と聞こえて、（それきりうとうともせず）うちもまどろまず、いとどしき水の音に目もさめて、夜半のあらしに、山鳥のここ

一二 この前のように、夜明けの気配に、鐘の音などが響いてくる。（二五頁注一四参照）

一三 （匂宮は）ぐっすりお寝みで、出てこられそうな様子もないことよと。

薫、匂宮、それぞれの暁の別れ

一四 （薫は）妬ましくて、咳払いをなさるのも、ほんとにおかしなことである。草子地。「声づくる」は、注意を促すため、咳払いをすること。匂宮の寝所に近い趣。

一五 ご案内した私が逆に踏み迷うのでしょうか、充たされぬ思いで帰る夜明けの仄暗い道に。「明けぐれの空にぞ我はまどひぬる思ふ心のゆかぬまにまに」（『拾遺集』巻十二恋二、女のもとより暗きに帰りてつかはしける　源順）

一六 こんな（馬鹿者の）例は、世間にあったでしょうか。大君の「後の世の例に言ひ出づる人もあらば……」（五一頁）に応じたもの。

一七 （妹のこと、私のことと）あれこれ思い悩む私の気持にもなってみて下さい、自分勝手なことでお嘆きなさるのならば。

一八 （匂宮が）昨夜の戸口からお出ましになる様子である。五〇頁の「一夜の戸口」である。「なり」は、伝聞推定の意。以下、匂宮の動作、風采を述べる。

一九 はなやかな折のお心用意とて、言いようもなく薫きしめていらっしゃる。

ちして明かしかねたまふ。（夜長をもて余していられる）

一二 例の、明けゆくけはひに、鐘の声など聞こゆ。一三 いぎたなくて出でたまふべきけしきもなきよと、一四 心やましく、声づくりたまふも、げにあやしきわざなり。

（薫）一五 「しるべせしわれやかへりてまどふべき
心もゆかぬ明けぐれの道

一六 かかる例、世にありけむや」とのたまへば、

（大君）一七 かたがたにくらす心を思ひやれ
人やりならぬ道にまどはば

と、（小さなお声でおっしゃるのを）ほのかにのたまふを、（諦めきれぬ気がするので）いと飽かぬことちすれば、（薫）「（何ともこの上なくきびしく隔てられていますので）いかにこよなく隔たりてはべめれば、（とてもたまらない気持です）いとわりなうこそ」（何かと恐み言をおっしゃって）など、よろづに怨みつつ、ほのぼのと明けゆくほどに、昨夜のかたより出でたまふなり。（大層しなしなともの柔らかな所作をなさるにつれて匂う薫物の香りなど）いとやはらかにふるまひなしたまへるにほひなど、一九 艶なる御心げさうには、言ひ知らずしめたまへり。（老女たちは）ねび人どもは、いとあやしく（どうも変な具合だと）

一 合点がいかず不審でならないけれど。薫は、大君と襖越しに対坐しているし、もう一人部屋を出てくる男をいぶかしむ。

二 途中の道のりも、帰りがけは（女君に心が残るせいか）大層遠くお思いになって。匂宮の心中。

三 「一夜も逢わずにいられようか」と、お心を痛めていらっしゃるのであろう。「若草の新手枕を纏きそめて夜をや隔てむ憎からなくに」（『古今六帖』五、一夜隔てたる。原歌は『万葉集』巻十一）

四 中門廊。中門で車をおりる。（一巻図録六参照）

五 異様な女車の体で、こっそり御門をお入りになるにつけても。「女車」は、女の乗っている車。下簾（簾の内側の垂絹）を下げる（図録六参照）。

六 並々ならぬご精勤ぶりと存じます。中の君に対する匂宮の熱意をひやかす。

七 案内役の自分が本意も遂げなかった馬鹿らしさは、いかにもしゃくなので、愚痴もお聞かせ申さない。

八 （薫との結婚をすすめてみたり、匂宮を導き入れたり）あれやこれやとお企みになりながら、それを顔色にもお出しにならなかったことと。中の君の心中。昨夜の件を、大君も薫と心を合せてのことと思う。

九 （大君は）自分が全然知らなかった事情も、はっきりと弁明なさることもできず、（中の君のご不満も）無理はないと申し訳なくお思い申される。

薫と匂宮、帰京

匂宮の後朝の文

一 心得がたく思ひまどはれけれど、さりともあしざまなる御心あらむやは、となぐさめたり。

（いくら何でも〔薫が〕悪いようになさるはずがあろうか　と気休めに思っている）

二 暗きほどにと急ぎ帰りたまふ。道のほども、帰るさはいとはるけくおぼされて、心安くもえ行き通はざらむことの、かねていと苦しきを、「夜をや隔てむ」と思ひなやみたまふなめり。まだ人騒がしからぬ朝のほどにおはし着きぬ。廊に御車寄せて下りたまふ。異やうなる女車のさまして隠ろへ入りたまふに、皆笑ひたまひて、「おろかならぬ宮仕への御心ざしとなむ思ひたまふる」と申したまふ。

（夜の明けぬうちにと）（〔宇治に〕気軽に）（通えそうもないことがもう今から大層つらいので）（人々も起き出さない）（〔六条院に〕）（お二人とも噴き出されて（薫））

七 しるべのをこがましさを、いと妬くて、愁へもきこえたまはず。宮は、いつしかと御文たてまつりたまふ。山里には、誰も誰もうつつのここちしたまはず思ひ乱れたまへり。

（お帰り早々に　後朝の文）（宇治の宮）（ご姉妹ともとても本当にあったこととは信じられず思い悩んでいらっしゃった）

八 さまざまにおぼし構へけるを、色にも出だしたまはざりけるよと、うとましくつらく、姉宮をば思ひきこえたまひて、目も見合はせたてまつりたまはず。

（いやなひどいお方と）（〔中君は〕）

九 知らざりしさまをも、さはさはとはえあきらめたまはで、ことわりに

一〇 ぼんやりと気の抜けたような有様で、肝腎の頼みのお方（大君）がいらっしゃるので。
一一（大君は）匂宮からのお文も、開いて見せてお上げになるけれども。母代りの心遣い。
一二 ありふれた志とお思いなのでしょうか、露のいっぱい置いた山路の笹原を分けて行きましたのに。
一三 恋文には手馴れのお筆の墨の色などが、格別風情があるのも。以下「……つまましければ」まで、大君の心中を叙す。
一四 ただ風雅のお付合いとしてご覧になっていた時は、すばらしいと感心したけれど。このこと、椎本三三〇頁参照。
一五（今では、かえってそれが）心配で気がかりでならず。中の君が、多情な匂宮に捨てられはせぬかと案じる。
一六 自分が出しゃばってお返事をさし上げるのも、とても気がひけるので。母親や乳母の役。前には、中の君に代って、匂宮からの弔問に返書したことがある（椎本三二八頁参照）。
一七 襲の色目。表蘇芳、裏萌黄。秋、冬に着用する。「細長」は、貴婦人の表着。袵がなく身頃の裾先が分れている。
一八 裏、表のほかに、中にもう一枚絹の入っているものをいう。いずれも祝儀の禄の品で、女物である。
一九 普通は肩に掛けるが、目立たぬように包ませる。
二〇 殿上童。（椎本三一〇頁注三参照）

心苦しく思ひきこえたまふ。人々も、「いかにはべりしことにか」など、御けしき見たてまつれど、一〇おぼしほれたるやうにてたのもし人のおはすれば、あやしきわざかな、と思ひあへり。一一御文もひきときて見せたてまつりたまへど、さらに起きあがりたまはねば、「いと久しくなりぬ」と御使わびけり。

（匂宮）一二
世のつねに思ひやすらむ露ふかき
道の笹原わけて来つるも

一三書き馴れたまへる墨つきなどの、ことさらに艶なるも、一四おほかたにつけて見たまひしはをかしうおぼえしを、一五うしろめたうもの思はしくて、一六われさかし人にて聞こえむもいとつましければ、まめやかに、あるべきやうを、一七いみじくせめて書かせたてまつりたまふ。紫苑色の細長一襲に、一八三重襲の袴具して賜ふ。御使苦しげに思ひたれば、一九包ませて、供なる人になむ贈らせたまふ。ことことしき御使にもあらず、例たてまつれたまふ上童なり。ことさらに、人にけしき

女房たち　どういうことだったのでございましょう　それとなくお伺い申すけれども　おかしな具合だこと　皆思っている　中君は　お返事が大層暇どります　困っていた　この際とるべき作法を　じっくりと言い聞かせてお返事をお書かせ申し上げなさる　一所懸命に　迷惑そうにしているので　お使の　改まった後朝のお使いといった　包ませて　いつもおさし向けなさる　ふうでもなく　お邸の人に気取　匂宮は　わざわざ

一（匂宮は）昨夜の出しゃばりの老女のしわざだなと、おもしろからずお思いになる。それと分る後朝の禄を、昨夜、中の君のもとに手引きした弁のしわざと解する。

二 昨夜の案内役。薫のこと。

三 薫の親代りのお方。（六巻匂兵部卿一六五頁）

四 またまた、何かといえば、いかにもこの世に気のなさそうに振舞うと。匂宮は、例の道心のせいと受けとる（橋姫二九〇頁参照）。

五 仕方がない、願いもしなかった縁組だからとて、粗略にできようか。

六 はるばる遠い宇治までのご道中を。「中道」は、両方の地点を繋ぐ道。歌語。

七 思えば不思議なこと。草子地。大君の心中の思いに重ねて書く。

八 ご本人の中の君は。

九（姉君が）美しく粧って下さるままにされていらっしゃる、その間にも。

一〇 濃い紅のお召し物。今夜のための装いであろう。

一一 しっかり者の姉君。

一二 家の女房たちも、きっと似合いのご縁と、聞き苦しいほどにあれこれと言い聞かすようでしたので。「めり」は婉曲表現。弁などの説得をいう。

匂宮、新婚第二夜の宇治通い

その夜、大君、中の君をなだめる

（二日目の夜も）その夜も、かのしるべ誘ひたまへど、「（薫）冷泉院にかならずさぶらひたまへ（ぜひとも伺候しなければならぬことがありますので）」とて、（京に）お残りになったとまりたまひぬ。例の、ことに触れてすさまじげに世をもてなすと、憎くおぼす。

いかがはせむ、本意ならざりしこととておろかにやは、（大君は）お諦めになって）と思ひ弱りたまひて、（お部屋の飾りなど何かと不足がちの）御しつらひなどうちあはぬ住処のさまなれど、（それなりお住居のさまだが）さるかたにをかしくしなして（匂宮を）待ちきこえたまひけり。はるかなる御中道を、（匂宮が）急ぎおはしましたりけるもうれしきわざなるぞ、かつはあやしき。

正身は、（正気も失せた有様でぼうとして）われにもあらぬさまにて、つくろはれたてまつりたまふままに、（涙で）濃き御衣の袖のいたく濡るれば、（大君）私はこの世に長く生きていられるとも思われませんので）さかし人もうち泣きたまひつつ、「世の中に久しくもとおぼえはべらねば、（明け暮れ何かと案じますうちにも）明け暮れのながめにも、（ただあなたのお身の上だけをおいたわしくお思い申していましたところ）ただ御ことをのみなむ心苦しう思ひきこゆるに、この人々も、よかるべきさまのことと、聞きにくきまで言ひ知らすめれば、

（二日目の夜も）もらさじとおぼしければ、昨夜のさかしがりし老人のしわざなりけりと、ものしくなむ聞こしめしける。

一三 年の功を積んだ人々の考えは、そうはいっても世間の道理もわきまえていよう。
一四 こうして（あなたを）お独り身のままでお置き申してよいものか、と考えるようにもなりましたが。薫に縁づけたいと思ったことをさす。
一五 今すぐこう、思いもかけず何やかやと身の縮む思いに心を乱すことになろうとは、夢にも考えませんでしたのに。中の君が匂宮と結ばれたことについて言う。

一六 いちずにお恨みになってはいけません。（無実の者を恨んで）罪作りになっては大変です。
一七 それでも（姉上が）こんなに心にかけておっしゃるのは、いかにも行く末定まらず悪しかれと思ってなさったことでもあるまいに。
一八 世間の物笑いになるような、みっともないことまで起って、お世話をおかけしたりしてはとてもつらいと。もし匂宮に捨てられたら、姉君がどんなに悲しまれるかと案じる。
一九 そうとも知らずに、ただびっくりしていらっしゃった様子も、並々ならず心をそそられたのに。匂宮の心に映った昨夜の中の君の姿。

匂宮、中の君にいよいよ惹かれる

一三 年経たる心どもには、さりとも世のことわりをも知りたらむ、はか（ろくに）頼りにもならぬ私一人が我を張って ばかしくもあらぬ心ひとつを立てて、一四 かくてのみやは見たてまつらむ、と思ひなるやうもありしかど、一五 ただ今かく、思ひあへずはづかしきことどもに乱れ思ふべうは、さらに思ひかけはべらざりしに、これがほんとに これやげに、人の言ふめるのがれがたき御契りなりけむ。人のよく言う逃れられない前世からの約束事だったのでしょう いとこそたまらなくつらいのです 苦しけれ。少しお気持がおさまりました頃に すこしおぼしなぐさみなむに、[私が] 何も知らなかった事情もお話し申しましょう 聞こえむ。一六 憎しとなおぼし入りそ。罪もぞ得たまふ」と、[中君の] 御髪をなでつくろひつつ聞こえたまへば、[中君は] いらへもしたまはねど、一七 さすがにかくおぼしのたまふが、げにうしろめたくあしかれともおぼしおきてじを、一八 人笑へに見苦しきこと添ひて見あつかはれたてまつらむがいみじきを、よろづに思ひみたまへり。

一九 さる心もなく、あきれたまへりしけはひだに、なべてならずをかしかりしを、まして今夜は少し女らしくなまめかしい風情でいられるのには ご愛着も一段と まいてすこし世の常になよびたまへるは、御心ざしも 増すにつけ まさるに、たはやすく通ひたまはざらむ山道のはるけさも、[匂宮は] 胸いた

一 真心のこもった様子でやさしくお約束なさるけれど。心変りはないと契る。

二 言いようもなく大事にされているご大家のお姫様でも、少し世間並みに人に接し、親とか兄弟とかいっては、男のすることなど見つけていらっしゃる方は。「ものの姫君」は、姫君を強調した言い方。「せうと」は、女から、兄弟を呼ぶ言葉。以下、中の君の人柄を、世間一般の姫君と比較して述べる。

三 (中の君は)家の内で、下にも置かずかしずく人こそないものの。大勢の女房にかしずかれて、直接他人に接する機会のない姫君というわけではないが。

四 何事も世間の人とは違って、変で田舎じみていることだろうと。中の君の卑下の心。

五 とはいえ、この中の君こそ、気が利いて機知に富む派手やかさは、(姉君より)すぐれていらっしゃった。お返事なども巧みなはず、という含み。

六 結婚三日目に当る夜は、お餅を召し上がるものです。「三日の夜の餅」といって、新婚第三夜、男女ともに祝餅を食べる習わしをいう。(二巻葵一一七～九頁参照)

七 (大君の)お前でお作らせになるが、分らないことばかりで。みずから指示する体。

八 また一方、親代りになって何かとお命じなさるにつけても、女房たちが何と思おうかと気がひけて。

三日の夜、大君と薫の心遣い

きまでおぼして、[一]心深げにかたらひ頼めたまへど、[中君は]うれしいとも何ともお分りにならないにとも思ひわきたまはず。[二]言ひ知らずかしづくものの姫君も、すこし世の常の人げ近く、親せうとなどいひつつ、人のたたずまひをも見馴れたまへるは、もののはづかしさも恐ろしさもなのめにやあらむ、[三]家にあがめきこゆる人こそなけれ、かく山深き御あたりなれば、人けに遠く(こんな山里のお住居なので)人に遠く、もの深くてならひたまへるここちに、思ひかけぬありさまのつつましくはづかしく、[四]何ごとも世の人に似ず、あやしう田舎びたらむかしと、はかなき御いらへにても言ひ出でむかたなくつつみたまへり。[五]さるは、この君しもぞ、らうらうじくかどあるかたのにほひはまさりたまへる。

何が気おくれするといってもこわいといってもほどほどのことであろう

引き籠ってひっそりとお育ちになったこととて

思ってもみなかった昨夜の出来事が気まり悪く気がひけて

ほんの些細なお答えでも口のきくようもなくて遠慮していらっしゃる

「[六]三日にあたる夜、餅なむ参る」と人々の聞こゆれば、ことさらにさるべき祝ひのことにこそはとおぼして、御前にてせさせたまふもたどたどしく、[八]かつは大人になりておきてたまふも、人の見るらむこと憚られて、面うち赤めておはするさま、いとをかしげなり。こ

女房たちがお教え申すので　では特別にしなければならぬ祝いごとなのだ　[大君は]　[大君の]　とても女らしい風情がある　姉さ

九 他人に対しては思いやりがあって情け深くていらっしゃるのだった。
一〇 昨夜、参上しようと存じましたが。「思たまへ」は、う音便「思う」の「う」を省略した表記。
一一 せっかくご奉公に励みましても、何のしるしもなさそうなことですから、恨めしく存じまして。「世」は、薫と大君の仲。
一二 今夜は、何かとご用もお勤めすべきだとは存じますが。後見として、三日の夜の世話もすべきだが。
一三 先夜の宿直所のすげないお扱いで気分もすぐれませんのが。障子（襖）の外で一夜を明かしたことを言う。風邪でも引いたという趣。
一四 檀の皮で作った奥州特製の紙。白くて厚い紙質。普通の音信に用いる。恋文は鳥の子薄様を用いる。
一五 きちんと行を揃えてお書きになって。恋文のように散らし書きにしないさま（『細流抄』）。
一六 今夜のためのお支度。女君や女房たちの晴着。
一七 ご衣裳を納める櫃。肩に掛けて担うので、数詞に「掛け」を用いる。底本以下「あまたかけこいれて」とあるが、「かけご」（懸子）は不審。今、訂。
一八 女房たちの着料に。直接姫君に贈るという失礼を避けたもの。
一九 染めもしていない絹や綾。「綾」は、織り出し模様のある絹。
二〇 姫君たちのお召し料と知れる二揃い。
二一 お召し料の衣裳のうちの下着。

ん気質というのか のかみ心にや、のどかに気高きものから、人のためあはれに情々しくぞおはしける。

薫 中納言殿より、

昨夜参らむと思たまへしかど、宮仕への労もしるしなげなる世に、思たまへ恨みてなむ。今宵は雑役もやと思うたまふれど、宿直所のはしたなげにはべりし乱りごこち、いとど安からでやすらはれすはべる。

と、陸奥紙におひつぎ書きたまひて、まうけのものども、こまやかに縫ひなどもせざりける、いろいろおし巻きなどしつつ、御衣櫃あまたかけに入れて、老人のもとに、人々の料に、とて賜へり。宮の御方にさぶらひけるに従ひて、いと多くもえ取り集めたまはざりけるにやあらむ、ただなる絹綾など、下には入れ隠しつつ、御料とおぼしき二領、いときよらにしたるを、単の御衣の袖に、古代のことなれど、

おっとりと 上品でいられるが
薫 中納言殿より、
昨夜参らむと思たまへしかど、宮仕への労もしるしなげなる世に、
思たまへ恨みてなむ。今宵は雑役もやと思うたまふれど、宿直所
のはしたなげにはべりし乱りごこち、いとど安からでやすらはれ
すはべる。
と、陸奥紙におひつぎ書きたまひて、まうけのものども、こまやか
つたりなどもしていないのを 色とりどりに反物に巻いたりしたまま
に縫ひなどもせざりける、いろいろおし巻きなどしつつ、御衣櫃あ
弁 母女三の宮のお手もとに有り合せたのにまかせて
またかけに入れて、老人のもとに、人々の料に、とて賜へり。宮の
そうたくさんもお取りそろえになれなかったのであろ
御方にさぶらひけるに従ひて、いと多くもえ取り集めたまはざりけ
うか
るにやあらむ、ただなる絹綾など、下には入れ隠しつつ、御料とお
大層美しく仕立ててあるのに 古風な趣向では
ぼしき二領、いときよらにしたるを、単の御衣の袖に、古代のこと
あるが
なれど、

一 夜の衣を着て馴れ親しんだ仲とは言わないまでも、言いがかりぐらいはつけないでもありませんよ。「小夜衣」は、夜着のこと。「馴れ」「かけ」は「衣」の縁語。大君に近づき、顔まで見たことがあるので、いくらそっけなくなさっても駄目です、とおどす（二一頁参照）。

大君と薫の歌

二 姉妹の二人が二人とも姿を見られてしまって、何の奥ゆかしいこともなくなってしまったのを、（薫の文を見て大君は）一層気のひけることに思われて。

三 お使いのうち何人かは、逃げて姿を隠してしまった。「かた〈」は、一部分。禄（労をねぎらって与える物）などにあずからぬよう、気を遣ったのである。

四 身分の低い下人。お使いの従者。

五 何隔てない心のお付合いばかりは、ずいぶん親しくさせて頂いていますが、馴染みを重ねた仲などとおっしゃらないで下さいませ。

六 お気持を率直にお詠みになっていると。

七 待ち焦がれてご覧になるお方は。薫のこと。

八 ひそかに、お心も上の空で、どうしたものかと嘆かわしくお思いになっているのに。新婚後、三晩続けて通うのが作法である。

母中宮、匂宮を訓戒

九 いまだにこんなふうにお独りでいらして、世間で、浮気なお方というご評判がだんだん高くなるのは。以下、母后明石の中宮のお諫め。

（薫）一
小夜衣着て馴れきとは言はずとも
　かことばかりはかけずしもあらじ

と、おどしきこえたまへり。

二 こなたかなたゆかしげなき御ことを、はづかしういとど見たまひて、御返りもいかがは聞こえむと、（このお返事も何と申し上げようと思案にくれていられるうちに）おぼしわづらふほど、三 御使かたへは逃げ隠れにけり。四 あやしき下人を（引き止めて）ひかへてぞ、御返り賜ふ。

（大君）五
隔てなき心ばかりは通ふとも
　馴れし袖とはかけじとぞおもふ

（気のせく上にいろいろ思い悩まれた揚句のこととて一段と何の趣向もないのを）心あわたたしく思ひ乱れたまへる名残に、いとどなほなほしきを、六 おぼしけるままと、七 待ち見たまふ人は、ただあはれにぞ思ひなされたまふ。（匂宮になる）

匂宮は、その夜内裏に参りたまひて、（宮中に参られたところすぐご退出も叶いそうにない雰囲気なので）えまかでたまふまじげなるを、八 人知れず御心もそらにておぼし嘆きたるに、（明石の中宮）中宮、九「なほかく独りおはしまして、世の中に、好いたまへる御名のやうやう聞こゆる、

匂宮、薫に励まされて、宇治に行く

一〇 何ごとも風流が過ぎて、ことさらおのが好みを通そうとお考えなさいますな。お上もご心配になって、お叱言を仰せです。将来の立場を考えて、色好みの面に自重を求める気持があろう（七四頁参照）。なお、趣味に偏らぬことを貴族の理想としたことは、匂兵部卿一七一頁参照。

一一 「里」は、宮中に対して臣下の自邸のこと。匂宮の邸は、二条の院（匂兵部卿一六一～二頁参照）。ただし、六条の院にも住むこと、四四頁に見える。ここは、匂宮が禁中に居つかず、奔放な独身生活を送られるのを意見されるのである。

一二 宮中に宿直する時の部屋。

一三 宇治へのお便り。今夜行けない嘆きを書き送る。

一四 （薫は）宇治の方々のお味方とお思いになると。匂宮の思い。

一五 （中宮は）いよいよおもしろからぬこととお思い申されるのではないでしょうか。「おぼし」「させたまふ」は、ともに中宮に対する敬語。

一六 清涼殿西廂にある女房の詰所（一巻図録五参照）。薫は、女房たちから、中宮ご教訓のことを漏れ聞いたのである。

一七 ひそかに、厄介なご用を勤めたかどで（あなたを宇治にご案内したことで）、受けずともよいお叱りを蒙ろうかと、青くなりました。

やはり大層いけないことです

なほいとあしきことなり。一〇何ごとももの好ましく、立てたる心なつかひたまひそ。上もうしろめたげにおぼしのたまふ」と、一一里住みがちにおはしますをいさめきこえたまへば、一二〔匂宮は〕とてもお困りになって宿直所に出でたまひて、一三御文書きてたてまつれたまへる名残も、いたくうちながめておはしますに、中納言の君参りたまへり。

一四そなたの心寄せとおぼせば、例よりもうれしうて、「いかがすべき、いとかく暗くなりぬめるを、心も乱れてなむ」と、嘆かしげにおぼしたり。〔薫は〕よく御けしきを見たてまつらむ、とおぼして、「日ごろ経てかく参りたまへるを、今宵さぶらはせたまはで急ぎまかでたまひなむ、一五いとどよろしからぬことにやおぼしきこえさせたまはむ。台盤所の方にてうけたまはりつれば、一六人知れず、わづらはしき宮仕へのしるしに、あいなき勘当やはべらむと、顔の色違ひはべりつる」と申したまへば、「いと聞きにくくぞおぼしのたまふや。多くは人のとりなすことなるべし。世に咎めあるばかりの心は、何ごと

お使いをさし上げなさったそのあとも　どうすればよか　気が気じゃないのです　もうこんなに暗くなってしまったようだし　何日ぶりかでこうして参内なさいましたのに　今夜ご宿直なさらずに急いでご退出なさったりしては　全く聞くに堪えないひどいおことをおっしゃるのだ　大方は誰かが告げ口するのだろう　私が何を非難されるほどの料簡とは

一 お出掛けになってもならなくても、中宮のご不興はおまぬがれになりますまい、同じことです。強く宇治行きを勧める。

二 木幡の山に馬ではいかがでございましょう。「山科の強田の山を馬はあれど徒歩ゆわが来し汝を思ひかねて」（『万葉集』巻十一）。なお「山科の木幡の里に」「かちよりぞ来る君を思へば」として『拾遺集』巻十九に見える。「木幡の山」は、図録一参照。ここは、車でなく馬で行くよう勧めたもの。

三 （しかしそれでは）一層世間の噂がうるさいことでしょうが。馬では、軽々しい振舞ということで、一層噂にもなろうがと言う。「障り所なからむ」は、妨げられることもなかろう、の意。

四 （私は今夜は）お供にはかえってお仕えいたしますまい。それよりおあとの始末を。

薫、中宮に伺候、さまざまの物思い

五 匂宮はお出かけになったようですね。「なり」は伝聞推定。

六 主上が（匂宮の行状を）お耳にあそばすたびに、私がお叱り申さないのがだらしないのだ、とお思いで仰せにもなるのがつらいことです。

七 明石の中宮には、東宮、二の宮、三の宮（匂宮）、五の宮、女一の宮の皇子女がある。（付録系図一参照）

八 明石の中宮。匂宮たちの母宮なので、こう呼ぶ。今年四十三歳。

九 薫の理想の女性であること、椎本三五〇頁参照。

にかはつかふらむ。所狭き身のほどこそ、なかなかなるわざなりけれ」とて、まことにいとはしくさへおぼしたり。いとほしう見たてまつりたまひて、「同じ御騒がれにこそはおはすなれ。今宵の罪にはかはりきこえさせて、身をもいたづらになしはべりなむかし。木幡の山に馬はいかがはべるべき。いとどものの聞こえや障り所なからむ」と聞こえたまへば、ただ暮れに暮れてふけにける夜なれば、おぼしわびて、御馬にて出でたまひぬ。「御供にはなかなかつかうまつらじ。御後見を」とて、この君は内裏にさぶらひたまふ。

（しでかすというのだろう）（ご大層な身分など）（かえってない方がましというものだ）（心から高貴の身をいとわしいとまでお思いの様子だ）（そんな匂宮を）（お気の毒に見申し上げなさって）（今夜の中宮のお咎めは私が代ってお受け申して）（身を無きものにもしてお為をはかりましょう）（どんどん日が暮れていって夜も更けてしまったので）（匂宮は）（思い余って）

（薫が）中宮の御方に参りたまへれば、「宮は出でたまひぬなり。あさましくいとほしき御さまかな。いかに人見たてまつるらむ。上聞こしめしては、いさめきこえぬが言ふかひなき、とおぼしのたまふこそわりなけれ」とのたまふ。あまた宮たちのかくおとなび整ひたまへど、大宮は、いよいよ若くをかしきけはひなむまさりたまひける。女一の宮も、かくぞおはしますべかめる、いかならむをりに、か

（中宮）（あきれて）（ものも言えない困ったお方だこと）（人は何とお思い申すことでしょう）（ますますお若くお美しい感じは以前にもまさっていらっしゃるだが）（このようにご成人され立派におなり）（きっとこのようにお美しいのだろう）（何かの機会に）

一〇 色好みな男が、けしからぬ料簡を起すというのも、このようなお間柄で、そうはいっても他人行儀な堅苦しさがなく、親しく扱われていながら、思う心のままならぬ時のことなのであろう。以下「えこそ思ひ絶えね」まで薫の心中の思い。

一一 自分のように、偏屈な性分の男はまたとあろうか。身近に大君や中の君に会いながら、手を出さなかったことを言う。

一二 それなのに、やはりいったん心ひかれた人のことは、とても思い切れないのだ。大君のこと。

一三 わざと（薫の）気を引いてみせる女房もいる。「見えしらがふ」は、目に立つように振舞うこと。

一四 女房たちも、表面は主家の気風に合せて、お淑やかにしているが。

一五 人の心はさまざまな世の中なので。「世の人の心心にありければ思ふはつらし憂きは頼まず」（『古今六帖』五、相思はぬ）

一六（中には）浮気っぽさたっぷりの下心がちらちら見える者もいるのを。薫に、それとなく好意を見せる女もいる。

一七 日頃のちょっとしたことにも、ただ世間の無常をしきりに思っていらっしゃる。「立ちてもゐても」は歌語。さまざまな女にも、無常を観ずる薫の本性。

ばかりにてももの近く、御声をだに聞きたてまつらむ、とあはれにおぼゆ。好いたる人の、思ふまじき心つかふらむも、かやうなる御仲らひの、さすがに気遠からず入り立ちて、心にかなはぬをりのことならむかし、わが心のやうに、ひがひがしき心のたぐひやはまた世にあんべかめる、それになほ動きそめぬるあたりは、えこそ思ひ絶えね、など思ひゐたまへり。さぶらふ限りの女房の容貌心ざま、いづれとなくわろびたるなく、めやすくとりどりにをかしきなかに、あてにすぐれて目とまるあれど、さらにさらに乱れそめじの心にて、いときすくにもてなしたまへり。ことさらに見えしらがふ人もあり。おほかたはづかしげにもてしづめたまへるあたりなれば、上べこそ心ばかりもてしづめたれ、心々なる世の中なりければ、色めかしげにすすみたる下の心漏りて見ゆるもあるを、さまざまにをかしくもあはれにもあるかなと、立ちてもゐても、ただ常なきありさまを思ひありきたまふ。

お声なりとせめてお聞きしたいものだ
せつない気持
な物越しでもいいから近くで
になる
[薫は]
[中宮に]
無雑で皆それぞれに美しいなかでも
劣りまさりなく不出来な者はなく
[薫は]ゆめゆめ女に心は乱すまいと決心して
上品で衆にすぐれていて目につく者もいるが
大層生真面目な態度で接していらっしゃる
[中宮方は]大体が気おくれするほどお行儀よくもの静かにお暮しの所なので
人それぞれにおもしろくもありいとおしくもあることよと

匂宮を迎える中の君

宇治では
かしこには、一納言殿のことことしげに言ひなしたまへりつるを、
[匂宮が]
夜ふくるまでおはしまさで、二御文のあるを、三されば[大君が]よ、と胸つぶれ
[匂宮が]
ておはするに、夜中近くなりて、荒ましき風のきほひに、いともな
荒々しい風に競うように
優雅でお美しく立派なよそおいでお越しになったのも
まめかしうきよらにてにほひおはしたるも、[大君も]いかがおろかにおぼえ
中の君ご本人も少しうちとけて
たまはむ。四正身もいささかうちなびきて、思ひ知りたまふことある
べし。五いみじくをかしげに盛りと見えて、引きつくろひたまへるさ
一段とほかと比べるものもあるまい　思われる
まは、ましてたぐひあらじはや、とおぼゆ。さばかりよき人を多く
見たまふ御目にだに、けしうはあらず、容貌よりはじめて、多く近
見劣りはせず　近くで見る
ってていられる匂宮の御目にも
ほどずっとすばらしい感じがなさるので
まさりしたりとおぼさるれば、六山里の老人どもは、まして口つき憎
(老女房)七
げにうち笑みつつ、「かくあたらしき御ありさまを、なのめなる際
の人の見たてまつりたまはましかば、いかにくちをしからまし。思
思い通りのご縁組
ふやうなる御宿世」と聞こえつつ、姫宮の御心を、八あやしくひがひ
大君　口々に申しては
がしくもてなしたまふを、もどき口ひそみきこゆ。
悪しざまに口を尖らせてお噂する
盛り過ぎたるさまどもに、あざやかなる花のいろいろ、似つかは
九

一　薫が、仰山な文面で言って寄こされたのに。薫の文に「今宵は雑役もや……」（五九頁）と、よほど大事な儀式のように書いてあったことをさす。

二　前に「御文書きてたてまつれたまへる」とあったもの。（六一頁参照）

三　やっぱり（噂通り浮気な宮様の一時の慰みだったのだ）。

四　（匂宮のお志のほどが）お分りになることもあるようだ。宮は、今夜、宮中を脱け出す時の苦心をいろいろ語りもしたのであろう。

五　とても美しく今が盛りと見えて、着飾っていらっしゃる姿は。以下、匂宮の眼に映る中の君の姿。薫から贈られた衣裳を着ているのである。

六　田舎暮しの老女たち。すぐ有頂天になる。

七　（中の君は）こんなもったいないほどのご器量ですもの、並の身分の殿方が婿君におなり申されたのなら、どんなに残念だったでしょう。

八　妙に片意地張っておいでなのを。薫に靡かないことをいう。「姫宮の御心を」を説明するかたち。

九　（女房たちが）盛りを過ぎた身なのに、はなやかな色とりどりの衣裳の似合いもしないのを仕立てては、身につかぬまま着飾っている姿が。薫から贈られた絹を仕立てて着ているさま。「花」は華美な衣裳の形容。

大君の悲しみ

一〇（大君は）これならと我慢のできそうな者もいないまわりの光景にお目をお止めになって。「見わたされ」の「れ」は、自発。

一一 私だってそろそろ盛りを過ぎた身なのだ。以下「心のなしにやあらむ」まで、大君のわが身を観ずる思い。

一二 だんだん痩せ細ってゆく。玉鬘を「酸漿などいふめるやうにふくらかにて」とほめるところがあった（四巻野分一三七頁参照）。

一三 （髪の少なくなった）後姿はおかまいなしに、額髪を工夫して頬に垂らしては。「額髪」は、頬のあたりに垂らした前髪。

一四 気後れするような立派なお方（薫）に添うことは、いよいよ気まりが悪く。前にも薫のことを「はづかしげに見えにくきけしき」（二七頁）と思っている。なお以下「……身のありさまを」まで、ふたたび大君の心中。

一五 もう一、二年もすれば、もっと（容色も）衰えることだろう。

一六 お手もとがほっそりと弱々しく、痛々しげなのをさし出して見るにつけても。横たわって見るさま。

一七 今夜、中宮から容易にお暇を許されなかったことを、あれこれお考えになると。

一八 やはり（宇治に通ってくるのは）気軽にできそうにないことだったのだ。

総角

匂宮、中の君に誓う

しからぬをさし縫ひつつ、ありつかずとりつくろひたる姿どもの、罪ゆるされたるもなきを見わたされたまひて、姫宮（大君）、われもやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば、痩せ痩せ（一二）になりもてゆく、おのがじしは、この人ども（この老女たちも）も、われあしと（自分を醜いと思っていようか）やは思へる、うしろでは（一三）知らず顔に、額髪をひきかけつつ、色どりたる（紅おしろいを塗りつけた化粧に念を入れて）顔づくりをよくして（様子ぶっているようだ）うちふるまふめり、わが身にては（わが身を振り返って）、まだいとあれがほどにはあらず（まだそうあの女たちほど見苦しくはない）、目鼻立ちも尋常だと思われるのは目も鼻もなほしとおぼゆるは、心のなしにやあらむ（うぬぼれのせいかもしれない）、とうしろめたう（気になって）、見出だして（お庭を）臥したまへり（見やって横になっていられる）。はづかしげならむ人に見えむことは、いよいよかたはらいたく、今一二年（一五）あらばおとろへまさりなむ（長生きできそうにない私の身体具合だものと）、はかなげなる身のありさまをと、御手つきの（一六）細やかにか弱く、あはれなるをさし出でても、世の中を思ひ続けたまふ。

匂宮

宮は、ありがたかりつる（一七）御暇のほどをおぼしめぐらすに、なほ心やすかるまじきことにこそは、といと胸ふたがりておぼえたまひけり。大宮の聞こえたまひしさまなど語りきこえたまひて、「思ひな

（胸も真っ暗になるようにお感じなさった）

（薫とのことを）

（明石の中宮がご意見申されたことなどを）「中君に」お話し申し上げられて（匂宮）心にかけ

一 かりそめにも、あなたを粗略に思うのだったら、こんな目をしてまで、今夜ここに伺ったりしないでしょうが。

二 あとのことを顧みず参ったのです。

三 然るべき用意をして、近い所にお移し申しましょう。たやすく通えるような都の邸宅に引き取ろう、の意。

四 (今から) これからさき途絶えがあろうとお考えらしいのは、噂に聞いた浮気なお心のほどがもうはっきり見えているのだろうか。中の君の思い。

五 ど自分の頼りないお身の上を思うと、いろいろと不安で悲しいのだった。

六 (匂宮は) 妻戸を押し開けなさって、ご一緒に(中の君を) 誘って、端近に出てご覧になると。

匂宮、中の君に一層惹かれる

七 いつものように、柴を積んだ船がひっそりと行き来する、その跡に残る白波など。「柴積む船」は、橋姫二八五頁参照。「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく船のあとの白波」(『拾遺集』巻二十哀傷、沙弥満誓。『古今六帖』三、舟。『和漢朗詠集』巻下、無常)

八 東の山の端が次第に明るくなると、女君(中の君)のお顔立ちは何一つ難なくかわいらしくて。

九 気のせいで、我が身内のお方(女一の宮)が、とても立派に思えるのだ。女一の宮は、当時の最高の女性。薫も理想の方と仰いでいた(六二頁参照)。

ながら来られぬ日もあろうが　どうしたことか　とお案じなさるな

がらとだえあらむを、いかなるにか、とおぼすな。一 夢にてもおろかならむに、かくまでも参り来まじきを、私の本心をお疑いになって心のほどやいかがと疑ひて、思ひ乱れたまはむが心苦しさに、二 身を捨ててなむ。いつもこうは脱け出せないでしょう常にかくはえまどひありかじ。三 さるべきさまにて近くわたしたてまつらむ」と、い真心こめて深く聞こえたまへど、四 絶え間あるべくおぼさるらむは、音に聞きし御心のほどしるきにや、と心おかれて疑われて、五 わが御ありさまから、さまざまもの嘆かしくてなむありける。

明けゆくほどの空に、妻戸おしあけたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所からのあはれ多く添ひて、山里らしい風情もひとしお深くて七 例の、柴積む船のかすかに行き交ふあとの白波、目馴れずもある住今まであまり見たこともない住まいの有様よと多情なご性分とて風変りでおもしろくお思いになるひのさまかなと、色なる御心には、をかしくおぼしなさる。八 山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御容貌のまほにうつくしげにて、限上もなく大切にお守りしている皇女といっても　これくらいのお美しさでいらっしゃるのだろうりなくいつきする忝たらむ姫宮も、かばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、九 わが方ざまのいといつくしきぞかし、こまやかなるに

一〇 宇治橋が大層古びたたたずまいで、かなたに見える光景など。宇治橋は、大化二年（六四六）僧道昭によって初めて架けられたが、その後しばしば流失し、架け替えられた。京都・奈良間の交通の要所。歌枕。「ちはやぶる宇治の橋守汝をしぞあはれとは思ふ年の経ぬれば」（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）

一一 こんなさびしい所に、女の身でどうやって何年もお暮しになれたことか。

一二（中の君は）とても気まり悪い思いで聞いていらっしゃる。身の上を卑下する気持。

一三 男君（匂宮）のご様子が。前に「女君の御容貌の……」とあったのに対する。

中の君も匂宮に惹かれる

一四 思いもかけなかったこととは思いながら、かえってあの昔から馴染みの中納言（薫）よりは気がおけない。以下、中の君の心中に添って述べる。

一五 あの人（薫）は、私ではなく姉君に心を寄せていて。以下、先夜、薫と逢った時のことを回想する。

一六（匂宮は）お噂だけでご想像申していた時は、（薫よりも）一層手の届かぬお方と存じ上げ。

一七 ほんの一行お書き下さるお文のお返事でも、書きにくく思ったのに。匂宮へは、中の君が返事をしていたこと、一三頁注一〇参照。

一八 我ながら（わが心の変りようを）いやなこととお思い知りになる。

暁の別れ

ほひなど（さなど）、うちとけて見まほしう（ゆっくりと見届けたく）、なかなかなるこちす（かえってたまらない気持になる）。水の音なひなつかしからず（音は荒々しくひびき）、宇治橋のいともの古りて見えわたさるるなど、霧晴れゆけば（霧が晴れるにつれて）、いとど荒ましき岸のわたりを（いよいよわびしげな岸辺を見やって）、「かかる所にいかで年を経たまふらむ」（匂宮）など、うち涙ぐまれたまへるを（ふと涙ぐみなさるのを）、いとはづかしと聞きたまふ。

一三 男の御さまの、限りなくなまめかしくきよらにて（この上もなく優雅でお美しくて）、この世のみならず契り頼めきこえたまへば（この世ばかりか来世までも変らぬ夫婦仲とお約束申されるので）、一四 思ひ寄らざりしこととは思ひながら、なかなかかの目馴れたりし中納言のはづかしさよりは（思われなさる）、とおぼえたまふ。一五 かれは思ふかた異にて（近づきにくく気詰りだったのに）、いといたく澄みたるけしきの（ひどくとりすました態度だったのが）、見えくはるかに、一七 一行書き出でたまふ御返りことだにつつましくおぼえしを（長い間お越しがなかったらきっと心細いことだろう）、久しうとだえたまはむは心細からむ（という気持になるのも）、と思ひならるるも、一八 われながらうたてと思ひ知りたまふ。

人々いたく声づくりもよほしきこゆれば（お供の人々咳払いをしてお帰りをお促し申すので）、京におはしまさむほど（京にご帰着の時分が）、

一（あまり明るくなって）きまり悪い思いをせぬうちにと。女のもとから暗いうちに帰るのが、当時の習わし。

二 二人の仲は絶えるはずもないのに、さぞかしあなたは、独り寝の袖を泣き濡らす夜もありましょう。「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）、「忘らるる身を宇治橋の中絶えて人も通はぬ年ぞ経にける」（同巻十五恋五、読人しらず）を踏まえる。

三 私たちの仲の絶えないことを願いつつ、お越しのないあなたを幾夜も待たねばならないのでしょうか。「宇治橋の」は「はるけき」を言い出す序。宇治橋は長さ八十三間（一五〇メートル）といわれ、長い橋とされていた。「絶え」「わたる」は「橋」の縁語。

四 若い女君のお心に灼きつきそうな、世にもまれな美しい朝帰りのお姿を見送って。「朝明の姿」は歌語（一巻夕顔一二七頁注一六参照）。

五（中の君も）隅に置けないお方だこと。男女の間の情にすでに目覚めていることをいう。草子地。

六 今朝は、物の見分けもつく時分なので。「立ち返りつつやすらひたまふ」うちに、時が経ったのである。

七 気のせいか、今一段ご身分がお高いので、宮のお姿は何とも格別でいらっしゃる。

一はしたなからぬほどにと、いと心あわたたしげにて、心よりほかな（ひどく気のせく様子で）（心にもなく来られぬ）らむ夜がれを、かへすがへすのたまふ。（繰り返し繰り返しお慰めになる）

（匂宮）二中絶えむものならなくに橋姫（夜もあろうと）
かたしく袖や夜半に濡らさむ

（立ち去りがたく）（引き返して来てはぐずぐずしていらっしゃる）出でがてに、立ち返りつつやすらひたまふ。

（中君）三絶えせじのわがたのみにや宇治橋の
はるけきなかを待ちわたるべき

言には出でねど、もの嘆かしき御けはひ、限りなくおぼされけり。（口には出さないが）（悲しそうな）（「女君の」ご様子を）（匂宮は）（たまらなくいとしいと思われた）

四若き人の御心にしみぬべく、たぐひすくなげなる朝明の姿を見送りて、名残とまれる御移り香なども、人知れずものあはれなるは、（あとに残る）（匂宮の）（人には言えず何やら恋しいのは）（女房たち）

五されたる御心かな。今朝ぞもののあやめも見ゆるほどにて、人々のぞきて見たてまつる。（匂宮を）「中納言殿は、なつかしくはづかしげなるさまぞ添ひたまへりける。思ひなしの今ひと際にや、この御さまはいとことに」など、めできこゆ。（女房）薫（おやさしくてその上気おくれするほどご立派なところがおありでいらした）（おほめ申し上げる）

匂宮、宇治に通えず
大君、薫の思い

八 帰りの道々も、（匂宮は）いじらしかった（中の君の）ご様子をお思い出しになって。「言には出でねど、もの嘆かしき御けはひ」を、思い出すのである。

九 （せめて）お手紙だけは、毎日毎日、日に何回となくお届け申しあそばす。

一〇 いい加減な気持ではないらしい、と思いながらも。匂宮の愛情を推し量る大君の心。

一一 こんな心配の限りを尽すような目には会わすまいと思っていたのに。

一二 せめて自分だけでも、やはりこんなこと（夫婦仲を案じること）で、嘆きを加えまいと。薫との結婚をあらためて断念する。

一三 （宇治では宮のお越しを）さぞ待ちかねていらっしゃることだろうと、お察しになって。

一四 自分の責任と思って、（姫君たちが）お気の毒なので。

一五 いくら何でも（少々ご無沙汰が続いても）大丈夫と、安心できるのだった。

一六 陰暦九月、晩秋である。

一七 宇治のあたりの野や山のたたずまい。

一八 晩秋初冬の景物。

九月、薫、匂宮を促して、ともに宇治に行く

道すがら、心苦しかりつる御けしきをおぼし出でて、立ちも返りなまほしく、さまあしきまでおぼせど、世の聞こえを忍びて帰らせたまふほどに、えたはやすくもまぎれさせたまはず。御文は明くる日ごとに、あまた返りづつたてまつらせたまふ。おろかにはあらぬにや、と思ひながら、おぼつかなき日数の積るを、いと心尽くしに見じと思ひしものを、身にまさりて心苦しくもあるかなと、姫宮はおぼし嘆かるれど、いとどこの君の思ひ沈みたまはむにより、つれなくもてなして、みづからだに、なほかかること思ひ加へじと、いよいよ深くおぼす。

（途中から引き返し もしたく）（体裁が悪いほど恋しくお思いになるが）（世間の噂をはばかってお帰りあそばしたことだから）（とても簡単には脱け出したりはおできになれない）（お越しのない日が幾日も重なるので）（わが身のこと以上につらいものだと）（ますますご本人の中の君がおふさぎになろうからと案じて）（気にかけていないふりをして）（ご決心になる）

薫

中納言の君も、待ち遠にぞおぼすらむかし、と思ひやりて、わがあやまちにいとほしくて、宮を聞こえおどろかしつつ、絶えず御けしきを見たまふに、いといたく思ほし入れたるさまなれば、さりともと、うしろやすかりけり。

（匂宮に対していつもご警告申しては）（ほんとに大層中の君に打ち込んでいられる様子なので）

九月十日のほどなれば、野山のけしきも思ひやらるるに、時雨め

（しきりに思われるのに）

一 匂宮は、ひとしお気もそぞろに物思わしげになさって、どうしたものかと、わがお心を定めかねて、お出かけをためらっていらっしゃる。「伊勢の海に釣する海士の浮子なれや心一つを定めかねつる」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）

二 ちょうどそんな折でもあろうと察して、（薫が）参上なさった。匂宮を援けて、宇治に連れ出す積り。

三 「初時雨ふるの山里いかならむ住む人さへや袖の濡るらむ」（『新千載集』巻六冬、寛和二年殿上の歌合　読人しらず）。「ふるの山里」は、大和国石上布留の地。「降る」と掛詞。ここも「この時雨に、宇治の山里ではいかがお思いでしょう。お越しのないのをさぞお嘆きでしょう」というのである。

四 秋も終り方の風情の、身に沁むばかりものさびしいのに。前に「九月十日のほど」とあった。

五 （時雨に）車中、しっとりとなさった二人の匂いは、この世のものならず優艶で。匂いは、湿気により一層際立つ。匂宮、薫の芳香の名高さは、匂兵部卿の巻に詳しい。

六 山家の者たちは、どうしてうろたえぬことがあろう。「山がつ」は、山荘に仕える者たち。

七 この日頃、お越しがないのをぶつぶつ言っていたのに、その気配もなくにこにこして。

八 京に、然るべきお邸に、こちらを辞めて、散り散りにご奉公に上がっていた娘たちや姪といった者を。

待ち喜ぶ山荘の人々

きてかきくらし、空のむら雲恐ろしげなる夕暮、宮いとど静心なくながめたまひて、いかにせむと、御心ひとつを出で立ちかねたまふ。をりおしはかりて参りたまへり。「ふるの山里いかならむ」と、おどろかしきこえたまふ。いとうれしとおぼして、もろともに誘ひたまへば、例の、ひとつ御車にておはす。

（あたりも暗く）（むらむらとひろがる黒雲も恐ろしげな夕方に）（お気）（薫）（ど一緒にと）（匂宮は）（をひいておあげになる）（例のように）（ご同車なさってお出掛けになる）

分け入りたまふままにぞ、まいてながめたまふらむ心のうち、いとどおしはかられたまふ。道のほども、ただこのことの心苦しきをかたらひきこえたまふ。たそかれ時のいみじく心細げなるに、雨は冷やかにうちそそきて、秋果つるけしきのすごきに、うちしめり濡れたまへる匂ひどもは、世のものに似ず艶にて、うち連れたまへるを、山がつどもは、いかが心まどひもせざらむ。

（野山を）（匂宮は）（自分以上に物思いなさっていよう中の君のお胸の内が）（一層よく推し量られなさる）（道々も）（匂宮は）（しきりにそんな思いをさせるのが）（つらいと打ち明けたお話を申される）（夕暮れ時で）（大層心細い感じがする上に）（降りかかって）（そのお二人がおそろいなの）（を）

女房たちは

女ばら、日ごろうちつぶやきつる名残なく笑みさかえつつ、御座ひきつくろひなどす。京に、さるべき所々に行き散りたる娘ども、姪だつ人、二三人尋ねよせて参らせたり。年ごろあなづりきこえけ

（探し出してきてお仕えさせてある）（長年）（姫君たちを）（見くびり申してい）

九 浅はかな者たち。娘や姪たち。
一〇 思いもかけぬ結構なお客様と目を見張っている。
一一（こんな時雨の中をと）折も折とてうれしくお思い申されるが、よけいな人（薫）がご一緒なのが。「さかしら人」は、よけいなことをする人。自分に懸想したりしている薫。
一二 なるほど、あちらはこうではいらっしゃらなかった。匂宮がさっさと中の君をわがものにしたこと。
一三 匂宮を、山里なりに、格別丁重に簾中（中の君のお部屋）にお迎え申し上げて。婿君としての扱い。
一四 こちらのお方（薫）は、主人側として内輪の気やすいお扱いとはいうものの、いまだに客間の落着かない席に遠ざけてお置きなので。廂の間に招じられているのであろう。

大君、薫と物越しに対面

一五（大君は）襖越しに、直接応対なさる。
一六 めったに冗談もならぬことです。もういい加減にして頂きたい、というほどの気持。「ありぬやとこころみがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき」（『古今集』巻十九雑体、誹諧歌、読人しらず）を踏まえる。
一七 妹の中の君のお身の上のことでも、大層お心を痛め悲しみなさって。匂宮の訪れが途絶えがちなことを嘆く。
一八 やはり一途に、どうかして、妹のように、男君に見えることをすまい。以下、大君の思い。

る心あさき人々、めづらかなる客人と思ひおどろきたり。姫宮も、
一〇 一一 をりうれしく思ひきこえたまふに、さかしら人の添ひたまへるぞ、
はづかしくもありぬべく、なまわづらはしく思へど、心ばへののどかにもの深くものしたまふを、げに人はかくはおはせざりけり、と見あはせたまふに、ありがたしと思ひ知らる。
一二 一三 宮を、所につけてはいとことにかしづき入れたてまつりて、この君は、主人方に心やすくもてなしたまふものから、まだ客人居のかりそめなる方に出だし放ちたまへれば、いとからしと思ひたまへり。怨みたまふもさすがにいとほしくて、物越に対面したまふ。「たはぶれにくくもあるかな。かくてのみや」と、いみじく怨みきこえたまふ。やうやうことわり知りたまひにたれど、人の御上にても、ものをいみじく思ひ沈みたまひて、いとどかかるかたを憂きものに思ひ果てて、なほひたぶるに、いかでかくうちとけじ、あはれと思ふ人の御心も、かならずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ、われ

たりとして思慮深くていらっしゃるのを
お比べになるにつけ
何となく面倒にお思いになるけれども
いかにも気詰りなことでもあり
[薫を]世に稀なお方とよくお分りになる
[薫は]気立てがゆっ
[薫は]何ときびしい扱いよとお思いになる
それをお怨みなさるのもさすがにお気の毒に思われて
このままいつまで
人の世の道理もお分りになっているが
[大君は]
いよいよ結婚といった男女の関係をつらいものと思い込まれて
うれしいと思うこの方のお気持にしても
[夫婦となれば]きっとひどいと恨むようなことになるのだろう
お互い

一 もとの気持を失わないで通したいもの。薫と今まで通りの間柄で、互いの好意を損わずに過したい。

二 （大君は）それとはなく、やはりそうだったのか（案の定匂宮のご無沙汰をお嘆きだったのか）と分るようにおっしゃるので。

三 自分（薫）が、絶えず宮のご本心のほどを窺っていることなど。前に「宮を聞こえおどろかしつつ、絶えず御けしきを見たまふに、いといたく思ほし入れたるさまなれば」（六九頁）と述べるところがあった。大君の心痛を慰めようとして言うのである。

四 やはりこのように物思いを重ねていますので。思いがけぬ中の君の結婚に加えて匂宮の夜離れと、心労が加わっている。

五 （大君には）きっと何かお考えがあるのだろう、たやすく他の男に靡きなさることはよもやあるまいと。薫の心中。前に、大君は匂宮の方にひかれているのであろうと疑うところがあった（四二頁参照）。

六 気の長いお方。薫のこと。

七 いつぞやのように何の隔てもなくて、お話し申しましょう。一周忌前の訪問の折、屏風を押し開けて入ったことをいう（二一頁～二六頁参照）。

八 いつもより、鏡に映る自分の顔を見ては、気がひけてたまらない頃ですから。物思いにやつれていると言う。「夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に恥づる身なれば」（『古今集』巻十四恋四、伊勢）による。

心用意をしっかりとなさっていられる

も人も見おとさず、心違はでやみにしがな、と思ふ心づかひ深くしたまへり。宮の御ありさまなども問ひきこえたまへば、かすめつつ、さればよ、とおぼしくのたまへば、いとほしくて、おぼしたる御さま、けしきを見ありくやうなど、語りきこえたまふ。

[大君は] いつもより隔てなく何やかやお話しになって

例よりは心うつくしくかたらひて、「なほかくもの思ひ加ふるほど、すこしここちもしづまりて聞こえむ」とのたまふ。人憎く気遠くはもて離れぬものから、障子の固めもいと強し、しひて破らむをば、つらくいみじからむ、とおぼしたれば、おぼさるるやうこそはあらめ、軽々しく異ざまになびきたまふことはた、世にあらじと、心のどかなる人は、さいへど、いとよく思ひしづめたまふ。「ただいとおぼつかなく、もの隔てたるなむ、胸あかぬここちするを、ありしやうにて聞こえむ」とせめたまへど、「常よりもわが面影に恥づるころなれば、うとましと見たまひてむも、さすがに苦しきは、いかなるにか」と、ほのかにうち笑ひたまへるけはひなど、あやし

少し気分も落着きましてからお話し申しましょう

憎ていに素っ気なく突き放したりはせぬものの

襖もしっかり錠をしてあるし

無理に破って入ったりしたら

情けなくとても悲しいこと

[大君が]

本当によくお気持をお静めになる

物越しのお話をするのは

胸の晴れぬ思いがしますから

もうひどく頼りなく

いやなとお思いになるかもしれませんのが

やはりつらく思われますのは

どうしたことでしょう

[匂宮が] 深くご執心のご様子や

[薫は] お気の毒で

[匂宮のお通いの様子なども] [大君に]

[大君の]

おせがみになるが

えも言え

九 そんなうれしいお気持に、油断させられ申して、果てはどうなってしまうわが身なのでしょう。

一〇 例によって、遠山鳥のように別々のまま夜が明けた。「遠山鳥」は、五二頁注一一参照。

一一（薫が）まさかまだ独り寝だろうともお思いにならず。「旅寝」は、わが家ならぬ所に外泊すること。大君に迎え入れられていないとは想像もできない。

一二 中の君。薫と大君とはまだ他人と思っている。

匂宮、中の君を重く扱おうと、苦慮する

一三 女の側では。姫君たち。

一四（捨てられて）世間の物笑いになるのかしら。

一五 なるほど気苦労の絶えないお気の毒なこと、と思われる。大君の心労いかにも、と同情する筆致。

一六（さりとて）京にも、（中の君が）人目に立たずお移りになれるような家も、さすがに見当らない。

一七 六条の院には、右大臣（夕霧）が、その一廓にお住まいで。夕霧は、六条の院丑寅の町を自邸とし、落葉の宮を住まわせている（匂兵部卿一六四頁）。

一八 あれほどぜひにとお望みの六の君とのご縁組のことを、匂宮がお心にもおかけにならぬので。（椎本三四八頁参照）

一九 父帝や母后（明石の中宮）にも六の君との結婚を愁訴申し上げなさっているようなので。

二〇 中の君のような意外な人を大っぴらに夫人としてお迎えになるのも。

ず慕わしく思われる

うなつかしくおぼゆ。「かかる御心にたゆめられたてまつりて、つ（薫）ひにいかになるべき身にか」と嘆きがちにて、しきりに嘆息をしては一〇例の、遠山鳥にて明けぬ。宮は、匂宮まだ旅寝なるらむともおぼさで、「中納言の、主人方（匂宮）薫わが家顔してゆったりと構えている様子がうらやましいことだに心のどかなるけしきこそうらやましけれ」とのたまへば、女君、おかしいとお聞きになる

あやしと聞きたまふ。

無理な算段をしてお越しになっては

わりなくておはしましては、すぐにご帰京なさるのがほどなく帰りたまふが、飽かず苦し（もの足りずつらいので）匂宮も何かと大層お悩みになっている

きに、宮ももの（そんな宮のお心の内をご存しないので）をいみじくおぼしたり。御心のうちを知りたまはね

ば、女方（一三）には、またいかならむ、（一四）人笑へにや、と思ひ嘆きたまへば、

（またどうなることだろう）

げに心尽くしに苦しげなるわざかな、と見ゆ。（一六）京にも、隠ろへてわ（一五）

たりたまふべき所もさすがになし。（一七）六条の院には、右の大殿、片つ

方に住みたまひて、さばかりいかでとおぼしたる六の君の御ことを（一八）

おぼしよらぬに、なまうらめしと思ひきこえたまふべかめり。すき（いささかお恨みにお思い申していらっしゃるようだ）（浮気がすぎるお振舞だと）

ずきしき御さまと、ゆるしなくそしりきこえたまひて、内裏わたり（一九）

にも愁へきこえたまふべかめれば、いよいよ、おぼえなくて出だし（一〇）

一　並々にお思いの女だったら、宮仕えさせるといったことで、かえって扱いやすい。中宮などに仕えさせておく方法がある。

二　しかし、中の君をその程度のお相手とはお思いになれず。

三　帝や后がかねてお心積りの通りにもなられたら。立坊を予定されていることを言う。

四　（将来即位の暁には）誰よりも高い位につけてあげよう。立后を考えているのである。

五　薫の本邸。去年春焼亡のこと、椎本三四八頁参照。

六　然るべき形で、大君をお移し申そう。夫人として世間に認められるような迎え方をするつもり。

七　ほんとに臣下の身は気楽なものだ。以下「……あらせたてまつらばや」まで、薫の心中の思い。

八　（匂宮も中の君も）お互いにお心を痛めていらっしゃるご様子なのも、お気の毒で。

九　女君の側にとっては、別に問題もあるまい。

薫の後見

する方たまはむも、憚ることといと多かり。（一）なべてにおぼす人の際は、宮仕への筋にて、なかなか心やすげなり。（二）さやうの並々にはおぼされず、もし世の中うつりて、（三）帝后のおぼしおきつるままにもおはしまさば、（四）人より高きさまにこそなさめ、など、ただ今は、いとはなやかに、心にかかりたまへるままに、もてなさむかたなく苦しかりけり。

（はばかさし障りが大酒多い）（御代が替って）（今のところは派手やかなお扱いをと）（「中君が」お気に召しているあまりに）（どうする方法もなくせつないのであった）

薫

中納言は、（五）三条の宮造り果てて、（六）さるべきさまにてわたしたてまつらむ、とおぼす。（七）げにただ人は心やすかりけり、かくいと心苦しき御けしきながら、やすからず忍びたまふからに、（八）かたみに思ひなやみたまふべかめるも、心苦しくて、忍びてかく通ひたまふよしを、中宮などにも漏らし聞こしめさせて、しばしの御騒がれはいとほしくとも、女方の御ためは咎もあらじ、いとかく夜をだに明かしたまはぬ苦しげさよ、いみじくもてなしてあらせたてまつらばや、など思ひて、あながちにも隠ろへず。（九）

（「匂宮が」このようにおいたわしいまでにご執心なのに）（周囲を気にして人目を忍んでおいでなので）（ひと言お耳にお入れ申して）（一時やいやい言われなさるのはお気の毒で）（内々にこうして宇治にお通いのことを）（ろくにこう夜も明かさずお帰りになるとはさぞおつらいことだろう）（ずいぶん立派にお世話してさし上げたいものだ）（無理にこそこそなさったりもしない）

一〇 夏、冬とあり、ここは、十月一日、衣服、調度を冬の装いに改めること。夏の更衣は、四月一日。
一一 御帳台（寝台）の垂絹。（一巻図録九参照）
一二 御簾の内側に垂れる絹の帳。（同右参照）
一三 さし当って入用がございまして。
一四 薫の乳母。
一五 網代もちょうどよい折でしょうと。「網代」は宇治の名物（橋姫二六三頁注一三参照）。
一六 紅葉をご覧になるよう、計画を立てておあげになる。「宇治山の紅葉を見ずは長月の過ぎゆく日をも知らずぞあらまし」（『後撰集』巻七秋下、長月のつごもりの日、紅葉に氷魚をつけておこせてはべりければ　千兼が女）。匂宮が去年から宇治の紅葉狩を望んでいたことは、椎本三一八頁、三二六～七頁参照。

匂宮、宇治の紅葉狩

一七 内輪の匂宮家のご家来衆。
一八 四位、五位で、宮中殿上の間伺候を許された者。
一九 右大臣（夕霧）の子息の宰相の中将。もとの蔵人の少将。（竹河二五〇頁注四参照）
二〇 官は参議（唐名宰相）、位は三位以上の者。
二一 （匂宮は）きっとそちら（宇治の宮邸）で、中休みにご一泊なさいましょうから。
二二 去年の春も、花見にお邸に伺った誰彼が。匂宮が初瀬詣での帰途、宇治に立ち寄った時、薫とともに山荘を訪れた人々（椎本三〇八～三一〇頁参照）。

薫、宇治の宮にも用意をさせる

更衣など、はかばかしく誰かはあつかふらむ、などおぼして、御帳の帷、壁代など、三条の宮造り果てて、わたりたまはむ心まうけに、しおかせたまへるを、「まづさるべき用なむ」など、いと忍びて聞こえたまひて、たてまつれたまふ。さまざまなる女房の装束、御乳母などにものたまひつつ、わざともせさせたまひけり。

[薫は] 誰がお世話するのだろう　お引っ越しなさる準備に　用意させておかれたのを　[薫] 一三　あれこれの女房の衣裳まで　ご相談なさっては　わざわざにも作らせたりなさった　一四　一五

十月朔日ころ、網代もをかしきほどならむと、そそのかしきこえたまひて、紅葉御覧ずべく申し定めたまふ。親しき宮人ども、殿上人のむつましくおぼす限り、いと忍びて、とおぼせど、所狭き御勢なれば、おのづからこと広ごりて、右の大殿の宰相の中将参りたまふ。さてはこの中納言ばかりぞ、上達部はつかうまつりたまふ。ただ人は多かり。

上旬　[薫は] 宇治行きをお勧め申し上げなさって　一六　親しく思われる者だけで　ご威勢なので　いつのまにか大げさなことになって　一七　一八　一九　[匂宮は]　[匂宮が]　大した　お供をお勤めになる　二〇　公卿以下の人は大勢だった

宇治の宮には　（薫）二一

かしこには、「論なく中宿したまはむを、さるべきさまにおぼせ。さきの春も、花見に尋ね参り来しこれかれ、かかるたよりにことよせて、時雨のまぎれに見たてまつりあらはすやうもぞはべる」など、

そのお積りでいらして下さい　こんなついでをちょうどよい折と　時雨の雨宿りに紛れてお姿などもおのぞき申すかもしれませんよ　二二

一 新しい御簾に掛け替え。以下、匂宮一行を待ち受ける宇治の宮邸のさま。

二 遣水（庭に流す引き水）の水草を取り払わせたりなさる。水の流れをよくするのである。

三 風情のあるお摘みや酒の肴など。「くだもの」は、木の実、果実、菓子などの軽食。薫からの贈り物。

四 （こう何もかも薫の世話になるのは）考えてみれば奥ゆかしさも何もないことだが。

五 （匂宮一行の人々が）川を船で上り下りし、おもしろく合奏なさるのも聞えてくる。以下も、宇治の宮邸の側から書く。

六 そちら側に出ていって。川の見える方の廂の御簾際まで出てゆく。

七 匂宮の御座船。屋形船の屋根に紅葉を葺く体。

八 世の人が、宮のご威勢に服し、下にも置かず大切にお仕え申している様子は。

九 格別丁重で盛んなのをご覧になるにつけても。主語は、宇治の姫君たち。

一〇 いかにも年に一度の七夕の逢瀬ほどでもよいから、こんな彦星の光り輝くばかりのお方をお迎えしたいもの、と思われた。宮の訪れの間遠さを怨む気持も忘れ去った様子。

一一 大学の博士。ここは文章博士であろう。（三巻少女二二三頁注一五参照）

匂宮の中宿り、果せず

こまごまとご注意してさし上げられた　掃除をし

こまやかに聞こえたまへり。御簾かけかへ、ここかしこかき払ひ、

取りのけ

岩がくれに積れる紅葉の朽葉すこしはるけ、遣水の水草払はせなど

必要な手伝いの人　「薫から」

ぞしたまふ。三よしあるくだもの、肴など、さるべき人などもたてま

仕方がない　これも前世か

つれたまへり。四かつはゆかしげなけれど、いかがはせむ、これもさ

「大君は」あきらめて　お心積りをしていらっしゃった　らの定めなのだろう

るべきにこそは、と思ひゆるして、心まうけしたまへり。

五 船にてのぼりくだり、おもしろく遊びたまふも聞こゆ。ほのぼの

ちらほらとそ　若い女房たち　の様子が見えるのを

ありさま見ゆるを、六そなたに立ち出でて、若き人々見たてまつる。

はっきり見分けられないが　匂宮ご本人のお姿は

正身の御ありさまは、それと見わかねども、紅葉を葺きたる船の飾

錦かと思われるのに　さまざまに吹き立てる笛の

りの、錦と見ゆるに、声々吹き出づるものの音ども、風につきてお

風に乗って聞えてくるのは騒々しいほど賑やかに思われる

どろおどろしきまでおぼゆ。八世人のなびきかしづきたてまつるさま、

こんなご微行の旅先でもかく忍びたまへる道にも、九いとことにいつくしきを見たまふにも、

一〇 げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ、とおぼえたり。

漢詩をお作らせになる積りで　お供していた　夕暮れ

文作らせたまふべき心まうけに、一一博士などもさぶらひけり。たそ

一二 お船を（岸に）漕ぎ寄せて演奏をしては、また詩をお作りになる。宇治の宮邸の対岸、夕霧の別邸であろう（椎本三〇五頁参照）。

一三 雅楽の曲名。黄鐘調で、船楽。海青楽とも。

一四 「いかなればあふみの海のかかりてふ人をみるめの絶えて生ひねば」（出典未詳）による。近江（「逢ふ身」の掛詞）の海、すなわち琵琶湖には、海藻の海松布が生えないので（「見る目」の掛詞）、海松布（見る目）なし、の意で、中の君に逢えぬことを嘆く。

一五 遠くの人、の意。対岸の中の君のこと。「七夕の天の戸わたる今宵さへ遠方人のつれなかるらむ」（『後撰集』巻五秋上、読人しらず。『朝忠集』）。前に匂宮が八の宮と交わした歌にも「遠方」が詠み込まれていた（椎本三〇八頁注五参照）。

一六 時節にふさわしい詩題を出して、（人々は）詩句を小声で口ずさんだり朗誦したりしている。作詩のさま。題は、博士などが出す。

一七 前出の宰相の中将の兄の衛門の督。夕霧の長男（六巻付録系図二参照）。

一八 勅命により、上皇や摂関以下重臣に、護衛のため賜る武士。弓箭を帯びて従う。衛門の督には四人。

一九 このような（親王のご遊覧といった）ご他出は。以下、衛門の督参上にいたったいきさつを述べる。

二〇 今日はこのまま逗留して、と匂宮は思われるのに。

二一 中宮職の長官。従四位下相当。

匂宮、翌日も、中の君を訪えず

時に かれ時に、御船さし寄せて遊びつつ文作りたまふ。紅葉を薄く濃く[冠に] 挿して かざして、海仙楽といふものを吹きて、皆はそれぞれ楽しそうな様子であるのに おのおの心ゆきたるけしきなるに、宮は、匂宮 あふみの海のこちして、遠方人の恨みいかにとの どんなにお恨みかとば かり お心もそぞろである み、御心そらなり。時につけたる題出だして、うそぶき誦じあへり。

人々の騒ぎが少し静まってからお出でになるようにと 人のまよひすこししづめておはせむと、中納言 薫 もおぼして、さる そのよ うな段取りをお打ち合せしていられる時に べきやうに聞こえたまふほどに、内裏より、中宮の仰せ言にて、宰相 明石の中宮 の御兄の衛門の督、ことことしき ご大層な装いの 随身ひき連れて、うるはしきさ 堅苦しい行装を整え て まして参りたまへり。かうやうの御ありきは、忍びたまふとすれど、 内々になさろうとしても いつのまにか大げさなことになって おのづからこと広ごりて、のちの例にもなるわざなるを、重々しき 前例にもなるものだのに 人数あまたもなくて、にはかにおはしましにけるを、聞こしめしお 匂宮が 宇治に どろきて、殿上人あまた具して参りたるに、はしたなくなりぬ。宮 衛門督が 従えて参上したので 具合の悪いことになった 遊楽の楽しさも消し飛んでしまった そんな宮のお気 も中納言も、苦しとおぼして、ものの興もなくなりぬ。御心のうち 困ってしまわれて 持を 人々は をば知らず、酔ひ乱れて遊び明かしつ。 その夜は

今日はかくてとおぼすに、また、宮の大夫、さらぬ殿上人など、 そのほかの

一 数にも入らぬしがない身の上では、結構なお方とお付き合いするなんて、叶わぬことだったのだと。以下、姫君たちの心を述べる。

二 遠く離れ離れに逢えなくて月日の経つのは、お越しになれないのももっともと思われ、いくら何でも（ずっとこうではあるまい）と、みずから慰めていらっしゃるのに。「よそにて」は次の「近きほどに」と響き合う。

三 網代の氷魚も匂宮に心をお寄せして、たくさん獲れ。氷魚は網代に寄るので、「心寄せ……」という。「いかでなほ網代の氷魚に言問はむ何によりてか我をとはぬと」（『拾遺集』巻十七雑秋、蔵人所にさぶらひける人の、氷魚の使にまかりけるとて、京にはべりながら音もしはべらざりければ　修理）

四 色とりどりに紅葉した木の葉を下に敷いて、賞味するのを。「水原抄ニ云ク庖丁ノ譜ニ氷魚ニハ紅葉ヲ敷くと云々」（『花鳥余情』所引）

五 皆に調子を合せて、（表面は）楽し　**匂宮の嘆き**そうなご遊覧だが。

六 空ばかり仰いでお悲しみでいらっしゃると。恋する人の物思いのさま。「大空は恋しき人のかたみかはもの思ふごとにながめらるらむ」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、酒井人真）

七 お目当ての年古りた宮家（姫君たちの山荘）の梢は。

〔中宮が〕お迎えに差し向けられた〔匂宮は〕気が気でなく残念で（お帰りになる気もなさらない）

あまたたてまつれたまへり。心あわたたしくくちをしくて、帰りたまはむそらなし。かしこには御文をぞたてまつれたまふ。（恋文らしい風中の君には）をかしや流めいたことも書かず）かなることもなく、（真剣な様子で）いとまめだちて、おぼしけることどもをこまごまと書き続けたまへれど、（人目も多く出立の間際では）人目しげく騒がしからむに、とて、〔中君からは〕御返りなし。数ならぬありさまにては、めでたき御あたりにまじらはむ、かひなきわざかなと、（今まで以上に身にしみてお分りになる）いとどおぼし知りたまふ。よそにて隔たる月日は、おぼつかなさもことわりに、さりともなどなぐさめたまふを、（こんな近所まで賑やかにやってこられて）近きほどにののしりおはして、（知らぬ顔で帰ってしまわれるのを）つれなく過ぎたまふなむ、つらくも（ひどいなさりようとも心残りにもさまざまに思い悩みなさる）くちをしくも思ひ乱れたまふ。

匂宮

宮は、ましていぶせくわりなしとおぼすこと限りなし。網代の氷魚も心寄せたてまつりて、いろいろの木の葉にかきまぜもてあそぶを、下人などはいとをかしきことに思へれば、人に従ひつつ、心ゆく御ありきに、（匂宮ご本人のお気持はといえば）みづからの御ここちは、（胸もふさがりたまらなくつらいと）胸のみつとふたがりて、空をのみながめたまふに、この古宮の梢は、いとことにおもしろく、（ただもう胸がいっぱいになって）（取り分け大層趣があって）

八 緑の常磐木（常緑樹）にはいからまっている蔦の紅葉した色なども、何やら奥深げに見えて、遠目にものさびしそうなのを。

九 なまじ（匂宮のご来訪があろうと）先方にあてにおさせ申したのに、嘆かわしいことになったと思う。

一〇 去年の春、匂宮の初瀬詣でにお供して宇治に中宿りした人々。（椎本三〇五～三一一頁参照）

宇治を去る人々の唱和

一一 父宮に先立たれて、さびしい山里に物思いに沈んでいられるであろう姫君たちの心細さはいかばかりかと話題にする。当時は、まだ八の宮在世中であった。

一二 姫君たちのお噂は、こんな山奥ではあるけれども、自然に伝わるものだから。

一三 箏の琴の名手で、亡き八の宮が朝に夕に弾くようにおしつけでいらしたから。「箏」は、十三絃の琴。これを習っていたのは、中の君である（橋姫二六一頁参照）。

一四 先だっても花盛りの折に一目見たあの木のもと―姫君たちも、この秋はさびしくお暮しでしょうか。「木のもと」に「子」を響かせる。

一五 薫を主人側（宮家側）と思って詠みかけてくるので。宰相の中将は、匂宮と中の君のことはまだ知らぬ趣。

一六 すぐに散るはかない桜が教えてくれます、美しく咲く花も紅葉も同じこと、無常な世であると。

常磐木（八）にはひまじれる蔦の色なども、もの深げに見えて、遠目さへすごげなるを、中納言の君も、なかなかたのめきこえけるを、憂（九）はしきわざかな、とおぼゆ。

去年（一〇）の春御供なりし君たちは、花盛りの美しさを思い出して花の色を思ひ出でて、後（一一）れてここになながめたまふらむ心細さを言ふ。かう忍び忍びに通ひたまふと、小耳に挟んでいる者もいるのだろうほの聞きたるもあるべし。心知らぬもまじりて、おほかたにとやかくやと、人（一二）の御上は、かかる山隠れなれど、おのづから聞こゆるものなれば、「（人々）大層すばらしいお方でいられるということだいとをかしげにこそものしたまふなれ。箏（一三）の琴上手にて、故宮の明け暮れ遊びならはしたまひければ」など、口々に言ふ。

宰相の中将、

いつぞやも花のさかりにひとめ見し（一四）
　木のもとさへや秋はさびしき

主人方（一五）と思ひて言へば、中納言、

桜こそおもひ知らすれ咲きにほふ（一六）

一　どこから秋は立ち去っていってしまったのか、私たちは、この山里の紅葉のもとを、こんなにも去りがたい思いでいるのに。今は冬「十月朔日ころ」（七五頁）である。

二　昔、お目にかかったことのある八の宮もお亡くなりになった山荘の岩垣に、昔に変らず這いかかっている葛なのか。「岩垣」は、垣根のようにめぐる岩。川に臨む八の宮邸の外観であろう。「葛」は、マメ科の蔓草。「奥山の岩垣紅葉散りぬべし照る日の光見る時なくて」（『古今集』巻五秋下、藤原関雄）「見し人も忘れのみゆくふる里に心ながくも来たる春かな」（『後拾遺集』巻十七雑三、藤原義懐）

三　（宮の大夫は）お供の中でも老人で涙もろく、すぐお泣きになる。

四　秋も終って紅葉も散り果て、さびしさのまさる木の下を、あまり激しく吹き払ってくれるな、峰の松風よ。前に「空をのみながめたまふに、この古宮の梢は、いとことにおもしろく」（七八頁）とあった眼前の景によって詠み、「木のもと」に、中の君への思いをこめる。

花ももみぢも常ならぬ世を

衛門の督、

一　いづこより秋はゆきけむ山里の
　紅葉のかげは過ぎ憂きものを

宮の大夫、

二　見し人もなき山里の岩かきに
　心ながくも這へる葛かな

三　中に老いしらひてうち泣きたまふ。親王の若くおはしける世のことなど、思ひ出づるなめり。宮、

四　秋はててさびしさまさる木のもとを
　吹きなすぐしそ峰の松風

とて、いといたく涙ぐみたまへるを、ほのかに知る人は、げに深くおぼすなりけり、今日のたよりを過ぐしたまふ心苦しさ、と見たてまつる人あれど、ことことしく引き続きて、えおはしまし寄らず。

（八の宮の若くていらした時分のことなどを思い出している様子だ　匂宮　うすうす事情を知る人は　ほんとに心からご執心なのだ　今日のせっかくの好機を無駄になさるとはお気の毒な　とご同情申し上げる人もあるが　大勢一行のお車を連ねているので　とてもお立ち寄りにはなれない）

五 一同の作った漢詩の、おもしろい詩句をあれこれと朗誦し。

六 このような酔余の詩歌に、まして出来のよい作があろうはずがない。ほんの一部をここに書き留めましたが、それもよい歌ではありません。省筆をことわり、先にあげた五首の歌について言い訳する草子地。

七 （匂宮ご一行の）素通りして帰ってゆかれる気配を、遠くなるまで聞える先払いの人々の声で、胸も波立つ思いになられる。

大君の無念の思い

八 案の定、噂に聞く通り、月草のように移り気なお方だったのだ。「月草」は、ツユクサ科の一年草。夏、青色の花を開き、花汁を藍色の染料などに用いた。すぐ色がさめるので、移ろいやすい心に喩える。「いで人は言のみぞよき月草の移し心は色ことにして」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）。以下、次頁四行目の「人笑へにをこがましきこと」まで大君の心中。

九 思ってもいない女を、さも思っているふうに、言葉上手にあれこれ言うものだと。

一〇 ここの取るに足りない女房たちが、昔話に話しているのを。

一一 何ごとにつけ、生れの違う身分になれば。皇族といった格別高貴な身分の人は。

一二 このように親しく婿君にとまでは、お考えになっていなかったのに。八の宮は生前、一通りの社交として付き合うよう言っていた（椎本三一一頁参照）。

五 作りける文のおもしろき所々うち誦じ、大和歌もことにつけて多かれど、六 かうやうの酔ひのまぎれに、ましてはかばかしきことあらむやは。片端書きとどめてだに見苦しくなむ。

興を催すにつけて

宇治の宮では

かしこには、過ぎたまひぬるけはひを、遠くなるまで聞こゆる前駆の声々、ただならずおぼえたまふ。心まうけしつる人々も、いとくちをしと思へり。姫宮はまして、なほ音に聞く月草の色なる御心なりけり、ほのかに人の言ふを聞けば、男といふものは、虚言をこそいとよくすなれ、思はぬ人を思ふ顔にとりなす言の葉多かるものと、一〇 この人数ならぬ女ばらの、昔物語に言ふを、さるなほなほしきなかにこそは、一一 けしからぬ心あるもまじるらめ、何ごとも筋ことなる際になりぬれば、人の聞き思ふことつつましく、所狭かるべきものと思ひしは、さしもあるまじきわざなりけり、あだめきたまへるやうに、故宮も聞き伝へたまひて、一二 かやうに気近きほどまでは、おぼし寄らざりしものを、あやしきまで心深げにのたまひわたり、思

心積りをしていた女房たちも

とても

残念なことと思っている

大君

ちらほら女房の話すのを耳にするのに

世間の男というものは

を平気でつくのだそうな

不心得な料簡の男も時にはいようが

の中には

外聞や人の思惑がはばかられて

我儘はできない

ものと思っていたのに

そうとも限らないものなのだった

亡き父宮も噂をお耳になさっていて

ふうに

匂宮は浮気なお方だという

〔匂宮が〕不思議なほど熱心に何度もお文をお寄こしになり

揚句に

一 不仕合せな身の上をひとしお嘆くことになるとは、何と情けないこと。匂宮一行に無視されたしがない身の上を嘆く。

二 こんな期待はずれの宮のなさりようを、またあの中納言も何とお思いになろう。田舎育ちの中の君が嫌われたとお思いであろうか、と案じる気持。

三 気分も悪くなって。

中の君の思い

四 当の中の君ご本人は。

五 宮のお越しがなくても、よんどころないご用がおできになったのだろうと。

六 (とはいえ、宮のご無沙汰の)久しくなるのが、気の揉めないでもなかったところへ。

七 なまじお近くまで来られながら、素通りしてお帰りになったのを。

八 抑えきれぬご様子なのを。物思いに堪えかねる中の君の様子。

九 (中の君を)世の姫君並みにかしずきたてて、ひとかどの人らしい(貴族らしい)暮しだったならば、(匂宮も)こんな見下げたお扱いはなさるまいものを。

こうして思いがけずお通い頂くにつけても
ひのほかに見たてまつるにつけてさへ、身の憂さを思ひ添ふるがあ
ぢきなくもあるかな、かく見劣りする御心を、かつはかの中納言も、
この邸にも特に思惑を気にしなくてはならぬような女房もいな
いかに思ひたまふらむ、ここにもことにはづかしげなる人はうちま
いけれど　めめい何と思おうかと
じらねど、おのおの思ふらむが、人笑へにをこがましきこと、と思
ほんに物笑いでみっともないこと
身体のお具合もとても悪いようにお思いになる
ひ乱れたまふに、ここちも違ひて、いとなやましくおぼえたまふ。
この上もなく深い愛情を信じてほしいと
正身は、〔匂宮に〕たまさかに対面したまふ時、限りなく深きことを頼め契
約束なさっているので　いくら何でもすっかり心変りはなさるまいと
りたまへれば、さりともこよなうはおぼし変らじと、おぼつかなき
ご自分では内心気を紛らわせていられるところもある
も、わりなき障りこそはものしたまふらめと、心のうちに思ひなぐ
さめたまふかたあり。ほど経にけるが思ひいられたまはぬにしもあ
ひどい方ともやしいとも思われるので
らぬに、なかなかにてうち過ぎたまひぬるを、つらくもくちをしく
いよいよ胸がいっぱいになる
も思ほゆるに、いとどものあはれなり。忍びがたき御けしきなるを、
人なみなみにもてなして、例の人めきたる住ひならば、かうやうに
大君　いよいよおかわいそうにとお思い申
もてなしたまふまじきを、など、姉宮は、いとどしくあはれと見た
される
てまつりたまふ。

一〇 私も生き永らえていたら、（薫と結婚することになって）きっと同じようなくやしい目に会うことだろう。以下、十一行目の「いかで亡くなりなむ」まで、大君の心中の思い。

一一 ここの女房が（中の君のことに）懲りもせずに、こうしたこと（薫との縁組のこと）ばかり、ぜひとも と思っているようだから。「こりずまに」は歌語。「こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住まへば」（『古今集』巻十三恋三、読人しらず）

一二 これこそは、繰り返し繰り返し、父宮がその積りで用心して生きてゆくように、とご遺言なさったのは、こんなこともあろうかと思ってのご教訓だったのだ。八の宮の遺言は、椎本三一九頁参照。

一三 こんな不幸な運命に生れついた二人ゆえ、頼みとする父母にも先立たれ申すようなことになるのだろうが、（だからといって）二人が二人とも同じように人の物笑いになることを重ねる有様で、亡き父母までお苦しめ申すのが、ほんとに情けないこと。

一四 そんな物思い（男に捨てられはせぬかという嘆き）に沈まず、愛執の罪などさほど深まらぬうちに、どうぞ死んでしまいたい。

一五 ただ、ご自分が死んだあとのあれこれを。「あらましごと」は、予想されること。

一六 私にまで先立たれなさっては。以下、次頁五行目の「たぐひすくなく心憂からむ」まで、ふたたび大君の思い。

大君の憂悶

一〇 われも世にながらへば、かうやうなること見つべきにこそはあめれ、中納言の、（薫）とざまかうざまに言ひありきたまふも、（あれやこれやとしきりに言い寄っておいでになるのも）人の心を見むとなりけり、（いくら私一人が相手になるまいと思っても）心ひとつにもて離れて思ふとも、（言い逃れるにも限りがあろうと）こしらへやる限りこそあれ、一 ある人のこりずまに、かかる筋のことをのみ、いかで、（心ならずも）と思ひためれば、心よりほかに、つひにもてなされぬべかめり、一二 （結局はそのようにさせられてしまいそうだ）これこそは、かへすがへす、さる心して世を過ぐせ、とのたまひおきしは、かかることもやあらむのいさめなりけり、一三 さもこそは憂き身どもにて、さるべき人にも後れたてまつらめ、やうのものと人笑へなることを添ふるありさまにて、なき御影をさへなやましたてまつらむがいみじさ、なほ（やはり私だけでも）われだに、一四 さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ、とおぼし沈むに、（悲しみに沈まれると）ここちもまことに苦しければ、（お食事もほんの少しも召し上がらず）ものもつゆばかり参らず、一五 ただ亡からむ後（気分もほんとに苦しいので）のあらましごとを、明け暮れ思ひ続けたまふに、（朝に夕に）もの心細くて、（すべてが心細くて）この君を見たてまつりたまふもいと心苦しく、一六 われにさへ後れたまひ（中の君のお姿を見申されるにつけてもとてもおいたわしく）

一 このままではもったいないほどの美しい姿を、朝夕の慰みにして。「見物」は、見るかいのあるもの。
二 どうかして世間の人並みにお世話もしてさし上げたい。ふさわしい身分の人を婿に迎えて世話すること。
三 たとえこの上なく貴いお方でいらっしゃっても。
四 これほどまで外聞の悪い目に会わされたような人が。匂宮から無視されたことをいう。
五 世間に出ていって、普通のお付合いをしてお過しになるというのは、そう例もないことで、つらいことであろう。
六 前にも「もの心細くて」とあった。死期の近いのを予感する趣。
七 宮中で。次に「もらし申し……」とあるので、衛門の督は取次ぎの女房にそれとなく言ったのであろう。
八 このようなお忍びのお通いのために、宇治へのお出ましも、俄かに思い立たれたのです。
九 ご身分にふさわしからぬお振舞と、世間も陰で悪口申しているようです。「なり」は、伝聞推定の意。
一〇 夕霧の長男。宇治の遊覧に中宮よりお迎えに遣わされている（七七頁参照）。
一一 大体が気儘なお里住まいが悪いのだ。前にも「里住みがちにおはしますを」中宮が諫められるところがあった（六一頁注一一参照）。

匂宮、禁足を命じられ
六の君との縁談進む

て、いかにいみじくなぐさむかたなからむ、（どんなにひどくふさぎこまれることだろう）あたらしくをかしきさまを、明け暮れの見物にて、（一）いかで人々しくも見なしたてまつらむ、と思ひあつかふをこそ、（二）人知れぬ行く先の頼みにも思ひつれ、（三）限りなき人にものしたまふとも、（四）かばかり人笑へなる目を見てむ人の、（五）世の中に立ちまじり、例の人ざまにて経たまはむは、（六）たぐひすくなく心憂からむ、などおぼし続くるに、いふかひもなく、この世には（この世ではほんのわずかな楽しいこともなしに終ってしまう私たちなのだろう）いささか思ひなぐさむかたなくて過ぎぬべき身どもなめり、と心細くおぼす。

（気配りをし骨を折ることを）（誰にも言わず将来の生きがいとも思っていたのに）（お話にもならぬ身の上の）

匂宮は、（すぐそのあと）立ち返り、（いつものように微行でと）例のやうに忍びてと出で立ちたまひけるを、（七）内裏に、「（八）かかる御忍びごとにより、山里の御ありきも、ゆくりかにおぼし立つなりけり。（九）軽々しき御ありさまと、世人も下にそしり申すなり」と、（一〇）衛門の督のもらし申したまひければ、中宮も聞こしめし嘆き、（一一）上もいとど許さぬ御けしきにて、（帝）「おほかた心にまかせたまへる御里住みのあしきなり」と、きびしきことども出で来て、内

（宇治へお出掛けになろうとしたのを）（ご立腹のご様子で）（容易ならぬ詮議がいろいろ起って）

一二 右大臣夕霧の六の君。（匂兵部卿一六三頁注一五、一七五頁参照）

一三 匂宮はご承引ではないことだが、無理にもさし上げなさるよう、すっかりお取り決めなさった。匂宮が、この人との縁組に乗り気でないことは、椎本三四八頁参照。重々しい後見を付けたならば、宮の素行も納まろうかとの配慮。将来の皇位継承者だからである。

薫の後悔

一四 自分があまり変り者なのだ。以下、六の君との婚儀の結果、予想される中の君の悲境を思って、初めから自分のものにしておけばよかったと後悔する薫の心中。

一五 然るべき因縁があったのか。「あやしきまでもてあつかはるるに」にかかる。

一六 人並みのお暮しをなさるようにお世話したいと、我ながら不思議なほど気にかかってならないのに。「もてあつかはるる」の「るる」は自発。

一七 自分が思いを寄せている方は別なのに、（その大君が）中の君を自分にお譲りなさろうとすることも、不本意だったので。

一八 今さら取り返しのつかぬことながら。「とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」（出典未詳。『釈』『奥入』所引）

一九（中の君が）恋しく、どうしているかと気がかりに思われる。

中宮のご意見

裏につとさぶらはせたてまつりたまふ。（いつも控えているようにおさせ申し上げなさる）右の大臣殿の六の君を、一二 一三 けひかずおぼしたることなれど、おしたちて参らせたまふべく、皆定められる。

中納言殿（薫）聞きたまひて、［六君のことを］あいなくものを思ひありきたまふ。（どうにもならないことなのにあれこれ思い悩まれる）一四 わが あまり異様なるぞや、さるべき契りやありけむ、一五 親王（八の宮が生前姫君たちのことを心配していられた様子もお気の毒で忘れられず）のうしろめたしとおぼしたりしさまもあはれに忘れがたく、（この姫君たちのご様子やお人柄も）この君たちの御ありさまけはひも、ことなることなくて世におとろへたまはむことの、（格別仕合せな目も見ずに零落なさったりするのが惜しくも思われるあまりに）惜しくもおぼゆるあまりに、一六 人々しくもてなさばやと、あやしきまでもてあつかはるるに、（匂宮もあいにくに身を入れてやいのやいのとおっしゃったの）宮もあやにくにとりもちて責めたまひしかば、一七 わが思ふかたは異なるに、ゆづらるるありさまもあいなくて、（このようにお世話したのだが）かくもてなしてしを、（しなくてもよいことをしたものだ）思へばくやしくもありけるかな、いづれもわがものにして見たてまつらむに、（お二人ともわがものにしてお世話申したところで）とがむべき人もなしかしと、一八 取り返すものならねど、（悪口を言うような人もいないのにと）をこがましく、（馬鹿なことをしたものと自分一人後悔の念にくれていらっしゃる）心ひとつに思ひ乱れたまふ。

（匂宮）宮は、（薫以上に）まして御心にかからぬをりなく、一九 恋しくうしろめたしと

一 私の所に宮仕えさせて、普通におだやかにお扱いなさい。女房として情けをかけて、忍び歩きなどはなさるな、の意。

二 お上が、格別のご身分にとお考え申していらっしゃるのに。東宮に立てようという思しめし。

三 晩秋初冬の景物。宇治遊覧は「十月朔日ころ」とあった。

四 匂宮同腹の姉。母中宮とともに宮中にいる趣。六条の院南の町東の対が居所（匂兵部卿一六二頁）。

五 後の文によれば、紙に描かれた物語絵、歌絵などである。

六 御几帳だけを隔てにして。身近に坐する体。

七 ほかにこの女一の宮のご容姿に比べられる方が世にあろうか。以下、匂宮の心中の思いに即して述べる。

八 冷泉院の女一の宮。弘徽殿の女御腹。（匂兵部卿一六六頁参照）

九 お心を打ち明けるすべもなく、長年お慕いしていらっしゃるのだが。匂宮が冷泉院の姫宮に心をかけていること、匂兵部卿一七二頁参照。

一〇 あの宇治の姫君は。中の君のこと。

一一 御絵がたくさん（女一の宮のお前に）散らばっているのを。巻物や冊子仕立てでなく、それぞれ一枚の紙に描かれている趣。

匂宮、女一の宮方に行き伊勢物語の絵に心をやる

おぼす。「御心につきておぼす人あらば、ここに参らせて、例ざまにのどやかにもてなしたまへ。筋ことに思ひきこえたまへるに、軽びたるやうに人の聞こゆべかめるも、いとなむくちをしき」と、大宮は明け暮れ聞こえたまふ。

（中宮）お気に入っていられる女の人があるなら　軽々しいお振舞があるように人がお噂申すらしいのも　私にはとても残念です　ご注意申し上げなさる

時雨いたくしてのどやかなる日、女一の宮の御方に参りたまへれば、御前に人多くもさぶらはず、しめやかに、御絵など御覧ずるほどなり。御几帳ばかり隔てて、御物語聞こえたまふ。限りもなく上品で　気高い感じながら　たおやかで女らしい姉宮のご様子を　今までずっと　内のお暮しぶりも奥ゆかしくていられると評判であるが　無上の方と　愛らしくて上品なことでは　ひけをお取り申すまいよ　まっ先に思い出すにつけて　やりに　おもしろそうな

女房　静かで　〔女一宮は〕　〔匂宮が〕

あてに気高きものから、なよびかにをかしき御けはひを、年ごろ二つなきものに思ひきこえたまひて、またこの御ありさまになずらふ人世にありなむや、冷泉院の姫宮ばかりこそ、御おぼえのほど、うちうちの御けはひも心にくく聞こゆれど、うち出でむかたもなくおぼしわたるに、かの山里人は、らうたげにあてなるかたの、劣りきこゆまじきぞかし、など、まづ思ひ出づるに、いとど恋しくて、なぐさめに、御絵どものあまた散りたるを見たまへば、をかしげなる

〔匂宮は〕　〔院の姫宮に〕　心

一二 女の賞玩する絵。恋する男女のさまなど描いた風俗画とされる。大和絵（中国風の唐絵に対するわが国独自の題材、描法の絵）である。

一三 山荘の風雅な暮しなど、それぞれ趣向を凝らして、恋する男女を描いてあるのを。山里に思いがけず美女を発見するという筋は、当時の恋物語の常套（橋姫二七六頁注六参照）。

一四 在五中将（在原業平）の物語。『伊勢物語』のこと。（三巻絵合一〇五頁参照）

一五 妹に琴（七絃の琴）を教えている図柄で、「人の結ばむ」と詠みかけているのを見て。「妹」は、男から見て姉妹をいう。「むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ、と聞えけり。返し、初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな」（『伊勢物語』四十九段）。「うら若み」の歌は、若若しく共寝をするのによそそうな、若草のように美しい妹を、ほかの男が契りを結ぶであろうと思うと惜しくてならない、の意。「寝」に「根」を掛け、「結ぶ」とともに「草」の縁語。

一六 いつまでも見ていたいほど美しく、少しでも血の繋がりの遠い人だとお思い申せるのなら（どんなにうれしかろう）。せめて異腹なら、という気持。

一七 若草のように美しいあなたと、共寝をしようとは思いませんが、やはり悩ましく晴れぬ思いがします。前出「うら若み」の歌を踏まえる。

女絵ども（一二）の、恋する男の住ひなど（住むさまなど）描ぎまぜ（描きこんで）、山里（一三）のをかしき家居など、心々に世のありさま描きたるを、よそへらるること多くて、御目とまりたまへば、すこし聞こえたまひて（少しおねだりなさって）、かしこへたてまつらむ（宇治のお方にさし上げよう）、とおぼす。在五（一四）が物語を描きて、妹に琴（一五）教へたる所の、「人の結ばむ」と言ひたるを見て、いかがおぼすらむ（〔匂宮は〕何と思われたのか）、すこし近く参り寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならはしてはべりけれ。いとうとうとしくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、いかなる絵にかとおぼすに、おし巻き寄せて、御前にさし入れたまへるを、うつぶして御覧ずる御髪のうちなびきて、こぼれ出でたるかたそばかり、ほのかに見たてまつりたまふが、飽かずめでたく、すこしももの隔てたる人と思ひきこえましかば、とおぼすに、忍びがたくて、

（この絵の昔の人も）
（〔それなのに〕とてもよそよそしくおあしらいあそばすのがたまりませんのでした）
（〔女一宮は〕どんな絵のことかとお思いなので小声で）
（〔几帳の下から〕）
（几帳の端からこぼれ出たほんの片端ほどを）
（いつも隔てなくしているものな）
（身につまされることが多々あって）
（手許に巻き寄せて）
（ちらりとご覧申し上げなさるのが）
（黙っていられなくて）

若草（匂宮）（一七）のね見むものとは思はねど
むすぼほれたるここちこそすれ

匂宮、女一の宮方の女房に心を紛らす

御前なりつる人々は、この宮をばことに恥ぢきこえて、もののうしろに隠れたり。ことしもこそあれ、うたてあやし、とおぼせば、ものものたまはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、されて憎くおぼさる。紫の上の、取り分きてこの二所をばならはしきこえたまひしかば、あまたの御なかに、隔てなく思ひかはしきこえたまへり。世になくかしづききこえたまひて、さぶらふ人々も、かたほにすこし飽かぬところあるは、はしたなげなり。やむごとなき人の御女などもいと多かり。御心のうつろひやすきは、めづらしき人々に、はかなくかたらひつきなどしたまひつつ、かのわたりをおぼし忘るるをりなきものから、おとづれたまはで日ごろ経ぬ。

女房たち　匂宮には格別姿を見られるのを恥ずかしがって　[女一宮は]ともあろうに　いやな変なことを　ご返事もなさらない　しくお思い申していられる　お互いにうちとけて親　お仕えする女　どこか整わず少しでも欠点のある者は　居づらそうにしている　身分の高い家柄の出の　姫君なども大層多い　新参の女房たちに　ほんのたわむれにお手をつけたりなどなさりながら　宇治の姫君を　何日か過ぎ去った

[匂宮を]待ちきこえたまふ所は、宇治では久しくお越しのない気がして絶え間遠きここちして、なほかくなめり、と心細くながめたまふに、中納言おはしたり。なやましげにしたまふと聞きて、御とぶらひなりけり。いとここちまどふばかりの御な

心細くて嘆いていられるところへ　薫　お見舞にお出でなのだった　ひどく我慢ができないほどご気分がお悪いとい

一　物陰（屏風や几帳の後ろ）に隠れている。匂宮の不埒な歌は聞えていないはず。

二　もっともなことと思われて、「うらなくものを」と答えた物語の姫君も、気が利き過ぎていてかわいげがないと（匂宮は）お思いになる。女一の宮のあくまで高貴なさま。「うらなくものを」は、前記『伊勢物語』の女の返歌。なぜそんな変なことをおっしゃるのでしょう、お兄様を心からご信頼していましたのに、の意。

三　紫の上が、特別にこのお二方を仲良くお育て申し上げなさったので。紫の上が、女一の宮と匂宮を膝下に養育したこと、五巻若菜下一六二頁参照。匂宮のことは、同横笛三三五頁参照。

四　大勢のご同胞の中で。中宮腹の皇子女は五人（六二頁注七参照）。

五　（父帝と母中宮が）この上もなく大切にお世話申し上げていらして。

六　気の多いお方のことって。匂宮のこと。

薫、宇治に、大君の病を見舞う

七　やはり、こんな結末らしい。数日の途絶えに、はや見捨てられたのだろうと思う。

八　お具合がお悪いご様子と聞いて。前に、食事も進まず、死を予感する大君のことが見える（八三～八四頁）。

九（大君は）お目にかかろうとはなさらない。

一〇くつろいで休んでいらっしゃるお居間の御簾の前にお入れ申し上げる。病室の前の廂の間である。

一一（大君は）ひどく見苦しいことと、迷惑がりなさるけれど。以下、大君の態度を述べる。

一二匂宮が、不本意ながらお立ち寄りになれなかった事情などを。先日の紅葉狩の折のいきさつを説明する。

薫、大君を慰める

一三こちら（中の君）は別に何ともおっしゃっていないようです。「聞こゆ」は、匂宮に対する恨み言なので、敬意を添えて言う。

一四ただ、亡き父宮がご教訓なさったのは、こういうことだったのだと、妹の身の上について思いますのばかりが、おかわいそうでなりません。結婚というようなことは考えるなという戒めのことを言う（椎本三一九頁参照）。

一五夫婦の仲というものは、いずれにしましても一筋縄でゆくことはむつかしいものですが。「世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋も果しなければ」（『新古今集』巻十八雑下、題しらず、蟬丸）の言葉による。

やみにもあらねど、ことづけて、（病気を口実に）対面したまはず。「おどろきながら、はるけきほどを参り来つるを、なほかのなやみたまふらむ御あたり近く」と、切におぼつかながりきこえたまへば、うちとけて住ひたまへる方の御簾の前に入れたてまつる。いとかたはらいたきわざ、と苦しがりたまへど、けにくくはあらで、御ぐしもたげ、御いらへなど聞こえたまふ。

（薫）気が気ではなく

（はるばる遠い所をやって参りましたものを）

（ぜひそちらのお休みになっていられるご病床近くまで）

（しきりに心配申し上げなさるので）

（そっけなくはなさらず）

（おつむをもたげて）

（お返事）

（などは申し上げなさる）

一二宮の、御心もゆかでおはし過ぎにしありさまなど、語りきこえたまひて、「のどかにおぼせ。心焦られしてな恨みきこえたまひそ」など教へきこえたまへば、「ここには、ともかくも聞こえたまはざめり。一四亡き人の御いさめはかかることにこそ、と見はべるばかりなむ、いとほしかりける」とて、泣きたまふけしきなり。いと心苦しく、われさへはづかしきこちして、「世の中は、とてもかくてもひとつさまにて過ぐすこと難くなむはべるを、いかなることをも御覧じ知らぬ御心どもには、ひとへにうらめしなどおぼすこともあら

（薫）安心していらっしゃい

（いらいらして宮をお恨み申したりなさいますな）

（おさとし申しなさると）

（大君）一三

（自分まで顔向けならぬことをした気がして）

（薫）一五

（そんなことは何事もご経験なとても）

（いちずに恨めしいなどとお思いなさることもございましょう）

（さったことのないあなた方には）

一 他人（匂宮）のお身の上のことまで世話を焼くのも、ふと妙な気がなさる。自分の恋路も成就しないのに、という気持が下にある。

二 よその人（薫）がお近くにいられるのも。

三 やはりいつもの、あちらのお席に。客間に、と勧める。西の廂の間である。

四 日頃にもまして、こうご病気なのが気がかりで、何もかも投げ出してやって参りましたのに、お側にも寄せて下さらず、こんな所に放り出しておかれるので、たまらぬ気持です。

五 老女弁の君。

六 病気平癒のために行う密教の祈禱。

七 何と見苦しい、わざわざにでも捨ててしまいたいわが身なのに。薫が祈禱のことなど指図するのを聞いての大君の思い。

八 人の気持を顧みないかのように（御修法を）お断りなさるのもいやなので。

九 それでもやはり、長生きせよと願っていられる（薫の）気持もうれしく思われる。「さすがに」は、「ことさらにもいとはしき身を、と聞きたまへど」に応じる。

翌朝、薫、心を残しながら帰京する

一〇 病気が長びくせいか、今日はとても苦しいのです。

そこはつとめて気長にお考え下さい　ご心配なさるようなことは決してあるまいと私は信じが

むを、しひておぼしのどめよ。うしろめたくはよにあらじとなむ思ております

ひはべる」など、人の御上をさへあつかふも、かつはあやしくおぼゆ。

夜々はましていと苦しげにしたまひければ、疎き人の御けはひの

夜はきまってとても苦しそうになさったので　中の君がお気になさっているご様子なので　（女房）

近きも、中の宮の苦しげにおぼしたれば、「なほ例の、あなたに」

（薫）

と人々聞こゆれど、「ましてかくわづらひたまふほどのおぼつかな

さを、思ひのままに参り来て、出だし放ちたまへれば、いとわりな

かようなご病中のご看護も　誰がしっかりお世話できるでしょうか

くなむ。かかるをりの御あつかひも、誰かははかばかしくつかうま

ご相談なさって

つる」など、弁のおもとにかたらひたまひて、御修法ども始むべき

お命じになる　［大君は］

ことのたまふ。いと見苦しく、ことさらにもいとはしき身を、と聞

きたまへど、思ひ隈なくのたまはむもうたてあれば、さすがに、な

がらへよと思ひたまへる心ばへもあはれなり。

翌朝

またの朝に、「すこしもよろしくおぼさるや。昨日ばかりにてだ

（大君）

（薫）少しはご気分もおよろしいでしょうか　せめて昨日のように

してお話し申しましょう

に聞こえさせむ」とあれば、「日ごろ経ればにや、今日はいと苦し

一二 では、こちらへ。昨日の場所に、大君の方から進んで招じ入れる。

一三 今までよりはうちとけたご様子なのも、胸の騒ぐ思いがするので。大君の身に変事でも起るのではないかと、胸を衝かれる。

一三 こんな山里のお住いはやはり気がかりなことでした。

一四 場所を変えてご祈禱なさるというのにかこつけて、適当な所にお移し申しましょう。「所さる」は、病気治療のため、物の怪の祟りなどを避けて、居所を変えること。薫は、かねて大君を京の邸に迎えようと思っていたこと、七四頁に見える。

一五 (弁などに) 申しておいて。姫君に関することなので、敬語をつける。

一六 宇治山の阿闍梨。

薫の供人から、匂宮と六の君の縁談を聞く

一七 右大臣殿 (夕霧) の姫君 (六の君) を、娶せ申されるはずだが、女君のほうでは、長年のご希望ゆえ、おためらいになるはずもなくて。匂宮禁足のこととともに、八四〜八五頁の記事に応じる。

くなむ。さらばこなたに」と言ひ出だしたまへり。いとあはれに、いかにものしたまふべきにかあらむ、ありしよりはなつかしき御けしきなるも、胸つぶれておぼゆれば、近く寄りてよろづのことを聞こえたまふ。「苦しくてえ聞こえず。すこしためらはむほどに」とて、いとかすかにあはれなるけはひを、限りなく心苦しくて嘆きゐたまへり。さすがに、つれづれとかくておはしがたければ、いとうしろめたけれど、帰りたまふ。「かかる御住ひはなほ苦しかりけり。所さりたまふにことよせて、さるべき所に移ろはしたてまつらむ」など聞こえおきて、阿闍梨にも、御祈り心に入るべくのたまひ知らせて、出でたまひぬ。

一一 [簾中から] 伝えさせなさる
一二 [薫は] とても悲しく
一体どうおなりになることなのだろう
一三 [大君) 苦しくてお返事ができません
とてもか細い声で弱々しげな様子なのを
少しおさまりましてから
一四 [薫は] この上なくおいたわしくて心配して
いらっしゃる
とはいえ
なすこともなくこうしてもいらっしゃれないので
ひどく気がかりではあるけれど
一五 [京に]
一六 [薫]
一七 [宇治への]
一八 [薫]
一九 [供人で]
二〇 [供人] 匂宮
二一 [宮中にずっと閉じ籠っていられることよ]
二二 [止められなさって]
二三 [その二人の内緒話に]
二四 [ご祈禱を一心にするようによくよくお言いつけに]
二五 [このお邸の若女房に言い寄ってねんごろになった者があった]
二六 [いつのまにか]
二七 [この君の御供なる人の、いつしかと、ここなる若き人をかたらひ寄りたるありけり。おのがじしの物語に、「かの宮の、御忍びありき制せられたまひて、内裏にのみ籠りおはしますこと。右の大臣殿の姫君を、あはせたてまつりたまふべかなる、女方は、年ごろの御

本意なれば、おぼしとどこほることなくて、年のうちにありぬべかなり。宮はしぶしぶにおぼして、内裏わたりにも、ただ好きがましきことに御心を入れて、帝后の御いましめにしづまりたまふべくもあらざめり。わが殿こそ、なほあやしく人に似たまはず、あまりまめにおはしまして、人にはもてなやまれたまへ。ここにかくわたりたまふのみなむ、目もあやに、おぼろけならぬこと、と人申す」など語りけるを、「さこそ言ひつれ」など、人々のなかにて語るを聞きたまふに、いとど胸ふたがりて、今は限りにこそあなれ、やむごとなき方に定まりたまはぬほどの、なほざりの御すさびにかくまでおぼしけむを、さすがに中納言などの思はむところをおぼして、言の葉の限り深きなりけり、と思ひなしたまふに、ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、いとど身の置き所なきここちしてしをれ臥したまへり。

弱き御ここちは、いとど世に立ちとまるべくもおぼえず。はづか

（ご婚儀は一年内に取り行われるということだ）（匂宮はお気が進まぬこととて）（ご意見にもおさまりなさるようにも見えぬご様子だ）（相変らずなぜだか世間の男とは違っておられて）（あまりにも真面目一方でいられて）（人からはもてあまされていられるのだ）（こちらへこうしてお出でになることだけが）（並々ならぬお志のこと）（驚き入った）（若女房）（こうこうと言っていました）（仲間を相手に）（大君は）（お噂している）（思惑を気になさって）（薫）（お考えになると）（気の張る）

一 御所の中でも、もっぱら色めかしいことにご熱中で。女一の宮方での行状など、その一例（八八頁参照）。

二 （それに比べて）うちのお殿様ときたら。薫のこと。

三 もうお終いなのだ、身分の高いお方の婿君にお決りになるまでの、ほんの一時の慰みに、こうまで（中の君に）ご執心だったのだろうに。以下、大君の苦悩の心中。

四 口先だけは情けありげにおっしゃったのだ。

五 とやかく匂宮の冷たいお仕打ちをお恨みになる余裕もなく、いよいよもはやなすすべもない気がして、力なげに横になっていらっしゃる。精も根も尽き果てた様子。

六 （大君は）お身体も弱っていられることとて、いよいよこの世に永らえられそうにもお思いになれない。

大君、中の君を見ていよいよ悲しむ

七（中の君は）聞えぬふりをして、寝ていらっしゃるのを。

八 大君。以下の、昼寝の中の君の姿を「見やりつつ」と続く文脈。

九 物思う時にするとか聞いた、うたた寝の（中の君の）ご様子がとてもかわいらしくて。「垂乳根の親のいさめしうたた寝はもの思ふ時のわざにぞありける」（『拾遺集』巻十四恋四、読人しらず。『古今六帖』四、うたたね。『小町集』）。「うたた寝」は、仮寝のこと。物思いに夜を明かす中の君が、昼間ついうたた寝をするのである。

一〇 親の諫めた言葉―八の宮のご遺言も。前掲の歌の措辞による。

一一（父宮は）罪深い人の行くという地獄には、よもや堕ちてはいらっしゃるまい。生前、仏道修行専一でいらしたからである。地獄は、六道（死後、その人の生前の行いの業により赴かねばならぬ世界）の一。

一二 木の下の落葉まで吹き払う風の音などに。

一三 几帳の陰に添って、横たわっていられる大君の姿は。

一四 白いお召し物に。病中の体。

一五 もつれもせず、枕元にうちやられて。

一六 几帳の際から外をもの悲しげに見ていらっしゃる目もとや額のあたりの美しさなど、心ある人に見せたいほどだ。例えば、薫などに、といった気持。

（何と思っていようかとそれがつらいので）しげなる人々にはあらねど、思ふらむところの苦しければ、聞かぬやうにて寝たまへるを、姫宮、もの思ふ時のわざと聞きし、うたた寝の御さまのいとらうたげにて、腕を枕にて寝たまへるに、御髪の（世にまたとなく愛らしい様子なのを眺めやって）（枕元に）たまりたるほどなど、ありがたくうつくしげなるを見やりつつ、親のいさめし言の葉も、かへすがへす思ひ出でられたまひて悲しければ、罪深かなる底にはよもしづみたまはじ、いづこにもいづこにも、（こんなにひどくつらい思いをしている私たちをお）（六道のどこでもよいから）（父宮の）おはすらむ方に迎へたまひてよ、かくいみじくもの思ふ身どもをう（残しになったまま）ち捨てたまひて、夢にだに見えたまはぬよ、と思ひ続けたまふ。（夢にもお見え下さらないことよ）

夕暮の空のけしきいとすごくしぐれて、木の下吹きはらふ風の音（大層ものさびしく時雨れてきて）などに、たとへむかたなく、来し方行く先思ひ続けられて、添ひ臥したまへるさま、あてに限りなく見えたまふ。白き御衣に、髪はけ（上品でこの上もないお方とお見えになる）づることもしたまはでほど経ぬれど、まよふ筋なくうちやられて、（日頃のお患いで少しお顔の色が青いのもかえって）（一層優艶な感じがして）日ごろにすこし青みたまへるしも、なまめかしさまさりて、ながめ出だしたまへるまみ額つきのほども、見知らむ人に見せまほし。（けずることもなさらないまま日がたつが）

一 さきほどの「木の下吹きはらふ風の音」に、である。

二 山吹襲（表薄朽葉、裏黄）の表着。

三 薄紫色の袿。

四 この辺に、ぼうとお立ちになっていました。「このわたりにこそ」で、手で指し示す体。後文によれば、宇治山の阿闍梨の夢にも現れ、その理由が語られている。

五 この頃は、明けても暮れても、父宮をお思い出し申しているので、お姿をお見せなさったのかしら。以下「罪深げなる身どもにて」まで、大君の心中。

六 罪の深そうな私たちだから。罪障の多い女人の身だから、それも叶わないのだろうか、の意。

七 異国にあったとか聞く香の煙。反魂香のこと。漢の武帝が、愛妃李夫人の死後、方士（幻術士）に霊薬を合せ焚かしめたところ、香の煙の中に夫人の姿が現れたという。「九華の帳深くして夜悄々たり　反魂の香は夫人の魂を反す　夫人の魂いづれの許にか在る　香の煙引きて香を焚く処に到る」（『白氏文集』巻四諷諭四「李夫人」）（付録三五三頁参照）

八 悲観しておられた折ゆえ、少しはもの思いも晴れたことであろう。草子地。

九 中の君のこと。匂宮の夫人、という気持。

中の君、父宮を夢に見る　匂宮より文あり

昼寝の君、風のいと荒きにおどろかされて起き上がりたまへり。山吹、薄色などはなやかなる色あひに、御顔はことさらに染めにほはしたらむやうに、いとをかしくはなばなとして、いささかもの思ふべきさまもしたまへらず。「故宮の夢に見えたまへる、いとものおぼしたるけしきにて、四 このわたりにこそほのめきたまひつれ」と語りたまへば、いとどしく悲しさ添ひて、「亡せたまひてのち、いかで夢にも見たてまつらむと思ふを、さらにこそ見たてまつらね」とて、二所ながらいみじく泣きたまふ。五 このころ明け暮れ思ひ出でたてまつれば、ほのめきもやおはすらむ、いかでおはすらむ所に尋ねぬ参らむ、罪深げなる身どもにて、と後の世をさへ思ひやりたまふ。六 人の国にありけむ香の煙ぞ、七 いと得まほしくおぼさるる。

いと暗くなるほどに、宮より御使あり。八 をりはすこしもの思ひなぐさみぬべし。御方はとみにも見たまはず。九 「なほ心うつくしうおいらかなるさまに聞こえたまへ。かうてはかなうもなりはべりなば、

昼寝の君（中の君）、風のいと荒きにおどろかされて起き上がりたまへり。
山吹（二襲）、薄色（三）などはなやかな色あひ（はなやかな色どりのお召し物に〔寝起きの〕）に、御顔はことさらに染めにほはしたらむやうに（赤く染めたかのように）、いとをかしくはなばなとして（美しくあでやかな風情で）、いささかもの思ふべきさまもしたまへらず（少しも物思いに沈み込むような様子もしておいでない）。「故宮（中君）の夢に見えたまへる（亡き父宮の夢にお見えでしたのが）、いとものおぼしたるけしきにて（とても心配そうなお顔をなさって）、四 このわたりにこそほのめきたまひつれ（また一度もお会いしたことがありません）」と語りたまへば、いとどしく悲しさ添ひて、「亡せたまひてのち（大君）、いかで夢にも見たてまつらむ（か夢にでもお目にかかりたいと思うのに）と思ふを、さらにこそ見たてまつらね（尋ねて参りたい）」とて、二所（お二人とも）ながらいみじく泣きたまふ。五 このころ明け暮れ思ひ出でたてまつれば、ほのめきもやおはすらむ（何とかして父宮のおいでになる所に）、いかでおはすらむ所に尋ねぬ参らむ（あの世のことまでお考えになる）、罪深げなる身どもにて、と後の世をさへ思ひやりたまふ。六 人の国にありけむ香の煙（匂宮）ぞ、七 いと得まほしくおぼさるる（ほんとに手に入れたいとお思いになる）。

いと暗くなるほどに、宮より御使あり。八 をりはすこしもの思ひなぐさみぬべし。御方（大君）はとみにも見たまはず（すぐにも見ようとなさらない）。九 「なほ心うつくしうおいらかなるさまに聞こえたまへ（やはり素直なお気持でおだやかなお返事をさし上げなさい）。かうてはかなうもなりはべりなば（このまま私が亡くなりでもしましたら）、

一〇 今よりもっとひどい目にお会わせ申す人も出てくるのではないか。匂宮より身分も低い男が、もっとつれない仕打ちをするのではないか、の意。

一一 そのようなけしからぬ料簡を起す者は、（匂宮に憚って）まさかあるまいと思いますので。

一二 寿命というものがあるので、（父宮ご他界の当時は）片時もこの世に残るまいと思いましたが、こうして生き永らえるものなのだと思っているのですよ。

一三 明日をも知らぬ無常の世なのに、やはり死ぬのが悲しいのは、誰のために惜しい命かお分りでしょう。あなたを守って上げたいためなのですよ。「明日知らぬわが身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ」（『古今集』巻十六哀傷、紀貫之）、「岩くぐる山井の水を掬びあげて誰がため惜しき命とか知る」（『伊勢集』）

一四 灯をともさせて（匂宮のお手紙を）ご覧になる。

一五 悲しい思いに沈んで、じっと見つめる空はいつもと同じ空なのに、どうして今日に限って、ひとしお逢いたい思いをそそり、涙を誘う時雨なのだろう。

一六 「かく袖ひつる」などということも書いてあったのか。「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖ひつる折はなかりき」（出典未詳。『花鳥余情』所引）

一七 通り一遍のお義理のお言葉と思うにつけても。

一八 （匂宮は）あれほど世にも稀な美男子なのに、その上、何とかして女にちやほやされようと。

一〇 これより名残なきかたにもてなしきこゆる人もや出で来む、とうしろめたきを、まれにもこの人の思ひ出できこえたまはむに、さやうなるあるまじき心つかふ人は、えあらじと思へば、つらきながらなむ頼まれはべる」と聞こえたまへば、「後らさむとおぼしけるこそ、いみじくはべれ」と、いよいよ顔を引き入れたまふ。「限りあれば、片時もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけり、と思ひはべるぞや。明日知らぬ世の、さすがに嘆かしきも、誰がため惜しき命にかは」とて、大殿油参らせて見たまふ。

（と心配でならないのですが）（時たまにしろ匂宮が思い出してお通い下さるなら）（匂宮を）（お恨みに存じながらもお頼り申す気になるのです）（中君）（私を置き去りにしようとお思いなのはひどうございます）（襟元に）（大君）

例の、こまやかに書きたまひて、

（匂宮）一五 ながむるは同じ雲居をいかなれば
おぼつかなさを添ふる時雨ぞ

（いつものように）（こまごまとお書きになって）

一六 「かく袖ひつる」などいふこともやありけむ、耳馴れにたるを、なほあらじことと見るにつけても、うらめしさまさりたまふ。さばかり世にありがたき御ありさま容貌を、いとど、いかで人にめでられ

（ありふれた文句なのを）（匂宮への）

一 あんなにご大層なまでにお約束なさったのに、いくら何でも、このまま終るはずはない。匂宮を信じる気持。前に「この世のみならず契り頼めきこえたまへば」（六七頁）とあった。

二 ご返事を、「今夜のうちに持って参ります」と（お使いが）申すので。匂宮が返事を待ちかねている。

三 霰の降る奥深い山里では、朝に夕に、憂いに沈んで眺める空もかき曇っています。私の胸の中も真暗です。「霰降る深山の里のわびしきは来てたはやすく訪ふ人もなし」（『後撰集』巻八冬、読人しらず）

四 こんなやりとりがあったのは、十月の末のことであった。

五 宇治へのご無沙汰はもう一月にもなると。紅葉の遊覧は「十月朔日ころ」（七五頁）だった。

六 何かと邪魔が入ったりするうちに。ついに十月中は行けなかったのである。「みなと入りの葦分け小舟障り多みわが思ふ人に逢はぬころかな」（『拾遺集』巻十四恋四、人麿。『柿本集』）

七 （今年は）五節など早くある年で。「五節」は、大嘗会、新嘗会にあたり、十一月の中の丑、寅、卯、辰の日に行われる儀式。普通、月に三度ある丑の日が二丑の時は、上の丑の日から行われる。今年はそれに当るのであろう。

八 （宇治では）言いようもなく待ち遠でいられた。

匂宮、心ならずもなお間遠

むと、好ましく艶にもてなしたまへれば、（色っぽく）若き人の心寄せたてまつりたまはむ、ことわりなり。（若い中の君が心をお寄せ申しなさるというのも無理はない）ほど経るにつけても恋しく、（中君は）さばかり所狭きまで契りおきたまひしを、（宮が）さりとも、いとかくてはやまじ、と思ひなほす心ぞ常に添ひける。（考え直す気持がいつも湧いてくるのだった）御返り、「今宵参りなむ」と聞こゆれば、これかれそそのかしきこゆれば、（女房も誰彼がおすすめ申し上げるので）ただ一言なむ、

（中君）三
あられふる深山の里は朝夕に
ながむる空もかきくらしつつ

四 かく言ふは神無月の晦日なりけり。五 月も隔たりぬるよと、宮は静心なく（気が気でなくお思いで）おぼされて、六 今宵今宵とおぼしつつ、障り多みなるほどに、七 五節などとく出で来たる年にて、内裏わたり今めかしくまぎれがちにて、（宮中もはなやかな気配で気を取られることも多く）わざともなければ過ぐいたまふほどに、八 あさましう待ち遠なり。（特にそのためでもないが無沙汰をされるうちに）はかなく人を見たまふにつけても、（本当は（中君のことが））さるは御心に離るるをりなし。（（匂宮は）かりそめに女を相手になさるにつけても）右の大臣殿のわたりのこと、（六の君とのご縁談を）大宮も、（母宮も）「なほさるのどやかなる御後見をまうけたまひて、（やはりああした将来を任せられる）そのほかに尋ねまほしくおぼさるる人あ（北の方をお迎えになって）（呼び寄せたいとお思いになるいとしい人が）

九 お側にお召しになって、軽々しいお出歩きはなさいますな。女房として召し使うように、と忠告する。
一〇 今しばらく（お待ち下さい）。考えるところがございますので。
一一（中の君を）本当にひどい目に会わせられようか。妻として、然るべき待遇で迎えたいという気持。
一二 思ったよりは不実なお方なのだな、いくら何でも（そのうちには）とお思い申し上げていた、そんな自分の甘い考えも（宇治の方々には）お気の毒なことだったと。

薫、大君を見舞う

一三（匂宮のところへは）めったにお伺いなさらない。薫の立腹のさま。
一四 十一月になってからは。
一五 公私ともにご多忙の頃で。五節などが上旬にあった。
一六 余儀ないご用でお忙しいのを放り出して（宇治に）参上なさる。「まで」は「参うで」の、長音無表記の形。
一七 ご祈禱は、ご病気が全快なさるまでと、お言いつけになっておいたのに。薫の采配で修法が始められたこと、九〇頁に見えた。
一八 宇治山の阿闍梨。（九一頁参照）
一九 老女弁の君。

あれば らば、参らせて、重々しくもてなしたまへ」と聞こえたまへど、
（匂宮）一〇 「しばし。さ思うたまふるやうなむ」など聞こえいなびたまひて、
（中君は）一一 まことにつらき目はいかでか見せむ、などおぼす御心を知りたまはねば、月日に添へてものをのみおぼす。

月日がたつにつれて物思いばかりしていられる

薫 中納言も、一二 見しほどよりは軽びたる御心かな、さりともと思ひこえけるもいとほしく、心からおぼえつつ、一三 をさをさ参りたまはず。

責任を感ずる思いで

宇治 山里には、お加減いかがかと絶えずお見舞の使いをさし上げなさる いかにいかにととぶらひきこえたまふ。一四 この月となりては、すこしよろしくおはす、と聞きたまひけるに、公私もの騒がしきころにて、五六日人もたてまつれたまはぬに、いかならむ、とうちおどろかれたまひて、一六 わりなきことのしげさをうち捨ててまでたまふ。

少しご気分もましでいらっしゃる

お使いもさし上げられなかったので

どんなお具合か

一七 修法はおこたり果てたまふまで、とのたまひおきけるを、よろしくなりにけりとて、一八 阿闍梨をも帰したまひければ、いと人ずくなにて、一九 例の、老人出で来て、御ありさま聞こゆ。「そこはかと痛きと

（大君は）

（ご病床には）

ご病状をお話し申し上げる

（弁）どこがどうと

たちまち気におなりになって

ころもなく、おどろおどろしからぬ御なやみに、ものをなむさらに聞こしめさぬ。もとより人に似たまはず、あえかにおはしますうちに、この宮の御こと出で来にしのち、いとどものおぼしたるさまにて、はかなき御くだものをだに御覧じ入れざりし積りにや、あさましく弱くなりたまひて、さらに頼むべくも見えたまはず。よに心憂くはべりける身の命の長さにて、かかることを見たてまつれば、まづいかで先立ちきこえなむと思うたまへ入りはべり」と、言ひもやらず泣くさま、ことわりなり。「心憂く、などか、かくとも告げたまはざりける。院にも内裏にも、あさましく事しげきころにて、日ごろもえ聞こえざりつるおぼつかなさ」とて、ありし方に入りたまふ。御枕上近くてもの聞こえたまへど、御声もなきやうにて、えいらへたまはず。「かく重くなりたまふまで、誰も誰も告げたまはざりけるが、つらく、思ふにかひなきこと」と恨みて、例の阿闍梨、おほかた世に験ありと聞こゆる人の限り、あまた請じたまふ。御修

大したお苦しみでもないご病気ですのに　お食事を少しもお召し上がりになりません　前々から普通の方と違って　お弱くていらっしゃいます上に　匂宮とのご縁組のことがありましてのちは　ますますお心をお痛めのご様子でいられまして　お話にならぬほどお弱りになりまして　もはや見込みもなさそうなご様子です　どうかお先に死なせて頂きたいものと心から願っているのでございます　返事もおできになれない（薫）　誰一人として教えて下さらなかったのが　恨めしく　「大君は」お声も出ないお弱りようで　大勢　お招きになる

一 病気治癒のため経典を朗誦すること。法華経を読むことが後文に見える。
二 薫の家来。京の邸から呼び寄せたのであろう。
三 上席の者も下人も。「殿人」を、詳しく言う。
四 心細かったのも嘘のようで、頼もしく思われる。

薫、親しく大君を看取る

五 (女房が)「いつもの、あちらの客間へ」と申し上げて。(九〇頁注三参照)
六 飯(玄米を蒸したもの)に湯を注いだもの。夏の水飯(水を注ぐ)に対し、冬の食事。
七 南廂は、ご祈禱の僧の席なので。
八 東面(建物の東の部分)の、もっと病床に近い席に、隔てに屏風など立てさせて、はいっておいでになる。母屋に座を占めたのである。「東面」が姫君たちの居間であること、橋姫二七五頁注一一参照。
九 中の君は大君の枕頭にいる様子。
一〇 初夜の勤行。一日を六時(晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜)に分ける。交替に間断なく読経するので、下に「不断に」という。
一一 声のありがたい僧ばかり十二人で。二人一組である。読経は、「明くる日」を待たず始めた趣。
一二 燈台の灯は、薫のいる南の間に点して、奥(北の間)はほの暗いので。母屋の南北二間(柱間二つ)の南側に薫がおり、北側に大君が病臥していると考えられる。
一三 薫と病床との間にある隔ての几帳。

法、読経、明くる日より始めさせたまはむとて、殿人あまた参りつどひ、上下の人立ち騒ぎたれば、心細さの名残なくたのもしげなり。

暮れぬれば、「例の、あなたに」と聞こえて、御湯漬など参らむとすれど、「近くてだに見たてまつらむ」とて、南の廂は僧の座なれば、東面の今すこし気近き方に、屏風など立てさせて入りゐたまふ。中の宮苦しとおぼしたれど、この御仲を、なほもてはなれたまはぬなりけりと、皆思ひて、うとくもえもてなし隔てず。初夜よりはじめて、法華経を不断に読ませたまふ。声尊き限り十二人して、いと尊し。

燈はこなたの南の間にともして、内は暗きに、几帳をひき上げて、すこしすべり入りて見たてまつりたまへば、老人ども二三人ぞさぶらふ。中の宮は、ふと隠れたまひぬれば、いと人少なに、心細くて臥したまへるを、「などか御声をだに聞かせたまはぬ」とて、御手をとらへておどろかしきこえたまへば、「ここちには思ひながら、

(うとくするが)(薫)せめて近くにいて看取ってさし上げたい(困ったことと)お思いにはなるが(薫と大君の御仲を)(女房たちは)皆合点して(やはり普通ではいらっしゃらないのだったと)他人行儀にお隔て申したりもできない(さし上げよ)(内側に)老女たちが二三人控えて(中の君)(大君は)ひっそりと(横たわっていられるのを)(薫)どうしてお声なりと聞かせて下さらないのですか(声をかけてさし上げなさると)(大君)気持はそうしたいと思いながら

一　お目にかかれぬままになってしまうのではないか、残念でなりませんでした。

二　聞きとれぬほどの声でおっしゃる。

三　お頭など少しお熱がおありだった。薫が手を当てて確かめた趣。

四　何の罪咎で、こんなご病気になられたのでしょうか。人を嘆かせたものが、その罰でこうして苦しむと聞いています。私を嘆かせたせいですよ、の意。「水ごもりの神に問ひても聞きてしか恋ひつつあはぬ何の罪ぞと」（『古今六帖』四、かたこひ）

五　もし（この人を）死なせてしまったら、どんな気持がするだろうと、胸も押し潰されるような気がする。

六　何日もご看病申し上げていらしたでしょうお疲れも、大変でしたでしょう。以下、中の君に言う言葉。

七　宿直人が控えていますから。薫自身のことをいう。今夜の看護は自分が替ろう、の意。

八　（薫が）面と向ってというのではないが、（大君の身近に）そっと寄ってきてご覧になるので。薫の思いやりあるさま。

大君の思い

お話するのがとても苦しいのです　何日もお出で下さいませんでしたので

もの言ふがいと苦しくてなむ。日ごろおとづれたまはざりつれば、おぼつかなくて過ぎはべりぬべきにやと、くちをしくこそはべりつれ」と、息の下にのたまふ。（薫）「かく待たれたてまつりつるほどまで参り来ざりけること」とて、さくりもよよと泣きたまふ。御ぐしなどすこし熱くぞおはしける。（薫）四「何の罪なる御ここちにか。人の嘆き負ふこそかくはあんなれ」と、御耳にさし当てて、ものを多く聞こえたまへば、うるさうもはづかしうもおぼえて、顔をふたぎたまへり。いとどなよなよと、あえかにて臥したまへるを、五むなしく見なしていかなるここちせむ、と胸もひしげておぼゆ。「日ごろ見たてまつりたまひつらむ御ここちも、やすからずおぼされつらむ。今宵だに心やすくうち休ませたまへ。宿直人さぶらふべし」と聞こえたまへば、うしろめたけれど、さるやうこそは、とおぼして、すこしぞきたまへり。

そんなに待ち遠しく思って頂くほど長らく　しゃくり上げ声を立ててお泣きになる　お伺いしなかったとは　〔大君の〕〔口を〕　〔大君は〕煩わしくも気詰りにも感じて　〔お袖で〕　いつもより一層力なげに　か細くなって横たわっていられるのを　今夜だけでもゆっくりとお休みなさいませ　〔中君は〕気になるけれど　何か訳があるのだろうお引き込みになった

直面にはあらねど、はひ寄りつつ見たてまつりたまへば、いと苦　〔大君は〕とて

九　こうまで親昵になる前世からの約束があったのだろう。

一〇　この上もなくおだやかで、何の警戒もいらない薫のお人柄を、あのもう一人のお方（匂宮）にお比べ申してご覧になると、その真心のほどもしみじみ分るのだった。

一一　亡くなったあとの思い出にまで、強情で、人の情けの分らぬ女とは思われたくないと気になさって。死期に臨んで、せめていい思い出を残したいと思う。

一二　そっけなく（薫を）押しのけたりは、とてもおできになれない。

一三　不断の読経の、明け方近く交替する声がとてもありがたく。前に「法華経を不断に読ませたまふ」（九九頁）とあったもの。後夜から晨朝に交替するのであろう。その時、重唱になる（六巻夕霧一七頁参照）。

一四　宇治山の阿闍梨も夜居に伺候していて、うとうとしていたのが。

八の宮、阿闍梨の夢にも見える

「夜居」は、僧が寝所近くで終夜加持をすること。

一五　梵語の音をそのままに読む呪語。災厄を除き功徳を得るとされた。

一六　大層尊く頼もしげに聞える。「功づく」は、仏道修行の年功を積むこと。

一七　（俗ながらも、生前は仏道に帰依していられたから）いくら何でも極楽浄土においでだろうと。地獄を炎熱の所とするのに対し、極楽を涼しい所とする。

しくはづかしけれど、かかるべき契りこそはありけめ、とおぼして、〔大君は〕もつらく気がひけるけれども

一〇　こよなうのどかにうしろやすき御心を、かの片つ方の人に見くらべたてまつりたまへば、あはれとも思ひ知られにたり。むなしくなりなむのちの思ひ出でにも、心ごはく、思ひ隈なからじとつつみたまひて、

一一　はしたなくもえおし放ちたまはず。〔薫は〕夜通し女房たちを指図して〔大君は〕ほんの一滴も召し上がる様して、御湯薬湯などさし上げさせなさるけれども子もない

など参らせたてまつりたまへど、つゆばかり参るけしきもなし。大変なことだいみじのわざや、いかにしてかはかけとどむべきと、言はむかたなく思ひゐたまへり。どうしたらお命を取りとめることができようかと〔薫は〕途方にくれて悲しみに沈んでいらっしゃる

一三　不断経の、暁がたのゐかはりたる声のいと尊きに、阿闍梨も夜居にさぶらひて眠りたる、はっと目覚めてうちおどろきて陀羅尼読む。老いかれにたれど、年寄ってしわがれた声だが

一六　いと功づきて頼もしう聞こゆ。〔阿闍梨〕「いかが今宵はおはしましつらむ」今夜はご気分はいかがでしたか

など聞こゆるついでに、故宮の御ことなど申し出でて、鼻しばしばうちかみて、〔阿闍梨〕「いかなる所におはしますらむ。故八の宮

一七　ご推察申し上げていましたのにさりとも涼しき方にぞ、と思ひやりたてまつるを、先つころの夢になむ見えおは

一 俗人のお姿で。極楽に成仏していないさま。
二 この世を心から厭い捨てていたので。以下「すすむるわざせよ」まで、夢に現れた八の宮の言葉。「厭ひ離る」は「厭離」を和らげた言い方。
三 わずかに気にかかる一ふしがあって、往生の一念が乱れたために。姫君たちの身の上を心にかけてのこと、ととれる言葉。前に中の君の夢にも「いとものおぼしたるけしきにて」現れている（九四頁）。
四 「弥陀の称名念仏の事也」（『細流抄』）。実際はこう言ったのを、ぼかして書いた。
五 『法華経』常不軽菩薩品の偈を唱えて勤行すること。諸方を礼拝して廻るので、「つく（額づく）」という。釈尊がまだ菩薩（仏となる前の修行者）であった時、「我深く汝等を敬ひて、敢へて軽慢せず。所以は何。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」と言って、四衆を礼拝して廻ったので、常不軽菩薩と呼ばれたことから、右の経文を唱えながら礼拝する。
六 どうか、父宮の往生なさる所がまだお決りにならぬ前にお側に参って、同じ所にも（生れ変りたい）。
七 阿闍梨の命じた常不軽勤行の僧たち。
八 夜明け方の嵐に難渋して。
九 宇治の宮邸の中門あたりに坐って。「中門」は、一巻末摘花二七二頁注六参照。
一〇 回向の終りの方の（当得作仏という）文句が、大層身に沁みる。「回向」は、自分の修行の功徳を他

薫、中の君と贈答

しました しましし。俗の御かたちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば、心と 何の執着もなかったのだが まることなかりしを、いささかうち思ひしことに乱れてなむ、ただ 今しばらく本願の浄土に行けずにいるのを思うと しばし願ひの所を隔たれるを思ふなむ、いとくやしき、すすむるわ 〔往生を〕助ける供養をせよ ざせよ、といとさだかに仰せられしを、たちまちにつかうまつるべ 仕してよいか分りませんので きことのおぼえはべらねば、堪へたるにしたがひて、行ひしはべる 私のできます範囲で 修行しております僧たち五六人に命じて 法師ばら五六人して、なにがしの念仏なむつかうまつらせはべる。 そのほかには私に思い当るところがございまして さては思うたまへ得たることはべりて、常不軽をなむつかせはべ 行じさせております す る」など申すに、君もいみじう泣きたまふ。かの世にさへさまたげ 薫 後の世まで父宮の往生をお妨げ申しているらしい罪障の深さを きこゆらむ罪のほどを、苦しき御ここちにも、いとど消え入りぬば 〔大君は〕苦しいご気分の中でも ますます絶え入らんばかりに つらくお思いになる かりおぼえたまふ。いかで、かのまだ定まりたまはざらむさきにま 〔阿闍梨の話を〕 でて、同じ所にも、と聞き臥したまへり。

阿闍梨は言少なにて立ちぬ。この常不軽、そのわたりの里々、京 宇治近辺の 廻ったのだが までありきけるを、暁の嵐にわびて、阿闍梨のさぶらふあたりを尋 伺候しているこのお邸にたどり着いて ねて、中門のもとにゐて、いと尊くつく、回向の末つ方の心ばへい 大層尊げに礼拝する

に廻すこと。ここは、常不軽を行ずること。
一一（姉君のご容態が）とてもご心配なので。
一二 奥の方に置いてある几帳の背後にお近寄りになった気配を（薫は）お聞きになって。中の君は、さきに「ふと隠れたまひぬれば」（九九頁）とあった。
一三 常不軽の声を何とお聞きになりましたか。勤行の一行が唱える偈のこと。
一四（常不軽の行は）重い法事には行わぬものですが、それでもありがたく思われます。朝廷などでは行われないもの、とされている。
一五 霜も冷たく凍る岸辺の千鳥が、寒さに耐えかねて鳴く声も悲しく響く明け方です。
一六（歌ともなく）話すように申し上げなさる。歌は節をつけて言う。
一七 冷淡な匂宮のご様子にも似ていて、ふとその面影がしのばれるが。
一八 明け方の、羽に置く霜を払って鳴く千鳥は、悲しみに沈む私の心を知っていて、あんなにあわれな声で泣くのでしょうか。
一九（年寄りの弁の君では）いかにも似合わぬ代役だけれども。薫が匂宮の「御けはひにも通ひて」とあったのと対照的。
二〇 このような折にふれての何げない歌のやりとりでも、（大君は）遠慮がちながらも、あたたかく、こちらの気持をちゃんと受け止めてお相手して下さるのに。以下、薫の思い。

とあはれなり。客人（薫）もこなたにすみたる御心にて、（仏道に深く帰依していられるお方ゆえ感に耐えぬお気持で）あはれ忍ばれたまはず。中の宮（中の君）、切（せち）におぼつかなくて、奥の方（かた）なる几帳（きちやう）のうしろ（さっと居ずまいをお正しになって）に寄りたまへるけはひを聞きたまひて、あざやかにゐなほりたまひて、「不軽の声（ふきやう）はいかが聞かせたまひつらむ。重々（おもおも）しき道には行はぬことなれど、尊くこそはべりけれ」とて、

（薫）一五 霜さゆる汀（みぎは）の千鳥（ちどり）うちわびて
鳴く音（ね）かなしきあさぼらけかな

言葉（ことば）のやうに聞こえたまふ。一七 つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、いらへにくくて（お返事がしにくくて）、弁の君を通して申し上げなさる）弁してぞ聞こえたまふ。

（中君）一八 あかつきの霜うち払ひ鳴く千鳥
もの思ふ人の心をや知る

一九 似つかはしからぬ御代りなれど、ゆゑなからず聞こえなす。（気品は失わぬさまでお伝え申し上げる）二〇 かやうのはかなしごとも、つつましげなるものから、なつかしうかひあるさまにとりなしたまふものを、今はとて（これきりでお別れしたら）別れなば、いかなるここち（どんなに悲しいことか）

一（薫は）八の宮が、阿闍梨の夢に現れなさったという様子を思い合せてご覧になると。

二（八の宮の霊は）大空を翔りながらも、どのようにご覧になるだろう。死者の霊が成仏せぬ時、宙をさまようとされた。

薫、神仏祈願に手を尽す

三 生前お籠りになったお寺。阿闍梨の山寺。

四（八の宮追善の）誦経をおさせになる。「誦経」は、経典を暗誦すること。

五 方々の寺に、ご祈禱依頼の使いをさし向けさせなさり。大君の病気平癒祈願である。

大君、受戒を願うも、人々許さず

六 朝廷にも京のお邸にも、お暇を頂くよしお願いなさって。朝廷には、暇文（欠勤届）を出す。

七「祭」は、神霊を招き、供物などして祈禱すること。「祓」は、神に贖物をして、罪、災厄などを除くこと。ともに陰陽道で行う。

八 何かの祟りなどという性質のご病気でもなかったので。前に薫は「何の罪なる御ここちにか」（一〇〇頁）と言っている。

九 この方（薫）が、このように付きっきりで、すっかり隔てがなくなってしまったのだから（顔も姿も見られてしまったのだから）。

一〇 今はこんなに並み大抵でないかに見える愛情だが、（結婚後）思ったほどではなかったと、私もあの方もお互い相手にそう思われるのは。

せむ、と思ひまどひたまふ。 気もそぞろの思いをなさる

一 宮の夢に見えたまひけむさまおぼしあはするに、かう心苦しき御 このようにお気の毒な

姫君たちのお身の上を

ありさまどもを、二 天翔りてもいかに見たまふらむ、とおしはかられて、三 おはしましし御寺にも、四 御誦経させたまふ。五 所々に祈りの使出だしたてさせたまひ、六 公にも私にも、御暇のよし申したまひて、

万事行き届かぬことなく手を尽しなさったけれども

七 祭祓、よろづにいたらぬことなくしたまへど、八 ものの罪めきたる御病にもあらざりければ、何の験も見えず。

大君ご自身も

治りたいと思って

みづからも、たひらかにあらむと、仏をも念じたまはばこそあらめ、

仏様にお願いでもなさるのならばともかく

ぜひこんな機会にどうかして死にたい

なほかかるついでにいかで亡せなむ、九 この君のかく添ひゐて、残りなくなりぬるを、今はもて離れむかたなし、さりとて、一〇 かうおろかならず見ゆめる心ばへの、見劣りしてわれも人も見えむが、心やすからず憂かるべきこと、もし命しひてとまらば、病にことづけて、かたちをも変へてむ、さてのみこそ、長き心をもかたみに見果つべきわざなれ、と思ひしみたまひて、とあるにてもかかるにても、

もう他人でいられるすべはない

尼にでもなってしまおう

そうしてはじめて

変らぬ気持もお互いに行く末長く見届けることができるのだ

情けないことであろう

もしどうでも生き永らえたら

生死のほどはどうあろうとも

と深く心にお決めになって

一一 どうかしてこの願いの筋（出家の本意）を遂げたい。

一二 仏教の戒（禁制）を守ること。ここでは在俗の人の守る五戒（殺生、偸盗、邪淫、妄語、飲酒の五つの戒律）をいう。（五巻若菜下一二二頁注三、四参照）

一三 そのように阿闍梨に伝えて下さい。宇治山の阿闍梨を導師に受戒を頼むのである。

一四 これほどお心を痛めていられるご様子の中納言様（薫）も、どんなにかがっかりお思い申されましょう。

一五 頼みのお方。薫のこと。

一六（薫が）こうして宇治に引き籠っておいでなので。薫が公私共に休暇を願い出た旨が前頁に見える。

一七 京のお邸に仕える者や、側近の家司などは。「家司」は、貴族の家の庶務をつかさどる事務官。

人々、薫を宇治に見舞う

一八 豊明節会のこと。五節の最後の中の辰の日に行われ、舞姫が舞を天覧に供する。ここは、十一月上の辰の日である。（九六頁注七参照）

一九 都では、まさかこれほどの荒れではあるまいと。以下、次頁二行目の「……かたらはばや」まで、薫の心に添って述べる。

二〇 自ら求めてのこととはいえ、心細い思いがして。

豊明の日、薫の思い

二一（大君とは）ついに添えぬままに終ってしまうのかと思うと、そんな前世からの定めは情けないけれども、（今さら）恨みに思うわけにもいかず。

二 いかでこの思ふこととしてむ、とおぼすを、（そこまでえらそうなことは〔薫には〕）さまでさかしきことはえうち出でたまはで、（お言い出しになれず）中の宮に、（中の君）「ここちのいよいよ頼もしげなくおぼゆるを、（大君）私の病気はいよいよ治る見込みがないように思われますから）忌むことなむ、（大層功徳があって命を延ばすことと聞きましたが）いとしるしありて命延ぶることと聞きしを、さやうに阿闍梨にのたまへ」と聞こえたまへば、皆泣き騒ぎて、「いとあるまじき御ことなり。かくばかりおぼしまどふめる中納言殿も、いかがあへなきやうに思ひきこえたまはむ」と、似げなきことに思ひて、（ことに思って）頼もし人にも（申し伝えないので〔大君は〕残念にお思いになる）申しつがねば、くちをしうおぼす。

かく籠りゐたまへれば、（次々に聞き伝えて）聞きつぎつつ、（お見舞にわざわざ宇治まで出掛けていらっしゃる方もある）御とぶらひにふりはへもの（〔薫が大君を〕並々にお思いではないのだ）したまふ人もあり。おろかにおぼされぬこと、と見たてまつれば、殿人、（ご心配）親しき家司などは、（めいめいが病気平癒のためあらゆるご祈禱をさせて）おのおのよろづの御祈りをせさせ、（申し上げる）嘆きこゆ。

豊明は今日ぞかしと、（〔薫は〕）京思ひやりたまふ。（〔ここ宇治の里では〕）風いたう吹きて、雪の降るさまあわたたしう荒れまどふ。（心せかせるかのように荒れ狂っている）都にはいとかうしもあらじかしと、人やりならず心細うて、うとくてやみぬべきにや、と思ふ契

一（大君の）やさしくかわいいご様子なのに。先夜来、枕頭の薫に見せた態度など。

二 終日、日の光もささず、雪空のまま暮れてしまった。

三 空もかき曇って、日の光もささぬ奥山に、悲しみに昏れて明け暮れる日々であることよ。「日かげ」に「日光」と「日陰の蔓」を掛け、豊明の節会に因む。この日、舞姫と神事奉仕の廷臣が插頭に掛けるからである（三巻少女二六〇頁注一参照）。「霜枯れの蓬の門にさしこもり今日の日かげを見ぬぞわびしき」（『高光集』）大臣うせたまひての年、新嘗会のころ、内裏にも参らで内侍のもとに）

薫、臨終の大君と語る

四 ただこうして薫がここにご逗留下さるのを頼りに、宮家の人々は皆お思い申している。

五 いつものように、大君の身近のお席にいらっしゃると。「東面の今すこし気近き方」（九九頁）である。

六 隔ての御几帳などを、風が中まで見えんばかりに吹きあおるので。

七 私として心の限りを尽して、神仏にお祈り申し上げているかいもなく。

八 お顔はしっかりとお袖で覆っていらっしゃる。最後までたしなみを忘れない心構え。

九 少し気分のましな時がありましたら、申し上げたいこともございますのですが。

りはつらけれど、恨むべうもあらず、なつかしうらうたげなる御もてなしを、ただしばしにても例になして、思ひつることどもかたらはばや、と思ひ続けてながめたまふ。光もなくて暮れ果てぬ。

（薫）三 かきくもり日かげも見えぬ奥山に
心をくらすころにもあるかな

四 ただかくておはするを頼みに、皆思ひきこえたり。五 例の、近き方にゐたまへるに、六 御几帳などを、風のあらはに吹きなせば、中の宮奥に入りたまふ、見苦しげなる人々も、かかやき隠れぬるほどに、いと近う寄りて、「いかがおぼさるる。七 ここちに思ひ残すことなく、念じきこゆるかひなく、御声をだに聞かずなりにたれば、いとこそわびしけれ。後らかしたまはば、いみじうつらからむ」と、泣く泣く聞こえたまふ。ものおぼえずなりにたるさまなれど、八 顔はいとよく隠したまへり。（大君）九「よろしき隙あらば、聞こえまほしきこともはべれど、ただ消え入るやうにのみなりゆくは、くちをしきわざにこ

一〇 縁起でもない、こんなに心細がっているとは悟られまいと、こらえておいでだが、嗚咽の声も抑えきれない。

一一 どのような前世の因縁で。以下「……ふしにもせむ」まで、薫の思い。

一二（大君の姿容貌に）少しでも厭なところをお見せ下されば、思いを冷ますきっかけにしよう。

一三 白いお召し物の柔らかなのを重ねて。（九三頁注一四参照）

一四「衾」は、夜具のこと（五巻柏木二九〇頁注七参照）。ここは、衾も重く感じて、押しやっているのか。

一五 衣裳の中には身もない、そんな雛の人形を寝かせてあるような感じで。痩せ細っている体。

一六 御髪は、さほどうるさくない程度に、長々と置かれているのが。六巻椎本三五一頁に大君の髪についての描写がある（注一五参照）。

一七 枕からこぼれ落ちているあたりが、つやつやとして見事で美しいにつけても。（同右注一六、一七参照）

一八（薫に）気を許そうともせず、気高い気品があって。

そ」と、いとあはれと思ひたまへるけしきなるに、いよいよせきとどめがたくて、ゆゆしう、かく心細げに思ふとは見えじと、つつみたまへど、声も惜しまれず。

本当に悲しいと思っていらっしゃるご様子なので　〔薫は〕　〔涙を〕

いかなる契りにて、限りなく思ひきこえながら、つらきこと多くて別れたてまつるべきにか、少し憂きさまをだに見せたまはばなむ、思ひさますふしにもせむ、とまもれど、いよいよあはれげにあたらしく、をかしき御ありさまのみ見ゆ。腕などもいと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひも変らず、白ううつくしげになよなよとして、白き御衣どものなよびかなるに、衾を押しやりて、中に身もなき雛を臥せたらむここちして、御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたる際の、つやつやとめでたうをかしげなるも、いかになりたまひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見るが、惜しきことたぐひなし。ここら久しくなやみて、ひきもつくろはぬけはひの、心とけずはづかしげに、

こうまで限りなくお祭い申しながら　心に叶わぬことばかりでお別れ申さねばならないのか　見つめるけれども　可憐でお別れするのはつらく　美しいご様子ばかりが目につく　弱々しそうなのに　肌の色つやも変らず　痩せ細って　白くかわいらしくなよやかな感じで　〔大君は〕一体どうなっておしまいになるのかと　生きてゆかれそうにもないご様子だと思うと　ずっと長い間　患って　身づくろいとてしない様子なのに

一　こととこまかに見ていると、魂も身から抜け出してゆきそうな気がする。気もそぞろの思い。物思いなどのため、魂が身体から遊離すると考えられていた（五巻柏木二七二頁注六、二七三頁注一〇参照）。

二　結局私を見捨てて行ってしまわれたら。先立ってお亡くなりになってしまったら。

三　命数がもし決っていて生き残ることになりましても。定命（前世から定められている寿命）が尽きないにしても。

四　あのお方（中の君）のことを話題になさると。

五　こうしてはかなくお別れしなくてはならぬ私でしたのに、深いお情けも分らぬ者のようにお思いでしたのも、不本意に思われましたので。薫の志を受け入れずにきたことを弁明する。

六　この、残りなさる方（中の君）を、私同様にお思い申して下さいと、それとなくお願い申しましたのに。（三五頁注一〇参照）

七　何としても、ほかのお方に心を向けることができませんでしたので。「この世を思ひかかづらふ」は、この世のことに執着する、の意。

八　あなたのご意向にお従い申さぬことになりました。詠嘆の気持から、連体止めになる。

お洒落に憂き身をやつして騒いでいる人などよりずっと美しく

限りなうもてなしさまよふ人にも多うまさりて、こまかに見るままに、魂もしづまらむかたなし。

（薫）「つひにうち捨てたまひては、世にしばしもとまるべきにもあらず。

私もこの世にしばらくも生きていようとも思いません

命もし限りありてとまるべうとも、深き山にさすらへなむとす。ただいと心苦しうてとまりたまはむ御ことをなむ思ひきこゆる」と、

[出家遁世して] 深い山に分け入る積りです [しかし] ただ一つ大層おいたわしい有様であとにお残りになるお方のことをお案じ申すのです

何とか答えて頂こうと思って

いらへさせたてまつらむとて、かの御ことをかけたまへば、顔隠したまふ御袖を少しひきなほして、「かくはかなかりけるものを、思ひ隈なきやうにおぼされたりつるもかひなければ、このとまりたまはむ人を、同じことと思ひきこえたまへ、とほのめかしきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからましと、これのみなむらめしきふしにてとまりぬべうおぼえはべる」とのたまへば、「かくいみじうもの思ふべき身にやありけむ、いかにもいかにも、異ざまにこの世を思ひかかづらふかたのはべらざりつれば、御おもむけに従ひきこえずなりにし。今なむ、くやしく心苦しうもおぼゆる。

ずらせて

（大君）

その通りにして下さっていたら　私も安心して死ねましょうにと　このことだけが忍めしいこととしてこの世に執着が残りそうに思われます

うひどく悲しい思いをしなければならぬ身だったのでしょう

今になって　悔まれもし心痛む思いもいたします

九（中の君のことは）お案じ申されますな。大君のもっとも執着するところを断とうとする配慮。
一〇 宇治山の阿闍梨のほかにも大勢招じていること、九八頁に見えている。
一一 真言密教で、印を結び陀羅尼を唱えて仏を念ずること。病気平癒の祈願。
一二 俗世を厭い離れよと、わざわざお勧め下さる仏などが（その方便として）こんな悲しい目にお会わせになるのであろうか。以下「いみじきわざかな」まで、薫の思いをそのまま地の文とする。「世の中を厭ひ離れね」は、仏教でいう「厭離穢土」のこと。

大君、死す

一三 見ているうちに、草木の枯れるようにお亡くなりになったのは、何という悲しいことか。「枯れゆく」は歌語。
一四 足摺もしたいぐらいで。「足摺」は、悲しみのあまり、足を地に摺ること。
一五 いつものように、おせっかいな女房たちが。いつも女房たちは、姫君たちの心を無視して、どんどん事を運ぶ。
一六 もう今は（お側にいられるのは）不吉なことです。死の穢を忌むからである。
一七 燈火を近くにかかげて（大君の死顔を）ご覧になると。「かかぐ」は、燈心を掻き立てて明るくすること。紫の上の死去の際に似た場面がある（六巻御法一一六頁参照）。

薫、大君を葬る

けれども　慰めて
されども、うしろめたくな思ひきこえたまひそ」などこしらへて、
［大君が］
いと苦しげにしたまへば、修法の阿闍梨ども召し入れさせ、さまざまに験ある限りして、加持参らせさせたまふ。われも仏を念ぜさせたまふこと限りなし。
効験のある僧ばかりで　してさし上げさせなさる　薫自身も仏を念じて一心不乱でいらっしゃる

世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにものの枯れゆくやうにて消え果てたまひぬるは、いみじきわざかな。ひきとどむべきかたなく、足摺もしつべく、人のかたくなしと見むこともおぼえず。限りと見たてまつりたまひて、中の宮の、後れじと思ひまどひたまふさまもことわりなり。あるにもあらず見えたまふを、例の、さかしき女ばら、今はいとゆゆしきこと、とひきさけたてまつる。
べもなく　まわりの者が愚か者よと見ようとも気にもならない　引き留める
中の君　自分もご一緒にと　いよいよご最期とお思い申しなさって
［中君が］正気も失せたさまでいらっしゃるのを　嘆き悲しまれるのもご無理はない
［中君を］お引き離し申し上げる

薫
中納言の君は、さりとも、いとかかることあらじ、夢かとおぼして、御殿油を近うかかげて見たてまつりたまふに、隠したまふ顔も、
いくら何でも　まさか亡くなられるはずはない　夢ではないかと思われて　［お袖で］隠していられる顔も

一　このまま、せめて蟬の脱殻のようにいつまででも見ていられたら、と悲しみに胸がいっぱいになる。「空蟬は殻を見つつもなぐさめつ深草の山煙だに立て」（『古今集』巻十六哀傷、堀川の太政大臣みまかりにける時に、深草の山にをさめてける後に詠みける僧都勝延）

二　臨終の作法。死後の処置をすること。女房たちが奉仕しているのであろう。

三　世にまたとないことに思われて。以下「……見つけさせたまへ」まで薫の思い。

四　（大君との死別が）真実、この世の執着を捨て去る道しるべならば（仏の方便ならば）。前に「世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの……」とあったのを受ける。

五　いっそすっかり煙にでもしてしまおう、とお思いになって。亡骸を見るのはつらいからである。前の「虫の骸のやうにても……」を受け、『古今集』の歌の「煙だに立て」に応じる。

六　あれこれ葬送の儀式を取り行うのは、もはや言うべき言葉もないのだった。

七　宙を歩いているようにふらふらと。葬送より帰る薫のさま。

八　「御忌」は、死穢に触れた近親者などが家に慎み籠ること。期間は三十日。薫がいるので、人数が多いのである。

中の君の嘆き

ただ寝たまへるやうにて、〔眠っていらっしゃるようで〕変りたまへるところもなく、〔生前と〕うつくしげにてうち臥したまへるを、かわいい様子をかくながら、虫の骸のやうにても見るわざならましかば、と思ひまどはる。今はのことどもするに、御髪を剃ぎすると、かきやるに、さとうち匂ひたる、〔さっと芳香がただようのが〕ただありしながらの匂ひに、〔ただ生前の匂いそのままで〕なつかしう香ばしきも、ありがたう、〔何ごとをもってこの方を〕何ごとにてこの人を、すこしもなのめなりしと思ひさまさむ、まことに世の中を思ひ捨て果つるしるべならば、〔この亡骸に〕恐ろしげに憂きことの、悲しさもさめぬべきふしをだに見つけさせたまへ、と仏を念じたまへど、いとど思ひのどめむかたなくのみあれば、〔仕方なくて〕言ふかひなくて、ひたぶるに煙にだになし果てて、〔悲しいので〕む、と思ほして、とかく例の作法どもするぞあさましかりける。空を歩むやうにただよひつつ、限りのありさまさへはかなげにて、煙も多くむすぼほれたまはずなりぬるもあへなしと、あきれて帰りたまひぬ。

御忌にこもれる人数多くて、心細さはすこしまぎれぬべけれど、

〔慰められようけれど〕

〔この亡骸に〕恐ろしそうな醜いことで悲しさも吹き飛んでしまうようなところでも

〔ますます心の静めようもなくただも〕

〔火葬の煙もあまりとどこおらずに終ってしまわれたのもあっけないことと〕〔薫は〕茫然としてお帰りになった

中の君の中の宮は、人の見思はむこともはづかしき身の心憂さを思ひしづみたまひて、また亡き人に見えたまふ。匂宮宮よりも御とぶらひいとしげくたてまつれたまふ。思はずにつらしと思ひきこえたまへりしけしきも、おぼしなほらでやみぬるをおぼすに、いと憂き人の御ゆかりなり。

忌に籠る薫——後悔の思い

薫中納言、このように世の中がいかにも情けなく思われる機会にかく世のいと心憂くおぼゆるついでに、本意とげむとおぼさるれど、女三の宮のお嘆きにご遠慮し三条の宮のおぼさむことに憚り、中の君のお身の上のおいたわしさにも心が痛んでこの君の御ことの心苦しさとに思ひ乱れて、かののたまひしやうにて、形見にも見るべかりけるものを、下の心は、身を分けたまへりとも、自分は心を移せそううつろふべくにも思えなかったのだが［中君に］こんな気苦労をおかけ申すよりはおぼえざりしを、かうもの思はせたてまつるよりは、いっそ深い仲になってただうちかたらひて、尽きせぬなぐさめにも見たてまつり通はましものを、などおぼす。かりそめに京にも出でたまはず、心を晴らすことかき絶え、ふっつりとなぐさむかたなくて籠りおはするを、世人も、おろかならず思ひたまへること、と見聞きて、内裏帝よりはじめたてまつりて、方々からのご弔問も多い御とぶらひ多かり。

九 人目には何と思われようかと、それさえ気のひけるわが身のつらさにお心も沈んで。匂宮に捨てられたと思って、大君がそれを苦に亡くなられたからである。

一〇 こちらもまた、まるで死んだ人のようでいらっしゃる。

一一（匂宮を）心外なひどいお方とお恨み申していられた（大君の）お気持も、お思い直しになることもないままに終ってしまったことをお考えになると。中の君の思い。大君の無念の思いは、八一頁～八二頁に見える。

一二 何ともつらい匂宮とのご縁である。「人の御ゆかり」で二語。

一三 大君がおっしゃったようにして、（大君の）形見としてでも中の君と一緒になればよかったのに。以下「……通はましものを」まで、薫の心中。

一四 大君の心の内では、中の君に身を分けた積りでいらっしゃっても。「身をわけたる心のうちは皆ゆづりて、見たてまつらむここちなむすべき」と大君の語ること、三五頁に見えた。

一五 尽きぬ悲しみの慰めとしてでも（中の君と）連れ添うのだった。「見通ふ」は、親しくする、情を通ずるというほどの意。

一六（宇治の姫君を）並々ならず大切に思っていられたのだ。

一 四十九日までの七日ごとの法要。
二 心をこめて供養なさるが。「孝ず」は、本来は、親の追善供養をすること。
三 決った作法があるので、お召し物の色が変らないのを。夫婦ではないので、喪服を着るわけにはゆかないのである。
四 大君づきの、特に親しくお仕えしていた女房たちが。
五 悲しみに血の涙を流しても、かいもないことには、わが袖を亡き人を偲ぶ喪の色に染められないのだった。悲しみに涙が尽きたあと、血涙が出るとされていた。
六 薄紫または薄紅をいう。禁色（濃い紫、濃い紅）に対する（一巻末摘花二七一頁注一三参照）。薫の直衣の色目。次に「濡らし添へ……」とあるので、薄紅であろう。
七 氷が解けぬまま光るのかと見えるお袖を。砧で打って光沢を出したさま。
八 女房たちが、几帳の陰などから覗き見して。
九 今さら嘆いても返らぬことはさておいて。大君死去の悲しさはともかくとして。
一〇（薫と姫君たちは）案外なご縁でいらしたこと。
一一（大君も中の君も）それぞれに（薫のお志に）添われなかったとは。
一二 中の君には。

薫の哀傷の歌

（薫は）大層立派に

はかなくて日ごろは過ぎゆく。七日七日のことども、いと尊くせ
いつのまにか日数はたってゆく
させたまひつつ、おろかならず孝じたまへど、限りあれば、御衣の
おさせになりながら
色の変らぬを、かの御方の心寄せわきたりし人々の、いと黒く着か
大層濃い鈍色の喪服
へたるをほの見たまふも、
に着替えているのを眼になさるにつけても

（薫）
くれなゐに落つる涙もかひなきは
形見の色を染めぬなりけり

薫、中の君を慰める

聴し色の氷解けぬかと見ゆるを、いとど濡らし添へつつながめたま
（涙で）
物思いに沈まれるお姿は
ふさま、いとなまめかしうきよげなり。人々のぞきつつ見たてまつ
まことに優雅でおきれいである
（女房）
りて、「言ふかひなき御ことをばさるものにて、この殿のかくなら
（薫）
なにおなじみ申したのに
ひたてまつりて、今はとよそに思ひきこえむこそ、あたらしくくち
これきりでお出でがないとお思い申すのが
惜しくて残念でなりま
をしけれ。思ひのほかなる御宿世にもおはしけるかな。かく深き御
せん
こんなに深いお志ですのに
心のほどを、かたがたに背かせたまへるよ」と泣きあへり。
皆泣いている
この御方には、（薫）亡き人のお形見として「昔の御形見に、今は何ごとも聞こえうけたまは
ご相談にあずかることにし
たいと存じております
らむとなむ思うたまふる。うとうとしくおぼし隔つな」と聞こえた
他人行儀にお考え下さいますな

一三 この方（中の君）は、はきはきしたご性分で、ずっとおおらかで、上品ではいらっしゃるが。

一四 世間の人が、風情のないものと言うとか聞く十二月の月が。『河海抄』に「清少納言枕草子、すさまじきもの、おうなのけさう、しはすの月夜と云々」とあるが、現存本には見えない。（三巻朝顔二〇九頁注八参照）

一五 御簾を巻き上げてご覧になると。以下の文「遺愛寺の鐘は枕を欹て聴く　香炉峯の雪は簾を撥げて看る」（『白氏文集』巻十六、律詩「香炉峯の下に、新たに山居をトし、草堂初めて成る時に、偶、東壁に題す」。『和漢朗詠集』巻下雑、山家）による。

一六 また今日も暮れたと。「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」（『拾遺集』巻二十哀傷、読人しらず。『和漢朗詠集』巻下雑、山寺）

一七 亡き人に後れまいと空行く月を慕うことだ、いつまでも住むべきこの世ではないから。大君を月によそえ、「住む」に「澄む」を掛け、月の縁語。

一八 三八頁注一参照。

一九 まわりの山々が雪にきらめいて鏡と見まがう岸辺の氷が。「扇どものさまなどは、ただ雪深き山を月の明きに見わたしたることちしつつ、きらきらと、そこはかと見わたされず、鏡をかけたるやうなり」（『紫式部日記』）

十二月、雪降る月夜、薫の哀傷の歌

（中君は）何かにつけて不運な身の上なのだと　むやみに気おくれがして

まへど、よろづのことと憂き身なりけりと、もののみつつましくて、まだ対面してものなど聞こえたまはず。一三 この君は、けざやかなるかたに、いますこし子めき、気高くおはするものから、なつかしくに

人を優しく受け止め　潤いのある人柄では　事あるごとに感じられる

ほひある心ざまぞ、劣りたまへりけると、事に触れておぼゆ。

（大君より）

雪のかきくらし降る日、終日にながめ暮らして、世の人のすさまじきことに言ふなる師走の月夜の、曇りなくさし出でたるを、簾巻き上げて見たまへば、向ひの寺の鐘の声、枕をそばたてて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、

（薫）一七 おくれじと空ゆく月をしたふかな

（薫は）物思いに沈んで

つひにすむべきこの世ならねば

風のいとはげしければ、蔀おろさせたまふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月影にいとおもしろし。京の家の限りなくと磨くも、

下ろさせなさるのに　月の光に　都の邸宅

とてもこうはゆかぬものだ　かろうじていささかなりとも回復なさりでもして

えかうはあらぬはや、とおぼゆ。わづかに生き出でてものしたまはましかば、もろともに聞こえまし、と思ひつづくるぞ、胸よりあま

一緒にお話し申そうものを　胸も張りさけるいたら

一 恋しさに堪えかねて、死ぬ薬が欲しいので、雪の山に跡を晦ましてしまおうか。「雪の山」は、ヒマラヤ山のこと。「雪山」という。薬草が多いとされていたので、そこには死ぬ薬もあろうから、という含意がある。眼前の雪を頂く山々を見ての思い。

二 半偈を教えたという鬼でもいてくれたらよいのに、それにかこつけて身も投げ捨てるのに。「偈」は、仏の功徳を讃める韻文。普通四句から成る。釈迦がまだ修行中、雪山童子といった時、羅刹（鬼）から「諸行無常、是生滅法」という、偈の半分を聞いて歓喜し、さらに残りの半分を聞こうとしたところ、餓えて力なく、言えない、食するものは人肉と人血のみと答えたので、童子はその身を与えることを約束し、残りの「生滅滅已、寂滅為楽」を教えられた。童子は、偈を石壁に刻し、衣服を木に掛けて谷に身を投げたが、羅刹は帝釈天に変じ、童子を受け取り助けた（『大般涅槃経』第十四。その他）。（図録六参照）

三 未練がましいご道心ではある。草子地。雪山童子は求法のためだが、薫は恋ゆえだからである。

四 年取った女房たち。弁の君など、姫君の結婚に熱心だった老女たち。

五 何よりも残念で悲しいことと。大君逝去のこと。

六 中の君のこと。

七 軽いお摘みもの。「くだもの」は、木の実や果実、菓子などの軽食。

忌に籠る薫——人人の追憶談を聞く

ようなる気がする
るここちする。

（薫）一 恋ひわびて死ぬる薬のゆかしきに
雪の山にやあとを消なまし

とお思いになるとは
半なる偈教へけむ鬼もがな、ことづけて身も投げむ、とおぼすぞ、二
心ぎたなき聖心なりける。三

女房たちを
人々近く呼び出でたまひて、物語などせさせたまふ世間話けはひなどの、
本当に申し分なく整ってゆったりと奥ゆかしいのを
いとあらまほしくのどやかに心深きを、見たてまつる人々、若い女房は若きは、
心の底からすばらしいお方とお思い申し上げる
心にしめてめでたしと思ひたてまつる。四老いたるは、五ただくちをしうい
みじきことを、いとど思ふ。ひとしお思う「御ここちの重くなりあそばしたのも
ご病気が重くおなりあそばしたのも
なさり方を
匂宮
ことも、ただこの宮の御ことを、思はずに見たてまつりたまひて、
心外なこととお思い申されまして
世間の物笑いになると大層お気になさったようですが
人笑へにいみじとおぼすめりしを、さすがにか六の御方には、かく思
ただ一人お胸の内でお二人の仲をお嘆きのご様子でした
配をしているとはお気づかれ申すまいと
ふと知られたてまつらじと、ただ御心ひとつに世を恨みたまふめり
その間に
お口になさらず
しほどに、七はかなき御くだものをも聞こしめし触れず、ただ弱りに
すっかりお弱り
になられたようでございました
表面では
なむ弱らせたまふめりし。上べには、何ばかりことことしくもの深
何ほどにも大して大げさに心配ごとがある

ようにもお見せになりませんで

げにももてなさせたまはで、下の御心の限りなく、何ごともおぼすめりしに、故宮の御誡にさへ違ひぬることと、あいなう人の御上をおぼしなやみそめしなり」と聞こえて、「大君が」折にふれておっしゃったことなど思い出して話しては

など語り出でつつ、誰も誰も泣きまどふこと尽きせず。

わが心から、あぢきなきことを思はせたてまつりけむこと、と取り返さまほしく、すべてこの世の中が恨めしくて なべての世もつらきに、念誦をいとあはれにした心をこめて

まひて、まどろむほどなく明かしたまふに、まだ夜深きほどの雪の夜も暗い頃の雪の降り積む

気配も大層寒そうな中を

けはひいと寒げなるに、人々声あまたして、馬の音聞こゆ。何人かはかかるさ夜中に雪を分くべき、と大徳たちもおどろき思へるに、

思い切り身をやつされて

宮、狩の御衣にいたうやつれて、濡れ濡れ入りたまへるなりけり。

ぐっしょりと濡れて入って来られるのだった

うちたたきたまふさま、さなり、と聞きたまひて、中納言は、隠

つた部屋

ろへたる方に入りたまひて、忍びておはす。御忌は日数残りたりけれど、心もとなくおぼしわびて、夜一夜雪にまどはされてぞおはしましける。

ひっそりしていられる

夜通し雪のために難渋してお出でになったのだった

[匂宮は] 気がかりでたまらなくて

匂宮 来訪 物越しの対面

宮を中の君に仲立ちしたことを後悔する。「取り返すものにもがなや世の中をありしながらの我が身と思はむ」(出典未詳の古歌)

一一 心に仏を念じ、口に仏の名号や経文を唱えること。

一二 大勢の人声がして、馬の嘶きや蹄の音が聞える。

一三 一体誰がこんな真夜中に雪を踏み分けて来ようか。

一四 僧たち。敬称。忌に籠っている。

一五 狩衣の敬語。貴族の旅行着。縫い付けが少なく、動きやすく仕立てられている(一巻図録一二参照)。

一六 戸をお叩きになる様子で、匂宮のご来訪だろうと(薫は)お聞きになって。妻戸などを叩くのであろう。「さなり」は「さなるなり」の音便「さなんなり」の撥音無表記の形。

一七 御忌は、あとまだ何日か残っているけれども。忌の期間は、三十日。

一八 内心では、この上もなく、何ごとにつけてもお気遣いをなさっていたようですが。

一九 亡き父宮のご教訓にも背いたことと。結婚は考えるなと遺言されたこと(椎本三一九頁注一二参照)。

二〇 せん方ないことに、妹君のお身の上に、お心を痛めるようになられたのでございます。

二一 (薫は)自分のせいで、(大君に)余計な心配をおかけ申したのだと、昔を今に取り返したい思いで。

一 姉君のお嘆きなさっていたご様子に、顔向けならぬ思いがしたものだが。自分が匂宮に捨てられたために、大君を苦しませたと思うからである。

二 それきり思い直して頂くこともできずに終ってしまったにつけても。大君生前に、匂宮の変らぬ心を知ってもらえなかったことを嘆く。

三 ようやく物越しで、（匂宮が）今日までのご無沙汰を言葉を尽してお詫びなさるのを、（中の君は）じっと聞いていられる。「物越」は襖を隔てている趣。

四 このお方（中の君）も、まるで正気も失せた有様で、姉君の跡を追って亡くなられるのではないかと思われるばかりのご様子の痛々しさを。返事の声などが、力なく聞えてくるのであろう。

五 匂宮は、今日はもうどうなろうともかまわぬと思ってお泊りになった。中宮などのお叱りも覚悟の上である。

六 物越しなどではなくて。直接逢いたいと言う。

七 しかるべき女房。中の君に取り次がせるために呼び寄せる。

八 こちらのお嘆きもよそに、薄情とも思えるお扱いぶりが。二カ月にわたって通って来ないことを言う。

九 大君生前の昔も、亡き今とても、ずいぶんひどいと思われる、月余のご無沙汰の罪は。

一〇 可愛げの失せぬ程度にお責め申されるがよいでしょう。「勘ふ」は、罪状を考えて、罰に当てること。

匂宮、宇治に泊る

日ごろのつらさもまぎれぬべきほどなれど、〔中君は〕今までの怨みも忘れてしまいそうな折ではあるが対面したまふべきこ（お逢いになろうという）気も起らずこちもせず、おぼし嘆きたるさまのはづかしかりしを、やがて見なほされたまはずなりにしも、今よりのちの御心あらたまらむは、（今これから先宮の冷たいお心が改まったにしたところで）かさら何にもならないと心の底から怨めしくお思いなので）ひなかるべく思ひしみてものしたまへば、〔女房たちは〕誰も彼もが散々世の中の道理を説いてお聞かせしては）りを聞こえ知らせつつ、物越にてぞ、日ごろのおこたり尽きせずのたまふを、つくづくと聞きゐたまへる。これもいとあるかなきかにて、後れたまふまじきにや、と聞こゆる御けはひの心苦しさを、（気遣わしく悲しいことと）しろめたういみじと、宮もおぼしたり。

今日は御身を捨ててとまりたまひぬ。「物越ならで」といたくわびたまへど、「今すこしものおぼゆるほどまではべらば」とのみ聞こえたまひてつれなきを、中納言もけしき聞きたまひて、さるべき人召し出でて、「御ありさまに違ひて、心浅きやうなる御もてなしの、昔も今も心憂かりける月ごろの罪は、さも思ひきこえたまひぬべきことなれど、憎からぬさまにこそ勘へたてまつりたまはめ。

（匂宮）（物越しなどではなくて）（中君）もっと人ごちがつくまで生きていましたならば）（りなさるけれども）（ばかりですげないご様子なのを）（この由を耳になさって）（も無理のないことですが）

一一（匂宮は）まだこんな手厳しいお咎めを受けられたことがないので、困っておられましょう。かりそめのお情けにも満足しているお相手が多いからである。

一二（中の君は）この方（薫）も何とお思いかと思うと、ますます気がひけて、お返事もようなされない。

一三あんなに固くお約束したことも、すっかりお忘れになるとは。匂宮の誓言、六六頁参照。

一四ご自分のせいとはいえ、（対面もできずに）嘆きながら横になっていられる（匂宮が）さすがにおいたわしくて。中の君の気持。

一五昨夜のように。

一六（匂宮が）数多くの神々に誓って、行く末長く変らぬ仲をお約束申されるにつけても。「誓ひつることのあまたになりぬれば千々の社も耳馴れぬらむ」（『紫明抄』所引。出典未詳）

一七どうしてこうお口上手なのだろうと、いやな気がするけれども。誰にでも言い馴れているのだろう、と思う。

一八女の気持も蕩かしてしまいそうな匂宮のご様子なのを、いちずに嫌い通すわけにはゆかないことと。

一九今までのお約束を思い出してみましても、頼りないことでしたのに、今また将来のことを、何を頼みにするのでしょう。

二〇（こんな歌を聞いては）かえって胸のやる方なく気が気ではない。匂宮の気持に即して書く。

匂宮、中の君物越しの贈答

二一かやうなることまだ見知らぬ御心にて、苦しうおぼすらむ」など、忍びてさかしがりたまへば、（陰から差し出口なさるので）いよいよこの君の御心もはづかしくて、（匂宮）何ともあきれた情けないお方なのですね）え聞こえたまはず。「あさましく心憂くおはしけり。聞こえしさまをもむげに忘れたまひけること」と、（一方ならず嘆きながらその日をお暮しになった）おろかならず嘆き暮らしたまへり。

夜のけしきいとどけはしき風の音に、人やりならず嘆き臥したまへるもさすがにて、例の、もの隔てて聞こえたまふ。（襖を隔ててお話を申し上げなさる）千々の社をひきかけて、行く先長きことを契りきこえたまふも、いかでかく口馴れたまひけむと、心憂けれど、（来てもくれずに放っておかれた時の憎らしさに比べるよそにてつれなきほどのうとましさとしみじみ胸にしみて）よりはあはれに、人の心もたをやぎぬべき御さまを、一方にもえ疎み果つまじかりけりと、（中君は）じっと耳を傾けていてただつくづくと聞きて、

来しかたを思ひいづるもはかなきを
行く末かけてなに頼むらむ

（かすかにおっしゃる）と、ほのかにのたまふ。なかなかいぶせう心もとなし。

一 行く末を短くはかないものとお思いなら、せめて今現在なりとも、私の言うことを聞いて下さい。
二 何ごとも、このように瞬く間に変る世の中ですから。大君の死を念頭において言う。
三 (私を嘆かせて)罪を作るような、そんなつれない考えをお持ちなさいますな。
四 (中の君が)恨むのも無理もないことだけれど、あまりにもすげない態度だと。匂宮の思い。
五 (それにつけても)中の君は、まして日頃の途絶えに、どんなにつらい思いをしたことかと。
六 あれやこれやしみじみとよくお分りになる。自分のつらさも中の君のつらさも、身に沁みて思われる。

匂宮、薫を慰め、帰京

七 主人顔をして住みついて。
八 (匂宮は)感慨深くもおもしろくも思ってご覧になる。
九 (薫は)大君生前のことなど、今さら言っても返らぬことながら、この匂宮にはぜひ申し上げようと思うが。
一〇 何と意気地のない、間抜けな男だと(匂宮に)思われ申そうかと気になって。

(匂宮)一「行く末をみじかきものと思ひなば
目のまへにだにそむかざらなむ

二何ごともいとかう見るほどなき世を、三罪深くなおぼしないそ」と、
何やかやとお慰めなさるけれども　(中君)気分も悪うございますので　(奥に)
よろづにこしらへたまへど、「ここちもなやましくなむ」とて入り
[匂宮は]女房たちの見る手前も体裁悪くて
たまひにけり。人の見るらむもいと人わろくて、嘆き明かしたまふ。
四恨みむもことわりなるほどなれど、あまりに人憎くもと、つらき涙
恨めしさに涙がこぼれるので
の落つれば、五ましていかに思ひつらむと、六さまざまあはれにおぼし
知らる。

薫　中納言の、七主人方に住み馴れて、人々やすらかに呼び使ひ、人も
女房たちを気軽に召し使ったり　女房も
大勢がかりで食事をさし上げさせたりなさるのを
あまたしてもの参らせなどしたまふを、八あはれにもをかしうも御覧
[薫は]　腑抜けのようにぼんやりと物思いに沈んでいるので
ず。いといたう痩せ青みて、ほれぼれしきまでものを思ひたれば、
[匂宮は]気の毒に思われて　心からお悔みの言葉を述べられる
心苦しと見たまひて、まめやかにとぶらひたまふ。九ありしさまなど、
[それを]口にするにつけても
かひなきことなれど、この宮にこそは聞こえめと思へど、うち出で
むにつけても、一〇いと心弱く、かたくなしく見えたてまつらむに憚り

一一 声をあげんばかりに泣き暮して何日もたったので。「音をのみ泣きて」は、和歌の修辞。
一二 面変りしたのも、醜くはなく、かえって一層美しくあでやかなのも。泣き腫れた薫の顔のさま。
一三 女だったら、きっと（薫に）心変りするだろうと。以下、匂宮の危惧の気持を述べる。
一四 何とかして、世間から非難されたり恨まれたりしないようにして、（中の君を）京に引き取ろう、とお考えになる。「恨み」は、夕霧右大臣などの恨み。
一五（中の君は）こんな調子で相変らずうちとけないけれど。
一六（今夜も泊っては）宮中あたり、帝や中宮のお耳にも入って。
一七 つれない仕打ちはどんなにつらいものかと、ただそれだけをお分りになってほしくて。「いかで我つれなき人に身をかへて苦しきものと思ひ知らせむ」（『源氏釈』所引。出典未詳）

十二月、薫、帰京

一八 誦経の僧のお布施。ここは、七日ごとの法要のためのもの。
一九 このように、宇治に閉じ籠ったまま、新しい年までも悲しみにくれて過せようか。薫の心中の思い。以下、自然に地の文に移る筆致。
二〇 あちらこちらから。母女三の宮や冷泉院など。

て、言少ななり。音をのみ泣きて日数経にければ、顔変りのしたるも、見苦しくはあらで、いよいよものきよげになまめいたるを、女ならばかならず心移りなむと、おのがけしからぬ御心ならひにおぼしよるも、なまうしろめたかりければ、いかで人のそしりも恨みをもはぶきて、京に移ろはしてむ、とおぼす。かくつれなきものから、内裏わたりにも聞こしめして、いとあしかるべきにおぼしわびて、今日は帰らせたまひぬ。おろかならず言の葉を尽くしたまへど、つれなきは苦しきものをと、一節をおぼし知らせまほしくて、心とけずなりぬ。

一一言少ななり。音をのみ泣きて日数経にければ、顔変りのしたるも、見苦しくはあらで、いよいよものきよげになまめいたるを、女ならばかならず心移りなむと、おのがけしからぬ御心ならひにおぼしよるも、なまうしろめたかりければ、いかで人のそしりも恨みをもはぶきて、京に移ろはしてむ、とおぼす。かくつれなきものから、内裏わたりにも聞こしめして、いとあしかるべきにおぼしわびて、今日は帰らせたまひぬ。おろかならず言の葉を尽くしたまへど、つれなきは苦しきものをと、一節をおぼし知らせまほしくて、心とけずなりぬ。

（ご自分のけしからぬ浮気なご性分から気を回されるにつけても）（中君のことが）何となく心配だったので
一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇

（大層具合の悪いことになろうとお気になさって）
（匂宮は）一方ならず言葉の限り機嫌を取られるが
（十二月になると）
（宇治では）
（物思いに沈みながら日々を暮される）（薫の）気持は
（空のたたずまいは常とは違うのに）
（こんな山里ならずとも）
（まるで夢を見ている思いである）
（たくさんお供え申し上げなさる）
（薫が）音沙汰もなく
（引き籠っておいでのことをご心配申

年の暮れがたには、かからぬ所だに、空のけしき例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪に、うちながめつつ明かし暮らしたまふこと、尽きせず夢のやうなり。宮よりも、御誦経など、こちたきまでとぶらひきこえたまふ。かくてのみやは、新しき年さへ嘆き過ぐさむ、ここかしこにも、おぼつかなくて閉ぢ籠りたまへることを聞

一　薫がこうしてずっとここにお住みつきになって。

二　時に触れ折につけ、風雅なご消息をお交わし申された長の年月よりも。大君生前の薫との交際をいう。

三　慰みごとにも暮し向きの面でも。「はかなきこと」は、和歌や音楽など風流な遊び。

四　これきりで、もう拝見できなくなるとは。「見さす」は、中途で逢えなくなること。

五　やはり、先だってのように（宇治まで）参上することもひどくむつかしいので、思案にくれて。

六　（というのは）明石の中宮がお耳になさって、中納言もあのように一方ならず悲しみにくれていたというのは。薫が、大君の忌にずっと籠っていたこと。以下、匂宮がこう言ってきた、そのいきさつを説明する。「ゐたなる」は「ゐたるなる」の音便「ゐたんなる」の撥音無表記の形。「なる」は伝聞推定。

七　なるほど（宇治の姫君たちを）並々には扱えないと、どなたもお思いなのだろうと、（匂宮を）いたわしくお思いになって。薫の様子から、その大君の妹とあれば、匂宮の執心も無理はなかろう、と母親らしく推察する。

匂宮の、中の君を京に移す計画、具体化

八　匂宮が紫の上から伝領した私邸。西の対に紫の上が住んでいた。（匂兵部卿一六一頁注七参照）

九　（中の君を）女一の宮方の女房にということで、迎えようとお考えになったのかと（匂宮は）お疑いになりながらも。明石の中宮は、前にこのような趣旨の

（京に）　（薫の）　言いようもなく悲しい

こえたまへば、今はとて帰りたまはむここちも、たとへむかたなし。

人の出入りの多かった　名残もなくなることをつらがる女房

かくおはしならひて、人しげかりつる名残なくならむを思ひわぶる人々、いみじかりしをりのさしあたりて悲しかりし騒ぎよりも、う

（今は）　大君逝去の大変なご不幸の折の当面の悲しかった騒ぎの際よりも　たちは

（女房たち）　ひっそりとしてひどく悲しく思われる

ちしづまりていみじくおぼゆ。「時々をりふし、をかしやかなるほどに聞こえかはしたまひし年ごろよりも、かくのどやかにて過ぐし

こうしてゆっくりとここでお暮し下　人情味があっていたわり深く

さったこの日頃のご様子やお振舞が

たまへる日ごろの御ありさまけはひの、なつかしくなさけ深う、はかなきことにもまめなるかたにも、思ひやり多かる御心ばへを、今は限りに見たてまつりさしつること」と、おぼほれあへり。

よく行き届いたお人柄を　一同涙にくれている

匂宮

かの宮よりは、「なほかう参り来ることもいと難きを思ひわびて、近うわたいたてまつるべきことをなむ、たばかり出でたる」と聞こえたまへり。后の宮聞こしめしつけて、中納言もかくおろかならず思ひほれてゐたなるは、げにおしなべて思ひがたうこそは、誰もおぼさるらめと、心苦しがりたまひて、二条の院の西の対にわたいたまひて、時々も通ひたまふべく、忍びて聞こえたまひければ、女一

（中君を）近くにお迎え申し上げる手はずを　（宇治に）　考え出しました　ご通知申された

（中君を）　（匂宮が）時々でもお通いになるようにと　内々（匂宮に）

ことを意見しているが（八六頁参照）、匂宮にとっては、かりそめにも女房扱いは、不本意なことである（七四頁参照）。

一〇（そうなれば）いつでも逢いたい時に逢えることになるのはうれしくて、（あのように宇治へ）伝えて来られたのであった。

一一そういうことになったらしいと。中の君が、中宮のご許可もあって、二条の院に引き取られる、ということ。「さななり」は、前出一一五頁注一七参照。

一二（自分も）三条の宮完成の暁には、（大君を）お迎え申そうと考えていたのに。（七四頁参照）

一三昔のことを思い返して、（何もかも失った思いで）心細い気がする。

一四匂宮がお疑いらしい筋のことは。中の君と薫が心を交わしはせぬかということ。「女ならばかならず心移りなむと、おのがけしからぬ御心ならひにおぼしよるも」（一一九頁）とあった。

一五そのほかの（夫婦としてではない）大抵のお世話は、自分を措いてほかに誰がいよう、と思っていられるとか。「おぼすとや」は、物語の結末を示す草子地。

の宮の御方にことよせておぼしなるにや、とおぼしながら、おぼつかなかるまじきはうれしくて、のたまふなりけり。さななりと、中納言も聞きたまひて、三条の宮も作り果てて、わたいたてまつらむことを思ひしものを、かの御代りになずらへても見るべかりけるを、など、ひき返し心細し。宮のおぼし寄るめりし筋は、いと似げなきことに思ひ離れて、おほかたの御後見は、われならでまた誰かは、とおぼすとや。

「中君を」亡き人のお代りと思ってお世話もすればよかったのに

全くとんでもないことと念頭にもとどめずに

早(さ)

蕨(わらび)

年明けて春になったが、大君に先立たれた中の君の悲しみは尽きない。一昨年の父八の宮の死に引き続いて、仲睦まじかったただ一人の姉をも失ってしまったのである。宇治山の阿闍梨から、新年の挨拶とともに籠に入れた蕨や土筆が贈られてきた。巻名は、この時の阿闍梨と中の君の贈答の歌による。一方、京の薫は、内宴の終った一月も末の頃、匂宮を訪れて、風烈しく梅の芳香の闇にただよう夜ふけまで、尽きせぬ大君の思い出を語った。

宇治では、京への移転も近づき、中の君の服喪も明けた。姉の死は軽服で三カ月である。その除服の儀にも薫からの心寄せがあったが、自らも、移転の前日、宇治を訪れ、中の君とともに、大君追懐の感傷にひたるのだった。かつて薫に、実父柏木の秘事を明かした老女の弁は、大君の死を深く悲しんで、尼になっていたが、宇治にとどまって山荘の留守を預かることになった。

移転は二月の七日。中の君は、二条の院に待ちかねる匂宮に迎えられて、新しい生活に入った。夕霧は、この二月に、六の君と匂宮との結婚をもくろんでいたので、思わぬ事態に不快を隠しきれない。止むなく二十日過ぎに裳着の儀をあげ、内々に薫の意向を打診するが、薫にその意志はない。同じ頃、三条の宮への移転をすませた薫は、三月に入って、はじめて二条の院を訪れる。薫の今までの好意を深く思い知る中の君ではあるが、二人の仲に疑わしげな目を向ける夫の匂宮を憚って、薫のあしらいに苦慮するのであった。

新春、中の君の悲しみ

一 日の光は草木の生い茂った山里にも分け隔てなく降り注ぐものだから。「日の光藪しわかねば石上ふりにし里に花も咲きけり」（『古今集』巻十七雑上、布留今道）による。歌の「日の光」を次に「春の光」と転じた。大君の亡くなった翌年の春、独り残された中の君の悲しみを以下に述べる。

二 「花鳥の色をも音をもいたづらにもの憂かる身は過ぐすのみなり」（『後撰集』巻四夏、藤原雅正）

三 折に触れて歌を詠むにも、上の句と下の句をそれぞれ付け交わして。

四 父宮亡き後の心細い暮しの、情けなさも、うらめしさも。

五 死ぬことも叶わないとは、何ということだろう。中の君の気持をそのまま地の文とした書き方。

六 宇治山の阿闍梨。

宇治山の阿闍梨より、年頭の挨拶

一藪しわかねば、〔中君は〕春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日ならむと、夢のやうにのみおぼえたまふ。ゆきかふ時節季節のままに時にしたがひ、二花鳥の色をも音をも、〔姉君と〕同じ心に起き臥し見つつ、三はかなきことをも本末をとりて言ひかはし、四心細き世の憂さもつらさも、うちかたらひあはせきこえしにこそ、仲睦まじく慰め合ってご一緒に過してきたからこそなぐさむかたもありしか、をかしきこと、風情のあることもあはれなるふしをも、しみじみと心打たれることも聞き知る人もなきままに、言っても分ってくれる人もいないので心よ晴れる時とてなく一人悲しみに打ちひしがれてろづかきくらし、心ひとつをくだきて、父宮がお亡くなりになってしまった時の宮のおはしまさずなりにし悲しさよりも、ややうちまさりて恋しくわびしきに、〔姉君が〕いかにせむと、どうしたらよいのかと夜の明け日の暮れるのも分らず悲しみにくれていられるが明け暮るるも知らずまどはれたまへど、世にとまるべきほどは、この世に生きる寿命のほどは前世からの定めのあることなので限りあるわざなりければ、五死なれぬもあさまし。

六阿闍梨のもとより、

一 年が改まりまして、姫君にはご機嫌いかがでいらせられましょうか。手紙の冒頭の挨拶。ここは年頭の挨拶。

二 中の君のための延命息災のご祈禱。

三 今となりましては、姫君お一人のご無事を、心にかけて仏にお祈り申し上げております。

四 土筆の古名。阿闍梨から山荘に、時節時節に贈物のあったこと、六巻椎本三三八頁に見え、八の宮の亡くなった翌新春にも芹、蕨などの献上があった（椎本三四六頁）。

五 童子たち。寺の雑用を勤める下僕たち。椎本三三八頁にも「法師ばら、童べ」と見える。

六 神仏や朝廷に献ずるその年最初の作物。

七 筆跡はひどい悪筆で。僧侶なので仮名に馴染まない趣。

八 ことさら一字一字をはなして書いてある。仮名を続け書きにせず、いわゆる放ち書きの体（一巻若紫二一一頁参照）。

九 亡き宮様にと長年、春には献上いたしておりましたので、いつも通りの初蕨をさし上げました。「摘み」に「積み」を響かせる。

一〇 姫君にご披露申し上げて下さい。手紙全体が側近の女房に宛てられている体裁。「しめたまふ」は尊敬表現。変体漢文に「令……給」の形で見え、男性用語。

一一 返事を（女房に）お書かせになる。女房に文言を書き取らせる形の、いわゆる仰せ書きである。

一年あらたまりては、何ごとかおはしますらむ。二御祈りは、たゆみなくつかうまつりはべり。三今は一所の御ことをなむ、やすからず念じきこえさする。

（怠りなく）（お勤め申し上げております）

など聞こえて、四蕨、つくづくし、五をかしき籠に入れて、「これは童べの供養じてはべる初穂なり」とてたてまつれり。六手はいとあしうて、歌は、七わざとがましくひき放ちてぞ書きたる。

（仏にお供えした）

（阿闍梨）

「君にとてあまたの春を摘みしかば
常をわすれぬ初蕨なり」

（中君）

八御前に詠み申さしめたまへ」とあり。九大事と思ひまはして詠み出だしつらむ、とおぼせば、歌の心ばへもいとあはれにて、なほざりに、さしもおぼさぬなめりと見ゆる言の葉を、めでたく好ましげに書き尽くしたまへる人の御文よりは、一〇こよなく目とまりて、涙もこぼるれば、一一返りこと書かせたまふ。

（重大事と思って散々考えて作った歌）（歌にこめられた真心にも深く打たれて）（その場限りの）（それほど心にお思いではないのだろうと）（美しく）（この人の気に入るように）（包宮の）（格段に）（心ひかれて）

（中君）

この春はたれにか見せむ亡き人の

一二 今年の春は（姉君も亡くなり）誰にお見せしましょう、亡き父宮の形見としてお摘み下さった峰の早蕨を。「形見」に「筐」（竹で編んだ籠）を響かせる。「早蕨」は『能因歌枕』正月の項に出、また「さわらびとは、はじめのわらびをいふなり」ともあり、歌語。巻名のもとづくところ。

一三 労をねぎらう品。衣類をかずけるのが普通。

一四 今が美しい盛りの、花やいだ感じでいらっしゃるお方が。中の君のこと。

一五 匂宮とのこと、また大君のことと、さまざまなお悲しみのために。

一六 亡き大君をも思わせるほどでいらっしゃる。

一七 せめて亡骸なりとこの世に残しとどめて拝見できるのであったらよいのにと。大君死去の時、薫は「かくながら、虫の骸のやうにても見るわざならましかば」と嘆き悲しんだことが見える（総角一一〇頁）。

一八 どうせのことに、（薫と）ご夫婦におなりあそばすご縁がなかったようだとは。

一九 薫にお仕えする家来が時々やって来るついでに。「この君の御供なる人の、いつしかと、ここなる若き人をかたらひ寄りたるありけり」（総角九一頁）とあった。

二〇 ひとしお、（大君の亡くなった）今になると、薫の気持も身に沁みて思い知られる。自分の悲しみに照らして、薫の気持の深さを思い知る。中の君の気持をそのまま地の文とした書き方。

かたみに摘める峰の早蕨

使に禄取らせさせたまふ。（一三）（授けさせなさる）

（一四）いとさかりににほひ多くおはする人の、（一五）さまざまの御もの思ひに、すこしうち面痩せたまへる、いとあてになまめかしきけしきまさりて、（とても気品があって優雅な感じが以前より立ちまさって）昔人にもおぼえたまへり。（一六）（むかしびと）並びたまへりしをりは、（お二人お揃いだった時分は）とりどりに（それぞれにお美しくて）、さらに似たまへりとも見えざりしを、（大君の逝去を）つい忘れては思わず大君かうち忘れては、ふとそれと思われるほど似かよっていらっしゃるのを）かとおぼゆるまでかよひたまへるを、「中納言殿の、（女房）薫（一七）骸をだにとどめて見たてまつるものならましかばと、朝夕に恋ひきこえたまふめるに、（一八）同じくは、見えたてまつりたまふ御宿世ならざりけむよ」と、（中の君のお姿を拝する女房たちは残念がる）見たてまつる人々はくちをしがる。（一九）かの御あたりの人の通ひ来るたよりに、（ご様子はいつもお互いに聞いていらっしゃるのだった）御ありさまは絶えず聞きかはしたまひけり。（薫が）尽きせず思ひほれたまひて、（すっかりぼんやりしてしまわれて）新しき年ともいはず、（おめでたい新年なのに）いやめになむなりたまへる、（いつも涙ぐんでばかりいらっしゃる）と聞きたまひても、（中君は）げにうちつけの心浅さにはものしたまはざりけりと、（ほんとにその場限りの浅いお気持ではいらっしゃらなかったのだと）いとど今ぞあはれも深く思ひ知らるる。（二〇）宮は、（匂宮）おはしますこ（宇治に）

一　とても思うにまかせず、機会もめったにないので。

二　正月二十一、二、三日のうち、子の日に仁寿殿で催される帝の私宴。題を賜って作詩、披講のことがある。平安中期にはほとんど行われていない。

三　胸一つに収めかねる悲しみも、匂宮のほかに誰に親しく訴えることができよう。大君を喪った悲しみである。

四　匂宮の御殿。三条の宮の落成、移転間近で、薫は六条の院にいるから、六条の院でのことである。

五　十三絃の琴。

六　例によって、ご贔屓の梅の香を賞翫しておいでになる。（六巻匂兵部卿一七一頁参照）

七　薫がその梅の下枝を折り取って参上なさる匂いが。梅の香と薫の体香とがまじり合う。「下枝」は歌語。

八　手折るあなたのお心に似た花なのでしょうか、色にはあらわさず、ひそかに匂うことです―おもてにはあらわさず、ひそかに（中の君を）お思いなのでしょう。総角一一九頁に中の君と薫の仲を疑うところがあった。梅は白梅であろう。

九　ただ見て楽しんでいる私に言いがかりをおつけになる、そんな厄介な花の枝なのでしたら、折るのも気をつけなくてはなりません。

薫、匂宮を訪れる

とのいと所狭くありがたければ、京にわたしきこえむ、とおぼし立ちにたり。

〔中君を〕お迎えしよう　お心をお決めになった

内宴などもの騒がしきころ過ぐして、中納言の君、心にあまることをも、また誰にかはかたらはむ、とおぼしわびて、兵部卿の宮の御方に参りたまへり。しめやかなる夕暮れなれば、宮うちながめたまひて、端近くぞおはしましける。箏の御琴かき鳴らしつつ、例の、御心寄せなる梅の香をめでおはする、下枝を押し折りて参りたまへるにほひの、いと艶にめでたきを、をりをかしうおぼして、

何かと公務多忙の時期が過ぎてから　薫　思いあぐねられて　物思わしげに庭を眺めなさって　優雅で結構なのを　折柄興あることとお思いになって

（匂宮）八　折る人の心にかよふ花なれや

色には出でずしたににほへる

とのたまへば、

（薫）九「見る人にかこと寄せける花の枝を

心してこそ折るべかりけれ

冗談を言い交わしていられるのは　迷惑なご邪推です

わづらはしく」と、たはぶれかはしたまへる、いとよき御あはひな

いかにも仲のよいお間柄だ

一〇 宇治での大君逝去の折のことを、何よりも気がかりなこととお尋ね申し上げなさる。弔いの気持。

一一 その当時から亡くなった今日に至るまで、（大君への）思慕の思いの絶えない旨を。六巻橋姫の巻の秋に薫がはじめて大君の姿を垣間見してから、総角の巻の去年冬に大君が亡くなるまで、三年ほどの付合いであった。

一二 泣いたり笑ったり（悲喜こもごも）とか、世間で言うようだが、まさにそんな様子で。「泣きみ笑ひみ」は当時の成語。

一三 薫に輪をかけて、あれほど多情で涙もろいご気性のお方ゆえ。

一四 人のお身の上のことでも。「わが身から憂き世の中と名づけつつ人のためさへ悲しかるらむ」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、読人しらず）と同じ趣。

一五 闇は、梅の香ばかりはかくせぬ暗さだけれども。「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」（『古今集』巻一春上、躬恒）によって文を綾なしたもの。一月末、晦日の頃である。

一六 世間にまたとないようなことだった（薫と大君）お二人の親しさを。清い間柄でいたことをいう。「仲のむつび」で一語。

一七 いや、いくら何でも、ほんとにそんな清い仲で通したはずはないでしょう。

薫、大君の思い出をしみじみと語る

り。

こまやかなる御物語ども（しみじみとうちとけたお話になってからは）になりては、一〇かの山里の御ことをぞ、まづはいかにと、宮は聞こえたまふ。中納言（薫）も、過ぎにしかたの飽かず悲しき（今までのことが悲しくてならないこと）こと、一一そのかみより（その折々の風）今日まで思ひの絶えぬよし、をりをり（情もまじえて）につけて、あはれにもをかしくも（悲しくもまた趣深くも）、泣きみ笑ひみとかいふらむやうに、聞こえ出（お打ち明け申し上げなさると）でたまふに、一三ましてさばかり色めかしく、涙もろなる御癖は、一四人の御上にてさへ、袖もしぼるばかりになりて（涙で）、かひがひしくぞあひしらひきこえたまふめる（薫も話しがいがあるようにお相手申し上げなさるようだ）。空のけしきもまた、げにぞあはれ知り顔に霞みわたれる（いかにも悲しみが分るかのように一面の霞に曇っている）。

夜になりて、烈しう吹き出づる風のけしき、まだ冬めきていと寒げに、大殿油も（時々消えては）消えつつ、一五闇はあやなきたどたどしさなれど、かたみに聞きさしたまふべくもあらず、尽きせぬ御物語をえはるけやりたまはで、夜もいたうふけぬ。一六世にためしありがたかりける仲のむつびを、「いでさりとも、一七いとさのみはあらざりけむ」と、残りあ

（尽きぬお話を心ゆくまで語り合うことがおできにならぬうちに）（お互いに話を途中でうち切る気にはおなりになれず）（匂宮）

（隠し立て）

一 仕方のない、日頃の（好色な）ご気性からなのでしょう。草子地。

二 一方では慰めもし、また（一方では）深い悲しみも諦めるように仕向けもし。

三 不本意ながら私のしでかした失敗だったと思われます、あの心残りな亡き人（大君）の縁につながる人を。薫は、自分の失敗から、大君にいらざる心配をかけて死なせたと自責している（総角一一五頁参照）。

匂宮、中の君を京に迎えることを薫に諮る

四 ほかに探すすべもないことですから。大君にゆかりの人としては中の君しかいない、の意。

五 大君が、（中の君を）自分同様に思ってくれるようにと、お譲りになった意向も。（総角三五頁、四九頁参照）

六 中の君に直接逢ったあの一夜のことは（総角三九頁）。古注に「恋しくは来ても見よかし人づてに磐瀬の森の呼子鳥かな」を挙げるが、しっくりしない。この歌『玄々集』には儒者孝宣とする。紫式部とほぼ同時代の人である。「磐瀬」に「言はせ」を掛ける。磐瀬の森は、歌枕。大和、生駒郡斑鳩町車瀬。

りげに問ひなしたまふぞ、（そうはいっても）わりなき御心ならひなめるかし。（悲しみに沈む）さりながらも、ものに心えたまひて、（匂宮は）何事もよくおわきまえで（〔薫の〕心の内も晴れ晴れするほどに）嘆かしき心のうちもあきらむばかり、（あれこれと親身になってお話しなさる宮のお話しぶりの巧みさについつい乗せられ申して）かつはなぐさめ、またあはれをもさまし、（ほんとに胸一つに収めがたいまでにわだかまる悲しみを）さまざまにかたらひたまふ御さまのをかしきにすかされたてまつりて、げに心にあまるまで（〔薫は〕この上もなく閉ざされた胸の晴れる思いがなさる）思ひ結ぼほるることども、すこしづつ語りきこえたまふぞ、こよなく胸のひまあくここちしたまふ。

宮も、（中の君を近々京にお移し申そうとするその時の支度の数々について）かの人近くわたしきこえてむとするほどのことども、（ご相談申し上げなさるのを）かたらひきこえたまふを、「いとうれしきことにもはべるかな。あいなくみづからのあやまちとなむ思うたまへらるる飽かぬ昔の名残を、また尋ぬべき方もはべらねば、（一通りのことはお世話申し上げなくてはならぬお方と思っておりますが）おぼかたには、何ごとにつけても、心寄せきこゆべき人となむ思うたまふるを、（不都合なこととお思いになりましょうか）もし便なくやおぼしめさるべき」とて、かの異人とな思ひわきそと、ゆづりたまひし心おきてをも、すこしは語りきこえたまへど、（話さないのだった）磐瀬の森の呼子鳥めいたりし夜のことは、残したりけり。心のうちには、かくなぐさめがた

七　こうして心の晴れ間もなく恋しい亡き大君の形見としてでも、やはり大君の言った通り（中の君と）結婚して、こうした京への移転のことなどもお世話申し上げるのだった、と。

八　いつもこんなことばかり考えていたら、とんでもない料簡を起すことになるかもしれない。中の君への横恋慕といった事態を危懼する。

九　心からお為を思ってお世話申し上げることにかけては、自分よりほかに誰がいようとお思いなので。

一〇　きれいな若女房や女の童などを新たに召しかかえて。

一一　もうこれきりと、この山荘を荒らすにまかせてしまうのも。中の君の思い。「いざここにわが世は経なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、読人しらず）による。菅原の伏見は奈良市伏見町字菅原（奈良市街の西郊）。

一二　無理にも強情を張って、この宇治に閉じ籠ってもどうしようもないことだろうし。

一三　浅からぬ私たちのご縁も切れてしまいそうな（不便な）お住まいですのに、どういうお積りなのですか。

一四　二月の初め頃ということなので。予定された移転の日取り。

中の君、京への移転を思い悩む

中の君、除服

き形見にも、げにさてこそ、かやうにもあつかひきこゆべかりけれと、くやしきことやうやうまさりゆけど、今はかひなきものゆゑ、常にかうのみ思はば、あるまじき心もこそ出で来れ、誰がためにもあぢきなくをこがましからむ、と思ひ離る。さてもおはしまさむにつけても、まことに思ひ後見きこえむかたは、また誰かはとおぼせば、御わたりのことどもも心まうけさせたまふ。

（後悔の気持が段々と強くなってゆくけれども）（今となってはもう手遅れなのに）（誰にとっても）（おもしろからぬ愚かしいことだろう）（あきらめる）（中の君がそうして京へお移りになるにつけても）（お移りについてのいろいろなお支度も用意をおさせになる）

宇治

かしこにも、よき若人童などもとめて、人々は心ゆき顔にいそぎ思ひたれど、今はとてこの伏見を荒らし果てむも、いみじく心細ければ、嘆かれたまふこと尽きせぬを、さりとてもまた、せめて心ごはく、絶え籠りてもたけかるまじく、（匂宮）「浅からぬ仲の契りも、絶え果てぬべき御住ひを、いかにおぼしえたるぞ」とのみ、怨みきこえたまふも、すこしはことわりなれば、いかがすべからむ、と思ひ乱れたまへり。

（女房たちは満足そうに勇み立っているけれども）（思い悲しまれなさることきりもないけれども）（だからといってまた）（いくらかはもっともと思われるので）（どうしたものか）

一四　きさらぎの朔日ごろとあれば、ほど近くなるままに、花の木ども

（その日が近くなるにつれて）

一 山々の春霞の立つのを見捨てて京に移ることも。「春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやならへる」（『古今集』巻一春上、帰雁をよめる、伊勢）により、春、北に帰って行く雁にわが身をよそえる。

二 その行く先（京）は、雁とは違って、自分の故郷でもない他人の家での暮しで。雁の帰って行く北の胡の国は常世（不老不死の仙境）とされていた。

三 （自分のような田舎に育った者には）どんなにか立つ瀬もない物笑いの種になるようなこともあろうか、などと。

四 喪服。姉妹の服喪は軽服で、三カ月。大君の亡くなったのは十一月。

五 御禊をなさるのも、姉君に対する思いが浅いように思われる。除服には川辺に出て身を浄める。川の縁で「浅き」という。

六 母北の方。中の君のお産で亡くなった（橋姫二五六頁）。

薫から、車、前駆の者など派遣

七 姉君の喪には喪服を色濃く染めようと。重服には色濃い鈍色を着る。

八 陰陽博士。出門の作法に奉仕させるためである。

九 月日のたつのは早いものです、姉君の喪服を着られたかと思うと、もう春の花々の咲く、美しいお召し物にお着がえになる除服の時がやって来ました。「霞の衣」は喪服（五巻柏木三一一頁、三一二頁参照）。「裁ち」に霞の縁語「立ち」を響かせ、「衣」「紐解く」は縁語。

雷のふくらむのも盛りの頃が気になって

のけしきばむも残りゆかしく、一峰の霞の立つを見捨てむことも、おのが常世にてだにあらぬ旅寝にて、いかにはしたなく人笑はれなることもこそ、など、よろづにつつましく、心ひとつに思ひ明かし暮らしたまふ。御服も、限りあることなれば脱ぎ捨てたまふに、御禊も浅きここちぞする。親一所は、見たてまつらざりしかば、恋しきことは思ほえず。その御かはりにも、この度の衣を深く染めむと、心にはおぼしのたまへど、さすがにさるべきゆゑもなきわざなれば、飽かず悲しきこと限りなし。

何かにつけ気のひける思いで

一人胸を痛めて明け暮れを過してお

世間のきまりのあることなので

お顔を拝見したこともなかったので

そうなさる理由も立たないことなので

心ではお思いになり仰せにもなったが

薫

中納言殿より、御車、御前の人々、博士などたてまつれたまへり。

（薫）九

はかなしや霞の衣裁ちしまに

花のひもとくをりも来にけり

歌にある通り色さまざまにとても美しいご衣裳をお贈り申し上げなさった

京へのご移転の時の供

げにいろいろいときよらにてたてまつれたまへり。御わたりのほど

人たちに与えるねぎらいの衣料など

大げさではないけれども

身分に応じ

のかづけものどもなど、ことことしからぬものから、品々にこまや

（女房）何か事ある折には

いつも気にかけて

て細かく気をおくばりになって

かにおぼしやりつつ、いと多かり。「をりにつけては、忘れぬさま

一〇 見ばえもしない老朽の女房たちの気持としては、薫のこうした（実生活上の）配慮を心からありがたく思って、中の君に申し上げる。

一一 今まで時々でも宇治においでになるお姿にお馴染み申し上げてきたのに、薫がもうこれきり、かかわりのないお方になってしまわれることを。

一二 これからはどんなにか恋しくお思い申し上げることになりましょう。「おぼえさせたまふ」は、思われなさるの意。「させたまふ」は薫に対する敬語。

薫、移転の前日、宇治来訪

一三 客間。西の廂である（総角七一頁参照）。

一四 自分の方こそ、匂宮より先に、大君を京に迎えようという積りになっていたのに、などと。

一五 それでも、自分によそよそしくして、以ってのほかといった気まずいおあしらいはなさらなかったのに。以下、薫の思い。

一六 自分の方から、妙なことに他人で終るようなことにしてしまったのだ。のんびり構え過ぎたことを悔む。

一七 覗き見をした襖の穴。（椎本三四九頁以下参照）

一八 母屋（寝殿の東面に通じる仏間）は、簾などがすっかり下ろしてあるので。

一九 中の君のいる寝殿の東面。

（実の兄弟などでも）はらからなども、（とてもこうまでのお世話はお）えいとかうまではお（下さるお心遣いは世にも珍しいほどで）なる御心寄せのありがたく、（できにならぬものです）はせぬわざぞ」など、（「中君に」）人々は聞こえ知らす。（お教え申し上げる）一〇あざやかならぬ古人どもの心には、かかるかたを心にしめて聞こゆ。（若女房たちは）若き人は、一一時々も見たてまつりならひて、今はと異ざまになりたまはむを、（ものさびしく思）さうざうしく、「一二いかに恋しくおぼえさせたまはむ」と聞こえあへり。（皆でお噂している）

（薫ご自身は）みづからは、（ご移転が明日という日の）一三わたりたまはむこと明日とての、（まだ朝早くのうちにお見え）まだつとめておはしたり。（になった）例の、客人居の方におはするにつけても、（今はようやくこの邸に）今はやうやうも（も馴染んで）の馴れて、一四われこそ人より先にかうやうにも思ひそめしか、など、（大君生前の面影や）ありしさま、（打ち明けて下さったお気持を）のたまひし心ばへを思ひ出でつつ、一五さすがにかけ離れ、ことのほかになどははしたなめたまはざりしを、一六わが心もてあやしうも隔たりにしかな、と（つらい気持でいろいろ思い出されなさる）胸いたく思ひ続けられたまふ。一七垣間見せし障子の穴も思ひ出でらるれば、寄りて見たまへど、一八このなかをばおろし籠めたれば、いとかひなし。（どうにもならない）

（女房たちが亡き大君のことをお思い出し申しては皆涙にくれている）一九内にも、（中の君）人々思ひ出できこえつつうちひそみあへり。中の宮は、

一 女房たちにもまして、溢れてならない涙にくれられて、明日の京へのお移りも念頭におありでなく。「涙の川」は、涙をたくさん流す意の歌語。その縁語で「渡り」と文を綾なした。

二 ここずっとご無沙汰の間に積りましたお話も。去年の年末、帰京して以来、薫は宇治を訪れていない。

三 いつものように、立つ瀬もないようなよそよそしいおあしらいはなさらないで下さい。

四 ますます何か違った世界に身を置く気持がいたします。大君亡き今となっては……という気持。

五 さあどうしたものでしょう。

六 ますます（日頃に輪をかけて）はきはきともしない変なことを申し上げるのではないかと、気のひける思いですから。以上の言葉、薫の希望を伝えた取次ぎの女房に洩らしたもの。

七 隔ての襖の出入口。薫のいる西廂と母屋の西面の境の襖であろう。

中の君との対面

八 中の君。総角の巻では大君を呼ぶ呼称であった。宮家の当主としてはもうこの人しかいないところからの呼び方。

九 いつもまだ身近にいられるかと思う姉君のことまでもお思い出し申し上げなさるので。「面影」は幻。

一 ましてもよほさるる御涙の川に、明日のわたりもおぼえたまはず、（気の抜けたように物思いに沈んで）（何をと）ほれぼれしげにてながめ臥したまへるに、（横におなりなのに）（薫）二「月ごろの積りも、そこ（いうのでもありませんが）（胸にたまっているように思われますので）はかとなけれど、いぶせく思うたまへらるるを、（その一端なりとお）片端もあきらめき（話し申し上げて）（気を紛らわしたく存じます）こえさせて、なぐさめはべらばや。三例の、はしたなくなさし放たせたまひそ。四いとあらぬ世のここちしはべり」と聞こえたまへれば、（中君）（立つ瀬もないと思われるようなお扱いをする積りもありませんが）（気分も）「はしたなしと思はれたてまつらむとしも思はねど、五いさや、ここ（いつものようではない感じで）（つらくてならず）ちも例のやうにもおぼえず、かき乱りつつ、六いとどはかばかしからぬひがことともやと、つつましうて」など苦しげにおぼいたれど、（迷惑そうにお思いだけれども）（女房の誰彼がおすすめして）「いとほし」など、（お気の毒です）これかれ聞こえて、七中の障子の口にて対面したまへり。

（薫は）とても気はずかしくなるほど優雅な物腰で　また今日は一段と老成した感じが立ちまさっていられると　目も見張るばかりはなやかにお美しく　並はずれたたしなみ深さなど　何とすばらしいお方か　と一分の隙もなくお見えのお姿を

いと心はづかしげになまめきて、またこのたびはねびまさりたまひにけりと、目もおどろくまでにほひ多く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人や、とのみ見えたまへるを、八姫宮は、九面影さらぬ人の御ことをさへ思ひ出できこえたまふに、いとあはれと見たてまつ

（しみじみとした思いで見申し上げな）

りたまふ。（薫）一〇「尽きせぬ御物語なども、今日は言忌すべくや」など言ひさしつつ、（薫）一一「わたらせたまふべき所近く、このころ過ぐして移ろひはべるべければ、夜中暁と、つきづきしき人の言ひはべめる、何ごとのをりにも、疎からずおぼしのたまはせば、世にはべらむ限りは、聞こえさせうけたまはりて過ぐさまほしくなむはべるを、いかがはおぼしめすらむ。人の心さまざまにはべる世なれば、一三あいなくやなど、一方にもえこそ思ひはべらね」と聞こえたまへば、（中君）一四「宿をばかれじと思ふ心深くはべるを、近く、一五などのたまはするにつけても、よろづに乱れはべりて、聞こえさせやるべきかたもなく」など、所々言ひ消ちて、いみじくものあはれと思ひたまへるけはひなど、いとようおぼえたまへるを、心からよそのものに見なしつる、といとくやしく思ひゐたまへれど、かひなければ、その夜のことかけても言はず、忘れにけるにやと見ゆるまで、けざやかにもてなしたまへり。

一〇 尽きることのない（亡き人の）お話なども、今日は憚りがありましょうか。移転の慶事を前にして、の気持。「言忌」は、慶事に当って不吉な言行を避けること。

一一 お越しになる所の近くに、もう暫くしましたら私も移ることになっておりますので（総角一二一頁参照）。匂宮の邸二条の院と再建された三条の宮は近い。

一二 「夜中、暁」と、そうした親しい間柄の人が言っているようですが。親しい間柄は時刻を問わず行き来する、という意味の当時の俗諺であろう。「夜中暁といはず、御心に従へるものの」（一巻夕顔一五四頁）という例があった。

一三 かえってご迷惑かなどとも存じまして、私の方から一方的に思い決めるわけにもゆきません。「あいなし」は、そぐわないの意。中の君に対する遠慮の気持を述べる。

一四 この家と縁を切りたくはないと思う気持が深うございますのに。「今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をば離れずとふべかりける」（『古今集』巻十八雑下、業平の朝臣）を踏まえて、「里」を「宿」と言いかえた。

一五 近くに、など仰せになりますにつけても。前の「わたらせたまふべき所近く」を受ける。あなた様もこの宇治と疎遠になられるのか、という気持であろう。

一六 中の君と何ごともない一夜を共にしたあの時のこと。（総角三九頁）

一「春は昔に変らぬ春なのに」と。「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」（『古今集』巻十五恋五、在原業平朝臣。『伊勢物語』四段。亡き大君を追憶する中の君と薫の気持。

二「五月待つ花橘」ではないけれども。「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』巻三夏、題しらず、読人しらず。『伊勢物語』六十段）による。

三（私が京に移ってしまえば）もう見る人もないでしょうに、嵐に吹き乱されるこの山荘に、亡き人の偲ばれる梅の花の香がします。「風のさと吹き入るるに」を受けて歌に「嵐」という。「あらじ」に「嵐」を掛ける。

四 かつて賞翫した梅は昔に変らぬ匂いを放っていますが、あなたがすっかりお移りになってしまうお家は、もう（ここならぬ）別の所なのでしょうか。梅を暗に姫君たちによそえる。「根ごめ」は、根ごとの意。「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」（『古今集』巻一春上、題しらず、読人しらず）

五 今度お会いする時もやはり、今日のように親しく対面して下さいますれば、何ごともご相談申し上げやすいと存じます。京での再度の対面を約する気持。

大君遺愛の紅梅に中の君、薫の唱和

御前近き紅梅の、色も香もなつかしきに、（やさしい風情なのに）鶯までもが見過しがたいかして うぐひすだに見過ぐし（行き来するようだから）がたげにうち鳴きてわたるめれば、まして「春や昔の」と心をまど（悲しみにくれていらっしゃるお二人の間のお話なので）はしたまふ。ぢちの御物語に、（折から悲しみもひとしお深い）をりあはれなりかし。風のさと吹き入るるに、（紅梅）花の香も客人の（薫）御匂ひも、橘ならねど、（亡き大君が思い出されるよすがである）昔思ひ出でらるるつまなり。（所在なさを紛らわすのにも）つれづれのまぎらはしにも、（つらく思われる慰めにも）世の憂きなぐさめにも、（大君が）心特にこの紅梅を愛して賞翫なさっていたのに）とどめてもてあそびたまひしものを、（中君は）お悲しみに堪えかねるので）など、心にあまりたまへば、

（中君）三
見る人もあらしにまよふ山里に
昔おぼゆる花の香ぞする

（口ずさむともなくほのかな声で）言ふともなくほのかにて、（とぎれとぎれに聞えたのを）たえだえ聞こえたるを、（薫は）慕わしそうに）なつかしげにうち誦じなして、（朗吟なさって）

（薫）四
袖ふれし梅はかはらぬにほひにて
根ごめうつろふ宿やことなる

（こらえきれない涙を上品に袖でぬぐい紛らわして）堪へぬ涙をさまよくのごひ隠して、言多くもあらず、（言葉数も少なく）「またもなほかやうにてなむ、何ごとも聞こえさせよかるべき」（薫）五 など、聞こえお

六　この山荘の留守番役に、あの髭もじゃの宿直の者などは残ることになっているので。「かの御移り香もて騒がれし宿直人ぞ、鬘髭とかいふつらつき、心づきなくてある」（椎本三四四頁）とあった人物。

七　薫の荘園。（椎本三四五頁、総角四八頁）

八　老女、弁の君。薫の実の父柏木、亡き八の宮、大君につながりのある、薫には縁の深い人物である。（椎本三三四頁系図参照）

九　こうした（京へのお移りの）お供をいたしますのも、思いもかけず長生きをしました命の程もとても情けなく思われますのに。

薫、出家した弁と対面

一〇　髪を短く、尼姿になってしまったのを。

一一　それでも時々はやって参りましょうが。中の君移転の後も、の気持。

一二　（誰もいなくては）とても頼りなく心細いことでしょうに。「たつき」は、手掛り。

一三　厭わしく思えば思うほどかえって長生きをいたします命のほどが情けなく。「憎さのみ益田の池のねぬなはは厭ふにはゆるものにぞありける」（『源氏釈』以下所引。出典未詳）。「あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき」（『後撰集』巻十恋二、読人しらず）

一四　もう何もかもこの世が情けなく思われますので。「大方のわが身一つの憂きからになべての世をば恨みつるかな」（『後撰集』巻十七雑三、読人しらず）

［座を］きて立ちたまひぬ。

ご移転に必要ないろいろのお支度を　御わたりにあるべきことども、女房たちに命じてお置きになる　人々にのたまひおく。六　この宿守に、七　かの髭がちの宿直人などはさぶらふべければ、このわたりの近き御庄どもなどに、山荘への何くれの心配りもお言いつけになったり　そのことどものたまひ預けなど、暮し向きの様々なことまでも取りはからってお置きになる　まめやかなることどもをさへ定めおきたまふ。

弁ぞ、「かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとつらくおぼえはべるを、皆も縁起でもないと思うでしょうから　人もゆゆしく見思ふべければ、もうこの世に生きているとも誰にも知られたくございませんに知られはべらじ」とて、一〇容貌もかへてけるを、［薫は］しひて召し出でて、感慨に堪えぬ思いでいとあはれと見たまふ。昔の思い出話などおさせになって　例の、昔物語などせさせたまひて、［薫］「ここには、一一なほ時々は参り来べきを、一二いとたつきなく心細かるべきに、こうしてあなたがおいでしたら　かくてもものしたまはむは、ほんとにしみじみとうれしく思われることでしょう　いとあはれにうれしかるべきことになむ」など、皆までも言えずに　えも言ひやらず泣きたまふ。（弁）「厭ふにはえて延びはべる命のつらく、私にどうせよとて姫君は先に逝っておしまいになられたのか　またいかにせよとてうち捨てさせたまひけむ、とうらめしく、一四なべての世を思ひたまへ沈むに、罪障もどんなに深いことでございま　罪もいかに深くはべら

一　ひどく年取ってはいるが。橋姫の巻に「年も六十にすこし足らぬほどなれど」（二九四頁）とあった。三年前のことである。

二　昔はさぞ美しかっただろうと思われる髪を短くしてあるので。尼削ぎといって、髪を肩に垂れるあたりで短く切り揃える。

三　額のあたりが今までと感じが変っているため。尼は、額髪（頬に垂れる前髪）も短く簡素にする。

四　思いあぐねた果てには。以下、薫の心中。臨終近い大君を看取っていた当時のことを回想する。

五　出家した功徳で命が長らえたかもしれない、そしてそんな尼姿の大君とどんなにか来世のことなどもしみじみとお話しできたかもしれないのに。

六　老いの身には何よりも涙が先立つことですが、その涙の川に身を投げましたら、姫君に死に遅れることもありませんでしたのに。

七　身を投げることも、大層罪深いことです、悟りの境地に達することなど、どうしてできましょう。「かの岸」は、彼岸。「涙の川」を受けて、川の縁語として言う。梵語「波羅蜜（多）」を訳して「到彼岸」、略して「彼岸」という。

（しょう）む」と、思ひけることどもを愁（うれ）へかけきこゆるも、（お訴え申し上げるのも）（愚痴っぽい感じだけれども）かたくなしげなれど、いとよく言ひなぐさめたまふ。（〔薫は〕ねんごろなお言葉でお慰めになる）

（〔弁は〕一）いたくねびにたれど、（二）昔きよげなりける名残（なごり）をそぎ捨てたれば、（それなりに品のよい感じだ）額（ひたひ）（三）のほどさまかはれるに、すこし若くなりて、さるかたにみやびかなり。（四）思ひわびては、（どうして大君をこうした尼姿にでもしてさし上げなかったのだろう）などかかるさまにもなしたてまつらざりけむ、（五）それに延ぶるやうもやあらまし、さてもいかに心深くかたらひきこえてあらまし、など、一方（ひとかた）ならずおぼえたまふに、（あれこれと思われなさるので）（この弁の尼まで）この人さへうらやましければ、（〔弁が〕姿を隠している）かくろへたる几帳（きちやう）をすこし引きやりて（ずらして）、こまかにぞ（ことこまかに）（親しくお話しになる）かたらひたまふ。（すっかり悲しみに心を奪われている様子ながら）げに、むげに思ひほけたるさまながら、ものうち言ひたるけしき用意、（心遣いは並々でなく）くちをしからず、（たしなみ深い女房だった頃の面影が見て取れる）ゆゑありける人の名残と見えたり。

（弁）六　さきに立つ涙の川に身を投げば
　　人におくれぬ命ならまし

（泣き顔になって）と、うちひそみ聞こゆ。（薫）七「それもいと罪深（ふか）かなることにこそ。かの

八 そんなしなくてもよいよけいなことまでもして、そのために深い迷いの底に沈んだまま過すのも、つまらぬことです。「底」も川の縁語で言う。

九 私も、あなたが身を投げるという涙の川の深みに沈んだところで、いつも恋しく思われて亡き人を忘れることはないでしょう。「瀬々」は、折々というほどの意。「瀬」（浅瀬）は川の縁語。「涙川底の水屑となり果てて恋しき瀬々に流れこそすれ」（『拾遺集』巻十四、恋四、源順）

一〇 いつまでとも知れぬ気がなさる。「わが恋は行方も知らず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」（『古今集』巻十二恋二、躬恒）

一一 わけもないのに今夜ここに泊るのも、人が変に思うだろうかと、つまらぬ疑いを掛けられたくもないので。匂宮などのおもわくを憚る気持。

一二 弁は、反対にますます尼らしい姿に身をやつして。

一三 ほかの人は皆、お引っ越しの晴れ着の支度に余念ないようですが、その中でただひとり悲しみの涙にくれている尼の私でございます。「袖の浦」は出羽の国の歌枕（最上川の河口、酒田市街の対岸）。「たつ」に「裁つ」、「浦」に「裏」を掛けて、いずれも「袖」の縁語。「尼」に「海士」を掛けて、「浦」の縁語。「藻塩を垂る」は漁夫の製塩の仕事。涙を流す意。

弁と中の君の唱和

岸に到ること、などか。さしもあるまじきことにてさへ、深き底に沈み過ぐさむもあいなし。すべて、なべてむなしく思ひとるべき世になむ」（総じて何もかもむなしいことと悟らねばならぬこの世なのです）などのたまふ。

「身を投げむ涙の川に沈みても
恋しき瀬々に忘れしもせじ」（薫）九

いかならむ世に、すこしも思ひなぐさむることありなむ」（一体いつになったら少しでもこの悲しみの紛れることがあるのでしょう）と、果てもなきここちしたまふ。帰らむかたもなくながめられて、日も暮れにけれど、一二すずろに旅寝せむも、人のとがむることやと、あいなければ、帰りたまひぬ。

思ほしのたまへるさまを語りて、弁は、いとどなぐさめがたくつ、老いゆがめる容貌も知らず、つくろひさまよふに、一三いよいよやつして、

人はみないそぎたつめる袖の浦に

（中君に）悲しみに沈んだお話しぶりを
（京に）帰る気にもなれず物思わしい気持で
女房たちは皆しごく満足げにしみにくれている
ますます気持の晴らしようもなく悲
晴れ着を縫ったりいそがしくして
老いて醜くなったお洒落に夢中になっているが
（弁尼）一三

一（大君を忘れがたく思う）悲しみの気持をお訴え申し上げると。

二 涙にくれる尼のあなたの衣と違うところがありましょうか、寄るべもないこれからの暮しを思って涙に濡れる私の袖なのです。「心から浮きたる舟に乗りそめて一日も波に濡れぬ日ぞなき」（『後撰集』巻十一恋三、男のけしきやうやうつらげに見えければ　小町）。

三 京にずっと落着くことも、とてもむつかしいことのように思われますので。匂宮との生活の不安をもらす。

四 事情によっては、この山荘を荒れ果てるままにはしておくまいと思いますが。いつかここに帰って来ることもあろうか、と言う。

五 そういうことにでもなれば、お会いする機会もありましょうが。

六 こうして人一倍（亡き姉君を思って）悲しみに沈んでいられるのを見ますと。

ひとり藻塩を垂るるあまかな

と愁へきこゆれば、

（中君）二「しほたるるあまの衣に異なれや

浮きたる波に濡るるわが袖

三世に住みつかむことも、いとありがたかるべきわざとおぼゆれば、

四さまに従ひてここをば荒れ果てじとなむ思ふを、五さらば対面もありぬべけれど、しばしのほども、心細くて立ちとまりたまふを見おくに、いとど心もゆかずなむ。かかる容貌なる人も、かならずひたぶるにしも絶え籠らぬわざなめるを、なほ世の常に思ひなして、時々も見えたまへ」など、いとなつかしくかたらひたまふ。昔の人のもてつかひたまひしさるべき御調度どもなどは、皆この人にとどめおきたまひて、（中君）六「かく人より深く思ひ沈みたまへるを見れば、前の世も、取り分きたる契りもやものしたまひけむと思ふふさへ、むつましくあはれになむ」とのたまふに、いよいよ童べの恋ひて泣くやうに、

暫くの間であるにせよ　たった一人でここにお残りなのをそのままにして行く　尼姿の　ますます気の進まぬ思いがします　ってしまうものでもないようですから　誰もがすっかり引き籠　時々で　やはり世間並みのことと考えて　も京に顔出しして下さい　とても親身にこれからのこともお話しになる　亡き大君が日頃お使いになっていられた思い出のこもる　お道具類　この弁のためにあとにお残しになって　前世で　格別姉君と深いご縁がおありだったのだろうかと思うとなおのこと　他人とも思えず胸がいっぱいになります　子供が母を慕って　［弁は］

七 迎えのお車を簀子（縁）に寄せて。部屋からそのまま車に乗り移る。

八 匂宮から派遣された前駆（先払い）の者たち。

京への出立

九 かえって具合が悪かろうと思われるので。中の君をことごとしく迎えるわけにもゆかず、世間体を憚る。

一〇 屋敷内の女房たちも、外のお迎えの連中も、ご出立をおうながし申し上げるので。

一一 一体どこへ行くのだろうと思うにつけても。見知らぬ京へ向う不安の気持。

一二 中の君のお車にご一緒に乗る。

一三 中の君の側近の女房。（東屋二九〇頁注一参照）

一四 長らえていればこそ、こんなうれしい時節にめぐりあえましたのに、世をはかなんでこの宇治川に身を投げていましたら……。「宇治川」の「宇」に「身を憂」と言い掛ける。「祈りつつ頼みぞわたる初瀬川うれしき瀬にも流れあふやと」（『古今六帖』三、川）、「こころみになほおり立たむ涙川うれしき瀬にも流れあふやと」（『後撰集』巻十恋二、橘俊仲）、「かかる瀬もありけるものをとまりゐて身を宇治川と思ひけるかな」（『九条右丞相集』）、以上『河海抄』所引。

悲しみをおさえるすべもなく涙に沈んでいる心をさめむかたなくおぼほれゐたり。

皆かきはらひ（すっかり掃除をすませ）、よろづとりしたためて（何もかもきちんと始末して）、御車ども寄せて、御前の人々、四位五位いと多かり。御みづからも（匂宮ご自身も）、いみじうおはしまさまほしけれど（それでは事が大げさになって）、ことことしくなりて、なかなかあしかるべければ（いのだけれども）、たゞ忍びたるさまにもてなして（すら内密にということになさったので）、心もとなくおぼさる（やきもきしていられる）。中納言殿（薫）より（一通りのことについては）も、御前の人、数多くたてまつれたまへり。おほかたのことをこそ、宮よりはおぼしおきつめれ（匂宮からのご指示はあるようだが）、こまやかなるうちうちの御あつかひは（こまごまとした内輪のお世話は）、ただこの殿（薫）より、思ひ寄らぬことなくとぶらひきこえたまふ（行き届かぬ所もなく面倒を見てさし上げなさる）。

日暮れぬべしと（日も暮れそうです）、内にも外にももよほしきこゆるに、心あわたたしく（〔中君は〕気が気でなく）、いづちならむと思ふにも（何と頼りなく悲しいことかというお気持でいっぱいなのに）、いとはかなく悲しとのみ思ほえたまふに、御車に乗る大輔の君といふ人の言ふ、

（大輔）一四

ありふればうれしき瀬にも逢ひけるを
身を宇治川に投げてましかば

（弁の尼の気持に比べると何という違いだろうと）〔中君は〕不愉快うち笑みたるを、弁の尼の心ばへにこよなうもあるかなと、心づき

一 亡くなられた姫君を恋しく思う気持も忘れはしませんけれども、今日のお引っ越しは、何をさし措いてもうれしく存じられます。「ゆく」に京に行く意を響かせる。
二 どちらも（大輔の君ももう一人の女房も）長年宮家にお仕えして来た者たちで。
三 皆、亡き大君の方をむしろご贔屓申し上げていたようだったのに。「心寄せまし」は「心寄せ増し」であろう。
四 不吉な言葉を避けること。女房たちは、大君のことにはつとめて触れまいとして、祝意を表わすのにもっぱらである。

京への道中

五 遙々と遠く、けわしい山道の有様を。宇治からは、山裾を北上して木幡山を越え、大亀谷に出る。（図録一参照）
六 ひどいお仕打ちだとばかり思われた、匂宮の、京からの（たまさかの）お通いを。「中の通ひ」（京と宇治との間の通い）で一語。
七 二月の七日。
八 わが身のこれからを思うと、山から出て空を渡る月も、結局、この世に住むに堪えかねて再び山に沈んでゆくのでした。「住み」に「澄み」を掛ける。
九 それにひき替え、あろうことか、今、宇治の山里を離れ去ろうとする自分は。

なことと
なうも見たまふ。いま一人、
（女房）
過ぎにしが恋しきことも忘れねど

今日はたまづもゆく心かな

いづれも年経たる人々にて、皆かの御方をば、心寄せましきこえためりしを、今はかく思ひ改めて言忌するも、心憂の世や、とおぼえたまへば、ものも言はれたまはず。

何も言う気にもおなりになれない　気持を変えて

京への道中の
道のほどの、はるけくはげしき山路のありさまを見たまふにぞ、
〔中君は〕
つらきにのみ思ひなされし人の御中の通ひを、ことわりの絶え間なりけりと、すこしおぼし知られける。七日の月のさやかにさし出でたる影、をかしく霞みたるを見たまひつつ、いと遠きに、ならはず苦しければ、うちながめられて、

無理もない　途絶えなのだったと　少しはお分りになるのだった　光が　〔京まで〕　初めてのこと　とて難儀なので　物思わしい気持になって

（中君）
ながむれば山よりいでてゆく月も
世にすみわびて山にこそ入れ

さまかはりて、つひにいかならむとのみ、あやふく、行く末うしろ

結局どうなることかとそればかり　心配でならず　先のことが気になる

一〇 一体今まで、何を思い悩んでいたのだろう（今までの物思いなど物の数でもなかった）と、昔の自分を取り戻したい気がする。「とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」（出典未詳の古歌）。中の君の思いに即した書き方。

善美を尽した二条の院

一一 催馬楽、呂「この殿は」の歌詞による。「この殿は むべも むべも富みけり 三枝の あはれ 三枝の はれ 三枝の 三つば四つばの中に 殿造りせりや 殿造りせりや」。「三枝の」は「三つ」の枕詞（三枝は、山百合、三葉など諸説ある）。「三つば四つば」は、幾棟もの殿舎の建ち並ぶさま（語源未詳）。

一二 （匂宮が）どのような人を得て、身をお固めになることかと世間注視の的であられたのに。

一三 世間の人も、中の君をよほどのお方なのだろうと目を見張る思いをしたのだった。

その夜の薫の思い

一四 一三五頁注一一参照。

一五 近頃は毎日三条の宮にお出でになってはいろいろ指図していらっしゃるが。

めたきに、一〇年ごろ何ごとをか思ひむとぞ、とり返さまほしきや。（につけても）

宵うち過ぎてぞおはし着きたる。見も知らぬさまに、目もかかや（見たこともない立派さで）（目もまばゆいほど）くやうなる殿造りの、三つば四つばなるなかにひき入れて、宮、い（〔二条院に〕）（〔車を〕）（匂宮）（今）つしかと待ちおはしましければ、御車のもとに、みづから寄らせた（どの）（か今かと気が気でなくお待ちでいらしたので）まひておろしたてまつりたまふ。御しつらひなど、あるべき限りして、女房の局々まで、御心とどめさせたまひけるほどしるく見えて、（〔中君を〕）（お部屋の飾りつけなど）（これ以上はない見事さで）（つぼねつぼね）（匂宮が十分お心配りして下さったことがはっきり目に見えるようで）いとあらまほしげなり。一一いかばかりのことにかと見えたまへる御ありさまの、にはかにかく定まりたまへば、おぼろけならずおぼさるることなめりと、世人も心にくく思ひおどろきけり。（まことに結構なお扱いである）（急にこうして人をお迎えになったので）（並々でないご寵愛なのだろうと）（様子もそれとなく聞こうと思って）

薫

中納言は、一四三条の宮に、この二十余日のほどにわたりたまはむとて、一五このころは日々におはしつつ見たまふに、この院近きほどなれば、けはひも聞かむとて、夜ふくるまでおはしけるに、たてまつれたまへる御前の人々帰り参りて、ありさまなど語りきこゆ。いみじう御心に入りてもてなしたまふなるを聞きたまふにも、かつはうれ

（二条の院に近い所なので）（お移りになるご予定なので）（〔二条宮に〕）（〔宇治に〕）（おさし向け申された）（前駆の者たち）（お着きの様子などご報告申し上げる）（宮がひどく中の君を大切にお扱いのようだとお聞きになるにつけても）（一方ではうれしい）

一「とり返すものにもがなや」（昔を取り返すことはできないものだろうか）の意。「とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」（出典未詳の古歌）

二 本当に契りを結んだわけではないけれども、一夜の共寝はした人なのに。上の句は「まほ」にかかる序詞。「真帆」（風を一杯にはらんだ帆）に「まほ」（まとも）を掛ける。「鳰の湖」は琵琶湖の別称。枕詞「しなてるや」が「鳰の湖」にかかるようになった事情についてはなお確説がない。『河海抄』に『万葉』の人丸の歌として「しなてるや鳰の水海に漕ぐ船のまほならねどもあひ見てしがな」を引くが、この歌、出典未詳。

三 母は藤典侍。匂宮との結婚が策されていたこと、六巻椎本三四八頁、総角八五頁、九一頁参照。

四 六の君へのお手紙。

五 女子の成人式。結婚を前提として挙式されることが多い。ここもそうである。

六 血の繋がりのある間柄で、目新しさもない縁組だが。夕霧と薫は、表向き、腹違いの兄弟。以下、夕霧の思案。

七 長年人知れず思いをかけていたという人にも先立たれて。大君のこと。

夕霧、六の君を薫にと思うが、拒まれる

六の君、裳着

（我ながら未練がましく思うものの）しきものから、さすがに、わが心ながらをこがましく、（胸もどきどきして）胸うちつぶれて、「ものにもがなや」と、（何度も何度もひとり口ずさまれて）かへすがへすひとりごたれて、

（薫）二 しなてるや鳰の湖に漕ぐ船の

まほならねどもあひ見しものを

（とでもけちをつけてみたい気がする）とぞ言ひくたさまほしき。

（夕霧）右の大殿は、三 六の君を（匂宮）宮にたてまつりたまはむこと、（この二月にと）この月にとおぼし定めたりけるに、（匂宮が）かく思ひのほかの人を、（こうして思いもかけない人をこちらの子定より先にとお）このほどよりさきにとおぼし（たくらみであったかのように大切にお迎えなさって）顔にかしづきする（涼しい顔でいられるので）たまひて、（夕霧が）離れおはすれば、（ひどく不快がっていらっしゃる）いとものしげにおぼしたり、（お気の毒なので）と聞きたまふもいとほしければ、四 御文は時々たてまつりたまふ。五 御裳着のこと、（世の評判になるほど盛大に支度なさったのを）世に響きていそぎたまへるを、（延期なさるのも体裁の悪いことなので）延べたまはむも人笑へなるべければ、二十日あまりに（裳を）着せたてまつりたまふ。

六 同じゆかりにめづらしげなくとも、（薫）この中納言をよそ人にゆづらむがくちをしきに、（赤の他人に婿に取られるのはおもしろくないから）さもやなしてまし、（いっそ婿にしてしまおうか）年ごろ人知れぬものに思ひ

八 世間無常のありさまを目のあたりに見たので。大君の死に遭ったこと。

九 この身も（愛する人に先立たれるような）不吉な身の上ではないかと思われるので。

一〇 どうして、このお人（薫）までもが、私が真剣に申し出る話を、気乗りのしないふうにあしらってよいものか。「この君さへ」は、匂宮だけでなく薫までもが、の意。

一一 三月の上旬と思われる。薫は新築の三条の宮にすでに移っている趣。

一二 主人のいない宇治の山荘のことがまずお心に浮ぶので。「浅茅原主なき宿の桜花心やすくや風に散るらむ」（『拾遺集』巻一春、恵慶法師。『恵慶法師集』）

一三 （賞翫する主人もいないので）気兼ねもなく、の意。前注所引の歌の下の句を口ずさむ。

一四 匂宮のご座所。二条の院の寝殿。

一五 例によって、どうかと思われる（不埒な）気持が拭いきれないのは、おかしなことだ。薫の気持に密着した書き方の草子地。

薫、二条の院を訪問

けむ人をもなくなして、もの心細くながめたまふなるを、などお思ぼし寄りて、さるべき人してけしきとらせたまひけれど、「世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く、身もゆゆしうおぼゆれば、いかにもいかにもさやうのありさまはもの憂くなむ」と、すさまじげなるよし聞きたまひて、「いかでか、この君さへ、おほなおほな言出づることを、もの憂くはもてなすべきぞ」と恨みたまひけれど、親しき御仲らひながらも、人ざまのいと心はづかしげにものしたまへば、えしひてしも聞こえ動かしたまはざりけり。

世をはかなんで物思いがちでいられるそうだが
（薫）八
適当な人物を介して薫の意向を確かめさせなさったけれども
とても情けなく
九
全くその気もどのような話であっても妻帯といったことには気が進まないのだ
一〇（夕霧）
ない様子である旨
一一
人柄がいかにも気のひけるほど立派な方でいらっしゃるので
［夕霧は］無理にも説得しようとすることはおできにならなかった

花盛りのほど、二条の院の桜を見やりたまふに、主なき宿のまづ思ひやられたまへば、「心やすくや」などひとりごちあまりて、宮の御もとに参りたまへり。ここがちにおはしましつきて、いとよう住み馴れたまひにたれば、めやすのわざや、と見たてまつるものから、例の、いかにぞやおぼゆる心の添ひたるぞ、あやしきや。されど、実の御心ばへは、いとあはれにうしろやすくぞ思ひきこえたま

一二
［薫は］
一三
独り口ずさむ思いに堪えかねて
一四
［匂宮は］こちらにおいでのことが多くて
すっかり中の
君とのお暮しに馴染んでいられるので
結構なことだ
一五
本当のお気持は
心からうれしくこれで安心だと
とお思い申し上げるものの
［中君のことを］お思い申し上げな

西の対の中の君

一 お車の支度をして。「装束」は、簾、座席などを整えること。
二 西の対の中の君のもと。
三 お部屋うちの様子も奥ゆかしい暮しぶりで。
四 しゃれた感じの女の童の、御簾の間から姿のちらちら見えるのを取次ぎに、参上のご挨拶を申し上げなさると。
五 お敷物をさし出して。簀子の座である。
六 以前からの事情を知っている女房なのであろう。新規お召しかかえでなく、宇治から付き従って来た女房。
七 いつでもお尋ねできそうに思われますお近くに住んでおりながら。
八 ついお庭先の桜の梢も霞を隔てて見えますにつけて。前に「二条の院の桜を見やりたまふに」とあった。かえって中の君方に近づきにくいことを言う。
九 悲しく思い出されることがほんとにいろいろございます。大君が存生ならば、という思い。
一〇 ほんとに、姉君がご存生で薫と結婚しておいでだったら。以下、中の君の心中。
一一 一二五頁注二参照。

（匂宮）宮は内裏へ参りたまはむとて、（一）御車の装束して、（二）人々多く参り集まりなどすれば、（お供の人々）山荘の質素な様子とはうって変って（三）立ち出でたまひて、（四）対の御方へ参りたまへり。山里のけはひひきかへて、御簾のうち心にくく住みなして、（五）をかしげなる童の、透影ほの見ゆるして御消息聞こえたまへれば、（六）御茵さし出でて、昔の心知れる人なるべし、出で来て御返り聞こゆ。「（薫）朝夕の隔てもあるまじう思うたまへらるるほどながら、（格別の用事もないのにお伺いしますのも）そのことととなくて聞こえさせむも、（ご遠慮いたしておりますうちに）なかなかなれなれしきとがめやと、（昔とは別の世界に身を置いているような気がしてなりません）つつみはべるほどに、世の中かはりにたるここちのみぞしはべるや。（八）御前の梢も霞隔てて見えはべるに、（九）あはれなること多くもはべるかな」と聞こえて、うちながめてものしたまふけしき、（痛ましいにつけて）心苦しげなるを、（一〇）げにおはせましかば、おぼつかなからず（行き来して）行き返り、かたみに（お互いに）花の色、鳥の声をも、（その折々につけて）をりにつけつつ、（少しは心楽しくこの世を生きてゆくこともできたのに）すこし心ゆきて過ぐしつべかりける世を、（亡き大君を）などおぼし出づ

（さるのだった）ひける。

（あれこれと）何くれと御物語聞こえかはしたまひて、（薫と）（お話をお交わしになって）夕つかた、（匂宮）宮は内裏へ参りたまはむとて、（一）御車の装束して、（二）人々多く参り集まりなどすれば、（お供の人々）山荘の質素な様子とはうって変って（三）立ち出でたまひて、（四）対の御方へ参りたまへり。山里のけはひひきかへて、御簾のうち心にくく住みなして、（五）をかしげなる童の、透影ほの見ゆるして御消息聞こえたまへれば、（六）御茵さし出でて、昔の心知れる人なるべし、出で来て御返り聞こゆ。「（薫）朝夕の隔てもあるまじう思うたまへらるるほどながら、（格別の用事もないのにお伺いしますのも）そのことととなくて聞こえさせむも、（ご遠慮いたしておりますうちに）なかなかなれなれしきとがめやと、（昔とは別の世界に身を置いているような気がしてなりません）つつみはべるほどに、世の中かはりにたるここちのみぞしはべるや。（八）御前の梢も霞隔てて見えはべるに、（九）あはれなること多くもはべるかな」と聞こえて、うちながめてものしたまふけしき、（痛ましいにつけて）心苦しげなるを、（一〇）げにおはせましかば、おぼつかなからず（行き来して）行き返り、かたみに（お互いに）花の色、鳥の声をも、（その折々につけて）をりにつけつつ、（少しは心楽しくこの世を生きてゆくこともできたのに）すこし心ゆきて過ぐしつべかりける世を、（亡き大君を）などおぼし出づ

一二 この上もない（薫の）ご好意の深さを、（こうしておしあわせになられた）今こそ、よくよくお分りでいらっしゃるということも、はっきりお分り頂くようになさらなくてはいけませぬ。「せたまふ」は二重敬語。

一三 女房の取次ぎなしに、いきなり直接お話し申し上げるようなことは、やはり気がひけるので、ためらっていらっしゃるうちに。

一四 どうしてすっかり他人行儀に（薫を）御簾の外に坐らせてお置きなのか。簀子の座であることを見咎める体。

一五 私にとっては物笑いなことでもあろうか、と思われますが。暗に中の君と薫の間柄を疑う体に諷する。

一六 それでも、全然他人行儀によそよそしく扱うのでは、罰が当るというものでしょう。

一七 もっと近くで。御簾の内（廂の間）に入れて、の意。

るにつけては、ひたぶるに絶え籠りたまへりし住ひの心細さよりも、飽かず悲しう、（全然世間と交渉もなくていらした〔宇治の〕／ひたすら悲しく）くちをしきことぞいとどまさりける。

人々も、（女房たち）「世の常に、（世間並みに）うとうとしくなもてなしきこえさせたまひそ。限りなき御心のほどをば、今しもこそ、見たてまつり知らせたまふさまをも、見えたてまつらせたまふべけれ」など聞こゆれど、人伝ならず、ふとさし出で聞こえむことの、なほつつましきをやすらひたまふほどに、宮（匂宮）、出でたまはむとて、御まかり申しにわたりたまへり。いときよらにひきつくろひ化粧じたまひて、見るかひある御さまなり。中納言はこなたになりけりと見たまひて、「などかむげにさし放ちては出だしすゑたまへる。御あたりには、あまりやしと思ふまで、うしろやすかりし心寄せを、わがためはをこがましきこともや、とおぼゆれど、さすがにむげに隔て多からむは、罪もこそ得れ。近やかにて、昔物語もうちかたらひたまへかし」など、聞こえたまふものから、（匂宮）「さはありとも、あまり心ゆるびせむも、

（お出かけということで〔中君に〕おいとま乞いの挨拶にお出でになった／とても美々しく身なりをととのえ／行き届いたお世話ぶりでしたので／こちらに来ていたのだったと／見るからにほれぼれするお姿だ／おめかしなさって／あなたに対しては／ほんとにどうしたことかと思うほど／昔の思い出話でもしみじみなさるがよかろう／申し上げなさるものの／そうはいっても／あまり気を許すのも）

またどんなものでしょう
またいかにぞや。うたがはしき下の心にぞあるや」と、うち返しの
またむし返して
たまへば、一方ならずわづらはしけれど、わが御心にも、あはれ深
おっしゃるので　人に言われなくても　やさしいお方
く思ひ知られにし人の御心を、今しもおろかなるべきならねば、か
だと身に沁みて思われた薫のお気持に対して　今さらよそよそしくしてよいものでもないので
の人も思ひのたまふめるやうに、いにしへの御かはりとなずらへき
〔薫を〕亡き姉君のお身代りともお思い申して
こえて、かう思ひ知りけりと見えたてまつるふしもあらばや、とは
おぼせど、さすがに、とかくやと、かたがたにやすからず聞こえな
つらいお気持になるのだった
したまへば、苦しうおぼされけり。

一　ひそかに何を思っているか分ったものではありませんからね。薫の下心を疑う、の意。

二　どちらに対しても（匂宮に対しても薫に対しても）厄介なことと思われるけれども。中の君の心。

三　あちら（薫）もそう思っておっしゃりもするようだが、そのように。

四　これほどにも感謝しているのだということを、（薫に）はっきり分って頂けるようなことでも何かあればよいが。何らかの形で、薫に自分の感謝の気持を表わしたい、の意。

五　ああだこうだと、（匂宮が）何かにつけて、心おだやかでないようなおっしゃり方をなさるので。中の君と薫の仲を疑うようなことを言うこと。

宿木（やどりき）

今上の女二の宮の母君藤壺の女御は、宮の十四歳の年、裳着の支度に専念するうち、夏頃、物の怪で亡くなった。菊の盛り、時雨のする夕方、帝は薫と賭碁に興じ、宮を薫に許すとの内意を示された。噂を聞いた夕霧は、薫を諦め、六の君の婿に匂宮をと思い定める（第一年）。翌年、八月の十六夜の夜、匂宮は六の君のもとに通うようになる。薫は、中の君の不安と悲しみを慰めようと度々二条の院を訪れる。ある夜、思いを抑えかねて中の君の袖を捉えるが、懐妊中の腹帯に気付いて危うく自制した。その後訪れた薫が、宇治に御堂を建てて大君の像を祀りたいと語るので、中の君は、大君に生き写しの異母妹の存在を打ち明ける。浮舟である。九月の末、宇治を訪れた薫は、大君の周忌法要と、山荘の寝殿を移築して御堂にすることを阿闍梨に諮る。そして弁の尼から浮舟のことを委しく聞く。巻名は、この時の薫と弁の歌の贈答による（第二年）。

年改まって、二月の初め、薫は権大納言に昇進して右大将を兼任。一方、中の君は男子を出産して、その立場も安定する。二月の二十日過ぎ、女二の宮の裳着の式が挙げられ、その夜から薫は宮のもとに通うことになる。四月の初め、女二の宮の御殿である藤壺で、帝主催の藤の花の宴が催され、薫は帝の御婿として面目を施した。翌日の夜、女二の宮は薫の自邸三条の宮に迎えられた。二十日過ぎ、宇治を訪れた薫は、たまたま初瀬詣での帰途山荘に泊り合せた浮舟を垣間見て、大君に生き写しのその容姿に心を打たれる（第三年）。

年立の通説は、この巻の第一年を大君の亡くなった総角の年（薫二十四歳）に重ねるが、第二年の終りと第三年の記事には、その翌年と考えざるを得ない記述があり（二二七頁注一八、二四一頁注八参照）、決めがたい点がある。

藤壺の女御腹の女二の宮

一　漠然と物語の時を指定する言い方。以下、藤壺の女御腹の女二の宮の紹介で、物語の冒頭形式の手続きが踏まれている。（六巻橋姫二五五頁注一参照）

二　亡き左大臣殿の姫君である女御の意。今上が東宮として元服の後、最初に入内し、麗景殿と申し上げた。左大臣（系図不詳）の三女。（四巻梅枝二六三～四頁参照）

三　そのかいがあると見える別段のこともなくてお過しなのに。立后のこともなかったことをいう。

四　御子をお産みになることも少なくて。「さや」は「さやう」の「う」を表記しない形と思われる。

五　後の一五九頁に「女二の宮」と見える。

六　自分が、いかにも無念なことに、中宮に圧倒され申してしまった運命の情けなく思われる代りに。以下、藤壺の女御の思い。

七　明石の中宮の所生。

宿木

一そのころ藤壺と聞こゆるは、二故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ春宮と聞こえさせし時、人よりさきに参りたまひにしかば、む仲睦ましくいとしくお思いになる面での帝のご寵愛はつましくあはれなるかたの御思ひは、ことにものしたまふめれど、格別でいらっしゃるようだが三そのしるしと見ゆるふしもなくて年経たまふに、明石の中宮には、宮たちさへあまた、ここらおとなびたまふめるに、四もうすっかり成人していられるようなのにさやのこともすくなくて、ただ女宮一所をぞ五持ちたてまつりたまへりける。六わがいとくちをしく、人におされたてまつりぬる宿世、なげかしくおぼゆるかはりに、この宮をだに、この姫宮をせめていかで行く末の心もなぐさむばかりにて見たてまつらむと、どうかこれから先自分も満足がゆくほどおしあわせな身の上にしてさし上げたいとかしづききこえたまふことおろかならず。御容貌もいとをかしくおはすれば、帝もらうたきものに思ひきこえさせたまへり。七女一の宮を、世にたぐひなきものにかしづききこえさせた

大切にお世話申し上げなさることはひとかたでないおかわいがり申しておいでになる

[帝が]世にまたとないほどに大切にお扱い申しておいでなので

一 女二の宮は、一般の世間の評判こそ（女一の宮に）及ぶべくもないが。

二 女御の父亡き左大臣のご勢力が盛んだったその余勢もたいして衰えていないので。

三 女二の宮の裳着の儀を挙げてさし上げようとなさって。主語は女御。「裳着」は、女子の成人式。結婚を前提に挙げられることが多い。前に「いかで行く末の心もなぐさむばかりにて見たてまつらむ」とあったが、いずれしかるべき婿君を持たせようというのが女御の念願だったのであろう。

女二の宮十四の年、裳着を前に、女御死去

四 人の死霊やその他魔性のものに取りつかれて正気を失うと考えられた病気。

五 女御は、気立てがやさしくて、人々がお慕い申すお人柄のお方だったので。

六 大体女御を直接存じ上げるはずもない分際の女官などまで、悲しくお思い出し申さぬ者はいない。「女官」は、宮中の御湯殿、台盤所などの御用を勤める下級の女官。

まふに、おほかたの世のおぼえこそ及ぶべうもあらね、うちうちの御ありさまはをさをさ劣らず。父大臣の御勢いかめしかりし名残、いたくおとろへねば、ことに心もとなきことなどなくて、さぶらふ人々のなり姿よりはじめ、たゆみなく、時々につけつつととのへ好み、今めかしくゆゑゆゑしきさまにもてなしたまへり。

内々のお暮しぶりは女一の宮に少しもひけを取られない

[女御は]格別お暮し向きに不安なことなどなくて

お仕えする女房たちの身なりなどをはじめとして

気を抜くことなく

四季折々の時節に合せて十分に数奇をこらし

はなやかで奥ゆかしくお暮しになっていらっしゃる

十四になりたまふ年、御裳着せたてまつりたまはむとて、春よりうちはじめて、異事なくおぼしいそぎて、何ごともなべてならぬさまにとおぼしまうく。いにしへより伝はりたりける宝物ども、このをりにこそはとさがし出でつつ、いみじくいとなみたまふに、女御、夏ごろ、もののけにわづらひたまひて、いとはかなく亡せたまひぬ。いふかひなくくちをしきことを、内裏にもおぼし嘆く。心ばへ情しく、なつかしきところおはしつる御方なれば、殿上人どもも、「こよなくさうざうしかるべきわざかな」と、惜しみきこゆ。おほかたさるまじき際の女官などまで、しのびきこえぬはなし。

[女二宮が]

余念なくお支度を心がけられて

何ごとにつけても並々ならず立派にとお心積りなさる

[左大臣家に]

熱心にお支度なさっていられるうちに

お話にもならぬ残念なことと

もうすっかりさびしくなってしまうことだな

中陰過ぎ、女二の宮参内

七 女御の四十九日のご法要。死後、四十九日間を中陰といって、まだ来世の生の定まらない期間とし、七日ごとに法要を営むが、その中陰の満ちる四十九日目の法要。『湖月抄』は「ナ、ナヌカ」と訓む。

八 毎日、女二の宮の御殿にお成りになっては。亡き母女御生前の御殿であった藤壺であろう。

九 黒い喪服に身をやつしていらっしゃるご様子は。

一〇 母女御のお身内といっても、後見役として（帝が）期待あそばすことのできる、伯父などといったしっかりした人もいない。故左大臣の子息たちのことである。

一一 大蔵省（諸国からの調、銭、金銀、珠玉、銅鉄、雑物などの管理、出納をつかさどる役所）の長官。正四位下相当。

一二 修理職（内裏の修理、造営をつかさどる役所）の長官。従四位下相当。

一三 ご自分おひとりが心配なさらねばならぬかのように女二の宮の将来をお案じになるのも、（帝には）お気の休まらぬことだった。

一四 お庭先の菊がまだすっかり色変りしおわらず、盛りの頃に。菊の花の霜に色変りしたのを当時は賞した。

帝、女二の宮の婿に薫をとおぼしめす

宮は、（女二の宮）まして（なおさらまだお若い身空なので）若き御ここちに、心細く悲しくおぼし（沈みきっていられるのを）入りたるを聞こしめして、心苦しく（痛々しくおかわいそうにと）あはれにおぼしめさるれば、御四十九日（過ぎる）過ぐるままに、忍びて（宮中に）参らせたてまつらせたまへり。日々にわたらせたまひつつ見たてまつらせたまふ。黒き御衣にやつれておはするさま、（女二宮を）いよいよいじらしげに気品のある様子が以前より目立っていらっしゃるいとどらうたげにあてなるけしきまさりたまへり。（女二宮は）お考えも十分に大人びていらしてくおとなびたまひて、母女御よりも今すこしづしやかに、（ひときわしっかりとした）重りかなるところはまさっていらっしゃるのを（危なげのないお方だとはお思い申し上げあそばすけれ）うしろやすくは見たてまつらせたまへど、（本当のところは）まことには、一〇御母方とても、後見と頼ませたまふべき、伯父などやうのはかばかしき人もなし。わづかに大蔵卿、修理の大夫などいふは、女御にも異腹なりける。ことに世のおぼえ重りかにもあらず、やむごとなからぬ人々をたのもし人にておはせむに、女は心苦しきこと多かりぬべきこそいとほしけれ、など、御心ひとつなるやうにおぼしあつかふも、やすからざりけり。

（物思わしげに時々）御前の菊うつろひ果てで盛りなるころ、空のけしきのあはれにう

亡き女御のことなど

ちしぐるるにも、まづ[一]この御方にわたらせたまひて、昔のことなど聞こえさせたまふに、〔女二宮は〕御いらへなども、おほどかなるものから、いはけなからずうち聞こえさせたまふを、〔帝は〕うつくしく思ひきこえさせたまふ。[二]かやうなる御さまを見知りぬべからむ人の、もてはやしきこえむも、などかはあらむ、朱雀院[三]の姫宮を、光源氏六条の院にゆづりきこえたまひしをりの定めどもなど、おぼしめし出づるに、しばしは、[四]いでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなましと聞こゆることどもありしかど、源中納言[五]の、〔女三宮は〕人よりことなるありさまにて、かくよろづを後見たてまつるにこそ、そのかみの御おぼえおとろへず、やむごとなきさまにてはながらへたまふめれ、[六]さらずは、御心よりほかなることどもも出で来て、おのづから人に軽められたまふこともやあらまし、〔帝は〕などおぼし続けて、[七]ともかくも御覧ずる世にや思ひ定めまし、とおぼし寄るには、[八]やがてそのついでのままに、この中納言よりほかに、よろしかるべき人、またなかりけり。宮たちの御

時雨れるにつけても　おっとりとはしているものの　たどたどしげな様子もなく申し上げなさるのを　かわいらしく　光源氏　お世話を代り　最初のうちは　にお願い申し上げなさった時の様々な評定などを　〔帝は〕　ご批判申すこともいろいろあったけれども　〔女三宮は〕昔のご声望も衰えずに　人にすぐれた立派な人物として　成行きから　軽んじられなさることも　〔帝は〕　お考えになってみると　あるかもしれない　〔女二宮は〕　ほかにいないのだった　内親王方の婿君　婿として適当な人物は

一　女二の宮の御殿。藤壺であろう。

二　こうした利発で美しいご様子を理解できる人物が、この宮を（妻として）いつくしみ申すというのも、何の不都合なことがあろう。「などかはあらむ」は、同様の言い方、後の一五八頁、四巻藤袴一九七頁に見える。以下、帝の心中の思い。ただし、次の「おぼしめし出づるに」の部分には、地の文の気持が出ている。

三　朱雀院の女三の宮。帝の妹君で、光源氏の正室。薫の母君。この時の婿選びのいきさつ、五巻若菜上二〇頁以下に見える。帝の東宮時代のことである。

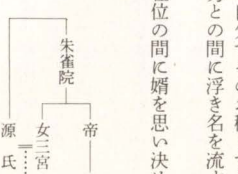
四　いやいや、感心できないことだ、結婚などなさらなければよかったのに。

五　薫。

六　そうでなかったら、ご自分でそのお積りでもない何かのことも出来して。男との間に浮き名を流すというようなこと。

七　誰にするにせよ、御在位の間に婿を思い決めようか。

八　そのまま順序通りに。父朱雀院が女三の宮を源氏に、帝が女二の宮を、源氏の子の薫に、ということ。



九 薫には、前から愛する夫人があって、（女二の宮を冷遇するような）外聞の悪いことが起りそうな様子は今のところなさそうだが。源氏の場合には、紫の上がいたので、女三の宮が疎んじられるということがあった。

帝、薫と碁を打ち、女二の宮のことをほのめかす

一〇 清涼殿の殿上の間。

一一 中務省の卿（長官）である親王。四品以上の親王が任じられる。中務省は帝の側近の雑事や詔勅の宣下や叙位のことにかかわる。後の東屋三二三頁に見える「中務の宮」と同一人物であろう。明石の中宮腹か。

一二 上野の国の守である親王。上総、常陸、上野の三国の守は親王が任じられる。系図不明。

一三 薫。

一四 薫の生れながらの芳香のこと。（六巻匂兵部卿一七〇頁参照）

一五 音楽などは場違いなことで。ここは藤壺で、女二の宮が服喪中であるからである。

一六 何となく日を過す遊びごととして、これがちょうど格好のものだろう。「春を送ることは唯酒有り　日を銷すことは碁に過ぎず」（『白氏文集』巻十六、律詩「官舎閑題」）

（としてお側に並べたとしても）かたはらにさし並べたらむに、（どの点から見ても不届きなことはあるまいに）何ごともめざましくはあらじを、とより思ふ人持たりて、聞きにくきことうちまずまじくはた、あめるを、（愚図愚図しているとそんなことになりかねないだろう）つひにはさやうのことなくてしもえあらじ、（そうならない先に）さらぬさきに、（婿にとそれとなく持ち出してみようか）さもやほのめかしてまし、などをりをりおぼしめしけり。

御碁など打たせたまふ。（［女二宮と］）暮れゆくままに、時雨をかしきほどに、（菊の花）花の色も夕ばえしたるを（夕明りに映えているのを）御覧じて、人召して、（帝）「ただ今、殿上には誰誰か」と問はせたまふに、「中務の親王、上野の親王、中納言源の朝臣さぶらふ」と奏す。（帝）「中納言の朝臣こなたへ」と仰せ言ありて参りたまへり。（［薫が］）げにかく取り分きて召し出づるもかひありて、（なるほどこうして特別にお呼び出しになるだけのことはあって）遠くよりかをれる匂ひよりはじめ、人に異なるさましたまへり。（人よりすぐれた風采でいらっしゃる）「今日の時雨、常よりことにのどかなるを、遊びなどすさまじきかたにて、いとつれづれなるを、いたづらに日を送るたはぶれにて、これなむよかるべき」とて、碁盤召し出でて、御碁の敵に召し寄す。（お相手に）いつもかやうに、気近くならしまつはしたまふにならひにたれば、（お側近く親しくお召しになるのが例になっているので）

一　薫は、今日もそうだろうと思っていると。

二　よい賭物はあるはずなのだが。「賭物」は、勝負に賭ける品。女二の宮のことをほのめかして言う。

三　（薫には）どう見えるのだろうか、ふだんより一層慎重に構えて控えていられる。意味ありげな帝のお言葉に、それと察している面持。

四　この帝と碁を囲む場面、源氏物語絵巻に図画されている（図録三参照）。

碁終って、薫、菊花一枝を賜う

五　三番勝負で一番負け越しあそばされた。帝、一勝二敗の趣。

六　いずれは女二の宮を許そうとの含意がある。「聞き得たり園の中に花の艶を養ふことを　君に請ふ一枝の春を折らむことを許せ」（『和漢朗詠集』巻下、恋、無名）

七　あれこれのご返事は申し上げないで。直接、行動によってお答えする趣。

八　世の常の家の垣根に美しく咲く花でしたら、思いのままに折り取って賞でましょうものを。女二の宮を念頭に置いて、遠慮の意をあらわす。

九　霜に堪えきれず枯れてしまった園の菊であるが、残された花の色は移ろいもしないでいることだ。「園の菊」を亡き藤壺の女御に、「残りの色」を女二の宮によそえる。

一さにこそは、と思ふに、（帝）二「よき賭物はありぬべけれど、〔それは〕軽々しくは〔簡単には〕渡せそうにないから〔ほかに〕何がよかろうかえわたすまじきを、何をかは」などのたまはする御けしき、三いかが見ゆらむ、いとど心づかひしてさぶらひたまふ。

四さて打たせたまふに、五三番に数一つ負けさせたまひぬ。（帝）「ねたきしてやらわざかな」とて、（帝）六「まづ今日はこの花一枝ゆるす」とのたまはすれば、御いらへ聞こえさせで、下りておもしろき枝を折りて参りたまへり。

（薫）八
世のつねの垣根ににほふ花ならば
心のままに折りて見ましを

と奏したまへる、慎重な心遣いのほどが見える用意あさからず見ゆ。

（帝）九
霜にあへず枯れにし園の菊なれど
のこりの色はあせずもあるかな

とのたまはす。

〔帝が〕かやうに、をりをりほのめかさせたまふ御けしきを、〔直接に〕人伝ならず

一〇 例の変った性分なので。人と違って、何ごとにも悠長に構えるのが薫の性癖。

一一 いやいや、（女二の宮を頂くのは）もともと望んだことでもない。以下、薫の心中。

一二 いろいろと心苦しい人々との縁組の話も、何かと聞き流して今まで年を経てきたのに。薫は今まで、大君に中の君をすすめられ（総角三四～三五頁）、夕霧から六の君のことを打診されたが（早蕨一四四～五頁）、いずれもことわってきた。

一三 今になって女二の宮との婚儀を承諾しては、世俗を捨ててしまった修行僧が還俗するような気がするであろう。「聖よ」は「聖世」か。

一四 女二の宮が明石の中宮腹でいらっしゃったらまた別だが。

一五 夕霧。

一六 前注一二参照。この人、六巻匂兵部卿一六三頁に初出、落葉の宮の養女（同一七五頁）。夕霧は前から匂宮にと考えていた（六巻椎本三四八頁、総角八五頁、九一頁、早蕨一四四頁参照）。

夕霧、六の君を匂宮にと心ざす

一七 水も洩らさぬ仲のよい夫婦をと願って婿を決めるといっても、並々の身分の男にまで格を下げるというのでは。「などてかくあふごかたみになりにけむ水洩らさじとむすびしものを」（『伊勢物語』二十八段）

うけたまはりながら、例の心の癖なれば、いそがしくしもおぼえず。いでや、本意にもあらず、さまざまにいとほしき人々の御ことどもをも、よく聞き過ぐしつつ年経ぬるを、今さらに聖よのものの、世に返り出でむここちすべきこと、と思ふも、かつはあやしや、ことさらに心を尽くす人だにこそあなれ、とは思ひながら、后腹におはせばしも、とおぼゆる心のうちぞ、あまりおほけなかりける。

かかることを、右の大殿ほの聞きたまひて、六の君はさりともこの君にこそは、しぶしぶなりとも、まめやかに恨み寄らば、つひにはえいなび果てじ、とおぼしつるを、思ひのほかのこと出で来ぬべかなりと、ねたくおぼされければ、兵部卿の宮はた、わざとにはあらねど、をりをりにつけつつ、をかしきさまに聞こえたまふことなど絶えざりければ、さはれ、なほざりの好きにはありとも、さるべきにて、御心とまるやうもなどかなからむ、水もるまじく思ひ定めむとても、なほなほしき際にくだらむはた、いと人わろく、飽かぬ

心せく気にもなれない　我ながらおかしなことだ　女二の宮についてわざわざ心を砕いている人もいるようなのに　こうした話を　薫に縁づけよう　［薫が］気が進まなくても　せめてのことに　結局は　本気になって頼んでみたら　実を結　［女二宮との］意外な縁談が　とわりきれないだろう　先を越された気がなさったので　一方匂宮は　熱心な様子でもない　風情のあるお便りを　［六君に］さし上げなさることなけれども　浮気心からであっても　ご縁があって　お気に召すといったことがないとも限るまい　いかにも体裁悪く　悔いを

一 今は、娘の行く末も気がかりな末世のこととて、時の帝でも姫宮に婿をとお考えになる時代に。高貴の血を引く姫宮でもつまらぬ男に浮き名を立てられるような時代に、ということ。かつての朱雀院の婿選びも同じ発想による（五巻若菜上二六頁参照）。

中宮の説得に匂宮も折れる

二 明石の中宮。匂宮の母、夕霧には異母妹に当るので、搦手から攻めるのである。

三 義理を欠いてまでおことわりしなさるというのも、不人情と受け取られかねますまい。匂宮にとっては伯父に当る夕霧からの懇請である。

四 親王は、ご外戚次第で運も開けるというものです。夕霧の婿になるのが将来の為と、さとす。

五 帝。

六 臣下なら、一人に（妻が）決ってしまうと、ほかの人を愛するということもむつかしいもののようですが。「ひとごと」、河内本と、別本の多くは「ひとかた」。

七 真面目くさったお人ながら、どちらの方も怨みっこなしにうまく取りさばいておいでではありませんか。雲居の雁と落葉の宮のこと。

八 ましてあなたの場合は、かねがねの私の存念どおりに事が運びましたら。立坊のことをいう（総角八六頁参照）。

残すことになろう　といった考えにおなりになった

ここちすべし、などおぼしなりにたり。

「女子うしろめたげなる世の末にて、帝だに婿もとめたまふ世に、ましてただ人の盛り過ぎむもあいなし」など、そしらはしげにのたまひて、中宮をもまめやかに恨み申したまふこと、たび重なれば、

帝の陰口を申すような言い方をなさって　臣下の娘が婚期を逃すのもつまらぬ　ほとほとお困りになって　（中宮）お気の毒に

聞こしめしわづらひて、「いとほしく、かくおほなおほな思ひ心ざして年経たまひぬるを、あやにくにのがれきこえたまはむも、情なきやうならむ。親王たちは、御後見からこそともかくもあれ。上の、御代も末になり行くとのみおぼしのたまふめるを、ただ人こそ、ひとことに定まりぬれば、また心をわけむことも難げなめれ、それだにかの大臣の、まめだちながら、こなたかなたうらやみなくもてなしてものしたまはずやはある、ましてこれは、思ひおきてきこゆることもかなはば、あまたもさぶらはむになどかあらむ」など、例ならず言続けて、あるべかしく聞こえさせたまふを、わが御心にも、

こうして一所懸命あなたを婿にと望んで　もう何年にもおなりなのを　ご治世ももうあと僅かだとそんなことばかりお口になさるようですが　言葉多く　道理を説いて　何人もの人がお側にいようと何の不都合がありましょう　夕霧　似ず　もともと全然気乗りのしない話だったわけでもないので　[匂宮は]ご自分でも　無理を通してまでも

もとよりもて離れてはたおぼさぬことなれば、あながちには、など

九 いかにも万事格式ばった右大臣家にとりこにされたような格好で。以下、匂宮の心中。

一〇 今まで気ままに振舞ってこられた暮しぶりも窮屈になるであろうことを、何となく面倒にお思いになるので、気が進まないのだが。

一一 なるほど、母中宮のおっしゃる通り。

一二 故致仕の太政大臣家の当主。柏木の弟（六巻紅梅一八一頁参照）。

一三 宮の御方。螢兵部卿の宮の遺児で、母真木柱の再婚により按察使の大納言邸の東の対に住む。大納言が紅梅に託して自分の実の娘中の君のことを匂宮にほのめかしたが、匂宮は宮の御方に関心がある（紅梅一八九頁以下参照）。

一四 ご服喪の期間も終ったので。母女御の死から一年、翌年の夏である。

薫、女二の宮との結婚を内諾　なお大君を想う

一五 いよいよ帝としては何にご遠慮なさることがあろう。

一六（ご婚儀を）いついつの頃にとお心積りなさったようだと、人伝にも聞くし、自身直接に帝のご意向を拝しもするけれども。

てとんでもないお話だなどとご反対申し上げなさろうかてかはあるまじきさまにも聞こえさせたまはむ。ただ、いとことうるはしげなるあたりにとり籠められて、一〇心やすくならひたまへるありさまの所狭からむことを、なま苦しくおぼすにもの憂きなれど、

と気持が折れてこられたのであろう

一一げにこの大臣に、あまり怨ぜられ果てもあいなからむ、など、やうやうおぼし弱りにたるべし。

[しかし]浮気など性分なので

具合の悪いことだろう

あだなる御心なれば、一二かの按察使の大納言の、一三紅梅の御方をもなほおぼし絶えず、花紅葉につけてもの

いまだにお忘れでなく　お歌を

六の君にも紅梅の御方にも関心はお持ちなのだった

詠み送ったりなさっては

のたまひわたりつつ、いづれをもゆかしくはおぼしけり。されど、その年はかはりぬ。

女二の宮も、一四御服果てぬれば、一五いとど何ごとにか憚りたまはむ。

薫の方からお申し出があれば　[帝が]

[薫に]お伝え申す

さも聞こえ出でば、とおぼしめしたる御けしきなど、告げきこゆる人々もあるを、あまり知らず顔ならむも、ひがひがしうなめげなり、

知らぬ顔をしているのも　世間の常識にはずれご無礼に当る

[薫は]決心なさって　それとなく希望の趣を申し上げなさる折々もあるのに

などおぼしおこして、ほのめかしまゐらせたまふをりをりもあるに、

帝がそっけないあしらいを何でなさるはずがあろう

はしたなきやうはなどてかはあらむ。一六そのほどにおぼし定めたなり、と伝にも聞く、みづから御けしきをも見れど、心のうちには、なほ

一 心残りなまま亡くなってしまわれた大君への悲しみがただもう、忘れようにも忘れられぬ思いがなさるので。

二 昔あったという香の煙の力を借りてでも、もう一度あのお姿を見たいものだ。漢の武帝が寵妃李夫人を喪い、方士に命じて調合させた反魂香を焚いて、夫人の姿を髣髴と見た故事。『白氏文集』巻四諷諭四「李夫人」。（付録三五三頁参照）

三 高貴な女二の宮との婚儀を、早くなどと急ぐ気持もない。

六の君の婚儀、八月と予定される　中の君の不安

四 夕霧。

五 早蕨の巻で二条の院に移った中の君。西の対が居所である（総角一二〇頁）。

六 やはり思っていた通りだ、こうならないはずはなかったのだ。いずれ匂宮にしかるべき正室が備わることは前から十分分っていたことなのだ、の意。以下、中の君の心中。

飽かず過ぎたまひにし人の悲しさのみ、忘るべき世なくおぼゆれば、（ああ何と）うたて、かく契り（宿縁の深くていらっしゃったお人が）深くものしたまひける人の、（どうして）などてかはさすがに疎くては過ぎにけむ、（それでいて）と心得がたく思ひ出でらる。くちをしき品な（納得のゆかぬ気持で思い出される）（いやしい）（身）（他人のままに亡くなったのか）（分の女でも）（あの大君のご様子に少しでも似通っているという人なら）（心をひかれもし）りとも、かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は、心もとまりなむかし、一昔ありけむ香の煙につけてだに、（ようす）（ひとたび）今一度見たてまつるものにもがな、とのみおぼえて、三やむごとなき方ざまに、いつしかなどいそぐ心もなし。

四 右の大殿にはいそぎたちて、（支度にかかって）八月ばかりに、（〔匂宮方に〕）と聞こえたまひけり。

五 二条の院の対の御方には、（〔その噂を〕）聞きたまふに、六さればよ、いかでかは、（どうせしがない身の上なのだから）（きっと物笑いの種になる情けないことが）数ならぬありさまなめれば、かならず人笑へに憂きこと出で来むも（起るに）（違いない）のぞ、とは思ふ思ふ過ぐしつる世ぞかし、（宮と今まで過してきたのだ）あだなる御心と聞きわたりしを、たのもしげなく思ひながら、目に近くては、ことにつらげなることも見えず、あはれに深き契りをのみしたまへるを、にはか（浮気な性分のお方と前々から聞いていたので）（頼りにはならぬお方だと）（直接向い合っては）（格別ひどいと思われるようなこともなく）（やさしく心をこめて愛を誓って下さるばかりだったのに）（急に態度がお変りになったらその時）（どうして平静な気持でいられよう）にかはりたまはむほど、いかがはやすきこちはすべからむ、ただ（普通の）

中の君、わが身に省みて大君の思慮深さを思う

臣下の夫婦仲

人の仲らひなどのやうに、いとしも名残なくなどはあらずとも、いかにやすげなきこと多からむ、なほいと憂き身なめれば、つひには山住みに帰るべきなめり、とおぼすにも、やがて跡絶えなましよりは、山がつの待ち思はむも人笑へなりかし、かへすがへすも、宮のたまひおきしことに違ひて、草のもとを離れにける心軽さを、はづかしくもつらくも思ひ知りたまふ。

なにか心の休まらぬことが多かろう

頼りなげなど様子でいつも

故姫君の、いとしどけなげに、ものはかなきさまにのみ、何ごともおぼしのたまひしかど、心の底のづしやかなるところは、こよなくもおはしけるかな、中納言の君の、今に忘るべき世なく嘆きわたりたまふめれど、もし世におはせましかば、またかやうにおぼすことはありもやせまし、それをいと深く、いかでさはあらじ、と思ひ入りたまひて、とざまかうざまにもて離れむことをおぼして、容貌尼になってしまおうともお考えだったのだをもかへてむとしたまひしぞかし、かならずさるさまにてぞおはせまし、今思ふに、いかに重りかなる御心おきてならまし、亡き御影

いかにもはきはきとせず

お考えのほどを仰せだったが

この上も

しっかりしている点は

いまだに忘れる時とてないようにずっとお

ど自分もこのようにお悩みになる

[大君が]もしこの世においでだったら

[ご存命なら]きっとそうしたお姿になっていられ

あれこれと手を尽して結婚を避けようとお思いになって

めなさって

ないお方だったのだ

薫

思い詰

ことはあったかもしれない

どうかそんな目には会うまい

どんなにか慎重なお心構えだったことだろう

ようし

七 それですっかり縁が切れてしまうといったことはないにしても。

八 やはりどうにも情けない身の上のようだから、結局は山里住まいに帰ることになるのだろう。もとの宇治の山里に身を引かねばならぬことになろうと、前途を悲観する。

九 あのまま世に知られず宇治にひっそり暮していたのならまだしも、山里の連中が待ち受けてさげすむのも、みっともない限りだ。結婚に失敗しての出戻り者よと笑われることを気に病む。

一〇 父八の宮のご遺言にそむいて。「おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな」（六巻椎本三一九頁）とあった。

一一 草深い山荘を。桐壺の巻に「いと立ち離れにくき草のもとなり」（一巻二四頁）という例がある。

一二 亡き姉の大君。以下も中の君の心中。

一三 今は亡き八の宮や大君の御魂も。

一 いえ何で、今さらどうしようもないのに、こんな自分の悲しみを宮に悟られ申そう。

中の君懐妊中、五月頃より悪阻

二 今までよりも心をこめてやさしく。六の君のことがあるので、中の君をいたわるのである。

三 中の君は、お具合が普通でなくご気分のすぐれないこともあるのだった。懐妊による悪阻が五月頃から始まっていたという説明。

四 もしかしたら、どうかしたのではないのか。婉曲に懐妊ではないのかと問いただす。

自分のことをどんなにかこの上もない迂闊者よとご覧になっていられよう

どもも、われをばいかにこよなきあはつけさと見たまふらむ、とはづかしく悲しくおぼせど、[中君は]一何かは、かひなきものから、かかるけしきをも見えたてまつらむ、と忍び返して、じっと心を抑えて気にもしていないそぶりで聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ。

[匂宮]宮は、二常よりもあはれになつかしく、起き臥しかたらひ契りつつ、この世だけでなくこの世のみならず、来世までもとひたすら心強いことを申し上げなさる長きことをのみぞ頼めきこえたまふ。それが実はさるは、この五月ばかりより、三例ならぬさまになやましくしたまふこともありけり。こちたく苦しがりなどはしたまはねど、常よりもの参るすすまことといとどなく、横になってばかりおいでなのを臥してのみおはするを、まださやうなる人のありさま、[匂宮は]よくも見知りたまはねば、ただ暑きころなればかくおはするなめり、とぞおぼしたる。おかしいと不審にお思いになることもあってさすがにあやしとおぼしとがむることもありて、[匂宮]四「もし、いかなるぞ。そのような人がさる人こそ、こんな症状だということだがかやうにはなやむなれ」などのたまふをりもあれど、[中君は]気恥ずかしくお思いになっていとはづかしくしたまひて、でしゃばってお打ち明け申し上げる女房もいないのでさりげなくのみもてなしたまへるを、さし過ぎ聞こえ出づる人もなければ、

五 何日に婚儀が行われるということなど、中の君はよそから人伝にお聞きになる。匂宮本人から直接に知らされない趣。

八月に入り、匂宮の婚儀近づく

六 六の君との婚儀は、別に秘密のことでもなく、世間では皆知っていることなのに。以下、中の君の思いを、語り手の立場から同情的に説明する。

七 中の君が宇治から二条の院にお移りになってからは。

八 あちこちの女性の許に泊って、夜、中の君の許に来られないこともなかったのに。

九 (六の君と婚儀の暁には)中の君が、急に、どんなに悲しまれるだろうと気の毒で、そんな際立ったことにしないために。

一〇 宮中の御宿直。

一一 (匂宮がせっかく)あらかじめ慣れさせてさし上げようとなさるのも、(中の君からは)ただひどいお仕打ちだとばかり恨まれるのが落ちでいらっしゃるようだ。「かねてよりつらさを人のならはさでにはかにものを思はするかな」(二句「つらさを我に」とも。出典未詳)

一二 浮気なご性分の宮のことだから。以下、薫の心中。「花心」は、次頁の「うつろふ」(色あせる、散る)と縁語。

薫、中の君を匂宮に譲ったことをくやむ

[匂宮は]たしかにもえ知りたまはず。

八月になりぬれば、その日など、ほかよりぞ伝へ聞きたまふ。宮は、隔てむとにはあらねど、言ひ出でむほど心苦しくいとほしくおぼされて、さものたまはぬを、女君は、それさへ心憂くおぼえたまふ。忍びたることにもあらず、世の中なべて知りたることを、そのほどなどだにのたまはぬことと、いかがうらめしからざらむ。かくわたりたまひにしのちは、ことなることなければ、内裏に参りたまひても、夜とまることはことにしたまはず、ここかしこの御夜離れなどもなかりつるを、にはかにいかに思ひたまはむと、心苦しきまぎらはしに、このころは、時々御宿直とて参りなどしたまひつつ、かねてよりならはしきこえたまふをも、ただつらきかたにのみぞ思ひおかれたまふべき。

中納言殿も、いといとほしきわざかな、と聞きたまふ。花心にはする宮なれば、あはれとはおぼすとも、今めかしき方にかならず

[匂宮は]
匂宮
隠しておく積りはないけれども
いざ知らせるとなるとつらく痛々しい気持がなさるので
そうともおっしゃらないのを
そうしたことまで情けなくお思いになる
何日頃
どうして怨めしくないことがあろう
といったこともおっしゃって下さらぬことよと
[匂宮は]格別のことでもないと
夜宮中に泊ることは特になさらず
参内したりなさっては
何とおいたわしいことか
[中君を]いとしくはお思いでも
目新しい
六の君の方に
薫

一 六の君方。すなわち右大臣家。

二 やかましく申し上げて宮をお離しにならないなら。夕霧が、婿としての匂宮にあまり自由な振舞を許さないなら、の意。

三 つまらぬことを考えたものだ、何という自分の料簡だったろう、どうして中の君を匂宮にお譲り申したのだろう。以下、再び、薫の思い。中の君と匂宮の結婚を策したいきさつを回想して、後悔する。

四 この世間一般のことも念頭にとどめずにすっかり仏道一筋に澄みきっていたそんな自分の気持も、煩悩で濁るようになってしまったので。「澄み」「濁り」は縁語。

五 当初からの自分の思いに背くことになるだろう。単なる色恋沙汰ではなく、人間としての理解に基づいた結び付きを願っていたのだ、という趣旨。

六 中の君も妹だから同じことだと無理なことを言って。総角三五頁の弁への言葉、同じく一〇八頁、臨終に際しての薫への言葉にも見える。

七 自分の意に反する中の君と結婚するようにと仕向けなさったのが。

八 急いでしたことなのだ。急いで中の君に匂宮を逢わせたのだ、の意。以上、薫の回想。

お気持が移ってしまうに違いない　何ごとにも抜かりのないお家柄だから

御心うつろひなむかし、女方(をんながた)も、いとしたたかなるわたりにて、ゆ

今までもそんなこともなくてお過しだったのに

るびなく聞こえまつはしたまはば、月ごろもさもならひたまはで、

おかわいそうなことだろう　考えてみるにつ

待つ夜多く過ごしたまはむこそあはれなるべけれ、など思ひ寄るに

亡き大

つけても、あいなしや、わが心よ、何しにゆづりきこえけむ、昔の

けても

君に深い愛情を抱いてからは　[中君が]

人に心をしめてしのち、おほかたの世をも思ひ離れて澄み果てたり

ひたすらあのお方のことばかりを　ああもしよう

しかたの心も濁りそめにしかば、ただかの御ことをのみ、とぎまか

大君が承知なさらないのに無理を通すことは　こうもしようとは

うざまには思ひながら、さすがに人の心ゆるされであらむことは、

気兼ねしては　どうかして少しでも

はじめより思ひし本意なかるべし、と憚りつつ、ただいかにしてす

自分に心を許して下さる様子をも見たいものだと　好意を寄せてもらって

こしもあはれと思はれて、うちとけたまへらむけしきをも見むと、

相手の大君はそんな気持にはお構い　将来の夢のようなことばかりを思い続けていたのに

行く先のあらましごとのみ思ひ続けしに、人は同じ心にもあらずも

ないあしらいで

てなして、さすがに一方にしもえさし放つまじく思ひたまへるなぐ

むげに突き離すわけにもゆくまいとお思いだったのでその気休めに

さめに、同じ身ぞと言ひなして、本意ならぬ方におもむけたまひし

はずそうとして　もくろみを　たが

が、ねたくうらめしかりしかば、まづその心おきてを違へむとて、

策を弄して男らしくもなく常軌を逸したように

急ぎせしわざぞかし、など、あながちにめめしくものぐるほしく

九 宮を宇治まで案内して（中の君と逢うよう）はからってさし上げた当時のことを思い出すにつけても。以上「あながちに」以下、地の文。「思ひ出づるも」と敬語のないのは、薫の気持に密着した書き方。

一〇 いやいや、もう今となっては、当時のことなど、かりそめにもお口にはなさらぬだろう。自分に感謝することなどあるまい、の意。

一一 相手の女にとってのみならず。中の君のみならず、親友であるはずの自分にとっても、の意。

一二 自分が心底からあまりに一つことに執着する性癖なので、匂宮のすることは、もう何とも腹立たしく思われるのであろう。心中匂宮を非難する薫を批評する草子地。

一三 帝の姫君を下さろうというご叡慮も。女二の宮のこと。以下、薫の思い。

一四 もうこれまでとおなりになった最期の時にも。大君の臨終の時（総角一〇八頁参照）。

一五 （あなたとのことは）何も不足を申し上げることはありません。以下、直接にその時の大君の言葉を写す趣。「思はずなり」は、心外だの意。

率てありきたばかりきこえしほど思ひ出づるも、いとけしからざりける心かなと、かへすがへすぞくやしき。宮も、さりともそのほどのありさま思ひ出でたまはば、わが聞かむところをもすこしは憚りたまはじや、と思ふに、いでや今は、そのをりのことなど、かけてものたまひ出でざめりかし、なほあだなるかたに進み、移りやすなる人は、女のためのみにもあらず、たのもしげなく、軽々しきこともありぬべきなめりかし、など、憎く思ひきこえたまふ。わがまことにあまり一方にしみたる心ならひに、人はいとこよなくもどかしく見ゆるなるべし。かの人をむなしく見なしきこえたまうてしのち思ふには、帝の御女を賜はむと思ほしおきつるも、うれしくもあらず、この君を見ましかばとおぼゆる心の、月日に添へてまさるも、ただかの御ゆかりと思ふに、思ひ離れがたきぞかし、はらからといふなかにも、限りなく思ひかはしたまへりしものを、今はとなりたまひにし果てにも、とまらむ人を同じことと思へとて、よろづは思

何とけしからぬ料簡だった　いくら何でもあの当時のい　後悔される　重ね重ね　ことかと　自分の聞くところも少しはお気になさらぬはずはある　きさつを　まいに　［薫は］　やはり浮気な性分が勝って　気の変りやすい　信頼がおけず　軽薄な仕打　人は　ちがあっても不思議はないのだ　増らしくお思い申し上げなさる　あの大君をはかなくお亡くし申し上げなさってからのち思うことと　は　中の君と結婚したらよかったのにと思われる気持が　つのるのも　大君と血を分けたお方と思うので　あきらめきれないのだ　同じ姉妹というなか　でも　［お二人は］この上もなく仲よくしておられたのに　あとに残る妹を私と同じに思って下さいと言って

一 ただ、あの私が考えておりましたことにお背きになったことだけが。中の君に匂宮を仲立ちしたこと。

二 亡き大君の魂は、空を翔ってでも「いとどつらしとや見たまふらむ」にかかる。臨終に際しての言葉通り、その魂は成仏していないかもしれぬと思う。

三 こんなことになったにつけては。六の君のことで中の君が悩んでいること。

四 自分の心柄からわびしい独り寝をなさる夜毎夜毎は。大君も中の君も、薫は自分から失ったに等しい。

五 今までのこと、これから先のことを、（自分のみならず）中の君の身の上についてまで、ままならぬこの世に思いをめぐらしなさる。

薫、そのまま夜を明かし朝顔の花に目をとめる

六 本当のところ愛着を感ずる女もいないというのは、さっぱりしたものだ。地の文の形で、薫の心境を代弁したもの。

七 見つけて引き取っては女房として仕えさせなどしている者も、大勢いるけれども。没落した名家の子女で、縁故を辿って三条の宮に女房として仕えている者も多いという趣。

はずなることもなし、ただかの思ひおきてしさまを違へたまへるのみなむ、無念な恨めしいこととして くちをしううらめしきふしにて、この世には残りましょうるべき、と[大君は]のたまひしものを、天翔りても、かやうなるにつけては、いとどつい仕打ちとお怨みであろうからしとや見たまふらむ、など、思い沈んで つくづくと人やりならぬひとり寝したまふ夜なは、はかなき風の音にも目のみさめつつ、来し方行く先、人の上さへ、あぢきなき世を思ひめぐらしたまふ。

ほんの一時の慰みに情けもかけ なげのすさびにものをも言ひ触れ、身近に親しくご用を務めさせていられる女房たちの中には おのずと気近く使ひならしたまふ人々のなかには、おのづから憎からずおぼさるるもありぬべけれど、お思いになる者もあるに違いないのだが ことには心とまるもなきこそさはやかなれ。さるは、とはいえかの君たちの身分に ほどに劣るまじき際の人々も、時世にしたがひつつおとろへて、心細げなる住ひするなどを、尋ね取りつつあらせなど、いと多かれど、世を捨てて 出家する時に 今はと世をのがれ背き離れむ時、この人だけはと この人こそと、特別に 取り立てて、心と執着して足手まといになるような女は作らないでおこう まるほだしになるばかりなることはなくて過ぐしてむ、と思ふ心深かりしを、何といかにも見苦しく いでさもわろく、我ながら筋の通らない心根であることよ わが心ながらねぢけてもあるかな、な

八 霧の立ちこめた垣根。歌語。

九 「朝顔は常なき花の色なれや明くる間咲きてうつろひにけり」（『花鳥余情』所引。出典未詳）

一〇 朝顔の花を無常の世に思いよそえたりするのが、身につまされる思いがするのであろう。朝顔の花に目をとめた薫の心事を説明する草子地。

薫、朝顔を折り取って、二条の院へ

一一 側近の侍であろう。

一二 二条の院。薫の住む三条の宮からは北に当るので、日頃こう言いならわしていた趣。

一三 宮（匂宮）は、昨日から宮中においであそばすそうです。匂宮は近頃、時々宮中に宿直すること、一六三頁に見えた。

一四 それもいたし方あるまい。

一五 中の君。

ど、常よりも、やがてまどろまず明かしたまへる朝に、霧の籬より、花のいろいろおもしろく見えわたるなかに、朝顔のはかなげにてまじりたるを、なほことに目とまるここちしたまふ。「明くる間咲きて」とか、常なき世にもなずらふるが、心苦しきなめりかし。格子も上げながら、いとかりそめにうち臥しつつのみ明かしたまへば、この花のひらくるほどをも、ただひとりのみぞ見たまひける。

人召して、「北の院に参らむに、ことことしからぬ車さし出でさせよ」とのたまへば、「宮は、昨日より内裏になむおはしますなる。昨夜御車率て帰りはべりにき」と申す。「さはれ、かの対の御方のなやみたまふなる、とぶらひきこえむ。今日は内裏に参るべき日なれば、日たけぬさきに」とのたまひて、御装束したまふ。出でたまふままに、おりて花のなかにまじりたまへるさま、ことさらに艶だち色めきてももてなしたまはねど、あやしく、ただうち見るになまめかしくはづかしげにて、いみじくけしきだつ色好みどもになずら

そのままにまじりともせず　色とりどりに　頼りなげな風情で　やはりとりわけ　上げたまま　横になったままで　薫一人だけで　人目に立たぬ　伺うから　引き出させよ　お見舞い申し上げよう　引いて帰りました　お加減がお悪いそうだから　日が高くならぬうちに　お出かけになる　「庭に」　不思議に　何気なく見ても優美で　流ぶって色っぽい態度でいられるわけでもないが　精一杯めかしこんだ伊達男連中などとはとても同日に論じられぬ　あたりを払う立派さがあり

一　今朝の束の間の美しさに心を奪われもしようか、置く露の消えない間だけが命の花と見ながらも。消えやすい露よりもはかない朝顔に心を寄せた、薫らしい歌。

二　女郎花には目もくれずに、お出かけになった。女郎花は、その名から女にたとえて詠むのが歌の上での約束。「をみなへし　女にたとへてよむべし」（『能因歌枕』）。好色には関心のないお人柄だと、筆を弄した。

薫、中の君と対面

三　女だけでは、気を許してまだ、朝寝していられることだろう。以下、薫の心。匂宮がお留守の夜だったから、と忖度する。

四　「声づくる」は、咳払いで来訪の旨を知らせること。

五　朝まだ早いうちに来てしまった。「朝まだき」は早朝の意の歌語。引歌のあるべき所であるが、未詳。

六　東西の対から南に延びる廊（中門廊）の門。ここから寝殿、東西の対の南面をうかがう体。（一巻図録六、七参照）

七　庭の草の露にお濡れになったお召し物のかおりが。薫には生得の体香があるとされる、それが湿気で匂い立つ趣。

ふべくもあらず、おのづからをかしくぞ見えたまひける。朝顔を引き寄せたまふ、露いたくこぼる。

（薫）「今朝の間の色にやめでむ置く露の
　　消えぬにかかる花と見る見る
はかなし」とひとりごちて、折りて持たまへり。女郎花をば、見過ぎてぞ出でたまひぬる。

明け離るるままに、霧立ちみちたる空をかしきに、女どちは、しどけなく朝寝したまへらむかし、格子妻戸などうちたたき声づくらむこそ、うひうひしかるべけれ、朝まだきまだき来にけり、と思ひながら、人召して、中門のあきたるより見せたまへば、「御格子ども参りてはべるべし。女房の御けはひもしはべりつ」と申せば、下りて、霧のまぎれにさまよく歩み入りたまへるを、宮の忍びたる所より帰りたまへるにや、と見るに、露にうちしめりたまへるかをり、例の、いとさまことに匂ひ来れば、「なほめざましくおはすかし、

八 あわてたそぶりもなく。以下、早朝の突然の来訪にも落着いて応対する、よくしつけの行き届いた女房たちのさま。

九 お敷物（三巻図録一一参照）。場所は南面の簀子である。

一〇 簀子の座をいう。他人行儀な扱いを恨む気持。

一一 さしずめ、北向きといった人目に立たぬ所ですね、私のような古馴染の者が控えているのにふさわしい骨休めの場所は。「北面」は、女房の詰所のある所。「古人」は、年老いた古参の女房。今まで中の君の後見役をつとめてきた自分を古女房になぞらえて、もっと親身な扱いはしてもらえぬか、という冗談。

一二 下長押。簀子と廂の間の境、一段高くなった所。

一三 やはりあそこまでお出ましになって。薫と直接話を交わすことをすすめる。

心をあまりをさめたまへるぞ憎き」など、あいなく、若き人々は、聞こえあへり。おどろき顔にはあらず、よきほどにうちそよめきて、御茵さし出でなどするさまも、いとめやすし。「これにさぶらへと ゆるさせたまふほどは、人々しきここちすれど、なほかかる御簾の前にさし放たせたまへるうれはしさになむ、しばしばもえさぶらはぬ」とのたまへば、「さらば、いかがははべるべからむ」など聞こゆ。「北面などやうの隠れぞかし、かかる古人などのさぶらはむにことわりなる休み所は。それもまた、ただ御心なれば、愁へきこゆべきにもあらず」とて、長押に寄りかかりておはすれば、例の、人人、「なほ、あしこもとに」など、そそのかしきこゆ。

もとよりも、けはひはやりかに男々しくなどはものしたまはぬ人柄なるを、いよいよしめやかにもてなしをさめたまへれば、今は、みづから聞こえたまふことも、やうやううたてつつましかりしかた、すこしづつ薄らぎて、面馴れたまひにたり。なやましくおぼさるら

（女房たち）（はしたなく）（取り澄ましすぎていらっしゃるのが気に入らない）（皆でお噂する）（八）（九）（一〇）（薫）（一一）（女房）（ではどういたしましたらようございましょう）（一二）（一三）（薫）（もともと）（その感じがてきぱきと）（を）（男らしいといったところはおありでない）（近頃は）（もの静かに控え目に振舞っていらっしゃるので）（中君が）（直接お話し申し上げなさることも）（馴染めなくて恥ずかしい気持だったのも）（平気になっていらっしゃる）（お具合が悪くていらっしゃるら）

一 夫婦の間の心得などを。六の君のことを念頭に置いて、それとなく妻としての心得を説く趣。

朝顔の唱和

二 お側の女房たちの手前を気にしなくてもいいのなら。

三 やはり、この世の中に、恋の物思いに悩まない人はあり得ないことなのだろうか。この自分ですら、こうなのだから、という気持。

四 大君に先立たれた悲しみ。

五 愚かしく臍をかむこの苦しみも。中の君を匂宮に譲ったこと。

六 官位などといって、世間の人が重大事と思っているらしい、それなりにもっとも至極な不平不満からわ

しい病状も むさまも、〔薫〕どうなさいました「いかなれば」など問ひきこえたまへど、〔中君は〕はきはきとも お返事申し上げなさらず もいらへきこえたまはず、常よりもしめりたまへるけしきの心苦し 沈み込んでおいでになる様子が痛々しいのも きも、〔薫は〕おいたわしく思われなさって あはれに思ほえたまひて、こまやかに、世の中のあるべきや ねんごろに うなどを、兄妹といった間柄ならそうするでもあろうかのように はらからやうの者のあらましやうに、教へなぐさめきこ さとし えたまふ。

〔中君の〕特に大君に似ていらっしゃるとも思われなかったけれども〔今は〕 声なども、わざと似たまへりともおぼえざりしかど、あやしきま 大君そのままと でただそれとのみおぼゆるに、人目見苦しかるまじくは、簾もひき ひとめ すだれ 上げてさしむかひきこえまほしく、うちなやみたまへらむ容貌ゆか 面と向い合ってお会い申し上げたく お具合が悪くていられるらしい かたち お顔も しくおぼえたまふも、なほ世の中にもの思はぬ人は、えあるまじき 見たいと思われなさるにつけ わざにやあらむ、とぞ〔薫は〕思ひ知られたまふ。「人々しくきらきらしき 人並みに出世してきらびやかな暮しをするというのではありませんが 悩みごとがあって どうにもならずこの身の扱いに苦 かたにははべらずとも、心に思ふことあり、嘆かしく身をもてなや しむようなことなどはなくて過せるはずのこの世の中だと 自分では思っておりましたの むさまになどはなくて過ぐしつべきこの世と、みづから思ひたまへ に 我から求めて し、心から、悲しきことも、をこがましくくやしきもの思ひをも、 あれこれと心休まる時とてなく思い悩んでいますのは不本意この上ないことです かたがたにやすからず思ひはべるこそいとあいなけれ。官位などい

が身の不幸を嘆いている人たちよりも。昇進を望んで叶えられない人たちの嘆きよりも、の意。

七 私の場合はもう一段と罪の深さはひどいことでしょう。愛執の一層の罪深さを言うのであろう。この世の執着を離れることを説くのが仏の教えであるから、それに背くのを罪と言った。

八 あなたを大君と思って私のものにしておくのでした、亡きお方は、あなたを私の妻にとお約束下さったのではなかったでしょうか。「白露」は大君をたとえる。

九 露の消えぬ間にしおれてしまった朝顔の花（大君）のはかなさよりも、消えおくれる露（あとに残された私）の方がずっと頼りないことです。

一〇 何にすがって生きてゆけばよいのでしょう。引歌のあるべきところであるが未詳。

一一 とてもひっそりと、言葉もきれぎれに、恥ずかしそうに皆までおっしゃらぬ様子が。

一二 秋はものの思う季節である。「大底四時は心惣苦なり　就中腸の断ゆることは是秋の天」（『和漢朗詠集』巻上、秋興。『白氏文集』巻十四、暮立）

薫、源氏薨去の往時を回想

ひて、大事にすめる、ことわりの愁へにつけて嘆き思ふ人よりも、七これや今すこし罪の深さはまさるらむ」など言ひつつ、折りたまへる花を、朝顔扇にうち置きて見ゐたまへるに、やうやう赤みもて行くも、なかなか色のあはひをかしく見ゆれば、やをらさし入れて、

（薫）八 よそへてぞ見るべかりけるしら露の
契りかおきし朝顔の花

わざとらしく扱ってもいらっしゃらないのに ことさらびてしももてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよ、と 趣深く をかしく見ゆるに、露の置いたまましおれてゆく風情なので 置きながら枯るるけしきなれば、

（中君）九 「消えぬまに枯れぬる花のはかなさに
おくるる露はなほぞまされる

一〇 何にかかれる」と、いと忍びて言も続かず、つつましげに言ひ消ちたまへるほど、なほいとよく似たまへるものかな、と思ふにも、悲しみが先に立つまづぞ悲しき。

（薫）一一 「秋の空は、いつもよりずっと物思いにばかりふけられますその所在なさを紛らわすことも 今すこしながめのみまさりはべるつれづれのまぎら

一「里は荒れて人は古りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる」（『古今集』巻四秋上、僧正遍昭）による措辞。

二 亡き六条の院。光源氏。

三 亡くなる前二三年の頃に世を捨てて出家なさった。源氏出家の事情がここではじめて語られる。

四 源氏の営んだ嵯峨野の御堂であろう（三巻松風一二三頁、一三〇頁、一三四頁、五巻若菜上八二頁参照）。大覚寺の南に当り、紫の上主催の源氏の四十の賀がここで行われた。

五 源氏に親しくお仕えした人々は、身分の上下なく皆その薨去を深く悼んだものでした。

六 六条の院の町々にお住まいだった夫人方も、皆それぞれの所に離れ散って。（六巻匂兵部卿一六三頁参照）

七 尼になって山林に隠れ住んだり。

八 つまらぬ田舎人になりさがったりなど。都に見切りをつけて、地方官の妻になったり、といったケースであろう。

九 昔の悲しみを忘れ去った頃になって。「忘れ草」は、萱草。その名から物思いを忘れる比喩として歌に詠まれる。上の「荒らし果て」の縁で「草」を「生ほす」と言う。

一〇 明石の中宮腹の女一の宮（南の町の東の対）と二の宮（南の町の寝殿）。（匂兵部卿一六二頁参照）

はしにもと思ひて、先つころ宇治にものしてはべりき。庭も籬もまことにいとど荒れ果ててはべりしに、堪へがたきこと多くなむ。故院の亡せたまひてのち、三三年ばかりの末に世を背きたまひし嵯峨の院にも、六条の院にも、さしのぞく人の、心をさめむかたなくなむはべりける。木草の色につけても、涙にくれてのみなむ帰りはべりける。かの御あたりの人は、上下心浅き人なくこそはべりけれ。方々つどひものせられける人々も、皆所々あかれ散りつつ、おのおの思ひ離るる住ひをしたまふめりしに、はかなきほどの女房などは、まして心をさめむかたなくおぼえけるままに、ものおぼえぬ心にまかせつつ、山林に入りまじり、すずろなる田舎人になりなど、あはれにまどひ散るこそ多くはべりけれ。さてなかなか皆荒らし果て、忘れ草生ほしてのちなむ、この右の大臣もわたり住み、宮たちなども方々ものしたまへば、昔に返りたるやうにはべめる。さる世にたぐひなき悲しさと見たまへしことも、年月経れば、思ひさます

（きようかと）（前よりずっと）（悲しみに）（出かけてみました）（立ち寄ってみる人は）（悲しみを抑えようもないといった）（有様でした）（この世を捨てた）（気持を静めようもない悲しみのあまりに）（しがない身の上の）（ものの分別もつかぬ愚かな考えに駆られては）（昔の有様に立ち返ったと申してもよいでしょう）（そうした世にまたとない悲しさと思われました源氏薨去のことも）（そうしてかえってすっかり）（夕霧）（それぞれお住みなので）（冷静に振り返って）

一 なるほど、人の死を悲しむ気持もいつかはきっとさめるものだ、と、つくづく思われます。
二 あの昔の源氏の死の悲しさ。
三 まだ私の幼くもあった頃のこととて。薫の九歳前後のことと計算される。
四 やはりこの最近の夢のような出来事と申しましたら、悲しみの消える時とてないように思われますのは。大君の死のこと。「夢」「さます」は縁語。
五 罪障の深さでは一段のものがありましょうかと。女人に対する愛着だから、という気持であろう。
六 いかにも深く悲しみを知る人と見える、というほどの意。中の君の目に映った薫の人柄。

中の君、八の宮の忌日を口実に、宇治行きを願う

七 姉君のお顔をありありと思い浮べて恋しく悲しくお思い申し上げなさっている、そんなお気持なので。
八 なかなか涙を収めかねていらっしゃる（簾中のご様子を。「ためらふ」は、かたちを改める、様子を直す意。
九 「山里はもののわびしきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）
一〇 そのように思い比べる気持も別になくて。父宮と姉君とともにわびしい山里暮しだったが、世間の苦労は知らなかった、という気持。

（思いますと）をりの出で来るにこそは、と見はべるに、げに限りあるわざなりけり、となむ見えはべる。（こうは申し上げながらも）かくは聞こえさせながらも、かのいにしへの悲しさは、まだいはけなくもはべりけるほどにて、（さほどにも深く感じなかったのかもしれません）いとさしもしまぬにやはべりけむ。なほこの近き夢こそ、さますべきかたなく思うたまへらるるは、同じこと、（どちらも同じ）世の常なき悲しびなれど、（はかない人の死を悼む悲しみですが）罪深きかたはまさりてはべるにやと、（そのことまでもが）それさへなむ心憂くはべる」（情けなく思われます）とて、泣きたまへるほど、いと心深げなり。

（亡き大君を）昔の人を、いとしも思ひきこえざらむ人だに、（さしてお偲び申さないであろう人でも）この人の思ひたまへるけしきを見むには、（薫）（つい同情して貰い泣きもしかねないだろうに）すずろにただにもあるまじきを、ましてわれものを心細く思ひ乱れたまふにつけては、（自分も何かと行く末を案じて悩んでいられるこの頃なので）いとど常よりも、（一層）面影に恋しく悲しく思ひきこえたまふ心なれば、（悲しんでいら）今すこしもよほされて、（もう一段と悲しみをそそられ）ものもえ聞こえたまはず、（何も申し上げることがおできにならず）ためらひかねたまへるけはひを、（互いにしみじみおいたわしいと思い合っていらっしゃる）たみにいとあはれと思ひかはしたまふ。（中君）「世の憂きよりは、など、（昔の人は言いましたが）人は言ひしをも、さやうに思ひくらぶる心もことになくて、（長年の間）年ごろ

は過ぐしてまいりましたが　今では

は過ぐしはべりしを、今なむ、一なほいかで静かなるさまにても過ぐさまほしく思うたまふるを、さすがに心にもかなはざめれば、二弁の尼こそうらやましくはべれ。三この二十日あまりのほどは、四かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしくおぼえはべるを、忍びてわたさせたまひてむや、と聞こえさせばやとなむ思ひはべりつる」とのたまへば、「五荒らさじとおぼすとも、いかでかは。六心やすき男だに、七往来のほど荒ましき山道にはべれば、八思ひつつなむ月日も隔たりはべる。九故宮の御忌日は、十かの阿闍梨に、十一さるべきことども皆言ひおきはべりにき。十二かしこは、なほ尊きかたにおぼしゆづりてよ。十三時々見たまふるにつけては、十四心まどひの絶えせぬもあいなきに、十五罪失ふさまになしてばや、となむ思ひたまふるを、またいかがおぼしおきつらむ。ともかくも定めさせたまはむに従ひてこそは、とてなむ。あるべからむやうにのたまはせよかし。何ごともうとからずうけたまはらむのみこそ、十六本意のかなふにてははべらめ」など、十七まめだちた

離れた所からでも聞きたいと思われますので　そっと［宇治に］お連れ下さいませんか　お願い申し上げたいものと思っておりました　身軽な　［私でも］思いながらも長いことご無沙汰していま　ご法事の支度はすべて私から申しつけてお　［山荘を］いてあります　悲しみの尽きませんのも不本意に思われますので　ほかに何かお考えでもおありでしょ　いかようにもあなたのお決めになるお指図通りに取り計らいたい　と思っています　こ　うか　うしたいというお考え通りにおっしゃって下さい　ご遠慮なくご用をお申しつけ　私の本望というものでございます　頂くことこそが

（薫）五

一なほいかで　二弁の尼　三この二十日あまりのほどは　四かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしく　五荒らさじ　六心やすき男だに　七往来のほど荒ましき山道にはべれば　八思ひつつなむ月日も隔たりはべる　九故宮の御忌日は　十かの阿闍梨に　十一さるべきことども皆言ひおきはべりにき　十二かしこは　十三時々見たまふるにつけては　十四心まどひの絶えせぬもあいなきに　十五罪失ふさまになしてばや　十六本意のかなふにてははべらめ　十七まめだちた

一　やはりどうぞして静かな山里暮しでもして世を送りたいと思いますが、そうは申しましても、とても思い通りに事は運ばないでございましょうから。宇治の山荘に引き籠りたいが、その願いも叶うまい、と言う。

二　大君の死後、尼になり、宇治の山荘に留まっている。（早蕨一三七頁以下参照）

三　今月（八月）の二十日過ぎの頃には。八の宮の命日は八月二十日の頃。（六巻椎本三三三頁参照）

四　八の宮の亡くなった、宮の師僧の阿闍梨の山寺。八の宮の亡くなった明け方にも、姉妹はかすかに山寺の鐘の声を聞いた（椎本三三三頁）。以下、阿闍梨の山寺での法要を自分の肝煎りで営みたい、という意。

五　山荘を荒らすまいとお思いでも（宇治に行きたいとお思いでも）、それはとても出来ない相談です。

六　木幡山越えをいう。（図録一参照）

七　亡き八の宮のご命日。

八　あそこ（山荘）は、やはり仏様のものになさってはいかがでしょう。八の宮が仏道に精進したゆかりのお邸だし、お寺にしたらという提案。

九　罪障消滅の精舎にしたいものと思いますが。寺にして、自分の愛執の罪を消すよすがにもしたい、と言う。

一〇　実務的なことをいろいろお話し申し上げなさる。後見人として、山荘の今後の管理、運営について話す趣。

一一 経巻や仏像などを、この上とも寄進なさるお積りらしい。山荘を寺にという薫の意図を忖度する草子地。通説に中の君のこととするが、文の呼吸に合わない。

一二 目立たぬようにそのまま宇治に引き籠って暮したい、といったご意向をお洩らしと見受けられるので。

一三 どちらに伺っても、御簾の外のおあしらいを受けることはあまりありませんので、居心地の悪い気がいたしております。座を立つ挨拶。

一四 (しかし) いずれまた、こんな格好ででも (御簾の外ででも) お伺いいたしましょう。

一五 二条の院の侍所 (侍の詰所) の主任。

一六 右京職の長官。従四位下相当。京職は、左右に分れて、それぞれ左京右京の庶政、司法、警察のことをつかさどる。

一七 (お目にかかるには) 参内した方がよいかな。

一八 どうして亡き大君のご意向に背いて、無考えなことをしたのだろうと。どうして中の君と結婚しなかったのか、の意。以下、薫の思い。

薫、大君逝去時からの精進をなお続ける

ることどもを聞こえたまふ。経仏など、この上も供養じたまふべきなめり。[中君は] 八の宮のご法事をたまたまよい機会に どおもむけたまへるけしきなれば、「いとあるまじきことなり。なほ何ごとも心のどかにおぼしなせ」と教へきこえたまふ。

日さしあがりて、人々参り集まりなどすれば、あまり長居もことあり顔ならむによりて、出でたまひなむとて、「いづこにても、御簾の外にはならひはべらねば、はしたなきここちしはべりてなむ。今また、かやうにもさぶらはむ」とて立ちたまひぬ。宮の、などかなきをりには来つらむ、と思ひたまひぬべき御心なるもわづらはしくて、侍の別当なる、右京の大夫召して、「昨夜まかでさせたまひぬとうけたまはりて参りつるを、まだしかりければくちをしきを、内裏にや参るべき」とのたまへば、「今日はまかでさせたまひなむ」と申せば、「さらば夕つかたも」とて出でたまひぬ。

なほこの御けはひありさまを聞きたまふたびごとに、などて昔の

人の御心おきてをもて違へて、思ひ隈なかりけむと、悔ゆる心のみまさりて、心にかかりたるもむつかしく、一なぞや人やりならぬ心ならむ、と思ひ返したまふ。二そのままにまだ精進にて、いとどただ行ひをのみしたまひつつ、明かし暮らしたまふ。母宮の、なほいとも若くおほどきて、しどけなき御心にも、かかる御けしきを、いとあやふくゆゆしとおぼして、「幾世しもあらじを、見たてまつらむほどは、なほかひあるさまにて見えたまへ。世の中を思ひ捨てたまはむをも、四かかる容貌にては、さまたげきこゆべきにもあらぬを、五この世の言ふかひなきこちすべき心まどひに、いとど罪や得むとおぼゆる」とのたまふが、かたじけなくいとほしくて、よろづを思ひ消ちつつ、御前にてはもの思ひなきさまをつくりたまふ。

念頭を離れないのも気の晴れぬ思いなので　反省なさる　[薫の]　はきはきしない　屈託なげにおっとりして　仏前のお勤め　女三の宮　今でもいかにも　とても不安に大変なこととお思いで　(女三宮)　こうしてお目にかかっている間は　やはり張合いのある立派なお姿でいらして下さい　あなたがこの世を捨てて出家なさろうとも　おとめ申し上げる立場にもありませんが　恐れ多くおいたわしいので　何もかも忘れようと　つとめて　母宮のお前では何の悩みもないようにとりつくろっていられる

右の大殿には、六条の院の東の御殿磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに、十六日の月やうやうさしあがるまで心もとなければ、いとしも御心に入らぬことにて、いかな

美しく調度を飾って　用意　万端を　[匂宮を]　お出での様子もないので

一　どうして、我から求めて思い悩まねばならぬ性分なのだろう。思い切りの悪さを反省する気持。

二　大君没後以来、ずっと精進（魚肉を断つこと）を続けていて。

三　私はもう先も長くないでしょうが。「幾世しもあらじわが身をなぞもかく海士の刈る藻に思ひ乱るる」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）の言葉による。

四　こうした尼姿の身では。

五　（あなたが出家なさったら）この世に生きているかいもない気がするでしょう、その悲しみで、ますます罪を作ることになりましょうかと思われるのです。

六　夕霧。

七　丑寅（東北）の町の御殿。六の君は、落葉の宮の養女として、ここに住む（六巻匂兵部卿一七五頁）。

八　婚儀は、八月とあった。（一六〇頁）

六の君の婚儀の夜

九　この婚儀は、匂宮としてはさして気乗りのなさらないことだから、どうなることかと。果して約束通り来て頂けるかどうか、気を揉む夕霧の心中。

一〇 様子を探ってご覧になると。使いをやって匂宮の動静を探らせる趣。

一一 匂宮には、お気に入りの人がおありだからと。二条の院の中の君のこと。

一二 藤典侍腹（六の君と同腹）の四男であろうか。六巻竹河二二七頁に源少将、椎本三〇六頁に頭の少将と見える。

一三 大空の月ですら宿るわが家に、お待ちしていた宵を過ぎてもお見えにならぬあなたです。前に「十六日の月やうやうさしあがるまで心もとなければ」とあった。「大空の月だに宿に入るものを雲のよそにも過ぐる君かな」（『元良親王御集』）を踏む。

匂宮、二条の院で中の君を慰める

一四 宮中においでだったのだが。宮中から直接六の君の許に赴くつもりだったのである。

一五 宮からお手紙をさし上げなさった、それへの中の君のお返事がどういう内容だったのだろうか。恐らく夜離れを言い訳する手紙に、宮の胸を打つ返事があったのであろう。

一六 使者の頭の中将の来た時の二人の様子。この前後、状況は逆であるが、「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）をほのかに思わせる措辞。

らむと、（気が気でなく）やすからず思ほして、案内（一〇）したまへば、（使）「この夕つかた、内裏（一一）より出でたまひて、二条の院になむおはします（おいでのご様子です）なる」と人申す。おぼす人持（一二）たまへれば、心やましけれど、（おもしろくないけれども）今宵（一三）過ぎむも人笑へ（世間の物笑いになると思って）なるべければ、御子（一四）の頭の中将して聞こえたまへり。

（夕霧）一三
大空の月だにやどるわが宿に
待つ宵（一四）過ぎて見えぬ君かな

（匂宮）宮は、（なまじ今宵のことだともはっきりさせまい）なかなか今なむとも見えじ、（不憫だ）心苦し、とおぼして、内裏（一四）におはしけるを、御文（一五）聞こえたまへりける、御返りやいかがありけむ、（やはりどうにもかわいそうに思われなさったので）なほいとあはれにおぼされければ、忍びてわたりたまへりけるなりけり。（一二条院に）お帰りになったのだった らうたげなるありさまを、（見捨てて出づべきここちもせず、）（いじらしい）（中君の）（匂宮は）言葉を尽して行く末を誓い慰めて（おいたわしいので）いとほしければ、よろづに契りなぐさめて、（一六）もろともに月をながめておはするほどなりけり。（何かと思い悩むことが多いのだけ）女君（中の君）は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、（決して顔色に出すまいとこらえにこらえて）いかでけしきに出ださじと念じ返しつつ、（さりげなく思い静めていら）つれなくさましたまふことなれば、（つしゃることなので）ことに聞きもとどめぬさまに、（中将の来訪を）（別に気にもかけない様子で）おほどかにもてな（おっとりと振舞っていらっ）

しゃるそぶりは　とても痛々しい

しておはするけしき、いとあはれなり。

頭の中将　あちらもお気の毒なので

中将の参りたまへるを聞きたまひて、さすがにかれもいとほしければ、出でたまはむとて、「今いと疾く参り来む。ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」と聞こえおきたまひて、なほかたはらいたければ、隠れの方より寝殿へわたりたまふ御うしろでを見送るに、ともかくも思はねど、ただ枕の浮きぬべきここちのすれば、

言葉をおかけしておかれて　それでも気が　とがめて具合悪いので　後ろ姿　何を思うというわけでもないのに　情けないものは人の心なのだったと

心憂きものは人の心なりけりと、われながら思ひ知らる。

幼きほどより心細くあはれなる身どもにて、世の中を思ひとどめたるさまにもおはせざりし人一所を頼みきこえさせて、さる山里に年経しかど、いつとなくつれづれにすごくありながら、いとかく心にしみて世を憂きものとも思はざりしに、うち続きあさましき御こ

父宮お一人をお頼り申して　いついつとても所在なくものさびしい暮しではあったけれど　この世に執着などお持ちのようでも　いらっしゃらなかった　ほんとにこうまで心からつくづくこの世をつらいものとも思わなかったのに　引き続いて夢のような父宮姉君のご逝去を悲しんでいた当時は

とどもを思ひしほどは、世にまたとまりてかた時経べくもおぼえず、恋しく悲しきことのたぐひあらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば、人の思ひたりしほどよりは、人にもなるやうなるあり

世間の人が思っていたよりは　水ら　えてみると

一　そのうちすぐにもお側に帰って来ましょう。お一人で月をご覧になってはいけませんよ。前に「もろともに月をながめて……」とあった。当時、女が一人で月を見ることを忌む俗信があった。その理由についてはなお考えるべきである。「独り寝のわびしきままに起きゐつつ月をあはれと忌みぞかねつる」（『後撰集』巻十恋二、月をあはれといふは忌むなりといふ人のありければ　読人しらず。『小町集』にも）、「ある人、月の顔見るは忌むことと制しけれども」（『竹取物語』）など。

二　上の空の思いでとてもつらい。「月」「空」は縁語。

三　人目につかぬ所を通って。支度のために、西の対から大っぴらに寝殿に行くのを憚る気持。

四　「枕浮く」は、「独り寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり」（『古今六帖』五、枕）などにより、独り寝の悲しみをいう歌語的表現。

中の君の悲しみ

五　幼い頃から頼りなく悲しい身の上の姉妹で。以下、中の君の哀切を極めた心情の細叙。

六　あのようなわびしい山里に長の年月を過したけれど。宇治の山荘での暮しをいう。

七　この世に自分一人が生き残って片時も過せようとは夢にも思われず。

八　人並みな暮しをしているような身の上だが。二条の院に迎えられて、匂宮から夫人としての処遇を受けている今の境遇をいう。

九　こうした暮しが長く続こうとは思わないが。いずれ匂宮に正室が備わり、愛の薄らぐかもしれないことを今までも危ぶんではいた。

一〇　いくら何でも夫の匂宮は、時々でもお逢いできないことがあろうか、と思ってもよさそうなはずなのに。

一一　このままおのずと年を重ねれば。そのうちまた、匂宮との間もうまくゆくようになるかもしれない、という気持。

一二　そんな望みを打ち砕くような非情な月が空高くに冴えて。「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）による。

一三　荒々しかった宇治の山荘の山おろしの風。

一四　何の不足もない結構なこの二条の院のお住いだが。

一五　山荘の椎の葉ずれの音の方がよかったと思われる。椎は、歌の世界で、山里暮しの象徴的な景物だったと思われるが、古い歌の例に逢着しない。なお六巻椎本三四五頁の歌参照。

一六　山里の松の木蔭の住いでも、これほど身を切られるようにつらい秋風の吹くことはありませんでした。「秋」に「飽き」を響かせる。

一七　過去のわびしい山里暮しを忘れてしまったというのでしょうか。中の君の心事を批評する形の草子地。

さまを、長かるべきこととは思はねど、見る限りは憎げなき御心ばへもてなしなるに、やうやう思ふこと薄らぎてありつるを、このふしの身の憂さはた、言はむかたなく、限りとおぼゆるわざなりけり、ひたすら世になくなりたまひにし人々よりは、さりともこれは、時時もなどかは、とも思ふべきを、今宵かく見捨てて出でたまふつらさ、来し方行く先皆かき乱り心細くいみじきが、わが心ながら思ひやるかたなく、心憂くもあるかな、おのづからながらへば、などなぐさめむことを思ふに、さらに姨捨山の月澄みのぼりて、夜ふくるままによろづ思ひ乱れたまふ。松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのどかになつかしく、めやすき御住ひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

（中君）一六

山里の松の蔭にもかくばかり
身にしむ秋の風はなかりき

一七

来し方忘れにけるにやあらむ。

一緒に暮している限りは不満もないおやさしいお扱いなので
世をはかなむ思いも薄らいでいたのに
この今の
堪え得る限りかと思われることなのだった
わが身のつらさといったら
跡形もなくこの世からいなくなってしまわれた父宮や姉君に比べれば
情けなさ
気持の
後先も考えられず心細く悲しくてならないのが
晴らしようもなく
情けなくもあることよ
はかない望みをつなごうと思うのに
をばすてやま
あれこれと
とてもの静かでやさしく
そうも思われず
あら
一四
一五
しひ
おと
かげ
こよひ
すま
おと
こよ
かげ
き
かた

一　月を見るのはいけないこととされておりますのに。一七八頁注一参照。
二　何とまあ、ほんのおくだものですらお召し上がりにもなりませんから。もともと悪阻で食事が進まないこと前に見えた（一六二頁）。「くだもの」は、果物、木の実、唐菓子のたぐいの軽食。
三　縁起でもなく思い出されることもございますのに。大君も死去前、食事が全く進まなかったことが見える（総角九八頁）。
四　何という、このたびのご婚儀でしょう。「いで」は、不満の意を表わす語。
五　もとからの深い愛情で結ばれた仲というものは、すっかり切れてしまうものではありませんよ。
六　あれもこれも（自分のことも匂宮のことも）耳をふさぎたい思いで。
七　黙って（これからの匂宮の態度を）見ていよう。
八　人にはとやかく言わせまい、自分ひとりで（匂宮を）お恨み申そうという積りなのでしょうか。これも中の君の心中を忖度する形の草子地。
九　昔からの女房たち。大君が中の君を薫にすすめた事情を知っている女房たち。
一〇　姫君（中の君）のご運勢の思いもかけなかったことですこと。薫と結ばれなかったことを嘆く気持。
一一　気を張って。

六の君との初夜

老人ども（老女房）など、「今は人らせたまひね。月見るは忌（一）みはべるものを。あさましく、はかなき御くだものをだに御覧じ入れねば、いかに（どうなっておしまいでしょう）ならせたまはむ。あな見苦しや。ゆゆしう思ひ出でらるることもはべるを、いとこそわりなく（ほんとに困ったことです）」とうち嘆きて、「いで（老女房）、この御こと（このまま冷たくなっておしまいになることはよもやありますまい）よ、さりとも、かうておろかにはよもなり果てさせたまはじ。さい（いくら何でも）へど、もとの心ざし深く思ひそめつる仲は、名残（なごり）なからぬものぞ」など言ひあへるも、（皆で話しているのも）さまざまに聞きにくく、今はいかにもいかにもかけて言はざらなむ、ただにこそ見め、とおぼさるるは、（やかく言ってほしくない）人には言はせじ、われひとり怨みきこえむとにやあらむ。「いでや、中納言殿の、さばかりあはれなる御心深さを」（あれほどおやさしく親切にして下さるお方なのに）など、そのかみの人々は言ひあはせて、「人の御宿世（すくせ）のあやしかりけることよ」と言ひあへり。

宮（匂宮）は、「中君を」いと心苦しくおぼしながら、今めかしき御心は、いかでめでたきさまに待ち思はれむと、心懸想して、えならず薫きしめたま（香をたきしめな）へる御けはひ、言はむかたなし。待ちつけきこえたまへる所のあり

（どのようにもほかの人にと）（というお気持なのは）（女房）いえねえ薫（念入りに）（派手なご性分のお方とて）（ぜひにもすば）らしい婿君として歓迎されたいものと）（言いようもなくご立派だ）（お待ち受け申し上げていらっしゃったお邸のたた）（さったご風采は）

一二 六の君の身体つき。
一三 どうだろうか。以下、匂宮がその人柄についてやや危懼の念を抱く心中。
一四（六の君は）そんなお人柄にも見えないのだろうか。「さや」は「さやう」に同じ（一五一頁注四参照）。
一五 秋の夜長だけれども。「長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」（『古今集』巻十三恋三、凡河内躬恒）
一六 お越しになったのが、もう夜更けだったからだろうか。

六の君への後朝の文

一七 中の君のいる西の対。
一八（寝殿で）しばらくお寝みになって、起きてからお手紙をお書きになる。六の君への後朝の文である。
一九 宮様がどんなに分け隔てなくお扱いになろうとしても。「天下に」は強めて言う語。
二〇 総じてやはり、こうした婚儀は相手方に対して心おだやかではいられないことなのだった。「ねたげ」は、「ねたし」（癪だ）と思われるような相手方（この場合、右大臣家）の様子、という意。
二一 六の君のお返事も、こちら（寝殿）で見たいものとお思いだが。中の君への遠慮の気持。

宿木

さまも、いとをかしかりけり。人のほど、ささやかにあえかになどはあらで、よきほどになりあひたるここちしたまへるを、いかならむ、ものものしくあざやぎて、心ばへもたをやかなるかたはなく、ものほこりかになどやあらむ、さらばこそうたてあるべけれ、などはおぼせど、さやなる御けはひにはあらぬにや、御心ざしおろかなるべくもおぼされざりけり。秋の夜なれど、ふけにしかばにや、ほどなく明けぬ。

（二条院に）帰りたまひても、対へはふともえわたりたまはず、しばし大殿籠りて、起きてぞ御文書きたまふ。「御けしきけしうはあらぬなめり」と、御前なる人々つきじろふ。「対の御方こそ心苦しけれ。天下にあまねき御心なりとも、おのづからけおさるることもありなむかし」など、ただにしもあらず、皆馴れつかうまつりたる人々なれば、やすからずうち言ふどももありて、すべてなほねたげなるわざにぞありける。御返りも、こなたにてこそは、とおぼせど、夜のほどの

数奇を凝らしたものだった　小柄で　きゃしゃといったふ　ほどよく大人びている感じでいらっしゃるのを　しっかり者で　気が強く　気立ても　ものやさしいところはなくて　こわいもの知らずといった人柄だろうか　もしそうなら困ったものだな　ご愛着もひとかたならぬ思いがなさるのだった　けなく　すぐにもお出でになれないで　まんざらでもないご様子のようですわ　女房たちは袖引き合う（女房）　中の君　おいたわしいこと　どうしてもあちらに負けてしまうこともあるでしょうよ　（中君に）親しくお仕えしている　平気でもいられずに　おもしろからぬことと不平を鳴らす連中もいて　昨夜の間気を

一 いつもの夜離れとは違って、どんな気がなさっただろう。匂宮は最近、宮中に宿直することが時々あった（一六三頁）。

二 寝乱れた匂宮のお顔も、とてもすばらしく目のさめるようなご様子で入っていらしたので。「寝くたれ」は、元来、女と共寝したあとの姿の乱れをいう語。

三 昨夜泣き明かした名残であろう。

四 今朝はまた、日頃より取り分け可憐な美しさが目立つ感じでいらっしゃるので。

五 愛情のこもったやさしい言葉などは、すぐにもお口にできない照れ隠しなのか。

六 いろいろさせていることも、どうも効き目がないような気がする。前から病気平癒のための加持祈禱をさせている趣。

七 密教の加持祈禱による祈願。

八 法力の効き目あらたかな僧がいないものでしょうか。

九 実名を言ったのだが、それをあらわに文章化しない書き方。

一〇 僧が、加持祈禱のため、終夜、寝所の近くに詰めること。

匂宮、中の君を慰める

おぼつかなさも、常の隔てよりはいかが、と心苦しければ、急ぎわたりたまふ。

［西の対に］

もまれたであろうことも

寝くたれの御容貌、いとめでたく見所ありて入りたまへるに、臥したるもうたてあれば、すこし起きあがりておはするに、うちあかみたまへる顔のにほひなど、今朝しもことにをかしげさまさりて見えたまふに、あいなく涙ぐまれて、しばしうちまもりきこえたまふを、はづかしくおぼしてうつ臥したまへる、髪のかかり髪ざしなど、なほいとありがたげなり。宮も、なまはしたなきに、こまやかなることなどは、ふともえ言ひ出でたまはぬ面隠しにや、「などかくのみなやましげなる御けしきならむ。暑きほどのこととかのたまひしかば、いつしかと涼しきほど待ち出でたるも、なほはればれしからぬは、見苦しきわざかな。さまざまにせさすることも、あやしく験なきことこそすれ。さはありとも、修法はまた延べてこそはよからめ。験あらむ僧もがな。なにがし僧都をぞ、夜居にさぶらはすべ

横に

［中君は］なっているのも気が咎めるので

色艶

［宮は］思わず

まじまじとお見つめ申し上げなさる

垂れ具合

生え際

何となくきまりが悪いので

（匂宮）どうしてこんな

暑い間のことですとかおっしゃったので

ふうにいつもお加減がお悪そうにしていられるのか

早く涼しくなればと待っていたその季節にもなったのに

それでも気分がよくおなりで

困ったことですね

ないのは

気恥ずかしくのを

やはりまたとないほどのお美しさだ

でもあきらめずに

目限を延ばすのがよいでし

詰めさせればよかっ

一一 病気のことなど話題になさるので。「まめごと」は、実際的なこと。

一二 こんな話題でも、調子のよいことをおっしゃるのは。

一三 ほんとにずいぶんお丈夫なたちらしい。「さはやか」は、気分のよいこと。冗談にまぎらわす気持。

一四 来世までもと誓って頼もしげなことをおっしゃるお言葉が尽きもしないのを。「頼め」（下二段）は、頼りにさせる意。

一五 なるほどこの世の生は短いものだろうその命の終りを待つわずかの間にも。「あり果てぬ命待つ間のほどばかり憂きことしげく思はずもがな」（『古今集』巻十八雑下、平貞文）。以下、中の君の思い。

一六（この度の六の君とのことのように、ほかの女に心を分けられる）つれないお仕打ちはあることだろうから。

一七 来世のお約束はせめて間違いないことかもしれない。匂宮に深く惹かれる気持。

一八 やはり性懲りもなく、また宮をあてにする気にもなるわが身なのだと思って。「こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人憎からぬ世にし住まへば」（『古今集』巻十三恋三、題しらず、読人しらず）

かりける」などやうなるまめごとをのたまへば、かかるかたにも言よきは、心づきなくおぼえたまへど、むげにいらへきこえざらむも例ならねば、「昔も人に似ぬありさまにて、かやうなるをりはありしかど、おのづからいとよくおこたるものを」とのたまへば、「いとよくこそさはやかなれ」とうち笑ひて、なつかしく愛敬づきたるかたは、これに並ぶ人はあらじかし、とは思ひながら、なほまたくゆかしきかたの心焦られも立ち添ひたまへるは、御心ざしおろかにもあらぬなめりかし。

（匂宮）（中君）（中の君）

（何もお返事申し上げないのもいつもと違って不自然なので）（人と違って弱い生れつきで）（このようにわずらう時もございましたが）（何もしなくてもすぐによくなるたちですのに）（ものやさしく）（愛敬づきたる）（早）（心せく思いも抑えかねなさるのは）（六君への）（ご愛着もひとかたならぬものがあるのだろう）

されど、見たまふほどは変るけぢめもなきにや、後の世まで誓ひ頼めたまふことどもの尽きせぬを聞くにつけても、げにこの世は短かめる命待つ間も、つらき御心は見えぬべければ、後の契りや違はぬこともあらむ、と思ふにこそ、なほこりずまに、またも頼まれぬべけれとて、いみじく念ずべかめれど、え忍びあへぬにや、今日は泣きたまひぬ。日ごろも、いかでかう思ひけりと見えたてまつらじ

（中君を）（目の前にしていられる間は今までと気持に変りもないのか）（中君は）（抑えに抑えているようだけれども）（思うゆえに）（とてもこらえきれないのか）（この日頃も）（どうかこんなに悲しんでいたのだと悟られ申すまいと思って）

と、よろづにまぎらはしつるを、一さまざまに思ひ集むることし多かれば、さのみもえもて隠されぬにや、こぼれそめては、とみにもえ（すぐにも涙をお）（そういつまでも隠しておけないのだろうか）（何かと目に立たぬようにしてきたのだが）

ためらはぬを、いとはづかしくわびしと思ひて、二いたく背きたまへば、しひてひき向けたまひつつ、「聞こゆるままに、あはれなる御ありさまと見つるを、なほ隔てたる御心こそありけれな。さらずは、

（宮の手前）（とても気恥ずかしくつらいと）（さめかねるのを）（自分の方に向かせなさっては）（匂宮）三（やはりよそよそしい気持をお持ちだったのですね）（でなければ）

夜のほどにおぼし変りにたるか」とて、わが御袖して涙をのごひたまへば、「夜の間の心変りこそ、四のたまふにつけて、おしはかられはべりぬれ」とて、五すこしほほ笑みぬ。「げにあが君や、幼の御もの言ひやな。されどまことには、七心に隈のなければ、いと心やすし。

（昨夜の間にお心変りをなさったのですか）（中君）（中君の）（お口になさるにつけて）（かえってさぞかしと）（存じられます）（ほんとのところは）（匂宮）六（幼きな）（隈くま）

八いみじくことわりして聞こゆとも、いとしるかるべきわざぞ。むげに世のことわりを知りたまはぬこそ、らうたきものからわりなけれ。よし、わが身になしても思ひめぐらしたまへ。九身を心ともせぬありさまなり。一〇もし思ふやうなる世もあらば、人にまさりける心ざしのほど、知らせたてまつるべきひとふしなむある。たはやすく言出づ

（何も世間の道理をわきまえておいでではないのが）（おかわいらしい所ですが困ったものです）（自分の身のこととしてでも考えてご覧なさい）（誰よりもあなたを愛している気持の深さを）（はっきりさせてさし上げられることが一つあるのです）（軽々しく）（口に）

一　あれもこれもといろいろ思い悩むことが多いので。六の君のこと、父宮、姉君のこと、宇治の山荘のことなど。

二　かたくなに顔をそむけていられるので。

三　私の申し上げる通りを信じて下さって、いとしいお心根の方と思っていましたのに。私の愛情を信じてくれているものとばかり思っていたのに、の意。

四　「夜のほどにおぼし変りにたるか」をそのまま切り返して、あなたの方のお心変りこそ、と言った。

五　ひっそりと口元に笑みをお浮べになった。皮肉っぽい表情。

六　ほんとにあなたというお人は、何と聞き分けのないことをおっしゃるのです。「あが君」は、親しみ呼ぶ語。

七　別に隠しだてもしていないのですから、私は気楽なものです。

八　（六の君に心変りしているのなら）どんなにもっともらしいことを申し上げても、ほんとのことは、はっきり分るものですよ。

九　わが身ながら心のままにも振舞えぬ私なのです。六の君とのことは、ままならぬ世間の仕向けだと言う。「いなせとも言ひ放たれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり」（『後撰集』巻十三恋五、伊勢）

一〇　もし思い通りのことにでもなったら。以下、立坊ののち、即位の暁には、立后のこともあろう、の意。（一五八頁参照）

一一 はかない命だけが頼りなのです。長らえさえすれば、いずれ、の意。引歌未詳。諸注は「えぞ知らぬ今こころみよ命あらば我や忘るる人や問はぬと」（『古今集』巻八離別、読人しらず）を引く。

一二 後朝の文の使者。振舞酒に酩酊している体。

一三 （中の君の手前）少し遠慮の必要なことも失念して。

六の君の返歌

一四 西の対の南面（正面）。庭先からである。

一五 すばらしい衣裳の数々を堆く肩に被いているので。夕霧邸で与えられた使者としての禄（褒美の品）。「玉藻」に「玉裳」を掛け、これで禄の衣裳を代表させた。「玉藻」「かづき」（潜き）は「海士」の縁語。「潜き」に「被き」（禄の衣裳を肩に掛ける）を掛ける。

一六 いきなり見せつけるのはやはりかわいそうだから。

一七 六の君の養母、落葉の宮。

一八 代筆のお手紙でも、気になるお扱いですね。中の君に見られてもいいのだろうか、というほどの気持の草子地。宣旨は外記が執筆するのでいう。

一九 差し出たことは恐れ多うございますので。以下、代筆をことわる。

二〇 女君はひとしおうち萎れております、どうしたお扱いゆえでございましょう。女郎花を六の君に、朝露を匂宮に喩える。「おき」は「置き」「起き」の掛詞。

（夕霧邸）べきことにもあらねば、命のみこそ」などのたまふほどに、かしこにたてまつれたまへる御使、いたく酔ひ過ぎにければ、すこし憚るべきこととも忘れて、（大つぼらに）けざやかにこの南面に参れり。

海士の刈るめづらしき玉藻にかづき埋もれたるを、（後朝の使いだろうと）さなめりと、（女房たち）人々見る。いつのほどに急ぎ書きたまひつらむと見るも、（匂宮が）（いつの間に急いで文をお書きになったのだろうと）（女房たちは）おもずはありけむかし。宮も、（しいて中の君に隠すまでのことはないけれども）あながちに隠すべきにはあらねど、（使者が）（多少の心遣いはすればよいのにと）さしぐみはなほいとほしきを、すこしの用意はあれかしと、（具合の悪い思いだが）かたはらいたけれど、（もう仕方がないので）今はかひなければ、女房して御文とり入れさせたまふ。

同じくは、（隠しだてのない態度でどこまでも通そう）隔てなきさまにもてなし果ててむ、と思ほして、ひきあけたまへるに、（一段と気が楽になって）継母の宮の御手なめりと見ゆれば、（ご筆跡のようだと）今すこし心やすくて、（下へ）うち置きたまへり。宣旨書きにてもうしろめたのわざや。

（落葉宮）さかしらはかたはらいたさに、（筆を執るようすすめたのですが）そそのかしはべれど、（とてもつらそうにしておりますので）いとなやましげにてなむ。

女郎花しをれぞまさる朝露の

中の君のつらい立場

一 ほかに二人と妻はいなくて、夫婦とはそういうものだと思って来ている、普通の身分の者の夫婦仲なら。以下、中の君の苦しい立場を説明する体の長い草子地。

二 考えてみれば、この場合は、とてもむつかしいことだ。

三 どうせはこうなるはずの、匂宮のお立場なのだ。

四 特別のお立場のお方だと、世間の人もお思い申し上げているので。立坊、即位が予想されていることをいう。

五 幸運なお方だと世人はお噂申し上げているようだ。没落した八の宮の姫君として、かえって破格の幸運だと世間では思っているという趣。

六 こうした、男女の間柄のことを。恋慕や嫉妬の情のこと。以下、中の君の思い。

七 昔の世のことを語った物語。下の「人の上にても」（世間のほかの人の身の上のこととしても）に対する。

いかにおきけるなごりなるらむ

あてやかにをかしく書きたまへり。（上品に）（美しく）

「かことがましげなるもわづらはしや。まことは、心やすくてしばしはあらむと思ふ世を、思ひのほかにもあるかな」などはのたまへど、また二つとなくて、さるべきものに思ひならひたるただ人の仲こそ、かやうなることのうらめしさなども、見る人苦しくはあれ、思へばこれはいと難し。つひにかかるべき御ことなり。宮たちと聞こゆるなかにも、筋ことに世人思ひきこえたれば、幾人も幾人も得たまはむことも、もどきあるまじければ、人も、この御方いとほしなども思ひたらぬなるべし。かばかりものものしくかしづきすゑたまひて、心苦しきかたおろかならずおぼしたるをぞ、幸おはしける、と聞こゆめる。みづからの心にも、あまりにならはしたまうて、にはかにはしたなかるべきが嘆かしきなめり。かかる道を、いかなれば浅からず人の思ふらむと、昔物語などを見るにも、人の上にても、

（匂宮）何やら恨みがましい歌なのも面倒なことだ
（私の本心は）（気楽に二人きりでしば）らくは暮そうと思っていたのに（思いもかけぬことになってしまったものだ）
（はたの者は同情もしようが）（このような立場に置かれた妻の怨めしい気持なども）
（妻を）（非難されるはずもないことだから）（お持ちになっても）
（中の君が）（お気の毒だ）
（中君を）（これほど重々しく二条の院に大切にお住まわせになどとも思っていないのであろう）
（おいたわしくお思いになること並々でなくご寵愛なのを）（なって）
（中の君自身の気持としても）（宮が）（今まであまり大事にして下さって）（急に）（体裁の悪い身の上になることが情けなく思われるのであろう）
（どうして大変）（なことのように人は思うのだろうと）

八 くつろいだ態度でいらして。次の、中の君の食事の世話をやいたりする、家庭のやさしい夫といった態度をいう。

匂宮、中の君をいたわる

九 一八〇頁注二参照。

一〇 上手な料理人。

一一 六の君のもとに赴く身支度のためである。

一二 派手なことを好まれるご性分なので、いよいよ浮き浮きした気分でいられるけれども。六の君のもとへと心の浮き立つ様子。

一三 あの山蔭の宇治の山荘がひたすら恋しく思われて。「ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける」（『古今集』巻四秋上、題しらず、読人しらず）を踏まえた措辞。

一四 あのまま宇治にいたら何気なく聞き過したであろうに、ひぐらしの声も悲しく聞かれる秋の暮であることよ。匂宮に取り残されるわが身を嘆く気持。

第二夜、匂宮、六の君のもとへ

合点がゆかず　なるほどいい加減にすまされないことだったのだと

あやしく聞き思ひしは、げにおろかなるまじきわざなりけりと、わが身になりてぞ、何ごとも思ひ知られたまひける。

自分の身になってはじめて

匂宮

宮は、常よりもあはれに、やさしく うちとけたるさまにもてなしたまひて、

（匂宮）何も召し上がらぬらしいのがとてもいけないことです

「むげにもの参らざなるこそいとあしけれ」とて、珍しそうな よしある御くだもの召し寄せ、またさるべき人召して、特別に ことさらに調ぜさせ料理させたりしてなどしつつ、そそのかしきこえたまへど、とても食欲などなさそうなご様子なので いとはるかにのみおぼしたれば、

（匂宮）困ったことですね　お案じ申し上げなさるけれども

「見苦しきわざかな」と嘆ききこえたまふに、暮れぬれば、夕つかた寝殿へわたりたまひぬ。風涼しく秋のことと空も風情のある時節のところへおほかたの空をかしきころなるに、今めかしきにすすみたまへる御心なれば、いとどしく艶なるに、

思い悩むことの多い中の君のご心中は　何かにつけ堪えがたいことばかりが多いのだった

もの思はしき人の御心のうちは、よろづに忍びがたきことのみぞ多かりける。ひぐらしの鳴く声に、山の蔭のみ恋しくて、

（中君）おほかたに聞かましものをひぐらしの
声うらめしき秋の暮かな

（匂宮は）お出かけになるらしい　お先払いの声

今宵はまだふけぬに出でたまふなり。御前駆の声の遠くなるまま

一　枕の下は海士も釣をするほどに涙があふれるのも。「恋をして音をのみ泣けば敷妙の枕の下に海士ぞ釣する」（『源氏釈』所引。出典未詳）。独り寝を悲しむ涙（一七八頁注四参照）。

二　匂宮が自分には最初からつらい思いをさせなさったことなどを思い出すのも。匂宮は結婚第三夜までは宇治に通ったが、その後、母中宮に禁足を命じられて通いが途絶えた（総角八四頁以下参照）。

三　この身重の身体の気分の悪いのも、一体どうなることなのだろう。以下、中の君の心。

四　とても短命な一族だから。姉の大君も短命、母君も自分を産んで先立たれた。

五　また身籠ったまま死ぬのはとても罪深いこととされているようなのに。

六　結婚第三夜の日。

七　明石の中宮。

八　夕霧。

第三夜、夕霧、薫を相伴の客として誘う

に、海士も釣すばかりになるも、われながら憎き心かな、と思ふ思ふ聞き臥したまへり。はじめよりもの思はせたまひしありさまなどを思ひ出づるも、うとましきまでおぼゆ。このなやましきこともいかならむとすらむ、いみじく命短き族なれば、かやうならむついでにもや、はかなくなりなむとすらむ、と思ふには、惜しからねど悲しくもあり、またいと罪深くもあなるものを、など、まどろまれぬままに思ひ明かしたまふ。

（いやな根性だ　思いながら　もうたくさんだという気がなさる　こんなお産といったことでで　死んでしまうことになるのだろうか　惜しくもない命だが　まんじりともできな　いまま物思いに一夜をお明かしになる）

その日は、后の宮なやましげにおはしますとて、誰も誰も参りたまへれど、御風におはしましければ、ことなることもおはしまさずとて、大臣は昼まかでたまひにけり。中納言の君さそひきこえたまひて、ひとつ御車にてぞ出でたまひにける。今宵の儀式、いかならむきよらを尽くさむ、とおぼすべかめれど、限りあらむかし。この君も、心はづかしけれど、親しきかたのおぼえは、わが方ざまにまたさるべき人もおはせず、ものの栄にせむに、心ことにはたおはす

（お具合が悪くていらっしゃるということで　参内なさ　お風邪　宮中を退出なさった　薫　格別心配なこともおありでないということで　同じお車にお乗せして「宮中を」　ひとつ　気の置けるお人ではあるが　身近な人と思われる点では　自分の方の　親族にほかに適当な人もおられず　薫を誘ったのも）

一一 薫が、いつもに似ず早々と六条の院に参上なさって。車中で誘いを受け、一旦帰邸してから出直した趣。「まで」は「まうで」の「う」無表記の形。

一二 寝殿の南の廂の間に、東に寄って匂宮のお席を設けてある。以下、『花鳥余情』に准拠として『吏部王記』天暦二年十一月二十二日、二十四日の記事を引く（付録三五二頁参照）。

一三 高坏であろう。その上に皿を置く。

一四 恒例の料理を盛った皿の意であろう。『吏部王記』では銀器が用いられている。

一五 外側に反った脚付きの皿。（二巻図録一二参照）

一六 新婚第三夜に、新郎新婦に供される祝いの餅。

一七 目新しくもないことをわざわざ書きとめるのは、気の利かないことですが……。草子地。

一八 いかにもしどけないお振舞で、すぐにも（六の君の部屋から）お出にならない。六の君に心を奪われている体をよそおう。

一九 致仕の太政大臣（昔の頭の中将）の子息。雲居の雁と同腹。母は按察使の大納言に嫁した（三巻少女二三一頁参照）。左衛門の督は従四位下相当。宰相は参議、正四位下相当。

二〇 主人役の頭の中将。前出、一七七頁注一二参照。

二一 匂宮用の酒盃。

二二 料理とともに勧められる盃。「土器」は、素焼きの盃。

第三夜の儀

る人なればなめりかし。二ならずいそがしくまでたまひて、人の上に見なしたるをくちをしとも思ひたらず、何やかやともろ心にあつかひたまへるを、大臣は、人知れずなまねたしとおぼしけり。

〔六君を〕〔夕霧と〕心を合せておる　匂宮のものにしたことを残念だと思っている様子もなく　世話していられるのを

宵すこし過ぐるほどにおはしましたり。寝殿の南の廂、東に寄りて御座参れり。御台八つ、例の御皿など、うるはしげにきよらにて、また小さき台二つに、花足の皿ども、今めかしくせさせたまひて、餅参らせたまへり。めづらしからぬこと書きおくこそ憎けれ。

〔匂宮は〕　折目正しく　しゃれた感じに整えさせなさって　供しておありになる　小憎らしいと　督をこらして

大臣わたりたまひて、「夜いたうふけぬ」と、女房してそそのかし申したまへど、いとあざれて、とみにも出でたまはず。北の方の御はらからの左衛門の督、藤宰相などばかりものしたまふ。

〔夕霧〕　宮のご出座をお勧め申すけれども　雲居の雁　兄弟

からうして出でたまへる御さま、いと見るかひあるここちす。主人の頭の中将、盃ささげて御台参る。次々の御土器、二度三度参りたまふ。中納言のいたくすすめたまへるに、宮すこしほほゑみたまへり。「わづらはしきわたりを」と、ふさはしからず思ひて言ひ

席に着いていられる　いかにも立派な期待通りの婿君ぶりだ　〔匂宮の〕　〔御酒を〕　召し上がりになる　薫　匂宮　苦笑なさった　性に合わないと思って不満を洩らしたと　〔匂宮〕気の置けるお邸なのに

一 裳、唐衣、表着、袿など一揃えの衣裳。
二 貴婦人の表着。袵がなく身頃の裾先が分れている。
三 中倍（表と裏の間にもう一枚重ねる）のある唐衣かという。（『花鳥余情』）
四 裳の腰も皆、位階によって差があるはずだ。「腰」は、裳を腰に当てる部分の大腰、二条長く後ろに引く引腰がある（四巻図録九参照）。
五 斜めの線を交差させた織り模様の絹。緑の品としては、より手の込んだ「織物」より格が下がる。
六 ここは、親王家に仕えて雑用を勤める者たち。以下、匂宮の供人の中でも下級の者たち。
七 御厩の舎人。馬のことを扱う下役。
八 確かにこうした贅美を尽した派手やかなことは、見た目もすばらしいので、物語などにも、何をさし措いても述べ立てているのかもしれません。以下、省筆をことわる草子地。
九 けれども、委しくはとても一々並べ立てられなかった、とかいうことです。報告者の言い分を伝える体。

薫の前駆の不平

一〇 あまり人にも注意されないような男が、暗い所で目立たずうろうろしていたのだろうか。夕霧邸で十分に振舞酒にもありつけなかった者がいた趣。
一一 正門を入って、車を下りる所である。（一六八頁注六参照）

とを　思い出されたからだろう　しを、おぼし出づるなめり。されど見知らぬやうにて、いとまめなり。東の対に出でたまひて、御供の人々もてはやしたまふ。おぼえある殿上人どもいと多かり。四位六人は、女の装束に細長添へて、五位十人は、綾の細長、袴など、かつは、限りあることを飽かずおぼしければ、ものの色、しざまなどをぞ、きよらを尽くしたまへりける。召次、舎人などのなかには、乱りがはしきまでいかめしくなむありける。げにかくにぎははしくはなやかなることは、見るかひあれば、物語などにも、まづ言ひたてたるにやあらむ。されど、くはしくはえぞ数へ立てざりけるとや。

[薫は]そ知らぬふりで　まじめくさって　[薫は]　[匂宮の]　接待なさる　[お供には]名の　知れた　衣裳の色合いや　仕立てなどに　一つには　しきたり通りではもの足りなくお思いだったので　善美をお尽しになったのだった　羽目をはずしたほど盛大に禄を賜ったのだった

薫

中納言殿の御前のなかに、なまおぼえあざやかならぬや、暗きまぎれに立ちまじりたりけむ、帰りてうちなげきて、「わが殿の、などかおいらかに、この殿の御婿にうちならせたまふまじき。あぢきなき御独り住みなりや」と、中門のもとにてつぶやきけるを聞きつ

お先払い　[二条宮に]　夕霧　して素直に　おなりにならないのだろう　不平を鳴らしたのを

一二 自分たちは、夜も更けてねむたいのに。以下、不平を鳴らした前駆の者の気持を思いやる体の草子地。

一三 今頃、気持よさそうに酔っ払って物陰にでも横になっていることだろうと。匂宮が泊るので、供人たちも夕霧邸で夜を過すのである。

薫、今宵の儀を回想し わが身の上を顧みる

一四 (人の婿になるなど) 何と面映いことなのだろう。以下、薫の思い。

一五 いずれも遠からぬ血筋の間柄だが。夕霧は匂宮の伯父、薫とて、表向きは匂宮の叔父に当る親族の仲である。

一六 しかしそれにしては、自分はあまりにも世離れた人間で、ぱっとしたところもないはずなのに。

一七 帝のご内意のあったあのことも。女二の宮との婚儀のこと。(一五三頁以下参照)

一八 (その時になっても) 自分がこんなふうにばかり気が進まないということだったら。

けたまひて、[薫は]をかしとなむおぼしける。一二夜のふけてねぶたきに、かあのちやほやと接待を受けた匂宮の供人たちはのもてかしづかれつる人々は、一三ここちよげに酔ひみだれて寄り臥しぬらむかしと、うらやましきなめりかし。

薫 [部屋に]君は、入りて臥したまひて、一四はしたなげなるわざかな、ことこと偉そうに格式しげなるさましたる親の出でゐて、一五離れぬなからひなれど、これかばった様子の親がわざわざ座につらなって誰彼が搔き立てた中で れ、火明くかかげて、すすめきこゆる盃などを、いとめやすくもて立派だったと なしたまふめりつるかなと、匂宮の御ありさまを、めやすく思ひ出で美人だと たてまつりたまふ。確かに自分だって げにわれにても、よしと思ふ女子持たらましかば、この宮をおきたてまつりて、内裏に帝にさし上げることもようしないだろうたら 匂宮をさし措き申して 目ざしていられる 女の子を持っていを 匂宮 思ふに、誰も誰も、宮にたてまつらむと心ざしたまへる女は、なほ それぞれに日頃口にしているということだが 自分の評判もまんざら 薫 源中納言にこそと、とりどりに言ひならふなるこそ、わがおぼえの らでもないというものなのだろう くちをしくはあらぬなめりな、一六さるは、いとあまり世づかず、古め 大きな気持にもなる きたるものを、など、心おごりせらる。一七内裏の御けしきあること、ほんとに帝がその気におなりの時に どうしたらよい まことにおぼしたたむに、一八かくのみもの憂くおぼえば、いかがすべ

一 どうだろう。結婚した場合のことを想像する気持。

二 物思いに眠れぬことの多い、所在ないこの頃なので。

三 女三の宮に仕える女房の一人。ここだけに見える人物。呼び名からすれば上臈の女房。

薫、その夜を按察使の君の局に過す

四 世間一統からとても認められませぬ身分違いのあなた様との仲なのに、こんな冷たいおあしらいでは、なまなかお逢いするようになりました私への世間の噂がつろうございます。朝早く帰る薫を怨んだ趣。「関川」は、逢坂の関近くの小川。「ゆるしなき（厳重な）関」と言い掛ける。「見馴れ」に「水馴れ」を掛け、「うちわたし」の「わたし」（渡）とともに川の縁語。「世に」に「よに」（とても）の意を掛ける。

五 深くもないように表面は見えようとも、内心はひそかにいつまでもあなたに心を寄せているのです。「したのかよひ」は、底流の意。「浅くこそ人は見るらめ関川の絶ゆる心はあらじとぞ思ふ」（『大和物語』百六段、元良親王）

六 お口に出して「深からず……」などとおっしゃるのは。

からむ、おもだたしきことにはありとも、いかがはあらむ、いかにぞ、故君にいとよく似たまへらむ時にうれしからむかし、と思ひ寄らるるは、さすがにもて離るるまじき心なめりかし。

（わが身にとって名誉なことではあるにしても　どんなものだろう　亡き大君に生き写しといったお方だったら　そんなこと　おことわりする気はないのであろう　が思われるのは）

例の、寝覚がちなるつれづれなれば、按察使の君とて、人よりはすこし思ひましたまへるが局におはして、その夜は明かしたまひつ。明け過ぎたらむを、人のとがむべきにもあらぬに、苦しげに急ぎ起きたまふを、ただならず思ふべかめり。

（目をかけていられる女房の　部屋　帰りが明るくなりすぎても　誰もかれこれ言うはずもないのに　気にして　〔按察使君は〕心おだやかならず思うようだ）

（按察使君）四

うちわたし世にゆるしなき関川を
みなれそめけむ名こそをしけれ

（かわいそうなので）

（薫）五

深からずうへは見ゆれど関川の
したのかよひは絶ゆるものかは

（深く愛しているとおっしゃったにしてもあてにもならないのに）

深しとのたまはむにてだにたのもしげなきを、六この上の浅さは、いとど心やましくおぼゆらむかし。妻戸押しあけて、「（薫）まことは、こ

（おもしろくなく思われることでしょうよ　一層　うへ　ほんとうは）

七 別に風流人を気取ってみせるというわけでもないが、近頃ますます明けるのが待ち遠しくなってゆく夜毎の寝覚めには。秋の夜長の物思いは、恋する人のしわざだが、自分は違うという趣。

八 冷たいお方だというふうには、女に思われなさらない。

九 ほんのその場限りの気持から色めいた言葉の一つもお掛けになるようになった女が、お側近くでお姿を見たいものと、いちずにお思い申し上げるのだろうか。（六巻匂兵部卿一七四～五頁参照）

一〇 無理を願って。出家の身の上の女三の宮に、若い侍女はそう必要もないはずだから、こういう。

三夜の翌日、六の君の容姿

一一 六の君。三夜を過ぎたので、夫として公然と昼間も婚家で過せる。以下の場面、源氏物語絵巻に図画されている（図録四参照）。

の空見たまへ、いかでかこれを知らず顔にては明かさむとよ。どうしてこの風情に知らぬ顔をして明かされようと思ってのことだ 艶なる人まねにてはあらで、いとど明かしがたくなり行く夜な夜なの寝覚には、この世かの世までなむ思ひやられてあはれなる」この世から来世のことまで遠く思われて感慨にふけられるのだ 取など、言ひまぎらはしてぞ出でたまふ。〔局を〕ことにをかしきことの数を尽くさねど、さまのなまめかしき見なしにやあらむ、様子が優雅に見えるところからそう思われるのだろうか 情なくなどは人に思はれたまはず。かりそめのたはぶれ言をも言ひそめたまへる人の、気近くて見たてまつらばや、とのみ思ひきこゆるにや、一〇あながちに、世を背きたまへる宮の御方に、尼姿でいられる女三の宮 縁を尋ねつつ参り集まりてさぶらふも、あはれなること、ほどほどにつけつつ多かるべし。手づるを辿っては大勢お仕え申し上げているけれども それぞれの身分なりに多いようだ

宮は、女君の御ありさま、昼見きこえたまふに、いとど御心ざしまさりけり。おほきさよきほどなる人の、様体いときよげにて、髪垂れ具合 姿もとてもすっきりと 人にすぐれて 何とお綺麗な のさがりば頭つきなどぞ、ものよりことに、あなめでた、と見えたまひける。色艶はこれはと思われるほど赤く映えて 重々しく 色もとはいかにも気品があり利発そうで の、まみいとはづかしげにらうらうじく、すべて何ごとも足らひて、

一　器量のよい人と言うのに不足な点は何もない。

二　なるほど親としては、やきもきなさるのも無理からぬところと思われた。夕霧は、六の君の結婚について、匂宮、あるいは薫と、相手について苦慮したことは前々から見える。

三　美しい若女房たち。

四　女の童。

五　意表をついて、いかがと思われるほどに派手過ぎる趣向を凝らしていらっしゃる。「そし」は、度を越えてする意。

六　雲居の雁腹の長女。（六巻匂兵部卿一六二頁参照）

七　中の君のもと。

八　下々の者のように身軽に動けるご身分ではないので、思い立った時にすぐ、昼間などに二条の院にお出かけになるわけにもいかないので。

匂宮の夜離れ続き　中の君、薫に消息

容貌よき人と言はむに飽かぬところなし。二十に一つ二つぞ余りたまへりける。いはけなきほどならねば、片なりに飽かぬところなく、あざやかに、盛りの花と見えたまへり。限りなくもてかしづきたまへるに、かたほならず、げに親にては、心もまどはしたまひつべかりけり。ただやはらかに愛敬づきらうたきことぞ、かの対の御方は、まづ思ほし出でられける。もののたまふいらへなども、はぢらひたれど、またあまりおぼつかなくはあらず、すべていと見所多く、かどかどしげなり。よき若人ども三十人ばかり、童六人、かたほなるなく、装束なども、例のうるはしきことは、目馴れておぼさるべかめれば、引き違へ、心得ぬまでぞ好みそしたまへる。三条殿腹の大君を、春宮に参らせたまへるよりも、この御ことをば、ことに思ひおきてきこえたまへるも、宮の御おぼえありさまからなめり。

かくてのち、二条の院に、え心やすくわたりたまはず。軽らかなる御身ならねば、おぼすままに、昼のほどなどもえ出でたまはねば、

容貌（かたち）よき人と言はむに飽（あ）かぬところなし。二十に一つ二つ余りたまへりける。いはけなきほどならねば、片なりに飽かぬところなく、あざやかに、盛りの花と見えたまへり。限りなくもてかしづきたまへるに、かたほならず、げに親にては、心もまどはしたまひつべかりけり。ただやはらかに愛敬づきらうたきことぞ、かの対の御方は、まづ思ほし出でられける。もののたまふいらへなども、はぢらひたれど、またあまりおぼつかなくはあらず、すべていと見所多く、かどかどしげなり。よき若人（わかうど）ども三十人ばかり、童（わらは）六人、かたほなるなく、装束（さうぞく）なども、例のうるはしきことは、目馴（な）れておぼさるべかめれば、引き違（たが）へ、心得ぬまでぞ好みそしたまへる。三条殿腹（ばら）の大君（きみ）を、春宮（とうぐう）に参らせたまへるよりも、この御ことをば、ことに思ひおきてきこえたまへるも、宮の御おぼえありさまからなめり。

かくてのち、二条の院に、え心やすくわたりたまはず。軽（かる）らかなる御身ならねば、おぼすままに、昼のほどなどもえ出でたまはねば、

二十を一つ二つ越えていらっしゃるのだった　まだ分別もつかない年頃ではないので　未熟で不足に思われるところもなく　水際立って　この上もなく大切にお育てなさったお方だけに　至らぬ点もなく　ものやさしく　[六君は]宮がお話しかけになるお返事なども　第一にお思い出しになるのだった　引っ込み思案というのではなく　のあるお人柄だ　見苦しい者は一人もいず　よくある格式張った装いでは　[宮が]目新しくもなくお思いになろうから　六の君のご結婚について　格別に気を使ってさし上げておいでなのも　匂宮のご声望とお人柄によることなのであろう　気軽にお出でになるわけにもいかない

九 そのまま同じ六条の院の南の町に。匂宮が、女一の宮とともに紫の上の手許で育った所である（五巻横笛三三五頁参照）。

一〇 六の君の許を素通りして二条の院にお出かけになるわけにもいかないといったことで。

一一 ほんとに、こんなに手の平を返したようなお扱いがあってよいものだろうか。以下、中の君の心。

一二 自分が山深い宇治から都に出て来た当時のことなど。

一三 すっかり匂宮との仲を絶ってしまうといったことではなくても。それきり宇治に引き籠ってしまうといったことではなくても、の意。

一四 先日のお話のことは。八の宮の法要のこと（一七四頁参照）。薫の肝煎りで執り行われた旨、阿闍梨から中の君に報告のあった趣。

一五 （亡き人々も）どんなにおいたわしいことかと思われますにつけても。

一六 出来ますれば、直接お目にかかってでもお礼を申し上げたく存じます。

やがて同じ南の町に、（昔長年そうだったようにお住みになって）年ごろありしやうにおはしまして、暮るればまたえ引き避きてもわたりたまはずなどして、（中君は）待ち遠なるをりをりあるを、（中君は）かからむとすることとは思ひしかど、（いざ直面してみると）さしあたりては、いとかくやは名残なかるべき、（なるほど思慮の深い人なら）げに心あらむ人は、（しがない身の上もわきまえず）数ならぬ身を知らで、（顔出しをするような世間ではなかったのだと）まじらふべき世にもあらざりけりと、（ほんとにあったこととも思えず後悔され悲しく思われるので）かへすがへすも山路わけ出でけむほど、うつつともおぼえずくやしく悲しければ、（やはりどうかしてそっと宇治に帰ってしまおう）なほいかで忍びてわたりなむ、（しばらく気楽な暮しもしてみたいものだ）むげに背くさまにはあらずとも、（かわいげのない態度に出たりしたら具合も悪いだろうが）しばし心をもなぐさめばや、憎げにもてなしなどせばこそうたてもあらめ、など、（自分の一存では思案に余って）心ひとつに思ひあまりて、（気がひけるけれども）はづかしけれど、中納言殿に文たてまつれたまふ。

一四 一日の御ことは、阿闍梨の伝へたりしに、（知らせてきましたので）くはしく聞きはべりにき。（こうしたご親切が今まで続いておりませんでしたら）かかる御心の名残なからましかば、いかにいとほしくと思ひたまへらるるにも、（つくづくありがたく存じられます）おろかならずのみなむ。さりぬべくは、みづからも。

と聞こえたまへり。

陸奥紙に、ひきつくろはずまめだち書きたまへるしも、いとをかしげなり。宮の御忌日に、例のことどもいと尊くせさせたまへりけるを、よろこびたまへるさまの、おどろおどろしくはあらねど、げに思ひ知りたまへるなめりかし。例は、これよりたてまつる御返りをだに、つつましげに思ほして、はかばかしくも続けたまはぬを、みづからとさへのたまへるが、めづらしくうれしきに、心ときめきもしぬべし。宮の今めかしく好みたちたまへるほどにて、おぼしおこたりけるも、げに心苦しくおしはかられれば、いとあはれにて、をかしやかなることもなき御文を、うちも置かずひき返しひき返し見ゐたまへり。御返りは、

うけたまはりぬ。一日は、聖だちたるさまにて、ことさらに忍びはべしも、さ思ひたまふるやうはべるころほひにてなむ。名残とのたまはせたるこそ、すこし浅くなりにたるやうにと、うらめし

一 檀の皮から製した奥州特産の紙。白く厚い紙質で、通常の書信に用いられる。

二 なるほど確かに心からそう思っていらっしゃるのであろう。草子地。草子地の形で、文面に接した薫の印象を代弁する趣。

三 胸のときめく思いもするであろう。これも、草子地の形で薫の心事を代弁する趣。

四 宮がついつい中の君を疎略にお扱いになった事情も、確かに、お気の毒にと察しがつくので。「げに」は、文面から、さこそと推測される意。

五 先日は、修行僧のような格好で。八の宮の法要に宇治に微行したことをいう。「聖」は、山野に修行する私度僧。

六 わざと人目を避けましたのも、あの頃はその方がよかろうと考えます仔細あってのことでした。別に仔細あってのことでもなかったであろうが、中の君が一緒に宇治に行きたいと言い出すかと憚ったので、わざとこう言ったのであろう。「はべし」は「はべつし」の促音無表記の形。

七 今までよく続いたと仰せになりましたのは。前に「かかる御心の名残なからましかば」とあったのをさす。

薫の返書

一 陸奥紙に、ひきつくろはずまめだち書きたまへるしも、いとをかしげなり。宮の御忌日に、例のことどもいと尊くせさせたまへりけるを、よろこびたまへるさまの、おどろおどろしくはあらねど、げに思ひ知りたまへるなめりかし。例は、これよりたてまつる御返りをだに、つつましげに思ほして、はかばかしくも続けたまはぬを、みづからとさへのたまへるが、めづらしくうれしきに、心ときめきもしぬべし。宮の今めかしく好みたちたまへるほどにて、おぼしおこたりけるも、げに心苦しくおしはかられれば、いとあはれにて、をかしやかなることもなき御文を、うちも置かずひき返しひき返し見ゐたまへり。御返りは、

うけたまはりぬ。一日は、聖だちたるさまにて、ことさらに忍びはべしも、さ思ひたまふるやうはべるころほひにてなむ。名残とのたまはせたるこそ、すこし浅くなりにたるやうにと、うらめし

（一）陸奥紙（みちのくにがみ）　気取りもなく

（二）ひきつくろはずまめだち書きたまへるしも　生真面目に書いておいでなのがかえって

（三）いとをかしげなり　とても風情がある

（四）宮の御忌日（八の宮）　感謝していらっしゃる気持が

（五）例のことどもいと尊くせさせたまへりけるを　［薫が］恒例のご法要をおごそかに執り行わせなさったことを

（六）よろこびたまへるさまの　大げさに述べ立ててあるわけではないが

（七）おどろおどろしくはあらねど　いつもは

（八）例は　こちらからさし上げる手紙のお返事でさえ

（九）これよりたてまつる御返りをだに　遠慮すべきことのようにお思いで

（十）つつましげに思ほして　すらすらと言葉をつらねることもなさらないのに

（十一）はかばかしくも続けたまはぬを　直接会ってとまで書いていらっしゃるのが［薫は］

（十二）みづからとさへのたまへるが　匂宮が目新しい六の君に夢中になっておられるこの頃なので

（十三）めづらしくうれしきに　心ときめきもしぬべし　とてもおいたわしくて

（十四）おぼしおこたりけるも　下にも置かず手に取ってくり返しくり返し

（十五）げに心苦しくおしはかられれば　別に何の風情があるわけでもない

（十六）ことさらに忍びはべしも　私が少々いい加減になったかに聞えるお言葉と

（十七）名残とのたまはせたるこそ　お恨みに存じ

（十八）すこし浅くなりにたるやうにと　お手紙拝見いたしました

八　これで失礼いたします。手紙の終りの挨拶の決り文句。

九　白く染めた紙。中の君の手紙の「陸奥紙」に対して、これも普通の書状に使われる紙質であったとことわる。

翌日の夕、薫の訪問

一〇　しなやかなお召し物を。直衣の下に何枚も重ねる袙。「なよよかなる」で、ごく上質の綾であることを暗に示す。

一一　丁子油（丁子の莟や実から採った香油）で染めたもの。黄色に赤味を帯び、夏に用いる染色。扇は、夏用の蝙蝠扇（今の扇子）。

一二　不思議なあの一夜のことなどを。大君が薫を避けたため、中の君は何ごともない一夜を薫とともに過したことがある（総角三八頁以下参照）。

一三　このお方と一緒になっていたらよかった、というくらいのことはお思いになっていられるかもしれない。中の君の薫に対する親しみの気持を忖度する形の草子地。

一四　薫のなさり方は何もかもこの上ないことと思い知られなさるからだろうか。

一五　部屋の中に。廂の間である。

万事は直接お伺いいたしました上でこわばった感じのに書いてある

事務的に

文通のあった翌日の

ひそかに恋い慕う気持もなく

ひたれば、あいなく心づかひいたくせられて、なよよかなる御衣どもを、いとど匂はし添へたまへるは、あまりおどろおどろしきまでなるに、丁子染の扇の、もてならしたまへる移り香などさへ、たとへむかたなくめでたし。

一段と薫物の香を深く匂わしていられるのは　並々でなく仰々しいほどであるのに加えて

ふだん使っていらっしゃる

女君も、一二あやしかりし夜のことなど、思ひ出でたまふをりをりなきにしもあらねば、まめやかにあはれなる御心ばへの、人に似ずものしたまふを見るにつけても、一三さてあらましを、とばかりは思ひやしたまふらむ。いはけなきほどにしおはせねば、うらめしき人の御ありさまを思ひくらぶるには、一四何ごともいとどこよなく思ひ知られたまふにや、常に隔て多かるもいとほしく、もの思ひ知らぬさまに思ひたまふらむ、など思ひたまひて、今日は、一五御簾のうちに入れた

心底からやさしい薫のお気立てが

ほかの人とは違っていられるのを

いつもそっけない扱いなのもお気の毒だし

ものわけも分らないお年頃でもないので

匂宮

人の好意も分らない者のようにお思いかもしれない

中君は

一 母屋の簾（廂の間との境）の内側に几帳を立て添えて。

二 わざわざお呼びということではございませんでしたが。以下、中の君の手紙に「さりぬべくは、みづからも」とあったことに触れる。

三 あいにくの時にお伺いいたしますのもいかがと存じまして、今日にいたしました。

四 それにいたしましても、今まで長年の私の誠意もようやく報われる時が来ましたのか。「しるし」は、効き目、「あらはる」は、はっきりする意。

五 先日うれしく聞きました私の心の内を。阿闍梨からの法要の報告を聞いた感謝の気持、の意。

六 心からありがたく存じております気持の一端なりとも、どうして知って頂けましょうと、残念に存じまして。

七 じっくりとお話し申し上げまたお伺いもしたい、お身の上のお話もございますのに。「世」は、男女の仲の意で、「御物語」とあるので、匂宮と中の君の間柄をさすと解される。

てまつりたまひて、母屋の簾に几帳添へて、（自分は少し奥に引っ込んだ座で）われはすこしひき入りて対面したまへり。（薫）「わざと召しとはべらざりしかど、（いつになく寛大な）例ならずゆ（お言葉を頂きましたうれしさに）るさせたまへりしよろこびに、（すぐにも参上いたしたく存じましたが）すなはちも参らまほしくはべりしを、（昨日は）宮がこちらにお出でと伺いましたので）宮わたらせたまふとうけたまはりしかば、をりあしくやはとて、今日になしはべりにける。さるは、年ごろの心のしるしもやうやうあらはれはべるにや、（うとうとしさも少し薄くなりました）隔てすこし薄らぎはべりにける御簾のうちよ。（珍しいこともあるものでございます）めづらしくはべるわざかな」とのたまふに、（中君は）まだとても気のひける思いで）なほいとはづかしく、言ひ出でむ言葉もなきここちすれど、（中君）「一日うれしく聞きはべりし心のうちを、例の、ただ結ぼほれながら過ぐしはべりなば、（胸の中にしまい込んだままで過ごしましたら）思ひ知る片端をだにいかでかはと、くちをしさに」と、（いかにも恥ずかしそうにお）いとつましげにのたまふが、（部屋の奥深く身を引いて）いたくしぞきて、（とぎれとぎれに）たえだえほのかに聞こゆれば、（つしゃるのが）心もしく思って）となくて、（薫）「いと遠くもはべるかな。まめやかに聞こえさせうけたまはらまほしき世の御物語もはべるものを」とのたまへば、（御簾際に）げに、（にじり寄ってこられる）とおぼして、すこしみじろき寄りたまふけはひを聞きたまふにも、（いかにも）

八 匂宮のお気持が、心外なことに浅くていらっしゃったことだと匂わせるふうに。

九 自分のつたなさゆえと思っているように（薫には）思わせて。「世やは憂き人やはつらき海士の刈る藻に住む虫のわれからぞ憂き」（『紫明抄』『河海抄』所引。出典未詳）。「われからぞ憂き」（自分のせいで情けない思いをしているのだ）の意を利かせる。

一〇 宇治にほんのちょっとお連れ頂きたいというお積りらしく、一途に思いつめてお頼みになる。

一一 そうでありませんと、ちょっとした行き違いでもあって、軽率なことを、などと宮がお思いになろうものなら、大変なことになりましょう。

一二 途中、往き来のお供も。青表紙本「道のほども」とあるが、河内本、別本により訂す。

不意に胸の高鳴る思いだが
ふと胸うちつぶるれど、さりげなくいよいよ落着き払った態度で
いとどしづめたるさまして、宮八
の御心ばへ、思はずに浅うおはしけるとおぼしく、かつは言ひもう
一方では宮を批判もし
とめ、またなぐさめも、かたがたにしづしづと聞こえたまひつつお
はす。

女君は、匂宮のつれないお仕打ちなどは
人の御うらめしさなどは、口に出してご相談申し上げなさってよいこ
うち出でかたらひきこえたま
とでもないので
ふべきことにもあらねば、ただ、世やは憂き、などやうに思はせて、九
言少なにまぎらはしつつ、山里に一〇あからさまにわたしたまへとお
ぼしく、いとねむごろに思ひてのたまふ。（薫）その件に限っては私の一存で勝
手には
まかせては、とてもお取り計らい申し上げられないことでございます
えつかうまつるまじきことにはべなり。なほ宮に、やはり
素直にお願い申し上げなさってみて
だ心うつくしく聞こえさせたまひて、宮のご意向通りになさるのがようございま
かの御けしきにしたがひてな
しょう
むよくはべるべき。一一さらずは、すこしも違ひめありて、心軽くなど
おぼしものせむに、いとあしくはべりなむ。そうした心配さえなければ
さだにあるまじくは、
私が直接自身でお世話申し上げますのに
道のほどの御送り迎へも、一二おりたちてつかうまつらむに、何の憚り
安心のできる　遠慮がありましょう
人とは違った私の性分については
かははべらむ。うしろやすく人に似ぬ心のほどは、宮も皆知らせた
十分ご承知でい

一 過ぎ去った昔のことを悔む気持を忘れる時とてなく。中の君を匂宮に譲ったこと。

二 古歌にあるように、できることなら昔を今に取り返したいものと、それとなく匂わせては。「取り返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」（『紫明抄』『河海抄』所引。出典未詳）

三 それにしても、いつ頃お出かけになることになりましょうか。

四 ひどく生い茂っておりました道中の草も、少し刈り払わせましょう。先日の宇治行きの経験から言う趣。

五 （九月の）月初めの頃にでも、と思っております。

六 何も、表立ってのお許しなど、大げさなことはいりませんでしょう。「世のゆるし」は、公然の承認というほどの意。具体的には匂宮の承諾ということになろう。

七 いつもよりも亡き大君そのままかと思われる気がして。

八 中の君。前には「女君」（一九七頁、一九九頁）と敬称があったが、ここは女の生身を思わせる端的な呼び方。

九 ああやはり、何て厭な、と思うと。

薫、簾中に入って添い臥す

まへり」（られます）などは言ひながら、をりをりは（折を見ては）、一過ぎにし方（かた）のくやしさを忘るるをりなく、ものにもがなやと、取り返さまほしきとほのめかしつつ、やうやう暗くなりゆくまでおはするに、（中君は）いとうるさくおぼえて、「さらば、（中君）ここちもなやましくのみはべるを、（それでは）またよろしくなりました折にでも思うたまへられむほどに、何ごとも」とて、（奥に）入りたまひぬるけしきなるが、（とても残念に思われるので）いとくちをしければ、「さても、（薫）いつばかりおぼし立つべきにか。四いとしげくはべし道の草も、すこしうち払はせはべらむかし」と、（気を引こうとして）心とりに聞こえたまへば、（入りかけたままで）しばし入りさして、「（中君）この月は（今月はもう終りでしょうから）過ぎぬめれば、五朔日のほどにも、とこそは思ひはべれ。ただいと忍びてこそよからめ。六何か、世のゆるしなどことことしく」とのたまふ声の、いみじくらうたげなるかなと、（何とかわいらしい感じなのだろうと）常よりも昔思ひ出でらるるに、えつつみあへで、（こらえきれずに）寄りゐたまへる柱もとの簾の下より、（寄りかかっていられた柱の根もとの）やをら（そっと身を延ばして）およびて、（中君の）御袖をとらへつ。

女、八九さりや、あな心憂、と思ふに、（とっさに何が言えるだろう）何ごとかは言はれむ、ものも

一〇 上半身は御簾の内にはいって、中の君のそばに身を横たえられた。

一一 いえ違うのです。あなたの思っているようなことではない、の意。無体な振舞には及ばないと、相手を安心させようとする。

一二 人目を忍んだ方がよいだろうとお思いのこともあったのがうれしく思われますのは。前に「ただいと忍びてこそよからめ」と言ったのを、二人でこっそり宇治へ、の意味にとりなして言う。

一三 この程度の対面は、昔のことも思い出して頂きたいものです。宇治でともに一夜を明かした時のことを持ち出す（総角三九頁参照）。

一四 全然そんな親しみもいだいていては下さらなかったとは、私としてはむしろいやな思いがされます。

一五 ここ幾月、残念なことをしたと思い続ける胸の内が、堪えがたいまでになってゆく気持を。中の君を匂宮の夫人にしたことを悔む気持。

言はで、いとど引き入りたまへば、それにつきていと馴れ顔に、半はうちに入りて添ひ臥したまへり。「あらずや。忍びてはよかるべくおぼすこともありけるがうれしきは、ひが耳か聞こえさせむとぞ。うとうとしくおぼすべきにもあらぬを、心憂の御けしきや」と怨みたまへば、いらへすべきこちもせず、思はずに憎く思ひなりぬるを、せめて思ひしづめて、「思ひのほかなりける御心のほどかな。人の思ふらむことよ。あさまし」とあはめて、泣きぬべきけしきなる、すこしはことわりなれば、いとほしけれど、「これは咎あるばかりのことかは。かばかりの対面は、いにしへをもおぼし出でよかし。過ぎにし人の御ゆるしもありしものを、いとこよなくおぼしけるこそ、なかなかうたてあれ。すきずきしくめざましき心はあらじと、心やすく思ほせ」とて、いとのどやかにはもてなしたまへれど、月ごろくやしと思ひわたる心のうちの、苦しきまでなりゆくさまを、つくづくと言ひ続けたまひて、ゆるすべきけしきにもあら

（続いて）（馴れ馴れしく）（一〇）（薫）（一一）（一二）（冷たいなさりようですね）（心外でいやな人だという気持になるのを）（無理に心を静めて）（中君）（思ってもみませんでした心根のお方なのですね）（侍女たちがどう思いましょう）（あんまりです）（聞き違いかと申し上げようと思ってなのです）（よそよそしくお思いになるような仲でもありませんのに）（中君は）（受け答える気にもなれず）（けなして）（泣かんばかりの困惑ぶ）（薫）（多少はもっともとも思われるので）（おいたわしいけれども）（非難されるほどのことでしょうか）（亡くなった姉君の）（一三）（好色がましい不埒な料簡をいだくことはないも）（一四）（とても落着いた態度ではいらっしゃるけれども）（安心にお思い下さい）（一五）（くどいまでに）（袖を）（放してくれそうな様子もないので）

一 つらいどころの話ではない。「いみじ」といった言葉では月並みな表現に終る、の意。中の君の気持を代弁する草子地。

二 これはどうしたことなのです。何と、子供のように。

三 前に一夜を共にしたあの当時よりも、言いようもなく癪たけていらっしゃるところなどを見ると。

四 自分から進んで、この人を他人のものにしておいて。匂宮に譲ったこと。以下、薫の心。

五 なるほど、声を立てて泣かれるのだった。「げに」とあるのは引歌を思わせる。「神山の身を卯の花のほととぎすくやしくやしと音をのみぞ鳴く」(『古今六帖』四、雑の思ひ。『源注拾遺』所引)

薫、何ごともなく、中の君のもとを辞去

六 見ず知らずの男でも突然はいって来たのならば。「すずろなる」は、この場合、中の君に近づくべからざる男、というほどの意。

七 昔ですら、ほかの人には真似のできないほどの心配りをなさった慎重なお人柄なので。昔の一夜、中の君と何ごともなかったほどのお人柄なので、の意。まして今は、相手は人妻の身である。

ぬに、せむかたなく、いみじとも世の常なり。なかなかむげに心知らざらむ人よりも、はづかしく心づきなくて、泣きたまひぬるを、

(どうしようもなく)(なまじ)(全然気心も知れないような相手よりも)(きまり悪くいやらしく思われて)(かわいらしげで)

(薫)二「こはなぞ。あな若々し」とは言ひながら、言ひ知らずらうたげに、心苦しきものから、用意深くはづかしげなるけはひなどの、三見しほどよりも、こよなくねびまさりたまひにけるなどを見るに、四心からよそ人にしなして、かくやすからずものを思ふこと、とくやしきにも、五またげに音は泣かれけり。

(痛々しいほどでありながら)(心配りも尋常でなく気品の高い身のこなしなどが)(こうしてつらい思いで悩まねばならぬことよ)(悔まれるにつけても)

近くさぶらふ女房二人ばかりあれど、六すずろなる男のうち入り来たるならばこそは、こはいかなることぞとも、参り寄らめ、うとからず聞こえかはしたまふ御仲らひなめれば、さるやうこそはあらめと思ふに、かたはらいたければ、知らず顔にてやをらしぞきぬるぞいとほしきや。男君は、いにしへを悔ゆる心の忍びがたさなども、いとしづめがたかりぬべかめれど、七昔だにありがたかりし御心の用意なれば、なほいと思ひのままにもてなしきこえたまはざりけり。

(これは何ごととばかりでもご相談し合っていられる間柄のお二人のようだから)(近づいても来ようが親しく何か仔細のあることなのだろうと思うと)(お側近くは憚られるので)(知らぬふりをしてそっとその場をはずしたのはお気の毒なことだった)(以前のことをとても抑えがたいに違いなかっただろうに)(後悔する気持の堪えがたいつらさなども)(今もやはり強引に自分の思いを通すような無体な振舞はなさらないのだった)

八 こうした場面は、こまごまと何から何までお伝えすることはとてもできないことなのでした。濡れ場の仔細にわたることは憚られると、省筆をことわる草子地。

九 このまま帰るのは不本意なことではあるが、人目につく不都合さを思うので。

帰邸後、薫の苦悩

一〇 相手の中の君の立場を気づかうからなのだ。薫の気持を代弁する草子地。

一一 加減が悪いと前から聞いていた（中の君の）お身体具合は。以下、薫の心中。

一二 消え入りたそうにお思いだった懐妊のしるしの腹帯に気づいたので。衣裳のふくらみに薫の手が触れたのでもあろう。

一三 思いやりのない無理強いをすることは、やはりどうしても自分の意に反することだ。再び、薫の心中。

一四 相手の中の君も、二人の間に立ってどんなに思い悩まれることか。「かたがた」は、夫の匂宮のこと、自分（薫）のこと。

一五 さっき別れたばかりのこの今の間も恋しく思われるのは、困ったことなのだった。「逢はざりし時いかなりしものとてかただ今の間も見ねば恋しき」（『後撰集』巻九恋一、読人しらず。『源注拾遺』所引）

一六 かさねがさね、ままならぬ恋心というものだ。草子地。

八かやうの筋は、こまかにもえなむまねび続けざりける。九かひなきものから、人目のあいなきを思へば、よろづに思ひ返して出でたまひぬ。

まだ宵と思ひつれど、暁近うなりにけるを、見とがむる人もやあらむと、わづらはしきも、一〇女の御ためのいとほしきぞかし。一一なやましげに聞きわたる御ここちは、ことわりなりけり、一二いとはづかしとおぼしたりつる腰のしるしに、多くは心苦しくおぼえてやみぬる一三かな、例のをこがましの心や、と思へど、情なからむことは、なほいと本意なかるべし、また、たちまちのわが心の乱れにまかせて、あながちなる心をつかひてのち、心やすくしもはあらざらむものから、わりなく忍びありかむほども心尽くしに、一四女のかたがたおぼし乱れむことよ、など、一五さかしく思ふにせかれず、今の間も恋しきぞわりなかりける。さらに見ではえあるまじくおぼえたまふも、一六かへすがへすあやにくなる心なりや。昔よりはすこし細やぎて、あてに

（ろうかと）（世間が憚られるのも）（帰りが明け方近くなったのを）（見つけて不審に思う人もあ）（あれやこれやと考え直してお帰りになった）（もっともなことなのだった）（おもにはそれが痛々しくて手出しもせずに終った）（のだ）（いつもながら間抜けな男だ）（それに）（その場の一時の自分の激情に身をゆだねて）（無体な振舞に及んだそのあと）（気軽に逢うことはとてもできない相談ではあるも）（のの）（無理をおかして人目を忍ぶ逢瀬を重ねるのも気苦労なことだし）（冷静に思ってみても抑えようもなく）（ぜひにも我が物にしなくてはいられないようなお気持なのも）（ほっそりして）（気品があ）

一　ほかのことは何も念頭になくなってしまった。

二　どうして宮がお許しになるはずがあろう。以下、再び薫の心。

三　まだとても暗い早朝に。「深き」は、「夜深き」の意。後朝の文めかした体である。

四　書状を縦に折り畳んで、包み紙（礼紙）の余った上下を折りひねったもの。正式の書状の形式。

五　むなしく踏み分けて帰って来ました道の草に露がしとどに置いていましたので、昔のことが思われる秋の空です。草深いあの宇治での一夜が思われる、の意。「露」に悲しみの涙を暗示する。

六　つれないお仕打ちが情けなく思われますことは、まさしく「どうしようもないお怨み」というところです。「身を知れば怨みぬものをなぞもかくことわりしらぬつらさなるらむ」（『河海抄』。『紫明抄』には「なぞもこの」。『源氏釈』五句「涙なるらむ」。出典未詳）

薫、早朝に歌を贈る

つって愛らしかった昨夜の中の君の様子などは自分のすらうたかりつるけはひなどは、立ち離れたりともおぼえず、身に添今別れ別れでいるとも思われずぐ側にいるような気がしてひたるここちして、一さらに異事もおぼえずなりにたり。宇治にいとても行きたいとお思いのようだがわたらまほしげにおぼいためるを、さもやわたしきこえてまし、なご希望通りお移ししてしまおうかど思へど、二まさに宮はゆるしたまひてむや、さりとて、忍びてはた秘密に事を運ぶといいっていと便なからむ、いかさまにしてかは、人目見苦しからで、思ふ心不都合だろうのは一体どういうふうにしたらはた目に難もなくて思いを遂げることができようと気もそぞろの思いでぼんやり横になっていらっしゃるのゆくべきと、心もあくがれてながめ臥したまへり。

三　まだいと深き朝に御文あり。例の、うはべはけざやかなる立文にて、

（薫）五

いたづらに分けつる道の露しげみ
昔おぼゆる秋の空かな

六　御けしきの心憂さは、ことわり知らぬつらさのみなむ。聞こえさもない気持ですせむかたなく。お返事をしないというのも女房がとあり。御返しなからむも、人の、例ならずと見とがむべきを、いつにないことと不審に思うだろうと（中君）お手紙拝見いたしましたひどく気分がすぐれず申し上げようと苦しければ、「うけたまはりぬ。いとなやましくて、何も申し上げらえ聞こえさ

薫の執着

七 少し男女の仲というものもお分りになっているせいか。匂宮と結婚後の中の君の変化をいう。以下、昨夜を回想する薫の心中。

八 いや何、匂宮がすっかり遠のいてしまわれたら。再び、薫の思い。

九 そういうことになっても、公然と気ままに逢うというわけにはとてもいかないだろうが。

一〇 あれほど考え深そうに利口ぶっていらっしゃるけれども、世の男というものは何と情けないものなのでしょう。前の「けしからぬ心なるや」という草子地を受けて、薫とて世の男の例外ではないと、嘆いてみせる体の草子地。

せず」とばかり書きつけたまへるを、あまり言少ななるかな、とさ（れません）（ことずく）（もの）
（足りない思いで）
うざうしくて、をかしかりつる御けはひのみ恋しく思ひ出でらる。
（昨夜の風情のあった）（薫は）

すこし世の中をも知りたまへるけにや、（七）さばかりあさましくわり
（昨夜）（あれほど気も動顛してどうしよ）
（うと困り抜いていらっしゃるふうではあったものの）（ただもう無言で押し通すといったことでは）
なしとは思ひたまへりつるものから、ひたぶるにいぶせくなどはあ
（なくて）（いかにも聡明なこちらが気がひけるほどの品位も身にそなわって）（お困りになり）
らで、いとらうらうじくはづかしげなるけしきも添ひて、さすがに
（ながらもやさしく言いなだめなどして）（無事に自分をお帰しになったあの賢さなどを思）
なつかしく言ひこしらへなどして、出だしたまへるほどの心ばへな
（い出すにつけても）（くやしく）（やりき）
どを思ひ出づるも、ねたく悲しく、さまざまに心にかかりて、わび
（れない思いがする）（どの点でも）（昔に比べると格段に立派になられたものだと）
しくおぼゆ。何ごとも、いにしへにはいと多くまさりて思ひ出でら
る。何かは、（八）この宮離れ果てたまひなば、われをたのもし人にした
（だろう）（自分を頼みの者となさるほかはない）
まふべきにこそはあめれ、さても、（九）あらはれて心やすきさまにはえ
（人目を忍ぶ仲ながらほかにこれ以上愛する人はいない最後の女性ということになる）
あらじを、忍びつつまた思ひます人なき心のとまりにてこそはあら
（中の君のことばかり）（四六時中思われるのは）（とんでもない料簡というも）
（だろう）
め、など、ただこのことのみ、つとおぼゆるぞ、けしからぬ心なる
（のだ）
や。（一〇）さばかり心深げにさかしがりたまへど、男といふものの心憂か
（亡き大君への悲しみは）（どうしようもないことだったので）（ほんと）
りけることよ、亡き人の御悲しさは、言ふかひなきことにて、いと

一 中の君の後見役の気持など、どこかに消し飛んで。

匂宮、中の君のもとに

二 いやいや、宮に不快の念をおいだき申しているなど、そぶりにもお見せすまい。以下、宮を迎えての中の君の心中。

三 この世に身の置き所もないように思われてきて。以下、薫も頼りにならないとすれば、せめて夫の匂宮にすがるほかはあるまいか、というほどの気持。

四 やはりどうあがいても情けない身の上なのだったと。「と」は次の行の「思ひ果てて」にかかる。以下、「憂きながら消えせぬものは身なりけりうらやましきは水の泡かな」（『拾遺集』巻二十哀傷、中務）の言葉を借りた措辞。

五 あの、薫の手前恥ずかしい思いをなさった腹帯。（前出二〇三頁）

にこんなに苦しいほどではなかったのだかく苦しきまではなかりけり。これは、よろづにぞ思ひめぐらされるのだったたまひける。（家来）「今日は、宮わたらせたまひぬ」など人の言ふを聞くにも、後見の心は失せて、胸うちつぶれて、いとうらやましくおぼゆ。

匂宮
宮は、日ごろになりにけるは、わが心さへうらめしくおぼされて、にはかにわたりたまへるなりけり。何かは、心隔てたるさまにも見えたてまつらじ、山里にと思ひ立つにも、たのもし人に思ふ人も、うとましき心添ひたまへりけり、と見たまふに、世の中いと所狭く思ひならられて、なほいと憂き身なりけりと、ただ消えせぬほどは、あるにまかせて、おいらかならむ、と思ひ果てて、いとらうたげに、うつくしきさまにもてなしてゐたまへれば、いとどあはれにうれしくおぼされて、日ごろのおこたりなど、限りなくのたまふ。御腹もすこしふくらかになりにたるに、かの恥ぢたまふしるしの帯の引き結はれたるほどなど、いとあはれに、まだかかる人を近くても見た

（二条院に）何日もご無沙汰してしまったのは自分の気持まで我ながら恨めしく思われなさって
宇治に帰ろうと決心するにつけても
いやらしい気持をお持ちなのだった
成行きにまかせて
素直に宮をお迎えしよう
心を決めて
死なないでいるうちは
可憐なそぶりで
今日までのご無沙汰のお詫びなど
言葉を尽して
（宮は）いよいよいとしく
懐妊した人
ひとしおいとしく（宮は）

六　男というものは皆このように口先の上手なものなのだろうかと。

七　こうした男女の情がからまっていては、昨夜の薫とのこともとんでもない間違いだったと思うと。

八　匂宮の、これから先も変らずにという頼もしいお言葉は。「頼め」は、頼りにさせること。

匂宮、薫の移り香をあやしむ

九　それにしても、あろうことか私をすっかり油断させておいて部屋にはいり込んで来たあの時のことよ。昨夜の薫を回想する中の君の心中。

一〇　ほんとに誰にも真似のできることではなかったのだと（考えて）。薫を特別の人と考えて、の意。「と」は次の「うちとく」にかかる。

一一　とても何か不安なことのように思われなさるので。宮の不在中の薫の接近を恐れる気持。

まはざりければ、めづらしくさへおぼしたり。（日新しい感じまでなさるのだった）うちとけぬ所にならひたまひて、よろづのこと心やすく、（気楽で）なつかしくおぼさるるままに、（親しみやすく）おろかならぬことどもを、尽きせず契りのたまふを聞くにつけても、（約束して）かくのみ言よきわざにやあらむと、（並々ならぬ愛の誓いの数々を）あながちなりつる人の御けしきも思ひ出でられて、（無理に迫って来た昨夜の薫のご様子も）年ごろあはれなる心ばへとは思ひわたりつれど、（今まで長年やさしく親切な気持のお方とは思ってきたけれども）かかる方ざまにては、あれをもあるまじきことと思ふにぞ、この御行く先の頼めは、（気が引かれるのだった）いでやと思ひながらも、（さあどうかしらと）すこし耳とまりける。

さても、あさましくたゆめたゆめて入り来たりしほどよ、昔の人（亡き姉君）にうとくて過ぎにしことなど語りたまひし心ばへは、（と他人のままで終ったことなどを私に話して下さったあの方の真面目さは）げにありがたかりけりと、（やはり気を許していていいことでは）なほうちとくべくはた、（なかったのだなどと）あらざりけりかしなど、いよいよ心づかひせらるるにも、（警戒する気持になられるにつけ）久しくとだえたまはむことは、（「宮が」長くこちらにお見えにならないのは）いとものの恐ろしかるべくおぼえたまへば、言に出でて言はねど、過ぎぬる（今までよりは）かたよりは、すこしまつはしざまにもてなしたまへるを、宮はいと（宮をお側から離さぬようにお甘えになるのを）ど限りなくあはれと思ほしたるに、かの人の御移り香の、いと深く（薫）（よいよこの上もなくいとしくお思いになるのに）

しみついていられるのが　ありふれた　十分　たきしめたのとは似ても似つかず

しみたまへるが、世の常の香の香に入れ薫きしめたるにも似ず、しるき匂ひなるを、その道の人にしおはすれば、あやしととがめ出でたまひて、いかなりしことぞと、けしきとりたまふに、ことのほかにもて離れぬことにしあれば、言はむかたなくわりなくて、いと苦しとおぼしたるを、さればよ、かならずさることはありなむ、よもただには思はじと思ひわたることぞかし、と御心騒ぎけり。さるは、単の御衣なども、脱ぎかへたまひてけれど、あやしく心よりほかにぞ身にしみにける。

おかしいと不審を口になさっ　どういうことがあったのかと　事情をお尋ねになるのに　〔中君は〕全然見当　どうしようもなく困りきって　はずれの疑いでもないことなので　平気でいるはずはないと前々から思っていたことなのだ　お心が騒ぐのだった　不思議なことにいつの間にか身体にしみついていたのだった

匂宮の疑惑　夫婦の唱和

（匂宮）五「かばかりにては、残りありてしもあらじ」と、よろづに聞きにくくのたまひ続くるに、心憂くて、身ぞ置き所なき。「思ひきこゆるさまことなるものを、われこそ先になど、かやうにうち背く際はことにこそあれ。また御心おきたまふばかりのほどやは経ぬる。思ひのほかに憂かりける御心かな」と、すべてまねぶべくもあらず、いとほしげに聞こえたまへど、ともかくもいらへたまはぬさへ、いと

あれこれ聞きづらい露骨な　ことを次々おっしゃるので　情けなくて　（匂宮）大切にお思い申し　ている気持は格別ですのに　あなたが不満に思われるほど長い間ご無沙汰したでしょうか　案外に　情けない料簡のお方だったのですね　もうとてもここにお話しできないほど　い勢いで申し上げなさるけれども　〔中君が〕とかくのお返事をなさらないことまで

一　薫のものとはっきり分る匂いなのを。

二　匂宮は香の道では専門のお方なので。薫の体香に張り合って香に凝っていたこと、六巻匂兵部卿一七一頁に見える。

三　やはり思った通りだ、きっとそんなことはあっただろう。以下、匂宮の心中。薫が中の君に近づくことはあったに違いない、の意。

四　それが実は。以下、匂宮に疑われぬように、中の君は用心して下着の単なども着がえていられたのだが、と事情を説明する草子地。

五　これほどなのなら（こんなに移り香が深くしみついているのでは）、無事にすんだはずもないでしょう。何もかも許してしまったのだろう、の意。

六　捨てられるのなら自分の方から先になどと、こんなふうに夫を裏切るのは、身分の低い女のすることです。「人よりは我こそ先に忘れなめつれなきをしも何か頼まむ」（『古今六帖』四、うらみず）

七　ほかの人と馴れ親しんだ袖の移り香を、身にしみて深くお怨みに思うことです。「馴れ」「袖」は縁語。「移り香を」「しめて」（しみこませて）と、「身にしめて」（しみじみと）を言い掛ける。

八　黙っているわけにもいかない、と思って。

九　今まで馴れ親しんできた夫婦の仲とお頼りしていましたのに、こんな移り香くらいのことでこれきりになってしまうのでしょうか。「みなれ」は「見馴れ」と「身馴れ」（「衣」の縁語）を掛ける。「中の衣」は夫婦の仲を意味する歌語。「かばかり」（このくらいのこと）の「か」に「香」を掛ける。

一〇　こういうことだから薫も心惹かれるのだと。

一一　色っぽいお心であることだ。薫と中の君の情事を疑いないものとする匂宮の性癖を批評する体の草子地。

一二　一途にはとても冷たくあしらいきれそうになく。

一三　ゆっくりお寝みになった上でご起床になり。

一四　朝の身仕舞い（洗面その他）のお道具やお粥なども。「粥」は、今の炊いたご飯。朝食。

一五　西の対（中の君の居室）の方にお運ばせになる。

匂宮、翌日も二条の院にくつろぎ、泊る

もしゃくの種で

ねたくて、

（匂宮）七　また人に馴れける袖の移り香を

わが身にしめてうらみつるかな

女は、（宮が）思いも寄らぬことを次々に言われるので　言葉もない思いだが　あさましくのたまひ続くるに、言ふべきかたもなきを、八いかがは、とて、

（中君）九　みなれぬる中の衣とたのみしを

かばかりにてやかけ離れなむ

とて、うち泣きたまへるけしきの、限りなくあはれなるを見るにも、言いようもなくいじらしい様子なのを見ても　一〇かかればぞかしと、いと心やましくて、ひどくおもしろくなくて　われもほろほろとこぼしたまふぞ、一一色めかしき御心なるや。まことにいみじきあやまちありとも、本当に大変なあやまちがあったとしても　一二ひたぶるにはえぞ疎み果つまじく、可憐で痛々しい様子をしていらっしゃるらうたげに心苦しきさまのしたまへれば、いつまでもお怨みにはなれずにえも怨み果てたまはず、途中で言葉を収められては　のたまひさしつつ、手を替えてお慰め申し上げなさりもするかつはこしらへきこえたまふ。

その翌日も　またの日も、一三心のどかに大殿籠り起きて、一四御手水御粥などもこな　一五

一 あれほど光り輝くほどに豪華な、高麗や唐土の錦や綾をふんだんに用いてある六の君方を見た目で見ると。「高麗」は、古代朝鮮で百済、新羅と鼎立した国。多くの文物がわが国にもたらされている。「錦」は、多彩な糸で模様を織り出した絹織物。

二 薄紫色の袿幾かさねかの上に。

三 撫子襲（表紅梅、裏青）の細長。「細長」は、貴婦人の表着（一九〇頁注二参照）。

四 匂宮の（中の君への）愛情が並々でないので、（六の君方に）別に後れを取るとも見えないのであろう。草子地。

五 この人を、同じ兄弟といった間柄ではない男が、いつも身近に近づいては話を交わして。以下、匂宮の心。今までも中の君の身辺については心配していたという趣。

六 自分が女にかけては抜け目のないご性分ゆえ、よく分る気がなさるので。

たに参らす。御しつらひなども、一さばかりかかやくばかり、高麗唐土の錦綾を裁ち重ねたる目うつしには、世の常にうち馴れたるここちして、人々の姿も、萎えばみたるうちまじりなどして、いと静かに見まはさる。君は、なよよかなる薄色どもに、撫子の細長重ねて、うち乱れたまへる御さまの、何ごともいとうるはしく、こととしきまで盛りなる人の御よそひ、何くれに思ひくらぶれど、気劣りもおぼえず、なつかしくをかしきも、四心ざしのおろかならぬに恥なきなめりかし。まろにうつくしく肥えたりし人の、すこし細やぎたるに、色はいよいよ白くなりて、あてにをかしげなり。かかる御移り香などのいちじるからぬをりだに、愛敬づきらうたきところなどの、なほ人には多くまさりておぼさるるままには、五これをはらからなどにはあらぬ人の、気近く言ひかよひて、事に触れつつ、おのづから声けはひをも聞き見馴れむは、いかでかただにも思はむ、かならずしかおぼえぬべきことなるをと、六わがいと隈なき御心ならひに

お部屋の調度類
目馴れた感じが
ありふれた
女房たち
ひっそりした
着古して糊気の落ちた身なりの者もいたりして
中の君
しなしなとした
感じに眺められる
整いすぎるほど整って
ものものしいま
しだけなくおくろぎのご様子を
そのほか何かに
でに美しい盛りの六の君のご衣裳や
するとも思われず
やさしく愛らしい感じなのも
ふっくらとかわいらしく
少しほっそりとお痩せ
気品があって愛らしい感じだ
こんな〔薫の〕
はっきりした証拠のなかった時でも
愛くるしくてかわいいところなど
やはりほかの人より格段にまさっていると思われなさるにつけては
何かにふつけて
自然に
どうして平気でいられよう
声や様子を聞き馴れ見馴れていたら
ただならぬ気持になるに違いないことなのだからと
きっと
わが
隈なき

七 両開きの扉の付いた本箱様のもの。上に棚のしつらえられたものもある（一巻図録九参照）。
八 小さい唐櫃。衣類などを納める。「唐櫃」は、六本の反り脚の付いた櫃（一巻図録一一参照）。
九 いくら何でもこんな手紙だけであるはずはあるまい、と疑惑が持たれるので。
一〇 中の君も、どうして手きびしくはねつけるはずがあろう。
一一 無沙汰を詫びる手紙。
一二 「いつの間にお話しになりたいことがそんなにおたまりなのでしょう（一日二日のことなのに）」とぶつぶつ不平を鳴らす老女房たちがいる。年の功で遠慮がないのである。「積る」「葉」は縁語。
一三 しかたのないことだ。以下、薫の反省。

宿木

薫、中の君のもとに衣料を贈る

おぼし知らるれば、常に心をかけて（気をつけて）、しるきさまなる文（はっきりそれと分る）などやあると、近き御厨子（七）小唐櫃（八）などやうのものをも、さりげなくて探したまへど、さるものもなし。ただいとすくよかに言少なにて（しどくあっさりと）、なほなほ（ありふれた内容のものなどが）しきなどぞ、わざともなけれど、ものにとりまぜなどしてもあるを、あやし（おかしい）、なほいとかうのみはあらじかし（九）、と疑はるるに、いとど（いよいよ）今日はやすからずおぼさるる（胸のおさまらない気がなさるのも）、ことわりなりかし。かの人のけしきも、心あらむ女の（心ひかれるに違いないのだから）、あはれと思ひぬべきを（ものの分る女なら）、一〇 などてかは、ことのほかにはさし放たむ、いとよきあはひなれば（いかにも似合いの二人だから）、かたみにぞ思ひかはすらむ（お互いに好意を寄せ合っていることだろう）かし、と思ひやるぞ（想像すると）、わびしく腹立たしくねたかりける（やりきれなく）。なほいと（やはりどうにも胸がおさまらなかったので）やすからざりければ、その日もえ出でたまはず（癪に思われるのだった）。六条の院には、御文をぞ二度三度（ふたたびみたび）たてまつれたまふを、「一二 いつのほどに積る御言の葉ならむ」とつぶやく老人（おいびと）どもあり。

〔二条院に〕

薫 中納言の君は、かく宮の籠りおはするを聞くにも、心やましくお（気がもめてならない）ぼゆれど（けれども）、一三 わりなしや、これはわが心のをこがましくあしきぞかし、（自分の料簡が愚かしくよくないことなのだ）

一 何ごともなくおしあわせにとはじめから思っていた中の君のことを、こんなふうに思っていいものか。匂宮と末長くと念じて今までお世話してきたのに、の意。

二 やはり、六の君とのことがあっても、中の君をお見捨てにはなれないようだと。

三 来月（九月）の法事のお布施に。正月、五月、九月は斎月として仏事を営むので、それであろうか。

四 衣服の調製所。宮中の貞観殿の役所の名であるが、上流貴族の邸のをもいう。

五 裳、唐衣以下の女房の装束幾揃えもに。

六 二一〇頁注三参照。

七 染めてない絹や綾などをお添えになる。「絹」は、平絹（模様を織り出さないもの）。「綾」は、斜めの線条の模様を織り出した絹。

八 ご自分のお召し料の中にあった紅の砧の打ち目のすばらしいのに。砧で打って艶を出したもの。次の文によるに袴の用にと考えたものらしい。

九 女用の袴の付属品はなかったのだが。

一〇 袴の紐。

一 うしろやすくと思ひそめてしあたりのことを、かくは思ふべしや、としひてぞ思ひ返して、二さはいへど、えおぼし捨てざめりかしと、うれしくもあり。人々のけはひなどの、（女房たちの衣擦れの音などが）なつかしきほどに（やさしいほどの感じに）萎えばみ（着古されて）ためりしを、（お気づかいになって）と思ひやりたまひて、母宮の御方に（女三の宮）参りたまひて、（薫）「よろしきまうけのものどもやさぶらふ。（何か適当な支度してある衣料はございませんでしょうか）使ふべきことなむ」（入り用がございまして）と申したまへば、（女三宮）「例の、三立たむ月の法事の料に、（特に支度もしてありませんが）白きものどもやあらむ。（支度させましょう）染めたるなどは、今はわざともしおかぬを、急ぎてこそせさせめ」とのたまへば、（薫）「何か、（いえ何たいしたことに使うのでもありません）ことことしき用にもはべらず。（今ありますものだけで結構です）さぶらはむにしたがひて」とて、四御匣殿などに（問い合わせなさって）問はせたまひて、五女の装束どもあまた領に、細長どもも、ただあるにしたがひて、（有り合せの物を取りそろえて）六ただなる絹綾などとり具したまふ。（中の君ご自身の）みづからの御料とおぼしきには、（お召し料とおぼしいのには）八わが御料にありける紅の擣目なべてならぬに、白き綾どもなど、あまた重ねたまへるに、袴の具はなかりけるに、（どうしたわけか）いかにしたるにか、一〇腰のひとつあるを、引き結び加へて、

一一 ほかのお方と契りを結んでしまわれたあなたなのですから、一途にお怨み申すわけにもいかないことです。下紐は、袴の紐にちなんで言う。男女あい逢う時はこれを解く。「むすぶ」「ひとすぢ」（一筋）は、下紐の縁語。「ひとすぢ」は「腰のひとつあるを」とあったのにちなむ。

一二 中の君の女房。早蕨一四一頁に見える。

一三 中の君のお召し料は。

一四 衣筥に納めて、その上包みも立派にしてある。衣筥は包みで包むのが例（一巻末摘花二七六頁、四巻行幸一七〇頁参照）。

一五 （匂宮がおいでの折なので）お目にかけないが。

一六 あわててお返ししようとしたり、ごたごたすることもないので。「ひこしろふ」は、強く引く意。突っ張るというに近いか。

一七 めいめい仕立てにとりかかったりする。「さし」は、くけ、かがりのたぐいを言うのであろう。

一八 白い袷を仕立てたりして、派手でないのが、かえって見た目に難のない感じだった。前に女三の宮の言葉に「白きものどもやあらむ」とあった。

一九 一体、薫以外の誰が、何ごとにもわたって（中の君の）お世話をし大切にしてさし上げる人がいよう。以下、薫の、実生活上の細々とした援助について、長々と説明する形で言う。

中の君への、匂宮、薫の配慮

（薫）二一 むすびける契りことなる下紐を（したひも）
ただひとすぢにうらみやはする

二二 大輔（たいふ）の君とて、おとなおとなしき人の、（年かさの女房で）むつましげなる（気心の知れた者あてにお贈りになる）につかはす。（薫）有り合せの物で見苦しいところは（伝言なさって）「とりあへぬさまの見苦しきを、（目立たぬようにしてあるが）つきづきしくもて（しかるべく取り繕ってご披露下さい）隠して」などの

二三 たまひて、御料（れう）のは、しのびやかなれど、（今までも）筥（はこ）にて包みも異（こと）なり。御覧ぜさせねど、（このようなお心遣いは）さきざきも、かやうなる御心しらひは、（いつものことで）常のことにて目馴れにたれば、（どうしたものかと思案することもなく）けしきばみ返しなど、（女房たちに分け与えたりしたので）ひこしろふべきにもあらねば、いかがとも思ひわづらはで、（女房たちの）人々にとり散らしなどしたれば、

二七 おのおのさし縫（ぬ）ひなどす。（優先して着飾らさせるということであるらしい）若き人々の、（お側近くに控えるような者たちを）御前（まへ）近くつかうまつるなどをぞ、（下女たちの）取り分きてはつくろひ立つべき。下仕（しもづか）へどもの、いたく（ぼらしかった身なりの者たちなどに）萎（なみす）えばみたりつる姿どもなどに、白き袷（あはせ）などにて、掲焉（けちえん）ならぬぞなかなかめやすかりける。

二九 誰（たれ）かは、何ごとをも後見（うしろみ）かしづきこゆる人のあらむ。宮（匂宮）は、お（並々）ろかならぬ御心ざしのほどにて、（ならぬご寵愛のことゆえ）よろづをいかで、（万事不自由のないように）とおぼしおきて（ご配慮になっておい）

一　風流気取りでぞくぞく心に沁む思いに身をやつし、花に置く露の美しさを賞でて一生は送るものと、日頃お思いである宮にしては。人生に風流韻事のほかはないと考えている匂宮の人柄をいう。

二　やはり自然に、折々につけて、中の君の暮し向きのことまでもご自分で面倒をみたりなさるのは。季節季節の調度や衣裳の新調などについ面倒を見るといったことであろう。

三　そんなにまでなさらなくても。

四　匂宮の乳母。宮への身びいきからである。

五　女の童。そこまではなかなか手の廻らない趣。

六　なまじ結構過ぎる住いであることだなどと。二条の院の暮しに肩身の狭い思いをする。

七　二条の院の人々。匂宮づきの人々。

八　立ち入り過ぎたあまりこまごましていると思われかねない心遣いぶりも。前の、下々の者のことまで思いやった贈り物について言う。

たれど、こまかなるうちうちのことまでは、いかがはおぼし寄らむ。（どうしてお気づきになろう／こまごまとした勝手向きのことまでは）限りもなく人にのみかしづかれてならはせたまへれば、世の中うちあはずさびしきこと、いかなるものとも知りたまはぬ、ことわりなり。（この上もなく人に大事にされるということだけのこれまでのご生活だったので／暮し向きが不如意でわびしい思いをすることが／どんなものかということもご存じでないのは／止むを得ないことだ）艶にそぞろ寒く、花の露をもてあそびて世は過ぐすべきものとおぼしたるほどよりは、おぼす人のためなれば、おのづからをりふしにつけつつ、まめやかなることまでもあつかひ知らせたまふこそ、ありがたくめづらかなることなめれば、「いでや」など、そしらはしげに聞こゆる御乳母などもありけり。童べなどのなりあざやかならぬ、をりをりうちまじりなどしたるをも、女君は、いとはづかしく、なかなかなる住ひにもあるかななど、人知れずはおぼすことなきにしもあらぬに、ましてこのころは、世に響きたる御ありさまのはなやかさに、かつは、宮のうちの人の見思はむことも人げなきこと、とおぼし乱るることも添ひてなげかしきを、中納言の君は、いとよくおしはかりきこえたまへば、うとからむあたりには、見苦

（愛する人のことだけあって／ほかに例もない目を見張るようなことであろうから／非難がましく陰口を申し上げる／身なりのぱっとしないのが／とても気のひける思いで／顔には出さないがお悩みになることがないわけでもないのに／近頃は／世に鳴り響いている六の君のお暮しの派手やかさに比べられて／一つには／見る手前も見すぼらしく思われることだろう／お悩みになることも／情けない思いなのを／薫十分にお察し申し上げていらっしゃるので／先方が親しくない間柄だったら）

九 今度は改めて。前の贈り物のあと、今回は特に支度させて贈った趣。

一〇 中の君用の小袿を織らせ。恐らくはその材料や工賃を贈ったもの。「小袿」は、貴婦人の略礼装。表着の上に着ける（一巻図録一二参照）。

一一 綾を織るための糸（『河海抄』）。『花鳥余情』には織り賃のこととする。

一二 このお方にしてからが。薫のこと。

一三 亡くなった八の宮。

一四 それからというものは、この世間一般についてもいろいろ考えるようになり、深い思いやりの心をお持ちになるようにもなったのだった。

一五 薫にはおかわいそうな（ちと荷の重い）八の宮の感化だとか、そんなことを言う人もいるようです。草子地。

中の君、薫の態度に困惑

しくくだくだしかりぬべき心しらひのさまも、軽く見る積りはないのだけれあなづるとはなけれど、何かは、ことことしくしたて顔ならむも、大げさに特別にととのえたふうなのもなかなかおぼえなく見とがむる人やあらむ、とおぼすなりけり。不審に思う者もいるかもしれない　とのお考えからなのだった　見苦しからぬ侍女たちの衣料などを調進させなさった上で　九 今ぞまた、例の、めやすきさまなるものどもなどせさせたまひて、一〇 御小袿織らせ、綾の料

「大輔に」下さったりなさった　匂宮　賜はせなどしたまひける。一一 この君しもぞ、宮にも劣りきこえたまはず、さま異に格別に大切に扱われて　かたはなるまで心おごりもし、世俗のことには関心が薄く　お上品なお気立ては並ぶ人もいないけれども　世を思ひすまして、あてなる心ばへはこよなけれど、故親王の御山

宇治で　のお暮しをご覧になるようになってからは　不如意な家のわびしい暮しは格別のものがあるのだと　住みを見そめたまひしよりぞ、さびしき所のあはれさはさま異なりけりと、気の毒にお思いになって　心苦しくおぼされて、一四 なべての世をも思ひめぐらし、深き情をもならひたまひにける。一五 いとほしの人ならはしやとぞ。

やはり何とか中の君にとって安心な分別のある保護者として通したい　かくて、なほいかでうしろやすくおとなしき人にてやみなむ、と思うけれどもままならず　［中君のことが］　思ふにもしたがはず、心にかかりて苦しければ、御文などを、ありりは心のたけをこまごまと　以前よりは心のたけをこまごまと　ややもすると　胸一つに収めておけない苦しさをあらわにしよりはこまやかにて、ともすれば、忍びあまりたるけしき見せつして申し上げなさるのを　やりきれない悩みごとにとりつかれたわが身と情けなくお思つ聞こえたまふを、女君、いとわびしきこと添ひたる身とおぼし嘆

一 全然親しくもない相手なら。以下、苦慮する中の君の心中。

二 昔から、世間普通とは違った頼りにする人としてずっとお付合いしてきながら。肉親でも夫婦でもないのに親身の世話を受けてきたのを「さま異なる」という。

三 自分を困らせはするものの、親身になって面倒を見て下さるご親切やお扱いが、心からのものであることが自分に分らないわけではない。

四 あの宇治の山荘以来の年寄りの女たちだけだ。

五 亡き姉君の大君。

六 そのまま簀子にお茵（座布団）をさし出させなさって。この前のように室内には請じ入れない趣。

薫、また夕べの訪問

いになる一かる。ひとへに知らぬ人ならば、まあ常識はずれなあなものぐるほしと、決めつけて突き放すことも簡単にできようけれどはしたなめさし放たむにもやすかるべきを、昔よりさま異なるたのもし人にならひ来て、今さらに仲あしくならむも、今になってなかなか人目あやしかるべし、三さすがに、あさはかにもあらぬ御心ばへありさまの、あはれを知らぬにはあらず、さりとて、相手の気持を受け入れているような応対をするのもとても憚られるし心かはし顔にあひしらはむもいとつましく、どうしたらいいものだろうといかがはすべからむと、あれこれよろづに思ひ乱れたまふ。お側に仕える女房たちも多少話し相手にもなりそうなまだ年若な女房たちはさぶらふ人々も、すこしものの言ふかひありぬべく若やかなるは、皆あ参の者だし昔から知っている者とてはたらし、見馴れたるとては、四かの山里の古女ばらなり、思ふ心をも、心の内の悩みもよく分ってくれて親身に相談できる人がまわりにいないとなると結局は同じ心になつかしく言ひあはすべき人のなきままには、五故姫君を思ひ出できこえたまはぬをりなし。おはせましかば、大君がご存命だったら薫も私にこんな気持を起されることはなかったろうにこの人もかかる心を添へたまはましやと、いと悲しく、匂宮が冷たくおなりになるかもしれない心配よりもきよりも、薫とのことが宮のつらくなりたまはむ嘆

男君も、匂宮ご不在で　どうにもこらえかねてもの静かなしひて思ひわびて、例の、しめやかな夕つかたおはしたり。六やがて端に御茵さし出でさせたまひて、（中君）折悪しくとても気分が悪「いとなやましきほ

七 医師などと同じお扱いでも、お部屋の中に控えさせて頂けぬものでしょうか。こうした人伝のご挨拶では、せっかくお伺いしたかいもない思いです。「医師」は、元来典薬寮の職員で、令制では定員十名。

八 先夜もお二人の近しい様子を見ていた女房たちが。

九 中の君の座がある。

一〇 夜通し加持のために詰める僧の座。これは廂の間。普通、「二間」と称する部屋がこれに当てられる。

一一 はっきり拒むのも、またいかがなものかと、まわりの者に憚られるので。

一二 亡き大君。

再び、簾中の対面

うございますので どにてなむ、お話は叶いませぬ え聞こえさせぬ」と、女房を通じてお伝え申し上げなさるのを 人して聞こえ出だしたまへるを 女房の手前憚られるので 聞くに、何ともつれないお扱いだと いみじくつらくて、涙の落ちぬべきを、人目につつめば、 しひてまぎらはして、「(薫)ご病気の折には なやませたまふをりは、見知らぬ祈禱僧などでも 知らぬ僧なども近く参り寄るを、医師などの列にても、御簾のうちにはさぶらふまじくやは。かく人伝なる御消息なむ、かひなきここちする」とのたまひて、いかにも不満そうな いともものしげなる御けしきなるを、一夜もののけしき見し 人々、確かにこれではあまり失礼に当りましょう「げにいと見苦しくはべるめり」とて、母屋の御簾うちおろして、夜居の僧の座に入れたてまつるを、女君、まことにここちも 気分も いと苦しけれど、人のかく言ふに、掲焉ならむも、またいかが、と 気の進まぬまま つつましければ、もの憂ながらすこしゐざり出でて、対面したまへり。

いとほのかに、時々もののたまふ御けはひの、昔人のなやみそめ 具合のお悪くなられた当初の頃が たまへりしころ、まづ思ひ出でらるるも、ゆゆしく悲しくて、かき 縁起でもなく 胸もとざされるような思いがなさるので くらすここちしたまへば、とみにものもえ言はれず、ためらひてぞ すぐには何も言えなくて 気持を静めてから

聞こえたまふ。こよなく奥まりたまへるもいとつらくて、簾の下より几帳をすこしおし入れて、例の、なれなれしげに近づき寄りたまふが、いと苦しければ、わりなしとおぼして、少将といひし人を近く呼び寄せて、「胸なむ痛き。しばしおさへて」とのたまふを聞きて、「胸はおさへたるはいと苦しくはべるものを」とうち嘆きてゐ直りたまふほども、げにぞ下やすからぬ。「いかなれば、かくしも常になやましくはおぼさるらむ。人に問ひはべりしかば、しばしこそここちはあしかなれ、さてまたよろしきをりあり、などこそ教へはべしか。あまり若々しくもてなさせたまふなめり」とのたまふに、いとはづかしくて、「胸はいつともなくかくこそははべれ。昔の人もさこそはものしたまひしか。長かるまじき人のするわざとか、人も言ひはべるめる」とぞのたまふ。げに誰も千年の松ならぬ世を、と思ふには、いと心苦しくあはれなれば、この召し寄せたる人の聞かむもつつまれず、かたはらいたき筋のことをこそ選りとどむれ、

〔中君が〕あまり奥の方に引っ込んでいられるのもひどく情けなくて〔奥に〕
〔中君は〕どうしようとお思いになって
〔中君〕しばらく押えていておくれ
〔薫〕胸の痛みは押えるとかえってとてもつらいものですのに
心配そうに居ずまい
〔薫〕どうしたわけでこんなふうに
をお直しになる胸の内も
いつもお加減がお悪くていられるのでしょう
しばらくの間
気分が悪いということはあっても
それでまたどうにかもとに戻る時もある
いつということもなくこうして時々痛みます
亡き姉君
長生きできそうもない人がかかる病気だとか
もそんなふうでいらっしゃいました
とてもせつないとしく思われるので
先ほどお呼び寄せになった少将の聞くところも憚られずに

一 簾に添えて向う側（母屋側）に立ててある几帳。
二 遠慮もなげに近づいて来られるのが。簾の下から上半身を中に入れるのであろう。
三 少将と呼んでいた人。中の君づきの女房。ここにはじめて見える。薫の接近をはばむ口実に呼ぶ。
四 ほんとに、内心はおだやかならぬものがある。薫の言葉を「胸の思いを押える」意に取りなして、少将を呼んだのを薫が不満に思う旨の草子地。
五 悪阻の症状について、乳母とか女房とかから知識を仕入れたという趣。
六 あまりに子供子供していられるせいなのでしょう。辛抱がなさすぎます、と励ます気持。
七 とてもきまり悪い思いで。懐妊のことに触れられたからである。胸の病は持病だと、話をそらす。
八 確かに誰も千年の齢をたもてるものではないこの世なのだから。「憂くも世に思ふ心にかなはぬか誰も千年の松ならなくに」（『古今六帖』四、うらみ）
九 聞かれて困るようなことは避けて口にしないけれども。插入句。

薫の口説

一〇 何ごとにつけても、亡き大君のことを薫はどこまでも思っておいでだ。薫の気持の底には常に大君への思いがあると、あらかじめ解説しておく気持。

一一 親しくはして頂けませんでしたが、ひとかたならぬ深い思いをおかけ申すようになりましたそのことがもとで。大君のこと。

一二 前々から念願の仏道修行の志は、やはりどうにかなってしまったのかもしれません。

一三 せめてもの気晴らしに。以下、大君の死後、ほかの女に心の移ることもあろうかと考えたこともある、と言う。

一四 心を強く惹かれる人もいないことでしたので。あなた以外には心惹かれる人はいなかった、という意味を逆から言う。

一五 けしからぬ気持が。中の君への野心。

昔より思ひきこえしさまなどを（思いをお寄せしていた気持などを）、かの御耳ひとつには心得させながら、人はかたはにも聞くまじきさまに（ほかの人は聞いてもおかしく思わないように）、さまよくめやすくぞ言ひなしたまふを（中の君お一人だけには分るように仕向けながら）、げにありがたき御心ばへにも（おだやかに聞き苦しくなくお話しになるのを）、と聞きゐたりけり。

一〇 何ごとにつけても、故君の御ことをぞ尽きせず思ひたまへる。

「いはけなかりしほどより（〈薫〉幼かった頃から）、世の中を思ひ離れてやみぬべき心づかひをのみならひはべしに（世俗のことは断念して一生を送ろうとそのことばかりを心がけていたのですが）、さるべきにやはべりけむ（そういうさだめだったのでしょうか）、うときものからおろかならず思ひそめきこえはべりしひとふしに、かの本意の聖心は、さすがに違ひやしにけむ。なぐさめばかりに、ここにもかし

一一 ここにも行きかかづらひて（人と関わり合って）、人のありさまを見むにつけて（そうした人と付き合っているうちには）、まぎるることもあろうか（こちらの人あちらの気持の紛れる）ともやあらむ、など、思ひ寄るをりをりはべれど（考えてみることも時にはありますが）、さらにほかざまにはなびくべくもはべらざりけり。よろづに思うたまへわびては（どうしてもほかの人には気持が傾くはずもないことなのでした）、

一四 心の引くかたの強からぬわざなりければ（それですっかり思案に余りました挙句に）、好きがましきやうにおぼさるらむと（好色がましい振舞のようにお思いであろうかと）、はづかしけれど、あるまじき心の（気のひけることですが）、かけてもあるべくはこそめざましからめ（万が一にもあるというのでしたらお目障りでもありましょうが）、ただかばかりのほどにて（この程度のお近くで）、時々思ふことを

も聞こえさせうけたまはりなどして、隔てなくのたまひかよはむを、誰かはとがめ出づべき。世の人に似ぬ心のほどは、皆人にもどかるまじくはべるを、なほうしろやすくおぼしたれ」など、怨みみ泣きみ聞こえたまふ。「うしろめたく思ひきこえば、かくあやしと人も見思ひぬべきまでは聞こえはべるべくや。年ごろこなたかなたにつけつつ、見知ることどものはべしかばこそ、さま異なるたのもし人にて、今はこれよりなどおどろかしきこゆれ」とのたまへば、「さやうなるをりもおぼえはべらぬものを、いとかしこきことにおぼしおきてのたまはするや。この御山里出で立ちいそぎに、からうして召し使はせたまふべき。それもげに御覧じ知るかたありてこそはと、おろかにやは思ひはべる」などのたまひて、なほいとものうらめしげなれど、聞く人あれば、思ふままにもいかでかは続けたまはむ。

外の方をながめ出だしたれば、やうやう暗くなりにたるに、虫の声ばかりまぎれなくて、山の方をぐらく、何のあやめも見えぬに、

申し上げそちらのお話もお伺いなどして　親しく日頃私とお付合いなさいますのを　誰が目くじら立てましょう　世間の男とは違う私の気性は　誰に後ろ指さされるは　怨んだり泣いたずもありませんので　どうかご安心になっていて下さい　(中君)安心ならないとお思い申すのでしたら　おかしいとはたの者も見て思いかねないほど親しくお話など申し上げましょうか　今まで長年あれこれのことにつけまして　お気持はよく存じ上げておりますからこそ　(薫)そのようなことといつありましたか覚えもありませんのに　いかにもたいしたことのようにお思いになっておっしゃることです　心からうれしく存じます　思い通りにもどうして十分にお話ができよう　様子だが　少将が側にいるので　それでもとても何かご不満そうな　うれわしげに眺めやると　何の見分けもつかないのに　はっきり聞えて

薫、大君追慕の情切なる旨を訴える

一 世間には例のないような頼りにするお方として。（一一六頁注二参照）

二 今では、こちらから何かとお願いを申し上げたりもしているのでございます。前に薫の来訪をうながす趣の手紙を出したことをいう（一九五頁）。

三 この前お話しの宇治にお出かけのお支度に、どうやらお使い下さろうというのですね。

四 それも、仰せのように、私を見込んで下さった上でのことと。「見知ることどものはべしかばこそ」と言ったのを受けて言う。

五 築山のあたりは仄暗くて。築山には喬木を植えるので鬱蒼とした感じ。

六「恋しさの限りだにある世なりせば年経てものは思はざらまし」（『古今六帖』五、年経ていふ。『是則集』。『紫明抄』以下には下句「つらきをしひて嘆かざらまし」）

七「恋ひわびぬ音をだに泣かむ声立てていづれなるらむ音なしの里」（『古今六帖』二、里）。所在不明。

八 亡き人にかたどった像でも作り、絵に写したりもして。『河海抄』に、高宗皇帝が最愛の皇子を七歳で失い、哀傷に堪えず香炉峰の北に遺愛寺を建立して、その像を安置した故事、漢の武帝が李夫人の絵姿を画かせ、董仲君に李夫人の姿を温石に刻ませた故事をあげる。『和名抄』に「偶人」を「比度加太」と訓む。

九 しかしまた、こともあろうに御手洗川にご縁のありそうな人形とは。「人形」を祓えのあと川に流す撫物にとりなして、恋を断つための人形とは、と言いなした。「恋せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」（『伊勢物語』六十五段）による。「御手洗川」は、参拝の前に身を浄める神社の側の川。

一〇 黄金の賄賂を要求する絵師がいるかもしれません。王昭君の故事（二巻須磨二四六頁注二参照）。

一一 そうなのです。

一二 故事未詳。出来栄えのすばらしさに空から花が降ったといった話か。

一三 そのような異能の人でもいないものでしょうか。「変化」は、神仏などが仮に人の姿で現れたもの。「へげ」は「へんげ」の撥音無表記の形。

物思いにうち沈んだ様子で
いとしめやかなるさまして寄りゐたまへるも、〔柱に〕 厄介なことばかり御簾の内では わづらはしとのみ内にはおぼさる。（薫）六「限りだにある」など、いと忍びやかにうち誦じて、

（薫）ほとほと困り果ててしまいました
「思うたまへわびにてはべり。七音なしの里もとめまほしきを、探したい思いですが 宇治かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、大げさに寺というほどではなくても 昔おぼゆる人形をもつくり、絵にも描きとりて、後世を弔いたいものと 行ひはべらむとなむ、思うようになりました 思うたまへなりにたる」とのたまへば、「あはれなる御願ひに、九またうたて御手洗川

（中君）心打たれるご発願ですが
近きここちする人形こそ、考えてみますとかわいそうな気もします 思ひやりいとほしくはべれ。一〇黄金もとむ

気がかりなことでございます
る絵師もこそ、など、うしろめたくぞはべるや」とのたまへば、

（薫）一一
「そよ。その工も絵師も、どうしたら私の心に叶うものを作ってくれるでしょう いかでか心にはかなふべきわざならむ。

一二 近き世に花降らせたる工もはべりけるを、一三さやうならむ変化の人もがな」と、あれにつけこれにつけ亡き人を忘れるすべもない旨を とざまかうざまに忘れむかたなきよしを嘆きたまふけしきの、深く思い詰めた様子なのもお気の毒で 心深げなるもいとほしくて、〔中君は〕 にじり寄って 今すこし近くすべり寄りて、

ほんとにおかしな思い付くはずもないことを今ふと思い出しました
「人形のついでに、いとあやしく思ひ寄るまじきことをこそ思ひ出ではべれ」とのたまふけはひの、多少うちとけた様子なのも すこしなつかしきも、いとうれし

一 どうにかしてこうした自分に対する思いをさまさせて、何ごともなくお付合いしよう、と思うので。「やむ」は、なおす意。

中の君、異母妹（浮舟）のことを薫に打ち明ける

くあはれにて、「何ごとにか」（薫）と言ふままに、几帳の下より手をとらふれば、[中君は]いとうるさく思ひならるれど、一いかさまにしてかかる心をやめて、なだらかにあらむ、と思へば、この近き人の思はむことのあいなくて、さりげなくもてなしたまへり。

「年ごろは世にやあらむとも知らざりつる人の、この夏ごろ、二遠き所よりものして尋ね出でたりしを、三うとくは思ふまじけれど、またうちつけに、さしも何かはむつび思はむ、と思ひはべりしを、さいつころ来たりしこそ、あやしきまで、四昔人の御けはひにかよひたりしかば、あはれにおぼえなりにしか。五形見など、かうおぼしのたまふめるは、なかなか何ごとも、あさましくもて離れたりとなむ、見る人々も言ひはべりしを、いとさしもあるまじき人の、いかでかはさはありけむ」とのたまふを、六夢語りか、とまで聞く。「さるべきゆゑあればこそは、七さやうにもむつびきこえらるらめ。などか今まで、かくもかすめさせたまはざらむ」とのたまへば、「いさや、そ

（中君）今までこの世にいるとも知りませんでした人が
今年の
遠く
尋ねて来ましたのが
そう何も親しくすることもあるまい
先頃
とてもなつかしい気持になりました
昔人
形見
お話にならぬほど似ていないと
そのままでした
それほど大して似ているはずもない人が
どうしてそのよう
（薫）それ相当のわけがあるからこそ
どうして
（中君）いいえ
このようにもほのめかして下さらなかったのでしょう

八　二人とも寄るべもない身の上で。以下、八の宮が、自分の死後の姉妹の行く末を案じていたことをいう。

九　（姉君が亡くなって）何もかも私一人の身の上のこととして身に沁みて思われますのに。

一〇　もう一人知られなくてもよい人のことまで一緒に、世間の人に知れ渡りますのは、いかにも父宮にいたわしいことに思われます。子女の零落は八の宮の名誉にかかわる、それは私一人でたくさんだ、という気持。

一一　形見の子を生んでいたのであろう。「結びおきし形見の子だになかりせば何に偲ぶの草を摘ままし」（『後撰集』巻十六雑二、兼忠朝臣の母の乳母。『古今六帖』五、かたみ）。「形見」に「筐」、「子」に「籠」を掛ける。

一二　憚られて。母親の今の身分の低さなどを思って、薫の手前あからさまに言うのを憚る気持。

一三　委しくは私も存じておりません。言い渋る趣。

一四　楊貴妃が愁いに沈んでいたというあの海上の仙山までも、大君の魂のありかを探すのでしたら、どこまでも心をふるい立たせましょうものを。「しるべする雲の舟だになかりせば世を海中に誰か知らまし」（『伊勢集』）。「世を憂」と言い掛ける。亭子院の長恨歌の屏風に、伊勢が楊貴妃の歌として詠んだ五首のうちの一首。「しるべする雲の舟」とは、臨邛の方士の探索のこと。（一巻付録「長恨歌」三二九頁以下参照）

のゆゑも（のわけも）、いかなりけむこととも思ひわかれはべらず。ものはかなきありさまどもにて、世に落ちとまりさすらへむとすらむこと（この世に残されて落ちぶれて暮すことだろう）、とのみ、うしろめたげにおぼしたりしことどもを（気がかりにお思いになっていらしたあれこれのご心配が）、ただ一人かきあつめて思ひ知られはべるに、また（一〇）あいなきことをさへうち添へて、人も聞き伝へむこそ、いといとほしかるべけれ」とのたまふけしき見るに、宮の忍びてものなどのたまひけむ人の、偲ぶ草摘みおきたりけるなるべし、と見知りぬ。

（八の宮が人知れず情けをおかけになったであろう人が）（察しがついた）

似たりとのたまふゆかりに耳とまりて、「かばかりにては、同じくは言ひ果てさせたまうてよ」と、いぶかしがりたまへど、さすがにかたはらいたくて、えこまかにも聞こえたまはず。「尋ねむとおぼす心あらば、そのわたりとは聞こえつべけれど、くはしくしもえ知らずや。またあまり言はば、心劣りもしぬべきことになむ」とのたまへば、「世を海中にも、魂のありか尋ねには、心の限り進みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざなれど、いとかくなぐさめ

（似ているとおっしゃる大君との血の繋がりが耳について）（薫）（そこまでお話しでしたら）（どうせ）（聞きたそうになさるけれども）（中君は）（こまかい事情までもお話しにはなれない）（中君）（つきとめたい）（どのあたりということは申し上げられますが）（がっかりなさりかねないことでもありますし）（それにあまり申しますと）（何もそれほど熱心になることはないことでしょうが）（もうこれほど悲しみを紛ら）

一 思いつきまして、大君の像を作ろうとの発願もしたほどなのですから。

二 その人を宇治のお寺の本尊とあがめて何の悪いことがありましょう。大君に生き写しのその人を愛して何が悪かろう、の意。

三 亡き父宮がお認めにもならなかった人のことを。わが娘として認知しなかった趣。

四 考えてみますと、いかにも口の軽いことですが、変化の工がいないものかとまでおっしゃるのがおいたわしいあまりに、こんなことまで申し上げたのです。

五 その人はとても遠い地方でずっと生い育ったのですが。母が受領（地方官）の妻になっていたことがうかがえる。

六 無理にこちらにつてを求めて来ましたのを。中の君の引きを当てにしてのこと。

七 この娘の身の振り方をどうしたものか、と苦にしていたようですが。結婚のことなどで悩んでいた趣。

八 あなたの大切な思われ人になるのは。「山里の本尊」を受けて言う。

九 そこまでのお扱いはいかがなものでしょう。果してそれに価するほどの人か、というほどの気持。

一〇 中の君はうわべは何げなさそうにしていながら。以下、薫の心。

一一 さすがにその好意は身に沁みる。今の打明け話を多とする思い。

薫、辞去

むかたなきよりはと、思ひ寄りはべる人形の願ひばかりには、などかは山里の本尊にも思ひはべらざらむ。なほたしかにのたまはせよ」と、うちつけに責めきこえたまふ。「いさや、いにしへの御ゆるしもなかりしことを、かくまで漏らしきこゆるも、かつはいと口軽けれど、変化の工もとめたまふいとほしさにこそ、かくも」とて、「いと遠き所に年ごろ経にけるを、母なる人のうれはしきことに思ひて、あながちに尋ね寄りしを、はしたなくもえいらへではべりしに、ものしたりしなり。ほのかなりしかばにや、何ごとも、思ひしほどよりは見苦しからずなむ見えし。これをいかさまにもてなさむ、と嘆くめりしに、仏にならむは、いとこよなきことにこそはあらめ、さまではいかでかは」など聞こえたまふ。

一〇 さりげなくて、かくうるさき心をいかで言ひ放つわざもがな、と思ひたまへる、と見るはつらけれど、さすがにあはれなり。あるまじきこととは深く思ひたまへるものから、顕証にはしたなきさまに

すすべもないよりはと　どうかはっきりしたことをお教え下さい　(中君)さあ　せっかちにうながし申し上げなさる　お打ち明け申し上げますのも　娘の田舎育ちを嘆かわしく思って　田舎育ち　ちらと見ただけだからでしょうか　そっけない返事もできないでいましたうちに　訪れて来たわけなのです　と想像していたよりは見た目に雅のない感じでした　願ってもない仕合せなことではありましょうが　恨めしいけれど　思っておいでなのだ　[中君が]と　んでもないこととは心から思っていらっしゃるものの　けしょう　あからさまにすげなくは自分

をお扱いになれないのも　自分のことを分っていて下さるのだ　と思うただならぬ気持のうちに　簾中の中の君は女房の手前もひどく具合が悪いと気におなりなのでぼえたまひて、うちたゆめて入りたまひぬれば、男君、ことわりとはかへすがへす思へど、なほいとうらめしくくちをしきに、思ひしめるすべもない思いでづめむかたもなきここちして、涙のこぼるるも人わろければ、よろれと思い悩むけれどもづに思ひ乱るれど、ひたぶるにあさはかならむもてなしはた、なほいとうたて、わがためもあいなかるべければ、念じ返して、常よりも物思わしげなそぶりでお帰りになったも嘆きがちにて出でたまひぬ。

一三　かくのみ思ひてはいかがすべからむ、苦しくもあるべきかな、いかにしてかは、おほかたの世にはもどきあるまじきさまにて、さすがに思ふ心のかなふわざをすべからむ、など、一四おりたちてれんじたる心ならねばにや、わがため人のためも心やすかるまじきことを、一五わりなく思ほし明かす。似たりとのたまひつる人も、いかでかはまことかとは見るべき、一六さばかりの際なれば、思ひ寄らむに難くは

なお、薫の未練

一三　このように中の君のことに思い悩んでばかりいては、どうしたらよいのだろう。以下、帰邸後の薫の心中。

一四　経験を積んで恋の道には手馴れているといった人柄でないせいか。「れんず」は「練ず」。

一五　解決もつかぬまま考えつつ夜をお明かしになる。「わりなく」は、しかたなく。

一六　その程度の身分のようだから、手に入れる気なら、むつかしくもなかろうが。中の君の話から、ほぼ受領の家庭と察しられている。「ななれば」は「なるなれば」の撥音便無表記の形。

一 先方の望まないことであるならば。向うの母親などの思惑を気にする。

二 八の宮の山荘。

薫、九月の末に宇治を訪れ、弁の尼と語る

三 九月の二十日過ぎ。秋も末の季節である。

四 ものさびしく荒々しげな流れ（宇治川）の音だけが山荘を守っている風情で。「宿守」は、留守居役。

五 一七四頁注二参照。

六 障子（今の襖に当る）の出入口の所に。部屋の境である。

七 鈍色（薄墨色）の青みがかったもの。几帳の帷の色。尼の調度の趣。

八 まことに恐れ多いことでございますが。老いた尼姿を憚って、几帳を隔てて対面することを託びる。

九 まともには姿を見せようとしない。

一〇 妹君様のことで、亡きお方がなさらなくてもよいご心配をなさっておられたのがちょうど今頃のことでしたと思い出しますと。匂宮の通いの途絶えたのを大君が心痛していたこと。（総角八一～八三頁参照）

一一「秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらむ」（『和泉式部集』）

一二 ほんとに姉君様がご心配になっていられたのも、厄介なことであるだろう あらずとも、一人の本意にもあらずは、うるさくこそあるべけれ、など、なほそなたざまには心も立たず。

まだその人のことには気持も進まない

二 宇治の宮を久しく見たまはぬ時は、いとど昔遠くなるここちして、すずろに心細ければ、三九月二十余日ばかりにおはしたり。いとどしく風のみ吹き払ひて、四心すごく荒ましげなる水の音のみ宿守にて、人影もことに見えず。見るにはまづかきくらし、悲しきことぞ限りなき。五弁の尼召し出でたれば、障子口に、六青鈍の几帳さし出でて参れり。「いとかしこけれど、七ましていと恐ろしげにはべれば、つつましくてなむ」と、八九まほには出で来ず。「いかにながめたまふらむと思ひやるに、同じ心なる人もなき物語も聞こえむとてなむ。はかなくも積る年月かな」とて、涙をひと目浮けておはするに、老人は一〇いとどさらにせきあへず。「人の上にて、一一あいなくものをおぼすめりしころの空ぞかし、と思うたまへ出づるに、一二いつとはべらぬなかにも、秋の風は身にしみてつらくおぼえはべりて、一三げにかの嘆かせ

ますます亡き大君に遠ざかる気がして

いよいよ激しく

一目見るなり何より胸が一杯になって

押し出して来て

（弁尼）

いよいよ恐ろしげな姿になっておりますので

ど遠慮申されまして

（薫）

どんなにさびしいお暮しだろうと察しするにつけても

ほかに分ってくれる人もいない昔話でも申し上げようと思いまして

あっけなく過ぎて行く

目に一杯浮べて

なおさらとても涙を抑えきれない

（弁尼）

いつに限らぬことではございますが

無情なものと思われまして

果してその通りになったと思われますようなあちらのご事情を。六の君との婚儀のこと。

一三 やはり私の責任のように思われて悲しいことです。中の君に匂宮を仲立ちしたのは自分だからである。

一四 この近頃のご事情は。匂宮の六の君との婚儀のこと。有力者である夕霧の婿になったことは、当然のことだと言う。

一五 虚空にはかなく立ち昇った煙だけは。火葬の煙。大君の亡くなったこと。

一六 死別というものは。「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」（『古今六帖』一、雫。『遍昭集』）

一七 宇治山の阿闍梨。

一八 大君のご命日の法要に供養する経巻や仏像。大君の亡くなったのは十一月の中旬。この年（宿木の第二年）が総角の翌年なら一周忌のはずであるが、それらしい様子もない。一周忌なら「御果」というべきところである。翌々年と考えなくてはならない。

一九 今さらどうしようもないことがいつまでも悲しく思われるのは、いかにもつまらぬことだから。

二〇 阿闍梨の山寺。

二一 お堂をつなぐ渡り廊下や、僧の住みかなど。

二二 「大層な功徳です」とご説明申し上げる。堂舎建立がどれほどの善根を積むことかを説き明かす。

たまふめりしもしるき世の中の御ありさまを、ほのかにうけたまはるも、さまざまになむ」と聞こゆれば、（薫）「とあることもかかることも、ながらふればなほるやうもあるを、あぢきなくおぼししみけむこそ、わがあやまちのやうになほ悲しけれ。このころの御ありさまは、何か、それこそ世の常なれ。されどうしろめたげには見えきこえざめり。言ひても言ひても、むなしき空にのぼりぬる煙のみこそ、誰ものがれぬことながら、後れ先だつほどは、なほいと言ふかひなかりけり」とても、また泣きたまひぬ。

風の便りに伺いますのも
悲しみは尽きないことです
（薫）どのようなことがあろうとも
時がたてば事情がよくなることもありますのに
「大君が」情けないことと思い詰めになっ
たのは
一三
いえ何
それが当り前のことなのです
しかし心配なことは何もないと私には思われます
いくら言ってみたところで
まぬがれぬさだめとは言え
やはり取り返しもつかぬこと
と言っても
なのでした
たれ
一四
一五
おく

阿闍梨召して、例の、かの御忌日の経仏などのことのたまふ。

一七 あざり
一八 きにち きやうほとけ

尋ねて来るにつけても
（薫）「さてここに時々ものするにつけても、かひなきことのやすからずおぼゆるがいと益なきを、この寝殿こぼちて、かの山寺のかたはらに堂建てむ、となむ思ふを、同じくは疾くはじめてむ」とのたまひて、堂いくつ、廊ども、僧房など、あるべきことども書き出でのたまひなどせさせたまふを、（阿闍梨）「いと尊きこと」と聞こえ知らす。（薫）「昔の

壊して
早く取りかかりたい
計画の仔細を書き出して仰せになったりなさる
のを
一九
二〇
二一
二二

一　結構なお住いとしてこの地を選んでお造りになったのであろうお邸を。

二　功徳を積むといったことには熱心なお考えをお持ちだったでしょうが。死後、寺にするお積りだったであろう、と言う。

三　ですから、この場所のままで寺にすることは、差し障りもありましょう。

四　人目も多い所ですから。勤行には向かない場所柄だと言う。

五　以下の話、『大日経疏』十八巻に『僧迦吒経』から引用されている話による。あるいはそれに基づく説教によるか（高木宗監氏）。一人の男が愛する美人の妻に死なれ、その屍を捨てるに忍びず、枯れ朽ちるまで背負って歩いた。時に菩薩が婦人に化身し、死んだ夫を背負ってこの男と行を共にした。男の隙をうかがって二つの屍を恒河に投ずると屍は忽ちに失せた。二人は嘆いて、二つの屍が愛し合って共に我等を捨てた、死人すらしかり、生者の愛が信じられるか、と。男は忽然と悟って修行の道に入った。これは、菩薩の慧の方便であったと説く。

六　陰陽寮（中務省の被管）の職員。令制では定員一名。暦を造り、暦生の教育に当る。

人の、ゆゑある御住ひに占め造りたまひけむ所を、ひきこぼたむ、情なきやうなれど、その御心ざしも、功徳の方には進みぬべくおぼしけむを、とまりたまはむ人々をおぼしやりて、えさはおきてたまはざりけるにや。今は、兵部卿の宮の北の方こそはしりたまふべければ、かの宮の御料とも言ひつべくなりにたり。されば、ここながら寺になさむことは便なかるべし。心にまかせてさもえせじ。所のさまもあまり川づら近く、顕証にもあれば、なほ寝殿を失ひて、異ざまにも造りかへむの心にてなむ」とのたまへば、「とざまかうざまに、いともかしこく尊き御心なり。昔、別れを悲しびて、屍を包みてあまたの年頸に掛けてはべりける人も、仏の御方便にてなむ、かの屍の嚢を捨てて、つひに聖の道にも入りはべりにける。この寝殿を御覧ずるにつけて、御心動きおはしますらむ、ひとつにはたいだいしきことなり。また後の世のすすめともなるべきことにはべりけり。急ぎつかうまつるべし。暦の博士はからひ申してはべらむ日

八の宮が　乱暴なことのようだが　その宮のお積りも　取り壊すのも　あとに残られる姫君たちの先々をお考えになって　そうはお決めになれなかった　中の君　取りしきられるはずの所　たのかと思われます　ですから　匂宮　ご料地と言ってもいいことになりました　勝手にそうするわけにもいきますまい　場所柄も　川岸に近く　お堂に改め造ろうと考えたわけなのです　ましても　まことにご殊勝な功徳になるご存念です　長年の間　妻との死別を悲しんで　移して　（阿闍梨）いずれにいたし　お心が平静でいらせられぬというのも　み堂建立は後世安楽へのうながしにもなることなのでございます　修行の道にも入ったのでございます　よろし　くないことでございます　早速お指図通りにいたしましょう　勘案申して取り決められましょう吉日をいました

七　知識のある工人。寺院建築の作法に委しい、の意。
八　仏のお教えに従って。経典その他に説かれている諸仏の尊容や、その配置など、法式通りに。
九　宇治近くの薫の荘園。

弁の尼、亡き柏木、大君の思い出を語る

一〇　仏像。八の宮念持の本尊など。
一一　主要な建物をつなぐ建物。部屋もしつらえられる。
一二　二条の院。中の君のもと。

お伺いいたしまして
をうけたまはりて、七もののゆゑ知りたらむ工三人を賜はりて、こ
たくみ
まかなることどもは、八仏の御教へのままにつかうまつらせはべら
お仕事を進めさせることにいたし　今度の工
ます
む」と申す。あれこれと方針をお決めになって　とかくのたまひ定めて、御庄の人ども召して、このほ
みさう
事全般について
どのことども、阿闍梨の指図通りに取り計らうようにとの旨をお命じになる言はむままにすべきよしなど仰せたまふ。
いつの間にか　［山荘に］
はかなく暮れぬれば、その夜はとどまりたまひぬ。
これでもう見納めだろう
このたびばかりこそ見め、とおぼして、立ちめぐりつつ見たまへ
あちこちを回って
ば、一〇仏も皆かの寺に移してければ、阿闍梨の山寺　尼君の弁の尼の行ひの勤行の道具のみあり。いと
どうして暮して行くのだろう　いかに
もひっそりと　はかなげに住ひたるを、あはれに、いかにして過ぐすらむ、と見た
すま　しみじみと
まふ。（薫）「この寝殿は変へて造るべきやうあり。造り出でむほどは、
事情で建て替えることになりました　出来上がるまでは
かの廊にものしたまへ。京の宮にとりわたさるべきものなどあらば、
お住みなさい　一二　運んだ方がよいと思われる調度などがあるのなら
庄の人召して、あるべからむやうにものしたまへ」など、まめやか
しかるべくあなたが指図して下さい　実際的な仕事
をいろいろとお打ち合せになる
なることどもをかたらひたまふ。ほかにては、かばかりにさだ過ぎ
よそでなら　これほどまでに年老いた人を
たらむ人を、何かと見入れたまふべきにもあらねど、夜も近く臥せ
あれこれ目をかけて大事になさるはずもないのだが
て、昔物語などせさせたまふ。故権大納言の君の御ありさまも、聞
昔の思い出話　亡き柏木のご生前のことも

一　お生れになったばかりでおいでしたあなた様のお姿を。柏木は、出産のことを噂に聞いて知っていた。「めづらし」は、目新しい意で、誕生についていう。

二　ご生前に親しくお仕え申し上げておきましたその自然の功徳をこうむりましたものと。「かの御世」は、柏木の生前。弁の尼は、柏木の乳母子。「験」は、効験、きき目。

三　いろいろの悲しいことを。柏木、八の宮、大君の死など。「思ひたまへ知り」にもかかる。

四　たまにはお邸に参上してお目通りせよ、どうしているかも分らず宇治に引き籠りきりになっているのは、すっかり私を見限ってしまったのだろう。間接話法で言う。

五　西方極楽浄土に往生する人を阿弥陀如来がお迎えに来て下さるという来迎思想による。

六　花や紅葉の色をめでるにつけ、その時何げなくお詠みになった歌の思い出などを。「歌語り」は、歌にまつわる話。

七　話の中身にしっくりした語り口で、（年寄りらしく）声を震わせながらではあるが。下に「語るのを」に聞く人もいなくて安心なので く人なきに心やすくて、こまごまとしたことまで いとこまやかに聞こゆ。「今はとなりたま（弁尼）もうご最期も近くお ひしほどに、めづらしくおはしますらむ御ありさまを、何とか見たいものと気がかりにお思い申し上げていらしたらしいご様子などが思い出されますにつけましても なりでした頃に ものに思ひきこえさせたまふめりし御けしきなどの思ひたまへ出でらるるに、こんな思いもかけませぬ死に際になりまして かく思ひかけはべらぬ世の末に、こうしてお姿を拝することができまして かくて見たてまつりはべるなむ、かの御世にむつましくつかうまつりおきし験のおのづからはべりけると、うれしくも悲しくも思ひたまへられはべる。心憂き命のほどにて、情けない長生きのお蔭で さまざまのことを見たまへ過ぐし、今まで見てきまして 思ひたまへ知りましたことは りはべるなむ、いとはづかしく心憂くはべる。宮よりも、中の君 時々は参りて見たてまつれ、おぼつかなく絶え籠り果てぬるは、こよなく思ひ隔てけるなめり、など、仰せになって下さることが折々ございますが のたまはするをりをりはべれど、縁起でもない尼の身の上で ゆゆしき身にてなむ、阿弥陀仏よりほかには、お目にかかりたいお方もいなくなってしまいました 見たてまつらまほしき人もなくなりてはべる」など聞こゆ。亡き大君の御ことなるともう果てしもなく 故姫君の御ことどもはた尽きせず、しかじかの折にこうおっしゃったとか 年ごろの御ありさまなど語りて、何のをり何とのたまひし、花紅葉の色を見ても、はかなく詠みたまひける歌語りなどを、つきなから

というほどの意味を補う気持で読む。

八 おっとりとして、口数の少ないお人だったが。大君の人柄についての薫の回想。

九 匂宮の夫人。中の君のこと。

一〇 自分に対しては、どこまでも真情を尽した情愛深い態度で接して、このまま何とか付き合っていきたいとお思いのようだ。自分に対する中の君のやさしいあしらいを思ってもみる。

一一 前に「人形」とあった。『名義抄』に「像」「人形」を「カタシロ」と訓む。大君の身代りというほどの意。

八の宮の遺児の素姓

一二 京にこのところそういう人がいるという話は、私は存じません。八の宮の遺児なら京にいると考えるのが常識だからである。以下、最近上京したという人のことと思われると、その知るいきさつを語る。

一三 お話のお方は、私が人伝に伺っておりましたお方のことなのでしょう。

一四 北の方は中の君を産んで亡くなり（六巻橋姫二五六頁）、その後、宮邸焼亡により宇治に移った（同二六三頁）。

一五 身分いやしからぬ女房。

ず、うちわななきたれど、こめかしく言少ななるものから、風雅なおをかし人柄の方だったと感じ入る思いでかりける人の御心ばへかなとのみ、いとど聞き添へたまふ。宮の御方は、今すこし今めかしきものから、もっとあけひろげな性格ではあるものの心ゆるさざらむ人のためには、気を許せない相手に対しては取りつく島もないようなおあしらいをなさりかねないところがおありのようだがはしたなくもてなしたまひつべくこそものしたまふめるを、われにはいと心深く情々しとは見えて、いかで過ごしてむ、とこそ思ひたまへれ、など、心のうちに思ひくらべたまふ。

〔お二人を〕

何かのきっかけで

さてもののついでに、かの形代のことを言ひ出でたまへり。〔弁尼〕「京にこのころはべらむとはえ知りはべらず。人伝にうけたまはりしことの筋ななり。故宮の、亡き八の宮まだこうして宇治にお引き籠りでもなくまだかかる山里住みもしたまはず、故北の方の亡せたまへりけるほど近かりけるころ、中将の君とてさぶらひける上臈の、気立てなどもまんざらではなかった人を心ばせなどもけしうはあらざりけるを、〔八宮が〕いと忍びて、ほんのかりそめのお気持で情けをおかけになったのをはかなきほどにもののたまはせけるを、知る人もはべらざりけるに、ご自分のお子か女子をなむ産みてはべりけるを、さもやあらむ、と思い当られることがありとおぼすことのありけるからに、あいなくわづらはしくものしきやうにおぼしなりて、ましたものですからあいにくなことに迷惑にも目障りにもお思いになるようになって

一 何ですか、すっかりそのことにお懲りになって。「あいなく」は、そこまでお思いになることもあるまいに、というほどの気持。

二 それ以来というもの、どうやらご修行一途のお暮しになりになってしまわれましたので。

三 陸奥は、大国。守は、従五位上相当。

四 先年、上洛して。夫の任期が終ったのにともなって上京した趣。

五 このあたりにもそれとなく申してきましたのを。恐らく、昔の知合いの女房のもとにでも知らせてきたのであろう。

六 常陸の守。常陸も大国。常陸は親王の任国なので介が実務を見、これをも守といった。

七 一頃は。前に母親の中将の君から消息があったという在京中のことであろう。

その後二度とお目をかけられることもなかったのでございます

またとも御覧じ入るることもなかりけり。あいなくそのことにおぼし懲りて、やがておほかた聖になりたまひにけるを、はしたなく思ひて、えさぶらはずなりにけるが、陸奥の守の妻になりたりけるを、一年のぼりて、その君たひらかにものしたまふよし、

なく思って　お仕えもできずお暇を取りましたあと　[中将君は]身の置き所　その姫君がご無事にご成長になっていることを　[八宮が]お耳になさって　決してこのよう

りにもほのめかし申したりけるを、聞こしめしつけて、さらにかかる消息あるべきことにもあらずと、のたまはせ放ちければ、かひなくてなむ嘆きはべりける。さてまた常陸になりて下りはべりにけるが、この年ごろ音にも聞こえたまはざりつるが、この春のぼりて、

便りなどしてはならぬと　きつく仰せになりましたので　それから　ここ数年噂にも姫君のことはお聞きしませんでしたが　[京に]

二条の院　お伺い申し上げたと　ちらりと

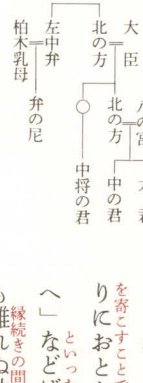
かの宮には尋ね参りたりけるとなむ、ほのかに聞きはべりし。かの君の年は、二十ばかりにはなりたまひぬらむかし。いとうつくしく生ひ出でたまふがかなしき、などこそ、中ごろは、文にさへ書き続けてはべめりしか」と聞こゆ。

育ちでいられるのがおいたわしい　大層おかわいらしく　手紙にまでくどく書いていたようでございます

[薫は]何もかもはっきりお聞きになって　それなら間違いのないことなのだろう

会ってみたいという気持になってきた　[薫]亡き人のご様子に　少しでも似ている人がいたら

見ばやと思ふ心出で来ぬ。「昔の御けはひに、かけても触れたらむ



八 中将の君。

九 弁の尼の自称。なお弁の尼の素姓については六巻椎本三三四頁参照。

一〇 その当時は別々の所におりまして。中将の君が八の宮の姫君を生んだのはほぼ二十年前。当時、弁の尼は九州にいたであろう（六巻橋姫二九六～七頁参照）。

一一 中の君づきの女房。（二一三頁注一二参照）

一三「さや」は「さやう」。（一五一頁注四参照）

一三 昨夜、あとから宇治にお運びして来た絹や綿といったものを。

一四 阿闍梨の山寺の僧たち。

一五 麻や葛で織った白布。このあたり、「贈る」「賜ふ」「賜ぶ」と、相手の身分の上下による言葉の使い分けが見られる。

薫と弁の尼の唱和

人は、知らぬ国までも尋ね知らまほしき心あるを、数まへたまはざりけれど、気近き人にこそはあなれ。わざとはなくとも、このわたりにおとなふをりあらむついでに、かくなむ言ひし、と伝へたまへ」などばかりのたまひおく。「母君は、故北の方の御姪なり。弁も離れぬ仲らひにはべるべきを、そのかみはほかほかにはべりて、くはしくも見たまへ馴れざりき。さいつころ京より、大輔がもとより申したりしは、かの君なむ、いかでかの御墓にだに参らむと、のたまふなる、さる心せよ、などはべしかど、まだここに、さしはへてはおとなはずはべめり。今、さらば、さやのついでに、かくる仰せなど伝へはべらむ」と聞こゆ。

明けぬれば帰りたまはむとて、昨夜後れて持て参れる絹綿などやうのもの、阿闍梨に贈らせたまふ。尼君にも賜ふ。法師ばら、尼君の下衆どもの料にとて、布などいふものをさへ、召して賜ぶ。心細き住ひなれど、かかる御とぶらひたゆまざりければ、身のほどには

知らない異国までも探しに行きたいという気持なのだが
[八宮は] お認めにはならなかったけれども
近いお血筋の人と申すべきだ
わざわざではなくても
こちらに便りを寄こすことでもあればその折に
私がこう言っていた
といった程度に頼んでお聞きになる（弁尼）八
縁続きの間柄のはずでございますが
先だって
親しく付き合うこともありませんでした
その姫君が
せめてお参りしたいと仰せのようですから
その積りでおれ
などということでしたが
特に便りもないようでございます
そのうち
こうしたお言葉などを
弁の尼
取り寄せて
こうしたお見舞の品々が常々あったので
[弁尼は] 身分の割には暮しだがこうしたお言

一 もの静かな暮しぶりで勤行に励むのだった。生活の雑念にわずらわされることのない有様。

二 「秋は来ぬ紅葉は宿に降り敷きぬ道踏み分けて訪ふ人はなし」（『古今集』巻五秋下、題しらず、読人しらず）による措辞。

三 前に「蔦」とあり、蔦の一種と思われる。『枕草子』草は段に「こだに」と見える。

四 中の君へのお土産のお積りらしく。

五 前にここに泊ったことがあると思い出さなかったなら、この深山木のもとの旅寝もどんなにさびしかったことであろう。「宿木」（ここは前文にあるように蔦のこと）に「宿りき」を掛ける。巻名出所の歌。

六 特に弁の尼に詠みかけたのでもない、独詠の趣。

七 荒れ果てた朽木のもとを、前に泊ったことがあると覚えていて下さるにつけても悲しゅうございます—亡き姫君のことが思われまして。「朽木」は、尼になってこの山里に隠れ住む自分をいう。

八 二条の院の中の君。

九 蔦の紅葉。先ほどの「こだになど」。

一〇 匂宮。

一一 薫の邸、三条の宮。薫の側からは、二条の院は「北の院」と呼ばれていた（一六七頁）。

一二 いつものように面倒なことが書いてあったらどうしようと。「もこそ」は、

薫、中の君に蔦を贈り、寝殿移築の了解を求める

いかにもこざっぱりと
いとめやすく、しめやかにてなむ行ひける。木枯の堪へがたきまで
吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を、踏み分け
足跡　風情の
るあとも見えぬを見わたして、とみにもえ出でたまはず。いとけし
ある　すぐお帰りになる気にもなれない
きある深山木にやどりたる蔦の色ぞまだ残りたる。こだになどすこ
這い掛っている　赤く
し引き取らせたまひて、宮へとおぼしくて、持たせたまふ。
従者に　お持たせになる
（薫）やどりきと思ひいでずは木のもとの
旅寝もいかにさびしからまし
弁の尼
とひとりごちたまふを聞きて、尼君、
（弁尼）荒れ果つる朽木のもとをやどりきと
思ひおきけるほどの悲しさ
昔のゆかりを偲ばせる点を　多少の取柄はあると心の慰
どこまでも古風な詠みぶりだが
あくまで古めきたれど、ゆゑなくはあらぬをぞ、いささかのなぐさ
む思いがなさるのだった
めにはおぼしける。
宮に紅葉たてまつれたまへれば、男宮おはしましけるほどなりけ
何げなく
り。「南の宮より」とて、何心なく持て参りたるを、女君、例のむ

危懼の気持をあらわす。
一三 今さら取り隠せるはずもないことだ。草子地。
一四 皮肉っぽい言い方をなさって。厭味たっぷりに言う趣。
一五 近頃、ご機嫌いかがでいらっしゃいましょうか。手紙の冒頭のきまり文句（早蕨一二六頁注一参照）。
一六 いつもにまして峰の朝霧の深さに晴れぬ悲しみの数々を味わい尽しましたお話も、いずれお目にかかりまして申し上げましょう。「雁の来る峰の朝霧晴れずのみ思ひ尽きせぬ世の中の憂さ」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、読人しらず）による措辞。
一七 しかるべきお指図はなさって下さい。弁の尼にも「京の宮にとりわたさるべきものなどあらば、……」（二二九頁）と言っていた。
一八 私がこちらにいると聞いた上でのことでしょう。「まろ」は親しい間同士で使う自称の代名詞。
一九 多少は、確かに宮のおっしゃる通りでもあったのでしょう。草子地。
二〇 匂宮が無理にも難癖をつけてこんなふうにおっしゃるのを、ひどいとお思いになって、怨めしそうな面持でいらっしゃるご様子は、どんな過ちがあっても大目に見てあげられそうなほどかわいらしい。
二一（わざと）よその方に顔を向けていらっしゃる。
二二 調子に乗って。いつまでも匂宮を怨むようなすねた態度をとって、の意。

つかしきこともこそと、苦しくおぼせど、取り隠さむやは。宮、（匂宮）「をかしき蔦かな」と、ただならずのたまひて、召し寄せて見たまふ。御文には、

（薫）日ごろ何ごとかおはしますらむ。山里にものしはべりて、いとど峰の朝霧にまどひはべりつる御物語も、みづからなむ。かしこの寝殿、堂になすべきこと、阿闍梨に言ひつけはべりにき。御ゆるしはべりてこそは、ほかに移すこともものしはべらめ。弁の尼に、さるべき仰せ言はつかはせ。

（匂宮）よくもまあさりげなくお書きになった手紙ですね
などぞある。「よくもつれなく書きたまへる文かな。まろありとぞ聞きつらむ」とのたまふも、すこしは、げにさやありつらむ。女君は、ことなきをうれしと思ひたまふに、あながちにかくのたまふを、わりなしとおぼして、うち怨じてゐたまへる御さま、よろづの罪もゆるしつべくをかし。「返りこと書きたまへ。見じや」とて、ほかざまに背きたまへり。あまえて書かざらむもあやしければ、

（匂宮）返事を
見ませんよ
返事を書かないのも変な具合なので

迷惑にお思いになるが
きれいな
宇治に行ってまいりまして
お取り寄せになって
依頼してまいりました
ご承諾を
〔寝殿を〕よそに移す仕事にもかかることにいたします
得ましてから
何でもない手紙だったのでほっとなさったのに

一 寝殿は、仰せのように、お寺にするのが一番よいことと存じておりましたが。「さや」は「さやう」（一五一頁注四参照）。

二 わざわざ、ほかに山奥の隠れ処を探したりいたしますよりは、（あそこを）荒らしてしまわないようにと思っておりますので。「いかならむ巌の中に住まばかは世の憂きことの聞こえこざらむ」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、読人しらず）による。

三 ご自分が浮気なご性分なだけに、何もないはずはあるまいとお思いになるので、心中おだやかならぬものがおありなのだろう。草子地。

四 庭前の植込み。以下の光景、源氏物語絵巻に図画されている（図録四参照）。

五 穂の出たすすき。

六 露を身に帯びて、弱々しげに風になびいている風情など。露を玉に見立てて、露を帯びたすきを玉の緒と言い、「玉の緒」は歌語として命の意味があるので、命はかなげに、という気持で、下に言い続ける。

七 表には現さない何か悩みでもおありのようですね、露にうちしおれて人恋しげなすすきの風情さながらですよ。薫のことを諷する。「しのすすき」はすすきをいう歌語。「秋の野の草の袂か花すすき穂に出でて招く袖と見ゆらむ」（『古今集』巻四秋上、在原棟梁）

八 柔らかく身に添う感じの袿（下着）の上に。

九 指貫を着けないくつろいだ姿。

匂宮と中の君、秋の前栽を前に、琵琶、箏を合奏

（中君）宇治へのお出掛けとはうらやましく存じられます山里の御ありきのうらやましくもはべるかな。一 かしこはげに、さやにてこそよく、と思ひたまへしを、二 ことさらにまた巌の中もとめむよりは、荒らし果つまじく思ひはべるを、いかにもさるべき（どのようにでも適当にご処置いただけますならば）さまになさせたまはば、（ありがたく存じます）おろかならずなむ。

と聞こえたまふ。（こうした咎め立てすることもないお付合いなのだろう）かく憎きけしきもなき御むつびなめり、（匂宮は）と見たまひながら、三 わが御心ならひに、ただならじとおぼすが、やすからぬなるべし。

枯れ枯れなる前栽四のなかに、尾花五の、（ほかの草より際立って）ものよりことにて手をさし出でて招くがをかしく見ゆるに、まだ穂に出でさしたるも、（穂に出きらないでいるのも）露をつらぬきとむる玉の緒六、はかなげにうちなびきたるなど、（やはり心に沁みる季節なのだった）例のことなれど、夕風なほあはれなるころなりかし。

（匂宮）穂にいでぬもの思ふらししのすすき七

招くたもとの露しげくして

なつかしきほどの御衣八どもに、直衣九ばかり着たまひて、琵琶を弾き

一〇 雅楽の六調子の一。黄鐘（洋楽のaに近い）を主音とする律旋音階。

一一 調子を整えるための短い曲。各調子に一つずつある。

一二 中の君も琵琶には興味をお持ちのこととて。橋姫の巻の薫の垣間見の場面でも、中の君は琵琶を弾いていた（六巻橋姫二七五頁参照）。

一三 身近に置く丈の低い几帳。三尺の几帳であろう。

一四 もう私がすっかり嫌いになったあなた様のお気持は、それとないそぶりでも私には分ります。「秋果つる」に「飽き果つる」を掛ける。

一五 「おほかたのわが身ひとつの憂きからになべての世をもうらみつるかな」（『拾遺集』巻十五恋五、題しらず、貫之）。わが身の不仕合せから、秋の哀れもひとしお身に沁みます、というほどの気持であろう。

一六 「是花の中に偏に菊を愛するのみにあらず　此の花開けて後更に花の無ければなり」（『和漢朗詠集』巻上、菊、元稹）

一七 『河海抄』に、西の宮の左大臣（源高明）の庭前の樹に霊物が降り、前に遊ぶ小児に憑いて、前注の詩を吟じて作者の本意は「開後」ではなく「開尽」であると教え、琵琶を執って秘曲を授けた、それは廉承武の霊で、曲は上元、石上、流泉の曲だった、という話を載せるが、本文に見えるところと細部に合わない点がある。類話は『源氏釈』『紫明抄』『江談抄』『古今著聞集』『十訓抄』に見える。

みたまへり。黄鐘調の掻き合はせを、いとあはれに弾きなしたまへば、女君も心に入りたまへることにて、もの怨じもえし果てたまはず、小さき御几帳のつまより、脇息に寄りかかりて、ほのかにさし出でたまへる、いと見まほしくらうたげなり。

（中君）「秋果つる野べのけしきもしのすすき
ほのめく風につけてこそ知れ

わが身ひとつの」とて涙ぐまるるが、さすがにはづかしければ、扇をまぎらはしておはする心のうちも、らうたくおしはからるれど、かかるにこそ人もえ思ひ放たざらめと、疑はしきかたただならで、うらめしきなめり。

菊の、まだよくもうつろひ果てで、わざとつくろひたてさせたまへるは、なかなかおそきに、いかなる一本にかあらむ、いと見所ありてうつろひたるを、取り分きて折らせたまひて、「花のなかにひとへに」と誦じたまひて、「なにがしの皇子の、この花めでたる夕

しみじみとした感じにお弾きになるので
いつまでもお怨みになりきれず
端
もっとよく見たいと思われるほどかわいらしい
せていられるのが
ちらりと顔をのぞか
きまり悪いので
扇
[句宮には]可憐なお人柄よと思われるけれども
で顔をさし隠していらっしゃる恥じらいの気持も
こんなふうだから薫もほっておく気になれないのだろうと
どうしても疑惑が強く持たれて
女君が怨めしいのであろう
十分に色変りもしきれないで
念入りに手入れをさせていらっしゃるここ
のお庭のは
かえって遅れているのに
とても美しく色
特別に
変りしているのを
吟詠なさって
(句宮)一七
(句宮)一六

一 何ごとも浅はかになってしまった末の世では、弾く気にもならないことです。昔は名人上手がいたので、天人が天降って秘曲を伝えるような奇瑞もあったのだと言う。

二 今の人の心は浅はかでもありましょうが、昔の名人上手からそのまま伝えたでありましょう弾き方までが、どうしてそんなに劣ることがありましょう。

三 十三絃の琴。

四 昔でしたらお習いするお方もいらっしゃいましたが。亡き八の宮のこと。

五 近頃私の行くあたりでは。六の君のこと。「見る」は逢うというほどの意。

六 まだ未熟な習いたてのお稽古ごとでも私には隠しだてをしませんよ。「初ごと」は、あるいは「初琴」とも見られる（四巻初音一六頁注九参照）。

七 それ、あなたの好きな中納言（薫）も、いつか言っていたようです。

ぞかし、いにしへ天人の翔りて、琵琶の手教へけるは。何ごとも浅くなりにたる世はもの憂しや」とて、御琴さし置きたまふを、くちをしとおぼして、「心こそ浅くもあらめ、昔を伝へたらむことさへは、などてかさしも」とて、おぼつかなき手などをゆかしげにおぼしたれば、「さらば、ひとりごとはさうざうしきに、さしいらへしたまへかし」とて、人召して箏の御琴とり寄せさせて、弾かせたてまつりたまへど、「昔こそまねぶ人もものしたまひしか、はかばかしく弾きもとめずなりにしものを」と、つつましげにて手も触れたまはねば、「かばかりのことも隔てたまへるこそ心憂けれ。このころ見るわたりは、まだいと心解くべきほどにもあらねど、かたなりなる初ごとをも隠さずこそあれ。すべて女は、やはらかに心うつくしきなむよきこととこそ、その中納言も定むめりしか。かの君には、かくもつつみたまはじ、こよなき御仲なめれば」など、まめやかに怨みられてぞ、うち嘆きてすこし調べたまふ。ゆるびたりけれ

曲 心残り 下にお置きになるのを なことと思いで 中君 二 まだよく知らない曲などを聞きたそうにお思いの様子なので 包宮 ひとりで弾くのではつまらないから 三 相手をなさって下さい 中君に 四 恥ずかしがって しっかり弾けるところまではゆかずにしまいましたのに 包宮 こんなことにまで私に他人行儀になさるところが 情けない 五 すっかりとうちとけるほどでもありませんが 六 素直で 人に逆らわないのがよいことなのだと 七 この上もない仲良しのようだからこんな遠慮もなさらぬのでしょうては 真剣な面持で 中君は 溜息をついて お弾きになる 絃が

八　盤渉（洋楽のhに近い）を主音とする律旋音階。

九　盤渉調の掻き合せ。（一三三七頁注一一参照）

一〇　催馬楽、律「伊勢の海」。「伊勢の海の　清き渚に　しほかひに　なのりそや摘まむ　貝や拾はむや　玉や拾はむや」

一一　宇治からついて来た年老いた女房たちであろう。五行先に、対して「若き人々は」とある。

一二　よそ様にもお通いなのはつれないお仕打ちですが。六の君のこと。

一三　やはりご主人様（中の君）は運のよいお方と申さねばなりませぬ。

一四　御物忌などと口実をお設けになるのを。物忌の時は他出を憚るので、六の君のもとに通わぬ口実にする。

一五　あちらのお邸。六条の院の右大臣家。

一六　夕霧。

一七　仰々しい有様で、何しにお出でになったというのか。参内姿でお供も多いのを諷する。「とよ」は強め。

一八　寝殿であろう。

一九　昔の思い出話。六条の院落成前は父源氏の私邸だったし、父源氏とともに紫の上の死を見送ったのもここである。

匂宮、三四日滞在
夕霧、迎えに来る

ば、盤渉調（調子をお合せになる）にあはせたまふ。搔き合はせなど、爪音（つまおと）をかしげに聞こゆ。伊勢の海歌ひたまふ（匂宮の）御声のあてにをかしきを、女ばらも、（几帳なもの）のうしろに近づき参りて、笑みひろごりてゐたり。（女房）「一心（ふたごころ）おはしますはつらけれど、それもことわりなれば、なほわが御前をば、幸（さいはひ）人とこそ申さめ。かかる（このように立派な奥方様として世にお立ちになるなど夢にも思われません）御ありさまにまじらひたまふべくもあらざりし年ごろの御住ひを、また帰りなまほしげにおぼしてのたまはするこそ、いと心憂けれ」など、ただ言ひに言へば、若き人々は、「あなかまや」など制す。

（どの物陰に）（相好を崩して喜んでいる）（仕方のないことですから）（お帰りになりたそうにお思いでお頼みになったりなさるのは）（でした長年の山里のお住いを）

御琴ども教へたてまつりなどして、三四日籠りおはして、御物忌（中君に）（二条院に）などことづけたまふを、かの殿にはうらめしくおぼして、大臣、内裏より出でたまひけるままに、ここに参りたまへれば、宮、「ことことしげなるさまして、何しにいましつるぞとよ」とむつかりたまへど、あなたにわたりたまひて対面したまふ。「ことなることなきほどは、この院を見で久しくなりはべるもあはれにこそ」など、昔

（退出なさったその足で）（二条の院）（女房たち）（ずけずけ言うので）（ほんとに情けないこと）（まあお黙りあそばせ）（ご機嫌斜めでおいで）（格別の用事もありません）（見ることもなくて久しくなりましたのも感無量です）（でしたので）

の御物語どもすこし聞こえたまひて、やがて引き連れきこえたまひて出でたまひぬ。一御子どもの殿ばら、さらぬ上達部殿上人なども、いと多くひき続きたまへる勢こちたきを見るに、二並ぶべくもあらぬぞ屈じいたかりける。人々のぞきて見たてまつりて、「さもきよにおはしける大臣かな。さばかりいづれとなく、若く盛りにてきよげにおはさうずる御子どもの、似たまふべきもなかりけり。あなめでたや」と言ふもあり。また、「さばかりやむごとなげなる御さまにて、わざと迎へに参りたまへるこそ憎けれ。三やすげなの世の中や」などうち嘆くもあるべし。四御みづからも、来し方を思ひ出づるよりはじめ、かのはなやかなる御仲らひに立ちまじるべくもあらず、かすかなる身のおぼえをと、いよいよ心細ければ、なほ心やすく籠りゐなむのみこそ目やすからめ、など、いとどおぼえたまふ。はかなくて年も暮れぬ。

正月晦日がたより、五例ならぬさまになやみたまふを、宮まだ御覧

そのまま［匂宮を］お連れ申し上げなさって　その他の　かむだちめ　てんじやうびと　威勢の盛んなのを見ると　女房たち　（女房）ほんとにお美し　お綺麗　あれほどどなたも劣りまさりなくていらっしゃる　肩を並べられる方もいらっしゃいません　何とご立派な　（女房）あれほどのご威勢盛んなお身の上でありながら　わざわざお迎えにお見えになるなんていやなお方ですこと　中の君ご自身も心配する者もいるようだ　あちらの今を時めくご一族に肩を並べてお付合いできるはずもない　やはり気楽に宇治に引き籠ってしまうことだけが無難な道だろう　一層思いをお深めになる　何ごとも　月末の頃から　匂宮　ご経験

一　夕霧には六人の子息がいる。（六巻付録三五六頁系図参照）

二　こちらは、とても敵うはずもないのが、情けない限りなのだった。中の君方の気持。「屈じ」は「屈し」の促音を「ん」と表記したもの。「いたし」は、甚だしい意。

三　お方様もご油断なりませんわ。「世の中」は、夫婦仲の意。中の君が六の君におされはせぬかと心配する。

四　昔からのことを思い出すのをはじめとして。宇治での暮し以来のことを思うのである。

新年、正月末、中の君の出産近づく

五　中の君は、お具合が悪くお苦しみになるのを。出産も近づいた様子。

六　安産祈願のための密教の祈禱。

七　母の明石の中宮。匂宮の第一子の出産である。

八　こうしてもう三年になったけれども。中の君が二条の院に移ってから三年と読める。この年（宿木の第三年）を、中の君が二条の院に移った早蕨の春の翌年とするのが現行年立の処理であるが、それでは二条の院移転から足掛け二年にしかならない。この第三年をもう一年あとにずらしてはじめて足掛け三年という計算になる。諸注、匂宮が宇治に通うようになった総角の秋以来足掛け三年と見るが、無理であろう。

女二の宮の裳着近づく

九　そう度々お伺いなさるわけにもゆかず。

一〇　一五二頁注三参照。薫との結婚を前提としてのこと。

一一　なまじ母女御方の有力なお世話役のいらっしゃらないのが、かえって結構なことのように見えるのだった。

一二　禁中の調度類を調進する所。蔵人所の被管。

一三　しかるべき受領（国司）たち。母方に縁故のある者たちもいよう。その富裕な財力に奉仕させる。

じ知らぬことにて、いかならむとおぼし嘆きて、御修法など、所にてあまたせさせたまふに、またまたはじめ添へさせたまふ。いといたくわづらひたまへば、后の宮よりも御とぶらひあり。かくて三年になりぬれど、一所の御心ざしこそおろかならね、おほかたの世には、ものものしくももてなしきこえたまはざりつるを、このをりぞ、いづこにもいづこにも聞こしめしおどろきて、御とぶらひども聞こえたまひける。

（のないことなので　どうなることかとご心配になって　寺々で数多くさせていらっしゃる上に　ほかにもまた加えてはじめさせなさる　お見舞がある　匂宮お一方のご愛情は並々ならぬものの　世間一統では　この時に　〔中君を〕重々しくもお扱い申し上げていらっしゃらなかったのだが　どちらでもどちらでもお産のことを耳にして気持をお変えになって　あちこちからお見舞い申し上げなさるのだった）

薫　中納言の君は、宮のおぼし騒ぐに劣らず、いかにおはせむと嘆きて、心苦しくうしろめたくおぼさるれど、限りある御とぶらひばかりこそあれ、あまりもえ参でたまはで、忍びてぞ御祈りなどもせさせたまひける。さるは、女二の宮の御裳着、ただこのころになりて、世の中響きいとなみののしる。よろづのこと、帝の御心ひとつなるやうにおぼしいそげば、御後見なきしもぞ、なかなかめでたげに見えける。女御のしおきたまへることをばさるものにて、作物所、さ

（匂宮がご心痛になるのにも　どうおなりになることかと心配し　一通りのお見舞くらいはなさるもので　おいたわしく不安にお思いになるけれども　ご祈禱　その一方　もうすぐ近くに迫って　世間はその噂にもっぱらで支度に大騒ぎする　父帝のご一存で計らうかのように支度にご熱心なので　母女御がご生前にしておかれたお支度はもちろんのこと）

一 いつもの（薫の）ご性分ゆえ。
二 除目（官吏任命の儀）の後、召名（任官名簿）の失錯を正す名目で行われる任命の儀。
三 員外の大納言。「大納言」は、太政官で大臣に次ぐ要職。正三位相当。
四 右近衛府の長官。従三位相当。
五 右大臣、夕霧。以下、夕霧が兼任の左大将を辞し、右大将が左に転じたその空席という趣。
六 昇進のお礼言上に諸所を訪問する儀礼。
七 中の君のもと。西の対。
八 僧など伺候していて不都合な所ですのに。修法に奉仕する僧たちが詰めているのである。
九 直衣（平常着）に下襲（長く裾を引く。本来束帯の時着ける）を加えてやや改まった直衣布袴姿（五巻図録三参照）。束帯姿の薫に匂宮も略礼装で答える。
一〇 主人として、南階より庭上におりて、拝舞の礼をお返しになる。拝舞は、一定の荘重で優雅な作法がある（一巻桐壺三七頁注二〇参照）。
一一 右大将新任の披露の宴。右近衛府の中少将、将監以下の下僚を招いて禄を賜る。この時、親王、公卿も招待される。
一二 夕霧。夕霧の右大臣新任の大饗が六条の院で行われたのになって、という文意。ただしこの大饗のことは物語に見えない。

二月はじめ、薫、権大納言兼右大将に昇進

るべき受領どもなど、とりどりにつかうまつることども、いと限りなし。やがてそのほどに、参りそめたまふべきやうにありければ、男方も心づかひしたまふころなれど、例のことなれば、そなたざまには心も入らで、この御ことのみいとほしく嘆かる。

きさらぎの朔日ごろに、直物とかいふことに、権大納言になりたまひて、右大将かけたまひつ。右の大殿、左にておはしけるが、辞したまへる所なりけり。よろこびに所々ありきたまひて、この宮にも参りたまへり。いと苦しくしたまへば、こなたにおはしますほどなりければ、やがて参りたまへり。僧などさぶらひて便なき方に、とおどろきたまひて、あざやかなる御直衣、御下襲などたてまつり、ひきつくろひたまひて、下りて答の拝したまふ御さまどもとりどりにいとめでたく、「やがて、官の禄賜ふ饗の所に」と、請じたてまつりたまふを、なやみたまふ人によりてぞ、おぼしたゆたひたまふめる。右大臣殿のしたまひけるままにとて、六条の院にてなむあり

数限りもない
それぞれに奉仕申し上げるお支度の品々は
引き続き裳着の儀のあと
婚君として参上なさるようにとの帝のご内意だったので
ご婚儀の方には
婚方もいろいろ気を使われるこの頃なのだが
中の君のことばかりがおいたわしく心配される
気乗りもせずに
兼任なさった
左大将兼任でいらしたのが
辞任なさったその空席なのだった
諸方をおめぐりになって
二条の院
[中君が] ひどくお具合が悪いので
[匂宮が]
[薫は] そのまま参上なさった
すっきりした
[匂宮は]
威儀をお正しになって
お二人のお姿はそれぞれに大層すばらしくて
(薫) これから
お具合の悪い中の君のことが気がかりで
[匂宮は] 出席をおためらいになるようだ
お召しになり
お招待申し上げなさるが

一三 饗宴の時の相伴役。
一四 大臣新任の時の披露の宴。（図録七、八参照）
一五 気が気でないので。中の君の出産も間近なので、気もそぞろの体。
一六 右大臣方では。六の君方のこと。匂宮がせっかく六条の院に顔を見せながら、同じ邸内の六の君を訪れず、二条の院に帰ったのを不満とする。
一七 中の君とて（八の宮の姫君なのだから）六の君にひけを取るはずもないご身分なのに。以下、草子地。
一八 しごくご満足に。女児でなく男児であったことを喜ぶ。
一九 着座せずに、ご挨拶に参上した。お産の穢れに触れない用意（『細流抄』）。
二〇 出産後、三夜、五夜、七夜、九夜に、近親、縁者から産婦の食事や祝いの品を贈り、産婦側で宴を催す。
二一 例によって、ただ宮家としての内々のお祝いで。
二二 強飯を卵形に握り固めたもの。下々への馳走。
二三 碁の賭物にする銭。
二四 椀に盛った飯に料理を添えたもの。
二五 産婦（中の君）の召し上がり物。
二六 折敷に台を取り付けた形のもの。食事を載せる。（五巻図録七参照）
二七 赤子のお召し物、五枚一揃え。産着である。
二八 小児用の衾（掛け布団）。

中の君、男子出産、産養の儀

ける。垣下の親王たち上達部、大饗に劣らず、あまり騒がしきまでなむつどひたまひける。この宮もわたりたまひて、静心なければ、まだ事果てぬに急ぎ帰りたまひぬるを、大殿の御方には、「いと飽かずめざまし」とのたまふ。劣るべくもあらぬ御ほどなるを、ただ今のおぼえのはなやかさにおぼしおごりて、おしたちもてなしたまへるなめりかし。

からうしてその暁に、男にて生まれたまへるを、宮もいとかひありてうれしくおぼしたり。大将殿も、よろこびに添へて、うれしくおぼす。昨夜おはしましたりしかしこまりに、やがてこの御よろこびもうち添へて、立ちながら参りたまへり。かく籠りおはしませば、参りたまはぬ人なし。御産養、三日は、例のただ宮の御私事にて、五日の夜は、大将殿より屯食五十具、碁手の銭、椀飯などは、世の常のやうにて、子持の御前の衝重三十、児の御衣五重襲にて、御襁褓などぞ、ことことしからず、忍びやかにしなしたまへれど、

匂宮
大勢お集まりだった
匂宮
宴も終らないうちに
ないあきれたお仕打ちだ
尊大な態度をおとりになられるの
って現在の世間の声望がきらびやかなのに思い上がられて
でしょう
匂宮
宮がご出席下さったお礼言上に
自分の昇進の喜びに加えて
同時に中の君ご出産のお祝い
薫
お祝いに参上なさらぬ人はいない
[匂宮が]
薫
内輪ごとのようになさったけれども
大げさでなく

一 沈香の一種。水に沈まず香気が浅いという。
二 片木で製した四角い盆。（五巻図録七参照）
三 高い一本脚の付いた台。（同右参照）
四 「粉熟は、五穀を五色にかたどりて粉にして餅になしてゆでて、甘葛をかけてこね合はせて、細き竹の筒をしてその中にかたく押し入れてしばし置きて、つき出でて、その姿双六の調度のごとくまなぶなり」（『花鳥余情』）
五 檜の薄板で作った折り箱。仕切りを作って食物を入れる。（二巻図録一二参照）
六 明石の中宮。
七 中宮職（中宮づきの役所）の長官。従四位下相当。
八 太刀。若君のお守り刀のお積りであろう。
九 右大臣夕霧。夕霧の肝煎りで祝う趣。
一〇 夕霧のご子息たちなど。
一一 （中の君が）お子様まで出来てもうすっかり大人びてしまわれたようだから。以下、薫の心中。

こまかに見れば、わざと目馴れぬ心ばへなど見えける。宮の御前にも浅香の折敷、高坏どもにて、粉熟参らせたまへり。女房の御前には、衝重をばさるものにて、檜破籠三十、さまざまし尽くしたることどもあり。人目にことことしくは、ことさらにしなしたまはず。七日の夜は、后の宮の御産養なれば、参りたまふ人々いと多かり。宮の大夫をはじめて、殿上人上達部、数知らず参りたまへり。内裏にも聞こしめして、「宮のはじめておとなびたまふなるには、いかでか」とのたまはせて、御佩刀たてまつらせたまへり。九日も、大殿よりつかうまつらせたまへり。よろしからずおぼすあたりなれど、宮のおぼさむところあれば、御子の君達など参りたまひて、すべていと思ふことなげにめでたければ、御みづからも、月ごろもの思はしくここちのなやましきにつけても、心細くおぼしたりつるに、かくおもだたしく今めかしきことどもの多かれば、すこしなぐさみもやしたまふらむ。大将殿は、かくさへおとなび果てたまふめれば、

（特別に）（目新しい趣向なども見えるのだった）（匂宮）（子の親におなりだというのだから）（ぜひに）（奉仕させなさった）（おもしろくなくお思いのお方のことだけれども）（万事につけ何の思いわずらうこともないすばらしさなので）（中の君ご自身も）（この幾月もの間悩みが絶えず身体の具合が悪かったにつけても）（先行きを不安にお思いだったのが）（こう）（した晴れがましいはなやかなことが次から次へと続くので）（多少は心も晴れやかにおなりでもあろうか）（薫）

一二 今までより一層、自分の方にはよそよそしくなるだろうか。
一三 しかしまた、最初からの自分の心積りを考えてみると。中の君の後見役として、匂宮に縁づけたこと。

二月二十日過ぎ、女二の宮の裳着、婚儀

一四 女二の宮。母女御の御殿だった藤壺がその居所。
一五 その夜のことは内々のお扱いだった。河内本と、別本の多く「その夜のことは」。
一六 世間一統の評判になっていかにも盛大に見えた帝のお心入れだったのに。前に裳着の準備について「世の中響きいとなみののしる」（二四一頁）とあった。
一七『花鳥余情』に、嵯峨天皇皇女潔姫と良房、宇多天皇皇女順子と忠平、醍醐天皇皇女勤子と師輔、同雅子と師輔、同康子と師輔、同靖子と師氏、同韶子と源清蔭（後、橘惟風）、村上天皇皇女保子と兼家、同盛子と顕光の諸例（以上、『花鳥余情』の誤りは訂して示した）を挙げた上で、在位中の確かな例は潔姫のみで、あとは譲位後あるいは崩御後のことだという。
一八 全く類いも稀な、薫のおおぼえ、運勢のめでたさだ。
一九 亡き六条の院（光源氏）でも。
二〇 その事情は若菜上の冒頭にくわしい。

二一 いとどわが方ざまは気遠くやならむ、それに匂宮のご愛情もいかにも並々ならぬまた宮の御心ざしもいとおろかならじ、ものがあろうと思ふはくちをしけれど、残念でならないが一三またはじめよりの心おきてを思ふには、いとうれしくもあり。

二月

かくてその月の二十日あまりにぞ、一四藤壺の宮の御裳着のことありて、その翌日またの日なむ大将参りたまひける。夜のことは忍びたるさまなり。一五天の下響きていつくしう見えつる御かしづきに、一六ただ人の具し薫

お添い申し上げなさるのはたてまつりたまふぞ、やはり不足なこととおいたわしく見えるなほ飽かず心苦しく見ゆる。「さる御ゆるし父帝としてお許しの臣下の者が婿としてご意向があったとはいえはありながらも、今の今このようにお急ぎあそばすにも及ばぬことだただ今かくいそがせたまふまじきことぞかし」と、非難がましく思って口に出しておっしゃる人もいたけれども〔帝は〕思い立たれたことはそしらはしげに思ひのたまふ人もありけれど、おぼし立ちぬること、てきぱき事をお運びになるご気性なので今までにも前例のないほどにすがすがしくおはします御心にて、来し方のためしなきまで、同じどうせなら立派な扱いをしようと考えておいでのようだくはもてなさむと、一七おぼしおきつるなめり。帝の御婿になる人は、まるで臣下のように昔も今も多かれど、かく盛りの御世に、ご在位中にただ人のやうに、婿取りい婿を取るのをお急ぎになったような例はそがせたまへるたぐひは、少なかったのではなかろうかすくなくやありけむ。夕霧右の大臣も、一八「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。一九故院だに、二〇朱雀院の御末に

一 薫の母宮。女三の宮。
二 私などは、なおさらなこと、誰も承知しないあなたをどうにか手に入れたような始末だ。話し相手は次の文によって落葉の宮であることが分る。柏木の未亡人である落葉の宮を強引に手に入れたいきさつは夕霧の巻に委しい。
三 落葉の宮。
四 結婚第三夜。披露の宴が張られる。
五 女二の宮の亡き母女御の異腹の兄弟。（一五三頁注一一参照）
六 女二の宮のお世話役と（帝が）お決めになっている人々や、女二の宮づきの家司（家政に任ずる事務官）に帝からご下命があって。
七 前駆の供人たち、護衛の者（朝廷から賜る。大将は八名）、車の左右に供奉する者、舎人（御厩の舎人。前出一九〇頁注七）に至るまでねぎらいの品をご下賜になる。
八 内々のことのようであった。帝の御婿といった表立った扱いではない、という意。
九 女三の宮。
一〇 今まで住んでいらっしゃった寝殿を（女二の宮に）お譲り申し上げようと（母宮は）おっしゃるけれども。

薫、女二の宮を三条の宮に迎えようとする

晩年におなりになって　これを最後とご出家なさった　時になって　お迎え
ならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得た
申し上げなさったのだ　思い出話をなさるので　ほんとにと　気がひけて
てまつりたまひしか。われはまして、人もゆるさぬものを拾ひたり
しや」とのたまひ出づれば、宮は、げにとおぼすに、はづかしくて
御いらへもえしたまはず。
三日の夜は、大蔵卿よりはじめて、かの御方の心寄せになさせた
その三日の夜の様々のことは　薫の
まへる人々、家司に仰せ言賜ひて、忍びやかなれど、かの御前、随
身、車副、舎人まで禄賜はす。そのほどのことどもは、私事のやう
にぞありける。

〔薫は〕　〔薫の〕
かくてのちは、忍び忍びに参りたまふ。心のうちには、なほ忘れ
三条の宮　物思いに一日を過し　いまだに忘れ
がたい亡き大君のことばかり念頭を離れずに
がたきいにしへざまのみおぼえて、昼は里に起き臥しながめ暮らし
気の進まぬままに急いで宮中に参上なさるのも　今まで経験のないこと
て、暮るれば心よりほかにいそぎ参りたまふをも、ならはぬここち
億劫でつらいので〔宮を〕宮中から退出させ申し上げよう　お心積り
とて　なさった
に、いとの憂く苦しくて、まかでさせたてまつらむ、とぞおぼし
おきてける。母宮は、いとうれしきことにおぼしたり。おはします
（薫）それは恐れ多うございましょう
寝殿ゆづりきこゆべくのたまへど、「いとかたじけなからむ」とて、

一一 御念誦堂（女三の宮の念仏誦経のためのお堂）と寝殿との間に、廊をつないでお造らせになる。
一二 母宮は寝殿の西側にお移りになるということのようだ。念誦堂は寝殿の西側にある趣。
一三 薫と女二の宮は、寝殿の東側から東の対にかけてを使用する予定と見える。
一四 六巻椎本三四八頁に「その年、三条の宮焼けて」とあり、早蕨一四三頁によると翌年の二月に新築の成った三条の宮に移った。
一五 子を思う親心は普通の人と同じようでいらっしゃるのだった。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、兼輔朝臣）による。
一六 亡き朱雀院。帝と女三の宮は、いずれも朱雀院の御子、異腹の兄妹の間柄。
一七（帝の）お心配りは並々ならぬものがあるのだった。

宿木

御念誦堂のあはひに、廊を続けて造らせたまふ。西面にうつろひたまふべきなめり。東の対どもなども、焼けてのち、うるはしくあたらしくあらまほしきを、いよいよ磨き添へつつ、こまかにしつらはせたまふ。

かかる御心づかひを、内裏にも聞かせたまひて、ほどなくうちとけうつろひたまはむを、いかがとおぼしたり。帝と聞こゆれど、心の闇は同じごとなむおはしましける。母宮の御もとに、御使ありける御文にも、ただこのことをなむ聞こえさせたまひける。故朱雀院の、取り分きて、この尼宮の御ことをば聞こえ置かせたまひしかば、かく世を背きたまへれど、おとろへず、何ごともとのままにて、奏せさせたまふことなどは、かならず聞こしめし入れ、御用意深かりけり。かくやむごとなき御心どもに、かたみに限りもなくもてかしづき騒がれたまふおもだたしさも、いかなるにかあらむ、心のうちにはことにうれしくもおぼえず、なほともすればうちながめつつ、

二 御念誦堂 立派に 三 東の対 一四 念入りにお部屋の調度など 一五 申し分ない出来なのを 整えさせなさる 薫のお心積りを 内裏 帝 新婚早々に気安く三条の宮にお移りになることを 一六 女二の宮のことをお頼み申し上げなさるのだった 女三の宮 一七 尼におなりでも 〔と声望は〕 〔帝に〕お頼み申し上げてお置きになったので 〔帝は〕お聞き届けになり 帝にお願い申し上げなさることなどは 女三の宮 尼 こうした尊いお二方が気をお使いになって 上げてちやほやされていらっしゃる晴れがましさも 格別うれしくも思われず 〔薫の〕 こもごもこの上もなく大切にお世話申し どうしたことなのだろうか やはり何かというと物思いに沈んでは

一 生後五十日目に、赤児に餅を含ませて祝う儀式。（五巻図録二「柏木三」参照）

二 籠に薄様を敷き、五葉（柑、橘、栗、柿、梨）を入れて、松の枝などに付けるという（『河海抄』桐壺）。

三 檜の薄板で作った折り箱。（二四四頁注五参照）

四 香木であるが、調度類の材として用いられた。以下、餅その他を載せる台や食器の材料である。

薫、匂宮の若君の五十日を祝う

宇治の寺造ることをいそがせたまふ。（お急がせになる）

宮（匂宮）の若君の五十日になりたまふ日数へ取りて、その餅（支度に念入りに心を配って）のいそぎを心に入れて、籠物、檜破籠などまで（ご自分で点検なさっては）見入れたまひつつ、世の常のなべてにはあらずとおぼし心ざして（世間ありきたりの並々のことではないようにとお目ざしになって）、沈、紫檀、銀、黄金など、道々の細工（細工人たちを）どもいと多く召しさぶらはせたまへば（お邸にお呼び寄せになるので）、われ劣らじと、さまざまのことどもをし出づめり。

薫自身も訪問　若君を見る

みづからも（ご自身でも）、例の、宮（匂宮）のおはしまさぬ隙（留守に）におはしたり。（五）心のなしにやあらむ、今すこし（一段と）重々しくやむごとなげなるけしきさへ添ひにけりと見ゆ。（六）今はさりとも、むつかしかりしすずろごとなどはまぎれたまひにたらむ、と思ふに心やすくて、対面したまへり。されど、ありしながらのけしきに、まづ涙ぐみて、「心にもあらぬまじらひ、いと思ひのほかなるものにこそと、世を思うたまへ乱るることなむまさりにたる」と、あいだちなくぞ愁へたまふ。（七）「いとあさましき御ことかな。（八）人もこそおのづからほのかにも漏り聞きはべれ」など

五 そう思って見るせいであろうか。権大納言兼右大将に昇進、帝の御婿にもなった。

六 もうこうなっては、いくら何でも。帝の御婿にもおなりなのだから、の意。以下、中の君の心中。

七 遠慮もなく愚痴をおこぼしになる。

八 誰かがひょっとして、ちらりとでも聞いたら、どういたしましょう。「もこそ」は、危懼の念をあらわす言い方。

九 これほど、はた目にはすばらしく思われる縁組にも心は晴れずに。以下、中の君の心中。

一〇 姉君が生きていられて薫と結婚なさったにしても、今の自分の身の上と同じように、姉妹うらみっこなしに、わが身の不運を嘆くのが落ちだったであろう。以下、中の君の心中。自分が六の君のことで苦労しているように、姉君も女二の宮のことで悩まれたに違いない、の意。

一一 しがない身の上では。没落した宮家、しかも父宮もいない身の上を思う。

一二 いや、よそよそしくはお扱い申すまい、どうにも困る私に対する懸想の一件によって恨まれるのは仕方ないとしても、そのほかには、何としてもこの人のお気持に背かないようにしよう、と思うので。薫の好意には答えたいとする中の君の心中。

一三 (匂宮と中の君のお子ゆえ) 言うまでもないことだから、かわいらしくないはずはない。草子地。

一四 よくないことが起らねばよいがと思われるほど。美しい人は神隠しにあったり、夭折することがあると思われていた。

宿木

はのたまへど、かばかりめでたげなることどもにもなぐさまず、忘れがたく思ひたまふらむ心深さよ、とあはれに思ひきこえたまふに、おろかにもあらず思ひ知られたまふ。おはせましかばと、くちをしく思ひ出できこえたまへど、一〇それもわがありさまのやうにぞ、うらやみなく身を恨むべかりけるかし、何ごとも数ならでは、世の人めかしきこともあるまじかりけり、とおぼゆるにぞ、いとどかの、うちとけ果てでやみなむ、と思ひたまへりし心おきては、なほいと重しく思ひ出でられたまふ。

[薫が] 若君を切にゆかしがりきこえたまへば、[中君は] 気がひけるけれど はづかしけれど、一二何かは隔て顔にもあらむ、わりなきことひとつにつけて恨みらるるよりほかには、いかでこの人の御心に違はじと思へば、みづからはともかくもいらへきこえたまはで、乳母してさし出でさせたまへり。一三さらなることなれば、憎げならむやは。一四ゆゆしきまで白くうつくしくて、たかやかに物語し、うち笑ひなどしたまふ顔を見るに、わがものに

しみじみお察し申し上げなさるにつけても
を忘れがたくお思いらしいお気持の深さよ
姉君が生きておいでならと
残念なことと
並々ならぬご愛情だったのだとよくお分りになる
世間の人並み
に晴れがましいことはあるはずもないのだった
薫
ますます姉君が
お考えは
に身を許すことなく終ろう
思慮深かったと
どうしても見たいとおっしゃるので
ご自分からはともかくのご
返事は申し上げなさらずに
に抱かせてさし出させなさる
かわいらしくて
自分のお子とし
唐をあげて

て見まほしくうらやましきも、一世の思ひ離れがたくなりぬるにやあらむ。されど、言ふかひなくなりたまひにし人の、世の常のありさまにて、かやうならむ人をもとどめおきたまへらましかば、とのみおぼえて、このころおもだたしげなる御あたりに、いつしかなどは思ひ寄られぬこそ、あまりすべなき君の御心なめれ。二かくめめしくねぢけてまねびなすこそいとほしけれ。しかわろびかたほならむ人を、帝の取り分き切に近づけてむつびたまふべきにもあらじものを、三まことしき方ざまの御心おきてなどこそは、めやすくものしたまひけめ、とぞおしはかるべき。四げにいとかく幼きほどを見せたまへるもあはれなれば、例よりは物語などこまやかに聞こえたまふほどに、暮れぬれば、五心やすく夜をだにふかすまじきを、苦しうおぼゆれば、嘆く嘆く出でたまひぬ。「をかしの人の御匂ひや。六折りつれば、かやいふやうに、うぐひすも尋ね来ぬべかめり」など、わづらはしがる若き人もあり。

てお世話したくらやましく思われるのも
はかなく亡くなってしまわれた大君が
普通に自分と結婚して
とばかり
こんなかわいらしい子供でも残しておかれたのであったら
早くお子がといったこ
最近結婚した晴れがましい女二の宮の御腹に
ほんとに仕方のないこの方のお心というものだ
とは頭に浮びもしないのは
そんなみっともないまともでもない人を
特別に
無理にも婿になさって親しくお扱いになるはずもないでしょうに
いつもよりはお話などねんごろに申し上げなさっているうちに
(女房)すてきなお匂いですこと
鶯だって誘われて飛んで来そうですわ
かいう歌のように
迷惑そうに言う
若い女房もいる

藤壺における藤の花の宴

夏にならば、三条の宮ふたがる方になりぬべし、と定めて、四月朔日ごろ、節分とかいふことまだしきさきにわたしたてまつりたまふ。明日とての日、藤壺に上わたらせたまひて、藤の花の宴せさせたまふ。南の廂の御簾あげて倚子立てたり。公わざにて、主人の宮のつかうまつりたまふにはあらず。上達部、殿上人の饗など、内蔵寮よりつかうまつれり。右の大臣、按察使の大納言、藤中納言、左兵衛の督、親王たちは、三の宮、常陸の宮などさぶらひたまふ。南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり。後涼殿の東に、楽所の人々召して、暮れ行くほどに、双調に吹きて、上の御遊びに、宮の御方より、御琴ども笛など出ださせたまへば、大臣をはじめたてまつりて、御前に取りつつ参りたまふ。故六条の院の御手づから書きたまひて、入道の宮にたてまつらせたまひし琴の譜二巻、五葉の枝に付けたるを、大臣取りたまひて奏したまふ。次々に、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院のものどもなりけり。笛は、かの夢に伝へ

七 三条の宮が、女二の宮のいられる宮中からは方塞りになる、という陰陽博士の勘申で。王相方であろうか。立夏後四十五日間、巽王離相といって、宅地内に造作のあった東南から南にかけての方角を忌む。

八 季節の変り目。ここは立夏。

九 飛香舎。女二の宮の御殿。（付録三五一頁参照）

一〇 以下の記述、『西宮記』の天暦三年四月十二日飛香舎藤花宴によったとおぼしい。（付録三四九頁参照）

一一 帝の着席なさる玉座。

一二 中務省に属し、宝物、錦綾、諸蕃の貢献物などを管理する役所。

一三 紅梅大納言。（六巻一八一頁紅梅の巻冒頭参照）

一四 髭黒の長男。もとの北の方の腹。

一五 髭黒の三男（玉鬘腹）とするのが通説。

一六 第四皇子。更衣腹。（六巻匂兵部卿一七六頁参照）

一七 藤壺の南。位置的に不審（付録三五一頁参照）。

一八 音楽の調習所。内裏外郭東北隅の桂芳坊にある。

一九 双調（洋楽のgに近い）を主音とする呂旋音階。春の調子とされる。

二〇 絃楽器の総称。後文の箏、琵琶、和琴など。

二一 琴の譜本。女三の宮は源氏から琴を伝授された。薫を通じて帝に献上する趣。

二二 朱雀院から女三の宮に伝えられた楽器類だった。

二三 柏木が夕霧の夢に現れて伝えた。（五巻横笛三三三頁、三四〇頁参照）

一 夕霧。
二 それぞれに得意の楽器を賜ってお弾かせになる。
三 薫。
四 今日の晴れの御遊に、世にまたとないほどの音色の限りを高らかにお吹きになったのだった。柏木は生前、夕霧に「みづからも、さらにこれが音の限りは、え吹きとほさず。思はむ人にいかで伝へてしがな」（五巻横笛三三〇頁）と言ったという。
五 譜を口で歌うこと。
六 前出。二四四頁注四参照。
七 沈（香木）で製した四角い盆。（五巻図録七参照）
八 前出。二四四頁注三参照。（五巻図録七参照）
九 藤色のまだら染めの敷物に、藤の折り枝が刺繍してある。打敷は折敷、高坏の下に敷く。
一〇 土器の表面に銀を沃懸けたもの。粉熟を入れた食器。坏か盤であろう。
一一 ガラス。
一二 酒を注ぐ細長い瓶。
一三 前出の左兵衛の督。（二五一頁注一五）
一四 帝からお盃を頂いて召し上がるのに。
一五 夕霧。
一六 自分だけが度々頂くのは不都合であろうし。
一七 天盃を賜った時に発する作法の声。あたりを静める警蹕の「をし」と同じ意味合いであろう。
一八 決った公式の作法であるが。
一九 天盃から酒を移して飲む土器。（『花鳥余情』）

亡き柏木の形見の品を　この上もない　〔帝が〕おほめになってい

しいにしへの形見のを、またなきものの音なり、とめでさせたまひければ、今宵の善美を尽した宴を措いて　ほかには一体いつ晴れがましい機会があろう　このをりのきよらより、またはいつかははえばえしきついでのあらむ、〔薫は〕とおぼして、取う出たまへるなめり。大臣和琴、三の宮琵琶など、とりどりに賜ふ。大将の御笛は、今日ぞ世になき音の限りは吹き立てたまひける。殿上人のなかにも、唱歌につきなからぬどもは召し出でて、おもしろく遊ぶ。

女二の宮　匂宮　不得意でない者

宮の御方より、粉熟参らせたまへり。沈の折敷四つ、紫檀の高坏、藤の村濃の打敷に、折枝縫ひたり。銀の様器、瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛の督、帝へのお給仕の役をおつとめになる　御まかなひつかうまつりたまふ。御盃参りたまふに、大臣、列席の親王方の間には　しきりては便なかるべし、宮たちの御なかにはた、さるべきもおはせねば、大将にゆづりきこえたまふを、憚り申　適当な方もいらっしゃらないので　薫　辞退なさるけれども　帝のご意向もあったのであろう　したまへど、御けしきもいかがありけむ、御盃ささげて、「をし」（薫）とのたまへる声づかひもてなしさへ、例の公事なれど、人に似ず見　声の出し方やそぶりまで　際立って立派に　見えるのも　一層帝の御婿として見るせいなのであろうか　ゆるも、今日はいとど見なしさへ添ふにやあらむ。さし返し賜はり

二〇 庭上におりて拝舞の礼をなさる。「舞踏」は、帝に対してお礼を申し上げる儀礼。「先立小揖、次再拝、次置笏於左、立左右左、次居左右左、次取笏居揖、次立再拝、次小揖」（『河海抄』桐壺）

二一 決りがあるので。官位による席次の上下は動かしがたい。

按察使の大納言の不満

二二 紅梅大納言。（前出二五一頁注一三）

二三 自分こそこうしたはなやかなお扱いを頂こうと思っていたのに。次に昔からの事情が説明される。

二四 お世話役を希望する旨も母女御にそっと申し上げたけれども。

二五（薫の）人品は、確かに前世の宿縁並々ならぬものがあろうが。人柄は非凡でもあろうが、の意。

二六 宮中の奥深く、帝の御座所も近い場所に。「おはします殿」は清涼殿。藤壺はその北西に接する。

二七 臣下の分際でわが家同然にお出入りして。藤壺の女二の宮のもとに通っていること。

て、下りて舞踏したまへるほど、いとたぐひなし。上蔦の親王たち大臣などの賜はりたまふだにめでたきことなるを、これはまして御婿にてもてはやされたてまつりたまへる御おぼえ、おろかならずめづらしきに、限りあれば、くだりたる座に帰り着きたまへるほど、心苦しきまでぞ見えける。

（婿君として帝からはなやかなお扱いを頂いていられるご信任のほどは並々ならず珍しいことなのだが）（木席の座に）（天盃を賜りなさるのでさえすばらしいことなのに）

按察使の大納言は、われこそかかる目も見むと思ひしか、ねたのわざや、と思ひゐたまへり。この宮の御母女御をぞ、昔心かけきこえたまへりけるを、参りたまひてのちも、なほ思ひ離れぬさまに聞こえ通ひたまひて、果ては宮を得たてまつらむの心つきたりければ、御後見望むけしきももらし申しけれど、聞こしめしだに伝へずなりにければ、いと心やましと思ひて、「人柄は、げに契りことなめれど、なぞ、時の帝のこととしきまで婿かしづきたまふべき。またあらじかし、九重のうちに、おはします殿近きほどにて、ただ人のうちとけさぶらひて、果ては宴や何やともて騒がるることは」など、

（無念なと）（女二の宮）（思いを掛け申し）（あきらめきれない風情で意中をお訴えしたりなさって）（その挙句は女二の宮を頂戴したいという気になったので）（帝のお耳にも入らずじまいになってしまったので）（大納言）（婿を大事になさることがあろう）（前例もないことだろう）（大げさなまでに）（はなはだおもしろくなく）（どうして）（ちやほやされることは）

一　やはり宴の盛儀はこの目で見たかったので。以下もそうだが、全体に大納言に対して揶揄的な筆致。

二　紅梅の巻にも、この大納言は、宮の御方の若い上臈の女房が自分に姿を見せないのに腹を立てたとある。（六巻紅梅一八八頁参照）

三　松の木を細長く削り、手許に紙を巻いて先端に火をともす。手許を明るくするためのもの。

四　南庭に置かれている。この上に、それぞれ詠歌の懐紙を置く。後世のものは長さ二尺ほど、広さ一尺二寸ほど、高さ三寸ほどで小さいが、昔は大きかったであろうと『安斎随筆』にいう。

五　お決りのこととて。こうした盛儀の折の歌にはいい歌はないものとする。このあたり以下、草子地。

六　上等の部でも、高位のお方とてお歌の詠みぶりは格別のこともないでしょうが。

七　帝の冠に插す藤の花房。

八　天下をしろしめす帝の插頭に折ろうと、藤の花の手の届かぬ枝に袖を掛けました。帝の御意に沿うべく女二の宮の婿になった、の意。

九　万世の末までも美しく咲きにおう花なのだから、今日も見飽きぬ美しい色と見ることだ。薫の将来を祝福する意。『河海抄』に「かくてこそ見まくほしけれよろづ世をかけてにほへる藤波の花」（『新古今集』巻二春下、飛香舎にて藤花宴はべりけるに　延喜御製）を引き、「藤に万歳藤の号あり」と注する。

列座の人々の和歌

（口を極めて帝を非難申し上げ不平を鳴らしなさったけれども）いみじくそしりつぶやき申したまひけれど、一さすがゆかしかりければ、参りて（参列して）、二心のうちにぞ腹立ちゐたまへりける。

三紙燭（しそく）さして（ともして）歌どもたてまつる。四文台（ぶんだい）のもとに寄りつつ置くほどのけしきは、おのおのしたり顔（それぞれ自信ありげな面持だったけれども）なりけれど、五例の、いかにあやしげに（どんなにかおかしげで古くさい歌だったろう）古めきたりけむ、と思ひやれば、あながちに（無理に全部を聞いて書くこともしません）皆もたづね書かず。上六（かみ）の町も、上臈（じやうらふ）とて、御口つきどもは、ことなること見えざめれど、（ほんの申しわけと思って）しるしばかりとて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし。これは、（次のは）大将の君（薫）の、下（お）りて御（ヒ）かざし折りて（さし上げなさった時の歌ですとか）参りたまへりけるとか。

（薫）八
すべらぎのかざしに折ると藤の花
　およばぬえだに袖かけてけり

（聴せぬところが憎らしいことです）
うけばりたるぞ憎きや。

（帝）九
よろづ世をかけてにほはむ花なれば
　今日をもあかぬ色とこそみれ

一〇
君がため折れるかざしは紫の

一〇 帝の御ために手折った插頭の藤の花は、紫の雲にも劣らぬ美しさであることよ。紫雲は瑞祥の雲。夕霧の歌であろう。「藤の花宮の内には紫の雲かとのみぞあやまたれける」（『拾遺集』巻十六雑春、延喜御時藤壺の藤花宴せさせたまひけるに殿上のをのこども歌つかうまつりけるに　皇太后宮権大夫国章）

一一 ありふれた色とも見えません、宮中にまで生いのぼった藤波の花は。「藤波」は風に靡く藤を波に見立てた歌語。薫への羨望の思いをこめたものであろう。

一二 催馬楽、呂「安名尊」。「あな尊　今日の尊さ　やいにしへも　はれ　いにしへも　かくやありけむ　や　今日の尊さ　あは　そこよしや　今日の尊さ」。祝宴をことほぐ気持。

一三 紅梅大納言。幼少の頃から美声の持主で、賢木の巻に高砂を歌ったことが見える（二巻賢木一八二頁）。なお六巻紅梅一八一頁注五参照。

一四 夕霧の子女は、六巻夕霧九七頁に六男六女あったと見えるから、その後に生れた末子であろう。童殿上していると見える。

一五 中国伝来の管楽器。木製の匏に十七本の竹管を立て、側面の口から吹く（二巻図録八参照）。

一六 帝から褒美の御衣をご下賜になる。

一七 それぞれ身分に応じて。

翌日の夜、女二の宮三条の宮に移る

雲におとらぬ花のけしきか

（大納言）世の常の色とも見えず雲居まで

たちのぼりける藤波の花

これやこの腹立つ大納言のなりけむ、と見ゆれ。かたへはひがこと（一部は聞き間違いであったかもしれません）にもやありけむ。かやうに、ことなるをかしきふしもなくのみぞあなりし。

夜ふくるままに、御遊びいとおもしろし。（格別におもしろい点もないお歌ばかりだったようです）大将の君の、安名尊歌ひたまへる声ぞ、（この上もなくすばらしいものだった）限りなくめでたかりける。（衆に抜きん出）按察使も、昔すぐれたまへりし御声の名残なれば、（大層堂々とした声で）今もいとものものしくて、（［薫に］合せてお歌ていられた美声のおもかげも残っているので）うちあはせたまへり。（いになった）右の大殿の（夕霧）御七郎、童にて笙の笛吹く。（とてもかわいらしかったので）いとうつくしかりければ、御衣賜はす。大臣下りて舞踏したまふ。（還御あそばされた）暁近うなりてぞ帰らせたまひける。（女二の宮）禄ども、上達部、親王たちには、上より賜はす。殿上人、楽所の人々には、宮の御方より品々に賜ひけり。

（翌日）その夜さりなむ、（夜に入って）宮まかでさせたてまつりたまひける。（［薫は］女二の宮を退出させ申し上げなさった）儀式いと（その立派さは）

一 主上お付きの女房全員に三条の宮までお供させなさった。帝のご下命による。

二 四方に庇の付いた車。次に「庇なき糸毛」とあるから、これも糸毛の車（飾り糸を垂れた車）であろう。女二の宮の乗用。「庇の車」「糸毛」とも、図録六参照。「凡内親王三位已上内命婦及更衣以上並聴ト乗二糸葺有レ庇之車一并著中緋牛鞦上」（『延喜式』弾正台）

三 以下、女房たちの乗用。

四 金の飾り金具を付けた車。次に「ただの檳榔毛」とあるから、檳榔毛の車であろう。

五 蒲葵の葉を裂いてさらしたものを車体に葺いたもの。（図録六参照）

六 檜の薄板を網代に組んで棟、物見（窓）の上下、袖（出入り口の左右）に張った車。（一巻図録一一参照）

七 簾の左右から袖口などを出した車。（二巻図録一三参照）

八 薫の本邸三条の宮の女房たち。

九 「殿上人の禄など」、河内本による。青表紙本「殿上人、六位など」とあるが、誤写を伝えたもの。

一〇 上賀茂、下鴨両社の例祭。祭日は四月中の酉の日。先立つ午の日斎院の御禊、申の日国祭（山城の国司による祭儀）が行われる。

四月二十日過ぎ、薫、宇治に赴き、浮舟と邂逅

格別のものがある

心ことなり。上の女房さながら御送りつかうまつらせたまひける。庇の御車にて、庇なき糸毛三つ、黄金づくり六つ、ただの檳榔毛二十、網代二つ、童、下仕へ八人づつさぶらふに、また御迎への出車どもに、本所の人々乗せてなむありける。御送りの上達部、殿上人の禄など、言ふ限りなききよらを尽くさせたまへり。

気兼ねなくくつろいで［女二宮を］

かくて、心やすくうちとけて見たてまつりたまふに、いとをかしげにおはす。ささやかにあてにしめやかにて、ここはと見ゆるところなくおはすれば、宿世のほどくちをしからざりけりと、心おごりせらるるものから、過ぎにしかたの忘ればこそはあらめ、なほまぎらるるをりなく、もののみ恋しくおぼゆれば、この世にてはなぐさめかねつべきわざなめり、仏になりてこそは、あやしくつらかりける契りのほどを、何のむくいとあきらめて思ひ離れめ、と思ひつつ、寺のいそぎにのみ心をば入れたまへり。

小柄で気品がありしっとりした物腰で　ここはと見える欠点もなくて　お出迎えの　お供しているのに　亡くなった大君のことが忘れられるのならよいのだが　ひたすら恋しく思われるばかりなので　この世では思いを晴らしよう　仏の悟りを得てはじめて　納得のゆかぬ身を切られるよ　世間の騒がしい頃をやりすごして　どんな宿業の報いなのかとはっきり知ってあきらめよう　宇治の寺の準備にばかり熱中していらっしゃる　持になるものの　いらっしゃるので

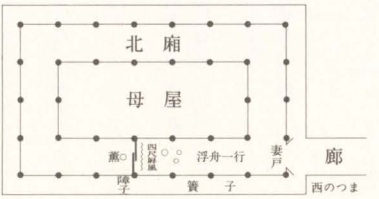
一〇 賀茂の祭など、さわがしきほど過ぐして、二十日あまりのほどに、

一一 阿闍梨の山寺の境内に建てさせている御堂。（二二七頁参照）
一二 弁の尼のもとを訪れないで帰るのは、やはり不憫なので。弁の尼が「荒れ果つる朽木のもとを」（二三四頁）と詠んだのによっていう。「見たまへ」は、諸本を通じて異文がない。
一三 矢を入れて腰に負う胡籙であろう。
一四 薫の護衛の者たち。
一五 清濁両説がある。口やかましく取り沙汰する意であろう。
一六 ひどい東国訛りの者が。先方の一行もすでに山荘に到着した趣。
一七 弁の尼の語った浮舟の一行だったのである。（二三二頁参照）
一八 長谷寺（大和の国磯城郡初瀬）。三巻玉鬘二九七頁以下に、玉鬘が参詣して右近に邂逅した情景が描かれている。
一九 おお。何かに思い当った時の言葉。
二〇 北側の方においでだ。気の張らぬ内輪の人だという趣。
二一 旅装で、簡素なよそおい。
二二 やはり高貴な人の一行であることははっきり分るのだろうか。

薫、浮舟を垣間見る

例の、宇治へおはしたり。造らせたまふ御堂見たまひて、すべきこ（これからの工事についてお指図をなさり）とどもおきてのたまひ、さて例の朽木のもとを見たまへ過ぎむがなほあはれなれば、そなたざまにおはするに、（山荘の方へ）女車のことことしきさ（目立つほどではないのが一台）まにはあらぬ一つ、荒ましき東男の、腰にもの負へるあまた具して、（大勢を供に）下人も数多くたのもしげなるけしきにて、（道中用心堅固な様子で）橋より今わたり来る見ゆ。（宇治橋を）田舎びたるものかな、と見たまひつつ、（薫は）殿はまづ入りたまひて、（薫先にお部屋に入られて）御前ども（前駆の者たちなどはまだ外で立ち騒いでいるうちに）などはまだ立ち騒ぎたるほどに、この車もこの宮をさして来るなりけり、と見ゆ。御随身ども、かやかやと言ふを制したまひて、（八の宮の山荘）「何人ぞ」と問はせたまへば、（尋ねさせなさると）声うちゆがみたる者、「常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺に詣でてもどりたまへるなり。（行きにも）はじめもここになむ宿りたまへりし」と申すに、おいや、（話に聞いた人らしい）聞きし人ななり、とおぼし出でて、人々をば異方に隠したまひて、（従者たちを）「はや御車入れよ。ここにまた人宿りたまへど、（ほかにお客が泊っておいでだが）北面になむ」（従者に言わせなさる）と言はせたまふ。（薫の従者たちも）御供の人も、皆狩衣姿にて、（仰々しくないいでたちだけれども）ことことしからぬ姿どもなれど、な

一 先方の一行は、面倒な人と泊り合せたといった風情で。疎略があってはと気を使う風情。
二 護衛の従者たちの乗馬。
三 もとの寝殿を山寺に移したあとに建てた新しい寝殿。
四 人目をさえぎる簾、屏風、几帳などの調度が入れてなくて。
五 中央の二間の意であろう。二間は廂の間と思われる。
六 衣擦れの音がするので。
七 弁の尼に使いをやって。



八 若い女房の同乗しているのが。
九 車の簾。
一〇 前駆の者たちが田舎びている割には。
一一 またそんなことをおっしゃる。

ほけはひやしるからむ、一わづらはしげに思ひて、二馬ども引きさけなどしつつ、かしこまりつつぞをる。車は入れて、廊の西のつまにぞ寄する。三この寝殿はまだあらはにて、四簾もかけず。おろし籠めたる五中の二間に立て隔てたる障子の穴よりのぞきたまふ。御衣の鳴れば、脱ぎおきて、直衣指貫の限りを着てぞおはする。とみにも下りで、七尼君に消息して、かくやむごとなげなる人のおはするを、誰ぞ、など案内するなるべし。君は、車をそれと聞きたまひつるより、一ゆめ、その人にまろありとのたまふな」と、まづ口かためさせたまひてければ、皆さ心得て、「早う下りさせたまへ。客人はものしたまへど、異方になむ」と言ひ出だしたり。

（遠くに引いて行 / 邸内に / 小さくなった様子でいる / 端 / 格子を / 隔てに立ててある / 襖 / 薫は / 浮舟たちは / すぐにも / だけを / こうした身分ありげなお方がおいでなのを / その人のだとお聞きになった時にすぐ / 尋ねているらしい / 薫 / 決して / 私が来ていると言って下さるな / 弁尼に / 口止めさせていらっしゃったので / 女房 / 外の車に伝えた）

八 若き人のある、まづ下りて、九簾うちあぐめり。一〇御前のさまよりは、このおもと馴れてめやすし。またおとなびたる人いま一人下りて、「早う」と言ふに、「あやしくあらはなるここちこそすれ」と言ふ声、ほのかなれどあてやかに聞こゆ。一一「例の御こと。こなたはさきざき

（上げるようだ / 年かさの女房が / この女房はもの馴れていて見苦しくない / 浮舟 / 何だかすっかり見られているような気がします / 上品に / 前の時にも / こちらは）

二 頭の格好や姿つきがほっそりとして上品なところは、とてもよく亡き大君が思い出されるようだ。薫の気持を忖度する形で書く。
三 女車の場合、打板というものを車の前板と簀子との間に渡すという（『花鳥余情』）。その用意がない様子。
四 長いことかかって車をおりて、部屋ににじってはいる。
五 濃い紅であろう。
六 撫子襲。表、紅梅に、裏、青という。
七 表着である。（一九〇頁注二参照）
八 濃い萌黄色。
九 細長の上に着ている。やや改まった略礼装。
一〇 こちらの方。覗いている薫の側からいう。
一一 何かに寄り添って横になった。
一二 木津川。初瀬詣では山の辺の道を通ったであろう。帰途は東大寺の西から奈良坂を経て山城の国相楽郡、水泉郷に入り、木津を経て泉川を渡り、北流する泉川の右岸を北上して宇治に至る。（図録二参照）
一三 今年の二月。二月にも初瀬詣でをしたと見える。
一四 女主人。浮舟。

〔格子を〕しめきったままでございますもおろし籠めてのみこそはべれ。そのほかにまたどこに人目のあるはずがございましょうさてはまたいづこのあらはなるべきぞ」と、安心しきっていて心をやりて言ふ。〔周囲を〕気にしながらつつましげに下るるを見れば、まづ頭つき様体細やかにあてなるほどは、いとよくもの思ひ出でられぬべし。檜扇ぴったり顔にかざしているので扇をつとさし隠したれば、顔は見えぬほど心もとなくて、気が気でなくて胸をときめかせながら〔薫は〕うちつぶれつつ見たまふ。車は高く、おるる所は低くなっているのをくだりたるを、この二人の女房は楽々と先の人々はやすらかに下りなしつれど、〔浮舟は〕身軽に下りたけれど難渋して いと苦しげにややみて、ひさしく下りてゐざり入る。濃き袿に、撫子とおぼしき細長、若苗色の小袿着たり。四尺の屏風を、この障子に添へて立てたるが、上より見ゆる穴なれば、残るところなし。こなたをばうしろめたげに思ひて、あなたざまに向きてぞ、（女房）添ひ臥しぬる。「さも苦しげにおぼしたりつるかな。泉川の舟わたりも、まことに今日はいと恐ろしくこそありつれ。このきさらぎには、水のすくなかりしかばよかりしなりけり。いでや、ありくは、東路を思へば、いづこか恐ろしからむ」など、二人して、苦しとも思ひたらず言ひゐたるに、主は音も

気がかりに思う様子で
ずいぶん今日はおっらそうでしたこと
出歩くのは
どこが恐ろしいことがありましたでしたこと
疲れた様子もなく
何でもなかった

せでひれ臥したり。腕をさし出でたるが、まろらかにをかしげなるほども、常陸殿などいふべくは見えず、まことにあてなり。

やうやう腰痛きまで立ちすくみたまへど、人のけはひせじとて、なほ動かで見たまふに、若き人、「あなかうばしや。いみじき香の香こそすれ。尼君の焚きたまふにやあらむ」とおどろく。老人、「まことにあなめでたのものの香や。京人はなほいとこそみやびかに今めかしけれ。天下にいみじきこととおぼしたりしかど、東にてかかる薫物の香は、え合はせ出でたまはざりきかし。この尼君は、住ひかくかすかにおはすれど、装束のあらまほしく、鈍色青鈍といへど、いときよらにぞあるや」などほめゐたり。あなたの簀子より童来て、「御湯など参らせたまへ」とて、折敷どもも取り続きてさし入る。くだもの取り寄せなどして、「ものけたまはる。これ」など起こせど、起きねば、二人して、栗などやうのものにや、ほろほろと食ふも、聞き知らぬここちには、かたはらいたくてしぞきたま

つそりと　ふっくりとしてかわいらしげなところも　人のいる様子を悟られまいと　気品がある　[薫は]じっと立っていられるが　若い方の女房　まあよい匂いですこと　弁の尼　なんとすばらしい　やはりとても風雅ではなやかなものですね　とても調合なさることはできませんでした　こんなにひっそりしていられるけれど　申し分なく　とても立派なものですわ　次々に持って来て　さし上げて下さい　[女房]　[浮舟を]　聞いたこともない薫の気持としては　見るに見かねる思いで身をお引きになった

一　常陸の守風情の娘にはとても見えず。

二　すてきな薫物（練り香）のかおりがしますわ。

三　前に「おとなびたる人」（二五八頁）とあった女房。

四　（北の方様は）何といってもご自分が調合の上手だとお思いだったけれども。常陸在国中のこと。「天下に」は強調の語。

五　鈍色（薄墨色）や青鈍（鈍色に青花を加えた色）などといっても。尼の着用の料である。前にも薫からの援助のあったことが見える（二三三頁）。

六　東側の廊から続く縁側。

七　女の童。

八　白湯。

九　片木で作った角盆。食器を載せる。

一〇　木の実、果物などの間食。

一一　もしもし。「ものうけたまはる」の約で、人にものを言い掛ける時の言葉。

一二　ぽりぽりと。擬音語。

一三 明石の中宮の御殿をはじめ、あちこちで。後宮をはじめ諸家で、薫は、れっきとした家柄の出のすぐれた上臈の女房を数多く見ている、という。

一四 極端過ぎて人に悪口を言われるほど真面目でいらっしゃる気性なのに。

薫なお垣間見　弁の尼、浮舟と対面

一五 このお方（浮舟）に逢いたいようにおっしゃっておいでだったから。以下、弁の尼の推測。

一六 宇治近辺の薫の荘園の管理をゆだねられている者たち。

一七 白木の薄板の箱。中を仕切って料理を入れる。

へど、（覗いてみたくなっては）またゆかしくなりつつ、なほ立ち寄り立ち寄り見たまふ。これよりまさる際（身分）の人々を、后の宮（一三）をはじめて、ここかしこに、容貌（気立ての上品な人も）よきも心あてなるも、ここら（大勢いやになるほど今までご覧になっているが）飽くまで見あつめたまへど、（よほどのことがなければ）おぼろけならでは、目も心もとまらず、（一四）あまり人にもどかるるまでものしたまふここちに、ただ今は、（どれほどほかの人より美しいと見えることもない人なのに）何ばかりすぐれて見ゆることもなき人なれど、かく立ち去りがたく、（どうしても目が離せないのも）あながちにゆかしきも、（いかにも不思議な気持なのだ）いとあやしき心なり。

（弁の尼）尼君は、（薫）この殿の御方にも、御消息（ご挨拶をお伝え申し上げたが）聞こえ出だしたりけれど、「（お疲れになったということで）御ここちなやましとて、（今ちょっとご休息になっていらっしゃいます）今のほどうちやすませたまへるなり」と、（気をきかして）御供の人々心しらひて言ひたりければ、（一五）この君を尋ねまほしげにのたまひしかば、（こうした機会にお話でもなさろう）かかるついでにもの言ひ触れむ、（とお考えなので）と思ほすによりて、（日暮を待っておいでなのか）日暮らしたまふにや、と思ひて、（薫が）かくのぞきたまふらむとは知らず。例の御庄（一六）の預（献上した）りどもの参れる破籠（一七）や何やと、（弁の尼の方にもさし入れたの）こなたにも入れたるを、（あれこれ指図をした上で）東人どもにも食はせなど、事ども行ひおきて、うち化粧じて、

一 浮舟一行の部屋。
二 先ほど年老いた方の女房がほめていた弁の尼の衣裳。
三 どうして今日、それも日が高くなってから（お着きなのでしょう）。
四 言うらしいのに。薫の聞いている趣に書く。
五 年老いた方の女房。
六 今朝も長いことご気分の直るのを待って出掛けましたので。
七 何というなつかしい人なのだろう。以下、薫の心中。大君に生き写しであることに心を打たれる。
八 仮にこの人よりはるかに下がる身分の、血縁の人といったところでも。

客人（まらうと）の方（かた）に来（き）たり。ほめつる装束（さうぞく）、げにいとかはらかにて、みめも（顔立ちも）なほよししくきよげにぞある。「昨日（きのふ）おはし着きなむと待ちき（なるほどとてもこざっぱりとして）（今でもどことなく上品で整った感じだ）（弁）（お着きになりましょうとお待ち申し上げていましたのに）こえさせしを、などか今日も日たけては」と言ふめれば、この老人（おいびと）、「いとあやしく苦しげにのみせさせたまへば、昨日（きのふ）はこの泉川（いづみがは）のわたりにて、今朝（けさ）も無期（むご）に御ここちためらひてなむ」といらへて、起こせば今ぞ起きゐたる。尼君をはぢらひて、そばみたるかたはらめ、（どうなさったことかとてもおつらがりになりますので）（たりに泊って）（浮舟を）（わきを向いている横顔が）これよりはいとよく見ゆ。まことにいとよしあるまみのほど、髪ざ（とても風情のある目もとのあたりや）（髪）しのわたり、かれをも、くはしくつづくとしも見たまはざりし御（こちらからは）（亡き大君の生え際の感じは）（薫は）（目を止めてご覧になったわけでもないお顔ではあるが）顔なれど、これを見るにつけて、ただそれと思ひ出でらるるに、例の、涙おちぬ。尼君のいらへうちする声けはひ、宮の御方にもいとよく似たりと聞こゆ。（そのままと）（尼君に向って受け答えする声や様子は）（中の君）

あはれなりける人かな、かかりけるものを、今まで尋ねも知らで過ぐしけることよ、これよりくちをしからむ際の品ならむゆかりなどにてだに、かばかりかよひきこえたらむ人を得ては、おろかに思（こんなによく似た人なのに）（はっきり知ろうとも）（しないで過してきたことよ）（これほど大君によく似た人を見つけたなら）（並々の愛情では）

九 今すぐにも側に寄って、「あなたはこの世に生きていらしたのに」と言って慰めてあげたい。以下、薫の心中。大君その人と見て語りかけたい気持。

一〇 蓬萊の山（渤海にあると信じられていた神仙の住む島）まで方士を遣わして探して、わずかに方士に託された形見の釵だけを得てご覧になったという帝は。玄宗皇帝のこと。白楽天の「長恨歌」に見える（一巻付録三二九頁以下参照）。

一一 この人は（「長恨歌」のように楊貴妃その人ではなく）大君とは別人だが、それでも心を慰めることができそうなほどよく似ている。

一二 女房たちの気づいたあの香りを。（二六〇頁）

一三 垣間見のために脱ぎ置いた下着など。（二五八頁）

一四 いつもお呼び出しになる襖の出入り口。（二二六頁）

一五 ちょうどよい折にここでご一緒になったのだが。「まで」は「まうで」の「う」無表記の形。

一六 いつかお願いしておいたことは。去年の九月末、自分の意向を伝えるよう弁に依頼した（二三三頁）。

一七 先に女房たちの話にも出ていた。（二五九頁）

薫、弁の尼と語る

すまないだろうと思われるのにふまじきここちするに、ましてこれは、〔父宮に〕認めて頂けなかったけれども知られたてまつらざりけれど、まことに故宮の御子にこそはありけれ、と見なしたまひては、亡き八の宮 得心なさったからには 限りなくあはれにうれしくおぼえたまふ。ただ今もはひ寄りて、世の中におはしけるものを、と言ひなぐさめまほし、蓬萊まで尋ねて、釵の限りを伝へて見たまひけむ帝は、やはり心もとなく思われただろう なほいぶせかりけむ、これは異人なれど、なぐさめ所ありぬべきさまなり、とおぼゆるは、この人に契りのおはしけるにやあらむ。前世からの縁がおありだったのであろうか 尼君は、物語すこしして、と〔薫が〕近くで覗いていられるらしい〔弁は〕く入りぬ。人のとがめつる薫りを、近くのぞきたまふなめり、と心気がついたので 内輪の立ち入った話もせずに引きさがることにしたのであろう 得てければ、うちとけごともかたらはずなりぬるなるべし。

日も段々暮れてゆくので 日暮れもていけば、君もやをら出でて、そっとその場を離れて 御衣など着たまひてぞ、一四 例召し出づる障子口に、尼君呼びて、一行と会見の様子など ありさまなど問ひたまふ。

「をりしもうれしくまで来あひたるを、（薫）一五 いかにぞ、どうでしたか 一六 かの聞こえしことは」とのたまへば、（弁）「しか仰せ言はべりしのちは、よい折がございまし さるべきついでにはべらば、と待ちはべりしに、去年は過ぎて、この二月になむ、

初瀬詣でのたよりに対面してはべりし。かの母君に、おぼしめしたるさまはほのめかしはべりしかば、いとかたはらいたく、かたじけなき御よそへにこそははべるなれ、などなむはべりしかど、そのころほひは、のどやかにおはしまさずとうけたまはりし、をり便なく思ひたまへつつみて、かくなむ、とも聞こえさせはべらざりしを、またこの月にも詣でて、今日帰りたまふなめり。行き帰りの中宿には、かくむつびらるるも、ただ過ぎにし御けはひを尋ねきこゆるゆゑになむはべめる。かの母君は、障ることありて、このたびは、独りものしたまふめれば、かくおはしますとも、何かはものしはべらむとて」と聞こゆ。「田舎びたる人どもに、忍びやつれたるありきも見えじとて、口かためつれど、いかがあらむ、下衆どもは隠れあらじかし。さていかがすべき。独りものすらむこそなかなか心やすかなれ。かく契り深くてなむ参り来あひたる、と伝へたまへかし」とのたまへば、「うちつけに、いつのほどなる御契りにかは」と、

ご意向の趣はそれとなく申し伝えましたところ
ついでに
たいめん
など申しておりましたが
ゆっくりお暇もおありでないとうけたまわりましたので
ともご報告申し上げませんでしたが
しかじか
お帰りのご様子なのです
亡き宮様の御おもかげをお慕い申し上げてのことのよ
こうして親しく泊られるのも
四月
まう
ゆ
なかやどり
ひと
どうだろうか
人目を忍ぶ粗末な姿で出かけたのを見られまいと思って
口止めしたのだが
げす
先方にお話ししようもないことお独りでご参詣のようですから
今日ここにおいでのことも
(薫)
みなか
四
むとて
と存じまして
きは
都合が悪くて
うに存じられます
ひと
独りでいるのならかえって気兼ねなく話せるというものだろう
六
それでどうしたものだろう
いつの間に深いご縁ができたことなのでしょう
(弁)
まあ急に
き

一 身の置き所もない、恐れ多いお身代りと申すものでございましょう。大君に対する卑下の気持。「御よそへ」は、薫が浮舟を大君と思って見る、ということ。

二 二月の二十日過ぎに、薫は女二の宮と結婚した（二四五頁）。

三 時期が悪いとご遠慮申しまして。

四 浮舟一行の従者たち。

五 下人たちの間では、知られてしまうだろうな。口さがないものだから、という気持。

六 こうして深い縁があって、お出会いすることになったのだ、と先方に伝えて下さい。

うち笑ひて、(弁)「さらば、しか伝へはべらむ」(そうお伝えしましょう)とて入るに、(奥に)

(薫)貌鳥(かほどり)の声も聞きしにかよふやと

しげみをわけて今日ぞ尋ぬる

ただ口ずさみのやうにのたまふを、入りて(何げなく口をついて出たように)語りけり。

七　美しい大君に似た人の、声も昔聞いた声に似ているかと、草の茂みを分けて今日ここまでやって来たのです。「貌鳥」は、『万葉集』に「容鳥」「貌鳥」の表記が見え、「容鳥の間なくしば鳴く」(巻三、巻十など)と詠まれる。もとは鳴き声から来た名で、かっこうの別名とするのが有力であるが、この歌も「顔」に思い寄せて「声も」と詠んでいるように、平安時代には字面から美しい鳥とする理解が生じたようである。「かほどりの間なくしば鳴く春の野の草の根しげき恋もするかな」(原歌『万葉集』巻十)「夕されば野辺に鳴くてふかほどりの顔に見えつつ忘られなくに」(以上『古今六帖』六、かほどり)

八　弁の尼君は奥に入って浮舟に伝えるのだった。

東屋（あづまや）

薫は、亡き大君に似るという浮舟に会いたく思うが、世間体を憚ってなかなか実行に移せない。浮舟の母も、弁の尼から薫の意向を伝えられ、うれしく思うものの、あまりの身分違いにためらっている。

浮舟の継父常陸の介は、長い東国の受領暮しの間に財を蓄え、それを目当ての求婚者は多い。浮舟の母との間にも何人かの子女を儲け、介は、彼なりにみやびやかな嗜みを身につけさせようと腐心しているが、母君は、高貴な血筋を受けながら、肩身の狭い思いでいる浮舟が不憫でならず、立派な縁組をさせてやりたいと、左近の少将を婿に選んだ。

八月、結婚の日も近い頃、少将は、浮舟が介の実子でないことを知り、介に直接交渉して、実の娘でまだ幼い浮舟の妹に変更し、約束の日も違えず婿入りしてきた。母君は、浮舟を同じ家に置くにしのびず、中の君のもとにしばらく預かってもらうことにする。

二条の院で、若君を中に目もまばゆい貴公子ぶりの匂宮と仲睦まじく暮す中の君を見、また訪れた薫の姿を垣間見て、母の心は揺らぐ。たまたま伺候する家来の中に、一向に映えぬ少将の姿を見出した時、母君は、浮舟の結婚には高い理想を持つべきだと思った。

しかし、偶然、匂宮が浮舟を見つけて強引に近づいたことから、母君は、浮舟を三条の隠れ家に移す。宇治の弁の尼からこのことを聞いた薫は、弁の仲立ちで、三条の小家を訪れ、翌日、浮舟を宇治に連れ出すのであった。巻名は、この時詠んだ薫の歌の言葉に由来する。薫二十六歳の八月から九月までのことである。

一（薫は）筑波山を分け入って、よく見たいお気持はありながら、そんな端山の繁みにまでむやみに熱心になるのも。「筑波山」は、常陸の国の歌枕。「端山」は、麓近い端の山。浮舟が常陸の介風情の継娘であるところから、こういう。「筑波山端山繁山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり」（『新古今集』巻十一恋一、源重之）。

薫、浮舟にひかれながらもためらう

二 全く人に聞かれても、身分にふさわしからぬ見苦しい振舞と思われそうな相手の分際なので。

三 弁の尼。薫は、かねてから浮舟への仲立ちを弁の尼に頼んでいた（宿木二三三頁、二六三頁参照）。

四（薫が）本気でお情けをおかけ下さるような話とも思わないので。以下、母北の方の気持を述べる。

五 ただ、そんなにまで詮索して、素姓をご存じになったとは、とその程度に、殿方らしい風流なことと思って。

六 わが娘（浮舟）が、人並みの身分であったら（躊躇せず薫に娶せるのに）などと、あれこれ思うのだった。

七 常陸の介のこと。常陸は太守の親王が遙任なので、介を守とも呼んだ。

浮舟の母、良縁を切望する

八 先妻のこと。

九 今の北の方の腹にも。浮舟の母のこと。以下、常陸の介との間に生れた子供のことをいう。

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の繁りまであながちに思ひ入らむも、いと人聞き軽々しう、かたはらいたかるべきほどなれば、おぼし憚りて、御消息をだにえ伝へさせたまはず。〔薫は〕〔浮舟の〕〔薫の〕仰せのおもむきなどを お手紙もお取り次がせになれないでいる 三 かの尼君のもとよりぞ、母北の方に、それとなく書いて寄こしたけれども のたまひしさまなど、たびたびほのめかしおこせけれど、四 まめやかに御心とまるべきこととも思はねば、五 ただ、さまでも尋ね知りたまふらむこと、とばかりをかしう思ひて、人の御ほどのただ今世にありがたげなるをも、数ならましかば、などぞよろづに思ひける。

守の子どもは、母亡くなりにけるなど、あまた、九 この腹にも、姫君とつけてかしづくあり、まだ幼きなど、すぎすぎに五六人ありければ、〔守は〕それぞれこの子供らの世話をしながら〔浮舟を〕 さまざまにこのあつかひをしつつ、異人と思ひ隔てたる心の

呼んで大切にしている娘があり ほかにまだ幼い子など 亡くなってしまった子供など 大勢おり 次々に 他人だと思って分け隔てする 薫君のお人柄ご身分が当節ではまたとないお方と思うにつけても

一（浮舟の）姿顔立ちが、並々で、ほかの娘たちと同じように考えてもよいくらいなら、何でこうせつないほども、その身の振り方に思い悩もう。以下、浮舟の美質を惜しむ母の心。

二（ほかの娘と）同じ分際だと（世間には）思わせておいてもよいのだが。「同じごと」は、同じように。

三（受領風情の娘というには）惜しく、いたわしいことと思っている。

四 ちょっとした家柄の若君といった人々も。

五 今度はわが大事の姫君（浮舟）を、理想的な婿を取らせて、お世話してさし上げようと。

六 常陸の介も、素姓の悪い人ではないのだった。次に「上達部の筋（家柄）」とある。「上達部」は、位は三位以上、官は参議以上。国政に直接参加できる上級貴族である。

七 ひとかどに風流なことを好むわりには、なぜか粗野で田舎じみたところがとれないのだった。以下、常陸の介の人柄をいう。

常陸の介の暮しぶりと、求婚者左近の少将の登場

気持があったので［母君は］　冷たい人だと　何とかほかの娘より

ありければ、常にいとつらきものに守をも恨みつつ、いかでひきすぐれて、おもだたしきほどにしなしても見えにしがな、と明け暮れ

［浮舟を］大事に世話をしていた　晴れがましい身分の婿君と縁組させて見せたいものだ　とび抜けて

この母君は思ひあつかひける。一さま容貌の、なのめにとりまぜてもありぬべくは、いとかうしも何かは苦しきまでももてなやまし、

誰にも似ず一人際立って　せつないほどもっ

二同じごと思はせてもありぬべきを、ものにもまじらず、あはれにかたいなくも美しくご成人なさったので

たじけなく生ひ出でたまへば、三あたらしく心苦しきものに思へり。

娘がたくさんいると聞いて　恋文を寄こす者が

娘多かりと聞きて、四なま君達めく人々も、おとなひ言ふ、いとあまたありけり。はじめの腹の二三人は、皆さまざまにくばりて、おと

先妻腹の娘の　それぞれに縁付けて　一人前にさせてある

なびさせたり。五今はわが姫君を、思ふやうにて見たてまつらばやと、明け暮れまもりて、なでかしづくこと限りなし。

気をつけて　いつくしみ大切にすることこの上もない

六守もいやしき人にはあらざりけり。上達部の筋にて、仲らひもものきたなき人ならず、徳いかめしうなどあれば、ほどほどにつけて

一族の者もさして　そうした身分の者なりには　財産も大したものという具合なので　地位の低い者ではなく

気位が高くて　はなやかに飾り立て　こざっぱりとした暮しぶりで

は思ひあがりて、家のうちもきらきらしく、ものきよげに住みなし、事好みしたるほどよりは、あやしう荒らかに田舎びたる心ぞつきた

八 あのような東国の、辺鄙な地方に埋もれて、長年過したせいか。「世界」は、地方、田舎の意。常陸の介は、前に陸奥の守でもあったこと、宿木二三二頁に見える。

九 何かものを言うのが、少し訛りを帯びて。「東にて養はれたる人の子は舌たみてこそ物は言ひけれ」（『拾遺集』巻七物名、読人しらず）

一〇 身分の高い権勢家を恐ろしく面倒なものと気兼ねし、こわがって。「豪家」は、三巻薄雲一六八頁注三参照。田舎受領が中央の権門にへつらい怖れるさま。

一一 風雅に琴笛を翫ぶといったことには疎く、弓を実に上手に射るのであった。常陸の介の無骨な人柄。

一二 腰折れ歌の勝負を競い、物語や庚申を楽しんで。腰折れ歌は、和歌の第三句（腰の句）と第四句がうまく続かぬ歌。下手な歌のこと。「庚申」は、庚申待ちのこと。庚申の夜、人が眠ると、その体内に住む三匹の尸虫（虫の名）が天に昇り、天帝にその人の罪を告げるため、命を奪われるという道教の説により、徹夜して歌合や管絃の遊びをする風習があった。

一三 求婚者の若君たち。

一四 左近衛府の少将。正五位下相当。

一五 今まで通っていた妻の所などとも縁が切れて。妻の家も富裕でなくて、十分に婿の世話ができなかった趣。

一六 左近の少将。以下、母君の考慮。

母君、少将を婿にと決め、一人奔走する

りける。若うより、さる東の方の、はるかなる世界にうづもれて年経ければにや、声などほとほとうちゆがみぬべく、ものうち言ふ、すこしたみたるやうにて、豪家のあたり恐ろしくわづらはしきものに憚り懼ぢ、すべていとまたく隙間なき心もあり。をかしきさまに琴笛の道は遠う、弓をなむいとよく引きける。なほなほしきあたりともいはず、勢にひかされて、よき若人どもつどひ、装束ありさまはえならずととのへつつ、腰折れたる歌合せ、物語、庚申をし、まばゆく見苦しく、遊びがちに好めるを、この懸想の君達、「らうらうじくこそあるべけれ、容貌なむいみじかなる」など、をかしきかたに言ひなして、心を尽くしあへるなかに、左近の少将とて、年二十二三ばかりのほどにて、心ばせしめやかに、才ありといふかたは人にゆるされたれど、きらきらしう今めいてなどはえあらぬにや、通ひし所なども絶えて、いとねむごろに言ひわたりけり。

この母君、あまたかかること言ふ人々のなかに、この君は人柄も

若い時分から　ややもするとまともに聞き取りにくく　何かにつけ大層抜けめなくすきま　用心深いところもある　身分の低い家柄をとやかく問題にもせず　その財力につられて　遊び事に興じて気取っているのを　しくみっともなく　みはえもいえず立派に整えては　才たけた　器量も大したものらしい　娘たちに違いあるまい　いい女であるかのように噂して　それぞれ恋心を募らせるなかに　性質も落着いていて　学問があるという点では　世間に認められているけれども　きらびやかな当世風の派手な暮しもしかねる事情にあるのか　大層熱心に前々から求婚してきているのだった　大勢このように縁組を求めてくる人々の中で

一 これ（少将）以上に立派な身分の人は、こんな受領風情の娘を、いくら何でも（金持ちだとはいっても）わざわざ言い寄っては来るまい。婿として、身分人柄を考慮した母君の判断。

二 浮舟の方に（少将の文を）取り次いで。

三 風情のある返事をおさせ申している。折にふさわしい返歌などさせるのである。「たてまつる」は、浮舟に対する敬語。

四 （少将が）浮舟の姿や顔立ちの美しさを知って、気に入ったなら。

五 たとえ継父は薄情でも。

六 ちょっとした遊び道具を作らせても。玩具や楽器など。

七 漆の上に金銀の粉や色粉をはきつけて磨き、絵模様をあらわしたもの。

八 屋久貝、鸚鵡貝などの殻の、真珠光のある部分を薄く剝ぎ、漆器の面に嵌め込んだ装飾。

九 （娘たちが道具の中に埋もれて）目をわずかにさし出すばかりの有様で。

一〇 宮中にあり、正月七日の節会、内宴、女踏歌、五節などの折、女楽を奉仕し、またその練習をする所。内教坊あたりから、音楽の教師を迎えるのは、然るべき女房のいないさま。

一一 立っては拝み、坐っては拝みして礼を言い。

難がなさそうだ　しっかりした考えを持って物の道理も分っていそうな上に　風采も気品があ

めやすかなり、心定まりてもの思ひ知りぬべかなるを、人もあてな

る

り、これよりまさりてこととしき際の人はた、かかるあたりを、

よかろうと思

さいへど尋ね寄らじ、と思ひて、この御方に取りつぎて、さるべき

[母君は]自

うち折々には

をりをりは、をかしきさまに返りことなどせさせたてまつる。心ひ

分一人あれこれ心積りする

とつに思ひまうく。守こそおろかに思ひなすとも、われは命をゆづ

命に換えても

この結婚の世話をして

りてかしづきて、さま容貌のめでたきを見つきなば、さりとも、お

[浮舟を]

ろかになどはよも思ふ人あらじ、と思ひ立ちて、八月ばかりと契り

[結婚の取りを]

て、調度をまうけ、はかなき遊びものをせさせても、さまことにや

道具類を支度し　細工も特別に意匠に

工夫を凝らし

うをかしう、蒔絵螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆるものを

こまかい細工の出来のよいと思われるものの方を

[浮舟]

ば、この御方にと取り隠して、劣りのを、「これなむよき」とて見

（母君）これがよろしいわ

すれば、守はよくしも見知らず、そこはかとないものどもの、人の

よし悪しもしかと分らず　これといった値打のない物でも　世間で

言う道具という道具は皆

調度といふ限りは、ただとり集めて並べすゑつつ、目をはつかにさ

[部屋中に]

し出づばかりにて、琴、琵琶の師とて、内教坊のわたりより迎へ取

りつつ習はす。手ひとつ弾き取れば、師を立ち居をがみてよろこび、

[娘が]一曲習い上げると　[常陸介は]

一二 労をねぎらい、褒美として与える品。普通衣類を与える。肩に被けるので、多いと身も「埋むばかり」になる。

一三 楽曲。「曲のもの」に同じか。（六巻竹河二三八頁注六参照）

一四 娘を（浮舟より）見下げておられるのだ。「あこ」は「吾子」。愛称。

少将、浮舟が介の実子でないことを知り怒る

一五 前に「八月ばかりと契りて」とあった。八月の吉日を約束していたのであろう。

一六 自分一人の考えで、こんなふうに計画して用意するのもとても気がひけるし、相手（少将）の思惑もどうなのか心配になって。母君の思い。

一七 （少将が）何カ月もこのように熱心におっしゃって下さって、日も経ちましたし。

一八 父親などおいででない方ですから、私一人でやきもきしているようなことで。浮舟が継子であることを初めて打ち明ける。

一二 禄を取らすること、埋むばかりにてもて騒ぐ。はやりかなる曲ものなど教へて、師と、をかしき夕暮などに、弾き合はせて遊ぶ時は、涙もつつまず、をこがましきまで、さすがにものめでしたり。かかることどもを、母君はすこしもののゆゑ知りて、いと見苦しと思へば、ことにあへしらはぬを、「あこをば思ひおとしたまへり」と、常に恨みけり。

（ちやほやする 調子の速い 風情のある 合奏して琴を弾く時には 馬鹿馬鹿しいほど 無骨者のくせに感じ入っている 夫のこと 物事に心得があるせいで 特別相手にもならないのを）

かくてかの少将、一五契りしほどを待ちつけで、「同じくは疾く」とせめければ、一六わが心ひとつにかう思ひいそぐも、いとつつましう、人の心の知りがたさを思ひて、はじめより伝へそめける人の来たるに、近う呼び寄せてかたらふ。「よろづ多く思ひ憚ることの多かるを、一七月ごろかうのたまひてほど経ぬるを、なみなみの人にもものしたまはねば、かたじけなう心苦しうて、かう思ひ立ちにたるを、一八などものしたまはぬ人なれば、心ひとつなるやうにて、かたはらいたう、うちあはぬさまに見えたてまつることもやと、かねてなむ思

（待ちきれないで（少将） 取り次いで来た仲人が 打ち明ける（母君） 何かにつけいろいろ気兼ねすることが多いのです ご身分も並々の方ではいらっしゃいませんので もったいなくおいたわしく存じまして このご縁組を決心したのですが 行き届かぬお世話のしぶりとご覧頂くこともあるやもしれぬと 今から案じておりまして はた目にも見苦しく）

す ふ。若き人々あまたはべれど、思ふ人具したるは、おのづからと思ひゆづられて、この君の御ことをのみなむ、はかなき世の中を見るにも、うしろめたくいみじきを、もの思ひ知りぬべき御心ざまと聞きて、かうよろづのつつましさを忘れぬべかめるをしも、もし思はずなる御心ばへも見えば、人笑へに悲しうなむ」と言ひけるを、少将の君にまうでて、「しかしかなむ」と申しけるに、けしきあしくなりぬ。「はじめより、さらに守の御娘にあらずといふことをなむ聞かざりつる。同じことなれど、人聞きもけ劣りたるここちして、出で入りせむにもよからずなむあるべき。ようも案内せで、浮かび たることを伝へける」とのたまふに、いとほしくなりて、「くはしくも知りたまへず。女どもの知るたよりにて、仰せ言を伝へはじめはべりしに、中にかしづく娘とのみ聞きはべれば、守のにこそは、とこそ思ひたまへつれ。異人の子持たまへらむとも、問ひ聞きはべらざりつるなり。容貌心もすぐれてものしたまふこと、母上のかな

年若い娘たちは大勢いますが　浮舟　命の程もはかない世の中を思うにつけても　気がかりで悲しくてなりませんので　[少将は]ものの情けのお分りのはずのお方と伺って　笑い者になって悲しいことでしょう　[少将の]機嫌が悪くなった　実の娘御でないということを聞いていなかったぞ　世間に聞えても一段低く見られるような気がして　守の娘に違いない　困ってしまって　[仲人]私は詳しいこともよく存じません　お言葉をお取り次ぎし始めたのですが　とばかり思っておりましたのです

一 気をつけてくれる人（父親）が付いている娘は、放っておいても良縁が得られることだろうと任せる気になりまして。

二 こうして一切の遠慮も忘れてしまいそうなのですが。不十分な婿扱いへの気兼ねも忘れて縁を結ぼうとすることを言う。

三 ひょっとして、心外なお気持でもお持ちになったりしたら。少将が心変りでもしたら。

四 （婿として）出入りするにしても格好の悪いことであろう。

五 よく調べもしないで。

六 女連中が知り合いの伝手で。後文によれば、この仲人の妹が浮舟方に仕える女房である（二七六頁参照）。

七 大勢の姉妹の中で、特に大切にしている娘とだけ聞きましたので。

八 まさか他人の子をお持ちであろうとも、問いただしもしなかったのです。

九 （浮舟が）器量や気立てもすぐれていらっしゃること。

一〇 世間に自慢できるような、身分の高い人との縁組をさせようと。

一一 何とかして、あの家（常陸の介方）との縁組を取り持ってくれる人はないものか。少将の言葉。

一二 あのような受領風情の家に（婿として）通ってゆくのは。

一三 当節流行のことで、別に非難されることもなかろうし。

一四 （相手が）婿を大切にし、後見として世話をやいてくれることで、（身分の低い者と縁組したという）不体裁を取り繕っている連中もあるようだが。

一五 私が下手に出ているように、世間が取り沙汰しよう。身を屈して受領の継娘にまで求婚するとは、と言われよう。

一六 いずれも、常陸の介の実子の婿。「はじめの腹の二三人は、皆さまざまにくばりて、おとなびさせたり」（二一七〇頁）とあった。少納言は、従五位下相当。讃岐の守は、上国の国守。従五位下相当。少将は、正五位下相当である。

一七 人に媚び諂い。

少将、常陸の介の実子との縁組を求む

しうしたまひて、一〇おもだたしう気高きことをせむと、[浮舟を]下にも置かずかると聞きはべりしかば、一一いかでかの辺のこと伝へつべからむ人もがな、とのたまはせしかば、さるたより知りたまへりと、取り申しなり。さらに、浮かびたる罪はべるまじきことなり」と、腹あしく言葉多かるものにて申すに、君、いとあてやかならぬさまにて、「かやうのあたりに行き通はむ、人のをさをさゆるさぬことなれど、今様のことにて、咎あるまじう、一四もてあがめて後見だつに、罪隠してなむあるたぐひもあめるを、[浮舟を]同じこととうちうちには思ふとも、よそのおぼえなむ、一五へつらひて人言ひなすべき。源少納言、讃岐の守などの、うけばりたるけしきにて出で入らむに、守にもをさをさ受けられぬさまにてまじらはむなむ、いと人げなかるべき」とのたまふ。

この人、一七追従あり、うたてある人の心にて、これをいとくちをしう、こなたかなたに思ひければ、「まことに守の娘とおぼさば、ま

（がりなさって）（大事にしていられると聞きましたので）（おっしゃいましたので）（申し上げたのです）（決して）（いい加減なとのお咎めを受けますはずはないことです）（少将）（ぼく口の達者な者であれこれ申し上げるので）（全く上品さなど少しもない様子で）（誰もがなかなか認めないことであるが）（少将）（浮舟と同じように内々では扱っているにしても）（世間の思惑では）（大きな顔をして出入りするだろうのに）（この私は）（はかばかしく）（認められないような有様で仲間入りするというのは）（全く肩身の狭いことではないか）（破談になるのを大層残念なこと）（娘をとお望みならば）（仲人）（どちらの家に対しても）

だ若うなどおはすとも、しか伝へはべらむかし。中にあたるをなむ、姫君とて、守はいとかなしうしたまふなる」と聞こゆ。「いさや、はじめよりしか言ひ寄れることをおきて、また言はむこそうたてあれ。されどわが本意は、かの守の主の、人柄もものしく、おとなしき人なれば、後見にもせまほしう、見るところありて思ひはじめしことなり。もはら顔容貌のすぐれたらむ女の願ひもなし。品あてに艶ならむ女を願はば、やすく得つべし。されど、さびしう事うち合はぬ、みやび好める人の果て果ては、ものきよくもなく、人にも人ともおぼえたらぬを見れば、すこし人にそしらるとも、なだらかにて世の中を過ぐさむことを願ふなり。守に、かくなむとかたらひて、さもとゆるすけしきあらば、何かは、さも」とのたまふ。

この人は、妹のこの西の御方にあるたよりに、かかる御文なども取り伝へはじめけれど、守にはくはしくも見え知られぬ者なりけり。ただ行きに守のゐたりける前に行きて、「とり申すべきことありて

さようにお取り次ぎしましょう
大層かわいがっていられるとのことです
姫君と呼んで
（少将）さあね
あのように申し込んでいたことをさしおいて
別口に求婚するのもいやなことだな
貫禄があって
老成した
したいものと
見込むところがあってこの縁組も考え出した人なので
したことなのだ
家運衰えて万事不如意な
風雅を愛した人の行きつく果ては
小綺麗な暮しもできず
世間からも人並みに思われていない有様を見ると
悪口を言われても
暮しに困らないで
私がこう言っているとよく話して
それでもかまわぬと承知する様子ならば
仲人
それほどよくも見知られていない者なのであった
少将の
（仲人）申し上げねばならぬことがありま

一 二番目に当る方を。中将の君（浮舟母）腹の第二子。

二 けれども私のもともとの気持は。以下、結婚について、常陸の介の財力に期待をかける本心を述べる。

三 「主」は、常陸の介に対する軽い敬語。

四 一向に、顔立ちの美しいといった女を求める気持はない。美人かどうかは、結婚の条件ではない。「もはら」は「専」の訓読語。男性用語。

五 家柄がよくて優雅な女を望むなら、たやすく手にはいろう。零落した名門の姫君なら、いくらもいる、という。

六 何の、かまわぬ、そのようにもしよう。

七 浮舟のこと。西の対に住む趣。仲人の妹が浮舟に仕える女房だったのである。

仲人、少将の意向を常陸の介に伝え、介、喜ぶ

八 「ただ行きに……行く」は、ずかずか行く、というほどの気持。思ったことをすぐ行動に移す下賤の者の感じ。

九　私はまだ目通りさせたことのない者が。

一〇（仲人は）話を持ちかけにくい顔つきながら、膝を進めて。常陸の介の不愛想な態度をちらちらうかがう面持。

一一　幾月か前から、北の方様に（少将が）お便りをさし上げておられますのに。

一二（少将の方では）吉日を勘えて。陰陽道で、婚姻の吉日を勘え選ぶ。

一三（浮舟は）確かに北の方のお産みになった方ではありますが。以下「便なかるべきよし」まで「ある人」の語った内容。

一四　若様たちが（婿として）お通いなさるのに。「君達」は、身分ある家柄の子弟。

一五（相手の親が）ひたすら内々のご主君のように大切にお思い申し。

一六　手に捧げ持った珠のように。「如レ捧レ手　掌上珠と云体なり」（『河海抄』）

一七（常陸の介にも）なかなか婿とは認められなさらぬようなことで（ほかの婿君たちとは）何となく劣った扱いでお通いになるのでは。

一八　しきりに悪く申す人々が大勢いるようですので。仲人口で嘘をつくところ。

東屋

なむ」と言はす。（取り次がせる）守、「このわたりに（この家に）時々出で入りはすと聞けど、前には呼び出でぬ人の、何ごと言ひにかはあらむ（何ごとを言いに来たのであろうか）」と、なま荒々し（愛想のない顔付だが）きけしきなれど、「左近の少将殿の御消息にてなむさぶらふ（（仲人）お言葉を伝えに参りました）」と言はせたれば、（常陸介は）会ひたり。一〇かたらひがたげなる顔して、近うゐ寄りて、（仲人）一一「月ごろ、内の御方に消息聞こえさせたまふを、（北方の）ご承諾があって御ゆるしありて、（この八月のうちにと）この月のほどにと契りきこえさせたまふことはべるを、一二（お約束申されましたことがございますので）日をはからひて、（早く式を挙げたいとお思いのところに）いつしかとおぼすほどに、ある人の申しけるやう、一三（申しましたには）まことに北の方の御腹にものしたまへど、守の殿の御娘にはおはせず、君達のおはし通はむに、（世間の聞えも物欲しげに取り入っているかに言われましょう）世の聞こえなむへつらひたるやうならむ、受領の御婿になりたまふかやうの君たちは、一五（このような若君たちは）ただ私の君のごとく思ひかしづきたてまつり、手に捧げたるごと、一六（気を配って）思ひあつかひ後見たてまつる（上げるのを取柄にして）にかかりてなむ、さるふるまひしたまふ人々ものしたまふめるを、（そのような縁組に踏み切られる方々もいらっしゃるようですが）とは言えそんなお望みは無理といった有様で）さすがにその御願ひはあながちなるやうにて、一七をさをさ受けられたまはで、け劣りておはし通はむこと、便なかるべきよしをなむ、切（お世話申し）（具合が悪いでしょうと申しまして）

一 初めから、ただ盛んなご威勢で、然るべき後援者とお頼り申すに十分なご声望によって、結婚の相手方としてお選び申して。以下「……参うで来」まで、少将の言い分を伝える体。

二 まだ年端もゆかぬ娘御も大勢いられるとのことだから。

三 ご意見を伺って来い。

四 （私自身は）少しも、このようなお便りがありましたことは、詳しくは伺っていません。北の方の一存で事が進められていたからである。

五 （浮舟は）実子同然に世話すべき人ですが、ほかにも不出来な娘どもがたくさんいまして。以下、つい浮舟のことまで気が廻らぬ、という弁解。

六 （私が）浮舟をほかの姉妹とは分け隔てしていると、ひねくれた恨み言を言うことがありまして。浮舟のことで一悶着あった趣。

七 私を取柄とおぼしめしてのご意向だとは、存じませんでした。

八 心底かわいいと思う娘は。

にそしり申す人々あまたはべるなれば、ただ今おぼしわづらひてなむ。[一]はじめよりただきらきらしう、人の後見と頼みきこえむに堪へたまへる御おぼえを選び申して、聞こえはじめ申しなり、さらに、異人ものしたまふらむといふこと知らざりければ、もとの心ざしのままに、[二]まだ幼きもあまたおはすなるを、ゆるいたまはばいとうれしくなむ、[三]御けしき見て参うで来、と仰せられつれば」と言ふに、守、「[四]さらに、かかる御消息はべるよし、くはしくうけたまはらず。[五]まことに同じことに思うたまふべき人なれど、よからぬ童べあまたはべりて、はかばかしからぬ身に、さまざま思ひたまへあつかふほどに、母なるものも、[六]これを異人と思ひ分けたることと、くねり言ふことはべりて、ともかくも口入れさせぬ人のことにはべれば、ほのかに、しかなむ仰せらるることはべりとは聞きはべりしかど、[七]にがしを取り所におぼしける御心は、知りはべらざりけり。さるは、いとうれしく思ひたまへらるる御ことにこそはべるなれ。[八]いとらう

（少将は）今のところご思案中でいられます
お手紙をさし上げはじめたのだ
一向に
実子でない方がいられようということは知らなかったのだから
最初からの願いのとお
お許し下さればまことにうれしいこ
りに
（少将が）おっしゃいましたので
とだ
それぞれ身の振り方を考え面倒を見ていますう
大した力もない私の分際で
（以後）何ごとにつけ私には口出しさせぬ人のことですから
さようにおっしゃっていることがありますとは耳にしていましたが
うす
実のところ
まことにうれしく存じられますお話と申すべきでしょう

九 この子なら命に換えてもいいと思っています。前に「中にあたるをなむ……守はいとかなしうしたまふなる」（二七六頁）とあった娘。

一〇 かえって嘆かわしい目に会うのではないかと心配して。

一一 ぜひとも（よい婿を迎えて）安心できるような境遇にもしておきたいと。

一二 今は亡き大将殿。少将の父のこと。系図不詳。「大将」は、近衛府の長官。従三位相当。少将は、もと上達部の家柄である。

一三 お出入りの家来として、日頃（少将を）拝見していましたが。以下、当時の少将について、その印象を述べる。

一四 「きやうざく」は、字音語。「警策」。人柄や容姿のすぐれていること。

一五 遠い田舎に、ずっと続けて過しました長の年月の間に。陸奥、常陸などの受領を歴任していたこと。

一六 今までのお気持を妨げでもしたかのように。少将の本意はやはり浮舟であるのに、常陸の介が妨害したかのように、の意。

仲人、少将をほめ上げる

たしと思ふ女の童は、あまたのなかに、これをなむ命にもかへむと思ひはべる。のたまふ人々あれど、今の世の人の御心、定めなく聞こえはべるに、なかなか胸いたき目をや見むの憚りに、思ひ定むることもなくてなむ。いかでうしろやすくも見たまへおかむと、明け暮れかなしく思うたまふるを、少将殿におきたてまつりては、故大将殿にも、若くより参りつかうまつりき。家の子にて見たてまつりしに、いときやうざくに、つかうまつらまほしと、心つきて思ひきこえしかど、はるかなる所に、うち続きて過ぐしはべる年ごろのほどに、うひうひしくおぼえはべりてなむ、参りもつかまつらぬを、かかる御心ざしのはべりけるを、かへすがへす、仰せのごとたてまつらむはやすきことなれど、月ごろの御心違へたるやうに、この人の思ひたまへむことをなむ、思うたまへ憚りはべる」と、いとこまやかに言ふ。

よろしげなめりと、うれしく思ふ。「何かとおぼし憚るべきこと

（ご所望の方々もありますが）（今時の殿方の）（あてにならぬと）（言われていますので）（せつない親心を痛めておりますのに）（おかれましては）（もなくてきました）（私は）（参上してご用を勤めていました）（ご主君としてお仕えしたいものだと）（お慕わしく存じ上げて）（いましたが）（お目通りも）（身につかぬ気恥ずかしいことに思われまして）（お伺いしてお仕えもいたしませんが）（このようなご厚志がございましたものを）（上げるのはたやすいことですが）（思いましょうことを）（気にしてためらわれるのです）（ところを話す）（どうやら乗り気らしいと）（仲人は）（仲人）（何やかやとお気遣いなさるようなこと）

一　ただあなた様（常陸の介）お一方のご許可のありましょうことを願いとなさって。

二　絶対に、そんな肝心の方（主人の常陸の介）のご存じないような振舞をすべきではない。「ほとりばむ」は、ここでは、北の方などまわりの者たちだけの結婚話に乗ること。「ほとり」は、周辺の意。

三　ご所領（荘園）もたくさんございます。例の仲人口である。

四　まだ今のところ、お金まわりもぱっとなさらぬようですが。「ころ」は「この頃」の意。

五　平の人の莫大な財産と下世話にも申します威勢などよりよほど優っていられます。何やら常陸の介あたりと比較した言い方。

六　少将の相当位は、正五位下。当時は、官職より位階の上の方を重んじた。

七　この次の蔵人の頭。蔵人所（天皇の日常身辺の雑事や取次ぎ、文書などをつかさどる役所）の長官。「別当」の下の役で、二人あり、一人は弁官から、一人は近衛府の次将から選ばれた。宮中で大きな勢力を持ち、しばしば参議昇進の前提となる役職であった。

八　「ごつ」は、言う。この物語中、他に用例を見ない語で、敬意と洗練に欠ける言葉遣いであろう。

九　万事備わってよく出来たそなたが。「朝臣」は、五位以上の廷臣に対する敬称。ここでは少将のこと。以下「……なし上げてむ」まで、帝のお言葉を伝える体。

一〇　官は参議、位は三位以上の貴族。公卿。

でもございません　少将の　にもはべらず。かの御心ざしは、ただ一所の御ゆるしはべらむを願ひおぼして、［姫君が］幼く　いはけなく年足らぬほどにおはすとも、真実のやむごとなく思ひおきてたまへらむをこそ、本意かなふにはせめ、もはらさやうのほとりばみたらむふるまひすべきにもあらず、となむのたまひつる。［少将は］　上品でいらして　お若い殿方といっても　［少将は］仰せでした　なのです　りけり。若き君たちとて、すきずきしくあてびてもおはしまさず、世のありさまもいとよく知りたまへり。領じたまふ所々もいと多くはべり。四まだころの御徳なきやうなれど、おのづからやむごとなきの方のご風格の具わったことといったら　人の御けはひのありけるやう、直人の限りなき富といふめる勢には、まさりたまへり。来年四位になりたまひなむ。こたみの頭は疑ひなく、帝の御口づからごてたまへるなり。よろづのこと足らひてめやすき朝臣の、妻をなむ定めざなる、はやさるべき人選りて後見をまうけよ、上達部には、われしあれば、今日明日といふばかりになし上げてむ、とこそ仰せらるなれ。何ごともただこの君ぞ、帝にも親

世間の評判もなかなかよくていられるお方　世間の事情も大層よくお分りでいらっしゃいます　女に目がなく上品ぶっているといったところもおありでなく　実のお子で　下にも置かず大切にと思い定めていられるお方こそ　念願が叶うというものだ　何といっても立派なお家柄にお生れ　妻をまだ持っていないとのこと　早く適当な人を　私がいることだから　者をつくれ　今日明日にでも昇進させよう　後援　少将　仰せとのことです　お身

一一 お考えもまことにご立派で。「かうざく」は「きやうざく（警策）」に同じ（二七九頁注一四参照）。

一二 せっかくの立派な婿君を。「人の御婿」で一語。

一三 あちこちで取り沙汰しているようですから。以下も縁組を急かす仲人の作りごとであろう。

一四 全くお話にならぬほど、田舎者の常陸の介だから。中央政界の話とあらば、すぐ真に受けて飛びつくのである。

一五 頭の上にもお捧げ申しましょう。前に、仲人が「手に捧げたるごと……後見たてまつるにかかりてなむ……」（二七七頁）と言ったのに応じ、さらに「頂にも」と言う。

一六 心細く、何を不足にお思いになることがありましょう。生活の心配はいらぬと胸を張る。

常陸の介、求婚に応じ、少将、喜ぶ

一七 あとに残す財宝や、持っております荘園の数々は、一つとしてこの娘のほかに取り合いをするような者はありません。遺産はすべてこの娘に譲るよう処置しておく、という含み。

一八（少将が） 誠意をもって、娘を大事に思い、心にかけて下さるならば。少将に対して「おぼしかへりみ」「させたまはば」と最高に重い敬語を用いる親心。

一九（少将が） 大臣の位を得ようとお望みになって、世にまたとない宝物をも使い尽そうとなさるにしても。買官の資金は提供する、と言う。

近くご用をお勤め申されているようです

しくつかうまつりたまふなる。二 御心はた、いみじうかうざくに、重重しくなむおはしますめる。三 あたら人の御婿を、こんなお申込みをお耳になかう聞きたまふほどに思ほし立ちなむこそよからめ。かの殿には、われもわれも婿に

お迎えしようと

とりたてまつらむと、所々にはべるなれば、四 ここにしぶしぶなる御

こちらでぐずぐずなさるご様子が見えましたら

けはひあらば、ほかざまにもおぼしなりなむ。これただうしろやす

「少将は」ほかの家にお心を変えられもしましょう　これもただこちらのお為を思って申し上げるのです

きことをとり申すなり」と、五 いと多く、よげに言ひ続くるに、六 いと

長々と　調子のよい話を言い立てるので

あさましく鄙びたる守にて、うち笑みつつ聞きゐたり。

（常陸介）今現在のご財力などが心細いというようなことは

「このころの御徳などの心もとなからむことは、七 なのたまひそ。な

おっしゃいますな　私

めが命のございます限りは

にがし命はべらむほどは、頂にも捧げたてまつりてむ。心もとなく、

何を飽かぬとかおぼすべき。たとひあへずしてつかうまつりさしつ

たとえ私の寿命が尽きて途中でお世話ができなくなりましても

とも、残りの宝物、領じはべる所々、ひとつにてもまた取り争ふべき人なし。子ども多くはべれど、これはさま異に思ひそめたる者にはべり。ただ真心におぼしかへりみさせたまはば、大臣の位をもとめむとおぼし願ひて、世になき宝物をも尽くさむとしたまはむに、

この娘　特別大事に以前から考えている者です

一 当代の帝が、さようにお心にかけておっしゃって下さるというのですから。「上達部には、われしあれば……なし上げてむ」と帝が仰せられたことをさす。

二 お後押しのほうはご心配いりますまい。常陸の介がそれは引き受けた、と言う。

三 これが、あちら（少将）のおためにも、私めが娘にとっても、仕合せな結果になることか、分りませんが。暗に、双方にとってよいだろう、と得意がる。

四 仲人の妹。浮舟の女房。（二七六頁参照）

五 母北の方の所。

六 大臣になるための財物を調達しようなどというのは、あまりにも仰々しい話だと。「ぞくらう」は、「贖労」。財物を納めて官を買うこと。ここは、その贖労料の意。常陸の介が「大臣の位を求めむとおぼし願ひて……」と言ったことをさす。

七 「中にあたるをなむ……」とあった二番目の娘（二七六頁参照）。北の方腹であるところから、こう強弁する。

八 ただ（浮舟は）姉妹中で一番の姉さんで、年齢もいっていらっしゃるので。浮舟、この頃「二十ばかり」（宿木二三二頁参照）。

無い物はございますまい
なきものはべるまじ。当時の帝、しか恵み申したまふなれば、御後見は心もとなかるまじ。これ、かの御ためにも、なにがしが女の童のためにも、幸ひとあるべきことにや、とも知らず」と、よろしげに言ふ時に、〔仲人は〕いとうれしくなりて、妹にもかかることありとも語らず、かなたにも寄りつかで、守の言ひつることを、いともいともよげにめでたし、と思ひて聞こゆれば、君、すこし鄙びてぞある、とは聞きたまへど、憎からず、うち笑みて聞きゐたまへり。大臣にならむぞくらうを取らむなどぞ、あまりおどろおどろしきことと耳とまりける。「さて、かの北の方にはかくとものしつや。心ざしことに思ひはじめたまへらむに、ひき違へたらむ、ひがひがしくねぢけたるやうにとりなす人もあらむ。いさや」とおぼしたゆたひたるを、「何か、北の方も、かの姫君をば、いとやむごとなきものに思ひかしづきたてまつりたまふなり。ただ中のこのかみにて、年もおとなびたまふを、心苦しきことに思ひて、そなたにとおもむけて申され

（仲人）何の
（少将）ところで
〔それを〕
〔仲人は〕
〔仲人は〕
〔北方が〕
〔少将〕
〔仲人は〕

こんな話になったとも知らせず
田舎じみている
悪い気はせず
にんまりとして
何ともまことによさそうで結構な話だ
常陸の介
話はこうなったと伝えたか
大変な熱意で思い立たれたのであろうに
筋の通らないおかしな振舞のように世間には取り沙汰する者もあろう
どうしたものか
なかなか決心されないのを
下にも置かぬ秘蔵の姫君としてかわいがり大切にお世話していられるということです
かわいそうにと心配なさって
そちらのお方にと振り向けておっしゃった

九 今までは、（母北の方が浮舟を）誰にもまして、並一通りでなく大切に扱っていると言っていたのが。急に様子の変った仲人の話を訝しむ少将の心中。しばしば「月ごろ」とある（二七三、二七七、二七九頁）。急に持ち上がった縁談らしい。

一〇 やはり（母君などに）一度はひどい男だと思われ、世間からは少々悪口を言われても。以下、少将の決心。

一一 大層抜かりなく、しっかりしたお方で。「またく」は「全く」。少将を揶揄した筆使い。

一二 北の方と約束した日の夕暮。

一三 母北の方は、誰にも言わず支度をして。次頁に「明日明後日と思へば」とあり、ここは、結婚当日の二、三日前からの母君の様子を書く。

一四 女房たちの衣装も新調させ。

一五 かわいそうに、父宮（八の宮）にお認め頂いてお育ちになったなら。以下「……悲しけれ」まで、母君の思い。

一六 世間の聞えでは、常陸の介のほかの子供とも区別して考えていないし。ほかの実子と区別していないし。

一七 また、たとえ本当のことを聞き知った人でも、かえってそのために見下すに違いないのが悲しい。八の宮に認められなかったことで、軽んじられるだろう、と悲しむ。

母君、当日になって破談を知らされる

ことなのです
けるなりけり」と聞こゆ。月ごろは、またなく世の常ならずかしづくと言ひつるものの、うちつけにかく言ふもいかならむと思へども、なほ一わたりはつらしと思はれ、人にはすこしそしらるとも、長ら
たちまち変ってこのように言うのもおかしなことだと思うけれども　将来長
へてたのもしきことをこそと、いとまたくかしこき君にて、思ひ取
く生活が安定することこそ大切だと　心に決め
りてければ、日をだにとりかへで、契りし暮にぞおはしはじめける。
たので　日取りを変えもせずに
北の方は、人知れずいそぎ立ちて、人々の装束せさせ、しつらひ
部屋の飾りつ
けなどいかにも趣深げに整えられる　身繕いをさせて見るの
などよしよししうしたまふ。御方をも、頭洗はせ、取りつくろひて
浮舟
見るに、少将などいふほどの人に見せむも、惜しくあたらしきさま
少将などという分際の者にめあわせるのも　惜しくもったいないほどの美しさ
を、あはれや、親に知られたてまつりて生ひ立ちたまはましかば、
なので　薫　ご所望のよしだがそのように　分に過ぎると
おはせずなりにたれども、大将殿ののたまふらむさまに、おほけな
「八宮は」お亡くなりにはなったけれど　自分だけ内心こう思い上がっ
くとも、なんで決心せぬことがあろうなどかは思ひ立たざらまし、されど、うちうちにこそかく
しても　ていても
思へ、ほかの音聞きは、守の子とも思ひわかず、また実を尋ね知ら
仕方がない　娘盛りをお過ぎになるのもつまらぬことだ　家柄も悪くなく大して難もな
いかがはせむ、盛り過ぎたまはむもあいなし、いやしからずめやす

一 仲人が、このように口先がうまく調子がよいのに、女はなおさら欺かれたのであろう。常陸の介もすっかり仲人口に乗せられたのを踏まえた草子地。

二 結婚の当日は、もう明日明後日に迫っていると思うと。母君の心中。

三 浮舟の部屋。西の御方である（二七六頁注七）。

四 常陸の介が外から入って来て。北の方は、この時介の部屋に来ていたのであろう。

五 仲人の話したことをそのまま伝える体。

六 私に隠して、うちの娘を好いて下さる大事なお方を横取りしようとなさったとは、何と大それたあさはかなことか。「あこ」は「吾子」。親しみ呼ぶ語。

七 さぞかし立派なそちらのお娘御を、妻になさるような若君たちはありますまい。「ようず」は「用ず」。用いる意の漢語的表現。あるいは「要ず」（欲しがる）の仮名遣いか。

八 身分も低くいかにもみっともない私ごとき者の娘をば、かりそめにもわざわざお声をかけて下さるそうだ。「いやしうも」は、漢文訓読語「いやしくも」（苟）の音便。

九（少将が）全く自分の望みに反する話だといって、よその家の婿にと考えをかえておしまいになりそうだということだったので。仲人に煽られたとおりを言う。「もはら」は、二七六頁注四参照。

一〇 おかしいほど浅はかで、相手の気持も頓着しない人で。常陸の介の単純で直情的な性格。

こうして熱心におっしゃって下さるようだし

きほどの人の、かくねむごろにのたまふめるを、など、心ひとつに思ひ定むるも、媒のかく言よくいみじきに、女はましてすかされたるにやあらむ。明日明後日と思へば、心あわたたしくいそがしきに、こなたにも心のどかにゐられたらず、そそめきありくに、守外より入り来て、ながながと、とどこほるところもなく言ひ続けて、「われを思ひ隔てて、あこの御懸想人を奪はむとしたまひけるが、おほけなく心幼きこと。めでたからむ御娘をば、ようぜさせたまふ君たちあらじ。いやしく異やうならむなにがしらが女子をぞ、いやしうも尋ねのたまふめれ。かしこく思ひくはだてられけれど、もはら本意なしとて、ほかざまへ思ひなりたまひぬべかなれば、同じくはと思ひてなむ、さらば御心、とゆるし申しつる」など、あやしく奥なく、人の思はむところも知らぬ人にて、言ひちらしゐたり。北の方あきれてものも言はれで、とばかり思ふに、心憂さをかきつらね、涙も落ちぬばかり思ひ続けられて、やをら立ちぬ。

（常陸介）

遠慮会釈もなく立板に水を流すように

忙しくあちこちしていると

気が気でなく

心もせくのに

ゆっくり落着いてもいられずに

（あなたは）うまく計画を立てられたけれども

ではお望みのままにとお受け申しました

同じことなら（わが家に）と思って

しばし考えるうちに

口もきけないで

母君

言いまくっていた

そっとその場を去った

情けなさがこみ上げて

涙もこぼれそうなほどあれこれ思われて

母君と乳母の嘆き　乳母薫の申し出を勧める

一一 浮舟の部屋。
一二 いくら何でも（たとえこんなことになったにしても）誰にもひけはお取りになるまい。母君の心中。
一三 二七二頁にも「われは命をゆづりてかしづきて」と、母君の気持が述べられている。
一四 まだ小さくて一人前にもなっていない小娘を。妹のこと。
一五 こんな情けないことを、同じ家の中で見たり聞いたりしたくないと思いはするけれど。
一六 いえ何、こうなったのも姫君のご運が強くて破談になったのかもしれません。
一七 あのように情けないお気持の方ですから。少将のこと。
一八 ほんのちょっと、拝見しただけですが。宿木巻末の、宇治の中宿りの際、隙見をしたものか。

東　屋

一一 こなたにわたりて見るに、〔浮舟は〕本当にかわいい様子で坐っていられるので いとらうたげにてゐたまへるに、さりとも人には劣りたまはじ、とは思ひなぐさむ。乳母と二人、（母君）情けないものは人の心というものでした 「心憂きものは人の心なりけり。私は おのれは、同じごと思ひあつかふとも、浮舟 婿君と思おう人のためには この君のゆかりと思はむ人のためには、一三 命をもゆづりつべくこそ思へ。親なしと聞きあなづりて、一四 まだ幼くなりあはぬ人を、〔浮舟を〕 聞いて馬鹿にして さし越えてかくは言ひなるべしや。一五 こんなふうに話をつけてよいものか かく心憂く、近きあたりに見じ聞かじと思ひぬれど、守のかくおもだたしきことに思ひて、受け取り騒ぐめれば、あひあひにたる世の人のありさまを、すべてかかることに口入れじと思ふ。いかでここならぬ所に、しばしありにしがな」とう ち泣きつつ言ふ。乳母もいと腹立たしく、わが君をかくおとしむること、と思ふに、「何か、これも御幸ひにて違ふこととも知らず。一七 かく心くちをしくいましける君なれば、あたら御さまをも見知らざらまし。わが君をば、心ばせあり、もの思ひ知りたらむ人にこそ見せたてまつらまほしけれ。大将殿の御さま容貌の、一八 ほのかに見たて

主人があんなに晴れがましいことに思って 承諾して喜んでいるよう どちらもお似合いの当節の人のしそうなことだし だから 〔私は〕一切こんどの縁組には口出ししない積りです どうかこの家以外の所に 当座の間だけでもいたいものです 浮舟 よくもこう見下げたこと 大事の姫君を 心柄もやさしく 物の道理もわきまえているような殿方にお引き合せ申したいものですわ 薫

まつりしに、さも命延ぶるここちのしはべりしかな。（ほんとに命が延びるような気持がいたしました）あはれにはた聞こえたまふなり。御宿世（ご運にまかせて）にまかせて、おぼし寄りねかし（そちらにご決心なさいませ）」と言へば、「あな恐ろしや。人の言ふを聞けば、年ごろ、おぼろけならむ人をば見じとのたまひて、右の大殿（母君）、按察使の大納言、式部卿の宮などの、いとねむごろに（とてもご熱心に）ほのめかしたまひけれど、聞き過ぐして、帝の御かしづき女（女二の宮）を得たまへる君は、いかばかりの人かまめやかにはおぼさむ。（どれほどの女をまともに世話しようなとお思いになろう）かの母宮などの御方にあらせて、（宮仕えさせて）時々も見むとはおぼしもしなむ、それはたげにめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。宮の上の、かく幸ひ人と申すなれど、もの思はしげにおぼしたるを見れば、いかにもいかにも、二心なからむ人のみこそ、めやすくたのもしきことにはあらめ。（夫婦仲も見苦しからず信頼もおけることでしょう）わが身にても知りにき。故宮の御ありさまは、いと情々しく、（亡き八の宮のお人柄は情が深く）めでたくをかしくおはせしかど、人数にもおぼさざりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。このいと言ふかひなく、情なく、さまあしき人なれど、ひた

一 それに、心から世話をしたいと仰せだとのことではありませんか。

二 長年、並々の人とは結婚する気はないとおっしゃって。薫が、出生の秘密や大君への執心から、権門との結婚を避けてきたことが、外部にはこう受け取られていたのである。

三 夕霧。六の君を薫へと思っていたことは、宿木一五七頁参照。

四 紅梅の大納言。柏木の弟。薫を婿にと思ったことは、六巻竹河二四九頁に見える。

五 ここに初出。のちの蜻蛉の巻に、桐壺院の皇子とあり、薫の叔父にあたる。

六 天子様が大事とかしずかれる皇女をおもらいになった（そんな理想の高い）お方は。薫が女二の宮と結婚したことをいう（宿木二四五頁）。

七 とても気の揉めることでしょう。女房扱いの、かりそめのお相手ではたまらない、と言う。

八 宮の上（中の君）が、あんなふうに果報者と世間でお噂しているようですが。

九 物思いがちに沈んでいらっしゃるのを見ますと。六の君のことで思い悩んでいること。

一〇（私を）人並みには思って下さらなかったから。女房として、一段下に見下していられたから。

一一 今の主人（常陸の介）は、お話にもならぬ、人の気持の分らない、不体裁な人ですが。

一二 何かの折のやり方が、今度のようにぶっきらぼうで、心遣いのないのが、癪にさわりますが。

一三 上達部や親王様といった方々で、お上品で気おくれするほどご立派なお方のお側といっても、こちらがしがない身分では、どうしようもありますまい。

一四 何事もわが身の程によるのだと思うと、何かにつけ悲しいことと、この方（浮舟）のお身の上を思います。身分を思えば、薫の申し出も躊躇なく受ける気にはならない、と言う。

一五 浮舟方。すぐあとに「西の方に来て」とある。

一六 このままで、帳台なども新調されたらしい部屋だし、急に事を運ばねばならぬようだから、あちらへ運んだり、何やかやと模様がえもしないことにしよう。浮舟の部屋で、彼女のために用意した新婚の調度類もそのままに、婿を迎えよう。

当日、常陸の介、一人結婚の準備に励む

一七（常陸の介が）気を利かしたつもりで、屏風をいくつも持ってきて。

一八 器物や冊子などを納める本箱様のもの。両開きの扉がある。（図録三、源氏物語絵巻「宿木一」参照）

一九 二層の棚を持つ調度。（同右参照）

筋に
おもむきに二心なきを見れば、気をもむこともなく今まで長の年月を過してきたので心やすくて年ごろをも過ぐしつるなり。一二 をりふしの心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ、嘆かしくうらめしきこともなく、かたみにうちいさかひても、納得できないことははっきりさせました心にあはぬことをばあきらめつ。一三 上達部親王たちにて、みやびかに心はづかしき人の御あたりといふとも、わが数ならではかひあらじ。一四 よろづのこと、わが身からなりけりと思へば、よろづに悲しうこそ見たてまつれ。いかにして、何とかして人笑へならずしたてたてまつらむ」と話し合うかたらふ。

守は準備に走り廻って いそぎたちて、「女房など、一五 こなたにきれいな人が大勢いるようだから めやすきあまたあなるを、当座の問私の方に貸して下さいこのほどはあらせたまへ。一六 やがて帳なども新しく仕立てられためるかたを、事にはかになりにためれば、取りわたし、とかく改むまじ」とて、西の方に来て、陣頭指揮をして何かと大層に飾り立てる立ちゐとかくしつらひ騒ぐ。めやすきよくすっきりした風情に さまにさはらかに、あちらこちら十分念入りに飾りつけてある部屋なのにあたりあたりあるべき限りしたる所を、一七 さかしらに屏風ども持て来て、いぶせきまで立て集めて、一八 厨子二階など、一九

一 前に乳母に向って、「すべてかかることに口入れじと思ふ」（二八五頁）と言っている。

二 西の対の北側の部屋。母屋を南北に仕切ってあるのであろう。婚礼は、南面で行われる趣。

三 あちら（北の方）のご本心は、よく分った。

四 まあよい、世間に母のない子はいないものでもなし。北の方が、見向きもしないのを恨んで言う。

五 妹娘の乳母。

六 髪はかわいらしく、小袿の丈ぐらいあり、裾はとてもふっさりしている。「小袿」は、婦人の略礼装（一巻図録一二参照）。

七 何も、あちら（北の方）が、ほかの人（浮舟）にと心積りしておられた婿君を、わざわざとは思うが。

八 あの仲人にだまされて、口移しに言うのも、いかにも馬鹿げている。草子地。

九 このところの扱いが豪勢で、申し分ないことだと、これならよかろうと思って。常陸の介方の準備のさまなど聞き及んでいるのであろう。

一〇 当夜の日取りもかえずに、通って来るようになった。二八三頁に「日をだにとりかへで、契りし暮にぞおはしはじめける」とあった。

見苦しいほどふやして
あやしきまでし加へて、心をやりていそげば、北の方見苦しく見れど、口入れじと言ひてしかば、ただに見聞く。御方は、北面にゐたり。「人の御心は見知り果てぬ。ただ同じ子なれば、さりともいと
（常陸介）三
全く同じ実の娘なのだから
かくは思ひ放ちたまはじとこそ思ひつれ。四さはれ、世に母なき子はなくやはある」とて、娘を、昼より乳母と二人、撫でつくろひ立てたれば、憎げにもあらず、十五六のほどにて、いと小さやかにふくらかなる人の、髪うつくしげにて小袿のほどなり、裾いとふさやかなり。これをいとめでたしと思ひて、撫でつくろふ。「何か、人の異ざまに思ひ構へられける人をしも、と思へど、人柄のあたらしく、かうざくにものしたまふ君なれば、われもわれもと、婿に取らまほしくする人の多かなるに、取られなむもくちをしくてなむ」と、かの仲人にはかられて言ふもいとをこなり。男君も、このほどのいかめしく思ふやうなることと、よろづの罪あるまじう思ひて、その夜もかへず来そめぬ。

得意になって支度するので
何も言わず
浮舟
念入りに装い立ててみ
見にくくもなく
小柄で
〔年は〕
〔常陸介は〕娘のこんな姿をとても美しいと思って
らとした身体つきで
〔常陸介〕七
もったいなく
〔少将は〕
特別すぐれていらっしゃるお方なので
欲しいと言わ
よそに取られてしまうのも残念でな
れる人が多いそうだから
少将

一一 何やらみっともない縁組なので、あれこれ世話を焼くのも気に染まないので。浮舟とともに一時家を明けようという積り。

一二 中の君。

一三 これといったご用もございませんでは。以下、母君の手紙の文面。

一四 慎まねばならぬことがございまして、（娘に）しばらく居所を変えさせたいと存じますが。物忌などで浮舟に方違えをさせたい、と口実を設ける。後に「ここには、御物忌と言ひてければ」（二九二頁）とある。

一五 （お邸の中に）人目につかず控えていられそうな目立たぬお部屋がございましたら、まことにうれしゅう存じます。二条の院に預かってもらえないか、の意。

一六 お頼み申す先としては、まずあなた様を。

一七 亡き父宮が、最後までお認めにならぬままだった人を。以下、中の君の思案。八の宮が、浮舟を娘として認めようとしなかったことは、宿木二三一～二頁の弁の尼の言葉に見える。

一八 かといって、みっともない有様で落ちぶれたりしているのを。

一九 大してしあわせな目にも会わず、どちらも落ちぶれてうろうろするのも、亡き父君にとって不面目なことであろうと、思い煩われる。中の君自身も後見のない心細い身の上である。

母君、中の君に文を送り、援助を頼む

母君、御方（浮舟）の乳母、いとあさましく（もうあきれて言葉もない）思ふ。[二]ひがひがしきやうなれば、とかく見あつかふも心づきなければ、宮の北の方の御もとに御文たてまつる。

[三]そのこととはべらでは、なれなれしくやとかしこまりて、（心に思い）え思ひたまふるままにも聞こえさせぬを、（あまり失礼かと存じご遠慮申しまして）つつしむべきことはべりて、しばし所かへさせむと思うたまふるに、[一五]いと忍びてさぶらひぬべき隠れの方さぶらはば、いともいともうれしくなむ。数ならぬ身（人数にも入らぬ）ひとつの蔭（力ではかばいきれず）に隠れもあへず、あはれなることのみ多くはべる世なれば、[一六]たのもしき方にはまづなむ。

（中君は）かわいそうだとはお思いになったが、（不憫に思うことばかりが多うございますこの世のこと）と、うち泣きつつ書きたる文を、（涙ながらに書いた手紙を）あはれとは見たまひけれど、[一七]故宮の、さばかりゆるしたまはでやみにし人を、われひとり残りて、（生き残って）知りかたらはむもいとつつましく、[一八]また見苦しきさまにて世にあふれむも、知らず顔にて聞かむこそ心苦しかるべけれ、[一九]ことなることなくてかたみに散りぼはむも、亡き人の御ために見苦しかるべきわざ

（親しく付き合うというのも大層気がひけることだし）

（知らぬ顔で聞き過すというのも気の毒なことであろう）

一 宇治以来の中の君づきの年輩の女房（早蕨一四一頁参照）。後文に、浮舟の母と同輩だったとある（三〇七頁）。中の君への取りなしを期待して、この人にも衷情を訴えた趣。

中の君、承諾する

二 以下、大輔の返事を要約したもの。中の君を説得して、承諾を取り付けたのである。

三 あの西の廂に、人目につかぬ部屋をしつらえて。西の対（中の君の御殿）の西廂のこと。後に「西の廂の、北に寄りて人げ遠き方に局したり」（二九一頁）とある。

四 あのお方に対しては。中の君のこと。

五 かえって、こんなことになったのをうれしく思う。少将との縁談がこわれた揚句、家にいたたまれなくなったこと。

常陸の介の婿扱い

六 ただ生地の粗い東絹をいくつも、無造作にまるめて（簾の中から）投げ出した。「東絹」は、東国産の織りの粗い絹。少将の供人などへの禄に、巻絹にして与える。一本ずつ腰に差して退出するので、腰差しともいう。

七 下僕などは、その大盤振舞をまことに大層な心遣いと喜んだので。

をおぼしわづらふ。

大輔がもとにも、〔母君から〕いろいろ心配でならぬ旨を言ってやったので（大輔）何かわけがあるのでございましょう いと心苦しげに言ひやりたりければ、「さるや冷たく取りつく島もないようなお断りはなさいますな このような母の卑しい者が うこそはべらめ。人憎くはしたなくもなのたまはせそ。かかる劣ごきょうだいのなかに時たまいられるのも 世間によくあることです りの者の、人の御なかにまじりたまふも、世の常のことなり」など聞こえて、「さらば、（大輔）かの西の方に、隠ろへたる所し出でて、いとそれでもよろしゅうございましたら しばらくの間でも むつかしげなめれど、さても過ぐいたまひつべくは、しばしのほど」〔母君に〕言ってやった〔母君は〕と言ひつかはしつ。いとうれしと思ほして、人知れず出でこっそり出かけようとする 浮舟 御方も、お親しくして頂きたいという気持があるので かの御あたりをば、むつびきこえまほしと思ふ心なれば、なかなか、かかることどもの出で来たるを、うれしと思ふ。

新婚のもてなしを どんなにか立派なものにしようと思うのだが 守、少将のあつかひを、いかばかりめでたきことをせむと思ふに、どうすればはなやかにできるかそのすべも知らぬ人なので そのきらきらしかるべきことも知らぬ心には、ただあららかなる東置き場もないほど 絹どもを、押しまろがして投げ出でつ。食物も、所狭きまでなむ運運び出して大騒動をしていた び出でてののしりける。下衆などは、それをいとかしこき情に思ひ 少将 全く思い通りで 我ながら利口な縁組をしたものだ ければ、君も、いとあらまほしく、心かしこく取り寄りにけり、と

八「客人」は、婿の少将のこと。新しく通ってくるのでこういう。「出居」は、客を接待する表座敷。
九（少将の）供人の控え所。
一〇 先妻腹の娘の婿。（二七五頁注一六参照）
一一 この巻冒頭に「守の子どもは……あまた……まだ幼きなど、すぎすぎに五六人ありければ」とあった。
一二 今まで浮舟が住んでいた西の対。
一三（浮舟を）廊などといった家の隅の方にお住まわせするのも、気に入らぬしおいたわしく思われて。
一四 この方（浮舟）のお身内に、（浮舟を）人並みに扱って下さる方がないので軽く見るのだろう。れきとした親戚がないと思って侮るのだろう。母君の思い。

母君、浮舟を伴って二条の院に参上

一五 取り分けお許しのなかった所だが。八の宮から実の娘と認めてもらえなかったことをさす。
一六 二条の院の西の対（中の君の御殿）の西廂。
一七 障子（襖）や屏風、几帳で、仕切り囲うこと。
一八（母君が）御前に参る時は（中の君は）几帳に姿を隠したりはなさらないで。前にも参上していること、宿木二三二頁の弁の尼の言葉に見える。
一九 今年二月に生れた男の子。（宿木二四三頁参照）
二〇 私だって、亡き北の方に繋がりのない者であろうか。以下、母君の心中の思い。この人が、八の宮の北の方の姪であること、宿木二三三頁に見える。

東屋

思ひけり。北の方、このほどを見捨てて知らざらむもひがみたらむ、と思ひ念じて、ただするままにまかせて見ゐたり。客人の御出居、侍としつらひ騒げば、家は広けれど、源少納言、東の対には住む、男子などの多かるに、所もなし。この御方に客人住みつきぬれば、廊などほとりばみたらむに住ませたてまつらむも、飽かずいとほしくおぼえて、とかく思ひめぐらすほど、宮にとは思ふなりけり。

この御方ざまに、かずまへたまふ人のなきをあなづるなめり、と思へば、ことにゆるいたまはざりしあたりを、あながちに参らす。乳母、若き人々二三人ばかりして、西の廂の、北に寄りて人げ遠き方に局したり。年ごろかくはるかなりつれど、うとくおぼすまじきなので人なれば、参る時は恥ぢたまはず、いとあらまほしく、けはひことじで、若君の御あつかひをしておはする御ありさま、うらやましくおぼゆるもあはれなり。われも、故北の方には離れたてまつるべき人かは、つかうまつるといひしばかりに、かずまへられたてまつら

結婚の当座を知らぬ顔に外出してかまいつけないのも意地悪のようだ
と我慢して
〔守の〕
部屋の用意に大騒ぎなので
住んでいるし
匂宮邸にとは思いついたのだった
これからどうするか思案する間
女房
伴って
〔母君は〕長年こうお付合いはなかったけれど
他人とはお思いになれない人
何一つ不足なところなく
とても上品な感じで
お相手をしてあやしていらっしゃるご様子が
〔母君には〕羨ましく思われるにつけ胸が迫ってくる
女房としてお仕えしていたというだけで
〔八宮から〕人並みに扱って頂けずに

一 こちらのお邸には、御物忌だと触れてあったので、（浮舟の部屋には）誰もやって来ない。「物忌」は、陰陽道で、凶事を避けるため、身を慎み、家の内に籠って、外部と交渉しないこと。厳重な物忌には、居所を変えることもある（二八九頁注一四参照）。

二 今回は、ゆっくりとした気分で、こちらのお暮しぶりを拝見する。次に、その様子や母君の感慨が記される。

三 匂宮が、西の対においで

母君、匂宮を隙見する

になる。

四 容姿の美しいことの形容。「花を折る」という修辞もある（『栄花物語』根合）。

五 自分が頼もしい夫と思って、ひどいと恨む時もあるものの、その意には背くまいと思っている常陸の守よりも。

六 姿顔立ちも人品風采も、はるかに立派そうな五位四位の連中が。令制では、四位五位は赤色の袍を着用。一条朝では、四位は黒色という。

七 貴族の家の家政を行う者。四位五位の者が任命される。

八 先妻腹の息子。「式部の丞」は、式部省（朝廷の儀式、文官の考課、選叙をつかさどり、大学寮を管理した省）の三等官。「蔵人」は、蔵人所の職員。いずれも六位相当。ここは、式部丞で蔵人に補せられたのである。

九 ああ、一体これはどういうお方なのか。何とすば

情けないことにこうして世間からは見下げられるのだ　こうして押しと思うにつけては

ず、くちをしくてかく人にはあなづらるる、と思ふには、かくしひてむつびきこゆるもあぢきなし。ここには、御物忌と言ひてければ、

かけて来てお親しく願うのもおもしろくない

人も通はず。二三日ばかり母君もゐたり。こたみは、心のどかにこの御ありさまを見る。

滞在した

三 宮わたりたまふ。ゆかしくてもののはさまより見れば、いときよらに、四桜を折りたるさましたまひて、五わがたのもし人に思ひて、うらめしけれど、心には違はじと思ふ常陸の守より、六さま容貌も人のほども、こよなく見ゆる五位四位ども、あひひざまづきさぶらひて、このことかのことと、あたりあたりのことども、家司どもなど申す。

[母君は] 拝見したくて物の隙間からのぞいてみると　[匂宮は] とても

お美しく

[お前に] いっせいに勝まずいたまま控えて

あれこれたくさんの事務の報告を

[母君が]

また若やかなる五位ども、顔も知らぬどもも多かり。八わが継子の式部の丞にて蔵人なる、内裏の御使にて参れり。御あたりにもえ近く参らず、こよなき人の御けはひを、あはれこは何人ぞ、かかる御あたりにおはするめでたさよ、よそに思ふ時は、めでたき人々と聞こゆとも、つらき目見せたまはばと、もの憂くおしはかりきこえさせ

[息子は] 匂宮のお側にも近寄れず畏まっていて　[そんな] この上もない宮のご様子を　遠くで考える時は　こんなお方の奥方になられた中の君のご運のすばらしさよ　いくら結構なご身分の方々と

申しても　冷たいお仕打ちをなさるのならと　気の進まぬことご想像申していた

らしい方だろう。以下、母君の感嘆の思い。
一〇 織女のように、年に一度の逢瀬であっても。前に「つらき目見せたまはば」とあったのに応じる。
一一 身辺に置いて、姿を隠すためのもの。普通、三尺の几帳である。
一二 何かお話をしていらっしゃるお二人のお顔立ちは、どちらも大層お美しく、お似合いのご夫婦である。
一三 亡き八の宮。「世にかずまへられたまはぬ古宮」であった（六巻橋姫冒頭）。
一四 御帳台。周囲に垂絹をした寝所（一巻図録九参照）。
一五 廷臣たち。匂宮の恩顧、口添えを期待して集まる。帝、后の愛子としての宮の権勢がしのばれる。
一六 日が暮れるまでおやすみになった。
一七 お食膳はこちら（西の対）にお運びする。
一八 わが家ではすばらしい暮しぶりをしていると、見もし思いもしていたけれど。以下、母君の思い。
一九 財力を頼んで、父親（常陸の介）が、皇后にもしてみせようと思っている娘たちは。「ぬし」は軽い敬語。
二〇 同じわが腹を痛めた子ながら、（浮舟とは）まるで人柄が違っている（さすが八の宮の娘は、受領の娘と比べものにならない）と思うにつけても。

母君、浮舟の結婚に、高い理想を持ち始める

つらむあさましさよ、この御ありさま容貌を見れば、織女ばかりにとはとんでもないことだった

ても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかこのように時々お逢い申すことができるのなら本当に何とすばらしいことだろう

な、と思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。女君、短き几帳を隔[匂宮は]中の君あやしていらっしゃる

ててはするを、おしやりて、ものなど聞こえたまふ御容貌ども、[匂宮は]

いときよらに似あひたり。故宮のさびしくおはせし御ありさまを思ひひっそりとお暮しであったご様子を

ひくらぶるに、宮たちと聞こゆれど、いとこよなきわざにこそありけれ、とおぼゆ。同じ宮様と申しても全く雲泥の差があるものなのだ

帳のうちに入りたまひぬれば、若君は、若き人、乳母などもてあ[匂宮が]女房お相手申し上げる

そびきこゆ。人々参りあつまれど、なやましとて、大殿籠り暮らし気分が悪いといって

つ。御台こなたに参る。よろづのこと気高く、心ことに見ゆれば、高貴で立派に見えるので

わがいみじきことを尽くすと見思へど、なほなほしき人のあたりは身分の低い者のすることはどう気張って

くちをしかりけり、と思ひなりぬれば、わが娘も、かやうにてさし浮舟このような高貴な方のもたかが知れているのだ

並べたらむには、かたはならじかし、勢を頼みて、父ぬしの、后にお側に置いたとしてもおかしくはあるまい

もなしてむと思ひたる人々、同じわが子ながら、けはひこよなきを

思ふも、なほ今よりのちも、一心は高くつかふべかりけりと、夜一夜あらましごとに思ひ続けらる。

三 宮、日たけて起きたまひて、「后の宮、例の、なやましくしたまへば、参るべし」とて、四御装束などしたまひておはす。ゆかしうぼえてのぞけば、うるはしくひきつくろひたまへるはた、似るものなく、気高く愛敬づききよらにて、若君をえ見捨てたまはで遊びおはす。五御粥強飯など参りてぞ、こなたより出でたまふ。今朝より参りて、さぶらひの方にやすらひける人々、今ぞ参りてものなど聞こゆるなかに、きよげだちて、なでふことなき人のすさまじき顔した

お具合がお悪いので
どんなお姿かと
参内しなければ
見たくて覗くと
改まった装いで身づくろいをなさったお姿は格別で
魅力があって美しく
お放しになれないであやしていられる
召し上がってから
休息していた廷臣たちが
詰所
何かとご報告申し上げているなかに
人並みにめかしこんで
どこといって取柄のない男でかわいげのない顔をしたの

る、八直衣着て太刀佩きたるあり。御前にて何とも見えぬを、一〇「かれぞこの常陸の守の婿の少将な。はじめはこの御方にと定めけるを、守の娘を得てこそいたはられめ、など言ひて、一一かしけたる女の童を得たるななり」「いさ、一二この御あたりの人はかけても言はず。一三かの君の方より、よく聞くたよりのあるぞ」など、おのがどち言ふ。聞

（中君方の女房）
浮舟
実の娘を貰って大事にしてもらいたい
（女房）
詳しく聞くってがあるのですよ
［そんなことは］口にもしません
［母君が］
朋輩同士話している

一 理想は高く持つべきものだったと。身分の高い婿君と結婚させるべきだ、と考えを改める。
二 これからのことがいろいろ考えられてならない。青表紙本「あらましかたり」。誤写と見て訂す。
三 匂宮は、日が高くなってからお起きになって。ここから、**少将、登場　匂宮のお前では、生彩なし**
翌日のこと。
四 参内のためのお召し物などお着けになっている。袍（束帯の表着）に、冠、指貫着用の衣冠姿であろう。
五 「粥」は、堅粥といって、今の普通の御飯。「強飯」は、蒸した御飯。
六 西の対。直接、中の君方から出かけるのである。
七 今しも、こちら（西の対）に参上して。
八 「直衣」は、貴族の平常着であるが、宿直の時にも着用する。「太刀佩く」は、武官の装いである。近衛次将は、宿直の時、帯剣のまま殿上することを特に許される（『花鳥余情』）。これが左近の少将である。
九 匂宮のお前では、一向に目立たないのを。
一〇 あれが例の常陸の守の婿の少将なのね。以下、御簾の中から、外の男たちを見ての、女房たちの私語。
一一 痩せっぽちの女の子を貰ったのですって。「かしけたる」は、十分発育していないこと。
一二 こちらの人。浮舟方の女房。
一三 あちらの方。少将方。

一四 少将を、相当な身分の者と考えた自分の料簡も残念で。以下、母君の思い。

一五 この頃では、一晩逢わないでも、気が気でならぬのがつらいことだ。「一夜を隔つるも……」は、恋の思いをいう歌語的表現。「今は一夜を隔てむことのわりなかるべきこととおぼさる」（二巻葵一一八頁）は、新枕のち、紫の上に対する源氏の思い。なお、葵一一九頁注一五参照。

一六 （匂宮が）お出かけになってしまったあとは、穴があいたようで、ぼんやりしている。母君の様子。

一七 母君が、中の君のお前に推参して。しばらくして、我に返ったのであろう。

一八 亡き奥方様。八の宮の北の方、中の君の母君のこと。浮舟の母は、その姪で、当時女房として仕えていた。

一九 お話にならぬほど、お小さい頃で。北の方は、中の君を産んだあとの肥立ちが悪くて、亡くなられたこと、六巻橋姫二五六頁参照。

二〇 あんな辺鄙な（宇治のような）山奥でお育ちになったのでもありました。不遇な生い立ちはむしろ異数の出世の予兆であった、という考え方。「山ふところ」は、幼少の中の君が「生ひ出づ」という連想からの用語。

母君、中の君に匂宮をほめる

聞いていようとも思わず　女房連中がこんな噂をするにつけても　どきっとして

くらむとも知らで、人のかく言ふにつけても、胸つぶれて、一四少将をめやすきほどと思ひける心もくちをしく、見ての通り大したこともなさそうな げにことなることなかる人物だったのだ べかりけり、と思ひて、いとどしくあなづらはしく思ひなりぬ。若君のはひ出でて、御簾のつまよりのぞきたまへるを、［匂宮が］うち見たまひて、立ち返り寄りおはしたり。「御ここちよろしく見えたまはば、（匂宮）中宮様のご気分がおよろしいようなら すぐに退出して参ろう やがてまかでなむ。なほ苦しくしたまはば、今宵は宿直にぞ。一五今は相変らずお悪いようなら 一夜を隔つるもおぼつかなきこそ苦しけれ」とて、しばしなぐさめとってあやして 遊ばして、出でたまひぬるさまの、かへすがへす見るとも見るとも飽くまじく、輝くばかりにお美しいので にほひやかにをかしければ、一六出でたまひぬる名残さうざうしくぞながめらるる。

女君の御前に出で来て、［匂宮を］大げさにおほめ申し上げるので いみじくめでたてまつれば、田舎びたる、［中君は］とおぼして笑ひたまふ。（母君）「故上の亡せたまひしほどは、言ふかひなく幼き御ほどにて、いかになりあそばすことかと 一八 一九 お仕え申す人々も 八 の宮も 宮もおぼし嘆きしを、この上ない こよなき御宿世のほどなりければ、ご運勢でいらしたからこそ 二〇 さる山ふ

一 亡き大君。
二 こんな身の上が情けなく、心細い折にも。六の君のことなどで、つらい思いをした折など。
三 多少なりとも気の晴れる時もありますが。若君誕生の時など。
四 昔、お頼り申し上げたご両親に先立たれましたことは、かえって世間によくあることと諦められて。
五 （ことに母上は）お顔も存じ上げぬままになってしまったので、そんなでもありませんが。「あるを」は、「尽きせずいみじくこそ」に対応する代用句。
六 ほかの何ごとにも心が移らないと、いつもお嘆きで、その深いお心のほどを見るにつけても。「愁ふ」は、泣き言を言う意。薫は、女二の宮降嫁にも心慰まぬ旨を中の君に訴えていたこと、宿木二四八頁参照。
七 やはりこの御降嫁のことは、おやめにもならなかったでしょうか。大君存命ならば、二の宮との縁組は、お取りやめになっていたかもしれない、の意。
八 姉妹とも同じような身の上よと、世間の笑いものになったようなつらい思いをするのも、かえってみじめなことだったでしょう。匂宮が六の君を正室にしたように、薫も二の宮を迎えて、姉妹は同様の運命に泣くことになっただろう、の意。

ところのなかにも、生ひ出でさせたまひしにこそありけれ。（残念なこと）くちをしく、故姫君（亡くなりになってしまったことが）のおはしまさずなりにたるこそ、飽かぬこと（晴れぬ思いでございます）なれ」などうち泣きつつ聞こゆ。君（中の君）もうち泣きたまひて、「世（中君）の中のうらめしく心細きをりをりも、またかくながらふ（またこうして生きていれば）ればすこしも思ひなぐさめつべきをりもあるを、いにしへ頼みきこえける蔭どもに後れたてまつりけるは、なかなかに世の常に思ひなされて、見たてまつり知らずなりにければ、あるを、なほこの御ことは（やはり姉君のことは）、尽きせずいみじくこそ。（いつまでも悲しくてなりません）薫大将の、よろづのことに心の移らぬよしを愁へつつ、浅からぬ御心のさまを見るにつけても、いとこそくちをしけれ（本当に残念に思われます）」とのたまへば、「大将殿（母君）は、さばかり世にためしなきまで（あんなに世間に例のないほど）、帝のかしづき（大事な婿君と）おぼしたなるに、心おごりしたまふらむかし（いい気になっておいでなのでしょうよ）。おはしまさましかば、なほこのこと、せかれしもしたまはざらましや」など聞こゆ。「いさや（お思いのご様子なので）、やうのものと、人笑はれなるここちせましも、なかなかにやあらまし。見果てぬにつけて心にくくもある世にこそは、と思へど、

（中君）
（さあ）
（途中で亡くなられたからこそいつまでも心に残る仲なのだ）

九 亡き父宮の後世のことまで、いろいろ深く考えてあれこれとお世話して下さっているようです。八の宮追善のため、宇治の寝殿を寺にしたことなど。

一〇 そのお亡くなりになった姫君のお身代りに、引き取って世話したいと、私などの数にも入らぬ娘のことまで、あの弁の尼君には仰せだったのです。この巻冒頭にそのことが見える。

一一 それも、娘が大君のゆかりの者なればこそ、お声を掛けて下さるのだ、と。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」――恋人の縁につながる者は皆なつかしく思われる（『古今集』巻十七雑上、読人しらず）。

一二 ここの女房も知っていると思うので。挿入句。前に女房たちの私語を聞いている（二九四頁）。

一三 不本意な身の上になって、落ちぶれてさすらいましょうことが悲しいので。身分の低い男の妻になって、地方を流浪したりすること。

一四 （いっそのこと）尼にして、深い山奥にでも住まわせて、世捨人として俗世のことは考えないことにしましょうか。「世の中」は、普通の結婚生活のこと。

一五 いえなに、人に軽んじられるとおっしゃることは、それは私どものように、親のない者の常です。父親の庇護のない者の運命だ、と言う。

母君、浮舟の不運を中の君に訴える

薫

かの君は、いかなるにかあらむ（どういうわけでしょうか）、あやしきまでもの忘れせず（不思議なほど昔のことをお忘れにならず）、故宮（こみや）の御後（おぢ）の世をさへ、思ひやり深く後見（うしろみ）ありきたまふめる」など、心（うち）とけて何かとお話しになる）うつくしう語りたまふ。（母君）一〇「かの過ぎにし御代（かは）りに尋ねて見むと、この数ならぬ人をさへなむ、かの弁の尼君にはのたまひける。さもや（ではその）ようにととても踏み切れるお話ではございませんけれども）と思うたまへ寄るべきことにははべらねど、一本（ひとも）ゆゑにこそはと、恐れ多い言い分ですが）かたじけなけれど、あはれになむ思うたまへらるる（しみじみおやさしいお方と思われます昔を忘れぬお心深さです）御心深さなる」など言ふついでに、この君をもてわづらふこと、泣く泣く語る。（浮舟の身の振り方に思い悩んでいることを詳しくではないが）

こまかにはあらねど、人も聞きけりと思ふに、少将の思ひあなづ（人を馬鹿にして）りけるさまなどほのめかして、（母君）「命はべらむ限りは、何か、朝夕の（私が生きています限りは）なぐさめぐさにて見過ぐしつべし。（何の「浮舟を」朝晩の話し相手としてこのままやってもいけましょう）うち捨てはべりなむのちは、一三（一人残して先立ちましたあとは）思はずなるさまに散りぼひはべらむが悲しさに、尼になして、深き山にやしすゑて、さるかたに世の中を思ひ絶えてはべらまし、などなむ、思うたまへわびては、思ひ寄りはべる」など言ふ。（中君）「げに心苦（本当にお気の毒なお身の上ではありましょうけれど）しき御ありさまにこそはあなれど、一五何か、人にあなづらるる御あり（思いあぐねました末には）（そんなことも考えます）

一（父宮が）ひたすらそのように（山里で暮すように）お決めになっていた私でさえ。宇治の地を離れぬようにという八の宮の遺訓は、六巻椎本三一九～三二〇頁に見える。

二 尼になられるのも。「やつい」は「やつし」の音便。「やつす」は、見ばえのない姿にすること。

三 なるほど、常陸殿といった風采である。いかにも田舎者の受領の妻といった風情、と茶化した草子地。

四 亡き宮様（八の宮）が、冷たく薄情にお見捨てになりましたので、いよいよ人並みには扱ってもらえず、世間からも馬鹿にされなさるのだと思っていましたが。

五「浮島」は、陸奥の国の歌枕。常陸の介が陸奥の守であったことは、宿木二三二頁に見える。「浮島」に「憂き」を響かせ、奥州赴任時代のつらかった思い出なども語ったことをいう。「塩釜の前に浮きたる浮島の浮きて思ひのある世なりけり」（『古今六帖』三、しほがま）

六「わが身ひとつの」―私一人がなぜこんなにつらい目にと、その悲しみを語り合う人もいない常陸での暮しも。「筑波山」は常陸の歌枕（二六九頁注一参照）。「世の中は昔よりやは憂かりけむわが身ひとつのためになれるか」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）

七 あちらでは。自宅の常陸邸のこと。

さまは、かやうになりぬる人のさがにこそ。さりとてもえ堪へぬわ（山住みを通すのもなかなかできることではありませんので）ざなりければ、むげにそのかたに思ひおきてたまへりし身だに、（この通り思いがけない生活をしているのですから［出家など］ましてとんでもないことです）かく心よりほかにながらふれば、まいていとあるまじき御ことなり。

二 やついたまはむも、いとほしげなる御さまにこそ」など、いとおと（とてもおいたわしいほどおきれいですもの）なびてのたまへば、母君、いとうれしと思ひたり。ねびにたるさま（いかにも分別ありげにおっしゃるので）なれど、よしなからぬさましてきよげなり。いたく肥え過ぎにたるなむ、常陸殿とは見えける。「故宮のつらう情なくおぼし放ちたりし（風雅のたしなみもなくはない感じでこざっぱりしている）に、いとど人げなく、人にもあなづられたまふと見たまふれど、（［母君は］年はとっているけれども）かう聞こえさせ御覧ぜらるるにつけてなむ、いにしへの憂さもなぐ（［中君に］こうしてお話し申し上げお目通り頂くにつけて昔のつらさも忘れるのでございます）さみはべる」など、年ごろの物語、浮島のあはれなりしことも聞こえ出づ。「わが身ひとつのとのみ、言ひ合はする人もなき筑波山のありさまも、かくあきらめきこえさせて、いつもいつも、いとかくてさぶらはまほしく思ひたまへなりはべりぬれど、かしこにはよか（［母君］長年の身の上話をして）らぬあやしのものども、いかにたち騒ぎもとめはべらむ。さすがに（こう胸も晴れるばかり申し上げましたので）（もうこんなふうにしてお側にはべらして頂きたいという気持になりましたが出来の悪いおかしな子供たちがどんなに大騒ぎして私を探っておりましょうやはり心配で）

八 こんな受領風情の妻に身を落すのは、無念なことでございましたとは、私自身もよくよく分りましたので。二条の院滞在中に、母君が肝に銘じたこと。

九 この方（浮舟）の結婚については、あなた様にお任せ申し上げて、私は構いますまい。中の君の縁で、立派な結婚をさせてやってほしい、と頼む。

一〇 中の君にお願いするように申し上げるので。

一一 本当にいい結婚をしてほしいものだ。「げに」は、母君の「かかるほどのありさまに身をやつすは……」を受けたもの。

一二 顔立ちも性質も、とても憎めそうにないほどかわいい感じである。以下、中の君から見た浮舟の印象。

一三 近くに控える（中の君方の）女房たちにも、上手に几帳の陰に姿を隠していらっしゃる。みだりに姿を見せないのが、姫君のたしなみ。

一四 あの人形を捜していらっしゃる方。薫のこと。「人形」の語、宿木二二一頁、二二四頁参照。

一五 （女房たちは）いつものように、御几帳を整えて、気遣いする。いつも簾に几帳越しの対面であること、宿木一九八頁に見える。

一六 「客人の母君」で一語。何もかもが物珍しい感じ。

一七 ほんのちらりとお姿を拝した人が、大層ご立派な方とお噂しているようですが。前に浮舟の乳母が「ほのかに見たてまつりしに……」（二八五～六頁）と語っている。

薫、来訪　母君、隙見する

落着かない気持がしてまいります

心あわたたしく思ひたまへらるる。[八]かかるほどのありさまに身をやつすは、くちをしきものになむはべりけると、身にも思ひ知らるるを、[九]この君は、ただまかせきこえさせて、知りはべらじ」など、か[一〇]こちきこえかくれば、[一一]げに見苦しからでもあらなむ、と見たまふ。

容貌も心ざまも、え憎むまじうらうたげなり。もの恥ぢもおどろ[一二]

はにかむにしても度が過ぎ　気は利くらしく

るようなことはなく　上品に

おどろしからず、さまよう児めいたるものから、かどなからず、近[一三]

おっとりとしているけれど　〔浮舟が〕何かものを言う

くさぶらふ人々にも、いとよく隠れてゐたまへり。ものなど言ひた

様子も　亡き大君のご様子に　不思議なほどそっくりな感じをお写し申していることよ

るも、昔の人の御さまに、あやしきまでおぼえたてまつりてぞある

お見せ申し上げたいものだ　ふとお思い出しに

や、かの人形もとめたまふ人に見せたてまつらばや、とうち思ひ出[一四]

なったちょうどその時に　（女房）薫　誰かが

でたまふをりしも、「大将殿参りたまふ」と人聞こゆれば、例の、[一五]

御几帳引きつくろひて、心づかひす。この客人の母君、「いで見た

見しましょう　どれひとつ拝

てまつらむ。[一七]ほのかに見たてまつりける人の、いみじきものに聞こ

とても及ばれますまい　〔中君の〕

ゆめれど、宮の御ありさまには、え並びたまはじ」と言へば、御前

匂宮　女房たち　さあ　どちらともお決め申せません　皆で申している

にさぶらふ人々、「いさや、えこそ聞こえ定めね」と聞こえあへり。

一（薫が）今しがた車からお降りになったようだ、と聞く時は。気配で察する体。
二 なかなか姿をお見せにならない。ゆったりと振舞う薫の貴人らしい挙措が、母君には強い印象を与える。
三 お部屋にお入りになる様子を見れば。廂の間に招じられたのである。母君は、母屋の御簾の隙間から覗き見している。以下、母君の思いに添って書かれる。
四 いかにも、何とすばらしい、風情がおありだとも見えないものの。古注は、真面目な人柄だからである、という。「げに」は、優劣はつけがたいと言った女房の言葉を受けたもの。
五 うっかり対面するのも憚られるほど立派なお姿で。薫の優雅さや気品に圧倒される思い。
六 つい額髪などにも手がいって。「額髪」は、頬のあたりに垂れる前髪。
七 この上もないすばらしさでいらっしゃる。匂宮にもまさる、という結論。
八 前駆の者が大勢いる様子で。参内の折の正式の行装のままである。
九 明石の中宮腹の宮たち。
一〇 今朝も大層怠けて、遅く参内なさいましたが。前に「宮、日たけて起きたまひて……」（二九四頁）とあった。
一一 失礼ながら、あなたのご失態と推察申し上げています。中の君が引き留めたための遅参であろうと、冗談に言う。

（母君）一体どれほどの人が「いかばかりならむ人か、宮をば消ち（匂宮をお負かせ申すでしょう）たてまつらむ」など言ふほどに、一今ぞ車よりおりたまふなる、と聞くほど、かしかましきまで（やかましいほど大声で先払いの声がして）追ひののしりて、二とみにも見えたまはず。（一同の期待をお集めになって）待たれたまふほどに、三歩み入りたまふさまを見れば、四げに、あなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、（優雅な感じがして上品でおきれいでいらっしゃる）なまめかしうあてにきよげなるや。五すずろに見え苦しうはづかしくて、額髪（六）などもひきつくろはれて、（気がひけるほどたしなみ深い態度で）心はづかしげに用意多く、（すぐこちらへ参られたのであろう）際（七）もなきさまぞしたまへる。内裏（八）より参りたまへるなるべし、御前（九）どものけはひあまたして、（薫）「昨夜、后の宮（中宮様がお具合が悪いよし）のなやみたまふよしうけたまはりて（参内しましたところ）参りたりしかば、宮たちのさぶらひたまはざりしかば、（お側にいらっしゃいませんでしたので）いとほしく（おいたわしく存じ上げまして）見たてまつりて、（お付き添い申していました）宮（匂宮）の御代りに今までさぶらひはべりつる。一〇今朝（けさ）もいと懈怠（けたい）して参らせたまへるを、一一あいなう御あやまちにおしはかりきこえさせてなむ」と聞こえたまへば、「（中君）げにおろかならず、思ひやり深き御用意になむ」とばかりいらへきこえたまふ。宮（匂宮）は内裏（内）にとまりたまひぬるを見おきて、ただならずおはした（あ一方ならず）（行き届いたお心遣いを頂きまして）（ご挨拶をお返し申し上げなさる）（お泊りになったのを見届けておいて）（何か思うところがあってお出

一二 何かにつけて。結婚とか昇進とかあるごとに。
一三 そんなにまで深く、どうしていつまでも（大君のことが）忘れられないでいられようか、これはやはり、最初深く思っているように言い出したことなので、すっかり忘れてしまったと思われたくないということだろうか。中の君の思い。
一四 人の気持は、はっきりとご様子に出るものだから。
一五 人は木石ではないから、中の君もよくお分りになる。「人非二木石一皆有レ情」（『白氏文集』巻四諷諭「李夫人」）
一六 こんな恋慕のお気持を癒す御禊をおさせ申したいとお思いになったからだろうか。「恋せじと御手洗川にせし禊神は受けずもなりにけるかな」（『伊勢物語』六十五段）
一七 浮舟のことを。「人形」は、薫自身使った言葉であるが、禊の縁語でもある（宿木二二一頁参照）。
一八 そのご本尊が、私の願いを叶えて下さるようなありがたくもありましょうが。薫は、前に「山里の本尊にも……」（宿木二二四頁）と言ったことがある。
一九 時々、満たされぬ思いをするようでは（中の君への執着が断てぬようでは）、かえって悟りの境地もおぼつかないでしょう。「山水」は、山中を流れる川。仏道修行を営むにふさわしい清浄の地。転じて、その境地。

中の君、薫に浮舟のことをすすめる

でになったようだるなめり。

（薫は）例の、物語いとなつかしげに聞こえたまふ。事に触れて、ただいにしへの忘れがたく、世の中のもの憂くなりまさるよしを、あらはには言ひなさで、かすめ愁へたまふ。さしもいかでか、世を経て心に離れずのみはあらむ、なほ浅からず言ひそめてしことの筋なれば、名残なからじとにや、など見なしたまへど、人の御けしきはしるきものなれば、見もてゆくままに、あはれなる御心ざまを、岩木ならねば、思ほし知る。怨みきこえたまふことも多かれば、いとわりなく思ほすにやあらむ、かの人形のたまひ出でて、「いと忍びてこのわたりになむ」と、ほのめかしきこえたまふを、かれもなべてのこちはせず、ゆかしくなりにたれど、うちつけにふと移らむこちはたせず。（薫）「いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそ尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく」とのたまへば、

（大君のことが）まな言い方ではなくて
（この世がいよいよつまらなく思えてくるということを）
（それとなくお訴えになる）
（考えてご覧になるが）
（ずっと見ているうちに）
（しみじみと胸を打つご真情を）
（薫が）叶わぬ思いをお怨み申されることも多いので
（中君は）困ってほっと嘆息して
（中君）ごく内々でこちらに
（薫は）その人のことも並々に
（ちらと一言申し上げなさると）
（話を聞くなりすぐにそんな気持にはとても）
（逢ってみたくは思ったが）
（薫）さて
なれない
は思えず
来ておりますの

一 困ったご道心ですこと。仏道修行に寄せた冗談。
二 ただ今のお言い逃れのお言葉は、思い出してみると、何やら不吉な思いがします。大君が中の君を身代りにと譲ったことが思い出される、と言う。
三 亡き大君の身代りならば、始終側に置いて、恋しく思う折々は、その思いを移して流す撫物にしましょう。「なでもの」は、紙製の人形のこと。これで身体を撫で、罪、災厄、穢れなどを移して、水に流す祓えの具。「瀬々」「なでもの」は縁語。
四 禊河の瀬ごとに流し出す撫物でしたら、一生お側に置いて頂けると誰が頼みにしましょう。
五 「引く手あまたに」とか申します。「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」(『古今集』巻十四恋四、ある女の、業平の朝臣をところ定めずありきすと思ひて詠みてつかはしける　読人しらず。『伊勢物語』四十七段)。大幣は、祓えの時、大勢の人が引き寄せて身を撫で、穢れを移し祓う。ほかに女が大勢いては浮舟がかわいそう、と姉らしく言う。
六 私の気持の最後の寄るべ、それは申すまでもありません。あなたなのだ、という含み。「大幣と名にこそ立てれ流れてもつひに寄る瀬はありてふものを」(『古今集』同右、返し　業平朝臣。『伊勢物語』同右)
七 まるでいまいましい、はかない水の泡にも比べられるような私の思いです。「水の泡の消えで憂き身といひながら流れてなほも頼まるるかな」(『古今集』巻十五恋五、友則)による。

(中君)一 果て果ては、「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひたまふも、(薫)二 「いでさらば、伝へ果てさせたまへかし。(中君)三 この御のがれ言葉こそ、思ひ出づればゆゆしく」とのたまひても、また涙ぐみぬ。

(薫)三 見し人の形代ならば身に添へて
恋しき瀬々のなでものにせむ

と、例の、たはぶれに言ひなして、まぎらはしたまふ。

(中君)四 みそぎ河瀬々にいださむなでものを
身に添ふ影とたれかたのまむ

(薫)五 引く手あまたに、とかや。いとほしくぞはべるや」とのたまへば、(中君)六 「つひに寄る瀬は、さらなりや。七 いとうれたきやうなる水の泡にもあらそひはべるかな。かき流さるるなでものは、いで、まことぞかし。いかでなぐさむべきことぞ」など言ひつつ、暗うなるもうるさければ、かりそめにものしたる人も、あやしく、と思ふらむもつつ

しまいには　冗談のように言いつくろって　涙を　(薫)は　かすかにお笑いになるのも　(薫には)　好もしく聞える　(薫)さあそれでは　(私の気持を)　先方によくお伝え下さい　(それでは)　かわいそうでございます　捨てられて流れてゆく撫物とは　全く私のことで　どうしたらこの思いが晴れるのでしょう　言うちに　日が暮れてくるのも事面倒　なので　しばらく泊りに来ている浮舟の母なども　おかしい　と思うだろうと気にもなる

八 浮舟たちに。

九 このような私の願いは、もう長年のことですから、この頃の思いつきだなどと、いい加減に思わないように、よくよくおっしゃって下さいまして、恥をかくようなことがございませんように（お願いします）。浮舟方に話を伝えてくれるように、との依頼。

母君、薫をほめる

一〇（浮舟の）乳母が、あの時ふと思いついて、何度も口にしていたことを。浮舟を薫にとすすめたこと（二八五～六頁参照）。以下、母君の心中。

一一 天の川を渡ってでも、このような彦星の光を待ち受けさせたいものだ。たまの訪れでもよいから、薫のような人と結婚させたい。「彦星に恋はまさりぬ天の川隔つる関を今はやめてよ」（『伊勢物語』九十五段）による措辞。前に匂宮を見た時も、この母君は「織女ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな」（二九三頁）と思っている。

一二 無骨な東国の田舎者ばかりを見続けてきたせいで。

一三（薫が）寄りかかっていらっしゃった柱にもお座布団にも、帰られたあとまで匂う移り香が。「真木柱」は、歌語。「我妹子が来ては寄り立つ真木柱そもむつましやゆかりと思へば」（『源氏釈』。出典未詳）

一四 折々お目にかかっている（中の君方の）女房でも。

ましきを、「今宵はなほとく帰りたまひね」（中君）と、こしらへやりたまふ。

（薫）「さらば、その客人に、かかる心の願ひ年経ぬるを、うちつけになど、浅う思ひなすまじう、のたまはせ知らせたまひて、はしたなげなるまじうはこそ。いとうひうひしうならひにてはべる身は、何ごともをこがましきまでなむ」とかたらひきこえおきて出でたまひぬるに、この母君、「いとめでたく、思ふやうなる御さまかな」とめでて、乳母ゆくりかに思ひよりて、たびたび言ひしことを、あるまじきことに言ひしかど、この御ありさまを見るには、天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、わが娘は、なのめならむ人に見せむは惜しげなるさまを、夷めきたる人をのみ見ならひて、少将をかしこきものに思ひけるを、くやしきまで思ひなりにけり。寄りゐたまへりつる真木柱も茵も、名残にほへる移り香、言へばいとことさらめきたるまでありがたし。時々見たてまつる人だに、

程よくなだめてお帰しになる
このまま早くお帰り下さいませ
本当にこんなことには不馴れなままで参りました私のこと
何をする
るにも愚かしいほど不調法でして
とくとお願い申し上げておいてお帰りになると
何とすばらしい
非の打ち所のないお姿ですこと
感心
して
薫の
ないことと反対したけれど
浮舟
男にめとらせたりするには惜しいほどの器量なのに
並々の身分の
少将風情を大したものと思ったのを
後悔するほどの気持になったのだった
取り立て
てて言うとわざとらしくなるほどまたとなくすばらしい

一　お経など読んでいますと、功徳のすぐれていることが書いてあるようですが、その中でも香の芳しいのを貴いことと、仏が説いておかれたのも、もっともですわね。「経」は、具体的には次に言う「薬王品」のこと。「功徳」は、善い果報を得ることのできる善行。

二　『法華経』薬王菩薩本事品第二十三のこと。法華経のために、身命を捨てて供養した薬王菩薩の前世の修行を説く。

三　牛頭山（牛頭に似た峰を持つ印度の高山）に産する栴檀（香木）。

四　何といっても、あのお方（薫）が近くで身動きなさると、仏様は嘘はおっしゃらなかったのだ、と思われます。薫の身に具わる芳香をほめて、さぞ前世で善根を積んだのであろう、と言う。『薬王品』の終りに「若有レ人聞二是薬王菩薩本事品一、能随喜讃善者、是人現世口中常出二青蓮華香一、身毛孔中常出二牛頭栴檀之香一。所得功徳如二上所レ説一」とあるのによる。

中の君、母君に薫をすすめる

五　（薫は）いったん思い立たれたことは、執念深いほど軽々しく変えたりなさらぬようですから。

六　なるほど今のご境遇を考えると。女二の宮が正室として降嫁されたこと。

七　あの、尼にしてでも、などとお考えになったこともあるのですから。（二九七頁参照）

八　出家遁世のことまで考えてみたのです。「飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」（『古今

そのたびごとにおほめ申し上げる（女房）一

たびごとにめできこゆ。「経などを読みて、功徳のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやむごとなきことに、仏のたまひおきけるもことわりなりや。薬王品などに、取り分きてのたまへる、牛頭栴檀とかや、おどろおどろしきものの名なれど、まづかの殿の近くふるまひたまへば、仏はまことしたまひけり、とこそおぼゆれ。

取り立てて説いておいでになる　［牛頭などと］恐ろしい名前ですが

［薫は］お小さい時から　お勤めも大層よくなさったからですよ　女房もいる　（女房）前世に何をなさったのか知りたいほどのご様子です

幼くおはしけるより、行ひもいみじくしたまひければよ」など言ふもあり。また、「前の世こそゆかしき御ありさまなれ」など、口々めづることどもを、すずろに笑みて聞きゐたり。

［母君は］思わずにこにこして聞いている　中の君　［薫が］内々にご依頼になったことを　それとなくおっしゃる　（中君）五

君は、忍びてのたまひつることを、ほのめかしのたまふ。「思ひそめつること、執念きまで軽々しからずものしたまふめるを、げにただ今のありさまなどを思へば、わづらはしきこちすべけれど、かの世を背きても、など思ひ寄りたまふらむも、同じことに思ひなして、こころみたまへかし」とのたまへば、「つらき目見せず、人にあなづられじの心にてこそ、鳥の音聞こえざらむ住ひまで思ひた

それと同じ捨て身になった　積りで　ご運を試してごらんなさい　（母君）娘に悲しい思いをさせず世間からも馬鹿にされまいと思えばこそ　何かと遠慮の多い気持にもなりましょうが

集』巻十一恋一、読人しらず）による措辞。

九　たとえ下仕えの分際などでも。女房とまでは申さず、下働きでもよい。

一〇（それでは）人並みでもない身に、いよいよつらい思いをさせることになりましょう。かりそめのお情けを頂くだけでは、つらい思いをさせるばかり。母君の経験したことである。「数ならぬ身には思ひのなかれかし人なみなみに濡るる袖かな」（『河海抄』など古注に引く。出典未詳）。「今はとて忘るる草の種をだに人の心に蒔かせずもがな」（『伊勢物語』二十一段）

一一　身分の高い人でも低い者でも、女というものは、男女の仲のことで、この世だけでなく後世まで、嫉妬愛執の罪に苦しむことになるのだと存じますと。

一二　さあ、どうしたものでしょうね、あの方（薫）の今までの誠実さに安心していたのですけれど、これから先のことは分らないものですから。

一三（常陸邸から）迎えの車などを持って来て。

一四　常陸の介の言伝など、大層腹を立てているように伝えたので。娘の婚礼をよそに長居をしているのを咎めた趣。

一五　尼になりと、あるいはどうなりと、思案を廻らします間。「いかならむ巌の中に住まばかは世の憂きことの聞こえこざらむ」（『古今集』巻十八雑下、読人しらず）

母君、帰る

まへおきつれ。（本当にあのお方のご様子ご風采を拝見いたしましてこの私のつくづく思いまげに人の御ありさまけはひを見たてまつり思ひたまふるは、（すことは）下仕（九）へのほどなどにても、かかる人の御あたりに馴（こんなご立派な方のお側に親しくお仕え申し上げるのは）れきこえむは、（さぞ張合いがありましょう）かひありぬべし。（まして年若い女なら）まいて若き人は、（きっとお慕い申すに違いございませんでしょうが）心つけたてまつりぬべくはべるめれど、数（一〇）ならぬ身に、もの思ひの種をやいとど蒔かせて見はべらむ。高（一一）きも短きも、女といふものは、かかる筋にてこそ、この世後（のち）の世まで、苦しき身になりはべるなれ、と思ひたまへはべればなむ、（浮舟を）いとほしく思ひたまへはべる。（かわいそうに思うのでございます）それもただ御心になむ。（でも）ともかくも、おぼし捨てずものせさせたまへ」と聞こゆれば、いと（お見捨てなくお世話下さいませ）わづらはしくなりて、（中君）「いさや、来（一二）し方の心深さにうちとけて、行く先のありさまは知りがたきを」とうち嘆きて、ことにもものたまはずなりぬ。（とても）（責任の重いことと思って）（どのようにでも）（しゃらずにしまった）

明けぬれば、車など率（一三）て来て、守（一四）の消息など、いと腹立たしげにおびやかしたれば、（母君）「かたじけなく、（恐れながら）よろづに頼みきこえさせてなむ。なほしばし隠させたまひて、巌（一五）の中にともいかにとも、思ひた（万事よろしくお願い申して私は失礼いたしますし）（浮舟を）（もう暫くおかくまい下さいまして）

一 母と離れ離れになるのを不安に思うが。
二 昨夜、宮中に宿直をしたこと、三〇〇頁に見える。
三 車なども、常とは違ったご微行の体で帰っていらっしゃったのに。網代車（二巻葵六九頁注二〇参照）であろう。親王は普通檳榔毛の車（宿木二五六頁注五参照）を用いる。
四 （母君の方は）車を引き止めて、そのまま立ち止っていると。
五 中門廊。ここは、西の対の方のそれであろう。これも、内々の体。
六 どういう車か。薫の車か、と疑う気持がある。
七 ご自分の経験から思いつかれるのも、怖いほどである。こんなことには、気味悪いほどよくお気が廻る、と草子地。
八 これは、常陸方の供人の言葉。
九 年若い前駆の連中が。匂宮の家来たち。
一〇 「殿」とは、ご立派なことだ。匂宮のお訊ねに、受領風情を「殿」とは過分な、という気持。
一一 本当に何という身分の違いだろう。以下、母君の気持を書く。

匂宮、帰邸、母君の車を見咎める

まへめぐらしはべるほど、数にはべらずとも（人数に入りませんでも）、思ほし放たず（お見捨てなく）、何ごとをも教へさせたまへ（教えてやって下さいませ）」など聞こえおきて、この御方（浮舟）も、いと心細く、ならはぬここちに（初めてのこととて）、立ち離れむを思へど、今めかしくをかしく（はなやかで趣深いお暮しぶり）見ゆるあたりに（の二条の院で）、しばしも見馴れたてまつらむと思へば（しばらくの間でもお側にいさせて頂こうと思うので）、さすがに（心細いながら）うれしくもおぼえけり（もやはりうれしく思われるのだった）。

［母君の］車引き出づるほどのすこし明うなりぬるに（空も明るんだ頃）、宮（匂宮）、内裏（二）よりまかでたまふ。若君おぼつかなくおぼえたまひければ（若君がどうしているかと気にかかっておいでだったので）、忍びたるさまにて（目立たぬようになさって）、車（三）なども例ならでおはしますに、さしあひて（ばったり出会って）、おしとどめて立てたれば（四）、廊（五）に御車寄せておりたまふ。（匂宮）「なぞ（六）の車ぞ。暗きほどに急ぎ（まだ暗いうちに急いで）出づるは（帰ってゆくのは）」と目とどめさせたまふ（お見咎めあそばす）。かやうにてぞ（こんなふうにして）、忍びたる所には（こっそり通う女の所か）出づるかしと（らは帰るものだと）、御心（七）ならひにおぼし寄るも、むくつけし。「常陸殿（八）のまかでさせたまふ（退出なさるのです）」と申す。若やかなる御前（九）ども、「殿（一〇）こそあざやかなれ（皆で笑うのを聞くにつけても）」と、笑ひあへる（一一）を聞くも、げにこよなの身のほどや、と悲しく思ふ。ただこの御方（浮舟）のことを思ふゆゑにぞ（将来の幸福を思うばかりに）、おのれも人々し（自分も人並みの身分に）

一二 まして当の浮舟を、身分の低い男の妻にしてしまうようなことは、とても惜しいと思うようになった。
一三 常陸殿という人を、こちらに通わせていらっしゃるのか。
一四 風情たっぷりな夜明け方に、急いで出ていった車副などの様子が、わけありげに見えました。「車副」は、牛車の左右に付き添う供人。荒々しい田舎者だったので、人目を紛らすため、わざとそんな者を連れてきたのではないか、と言う。
一五 まだお疑いになっていておっしゃる。相変らず薫のことを疑っている趣。
一六 大輔などが若くていました頃、友達だった人で、その人は、大してしゃれた人とも思われませんのに。「大輔」は、中の君づきの女房（二九〇頁参照）。
一七 無実の罪は着せないで下さい。「思はむと頼めしこともあるものをなき名を立てでただに忘れね」（『後撰集』巻十恋二、男のもとより、今はこと人あんなればと言へりければ、女にかはりて　読人しらず）
一八 明くるも知らずといったふうに、ゆっくりお寝みになっていたところへ。「玉簾明くるも知らで寝しものを夢にも見じと思ひかけきや」（『伊勢集』）の言葉を借りたもの。
一九 右大臣夕霧の子息たち。
二〇 古詩などの韻を踏んであるところを隠し、詩の内容から、隠してある韻字を当てる遊び。

翌夕、匂宮、ふたたび西の対へ

なりたいという気になるのだったくならまほしくおぼえける。[一二]まして正身を、なほなほしくやつして見むことは、いみじくあたらしう思ひなりぬ。宮、入りたまひて、[お部屋に]

「常陸殿といふ人や、ここに通はしたまふ。[一四]心ある朝ぼらけに、急ぎ出でつる車副などこそ、ことさらめきて見えつれ」など、[一五]なほおぼし疑ひてのたまふ。[中君は]聞き苦しくまわりの者もどう思うか

「大輔などが若くてのころ、友達にてありける人は、ことに今めかしうも見えざめるを、[一六]ゆゑゆゑしげにものたまひなすかな。人の聞きとがめつべきことをのみ、常にとりないたまふこそ、[一七]なき名は立てで」と、うち背きたまふも、[横を向かれるのも]らうたげにをかし。[一八]明くるも知らず大殿籠りたるに、人々あまた参りたまへば、[匂宮は]寝殿にわたりたまひぬ。后の宮は、[明石の中宮]ことことしき御なやみにもあらで、おこたりたまひにければ、ここちよげにて、[一九]右の大殿の君たちなど、碁打ち韻塞などしつつ遊びたまふ。

夕つかた、宮[西の対]こなたにわたらせたまへれば、女君[中の君]は、御ゆするの

いかにもわけありげにおっしゃるのですね　人が聞いたらおかしいと思うようなことばかり　いつも意味ありげにおっしゃるなんて　かわいらしく風情がある　廷臣たちが　大したご病気でもなくて　皆さまご機嫌よくて　よろしくおなりになったので　ご洗髪をなさっ

一 小さい女の童がそこにいるのを（中の君のもとに）やって。

二 宮の仰せはどもっとも、いつもは、お留守のあいまを見計らってなさいますのに。「すます」は、髪など洗うこと。

三 今日を逃せば、この八月中にはよい日もないし。洗髪入浴に吉の日というのが陰陽道で決められていた。

四 九、十月はとてもできないし、というので、お勤め申させたのですが。「九月は忌む月なり。十月はかみなし月にて髪あらふにはばかる月なるべし」（『花鳥余情』）

五 西の部屋に見馴れぬ女の童の姿が見えたのを。「西の方」は、西廂であろう。その北側には浮舟がいる（二九一頁参照）。

六 西廂を南北の間に仕切る襖障子であろう。以下、母屋から覗いている匂宮の目に映った西廂の状況。

七 その屏風の端に、几帳を簾に添えて立ててある。「簾」は、西側の簀子との間に垂れたもの。

八（几帳の）帷を一枚（横木に）掛けて、紫苑色のはなやかな袿に、女郎花の織物とおぼしい表着が重なって、袖口がさし出ている。「紫苑色」は、表薄紫、裏青の襲。「女郎花の織物」は、表、経青、横黄の織物に裏青。

九（手前にある）屏風が一面だけ畳まれている間から、思いもかけず見えているのらしい。

匂宮、浮舟を発見

女房たち　休息をとっていたりして　御座所の前には誰もいている最中だった

ほどなりけり。人々もおのおのうち休みなどして、御前には人もなし。小さき童のあるして、（匂宮）「をりあしき御ゆするのほどこそ、困りまあいにくのご洗髪の折とは　見苦しかめれ。さうざうしくてやながめむ」と、聞こえたまへば、「げ（大輔）二　一人でぼんやりしているわけにもいかぬし　したね

におはしまさぬ隙々にこそ例はすませ。あやしう日ごろももの憂がうがりなさったので　らせたまひて、今日過ぎば、この月は日もなし、九、十月はいかなぜかこのところずっとご洗髪をおっく　かは、とてつかまつらせつるを」と、大輔いとほしがる。困っている

若君も寝たまへりければ、そなたにこれかれあるほどに、宮はたこちらからなさっていると　そちらに何人か女房がお付きしている折で　たずみありきたまひて、西の方に例ならぬ童の見えけるを、今参り新参の童　たるか、などおぼして、さしのぞきたまふ。中のほどなる障子の、匂宮は　向うに　細目にあきたるより見たまへば、障子のあなたに、一尺ばかりひき引き　離して　さけて、屏風立てたり。そのつまに、几帳、簾に添へて立てたり。

帷一重をうちかけて、紫苑色のはなやかなるに、女郎花の織物と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。屏風の一枚たたまれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。今参りのくちをしからぬめり、とお

新参の女房でかなりの身分の者のようだ　匂宮は

一〇 母屋から西廂に通ずる襖障子。前の「中のほどなる障子」とは別。
一一 相手は気づかない。屏風の向うにいる人のこと。これが浮舟である。
一二 こちら（西側）の廊に囲まれた壺前栽が。「壺前栽」は、殿舎や廊に囲まれた庭の植込み。
一三 遣水のあたりの石を高く組んである風情が、とても趣深いので。
一四（女は）端近に、几帳の陰に横になって見とれているのだった。
一五 前に「中のほどなる障子の、細目にあきたる」とあった障子。
一六 いつもこちらに来つけている女房なのだろう。浮舟方との連絡係といった役目の女房か、と思う。
一七（もう一方の手で）今はいって来たこちらの障子はお閉めになって。
一八 屏風の間に坐りこまれた。「屏風のはさま」は、一双の屏風と屏風との間。
一九（匂宮は）そうしたもの（屏風）の際に身を寄せて、顔をあちら向けに隠して、大層用心して誰か分らぬようにしていらっしゃるので。
二〇 あのひとかたならず熱心にご意向を伝えて来られるという大将（薫）なのだろうか。浮舟の思い。

ぼして、一〇この廂に通ふ障子を、音を立てぬように いとみそかにおしあけたまひて、やを ら歩み寄りたまふも、一一人知らず。一二こなたの廊の中の壺前栽の、大層つと 美しく色様々に秋草の花が咲き乱れているのに とをかしう色々に咲き乱れたるに、一三遣水のわたりの石高きほど、いとをかしければ、一四端近く添ひ臥してながむるなりけり。一五あきたる障子を、匂宮は もっと広く押し開けて 端 匂宮 は思ひもかけず、一六例こなたに来馴れたる人にやあらむ、と思ひて、起き上がった姿つきが 起きあがりたる様体、とても美しく いとをかしう見ゆるに、例の御心は過ぐしたなれずに まはで、衣の裾をとらへたまひて、一七こなたの障子は引きたてたまひて、屏風のはさまにゐたまひぬ。あやしと思ひて、扇を隠したまま振 扇で顔を隠したまま振 おやと思って 扇をさし隠して 見かへりたるさま、とても美しい いとをかし。扇を持たせながらとらへたまひて、 匂宮は 扇を持たせたままその手を捉えなさって 「誰ぞ、誰か 名前が聞きたい 名のりこそゆかしけれ」とのたまふに、女は 気味悪くなった むくつけくなりぬ。一九さるもののつらに、顔をほかざまにもて隠して、いといたう忍びたまへれば、二〇このただならずほのめかしたまふらむ大将にや、かうば 薫物のよい匂いのする様子などもその人かと思われるので しきけはひなども思ひわたさるるに、いとはづかしくせむかたなし。 とても気詰りでどうしていいか分らない

一 浮舟の乳母。
二 向う側の屏風を押し開けてやって来た。「あなた」とは、匂宮の側の屏風から見て「あなた」で、北側にある。
三 （匂宮が）そんなことに遠慮なさるはずもない。
四 お口のお上手なご性分なので。
五 くつろいだ様子で横におなりになるので。
六 明りは、燈籠にともして。「燈籠」は、母屋の天井や軒先に吊す照明具（一巻図録一〇参照）。
七 （中の君が）もうそろそろこちらにお帰りあそばします。洗髪を終ったのである。
八 お前以外の御格子は、みな下ろす気配である。中の君のお部屋の前に当る所は上げておく趣。
九 こちらのお部屋（浮舟のいる所）は、離れの使わない部屋にしてあって。
一〇 背の高い棚厨子一対を立て。「棚厨子」は、上段が棚になった厨子（図録三参照）。
一一 通り道の襖障子。前に「この廂に通ふ障子」（三〇九頁）とあった。「一間」は、柱間（柱と柱の間）一つをいう。道具などのけて通路にしたのであろう。
一二 右近といって、大輔の娘で（中の君に）お仕えしているのがやって来て。
一三 まだ明りもおつけしてなかったのですね。
一四 一人で大変なのに。插入句。

乳母が現れる

乳母、人げの例ならぬを、あやしと思ひて、あなたなる屏風をおしあけて来たり。「これはいかなることにかはべらむ。あやしきわざにもはべるかな」と聞こゆれど、憚りたまふべきことにもあらず。かくうちつけなる御しわざなれど、言の葉多かる御本性なれば、何やかやとのたまふに、暮れ果てぬれど、「誰と聞かざらむほどはゆるさじ」とて、なれなれしく臥したまふに、宮なりけり、と思ひ果つるに、乳母、言はむかたなくあきれてゐたり。

大殿油は燈籠にて、「今わたらせたまひなむ」と人々言ふなり。御前ならぬ方の御格子どもぞおろすなる。こなたは離れたる方にしなして、高き棚厨子一具立て、屏風の袋に入れこめたる、所々に寄せかけ、何かの荒らかなるさまにし放ちたり。かく人のものしたまへばとて、通ふ道の障子一間ばかりぞあけたるを、右近とて、大輔が娘のさぶらふ来て、格子おろしてここに寄り来なり。「あな暗や、まだ大殿油も参らざりけり。御格子を、苦しきに、急ぎ参りて

（乳母）これは一体どうしたことでございましょう
（匂宮）誰か名前を聞かないうちは放さな
（女房）
（右近）まあ暗い

右近がやって来る

常ならぬ人の気配がするのを
おかしなことで
こんなその場の出来心のおたわむれであるが
どざいますこと
言葉もなく途方にくれて坐っている
匂宮なのだ
合点する
つけ
何やかやと置いて雑然としたままで放ってある
女房たちの声がする
屏風を袋に入れてしまってあるのを
今はこのようにお客がご逗留だというので
急いで皆下ろして

一五 また、格子を引き上げるので。

乳母、右近に急を告げる

一六 こちらに、とてもけしからぬことがございますので、ほとほと手に余りまして、身動きもとれないでおります。「極ず」は、疲れる意。

一七 直衣を脱ぎ捨てた匂宮の体。

一八 すぐにも参上して、奥方様にこっそり申し上げましょう。

一九 言いようがないほど上品で美しい人だな、一体どういう人だろう。以下、匂宮の思い。

二〇 ああ言いこう言いしてお怨みになる。女が名乗らないことを怨む。

闇にまどふよ」とて引き上ぐるに、宮も、なま苦しと聞きたまふ。乳母はた、いと苦しと思ひて、ものづつみせずはやりかにおぞき人にて、「もの聞こえはべらむ。ここに、いとあやしきことのはべるに、見たまへ極じてなむ、え動きはべらでなむ」「何ごとぞ」とて探り寄るに、桂姿なる男の、いとかうばしくて添ひ臥したまへるを、例のけしからぬ御さまと思ひ寄りにけり。女の心合はせたまふまじきこと、とおしはからるれば、「げにいと見苦しきことにもはべるかな。右近はいかにか聞こえさせむ。今参りて、御前にこそは忍びて聞こえさせめ」とて立つを、あさましくかたはに、誰も誰も思へど、宮は懼ぢたまはず。あさましきまであてにをかしき人かな、なほ何人ならむ、右近が言ひつるけしきも、いとおしなべての今参りにはあらざめり、と心得がたくおぼされて、と言ひかく言ひ怨みたまふ。心づきなげにけしきばみてもてなさねど、ただいみじう死ぬばかり思へるがいとほしければ、情ありてこしらへたまふ。

匂宮
少々困ったとお聞きになる
物事に尻込みしないせっかちで気の強い人なので
（乳母）ちょっと申し上げます
（右近）
大層よい匂いをさせて女に寄り添って寝ていられるので
［暗がりを］
女君がご同意であるはずもないこと
いつもの宮様の悪いお癖が始まったと気づくのだった
（右近）本当にまことに困り果てたことでございます
右近めは何と申し上げてよいか分りませぬ
とんでもない見苦しいことと
右近が話していた言葉つきからも
そう並々の新参の女房というのでは
［宮は］合点のいかぬ思いがなさって
［浮舟は］いやがっているような素振りもあらわに見せないけれど
ただもうひどく死ぬほどつらく思っている様子なのがかわいそうなので
やさしく機嫌をおとりになる

一 中の君。

二 （さりとて匂宮に）何と申し上げよう。以下、中の君の心中。

三 （それにしても一体）どうして（浮舟のことを）お気づきになったのだろう。

四 上達部が大勢お出でになった日のことで、（匂宮は）ご一緒に遊び興じなさったりしては。以下、右近の言葉。「上達部」は、位は三位以上、官は参議以上の廷臣。前に「人々あまた参りたまへば……」（三〇七頁）とあったのに照応する。

五 いつも、こういう時は、遅くなってから、こちら（中の君方）へお出でになりますので、皆さん（女房たち）は、安心してお休みだったのですよ。匂宮の闖入を防げなかったことの言い訳。

六 中の君づきの女房。

七 お胸の痛みでお苦しみですが。（宿木一八八頁、東屋二九四頁参照）

八 おあいにくのご病気ですこと。匂宮にとって、折悪しき母后のご病気、とたわぶれに言う。

九 いえ、まだそこまではいっていないでしょう。実

右近、中の君に報告

右近、上に、「しかしかこそおはしませ。いとほしくいかに思ほすらむ」と聞こゆれば、「例の、心憂き御さまかな。かの母も、いかにあはあはしく、けしからぬさまに思ひたまはむとすらむ。うしろやすくと、かへすがへす言ひおきつるものを」と、いとほしくおぼせど、いかが聞こえむ、さぶらふ人々も、すこし若やかによろしきは、見捨てたまふなく、あやしき人の御癖なれば、いかがは思ひ寄りたまひけむ、とあさましきに、ものも言はれたまはず。

「上達部あまた参りたまへる日にて、遊びたはぶれたまひては、例も、かかる時は遅くもわたりたまへば、皆うちとけてやすみたまふぞかし。さてもいかにすべきことぞ。かの乳母こそおぞましかりけれ。つと添ひゐてまもりたてまつり、引きもかなぐりたてまつりつべくこそ思ひたりつれ」と、少将と二人していとほしがるほどに、内裏より人参りて、大宮この夕暮より御胸なやませたまふを、ただ今いみじく重くなやませおはしますよし申さす。右近、「心なきを

（浮舟は）どんなお気持でしょう
お気の毒に
（中君）また情けないお振舞ですこと
浮舟
不届きなことと思いになることでしょう
困ったことと思い
お仕えする女房でもの者は
困った宮のご性分だから
お見逃しになることなく
あまりのことに
（中君は）言葉もなくていらっしゃる
（匂宮を）手荒にお引き放し申し上げかねまじき権幕でしたよ
ぴったり側に坐り込んでお見張りして
気の毒がっているところに
明石の中宮
大層ひどくお苦しみになっている旨を言上させる
気の強い人でした
それにしてもどうしたらいいでしょう
お使い

事には及んでいないだろう、と、露骨な推測。
一〇 本当に人聞きの悪い（宮の）ご性質だこと。「人の御本性」で一語。「……めれ」は、和らげて言う気持。
一一（右近は）宮のお側に参上して。
一二 誰が参っているのか。また、大げさに脅かすことよ。
一三 中宮職の侍に詰める者で、平の重経と名乗っていました。中宮職は、中宮に関する事務一般を取り扱う役所。「侍」は、侍所、家臣の詰所。
一四 右近は、簀子に出て。思いあまった右近の行動。
一五 匂宮のいる（西の対の）西廂の庭前。今までは、おそらく寝殿の南庭にいたのを、直接こちらに呼んで問う。宮にも直接お聞かせするつもり。
一六 お使いの口上を、女房に取り次いだ宮家の家臣。やはり庭上に控える。
一七 匂宮の弟宮か。（宿木一五五頁注一一参照）
一八 大夫はたった今参内されました。「大夫」は、中宮職の長官。従四位下相当。
一九 こちらに伺います途中、御門からお車を引き出すのを見ました。お使いの言葉を取次ぎがそのまま伝える体。中宮大夫邸は、内裏から二条の院への道筋にある趣。
二〇 人々がどうお思いかときまり悪くなられて。「おぼす」と敬語があるので、この「人」は、宮廷にお見舞に上がられた人々であろう。

匂宮、ようやく立ち去る

りの御なやみかな。聞こえさせむ」とて立つ。少将、「いでや、今はかひなくもあべいことを、をこがましく、あまりなおびやかしきこえたまひそ」と言へば、「いな、まだしかるべし」と、忍びてさめきかはすを、上は、いと聞きにくき人の御本性にこそあめれ、すこし心あらむ人は、わがあたりをさへ疎みぬべかめり、とおぼす。

参りて、御使の申すよりも、今すこしあわたたしげに申しなせば、動きたまふべきさまにもあらぬ御けしきに、「誰か参りたる。例の、おどろおどろしくおびやかす」とのたまはすれば、「宮の侍に、平の重経となむ名のりはべりつる」と聞こゆ。出でたまはむことのいとわりなくくちをしきに、人目もおぼされぬに、右近立ち出でて、この御使を西面にて問へば、申し次ぎつる人も寄り来て、「中務の宮参らせたまひぬ。大夫はただ今なむ。参りつる道に、御車引き出づる、見はべりつ」と申せば、げにはかに時々なやみたまふをりもあるを、とおぼすに、人のおぼすらむこともはしたなくなり

今
お伝え申しましょう
さあでも
骨折り損ですから
〔匂宮を〕あまりおどかしておあげな
ひそひそと小声で言い合うのを
中の君一〇
私のことまで
多少なりとも考えのある人なら
お動きになりそうな様子もないお声の調子で
一段と急を要することのように申し上げると
（匂宮）
（右近）
仰せになるので
〔匂宮は〕ここを出ておゆきになることを
人目を憚るお気持もないのに
（取次）
内裏のお使い
参内なさいました
なるほど急に時々おわずらいになることもままあるから
〔匂宮は〕

て、いみじう怨み契りおきて出でたまひぬ。

〔浮舟は〕恐ろしき夢の覚めたるここちして、汗におし浸して臥したまへり。

扇であおいだりして　何ごとにつけても

乳母、うちあふぎなどして、「かかる御住ひは、よろづにつけて、

（乳母）このようなお宿は

つつましう便なかりけり。かくおはしましそめて、さらによきことはべらじ。あな恐ろしや。限りなき人と聞こゆとも、やすからぬ御

ああこわいこと　この上ないご身分のお方と申しても　安心ならぬお振舞に

ありさまは、いとあぢきなかるべし。よそのさし離れたらむ人にこそ、よしともあしともおぼえられたまはめ、人聞きもかたはらいたきこと、と思ひたまへて、降魔の相を出だして、つと見たてまつりつれば、いとむくつけく、下衆下衆しき女とおぼして、手をいといたくつませたまひつるこそ、直人の懸想だちて、いとをかしくもおぼえはべりつれ。かの殿には、今日もいみじくいさかひたまひけり。ただ一所の御上を見あつかひたまふとて、わが子どもをばおぼし捨てたり、客人のおはするほどの御旅居見苦しと、荒々しきまでぞ聞こえたまひける。下人さへ聞きいとほしがりけり。すべてこの少将

存じまして　本当に困ったことでございましょう　及ばれましては

悪いこと　〔これだけは〕世間に漏れても具合の

とても気色の悪い　したので　下品な女とお思いになって　私の手をぎゅっと強くおつねりあそばしたのは　じっとおにらみ申していま

はげしくお言い争いになりましたとか　聞いて北の方にご同情申しました

〔浮舟に〕大層残念がって散々約束をして出ておゆきになった

私の子供たちのことをお構いになろうとしない

一　汗にぐっしょり濡れて、横になっていらっしゃる。

二　気兼ねが多くて、具合が悪うございます。

危機を脱した浮舟

三　（匂宮が）こうしていったんお出でなされたからには、（こののち）ゆめよいことはございますまい（同じことがこれからも必ずありましょう）。

四　よその何の関わりもない方になら、いいとも気に入らぬとも思われなさってもようございましょうが。中の君との間柄を思えば、匂宮とのことだけは困る、の意。

五　釈迦八相（下天、託胎、降誕、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃の相）の一。「降魔」の「う」無表記の形。仏が菩提樹の下で、悪魔を降伏した時の相。『花鳥余情』は、不動明王などが悪魔を降伏する際の忿怒の相と注する。ここは、乳母が恐ろしい顔をして、匂宮を睨みつけていたことをいう。

六　下々の者の色ごとめいて、ほんとにおかしゅうございました。「直人」は、身分の低い者。

七　あちらのお邸。常陸の介の家。昨日、母君が帰ったばかり。

八　ただお一人（浮舟）のことばかりお世話なさるあまり。以下、常陸の介の立腹の雑言。

九　お客人がおいでの折というのに、ご外泊は見苦しいと。「客人」は、新しく通ってくる婿の少将のこと。

一〇　下男下女にまで聞えるほどの大声だった様子。

一一 本当にいけすかない方でいらっしゃいます。「おぼえたまふ」は、思われなさる。
一二 今度のご縁談のごたごたがございませんでしたら。

一三（中の君が）何とお思いだろうか、と思うと、どうしてよいか分らないので。浮舟の案じているのは、姉の中の君のこと。

乳母、浮舟を慰める

一四 意地悪な継母に苛められるよりは、このほう（父なき人の方）がずっと気楽です。『落窪物語』などが愛読された時代である。
一五 くよくよなさいますな。「屈ず」の「ん」は、「屈す」の促音を表記したもの。
一六 大和の国磯城郡初瀬の長谷寺。本尊十一面観音。（三巻玉鬘二九七頁注九参照）
一七 旅馴れぬお身なのに、たびたび続けてお詣りなさるというのは。「詣で」は、「まうで」の「う」無表記の形。浮舟の初瀬詣では、宿木二五七頁、二六三～四頁参照。
一八（浮舟には）こんなご運があったのだ、と驚くほどのお仕合せがおありのように、とお祈りしているわけなのでございます。

の君ぞ、いと愛敬なくおぼえたまふ。この御ことはべらざらましかば、家の内ではおもしろからず気まずいもめごとがときたまございましても うちうちやすからずむつかしきことはをりをりはべりとも、な 平穏に だらかに、年ごろのままにておはしますべきものを」など、うち泣 今まで通りのままでお過しになれましたものを きつつ言ふ。

浮舟
君は、ただ今はともかくも思ひめぐらされず、ただだいみじくはし あれこれ考える心のゆとりもなく ただむやみに恥ずかしい思いで たなく、見知らぬ目を見つるに添へても、いかにおぼすらむ、と思 出会ったこともない目に会ったさらにその上に ふに、わびしければ、うつぶし臥して泣きたまふ。いと苦しと見あ 〔浮舟は〕 〔乳母は〕とてもお気の毒と なだめあぐんで つかひて、「何かかくおぼす。母おはせぬ人こそ、たづきなう悲し 何でそうご心配なさいます 頼む人とてなく悲しい ことでしょう かるべけれ。よそのおぼえは、父なき人はいとくちをしけれど、さ 世間から見れば 大層見劣りがしますが がなき継母に憎まれむよりは、これはいとやすし。ともかくもした 〔母君が〕いずれにしろお仕合せにしてさし上げられましょう てまつりたまひてむ。なおぼし屈ぜそ。さりとも初瀬の観音おはし いくら何でも ませば、あはれと思ひきこえたまふらむ。ならはぬ御身に、たびた 不憫なとお思い申して下さるでしょう びしきりて詣でたまふことは、人のかくあなづりざまにのみ思ひき 人がこう何かといえばあなどりがちにお思い申しているのを こえたるを、かくもありけり、と思ふばかりの御幸ひおはしませ、

一 内裏に近い方角なのだろうか、こちら（西側）の御門からお出ましなので。二条の院の西門より出る気配（一巻図録二参照）。

二 何かおっしゃる（匂宮の）お声も聞える。西の対の西廂にいる浮舟たちには、ご出門の物音がよく聞える。

匂宮、参内の気配

三 趣のある古歌など口ずさみなさって通り過ぎてゆかれる間、（浮舟たちには）それがわけもなくいとわしく気重に感じられる。

四 官吏が公用の時に乗るために、諸国の官用牧場から、左右馬寮に移し置いて飼ってある馬。ここは、匂宮の宿直を勤める者の乗馬。

五 奥方（中の君）は、（浮舟が）かわいそうで、いやな気持でいるだろうと心配して。

中の君、浮舟を呼ぶ

六 髪を洗ったせいか、気分がすぐれずまだ起きていますから、こちらへお出でなさいませ。中の君のいる母屋へと呼ぶ。

七 気分が大層悪うございますので、おさまりましてから。

とこそ念じはべれ。あが君は、（あなた様は）人笑はれにてはやみたまひなむや」（世間の笑い者のままで終られるはずがありましょうか）と、世をやすげに言ひゐたり。（何の心配もなさそうに言っていた）

匂宮

宮は、急ぎて出でたまふなり。（急いでお出ましのご様子である）内裏近き方にやあらむ、こなたの御門より出でたまへば、もののたまふ御声も聞こゆ。いとあてに限りもなく聞こえて、心ばへある古言などうち誦じたまひて過ぎたまふほど、すずろにわづらはしくおぼゆ。うつし馬ども引き出だして、宿直にさぶらふ人、十人ばかりして参りたまふ。（お供に参内なさる）

上、いとほしく、うたて思ふらむとて、（何も知らぬ顔で）知らず顔にて、「大宮な（中君）（中宮が）（お悪いということで宮様は参内なさいましたから）やみたまふとて参りたまひぬれば、今宵は出でたまはじ。（今夜は退出なさらないでしょう）ゆするの名残にや、ここちもなやましくて起きゐはべるを、わたりたまへ。（さぞご退屈なさってもいることでしょう）つれづれにもおぼさるらむ」と聞こえたまへり。（浮舟）「みだりごこちのいと苦しうはべるを、ためらひて」と、乳母して聞こえたまふ。（を通して申し上げなさる）（中君）（どうなさったのですか）「いかなる御ここちぞ」と、（折り返し容態をお尋ねになると）立ち返りとぶらひきこえたまへば、（浮舟）「何（どこが悪いともよく分りませんが）ごこちともおぼえはべらず、ただいと苦しくはべり」と聞こえたま（ただひどく苦しゅうございます）

へば、少将、右近、目まじろきをして（目くばせをして）、「かたはらいたくぞおぼすらむ」と言ふも、（右近たち）ただなるよりはいとほし。いとくちをしう心苦しきわざかな、（薫）大将の心とどめたるさまにのたまふめりしを、いかに（お気に召したようにおっしゃっていたご様子だったのに）（どんなに）あはあはしく思ひおとさむ、かく乱りがはしくおはする人は、聞きにくく、実ならぬことをもくねり言ひ、（軽々しい女とお見下げになることだろう）またまことにすこし思はずならむことをも、さすがに見ゆるしつべうこそおはすめれ、この君は、言はで憂しと思はむこと、いとはづかしげに心深きを、（本当に気がひけるほど考え深い方なのに）あいなく思ふこと添ひぬる人の上なめり、年ごろ見ず知らざりつる人の上なれど、（長の年月会いもせず噂に聞きもしなかった妹だけれど）心ばへ容貌を見れば、（とても放っておけないほど）え思ひ放つまじう、らうたく心苦しきに、（女の一生というものは生きにくく煩わしいことが多いものだこといのに）世の中はありがたくむつかしげなるものかな、（心に満たぬことが多い気持がするけれど）わが身のありさまは、飽かぬこと多かるここちすれど、（そうは落ちぶれずに過してきたのでそれで）かくものはかなき目も見つべかりける身の、さははふれずなりにけるにこそ、（人の言う通り仕合せだったのだ）げにめやすきなりけれ、今はただ、この憎き心添ひたまへる人の、（何事も起さないであきらめて下さるなら「私自身は」）なだらかにて思ひ離れなば、さらに何ごとも思ひ入れずなりなむ、と思ほす。い

八（浮舟は）さぞきまり悪くお思いでしょうね。匂宮との間に、何かあったと思っている口ぶり。

九 普通の場合より気の毒だ。誰も知らないならともかく、女房たちにまで知られてしまって、という気持。草子地。

一〇 本当に残念ないたわしいことだ。以下最後の行の「……思ひ入れずなりなむ」まで、中の君の長い思惟。

一一 あのようにしまりがなくていらっしゃる方は。匂宮のこと。

一二 聞くに耐えないような、ありもしないことにも難癖をつけて文句を言い。薫との仲を疑う言葉は、三〇七頁にも見える。

一三 一方また、実際多少心外なことがあっても（ご自分の日頃のことがあるから）さすがに大目に見るというようなところがおありのようだ。大ざっぱでいい加減なところのある匂宮の性格を見抜いている。

一四 口には出さずいやだと思うような点では。「言はで……思ふ」は、歌によく詠まれる言い方。「心には下行く水の湧きかへり言はで思ふぞ言ふにまされる」（『古今六帖』五、言はで思ふ）など。

一五 難儀なことに、心配事が増えたらしい妹の身の上だ。

一六 この妹のようにつまらぬ目に会うかもしれなかった身でありながら。匂宮などから、人並みでない扱いを受けること。

一七 この困った恋心をお持ちの方が。薫のこと。

一 白いお召し物。桂姿であろう。濡れ髪のため、表着など着ていない姿。

乳母、右近に申し入れ

二 こちら（中の君方）の障子の所へ来て。「障子」は、中の君のいる母屋と廂の間を仕切る襖障子。

三 御前で慰めてさし上げて頂きたい、と存じまして（罷り出ました）。中の君から慰めて頂きたい、と言う。

四 大層肩身が狭そうにくよくよしておいでのようですのも。「ことわりにいとほしく……」に続く文脈。

五 少しでも男女のことをご存じの方ならともかく、とてもそう平気ではいらっしゃれますまいと。

中の君、浮舟を慰める

と多かる御髪なれば、とみにもえ乾しやらず、（乾かしきれず）（起きて坐っていられるのもお）起きゐたまへるも苦し。白き御衣一襲ばかりにておはする、細やかにをかしげなり。

（浮舟）この君は、（口実だけでなく本当に気分も悪くなっているけれども）まことにここちもあしくなりにたれど、乳母、「いと（本当に）（何と思われますことか）かたはらいたし。事しもあり（何かあったようにお思いになりましょうに）顔におぼすらむを、（ただおっとりと構えてお目）見えたてまつりたまへ。（通り申し上げなさいませ）右近の君などには、事のありさまはじめよ（ご説明いたしましょう）り語りはべらむ」と、（無理やり強く勧めて）せめてそそのかしたてて、こなたの障子のもとにて、（乳母）「右近の君にもの聞こえさせむ」（お話し申し上げとう存じます）と言へば、（右近が）立ちて出でたれば、（乳母）「いとあやしくはべりつることの名残に、（本当におかしなことがございましたそのせいで）（浮舟は）身も熱うなりたまひて、（真実いかにもお苦しそうにお見えあそばすので）まめやかに苦しげに見えさせたまふを、（お熱が出たりなさいましたて）いとほしく見はべる。御前にてなぐさめきこえさせたまへ、とてなむ。（おいたわしく存ぜられます）あやまちもおはせぬ身を、いとつましげに思ほしわびためるも、いささかにても世を知りたまへる人こそあれ、いかでかはと、ことわりにいとほしく見たてまつる」とて、引き起こして参らせたてまつる。（何の間違いもおありでない）（身なのに）（ご無理もないこととおいたわしく）（存じ上げます）（浮舟を）（中君のお前に）

（浮舟は）われにもあらず、人の思ふらむこともはづかしけれど、いとやは（正体もなく）（まわりの人の手前も気がひけてならないけれど）（本当に素直な）

六 頬に垂らす前髪。
七 燈火の方に背を向けていられる様子は。以下、右近たちの目に映る浮舟のさま。
八 奥様（中の君）を比べる人もないほど美しいと（右近たちは）お思い申しているが、それにどこが劣るとも見えず、上品で美しい。「け劣る」は、どことなく感じが劣ること。
九 （匂宮が）この人（浮舟）にご執心なさったら、目に余ることが起るだろう。妹が姉の寵を奪うといったことになろう。右近たちの思い。
一〇 右近と少将の二人ほどが。
一一 （浮舟が）中の君のお前では、いつまでも顔をそむけてばかりもいらっしゃれないので。それで右近たちにもよく見える。
一二 亡き大君。
一三 一人残されたわが身の運命も恨めしく、こんな不仕合せな者はまたとない思いで暮してきましたが。
一四 思ってくれる人もない私ですから、亡き姉君のお気持同様、私を思って下さるなら。「思ふ人」は、自分を愛してくれる親きょうだいのこと。
一五 それに田舎暮しに馴れた身では、気の利いたお返事を申し上げる言葉も浮ばず。

おっとりし過ぎていらっしゃるお方なので［乳母に］押し出されたままそこにいらっしゃるらかにおほどき過ぎたまへる君にて、押し出でられてゐたまへり。［涙で］額髪などの、いたう濡れたるをもて隠して、［扇で］燈の方に背きたまへるさま、上をたぐひなく見たてまつるに、け劣るとも見えず、あてにをかし。これにおぼしつきなば、めざましげなることはありなむかし、これほど大した美人でなくても新参の女房などに興味をお持ちになるご性分なのにいとかからぬをだに、めづらしき人、をかしうしたまふ御心を、と二人ばかりぞ、御前にてえ恥ぢあへたまはねば、見ゐたりける。［中君は］世間話をとてもやさしくなさって物語いとなつかしくしたまひて、「例ならずつつましき所など、なつったりしないで下さいね思ひなしたまひそ。故姫君のおはせずなりにしのち、忘るる世なく忘れる時とてなく悲しみじく、身もうらめしく、たぐひなきここちして過ぐすに、いと亡き姉君そっくりでいらっしゃるあなたのお姿を見ると心も晴れる思いでしみじみうれしよく思ひよそへられたまふ御さまを見れば、なぐさむここちしてあはれになむ。思ふ人もなき身に、昔の御心ざしのやうに思ほさば、いとうれしくなむ」などかたらひたまへど、いとものつつましくて、また鄙びたる心に、いらへきこえむこともなくて、「年ごろいとはるかにのみ思ひきこえさせしに、かう見たてまつりはべるは、何ご

一 物語絵など取り出させなさって、右近に物語を読ませなさって。厨子などから取り出させたのであろう。「詞」は、物語の本文。この場面、源氏物語絵巻に図画されている（図録五参照）。

二 （浮舟も）向い合って、顔を隠すこともお忘れになるふうで、一心になって絵に見入っていらっしゃる火影の姿は。当時の貴族の女性が物語絵を喜んだことは、三巻絵合の巻に詳しい。また、一巻若紫二三七～八頁、末摘花二八二頁、五巻若菜上八二頁参照。

中の君、絵を見せて、浮舟を慰める

三 額のあたりや目もとが、ほんのりと匂うように美しい感じで。

四 本当にしみじみなつかしい顔立ちだこと。「人の容貌」で一語。以下「……いみじきものなりけり」まで、中の君の心中の思い。

五 （浮舟は）亡き父宮に大層よく似申しているのであろう。

六 年寄りたちが言っていたようだ。昔を知る老女房たちの言葉を伝え聞いていた趣。

七 （亡き八の宮や大君と）心の中で比べてごらんになるので。

八 あちら（大君）は、この上もなく上品で高貴の方という感じながら。「おぼしくらぶる」心の続き。

無邪気な声で

ともなぐさむここちしはべりてなむ」とばかり、いと若びたる声にて言ふ。

もがすっかり満たされる思いがいたします

一 絵など取り出でさせて、右近に詞読ませて見たまふに、二 向ひても

[中君が]

の恥ぢもえしあへたまはず、心に入れて見たまへる火影、さらにこと見ゆる所なく、こまかにをかしげなり。三 額つきまみの薫りたるここちして、いとおほどかなるあてさは、ただそれとのみ思ひ出でらるれば、[中君は] 絵はことに目もとどめたまはで、四 いとあはれなる人の容貌かな、いかでかうしもありけるにかあらむ、五 故宮にいとよく似たてまつりたるなめりかし、故姫君は宮の御方ざまに、六 われは母上に似たてまつりたるとこそは、古人ども言ふなりしか、七 げに似たる人はいみじきものなりけり、とおぼしくらぶるに、八 涙ぐみて見たまふ。

目鼻立ちが整って美しい風情だ

思われる欠点もなく

全くここがと

大君の再来かと

まことにおっとりとした上品な感じは

どうしてこうまでよく似たのだろう

亡き大君は父宮のお顔立ちの方に

[浮舟を]

ほんとに似ている人

というものはなつかしいものだこと

かれは、限りなくあてに気高きものから、なつかしうなよよかに、かたはなるまで、なよなよとたわみたるさまのしたまへりしにこそ、これは、またもてなしのうひうひしげに、よろづのことをつつまし

暖かく人をひきつけもの柔らかで

ものやさしい感じでいらっしゃったことだ

危なっかしいほど

物腰がいかにも人馴れせず

何ごとにも気おくれしたふうに思っ

浮舟

九　もう少し重々しい感じさえ身につけたならば。

一〇　いつのまにか、姉ぶった思いで（浮舟の世話を）あれこれお考えになる。

姉妹の睦み、女房たちの臆測

一一　とてもお会いしたく、とうとう一度もお顔を拝せずに終ったことを、本当に残念に悲しいと思っている。浮舟の思い。

一二　昨夜の経緯を知っている女房たちは。右近たち以外にも知れている趣。

一三　（浮舟ご本人は）ほんとにかわいらしい方ですが、（中の君が）どんなに大事になさろうとしても。

一四　そのかいのあることでしょうか。匂宮のお手がついていては仕方がない、の意。

一五　そうでもなさそうです。あの御乳母が（私を）摑まえて、何やかやと泣き言を言っていました様子では、何どともないような口ぶりでした。右近を呼び出して語ったことをさす（三一八頁）。

一六　逢って逢わぬような意味合いに、そんな歌を歌ったり口ずさんだりしていらっしゃいました。『釈』以下古注は「臥すほどもなくて明けぬる夏の夜は逢ひても逢はぬここちこそすれ」（出典未詳）をあげる。

一七　昨夜、浮舟が燈火のもと、物語絵に熱中していた様子のこと。

東　屋

うのみ思ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる、ゆゑゆゑしきけはひだにもてつけたらば、大将の見たまはむにも、さらにかたはなるまじ、など、このかみ心に思ひあつかはれたまふ。

（見ばえのする優雅さという点では劣っている）（薫）（お相手になさっても）（決して）（ていたせいか）（おかしくはあるまい）（お二人は）

物語などしたまひて、暁がたになりてぞ寝たまふ。かたはらに臥せたまひて、故宮の御ことども、年ごろおはせし御ありさまなど、まほならねど語りたまふ。いとゆかしう、見たてまつらずなりにけるを、いとくちをしう悲しと思ひたり。昨夜の心知りの人々は、「いかなりつらむな。いとらうたげなる御さまを、いみじうおぼすとも、かひあるべきことかは。いとほし」と言へば、右近ぞ、「さもあらじ。かの御乳母の、ひきすゑてすずろに語り愁へしけしき、もて離れてぞ言ひし。宮も、逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそ、うちうそぶき口ずさびたまひしか。いさや、ことさらにもやあらむ、そは知らずかし。昨夜の火影のいとおほどかなりしも、事あり顔には見えたまはざりしを」など、うちささめきていとほしがる。

（中君は浮舟を）（夜明け方）（亡き父宮）（ご在世中のあれこれのご様子などを）（ぽつりぽつりとお話しになる）（どうだったのでしょうね）（お気の毒に）（そこの所は分りません）（とておっとりしていた様子も）（何かあったように）（にはお見えでなかったですもの）（いえでも）（わざとそんなふうにおっしゃったのか）（ひそひそ話し合って気の毒がっている）

一 乳母は、車を寄こしてもらって。母君に報告のため、帰宅しようと、常陸邸に車を取りにやる。

二 (二条の院の) 女房たちも怪しからぬことに思って噂するだろう、中の君ご自身もどうお思いか。以下「……ものなり」まで、母君の心中の思い。

三 こうした筋 (男女の仲) についての嫉妬は、身分の高い人も何もないものだと。

四 自分のいつもの考えから推して。

五 いつまでも子供みたいにしっかりせぬ人 (浮舟のこと) をお預け申しておいて。

六 まるで鼬と同じような気持がしますので (また参上いたしまして)。心配で気もそぞろなこと。「いたちは狐の性の類也。狐は狐疑とて物をつよく疑ふ心のある物也。その如くにいたちも疑ひの心のあるもの也。うしろやすくは思へども疑はしき心のあると也。いたちのまかげなどいふも疑心のある故也」(『細流抄』)

七 心配そうに疑っていらっしゃるらしいお口ぶりが気になりますこと。「御まかげ」は、母君の言葉の「鼬の……」に引かれたもの。鼬のまかげといって、鼬が人を見るとあやしく思って、目の上に手をかざすこと、と古注にいう。

八 気がひけるようなお目もとを見るにつけても。中の君の言葉にあった「御まかげ」と照応する。

九 (浮舟が) こうしてお側に控えていなさるのは。

一〇 出家の本願。(二九七頁参照)

乳母の報告、母君浮舟を引き取る

乳母、車乞ひて、常陸殿へ往ぬ。北の方にかうかうと言へば、[母君は]驚きあわてて つぶれ騒ぎて、人もけしからぬさまに言ひ思ふらむ、正身もいかがおぼすべき、かかる筋のものにくみは、貴人もなきものなりと、お[四]のが心ならひに、[一二条院に]じっとしていられない気持になってあわたたしく思ひなりて、夕つかた参りぬ。宮お[匂宮]はしまさねば心やすくて、気が楽で「あやしく心幼げなる人を参らせおきて、[母君]これで一安心とお頼り申してはいますものの うしろやすくは頼みきこえさせながら、鼬のはべらむやうなることちのしはべれば、よからぬものどもに、ろくでもない家の者たちに憎まれ恨まれております憎み恨みられはべる」と聞こゆ。「いとさ言ふばかりの幼げさにはあらざめるを、[中君]何もそう言うほどの子供っぽさではないと思いますのに うしろめたげにけしきばみたる御まかげこそわづらはしけれ」とて笑ひたまへるが、心はづかしげなる御まみを見るも、[母君は]気が咎めて身も縮む思いがする心の鬼にはづかしくぞおぼゆる。[中君は]何とお思いだろういかにおぼすらむ、と思へば、[母君は]昨夜のことはとても申し出せないえもうち出で聞こえず。

[母君]「かくてさぶらひたまふは、長年の願いが年ごろの願ひの満つここちして、叶う気がしまして人の伝え聞きましても体裁がよく漏り聞きはべらむもめやすく、晴れがましいことと心得ているのでございますがおもだたしきことになむ思ひたまふるを、そうは申してもやはりご遠慮申すべきことでございましたさすがにつつましきことになむはべりける。深き山の本意は、

一一 変りようもないはずのことでございますのに。「みさを」は、変らぬこと。

一二 ここにおられて、何が心配だとおっしゃるのでしょう。

一三 けしからぬふうの、お振舞のいけない方が。匂宮のこと。

一四 お恥ずかしいことながら（故宮が浮舟を）実の子とお認め下さらなかったことについては。

一五 そちらの筋ではなくて。八の宮の血に繋がる姉妹という縁ではなくても。

一六 お見捨てあそばすはずもない絆もございますのを、すがり所にお頼り申し上げております。自分が、中の君の母北の方の姪に当ることをいう。（二九一頁注一〇参照）

一七 明日、明後日と、重い物忌でございますので。「物忌」は、二九二頁注一参照。物忌は普通二日間のことが多い。

一八 きびしく守れる所で過しまして。「おほぞうならぬ」は、いい加減でない、の意。人の出入りなどない所をいう。

一九 かわいそうな、不本意なことよ。

二〇 みさをになむはべるべきを」とてうち泣くもいといとほしくて、（中君）「ここには、一二 何ごとかうしろめたくおぼえたまふべき。とてもかくても、［私が］粗略にお構いしない気持でいますならばともかく うとうとしく思ひ放ちきこえばこそあらめ、一三 けしからずだちてよからぬ人の、時々ものしたまふめれど、その心を皆人見知りためれば、気をつけて心づかひして、便なうはもてなしきこえじ、と思ふを、いかにおしはかりたまふにか」とのたまふ。（母君）「さらに御心をば隔てありても思ひきこえさせはべらず。一四 かたはらいたうゆるしなかりし筋は、何にかかけても聞こえさせはべらむ。一五 その方ならで、思ほし放つまじき綱もはべるをなむ、とらへ所に頼みきこえさする」など、（母君）おろかならず聞こえて、「明日明後日、かたき物忌にはべるを、一八 おほぞうならぬ所にて過ぐして、またも参らせはべらむ」と聞こえて連れて行くいざなふ。一九 いとほしく本意なきわざかな、とおぼせど、［中君は］えとどめたまはず。［母君は］考えもしなかった不祥事に気も動転しうろたえてしまっているので あさましうかたはなることにおどろき騒ぎたれば、挨拶も申し上げないで辞去したをさをさものも聞こえで出でぬ。

（中君）
かわいそうに思われて
いずれにしても
［私が］粗略にお構いしない気持でいますならばともかく
お見えになるようですが
そんな事情を皆も承知しています
不都合なお扱いはいたさぬ積りです
（母君）決してご厚情のほどを分け隔てあるようには存じ上げておりません
何で一言でも愚痴を申し上げたりいたしましょう
（二条院）参らせましょう
［浮舟を］
［中君は］
お引き留めになれない
ろくにご挨拶も

浮舟、三条の小家に行く

かやうの方違へ所と思ひて、小さき家まうけたりけり。三条わたりに、さればみたるが、まだ造りさしたる所なれば、はかばかしきしつらひもせでなむありける。「あはれこの御身ひとつを、よろづにもてなやみきこゆるかな。心にかなはぬ世には、あり経まじきものにこそありけれ。みづからばかりは、ただひたぶるに、品々しからず人げなう、たださるかたにはひ籠りて過ぐしつべし。この御ゆかりは、心憂しと思ひきこえしあたりを、むつびきこゆるに、便なきことも出で来なば、いと人笑へなるべし。あぢきなし。ことやうなりとも、ここを人にも知らせず、忍びておはせよ。おのづからともかくもつかうまつりてむ」と言ひおきて、みづからは帰りなむとす。君はうち泣きて、世にあらむこと所狭げなる身、と思ひ屈したまへるさま、いとあはれなり。親はたましてあたらしく惜しければ、つつがなくて思ふごと見なさむと思ひ、さるかたはらいたきことにつけて、人にもあはあはしく思はれ言はれむが、やすからぬなりけ

かねて小宅を用意していたのだった
小意気な家で
造りかけの
(母君)ああなたのお身の上一つを
何かにつ
ままならぬ憂き世には
とても生きてゆける
けてうまくお世話できないこと
ものではありませんね
浮舟
当方からお近づき申した揚句
不
ひどい物笑いになりましょう
都合なことでも
つまらないこと
隠れていらっしゃい
いずれそのうち何と
母君自身
かうまくしてさし上げますから
何の障りもなく望み通りに縁づけてやりたいと考え
世間からも軽々しいと思われ噂されたりするのが
気になってならないのだっ

一 (母君は)こういう場合の方違えのための家にと思って。「方違へ」は、悪神の遊行する方角を避けて、居所を移すこと。

二 これといって十分な設備もしないままだった。「しつらひ」は、室内の設備。簾、几帳、屏風、帳台等を揃えること。

三 私一人のことなら、何も考えずに、身分が低く人数に入らなくても、ただそういう境遇に埋もれて世を送りもしましょう。「はひ籠る」は、そっと籠る意。

四 このご親戚は(中の君方は)ひどいなさりようとお恨み申した所なのに。子と認めてもらえなかったことをいう。

五 粗末な家でも。「ことやう」は「異様」。普通ではないさま。

六 生きているのも肩身の狭い身の上と、うち沈んでいられる様子は、本当にいじらしい。「屈す」は「屈す」の促音無表記の形。

七 母親にしてみれば、まして一層もったいなく惜しく思われるので。以下、浮舟を、三条の隠れ家にまで連れ出した母親の気持を説明する。

八 あんな体裁の悪いことが起ったにつけても。匂宮に押し入られたこと。

九 物分りが悪くはない人だが、少々怒りっぽく、我儘なところがいくらかあるのだった。母君の人柄。

一〇 あちらの家（常陸邸）でも、（浮舟を）人目につかぬ所に住まわせておくことはできたのだが。

一一 そんな隅っこに置くのはかわいそうに思って。人数ならぬ扱いはしたくない気持。

一二 この家は、まだこんなに粗造りで、（戸締りなども）不用心な所のようです。

一三 部屋部屋にある道具類をお取り寄せになってお使いなさい。

一四 夜番の者。

一五 あちらの家（常陸邸）で、怒ってお恨みなのが。「らる」は軽い敬語。常陸の介を意識していよう。

一六 母君が自分と心を合せて、不体裁なことに、立ち働こうとしない、と不満を言うのだった。母君の言葉に「かしこに腹立ち恨みらるるが……」とあるのを受けた説明。

一七 本当にいやな人だ、この少将のせいで、（浮舟の身に）今度のようないろいろの面倒も起ったのだと。母君の思い。「まぎれ」は、物事が錯綜すること。

一八（母君にとって）この上もなく大事と思う娘（浮舟）のことが、こんな有様なので。

一九 匂宮の御前では、まことに貧相に見えたので、それが大きく働いて、見下げる気持になったことゆえ。（二九四～五頁参照）

二〇 この家（常陸邸）では、どんなふうに見えるだろう。

常陸邸における少将の婿君ぶり

り。ここちなくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、思ひのままにぞすこしありける。[一〇]かの家にも隠ろへてはする[一一]たりぬべけれど、しか隠ろへたらむをいとほしと思ひて、かくあつかふに、年ごろかたはら去らず、明け暮れ見ならひて、かたみに心細くわりなしと思へり。「ここは、まだかくあばれて、あやふげなる所なめり。さる心したまへ。曹司曹司にある物ども、召し出でて使ひたまへ。宿直人のことなど言ひおきてはべるも、いとうしろめたけれど、かしこに腹立ち恨みらるるが、いと苦しければ」と、うち泣きて帰る。

（母君）[一二]
（母娘一緒で）
（朝晩顔を合せてきたので）
（二人とも心細くたまらないと思っている）
（気をつけて下さい）
（よく言い付けてありますが）
（それでも心配でならないけれど）
（とてもつらいので）

少将のあつかひを、守は、またなきものに思ひいそぎて、もろ心に、さまあしく、いとなまず、と怨ずるなりけり。[一七]いと心憂く、この人により、かかるまぎれどももあるぞかしと、[一八]またなく思ふ方のことのかかれば、つらく心憂くて、をさをさ見入れず。[一九]かの宮の御前にていと人げなく見えしに、多く思ひおとしてければ、私ものに思ひかしづかましを、など思ひしことはやみにたり。[二〇]ここにてはい

（接待）
（常陸介）
（この上もない大事と考えて支度をするのに）
（悲しく情けなくて）
（ろくに婿君の世話もしない）
（秘蔵の婿にして大切に世話しよう）
（などと思っていた考えは消えてしまっている）

一 少将がゆっくりとご逗留の昼頃。夜の明けぬうちに帰るといった新婚早々の時期は過ぎた趣。
二 少将のいる所。西の対である（二九一頁参照）。
三 白い綾の着馴れて柔らかそうな下着に、今様色の美しい艶を出した袿を着て。「今様色」は、紅、または濃い紅梅色とも。「擣目」は、砧で打って出した艶の模様。以下、母君の目にする少将の有様。
四（廂の間の）端近く、庭前の草花を見ようと坐っている姿は。
五 少将の妻。常陸の介と母君の実の娘。
六 中の君が、匂宮に寄り添っていらっしゃったあのお二人のお姿を思い出すと（二九三頁参照）。
七（少将が）側に控える女房に、何か冗談を言って。「御達」は、年輩の重だった女房に対する敬称。
八 それほど前に二条の院で見た時のように、見映えのしない無様な男とも思えないので（二九四頁参照）。
九 あの匂宮邸にいたのは、別の少将だったのだ。少将の定員は、左右近衛府で各二名。
一〇 どうしてあんな種があったのでしょう。どこから探して来られたのだろう、の意。
一一 同じ萩とはいえ、枝ぶりなどが本当に趣がありました。常陸の介の家の前栽にも、萩が咲いている様子。
一二「移ろはむことだに惜しき秋萩に折れぬばかりも置ける露かな」（『拾遺集』巻三秋、亭子院の御屏風に 伊勢。『古今六帖』六、秋萩。『和漢朗詠集』上秋、萩。『伊勢集』）。「移ろふ」は、色があせること。

かが見ゆらむ、まだうちとけたるさま見ぬに、〔母君は〕くつろいでいる姿は見ないが と思ひて、一のどかにゐたまへる昼つかた、二こなたにわたりてものよりのぞく。物の隙間から 三白き綾のなつかしげなるに、今様色の擣目などもきよらなるを着て、四端の方に前栽見るとてゐたるは、どこが悪かろう いづこかは劣る、いときよげなめるは、本当に美しい様子よ 五と見ゆ。娘いとまだかたなりに、何心もなきさまにて添ひ臥したり。いかにも無邪気そうに少将の側で横になっている 六宮の上の並びておはせし御さまどもの思ひ出づれば、幼げな姿で くちをしのさまどもや、と見ゆ。七前なる御達にものなど言ひたはぶれて、うちとけたるは、八いと見しやうに、にほひなく人わろげにも見えぬを、お話にもならぬしがない夫婦だ とそう思った折も折言うことといったら 九かの宮なりしは、異少将なりけり、と思ふをりしも言ふことよ。さすがに格別みごとで風情のあることです（少将）「兵部卿の宮の萩の、一〇なほことにおもしろくもあるかな。いかでさる種ありけむ。一一おなじ枝ざしなどのいと艶なるこそ。一日参りて、先日参上して 一二出でたまふほどなりしかば、折り取れないでしまいました えぬ折らずなりにき。ことだに惜しき、ちょうどお出ましになる時だったので 匂宮と宮のうち誦じたまへりしを、歌い上げられたのを 若い女房衆に見せて上げることができましたら 若き人たちに見せたらましかば」と 少将自身も この男の根性の卑しさを思えば 人並みて、われも歌よみゐたり。（母君）「いでや、心ばせのほどを思へば、人と

一三 宮のお前でのみすぼらしさは、もう言いようもなかったのに。「出で消え」は、人前に出て普段より見劣りすること。

一四 標を結った小萩は少しも乱れていないのに、どんな露が置いたからといって、色変りする萩の下葉なのでしょう。「しめゆふ」は、領有を示すためにしるしの標縄を引き渡すこと。約束をした浮舟の方はそれを守っているのに、あなたはなぜ妹娘に心変りしたのですか、の意。

母君と少将の問答

一五 宮城野の小萩―八の宮の姫君と知っていたら、かりそめにも心をほかに分けはしなかったでしょうに。「宮城野」は、陸奥の歌枕。萩の名所とされた。今、仙台市の東にその名が残る。「宮城野」の「宮」に皇族の意を響かす。「つゆも」に「露」を掛け、「萩」の縁語。

一六 亡き八の宮のお子だということを耳にしたのらしい、と思うと、（こうして素姓を知られたからには）いよいよ（身分にふさわしい）人並みの縁につけたいと、そればかりが心にかかる。母君の思い。

母君、いよいよ浮舟の良縁を願い、薫のことを思う

一七 大それたことながら大将殿（薫）のご様子やお顔が、慕わしく目の前に浮んでくる。「あいなし」はあるまじきことだ、の意。

一八 同じようにすばらしいお方と拝見したけれども、匂宮のことは問題にならず、念頭にもない。「離れ」は「はなたれ」の誤脱か。「たまひ」は宮に対する敬語。以下、薫へと傾く母君の長い思案を述べる。

（何を一人前に歌など詠んでいるのか　つい文句が出るが）もおぼえず、一三出で消えはいとこよなかりけるに、何ごと言ひゐたるぞ」とつぶやかるれど、いとここちなげなるさまは、さすがにした（見えないので）らねば、いかが言ふとて、こころみに、

（母君）一四しめゆひし小萩がうへもまよはぬに

いかなる露にうつる下葉ぞ

（気の毒に思われて）とあるに、いとほしくおぼえて、

（少将）一五「宮城野の小萩がもとと知らませば

つゆもこころをわかずぞあらまし

（ぜひとも直接お目にかかって申し開きがしたいものです）いかでみづから聞こえさせあきらめむ」と言ひたり。

故宮の御こと聞きたるなめり、と思ふに、いとどいかで人とひとしく、とのみ思ひあつかはる。一七あいなう大将殿の御さま容貌ぞ、恋しう面影に見ゆる。一八同じうめでたしと見たてまつりしかど、宮は思ひ離れたまひて、心もとまらず、あなづりて押し入りたまへりける（見下して強引に押し入ってこられたことを考えるだけでも無念でならない　薫）を思ふもねたし、この君は、さすがに尋ねおぼす心ばへのありながら（気にかけて言い寄ろうというお気持はありの者とも思われず）

一 何のきっかけもなしに、言い出したりもなさらず。求婚にふさわしい機会を待って申し込むのが、優雅な作法である。

二 年若い浮舟は、私以上にこんなふうに（慕わしいと）お思い出し申していられることだろう。

三 わが婿にしようなどと、こんな可愛げもない男を、考えたりしたのはみっともないことだったのだ。目の前にいる少将のこと。「なべかりけれ」は「なるべかりけれ」の撥音便無表記の形。

四 （それが実現することなど）とてもむつかしく思われる。

五 （そんな薫が）一体浮舟がどんな娘だというので、お心をおとめになろう。以下「いと難し」と思う理由が述べられる。

六 人格の優劣と言い、心ざまの賤しさ上品さと言い、すべて身分によって、顔つきも気立てまでも決ってくるものなのだ。

七 自分が腹を痛めた子どもたちを見ても。常陸の介との間の子どものこと。

八 現在の帝のご秘蔵の姫宮をお貰い申されているような方の目からご覧になったら。女二の宮を正室にする薫の目から見れば。

ながら、うちつけにも言ひかけたまはず、つれなし顔なるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひ出でらるれば、若き人は、ましてかくや思ひ出できこえたまふらむ、わがものにせむと、かく憎き人を思ひけむこそ見苦しきことなべかりけれ、など、ただ心にかかりて、なすれば物思いに沈んでがめのみせられて、とてやかくてやと、よろづによからむあらましと思い描いてみるのだがごとを思ひ続くるに、いと難し。やむごとなき御身のほど、御もて言いなし、見たてまつりたまへらむ人は、今すこしなのめならず、いかばかりにてかは心をとどめたまはむ、世の人のありさまを見聞くに、劣りまさり、いやしうあてなる、品に従ひて、容貌も心もあるべきものなりけり、わが子どもを見るに、この君に似るべきやはある、少将を、この家のうちにまたなき者に思へども、宮に見くらべたて時はまつりしは、いともくちをしかりしにおしはからる。当帝の御かしづき女を得たてまつりたまへらむ人の御目うつしには、いともいともはづかしく、つつましかるべきものかな、と思ふに、すずろにこ

何気ないふりをしていらっしゃるのは大したものだ　こうして何かにつけて思い出されるのだから　〔浮舟のことが〕　こうしたらああしたらと　さまざまによかれと思う将来の夢を次々　〔薫は〕尊いご出身と言い　ご風采と言い　また妻としてお迎え申されている方と言えば　ひときわ並のお方ではない　浮舟　比べられる者があろうか　この常陸の介の家ではまたとない者と思っているけれども　匂宮を拝したあとで比べた　もう本当にお話にもならなかったのを思えばよく分る　身の縮む思いをしなくてはならぬことだ　まことにどうにも気がひけて　わけもなく気持

九 仮の住いは、何をすることもなく。「旅の宿り」は、三条の隠れ家のこと。

三条の小家の浮舟

一〇 庭の草もうっとうしい気分がするのに。手入れがされず、草の生い茂るさま。

一一 ただ下品な東国訛りの者どもばかりが出入りし。常陸の介の家来。先に「宿直人のことなど言ひおきてはべるも」（三二五頁）とあった、宿直の番に当る者たちであろう。

一二 いやな振舞に及ばれた方（匂宮）のご様子も、なぜかやはり思い出されて。

一三 あれは何をおっしゃっていたのか、（匂宮は）いろいろとやさしそうにおっしゃったことだ。「言の葉多かる御本性なれば、何やかやとのたまふ……」（三一〇頁）とあった。

一四 匂宮がお立ち去りになった後まで、よい匂いがしていた御移り香も。

母と娘の交わす歌

一五 「たつやと」は、諸本異同はないが、解しがたい。『玉の小櫛』は、「いかにやと」の誤写とするが、首肯しがたい。旧説は「母君だつやと」と読んで、母君らしくというつもりか、と解する。

一六 （母君が）一方ならず不憫と思ってご心配下さっているらしいのに、お世話して頂くかいもないことだ。浮舟の思い。

一七 退屈などと、そんなことはありません。

もぼうとなる気がするのだった

こちもあくがれにけり。

旅の宿りはつれづれにて、庭の草もいぶせきここちするに、いやしき東声したる者どもばかりのみ出で入り、なぐさめに見るべき前栽の花もなし。うちあばれて、はればれしからで明かし暮らすに、宮の上の御ありさま思ひ出づるに、若いここちに恋しかりけり。あやにくだちたまへりし人の御けはひも、さすがに思ひ出でられて、何ごとにかありけむ、いと多くあはれげにのたまひしかな、名残をかしかりし御移り香も、まだ残りたるここちして、恐ろしかりしも思ひ出でらる。

一一 一体に未完成で
一二 気晴らしに見られるような
一三 気分も晴れぬ思いのまま朝晩を迎える日々に
一四 中の君
一五 若い娘心には恋しく思われるのだった
一六 「それにつけても」怖かった
一七 記憶もよみがえる

母君たつやと、いとあはれなる文を書きておこせたまふ。おろかならず心苦しう思ひあつかひたまふめるに、かひなうもてあつかはれたてまつること、とうち泣かれて、「いかにつれづれに見ならはぬここちしたまふらむ。しばし忍び過ぐしたまへ」とある返りことに、「つれづれは何か。心やすくてなむ。

一五 大層情のこもった手紙を書いてお寄こしになる
一六 つい泣けてしまって（母君）そんな所でどんなに退屈で落着かぬ気持がなさることでしょう
一七 もうしばらく辛抱していて下さい
（浮舟）この方が気楽です

一 何もかも忘れてうれしいことでしょうに、もしここが憂き世を離れた別世界と思うことができましたら。「世の中にあらぬ所も得てしがな年ふりにたるかたち隠さむ」（『拾遺集』巻八雑上、読人しらず）

二 子供っぽく詠んであるのを見るやいなや。「幼げ」は、思い詰めた理屈っぽい歌の詠みぶりをいう。

三 つらいこの世以外の所を捜し求めてでも、あなたがお栄えになるのを見たいものです。浮舟の栄華のためなら、どんなことでもしたい、の意。

四 習慣になってしまっているので、夜の寝覚ごとに（亡き大君のことを）忘れず、しみじみと悲しく思い出されなさるばかりなので。

五 宇治山の御堂。八の宮邸の寝殿を解体して阿闍梨の山寺に寄進することにしたこと、宿木二二七～八頁、二三五頁、二五七頁参照。

六 昔は、大層簡素に、いかにも仏道修行の僧のようにしていらしたお暮しを思い出すと。

七 当時とはすっかり様子を変えてしまったのも、残念に思われるほどで。

薫、宇治に行き、新造の寝殿を見る

ひたぶるにうれしからまし世の中に
　あらぬところと思はましかば」

と、幼げに言ひたるを見るままに、ほろほろとうち泣きて、かうまどはしはふるるやうにもてなすこと、といみじければ、

憂き世にはあらぬところをもとめても
　君がさかりを見るよしもがな

と、なほなほしきことどもを言ひかはしてなむ心のべける。

かの大将殿は、例の、秋深くなりゆくころ、ならひにしことなれば、寝覚寝覚にもの忘れせず、あはれにのみおぼえたまひければ、宇治の御堂造り果てつ、と聞きたまふに、みづからおはしましたり。久しう見たまはざりつるに、山の紅葉もめづらしうおぼゆ。こぼちし寝殿、こたみはいとはればれしう造りなしたり。昔いとことそぎて、聖だちたまへりし住ひを思ひ出づるに、故宮も恋しうおぼえたまひて、さまかへてけるもくちをしきまで、常よりもながめたまふ。

（母君）
（母君は）
（浮舟を）
（宇治に）
（薫は）
一 ひたぶるにうれしからまし世の中に　何の曲もない思ったままの歌をお互いやりとりして心を慰めるのだった
二 なほうに行方も定めずさすらうような目に会わせること　ととても悲しいので
三 憂き世にはあらぬところをもとめても　君がさかりを見るよしもがな
四 薫　例によって　秋深くなりゆくころ、ならひにしことなれば、寝覚寝覚にもの忘れせず、あはれにのみおぼえたまひければ、
五 出来上がった　宇治の御堂造り果てつ、
六 今度の新造のは大層明るくはなやかな感じに造ってある　こたみはいとはればれしう造りなしたり。昔いとことそぎて、
七 亡き八の宮も恋しく思い出されなさって　聖だちたまへりし住ひを思ひ出づるに、故宮も恋しうおぼえたまひて、さまかへてけるもくちをしきまで、
解体した　こぼち
いつもより物思いに沈んでいられる　常よりもながめたまふ。

八 以前してあったお部屋の飾りつけは、（八の宮方のは）まことに仏道修行にふさわしく、ありがたい感じがして。寝殿の西面、母屋が仏間で、西廂が八の宮の居間であったこと、六巻椎本三四九頁参照。

九 もう一方を、姫君たちのお部屋として女らしくこまごまとしたお道具を揃えるなど、それぞれ趣を変えて、一様でなかったのだが。寝殿の東面が姫君たちの部屋であったことは、椎本同頁、総角九九頁参照。

一〇 網代屏風とか何かの大まかな調度類などは。八の宮方のものであろう。

薫、弁の尼のもとに立ち寄り、浮舟への仲介を頼む

「網代屏風」は、椎本三〇九頁注一一参照。

一一 新造の御堂の僧房の用具に。「僧坊」は、御堂に奉仕する僧の住む建物。

一二 昔ながらに絶えることなく流れるこの清水に、亡き方々はどうして面影だけでも映し止めておいて下さらなかったのだろう。遺水は湧き出る泉を水源とすることが多い。

一三 （薫は）長押に軽く腰をおろされて。「長押」は簀子と一段高い廂の間の境に渡してある横木。

一四 例の人（浮舟）は、先頃宮様（匂宮）のお邸にいると聞きましたが。

一五 物忌の方違えをするといって、あちらこちらと住居を変えていられる様子です。二条の院に行く時も、出る時も、物忌を口実にしていたこと、二九二頁、三二三頁参照。

八 もとありし御しつらひは、いと尊げにて、今片つ方を、女しくこまやかになど、一方ならざりしを、網代屏風何かのあらあらしきなどは、かの御堂の僧坊の具に、ことさらになさせたまへり。山里めきたる具どもを、ことさらにせさせたまひて、いたうもことそがず、いときよげにゆゑゆゑしくしつらはれたり。

［供養のため］特に役立てるようになさった　山荘にふさわしい調度類を　［新造の寝殿のために］わざわざ造らせなさって　さほど簡略にもせず　大層こざっぱりと奥ゆかしく設備がされている

遣水のほとりなる岩にゐたまひて、

腰かけなさって

（薫）一二 絶え果てぬ清水になどかなき人の

面影をだにとどめざりけむ

涙をのごひつつ、弁の尼君の方に立ち寄りたまへれば、いと悲しと見たてまつるに、ただひそみにひそむ。長押にかりそめにゐたまひて、簾のつま引き上げて、物語したまふ。几帳に隠ろへてゐたり。

［弁尼は］とても悲しい気持でお姿を拝すると　ただ泣き顔をするばかりである　［弁は］端を

（薫）一四 ことのついでに、「かの人は、さいつころ宮にと聞きしを、さすがにうひうひしくおぼえてこそ、おとづれ寄らね。なほこれより伝へ果てたまへ」とのたまへば、「一日、かの母君の文はべりき。忌違

話のついでに　便りもしないでいます　やはりあなたから何もかも　はり私にはなかなか踏み切れなくて　伝えて下さい　（弁）先日　向うの母君から手紙がございました

一　近頃も、粗末な小家に隠れておいでになるらしいのもかわいそうで。「心苦しく」以下、母君の手紙を間接的に伝える口調から、文面をそのまま伝える形になる。

二　険しい山道なので。

三　私だけがいつまでも昔を忘れず踏み分けてやって来るのです。「まろ」は、親しい間で用いる一人称。

四　どれほどの前世からの因縁なのか。

五　では、その遠慮のいらない所へことづけて下さい。「心やすからむ……」と言うのは、隠れ家で人目につかぬからである。

六　（けれども）今さら京を見ますことはおっくうで、宮様（二条の院）にもようお伺いしないでいますのに。中の君からたびたび出京を促されて、辞退していたこと、宿木二三〇頁に見える。

七　愛宕山に籠る聖でも。「愛宕の聖」は『河海抄』は、空也上人かといい、また真済僧正をあげる。『花鳥余情』は、真済かとする。愛宕山は京都市西京区にある丹波との国境の山で修験道の聖地。「聖」は、山林に籠って苦行する修行僧。

八　衆生済度の徳もありませんのに、（仲立ちのために京に出たりしては）聞き苦しい噂も立ちましょう。「人わたす」は、衆生を彼岸（悟りの境地）に渡すこと。「人わたすことだになきを何しかも長柄の橋と身のなりぬらむ」（『後撰集』巻十五雑一、七条后）

ふとて、ここかしこになむあくがれたまふめる。このころも、あやしき小家に隠ろへものしたまふめるも心苦しく、〔宇治が〕もう少し近い所でしすこし近きほどならましかば、そこにもわたして心やすかるべきを、荒ましき山道に、簡単には決心がつきかねています（そちらにでも連れて行って安心するところなのですが）たはやすくもえ思ひ立たでなむ、とはべりし」（ということでした）と聞こゆ。「人々の（薫）誰もがそんなに恐ろしがっているような山道をかく恐ろしくすめる道に、まろこそ古りがたく分け来れ。何ばかりの契りにか、と思ふは、あはれになむ」（と思うと）（感慨無量です）とて、例の、涙ぐみたまへり。（薫）「さらば、その心やすからむ所に、消息したまへ。みづからや（家に出向かれるお積りはないか）はかしこに出でたまはぬ」とのたまへば、（弁）「仰せ言を伝へはべらむことはやすし。今さらに京を見はべらむことはもの憂くて、宮にだにえ参らぬを」と聞こゆ。（薫）「なにでか。ともかくも人の聞き伝へば（なに構うまい　あれこれと人が取り沙汰するのならともこそあらめ、愛宕の聖だに、時に従ひては出でずやはありける。深き契りを破りて、人の願ひを満てたまはむこそ尊からめ」とのたまへば、「人わたすこともはべらぬに、聞きにくきこともこそ出でまうで来れ」と、苦しげに思ひたれど、「なほよきをりなるを」と、

（場合によっては山を出ないことがありましょうか　籠りの深い誓いを破って　凡人の願いを叶えて下さるのこそ仏の道でしょう　お取次ぎしますことはたやすうございます　困ったことと思ったけれど　でもよい機会だから行って下さい）

九（薫は）いつになく無理押しなさって。
一〇その仮の住居がどこか確かめておいて下さい。
一一（薫は）浅はかで軽薄な、といったところはないお人柄なので。
一二（お邸の）お近くでございますよ。浮舟のいるのは三条の小家だから、薫の三条の宮に近い、と言う。
一三（そうでないと）私がわざわざ差し出がましく、取り持ちを買って出たように思われますのも、今さら伊賀姥のようではないか、と気のひけることですので。
「伊賀姥」は、仲人のこと。「たうめ」は、老女、または老狐を言い、国々にいて、狐が人を化かすように巧みに物を言うところから、名づけられたとされる。
一四「右大将は、常陸の守の娘に求婚している」などと噂もしようからね。あまりの身分違いゆえ、体面上困る、という気持。
一五（しかも）その守の殿というのは、ひどく武張った人物らしいし。お話にならない相手なのである。「ぬし」は軽い敬語。
一六お気の毒にと思う。大君追慕のあまり、常陸の介ごとき者の継子に執心するのをいたわしく思う。
一七木蔭の草の美しい秋の花のいろいろ。
一八（こうした風流の方面にも）よくご理解はおありのお人柄のようだが。「かひなからず」は、こうした山土産を持ち帰るかいがなくはない、の意。

女二の宮を重んじる薫

東屋

例ならずしひて、「明後日ばかり車たてまつらむ。（薫）その旅の所尋ね（車をさし向けましょう）おきたまへ。ゆめをこがましうひがわざすまじくを」と、ほほゑみ（含みのある笑）てのたまへば、わづらはしく、（弁は）気が重くて いかにおぼすことならむ、と思へど、（一体どういうお積りなのだろう）奥なくあはあはしからぬ御心ざまなれば、おのづからわが御ために（顔で）（いずれにしろご自身の名誉のために）も、人聞きなどはつつみたまふらむ、と思ひて、「さらばうけたまはりぬ。（外聞などはおはばかりになることだろう）（弁）それでは承知いたしました 近きほどにこそ。（先に）お手紙などをおやりになって下さいまし 御文などを見せさせたまへかし。ふりはへさかしらめきて、心しらひのやうに思はれはべらむも、今さらに伊賀姥にや、とつつましくてなむ」と聞こゆ。（薫）手紙をやるのは何でもないが 世間の口はとかくうるさいものだから 「文はやすかるべきを、人のもの言ひいとうたてあるものなれば、右大将は、常陸の守の娘をなむよばふなる、などもとりなしてむをや。その守のぬし、いと荒々しげなめり」とのたまへば、（弁は）苦笑して うち笑ひて、いとほしと思ふ。（お帰りになる）

暗うなれば出でたまふ。下草のをかしき花ども、紅葉など折らせ（女二の宮にお目におかけになる）たまひて、宮に御覧ぜさせたまふ。かひなからずおはしぬべけれど、（あまりうちとけてお親しみ申されない様子である）（薫は）うやうやしく奉るといったふうで かしこまり置きたるさまにて、いたうも馴れきこえたまはずぞあめ

一 女二の宮の父帝から。

二 薫の母女三の宮にも何かとお頼み申されるので、（薫も）重々しい正室としては、この上もなく大事にお思い申し上げていらっしゃる。帝と女三の宮とはご兄妹の間柄である。

三 あちらからもこちらからも（帝からも女三の宮からも）大切にお扱い申される方（女二の宮）へのご奉公に加えて。

四 厄介な秘密の恋心。浮舟に対する執心。上の「宮仕へ」に対して「私心」という。

五 仰せになった日のまだ早朝に。前に「明後日ばかり……」とあった日。

六 下級の侍。「侍」は、貴族の家に仕える家来。

七 世間に顔を知られていない牛飼童。「牛飼」は、牛車の牛を扱う者。垂れ髪で童形なので、年齢にかかわらず童という。

八 荘園の者どもで田舎じみたのを呼び出して、警護に加えよ。道中、近い荘園の者を使え、という指示。

九 若い時からのいろいろの出来事が思い出されて。自分の過去、亡き八の宮や大君、また中の君のこと。

一〇 案内の男。三条の小家を知っている。弁の尼が伴って来たのであろう。

一一 初瀬詣での折、お供していた若い女房。宇治に中宿りをした折のこと、宿木二五八頁参照。

弁の尼、出京　浮舟の隠れ家を訪う

る。内裏より、ただの親めきて、世間普通の親のように 入道の宮にも聞こえたまへば、いとやむごとなき方は限りなく思ひきこえたまへり。こなたかなたとかしづききこえたまふ宮仕へに添へて、むつかしき私心の添ひたるも、苦しかりけり。

のたまひしまだつとめて、気心をよくご存じのむつましくおぼす下﨟侍一人、顔知らぬ牛飼つくり出でてつかはす。選び出して「庄の者どもの田舎びたる召し出でつつ、つけよ」とのたまふ。「宇治に」「薫は弁に」必ず京に行くように仰せだったのでかならず出づべくのたまへりければ、ひどく気おくれがしてつらいのだが いとつつましく苦しけれど、「弁は」身支度をして車に乗ったうち化粧じつくろひて乗りぬ。野山のけしきを見るにつけても、いにしへよりの古事ども思ひ出でられて、ずっと物思いに沈んだまま日暮れに到着したながめ暮らしてなむ来着きける。ひどく閑散として人の出入りもない所なので いとつれづれに人目も見えぬ所なれば、「車を門内に」引き入れて、「（弁）これこれの者が参りました」と、しるべの男して言はせたれば、初瀬の供にありし若人、「弁を」出で来ておろす。むさくるしい所で あやしき所終日物思いながら日を送っている時に をながめ暮らし明かすに、昔語りもしつべき人の来たれば、「浮舟は」うれしくて呼び入れたまひて、「お部屋に」親とお思い申した方のお身近く仕えた人と思うので親と聞こえける人の御あたりの人と思ふに、

一二 おなつかしい方と、私一人の胸の内に拝しましてからのちは。八の宮の遺児と思ってなつかしむ。

一三 匂宮邸。二条の院の中の君のもと。

一四 すばらしいお方と、お姿を拝してからはお思い申していたお方のことなので。二条の院滞在中に、薫を見て以来、思っていた趣。

一五 にわかにこんなふうに計画を廻らしていらっしゃろうとは、思いも寄らない。「かく」は、次に述べるような薫来訪のことをさす。

一六 宇治からお使いが参りました。弁の尼のもとに宇治から使いが来た体を装う。

一七 多分薫のお越しだろうと思うけれども、（言うままに）弁が門をあけさせると。

一八 車を門内に引き入れる音がする。馬ではなく、車で来るのは、身分の高い人である。

一九 おや、と思っていると。浮舟方の女房の不審の思い。

二〇 「尼君にお目にかかりたい」と言って、宇治に近い（薫の）御領地の支配人の名を言わせなさったので。かねて、弁の尼と交渉のあること、宿木二六一頁にも見える。

二一 えも言えずよい香りが匂ってくるので、さては薫君のご来訪だったのかと。

その夜、薫来訪

親しみが感じられるのだろう（弁尼）一二 むつましきなるべし。「あはれに、人知れず見たてまつりしのちよりは、お思い出し申し上げぬ時はないのですが思ひ出できこえぬをりなけれど、この世をこの尼姿のとおりすっかり見捨てました身で世の中かばかり思ひたまへ捨てたる身にて、一三 かの宮にだに参上いたしませんのに参りはべらぬを、この大将殿の、あ思議なほど熱心にお頼みになりましたので不やしきまでのたまはせしかば、心をはげまして出てまいりました思うたまへおこしてなむ」と聞こゆ。浮舟君も乳母も、一四 めでたしと見おききこえてし人の御さまなれば、忘れて忘れずにお申し入れ下さるというのもありがたいけれどぬさまにのたまふらむもあはれなれど、一五 にはかにかくおぼしたばかるらむとは思ひも寄らず。

宵を少し過ぎた頃に
宵うち過ぐるほどに、一六 宇治より人参れり、とて、門忍びやかにうちたたく。門をほとほとと叩く 一七 さにやあらむ、と思へど、弁あけさせたれば、車をぞ引き入るなる。一八 あやし、一九 と思ふに、「尼君に対面賜はらむ」二〇 とて、この近き御庄の預りの名のりをせさせたまへれば、戸口にみざり出でたり。誰もが胸をときめかすに違いないご様 [弁は] にじり出た 雨すこしうちそそくに、風はいと冷やかに吹き入りて、二一 言ひ知らず薫り来れば、かうなりけりと、誰も誰も心ときめきしぬべき子がすばらしいので 何の支度もなくむさくるしい上に 御けはひをかしければ、用意もなくあやしきに、まだ思ひあへぬほ まだ予想もしていなかった

一 わざわざのお出ましということですのに、このままお帰し申されるわけにいきましょうか。「立ちながら」は、原義は、立ったまま。人を訪ねて早々に辞去する場合に使う。
二 あちらのお邸。常陸邸の母君のもと。
三 近い所ですから。三条の隠れ家と本邸、近い様子。
四 小娘のように、なんでお母様に相談なさることがありましょう。
五 (それに薫は)不思議なほど気長で、お考え深くていらっしゃるお方ですから。
六 夜廻りをして。
七 屋敷の東南の隅の壊れているのが大層あぶない。塀か垣が壊れている趣。
八 ここにあるお車は、門内に入れるのなら早く引き入れて、御門を戸締りせよ。「人の御車」で一語。
九 こういうお客のお供ときたら、気の利かないものだ。他人の家だと思って、という気持。
一〇 「苦しくも降り来る雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに」(『万葉集』巻三、長忌寸奥麻呂)。「苦しくも降り来る雨か」の意を利かせて口ずさんだもの。

どなれば、心騒ぎて、「いかなることにかあらむ」と言ひあへり。(女房)これはどういうことなのでしょう

(薫)気の張らない所で「心やすき所にて、月ごろの思ひあまることも聞こえさせむとてなむ」と言はせたまへり。(弁を通じて)いかに聞こゆべきことにか、と君は苦しげに思ひてゐたまへれば、乳母見苦しがりて、「しかおはしましたらむを、立ちながらやは帰したてまつりたまはむ。かの殿にこそ、かくなむ、と忍びて聞こえめ。近きほどなれば」と言ふ。(弁)「うひうひしく、などてかさはあらむ。若き御どもの聞こえたまはむは、ふとしもしみつくべくもあらぬを、あやしきまで心のどかに、もの深うおはする君なれば、よも人のゆるしなくてうちとけたまはじ」など言ふほど、雨やや降り来れば、空はいと暗し。宿直人のあやしき声したる、夜行うちして、「家の辰巳の隅のくづれいとあやふし。この、人の御車入るべくは、引き入れて御門さしてよ。かかる人の御供人こそ、心はうたてあれ」など言ひへるも、むくむくしく聞きならはぬここちしたまふ。(薫)「佐野のわたりに家もあらなくに」な

(女房)これはどういうことなのでしょう
もう幾月も胸に抑えきれずにきた思いも聞いて頂こうと存じまして
何とお返事申し上げたらよいのか
浮舟
困ったと
見かねて
とそっと申し上げましょう
お若い方同士がお話しなさったりするのは
何も
すぐ深い仲になられるわけでもありませんし
よもやお相手がご承知ないのに馴れ馴れしくはなさいますまい
雨が少しひどくなるので
(宿直人)
夜番の聞き馴れぬ訛りの者が
皆して言うのも
(薫は)気味悪く別世界のものの声のようにお聞きになる

一一 田舎風な縁先。この場面、源氏物語絵巻に図画されている。（図録五参照）

一二 戸口をとざしている葎が繁ってでもいるのか、あまりにも長い間待たされて、軒の雨だれに濡れることだ。催馬楽、律「東屋」、「東屋の　真屋のあまりの　その　雨そそき　われ立ち濡れぬ　殿戸ひらかせ　かすがひも　とざしもあらばこそ　その殿戸　われ鎖さめ　おしひらいて来ませ　われや人妻」を踏まえる。巻名、この歌の言葉による。

一三 無骨な東国の田舎者もどうしたことかと思うに違いない。宿直人たちのこと。

一四 引き違えの板戸。貴人の部屋には用いぬもの。

一五 こんな隔ての戸を作った飛騨の工も恨めしいことです。「飛騨の工」は、飛騨の国（岐阜県北部）の工匠。飛騨の国は古来毎年交替に工匠を都に上げ、公役に奉仕した。『今昔物語集』巻二十四第五に、東西南北四面の戸、入ろうとすると閉じる小堂を造って、絵師百済川成を困惑させた平安初期の伝説的名匠、飛騨の工の話が見える。この話を踏まえたものか。

一六 どうなさったのであろうか。乳母などが気を利かせて、開けたのでもあろう。

一七 あの、大君の身代りにというかねての望みもおっしゃらず。

一八 思いがけぬちょっとした隙間からあなたを見て以来。宇治での垣間見のこと（宿木二五八頁以下参照）。

薫、浮舟に逢う

ど口ずさびて、（一二）里びたる簀子の端つ方にゐたまへり。

（薫）（一二）さしとむるむぐらやしげき東屋の
あまりほどふる雨そそきかな

［雨の雫を］とうち払ひたまへる追風、尋常でないほど薫り高く いとかたはなるまで、（一三）東の里人もおどろきぬべし。

あれこれ口実を考えてもお断り申し上げるすべもないので とざまかうざまに聞こえのがれむかたなければ、南の廂に御座ひ席を用意して［薫を］きつくろひて入れたてまつる。［浮舟が］気軽にも心やすくしも対面したまはぬを、こ女房たちが れかれ押し出でたり。（一四）遣戸といふもの鎖して、錠をして いささかあけたれば、

「（一五）飛騨の工もうらめしき隔てかな。こんな板戸のかかるものの外には、前には まだ坐ったことがありません お怨みなさって らはず」と愁へたまひて、（一六）いかがしたまひけむ、［母屋の中に］入りたまひぬ。（一七）かの人形の願ひものたまはで、ただ、「（薫）（一八）おぼえなきもののはさまより 抑えようもなく恋しいのです 前世の約束があるのでしょうか 不思議なほど慕 見しより、すずろに恋しきこと、さるべきにやあらむ、あやしきまわしくお思い申しています でぞ思ひきこゆる」とぞかたらひたまふべき。やさしくお話しなさるご様子 女の風情は 大層かわいら 人のさま、いとらうしくおっとりしているので たげにおほどきたれば、期待にも背かず とてもいとしくお思いになった 見劣りもせず、いとあはれとおぼしけり。

翌朝、薫、浮舟を伴って、宇治に行く

一（秋の長夜とはいえ）すぐに夜も明けてしまった気がするのに。「長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」（『古今集』巻十三恋三、凡河内躬恒。『古今六帖』五、ふせり）

二 暁の鶏の声に別れを惜しむのが、歌にもよく詠まれた情景。ここは、そんな鶏の声もせず。

三（三条の）大路も程近い小家なので。

四 こんな朝方に見ると、品物を頭に載せた物売りたちの、鬼のように見える姿なのだ。薫の思い。物を載せた形が角の生えたように見えるので、こう思うか。

五 このような蓬の宿の仮寝にご経験のないご気分も、おもしろくお思いになるのでもあった。「蓬」は、荒れた家に生い茂るものとされた。「まろ寝」は、帯も解かず仮寝すること。旅寝。

六 役目を終えて帰る気配。夜廻りの責任者らしい。

七 ここは南廂の隅にある両開きの戸。

八 この月は九月でもあったのに、いやなこと。結婚には不吉だ、という意。九月は季の果てだからか（三巻玉鬘二九〇頁注一〇参照）。

九 九月といっても、明日が節分と聞いております。「節分」は、季節の変る前日。ここは、明日立冬の前日ゆえ、多少のことはこだわるに及ぶまい、の意か。

一ほどもなう明けぬるここちするに、鶏などは鳴かで、大路近き所に、おほどれたる声して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うち群れて行くなどぞ聞こゆる。四かやうの朝ぼらけに見れば、ものいただきたる者の、鬼のやうなるぞかし、と聞きたまふも、五かかる蓬のまろ寝にならひたまはぬここちもかしくもありけり。宿直人六も門あけて出づる音す。おのおの入りて臥しなどするを聞きたまひて、人召して、車妻戸に寄せさせたまふ。かき抱きて乗せたまひつ。誰も誰も、あやしう、あへなきことを思ひ騒ぎて、「九月にもありけるを、心憂のわざや、いかにしつることぞ」と嘆けば、尼君も、いといとほしく、思ひのほかなることどもなれど、「おのづからおぼすやうあらむ。うしろめたうな思ひたまひそ。長月は明日こそ節分と聞きしか」と言ひなぐさむ。今日は十三日なりけり。尼君、「こたみはえ参らじ。宮の上聞こしめさむこともあるに、忍びて行き帰りはべらむも、いとうたてなむ」と聞こゆれど、まだきこのこ

問延びのした声で　何と言っているのか聞いたこともない名のりをあげて　一団になって　お聞きになるにつけ　〔薫は〕夜番の男たちも各自引き取って寝たりするのをお聞き届けに　〔浮舟を〕抱き上げて　（乳母ら）　とんでもない　あまりにも急なこととあわてて　これはどうしたことなのでしょう　弁の尼　いろいろと不本意な事の成行きだけれども　とても気の毒で　（弁）いずれ何かお考え　ご心配なこととお思いなさいますな　言いなだめる　今日はようお供いたしません　中の君　お聞きあそばす手前もありますのに　こっそり行き　早々にこのことを　帰りいたしますのも　まことに不都合なことで

一〇 あちら（宇治）も案内する人がいなくては、頼りない所だから。

一一（弁の尼は）浮舟にいつも付き添っている侍従と一緒に乗った。「侍従」は、女房の呼び名。

一二 尼君のお供について来た女の童。

一三（薫は）牛なども掛け替えられる用意をしていらっしゃった。宇治までは、遠路だからである。

宇治への道中、人々の思い

一四 賀茂河原を過ぎ、法性寺のあたりをいらっしゃる頃に。「法性寺」は、賀茂川の東、九条河原に臨む藤原忠平創建の寺。今の東福寺の地がこれに当る。ここから大和大路を南下し、宇治に到る。（図録一参照）

一五 ほんのちらりと（薫のお姿を）拝見して。二条の院に逗留中のことであろう。

一六 世間に憚る気持も起らない。

一七 大きな石のある道はつらいものだから。車が揺れるのである。

一八 薄絹の細長を、車中の前後の隔てに垂れてあるので。「細長」は、貴婦人の表着。袿を付けず、身頃の裾先の分れた仕立て。ここは、前の席の薫と浮舟、後ろの弁と侍従の間を仕切るために掛け垂らしたもの。普通は几帳の帷を掛ける、という。

（中君の）お耳に入れるというのも　何となく気がひける思いがなさって　（薫）その点はあとからお詫び申されてもよろしいでしょう

とを聞かせたてまつらむも、心はづかしくおぼえたまひて、「それはのちにも罪さり申したまひてむ。一〇かしこもしるべなくては、たづきなき所を」とせめてのたまふ。（薫）誰か一人お供に参るように　無理にお勧めになる「人一人やはべるべき」とのたまへば、一一この君に添ひたる侍従と乗りぬ。乳母、一二尼君の供なりし童な

後に残されて　もう何が何やら分らぬ気持でぼうとしていた

どもおくれて、いとあやしきここちしてゐたり。

近い所なのか

近きほどにや、と思へば、宇治へおはするなりけり。一三牛などひき替ふべき心まうけしたまへりけり。河原過ぎ一四法性寺のわたりおはしますに、夜は明け果てぬ。若き侍従人は、一五いとほのかに見たてまつりて、

すばらしいお方と　無性にお慕い申しているので

めできこえて、すずろに恋ひたてまつるに、一六世の中のつつましさもおぼえず。浮舟君ぞいとあさましきに、全くあまりのことに　何も分らなくなってうつ伏せに臥せっていられるのを（薫）ものもおぼえでうつぶし臥した

[浮舟を]

るを、「一七石高きわたりは苦しきものを」とて、抱きたまへり。一八羅の細長を、車のなかに引き隔てたれば、はなやかにさし出でたる朝日影に、尼君はいとはしたなくおぼゆるにつけて、故姫君の御供にこそ、かやうにても見たてまつりつべかりしか、あり経れば思ひかけ

ぱっとあたりを照らし出した朝日の光に透　とても自分の尼姿がきまり悪く思われるにつけても　亡き大君のお供をしてこ　生き永らえていると

このようにご一緒のところも拝見したかったのに

一 ご新婚早々なのに、異形の尼姿でお供しているのでさえ縁起でもないのに、どうしてこうめそめそしているのか。侍従の思い。

二 （侍従は委しい事情を知らないので）単純に考えているのだった。草子地。

三 目の前の人（浮舟）は、いとしく思わぬわけではないが。

四 秋の空のたたずまいを見るにつけても、昔の恋しさが募ってきて。大君存生中、宇治へ通ったことを思い出す。

五 胸は悲しみに昏れて、あたりも霧に閉ざされた思いがなさる。宇治は霧の深い所、次第に宇治に近づく趣。

六 （薫が）物思いに沈んで寄りかかっていらっしゃる、そのお袖が重なったまま長々と車の外に出ていたのが。直衣と袿の袖の重なったのが、下簾の端から外に垂れているさま。

七 宇治川の川霧である。

八 下のお召し物（袿）が紅なのに、表着の御直衣の花色（薄い藍色）が、ひどく色変りして見えるのを。紅と薄藍の重なったのが、二藍（紫に近い色）に見える。

九 急坂をおりる高みの所で見つけて。「落し懸け」は、急におりる坂道の意であろう。

一〇 亡き大君の形見の人と思うにつけて、朝露がしとどに置くように、涙に濡れる私の袖なのだ。

薫の悲しみ

思いもかけぬ経験をすることよ　こらえようとはするのだがつい顔をゆがめて泣くのを

ぬことをも見るかな、と悲しうおぼえて、つつむとすれどうちひそみつつ泣くを、侍従はいと憎く、一ものはじめにかたち異にて乗り添ひたるをだに思ふに、なぞかくいやめなる、と憎くをこにも思ふ。

憎らしく　愚かしいとも思う　何でもないことにでもすぐ泣くものなのだと　年寄りは

老いたる者は、すずろに涙もろにあるものぞと、二おろそかにうち思ふなりけり。

薫

君も、三見る人は憎からねど、四空のけしきにつけても、来し方の恋しさまさりて、五山深く入るままにも、霧立ちわたるここちしたまふ。六うちながめて寄りゐたまへる、袖の重なりながら長やかに出でたりけるが、七川霧に濡れて、八御衣の紅なるに、御直衣の花のおどろおどろしう移りたるを、九おとしかけの高き所に見つけて、引き入れたまふ。

（薫）一〇

形見ぞと見るにつけては朝露の
　　ところせきまで濡るる袖かな

ついうっかり独り言のようにおっしゃるのを耳にして

と、心にもあらずひとりごちたまふを聞きて、いとどしぼるばかり、

一一 おかしな、みっともない有様だこと、うれしいはずの道中なのに、ひどく厄介な事情が裏にあるような気がする。「世」は、薫と浮舟の仲。侍従の心中の思いから、自然に地の文に移る体。
一二 ご自分もそっと鼻をかんで。薫も弁の尼につられて泣く様子。
一三 大層ふさいでいるのですね。
一四 程よい具合に（扇で顔を）さし隠して、恥ずかしそうに外を眺めている目もとなどは。
一五（亡き大君は）大層大様でいらしたものの、思慮深さは大したものでいらっしゃった。
一六 どうにもやりばのない悲しさは、虚しい大空にも満ちあふれそうだ。前の「心もとなかめる」とともに、薫の心情に密着した書き方。「わが恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず。『古今六帖』四、恋）
一七 ああ、亡き大君の魂は、ここに留まってご覧になっているだろうか、誰のせいで、このようにむやみにあちこちするものでもないのに。あなたのせいで、身代りの人を求めてさまようのだ、の意。「……あらなくに」は、歌語。
一八 少し気を利かせて。浮舟を休息させるため。

宇治に着く

尼君の袖も泣きぬらすを、若き人（侍従）、あやしう見苦しき世かな、心ゆく道に、いとむつかしきこと添ひたるここちす。（弁の）忍びがたげなる鼻すすりを聞きたまひて、われも忍びやかにうちかみて、いかが思ふ（浮舟が）らむといとほしければ、「あまたの年ごろ、この道を行きかふたび重なるを思ふに、そこはかとなくものあはれなるかな。すこし起き上がりて、この山の景色も見たまへ。いと埋れたりや」と、しひてか抱き起しなさるので き起こしたまへば、をかしきほどにさし隠して、つつましげに見出だしたるまみなどは、いとよく思ひ出でらるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。いといたう児めいたるものから、用意の浅からずものしたまひしはや、と、なほ行く方なき悲しさは、むなしき空にも満ちぬべかめり。

（宇治に）おはし着きて、あはれ亡き魂や宿りて見たまふらむ、誰によりて、かくすずろにまどひありくものにもあらなくに、と思ひ続けたまひて、（車を）おりてはすこし心しらひて立ち去りたまへり。女は、（浮舟）母君がどんな

（亡き大君に）とてもよく似ているけれども（浮舟が）素直であまりにもおっとりし過ぎているところが頼りなさそうな感じだ

（薫は）

この山道を何度も何度も行き来したことを思うと何とはなしにしみじみと胸が迫るのです

（あなたも）

（浮舟を）無理に

今まで長年

一（薫が）うっとりとするような男ぶりで、心を打つことをしみじみとやさしく話しかけて下さるので。
二（車を）渡殿につけるのを。
三 わざわざそんな遠慮をしないでもよい住居なのに、心遣いが過ぎる。ほんのしばらくの仮住居だから、浮舟を女主人として扱う必要はない、といった気持。
四 ご領地の荘園から、またいつものように、人々が騒々しいほど大勢参上する。薫身辺の雑事に奉仕するため。
五 女君のお食事。「台」は、食物を載せるお膳。
六 道中は、草木が繁ってうっとうしかったが。
七（浮舟は）今までの晴れぬ思いも癒されるような気持がするけれども。三条の隠れ家での鬱々とした日日と比べての思い。
八 薫のこと。一家の主人といった語感がある。
九 まだ出来上がらない仏前のお飾りなどを、先日目にしていましたので。宇治に来た理由を、過日完成を見に来た御堂のことにかこつける（三三〇頁）。
一〇（そこへ）物忌だったことを思い出しましたので。物忌中は、他出や人との接見を避けて籠らないと、災厄を受けるとされた。病中はなおさらである。
一一 物忌は、二日間のことが多い。

薫、京に手紙

とても悲しく気になるが
ひたまはむことなど、いと嘆かしけれど、艶なるさまに、心深くあ
気を取り直して　［車から］
はれにかたらひたまふに、思ひなぐさめておりぬ。尼君は、ことさ
ここには下りないで
らにおりで、廊にぞ寄するを、わざと思ふべき住ひにもあらぬを、
［薫は］
用意こそあまりなれ、と見たまふ。御庄より、例の、人々騒がしき
まで参り集まる。女の御台は、尼君の方より参る。道はしげかりつ
このお邸の有様は広々として晴れやかだ　宇治川　調進する
れど、このありさまはいとはればれし。川のけしきも山の色も、も
く取り入れたお邸の造りを眺めやって
てはやしたる造りざまを見出だして、日ごろのいぶせさなぐさみぬ
一体これから自分をどうなさるお積りかと　不安でいぶかしく思われる
るここちすれど、いかにもてないたまはむとするにかと、浮きてあ
やしうおぼゆ。

殿は、京に御文書きたまふ。

今日は日柄もますます日で　急いでこちらに来ていますが　気分が悪くなりまして
なりあはぬ仏の御飾りなど見たまへおきて、今日よろしき日なり
したので
ければ、急ぎものしべりて、乱りごちのなやましきに、物忌
謹慎することに
なりけるを思ひたまへ出でてなむ、今日明日ここにてつつしみは
いたします
べるべき。

一二 母女三の宮にも正室の女二の宮にも、ご挨拶申し上げなさる。

一三 うちくつろいだご様子が、また一段とすばらしい感じで、（薫が浮舟の部屋に）入っていらしたのも。

薫、くつろいで浮舟と日を暮す

一四 色さまざまに取り合せよくと考えて仕立て何枚も重ねて着ているが。母君の心入れのさま。

一五 亡き人（大君）の、すっかりお身に馴染んだお着物を召していらしたお姿が。「萎えばむ」は、着古して糊気が落ち、柔らかくなったさま。

一六（目の前の浮舟の）髪の裾の美しさなどは。切り揃えられた髪の裾の扇のように拡がるさま。大君は「髪、さはらかなるほどに……、末すこし細りて」（六巻椎本三五一頁）とあった。

一七 その一方では。三行先の「……と思ふも」に続く。

一八 この人をどのような形で扱ってやったらいいだろう。以下、浮舟の処遇についての薫の思案。

一九 ひとかどの扱いで、三条の宮に迎えて妻とするのも。例えば、中の君のように、対の御方といった地位が考えられよう。

二〇 世間への聞えも具合悪かろう。女二の宮に憚る気持。

二一 そうかといって、大勢いる女房と同列で、並々の宮仕えをさせるのでは、本意に違おう。

二二 逢わないとさびしいことだろうと。宇治になかなか通えないことを、今から思う。

など、母宮にも姫宮にも聞こえたまふ。

一三 うちとけたる御ありさま、今すこしをかしくて入りおはしたるも

［浮舟は］はづかしけれど、一四 もて隠すべくもあらでゐたまへり。女の御装束など、色々によくと思ひてし重ねたれど、すこし田舎びたることもう

田舎じみたところもどこかしら感じられて

ちまじりてぞ、一五 昔のいと萎えばみたりし御姿の、あてになまめかし

上品で優雅な風情のあったことがしきりに思い出されてならないが

かりしのみ思ひ出でられて、一六 髪のすそのをかしげさなどは、こまどまとあてなり。宮の御髪のいみじくめでたきにも劣るまじかりけり、

一筋一筋が艶々と気品がある　女二の宮　すばらしくご立派なのにもひけをとることはないだろう

［薫は］と見たまふ。一七 かつは、この人をいかにもてなしてあらせむとすらむ、

今すぐ

ただ今、一九 ものものしげにてかの宮に迎へすゑむも、二〇 音聞き便なかるべし、二一 さりとてこれかれある列にて、おほぞうにまじらはせむは本意なからむ、しばしここに隠して（宇治）あらむ、と思ふも、二二 見ずはさうざうしかるべく、あはれにおぼえたまへば、おろかならずかたらひ暮

いとしく思われなさるので　一方ならずこまやかに話し合って日を暮される

らしたまふ。故宮の御こともたまひ出でて、昔物語をかしうこま

［薫は］亡き八の宮のこともお話に出されて　昔の思い出を興深くこまごまと話して冗談もおっしゃってみるけれども　［浮舟は］ひどく気おくれしたふうで

やかに言ひたはぶれたまへど、ただいとつつましげにて、ひたみち

一（薫は）張合いなくお思いになる。いつも心を打つ応対をした大君と違うところ。

二 しかしまた、間違っても、こんなふうに頼りないのは、至極結構だ、教え教えしてでも連れ添えよう。気おくれして引っ込み思案なのは、自分が教育して直せる、と思う。

三 そんな身代りは、何にもなりはしない。

四 前から、このお邸にあった琴や箏の琴を持って来させなさって。「琴」は、七絃。「箏」は、十三絃。いずれも中国伝来の楽器。後文によれば、この中に和琴（六絃）もあった。

薫、琴を調べ、浮舟と語らう

五 九月十三夜の月である。

六 亡き八の宮の奏でなさる琴の音は、仰々しくはなくて、本当に風情があって胸にしみるばかりにお弾きになったものだ。八の宮が琴の名手であること、六巻橋姫二七三頁、椎本三〇九頁に、薫もその演奏を聞いたこと、橋姫二九二頁に見える。

七 昔、どなた（八の宮や大君）もがご在世中に、あなた（浮舟）も、ここで大きくなられたのだったら。

八 どうして、あんな田舎に何年もお暮しだったのですか。

九 骨に白い紙を張った、いわゆる「かはぼり」の扇である。夏扇。（二巻紅葉賀三四頁注一〇参照）

（でいるだけなのを）に恥ぢたるを、一さうざうしうおぼす。二あやまりても、かう心もとなきはいとよし、教へつつも見てむ、田舎びたるされ心もてつけて、（田舎くさい風流気取りを身につけていて）品々しからず、（品がなく）はやりかならましかばしも、三形代不用ならまし、と（出しゃばりで落着きがなかったら）思ひなほしたまふ。

四 ここにありける琴、箏の琴召し出でて、かかることはた、ましてえせじかしと、くちをしければ、（手も出せぬだろうと残念なので）ひとり調べて、宮亡せたまひての（こういった楽器に手を触れなかったことだと）ち、ここにてかかるものに、いと久しう手触れざりつかしと、めづ（久しぶりのことに我ながら興を催して）らしくわれながらおぼえて、いとなつかしくまさぐりつつながめたられると（とても大事そうにすさび弾きしながら思い出に耽っていて）まふに、五月さし出でぬ。六宮の御琴の音のおどろおどろしくはあらで、いとをかしくあはれに弾きたまひしはや、とおぼし出でて、「（薫）昔誰も誰もおはせし世に、ここに生ひ出でたまへらましかば、今すこし（もっと昔をしのぶ気持は深いことでしょうに）あはれはまさりなまし。親王の御ありさまは、よその人だに、あは（八の宮のお人柄は他人の私でさえしみじみと慕わしく思い出されなさるほどです）れに恋しくこそ思ひ出でられたまへ。七などて、さる所には年ごろ経たまひしぞ」とのたまへば、（浮舟は）八いとはづかしくて、九白き扇をまさぐり

一〇 抜けるほど白くて、額髪の間から見えるなまめかしい頬のあたりなど。

一一 次の言葉により、和琴と分る。わが国古来の琴。

一二 「東琴」すなわち和琴のこと。日本武尊の「吾嬬者耶」の三歎が「東」の国号の由来とされる（『日本書紀』）ところから言う。浮舟が「東」育ちなので、次に「さりとも」云々と言う。

一三 その大和言葉も。和歌のこと。和琴をまた大和琴とも言うのに掛けた言葉のあや。

一四 そうひどく見苦しく気の利かぬ者とも思えない。浮舟の即座の応酬をよしとする薫の心中。

一五 「班女が閨の中の秋の扇の色　楚王の台の上の夜の琴の声」（『和漢朗詠集』上冬、雪、尊敬）。第二句は、雪の静かに降る音は、楚の襄王が蘭台のほとりで夜弾じた琴の音を思わせる、の意。夜、宇治川畔の宮邸で琴を弾くことから連想して、この句を誦した。

一六 実は、扇の色も気にしなければならない閨の故事を（侍従は）知らないので。朗詠の第一句は、漢の成帝の宮女班女（班婕妤）が帝寵を失って、夏に珍重された白絹の扇が、秋になって捨てられるのに喩えて嘆いた故事による（『文選』巻二十七、「怨歌行」）。今、浮舟は「白き扇をまさぐりつつ」あるので、不吉な符合に気づくべきなのである。以下、草子地。

一七 言うにも事欠いて、おかしな詩句を口にしたものだ。さすがに薫は後悔する。

薫と弁の尼の贈答

一〇 抜けるほど白くて、額髪の間から見えるなまめかしい頬のあたりなど。

一一 次の言葉により、和琴と分る。わが国古来の琴。

一二 「東琴」すなわち和琴のこと。日本武尊の「吾嬬者耶」の三歎が「東」の国号の由来とされる（『日本書紀』）ところから言う。浮舟が「東」育ちなので、次に「さりとも」云々と言う。

一三 その大和言葉も。和歌のこと。和琴をまた大和琴とも言うのに掛けた言葉のあや。

一四 そうひどく見苦しく気の利かぬ者とも思えない。浮舟の即座の応酬をよしとする薫の心中。

一五 「班女が閨の中の秋の扇の色　楚王の台の上の夜の琴の声」（『和漢朗詠集』上冬、雪、尊敬）。第二句は、雪の静かに降る音は、楚の襄王が蘭台のほとりで夜弾じた琴の音を思わせる、の意。夜、宇治川畔の宮邸で琴を弾くことから連想して、この句を誦した。

一六 実は、扇の色も気にしなければならない閨の故事を（侍従は）知らないので。朗詠の第一句は、漢の成帝の宮女班女（班婕妤）が帝寵を失って、夏に珍重された白絹の扇が、秋になって捨てられるのに喩えて嘆いた故事による（『文選』巻二十七、「怨歌行」）。今、浮舟は「白き扇をまさぐりつつ」あるので、不吉な符合に気づくべきなのである。以下、草子地。

一七 言うにも事欠いて、おかしな詩句を口にしたものだ。さすがに薫は後悔する。

て、ゆゑなからず取りまぜて、敷きたる紙に、[一]ふつつかに書きたるもの、隈なき月にふと見ゆれば、目とどめたまふほどに、[二]くだもの急ぎにぞ見えける。

（たしなみの程を見せて　明るい月光にふっと見えたので　目をおとめになるものだから）

（弁）[三]やどり木は色かはりぬる秋なれど
　　むかしおぼえて澄める月かな

と古[四]めかしく書きたるを、[五]はづかしくもあはれにもおぼされて、

（薫）[六]里の名もむかしながらに見し人の
　　おもがはりせるねやの月かげ

わざと返[七]りことはなくてのたまふ、[八]侍従なむ伝へけるとぞ。

一　筆太に書いてあるのが。老人らしく太い字。
二　まるで、くだものを早く欲しがっているように見えた。たわむれに取りなした草子地。
三　宿木は、すっかり紅葉して色が変ってしまった秋ではございますが、昔に変らず月は澄みわたっています。「宿木」は、折り敷いてある蔦に寄せていう。上の句、大君から浮舟に変ったことを暗に言い、月を薫に喩える。「澄める」に「住める」の意を掛ける。去年秋の、「宿木」を詠み込んだ薫との贈答を踏まえたもの（宿木二三四頁参照）。
四　年寄りらしい詠みぶりなのを。「むかしおぼえて」などというところ。
五　きまり悪くも、もの悲しくもお思いになって。浮舟のこと、大君のことを思ってである。
六　宇治という里の名も昔のままで、世を憂しと嘆く私も昔のままだが、昔の人が面変りしたかと思われる（新しい女とともに過す）閨の月影です。
七　ことさらに返歌というわけではなくおっしゃるのを。独詠めいて言うのであろう。弁の尼の歌も、わざとならぬ体で贈られてきたからである。
八　お側にいた侍従が伝えたとか。語り手の存在を示す草子地。

付

録

飛香舎藤花の宴

西宮記

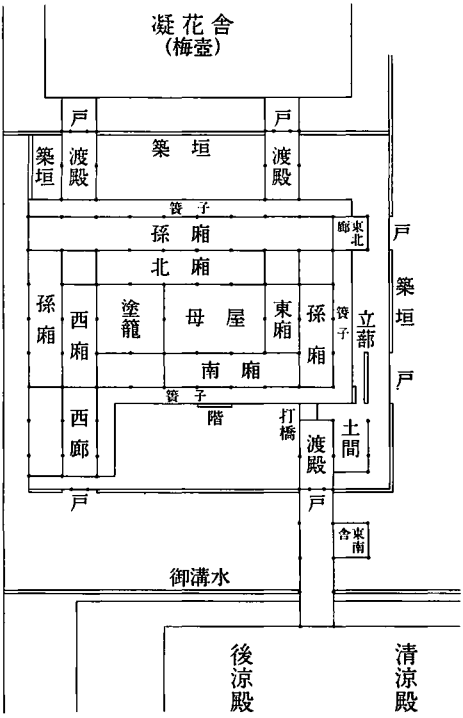
天暦三、四、十二、於飛香舎有藤花宴。以殿上御倚子立南廂。有毯代　南廂東一二三間巻簾、垂母屋。前立四尺屏風三帖。同廂西中戸東面東一間障子西面立五尺屏風二帖。敷信濃広莚、中敷毯代、立御椅子。南簀子敷同莚、同簀子中間以東敷畳、公卿座。当庇中戸南立五尺障子、其西在御酒具、赤漆火炉一口。有黒漆台、同机二前。其上在満止瓶、令昨金銅杓件鳥入御酒。銀御銚子一口、加土器台盤、炭取。当公卿南前庭、敷紫端畳四枚、其南敷二枚、殿上人座。仰掃部寮令敷軒廊東小庭畳二行、西面北上、楽所座。未剋、御出。召右大臣。次諸卿参上。次侍臣着座。四位五位北六位南供御膳具。惟時朝臣率五位六位自南庭渡西、舁置物御机二基立御座西、橡木作、在木蘭地綺敷物臥組等、御折敷四枚立御机上、浅香折敷沈裏、以金閉之、朽葉色唐羅、花文綾敷物、在心葉藤色閉組等、件組折敷一、各加象牙台、表紫檀、裏蘇芳、在銀筋　供膳折敷二枚、以橡木作、無心葉組等　御肴四種、生物、干物、窪坏、以銀作土器、以黄土塗之　供了、陪膳退下。給臣下衝重。次供御酒。銀瓶、維時朝臣供之、伊尹取銚子　給臣下。義方朝臣給　二献、餛飩、給臣下。大臣奏聞、召楽所別当中納言源朝臣、令召楽人。別当仰蔵人召之。楽所参入、奏調子。有哥事。立文台南庭　立置物御机、置御硯紙、給臣下、献題。維時　大臣奏、准延長例、地下人一両献哥。召庭燎。月光明也　献哥。伊尹取文台、右兵衛佐清正講之。左少将朝成、蔵人頭雅信朝臣、秉燭。地下献哥者、

源循、藤原兼家、灌木有時、時方等云々。講レ哥。大臣取二御製一。召二公卿侍臣堪レ哥者一、奏二糸竹一。大臣、納言、渡レ西。大臣取二御杖一。源朝臣、取二御琴譜一、進二御前一、奏云、延喜御時御琴譜云々。源朝臣等称二物名一、授二頭蔵人一、置二御机一。琴出レ袋弾御。兼家被レ聴二昇殿一。大臣共拝　賜レ禄。納言女装、源氏小袿袴、四位白細長大臣給二御衣一襲、又以二女装束一給レ之

右は、『花鳥余情』に指摘する『西宮記』村上天皇の天暦三年四月十二日、飛香舎（藤壺）における藤花の宴の記事である。時の右大臣は九条師輔。村上天皇は、親王当時、朱雀天皇の天慶三年四月十九日、飛香舎において、当時権中納言左衛門督であった師輔の長女安子を娶った。天暦三年当時女御であった安子（立后は天徳二年十月二十七日）は、藤壺に在ったものと思われる。文中、「楽所別当中納言源朝臣」とあるのは源高明である。

なお、物語本文の「琴の譜二巻」云々の箇所（二五一頁）に『花鳥余情』は「天暦三年、右大臣捧下先皇賜二勤子内親王一箏譜三巻上。左衛門督執二赤笛一管。元貞保親王笛也左兵衛督将二螺箏一面。元貞保親王物、有二奇音一奏レ名而献レ之」と注するが、何に拠ったものか、明らかでない。勤子内親王は醍醐天皇第四皇女、師輔の室であった（天慶元年十一月五日薨）。『古今著聞集』巻六、管絃歌舞に「同（天暦）三年四月十二日、飛香舎にて藤花の宴ありけり。右大臣、左衛門督、左兵衛督候ひ給ふ。和歌糸竹の興などはてて、女御、御おくりものありけり。先皇の勤子内親王に給ひける箏譜三巻、貞保親王のもちゐたりける笛、螺鈿の箏などをぞ奉り給ひける。件の箏、奇香あるよし、吏部王、記し給ひたるとかや。いかなるにほひにてか侍りけむ。ゆかしき事也」とある。『花鳥余情』割注「奇音」は「奇香」の誤写とする。

なおまた、物語本文の「粉熟」の箇所（二四四頁）に『花鳥余情』の注する「天暦三年、沈香折敷四枚、紫檀台、以二土器様銀器一供二御肴粉熟一。有二赤漆火炉、銀銚子一」の文も、拠るところ明らかでない。



飛香舎（藤壺）

藤壺は、母屋・塗籠の四周に廂をめぐらし、さらに東・西・北に孫廂を設ける複雑な構造である。北は東西二本の渡殿によって凝花舎(梅壺)に通じ、南は東南の渡殿によって清涼殿・後涼殿に通ずる。宿木251頁に、楽所を「後涼殿の東」に設けたとあるのは不審であるが、『西宮記』には「軒廊東小庭」に設けたとある(349頁参照)。これは位置的に見て、東南の渡殿の東に土間とある箇所と考えるほかない。この渡殿は、古くは軒廊(こんろう)であったものと考えられる。軒廊とは、屋根のあるたたき土間の通路である。本文の「こうらうてん」は、もと「こんらう」とあったのが誤写されたか、あるいは意改された結果であろう。

三日夜の儀

花鳥余情

吏部王記、天暦二年十一月廿二日丁卯、夜詣二右丞相坊門家一、娶二公中女一。廿四日、夜更漸深、向二右相府亭一。所住之東南対廂東頭西向設レ座。以二朱台六基及銀器一弁レ饌。少台一双以二様器一弁レ饌。菓等安二座右一。其西頭南北対設二客座一。主公伝二侍女一告二備レ饌由一。即出就レ座。左兵衛督師尹卿、右衛門督師氏朝臣相次加レ座。以二折敷一設レ饌。左少将藤原朝臣伊尹以二盞酒一安レ台。酒巡両三行。即入二簾中一。侍女以二一盃餅一安二筥蓋一、差レ之。主公率二客卿一起就二別処一、命レ飲深。賜二陪従者禄一。五位三人、白単細長各二領、袴一具。六位有官、散位四人、各同細長二領。無官三人、白絹各一疋。召継以下、銭二万。

右は『花鳥余情』に引かれた『吏部王記』の逸文である。『吏部王記』の筆者、醍醐天皇第四皇子、式部卿重明親王が、右大臣九条師輔の二女登子を娶った時の記録である。二十四日は、三日の夜の儀。文中に見える師尹（もろただ）、師氏は、師輔の弟、伊尹（これまさ）は、師輔の長子である。宿木一八九頁の匂宮の三日の夜の儀は、記述全体の運びから見ても、この『吏部王記』に拠ったものかと思われる。

李夫人

鑒二嬖惑一也　李夫人は　嬖惑を鑒みたり

本文ならびに訓読は、神田喜一郎博士蔵文集第四による。本文、訓読の作製には、太田次男・小林芳規著『神田本白氏文集の研究』の恩恵を蒙った。通行本との本文の異同を、那波本により下に摘記した。

漢武帝初喪二李夫人一　〔喪—哭〕
夫人病時不レ肯レ別
死後留二得生前恩一
君恩未レ尽念未レ已
甘泉殿裏令レ写レ真
丹青画出竟何益
不レ言不レ咲愁二殺君一　〔咲—笑〕　〔君—人〕
又令二方士合二霊薬一
玉釜煎錬金炉焚
九華帳深夜悄々　〔深—中〕
反魂香反二夫人魂一　〔反—降〕
夫人之魂在二何許一

漢の武帝初めて李夫人を喪へり
夫人の病せし時に別れ肯ぜず
死して後に生前の恩を留め得たり
君の恩尽き未れば念ひ已ま未
甘泉殿の裏に真を写さ令む
丹青画き出でたり竟に何の益かあらむ
言ず咲はず君を愁へ殺さしむ
又方士をして霊薬を合はせ令む
玉釜に煎錬して金炉に焚く
九華の帳深くして夜悄々たり
反魂の香は夫人の魂を反す
夫人の魂何の許にか在る

香煙引到レ焚レ香処
既来何苦不レ須臾
縹眇悠揚還滅去
去何速兮来何遅
是耶非耶両不レ知
翠娥髣髴平生貌
不レ似昭陽寝レ病時
魂之不レ来兮君心苦
魂之来兮君亦悲
背レ燈隔レ帳不レ得レ語
安用暫来遙見為
傷レ心不レ独武皇帝
自レ古及レ今多若レ斯
君不レ見穆王三日哭
重壁台前傷盛姫
又不レ見泰陵一掬涙
馬嵬路上念楊妃
縱令妍姿艶骨化為レ土

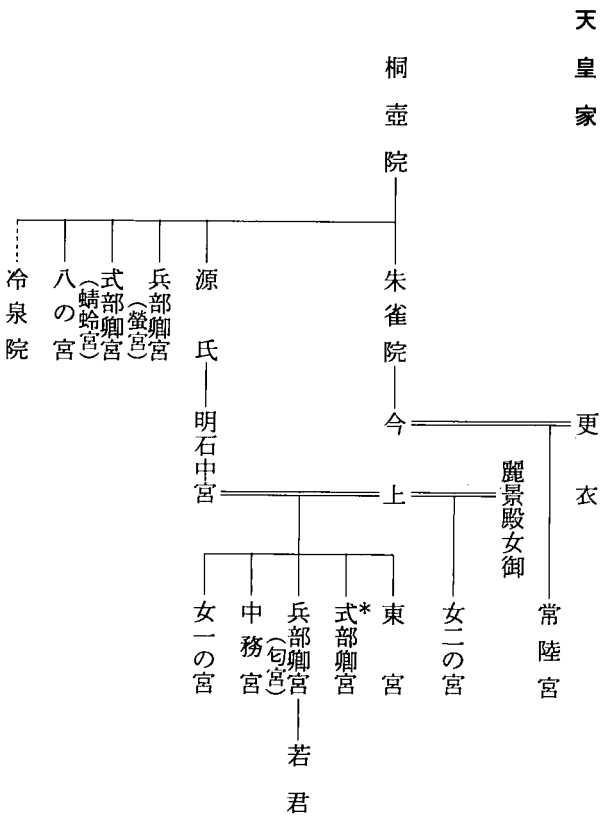
香の煙引きて香を焚く処に到る
既に来りて何ぞ苦須臾もあらざることを
縹眇悠揚として還りて滅え去る
去ること何ぞ速に来ること何ぞ遅き
是耶非ぬ耶両ながら知らず
翠娥髣髴なれども平生の貌に
似ず昭陽に病に寝せし時に
魂の来らざるときには君の心苦しぶ
魂の来るときにも君亦悲しぶ
燈を背け帳を隔てて語すること得ず
安んぞ暫に来りて遙に見ることを用て為む
心を傷ましむることは独り武皇帝のみにあらず
古自り今に及ぶまでに多く斯の若し
君見ずや穆王の三日の哭を
重壁台の前に盛姫を傷む
又泰陵の一掬の涙を見ずや
馬嵬の路の上に楊妃を念へり
縱令妍姿艶骨をもて化して土と為らしむとも

〔煙—烟〕
〔病—疾〕
〔兮—ナシ〕
〔遙見為—還見違〕
〔武皇帝—漢武帝〕
〔多—皆〕
〔骨—質〕

此恨長在無二銷期一
生亦惑死亦惑
尤物感レ人忘不レ得
人非二木石一皆有レ情
不レ如不レ遇二傾城色一

此の恨みは長く在りて銷ゆる期無けむ
生きても亦惑はし死しても亦惑はす
尤き物の人を感ぜしむること忘るること得ず
人木石に非ざれば皆情有り
如かじ傾城の色に遇はざらむには

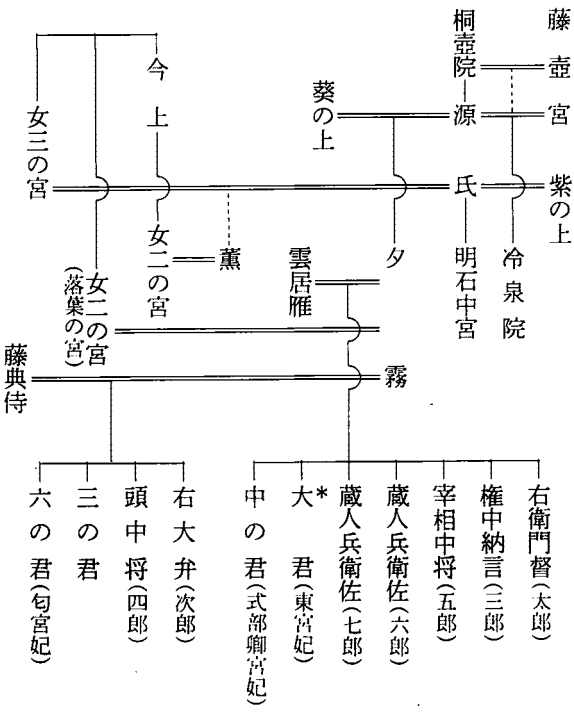
〔感―惑〕



*式部卿宮の呼稱は蜻蛉の巻による。

系図一

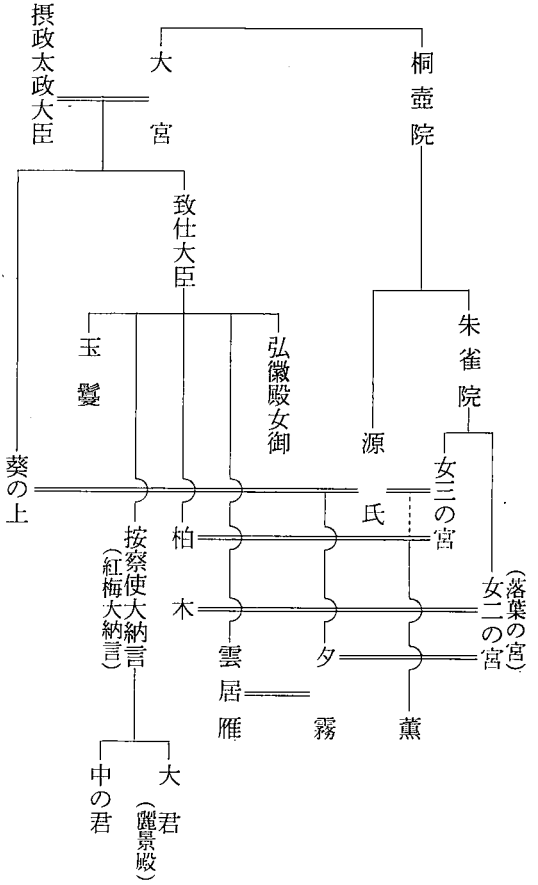
源氏



*宿木の巻「三条殿腹の大君」による。

系図二

藤原氏（致仕大臣家）

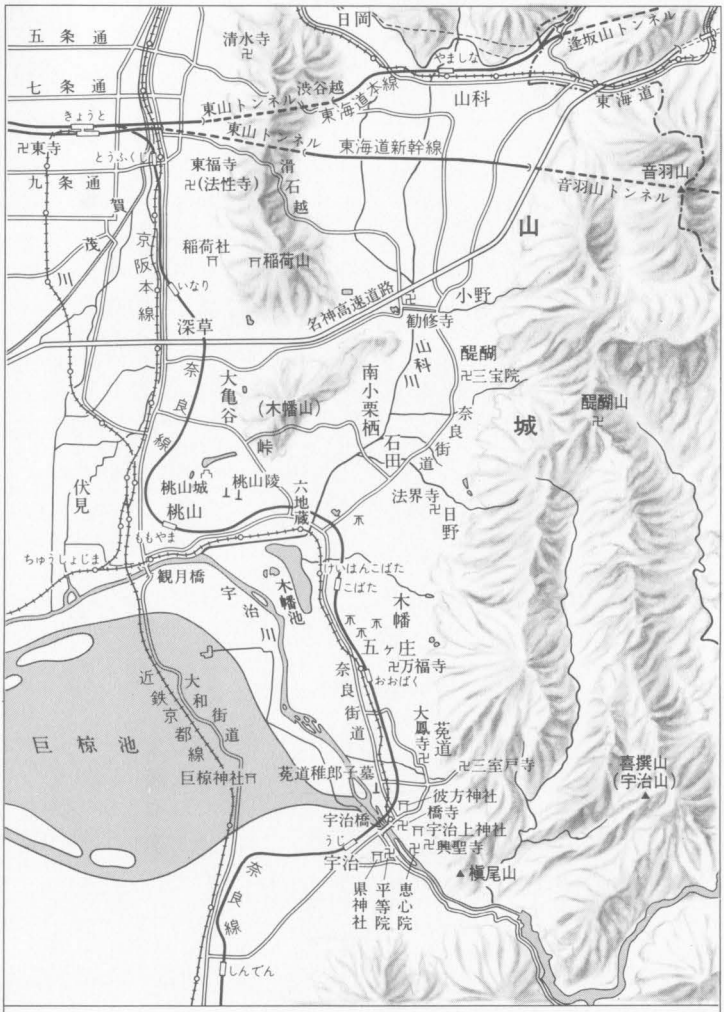

桐壺院
大宮
摂政太政大臣
朱雀院
致仕大臣
源氏
女三の宮
玉鬘
弘徽殿女御
葵の上
柏木
（落葉の宮）女二の宮
按察使大納言（紅梅大納言）
夕霧
雲居雁
薫
大君（麗景殿）
中の君

八の宮家

- 桐壺院
  - 朱雀院
  - 源氏
  - 兵部卿宮（螢宮）
  - 式部卿宮（蜻蛉宮）
  - 冷泉院
  - 八の宮
    - 大君
    - 匂宮
    - 中の君
      - 若君
    - 浮舟
    - 中将の君
    - 北の方
    - 大臣
    - 北の方
      - 左中弁
        - 弁の尼
        - 柏木乳母

常陸介家

- 先妻
  - 蔵人式部丞
  - 女（源少納言妻）
  - 女（讃岐守妻）
- 常陸介
  - 女（左近少将妻）
  - ○
  - ○
  - 中将の君
    - 浮舟



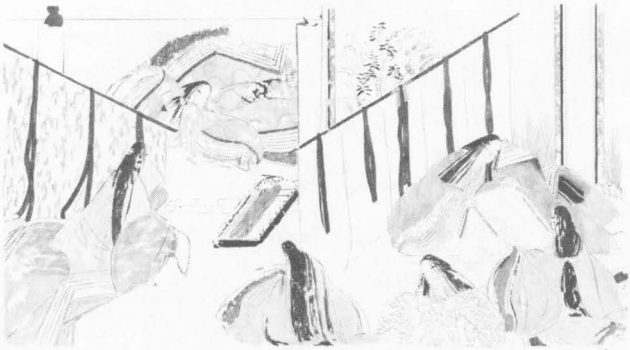
京都より宇治へ

京都より宇治への経路は、九条、賀茂川の東、法性寺（今の東福寺の寺域にほぼ重なる）の前から大和大路を南下、大亀谷から峠を越えて六地蔵に出（木幡山越え）、山沿いを南下して宇治に至った。巨椋池は、昭和16年に干拓されて田圃となった。宇治川の流路は、古くは巨椋池に流れこんでいた。

（安永七年版　山城州大絵図による）

泉川の舟渡り

図のほぼ中央、木津大路村を経て木津川(泉川)を渡り、左折、右岸を北上して、玉水町に至る間を示す。宇治の南、約20キロである。



早　蕨（源氏物語絵巻）

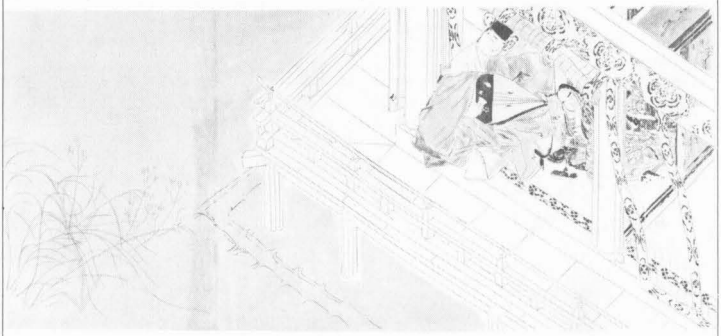
京の二条の院への移転を前に、弁の尼と語る中の君。画面左手、上方、母屋の柱の間にうつむいて悲しみに沈むのが中の君。その手前に几帳を隔てているのが弁の尼で、数珠を右手に、左手で目頭を押えている。中の君の手前に打乱りの筥に巻絹が納められている。画面中央手前に後ろ向きの女房が一人、その右に衣を縫う女房、その右手に女房が二人で布地を手にしている。本文139頁。

宿　木 一（源氏物語絵巻）

主上が薫を相手に賭碁を打たれる場面。面画右手、こちら向きに石をおろしているのが、主上。その手前が薫。次の間の障子のもとに裳、唐衣姿の女房が二人いて一人は覗き見している。画面右手奥に二階（上階に火取、下階に打乱りの筥）、主上の背後の柱間に副障子（そえしょうじ）。女房の背後に二層の棚を備えた厨子一双。主上の左手、障子の背面に見えるのは大床子で、場所は朝餉（あさがれい）の間を思わせる。本文155～6頁。

宿　木 二（源氏物語絵巻）

新婚第三夜の三日の夜の儀、いわゆる露顕（ところあらわし）を終えて翌日の匂宮と六の君。六条の院の丑寅（うしとら）の町の寝殿である。画面右手、くつろいだ大袿姿、立烏帽子の匂宮と、小袿を着け、袖口で口許を蔽った六の君。几帳と屏風を隔てて左手上方に女房二人、手前に女房三人、いずれも裳、唐衣姿で、扇をさし隠している。本文193～4頁。

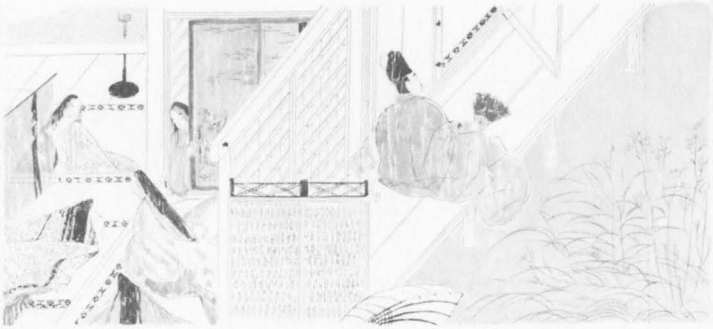


宿　木 三（源氏物語絵巻）

二条の院、西の対の匂宮と中の君。廂の間、簀子に面して琵琶を弾ずる匂宮と、その前で脇息に寄りかかってこれを聴く中の君。匂宮は直衣を羽織っているが指貫を着けない下袴だけのくつろいだ姿。簀子に高欄をめぐらし、下に雨落ちの砌（みぎり）が描かれている。画面左手には風に靡く前栽を配し、画面右手の御簾の裾が風に吹き上げられている。本文236～7頁。

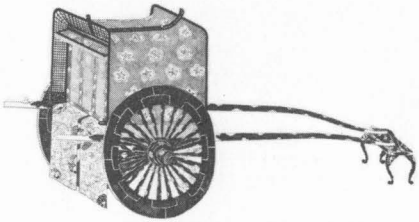
東　屋 一（源氏物語絵巻）

二条の院、西の対。中の君の前で物語絵に見入る浮舟。画面中央に几帳、その奥に障子を半ばあけた母屋の一画。その柱に沿う位置にこちら向きに浮舟。それに向って女房に髪をくしけずらせているのが中の君。その右手で女房の右近が物語の本文を読み上げている。画面右手に女房が二人いる。本文320頁。

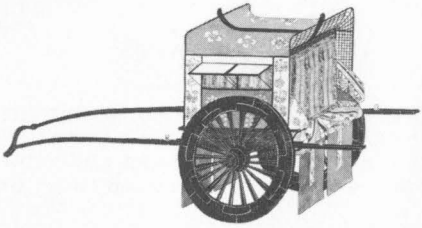


東　屋 二（源氏物語絵巻）

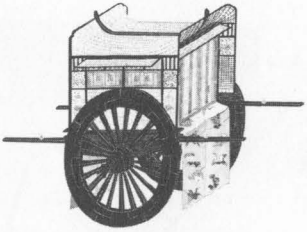
三条の小家に浮舟を訪れた薫。秋草の生い茂る庭に面して、ひなびた簀子に坐り、扇を手にしている。簀子を手前で仕切るのが透垣（すいがい）。その手前に傘が開いたまま立てかけられている。薫の前には妻戸が開いており、その背後、簀子と室内を仕切るのが遣戸。画面左、母屋に、後ろ姿を見せているのが浮舟。廂の間でこれに向いて横顔を見せているのが弁の尼。本文337頁。



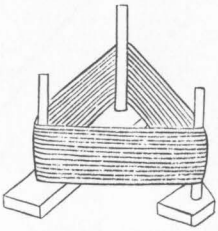
糸　毛　車（輿車図考）



女　　車（輿車図考）



檳榔毛庇車（輿車図考）

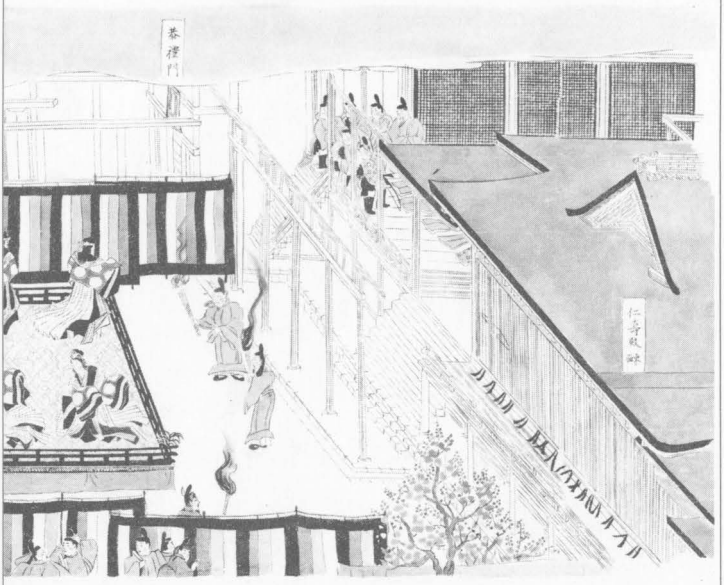


（和漢三才図会）絡

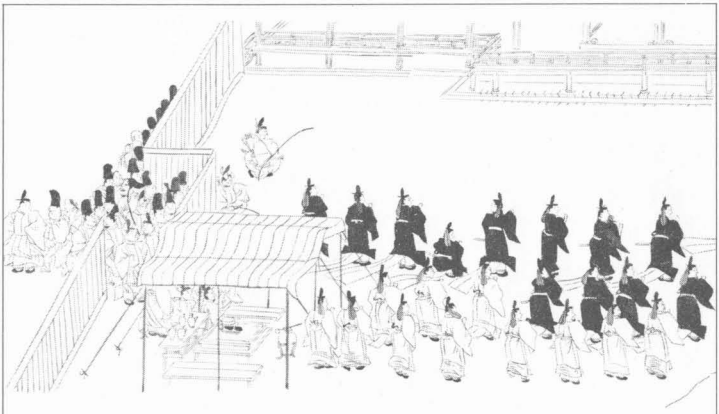
梁（伊勢神宮神宝）

雪山童子（法隆寺　玉虫厨子）

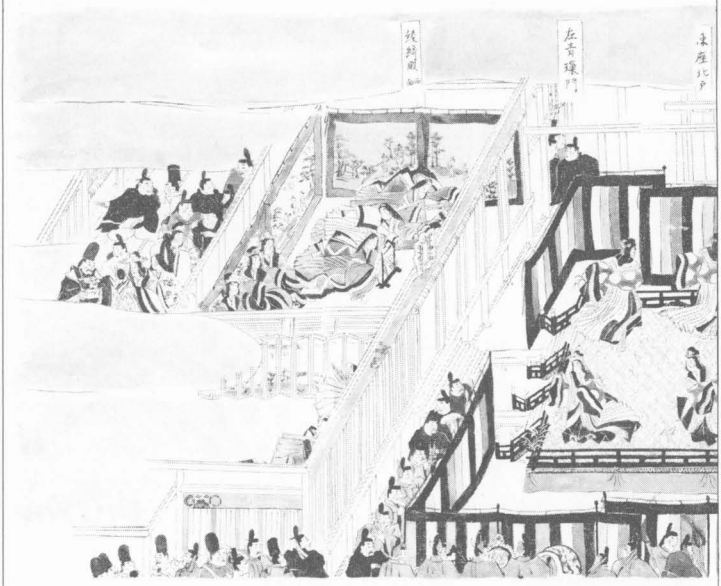
尊者来臨の図。東三条殿寝殿の南面と南庭。南階の階隠（はしがくし）の柱の前に立つのが主人、それに対して庭上にあるのが正客の尊者で、互いに拝礼をかわすところ。池には龍頭、鷁首（げきしゅ）の舟を浮べ、庭上に二つの幄舎（あくしゃ）が設けられ、上手のは調理場、下手のには火炉や瓶子が見え、酒を支度する所と見える。



内教坊の妓女が舞を奏する図。画面右手が仁寿殿、左手が綾綺殿。中庭の舞台に六人の妓女の姿が見える。舞台の手前、斑幔（まだらまく）の外側に近衛の楽人の座。綾綺殿内に、唐絵の帷障（ぜじょう）をめぐらして舞妓と女楽人の座がしつらえられている。



大臣大饗（年中行事絵巻十）



内　宴（年中行事絵巻四）

新潮日本古典集成（第六二回）

源氏物語 七

昭和五十八年十一月五日　印刷
昭和五十八年十一月十日　発行

校注者　石田穣二　清水好子

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

定価一八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yōshiko Shimizu, Printed in Japan, 1983.

ISBN4-10-620362-6 C0393

新潮日本古典集成

源氏物語

八

石田穣二　清水好子　校注

新潮社版

目次

凡例……三
浮舟……九
蜻蛉……九
手習……一七
夢浮橋……二五

付録

陵園妾……二八三
系図……二八六
図録……二九〇
年立……二九五

凡例

一、本巻には、浮舟、蜻蛉、手習、夢浮橋の四巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、浮舟は明融本を、蜻蛉、夢浮橋は大島本を底本とするが、手習は、静嘉堂文庫蔵、伝二条為氏筆本を底本とする。手習の大島本には、青表紙本として不純な点があると考えられるからである。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、

そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文派の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であ

るが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、「陵園妾」、系図、図録を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

一、なお、最後に年立を付載した。物語全体の構造を察し、また梗概の代用とする便宜もあろう。

源氏物語 八

浮(うき)

舟(ふね)

匂宮は、二条の院で会った浮舟のことが忘れられず、その素姓を教えてくれない中の君を恨んでいる。薫は、浮舟をいとしく思いながらも、正夫人女二の宮への憚りから、宇治を訪れることも間遠である。

年明けて正月、中の君のもとに浮舟から新年の挨拶が届けられた。その文面を見て、匂宮は、浮舟が宇治にいることを知る。さらに、薫方の事情に詳しい家臣を通じて、薫が宇治に女を囲うことも知った。その女がかの女か。わが目で確かめようと宇治を訪れた匂宮は、格子の隙間から浮舟を見届ける。匂宮は薫と偽って部屋に入り、強引に浮舟と契った。浮舟は、一途な匂宮に惹かれる。

二月、ようやく宇治を訪れた薫は、物思わしげな浮舟の様子にいとしさを増し、京に迎える約束をする。二月十日頃、宮中の詩宴に、古歌を口ずさむ薫の浮舟を思う心の深さを知って、匂宮はじっとしていられず宇治へ急いだ。今度は、対岸の小家に女を連れ出してゆっくりと二日間を過す。巻名は、この時宇治川を渡る小舟の中で浮舟が唱和した歌による。

匂宮は薫に対抗して、三月末には浮舟を京に迎えようとする。浮舟は二人の男性の間に立って苦悩する。

ある日、薫と匂宮の文使いが宇治の邸で鉢合せし、事態を知った薫は、浮舟に不倫を詰る歌を送る。邸の周辺も厳重に警戒されるようになり、訪れた匂宮も浮舟に会えずに帰らねばならなかった。

京移りを喜ぶ母や乳母のこと、さらには中の君に対しても心を痛める浮舟は思い詰めて、入水を決意する。

東屋の翌年、薫二十八歳（通説二十七歳）の年、正月～三月のことである。

一 今でもまだ、あのほんのはかない出会いに終った夕暮れのことをお忘れになる時とてない。二条の院の西の対で浮舟を見つけたものの、乳母や女房に騒がれて思いを遂げられなかった夕べのこと。七巻東屋三〇八～三一四頁に詳述されている。

二 大した身分ではなさそうな様子だったが、女の感じは、実によかったなと。匂宮の、浮舟に対する印象。

三 中の君に対しても。

四 こんな何でもないことなのに、むやみに気をまわして、嫉妬などなさることだ。そんな方とは思っていなかった、情けない。「かかる筋のもの憎み」は、男女の仲についての嫉妬。一件以後、浮舟が二条の院から姿を消したのを、中の君が嫉妬して女を隠したのだと邪推して言う。

五 (薫が浮舟を) 表立って重々しい扱いはなさらないようだが。「たまはざなれど」は「たまはざるなれど」の撥音便無表記の形。「なれ」は推定。以下、次頁六行目の「……もてそこなはじ」まで中の君の思料。

六 並々ならぬ御愛着で、あの方 (薫) がこっそりとお住まわせになっている人なのに。浮舟のこと。

七 仕えている女房の中でも、一時の慰みに手をつけてみようと思い立たれた者は誰でも、ご身分柄困るような女房の実家にまで追って行かれる、体裁の悪いご性分なのに。匂宮が女房に手出しをすること、東屋三一二頁に見える。

匂宮、浮舟を忘れがたく、中の君を恨む

匂宮、一なほかのほのかなりし夕べをおぼし忘るる世なし。二ことことしきほどにはあるまじげなりしを、人柄のまめやかにをかしうもありしかなと、いとあだなる御心は、とても浮気なご性分ゆえ 心残りなままで終ってしまったことよと くちをしくてやみにしことと、いまいましくお思いになるままに ねたうおぼさるるままに、三女君をも、「四かうはかなきことゆゑ、あながちに、かかる筋のもの憎みしたまひけり。思はずに心憂し」と、けなして はづかしめ怨みきこえたまふをりをりは、〔中君は〕とてもつらくて 本当のことを いと苦しうて、ありのまま申し上げてしまおうか にや聞こえてまし、とおぼせど、五やむごとなきさまにはもてなしたまはざなれど、浅はかならぬかたに、心とどめて人の隠し置きたまへる人を、余計な口出しをして〔匂宮に〕お話ししたりすれば もの言ひさがなく聞こえ出でたらむにも、〔匂宮は〕そのまま聞き流しになさるようなご性分でもないお有様だ さて聞き過ぐしたまふべき御心ざまにもあらざめり、七さぶらふ人のなかにも、はかなうものをものたまひ触れむとおぼし立ちぬる限りは、あるま

じき里まで尋ねさせたまふ、御さまよからぬ本性なるに、さばかり月日を経て、おぼししむめるあたりは、ましてかならず見苦しきこと取り出でたまひてむ、ほかより伝へ聞きたまはむはいかがはせむ、いづかたざまにもいとほしくこそはありとも、ふせぐべき人の御心ありさまならねば、よその人よりは聞きにくくなどばかりぞおぼゆべき、とてもかくても、わがおこたりにてはもてそこなはじ、と思ひ返したまひつつ、いとほしながらえ聞こえ出でたまはず。異ざまにつきづきしくは、え言ひなしたまはねば、おしこめてもの怨じしたる、世の常の人になりてぞおはしける。

〔浮舟のことを〕どうにも仕方がない　止めだてできるような匂宮のご性質お振舞ではないから　とにかくどうなろうとも　自分の不注意なおしゃべりから下手なことにはすまい　お考え直しになっては　おし黙ったまま　嫉妬している　世間並みの女のようにして過しておいでになる

薫

かの人は、たとしへなくのどかにおぼしおきてて、待ち遠なりと思ふらむと、心苦しうのみ思ひやりたまひながら、所狭き身のほどを、さるべきついでなくて、かやすく通ひたまふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど、今いとよくもてなさむとす、山里のなぐさめと思ひおきてし心あるを、すこし日数も経ぬべきこ

この上なくのんびりと構えておいでになっていて　〔浮舟が〕　かわいそうだとはいつもお心遣いをなさるものの　それ相当な機会がなくては　〔宇治は〕たやすくお通いになれる道中でないので　日数のかかり

一　これほど月日が経つのに、深くご執着らしい人（浮舟）のことだから、女房どころでなくきっと不体裁なことを引き起されることだろう。薫との間に悶着が起るだろう、の意。

二　（薫、浮舟の）どちらに対しても、気の毒なことになるにしても。

三　（そうなれば、浮舟は血の繋がった妹のことゆえ）赤の他人よりは外聞の悪いことだなどぐらいは思うことだろう。嫉妬の思いはさらさらない、という気持。

四　困ったこととは思いながらも、本当のこととはお打ち明けなさらない。

五　（そうかといって）ありもしない嘘をついて、もっともらしく言い繕ったりはおできにならないので。中の君の素直で上品な人柄。

六　何をなさるにもご大層なご身分なので。薫、権大納言右大将（七巻宿木二四二頁参照）。また、北の方は内親王である。

七　神様が禁じて逢えなくなさる道より　**薫の思惑**　ももっと難儀な恋路である。「恋しくは来ても見よかしちはやふる神のいさむる道ならなくに」（『伊勢物語』七十一段）を踏まえる。

八　けれども、いずれ十分な世話をしてやる積りだ。以下、地の文から自然に薫の心中の叙述に移る。

九　（浮舟を宇治に置いたのも）山荘に行った時の慰めにと考えてのことだから。

一〇 そんな具合にして、当分の間は人に知られないような所に住まわせ、次第にそういうものだと、浮舟の気持も気長になるように仕向けておいて。そうしばしば会える間柄ではないと浮舟を納得させて。

一一 急に女を迎えられて、一体どういう人なのだろう、いつから親しくなられたのか、などとあれこれ取り沙汰されるのも煩わしく。

一二 浮舟を迎えたそもそもの思惑にはずれることになろう。浮舟は亡き大君の身代り。

一三 大君ゆかりの地をさっぱり切り捨てたように（浮舟を宇治から）連れ出して、亡き大君のことを忘れたかのように思われるのは、いかにも不本意だ。

一四（薫は浮舟を）京に移すべき所をお心積りなさって。前に「今いとよくもてなさむとす」とあった。

一五 少しお忙しくなられたようでもあるが。このところ、官位昇進、婚儀、浮舟のことと重なっている。

一六（それを）拝見する女房たちも、なぜこれほどまでにといぶかしく思うほどであるが。実の親兄弟でもないのに、と不審がる。

その後の、中の君と薫の間柄

そうな用事をこしらえて
とども作り出でて、のどやかに行きても見む、さて、しばしは人の
ゆっくりと　ゆ行って逢いもしよう一〇
知るまじき住み所して、やうやうさるかたに、かの心をものどめお
自分としても　世間の非難を受けないように　目立たぬようにするのが得策だろう
き、わがためにも、人のもどきあるまじく、なのめにてこそよから
め、一一にはかに、何人ぞ、いつより、など聞きとがめられむものさ
わがしく、一二はじめの心に違ふべし、また宮の御方の聞きおぼさむこ
中の君　聞かれた時のお気持を考えても　一三
とも、もとのところを際々しう率て離れ、昔を忘れ顔ならむ、いと
気持を抑えなさるのも　悠長にすぎるご性分がさせることなのであろう
本意なし、などおぼししづむるも、例の、のどけさ過ぎたる心から
なるべし。

一四 わたすべきところおぼしまうけて、忍びてぞ造らせたまひける。

一五 すこしいとまなきやうにもなりたまひにたれど、宮の御方には、な
中の君　り怠りなく好意を寄せお世話をしてさし上げなさることは今までと同様である
ほたゆみなく心寄せつかうまつりたまふこと同じやうなり。一六見たて
まつる人もあやしきまで思へれど、世の中をやうやうおぼし知り、
世間の人の振舞を見聞きなさるにつれて　亡き人のことを忘れぬ変らぬ心の
人のありさまを見聞きたまふままに、薫これこそはまことに昔を忘れ
後々までもねんごろな例なのであろうと　感じ入られることも一通
ぬ心ながさの、名残さへ浅からぬためしなめれと、あはれもすくな

一 案に相違した運命だったこと、亡き姉君のお考えおきになった通りにもならないで、どうしてこんな物思いの絶えそうもない結婚をすることになってしまったのだろう。中の君の思い。亡き大君は、自分の代りに中の君が薫と結ばれることを望んでいたこと、七巻総角の巻に詳しい。

二 （中の君が薫と）直接お会いになることは、めったにない。

三 歳月もたち、あまりにも昔が遠くなって、内々のご事情を深く知らぬ女房は。宇治以来の事情を知らぬ新参の女房が増えているのである。

四 さしたる身分もない、並々の者なら、それくらいの以前の付合いを忘れずに、いつまでも親しくするというのもふさわしいが。以下、女房の心中。

五 なまじこんな格式のある高い身分なのに、世間の常識に外れた交際ぶりも、気がひけるので。女房の心中からいつか中の君の心中叙述になる。

六 宿木の巻に誕生した男の子。（七巻二四三頁参照）

七 中の君以外の腹には、こんなお子も生れて来ないのではなかろうかと、（匂宮は）大切な一粒種とお思いになって。皇位継承の可能性もある男子である。

八 気兼ね入らずの親しめる夫人としては、誰よりも大切になさるので。正室の六の君は、舅の夕霧がいて気の張る相手。

りでない［薫は］お年を重ねてゆかれるにつれて　世間の評判も　格別にす

からず。ねびまさりたまふままに、人柄もおぼえも、さま異にもの

ぐれたお方なので　匂宮　頼りなく思われる折々には

したまへば、宮の御心のあまりたのもしげなき時々は、思はずなり

ける宿世かな、故姫君のおぼしおきてしままにもあらで、かくもの

思はしかるべきかたにしもかかりそめけむよ、とおぼすをりをり多

くなむ。されど、対面したまふことは難し。年月もあまり昔を隔て

ゆき、うちうちの御心を深う知らぬ人は、なほなほしきただ人こそ、

さばかりのゆかりたづねたるむつびをも忘れぬに、つきづきしけれ、

なかなかかう限りあるほどに、例に違ひたるありさまも、つつまし

［加えて］匂宮が始終二人の仲をお疑いなのも　ますますつらくお思いになり　気

ければ、宮の絶えずおぼし疑ひたるも、いよいよ苦しうおぼし憚り

になさっては　どうしても隔てを置いたあしらいになってゆくのに　［薫は］それでも今までど

たまひつつ、おのづからうときさまになりゆくを、さりとても絶え

おり　匂宮　浮気な

ず、同じ心の変りたまはぬなりけり。宮も、あだなる御本性こそ見

な思いをすることもあるが　かわいらしく大きくなってゆかれるにつれて

まうきふしもまじれ、若君のいとうつくしうおよすけたまふままに、

ほかにはかかる人も出で来まじきにやと、やむごとなきものにおぼして、うちとけなつかしき方には、人にまさりてもてなしたまへば、

九　正月の上旬を過ぎた頃。東屋の巻の翌年の正月である。上旬は、朝廷、大臣家等での儀式、宴会が多い上、正室の六の君のもとで過ごさねばならなかったのであろう。匂宮二十九歳。

正月、宇治の便りあり　匂宮、薫からかと疑う

一〇　女の童。

一一　緑の薄様（緑色の薄い鳥の子紙）で包んだ包み文の大ぶりなのに。「包み文」は、結び文をさらに薄様で包んだもの。後朝の文などに用いる。小松に色を合せて緑の紙を用いた。中の君に宛てた浮舟の文である。

一二　鬚のように端を編み残した竹籠。花や若菜などを入れる。ここは、すぐあとに見えるように細工物である。（図録二参照）

一三　正式の手紙の形式。白い包み紙で縦に包み、上下の端を折り畳む。次の童の言葉によれば、右近（浮舟の侍女）から大輔に宛てたもの。

一四　宇治以来の、中の君側近の女房（東屋二九〇頁注一参照）。「おとど」は、婦人に対する敬称。

一五　いつものように、お方様（中の君）がご覧になるのでしょう。童の不用意な発言。

一六　鋲を細工して、緑青で彩色したものであろう。

一七　お前にお取り寄せになるのを。

一八　大将（薫）が、さあらぬ体に装った手紙なのだろうか。

［中君は］以前よりは少しは不安な思いも薄らいでお暮しになっている

ありしよりはすこしもの思ひしづまりて過ぐしたまふ。

［匂宮が二条院に］　二つにおなりになった

睦月の朔日過ぎたるころわたりたまひて、若君の年まさりたまへるを、もてあそびうつくしみたまふ昼つかた、小さき童、緑の薄様なる包み文の大きやかなるに、小さき鬚籠を小松につけたる、また、すくすくしき立文とり添へて、奥なく走り参る。

相手になってお慈しみになっていられるのを　中の君　改まった感じの

女君にたてまつれば、宮、「それはいづくよりぞ」とのたまふ。

匂宮　それはどこからの手紙か　（童）

「宇治より大輔のおとどにとて、もてわづらひはべりつるを、例の、御前にてぞ御覧ぜむ、とて取りはべりぬる」と言ふも、いとあわたたしきけしきにて、

［使が］誰に渡そうかとまごついていましたので　言うのも　ひどくせかせかした様子で　と存じまして受け取りました

（童）　鬚籠

「この籠は、金をつくりて色どりたる籠なりけり。松もいとよう似て作りたる枝ぞとよ」と、笑みて言ひつづくれば、宮も笑ひたまひて、「いでわれももてはやしてむ」と召すを、女君、いとかたはらいたくおぼして、「文は大輔がりやれ」とのたまふ御顔の赤みたれば、宮、大将のさりげなくしなしたる文にや、宇治の名のりもつきづきし、とおぼし寄りて、この文を取りたまひつ。

つくりにこしらえた枝ですわ　にこにこと調子づいて言うので　小松も大層上手に本物そ　どうしようかとはらはらなさって　（中君）　の所へ持っておゆき　［中君の］

（匂宮）どれ私も一緒に眼を楽しませてもらおう

匂宮　宇治からと名乗ったのもいかにもそれらしい　お勘ぐりになって

匂宮、浮舟の文を見る

一 とはいえ、もし薫の手紙だったらとお思いになると。匂宮の心中。
二 みっともない、どうしてそんな女房たちの間でやりとりする内輪の文などご覧になるのでしょう。
三 女同士の手紙とは、どんなものなのかな。
四 ひどく若々しい筆跡で。書き馴れぬ体。浮舟の手紙である。
五 山里の住まいの気の晴れませぬことといったら、峰の霞も絶え間なく立ちこめた思いがいたします。新春なので「峰の霞」という。
六 端書。手紙のはじめの方に書き添えた文言。
七 これも若宮にさし上げて下さいませ。次に見える卯槌のこと。以上、前に「大きやかなる」とあった包み文。
八 なるほど中の君の言った通り、女の筆跡で。
九 年明けまして、ご機嫌いかがでいらっしゃいますか。年頭の挨拶の言葉。以下、右近から大輔への文。
一〇 あなた様におかれましても、どんなにかおにぎやかなお正月をお迎えのことでしょう。「私」は、主筋に対して私的なこと。「たのし」は、満ち足りて裕福なこと。
一一 私どもでは、まことに結構なお住まいで、行き届いたことと存じますが。
一二 こうしていつもつくねんと物思いをなさっているよりは。以下、主人の浮舟に対して二重敬語を用いる。

一さすがに、それならむ時にとおぼすに、いとまばゆければ、「あけて見むよ。怨じやしたまはむとする」とのたまへば、「見苦しう、何かは、その女どちのなかに書き通はしたらむうちとけ文をば、御覧ぜむ」とのたまふが、騒がぬけしきなれば、「さは見むよ。二女の文書きはいかがある」とてあけたまへれば、三いと若やかなる手にて、

（匂宮）開けて見ますよ　ひどくばつが悪いので　（中君）お怨みになるのではないかな　おっしゃる様子が　あわてた気配もないので　（匂宮）では見ますよ

おぼつかなくて年も暮れはべりにける。四山里のいぶせさこそ、峰の霞も絶え間なくて。

（浮舟）ご無沙汰のまま年も暮れてしまいました

五とて、端に、六「これも若宮の御前に。七あやしうはべるめれど」と書きたり。ことにららうじきふしも見えねど、おぼえなき、御目たてて、この立文を見たまへば、げに八女の手にて、

不出来なものとは存じますが　特に才気のあるような書きぶりも見えないけれども　心当りがないので　不審に思われて

年あらたまりて何ごとかさぶらふ。九一〇御私にも、いかにたのしき御よろこび多くはべらむ。一一ここには、いとめでたき御住ひの心深さを、なほふさはしからず見たてまつる。一二かくてのみつくづくとながめさせたまふよりは、時々はわたりまゐらせたまひて、御心

でもふさわしいお扱いではないように存じ上げます　（そちらに）お同いあそばされて　お気晴

一三 身もすくむ恐ろしいことと、すっかりお思いこみになりまして。匂宮に押し入られたことをさす。
一四 若宮のおんもとにと、卯槌をご進上なさいます。「卯槌」は、桃の木を四角に切って、五色の組糸を垂らしたもの。正月初卯の日に、宮中の糸所から悪鬼を払う呪いとして造進した。宮中以外でも行われた。（図録二参照）
一五 ご主人様。匂宮のこと。
一六 （正月だというのに）縁起でもない言葉を慎むことも忘れて。「ふさはしからず」「つつましく恐ろしきものに」「もの憂きことに嘆かせたまふ」など。
一七 並々の奉公する女房とは思えぬ書きぶりだとお気づきになってみると。
一八 その厄介なことがあるという文句に、あの時の女だなと思い当られた。「つつましく恐ろしきものに」とあるので、勘づく。
一九 ふた股になった木の枝。「方言云、江東謂二樹枝一曰二杈椏一。砂弼二音末太不利」（『和名抄』）。次の歌により、ここは松の枝。前に見えた作り物の小松。
二〇 藪柑子。冬、赤い実を付ける。正月の祝儀物。前の「またぶり」とともに、これも作り物。二股の松の枝の一方に藪柑子が刺し通してある体。
二一 まだ年経ぬ松ではございますが、若君のおんために、深い心をこめて、千代のお栄えをご期待申し上げている心をお汲みとり下さいませ。「まだふりぬ」に「またぶり」を詠みこみ、「まつ」に「松」を掛ける。

らしもなさればよろしいのに
もなぐさめさせたまへ、と思ひはべるに、一三つつましく恐ろしきものにおぼしとりてなむ、もの憂きことに嘆かせたまふめる。若宮（参上するのは）気の進まぬこととお嘆きのようでございます一四の御前にとて、卯槌まゐらせたまふ。一五おほき御前の御覧ぜざらむ（おいでにならない時）ほどに、御覧ぜさせたまへとてなむ。（ご披露下さいませとのことでございます）

と、こまごまと、言忌もえしあへず、一六（くどくどと）もの嘆かしげなるさまのかたくなしげなるも、（何やら泣き言を並べたてた書きぶりの愚痴っぽいのも）うち返しうち返し、（「包宮は」繰り返し繰り返し）あやしと御覧じて、「今はの（中君）たまへかし。誰がぞ」（誰の手紙ですかてもいいでしょう）とのたまへば、「昔、（宇治の山荘に仕えていました女房の娘が）かの山里にありける人の娘の、（仔細がありまして）さるやうありて、このころかしこにあるとなむ聞きはべりし」と聞こえたまへば、一七おしなべてつかうまつるとは見えぬ文書きを心得たまふに、一八かのわづらはしきことあるにおぼし合はせつ。

卯槌（趣向を凝らし）をかしう、つれづれなりける人のしわざと見えたり。一九（暇をもてあましている人の手間をかけた細工と見えた）またぶりに、二〇山橘（宇治）つくりてつらぬき添へたる枝に、

（浮舟）二一
まだふりぬものにはあれど君がため
ふかき心にまつと知らなむ

格別の趣向もない歌なのを　あのずっと心にかかる女の歌だろうか　お気づきになっ

と、ことなることなきを、かの思ひわたる人のにや、とおぼし寄りぬるに、御目とまりて、「返りことしたまへ。情なし。隠いたまふべき文にもあらざめるを、など御けしきのあしき。まかりなむよ」とて立ちたまひぬ。女君、少将などして、「いとほしくもありつるかな。幼き人の取りつらむを、人はいかで見ざりつるぞ」など、忍びてのたまふ。「見たまへましかば、いかでかはまゐらせまし。すべてこの子は、ここちなうさし過ぐしてはべり。生ひ先見えて、人はおほどかなるこそをかしけれ」など憎めば、「あなかま。幼き人な腹立てそ」とのたまふ。去年の冬、人のまゐらせたる童の、顔はいとうつくしかりければ、宮もいとらうたくしたまふなりけり。

（包宮）　お隠しなさるよう　たので　手紙でもなさそうなのに　どうしてご機嫌が悪いのですか　では退散しましょう　なぜに向って（中君）　女房たちはどうして気づかなかったの　小声　知っておりましたら　なんでこちらへお届け申させましょう　だいたいがこの子は　考えのない出過ぎ者でございます　（中君）まあ静かに　小さい者を叱りなさるな

（包宮は）わが御方におはしまして、あやしうもあるかな、宇治に大将の通ひたまふことは、年ごろ絶えずと聞くなかにも、忍びて夜とまりたまふ時もあり、と人の言ひしを、いとあまりなる人の形見とて、さるまじき所に旅寝したまふらむこと、と思ひつるは、かやうの人隠

誰かが話していたが　内々で　思っていたが　薫

一　お返事をしておやりなさい。風情がありませんよ。趣向を凝らした贈り物だから、という気持。

二　中の君づきの女房。（七巻宿木二一八頁、東屋三一二頁、三一七頁参照）

三　気の毒なことをしてしまったわね。浮舟の手紙を匂宮に見られてしまったことをいう。

四　年端もゆかぬ者が（この手紙を）受け取ったのでしょうに。前出の「小さき童」のこと。

五　末はさこそと思われるように、子供はおっとりしているのが、かわいげがありますのに。

六　ある人が奉公にさし上げた女の童で、顔立ちは大層かわいらしかったので、匂宮もずいぶんと目をかけていらっしゃるのだった。それで、宮様ご同席の場に進み出たのだと、説明する気持。

七　ご自分のお部屋。二条の院の寝殿。

八　どうもおかしいな。

以下「……隠し置きたまへるなるべし」まで、匂宮の推理。

九　それはあんまりな、いくら恋しい人（大君）の思い出の地だといっても、とんでもない所に旅寝をなさるというのは。「旅寝」は、外泊の意。

匂宮、大内記より、薫が宇治に女を隠すことを聞く

一〇 ご学問のことで、ご用をさせておいでになる大内記である者。「大内記」は、中務省の役人。正六位上相当。定員二名。詔勅宣命の作成、御所の記録をつかさどる。漢詩文の才ある者が用いられた。後文によれば、式部の少輔道定とある（五一頁、七五頁）。

一一 あちら（薫）のお邸に親しい係わりのあるのを。後文によれば、大内記は、薫の家司の婿（一〇頁）。

一二 韻塞をしたいから、適当な詩集をいくつか選び出して、こちらの部屋の厨子（本箱）に積んで置くようになどお命じになって。「韻塞」は、古詩の韻を踏んであるところを隠し、その韻字を当てる遊び。

一三 寺をば、大層立派に造ったと聞いている。七巻東屋三三〇頁にその完成のことが見える。

一四 不断の念仏三昧を修める堂。「三昧」は、仏を念じて心を乱さぬ修行。

一五 去年の秋頃からは、以前よりも度々お出でになるとのことです。薫が浮舟を宇治に伴ったのは、去年の秋である（東屋三三八頁以下参照）。

一六 女をひそかに住まわせておいでになる。以下、下人の噂の内容。

一七 あの辺（宇治近辺）にお持ちになっているあちこちの荘園の者が、皆（薫の）ご命令により参上してご用を承っている、その者たちを山荘の宿直に当てたりなさっては。

一八 一体、どんな幸運な方が。

一九 大内記は、「下の人々」の噂を更に聞き伝えた体。

し置きたまへるなるべし、とおぼし得ることもありて、御書のことにつけて使ひたまふ大内記なる人の、かの殿にしたしきたよりあるをおぼし出でて、御前に召す。参れり。韻塞すべきに、集ども選り出でて、こなたなる厨子に積むべきことなどのたまはせて、「右大将の宇治へいますること、なほ絶え果てずや。寺をこそ、いとかしこく造りたなれ。いかでか見るべき」とのたまへば、「寺いとかしこくいかめしく造られて、不断の三昧堂など、いと尊くおきてられたり、となむ聞きたまふる。通ひたまふことは、去年の秋ごろよりは、ありしよりもしばしばものしたまふなり。下の人々の忍びて申ししは、女をなむ隠しすゑさせたまへる、けしうはあらずおぼす人なるべし、あのわたりに領じたまふ所々の人、皆仰せにてまゐりつかうまつる、宿直にさしあてなどしつつ、京よりもいと忍びて、さるべきことなど問はせたまふ、いかなる幸ひ人の、さすがに心細くてゐたまへるならむ、となむ、ただこの師走のころほひ申す、と聞

（大内記）
（匂宮）
（大内記が）
（薫が宇治に）

合点されることもあって
御書のこと
お出でになることは
相変らず続いているのか
何とかして見たいものだな
大規模なものを造営されて
と耳にいたしております
まことに尊いきまりもお定め
になった
ましたには
憎からず思っていらっしゃる方なの
だろう
必要
どく内密に
な品々などは何かとお見舞なさる
とはいえさびしい山里
の住まいをしていられるのだろう
十二月の頃お噂している
つい先頃の

きたまへし」と聞こゆ。いとうれしくも聞きつるかな、と思ほして、
何とうれしいことに詳しいことを聞いたものよ〔匂宮は〕
「たしかにその人とは言はずや。かしこにもとよりある尼ぞ、とぶ
はっきりどこの誰と名前は言わなかったか　〔薫は〕見　噂の女性は
らひたまふと聞きし」（大内記）「尼は、廊になむ住みはべるなる。この人は、
舞っておやりだと聞いたが　今度新しく建てられた寝殿に　見苦し
今建てられたるになむ、きたなげなき女房などもあまたして、くち
こざっぱりした女房なども大勢使って　（匂宮）おもしろい話だな
からぬ有様で暮しております
をしからぬけはひにてゐてはべる」と聞こゆ。「をかしきことかな。
どういう積りで　どのような女を　そのようにお囲いになったのだろう　やはりいかに
何心ありて、いかなる人をかは、さてすゑたまひつらむ。なほいと
普通の人とは違った　ご性分だな　も一癖ある人で
けしきありて、なべての人に似ぬ御心なりや。右の大臣など、この
人のあまりに道心に進みて、山寺に、夜さへともすればとまりたま
ふなる、軽々し、ともどきたまふと聞きしを、げになどかさしも仏
の道には忍びありくらむ、なほかの故里に心をとどめたる、と聞き
さてはこういうわけがあったのだね
し、かかることこそはありけれ。いづら、人よりはまめなるとさか
しがる人しも、ことに人の思ひいたるまじき隈ある構へよ」とのた
大内記
まひて、いとをかしとおぼいたり。この人は、かの殿にいとむつま
〔薫が〕
しくつかうまつる家司の婿になむありければ、隠したまふことも聞

一　あそこに前から住んでいる尼。弁の尼のこと。

二　その尼は、廊（渡殿）に住んでおりますそうで。宇治の宮の寝殿再建中は、廊に住んでいたが、その後も同じ所に住まう趣（宿木二二九頁参照）。

三　右の大臣（夕霧）などが、この人（薫）が、あまりにも仏道修行の願いが深すぎて、宇治の山寺に、夜もどうかするとお籠りになるというのを、ご身分にふさわしくない、と非難なさっていると聞いたが。

四　（それを）全く何でそんなに人に隠れて寺参りばかりするのだろう、やはりあの昔の思い出の地が忘れられないのだ、と（自分は）思っていたのだが。

五　どうだ、人よりはまじめだと分別顔をしている男のほうがかえって、ことさら誰もが思いつかないような隠し事を考え出すことよ。「いづら」は、相手に呼びかける語。

六　あちら（薫）のお邸に、大層親しくお仕えしている家司の婿だったので。「家司」は、家政をつかさどる事務官。後の六四頁に、「大蔵の大夫」と見える。

七 どうしたら、この人を、この前ここ（二条の院）で会った女かどうか見極めることもできようか。以下、匂宮の心中。

八（中の君が薫と）心を合せて（浮舟を）お隠しになっていらっしゃったのも、とてもくやしい思いがする。匂宮の心中から、自然に地の文になる。

九 正月十八日、帝が弓場殿に臨御され、左右の近衛、兵衛の舎人の競射を御覧になる儀。（五巻図録四参照）

匂宮、大内記に宇治行きを語らう

一〇 正月二十一、二、三日のうち、子の日に仁寿殿で帝の催される私宴。題を賜って、作詩、披講する。この物語の作られた平安中期には行われないようになっていた。（図録三参照）

一一 大臣以外の中央の官吏や地方官を任命する公事。春秋二回あり、春は、正月中旬または下旬に行われた。

一二 この大内記は、なりたいと思う官職があって。匂宮の口ききを期待しており、宮もそれを読んで、無理な案内を命じるのである。

一三 まことに具合の悪いことなのだが。以下、適当に虚実ないまぜて言う。

くなるべし。〔匂宮は〕御心のうちには、いかにして、この人を、見し人かとも見さだめむ、〔薫〕かの君の、さばかりにてすゑたるは、なべてのよろし人にはあらじ、このわたりには、いかでうとからぬにかはあらむ、心をかはして隠したまへりけるも、いとねたうおぼゆ。

ただそのことを、このころはおぼししみたり。賭弓、内宴など過ぐして、心のどかなるに、司召など言ひて、人の心尽くすめるかたは、何ともおぼさねば、宇治へ忍びておはしまさむことをのみおぼしめぐらす。この内記は、望むことありて、夜昼、いかで御心に入らむと思ふころ、例よりはなつかしう召し使ひて、「いと難きことなりとも、わが言はむことはたばかりてむや」などのたまふ。かしこまりてさぶらふ。〔匂宮〕「いと便なきことなれど、かの宇治に住むらむ人は、はやうほのかに見し人の、行方も知らずなりにしが、大将に尋ね取られにける、と聞きあはすることこそあれ。たしかには知るべきやうもなきを、ただものよりのぞきなどして、それかあらぬか

それほどまでにして置いておくのは　並み一通りのざらに　どうして親しい付き合いがあるのだろう　中の君とは　いるような女ではあるまい　この頃は思いつめていらっしゃる　ただ浮舟のことばかりを　気持も落着いたところへ　皆が気をもむらしい任官昇進のこと　関心もおありでないので　こっそりとお出かけになろうということばかりあれこれ思案なさる　どうかして宮のお気に入ろうと思う頃とて　〔匂宮は〕いつもよりは親しげにご用を言いつけられて　私が頼むことは何とか計らってくれようか　難儀なことでも　謹んで承っている　例の宇治に住んでいるという女は　前に少しかかわりがあった人で　行方も分らずなってしまったのが　見出だされ引き取られたのだ　そなたの話から思い当るところがある　〔しかし〕はっきりと確かめられるすべもないので　ほんの物陰から隙見などして　確かにその人かどうか

一 ずいぶん険しい山越えではございますが。木幡の山越えをいう（七巻早蕨一四二頁注五参照）。
二 亥の時は、午後九時から十一時、子の時は、午後十一時から午前一時までをいう。
三 そうして暁にはお帰りあそばされましょう。「暁」は、夜明けのまだ暗い頃。
四 いかにも。大内記の説くところに同意する気持。そこで「自分も昔、一度や二度は通ったことがある」と述懐する。
五 （しかし）身分をわきまえぬと非難されるに違いない、それで世間に漏れたら困ると思うのだ。実行に当って、大内記の細心の注意を要求する口ぶり。
六 昔から宇治の様子をよく知っている者二、三人。以前、中の君のもとに通う時お供した者たち。
七 御乳母子で蔵人から叙爵した若い者。「蔵人」は、蔵人所の職員で、天皇のお側近く雑務・陪膳に奉仕する。ここは六位の蔵人。「かうぶり得」は、従五位下に叙せられること。後の三〇頁に「時方」とある男のこと。
八 大将（薫）は、今日明日なら、まさか宇治へお出でになるまいなどと。

匂宮、宇治に行く

と見さだめむ、となむ思ふ。いささか人に知らるまじき構へは、いかがすべき」とのたまへば、あなわづらはし、と思へど、「おはしまさむことは、一いと荒き山越えになむはべれど、ことにほど遠くはさぶらはずなむ。夕つかた出でさせおはしまして、亥子の時にはおはしまし着きなむ。三さて暁にこそは帰らせたまはめ。人の知りはべらむことは、ただ御供にさぶらひはべらむこそは。それも、深き心はいかでか知りはべらむ」と申す。「さかし。昔も一度二度通ひし道なり。軽々しきもどきおひぬべきが、ものの聞こえのつつましきなり」とて、かへすがへすあるまじきことに、わが御心にもおぼせど、かうまでうち出でたまへれば、え思ひとどめたまはず。

御供に、昔もかしこの案内知れりし者二三人、この内記、さては御乳母子の蔵人よりかうぶり得たる若き人、むつましき限りを選りたまひて、大将、今日明日よにおはせじ、など、内記によく案内聞きたまひて出で立ちたまふにつけても、いにしへをおぼし出づ。あ

（を見きわめたい）（少しも人に知られないようにする）（工夫は）（〔大内記は〕これはやっかいな）（〔宇治に〕お出）（うしたらよかろう）（〔京を〕ご出立あそばしましたなら）（ざいません）（であそばすのは）（特に道のりの遠い所ではど）（誰か人が知るといた）（しましても）（ほんのお供に従います者たちだけでしょう）（その者たちも）（深い事情）（はどうして知りましょう）（匂宮）（匂宮ご自身でも反省なさるが）（してはならないことだと）（思いとまることはおできにならない）（おロに出してしまわれたので）（気心の知れた者ばかりを）（そのほかは）（〔中君に通った〕）（昔をお思い出しになる）（子をお聞きになってお出かけになるにつけても）

九　どうしてこうまでと思うほど、心を合せて自分を伴ってくれた人（薫）に対して。以下、昔を思い出して、匂宮の自責の念。

一〇　いくら好色のお方とはいえ、とてもおできにならないお身の上なのに。

一一　普通なら牛車を用いる。服装は狩衣姿であろう。

一二　女にかけての好奇心は人一倍強いご性格なので。

一三　早く着けばいいのに。以下「あやしかるべけれ」まで、匂宮の心中。

一四　九条河原に臨んだ寺。（七巻東屋三三九頁注一四参照）

一五　山荘の勝手をよく知っているあちら（薫）のお邸の家来に、様子をよく訊いておいたので。

一六　夜番のいる方には近づかないで。

一七　葦を結って作った垣。水辺に近い田舎家の風情。山荘の西側から忍び入る。東側に出入りの門のある趣。

一八　寝殿の南座敷に燈火の明りがほの暗く透いて見え、さらさらと衣摺れの音がするのを。「寝殿の南面」は、寝殿の南側、表座敷。

一九　匂宮のお前に引き返して。

匂宮、宇治山荘に着く

やしきまで心をあはせつつ率てありきし人のために、（その好意を裏切ること）うしろめたきわざにもあるかな、（とになることだ）とおぼし出づることもさまざまなるに、（京の中で）京のうちだに、（も）むげに人知らぬ御ありきは、一〇さはいへど、えしたまはぬ御身にしも、（まるで誰も宮とは存じ上げぬお忍び歩きは）あやしきさまのやつれ姿（みすぼらしい様子のお忍びのいでたちで）して、一一御馬にておはすることも、（何となく恐ろしく気が咎めるけれども）ものの恐ろしくややましけれど、一二もののゆかしきかたは進みたる御心なれば、山深うなるままに、一三いつしか、いかならむ、（首尾はどうだろう）見あはす（女と逢うこと）ることもなくて帰らむこそ、（もなく帰るのだったら）さうざうしくあやしかるべけれ、（がっかりするし何のための苦労か分らない）とおぼすに、（気が気でない思いがなさる）心も騒ぎたまふ。一四法性寺のほどまでは御車にて、（お乗りになるのだった）それよりぞ御馬にはたてまつりける。

急ぎて、宵過ぐるほどに（山荘に）おはしましぬ。内記、案内（あない）よく知れるかの殿の人に問ひ聞きたりければ、一五宿直人（とのゐびと）ある方（かた）には寄らで、一七葦垣（あしがき）籠めたる（こ廻らした）西面（にしおもて）を、（そっと少しばかり破って）やをらすこしこぼちて入りぬ。（不案内だけれど）（まだはじめてのお邸なので）われもさすがにまだ見ぬ御住ひなれば、（人が大勢いるわけでもないので）たどたどしけれど、人しげうなどしあらねば、寝殿（しんでん）の南面（みなみおもて）にぞ、火ほの暗う見えて、そよそよとする音する、一九参り

一（匂宮は）そっとお上りになって。寝殿の南面の簀子に上るのである。

二 細い角材を四つ組みに組み合せ、内側に板を張ったもの。簀子と室内（廂の間）を仕切る。その板張りに穴があるのであろう。

三 篠竹で編んだ粗製の簾。田舎びた調度。普通の簾より音が高い。格子の外側に下げてあり、匂宮はその内側に入る。

四 几帳の帷も腕木に掛けて、押しやってある。格子の内側、廂の間にある几帳。穴をふさぐはずのもの。以下、匂宮の目に映る室内の光景。

五 女の童のかわいらしいのが、糸を縒っている。

六 何よりもあの時火影でご覧になった、まさにその顔である。東屋の巻に「西の方に例ならぬ童の見えけるを」（七巻三〇八頁）とあった。ただし火影のことは見えない。

七 咄嗟の見間違いかと。

八 あの時、右近と名乗っていた若い女房もいる。ただし、東屋の巻で「右近はいかにか聞こえさせむ」（三一一頁）と言ったのは、中の君づきの女房である。

九 きれを折りながら。きれの折り目に沿って裁ち縫いをする。

一〇 こうしてお移りあそばしたなら。後文によれば、浮舟の母が彼女を伴って石山詣でに赴くという前夜のこと（三三頁参照）。

一一 昨日、京から薫の使いのあった趣。

匂宮、垣間見

浮舟を見つける

（内記）まだ家の者は起きているようでございます　構わずこの葦垣の崩れからおいで下さい

て、「まだ人は起きてはべるべし。ただこれよりおはしまさむ」と、先に立って宮をお入れ申し上げる しるべして入れたてまつる。

一 やをら上りて、二 格子の隙あるを見つけて寄りたまふに、三 伊予簾は気がひける さらさらと鳴るもつつましく。あたらしきよげに造りたれど、さすがにあらあらしくて隙ありけるを、誰かは来て見む、ともうちとけて、穴もふさいでない ふたがず。四 几帳の帷うちかけておしやりたり。火明う燈して、もの縫ふ女房人三四人ゐたり。五 童のをかしげなる、糸をぞよる。これが顔、まづかの火影に見たまひしそれなり。六 うちつけ目かと、なほうたがはしきに、七 右近と名のりし若き人もあり。君は、かひなを枕にて、火をながめたるまみ、髪のこぼれかかりたる額つき、いとあてやかになまめきて、対の御方にいとようおぼえたり。

〔寝殿は〕新しくこざっぱりと建ててあるけれども　やはり

隙間があったのに　誰がやって来て覗こう　などと気を許して

この　まだ　女主人　腕　額の様子　とても気品があってあでやかで　中の君に大層よく似ている

灯を憂わしげに見ている目もと

子の顔立ちが　信じられないお気持だが

この右近、八 もの折るとて、「一〇 かくてわたらせたまひなば、とみにしもえ帰りわたらせたまはじを、殿は、この司召のほど過ぎて、朔日ころにはかならずおはしましなむ、と、一一 昨日の御使も申しけり。

そうすぐ　薫　司召の頃を過して　二月の初め頃にはきっとお出でになるであろう

にはお戻りになれませんでしょうに

一二 ちょうど（殿様がお出でになろうという）折も折、ふいと身をお隠しなさったようで、いけません。何か薫の待遇が不満ですねたようなのが見苦しい、と言う。

一三 ご身分がありますのに、何で、ご挨拶もなしにこっそりお出かけになれましょう。

一四 石山詣でであること後の三三頁に見える。

一五 そのまますぐこちらへお帰りなさいませ。「ね」は完了の助動詞「ぬ」の命令形。

一六（京の母君のお邸は）かえって落着かぬ他人の家のような気がすることでしょう。「旅」は、外泊の意。

一七 やはりもうしばらく、このままで（薫のお通いを）お待ち申しなさる方が。

一八 薫が、いずれ浮舟を京に迎えようと用意していることは、一三頁に見える。

一九 あの乳母殿が。「おとど」は、女房などを呼ぶ敬称。

二〇 にわかにこんなお参りを（母君に）お勧め申されたのでしょうよ。

二一「まま」は、乳母を親しみ呼ぶ語。

二二 お引き止めしきれなかったのでしょう。乳母の上京を引き止めるべきだった、と悔む。

御文にはいかが聞こえさせたまへりけむ（ご返事には何とお書き申されたのでございましょう）」と言へど、いらへもせず、いともの思ひたるけしきなり（ひどく物思いに沈んでいる様子である）。「をりしもはひ隠れさせたまへるやうならむが、見苦しさ」と言へば、向ひたる人（向い合った女房が）、「それは、かくなむわたりぬると、御消息聞こえさせたまへらむこそよからめ（のわけで出かけましたと お手紙で申し上げなさったらよろしゅうございましょう）。軽々しう、いかでかは、音なくてははひ隠れさせたまはむ。御物詣でのかようなお住いは心細いようですが）のちは、やがてわたりおはしましねかし。かくて心細きやうなれど、ご自分の思い通りに誰に気兼ねもないお暮しに馴れておいでなので）心にまかせてやすらかなる御住ひにならひて、なかなか旅ごこちすべしや」など言ふ。またあるは、「なほしばし、かくて待ちきこえさせたまはむぞ、のどやかにさまよかるべき（おだやかでかどが立ちませんでしょう）。京へなど迎へたてまつらせたまへらむのち、おだしくて親にも見えたてまつらせたまへかし（何の気兼ねもなく母君にもお目にかかるようになさいませ）。このおとどの、いと急にものしたまひて（とてもせっかちなお人で）、にはかにかう聞こえなしたまふなめりかし（じっと辛抱して気長にかまえている人の方が）。昔も今も、もの念じしてのどかなる人こそ、幸ひは見果てたまふなれ（結局は幸せになられると申します）」など言ふなり（言うらしい）。右近、「などて（どうして）、このままをとどめたてまつらずなりにけむ（年寄りは）。老いぬる人は、むつかし（しちめんどう）

一 そうそう（あの時も）邪魔した憎らしい婆さんがいたな。二条の院での出会いの時のこと（東屋三一〇頁、三一二頁、三一四頁参照）。

二 宮様（匂宮）の奥方。中の君のこと。

三 右大臣。夕霧。

四 ご大層に大騒ぎをして（匂宮の）婿扱いをしていらっしゃるようですが。夕霧の女六の君との縁組は、七巻宿木一七六頁、一八〇頁、一八八～一九〇頁、一九三～四頁に見えている。

五 若君がお生れになってからのちは、この上もないお有様でいらっしゃるそうです。匂宮の第一王子の母として重んじられていること。（宿木一四四頁参照）

六 こんなさし出た人たち。暗に乳母をさす。

七 うちのお殿様（薫）さえ。

八 （浮舟とて）中の君の幸福にひけをお取り申されることがありましょうか。

女房たち、中の君を話題にする

なことを考えるものですわね き心のあるにこそ」と憎むは、乳母やうの人をそしるなめり。げに（乳母といった人を悪く言うのであろう）（匂宮は）憎き者ありかし、とおぼし出づるも、夢のここちぞする。（夢かと思う気がする）

聞いていられないほど かたはらいたきまで、うちとけたることどもを言ひて、「宮の上（女房）二（内輪の話をいろいろ言い出したあげく）こそ、本当にお幸せなご運の方ですこと いとめでたき御幸ひなれ。三右の大殿の、あれほどすばらしいご威勢で さばかりめでたき御勢にて、四いかめしうののしりたまふなれど、五若君生れたまひて（中君には）のちは、こよなくぞおはしますなる。六かかるさかしら人どものおはせおあせりにならずに よく考えてお振舞になっていらっしゃるのでしょう で、御心のどかに、かしこうもてなしておはしますにこそはあめれ」（女房）と言ふ。「殿だに、七真実（浮舟を）大事にお思い申して下さることが変らないならば まめやかに思ひきこえたまふこと変らずは、八劣りきこえたまふべきことかは」と言ふを、君、すこし起きあがりて、（浮舟）

何の縁もない人になら まあなんて聞き苦しいことを 負けないようにとも何とでも思いまし「いと聞きにくきこと。よその人にこそ、劣らじともいかにとも思はめ、かの御ことなかけても言ひそ。漏り聞こゆるやうもあらば、（万一お耳に入るようなことでもあれば）（あのお方のことだけは決して口にしないで）

困ったことになりましょう かたはらいたからむ」など言ふ。

ほんとによく（中君に）似通った感じだな 何ばかりの親族にかはあらむ、九いとよくも似かよひたるけはひかな、と思ひくらぶるに、心はづかしげにてあてなるところは、かれ

気やすい真似などできないような気品のある点では 中の君

匂宮の興味募り、人々、やがて寝る

九 （中の君と）どの程度の親族なのだろう。以下「……いとをかしき」まで、匂宮の心中に即した文。

一〇 そこへもってきて、こうまですっかり顔をご覧になっては、どうかしてこの女を自分のものにしたい。河内本には、この次、「と心もそらになりたまひて」との間に「とわりなくおぼしまどひぬ。物へ行くべきなめり、親もあるべし、いかでかここならでまたはたづねあはむ、今宵のほどにはいかがすべき」という文章がはいる。

一一 明日朝早くにでも、これは縫えましょう。外出用の衣服を仕立てている趣。

一二 (母君の方で) いくらお急ぎになっても、お車はお昼頃になりましょう。京から迎えの車が来る趣。「日たく」は、日が高くなること。

一三 仮眠をとるといった様子で、隅の方に行って横になった。

一四 北廂。寝殿の北側にある奥向きの部屋。

匂宮、薫を装って部屋に入り込む

一五 ほかに手だてもないので。匂宮の気持を代弁したかたちの地の文。

一六 「声づくる」は、来訪を知らせるため、咳払いをすること。

格段にまさっている　浮舟　ただもう可憐で目鼻立ちの一つ一つの美しいところが何とも言はいとこよなし。これはただらうたげにこまかなるところぞいとをかしき。十人並みで　よろしう、どこか不揃いな具合の悪いところを見つけたにしたところでなりあはぬところを見つけたらむにてだに、これほど会いたいと思い詰めていらっしゃる女をばかりゆかしとおぼししめたる人を、当の本人と見て　それと見て、おとなしく引き下られるようなご気性ではないからさてやみたまふべき御心ならねば、一〇まして隈もなく見たまふに、いかでかこれをわ我を忘れておしまいになってがものにはなすべき、と心もそらになりたまひて、なおも見詰めていられなほまもりたまへば、右近、「いとねぶたし。昨夜もすずろに起き明かしてき。つとめてのほどにも、これは縫ひてむ。急がせたまふとも、御車は日たけてぞあらむ」と言ひて、しさしたるものどもとり具して、几帳にうちかけなどしつつ、一三うたた寝のさまに寄り臥しぬ。君もすこし奥に入りて臥す。右近は北面に行きて、しばしありてぞ来たる。君のあと近く臥しぬ。

ほんとに眠いこと　何やかやと夜明かしてしまいました　一二　しかけていた縫物をみな取り集めて　浮舟　裾の方に　南面に

ねぶたしと思ひければ、いととう寝入りぬるけしきを見たまひて、一五またせむやうもなければ、忍びやかにこの格子をたたきたまふ。右近聞きつけて、「誰そ」と言ふ。声づくりたまへば、高貴の人らしい咳払あてなるしは

匂宮は　右近は

一 よそへお出かけになるご予定だと、仲信が伝えたので。今しがた立ち聞きした話を、薫のふりをして、それらしくこしらえて言う。仲信は、薫の家司。大蔵の大夫（六四頁）、大内記道定の舅（七七頁）。その名を聞いて、右近はすっかり薫と思い込む。

二 格子の懸金を外して、開ける。

三 途中でひどく恐ろしいことがあったので、見苦しい姿になっている。盗賊などに襲われた、という口ぶり。

四 火を暗くしてくれ。ひどい姿を見せたくない、と言う。顔を見られないための口実。

五 もともとどこか似通っていらっしゃるお声を。匂宮と薫とは、本来血を分けた従兄弟。

明石中宮 ═══ 匂宮
今上 ═══ 女三の宮 ═══ 薫
柏木

六 ひどいことがあったとおっしゃったが、どんなご様子かしら。右近の気持。

七 大層ほっそりとして、なよやかなお召し物で。

八 よい匂いをさせていらっしゃることも（薫に）劣らない。薫の生得の芳香に負けまいと、匂宮も香をたきしめていることは、六巻匂兵部卿一七一頁に詳しい。

九 （匂宮は）浮舟の側に近づいて。

いと聞き分けて
ぶきと聞き知りて、殿（薫）のおはしたるにや（おいでになったのか）、と思ひて、起きて出でたり。（匂宮）「まづこれあけよ」（とにかくこの格子を開けよ）とのたまへば、（右近）「あやしう（おかしな）、おぼえなきほど（思いがけない時刻のお越しでございますこと）にもはべるかな。夜はいたう（ふけましたようでございますのに）ふけはべりぬらむものを」と言ふ。（匂宮）「もの（それは大変だと思って）へわたりたまふべかなりと、仲信が言ひつれば、おどろかれつる（そのままずぐ出てきたので）まに出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。（ほんとにひどいめにあった）まづあけよ」（とにかく開けよ）とのたまふ声、いとようまねび似せたまひて、（薫に）（そっくり似せなさった上に）忍びたれば、（低い声なので）思ひも寄らず、（右近は）かい放つ。（匂宮）「道にて、いとわりなく恐ろしきことのありつれば、あやしき姿になりてなむ。火暗うなせ」とのたまへば、（右近）「あないみじ」（まあ大変）とあわてまどひて、火は取りやりつ。（取りのけてしまった）「われ人に見すなよ。（匂宮）（私の姿を人に見せるなよ）来たりとて、（誰も起してはいけないといって）人おどろかすな」と、（全くよく知恵のまわるお方で）いとらうらうじき御心にて、もとよりもほのかに似たる御声を、（薫のご様子にそっくり似せてお入りになる）ただかの御けはひにまねびて入りたまふ。ゆゆしきことのさまとのたまひつる、いかなる御姿ならむ、といと（右近）ほしくて、われも隠ろへて見たてまつる。いと細やかになよなよと装束きて、香のかうばしきことも劣らず。近う寄りて、御衣ども脱

一〇 馴れ馴れしい様子で横におなりになるので。薫を装ってごく自然に振舞うそぶり。
一一 いつものご寝所にどうぞ。母屋の御帳台へとすすめる。前に「君もすこし奥に入りて臥す」とあった。
一二 (右近は仕方なく)夜具をお掛け申して。「衾」は、襟なしで、大きく仕立ててある(図録二参照)。
一三 浮舟たちの側から少しひき下がって。
一四 薫の家来衆は、いつも、浮舟方では接待せぬことになっているので。弁の尼のいる廊の方で世話をする習慣なのであろう。浮舟の存在を、なるべくおおっぴらにしないようにという配慮であろう。そこで、従者の違いに気づかれることもなくてすんだ。

浮舟、匂宮と知る

一五 お志の深い、夜更けのお越しですこと。無理算段して、ようやく来て下さったのですよ、という含み。
一六 そんなお殿様(薫)のお気持を、(浮舟は)お分りではないのですわ。
一七 あれほど人前を憚らねばならなかった所(二条の院)でさえ、無体なことをなさろうとしたお人だから。東屋三一〇〜三一四頁の事件のこと。
一八 あの時、ひどいと思ったこと。二条の院で、人々に妨げられて思いを遂げられなかったこと。
一九 匂宮も、なまじ逢ってかえってつらい思いで。

ぎ、馴れ顔にうち臥したまへれば、(右近)「例の御座にこそ」など言へど、[匂宮は]ものものたまはず。御衾参りて、寝つる人々起こして、すこし退きて皆寝ぬ。御供の人など、例の、ここには知らぬならひにて、(女房)「あはれなる夜のおはしましざまかな。かかる御ありさまを御覧じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、「あなかま、たまへ。夜声は、ささめくしもぞかしかましき」など言ひつつ寝ぬ。

女君は、あらぬ人なりけり、と思ふに、あさましういみじけれど、[匂宮は]声も立てさせなさらない声をだにせさせたまはず。いとつつましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。はじめよりあらぬ人と知りたらば、いかがいふかひもあるべきを、夢のここちするに、やうやう、そのをりのつらかりし、年月ごろ思ひわたるさまのたまふに、この宮と知りぬ。いよいよはづかしく、かの上の御ことなど思ふに、[浮舟は]ますます身もすくむ思いでまたたけきことなければ、限りなう泣く。宮もなかなかにて、たは[今後]やすく逢ひ見ざらむことなどをおぼすに、泣きたまふ。

誰か違う人なのだ
ひそひそ言うのがかえって耳に立つものよ
訳知りめいたことを言う女房もあるが(右近)黙って
静かになさい
あまりのことに驚き呆れるけれど
何とも言いようのない仕儀だ
最初から違う人と分っていたならば
何とかあらがうすべもあっただろうに
[浮舟は]夢を見ている思いだが
年が変っても思い続けて来たことをおっしゃるので
[浮舟は]ますます身もすくむ思いで
匂宮だと
ほかにどうすることもできぬ身とて
ただもう泣くばかり
やすく逢えそうもないことなどをお考えになるとせつなくて

翌朝、匂宮帰らず　右近、匂宮と知る

一 出立の用意を告げる咳払い。

二 今後また（宇治に）お出でになることも、むつかしいので。

三 何ごとも、生きている間だけのことなのだ。「恋ひ死なむ後は何せむ生ける日のためこそ人は見まくほしけれ」（『拾遺集』巻十一恋一、大伴百世。『古今六帖』四、恋。原歌は『万葉集』巻四。巻十一にも類歌がある）

四 歌の文句ではないが、本当に恋死しそうに思われなさるので。

五 前夜、大内記と共にお供に従った匂宮の腹心の家来。（二二頁注七参照）

六 私（匂宮）は、山寺にお忍びで参籠だ。今夜も帰京しない口実を授ける。

七 こうなっては、いくらあたふたしたところで。「おぼほれ」は「溺れ」。以下、右近の思案。

八 あの、思いもかけぬことのあった折に。二条の院でのこと。

九 今日、お迎えの車が来るということでございましたのに。前に「急がせたまふとも、御車は日たけてぞあらむ」（二七頁）とあった。以下、匂宮に向って、何とかして引き揚げさせようとして言う。

夜はただ明けに明く。（どんどん明けてゆく）御供の人来て声づくる。（浮舟の方に）右近聞きて参れり。（匂宮は）お帰りになる気もなさらず出でたまはむここちもなく、飽かずあはれなるに、（心からいとしく思われるのに）またおはしまさむことも難ければ、京にはもとめ騒がるとも、（行方を探され騒がれようとも）今日ばかりはかくて（帰らずに）あらむ、何ごとも生ける限りのためこそあれ、ただ今出でおはしまさむは、（お帰りになろうとい逗留しようう）まことに死ぬべくおぼさるれば、この右近を召し寄せて、（やって来た右近をお側に呼ばれて）「いとここちなしと思はれぬべけれど、（とても帰れそうにない気持だ）今日はえ出づまじうなむある。（匂宮）全く無分別な仕業と思われるかもしれないが男どもは、（従者たち）このわたり近からむところに、（この辺の近い所に）よく隠ろへてさぶらへ。（うまく隠れて控えておれ）時方は、（京へ戻って）京へものして、山寺に忍びてなむ、とつきづきしからむさまに、（適当に返事などをせよい繕って）いらへなどせよ」とのたまふに、（右近は）いとあさましくあきれて、（あまりの意外さに呆然とし不注意だった）心もなかりける夜のあやまちを思ふに、（昨夜の自分の失態を考えると）ここちもまどひぬべきを、（気もおかしくなりそうなのを）思ひしづめて、（じっとこらえて）今はよろづにおぼほれ騒ぐとも、（どうしようもないば）かひあらじものから、なめげなり、（失礼に当るかりか）あやしかりしをりに、いと深うおぼし入れたのから、（匂宮にも）りしも、（こんな破目になる避けられぬたのも）かうのがれざりける御宿世にこそありけれ、（ご宿縁だったのだすくせ）人のしたるわざかは、（誰が悪いというわけでもない）と思ひなぐさめて、（気を取り直して）「今日御迎へにとはべりしを、（右近）いかに（それをど）

一〇 やはり今日のところはお引き取り下さいまして、お気持がございますれば、改めてごゆっくりと（お出で下さいませ）。

一一 私は、このところずっと（浮舟のことを）思い詰めたあげく、何も分らなくなっているので。「ほる」は、知覚を喪ってぼんやりした状態をいう。

一二 （京への）お返事には、今日は物忌で（出かけられない）とでも言うがよい。「物忌」は、陰陽道で、凶事を避けるために身を慎んで家の内に籠ること。

一三 さきほど合図をして帰京を促した人に。「御供の人来て声づくる」とあった、その人。後文によれば、大内記である。

一四 （宮様は）かようかよう仰せですが。今日は帰らぬと言った匂宮の言葉を伝える。

一五 いくら宮様がそうお望みになりましても、あなた方お付きのご家来衆の一存で決ることでしょう。

一六 どうしてこう考えもなしに（こんな所まで）ご案内申すことがありますか。「こそ」は強意の助詞。

一七 ご無礼な振舞に及ぶ山家の者などがおりましたら。匂宮が、途中盗賊に遭ったなどと嘘を言ったのも、難なく信じられたほど、宇治への道中は危険な所。

右近、時方らを叱る

せさせたまはむとする御ことにか。かうのがれきこえさせたまふまじかりける御宿世は、いと聞こえさせはべらむかたなし。をりこそいとわりなくはべれ。なほ今日は出でおはしまして、御心ざしはべらば、のどかにも」と聞こゆ。およすけても言ふかな、とおぼして、

（こうしておのがれ申すすべもおありでなかったのようにあそばすお積りなのでございましょう）
（ご宿縁のほどは）
（もはや何とも申し上げるすべもございません）
（でもちょうど具合の悪い時でございます）

（匂宮）一一「われは、月ごろ思ひつるに、ほれ果てにければ、人のもどかむも知られず、ひたぶるに思ひなりにたり。すこしも身のことを思はば、

（匂宮は）一一人前な口をきくことだ
（世間がどうそしろうと）
（もかまわない）
（向う見ずな気持になってしまっている）
（少しでもわが身のことを考えるならば）

かからむ人の、かかるありきは思ひ立ちなむや。一三御返りには、今日は物忌など言へかし。人に知らるまじきことを、誰がためにも思へかし。異事はかひなし」とのたまひて、この人の、世に知らずあはれにおぼさるるままに、よろづのそしりも忘れたまひぬべし。

（私ほどの身分の者が）
（こんな危ない遠出など思いついたりしようか）
（人に感づかれないような算段を）
（どちらのためにも考えるのだ）
（浮舟）
（ほかの事は一切無用だ）
（またとなくかわいいと思われなさるお気持にまかせて）
（どんな非難も忘れておしまいになりそうだ）

（部屋を）一二右近出でて、一三このおとなふ人に、（右近）一四「かくなむのたまはするを、なほいとかたはならむ、とを申させたまへ。あさましうめづらかなる御ありさまは、一五さおぼしめすとも、かかる御供人どもの御心にこそあらめ。一六いかで、かう心幼うは率てたてまつりたまふこそ。一七なめげ

（それは）
（やはり大層見苦しいことでは）
（ときつくお諫め申して下さい）
（あきれるばかり目にも余る宮様のなさりようですが）

一（匂宮が）時方とお呼びであったのは、どなたですか。こうこうの仰せです。先の「時方は、京へものして……」（三〇頁）とあった匂宮の命令を伝える。

二 あなたのお叱りがいろいろ恐ろしいので。「勘ふ」は「勘ふ」（叱り責める）の「ウ」表記。

三（山荘の）夜番の者も皆起き出してくる様子だ。

四 お殿様（薫）は、ある訳があって、大層人目を避けておいでのご様子を拝見いたしますと。匂宮を人目につかせぬ口実。

五 お召し物なども、夜になって内々に（京のお邸から）こちらへ持参するように、仰せになりました。昨夜の匂宮の作りごとを拝借。

六 年輩の女房たち。

七 木幡山は大層恐ろしい山だそうですよ。「恐ろしかなる」は「恐ろしかるなる」の音便「恐ろしかんなる」の撥音無表記の形。「木幡山」は、六巻椎本三二八頁参照。

八 いつものように、お前払いもおさせにならず、お忍びでいらしたでしょうに、まあ大変。

九 下々の者が、ちょっとでも耳にしたら、大ごとになりましょう。たちまち噂が広まって、醜態を天下に晒すことになる。

右近の画策

なることを聞こえさする山がつなどもはべらましかば、いかならまし」と言ふ。内記は、げにいとわづらはしくもあるかな、と思ひ立てり。「時方と仰せらるるは、誰にか。さなむ」と伝ふ。笑ひて、「勘へたまふことどもの恐ろしければ、さらずとも逃げてまかでぬべし。まめやかには、おろかならぬ御けしきを見たてまつれば、誰も誰も身を捨ててなむ。よしよし、宿直人も皆起きぬなり」とて急ぎ出でぬ。

（どんなことになりますやら）（大内記）（いかにも本当に面倒なことになっている（右近））（と思って立つ）（〔時方は〕苦笑いして）（〔京へ〕帰りましょう）（宮の仰せがなくとも）（〔匂宮の〕並々ならぬご執心のご様子をお見受け申したので）（実のところは）（命がけでお供したのです）（まあよい）（急いで帰って行った）

右近、人に知らすまじうはいかがはたばかるべき、とわりなうおぼゆ。人々起きぬるに、「殿は、さるやうありて、いみじう忍びさせたまふけしき見たてまつれば、道にていみじきことのありけるなめり。御衣どもなど、夜さり忍びて持て参るべくなむ、仰せられつる」など言ふ。御達、「あなむくつけや。木幡山は、いと恐ろしかなる山ぞかし。例の、御前駆も追はせたまはず、やつれておはしましけむに、あないみじや」と言へば、「あなかま、あなかま。下衆

（誰にも感づかれないようにするにはどうごまかしたらよかろうか）（途方にくれている）（（右近））（女房たち）（まあ気味の悪いこと）（途中で大変恐ろしいことがあったご様子です）（（右近））（静かに）（静かに）

一〇 長谷寺（大和の国磯城郡初瀬）の本尊十一面観音。浮舟が何度も参詣して加護を祈願していること、七巻東屋三一五頁の乳母の言葉にも見える。

一一 大層な願。盛大なお礼参りを約束する願。諧謔の筆致。

一二 実は、今日（浮舟を）石山にお参りさせようとして、母君が迎えの車を差し向けることになっていたのだった。「石山」は、滋賀県大津市の石山寺。本尊は如意輪観音。今日の外出の目的を説明する。

一三 仏事、神事の前に、心身の穢れを浄めるため、さまざまの禁忌を守ること。「精進」の撥音無表記。

一四 母屋と廂の間との間仕切りの簾。

一五 重い物忌の時には、小さい木札や白紙に「物忌」と書いて簾などに付ける。

物忌と偽る

一六 夢見が悪かった。それで災厄を避けるため、厳重に物忌をする、というわけ。母君にも逢わせぬ口実。

一七 洗面の水や道具を（匂宮に）さし上げる様子は、いつもと（薫の場合と）変らないのだけれども。

一八（右近一人の）介添を不満に思われて。

一九 あなたがお洗いになったら（そのあとで私が）。

二〇 次の、浮舟の気持の傾斜に応じた呼び方。

二一 一分の隙もなく奥ゆかしい人。薫のこと。

二二 片時も一緒にいられなかったら、死んでしまいそうだと、恋に身を灼かれるお方。匂宮のこと。

などの、ちりばかりも聞きたらむに、いといみじからむ」と言ひ（口にはする）ぬべし、とおぼしこがるる人を、心ざし深しとは、（こういうのを言うので）かかるを言ふに

たるここち恐ろし。あやにくに殿の御使のあらむ時、いかに言はむ（何と言い逃れようと）と、「初瀬の観音、今日事なくて暮らしたまへ」と、大願をぞ立てける。

（右近）

石山に今日詣でさせむとて、母君の迎ふるなりけり。（ここの女房たちも）この人々もみな精進し、きよまはりてあるに、（潔斎して用意していたのに）「さらば、今日はえわたらせたまふまじきなめり。（とてもお出かけにならるのは無理でしょう）いとくちをしきこと」と言ふ。

日高くなれば、格子などあげて、右近ぞ近くてつかうまつりける。（寝殿の）（端から端まで下ろして）母屋の簾は皆おろしわたして、「物忌」など書かせてつけたり。（母君がもしやご自身出向いておいでかと案じて）君もやみづからおはするとて、夢見さわがしかりつ、（皆の手前を偽るのだった）と言ひなすなりけり。御手水など参りたるさまは、（お側近くに控えてお世話申し上げた）例のやうなれど、まかなひめざましうおぼされて、「（匂宮）そこに洗はせたまはば」とのたまふ。女、（見馴れていたのに）いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、時の間も見ざらむに死

やあらむ、と思ひ知らるるにも、あやしかりける身かな、誰も、もの聞こえあらば、いかにおぼさむと、まづかの上の御心を思ひ出できこゆれど、知らぬを、「かへすがへすいと心憂し。なほあらむまにのたまへ。いみじき下衆といふとも、いよいよなむあはれなるべき」と、わりなう問ひたまへど、その御いらへは絶えてせず。異事は、いとをかしくけぢかきさまにいらへきこえなどして、なびきたるを、いと限りなうらうたしとのみ見たまふ。

日高くなるほどに、迎への人来たり。車二つ、馬なる人々の、例の、荒らかなる七八人、男ども多く、例の、品々しからぬけはひ、轉りつつ入り来たれば、人々かたはらいたがりつつ、「あなたに隠れよ」と言はせなどす。右近、いかにせむ、殿なむおはする、と言ひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせず、おのづから聞きかよひて、隠れなきこともこそあれ、と思ひて、この人々にも、とに言ひ合はせず、返りこと書く。

一 不思議な廻り合せの身の上だこと、どなたも（薫も中の君も）、このことをお耳になさったら、何とお思いだろうと。浮舟の思い。

二 匂宮は（そうした浮舟の気持が）分らないので。

三 何と言ってもひどく情けない。浮舟が素姓を明かそうとしないのに不満を述べる。

四 たとえどんなに身分の低い生れであっても。

五 そのお返事だけは（素姓を明かすことは）どうしてもしない。

六 宮の言うなりになっているのを。

七 牛車が二輛、騎馬の人々が、いつもと同じく、荒荒しい感じの七、八人。宿木二五七頁の初瀬詣での帰途の一行についても「荒ましき東男」とあった。

迎えの車来る　右近言いくるめて返す

八 供廻りの従者たちは大勢で。道中堅固の体。

九 毎度のことながら、田舎びた様子で、東国訛りでしゃべりながら（邸内に）入って来たので。「轉る」は、意味もよく分らぬ方言をしゃべること。前出宿木にも、「声うちゆがみたる者」（二五七頁）とあった。

一〇 女房が直接言うのでなく、下働きの者を通じて伝えさせるので、こう言う。

一一 どうしたものか、お殿様（薫）がご来訪中だ、といった場合。以下「隠れなきこともこそあれ」まで、右近の思案。

一二 昨夜から月の障りになられまして、（お参りできなくなったのを）大層残念がって、お嘆きのご様子でしたのに。神仏は血の穢れを忌むので、月事の女は参詣しないところから、口実にする。以下、右近が母君に書く返事。

一三 昨夜、いやな夢をご覧になりましたので。「今宵」は、今し方明けた夜をさす。

一四 何かがまるで邪魔だてしているように存じ上げています。「もの」は、妖怪、怨霊など魔性のもの。

一五 弁の尼。廊に住む。この人も寝殿に寄せつけないようにする。

一六 霞の立ちこめる山裾を見やっては物思いに沈んでいられるのに。前に右近の手紙にも「かくてのみつづくとながめさせたまふ……」（一六頁）とあった。

匂宮、浮舟、たがいに惹かれる

一七 だんだん日が暮れてゆくのはたまらないと、それば かり気に病んでいらっしゃるお方。別れの時の迫るのに焦慮する匂宮のこと。

一八 いつまで見ていても見飽きず、どこ一つ難があると思われるところもなく。匂宮の目に映る浮舟の美質。「春霞たなびく山の桜花見れども飽かぬ君にもあるかな」（『古今集』巻十四恋四、題しらず、友則。『古今六帖』五、二人をり）

一九 しかし実のところ、あの中の君には似ているけれども劣っている。浮舟を比較評価する地の文。

二〇 夕霧右大臣の姫君。六の君。匂宮の正室。

昨夜より穢れさせたまひて、いとくちをしきことをおぼし嘆くめりしに、今宵夢見さわがしく見えさせたまひつれば、今日ばかりつつしませたまへとてなむ、物忌にてはべる。かへすがへすくちをしく、ものの（今日一日はお身をお慎みなさいませと申して）さまたげのやうに見たてまつりはべる。

[迎えの] 食事

と書きて、人々にものなど食はせてやりつ。尼君にも、「今日は物忌にて、[京へは] わたりたまはぬ」と言はせたり。

[浮舟は] いつもは時間を持てあましてしまって

例は暮らしがたくのみ、霞める山際をながめわびたまふに、暮れ行くはわびしくのみおぼし焦らるる人にひかれたてまつりて、いとはかなう暮れぬ。まぎるることなくのどけき春の日に、見れども見れども飽かず、そのことぞとおぼゆる隈なく、愛敬づきなつかしくをかしげなり。さるは、かの対の御方には似劣りなり。大殿の君の女盛りにはなばなとお美しいお側に並べたら

自然と釣りこまれ申して

知らぬ

誰に妨げられることもないのんびりした

愛らしくてやさしく

女らしい風情がある

さかりに匂ひたまへるあたりにては、こよなかるべきほどの人を、今はただもう夢中になっていらっしゃる時とて

お話にもならないほどの人なのに

まだ出会ったこともないすばらしい女とご覧に

たぐひなうおぼさるるほどなれば、また知らずをかしとのみ見たまふ。女はまた、大将殿を、いときよげに、またかかる人あらむやと

なる 浮舟 薫

とてもすっきりして 世間にこのような方はまたあるまい

一（宮は）硯を引き寄せて、手すさびに歌などお書きになる。「手習」は、心に浮ぶままに歌の文句など書くこと。

二 絵なども趣ありげにお描きになるので。後文のように人物画である。男女の人物を配した物語絵を、当時の若い女性が好んだことは、七巻総角八六〜八七頁や同東屋三二〇頁の記述などでも知られる。

匂宮、手習に絵を描き、歌を詠み交わす

三 美貌の男と女が、一緒に添い寝をしている絵をお描きになって。自分たちを物語の主人公になぞらえた趣。（図録一参照）

四 二人の仲は末長くと約束しても、やはり悲しいのは、ただ人の命は明日をも知らぬはかないものだからなのです。

五（しかし）思うままにやって来ることなど全然できないで、あれこれと無理な算段をしなければならないことを思うと、本当に死んでしまいそうな気がする。「まことに……」は、歌の「明日知らぬ命……」が念頭にある。

六 冷たいおあしらいだったのに。二条の院では思いを遂げられず、そのまま浮舟の所在が分らなかったのを、こう言う。

七 墨でお濡らしになった筆。返歌を促す体。

八 人の心を変りやすいものと悲しんだりしないでしょうに、命だけが移ろいやすいこの世と思うのでした

と思っていたが　お顔立ちが整って輝くようなお美しさの点では　〔宮は〕この上もなくていらっしゃると思う

見しかど、こまやかにほひきよらなることは、こよなくおはしけりと見る。

硯（すずり）ひき寄せて、手習（てならひ）などしたまふ。いとをかしげに書きすさび、絵（ゑ）などを見所（みどころ）多く描（か）きたまへれば、若きこころには、思ひも移りぬべし。「心よりほかに、え見ざらむほどは、これを見たまへよ」とて、いとをかしげなる男女（をとこをんな）、もろともに添ひ臥（ふ）したる画（かた）を描きたまひて、「常にかくてあらばや」などのたまふも、涙落ちぬ。

大層お上手にお筆を走らされ　若い女としては　気持も移ることであろう　〔匂宮〕思うにまかせず　来られないような時には　この絵を見ていて下さい　〔匂宮は〕いつもあなたとこうしていたい

〔匂宮〕四「長き世をたのめてもなほかなしきは
ただ明日（あす）知らぬ命なりけり

全くこんなことを思うなんて縁起でもない

いとかう思ふこそゆゆしけれ。五心に身をもさらにえまかせず、よろづにたばからむほど、まことに死ぬべくなむおぼゆる。六つらかりし御ありさまを、なかなか何に尋ね出でけむ」などのたまふ。女、濡らしたまへる筆を取りて、

なまじどうして見つけ出したりしたのだろう

〔浮舟〕八心をばなげかざらまし命のみ

ら。もう今から来られないことを言い訳する匂宮を怨む趣。

九 もし心変りでもしたら怨めしく思うのだな、と（この歌を）ご覧になるにつけても、かわいくてならない。匂宮の思い。

一〇 どんな人の心変りを経験して（こんな歌を詠むのですか）。

一一 本人の口から言わせたいとは、困ったものです。匂宮の蕩児ぶりをからかい気味に言う草子地。

一二 時方。「大夫」は、五位の者の通称。時方の叙爵のことは「蔵人よりかうぶり得たる……」として、二二頁に見える。今朝、宮の命で京に帰った（三〇頁参照）。

一三 明石の中宮からも（匂宮の安否を問う）お使いが（二条の院に）参りましたし。

一四 人目をお忍びのお出歩きは、全くど身分柄いかがかと存じます上に、失礼なこともあるかもしれませんのに。宮とは分らないので、無礼を働く者がいるかもしれないという。以下「……いとからき」まで、夕霧の苦情。

一五 （宮様は）東山へ聖に会いに行かれたと。先に、匂宮からの「山寺に忍びてなむ、と……いらへなどせよ」（三〇頁）との命に応じたもの。「聖」は、山野に籠って修行する私度僧。

時方、帰参

さだめなき世と思はましかば

とあるを、変らむをばうらめしう思ふべかりけり、と見たまふにも、いとらうたし。（匂宮）「いかなる人の心がはりを見ならひて」など、ほほ（にやに）ゑみて、大将（薫）のここにわたしはじめたまひけむほどを、（宇治）かへすがへすゆかしがりたまひて、問ひたまふを、苦しがりて、「え言はぬことを、かうのたまふこそ」と、うち怨じたるさまも、若びたり。おのづからそれは聞き出でてむ、とおぼすものから、言はせまほしきぞわりなきや。

夜さり、京へつかはしつる大夫参りて、右近に会ひたり。「后の宮よりも御使参りて、右の大殿もむつかりきこえさせたまひて、人に知られさせたまはぬ御ありきは、いと軽々しくなめげなることもあるを、すべて、内裏などに聞こしめさむことも、身のためなむいとからき、といみじく申させたまひけり。東山に聖御覧じに、となむ、人にはものしはべりつる」など語りて、「女こそ罪深うおは

（浮舟を）移し住ませなさった最初のいきさつを（浮舟は）つらがって（時方）

一 何のかかわりもないはたの者まであたふたさせなさって。時方自身のこと。「顕証」は、はたから見ること。

二 （浮舟のことを）聖とまでお呼び申して下さったのですから、上出来ですわ。「東山に聖御覧じに……」をからかって切り返したもの。

三 ご家来の嘘つきの罪。仏教では、殺生、偸盗、邪淫、妄語、飲酒を五悪とする。ここまでは軽口。

四 ほんとに、何とも困ったご料簡は、一体どうしてそんなお癖がおつきになりましたのやら。お付きの者が悪いと当てこする。

五 無鉄砲なお出かけでしたこと。女の側の女房に、内々通じずに事を行うとは考えがない、と言う。

六 （右近は）お前に参上して、「しかじかでございます」と、（時方の報告を）その通り言上すると。

右近、時方の復命を言上　匂宮、思い悩む

七 身軽に動ける身分の殿上人ぐらいで、しばらくいたいものだ。「殿上人」は、四位、五位で、殿上の間詰め。

八 こんなふうに（夕霧など）憚るべき世間の目も。

九 その上、何とやら、世間の言いぐさに言うこともあるから。以下の文意によれば、「自分のことは棚に上げて他人の行為を咎める」といったこと。

一〇 あなた（浮舟）を放っておいた自分（薫）の失態も棚に上げて、（あなたが）怨まれなさるのまでが心

しゃるものですね

するものはあれ。すずろなる顕証の人をさへまどはしたまひて、そ

もせぬ嘘までつかせなさることよ

らごとをさへせさせたまふよ」と言へば、（右近）「聖の名をさへつけきこ

それで帳消しになさいますこ

えさせたまひてければ、いとよし。私の罪も、それにてほろぼした

とでしょう

まふらむ。まことに、いとあやしき御心の、げにいかでならはせた

（それでも）早くからこうしてお越しあそばすと承っておりましたにしても

まひけむ。かねてかうおはしますべしとうけたまはらましにも、い

分恐れ多いことですから

とかたじけなければ、たばかりきこえさせてましものを、奥なき御

よしなにお取り計らい申し上げましたでしょうに

ありきにこそは」と、あつかひきこゆ。

とやかく口出し申し上げる

六 参りて、さなむ、とまねびきこゆれば、げにいかならむと、おぼ

本当にどんな騒ぎだろうと　想像な

さると

しやるに、「所狭き身こそわびしけれ。軽らかなるほどの殿上人な

（匂宮）　自由のきかぬ身がいやになる

どにてしばしあらばや。いかがすべき。かうつつむべき人目も、え

どうしたらよかろう

憚りあふまじくなむ。大将もいかに思はむとすらむ。さるべきほど

とても構っていられない　薫　どのように思うことだろう　親しいのは当然の叔父甥の間柄とはいえ

とは言ひながら、あやしきまで、昔よりむつましき仲に、かかる心

親しい仲だったのに　不思議なほど　こんな背信の行為が知られたならば

の隔ての知られたらむ時、はづかしう、またいかにぞや、世のたと

顔向けならないし

ひに言ふこともあれば、待ち遠なるわがおこたりをも知らず、怨み

配だ。

一一 気ぶりにも人にお気づかれにならぬようにして。「人」は、暗に薫をさす。

一二 今日で三日めになる。

一三 (宮様の)魂は、女の袖の中にお残しになったことでしょう。魂も抜けたさまでお帰りのことでしょう。「飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなきここちする」(『古今集』巻十八雑下、女友達と物語して、別れてのちにつかはしける　陸奥)。草子地。

一四 (匂宮は)妻戸のもとに、ど一緒に(浮舟を)連れ出しなさって。共に外を見やる体。

一五 またとなく踏み迷うことだろう、悲しみにくれる私の先に立つ涙―まず流れ出る涙も、道をかきくらし見えなくするので。

一六 涙さえ、人数ならぬ身の私の狭い袖にせき止めきれませんのに、どうして宮様をお引き止め申すことができましょう。

一七 それぞれが身につける着物も冷えきってしまった気がして。「東雲のほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき」(『古今集』巻十三恋三、題しらず、読人しらず)。「東雲」は、東の空が白む時刻。「おのがきぬぎぬ」は、今まで共寝の上に重ねていたそれぞれ自分の着物を着ること。

匂宮、別れを惜しみつつ、帰京

られたまはむをさへなむ思ふ。[一二]夢にも人に知られたまふまじきさまにて、ここならぬ所に率て離れたてまつらむ」(ここ以外の所に／お連れ出し申そう)とぞのたまふ。今日[一三]さへかくて籠りゐたまふべきならねば、出でたまひなむとするにも、袖のなかにぞとどめたまひつらむかし。

夜の明けきらぬうちにと　お供の人々は咳払いをしておせかし申し上げる

明け果てぬさきにと、人々しはぶきおどろかしきこゆ。妻戸にも[一四]ともに率ておはして、(お帰りになろうとするにつけても／なかなかお出ましになれない)え出でやりたまはず。

(匂宮)[一五]世に知らずまどふべきかな先に立つ

涙も道をかきくらしつつ

(この上もなく切ない思いでいっぱいだった)女も、限りなくあはれと思ひけり。

(浮舟)[一六]涙をもほどなき袖にせきかねて

いかに別れをとどむべき身ぞ

風の音もいと荒ましく(荒々しく)、霜深き暁に[一七]、おのがきぬぎぬも冷やかになりたるここちして、(匂宮は)御馬に乗りたまふほど、(あと戻りしたいほどにつらくお思い)引き返すやうにあさましけれど、(内記や時方)御供の人々、いとたはぶれにくし(ほんとに冗談じゃない)、と思ひて、(ひたすら一行)ただいそ

一 大内記と時方。大内記は、本来正六位上相当だが、後の五一頁に式部の少輔（従五位下相当）を兼ねるとある。時方は、前に「大夫」と呼ばれていた。

二 険しい山路を越えきって（ひとまず安心と）。木幡の山越えである。

三 水際の氷を踏み鳴らす馬の足音も。宇治の風物。（六巻橋姫二七三頁注九参照）

四 不思議な縁に結ばれた宇治の里であることよ。

五 中の君が、ほんとに水臭いことに（浮舟のことを）お隠しになっていたのも、恨めしいので。このこと、この巻の冒頭部分（一一〇～一二頁）に見える。

匂宮、二条の院に帰り、中の君を怨む

六 気楽なご自分のお部屋。二条の院の寝殿。

七 中の君のいる西の対。

八（中の君は）何があったともご存じなく、とてもすっきりしたお姿でいらっしゃる。

九（匂宮は）またとなく美しいとご覧になった人（浮舟）よりも。以下、中の君と浮舟を思い比べる匂宮の心中。

一〇 御帳台に入ってお寝みになる。

一一 私の方で、どんなに深く愛していても、先立ったりしたら。「見置い」は「見置き」のイ音便。あとに残して置く意。

がしにいそがし出づれば、（匂宮は）魂も抜けた有様でご出立になったわれにもあらで出でたまひぬ。一この五位二人なむ、（匂宮の）御馬の口（口取りにご奉仕していた）にはさぶらひける。二さかしき山越え出でてぞ、（二人は）おのおの馬には乗る。三みぎはの氷を踏みならす馬の足音さへ、心細くもの悲し。昔もこの道にのみこそは、（宇治への恋路にだけは）かかる山踏みはしたまひしかば、四あやしかりける里の契りかな、とおぼす。

（険しい山路を踏み分けて通われたことなので）

（匂宮は）二条の院におはしまし着きて、女君のいと心憂かりし御もの隠しもつらければ、六心やすき方に大殿籠りぬるに、（一人寝は）寝られたまはず、いとさびしきに、もの思ひまされば、心弱く（折れて）対にわたりたまひぬ。七何心もなく、いときよげにておはす。八めづらしくをかしと見たまひし人よりも、（中の君）またこれはなほありがたきさまはしたまへりかし、と見（やはり世間に滅多とない美しい方でいらっしゃることよ）たまふものから、（浮舟が）いとよく似たるを思ひ出でたまふも、（大層よく似ていたのを思い出されるにつけても）胸ふたがれば、（胸が一杯になるので）九いたくものおぼしたるさまにて、（中の君）御帳に入りて大殿籠る。一〇女君をも率て入りきこえたまひて、（中にお誘い申し上げなさって）「ここちこそいとあしけれ。いかならむとするにかと、（気分がひどく悪いのです）心細くなむある。一一まろは、いみじくあはれと見

（どうなることかと）（心細くてなりません）

置いたてまつるとも、御ありさまはいととく変りなむかし。人の本意はかならずかなふなれば」とのたまふ。けしからぬことをも、まめやかにさへのたまふかな、と思ひて、「かう聞きにくきことの漏りて聞こえたらば、いかやうに聞こえなしたるにか、と人も思ひ寄りたまはむこそ、あさましけれ。心憂き身には、すずろなることもいと苦しく」とて背きたまへり。宮も、まめだちたまひて、「まことにつらしと思ひきこゆることもあらむは、いかがおぼさるべき。まろは、御ためにおろかなる人かは。人も、ありがたしなど、とがむるまでこそあれ。人にはこよなう思ひおとしたまふべかめり。たれもさべきにこそは、とことわらるるを、隔てたまふ御心の深きなむ、いと心憂き」とのたまふにも、宿世のおろかならで、尋ね寄りたるぞかし、とおぼし出づるに、涙ぐまれぬ。まめやかなるを、いとほしう、いかやうなることを聞きたまへるならむ、とおどろかるるに、いらへきこえたまはむこともなし。ものはかなきさまにて見

一三 あなたのお身の上はすぐ変ってしまうのでしょうね。私の死後は薫と結ばれるのだろう、という。

一三 人の一念は、必ず叶うということですから。自分が望みを遂げたにつけて、中の君と薫の間柄を疑って言う。

一四 私のような、もともと不仕合せな者には、つまらない冗談でも、とてもつろうございます。

一五 背をおむけになる。

一六 世間の人も、めったにないことだなどと咎め立てするほどなのです。

一七 (それなのに) 誰かさんよりは格段に軽く見ていられるようです。下に、浮舟のことを知らさなかったことを含めて言う。

一八 人は誰でも、それぞれこの世ならぬ深い宿縁で繋がっているのだ、と頭では分るのですが。

一九 自分 (匂宮) と浮舟の宿縁。

二〇 (宮のご様子が) ただごとではないので。以下、匂宮の涙を見ての中の君の思い。

二一 正式の婿入りといったかたちでなく私のもとにお通いになるようないきさつだったため、何ごとにつけても (私を) 軽々しく振舞うものと (薫とも簡単に付き合うものと) 推し量りなさるのであろう。

一 何の縁もない人（薫）を中に立て、そんな人の好意を、身にしみてありがたく受け入れたりするようになったこちらの到らなさゆえに。薫の仲立ちや後見に頼ったために。「すずろなる人」は、結婚の世話などする筋合でもない人。

二 （その悲しみのご様子は）一層かわいい感じがなさる。ここから、匂宮の側に立った文脈。

三 あの人（浮舟）を見つけたことは、しばらく（中の君に）お教えすまい、と（匂宮は）お思いなので。

四 ほかのこと（薫のこと）と思わせてお怨みになるのを。

五 一体何があったのか、事の実否を確かめないうちは、宮に顔をお合せするのも気がひける思いがする。中の君の気持に即した地の文。

六 明石の中宮。昨日も、二条の院へ問い合せの使いがあった。

母中宮よりお見舞

七 昨日お見えでありませんでしたが。以下、明石の中宮よりの文面。

八 ご気分がお悪かったとのこと。昨日、東山の聖のもとに行ったと触れられたのが、加持祈禱のためと解されていたのであろう。

九 （どんなに悪いのかと）大げさに心配して頂くのも困るけれども。

そめたまひしに、何ごとをも軽らかにおしはかりたまふにこそはあらめ、すずろなる人をしるべにて、その心寄せを思ひ知りはじめなどしたるあやまちばかりに、軽くあしらわれるわが身なのだおぼえ劣る身にこそ、とおぼしつづくるも、よろづ悲しくて、いとどらうたげなる御けはひなり。かの人見つけたることは、しばし知らせたてまつらじ、とおぼせば、異ざまに思はせて怨みたまふを、〔中君は〕ただこの大将の御ことをまめまめしくのたまふ、とおぼすに、人やそらごとをたしかなるやうに聞こえたらむ、などおぼす。ありやなしやを聞かぬ間は、見えたてまつらむもはづかし。

本気で疑ってお怨みになるのだ　とお思いなので　誰かがありもしないことを本当のことのように申し上げたのか

内裏より大宮の御文あるに、おどろきたまひて、なほ心解けぬ御けしきにて、あなたにわたりたまひぬ。「昨日のおぼつかなさを、なやましくおぼされたなる、よろしくは参りたまへ。久しうもなりにけるを」などやうに聞こえたまへれば、騒がれたてまつらむも苦しけれど、まことに御ここちも違ひたるやうにて、その日は参りた

様子で　寝殿　〔中宮〕　まだご機嫌の直らぬご　よろしいようなら参内なさい　久しく顔をお見せでありませんから　お加減も　お悪いような感じで　〔宮中に〕

一〇 位は三位以上、官は参議以上の上級の貴族。
一一 母屋にお籠りのまま。人々に会わず、病中の体。
一二 こちらへどうぞ。「を」は間投助詞。休養している室内に請じ入れる趣。

薫の見舞を受ける

一三 お加減がお悪いとのことでございましたので、中宮におかれましても、大層ご心配あそばしていらっしゃいます。前の、中宮のお見舞に対する返事を受けて、母后の意を体しての見舞でもある。
一四 修行者ぶるとは言うものの、とんでもない山伏の本性だ。「山伏心」は、山伏は山野に野宿して修行する僧をいうところから、薫の宇治の山里通いを皮肉ったもの。以下、匂宮の心中。
一五 あんなかわいい人を、ああして放っておいて。浮舟のこと。
一六 ほんの些細なことを捉えても。
一七 (薫が) 自分は堅物だという顔をし、お口にもなさるのを。
一八 あれこれとけちをおつけになるのに。「のたまひ破る」は、言い破る (論破する) の敬語。
一九 (高にかかって) どんなにかお言い立てになるところだろう。
二〇 風が体内に入って内臓を侵した病気と考えられていた。病状定まらず、万病のもととなるので、こう言う。

まはず。上達部などあまた参りたまへど、御簾のうちにて暮らしたまふ。

薫

夕つかた、右大将参りたまへり。「こなたにを」とて、うちとけながら対面したまへり。「なやましげにおはします、とはべりつれば、宮にもいとおぼつかなくおぼしめしてなむ。いかやうなる御なやみにか」と聞こえたまふ。見るからに、御心騒ぎのいとどまされば、言少なにて、聖だつと言ひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかりあはれなる人を、さて置きて、心のどかに月日を待ちわびさすらむよ、とおぼす。例は、さしもあらぬことのついでにだに、われはまめ人ともてなし名のりたまふを、ねたがりたまひて、よろづにのたまひ破るを、かかること見あらはいたるを、いかにのたまはまし。されど、さやうのたはぶれごともかけたまはず、いと苦しげに見えたまへば、「不便なるわざかな。おどろおどろしからぬ御ここちの、さすがに日数経るは、いとあしきわざにはべり。御風邪

(お見舞に)
(匂宮)
(薫)
(薫を)見るなり
(匂宮は)お胸の動悸がいよいよ激しくなるのので
どのようなお具合でいられますか
姿で
くつろいだお
悠長に構えて長の月日を待ち遠しがらせているとは
いつもは
こんな秘密を発見なさったのだもの
そんな冗談口もこれから先もお口にされず
しそうなご様子なので
(薫)
大して悪くもないといったご病状がいけませんね
くやしがりなさって
まことにお苦
そのまま
本当によくないことでございます

浮舟

十分ご養生なさって下さいませ
よくつくろはせたまへ」など、ねんごろにお見舞を申し上げておいてお帰りになったまめやかに聞こえおきて出でたまひぬ。はづかしげなる人なりかし、わがありさまを、いかに思ひくらべけむ、など、[匂宮は]何かのことにつけてもさまざまなることにつけつつも、ただこの人を、時の間忘れずおぼし出づ。

宇治
かしこには、石山詣でも中止になってとても手持ち無沙汰である石山もとまりていとつれづれなり。御文には、いといみじきことを書き集めたまひてつかはす。その文をやることさえ心配でそれだに心やすからず、「時方」と召しし大夫の従者の、心も知らぬしてなむやりける。(右近)「右近が古く知れりける人の、殿の御供にて尋ね出でたる、さらがへりてねむごろがる」と、友達には言ひ聞かせたり。よろづ右近ぞ、そらごとしならひける。

月もたちぬ。[匂宮は]このようにお焦りになるが[宇治へ]かうおぼし焦らるれど、おはしますことはいとわりなし。かうのみものを思はば、さらにえながらふまじき身なめりと、心細さを添へて[匂宮は]嘆きたまふ。

薫
大将殿、すこしのどかになりぬるころ、例の、こっそりとおいでになった忍びておはしたり。

一 とても太刀打ちできない人柄だ、私のような者を(薫と)見比べて(浮舟は)何と思ったことだろう。薫を送り出したあとの匂宮の思い。

二 (匂宮からの)お便りには、実に大層なことをいろいろ書いておやりになる。「いみじきこと」は、思いのたけや、将来の誓いなど。

三 「時方」とお呼びであった五位の者の家来で。前に匂宮が「時方は、京へものして……」(三〇頁)と名指しで命じたことをさす。

匂宮、浮舟に文をやる

四 何も事情を知らない者を使者にして行かせた。秘密を知られないためである。

五 私(右近)が昔付き合っていた人が、殿様(薫)のお供で来ているうちに私を見つけ出したものですから、また蒸し返して口説いてくるのです。自分の昔の恋人の手紙を受け取る体に言いなす。

六 仲間の女房。

七 何もかも、右近は嘘ばかりつく破目になるのだった。からかい気味の草子地。

八 月も変った。二月である。

九 こんなにせつない思いをいつもしていては、とても命も持ちそうにないことだと。恋死しそうだと、匂宮の身を灼く思い。

一〇 少しお暇になられた頃。前に薫の使いが「殿は、この司召のほど過ぎて、朔日ころにはかならずおはしましなむ」(二四頁)と伝えることがあった。

二月、薫、宇治に行く

一一 宇治山の阿闍梨の寺。その傍らに、薫は八の宮の旧邸を移して、御堂を建てている（東屋三三〇頁）。まず寺に詣でる悠揚たる態度。

一二 経文を声をあげて読むこと。

一三 こちら（薫）はそうひどくお姿をやつされることもなく。匂宮に対して「これは」という。騎馬で来た匂宮は狩衣姿であったであろう（二三頁）。

一四 平常のいでたち。正式には冠を着用する。

一五 浮舟。これから展開する恋の場面の人物。

一六 どうして（薫に）お会い申すことができようと。以下、浮舟の懊悩の心中。

一七 私は、今まで一緒に暮してきた女人たちにも、すっかり心が冷めてしまいそうな気がする。匂宮の情熱的な言葉を思い出す体。

一八 本当に宮のお言葉通り、あれからお加減が悪いということで、あちらにもこちらにも、いつもの通りのお通いもなくて。病臥して六の君にも中の君にも会っていない、という情報が届いている趣。

一九 目の前のお方といえば。薫のこと。

二〇 恋しい悲しいと溺れきるというのではないが。「おりたつ」は、直接身を労すること。

二一 言葉を尽して言うよりもずっと。「心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる」（『古今六帖』五、言はで思ふ）

寺に仏など拝みたまふ。御誦経（この山荘にはご微行とはいえ）せさせたまふ僧に、もの賜（お布施）ひなどして、夕つかた、ここには忍びたれど、これはわりなくもやつしたまはず、烏帽子直衣（本当に申し分なくすっきりしたお姿で）の姿、いとあらまほしくきよげにて、歩み入りた（部屋にお入り）まふより、はづかしげに用意ことなり。

女、いかで見えたてまつらむとすらむと、（空にも目があるように気がひけて）空さへはづかしく恐ろしきに、あながちなりし人の御ありさま、（つい思い出されるのにつけて）うち思ひ出でらるるに、（こわいのに）またこの人に見えたてまつらむを思ひやるなむ、（見境もないお振舞だった匂宮のお姿が）いみじう心憂き。

（薫）（お会い申すことになるのを考えると）われは年ごろ見る人をも、皆思ひかはりぬべきここちなむする、と（つくづく情けない）（匂宮が）のたまひしを、げにそののち御ここち苦しとて、いづくにもいづくにも、例の御ありさまならで、御修法（騒いでいるそうだと聞くと）など騒ぐなるを聞くに、また（夜のことを聞いて何とお思いだろう）いかに聞きておぼさむ、と思ふもいと苦し。この人はた、いとけはひことに、心深く、なまめかしきさまして、久しかりつるほどのお（格別人とは違った感じで）こたりなどのたまふも、言多からず、恋しかなしとおりたたねど、（長い間放っておいて悪かったなど無沙汰をお詫びになるのも）常にあひ見ぬ恋の苦しさを、さまよきほどにうちのたまへる、いみ（奥ゆかしく美しいご様子で）（しっとりと）（程よい感じに匂わしておっしゃるのが）

一 優雅で色っぽいお美しさはむろんのこと、（女が）生涯長く頼みにできそうな性格という点では、（匂宮には）この上なくすぐれていらっしゃる。

二 （薫が）心外なと思われるに違いない料簡など、少しでもお耳に入ったりしたら。匂宮に逢ったことを聞かれたなら、の意。「聞かせたらむ」は、諸本異同なし。「せ」は使役。以下、浮舟の心中。

三 不思議なほど夢中になって恋い焦がれなさる方（匂宮）を、いとしく思うのも、それは本当に道に外れた軽はずみなことだ。

四 お見限りになってしまったら、その時はどんなに心細いか、骨身にしみて分っているので。今までの宇治の暮しからも想像がつく、というもの。

五 しばらく来ない間にすっかり情が分るようになって、一層女らしくなったものよ。「月ごろ」とあるのは、正月を隔てているから。以下、薫の心中。

六 所在ない山里の住まいをしていては、物思いの限りを尽していることだろう。

薫と浮舟、それぞれすれ違う思い

七 今造らせている邸は。浮舟を引き取るために新築中の京の家。前に「わたすべきところおぼしまうけて、忍びてぞ造らせたまひける」（一三頁）とあった。

八 ここよりはやさしい川のほとりで。宇治川の荒々しい流れに対してこう言う。

九 匂宮のこと。以下、思い悩む浮舟の心中を書く。

じく言ふにはまさりて、いとあはれと人の思ひぬべきさまをしめたまへる人柄なり。（しみじみ胸にしみると相手の女が思いそうな感じを身につけていらっしゃるお方である）艶なるかたはさるものにて、行く末長く人の頼みぬべき心ばへなど、こよなくまさりたまへり。思はずなるさまの心ばへなど、漏り聞かせたらむ時も、なのめならずいみじくこそあべけれ。（一通りでなく大変なことになろう）あやしううつし心もなうおぼし焦らるる人を、あはれと思ふも、それはいとあるまじく軽きことぞかし。（薫）この人に憂しと思はれて、忘れたまひなむ心細さは、いと深うしみにければ、思ひ乱れたるけしきを、（浮舟の）様子を月ごろにこよなうものの心知り、ねびまさりにけり、つれづれなる住処のほどに、思ひ残すことはあらじかし、と見たまふも心苦しければ、常よりも心とどめてかたらひたまふ。（心をとめてあれやこれやとお慰めになる）

「造らする所、やうやうよろしうしなしてけり。一日なむ見しかば、ここよりは気近き水に、花も見たまひつべし。三条の宮も近きほどなり。明け暮れおぼつかなき隔てもの、おのづからあるまじきを、この春のほどに、さりぬべくはわたしてむ」と思ひてのたまふも、か

（薫）七 造らする所、やうやうよろしうしなしてけり。一日なむ見しかば、ここよりは気近き水に、花も見たまひつべし。三条の宮も近きほどなり。明け暮れおぼつかなき隔てもの、おのづからあるまじきを、この春のほどに、さりぬべくはわたしてむ」と思ひてのたまふも、か

（だんだんと何とか目鼻がついてきました）（先日見てきましたが）（お花見もおできになれましょう）（私の本邸も）（いつもどうしているか心配なこんな無沙汰も）（自然なくなることでしょうから）（都合がつけばお移ししよう）（そのお積りでおっしゃるのも）

一〇 昨日も匂宮から手紙が来た趣。
一一 この前お会いした時の匂宮のお姿が、ありありと目に浮ぶ思いがするので、自分ながらも、何とあさましい身よ、とあれこれ思い続けて泣いてしまった。
一二 あなたのお気持が、こんなふうではなくて大らかだったので、私も落着いていられてうれしかったのです。薫の訪れの間遠なのを怨んで泣く、と思ったのである。
一三 いささかなりともあなたをおろそかに思うようでしたら、こうまで苦労してはるばる通って来られる身分でもなし、道中でもありませんのに。
一四 二月、月初めの夕月夜。夕方早く出る。
一五 薫は、過ぎ去った昔の悲しみをもあらためて思い出し。大君生き写しの浮舟を前にして、亡き人を偲ぶ。「男」「女」と呼ぶのは、一幅の恋の画面の人物のような扱い。
一六 浮舟は浮舟で、今からわが身に添うたつらさを嘆く思いを加えて。匂宮と薫の板挟みになる苦しみ。
一七 「蒼茫たる霧雨之霽の初めに寒汀に鷺立てり　重畳せる煙嵐之断えたる処に晩寺に僧帰る」（『和漢朗詠集』下、雑、僧、「閑賦」張読）。「かささぎ」は、蒼鷺。冠毛が大きく、笠鷺の意であろう。

薫、浮舟、歌を交わす

一八 総角の巻の中の君の歌では「はるけき」の序となる。（七巻六八頁注三参照）
一九 宇治川の景物。（総角六六頁注七参照）

の人の、（誰に気兼ねもなく会える所を用意した）のどかなるべき所思ひまうけたり、と昨日ものたまへりしを、（こんな［薫の］ご計画も知らず　そのお積りなのだろう）かかることも知らで、（と悲しくて胸が一杯になるが　匂宮）さおぼすらむよ、（なびいていいことではないのだ）とあはれながらも、そなたになびくべきにはあらずかし、（と思うその下から）と思ふからに、ありし御さまの、面影におぼゆれば、われながらも、うたて心憂の身や、と思ひ続けて泣きぬ。「御心ばへの、（薫）かからでおいらかなりしこそ、のどかにうれしかりしか。（誰かが何か余計なことでもお耳に入れたのでしょうか）人のいかに聞こえ知らせたることかある。すこしもおろかならむ心ざしにては、かうまで参り来べき身のほど、道のありさまにもあらぬを」など、朔日ごろの夕月夜に、すこし端近く臥して（横になって愁いを含んで外を見ていられる）ながめ出だしたまへり。男は、過ぎにしかたのあはれをもおぼし出で、女は、今より添ひたる身の憂さを嘆き加へて、かたみに（それぞれ物思いに沈んでいる）もの思はし。

山のかたは霞隔てて、寒き州崎に立てるかささぎの姿も、所から（場所が場所なのでまことに風情がある上に）はいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見わたさるるに、柴積み舟の所々に行きちがひたるなど、（ずっと長く向うまで見えるのに）ほかにて目馴れぬことどもの（よそでは見馴れないものばかり）

一 やはり昔のことがたった今のような気がして。薫は、昔に変らぬ宇治の風物に亡き大君が思い出されてならないのである。以下、薫の思い。

二 ほんとに、大君ゆかりの人といった筋合ではない女と向い合ったにしても、ざらにはない逢瀬の風情が多かろうというものである。それほど趣深い背景。

三 あの宇治橋のように、末長い二人の契りは朽ちはしないでしょうに、不安に思って心配なさるな。「宇治橋」は、眼前の景。また「長き」を言い出す序。「あやぶむ」に「踏む」を詠み込み、「朽ち」「踏む」は「橋」の縁語。

四 宇治橋は板の絶え間がありますのに―おいでが途絶えがちなので私たちの仲はどうなるのかと心配でなりませんのに、それでも朽ちないもの、尽きぬ縁だと頼みにせよとおっしゃるのですか。

五 今さら長居するでもあるまい、（京に引き取ってから）気楽な所で（ゆっくり会おう）。

みとり集めたる所なれば、見たまふたびごとに、なほそのかみのことのただ今のここちして、いとかからぬ人を見かはしたらむだに、めづらしき仲のあはれ多かるべきほどなり。まいて、〔浮舟は〕恋しき人によそへられたるもこよなからず、やうやうものの心知り、都馴れゆくありさまのをかしきも、こよなく見まさりしたるここちしたまふに、女は、かき集めたる心のうちに、もよほさるる涙、ともすれば出でたつを、なぐさめかねたまひつつ、

（がいろいろと多くある所なので）（大君 生き写しと思われるのも悪くはなく）（浮舟）（格段にはじめの頃よりよくなったという気がなさるが）（都の女らしくなってゆく様子がかわいいにつけても）（次第に男女の情が分ってきて）（思わず溢れる涙が）（どうかするとこぼれ落ちるのを）

（薫）三「宇治橋のながき契りは朽ちせじを
あやぶむかたに心さわぐな
今見たまひてむ」とのたまふ。

（浮舟）四絶え間のみ世にはあやふき宇治橋を
朽ちせぬものとなほたのめとや

（いずれお分りでしょう）

〔薫は〕前よりも一層〔浮舟を〕置いて帰りがたく さきざきよりもいと見捨てがたく、しばしも立ちとまらまほしくおぼさるれど、人のもの言ひのやすからぬに、五今さらなり、心やすき

（ほんのしばらくでもここにいたいと）（世間の噂がうるさいので）

六 よくもまあ、ひとかどの女らしくなったものだ、といじらしく思い出されることが、以前よりもひとしおなのだった。あのまま宇治に放っておくのはかわいそうだと、薫の気持はいよいよ傾く。

七 作文の会をお催しになるというので。「文」は、漢詩。

八 季節にふさわしい様々の楽器の音に。双調（雅楽の六調子の一。春の調べ）などに整えられているのであろう。

九 催馬楽、呂「梅が枝」。「梅が枝に 来居る鶯 や 春かけて はれ 春かけて 鳴けどもいまだ や 雪は降りつつ あはれ そこよしや 雪は降りつつ」

一〇 匂宮のお控え所に、一同参上なさる。その中に薫もいる趣。匂宮の宿直所が宮中のどの殿舎かは不詳。

一一 匂宮のお部屋の端近。

一二 さながら「闇はあやなし」といったお身の香りやお振舞で。薫の生得の芳香をいう。「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」――春の夜の闇は効のないものだ、梅の花の色は見えないにしても香は隠すことができないのだもの（『古今集』巻一春上、春の夜梅の花をよめる 凡河内躬恒）

一三 「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）。橋姫に浮舟をよそえる気持。

一四 こんな和歌の一ふしを口ずさみにおっしゃったのも。漢詩に対して、和歌を「はかなきこと」という。

二月十日頃、宮中に詩宴催さる

さまにてこそ、などおぼしなして（考え直されて）、暁（夜明け方に）に帰りたまひぬ。いとようもおとなびたりつるかな、と心苦しくおぼし出づること、ありしにまさりけり。

二月

きさらぎの十日のほどに、内裏に文作らせたまふとて、この宮（匂宮）も大将（薫）も参りあひたまへり。をりにあひたるものの調べどもに、宮の御声はいとめでたくて、梅が枝など歌ひたまふ。何ごとも人よりは（匂宮は）この上もなくすぐれていらっしゃるお人柄なのによなうまさりたまへる御さまにて、（つまらぬ女のことにすずろなることおぼし焦らるるのみなむ、（罪深いことなのだったように参内なさった）罪深かりける。（本当にすばらしくて）

雪にはかに降り乱れ、風などはげしければ、御遊びとくやみぬ。（管絃の御遊はすぐ中止された）

一〇 この宮の御宿直所に、人々参りたまふ。（匂宮は）お食事を召し上がったりして ご休息になっている もの参りなどして、うちやすみたまへり。（誰かにご用を言いつけようとなさって）大将（薫）、人にもののたまはむとて、すこし端近く出でたまへるに、雪のやうやう積るが（雪がだんだんと積ってゆくのが）、星の光にほのぼのしきを（星の光にぼうと映る外の景色に）、闇はあやなし、とおぼゆるにほひありさまにて、「衣かたしき今宵もや」（薫）とうち誦じたまへるも、一四はかなきことを口ずさびにのたまへるも、

一 言うにも事欠いて。ほかに思いを託する歌はいくらでもあろうに、の意。匂宮の心中に即した書き方。

二 (薫は) いい加減に思ってはいないのであろう。以下、匂宮の心中の思い。

三 独り寝の浮舟を、さぞや待ち遠にと自分だけが思いを馳せている積りだったのに。「かたしく袖」は、前出の歌の「衣かたしき……」による。

四 これほど思ってくれる初めからの男 (薫) をさし置いて。

五 昨夜詩題を賜り、作った詩を献上するため、各自帝の御前に参上するのである。

六 もう二つ三つお年上のせいか。実は、薫は匂宮より年下のはず。匂宮誕生は、源氏四十七歳以前 (五巻若菜下一六七頁注四参照)。薫は、源氏四十八歳の時の子である (同巻柏木三〇〇頁参照)。老成した薫の人物像を強調しようとしてわざとこうしたのであろう。

七 今上の女二の宮を正夫人に頂いている。

八 詩文の才も、ご政治向きのご力量も、誰にも負けをお取りにならないようだ。女の語り手らしい語尾。

九 詩の朗誦も終って。詩会では、披講といって、講師 (詩を読み上げる役の者) が集まった詩を朗誦して皆に披露する。

一〇 匂宮のお作を、すばらしい出来だと、口々に吟じて賞めそやすが。「ののしる」は、騒ぐ意。

なぜかしらしみじみと胸をうつ風情の身に備わった人柄なので　大層奥ゆかしく見える

あやしくあはれなるけしき添へる人ざまにて、いともの深げなり。言しもこそあれ、宮は寝たるやうにて御心騒ぐ。おろかには思はぬ

寝入ったふりをなさりながらお心が騒ぐ　〔薫も〕

なめりかし、かたしく袖を、われのみ思ひやるここちしつるを、同じ心なるもあはれなり。わびしくもあるかな、かばかりなる本つ人をおきて、わが方にまさる思ひは、いかでつくべきぞ、とねたうおぼさる。

よく分る気がする　つらいことだな　愛情は　どうして持てるはずがあろう　くやしくお思いになる

翌朝、雪のいと高う積りたるに、文たてまつりたまはむとて、御前に参りたまへる御容貌、このころいみじく盛りにきよげなり。かの君も同じほどにて、今二つ三つまさるけぢめにや、すこしねびまさるけしき用意などぞ、ことさらにも作りたらむ、あてなる男の本にしつべくものしたまふ。帝の御婿にて飽かぬことなし、とぞ世人もことわりける。才なども、おほやけおほやけしきかたも、後れずぞおはすべき。文講じ果てて、皆人まかでたまふ。宮の御文を、すぐれたり、と誦じののしれど、何とも聞き入れたまはず、いかなる

〔匂宮の〕　このところすばらしい男盛りでお美しくていらっしゃる　薫　同じお年頃で　宮よりやや老成した　わざわざ作り出したかのような　高貴な殿方の　感じの様子や態度などは　お手本にしたいほどでいらっしゃる　何一つ不足はない　認めているのだった　〔匂宮は〕　うれしくも何ともお聞きにならず　〔我ながら〕どう

一一 上の空で（ただもう浮舟のことを思い詰めて）ぼんやりしていらっしゃる。

一二 （匂宮は）あの薫のご様子にも、いよいよ警戒の念を強められたので。「おどろく」は、はっと気づく。

一三 都では、あとから降る雪を待ち顔に消え残っている雪が。「白雪の色分きがたき梅が枝に友待つ雪ぞ消え残りたる」（『家持集』）、「梅の花咲くとも知らずみ吉野の山に友待つ雪の見ゆらむ」（『貫之集』）

匂宮、宇治に赴く

一四 次第に深く降り積って道を埋めている。

一五 泣きたいほど恐ろしく、（主命とはいえ）迷惑なことだとまで思う。

一六 ご案内役の大内記は、式部の少輔を兼任しているのだった。「式部の少輔」は、式部省（礼式、文官の考課、選叙をつかさどり、大学寮を管理した役所）の次官。大輔の下位。従五位下相当。

一七 （本官といい兼官といい）どちらもどちらも、重重しく構えていなければならないお役目なのに。

一八 今夜おいでになるとお知らせがあったけれども。

一九 （内記は）右近に匂宮ご到着の旨を通じた。

二〇 浮舟も。右近はもとより、という含み。

二一 （こんなことをしていては）末はどんなことになってしまわれる（浮舟の）お身の上かと。

二二 （浮舟が）右近同様気のおけぬ者と思っていらっしゃる若女房で。後文によれば、侍従とある。

ここちにて、（こんな詩なんか作り上げたのだろうと）かかることをもし出づらむと、そらにのみ思ほしほれたり。

（一二）かの人の御けしきにも、いとどおどろかれたまひければ、あさまし（大層無理な算段をなさって〔宇治に〕）たばかりておはしましたり。（一三）京には、友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るままに、（一四）やや降り埋みたり。常よりもわりなきまれの細道をわけたまふほど、（たに通らぬ細道を雪を分けて行かれる時）御供の人も、（一五）泣きぬばかり恐ろしう、わづらはしきことをさへ思ふ。（一六）しるべの内記は、式部の少輔なむかけたりける。（一七）いづかたもいづかたも、こととしかべき官ながら、（いかにもこんなお供らしく〔指貫の裾を〕引き上げたりしている姿もかいがいしいものだった）いとつきづきしく、引きあげなどしたる姿もをかしかりけり。

（宇治では）かしこには、（一八）おはせむとありつれど、かかる雪には、（こんな雪にまさか）とうちとけたるに、夜ふけて右近に消息したり。（一九）あさましうあはれ、（何とまあ深いお気持か）と君も思へり。（二〇）右近は、いかになり果てたまふべき御ありさまにかと、かつは苦しけれど、（一方では心配に思うけれど）今宵はつつましさも忘れぬべし。（今夜は周囲への憚りも忘れてしまいそうだ）言ひ返さむかたもなければ、（二一）同じやうにむつましくおぼいたる若き人の、（考えもないので）心ざまも奥

一 道中、雪にお濡れになったお召し物の香りが、あたりいっぱいに匂うのも。薫物の香は湿気によく引き立つ。

二 あのお方（薫）のご様子に似せて、ごまかしたのだった。薫の生得の芳香に事寄せて、薫が来たかのようにとりつくろう。

三 川の向うの、とある人の家に（浮舟を）連れておいでになろう、と計画していたので、あらかじめ（そちらに）時方をやっておいたのが。五四頁に、時方の叔父因幡の守の家とある。

四 これはどうなさるお積りなのかと。浮舟を連れ出そうとするのを見ての右近の動顛。「右近も」とある。当の浮舟はもとより、という気持。

五 子供が雪遊びをした時のように、震え上がったのだった。右近の驚きあわてるさまを諧謔的に言う。

六 とてもそんなことは（できません）。

七 右近は、このお邸の留守番役に残って。ここの人目をつくろう後始末の方が厄介。

八 さきほど右近が味方につけた女房。

九 何と頼りなげなものよと、（浮舟が）朝に夕に眺めやる小舟に（匂宮は）お乗りになって。柴積舟であろうか。

翌朝、浮舟を連れ出す

小舟で、橘の小島のほとりを行く二人

浅はかでない者を味方につけて　（右近）もうとても困っているのです　心を合せて　まわり

なからぬをかたらひて、「いみじくわりなきこと。同じ心に、もて隠したまへ」と言ひてけり。

にうまく隠して下さい　二人して　〔匂宮を〕

もろともに入れたてまつる。道のほどに濡れたまへる香の、所狭う匂ふも、

扱いに困るところなのだけれども

もてわづらひぬべけれど、かの人の御けはひに似せてなむ、もてまぎらはしける。

夜のほどにて立ち帰りたまはむもなかなかなべければ、ここの人目もいとつつましさに、時方にたばからせたまひて、川よりをちなる人の家に率ておはせむ、と構へたりければ、さきだててつかはしたりける、夜ふくるほどに参れり。「いとよく用意してさぶらふ」と申さす。こはいかにしたまふことにかと、右近もいと心あわたたしければ、寝おびれて起きたるここちも、わななかれて、あやし。童べの雪遊びしたるけはひのやうにぞ、ふるひあがりにける。「いかでか」なども言ひあへさせたまはず、かき抱きて出でたまひぬ。右近はこの後見にとまりて、侍従をぞたてまつる。いとはかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたま

夜の明けぬうちにお帰りになるというのもなまじ思いが募ることだろうので〔それに〕この邸の人々の見る目も大層気になるので　然るべく工面させなさって　言上させる　帰参した　（時方）万事遺漏なく支度してございます　寝ぼけて起き上がった気持も　身体が震えて　正体もない　分らないので　急のことに何が何やら　〔浮舟を〕　言うひまもお与えにならず　〔匂宮は〕　お供におつけする

一〇（浮舟には）遙かに遠い岸に向ってでも漕ぎ離れてしまったような心細い気がして。

一一 明け方西の空にかかっている月。陰暦二十日以後の月で、夜半に出る。これによれば、匂宮の宇治来訪は、宮中詩宴（二月十日頃）の十日ほど後となる。

一二 これが橘の小島でございます。「今もかも咲きにほふらむ橘の小島の崎の山吹の花」（『古今集』巻二春下、題しらず、読人しらず）。「橘の小島」については、『平家物語』巻九宇治川に、「平等院の艮、橘の小島より、武者こそ二騎引つ駆け引つ駆け出で来たれ」とあるが、地形変り、今不明。

一三 風情のある常緑樹の木蔭が茂っている。橘の木である。「橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜置けましてときは木」（『岷江入楚』所引。『万葉集』巻六、下の句「枝に霜降れどいや常葉の樹」）

一四 年がたっても変ったりはしない、変らぬ緑の橘の小島の崎で約束する私の気持は。

一五 橘の小島の色―お約束して下さるお心は変らないでしょうけれど、この浮舟のような私はどこへ行きますことやら。浮舟（水に漂う舟）に、薫と匂宮のどちらに身を寄せてよいやら分らぬわが身を喩える。巻名、人物の呼称の出所となった歌。

ひて、（棹さして向う岸にお渡りになる間）さしわたりたまふほど、一〇はるかならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、（宮に）ぴったり寄って、つとつきて抱かれたるも、（宮は）大層いじらしいとおぼす。有明の月澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、（船頭）一一「これなむ橘の小島」と申して、（お舟をしばらく棹さして止めたのでご覧になってみると）大きな岩のような形をしていて）おほきやかなる岩のさまして、一三されたる常磐木の蔭茂れり。（匂宮）「あれ（をご覧なさい）見たまへ。（大したこともない木だが）いとはかなけれど、千年も経べき緑の深さを」（もちそうな緑の深さです）とのたまひて、

（匂宮）一四
年経ともかはらむものか橘の
小島の崎に契る心は

（浮舟）（朝夕見馴れた川ながら）はじめての旅路のように思われて）女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

（浮舟）一五
橘の小島の色はかはらじを
この浮舟ぞゆくへ知られぬ

（女も美しいので）折もよし（ただもうすばらしいとこんな歌でもお思いになる）をりから、人のさまに、をかしくのみ何ごともおぼしなす。

（浮舟を）（供人）（対岸に）かの岸にさし着きて下りたまふに、人に抱かせたまはむは、いと

かわいそうなので〔宮が〕
心苦しければ、抱きたまひて、一たすけられつつ入りたまふを、二いと見苦しく、何人をかくもて騒ぎたまふらむ、〔供人たちは〕と見たてまつる。三時方が叔父の因幡の守なるが領ずる庄に、はかなう造りたる家なりけり。まだすっかり出来上がっていない上に
まだいとあらあらしきに、四網代屏風など、御覧じも知らぬしつらひ類で
満足に
にて、風もことに障らず、防げず垣のもとに雪むら消えつつ、今もかき曇
空暗く降っている
りて降る。

日さし出でて五軒の垂氷の光りあひたるに、人の御容貌もまさることちす。六宮も、所狭き道のほどに、軽らかなるべきほどの御衣ども
なり。七女も、脱ぎすべさせたまひてしかば、細やかなる姿つき、いとをかしげなり。〔浮舟は〕身づくろいをすることもなくしどけない有様を
とても気がひけて
とはづかしく、八まばゆきまできよらなる人にさしむかひたるよ、と思へど、まぎれむかたもなし。九なつかしきほどなる白き限りを五つばかり、袖口裾のほどまでなまめかしく、十色々にあまた重ねたらむ
重なりまで優美で
よりも、
感じよく着こなしている
をかしう着なしたり。十一常に見たまふ人とても、かくまでう
これほどまであ

一（匂宮ご自身は）供の者に介添されて（用意の家に）お入りになるのを。
二 全く見ていられない、どれほどの身分の女をこんなに大騒ぎなさるのだろう。大したこともない山里の女なのに、という気持。
三 時方の叔父で、因幡（今の島根県の東半部）の守である者が持っている荘園に、ごく手軽に建てた家なのだった。用意した家の説明。
四 網代を表に張った屏風。山荘風のしつらい。（六巻椎本三〇九頁注一一参照）
五 軒のつららが、どれもきらきらと光っているのに映えて、二人のお顔立ちのお美しさも一段とまさる感じがする。**隠れ家の朝、一日目**
六 匂宮も（人に知られてならぬ）厄介な道中なので、お忍びにふさわしいお召し物である。狩衣であろう。
七 お相手の浮舟も、（宮が）表着をお脱がせになったので、ほっそりとした身体つきは、大層美しい。閨のままの姿。
八 身を隠すすべもない。屏風、几帳なども整わない。
九（浮舟は）手触りも柔らかい白い衣だけを五枚ほど着て。「なつかしき」は、着馴れて糊気の落ちた絹のさま。
十 上に様々な色の袿を幾重にも重ね着たのよりも。貴族の女性の日常の姿。
十一 いつもお馴染みの方でも。中の君や六の君。

一三（右近ばかりか）この侍従までが、自分のこうしたところを（匂宮との仲を）すっかり見ることよと、浮舟はつらく思う。侍従を意識して「女君」と言う。

一三 そこにいるのはまた誰か。私のことを人に言うなよ。「犬上や鳥籠の山なるいさら川いさと答へてわが名もらすな」（『古今六帖』五、名を惜しむ。『古今集』巻末墨滅歌にもある）

一四 ここ（因幡の守の山荘）の留守番として住んでいる者が、時方を一行の主人と思ってしきりに崇め奉るので。時方は、因幡の守の甥。

一五 匂宮が今おいでになる部屋の遣戸を隔てて、大きな顔をして坐っている。匂宮たちの部屋の隣にいる趣。

一六 恐縮して何か話しているのを。「……をり」は、身分の低い者に対して用いる。

一七 大層恐ろしいことになると陰陽師が占った物忌のために。

一八 薫が来られた時にも、（浮舟が）今と同じようにうちとけて逢ったのだろうと。

一九（薫が）女二の宮を、正室として大層大事にしていらっしゃる様子などもお話しなさる。浮舟との仲に水を差したい気持。

二〇 あのお耳に止った一言（詩会の夜、薫が「衣かたしき今宵もや」と誦したこと）は、お口になさらないのが憎らしいこと。草子地。

こんなことまでが　やはりはじめ
ちとけたる姿などは見ならひたまはぬを、かかるさへぞ、なほめづらかにをかしうおぼされける。
侍従も、いとめやすき若人なりけり。[二一] これさへ、かかるを残りなう見るよと、女君は、いみじと思ふ。宮も、「[二三]これはまた誰そ。わが名もらすなよ」と口がためたまふを、いとめでたしと思ひきこえたり。[二四]ここの宿守にて住みける者、時方を主と思ひてかしづきありけば、[二五]このおはします遣戸を隔てて、所得顔にゐたり。[宿守が]緊張した声ひきしじめ、[二六]かしこまりて物語しをるを、[時方は]気がひけて返事もできず　おかしく思っていた[時方]いらへもえせず、をかしと思ひけり。[二七]「いと恐ろしく占ひたる物忌により、京のうちをさへ去りてつ慎しているのだつしむなり。ほかの人寄すな」と言ひたり。
誰も来ないので　[匂宮は]気を許して女と終日語り合われる
人目も絶えて、心やすくかたらひ暮らしたまふ。[二八]かの人のものしたまへりけむに、かくて見えてむかしと、[匂宮は]想像なさって おぼしやりて、いみじく怨みたまふ。[二九]二の宮を、いとやむごとなくて持ちたてまつりたまへるありさまなども語りたまふ。[二〇]かの耳とどめたまひし一言は、のた

一 洗面の水やお道具、それに軽いお摘みなどを。「くだもの」は、木の実、果実などの軽食。
二 どうやらひどく大切にされているらしいお客様が、そんなところを見つけられるなよ。時方を冷やかしての言葉。「主」は軽い敬称。
三 時方のこと。「大夫」は、五位の称。（二二頁注七参照）
四 あのご自分の宿られる方角をご覧になると。対岸の宇治の邸をいう。「晴るる夜の星か河辺の螢かもわがすむ方の海士のたく火か」（『伊勢物語』八十七段）の言葉によるか。
五 山は雪をかむって鏡を懸けたようにきらきらと夕日に輝いているので。（七巻総角一一三頁注一九参照）
六 昨夜踏み分けてきた雪の山路が険しく難渋したことなど、いかにも同情を引くように大げさにお話しになる。
七 峰の雪や汀の氷を踏み分けて、難儀しながらやって来ましたが、それもあなたに迷うてのこと、道には迷いませんでした。
八 「山科の木幡の里に馬はあれど徒歩よりぞ来る君を思へば」（『拾遺集』巻十九雑恋、題しらず、人麿。原歌は『万葉集』巻十一）。下の句を暗示する。
九 お心に浮ぶままに、歌などお書きになる。
一〇 降り乱れ、汀に凍りついてしまう雪よりもはかなく、私は空の中途で消えてしまうことでしょう。

匂宮と浮舟、贈答

まひ出でぬぞ憎きや。時方、御手水御くだものなど、取り次ぎて参るを御覧じて、「いみじくかしづかるめる客人の主、さてな見えそや」といましめたまふ。侍従、色めかしき若人のここちに、いとをかしと思ひて、この大夫とぞ物語して暮らしける。

雪の降り積れるに、かのわが住む方を見やりたまへれば、霞のたえだえに梢ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるやうに、きらきらと夕日に輝きたるに、昨夜わけ来し道のわりなさなど、あはれ多う添へて語りたまふ。

「峰の雪みぎはの氷踏みわけて
　君にぞまどふ道はまどはず
木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ。

（浮舟）一〇
降りみだれみぎはに氷る雪よりも
　中空にてぞわれは消ぬべき

一一 書いて消した。恥じらったさま。
一二（匂宮は）歌に「中空にてぞ」とあるのをお見咎めになる。匂宮と薫の中に立って迷っているように聞えることを咎める。
一三 匂宮の御物忌は二日間と、（京には）取りつくろっておありなので。
一四 留守番役の右近。
一五 浮舟の着換えのお召し物などを お届けした。
一六 濃い紫の袿に、紅梅の織物の表着などを。「紅梅の織物」は、経紅に、緯白、または紫。十二月末、正月、二月、三月に用いる。
一七 腰に付ける小さな裳。主人の前に出る時着用する。（一巻夕顔一二八頁注三参照）
一八（匂宮は）その褶をお取りになって、浮舟に着せられて、宮のご洗面のお世話をおさせになる。身近に世話をさせて玩弄したい気持。女房扱いになる。
一九 女一の宮に浮舟をさし上げたならば、きっと秘蔵の女房になさることだろう。（お側には）ずいぶん身分の高い人がたくさん仕えているけれど、これほどの美人はいないのではないか。匂宮の心中。浮舟に対する薫の気持との、基本的な相違を示すところ。
二〇 こっそりと（浮舟を）連れ出して、匿っておこうということを。このこと三九、四七頁に見えた。
二一 それまでの間、薫に逢ったら（承知しない）。

隠れ家の二日目

と書き消ちたり。この中空をとがめたまふ。げに憎くも書きてけるかな、とはづかしくてひき破りつ。さらでだに見るかひある御ありさまを、いよいよあはれにいみじと、人の心にしめられむと、尽くしたまふ言の葉、けしき、言はむかたなし。

（まあ本当に生意気なことを書いた／気がひけて／紙を／宮は／ただでさえ見とれるような美しいご容姿なのに／ますます感激してすばらしいと／女の心に印象づけられるようにと／あらん限り尽される）

御物忌二日とたばかりたまへれば、心のどかなるままに、かたみにあはれとのみ、深くおぼしまさる。右近は、よろづに例の、言ひまぎらはして、御衣などたてまつりたり。今日は乱れたる髪すこしけづらせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかしく着かへてゐたまへり。侍従も、あやしき褶着たりしを、あざやぎたれば、その裳を取りたまひて、君に着せたまひて、御手水参らせたまふ。姫宮にこれをたてまつりたらば、いみじきものにしたまひてむかし、いとやむごとなき際の人多かれど、かばかりのさましたるは難くや、と見たまふ。かたはなるまで遊びたはぶれつつ暮らしたまふ。忍びて率て隠してむことを、かへすがへすのたまふ。そのほど、かの人

（お互いに／一途にいとしいとばかり／宮は／一層お気持が深まる／言ひつくろって／何やかやとまた／ほかの女房／浮舟は／とかせて／色合いも美しいのに着換えていらっしゃる／お粗末な／さっぱりと着換えたので／見ていられないようなたわむれごとをして一日をお過しになる／宮は／何度も念を押して）

一 いくら目の前に自分がいても、（薫から）心を移そうとはしないようだ。匂宮の思い。

二 怨んだり泣いたりして、千万言の言葉を費やして夜を明かされて、まだ暗いうちに（浮舟を）連れてお帰りになる。「怨みても泣きても言はむかたぞなき鏡に見ゆる影ならずして」（『古今集』巻十五恋五、題しらず、藤原興風）

三 来た時のように、（浮舟を）ご自身お抱きになる。

四 あなたが大切に思っていらっしゃるらしい人は。薫のこと。「目の前にだに思ひうつらぬなめり」という思いから出たいやみ。

五 本当におっしゃる通りだと思って、合点している様子が、とてもかわいい。

六 右近が妻戸（建物の隅にある両開きの板戸）を開けて（浮舟を）お入れ申す。

七 このようなお忍び歩きのお帰りは、やはり二条の院にお出でになる。気兼ねせずに休める中の君のもと。前にも宇治から二条の院に戻っている（四〇頁）。

八 帝后をはじめどちらにも。夕霧方でも、の意。

九 ますますあわただしくて。お見舞や病気治療の加持祈禱などで人の出入りが多い。

一〇 あの小うるさい乳母が。（二五～二六頁参照）

一一 今は、こんな心細い住いだけれど。

逢瀬のあと、匂宮は病み浮舟方、薫の迎えを待つ

に見えたらば、といみじきことどもを誓はせたまへば、いとわりなきことと思ひて、いらへもやらず、涙さへおつるけしき、さらに目の前にだに思ひうつらぬなめり、と胸痛うおぼさる。怨みても泣きても、よろづのたまひ明かして、夜深く率て帰りたまふ。例の、抱きたまふ。「いみじくおぼすめる人は、かうはよもあらじよ。見知りたまひたりや」とのたまへば、げにと思ひて、うなづきてゐたる、いとらうたげなり。右近、妻戸放ちて入れたてまつる。やがてこれより別れて出でたまふも、飽かずいみじとおぼさる。

かやうの帰さは、なほ二条にぞおはします。いとなやましうしたまひて、ものなど絶えてきこしめさず、日を経て青みやせたまひ、御けしきもかはるを、内裏にもいづくにも思ほし嘆くに、いとどものさわがしくて、御文だにこまかには書きたまはず。かしこにも、かのさかしき乳母、娘の子産むところに出でたりける、帰り来にければ、心やすくもえ見ず。かくあやしき住ひを、ただかの殿のもて

（浮舟は）もうどうしたらよいかと困って
（匂宮）
（匂宮は）名残も尽きずつらいと思われる
（匂宮は）大層お具合がお悪いご様子で
（浮舟への）
（浮舟）
（浮舟）
（浮舟

一二 表立ったお扱いではないものの、ご本邸近くに引き取ろうという気におなりになったので。（四六頁参照）

一三 次々としかるべき女房を捜し求め、女の童のかわいらしい者などを雇い入れて（宇治へ）お寄こしになる。京に移るのに恥ずかしくないように、召使をそろえる。

一四 自分としても。以下、浮舟の思い。

一五 前後の見境もなく恋い焦がれなさるお方（匂宮）のことを思い浮べると。

一六 雨が降り止まず、日数も重なる頃。三月の長雨であろう。月も変った趣。

一七 いよいよ宇治へのお通いも叶わぬこととお諦めになって。主語は、匂宮。

匂宮より文あり　浮舟、思い悩む

一八 親に大事がられる子は窮屈なものだ。「たらちねの親の飼ふ蚕の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて」（『拾遺集』巻十四恋四、題しらず、人麿。『古今六帖』二、親）

一九 あなたのことを思って眺めやる宇治の方の雲も見えないほど、わが心のみか空まで暗い長雨のこの頃のつらいこと。「ながめ」に「長雨」が響く。

ちゃんとお世話下さるだろうことを楽しみに待つことで　気を休めていたところへ

なしたまはむさまをゆかしく待つことにて、母君も思ひなぐさめたるに、忍びたるさまながらも、近くわたしてむことをおぼしなりにければ、いとめやすくうれしかるべきことに思ひて、やうやう人もとめ、童のめやすきなど迎へておこせたまふ。わが心にも、それこそ望みどおりのことと　本当に世間体もよく結構なことだと　〔母君は〕　その京住まいこそ　はじめから待ち続けていたのだ

そはあるべきことに、はじめより待ちわたれ、とは思ひながら、ながちなる人の御ことを思ひ出づるに、怨みたまひしさま、のたまひしことども、面影につと添ひて、いささかまどろめば夢に見えたまひつつ、いとうたてあるまでおぼゆ。

怨みごとをおっしゃった様子やそのお言葉のあれこれが　目先に焼きついて　少しうとうとすると　〔匂宮が〕　本当に我ながらいやになるほどの気がする

雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いとど山路おぼし絶えて、わりなくおぼされければ、親のかふこは所狭きものにこそ、とおぼすもかたじけなし。尽きせぬことども書きたまひて、

たまらなくお思いになるので　恐れ多いことだ　尽きぬ思いのたけを何やかやとお書きになって

（匂宮）ながめやるそなたの雲も見えぬまで
空さへくるるころのわびしさ

筆にまかせて書き乱りたまへるしも、見所あり、をかしげなり。こ

書きすさびなさったのがかえって　見事で　風情がある　格別

考え深いというのでもない浮舟の到らぬ心には

とにいと重くなどはあらぬ若きここちに、一いとかかる心を思ひもまさりぬべけれど、二はじめより契りたまひしさまも、さすがに、かれはなほいとものの深う、人柄のめでたきなども、世の中を知りにしはじめなればにや、三かかる憂きこと聞きつけて、思ひ疎みたまひなむ世には、いかでかあらむ、四いつしかと思ひまどふ親にも、思はずに心づきなしとこそはもてわづらはれめ、五かく心焦られしたまふ人は

いやな娘だと厄介者扱いされることであろう

た、いとあだなる御心本性とのみ聞きしかば、かかるほどこそあらめ、またかうながらも、京にも隠しする忍たまひ、ながらへてもおぼしかずまへむにつけては、六かの上のおぼさむこと、よろづ隠れなき世なりければ、七あやしかりし夕暮のしるべばかりにだに、かう尋ね出でたまふめり、八ましてわがありさまのともかくもあらむを、聞きたまはぬやうはありなむや、と思ひたどるに、わが心も、きずありてかの人にうとまれたてまつらむ、なほいみじかるべし、と思ひ乱るるをりしも、かの殿より御使あり。

よしやまたこのままで　私を京にかくまっておかれて　行く末長くひとかどのお通い所としてお世話下さるにつけては　[それに]何ごとも隠し通せぬ世の中だから　こうして捜し出しなさるようだ　次々に思案すると　我ながらも　道を踏み外して　薫　いやな女だと思われ申すのは　やはりとても悲しいことだろう　[お文の]薫

一 本当にこんな思い詰めた気持（匂宮のお手紙）には、恋心も一段とつのりそうではあるが。以下、浮舟の心中に添って書き、いつか純然たる心の文になる。

二 はじめての時から、行く末長くとお約束なさった態度も、さすがに、あちら（薫）はやはり思慮深く、人柄が立派だと思うのなども、男女の仲を知った最初の相手だからだろうか。

三 こんないやなこと（匂宮との密事）を耳にして、私をお嫌いになったら、どうして生きていけようか。

四 早く京に迎えられるようにと、気をもんでいる母親からも。

五 こんなふうに恋い焦がれていらっしゃるお方（匂宮）はといえば、大層浮気なお生れつきだという噂がもっぱらだったから、ご熱中の間はともかく（すぐ冷めてしまわれることだろう）。

六 二条の院の上（中の君）が、何とお思いになろうか。

七 まるで夢のようだった夕暮れの出来事を手掛りにしてでも。二条の院で、匂宮が浮舟に近づいたことをいう。（東屋三〇八～三一四頁参照）

八 （そうだとすれば）まして京のうちで自分がどうしているかぐらいのことを、（薫が）お耳になさらぬことがあろうか。匂宮に匿われていても、すぐ薫に知れよう。

浮舟、匂宮の文を見る

九 どうしても長々と書き続けてある方（匂宮の文）を読みながら、横になっていられると。

一〇 殿様（薫）のお顔立ちを、世にまたといらっしゃるまいと思っていましたが。

一一 ご冗談などおっしゃる時のたまらないこと。

一二 私だったら、これほどのご執心を知りながら、とてもこんなに落着いてはいられませんわ。「まろ」は、親しい間で用いる一人称。男女ともに使う。

一三 中宮様（明石の中宮）のところにでも宮仕えに上がって、いつも（匂宮を）拝していましょう。

一四 まあ、安心できないお人だこと。色好みなのを非難する。

一五 どう考えても今度のこと（匂宮とのこと）は、ほんとにいけないことですわ。

一六 右近が一人でいろいろ考えていたよりは、嘘をつくにしても都合がよくなったのだった。侍従という仲間ができたので、という気持。

一七 あとから来た薫の手紙。

薫の文を見る

一八 あなたのことをいい加減に思っていましょうか。

あれこれと両方の手紙を並べて見るのもいやなので

これかれと見るもいとうたてあれば、なほ言多かりつるを見つつ臥したまへれば、侍従、右近、見合はせて、「なほ移りにけり」など、言はぬやうにて言ふ。「ことわりぞかし。殿の御容貌を、たぐひおはしまさじと見しかど、この御ありさまはいみじかりけり。うち乱れたまへる愛敬よ。まろならば、かばかりの御思ひを見る見る、えかくてあらじ。后の宮にも参りて、常に見たてまつりてむ」と言ふ。右近、「うしろめたの御心のほどや。殿の御ありさまにまさりたまふ人は、たれかあらむ。容貌などは知らず、御心ばへけはひなどよ。なほこの御ことは、いと見苦しきわざかな。いかがならせたまはむとすらむ」と、二人してかたらふ。心ひとつに思ひしよりは、そらごともたより出で来にけり。

（顔を）

（侍従）ご無理もありませんわ

口には出さず目顔で言う

匂宮のお美しさといったらすばらしいものでした

誰がおられましょう

顔立ちなどはともかく

ご気性や物腰などはもう格別

やはりお心が移ったのですわ

二人で語り合う

なるというのでしょう

後の御文には、

思ひながら日ごろになること。ときどきは、それよりもおどろかいたまはむこそ、思ふさまならめ。おろかなるにやは。

心にかけながらご無沙汰しました

あなたの方からもお便りを下さるのでしたら

申し分ないのですが

一 など書いて、端書に。「端書き」は、手紙の初めの方に戻って書き添えたもの。

二 川水も増す遠い宇治のあなたはどうしていることだろう、晴れぬ長雨に私も物思いに閉ざされて過すこの頃は。「をち」に「遠」（遠方、彼方）の意と、宇治に存した地名を掛ける（六巻椎本三〇八頁注五参照）。「ながめ」は「長雨」「眺め」の掛詞。

三 いつもより、お案じ申す気持がつのるのです。歌からすぐ続く文脈。

四 白い色紙（鳥の子薄様の白い染紙）に書いて、立文にしてある。「立文」は、書状を巻いて包み紙にたてに包んだもの。儀礼や普通の用件の時の形式。

五 匂宮は、大層言葉多く書き連ねてあるのを、ことさら小さな結び文にされたのは。結び文は恋文の形。

六 先にあちらのお返事を、人目につかぬうちに。匂宮への返事を女房（右近か侍従）が勧めるのである。

七 宇治―憂しと響く里の名を、私の身の上を言うのだと思うと、その宇治の地に住むのは一層つらく思われる。「わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、喜撰法師）

匂宮への返歌

八 前出。三六頁参照。

九 他所に行って、宮にすっかり逢えなくなってしまうのは、とても悲しく思うことだろう。浮舟の思い。

一〇 空をかきくらし、晴れ間もない峰の雨雲に、どちらとも定めなくこの世を過す我が身を、してしまいた

一など、端書きに、

（薫）二 水まさるをちの里人いかならむ
晴れぬながめにかきくらすころ

と、三 白き色紙にて立文なり。四 御手もこまかにをかしげならねど、書きざまゆゑゆゑしく見ゆ。五 宮はいと多かるを、ちひさく結びなしたまへる、さまざまをかし。六「まづかれを、人見ぬほどに」と聞こゆ。

（浮舟）「今日はえ聞こゆまじ」と、

（浮舟）七 里の名をわが身に知れば山城の
宇治のわたりぞいとど住み憂き

八 宮の描きたまへりし絵を、時々見て泣かれけり。ながらへてあるまじきことぞと、とざまかうざまに思ひなせど、九 ほかに絶えこもりてやみなむは、いとあはれにおぼゆべし。

（浮舟）一〇「かきくらし晴れせぬ峰のあま雲に

書き ご筆跡も趣があって美しいというのではないがぶりにおたしなみのほどがうかがえる
それぞれに趣がある
とてもお返事できません
恥ずかしがって
手すさびに
〔浮舟は〕思わず泣くのだった
〔匂宮との仲は〕長くは続くはずのないことと
あれこれと考えては見るけれど

い。匂宮と薫の間に挟まれて苦しむ身は、いっそ死んで火葬の煙となってしまいたい、の意。

二一 煙となって大空の雲にまじってしまったなら。「白雲の晴れぬ雲居にまじりなばいづれかそれと君は尋ねむ」（『花鳥余情』所引。出典未詳）

二二 そうは言っても（死んでしまいたいなどと言っても）、私のことを恋しく思っていることだろう。

一三 まじめなお方。薫のこと。

一四 一人さびしく、訪われることもないわが身のつらさを知る雨が止む間もありませんので、川の水嵩がまさるばかりか、私の袖まで涙で一層濡れております。「つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡れて逢ふよしもなし」（『古今集』巻十三恋三、業平の朝臣の家にはべりける女のもとによみてつかはしける　敏行朝臣）、「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」（『古今集』巻十四恋四、藤原敏行朝臣の、業平朝臣の家なりける女をあひ知りて文つかはせりける言葉に「今まうで来、雨の降りけるをなむ見煩ひはべる」と言へりけるを聞きて、かの女にかはりてよめりける　在原業平朝臣）。いずれも『伊勢物語』百七段。

薫への返歌

一五 女二の宮。薫の正室。

一六 さしたる間柄でもないのですが、いつかもう長年になる者がいるのですが。浮舟のこと。

薫、女二の宮に、浮舟のことを打ち明ける

浮きて世をふる身をもなさばや
（声をあげて泣いておしまいになる）

一二 まじりなば」と聞こえたるを、宮はよよと泣かれたまふ。さりとも、恋しと思ふらむかし、とおぼしやるにも、（物思いに沈んでいるであろう女の姿ば）もの思ひてゐたらむさまのみ面影に見えたまふ。（顔に浮ぶ思いがなさるかり）

一三 まめ人はのどかに見たまひつつ、（ゆったりと［返書を］）あはれ、（かわいそうに）いかにながむらむ、（どんなに物思いをしていよう）と思ひやりて、いと恋し。

一四 つれづれと身を知る雨のをやまねば
袖さへいとどみかさまさりて
（いつまでも放さず見ていらっしゃる）

とあるを、うちも置かず見たまふ。

一五 女宮に物語など聞こえたまひてのついでに、「（薫）無礼なとも思し召そうかなめしともやおぼさむと、（気がひけますが）つつましながら、一六 さすがに年経ぬる人のはべるを、（大層嘆いている様子なのがかわいそうなので）あやし（人とは違った考えを持っていまして）（田舎に放っておきまして）き所に捨て置きて、（と思っております）いみじくもの思ふなるが心苦しさに、（近くに呼び寄せて）近う呼び寄せて、（ひたすら世捨人として過そうと思っておりましたが）と思ひはべる。昔より異やうなる心ばへはべりし身にて、（この世を）世の中を、すべて例の人ならで過ぐしてむと思ひはべりしを、かく

一 概に世を捨てるわけにもまいりませんので（こうして日々を過しておりますが、そうなると）、今までそんな者がいるとは世間にも知らせなかったしがない分際の者まで、（捨て置くのは）かわいそうで、罪障にもなろうかという気がいたしまして。

二 どのようなことに気を病むものなのかも存じませんのに。嫉妬など知らぬ、と言う。

三 けれどもその者は、それほどの（問題にするほどの）分際と考えるにも及びますまい。

四 さては、女を引き取るための家だったのか。「料」は、所用に供すべき物。

五 あの大内記が妻とする人の親で、大蔵の大夫である者に。匂宮腹心の家来大内記の妻の父は薫の家司であること、すでに二〇頁に見える。「大蔵の大夫」は、大蔵省（七巻宿木一五三頁注一一参照）の丞（三等官、六位相当）で、五位に叙せられた者。

匂宮、薫の浮舟移転の計画に、対策を立てる

六 （大内記は）妻を通じて、情報を耳にして。

七 襖絵の絵師連中なども、（薫の）御随身の中にいる者で、ご信頼なさる家来などからお選びになって。「随身」は、近衛府の将曹以下で、上皇、摂関、大臣、大将などの護衛に当る者。音楽その他の技芸に達した者が多かった。

見たてまつるにつけて、ひたぶるにも捨てがたければ、ありと人にも知らせざりし人の上さへ、心苦しう、罪得ぬべきここちしてなむ」と、聞こえたまへば、「いかなることに心置くものとも知らぬを」と、いらへたまふ。「内裏になど、あしざまに聞こしめさするもしれませんを人やはべらむ。世の人のもの言ひぞ、いとあぢきなくけしからずはべるや。三 されどそれは、さばかりの数にだにはべるまじ」など聞こえたまふ。

（女二宮）二 （薫）内 帝にも お返事をなさる 一体世間の人の口というものは まことにがしくたちの悪いものでご ざいます よからぬようにお耳に入れる人もいるか てご一緒申し上げるにつけて

造りたる所にわたしてむ、とおぼし立つに、「四かかる料なりけり」など、はなやかに言ひなす人やあらむ、など、苦しければ、いと忍びて、障子張らすべきことなど、人しもこそあれ、五この内記が知る人の親、大蔵の大夫なるものに、むつましく心やすきままに、のたまひつけたりければ、聞きつぎて、宮には隠れなく聞こえけり。

「絵師どもなども、御随身どものなかにある、むつましき殿人などを選りて、さすがにわざとなむせさせたまふ」と申すに、いとどお

〔薫は〕新築した家に 〔浮舟を〕移そう とお思い立ちになるが 派手に噂を立てる人があるかもしれない 襖障子を張らせる仕事などを 気心が知れて何でも言えるので 案じられるので どく内々に 匂宮 何もかも知れてしまった 隠れ家ながらやはり念を入れてさせておいでです 〔内記が〕 〔匂宮は〕いよい つけなさったので

八 ご自分の乳母で、遠国の受領の妻として下る者の家が、下京あたりにあるのを。その夫の家らしい（八七頁参照）。

九 （匂宮が）さも重大事とお思いのようなのに、（お断りしては）恐れ多いので。

一〇 三月の末頃。次に「卯月の十日」とある。

一一 早速その日に移そうと、（匂宮は）ご計画になる。

一二 かように心積りしている。滅多に人に気取られぬように。「ゆめゆめ」は、強い禁止の意の副詞。

一三 乳母がひどくうるさいので、（おいで頂くことは）むつかしかろうとお返事申し上げる。前にも「かのさかしき乳母」（五八頁）とあった。

一四 （浮舟移転の日を）四月の十日頃とお決めになっていた。

一五 （浮舟は）誘う人があれば、どこへでも、という気にはなれず。「わびぬれば身を浮き草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」（『古今集』巻十八雑下、文屋康秀が参河掾になりて「県見にはえ出で立たじや」と言ひやれりける返りことによめる　小野小町）

一六 決心がつかず不安な気持がつのるので。「浮きたる」は、歌の「身を浮き草の」を受けた措辞。

一七 常陸の介の次女で少将の妻になった人。東屋二七六～二八八頁に、その結婚の経緯が述べられている。

一八 安産祈願の修法や読経などとばたばたしているので、一緒に石山詣でもなるまいとのことで。

母君、宇治に来る

よ気が気でなくぼし騒ぎて、八わが御乳母の、遠き受領の妻にてくだる家、下つ方にあるを、（匂宮）ごくごく内密の女をいと忍びたる人、しばし隠いたらむ」と、しばらく隠しておきたいかたらひたまで頼みこみなさったのひければ、いかなる人にかは、どういう人なのだろうと思へど、大事とおぼしたるに、かたじけなければ、（乳母）それではどうぞ「さらば」と聞こえけり。これをまうけたまひて、お引き受けしたすこし御心のどめたまふ。この月のつごもりがたに下るべければ、[匂宮は]少し安心なさる[乳母らは]一〇やがてその日わたさむ、とおぼし構ふ。（匂宮）一一「かくなむ思ふ。ゆめゆめ」お手紙を何度も送られるだけでと言ひやりたまひつつ、ご自身宇治へお出かけになることはとてもできない相談であるおはしまさむことはいとわりなくあるうちのみかにも、宇治の方でもここにも、乳母のいとさかしければ、難かるべきよしを聞こゆ。

薫

大将殿は、一四卯月の十日となむ定めたまへりける。一五誘ふ水あらば、本当に困った

とは思はず、いとあやしく、一体どうしたらいい身の上なのだろういかにしなすべき身にかあらむ、と浮一六きたるここちのみすれば、京の母君の家にしばらく出かけて行って思案する間そこにいようと思はれるが母の御もとにしばしわたりて、思ひめぐらすほどあらむ、とおぼせど、一七少将の妻、子産むべきほど近くなりぬとて、一八修法読経など隙なく騒げば、石山にもえ出で立つまじ、母

一 お殿様（薫）から、女房たちの着る物などまで、こまごまとご配慮がございました。京へ移る折の晴れの衣裳であろう。

二 私一人の計らいでは、ほんのお粗末なことしかできませんでしょう。「まま」は、乳母を親しみ呼ぶ語であるが、ここは自称に用いる。

三 とんでもないことがいろいろと起って、世間の物笑いになるならば。匂宮に迎えられた揚句、露顕したりすること。

四 あとさきも忘れていちずにおっしゃる方はといえば。匂宮のこと。

五 どこに隠れたところで、必ず捜し出して。「白雲の八重立つ山に籠るとも思ひ立ちなばたづねざらめや」（『紫明抄』『河海抄』所引。出典未詳）。

六 やはりさっさと隠れ家に抜け出すことを考えよ、と今日もおっしゃったが。今日も匂宮から文があった趣。

七 （母君は）おかしいこと、物の怪などのせいかしらと、どんなお具合かと不審に思うが。妊娠かと疑う気持。

八 石山詣でもお取り止めになりましたことですしね。月の障りはあった、と言う。

こちら宇治へおいでになった
ぞこちわたりたまへる。乳母（乳母）出で来て、「殿より、人々の装束なども、こまかにおぼしやりてなむ。いかできよげに何ごとも、と思うどうかして見た目も雛なく何もかも と心掛けてはいますが
たまふれど、ままが心ひとつには、あやしくのみぞし出ではべらむかし」など言ひ騒ぐが、ここちよげなるを見たまふにも、君は、けはしゃいで言うのが うれしそうなのをご覧になるにつけても 浮舟
しからぬことどもの出で来て、人笑へならば、たれもたれもいかに思はむ、あやにくにのたまふ人はた、八重立つ山に籠るとも、かならず尋ねて、われも人もいたづらになりぬべし、なほ心やすく隠れなむことを思へ、と今日ものたまへるを、いかにせむ、とここちあしくて臥したまへり。「などかかく例ならず、いたく青み痩せたまへる」とおどろきたまふ。「日ごろあやしくのみなむ。はかなきものも聞こしめさず、なやましげにせさせたまふ」と言へば、あやしきことかな、もののけなどにやあらむ、と、いかなる御ここちぞ、と思へど、「石山とまりたまひにきかし」と言ふも、かたはらいたければ、伏し目なり。

結局私も宮様も身を滅ぼしてしまうことになろう
乳母や女房たちも何と思おう
どうしたものか
気分も悪くなってきて
（母）どうしてこうお具合が悪くて
心配なさる
（乳母）このところずっとおかしいのです
ちょっとしたお食事もお上がりになりませず
ご気分がお悪いご様子でいらっしゃいます
（女房）
［浮舟は］恥ずかしくてならないので

九 有明の空を思い出すと。「有明の月澄みのぼりて」（五三頁）とあった、匂宮に抱かれて川を渡った時のこと。

母君、弁の尼と語る

一〇 あちらにいる尼君。廊に住む弁の尼。（二〇頁注二参照）

一一 亡き大君のお人柄は。以下、尼君の語る話の概要。

一二 姉君のお立場として当然のご心配も、思いつめてお嘆きでしたあまりに。匂宮と中の君の結婚について心を痛めたこと。

一三 宮の奥方様（中の君）と同じようなお身の上で。薫の夫人として、の意。

一四 ご姉妹で親しく消息をお交わしになって。

一五 自分の娘（浮舟）だって（お二人と）何の違いがあろう（同じ八の宮の子）、望み通りの運がこのまま続いたなら（お二人に）負けまいものを。母君の思い。

一六 こんなふうにお目にかかれる折ごとに、昔のことも、ゆっくりとお話し申し上げ、承りもしたいものです。

一七 不仕合せ続きの縁起でもない身の上と、つくづく思い知らされましたので。主家の柏木に死別し、また大君にも先立たれて尼になった身だからである。

暮れて月いと明し。有明の空を思ひ出づる、涙がどうにも押えられないの涙のいととめがたきは、ほんとにいけない料簡だいとけしからぬ心かな、と思ふ。〔浮舟は〕母君、昔の思い出話など始めて昔物語などして、一〇あなたの尼君呼び出でて、一一故姫君の御ありさま、物ごとを深くお考えで心深くおはして、一二さるべきこともおぼし入れたりしほどに、見る見るうちにお力落しのあまり亡くなら目に見す見す消え入りたまひれたことなどを話すにしことなど語る。「おはしまさましかば、（尼君）ご存命でしたならば一三宮の上などのやうに、本当にこの上もないさびしいご境遇だったお二人ですが聞こえ通ひたまひて、一四心細かりし御ありさまどもの、いとこよなきお仕合せなことだったでしょうに御幸ひにぞはべらましかし」と言ふにも、一五わが娘は異人かは、思ふやうなる宿世のおはし果てば劣らじを、など思ひ続けて、〔母君〕いつも「世とともに、この君につけては、心配ばかりしておりました私の胸の内もものをのみ思ひ乱れしけしきの、すこし少しはほうちゆるびて、かくてわたりたまひぬべかめれば、ここに参り来ること、こうして京にお移りになることになりましたので〔私が〕こちらに伺うことかならずしもことさらには、思い立つわけにもゆきますまいえ思ひ立ちはべらじ。一六かかる対面のをりをりに、昔のことも、心のどかに聞こえうけたまはらまほしけれ」などかたらふ。「ゆゆしき身とのみ思うたまへしみにしかば、親しげに話す（尼君）一七〔浮舟に〕ゆっくりとお目にかかってお話し申し上げたりするのもこまやかに見えたてまつり聞こえさせむも、いかがかと ご遠慮して過何かは、つつまし

一 世にまたとないほど慎重に事をお運びのようにお見受けいたしますお殿様（薫）のご性格ですのに、（それが）こうして（浮舟を）わざわざお迎え申し上げなさったのも。

二 ただもうあなた様のお引き合せのお蔭と、繰り返しありがたく存じています。弁の尼の仲立ちのこと、東屋二六九頁注三、三三一頁以下参照。

三 もったいないことに（二条の院に引き取って）お目をかけて下さいましたけれども、憚り多いことがつい起りましたので。匂宮が浮舟に迫ったことを言う。

四 よるべのない、身の置き所もないお人だ。浮舟のこと。

五 （二条の院は）ほかのことではすべて、とても結構なお邸なのですけれども、そちらの方のことで（匂宮のお手がつくことで）、奥方様が、女房の分際で無礼な、とお思いになろうことが難儀なのです。

六 大輔は中の君づきの女房。その娘の右近である。東屋三一〇頁以下に登場。この巻の右近とは別人。

七 やっぱりそうだ、まして妹の私は、と。女房でさえ中の君を憚るのだから、血を分けた妹はまして、と思う。

（私めを一人残して京にお移りなさいましたら）くて過ぐしはべりつるを、うち捨ててわたらせたまひなば、いと心（こんな山里の）細くなむはべるべけれど、かかる御住ひは、（気づかわしいことと存じ上げてお）心もとなくのみ見たてまつるを、（もうこれで安心というものでございます）うれしくもはべるべかなるかな。世に知らず重々しくおはしますべかめる殿の御ありさまにて、かく尋ねきこえさせたまひしも、（並々のお志ではないはずといつか申し上げておきましたが）おぼろけならじと聞こえおきはべりにし、（やはりいい加減な申し分で）浮きたることにやはべりける」など言ふ。「（母君）先のことは分りませんが（ただ今のところはこうしてお）はべりける」など言ふ。「のちは知らねど、ただ今はかくおぼし（見捨てないように仰せ下さるにつけましても）離れぬさまにのたまふにつけても、ただ御しるべをなむ思ひ出できこゆる。（中の君）宮の上の、かたじけなくあはれにおぼしたりしも、つつましきことなどの、おのづからはべりしかば、中空に所狭き御身なり、と思ひ嘆きはべりて」と言ふ。尼君うち笑ひて、「この（匂宮）宮の、いと（本当に）さわがしきまで色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人、さぶらひにくげになむ。おほかたは、いとめでたき御ありさまなれど、（しにくがっているようです）さる筋のことにて、上のなめしとおぼさむなむわりなき、と大輔が（ご奉公）娘の語りはべりし」と言ふにも、さりや、まして、と君は聞き臥し（もう次から次へと色好みのお振舞がおありのようですので）（しっかりした若い女房は）

八（薫は）帝の御娘を頂いておいでになる方ですけれども、（その女宮とは）別にご縁もないわけですから、お咎めがあろうとなかろうと（どうなろうとも）それはしかたのないことと。

浮舟、母の話すのを聞きつつ、入水を思う

九（しかし匂宮とは）不都合なことをし出かしなさったら。実の姉の夫と道ならぬことをするようだったら。二条の院での出来事を念頭において言うのであろう。

一〇もうお世話しないでしょう。親娘の縁を切る、と言う。

一一やはりこの身を亡くしてしまいたい、（でないと）結局は世間の物笑いになるようなことが起るだろう。匂宮は、どうでも無理を通されるに違いない、と思う。

一二すぐそこの宇治川の流れの音が、恐ろしげな響きを立てて流れるのを。死のうと思った時、耳につく水音。

一三またとない荒々しい所に、年を越えて住んでいらっしゃるのだもの。浮舟のこと。

一四先だって、渡守の孫の男の子が、棹を差し損ねて川にはまってしまいました。

一五そんなことにでもなって（宇治川に入水して）、わが身が行方知れずになってしまったならば。以下、浮舟の心中の思い。

一六母君をはじめ、匂宮や薫なども。

たまへり。

（母君）まあいやなこと

「あなむくつけや。帝の御女を持ちたてまつりたまへる人なれど、

恐れ多い

よそよそにて、あしくもよくもあらむは、いかがはせむと、おほけなく思ひなしはべる。よからぬことをひき出でたまへらましかば、

ことですがそう考えています

たとえどんなに私にとって悲しくつらいとお思い申すにしても

すべて身には悲しくいみじと思ひきこゆとも、また見たてまつらざらまし」など、言ひかはすことどもに、いとど心ぎももつぶれぬ。

〔尼君と〕話し合っている言葉を聞いて〔浮舟は〕ますます胸も潰れる思いがする

なほわが身を失ひてばや、つひに聞きにくきことは出で来なむ、と思ひ続くるに、この水の音の恐ろしげに響きて行くを、「かからぬ流れもありかし。世に似ず荒ましき所に、年月を過ぐしたまふを、

（母君）こんなに激しくない川もありますのに

〔薫が〕かわいそうだとお思いなのも当り前です

満足そうに

あはれとおぼしぬべきわざになむ」など、母君したり顔に言ひゐたり。昔よりこの川のはやく恐ろしきことを言ひて、「先つころ渡守が孫の童、棹さしはづして落ち入りはべりにける。すべていたづらになる人多かる水にはべり」と、人々も言ひあへり。君は、さてもわが身行方も知らずなりなば、誰も誰も、あへなくいみじと、しば

急流で危険なことを話題にして

（女房）

何にしろ命を落す人の多い川なのです

女房たちも口々に言う

浮舟

当分の

あっけなく悲しいと

一 生き永らえて、世間の物笑いになるような情けないことでも起ったら。

二 （死ぬのは）何のさし障りもありそうになく、万事さっぱりと片付くように思われるけれども、また思い返してみると、とても悲しい。

三 必要なご祈禱など寺にさせて下さい、祭や祓など（もこれこれをするようになど言いつける。「祭祓」は、陰陽道で行うもの（七巻総角一〇四頁注七参照）。

四 御手洗川に御禊もしたい有様なのに。恋ゆえの悩みなのに。「恋せじと御手洗川にせし御禊神はうけずもなりにけらしも」（『古今集』巻十一恋一、題しらず、読人しらず。『伊勢物語』六十五段）。「御手洗川」は、神社の境内にあり、参詣者が身を清める川。

五 （京へ移るのに）女房が少ないようです。

六 （気心の知れぬ）新参者は連れてゆかないで、ここ（宇治）に残して置きなさい。

七 上つ方のお付き合いは、ご本人は何ごとにも大らかにお考えでしょうが。正室の女二の宮方を意識した言葉。ご本人は嫉妬などなさらないだろうが、の意。

八 よくない仲となってしまったお方とは（下々の者が反目して）、厄介なことも起るでしょう。

九 表立たず控えめにして。底本ほか「かくしひそめて」。河内本による。

一〇 あちら（京の家）で寝ている人も心配です。お産の近い少将の妻のこと。六五頁参照。

母君、帰京

（間くらいはお思いになろうが）しこそ思うたまはめ、ながらへて人笑へに憂きこともあらむは、（その悲しい物思いの消えることがあろう）つかそのもの思ひの絶えむとする、と思ひかくるには、（とそこまで考えてくると）障りどころもあるまじく、さはやかによろづ思ひなさるれど、うちかへしいと悲し。（母が何かと自分の身を案じて話している様子を）親のよろづに思ひ言ふありさまを、（寝たふりをしながら何やかやと深く）寝たるやうにてつくづく（思い悩んでいる）と思ひ乱る。

（浮舟が）具合悪そうで

なやましげにて痩せたまへるを、（母君は）乳母にも言ひて、（注意して）さるべき御祈りなどせさせたまへ、祭祓（そうとも知らずに何かと心配して言う）などもすべきやうなど言ふ。御手洗川に御禊せまほしげなるを、かくも知らでよろづに言ひ騒ぐ。（十分に信用のおける家の人を選んで）（母君）「人少なめり。よくさべからむあたりをたづねて、今参りはとどめたまへ。やむごとなき御仲らひは、正身こそ何ごともおいらかにおぼさめ、よからぬ仲となりぬるあたりは、わづらはしきこともありぬべし。かいひそめて、（その積りで用心なさい）さる心したまへ」など、思ひいたらぬことなく言ひおきて、「かしこにわづらひはべる人もおぼつかなし」とて帰るを、（何から何までこまごまと注意をして）（母君）おいて（浮舟は）ひどく思い乱れていともの思はしく、よろづ心細ければ、（これきり母に会わぬまま）またあひ見でもこそ、（死ぬのも）とも

一一 そんな所で、お側の人たち（女房）も、ちょっとしたことも用意できないほど、家も狭いことですから。「はかなきこと」は、衣服の裁ち縫いなど。

一二 たとえあなたが、武生の国府といった、遠い所へいらしたとしても、私はこっそりやって参りましょうものを。催馬楽、律「道の口」に、「道の口　武生の国府に　我はありと　親には申したべ　心あひの風や　さきんだちや」に「我はありと親には申したべ」とあることによる。武生は越前の国の国府。

一三 数ならぬ身分の母の身では、こうして出世なさったあなたに対して、何もして上げられなくてお気の毒でなりません。

一四 気分が悪いということでしたが、いかがですか。前の薫への返事の折に（六三頁）、女房などから浮舟の様子が伝えられているのであろう。

一五 よんどころない差支えが、いろいろありまして。

一六 あなたがこちらに移られるまでの、待つ間を過すつらさは、かえってたまらない思いです。

一七 六六頁参照。母君滞在中で返事が出来なかった趣。

一八 思わぬ方に吹く風に靡かれるのではないかと、それが心配です。「須磨の海士の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）。

薫の文、匂宮の文

（浮舟）気分が悪いにつけましても　お目にかからな

かくもなれ、と思へば、「ここちのあしくはべるにも、見たてまつ

いではとても心細い気持がしてなりませんので　当分の間だけでも　お側に参って

らぬがいとおぼつかなくおぼえはべるを、しばしも参り来まほしく

いたい　あとを慕う（母君）私もそうは思いますが　あちらもお産でずいぶん何かと騒が

こそ」としたふ。「さなむ思ひはべれど、かしこもいとものさわが

しいことです

しくはべり。一一この人々も、はかなきことなどえしやるまじく、狭く

などはべればなむ。武生の国府にうつろひたまふとも、忍びては参

り来なむを、一三なほなほしき身のほどは、かかる御ためこそいとほし

くはべれ」など、うち泣きつつのたまふ。

（薫）殿の御文は今日もあり。（薫）一四「なやましと聞こえたりしを、いかが」

お見舞い下さっている

と、とぶらひたまへり。

（薫）自身で伺いたいのですが　（匂宮）何を思い迷っていられるのですか　ひとしお何も頭に入らずいちずに思いつめています

みづからと思ひはべるを、一五わりなき障り多くてなむ。一六このほどの

暮らしがたさこそ、なかなか苦しく。

匂宮

などあり。宮は、一七昨日の御返りもなかりしを、

いかにおぼしただよふぞ。一八風のなびかむ方もうしろめたくなむ。

いとどほれまさりてながめはべる。

一 この前、雨の降った日。（五九～六〇頁参照）
二 薫の家来の随身。
三 （相手が）あの少輔の家で時々会う下男なので。「少輔」は、大内記道定のこと。式部の少輔兼任は、五一頁参照。この下男は、すぐ後のやりとり、また後の七四頁によれば時方の家来（四四頁注三参照）。
四 お主は。目下の者を呼ぶ軽い二人称の敬語。
五 そんな私用の相手に、しゃれた恋文など届けに来るのか。どうもお主、胡散臭いな。
六 主人の守の君のお手紙を、ここの女房にさし上げなさるのです。「守の君」は、国守を言う。時方は、出雲の権の守とある（七四頁）。
七 あと先言うことが違って、おかしいと思うが。
八 時方のこと。左衛門府（宮城内外を警護する）の佐。従五位上相当。時方は大夫（五位の称）。本当に時方の使いかどうか、確かめさせる積り。
九 身分の低い下人の身では、思い到らず。
一〇 薫の使者の随身のこと。「舎人」は、近衛の舎人、また近衛府の将監（三等官）以下の称。随身は普通、将曹（四等官）以下が勤める。「舎人の人」は「劣りの下衆」に対して、いっぱしの舎人、といった気持。以下「くちをしきや」まで、草子地。
一一 （随身は）主人のお邸（薫邸）に参上して。

文使いの鉢合せ

薫の使者、相手の正体を見届ける

こちらはるると書き連ねていられる

など、これは多く書きたまへり。

雨降りし日、来あひたりし御使どもぞ、今日も来たりける。殿の御随身、かの少輔が家にて時々見る男なれば、「真人は、何しにここにはたびたびは参るぞ」と問ふ。「私にとぶらふべき人のもとにまうで来るなり」と言ふ。「私の人にや、艶なる文はさし取らする。けしきある真人かな。もの隠しはなぞ」と言ふ。「まことは、この守の君の御文、女房にたてまつりたまふ」と言へば、言違ひつつあやしと思へど、ここにて定め言はむも異やうなべければ、おのおの参りぬ。

（随身）
（匂宮の使）
（随身）
何の用で
私用で尋ねなければならぬ人のところにやって来るのです
何で隠しだてするのだ
（匂宮の使）本当は
ここで詮議するのも
それぞれ京へ帰参した

［随身は］頭の働く男だったので

かどかどしきものにて、供にある童を、「この男に、さりげなくて目つけよ。左衛門の大夫の家にや入る」と見せければ、「宮に参りて、式部の少輔になむ、御文は取らせはべりつる」と言ふ。さまで尋ねむものとも、劣りの下衆は思はず、ことの心をも深う知らざりければ、舎人の人に見あらはされにけむぞ、くちをしきや。殿に

連れている
（随身）
（童）
匂宮邸
家に入るかどうか
追跡させたところ
気づかれないように
どうかと思って
ご返事の文は渡しました
事のいきさつも十分知らなかったもので確かに探ろうとも
見破られてしまったというのものだから
情けない話です

一三 薫の装い。平常着のさま。

一三（そちら へ）いらっしゃるということだったので、大げさに、ご前駆なども大勢はいない。姉弟の間のくつろいだ訪問。

一四（随身は）側の取次ぎの者が聞くのもどうかと憚って、ただ畏まって控えている。

一五 明石の中宮。しばしばご不例である。

匂宮、浮舟の文を見る

一六 お子様の親王たち。

一七 あの大内記は、太政官の役人なので（公務多端のため）遅くなって参上した。浮舟の返書を届けるのが遅れて、今に到ったことの説明。但し、内記は、中務省の官である。中務省は太政官左弁官局の管轄。

一八 浮舟の返書。時方の従者から受け取ったもの。

一九 六条の院南の町の台盤所。女房の詰所。

二〇 中宮のお前。

二一 紅に染めた鳥の子紙（雁皮紙）の薄いもの。恋文の体裁。後文には「赤き色紙」（七五頁）とある。

参りて、[薫が] ちょうどお出かけになろうとする時に 今出でたまはむとするほどに、御文たてまつらす。直衣に[一二]て、六条の院に、后の宮の[明石の中宮が里下がりしていらっしゃる頃なので]出でさせたまへるころなれば、参りたまふなりければ、ことことしく、御前などあまたもなし。御文参らす[お手紙をお取次ぎする人に（随身）おかしなことがございましたのを]る人に、「あやしきことのはべりつる、見たまへ定めむとて、今ま[しかと見届けようとして]でさぶらひつる」と言ふを、ほの聞きたまひて歩み出でたまふままに、[薫は] 小耳にはさまれて（薫）「何ごとぞ」と問ひたまふ。[一四]この人の聞かむもつつましと思ひて、かしこまりてをり。殿もしか見知りたまひて、[そのまま出かけられた]出でたまひぬ。

宮、[一五]ご病気でご気分がお悪そうでいられるとのことで例ならずなやましげにおはすとて、[一六]宮たちも皆参りたまへり。[人の出入りが多いが]上達部など多く参りつどひて、さわがしけれど、ことなることもお[格別お悪いというご容態で]はしまさず。かの内記は政官なれば、おくれてぞ参れる。この御文[一八]もたてまつるを、[匂宮] 宮、[一九]台盤所におはしまして、[二〇]戸口に召し寄せて取[お下がりになる]りたまふを、[薫] 大将、御前の方より立ち出でたまふ側目に見通した[横目で遠くからご覧になって 深くご執心らしい女からの手紙の様子よ]まひて、せちにもおぼすべかめる文のけしきかな、とをかしさに立[興味を覚えて]ちとまりたまへり。[匂宮は] 引きあけて見たまふ。[二一]紅の薄様に、[こまごまと言葉]こまやかに

多く書いてあるらしい　[匂宮は]気を取られて　すぐにもこちらをお向きにならないのに

書きたるべし、と見ゆ。文に心入れて、とみにも向きたまはぬに、大臣も立ちて外ざまにおはすれば、この君は、障子より出でたまふとて、大臣出でたまふと、うちしはぶきて、おどろかいたてまつりたまふ。ひき隠したまへるにぞ、大臣さしのぞきたまへる。おどろきて御紐さしたまふ。殿もついゐたまひて、「まかではべりぬべし。御邪気の久しくおこらせたまはざりつるを、恐ろしきわざなりや。山の座主ただ今請じにつかはさむ」と、いそがしげにて立ちたまひぬ。

長い間お起りあそばしませんでしたのに　[また起るとは]油断なりませぬ　気ぜわしそうにしてお出ましになった　[匂宮に]ご注意申し上げなさる　夕霧　匂宮を先に立ててお供申し上げなさって　どなたもお帰りになった

夜ふけて皆出でたまひぬ。大臣は、宮をさきに立ててたてまつりたまひて、あまたの御子どもの上達部君たちをひき続けて、あなたにわたりたまひぬ。この殿はおくれて出でたまふ。随身しきばみつる、あやし、とおぼしければ、御前など下りて火ともすほどに、随身召し寄す。「申しつるは何ごとぞ」と問ひたまふ。「今朝、かの宇治に、出雲の権の守時方の朝臣のもとにはべる男の、紫の薄様にて、

先刻話していたのは何ごとか　(薫)　(随身)　薫　あとに従えて　仕える　襖口からお出になろうとして　咳払いをして　お出ましになると

随身、薫に委細を報告

一　夕霧右大臣。
二　(それで匂宮が)ちょうど手紙を引き隠しなさったところに、夕霧が顔をお出しになった。
三　(匂宮は)はっとして、直衣の入紐をおさしになる。襟元を外してくつろいでいたのである。
四　夕霧も膝まずかれて。匂宮に敬意を表するさま。夕霧は、六条の院の主人なので、「殿」という。
五　物の怪のこと。中宮に憑くので、「御」をつける。
六　比叡山の天台座主。「座主」は、一山の寺務を統べる最高の僧職。
七　加持祈禱に来てもらうため、使いを出しましょう。「請ず」は、頼んで来てもらうこと。
八　大勢のご子息たちの、上達部(三位以上、官は参議以上の者)や、そのほかの若君たち。
九　あちらのお住居。同じ六条の院の東北の町。匂宮の正室六の君がいる(六巻匂兵部卿一六四頁、一七五頁参照)。
一〇　(薫は)出がけに、随身が何かわけありげな様子だったのが、おかしいとお思いになったので。
一一　前駆の者などが、お前を引き下がって、松明の用意をするのを待つ間に。人少なになった時に。
一二　左衛門の大夫(七二頁)の兼官。遙任であろう。官職名、実名で正しく呼ぶ。

一三 桜の枝に結びつけた文。桜襲は、表白、裏紫なので、紙の色に合せたかと『花鳥余情』はいう。
一四 宇治の山荘の寝殿の西の妻戸。東の方は、「宿直人ある方」（一三頁）とあった。
一五 私、見つけまして、かようかようと問い質しましたところ。七二頁の質問を繰り返し述べる体。
一六 あと先言うことが違って。
一七 匂宮のお邸。二条の院である。
一八 その返事は、（宇治では）どんなふうにして渡したのか。紙の色、体裁などを尋ねる。
一九 （私がいた所とは）別の方から出しました。
二〇 下部の者が申しましたには。時方の下男のあとを随身が供人に付けさせた趣。前出の童であろう。
二一 （薫が）考え合せてご覧になるのに、この赤い色紙というのは、さきほど匂宮がご覧になっていた紅の薄様に間違いない。
二二 やはり何とも油断のならない、抜け目なくいらっしゃる宮様だ。以下、薫の心中。
二三 そういう女（薫が宇治に囲う女）がいるとお聞きになったのだろう。

薫、さまざまの思い

二四 （宇治は）遠方で田舎びた所だから、こんな男女の道の間違いは、まさかあるまいと思っていたのは、考えが足りなかった。
二五 それにしても、私にかかわりのない女になら、そんな色ごとをしかけなさるのもよかろうが。

手渡しましたのを
桜につけたる文を、西の妻戸に寄りて、女房に取らせはべりつる、
一四 一五 一六
見たまへつけて、しかしか問ひはべりつれば、言違へつつ、そらご
いかにも あとを
嘘らしい申しようをいたしましたので どうしてそう言うのか
とのやうに申しはべりつるを、いかに申すぞ、とて、童べして見せ
付けさせましたところ
はべりつれば、兵部卿の宮に参りはべりて、式部の少輔道定の朝臣
一七
返事 手渡しました 薫
になむ、その返りことは取らせはべりける」と申す。君、あやしと
一八 （薫） （随身）
おぼして、「その返りことは、いかやうにしてか出だしつる」「それ
見ておりません
は見たまへず。異方より出だしはべりける。下人の申しはべりつ
一九 二〇
大層美しいものだった
るは、赤き色紙の、いときよらなる、となむ申しはべりつる」と聞
こゆ。おぼしあはするに、違ふことなし。さまで見せつらむを、か
二一 そこまで見届けさせたらしいのを 気
のきいた処置と感心なさるが まわりに人がいるので こまかくもおっしゃらない
どかどしとおぼせど、人々近ければ、くはしくものたまはず。
お帰りの道々に 二二 一体どう
道すがら、なほいと恐ろしく、隈なくおはする宮なりや、いかな
どのようにして女に近づか
した機会に
りけむついでに、さる人ありと聞きたまひけむ、いかで言ひ寄りた
二三 二四
れたのだろう
まひけむ、田舎びたるあたりにて、かうやうの筋のまぎれは、えし
二五
もあらじ、と思ひけるこそ幼けれ、さても、知らぬあたりにこそ、

一 昔から何の隠しごともしないで、常識では考えられないような仲立ちをして、先に立ってお連れ申し上げた宇治という所だのに。昔、身を捨てて匂宮を中の君のもとに導いたことを思い起す。（七巻総角四七～四九頁、六九～七〇頁参照）

二 （それに比べて）中の君のことを、こんなに深く慕いながら、年来こらえているのは。

三 とはいえ、中の君への思いは、つい近頃始まった、世間に顔向けならぬ不体裁なことでもなく、もともとそれだけの因縁もあるのだが。姉君に譲られて、一夜を仮の添寝までしたこともある仲である（総角三七～三九頁参照）。

四 ただわが心中に疚しいところがあっては。

五 （匂宮が）近頃あのようにお具合がお悪くて。（四二～四三頁、五八頁参照）

六 （もう浮舟のもとに）通い始められたのだろうか、それにしてもいかにも遠い恋路を通われたものだ。

七 お行方が分らないと、ご在所を探されなさった日もある、と耳にしたこともあったな。はじめて浮舟を訪れた時のことであろう（三〇～三七頁参照）。

八 昔をお思い出しになるにつけても。ここからは地の文。

九 宮が中の君のもとにお通いになれなかった時のお嘆きは。

一〇 浮舟がひどく物思いに沈んでいる様子だったのも。（四五～四六頁参照）

さる好きごとをものたまはめ、昔より隔てなくて、あやしきまでしるべして、率てありきたてまつりし道にしも、うしろめたくおぼし寄るべしや、と思ふに、いと心づきなし。対の御方の御ことを、いみじく思ひつつ、年ごろ過ぐすは、わが心の重さ、こよなかりけり、さるは、それは今はじめてさまあしかるべきほどにもあらず、もとよりのたよりにもよれるを、ただ心のうちの隈あらむが、わがためも苦しかるべきによりこそ、思ひ憚るもをこなるわざなりけり、このころかくなやましくしたまひて、例よりも人しげきまぎれに、いかではるばると書きやりたまふらむ、おはしやそめにけむ、いとはるかなる懸想の道なりや、あやしくて、おはし所尋ねられたまふ日もあり、と聞こえきかし、さやうのことにおぼし乱れて、そこはかとなくなやみたまふなるべし、昔をおぼし出づるにも、えおはせざりしほどの嘆き、いといとほしげなりきかし、とつくづくと思ふに、女のいたくもの思ひたるさまなりしも、片端心得そめたまひては、

人を裏切ってそんな考えを持たれてよいものか　つくづく厭わしい　そんな自分の慎重さは　この上もないことだ　自分としても　遠慮していたのも馬鹿げたことだった　つらいことだろうと思ってそれで［今まで］　うやって遠い宇治まで手紙を書いてやられるのだろう　いつもより人の出入りの多い取り込み中に　どこがお悪い　さてはそんな無理な恋路にお心を乱されて　よくよく思い出してみると　本当においたわしいご様子だった　どうやら事情が分ってこられると　というのでもなくお煩いになるのであろう

一一 難のない人はめったにいないというが、人の心とはそういうものではある。以下「いとよきあはひなり」まで、ふたたび薫の心中。

一二 匂宮のお相手としては。「具」は、身に添える物。

一三 れきとした妻にする積りでかかわりはじめた女ならばともかく。大君とは比較にならぬ浮舟の身分。薫の扱いの程を示すくだり。

一四 やはり今まで通り、心慰みの相手として置くことにしよう。匂宮の女でもよい、と思う。

一五 自分が（こんなことから）嫌気がさして、面倒を見てやらなくなったら。以下「いとほしく」まで、薫の気持。

一六 それが、浮舟にとって、あとあとどんなに気の毒なことになるか、格別深くもお考えにならないだろう。浮気な匂宮の、一時の寵を失ったあとの、浮舟の寄るべない身の上まで、考えておやりにはならないだろう。

一七 明石の中宮腹の女一の宮。匂宮の姉宮。

一八 浮舟がそんなめにあって、一品の宮方に出仕したりするのを見聞きするのは、かわいそうでならない。

一九 ご自身直接に、人目のない折を見計らって、お側にお呼びになった。

二〇 道定の朝臣（大内記）は、今でも仲信の家に通っているのか。仲信の女との夫婦仲について問う。匂宮と女を張り合っているとは、あくまで隠したく、道定自身が浮舟に懸想していると思わせるための用意。

薫、浮舟に詰問の手紙

あれこれ思い合せて見られるにつけ　本当に情けない

よろづおぼしあはするに、いと憂し。ありがたきものは、人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたるかたは添ひたる人ぞかし、この宮の御具にては、いとよきあはひなり、と思ひもゆづりつべく、退くここちしたまへど、やむごとなく思ひそめはじめし人ならばこそあらめ、なほさるものにて置きたらむ、今はとて見ざらむはた、恋しかるべし、と人わろく、いろいろ心のうちにおぼす。

[浮舟は] 表面いかにも可憐でおっとりとした人柄とは見えながら　色めいたところはある人ではあった　全く似合いの人だ　[浮舟を] 譲ってもいい気がして　身を引きたい思いがなさるが

一五 われすさまじく思ひなりて捨て置きたらば、かならずかの宮、呼び取りたまひてむ、一六 人のため、のちのいとほしさをも、ことにたどりたまふまじ、さやうにおぼす人こそ、一品の宮の御方に人二三人参らせたまひたなれ、一八 さて出で立ちたらむを見聞かむ、いとほしく、など、なほ捨てがたく、けしき見まほしくて、御文つかはす。例の随身召して、一九 御手づから人間に召し寄せたり。「道定の朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」「さなむはべる」と申す。「宇治へは、常にや

匂宮　[浮舟を]　お連れ出しになるだろう　これきりで縁を切るというのではせつないことだろう　と見苦しいほど

そんなふうに一時愛された人を　女房に二三人　上げていられるということだ　[浮舟の] 様子が探りたくて　やはり放っておけず　昨夜の　(薫)　[道定は]　(随身)　さようでございます　(薫)　いつも

一 あの先日会ったという下男は遣わすのだろうか。鉢合せをした匂宮の文使いのこと。

二 （浮舟は）ひっそり暮している女だから、道定も思いをかけるのだろうな。仲信の女をさし措いて、浮舟に思いを寄せたか、と推察する体の発言。

三 道定が、いつもこちらの殿様（薫）の動静を探ろうとし、あちら（宇治）のことを尋ねたのも思い当ることがあるが。

四 随身のような下々の者に、内情を詳しくは知らせたくない。

五 心乱れることが、あれこれとある。薫のこと、匂宮のこととさまざま。

浮舟、薫の手紙を返す

六 （薫のお文は、ほかのことは何も書いてなくて）ただ次の歌だけが認められている。

七 私をおいてほかの人に心を移している、そんな頃だとも知らず、待っていてくれるものとばかり思っていました。「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（『古今集』巻二十東歌、読人しらず）

八 （これ以上）私を世間の笑い者にして下さるな。

九 このご返事を、いかにも歌の意味が分ったふうに申し上げるのも憚られることだし。

一〇 （よそへのお文が）間違えて届けられたように存じられますので（私には訳が分りませんので、このままお返し申し上げます）。

一このありけむ男はやるらむ。二かすかにてゐたる人なれば、道定も思ひかくらむかし」と、うちうめきたまひて、（薫）人目につかぬようにして行け（苦しげにつぶやかれて）「人に見えでをまかれ。（物笑いになる）をこなり」とのたまふ。かしこまりて、（随身は）少輔三が常にこの殿の御こと案内し、かしこのこと問ひしも思ひあはすれど、もの馴れてえ申し（気安く申し上げ）出でず。（られない）薫君も、下衆四にくはしくは知らせじ、とおぼせば、（それ以上）お尋ねまはず。（なさらない）

宇治では

かしこには、御使の例よりしげきにつけても、（いつもより度々来るにつけても）五もの思ふことさまざまなり。六ただかくぞのたまへる。

（薫）七「波越ゆるころとも知らず末の松

待つらむとのみ思ひけるかな

八人に笑はせたまふな」とあるを、（浮舟は）おやおかしいと思うにつけいとあやしと思ふに、（胸がどきりとし）胸ふたがり九ぬ。御返りことを、心得顔に聞こえむもいとつつまし、（何か問違いでひがことに（もあったらおかしな具合なので）一〇てあらむもあやしければ、（もと通りにして）御文はもとのやうにして、（浮舟）「所違へのやうに見えはべればなむ。（なぜか気分がすぐれませんので何も申せません）あやしくなやましくて何ごとも」と書き添

右近と侍従、こもごもに浮舟を諫める

一 結局自分は、不届きな者としてろくでもない結末を招くことになるのだろう。薫に見限られ、親の期待に背く結果になること。浮舟の心中の思い。
二 縁起の悪い、してはいけないことと申しますのに。
三 間違いがあるような文面だったので、宛先を取り違えたのかと思って。
四 (右近は、なぜそのまま手紙を返すのか) 不審に思ったので、途中で開けて見たのだった。
五 よくない右近の振舞ですこと。草子地。
六 (浮舟は) まさか右近が手紙をこっそり見ていようとは思わないので。
七 別の筋から、あちらの殿様 (薫) のご様子を知る人が (右近に) 教えたのだ、と思うと。それほど事は歴然としているのかと、懼れる気持。
八 誰がそんなことをお前に言うのか。
九 側にいる女房たち (右近や侍従) がこれを見て、何と思おうか、そのことも。

へてたてまつれつ。[薫は]見たまひて、さすがにいたくもしたるかな、かけて見およばぬ心ばへよ、とほほ笑まれたまふも、憎しとはえおぼし果てぬなめり。

今うまい言い逃れをしたものだ
つい苦笑をお浮べになるのも[浮舟を]憎らしいとはお思いきれになれないのだろう

まほならねどほのめかしたまへるけしきを、[浮舟]かしこにはいとど思ひ添ふ。[一]つひにわが身は、けしからずあやしくなりぬべきなめり、といとど思ふところに、右近来て、[薫]「殿の御文は、などて返したてまつらせたまひつるぞ。[二]ゆゆしく、忌みはべるなるものを」[(浮舟)]「ひがことのあるやうに見えつれば、[所違]へかとて」とのたまふ。[一四]あやしと見れば、道にてあけて見けるなりけり。[一五]よからずの右近がさまやな。見つとは言はで、[(右近)]「あないとほし。苦しき御ことどもにこそはべれ。[薫]殿はもののけしき御覧じたるべし」と言ふに、[一七]おもてさとあかみて、ものもたまはず。[一六]文見つらむと思はねば、異ざまにて、かの御けしき見る人の語りたるにこそは、と思ふに、[(浮舟)]「誰かさ言ふぞ」などもえ問ひたまはず。[一九]この人々の見思ふらむことも、いみじ

いいよいよ物思いが増す
どうしてお返し申し上げなさったのですか
ますます思いつめている所に
[お文を]まあ困りました
難儀なことにどちら様もなりました
事の様子をお気づきになったのでしょう
[浮舟は]顔色が
お尋ねにもなれない
本当に気

一（匂宮とのことは）最初自分から進んでこうなったわけではないが。

二 右近姉妹が母（浮舟の乳母）とともに常陸の介に従って在国中の話と見える。

三（恋の鞘当ては）それぞれ身分に違いはあっても、ただもうこんなものです。挿入句。

四 その揚句、自分（前からの男）も（姉のもとに）通って来なくなりました。

五 国としても（常陸の国庁としても）屈強のせっかくの武士一人をなくしてしまいました。「あたら武士」で一語。「武士」は、武器を携え、警護に当る者。

六 すぐれた家来。

七 常陸の介の館。国守の官邸。

八（姉は）そのまま東国の田舎者になって。常陸の介帰任の時も、都に同行されなかった趣。

九 浮舟の乳母のこと（二五頁注二一参照）。ここで右近姉妹は乳母子と分る。

一〇 身分の上下にかかわらず、こんな男女の仲の揉め事では、お心を迷わされるのは、本当にいけないことです。

一一（薫たちの場合は、ご身分柄、常陸の事件のように）お命にかかわるほどではなくても。荒々しい暴力沙汰には到らずとも。

右近、姉の実例を語る

くはづかし。一わが心もてありそめしことならねども、心憂き宿世かな、と思ひ入りてゐたるに、侍従と二人して、「右近が姉の、常陸にて人二人見はべりしを、三ほどほどにつけては、ただかくぞかし、これもかれも劣らぬ心ざしにて、思ひまどひてはべりしほどに、女は、今の方にいますこし心寄せまさりてぞはべりける。それに妬みて、つひに今のをば殺してしぞかし。四さてわれも住みはべらずなりにき。五国にもいみじきあたら武士一人失ひつ。またこのあやまちたるも、六よき郎等なれど、かかるあやまちしたるものを、いかでかは使はむ、とて、国のうちをも追ひ払はれ、すべて女のたいだいしきぞ、とて、七館のうちにも置いたまへらざりしかば、東の人になりて、八ままも今に恋ひ泣きはべるは、九罪深くこそ見たまふれ。ゆゆしきついでのやうにはべれど、一〇上も下も、かかる筋のことは、おぼし乱るるはいとあしきわざなり。一一御命までにはあらずとも、人の御ほどほどにつけてはべることなり。死ぬるにまさる恥なることも、よき人の

（がひける）思いに沈んでいると（右近）二 男を二人持ったのですが 三 ほどほどにつけては、ただかくぞかし、（姉の男は）二人とも負けず劣らずの愛情で 姉 すっかり取り乱すほどでいましたが（前の男が）新しい男の方に一段と気持が傾いていたのでした 新しい男 殺してしまったのです 四 殺人の罪を犯した者も 五 こんな罪を犯した者を 六 常陸の国からも追放されて 七 置いて下さらなくなったので 八 恋しがって泣いていますのは 往生の妨げにもなることと存じます 九 こんな時に縁起でもない話のようで恐れ入りますが 一〇 何か問題は起るものでございます 一一 それぞれのご身分相応 身分の高い方

一二（薫か匂宮か）どちらか一方にお決めなさいませ。
一三 匂宮も、ご愛情の深さが（薫よりも）ずっとまさっていて。以下、浮舟が匂宮の方にひかれていると見て言う。
一四 あんなに奥様（浮舟の母）が、大事と思って何かとお世話申されていますのに。
一五 薫に迎えられての京移りの準備。
一六 そのお迎えよりも先に、と（匂宮が）申していられるのが、本当につらくおいたわしく存じられます。（六四〜六五頁参照）

侍従、匂宮を勧める

一七 ただ（浮舟の）お胸の中に、多少なりとお気持の傾くほうの男君を、前世からの因縁のある方だとお考えなさいませ。
一八 あちら（薫）が、あのように何かとお心積りなさっていたらしいこと（浮舟を迎えること）にも、心も動きません。
一九 当分の間は身を隠してでも。事を荒立てないための用意。
二〇（侍従は）匂宮を、大層すばらしいお方とお思い申し上げているので、いちずに言う。（五五頁参照）
二一 いずれも、かねて浮舟方の信心篤い寺々。

ふたたび右近の忠告

御身には（には）、なかなかはべるなり。（かえってあるものでございます）一方（ひとかた）におぼし定めてよ。宮（一三）も御心ざしまさりて、まめやかにだに聞こえさせたまはば（本気でおっしゃって下さるのでさえあれば）、そなたざまに（そちらの方にでもお）もなびかせたまひて、ものないたく嘆かせたまひそ。（そうくよくよとお嘆きなさいますな）瘦せおとろへ（物思いに痩せて）おやつれになるのも本当につまりません）させたまふもいとやくなし。（一四）さばかり上（うへ）の思ひいたづききこえさせたまふものを、ままがこの御いそぎに心を入れて、（乳母）（一五）（一心になって）（大騒ぎしていますにつけても）まどひゐてはべるにつけても、（一六）それよりこなたに、と聞こえさせたまふ御ことこそ、いと苦しくいとほしけれ」と言ふに、（侍従は）いま一人、「うたて恐ろしき（まあいやな恐ろしい話）までな聞こえさせたまひそ。（まで持ち出してお諫め申されますな）何ごとも御宿世（すくせ）にこそあらめ。（前世のご宿縁でしょう）ただ御心（一七）のうちに、すこしおぼしなびかむ方（かた）を、さるべきにおぼしならせたまへ。（いえいっそ）いでや、（本当にもったいないばかり）いとかたじけなく、（「匂宮が」大層ご執心のご様子でしたから）いみじき御けしきなりしかば、人（一八）のかくおぼしいそぐめりし方にも心も寄らず。しばしは隠（かく）ろへても、（一九）（結局のところ考えお気持のよりひかれなさるお方のほうに身をお寄せなさいませ）御思ひのまさらせたまはむに寄らせたまひね、とぞ思ひえはべる」と、宮（二〇）をいみじくめできこゆる心なれば、ひたみちに言ふ。

「いさや、（右近）（いいえ）私は右近は、とてもかくても、（どちらになるにしても）事なく過ぐさせたまへ、と初（はつ）（二一）（ご無事でお暮しになるように）

一 薫様の荘園の家来たちは大変な乱暴者たちで、一族がこの宇治の里にいっぱいおります。（一九頁注一七参照）。そのほか、六巻椎本三四五頁、七巻総角四八頁、早蕨一三七頁、東屋三三四頁にも。

二 大体、この山城、大和の国で、殿（薫）のご所領の荘園の者は、皆あの内舎人なる者の縁に繋がっていますとか。「内舎人」は、中務省に属し、帯刀して内裏の宿衛、行幸の供奉、警護に当った。四位、五位の者の子弟から選ばれた。

三 右近衛府の将監（三等官、従六位上相当）で、従五位に叙せられた者の称。右大将薫の直属の下僚。

四 高貴な方々の間では、ことさら思慮のないことをし出かせ、とはお思いでなくても。薫や匂宮本人は意図しなくても。

五 考えなしの田舎者たちが、宿直の役で交替にお詰めしているのですから、自分の当番の時に、少しの落度もないようになどと思って、間違いも起すかもしれません。怪しい者と思えば、すぐ武力に訴えるかもしれないと、匂宮に危害の及ぶことを案じる。

六 先夜のお出ましは、本当に恐い思いをいたしました。川向うの家に行った時のこと（五二頁以下参照）。

七 やはり、自分を匂宮の方に心をお寄せ申していると思って、この人たちもこんなふうに言うのは、とても気のひけることで。以下、次頁四行目「げに……出で来たらむ時」まで、浮舟の心中の思い。

瀬石山などに願をなむ立てはべる。一この大将殿の御庄の人々といふ者は、いみじき無道の者どもにて、一類この里に満ちてはべるなり。二おほかたこの山城大和に、殿の領じたまふ所々の人なむ、皆この内舎人といふ者のゆかりかけつつはべるなる。三それが婿の右近の大夫といふ者をもととして、頭領にして［薫は］この辺の警護など万端のことをお命じになっているそうです よろづのことをおきて仰せられたるなり。四よき人の御仲どもは、情なきことし出でよ、とおぼさずとも、五ものの心得ぬ田舎人どもの、宿直人にてかはりがはりさぶらへば、おのが番に当りて、いささかなることもあらせじなど、あやまちもしはべりなむ。六ありし夜の御ありきは、いとこそむくつけく思うたまへられしか。匂宮 宮は、ひたすら人目をお避けになろうとして わりなくつつませたまふとて、御供の人も率てお連れ はしまさず、むやみに粗末なお忍び姿でいられますのを やつれてのみおはしますを、あんな気の荒い者がお見つけ申した さる者の見つけたてまつりしましたら りたらむは、本当に大変なことです いといみじくなむ」と、言い立てるのを言ひ続くるを、浮舟君、七なほわれを、宮に心寄せたてまつりたる、と思ひて、この人々の言ふ、いとはづかしく、自分としては別にどちらとも思わず ここちにはいづれとも思はず、ただ夢のようにわけも分らぬ気持 ただ夢のやうにあきれ

八 宮様がひどくいちずになっていらっしゃるのを、どうしてこうまで、とは思うけれど。

九 わが身を預ける方とお頼り申して、二年も過して来た方を。薫のこと。薫に迎えられたのは、去年秋。数えで勘定するので、年を越すと二年になる。

一〇 私は、どうぞして死んでしまいたい。思案の揚句、思わず口にした言葉。

一一 世間にも滅多にない情けない身の上だこと。

浮舟、死を願う

一二 こんな情けないめに遭う例は、下々の者の間にだってそうたくさんはあるまいに。『河海抄』は、「忠臣不レ事二君一、貞女不レ更二夫一」（『史記』田単列伝。『説苑』）を引く。（六巻夕霧四八頁注四参照）

一三 （以前は）思い悩まれるはずのことがありでも、いつも何気ないふうで、のんびりとしていらっしゃいましたのに。浮舟のおっとりとした本性。少将との結婚不調の時のことなどが想起される（東屋の巻参照）。

一四 染め物などせっせとしている。京移りの晴れ着の用意。

一五 新参の女の童などのこぎれいなのを呼び寄せて。これも移転に備えて雇い入れた。（七〇頁注五参照）

一六 こんな人でもお相手になさいませ。気晴らしに、という気持。

一七 物の怪などが、（お仕合せなど運を）お邪魔申そうとしてするのでしょう。

て、いみじく焦られたまふをば、などかくしも、とばかり思へど、頼みきこえて年ごろになりぬる人を、今はともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじとものも思ひ乱るれ、げによからぬことも出で来たらむ時、とつくづくと思ひゐたり。「まろは、いかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かく憂きことあるためしは、下衆などのなかにだに多くやはあなる」とて、うつぶし臥したまへば、「かくなおぼしめしそ。やすらかにおぼしなせ、とてこそ聞こえさせはべれ。おぼしぬべきことをも、さらぬ顔にのみ、のどかに見えさせたまへるを、この御こととのの、いみじく心焦られをせさせたまへば、いとあやしくなむ見たてまつる」と、心知りたる限りは、皆かく思ひ乱れ騒ぐに、乳母、おのが心をやりて、もの染めいとなみゐたり。今参り童などのめやすきを呼び取りつつ、「かかる人御覧ぜよ。あやしくてのみ臥させたまへるは、もののけなどの、さまたげきこえさせむとするにこそ」と嘆く。

（浮舟が）

（右近）そうど心配なさいますな

何でもないとお考えなさるように

と思ってあれこれとお話し申したのです

これ限りとお別れしようとは思わないから

こんなふうにつらいことと思い悩んでいるのに

右近の話のようによからぬ事件でも起ったらどうしよう

（浮舟）

つくづく思案にくれている

宮様とのことがあってからは

ずいぶんと

もうどうなさったことかと存じております

気をもんでいらっしゃいますので

事情を知っている女房は誰も

心配に気もそぞろなのに

自分一人満足げに

どこがお悪いともなく臥せっていらっしゃるのは

（乳母）

内舎人、やって来て、警護強化の旨を伝える

一 先日のご返答に対する返事さえ下さらないで。「所違（とがえ）へのやうに見えはべればなむ……」（七八頁）と、薫の手紙をそのまま返したことへの返事。

二 前に右近が浮舟を恐（おそ）がらせた内舎人なる者が、本当にやって来た。

三 話の通りいかにも荒っぽく、どっしりと太った年寄りで、声はしわがれ、さすがにただ者ならぬ面構（つらがま）えの男が。

四 今朝、京のお邸（三条の宮）に参上しまして、たった今帰って参じました。そのまますぐこちらへ来た、と言う。緊急の趣。

五 （女君が）こうしてお住まいの間、いつなんどきとも知れぬ出来事にも、私めらがこうして番に当っている、と（薫は）ご安心なさって。「夜中暁（よなかあかつき）」は、七巻早蕨一三五頁注一二参照。

六 女君に仕える女房のもとに。聞く方には、ぴんと来る言葉。以下「……いかがさぶらふべき」まで、薫の言葉を直接話法を交えて伝える。

七 私めは病気が重うございまして。以下、内舎人が薫に答える言葉をそのまま語る。

八 警護に当るべき男たちは、怠りないように督励してお勤めさせておりますのに。

殿（とのの）より薫は、一かのありし返りことをだにのたまはで、日ごろ経（ふ）ぬ。何日かが過ぎた

二このおどしし内舎人（うどねり）といふ者ぞ来たる。三げにいと荒々しく、ふつつかなるさましたる翁（おきな）の、声かれ、さすがにけしきある、「女房（内舎人）にも（お話し申し上げたい）のとり申さむ」と言はせたれば、右近しも会ひたり。「殿に召しは（取り次がせたので）べりしかば、四今朝参（さぶ）りはべりて、ただ今なむまかり帰りはんべりつる。雑事（ざふじ）ども仰せられつるついでに、五かくておはしますほどに、夜中暁（なかあかつき）のことも、なにがしらかくてさぶらふ、と思ほして、宿直人（とのゐびと）わざとさしたてまつらせたまふこともなきを、このころ聞こしめせば、六女房の御もとに、知らぬ所の人通ふやうになむ聞こしめすことある、たいだいしきことなり、宿直（とのゐ）にさぶらふ者どもは、その案内（あんない）聞きたらむ、知らではいかがさぶらふべき、と問はせたまひつるに、七うけたまはらぬことなれば、なにがしは身の病重くはべりて、宿直（とのゐ）つかうまつることは、月ごろおこたりてはべれば、案内もえ知りは（ご詰問あそばされましたが）（私の全然承知していないことなので）（宿直の番に奉仕しますことは）（この二三カ月勝手しておりますので）（事情もよく分っており）んべらず、八さるべき男（をのこ）どもは、懈怠（けだい）なくもよほしさぶらはせはべる

（宿直の者をわざわざ京からお差し向け申されることもなかったのに「薫が」近頃お耳になさるには）（どこの誰とも素姓の知れぬ者が通ってくるとか）（お聞きあそばすことがあるが）（不届き千万なことだ）（事情を聞いていよう）（知らないではどうしてすまされようか）

九 そのような以ての外のことがございましたら、どうして私がお聞きせぬわけがございましょう。「さのごとき」は、普通は「さやうの」と言うところ。「のごとき」は漢文訓読語。「非常」は前の「懈怠」ととも に男性用語。

一〇 気を付けて番をせよ。以下、薫より内舎人へ命じる言葉をそのまま伝える体。

一一 梟の鳴くのを聞くよりも、ひどく恐い気がする。梟を不吉な恐ろしい鳥とすること、「梟は松桂の枝に鳴き 狐は蘭菊の叢に蔵る」（『白氏文集』巻一諷諭一「凶宅詩」）がある。（一巻夕顔一五三頁注七、三巻蓬生五七頁注一五参照）

一二 （右近は内舎人には）ろくに受け答えもせず。恐ろしさのあまりである。

一三 ほら、何やかや私が申し上げた通りなのをお聞きあそばせ。いよいよ恐ろしい内舎人一統が乗り出して来たことを言う。

一四 この辺は盗人が多いとかいうことなのに。事情を知らず、盗賊の用心に宿直が厳重になるのかと喜ぶ。

一五 早く逢いたい思いのせつなさを言っておよこしになるのが。「君に逢はむその日をいつと松の木の苔の乱れてものをこそ思へ」（『新勅撰集』巻十二恋二、読人しらず）

一六 もうひどく重荷に思われる。以下、追い詰められた浮舟の心中。

死を決意する浮舟

を、さのごとき非常のことのさぶらはむをば、いかでかうけたまはらぬやうははべらむ、となむ申させはべりつる。用意してさぶらへ、便なきこともあらば、重く勘当せしめたまふべきよしなむ、仰せ言はべりつれば、いかなる仰せ言にかと、恐れ申しはんべる」と言ふを聞くに、梟の鳴かむよりも、いともの恐ろし。いらへもやらで、「さりや、聞こえさせしに違はぬことどもを聞こしめせ。もののけしき御覧じたるなめり。御消息もはべらぬよ」と嘆く。乳母はほのうち聞きて、「いとうれしく仰せられたり。盗人多かんなるわたりに、宿直人もはじめのやうにもあらず、皆、身の代りぞ、と言ひつつ、あやしき下衆をのみ参らすれば、夜行をだにえせぬに」と喜ぶ。

君は、げにただ今いとあしくなりぬべき身なめり、とおぼすに、宮よりは、「いかにいかに」と、苔の乱るるわりなさをのたまふ、いとわづらはしくてなむ。とてもかくても、一方一方につけて、いとうたてあることは出で来なむ、わが身ひとつの亡くなりなむのみ

（取次に）
（不都合なことでもあったら）
（どういう意味の仰せ言なのかと）
（恐縮に存しております）
（厳重に罰することになるという旨を）
（仰せ出されましたので）
（右近）一三
（薫は）様子をお
（悟りになったのでしょう）
（乳母）何とうれしいことによく仰せ下さった
（を聞いて）
（お手紙も下さいませんわ）
（片はし）
（最初のように十分に当直もせず）
（代理の者です）
（と言っては）
（役にも立たぬ）
（下男ばかり参上させるので）
（夜廻りもできないのだから）
（本当に今すぐにも右近の言うような破滅に及ぶ身の上なのだろう）
（とお思いのところへ）
（浮舟）
（匂宮）
（どうなのだどうなのだ）
（どちらに離くにしても）
（そのどちらかに）
（ひどく面倒なことが起るだろう）
（それなら）自分一人が
（死んでいなくなること）

一 昔は、言い寄る男の熱意が、いずれとも優劣のつけられないのにさえ思い悩んで、身を投げる例もあったのだもの。『大和物語』百四十七段生田川伝説、『万葉集』巻九、葦屋の菟原処女の話（生田川伝説と同じ）。また『万葉集』巻十六、桜子は二人の男に思われて縊死し、鬘児は三人の男に思われて身を投げた。

二 あとに残った大勢の子供の世話にかまけて、そのうちお忘れになろう。「忘草摘む」は和歌の措辞。

三 世間の物笑いになるような有様で、つまらぬ生涯を送るのは。薫からも匂宮からも見捨てられて、零落して過すのは。

四 いかにも姫君らしくおっとりとして、たおやかな感じだが。「児めき」は、世故にうといさま。以下、草子地。

五 高貴の身分にふさわしい身の処し方を知ることも少ない環境で（母君が）育て上げた人なので。東育ちなので。

六 （自殺といった）少し乱暴なことを、考えついたのであろう。

七 人に見られたら困る文反古。「反古」は、物を書いて不用になった紙。匂宮からの手紙である。

八 所在ない宇治での長の月日に、何とはなしに書き溜められた手習などを。「手習」は、心に浮ぶ古歌の文句などを筆にまかせて書くこと。

九 好き合っていらっしゃるお二人の間で、心をこめてやりとりなさった手紙は。匂宮と交わした恋文。

浮舟、身辺の整理

こそめやすからめ（が一番いい方法だろう）、昔は、懸想する人のありさまの、いづれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身を投ぐるためしもありけれ、ながらへばかならず憂きこと見えぬべき身の、亡くならむは（死んでゆくのは）、なにか惜し（どうして惜しかるべき、親もしばしこそ嘆きまどひたまはめ（母上も一時は嘆き悲しんでお心を乱されようがことがあろう）、あまたの子どもあつかひに、おのづから忘草摘みてむ（生き永らえていたらきっと恥さらしなことになる私などが）、ありながらもてそこなひ（生きていて間違いを起し）、人笑へなるさまにてさすらへむは（死ぬにまさるつらいことだろう）、まさるもの思ひなるべし（などという気になる）、など思ひなる。児めきおほどかに、たをたをと見ゆれど、気高う世のありさまをも知るかたすくなくて、おほし立てたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを、思ひ寄るなりけむかし。

むつかしき反古など破りて（大げさに取り散らして）、おどろおどろしく一度にもしたため（一度に始末したりせず）、燈台の火に焼き、水に投げ入れさせなど（川に投げ捨てさせなどして）、やうやう失ふ（少しずつ）。心知らぬ御達は（訳を知らない女房は）、ものへわたりたまふべければ（京へお移りになることだから）、つれづれなる月日を経て、はかなくし集めたまへる手習などを、破りたまふなめり（お破りになるのだろう）、と思ふ。侍従などぞ（侍従）、見つくる時は、「などかくはせさせたまふ（どうしてそんなことをなさるのです）。あは

一〇（まして匂宮のお文は）あんなすばらしいご料紙に、恐れ多いお言葉の数々をお尽しあそばしているのを、ただこうして破り捨てなさるのは、心ないなさりようです。「紙使ひ」は、折にふさわしい紙の色合いなどを言うのである。

一一よけいなことに、こんな手紙（秘密の恋文）を大事にしまい込んで置いたなんて、など（匂宮が）噂を聞いて思われようことが、身が縮むほど恥ずかしい。その場その場で始末すればよいものを、うれしそうに取っておくなんて、と匂宮に嗤われそうだ、と思う。

一二（一人で死出の道に旅立つのだと）心細いことを思い続けてゆくと、またそれは（身を投げることは）とても決心のつきかねることなのだった。

一三親を残して先立つ人は、大層罪の深いものだというのに、などと。不孝（親の追善供養ができない）の罪を言う。

一四（世間知らずに育ったものの）さすがに、どこかで聞いたことも思い浮べる。

一五三月二十日過ぎ。

一六匂宮が予定していた家の主人。宮の乳母の夫。宮に家を貸す約束をしたこと、六五頁に見える。

一七六五頁注一〇参照。

一八六五頁に「やがてその日わたさむ……」とあるのに照応する。

一九そんなことおっしゃって。以下、浮舟の心中。

匂宮の上京を促す手紙　浮舟、返事せず

れなる御仲に、心とどめて書きかはしたまへる文は、（他人にはお見せにならないにしても）人にこそ見せさせたまはざらめ、（文箱の底などに大事におしまいになって時々ご覧になるのが）ものの底に置かせたまひて御覧ずるなむ、（どんな身分の者でもそれぞれに）ほどにつけては、いとあはれにはべる。一〇さばかりめでたき御紙使ひ、（胸打たれるものでございます）かたじけなき御言の葉を尽くさせたまへるを、かくのみ破らせたまふ、情なきこと」と言ふ。（浮舟）「何か、（いいえ）むつかしく（気分もすぐれず）、長かるまじき身に（どうも長生きはできそうに思えません）こそあめれ。（お文が）落ちとどまりて、（あとで人目にふれては）人の御ためもいとほしからむ。一一さかしらにこれを取りおきけるよ、（宮様にとってもご迷惑なことでしょう）など、漏り聞きたまはむこそはづかしけれ」などのたまふ。一二心細きことを思ひもてゆくには、またえ思ひ立つまじきわざなりけり。一三親をおきて亡くなる人は、いと罪深かなるものを、など、一四さすがに、ほの聞きたることをも思ふ。

一五二十日あまりにもなりぬ。一六かの家主、一七二十八日に下るべし。宮は、

「一八その夜かならず迎へむ。（様子を気取られないように十分に注意を）下人などに、よくけしき見ゆまじき心づかひしたまへ。（私の方からは絶対にこの話が漏れることはないしなさい）こなたざまよりは、ゆめにも聞こえあるまじ。（心配しなさるな）疑ひたまふな」などのたまふ。一九さて、（無理な算段をなさって迎えにおいでになられても）あるまじきさまにておはしたらむ

一　それに、たとえほんのわずかの間でも、どうして（警戒厳重な）この家にお通し申すことができよう、（せっかく迎えにお出で下さったのに）そのかいもなくひどい仕打ちと私を怨みながらお帰りになるお姿など、思い浮べると。

二　またしても、宮様のお顔が目先にちらついて。（四七頁、五九頁参照）

三　どうか姫様、こんなご様子を、おしまいにはまわりで気づきましょう。ご病気とは触れているが、ついに匂宮との仲が露顕しよう。「あが君」は、懇願するほどの気持を表わす。

四　そんなにくよくよご心配なさらないで、よろしいようにお返事申し上げなさいませよ。浮舟の泣く様子に、匂宮を慕ってのことと見る。

五　姫様のかぼそいお身体一つぐらい（宮様は）空からでもお連れ出し申されるでしょう。浮舟を力づけようと大げさな言い方をする。

六　そうなってもいい（匂宮に靡いてもいい）、という気があるのならともかく。

七　こんなふうに、すっかり私が頼りにしているように（宮様は）おっしゃるので。

八　こんなことになったわが身が本当に情けなく思われるのです。

に、今一度ものをもえ聞こえず、おぼつかなくて返したてまつらむことよ、また時の間にても、いかでかここには寄せたてまつらむとする、かひなく怨みて帰りたまはむさまなどを思ひやるに、例の、面影離れず、堪へず悲しくて、この御文を顔におし当てて、しばしはつつめども、いといみじく泣きたまふ。「あが君、かかる御けしき、つひに人見たてまつりつべし。やうやう、あやしなど思ふ人はべるべかめり。かうかかづらひ思ほさで、さるべきさまに聞こえさせたまひてよ。右近はべらば、おほけなきこともたばかり出だしはべらば、かばかりちひさき御身ひとつは、空より率てたてまつらせたまひなむ」と言ふ。とばかりためらひて、「かくのみ言ふこそいと心憂けれ。さもありぬべきこと、と思ひかけばこそあらめ、あるまじきこと、と皆思ひとるに、わりなく、かくのみ頼みたるやうにのたまへば、いかなることをし出でたまはむとするにか、など思ふにつけて、身のいと心憂きなり」とて、返りことも聞こえたまはず

（ひとたび）お話し申し上げることもできず（いない）お目にかかれないままお帰り頂くことになるに違（一）（とき）（ま）（うら）（二）（おもかげ）匂宮の人目を憚っていたが（三）（右近）こらえきれず激しくお泣きになる（おいおいと）おかしいなどと思う人がいる（四）（おも）世間を憚らぬ大それた計略を考え出しましたならば私がおりますからは（五）（みな）（浮舟は）しばらく涙をおさめて（そんなふうにばかり言うのが）（うけない）情けない（六）（とんで）（もないこと）とよく分っているのに（困ったことに）（七）（しでかすおつもりなのか）（宮様が）どのようなことを（いで）（案じら）（れるにつけて）（八）（甲し上げないでしまわ）（匂宮の文への）

九（浮舟が）いまだに一向承知する気配もなくて、返事も途絶えがちになるのは。以下「……寄るならむかし」まで、

匂宮、宇治に行く

匂宮の心中。

一〇もっともらしく言い含めたので、多少とも世間体のよい方に（薫の方に）心がきまったのであろう。

一一それにしても（浮舟は）自分を慕ってくれていたのに。

一二恋しさは晴らしようもなく、何もない空（虚空）にも満ちてしまう思いがなさるので。「わが恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」（『古今集』巻十一恋一、読人しらず）による措辞。

一三葦垣を廻らした方。邸の西側。いつもは宿直人がいないとあった（二三三頁）。後文によれば、時方が先導を勤める様子。

宇治の邸の厳重な警護

一四（時方は）いったん退って、代りに勝手を知った下男を入れたところ。

一五京より急ぎのお手紙があるのです。母君からの便りと思わせる。ふだんから親しく用達する趣。

一六右近の召使。右近に取次ぎを頼むため。

一七とても、今夜はだめです。

なりぬ。

匂宮

宮、かくのみなほうけひくけしきもなくて、返りことさへたえだえになるは、かの人の、薫あるべきさまに言ひしたためて、すこし心やすかるべき方に思ひ定まりぬるなめり、ことわりとおぼすものから、いとくちをしくねたく、さりともわれをばあはれと思ひたりしものを、あひ見ぬとだえに、人々の言ひ知らする方に寄るならむかし、などながめたまふに、行く方知らず、むなしき空に満ちぬることちしたまへば、例の、いみじくおぼし立ちておはしましぬ。

葦垣の方を見るに、例ならず、「あれは誰そ」と言ふ声々、いざとげなり。立ち退きて、心知りの男を入れたれば、それをさへ問ふ。前々のけはひにも似ず、わづらはしくて、「京よりとみの御文あるなり」と言ふ。右近が従者の名を呼びて会ひたり。いとわづらはしく、いとどおぼゆ。「さらに、今宵は不用なり。いみじくかたじけなきこと」と言はせたり。宮、などかくもて離るらむ、とおぼすに、

（召使に）

匂宮

宮、などうしてこう自分を遠ざけるのか

（右近）

（右近は）

大変恐れ多いことですが

目ざと

前とは違って（夜番）

脅める声々が

（男）

その男まで訊問する

これは面倒なと思って

今までの扱いと大違いで

思い沈んでいられると

大変な無理をなさって思いきってお出かけになった

しばらく逢わない間に

女房たちが説き聞かせるままにあちらに付くのであろう

とても残念でいまいましく

これも無理はないとお考えになるも

時方、侍従と会う

一 右近が相手にならないなら、侍従をという気持。時方、侍従と気の合うこと、五六頁参照。

二 (時方は)才覚のある男なので、うまく言い繕って中に入り、あちこち捜して侍従に会った。たやすく取次ぎを頼めぬ気配だったのであろう。

三 姫君様(浮舟)にも、何かひどくお案じになっているご様子なのは、今夜のような御ことが申し訳ないと、お心を痛めておいでなのだ、とおいたわしく存じ上げています。せっかく訪れた匂宮を空しく帰らせることになるのを嘆いているのだ、と言う。

四 どうしても、今夜は、誰かが様子に気付きましたら、かえってひどく都合の悪いことになりましょう。肝腎の宮のお迎えの時、事がうまく運ばぬ恐れがある、の意。

五 (宮様が)さようにもお心配りあそばしましょうその当夜。浮舟を京へ迎え取ろうと計画している夜のこと。

六 (そして)乳母がすぐ目を覚まして、これも油断ならないことなどもうち明ける。

七 かいないお返事を申し上げるのでは。今夜はお目にかかれないという返事では。

わりなくて(たまらなくなって)、「まづ時方(匂宮)入りて、侍従に会ひて、さるべきさまにたばかれ(うまい具合に工面せよ)」とてつかはす。かどかどしき人にて、とかく言ひ構へて、たづねて会ひたり。「いかなるにかあらむ、かの殿のたまはする(お言い付けがあった)ことありとて、宿直にある者どもの、さかしがりだちたるころにて、(夜番の連中が)いとわりなきなり。御前にも、ものをのみいみじくおぼしためるは、(このところ出しゃばり出しまして)かかる御ことのかたじけなきを、おぼし乱るるにこそ、と心苦しくなむ見たてまつる。さらに、今宵は、人けしき見はべりなば、なかなかにいとあしかりなむ。やがてさも御心づかひせさせたまひつべからむ夜、ここにも人知れず思ひ構へてなむ、聞こえさすべかめる」。乳母のいざときことなども語る。大夫(時方)、「おはします道のおぼろけならず、あながちなる御けしきに、あへなく聞こえさせむなむ、(こうしておいでになる道中も)(何が何でもといったご様子なのに)(こちらでもこっそり手はずを整えて)(お知らせ申しましょう)(一緒に来て下さい)(あなたからも詳しく宮様にご説明申し上げて下さい)(言い合いをしているうちに)(不都合千万なこと)(それは無理というものでしょう)(誘う)(侍従)(どうしたわけでしょうか)(本当に困っているのです)(並み一通りでなく)(時方)(薫)(ではたいだいしき。さらば、いざたまへ。ともにくはしく聞こえさせたまへ」といざなふ。「いとわりなからむ」と言ひしろふほどに、夜もいたくふけゆく。

八 田舎びた声の犬があちこちから出て来て吠え立てるのも。「家を守る一犬は人を迎へて吠ゆ　野に放てる群牛は犢を引いて休す」（『和漢朗詠集』下雑、田家早秋、都良香）

九 供廻りの者も少なく、ひどくお微行のお出かけなので、とんでもない者が飛び出して来たら、どうしようかと。「すずろならむもの」は、匂宮とは知らないで襲おうとする者。盗賊や夜警の者。

匂宮、路傍に坐して侍従の話を聴く

一〇（侍従は）髪を脇の下から前に廻して（手に持って）。歩行のためである。

一一（時方が）侍従の衣の裾を持って、付き添ってゆく。歩きやすいように、普通は裾をからげるが、ここは急場だから、時方が持つ。

一二（時方は）侍従に、自分の履いていた沓を履かせて。深沓か（図録四参照）。

一三 粗末な履物。草履か草鞋であろう（図録四参照）。

一四 山家の垣根の生い茂った葎の蔭に。「山がつ」は、山に住む身分の賤しい者。「葎」は、山野に自生する蔓草の一種。

一五 もともと雨天に、衣服にはねる泥を防ぐため、馬の鞍の下につけた馬具。毛皮を用いた。（図録四参照）『大和物語』百五十四段に、男が龍田山で草の上に障泥を敷いて女と寝た話がある（『花鳥余情』）。

一六 気弱な女の身では。侍従のこと。

一七 ひどく恨んでいる仇敵を鬼の姿にしたとしても。

匂宮ご乗馬のまま少し離れてお待ちになっていると

宮は、御馬にてすこし遠く立ちたまへるに、八里びたる声したる犬どもの出で来てののしるも、いと恐ろしく、人少なに、九いとあやしき御ありきなれば、すずろならむものの走り出で来たらむも、いかさまにと、お供に従う者は誰もはらはらするのだったさぶらふ限り心をぞまどはしける。（時方）さあ早く急いで参りましょう「なほとくとく参りなむ」と言ひ騒がして、この侍従を率て参る。一〇髪脇より搔い越して、様体いとをかしき人なり。馬に乗せむとすれど、さらに聞かねば、一一衣の裾をとりて、立ち添ひて行く。一二わが沓をはかせて、みづからは、供なる人のあやしきものをはきたり。一三参りて、かくなむ、と聞こゆれば、一四山がつの垣根のおどろ葎の蔭に、一五障泥といふものを敷きて下したてまつる。わが御ここちにも、あやしきありさまかな、かかる道にそこなはれて、はかばかしくはえあるまじき身なめり、とおぼし続くるに、泣きたまふこと限りなし。一六心弱き人は、ましていといみじく悲しと見たてまつる。一七いみじき仇を鬼につくりたりとも、おろかに見捨つまじき人の御あ

（宮のお前に）（時方が）（馬上のままでは）お話しなさるすべもないので（時方自身は）自分の下男の（宮を）見苦しいことになったな（時方は）姿のとても美しい人である（侍従は）どうしても聞かないので

こうこうです　ただもう　こんな色恋沙汰で怪我でもして　これといって　たった将来はとても期待できそうにない身の上らしい　といろいろお考えになると（悲しくて）　おろそかに思って見捨てたりはできない宮様の　お泣きになる　匂宮ご自身でも

一　やはり女房たちが何かと教えたのであろう。前にも「人々の言ひ知らする方に寄るならむかし」（八九頁）と疑っている。

二　さようにも（浮舟を京へ迎えようと）お心積りのその当日を。

三　こんな（危ない目をしてまでお越し下さる）もったいないご様子をあれこれ拝見致しましたので。

四　（今夜会ってくれないからと言って、相手ばかりを）いちずにお恨みになるわけにもゆかない。

五　さきほどからの、怪しんで吠える犬の声が止まないので。

六　（その人声を怪しんで）弓弦を鳴らし、耳馴れない下人の声がして。夜番の者が、警戒のため、弓に矢を矧げず弦だけ鳴らしたり、声をあげて警戒する夜廻りのさま。

匂宮、帰る

七　（恋しい女にも逢えないで、いっそ死にたい思いながら）どこに身を捨てたものか分らず、白雲のかからぬ山もない山道を、泣く泣く帰ってゆくことだ。一、二句は、侍従の「身を捨てても……」に触発された言葉。「白雲の」に「知ら（ず）」、「な（無）く」に「泣く」を掛け、「泣く泣く」と続けた。「いづくとも所定めぬ白雲のかからぬ山はあらじとぞ思ふ」（『拾遺集』巻十九雑恋、読人しらず）

八　その宮様のご様子は、優雅で胸を打ち、夜更けの露に湿って匂いを増すお召し物の香の香ばしさなど。侍従の心に映じた匂宮の姿。

（匂宮）涙をおおさめになって直接お話し申すことはできないこと、ありさまなり。ためらひたまひて、「ただ一言もえ聞こえさすまじきのか。どういうわけでいかなれば、今さらにかかるぞ。この期に及んでこうなのかなほ人々の言ひなしたるやうあるべし」とのたまふ。（侍従は）このところの事情を詳しく申し上げてありさまくはしく聞こえて、「やがてさおぼしめさむ日を、事前に人に漏れぬようにかねては散るまじきさまに、お計らい下さいませたばからせたまへ。（私は）かくかたじけなきことどもを見たてまつりはべれば、身を捨てても思うたまへたばかりはべらむ」と聞こゆ。（匂宮は）ご自身も人目をひどく気になさることゆえ心の限りお取り計らい申し上げましょうわれも人目をいみじくおぼせば、一方に恨みたまはむやうもなし。

夜はいたくふけゆくに、このもの咎めする犬の声絶えず、人々追人々が追い払ったりすると（匂宮の）供のひさけなどするに、弓ひき鳴らし、あやしき男どもの声どもして、火の用心「火あやふし」など言ふも、おちおちしていられないので（匂宮は）お帰りになるいと心あわたたしければ、帰りたまふお気持は言うもおろかであるほど、言へばさらなり。

（匂宮）「いづくにか身をば捨てむと白雲の
かからぬ山もなくなくぞゆく

それでは早く侍従さらばはや」とて、この人を帰したまふ。御けしきなまめかしくあ

はれに、夜深き露にしめりたる御香のかうばしさなど、たとへむかたなし。泣く泣くぞ帰り来たる。

何とも言いようもない

右近は、言ひ切りつるよし言ひゐたるに、君はいよいよ思ひ乱ること多くて臥したまへるに、入り来てありつるさま語るに、いらへもせねど、枕のやうやう浮きぬるを、かつはいかに見るらむ、とつつまし。翌朝も、あやしからむまみを思へば、無期に臥したり。ものはかなげに帯などして経読む。親に先だちなむ罪うしなひたまへ、とのみ思ふ。ありし絵を取り出でて見て、描きたまひし手つき、顔のにほひなどの、向ひきこえたらむやうにおぼゆれば、昨夜一言をだに聞こえずなりにしは、なほ今ひとへまさりて、いみじと思ふ。かの、心のどかなるさまにて見む、と行く末遠かるべきことをのたまひわたる人も、いかがおぼさむ、といとほし。憂きさまに言ひなす人もあらむこそ、思ひやりはづかしけれど、心浅く、けしからず人笑へならむを、聞かれたてまつらむよりは、など思ひ続けて、

〔侍従が〕戻って来て先程からのことを話すので

親に先立とうとする不孝の罪をお許し下さいほんの形ばかり

〔匂宮の〕

目の前にお会い申しているように思われるのでお顔の美しい色艶などが

〔今となれば〕やはり一段とまして悲しく思われるせめて一言でも申し上げずに終ったことは

九（侍従は）泣きながら帰って来た。匂宮の歌の言葉による修辞。

一〇きっぱりと（匂宮との対面を）お断りした旨を話しているところへ。

一一浮舟は（それを聞いて）一層物思いが増して横になっていられるところへ。

浮舟の今はの思い

一二（浮舟は）受け答えもしないけれど、だんだん枕も浮くばかり涙が溢れてくるのを。「枕浮く」は、恋人を思って独り寝の悲しみをいう歌語的表現。（五巻柏木二六九頁注八、七巻宿木一七八頁注四参照）

一三一方では、この人たち（右近や侍従）がどう思うか、と気がひける。

一四翌朝も（夜通し泣き明かして）腫れぼったくなった目もとを気にして、いつまでも寝ている。

一五掛け帯。（六巻椎本三五〇頁注七参照）

一六この前、匂宮がお描きになった絵。（三六頁参照）

一七あの、落着いた住いでゆっくり会おう、と末長く変らぬことをいつも約束して下さる方も。薫のこと。

一八（自分が死んだら）何とお思いだろうか。

一九（死んだあと）いやなことを言いふらす人もあろうが、それを思うと、気になってならないが。

二〇（生きていて）浅はかで、不埒な女だと世間の物笑いになるのを、（薫に）聞かれ申すよりは。

一　悲しみ悩んだあげく、耐えきれずにわが身を捨てるにしても、亡きあとに情けない評判の残るのがたまらない。川に身を投げても、憂き名は濯ぐことができない、と嘆く。

二　いつもはさほど思い出さぬ弟妹の、みっともない者たちも。異父弟妹。

三　女房たちは皆それぞれせっせと染め物をし、何やかやと騒いでいるが。引越し準備のため。

四　脱け出すにはどこを出て行こうかと心積りしながら。

五　気分も悪く、すっかりおかしくなってしまった。こんな時、物の怪などがつけ入りやすいと考えられていた。

六　屠所に牽かれる羊が一歩一歩死に近づくよりも、もっと死が近い気がする。「是寿命……如二囚趣一レ市歩歩近二死一。如下牽二牛羊一詣上於屠所一。」（『涅槃経』三十八）。

浮舟、匂宮の文に返歌

「譬如下栴陀羅、駈レ牛至二屠所一、歩々近二死地一」（『摩訶摩耶経』上）。「今日もまた午の貝こそ吹きつなれ羊の歩み近づきぬらむ」（『千載集』巻十八雑下、誹諧、赤染衛門）

七　亡骸をもこのつらい世の中に残さなかったなら、どこを目当てに、宮様も私をお怨みになれましょう。「今日過ぎば死なましものを夢にてもいづこをはかと君が訪はまし」（『後撰集』巻十恋二、中将更衣）

八　あちらこちら（薫や匂宮）に遺書を残しては。以

（浮舟）一
なげきわび身をば捨つとも亡き影に
憂き名流さむことをこそ思へ

母君
親もいと恋しく、例はことに思ひ出でぬ弟妹のみにくやかなるも、恋し。宮の上を思ひ出できこゆるにも、すべて今一度ゆかしき人多かり。三人は皆おのおのもの染めいそぎ、何やかやと言へど、耳にも入らず。夜となれば、人に見つけられず、出でて行くべき方を思ひまうけつつ、寝られぬままに、ここちもあしく、皆違ひにたり。明けたてば、川の方を見やりつつ、羊の歩みよりもほどなきここちす。

中の君
会いたい人が多い
〔浮舟には〕
女房の目にとまらぬように
夜が明けると

匂宮
宮は、いみじきことどもをのたまへり。今さらに、人や見む、と思へば、この御かへりことをだに、思ふままにも書かず。

大層な怨み言をいろいろ言ってよこされた
この期にも
人に見られるかと
宮のお便りのお返事さえ
思いのたけもしたためない
案じるので

（浮舟）七
からをだに憂き世の中にとどめずは
いづこをはかと君もうらみむ

使いに渡した
最後に臨んで覚悟するところをお知らせ申したいと思うけれど
〔お二人は〕近しいご親族だから
いずれはお聞き

とのみ書きて出だしつ。薫かの殿にも、今はのけしき見せたてまつらまほしけれど、八所々に書きおきて、離れぬ御仲なれば、つひに聞き

下、浮舟の心中。

九 もう一切、どうなってしまったのやらと、誰にも分らないままで死んでしまおう、と思い直す。薫への手紙は書かなかったのである。

一〇 昨晩の夢に、あなたが縁起でもないふうにお見えになったので、無事を祈るお経をあちこちの寺に頼みましたが。以下、母の手紙。もの思う浮舟の魂があくがれ出て母の夢に現れた趣。後の九七頁の右近の言葉に見える。

一一 その夢のあとずっと、睡れなかったせいでしょうか。

一二 世間の人が不吉と言うことが、あなたのお身の上で見えましたので。「解レ夢書曰ク、夢見レ病人一必死」（『河海抄』所引）

一三 人気も少ない山里のお住いで、時々そちらにお立ち寄りなさるお方（薫）のご縁の方のお恨みもとても恐ろしく。正夫人女二の宮方の嫉妬も恐ろしく。

一四 少将のほうが、まだとても心配で、物の怪めいて患っていますので。出産が近いと、六五頁にあった。

一五 ちょっとでも家を離れてはならない、とやかましく言われていますので。夫の常陸の介が文句を言う。

一六 そちらのお寺。宇治山の阿闍梨の寺。

一七 誦経の料。お布施。

一八 誦経依頼の、寺への手紙。

母の文に返歌

合せになるだろうことが　あはせたまはむこと、思ってもつらいことだいと憂かるべし、すべて、いかになりけむと、誰にもおぼつかなくてやみなむ、と思ひ返す。

京より母の御文持て来たり。

一〇 寝ぬる夜の夢に、いとさわがしくて見えたまひつれば、誦経所所せさせなどしはべるを、一一 やがてその夢ののち、寝られざりつるけにや、ただ今昼寝してはべる夢に、一二 人の忌むといふことなむ見えたまひつれば、目を覚ますなり［この文を］差し上げます　十分にご用心なさいませおどろきながらたてまつる。よくつつしませたまへ。一三 人離れたる御住ひにて、時々立ち寄らせたまふ人の御ゆかりもいと恐ろしく、お具合がすぐれずにいらっしゃるちょうどその折も折　なやましげにものせさせたまふをりしも、夢見がこう悪いのを　何やかやとお案じしています　夢のかかるを、よろづになむ思うたまふる。［宇治に］参り来まほしきを、一四 少将の方の、なほいと心もとなげに、もののけだちてなやみはべれば、一五 片時も立ち去ること、といみじく言はれはべりてなむ。その寺にも御誦経せさせたまへ。

とて、一七 その料のもの、一八 文など書き添へて持て来たり。今は限りと死を覚悟　限りと思ふ命

一 山寺へ使いの者をやっている間に、（浮舟は）母に返事を書く。

二 後の世でまたお会いできるよう祈って下さい、この世の不吉な夢にお心を痛められないで。「この」に「子」を響かせ、夢のようなはかないこの世の縁に執着なさらないで、の意がある。

三 山寺では、早速誦経を行うらしく、その開始を告げる鐘の音が風に乗って聞えてくる。

四 あの誦経の鐘の音が消えてゆく響きに、私の泣く音を添えて、私が死んでいったと母に告げてほしい。

五 誦経した経文の名や度数を書き付けて、願主に送る文書。それに歌を書きつけた趣。

六 今夜は京へとても帰れますまい。夜更けて山寺から宇治の邸に帰ってきた趣。

七 その巻数を木の枝に結び付けて置いた。木の枝に付けた巻数を枝巻数という（『湖月抄』師説）。

八 何だか妙に胸騒ぎがすること。「人に逢はむ月のなきには思ひおきて胸はしり火に心焼けけり」（『古今集』巻十九誹諧歌、小野小町）

九 （浮舟は邸を脱け出すのに）難儀なことと聞きながら横になっていらっしゃる。

一〇 お湯漬なりと。「湯漬」は、ご飯に湯をかけたもの。

一一 余計な世話を焼いているようだが、大層年を取ってきたなくなって。以下、乳母を哀れむ浮舟の思い。

乳母、右近も不安がる

（浮舟は）このように綿々と書いていられるのもする命とも知らないで のほどを知らで、かく言ひ続けたまへるも、いと悲しと思ふ。

（この際）言い残したいことはたくさんあるが 寺へ人やりたるほど、返りこと書く。言はまほしきこと多かれど、

はばかられるので つつましくて、ただ、

（浮舟）のちにまたあひ見むことを思はなむ

この世の夢に心まどはで

（浮舟は）じっと聞きながら横になっていられる 誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを、つくづくと聞き臥したまへり。

（浮舟）鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへて

わが世尽きぬと君に伝へよ

巻数持て来たるに書きつけて、（使）「今宵はえ帰るまじ」と言へば、ものの枝に結ひつけて置きつ。

（母君のお文にも）夢見が悪い 乳母、「あやしく心ばしりのするかな。夢もさわがし、とのたまはせたりつ。宿直人、（女房に）十分夜番をして下さいよくさぶらへ」と言はするを、苦しと聞き臥したまへり。（乳母）何も召し上がらないのは本当にいけません「ものきこしめさぬ、いとあやし。御湯漬」などよろづに言ふを、さかしがるめれど、いとみにくく老いなりて、われな

私が死ん

一二 この世には寿命を全うできそうにない仔細を、それとなく話そう。乳母には、一言死を選ぶ訳を語りたい、と思う。

一三 まず胸を衝かれて、言葉より先に涙が溢れてくるのを気になさって。歌に「先に立つ涙」という表現がある（七巻早蕨一三八頁、本巻三九頁）。

一四 こんなに思い悩んでいらっしゃるので、物思いをする人の魂は、身を抜け出してさまようということですから。当時の俗信。二巻葵八六頁にも「もの思ふ人の魂は、げにあくがるるものになむありける」と言うところがある。

一五 （浮舟は）普段着の糊気の落ちた衣を顔に押し当てて、横になっていらっしゃったとか。涙を掩う体。「……となむ」は、伝聞の形で物語を語り終える決った形式。

だら　どこで暮してゆくのだろう　と想像なさるにつけても

くは、いづくにかあらむ、と思ひやりたまふも、いとあはれなり。世の中にえあり果つまじきさまを、ほのめかして言はむ、などおぼすに、一三まづおどろかされて先だつ涙を、つつみたまひて、ものも言はれず。右近、ほど近く臥すとて、「かくのみものを思ほせば、もの思ふ人の魂は、あくがるなるものなれば、夢もさわがしきならむかし。いづかたとおぼし定まりて、いかにもいかにもおはしまさなむ」とうち嘆く。一五菱えたる衣を顔におしあてて、臥したまへりとなむ。

とてもかわいそうだ　一言も口に出せない　お側近く寝ることにして（右近）一四　母君の夢見も悪いのでしょう　どんな結果になるにしても思う通りになさって　どちらか一方にとお決めになって　嘆息する　下さい

蜻(かげ)

蛉(ろふ)

浮舟失踪の翌朝、宇治の邸で人々はなすすべも知らぬ有様だった。京の母君からは胸騒ぎがすると再度の使いが来る。右近は昨夜の浮舟の母君への手紙を開けてみて、入水の覚悟を知った。匂宮からもお使いが来た。宮は折り返しまた時方を遣わし、侍従から詳細を確かめようとした。やがて母君自身もやって来て、驚き悲しむことは一通りではない。人々は入水の噂が世間に拡がるのを恐れて、亡骸もないまま、その夜葬送を済ませてしまった。折から薫は石山参籠中であったが、葬送の翌日、弔問の使いを送り、粗略な葬儀を咎めた。

匂宮はその後悲嘆のあまり病床に臥し、薫はそれを見舞ってさり気なく皮肉を言う。匂宮は、侍従を呼び寄せて、浮舟失踪の前後の有様を語らせたりする。薫もやがて宇治を訪れ、右近から入水のことを聞いて、母の悲しみを深く察し、遺族の世話を約束した。

浮舟四十九日の法要を薫は盛大に営んだ。中の君からもお供えがあり、匂宮も右近のもとに志を届けた。常陸の介は、今や浮舟がわが子と比較にならぬやんごとない身であったことを知った。

夏、明石の中宮の法華八講に、薫は中宮方の女房小宰相に会おうと訪れた西の渡殿で、女一の宮を垣間見し、その類いない高貴な美しさにひかれる。夫人の女二の宮に同じ装いをさせてみたりするが、比べようもなく、それからはたびたび中宮方に出入りするようになった。そして、父式部卿の宮を喪って出仕する宮の君に出会い、その運命の変転をあわれむにつけ、薫は、ひとしお、はかなく別れた八の宮の姫君たちを慕わしく思うのであった。巻名は、この時の気持を詠んだ薫の歌に由来する。

一 あちら（宇治）では、女房たちが、（浮舟が）いらっしゃらないのを知って大騒ぎで探すけれども、何のかいもない。浮舟の巻末、浮舟が辞世の歌を書きつけた宵（九六～九七頁）に続く、その翌朝の趣。

二 物語の中の姫君が、男に盗み出された翌朝のようなことなので、細々とも申しません。草子地。『伊勢物語』六段に女を盗んで芥川を行く話、『大和物語』百五十四、百五十五段に女を盗んで逃げる話がある。

浮舟失踪の翌朝

三 京の母君のもとから、前に出した使いが帰らずじまいになったので、心配でならないといって。前の使者は、昨夜は宇治に泊った（浮舟九五～九六頁）。

四 まだ一番鶏の鳴く夜明け頃に。

五 あの事情を知っている仲間は。右近と侍従の二人。

六 （宇治川に）身をお投げになったのでは、と考えるのだった。

七 （乳母や右近たちは）泣く泣く、今届いた母君の手紙を開けると。浮舟がいないので、一同で読む。

右近ら入水と推測

八 今夜は夢の中でさえやすやすとお姿を見ることができず。昨日の文には「寝ぬる夜の夢に、いとさわがしくて見えたまひつれば」とあった（浮舟九五頁）。

蜻蛉

一 かしこには、人々、おはせぬをもとめ騒げど、かひなし。物語の姫君の、人に盗まれたらむ朝のやうなれば、くはしくも言ひ続けず。

二 京より、ありし使の帰らずなりにしかば、おぼつかなしとて、また人おこせたり。「まだ鶏の鳴くになむ、出だし立てさせたまへる」と使の言ふに、いかに聞こえむと、乳母よりはじめて、あわてまどふこと限りなし。思ひ得るかたなくて、ただ騒ぎあへるを、かの心知れるどちなむ、いみじくものを思ひたまへりしさまを思ひ出づるに、身を投げたまへるか、とは思ひ寄りける。

（使）四 出立させなさいました 使いを 何とお返事したものかと 乳母たちは 見当もつかなくて 一同ただ騒いでいるのを 五 大層思い悩んでいらっしゃった 浮舟の ご様子を思い出すにつけて

六

七 泣く泣くこの文をあけたれば、

いとおぼつかなさに、まどろまれはべらぬけにや、今宵は夢にだにうちとけても見えず、ものにおそはれつつ、ここちも例ならず

とても気掛りですので まんじりともしないせいでしょうか 八 何度もうなされたりして 気分もいつものようでなく

いやな気持がしますが
うたてはべるを、一なほいと恐ろしく、二ものへわたらせたまはむこ
とは近かなれど、それまでの間私のところにおいで頂くことにしましょう三そのほどここに迎へたてまつりてむ。今日は雨
降りはべりぬべければ。

などあり。昨夜四の御返りをもあけて見て、右近いみじう泣く。五されば
よ、心細きことは聞こえたまひけり、われに、私になどかいささかの
どうしてほんのひと言でも
打ち明けて下さらなかったのだろう
たまふことのなかりけむ、七幼かりしほどより、つゆ心おかれたてま
つることなく、塵ばかり隔てなくてならひたるに、今は限りの道に
何一つ隠し立てすることなく過してきたのに
ほかならぬ今生の別れ
の道に私を置き去りになさって
そのそぶりさえお見せにならなかったのが恨めしいこと
しも、われをおくらかし、けしきをだに見せたまはざりけるがつら
きこと、と思ふに、八足摺といふことをして泣くさま、若き子どもの
頑是ない子供のよう
である
やうなり。九いみじくおぼしたる御けしきは、見たてまつりわたれど、
お思いつきになろう
一〇かけても、かくなべてならずおどろおどろしきこと、おぼし寄らむ
ことなかったあの方のご性分だったのに
ほんとに一体どうしたことなのだろう
ものとは見えざりつる人の御心ざまを、なほいかにしることにか、
と合点がゆかず本当に悲しい
とおぼつかなくいみじ。一一乳母は、なかなかものもおぼえで、ただ、
(乳母) どうしましょう
どうしましょう
とロ走るだけなのだった
「いかさまにせむ、いかさまにせむ」とぞ言はれける。

宮にも、いと例ならぬけしきありし御返り、〔浮舟が〕どう思っているのだろうわれをさすがにあひ思ひたるさまながら、あだなる心なりとのみ、深く疑ひたれば、ほかに行き隠れむとにやあらむ、とおぼし騒ぎて、御使あり。〔お使は〕邸内の人々が皆泣き騒いでいる時に来て〔匂宮の〕ある限り泣きまどふほどに来て、御文もえたてまつらず。「いかなるぞ」と下衆女に問へば、〔女房方も〕途方にくれておられます「上の、今宵にはかに亡せたまひにければ、ものもおぼえたまはず。たのもしき人もおはしまさぬをりなれば、さぶらひたまふ人々は、ただものにあたりてなむまどひたまふ」と言ふ。心も深く知らぬ男にて、それ以上尋ねもせず京に帰参したくはしくも問はで参りぬ。

〔お使〕「かくなむ」〔取次に〕と申させたるに、夢とおぼえていとあやし。いたくわづらふとも聞かず、日ごろなやましとのみありしかど、昨日の返りことはさりげもなくて、常よりもをかしげなりしものを、とおぼしやるかたなければ、「時方行きてけしき見、たしかなること問ひ聞け」とのたまへば、「かの大将殿、いかなることか、聞きたまふことはべりけむ、宿直する者おろかなり、などいましめ仰せらるると

一二 匂宮におかれても。「おぼし騒ぎて」に続く。

匂宮よりお使い

一三 ただならぬ気配の感じられたお返事に。「からをだに憂き世の中にとどめずは……」とだけ書かれた文のこと（浮舟九四頁参照）。

一四 どこかよそへ身を隠す積りでこんな歌を詠んだのだろうか。匂宮としては、まさか投身入水など思いもよらない。

一五 下働きの女。取次ぎの女房もいないのである。

一六 奥様が。浮舟をさす。この邸の女主人である。

一七 頼りになるお方。母君のことなどであろう。

一八 事情も深く知らない家来なので。

一九 こうこうでございます。右の有様を述べる。

二〇（匂宮は）まるで夢かと思われて、とても納得できない。以下、匂宮の心中に即して書く。

二一 近頃はずっと気分が悪いということだったが。浮舟からの返事も絶え絶えになっていたこと、浮舟七一頁に見える。

二二 昨日の返事にはそんな様子もなくて、いつもより風情のある手紙だったのに。「からをだに」の歌を、閨怨の深いものと見た。

二三 匂宮の乳母子。浮舟の巻でも活躍。

匂宮、改めて時方を遣わす

二四 何ごとか、お耳に入ったことがあったらしゅうございまして。以下のこと、浮舟の巻の厳戒の処置と照応する（八四～八五頁、八九～九〇頁参照）。

て、下人のまかり出づるをも、見とがめ問ひはべるなれば、ことづくることなくて、時方まかりたらむを、ものの聞こえはべらば、おぼしあはすることなどやはべらむ。さてにはかに人の亡せたまへらむ所は、論なうさわがしく、人しげくはべらむを」と聞こゆ。「さりとては、いとおぼつかなくてやあらむ。なほとかくさるべきさまに構へて、例の、心知れる侍従などに会ひて、いかなることをかく言ふぞ、と案内せよ。下衆はひがことも言ふなり」とのたまへば、いとほしき御けしきもかたじけなくて、夕つかた行く。

口実にする　事が漏れたりいたしますと　そのように急に　亡くなったようで　定め し混雑していまして　人の出入りも多うございましょうし　全く事情も分らぬままでいられようか　やはり何とかうまく工面して　どのようなことをそんなふうに騒ぐのか　尋ねよ　とかく間違ったことも言うものだ　[時方は] おいたわしいまでのご様子ももったいなく思って　[宇治に]

かやすき人は、疾く行き着きぬ。雨少し降りやみたれど、わりなき道にやつれて、下衆のさまにて来たれば、人多く立ち騒ぎて、「今宵やがてをさめたてまつるなり」など言ふを聞くここちも、あさましくおぼゆ。右近に消息したれども、え会はず、「ただ今ものおぼえず、起きあがらむここちもせでなむ。さるは、今宵ばかりこそはかくも立ち寄りたまはめ、え聞こえぬこと」と言はせたり。

るような ご用もなくて　[宇治の邸では]　[右近] 今は何が何やら分りませず　起き上がる元気もございませんので　りのことと驚かれる　お会いできぬとは残念です　[取次に]

一一 せめてもうお一方にでも。侍従に面会を求める。
一二 本当にお話にもなりません、（浮舟）ご自身でも思いがけぬ有様でお亡くなりになりましたので。突然の急死だと言う。
一三 先夜、まことに申し訳ないとお思い申していらっしゃったご様子なども、お話し申し上げましょう。匂宮を路上のまま、逢わずに帰らせた夜のこと（浮舟八九～九三頁参照）。「聞こえさせ……」は、匂宮を念頭においての敬語。
一四 このたびの死の穢れなど、世間の人が忌みます間が過ぎましてから。死穢の忌は三十日、近親者が家につつしみ籠る。
一五 乳母なのだろう。時方が推量する体。
一六 浮舟を呼ぶ言葉。
一七 亡骸さえお見届け申しませんのが、情けなく悲しいことでございます。聞く者にまず不審を抱かせる言葉である。

時方、乳母の嘆きに不審を抱く

一八 朝晩にお顔を拝していましても、もっといつまでもとお思い申し。「おぼえたまひ」は、（浮舟が）思われなさり、の意。
一九 朝夕に、望みをおかけ申していたればこそ、命も続いていたのです。薫に引き取られることを楽しみに待っていたという気持。

（時方）かといって　こう事情も分らないままでは　どうして帰参できましょう

「さりとて、かくおぼつかなくては、いかが帰り参りはべらむ。今一所だに」と切に言ひたれば、侍従ぞ会ひたりける。「いとあさましく、おぼしもあへぬさまにて亡せたまひにたれば、いみじと言ふにも、飽かず夢のやうにて、誰も誰もまどひはべるよしを申させたまへ。すこしもここちのどめはべりてなむ、日ごろもものおぼしたりつるさま、一夜、いと心苦しと思ひきこえさせたまへりしありさまなども、聞こえさせはべるべき。この穢らひなど、人の忌みはべるほど過ぎして、今一度立ち寄りたまへ」と言ひて、泣くことといみじ。

熱心に頼んだので　（侍従）　悲しいと言うにも　ほんとに夢のようなことで　途方にくれておりますと申し上げて下さいませ　いくらかでも気持を静めましてから　［浮舟が］この日頃ずっと物思いに沈んで　いられたご様子や

うちにも泣く声々のみして、乳母なるべし、「あが君や、いづかたにかおはしましぬる。帰りたまへ。むなしき骸をだに見たてまつらぬが、かひなく悲しくもあるかな。明け暮れ見たてまつりても飽かずおぼえたまひ、いつしかかひある御さまを見たてまつらむと、朝夕に頼みきこえつるにこそ、命も延びはべりつれ。うち捨てた

邸内でも　どこへ行っておしまいになったのです　はやくご立派なお暮しをなさるのを見せて頂こうと　私を置き去りに

一 たとえ鬼神でも、大事の姫様をお奪い申すことはできますまい。「領ず」は、わがものにする意。

二 人が大層大切にしている人は、帝釈天もお返しになるということです。孝子睒（後の釈迦）が誤って国王の矢に当り死んだので、盲いた老父母が、その亡骸を抱いて泣き喚わったところ、帝釈天が下り来たって薬を飲ませ、睒は蘇ったことを言う（『仏説睒子経』『三宝絵』上）。「帝釈」は、忉利天の主。須弥山の頂、喜見城にあって、他の三十二天を司る。

時方、侍従を問いただし事情を聞き出す

三 合点のゆかぬこともあるので。前に、今夜すぐ葬送すると言い、今、遺骸を返せと泣くことなど。

四 もしや誰かがお隠しなさったのか。薫などの仕業か、という気持がある。

五 （浮舟ご本人がおられぬ）今となっては、亡くなられたにしても人が隠したにしてもどうしようもないことだけれど。

六 私の復命と食い違うことがありましたら、代りに参りましたお使者の私の落度になりましょう。

七 それに、いくら何でも（確実なことを話してくれるだろう）と頼みになさって。

八 異国の朝廷でも、昔の例がいくつもありますが。玄宗皇帝と楊貴妃（一巻付録三二五頁参照）、漢武帝と李夫人（七巻付録三五三頁参照）の例などがある。

なさって
まひて、かく行方も知らせたまはぬこと。お教え下さらないとは鬼神もあが君をばえ領じたてまつらじ。人のいみじく惜しむ人をば、帝釈も返したまふなり。私の姫君をお連れ去り申した者はあが君を取りたてまつりたらむ、人にまれ鬼にまれ、返したてまつれ。なき御骸をも見たてまつらむ」と言ひ続くるが、心得ぬことどもまじるを、あやしと思ひて、「なほのたまへ。もし人の隠しきこえたまへるか。たしかに聞こしめさむと、御身のかはりに出だし立てさせたまへる御使なり。今は、とてもかくてもかひなきことなれど、のちにも聞こしめしあはすることのはべらむに、違ふことまじらば、参りたらむ御使の罪になるべし。また、さりともと頼ませたまひて、君たちに対面せよ、と仰せられつる御心ばへも、かたじけなしとはおぼされずや。女の道にまどひたまふことは、人の朝廷にも、古き例どもありけれど、またかることはこの世にあらじ、となむ見たてまつる」と言ふに、げにいとあはれなる御使にこそあれ、隠そうとしたところで隠すとすとも、かくて例ならぬことのさま、おのづから聞こえなむ、

（時方）隠さず言って下さい
不審に思って
お亡骸なりと拝みとうございます
人にもせよ鬼にもせよ
お返し申せ
ご自身でお出向きになる代りにお遣
（私は）宮が確かなことをお知りになろうと
わしになった
（匂宮が）後日思い当られることをお耳になさることがありました場合も
あなた方に直接会ってこい
と仰せられたご信頼のほども
女色に迷われることは
もったいない
ことはお思いにならないのですか
これほどの深い思召しはまたとこの世にあるまい
その通りまことにありがたいお使いであることよ
いずれ世間に知れわたるだろう
こんな
めったにない出来事は

と思ひて、「などか、いささかにても、人や隠いたてまつりたまふらむ、と思ひ寄るべきことあらむには、かくしもある限りまどひはべらむ。日ごろ、いといみじくものをおぼし入るめりしかば、かの殿の、わづらはしげに、ほのめかしきこえたまふことなどもありき。御母にものしたまふ人も、かくののしる乳母なども、はじめより知りそめたりし方にわたりたまはむ、となむいそぎ立ちて、この御ことをば、人知れぬさまにのみ、かたじけなくあはれと思ひきこえさせたまへりしに、御心乱れけるなるべし。二あさましう、心と、身を亡くなしたまへるやうなれば、かく心のまどひに、ひがひがしく言ひ続けらるるなめり」と、さすがにまほならずほのめかす。心得が落ちないので たく思ひて、「さらば、のどかに参らむ。三立ちながらはべるも、いとことそぎたるやうなり。今御みづからもおはしましなむ」と言へば、「あなかたじけな。一三今さらに人の知りきこえさせむも、亡き御ためは、なかなかめでたき御宿世見ゆべきことなれど、恐びたまひ

（侍従）何の　少しでも　誰かが連れ出してお隠し申されたのだろ　こうまで家中の者が皆あわてふためきま　と思い当るようなことがあるのでしたら　〔浮舟が〕とてもひどく何かお悩みになっているご様子でしたので　この頃　しょうか　母君でいらっしゃるお方も　今泣き騒いでいます　匂宮との御こ　〔浮舟は〕それこそわが胸一つに　もったいなく恋しいこととお慕い申し上げていらっし　とは　ご正気も失せたのでございましょう　やいましたので　〔乳母は〕かように気も転倒して　わけの分らぬ繰り言を　ありのままではなく遠まわしに話して聞かせる　まだ腑に　あれこれ口にしておられるのでしょう　（時方）では　またゆっくり伺いましょう　いずれ宮様がご自身でもおいでになりましょう　（侍従）まあもったいないこと　〔浮舟自身が〕隠してい

一〇七

一　この邸では、こんな（投身入水をして遺骸もないといった）普通ではない形でお亡くなりになったことを世間に知らせまいと、何かとごまかしているのに。

二　（時方に長居をされて）自然に事の仔細を察せられては、と案じるので。

三　雨が激しく降っていたのに紛れて。前に「雨少し降りやみたれど」（一〇四頁）とあった。

四　見ている前で死なせてしまったのなら、その悲しさは。

五　鬼が食べてしまったのだろうか、狐のようなものが攫っていったのだろうか。

六　ほんに昔物語の不思議な魔性のもののしわざの話だったか、そんなことも言っていたようだ。『伊勢物語』六段に「鬼はや一口に食ひてけり」の話があり、『江談抄』に、光孝天皇の仁和三年（八八七）、武徳殿の松原に鬼が出て人を食った話を載せ、『今昔物語集』巻十六、第十七話に、寛平八年（八九六）備中の国で賀陽良藤が狐にとられた話を伝える（『花鳥余情』）。当時の物語には、姫君が鬼に食われたり、狐などに攫われたりする話が多かったのであろう。

七　そのほかには、あの恐ろしいとお思い申しているあたりで。正室女二の宮の所。

八　意地の悪い御乳母といったような人がいて。

九　乳母の指図で、邸に潜り込んだかもしれない下人。

母君も宇治に来る

らしたことですから　ほかにも　お漏らしあそばされずそっとしておいて下さるのがご配慮というもしことなれば、また漏らさせたまはでやませたまはむなむ御心ざしにはべるべき」。ここには、かく世づかず亡せたまへるよしを、人のでございましょう　一に聞かせじと、よろづまぎらはすを、自然にことどものけしきもこそ見ゆれ、と思へば、かくそのかしやりつ。

こう言って急いで帰らせた　〔宇治へ〕

三　雨のいみじかりつるまぎれに、母君もわたりたまへり。さらに言まるで言うべき言葉もなく　〔母君〕四はむかたもなく、「目の前に亡くなしたらむ悲しさは、いみじうとどんなにつらくても　人の世の常でも、世の常にて、たぐひあることなり。これはいかにしつることいくらもあることです　これは一体どうしたことなのですか　と正体もない　こんな〔匂宮との〕混み入った事情があって　〔浮舟が〕ひどく思い悩んでいぞ」とまどふ。かかることどものまぎれありて、いみじうもの思ひられようとも　〔母君は〕たまふらむとも知らねば、身を投げたまへらむとも思ひも寄らず、川に身を投げられたのだろうなどとは夢にも思わず　五鬼や食ひつらむ、狐めくものや取りもて去ぬらむ、六いと昔物語のあやしきもののことのたとひにか、さやうなることも言ふなりし、と思ひ出づ。七さては、かの恐ろしと思ひきこゆるあたりに、心などあ八しき御乳母やうの者や、〔薫が浮舟を〕京へお迎えになるようだと聞いて　目ざわりなと憎んで　かう迎へたまふべしと聞きて、めざましが誘拐をたくらんだ者があるかもしれないと　りて、たばかりたる人もやあらむと、九下衆などを疑ひ、〔母君〕「今参りの　新参

一〇（この宇治を）ひどく不便な田舎だといって、住み馴れない新参者は、ここではろくな支度もできませず。「はかなきこと」は、『花鳥余情』に「張り洗ふ事など也」という。

一一 誰もが、京の引越しに必要な物などを携えて、（里に）帰っていったのでございます。便利な京の実家で、仕立直しなどしてくるという趣。

一二 この身を亡くしてしまいたい。浮舟六九頁、八五～八六頁に、こう思うとこ侍従、右近と相談して母君に真相を語るろがある。

一三「亡き影に」とすさび書きなさった紙が、硯箱の下にあったのを見つけて。「なげきわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ」（浮舟九四頁）の歌のこと。

一四 宇治川の方を見やりながら。歌の「身をば捨つとも」などを見て、さてはあの川に、といった気持。

一五 そんなふうにして（川に身を投げて）お亡くなりになったに違いないお方のことを、ああかこうかと大騒ぎをして。鬼か狐か、または本妻方が取り隠したかと当て推量していることをさす。

一六 どちら様も。母君など。

一七（匂宮とのことは）秘密のことといっても、ご自分から進んでそうなったことではない。そのはじめの経緯は、右近が詳しい（浮舟二七頁以下参照）。

心知らぬやある（で気心の知れぬ者はいませんか）」と問へど、（女房）一〇いと世離れたりとて、ありならはぬ人は、ここにてはかなきこともえせず、今とく参らむ（いずれすぐ戻って参りますと言っては）と言ひつつなむ、皆そのいそぐべきものどもなど取り具しつつ、帰り出ではべりにし」とて、（前から仕えている女房でも）もとよりある人だに、（半ばの者はいないで）かたへはなくて、いと人少ななるをりになむありける。

侍従などこそ、（浮舟の）日ごろの御けしき思ひ出で、「（浮舟）一二身を失ひてばや」など泣き入りたまひしをりをりのありさま、（書き残しておかれた）書きおきたまへる文（手紙）をも見るに、「一三亡き影に」と書きすさびたまへるものの、硯の下にありけるを見つけて、一四川の方を見やりつつ、（音高く流れる）響きののしる水の音を聞くにも、（気味悪く悲しく思っては）うとましく悲しと思ひつつ、「（侍従）一五さて亡せたまひけむ人を、とかく言ひ騒ぎて、一六いづくにもいづくにも、いかなる方になりたまひにけむ、とおぼし疑はむも、いとほしきこと」と言ひあはせて、（右近）一七「忍びたることとても、御心より起こりてありしことならず。親にて、亡きのちに聞きたまへりとも、いとやさしきほどならぬを、あ

（浮舟は）一体どうおなりになったのか（私たちを）本当に迷惑なことです（右近と）話し合って親として（右近）一七（死後にそのことをお聞きになったとしても）別に恥ずかしいお相手ではないのですから

一　このように全くどうなったやら分らないといった心配ごとまで、あれこれ考えて思い乱れていらっしゃるご心痛は。鬼に攫われたか狐か人かと思い案じているさま。

二　世間の仕来りから外れた有様で（死後の営みもまともにしないで）何日もたったならば。

三　言うほう（右近や侍従）もあまりの悲しさに魂も失せる思いで、言葉も続けられず。

四　では、このいかにも荒々しいと思う川に、流されて死んでおしまいになったのか。

右近たち、母君を説得して、葬送の車を出す

母君の思い。かねてこの川を「荒まし」と思っていたこと、浮舟六九頁参照。

五　どちらに流れて行っておしまいになったのか捜して、せめて亡骸だけでもちゃんとお弔いしたい。

六　果てしもない大海原に流れて行っておしまいになったことでしょう。

七　それなのに、（川など捜したりして）人が噂を立てたりしては、（事が知れて）一層聞き苦しいことになりましょう。

八　車を（浮舟のいた部屋の前に）寄せさせて。遺骸を運び入れる体を装う。

九　浮舟が日頃坐っていた畳や茵など。実際の葬送では、この上に遺骸を載せる。

一〇　身近にお使いになっていられたお道具類。

りのままに聞こえて、かくいみじくおぼつかなきことどもをさへ、かたがた思ひまどひたまふさまは、すこしあきらめさせたてまつらむ。亡くなりたまへる人とても、骸を置きてもてあつかふこそ世の常なれ、世づかぬけしきにて日ごろも経ば、さらに隠れあらじ。なほ聞こえて、今は世の聞こえをだにつくろはむ」とかたらひて、忍びてありしさまを聞こゆるに、言ふ人も消え入り、え言ひやらず、聞くここちもまどひつつ、さは、このいと荒ましと思ふ川に、流れ亡せたまひける、と思ふに、いとどわれも落ち入りぬべきここちして、「おはしましにけむ方を尋ねて、骸をだにはかばかしくをさめむ」とのたまへど、「さらに何のかひはべらじ。行方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ。さるものから、人の言ひ伝へむことは、いとど聞きにくし」と聞こゆれば、とさまかうさまに思ふに、胸のせきのぼるここちして、いかにもいかにもすべきかたもおぼえたまはぬを、この人々二人して、車寄せさせて、御座ども、気近う

〔母君に〕
お亡くなりになった人といっても
遺骸を安置してそれを皆が弔うのが世の常の
いくらかでも晴らしてさし上げましょう
道ですのに
いよいよ隠し通せぬでしょう
はりお話し申して
今はせめて世間体なりとうまく取り繕いましょう
相談して
〔母君に〕
と本当のことを
聞く母君の方でもすっかり取り乱して
いよいよ自分も川に落ち込んでしまいそうな気がして
〔母君〕
〔右近たち〕もはや何のかいもございますまい
〔母君は〕あれやこれやと思うちに
もう一体どうしてよいのやら何も分らぬ面持でいらっし
胸元がこみ上げてくるような気がして
やるのを
右近と侍従

一 そっくり脱いで置かれたままの夜着の類いを。
二 浮舟の乳兄弟に当る僧とその叔父の阿闍梨。「大徳」は、僧を敬っていう語。「阿闍梨」は、天台宗、真言宗での僧職の名。僧綱（僧正、僧都、律師）に次ぐ。もとは梵語で、師範たる僧の意。
三 阿闍梨の弟子で気心の知れた者など、皆前々から懇意にしている年寄りの僧など。もっとも信頼のおける乳母の血縁や関係者。年の功も積んでいる。
四 死穢のため、近親者や側近の者が三十日間、家につつしみ籠る。それとともに籠る僧たちだけで。
五 乳母や母君は、縁起でもないあんまりだと、臥し転び泣く。まだ生きているかもしれないのに、という気持。

その夜、火葬に付す

六 右近の大夫や内舎人など、前に（浮舟たちを）恐がらせ申した者ども。（浮舟八二頁、八四頁参照）
七 お殿様（薫）に事の仔細も申し上げられて、日をお決めになり、立派になさるのがよろしかろう。葬送は、陰陽師に適当な日時を占わせて行う。
八 わざと今夜のうちに済ませたいのです。
九 事情を心得た僧たちだけで。前出の僧たち。
一〇 とてもあっけなく終って、煙は消えてしまった。遺骸がないからである。
一一 宇治の里人たち。大夫、内舎人など。
一二 不吉な言行を避けること。
一三 決った作法。入棺や拾骨の儀式など。

使ひたまひし御調度ども、皆ながら脱ぎおきたまへる御衾などやうのものを取り入れて、乳母子の大徳、それが叔父の阿闍梨、その弟子のむつましきなど、もとより知りたる老法師など、御忌に籠るべき限りして、人の亡くなりたるけはひにまねびて出だし立つるを、乳母、母君は、いとゆゆしくいみじと臥しまろぶ。

（車に）（人が亡くなったような様子によそおって）（葬送の車を）

大夫、内舎人など、おどしきこえし者どもも参りて、「御葬送のことは、殿に事のよしも申させたまひて、日定められ、いかめしうそつかうまつらめ」など言ひけれど、「ことさらに今宵過ぐすまじ、いと忍びてと思ふやうあればなむ」とて、この車を、むかひの山の前なる原にやりて、人も近くも寄せず、この案内知りたる法師の限りして焼かす。いとはかなくて、煙は果てぬ。田舎人どもは、なかなか、かかることをことことしくしなし、言忌など深くするものなりければ、「いとあやしう、例の作法など、あることどももしたまはず、下衆下衆しく、あへなくてせられぬることかな」とそしりけ

（内舎人ら）（右近たち）（どく内密に運びたいと思う訳がありますので）（山荘の）（火葬にする）（葬儀といったことを丁重に取り扱いて）（厳重に）（大夫ら）（何とおかしな）（いろいろするべきこともなさらず）（下々の者のように）（あっけなくお済ませになったことだ）（非難する者が）

一 兄弟のおありの方は、わざとこのように簡略に、都の方はなさるそうな。一二一頁にも「兄弟あるは、など、……ことそぐなりけむかし……」とある。

二 こんな田舎の人々のとかくの噂や思惑さえ心配でならないのに。以下、右近たちの思い。

右近、侍従、秘密を守る工作

三 きっとお疑いになることもあるだろうに。誰かが浮舟を取り隠したのではないか、という疑い。

四 匂宮は、ご同族の親しいお間柄だから、そういう人（浮舟）が（宮の許に）おいでかどうかは、しばらくは隠しているとも（薫は）お疑いにもなろうが、結局は分ることだろう。

五 一体どういう男が攫って隠したのだろう。下賤の男にでも連れ出されたのではないか、という疑い。

六 浮舟ご生前のお身の上の果報は、まことに高貴な殿方とのご縁が深くていらした方だのに。

七 全く（あのお歌にある通り）「亡き影に」―亡くなった後で、とんでもない恥ずかしい疑いをお受けになるのか。（浮舟九四頁参照）

八 もしも命があったならば。悲しみのあまり、とても生き永らえそうにもないが、という含み。

九 今のところは、（死別の）悲しみも醒めるような噂を、いきなり人からお聞きになるようなことがあっては、やはり（浮舟のために）とてもおいたわしいことでしょう。行方知れずになったと聞いては、疑惑がいると（大夫ら）れば、「かたへおはする人は、ことさらにかくなむ、京の人はしたまふなる」など、さまざまになむやすからず言ひける。

あれこれとおだやかでない取り沙汰をするのだった

悪い噂

二 かかる人どもの言ひ思ふことどもだにつつましきを、ましてものの聞こえ隠れなき世の中に、大将殿わたりに、骸もなく亡せたまへり、と聞こしめさば、三かならず思ほし疑ふこともあらむを、四宮はた、同じ御仲らひにて、さる人のおはしおはせず、しばしこそ忍ぶともおぼさめ、つひには隠れあらじ、また、定めて宮をしも疑ひきこえたまはじ、五いかなる人か率て隠しけむ、などぞおぼし寄せむかし、六生きたまひての御宿世は、いと気高くおはせし人の、げに亡き影に、いみじきことをや疑はれたまはむ、と思へば、ここのうちなる下人どもにも、今朝のあわたたしかりつるまどひに、けしきも見聞きつるには口かため、案内知らぬには聞かせじ、などぞたばかりける。

はすぐ広がる世の中のことだから

薫

それに

必ずしも匂宮だけをお疑い申されるとは

限らないだろう

などとお考えになるに違いない

山荘に仕えている

変事の様子も見聞きした者

あたふたと気も動転していた間に

事情を知らぬ者には聞かせぬように

など知恵をしぼるのだった

には口止めをし

「ながらへては、七誰にも、しづやかに、ありしさまをも聞こえてむ。八ただ今は、悲しささめぬべきこと、ふと人伝に聞こしめさむは、な九

（右近たち）八

ゆっくりと

事の次第もお話し申し上げましょう

誰どなたにも

先立って、嘆きも醒めよう、と案じる。

一〇（ご病気平癒の祈願のため）石山寺に参籠なさって。孝心深いさま。「石山」は、浮舟三三頁注一二参照。

一一それで、一層宇治の浮舟のことを気になさっていたけれど。

一二（浮舟の亡くなったことを）これこれの事情でございます、と伝える人はいなかったので（薫は何もご存じなくて）。

一三真っ先に薫からの弔問のお使いがないのを、（宇治の人々は）世間体も情けないことと思っていると。

一四薫の荘園の人。前出の内舎人など。

一五こんな一大事は、耳にするなり私自身が行くべきところだが。以下、薫の言葉をお使いが伝える体。

一六身を慎んで、このような山寺（石山）に、日限を定めて参籠しているので（思うにまかせない）。参籠は、祈願の程度によって何日間と日を限る。

一七昨夜行われた葬儀のことは。

一八どうして。あとの「急ぎせられにける」にかかる。

一九私の方に連絡して、日を延ばしてでも葬送といったことはするものなのに。

二〇（浮舟が死んでしまった今となっては）同じこと、どうしようもない話だが。

二一田舎者から非難まで受けるのは。前出一一一～二頁参照。

翌日、薫の使い、弔問

ほいといとほしかるべきことなるべし」と、この二人ぞ、深く心の（良心も）咎めるので鬼添ひたれば、もて隠しける。（隠し続けるのだった）

薫

大将殿は、入道の宮（母女三の宮）のなやみたまひければ、石山に籠りたまひて、（お具合がお悪かったので）騒ぎたまふころなりけり。さて、いとどかしこをばおぼつかなうお（お取り込み中の頃であった）ぼしけれど、はかばかしく（手落ちなく）、「さなむ」と言ふ人はなかりければ、（女君の逝去という大事に当っても）かかるいみじきことにも、まづ御使のなきを、人目も心憂しと思ふに、御庄の人なむ参りて、（石山に）しかしかと申させければ、（これこれと言上させたので）あさましきこと（薫は）夢のようなことちがなさって）こちしたまひて、御使、そのまたの日、（葬儀のあった翌日）まだつとめて参りたり。（また早朝に）（宇治に）（母宮が）

「いみじきことは、聞くままにみづからものすべきに、かくなやみたまふ御ことにより、つつしみて、かかるところに日を限りて籠りたればなむ。昨夜のことは、などか、ここに消息して、日を延べてもさることはするものを、いと軽らかなるさまにて、急ぎせられに（簡略なやり方で）（急いですませられた）ける。とてもかくても、同じ言ふかひなさなれど、とぢめのことを（いずれにしても）（人の一生の最後の作法）しも、山がつのそしりをさへ負ふなむ、ここのためもからき」など、（なのに）（私としてもつらいことだ）

一 あの腹心のご家来の大蔵の大夫。仲信。薫の家司。（浮舟六四頁注五参照）

二 ただ涙にかきくれていることを口実にして、はきはきした返事もしないでしまった。応対に出た右近たちの態度。

三 （お使いの返事を聞いて）何といってもいかにもあっけない最期と悲しくお思いになるにつけても。

四 （宇治という所は）何と情けない土地柄であることか。薫は、すでに大君を失っている。

薫の嘆き

「わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」（『古今集』巻十八雑下、題しらず、喜撰法師）。以下「……人も言ひ犯したまふなりけむかし」まで、薫の心中。

五 鬼などが住んでいるのであろうか。あまりにあっけない死に、鬼にでも食われたのか、と疑う。なお、母君も同様の思いであったこと、一〇八頁参照。

六 心外な男女のことでの間違いがあるようだったのも。匂宮がこっそり通われたこと。

七 正夫人の女二の宮の御殿。

八 どこまでもはかなく悲しい仲をお嘆きになる。大君とも、そのゆかりの浮舟とも添い遂げることはできなかった。

一かのむつましき大蔵の大夫してのたまへり。〔薫から〕御使の来たるにつけても、一層悲しさも増すのに　いとどいみじきに、聞こえむかたなきことどもなれば、二ただ涙におぼほれたるをかことにて、はかばかしくもいらへやらずなりぬ。

薫

殿は、三なほいとあへなくいみじと聞きたまふにも、四心憂かりける所かな、五鬼などや住むらむ、どうして今まであんな所に住まわせておいたのだろう　などて今までさる所にすゑたりつらむ、六思はずなる筋のまぎれあるやうなりしも、あんな所に放って置いたので気楽に　かく放ち置きたるに心や考えて　すくて、人も言ひ犯したまふなりけむかし、手出しをされたのであろう　と思ふにも、わがたゆで恋路にうとい性格が悔まれてならず　く世づかぬ心のみくやしく、お胸も締めつけられる思いがなさる　御胸いたくおぼえたまふ。なやませたいられる折に　まふあたりに、女のことで心を悩ましていられるのも不都合なので　かかることおぼし乱るるもうたてあれば、〔石山から〕京におはしぬ。

宮の御方にもわたりたまはず、「（薫）大した身分の者でもございませんが　ことことしきほどにもはべらねど、不吉なことを身近の者について聞きましたので　ゆゆしきことを近く聞きはべれば、取り乱しています間は縁起でもないと存じまして伺いませぬ　心の乱れはべるほどもいましくてなむ」と聞こえたまひて、お伝え申し上げなさって　尽きせずはかなくいみじき世

九　浮舟が生きていた時には。以下、薫の思い。
一〇　自分は、このような女の問題で、ひどく悲しい思いをする定めに生れついているのだ。大君のことからそれは始まっている。
一一　世間の人とは違った願いを持っていた身なのに。この世の栄華を求めず仏道修行を志していたのに。
一二　人に道心を起させようとして、仏のなさる方便は、本来の慈悲のお心も隠して、このようにつらい目をお見せになるのであろう。「方便」は、仏、菩薩が衆生を悟りに導くために、仮に執る巧みな手段。

匂宮の嘆き

一三　悲嘆にくれられることは薫以上で、の意。
一四　（それを見た女房たちが）どんな物の怪がお憑きしたのか、などと心配するが。
一五　このようなわけも分らぬ泣き顔でいるのを人に悟られまいと。「いやめ」は、涙ぐんだ目つき。

を嘆きたまふ。生前のありしさま容貌、いと愛敬づき、女らしい風情のあった物腰をかしかりしけはひなどの、いみじく恋しく悲しければ、一九うつつの世には、などかくどうしてこれほどにも心を傾けずしも思ひ入れず、のんびり構えて過していたのだろうのどかにて過ぐしけむ、ただ今は、さらに思ひしどうにもあきらめようすべもないままにづめむかたなきままに、悔まれることが無数に思い出されくやしきことの数知らず、二〇かかることの筋につけて、いみじくもの思ふべき宿世なりけり、二一さま異に心ざしたりし身の、思いもかけず思ひのほかに、こうして世間普通の身の上で過しているのを仏などもけしかかる例の人にてながらふるを、仏などもからぬ奴とお思いなのだろうか憎しと見たまふにや、二二人の心を起こさせむとて、仏のしたまふ方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ、と思ひ続けたまひつつ、行ひをのみしたまふ。仏前で一心に勤行なさる

匂宮

かの宮はた、二三まして二三日はものもおぼえたまはず、何の分別もおつきにならず うつし心も正気もおなくしになった有様でなきさまにて、二四いかなる御もののけならむ、など騒ぐに、だんだんとやうやう涙も涸れ尽しなさって涙尽くしたまひて、お気持が落着くにつけてかえって おぼししづまるにしもぞ、ありしさまは恋しく「浮舟の」存生の時の面影は恋しくせつなく思い出されなさるのであった いみじく思ひ出でられたまひける。人には、ただ御病の重きさまを病気が重いようにひたすら装ってのみ見せて、二五かくすずろなるいやめのけしき知らせじと、上手に取繕かしこく

一 思った通り、やはり（二人の仲は）ただの手紙のやりとりだけではなかったのだ。（浮舟七二～七五頁参照）

二 （浮舟は）匂宮がご覧になったら、きっとわがものにせずにはおかぬとお思いになるに違いない人だ。男をひきつけずにおかぬ魅力にあふれた浮舟の美貌。

三 もし浮舟がずっと生きていたら、ただの他人の場合と違って、自分としても馬鹿な目を見ることになっただろう。匂宮と浮舟の関係は、やがて世間に知れ、そうなれば匂宮とは叔父甥の間柄だけに、自分も恥を晒すことになるのだった。薫の思い。

四 大した身分でもない寵い者の喪に籠って、お見舞に上がらないのも、おかしなことだろう、と思ってお伺いになる。後文（一二二頁）によれば、匂宮は六条の院の正室六の君のもとにいる趣。

五 かつて薫と縁組を考えたことがある。（七巻東屋二八六頁注五参照）

六 ここで、源氏の異母弟と分る。叔父の服喪は、三カ月で軽服。「薄鈍」は、薄い鈍色（薄墨色）の喪服。

七 心中ひそかに（浮舟の喪に服しているかのように）悲しく思いよそえられて。浮舟は陰の身で、薫が表立って喪に服することはできないからである。

八（薫は悲しみのため）少し面やつれして。

薫、匂宮を見舞う

（人々）一体自然とご様子ははっきり分ることだったので

っているとご自分ではお思いだったが

どのような方のことでこんなにお心を乱され

お命も危ういほどご悲嘆にくれていらっしゃるのでし

もて隠すとおぼしけれど、おのづからいとしるかりければ、「いかなることにかくおぼしまどひ、御命もあやふきまでしづみたまふらむ」と、言ふ人もありければ、かの殿にも、いとよくこの御けしきを聞きたまふに、さればよ、なほよその文通はしのみにはあらぬなりけり、見たまひては、かならずさおぼしぬべかりし人ぞかし、ながらへましかば、ただなるよりは、わがためにをこなることも出で来なまし、とおぼすになむ、こがるる胸のすこしさむるここちしたまひける。

薫

詳しくこうした匂宮のご様子を

思い焦がれる胸の内も少しはさめる気持がなさるのだっ

ご病気見舞に

宮の御とぶらひに、日々に参りたまはぬ人なく、世の騒ぎとなれるころ、ことことしき際ならぬ思ひに籠りゐて、参らざらむもひがみたるべし、とおぼして参りたまふ。そのころ、式部卿の宮と聞こゆるも亡せたまひにければ、御叔父の服にて薄鈍なるも、心のうちにあはれに思ひよそへられて、つきづきしく見ゆ。すこし面痩せて、いとどなまめかしきことまさりたまへり。人々まかでて、しめやか

毎日参上なさらぬ人はなく

世間でも皆が騒いでい

る時に

折にあった感じがする

一層優雅な美しさは増していらっしゃる

退出して

ひっそりとし

九 本当に枕も上がらぬというわけではないご容態なので。

一〇（母屋の）御簾の内にもいつもお入りになる、身内ともいうべき人。薫のこと。

一一（薫を）ご覧になるにつけても、いよいよ涙が（言葉より）先に立って堰きとめがたいことだろうとお思いになるが。

一二 慎まねばならぬ病状だ。物の怪かもしれないと疑っている。

一三 后の宮。明石の中宮。

一四 それもごもっともと、世の中の無常も、心細く思っています。浮舟の死を悲しむ気持がつい言外ににじみ出た体。

一五 そのままとめどもなく流れ落ちるので。前に「……涙のまづせきがたさをおぼせど……」とあったのに照応する。

一六 ひどく体裁が悪いけれど、必ずしもどうして（浮舟を思っての涙と）気づこう、ただ女々しく気の弱い者と思うことだろう。匂宮の心中。

一七 やはりそうだったのだ。「……おぼしわたりつらむ」まで、その匂宮の様子を見ての薫の心中。匂宮には「とおぼすも」と敬語、薫は「と思ふに」と書き分ける。以下、薫、匂宮の思惑の違いを相互に書く。

一八 何と冷たい人だろう。以下、薫の「悲しさは忘れたまへるを」とある表情を見ての匂宮の思い。

なる夕暮なり。宮、臥ししづみてのみはあらぬ御ここちなれば、（親しくない人にはご面会にならないけれども）とき人にこそ会ひたまはね、御簾のうちにも例入りたまふ人には、（お会いにならぬわけでもない）対面したまはずもあらず。（お顔をお合せになるのも具合悪く気がさすし）見えたまはむもあいなくつつまし、（気を取り直し）見たまふにつけても、いとど涙のまづせきがたさをおぼせど、思ひしづめて、（匂宮）「おどろおどろしきここちにもはべらぬを、（大してひどい病気でもないのですが）皆人は、つつむべき病のさまなり、（しきりに言うので）とのみものすれば、内裏にも宮にもおぼし騒ぐがいと苦しく、（大層ご心配下さるのがとても心苦しく）げに世の中の常なきをも、心細く思ひはべる」とのたまひて、（おし拭って紛らわそうとなさるお積りの涙が）おしのごひまぎらはしたまふとおぼす涙の、やがてとどこほらずふり落つれば、いとはしたなけれど、かならずしもいかでか心得む、ただめめしく心弱きとや見ゆらむ、（とお思いだが）とおぼすも、さりや、ただこのことをのみおぼすなりけり、（浮舟のことばかり悲しんでおいでなのだ）いつよりなりけむ、われ（私をどんなにかお人好しよと）をいかにをかしと、（お笑いになりたいお気持で）もの笑ひしたまふこちに、（もう幾月もお過しになって）月ごろおぼしわたりつらむ、と思ふに、（悲しさは忘れた面持でいられるのを）薫この君は、悲しさは忘れたまへるを、（きたことだろう）こよなくもおろかなるかな、（痛切な）ものの切におぼゆる時は、（悲しみの時というものは）いとかからぬこと（こんな死別といったこと）

一 空を飛ぶ鳥の鳴き渡る声にも、心をそそられて悲しいものだのに。雁や時鳥の鳴く音に、あわれを催されて詠まれた歌は多い。

二 自分がこのようにわけもなく悲しんでいるのにつけても、もし真相を（浮舟ゆえの悲嘆と）知ったならば。

三 それほど、人の心の悲しみの分らぬ人でもないのに。

四 世間無常の道理を深く悟っている人は、かえって（身辺の不幸には）冷静でいられるのだな。

五 浮舟ゆかりの人と思えば懐かしく思われる。「わぎもこが来ては寄り立つ真木柱そもむつましやゆかりと思へば」（『釈』『奥入』以下）

薫、浮舟のことを語り それとなく皮肉を言う

六 （薫こそ浮舟の）形見なのだ。

七 今は、私もなまじ高い官位となりましたし、あなた様はなおさら高貴の御身でお暇のないお有様で。

八 高貴の人の夜の話相手などに、身辺に侍ること。

九 これといったご用がなくては、お相手を勤めることもできませず、つい取り紛れて過しておりますのが残念でございます。それで今まで浮舟のことも話せなかった、という前置き。

一〇 実は（匂宮が）昔お通いになったことのある山里で。宇治のこと。

一一 短い生涯のまま亡くなりました人（大君）の、同じ血に繋がる人（浮舟）が。

でなくても
につけてだに、空飛ぶ鳥の鳴きわたるにも、もよほされてこそ悲しけれ、わがかくすずろに心弱きにつけても、もし心を得たらむに、さ言ふばかり、もののあはれを知らぬ人にもあらず、世の中の常な
大したも
きことを、しみて思へる人しもつれなき、とうらやましくも心にく
のだとも感心なさるものの
くもおぼさるるものから、真木柱はあはれなり。〔浮舟が〕薫に向い合っていた これに向ひたらむ
時の様子も想像なさると
さまもおぼしやるに、形見ぞかし、とうちまもりたまふ。じっと見つめていらっしゃる

いろいろと世間話を申し上げていらっしゃるうちに
やうやう世の物語聞こえたまふに、いと籠めてしもはあらじ、と
（薫）胸の内にしばらくでもしまっておいて 黙っていることもあるまい
おぼして、「昔より、心にしばしも籠めて、聞こえさせぬこと残し
お打ち明け申さぬことを残しています間は
まことに心の晴れぬ思いがいたしましたものですが
はべる限りは、いといぶせくのみ思ひたまへられしを、今はなかな
かの上蔵になりにてはべり、まして御暇なき御ありさまにて、心の
りとしてお過しの時もございませんので
どかにおはしますをりもはべらねば、宿直などに、そのこととなく
てはえさぶらはず、そこはかとなくて過ぐしはべるをなむ。昔御覧
意外な所に住んでいますことを耳にいたしまして
ぜし山里に、はかなくて亡せはべりにし人の、同じゆかりなる人、
時々は逢いもしようか
おぼえぬ所にはべりと聞きつけはべりて、時々さて見つべくや、と

一二 折悪しく、世間からとやかく言われそうな時でしたので。女二の宮降嫁の頃だったので。
一三 またあちら（浮舟）の方でも、私一人を頼りにする気持も特になかったのではないか、とは思っておりましたが。それとない皮肉。
一四 れっきとした重々しい扱いと考えますのならばともかく。正妻というのならともかく。
一五 ただ世話をしてやる上には、（それも）別に大して不都合なことでもないなどと考えまして、気がおけずかわいいと思っていました人（浮舟）が。
一六 お聞き及びのことでもございましょうが。これも、一矢。

薫、さらに皮肉を言って退出

一七 本当に、こんなに悲しむところはお見せしたくない、みっともない。匂宮に奪られた女のことを、宮の前で嘆くのは間抜けなこと、という気持。
一八 薫の様子が何だか取り乱したふうなのを、どうもおかしい困ったとはお思いになるが。浮舟との密事を知られたか、とようやくこのあたりで気づく体。

考えていましたが
思うたまへしに、一二あいなく人のそしりもはべりぬべかりしをりなり
しかば、このあやしき所に置きてはべりしを、をさをさまかりて見
あの辺鄙な田舎に住まわせておいたのですが　滅多に出かけて行きまして逢
ることもなく、一三またかれも、なにがし一人をあひ頼む心もことになく
うこともなく　ひとり
やありけむ、とは見たまへつれど、一四やむごとなくもののしき筋に
思うたまへばこそあらめ、一五見るにはた、ことなる咎もはべらずな
どして、心やすくらうたしと思うたまへつる人の、いとはかなくて
亡くなってしまいました　[それにつけても]すべて人の世の無常の有様を思い続けてゆきます
亡くなりはべりにける。なべて世のありさまを思うたまへ続けはべ
悲しく存じます
るに、一六悲しくなむ。聞こしめすやうもはべらむかし」とて、今ぞ泣
きたまふ。泣きになる

薫　これも、一七いとかうは見えたてまつらじ、をこなり、と思ひつれど、
[涙が]
こぼれそめてはいととめがたし。一八けしきのいささかみだり顔なるを、
平静を装って　(匂宮)本当にお気の毒なことでし
あやしくいとほしとおぼせど、つれなくて、「いとあはれなること
どうなさったかともお悔みを申そうと思っ　ちょっと耳にしました
にこそ。昨日ほのかに聞きはべりき。いかにとも聞こゆべく思うた
聞きましたのでご遠慮して　表立っては世間にお知らせにならぬことだ
ていたのですが
まへながら、わざと人に聞かせたまはぬこと、と聞きはべりしかば

一　然るべきお相手（匂宮の寵い者）としてでもお目にかけたい、と考えていました者でございます。

二　いつかそういうこともございましたでしょうか、お邸（二条の院）にもお出入り申す縁故もございましたから。中の君の異母妹だったから、と言う。

三　つまらぬ世間話をお耳にあそばし、お心を騒がせられますのもよろしくないことでございます。暗に、浮舟の死をそう嘆かれますな、と言い、それゆえの病と察していることを仄めかす。

四　本当にひどいお嘆きだったな。匂宮の様子を思い出しての薫の感慨。以下次頁三行目の「かからじ」まで、薫の心中。

五　（匂宮にこんなに思われるとは）何と言ってもすばらしい浮舟の運勢なのだった。

六　（匂宮といえば）只今の帝と中宮が、あれほどにも大切になさっている皇子であり、ご自身もまた、ご容貌よりはじめ、何もかもが現在の世にまたといらっしゃらない方であろう。

七　妻となさる方とても、並み一通りではなく。正夫人の六の君、側室の中の君、それぞれ一方ならずすばらしい女性である。

八　密教の祈禱。

九　「祭」「祓」ともに陰陽道で行う災厄除去の法。

薫、高貴の人々に思われた浮舟の宿世を思う

なむ（いました）」と、つれなくのたまへど（何食わぬ顔でおっしゃるけれど）、いと堪へがたければ（つらいので）、言少なにて（ことずく言葉少なでいらっしゃる）おはします。「（薫）一さるかたにても御覧ぜさせばや、と思うたまへし人になむ。二おのづからさもやはべりけむ、宮にも参り通ふべきゆゑはべりしかば」など、すこしづつけしきばみて（当てこすって）、「（薫）ご病気のよろしくない間御ここち例ならぬほどは、三すずろなる世のこと聞こしめし入れ、御耳おどろくもあいなきわざになむ。よくつつしませおはしませ（どうぞ十分お大事になさいませ）」など、聞こえおきて出でたまひぬ。

四　いみじくもおぼしたりつるかな、いとはかなかりけれど、さすがに高き人の宿世なりけり、当時の帝后の、さばかりかしづきたてまつりたまふ皇子、顔容貌よりはじめて、ただ今の世にはたぐひはせざめり、見たまふ人とても、なのめならず、さまざまにつけて限り方々をさしおいてなき人をおきて、これに御心を尽くし、世の人立ち騒ぎて、修法、読経、祭、祓と、道々に騒ぐは、この人をおぼすゆかりの、御ここちのあやまりにこそはありけれ、われも、かばかりの身にて、時の

[浮舟は]まことにはかない一生だったが五　お見舞い申し上げておいてお帰りになった　浮舟　うつつを抜かされ　浮舟　ご執心のあまりの　ご気分の　ご不調なのだった　自分も　これほどの身分で　現在の

帝の御女を持ちたてまつりながら、一〇この人のらうたくおぼゆるかたは劣りやはしつる、まして、今はとおぼタるには、心をのどめむかたなくもあるかな、さるは、をこなり、かからじ、と思ひ忍ぶれど、さまざまに思ひ乱れて、「二人木石にあらざればみな情あり」と、うち誦じて臥したまへり。

正夫人に頂きながら　心を静めようにもそのもう亡き人かと思うと　とはいえ　それも愚かしいすべもないことだ　と我慢してみるけれども　もう嘆くまい　またあれやこれやと心が乱れて　（薫）二　朗誦して横になっていられる

後のしたためなども、いとはかなくしてけるを、宮にもいかが聞きたまふらむ、といとほしくあへなく、三母のなほなほしくて、兄弟あるは、など、さやうの人は言ふことあなるを思ひて、ことそぐなりけむかし、など心づきなくおぼす。おぼつかなさも限りなきを、ありけむさまもみづから聞かまほし、とおぼせど、一四長籠りしたまはむも便なし、一五行きと行きて立ち帰らむも心苦し、など、おぼしわづらふ。

ひどく簡略にすませたのを　匂宮　どうお思いに　なっておられよう　［薫は］体裁も悪く張合いもなくて　ご不満にお思いになる　いろいろと不審なことも限りなくあるのに　その時の実際の様子も自身行って聞きたい　思い迷っていらっしゃる

一六月たちて、一七今日ぞわたらまし、と思ひ出でたまふ日の夕暮、いとものあはれなり。一八御前近き橘の香のなつかしきに、ほととぎすの二

一〇この人（浮舟）がいとしく思われたことでは（匂宮に）劣っていただろうか。以下、高貴の身の自分からも、宮に劣らず思われる浮舟の宿世に感嘆する気持から発した思い。

一一「人木石に非ざれば皆情有り　如かじ傾城の色に遇はざらむには」（『白氏文集』巻四諷諭四「李夫人」）（七巻付録三五三～五頁参照）

一二母の身分が低くて。受領風情の北の方である。

一三兄弟のある人は（葬式を簡略にするものだ）などと、下々の間では言うことがあるらしいのを気にして、粗略にすませたのであろう。

薫、葬送の簡略なのを浮舟のために惜しむ

（一一一二頁参照）

一四忌籠りに付き合って、宇治に長らく足止めされなさるのも不都合だ。死穢の忌は三十日。

一五（さりとて）行くには行っても、穢れを避けてすぐに帰って来るのも、本意ないことだ。死者のあった家に行って坐ると、穢れに触れる。

一六月が改まって。四月になったのである。

一七（浮舟が生きていたら）今日、京に移ってくるところだったのに、とお思い出しになる日の夕方。四月十日のこと（浮舟六五頁参照）。

一八お庭先の橘の花の香が、人懐かしく匂うのに。「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』巻三夏、読人しらず）

四月十日、薫、二条の院の匂宮に歌を贈る

一「亡き人の宿に通はば時鳥かけて音にのみ泣くと告げなむ」（『古今集』巻十六哀傷、題しらず、読人しらず）。時鳥は冥途とこの世の間を往復する鳥とされていた。『十王経』に見える。

二 二条の院。薫の本邸三条の宮より言う（七巻宿木一六七頁注一二参照）。中の君が住む。

三 忍び音に時鳥が鳴いていきましたが、あなたも声を忍んでお泣きでしょう、もはやかいもない亡き人（浮舟）に心をお寄せならば。「死出の田長」は、時鳥の異名。浮舟によそえる。「忍び音」は、四月初夏の時鳥の鳴く音。

四 中の君。

五 意味ありげな手紙の書きざまだな。浮舟との仲をほのめかした歌だからである。

六 橘の花の薫るところでは、時鳥も気をつけて鳴くべきなのです（亡き人を偲ぶかと気を廻す人もあるから）。

七 今回の事件の経緯は。匂宮と浮舟の仲や浮舟の死は。

八 悲しく言いようもないほどはかない一生で、（大君といい浮舟といい）それぞれにつけて大変な物思いをした姉妹のなかで。

九 自分一人だけが、物思いの苦労を知らないので、今まで生き永らえているのだろうか、でも（この世は無常だから）それもいつまでか分らない。

匂宮、中の君に打ち明け、少し心を慰む

声ばかり鳴きてわたる。「宿に通はば」（独り口ずさまれるのも）とひとりごちたまふも飽かねば、北の宮に、ここにわたりたまふ日なりければ、橘を折らせて聞こえたまふ。

忍び音や君もなくらむかひもなき
死出の田長に心かよはば

（薫）三

宮は、（匂宮）女君（四）の御さまのいとよく似たるを、（浮舟に）いとあはれにおぼして、（せつないまで悲しく思われて）二所（ご一緒にしんみりしていられる時だった）ながめたまふをりなりけり。（匂宮は）けしきある文かな、と見たまひて、

「橘のかをるあたりはほととぎす
心してこそなくべかりけれ」（匂宮）六

と書きたまふ。

わづらはし（迷惑なことです）

女君（中の君）、七このことのけしきは、皆見知りたまひてけり。（すっかりご存じなのだった）あはれにあさましきはかなさの、さまざまにつけて心深きなかに、われ一人（ひとり）もの思ひ知らねば、今までながらふるにや、それもいつまで、と心細くおぼす。（匂宮）宮も、（浮舟とのことは）隠れなきものから、（黙っていらっしゃるのも心苦しいので）隔てたまへるもいと苦しけれ

一〇（どういう人なのか）隠し立てなさったのが恨めしかった。中の君が、浮舟の素姓、境遇を教えてくれなかったのを恨む。

一一（中の君は浮舟の姉ゆえ）赤の他人よりは、気持が通いなつかしく思われる。

一二 大げさで格式張って、匂宮が不例といった場合も、大騒ぎなさる所（六の君のお邸）では。

一三 六の君の父夕霧右大臣やご兄弟の方々が始終来られるのも。

一四 もう全く夢のような出来事と思われ、やはりどういう訳で、あんなに急に亡くなったのか、と不審が募るばかりなので。匂宮の心中の説明。

匂宮、時方らを宇治に遣わす

一五 匂宮がこっそり宇治に通われる時、いつもお供していた人々。時方や大内記道定。

一六 乳母子の右近。

一七（宇治の邸は人少なで）何人かの念仏の僧たちを頼りに、ひっそり暮しているところへ（時方らが）入って来ると。「念仏の僧」は、忌に籠って念仏を奉仕する僧。一一一頁の「大徳」以下の僧たち。

一八（この前匂宮をお連れした時）物々しく、急に周囲を固めていた夜番の者どもも。（浮舟八九頁参照）

一九 運悪く、最後の折だったのに（宮を）お入れ申さずに終ったことよ、と思い出すにつけても（宮が）いたわしい。以下、往時を回想する時方らの心中。

蜻蛉

ば、ありしさまなど、浮舟とのことなど すこしはとりなほしつつ語りきこえたまふ。いくらか聞き苦しくないようにつくろって

（匂宮）一〇「隠したまひしがつらかりし」など、泣いたり笑ったりして申し上げなさるにつけても 泣きみ笑ひみ聞こえたまふにも、異人よりはむつましくあはれなり。一一ことことしくうるはしくて、お見舞の

例ならぬ御ことのさまも、おどろきまどひたまふ所にては、御とぶらひの人しげく、方々が絶え間なく 一三父大臣、兄の君たち隙なきも、大層煩わしいのに いとうるさきに、

二条の院 ここはいと心やすくて、気が張らず なつかしくぞおぼされける。くつろげる所だとお思いなのだった

一四いと夢のやうにのみ、なほいかで、いとにはかなりけることにかは、とのみいぶせければ、一五例の人々召して、一六右近を迎へにつかはす。

今さらに 宇治川 母君も、さらにこの水の音けはひを聞くに、自分もふらふらと転げ落ちそうな われもまろび入りぬべく、気がして 悲しく心憂きことのどまるべくもあらねば、つらい思いが薄らぎそうにもないので いとわびしうて帰りたまひにけり。一七念仏の僧どもをたのもしき者にて、いとかすかなるに入り来たれば、一八ことことしく、にはかに立ちめぐりし宿直人どもも見とがめず。一九あやにくに、限りのたびしも入れたてまつらずなりにしよ、と思ひ出づるもいとほし。

[京に] さし向けなさる [京に] たまらなくなって [京に]

[今日は] ご身分にふさわしからぬ物好きなご執心ぶ さるまじきことを思ほしこが

一 こうして宇治にやって来てみると。
二 （浮舟が宮に）お抱かれ申しなさって、小舟にお乗りになった風情が、品があって愛らしかったことなどを。橘の小島のくだり、浮舟五二～五三頁参照。
三 こうこうの仰せなので、お迎えのお使いに参上しました。前の「いと夢のやうにのみ……」以下の匂宮の気持を口上にして伝える体。

右近に会う

四 （仰せに従って参上しましては）今に及んで、朋輩たちもおかしいと噂を立てたり思ったりするのが気になりますし。せっかく今まで匂宮との密事は隠してきたのに、という気持。
五 この（浮舟の）御忌が終って。忌籠りは三十日。
六 （自分も跡を追って死にたいぐらいだが）心に叶わず生き永らえていましたら。
七 仰せのように、夢としか思えぬあれこれのことも。浮舟死去の前後のこと。前に「いと夢のやうにのみ……」とあった匂宮の言葉を受ける趣。
八 時方。左衛門の大夫である（浮舟七二頁参照）。
九 （私は）一向に、お二方（匂宮と浮舟）の御仲については、詳しくも存じ上げてはおりませんし。家臣としての挨拶。
一〇 またとない（匂宮の）深いご愛情を拝しておりましたので。無理な宇治通いの工面は、いつも時方がしていたことは浮舟の巻に詳しい。

るること、と見苦しく見たてまつれど、ここに来ては、おはしましし夜な夜なのありさま、抱かれたてまつりたまひて、舟に乗りたまひしけはひの、あてにうつくしかりしことなどを思ひ出づるに、心強き人なくあはれなり。右近会ひて、いみじく泣くもことわりなり。「かくのたまはせて、御使になむ参り来つる」と言へば、「今さらに、人もあやしと言ひ思はむもつつましく、参りても、はかばかしく聞こしめしあきらむばかり、もの聞こえさすべきこともしはべらず。この御忌果てて、あからさまにものになむ、と人に言ひなさむも、すこし似つかはしかりぬべきほどになしてこそ、心よりほかの命はべらば、いささか思ひしづまらむをりになむ、仰せ言なくとも参りて、げにいと夢のやうなりしことどもも、語りきこえさせはべらまほしき」と言ひて、今日は動くべくもあらず。

大夫も泣きて、「さらに、この御仲のこと、こまかに知りきこえさせはべらず、ものの心も知りはべらずながら、たぐひなき御心ざ

（匂宮を）（匂宮が）（右近）（時方）
気丈な人もなく皆しんみりしている
参上しましても　事情をはっきりご納得お話し申し上げられそうな気もいたしません頂きますように
ちょっと用事がありますので　口実をもうけますにも
少しは似つかわしいような時分になりましてから
少しは気持が落着きましたような折に
お話し申し上げたいと存じます
またものの道理も心得ぬ無骨者ではありますが

一 あなた方とも、何も急いでお近づきになることもありますまい、いずれは（匂宮が浮舟を迎え取られた節には）ご用を勤めることになるお方と存じていましたのに。「君たち」は、右近と侍従。

二 私個人としてお寄せする気持も、かえって深くなりました。浮舟存生中は、主命による奉公だったが、もはやそれもないかと思うとかえって、の意。

三 （匂宮が）わざわざお車などをお心遣いなさいまして。

四 せめてもうお一方でも、おいで下さい。侍従のこと。

五 それにしてもやはり、この御忌の期間中はどうして伺えましょう。（宮様は）穢れをお忌みにならないのでしょうか。宮も侍従の穢れに触れるからである。

六 匂宮ご病気で大騒ぎをして、何やかやとお慎みのことがあるようですが。祈禱、祓など道々に行われていること、一二〇頁参照。

七 それに、こんなに深い御仲ですから、いっそ忌にお籠りにもなりたいお気持でしょう。

八 忌明けまであと幾日もありません。「忌も薄くなるとの心也」（『湖月抄』師説）

九 前に拝見した時のご様子もとても慕わしくお思い申し上げているので。橘の小島の折にもお供し、匂宮最後の訪問の時も対面した。

一〇 主人の喪に服しているさま。

右近の代りに侍従を連れ出す

しを見たてまつりはべりしかば、君たちをも、何かは急ぎてしも聞こえうけたまはらむ、つひにはつかうまつるべきあたりにこそ、と思うたまへしを、言ふかひなく悲しき御ことののちは、私の御心ざしも、なかなか深さまさりてなむ」とかたらふ。「わざと御車など おぼしめぐらして、たてまつれたまへるを、むなしくては、いといとほしくなむ。今一所にても参りたまへ」と言へば、侍従の君呼び出でて、「さは、参りたまへ」と言へば、「まして何ごとをか聞こえさせむ。さてもなほ、この御忌のほどにはいかでか。忌ませたまはぬか」と言へば、「なやませたまふ御響きに、さまざまの御つつしみどもはべめれど、忌みあへさせたまふまじき御けしきになむ。また、かく深き御契りにては、籠らせたまひてもこそおはしまさめ。残りの日いくばくならず、なほ一所参りたまへ」と責むれば、侍従ぞ、ありし御様もいと恋しく思ひきこゆるに、いかならむ世にかは見たてまつらむ、かかるをりに、と思ひなして参りける。黒き衣ど

今さら詮ない悲しいご不幸がありましてからは　懇ろに言う（時方）　私　それを無になさっては　私が大層おさし向けになりましたのに　迷惑いたします　（侍従）私などなおさら何を申し上げられ　（右近）それでは　お伺いなさいましょう　（時方）　この忌明けをお待ちになれないご様子でいらっしゃいます　お一人はおいで下さい　せかすので　もうこのあといつになったらお目にかかることがあろう　こんな折にこそ　という気になって参上するのだった

一 裳は、（浮舟亡き）今では自分より目上の人はいないのでうっかりして、黒い色のを染めていなかったので。裳を着けるのは、主人の前に出る時の礼装。

二 薄紫色の裳を持たせて参上する。お供の女の童などに持たせるのであろう。

三 浮舟が生きていらっしゃったら、この道をこっそりお出ましになるところだったのに。薫に引き取られる先に、匂宮が連れ出すはずだった（浮舟六五頁、八七頁参照）。

四 自分は（匂宮の方に）内心、心をお寄せ申していたのに。侍従が薫よりも匂宮にひかれていることは、浮舟六一頁、八一頁参照。

五 ご自身は寝殿においでになって。中の君のいる西の対にいたのを、侍従到着と聞いて、自室（寝殿）に赴いたのである。

六 侍従を渡殿に降ろさせなさった。寝殿の東の渡殿に車を着けさせたのであろう。西の対から遠く、人目にも付かぬよう計らう体。

七 （浮舟が）あの頃ずっと悲しみ悩んでいらしたこと、あの匂宮来訪の夜、お泣きになったこと（浮舟九三頁参照）。「……さま」「……さま」と、侍従の話の内容を列ねて、自然に会話に移る文脈。

八 （浮舟は）おかしいほど、何もおっしゃらない方で。以下、浮舟の性格を語る。

九 あんな（入水などという）思いきったことをお考

侍従、二条の院に参上

も着て、引きつくろひたる容貌もいときよげなり。裳は、ただ今われより上なる人なきにうちたゆみて、色もかへざりければ、薄色なるを持たせて参る。おはせましかば、この道にぞ忍びて出でたまはまし、人知れず心寄せきこえしものを、など思ふにもあはれなり。道すがら泣く泣くなむ来ける。

（化粧した）（顔立ちも大層美しい）（一）（二）（三）（四）

宮は、この人参れり、と聞こしめすもあはれなり。女君には、ありまりうたてあれば、聞こえたまはず。寝殿におはしまして、渡殿におろさせたまへり。ありけむさまなどくはしう問はせたまふに、日ごろおぼし嘆きしさま、その夜泣きたまひしさま、「あやしきまで言少なに、おぼおぼとのみものしたまひて、いみじとおぼすことをも、人にうち出でたまふことは難く、ものづつみをのみしたまひしけにや、のたまひ置くこともはべらず。夢にも、かく心強きさまにおぼしかくらむとは、思ひたまへずなむはべりし」など、くはしく聞こゆれば、ましていとみじく、さるべきにて、ともかくもあら

（匂宮）（侍従）（何もおっしゃらない）（中の君）（お胸がせまる）（五）（六）（七）（八）（九）

（匂宮が）今はの折どんな様子だったのかなど詳しくお尋ねになるのに
（侍従）
まるではきはきとせぬお人柄でいらして
つらい悲しいとお思いのことも
いつもご自分のお胸一つにこめていらした
私どもにお煽らしになることはめったにない
お言い残しになったこともございません
思いもよらぬことでございました
（匂宮は）ひとしお悲しく思われて
詮方もない病気で
命を落すといった場合

えになろうとは。

一〇（浮舟は）どれほどせつない決心をして、あんな荒々しい川に身を投げたのだろう、と想像なさると。

一一それ（入水するところ）を見つけて止めることができていたら、と胸もたぎる心地がなさるが。「堰く」「わきかへる」は「水」の縁語。

一二お手紙を焼き捨てていらした時などに、どうして気づかなかったのでございましょう。浮舟が文反古など処分していたこと、浮舟八六頁参照。

一三あの巻数にお書きつけになった、母君へのお返事のことなどをも。浮舟辞世の「のちにまた……」「鐘の音の……」の歌のこと（浮舟九六頁参照）。

匂宮、侍従をいたわる

一四（匂宮としては）何ほどの者とも気にもとめていらっしゃらなかった人も。侍従のこと。

一五あちら（中の君）も縁がないわけではないから。旧主の浮舟とは血の繋がる姉だから、の意。

一六いずれご一周忌などすませましてから。

一七一晩中語り明かした翌朝のまだ暗いうち。

一八浮舟のお使いになる品として用意させなさった櫛の笥一揃い、衣笥一揃いをお土産になさる。浮舟を引き取った時、与える積りだった品々。「櫛の笥」は、三巻絵合九三頁注八参照。「衣笥」は、衣裳笥。包み（風呂敷）に包む。「一具」は、一双をいう。

一九ただ、侍従に与えてふさわしい程度の贈り物になさったのだった。「おほす」は、課する、負わせる。

よりも

ましよりも、一〇いかばかりものを思ひ立ちて、さる水に溺れけむ、とおぼしやるに、一一これを見つけて堰きとめたらましかば、とわきかへるここちしたまへどかひなし。「御文を焼き失ひたまひしなどに、（侍従）一二などて目を立てはべらざりけむ」など、夜一夜かたらひたまふに、聞こえ明かす。一三かの巻数に書きつけたまへりし、母君の返りことなどを聞こゆ。

一四何ばかりのものとも御覧ぜざりし人も、なつかしくいとしいものに思われなむつましくあはれにおぼさるのでさるれば、「わがもとにあれかし。一五あなたももて離るべくやは」とのたまへば、（侍従）仰せのままにお仕えしますにつけても何かと悲しい思いをすることでしようと存じますので「さてさぶらはむにつけても、もののみ悲しからむを思うたまへれば、一六今この御果てなど過ぐして」と聞こゆ。（匂宮）「またもこの人まで別れがたくお思いになる参れ」など、この人をさへ飽かずおぼす。暁に帰るに、一八かの御料にとてまうけさせたまひける櫛の笥一具、衣笥一具、贈物にせさせたまふ。（浮舟のために）いろいろ調えさせなさった品はたくさんあったのだけれど事が大げさになりそうだったのでさまざまにせさせたまへることは多かりけれど、おどろおどろしかりぬべければ、一九ただこの人におほせたるほどなりけり。（侍従は）な

一（宇治に帰ってから）右近と二人で、こっそり見ては。

二（二人とも）することもないので。主人の忌に籠っていて、ご用もなく、来訪者もないからである。

三どれも皆精巧な細工で、今風な意匠に仕立ててあるのを見ても。

四衣筥の中の衣服である。

五主人の服喪中に、こんなにはなやかなものをどこへ隠そうか。

六一体自分は、どんな前世からの因縁で、この人たちの父親王（八の宮）のもとにお伺いするようになったのだろう。以下「……思ひ知らするなめり」まで、八の宮との出会い以来のことを回想しての、薫の感慨。

薫、ようやく宇治に行き、右近と会う

七このように思いもよらぬ末々の人まで心にかけて。浮舟は、八の宮の隠し子で、中の君の話に出るまで、その存在を知られなかった人である（七巻宿木二二二頁参照）。

八仏道修行専一でいらっしゃった八の宮のもとに、仏のお導きで参って、後世を願うことばかりお話ししていたのに。

九結局は、姫君たちに懸想するといった、道心にはあるまじき心得違いをしたために、（仏が）世の無常を悟らせようとするのであろう。

言われるままに参上して　こんな頂戴物がいろいろとあるのを　明察は何と思おうか　思い

に心もなく参りて、かかることどものあるを、人はいかが見む、すずろにむつかしきわざかな、と思ひわぶれど、いかがは聞こえ返さがけずやっかいなことになったものよ　内心困っているが　どうしてご辞退申せよう

む。右近と二人、忍びて見つつ、つれづれなるままに、こまかに今めかしうし集めたることどもを見ても、いみじう泣く。装束もいと派に仕立て上げられたものばかりなので　（右近と侍従）　大層立

うるはしくし集めたるものどもなれば、「かかる御服に、これをばいかで隠さむ」など、もてわづらひける。始末に困るのだった

薫

大将殿も、なほいとおぼつかなきに、おぼしあまりておはしたり。やはり大層気になるので　〔宇治に〕

道すがらも　昔のことをあれもこれも思い出しては

道のほどより、昔のことどもかき集めつつ、いかなる契りにて、この父親王の御もとに来そめけむ、かく思ひかけぬ果てまで思ひあつかひ、このゆかりにつけては、ものをのみ思ふよ、いと尊くおはせしあたりに、仏をしるべにて、後の世をのみ契りしに、心きたなき末の違ひめに、思ひ知らするなめり、とぞおぼゆる。右近召し出でて、「ありけむさまもはかばかしう聞かず、なほ尽きせずあさましく、はかなければ、忌の残りもすくなくなりぬ、過ぐして、と思ひ

八の宮ゆかりの方々については　物思いばかりしていることだ　やはりどうにも納得がゆかず　（薫）どんな最期だったのかともしかと聞いていないし　頼りない話なので　忌明けももうすぐのことだから　それが過ぎてから

一〇 弁の尼。以下、右近の心中。
一一 いずれは（尼君の方からも）事の次第をお聞き合せになるだろうから。
一二 なまじ隠し立てしても、食い違ったことがお耳に入っては、具合の悪いことになろう。
一三 不埒なこと（匂宮との仲）については、人々を偽る口実もあれこれ考えては言い続けてきたが。
一四 あとあと問題になってもと思ったので、ありのままの出来事を申し上げた。入水のことなど。
一五 （薫は）あまりな、思いもよらぬ話なので、しばらくは言葉もなくていらっしゃる。
一六 とてもそんなことは信じられない。以下「……言ふにかあらむ」まで、驚き乱れる薫の心中。
一七 普通誰でもが心に思い、口にすることも、格別に無口で、おっとりした人だったのに。浮舟の人柄。嫉妬めいた態度や言葉がなかったことを言う。侍従も、「あやしきまで言少なに……」（一一六頁）と匂宮に語っていた。

右近を問い詰める

一八 どうしてそんな思いきった恐ろしいことを決心したりしようか。右近から入水のことを聞いての思い。
一九 どういう積りで、この女房たちは、わざとこのように言いつくろうのだろうか。入水ではなくて、匂宮がどこかへ隠しているのではないか、と疑う。
二〇 匂宮も深くお悲しみの様子は誰の目にも明らかだ。先日お見舞して、確かめてある（一一七～九頁）。

つれど、しづめあへずものしつるなり。（落着いていられずやって来たのだ）いかなることにてか、（どんなご病気にかかって）はかなくなりたまひにし（かくなりになったのか）」と問ひたまふに、尼君（一〇）なども、けしきは見てければ（ていたから）、つひに聞きあはせたまはむを、（一一）なかなか隠しても、こと違ひて（たが）聞こえむに、そこなはれぬべし、（一二）あやしきことの筋（すぢ）にこそ、虚言（そらごと）も思ひめぐらしつつならひしか、（このように真心からおっしゃるご様子に面）かくまめやかなる御けしきにさし向ひきこえては（とお向い申しては）、かねて（前もって）、と言はむかく言はむとまうけし言葉も忘れ（てしまい）、（一四）わづらはしくおぼえければ、ありしさまのことどもを聞こえつ。

（ああ言おうこう切り抜けようと考えていた言葉も忘れ）

（一五）あさましく、おぼしかけぬ筋（すぢ）なるに、ものもとばかりのたまはず。さらにあらじとおぼゆるかな、（一六）なべての人の思ひ言ふことをも、（一七）よなく言少（ことずく）なに、おほどかなりし人は、（一八）いかでさるおどろおどろしきことは思ひ立つべきぞ、（一九）いかなるさまに、この人々、もてなして言ふにかあらむ、と御心（お気持もますます）も乱れまさりたまへど、（二〇）宮もおぼし嘆きたるけしきいとしるし、ここのありさまも、（ここの山荘の様子も）しかつれなしづくりたら（そんなそ知らぬふりをよそおった気）

一 こうして（宇治に）おいでになったにつけても。
二 改めて悲しくてたまらない浮舟の死を、上下の者一緒になって泣き騒いでいるのだから。浮舟の死は疑えないと思う。
三 （浮舟の）お供についていっていなくなった人（女房）はいないか。逃げ隠れているなら、供の女房を連れているはず。
四 （浮舟が）私を薄情だと怨んで、離れてゆかれるようなことは、まさかあるまいと思う。
五 一体どのような、突然に、言うに言えぬ事情が起ったにしても、そんな（入水などという）ことをなさるはずがあろう。「たちまちに」は「言ひ知らぬことありて」にかかる。

右近の打ち明け話

六 （浮舟は）お小さい時から不如意なお身の上で大きくなられたお方で。父八の宮に認められず、母の連れ子として、継父の任地の東国に育ったことを言う。
七 人里離れたお住い。宇治の住いのこと。
八 いつということなく始終物思いに沈んでいらっしゃるご様子でしたが。山里に打ち捨てられた暮しをさびしがっていた、と暗に言う。
九 （でも）時たまにしろ、こうして（お殿様が）お出で下さいますのを、お待ち申し上げなさることで。
一〇 ゆっくりと、折あるごとにもお会い申されることができるような境遇に、早くなりたいとばかり。京に引き取られたいということ。

（配は）むけはひは、（自然に分るはずのものだが）おのづから見えぬべきを、一かくおはしましたるにつけても、悲しくいみじきことを、上下の人つどひて泣き騒ぐを、と聞きたまへば、「（薫）御供に具して失せたる人やある。（もっとその時あったことをはっきりと言いなさい）なほありけむことをたしかに言へ。四 われをおろかなりと思ひて背きたまふことは、よもあらじとなむ思ふ。五 いかやうなる、たちまちに、言ひ知らぬことありてか、さるわざはしたまはむ。（私にはとても本当のこととは思えない）われなむえ信ずまじき」とのたまへば、（右近は）大層困ってしまって（やりこうだとやっかいなことに思って）いといとほしく、さればよ、とわづらはしくて、（右近）自然お耳にも入っておりましょう）「おのづから聞こしめしけむ。六 もとよりおぼすさまならで生ひ出でたまへりし人の、世離れたる御住ひののちは、いつとなくものをのみおぼすめりしかど、たまさかにもかくわたりおはしますを、（お小さい時からのお身の上の悲しかったことまでもお慰めになっては）待ちきこえさせたまふに、もとよりの御身の嘆きをさへなぐさめたまひつつ、一〇 心のどかなるさまにて、時々も見たてまつらせたまふべきやうに、いつしかとのみ、言に出でてはのたまはねど、（お口に出してはおっしゃいませんが）おぼしわたるめりしを、（いつも願っていられたようですが）その御本意かなふべきさまにうけたまはることどももはべりしに、（いかねてのお望みが叶いそうなことと承るお話が何かとございましたので）

一 こうして（宇治に）おいでになったにつけても。
二 改めて悲しくてたまらない浮舟の死を、上下の者一緒になって泣き騒いでいるのだから。浮舟の死は疑えないと思う。
三 （浮舟の）お供についていっていなくなった人（女房）はいないか。逃げ隠れているなら、供の女房を連れているはず。
四 （浮舟が）私を薄情だと怨んで、離れてゆかれるようなことは、まさかあるまいと思う。
五 一体どのような、突然に、言うに言えぬ事情が起ったにしても、そんな（入水などという）ことをなさるはずがあろう。「たちまちに」は「言ひ知らぬことありて」にかかる。
六 （浮舟は）お小さい時から不如意なお身の上で大きくなられたお方で。父八の宮に認められず、母の連れ子として、継父の任地の東国に育ったことを言う。
七 人里離れたお住い。宇治の住いのこと。
八 いつということなく始終物思いに沈んでいらっしゃるご様子でしたが。山里に打ち捨てられた暮しをさびしがっていた、と暗に言う。
九 （でも）時たまにしろ、こうして（お殿様が）お出で下さいますのを、お待ち申し上げなさることで。
一〇 ゆっくりと、折あるごとにもお会い申されることができるような境遇に、早くなりたいとばかり。京に引き取られたいということ。

一一 母君のこと。前の常陸の介の妻なのでこういう。「筑波山」は、常陸の国の歌枕（七巻東屋二六九頁注一参照）。

一二 合点のゆかぬお文がございましたところへ。薫から「波越ゆるころとも知らず……」とあったことをさす（浮舟七八頁参照）。

一三 このお邸の夜番などを奉仕している者どもも。内舎人たち一統のこと。

一四 お付きの侍女たちにふしだらな点があるようだ。（浮舟八四頁参照）

一五 物の道理もわきまえぬ乱暴な田舎者たちが、おかしな具合に歪めて推測し申し上げることもいろいろございましたが。宿直人が気をまわして山荘の警備を厳重にしたことをいう。

一六 その後、長らくそちらからのお便りもございませんでしたので。薫から返書もなかったこと、浮舟八四頁参照。

一七 自分は不仕合せな身の上だとばかり。「いかに思ひ嘆かれむ」まで、浮舟の気持を代弁する。

一八 なまじ訪れた幸運（薫に思われたこと）が、かえって世間の物笑いになる結果に終ったならば。薫から離別されるようなことがあったならば、の意。

一九 どうしたことかと、あれこれの疑いにとり紛れていたお気持もどこへやら。匂宮が隠したのではないかなどと疑って、悲しみも紛れていた心。

こうしてお仕えする私どもも　うれしいことと存じましてご用意をととのえ
かくてさぶらふ人どもも、うれしきことに思うたまへいそぎ、[一二]かの
筑波山も、ようやくのことに思いを達したふうで　[浮舟が京に]お移りになられるに
からうして心ゆきたるけしきにて、わたらせたまはむこ
ついてお支度に懸命になっていましたのに
とをいとなみ思うたまへしに、[一三]心得ぬ御消息はべりけるに、[一三]この宿
直などつかうまつる者どもも、[一四]女房らうがはしかなり、など、いま
いお咎めがあったことなどを申し立てて
しめ仰せらるることなど申して、[一五]ものの心得ずあらあらしき田舎人
どもの、あやしきさまにとりなしきこゆることどもはべりしを、[一六]そ
小さい時から身に沁みて承知しているのに　何
ののち久しく御消息などもはべらざりしに、[一七]心憂き身なりとのみ、
やかやとお世話下さる母君が
いはけなかりしほどより思ひ知るを、人数にいかで見なさむと、よ
ろづにあつかひたまふ母君の、[一八]なかなかなることの、人笑はれにな
どんなに悲しみ嘆かれよう　なぜと悪い方に考えて
り果てば、いかに思ひ嘆かれむ、などおもむけてなむ、常に嘆きた
いつもお嘆きになっていました
まひし。その筋よりほかに、何ごとをかと、思うたまへ寄るに、堪
そのこと以外に　何があったのかと　考えてみますのに　思い
当ることはございません　鬼などはお隠し申し上げたとしても　何か少しは証拠を残してゆくもの
へはべらずなむ。鬼などは隠しきこゆとも、いささか残る所もはべ
だと聞いておりますが　ひどく悲しそうなので
るなるものを」とて、泣くさまもいみじければ、[一九]いかなることにか、
とまぎれつる御心も失せて、せきあへたまはず。
お涙をとどめようもない

一　私は、思うままに振舞うこともできず、何をしても目立ってしまう身の上なので。

二　いずれ京に迎えて、あの人（浮舟）に何の不満もないように、世間体も見苦しくなく世話をして。

三　かえって（浮舟の方に）ほかに分けるお気持があったからだと思われます。悠長な自分より、熱心だと思う恋人がいたからだろうと、匂宮のことをほのめかす。

四　そのようなことにつけて。匂宮とのことが原因で、の意。「身をも失ひたまへる」にかかる。

五　（浮舟は）始終お逢い申せぬことを嘆くあまり、身をも亡きものにされたのか。

六　右近めもお側に控えていぬ時はございませんのに。浮舟身辺の出来事は委細見届けている自分の話こそ真実だ、という含み。

七　匂宮の奥方様のお邸（二条の院）に、（浮舟が）内々でおいでになっていました時に、（匂宮が）とんでもない思いがけぬ時に、（浮舟のもとに）入り込んでいらっしゃいましたけれど。匂宮、浮舟の最初の出会いを語る。匂宮闖入の件、七巻東屋三〇八～三一四頁参照。

八　大層手きびしいことを申し上げましたので、お出ましになりました。お側の女房たちの才覚で事無きを得た、と言う。

薫、さらに追究する

右近の証言

（薫）「われは心に身をもまかせず、顕証なるさまにもてなされたるありさまなれば、おぼつかなしと思ふをりも、今近くて、人の心おくまじく、目やすきさまにもてなして、行く末長くを、と思ひのどめつつ過ぐしつるを、おろかに見なしたまひけむこそ、なかなか分くるかたありける、とおぼゆれ。今はかくだに言はじと思へど、また人の聞かばこそあらめ、宮の御ことよ、いつよりありそめけむ。さやうなるにつけてや、いとかたはに、人の心をまどはしたまふ宮なれば、常にあひ見たてまつらぬ嘆きに、身をも失ひたまへる、となむ思ふ。なほ言へ。われには、さらになな隠しそ」とのたまへば、たしかにこそは聞きたまひてけれ、といといとほしくて、「いと心憂きこと聞こしめしけるにこそはべるなれ。右近もさぶらはぬをりはべらぬものを」とながめやすらひて、「おのづから聞こしめしけむ。この宮の上の御方に、忍びてわたらせたまへりしを、あさましく思ひかけぬほどに、入りおはしましたりしかど、いみじきことを

（薫）
末長く添い遂げよう
とはやる気持を抑えて
ほかに誰
今さらこんなことまで口にすまいと思うが
〔浮舟のことを〕気がかりに思う時も
〔それを浮舟が〕冷たいとおとりになったらしいのは
匂宮とのことなのだが一体いつから始まったのだろう
女の心を惑わしなさる宮様のことだから
全くけしからぬほど
か聞いているのならともかく
私には
決して隠しだてしないように
ぜひ話してほしい
とても困ってしまって
（右近）何と
情
ことを聞いていらっしゃるのだ
確かな
けないことをお耳にあそばしたのでございますね
（右近）自然とお聞き及びでもございましょう
しばらくじっと考え込んで

九（浮舟は）それに怖気づかれまして、あのむさくるしゅうございました小家にお移りになったのでございます。三条の小家のこと、薫がそこへ浮舟を訪れたこと、東屋三二四～五頁、三三五～七頁参照。

一〇風のつてにも宮のお耳に入らぬように、とお思いになって何ごともなく来ましたのに。

一一つい今年の二月頃から、お便りを頂くようになりました。以下、事態をつくろって過小に言う。

一二（それでは）あまりにもったいない、かえって失礼に当りましょうなどと、私めなどがご意見申し上げましたので、一度か二度くらいはお返事申されましたでしょうか。ほんの儀礼的な交渉だけだった、の意。

一三それ以外のことは私は存じ上げません。きっぱりと密通の事実を否定する。

一四こう言うように決っている。浮舟を庇い、自分たちの落度を隠す、女房なら当然の科白と思う。以下、薫の心中に添って書く。

一五自分がここ（宇治）に放って置かなかったら、どんなつらい思いで過そうとも。「いみじく憂き世に経とも」は、次注の歌の措辞による。

一六どうして、わざわざ深い谷を求めて身を投げたりしようか。「世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ」（『古今集』巻十九、雑体、読人しらず）の措辞による。

蔦　蛉

聞こえさせはべりて、出でさせたまひにき。それに懼ぢたまひて、かのあやしくはべりし所にはわたらせたまへりしなり。そののち、音にも聞こえじ、とおぼしてやみにしを、いかでか聞かせたまひけ（どうしてお聞き込みになりましたも）む、ただこのきさらぎばかりより、おとづれきこえさせたまひし。（宮の）御文はいとたびたびはべめりしかど、（浮舟は）御覧じ入るることもはべらざりき。（とてもたびたびございましたようですが）いとかたじけなく、なかなかうたてあるやうになどぞ、右近など聞こえさせしかば、一度二度や聞こえさせたまひけむ。（お目を通されることもございませんでした）それよりほかのことは見たまへず」と聞こえさす。（謹んで申し上げる）

一四かうぞ言はむかし、しひて問はむもいとほしくて、つくづくとうちながめつつ、宮をめづらしくあはれと思ひきこえても、わが方をさすがにおろかには思はざりけるほどに、いとあきらむるところなく、はかなげなりし心にて、この水の近きをたよりにて、かく思ひ寄るなりけむかし、わがここにさし放ち据ゑざらましかば、いみじく憂き世に経とも、いかでか、かならず深き谷をももとめ出でまし、

（それを）無理に問い詰めるのもかわいそうで　じっと物思いにふけりながら　好ましく慕わしいお方とお思い申しても　この川の流れが近くにあるのを幸いに　（もともと）はっきりした考えもなくこんな大それたことを思いついたのだろう　頼りない心根の人だったから

と、いみじう憂き水の契りかなと、この川のうとましくおぼさるることといと深し。年ごろあはれと思ひそめてし方にて、荒き山路を行き帰りしも、今はまた心憂くて、この里の名をだにえ聞くまじきこちしたまふ。宮の上のたまひはじめし、人形とつけそめたりしさへゆゆしく、ただわがあやまちに失ひつる人なり、と思ひもて行くには、母のなほ軽びたるほどにて、後の後見もいとあやしく、ことそぎてしなしたるなめり、と心ゆかず思ひつるを、くはしく聞きたまふになむ、いかに思ふらむ、さばかりの人の子にては、いとめでたかりし人を、忍びたることはかならずしもえ知らで、わがゆかりにいかなりけることのありけるならむ、とぞ思ふらむかし、など、よろづにいとほしくおぼす。穢らひといふことはあるまじけれど、御供の人目もあれば、のぼりたまはで、御車の榻を召して、妻戸の前にぞゐたまへりけるも、見苦しければ、いとしげき木の下に、苔を御座にて、とばかりゐたまへり。今はここを来て見むことも心憂

目の前の流れがいとわしく思われなさることは
本当に深いものがある
今は逆に情けない思いで
ひとえに自分の到らぬゆえに死なせてしまった人なのだ
不満に思っていたが
詳しく事情をお聞き
あの程度の身分の人の娘としては
[浮舟は]ごく
隠していた[匂宮との]事情は必ずしも知るすべもなくて
上出来の人だったのに
あれもこれもかわいそうにお思いになる
[ご身分柄]
しばらく坐っていられた
お敷物にして
もはやここを訪れて眺めることも気の進まぬこ

一 何とも情けないこの川との因縁だなと。
二 この幾年か、いとしいと心に深く思ったことにひかれて。大君、中の君、浮舟と恋しい人にひかれて。
三 もう（宇治という）この里の名さえ聞きたくないような気持がなさる。「宇治」に「憂し」が響くこと、浮舟六二頁注七参照。
四 宮の上（中の君）が（浮舟のことを）言い出されて、はじめに人形と名付けたのも不吉で。「人形」は、祓えのあと川に流す撫物（これで身体を撫で、罪、災厄、穢れなどを移す紙製の具）。（宿木二二一頁参照）
五 母が身分の低い者なので、葬送などもずいぶんおかしな、簡略なことで済ませたのであろう。「後の後見」は、死後の世話の意。（一二一頁参照）
六 （母は）どんなに悲しんでいることだろう。以下「とぞ思ふらむかし」まで、母の気持を忖度する。
七 この私の方との係わりで、どのようなことがあったのだろう、と恨んでいることだろう。母君たちが、正室の女二の宮方を怖れていたこと、一〇八頁参照。
八 死穢に触れるということはあるまいが。浮舟はこの家で死んだのではないからである。
九 お供の人の手前もあるので。世間には、あくまで病死と触れてある。
一〇 室内にお上がりにならず。（一〇七頁注一二参照）
一一 牛車の轅を載せる台。それを取り寄せて、妻戸の前に腰かけている。屋外にいる体。

一二 私までが、この悲しい思い出の地を捨てて荒れるにまかせたならば、一体誰がこの宿を思い出すことだろう。八の宮も、その姫君たちも、そして自分までが捨てたならば、という気持。（七巻宿木一三四頁参照）

一三 宇治山の阿闍梨。

一四 僧綱（令制の僧官職）における三階級の一。僧正、僧都に次ぐ。「阿闍梨」は、僧綱に次ぐ。

一五 一一三頁注一七参照。

一六（入水は）大層罪深いとされる所業とお思いなので。「自殺者殺生之随一也云々此故歟」（『河海抄』）

一七（四十九日まで）七日ごとの法要に、経や仏を供養するようにということなどを。

一八（浮舟が）生きていたならば、今夜帰ったりしようか、としきりに思われる。

一九 弁の尼。廊に住む。

二〇 うつむきに臥しております。悲しみに沈むさま。

二一（浮舟の）亡骸も捜し出さず、お話にもならぬ仕儀に到ったことだ。以下、薫の心中。

二二 どのあたりの水底の貝殻に交ってしまったのだろう。「うつせ」は「うつせ貝」の略。肉が抜けてからになった貝。「今日今日とわが待つ君は石川の貝に交りてありといはずやも」（『万葉集』巻二、依羅娘女）

薫、悲しみながら帰京

とであろう　とばかり思えて　あたりを見廻しなさって

かるべし、とのみ、見めぐらしたまひて、

（薫）二一 われもまた憂きふる里を荒れはてば

たれやどり木のかげをしのばむ

二三 阿闍梨は、今は律師なりけり。召して、この法事のことおきてさせたまふ。二四 念仏僧の数添へなどせさせたまふ。二五 罪いと深かなるわざとおぼせば、軽むべきことをぞすべき、二六 七日七日に経、仏供養ずべきよしなど、こまかにのたまひて、いと暗うなりぬるに帰りたまふも、二七 あらましかば、今宵帰らましやは、とのみなむ。二八 尼君に消息せさせたまへれど、二九「いともいともゆゆしき身をのみ思ひたまへしづみて、いとどものも思うたまへられず、ほれはべりてなむ、三〇 うつぶし臥してはべる」と聞こえて、出で来ねば、しひても立ち寄りたまはず。道すがら、とく迎へ取りたまはずなりにけることくやしく、水の音の聞こゆる限りは、心のみ騒ぎたまひて、三一 骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにて、三二 いづれの底のう

浮舟の法要　取り決めさせなさる　ふやしたりなどおさせになる　軽くなるような追善をするように　こまごまとお命じになって　大層暗くなった頃にお帰りになるにつけても　挨拶をおさせになるけれど（弁尼）何ともかとも縁起でもない身だとばかり思われ沈みこんでいましてさせたまへれど　いよいよ何ごともわきまえられませず　ぼんやりしておりまして　川音が聞えている間は　帰りの道中〔浮舟を〕早くお引き取りにならないでしまったことが悔まれて　お心が乱れるばかりで　〔薫は〕　どんな様子をして

慰めようもなくお思いになる

つせにまじりにけむ、など、やるかたなくおぼす。

かの母君は、京に子産むべき娘のことにより、つつしみ騒げば、悲しみを晴らす時とてもな

例の家にもえ行かず、すずろなる旅居のみして、思ひなぐさむをり

産婦もどうなることだろう　と案じていたが　[これは]無事に出産したのだ

もなきに、またこれもいかならむ、と思へど、たひらかに産みてけり。ゆゆしければえ寄らず、残りの人々の上もおぼえず、ほれまどひて過ぐすに、大将殿より御使忍びてあり。ものおぼえぬここちにも、いとうれしくあはれなり。

内々に来る　[母君は]うつけたような気持な

大層うれしくもありまた悲しい

(薫)

あさましきことは、まづ聞こえむと思うたまへしを、心ものどまらず、目もくらきここちして、まいていかなる闇にかまどはれたまふらむと、そのほどを過ぐしつるに、はかなくて日ごろも経にけることをなむ。世の常なさも、いとど思ひのどめむかたなくのみはべるを、思ひのほかにもながらへば、過ぎにし名残とは、かならずさるべきことにも尋ねたまへ。

真先にお見舞申そうと思っていましたが　私の心も落着か

[涙に]目もかきくもる気持がして

思いがけず生き永らえていましたなら

ねんごろにお書きになって

など、こまかに書きたまひて、御使には、かの大蔵の大夫をぞ賜へ

薫、浮舟の母を弔問

一 京の家で、お産をするはずの娘のことで、穢れをやかましく忌み避けているので。

二 いつものわが家（常陸の介邸）に帰ることもならず。母は浮舟の死穢に触れたことになっている。

三 心ならずもかりそめの住いばかりしていて。三条の小家にでもいるのであろう。

四 穢れに触れた不吉な身なので（娘のもとにも）近寄れず、あとの子供たちのことも考えられず、ぼうとして正体もないさまで日を送っているところへ。

五 あまりと言えばあまりなこのたびのこと（浮舟の死）については。以下、薫の弔問の文面。

六 まして親のお気持は、どれほどお悲しみであろうかと。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』巻十五雑一、藤原兼輔）

七 その当座の間をやり過していた間に、いつのまにか日数もたってしまったことを驚いています。

八（浮舟の死につけても）世の無常も、いよいよ呑気に構えてはいられない気持ですが。自分もいつ死ぬかもしれないが、の意。

九 亡き人（浮舟）の形見とも思われて、必ず何かの折にもお便りを下さい。

一〇 例の大蔵の大夫（仲信）をお遣わしになった。薫の家司。前にも宇治へ弔問に行っている（一一四頁参照）。

一一 万事を気長に考えて、年も越えましたので。昨秋以来、浮舟を宇治に置いたままだったことを言う。以下、薫の言葉を述べる仲信の口上。

一二 朝廷に出仕するような場合にも、必ず面倒を見ることにいたしましょう。私が引き立ててやろう、の意。

一三 そう厳重に慎まなくてもよい触穢なので。浮舟は、宇治の邸で死んだのではないからである。

一四 「大して穢れに触れておりません」と言い繕って。触穢の人の家に上がると、その人も穢れに触れたことになるので、こう言う。

一五 こんなひどい目にあっても死なれませぬ命を。悲しみのため、いっそ死にたい思いなのに、の意。

一六 (それは)こんなありがたい仰せ言を拝するためだったのか、と存じます。

一七 ありがたいお言葉を。薫の、京に迎えようという約束のこと。

一八 詮ない結果となりましては。浮舟が死んでしまっては。

一九 宇治の里との因縁もまことにつらく悲しく存じます。「憂し」と通じる里の名だからである。

二〇 (けれども)あれやこれやとうれしい仰せ言に、命も延びる思いがいたしまして。母の自分のこと、幼い子供のこと、様々に配慮のあるのを感謝する。

母君のお返事

りける。(薫)一一「心のどかによろづを思ひつつ、年ごろにさへなりにけるほど、かならずしも心ざしあるやうには見たまはざりけむ。されど、今よりのち、何ごとにつけても、かならず忘れきこえじ。またさやうにを人知れず思ひおきたまへ。幼き人どももあなるを、朝廷(おほやけ)一二にかうまつらむにも、かならず後見(うしろみ)思ふべくなむ」など、言葉にものたまへり。

一三 いたくしも忌(い)むまじき穢(けが)らひなれば、(母君)一四「深うも触(ふ)れはべらず」など言ひなして、せめて呼びすゑたり。御返り、泣く泣く書く。

(母君)一五 いみじきことに死なれはべらぬ命を、心憂く思うたまへ嘆きはべるに、(一六)かかる仰せ言見はべるべかりけるにや、となむ。年ごろは、心細きありさまを見たまへながら、それは数(かず)ならぬ身のおこたりに思うたまへなしつつ、(一七)かたじけなき御一言(ひとこと)を、行く末長く頼みきこえさせはべりしに、(一八)いふかひなく見たまへ果ててはべりもいと心憂く悲しくなむ。(二〇)さまざまにうれしき仰せ言に命延(の)び

(あなたのことを)きっと忘れはいたしますまい そちらでも
(お使を)たって招じ入れた
情けないことと存じまして嘆いておりま
今までは
(娘の)心細い身の上を案じておりましたものの
しがない身分の私のつたなさ
ゆえと考えましては
行く末長くとお頼り申し上げておりましたのに

はべりて、今しばしながらへはべらば、なほ頼みきこえさせはべるべきにこそ、と思うたまふるにつけても、目の前の涙にくれはべりて、え聞こえさせやらずなむ。

など書きたり。御使に、なべての禄などは見苦しきほどなり、飽かぬここちもすべければ、かの君にたてまつらむと心ざして持たりける、よき斑犀の帯、太刀のをかしきなど、袋に入れて、車に乗るほど、「これは昔の人の御心ざしなり」とて、贈らせてけり。

（母君）五

薫［贈り物を］

殿に御覧ぜさすれば、「いとすずろなるわざかな」とのたまふ。

（薫）今さらしなくてもよいことをしたものだ

（お使）七

言葉には、「みづから会ひはべりたうびて、いみじく泣く泣くよろづのことのたまひて、幼き者どものことまで仰せられたるが、いともかしこきに、また数ならぬほどは、なかなかいとはづかしうなむ、人に何ゆゑなどは知らせはべらで、あやしきさまどもをも皆参らせはべりて、さぶらはせむ、となむものしはべりつる」と聞こゆ。げにことなることなきゆかりむつびにぞあるべけれど、帝にも、さば

ひどく泣きながら何やかやといろいろおっしゃいまして

口上

かえってとても気がひけてなりません

にもったいないのに

九

八

不出来な有様の子供たちですが皆お側にさし上げまして

人にはどういう縁故でなどとは知らせませずに

ご奉公させましょう

と申していました

にもあまり見映えのしない親類付合いというところだが

一〇

一 もう少し生き永らえておりましたら、この上ともお頼り申し上げますこと、と存じますにつけても。行く末は頼もしく存じ上げるにつけても。

二 （今現在浮舟の死が悲しく）目の前に落ちる涙にかきくれて、とてもおしまいまで申し上げることができません。「行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり」（『後撰集』巻十九離別、源済）

三 お決りの禄などは（喪中ゆえ）見苦しいことだし、（さりとて何もしないのでは）物足りぬ気持もするようなので。「禄」は、労をねぎらって与える品物。通例は、女の装束。

四 亡き女君（浮舟）にさし上げようという積りで持っていた立派な斑犀の帯や洒落た太刀などを。浮舟にさし上げて、家臣の料などに与えてもらう積りだったのであろう。「斑犀の帯」は、斑文のある犀角を飾りにした石帯。四位五位の束帯に用いる。

五 これは亡き人（浮舟）のお気持からです。

六 （召使に）届けさせた。使者の帰り際に贈る贈り物の体。

七 母君自身がお会いになりまして。「はべりたうぶ」は、三巻少女二二四頁注七参照。

八 子供たちのことまでお言葉を頂きましたのが。以下「さぶらはせむ」まで、母君の言葉を伝える。

九 また人数にも入らぬ分際では。受領程度の身分の者では、の意。

一〇 帝にも、その程度の身分の人の娘をさし上げない

ことがあろうか。受領の娘が後宮に上がった例として、清和天皇の更衣佐伯氏（信濃権介子房の娘）、宇多天皇の寵を受けた伊勢（大和守藤原継蔭の娘）、醍醐天皇の更衣藤原鮮子（伊予介連永の娘）などがある。

一一（浮舟はもともと八の宮の血を引く人であるが）あの常陸の介の娘だったのだと。

一二（浮舟に対する）自分の扱いが、それ（受領風情の娘ということ）によって、とかく言われるような形で始まったのならともかく。浮舟とは正式の結婚をしたわけではないから、女の身分を云々されても、自分の落度にはならない、の意。

一三 あちらでは。母君のいる三条の小家。

一四 こんな（娘がお産だという）時に、よくもこうしてお過しだ。

母君、常陸の介に事情を語る

一五（浮舟は）みすぼらしい暮しをしておいでだろう、と（常陸の介は）思いもし、口にもしていたので。

一六（薫が）京にでもお迎え下さってから、晴れがましいことで、などと言って知らせてやろう。母君の思い。

一七 こんなことになったので。浮舟が死んでしまったので。

一八 前出の、薫の弔問の手紙。証拠の品である。

一九 権門の人をありがたがって、田舎者で、何にでも感心する性分なので。同様のこと、七巻東屋二七一頁注一〇参照。

かりの人の娘たてまつらずやはある、それに、（その上）さるべきにて、（前世の因縁があって〔帝が〕）時めかしおぼさむをば、人のそしるべきことかは、ただ人はた、（臣下ともなれば）あやしき女、（素性の賤しい女や）世に古りにたるなどを持ちゐるたぐひ多かり、かの守の娘なりけりと、（いったん結婚した女などを妻にしている例はいくらもある）人の言ひなさむにも、（世間が取り沙汰しようとも）わがもてなしの、それに穢るべくありそめたらばこそあらめ、一人の子をいたづらになして思ふらむ親の心に、（母親の心に）なほこのゆかりこそおもだたしかりけれ、と思ひ知るばかり、用意はかならず見すべきこと、とおぼす。

（ご寵愛なさるというのを）（むなしく死なせて悲しんでいるであろう）（やはりこの娘の縁で面目を施すことだ）（としみじみ思うように）（その配慮は必ずしてやらねばならない）

一三 かしこには、常陸の守、立ちながら来て、「をりしもかくてゐたまへること」など腹立つ。年ごろ、いづくになむおはするなど、ありのままにも知らせざりければ、はかなきさまにておはすらむ、と思ひ言ひけるを、京になど迎へたまひてむのち、面目ありて、など知らせむ、と思ひけるほどに　かかれば、今は隠さむもあいなくて、ありしさま泣く泣く語る。大将殿の御文もとり出でて見すれば、よき人かしこくして、鄙び、ものめでする人にて、おどろき臆して、

（ちょっとやって来て）（常陸介）一四（今まで〔浮舟が〕どこにお住まいになっているかなど）（本当の事情も〔常陸介に〕知らせなかったので）（もう隠しだてするのもつまらなくて）（今までの事情を）（怖れて）

一（薫のお手紙を）何度も何度も見て。
二 私もご家来筋として、お出入りしているが、お側近くご用をお申し付けになることもなく。
三 まして（浮舟が）生きていられたならば（どんなにかお引立てに預かったことだろう）、と思うと。母君の思い。
四 実際は、生きていらしたならば、かえってこんな一族の人のことを訊いておやりになるはずもないことだ。草子地。
五 自分が（宇治に捨て置いたりして）行き届かなかったために、死なせてしまったのも気の毒だ、母の悲しみを晴らしてやろう、とお思いになるので。
六 世間の非難も。常陸の介一族を過分に取り立てる、という非難。
七 一体どういうことだったのだろうとお思いになるので。あるいは生きているかもしれない、とも思う。
八 いずれにしろ（生きているにしろ死んだにしろ）法事は罪障消滅のよすがになることだから。

浮舟四十九日の法要

九 宇治山の阿闍梨の寺。律師昇進のこと、一三五頁に見える。
一〇 四十九日の法要には、六十人の僧を請ずるのが定例とされた（『花鳥余情』）。後出の「七僧」もこの中に入る。
一一 右近のところに。内密にするさま。
一二 銀の壺に黄金を入れて。砂金であろう。法会の料。

一うち返しうち返し、（常陸介）本当にすばらしいご幸運を捨てて「いとめでたき御幸ひを捨てて亡せたまひにけた方よる人かな。おのれも殿人にて、参りつかうまつれども、近く召し使ひたまふこともなく、いと気高くおはする殿なり。若き者どものことをおっしゃって下さったのは（子供たちの将来のこと）心強いことではないかと仰せられたるは、たのもしきことになむ」など、喜ぶを見るにも、ましておはせましかば、と思ふに、ふしまろびて泣かる。守も今なむうち泣きける。さるは、おはせし世には、なかなかかかるたぐひの人しも、尋ねたまふべきにしもあらずかし。わがあやまちにて失ひつるもいとほし、なぐさめむ、とおぼすよりなむ、人のそしり、深くは心に留めまいねむごろに尋ねじ、とおぼしける。

（薫は）法要営ませなさるにつけても四十九日のわざなど営ませなさったせたまふにも、いかなりけむことにかは、とおぼせば、とてもかくても罪得まじきことなれば、いと忍びて、かの律師の寺にてなむ営ませなさったせたまひける。六十僧の布施など、おほきにおきてられたり。母君も来ゐて、参列して事ども添へたり。宮よりは、右近がもとに、白銀の壺に黄金入れて賜へり。人見とがむばかりお

一三 京のお邸の家臣たちを、気心の知れたものばかり大勢（宇治に）お遣わしになった。法会の手伝いのためである。

一四 一体どういう方なのだろう。

一五（常陸の介は）婿取りした少将の子を産ませたばかりで、盛大な産養をさせようと大騒ぎをし。

一六 家の内に無いものといってはほとんどなく、唐土や新羅の品々まで飾り立てたいところだったが。「唐土新羅の飾り」は、舶来の錦などであろう。からかい気味の筆致。

一七（身分柄）そう大したこともできないので、まことにお粗末な有様だった。

一八 この（浮舟の）ご法要が。以下、わが家の産養と比べる常陸の介の心中。

一九 もし生きていたら、自分とは比べようもない、すばらしい浮舟のご運勢だったのだ、と思う。「人の御宿世」で一語。

二〇 中の君もお布施を寄せられ。

二一 七僧に供する食事のこともお引き受けになった。「七僧」は、法会を行う役僧。講師、読師、呪願、三礼、唄、散花、堂達をいう（五巻鈴虫三四九頁注九参照）。大法会、四十九日の法会には七僧を揃える。

二二 このようなご寵愛の人をお持ちになっていたのだと、帝までお聞きになって。

げさなことは ほきなるわざは、なさるわけにもいかず えしたまはず、右近が心ざしにてしたりければ、事情を知らない人は 右近の志のようにして供養したので 心知らぬ人は、「いかでかくなむ」など言ひける。どうしてこんなに立派に 殿の人ども、むつましき限りあまた賜へり。（殿人）おかしいな 「あやしく、音もせざりつる人の果てを、こんなに手厚くなさるのは かくあつかはせたまふ、誰ならむ」と、噂にも聞かなかった人のご法事を 今頃気がついて驚く人がやたら多 わきまえもなく主人顔をしているのを 常陸の介 いのに 不審に思って るに、常陸の守来て、心もなくあるじがりをるなむ、あやしと人々見ける。少将の子産ませて、いかめしきことせさせむとまどひ、家のうちになきものはすくなく、唐土新羅の飾りをもしつべきに、限りあれば、いとあやしかりけり。この御法事の、忍びたるやうにお有様がこの上なく立派なのを見ると 内々にというお積りであっ たけれど ぼしたれど、けはひこよなきを見るに、生きたらましかば、わが身に並ぶべくもあらぬ、人の御宿世なりけり、と思ふ。宮の上も誦経したまひ、七僧の前のこともせさせたまひけり。今なむ、かかる人持たまへりけりと、帝まで聞こしめして、おろかにもあらざりける 女二の宮にご遠慮申し上げて 並々ならず大切に思っていた人なの に 人を、宮にかしこまりきこえて、隠しおきたまへりけるを、いとほ 気の毒な ことと思いになった しとおぼしける。

一 匂宮と薫の、お二人の方のお胸の内は、いつまでも悲しく。

匂宮、薫、悲しみのその後

二 あいにくな横恋慕の燃え立つ最中に、（浮舟が死んで）ふいに絶たれた仲であっては。匂宮のこと。

三 あのように（前に母君にお約束なさったように）お心にかけて、何やかやとご配慮なさって。

四 明石の中宮が、御軽服の間は、引き続き（六条の院に）お里下がりしていらっしゃるのだが。「軽服」は、重服（父母の喪）に対して、その他の近親者のための服喪をいう。叔父式部卿の宮薨去による（一一六頁参照）。叔父の服喪は三カ月。

明石の中宮方の女房小宰相、薫を弔う

五 明石の中宮腹の第二皇子。匂宮は三の宮。（六巻匂兵部卿一六二頁参照）

六 大叔父の薨去のあとを襲ったのである。

七 明石の中宮腹の女一の宮。匂宮の姉宮。（浮舟七七頁参照）。

八 美人の女房たちの顔立ちも、まだとくとご覧になっていないのが、心残りなお気持である。女一の宮方にすぐれた女房の集うこと、七巻総角八八頁参照。

九 （風儀の厳しい女一の宮の御あたりで）ようやくのこと、大層人目を忍んでお逢いになっている。

一〇 「琴」は、絃楽器の総称。「爪音」は、箏（十三絃）の音。「撥音」は、琵琶の音。

一一 いつものように、（薫のことを）悪く言われるが。

二人の人の御心のうち、古りず悲しく、あやにくなりし御思ひの盛りにかき絶えては、いといみじけれど、あだなる御心は、なぐさむや、などこころみたまふこともやうやうありけり。かの殿は、かくとりもちて、何やかやとおぼして、残りの人をはぐくませたまひても、なほいふかひなきことを、忘れがたく思ほす。

（とてもつらいけれども移り気なご性分なので お心が紛れるか など試しにほかの女に言い寄ってみられることも次第にあるのだった 薫 あとに残った一族の人々をお世話なさって やはり詮ない浮舟のことを）

后の宮の、御軽服のほどは、なほかくておはしますに、二の宮なむ式部卿になりたまひける。重々しうて、常にしも参りたまはず。

（重々しいご身分柄 始終は〔母宮のもとに〕）

この宮は、さうざうしくものあはれなるままに、一品の宮の御方をなぐさめ所にしたまふ。よき人の容貌をも、えまほに見たまはぬ、残り多かり。大将殿の、からうしていと忍びてかたらひたまふ、小宰相の君といふ人の、容貌などもきよげなり、心ばせある方の人とおぼされたり。おなじ琴を掻きならす爪音、撥音も、人にはまさり、文を書き、ものうち言ひたるも、よしあるふしをなむ添へたりける。

（お心も楽しまずもの悲しい お気持のままに 薫 女房 すっきりと美しいし 気の利いた ちょっともものを言っても 趣のある一ふしを添えてあるのだった 〔薫は〕）

この宮も、年ごろいといたきものにしたまひて、例の、言ひ破りた

（匂宮 〔小宰相を〕 前々から大層よい女だとおぼしめして）

一二（小宰相は）何も、そんなに皆と同じようにすることがあろうかと。誰もが匂宮にすぐ靡くが、自分までそんな珍しくもないことをしてよいものかと。

一三 生真面目なお方。薫のこと。

一四（浮舟のことで薫が）悲しんでいらっしゃるのも（小宰相は）よく知っているので。

一五 お胸の内をお察しする心は人に劣りませんが、数にも入らぬ私ゆえ（わざとお悔みも申し上げませず）悲しみに絶え入るばかりの思いで過しています。

一六（亡くなられたお方と）私が入れかわれるものでしたら（これほどまでお嘆きにもなりますまいに）。「草枕紅葉蔀にか へたらば心をくだくものならましや」（『後撰集』巻十九羇旅、亭子院）によるか。

一七 いとしく思われる。薫の心中。

一八 世の無常を何度も味わっている厭わしい身の私でも、人が気づくほど嘆きを見せてはいない積りですが（よくぞ察してお尋ね下さった）。

一九 普通はこのように女房の局に立ち寄るなどということもなさらない、人柄も重々しい方なのに。「ならす」は、相手に馴れ親しませる意。

二〇 本当に頼りなげな住いなのです。語り手の插入句の体。

二一 局などといって、狭くて奥行きもない部屋の遣戸口に寄りかかっていらっしゃるのを。「遣戸」は、引き違いの板戸。女房の局口などによくある粗末な建具。

まへど、二一などか、さしもめづらしげなくはあらむと、（気強く小憎らしい様）心強くねたきさまなるを、二三まめ人は、すこし人よりことなり、（と感心していられるのであ）とおぼすになむありける。二四かくものおぼしたるも見知りければ、忍びあまりて聞こえたり。（小宰相）

あはれ知る心は人におくれねど
数ならぬ身に消えつつぞ経る

二六かへたらば」と、（奥ゆかしい紙に書いてある）ゆゑある紙に書きたり。（もの悲しい）ものあはれなる夕暮、しみりとした時を）めやかなるほどを、（うまく見計らって言ってよこしたのも）いとよくおしはかりて言ひたるも、二七憎からず。（薫）二八

常なしとここら世を見る憂き身だに
人の知るまで嘆きやはする

（この弔問のお礼を）このよろこび、「あはれなりしをりからも、（しんみりともの悲しい折だったので）いとどなむ」など言ひ（小宰相の局に）に立ち寄りたまへり。（薫は）いとはづかしげにものものしげにて、（まことに気がひけるほど立派なご様子で）二九なべてかやうになどもならしたまはぬ、人柄もやむごとなきに、（ひとしおうれしかった）三〇いとものはかなき住ひなりかし、三一局などいひて、せばくほどなき遣戸口に寄

一 亡き人（浮舟）よりも、こちらは奥ゆかしい感じが身にそなわっていることよ。以下、薫の心中。
二 （こんな人が）どうしてこのように宮仕えに出たのであろう、然るべきものとして（寵い者として）、自分も囲っておきたいぐらいだのに。
三 （けれども）そんなひそかなお気持は。
四 その年の夏である。
五 中宮主催の法華八講（二巻賢木一七〇頁注一参照）。父光源氏、養母紫の上のための追善法要。
六 五巻を講ずる日などは、大変な見物だったので。薪の行道が行われるからである。（賢木一七一頁注一四、一六参照）
七 あちらこちらから、（縁者たちが）女房の縁故を辿って参上して。
八 五日めの朝座で法会は終って。法華経八巻を五日に分けて講じ、第一日めの夕座から始まったと考えられる。
九 寝殿を法会を行う御堂とした。
一〇 寝殿の北廂。母屋との境の襖障子も会場を広くするため、取り外してあった趣。
一一 寝殿と西の対の間の渡殿。寝殿を片付ける間、一時、女一の宮をお移ししている。
一二 法会聴聞の間は正装の束帯を着用していたのを、終了後、平常着に着換えた。

明石の中宮の法華八講

薫、女一の宮を垣間見る

〔小宰相は〕きまり悪い思いがするけれども（それでもそうひどく卑下する）りゐたまへる、かたはらいたくおぼゆれど、さすがにあまり卑下してもあらで、いとよきほどにものなども聞こゆ。見し人よりも、これは心にくきけ添ひてもあるかな、などてかく出で立ちけむ、さるものにて、われも置いたらましものを、とおぼす。人知れぬ筋は、（お顔色にもお出しにならない）かけても見せたまはず。

光源氏

蓮の花の盛りに、御八講せらる。六条の院の御ため、紫の上など、（それぞれ日をお分けになって）皆おぼし分けつつ、御経仏など供養ぜさせたまひて、（ご供養あそばして）いかめしく（大がかりで格式の高い法会であった）尊くなむありける。五巻の日などは、いみじき見物なりければ、（見物する人が多かった）なたかなた、女房につきつつ参りて、もの見る人多かりけり。

五日といふ朝座に果てて、御堂の飾り取りさけ、（取り除き）御しつらひ改むるのに（お部屋の模様替えをする）、北の廂も、障子ども放ちたりしかば、皆入り立ちてつくろふ（家臣たちが立ち入って片づけている）ほど、西の渡殿に姫宮おはしましけり。もの聞き極じて（聴聞に疲れて）女房もおのおの局にありつつ、御前はいと人少なる夕暮に、大将殿、直衣着（〔姫宮の〕薫）かへて、今日まかづる僧のなかに、かならずのたまふべきことある（退出する僧の中に）（ぜひ仰せにならねばならないご用があるので）

一三 納涼遊宴のため池に臨んで建てられた殿舎。ここは、西の対に続く廊の南端にあるのであろう（三巻図録九参照）。衆僧の控え室とされていた趣。
一四 人の気配もあまりしないのに。西の渡殿の様子。
一五（西の渡殿は）さきほどからの話に出ていた小宰相の君などが、ちょっと几帳などばかりを仕切りに立てて、休息する上局（お前に伺候した時の休息所）にしている。
一六 女房の衣摺れの音がする。
一七 馬道の方の襖。「馬道」は、建物の中央を貫通する廊下。ここは、西の対を南北に仕切る馬道か。
一八 いつも、そのような（ちょっと休息といった）女房がいる時の様子とは変って。今日は、一品の宮のご座所になっているからである。
一九 氷を箱の蓋に載せて割ろうとして。「氷」は、四巻常夏八五頁注七参照。ここは、朝廷から中宮に献じられたものであろう。「ものの蓋」は、硯箱の蓋など。
二〇「唐衣」は、女房が貴人の前に出る時着用。「汗衫」は、同じく童女が着用、女房の裳、唐衣に当る。
二一 皆くつろいだ服装をしているので、女一の宮がおいでになろうとは、（薫は）お思いでなかったのに。
二二 白い薄絹の表着を着ていられる方。一品の宮。
二三 少しこちらの方に（薫の見ている方に）なびかせて長く引かれている有様は。

により、釣殿の方におはしたるに、皆退出していないので［南の］池の側で涼んで皆まかでぬれば、池の方にすずみたまひて、人少ななるに、かくいふ宰相の君など、かりそめに几帳などばかり隔てて、うちやすむ上局にしたり。ここにやあらむ、ここにいるのであろうか人の衣の音す、とおぼして、［薫は］馬道の方の障子の細くあきたるより、細く開いているところから広々と部やをら見たまへば、例さやうの人のゐたるけはひには似ず、はればそっと覗いてご覧になると れしくしつらひたれば、なかなか、几帳をいくつも立て違えてある間から奥の方まで見通されて屋がととのえられているので ひより見通されて、［中が］すっかり見える氷をものの蓋に置きて割るとて、騒いでいる女房二人ほどもて騒ぐ人々、大人三人ばかり、童とゐたり。女の童 唐衣も汗衫も着ず、皆うちとけたれば、御前とは見たまはぬに、白き薄物の御衣着たまへる人の、手に氷を持ちながら、かくあらそふをすこし笑みたまへる御顔、言はむかたなくうつくしげなり。いと暑さの堪へがたき日なれば、こちたき御髪の、苦しくおぼさるるにやあらむ、すこしこなたに靡かして引かれたるほど、たとへむものなし。ここらよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけり、とおぼゆ。御前なる人は、言いようもなく愛くるしいお顔立ちである御髪がうっとうしくお思いになるのであろうか こうして騒いでいるのを 今まで大勢美しい人を見ているけれど たとえようもなく美しい とても比べるすべもないのだった 女房たち と思われる

一 全く土くれか何かのような感じがするが。「上の心油然として悦たること遇へること有るが如し、左右前後を顧みるに粉色土の如し」（『白氏文集』巻十二、感傷「長恨歌伝」）

二 黄色の生絹の単。「生絹」は、練らない絹で、夏の衣料。「単」も、裏を付けぬ仕立ての夏の袿。

三 薄紫色の裳。

四 （氷は冷たくて）かえって、割るのが大変で、とても暑苦しそうです。

五 その声を聞いて、自分の心をかけている小宰相の君だとは分った。今初めて女の顔立ちを見た趣。

六 （小宰相に言われても）強情に割って、皆手に手に持っている。以下、薫の目に映る、氷を楽しむ女房たちの様子。

七 また別の女房は。

八 この上もなくうれしい。薫の気持をそのまま書く。以下「……もの思はせむとするにやあらむ」まで、薫の心中の思い。

九 自分もまだ幼くて、わけも分らずに拝した時。椎本の巻に「女一の宮も、かうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひくらべられて」（六巻三五〇頁）とあった。女一の宮は、東宮の「御さしつぎ」（五巻若菜下一六二頁）で、東宮は薫より七歳年長。

一〇 また例によって、つらい物思いをさせようというのであろうか、と一方では不安な気持で。ついこの間、浮舟のことでそれを思い知ったばかり（一一五頁

一 まことに土などのここちぞするを、思ひしづめて見れば、黄なる生絹の単、薄色なる裳着たる人の、扇うちつかひたるなど、用意あらむはや、とふと見えて、「なかなか、ものあつかひに、いと苦しげなり。たださながら見たまへかし」とて、笑ひたるまみ、愛敬づきたり。声聞くにぞ、この心ざしの人とは知りぬる。

（気を落着けてよく見ると）（扇を使っている様子など）（深い人だな）（すぐ目に止って（小宰相））（ただそのままでご覧なさいよ）（目もと）（愛嬌がある）

心強く割りて、手ごとに持たり。頭にうち置き、胸にさし当てなど、さまあしくする人もあるべし。異人は、紙につつみて、御前にもかくて参らせたれど、いとうつくしき御手をさしやりたまひて、のごはせたまふ。「いな、持たらじ。雫むつかし」とのたまふ御声、いとほのかに聞くも、限りなくうれし。まだいと小さくおはしましほどに、われも、ものの心も知らで見たてまつりし時、めでたの児の御さまや、と見たてまつりし、そののち、たえてこの御けはひをだに聞かざりつるものを、いかなる神仏の、かかるをり見せたまへるならむ、例の、やすからずもの思はせむとするにやあらむ、と

（お行儀の悪いことをする女房もあるようだ）（氷を）（同じようにしてさし上げたが）（一品宮は）（とてもかわいらしいお手をさし出しなさって）（拭わせなさる）（一品宮）（いいえ）（持ちとうない）（雫がいやなの）（ほんのかすかに耳にするのも）（一品宮が）（何と美しい）（お子だろう）（とお見上げ申したが）（全然この姫宮の物越しのお気配さえ耳にすることはなかったのに）（どのような）（こんなよい機会を与えて下さったのであろう）

参照）。

一一 こちらの対（西の対）の北廂に局をしていた下﨟の女房が。

一二 薫が覗いている襖のこと。馬道に面している。

一三 あたふたと（こちらへ）やって来る。

一四 そこに立っている直衣姿の人を見つけると。

一五 簀子をどんどんやって来るので。女房は御簾の外に出ないのが普通。「簀子」は、外廻りの濡れ縁。

一六 顔を見られまい、（垣間見など）いかにも好色めいた仕業だ。自分らしくもない、と世間を憚る気持。

一七 下﨟女房のこと。「おもと」は、女房の敬称。

一八 大変なことになった。以下「……聞きつけたまはぬならむかし」まで、下﨟女房の心中。

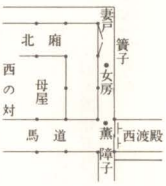
一九（襖の側の）御几帳も奥が見えるぐらい引き寄せてあったことよ。先に「几帳どもの立てちがへたる……」とあったのに照応する。

二〇 誰が襖を開け放しにしたのか、ときっと詮議されるに決っている。

二一（お召し物の）単も袴も生絹らしく見えたお姿だったから。生絹は軽くて衣摺れの音も軽い。

二二 だんだんと道心も固めてきたのに、一つつまずいてからは。大君とのこと以来。以下、薫の心中。

二三 あの悲しみの当時。大君と死別の当時。



薫の反省

かつは静心なくて、まもり立ちたるほどに、二なたの対の北面に住みける下﨟女房の、二この障子は、とみのことにて、あけながら下りにけるを思ひ出でて、人もこそ見つけて騒がるれ、と思ひければ、二三まどひ入る。二四この直衣姿を見つくるに、誰ならむ、と心騒ぎて、お二五のがさま見えむことも知らず、簀子よりただ来に来れば、ふと立ち二六去りて、誰とも見えじ、すきずきしきやうなり、と思ひて隠れたまひぬ。

じっと見詰めてたたずんでいると　急ぎの用事で　開けたまま　局に　下がってしまったのを思い出して　誰かが見つけて小言を言われては大変　誰だろう　どきどきして　自分の姿を人に見られることも忘れて　[薫は]　とっさに　立ちのいて

二七このおもとは、二八いみじきわざかな、二九御几帳をさへあらはに引きなしてけるよ、右の大殿の君たちならむ、うとき人はた、ここまで来べきにもあらず、ものの聞こえあらば、三〇誰か障子はあけたりし、とかならず出で来なむ、三一単も袴も、生絹なめりと見えつる人の御姿なれば、三二え人も聞きつけたまはぬならむかし、と思ひ極じてをり。三三かの人は、三四やうやう聖になりし心を、ひとふし違へそめて、さまざまなるもの思ふ人ともなるかな、三五そのかみ世を背きなましかば、今は

夕霧　ご子息だろう　全くの他人が　このことが知れたら　来ようはずがない　女房たちもお聞きになれなかったのであろう　弱りきっている　薫　あれこれと物思いの絶えない身ともなったものだ　世を捨てていたならば

一 深い山に住みついて、こんなに心を乱すこともなかったであろうに。
二 （お姿を見たため）かえってせつなく、何のかいもないはずのことなのに。結婚することもできぬ高貴の方なのに。
三 女二の宮の寝起きのお顔が。

薫、女二の宮を前に、女一の宮の面影を追う

四 こちら（女二の宮）よりあの方（女一の宮）の方が、必ずまさっているというわけでもあるまい、とは思われるものの。
五 全然似てはいらっしゃらないことだ。以下、薫の心中。
六 もっと薄いお召し物になさいませ。「たてまつる」は着るの尊敬語。
七 あちらに参って。母女三の宮のもと。
八 女三の宮方の女房。衣服調製の係と見える。
九 薄物の単のお召し物を縫って参るよう申せ。女一の宮と同じ物を妻にも着せて比べようという魂胆。
一〇 いつものように、お念誦をなさるご自分のお部屋においでになったりして。朝の勤行は、道心深い薫の日課の趣。
一一 さきほど仰せつけになったお召し物が、（もう出来上がっていて）御几帳にかけてある。恥じらって手を通さぬ体であろう。

女宮に、女一の宮と同じ衣裳を着せて慰む

一深き山に住み果てて、かく心乱らましや、（心おなど次々にお思いになるのも）なおぼし続くるも、やすからず。（どうして今まで）（一品宮を）（お見上げ申したいと思ったのだろう）（だやかでない）などて年ごろ、見たてまつらばやと思ひつらむ、二なかなか苦しく、かひなかるべきわざにこそ、と思ふ。

（その翌朝）つとめて、三起きたまへる女宮の御容貌、（大層お美しい風情なのは）いとをかしげなめるは、四これよりかならずまさるべきことかは、と見えながら、五さらに似たまはずこそありけれ、（一品宮は）あきれるばかりの気品に映えて）あさましきまであてにかをり、（とても言葉には尽せぬご様子だった）えも言はざりし御さまかな、（一つには自分の気のせいか）かたへは思ひなしか、（あんな場合だったからか）をりからか、とおぼして、（薫）「いと暑しや。六これより薄き御衣たてまつれ。（女はいつもと違った着物を着て）女は例ならぬもの着たるこそ、（その時々によって風情があるものです）時々につけてをかしけれ」とて、（薫）七「あなたに参りて、大八（女房たちは）（女二の宮）弐に、薄物の単の御衣、九縫ひて参れと言へ」とのたまふ。御前なる人は、この御容貌のいみじき盛りにおはしますを、（すばらしい女盛りでいらっしゃるのを）（もっと引き立ててさし上げなさるのだ）もてはやしきこえたまふ、とをかしく思へり。

（女宮の御殿に）一〇例の、念誦したまふわが御方におはしましなどして、昼つかたわたりたまへれば、一一のたまひつる御衣、御几帳にうち掛けたり。（薫）「なぜ

一二 しまりなく見えます。「ばうぞく」は字音語であるが、原語、明らかでない。一巻空蟬一〇八頁にも見える。
一三 今はかまわないでしょう。「あへはべなむ」は「あへはべりなむ」の撥音便無表記の形。
一四 御袴も、昨日女一の宮がお召しになっていたのと同じ紅である。
一五 お髪の多さや、裾にひろがる感じなどは（女一の宮に）劣りはなさらないけれど、やはり人それぞれということなのだろうか。女一の宮は、「こちたき御髪の……すこしこなたに靡かして引かれたるほど、たとへむものなし」（一四五頁）と薫には見えた。
一六 以下、これも昨日と同じ場面を再現。
一七 恋しい人の姿を絵に描いて眺める人だっていたではないか。漢の武帝が李夫人の絵姿を描かせた故事がある（七巻付録三五三頁『白氏文集』巻四諷諭四「李夫人」参照）。
一八 まして女二の宮は、果せぬ思いをやるには不似合いではないお間柄の方だ。女一の宮とはご姉妹。
一九 （私と結婚して）臣下になってしまわれたからといって、あちらからもお便り申されないのでは、情けないことです。以下、わざと大げさに言う。
二〇 そのうち、大宮（母明石の中宮）のお前で、（あなたが）お恨み申していられる、と申し上げましょう。「啓す」は、中宮、東宮に対して言上すること。

これはお召しにならぬのですか　人が大勢見ている時は　透けた着物を
ぞこはたてまつらぬ。人多く見る時なむ、透きたるもの着たるはば
ご自分の手で着せてお
うぞくにおぼゆる。ただ今はあへはべなむ」とて、手づから着せた
あげになる
てまつりたまふ。御袴も昨日のおなじ紅なり。御髪の多さ、裾など
とても同じようには見えない
は劣りたまはねど、なほさまざまなるにや、似るべくもあらず。氷
女房たちに　［薫は］　［女宮に］さし上げなどなさるのもわれな
召して、人々に割らせたまふ。取りて一つたてまつりなどしたまふ
がらひそかにおもしろく思う
心のうちもをかし。絵に描きて、恋しき人見る人は、なくやはあり
ける、ましてこれは、なぐさめむに似げなからぬ御ほどぞかし、と
心ゆくまでお目にかかることができ　自分もご一緒し　このようにして
思へど、昨日かやうにて、われまじりゐ、心にまかせて見たてまつ
我知らず溜息が漏れてしまう　という思いがきざすと
らましかば、とおぼゆるに、心にもあらずうち嘆かれぬ。「一品の
お便りはさし上げていらっしゃいますか　（女二宮）宮中に
宮に、御文はたてまつりたまふや」と聞こえたまへば、「内裏にあ
帝がそう仰せられましたのでお便り申しましたが　もう長らくさし上げていません
りし時、上のさのたまひしかば聞こえしかど、久しくさもあらず」
とのたまふ。（薫）「ただ人にならせたまひにたりとて、かれよりも聞こ
えさせたまはぬにこそは、心憂かなれ。今、大宮の御前にて、恨み
（女二宮）何でお恨み申しましょう
きこえさせたまふ、と啓せむ」とのたまふ。「いかが恨みきこえむ。

一 下々の者になり下がったからといって、お見下げになっているらしい、と思いますので、(ご遠慮して)お便りをさし上げないのです、と申し上げましょう。いよいよ冗談めかして、女宮をそそのかす。

二 いつものように、匂宮もお出でになっていた。匂宮も「一品の宮の御方をなぐさめ所にしたまふ」(一四二頁)とあった。

翌朝、薫、明石の中宮方に参上　匂宮も参上

三 丁子染に濃く染めた薄物の単(の袿)を、濃い直衣の下にお召しになっているのは。丁子染は、丁子を濃く煎じた汁で染めたもの。黄色味を帯びた薄紅色。「こまやかなる直衣」は、濃い縹(薄い藍色)の直衣。いずれも夏の物。

四 やはり以前よりは面やつれしていらっしゃるのが。浮舟のことで物思いのあまりの病み上がり。

五 (匂宮が姉宮に)よく似ていらっしゃると見るにつけても、まず(女一の宮が)恋しく思われるのを。

六 何もなかった時よりは、つらい思いがする。なまじお姿を拝したために、一層せつない。

七 物語絵である。匂宮の持参したもの。

八 昔の御こと。父光源氏の思い出など。

九 女一の宮にさし上げた残りの絵。

一〇 私のところにおいでの皇女(女二の宮)が。宮中に対して、わが家を「里」という。

薫、中宮に女一の宮よりのお文を請う

いやですこと
うたて」とのたまへば、(薫)「下衆になりにたりとて、おぼしおとすなめり、と見れば、おどろかしきこえぬ、とこそは聞こえめ」とのたまふ。

(薫は)　一日中過して　翌朝　明石の中宮
その日は暮らして、またの朝に大宮に参りたまふ。例の、宮もおはしけり。丁子に深く染めたる薄物の単を、こまやかなる直衣に着たまへる、いとこのましげなり。女の御みなりのめでたかりしにも劣らず、白くきよらにて、なほありしよりは面痩せたまへる、いと見るかひあり。おぼえたまへりと見るにも、まづ恋しきを、いとあるまじきこと、としづむるぞ、ただなりしよりは苦しき。絵をいと多く持たせて参りたまへりける、女房して、あなたに参らせたまひて、われもわたらせたまひぬ。

大層よいお好みである　[先日の]姉宮のお姿の美しかったのにも劣らず　色白で匂うように美しく　とても　とんでも　と気持を抑えるのは　ないことだ　大層たくさん持たせて参上なさったのだが　一品の宮の御方にさし上げなさって　匂宮ご自身もそちらへおいでになった

(薫)[中宮のお前に]
大将も近く参り寄りたまひて、御八講の尊くはべりしこと、いにしへの御こと、すこし聞こえつつ、残りたる絵見たまふついでに、(薫)一〇「この里にものしたまふ皇女の、雲の上離れて、思ひ屈したまへる

ありがたく思われたこと　宮中を離れて　気をくさらせてお

一一 女一の宮の御もとから、お便りもございませんのを。

一二 かように臣下の妻になってしまわれたので、（女一の宮が）お見捨てあそばされたように思って。

一三 私がお下りを頂戴して持って帰りましたのでは、さほど張合いもございませんでしょう。女一の宮より直接賜りたい、という含み。

一四 宮中では、お近くでしたので、折にふれてお便りをさし上げていらしたようですが。女二の宮は藤壺に住んでいた（七巻宿木二四五頁注一四参照）。

一五 離れ離れにおなりになった時に。女二の宮が、薫の邸（三条の宮）に移られた時に。

一六 そちら（女二の宮方）からもどうしてお便りなさらないのです。

一七 あちら（女二の宮）からは、とてもそのようなことは。遠慮がある、と言う。

一八 こうして親しくお出入りできるご縁によって。薫と明石の中宮は、姉弟であるから、その繋がりで。

一九 まして仰せのように、いつもお文をさし上げていらしたというのに。

二〇 色めいた下心（女一の宮への恋心）があってのことか。

二一 先夜のお目あての人。「この心ざしの人」（一四六頁）とあった小宰相の君のこと。

二二 八講の折に一品の宮を隙見した西の渡殿。

薫、西の渡殿に行く

いでなのがおいたわしく存じられます
こそいとほしく見たまふれ。姫宮の御方より、御消息もはべらぬを、
かく品定まりたまへるにおぼし捨てさせたまへるやうに思ひて、心
の晴れぬ様子でばかりおりますので　こうした絵など　時々お見せになって下さいませ
ゆかぬけしきのみはべるを、かやうのもの、時々ものせさせたまは
なむ。なにがしがおろして持てまからむ、はた、見るかひもはべら
じかし」と聞こえたまへば、「あやしく、なでてか捨てきこえたま
はむ。内裏にては、近かりしにつけて、時々聞こえ通ひたまふめり
しを、所々になりたまひしをりに、とだえそめたまへるにこそあら
め。今そそのかしきこえむ。それよりもなどかは」と聞こえたまふ。
（中宮）おかしなこと　どうしてお見捨て申したりなさいましょう　（文通が）途絶えることになられたのでしょう　いずれおすすめ申しましょう
（薫）「かれよりはいかでかは。もとより数まへさせたまはざらむをも、
親しい者とはお考え下さらぬような人でも　思し召しの中に入れて下さいます
かく親しくてさぶらふべきゆかりに寄せて、おぼし数まへさせたま
はむこそ、うれしくははべるべけれ。ましてさも聞こえ馴れたまひ
けむを、今捨てさせたまはむは、からきことにはべり」と啓したま
今になってお見捨てになっては　うれしゅうございましょう　つらいことでございます
ふを、すきばみたるけしきあるか、とはおぼしかけざりけり。
［中宮のお前を］　［中宮は］　心慰めに見た
立ち出でて、一夜の心ざしの人に会はむ、ありし渡殿もなぐさめ

一 中宮のお前を通り過ぎて。南面の簀子を通って、寝殿西面（女一の宮の御座所）の方に行く。
二 御簾の中の中宮の女房たち。廂の間にいて、御簾越しに外を見ている体。
三 いかにもとても姿よくえもいえぬ物腰で。
四 西の渡殿のあたりは、右大臣家の君達などがいて、（女房と）何か話している様子なので。渡殿の簀子にいるのであろう。先日の下臈女房が、夕霧の子息なら、ここまで木戸御免だと想像したとおりの光景（一四七頁）。
五 （薫は）妻戸の前にお坐りになって。寝殿西南角の妻戸。西向きに開いている。廂の間の女房にものを言う体。
六 こちら（女一の宮）の方々のお目通りを頂くことがなかなかございませんので。
七 西の渡殿にいる夕霧の子息たち。薫の甥に当る。
八 不思義に優雅で、風情のあるこちら（女一の宮方）のご様子である。
九 あちら（中宮の御方）にお移りになっていた。寝殿の東面が、明石の中宮のご座所。
一〇 大将（薫）がそちらに参ったのですが。「どうしました」というほどの気持。
一一 （姫宮の）お供でご一緒に参った大納言の君。上臈の女房である。

中宮と大納言の君との語らい

に見むかし、とおぼして、御前をあゆみわたりて、西ざまにおはするを、御簾のうちの人は心ことに用意す。げにいと様よく限りなきもてなしにて、渡殿の方は、右の大殿の君たちなどゐて、もの言ふけはひすれば、妻戸の前にゐたまひて、「おほかたには参りながら、この御方の見参に入ることの難くはべれば、いとおぼえなく、翁びすっかり年寄りじみてしまった気がしますが果てにたるここちしはべるを、今よりは、と思ひおこしはべりてなむ。ありつかずと、若き人どもぞ思ふらむかし」と、甥の君たちの方を見やりたまふ。「今よりならはせたまふこそ、げに若くならせたまふならめ」など、はかなきことを言ふ人々のけはひも、あやしうみやびかに、をかしき御方のありさまにぞある。そのこととなけれど、世の中の物語などしつつ、しめやかに、例よりはゐたまへり。

姫宮は、あなたにわたらせたまひにけり。大宮、「大将のそなたに参りつるは」と問ひたまふ。御供に参りたる大納言の君、「小宰相の君に、もののたまはむとにこそははべめりつれ」と聞こゆれば、

（いものよ）（格別に心遣いをする）（西の方に）（似合わぬことだと）（あの若い連中は思っていることでしょう）（全くいつの間にか）（今日からは）（と気を取り直しまして参上しました）（（女房）これからお馴染みになられますとは）（ほんにお若返りになられたのでございましょう）（何ということもない冗談を言う女房たちの様子も）（別にこれといった話でもないが）（世間話などあれこれしては）（しんみりと）（いつもより長居していられる）（一品の宮）（中宮）（お会いになろうというお積りだったようでございます）

一三 あの堅物のお方が。

一三 血を分けたごきょうだいではあるが。

一四（薫は）ほかの女房よりはお気に召して、（小宰相の）局などにお立ち寄りになるようでございます。

一五 ありふれた世間並みの色恋の筋ではございませんのでは。

一六（小宰相は）匂宮に対しては、大層薄情なお方だと思って、お返事もさし上げないということでございます。前に「なぜか、さしもめづらしげなくはあらむと、心強くねたきさまなるを」（一四三頁）とあったのに照応する。

一七（匂宮の）本当に見苦しい（浮気な）お振舞を、（小宰相が）よくお見通しなのがおもしろいこと。

一八 どうかしてこんな悪いお癖を直してさし上げたいものです。

一九 宮様の二条の奥方様の妹君でございました。腹違いの方でしょう。「御」は「二条の北の方」につく。

二〇 常陸の前国守のなにがしの妻は。「なにがし」は実名を言ったのをぼかして書く。浮舟の母のこと。

大納言の君、浮舟入水のことを中宮にお話しする

二一 叔母とも母とも世間では言っているようですが、どちらでしょうか。下々のことは、巷間の噂にほの聞くだけ。

蜻蛉

（中宮）「まめ人の、さすがに人に心とどめて物語するこそ、ここちおくれたらむ人は苦しけれ。心のほども見ゆらむかし。小宰相などは、いとうしろやすし」とのたまひて、御兄弟なれど、この君をばなほづかしく、人も用意なくて見えざらなむ、とおぼいたり。「人よりは心寄せたまひて、局などに立ち寄りたまふべし。物語こまやかにしたまひて、夜ふけて出でなどしたまふをりをりもはべれど、例の目馴れたる筋にははべらぬにや。宮をこそ、いと情なくおはします、と思ひて、御いらへをだに聞こえずはべめれ。かたじけなきこと」と言ひて笑へば、宮も笑はせたまひて、「いと見苦しき御さまを、思ひ知るこそをかしけれ。いかでかかる御癖やめたてまつらむ。はづかしや、この人々も」とのたまふ。

（大納言）「いとあやしきことをこそ聞きはべりしか。この大将の亡くなしたまひてし人は、宮の御二条の北の方の御おとうとなりけり。異腹なるべし。常陸の前の守なにがしが妻は、叔母とも母とも言ひはべる

（それでもやはり人に思いを寄せて話し合うというのは）（気のきかない人だったら困りますね）（心根も見透かされることでしょう）（その点）（本当に安心です）（やはり気になさり）（女房たちも不用意に心対しないでほしい）（とお思いである）（大納言）（お話をしんみりとなさって）（夜がふけてからお帰りになることなども時々ございますが）（中宮）（苦笑なさって）（何と恐れ多いことで）（中宮）（けがならない）（あなたたちにも）（顔向）（大納言）（大層おかしな噂を耳にいたしました）（りました方は）

一 その女君（浮舟）に、何と宮様が、大層忍んでお通いなのでした。

二 警護の者を付けたりなどして、物々しく警戒なさったために。以下のこと、浮舟の巻末近くに詳しい。

三 （そのあと）急に姿を隠してしまいましたのを。

四 それほどの滅多とない事件なら、自然世間の噂にも上りそうなことですのに。やがて自分の耳にも入ってくるはずなのに、という気持。

五 このように宇治の八の宮一族が、短命だったことを、ひどく悲しがってお話しでしたが。大君といい、浮舟といい、若死すること。

六 いいえ。中宮の疑いを否定する語気。

七 下々の者は不確かなことも平気で口にしますから、と存じましたが。

八 あちら（宇治の邸）に仕えていました下童が。「下童」は、雑用に召し使う少女。

九 小宰相の実家にやって参りまして。「出でまうづ」は、宇治から京へ出て来たので、こう言う。

なるは、いかなるにか。一その女君に、宮こそ、いと忍びておはしましけれ。大将殿や聞きつけたまひたりけむ、にはかに迎へたまはむとて、二まもり添へなど、ことことしくしたまひけるほどに、宮も、いと忍びておはしましながら、え入らせたまはず、あやしきさまに、御馬ながら立たせたまひつつぞ、帰らせたまひける。女も、宮を思ひきこえさせけるにや、三はかに消え失せにけるを、身投げたるなめりとてこそ、乳母などやうの人どもは、泣きまどひはべりけれ」と聞こゆ。宮も、いとあさまし、とおぼして、「誰かさることは言ふとよ。いといとほしく心憂きことかな。四さばかりめづらかならむことは、おのづから聞こえありぬべきを、大将もさやうには言はで、世の中のはかなくいみじきこと、五かく宇治の宮の族の、命短かりけることをこそ、いみじく悲しと思ひてのたまひしか」とのたまふ。

「いさや、六下衆は、たしかならぬことをも言ひはべるものを、と思ひはべれど、七かしこにはべりける下童の、八ただこのころ、宰相が里

（浮舟を京に）
薫 お耳になさったのでしょうか
匂宮 お入りになることができず 見苦しいことに
ひどく身をやつしておいでになりながら
お馬に乗ってずっと外にお立ちになったままで
お帰りになりました
浮舟 お慕い申していたのでしょうか
川に身を投げたらしい
乳母などといった人たちは 泣き騒いでいましたとか
いといって
中宮 それは大変なこと
（中宮）誰がそのようなことを言うのです
本当に困った情けない話ですこと
人の世の無常で悲しいこと
（大納言）
薫 そんな話はしないで
ついさき頃

一〇 このように尋常でない有様で（浮舟が）お亡くなりになったことを。
一一 それで（中宮様には）詳しくはお耳に入れなかったのでございましょう。
一二 決してこのような話は、二度と人に話すなと（下童に）注意させなさい。
一三 こうしたことで（女性問題で）、匂宮ご自身も御身をあやまり。
一四 世間からも軽率で感心しない方ときっと思われなさることでしょう。
一五 このようにお便りを交わして、早くから（ご筆跡を）見ればよかった。
一六 芹川の大将の物語のとほ君が、女一の宮に恋する秋の夕暮に。「芹川の大将」は、物語の名。当時流行した散佚物語。「とほ君」（遠君か）は、主人公の貴公子の幼名と思われる。のちに大将に昇進するのであろう。「女一の宮」は女主人公。

女一の宮より女二の宮へお便り

一七 思い余って、（女一の宮のもとへ）通って行った場面の絵を、おもしろく描いてあるのを。
一八 本当に今の自分の気持にそっくりに思えることだ。相手は、同じく女一の宮だからである。以下、薫の思い。
一九 これほどまでに自分に靡いて下さる方があったなら。物語の女一の宮のように、現実の女一の宮も自分を思って下さるのだったら。

に出でまうできて、たしかなるやうにこそ言ひはべりけれ。（間違いないことのように言いましたのでございます）一〇かくあやしくて亡せたまへること、人に聞かせじ、（人に聞かせまい）おどろおどろしく、（人騒がせで）お（気味の悪い話だから）ぞきやうなり、とて、いみじく隠しけることどもとや。（というので）一一さてくはしくは聞かせたてまつらぬにやありけむ」と聞こゆれば、「（中宮）一二さらに、かかること、またまねぶな、と言はせよ。一三かかる筋に、御身をもてそこなひ、一四人に軽く心づきなきものに思はれたまふべきなめり」といみじくおぼいたり。（大層お心を痛めていらっしゃる）

そののち、（一品の宮）姫宮の御方より、二の宮に御消息ありけり。（ご筆跡）御手など（大層おかわいらしいのを見るにつけても）の、いみじくうつくしげなるを見るにも、（薫は）いとうれしく、一五かくてこそ、とく見るべかりけれ、とおぼす。あまたをかしき絵ども多く、（いろいろおもしろい絵をたくさん）大宮もたてまつらせたまへり。（薫）大将殿、（それ以上におもしろい物語絵をたくさん）うちまさりてをかしきども（中宮からもさし上げさせなさった）集めて、（揃えて）参らせたまふ。一六芹川の大将のとほ君の、女一の宮思ひかけたる秋の夕暮に、一七思ひわびて出でて行きたる画、をかしう描きたるを、一八いとよく思ひ寄せらるかし、一九かばかりおぼし靡く人のあらまし（一品宮に）献上なさる

一　荻の葉に露を結ばせる秋風も、夕暮はことさら身に沁みてわびしく思われる（叶わぬ恋の思いゆえに）。物語の主人公に託して詠んだ歌。

二　そんな様子がほんの少しでも漏れたら。以下、薫の心中に即した書き方。

三　こんなふうに、何かにつけてあれこれと、思い悩んだ挙句には。以下の地の文にもほとんど敬語はなく、薫の心中に即した書き方。

四　亡き人（大君）がご存生ならば、どんなことがあろうとも、ほかの女に心を移そうか。以下「わが心みだりたまひける橋姫かな」まで、薫の心中。

五　たとえ、当代の帝が姫宮を下さろうとも。

六　考えてみればやはり情けなく、わが心をお乱しなさった橋姫であることよ。「橋姫」は、宇治の縁で、大君のこと。

七　この方（中の君）のことをあれこれ思いあぐねた揚句、その次には。以下、地の文。

八　思いもよらぬ死に方をした人（浮舟）が、大層考えが浅くて、思い切ってさっさと命を絶った軽率さを認めがたく思いながらも。

かば、と思ふ身ぞくちをしき。

と思うわが身が残念でならない

（薫）荻の葉に露吹きむすぶ秋風も

ゆふべぞわきて身にはしみける

と書きても添へまほしくおぼせど、絵に書き添えたくもお思いになるが さやうなるつゆばかりのけしきにても漏りたらば、ひどく面倒なことになりそうな間柄だから いとわづらはしげなる世なれば、ほんの些細なことをも、えほのめかし出づまじ。匂わすわけにはゆくまい かくよろづに何やかやと、もの思ひの果ては、昔の人ものしたまはましかば、いかにもいかにもほかざまに心を分けましや、時の帝の御女を賜ふとも、頂戴しなかったであろう 得たてまつらざらまし、また、〔帝も〕それほどに思う人があるとご承知の上では さ思ふ人ありと聞こしめしながらは、こうしたご降嫁のこと かかることもなからましを、なほ心憂く、わが心みだりたまひける橋姫かな、と思もなかっただろうに ひあまりては、また宮の上にとりかかりて、中の君のことが思われて 恋しくも怨めしくも 恋しうもつらくも、わにもならないことが りなきことぞ、愚かしいまでにくやまれる をこがましきまでくやしき。これに思ひわびてのさしつぎには、あさましくて亡せにし人の、いと心幼く、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひながら、それでも大変なことになったと思 さすがにいみじとものの

九 自分（薫）の態度にただならぬものがあると、良心に責められて嘆き沈んでいたという様子をお聞きになったことも、思い出されては。浮舟亡きのち、宇治を訪れて、右近に実情を聞いた時のこと（一三一頁参照）。

一〇（本妻といった）重々しい扱いではなく。以下、「……世づかぬおこたりぞ」まで、「など」で受けられる薫の心中。

一一 あくせくなさらず、乱れた様子などお見せにならない方（薫）でも、こうした女の問題では。

一二 亡き人（浮舟）を偲ぶよすがとして。

一三 対の御方（中の君）お一人ぐらいは。

一四 幼い時からずっとご一緒にお育ちになったわけではない、つい近頃始まったお付合いなので、そう深く、どうしてお心にとめられよう。匂宮と同じ思いの話相手にはならない、という含み。中の君と浮舟は、ほんの二、三年前からの往き来であった。

一五 また、迎えにおやりになるのだった。侍従は、前にも匂宮に呼ばれている（一二五頁以下参照）。

一六 ほかの女房たちは皆散り散りにお暇を取って。

一七 この女房二人。侍従と右近。

匂宮、慰めに、侍従を中宮の女房に迎える

を思ひ入りけむほど、わがけしき例ならずと、心の鬼に嘆きしづみてゐたりけむありさまを聞きたまひしも、思ひ出でられつつ、重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたきかたらひ人にてあらせむ、と思ひしには、いとらうたかりし人を、思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ、女をも憂しと思はじ、ただわがありさまの世づかぬおこたりぞ、など、ながめ入りたまふ時々多かり。

二 心のどかに、さまよくおはする人だに、かかる筋には、身も苦しきことおのづからまじるを、宮はましてなぐさめかねたまひつつ、かの形見に、飽かぬ悲しさをものたまひ出づべき人さへなきを、対の御方ばかりこそは、「あはれ」などのたまへど、深くも見馴れたまはざりける、うちつけのむつびなれば、いと深くしも、いかでかはあらむ。また、おぼすままに、「恋しや、いみじや」などのたまはむには、かたはらいたければ、かしこにありし侍従をぞ、例の、迎へさせたまひける。皆人どもは行き散りて、乳母とこの人二人な

い詰めていたということや　ただ気のおけないかわいい思い者として置いておこう　本当にかわいい人だったのに　もう匂宮もお　いろいろ考えてくると　と思ったその点では　浮舟　情けない　恨み申すまい　要するに自分のやり方が世馴れぬためのしくじり　ぼんやり考え込んでいられる折々が多い　なのだ　時には苦しま　れることも自然とあるのに　お気持の晴らしようもなく　尽きぬ悲しさも打ち明けて話し合えるようなお相手もないのに　匂宮　気が咎めることでもあるので　宇治の邸に　お思い通りに　恋しい　それに［匂宮の］　たまらない　［中君に］おっ　しゃるのは　かわいそうに　かたみ　あ　たい　じゆう　めのと　ふたり　ふた　い　ぬ　ぬ　ぬ

一 侍従は、（浮舟とは）かかわりの薄いただの女房であるけれども、その後も（乳母や右近たちの）話相手として日を送っていたが。右近は乳母子である。

二 どこにもないような荒々しい宇治川の音も、そのうちうれしい折もあろうか、と頼みにしていた間こそ我慢していたが。浮舟の京移りなどもあろうかと、気を紛らわせてもいたが。「祈りつつ頼みぞわたる初瀬川うれしき瀬にも流れあふやと」（『古今六帖』二、川）

三 （浮舟亡き今は）ただもう情けなく忌わしく怖ろしいと思われるばかりなので。

四 私のところ（二条の院）に宮仕えせよ。

五 ほかの女房たちが何と言おうか、その口の端も、あのような（男女の）問題がからんでいるあたりでは、聞きづらいこともあろう、と思うので。中の君と浮舟が姉妹で、匂宮の愛を争う形になっていたことをさす。

六 明石の中宮方。

七 そう見苦しくない、まずまずの下臈の女房だ、ということで、ほかの女房たちも悪く言わない。「ゆるす」は、大目に見る、認める。

八 侍従が、御簾越しなどに、薫の姿を見かけるのである。

九 大家の姫君といった人たちばかりが。

一〇 やはり、昔お仕えした方（浮舟）ほど美しい人はいないものだ、といつも思って過している。

（浮舟が）特別目をかけて下さったことも忘れかねて

む、取り分きておぼしたりしも忘れがたくて、侍従はよそ人なれど、なほかたらひてあり経るに、世づかぬ川の音も、うれしき瀬もやある、と頼みしほどこそなぐさめけれ、心憂くいみじくもの恐ろしくのみおぼえて、京になむ、（京に出て来て）あやしき所に、（みすぼらしい家に）このころ来てゐたりける。（近頃移って来ていたのだった）

（匂宮は）捜し出しなさって尋ね出でたまひて、「かくてさぶらへ」とのたまへど、（宮のご配慮はありがたいが）御心はさるものにて、人々の言はむことも、さる筋のことまじりぬるあたりは、聞きにくきこともあらむ、と思へば、（侍従は）お引き受け申さず うけひききこえず、后の宮に参らむとなむおもむけたれば、（匂宮）「いとよかなり。（それはよかろう）さて人知れず（お仕えしたいと意向を申し出たので）おぼしつかはむ」とのたまはせけり。（その上で私が内々に目をかけてやろう）（侍従は）心細く頼るあてもない身もこれで慰もうかと思って）やとて、知るたよりもとめて参りぬ。（手づるを求めてご奉公に上がった）きたなげならでよろしき下臈なり、とゆるして、人もそしらず。大将殿も常に参りたまふを、見るたびごとに、（何もかもが悲しく思われる）もののみあはれなり。（中宮方は）いとやむごとなきものの姫君のみ、（大勢宮仕えに上がっている御殿だと世間でも言うが）多く参りつどひたる宮と人も言ふを、（侍従が）やうやう目とどめて見れど、なほ見たてまつりし人に似たるはなかりけり、と思ひありく。

（中宮方に）

（大層身分の高い）

（侍従が）だんだん注意してよく見るけれど

式部卿の宮の遺児宮の君、女一の宮方に出仕

この春亡せたまひぬる式部卿の宮の御女を、継母の北の方、ことにあひ思はで、兄の馬の頭にて人柄もことなることなき、心かけたるを、いとほしうなども思ひたらで、さるべきさまになむ契る、と聞こしめすたよりありて、「いとほしう、父宮のいみじくかしづきたまひける女君を、いたづらなるやうにもてなさむこと」などのたまはせければ、いと心細くのみ思ひ嘆きたまふありさまにて、「なつかしう、かく尋ねのたまはするを」など、御兄の侍従も言ひて、このころ迎へ取らせたまひてけり。姫宮の御具にて、いとことなからぬ御ほどの人なれば、やむごとなく心ことにてさぶらひたまふ。限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひきかけたまふぞ、いとあはれなりける。

匂宮、宮の君に懸想する

兵部卿の宮、この君ばかりや、恋しき人に思ひよそへつべきさまにしたらむ、父親王は兄弟ぞかし、など、例の御心は、人を恋ひたまふにつけても、人ゆかしき御癖やまで、いつしかと御心かけたまひ

一一 式部卿の宮薨去のこと、一一六頁参照。
一二 式部卿の宮の北の方。後添いであろう。
一三 (北の方の)兄弟の、馬の頭で人物も大したこともない男が。「馬の頭」は、左右馬寮の長官。従五位上相当。
一四 (姫君の婿としてそんな男は)お気の毒だとも思わないで、縁づけるように取り決めた。
一五 そのかいもない身の上にしてしまうとは。身分の低い男の妻にすることを不憫に思われるのである。
一六 ご兄弟の侍従。式部卿の宮の子息で姫君と同腹。「侍従」は、中務省に属し、帝の側近に侍してご用を勤める。従五位下相当。名門の子弟がなることが多い。
一七 女一の宮のお相手として、ちょうどよいお間柄の方なので。「こよなからぬ」は、たいして隔たりのない、の意。中宮と姫君は、いとこである。
一八 (とはいえ)決りのあることなので(女房として出仕したのだから)、宮の君など名付けて。召名(女房としての呼び名)が付く。
一九 裳くらいは。唐衣は略している体。主人の前では女房は裳、唐衣着用の正装が決りである。
二〇 宮の君の父式部卿の宮と浮舟の父八の宮は兄弟。(付録系図一参照)

一（そこまで身を落されることに）非難がましいことも言いたくなることだ。以下、薫の心中。
二（父宮ご在世中は）つい先日まで（宮の君を）東宮にさし上げようかなどお考えになり、自分（薫）にもそんなご様子をほのめかされたものだ。薫への申し出のこと、七巻東屋二八六頁に、浮舟の母の言葉として見える。
三（たとえ浮舟のように）水底に身を投げても、非難されることもないことだ。
四（宮の君に）ほかの人より好意を寄せておいでになる。身の上をあわれむ気持からである。
五（中宮が）六条の院にご滞在なさるのを。中宮御軽服で里下がりのこと、一四二頁注四参照。
六 遠くまで見渡されるたくさんの対の屋や、廊、渡殿に満ちあふれている。六条の院南の町の有様。女房たちが思い思いに局している様子。
七 夕霧右大臣。
八 亡き光源氏のご威勢にも劣らず、万事至らぬことなくお世話してさし上げなさる。
九 いつものご気性なら。浮舟のことでお嘆きでないならば。
一〇 この幾月かの間に、どんな浮気沙汰を何かと引き起していらっしゃったことだろうに、この上なく静まり返っていらっしゃって。悲しみのあまり病いづくほどだった名残。
一一 浮舟死後、今までに三カ月ほどたつ。

てけり。大将、一もどかしきまでもあるわざかな、昨日今日（二）といふばかり、春宮（三）にやなどおぼし、われにもけしきばませたまひきかし、（こんな思いもかけない零落ぶりを見るくらいなら）かくはかなき世のおとろへを見るには、三水の底に身をしづめても、もどかしからぬわざにこそ、など思ひつつ、四人よりは心寄せきこえたまへり。

五この院におはしますをば、内裏（宮中よりも広々として趣があり住み心地のよい御殿と思って）よりも広くおもしろく住みよきものにして、常にしもさぶらはぬ人どもも、（いつもは同候しない女房たちも）皆うちとけ住みつつ、六（一同くつろいでお仕えしていて）はるばると多かる対ども、廊、渡殿に満ちたり。七右の大殿、八昔の御けはひにも劣らず、すべて限りもなく営みつかうまつりたまふ。いかめしくなりにたる御族（ご一族なので）なれば、なかなかいにしへよりも、（かえって光源氏の昔よりも盛んになっている）今めかし（はなやかなことではまさっているほどなのであった）きことはまさりてさへなむありける。九この宮（匂宮）、例の御心ならば、一〇月ごろのほどに、いかなる好きごとどもをし出でたまはまし、（ご権勢）こよなくしづまりたまひて、人目には少しは（大人びてよくなられたか）生ひなほりしたまふか、（などと思われたのだが）見ゆるを、一一このころぞまた、宮の君に、本性（本性を発揮して）あらはれて、（お心を寄せて）かかづら

一三 明石の中宮は、宮中にご帰参あそばそうとすると。式部卿の宮の服喪（三カ月）も明けた趣。
一三（この御殿の）秋の盛りの、紅葉の頃などを見ませんでは。
一四 池のほとりの風情を楽しみ、月の光を賞でて、管絃の御遊びが絶えず催され、いつもよりはなやいだ様子なので。
一五 こうした音楽の催しには、格別に興を添えていらっしゃる。自分も演奏に加わる趣。
一六（匂宮は）明け暮れお目にかかっていても、なお今はじめて見つけた初花のような、目のさめるお美しさでいらっしゃるが。「初花」は、その季節に最初に咲く花（二巻賢木一八二頁、六巻竹河二〇八頁参照）。
一七 いつものように、（匂宮と薫の）お二方が参上なさっては。同様の例、一五〇頁にも見える。
一八 あの侍従。浮舟に仕えていた女房。
一九 どちらの方なりとも（浮舟が）ご一緒になられて、すばらしいご運のほども明らかなお身の上で、生きていて下さったならばよかったのに、あきれるほどあっけなく、情けないご料簡だったことよ。浮舟の入水を悔む、侍従のひそかな思い。
二〇 もうお一方。薫のこと。

匂宮、薫、中宮のお前に参上

（女房）二三 あちこちしていられるのだった
ひありきたまひける。
涼しくなったというので
涼しくなりぬとて、宮、内裏に参らせたまひなむとすれば、「秋の盛り、紅葉のころなどを見ざらむこそ」など、若い女房たちは残念がって若き人々はくちをしがりて、皆参りつどひたるころなり。水に馴れ月をめでて、御遊び絶えず、常よりも今めかしければ、この宮ぞ、匂宮かかる筋はいとことよなくもてはやしたまふ。朝夕に目馴れても、なほ今見む初花のさそう親しく奥向きまでお出入りなどはなさらぬ問柄なましたまへるに、大将の君は、いとさしも入り立ちなどしたまはぬのでほどにて、はづかしう心ゆるびなきものに、皆思ひたり。例の、二
[女房たちも]気のおけるうちとけにくいお方と
所参りたまひて、御前におはするほどに、かの侍従は、ものより
[中宮の]物陰からそっと拝見するにつけても
のぞきたてまつるに、いづかたにもいづかたにもよりて、めでたき御宿世見えたるさまにて、世にぞおはせましかし、あさましくはかなく、心憂かりける御心かな、など、人には、そのわたりのこと、
あの宇治での出来事は
一言でも知り顔に話すわけにもゆかぬことなので
かけて知り顔にも言はぬことなれば、心一つに飽かず胸いたく思ふ。
ひとり諦めきれぬ悲しみに胸が痛む
匂宮
宮は、内裏の御物語など、こまやかに聞こえさせたまへば、いま一
宮中での出来事など
こまごまと[中宮に]

一（薫に）見つけられ申すまい、しばらくの間は、（浮舟の）一周忌も待たないで薄情なことだ、と思われ申すまい。侍従の心中。

二（薫は）東の渡殿で、こちら（寝殿）の妻戸に向って開いている戸口の所に、女房たちが大勢いて、話などひっそりとしているところにお出でになって。寝殿の東の渡殿に女房の局がある趣。「戸口」は、東の渡殿の妻戸口。

三 私をこそ、あなた方は親しく思って下さるべきではないでしょうか。

四 それでもためになることを教えてもあげられそうです。女の知らないことを、教えてあげましょう。

五 弁のおもとと呼ぶ、物馴れた年輩の女房が。「おもと」は、女房の敬称。

六 そもそも親しくお思い申すべき訳もない人が、恥ずかしがらずに平気でお相手をいたしますのではないでしょうか。薫には、皆が心を寄せているので、気がひけて物が言えないのだ、と取りなす。

七（私は）必ずしもそうした訳のあるなしを見きわめて親しくお話しさせて頂くのではございませんが。

八 恥ずかしがる必要もない。恋の相手にならない。

九 唐衣は脱ぎすべらかして脇へ押しやり。うちくつろいだ体。

一〇 すさび書きをしていたのであろう。

薫、中宮の女房と語る

退出なさる

所は立ち出でたまふ。見つけられたてまつらじ、しばし、御果てをも過ぐさず心浅し、と見えたてまつらじ、と思へば、隠れぬ。

東の渡殿に、あきあひたる戸口に、人々あまたゐて、物語など忍びやかにする所におはして、「なにがしをぞ、女房はむつましくおぼすべきや。女だにかう心やすくはあらじかし。さすがにさるべからむこと、教へきこえぬべくもあり。やうやう見知りたまふべかめれば、いとなむうれしき」とのたまへば、いといらへにくくのみ思ふ。中に、弁のおもとて、馴れたる大人、「そもむつましく思ひきこゆべきゆゑなき人の、恥ぢきこえはべらぬや。ものはさこそはなかなかはべりけれ。かならずそのゆゑたづねて、うちとけ御覧ぜらるるにしもはべらねど、かばかりに面無くつくりそめてける身に負はざらむも、かたはらいたくてなむ」と聞こゆれば、「恥づべきゆゑあらじ、と思ひ定めたまひてけるこそくちをしけれ」など、のたまひつつ見れば、唐衣は脱ぎすべしおしやり、うちとけて手習

（薫）三

女でもこんなに気のおけぬ者はありますまい

四

だんだん私という者がお分りのようです

本当にうれしく思います

「女房たちは」どうぞ挨拶してよいやらと思う

五

六

ものごとはかえってそういったものでございましょう

七

厚かましさを身上といたします私

これほどまで

決めてかかっていられるのがまことに残念です

（薫）八

柄にもないことと存じまして

がしりごみいたしますのも

九

一〇

くつろいで

一一 硯筥の蓋に置いて、わずかな秋草の花の枝先を手折って、もてあそんで目を楽しませていたと見える。硯筥の蓋に置いた秋草を手習の歌に詠んでいた趣。

一二（女房の）半ばは、几帳が立ててある陰にそっと隠れ、ある者はふと背を向けて、開いている戸口の方に向わないようにしているそれぞれの髪格好も、美しいと（薫は）見渡しなさって。「頭つき」は、頭の形。

一三 女郎花の咲き乱れる野辺に立ち入っても―美しい方が大勢いられる所に参りましても、かりにも私が浮気だという評判をお立てになれましょうか。私は至極まじめな男なのです。「つゆの」に「露」を掛け、「女郎花」の縁語。「女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立つべき」（『古今集』巻四秋上、小野美材。『古今六帖』六、女郎花。『和漢朗詠集』巻上秋、女郎花、野美材）

一四 それなのにどなたも気楽には付き合って下さらないで。皆隠れたり、後ろを向いてしまったのを恨む。

一五 花といえば、名からして移ろいやすいようですが、女郎花はそこらの露にしどけなく靡いたりしましょうか。そう誰にでも靡きはしませぬ。

一六 ほんの少しだけれど。歌一首に過ぎないけれど。

一七 たった今、寝殿の方に参上しようとした途中、（薫が戸口にいるため）道をふさがれて動けずにいた者らしい、と見える。

一八 あまりにはっきりしたお年寄り臭いお言葉。女たちの中にいても、浮気はしないという薫の歌のこと。

しけるなるべし、硯の蓋にする。て、心もとなき花の末々折りて、もてあそびけりと見ゆ。かたへは几帳のあるにすべり隠れ、あるはうち背き、おしあけたる戸の方にまぎらはしつつゐたる頭つきどもも、をかしと見わたしたまひて、硯ひき寄せて、

（薫）「女郎花みだるる野辺にまじるとも
つゆのあだ名をわれにかけめや

心やすくはおぼさで」と、ただこの障子にうしろしたる人に見せたまへば、うちみじろきなどもせず、のどやかに、いととく、

（女房）花といへば名こそあだなれ女郎花
なべての露にみだれやはする

と書きたる手、ただかたそばなれど、よしづきて、おほかためやすければ、誰ならむ、と見たまふ。今参う上りける道に、ふたげられてとどこほりゐたるなるべし、と見ゆ。弁のおもとは、「いとけざやかなる翁言、憎くはべり」とて、

（筆跡）（誰だろう）（風情があって）（どこといって難がない）（憎らしく存じます）

一　やはりここにお泊りになって試してごらんなさいませ、女郎花の盛りの色―美しい女たちにお心が移るか移らないかを。

二　あなたの方で宿を貸して下さるなら、一晩は泊りましょう、大抵の花には心ひかれぬ私ですけれども。

三　何で、そんな見下したようなことを仰せになります。お宿などお貸しはいたしませぬ。

四　ただきまり文句の「野辺」の出過ぎたたわむれを申しただけのことでございます。前出の『古今集』の歌を念頭において言う。野辺に宿る、寝るというのは歌の常套文句。

五　気の毒なことをしました。道を開けましょう。先の女房（前頁注一七）に斟酌して言う。

六　とりわけ、先ほどの物恥じなさるには訳があるとのお話、きっとその訳がありそうな折のようですから。女房たちが薫に恥じて隠れたりするのを、誰かほかに気のおける方がおいでになるからだろう、と言いなす。暗に匂宮をさした言い方。

七　寝殿の東の簀子の高欄に寄りかかって。薫のさま。寝殿の東南の隅である。

八　秋草の花の咲き乱れるお庭先の草むらを。「ひもとく」は、衣服の紐を解いて共寝する意もある。

九　「大抵四時は心物べて苦なり　中に就いて　腸　断ゆるは是秋の天」（『白氏文集』巻十四「暮立」。『和漢朗詠集』巻上秋、秋興）。

薫、中宮の女房と語りつつ、中の君を思う

（弁）「旅寝してなほこころみよ女郎花
さかりの色にうつりうつらず
その上でお決め申すことにいたしましょう
さてのち定めきこえさせむ」と言へば、
（薫）宿貸さばひと夜は寝なむおほかたの
花にうつらぬ心なりとも
（弁）とあれば、「何か、はづかしめさせたまふ。おほかたの野辺のさかしらをこそ聞こえさすれ」と言ふ。はかなきことをただすこしのたまふも、人は残り聞かまほしくのみ思ひきこえたり。「心なし。道あけはべりなむよ。わきても、かの御もの恥ぢのゆゑ、かならずありぬべきをりにぞあめる」とて、立ち出でたまへば、おしなべてかく残りなからむ、と思ひやりたまふこそ心憂けれ、と思へる人もあり。

［薫が］何でもないたわむれをほんのひと言おっしゃっても　女房たちはその次は何とおっしゃるか伺いたく思うのであった　（薫）

誰もが皆この弁のように　あけすけなのだろう　とご想像なさるのでは　情けない　と思っている女房もある

東の高欄におしかかりて、夕影になるままに、花のひもとく御前の草むらを見わたしたまふ。もののみあはれなるに、「中につい

夕日のかげるにつれて

て腸たゆるは秋の天」といふことを、いと忍びやかに誦じつつゐたまへり。一〇ありつる衣の音なひ、しるきけはひして、母屋の御障子より通りて、あなたに入るなり。宮のあゆみおはして、「これよりあなたに参りつるは誰そ」と問ひたまへば、「かの御方の中将の君」と申し上げる声がする と聞こゆなり。一三なほあやしのわざや、誰にかと、かりそめにもうち思ふ人に、やがてかくゆかしげなく聞こゆる名ざしよと、いとほしく、この宮には、皆目馴れてのみおぼえたてまつるべかめるもくちをし。一五おりたちてあながちなる御もてなしに、女はさもこそ負けたてまつらめ、わがさもくちをしう、この御ゆかりには、ねたく心憂くのみあるかな、いかで、このわたりにも、めづらしからむ人の、例の心入れて騒ぎたまはむをかたらひ取りて、一七わが思ひしやうに、やすからずとだにも思はせたてまつらむ、まことに心ばせあらむ人は、わが方にぞ寄るべきや、一八されど難いものかな、人の心は、と思ふにつけて、一九対の御方の、かの御ありさまをば、ふさはしからぬも

大層低い声で　心を動かす男に　毒で　匂宮が歩いていらして　誰だろうかと　すぐさまこのようにあからさまに名前をお教え申すとはと　〔中将君が〕気の　この御殿の女房の中でも　ずば抜けた美人といった人で　〔匂宮が〕例によって熱心に騒いでいられるような女を口説き落して　〔匂宮に〕せめて心おだやかならぬこととも思わせ申したい　私の方に離くはずなのだ　本当に物の分った人だったならば

一〇さきほどの女房の衣摺れの音が、それと分る気配で、母屋の襖の所を通って、あちらに入って行くらしい。さきに薫と歌を交わした女房のこと。御前に参上する途中であった。「母屋の御障子」は、寝殿の東面と西面を分つ母屋の中仕切りの襖であろう。

一一ここからあちらに参ったのは誰か。匂宮は、寝殿東廂にいる趣。

一二姫宮（女一の宮）の御方の中将の君でございます。薫は御簾の外で聞く体。

一三なんと怪しからぬことよ。以下「……名ざしよ」まで、薫の心中。

一四（中宮方の女房は）誰もがお馴染みに存じ上げているらしいのも残念だ。薫の心中に即した書き方。

一五（匂宮の）行動的でひたむきなおあしらいに、女はかようにお離き申すのであろう。浮舟のことも念頭にあろう。以下、一三行目の「人の心は」まで、薫の心中。

一六自分はまことに残念なことに、このご一族の方には、くやしく情けない思いをするばかりだ。匂宮には後れを取り、女一の宮には思いの叶わぬことをいう。

一七自分が（匂宮のために）つらい思いをしたように。

一八けれどもめったにないものだ、そんな物の分った女は。

一九対の御方（中の君）が、匂宮の浮気なご行跡を、お気に召さずお思い申されて。以下、薫の心中に即して書く。

一（自分との）親しい付合いがまずいことになってゆく、そんな世間の思惑を、つらいと思いながら。
二 物思いにともすれば夜も目ざめて所在ないので。
三 この前垣間見た西の渡殿。（一四五頁参照）
四 あの時のことが癖のようになって、わざわざおいでになったのも、おかしなことだ。草子地。
五 姫宮（女一の宮）は、夜分はあちらにお渡りあそばしたので。母中宮のもとでお寝みになる。
六 十三絃の琴。
七 どうしてこう人を焦らすようにお弾きになるのですか。唐代の小説『遊仙窟』に、十娘が琴を弾くさまを叙して、「故々にして纖なる手を将て、時々に小き緒を弄す。耳に聞くにだも猶気の絶えぬべきものを、眼に見むときに、若為 怜らむ」とあるのにより、琴の音で気をもませるだけでなく、姿形を見せてほしい、の意。

薫、西の渡殿に行き、女一の宮の女房と語る

八 似ているような兄が、私にございましょうか。同じく『遊仙窟』に、侍女が十娘の容姿を説明するのに「容貌は舅に似たり、潘安仁之外甥なれば。気調は兄の如し、崔季珪之小妹なれば」とあるのによって答える。潘安仁、崔季珪ともに美男で有名。美男の兄もおりませんのに、と応ずる。
九 さきに歌を詠み交わした女房（一六三頁）。名前は先刻知った（一六五頁参照）。
一〇 私こそ（姫宮の）御母方の叔父ですよ。『遊仙窟』

のに思ひきこえて、いと便なきむつびになりゆく、おほかたのおぼえをば、苦しと思ひながら、なほさし放ちがたきものにおぼし知りたるぞ、ありがたくあはれなりける。さやうなる心ばせある人、こ（この）（そんな物の分った女性が）
こらのなかにあらむや、入りたちて深く見ねば知らぬぞかし、寝覚がちにつれづれなるを、すこしは好きもならはばや、など思ふに、
（親しく出入りしてよく見ないから自分は知らないのだ）（色ごとでもしてみようか）（思うけれども）

今はなほつきなし。
（今はやはりその気になれない）

三 例の西の渡殿を、四ありしにならひて、わざとおはしたるもあやし。
姫宮、夜はあなたにわたらせたまひければ、人々月見るとて、この渡殿にうちとけて物語するほどなりけり。箏の琴いとなつかしう弾きすさぶ爪音、をかしく聞こゆ。思ひかけぬに寄りおはして、「など、かくねたまし顔にかき鳴らしたまふ」とのたまふに、皆おどろかるべかめれど、すこしあげたる簾うちおろしなどもせず、起きあがりて、「似るべき兄やはべるべき」といらふる声、中将のおもととか言ひつるなりけり。「まろこそ御母方の叔父なれ」と、はか
（女房たちは）（くつろいでおしゃべりをしているところであった）（とてもうちとけて気ままに弾く）（しゃれた感じに）（〔薫が〕思いもかけずお近づきになって）（簾を急いで下ろしたりもせず）（背を起し）（応じる声は）（中将）（言った女房なのだった）（薫）
（〔私を〕やはりすげなくはできない者と分って下さっているのは）（世には稀なお方と胸にしみるのだった）（女房たちの中にいるだろうか）（誰もが意表を）（少し巻き上げてある）（つかれたはずなのだが）

の言葉を用いて、話題を女一の宮に移した。
一一（姫宮は）いつものように。
一二 どのようなことを、このお里下がりの間になさっておいでですか。「里住み」は、「内裏住み」に対して、自邸に住むこと。六条の院の滞在をいう。
一三 ただこんなふうにしてお過しのようでございます。音楽の演奏などをお楽しみになっていると言う。
一四（御簾の中から）さし出した和琴を、そのまま調子も直さずに掻き鳴らしなさる。「和琴」は、六絃の琴。わが国古来の楽器とされている。
一五 律旋音階。西洋音楽の短調に近い。呂（西洋音楽の長調に近い）が中国伝来の雅楽の調子であるのに対し、わが国伝来の俗楽の調子とされる。秋の調べ、また女の調べとされた。
一六 わが母宮（女三の宮）も（女一の宮に）負けをお取りになるご身分だろうか。以下「……心にくかりける所かな」まで、薫の心中。
一七（女一の宮は）后腹と申し上げるばかりの違いはあるが。女三の宮は女御腹。
一八 それぞれの父帝が慈しまれ大切にお世話なさった有様は違いはしなかったのに。朱雀院が女三の宮を、当帝が女一の宮をご鍾愛のほどに変りはないのに。
一九 明石の浦はいかにも奥ゆかしい所だ。明石の中宮ご一族の異数の幸いを思う。
二〇（女二の宮を頂いた）自分の運勢はまことに大したものなのだ。再び、薫の心中。

なきことをのたまひて、「例の、あなたにおはしますべかめりな。何わざをか、この御里住みのほどにせさせたまふ」など、あぢきなく問ひたまふ。「いづくにても、何ごとをかは。ただかやうにてこそは過ぐさせたまふめれ」と言ふに、をかしの御身のほどや、と思ふに、すずろなる嘆きの、うち忘れてしつるも、あやしと思ひ寄る人もこそ、とまぎらはしに、さし出でたる和琴を、たださながら掻き鳴らしたまふ。律の調べは、あやしくをりにあふと聞こゆる声なれば、聞きにくくもあらねど、弾き果てたまはぬを、なかなかなりと、心入れたる人は、消えかへり思ふ。わが母宮も劣りたまふべき人かは、后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ、帝々のおぼしかしづきたるさま、異事ならざりけるを、なほこの御あたりは、いとことなりけることあやしけれ、明石の浦は心にくかりける所かな、など思ひ続くることどもに、わが宿世は、いとやむごとなしかし、まして、並べて持ちたてまつらば、と思ふぞいと難きや。

（薫）あちらにおいでになるのでしょうね
聞かでものこれどとをおっしゃって
優雅にお暮しのお身の上だなとをお聞きになる
（中将）どちらにいらしてもく
別段これといって
及ばぬ身を嘆く溜息が
ついうっかり出てしまったのも
変だと気を回す人があってはいけない
ごまかすために
不思議にこの季節に合うと耳に聞える音なので
聞きにくくもないけれど
終りまでお弾きにならないのを
なまじ気がもめると
音楽を好む女房たちは
死ぬほど残念がる
やはりこの姫宮の御方は
格別高貴な感じがするのは不思議なことだ
思い続けるあれやこれやにつけて
その上
と思うのはとても
叶えられぬことだ
「女一宮を」並べて頂戴できたならば

一 式部卿の宮の姫君。（一五九～一六〇頁）

薫、宮の君を訪う

二 自分のお部屋を持っていた。

三 ああ、何とおいたわしい、この方（宮の君）もまた同じことだのに。同じく皇族の血筋で、父宮にかしずかれて育った。薫の思い。

四 故式部卿の宮が、ご生前私に好意をお寄せ下さったのだから。薫を婿にと申し込まれたことを言う。

五 女の童が、美しい宿直姿で。「宿直姿」は、夜、主人の側に侍する時のうちとけた姿。

六 こういうのが、世間並みの振舞なのだと思う。前に「簾うちおろしなどもせず」（一六六頁）とあった女一の宮方のことが念頭にあろう。

七 西の対の南廂の東の隅の間。「間」は柱と柱の間。

八 咳払いをなさると。来訪を告げる合図。

九 心から、「思ふ」と言う以外に自分の気持を表わす言葉はないものかと思われてなりません。「思ふて ふ言よりほかにまたもがな君ひとりをばわきてしのばむ」（『古今六帖』五、わきて思ふ）による。

一〇 亡き父宮がお望み申し上げていらっしゃったことなどが。薫を婿にと志していたこと。

一一 このように、折にふれてお噂頂いておりますらしいよそながらのお言葉をも、（宮の君は）お喜び申されているご様子でございます。

一二（取次ぎの女房の挨拶だけでは）世間並みの扱いのようで、失礼ではないか、とおもしろくないので。

宮の君は、この西の対にぞ御方したりける。（西の対では）若い女房たちが大勢いる様子で 若き人々のけはひあまたして、月めであへり。いであはれ、これもまたおなじ人ぞかし、と思ひ出できこえて、親王の、昔心寄せたまひしものを、と言ひなして、（西の対の方へ）そなたへおはしぬ。童の、をかしき宿直姿にて、二三人出でてありきなどしけり。（薫を）見つけて入るさまどももかかやかし。これぞ世の常と思ふ。南面の隅の間に寄りて、うち声づくりたまへば、すこしおとなびたる人出で来たり。（薫）「人知れぬ心寄せなど聞こえさせはべれば、なかなか、皆人聞こえさせふるしつらむことを、うひうひしきさまにて、まねぶやうになりはべり。まめやかになむ、言よりほかをもとめられはべる」とのたまへば、君にも言ひ伝へず、さかしだちて、「いと思ほしかけざりし御ありさまにつけても、故宮の思ひきこえさせたまへりしことなど、思うたまへ出でられてなむ。かくのみをりをり聞こえさせたまふなる御後言をも、よろこびきこえたまふめる」と言ふ。なみなみの人めきて、ここちなのさまや、

（御簾の外に）恥ずかしそうだ あちこちしたりしていた 西の対の方へ 年のいった女房が応対に出て来た 人知れず心をお寄せしていますなどと申し上げますと 誰もが申し上げ古したでありましょうことを 口実をつけて 少し 口真似するようなことになります 有様で 主人の宮の君にも伝えず 出しゃばって （女房）まことにお思いよりにもなりませんでした今のご境遇につけても 思い出されましてなりません

一三 もともと（私を）お見捨てになれない間柄ということはともかくとして。薫と宮の君はいとこ同士。
一四 （宮仕えに出られた）今はなおのこと。
一五 とても（お話しできません）。
一六 （件の女房は）いかにもと驚きあわてて。やっと気づいたさま。
一七 宮の君をゆさぶるようにして（直接のお返事を）促すらしくて。
一八 松も昔の、と知る人もないさびしさについ物思いに沈んでばかりいますにつけても。「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」（『古今集』巻十七雑上、藤原興風。『古今六帖』六、松。『和漢朗詠集』巻下、交友）を引く。
一九 ただ普通のこんな宮仕え人と思うのなら、（宮の君のお返事は）大層風情もあろうけれど。「かかる住処の人」は、こんな局住まいをする人。
二〇 この場合は、（親王の姫君ともあろう方が）どうしてこの程度にしろ、男に直接応答してもよいというふうにおなりになったのだろうかと。身分にふさわしくない軽率さを批判する。
二一 （しっかりした女性は）めったにいないものだ。
二二 この方（宮の君）こそは、この上なきご身分の父親王が大切にご養育あそばした姫君だが。以下、薫の心中。
二三 あんな修行僧のようなお方のもとで。八の宮のこと。式部卿の宮と比べていう。

薫、あらためて宇治の姫君たちを偲ぶ

ともの憂ければ、（薫）一三「もとよりおぼし捨つまじき筋よりも、一四今はまして、さるべきことにつけても、思ほし尋ねむなむうれしかるべき。（何かのご用につけても）（親しくお付合いして下さるならうれしく存じましょう）うとうとしう、人伝（ひとづて）などにてもてなさせたまはば、一五えこそ」とのたまふに、げに（一六）と思ひ騒ぎて、君をひきゆるがすべければ、「（宮君）一八松も昔の、とのみながめらるるにも、もとより、などのたまふ筋は、まめやかにたのもしうこそは」と、人伝（ひとづて）ともなく言ひなしたまへる声、いと若やかに愛敬づき、やさしきところ添ひたり。一九ただなべてのかかる住処の人と思はば、いとをかしかるべきを、二〇ただ今は、いかでかばかりも、人に声聞かすべきものとならひたまひけむと、なまうしろめたし。容貌（かたち）もいとなまめかしからむかしと、見まほしきけはひのしたるを、この人ぞ、また例の、この御心みだるべきつまなめる、とをかしくも、二一ありがたの世や、とも思ひゐたまへり。

（親しくお付合いして下さるならうれしく存じましょう）（取次ぎなどでおあしらいなさるのでは）（他人行儀に）（もとからの縁）（などと仰せ下さることは）（心から）（力強く存じられます）（愛らしく）（つつましやかな感じも具わっている）（直接話しかけるような言い方でおっしゃる声が）（何だか先）（顔立ちもさぞ美しいのであろうと）（逢ってみたい感じのす）（が心配に思われる）（この方が）（また例によって）（匂宮のお心をかき乱すことになりそうだ）（る人であるのを）（と興味深くも）

二二これこそは、限りなき人のかしづき生ほしたてたまへる姫君、またかばかりぞ多くはあるべき、あやしかりけることは、二三さる聖の御

（この程度のところが多くの人の姿だろう）（不思議に思われてならぬことは）

一（しかも）宇治の山あいに生い育った姫君たちが、難のある方はなかったことだ。大君と中の君のこと。

二 この、何と頼りない、考えの足りないことよなどと思わざるを得ない人も。浮舟のこと。「軽々し」は、身分にふさわしくないの意。

三 どういうわけか、みな悲しい結果に終ったご縁を。大君とは死別し、中の君は人のものにし、浮舟も行方知れずになったこと。

四 蜉蝣目の昆虫。形は蜻蛉に似て小さく、ひらひらと弱々しく飛ぶ。成虫になってからの生存期間が短いので、古来はかないものの喩えとされる。

五 そこにいるとは見ても手には取られず、やっと手にしたと思えば、また行方も知れず消えてしまった蜻蛉よ。巻名出所の歌。「ありと見て頼むぞかたきかげろふのいつとも知らぬ身とは知る知る」（『古今六帖』一、かげろふ）

六「たと（てもはかなきものは世の中のあるかなきかの身にこそありけれ」（出典未詳。『釈』以下古注に引く）。「世の中といひつるものはかげろふのあるかなきかのほどにぞありける」（『後撰集』巻十八雑四、題しらず、読人しらず）。歌から続いて、世の無常を嘆く気持から出た言葉。

七 いつものように、独り言につぶやいていらっしゃったとか。伝聞の形で語り手の存在を示す草子地。

あたりに、一山のふところより出で来たる人々の、かたほなるはなかりけるこそ、二この、はかなしや軽々しや、など思ひなす人も、かやうのうち見るけしきは、いみじくこそをかしかりしか、と何ごとにつけても、ただかの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける。三あやしくつらかりける契りどもを、つくづくと思ひ続けながめたまふ夕暮、四蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを、

（薫）五「ありと見て手にはとられず見ればまた

ゆくへもしらず消えし蜻蛉

六あるかなきかの」と、七例の、ひとりごちたまふとかや。

（このようにちょっと会った感じは）
（大層風情があったものだ）
（あの八の宮のご一族を）
（それからそれへと思い続けてうち沈んでいられる夕暮に）

手（て）習（ならひ）

その頃、横川の僧都という高徳の僧がいた。その母尼と妹尼の初瀬詣での帰途、母尼が発病し、僧都も下山して加持祈禱をし、一行は宇治の院に泊る。その院の裏庭の大木の根元に物の怪に気取られたとおぼしい意識不明の若い女性が見出だされ、そのまま母尼と妹尼の住む小野の山荘に伴われる。それは浮舟だった。四月五月と重態が続くが、妹尼のたっての願いで下山した僧都の加持によってようやく意識を取り戻す。

妹尼は、浮舟を、初瀬の観音から授かった亡き娘の身代りと喜ぶが、浮舟は出家の願いを口にするだけでかたくなに身許を明かそうとしない。ようやく秋、浮舟はわずかに手習にその鬱々とした心情を託すのみである。巻名はこれに基づく。妹尼の亡き娘の婿だった中将なる人物が、浮舟の姿を垣間見て心を動かすが、浮舟にはうとましく思われるばかりである。そして九月、妹尼の初瀬詣での留守中、一品の宮の物の怪加持のため途中立ち寄った僧都に懇願して、浮舟は出家を遂げ、ようやく心の安らぎを得た思いをする。朽木のように人に知られぬ生涯を送ろうとする彼女の決意は堅い。

年明けて春、浮舟は、妹尼の甥の紀伊の守が、薫のその後を語るのを聞き、頼まれて尼たちが自分の周忌法要の布施の女の装束を調進するのを見たりする。浮舟の消息は横川の僧都の口から明石の中宮の耳に入り、やがて薫にも知らされる。薫は思い悩みながらも、とにかく僧都に会って事情を確かめようとする。

年立の上では蜻蛉の巻に重なって、その翌年の夏までに至る巻である。

一 以下、物語の冒頭形式を踏む。橋姫、宿木の冒頭（六巻二五五頁、七巻一五一頁）に同じ形が見られる。
二 比叡山三塔の一つ。根本中堂の北約一里。中堂の楞厳院は慈覚大師円仁の開基。（図録一参照）
三 実名をあらわに言わない書き方。『河海抄』は恵心僧都源信のことかとする。

横川の僧都の母の尼、初瀬詣での帰途、病む

横川の恵心院に隠棲し、寛仁元年（一〇一七）六月十日寂、七十六歳。寛和元年（九八五）四月『往生要集』を著す。寛弘元年（一〇〇四）五月、権少僧都に任ぜられ、翌年十二月、辞退した。

四 昔懸けた願があってその願果しに。
五 大和の長谷寺（七巻宿木二五七頁注一八参照）。恵心僧都（大和の国葛城下郡の出身）は母が観音に祈請して得た子と伝えられる。『河海抄』『花鳥余情』はそれを長谷寺とするが、伝記は皆、高尾寺とする。
六 師僧の意。天台、真言宗で朝廷から賜る僧位。
七 仏像、経巻を寺に奉納する儀を執り行った。
八 東大寺の北から木津に通ずる奈良街道の、大和、山城の国境の山越え。
九 恵心僧都には、九年の山籠りの後、帰郷の途中、母尼からの使いに行き遭い、郷里で母尼の往生を看取った話（『今昔物語集』巻十五第三十五）、千日の山籠りの時、西坂本一乗寺降り松で妹の安養尼を蘇生させた話（『古事談』第三）がある。

僧都、下山して宇治に赴く

一そのころ、横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。四古き願ありて、初瀬に詣でたりけり。むつましくやむごとなく思ふ弟子の阿闍梨を添へて、仏経供養ずること行ひけり。事ども多くして帰る道に、奈良坂といふ山越えけるほどより、この尼君、ここちあしくしければ、かくては、いかでか残りの道をもおはし着かむ、ともて騒ぎて、宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるにとどめて、今日ばかりやすめたてまつるに、なほいたくわづらへば、横川に消息したり。山籠りの本意深く、今年は出でじと思ひけれど、限りのさまなる親の、道の空にて亡くやならむとおどろきて、急ぎものしたまへり。惜しむべくもあらぬ人のさまを、みづからも、弟子のなかにも

（僧都が）親しく思いまた重んじてもいる
母の尼君
色々の供養を多くして
身体の具合が悪くなったので
これでは
どうして残りの道中を続けてお帰りになれよう
大騒ぎして
もともと知合いだった
あたり
今日一日ほ
それでもひどく苦しそうなので
どお休ませ申したけれども
使いをやった
（山を）
（僧都は）
危ないという知らせの
素志深く
亡くなりでもしたらとひどく心配して
急いで宇治まで出向いて来られた
旅
今さら惜しむこともない母尼のお年だが
僧都自身も

験あるして加持し騒ぐを、家あるじ聞きて、「御嶽精進しはべるを、いたく老いたまへる人の、重くなやみたまふはいかが」とうしろめたげに思ひて言ひければ、さも言ふべきことと、いとほしく思ひて、いと狭くむつかしくもあれば、やうやう率てたてまつるべきに、中神ふたがりて、例住みたまふ所は忌むべかりけるを、故朱雀院の御領にて、宇治の院といひし所、このわたりならむ、と思ひ出でて、院守、僧都知りたまへりければ、一二日宿らむ、と言ひにやりたまへりければ、「初瀬になむ、昨日皆詣でにける」とて、いとあやしき宿守の翁を呼びて率て来たり。「おはしまさばはや。いたづらなる院の寝殿にこそはべるめれ。物詣の人は、常にぞ宿りたまふ」と言へば、「いとよかなり。公所なれど、人もなく心やすきを」と見せにやりたまふ。この翁、例もかく宿る人を見ならひたりければ、おろそかなるしつらひなどして来たり。

（主人）その家の主人
気づかわしそうな顔つきで
そうした苦情ももっともだと
気の毒に
むさくるしくもあるので
［母尼を］
ふさがっていて
泊りたい
［使を］
とても貧相な
（使）
連れて来た
（翁）
お越しでしたら今すぐにでも
誰も使っていな
（僧都）好都合なようだ
誰もいなくて気兼ねもいらぬから
検分に［使を］
一通りの部屋の支度などして
［使は］帰って来た

まづ僧都わたりたまふ。いといたく荒れて、恐ろしげなる所かな、

一 法力にすぐれた者に命じて、懸命に仏に念ずるのを。「加持」は、真言密教の祈禱。
二 吉野の金峰山に参詣する前に行う精進。千日と称されるが、実際は三七日、五十日、百日ほどだったようである。吉野の金剛蔵王菩薩は、弥勒菩薩出世の時地に敷く黄金を守護するとされた。
三 重い病気でいられるのはいかがなものでしょう。死なれでもすると精進のけがれになると迷惑がる。
四 陰陽道で説く天一神。（一巻帚木八一頁注一一参照）
五 尼君のいつも住んでおられる所は（その方角を）避けなければならなかったので。後文によるに比叡の西坂本、小野である（一八三頁）。
六 亡き朱雀院。この物語の朱雀院である（七巻宿木二四七頁注一六参照）。
七 史上の朱雀院が御幸した記録があり、実在した邸宅である。物語の朱雀院は史上の朱雀院と重なる書き方がされている（三巻絵合一〇七頁注一一、四巻梅枝二五九頁注一六参照）。
八 留守番の老人。
九 邸内中央の主要な建物。
一〇 京からの神社仏閣詣での人。たとえば初瀬詣でなど。（六巻椎本三〇五頁注四、三一三頁注七、七巻宿木二五七頁注一八参照）
一一 公領。「故朱雀院の御領」なのでこう言う。

僧都、宇治の院を検分
怪しい若い女性を発見

と見たまひて、（僧都）「大徳たち、経読め」などのたまふ。この初瀬に添付き
ひたりし阿闍梨と、同じやうなる、何ごとのあるにか、つきづきし（建物の）
きほどの下臈法師に、火ともさせて、人も寄らぬうしろの方に行きたり。森かと見ゆる木の下を、うとましげのわたりや、と見入れたるに、白きもののひろごりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と、立ちとまりて、火を明くなして見れば、もののゐたる姿なり。「狐の変化したる、憎し、見あらはさむ」とて、一人は今すこし歩み寄る。今一人は、「あな用な。よからぬものならむ」と言ひて、さやうのもの退くべき印をつくりつつ、さすがになほまもる。頭の髪あらば太りぬべきここちするに、この火ともしたる大徳、憚りもなく、奥なきさまにて、近く寄りてそのさまを見れば、髪は長くつやつやとして、大きなる木の根のいと荒々しきに寄りゐて、いみじく泣く。

（阿闍梨）「めづらしきことにもはべるかな。僧都の御坊に御覧ぜさせたてまつらばや」と言へば、「げにあやしきことなり」とて、一人はまう

添った　ってつけの　何か変ったことでもあるのか　こんな案内にうると　何か白いもののひろがっているのが目に入る　薄気味の悪いあたりだな　覗き込んでみ　何かが坐っている姿と見える　正体をあばいてやろう　もっと近く　たちのよくないものだろう　それでもなおじっと見つめる　ご検分いただいた方がよか　もたれ坐って　確かに奇怪なことだ　参上し

一二 僧の敬称。以下、弟子の僧たちに、荒れた邸宅に棲みついている魔性のものを退けるために経を読むことを命ずる。
一三 もう一人同じような弟子の僧とが。
一四 身分賤しい法師。
一五 古びた巨木やその周辺には魔性のものが棲みつくと信じられていた。次の頁に見える木霊など。
一六 狐が化けたのだ、小癪な。狐が人に化けることは古くから信じられていた。「変化」は、神仏や魔性のものが仮に人の姿を取って現れること。
一七 なんと、やめた方がよい。
一八 魔性のものの退散する印を結んで。「印」は、さまざまの呪（陀羅尼）に応ずる印相（手の指をさまざまに組み合せて仏の悟りや徳をあらわす）。
一九 頭を丸めた僧侶なので、こう言う。髪の毛の逆立つような恐怖感をいう。『今昔物語集』に「頭の毛太る」という表現がある。
二〇 前に「火を明くなして……一人は今すこし歩み寄る」とあった僧。前の「この初瀬に添ひたりし阿闍梨と、同じやうなる」とあった二人のうちの一人。
二一 恐れるふうもなく、気にも掛けぬ様子で。
二二 若い女性と見えるさま。

一 下働きの者たちは。一行隔てて「ゐしづまりなどしたるに」にかかる。
二 食事を調理する所など、必要ないろいろのことを。食事の調理その他の雑用を、の意。
三 そちらの方にかかりきりでひっそりしていたりするので。支度の物音など、こちらまでは聞えてこない趣。
四 一時（今の二時間）の意であろう。たとえば戌（午後八時前後）から亥（午後十時前後）の時になるまで、といった感じ。
五 人間か何ものか正体を見きわめよう。魔性のものは夜が明ければ、退散するか通力を失う。
六 仏、菩薩の秘密の語の意。翻訳せずに原音で唱える。ここは陀羅尼と同じ意。
七 はっきり感得するところがあるのだろうか。
八 死んだ人ではないのであろう。僧都は後にも「さやうの人（死者）の魂を、鬼の取りもて来たるにや」（一八二頁）と思っている。そうした仮象のものではあるまい、ということ。
九 どうしてそんな死人をこの院の中に捨てたりいたしましょう。いやしくも皇室の御領だから、という気持。死体の遺棄は下々ではむしろ普通のことだった。
一〇『和名抄』に「樹神」を「古多万」と訓む。
一一 死の穢れに触れる恐れのある所のようです。この人がこのまま死んだら困る、と言う。

で（て）で、かかることなむ（これこれしかじか）、と申す。「狐の人（僧都）に変化（へんぐわ）するは昔より聞けど、まだ見ぬものなり（まだ見たことのないものだ）」とて、わざと（わざわざ）下りておはす。

かのわたりたまはむとすることによりて、下衆（げーす）どもは、皆はかば（役に立つ）

かしきは、御厨子所（みづしどころ）など、あるべかしきことどもを、かかるわたり（こうした旅の宿泊先）

にはいそぐものなりければ、ゐしづまりなどしたるに、ただ四五人（三）

してここなるもの（この木の下のもの）を見るに、変ることもなし。あやしくて、時の移（四）

るまで見る。疾く（とく）夜も明け果てなむ、人か何ぞ、見あらはさむ、と（五）

心にさるべき真言（しんごん）を読み（唱え）、印（いん）を結んで（六）

ふらむ、「これは人なり。さらに非常（ひざう）のけしからぬものにあらず。（七）

寄りて問へ。亡（な）くなりたる人にはあらぬにこそあめれ。もし死にたる人を捨てたりけるが、よみがへりたるか」と言ふ。「何のさる人（僧たち）（九）

をか、この院のうちに捨てはべらむ。たとひまことに人なりとも、

狐木霊（きつねだま）やうのものの、あざむきて取りもて来たるにこそはべらめ。

いと不便（ふびん）にもはべりけるかな。穢（けが）らひあるべき所にこそはべめれ」

（あやしい様子も見えない）（不思議でならず）（明けきればよいのに）（心中しかるべき）（決して）（あやしいよからぬ魔性のものではない）（息を吹き返したのであろうか）（あるいは）（たぶらかして正気を失わせてここまで連れて来たのでしょう）（といった魔性のものが）（困ったことになったものです）

二 その声がこだまするのも。「山彦」は、山に棲む精霊のしわざと信じられていた。

三 烏帽子を上へずり上げて。阿弥陀にかぶったさま。（図録四参照）

一四 別に不思議がる者もおりません。以下、青表紙本の大島本、肖柏本には「見おどろかずはべりき。さてそのちごは死にやしにしと言へば、生きてはべり、狐は……」とある（別本の一部にもほぼ同文がある）。

一五 あちらの時ならぬ深夜のお食事の支度をしている所に、気を取られているのであろう。前頁に「御厨子所」とあった。

一六 前に「この火ともしたる大徳」（一七五頁）とあった僧。

一七 天下第一の法力あるお方。僧都のこと。

一八 大木の根もとなのでこう呼んだのであろう。

一九 昔話に伝える目も鼻もなかったという女鬼。のっぺらぼうの女怪の伝承は各地にある。『花鳥余情』に「朱の盤といふ絵物語あり。文殊楼の目なし鬼の事を書けり。山法師なるによりて聞きつけたる事を言へるなり」とあるのも同様の話か。文殊楼は叡山東塔、根本中堂の前に今もある。

と言ひて、ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるも、いと恐ろし。

［宿守は］だらしない姿で

あやしのさまに、額おしあげて出で来たり。（僧）「ここには、若き女などや住みたまふ。かかることなむある」とて見すれば、（宿守）「狐のつかまつるなり。この木のもとになむ、時々あやしきわざしはべる。

一昨年の秋も、ここにはべる人の子の、二つばかりにはべりしを、取りてまうで来たりしかども、見おどろかずはべり。狐は、さこそは人はおびやかせど、ことにもあらぬ奴」と言ふさま、いと馴れたり。かの夜深き参りものの所に、心を寄せたるなるべし。僧都、「さらば、さやうのもののしたるわざか。なほよく見よ」とて、この物懼せぬ法師を寄せたれば、（僧）「鬼か神か狐か木霊か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れたてまつらじ。名のりたまへ、名のりたまへ」と衣を取りて引けば、顔をひき入れていよいよ泣く。（僧）「いで、あなさがなの木霊の鬼や。まさに隠れなむや」と言ひつつ、顔を見むとするに、昔ありけむ目も鼻もなかりけむ女鬼に

先ほどの

このような妙なことがある

しますことです

この院に仕えています人の子で

正体を失わせてさらって来ましたけれども

不思議なしわざをいたします

そんなふうに人をこわがらせはしますが

別段のこともない

正体をお隠し申せまい

おいでであるからには

正体を隠しきれようものか

まあたちの悪い

何と

やあらむ、とむくつけきを、たのもしくいかきさまを人に見せむと思ひて、衣を引き脱がせむとすれば、うつ臥して声立つばかり泣く。

気味が悪いけれども　頼りがいのある威勢のいいところを　声を挙げるほどに

「何にまれ、かくあやしきこと、なべて世にあらじ」とて、見果てむと思ふに、雨いたく降りぬべし。

正体が何にせよ　普通に世間にあることではない　正体を見届けようと

（僧）「かくて置いたらば、死に果てはべりぬべし。垣の下にこそ出ださめ」と言ふ。僧都、「まことの人のかたちなり。その命絶えぬを見る見る捨てむこと、いみじきことなり。池におよぐ魚、山に鳴く鹿をだに、人にとらへられて死なむとするを見つつ、助けざらむは、いと悲しかるべし。人の命久しかるまじきものなれど、残りの命、一二日をも惜しまずはあるべからず。鬼にも神にも領ぜられ、人に逐はれ、人にはかりごたれても、これ横様の死にをすべきものにこそはあめれ、仏のかならず救ひたまふべき際なり。なほこころみに、しばし湯を飲ませなどして、助けこころみむ。つひに死なば、言ふ限りにあらず」とのたまひて、この大徳して抱き入れさせたまふを、

死んでしまいますでしょう　大変なことだ　人の命は長くはない定めのものであろうが　大切にしなくてはならぬものだ　薬湯

僧都、この女性を院の内に助け入れる

一　雨がひどくなりそうだ。その場の人々の予測の気持をそのまま地の文としたもの。浮舟失踪の翌日の母からの手紙に「今日は雨降りはべりぬべければ」（蜻蛉一〇二頁）とあり、その夜、匂宮からの使い時方が山荘に着いた時に「雨少し降りやみたれど」（同一〇四頁）、「雨のいみじかりつるまぎれに、母君もわたりたまへり」（同一〇八頁）とあった。

二　宇治の院の築地塀の外に捨てよう、と言う。死の穢れに触れることを恐れるのである。

三　仏者として、慈悲の心のあるべきことを説く。対句表現は何か典拠のあるべきことを思わせる。

四　鬼か神に正体を失わされたにせよ、誰かに追い出されたか、だまされたかにせよ。悪人とか継母の奸計といったことが想像される。

五　この人は、非業の死をとげなくてはならぬ定めのようだ。「横様の死に」は「横死」をやわらげた言い方。

六　（そういう者こそ）仏が必ずお救いになるはずの類いの人なのだ。

七 重病の母尼のこと。

八 きっと死の穢れに触れることになるのだ。

九 何か魔性のものの化身であるにもせよ。「変化」は、神仏や魔性のものが仮に人間の姿となったもの。

一〇 下々の者などは、ひどく大げさに、何でも口さがなく言い立てるものなので。

尼君、到着　妹尼、女性の介抱に手を尽す

一一 いや何、魔性のものに正気をなくされた人なのでしょう。軽くあしらってみせる語気。

一二 私がお寺で見た夢がありました。「寺」は長谷寺。次の妹尼の言葉によって、死んだ娘の身代りを授かるといった夢のお告げがあったことが分る。

弟子ども、「たいだいしきわざかな。（不都合なことをなさるものだ）いたくわづらひたまふ人の御（側近くに）あたりに、よからぬものを取り入れて、穢らひかならず出で来なむとす」と、（たちのよくないものを）（非難する者もいる）もどくもあり。また、「ものの変化にもあれ、（目の前に）目に見す見す、生ける人を、かかる雨にうち失はせむは、いみじきことなれば」など、（死なせるのは）（とてもひどいことだから）（思い思いに）心々に言ふ。下衆などは、いと騒がしく、ものをうたて言ひなすものなれば、人騒がしからぬ隠れの方になむ臥せたりける。（人目につかない）

御車寄せて下りたまふほど、いたく苦しがりたまふとて、（母尼が）ののしる。すこししづまりて、僧都、「ありつる人は、いかがなりぬる」と問ひたまふ。（弟子）「なよなよとしてものも言はず、息もしはべらず。何か、ものにけどられにける人にこそ」と言ふを、妹の尼君聞きたまひて、「何ごとぞ」と問ふ。（僧都）「しかしかのことをなむ、六十にあまる年、めづらかなるものを見たまへつる」とのたまふ。（妹尼）「おのが寺にて見し夢ありき。いかやうなる人ぞ。まづそ

（大騒ぎする）（さきほどの人は）（どうなったか）（正体もない有様で）（息）（年になって）（世にも珍しいものを見たものです）（これこれしかじかなのですが）（六十を越えた）（聞くなりすぐに）

のさま見む」と泣きてのたまふ。「ただこの東の遣戸になむはべる。はや御覧ぜよ」と言へば、急ぎ行きて見るに、人も寄りつかでぞ捨ておきたりける。いと若くうつくしげなる女の、白き綾の衣一かさね、紅の袴ぞ着たる。香はいみじくかうばしくて、あてなるけはひ限りなし。「ただ、わが恋ひ悲しむ娘の、帰りおはしたるなめり」とて、泣く泣く御達を出だして、抱き入れさす。いかなりつらむとも、ありさま見ぬ人は、恐ろしがらで抱き入れつ。生けるやうにもあらで、さすがに目をほのかに見あげたるに、「もののたまへや。いかなる人か、かくてはものしたまへる」と言へど、ものおぼえぬさまなり。湯とりて、手づからすくひ入れなどするに、ただ弱りに絶え入るやうなりければ、「なかなかいみじきわざかな」とて、「この人亡くなりぬべし。加持したまへ」と、験者の阿闍梨に言ふ。「されば こそ。あやしき御もののあつかひなり」とは言へど、神などの御ために経読みつつ祈る。

（僧都）すぐそこの　ひむがし　やりど　おります
かわいらしげな　をんな　しろ　あや　きぬひと
上品な　かを　はかま
（妹尼）
帰っておいでになったのであろう
なむめり　いだ　たち　ご
（妹尼）何かおっしゃい
それでも
こちらの言うことも
分らない様子だ　薬湯　自分で匙ですくって［口に］
息も絶えてしまうようだったので
（妹尼）
どんどん弱って
（阿闍梨）
いらぬお世話をお焼きなさるというものです

一　引き違えの板戸（七巻図録五「東屋二」参照）。遣戸の内側の板の間であろう。

二　表着をつけない袒姿の趣。「綾」は、打ち違えの斜線を織り出した絹織物。

三　衣裳に薫きしめた薫物のかおり。

四　重立った女房の称。妹尼づきの年輩の女房。

五　どんなふうだったとも、（大木の根もとで）見出だされた時の様子を知らない御達は。

六　どうした事情で、こんなことにおなりになったのです。身許や事情を知ろうとする。

七　なまじこれは大変な心配をしょいこみました。亡き娘の身代りと喜んでみたものの、この人の命を危ぶむ。

八　法力すぐれた（僧都の弟子の）阿闍梨。前にも「弟子のなかにも験あるして」（一七三頁）とあった。

九　言わないことではありませぬ。

一〇　神分といって、祈禱の前に『般若心経』を読む。悪鬼邪神を退け、善神の加護を願う趣旨。

一一 何もののしわざか、十分に調伏して聞きなさい。とりついた物の怪を憑坐に駆り移して正体を名乗らせよ、と言う。

一二 触れなくてもいい死の穢れのためにここに籠って、迷惑しなくてはならぬとは。いわゆる忌籠りで、人の死の場合、三十日間他出を憚る。旅の帰路のことと大変な迷惑である。

一三 そのまま亡骸をお捨てになるわけにもいきますまい。しかるべきとむらいが必要だろう、の意。

一四 まあ静かに。人に聞かれてはなりませぬ。面倒なことになったら困ります。身分の高い身寄りが現れたりして悶着が起っては困る、という気持。

一五 もうすっかりこちらに付ききりでいる。「うちつけ」は、唐突の意。態度を豹変させて、という感じ。

一六 今でも悲しくてならない人の身代りとして。前に「わが恋ひ悲しむ娘」とあった尼君の亡き娘。

僧都もさしのぞきて、「いかにぞ。何のしわざぞと、よく調じて問へ」とのたまへど、いと弱げに消えもていくやうなれば、「え生きはべらじ。すずろなる穢らひに籠りて、わづらふべきこと」「さすがにいとやむごとなき人にこそはべるめれ。見苦しきわざかな」と言ひあへり。

「あなかま。人に聞かすな。わづらはしきこともぞある」など口がためつつ、尼君は、親のわづらひたまふよりも、この人を生け果てて見まほしく惜しみて、うちつけに添ひゐたり。知らぬ人なれど、みめのこよなくをかしければ、いたづらになさじと、見る限りあつかひ騒ぎけり。さすがに時々目見あげなどしては、涙の尽きせず流るるを、「あな心憂や。いみじく悲しと思ふ人の代りに、仏の導きたまへると思ひきこゆるを、かひなくなりたまはば、なかなかなることをや思はむ。さるべき契りにてこそ、かく見たてまつるらめ。なほ、いささかもののたまへ」と言ひ続くれど、からうして、

一 見苦しい、生きていても仕方のない者なのです。

二 からだにあるいは不具のところでもあるのか。若い女のことなので気をまわす。「疵」は、欠陥の意。

三 人の心を乱そうとして姿を現わした何かの化身であろうか。「仮のもの」は、いわゆる変化。

四 奇妙ないきさつに心を痛める。身許の知れぬ意識不明の女までかかえ込んで、一喜一憂するといった感じ。

五 宇治近辺の下人などで、僧都にお仕えしていた者たちが。僧都は宇治に何か関わりがあると見える。宇治には、弘法大師開基の龍泉寺を恵心僧都が長和二年（一〇一三）に再興した恵心院がある。

六 蜻蛉一一一頁参照。浮舟失踪の翌日の夜のことであった。この日はその翌日。

七 そんな死人の魂を、鬼が取って持って来たのか。紀長谷雄が朱雀門の楼上で鬼と双六を打って勝ち、鬼から得た美女は、死人のよい所を取り集めたものだったという（『続教訓抄』『長谷雄双紙』）。

土地の下人、浮舟葬送の噂をする

（女）命を取り止めましても　人目につかぬように　宇治川に落し入れたまひてよ」と、あやしき不用の人なり。人に見せで、夜この声も絶え絶えに　（妹尼）たまに何かおっしゃるのを　まふをうれしと思ふに、何ということを　あないみじや。いかなればかくはのたまふどうしてそんなことをおっしゃるのです　何も言わなくぞ。いかにして、どんなわけで　さる所にはおはしつるぞ」と問へども、ものも言はずなりぬ。あのような所においでだったのです　なってしまった　身にもし疵などやあらむ、とて見れど、ここはと見ゆるところなくうつくしければ、愛くるしいので　〔妹尼は〕気も動転して　あさましく悲しく、まことに、人の心まどはさむとて出で来たる仮のものにや、と疑ふ。

二日ばかり籠りゐて、母尼と女　二人の人を祈り加持する声絶えず、あやしきことを思ひ騒ぐ。そのわたりの下衆などの、僧都につかまつりける、こうしてご滞在だそうだと聞いて　ご挨拶にやって来たりするのが　世間話　かくておはしますなりとて、とぶらひ出で来るも、物語などして言ふを聞けば、「故八の宮の御女、薫　右大将殿の通ひたまひし、お通いだった方が　格別のご病気ということでもなくて　急にお亡くなりになったというので騒ぎでございますとになやみたまふこともなくて、にはかにかくれたまへりとて騒ぎはべる。その御葬送の雑事どもつかうまつりはべるとて、雑用をおつとめいたしますために　昨日はえ参りはべらざりし」と言ふ。さやうの人の魂を、鬼の取りもて来た

参上できませんでした

るにや、と思ふにも、姿を目にしながらも現実にあるものとも思われずかつ見る見る、あるものともおぼえず、八あやふく恐ろし、とおぼす。人々、「昨夜見やられし火は、九しかことことしきけしきも見えざりしを」と言ふ。「ここから見えた（下衆）わざと簡素にして ことさらことそぎて、いかめしくもはべらざりし」と言ふ。盛大なものでもありませんでした 一〇穢らひたる人とて、立ちながら追ひ返しつ。「（人々）薫大将殿は、宮の御女持ちたまへりしは、一一亡せたまひて年ごろになりぬるものを、もう何年にもなっているのに 誰のことなのだろう誰を言ふにかあらむ。一二姫宮をおきたてまつりたまひて、よに異心おはせじ」など言ふ。

母尼君はどうやら持ち直された

尼君よろしくなりたまひぬ。一三方もあきぬれば、かくうたてある所に久しくおはせむも便なし、とて帰る。「この人は、なほいと弱げなり。道中もご無事でいらっしゃれるかしら 道のほどもいかがものしたまはむ。いと心苦しきこと」と言ひあへり。車二つして、老人乗りたまへるには、つかうまつる尼二人、次のにはこの人を臥せて、一四かたはらにいま人一人乗り添ひて、道すがら行きもやらず、車とめて湯参りなどしたまふ。比叡坂本に、一五小野といふ所にぞ住みたまひける。一六そこにおはし着くほど、いと遠

こんな気味の悪い所に
とても心配ですこと
母尼君
もう一人女房が
進みもはかどらず
薬湯をさし上げたりなさる
[尼君たち]は

一四 二台目の妹の尼君の車。次に「いま人一人」とあるのは、妹尼のほかにもう一人の意。
一五 比叡の山の麓。ここは高野川沿いの西坂本。
一六 修学院から北、大原にかけての一帯をいう。（図録一参照）

一八 消え失せてしまうのではないかと恐ろしく僧都はお思いになる。
一九 そのような大層な様子も見えなかったのに。火葬の火のようにも見えなかった、と言う。蜻蛉の巻に「この車を、むかひの山の前なる原にやりて、人も近くも寄せず、この案内知りたる法師の限りして焼かす。いとはかなくて、煙は果てぬ」（一一一頁）とあった。
二〇 死穢に触れた人だというので、庭先のままで早々に帰らせた。「立ちながら」は、上に上げないこと。
二一 大君のこと。亡くなったのは年立の上では四年前（通説、三年前）のこと。
二二 女二の宮をおさし措き申して、よもやほかの婦人に心をお移しになることなどあるまいに。
二三 方塞りも解けたので。前に「中神ふたがりて」（一七四頁）とあった。

一行、比叡坂本の小野に帰着

し。「中宿を設くべかりける」など言ひて、夜ふけておはし着きぬ。僧都は、親をあつかひ、娘の尼君は、この知らぬ人をはぐくみて、皆抱きおろしつつ休む。老の病のいつともなきが、苦しと思ひたまへし遠道の名残こそ、しばしわづらひたまひけれ、やうやうよろしくなりたまひにければ、僧都は上りたまひぬ。

母尼君の介抱をし　何とか回復に向われたので

かかる人なむ率て来たる、など、法師のあたりにはよからぬことなれば、見ざりし人にはまねばず。尼君も、皆口がためさせつつ、もし尋ね来る人もやある、と思ふも、静心なし。いかで、さる田舎人の住むあたりに、かかる人落ちあふれけむ、物詣などしたりけむ人の、ここちなどわづらひけむを、継母などやうの人の、たばかりて置かせたるにや、とぞ思ひ寄りける。「川に流してよ」と言ひし一言よりほかに、ものもさらにのたまはねば、いとおぼつかなく思ひて、いつしか人にもなしてみむ、と思ふに、つくづくとして起き上がる世もなく、いとあやしくのみものしたまへば、つひに生くま

こんな若い女性を　連れ戻った　事情を話さない　妹尼君　皆に口止めさせては　病気にでもなったであろうのを　考えてみるのだった　〔妹尼は〕一体どうしたことかと　何とか早く人並みの身体にしてやりたい　〔女は〕ぼんやりとした様子で起きあがることもついぞなく　まことに不思議な様子でずっといられるので　結局は命のない人な

一　途中に泊る所を用意しておくのだった。宇治から小野まで、二十四、五キロであろうか。普通なら一日の行程である。

二　大事に世話して。「はぐくむ」は、親が子を大事に育てる意。妹尼の気持が出ている。

三　母尼君は年老いていつも病がちのところへ、つらい思いをなさった長旅のあとのこととて、しばらくは具合がお悪かったが。「思ひたまへし」は底本以下「思給へし」。「思給ひし」とありたいところ。

四　横川にお帰りになった。前に見えるように山籠り中である。

若い女性、なお回復せず

五　法師の身辺のこととしてはかんばしからぬことなので。僧都のこと。

六　宇治の院での出来事を知らない僧たちには。

七　万一捜しに来る人でもあったら、と思うにつけても、気が休まらない。

八　以下、妹尼の推測。

九　こんな身分ありげな美しく若い女性がみじめな姿でいたのだろう。

一〇　宇治は、奈良や初瀬への交通の要衝である。

一一　継母などといった人が、うまく計らって捨て置かせたのだろうか。

一二　一八二頁参照。

一三　妹尼の心中を反映して、敬語になっている。

一四 妹尼は「おのが寺にて見し夢ありき」（一七九頁）と言った。その内容を、ここではじめて人々に明かすのである。

一五 前に「験者の阿闍梨」（一八〇頁）とあった。

一六 密教の修法で護摩を焚くこと。その火で一切の悪業を焼き滅ぼすという。「芥子」は、カラシナの種という。

一七 浮舟が入水を企てたのは、三月末のことであった。

六月に入り、妹尼の請いで、僧都下山

一八 どうか下山して下さいませ。以下、妹尼の手紙。

一九 寿命の尽きるはずのなかった人なのに、深く取り付いて正気を失わせた魔性のものが、立ち去らないのでしょう。

二〇 どうか、あなた様。懇願して呼び掛ける言葉。

二一 不思議なことがあればあるものだ。以下、僧都の思い。

二二 あの時（宇治の院で）そのままに捨てて置いたら……。大変な罪を犯すところだったろう、というほどの気持。

二三 命数が尽きたのだと思おう。「業」は、前世における善行悪行。ここは、現世におけるその応報。

ほっておくのもかわいそうでとても忍びない
じき人にや、と思ひながら、うち捨てむもいとほしくいみじ。一四夢語りもし出でて、一五はじめより祈らせし阿闍梨にも、忍びやかに一六芥子焼くことせさせたまふ。

ずっと続いてこうして介抱しているうちに
うちはへかくあつかふほどに、一七四五月も過ぎぬ。いとわびしくか

分らず効果もないのに困り果てて
ひなきことを思ひわびて、僧都の御もとに、

[妹尼は] どうしていいか
なほ下りたまへ。この人助けたまへ。さすがに今日までもあるは、

それでも今日までも生きているのは
一九死ぬまじかりける人を、憑きしみ領じたるものの、去らぬにこそあめれ。二〇あが仏、京に出でたまはばこそあらめ、ここまではあへなむ。

京にお出になるのならともかくも
ここまでなら構いませんでしょう

思い余った気持を
など、いみじきことを書き続けて、たてまつれたまへれば、二一いとあやしきことかな、かくまでもありける人の命を、二二やがてうち捨てましかば、さるべき契りありてこそは、われしも見つけけめ、こころみに助け果てむかし、それにとまらずは、二三業尽きにけりと思はむ、とて、下りたまへり。

手紙をさし上げなさったので
今までも生き永らえることのできた人の命を
しかるべき前世の因縁があったればこそ
私が見出だしたのであろう
最後まで助けてみよう
それでも命がないのなら

妹尼、僧都に病状を訴える

一 懸命に。不思議に衰えの見えない症状を僧都に訴えて、僧都の修法にすがろうとするいちずな気持を表わす。
二 女の寝ている部屋に顔を出して。
三 まことに世にもすぐれたこのお人のお顔かたちだ。「きやうざく」は「警策」。馬を打ち警めて早く走らせる策の意で、もと詩文にすぐれていること、転じて、すぐれて立派なこと。「ようめい」は「容面」。「い」は「ん」を表記したもの。
四 幸福をもたらす前世での善行。
五 あるいはそうか、と思い当られるような噂もありませぬか。
六 そもそも因縁あってこそ仏のお導きもあろうというものです。「それ」は漢文訓読語、文頭の発語。「縁」は、ここは「因縁」の意。ものごとの起る根本の原因。
七 因縁もなくてどうして（仏のお導きがあろう）。

僧都、周囲の反対を押して修法

八 以下、妹尼の思い。

〔妹尼は〕よろこび拝みて、月ごろのありさまを語る。「かく久しくわづらふ人は、むつかしきこと、おのづからあるべきを、いささかおとろへず、いときよげに、ねぢけたるところなくのみものしたまひて、限りと見えながらも、かくても生きたるわざなりけり」など、おほなおほな泣く泣くのたまへば、「見つけしより、めづらかなる人の様子だみありさまかな。いで」とて、さしのぞきて見たまひて、「げにいときやうざくなりける人の御ようめいかな。功徳の報いにこそ、かかる容貌にも生ひ出でたまひけめ、いかなる違ひめにて、かくそこなはれたまひけむ。もし、さにや、と聞きあはせらるることもなしや」と問ひたまふ。「さらに聞こゆることもなし。何か、初瀬の観音の賜へる人なり」とのたまへば、「何か、それ縁に従ひてこそ導きたまふらめ、種なきことはいかでか」などのたまひあやしがりて、修法はじめたり。

朝廷の召しにだに従はず、深く籠りたる山を出でたまひて、すず

〔妹尼〕
むさくるしい感じが
どうしても出てくるものですが
少しもやつれることなく
見苦しいところなど少しもなくていらして
とてもきれいで
もう駄目かと
こうして命だけでも永らえているわけなのでした
〔僧都〕
不思議千万なこのお人のご様子だ
〔僧都〕
どれ
四
功徳
五
ことにおなりだったのだろう
〔妹尼〕少しもそうした噂は聞きません
何か
六
〔僧都〕
おっしゃり不思議に思いながら
七
お呼び出しにも心ぜず

九 こんな行きずりの見も知らぬ若い女のために修法など大騒ぎをしておられると。

一〇 いや、あれこれ言うまい、御僧たち。「あなかま」は、発言を制止する語。「大徳」は、僧侶に対する敬称。

一一 戒律を破って恥じない法師。僧都の謙辞。

一二 「忌むこと」は、下に出る「戒」を和語にやわらげた言い方。法師として守るべき戒律。天台宗では、『梵網菩薩戒経』に説く「十重四十八軽戒」の五十八戒を円頓一乗戒とする。

一三 仏教の恥となりますことです。

一四 大層なさまざまの誓いをお立てになって。非常の決意を以って修法に当るのである。

一五 物の怪を憑坐に駆り移して。憑坐は、暗示にかかりやすい若い女性がこれにあてられる。

一六 その事情だけでも（憑坐の口を借りて）告白させたくて。今度は物の怪の駆り移された憑坐を責める。

一七 昔は、修行を積んだ僧なのだが。以下、物の怪が自身の素姓を告白する。『河海抄』に、染殿后（明子。文徳后、清和母）にとりついた天狗（紀僧正真済の後身）を相応和尚が調伏した話（『古事談』）、同じ后の病悩を加持した行者が鬼（紺青鬼）となって后を狂わせ犯した話（『今昔物語集』など）を挙げる。

物の怪の告白

ろにかかる人のためになむ行ひ騒ぎたまふと、（世間の噂が立っては）ものの聞こえあらむ、いと聞きにくかるべし、（意見して）とおぼし、弟子どもも言ひて、人に聞かせじと隠す。僧都、「一〇いであなかま、大徳たち。（一一）われ無慚の法師にて、（悪く）一二忌むことのなかに、破る戒は多からめど、女の筋につけて、（人の非言われたことなく）まだそしりとらず、（問違いを犯したことはない）あやまつことなし。齢六十にあまりて、今さらに人の（前世の約束ごとで致し方なかろう）難を受けるのもどき負はむは、さるべきにこそあらめ」とのたまへば、（弟子）口さがない連中が（物事を）ぬ人の、ものを便なく言ひなしはべる時には、（悪くとりなして噂いたします時には）仏法の聟となりはべることなり」と、（おもしろくないことと思って）心よからず思ひつつ言ふ。（僧都）「この修法のほどにしるし見えずは」と、一四いみじきことどもを誓ひたまひて、夜一夜加持（効き）したまへる暁に、一五人に駆り移して、何やうのものの、かく人をまどはしたるぞと、一六ありさまばかり言はせまほしくて、弟子の阿闍梨、（思い思いに）とりどりに加持したまふ。月ごろ、いささかもあらはれざりつるものの、（調伏されて）調ぜられて、「おのれは、ここまでまうで来て、かく調ぜ（祈禱に責められ申すような身の上でもない）られたてまつるべき身にもあらず。一七昔は行ひせし法師の、いささか

（めが現れないならば）

（どのような魔性のものが）

（こんな所まで推参して）

（こうして加持）

（この世にいさ）

（正体をあらわさなかった）

一 成仏できずにあちこちさまよっていたうちに。
二 身分高い美しい女がたくさん住んでいられた所に住みついて。宇治の八の宮の山荘である。
三 もう一人の方はとり殺したのだが。大君のこと。大君に物の怪のとりついていた形跡はない（七巻総角八三～一〇九頁）。この巻で、事情をこの物の怪の言うようなことに作りかえたのである。
四 浮舟。
五 私はもう死んでしまいたい。（浮舟八三頁参照）
六 初瀬の観音。
七 物の怪の取り憑いている人。憑坐。
八 当の本人（浮舟）の気分はさっぱりとして。物の怪の去ったさま。

浮舟、意識よみがえる　失踪前後の回想

九 住んでいた所も、自分がどういう名前の人だったかも、確かにはっきりとも覚えていない。
一〇 何とつらいことかと悲しい思いをいだいて。以下、失踪当夜のいきさつを浮舟自身の回想を借りて語る。

なる世に恨みをとどめて、漂ひありきしほどに、よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて、かたへは失ひてしに、この人は、心と世を恨みたまひて、われいかで死なむ、といふことを、夜昼のたまひしにたよりを得て、いと暗き夜、独りものしたまひしを取りてしなり。されど、観音とざまかうざまにはぐくみたまひければ、この僧都に負けたてまつりぬ。今はまかりなむ」とののしる。「かく言ふは何ぞ」と問へば、憑きたる人、ものはかなきけにや、はかばかしくも言はず。

正身のここちはさはやかに、いささかものおぼえて見まはしたれば、一人見し人の顔はなくて、皆、老法師、ゆがみおとろへたる者どものみ多かれば、知らぬ国に来にけるここちして、いと悲し。あれしに世のこと思ひ出づれど、住みけむ所、誰と言ひし人とだに、たしかにはかばかしくもおぼえず。ただ、われは限りとて身を投げし人ぞかし、いづこに来たるにか、とせめて思ひ出づれば、いとい

さかの恨みを残して死んで
自分か
手がかりをつかんで
あれこれと手を尽して大事にお守りなさったのでたのだ
横川のわがものにし
僧都
もう退散いたすとしよう
大声で言う
お前は何者か
名前を言わない
一人も知った人の顔はなくて
背の曲った老い衰えた者たちばかり
昔の
いくらか意識を取りもどして
しっかりした者でないせいか
はきはきとも
暮しのことを思い出そうとするけれど
自分はもう最期と思って
無理に
［それが］どこに来てしまったのか

一一 今までのこともこれから先のことも頭になくて。前後の分別もなくしたさま。

一二 部屋の中に引き返すのも中途半端な気持で。

一三 鬼でも何でもよいから私を食べて殺してほしい。鬼は人を食い殺すものとされていた。鬼が女を食い殺した話は『伊勢物語』六段、『今昔物語集』などに見える。

一四 自分を抱くような気がしたのを、宮と申し上げた方がなさるのだと思われた時から。浮舟の巻の橘の小島のくだりで、匂宮は、舟の乗りおりの時も、舟中でも浮舟を抱いていた（五二～五四頁）。「宮と聞こえし人」という言い方は、浮舟の記憶がまだ完全にもどっていないことを示す。

一五 とうとうこうして目的の入水も果さずにしまったことだ。

一六 宇治の院の樹下での様子に符合する（一七五頁）。

一七 前に「四五月も過ぎぬ」（一八五頁）とあった。

一八 どんなにか情けない様子を、見も知らぬ人に世話をされて見られたことだろう。若い女らしい恥じらい。

みじとものを思ひ嘆きて、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風はげしく、川波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、来し方行く末もおぼえで、簀子の端に足をさしおろしながら、行くべき方もまどはれて、帰り入らむも中空にて、心強くこの世に亡せなむと思ひ立ちしを、をこがましくて人に見つけられむよりは、鬼も何も食ひて失ひてよ、と言ひつつ、つくづくとゐたりしを、いときよげなる男の寄り来て、「いざたまへ、おのがもとへ」と言ひて、抱くここちのせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより、ここちまどひにけるなめり、知らぬ所にすゑ置きて、この男消え失せぬ、と見しを、つひにかく本意のこともせずなりぬる、と思ひつついみじう泣く、と思ひしほどに、そののちのことは絶えて、いかにもいかにもおぼえず、人の言ふを聞けば、多くの日ごろも経にけり、いかに憂きさまを、知らぬ人にあつかはれ見えつらむ、とはづかしく、つひにかくて生き返りぬるか、と思ふもくち

開けて
ひとりぼっちで
下におろしたまま
一二 どっちに行っていいのかも分らず
せっかく決心して
一三 みっともない様子で
じっと思いつめて坐っていた
きれいな
一四 のを
さあいらっしゃい
私の所へ
わけが分らなくなってしまったのだろう
坐らせておいて
と見たのだが
一五 思っていたうちに
一六 全然
一体どうなったことやら記憶もない
一七 身もすくむ思いで
思うにつけても

浮舟、ようやく回復、出家を望み、五戒を受ける

一 どうしたわけで、こんなにはかばかしからぬ様子でばかりいらっしゃるのか。食事を摂ろうともせず回復のきざしもないのを悲しむ。

二 このままにして置くに忍びない美しいご様子顔かたちを見ているので。

三 (浮舟は)内心では、やはりどうかして死にたい、と思い続けなさるけれども。

四 なかなか芯が強くて、ようやく枕から頭を持ち上げるほどにおなりなので。回復のさま。

五 かえって顔がほっそりとなってゆく。回復期の病人の様子がよく写されている。

六 それで(尼になった功徳で)どうにか生きられるかもしれません。

七 頭の頂の髪だけを少し切り(五巻若菜下二二二頁参照)。正式の尼は髪を肩を過ぎるあたりまでに切る。

八 在家の信者の守るべき戒。殺生、偸盗、邪淫、妄語、飲酒。

残念なので とてもつらい気がして をしければ、いみじくおぼえて、なかなか沈みたまへりつる日ごろは、うつし心もなきさまにて、ものいささか参るをりもありつるを、つゆばかりの湯をだに参らず。

かえって重くわずらっていらっしゃった今までは 正体もないような様子で 食事を何か少しは召し上がる時もあったのだが ほんのわずかの薬湯さえも召し上がらない

(妹尼)「いかなれば、かくたのもしげなくのみはおはするぞ。うちはへぬるみなどしたまへることはさめたまひて、さはやかに見えたまへれば、うれしく思ひきこゆるを」と、泣く泣く、たゆむをりなく添ひねてあつかひきこえたまふ。ある人々も、あたらしき御さま容貌を見れば、心を尽くしてぞ惜しみまもりける。心には、なほいかで死なむ、とぞ思ひわたりたまへど、さばかりにて生きとまりたる人の命なれば、いと執念くて、やうやう頭もたげたまへば、もの参りなどしたまふにぞ、なかなか面痩せもていく。いつしかとうれしく思ひきこゆるに、(浮舟)「尼になしたまひてよ。さてのみなむ生くやうもあるべき」とのたまへば、(妹尼)「いとほしげなる御さまを、いかでかさはなしたてまつらむ」とて、ただ頂ばかりをそぎ、五戒ばかりを受け

ずっと続いて熱がおありだったりしたことは さっぱりなさったようにお見えなので うれしくお思い申し上げていますのに 心を許す時とてなく付ききりで介抱申し上げなさる お付きの人々も 一所懸命に何とか回復させようと看護するのだった あれほどの重態でありながら命を取り止めたほどの命なので 食事を召し上がったりなさるうちに 〔妹尼は〕早くよくなればと どうして尼になどしてさし上げられましょう もったいないほどのご器量ですのに

させたてまつる。心もとなけれど、もとよりおれおれしき人の心にて、えさかしく強ひてものたまはず。僧都は、「今はかばかりにて、いたはりやめたてまつりたまへ」と言ひおきて、上りたまひぬ。

元来がはきはきしたところのない性格の人なので
今はこのくらいにしておいて
〔横川に〕

夢のやうなる人を見たてまつるかな、と尼君はよろこびて、せめて起こしすゑつつ、御髪手づからけづりたまふ。さばかりあさましく、ひき結ひてうちやりたりつれど、いたくも乱れず、解き果てたれば、つやつやとけうらなり。一年たらぬつくも髪多かる所にて、目もあやに、いみじき天人の天降れるを見たらむやうに思ふも、あやふきここちすれど、「などかいと心憂く、かばかりいみじく思ひきこゆるに、御心を立てては見えたまふ。いづくに誰と聞こえし人の、さる所にはいかでおはせしぞ」と、せめて問ふを、いとはづかしと思ひて、「あやしかりしほどに、皆忘れたるにやあらむ、ありけむさまなどもさらにおぼえはべらず。ただほのかに思ひ出づることとては、ただいかでこの世にあらじと思ひつつ、夕暮ごとに端近

思いもかけぬ人をお世話することになったものだ
妹尼君
櫛をお入れになる
ひどくもつれてもいず
すき終ってみ
すばらしい
まぶしいほどで
(妹尼)
正体もなくていましたうちに
誰と申し上げた方
上げていますのに
どこで
これほどまでに心からご心配申し
あのような所にどんなわけでおいでしたのか
とても気のひけること
以前ど
うしていたかということなども全然おぼえておりません
どうしてもこの世に生きていたくないと思いながら

一九一

九（浮舟は）これでは何か気がすまないけれども。
一〇 さしでがましく無理にも（正式の出家を）お願いにもなれない。
一一 よく介抱して病気をなおしてさし上げなさい。妹尼への言葉。「やむ」は、病気をなおす意。
一二 あれほどひどい状態で、（髪を）引き結んで枕上に投げ出してあったのだが。

浮舟、素姓を明かさず

就寝の時や病気で臥床の時、髪は結んで枕上に置く。（二巻葵八五頁注一一参照）
一三 つやつやとしてみごとな髪だ。「けうら」は、正しくは「きよら」、その発音のままの表記。
一四 みすぼらしい年老いた女ばかり住む所なので。「百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ」（『伊勢物語』六十三段）による。「つくも髪」は、つくも（江浦草）という水草に似た短く乱れた老女の髪。もと「つゝも髪」で、百から一画除くと白になるので白髪の意とする説もある（「つゝ」はわずかに足りぬ意）。
一五 いついなくなるか心配なほどだが。天人ならば、いつ昇天するか分らない。『竹取物語』など。
一六 どうして、何とも情けないことに。「御心を立てては見えたまふ」にかかる。
一七 かたくなに何もおっしゃっては下さらないのです。

くてながめしほどに、前近く大きなる木のありし下より、人の出で来て、率て行くこちなむせし。それよりほかのことは、われながら、誰ともえ思ひ出でられはべらず」と、いとらうたげに言ひなして、「世の中になほありけりと、いかで人に知られじ。聞きつくる人もあらば、いといみじくこそ」とて泣いたまふ。あまり問ふをば、苦しとおぼしたれば、え問はず。かくや姫を見つけたりけむ竹取の翁よりも、めづらしきここちするに、いかなるものの隙に消え失せむとすらむと、静心なくぞおぼしける。

ぼんやりしていましたら
[私を]
連れて行く気がしました
自分が誰とも思い出すことができません
(浮舟)
[私のことを]
それこそ大変です
つらいとお思いのようなので

[妹尼は]
落着かない気持だった

五 この主人もあてなる人なりけり。女の尼君は、上達部の北の方にてありけるが、その人亡くなりたまひてのち、女ただ一人をいみじくかしづきて、よき君達を婿にして思ひあつかひけるを、その女の亡くなりにければ、心憂し、いみじ、と思ひ入りて、かたちをも変へ、かかる山里には住みはじめたるなりけり。世とともに恋ひわたる人の形見にも思ひよそへつべからむ人をだに見出でてしがなと、

身分のある人なのだった
妹尼君
六
夫の上達部
とても大
切に世話をして
大事にして面倒を見ていたのが
情けない
悲しい
思い詰めて
髪もおろして尼にな
り
いつまでも恋しく思い続ける
亡き娘の
形見とも思うことのできる人でもせめて見つけ出したいものと

母尼
横川僧都
妹尼
中将
(女)
(上達部)

一 いかにも無邪気そうな口ぶりで言って。記憶がはっきりしないという嘘を見破られまいとする用意。

二 この世にまだ生きていたのだと、どうしても人に知られたくありません。このあたりでは、浮舟の記憶は完全に戻っていると見える。

三 ここで、この巻冒頭からの設定が『竹取物語』の型を踏まえることが明らかにされる。横川の僧都が竹取の翁、妹尼が「妻の女」に当る。

四 どうかして目を離した隙にでも消え失せてしまうのではないかと。

尼君たちの素姓

五 母尼君。

六 公卿。官は参議以上、位は三位以上。当時の上流階級である。後の僧都の言葉に「故衛門の督」（二三五頁）と見える。

七 身分ある良家の子弟。後に「中将」（一九六頁）と見える。

秋の小野の山里の風情、山荘の日常

八 以前住んでいた宇治の山里。以下、浮舟の目と心に映じた山荘の風情。
九 高野川の瀬音である。
一〇 庭先の草木の植え込み。
一一 門前や家の近くの田。歌語。
一二 山荘の下働きの女たちであろう。「歌」は稲刈り歌。
一三 鳴子。（六巻夕霧五九頁注一五参照）
一四 昔暮した東国のこと。常陸でのこと。
一五 夕霧の巻で亡くなったので、こう呼んだもの。落葉の宮の母、一条の御息所。（六巻夕霧一二頁注三、四参照）
一六 山に作りかけたような家なので。山深くの家であることを形容したもの。
一七 七絃の琴。妹尼の古風な教養をしのばせる。（五巻若菜下一八一頁注一二参照）
一八 妹尼に仕える尼女房の一人。

所在ない暮しも心細いのでせつなく願っていたところ
つれづれも心細きままに思ひ嘆きけるを、こんな思いがけない人で かくおぼえぬ人の、容貌
立ちまさっているほどの人を手に入れたので 現実のこととも思われず
けはひもまさりざまなるを得たれば、うつつのこととも思われず、
不思議な気はしながらも 〔妹尼は〕 年取ってはいるが とてもこざっ
あやしきここちしながら、うれしと思ふ。ねびにたれど、いときよ
ぱりと風情のある人で 物腰にもどことなく品がある
げによしありて、ありさまもあてはかなり。

昔の山里よりは、水の音もなごやかなり。家の造りも 造りざま、立派な山荘で ゆゑある所
の、木立おもしろく、枝ぶりよく 前栽などもをかしく、風情があって ゆゑを尽くしたり。秋
十分に手が掛けてある
になりゆけば、空のけはひあはれなるを、門田の稲刈るとて、所に 田舎は
田舎なりのまねごとをしては
つけたるものまねびしつつ、若き女どもは歌うたひ興じあへり。引
板ひき鳴らす音もをかし。見し東路のことなども思ひ出でられて、
もう少し奥にはいって
かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは、今すこし入りて、山に
所在なく
片かけたる家なれば、松蔭しげく、風の音もいと心細きに、つれづ
いつということもなくもの静かだ
れに行ひをのみしつつ、いつともなくしめやかなり。尼君ぞ、月な
勤行 妹尼
ど明き夜は、琴など弾きたまふ。少将の尼君などいふ人は、琵琶弾
合奏する（妹尼） こんなことはなさいますか
きなどしつつ遊ぶ。「かかるわざはしたまふや。つれづれなるに」
所在ない暮しですのに

浮舟の回想、述懐

一 昔も、おかしな育ち方をした身の上で。継父のもとで、陸奥や常陸の田舎で生い育ったことをいう。以下、浮舟の心事。

二 手すさびに。「手習」は、古歌や自作の歌に思いを託して手すさびに書き付けること。この巻には、以下にこれを含めてこの語五例見え、巻名の出所。浮舟は、古系図で「手習の三の君」、古注で「手習の君」とも呼ばれている。

三 悲しみのあまり身を投げた涙川の早瀬を、柵をかけて誰が救ってくれたのでしょう。「涙の川」（また「涙川」とも）は、涙を多く流すことをいう歌語。「しがらみ」は、川の中に杭を打ち柴などで流れを堰き止めるもの。「流れゆく我は水屑となり果てぬ君しがらみとなりてとどめよ」（『大鏡』時平伝、道真）

四 前に「秋になりゆけば」とあった。

五 妹尼たちは、しゃれた気分で歌を詠んだり。これも彼女たちの昔の生活の名残。

六 私がこうして情けないこの世に生き永らえているということも、都で誰が知りましょう。「月の都」は、月世界の都の意であるが、月をながめての歌なので、単に都の意に言う。「めぐる」は「月」の縁語。

など言ふ。昔も、あやしかりける身にて、心のどかに、音楽といった芸さやうのことすべきほどもなかりしかば、事を習えるような余裕もなかったので いささかをかしきさまならずも生ひ育ってしまったことだと 出でにけるかなと、こんな年老いた尼君たちが かくさだ過ぎにける人の、にはそれにつけても昔を思い出す心をやるめるをりをりにつけては思ひ出づ。ほんのわずかなたしなみを身につけることもなく生い なほあさましくものはかなかりけると、われながらくちをしければ、情けない思いなので 手習に、

（浮舟）三 身を投げし涙の川のはやき瀬を

しがらみかけてたれかとどめし

思ひのほかに心憂ければ、思いもかけず助けられて情けないので 行く末もうしろめたく、これから先もどうなることかと うとましきまで持で思いやられる 思ひやらる。

四 月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、気散じをしているらしい折々 いにしへ思ひ出でつ、昔の都の暮しを さまざまの物語などするに、いらふべきかたもなければ、つくづくとうちながめて、思いにふけって空をながめて

（浮舟）六 われかくて憂き世の中にめぐるとも

たれかは知らむ月の都に

愛想の尽きるような気 あいづちの打ちようもないので

七 もうこれが最期と決心をした時は、もう一度会いたいと思う人が多かったけれども。入水の決心をした時のこと（浮舟九四頁参照）。以下、浮舟の思い。

八 浮舟の乳母。浮舟巻末にもこの乳母と右近のことが見える。

九 今どこにいるのだろう。浮舟巻末にも同じ思いが述べられている。

一〇 浮舟の乳母子。この右近の思い出は、地の文の形で結ばれる。ただ「思ひ出でらる」と敬語がなく、浮舟の心事に密着した書き方。

一一 こんなさびしい山里に、もうこれまでと世をあきらめて引き籠ってしまうのは。「絶え」は「思ひ絶え」「絶え籠る」と、上下にかかる。

世を忍ぶ浮舟の日常

一二 京で女房勤めをしている者も、あるいはほかの暮しをしている者も。後者は、結婚でもしている者たちであろう。時々手伝いなどに顔を出すのである。

一三 この人々がかつて自分の知っていたあたりに出入りして（その口から洩れて）。「見しわたり」は、薫や匂宮のこと。

一四 （薫や匂宮が）想像されることも、並みはずれたみじめな有様を考えられるにちがいないと思うので。身分卑しい男とのかかわりなど想像されては、という女らしい気遣い。

一五 「鷹君」か。上の「侍従」は女房、これは女の童。

七 今は限りと思ひ果てしほどは、恋しき人多かりしかど、こと人々は（ほかの人々は今それほどにも思い出されず）さしも思ひ出でられず、ただ、親いかにまどひたまひけむ、乳母、（母君がどんなに悲しまれたことだろう）よろづに、いかで人なみなみになさむと思ひ焦られしを、いかにあ（どうかして私を人並みにしあわせにしようと）へなきここちしけむ、いづこにあらむ、われ世にあるものとはいか（あれやこれやと）でか知らむ、同じ心なる人もなかりしままに、よろづ隔つることな（気を許せる親しい人もいなかったこととして）くかたらひ見馴れたりし右近なども、をりをりは思ひ出でらる。（私がこの世にまだ生きているとはどうして知ろう）（何かにつけ隠しだてすること）（なく親しんでいつも身近にいた）

若い女が

若き人の、かかる山里に、今はと思ひ絶え籠るは、難きわざなり（いことなので）（なかなかできな）ければ、ただいたく年経にける尼七八人ぞ、常の人にてはありける。（いつも仕えている人なのであった）

それらが娘孫やうの者ども、京に宮仕へするも、異ざまにてあるも、時々ぞ来通ひける。かやうの人につけて、見しわたりに行き通ひ、（こうした人が来るにつけ）おのづから、世にありけりと誰にも誰にも聞かれたてまつらむこと、（自然に）（まだ生きていたのだと）（どなたにもせよ知られ申したりしたら）いみじくはづかしかるべし、いかなるさまにてさすらへけむ、など、（身の置き所もない思いをすることだろう）（どんなみじめな様子でうろうろしていたのだろう）思ひやり世づかずあやしかるべきを思へば、かかる人々にかけても（ちらりとも姿を見せない）見えず。ただ侍従、こもきとて、尼君のわが人にしたる二人をのみ（妹尼が自分の召使にしている）

一 浮舟お付きを申し付けて手許から割いてある。

二 （二人は）顔立ちも心くばりも、昔知っていた都の侍女たちには似ても似つかない。「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（『伊勢物語』九段）。流離に似た思いから「都鳥」の語が使われたのであろう。

三 身を隠すことのできる別世界というのは、ここのことだろうかと。「世の中にあらぬ所も得てしがな年ふりにたるかたち隠さむ」（『拾遺集』巻八雑上、読人しらず）。浮舟は、この歌を踏まえた母君とのかつての贈答を思い出している（七巻東屋三三〇頁参照）。

妹尼の昔の婿中将の来訪

四 近衛の中将。従四位下相当。

五 内供奉十禅師（宮中の内道場に奉仕する）であろう。また、僧籍に入った人の称。

六 横川に通う道すがらということで。横川には、長谷出から横高山の南の鞍部を経て横川に通ずる道がある。山荘の位置が大体分る。なお二三八頁注二参照。（図録一参照）

七 人目を忍ぶようにして（宇治に）通っていらした方（薫）のご様子、振舞いぶりが、ありありと思い出される。

八 歌語。「あな恋し今も見てしが山賤の垣ほに咲けるやまと撫子」（『古今集』巻十四恋四、読人しらず）

九 寝殿の南廂。客を迎える表座敷。

ぞ、一この御方に言ひ分きたる。二みめも心ざまも、昔見し都鳥に似たることなし。何ごとにつけても、三世の中にあらぬ所はこれにやあらむとぞ、かつは思ひなされける。かくのみ人に知られじと忍びたまへば、まことにわづらはしかるべきゆゑある人にものしたまふらむ、とて、くはしきこと、ある人々にも知らせず。

尼君の昔の婿の君、今は四中将にてものしたまひける、弟の禅師の五君、僧都の御もとにものしたまひける、山籠りしたるをとぶらひに、兄弟の君たち常に上りけり。六横川に通ふ道のたよりに寄せて、中将ここにおはしたり。前駆うち追ひて、あてやかなる男の入り来るを見出だして、七忍びやかにておはせし人の御さまけはひぞ、さやかに思ひ出でらるる。八これもいと心細き住ひのつれづれなれど、住みつきたる人々は、ものきよげにをかしくしなして、垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗など咲きはじめたるに、いろいろの狩衣姿の男どもの若きあまたして、九君も同じ装束にて、南面に呼び

（一一一

一〇 障子（襖障子）の出入り口。尼君の位置は母屋である。

一一 年月がたつにつれまして、昔のことがいよいよ縁遠く思われますばかりでございますが。娘が死んでから五、六年たっていると見える（二〇一頁）。

一二 婿として通って来ていた当時のいろいろなことが。

一三 弟の出家生活。俗世を離れた修行一途の山籠り生活がうらやましい、と言う。仏道に心が傾いていることを言う。

一四 世間の風潮に染まないお方だったのだと。世間の普通の男のように軽薄に昔のかかわりを忘れることのないお方だ、と言う。

妹尼、中将と対面

れたので
すゑたれば、うちながめてゐたり。年二十七八のほどにて、ねびと
大人びて
とのひ、ここちなからぬさまもてつけたり。

妹尼
尼君、障子口に几帳立てて、対面したまふ。まづうち泣きて、

（妹尼）一一
「年ごろの積りには、過ぎにし方いとど気遠くのみなむはべるを、
山荘の光として今もなお出でをお待ち申し上げます気持が　忘れることなく続いておりますのを
山里の光になほ待ちきこえさすることの、うち忘れずやみはべらぬ
我ながら不思議なこととも存じております
を、かつはあやしく思ひたまふる」とのたまへば、「心のうちあは
（中将）心の中では悲しく
思い出されない折とてないのですが
れに、過ぎにし方のことども、思ひたまへられぬをりなきを、あな
ご遠慮申し上げまして
ら俗世を避けてお暮しのご様子と拝察いたしますので
がちに住み離れ顔なる御ありさまに、おこたりつつなむ。一三山籠りも
よく出かけて来ますのですが
うらやましく、常に出で立ちはべるを、おなじくは、など、慕ひま
邪魔されるような格好でついご無沙汰しております
いて来たがる人々に
とはさるる人々に、さまたげらるるやうにはべりてなむ。今日は、
同行をことわってこちらにお伺いいたしました
（妹尼）
皆はぶき捨ててものしはべりつる」とのたまふ。「山籠りの御うら
亡き娘をお忘れになら
当世はやりのお言葉のように存じられます
やみは、なかなか今様だちたる御ものまねびになむ。昔をおぼし忘
一緒に付
並々ならずありがたく存じ
らないお気持も
れぬ御心ばへも、一四世に靡かせたまはざりけると、おろかならず思う
られる折が多うございます
たまへらるるをり多く」など言ふ。

中将一行、村雨に降りこめられる

一 一行の人たち。
二 姫飯（今の炊いた飯）または干飯に水をかけたもの。冬の湯漬に対する。
三 間食ないし酒の肴とする。いわゆる「くだもの」と総称される中に入る。
四 にわか雨。
五 あえなく死んでしまったわが娘よりも。以下、妹尼の心。
六 （娘は）どうしてせめて忘れ形見の子供なりと残さないで死んでしまわれたのかと。「忘れ形見」は、忘れぬためにあとに残すもの。「忘れ難み」に「形見」を掛けた語。歌語であろう。
七 妹尼は、（心中）思いもかけぬことと心を動かされているに違いない浮舟のことを、（聞かれずとも）自分から話してしまいかねない気持であろう。草子地。

浮舟の心事

八 浮舟。中将の相手役に擬せられているこの場面にふさわしい呼び方。
九 自分は自分で、いろいろ思い出すことが多くて。前に、中将の姿を見て「忍びやかにておはせし人の御さまけはひぞ、さやかに思ひ出でらるる」とあった。「われはわれと」は、三巻澪標二四頁注一参照。
一〇 袴も、ここでは檜皮色（黒みがかった蘇芳色）を常としているからだろうか。檜皮色は、出家の人の多く用いる色。

人々に水飯などやうのもの食はせ、君にも蓮の実などやうのもの出だしたれば、馴れにしあたりにて、さやうのこともつつみなきことこちして、村雨の降り出づるにとどめられて、物語しめやかにしたまふ。言ふかひなくなりにし人よりも、この君の御心ばへなどの、いと思ふやうなりしを、よそのものに思ひなしたるなむ、いと悲しき、など忘れ形見をだにとどめたまはずなりにけむと、恋ひしのぶる心なりければ、たまさかにかくものしたまへるにつけても、めづらしくあはれにおぼゆべかめる問はず語りもし出でつべし。

（中将は）しんみりと　昔なじみの所なので　接待を受けるのも遠慮のいらない気がして　足止めされて　中将　お気立て　恋しく忘れがたく思う気持だったので　いかにも申し分なかったのを　もう他人だと思うよりほかなくなったことが　中将が久しぶりにこうして尋ねて来られたにつけても

姫君は、われはわれと、思ひ出づるかた多くて、ながめ出だしたまへるさま、いとうつくし。白き単のいと情なくあざやぎたるに、袴も檜皮色にならひたるにや、光も見えず黒きを着せたてまつりたれば、かかることどもも、見しには変りてあやしくもあるかな、と思ひつつ、こはごはしくいらぎたるものども着たまへるしも、いとをかしき姿なり。御前なる人々、「故姫君のおはしまいたるここ

外をぼんやり眺めていらっしゃる様子は　とてもかわいらしい　風情もなくさっぱりとしたのに　つやもなく　お着せ申しているので　昔着ていたのとは違っておかしな格好だこと　このような着物も　ごつごつした肌ざわりのよくないお着物をお召しなのがかえって　[浮舟は]　風情のある　亡き姫君がまるでよみがえっておいでのとよみがえって

一一 まあとんでもない、この世で人並みに、どのような人にせよ契りを結ぶなどということは（まっぴらだ）。以下、浮舟の心。

一二 中将。

一三 前に「少将の尼君などいふ人は、琵琶弾きなどしつつ遊ぶ」（一九三頁）とあった人。昔、妹尼の姫君在世中は女房として「少将」と名乗っていたのである。

中将、ふと見かけた浮舟のことを少将に語る

一四 昔知っていた方々は。自分が婿として通っていた当時の女房たち。

一五 薄情なせいと、どなたもどなたもお思いでしょうか。

一六 この少将は、（当時）親しく自分の世話をしてくれていた女房なので。

一七 寝殿の南廂に請じ入れられた時であろうから、寝殿に通ずる廊であろう。宿木に「廊の西のつま」（七巻二五八頁）という例がある。

一八 長くうしろに垂れた髪。歌語であろう。「ほととぎすをちかへり鳴けうなゐ子がうち垂れ髪の五月雨の空」（『拾遺集』巻二夏、躬恒）

胸もいっぱいになりまように思われますのに　中将様までこうして拝見いたしますと

ちのみしはべるに、中将殿をさへ見たてまつれば、いとあはれにこそ。同じくは、昔のさまにておはしまさせばや。いとよき御あはひならむかし」と言ひあへるを、あないみじや、世にありて、いかにもいかにも人に見えむこそ、それにつけてぞ昔のこと思ひ出でらるべき、さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなむ、と思ふ。

どうせのことにす　昔のように婿君としてお通わせ申したいもの　いかにもお似合いのご夫婦でしょう　皆で言っているのを　男と女のことなどは　それにつけてもあの嫌な昔のことが思い出されることだろう　さっぱりと忘れてしまいたい

妹尼「奥に」尼君入りたまへる間に、客人、雨のけしきを見わづらひて、少将といひし人の声を聞き知りて、呼び寄せたまへり。「昔見し人々は、皆ここにものせらるらむや、と思ひながらも、かう参り来ることも難くなりにたるを、心浅きにや、誰も誰も見なしたまふらむ」などのたまふ。つかうまつり馴れにし人にて、あはれなりし昔のことどもも思ひ出でたるついでに、「かの廊のつま入りつるほど、風がひどかったのに吹き乱されての騒がしかりつるまぎれに、簾の隙より、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、世を背きたまへるあたりに、誰ぞとなむ見おどろかれつる」とのたまふ。姫君の立ち出で

おぼえていて　おいでなのだろうか　雨の降りやまない様子に帰りかねて　一三　一四　（中将）　むつかしくなったのを　一五　一六　（中将）一七　端を入って来た時に　風　なみなみの美しさではあるまいと思われた人の　一八　出家なさった方々のお住いに　たれ一体誰かと目を疑う思いでした　浮舟

一 ましてもっとよく（浮舟を）見せたら。以下、少将の尼君の思い。
二 亡くなられた姫君は、（浮舟には）とても比べものにならないほど器量が劣っていらしたのに、それでさえ。
三 毎日のお楽しみとお思い申し上げていらっしゃるようですが。「見物」は、見るに価するもの、見て楽しいもの。
四 一体どういう人なのだろう、ほんとにとてもきれいな人だったと。中将の思い。
五 「ここにしも何にほふらむ女郎花人のもの言ひさがにくき世に」（『拾遺集』巻十七雑秋、房の前栽見に女どもまうで来たりければ　僧正遍昭）。こんな尼の住いにといぶかしむ思いを託す。「をみなへし　女にたとへてよむべし」（『能因歌枕』）
六 ひとり言を言ってたたずんでいる。返事を求めるでもない風情。
七 人の口の端をさすがに気になさるところは奥ゆかしい。歌の「人のもの言ひ」によって言う。中将の遠慮深い態度をほめる。

中将の関心　妹尼の期待

たまへりつるうしろ（後ろ姿を）でを、見たまへりけるなめり、と思ひて（少将は）、ましてこまかに見せたらば、心とまりたまひなむかし（お気に入りになるに違いない）、昔人（むかしびと）は、いとこよなく劣りたまへりしをだに、まだ忘れがたくしたまふめるを（いまだに忘れがたくお思いのようなのに）、と心ひとつに思ひて（ひとり決めして）、「過ぎにし（少将）亡き姫君のことを［尼君は］忘れかねて御ことを忘れがたく、なぐさめかねたまふめりしほどに（ご様子でしたのに）、おぼえぬ人（思いもかけぬ人をお手許にお引き取り申しなさって）を得たてまつりたまひて、明け暮れの見物（みもの）に思ひきこえたまふめるを、うちとけたまへる御ありさまを、いかでか御覧じつらむ（どうしてご覧になったのでしょう）」と言ふ。かかることこそはありけれ、とをかしくて、何人（なにびと）ならむ、げにいとをかしかりつと、ほのかなりつるを、なかなか思ひ出づ。こまかに問へど、そのままにも言はず、「おのづから聞こしめしてむ（人々）」とのみ言へば、うちつけに問ひ尋ねむもさまあしきここちして、「雨もやみぬ。日も暮れぬべし」と言ふに、そそのかされて出でたまふ。

前近き女郎花を折りて、「何にほふらむ」と口ずさびて、ひとりごち立てり。「人のもの言ひを、さすがにおぼしとがむるこそ」な

［中将が］くわしく　ありのままにも話さず　ちらりと見ただけの姿を　かえって鮮やかに　気持をひかれて　いきなり事情を尋ねて詮索する　そのうち自然にお耳になさいましょう　のもぶしつけな気がして　うながされて

八 藤原氏で中納言（従三位相当）である人。現在、中将はこの人の姫君のもとに婿として通っている趣。

九 ご両親のお邸においでのことが多い、と世間では噂しているようです。

一〇 情けないことに。以下、浮舟に向って言う。

一一 あなたのことをお案じなさるに違いない方々がこの世においでででも。親兄弟など。

一二 どんなことでも、その当座のようには、必ずしも思わないものなのです。時がたてば悲しみも自然に薄れるものだ、と言う。

一三 （浮舟は）一層涙ぐんで。親のことなど言われて、悲しみがこみ上げる体。

手習

ど、古代の人どもは、ものめでをしあへり。「いときよげに、あらまほしくもねびまさりたまひにけるかな。同じくは、昔のやうにても見たてまつらばや」とて、「藤中納言の御あたりには、絶えず通ひたまふやうなれど、心もとどめたまはず、親の殿がちになむものしたまふ、とこそ言ふなれ」と、尼君ものたまひて、「心憂く、ものをのみおぼし隔てたるなむいとつらき。今はなほ、さるべきなめりとおぼしなして、はればれしくもてなしたまへ。この五年六年、時の間も忘られず、恋しく悲しと思ひつる人のうへも、かく見たてまつりてのちよりは、こよなく思ひ忘られにてはべる。思ひきこえたまふべき人々世におはすとも、今は世に亡きものにこそ、やうやうおぼしなりぬらめ。よろづのこと、さしあたりたるやうには、えしもあらぬわざになむ」と言ふにつけても、いとど涙ぐみて、「隔てきこゆる心もはべらねど、あやしくて生き返りけるほどに、よろづのこと夢のやうにたどられて、あらぬ世に生れたる人は、かかるこ

（尼たち）とてもお綺麗に　皆感心している　古風な尼たちは　申し分なく前より立派におなりになりましたこと　昔のように姉君として　ずっと通ってお　お邸　（妹尼）　お迎え申し上げたいものです　あまりご熱心でもなく　いでのようですが　妹尼　何ごと　（妹尼）　今はもう　これも前世のさだめだ　明るくお振舞いになって下さい　お考えになって　すっかり忘れた思いになっております　亡き娘　こうしてあなたにお会いしてからというものは　あきらめておいでででしょう　（あなたを）　亡いものと　（浮舟）隠し　立て申し上げる気持もございませんが　あのような妙な有様で生き返りましたので　何もかも　が夢のようにはっきり分らなくなりまして　違った世界に生れ変った人は　こんな気持で

一　言葉そのままに、何の隠し立てもない様子でかわいらしいので。

二　声明で、当時のいわば声楽。

中将、横川で禅師に浮舟の噂をする

「ただ頭の中将、源中将、六位一人残りて、よろづのこと言ひ、経読み、歌うたひなどするに」（『枕草子』故殿の御服のころ）、「八月二十余日のほどよりは、上達部、殿上人ども、さるべきは皆宿直がちにて、橋の上、対の簀子などに皆うたた寝をしつつ、はかなう遊びあかす。琴、笛の音などにはただたどしき若人たちの読経あらそひ、今様歌どもも、所につけてはをかしかりけり」（『紫式部日記』）

三　中将たちの来訪に、浮舟は奥に入ろうとした後ろ姿を中将に見られたのである。

四　身分のある女は住まわせてはいけないものだと思われます。

五　いつのまにか見馴れてそれが普通と思うようになりましょう。女らしさを失ってしまうだろうという気持。

こちやすらむ、とおぼえはべれば、今は、知るべき人世にあらむとも思ひ出でず、ひたみちにこそむつましく思ひきこゆれ」とのたまふさまも、げに何心なくうつくしく、うち笑みてぞまもりゐたまへる。

親しい人がこの世にいようとも思いでもありましょうか
という気がいたしますので
出しませんで
ただもうひたすらお慕い申し上げる気持でおります
〔妹尼は〕
あにこにこして見つめていらっしゃる

中将は、山におはし着きて、僧都もめづらしがりて、世の中の物語したまふ。その夜はとまりて、声尊き人々に経など読ませて、夜一夜遊びたまふ。禅師の君、こまかなる物語などするついでに、

横川
久しぶりの来訪を喜んで
うちとけた
〔妹尼は〕

〔中将〕「小野に立ち寄りて、ものあはれにもありしかな。世を捨てたれど、なほさばかりの心ばせある人は、難くこそ」などのたまふついでに、

しみじみとした思いをしました
やはりあれほどのたしなみのある人は
滅多にいないものです
〔御簾の〕

〔中将〕「風の吹きあげたりつる隙より、髪いと長くをかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつらむ、立ちてあなたに入りつるうしろで、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、よき女は置きたるまじきものにこそあめれ。明け暮れ見るものは法師なり。おのづから目馴れておぼゆらむ、不便なることなりかし」とのたまふ。禅

人目につくと思ったのでしょうか
並々の身分の人
よくないことです

六 そんな所（宇治）に隠れ住んでいたのでしょう。

七 昔物語の中の話のような気がします。身分ある美女が、事情あってものさびしい所に隠れ住むうち、男に見出だされるという設定はよく見られた（一巻末摘花二四八頁注八、六巻橋姫二七六頁注六参照）。

中将、帰途、浮舟に歌を詠みかける　妹尼、返歌

八 多分お帰りにお立ち寄りだろうと心設けしていたので。食事の支度などして心待ちしていた趣。

九 故姫君在世中のことを思い出しているお給仕の少将の尼なども、袖口は昔とは違う鈍色だけれども、（身づくろいをして）風情がある。

一〇 いつもより一層涙がちで妹尼君はいらっしゃる。亡き娘のことを思い出すことしきりの思い。

一一 厄介なことと思うけれども。浮舟の近親者などへの聞えを憚る気持。

一二（亡き娘のことが）どうしても忘れられませんで、（そんな執着が）ますます罪深いことと思われてなりませんでした心やりに。

一三 このような辺鄙な谷底の住いまで誰がお探し申し上げよう。底本「たびのそら」（旅の空）が青表紙本本来の形と思われるが、河内本により訂す。

師の君、「この春初瀬に詣でて、あやしくて見出でたる人となむ聞きはべりし」とて、見ぬことなればこまかには言はず。「あはれなりけることかな。いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとてぞ、さる所には隠れゐけむかし。昔物語のここちもするかな」とのたまふ。

（不思議ないきさつで見つけ出した人だと聞きましたけのありそうな話ですね）（どういう素姓の人なのだろう）（この世を）（中将）何か深いわ

翌日

またの日帰りたまふにも、「過ぎがたくなむ」とておはしたり。

（中将）素通りなりかねまして　（小野に）

さるべき心づかひしたりければ、昔思ひ出でたる御まかなひの少将の尼なども、袖口さま異なれど、をかし。いとどいや目に、尼君はものしたまふ。物語のついでに、「忍びたるさまにものしたまふらむは、誰にか」と問ひたまふ。わづらはしけれど、ほのかにも見つけたまひてけるを、隠し顔ならむもあやしとて、「忘れわびはべりて、いとど罪深くのみおぼえはべりつるなぐさめに、この月ごろ見たまふる人になむ。いかなるにか、いともの思ひしげきさまにて、世にありと人に知られむことを、苦しげに思ひてものせらるれば、かかる谷の底には誰かは尋ねきこえむ、と思ひつつはべるを、いか

（中将）世を忍んでこちらにお暮しでいらっしゃるらしい方は　（ちらりとでも目にしておしまいになったのを）　（隠し立てするようなのも変だと思って）　（妹尼）　（ここ幾月かの間お世話しております人なのです）　（どうしたわけか）　（とても何か悩みごとの多いような様子で）　（つらいと思っていらっしゃるようですので）　（常々思っておりましたが）　（どうし）

一 一時の浮気心から参上したにいたしましても、山深い道中をお尋ねした泣き言くらいは申し上げてもよろしいでしょう。

二 全く関係のないこととつれなくおあしらいになってよいことでもございますまい。昔のように私を婿としてお扱い下さってもよいではないか、の意。「ことこと」は「異事」。

三 どうしたわけあいで世をはかなんでいられる人なのでしょう。

四 畳んで懐中にする紙。旅先のこととて、という趣。

五 ほかの浮気な男の言いなりにはならないで下さい、私がわがものにしましょう、京からの道のりは遠くても。「あだし野」は歌枕。嵯峨、小倉山の西北、今、念仏寺のある鳥居本のあたり。昔の葬所である。「あだ」に浮気の意をこめる。「女郎花」は、浮舟をさす。「しめ」は、占有のしるし。

六 引き取りましてから、どうしたらよろしいものやら思いあぐねております、ここは（若い女にはふさわしくない）憂き世を背いた尼の住居ですので。

（中将）一 でかは聞きあらはさせたまひつらむ」といらふ。「うちつけ心ありて参り来むにだに、山深き道のかことは聞こえつべし。ましておぼしよそふらむかたにつけては、二 ことことに隔てたまふまじきことにこそは。三 いかなる筋に世を恨みたまふ人にか。なぐさめきこえばや」など、ゆかしげにのたまふ。

四 出でたまふとて、畳紙に、

（中将）五 あだし野の風になびくな女郎花

われしめ結はむ道遠くとも

（妹尼）と書きて、少将の尼して入れたり。尼君も見たまひて、「この御返り書かせたまへ。いと心にくきけつきたまへる人なれば、うしろめたくもあらじ」とそそのかせば、「いとあやしき手をば、いかでか」とて、さらに聞きたまはねば、「はしたなきことなり」とて、尼君、「聞こえさせつるやうに、世づかず、人に似ぬ人にてなむ。

六 移し植ゑて思ひみだれぬ女郎花

七 今回は（最初のことゆえ）返歌のないのも仕方あるまいと。

八 恋文などわざわざ書き送るのはさすがに今さら気のひけることだし。以下、中将の心事。

九 何か悩みごとがあるという、それがどういうことか分らないけれど。前に妹尼が「いかなるにか、いともの思ひしげきさまにて」（二〇三頁）と言った。

中将、小鷹狩にかこつけて再訪

一〇 中秋の明月に近い頃である。

一一 隼、鷂、兄鷂、雀鷂などの小型の鷹を放って鶉などの小鳥をとる。秋の歌題。「秋の野に狩りぞ暮れぬる女郎花今宵ばかりの宿は貸さなむ」（『貫之集』一、小鷹狩）

一二（浮舟は）誰かほかに思う人がいるのか、と思われます。「誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし」（『小町集』。『新古今集』巻四秋上、小野小町）。「待乳の山」は、大和の宇智郡五条から紀伊の国に通ずる道の国境の山。

一三 少将の尼を通じて御簾の外の中将に挨拶なさる。

一四（出家を）お許しになるはずもない人々に気兼ねして過しております。両親たちのことであろう。

一五 いかにも屈託なげに暮しているといった人は。暗に今の妻、藤中納言の娘（二〇一頁）のことを言うのであろう。

手習

憂き世をそむく草の庵に」

大目に見て

とあり。こたみはさもありぬべしと、思ひゆるして帰りぬ。

文などわざとやらむはさすがにうひうひしく、ほのかに見しさまは忘れず、もの思ふらむ筋、何ごとと知らねど、あはれなれば、八月十余日のほどに、小鷹狩のついでにおはしたり。例の尼呼び出で、「ひと目見しより、静心なくてなむ」とのたまへり。いらへたまふべくもあらねば、尼君、「待乳の山の、となむ見たまふる」と言ひ出だしたまふ。対面したまへるにも、「心苦しきさまにてものしたまふと聞きはべりし人の御うへなむ、残りゆかしくはべる。何ごとも心にかなはぬこちのみしはべれば、山住みもしはべらまほしき心ありながら、ゆるいたまふまじき人々に思ひ障りてなむ過ぐしはべる。世にこちよげなる人のうへは、かく屈したる人の心かならにや、ふさはしからずなむ。もの思ひたまふらむ人に、思ふことを聞こえばや」など、いと心とどめたるさまにかたらひたまふ。

気持がひかれるので

少将の尼

〔小野に〕

（中将）

〔浮舟が〕お返事

妹尼

気もそぞろの思いです

なさるはずもないので

〔妹尼が〕

（中将）お気の毒など事情でいらっしゃるとお聞きしましたお方のお身の上について

なお委しく伺いたく存じます

何か悩みごとがおありだという人に

出家して山にでも籠りたいという気持があるのですが

沈みがちな私の性分の

私の気持をお話ししたいのです

しっくりいたしません

いかにもご執心の様子で相談をお持ちかけになる

一　もの思わしげな女を妻になさりたいというお望みにつきましては。互いに悩みを打ち明けられる妻を得たいという中将の希望。このあたり、この中将の人物像はさながら矮小化された薫である。

二　世間並みの暮しはもういやだと。浮舟に出家の望みのあることを言う。

三　それはあまりと思われるまでにこの世をうとましく思っているようですので。「花と見て折らむとすれば女郎花うたたあるさまの名にこそありけれ」（『古今集』巻十九雑体、誹諧歌、読人しらず）。「うたた」は「うたて」の転。

四　余命いくばくもない私のような年寄りでも。

五　そっけないなさり方です。

六　こうしたものさびしい所にお住まいでしたら、何でもないことでも、人の情けに答えるのが、当り前というものではありませんか。

七　どうなさったのです、何と情けない。返事をうながす気持。

八　秋になったらとのお約束は、私をおだましになったのですね。妹尼の「待乳の山の」の引歌の下の句「秋と契れる人ぞあるらし」の「人」を自分のことにとりなして言ったもの。

九　尼君が私をお待ちと思ってやって来ましたが、またつれないお方のために涙にくれています。「松」に「待つ」を掛ける。「荻原」の例歌、六巻夕霧二六頁に既出。

中将と妹尼の贈答

（妹尼）一「ここちよげならぬ御願ひは、聞こえかはしたまはむに、つきなからぬさまになむ見えはべれど、二例の人にてあらじと、三いとうたたあるまで世を恨みはべるめれば、四残りすくなき齢の人だに、今はと背きはべる時は、いとものの心細くおぼえはべりしものを、世をこめたる盛りにては、つひにいかがとなむ見たまへはべる」と、親がりて言ふ。

（奥に）（妹尼）五入りても、「情なし。なほいささかにても聞こえたまへ。六かかる御住ひは、すずろなることも、あはれ知るこそ世の常のことなれ」など、こしらへても言へど、（浮舟）「人にもの聞こゆらむかたも知らず、何ごともいふかひなくのみこそ」と、いとつれなくて臥したまへり。客人は、（中将）「いづら、あな心憂。七秋を契れるは、すかしたまふにこそありけれ」など、恨みつつ、

（中将）九松虫の声をたづねて来つれども
また荻原の露にまどひぬ

（いろいろお話し合いになるのに）（不似合いでは）（ない人のように見えますけれども）（出家いたします時は）（まだ先の長い若い女の身空では）（おしまいまで出家を通せるものかと心配しております）（親めいたロぶりで言う）（どうか一言でもいいからお返事申し上げなさい）（なだめすかすようにも）（浮舟）（男の方にどうお話しするものかも存じませんで）（何をやらせても不調法な私でございます）（全然その気も見せずに）

一〇 まあ、おいたわしい。せめてこの返歌だけでも。
一一 そのように色恋めいた歌を詠むのもまことに情けなく。以下、浮舟の心中。
一二 以前（出家前）は、当世風な気の利いた人だったその名残なのであろう。浮舟が詠んだ体によそおってその場をとりつくろった趣。
一三 秋の野の露を踏み分けておいでになってその露に濡れた狩衣ですのに、葎の茂ったこのさびしい家のせいだとおっしゃって下さいますな。
一四 部屋の中でも。以下、簾中で尼たちが浮舟に返事をすすめるさま。
一五 （亡き姫君のみならず）この昔の婿君の中将のこともいつまでも思い出しては恋しく思い続けている尼君たちなのに。
一六 世間並みの色恋めいたこととはお考えにならずとも、ぶしつけにならないほどに。

（妹尼）一〇「あないとほし。これをだに」と責むれば、一二さやうに世づいたらむこと言ひ出でむもいと心憂く、また言ひそめては、（一度返歌したら）かやうのをりをりに責められむも、（面倒なことと思われるので）むつかしうおぼゆれば、（とかくのお返事もなさらないので）いらへをだにしたまはねば、（あまりに張合いのないことと皆で思っている）あまりいふかひなく思ひあへり。（妹尼）尼君は、一三はやうは今めきたる人にぞありける名残なるべし、

（妹尼）一三「秋の野の露分け来たる狩衣

むぐらしげれる宿にかこつな

となむ、（迷惑なこととお思い申し上げていらっしゃるようです）わづらはしがりきこえたまふめる」と言ふを、一四内にも、（りこうして不本意なことにこの世に生きていると人に知られ始めるのを）なほかく心よりほかに世にありと知られはじむるを、（とてもつらいとお思い）いと苦しとおぼす心のうちをば知らで、（の〔浮舟の〕心中も知らないで）一五男君をも飽かず思ひ出でつつ、恋ひわたる人々なれば、（尼たち）「かくはかなきついでにも、（こんなちょっとした折にでも）うちかたらひきこえたまへらむに、（親しくお相手申し上げなさっても）心よりほかに、（お気持に背いて）よにうしろめたくは見えたまはぬものを、（油断のならぬお振舞をなさる方ではいらっしゃいませんのに）一六世の常なる筋におぼしかけずとも、（お返事くらいは）情なからぬほどに、御いらへば（申し上げなさいませ）かりは聞こえたまへかし」など、（引き動かさんばかりに）ひき動かしつべく言ふ。

一　さすがにこんな年寄りの昔気質には不似合いに、当世風に気取っては。老いた尼たちのこと。昔の女房気質が抜けきれない趣。

二　何かというと下手な歌を詠みたがって、はしゃぎたがる尼たちの様子は。「腰折れ歌」は、歌の上の句と下の句がよく続かぬ下手な歌。

三　（浮舟には）とても気の許せないものに思われる。中将の手引きもしかねないという不安。

四　「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつつ」（『古今集』巻四秋上、是貞の親王の家の歌合の歌　忠岑）

五　（といって）今新たに私に心を寄せて下さりそうなお方は、ここにいらっしゃりそうにもありませんから。浮舟の冷たさを暗に諷する。

六　ここを「世の憂き目見えぬ山路」（世の中のつらいことのない山中）と思うわけにもまいりませぬ。「世の憂き目見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」（『古今集』巻十八雑下、物部吉名）

七　どうして、せっかくのこの良夜をご覧にならずに途中でお帰りなのです。「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや」（『後撰集』巻三春下、月のおもしろかりける夜花を見て　源信明）

八　いえ何、あちらのお気持も、もう分りましたので。「をちなる里」は、引歌か。「をち」は宇治の地名（浮舟六二頁注二）で、浮舟のことと解し得る。

妹尼、中将をひきとめる

一さすがにかかる古代の心どもにはありつかず、今めきつつ、腰折れ歌好ましげに、若やぐけしきどもは、いとうしろめたくおぼゆ。限りなく憂き身なりけりと見果ててし命さへ、あさましく長くて、いかなるさまにさすらふべきならむ、ひたぶるに亡きものと人に見聞き捨てられてもやみなばや、と思ひ臥したまへるに、中将は、おほかたもの思はしきことのあるにや、いといたくうち嘆きつつ、忍びやかに笛吹き鳴らして、「鹿の鳴く音に」などひとりごつけはひ、まことにここちなくはあるまじ。「過ぎにしかたの思ひ出でらるるにも、なかなか心尽くしに、今はじめてあはれとおぼすべき人はた、難げなれば、見えぬ山路にもえ思ひなすまじうなむ」と、うらめしげにて出でたまひなむとするに、尼君、「など、あたら夜を御覧じさしつる」とて、ゐざり出でたまへり。「何か、をちなる里も、こころみはべりぬれば」と言ひすさみて、いたくすきがましからむも、さすがに便なし、いとほのかに見えしさまの、目とまりしばか

（浮舟は）もう全く死んだものと世間の人に無視されたままで終りたいものだ　大層深い溜息をつきながら　この上もなく情けない身の上だと見切りをつけたこの命まで　何と思いのほかに永らえて　これから先どんなみじめな境涯になることなのだろう　もと何か心に思い悩むことでもあるのか　（中将）四　横笛　ひとり口ずさむ様子は　（中将）昔の妻とのことが思い出されるにつけましても　かえって悲しみに心乱れますし　心に不満を残す風情でお帰りになろうとするのに　妹尼　（中将）八　（御簾際に）にじり出てこられた　軽くいなして　あまり好色がましく振舞うのも　（浮舟の）　目にとまった程度のこと　やはり　具合が悪い

九 部屋深く引き籠って相手をしようとしない態度もこうした山里の風情にふさわしくなくおもしろくないと思うので。前頁「いたくすきがましからむも」以下、中将の失望の心中。風雅な環境の手狭な山里住まい、そこにしかるべき男女のやりとり、といった期待があったという趣。

一〇 妹尼は、中将その人だけでなくその笛の音にまで、ますます名残惜しい気持になって。

一一 この夜更けの月を風情あるものと見ない人が、（その月の入る）山の端に近いこの家にお泊りにならぬのでしょうか。前の「あたら夜」の歌を踏まえる。「山の端」は、月の入る山の頂。

一二 （浮舟が）こう申し上げていられます。浮舟の詠んだ歌だと、とっさにいつわって言う。

一三 では、山の端に沈むまで月を眺めておりましょう、その甲斐あってお逢いすることもできましょうかと。「板間」は、板葺き屋根の板と板との隙間。月の光が漏れ入る縁で言う。

一四 例の母尼君。

大尼君の出現　深夜の演奏会

一五 かえって昔のことなどおくびにも出さず。年寄りは昔の思い出話でもしそうなものだが、という気持。

一六 妹尼に言う。「尼君ぞ、月など明き夜は、琴など弾きたまふ」（一九三頁）とあった。

とを 所在なく暮している気晴らしに思い出して尋ねて来たのだが

り、つれづれなる心なぐさめに思ひ出でつるを、あまりにもよそよそしく あまりもて離れ、奥深なるけはひも所のさまにあはずすさまじと思へば、帰りなむとするを、笛の音さへ飽かずいとどおぼえて、

（妹尼）一二 深き夜の月をあはれと見ぬ人や

山の端ちかきやどにとまらぬ

どこか整わないところのある歌を（妹尼）一二

と、なまかたはなることを、「かくなむ聞こえたまふ」と言ふ。心期待に心動いてときめきして、

（中将）一三 山の端に入るまで月をながめみむ

閨の板間もしるしありやと

など言ふに、この大尼君、笛の音を聞きつけたりければ、ぼけながらもさすがに感に堪えてめでて出で来たり。

物を言うたびに咳をまじえ

ここかしこうちしはぶき、お話にもならぬ震え声であさましきわななき声にて、なかなか昔のことなどもかけて言はず、誰とも思ひ分かぬなるべし。「いで、中将が誰ともはや分らないらしい（母尼）さあ その琴の琴弾きたまへ。横笛は、月にはいとをかしきものぞかし。趣のあるものですよ

一 どうしました。さあ早く、とうながす気持。
二 お前がた。目下の者に対する対称代名詞。尼たちに対して言う。古風な言葉のようで、次の頁の「主殿のくそ」と、この物語で二例のみ。
三 妹尼に琴の琴を持って来てさし上げよ、の意。
四 老少不定のこの世が、これにつけてもしみじみ思われる。自分の妻だった孫娘は早く死に、八十を越えたこの尼君がまだ存命なのに感慨をもよおす。中将の心事に密着した書き方。
五 盤渉（洋楽のhに近い）を宮（主音）とする律旋音階。冬の調子といわれる。
六 さあどんなものでしょう、私の琴はもう調子外れになっておりましょう。謙遜してみせる。「ひがこと」は、間違いの意。「琴」を掛ける。
七 今時の好みとしては。琴について言う。
八 「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをより調べそめけむ」（『拾遺集』巻八雑上、野の宮に斎宮の庚申しはべりけるに、松風入二夜琴一といふ題をよみはべりける　斎宮女御）
九 宵のうちにねむたがること。老人の習性である。
一〇 この婆は。大尼君が自称して言う。

大尼君、和琴を弾く

一一 和琴。六絃。日本古来の琴といわれる。
一二 横川の僧都。
一三 それなら弾きますまい。「何かは弾かむ」の意。

一いづら、二くそたち、三琴とりて参れ」と言ふに、それなりと、おし
はかりに聞けど、いかなる所に、かる人、いかでこもりゐたらむ、
四さだめなき世ぞ、これにつけてあはれなる。五盤渉調をいとをかしく
吹きて、「いづら、さらば」とのたまふ。六女尼君、これもよきほど
のすき者にて、「昔聞きはべりしよりも、こよなくおぼえはべるは、
山風をのみ聞き馴れはべりにける耳からにや」とて、「いでや、七こ
れはひがことになりてはべらむ」と言ひながら弾く。八今様は、をさ
をさなべての人の、今は好まずなりゆくものなれば、なかなかめづ
らしくあはれに聞こゆ。九松風もいとよくもてはやす。吹き合はせた
る笛の音に、月もかよひて澄めるここちすれば、いよいよめでられ
て、宵まどひもせず起きゐたり。
一〇「嫗は、一一昔あづま琴をこそは、ことともなく弾きはべりしかど、今の
世には、一二変りにたるにやあらむ、この僧都の、聞きにくし、念仏よ
りほかのあだわざなせそ、とはしたなめられしかば、一三何かは、とて

（中将）さあ
（妹尼）
山風ばかりいつも聞いて暮しております耳のせいでしょうか
（妹尼）
弾くこともなくなってゆく楽器なので
〔琴の音を〕引き立てる
〔大尼君は〕ますます感じ入って
母尼君らしいと〔中将は〕聞いて察するけれども
一体こんな所に
こんな老人が
どうして隠れ住んでいたのだろう
相当な趣味人
すっかりご上達と思われますのは
に一般の人が
〔弾き方も〕
無駄ごとは止めなさい
しごく上手に弾いたものでしたが
下手くそな
たしなめなさったので

一四 とても響きのよい琴もあります。和琴について「よく鳴る」という言い方、一巻帚木六九頁、二巻花散里一九四頁、四巻常夏九一頁に見える。

一五 西方十万億土のかなたにある阿弥陀如来の浄土。

一六 仏になるために悟りを求め衆生を教化する存在。宇治平等院の雲中供養菩薩像などの遺品がある。（図録三参照）

一七 日野法界寺の壁画などの遺品がある。

一八（そのために）勤行に身が入らず、罪になったりすることがありましょうか。

一九 主殿さんよ。「そ」は、前頁注二参照。女房の名か。「主殿」は、元来、後宮十二司の一つである殿司。室内身辺の雑用を弁ずる小間使い的な職掌なので、戯れに言ったものか。ちなみに宮中の御遊の楽器を管掌するのは書司である（四巻常夏九二頁参照）。

二〇 未詳。和琴の調子の一つともいう。（二巻花散里一九四頁注二、四巻真木柱二四三頁注一五参照）

二一 爪音さわやかに弾く。和琴は、琴軋という水牛製のへら状のもので弾く。

二二「たけふ」（武生）は催馬楽、律「道の口」の一節（浮舟七一頁参照）。最後の「な」は衍ないしは誤り、中間が笛の唱歌（譜を歌うこと）（山田孝雄博士『源氏物語之音楽』）。「笛の音の春おもしろく聞こゆるは花ちりたりと吹けばなりけり」（『後拾遺集』巻二十雑諧、読人しらず）

二三 琴軋の裏で絃をはねて。

弾きはべらぬなり。さるは、いとよく鳴る琴もはべり」と言ひ続けて、いと弾かまほしと思ひたれば、いと忍びやかにうち笑ひて、「いとあやしきことをも制しきこえたまひける僧都かな。極楽といふなる所には、菩薩なども皆かかることをして、天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かなれ。行ひまぎれ、罪得べきことかは。今宵聞きはべらばや」とすかせば、いとよし、と思ひて、「いで、主殿のくそ、あづま取りて」と言ふにも、しはぶきは絶えず。人々は、見苦しと思へど、僧都をさへ、うらめしげにうれへて言ひ聞かすれば、いとほしくてまかせたり。取り寄せて、ただ今の笛の音をもたづねず、ただおのが心をやりて、あづまの調べを爪さはやかに調ぶ。皆異ものは声やめつるを、これにのみめでたる、と思ひて、「たけふちちりちちり、たりたな」など、搔き返しはやりかに弾きたる言葉ども、わりなく古めきたり。「いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ」とほむれば、耳ほのぼのしく、かたはらなる人

（中将）まことにおかしなことをお止め申し上げなさった僧都ですね
（中将は）
（中将）
（母尼）
（母尼）
（中将）

それにしても
いかにも弾きたいと思っている様子なので
こうした音楽をかなでて
好都合だ
お上手を言うと
和琴
僧都のことまで
恨みがましく泣き言を言って中将に訴えるので
気の毒で
咳は止まらない
を持っておいで
気にせず
今中将の吹いていた
自分の弾きたいように
したいようにさせている
[和琴を]
自分の和琴だけに感心している
器は黙ってしまったのを
急な調子で弾いているその文句は
当節ではあまり耳にせぬ歌をお弾きにな
どうしようもなく古めかしい
耳も遠くなっているので
りましたね

一 ここに大分前からいらっしゃるらしい姫君は。浮舟のこと。

二 全くのところ、このようなつまらぬ遊びごとなどなさらなくて。「もはら」は「専」の訓読語。この物語のほかの例は、僧侶ないしは男性の用語。

三 風に乗って聞えて来る中将の笛の音。月下に横笛を吹きながら帰る趣。

四 以下、妹尼あての中将の消息。

翌朝の中将からの歌

五 あれこれにつけ（亡き妻のこと、浮舟のことで）、心も千々に乱れましたので、はやばやとおいとまいたしました。

六 忘れることのできない亡き妻のことにつけ、また姫君のつれないお仕打ちにも、声をあげて泣かれることでした。「こと」に「琴」を響かせ、「笛竹」の縁語。「笛竹」は笛の歌語。自分の吹いた横笛をいうが、竹の縁で、次の「ふし」（節）の序。「ね」（音）は「笛竹」の縁語。

七 ますますどうしてよいか分らない思いの尼君は。

に問ひ聞きて、「今様の若き人は、（母尼）当世風の若い女は かうやうなることをぞ好まれざりける。ここに月ごろものしたまふめる姫君、（こうした音楽などには手をお出しでないそうな）（とてもお美しくてい容貌はいときよらにものしたまふめれど、もはら、かかるあだわざなどしたまはず、埋られるようだが）れてなむものしたまめる」と、（ひっそりと何もせずにおいでのようだ）（自分だけえらそうに人もなげに高笑いして話すの）われかしこにうちあざ笑ひて語るを、（妹尼）尼君などは、かたはらいたしとおぼす。（あまりのことにはらはらしていられる）これにすっかり興もさめて（中将が帰られる道すがらも）りたまふほども、山おろし吹きて、（尼君たちが）聞こえ来る笛の音、いとをかしう聞こえて、起き明かしたる翌朝、

昨夜は、かたがた心乱れはべりしかば、急ぎまかでではべりし。

忘られぬむかしのことも笛竹の

つらきふしにもねぞなかれける

（何とか多少ともお分り下さるほどにお言い聞かせ下さいますように）なほすこしおぼし知るばかり教へなさせたまへ。（耐えられることでしたら）忍ばれぬべくは、（このような好色がましいことまで）すきずきしきまでも、（何で申し上げましょう）何かは。

とあるを、いとどわびたるは、涙とどめがたげなるけしきにて、書きたまふ。

妹尼の返歌

八 あなたの笛の音に亡き娘のことも恋しく思い出されて、お帰りの時にも涙に袖の濡れたことでございました。「こと」に「琴」を響かす。

九 母尼のこと。先に「もはら、かかるあだわざなどしたまはず、埋れてなむものしたまふめる」と中将に語ったこと。

一〇 そのまま下に置かれたことだろう。草子地。いつまでも手に取って見る気はしなかったろう、の意。

浮舟、なお出家を願う

一一 荻の葉に秋風が吹き過ぎるにも劣らぬほどしげしげと中将から便りがあるのも。以下、浮舟の心。「秋風の吹くにつけても訪はぬかな荻の葉ならば音はしてまし」（『後撰集』巻十二恋四、平かねきがやうやうかれがたになりにければつかはしける　中務）

一二 思い知った折々のことも、少しずつ思い出されるので。匂宮とのことで懲りたという気持。

一三 どうか、こうした筋合いのこと（色恋のこと）をあの方にも諦めさせるような姿に、早く私をなさって下さい。出家を望む旨を口にする。

一四 若い女らしくはなやかなところも格別なく、もともと陰にこもった性格なのだろう。

一五 ほかの総ての欠点は大目に見て。

笛の音にむかしのことも偲ばれて
帰りしほども袖ぞ濡れにし

（不思議に）あやしく、もの思ひ知らぬにやとまで見はべるありさまは、老人の問はず語りに聞こしめしけむかし。

（ものの情けも分らないのかとまで思われます）とあり。（色よい返事でもないのを）めづらしからぬも見所なきこちして、一〇うち置かれけむかし。

荻の葉におとらぬほどにおとづれわたる、いとむつかしくもあるかな、（男の心というものはむやみにいちずなものなのだ）人の心はあながちなるものなりけり、と見知りにしをりも、やうやう思ひ出づるままに、（浮舟）「なほかかる筋のこと、人にも思ひ放たすべきさまに、疾くなしたまひてよ」とて、経習ひて読みたまふ。心のうちにも念じたまへり。（仏にお祈りなさる）かくよろづにつけて世の中を思ひ捨つれば、若き人とてをかしやかなることもことになく、結ぼほれたる本性なめり、と思ふ。容貌の見るかひありうつくしきに、（浮舟が）よろづの咎見ゆるして、明け暮れの見物にしたり。すこしうち笑ひ

（何ともわずらわしく思われることだ）

（浮舟が）このように何かにつけて世間のことには無関心なので

（妹尼は）ほれぼれするほどかわいらしいのに

たまふをりは、めづらしくめでたきものに思へり。

九月、妹尼、初瀬にお礼参り、浮舟、同行をことわる

九月になりて、この尼君（妹尼）、初瀬に詣づ。年ごろいと心細き身に、恋しき人の上も思ひやまれざりしを、かくあらぬ人（こうして別人とはとてもお思いになれない悲しみを紛らわせる人を手に入れたので）ともおぼえたまはぬなぐさめを得たれば、観音の御験（お礼参りといった積りで）うれしとて、かへり申しだちて、詣でたまふなりけり。「いざたまへ。人（誰も知る人はありますまい）やは知らむとする。同じ仏（同じ仏様でも）なれど、さやうの所（同行をすすめるけれども）に行ひたるなむ、験ありてよき例多かる」と言ひて、そそのかしたつれど、昔、母君、乳母などの、かやうに言ひ知らせつつ（言い聞かせては）、たびたび（度々自分をお参りさせたけれども）詣でさせしを、かひなきにこそあめれ、命さへ心にかなはず（死ぬことも思うにまかせず）、たぐひなきいみじきめを見るは、といと心憂く思われる上に（この上もない悲しい目を見るからには）きうちにも、知らぬ人に具して、さる道のありきをしたらむよと、何かこわいような気持がする）そらおそろしくおぼゆ。心ことはきさまには言ひもなさで、「ここちいつもとても悪うございますので）のいとあしくのみはべれば、さやうならむ道のほどにもいかがなど、（そのような遠い旅の道中でもどうなりますことやらなどと）気おくれいたします）つつましくなむ」とのたまふ。物懼（強情に同行を拒むような言い方はしないで）はさもしたまふべき人ぞかし、と思ひて、しひても誘はず。

（浮舟）気分が

一 長年とても心細い暮しをして来た身の上で、恋しい亡き娘のことも忘れられなかったのだが。以下、長谷寺参詣を思い立った動機を説明する。

二 初瀬の観音の御霊験をまことにありがたいことと思って。

三 あのような尊いお寺で勤行をすると、霊験があってしあわせになる人も多いのです。玉鬘の巻にも「仏の御なかには、初瀬なむ、日の本のうちには、あらたなる験あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあんなり」（三巻二九七頁）と豊後の介が言って、玉鬘は自身初瀬に参籠している。

四 以下、浮舟の思い。

五 知らない人と一緒に、そんな遠い道中の旅をしたらどうなることかと。妹尼との同行に迷惑を感ずる気持。

六 そんなふうに（旅を）こわがりなさるのももっともなことだ。宇治で魔性のものにさらわれた経験のある人だから、という気持。

七 こうして頼りなくこの世に生きている私にとって初瀬には情けない思い出しかなく、（初瀬の）古川のほとりに立っている二本の杉を再び尋ねて行く気にはなれません。「世に経る」を「古川」に言い掛ける。「瀬」は川の縁語。「初瀬川古川の辺に二本ある杉年を経てまたもあひ見む二本ある杉」（『古今集』巻十九雑体、旋頭歌、題しらず、読人しらず）によって詠む。

八 一九四頁注二参照。

九 二本（の杉）とおっしゃるのは、もう一度お逢い申したいとお思いのお方があるのでしょう。引歌の「またもあひ見む」によって言う。

一〇 浮舟はどきっとして。薫のことがひそかに念頭にあった趣（二二二頁参照）。

一一 あなたに昔どんな事情があったのか存じませんが、私はただあなたを亡くなった娘のように思っております。

一二 妹尼は小人数の微行という積りだったが、仕える尼君たちが皆同行を願うので。

一三 一九三頁注一八以来見える人物。

一四 左衛門という呼び名で仕えている年輩の女房。ここに初出。

一五 女の童。

一六 何とも情けない身の上と思いながらも、もう仕方がないと、頼りにしているたった一人の人（妹尼）がおいででないのは、心細い限りだと。

浮舟、つれづれに、少将の尼と碁を打つ

（浮舟）はかなくて世にふる川の憂き瀬には
たづねもゆかじ二本の杉

と手習にまじりたるを、尼君見つけて、「二本は、（妹尼）またもあひきこえむと思ひたまふ人あるべし」と、たはぶれごとを言ひあてたるに、胸つぶれて、面赤めたまへるも、いと愛敬づきうつくしげなり。

（妹尼）ふる川の杉のもとだち知らねども
過ぎにし人によそへてぞ見る

（別段のこともない平凡な返歌を）ことなることなきいらへを口疾く言ふ。（冗談を言ったのが的を射ているので）忍びて、と言へど、（愛らしくていじらしい風情だ）皆人慕ひつつ、ここには（小野）人少なにておはせむを心苦しがりて、（浮舟が小人数で留守居なさるのを気の毒がって）心ばせある少将の尼、左衛門とてあるおとなしき人、（気の利いた）童ばかりぞとどめたりける。

（出かけたのを［浮舟は］ぼんやり見送って）皆出で立ちぬるをながめ出でて、あさましきことを思ひながらも、今はいかがはせむと、たのもし人に思ふ人一人ものしたまはぬは、（とても所在ない思いでいると）心細くもあるかなと、いとつれづれなるに、中将の御文あり。（少将）「御

一 浮舟は、することもなく、今までのこと、これからのことを思ってふさぎこんでいらっしゃる。

二 自分の方が強いだろうと思って、浮舟に先手でお打たせ申してみると。少将の尼が白、浮舟が黒。

三 今度は先手後手を取りかえて打つ。

四 横川の僧都。

五 鼻高々と碁聖大徳を気取って、進んで打つというわけではありませんが。以下、僧都の言葉。碁聖大徳は、「備前掾橘良利、肥前国藤津郡大村人也。出家名二寛運一、為二亭子院殿上法師一。亭子法皇山ぶみし給ふ時御ともしけるよし大和物語にのせ侍り。碁の上手なるによりて碁聖といへり。延喜十三年五月三日碁聖奉レ勅作二碁式一献レ之云々」（『花鳥余情』）。『大和物語』『大鏡』『今昔物語集』『古事談』『古今著聞集』などに見える。

六 三番勝負で二番負けたという意。

七 碁聖大徳の碁よりはお強いに違いない。間接に、僧都よりはお強いだろう、の意。

八 尼削ぎで、簡素に垂れた額髪（頬に垂れた前髪）。

九 やっかいなことに手を出してしまったことだ。対人関係の総てをうとましく思う気持。

一〇 せっかくのお若さなのに。

覧ぜよ」と言へど、聞きも入れたまはず。〔浮舟は〕いつもより一層人少なでいとど人も見えず、つれづれと来し方行く先を思ひ屈したまふ。「苦しきまでもながめさせたまふかな。〔少将〕はたの私どももつらいほど思い沈んでいられますね〔浮舟〕とても下手だったのですが御碁を打たせたまへ」と言ふ。「いとあやしくこそはありしか」とはのたまへど、打ってみようとお思いのようなので人をやたむとおぼしたれば、盤取りにやりて、われはと思ひて先せさせたてまつりたるに、いとこよなければ、また手直して打つ。〔少将〕「尼上疾く帰らせたまはなむ。この御碁見せたてまつらむ。〔妹尼の〕かの御碁ぞいと強かりし。僧都の君、はやうより〔以前から〕いみじう好ませたまひて、〔碁を〕けしうはあらずとおぼしたりしを、いと碁聖大徳になりて、〔妹尼に〕挑戦なさったところ〔あなたの〕さし出ててこそ打たざらめ、御碁には負けじかし、と聞こえたまひしに、つひに僧都なむ二つ負けたまひし。碁聖が碁にはまさらせたまふべきなめり。〔面白がるので〕あないみじ」と興ずれば、さだすぎたる尼額の見つかぬに、〔見苦しい姿で〕もの好みするに、〔碁などに興ずるので〕むつかしきこともしそめてけるかな、と思ひて、〔気分が悪いと言って横になってしまわれた〕ここちあしとて臥したまひぬ。〔少将〕「時時は陽気に振舞っておいでなさいませ時はればれしくもてなしておはしませ。〔ひどく沈み込ん〕あたら御身を、いみじく沈

一一 私には秋の夕のもの悲しさも格別分っているわけではないけれど、物思いに沈む袖に（いつか）涙の露が乱れ落ちることです。

一二 前に「中将の御文あり」とあった。

一三 まあいやな、これは何としたことか。浮舟の思い。

その夜、月明に中将の訪れ

一四（こんな秋の夜更け、遠い道をおいで下さった）中将様のご厚志のほども、ひとしお身にしみて思われる折節ではございませんでしょうか。

一五（お言葉を聞くだけで）もう何か深い仲になるかのようにお思いなのですね。「若き御どちもの聞こえたまはむは、ふとしもしみつくべくもあらぬを」（七巻東屋三三六頁）

一六（手引きでもしはしないかと）とても不安な気持になる。

一七 昼間の文の使いが、浮舟がお一人でいるといったことを聞き出していたのであろう。

一八 こうしたさびしい場所柄なればこそ、ものに感ずる心も深まるものですのに。

だご様子でおいでなさいますのが何とも残念で
みてもてなさせたまふこそくちをしく、玉に瑕あらむここちしはべれ」と言ふ。夕暮の風の音もあはれなるに、〔浮舟は〕思ひ出づること多くて、

（浮舟）心には秋のゆふべをわかねども
ながむる袖に露ぞみだるる

月さし出でてをかしきほどに、昼文ありつる中将おはしたり。あなうたて、こはなぞ、とおぼえたまへば、奥深く入りたまふを、

（少将）ほんとにあんまりなさりようです
「さもあまりにもおはしますかな。御心ざしのほども、あはれまさるをりにこそはべるめれ。ほのかにも、〔中将の〕聞こえたまはむことも聞かせたまへ。しみつかむことのやうにおぼしめしたるこそ」など言ふに、いとうしろめたくおぼゆ。おはせぬよしを言へど、昼の使の、一所など問ひ聞きたるなるべし、いと言多く怨みて、〔中将は〕「御声も聞きはべらじ。ただ気近くて聞こえむことを、聞きにくしともおぼしことわれ」と、よろづに言ひわびて、〔中将〕「いと心憂く。所につけてこそ、もののあはれもまされ、あまりかかるは」などあはめつつ、

ちらりとでも　申し上げなさるお言葉に耳をお傾けなさいませ　浮舟ご不在の旨を　お側近くで申し上げることを　聞くに堪えないとも何とでもご判断下さい　何と情けない　お返事もいりません　あれこれ説得に困ったあげく　なじりながら　これではあんまりです

一　山里の秋の夜更けの情趣も、もの思う人であるなら、よくお分りのはずですのに。

二　うまく取りなしてさし上げられる人もおりません。代って返歌の詠めるような者もいない、と言う。

三　このままでは、いかにも常識にはずれるようでございましょう。

四　情けない身の上だということも分らずに暮している私ですのに、その私を、もの思う人だと、人は思うのでした。

五　ことさら返歌するというのでもなく（ひとりごとのように）口にするのを、聞いてお伝え申すと。

六　中将との応対に当っている少将の尼や左衛門を。

七　浮舟に中将との応対をすすめるべく、奥に入って見ると。

八　それに、大方にお見受けするところなども、ものの情趣の分らぬお人ではないらしいのに。

中将、歌を詠みかけ、浮舟、母尼の部屋に入る

（中将）「山里の秋の夜ふかきあはれをも
もの思ふ人は思ひこそ知れ

（自然にお気持もこちらと通ずるはずですのに）おのづから御心も通ひぬべきを」などあれば、（少将）妹尼ご不在で「尼君おはせで、ま[二]ぎらはしきこゆべき人もはべらず、[三]いと世づかぬやうならむ」と責[七]むれば、

（浮舟）憂き[四]ものと思ひも知らですぐす身を
もの思ふ人と人は知りけり

[五]わざと言ふともなきを、聞きて伝へきこゆれば、（ひどく心を動かされて）いとあはれと思ひて、（中将）「なほただいささか出でたまへ、（どうかほんの少しでも端近にお出ましを）と聞こえ動かせ」と、[六]この人（とおすすめして下さい）人をわりなきまで恨みたまふ。（困り果てるほどに）「あやしきまで、（少将）不思議なほどつれなくぞ見えたまふや」とて、[七]入りて見れば、（気のない様子でいらっしゃることです）例はかりそめにもさしのぞきたまはぬ老人の（母尼）御方に入りたまひにけり。（[浮舟は]ふだんはかりそめにも顔をお出しにならない）あさましく思ひて、（あきれる思いで）かくなむ、（これこれ）と聞こゆれば、（中将）「かかる所にながめたまふらむ心のうちのあはれに、（このような所で物思いに沈んでいられるご心中を思えばおいたわしいし）おほかたのありさまなども、（もう全く何のわきまえ）情なかるまじき人の、いとあまり思ひ[八]

九 そうした態度をおとりなのも、何か（男に）お懲りになったせいなのですか。

一〇 どうか、どんな事情でこの世に望みを失って、（そして）ここにこのままいつまでおいでのお人なのです（お聞かせ下さい）。

一一 （少将たちは）くわしいことは、どうして話して聞かせられよう。自分たちの立場を考えてのこと。

一二 （妹尼の）お世話申し上げなさる筋合いのお方ながら。遠い縁辺といった趣に言いなす。

一三 ふだん話に聞いて、とても気味悪くばかり思っている母尼のそば近くにうつぶせに寝て。

一四 （母尼は）宵のうちから眠たがる年寄りの性とて。

一五 （母尼に）似たような年寄りの尼たち。「すがふ」は、次ぐ、似るの意。

一六 老尼たちを鬼かと恐ろしく思う。地獄草紙に老婆の姿をした鬼が見える（図録四参照）。

一七 「一つ橋」は、丸木橋。この話、明らかでない。進退きわまった気持をいうか。「本縁たしかならず。心はただ、身を投げんとせし人の、行く道に一ばしのあやふきを見て道より帰りたるといふことあるべし」（『細流抄』）。「津の国の難波の浦の一つ橋君をし思へばあからめもせず」（『古今六帖』三、橋）

一八 浮舟に仕える女の童。（一九五頁注一五参照）

一九 何とも頼りにならない付き人であることよ。草子地。

浮舟、老尼たちにおびえて夜を過す

もない人よりもまさってつれないおあしらいなのは心外です

知らぬ人よりもけにもてなしたまふめることそ。それも物懲したまへるか。

一〇 なほ、いかなるさまに世を恨みて、いつまでおはすべき人ぞ」など、

様子を尋ねて

ありさま問ひて、いとゆかしげにのみおぼいたれど、こ

いかにももっと事情を知りたげなご様子だけれども

（少将）一一

まかなることは、いかでかは言ひ聞かせむ。ただ、「知りきこえた

今まではずっと疎遠なようなことでお過しでいらっしゃったのですが

まふべき人の、年ごろはうとうとしきやうにて過ぐしたまひしを、

初瀬詣ででたまたまご一緒になって　お迎え申し上げなさったのです

初瀬に詣であひたまひて、尋ねきこえたまへる」とぞ言ふ。

浮舟

姫君は、一三いとむつかしとのみ聞く老人のあたりにうつぶし臥して、

言うに言われぬ恐ろしく大きないびきをかきかきいびきをかいている

寝も寝られず。一四宵まどひは、えもいはずおどろおどろしきいびきしつつ、前にも、一五うちすがひたる尼ども二人して、おとらじといびきをかはせたり。いと恐ろしく、今宵この人々にや食はれなむ、と思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは、一七一つ橋あやふがりて帰り来たりけむ者のやうに、わびしくおぼゆ。一八こもき、供に率ておはしつれど、色めきて、このめづらしき男の艶だちゐたまへる方に帰り去にけり。今や来る今や来る、と待ちゐたまへれど、一九いとはかなき

二人で　負けじと一緒に大きないびき

生来の気弱さから　こわがって

心細い思いでいる　連れておいで

だったが　色気づいて　たまさかの男の客である中将が気取って坐っていられる

もう帰るか　［浮舟は］

一 本当に情合いもなく、引っ込み思案でいらっしゃることよ。せっかくのご器量なのに。少将や左衛門たちの不満の言葉。

二 ひどく咳きこんでむせて。「おぼほれ」は、溺れ。

三 頭は白髪で真白なのに、黒いものをかぶって。黒い単か何かをかぶっているのであろう。

四 鼬とかいう動物がそんなしぐさをするそうだが。「鼬のまかげさすといふことなり」（『河海抄』）。鼬は疑い深い性質だと考えられていた（七巻東屋三二二頁注六、七参照）。

五 鬼が自分をさらって来たであろう時のことは。以下、浮舟の思い。宇治でのことを思い出す趣（一八九頁参照）。

六 あられもないみじめな有様で生き返り、人並みの身体になって。ふたたび、浮舟の思い。

七 もう一度昔のさまざまないやなことを思い出して心も乱れ。中将の出現によって、薫や匂宮とのことを改めて思ったこと。

八 地獄でこれよりも恐ろしい姿の鬼たちに囲まれて責めさいなまれていたことだろう。鬼かとも見える大尼君からの連想で、前に「いと恐ろしく、今宵この人人にや食はれなむ、と思ふ」とあったのと首尾照応する。

たのもし人なりや。中将、言ひわづらひて帰りにければ、「いと情なく、埋れてもおはしますかな。あたら御容貌を」などそしりて、皆一所に寝ぬ。

夜中ばかりにやなりぬらむ、と思ふほどに、尼君しはぶきおぼほれて起きにたり。火影に、頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて、この君の臥したまへるをあやしがりて、鼬とかいふなるものがさるわざする、額に手をあてて、「あやし。これは誰ぞ」と、執念げなる声にて見おこせたる、さらに、ただ今食ひてむとする、とぞおぼゆる。鬼の取りもて来けむほどは、ものおぼえざりければ、なかなか心やすし、いかさまにせむ、とおぼゆるむつかしさにも、いみじきさまにて生き返り、人になりて、またありしいろいろの憂きことを思ひ乱れ、むつかしとも恐ろしとも、ものを思ふよ、死なましかば、これよりも恐ろしげなる者のなかにこそはあらましか、と思ひやらる。

言い寄るのに根負けして　母尼　浮舟　不思議がって　手をかざして　（母尼）　しつこそうな声でこちらを見ているのは　ただもう　すぐにも取って食おうとするのだ　何も分らなかったので　気がする　今はどうしたらよかろう　という追いつめられた気持につけても　って不安もなかった　どうしたらよいかとも恐ろしいとも　心を痛めることよ　死んでいたなら　想像される

浮舟、寝られぬままに来し方を思う

九 何と情けない身の上か。以下、浮舟の回顧。
一〇 父親であられたというお方。八の宮のこと。
一一 遙か遠い東国を何度も長の年月行き来して。養父の任地に従い、陸奥に下り、上京し、また常陸に下ったこと（七巻宿木二三二頁参照）。
一二 二条の院の中の君のこと。
一三 不本意なことでご縁が切れてそのままになり。匂宮とのことで、母により三条の小家に移されたこと（七巻東屋三〇八頁以下参照）。
一四 自分をしかるべく処遇しようと思い決めていらっしゃったお方（薫）のお蔭で。北の方ではないにしても妻の一人に、という薫の思惑をいう。
一五 橘の小島の常磐木の色を引合いにして変らぬ愛をお誓いになったことを。（浮舟五三頁参照）
一六 はじめから、さして深い思いではなくとも、いつまでも気長に愛して下さるふうだったお人は。薫のこと。「夏衣薄きながらぞ頼まるる一重なるしも身に近ければ」（『拾遺集』巻十三恋三、題しらず、読人しらず）

昔よりのことを、まどろまれぬままに（まんじりともできないままに）、常よりも思ひ続くるに（ふだんよりもいろいろ考えるのに）、いと心憂く、親と聞こえけむ人の御容貌も見たてまつらず、はるかなる東をかへるがへる年月をゆきて、たまさかに尋ね寄りて（たまたまお近づきになって）、うれしたのもしと思ひきこえし姉妹の御あたりも、思はずにて絶え過ぎ、さるかたに思ひ定めたまへりし人につけて（ようやくこの身の不仕合せも晴々しくなろうかという瀬戸際に）、やうやう身の憂さをもなぐさめつべききはめに、あさましくもてそこなひたる身を思ひてゆけば、宮を（匂宮）、すこしもあはれと思ひきこえけむ（少しでもいとしくお思い申し上げたような料簡がいかにも不届きなのだと思うと）心ぞいとけしからぬ、ただこの人の御ゆかりにさすらへぬるぞ、と思へば、小島の色をためしに契りたまひしを、などてをかしと思ひきこえけむ、とこよなく飽きにたるここちす（このお方とのご縁ゆえにみじめな境涯に落ちたのだと嫌気がさした気がする）。はじめより、薄きながらものどやかにものしたまひし人は、このをりかのをりなど（何かの折のことなど）、思ひ出づるぞこよなかりける。かくてこそありけれ、と聞きつけられたてまつらむは（〔薫に〕聞きつけられ申した時の身のすくむようなこんな所に生きていたのだと思い出すと比べものにもならないのだった）、ほかの誰よりも深いものがあろうづかしさは、人よりまさりぬべし、さすがに、この世には、ありし（それでも昔ながら生きていたら）御さまを、よそながらだにいつかは見むずる（よそながらでもいつかは見ることができようかの薫のお姿を）、とうち思ふ（ふと思う）。なほわ（やはり見

一 鶏鳴で魔の跳梁する夜の支配が終る。まだ暗い時刻である。次の「思ひ明かして」のところで明るい朝を迎える。

二 まして母上のお声を聞いたのならどんなにうれしかろう。やさしかった母をなつかしむ思い。哀切である。「山鳥のほろほろと鳴く声聞けば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」（『玉葉集』巻十九釈教、山鳥の鳴くを聞きて　行基菩薩）

三 お供をしていつもの部屋に帰るはずの人。「こもき」のこと。迎えに来るはず、という趣。

四 前に「うちすがひたる尼ども二人」（二一九頁）とあった。

五 下働きふうの下臈の法師たち。小野に立ち寄ることを先触れにやって来た趣。

六 尋ねる様子に。「なれ」は推定。浮舟に聞えて来る趣。

七 今上の女一の宮。明石の中宮腹。匂宮の姉宮。

八 延暦寺の天台座主。

九 ご祈禱申し上げていられますが。

一〇 ご祈禱の効験が見えないということで。

一一 夕霧の子息。近衛の少将は正五位下相当。官は少将ながら四位に進められている。名門ゆえである。

一二 明石の中宮。

ようやく夜明ける

（ひとり心の中で思い直す）苦しい料簡だろの心や、（こんなことも思うまい）かくだに思はじ、など、心ひとつをかへさふ。

（やっとのことで）からうして鶏の鳴くを聞きて、（心からほっとする）いとうれし。母の御声をまして聞きたらむはいかならむ、と思ひ明かして、（気分もとてもよくない）ここちもいとあし。供にてわたるべき人もとみに（すぐに）来ねば、なほ臥したまへるに、いびきの人はいと疾く起きて、粥などむつかしきことどもをもてはやして、（見るのもうっとうしい朝の食膳をいそいそとすすめて）「御前に疾く（あなた早く召し上がれ）きこしめせ」など寄り来て言へど、（老い尼の給仕ではいかにも）まかなひもいと心（気が進まず）づきなく、うたて見知らぬここちして、（いやな見たこともないような気がして）（浮舟）「なやましくなむ」（気分が悪いので）と、ことなしびたまふを、（無理にすすめるのもほんとに気が利かない）しひて言ふもいとこちなし。

横川の僧都

下衆下衆しき法師ばらなどあまた来て、「僧都、今日下りさせたまふべし」（どうして急なことになりましょう）「などにはかには」（法師）と問ふなれば、「一品の宮の、御ものの（お煩いでいらせられますのを）けになやませたまひける、山の座主、御修法つかまつらせたまへど、（参上なさらなくては）なほ僧都参りたまはでは験なしとて、昨日二たびなむ召しはべりし。右大臣殿の四位の少将、昨夜夜ふけてなむ上りおはしまして、（夕霧）（再度お召しがありました）后の宮の御文などはべりければ、下りさせたまふなり」と、いとは

（山をお下りにとなくお断りになるのを）

一三 気のひけることだけれども。以下、浮舟の決心。進んで出家を願うのを遠慮する気持。
一四 さし出口をする（出家に反対する）人もあまりいなくてよい機会だ。妹尼たちが不在中なのをいう。
一五 戒。出家の守るべき戒律。先に五戒は受けたが（一九〇頁）、ここは、正式の出家の戒を受けるつもり。
一六 わけも分らずにただうなずく。母尼の老耄のさま。
一七 いつもの部屋にお帰りになって。
一八 先にも「御髪手づからけづりたまふ」（一九一頁）とあった。
一九 母君にもう一度このままの姿を見せないでしまうことが、我から望んだこととはいえ、とても悲しいことだ。以下、浮舟の心。文末は、いつか地の文になる。
二〇 六尺ほどあるその髪の裾など（ふっさりとして）、愛らしいのだった。「うつくし」は、愛撫したい感じ。自らの髪をいとおしむ気持。
二一 「たらちめはかかれとてしもむばたまのわが黒髪を撫でずやありけむ」（『後撰集』巻十七雑三、はじめて頭おろしはべりける時ものに書きつけはべりける遍昭）
二二 寝殿の南廂。客を請じる。

日暮れ、僧都、下山

面目ありげに吹聴する
なやかに言ひなす。一三はづかしくとも、〔僧都に〕会ひて、尼になさって下さいませ尼になしたまひてよ、ともお願いしようとも言はむ、一四さかしら人少なくてよきをりにこそ、と思へば、起きて、「（浮舟）ここずっととても気分がすぐれずにおりますので ここちのいとあしくのみはべるを、僧都の下りさせたまへらこちらにお下りになりましたら一五むに、忌むこと受けはべらむとなむ思ひはべるを、お受けしたいとさやうに聞こえ〔僧都に〕おとりなし下さいたまへ」とかたらひたまへば、一六ほけほけしくうなづく。

一七例の方におはして、一八髪は尼君のみけづりたまふを、異人に手触れ妹尼だけがさせむもうたておぼゆるに、手づからはた、えせぬことなれば、いやだと思われるけれども自分自身ではとてもできないことなのでただすこし解き下して、一九親に今一度かうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ、いたくわづらひしけにや、髪ひどく病んだせいかもすこし落ち細りにたるここちすれど、何ばかりもおとろへず、いどれほどもと多くて、二〇六尺ばかりなる末などぞ、うつくしかりける。筋なども、毛筋とてもつやつやと愛らしい感じだいとこまかにうつくしげなり。（浮舟）二一「かかれとてしも」と、ひとりごちぬたまへり。

暮れがたに、僧都ものしたまへり。二二南面払ひしつらひて、まろきれいに整えて丸い頭お立ち寄りになった

一 いかがですか、ここのところは。僧都のご機嫌伺い。僧都が浮舟の修法のために下山したのは六月（一八五頁）、今は九月である。
二 妹尼をこう呼んでいると見える。東の対を居室としているのであろう。
三 あの、こちらにおいでだった方は。浮舟のこと。

浮舟、僧都に出家を懇願

四 浮舟の部屋。妹尼と共にいた東の対であろう。
五 思いかけぬことでお目にかかるようになりましたのも。宇治の院以来のこと。「不意にて」は男性用語。
六 世を背いていらっしゃる人のお側で。母尼や妹尼と一緒に、の意。

なる頭つきども、行きちがひ騒ぎたるも、例に変りていと恐ろしきここちす。母の御方に参りたまひて、「いかにぞ、月ごろは」など言ふ。「東の御方は物詣したまひにきとか。このおはせし人は、なほものしたまふや」など問ひたまふ。「しか、ここにとまりてなむ。ここちあしとこそものしたまひて、忌むこと受けたてまつらむ、とのたまひつる」と語る。

立ちてこなたにいまして、「ここにやおはします」とて、几帳のもとについゐたまへば、つつましけれど、ゐざり寄りて、いらへしたまふ。「不意にて見たてまつりそめてしも、さるべき昔の契りありけるにこそ、と思うたまへて、御祈りなども、ねむごろにつかうまつりしを、法師は、そのこととなくて、御文聞こえうけたまはらむも便なければ、自然になむおろかなるやうになりはべりぬる。いとあやしきさまに、世を背きたまへる人の御あたり、いかでおはしますらむ」とのたまふ。「世の中にはべらじと思ひ立ちはべりし身

七 あれこれと手をお尽し下さいましたご厚志のほどは。わざわざ下山までして救ってくれた僧都の厚意に感謝の意を表わす。

八 それでも、どうしてもやはり普通の人のようにはいかず、所詮はこの世に生きてはいられますまいと思われますので。

九 世間並みの女としてはこの世に永らえられそうもない身の上でございます。俗のかたちでは生きてはいけない、と言う。

一〇 女のお身の上というものは、まことに不都合なものでございます。将来、不慮の間違いでもあってはと危ぶむ。

一一 母の中将の君が、中の君に「尼になして、深き山にやしすゑて、……」（七巻東屋二九七頁）と語ったことがある。

一二 ぜひにもどうか（お願い申し上げます）。出家を懇願する。

の、いとあやしくて今まではべるを、（どうしたことか今まで生きておりますことを）心憂し（情けないと思いはいたしますものの）と思ひはべるものから、よろづにものせさせたまひける御心ばへをなむ、（何ごとにも至りませぬ私と）いふかひなきここちにも、（身にしみてありがたく存じますが）思うたまへ知らるるを、（尼になさって下さいませ）なほ世づかずのみ、つひにえとまるまじく思うたまへらるるを、（この世に生きては）尼になさせたまひてよ。世の中にはべるとも、（おりましても）例の人にてながらふべくもはべらぬ身になむ」と聞こえたまふ。「（僧都）まだいと行く先遠げなる御ほどに、（先の長いお若い身空ですのに）いかでかひたみちに（どうしていちずにそのような）しかはおぼし立たむ。（ご決心がなされましょう）かへりて罪あることなり。（かえって罪を作ることになります）思ひ立ちて、心を（仏道に）起こしたまふほどは強くおぼせど、（発心なさる時はかたい決心でいらっしゃっても）年月経れば、女の御身といふものの、いとたいだいしきものになむ」とのたまへば、「（浮舟）幼くはべりしほどより、ものをのみ思ふべきありさまにて、親なども、尼になし（何かと苦労ばかりいたさねばならない身の上で）（尼にして面倒を見ようか）てや見まし、などなむ思ひのたまひし。（などと思いもし言われたこともあります）まして、すこしもの思ひ知りはべりてのちは、（普通の俗のかたちを捨てて）例の人のさまならで、（ようになりましてからは）後の世をだに、（のち せめて後世の安楽を）と思ふ心深くはべりしを、亡くなるべきほどのやうやう近くなりはべるにや、（死ぬ時がだんだん近くなりましたせいでしょうか）ここちのいと弱くのみなりはべるを、（気持がとても心細くなってゆくばかりでございますので）なほいかで」とて、うち泣き（多少とも世間の事情が分る）

一 不思議なことだ、これほどの器量、容姿でありながら。以下、僧都の心中。

二 とりついていた物の怪もそんなことを言っていたようだ。「この人は、心と世を恨みたまひて、われいかで死なむ、といふことを、夜昼のたまひしにたよりを得て」（一八八頁）とあった。

三 （出家は）仏がそれはそれはおほめになることではあり。「三宝」は、仏宝、法宝、僧宝を言うが、ここは仏宝、すなわち仏のこと。

四 一七日の御修法と見える。

五 以前、とても気分がすぐれませんでした頃と同じような有様で。前に五戒を受けた時のことを言うのであろう。

浮舟、僧都の手によりついに出家

つつのたまふ。

一あやしく、かかる容貌ありさまを、などて身をいとはしく思ひは（どうしてわが身を厭わしく思うようになられたのであろう）じめたまひけむ、二もののけもさこそ言ふなりしか、と思ひあはする（思い合せてみると）に、さるやうこそあらめ、今までも生きたるべき人かは、あしきもの（何か深い仔細があるのだろう）の見つけそめたるに、いと恐ろしくあやふきことなり、とおぼして、「とまれかくまれ、（今まで生きているはずもなかった人なのだ）おぼし立ちてのたまふを、三宝のいとかしこくほめたまふことなり、法師にて聞こえ返すべきことならず。御忌むことはいとやすく授けたてまつるべきを、急なることにてまかでたれば、今宵かの宮に参るべくはべり。明日よりや御修法はじまるべくはべらむ。七日果ててまかでむに、つかまつらむ」とのたまへば、かの尼君おはしなば、かならずさまたげてむ、といとくちをしくて、「みだりごこちのあしかりしほどに似たるやうにて、いと苦しくはべれば、重くならば、忌むことかひなくやはべらむ。なほ今日はうれしきをりとこそ思うたまへつれ」とて、いみじく泣きた

（悪い霊が目を付けるようになったのだから）（このままでは）（僧都）事情はともあれ（ご本人が決心しておっしゃるのに）（僧侶の身として反対申し上げるべきことではない）（火急の用件で下山してまいりましたので）（一品の宮 参上致さねばなりませぬ）（始まることになりましょう）（終って退出して来た時に）（お授け申しましょう）（帰って来られたら）（止めるに違いない）（とても残念で）（浮舟）（戒を受けても無駄になるかもしれません）（やはり）（願ってもない機会と思っておりましたのに）

六 修行一途の（純粋な）僧都の気持として。「聖」は、元来修行に専念する私度僧のこと。

七 年をとるにつれて。「おふる」は底本のまま。このままでは「生ふる」であるが、「老ゆる」であろうか。河内本「ふ（経）る」。

八 同じことなら。やや落着かない。河内本、別本「ことは」なし。

九 鋏を取り出して、櫛の筥の蓋を（几帳の外に）さし出したので。切った髪をこれに受けるため。「櫛の筥」は、櫛その他の化粧道具を入れる箱（三巻図録一一参照）。

一〇 最初（宇治の院で）お見つけ申した僧が、二人ともお供して来ていたので。（一七五頁参照）

一一 なるほどあのような重態の有様だったこのお人のことだから、俗の姿のままでは、この世でお暮しになるのもよくはあるまいと。宇治の院でのことを思い出し、僧都と同じように悪霊の祟りを恐れる。

一二 僧都の一行中にいた趣。

一三 自分の部屋。

一四 僧都一行の中の自分の知り人の相手をするということで。

まへば、聖心にいといとほしく思ひて、「夜やふけはべりぬらむ。山より下りはべること、昔はことども思うたまへられざりしを、年のおふるままには、堪へがたくはべりければ、うち休みて内裏には参らむ、と思ひはべるを、しかおぼしいそぐなれば、ことは今日つかうまつりてむ」とのたまふに、いとうれしくなりぬ。鋏取りて、櫛の筥の蓋さし出でたれば、「いづら、大徳たち、ここに」と呼ぶ。はじめ見つけたてまつりし、二人ながら供にありければ、呼び入れて、「御髪おろしたてまつれ」と言ふ。げにいみじかりし人の御ありさまなれば、うつし人にては、世におはせむもうたてこそあらめと、この阿闍梨もことわりに思ふに、几帳の帷のほころびより、御髪をかき出だしたまへるが、いとあたらしくをかしげなるになむ、しばし鋏をもてやすらひける。

かかるほど、少将の尼は、兄の阿闍梨の来たるに会ひて、下にぬたり。左衛門は、この私の知りたる人にあへしらふとて、かかる所

（僧都）よ もう夜もふけたでしょう
別に何とも思われませんでしたが
とてもつらいことですので
（ここで）休みして 宮中
そのようにお急ぎのようですから
（浮舟は）ほっと安堵した
てさし上げましょう
（僧都）さあ
こちらへ
閉じ目の間から
持ったままためらうのだった
手でつかねて外にお出しなのが
いかにも切るには惜しく美しい黒髪なので
こうしている間
こうしたさび

一 こもき一人で。女の童のこもきだけが浮舟の側にいた趣。

二 僧都がご自分の衣や袈裟などを。急のこととて代りに用いる。

三 出家者が、出家に先立って氏神、国王、父母などを礼拝する儀がまずある。

四 妹尼。

五 これほどまでに出家の儀式に手をつけたのを、はたからとやかく言うのもおもしろくないと思って。僧都の気持。

六 前の礼拝に続いて、師僧がまず唱え、出家者に唱えさせる偈。「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者」。三界（衆生の輪廻する欲界、色界、無色界）に流転して、恩愛は断つことができないが、恩を棄てて無為に入るのが、真実の報恩である、の意。逸経『清信士度人経』の偈で、『諸経要集』『法苑珠林』に引く。

七 自分はもう恩愛も断ちきってしまったのに。入水を決意したこと。

八 額髪。

九 これほどのご器量を尼削ぎになさって。

一〇 剃髪の後、師僧は三帰（仏、法、僧の三宝に帰依する）の功徳を説いて、十善戒を授ける。不殺生、不偸盗、不淫欲、不妄語、不沽酒、不説四衆過、不自讃毀他、不慳貪、不瞋恚、不誹謗三宝の十戒。

（しい場所柄では）（それぞれに）（親しくしている人々が久しぶりに山から下りて来たので）につけては、皆とりどりに、心寄せの人々めづらしくて出で来たるに、（簡単なもてなしなどするのを）はかなきことしける、（あれこれ指図などしていた間に）見入れなどしけるほどに、こもき一人して、（これとれしかじかです）かかることなむ、と少将の尼に告げたりければ、（あわててやって来て）まどひて来て見るに、（僧都）わが御上の衣、袈裟などを、（形ばかりでも整える気持で）ことさらばかりとて着せたてまつりて、「親の御方拝みたてまつりたまへ」と言ふに、（どちらを向いてよいか分らないので）いづかた（浮舟は）とも知らぬほどなむ、（少将）ま（ついこらえきれなさらず）え忍びあへたまはで泣きたまひにける。「あ（何ということを）なあさましや。（どうしてこんな軽はずみなことをなさいますのです）などかくあふなきわざはせさせたまふ。上（四）（お帰りになら）帰りおはしましては、（どのようなお叱りを仰せになりますでしょう）いかなることをのたまはせむ」と言へど、（五）かばかりにしそめつるを、言ひ乱るもものしと思ひて、僧都いさめたまへば、（たしなめなさるので）寄りてもえさまたげず。（近づいて止めることもできない）（浮舟）「流転三界中」（六）など言ふにも、（七）断ち果てて（さすがに悲しいのだった）しものを、と思ひ出づるも、さすがなりけり。（よく削ぎかねて）御髪もそぎわづらひて、（阿闍梨）「のどやかに、（あとでゆっくり）尼君たちの手でお整え下さい）尼君たちしてなほさせたまへ」と言ふ。（八）額は僧都ぞそぎたまふ。（僧都）「かかる御容貌やつしたまひて、（九）（後悔なさるな）悔いたまふな」など、（一〇）尊きことども説き聞かせたまふ。（すぐに許してもらえそうにもなく）とみにせさすべくもなく、

一一 僧都の一行は皆京に出立して、あとはひっそりとなった。
一二 少将や左衛門たち。

一三 それでも、今の気持としては気が休まってうれしく思われる。浮舟の心を直叙したもの。
一四 (これでもう)この世で普通に過さなくてはならないといったことは考えなくてもすむことになったのは。

出家の翌日、浮舟の述懐

一五 髪の裾が、急にばさばさに広がったような感じで。尼削ぎは、肩を過ぎたあたりで切る。
一六 しかも不揃いに削がれているのを。「しどけなく」は、乱雑にの意。前に「御髪もそぎわづらひて」云々とあった。

皆言ひ知らせたまへることを、うれしくもしつるかなと、これのみぞ生けるしるしありておぼえたまひける。

皆が反対して言い聞かせなさった出家のことを　しとげたことだと　生きているかいがあったという気がなさるのだった

一一 皆人々出でしづまりぬ。夜の風の音に、一二この人々は、「心細き御住ひも、しばしのことぞ、今いとめでたくなりたまひなむ、と頼みきこえつる御身を、かくしなさせたまひて、残り多かる御世の末を、いかにせさせたまはむとするぞ。老いおとろへたる人だに、今は限りと思ひ果てられて、いと悲しきわざにはべる」と言ひ知らすれど、一三なほただ今は心やすくうれし。世に一四経べきものとは思ひかけずなりぬるこそは、いとめでたきことなれと、胸のあきたるここちしたまひける。

しばらくの間のことだ　やがてすばらしい良縁にお恵まれになりましょう　とご期待申し上げていたお身の上を　こんなお姿にしておしまいになって　先の長いこれからのご生涯を　どうやってお過しになるお積りなのです　老いさらばえた年寄りでも　[出家すると]も　うこれきりという気持になって　とても悲しいことなのです　言い聞かせるけれども　胸の晴れ晴れしたような気がなさるのだ　ほんとにすばらしいことだと

翌朝は、さすがに人の許さぬことなれば、変りたらむさま見えむもいとはづかしく、髪のすその、にはかにおぼとれたるやうに、一六どけなくさへそがれたるを、むつかしきことども言はで、つくろはむ人もがなと、何ごとにつけてもつつましくて、暗うしなしておは

人の反対を押し切っての出家ゆえ　今までとは違った姿を見られるのもとても気がひけて　一五髪の裾　ぶつぶつ出家の小言など言わないで　整えてくれる　人はいないものかと　気兼ねされるので　[あたりを]

す。思ふことを人に言ひ続けむ言の葉は、もとよりだにはかばかしからぬ身を、まいてなつかしくことわるべき人さへなければ、ただ硯に向ひて、思ひあまるをりは、手習をのみ、たけきことにて書きつけたまふ。

（浮舟）「なきものに身をも人をも思ひつつ
捨ててし世をぞさらに捨てつる
今はかくて限りぞと思ひなりにし世の中を
限りぞと思ひなりにし世の中を
同じ筋のことを、とかく書きすさびゐたまへるに、中将の御文あり。ものさわがしくあきれたるここちしあへるほどにて、かかることなむ、と言ひてけり。いとあへなしと思ひて、かかる心の深くありける人なりければ、はかなきいらへをもしそめじと、思ひ離るる

（浮舟）

（浮舟）

委しく話す　もともとはきはき言えない性分なのに　ましてや親しくことを分けて話せる相手もいないことなので　胸に思いの余る時は　精一杯のこととして　今はもうこうして一切を終りにしたのだ　同じような気持の歌を　あれこれ気の向くままに書いていらっしゃると　と返事をしたのだった　〔中将は〕ひどく気落ちした思いで　これこれしかじかです　かりそめの返歌もはじめからすまいと　その気もなかっ

一　歌のすさび書きだけを。

二　この世にないものとわが身をも人をも思って、捨ててしまったこの世を、また改めて捨ててしまったことだ。入水を思い立ち、さらに今また出家したこと。

三　「人をも」は、一切の係累を断つ気持。それでもやはり、我と我から、大層悲しい思いでそれをご覧になる。なお断ち切れないものを自ら感じる趣。

四　もうおしまいだと思い決めてしまった世の中を、重ね重ね（駄目押しをするように）捨てて尼になったことだ。

五　少将や左衛門は、（浮舟の急の出家に）気も動転して考えも働かない状態で皆いる時とて。

六　こういう（出家の）気持を深く持った人だったので。以下、中将の思い。

七 何とも申し上げようもないご出家のことにつきましては。歌に続く語勢。

八 この世の迷いを離れて遠く悟りをお目指しであろうあなたに、私も遅れまいと心せかれることです。自分も出家したい、の意。「岸」は「彼岸」に対する「此岸」。「あま」に「海士」と「尼」を掛け、「乗り」に「法」を響かす。

九 心だけはこの憂き世の岸を離れておりますけれども、この先どうなるかも分らない頼りない身の上です。「あま」に「海士」と「尼」を掛ける。「浮木」は、水に漂う木。あるいは、いかだ。中将の歌の「あま舟」に応じ、わが身の寄るべなさを言ったもの。

なりけり（たのだ）、さてもあへなきわざかな（それにしてもあっけないことだ）、いとをかしく見えし髪のほどを、たしかに見せよと（もっとよく見せてくれと）、一夜（ひとよ）もかたらひしかば（先夜も頼んでみたところよい折がありましたらその時に）、さるべからむをり（とても残念に思われて）に、と言ひしものを、といとくちをしくて、たち返り（折り返し）、「聞こえむかたなきは、

（中将）八
岸遠く漕ぎ離るらむあま舟（ぶね）に
乗りおくれじといそがるるかな」

（浮舟は）いつもに似ず手に取って例ならず取りて見たまふ。（出家の感慨にひたっている折とて）もののあはれなるをりに、今はと思ふも（これで終りだと思うのも胸にしみる思いだが）あはれなるものから、いかがおぼさるらむ（どうしたお気持からか）、いとはかなきものの端（はし）に（ほんのちょっとした紙の）、

（浮舟）九
心こそ憂き世の岸を離るれど
行方（ゆくへ）も知らぬあまの浮木（うきき）を

と、例の、手習（てならひ）にしたまへるを、包みてたてまつる（中将に）。「書き写してだにこそ（浮舟）（せめて書き写してさし上げて）」とのたまへど、（少将）「なかなか書きそこなひはべりなむ（かえって書き損じましょうから）」とてやりつ。めづらしきにも（初めて見るにつけても）、言ふかたなく悲しくなむおぼえける（言いようもなく）。（中将は）

一 初瀬詣でに出かけた妹尼。

二 初瀬の観音にもお祈り申し上げて来ましたのに。

三 （赤の他人でさえこうなのだから、ましてや）実の母君が、（自分が行方知れずになったあと、入水したものと思って）そのまま亡骸も行方知れずと悲しみにくれられたであろう時のことを想像すると。

四 ほんとに考えのないことをして下すったお方です。浮舟の無謀としか思えない出家を悲しむ。

五 浮舟の尼としての衣裳。

六 濃いねずみ色。尼の衣裳の色。

七 貴婦人が表着の上に羽織る略礼装。

八 ほんとに思いもかけず、このさびしい山荘のうれしい光とも思って。

妹尼の落胆

物詣の人帰りたまひて、（悲しみ驚きなさることはこの上もない）思ひ騒ぎたまふこと限りなし。「かかる身にては（身としては）、すすめきこえむこそは、（むしろおすすめするのが当然）と思ひなしはべれど、（とあきらめてはみますけれど）残り多かる御身を、いかで経たまはむとすらむ。（どうして〜お過しになるというのでしょう）おのれは、世にはべらむこと、（この世の寿命も）今日明日とも知りがたきに、（はかりかねますので）いかでうしろやすく見おきたてまつらむと、（どうかして安心のゆくようにしてさし上げておきたいと）よろづに思ひたまへてこそ、（いろいろ心配いたしました末に）仏にも祈りきこえつれ」と、（泣き伏し身をよじって）伏しまろびつつ、いといみじげに思ひたまへるに、（大層なお悲しみようであるのを見ると）まことの親の、やがて骸もなきものと思ひまどひたまひけむほどおしはかるぞ、（何よりもひどく悲しいのだった）まづいと悲しかりける。例の、（受け答えもせずに背を向けていらっしゃる様子が）いらへもせでそむきゐたまへるさま、（とてもあどけなくかわいらしいので）いと若くうつくしければ、「いとものはかなくぞおはしける御心なれ」と、（妹尼）泣く泣く御衣のことなどいそぎたまふ。（支度なさる）鈍色は手馴れにしことなれば、（仕立てた）小袿、袈裟などしたり。（仕える尼たちも）ある人々も、かかる色を縫ひ着せたてまつるにつけても、（尼たち）「いとおぼえず、うれしき山里の光と、明け暮れ見たてまつりつるものを、（何と情けないことでしょう）くちをしきわざかな」と、あた（その出家を残念がっては）らしがりつつ、僧都を恨みそしりけり。（悪く言うのだった）

九 なるほどあの弟子の僧の言っていた通り。前の二二二頁に見える。
一〇 （僧都のご祈禱によって）はっきりした様々の効験が現れて。物の怪退散のことである。
一一 物の怪のご病後も心配ということで。
一二 ご祈禱をさらに延長してお行いになるので。主として母の明石の中宮のお指図であろう。
一三 中宮からお召し出しがあって。
一四 夜居におはべらせになる。「夜居」は、終夜、寝所の近くで加持すること。
一五 ここ数日の一品の宮の看病に疲れ果てている女房たち。
一六 中宮が一品の宮と同じ御帳台においでになって。
一七 昔からあなたを頼りにしていらせられますが。帝をはじめ、というほどの気持。
一八 来世もこの通りお救い下さるものと。僧都の導きで極楽往生も疑いないものと。
一九 私ももうこの世に長くはありますまいというように、仏などもお示し下さることがいろいろございます上に。夢告のたぐいであろう。
二〇 一品の宮の御物の怪のしつこいこと、（祈禱で正体を現わして）あれこれと名乗るのが無気味なことなどを（中宮に）お話しなさるついでに。主語は僧都。今度の経験から、自然に浮舟のことに話が及ぶ体。

僧都、一品の宮の夜居に伺候

僧都、中宮に浮舟の一件を語る

一品の宮の御なやみ、げにかの弟子の言ひしもしるく、いちじるきことどもありて、おこたらせたまひにければ、いよいよと尊きものに言ひののしる。名残も恐ろしとて、御修法延べさせたまへば、とみにもえ帰り入らでさぶらひたまふに、雨など降りてしめやかなる夜、召して、夜居にさぶらはせたまふ。日ごろいたくさぶらひ極じたる人は、皆休みなどして、御前に人少なにて、近く起きたる人少なきをりに、同じ御帳におはしまして、「昔より頼ませたまふなかにも、このたびなむ、いよいよ、後の世もかくこそはと、たのもしきことまさりぬる」などのたまはす。「世の中に久しくはべるまじきさまに、仏なども教へたまへることどもはべるうちに、今年来年過ぐしがたきやうになむはべりければ、仏をまぎれなく念じつめはべらむとて、深く籠りはべるを、かかる仰せ言にて、まかり出ではべりにし」など啓したまふ。

一〇 御もののけの執念きこと、さまざまに名のるが恐ろしきことなど

（ご病気は）（ご平癒あそばされたので）（僧都を）（実に効験あらたかなお方と世人は誉めそやす）（僧都は）（すぐに帰山もならず宮中に伺候しておられると）（もの静かな）（宿直に）（今度のことは）（安心の思いも深まりました）（僧都）（中宮）（山に）（このたびのご下命でしようと存じまして）（山をおりました次第でございます）（言上なさる）（余念をまじえず念じてお勤めの）（無事に過せるかどうかということでございましたので）

一 めったにないこと。当時の男性用語。
二 以下、この巻冒頭の宇治の院でのこと。
三 このように。漢文訓読語。男性用語。
四 たちのよくない魔性のものが必ずよそからしばしばやって来ては根城にして、重い病人（母の尼）にとってよくないことでも起りましょうかと。「病者」も男性用語（一巻夕顔一二五頁に見える）。
五 大将（薫）が親しくしておられる宰相の君が、（それまで起きていて）この僧都の話を聞いていたのだった。一品の宮づきの女房、小宰相、薫の愛人（蜻蛉一四二頁参照）。「しも」は、余人ならぬ、といった語気。
六 聞いても何の関心も持たない。
七 浮舟のこと。「女人」も僧侶らしい堅い用語。仏典に多い。（六巻夕霧三一頁注二一参照）
八 母尼と妹尼。

のたまふついでに、（僧都）「いとあやしく稀有のことをなむ見たまへし。この三月に、年老いてはべる母の、願ありて初瀬に詣でてはべりし帰さの中宿に、宇治の院といひはべる所にまかり宿りしを、かくのごと、人住まで年経ぬる大きなる所は、よからぬものかならず通ひ住みて、重き病者のためあしきことどもや、と思うたまへしもしるく」とて、かの見つけたりしことどもを語りきこえたまふ。「げにいとめづらかなることかな」とて、近くさぶらふ人々皆寝入りたるを、恐ろしくおぼされて、おどろかさせたまふ。大将のかたらひたまふ宰相の君しも、このことを聞きけり。おどろかさせたまひける人々は、何とも聞かず。僧都、懼ぢさせたまへる御しきを、心もなきこと啓してけり、と思ひて、くはしくもそのほどのことをば言ひさしつ。「その女人、このたびまかり出ではべりつるたよりに、小野にはべりつる尼どもあひ訪ひはべらむとて、まかり寄りたりしに、泣く泣く、出家の本意深きよし、ねむごろにかたらひはべりし

（中宮は）
（あの浮舟を発見した事の次第を）
（無人で）
（何年もたった大きな邸は）
（思いましたが果してその通り）
（中宮）
（女房たち）
（目を覚ませなさる）
（あとから目を覚ませなさった女房）
（中宮のこわがっていらっしゃるご様子を）
（不用意）
（たちは）
（言上したものだ）
（後悔して）
（詳しく発見当時のことを話すのは途中でさしひかえて）
（僧都）
（今回のお召しにより山を出てまいりましたついでに）
（立ち寄りましたところ）
（心から私に打ち明けて頼みましたので）
（望みの深い旨を）

九　このこと、前の一九二頁に見える。

一〇　それ相応に目を掛けて大切に世話をしておりましたのですが。「随分に」は、分相応に。これも男性用語（一巻帚木四八頁に見える）。

一一　お勤行のために墨染の衣に身をやつすのも、痛々しいような人でした。「やつる」は、粗末な身なりをすること。

一二　どうしてそのような所に、身分のある女を（魔物は）さらって行ったのでしょう。それでも、もう今は誰か素姓も知れておりましょう。

一三　それは存じません。素姓はひそかに打ち明けているのかもしれません。

一四　龍の中からでも仏がお生れにならないのならともかく。龍女成仏の例もあることですから、の意。『法華経』提婆達多品第十二に見える。

一五　並の身分の人としては、いかにも前世の罪業の軽いと思われる美しい人でした。前世の戒行によって美人に生れるとされた。

一六　その頃あの宇治のあたりで行方知れずになったとかいう人のことを、中宮はお思い出しになる（蜻蛉一五三～四頁参照）。

一七　宰相の君。

一八　姉君（宰相の君の姉）から伝え聞いて。宰相の君は浮舟のことを姉から伝え聞いた趣（蜻蛉一五四～五頁参照）。この姉もどこかに仕える女房であろう。

かば、頭おろしはべりにき。髪をおろさせました なにがしが妹、故衛門の督の妻にはべりし尼なむ、亡せにし女子の代りにと、思ひよろこびはべりて、随分にいたはりかしづきはべりけるを、尼になってしまいましたので［私を］かくなりにたれば、恨みはべるなり。確かに げにぞ、容貌はいとうるはしくけうらにて、まことによく整った美しい人で行ひやつれむもいとほしげになむはべりし。何びとにかはべりけむ」と、ものよどういう人だったのでしょう く言ふ僧都にて、語り続け申したまへば、「いかでかさる所に、よき人をしも取りもて行きけむ。さりとも、今は知られぬらむ」など、話し好き（僧都）一三 この宰相の君ぞ問ふ。「知らず。さもやかたらひはべらむ。まことにやむごとなき人ならば、何か、隠れもはべらじをや。田舎人の娘も、さるさましたるこそははべらめ。龍のなかより、仏生れたまはずはこそはべらめ、ただ人にては、いと罪軽きさまの人になむはべりける」など聞こえたまふ。

分の高い人でしたら いえ何 知れないはずはないことです 本当に身 そうした美しい人はいることでしょう 不思議な事情で 死んだ人だとは耳にしていたので

一六　そのころかのわたりに消え失せにけむ人をおぼし出づ。この御前なる人も、姉君の伝へに、あやしくて亡せたる人とは聞きおきたれ

一 たちのよくない敵のような人もいるかのようにほのめかして。
二 事情が何にしても不思議でございますので。宇治の院で見出だした時以来のいきさつをいう。
三 何となく事情をはっきりさせたくないような様子なので。
四 宰相の君。薫との仲を知っているので言う。
五 どちらにしても（浮舟も薫も）世間に秘密にしておきたいであろうことを。以下、中宮の心中。末は自然に地の文になる。
六 一品の宮。
七 罪障を作ることにもなりましょうことを。若い女の身空で出家して果して末遂げられることだろうかと危ぶむ。
八 この世をはかないものと思い定められたのも（そういう思いから出家なさったのも）、もっともと思われるお身の上ではありませんか。意識もなく生死の境をさまよったことをいう。

僧都、帰山の途中小野に立ち寄る

ば、それにやあらむ、とは思ひけれど、定めなきことなり、僧都も、「かの人、世にあるものとも知られじと、よくもあらぬ敵だちたる人もあるやうにおもむけて、隠し忍びはべるを、事のさまのあやしければ、啓しはべるなり」と、なま隠すけしきなれば、人にも語らず。宮は、「それにもこそあれ。大将に聞かせばや」と、この人にぞのたまはすれど、いづかたにも隠すべきことを、定めてさならむとも知らずながら、はづかしげなる人に、うち出でのたまはせむもつつましくおぼして、やみにけり。

姫宮おこたり果てさせたまひて、僧都も上りたまひぬ。かしこに寄りたまへれば、いみじく恨みて、「なかなか、かかる御ありさまにて、罪も得ぬべきことを、のたまひもあはせずなりにけることをなむ、いとあやしき」などのたまへど、かひもなし。「今はただ御行ひをしたまへ。老いたる若き、定めなき世なり。はかなきものにおぼしとりたるも、ことわりなる御身をや」とのたまふにも、いと

（浮舟）その人だろうか　この世に生きているとも知られまいとして　不確かなことではあり
人目を避けておりますが　言上いたしますのです　（宰相君は）
中宮　その人かもしれませんよ　薫　知らせたいものです
五　あの気の置ける薫に　こちらから口出ししておっしゃるのも分らないまま　そのままになった　はっきりそうだろうと
六　横川に帰山された　小野の山荘　このような尼のお姿になって　（妹尼）なまじ　（私に）とうとうご相談もして下さらなかったことは　いつ死ぬか分らぬ世です　老人も若い人も　勤行　ほんとにおかしなこと　もう仕方もない（僧都）
七　罪障を作ることにもなりましょうことを。若い女の身空で出家して果して末遂げられることだろうかと危ぶむ。
八　この世をはかないものと思い定められたのも（そういう思いから出家なさったのも）、もっともと思われるお身の上ではありませんか。意識もなく生死の境をさまよったことをいう。
（浮舟は）

九 衣や袈裟。

一〇 一品の宮のご祈禱でお布施として賜って来たものである。

一一 身の自由もきかずこの世を捨てがたいと、誰しもお思いのようです。

一二（しかし）こうした山林の中で仏道のお勤めをなさろうというあなたのような方は。

一三 この我々の寿命というものは、草木の葉の薄いようにはかないものです。『白氏文集』巻四諷諭四「陵園妾」の冒頭「陵園妾　陵園妾　顔色花の如く　命は葉の如し　命は葉の薄きが如し　将に奈何せむとする」による。原詩は君恩の薄きを嘆く意味であるが、それを世間無常の意味にとりなした。（付録二八三頁参照）

一四 右の「陵園妾」の一節。「陵園妾」は、宮女が讒言によって罪を得て陵墓を守る役に配された薄倖を嘆く詩。今の浮舟の境遇に思い寄せたもの。（付録二八四頁参照）

一五 前の「松門に」の句に続く「柏城尽日に風蕭瑟たり」の一句による。「蕭瑟」は秋風の音のものさびしいさま。

一六 ああ、山伏は、こういう日には声をあげて泣きたくなるもののようです。「山伏」は山野に修行する僧。

一七 夢浮橋二六八頁の「谷の軒端」と同義。谷のはずれというほどの意味であろう（『河海抄』）。

中将の来訪

身のすくむ思いをするのだった

はづかしくなむおぼえける。「御法服あたらしくしたまへ」とて、（僧都）新調なさるように

綾、羅、絹などいふもの、たてまつりおきたまふ。「なにがしがは（僧都）拙僧が無事でおり

べらむ限りは、つかうまつりなむ。なにかおぼしわづらふべき。常普通

の世に生ひ出でて、世間の栄華に願ひまつはるる限りなむ、所狭く

捨てがたく、われも人もおぼすべかめる。かかる林のなかに行ひ勤

めたまはむ身は、何ごとかはうらめしくもはづかしくもおぼすべ

き。このあらむ命は、葉の薄きがごとし」と言ひ知らせて、「松門

に暁に到りて月徘徊す」と、法師なれど、いとよしよししくはづか

しげなるさまにてのたまふことどもを、思ふやうにも言ひ聞かせた

まふかな、と聞きゐたり。

今日は、ひねもすに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人も、

「あはれ山伏は、かかる日にぞ音は泣かるなるかし」と言ふを聞き

て、われも今は山伏ぞかし、ことわりにとまらぬ涙なりけり、と思

ひつつ、端の方に立ち出でて見れば、はるかなる軒端より、狩衣姿

身のすくむ思いをするのだった

一体何ごとに不満を抱いたり引け目を感じたりなさることがありましょう

さし上げておおきになる

お世話申し上げましょう

何も心配なさることはありません

ますうちは

の俗世に生い育って

あこがれて執着している間は

教えさとして（僧都）

いかにも優雅でこちらが気おくれするような立派な様子でおっしゃることの数々を

本当に望み通りいろいろよくお教え下さることよ

[浮舟は]

[浮舟は]

立ち寄られた僧都も

私も今はもう山伏の身の上なのだ

道理でとめようとしてもとまらぬ涙なのだった

色さまざまに入りまざって
色々に立ちまじりて見ゆ。一山へ上る人なりとても、二こなたの道には、
ごくまれにしかいない
通ふ人もいとたまさかなり。三黒谷とかいふ方よりありく法師の跡の
往来する
み、まれまれは見ゆるを、例の姿見つけたるは、あいなくめづらし
世俗の人の姿を目にしたのは　場違いに珍しく思われるの
だが
きに、四この恨みわびし中将なりけり。五かひなきことも言はむとて
あの恨みあぐねた
ものしたりけるを、紅葉のいとおもしろく、六ほかの紅に染めまし
たる色々なれば、入り来るよりぞものあはれなりける。七ここにいと
分け入って来るなりしみじみ感に打たれるのだった　こんな所でいか
にも屈託のなさそうな人を目にしたりしたら
ここちよげなる人を見つけたらば、八あやしくぞおぼゆべき、など思
かえって変な感じがするだろう
ひて、「暇ありて、つれづれなるここちしはべるに、紅葉もいかに
（中将）　所在ない気がいたしますので　どんなに見
事かと思いまして伺いました
と思うたまへてなむ。九なほ立ち返り旅寝もしつべき木の下にこそ」
外を眺めていらっしゃる　妹尾　すぐ涙になって
とて、見出だしたまへり。尼君、例の、涙もろにて、
（妹尾）
木がらしの吹きにし山のふもとには
立ち隠るべき蔭だにぞなき
とのたまへば、
（中将）
待つ人もあらじと思ふ山里の

一　比叡山。延暦寺。
二　この山荘近くから登る道。横川の僧都が往路帰路とも山荘に立ち寄る所、また次の黒谷の位置からすると、横川に直登するいわゆる長谷出坂のことと考えられる。途中で黒谷に登る道が分岐する。（図録一参照）
三　西塔から北に下った別所。青龍寺のある所。（図録一参照）
四　中将は、今さら言っても詮ない浮舟の出家について怨み言の一つも言おうと思ってやって来たのだが。
五　他所の紅葉よりもひとしお美しく色づいたさまざまの色どりなので。
六　やはり立ちもどってかりそめの宿りもしてみたい木蔭です。浮舟は出家してしまって仕方もないけれども、紅葉が見事なので、という気持。
七　木枯の吹き過ぎてしまった山の麓には、身を隠せる木蔭もございません。浮舟も出家してしまったので、あなたをお泊めするすべもございません。
八　私を待って下さる人もあるまいと思うこの山里の木々の梢を見ながらも、それでもこのまま通り過ぎる気にはなりません。「あらじ」に「嵐」を響かせて、尼君の歌の「木がらし」に応ずる。

九 中将は、今さら言っても詮ない（出家した）浮舟のことを、なおも諦めきれずにおっしゃって。

浮舟の尼姿を中将垣間見る

一〇 せめてそれくらいはしてくれて、前に約束した証にしてほしい。前の二三一頁に少将の尼が垣間見をさせる約束をした旨が見える。

一一 薄墨色の綾。表着である。

一二 萱草色。紅の黄ばんだ色。喪服にも用いる。

一三 八枚一組の檜の薄板を五組重ねた檜扇。二巻花宴五六頁に「桜の三重がさね」という例がある。

一四 うるさいほどたっぷりした（髪の）裾の様子だ。尼削ぎにしてある髪の量の多いさま。

一五 それでも数珠は近くに立ててある几帳に懸けて置いて。常に手にしているはずの数珠を手離しているのは、まだ初心のさまをいうのであろう。

一六 ましてや思いをかけていられる男は、どんな気持でこのお姿を見申し上げなさることか。中将の心事をおしはかる趣。

一七 襖障子の戸締りの掛金。（六巻椎本三四九頁参照）

一八 ほんとにこんなに美しい人だとは思ってもいなかった。以下、浮舟の姿を見ての中将の思い。

こずゑを見つつなほぞ過ぎ憂き

言ふかひなき人の御ことを、なほ尽きせずのたまひて、「さま変りたまへらむさまを、いささか見せよ」と、少将の尼にのたまふ。

（中将）尼の姿にお変りだという様子を

（中将）一〇「それをだに、契りししるしにせよ」と責めたまへば、入りて見るに、ことさらにも人に見せまほしきさましてぞおはする。薄鈍色の綾、中に萱草など、澄みたる色を着て、いとささやかに、様体をかしく、今めきたる容貌に、髪は五重の扇を広げたるやうに、こちたき末つきなり。こまかにうつくしき面様の、化粧をいみじくしたらむやうに、赤くにほひたり。行ひなどをしたまふ、なほ数珠は近き几帳にうち懸けて、経に心を入れて読みたまへるさま、絵にも描かまほし。うち見るごとに涙のとどめがたきこちするを、まいて心かけたまはむ男は、いかに見たてまつりたまはむ、と思ひて、さるべきをりにやありけむ、障子のかけがねのもとにあきたる穴を教へて、まぎるべき几帳など引きやりたり。いとかくは思はずこそあり

（少将尼が）

（浮舟は）わざわざでも人に見せたいほど美しい姿をしていらっしゃる

すっきりした

とてもほっそりと

姿つき

美しく

はなやいだ

よく整ったかわいらしい

念入りにしたかのように

つやつやとしている

勤行などなさるのだが

どよい折だったのだろうか

（少将尼は）

見通しを悪くする

引きのけた

（中将に）

一（浮舟を出家させたことが）自分の犯した過ちでもあるかのように、惜しく残念で悲しく思われるので。

二 これほどの美しい姿をした人を行方知れずにして、捜さぬ人がいただろうか。以下、中将の思い。

中将の思惑

三 たとえ尼姿であっても。ふたたび中将の思い。

四 かえって（俗の姿より）美しさが映えていとしく思われようから。

五 普通の男女の間柄ということでは（浮舟の方で）気兼ねなさることもあったでしょうが。前の男に憚って、という気持。

六 気兼ねなくお話も申し上げられるというものです。

七 亡き妻とのことが忘れがたくて、このようにお伺いしているのですが、それにもう一つ（浮舟への）私の気持も加えまして（今後も）。

八 ほんとに先のことも心細く、気がかりな（浮舟の）身の上でございますから。自分の余命も短い、と言う。

九 まじめなお気持で。色恋沙汰抜きで、の意。

しか、いみじく思ふさまなりける人を（すばらしく申し分のない美しい人だったのにと）と、一わがしたらむあやまちのやうに、惜しくくやしく悲しければ、（涙をこらえきれず）つつみもあへず、（愚かしいまでに）もの狂ほしきまで、（そんな自分のけはいも聞えそうなので）けはひも聞こえぬべければ、退きぬ。

二かばかりのさましたる人を失ひて、尋ねぬ人ありけむや、また、その人かの人の女なむ、行方も知らず隠れにたる、もしはもの怨じして、世を背きにけるなど、おのづから隠れなかるべきを、など、あやしくかへすがへす思ふ。三尼なりとも、かかるさましたらむ人は（姿を隠したとか）（あるいは）（嫉妬して）（尼になったとか）（自然世間の噂になるはずなのだが）（名の知れた誰彼の）（不思議なことだと）うたてもおぼえじ、など、四なかなか見所まさりて心苦しかるべきを、（いやな気持もしないだろう）（などと）（これほどの美しい人なら）忍びたるさまに、なほかたらひとりてむ、と思へば、まめやかにかたらふ。「世の常のさまにはおぼし憚ることもありけむを、かかるさまになりたまひにたるなむ、六心やすく聞こえつべくはべる。さやうに教へきこえたまへ。来し方の忘れがたくて、かやうに参り来るに、また今一つ心ざしを添へてこそ」などのたまふ。「いと行く末心細く、うしろめたきありさまにはべるめるに、九まめやかなるさま

（世間に知れぬように）（やはり自分の物にしてしまおう）（真剣に話を持ちかける）（お姿になっておしまいになったので）（うにご説得申して下さい）

一〇 この尼君（妹尼）も（浮舟と）何かつながりのある人なのだろう（縁者なのだろう）、（浮舟は）一体どういう人なのだろう。中将の心。

一一 先々の（浮舟の）お世話は。

一二 そのような（色恋抜きの）お付合いをするようになりましたならば、必ずや変ることなくしてさし上げる積りです。

一三 （浮舟の行方を）お捜し申しなさるような方は。浮舟のもとの男。浮舟を尼君の縁類と見ているので、敬語を使う。

一四 何も気を使わなくてはならぬことではありませんが。色恋抜きの付合いのはずだから、という気持。

一五 （私を嫌ってではなく）ただなべてのこの俗世に背いて出家されたあなたですけれども、しかし、その嫌うということにつけて、何か私が嫌われたようでわが身が恨めしく思われます。

中将、浮舟に消息

いつもお心に掛けて　訪れて下さることは　心からうれしいことと思って忘れずにおりましょう

におぼし忘れず訪はせたまはむ、いとうれしくこそ思うたまへおかめ。はべらざらむのちなむ、あはれに思うたまへらるべき」とて泣きたまふに、一〇この尼君も離れぬ人なるべし、誰ならむ、と心得がたし。「行く末の御後見は、命も知りがたくたのもしげなき身なれど、一二さ聞こえそめはべりなば、さらに変りはべらじ。一三尋ねきこえたまふべき人は、まことにものしたまはぬか。さやうのことのおぼつかなきになむ、一四憚るべきことにははべらねど、なほ隔てあるここちしはべるべき」とのたまへば、「人に知らるべきさまにて世に経たまはば、さもや尋ね出づる人もはべらむ、今はかかるかたに、思ひ限りつるありさまになむ。心のおもむけもさのみ見えはべるを」などか

私のいなくなりましたその後が　かわいそうでならないことでございます　合点が行きかねる（中将）一一　明日の命も知れず頼りにもならぬ私ではありますが　本当にいらっしゃらないのですか　その辺の事情がまだはっきりいたしませんので　人と付き合うような普通の有様で　お暮しならなりません　妹尼　そのように捜し出す人もいるかもしれませんが　こうした仏道修行に　心を決めてしまった暮しぶりでございます　本人の積りもそうとしか見受けられませぬ　打ち明けたお話をなさる

たらひたまふ。

浮舟　こなたにも消息したまへり。

（中将）一五　おほかたの世をそむきける君なれど

厭ふによよせて身こそつらけれ

一 中将が心をこめて申し上げなさることなどを、（取次ぎの者が）いろいろと浮舟に伝える。
二 中将の「厭ふによせて」の歌への返歌はなさらない。
三 思いもかけぬとんでもないことも起った身の上だから。匂宮とのこと。以下、浮舟の思い。
四 中将のことなど、思ってもいやなことだ。
五 もういっさい山奥の朽ち果てた木のような有様で。「朽木」は、世に知られぬ境涯をいう歌語。（六巻橋姫二九七頁注一六参照）
六 碁のこと、前の二一六頁に見える。
七 天台宗の根本聖典として当時もっとも尊崇された。
八 ほかの経典など。「法文」は、経、論、釈。仏法を説いた書の総称。
九 小野は雪深い里である。「小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し」（『伊勢物語』八十三段）
一〇 ほんとに気持を晴らすすべもないのだった。引歌のありそうな所。「白雪の降りて積れる山里は住む人さへや思ひ消ゆらむ」（『古今集』巻六冬、壬生忠岑）
一一 谷川のさま。
一二 山荘の対岸に二日を過した時のこと。（浮舟五六頁）

浮舟の心情　その日常　新春の小野　浮舟の感懐

（中将）「兄妹とお思い下さい無常なこの世のお話なども申し上げて ぼしなせ。はかなき世の物語なども聞こえて、心の慰めとしましょう なぐさめむ」など言ひ続く。（浮舟）深いお考えのお話など「心深からむ聞いて分るはずもないわが身が情けのうございます 御物語など、聞き分くべくもあらぬこそくちをしけれ」といらへて、この厭ふにつけたるいらへはしたまはず。

思ひよらずあさましきこともありし身なれば、いとうとまし、すべて朽木などのやうにて、誰にも相手にされないで終ろう という態度でいられる 人に捨てられてやみなむ、ともてなしたまふ。されば、今まで幾月も鬱々と 月ごろたゆみなく結ぼほれ、念願の出家をお遂げになってからは ものをのみおぼしたりれたのも しも、この本意のことしたまひてのちより、すこしはればれしくなりて、尼君とはかなくたはぶれもしかはし、碁打ちなどしてぞ明かし暮らしたまふ。行ひもいとよくして、法華経はさらなり、異法文なども、いと多く読みたまふ。雪深く降り積み、人目絶えたるころぞ、げに思ひやるかたなかりける。

妹尼 とりとめもない冗談なども言い交わし 勤行 言うに及ばず 人の行き来も途絶えた頃は 気持も明るくなって くよくよ考えこんでばかりいら

年も返りぬ。春のしるしも見えず、氷りわたれる水の音せぬさへ心細くて、「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひ果て

改まった 匂宮 いやだという気になってし

一三 空を暗くして降る野山の雪を悲しく眺めても、ずっと前のことが今日も悲しく思い出される。「ふり」に「古り」と「降り」（「雪」の縁語）を掛ける。匂宮の歌にも「峰の雪みぎはの氷踏みわけて」とあった。

一四 正月の子の日に若菜を摘んで人に贈り、長寿を祈る風習があった。（五巻若菜上四七頁参照）

一五 山里の雪を分けて生い出た若菜を摘んでお祝いして、やはりあなたの行く末に望みが持たれることです。

一六 雪深い野辺の若菜も、今からはあなた様のご長寿を祈って摘むことにいたしましょう。あなた様のために私も生き永らえましょう、の意を兼ねる。「つむ」に「摘む」と「積む」を掛ける。

一七 いかにもそうお思いであろうと、不憫に思われるにつけても。

一八 お世話のしがいのある美しいお姿と思えるのでしたら。浮舟が尼姿でなかったなら、と悲しむ。

まったけれど　それでも宮とのあの時などのことは

にたれど、なほそのをりなどのことは忘れず。

（浮舟）一三

かきくらす野山の雪をながめても

ふりにしことぞ今日も悲しき

心慰めの　勤行　自分が姿を消

など、例の、なぐさめの手習を、行ひの隙にはしたまふ。われ世に

してから年も改まってしまったが

なくて年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかし、など、思ひ出

づる時も多かり。若菜をおろそかなる籠に入れて、人の持て来たり

粗末な　妹尼

けるを、尼君見て、

（妹尼）一五

山里の雪間の若菜摘みはやし

なほ生ひさきのたのまるるかな

浮舟　さし上げなさったので

とて、こなたにたてまつれたまへりければ、

（浮舟）一六

雪ふかき野辺の若菜も今よりは

君がためにぞ年もつむべき

とあるを、一七さぞおぼすらむ、とあはれなるにも、「見るかひあるべ

（妹尼）一八

心から悲しんで

き御さまと思はましかば」と、まめやかにうち泣いたまふ。

一「春は昔に変らぬ春なのに」と。「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」（『古今集』巻十五恋五、在原業平朝臣。『伊勢物語』四段）

二 はかない逢瀬だった匂宮のことが忘れられないのだろうか。浮舟の心事を忖度する体の草子地。「飽かざりし君が匂ひの恋しさに梅の花をぞ今朝は折りつる」（『拾遺集』巻十六雑春、具平親王）による。

三 夜半から明け方にかけての勤行。

四 仏前に供える水。樒や花を浮べる。

五 下働きの尼の少し年若いのがいたのを。

六 袖を触れた人（匂宮）の姿は見えないけれども、花の香はその人の袖の香かと思われるほど匂って来る春の曙です。「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」（『古今集』巻一春上、読人しらず）

紀伊の守の来訪

七 去年一昨年とご無事でいられましたか。

八 大尼君お一人を。

九 常陸の介の北の方。この常陸の介は、現任の人で、浮舟の継父とは別人。

一〇 ますます所在なくおさびしいお暮しぶりです。孤独な老齢の大尼君のさま。

閨（軒先）のつま近き紅梅の色も香も変らぬを、「一春や昔の」と、異花よ（例年と）りもこれに心寄せのあるは、二飽かざりし匂ひのしみにけるにや。後（三）夜に閼伽（四）たてまつらせたまふ。下﨟（五）の尼のすこし若きがある、召し出でて花を折らすれば、（紅梅）かことがましく（恨みがましく散るにつけて）散るに、いとど匂ひ来れば、（浮舟）袖ふれし（六）人こそ見えね花の香の

（の花よりも紅梅に気持がひかれるのは）

それかとにほふ春のあけぼの

大尼君の孫の紀伊の守（であった者が）なりけるが、このころ上り（上京して尋ねて来た）て来たり。三十ばかりにて、容貌（意気盛んな様子をしている）きよげに誇りかなるさましたり。「何ごとか、去年一昨年（七）」など問ふに、ほけほけしきさまなれば、（大尼君が）ぼけてしまっている様子なので（紀伊守）こなたに来て、（妹尼の部屋に）「いとこよなくこそひがみたまひけれ。（紀伊守）なんとすっかり訳が分らなくなっておしまいだ あはれにもはべるかな。（おいたわしいことです）残りなき御さまを、（先も長くないお年なのに）見たてまつること（お目にかかることも）難くて、遠きほどに（遠い所で）年月を過ぐしはべるよ。親たちものしたまはでのちは、（両親が亡くなってからというものは）一所をこそは御代り（親代りの）に思ひきこえはべれ。（お方とお思い申しています）常陸の北の方は、（お便りをさし上げていなさるでしょうか）おとづれきこえたまふや」と言ふは、（妹であるらしい）いもうとなるべし。（妹尼）「年月に添へては、（年月がたつにつれて）一〇つれづれにあは

一一 常陸の介の北の方。
一二 （常陸の介の北の方の帰京まで）とても待ちおおせることはおできにならぬようにお見えです。
一三 私の父親と同じ名だと、他人ごとながら耳がとまるのに。浮舟のこと。「常陸」というのに自然に耳がとまる。

紀伊の守、薫の動静を語る

一四 亡き八の宮の姫君にお通いでしたが、まずお一人は先年お亡くなりになりました。大君のこと。
一五 その妹君を。浮舟のこと。
一六 宇治山の寺の律師。八の宮の師僧で、薫とも関係が深い。阿闍梨から律師になったこと、蜻蛉一三五頁に見えている。
一七 その布施のための女の装束一揃いを調製することになりましたが。家来のそれぞれに応分の負担が命じられるのである。
一八 織らせなければならぬものは。織物などの調達はこちらでする、と言う。
一九 どうして心を激しくゆさぶられないことがあろう。浮舟の気持。

れなることのみまさりてなむ。常陸は、いと久しくおとづれきこえたまはざめり。（もう長いことお便りもさし上げていなさらぬようです）え待ちつけたまふまじきさまになむ見えたまふ」とのたまふに、わが親の名と、あいなく耳とどまるに、また言ふやう、「（紀伊守）まかり上りて日ごろになりはべりぬるを、（もう何日にもなりましたのですが）公事のいとしげく、（とても忙しく）むつかしくのみはべるにかかづらひてなむ。（面倒しごくでありますのにかまけておりまして失礼いたしました）昨日もさぶらはむと思うたまへしを、（おりましたところ）右大将殿の宇治におはせし御供につかうまつりて、故八の宮の住みたまひし所に（薫が）おはして、（一日お過しでいられました）日暮らしたまひし。故宮の御女に通ひたまひしを、まづ一所は一年亡せたまひにき。その御おとうと、また忍びてすゑたてまつりたまへりけるを、（八宮の旧邸に）（お迎え申していられたのですが）去年の春また亡せたまひにければ、その御果てのわざせさせたまはむこと、（一周忌のご法要をおいとなみになることについて）かの寺の律師になむ、（しかるべきお支度をお申しつけになって）さるべきことのたまはせて、（拙者も）なにがしも、かの女の装束一領調じはべるべきを、（お引き受け下さいましょうか）せさせたまひてむや。織らすべきものは、急ぎせさせはべりなむ」と言ふを聞くに、いかでかはあはれならざらむ。（急いでいたさせましょう）（尼君たちが不審に思おうかと）人やあやしと見むと、（気がひけて）つつましうて、（奥の方を向いて坐って）奥に向ひてゐ

一 八の宮のこと。「俗聖とか、この若き人々の付けたなる」（六巻橋姫二六五頁）とあった。

二 世間に知れているのは北の方腹の大君と中の君だけである。

三 この、大将殿（薫）の二人目のお方というのは、素姓の低いお生れのようです。母の素姓が低いらしいと言う。

四 はじめのお方（大君）の時は、大変なことでした。薫の悲しみようは一通りでなかった、と言う。

五 （この紀伊の守は）薫に親しく仕える人なのだったと察しられるにつけても、さすがに（分ることはあるまいと思うものの）恐ろしい。浮舟の気持。

六 昨日もまことに見ていられぬようなことでございました。薫の取り乱しようを言う。

七 川に近い所で。八の宮の邸には「水にのぞきたる廊」があった（六巻椎本三〇九頁注九参照）。そこであろう。

八 親しんだ人は姿もとどめない水の上に、落ち添う悲しみの涙はいよいよ堰きとめることも叶わない。「水」の縁語で「かげ」（影）という。浮舟が入水して果てたと信じての思い入れ。

九 女なら誰しも、ただもうすばらしいお方とお思い申し上げるに違いありません。このように心やさしいお方だから、という気持。

たまへり。尼君、「かの聖の親王の御女は、二人と聞きしを、兵部卿の宮の北の方は、いづれぞ」とのたまへば、「この大将殿の御後のは、劣り腹なるべし。ことことしくももてなしたまはざりけるを、いみじく悲しびたまふなり。はじめのはた、いみじかりき。ほとほと出家もしたまひつべかりきかし」など語る。

（ていられる）（妹尼）（一）（ひじり）（みこ）（ふたり）（聞きしを）（兵部）（紀伊守）（三）（どちらですか）（匂宮）（薫は）（れっきとしたお扱いもなさらなかったのですが）（今は）（ひどくお悲しみでいられます）（四）（ほとんど）（出家もなさりかねないようなことでした）

五 かのわたりの親しき人なりけり、と見るにも、さすが恐ろし。

（紀伊守）（不思議に）（お二人とも同じように）（あの宇治のお邸で）（お亡くなりになったことです）

「あやしく、やうのものと、かしこにてしも亡せたまひけること。昨日もいと不便にはべりしかな。川近き所にて、水をのぞきたまひて、いみじく泣きたまひき。上にのぼりたまひて、柱に書きつけたまひし、

（六）（七）（流れに目をおやりになって）（上の部屋にお上りになって）（お書きつけになった）（つた歌は）

見し人はかげもとまらぬ水の上に
落ち添ふ涙いとどせきあへず

（八）（というお歌でした）

となむはべりし。言にあらはしてのたまふことは少なけれど、ただけしきには、いとあはれなる御さまになむ見えたまひし。女は、い

（口に出してはっきりおっしゃることは少ないのですが）（ご様子では）（ほんとにおいたわしいご様子と拝されました）（九）

一〇 最高の権力者。摂関家。ここでは夕霧をさすか。

一一 格別ものごとが深く分るというのでもなさそうなこんな人でも、薫のお人柄はよく分っているのだ、と思う。浮舟の思い。

一二 この呼称、一巻桐壺三六頁、四一頁、二巻須磨二四七頁、六巻匂兵部卿一六九頁に見える。

一三 亡き六条の院。光源氏のこと。

一四 このご一族（光源氏の一門）がすばらしいお方とされていらっしゃるようです。薫と、次に名前の出て来る夕霧。

一五 右大臣様（夕霧）と比べてどうでしょう。

一六 威厳のあるお方で。「宿徳」は、重々しく貫禄のあること。「すう」は拗音「しう」の直音表記。

一七 女の身になってお側近くお仕えしたいものだ、とそんな気がいたします。

一八 誰かが（浮舟に聞かせるように）教えたかのようにしゃべり続ける。

一九 浮舟は、悲しくもまた興味深くも聞いていると。

浮舟、自身の法要の布施の衣裳を見ての感慨

みじくめでたてまつりぬべくなむ。[私は]若くはべりし時より、優におは[すばらし]すと見たてまつりしみにしかば、世の中の一[一〇]の所も、何とも思ひはべらず、ただこの殿[薫]を頼みきこえさせてなむ、過ぐしはべりぬる[お頼り申し上げて／今までやってまいりました]」と語るに、[一一]ことに深き心もなげなるかやうの人だに、御ありさまは見知りにけり、と思ふ。尼君[妹尼]、「光君[一二]と聞こえけむ[とか申し上げた]故院[一三]の御ありさまには、え並びたまはじとおぼゆるを、ただ今の世に、[一四]この御族[ご立派さには／とてもおかないにはなるまいと思われますが]ぞめでられたまふなる。[一五]右の大殿[紀伊守]と」とのたまへば、「それは、容貌[夕霧]もいとうるはしうきよらに、宿徳[一六]にて、際[格別のご風采の方でいらっしゃいます]ことなるさまぞしたまへる[とてもご立派でお美しくす]。兵部卿の宮[匂宮]ぞ、いといみじくおはするや[何ともお美しくていらっしゃいます]。女にて馴[一七]れつかうまつらばや、となむおぼえはべる」など、教へたらむやうに言ひ続く。あはれにもをかしくも聞くに、[一八]身の上もこの世のこととも[そのわが身の上もこの世にあったこととも思われない]おぼえず。[紀伊守は]よどみもなくしゃべっておいて帰って行ったとどこほることなく語りおきて出でぬ。

[薫は]私をお忘れではないのだと胸を打たれるにつけても忘れたまはぬにこそは、とあはれと思ふにも、一層母君がどんなに悲しんいとど母君の御心でいられるかと思いやられるけれども／なまじこの世の望みもない尼姿をお目にかけたり耳に入れのうちおしはからるれど、なかなかいふかひなきさまを見え聞こえ

たりするのは　紀伊の守の頼んで行った布施の衣裳などを　やはりどうしても気のひけることなのだった

たてまつらむは、なほいとつましくぞありける。かの人の言ひつけしことなど、染めいそぐを見るにつけても、あやしくめづらかなるここちすれど、かけても言ひ出でられず。裁ち縫ひなどするを、

（妹尼）一　とてもお上手に

「これ御覧じ入れよ。ものをいとうつくしくひねらせたまへば」とて、小桂の単たてまつるを、うたておぼゆれば、ここちあしとて手も触れず臥したまへり。尼君、いそぐことをうち捨てて、「いかがおぼさるる」など思ひ乱れたまふ。紅に桜の織物の袿重ねて、「御前にはかかるをこそたてまつらすべけれ。あさましき墨染なりや」と言ふ人あり。

（浮舟）六

あまごろもかはれる身にやありし世の
かたみに袖をかけてしのばむ

と書きて、いとほしく、亡くもなりなむのちに、ものの隠れなき世なりければ、聞きあはせなどして、うとましきまで隠しける、とや思はむなど、さまざま思ひつつ、「過ぎにしかたのことは、絶えて

奇妙な世にまたとないことと　とても口にできることではないという気がするけれども　妹尼は　お渡しするのを　とてもいやな気がするので　気分が悪いと言って　衣裳の支度をそっちのけにして　（妹尼）どんな　心配なさる　（尼の一人）お　何と情けない　尼姿ですこと　姫君にはこういう衣裳をお着せすればお似合いなのです　（浮舟）六　私のことを人から聞いたりして　私が死にでもしたあとに　何でもおしまいには分ってしまう世間だから　（浮舟）過ぎてしまいました昔のことは　すっかり

一　これをお願いできませんか。「御覧じ入る」は、「見入る」（注視する、世話をする）の敬語。

二　「ひねる」は、袖先、裾先などを内側にまるめこむようにすること。紵けないで糊付けする。

三　貴婦人の略礼装。表着の上につける。（一巻図録一二参照）

四　紅色の袒。

五　桜襲。表白、裏紫または赤。

六　尼の衣にすっかり変ってしまったこの身に、昔の暮しの形見としてこのはなやかな衣裳の袖をかけて、昔を偲びもしようか。「かけて」に、「心に掛けて」の意を重ねる。「かゝる装束をみて、むかしをしのびたる也。下の心は、此のいとなみも我身の周忌の仏事の料なれば、むかしを思ひいでゝいとあはれなる也」（『細流抄』）

七　お気の毒に。以下、尼君に対する浮舟の思い。

八　愛想の尽きるほど身許をひた隠しにしたことだ、と思うことだろうなどと。自分のかたくなな態度をうとましく思われることだろう、と思う。

九 さりげないふうにおっしゃる。心中の動揺を見透かされぬように気を使う。

一〇 気の利かないことしかできないにつけましても。「なほなほし」は、平凡の意。

一一 娘が生きていてくれたら。「昔の人」は、故人。

一二 そのようにあなたをお世話申し上げられたでしょうお人は。浮舟の母親の存否について婉曲に問う。

一三 私のようにはっきり娘を死なせてしまった者でも。

一四 せめてことだけでもその場所を知りたい思いがいたしますのに。来世の生所だけでも知りたい、の意。

一五 (あなたの場合は)行方知れずで。

一六 終りの頃には、一人はおいでした。「母親」という積りであろう。

一七 浮舟の一周忌の法要。浮舟の失踪は三月末のことである(浮舟八七頁以下参照)。 **薫、一周忌の法要を営む**

忘れてしまいましたが 忘れはべりにしを、このような衣裳のお支度をなさっているのを拝見しますと かうやうなることをおぼしいそぐにつけてこそ、何かもの悲しい気持にもなります ほのかにあはれなれ」とおほどかにのたまふ。(妹尼)それでも「さりとも、お思い出しになることは沢山おありでしょうに おぼし出づることは多からむを、どこまでも隠し立てなさるのが情けないことです 尽きせず隔てたまふこそ心憂けれ。ここには、私など かかる世の常の色あひなど、こうした普通の人の着る色合いなど 久しく忘れにければ、もう長いこと忘れていますので なほなほしくはべるにつけても、昔の人あらましかば、など思ひ出ではべる。しかあつかひきこえたまひけむ人、世におはすらむや。この世においでしょうか かく亡くなして見はべりしだに、それでもどこにいるだろうか なほいづこにあらむ、そことだに尋ね聞かまほしくおぼえはべるを、行方知らで、(浮舟)思ひきこえたまふ人々はべらむかし」とのたまへば、「見しほどまでは、一人はものしたまひき。ここ幾月の間にこの月ごろ亡せやしたまひぬらむ」とて、涙の落つるをまぎらはして、(浮舟)なまじ思い出しますにつけて「なかなか思ひ出づるにつけて、つらい気持になりますので うたてはべればこそ、申し上げられないのですえ聞こえ出でね。隠しごとなど何もいたしてはおりませんのに 隔ては何ごとにか残しはべらむ」と、言少なにのたまひなしつ。

薫 大将は、この果てのわざなどせさせたまひて、はかないかかわりで終って はかなくてもやみ

一 常陸の介の子供たち。この子供たちの仕官に尽力を約したこと、蜻蛉一三七頁に見える。
二 六位の蔵人。
三 薫は右大将なので、右近衛府。
四 近衛府の三等官。従六位上。蔵人に右近将監を兼ねさせるのである。
五 まだ元服前の子ども。
六 明石の中宮の御所。
七 辺鄙な山里に。宇治のこと。
八 前世の因縁というものでしょう。以下「さなむある」まで、「と思ひたまへなしつつ」に受けられる。
九 場所がらのせいかと、情けない気持になってしまいましてからは。同じ所で大君に続いて浮舟をも喪ってしまったこと。
一〇 つい先頃、ちょっとした用件で出向きまして。浮舟の一周忌の法要をぼかして言う。
一一 わざわざ人に道心（仏道修行の心）を起させるように造り置いた、修行者の住処だという気がいたしました。八の宮の邸のこと。
一二（中宮は）横川の僧都の噂した浮舟のことをお思い出しになって。

薫、中宮御所に伺候 胸中の悲しみを語る

ぬるかな、とあはれにおぼす。かの常陸の子どもは、かうぶりしたるは蔵人になし、わが御司の将監になしなど、いたはりたまひけり。童なるが、中にきよげなるをば、近く使ひ馴らさむ、とぞおぼしたりける。

元服したのは　しまったことだ　しみじみお思いになる　目をお掛けになるのだった　中でも見苦しからぬ者を　身近に　仕えさせよう

雨など降りてしめやかなる夜、后の宮に参りたまへり。御前のどやかなる日にて、御物語など聞こえたまふついでに、「あやしき山里に、年ごろまかり通ひ見たまへしを、人のそしりはべりしも、さるべきにこそはあらめ、誰も心の寄るかたのことは、さなむある、と思ひたまへなしつつ、なほ時々見たまへしを、所のさがにやと、心憂く思うたまへなりにしのちは、道もはるけきここちしはべりて、久しくものしはべらぬを、先つころもののたよりにまかりて、はかなき世のありさまとり重ねて思うたまへしに、ことさら道心を起こすべく造りおきたりける、聖の住処となむおぼえはべりし」と啓したまふに、かのことおぼし出でて、いといとほしければ、「そこに

人少　もの静かな　なな日だったので　世間話などお話し申し上げなさるついでに　ここ幾年か通って逢っておりましたのを　人がとやかく申しましたにつけても　誰でも気に入った向きのことは　そうしたものだ　自分を納得させながら　通っていたのですが　道中もいかにも遠いという気がいたしまして　長いこと行ってもおりませんでしたが　いこの世の有様をあれこれと重ね て思いましたにつけ　上なさるのに　おいたわしくてならないので（中宮）

一三 大君、浮舟と続いて亡くなったことをお考えなのかと思って。ここの本文、河内本、別本による。底本はじめ青表紙本の有力諸本「つづきをおぼしよるかたと思ひて」とある。

一四 薫がこうしてやはり隠したがっていることを。以下、中宮のお心遣い。

一五 匂宮が。浮舟失踪当時の匂宮のこと（蜻蛉一一五頁参照）。また中宮が匂宮と浮舟のいきさつも承知のこと、蜻蛉一五三～四頁参照。

一六 やはり（匂宮の不行跡からこんなことになったとて）心も痛むので。母として一抹の責任も感ずるので、言い出しにくい。

一七 薫の人柄からも、匂宮のからんでいることからも、自分からは口出ししにくい人のことだと。

一八 薫の思い人、宰相の君（一三三四頁）。

中宮、小宰相に薫に語るよう奨める

一九 あなたは、詳しくあれこれと事情を聞いているのです。横川の僧都の話のほかに、前に「姉君の伝へに、あやしくて亡せたる人とは聞きおきたれば」（一三三五頁）とあった。

は恐ろしきものや住むらむ。（恐ろしい魔物でも住むのでしょうか）いかやうにてか、（どのような事情で）かの人は亡くなりにし」と問はせたまふを、なほうち続きたるをおぼし寄るかと思ひて、「さもはべらむ。（薫）（そうかもしれません）さやうの人離れたる所は、よからぬものなむかならず住みつきはべるを、（たちのよくない魔物がきまって住みつくものですが）亡せはべりにしさまもいとあやしくなむはべる」とて、（亡くなりました事情もとてもおかしなことなのでございます）くはしくは聞こえたまはず。なほかく忍ぶる筋を、（こちらで）聞きあらはしけりと思ひたまはむが、いとほしくおぼされ、宮の、もすっかり聞き出しているのだとお思いになろうことがのをのみおぼして、そのころは病にもなりたまひしをおぼしあはすお気の毒な気もなさりつけても るにも、さすがに心苦しくて、かたがたに口入れにくき人の上とお思いとどまられたぼしとどめつ。

小宰相に、忍びて、「（中宮）薫大将、（浮舟）かの人のことを、いとあはれと思ひてのたまひしに、いとほしくて、うち出でつべかりしを、それにもあらざらむものゆゑと、つつましくてなむ。君ぞ、ことごと聞きあはせける。かたはならむことはとり隠して、さることなむありけると、おほかたの物語のついでに、僧都の言ひしこと語れ」とのたまとても忘れがたくお思いでお話しなさったのでおいたわしくて遠慮されましてかも分らないのにと不都合と思われるようなことは話さないで世間話のついでに

一 ましてや、ほかの人（自分など）はどうしてお話しできましょう。
二 私では、具合の悪いことがあるのです。それとなく、匂宮のことがあるから、と言う。
三 中宮のお心遣いをいかにもとお思い申し上げる。
四 薫が小宰相の局に立ち寄って。
五 中宮が浮舟のことをお訊ねになったのも。以下、薫の心中。
六 どうしておしまいまでおっしゃって下さらぬのだろう。おっしゃって下さってもいいではないか、の意。
七 自分としても、はじめからの浮舟失踪のいきさつについて、中宮に申し上げないでしまったことなので。匂宮のことがからむからである。
八 こうして小宰相から浮舟の話を聞いた上でもなお（ありのままに申し上げるのは）自分が笑いものになるような気がして。
九 （このことは）誰にも一切話していないのだが。以下「隠れある世の中かは」まで、下の「など」で受けられる。

小宰相の打ち明け、薫の驚き

はす。「御前（小宰相）にだにつつませたまはむことを（中宮様でさえご遠慮なさるようなことを）、まして異人（ことひと）はいかでか」と聞こえさすれど、「さまざまなることにこそ（中宮）事情により人によることなのです。また、まろは（それに）いとほしきことぞあるや」とのたまはするも、心得て（小宰相は）察して、をかしと見たてまつる。

四 立ち寄りて物語などしたまふついでに、（小宰相が）話を持ち出した言ひ出でたり。めづらかにあやしとは、いかでかはおどろかれたまはざらむ。（世にも珍しい不思議なことだと）宮の問はせたまひしも、かかることをほのおぼし寄りてなりけり、（こういうことをうすうすお気づきになってのことだったのだ）などかのたまはせ果つまじき、とつらけれど、（お恨みに思うが）われもはじめよりありしさまのこと聞こえそめざりしかば、聞きてのちもなほをこがましきここちして、人にすべてもらさぬを、なかなかほかには聞こゆることもあらむかし、うつつの人々のなかに忍ぶることだに、隠れある世の中かは、など思ひ入りて、この人にも、さなむありし、などもあかしたまはむことは、なほ口重きここちして、「なほあやしと思ひし人のことに、似てもありける人のありさまかな。さてその人はなほあら

（この世にある人々の間で秘密にしていることですら）（思案にくれて）（小宰相）（かえってはたではいろいろ噂も立っているに違いない）（知れないでいる世の中だろう）（これこれの事情だった）（などともお打ち明けになることは）（まだ気軽に言えない思いがして）（薫）（どうもおかしいと思っていた人のことに）（いかにもよく似たその人の身の上であることだ）（それで）（無事で）

一〇 以下、僧都の話の内容を伝える趣。

一一 ご本人が出家の素志の深い旨を（僧都に）訴えて尼になりました。

一二 本当にその人が浮舟だと捜し当てた時には。以下あれこれと思いをめぐらす薫の心中。

一三（浮舟が）せっかく決心して入ったという仏の道も邪魔立てなさるに違いないことだ。

一四（匂宮は）そんなお積りで、（中宮に）「それとはおっしゃいますな」（薫には隠しておいてほしい）などと申し上げられておかれたので。

一五「これこれの噂を聞きました」と。

一六（浮舟が）再びこの世の人になったとあれば、遠い将来には、来世でまた逢おうといった程度のことを親しく話し合うふとした機会も自然にあることであろう。「黄なる泉」は「黄泉」の訓み。冥途。前に「やがて亡せにしもの」とある縁で言う。「風のまぎれ」は、風のいたずらとでもいったところ。ふとした機会といった感じ。

手習

（小宰相）一〇 横川からおりてきたその日に尼にしました
むや」とのたまへば、「かの僧都の山より出でし日なむ、尼になし
つる、いみじく病気をしていた時にも出家させなかったのはたの人が
を、正身の本意深きよしを言ひてなりぬる、とそんなお話のようでした
か」と言ふ。所も場所も同じ宇治だし その当時の事情と思い合せてみると
違ふふしなければ、まことにそれと尋ね出でたらむ、いとあさまし
きこちもすべきかな、いかでかはたしかに聞くべき、おりたちて
尋ねありかむも、かたくなしなどや人言ひなさむ、またかの宮も、
聞きつけたまへらむには、かならずおぼし出でて、思ひ入りにけむ
道もさまたげたまひてむかし、さて、さなのたまひそ、など聞こえ
おきたまひければや、われには、さることなむ聞きしと、さるめづ
らしきことを聞こしめしながら、のたまはせぬにやありけむ、宮も
かかづらひたまふにては、いみじくあはれと思ひながらも、さらに、
やがて亡せにしものと思ひなしてをやみなむ、うつし人になりて、
末の世には、黄なる泉のほとりばかりを、おのづからかたらひ寄る

尼にしました
出家させなかったのはたの人が
とそんなお話のようでした
場所も同じ宇治だし
その当時の事情と思い合せてみると
ほんとに意想外の驚
どうしたら確かなことが聞けようか
私が直接のり出
きに打たれることだろう
匂宮
馬鹿なことをするものだなどと人は噂しようか
して捜しまわるというのも
噂を耳になさったりでもしたら
きっとまた夢中におなりになって
聞きつけたまへらむには、かならずおぼし出でて、思ひ入りにけむ
道もさまたげたまひてむかし、さて、さなのたまひそ、など聞こえ
おきたまひければや、われには、さることなむ聞きしと、さるめづ
珍しい話をお耳になさりながらも
〔中宮は〕おっしゃらなかったのだろうか
匂宮も
らしきことを聞こしめしながら、のたまはせぬにやありけむ、宮も
かかわっておられるというのなら
せつないほどにいとしくは思われるものの
きっぱりと
かかづらひたまふにては、いみじくあはれと思ひながらも、さらに、
あのままうち死んでしまったものと思い諦めてこのままにしておこう
やがて亡せにしものと思ひなしてをやみなむ、うつし人になりて、
末の世には、黄なる泉のほとりばかりを、おのづからかたらひ寄る

一（中宮は）やはり私におっしゃっては下さらないだろう。

二 中宮のご意向が知りたいので。匂宮の関与の如何、また中宮が匂宮の為を計るかどうか薫は知りたいのである。

三 中宮。「大宮」は、宮たちの母宮といった語感。匂宮の母としての中宮の意向をただすといった感じになる。

薫、中宮のご意向を確かめる

四 全く意外なことで死なせてしまったと思っておりました人が。入水したと思われた浮舟のこと。

五 自分から進んでそんな思い切ったことをして。入水という非常手段までとって、の意。

六 人が話してくれましたような事情でしたら、そんなことであったかもしれませんと。物の怪に気取られたということなら、合点がゆかぬでもない、と言う。

七 いかにも毅然とした態度で。匂宮の介入は許さぬといった面持。

八 その人のことを、また（匂宮が）そのように（私が尋ねあてたと）お耳になさいましたならば。

九 絶対に、（その人が）そうして生きていたということも、知らぬ顔をしている積りでございます。ことを秘密にしておきたいと婉曲に釘をさす。

一〇 僧都が話してくれたことなのですが。

風のまぎれもありなむ、わがものに取り返し見むの心はまたつかはじ、など思ひ乱れて、なほのたまはずやあらむ、と思へど、御けしきのゆかしければ、大宮に、さるべきついで作り出でてぞ啓したまふ。

（薫は）（もう一度自分のものにして逢おうという気持はもう起すまい）（適当なきっかけをこしらえて）

（薫）「あさましくて失ひはべりぬと思うたまへし人、世に落ちあふれてあるやうに、人のまねびはべりしかな。いかでかさることははべらむ、と思ひたまふれど、心とおどろおどろしく、もて離るることはべらずや、と思ひわたりはべる人のありさまにはべれば、人の語りはべりしやうにては、さるやうもやはべらむと、似つかはしく思うたまへらるる」とて、今すこし聞こえ出でたまふ。宮の御ことを、いとはづかしげに、さすがに恨みたるさまには言ひなしたまはで、「かのこと、またさなむと聞きつけたまへらば、かたくなにすきずきしくもおぼされぬべし。さらに、さてありけりとも、知らず顔にて過ぐしはべりなむ」と啓したまへば、「僧都の語りしに、いとも

（この世に落ちぶれて生きて）（どうしてそんなことがありましょう）（人が話してくれて驚いております）（いますように）（と信じがたい思いですが）（私から離れ去ることはありますまい）（とあれからもずっと思っておりますそんな気立ての人ですから）（その人にふさわしい話）（今更詳しく事情をお話し申しなさる）（そうはいうものの恨みを含んでいるような言い方はなさらないで）（馬鹿な好色沙汰といったふうにお思いにもなりましょう）（のように思われます）

一一 何とも申し上げようもない不届きなご料簡だ、と思いますので。

一二 こうしたことにつけて。女に関する不行跡によって。

一三 いかにもご身分にふさわしからぬ困ったお方だと、世間では定評になっておられるようですので。

一四 とても慎重なお人柄の方だから。中宮のこと。以下、薫の思い。

一五 仮にどんな気を許した世間話でも、自分がこっそり言上したであろうことをお漏らしになることはあるまい。

一六 (浮舟が) 住んでいるという山里は、どこなのだろうか。小野といっても範囲が広いからである。以下、薫の思い。

薫、横川の僧都に会おうとする

一七 毎月の八日。六斎日(八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日。殺生禁断の日とされる)の初めの日で、薬師如来の縁日。

一八 人間の病苦を救うとされる如来。叡山根本中堂の本尊。

一九 根本中堂。

二〇 浮舟の兄弟(異父弟)の(まだ元服前の)童であるのを、引き連れておいでになる(二五〇頁参照)。すでに叡山に向け出立の体。五月の月末に近い頃かと思われる(夢浮橋二六五頁注一八参照)。

匂宮

の恐ろしかりし夜のことにて、耳もとどめざりしことにこそ。よくも聞いていなかったことなのです宮は、いかでか聞きたまはむ。聞こえむかたなかりける御心のほどかな、聞いておられるはずはありません と聞けば、まして聞きつけたまはむこそ、この話をお耳になさったりするのは いと苦しかるべけれ。とても困ったことでしょう かる筋につけて、いと軽く憂きものにのみ、世に知られたまひぬめれば、心憂くなむ」とのたまはす。情けなく思っています いと重き御心なれば、かならずしも、うちとけ世語りにても、人の忍びて啓しけむことをもらさせたまはじ、などおぼす。

[薫は]

一六 住むらむ山里はいづこにかあらむ、いかにして、どのようにして 不体裁にならずに連絡 さまあしからず尋ね寄らむ、僧都に会ひてこそは、会った上で たしかなるありさまも聞きあはせなどして、果してその人か確かな事情も聞き合せなどして ともかくも問ふべかめれ、いかようにも訊ねてみるのがよかろう など、ただこのことを起き臥しおぼす。

一七 月ごとの八日は、かならず尊きわざせさせたまへば、ありがたい供養をおさせになるので 薬師仏に寄せたてまつるにもてなしたまへるたよりに、寄進申し上げなさるということでお参りなさる関係から 中堂には、参詣なさるのだった 時々参りたまひけり。そこからそのまま それよりやがて横川におはせむ、おいでになろう とおぼして、

二〇 かのせうとの童なる、率ておはす。家族の者たちには すぐには知らせまい その人々には、とみに知らせじ、

事情によってそれは決めよう
ありさまにぞ従はむ、とおぼせど、一うち見む夢のここちにも、あはれをも加へむとにやありけむ。さすがに、当の本人だとは突きとめたものの その人とは見つけながら、みすぼらしい姿で
あやしきさまに、尼姿の人々の中に暮していて容貌(かたち)ことなる人のなかにて、二憂きことを聞きつけたらむこそいみじかるべけれと、三よろづに道すがらおぼし乱れけるにや。

一　浮舟に再会した時は夢のような気がするだろうが、（それだけでなく）一層の感慨をも加えようというお積りだったのだろうか。肉親の一人を伴った薫の気持を忖度する体(てい)の草子地。

二　いやなことを耳にしたりしたらひどくつらいことだろうと。失踪後、何か男関係でもあったというようなこと。

三　あれこれと、中堂への道すがら、思い乱れなさったことだろうか。巻を閉じる形の草子地。

夢浮橋（ゆめのうきはし）

横川に僧都を尋ねた薫は、僧都自身の口から、宇治の院以来の詳しい事情を聞き出し、夢かとの思いに、僧都の前も憚らず思わず涙した。浮舟を早まって出家させたことに後悔の念を禁じ得ない僧都は、薫のこうした深い愛執の思いを目のあたりにして困惑する。浮舟との対面を策す薫は、僧都に下山して案内するよう懇請するが、僧都は婉曲にこれをことわる。薫は、さらに、供に加えた浮舟の弟小君を使いに遣りたいからと一筆の添え書きを頼む。これにも渋る僧都に、薫は昔から仏道に志の深い旨を語ってようやく納得を得た。

その夜、横川から下山する薫一行のあわただしい松明の光は、山荘の浮舟たちからも遥かに望まれた。頃はちょうど遣水に螢の明滅する夏五月の頃だった。

翌日、事情を明かされた小君が使いに立つ。僧都の手紙は浮舟に還俗を奨めるものだった。もう一通、小君の齎した薫の手紙にも、浮舟は返事をしようとしない。しきりに取りなす妹尼に、浮舟は、過去のことは一切夢かと思われるばかりで、たしかな記憶もないと言い張るばかりであった。誰にも知られないで終りたいという浮舟の決意は堅い。空しく帰参した小君を迎えた薫の胸中は複雑で、あらぬ疑いも萌すのだった。

巻名「夢の浮橋」は恐らく作者の造語で、出典不明の古歌「世の中は夢の渡りの浮橋かうちわたりつつものをこそ思へ」（三巻薄雲一六二頁注一参照）に基づくものであろう。本文中にこの語は見えないが、「夢」の語が前後五回（「夢語り」一例を含む）にわたってこの巻に使われている。

一 叡山。根本中堂。前の手習の巻の終りに続く書きぶり。
二 経典や仏像など供養させなさる。

薫、横川に僧都を訪う

三 ご祈禱など依頼なさるお付合いはおありになったが。「つけ」は、付託する意。
四 前巻手習二三三頁に見える。
五 一段と深いご縁をお結びになったので。後世の安楽のことまで僧都に依頼する趣。
六 (右大将ともあろう) 重々しい地位にいらっしゃるお方が。
七 飯に湯を注いだもの。
八 家来たちが休息に下がったりした頃合いを見計らう趣。
九 お持ちになっていられる家でもございますか。
一〇 はい、ございます。まことに貧相な家でございます。

一 山におはして、例せさせたまふやうに、二 経仏など供養ぜさせたまふ。(その翌日には) またの日は横川におはしたれば、僧都おどろきかしこまりきこえたまふ。年ごろ、三 御祈りなどつけかたらひたまひけれど、ことに(格別なさる)特に親しいということはなかったのだが)いと親しきことはなかりけるを、四 このたび一品の宮の御ここちのほどにさぶらひたまへるに、すぐれたまへる験ものしたまひけり、と見たまひてより、五 こよなう尊びたまひて、今すこし深き契り加へたまひてければ、重々しうおはする殿の、かくわざとおはしましたることと、もて騒ぎきこえたまふ。御物語など、こまやかにしておはすれば、御湯漬など参りたまふ。

八 すこし人々しづまりぬるに、(薫)「小野のわたりに、知りたまへる宿りやはべる」と問ひたまへば、(僧都)一〇「しかはべり。いと異様なる所にな

(いつもおさせになるように)
(ご病悩)
(思いがけず恐れ多いことと申し上げ)
(衆にすぐれていられる)
(効験がありだった)
(ご覧になってから)
(この上なくありがたくお思いで)
(こうしてわざわざお尋ね下さったことと)
(ねんごろになさっていられる)
(さし上げなさる)
(ご接待申し上げなさる)
(薫が)
(薫)
(僧都)

一 年老いた尼、というほどの気持。
二 夜中、暁と言わず。刻限を問わずいつでも。（七巻早蕨一三五頁注一二参照）
三 一段と膝を進めて。他聞を憚る密談の体。
四 また、こんなことを（貴僧に）詮索がましく申し上げたりしましては。
五 いずれにせよ申し上げにくいことですが。
六 私が面倒を見なくてはならぬ人が身を隠しておりますように聞きましたのですが。
七 はっきりそれと確かめた上で。
八 あなたの仏弟子になって。僧都が出家の導師になったこと。
九 私が死なせたかのように、苦情を持ちかける人もいるのですが。親などからの苦情もある、とそれとなく圧力をかける。
一〇 やはり思った通りだ、並の身分の人とは見えなかった人柄だった。以下、僧都の心中。

僧都の困惑

む。なにがしが母なる朽尼のはべるを、京にはかばかしき住処もはべらぬうちに、かくて籠りはべるあひだは、夜中暁にも、あひぶらはむ、と思ひたまへおきてはべる」など申したまふ。「そのわたりには、ただ近きころほひまで、人多う住みはべりけるを、今は、いとかすかにこそなりゆくめれ」などのたまひて、三今すこし近うゐ寄りて、忍びやかに、「（薫）いと浮きたるここちもしはべる、四また尋ねきこえむにつけては、いかなりけることにかと、心得ずおぼされぬべきに、五かたがた憚られはべれど、かの山里に、六知るべき人の隠ろへてはべるやうに聞きはべりしを、七たしかにてこそは、いかなるさまにて、などももらしきこえめ、など思ひたまふるほどに、御弟子になりて、八忌むことなど授けたまひてけり、と聞きはべるは、まことか。まだ年も若く、親などもありし人なれば、九ここに失ひたるやうに、かことかくる人なむはべるを」などのたまふ。

僧都、一〇さればよ、ただ人と見えざりし人のさまぞかし、かくまで

（拙僧の）（こうして山籠りしております問は）（見舞って）（いません上に）（と考えてのことでございます）（やりましょう）（つい近頃まで）（まことにものさびしくなっていくようです）（薫）（まことにつかぬ話のような気もいたしますし）（一体どうした事情のことなのかと）（不審にお思いのことと存じ）（られますので）（などともお打ち明け申し上げよう）（思っておりますうちに）（あって）（どういう事情が）（戒などをお授けになった）（本当で）（しょうか）（これほどまで）

一一 法師の身とはいえ。出家を勧めるのは当然とはいえ。再び、僧都の思い。

一二 確かなことをお聞きになったに違いない。以下、さらに僧都の思い。

僧都、詳細に事情を語る

一三 母尼と妹尼。以下、手習の巻の冒頭に書かれた浮舟発見のいきさつを語る。

一四 このあたり、事情は前後している。

一五 疲労による病の意であろう。

一六 まず最初に奇怪なことがございました。発見の詳しいいきさつも語ったのであろうが、それは省筆に従う呼吸。

一七 葬儀の前に亡骸を安置しておく所。死んだと思われた人が蘇生したという物語があったのであろう。なお宇治には菟道稚郎子が蘇生した話がある（『日本書紀』仁徳天皇即位前紀）。手習の巻では「もし死にたる人を捨てたりけるが、よみがへりたるか」（一七六頁）というところがある。

のたまふは、軽々しくはおぼされざりける人にこそあめれ、と思ふに、法師といひながら、心もなく、たちまちに容貌をやつしてけること、と胸つぶれて、いらへきこえむやう思ひまはさる。たしかに聞きたまへるにこそあめれ、かばかり心得たまひて、うかがひ尋ねたまはむに、隠れあるべきことにもあらず、なかなかあらがひ隠さむに、あいなかるべし、など、とばかり思ひ得て、「いかなることにかはべりけむ。この月ごろうちうちにあやしみ思うたまふる人の御ことにや」とて、「かしこにはべる尼どもの、初瀬に願はべりて、詣でて帰りける道に、宇治の院といふ所にとどまりてはべりけるに、母の尼の労気にはかにおこりて、いたくなむわづらふと告げに、人のまうで来たりしかば、まかりむかひたりしに、まづあやしきことなむ」とささめきて、「親の死にかへるをばさしおきて、もてあつかひ嘆きてなむはべりし。この人も、亡くなりたまへるさまながら、さすがに息は通ひておはしければ、昔物語に、魂殿に置きたりけむ

（おっしゃるのは）（いい加減には思っていらっしゃらなかった人なのであろう）（無分別にも）（尼姿にしてしまったこと）（どうお答え申し上げたものかと思案される）（不安な思いで）（あわただしく）（これほどまでに事情をご承知で）（様子を知ろうとなさっているからには）（知れないでいるはずのことではない）（かえって無理に隠そうとしたので）（暫くの思案で腹を決めて）（僧都）（どういうことでございましたのでしょうか）（内心ひそかに不審に思っておりますお人のことでしょうか）（僧都）（小野）（途中）（一四）（一五）（ひどくなって）（重い病状だと）（知らせに）（使いがやってまいりましたので）（宇治に）（出向きましたところ）（声をひそめて）（僧都）（親があわや死のうというのをよそにして）（妹尼は）（その人の介抱に心を砕いておりました）（浮舟）

人のたとひを思ひ出でて、さやうなることにや、とめづらしがりはべりて、弟子ばらのなかに験ある者どもを呼び寄せつつ、かはりがはりに加持せさせなどなむしはべりける。なにがしは、惜しむべき齢ならねど、母の旅の空にて病おもきを助けて、念仏をも心乱れずせさせむと、仏を念じたてまつり思うたまへしほどに、その人のありさま、くはしくも見たまへずなむはべりし。ことの心おしはかり思うたまふるに、天狗木霊などやうのものの、あざむき率てたてまつりてのちも、三月ばかりは亡き人にてなむものしたまひけるを、なにがしが妹、故衛門の督の北の方にてはべりしが、尼になりてはべるなむ、一人持ちてはべりし女子を失ひてのち、月日は多く隔てはべりしかど、悲しび堪へず嘆き思ひたまへはべるに、同じ年のほどと見ゆる人の、かく容貌いとうるはしきよらなるを見出でたてまつりて、観音の賜へるとよろこび思ひて、この人いたづらになし

話
〔妹尼は〕
そうした人なのだろうか
法力
拙僧
三
母尼
力添えして
四
浮舟
仏を一心に念じ申して願っておりましたので
〔その時は〕詳しくも見なかったのでございます
事情を推察して思いますのに
魔物が
たぶらかして
お連れ申した
と皆の話から存じられました
介抱して
死んだ人のようでいらっしゃいましたが
死なせてから
尼になっております
随分たってお
年の頃
拙僧の妹で
いかにもととのって美しい人を
お死なせ申してはならの

一 僧都の弟子たち。以下も、妹尼のこと。
二 諸仏の加護を念ずること。真言密教の行法。
三 死んでも惜しくない老齢の身ではございますが。母尼のこと。
四 念仏を一心不乱にさせましょうと。母尼の臨終正念（臨終に際して極楽往生を疑わぬこと）を願ったということ。
五 後世のいわゆる烏天狗のイメージと同様であったらしい。『今昔物語集』巻二十本朝付仏法にまとまって天狗の話が見える。染殿の后に天狗の憑いた話もある（『古事談』二）。仏者には親しい魔性である。
六 手習一七六頁参照。
七 宇治からみて都近い小野の山里を、大まかに「京」といったのであろう。
八 手習一八五頁に「うちはへかくあつかふほどに、四五月も過ぎぬ」とあった。
九 中宮にも同様の紹介をしている。（手習一三三五頁）
一〇 初瀬の観音がお授け下さったのだと。（手習一七九～一八〇頁、一八六頁参照）

一一 それはもう一生懸命になりまして。
一二 あとになりましてから。前に「その人のありさま、くはしくも見たまへずなむはべりし」とあった首尾。
一三 叡山の西坂本。小野のこと。
一四 護身法。印を結び陀羅尼を唱えて身心を守護する修法。
一五 やはりこの私に取り憑いていた物の怪が、まだまといい付いているような気がいたします。以下「後の世を思はむ」まで、僧都に出家を頼む浮舟の言葉を伝える趣。
一六 後世の安楽を願いとうございます。
一七 夢にも、(薫にとって)関わり合いのおありであろうこととは、どうして当てもなく気づくことでございましょう。「そらに」は、拠り所なしにの意。
一八 世間の噂の種にもしたいようなことでございましたが。
一九 母尼や妹尼。

薫の驚き

二〇 (薫としては)これこれらしいと、ちらと耳にして、(それで)ここまではっきりお聞き出しになったことではあるが。

たてまつらじと、まどひ焦られて、泣く泣くいみじきことどもを申されしかば、のちになむ、かの坂本にみづから下りはべりて、護身などつかうまつりしに、やうやう生き出でて人となりたまへりけれど、なほこの領じたりけるものの、身に離れぬここちなむする、このあしきもののさまたげをのがれて、後の世を思はむ、など、悲しげにのたまふことどものはべしかば、法師にては、勧めも申しつべきことにこそは、とて、まことに出家せしめたてまつりてしにはべる。さらに、しろしめすべきこととは、いかでかそらにさとりはべらむ。めづらしきことのさまにもあるを、世語りにもしはべりぬべかりしかど、聞こえありて、わづらはしかるべきことにもこそと、この老人どものとかく申して、この月ごろ音なくてはべりつるになむ」と申したまへば、さてこそあなれと、ほの聞きて、かくまでも問ひ出でたまへることなれど、むげに亡き人と思ひ果てにし人を、さはまことにあるにこそは、とおぼすほど、夢のここちしてあさま

たてまつらじと(たての願いを申してよこされまないと)、まどひ焦られて(したので)、泣く泣くいみじきことどもを申されしかば(してさし上げましたところ)、のちになむ、かの坂本にみづから下りはべりて、護身(意識を取りもどして普通の有様におなりでした)などつかうまつりしに、やうやう生き出でて人となりたまへりけれど(が)、なほこの領じたりけるものの(たちのよくない魔物の妨げからのがれて)、身に離れぬここちなむする、このあしきもののさまたげをのがれて(いろいろお願いなさることがございましたので)、後の世を思はむ、など、悲しげにのたまふことどものはべしかば(こちらからお勧めもすべきことだ)、法師にては(としては)、勧めも申しつべきことにこそは、とて、まことに出家せしめたてまつりてしにはべる(出家おさせ申し上げたという次第でございます)。さらに、しろしめすべきこととは(何せ世にも珍しいいきさつでもございますので)、いかでかそらにさとりはべらむ。めづらしきことのさまにもあるを、世語りにもしはべりぬべかりしかど、聞こえありて(世間に知れて)、わづらはしかるべきことにもこそと(厄介な問題に巻き込まれることになっても困ると)、この老人どものとかく申して(あれこれ申しまして)、この月ごろ音なくてはべりつるになむ」と申したまへば、さてこそあなれと、ほの聞きて(口外もせずにいたのでございます)、かくまでも問ひ出でたまへることなれど、むげに亡き人と思ひ果てにし人を(てっきり死んだ人だと思いあきらめていた人を)、さはまことにあるにこそは(それではほんとに生きているのだ)、とおぼすほど(お思いになると)、夢のここちしてあさま(夢見ごこちであまりといえばあま

一 僧都が立派な人なのに。以下、薫の心中。

二 これほどまでにお思いだったのに、この世では死んだ人と同じような尼姿にしたことだと。僧都の後悔する心中。

三 罪深いことをしたと思うので。

四 身分の高いお生れでいらっしゃったのでしょう。「家の子」は、良家の子弟の意。

五 これほどひどい身の上になりなったのでしょうか。

薫の、僧都への説明

「はふる」は、零落する意。

六 一応は皇族の血筋とでも言えるほどの人でしたでしょうか。八の宮の庶腹であることをぼかして言う。

七 そうかと言って、まさかこれほどまで落ちぶれてよい女とは思いませんでしたのに。適当な処遇は与える積りでいた人だ、と言う。

八 罪障を軽くする境涯にいるのですから。尼になったこと。

しければ、つつみもあへず涙ぐまれたまひぬるを、僧都のはづかしげなるに、かくまで見ゆべきことかは、と思ひ返して、つれなくもてなしたまへど、かくおぼしけることを、この世には亡き人と同じやうになしたることと、あやまちしたるここちして、罪深ければ、「あしきものに領ぜられたまひけむも、さるべき前の世の契りなり。思ふに高き家の子にこそものしたまひけめ。いかなるあやまりにて、かくまではふれたまひけむにか」と問ひ申したまへば、「なま王家流などいふべき筋にやありけむ。ここにも、もとよりわざと思ひしことにもはべらず、ものはかなくて見つけそめてははべりしかど、またいとかくまで落ちあふるべき際とは思うたまへざりしを、めづらかに、あともなく消え失せにしかば、身を投げたるにや、など、さまざまに疑ひ多くて、たしかなることは、え聞きはべらざりつるになむ。罪軽めてものすれば、いとよしと心やすくなむ、みづからは思ひたまへなりぬるを、母なる人なむ、いみじく恋ひ悲しぶなる

りのことなので　隠そうにも隠せずつい涙ぐんでしまわれたが　こんな気弱なところを見せてはならぬ　平静をよそおっていらっしゃるけれども　過失を犯したような気がして　取りつかれなさったというのも　そうなる　前世からの因縁です　(僧都)魔物に　どのような間違いで　私としても　もともと特に重く扱う積りだったわけでもありませんで　ふとしたことから関わりを持つようになったのではありましたが　行方も知れず姿を消してしまいましたので　千万にも　不思議　いろいろと不審な点も多くて　確かな事情は　聞き出せなかった次第なのです　大変結構なことだと安心な気持に　私自身はなりましたが　ひどく恋しがって悲しんでいるそう

九（それでは）今までずっと秘密にしておられたあなた方のご意向も無になるようなことで。係争に巻き込まれたくないという妹尼や僧都の意向。

一〇その上で。母親には知らせまいと前置きした上で直接の交渉の仲介を僧都に頼む。

僧都に小野を訪れることを依頼

一一はなはだ不都合な案内役とはお思いでしょうとも。僧侶には似つかわしからぬ役割という気持。

一二要するに、小野に私を連れて行ってほしい、ということ。

一三夢のような失踪以来のあれこれのことを。前にも「夢のここちしてあさましければ」（二六三～四頁）とあった。

一四（尼になった）せめて今なりと語り合いたい。

一五俗のかたちを変え、世間を捨ててしまった積りで（本人は）いても。以下、僧都の心中。

一六おかしな気持（淫欲の心）はなくならぬ者もいるようだ。

一七つまらぬ依頼を受けたものと困り果てた。

一八月が改まっての頃に。「今日明日は」と言ってこう言うのだから、今は月末らしい。後文に螢が出てくるので、五月末と見ておく。

一九ここであわててやきもきする体を見せるのも。

（これこれと聞き出したなので）を、かくなむ聞き出でたる、と告げ知らせまほしくはべれど、月ごろ隠させたまひける本意違ふやうに、（厄介なことになろうかもしれません）ものさわがしくやはべらむ。親子の仲の思ひ絶えず、（母が）悲しびに堪へで、（尋ねて来たりするに違いないことで）とぶらひものしなどしはべりなむかし」（親子の間の情愛のきずなですから）などのたまひて、一〇さて、（薫）「いと便なきしるべとはおぼすとも、一一かの坂本に下りたまへ。（ここまで聞き出して）かばかり聞きて、（いい加減にそのままにしておけようとは思っておりませんでした人ですから）なのめに思ひ過ぐすべくは思ひはべらざりし人なるを、一二夢のやうなることどもを、（と思うのです）一四今だに語りあはせむ、となむ思ひたまふる」とのたまふけしき、いかにも思いを絶ち切れぬご様子なので）とあはれと思ひたまへれば、一五容貌をかへ、世を背きにきとおぼえたれど、髪鬚を剃りたる法師だに、一六あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身はいかがあらむ、（どうであろうか）いとほしう罪得ぬべきわざにもあるべきかなと、一七あぢきなく心乱れぬ。（困った）（罪作りなことになるかもしれぬことだと）（僧都）「まかり下りむこと、今日明日は障りはべり。（支障）一八月たちてのほどに、御消息を申させはべらむ」（ご案内をさし上げさせましょう）と申したまふ。（薫は）いかにも気がかりだが）いと心もとなけれど、（それでもぜひにと）なほなほと、一九うちつけに焦られむも、さまあしければ、（体裁の悪いことなので）さらば、（それでは）とて帰りたまふ。

一 浮舟の弟。手習巻末に「かのせうとの童なる、率ておはす」（二五五頁）とあった。後の僧都の手紙に「小君」と見える（二七〇頁）。

薫、とりあえず小君に託す手紙を僧都に依頼

二 誰ということは書かずに。自分（薫）の名前は伏せて、の意。

三 きっと罪を犯すことになりましょう。浮舟の破戒堕落のきっかけを自ら作ることは避けたい、という気持。

四 薫の本邸であるが、ここは、そこに共に住む、出家した母の女三の宮のこと。

五 よんどころない足手まとい（出家の妨げになるもの）と思われまして。

一かの御せうとの童、御供に率ておはしたりけり。異兄弟どもよりは、容貌もきよげなるを、呼び出でたまひて、「これなむ、その人の近きゆかりなるを、これをかつがつものせむ。御文一行賜へ。

（連れておいでなのだった）（見苦しくないのを）（薫）（この子は）（近い縁辺に当りますが）（とりあえず遣わしましょう）（ふみひとくだりたまへ）

二その人とはなくて、ただ、尋ねきこゆる人なむある、とばかりの心を知らせたまへ」とのたまへば、「なにがし、このしるべにて、三かならず罪得はべりなむ。ことのありさまは、くはしくとり申しつ。今は、御みづから立ち寄らせたまひて、あるべからむことは、ものせさせたまはむに、何の咎かはべらむ」と申したまへば、うち笑ひて、「罪得ぬべきしるべと思ひなしたまふらむこそはづかしけれ。ここには、俗のかたちにて、今まで過ぐすなむいとあやしき。いはけなかりしより、思ふ心ざし深くはべるを、四三条の宮の、心細げにて、たのもしげなき身ひとつをよすがにおぼしたるが、五避りがたきほだしにおぼえはべりて、かかづらひはべりつるほどに、おのづから位などいふことも高くなり、身のおきても心にかなひがたくなど

（お捜ししている人がいる）（というほどの事情を）（僧都）（拙僧は）（先方に通じて下さい）（この手引きによって）（申し上げました）（事の次第につきましては）（ご自身で）（小野に）（いかようにもしかるべき処置を）（おとり）（になるについては）（何の）（仔細がございましょう）（薫）（罪を作ることになる手引きとお考えのようですのが身のすくむ思いがいたされます）（俗人の姿のままで）（私としては）（今まで暮して来たのがまことにおかしいのです）（幼い頃）（出家を願う気持が深いのですが）（から）（頼りにもならぬこの私一人を身を寄せる蔭とお思いでいられるのが）（愚図愚図しておりましたうちに）（官位）（この身の処置も思うに任せぬといったことで）（くらる）

六 出家を願いながらもそのままになっておりますうちには。

七（母宮のことのみならず）そのほかにもよんどころない事情も、ますますふえるといったことで過してはおりますが。たとえば女二の宮と結婚したことなど。

八 公務の面でも私生活の上でも。

九 それ以外のことでは。

一〇 修行に専念する私度僧。

一一 重い罪になるようなことを。出家した浮舟に不淫欲の戒を破らせるようなこと。

一二 ただ、かわいそうな母親の嘆きなどを。浮舟の母のこと。

薫、僧都の手紙を得て下山

一三 それはますますご殊勝なことでございます。薫の仏道への関心の深さをありがたがる。

一四 途中、小野に一泊するのも好都合な具合だったが。

して、思ひながら過ぎはべるには、（六）またえ避（さ）らぬことも、数のみ添ひつつは過ぐせど、公私（おほやけわたくし）（八）に、のがれがたきことにつけてこそさもはべらめ、（九）さらでは、仏の制したまふかたのことを、わづかにも聞き及ばむことは、いかであやまたじ、とつつしみて、心のうちは聖（ひじり）（一〇）に劣りはべらぬものを、ましていとはかなきことにつけてしも、重き罪得（う）べきことは、などてか思ひたまへむ。（一一）さらにあるまじきことにはべり。ただいとほしき親の思ひなどを、聞きあきらめはべらむばかりなむ、うれしう心やすかるべき」など、昔より深かりしかたの心ばへを語りたまふ。

（止むを得ない事情によってそんな次第にはなっておりますが／禁じていらっしゃる筋のことを／わずかでも知り得た限りのことは／絶対に間違いを犯すまい／気をつけて／いかにもつまらぬ男女の愛情に溺れたりして／どうして考えましょうか／絶対にあるはずのないことでございます／お疑いには及びません／事情を聞いて慰めてやることでもできましたら／心の安まることでしょう／昔から深かった仏道への願いについて）

僧都も、げにと、うなづきて、（一四）「いとど尊きこと」など聞こえたまふほどに、日も暮れぬれば、中宿（なかやどり）もいとよかりぬべけれど、うはの空にてものしたらむこそ、なほ便（びん）なかるべけれ、と思ひわづらひて帰りたまふに、このせうとの童（わらは）を、僧都、目とめてほめたまふ。「これにつけて、まづほのめかしたまへ」と聞こえたまへば、文書（ふみ）

（僧都）（一三）

（心も決らぬまま尋ねて行ったりしたら／不都合なことだろう／思い悩まれて／兄弟の／とりあえず様子を知らせて下さい／（そのまま）／（薫）この子に託して）

一 おかしなことのようにお思いになってはならぬわけもあることなのです。自分は、出家した浮舟の師僧なのだから、という気持から言う。

二 （薫一行の）前駆の者たち。

三 青々と茂った夏山。ただし同名の歌枕（若狭、丹波の国境、また陸奥にあるとする）もあり、歌語としてはこの歌枕が背景にあろう（五巻若菜上七九頁にも見える）。

山荘より遥かに帰途の薫一行を望む

四 谷のはずれから。長谷出坂の入口のあたりであろう。上に「例の」というのは、手習二三七頁に「はるかなる軒端より」とあったのを受ける。

五 先払いの声を重々しくかけて。いかにも身分ありげな一行の様子。

六 引干。海藻の干したもの（『河海抄』）。

七 いかにも浮世離れして、田舎くさいものの言いようだ。聞いている浮舟の心中を代弁した形の草子地。

八 本当にそうなのかもしれない。以下も、浮舟の心中を地の文で直叙する。

九 薫が宇治に通って来ていた時のことをいう。

きて取らせたまふ。（僧都）「時々は山におはして遊びたまへよ。（横川）すずろなるやうにはおぼすまじきゆゑもありけり」と、うちかたらひたまふ。この子は心も得ねど、文取りて御供に出づ。坂本になれば、御前の人々すこし立ちあかれて、「忍びやかにを」とのたまふ。

小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向ひて、まぎるることなく、遣水の螢ばかりを、昔おぼゆるなぐさめにてながめたまへるに、例の、はるかに見やらるる谷の軒端より、前駆心ことに追ひて、いと多くともしたる火の、のどかならぬ光を見るとて、尼君たちも端に出でゐたり。「誰がおはするにかあらむ。御前などいと多くこそ見ゆれ。昼、あなたにひきぼしたてまつれたりつる返りことに、大将殿おはしまして、御饗応のことにはかにするを、いとよきをりとこそありつれ」「大将殿とは、この女二の宮の御夫にやおはしつらむ」など言ふも、いとこの世遠く、田舎びにたりや。まことにさにやあらむ、時々かかる山路分けおはせし時、いとしるかりし随身

（お渡しになる）（横川）（気晴らしなさるがよい）（親しく言葉をおかけになる）（小野にさしかかると）（わけも分らないが）（受け取って）（離れ離れになって）（薫）（目立たぬようにせよ）（気持の紛らしようもな）（〔浮舟は〕昔が偲ばれる気慰めとしてぼんやり眺めていられると）（松明）（妹尼）（どなたがおいでなのでしょう）（横川）（尼）（薫）（たとのことでした）（婿君でおいでし）（たかしら）（すぐに聞き分けられた）（ご接待の支度を急にするので）（ちょうどよい折でし）（返事）（お届けした）

一〇 月日が過ぎてゆくにつれて（それにもかかわらず）。以下、浮舟の思い。

一一 横川に行き来する人だけが、このあたりでは時々親しく目にする人なのだった。前に「山へ上る人なりとても、こなたの道には、通ふ人もいとたまさかなり。黒谷とかいふ方よりありく法師の跡のみ、まれまれは見ゆるを」（手習二三八頁）とあった。

薫、事情を明かして小君を遣わす

一二 帰途このまま（小野の山荘に）遣わそうと。

一三 浮舟七二頁に見える人物であろう。

一四 吾子。ここは年少者を親しんで呼ぶ言い方。

の声も、うちつけにまじりて聞こゆ。月日の過ぎゆくままに、昔のことのかく思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞ、と心憂ければ、阿弥陀仏に思ひまぎらはして、いとどものも言はでゐたり。横川に通ふ人のみなむ、このわたりには近きたよりなりける。

（中にまじって）（昔のこ）（今さらどうなることでもない）（情けないので）（いつにもまして何も言わないでいる）

薫

かの殿は、この子をやがてやらむとおぼしけれど、人目多くて便なければ、殿に帰りたまひて、またの日、ことさらにぞ出だし立てたまふ。むつましくおぼす人の、ことことしからぬ二三人、送りにて、昔も常につかはしし随身添へたまへり。人聞かぬ間に呼び寄せたまひて、「あこが亡せにしいもうとの顔はおぼゆや。今は世に亡き人と思ひ果てにしを、いとたしかにこそものしたまふなれ。うとき人には聞かせじと思ふを、行きて尋ねよ。母には、まだしきに言ふな。なかなかおどろき騒がむほどに、知るまじき人も知りなむ。その親の御思ひのいとほしさにこそ、尋ぬれ」と、まだきにいと口がためたまふを、幼きここちにも、兄弟は多かれど、この君の容貌

（小君）（お邸）（供人も多くて）（その翌日）（改めて）（小野に）（お遣わしに）（不都合なので）（信頼していらっしゃる家臣の）（さして身分高からぬ者）（同行させなる）（宇治に）（お加えになった）（姉）（覚えているか）（あきらめていたのだが）（実は）（まことに確かに生きておられるそうなのだ）（確かめよ）（実否の分らぬうちに）（知ってはならぬ人も知ってしまおう）（確かめるのだ）（今からきびしく口止めなる）（浮舟）（おさな心にも）（なさるのを）

一「唯唯」の字を当てる。目上に対して応諾の旨を答える言葉。

二 ぶっきらぼうに。涙を隠す気持からわざと乱暴に言う。

三 まだ翌朝早く。薫の帰京した翌朝、すなわち小君訪問の当日の早朝。

四 事情をお伺いいたしまして、これは困ったことと、かえって気後れしております。浮舟を出家させたことを、功徳になることであるにもかかわらず後悔している趣。浮舟への伝言である。

五 前に薫にも「まかり下りむこと、今日明日は障りはべり」（二六五頁）と言っている。

六 山（横川）から、僧都のお手紙を持って、参上した人がおります。小君に同行した者の口上。

僧都より、あらかじめの知らせ

小君、到着

をば、似るものなしと思ひしみたりしに、亡せたまひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるに、かくのたまへば、うれしきにも涙の落つるを、はづかしと思ひて、「をを」と荒らかに聞こえゐたり。

（この上なく美しい人だと心に焼きついていたのに）（思い続けていたところ）（薫が）（うれしいにつけても）（小君）（小野）（面目もないと）

かしこには、まだつとめて、僧都の御もとより、

昨夜、大将殿の御使にて、小君やまうでたまへりし。ことの心うけたまはりしに、あぢきなく、かへりて臆しはべりてなむ、と姫君に聞こえたまへ。みづから聞こえさすべきことも多かれど、今日明日過ぐしてさぶらふべし。

（薫）（浮舟）（申し上げて下さい）（直接姫君に申し上げなくてはならぬことも多いのですが）（お目にかかります）（こちらにお伺いでしたか）

と書きたまへり。これは何ごとぞ、と尼君おどろきて、こなたへもてわたりて見せたてまつりたまへば、面うち赤みて、ものの聞こえのあるにや、と苦しう、もの隠ししける、と恨みられむを思ひ続くるに、いらへむかたなくてゐ給へるに、「なほのたまはせよ。心憂くおぼし隔つること」と、いみじく恨みて、ことの心を知らねば、あわたたしきまで思ひたるほどに、「山より、僧都の御消息にて、

（手紙を）（妹尼）（浮舟は）（自分のことが知れたのだろうか）（つらく思い）（隠し立てしていた）（妹尼に）（恨まれようことをあれこれ思うと）（返事のしようもなくて）（妹尼）（ぜひにおっしゃって下さい）（情けなく他人行儀でいられること）（事情が分らないので）（何も手につかぬほど気をもんでいるところへ）（従者）

七 不思議に思うけれども。今しがた僧都から手紙が来たばかりだからである。

八 この人の持って来たのが、それでは、確かなお手紙なのだろう。

九 菅などで編んだ円い敷物（五巻図録七参照）。簀子にさし出したのである。

一〇 このようなおあしらいでお目にかかるはずではないように。簀子の座というよそよそしい扱いに不満を述べる趣。

一一 浮舟のこと。以下、上包みの宛名と、僧都の署名。

一二 僧都の法名。

一三 人違いでしょうなどと、抗弁する余地もない。

一四 昨日の朝のことである。手紙は昨夜書かれた。

一五 あなた様のご様子につき事情をお訊ねですので。

一六 ご愛情の深かったお間柄に背をお向けになって。「御心ざし」は、薫の愛情。

僧都の書簡の趣

参りたる人なむある」と言ひ入れたり。（申し入れた）

あやしけれど、（七）「これこそは、さは、たしかなる御消息ならめ」（八）とて、（妹尼）「こなたに」と言はせたれば、（取次に）いときよげにしなやかなる童の、（とてもすっきりしてお行儀のよい）えならず（えも言わず）装束きたるぞ、（着飾ったのが）歩み来たる。円座さし出でたれば、簾のもとについゐて、（膝まずいて）「かやうにてはさぶらふまじくこそは、僧都は（小君）（一〇）のたまひしか」と言へば、（妹尼）尼君ぞ、（小君への）いらへなどしたまふ。（応対など）文取り入れて見れば、（仰せられたことです）「入道の姫君の御かたに、山より」とて、（一一）名書きたまへり。（一三）あらじなど、あらがふべきやうもなし。（浮舟は）いとはしたなくおぼえて、（もう立つ瀬もない思いで）いよいよ引き入られて、（奥に）人に顔も見合はせず。（後しさりされて）「常にほこりかならずものしたまふ人がらなれど、（誰にも顔を合せようとしない）いとうたて心憂し」など言ひて、（妹尼）僧都の御文見れば、（いつもはきはきしないでいらっしゃるお人柄ですけれど）

今朝ここに、（一四）横川薫大将殿のものしたまひて、（一五）御ありさま尋ね問ひたまふに、（一六）はじめよりありしやうくはしく聞こえはべりぬ。御心ざし（はじめからの事のいきさつを）深かりける御仲を背きたまひて、（見苦しい山家住まいの者たちの中で）あやしき山がつのなかに出家し

たまへること、かへりては、仏の責め添ふべきことなるをなむ、お話を伺って心配しております次第です　仕方のないことです
うけたまはりおどろきはべる。いかがはせむ。もとの御契りあや
まちたまはで、愛執の罪をはるかしきこえたまひて、一日の出家
の功徳は、はかりきれないものですから　はかりなきものなれば、なほ頼ませたまへとなむ。こ
とごとには、私自身直接お目にかかって申し上げましょう　みづからさぶらひて申しはべらむ。かつがつこの小
君聞こえたまひてむ。
お話し申し上げなさいましょう　とりあえず

と書きたり。
問違いようもなく
まがふべくもあらず、書きあきらめたまへれど、異人は心も得ず。
〔僧都は〕はっきりお書きになっているが　(妹尼)小君　どういうお方なのです
「この君は、誰にかおはすらむ。なほいと心憂し。今さへかくあな
ほんとに何とも情けない　今になってもこうして　どこまでも隠し立てをなさる
がちに隔てさせたまふ」と責められて、すこし外ざまに向きて見た
きつく言われて〔浮舟が〕
まへば、この子は、今はと世を思ひなりし夕暮にも、いと恋しと思
同じ家で一緒に暮していた頃は　とてもやんちゃで　むやみにいば
ひし人なりけり。同じ所にて見しほどは、いとさがなく、あやにく
りちらして憎らしかったけれども　とてもかわいがって
におごりて憎かりしかど、母のいとかなしくして、宇治にも時々率
連れておいでだったので〔小君が〕少し大きくなってからは　互いに仲よくした
ておはせしかば、すこしおよすけしままに、かたみに思へりし童

一　かえって、仏のお叱りを新たに受けなければならぬことであることを。「かへりては」は、仏のおほめにあずかるどころではなく、かえって、の意。薫に愛執の思いの断ちがたいものがあることを言う。

二　もともとの（薫との）夫婦のご縁をお損いになることなく、（薫の）愛執の罪をお晴らし申し上げなさって。浮舟に還俗をすすめる趣旨。

三　「若善男子善女人、発阿耨多羅三藐三菩提心、一日一夜出家修道、二百万劫不レ堕三悪趣一、常生三善処一、受三勝妙楽一、遇三善知識一、永不三退転一、得レ値三諸仏一、受三菩提記一、坐三金剛坐一、成三正覚道一」（『心地観経』。『河海抄』所引）。なお六巻御法一一五頁注八参照。

四　（還俗しても）なお安んじて（その功徳に）おすがりなさるようにと存じます。

五　浮舟以外の人には何のことか分らない。

六　もうこれが最期と覚悟をきめた夕暮れにも。浮舟の巻に「例はことに思ひ出でぬ弟妹のみにくやかなるも、恋し」（九四頁）とあった。

七 ほかの人々の様子は。薫などのこと。手習二四四頁以下の紀伊の守の話など。

八 小君がとてもかわいらしげで、（浮舟に）少し似ていられるような気もするので。妹尼の印象。

九 いえいえ、今は私がこの世に生きているとも（小君は）思っていないだろうに。以下、浮舟の心中。

一〇 確かに仰せのように隠し立てしているとお思いでしょうことがつらくて。「心憂くおぼし隔つること」（二七〇頁）、「今さへかくあながちに隔てさせたまふ」（二七二頁）と妹尼は繰り返し言っている。

一一 情けない姿でおりましたでしょう私の様子は。物の怪に取り憑かれて宇治の院で発見された時のこと。

一二 紀伊の守とか申したお方が。（手習二四四頁以下参照）

一三 昔知っていたお人のことかと。薫の宇治行きのこと。

小君との面会を拒み浮舟、心中を語る

心を思ひ出づるに、夢のやうなり。まづ母のありさま、いと問はまほしく、異人々の上は、おのづからやうやう聞けど、親のおはすらむやうは、ほのかにもえ聞かずかしと、なかなかこれを見るに、いと悲しくて、ほろほろと泣かれぬ。

（子供心）（何よりも母がどうしているか）（とても聞きたくて）（母親がどうしていられるかは）（何かの折に段々と耳に入るけれども）（かすかにも聞くことができないことだと）

いとをかしげにて、すこしうちおぼえたまへるここちもすれば、「御兄弟にこそおはすめれ。聞こえまほしくおぼすこともあらむ。うちに入れたてまつらむ」と言ふを、何か、今は世にあるものとも思はざらむに、あやしきさまに面変りして、ふと見えむもはづかしと思へば、とばかりためらひて、「げに隔てありとおぼしなすらむが苦しさに、ものも言はれでなむ。あさましかりけむありさまは、めづらかなることと見たまひてけむを、さてうつし心も失せ、魂などいふらむものも、あらぬさまになりにけるにやあらむ、いかにもいかにも、過ぎにしかたのことを、われながらさらにえ思ひ出でぬに、紀伊の守とかありし人の、世の物語すめりしなかになむ、見し

（はらはらと思わず涙が落ちた）（お話ししたく思っていられることもおありでしょう）（お部屋にはいって頂きましょう）（おかしな尼姿に）（ようやく涙を収めて）（何も申し上げられない思いです）（浮舟）（急に顔を合せるのも気がひける）（なまじ小君の姿を見ると）（そのようなことで正体もなくしたましひ）（性根などというらしいものも）（以前とは違ったことになってしまったのでしょうか）（過ぎ去った昔のことを）（一向に思い出せないのですが）（世間話をしておいでらしかったその中に）

一 たった一人おいでだった方が。母親のこと。
二 何とかして（私をしあわせに）と、一通りのことではなく心を砕いていたようでしたが。
三 この僧都のおっしゃっておられる人などには。僧都が手紙の中で言っている薫のこと。
四 何とかお考え下さって、何かの間違いだった（人違いだった）というように申し上げて。
五 （そんなことは）とても出来ることではありません。
六 聖（修行僧）という中でも、あまりにも修行一途のお方ですから。世事には疎いという気持。
七 あとですっかり分ってしまうにきまっています。
八 いい加減な軽々しいご身分の方でもいらっしゃいません。薫のこと。嘘などつける相手ではないという気持。

あたりのことにやと、ほのかに思ひ出でらるることあるここちせし。思い出されることがあるような気がしました そののち、とざまかうざまに思ひ続くれど、あれこれといろいろ考えてみますけれども さらにはかばかしくも一向にはっきりとも思い出せないのですが おぼえぬに、ただ一人ものしたまひし人の、いかでとおろかならず思ひためりしを、そのことだけは まだこの世に生きておいでだろうかと まだや世におはすらむと、そればかりなむ心に離れず、悲しきをりをりはべるに、今日見れば、この童の顔は、小さい小さくて見しここちするにも、いと忍びがたけれど、今さらに、かかる人にも、生きているとは知られないで終りたいと思うのです ありとは知られでやみなむとなむ思ひはべる。母親 かの人もし世にものしたまはば、それ一人になむ、対面せまほしく思ひはべる。三 この僧都ののたまへる人などには、どうしても知られ申したくない さらに知られたてまつらじ、とこそ思ひはべれ。四 かまへて、ひがことなりけりと聞こえなして、も隠して下さいませて隠したまへ」とのたまへば、（妹尼）五「いと難きことかな。僧都の御心は、何もかもすっかり申し上げなさったに違いありません 聖といふなかにも、あまり隈なくものしたまへば、まさに残いては聞こえたまひてむや。七 後に隠れあらじ。八 なのめに軽々しき御ほどにもおはしまさず」など言ひ騒ぎて、（人々）見たこともないほど強情でいらっしゃる「世に知らず心強くおはします

小君、薫の手紙をもたらす

九　母屋の御簾際に几帳を立てて。小君を廂の間に請じ入れる用意。

一〇　浮舟がここにいるとは聞いていたけれども。薫から事情を明かされている（二六九頁）。

一一　きっかけもなく自分から親しく言葉をかけるのも気はずかしいけれども。

一二　もう一通ことづかっておりますお手紙を。薫の浮舟宛ての手紙。

一三　僧都のお導きは確かなことでありますのに。浮舟のことにいることは確かなこと、という気持。

一四　私たちはたの者は。第三者、傍観者の意。

一五　他人行儀になさって、はっきりしない態度をお取りになるからには。

一六　直接にお手渡しせよ、ということでお預かりして来ましたので、ぜひにもさし上げなくてはなりません。

一七　まことにごもっともなおっしゃりようです。以下、浮舟に向って言う言葉。

一八　前に「母屋の際に几帳立てて」とあった几帳。

（小君を）母屋の御簾際に几帳を立てて。小君を廂の間に請じ入れる用意。

（小君）浮舟がここにいるとは聞いていたけれども。薫から事情を明かされている（二六九頁）。

きっかけもなく自分から親しく言葉をかけるのも気はずかしいけれども。

もう一通ことづかっておりますお手紙を。薫の浮舟宛ての手紙。

僧都のお導きは確かなことでありますのに。浮舟のことにいることは確かなこと、という気持。

私たちはたの者は。第三者、傍観者の意。

（皆で話し合ってとです）こそ」と、皆言ひ合はせて、母屋の際に几帳立てて入れたり。

この子も、一〇さは聞きつれど、幼ければ、一一ふと言ひ寄らむもつつましけれど、（小君）一二「またはべる御文、いかでたてまつらむ。（ぜひにもさし上げたいのです）一三僧都の御しるべはたしかなるを、かくおぼつかなくはべるこそ（こんなわけの分らないことでは困ります）」と、伏目にて言へば、（妹尼）「（それそれ）そそや。（まあ利発なおっしゃりよう）あなうつくし」など言ひて、（妹尼）「御文御覧ずべき人は、一四（一体どうしたことかと）ここにおいでになるようです）ここにものせさせたまふめり。見証の人なむ、いかなることにかと、（得心しかねているのですから）心得がたくはべるを、（ぜひおっしゃって下さい）なほのたまはせよ。（お若くていられますが）幼き御ほどなれど、かかる御しるべに頼みきこえたまふやうもあらむ」（たご使者として［薫が］ご信頼なさるだけの訳もあるのでしょう）など言へど、（小君）一五「おぼし隔てて、おぼおぼしくもてなさせたまふには、（何を申し上げられましょう）何ごとをか聞こえはべらむ。（私を他人のように今はお思いですから）うとくおぼしなりにければ、（申し上げることもございません）聞こゆべきこともはべらず。ただこの御文を、一六人伝ならでたてまつれ、とてはべりつる、いかでたてまつらむ」と言へば、（妹尼）一七「いとことわりなり。（いくら何でも怖ろしいほどのなさりようです）なほいとかくうたてなおはせそ。（どうかそんなに強情をお張りにならないで）さすがにむくつけき御心にこそ」（おうながし申して）と聞こえ動かして、一八（人ごこちもない思いで坐っていられ）几帳のもとに（浮舟を）押し寄せたてまつりたれば、あれにもあらでゐたまへ

一 いかにも別人ではないような気がするので。小君の御簾、几帳越しの印象。

二 例によって何にでもすぐ感心したがる出過ぎた人は、世にまたとない結構なお手紙と思うらしい。草子地。妹尼以下の尼たち。「古代の人どもは、ものめでをしあへり」（手習二〇一頁）とあった。

三 あれこれとひどいことをなさった今までのあなたのお仕打ちは。匂宮との密通、失踪、身許を隠していたこと、無断の出家等々をいう。

四 （あなたを救い庇護して来た）僧都の徳に免じて大目に見てさし上げることにして。

五 （あなたが行方知れずになった）思いも寄らぬ当時の夢のような思い出話なりとせめて（話し合いたい）。

六 仏の道の師として横川に僧都を尋ねたのですが、その僧都の導きで、思いも寄らぬ恋の山にうろうろしていることです。

七 私としては、行方も知れぬあなたの忘れ形見として側に置いている者なのです。

薫の手紙

るる様子が
るけはひ、異人（ことひと）には似ぬここちすれば、そこもとに寄りてたてまつりつ。（小君）「御返り疾く賜（たま）はりて参（と）りなむ（帰参いたしましょう）」と、かくうとうとしきを、情けないと心憂しと思ひて急ぐ。

尼君（あまぎみ）、御文（おふみ）ひき解（と）きて、見せたてまつる。（浮舟に）ありしながらの御手（ご筆跡）にて、紙の香（か）など、例の、世づかぬまでしみたり。（異様なまでにたきしめてある）ほのかに見て、例のものめでのさし過ぎ人、いとありがたくをかしと思ふべし。

（薫）さらに聞こえむかたなく、三 さまざまに罪重き御心をば、四 僧都に思ひゆるしきこえて、今はいかで、五 あさましかりし世の夢語りをだに、といそがるる心の、（思いせかれる気持が）われながらもどかしきになむ。まして人目はいかに。（我ながらどうしたことかと思われるのです）

と、書きもやりたまはず。（気持も十分にお書きになれない）

（薫）法（のり）の師とたづぬる道をしるべにて
おもはぬ山に踏みまどふかな

この人は、（小君）見や忘れたまひぬらむ。七 ここには、行方なき御形見に（もうお見忘れかもしれません）

八 いつもより一層内に沈みこんではきはきしない心には、どう申し開きをしてよいか分らない。

浮舟、返事を拒む

九 それがなおりましてから、いずれ後ほど申し上げることにいたします。

一〇 どうしたことか、一体どんな夢を見ていたのかと思われますばかりで、何も分りませんのです。

一一 今日のところは、やはりこのままお持ち帰り下さい。

一二 宛て先違いでもありましたら、とても具合の悪いことでございましょう。

一三 あまり失礼にあたっては。権門である薫に憚る気持から言う。

見るものにてなむ。

など、（情愛のこもった書きぶりだ）いとこまやかなり。（このようにこまごまと書いていらっしゃる文面は）かくつぶつぶと書きたまへるさまの、（ごま）ぎらはさむかたなきに、さりとて、（昔の自分とはうって変った尼姿を）その人にもあらぬさまを、（心なら）思ひのほかに見つけられきこえたらむほどのはしたなさなどを思ひ乱れて、（かしようもないのだが）いとどはればれしからぬ心は、（ずも見つけられ申した時の立つ瀬もない恥ずかしさなどを思うと心も乱れて）言ひやるべきかたもなし。

さすがにうち泣きてひれ臥したまへれば、（ほんとに世にも変ったおかしなお）いと世づかぬ御ありさまかな、（扱いかねている方ですこと）と見わづらひぬ。「いかが聞こえむ」（妹尼）（どうご返事申しましょう）など責められて、「こ（浮舟）（今は気分がとても苦しゅうございますので）こちのかき乱るやうにしはべるほど、ためらひて、（何も心に浮ぶこともなく）今聞こえむ。昔のこと思ひ出づれど、さらにおぼゆることもなく、あやしう、いかなりける夢にかとのみ、心も得ずなむ。（少し気持が落着きましたら）すこししづまりてや、この御文なども、（分ることもあるかもしれません）見知らるることもあらむ。今日は、なほ持て参りたまひね。所違へにもあらむに、（押しやりなさるので）いとかたはらいたかるべし」とて、ひ（妹尼）（ほんとに困ったことをなさいま）ろげながら、尼君にさしやりたまへれば、「いと見苦しき御ことかな。（お側の私たちまでが）あまりけしからぬは、見たてまつる人も、罪さりどころなかる（手紙を広げたまま）（お咎めをこうむることになりす）

一　この家の主人。妹尼。
二　物の怪のせいでいらっしゃるのでしょうか。今までのいきさつを簡単に語る。
三　お髪もお下ろしになったのですが。尼になったこと。

小君、空しく帰る

四　このようにほんとにしみじみとおいたわしいいろいろなご事情がございましたことを。薫がこうまでして捜し当てて来たこと。
五　それが一層、こうしたお手紙など頂いて、気持がお乱れなのでしょうか。
六　山里は山里なりのしゃれたお膳など用意したが。
七　わざわざ私をお遣わしになっただけのことはありますように。
八　一言だけでもお返事を頂きたいものです。
九　ごもっともなことです。

べし」など言ひ騒ぐも、うたて聞きにくくおぼゆれば、顔も引き入れて臥したまへり。

主人ぞ、この君に物語すこし聞こえて、「ものの（妹尼）けにやおはすらむ、例のさまに見えたまふをりなく、なやみわたりたまひて、御容貌も異になりたまへるを、尋ねきこえたまふ人あらば、いとわづらはしかるべきこと、と見たてまつり嘆きはべりしもしるく、かくいとあはれに心苦しき御ことどものはべりけるを、今なむいとかたじけなく思ひはべる。日ごろも、うちはへなやませたまふめるを、いとどかかることどもにおぼし乱るるにや、常よりもものおぼえさせたまはぬさまにてなむ」と聞こゆ。所につけてをかしき饗応などしたれど、幼きここちは、そこはかとなくあわてたるここちして、「わざとたてまつれさせたまへるしるしに、何ごとをかは聞こえさせむとすらむ。ただ一言をのたまはせよかし」など言へば、「げに」など言ひて、かくなむ、と移し語れど、ものものたまはねば、かひ

（小君）七　（八）　（九）

（衣に）　（妹尼）二　（小君）　（三）　（四）　（五）　（六）　（妹尼）

いやな聞きたくもないことと思われるので　普通の様子にお見えになる時とてなく　ずっとおわずらいでいらして　行方をお捜しなさるお方がおいでなら　本当に面倒なことになりましょう　お世話申し上げながら心を痛めておりましたが案の定　今になってまことに恐れ多いことと存じております　近頃も　ずっとお具合が悪くていらっしゃるようですが　何となくいたたまれないような気持で　年も若いこととて　子でいらして失礼申し上げます　いつもよりも正体もないようなご様　何もおっしゃらないので　そのまま伝えるが　これこれ　仕方が　一体何とご報告申し上げたらよろしいのでしょう

一〇 ここは、雲の遥か遠くに（都から）離れている所でもないようでございますから。「雲のはるかに」は引歌のあるべきところ。

一一 山風は激しゅうございましょうとも。河内本に「山ふかくとも」とあるのに従うべきであろう。前の引歌と関係があろう。

一二 ここに用もなく日の暮れるまで長居するのも、おかしなことだろうから。小君の心中。

薫の疑い

一三 期待もはずれ、なまじ使いなど出さねばよかったと。

一四 ご自身が何もかも慎重にお考えの上、浮舟を宇治のような所に捨てておき置きになっていた、そんなご経験から。言いさした形。

一五 と、もとの本にあるようです。写本の筆者が、原本にはこうあった、とする注記であるが、物語の大尾を示す常套句であったと考えられる。『宇津保物語』の大尾「楼の上の下」も、「となむ本にこそはべるめれ」と結ばれている。

なくて（妹尼）このようにはきはきしないご様子をお話し申し上げるよりほかございますなくて、「ただ、かくおぼつかなき御ありさまを聞こえさせたまふ一〇べきなめり。雲のはるかに隔たらぬほどにもはべめるを、一一山風吹くとも、またもかならず立ち寄らせたまひなむかし」と言へば、一二すずろにぬ暮らさむもあやしかるべければ、帰りなむとす。人知れずゆかしき御ありさまをも、えお立ち寄り下さいますように見られないでしまったことを気にかかる残念なことに思ってえ見ずなりぬるを、おぼつかなくくちをしくて、心ゆかずながら参りぬ。

晴れぬ思いのまま帰参した

［薫は］いつ帰るかとお待ちだったのに［小君が］こんなわけも分らぬことで帰って来たので

いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくて帰り来たれば、一三すさまじく、なかなかなりと、おぼすことさまざまにて、人の隠しする忘たるにやあらむと、一四わが御心の思ひ寄らぬ隈なく、落し置きたまへりしならひに、一五とぞ本にはべるめる。

あれこれお思いになることも多くて　誰か男がひそかにかくまっているのだろうかと

付

録

陵園妾　憐二幽閉一也　陵園妾は　幽閉を憐べり

本文ならびに訓読は、神田喜一郎博士蔵文集巻第四による。本文、訓読の作製には、太田次男・小林芳規著『神田本白氏文集の研究』の恩恵を蒙った。通行本との本文の異同を、那波本により下に摘記した。

陵園妾　陵園妾
顔色如レ花　命如レ葉
命如二葉薄一将二奈何一
一奉二寝宮一年月多
春愁秋思知二何限一
青糸髪落抜レ鬢疎
紅玉膚銷繋レ裙慢
憶在宮中被二妬猜一
因レ讒得レ罪配レ陵来
老母啼呼趁レ車別
中宮監送鎖レ門迴
山宮一鎖無二開日一

陵園妾　陵園妾
顔色花の如く命は葉の如し
命は葉の薄きが如し将に奈何せむとする
一び寝宮に奉へまつつて年月多し
春の愁へ秋の思ひ何の限りをか知らむ
青糸の髪落ちて鬢を抜くこと疎なり
紅玉の膚は銷えて裙を繋くること慢し
憶在宮中に妬み猜まれき
讒に因つて罪を得て陵に配せられて来る
老母啼き呼んで車を趁めて別れき
中宮監送して門を鎖して迴りき
山宮一び鎖して開く日無く

〔陵園妾陵園妾―陵園妾〕

〔年月多―年月多年月多〕

〔抜鬢―蘂鬢〕

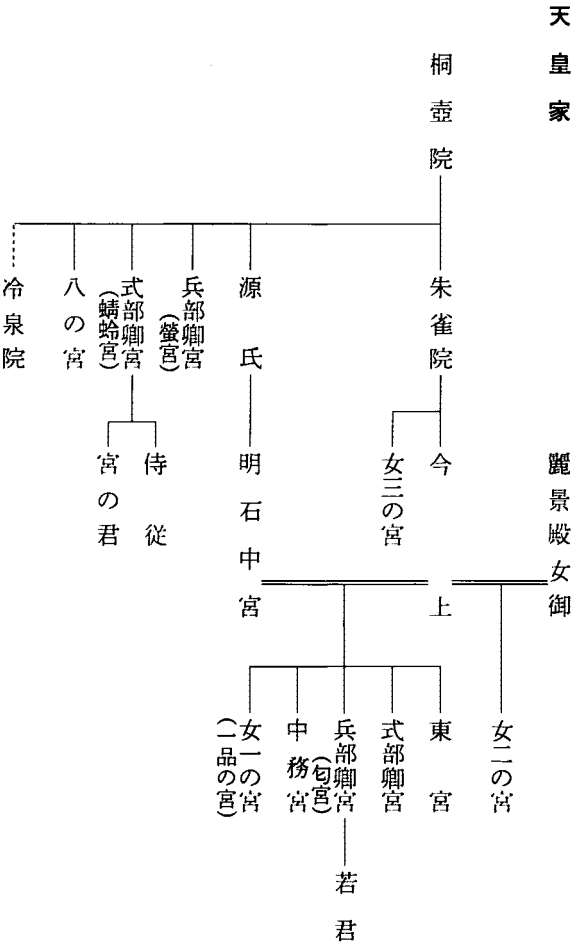
〔憶在―憶昔〕

未レ死此身不レ合レ出　死せ未れば此の身出づ合からず
松門到レ暁月徘徊　松門暁に到りて月徘徊す
柏城尽日風蕭瑟　柏城尽日に風蕭瑟たり
松門柏城幽閉深　松門柏城幽閉深し
聞レ蟬聽レ鷽感二光陰一　蟬を聞き鷽を聽きてのみ光陰を感ず
眼看二菊蘂一重陽涙　眼に菊蘂を看れば重陽の涙（あり）
手把二梨花一寒食心　手に梨花を把れば寒食の心（あり）
手把二梨花一無二人見一　手に梨花を把れども人の見る無し
緑蕪牆遶二青苔院一　緑蕪の牆青苔の院を遶れり
四季徒支二粧粉銭一　四季に徒に粧粉の銭を支つ
三朝不レ識二君王面一　三朝までに君王の面を識らず
遙想六宮奉二至尊一　遙に想ふ六宮の至尊に奉へまつらむことを
宣徽雪夜浴堂春　宣徽の雪の夜浴堂の春
雨露之恩不レ及者　雨露の恩及ばざる者
猶聞不二啻三千人一　猶聞く啻三千人にあらず
三千人我爾　三千人我と爾となり
君恩何厚薄　君の恩何ぞ厚薄なる
願令二輪転直二陵園一　願はくは輪転して陵園に直せしめて

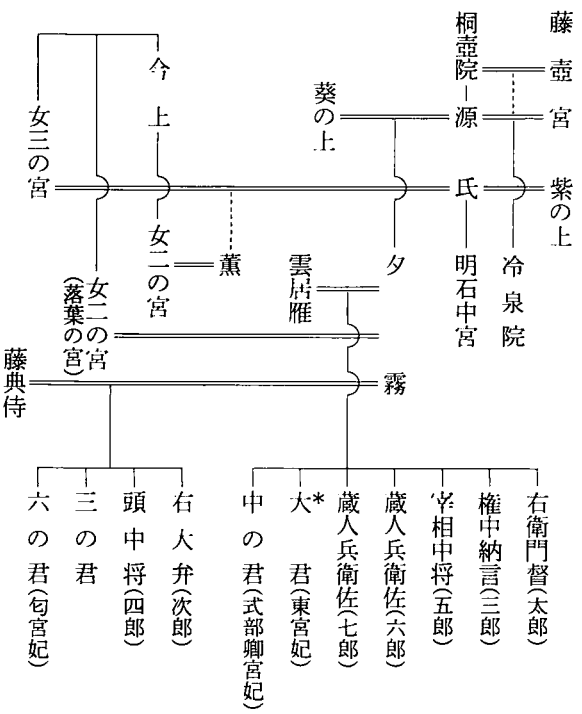
〔不合出―不令出〕
〔聽鷽―聽鶯〕
〔手把梨花―把花掩涙〕
〔我爾―我同〕

三歳一来均ニ苦楽一　三歳に一び来つて苦楽を均しうせむ

第六行「抜鬢」の「抜」は「撥」の簡体字であろうという。「ヲサムルコト」と訓むか。
第一一行「中宮」は「中官」の誤りであろう。「中官」は「宦官」の意。


天皇家
麗景殿女御
桐壺院
朱雀院
今上
女三の宮
女二の宮
源氏
明石中宮
東宮
式部卿宮
兵部卿宮（匂宮）
中務宮
女一の宮（一品の宮）
若君
兵部卿宮（螢宮）
式部卿宮（蜻蛉宮）
八の宮
冷泉院
侍従
宮の君

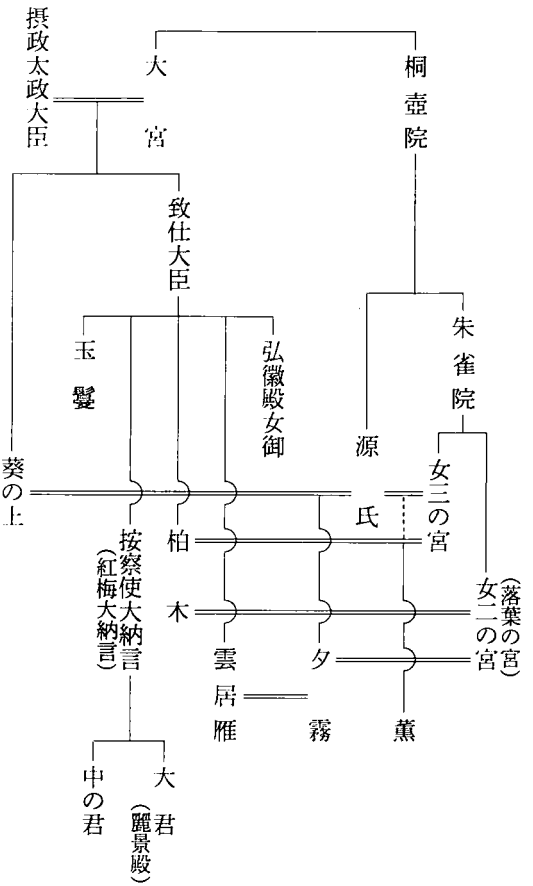
源氏



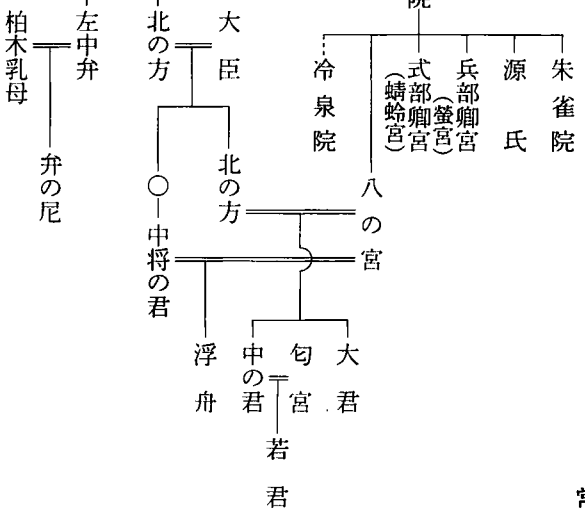
*宿木の巻「三条殿腹の大君」による。

系図二

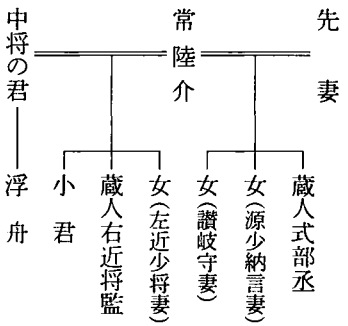
藤原氏（致仕大臣家）


摂政太政大臣
大宮
桐壺院
致仕大臣
玉鬘
弘徽殿女御
朱雀院
源氏
葵の上
女三の宮
柏木
按察使大納言（紅梅大納言）
（落葉の宮）女二の宮
雲居雁
夕霧
薫
中の君
大君（麗景殿）

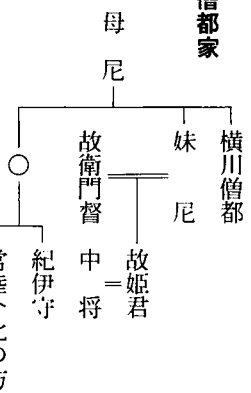
八の宮家



常陸介家

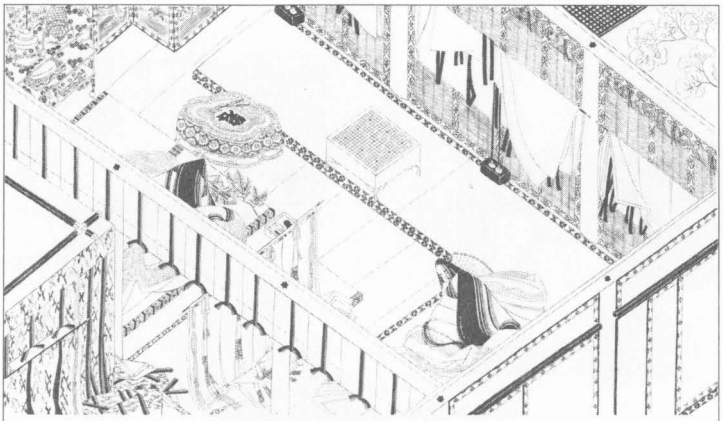


横川僧都家

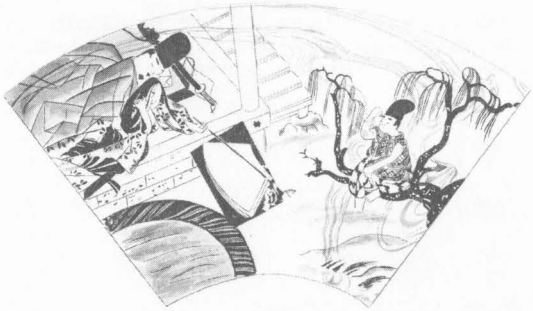


叡山・小野

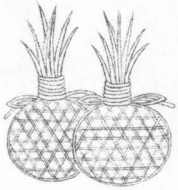
手習の巻で，浮舟が身を寄せた小野の尼君たちの山荘は，旧地名長谷出（はせだし）のあたりであろうと考えられる。ここからは，横高山の南の鞍部を経て横川に至る道，途中から分岐して黒谷青龍寺を経て釈迦堂（西塔）に至る道がある。（本文196頁，238頁参照）



卯　槌（枕草子絵巻）

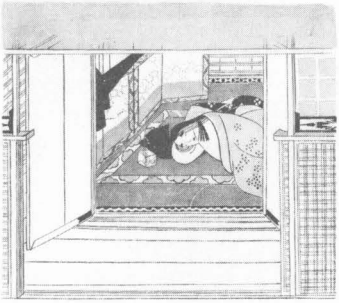


添い寝の図（扇面古写経）

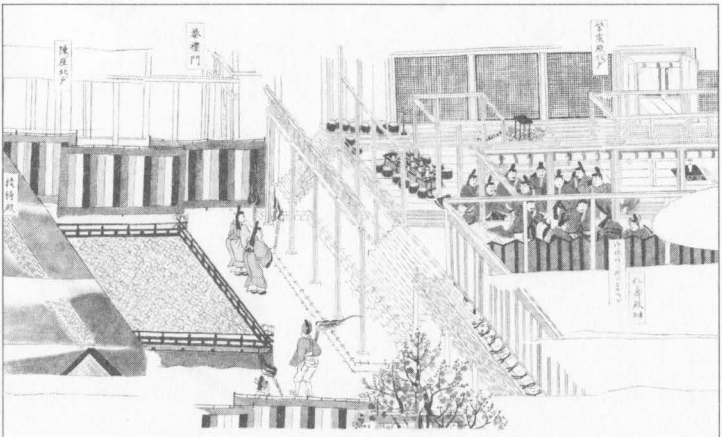


鬚　籠

（初音蒔絵調度硯箱）



衾　（春日権現験記絵）



内　　宴（年中行事絵巻四）

仁寿殿の南廂における，主上のお前での献詩披講の図。七巻図録七，八の内教坊の妓女が舞を奏する図に続く場面である。屏風を背に椅子に着いている帝のお前に内大臣と講師，読師，その背後に公卿，文人が控えている。

来迎菩薩（当麻曼荼羅縁起）

障　泥（年中行事絵巻一）

深　沓（年中行事絵巻一）

草　履（法然上人絵伝）

烏帽子・草鞋（慕帰絵詞）

浅　沓
（年中行事絵巻九）

鬼　（地獄草紙）

年

立

年立は、源氏の年齢と薫の年齢を基準として、物語の叙述を時間的順序にしたがって、その内容を整理したものである。

源氏の年齢は、桐壺の巻は別として、若菜上の巻の源氏四十の賀をもととし、薫の年齢は、匂兵部卿の巻に、十四歳の二月に侍従、十九歳、宰相中将とあるのをもととして、それぞれ、前後に推算したものである。

『源氏物語』の年立は、歴史的には、一条兼良のいわゆる旧年立にはじまり、『細流抄』等の修正を経て、本居宣長のいわゆる新年立に定着を見た。現行の年立は宣長のそれにほぼ拠るが、本年立も同様である。

ただ、宇治十帖の宿木の第一年を、宣長の年立では、薫二十四歳の年（総角の巻の年）のこととするが、本年立は、その翌年のこととして処理した。その根拠は、本年立の記述にも示されているが、七巻宿木巻頭の解説を参照されたい。

各事項の配列は、物語の叙述の流れのままとし、時間的に前後する事項は〔　〕でくくって示した。なお、人物の年齢に問題のある場合、その年次の終りに注記をほどこした場合がある。

源氏年齢	主要事項	人物年齢その他
	桐壺更衣、帝寵を受け、朋輩に妬まれる。	
1	桐壺更衣、皇子（光源氏）を出産。帝寵加わり、弘徽殿女御らの圧迫募る。	
2		
3	皇子、三歳、袴着の儀。 夏、桐壺更衣病み、退出の夜死去。皇子、里邸に退出。更衣、愛宕に葬送の夜、従三位追贈。 秋、叡負命婦、勅使として桐壺更衣の里邸を弔問、復命。 皇子、参内。	
4	春、第一皇子（弘徽殿女御腹、朱雀院）立坊。	朱雀院7
5		
6	桐壺更衣母北の方、死去。	
7	皇子、七歳、読書始め。	
8～11	皇子、鴻臚館で高麗人の相人に会い、予言あり。詩の贈答をする。 皇子、臣籍に降下、源氏を賜る。 藤壺（先帝の四の宮）入内。	

桐壺帝在位：桐壺（1～3）、壺（8～11）

12	16 ～ 13	17
源氏、元服。その夜、左大臣の姫（葵の上）と結婚。藤壺を慕う。 源氏の私邸二条院の整備造営。	〔源氏、この間、中将に任ずる〕	帚木　空蟬　夕 帚木以下三帖、源氏の中将時代の挿話。 夏、五月雨の夜、源氏の宿直所で、雨夜の品定め（頭中将、左馬頭、藤式部丞）。源氏、中流の女性の魅力を教えられる。指食いの女、木枯の女、常夏の女（夕顔）、博士の娘の話。 翌日夜、源氏、方違えに紀伊守の中川の邸に宿り、空蟬と契る。 源氏、空蟬の弟小君を召して、空蟬に消息する。 源氏、再度中川の邸を訪問。空蟬避けて逢わず。 源氏、三度中川の邸訪問。空蟬と軒端荻の囲碁を垣間見る。空蟬のもとに忍ぶが、空蟬はすばやく逃れ、残された軒端荻と契る。 この頃、源氏、六条御息所に通う。 夏、大弐の乳母の病気見舞に行き、五条大路の夕顔の咲く隣家の女から歌を贈られる。惟光に事情を探らせる。 伊予介（空蟬の夫）上京。源氏に挨拶に来る。 秋、源氏、六条御息所を訪う。翌朝、侍女中将と唱和。 源氏、惟光の手引きで夕顔に逢う。 八月十五夜、源氏、夕顔を訪い、夜明け、某院に夕顔を伴う。 十六日夜、夕顔、物の怪に襲われ急死。 十七日朝、惟光、夕顔を東山に運び、源氏、二条院に帰る。 十七日夜、源氏、東山に行き、夕顔の遺骸を弔う。この頃より、源氏病む。 九月二十日頃、源氏回復。
葵の上16	中将	

顔	源氏、夕顔の侍女右近より、夕顔の素姓を聞く。〔頭中将との間の遺児玉鬘は、一昨年春の生れ〕 空蟬、源氏に見舞の便り。 源氏、軒端荻と歌の贈答。 冬、源氏、比叡の法華堂で夕顔の四十九日の法要を行う。 十月初め、空蟬、夫伊予介と共に任国に下る。	夕顔19 玉鬘3

18

若紫	末摘花	
玉鬘（四歳）、夕顔の乳母と共に筑紫に下る。〔玉鬘〕 春、三月末、源氏、瘧病の加持に北山の聖のもとに行く。 明石入道の秘蔵娘の話を聞く。 夕方、紫の上を垣間見る。 招かれて、北山の僧都の坊に泊り、僧都から、紫の上の素姓を聞く。 妹尼に紫の上を乞う。 翌朝、源氏、全快。頭中将ら、北山まで迎えに来る。帰京。 源氏、葵の上と不和。 源氏、北山の尼君に文を送る。 夏、藤壺、病気退出。源氏、藤壺に逢う。 六月頃、藤壺、懐妊三ヵ月。 源氏、夢想あり。	春、源氏、大輔命婦より末摘花の噂を聞く。 十六夜の夜、源氏、末摘花邸に琴を立ち聞きし、頭中将に見つけられる。 源氏、頭中将と競い合い、末摘花に文を送るも返事なし。 源氏、瘧病を患う。	紫の上10ばかり 尼君40余

18	19
若紫	
秋、七月、藤壺、参内。 秋の末、源氏、北山の尼君を京の邸に見舞う。 朱雀院行幸の準備。 九月二十日頃、北山の尼君、死去。 冬、源氏、紫の上を訪う。 翌日、父兵部卿宮、紫の上を訪う。 その夜、源氏、兵部卿宮に先んじて、紫の上を二条院に迎える。 二条院で紫の上の新しい生活。	
末摘花	
秋、八月二十余日、源氏、末摘花に逢う。 翌日、朱雀院行幸の楽人、舞人の定め。 冬、朱雀院行幸の試楽。 雪の夜、源氏、末摘花を訪う。 翌朝、末摘花の異様な容貌を見る。 年末、末摘花、源氏に新年の衣裳を贈る。	春、正月七日、源氏、末摘花を訪う。 翌日、源氏、紫の上と戯れる。
紅葉賀	
冬、十月、朱雀院行幸の試楽。 源氏、青海波を舞う。 翌朝、藤壺と歌の贈答。 十月十日過ぎ、朱雀院行幸の盛儀。源氏、正三位を賜る。 源氏、藤壺を里邸に訪う。 十二月下旬、紫の上、除服。	春、正月、源氏、朝拝に参内。 源氏、葵の上と不和。 二月十余日、藤壺、皇子出産。 夏、四月、藤壺、若宮参内。 源氏、紫の上を愛育。葵の上方の不満。 源氏、源典侍に戯れ、頭中将に見つけられる。 桐壺帝譲位を決意。
正三位	葵の上23

	20	21	22
秋、七月、藤壺立后。源氏、参議に任ずる。	宴　花 春、二月二十日過ぎ、南殿の花の宴。 その夜、源氏、弘徽殿の細殿で朧月夜と契る。 翌日、後宴。 三月二十日過ぎ、源氏、右大臣邸の藤の花の宴に招かれ、朧月夜と再会。	源氏、大将に任ずる。〔若菜上〕	既に御代改まる。〔桐壺帝譲位、朱雀帝即位、藤壺腹の皇子東宮〕 源氏、東宮の後見となる。 前坊の姫君（六条御息所腹）斎宮となる。 葵の上懐妊。 弘徽殿大后腹の女三の宮、斎院となる。 夏、四月、賀茂祭御禊に源氏供奉。葵の上と六条御息所の車争い。 賀茂祭当日、源氏、紫の上と同車して見物。源典侍と歌を贈答。 葵の上、物の怪に悩む。 六条御息所、病む。源氏、見舞う。 秋、源氏、葵の上に取りついた物の怪を御息所の生霊と知る。 その直後、葵の上、男子（夕霧）出産。産養の儀。 司召の夜、葵の上急逝。 八月二十余日、鳥部野に葵の上の葬送。 源氏、四十九日過ぎまで、左大臣邸に籠る。 六条御息所の弔問。
参議		大将	

	22	23	24
	葵	賢	
	源氏、頭中将と歌の贈答。 源氏、朝顔の姫君と歌の贈答。 冬、十月、源氏、左大臣邸を出、桐壺院に挨拶、二条院に帰る。 源氏、紫の上と新枕。 弘徽殿大后、御匣殿（朧月夜）の入内を画策。	春、正月一日、源氏、院・帝、東宮に参賀、左大臣邸を訪う。 六条御息所、斎宮に従って伊勢下向を決意。 秋、桐壺院病む。 九月七日、源氏、野の宮に御息所を訪う。 九月十六日、斎宮、桂川で祓をし、斎宮、御息所参内*、伊勢下向。 冬、十月、桐壺院重態。朱雀帝行幸。源氏、東宮に従い最後の拝謁。それぞれに遺言あり。 十一月初め、桐壺院崩御。 十二月二十日、桐壺院四十九日法要。藤壺中宮、里邸に退出。 ＊六条御息所、十六で故宮に参り、二十で死別、今年三十とあり。	春、正月、右大臣方政権を握る。 二月、御匣殿（朧月夜）、尚侍になる。 斎院（女三の宮）服喪により退下、朝顔の姫君、斎院になる。 源氏、ひそかに朧月夜に逢い、帰途、人に見つけられる。 源氏、藤壺のもとに忍び、拒まれる。 秋、藤壺、出家を決意し、東宮を訪う。 源氏、雲林院に籠る。 九月二十日、源氏、参内して帝と語り、退出の途中、右大臣家の頭弁に諷せられる。 十一月初め、桐壺院一周忌に、源氏、藤壺と歌の贈答。
		六条御息所 30 斎宮 14	

十二月十余日、藤壺、法華八講を催し、結願の日、出家。

25

木

春、正月、源氏、藤壺を訪う。
司召に源氏方昇進なし。
左大臣、致仕す。
夏、源氏、三位中将と韻塞を催す。
朧月夜、瘧病のため、里邸に退出。源氏をひそかに通わせる。
雷雨の夜明け、源氏、密会の現場を右大臣に見つけられる。
右大臣の訴えに激怒した弘徽殿大后、源氏の失脚を計る。

花散里

夏、五月二十日頃、源氏、花散里を訪れる途中、中川の女と歌を贈答。
源氏、麗景殿女御、花散里を訪う。

26

須磨

春、源氏、須磨退去を決意。
三月二十日過ぎ、須磨へ出立。
出発の二、三日前、夜ひそかに左大臣邸に暇乞い。その夜泊る。
明け方、二条院に帰る。紫の上の悲しみ。帥宮、三位中将、来訪。
その夜、源氏、花散里を訪う。
朧月夜に別れの文。
出発前夜、藤壺を訪れ、桐壺院の山陵に詣でる。東宮に消息。
紫の上と最後の別れ。未明、須磨へ出立。
申の時頃、須磨到着。須磨の閑居のさま。
夏、長雨の頃、源氏、紫の上、藤壺、朧月夜に消息。それぞれ返書あり。
伊勢の六条御息所と消息を交わす。
花散里の文あり。
秋、七月、朧月夜、許されて参内。帝に寵愛される。
須磨の秋の寂寥と悲哀。家臣たちとの唱和。

26	須磨	八月十五夜、源氏の感傷。 大宰大弐、上京の途中、源氏に消息。源氏、娘の五節と歌を贈答。 京の人々、源氏を恋う。 冬、源氏、京を思う。 明石入道、源氏の噂を聞き、娘を源氏に奉りたいと望む。
27	明石	春、二月二十余日、源氏、往時の花の宴を偲ぶ。 宰相中将（頭中将）、源氏を見舞う。 三月一日上巳の日、源氏、海辺で祓をする。にわかに暴風雨起る。源氏、怪夢を見る。 なお雨風止まず、紫の上の使い到着。 その翌日（三月十三日）、暴風、高潮。源氏、住吉など神仏に大願を立てる。館に落雷。夜に入って風雨止む。源氏、夢に故桐壺院よりこの浦を立ち去るよう諭される。 翌明け方、明石入道、住吉明神の夢告により、舟を仕立てて、源氏を明石に迎える。 源氏、明石から京の人々に消息する。 明石入道、娘のことを源氏に語る。 夏、四月、源氏、入道と琴を楽しみ、入道、娘を源氏に奉らんことを申し出る。 翌日、源氏、明石入道の娘に文をやる。 〔三月十三日夜、朱雀帝、夢に故桐壺院の叱責を受け、以後、眼を病む。その後、太政大臣（右大臣）薨去、弘徽殿大后も病む〕 秋、八月十三日夜、源氏、岡辺の家で明石の上と契る。 源氏、紫の上、それぞれ絵日記を書く。
28	石	春、正月、朱雀帝病み、譲位と源氏召還を決意する。 秋、七月二十余日、再度、源氏召還の宣旨下る。 〔六月、明石の上懐妊〕 源氏、須磨退去後、末摘花邸荒廃。 秋、末摘花の叔母、夫が大宰大弐になり、末摘花に同行を勧める。

明石入道 60
ばかり
明石の上 18
ほどか

八月、源氏、難波に祓して帰京、権大納言に任ずる。
八月十五夜、源氏、参内。朱雀帝と語る。
冬、十月、源氏、桐壺院追善の法華八講を催す。

澪標

春、二月、東宮（冷泉院）元服。
二月二十余日、朱雀帝譲位。冷泉帝即位。承香殿腹の皇子立坊。
源氏、内大臣に、致仕大臣、摂政太政大臣に、宰相中将、権中納言になる。
源氏、二条の東院を改築。
三月十六日、明石の姫君誕生。〔宿曜の予言〕源氏、乳母を明石に遣わす。
夏、五月五日、明石の姫君、五十日の祝いに、源氏、使いを遣わす。
五月雨の頃、源氏、花散里を訪う。
藤壺、准太上天皇の待遇。
秋、八月、権中納言（頭中将）の姫入内（弘徽殿女御）。
源氏、住吉にお礼参り。同日、明石の上も参詣に来合せるが、源氏一行を避けて難波に泊る。翌日、源氏、文を送る。
六条御息所、前斎宮とともに帰京。病により出家。源氏、御息所を見舞う。
六条御息所、源氏に前斎宮を託して死去。
冬、源氏、前斎宮を弔問。

蓬生

源氏、帰京するが、末摘花を訪わず、叔母、執拗に同行を勧める。
冬、源氏の法華八講に末摘花の兄の禅師、召される。
叔母、末摘花の乳母子侍従を伴い下向。

関屋

夏、四月、源氏、花散里を訪う途次、末摘花を訪れる。
源氏、末摘花の生活を後見する。
〔二年後、二条の東院に引き取る〕
秋、九月末、空蟬の夫常陸介、任果てて帰京。逢坂の関で、源氏一行の石山詣でに出遇う。源氏、空蟬と歌の贈答。
常陸介死去、空蟬出家。

権大納言

冷泉帝 11
東宮 3
摂政太政大臣 63
内大臣

弘徽殿女御 12

六条御息所 36
前斎宮 20

29		朱雀院、前斎宮を妃に望むが、源氏、冷泉帝に奉ろうとして、藤壺の同意を得る。	
30		〔この年秋、前斎宮の喪あける〕	
31	合絵	春、前斎宮入内（梅壺女御）、朱雀院の失望。 三月十日頃、藤壺の御前で、梅壺、弘徽殿の絵合せ。竹取の翁に宇津保の俊蔭、正三位に伊勢物語。 三月二十余日、帝の御前で絵合せ。源氏の須磨の絵日記により梅壺方勝つ。 源氏、出家の志あり。嵯峨野の御堂を造営。 二条の東院落成。花散里をその西の対に迎える。	梅壺女御 22
32	松風 薄	明石入道、明石の上の上京に備えて大井の山荘を修築。 秋、明石の上、姫君と母を伴い上京。大井の山荘に入る。 源氏、大井で明石の上と再会、姫君を見る。 翌日、嵯峨野の御堂に赴き、大井に帰る。 翌日、桂院で宴遊、夜ふけて二条院に帰る。 翌日夜、源氏、紫の上に姫君の養育のことを相談する。（姫君三歳） 冬、源氏、明石の上に、姫君を二条院に引き取ろうと語る。 十二月、源氏、大井に赴き、姫君を二条院に迎え、紫の上の養女とする。 明石の姫君、袴着。 春、正月、二条院の新春。東院での花散里ののどかな生活。 源氏、大井に明石の上を訪う。 太政大臣、薨去。天変地異相次ぐ。 三月、藤壺重態。帝の行幸。 藤壺、源氏の見舞を受け、崩御。葬送。源氏の悲嘆。 夏、藤壺四十九日の法要。その後、夜居の僧、帝に出生の秘密を奏上。帝の煩悶。	明石の姫君 3 藤壺 37

雲	翌日、桃園式部卿宮（朝顔の斎院の父）薨去。 冷泉帝、源氏に譲位の意をもらす。源氏、諫める。 秋、源氏、太政大臣にすすめられるも固辞し、従一位、牛車を許される。 斎宮女御（梅壺）、二条院に里下がり。源氏と春秋の優劣を語り合う。 源氏、大井に明石の上を訪れ、慰める。 九月、朝顔の斎院、父宮の喪のため、辞任して、桃園の宮に移る。 源氏、桃園の宮に女五の宮を訪い、朝顔の前斎院と語る。 翌朝、源氏、朝顔の前斎院に朝顔につけて歌を贈る。 紫の上、源氏と前斎院の噂に悩む。 冬、十一月、源氏、桃園の宮を訪れ、尼になった源典侍に再会する。 源氏、紫の上を慰める。 雪の夕暮、源氏、二条院の童女たちの雪まろばしを見る。 同夜、源氏、紫の上に、藤壺、朝顔、朧月夜、明石の上、花散里について語る。 その夜、藤壺、源氏の夢枕に立って怨む。 源氏、藤壺のために供養をする。	従一位
朝顔		

33

少女	春、藤壺の一周忌。 夏、四月、朝顔の前斎院除服。源氏、文を送る。 夕霧、元服。六位で還り殿上する。 夕霧の字をつける儀式を二条院で行う。式後、饗宴詩会。 夕霧、大学入学。勉学に励む。 秋、夕霧、寮試に合格。 斎宮女御（梅壺）立后。 源氏、太政大臣に、大納言（頭中将）、内大臣になる。 ［夕霧と内大臣の姫君（雲居雁）、幼時より大宮に養われ、相思の仲］	夕霧 12
女		太政大臣 雲居雁 14

33	34	35
少		女
内大臣、大宮を訪れ、音楽を楽しむ。 内大臣、夕霧と雲居雁の仲を知る。 内大臣、二人の仲を割かんとし、雲居雁を自邸に引き取る。 夕霧、雲居雁とひそかに対面、惜別。 冬、十一月、源氏、五節の舞姫に惟光の娘を献ずる。 夕霧、舞姫姿の惟光の娘を見て、歌を詠みかける。 源氏、五節の日、往年の筑紫の五節を思い、歌を贈答。 夕霧、惟光の娘に文を送る。 源氏、夕霧を花散里に託す。 年末、夕霧、大宮に不遇を訴え嘆く。	春、正月、源氏、自邸二条院に白馬を引かせる。 二月二十余日、朱雀院に行幸。放島の試み。帝、源氏と共に帰途、弘徽殿大后を見舞う。 同日、夕霧、進士に及第。 秋、夕霧、五位に叙せられ、侍従に任ずる。 源氏、六条院造営。	春、源氏、式部卿宮（紫の上の父）の五十の賀の準備。 秋、八月、六条院完成。四町に四季の庭作り。 彼岸の頃、紫の上（春）、花散里（夏）移転。数日後、秋好中宮（秋）移転。 九月、秋好中宮、紫の上と春秋の優劣をめぐり歌の贈答。 冬、十月、明石の上（冬）、六条院に移る。
		玉
		玉鬘、筑紫で成人。二十歳ばかり。* 春、三月、肥後の大夫監、玉鬘に求婚。 四月、玉鬘主従、筑紫を逃れ上京。 秋、九月、玉鬘主従、石清水参詣。 玉鬘主従、初瀬詣で。右近に邂逅。 右近、帰京して源氏に報告。 冬、十月、玉鬘、六条院に移り、花散里の町の西の対に住む。
		玉鬘20ばかり

螢

年末、源氏、婦人たちに衣配り。

＊玉鬘、四歳の時、乳母に伴われて筑紫に下向。推算でこの年二十一歳。（『夕顔』『若紫』参照）

初音

春、正月元日、子の日、紫の上方のめでたい新春の行事。
源氏、明石の姫君、花散里、玉鬘を訪い、明石の上のもとに泊る。
二日、六条院臨時客。
数日後、源氏、二条の東院に、末摘花、空蟬を訪う。
十四日、男踏歌、六条院南の町に参上。婦人たち見物。
翌日、源氏、踏歌の後宴を計画。
春、三月二十余日、六条院春の御殿の船楽。同夜、管絃の遊び。

胡蝶

柏木中将、螢兵部卿宮、玉鬘に懸想する。
翌日、秋好中宮の季の御読経の第一日。紫の上、中宮と春秋優劣の歌の贈答。
夏、四月、更衣の頃、源氏、玉鬘への螢兵部卿宮、髭黒右大将、柏木などの恋文を披見。
源氏、玉鬘に意中を打ち明ける。玉鬘の困惑。
夏、五月雨の頃、源氏、螢兵部卿宮の恋文を見、玉鬘に返事を書かせる。

螢

螢兵部卿宮、玉鬘を訪う。源氏、螢を放ち、玉鬘の姿を宮に垣の見せる。
五月五日、六条院の馬場で競射。その夜、源氏、花散里のもとに泊る。
長雨の頃、六条院の婦人、絵物語に興じる。
源氏、玉鬘と物語論。
夕霧、明石の姫君方を訪い、雲居雁を恋う。

常夏

内大臣、夕顔の遺児（玉鬘）を偲び、夢占いをする。
夏、六月、炎暑の日、源氏、内大臣家の君達と六条院の釣殿で涼む。内大臣の落胤、近江の君の噂。
その夕暮、源氏、君達を連れて、玉鬘を訪う。
その夜、源氏、玉鬘と和琴を弾き、和琴について論ずる。

常夏

源氏、玉鬘の処遇について思い悩む。
内大臣、玉鬘の噂をして、源氏に対抗心を燃やす。
内大臣、雲居雁の部屋を訪れ、うたた寝を戒める。
内大臣、近江の君の処置に窮し、弘徽殿女御に託す。
近江の君、弘徽殿女御と歌を贈答する。
源氏、近江の君のことについて内大臣を批判。

篝火

秋、七月、源氏、玉鬘と篝火の歌を贈答。玉鬘、源氏にややうちとける。
同夜、夕霧、柏木、弁少将、玉鬘方に参上し、音楽を合奏。柏木、玉鬘に思いを寄せる。
秋好中宮の御前の庭、秋の花ざかり。
八月、烈しい野分。
夕霧、風の中に、六条院を見舞い、紫の上を垣間見る。
夕霧、三条の宮に大宮を見舞う。
夕霧、翌朝、再び、六条院を見舞う。
夕霧、源氏の使いとして秋好中宮を見舞い、復命。
源氏、夕霧を伴い、秋好中宮を見舞い、明石の上を見舞う。
源氏、玉鬘、花散里を見舞う。夕霧、玉鬘にたわむれかかる源氏を垣間見て不審を抱く。
夕霧、明石の姫君を見舞い、雲居雁に歌を贈る。明石の姫君を垣間見る。
夕霧、大宮を訪う。内大臣も来合せ、近江の君のことをこぼす。

野分

冬、十二月、大原野行幸。玉鬘、帝を拝し、初めて父内大臣を見る。
翌日、源氏、玉鬘に消息し、尚侍出仕を勧める。
大宮、病む。

行

春、二月初め、源氏、大宮を見舞い、玉鬘のことを打ち明ける。
その夜、大宮、内大臣を招き、源氏、対面して玉鬘のことを語る。
二月十六日、玉鬘裳着。大宮より祝いの歌。秋好中宮はじめ六条院の婦人方より贈物あり。内大臣腰結いの

幸	役を勤め、初めて玉鬘と対面。 近江の君、玉鬘を羨む。	
藤袴	春、玉鬘、尚侍に就任。 夕霧、玉鬘、大宮の喪に服す。〔死去は三月二十日〔藤裏葉〕〕 秋、夕霧、源氏の使いとして玉鬘を訪い、藤袴につけて歌の贈答。 夕霧、源氏に復命、玉鬘のことを話し合う。 八月十三日、玉鬘、除服。尚侍としての出仕、十月と予定される。 柏木、父の使いとして玉鬘を訪う。 髭黒大将、いよいよ玉鬘に執心。 九月、玉鬘の求婚者、競って文を送る。 冬、髭黒、玉鬘に逢う。	
真木柱	源氏、三日夜の儀式を営む。 十一月、玉鬘、六条院で内侍所の事務を決裁する。髭黒、側を離れず。 源氏、玉鬘を訪れ、歌を詠み交わす。 髭黒、玉鬘を自邸に迎えようとし、北の方を説得する。 その夕方、玉鬘を訪おうとする髭黒、物の怪に乱心した北の方に火取りの灰をかけられる。 父式部卿宮、北の方と子供を引き取り、真木柱の姫君、歌を残して母とともに去る。 髭黒、式部卿宮邸に行き、子息二人を連れて帰る。	髭黒32〜33 北の方35〜36 真木柱12〜13 髭黒長男10 髭黒次男8
38	春、正月、玉鬘出仕。 男踏歌あり。帝と玉鬘、和歌を唱和。 髭黒、強いて玉鬘を自邸に退出させる。 二月、源氏、ひそかに玉鬘に文を送る。玉鬘の返歌。 帝よりもひそかに文あり。 三月、源氏、庭前の山吹に玉鬘を偲び、文を送る。髭黒より返歌。	

	38	39	
	冬、十一月、玉鬘、男子出産。 〔近江の君の近況。夕霧に歌を詠みかける。秋の頃のこと〕	梅枝 春、正月末、明石の姫君、東宮妃として入内の支度に、源氏、薫物を調じ、六条院の婦人たちにも依頼。 二月十日、螢兵部卿宮、源氏を訪れ、薫物合せの判をする。同夜、宴遊。 翌日、明石の姫君、裳着。秋好中宮、裳の腰を結う。 二十日過ぎ、東宮元服。左大臣の三の君（麗景殿）入内。 明石の姫君の入内、四月と決り、源氏、調度、草子などを準備。 源氏、紫の上を相手に、仮名書道の論。 源氏、人々に草子の執筆を依頼。源氏も執筆。 螢兵部卿宮、源氏に嵯峨天皇宸筆の古万葉集、醍醐天皇宸筆の古今和歌集を贈る。 内大臣、雲居雁の結婚について苦慮する。 源氏、夕霧に結婚について諭す。 夕霧、雲居雁、相思の思い変らず。 内大臣、二人の結婚を認めようとする。 春、三月二十日、故大宮の一周忌。内大臣、極楽寺に詣で、夕霧と親しく語る。 夏、四月七日、夕霧、内大臣邸の藤の花の宴に招かれ、その夜、雲居雁と結婚。 四月八日、六条院の灌仏会。 賀茂祭の当日、早暁、紫の上、賀茂の御阿礼詣で。祭の行列見物。 藤典侍（惟光の娘）祭の使いに立つ。夕霧と歌を交わす。 四月二十余日、明石の姫君入内。紫の上、付き添う。 三日後、紫の上退出。明石の上、代って参内。紫の上と明石の上、初めて対面する。 朝廷において、明年、源氏の四十の賀の準備。源氏、出家の志あり。 秋、源氏、准太上天皇の処遇を賜る。 内大臣、太政大臣に、夕霧、中納言に昇進。	藤裏葉
	明石の姫君 11 東宮 13		准太上天皇

40

若菜上

夕霧、雲居雁、三条殿（三条の宮）に移り住む。太政大臣、三条殿を訪う。
冬、十月二十余日、六条院行幸の盛儀。朱雀院上皇も御幸。
朱雀院、六条院行幸の後、不例。
朱雀院、出家を思い、女三の宮の将来につき思い悩む。
東宮、朱雀院に行啓。朱雀院、女三の宮の将来を東宮に依頼。
夕霧、源氏の使いとして朱雀院を見舞う。朱雀院、女三の宮のことを仄めかす。
朱雀院、乳母たちと女三の宮の婿選びの評定。
女三の宮の乳母とその兄左中弁の働き。
柏木右衛門督、螢兵部卿宮、藤大納言ら、女三の宮を望む。
朱雀院と東宮、源氏を婿にと決める。
年末、女三の宮、裳着。
三日後、朱雀院、出家。
源氏、朱雀院を見舞い、女三の宮の後見を引き受ける。
翌日、源氏、紫の上に事情を語る。

女三の宮 13〜14
夕霧 18

春、正月、女三の宮、六条院降嫁の準備。
正月二十三日、玉鬘、六条院に参上、源氏の四十の賀を祝い、若菜を献ずる。
二月十余日、女三の宮、六条院に降嫁。
二月中に、朱雀院、西山に移る。紫の上に御文あり。
朧月夜尚侍、二条の宮に退出。
三月、源氏、ひそかに朧月夜を訪う。
夏、明石女御、懐妊。六条院に退出。
紫の上、女三の宮に対面。
冬、十月、紫の上、源氏の四十の賀に嵯峨野の御堂で薬師仏を供養する。
十月二十三日、紫の上、二条院で精進落しの祝宴。

明石女御 12

40	若	十二月二十余日、秋好中宮、源氏の四十の賀のため諸寺に布施。六条院の西の町で賀宴。 夕霧、右大将に昇進。 勅命により、夕霧、六条院の丑寅の町で、賀宴を催す。太政大臣、勅命により参賀。	
41	若菜上	春、正月、明石女御、御産の祈り。 二月、御産近く、女御、明石の上の御殿に移る。 明石の尼君、女御に昔語りをする。 三月十余日、明石女御、皇子出産。 七日の夜、内裏より産養。 明石入道、宿願を果して、山に入ろうとし、明石の上と尼君に文を送る。須弥山と日月の夢想を告げる。 明石の上、女御に入道の文を見せる。 源氏、明石入道の文を見る。明石女御に紫の上の恩を説く。 柏木、なお女三の宮に心を懸ける。 三月、六条院の蹴鞠。柏木、女三の宮を垣間見る。柏木、夕霧、同車して退出。 柏木、小侍従を介して女三の宮に文を送る。 三月末、六条院の賭弓。柏木も参会。 柏木、東宮を通じ、女三の宮の猫を得る。 玉鬘一族の近況。真木柱の姫君、螢兵部卿宮と結婚。	明石の尼君 65～66
45～42	若	〔この間、四年経過〕	
46	若	冷泉帝譲位（在位十八年）。今上即位。明石女御腹の第一皇子立坊。太政大臣、致仕。髭黒、右大臣に、夕霧、大納言に昇進。	冷泉院28 今上帝20 東宮6

47

菜

下

紫の上、出家を望む。源氏、きびしく制止。
冬、十月中旬、源氏、御願果しの住吉詣での盛儀。（明石女御、紫の上、明石の上、明石の尼君同行）
女三の宮、二品に叙せられる。
紫の上、女一の宮を養育。花散里、夕霧の典侍腹の姫君を養育。
源氏、来年の朱雀院の五十の賀に備え、女三の宮に琴の秘曲を伝授、年末に及ぶ。
十一月以降、明石女御、懐妊のため、六条院に退出。源氏、来春、女楽を計画。

春、正月十九日、六条院にて女楽あり（明石女御、女三の宮、紫の上、明石の上）、源氏、夕霧と音楽、琴を論ず。
翌日、源氏、紫の上（この年、三十七歳の厄年）に半生を回顧、婦人たちの批評。
その夜、源氏、女三の宮のもとに泊る。
翌暁より、紫の上、重く病む。
紫の上の病のため、二月十余日予定の、女三の宮主催の朱雀院の御賀、延引。
三月、紫の上を二条院に移す。明石女御、源氏とともに看護に尽すも、病状好転せず。
柏木衛門督の近況。既に中納言、朱雀院の女二の宮を賜っている。
柏木、女三の宮の乳母子小侍従に手引きを迫る。
夏、四月、賀茂祭の御禊の前夜、小侍従、柏木を女三の宮のもとに導く。柏木、女三の宮と契り、猫の夢を見る（懐妊の相という）。
女三の宮不例。源氏、見舞う。
賀茂祭の当日、柏木の憂悶。
翌日、祭の帰さの日、紫の上、絶息。源氏、急ぎ二条院に帰る。紫の上、蘇生し、六条御息所の死霊現れる。
人々の見舞。
紫の上、五戒を受ける。六月に入って小康を得る。
五月頃より、女三の宮、懐妊の兆あり、不例。
源氏、女三の宮の不例を見舞い、二、三日滞在。

女三の宮21〜22
紫の上37

47

若菜下

源氏、柏木の文を発見して密通の事実を知り、苦慮。
女三の宮と柏木、密通の露顕を知り煩悶する。柏木、源氏への恐れから身に違和をおぼえる。
朧月夜尚侍、出家。源氏、歌の贈答をし、尼の装束を贈る。
秋、八月、九月、朱雀院の御賀、延引。
冬、十月、女三の宮、不例、さらに御賀延引。この月、女二の宮、院の御賀に参上。柏木も病を押して参上。
朱雀院、女三の宮を案じて消息。源氏、女三の宮を戒める。
十一月、御賀さらに延引、十二月に予定される。
明石女御、皇子出産。
十二月十余日、朱雀院御賀の試楽、六条院で行われる。
紫の上、二条院より帰り、試楽見物。
柏木、試楽に召され、音楽を指導する。宴半ば、源氏に諷され、中途で退出。以来、病重く、父の致仕太政大臣邸で病を養う。
十二月二十五日、女三の宮、朱雀院の御賀を行う。

48

柏

春、正月、柏木の病好転せず、小侍従に女三の宮あての文を託す。
小侍従、女三の宮の返書を得て、折しも加持祈禱で騒がしい致仕太政大臣邸に赴く。
柏木、宮の返書を見て、最後の文を小侍従に託す。
翌日、女三の宮、男子（薫）を出産。
薫の産養。
女三の宮、源氏に出家を申し出る。
朱雀院、夜陰ひそかに女三の宮を見舞う。女三の宮、朱雀院を導師に出家。六条御息所の死霊出現。
柏木、重態におちいる。
柏木、権大納言に昇進。
夕霧、柏木を見舞い、女二の宮（落葉の宮）のことを託される。
柏木、死去。

薫1
柏木32～33

木

三月、薫、五十日の祝い。源氏の感慨。
夕霧、一条の宮に落葉の宮を弔問、母御息所と和歌の唱和。
その帰途、夕霧、致仕太政大臣を見舞い、和歌の唱和。
夏、四月頃、夕霧、落葉の宮を見舞い、母御息所と和歌の唱和。
秋の頃、薫、這い始めるほどに成長。

49

横笛

春、柏木の一周忌。源氏、夕霧、ねんごろに供養する。
朱雀院、女三の宮に、筍などを贈る。源氏、薫をいつくしむ。
秋、夕霧、落葉の宮を訪う。落葉の宮と想夫恋を合奏。母御息所、夕霧に柏木遺愛の横笛を贈る。
その夜、夕霧、夢に柏木を見、愛若で供養する。
夕霧、六条院に参る。明石女御腹の皇子（三の宮と二の宮）と薫、相睦ぶ。
夕霧、源氏から横笛の由来を聞き、柏木の遺言を伝える。

薫2
三の宮（匂宮）3ばかり

50

鈴虫

夏の頃、蓮の花の盛り、女三の宮の持仏開眼供養。
秋の頃、六条院の女三の宮の御殿の庭に、秋の野を作り、虫を放つ。
八月十五夜、源氏、女三の宮方で鈴虫の宴。冷泉院より消息あり。
同夜、源氏、人々を引き連れ冷泉院に参り、月の宴あり。
翌朝、源氏、秋好中宮と、母六条御息所のことなど語り合う。
一条御息所、物の怪加持のため、小野の山荘に移る。
八月中旬、夕霧、小野に御息所を見舞い、落葉の宮に迫って意中を訴える。
翌朝、六条院の花散里方に帰り、落葉の宮に文を送る。
加持の律師、御息所に夕霧と落葉の宮の仲についてただす。
御息所と落葉の宮の嘆き。御息所、夕霧に文を送る。
夕霧、三条の邸に帰る。御息所の文を雲居雁に奪われる。
翌日夕、かろうじて御息所の文を発見、返書を送る。

夕霧

夕霧

その夜、御息所、夕霧を恨み、病勢悪化、急逝する。
夕霧の弔問、御息所の葬送。
九月、夕霧、落葉の宮にしばしば文を送る。雲居雁の嘆き。
九月十三日、夕霧、落葉の宮を訪う。
源氏、夕霧の噂に心痛。
冬、十月、御息所四十九日の法要。
朱雀院、落葉の宮の出家の意向を諌める。
夕霧、落葉の宮を一条の宮に移し、東の対をわが部屋とする。
その夜、落葉の宮、夕霧を塗籠に避ける。
翌朝、夕霧、六条院に帰り、源氏、花散里と語る。
夕霧、三条殿に帰り、雲居雁をなだめる。
その夜、夕霧、塗籠に入り、落葉の宮の説得につとめる。
翌日、夕霧、強引に一条の宮にとどまる。
雲居雁、怒って致仕太政大臣邸に帰る。夕霧、迎えに行くが空しく帰る。
致仕太政大臣、落葉の宮に文を送る。
藤典侍、雲居雁に慰めの文を送る。

御

紫の上、久しく病み、出家を願う。
春、三月十日、紫の上、二条院で、法華経千部の供養を行う。花散里、明石の上も参会。
夏、紫の上の衰弱加わる。
明石中宮、紫の上の病気見舞に二条院に退出。
紫の上、三の宮（匂宮）をいつくしむ。
秋、紫の上、小康を保つ。
八月十三日夕、紫の上、源氏、明石中宮と和歌を唱和。
八月十四日朝、紫の上、死去。

紫の上 43
薫 4

法

源氏の悲嘆。夕霧、紫の上の美しい死に顔を見る。
八月十五日暁、葬送。
致仕太政大臣、秋好中宮の弔問。
源氏、勤行に専念。

幻

春、新年、人々、六条院に参賀。源氏対面せず。
螢兵部卿宮の訪問。源氏と語る。
源氏、女房たちと紫の上を偲ぶ。
二月、紫の上の形見の紅梅咲く。
三月、紫の上遺愛の桜咲き、源氏、匂宮に心を慰める。
源氏、女三の宮を訪れる。
源氏、明石の上方を訪れ、懐旧談。
夏、四月、花散里より更衣の衣裳を奉る。
賀茂祭の日、源氏、中将の君と歌を交わす。
五月十余日、五月雨の晴れ間、夕霧、源氏を見舞う。
六月、盛夏、源氏、池の蓮、螢に故人を偲ぶ。
秋、七月七日、源氏、七夕の詠歌。
八月、紫の上の一周忌法要に曼陀羅供養。
九月九日、源氏、菊を見て、詠歌。
冬、十月、源氏、雁を見て、詠歌。
十一月、五節の頃、夕霧の子息、童殿上。豊明節会の日、源氏、詠歌。
年末、源氏、来年の出家に備えて、文反古を焼き、形見分けをする。
仏名の日、源氏、老導師をいたわる。
追儺の日、源氏、匂宮を見て感慨深し。

薫5
匂宮6

		雲隠	巻名のみで、物語の本文はない。匂兵部卿の巻、薫十四歳の年までの間に八年間の空白がある。この間に、源氏出家、嵯峨の院に二、三年隠棲して、薨去『宿木』。朱雀院、致仕太政大臣、髭黒太政大臣、螢兵部卿宮など、みな故人となる。	
薫年齢				人物年齢その他
		匂	匂宮、元服して、兵部卿宮。二条院に住む。 女一の宮、六条院南の町の東の対に、二の宮、同じ町の寝殿に住む。 夕霧、落葉の宮を六条院丑寅の町に住まわせる。 薫、冷泉院、秋好中宮の愛顧を受ける。	髭黒の死後、玉鬘と子女たちの生活。 玉鬘腹の大君、中の君に求婚する者多し。
14	春、二月、薫、元服して侍従となる。 秋、薫、右近中将に昇進。冷泉院に曹司を賜る。 女三の宮、三条の宮で仏事に専念。 この頃より、薫、おのれの出生につき疑う。	竹	蔵人少将（夕霧の息）、大君に求婚。 薫、四位侍従。この頃十四、五歳。玉鬘邸に出入りする。	侍従 右中将
15	春、正月一日頃、夕霧右大臣、玉鬘を訪い、玉鬘の姫君の冷泉院入内のことを話し合う。 同じ日、夕方、薫、玉鬘を訪う。 正月二十余日、薫、藤侍従（玉鬘の三男）を訪い	兵		

20	19	18～17	16	
卿			部	
春、正月十八日、夕霧、賭弓の還饗に、匂宮、薫	薫、三位宰相。右中将もとのまま。 夕霧、匂宮か薫を婿にと志し、六の君を落葉の宮に預ける。			蔵人少将に出会う。薫、藤侍従と竹河を謡う。 三月、玉鬘の姫君たち、桜を賭け物に碁を打つ。 蔵人少将、これを垣間見る。 大君、冷泉院に参ること決定。 三月晦日、蔵人少将、玉鬘方の女房少将のもとに来て嘆く。 夏、四月一日、蔵人少将、大君に歌を贈る。 四月九日、大君、冷泉院入内。帝の不興。 秋、七月、大君、懐妊。
		河		
	宰相中将 この頃、冷泉院の御息所、皇子出産。弘徽殿女御の不興をかい、里がち。 薫、宰相中将。 蔵人少将、三位中将に進み、左大臣の姫と結婚。		玉鬘の息中将27～28 玉鬘、尚侍を辞して中の君に譲り、中の君入内。 春、正月十四日、男踏歌。 翌日、薫、冷泉院に召され、院、御息所（大君）と音楽を合奏する。 夏、四月、御息所（大君）、姫宮出産。	玉鬘大君18～19 玉鬘の息中将27～28

	20	21	22	23
	橋		姫	椎
	たちを六条院に招く。 宇治の八の宮と姫君たちのわびしい日々。〔これより以前、八の宮の北の方、中の君を出産して死去。京の邸、焼亡して宇治に移り住む〕 宇治山の阿闍梨、八の宮の近況を冷泉院に伝える。 薫、阿闍梨を介して八の宮と文通。 薫、八の宮に私淑し、そのもとに通う。		薫、八の宮のもとに通うこと三年ばかり。 秋の末、薫、八の宮の山籠り中に宇治を訪れ、姫君たちを垣間見る。八の宮方の老女弁の君から柏木のことを聞く。 薫、匂宮に八の宮の姫君のことを語る。 冬、十月五、六日頃、薫、八の宮を訪う。 明け方、薫、弁の君より、柏木、女三の宮の秘密を聞く。 薫、帰京し、柏木の文反古を読む。	春、二月二十日頃、匂宮、初瀬詣での帰途、宇治に中宿り。 出迎えの薫、八の宮を訪う。 匂宮、八の宮に消息。中の君、返歌。
竹				
				大君25 中の君23

24			
総角	本	河	中納言
秋、薫、中納言に昇進。 七月、薫、宇治を訪う。八の宮、姫君たちの将来を薫に託す。 八月、八の宮、山寺に籠る。 八月二十日頃、夜半、八の宮、山寺で死去。 薫のねんごろな弔問。 九月、匂宮の宇治逍遙の計画中止。 八の宮の忌明けの頃、匂宮の弔問の手紙。薫、姫君たちを訪い、大君と語る。 冬、年の暮、薫、雪を冒して宇治を訪れ、匂宮の中の君への執心を語り、大君への自らの思いを訴える。 春、正月、宇治山の阿闍梨、姫君たちに芹、蕨などを贈る。 桜の花盛りの頃、匂宮、宇治に消息し、中の君返歌。 夕霧、匂宮を六の君の婿にと願う。 三条の宮焼亡。薫、女三の宮、六条院に移り住む。 夏、薫、宇治を訪れ、姫君たちを垣間見る。 秋、八月、八の宮の一周忌の準備。薫、宇治を訪い、大君に迫って意中を訴えるが、空しく夜を明かし、和歌を唱和して帰京。 八の宮の一周忌明け、薫、再び宇治を訪い、大	薫、中納言に昇進。夕霧、左大臣に、紅梅大納言、右大臣に、三位中将、宰相に昇進。 薫、昇進の挨拶に玉鬘を訪う。 紅梅右大臣、任大臣の大饗。	
紅梅	紅梅大納言の大君、東宮入内。 紅梅大納言、中の君を匂宮にと志す。 春、紅梅大納言、宮の御方と琵琶について語る。 紅梅大納言、若君に託し、匂宮に紅梅を贈る。 匂宮、宮の御方を思い、大納言に返歌。 再び、大納言、匂宮、歌の贈答あり。	大君17～18	

総

君のもとに忍ぶ。大君、逃れて、薫、中の君と何ごともない一夜を明かす。
薫、匂宮を訪れ、中の君への手引きを約束。
八月二十六日、薫、匂宮を宇治に伴い、中の君に逢わせる。
匂宮から後朝の文あり。
翌日夜、匂宮、中の君に通う。
三日夜の祝い。薫、衣類を贈る。匂宮、薫の尽力で宇治に通う。
九月十日頃、薫、匂宮と宇治へ赴く。
薫、更衣の衣類などを宇治に贈る。
冬、十月初め、薫、匂宮を誘い、宇治に紅葉狩を催す。
内裏より廷臣お迎えに参り、匂宮、中の君に逢い得ずに帰京。
大君、悲嘆のあまり病む。
匂宮、外出を制せられる。
匂宮と六の君の縁談、進められる。
時雨する日、匂宮、女一の宮に伊勢物語絵に託して歌を贈る。
薫、宇治に大君の病を見舞う。翌朝、帰京。
大君、匂宮と六の君の縁組の噂に消沈し、病進む。
十月晦日頃、匂宮、中の君に消息。
十一月上旬、薫、大君を見舞う。
薫、宇治に籠り、大君を看護。
十一月、豊明の日、風雪しきり、薫、大君と語る。
大君、死去。
葬送。薫、宇治に籠り、供養に専念する。
十二月、月夜、薫、大君を偲ぶ。

紅梅

匂宮、八の宮の姫君に通う。

角

		25	匂宮、中の君を訪う。中の君対面せず。 年末、薫、帰京。 匂宮、中の君を京に引き取ろうとする。
		早蕨	春、正月、宇治山の阿闍梨、中の君に蕨、つくしを贈る。 正月下旬、薫、匂宮を訪い、大君の思い出を語る。 二月初め、中の君除服。 中の君、京移りの準備。 出立の前日、薫、中の君を訪う。弁の尼にも対面。 二月七日、中の君、二条院に迎えられる。夕霧、匂宮と六の君の結婚を予定していたので不快。 薫、新造の三条の宮に移る準備。〔二十余日に移転の予定〕 二月二十日過ぎ、夕霧の六の君裳着。夕霧、薫に六の君との結婚の内意を打診するが不調。 花盛りの頃、薫、二条院に中の君を訪う。
(24)			夏、今上の藤壺女御、死去。春の頃から準備されていた女二の宮の裳着延びる。 女御の四十九日過ぎて、帝、女二の宮を内裏（藤壺）に迎える。 秋、菊の盛りの頃、帝、薫と碁を打って、女二の宮降嫁の内意を示す。 夕霧、薫を諦めて、匂宮と六の君の縁組を志す。中宮の説得により匂宮、承諾。匂宮、紅梅大納言の宮の御方をなお忘れず。 ＊宣長の新年立では、この宿木の第一年は前年、薫、二十四歳の年のことで総角の巻と重なる。	女二の宮 14
(25)	26	宿木	夏、女二の宮除服。帝、薫との縁談を進め、薫、心ならずも承引。 匂宮と六の君との婚儀、八月と決定。中の君の不安。中の君、五月より懐妊。 秋、八月、中の君、六の君の婚儀の日取りを聞く。 薫、早朝、朝顔を手折って、二条院に中の君を訪う。 八月十六日、匂宮と六の君の婚儀。後朝の文のこと。第二夜のこと。中の君の悲しみ。	

26（25）	宿	第三夜の儀。夕霧、薫を招待。 薫、その夜、按察使の君の局に泊る。 匂宮の夜離れ続き、中の君、薫に消息。 翌日夕、薫、中の君を訪う。中の君、宇治に行くことを懇願。薫、中の君に迫るが自制。 翌日、匂宮、帰邸。薫の移り香を咎める。 薫、中の君にたびたび文を送る。 薫、再び訪問。中の君、異母妹浮舟のことを薫に告げる。〔浮舟、この年夏、中の君を訪問〕 九月二十余日、薫、宇治に赴き、大君の周忌法要のこと、山荘の寝殿を山寺に御堂として移築することを阿闍梨に諮る。その夜、弁の尼より、浮舟のことを委しく聞く。〔浮舟、この春、上京〕 薫、翌朝帰京。弁の尼と唱和。中の君に山荘の蔦の紅葉を贈る。 匂宮と中の君、秋の前栽を前に琵琶、箏の琴を合奏。匂宮、三、四日、二条院に滞在。	浮舟20ばかり
27（26）	木	春、正月末、中の君の出産近づく。〔中の君、二条院に迎えられてから三年とあり〕 二月初め、薫、権大納言兼右大将に昇進。 同じ頃、中の君、男子出産。明石中宮、薫、夕霧らの産養。 二月二十日過ぎ、女二の宮裳着、薫と婚儀。 三月、匂宮の若君五十日の祝いに、薫、中の君を訪う。 夏、四月初め（節分前）、帝、藤壺で藤の花の宴。 翌日夜、女二の宮、薫の三条の宮に移る。 四月二十日過ぎ、薫、宇治に行き、寺の造営を見る。 その日、初瀬詣での帰途、山荘に泊り合せた浮舟一行に出会い、浮舟の容姿を垣間見る。 秋、浮舟の母、浮舟と左近少将の婚礼準備。 八月、左近少将、破約して、常陸介の実子と結婚。 浮舟の母、中の君に頼み、浮舟を二条院に預ける。 浮舟の母、二条院に逗留して、匂宮を垣間見る。	権大納言 右大将
	東		左近少将22〜23 常陸介の女15〜16

屋

薫、中の君を訪う。中の君、薫に浮舟を勧める。
浮舟の母、薫を垣間見て、浮舟を薫にと志す。
翌日、早暁、浮舟の母、帰宅。
その日の夕、匂宮、浮舟を見付けて迫るが、事なきを得る。
中の君、浮舟を慰める。
母君、驚いて浮舟を引き取り、三条の小家に移す。
九月、薫、宇治に行き、新造の御堂を見、弁の尼より浮舟の動静を聞く。
九月十二日、薫、弁の尼の手引きで、三条の小家を訪い、浮舟に逢う。
翌日、薫、浮舟を宇治に移し、二、三日滞在。

28 (27) 浮舟

匂宮、浮舟のことを忘れず、中の君は浮舟の行方を秘す。
春、正月初め、浮舟、中の君に文を送り、匂宮、その文を見て事情を察する。
匂宮、家臣より薫が浮舟を宇治にかくまうことを聞き出す。
正月下旬、匂宮ひそかに宇治に行き、薫を装って浮舟に逢う。
翌日、匂宮、宇治に逗留。右近たちの狼狽。
翌暁、匂宮、帰京。
匂宮、浮舟に執着して気分すぐれず、二条院に籠る。薫、見舞う。
二月初め、薫、宇治を訪い、浮舟を京に移すことを語る。宇治橋の和歌を唱和。
二月十日頃、内裏作文の会。薫の動静に、匂宮、心を騒がす。*
二月、有明月の頃、匂宮、宇治に赴き、浮舟を小舟で対岸の家に連れ出し、二日間を過す。橘の小島の唱和。
三月、長雨の頃、匂宮、薫双方より浮舟に消息。
薫、浮舟のことを女二の宮に明かす。
匂宮は三月末、薫は四月十日、浮舟を京に移そうとする。
母君、宇治を訪い、浮舟の健康を気遣い、細々と注意して帰京。
浮舟の煩悶、入水を思う。

浮舟

薫と匂宮の使者、宇治で行き会う。
薫、浮舟と匂宮の関係を知る。
薫、浮舟に匂宮のことをほのめかした文をやる。
右近、姉の例を話して、浮舟に意見。
薫、荘園の者たちに命じて、浮舟方の警備を厳しくする。
浮舟、入水を決意して、文反古を焼く。
三月二十日過ぎ、匂宮、二十八日に浮舟を迎えることを伝える。
匂宮、宇治を訪う。警戒厳しく、浮舟に会えず、かろうじて侍従に会い、帰京。
浮舟、匂宮の文に返歌。
母君、凶夢を見て浮舟の身を案じ、誦経の料とともに文をよこす。
浮舟、母の文に返歌を認める。

＊薫、匂宮より二、三歳年長との記述あり。年立上は、匂宮は薫より一歳年長。

蜻蛉

翌朝、人々、浮舟の失踪を知る。
匂宮、宇治に使いを遣わし、事情を知る。
浮舟の母、乳母の悲嘆。
その夜、浮舟の葬送。
翌日、薫、(石山参籠中) 事件を知り、使いを宇治に遣わす。
薫、帰京。浮舟を偲ぶ。
匂宮、悲嘆のあまり、病臥の体。
式部卿宮、薨去。薫、服喪。
薫、匂宮を見舞い、浮舟のことをほのめかす。
夏、四月十日、薫、匂宮と時鳥の歌を贈答。
匂宮、侍従を迎え、詳細を聞く。
薫、宇治に行き、右近より事情を聞く。宇治山

手

春、三月末、横川の僧都の母、初瀬詣での帰途病み、僧都下山して宇治院に伴う。
宇治院で、人事不省の浮舟を発見。
妹尼、亡き娘の身代りと喜び、浮舟を介抱する。
二日ほど宇治院に滞在。
宇治の里人、昨夜の故八の宮の姫君 (浮舟) 葬送の話をする。
尼君一行、浮舟を伴い、小野に帰る。
僧都、帰山。
四月、五月と過ぎ、浮舟、回復せず。

横川僧都60余
母尼80余
妹尼50ばかり

の阿闍梨（今は律師）に供養の法事のことを命じる。
薫、浮舟の母に文をやり見舞う。
常陸介、初めて事情を知り驚く。
薫、浮舟四十九日の法要を営む。
小宰相の君、薫を慰める文を送る。
蓮の花盛り、明石中宮、六条院で法華八講。
結願の日、薫、女一の宮を垣間見る。
翌日、薫、女二の宮に、女一の宮と同じ服装をさせて、女一の宮を偲ぶ。
翌日、薫、明石中宮方に行き、女一の宮より、女二の宮への文を請う。
明石中宮、大納言の君より、浮舟失踪の経緯を聞く。
匂宮、侍従を明石中宮に出仕させる。
故式部卿宮の姫君（宮の君）、明石中宮に出仕。
匂宮、宮の君に懸想する。
薫、宮の君の身の上に同情する。
秋、明石中宮、なお六条院に滞在。薫、明石中宮に参り、女房たちと語り、宮の君を西の対に訪う。
薫、蜻蛉に寄せての感慨。

蜻

僧都、妹尼の請いにより下山して、浮舟に加持する。
物の怪、調伏され、浮舟、回復。失踪の夜の浮舟の記憶。
横川の僧都、浮舟に五戒を授けて帰山。
浮舟、妹尼にも素姓を明かさず。手習に思いをやる。

習

秋、妹尼の昔の婿の中将、横川に参る途中、小野に立ち寄る。
中将、簾の隙間より、浮舟の姿を見る。
翌日、中将、帰京の途次、再び小野に立ち寄り、浮舟に歌を贈る。
八月十余日、中将、小鷹狩のついでに小野に立ち寄り、浮舟に意中を訴える。中将、尼君たち

中将27〜28

(27) 28	と琴笛を合奏。大尼君の和琴の演奏。 九月、妹尼、亡き娘の身代りを得たお礼参りに初瀬詣でに出立。浮舟、同行せず。 その日、夜、中将訪れて、浮舟に言い寄る。 浮舟、大尼君の部屋に逃れ、不安の一夜を明かす。中将、諦めて帰京。 翌夕、横川の僧都、女一の宮加持のため下山して、小野に立ち寄る。 浮舟、僧都に懇願して出家をとげる。 翌日、尼姿の浮舟、手習をことする。 中将、浮舟の出家を知り、歌を贈る。 妹尼、小野に帰り、浮舟の出家を嘆く。 女一の宮の物の怪平癒。横川の僧都、明石中宮に浮舟発見の経緯を語る。 僧都、横川への帰途、小野に立ち寄る。 その日、中将、小野を訪れ、尼姿の浮舟を垣間見して執心を増す。 浮舟、勤行にいそしむ。
(28) 29	春、正月、妹尼、浮舟に若菜を贈り、歌を交わす。 紅梅に浮舟の懐旧の歌。 妹尼の甥紀伊守、上京して小野を訪い、薫が浮舟の一周忌の準備をすることを語る。妹尼に布施の装束の仕立てを頼む。

手

妹尼たち、仕立物を急ぐ。浮舟の感慨。
三月、薫、宇治にて、浮舟一周忌の法要を営む。
薫、浮舟の兄弟を引き立てる。
薫、明石中宮に参り、浮舟のことを語る。
明石中宮、小宰相をして、薫に浮舟の生存を告げさせる。
薫、明石中宮に、浮舟のことにつき、匂宮への斟酌を語る。
夏、薫、浮舟の弟（小君）を伴い、叡山中堂に参詣。横川に赴こうとする。

習

橋浮夢

薫、中堂参詣の翌日、横川の僧都を訪れ、浮舟のことを質す。
僧都、宇治院以来の事情を語る。
僧都、小野への案内は断るも、小君に浮舟あての文を託す。
その夜、小野の尼君たちと浮舟、薫一行の下山を望見する。
翌日、薫、小君を小野に遣わす。
その朝、横川の僧都、小野に文をやり、事情を知らせる。
小君に託した僧都の文、浮舟に還俗をすすめる。
浮舟、小君に会わず。
浮舟、小君のもたらした薫の文に返事もせず、小君、空しく帰京する。
薫、不審の思い晴れず。

新潮日本古典集成（第六九回）
源氏物語 八

昭和六十年四月一日　印刷
昭和六十年四月五日　発行

校注者　石田穣二　清水好子
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八
組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

定価一八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yoshiko Shimizu, Printed in Japan, 1985.

ISBN4-10-620369-3 C0393